ヴァルキリーズ・ストーム

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヴァルキリーズ・ストーム

【Ｎコード】
Ｎ２０７３Ｃ

【作者名】
鷹嶺綺羅

【あらすじ】
突如、人類に襲いかかってきた魔族との交戦が始まってから３０年。

魔法が存在する現代世界で、人型兵器”メサイア”のパイロット候補生として訓練校に入校した少女達を待っていたのは、世界中を巻き込んだ血みどろの戦いだった。

巨大ロボットあり、魔法あり、モンスターありと、何でもありの

ご都合満載！

レシプロ戦闘機の眼下を３０メートルのロボットが疾走して、ティーガー戦車が大地を駆けるいい加減な設定で仮想戦記モノが読めるのはこの作品だけです（多分）

様々な登場人物を絡めながら語られる、ネット小説最長編で、かつ、御伽話的な戦争モノを目指しています！

終わったはずの戦い

●約２７００年前　極東　弓状列島

荒涼とした大地に、雪をはらんだ風が吹いていた。

――せっかくの式典なのに。

左右に威儀を正して整列する無数の兵士達。
その列に混じって立つ少女は、冷たい風にそっと襟元を正し、目の前に視線を向けた。
端正すぎる顔立ちと、風に揺れる細く艶やかな黒髪の少女は兵士達の注目の的だ。
居並ぶ数多の軍勢の中、幸運にも彼女が視界に入る兵士達は、こぞって彼女に視線を向けている。
寒空の下、むさ苦しい仲間達の顔を拝むより、この少女こそ鑑賞したいというのが本音だ。

肝心の彼女自身は、その視線に全く気づいていない。

ただ、いつ恐怖の上官から質問が飛んでくるか戦々恐々として、そんなことに気づく余裕がないのだ。

不意に、軍楽隊の演奏が、聞き慣れない曲に変わった。
勇壮で重厚感のある行進曲。
軽やかな、輪舞曲を思わせる聞き慣れた行進曲ではない。

――――いい曲だな。

少女はただ素直にそう思った。

チッ。

その時聞こえたのは、聞き慣れた舌打ちの音。

少女は斜め前に立つ上官の顔を盗み見た。

少女より頭二つほど低い、女の子と呼ぶに相応しい背の持ち主。

子供としか言い様のない外見だが、軍服に付けられた参謀飾緒（さんぼうしょくちょ）の色と、階級章の示す階級は、ここに居並ぶ誰よりも高い。

彼女の恐怖の上官殿だ。

普段から気難しい上に、気分屋の上官は何が気に入らなかったのか？

少女は、上官の下で生き残るために身につけた習慣、つまり、上官が機嫌を損ねている原因の把握と対策を考えた。

その視線に気づいたんだろう。

不意に振り向いた上官と少女の目線があった。

「魔族軍の軍歌――――行進曲よ」

上官は言った。

「人類が余計な気を遣っている。この弓状列島の島民気質かしらね」

「調べてみてはいかがです？」

少女は言ってみた。

「戦いはもう終わるんです。閣下、後の事は何も決めていないって、いつもおっしゃっていたじゃないですか」
「ハンッ、しばらくは残務整理の書類相手に格闘の日々よ。あなたもだけど」
うげ。
少女は何か苦いものをかみ砕いたような顔で小さく舌を出した。
「ほら。あそこが人類側。この弓状列島の人間の王。現地語では何と言ったかしらね」
「はぁ」
少女は、上官の指さす方向に目を凝らしてみた。
よく見たら、軍楽隊は人間だ。
その軍楽隊の向こう。
見慣れない軍旗の下に並ぶ兵達は、服装こそ自分達と同じだが、顔つきが少し違う。
人類の黄色タイプの特徴をよく捉えた顔立ち。
その中でも少しだけ高い場所、台の上に立って威儀を正している背の高い男。
あれが、この弓状列島の王なんだろうと、少女は判断した。
「まぁいいわ。どうせ人間の寿命なんてたかが知れてる。思い出した頃には向こうが死んでるわ」
「まぁ、私達からすれば短いですけどね」
数千歳の寿命を誇る自分達神族と、わずか数十年の寿命しかない人類を比較すること自体が無茶だと、少女はそう思う。
「その王の願いとして、あの曲が流れているんだそうよ」
答えを知っていそうな上官の顔は、複雑なままだ。
「処刑されるとはいえ、一軍を率いた身。その武人としての名誉は守ってはどうか」
ふん。
上官は肩をすくめた。
「ケンプファー卿にそうかけあったそうよ?あの熱血バカのことだも

ん。感動しちゃってね。即決でＯＫ出した挙げ句が――――これ」

ザワッ！

あたりから息を呑む音が、まるで押し寄せる波のようにわき上がった。

――――ヴォルトモード卿だ。

――――ヴォルトモード閣下だ。

命が尽き果てるまで忘れることが出来ないだろう、赤地に双頭の蛇を描いた巨大な軍旗が進んでくる。

「捧げ――――剣っ！」

居並ぶ指揮官達が、まるでその軍旗の偉容に負けまいと足掻くが如き声で部下に号令、兵達が、その軍旗に剣を捧げる。

風にたなびく赤地に双頭の蛇。

魔族軍の軍旗だ。

敗軍の軍旗だというのに、その威厳はどうだ。

少女達、つまり神族の軍である天帝軍の濃紺を基調とした軍旗の群れの直中にあっても、決して劣ることはない。

ちらと見ただけで、見る者の背筋を、得体の知れない興奮が走る。

反対側に並ぶ兵士達もおそらく少女と同様なんだろう。

自分達の上官達に剣を捧げるより緊張してこわばった顔をしている。

そんな軍旗の後に続くのは、軍の刑務執行官達と――――

処刑される者。

軍装に威儀を正した敗軍の将。

ヴォルトモード卿だ。

高い背に鍛えられた筋骨たくましい体の上に長く白い顎髭。
飾り立てられた銀色の甲冑。
腰の大剣。
楯。
金の戦斧。
その姿は、処刑される罪人というより、戦いに赴く王侯の威厳あふれる姿でしかなかった。

――すごい。

以前からヴォルトモード卿の噂だけは聞いていた少女は目を見張った。
歩くだけで周囲が威儀を正すほどの威圧感はどうだ？
これほどの威厳ある人物を、少女は知らなかった。
目の前を歩く姿を見るだけで勘当すら感じる、彼女にとって君主の理想が目の前に立っている。

――敵は、この御方を仰ぎ見て戦ったのか。

破れた敵に嫉妬するのは変だと思うが、素直に、少女は敵が羨ましかった。

この人間界を巡り、天界と魔界が対立。人間界を焦土にする程の戦いを繰り広げた敵、魔族軍を率いたのが、このヴォルトモード卿だ。

「人間共め――――とんだ茶番にしてくれたわ」

上官の評価は、辛辣どころではなかった。

「どういう――――ことです？」

「考えてご覧なさい。敗軍の将があんな格好で敵の中を歩くのよ？まだ下着姿で歩かされた方がマシよ」

「そうでしょうか？なかなかお洒落っていうか」

「過ぎた礼儀はイヤミにしかならないわ。取り方によってはあの行進曲だって、卿をコケにしているっていえば言えるのよ？」

「私には、罪人としてではなく」

少女はまるで人間を弁護するように言った。

「武人としてのヴォルトモード卿に礼儀を払おうとしている。そうとしか見えませんが？」

「それはね」

上官は冷たく言った。

「あなたがお子ちゃまなだけ」

ヴォルトモード卿が今、目の前を通過する。

そんな所だった。

不意に、ヴォルトモード卿の脚が止まった。
刑務執行官達が一瞬、刑杖でその後ろから小突こうとして動きを止めた。
構えかけた刑杖をどうしていいのかわからず、躊躇った後に戻す。
少女は、ヴォルトモード卿の視線が自分に、いや、前に立つ自分の上官に向けられていることに気づいた。

ざわっ。

ヴォルトモード卿の視線に誰がいるのかを知ったこと。
周囲のざわめきはそのためだ。

「……」
上官は、無言で敬礼する。
能面のように感情を押し殺したその顔には、その地位に相応しい威儀がこめられている。
それに答えるように、ヴォルトモード卿が答礼を返した。

自分の上官は、参謀として軍を指揮し、実質的にヴォルトモード

卿と魔族軍をうち負かした張本人。

イツミ・アマテル情報軍少将、第三軍総司令官。

二人の関係は、勝者と敗者。

それだけで言い足りるはずだ。

なのに、その光景はそんな安易な言葉を越えた、むしろ荘厳な儀式にさえ思えてしまう。

息をすることさえ忘れた少女の目の前で敬礼を解いたヴォルトモード卿が、処刑の場へと再び歩き始めた。

「まぁ――――これで」

上官はため息混じりに言った。

「二千年は大丈夫でしょう」

「たった二千年、ですか？」

「仕方ないでしょう？」

上官は頷いた。

「軍令部のアホ共、あんな休戦協定を受け入れちゃったんだから」

状況の説明が必要だろう。

この人間界において、“人間”を作り上げたのは誰か？

それは、創造主たる神。

否――人間にとって“神に最も近い”存在だ。

名を「神族」と「魔族」という。

共に、人間界とは異なる異次元世界――天界と魔界に住む存在であり、死者の世界である獄界に住む獄族と共に、この人間界を発見した張本人達。

新たなる開拓地。

新世界。

それが魔界と天界にとっての人間界。

彼等は、競うようにして人間界の開拓に着手した。

最初は自らの手で、後に工業生産品として量産される奴隷――人類を使って。

工場の試験管の中で種となり、
培養槽の中で促成培養され、
その中でマインドコントロールという名の学習が与えられ、
名前も与えられず、
労働力という名の歯車として扱われ、
不要の烙印を押されたが最後、
神族や魔族達が生み出した生ゴミと一緒に、有機体分解装置に生死を問わず放り込まれ、
合成装置によって“合成食品”という名で仲間の栄養源として仲間の血肉となる存在。

それが人間だ。

欠けた仲間は、
工場に発注するだけで交換出来る、
使い捨ての、
生殖能力のない、
文句も言わない、
ただの有機生命体としての工業製品。

神族にとって、あるいは魔族にとっても、人とはそんな存在に過ぎなかった。

人間とは奴隷以下の存在だった。

両族は互いの都合だけで人間界を開拓し、必要な人間を工場で量産し続け、その管理は時に従って杜撰きわまりないものとなってい

った。

消耗品同然に使い捨ての効く労働力としての人間に支えられた、無計画に近い開拓競争の結果は、必然ともいうべきしっぺ返しを用意する。

神族と魔族の双方がそれに気づいた時には手遅れだった。

いかなる理由か、人に生殖能力が生まれ、マインドコントロールが施されずに成人した“異端者”が世界中で生まれていたのだ。

工業製品に過ぎない人間が勝手に子孫を増やすことはあり得ない。生殖能力が遺伝子レベルで削除され、あくまで培養槽で生まれる“製品”として扱われていた人間が、子供を産み育てることは出来ないはず。

だが、人類の女が子供を出産する現場に立ち会った双方の科学者達は、人が“製品”ではなくなったことを思い知らされた。

原因はすぐにはっきりした。

杜撰な管理は人間の生産現場にも及んでおり、量産用の遺伝子がいつの間にか書き換えられ、その遺伝子情報に魔族と神族という、人間にとって“主人”のデータが加えられたのだ。

一部の神族や魔族が性的な玩具として人間を改良した結果であることは明白だった。

女に子宮を与え、慰み者として性欲処理に使う。

男は精巣と男根を与え、玩具やペットとして愛玩する。

そんな玩具達が、ずさんな管理と低いモラルの元、安易に捨てられ、そして互いに出会い、その製造目的を玩具同士で果たしたらどうなるか？

結果は明白だった。

人が人を産む。

その術こそが、神族と魔族にとっては絶望の種子であり、その産物が禁断の果実だった。

聖書に語られる禁断の果実――――知識。

知識とは？

性の快楽。

生殖能力を手に入れ、繁殖を続ける中、抗いがたいその味を覚えた人間は、快楽を追い求め続けた。

快楽の結果が、莫大な人間の爆発的増殖だ。

しかし、神族と魔族は、それを放置した。

曰く、仕事以外の事柄まで関与する必要を認めない。

曰く、必要ならいつでの“消せる”。

共に、工業製品として人間の量産を続けており、その必要数は安定的に確保していた。

彼等には、開拓に影響が出ない範囲でなら、生殖能力を持つ人間など、飼い猫や飼い犬が野生化したのと同等程度にしか認識していなかったのだ。

あくまで開拓という、自分の仕事以外には関与しないという、官僚の理論がまかり通った結果だ。

人間界における神族と魔族双方の繁栄と並行して、人類の繁殖は約1万年に及んだ。

その間、神族や魔族の世界に溶け込んだ一部の人類を通じて、人類は彼等の社会を模倣していった。

生活の向上は生きることに快適をもたらし、貧富の差、身分制度、憎悪、犯罪など、両族の負の部分までを人間の間に生み出した。

人間は、両族の技術や考え方、そして知識のほとんどを取り込み、いつしか世界規模の社会を築き上げた。

後に人類が超帝国と呼ぶ連合国家社会の誕生である。

神族と魔族の技術と知識によって生み出された人類の社会。

そこには、一つだけ決定的なものが欠けていた。

技術と自然のバランスをとる方法だった。

人間は、自然との共存を最後まで理解出来なかった。

搾取すべき対象。

それこそが自然であり、自然は敵でしかなかった。

神族や魔族が作り出した社会なら外部に漏れ出すことのない汚染物質が公然と大地を、水を、空気を汚し、動植物は糧として、道楽として、人間達によって乱獲されていった。

その結果は、さすがに神族と魔族を青くさせるに十分すぎた。

ダイナソアが消え、サーベルタイガーが消え、マンモスが消え…

…気がついたときには、手に負えないレベルで自然破壊が起きていた。

水も空気も、そして大地も――――全てが人類により汚染されつくされていた。

性の快楽を本能とし、快楽だけを追い求める人類の飽くなき欲望は、罪無き他種を侵すことに何らためらいもなかったのだ。

初めての人類が生み出された時点と比較して、三百万種の種族が消えた。

三百万種。

それは、神族と魔族が地上に用意した種族の大半が絶滅したことを意味する。

大絶滅と呼ばれる事件だ。

官僚的な、曖昧な対応に終止する神族に我慢強く対応した魔族だったが、彼等が宗教上、重視する聖獣“セイクレッド”が人間達による乱獲の結果、地上から絶滅したことが判明し、これが決定的な引き金となった。

魔族は、神族が問題を放置することでこの大絶滅を引き起こした。これ以上の議論は、絶滅を増やすだけだと主張し、神族の中にまでシンパを産み出すほどの影響力をみせた。

その最も急先鋒にいたのが、魔族側軍団長ヴォルトモード卿だ。

人類を絶滅し、傷ついた地上世界に修復の時間を与える。

そうしなければ、人間界は滅ぶ。

主の与えたもうた新天地は、そうでもしなければ守れるものではない。

このままでは、我らは地上を開拓するのではなく、滅ぼすためにこの地にやって来たことになる。

人を絶滅することを何故恐れる？

人とは、あくまで我らの被創造物に過ぎない。

生殺与奪は元より我らの特権。

我らはその権を行使するのみ。

それを忘れるな。

その主張を現実とすべく、ヴォルトモード卿の軍勢は人類の大粛正に乗り出す。

当時１００億を超えていた人類を絶滅寸前に追い込んだ彼の振る舞いを神族は黙認した。

目の前に人類の死骸を積み重ねられて尚、彼らは黙っていた。

反撃の時期を、待っていたのだ。

時期――それはすぐにやってきた。

人類と誤認した神族の殺害事件。

神族は「地上世界における神族の利権と安全の確保」を口実に魔族に刃を向けた。

魔族軍と神族軍の戦いの始まりである。

戦いは数百年の長きに渡った。

その間、神族の中にもかなりの数、卿に対する同調者がいたのは事実であり、神族側の意見の統一がとれなかったことが結果として戦いを長引かせたが、とにかく、魔族軍は各地で数に勝る神族軍と互角に渡り合った。

そのヴォルトモード卿の戦いが終わらせたのは、魔界を統べる皇帝――魔帝と、天界を統べる王――聖帝の直接対話であった。

互いに恐れたのは、地上の利権争いが、本格的な双方のつぶし合いに転じること。

それだけだ。

彼等の関心事に人類の行く末はない。

この会談の結果――

ヴォルトモード卿とその軍勢は、魔界から切り捨てられた。

どういうことか？

魔界からの補給を断たれたのだ。

――味方の、魔族によって。

天帝軍は、地上における戦闘を停止する。
その条件として、魔族は人間界に対する補給を停止する。

そんな、双方の帝の合意の結果だ。

これではヴォルトモード卿のメンツは丸つぶれになるのではないか？
否。
この時、魔帝が最も怖れたのは、聖帝でも天帝軍でもない。
人間界での軍功と個人のカリスマをもって勢力を拡大し続けたヴォルトモード卿自身だった。
人間界にいるにも関わらず魔界で支持を広げ、次期魔帝に推薦する声まで上がる彼を、魔帝は怖れた。

それ故にヴォルトモード卿に命じたのだ。

神族と和平をなせ。

それが半世紀にわたる自らの戦いを否定するものだったとしても、主君の命令を保護にするヴォルトモード卿ではなかった。

魔族軍と神族軍の停戦交渉が開始されたのは、それからすぐのこと。

停戦交渉は、申し出た時点で負けを意味する。
これを理解して欲しい。
勝っている者が自ら矛を収めることはありえないのだ。

この当時、ヴォルトモード卿率いる魔族軍は地上の7割を制圧し、25カ所で天帝軍相手に降伏勧告を出している最中だった。
そう。
ヴォルトモード卿は、圧倒的勝利を目前にしながら、停戦交渉を自ら申し出るという、敗軍の立場に追い込まれたのだ。
神族は、そこにつけ込んだ。

魔族軍の武装解除。
地上に残る全魔族軍の閉鎖門（クローズド・ゲート）への封印。

神族の打ちだした要求は、いわば魔族軍の皆殺しに等しい要求だ

った。

異世界をつなぐ移動空間――門（ゲート）。

その出入り口を完全に塞げば、門（ゲート）内部に存在する者は、時間の流れから完全に取り残される。

天帝軍には、魔界に彼らが戻ることによって、彼らの認識においては地域紛争に過ぎないこの戦いをこれ以上エスカレートさせて、双方の全面戦争へと駆り立てる声が高まる事への警戒感があった。

そして、その警戒感は、肝心の魔帝の怖れと繋がり――

魔族軍が戦闘を停止、補給もなく、天界から送り込まれてくる神族の増援を指をくわえて見ているしかないのに対し、天帝軍は兵力を増強。

魔界はそれさえ黙認した。

彼我の軍事バランスが完全に逆転したのは、ヴォルトモード卿が神族軍の突き出した降伏文書に調印する遥か以前のこと。

――自分の処遇は一任するが、せめて部下達は祖国へ

そのヴォルトモード卿の願いは、要求の完全履行を求める神族の官僚達には届かなかった。

一体、何のために全軍を封印するのか。

魔界は何故、自分達に救いの手を差し伸べてくれないのか。

何も告げられることもなく、ただヴォルトモード卿の耳には、その日、どの部隊がどこでの門（ゲート）に封印されたか、それだけが告げられ

る日々が続く。

結果として、全部隊の封印を見送ったヴォルトモード卿が、神族の支配地であるこの弓状列島の中心地に封印されようとしていた。

「……」

目の前には、真っ暗な穴が無慈悲に口を開いていた。

この中に入り、口を封じられれば、次に出てくるのは何年、何千年先のことかわからない。

音もなければ時を感じることもない、無慈悲な世界。

痛みも苦しみも、空腹さえ感じない世界だ。

「……閣下」

神族の刑務官が穴の両脇に立ってヴォルトモード卿に告げた。

「これは、罪状です」

刑務官が丸められた羊皮紙を広げた。

「地上に戦禍をもたらしたことに対する罪の」

「……」

ヴォルトモード卿は、無言で頷いた。

「魔界ヴォルトモード公爵を無期限の封印刑に処す」

「……」

「……何か、ございますか？」

「一つ」

ヴォルトモード卿は、処刑を前にしているとは思えないほど毅然とした声で言った。

「――儂との取り決めは、生きておるな？」

「……」

刑務官の視線が、自らの司令官に助けを求める。

彼らを一望出来る台の上で成り行きを見守る高官達の中にいた司令官は、無言で頷いた。
「――――はい」
刑務官は頷き、別な羊皮紙を開いた。

「終戦協定付帯条件――――
第一条、万一、人類によってこの封印が破られた場合、それは人類が魔族に対し戦線を布告したものと見なす。この際においては、神族はその名誉にかけて、魔族軍の反撃に一切の手出しを行う権利を放棄する。
第二条、神族・魔族ともに地上開発の主導権を放棄し、人類に一任する」

読み上げた刑務官は、“合ってますか?”と、まるで子供のようにヴォルトモード卿をちらりと盗み見た。
目をつむって、それを聞いていたヴォルトモード卿の顎髭に埋もれた口元が楽しげに歪んだのに気づいた者は、そうはいない。

「――――馬っ鹿」
それに気づいたのは、少女の上官だ。
「まんまと乗せられて」
「乗せられた?」
「シルフィーネ」
機嫌の悪さを示すトーンの低さに恐れおののきながら、少女は背

筋を伸ばした。
「おっぱい大きくしているヒマがあったら、すこしは栄養を脳みそに回しなさい」
「な、なんてこと言うんですか」
「考えてご覧なさい」
「？」
「ヴォルトモード卿が言っていることは、この地上を、神族も魔族も、基本的に介入出来ない、つまり、人間共の好き放題にさせるってことよ」
「……別にいいんじゃないですか？」
「ぐーで殴るわよ？」
「……つまり」
「……」
「どういう意味ですか？」
「……共に戦った人間達に全てを任せるって、響きはいいことよ？しかも、復興資金を支払わなくて済むから、官僚共は大喜び。生き残った人間達のことなんて知るかって意味にもなる」
「はぁ」
「でも、そもそもこの戦争が勃発したのは、人類の行った環境汚染が原因よ？それが根本から解決していないどころか、戦禍で悪化している」
「……ってことは？」
「何も変わらないどころか悪化した結果を人類に押しつける。なんだかんだ言っても、神族や魔族にすがって生きてきた人類は子供と同じ。
そんな連中に明日から自力で生きろなんて言ったら大混乱が起きるわよ？
その混乱の結果として……違う」
「違う？」
「人類をそそのかして、復活させることが――出来る」

「まさか」
「そのまさかよ……」
上官は言った。
「間違いなく、ヴォルトモード卿は復活する。その時は、魔族対人類よ？――私達抜きの」
「人類に勝ち目は！」
「ヴォルトモード卿は、今回の戦いは諦めた」
そう言う上官の目の前で、ヴォルトモード卿が門の中へと消えていく。
「それは何故？――次の戦いのためよ。次の戦いに勝つために、今の敗北を選んだ」
「……」
「……やってくれるわよ」
「どう……するんですか？」
少女は真っ青になっていた。
「……私が知るもんですか」
「イツミ様っ！」
「じゃあ、あんたが何か出来る？」
「――っ！」
「人類に兵器でも供与する？あいつらは、それで互いに殺し合うだけよ」
「……」
「時の流れに任せるしかないわ。時の流れの中で、人類が門（ゲート）に接触しないように監視する。その程度ね」
「情報統括軍を指揮するイツミ様のお言葉とも思えません……」
「これはね。シルフィーネ」
ヴォルトモード卿の封印を見守り終えた上官は言った。
「根気のいる作業なの。音を上げた方が負け」
「……そういうものなのですか？」
「そうよ。千年、二千年……何年かかるかわかんないけど、それま

でに人類が、今以上にバカになっていないことを、祈るしかないわ」

「……はい」

「――ま。無駄でしょうけど」

シルフィーネと呼ばれた少女が、魔族軍から解放され、さらに神族の手を放れた各地で人類同士が殺し合いを始めたことを知ったのは、それから数日後のことである。

それから約２７００年近くが過ぎようとしていた。

２７００年。

もう、古い過去の話。

古すぎると言っても文句も来ないはずの――過去の話のはずだ。

「お母さん」

ぼんやりと月を眺めていたシルフィーネは、不意にかけられたその声に、我に返った。
「あら……悠理、どうしたの？」

場所は自宅。
あのヴォルトモード卿が封印された地から少し離れた場所に人間が立てた住まい。
その縁側に腰を下ろしていたシルフィーネの顔を、銀色の髪をした女の子が不思議そうにのぞき込んでいた。
女の子？
否、男の子だ。
腹を痛めて産んだとはいえこの子は本当に性別を間違えてしまう。

１４年前に、人間との間に生まれたシルフィーネの宝物。
上官であるイツミの元へ修行に送り出して、久々に帰ってきた所だった。
突然のことに、自分がどんな顔をしているのかさえわからない。
ただ、驚いているだろう。

何で、あんな昔のことを思い出したんだろう。

シルフィーネは不思議に思ったが、せいぜい、息子からイツミの話を聞いたからかも知れない。
そう考えた。

イツミが動いた。

その意味は、考えたくない。

「ぼんやりしてる」
「そう？」
「寒くなってきたから、お部屋に入ろう？」
「……そうね」

シルフィーネは息子の持ってきてくれた綿入りの半纏に袖を通すと、息子を抱き上げた。

――――もう抱っこしなくても歩けるよ。
――――せっかくなんだからお母さんに甘えさせなさい。

部屋に入る前、シルフィーネは、もう一度、ヴォルトモード卿が封じられた門（ゲート）の方角を見た。

今、その場所が正確にはどこにあって、そこに何が眠っているかを知るのは、この国を統べる君主、あのヴォルトモード卿に対する厚遇を求めた王の末裔と、その率いる組織のみ。

それでいいと思う。

人は、忘れるという特技がある。

あんなものは、忘れてしまうのがいい。

そう思う。

「おい遥香」

部屋の奥から夫の声がした。

「あ、そうそう。悠君、お父さんと一緒にお風呂に入りなさいな」

部屋に入れば、そこには、神族と何も変わらぬ人の生活がある。

それを護るために、あの御方は眠っているのが良いのだ。

イツミ様の予測が外れますように。

シルフィーネは、小さくそう願った。

物語は、ここから始まる。

終わったはずの戦い（後書き）

……なんか、書き続けていて、どうしても書きたい方向と違ってきましたので修正します！

ギアナ高地事件

●ギアナ高地。

南米大陸北部の高地帯である、１７億年前の古い地層がむきだしになったテーブルマウンテン状の山々が大小無数に近く存在し、絶壁によって下界から隔絶されたテーブルマウンテン山頂付近では、独特な生態系が繁栄を誇る、まさに秘境。

それがギアナ高地である。

その一角であるロイマと呼ばれる地点は、テーブルマウンテンの山頂から見れば下界のさらに下界としか言い様のない場所。

ジャングルの中を徒歩か、或いはヘリでなければ近づくことさえ難しい所。

今、そこには様々な機材が持ち込まれ、機材の間を人々が右往左往している。

発電用ディーゼルにつながれた照明が煌々と照らす中、続けられる作業は、発掘作業だ。

「まさか――伝説が本当だったとはな」

発掘作業の中、ようやく現れた“それ”は、岩をくりぬき、コンクリートによく似た謎の物質で仕上げられた地下室の入り口だ。

「……ああ」

スタッフの呟きに、エール大学のウォルフガング教授は無意識に頷いた。

この地方特有の粘り着くような湿気を含む暑さが教授の老いた体にはきつい。

教授の専攻は考古学。
しかも超帝国の研究が専門だ。
ある日、エール大学の研究室にベネズエラから送りつけられてきた封筒（エアメール）が全ての発端だった。
ベネズエラ在住の考古学マニアを名乗る人物からの封筒の中身は、数枚の手紙と写真。そして白い石と地図だった。

ギアナ高地のロイヤで偶然、不思議な遺跡の入り口を発見した。

手紙は、そう書いてあった。

自分に理解出来ない建築物はすべて超帝国の遺跡だと言い張る無知な連中に振り回されて半生を送った教授は、ビール片手に同封された写真を見た。
放置されたコンクリート製の部屋というのが、教授の最初の判断であり、手紙をゴミ箱に放り込んだとしても文句を言われる筋合いではない。
――おい、これって。
教授が動きを止めたのは、偶然にもサンプルとして送られてきた白い石に触れたから。
その異質な感触は、幸いにして指が覚えていた。
コンクリートじゃない。
この感触は――
彼はその白い石を分析に回した。

その結果、石はコンクリートに極めて近い、ラムリアース帝国に残されている、超帝国の遺跡でも使用された人工物であることが判明。

大学から予算を分捕った教授は、スタッフと共にギアナ高地へと飛んだ。

「歴史的発見ですよ」

助手のキャサリンがソバカスだらけの顔を興奮に赤くして言った。

「この未開の地、ギアナ高地に超帝国遺跡なんて！」

「……ああ」

教授もそう思った。

人類未到の地として知られたこのギアナ高地に、超帝国遺跡だ。

これは重要な発見――いや、歴史的発見だ。

下手をすれば、人類の歴史がひっくりかえる。

「しかも、ここはかなり大切な場所だったんじゃないですか？教授」

「どうしてそう思うんだ？キャサリン君」

「だって、こんな広いんですよ？」

キャサリンのマグライトが遺跡の中を照らし出す。

長い歳月の流れの中、遺跡は相応のダメージをおってはいたが、遺跡そのものの持つ風格が衰えることはない。

マグライトに照らし出された室内。

入り口こそせまいが、天井はそこそこ高く、ちょっとした街の教会が入りそうなサイズのホールが開けていた。

「これは――まるで神殿です」

「そうか？」

突然、後ろからあがった野太い声に、教授とキャサリンは思わず飛び上がった。

「ああ、失礼」
そこに立っているのは、軍服をラフに着込んだフリー記者のロバートがいた。
「これが神殿？」
ロバートは、手に持ったマグライトで天井を照らす。
「俺にゃ、コンクリート造りの倉庫くらいにしか思えないぜ？」
「その意見には同意するよ」
教授は頷いた。
「紀元前九から七世紀の頃は、どういうわけか建物の造りは荒く、装飾はほとんどなされない。ほんの2、３００年前まではしっかりとした飾りがなされていたのに。これは全くの謎だよ。
この遺跡は、超帝国時代の素材で造られているが、間違いなくこの時代の特徴を示している」
「紀元前7世紀なら、戦争でしょう」
ロバートは言った。
「戦時中のバラック代わりに立てられた建物だから、そうなったんじゃないですか？紀元前7世紀頃って、全世界で戦争があったことは、俺でも知っています」
「……君は、新聞記者を辞めて学者になればいい。洞察力に優れているようだ」
「遠慮します。俺はむしろ学会の賞賛より」
ロバートは、近くに転がっていた石柱を軽く脚で小突いた。
「お宝の方が」
「――ふん」
俗物が。
教授は小さくそう呟くと、ロバートに言った。
「世紀の発見だ。発掘の邪魔だけはしてくれるなよ？」
「へいへい」
ロバートは肩をすくめた。
「何か出たら教えてください。外でタバコ吸ってます」

教授、これは何か呪術的な意味が？
わからない。何だ……この石柱は？
あちらに、何本か似たものが
ふむ……この溝に差し込めばいいのか？

ロバートは、教授とキャサリンのやりとりを背中で受けつつ、出口を目指した。

出口にさしかかった途端、むっとする空気に息が詰まった。
「早く帰りてぇなぁ……」
Ｔボーンステーキから遠ざかってすでに何日だ？
ああ。フライドポテトを腹一杯食べてぇなぁ……。
ロバートは、資材の入っていたコンテナに腰を下ろすと、マルボロに火を付けた。
何しろ、今回の取材は、依頼からして異常だった。
ＮＹのオフィスにかかってきたＦＡＸ。
ギアナ高地で行われる発掘を取材してくれ。費用はすでに口座に送金済み。
依頼主は教授。
売名行為のお先棒を担ぐのは好きではないにしても、仕事にあぶれていたロバートは、もらった金を元手に、ここまで来た。
だが――
肝心の教授は、彼を雇った覚えはないという。
それだけじゃない。
カラカスに入ったロバートは、空港のロビーで背広姿の男達に囲

まれた。

――ロバート・キャッチャーだな？
――そうだ。
――仕事を依頼したい。
――仕事？

その“仕事”は終わった。
報酬はドル紙幣の束を２つ。
ただ、わからないのは――

石柱に教授達の興味を引け。
最悪、君自身が石柱を調べろ。

それが仕事だ。
まるで女子供でも出来る仕事だ。
それをこんな大金で？

――マズかったかな？

ロバートは、そう思って、今回の仕事を引き受けたことを後悔し始めていた。

きっと、ずいぶんと厄介なことになるだろう。

それだけははっきりとわかる。

何しろ、ここロイヤは、元は現地人の言葉で“悪魔の巣”を意味する土地。

現地人のガイドからシェルパまで、地名を聞いただけで集まらなかったという曰く付きの場所だ。

迷信深いと笑われても、その迷信を信じてきたから、自分は生き延びてきたと、ロバートは考えている。

「……ん？」

ズズズッ。

不意に地面が揺れた。

「地震か？」

ロバートは立ち上がろうとして出来なかった。

ズンッ！

グアテマラで爆撃機の誤爆を喰らった時を思い出した。

間近で爆弾が爆発し、衝撃波に吹き飛ばされたあの時と同じだ。

気が付くとロバートはなぎ倒された木々の下に挟まれていた。

「……っ！」

隙間があったのが幸いだ。

何とか木々の間から這いだしたロバートは絶句した。

「……な、何だ？」

それまで見事な緑の絨毯を作り上げていたギアナ高地の緑は、軒並み吹き飛ばされていた。

それはまるで集中爆撃を受けた跡さながらの光景だった。
「何が……起きたんだ？」
スタッフ達が倒れた機材の下敷きになった仲間を助けようと駆け回る中、ロバートは確かに見た。
テーブルマウンテンが、一斉に崩れようとしている、その光景を――――。
「な、何だ？何なんだ？」
テーブルマウンテンの断崖を構成する岩が、まるで剥がれるように落ちていく。
その隙間から、何かが飛び出した。

――――鳥か？

違う。
鳥にしては奇妙だ。
あの羽根は、まるでコウモリのそれだ。
だいいち、コウモリにしても鳥にしても、あんな長い首はもっていない。

同じような奇妙な生き物たちが続々とテーブルマウンテンの岩肌から現れてくる。

ロバートは、その光景を呆然とみているしかなかった。

「何が来ているんですか、軍曹!?」
「モンスターだとよ」
「俺達、ハリウッド映画に出るんですか?」
「少なくとも、ギャラが出るとは聞いてねぇ」

ギアナ高地を下り、都市マナオスに迫りつつあるバケモノ達に対し、ブラジル陸軍はマナオス防衛のために部隊を送り込んだ。
戦車を配備した戦車大隊と歩兵連隊。さらに砲兵連隊がそれぞれ2個ずつだ。

彼らの中で、敵が何者なのか知る者はいない。

そんな彼らが見た敵とは、実に奇妙なものだった。

「なんだありゃ」

銃を構える兵士の一人が唖然としたのも無理はない。
戦闘準備を整え、敵の出現を待つ彼らの目の前に現れたのは、ギアナ高地方面から風にながれて向かってくる、黒いアドバルーン達。

「小隊長、ありゃなんですか？」
兵士の一人の問いかけに、小隊長も答えられず、ただ空を見上げるだけ。
「通信、貸せ」
通信兵から無線機を受け取った小隊長は、司令部に問いかけた。
「こちらホテル０２　キング０１　送れ」
「こちらキング０１」
「前方２００メートル付近に不審なアドバルーン、数４、命令を求む。送れ」
「キング０１よりホテル０２　アドバルーンとは何か？　送れ」
「キング０１　天幕から出て外を見ろ！」

しばらく後に、司令部から命令が入った。

「キング０１よりホテル０２、小銃による攻撃を許可する」
「――――だそうだ」
小隊長は無線機を戻し、部下に命じた。
「一発ずつでいい。無駄弾は撃つな――――構え」
ガチャッ
全員が照準をアドバルーンに向ける。
「撃てっ！」
銃声。

次の瞬間。

「っ！！」

すさまじい爆発音がして、小隊長達はとっさに頭を地面に叩き付けるように伏せた。

「……？」

恐る恐る見上げた空。

そこにアドバルーンは存在しなかった。

「誰か、アドバルーンがどうなったか、見た者はっ！？」

「破裂したように見えました！」数名の兵士からそんな声が上がる。

「通信兵」

小隊長が通信兵に手を伸ばすが、通信兵は通信機を手渡そうとしない。

「どうした！」

小隊長の怒鳴り声に、通信兵は背負った通信機を下ろしながら答えた。

「通信不能！」

「何？どういうことだ！」

「くそっ！どういうことだ！？」

戦車の操縦席に座る兵士が規定の動作を何度も繰り返し、

「キング０１、司令部応答しろ！」

戦車長が無線機に怒鳴るが、戦車は動きをみせない。無線機は言葉を運ぼうとしない。
兵器が――――動かない。

「くそっ！ＥＣＭか？」
機能を停止したパソコンに見切りをつけた司令部の一人が電磁波攻撃について触れた時にはすでに遅かった。

ドドドドド……ッ
不意に、地響きが兵士達を襲った。

「なっ、何だ？」
木々の群れを踏みつぶし、こちらにむけて襲いかかってくるのは……。

見たこともないような巨大な物体の群れ。

まるでサイだかトリケラトプスだかをスケールアップしたようなバケモノが、自分達にむけて走ってくる！

「う、撃てぇっ！」
小隊長の怒鳴り声に弾かれたように兵士達は小銃を撃ちまくる。
だが、そんなことで敵の動きが止まるはずもないことは、撃っている彼ら自身、わかっていることだ。
「戦車、戦車は！」
敵が面前に迫る中、小隊長が叫ぶ。
背後からは何の砲声もしない。
「くそっ！――――第二小隊、戦線を放棄！逃げろっ！」

状況説明　政治

「騎士と魔導師が生まれたのは、紀元前に存在した“超帝国”においてだとされる」

壇上の外部講師は、そう言ってチョークを握った。

「歴史を語る上で、“超帝国”は、神話の物語として一笑に付されるのが普通だ。

この世界を統一支配した帝国。

そんなものは丁度、ムー大陸やアトランティスのようなもの――つまり、存在なかった。

そう、判断されている。

超帝国の遺跡とされるモノはあちこちにある。

だが、人類の進化を考えれば、なぜ、どうやって、それほどの高等な建築を作れたかが説明出来ない。

はっきり言えば、現代の建築技術を上回る高い技術がふんだんに使われた遺跡だって五本の指では足りないんだがね。

なら、学者はその存在をどう判断しているか？

それこそオカルトの世界さ。

無視するか、あるいはオーパーツ扱いするか……。

どっちにしても“都合の悪い存在”ってところかな？

わかるだろう？

普通じゃあり得ない話なんだから。

とはいえ、そんな連中でも、騎士や魔導師の存在、そして、超帝国の末裔を名乗るラムリアース帝国を否定出来る者はいない。

当然だ。

目の前に存在するモノを否定することは誰にも出来ないのだ。
たとえば――そうだな。
ラムリアース帝国のシャール遺跡群。
スライドは……これだな。
見たまえ。この荘厳な石造りの建築群を。
ここに残る遺構は、少なくとも数千年前に建築されたことは確かなのだが、誰がどうやって造ったか。この建築素材をどうやって作ったのかさえ、まったく解明さえ出来ていない。
つまり、この遺跡に対して現代建築技術が追いついていないのだ。
たが、いくら現代の建築技術を信じていようとも、誰も、この遺跡に高い技術が用いられていることを否定出来ない。

建託だけではない。
超帝国の産物とされる騎士も魔導師も世界中に存在する。
そして――魔法もだ。

誰がどうやって騎士を、魔導師を生み出し、魔法を編み出したか？
世界中の様々な民族の大半に騎士達の種を、誰がどうやって持ち込んだのか？
世界中の異なる言語体系の中、類似する魔法を誰がどうやって伝えたのか？
……はっきり、謎だ。
その謎を説明するために、“超帝国”という特異な存在を持ち出すのは、むしろ理にかなっていると、私はそう思う。
何故？
楽だからさ。

騎士と魔導師についてだね？

鉄板さえ貫く腕力と、時速数百キロで走れる運動能力を誇る騎士。

ＥＳＰを元にする魔法を自在に操れる魔導師。

いわば超人達だ。

こんな存在が生命体の通常進化の中で自然発生することがありえない。それはわかるだろう？

はっきり異質と言い切れるのだよ。

ならば何故、どこで、どうやって、騎士や魔導師が生まれたか？

それは誰にも分からない。

超帝国が伝説の存在であるように、人類の過去はあまりにわからないことだらけだ。

特に、紀元前七世紀から六世紀に至る一世紀は最悪で、その頃の遺構は、全て大きく破壊されている。

いいかい？

紀元前九から七世紀にかけては、俗に“断絶の世紀”と呼ばれている。

伝説では、神と悪魔、そして巨人達が戦った時代とされるが、そんなことをマトモに信じる者はいない。

それにしても、この頃に世界規模で激しい戦いが繰り広げられただろうことだけは、石碑や口伝、伝説。様々な形で語られている。

そして、この紀元前七世紀から紀元前一世紀頃まで、ごく一部の――例えばエジプトやペルー、黄河といった、ごくわずかにして、紀元前七世紀とは比べものにならないほど低いレベルの文明が、現代文明まで続くことになる。

世界が安定を見せたのは、紀元前一世紀頃。

ヨーロッパでは、少数部族達が群雄割拠を繰り広げていたし、イタリアをギリシアやローマ帝国が支配している有様だ。

当時、世界最大規模の帝国といえたのは、ラムリアースとローマ

程度だったが、ローマは疫病の発生や内紛などで、ヨーロッパへの侵攻はほとんど出来ずじまい。
その間に、後のドイツやフランスといった国々の祖先が誕生することになる。
まぁ、君達の知る歴史は、そんな頃に始まったわけだ。

それから二千年。

ヨーロッパは少なくとも4世紀から今日まで、ずっと安定した気候の元、たいした疫病も外敵もなく、長き良き中世を続けることになる。

ヨーロッパは本当に平和だった。

当時としては魅力的な取引品もないから、疫病の巣のような状況を呈していたインドやアジアとの交易はほとんどなかったし、何より、ヨーロッパにとって、そんな所は人間の住処ですらなかった。
モンゴル帝国をはじめ、ときおりあった異民族の襲撃は、彼等にとっては人間以外からの襲撃であり、つまりは悪魔の来襲。
そんな時はヨーロッパ人は全てを超越し、戦いを神の意志として捉え、魔法と騎士達によって殲滅させたものだ。

モンゴル。

この連中のヨーロッパ、中東方面への侵略を食い止めた意義は大きい。

どういうわけか、中国大陸は騎士や魔導師が恐ろしく少ない反面、ヨーロッパは逆にウマが少ない。
ウマに乗った騎馬兵達がその移動スピードが圧倒的脅威足り得た

背景には、そんな事情がある。

ヨーロッパ以前に、騎馬の侵攻を食い止められなかった中国と朝鮮半島は、それまでの偉大な遺産のほとんどを焼き払われ、各地に残されていた貴重な文献は川に投げ捨てられた。

王朝は潰され、生き残った市民は略奪と暴行、強姦に曝された挙げ句、虐殺された。

こと、戦闘の最中、モンゴルによる兵糧責め作戦の産物として、中国各地の灌漑施設を大きく破壊されたことは致命的だ。

当時の中国大陸は全域に渡って気候の異様な変動によって乾燥していたため、灌漑施設は農業を行う上で必須の存在だったのだ。

このおかげで見る間に大陸の農業は衰退し、後に支配したモンゴルでさえ、宥和、つまりは懐柔政策で現地の不満をそらし、なんとか帝国を維持せざるを得ない状況を産み出した。

ちなみに、当時の餓死者は大陸全域で当時の全人口の半分近くに登ったとさえ言われる。

スゴイだろう？

これほどの破壊が西側で起きていたら？

考えたくもない話だが――よし、これだ。

スライドに映したのは、現在のバビロニア帝国の首都バクダット。

砂漠地帯なのに緑豊かなこの大都市だが、実はここも連中に襲われた。

この時は、幸いにして騎士によって防衛されている。

騎士達の功績だ。

バクダットは、当時から続くイスラム科学を中心とした世界最高

峰の学術都市だ。
隣接する都市がいくつもモンゴルにより破壊され、貴重な書物が灰燼に帰したことを考えて見ろ。
それがバクダットで行われていたら、人類は今持っている知識のかなりを失っていたろう。
それを救ったのは騎士達だ。
騎士！
何と素晴らしいんだろうなぁ……。
おいおい……居眠りしないで先人達の功績を聞きたまえ。

……起きたか？
今ある世界の話だな。
モンゴル襲撃の後、ヨーロッパと中東は、一時的な戦乱の時期を迎え、この間に、いくつもの帝国や王国が勃興しては滅びていった。
安定するのはルネサンスの頃以降だ。
ルネサンスは、剣から金へというフレーズが語るように、武力により領土拡張を狙うより、産業をもって経済的覇権を狙う方が良いと、君主達が思うようになった時代でもある。
軍事から経済主体への変化とも言えるな。
経済状態をよりよりくするために、各国は貿易による緊密な相互関係を作り上げた。
国家間の問題は武力ではなく外交でケリがつく。
いや、ケリをつけるしかなくなった時代の到来だ。
何故？
理由の一つが、ルネサンス期の闇を支えた魔法の劇的な発展がある。
それまでの魔導師や魔法騎士が使う魔法を、手投げ爆弾ほどの破壊力に例えよう。
なら、ルネサンス期の彼等の使う破壊力はどれ程？
大型爆弾並。

お世辞でそれだ。
たった一人の魔導師の攻撃で、千人の兵隊が黒焦げにされただの、城が吹っ飛んだだの、物騒な話はそこら中に転がっている。
そんな破壊を安易に使われてはかなわない。
灰燼となった都市や黒こげになった市民を欲しがる者はいないのだ。

特に、17世紀からヨーロッパの安定と繁栄の時代は、こうした魔導師の脅威から逃れるための措置として生まれた側面を忘れてはならないだろう。

宗教的な問題は無論あったさ。
プロテスタントとカソリックとかね。
だが、考えてみたまえ。
宗教上の理想と、無残な破壊という現実。
君が君主ならどっちをとる？
宗教で争うより、それを越えて儲ける方が利口だろう？
滅んだ国は、この逆をやった国がほとんどさ。

そして、時が流れてアメリカの発見と独立、そしてその発展を尻目に、ヨーロッパ各国はこの頃になってようやく新たな貿易対象を求めてアフリカやアジアへの進出を始める。

ヨーロッパ人がやっとアジアへ興味を持つようになった理由？
単に産業革命の結果、大量生産にシフトしたものの、売れ残った商品の押しつけ先を求めて。
そして、綿産業育成のための労働力確保のために。
それだけだ。
当時から現在まで、自然から生み出される大量生産可能な布は、綿花か羊毛を用いるしかない。

化学繊維が発見されたのは19世紀に入ってからだ。

人口の増大によって、特に求められたのが綿花の大量栽培。

アメリカは、そのために開拓されたようなものだが……。

時代で言えば、植民地時代の到来だな。

ヨーロッパが目指したアジアの抵抗は魔法と騎士ですべて潰せたか？

否。

断じて否だった！

意外だろう？

モンゴル人を撃破し、爆弾のような破壊をもたらす彼等をして、その攻略は失敗したなんて、あり得ないと思って当然だ。

彼らを待っていたのは、アジアの騎士と魔法だ。

モンゴル人達に騎士がいなかったのと同様に、アジア人には騎士も魔導師もいないと思っていたら、これがどっこい。いたんだよ。

しかも、彼らの使う武器も戦法も全く違う。

勝手の違う相手に戸惑うしかない。

集団戦の中で罠や毒ですら平気で使う騎士達に、ヨーロッパ系対抗魔法では防げない魔法を使う魔導師達相手だ。

――――そう。

彼らヨーロッパ人は、今度はかつて攻め込んできたモンゴル人の立場に追い込まれたわけだ。

で、どうなったって？

膨大な犠牲が出た。

本当に冗談抜きで、派遣した騎士どころか軍が全滅したなんて話もある。
あまりの犠牲を前に、とうとう君主達は発想を切り替えた。
戦いではなく、懐柔する方向へと動いたんだ。
アジアの騎士達と魔導師を怖れつつね。
表では懐柔を心がけ、その背後では、彼等の魔法や戦法を研究。
阿片と魔法薬、そして酒をアジアに大量にバラ撒いた。
１８世紀から１９世紀初等にかけてのアジアの植民地化はそういう長年の侵食の昇華といえるだろうさ。
良い事かはともかく、例えば、清王朝末期、アヘン戦争でヨーロッパ軍が圧勝したのはそんな背景があってのことだと、はっきり言えるよ。
この頃開国したのが、わが帝国さ。
ヨーロッパと対等の立場を願う我が国のたどった苦難の道のりは、また別の時間にしよう。
ただね？
これはアジアの話。
同じ頃、北米では内部で分裂していた。
合衆国は、ブレッキンリッジ大統領の下、工業地帯を抱える北部と、綿花産業と牧畜の農業主体の南部は、黒人奴隷や税制といった諸問題を巡って争い、遂に国家分裂の憂き目を見た。
北部にアメリカ連邦、南部にはアメリカ連合が成立したわけだ。
工業国家のアメリカ連邦。
農業国家のアメリカ連合。

日本語にするとわかりづらいねぇ。
そう思わないか？
連邦は、ヨーロッパ向けの工業製品の輸出で成立する国。
連合は綿花と酪農でそれぞれ国家として成立する国。
主義主張はともかく、まぁ、相互依存というか、棲み分けたんだな。
ただ、当時の力関係からすれば、食料を握っている連合の方がやや強い。
工業国家である連邦は、ただヨーロッパに工業製品を輸出することだけを考え、移民は労働力としてしか扱われなかった。
ヨーロッパ、特に東欧からの大量の移民は、これを好まなかった。
彼等は工業社会の歯車となるより、自力での成功を求めて南部連合へ開拓者として移民することを望んだ。
ただ、開拓者の子孫を中心とする連合といえど土地には限界がある。
増大する開拓者希望者と、彼等に分配できる土地のバランスという現実を前に、連合政府は新たな土地を海外に求めるしかなかった。
彼等が目をつけたのは中国大陸だ。
当時の中国大陸は英国やヨーロッパがこぞって経済進出の真っ最中。
人類が同じ人類から力で奪い取れる最後の土地がそこにあったわけだ。
この流れに乗り遅れるなというわけで、南部連合日本に中継基地を作りたくてはペリーを派遣した挙げ句、当時鎖国政策をとっていた日本を無理矢理開国させた。
そして、日本の港を中継基地にして、念願の大陸進出へ向かい、まんまと成功するわけだ。

豊富な天然資源、特に横浜開港と同じ年に発見されたテキサスの大油田によって経済的に潤沢になったことで強気になった彼等は、容赦なく中国大陸へと侵略を開始したんだよ。

移民を兵隊にして、獲得した領土は兵隊とその家族に格安で分け与えるとする政策をとったんだ。

それを受けた南部連合の兵隊達は目の色を変えて中国大陸を蹂躙した。

自分達の土地欲しさにね。

略奪、放火、暴行、虐殺――国境線を蹂躙されることを恐れたロシア軍ですら躊躇させた程、彼等は派手に暴れ回った挙げ句、１８８６年の奉天での和睦会議で満州地方の部分割譲を清王朝に承認させ、マン州（満州）を建設。

その後、海賊問題を口実にフィリピンにも侵出し、これの植民地化にも成功。

こっちにも国内の開拓希望者を量に送り込んだ。

中国大陸の植民地を獲得し、パナマ運河を建設することで太平洋と大西洋双方に製品を輸出出来るようになった南部連合は、工業力の面でも圧倒的な力をつけ始め、工業面でも北部連邦と肩を並べるまでに至る。

この頃、世界中の誰が言おうと世界最大にして最高の国力を持つ国家は南部連合だ。

１９２９年の世界恐慌で連邦の経済がガタガタになった時も、この国の国民だけは、資源と植民地を犠牲にして貧乏人でさえ左うちわで笑っていたというエピソードは伊達ではないよ？

ただ、その結果は――どうなんだろうね。

北部連合との対立が激化したのも、この世界恐慌以来だ。

南部連合の軍事力拡大と共に、南北のパワーバランスの天秤は狂いだし、遂に崩壊した。

ミズーリ州国境帰属問題にかこつけて１９３８年１２月８日朝の南部連合による北部連邦への武力侵攻――電撃戦の開始がそれだ。
事前通告無しに国境線を突破した南部連合軍は次々と北部連邦の領土を侵していった。

赤色戦争、もしくは北米大戦と呼ばれる戦いの始まりだ。

なぜ赤色と呼ばれるようになったか？
これは諸説あってよく分からないが、世界各国から集まった北部連邦支持派の各国派遣軍が共通の軍旗として赤い旗を用いたからだとされる。
当初は国内戦争とみなし、自分の手を汚すことを嫌ったヨーロッパが重い腰を上げたのは、北部連邦が国土の３分の２を喪失した時点でのこと。
双方の国家が統一して、自分達の経済を脅かすような強大な国となることをヨーロッパが嫌ったというのが本音だろう。
ヨーロッパや日本は南部アメリカ連合を侵略者として非難し、北部アメリカ連合を支援する声明を採択した。
まぁ、大まかに言ってだよ？
実際、ヨーロッパ各国でも中立を宣言したり、裏では連邦を支援した国もある。
調べてみれば、国際政治のずるさをはっきり思い知ることが出来るのが、この赤色戦争だね。
はっきり言えることは、１９３９年から４５年にかけて、北米大陸は世界最大の戦場になっていたということだけだ。

……何？
日本はどうなっていたかって？
ペリー来航の後、攘夷だなんだとドタバタした後、やっと明治維新を迎えた帝国は、坂本龍馬主導の元に貿易立国を目指すと共に、

下手に外国を刺激しまいとして植民地取得には消極的な姿勢を貫いていた。

まぁ、貿易国家としてうまくやっていたわけだよ。

日本のフネは満州やフィリピンと北米を繋ぐルートから世界中の航路に進出し、世界中の港へ行けば1隻くらいは日本船籍がいると言われた程の海洋国家へ発展したのさ。

他国との戦争？

公にはほとんどしたことなかったね。

“清との戦も辞すな、大陸での植民地獲得しろ”と主張した西郷隆盛は、逆賊として西南戦争で殺されたし、坂本龍馬主導下で発足した海軍は、“ノルマントン号事件”の結果を見るまでも無く、貿易船団護衛が主眼。

日本なんて国は、貿易相手と必要な資源を買えばそれで事足りる国なわけで、まぁ……坂本龍馬は、その会社……今の光菱を使って儲けるためにそんな政策を打ちだしたとさえ言われるし、西郷はむしろ植民地獲得を狙う当時の急進派――不平士族をまとめて根絶するための人柱になったというのが定説だけど、どんなものだろうねぇ。

そんな日本が赤色戦争でどっちについたかって？

どっちだと思う？

満州やフィリピンに植民地を持つ上に、炭田や油田といった膨大な資源を抱える南部連合につく方が利口？

違うんだよ。

南部連合は、公然と日本に対して差別政策をとっていたんだ。

人種差別と、もう一つ原因がある。

日本船が南部に持ち込んだ虫が原因なんだ。

たかが虫？

そう。されど虫なんだ。
農業国家である南部連合に大打撃を与えたのが、日本生まれのたった一匹の虫なんだよ。
日本から輸出されたアヤメの球根に幼虫が紛れていたとされるけどね。
北米大陸には、こいつの天敵がいなかったから、最初は食い止めようがなかったのさ。

マメコガネ。

小型のコガネムシでね。成虫は大豆だろうが何だろうが農作物は片っ端から食い荒らす。幼虫は根を食い殺すといった代物でね。
南部ではこいつのおかげで歴史上ワーストワンとも言われる食糧危機が何度も起きているんだ。
この虫のことを“ジャパニーズ・ビートル”と呼んで南部の連中の日本への憎悪の根拠となった。
南部では日本人というだけで殺されたなんて話はざら。
日本政府は何度も南部連合に対して待遇改善を申し出たが無駄だった。
南部連合にとってはマメコガネを持ち込んだ日本人なんて敵でしかなかったのさ。

１２月１０日、日本が対応を決めかねている間に、アリューシャン列島の島、キスカを出向した南部連合海軍の奇襲部隊が横須賀と呉を同時空襲、日本海軍空母部隊は壊滅的打撃を被った。
これを受けて日本政府は南部連合に対して宣戦を布告、フィリピンや大陸での利権を狙う英国やヨーロッパ各国軍と協力して参戦することになる。
当時の各国が最新鋭兵器をバンバン投入し、北米大陸を部隊に戦い抜いた戦争は１９４５年８月１５日の停戦協定調印まで続いた。

連合は独立の代わりに、莫大な賠償金と、満州その他の植民地放棄を飲む形がとられ、そして戦勝国となったヨーロッパに待っていたのは、戦争で荒廃した北米大陸の復旧事業だ。

ヨーロッパにとって、これは大変なことだった。

それで世界はどうなったか？

数千万人の出戻りと経済的な激動に耐えられず、１９４９年と１９５１年に「戦後恐慌」と呼ばれる世界的不況が起きた。

この恐慌からヨーロッパは半世紀近く立ち直ることが出来なかった。

“ヨーロッパは、戦争で勝って、経済で負けた”と赤色戦争が呼ばれる所以だ。

無論、アメリカも無事では済まなかった。

綿花暴落や植民地の喪失、賠償金の支払い、自国内の地下資源の採掘権を連邦側資本に握られた連合の国家経済は完全に崩壊。

クーデターの挙げ句、１９５２年のフィラデルフィア条約により、連合と連邦は統合され、アメリカ合衆国が発足する。

結果、大損した帳尻を合わせるために、ヨーロッパ各国が血眼になったのが経済の立て直し。

アジア植民地の放棄だ。

１９０５年に清王朝から王朝が変わった途端、今までがウソのように各国の植民地を奪還してのけた西王朝、現在の中華帝国により、シナ大陸の各国の植民地は失われている。

そこで、貴重な利権であるアジア植民地に経済を依存する体勢からの脱却は、各国の至上命題になったわけだ。

これに舞い上がったのが、インテリ気取りの現地のバカや若造共だ。

そういう連中が必ずといって持ち出したのが、生半可にかじっただけのルソーあたりの人権思想をベースにしたあの考え方だ。

よく言う“民主主義”だ。

だが、よく考えてくれ。

フランスでルソーがそれを唱えた挙げ句がどうなった?

ルイ13世以降、戦争を回避し続け、武力を行使してまで貴族達と聖職者の免税特権を削り、海外貿易で莫大な黒字を作り、世界的に見ても先進的な国民への福祉を実現していたあの大帝国フランスの栄華は誰のおかげだ?

その全てはブルボン王朝の歴代の王達の功績として知られることだ。

ルソー達の思想は、こういう繁栄の中で生まれた、一部の道楽息子の驕慢にすぎない。

自由だの平等だの説いた挙げ句、一部国民にも大きな共感が生まれはした。

その一部国民の支持を元にした、“国民議会”たるデマゴーグ達が何をしでかした?

知っているだろう?

フランス動乱だ。

各地で武装蜂起、意味不明な大義名分を振りかざし、逆らう者は皆殺しのあの恐怖政治。
フランス史上最大の汚点。悪夢の3年間とさえ呼ばれたあの暗黒の時代。
貴族や聖職者は無差別に虐殺された。
国家は無政府状態に陥り、国民は一切の福祉を奪われた。
政治の素人達が思いつきで次々と撃ち出す政策はすべて失敗。
王朝を支えた有能な官僚は次々と断頭台に消えた。
そんな暴政の末に、世界で最も福祉的に保証されていたはずの国民は日々のパンにさえ事欠く有様。
その隙に各国は好き勝手に自国の領土をかすめ取る。
恐怖政治が続いた三年間でフランスは植民地を全て喪失し国土は3分の1を他国に奪われた。
全てはルソー支持者のおかげでな。
国民が彼らに愛想を尽かし、オーストリアに逃れたルイ16世の王政復古を願ったのは、むしろ当然のことだ。

その思想の延長線上に民主主義があることは分かっている。

民主主義はそう悪いものじゃない。

ようは使い方だ。

何だってそうだろう?

だがな?
ショーが語るように、「腐敗した少数の権力者を任命する代わりに、無能な多数者が選挙によって無能な人を選出すること」がデモクラシーであることは、日々、新聞読めばわかるだろう?
民意の結果として政治を託された政治屋が、民意からかけ離れた

ことするのも、また民主主義の悪しき方面の産物だ。
その後生まれたフランスの王政復古は、“無能な人”の失政より、“腐敗した少数の権力者”による繁栄を望んだ結果だ。
政治的素人をいくら民主主義だ主権者だと叫んで権力の座につけても、待っているものは破滅でしかない。
その偉大な教訓を与えたフランス動乱を受け、各国はルソーだけでなく、啓蒙主義者と彼らの言論を広めたメディアの徹底弾圧を開始。
とばっちりを受けたヨーロッパの言論出版界は、一世紀後退したとさえ言われる。
そういう意味では、ルソーは言論の自由まで潰したことになるな。

……何の話だったか？
……ああ。
植民地独立の動きか。

世界地図を見ろ。

アジアのほとんどの国が、独立しているだろう？
それは何故？
戦後の経済システムの変化さ。
拡大の一途をたどる大規模消費社会の中にあっては、旧来の植民地の維持のために戦費や軍事費を使うことが無駄だとされるようになった。
植民地で欲しいのは資源と消費者だけ。
各国は、植民地の資源開発権だけを自国のものとし、政治的にだけ独立させることで、肝心の政治的なことは全て植民地に押しつけた。
わかるか？
押しつけられても、素人に何が出来る？

経済は宗主国に握られ、発展は望めない。
独立とはタテマエで、植民地時代と何も変わらない、いや、昔の方がまだマシな状況。
独立国が、宗主国との経済的断行をやった結果、商店からモノが消え、医者は薬すら手に入らず、まがりなりにも、宗主国本国並の福祉が保証されていた国民が饑餓に陥る……あのフランスの恐怖政治時代の現代版がやってきたのさ。
政治まで面倒見てくれた植民地時代の方がまだマシだった。
そう言って過言ではない国が、この世界にはいくつも生まれる結果になったのはこのためだ。

民主主義。

自分達が自らの意志で、自らの国の政治を動かせる主義。
その思想は、甘美に聞こえるだろうがとんでもない。
一歩間違えれば、その国を滅ぼしかねない危険性を秘めているのだ。
その危険性をわかった上でなければ、民主主義なんて唱えるのはおかしい。

なのに、「植民地解放」、「民主主義の普及」を大義名分に、海外へ民主主義の押し売りに走る国が生まれた。

アメリカだ。

１９６０年代、オランダから独立したベトナム大越王朝に対して、分離独立を主張する少数民族を支援することを口実に軍事介入。
これに対し、大越王朝と周辺国、そして元宗主国は、民主化により共倒れすることを怖れてアメリカと戦うことになる。

ベトナム戦争の始まりだ。

ベトナム軍にベトナム市民軍、ここに各国軍が加わっての泥沼と化した戦いの決定打となったのが、魔法兵器である“メサイア”だ。

……ほう？

目の色が変わったな。

ロシア科学アカデミーが開発した人型魔法戦闘兵器の開発コードが、そのまま兵器の名称となった珍しいケースだが、戦線に投入されたメサイアがどれほどの活躍を示したか、語るまでもないだろう。

使用したのは大越王朝支援のために派兵していたロシア帝国。

投入数はたった４騎。

彼らの名称では“スターリン”と呼ばれるメサイア。

たった４騎で、アメリカ軍は壊滅的打撃を被った。

……まぁ、君たちにとっては常識だな。

もう少し、つき合ってもらおう。

一方的に叩かれたアメリカ軍は、戦局挽回のため、当時開発されたばかりのプルトニウム反応弾を戦場にばらまいた。

その二次被害なんて、あの楽天国民の知ることじゃない。

何の罪もないベトナム国民が放射能汚染の犠牲となり、国土は深刻な環境破壊に襲われた。

結局、アメリカの失敗は、民主主義が虐殺者の大義名分にすぎな

い事を証明してのけたに過ぎない。
結局、アメリカはベトナムを汚染した犯罪者として東南アジア全域から撤退を余儀なくされる。
ルソー以来の民主主義は敗北したわけだ。
大体、放っておいても、各国ではルソー以前から立憲君主政治が基本だし、民間からの優秀な人材の登用は当然だし……君主による完全独裁政治をとる国なんて皆無に近いから、一々民主主義なんて名乗るだけでもおかしいんだが……まあ、ここは歴史の授業であって、政治思想の時間ではないからな。
興味があるなら、これ以上は自分で調べてみるといい。

このベトナム戦争は、戦争という面からすれば大変に興味深い。
……なんだ。
メサイアの話となれば、起きるのか？
しょうがないな。

そうだ。
ベトナム戦争は、赤色戦争以降、大量破壊が可能な機関銃や航空機の発展に伴い、戦場の主役からずり落ちていた騎士と魔導師が、再び戦場の主役に戻った戦争でもある。
ジャングルでの接近戦は、騎士にとっては戦いやすい戦場だ。

そして、メサイア操縦者としての騎士。
そして、メサイアコントローラーとしての魔導師にとっての初舞台となった戦争でもある。

この戦争以降、各国はメサイアの開発と生産に躍起になる。
アメリカは月に行くなんて妄想を放棄して国力を傾けた挙げ句、グレイファントムを開発。
ロシアはスターリンをベースにした騎を同盟国に配備させる動き

を強める。
各国は両国から得た情報と技術を元に、独自のメサイア開発に躍起になる。
これが同時に、新しい植民地を生み出す闘争の元になる。
植民地開放政策をリセットさせたんだ。

そうだ。
魔晶石（ましょうせき）だ。
メサイアや飛行艦、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のエンジンに使われるエンジンの動力源。
いくらメサイアの素体を造ることが出来ても、エンジンに使える魔晶石が無ければどうしようもない。

ダイヤより貴重な存在――魔力の結晶、魔晶石。

世界最大の産地である大日本帝国、そしてロシア帝国、ラムリアース帝国、ついでアメリカ合衆国、中華帝国と……あとはごくごく限られている。
こうした国々が、鉱山と魔晶石を厳重管理して、海外輸出は基本的にしないことは知っているな？
魔晶石は戦略・戦術双方で重要であるから、それを生産出来る国が限られることは戦乱を防止する上である意味望ましいが、しかし、生産不能の国からすれば落ち着いていられる話ではない。

大英帝国やドイツ帝国、フランス王国といった名だたる国が莫大な投資も、犠牲も惜しむことさえ許されず、魔晶石鉱山をかかえる

国を時代遅れの植民地なんて代物にしてでも、その鉱山を抱える必要があったのは、そういう背景があるんだ。

１９７０年代から９０年代にわたる苛烈な魔晶石獲得競争を“魔晶石戦争”、あるいは第二次世界大戦とさえ呼ぶ者もいる。

苛烈な魔晶石獲得競争は、同時にメサイアと飛行艦の開発競争へと転じ――そして、世界は奴らの襲撃を受けることになる。

……む。

いかん、もう時間か。

とりとめのない話で終わったな。

これで授業を終わる。

次までにテキスト８０頁から１００頁までを予習しておけ。

以上――ご苦労だった。

状況説明　世界

“あの戦争”を一言で言うと？

難しいことを言うな、貴様は。

そうだな……。

私なら、“人類史上初の戦争”と表現する。

意味がわからない？

いくらお前達だって、“ここ”に来るまで新聞読まなかったわけじゃないだろう？

……。

……よろしい。

お前達がバカだということがよくわかった。

まず、きっかけから話しておこう。

丁度、今から約３０年前に遡る。

１９××年２月１２日。

南米およびアフリカ大陸のほぼ全域が被害を受けた“エアバースト事件”が発生した。

南米大陸と、大西洋を挟んだアフリカ大陸で発生した謎の連鎖的爆発事件だ。

……本当に知らないのか？

何？

私達、生まれてません？

そうか……まぁ、私もまだだしな。

……。
何がおかしいっ！
私だってまだ２５と４１ヶ月だぞ！？
……ったく。
話を戻すぞ。
この爆発によって生じた、熱風を含む衝撃波、“エアバースト”現象は……。
ああ。そうだ。
元々、“エアバースト”とは、“空中爆発”の意味だが、この事件以降、“大気爆発”というニュアンスで一般化している。
一般常識だから。
それにしてもお前ら。
この爆発の影響は、未だに世界各地に異常気象を引き起こしているんだぞ？
ファッション雑誌にうつつを抜かす前に世界情勢というものをだな……。
えっ？
プラウタの新作バッグ！？
発売いつ！？
……。
……コホン。
少しは社会に関心を持て。

続けるぞ？

爆風と衝撃波、そして爆発による熱は、アフリカと南米のかなりを焼き尽くした。
直接的、そして間接的な被害ははかり知ることさえ出来ない。
人類の生活基盤だけではない。
両大陸の自然界はほぼ壊滅し、この現象で絶滅した種族はどれ程

になるか、私は知らない。

また、被害は両大陸にとどまらなかった。

両大陸によって生じた大津波は、世界各国を襲った。

日本も例外ではない。

太平洋側では最大１０メートルを超える津波が観測され、各地に甚大な被害をもたらしたのだ。

ほとんどの国にとって、南米やアフリカを助ける余裕なんてどこにもなかった。

双方の大陸の救援作業が本格化し始めたのは、事件から実に1ヶ月以上過ぎた３月１４日。

南米とアフリカ各国で“奴ら”の武力攻撃が確認されたのはこの日だ。

他国からの侵略ではない。

襲ったのは、少なくとも人類でさえなかった。

魔族だ。

戦車なく、
戦闘機もなく、
大砲も持たず、
甲冑を身にまとう異形の軍団。

手にする武器は、
剣
槍
斧

そして魔法を武器として、得体の知れない巨大なバケモノ達で編

成される。

それが魔族軍だ。

私がさっき、人類初の戦争と表現したのは、まさにここにある。

人類史上、人類が同族以外との組織的な戦闘を行った経験は、よってたかってマンモスを狩るような“狩猟”として以外、経験はないはずだ。

誰か、人類がかつてモンスター相手に組織的に戦ったと聞いたことあるか？

……ある？

モンス――何だって？

馬鹿。

それはゲームの話だ。

とにかく、この日を境に、人類は二つの大陸で、“魔族軍”と呼ばれるモンスター共との戦争に突入する。

小銃弾をものともしない強靱な彼らは、開戦以降、各地で人類を圧倒、わずかな期間で両大陸を完全に制圧した。

一時期は、彼らの地中海越えによるヨーロッパ侵攻が本気で語られたほどだ。

勿論、人類だって黙って殺されたわけじゃない。

とにかく、開戦当初から戦線に送り込まれたのは、当時の世界最新鋭の兵器達だ。

戦場が“兵器の見本市”と皮肉られたのも、当時の映像を見れば肯ける。

だが――わかるか？

世界有数の優秀なハイテク兵器を湯水のように投入したにもかかわらず負けた、否、負けるしかなかった。

お前等。

本気で新聞読まなかったらしいな。

狩野粒子（かのうりゅうし）は知っているだろう？

魔族軍出現と共に、南米とアフリカ全土で観測された魔法物質だ。

いくらなんでもそれくらいは……よかった。知っていたか……ホッ。

狩野粒子そのものは、１ミクロンにも満たない恐ろしく細かい微粒子にすぎない。

だが、粒子一粒が三次元上に存在することで、粒子の周辺、半径数十メートルの空間が異常地帯に汚染される。

こいつが空間汚染物質であることは覚えておけ。

……違う。

毒ガスを連想するな。

一定レベルを超えない限り、人類への健康被害は確認されていない。

問題は、狩野粒子が人体ではなくて、兵器に与えた影響だ。

狩野粒子は兵器を破壊した。

人類の本当の敵は、奴らだった。

そう、表現するしかない。

……だから、別に兵器に接触したら爆発するとか、そういうことじゃない。

意味がもっとわからなくなった？

最新鋭兵器と旧式兵器の違いはわかるか？

例えば、ジェット戦闘機とプロペラ戦闘機の違い。

エンジン？

確かに、ジェットエンジンに入り込むと高濃度に圧縮されて挙げ句に爆発するけど、そういうことじゃなくて……そうだ。

電子装備に対する影響だ。

狩野粒子による空間汚染は、兵器の電子装備を破壊するんだ。

真空管ならいざしらず、対策処理されていないＩＣやＬＳＩといった半導体や、それらで構成される精密電子パーツは、狩野粒子に汚染された空間では間違いなく発狂する。

レーダーは反応せず、操縦系は狂い、ミサイルなんて発射ボタンを押してケースの中で吹き飛んだらマシ。

信じられないだろうが、本当のことだぞ？

普段、町中を走っている車のエンジンでさえＩＣやＬＳＩといった半導体に制御されているんだ。

軍用のエンジンだって同じだ。

だから、狩野粒子によって、国連軍の兵器は戦う前から破壊されたわけだ。

各国が満を持して戦線に持ち込んだ兵器は軒並みスクラップ扱い。

せいぜい使い物になったのは、電子装備を持たない赤色戦争当時の兵器達。

例えば、米軍のM４や我が国のチハ戦車……今では博物館ですらみかけないような、古い戦車や装甲車が戦場を駆け回り、バズーカと重機関銃こそが最も信頼される兵器となった。

機甲部隊を歩兵で止めろというに等しい。

開戦とされる日から3ヶ月後には人類は両大陸からの完全撤退を決定。

妖魔達の出現から国連による両大陸完全放棄宣言までの悪夢のような負け戦を別に“三ヶ月戦争”、口の悪い連中は“滅亡戦争”と呼ぶ。

後にアフリカ、南米奪還のため、各国軍による上陸作戦は幾度となく試みられたが、少なくとも、この三ヶ月戦争以降、数年間の間はすべて失敗した。

上陸した途端に、バケモノじみた蜂、“デス・ビー”に襲われて全滅したケースもあったな。

……おいおい。

“デス・ビー”はオシッコかけてなおる相手じゃない。

チクっと刺されたらもう終わりだ。

毒が瞬間的に全身に回って、体の組織が連鎖的に崩壊を始める。

写真で見たことがあるが、顔が数倍に膨れあがって、圧力に負けて目玉が飛び出していたぞ。

そうなってもすぐには死ねない。

脳が血圧の変化で潰されるまで苦しみ抜くんだ。

どうだ、刺されたいか？

……心底遠慮？そうだな。

人類はいつしか、アフリカと南米を忘れ去ったような生活をしていた。

この状況を激変させたのが、メサイアだ。

人型機動魔法兵器、メサイア。

魔法兵器である以上、狩野粒子の被害から逃れることが出来る。
毒虫共も無視出来る。

何故、最初から投入しなかったか？

答えは政治的な理由ってヤツだ。

いいか？
メサイアは各国の持つ軍事機密の塊だ。
破壊力は陸戦兵器としては最強だが、反面、整備に恐ろしく手間がかかる。

なにより、当時は生産方法がハンドメイドに近い関係で、数があまりに少なすぎた。
三ヶ月戦争の時点で世界に五百騎とは存在しなかったはずだ。
1騎建造するのに3年かかるし、メサイア1騎で軍艦1隻が買えるコスト。

だが、人類がアフリカと南米を奪還したかったら、メサイアに頼むしかないことを知っていた。

だからこそ、各国はその量産・低コスト化の発見に全力を注いだ。

今のように、1ヶ月で1騎組み上げる“クイック・ライン”が完成するのは、三ヶ月戦争から3年目のこと。

開発した米国でラインが動き出したのは、それから5年、他国での本格稼働は7年だ。

各国が足並みを揃えることが出来たのが、１０年目のことだ。

それだけに、当時は兵器としてものすごく貴重だった。

運用費用も莫大だ。

そう簡単に戦場に投入すること出来ない。

とにかく、メサイアが大量投入され、状況が一変した。

魔族の戦場は、メサイアの戦場となった。

火炎放射装置で小型妖魔を焼き殺し、大型妖魔相手に戦斧を振るう。

相当な犠牲は払ったが、アメリカは１０年目に南米から魔族軍を駆逐することに成功した。

魔族軍にはメサイアが有効。

各国は、そのためを口実にメサイアの開発と増産に乗り出した。

戦争と平行して行われた“メサイア配備競争”の幕開けだ。

魔族軍を口実に、メサイアを増産する他国を警戒して、自らも増産に動く。

それを見た相手国は、さらに増産を……。

そんな堂々巡りの中、貴様等も、この軍拡競争の一環として徴兵されたわけで……。

誰だ？

余計なマネしやがってといったヤツは。
まぁいい。
おかげで私も女子高生に――――違う、女子校の教師役を仰せつかったんだ。
迷惑なのはお互い様だ。

各国がこぞって大量のメサイアを投入した結果として、アフリカは一応、人類の土地と呼べるまでに回復はしている。

……だが。

悲しいことに、魔族軍から土地を奪還した後、各国が何をした？

領土の奪い合いだ。

南米は、戦線をほぼ単独で構築していた合衆国が完全に植民地化した。
アフリカはドイツやイギリス、そしてラムリアース帝国といった名だたる国が卓上のケーキのように切り分けた。
サハラ砂漠やコンゴ盆地、そしてエチオピア高原では、魔族軍がいまだ頑張っているというのに、人類は連中そっちのけでアフリカを分断、自らの植民地としたんだ。
解放すべき土地は、勝者の獲物になったのだ。

ん？

植民地は人道的見地から、過去にほとんど解放された？

人道的に問題？

面白いことを言うな。

なら聞くが、植民地が人道上、どう問題なんだ？

現地人からの簒奪的行為？

なら――――

最初から人が住んでいない場所なら？

アフリカと南米は、そういう所だ。

何しろ、両大陸の人類はほぼ根こそぎ魔族軍に殺されたんだから。

……そう。

両大陸は魔族軍との戦争で戦勝国となった国々がどうしようが、文句を言うべき現地人がいない土地だ。

両大陸の処遇を決めた“ヴェルサイユ条約”は植民地における戦勝国の完全なフリーハンドを認めている。

現地から脱出した、“お気の毒な御方”がいるはずだ。

その方々に土地をお返すべき？

馬鹿な。

奪還のためにかかった莫大な費用と人的損害を、その御方とやらが支払ってくれるのか？

“ヴェルサイユ条約”の別名を知っているか？

“ニンジン条約”だ。

そう。
あの食べる人参だ。
広大な土地。
地下資源。
そんな“人参”を各国の鼻っ面にぶら下げて、兵力を派遣させることで、人類は両方の大陸を奪還したといってもいい。

そんなきれい事のためになんて、誰一人戦いはしなかったろうな。
あの戦争に出た者として、それだけははっきり言える。

だが――

戦勝国、欧米にとって、植民地獲得の代償は高くついた。
あの戦争に関わることによって生じた膨大な戦費と、なにより莫大な戦死傷者による労働人口の減少だ。
戦争によって多数の若者――労働力を失ったことで、ただでさえ高い戦勝国の労働賃金は、さらに高騰するしかない。
それは、資本家をして、豊富な労働力を誇り、賃金も安い国へと経済の中心をシフトさせるには十分だったのだ。

中華帝国と東南アジアだ。

メサイア投入から数えて１２から１５年目。
ほぼアフリカの処遇が見えていた頃、未だに兵士達が血みどろの戦いを繰り広げる中、政治屋共は、植民地開拓に血道をあげる一方、どうにかこのシフトを自分側に崩そうと暗躍する。
人類史上類を見ないとさえ言われた経済成長率２５％を叩き出し、経済大国を自負する中華帝国は、アジア経済圏を提唱し、アジアの

盟主として振る舞い始める。
膨大な戦時国債を誰が負担したかといえば、中華帝国だ。
おかげで、欧米は彼等に強く出ることが出来ない。
あれは例外だ。
世界は、連中に関わればどんな目に遭うかは思い知らされているし、何より連中はこの戦争に何も関与していない。
考えて見ろ。
世界中が大変な目に遭っているというのに、“ニイハオ！安いよ安いよ”でコピー品を売りつけに来た連中と仲良くしたいか？
欧米が“チャイナ・パージ法”を成立させ、経済圏内での産業保護に動いてからは、さすがにかつての勢いはない。
“言うこと聞かなければ、戦時国債放棄するアル！”と脅せば、“次の植民地はテメエ等だぞゴラァ！”となる。
そんな状況を経て、世界経済は“ヨーロッパ経済圏”と“アメリカ経済圏”、そして“中華経済圏”の３つに分断されている。
各経済圏は独立しており、かつてのようなグローバル経済はもう成立しない。
経済圏同士でやりとりをするのが普通だし、昔流行りかけた“グローバル”という言葉自体が死語だ。
まあ、その辺は、興味があったら自分で調べろ。
新聞を読め。

とりあえず！

まとめるぞ？
南米全域と、アフリカの大半を魔族軍から取り戻した人類は、両大陸を植民地化した。
アメリカとＥＵは、戦争に参加した戦勝国主導の元、それぞれに独自の経済圏を確保する。
そして、近年、経済的発展を遂げた中華帝国と対立するに至って

いる。

一応、一般常識のレベルの話だ。

ここで、騎士としてのお前達がまず覚悟するべきことは、アフリカが未だ魔族軍から完全には解放されていないことであり、我が軍は、アフリカに一貫して部隊を送り続けていることだ。

魔族軍の掃討はまだ続いている
貴様等も、いずれは先輩方同様、アフリカに行くことになる。

それは、そう遠いことではない。

今から楽しみにしておけ。

……よし。

今日はここまでにしよう。
宗像。
泉と風間が目を覚ましたら職員室に来るように伝えておけ。
午後は長野教官の授業からか……。

ご苦労だった。
解散。

天原商店

●東京都内　天原骨董品店

「……それで？」

王侯貴族顔負けの応接室。

そのソファーにふんぞり返った少女は、目の前に立つ、背広姿の男を見下したような眼で睨んだ。

絹のような艶やかな長い髪に透き通るような白い肌。黒くつややかな髪。十代半ばに達しているかさえおぼつかない、華奢な体を包むゴシック調のドレス。

あどけない顔に浮かぶその表情は、あからさまなまでに、目の前の相手を歓迎していない。

名を、天原神音（あまはら・かみね）という。

一方、少女の目の前に座る一流企業の社員（マシン）然とした男は、少女の視線を受けても、能面のような顔に浮かべた営業スマイルを崩さない。

どんなに笑顔を浮かべていても、それが偽りだとわかってしまう。心の中では何も笑っていない。

オールバックにまとめた髪に仕立ての良いスーツ。やや細く角張った顔。その皮膚の下に、血が流れているかさえわからない。

そんな男だ。

少女――神音は、そんなタイプの男が大嫌いだった。

「ユギオ……殿、ですか」

名刺を名刺盆に、優雅だが無造作に近い仕草で置いた。

「そんなご大層な御方が、こんなちっぽけな店になんの御用で？」

「これはご謙遜を」
予測はしていたのだろう。
その突っ慳貪な言葉に、ユギオと呼ばれた男は小さく笑った。
その笑い方が気に入らないのか、神音の端正な眉が少しだけつり上がった。
「天下の天原商会総帥のお言葉とも思えませんな」

「愚かなイヤミにしか聞こえないわ。もう一度聞きます……ここに、何をしに来たのですか」

「ビジネスです」

「それはおあいにく様」
神音は、心底楽しい。とばかりに、ころころと笑った。
「ビジネスの基本は、信頼のおける相手と信頼の取引を行うこと。わが商会は、一見様との取引は行わないことにしているわ」
その言葉には、不思議な威厳があった。
「お引き取りを」

「紹介状はここに」
どこから取り出したのか、ユギオは封筒をちらつかせて見せた。
封蠟に押された印章に、神音は嫌でも見覚えがあった。

「――ご用件は？」
差し出された封筒を受け取ろうともしない。

「お力添えをいただきたい」
ユギオは黙ってテーブルに紹介状を置いた。

「お力添え？」
「はい」
「……」
神音は、恐ろしいほどの形相で相手を睨み付けた。
「アフリカでの馬鹿騒ぎに加担しろと？」
「馬鹿騒ぎとは随分ですな。犠牲がどれほどかご存じで？」
「知ったことですか。私には何の関係もないです――で？」
その顔つきは未だ厳しい。
「要点を」
「……アフリカの部隊を魔界へ撤収させたいのです」
「何故？」
「戦力建て直しのため」
「つまり、一時的撤退？」
「捲土重来……時期的には、すぐですが」
「永劫に人間界から手を引く……じゃなくて？」
「部隊という表現は使いましたが」
ユギオはティーカップに手を伸ばした。
「――いいお茶ですね」

「どうも」

「心が和みます……ご存じですか？南米及びアフリカで暴れたのは、単に“妖魔の群れ”に過ぎないこと」

「……組織戦ではなかったと？」

神音の顔が、きょとん。となった。

「人類側は魔族軍と呼称していますが？」

「人類側へのメース技術の大量供与に誰が関与していたかは問いません。同様に、あれは、我々の流した情報が変な形でリークしたのが、人類のマスコミに伝わった結果で」

「魔族軍の残党にもならない、妖魔部隊が単に暴走しただけ？」

「ええ。数だけはいましたがね。軍としての組織戦はしていません。なにしろ、指揮官が司令部ごと不在でしたから。

ご存じでしょう？

先の戦乱の後、天帝軍によって魔族はすべて一カ所に集められ封印されています。

妖魔部隊を指揮する者がいるのは」

ユギオは、まるで試すように神音を見た。

「アフリカではありません」

「妖魔でも、オークやライノサラス程度なら、単独、もしくは群れで行動しても、人類には十分脅威でしょう」

「最初はそうでした。人間の言う、狩野粒子が人類に与えた混乱から人類が立ち直り、メース……じゃない、メサイアを投入するまでは」

ユギオは、思い出したように顔をしかめた。
「それからは、我々にとっては悪夢の日々でしたよ」

「成る程？妖魔部隊のみを解き放ち、自前の指揮官で管理すればいいと思っていたけど、実際やってみたら」

「……認めましょう」
ユギオは力無く頷いた。
「素人でも、妖魔を“呪具”で単にコントロールすることは容易。そんな安易な目論見は見事に覆されました」

「そんな幼稚な発案が通るあたり、トップのおつむの程が知れますね。で？どれほどの犠牲を被ったのです？」

「既に約８割。占領地域は、最大時の９割近くを喪失」
軽く百万に達する犠牲ということだ。

「妖魔の繁殖力から考えても、それだけの戦力を復旧するのに何年かかると思ってます？他人の軍隊をそうも浪費して。ヴォルトモード卿が聞いたら、黙ってませんよ？」

「無様な話です。確かに」
ユギオは、自分に言い聞かせるように頷いた。
「妖魔を管理出来る指揮官の不在は、我々の予想以上に大きい打撃でした。
いえね？
指揮官は用意していたのです。
ところがこの連中、せいぜい小隊規模を運用した経験は豊富ですが、それ以上となると未経験。つまり」

「なんて無茶な。大型妖魔を組織戦で使いたければ、熟練した大隊級以上のクラスの指揮官を筆頭に、熟練した各クラス指揮官が」

「経験のある人材の確保が出来ませんでした」

「部隊の運用に混乱を来した挙げ句、自滅したと？」

「それともう一つ。失敗のもう一つの原因に、補給がありました」

「……まさか」

神音は、額に手を当てた。

「人間界との、あんな細い正規ルートを経由して補給を通したのではないでしょうね」

「その通りです」

「……」

「……」

「……悪いことは言いません」

暫しの時間が過ぎた後、神音はようやく口を開いた。

「もう二度と、この分野に関わらないことです」

「この分野とは？」

「それさえわからなければ、社会に出ないことです。世の中は怖いんですよ？」

「……我々も失敗の原因という点では意見は統一しているのです」

ユギオはソファーの背もたれに倒れかかるような勢いで体を預けた。
「その全てを外部委託していたことです」
「どこへ？」
「もう言っても良いでしょう」
投げやりな仕草で言った。
「レンファ商会ですよ」
「レンファへ？」
レンファ商会
魔界の民間軍事コンサルタント会社。
魔界軍最高レベルの将校が多数雇用されており、商会幹部に言わせれば、「一平方フィート当たり将軍の数は、魔界軍司令部よりレンファの方が多い」となる。
それ故、軍事関連企業では、一流どころとして知られている。
「そうです。御社のライバル会社ですね」
「言葉を選びなさいっ！」
神音は、ムッとした顔で怒鳴った。
「あんな高級将校（むのうども）の天下り先と、ウチを同格に扱うなんて！」
「そうです。その通りです。我々は、業務委託先を間違えた。最大の失敗――そんなところです」
「まったく」
神音は衣擦れの軽やかな音と共に、軽く姿勢を正した。

「実戦経験もなく、部下の功績をかすめ取ることと、司令部の椅子を暖めることしか能のない軍高官（ばかども）を血眼になって雇っているのは、そんな連中でも、軍内部に圧力をかけやすいからです。
補給部隊と工兵隊だけで戦争が出来ると勘違いしてるような、軍の動かし方すらロクに知らない幹部共は、責任ですら部下任せにして当然な組織。
それがレンファ。
ウチのように、戦争の規模を問わず、開戦から戦後復興まで。戦争に関する全てをコントロールすることを存在目的として、それを可能にするだけのスタッフを抱えているところとは、何もかも違うのです」

「そうです。事情があったとはいえ、我々が馬鹿でした。おかげで大損だ」

「魔界からの物資輸送に、規制だらけ正規ルートを使ったのも、連中の利権が絡んでいるどころか、それ以外に、人間界との輸送方法を連中が知らなかったからでしょう？」

「こちらの手配した補給物資のかなりが届かず仕舞でした。届かなかった物資の、ほぼ全てが横流しされた形跡があります。こちらが裁判沙汰に出来ないことを良いことに好き放題」

「ザマみなさい。でも、あなた達はあの馬鹿社長との繋がりがあるみたいね。政治的な繋がりでしょう？そんなことで」

「故人の悪口は止めましょう」
ユギオは軽く首を横に振った。
「訃報は明日の朝刊に載るでしょう。とにかく、我々はレンファとは手を切りました。我々独自の別ルートで確保した部隊を、すでに

現地へ派遣しています」

「傭兵を？」

「“イシス”ですよ。最近、売り出し中の民間軍人会社。失礼ながら、神音様のコネクションは外させていただきました。理由はお察しください。

本音を言うなら、今すぐにでもあなた方に全業務を委託したい。しかし、当局の警戒の目は動いている。人間界に対する過度の介入は、天界との関係もあり、当局は神経を尖らせていますからね」

「当たり前でしょう？大陸規模で人類が皆殺しにされたなんて、先の戦争を最後になかった事。あの時の協定に抵触するか否かで、天界と魔界は１０年近く議論は平行線のまま。両界の重大な政治問題化しているのですよ？」

「単なる妖魔部隊の暴走で片づけたい魔界と、人間支援による妖魔掃討を主張する天界……まぁ、両勢力共に」

「平行線で終わっているのは、両勢力に、あなた達が政治的介入を続けてきたからだ。そういうのですか？」

「――ご明察」

「ますます手を貸せなくなったわね」

神音は横を向いた。

「政府は馬鹿じゃないわ――こちらからの人的支援は、絶対に無理よ。情報省が動いたらアウトですからね」

「情報省は抑えています。ご心配なく。問題はマスコミです。神音

様にお願いしたいのは、人的な支援ではなく、兵器と物資の販売、そしてお持ちの門(ゲート)を用いた魔界からの輸送の方でして」

「それこそお断り」

神音はきっぱりと即答した。

「うちの門(ゲート)は、はっきり非合法。いい？人間界で門(ゲート)が使えるのは、魔族または神族が、その地域を明確に保有していることを宣言した地域に」

「すでに、その辺の手配は出来ています」

ユギオはブリーフケースから書類を取り出した。

「政府公式の人間界側、門(ゲート)設置許可証です」

「……かなり影響力のあるということですか？」

「何とでも」

「でも、あなた達、今更、アフリカに何の未練があるのです？」

「まさか！」

ユギオは首を横に振った。

「人間がどれほど残っているがご存じですか？」

「人類を絶滅させるつもり？」

「そこまではやりません」

ユギオの晴れやかな顔は、少女には狂気にさえ見えた。

「我々の目的は、時計の針を戻すことだけです」

「……針？」

「人類は進歩しすぎました。人類のあらゆる技術、思想……諸々全ての進歩の針を中世に戻します」

「……」

「そうでなければ、人間界に未来はありません。人間の技術的進歩が、多くの種族を絶滅に追い込み、人間そのものを苦しめています……ご理解いただけるものと」

「……先の戦争の終結において」

神音はため息混じりに答えた。

「人類の精神的進歩を、我々魔族と、神族は共に期待した。ところが」

「技術は進歩しましたが、精神面では劣化し続けている……ここ数百年、変わることのない魔界・天界双方の共通見解です。

――例えば、

人間界の技術的進歩が21世紀なら、精神的進歩は？

わかりますか？

6世紀にも満たないのです。

しかも、現実の6世紀の人類の方が、精神面を含め、あらゆる面で優れていた。

科学技術の進歩と共に精神はすさむ一方。

むしろ類人猿（プロトタイプ）の方が今の人類よりマシだと、そう主張する学者も多い位でして」

「……」

「ですから」

ユギオは声を少しだけ高めた。

「我々は、人類の精神面と技術のバランスをとるべく動いている。時計の針を戻すとは、精神面に相応した技術力のみを、適切に管理された、適量に数を減らした人類に与えることに他ならない」

「適量？数を減らした？」

「総人口４２億……いまだ多すぎます。その数そのものが人類の罪です。１億で十分です」

「……物騒な考え方だけど」

神音は言った。

「それに加担する見返りについて、何の説明もないけど？」

「――正直」

ユギオは、わざとらしく両手を広げた。

「我々が成そうとしていることは、“結果”に過ぎません」

「結果？」

「そうです。予め、決められたシナリオ通りにことを運ぶ。そう、表現するのが最も適切でしょうな。レンファの無能という、シナリオの狂いを矯正するのが神音様の元へおうかがいした、その意味では最大の目的」

「……どこで、何をしようとしているのです」

神音は、その明晰な頭脳のどこかで理解しつつ、拒んでいた答えがユギオの口から出るのを覚悟した。

「ヴォルトモード軍をわが手中に。そのためには本隊、つまり、封印されている魔族軍部隊を解放させる必要がある」

「お断りするわ」
神音は即答した。
「リスクが高すぎる。通常価格ではとても無理。あの弓状列島の大半は、わが商会の排他的活動区域」
神音は、そこまでいいかけて、あっ。となった。
「……それで私に接触した」
神音の瞳は、ユギオに敵対的な色を含んでいた。
「ようやくつながりました」

「わかりました?」

「あなた達がアフリカを放棄した後、どこに出るか。アフリカなんて後回しでいい。問題は、あの弓状列島。そこでの活動をやりやすくするために、天界と魔界双方に認めさせた、当該地域におけるわが商会の排他的経済活動権が欲しい」

「排他的経済活動権は」
ユギオはしてやったり。といわんばかりに、嬉しそうに頷いた。
「当該地域においては、保有者の経済活動を阻害する全ての存在の行動を阻止、排撃する権限を認めるものですから」

「帰りなさい」
神音は言い切った。
「一杯食わされたことは認めましょう。しかし」

「我々は、リスク込みの金額でお取引を願い出ているのです」
ユギオは言った。
「滝川村の安全は、何としても護りたいのではありませんか?」

ぴくり。
神音の動きが止まった。
「どういう、ことです？」

「ヴォルトモード卿が、どこで封印されたか、もうご存じでしょう？」

「……先代と先々代の記録は残っているわ」

「心強い」
パンッ。
ユギオのクセらしい。
まるで柏手を打つように、楽しげに手を叩いた。
“それ”をご存じなら、私が何を言いたいのかもおわかりで」

「――私と取引したいなら」
その外見からは想像も付かない威厳ある重々しい声が、ユギオの言葉を遮った。
「脅しじみた物言いはやめなさい」

「――失礼」
パンッ。
ユギオは、まるで挑発するように再び手を叩いた。
「どうも予想通りに事が運ぶと興奮するクセがありまして」

「悪い癖ね」

「恐れ入ります。神音様」

「――で？」

「そうなれば、滝川村……下手すれば消滅ですからねぇ。ご子息のご家族、お孫さんはまだ１４でしたっけ？」

「もう一度言うわ。脅しはやめなさい。第一、忘れてない？」

「人間風に言えば、義理の娘――ご子息の奥方の件ですか？」

「神族軍情報統括軍高級将校――あの戦争を“鬼のイツミ”の下で経験するなんて、私に言わせればお気の毒なんだけど……とにかく、滝川には彼女がいる。彼女はいわば、神族が送り込んだ監視部隊。それを巻き込んだらどうなると？」

「ですから」

ユギオは笑った。

「事故は、あるでしょう？流れ弾とか」

「都合のいいことを――何を、いくらで、どれだけほしいの？」

「それはもう！」

ユギオは楽しげに言った。

「とりあえず、人間界への裏輸送ルートの確保。そしてこちらのリストの物資を」

ユギオは、席を立って神音に近づく。

「裏ルートを使う以上、取引はウチの独占と判断してよいのね？」

神音はリストを受け取った。

「勿論」

「“サライマ”……メースまで？」

「人類の格言にあります――“目には目を”」

「……メサイアのことですね」

「そうです。アレは、人類の唯一に近い対抗手段です。対する我々の現有戦力では……」

「……他の業者のブツを扱うなら、ルートは即座に閉鎖します。違約金は天文学顔負けのケタになりますから、覚悟しておいて。事前に断っておくわ。よろし？」

「――はい」

「滝川を抑えられたら私は交渉に乗るしかないじゃない。ったく、由忠がふがいないから」

「ハハッ……感謝します」

「大盤振る舞いね。何です？他だと困るのですか？」

「裏表いずれにも、神音様ほど影響力のある所はございません。下手に動くと天界までも」

「……面白くもないけど……で？何て言ったかしら？あなた達」

「――中世協会」

男は言った。

「第四計画とお呼びいただいても結構です」
「これは、確認と、そしてあなた達の誠意を試すためのテストです」
神音は言った。
「返答次第で品質が決まります」
「――どうぞ？」
「時計の針を戻して、何をするの？」
「人類の進歩の停止……人間界に永遠の中世を」
「……どう答えるべきかは」
神音は答えた。
「後の行動によって代弁させてもらうことにしましょう」

部屋から出たユギオに、控え室で待っていた部下らしき男達が恭しく頭を下げた。
「商談は成立だ」
その中の一人にブリーフケースを手渡しながら、勝ち誇った顔でユギオは言った。
「かなりの代償は支払うことになるが、やむを得まい」
「レンファの失態が痛く付きましたな」
「アレを使うことを主張したコウカク達は？」
「死罪」
「レンファのアホ共、誰がアフリカの家畜を皆殺しにしろと命じた

のだ」
　ユギオは吐き捨てるように言った。
「我々は、アフリカを支配下に置けと命じたのだ」
「妖魔の“呪具”コントロールではそこまでは無理ですよ」
「出来ると豪語したのは、コウカクとレンファだ」
「コウカクは所詮、レンファの犬です――それで？」
「撤退完了まで、アフリカの中央高原一帯は死守する。そう簡単に放棄してはならない。
　今までは猊下が躊躇されていたが、メースを投入する許可が下りたばかりだ」
「メースを？」
「ああ。猊下はメースがお嫌いだが……目には目を。巨人兵器には巨人兵器を――メース相手なら、人類側も我々に対する攻勢を止めるだろう」
「アフリカを一時放棄して」
　部下は言った。
「ヴォルトモード軍の魔族を発見次第、そこへ新たに門（ゲート）を作るだけでも」
「そうはいかん」
　ユギオは苦笑しながら肩をすくめた。
「ここまでの失態は、すべてレンファに背負ってもらう。アースフィールドに世論対策はどうなっているか報告させろ。
　レンファの失態で、百万の妖魔部隊を失った大失態だ。
　マスコミ、特にレンファの息がかかった連中が弁明に動き出す前に先手を打つ必要がある。
　人類に一矢報いた彼らの功績を無に帰したのはレンファだと世論に認めさせねば、全てが我々の責任となって、我々を苦しめることになる――それにさえしくじったら」
「しくじったら？」
「――あの小娘に頭を下げに来た意味がなくなるぞ」

「……小娘で悪かったわね」
イヤホンを耳から外した神音は、不機嫌そうに毒づくと、窓辺に立った。
魔法で合成された木漏れ日が目に眩しい。
「……かのん」

「はいじゃ」
後ろに控えていた、少女そっくりな人形が頷く。

「すぐに、連中に届けられるメースは？」

「在庫からして」
うーん。
“かのん”と呼ばれた少女は腕組みした後に答えた。
「即納可能状態のツヴァイは５００、サライマが１５００……在庫は豊富じゃ」

「思ったより少ないのね」

「ツヴァイはとっくの昔に正規軍を退役したロートルじゃ」
かのんはあきれ顔で言った。
「辺境の貧乏国家に売りつけるための代物じゃ。サライマは退役が始まっておる。
クリーヌランド方面での反乱もあって、市場ではタマ数が少なくなっておるんじゃ。
むしろ多いのじゃ」

「戦争する上ではどう？」

「人類のメサイアは大したことない」
かのんは馬鹿にしたような顔で言った。
「装甲、動力、すべての面でツヴァイより落ちる」
「……そうね」
「しかも、在庫ストックは豊富じゃ。ネットワーク使えば騎数は何倍にもなる」
「……」
「いかほど用意するんじゃ？」
「連中の提案額から送り出せる騎数の最大数を割り出しなさい。継戦期間は1ヶ月。グレードは低くていいわ」
「ううむ」
かのんはしばらく唸った後、
「……１５０騎。他パーツの用意も含めて、それ以上は無理じゃ」
「いいでしょう――輸送艦を用意して。門（ゲート）を使います」
「ご……ご主人様？」
「――何？」
「まさか――人間界へ？」
「私も少し」

少女は薄ら寒い笑みを浮かべた。
「――人類への恨み辛みがありますからね」
「由忠へは？」
「――由忠より、遥香さんの方がいいわ。情報統括軍に恩を売っておくのも悪くない」
言いかけて、神音は黙った。
「どうしたのじゃ？」
「……やめましょう」
「何故？」
「こちらの動きは全て読まれているはず。下手な行動はこちらの命取りになるわ」
「じゃが、それでは由忠達が危険じゃ」
「……そうね」
うーん。
神音は、腕組みをした後、しばらく考え込んだ挙げ句、ぽん。と手を叩いた。
「かのん」
「はいじゃ」
「――悠理は、どうしていたかしら？」

「それは非道じゃ」

「何が」

「孫を隠れ蓑にするとはヒドい話じゃ、そう言ったのじゃ」

ポカンッ！

神音の一撃がかのんの脳天に炸裂した。

「本当のことじゃ！」

頭に出来たたんこぶを押さえながら、滝のような涙を流したかのんが抗議する。

「よく考えなさい。かのん」

「ううっ……妾の脳みそはご主人様の8割じゃ。そんなに遜色は」

「私と悠理は祖母と孫」

「悠理はまだ１４じゃ。まだまだ子供じゃ。ピッカピカの童貞君じゃ。反抗期はまだのようじゃが」

童貞。

その言葉に、なぜか神音の眼には剣呑な光が宿った。

「そうね……あの年頃は難しいものね」

「そうじゃ。悠理は素直ないい子じゃが、馬鹿正直過ぎる。女でも知れば別かもしれんが」

「女を……知る？」

「ご……ご主人様！？」

「……何？」

「な、何だか、背筋が痛い程寒いんじゃが！？」

「ちょっと」

神音はうっすらと恐ろしい笑みを浮かべた。

かのんを見る目が完全に据わっている。

「由忠の、同じ頃を思い出して」

「あれはやりすぎた！」

かのんは即座に言った。

「妾は十分反省しとる！じゃが、あの頃は、妾は妾で、由忠のことを本当に心配したからこそ、ああいうことをしたと、最後はご主人様もお認めになって、手打ちにしてくださった！」

「……そうね」

「そうじゃ！」

「ただ、やっぱり母親として、筆降ろしの件からはじまって何から何まで、由忠のことは、あなたにはいろいろ言いたいことはあるの」

ギロリ！

神音の眼光を前に、かのんは背筋を伸ばしたまま、凍り付いたように動かなくなった。

「あなたのおかげで、親としてどれ程恥をかいたか……とか」

「落とし前はつけた！日本にいられなくなって、海外を二人で放浪

したんじゃ！散々苦労したんじゃ！それで十分じゃとおっしゃった！」

「……はぁ」

神音は脱力気味なため息をついた。

「かのん、あなたも言うようになったわね」

「分解されたくないからの」

「まぁいいわ。悠理を呼ぶ時に、こう伝えなさい。おばあちゃんが“鬼ころしが飲みたい”と言っていたと」

「鬼ころし？」

「言えば分かるわよ――伝えなさい」

「了解じゃ」

かのんはまるで逃げだそうとするかのようにきびすを返した。

「――まちなさい」

神音はその背中に言った。

「かのん？あの連中にメースのカタログ持っていって、こう伝えなさい。水中型と母艦にお買い得がありますよ？って」

●富士学校編　第一話　入学

近衛兵団メサイア大隊第４５期メサイア操縦適正者候補生。

それが自分達の地位であるにもかかわらず、まともに最初からいえたのは、１０名いる候補生の中でただ一人。

泉美奈代（いずみ・みなよ）

父は近衛騎士。

母は生命保険会社のセールスウーマン。

高給な割に危険な職業としては帝国随一。当然、市井の生命保険なんて加入できるはずもない近衛騎士の父と、その生命保険の販売を生業とする母がどうやって知り合ったのか、そして、何故結婚したのか、美奈代は娘として本気で不思議がっている。

しかし、その答えを知っている二人はこの世にはいない。

生後まもなく、母が交通事故で他界。

軍人として出征ばかりしていた父により、ほとんど施設に預けられ続けた美奈代は、家族というものを知らない。

学校で母親の似顔絵を描こうと言われ、どうしても描けずに、白紙で出して先生に怒られたことがある。

父が高校に入学する前に戦死しても、美奈代は不思議と悲しさは覚えなかった。

親の残してくれた遺族年金と、騎士としての体が、美奈代にある全てだ。

騎士。

現代において、一般的な意味で、その言葉の指す所は、かつて甲冑に身を包み、馬に乗っていた職種ではない。

一種の人種だ。

常人とは比べ物にならない身体能力を持ち、素手の一撃は鉄板を貫通、跳躍すれば数十メートルを余裕で飛び越す。時速数百キロで疾走し、その動体視力は弾丸すら見切る。

まさに“非常識”な能力を持つ者。

それが、騎士とされる。

騎士になったのだから。

たったそれだけの理由で、美奈代が周囲に「泉は軍人になるしかない」と見られるまでになるのに時間は必要なかった。

採用担当の近衛士官から、訓練生として美奈代を採用する旨を伝えられても、周囲からはそれが当然だと思われた。

騎士は力。

力こそが全て。

戦う道具。

それが騎士……。

軍隊や警察といった、国家が管理する暴力装置に属すことが認められなければ、騎士は騎士としての立つ瀬を失う。

立つ瀬のない騎士は騎士ではない。

ただの人間？

否。

ただの人間以下となる。

騎士。

その名故の羨望の裏返しとして、社会からはじき出され、蔑まれ、

待っているのは、まっとうな生活も、最後ですら期待できない暗黒の日々。

そこに、騎士個人の夢も希望も、考慮はされない。

騎士は選ぶ存在ではない。
選ばれる存在なのだ。

そんな立場に美奈代が立たされても、誰も哀れみさえしなかった。

美奈代も、それに表だって異議を唱えなかった。

ただ、騎士としての将来を命じられた瞬間、将来への漠然とした夢を捨てただけだ。

「泉美奈代候補生、出頭いたしました」

美奈代が養成校正門で、衛兵に申告したのは、高校卒業の１０日後のこと。

暖かい風が桜が花を散らせている。

元陸軍少年戦車兵学校のそれをそのまま使った煉瓦造りの古ぼけた衛門の前。

しかめ面をした直立不動の衛兵を前に、何度も練習した申告を行った。

家族の遺品は私物と一緒にすべて片づけた。

両親の位牌も寺に預けた。

住み慣れた施設から退去したことで、もう、美奈代に戻るところはない。
すでに母はなく、出征ばかりの父という環境のせいで、美奈代は家族としての居場所を失うことに、何の抵抗すら感じらなかった。

軍隊生活に必要な物資はすべて軍で用意してくれる。
軍隊に入る兵隊の持ち物は、身一つでたくさんだ。

父の言葉通りというわけでもないだろうが、あれこれ処分しつくした美奈代がこの時に持っていたのは、着替えをのぞけば、入営に必要な書類一式。
不思議とただそれだけだった。

案内役の兵に連れられ、美奈代は訓練生用の宿舎に入った。
古ぼけた3階建ての、どこにでもありそうなマンション。
宿舎を初めて見た時の、美奈代の印象はそんなものだった。

割り当てられた部屋は一人部屋。
パイプベッドと、高校で使っていたのと同じ古ぼけた机が一つ。
小さな棚。
それだけが調度品の殺風景な部屋だが、それまで育ってきた美奈代の部屋と比べても、そんなに遜色はない気がした。

とことん、軍隊生活をしてきたということか。

ベッドの上にバッグを放り出した美奈代は、ふとそんなことを思い、そして自嘲した。

本物の軍隊なら、私はまだカラ付きのヒヨコ以下なんだぞ?

そう思うからだ。

教官兼上官は父。
その小さな軍隊で、私は育ってきた。
そう言うのは簡単――いや、簡単すぎる。
第一、それが本物の軍隊で通用すると、本気で思っているのか？

誰かが気を利かせてくれたのだろう。
開かれた窓からは春の風が暖かな空気を運んでくる。

そして――

「……あれか」

窓の向こう。
そこに立つのは、一体の神像。

違う。

メサイアだ。

「総合展示以来だな――生で見るのは」

メサイア――

全高２５メートル以上を誇る人類最強の人型魔法兵器。

その前にはいかなる通常兵器も無意味。
歴史に初めて登場したのは、１９４５年に終結した赤色戦争から
奇跡的、驚異的な復興を遂げ、世界支配を狙うまでに発展したアメ

リカ合衆国と、ユーラシア大陸の覇権を狙うロシア、そして中華思想を掲げる中華帝国による連合軍との代理戦争となった第一次ベトナム動乱。
米軍の兵器と物量に押された連合軍が繰り出した最強最悪のジョーカー。
それが、メサイア。

ロシア軍呼称ＭＤＲＯＭ－１１スターリン。
「鋼鉄の人」を意味するその名が、メサイアという存在を、如実に表現していた。

そして、メサイアは戦場に立った。

投入されたメサイアは、わずか４騎。

目的は――破壊と恐怖を人類に刻みつけること。

後にそう語られる程、４騎は、戦場を地獄に変えてしまった。

たった４騎を阻止するもに支払った血の代償は、およそ１０万とも２０万ともされる。

たった４騎のメサイア――後に“黙示録の４騎士”と呼ばれる――により戦線は逆転どころか、ベトナムから米軍を駆逐する寸前までに陥らせたのだ。
米軍を住民どころか友軍を巻き添えにした新開発の兵器――反応弾――を使用せざるを得ない所まで追い込んだ、まさに恐怖の申し子。

それが、メサイア。

魔法動力源として利用される魔晶石（ましょうせき）を用いたエンジンから供給される、莫大なエネルギーで稼動する現代魔法技術のある種の結晶。
人類が夢見た、万能兵器。
開発が完成だとさえされる最強兵器。

ある人は言う。
“メサイアは、人類の英知の結晶である”と――。

人類に平安と安寧を保証するべき魔法技術が生み出した破壊のための英知。
その結晶たるメサイア。

またある人は言う。
“メサイアは、人類が産み出した神である”と――。

陸海空、戦域を選ばず、敵対する全てを薙ぎ払うために存在する最強の神。

戦場の救世主――メサイア。
破壊の神――メサイア。

美奈代は窓に歩み寄った。

アイドル状態なのか、魔晶石エンジンから発せられる、独特なメカニカルノイズ混じりの音は聞こえてこない。

「戦闘機動時に、耳栓なしで近づくと鼓膜がダメになるんだったな」
ふと、父から聞いた言葉を思い出し、美奈代は苦笑しながら窓にもたれかかると頬杖をついた。

聞こえてくるのは、エンジン音ではなく、静かなヴァイオリンの音色。

風が奇妙な音を運んでくるのに気づいたのは、その時だ。

「……ヴァイオリン？」

間違いない。

音楽といえば軍歌くらいしか知らないという美奈代にも、楽器の音の区別くらいは出来る。

曲なんてわかりはしない。

ただ聞き入るだけで不思議な安堵感に包まれる、そんな演奏だった。

軍楽隊の練習でもあるんだろうか？

音の出所を知りたくて、窓から顔を出した美奈代だが、窓の外に人気はない。

「……となりの部屋？」

そう。

美奈代には、隣の部屋からヴァイオリンの演奏が聞こえてきたことだけはわかった。

その日の午後。

美奈代が訓練生と顔を合わせたのは、この時が初めてだった。

場所は被服配給所。

「……」

そこに入った美奈代は、言葉を失った。

メサイア乗りの卵達というからには、どんないかめしい連中かと思っていたら……。

「えーっ！？双葉ぁ！私、バストいくつだっけ？」
「お姉！それってケンカ売っているの！？」
「ふむ……８２と見た」
「あははっ！ミサちん正解！」
「光葉だって！」

一瞬、どこの女子校かと思ったのも無理はないと美奈代は思った。
配給所の前で列を作るのは自分より絶対に年下……というより、中学生でも通るか心配な女の子三姉妹。反対に、その保護者とも思えるほど大人びた女。
そして……。

「ここだここ！」
よく響く大声に思わず振り返ると、ポニーテールの女の子が、長い髪の女の子の手を引っ張って走ってきた。
「ほらぁ！やっぱりこっちでしょう！？」
「さ、さつきさん……ズルい」
どうやらかなり走ったらしい。二人とも息が切れていた。
「わ、私、こっちって最初から……」
「ははっ！気にしない気にしないっ！」

こんな連中と一緒では先が思いやられる。
ため息一つ、美奈代は列に並んだ。

配給を受けた後、
「お……重い」

部屋に戻る美奈代の前をよろけながら歩くのは、先程遅れてきた髪の長い少女だった。
無理もない。
ずしりと手にくる重さを感じながら、美奈代はそう思った。

被服。
一言でそういわれたが、受け取ったものは生活に必要なほとんどの全て。
制服、訓練用の戦闘服、半長靴、短靴、雑嚢、背嚢、すいとう、飯盒、個人用天幕、携帯エンピ、ポンチョ、防寒服、手袋などなど……。
その中でも、とにかく重いのが、パイロット用の戦闘装備。
この一式だけで総重量は３０キロ近くある。
３０キロが自分の体重の何割かを考えて、美奈代は少しだけブルーな気分になった。

「あっ！あっ……きゃーっ！」
目の前でついに女の子がバランスを崩して倒れた。
廊下に新品の装備がバラバラに散らばった。
ふうっ。
美奈代は半泣きになって物をかき集める女の子の手助けをした。
「大丈夫か？」
「す、スミマセン……」
「あまり、重い物を持ったことはないみたいだな」
「剣の訓練だけは祖父から受けてましたけど……ヴァイオリンやってたから、指を大切にしろっていわれて」
「ヴァイオリン？……軍楽隊にでも？」
「訓練終えたら軍楽隊に回してもらえるって聞いたから入ったんですけど……」

「？ああ、さっき演奏していたのは君か」
「は、はい……あの、ご迷惑でしたか？」
心配そうに自分を見つめる女の子の顔を見た美奈代は思った。

綺麗な子だ。

美奈代はそう思った。

今まで見た中で一番綺麗な子だと。
美奈代は知らずに相手の顔を見つめていた。

「あの？」
「あ、ああ！すまない！ぼうっとしていた！」
「？はぁ……」
首を傾げる女の子に、美奈代は言った。
「私は泉美奈代だ」
「あ、はい。私、風間祷子（かざま・とうこ）です」
「音楽は素人だけど、見事な演奏だったと思う。風間、では、物品を部屋に戻そう。次は、身体検査だ」
「はい」

「……」
「……」
「……」
医務室に集まった全員が凍り付いたのは、はっきりいって無理もない。

身体検査。
呼び名はいい。
身長、体重、胸診検査、レントゲン、血圧、血液検査。

神城という名の三姉妹は血液検査の採血で大泣きしていたが、その三姉妹すら、次の検査項目を前に立ち止まっている。

検査はそれぞれ衝立によって仕切られた部屋で行われ、それぞれの衝立には検査項目が貼り付けられているのだが――

「こ、これ……ホンキ？」
「……じゃないの？」

ギョウ虫検査
性病検査

残り二つの検査内容を示す張り紙には、そう書かれていた。

「あ、あたし……パス」
ポニーテールの女の子、早瀬が赤面しながら手を軽く振った。
「そうもいかないだろう」
美奈代はそれを止めた。
「義務なんだ」
「じゃ、じゃあ、あんた行きなさいよ」
「そ……それは」
美奈代も女の子だ。
この検査だけは勘弁して欲しいというのが、女の子としての美奈代の本音だ。
「ふむ……私が検査してやろうか？」
そう言ったのは宗像だ。
「あんた、看護婦だったの？」
「いや。個人的なシュミだ」

「……」

「何をしている！」

突然の罵声に驚いた全員の視線が背後に集中する。

「男子は全て終わったぞ！？」

そう怒鳴るのは、髪を背中で束ねた女性士官。

胸のネームプレートには「二宮」と書かれていた。

階級章は中佐。

年の頃は３０前で中佐だから、かなりの実力者なんだろう、美奈代はそう思った。

「で、でもぉ……」

神城三姉妹はおずおずと抗議するが、

「でも明後日もない！」と二宮に怒られた。

「そうです！」

誰も来ないことにしびれを切らせたのだろう、マスクをした看護婦が衝立の向こうから顔を出した。

「さぁ！男子はあっさり終わりましたよ？」

「都築っち、喜んだよね？お尻になんかされて」

「俺にエクスカリバーを！みたいな？ふむ。似合うな」

「神城双葉候補生！宗像理沙候補生！」

二宮に名を呼ばれた二人が無意識に直立不動の姿勢をとる。

「何をくだらないことを！生徒隊長は誰か！？」

「まだ、決めていません」

美奈代の一言を受け、二宮は美奈代に言った。

「よし。貴様なれ」

「はっ？」

「生徒隊長を先頭に番号順に続け！」

「あのぉ……この検査って、何をするんですか？」

検査が遅れ、ようやくみんなに合流した祷子が不思議そうに訊ねた。
「なに」
二宮は楽しそうにニヤリと笑っていった。
「楽しくて気持ちのいいことだ」
「まぁ。それなら」
祷子は、ポンッと手を叩いて言った。
「まず、教官から楽しんでいただかなくては」
「なっ!?」
二宮が青くなった。
「わ、私は――」
「まぁまぁ。二宮さん」
手に検査用の太めのガラス棒を持つ看護婦がガシッ!と二宮の肩を掴んだ。
「教官として手本を示すのも面白いですよ?」
「ま、待て!私はまだお嫁入り前で――ヒッ!?」
「はい二宮さん?下着脱がしますから、お尻付きだしてくださいね?検査しますから」
「だ、だから!いやぁ!」
衝立の向こうに引きずられていった二宮が暴れている物音がして、ポイポイと宙を舞って美奈代達の前に舞い降りたのは……。
「さすが教官」
生徒達が、衝立に引っかかるソレを前に感心したように言った。
「オトナだねぇ……」
「うん。こんなシルクの高級下着を普段から身につけているとは……」
「オトナだ」
「うん」
「見るなぁ!……い、いや!そんな太いの入らない!痛ぁぁぁぁいっ!!」

衝立の向こうから聞こえた教官の悲鳴。

それは、すぐ後に、全員があげた悲鳴でもあったが……。

「と……とにかく」

何故かお尻をさすりながら教壇に立った二宮は、威厳を示すように居並ぶ候補生達に言った。

「私が貴様等、第４５期候補生の指導責任者を命じられた二宮真理中佐だ」

寸分の油断もなく着込まれた軍服といい、立ち姿といい、典型的な職業軍人を連想させる二宮の口調こそ厳しいが、声色はむしろ心優しい女性のそれだった。

「貴様等ヒヨコが一人前になるよう、厳しく躾るつもりだ。情け容赦という言葉を、我々教官が知るとは最初から思うな」

「……」

美奈代達は黙って二宮の言葉に聞き入る。

ここは軍隊だ。下手なことすれば殴られる程度では済まない。その程度のことは、皆わかっているのだ。

「――よろしい。そして、私の横に立つのが、副責任者の長野大尉。他にも教官はいるが、今から貴様等の父親は長野大尉だ。そう思え」

４０代だろう。中肉中背、やや薄目の白髪が目立つ、いかつい中年男が美奈代達を一瞥する。

教官として、二宮より迫力があるのはやむを得ないだろう。

「ここでの生活に入る前に、貴様等に辞令を手渡す。各自、他の者の名前を覚えておけ。呼ばれた者は一人ずつ前へ。――泉美奈代」

「はい」

「――近衛兵団メサイア大隊第４５期メサイア操縦適正者候補生に任命する」
「はい」
美奈代は辞令を受け取った。
「次――宗像理沙候補生」
「はい」
先程、神城三姉妹と一緒にいた大人びた女性が立ち上がった。
中性的な顔立ちはかなりの美女といえるし、立ち振る舞いも洗練されている。
「とても同い年とは思えない」というのが、美奈代の感想だ。
「神城一葉（かみしろ・かずは）」
「あ、はい」
「神城双葉（かみしろ・ふたば）」
「は、はい」
「神城光葉（かみしろ・みつは）」
髪型が違わなければ絶対に区別出来ない小学生のような小柄な三姉妹が順番に辞令を受け取った。
「柏美晴（かしわ・みはる）」
「は、はい」
メガネをかけた大人しそうな女の子が立ち上がって辞令を受け取る。
緊張しているのか、その体は気の毒なほど震えていた。
「都築真（つづき・しん）」
「ウス」
顔はいいし、背は高いし、引き締まった筋肉質という男が立ち上がった。

顔だけなら気になるタイプだが、ふんどりかえった態度からして、決して素行がいいとはいえない。
美奈代は一言「気に入らない」と口の中だけで呟いた。

「山崎大輔（やまざき・だいすけ）」
「はい」
ノッソリ。
その言葉がしっくり来るほど、彼は巨大だった。
身長は優に2メートルは越えているだろう。
ゴツい顔立ちに全身筋肉といわんばかりのマッチョ。神城達から「フランケン」と呼ばれた男が二宮に近づく。
「ありがとうございます」
山崎は辞令を受け取ると、二宮に頭を下げた。礼節の点からすれば、都築とは雲泥の差だ。立ち振る舞いも、むしろ彼が大人しいタイプの人間だと告げている。

「早瀬さつき」
「はい」
はきはきとした返事と共に、ポニーテールの女が立ち上がった。
ボーイッシュな印象が強い、体育会系な女。
それが美奈代の印象だ。

「風間祷子」
「はい」
最後に立ち上がったのは、髪の長い美女だ。
恐ろしくおっとりとした印象のある返事といい、流れるような歩き方といい、どこか普通ではない印象を、美奈代はぬぐうことが出来ない。

「以上だ。同じ富士学校に４４期で入った連中と違い、貴様等には特別な式典もなく申し訳ないが、貴様等は……」

全員を着席させ、そう言い始めた二宮はちょっと言い淀んだ後、続けた。

「特殊なのだ」

「？」

「貴様等のメサイア操縦適格者としてのランクは平均でＡＡ。これほどの高レベルとなると、通常カリキュラムでは不十分だ。したがって、カリキュラムはすべて貴様等向けの特別なものとなる。何がどうなるかについては、その身で味わってもらう」

その身で。

そこを力説した二宮は口元をゆるめた。

「――――地獄へようこそ」

●富士学校編　第一話　入学（後書き）

●富士学校編　第二話　歩兵の本領

この世の地獄。

美奈代達は、それがここだとことあるごとに思い知らされるまで日付は必要なかった。

軍における新入りの立場は、それがどんな国家や組織に属そうとも、たった一言、

地獄。

これで全てが語りきれるものだ。

訓練訓練訓練ついでに座学座学座学。

敬礼の仕方から銃火器の取り扱い、そして難解を極めるメサイアの理論まで、詰め込みすぎのカリキュラムに追われる日々は、他の言葉では表現できるはずはない。

その中で、候補生達は自然と3つのタイプに分類出来るようになっていった。

肉体派
頭脳派
ハイブリット派

前者は、座学より肉体を使う訓練が得意で、理屈より直感がモノを言うタイプ。

都築真、早瀬さつき、神城三姉妹がこのタイプ。

教官達に言わせると、脳みそ筋肉の「バカ共」だ。

中者は肉体派の正反対。

柏美晴や、意外だが山崎大輔がこのタイプだ。

そして、ハイブリット派。

……これはさらに二つに分かれる。

肉体と頭脳の程度がバランスよく配分された優等生タイプ。

宗像と泉の二人は、この典型例だ。

そして――

生きてることそのものが、何かの冗談。

そこまでこき下ろされるほど、肉体・頭脳共に徹底したレベルで欠落しているとレッテルを貼られるタイプがいる。

役立たずともいう。

本気なのかそれとも単に手抜きしているのかは本人のみが知る所だが、それでも、周囲はそう見なす存在。

それが、風間祷子だ。

「も……もう、ダメ」

そう言ってその場にひっくり返ったのは、頭脳派の柏美晴だった。

肉体訓練の昇華を示すべく行われた行軍訓練。

３０キロ以上の戦闘装備を着用し、５０キロ先の目的地までひた

すら歩き続ける訓練は、超人的肉体と反射能力を誇る騎士にもかなりの負担を強いる。

真っ先にネをあげた柏美晴は、理系高校に在学中、ずっとマンガに入れ込んでいたという、自他共に認めるインドア派。

自宅の薙刀道場の鍛錬で鍛えてはいたが、その子に、大の男でさえへたばるとされる行軍訓練はキツすぎる。

無理もない。

誰もがそう思いつつ、それでも言わざるを得ない。

「しっかりしてよ！」

「そうだ！みんな頑張ってるんだぞ！？」

肉体派からは叱責が飛ぶが、

「そ……そうは……言われても」

美晴は絶え絶えの息の下で苦しげに文句を言った。

「わ、私……こんなに歩いたこと自体が初めてだよ……」

そう言って、美晴は手にした自動小銃を何とか体の上からどかそうともがいた。

鉄板すら撃ち抜く腕力を誇る騎士が、わずか5キロにも満たない鉄のカタマリを動かすことすら出来ない。

それが、美晴の体力の消耗度を如実に示していた。

「泉」

水筒のキャップを外しながら、宗像が美奈代に言った。

「美晴は限界だ。これ以上の行軍の継続は」

「……」

美奈代は全員を見回した。

若干１８歳の女の子が３０キロ近い装備を身につけて５０キロの行軍。

入営以来、シゴキそのものの肉体的訓練を受けているとはいえ、騎士の体を持つとはいえ、その過酷さは一々口にする必要すらない。

「やむを得ない」
美奈代は言った。
「ここで15分の小休止をとる」
ズシャッ！
途端に全員がその場にへたり込む。
そんな仲間達に、美奈代は容赦なく言った。
「早瀬、私と共に警戒に立て」
「えーっ！？」
さつきが悲鳴に近い声を上げたのも無理はない。
さつきも脚が立たないのだ。
そんなさつきに美奈代は容赦がなかった。
「体育系だったんだろう？それくらいやれ。それとも、柏にかわってもらうか？」
「ううっ……男子がいるでしょう！？男子が！」
「あれはもう斥候に出てもらっている。山崎は使えるが――都築は使えん」
「あらあら？あのフランケンがお好みでしたか？」
「私は外見に惑わされたりはしない――柏」
「……」
美晴は弱々しい顔で眼だけを美奈代に向けた。
そんな美晴の前で膝を折った美奈代が、タオルで汗に濡れた美晴の顔をぬぐった。
「もう少しだ。病院送りはそれまで待て――みんなのために」
美晴は黙って頷いた。
「宗像、水を」
「ああ」
そういうと、宗像は水筒の水をあおった。
「ち……ちょっと理沙ちん？」
一葉が恐る恐る訊ねた。
「まさか……口移し？」

コクン。
宗像は口に水を含んだまま、頷いた。
「ま、待って！」
美晴が慌てて体を起こしたものだから――――。

「宗像ぁ……覚えてなさいよぉ？」
恨めしそうに宗像を睨む美晴のヘルメットの下の髪はびしょぬれだ。
「動けそうになかったから、やってあげようと思っただけだ」
宗像は、しれっと言い放った。
「大体、なんだ？歩けるじゃないか」
「ふ……ふざけないでよ」
美晴は銃を杖代わりにしてよろめきながら歩いている。
「これ、歩いているって言わない」
「褥子を見ろ。ああやって先方に立って歩いているじゃないか」
美佐子は部隊の前方を歩く褥子の姿を見ながら言った。
「不平不満も言わずに頑張っている。あいつも肉体訓練の最終過程だということはわかっているんだな」
「……あのボンクラちゃんがねぇ」
ボンクラちゃん。
何かある度に、教官が罵声として「このボンクラぁ！」と褥子を呼ぶので、周囲も褥子のことをそう呼ぶようになっていた。
「なかなか、根性はあるようだな」
褥子の失態の度、部隊として責任をとらされ、その隊長として辛い思いをしてきただけに、危険が潜む前衛として自ら進んで立つ褥子の姿に、美奈代も感慨深げに見入っていたのだが――――

パタッ

突然、褥子が倒れた。

「!?」
後方にいた美奈代達は、一斉に伏せる。
「か、風間?」
返事はない。
もし、模擬弾が発射され、褌子がそれに当たったなら、いくらなんでもそろそろ銃声が聞こえてもいいはずだ。
それが、聞こえない。
「手裏剣、投擲ナイフの類かもしれない」
宗像の言葉に、美奈代は黙って頷くが、
「まさか!行軍演習でしょ?いくらなんでもそこまでは」
さつきが否定を口にした。
「私達を殺す気?」
「ここまで歩かされること自体……私達を殺すつもりだよ」
美晴はそう言うしかない。
「演習用麻酔弾の可能性が高い」
宗像は、さつきの意見にそう答えた。

演習用麻酔弾――
この世界の軍隊や警察では広く用いられる特殊な魔法処理がされた弾丸。
命中すると麻酔をかがされたように気絶するため、そう麻酔弾と呼ばれている。

隊長として、美奈代はその可能性を否定するわけにはいかない。
だから、皆に命じた。
「各員、戦闘態勢」
美奈代は、２０メートルほど先にある大岩を指さした。
「――風間を救出後、そこの岩の影に隠れる」

「了解」
「かかれっ！」
美奈代達は一斉に駆け出した。

「あんた、いい加減にしなさいよ！」
数分後、祷子は全員の前で正座させられていた。
「疲れていたにしても、眠りながら行軍して、コケてもなお眠り続けるって、あんたどういう神経してるのよ！」
美晴が怒るのも無理はない。
余計な体力を使ってまで助けに言ったのに、祷子はその場でグーグー眠っていたのだから、怒るなというほうが無理だ。
「……返す言葉もございません」
うなだれる祷子は、未だにどこか眠そうだ。
「はぁっ……祷子！？帰ったら、全員に酒保でおごりだからね！」
「あっ！私サイダーがいい！」
「アイス！」
「あんパン！」
「私は風間と一晩でいいぞ？」
「宗像……ホント、あんたと同室だけはしたくないわ」
「ん？私は気持ちいいのが好きなだけだが？」
「もういい」
美奈代は渋い顔で言った。
「風間、懲罰として柏の装備を持て。準備が終わったら斥候へ伝令に走れ」
「は……はぃぃ」
「声が小さいっ！」
「はいっ！」
「早瀬、宗像。柏のバックパックを風間のバックパックの上にくくりつけろ」
「ほ、本気？――――ボンクラちゃんが死ぬわよ？」

驚くさつきに、美奈代は冷たく言い放った。
「風間はバテてはいない」
驚く美晴に美奈代は言った。
「単に寝不足なだけだ――違うか？」
ばつが悪そうに頷く祷子は、バックパックのハーネスを締め直した。

眠いのは本当だけど――

祷子は肩に食い込むバックパックの重さに耐えながら走った。
パイロット用の戦闘装備といえば、要するには甲冑のことだ。
祷子の全身には、すでに１００キロ近い、つまり、祷子に言わせれば、祷子二人分の体重＋十数キロ（？）の重さがかかっている。
それでも祷子は歩き続けられる。
それは騎士としての肉体の産物以外の何者でもない。

美奈代さんはスゴイ。

祷子はそう思う。
美奈代は気丈に振る舞ってはいるが、もう脚が限界に来ているのは、その引きずり方からして明らかだ。
祷子が見る限り、美奈代は最も体力がない。
あるのは根性だけだ。
だから、真っ先に脱落するのは美奈代だと、祷子はそう思っていた。
ところが美奈代は持ち前の根性だけで歩き続け、周囲への配慮も欠かさない。
祷子に美晴のバックパックを持たせたのも、最も体力が残っていることを、美奈代が見抜いていたからだと、祷子は理解していた。

祷子のこの体力は、幼い頃から続けさせられた剣術修行の賜だ。
祖父に育てられた祷子は、可愛がられると同時に、厳しく育てられた。
神社の巫女の修行の一環としてあったのが剣術修行。
巫女として、山頂にある神社へ朝夕のお務めに行かされていたのも、足腰の訓練になっていたと、今では実感としてわかる。
吹奏楽部に入り、ヴァイオリン奏者として名を馳せた後も続けた日課。
それが祷子の体力につながっていた。

あっ。いた。

森の出口付近。
倒木の影に隠れるようにして向こうを見る二人の兵士が、こちらを見ると手を挙げてくれた。

「お疲れさまです」
「風間さん、どうしたんですか？その荷物」
驚いたという顔で祷子を見る巨人――山崎が言った。
「この行軍です。足腰、大丈夫ですか？」
「ええ。平気です。ありがとう」
「どっちにしても、疲れたでしょう？懲罰でなければ代わりますよ……はいこれ」
美晴の装備を受け取った山崎がそっと取り出したのは、野苺（のいちご）だ。
「さっき、そこで見つけたんです。酸味が体力回復につながりますよ？」
「ありがとうございます」
にこりと笑って野苺を受け取る祷子に、山崎は照れた笑顔を浮かべる。
「おーお。アツイねぇ。大輔ちゃん」

「つ、都築さん！」
「くすっ。後続がもう体力的に限界です。これがあれば」
「はい。全員一個ずつなら、間に合いますね」
「あっ、それで伝令です。前方に障害はないか」
「ありません。ただし、無線で警告が入っています」
「警告？」
「前方でメサイアの運用訓練中。模擬戦闘も組み込まれているため、事故発生防止に留意せよ。とのことです」
山崎は、そう言って背中の無線機を、その太い指でつついた。
「了解……後方の部隊は無線機を持っていません。伝令、走ります」
「いや……それは必要ないでしょう」
山崎はそう言って、袴子が走ってきた先を見た。
つられて見た袴子の眼に、こちらに向かってくる一団の姿が見えた。

「このバケモノ」
ポツリとそう言ったのは美晴だ。
「あんた、この装備で走れるって、どういう存在よ」
「ははっ……小さい頃から重い物担いで山道歩いていたから、慣れちゃっているんですよね」
「へぇ？所で美奈代。いつまでここに？」
「喜べ」
無線機と地図を相手にする美奈代が言った。
「ここで待機の命令が出た。前方でメサイアの訓練が始まっている」
「へぇ！？」
そう言って身を乗り出したのは光葉だ。
「見たい！」
「見ることは出来なくても、音は聞こえているだろう？」
「へっ？」
両耳に手をやる光葉だけでなく、居合わせた全員が耳を澄ませた。

ズーン

ズーン

ガーン

鉄を叩く機械が遠くで動いているような音が、森の小鳥たちの声に紛れてその耳に届く。

「あれが、そうなの？」

「そうだ」

一葉に美奈代は言った。

「二宮教官によると、ＭＤＩＪα－０１５「幻龍（げんりゅう）」だ」

「幻龍？えっと……あの近衛の標準メサイア？」

「そうだ。いずれ我々が乗る騎体でもある」

美奈代は、眩しそうな眼で、見えないメサイアに思いを馳せた。

「不敗のメサイア。かつて父が駆り、命がけでその名誉を守り抜いた、誇るべき騎だ」

「私達が、それに乗る」

「そのために、私達はここにいるんだ」

美奈代の言葉に、皆が頷いた、次の瞬間だ。

ガギィィン

遠くで鈍い、奇妙な音がした。

いままでとは全く違う音。

それを、祷子は聞き逃さなかった。

「伏せてぇっ！」

祷子がとっさに叫ぶ。
“誰かに伏せろと言われれば伏せろ”と教えられている美奈代達は、その場に伏せた。

ドンッ！

凄まじい音
振動
そして、凄まじいまでの土砂と衝撃が、祷子達を襲った。

「な、何だっ！？」
それまで見えていたのは、広大な演習地ののどかなまでの光景。
それが、何か白い物体で隠されていた。
「……メサイアのシールド？」
あちこち傷だらけになった白い金属物。
それは、間違いなくメサイアのシールドそのものだ。
「ケガはないか！？総員番号！」
一瞬、シールドの制式番号、重量等のデータを思い浮かべていた美奈代は、慌てて全員の安否に動く。
全員いる。
被害はない。
「山崎、待機地点約５０メートル地点にＳ４５シールドが落下したと教官に報告！」
「はいっ！」
「宗像、スモークを！こちらの存在を知らせる！」
「了解！」
ピンッ
宗像は、歯で安全ピンを抜いた発煙手榴弾を前方へ向けて投げつけたが……。

「だめっ！――来るっ」
そう叫んだ祷子の声に、
「何が来る」
というんだ？
その美奈代の声は誰の耳にも聞こえなかった。

激震

鼓膜がどうにかなったんじゃないかと疑いたくなるような音。
それらが空気の壁となって全員をはじき飛ばしたからだ。

「……」
「……」

誰も、誰の安全も確かめない。
ただ、目の前の光景に呆然と見入るだけだ。

彼女達の目の前に現れたモノ。

それは、純白の甲冑を身に纏った巨大すぎる騎士。

メサイア。

その重厚にして華美な装甲のライン
気高いまでの雰囲気
単なる兵器と呼ぶには、あまりに美しすぎる存在が、目の前で戦いを繰り広げる。

「これが……メサイア」

誰かが呆けたような声で言った。
「スゴイ……」
全長２５メートル以上。
魔法により稼働する世界最強の兵器。
自分達の目標。
それを間近で見つめること自体が、全身の震えにも似た興奮と感動を引き起こす。
「泉っ！」
宗像が叫ばなければ、美奈代はいつまでもメサイアに見入っていたろう。
力任せに肩を掴まれ、揺すられることで、美奈代は現実に引き戻された。
「危険だ！一端、ここを離れるんだ！」
「えっ？」
「相手はこっちに気づいていない！」
「そ、そうね――全員傾聴！これから５００メートル、一気に下がるぞ！」
「了解！」
美奈代の号令は、一瞬だけ遅かった。
対峙するメサイアの一撃を剣で止めたメサイア。
自重１００トンを軽く越える重量物同士の激突は、新たな衝撃となって、美奈代達を襲った。
「きゃあっ！？」
「走れぇっ！」
その衝撃を受け、まともにはじき飛ばされた面々は、それでもなお、走り出す。

転んだ双葉と光葉を山崎が両脇に抱きかかえて進むのを前に見ながら、美奈代は走る。
だが――
「ぐっ！？」
突然、足を取られて、美奈代は転んだ。
木の根に足を取られたのだ。
派手に転び、それでもなお立ち上がろうとしたが、足が言うことを聞かない。

ひねったか！？
くそっ！
こんなところで！

痛む足をかばうように立ち上がろうとした、次の瞬間。
世界が暗くなった。

「えっ？」

上を向いた美奈代の目に映し出されたのは、自分めがけて振り下ろされるメサイアの足の裏。
滑り止めに走るスリットや、ボルトの穴まで綺麗に見えるほどの近さで――。

美奈代は声が出なかった。
悲鳴すら口から出ては来ない。
ただ、呆然と、自分に襲い来るモノを見つめること。
それが、美奈代に出来る全てだった。

グンッ！

死ぬ時は、横から衝撃が来る。
美奈代はそう思った。
そう思って、自分の死を覚悟した。

「大丈夫か！？」
張りのある男の声がして、激しく揺すぶられた美奈代は、自分がまだ生きていることを知った。
「……」
あまりのことに呆然とする美奈代の頬を、誰かが叩いた。
「しっかりしろよ！」
それは、美奈代の父の顔だった。
「おとう……さん？」
「はぁっ！？誰がだ！」
さらに一撃。
我に返った美奈代は、自分を叩いたのが、都築だと知った。
「都築？」
「やっと正気になったか」
都築はほっとした顔で言った。
「頼むぜ隊長さんよぉ。あんなところでコケるなよなぁ」
「都築っち。カッコよかったぁ！」
一葉が興奮気味にわめく。
美奈代が見ると、自分の周囲には訓練生全員がいた。
全員無事。
それが例えようもない安心感となって美奈代を包んだ。
「逃げてる最中に、コケた美奈代っち助けに危険省みないで飛び込んでいくんだもん！」
つまり、自分を助けたのは都築ということになる。

「そうか……済まなかったな。都築」
「何」
都築は立ち上がって美奈代から離れようとした。
「おーお！赤くなって」
宗像のからかいに都築がムキになって答えた。
「ち、違うわ！」
「じゃあ」
美奈代の足の応急処置をしていた袴子が言った。
「もう隊長、歩けないのですから、都築さんに負ぶってもらいましょう」
「なっ！？」
「なにっ！？」
都築と美奈代双方が驚いた。
「ほら。もう、私達の中で隊長かついで歩ける人、いませんし、都築さん、元気いっぱいみたいですから」
「おお。それなら」
宗像は、美奈代のバックパックどころか、上半身のパイロットスーツを手早く脱がしてしまった。
ちなみにスーツの下はTシャツ一枚だ。
「装備を軽くしてやろう。山崎、都築の方もな」
「了解です」
「や、やめろ山崎！」

「ったく」
ぶつくさ言いながら美奈代を担ぐのは都築だ。
「隊長ぉ。とんだ災難だぜ？こりゃ」
「すまん」
「ホントだ」
情けない。と思いながら、美奈代は都築にもたれかかった。

不意に、都築の汗の匂いを感じる。
「重く……ないか？」
「重い」
「き、貴様っ！女めがけて！」
「いててっ！隊長、歩けるんじゃないか！？」
「うるさいっ！背負っていけっ！」
「そうですよぉ」
横を歩く袴子が言った。
「隊長、足をくじいてるんですから」
「そうそう。それにノーブラだ」
「なっ！？」
「へぇ？隊長、そうなんだぁ」
「都築君？私の計略に感謝したまえ？」
宗像が意地悪い口調で言った。
「バスト８５センチはなかなかだろう？クックックッ」
「これから、お前のことを悪魔と呼んでやる」
「褒め言葉だな」
「あーっ。都築っち。思いっきり前屈みだぁ」
「うるさいっ！」

美奈代は赤面しつつも、都築の背中に不思議な安堵感を感じていた。

●富士学校編　第三話　シミュレーター

「この世界の戦争は、土地や人民を手に入れる国家間交渉の一手段とされている。その為に、戦場での被害は最小にする必要がある。そのために戦争代理人たる騎士、そしてメサイアが用いられる。何故？――――当然だからだ」

教壇に立つ教師――――長野教官は、そう語る。

「考えても見ろ」

その眼は、教室にいる全員を押さえつけるかのごとく、危険に光り輝いている。

「誰が黒こげになった土地など欲しがる？
誰が廃墟になった都市など欲しがる？
誰が難民となった市民など欲しがる？
欲しいのは、そのままの土地と人なのだ。
さかのぼること約半世紀前、敵地を焦土にし、敵国の国力を奪う焦土主義が広く流布していたのは事実だ。
それがいかに間違いであったかは、あの戦争の後始末が教えてくれた！
あの忌まわしき北米大陸戦争――――赤色戦争において、戦勝国となったプロイセン、ブルボン、ヴィクトリアといった世界に冠たる帝国は、戦いで荒廃した占領地の復旧といういわば後始末のためだけに戦費を上回るほどの莫大な費用の捻出を余儀なくされ、結果として、１０年と経たない内に敗戦国だったアメリカに喰われた。
戦で勝ちを収めたにもかかわらず、その後で負ける。
まさに真の負け戦というべきだろう。

その苦い経験があればこそ、世界は変わった。
銃の発展に伴い、戦場の檜舞台から降りたはずの我ら騎士が再び返り咲いた。
一般兵で編成される軍隊を前面に出すのではなく、我ら騎士という選ばれた者達が、あらゆる被害を最小限に抑えて戦争を終わらせる。
それを台無しにしてくれる艦隊戦や空爆なんて多大な被害が予想される作戦は、サル以上の脳みそがあれば原則行わない。
平気でそんなバカは、アメ公か中華主義者にやらせておけばいい」

教官は、そこまで言うと、教壇を降りた。

「いくら貴様等がクソでも、ここにいる以上、こんなことは百もご承知とは思う」

檻の中に閉じこめられた熊のように、教官は机と机の合間を歩きながら言う。

「貴様等ウジ虫のクソ溜が、あろうことか畏れ多くも天皇陛下よりお預かりすることになるだろう、それがメサイアだ」

生徒達はテキストを読むフリをして息を潜めている。

「騎士の手足となり、あらゆる敵を殺す世界最強の兵器。どんな攻撃にも耐えうる万能の鎧に身を固め、計り知れぬ力で居並ぶ敵を叩いて砕く。決して倒れる事もなく死ぬ事もなく、ただひたすら操縦者の意のままに闘い続ける不死身の兵士。海であろうが空であろうが闘う場所を選ばない。勝利する事のみを目的とした完全なる兵器――そして、その裏付けとなる現代魔法技術の昇華」

教官は目的もなしに歩いているのではない。
教室の端まで来ると、くるりとターンして、別な隙間を歩き、目的地を目指す。

「１９５０年代の東南アジア動乱。ケサン攻防戦がメサイアのデビュー戦となったことは知っているだろう。後先考えずに、物量だけで民間人を巻き込みながら戦う、あの芸のないヤンキー共の顔面に、彼らは痛烈な一撃を加えることに成功した――わずか、１０騎のメサイア、「スターリン」によってな」

ピタッ
教官の足が止まる。
その視線の先にいるのは――

「袴子……袴子ってば」
横に座る生徒が定規を使って脇から突くが、肝心の生徒は微動だにしない。
机に突っ伏す長い髪。
騎士にしては小柄な体つき。
間違いなく、女性だ。

「メサイアはご存じの通り、人型兵器だ。
考えてみれば当たり前の話だ。
その道具が使えるか、使えないかの分かれ目は道具の使い方、ノウハウがどれだけ蓄積されているか、そこに集約される。
そして、兵器としてのノウハウがもっとも蓄積されているのは、何と言っても「人体」だ。
各種格闘技、刀剣や銃を用いた戦闘。人類は長い歴史の中で「人体」の使用方法についてノウハウを蓄積してきた。
戦闘機や戦車など、人間以上の存在に関するノウハウの蓄積など、

せいぜいここ１００年足らずしかないだろう。
しかも、性能自体が次々に変化する「乗り物」系兵器に対し、「人体」は有史以来大きな変化がない。つまり、過去のあらゆるノウハウが、いかに性能が上がろうと、基本的に全て使用可能なのだ。
その意味で、人間にとって、人型兵器が、もっとも使いやすい道具であるのは、ある面当然なのだが……」

隣の生徒は、定規で突くことを止め、テキストに目を落としている。

「その最強の兵器を使う貴様等ヒヨコ（パイロット候補生）の中には、その意義どころか、ここにいる理由すらわかっていないバカがいるらしいな……」

教官の額には青筋が走り、体から発せられる怒気が周囲の温度を急激に冷やす。

クシャンッ

可愛らしいくしゃみの音が室内に響き、机に突っ伏していた生徒が起きあがる。
「あ……あれ？」
まだ授業中なのに驚いているのは明らかだ。
そして、後ろを振り向くなり、教官と視線が合った彼女は、気まずそうにやや引きつり気味な作り笑顔を浮かべる。
教官は、震える声で、それでも紳士的な言葉を口からひねり出した。
「お目覚めかな？候補生」

「まったく！」
バンッ！
職員室に戻ってきた先程の教官は、苛立たしさをこめて教本をデスクに叩き付けた。
「長野教官、どうなさったのですか？」
横のデスクで書類仕事をしていた女性教官が訊ねる。
「候補生達に、何か問題でも？」
「問題ばかりですよ！」
教官――――長野雅也（ながの・まさや）大尉は、乱暴に椅子に腰を下ろしながら言う。
「また、あの風間です！」
「ああ。あの、鳴り物入りの？」
女性教官、二宮真理（にのみや・まり）中佐は、生徒達の履歴から該当する名前を思い出した。
「そうです。あの“ボンクラちゃん”です」
「“ボンクラちゃん”？」
「生徒達がそう呼んでいるんですよ。無理もないですけど」
「生徒同士で、愛称で呼ぶのは禁止されているはずですが？」
「固いことはいいっこなしにしましょう」
「長野大尉は、生徒達の肩を持つおつもりですか？」
「こういうことだけはね」
長野は肩をすくめてウィンクしてみせる。
不服そうな二宮は言う。
「それで？何ですか？もう明日には生徒達はシミュレーター訓練に」
「今回の選抜は、絶対に何かの間違いだと、そう言っているのです！」
ダンッ！
長野はデスクに拳を振り下ろし、荒い語気でまくし立てた。
「大体、なんなんですかあの面子は！俺はいつから女子校に配属になったんです！？」

「メサイアの操縦に筋力は必要ないですからね」
二宮はニコリと微笑みながら長野に答えた。
「メサイアのセミ・トレーサー・ライド・システム（ＳＴＲシステム）はバネ仕掛けではないんですから」
「俺はそうであったらどれほど素晴らしいか。そう思っていますよ」
長野はそっぽを向きながらそう答える。
「とくに、あの“ボンクラちゃん”と来た日にゃ」
顔は苦々しげに歪む。
「――――あいつが芸能人養成の学校にいたことは知っています！ですけど、ですけどね？メサイアって、どんなものか位は知っていて当然でしょう！？

それが、最初の基礎講習では……

俺『以上が、メサイアの運用する兵器の基本構造だ。何か、質問は？』
ボンクラ（以下、ボと略してやる！）『あのぉ』
俺『風間候補生、何だ？』
ボ『ロケットパンチは、ないんですか？』
俺『あるかっ！』

騎体構造の授業になればなったで……

俺『以上、メサイアの基本構造だ。質問は』
ボ『メサイアって、ガソリンで動くんですか？』
俺『……いつ、俺がそんなこと言った？』
ボ『だって、エンジンって……』

サバイバル訓練になればもう……

俺『以上だ……風間候補生』
ボ『はい？』
俺『頼むから、何も言うな』
ボ『あのぉ……私、サバイバル訓練って、テントの張り方とか食料の確保の仕方を習うのかと思ってたんですけど』
俺『テントで敵が殺せるか！？』

しまいにゃ……

俺『メサイアで戦うこととは何かわかっているのか！？風間候補生！』
ボ『えっと……ロボットに乗り込んで戦うリアルロボット対戦ゲーム？』

……。

そうです。
あいつは、絶対にどこかおかしいんです。
そんな奴が、軍隊に入ること自体、何かの間違いなのです。
そうは思いませんか？」

「し、史上最強のギャグですよ……ププッ……それ」
吹き出すまいと必死に堪えつつ、二宮は震えながらそう言った。

「ロボットに乗り込んで戦うリアルロボット対戦ゲーム？な、成る程？」
「笑い事じゃありませんって」
「まぁ……懸念はわかりますよ？」
二宮は言った。
「貴重なメサイア、それをあんな若い女の子達が動かす。それが気

に入らないんでしょう?戦場は女の死に場所じゃないって」
「……悪いですか?」
「いえ?ヒロイックな視点からすれば正しいと思います。ですが、これは日本全国の可能性のある全員を選抜した結果であること。その結果として、彼女達がこの養成過程に在籍していること。なにより、我々には、教育課程参加に関して、生徒を選別する権限は与えられていない。あくまで送りこれてくる殻付きのヒヨコ達を、どう猛な猛禽に変えてやる。それが我々にとっての全てですよ」
「……まぁ、そういうことにしておきましょう」
長野は深いため息と共にいかつい肩を落とした。
「バカでも(ピー)でも、使えればいいんですからね」
「もうっ。そういう口の悪いところ、直した方がいいですよ?娘さんにまた嫌われますよ?」
「何」
長野は苦笑してそれに答えた。
「長女の口の悪さと来たらこんなもんじゃありません。何度殴りそうになったか……。聞いてくださいよ。あいつ、私立行きたいなんて言うんですよ?しかも医学部」
「あら。いいじゃないですか」
「よくありません!」
長野は目を丸くして抗議した。
「学費、いくらかかると思ってるんですか!?俺が近衛軍医科大のパンフもっていってやったら、“行かない”の一言で斬り捨てられて!」
近衛軍医科大学は、近衛軍の軍医養成機関。在学中の学費と生活費は免除。ただし、軍隊同然の厳しい規律と、卒業後かなりの年数、軍医としての勤務が強いられることで知られる、帝国でもトップクラスの名門医科大学だ。
「軍隊は、いつだって子供達には好かれませんからね」
二宮は自嘲気味に口元を歪めた。

「かくいう私も、あの子達位の年頃には、近衛なんて絶対イヤだ！って言ってた口ですけど」
「泣く子も黙る二宮教官の言葉とも思えません」
「まぁヒドイ」
「ところで」
長野は声のトーンを落とした。
「教官、どう思います？」
「えっ？」
「例の作戦ですけど」
「アフリカですか？」
「決行日が決定したそうです」

●翌日
「シミュレーター。これが本物なら、貴様等の棺桶と呼ぶところだ」
富士学校の一角に二宮の声が響く。
トラックがそのまま走れそうなほど広く、最低限の照明でようやく室内がわかる程度の明るさしかないその室内にあるのは、飛行機のコクピット部分だけを切り取ってきたような白い機械の塊。
その塊の各所に繋がれたケーブルと、下回りを支える複雑なアブソーバーやスプリングが、一体どういう使い方をするか、何となくわからせてくれる。
つまり、日常において定義される「普通でマトモなこと」には決して使われない。
そういうことだ。

「メサイアのコクピットで五体満足な死体が残ることはほとんどない」
二宮は言った。
「挽肉にされるか、生きたまま火葬されるか……口さがないアメリ

カ人達が、メサイアのコクピットを“挽肉製造器（ハンバーグ・メーカー）”とか、“未亡人（ウイドウ）製造器（メーカー）”と呼ぶのは伊達ではない」

それを聞く候補生達は顔色一つ変えることはない。

全周約3メートルの円形状のコクピットでどうしてそんなことが起きる？

目の前の教官の言葉を、単なる脅しだと思っているからだ。

二宮は顔をしかめた。

彼女は決して嘘や脅しを言っているのではない。

そうやって死んだ仲間を、実際に見聞している。

つまり、事実を言っているのだ。

だが、その経験のない候補生達は、どれほど言っても、コクピットで騎士が挽肉になるなんて想像さえ出来ない。

「……まぁ、いい」

二宮は諦めている。

新米教官だった頃は、蕩々と言葉の意味を説教したものだが、すでに無駄だと悟っているのだ。

ただ、はったりだと思われるのだけは、面白くはない。

「今日、貴様等の乗るのは、単なるシミュレーターに過ぎない。何かの間違いで、本物に乗った時には、私が言っていることが正しかったと理解するだろう――多くは、死んだ後に」

二宮はそんなイヤミを言うだけに止めた。

「全く……お前達と来た日には……他の分隊は全部、実騎搭乗訓練まで行っているというのに、これからシミュレーター搭乗なんて、恥ずかしいと思え」

「はいっ！教官っ！」

「……返事だけは一人前なんだから」

二宮は教本を開いた。

「操縦方法は、座学で教えた通りだ。もっとも。座学ではご不満ら

しく、独特な睡眠学習で勉強していた者もかなりいたが」
二宮の前で整列する候補生達は直立不動の姿勢を崩すことなく、健気なまでに教官のイヤミに聞き流している。
「まぁ。どっちにしろ、我々教官は、教えることは教えたつもりだ」
二宮は、あえて教え子を突っぱねるような口調になった。
「限られた時間の中で、ただ聞く人形をやっても何の意味もないことは、これまでの訓練の中で骨身にしみているだろうし？これだって、単なるオモチャのつもりなら、待っているのは、貴様等の確実な死そのもの。それだって百もご承知だな？」
「はいっ！」
訓練生達の返答を聞いた二宮は、手元の資料をめくりながら言った。
「まず、本シミュレーターは、メサイアの動きを完全に再現するために、コクピット回りを構成するものだ。だが、単にコクピットの形だけを再現しても何の意味もない」
訓練生の何人かが、首を傾げた。
「早瀬。意味がわからないという顔をしているな」
「はぁ……」
早瀬さつきは首を傾げながら言った。
「シミュレーターって、コクピットを再現して、その操縦に慣れさせるための装置ではないのですか？」
「ふむ……本来なら腕立て２０というところだが、まぁ、いい」
青くなる早瀬は、小さく安堵のため息をついた。
「メサイアを操る以上、メサイアの高い機動にパイロットはついていかなければならない。しかも、かなり厳しい動きに、だ」
候補生達の顔は、一様に「わかっている」という顔だ。
「だからこそ、このシミュレーターは、メサイアの機動を完全に再現出来るように作られている。具体的には、各種Ｇ、振動、衝撃――これらによりメサイアが受けるダメージが、操縦システムを通

じてパイロットにダイレクトに来ることは、座学で説明済みだな？泉」
「はい」
「時には、下手をすれば廃人になる程度では済まない程のダメージを求める、擬似的な実戦を搭乗者に味わわせるための装置。メサイアの“負”の部分を前もって味わわせる。それがコイツだ。単に操縦を知るという、“正”の部分のみに目を向けて、デパートの屋上にあるオモチャと一緒に見るな」
「……」
候補生達から返答はない。
「よし。数の問題がある。ペアを組め」

早瀬さつきが搭乗することになったのは、シミュレーター2号機。ペアは祷子だ。
「じゃ、準備開始するよ？」
シミュレーターの前に立つ整備兵の一人が、手元の装置をいじり出す。
シミュレーターの前面部分が二つに割れ、中からシートがせり出してきた。
「あれ？」
それがさつきには疑問だった。
「コクピットって、上から入るんじゃなかった？」
「それは実騎」
整備兵は言った。
「実騎は、専属パイロットの身体的特徴にあわせたセッティングがされてるけどさ？不特定の騎士が乗るシミュレーターではそうはいかないだろ？その関係で、あえてシステムをコクピットから引き出して、騎士の体格に合わせてセッティングする。――ま、他の国じゃ、こういうタイプのコクピットの方が一般的だけどな」

「近衛のコクピットは、もう、その騎士専用にセッティングされてるの？」
「Ｌサイズの服しか着れないヤツに、Ｓサイズの服を着ろって命じているようなモンさ」
「ふぅん？よくわかんないけど」
まぁいいさ。ほら、さっさと“ブーツ”に脚入れて――――思ったより短けぇな……痛てぇっ！
「騎士の動作を最大限活かすために、騎士の身体情報やクセを元にグローブやブーツは絶妙なセッティングがなされる。言い換えれば、それほど厳しいセッティングがなされているから、そのメサイアを他の騎士が動かそうってしても、そうそう上手くいかないってことさ。ほれ、腕部セッティング完了――――腕振ってみな」
「へぇ？思ったよりずっと軽い」
さつきは自分の腕を覆うゴツイ操縦システムを軽く振ってみた。腕が包まれ、軽く引っ張られる感じはあるが、ほとんど重さを感じない。
まるで手袋付きのジャンパーに腕を突っ込んでいるような、そんな感じだ。
「綿みたい」
「だろ？」
そのさつきの答えが気に入ったのか、整備兵はニンマリと笑った。
「帝国のメサイアは世界で一番操縦に優れているんだ。ロシアのスターリンや、まして中華の“赤兎（せきと）”じゃ、こうはいかねぇ。あんなのは大リーグ養成ギプス並のシロモノだからな」
整備兵は胸を張っていった。
「これが帝国クオリティだ！」
「ふぅん？」
さつきは、少しだけ感心したように言った。
「じゃ、近衛のメサイアは、乗っ取られる心配もなければ、操縦系

も他の国に比べて格段に優れていると」
「開発費年間数千億オーバーはダテじゃねぇからな」
「……税金の無駄遣い」
「二宮教官に言ってやろうか？」
「……だ、黙っていてね？お願いだから」
「今日、暑いなぁ」
「……冷たいジュース、差し入れるから」
「ペット5本で」
「……わかったわよぉ」
「よし。商談成立――――で、グローブとブーツ装着したら、このブレストガードとヘルメットが下がる仕組みで……嬢ちゃん、胸までないのかよ――――グアッ！？ブ、ブーツで蹴るか！？

コクピット。
そう言われれば、
座席があって、
レバーがあって、
ペダルがあって、
計器類があって、
……そんな光景を想像するだろう。
メサイアのコクピットは違う。

座席はないに等しい。座席の代わりに、脊椎を固定するパーツがあるだけ。
そこを中心に、手を突っ込むパーツと、脚を突っ込む場所がある。

一般には、これを総じて“コントロールユニット”、もしくは単に“ユニット”とか“システム”とか呼ぶ。

ユニットを動かす騎士の四肢の動作を信号として読みとり、メサイアに伝達するセミ・トレーサー・ライド・システム（ＳＴＲシステム）によって、メサイアの動きとして反映させる仕組みだ。

前進後進は、これをつけたパイロットの脚を動かすことで行われるし、手や腕の動きは、上半身部分のシステムの検知結果がダイレクトに反映される。

「腰を固定された状態でジタバタやって、それで敵を倒せ――――要はそういうことさ」

システム各部をさつきの体に合わせてセッティングしながら、その整備兵は言った。

「最初は慣れないかもしれないけど、後は場数だよ――――胸、きつくないか？」

「大丈夫。ありがと」

年頃の女の子としては、男に体をベタベタされるのは嫌だが、しかたのないことだと、さつきは割り切りながら答えた。

「コントロールユニットのうち、俺達がグローブって呼ぶ腕部操縦システムや、ブーツって呼ぶ脚部操縦システムから体を離していれば、その間は騎士の動きはメサイアに反映されない。だから、起動シークエンスとか、そういったことは、システム装着とは別にやってくれよ？でないと、メサイアが一生懸命、空中を押すなんて無様なことやらかすことになるからな」

「ププッ……そんなバカいないでしょう？」

「それがいるんだよ……慣れないと。それと」

なぜか教官達の方をちらと見た整備兵がさつきに渡したのは、ビニール袋だ。

「何？」

「すぐにわかる」

整備兵は、意味ありげな顔で言った。

「頼むからこいつで済ませてくれよ？後始末、俺達なんで」

何でこんなものが必要なんだろう。

それはイヤでもわかった。

起動手順はクリア。

スイッチや計器類が書かれた紙を壁に貼り付け、二宮の指導の元、指が痛くなるほど押し続けた賜(たまもの)だ。

後はシステムを動かすだけ。

恐る恐る脚を動かし、メサイアの動作を表示するモーションモニターの端に表示されるメサイア稼動情報表示を見る。

一歩踏み出していた。

また一歩。

また一歩。

歩いている。

世界最強の兵器が自分の意のままに動くことは、さつきにとって新鮮な感動だ。

「すご……」

モニターが映し出すのは、疑似環境。

手足が動く感覚が、皮膚越しに伝わってくる。

その感覚は、スノーボードを趣味とするさつきから言わせると、あの分厚い防寒服であるスノボウェアを着ているのとよく似ている。

それでも、メサイアが手を動かし、歩くというのがどういうことか、さつきにきちんと教えてくれる。

わずか1分足らずで、さつきはメサイアの感覚に慣れてしまった。

もっと揺れるかと覚悟していたが、魔法により完全に近い慣性制御が施されたコクピットは、システムが微弱な揺れを情報として伝えてくる程度で、この程度の動作では全く揺れないに等しいと、冷

静に判断する余裕さえあった。
掌を見ようと右手を動かすと、モニターの向こうでメサイアの手が動き、首を動かせばメサイアの視界がそちらの方向へ動く。
「こういうものなんだ……」

『早瀬候補生』
通信機に教官の声が入る。
「はい」
『歩行訓練はクリアした。これからは戦闘機動に移ってもらう』
「戦闘機動？ま、待ってください！私、そんなの！」
『すべてオートで行われる。その際のシステムの動きを、今のウチに味わっておけ――――やりたきゃマニュアルでもいいぞ？』

そんな無茶な！
私はまだ歩ける程度だよ！

そんなさつきのもっともらしい抗議は、最後には言葉にすらならなかった。

「大丈夫ですか？」
シミュレーターから降ろされ、床にノびたさつきの顔を心配そうにのぞき込むのは、ペアを組んだ祷子だ。
同性として羨ましいを通り越している美貌の持ち主である祷子の顔を間近で見られるのは嬉しい限りだが、時と場合にもよる。
「……死んだと思った」
そういうのが精一杯だ。
胃の中のものは全て戻してしまった。
グローブに腕をとられてビニール袋を開く暇すらなかった。
今朝に限って、教官達がやたらと「メシちゃんと食え！」と言って回ってきた理由がわかった。

最後には胃液すら出なかったが、あれは辛かった。
三半規管がどうにかなったみたいだ。
目の前がぐらぐら揺れている。
この気持ち悪さは説明が出来ない。
「そんなに揺れるんですか？」
「最初がウソみたい……戦闘機動に切り替わった途端、振動とか、とにかく全部がすさまじくシビアになって……」
「はぁ」
祷子が辺りを見回した視線の先。
先程、先発でシミュレーターに乗って、今、立っているのは美奈代だけだ。
足下ではバケツを抱えた都築がノビている。
「泉さん以外、みんなぐったりされています」
「あいつ、バケモノよ」
「敵2撃破ですよ？スゴイです」
「私の気絶回数は……そんなもんじゃない」
「ふふっ……」
笑う祷子に、さつきは気づいた。
「美奈代、戦ったの？」
「というか……他人の楯なんてごめんだって、マニュアル操縦を」
「突発的に出来ることなの？戦闘機動よ？」
「普通の人にケンカが出来るかどうか――その問いと同じだって二宮教官は言ってました」
祷子はなぜかペロリと舌を出した。
「同じ事、教官に聞いて怒られちゃいました。座学で何を学んでいた！って」
「ふふっ……声マネ似てない」
「あら。ヒドイ」
笑おうとして吐き気に襲われたさつきは、口元を抑えながら言った。

「私も戦えば良かった……そう言いたいけど、こんなの、人間の乗れる代物じゃない……」
「スピーカーから、皆さんの悲鳴が聞こえてましたけど……」
「あんたも乗ってみればわかる」

そういうものか。
祷子は、かなり待たされてシミュレーターに乗った。
先発の候補生達がコクピット内部に盛大に吐きまくった後始末のせいだ。
「ボンクラちゃん。大丈夫かい？」
搭乗するのが、候補生であることそのものが何かの冗談とさえ言われる祷子だ。
さすがに整備兵達も心配なのか、セッティング中に何度もそう訊ねてくる。
「はい」
消臭剤や消毒用のアルコールのにおいがツンと鼻を突く中、祷子は、何も考えていないとしか言い様のない微笑みで答えた。
「ご飯、ちゃんと食べましたし」
「そ、そうかい」
その返事が出る時点でもうアウトだ。
整備兵は、そんな表情を見せた。
ちらりと他のシミュレーターを見ながら、整備兵は言った。
「あーあ。神城の嬢ちゃん達、泣いてるぜ？」
「まぁ。大変」
「すぐにボンクラちゃんも大変になるんだからよ……よしっ。出来た！」

問題は、むしろ外で起きた。

それは、祷子がシミュレーターを起動し終えた瞬間から始まった。

『風間候補生、待て』

モニターにシミュレーション中断を告げる表示が出る。

「え？」

祷子はきょとん。として動きを止めた。

システムはオールグリーン。

警告表示は何一つ点灯していない。

『システムエラーが発生した可能性がある。システムを再起動する。しばらく待て』

1時間後。

「どういうことです？」

シミュレーターコントロールルームで二宮は2号機担当の技官にくってかかった。

祷子の乗るシミュレーターの前では、美奈代達が何事か話しながら様子をうかがっている。

「何故、風間候補生だけ、起動中断、再開を？」

それがわからない。

教官として見る限り、祷子は問題なくシミュレーターを起動させている。

そのまま、次の過程に進めるのに。

「間違いないな？」

他の技官と話し合っていた技官は、ようやく二宮に気づいたという顔で言った。

「これを、見て下さいよ」

技官が指さすのは、数字の羅列。

それは、起動開始から完了までの時間だ。

「？」

「起動完了までの時間が早すぎるんです。それに、メサイアが安定

していません」
「起動は問題ないじゃないてずか。安定は……知りませんが」
「問題なのです」
技官は呆れた。という顔で言った。
「こんなスピードでこなせるのは、高レベルの熟練騎士だけです」
「それを風間がやっている？」
「だから確認していたのですよ」
「私がおかしいと思うのは、あなたの方です」
二宮は睨み付けるように技官を見た。
背の高い、いかにも理系という、どこか人間らしくない冷たい顔立ち。
その皮膚の下で流れているのがどんな化学薬品なのか知りたくもない。
全てが気に入らなかった。
「今回は謎が多すぎます。第一、あなた達開発局βチームが訓練の監督を行うなんて」
「お答えできません」
ため息混じり。見下げた口調と態度で技官は答えた、二宮の神経をブチ切れる一歩手前に追いやった。
「すべては機密事項。また、こちらはあなた方の都合に合わせる必要はないので」
「実戦経験者にケンカ売ってます？」
「どうしてそういうとらえ方しかできないんですかねぇ」
二宮に拳をめり込まされる一歩手前で技官は言った。
「教官にこんな事言いたくないんですけどね？風間候補生は負荷をかけています」
「負荷？」
「ええ。シミュレーターにとって、風間候補生は、自らを操る“パートナー”ではありません。いいですか？メサイアと騎士、そしてＭＣは、共に戦う“パートナー”であることが求められるのです。

三者のバランスが崩れたメサイアは戦力としての存在価値を激減させる。ご存じでしょう」

「言葉が不明瞭に過ぎます。独りよがりの会話は止めてください」

「……あなたの方がよほどけんか腰だ」

「どうも。それで？」

「シミュレーターは、風間候補生を恐れています。パートナーではなく、自分を酷使する支配者として」

「？」

「ごく希な現象ではありますけどね。自分では耐えられないほどの動きを求める騎士を、メサイアは恐れます。“他を当たってくれ”とでもいいましょうか？」

「……あれは机上の空論であり、現実には起きるはずがないと」

「確率は何億分の一以下です。確かに。しかし、この起動の素早さは、メサイアがあの娘に怯え、機嫌を損ねたくないと考えている証拠。それだけに興味があるんですよ。あの娘には」

技官はそう言ってモニターの一角を突いた。

表示されているのは、祷子のパーソナルデータ。

メサイアの操縦適正能力を示すＳＭＤ。

レベル一つの差で戦闘能力差はケタ違いに開く。

一般的な最高レベルであるレベルＡと、最低のＤ同士で戦おうとしても、戦うことすら出来ないほどだ。

レベルＦＬ。

現在、認定されている最高レベルの上から2番目というハイスペック。

認定されている女性騎士は人類でも5人といない。

近衛どころか、全人類規模で見た方が正しいほど、貴重なレベルだ。

近衛騎士の平均レベルがＡＡ＋。

それで世界最高レベルどころか、異常とさえ言われる。
世界最大の米軍ですら、平均レベルはＢＢＢ。もっと世界を広く見れば、ＢＢが精一杯。
そういうものだ。
「この娘はそれだけじゃないんです」
「はっ？」
「いずれ、開発局でいただく人材です。大切に扱ってくださいね？くだらないシゴキで傷モノにされては困ります」
技官は肩をすくめた。
「開発局勤務だって、いろいろと制約というか、圧力かけられてるんですから」
「……わかりました」
二宮は言った。
「しかし、次のカリキュラムにも影響します。データ分析で対処して下さい」
「……了解。風間候補生、待たせて済まない。次のプロセスへ移行する」
二宮は、メサイアの情報に目をやりながら、祷子の操縦を見守った。

スゴイ。

それが祷子の感想だ。
メサイアの四肢が、いや、メサイアそのものが、自分の体になったような不思議な錯覚すら覚える。
だから、祷子は不思議だった。
皆がメサイアに乗って気分を悪くするのが理解できない。
自分の体を動かして気分が悪くなるはずはないのに――――。

ただ、そんな疑問も快適さすら、戦闘機動に移るまでのこと。

「――――っ！！」

急激なGに振り回されながら、祷子は奇妙な違和感を感じていた。

戦闘。

祷子にもそれはわかる。

わからないのは、

戦闘機動に移った途端、先程のメサイアとの一体感が全くなくなったこと。

全てが強い違和感となって祷子を襲う。

何故？

何が？

どうして違ってきた？

それに、この違和感は？

違和感？

違う。

これは不快感？

いや――――不満そのものだ。

揺れるモニターに映し出されるのは、敵。
ドイツ帝国の主力メサイア“ノイシア”。
クリーム色の重厚な装甲に身を包み、シールドとメイスを装備している、世界的に見ても“有力”なメサイアだ。
日本も立憲君主国であることから、同帝国とは友好関係にあるが、やはり仮想敵となることは避けられないようだ。

敵は3騎。
戦況モニターに映し出される状況は、お世辞にも芳しいものではない。
祷子の騎は、その動きの稚拙さもあって、三角陣形のど真ん中に包囲されている。

前方にノイシアA。
左後ろにノイシアB。
右後ろにノイシアC。
それが、戦況モニター上で割り当てられた敵の名。
敵の戦況モニターに自分の騎が何と映し出されるのか、祷子は知らない。

ドンッ！
モニターの中で、土煙と振動をあげ、ノイシアが突撃してきた。
迎え撃とうとした祷子だが――――。
「えっ？何で？」
思わずそう叫ぶ。
何のことはない。
騎体が、敵の攻撃を後退して避けたのだ。
「何で下がるの？」

あそこで下がっちゃダメ。
褥子の心のどこかで、何かがそう叫ぶ。
あそこで下がったら！！

褥子の目は、戦況モニターに移る。
彼我の配置が映し出されるモニターには、自騎と目の前の敵騎、
そして――――。

背後には分散して伏せる敵数騎。

下がれば囲まれる。
囲まれれば殺される！

わかっているはずだ。
それなのに、何故、下がった？
「きゃあっ！」
理由を知る術もないコクピットを激震が貫いた。
「ひ、被害は！？」
騎体の状況を示すステイタスモニターは、背部に中程度の損傷が発生したことを告げている。
「ちっ――――っ！？」
メサイアを動かそうとした褥子だったが、それが無理な注文であることを、すぐに思い知らされた。
騎体が動かない。
「操縦が！？」
力任せにシステムを動かそうとしても全く反応しない。
何とかしなくては。
そう思い、スクリーンモニターを見た次の瞬間、

ガンッ！

頭が割れたかと思った。
ヘルメット越しに伝わる激震。
それは頭部への一撃があった証拠。
敵の攻撃は、それだけでは終わらない。
メイスが振り下ろされるたびに、被害箇所に痛みが走る。
「――――っ！」
目をつむり、歯を食いしばるがそれでも痛みはやってくる。
メサイアはついに膝をついた。
動きはしない。
ただただこのシミュレーションが終わるのを待つ。
それが自分に出来るただ一つのこと。
ただ一つの？
……。
違う。
祷子は思った。
私はパイロットだ。
パイロットにしか出来ないことがある。
私は、それをしなければならない！
祷子は脇にどけていたコンソールを引き出し、騎体設定の操縦権限を外部・コントロールからコクピット・コントロールに設定、コントロールシステムを握りしめた。
「！」
ガギィンッ！
次の瞬間、シールドを装備した左腕が頭部をガード。メイスの一撃を凌いだ。
「う、動く！」
祷子は震える声で言った。
「いけるっ！」
ノイシアが狼狽した様子に見えたのは、祷子の錯覚にすぎない。

反撃に移る敵への対処を担当するコンピューターが次の処理をノイシアAに告げるために生じたわずかなタイムラグなのだ。
時間にしてわずか数秒足らずこと。
だが、祷子にはそれで十分だった。
ガンッ！
左腕の肘を引き、突き技の要領でシールドのエッジをノイシアAの股関節に突き立てた。
装甲スカートの隙間をねらい澄ましたような一撃を受けたノイシアAは脚部を切断され、バランスを失った。祷子の騎は、崩れ落ちてきたノイシアAを肩に背負う形になる。
「一騎！」
祷子はノイシアAをプロレス技の要領でノイシアBに投げつけ、同時に立ち上がった。
「バランサー、生きてるけど！」
思うように踏ん張りの効かない足回りをねじ伏せながら、祷子はメサイアを旋回させ、腰の刀を抜き放ち様、ノイシアCの腰部を切断した。
警告音が鳴り響くコクピット。
エラー表示で真っ赤になったモニター越しに、ノイシアA、Bが崩れ落ちるのが映し出される。
「いけっ！」
刀の慣性と騎体の関節の負荷をねじ伏せながら、祷子は刀を無理矢理メサイアの頭上にまで移動させ、一気に刀でノイシア2騎を串刺しにすべく、コントローラーを操作して……。

「騎体は……まぁ、仕方ない」
二宮は祷子に言った。
「騎士の機動にメサイアがついていかない故に騎体が破損するケースは、ごくわずかだが、実例として存在はする。また、今回の訓練

にしても、元々は、メサイア戦の恐ろしさを、まず知ってもらうことが目的だ。目的は達成されたものと判断される」
「……はい」
「操縦権を自らのモノとして、敵を撃破した判断についても、決して非難されるものではない」
「……」
「あの状況でメサイア全騎を倒したことについては、文句はないということだ」
「……ありがとうございます」
「問題は、だ」
二宮の鋭い眼光を受け、祷子はすくみ上がった。
「騎の負担を考えない機動を行ったことだ」
「す……すみません」
「騎が貴様の操縦についていけず、エラーを宣言しているのを無視、あまつさえ、関節はガタガタにして……3騎撃破の代償として騎体は行動不能……自爆させたというのは、評価どころか、大減点対象だ」
祷子に返す言葉はなかった。
ノイシアCを撃破した次の瞬間。
右膝関節の構造パーツが破断、右脚部は膝関節から外れた。
祷子の騎はノイシア2騎を覆い被さるように転倒。
串刺しには成功したものの、祷子の騎そのものも行動不能。
システムは、祷子に脱出と自爆を要求してきた。
自爆システムを起動させた時の、自分の不甲斐なさと悔しさを思い出し、祷子は泣き出しそうになった。
「敵を倒す。それは評価出来る。だが、ああも騎体を安く見てもらっては困る」
「……」
「騎体を安く見る。それは、自分の命を安く見ているのと同じだ」
二宮はコーヒーポットに手を伸ばしながら言った。

「騎士の価値は、生きていればこそのもの。死んだ騎士に価値はない。なにより」
「はい」
「私は、貴様等に死ぬ方法を教えているわけではない」
そう言う二宮の目は、どこか慈愛すら感じさせる優しさを持っていた。
「近衛の騎士として、どんな戦いでも生きて功を成すための術を教えているつもりだ」
「……教官」
「敵を倒すことにこだわるな。生きる術と敵を倒す術はいつもイコールではつながらない。教えたはずだぞ？常に戦況を冷静に見定め、生き残ることを考えろと」
じっ。と祷子を見た二宮はため息混じりに言った。
「貴様や泉に言っても無駄か」
「？あの……私は確かに居眠りとか、いろいろありますけど……？」

「……泉は」
二宮はコーヒーを注ぐ手に注意しながら言った。
「単なる試験秀才……試験の時だけ成績はいいが、実践で活かせるタイプではない」
「えっ？」
「学校の成績はいいが、社会に出てその経験や知識が活かせない、そんなタイプだ。見ていてわかる。あいつは軍人、いや、社会人になれば絶対、苦労するタイプだ。私なら、さっさと結婚して専業主婦になることを勧める」
「……」
「第一、泉は知られていないが、お前以上の特技がある」
「はい？」
「目を開けたまま眠れるんだ。自習で知識は得ているようだが、授業ではよく寝ているぞ？」

「う、ウソ……ですよね」
「教官を舐めるな。そして、お前並に頭に血が上ると視野が狭くなる。……先程の説教は、すでに泉に話したことだし？ま、お前とは別な意味で劣等生といえば劣等生だ。――飲むか？」
コーヒーの入った紙コップを袴子に渡しながら、
「そういえば、何故居眠りが多いか聞いていなかったな」
「……怒られます」
「聞かねば怒りようがない」
「……消灯の後、ヴァイオリンの練習を」
「ヴァイオリン？」
「近衛に入ったら、音楽大学に通わせてくれる。軍楽隊の指導もつける。そう言われていたんですが」
「無理だな……なんだ？そんなにヴァイオリンってのは難しいのか？」
「感覚が鈍るんです。しばらく使っていないと」
「……そうか」
二宮はふと思いついたように言った。
「一曲、弾いてくれないか？」

●富士学校編　第四話

ここで富士学校のシステムを補足しておく。

富士学校への採用は、恐ろしく不定期であり、期ごとの採用数は、かなりばらつく。

美奈代達４５期は、たった１０名。

その前である４４期は実に５０名だ。

しかも、この2期は同じ日に富士学校に入校している。

４４期は、従来の採用方法――つまり、受験を通して採用された。

対する４５期は全員が学校側からの要請により採用されている、いわば特待生。

美奈代達４５期生からすれば異論はあるが、４４期生から見た2期の違いの根本はここにある。

富士学校の受験倍率は、実は帝国の最高学府たる帝国大学より高い。

帝国大学が、一般人（希望すれば騎士も、だが）の入れる最高の学府であるのに対して、富士学校は騎士の入れる最高の学府。

そこに入るには並大抵の努力では意味を為さない。

頭脳、体力、共に受験したければ死に物狂いで培うべき代物であり、４４期生は受験戦争を乗り切るために多くの苦難を乗り越えてきたという自負と、それを成し遂げた己に対する自身がある。

一方の４５期生は、それがない。

入りたくないのに向こうから来いと言われてしかたなく来た。

口にこそ出さないが、ほとんどの生徒はそう思っている。
４４期生は本気でそう思っている。
でなければ、あのカリキュラム進行の遅さが説明できない。
連中にやる気がないから遅いんだ。
そんなヤツとどうして共に学ぶ必要がある。
俺達は自分から名乗り出なければ採用してもらえなかったのに、
あんな奴らには迎えが来たなんて理不尽だ。
それが、４４期生の声なき怒りであり、抗議となっている。

ところが、４５期にはそれがわからない。
４４期生に一番聞いてみたいことと言われれば、４５期生達はこう答えるだろう。
「こんな所になんで志願で入ったの?」と、

そこにあるのは相互の不理解であり、互いに対する不条理さだ。
また、学校が生徒を分隊に区分けする分隊制度をとるにあたっても、この４４期生の不満は高い。
４４期を6分隊に分けるのはいい。
４４期生達も文句はない。
だが、便宜上、４５期を7番目の分隊として扱うことに、４４期生は納得が出来ない。

その互いに対する認識のずれが、４４期生をして４５期生への言いがかりともいえる差別へとつながっている。

美奈代達は、そんな中にいる。

４４期生にとって幸い、４５期生にとって不幸なのは、カリキュラムはすべて別ということだ。
その進行は全て４４期の方が早い。

４４期生にとってはそれで当然なのだが、彼等がメサイアの実騎登場に慣れ始めた頃、４５期の美奈代達は、メサイアのシミュレーターにようやく慣れ始めたばかりだ。
そんな時期、富士学校の生徒達の間で話題になるのは、たった一つだ。

模擬戦。

正確には“分隊対抗模擬戦闘訓練”。
分隊毎にメサイアで繰り広げる模擬戦闘のこと。
勝ち抜き式のトーナメント方式で最後まで勝ち残った分隊が勝利となる。
賞品は望みのまま――――そう言いたいが、実際の所、何か出たと聞いた覚えがない。
教官からほめ言葉くらいはもらえるだろう、せいぜい内申がよくなる程度ではないか。
美奈代達の認識はその程度だったが……。

「賞品はアフリカ送りだ」
二宮の一言に美奈代達は唖然となった。
「……は？」
「質問」
宗像が手を挙げた。
「最前線送りは死刑判決に近い気がします」
宗像は、あわてて付け加えた。
「一般兵の感覚では」
「……命拾いしたな。騎士としてそのセリフを口にしたら、タダでは済まさんが」

二宮は、なぜか横で頷いていた美奈代をにらみつけると、続けた。
「派遣期間は2ヶ月を予定している。
派遣から期間すればそのまま卒業するタイミングだ。
派遣期間はたった2ヶ月にもかかわらず、1年間の従軍期間と同じ扱いを受ける。
これにより、卒業すれば、普通、准尉に任官される所が、少尉任官となる。階級一つ違うと、軍隊では待遇がかなり違うぞ?」
二宮は楽しげに言った。
「これを目指してがんばれ」
44期生ならある程度、言われた通りに頑張るだろう。
准尉。
そう呼ばれるより、
少尉。
そう、はっきり呼ばれたい。
ところが、45期生の反応は冷ややかだった。
「一年間分の従軍経歴と、少尉の階級章が欲しいか?ということですか?」
この返事だ。
「……そうだ」
「別に興味ありません」
美奈代はきっぱりと言った。
「中尉までなら、まじめに任務に励めば、いつかはもらえるとおっしゃったのは教官です」
「……っ」
「だいたい」
宗像が言った。
「そんな栄誉なんて、あのエロ、じゃない。44期の第一分隊あたりのモノでしょう?我々のようなドンガメ分隊には何の意味もありません」
「そ……それは」

「？」
「教官？」
祷子が訊ねた。
「何か、それを目指さないと、私達にとって都合の悪いことがあるんですか？」
「いや……」
二宮は、気まずそうな顔で首を左右にふると、とって付けたような笑顔で、明るい声を上げた。
「そ、そうだ！派遣前には一週間の特別休暇があるぞ！？」
「……別にどうでもいいです」
「……あっ」
二宮は今度こそ固まった。
「他分隊に勝てると思っていませんから」と美晴。
「そうよね」さつきは頷いた。
「まぁ、教官。負けても殺されるわけじゃないですし、アフリカに送られなければどうなるんです？」
「いや……」
二宮はやや落胆した様子で手元の書類をめくった。
「通常授業だが……」
「私、そっちでいいです」
さつきは言った。
「死にたくないですし」
「……」

「ねぇ」
授業の後、食堂へ向かう途中、美奈代が言った。
「二宮教官の様子がヘンだとは思わなかった？」
「うん」
さつきが頷いた。

「退室するとき、黒雲背負っていたし、なんだか、アフリカ送りに妙にこだわっているっていうか……どうしたんだろ」
「私もそう思いましたけど」美晴が首を傾げた。
「何か言いづらいことを言わなきゃいけない。でも、それをどうしても言えなかった……そんな感じでしたね……そういえば」
「ん？」
「宗像さんは？」
「さっき、第一分隊の染谷候補生に呼び出されました」
「宗像が？」
「はい」
祷子は頷いた。
「なんだか、染谷候補生はあわてた様子でしたが」
「染谷と宗像が？」
さつきが顔をしかめた。
「まさか。あの二人が？」
「……ん？」
二宮が何を考えているかさえ忘れて、昼飯のメニューが何かだけを考えていた美奈代は、なぜか、さつき達の視線が自分に注がれていることに気づいた。
「どうした？」
「……いえ」
美晴が気まずそうに視線をそらせた。
「ほら、染谷ってさ」
さつきがそういいかけた時だ。
「待たせたな」
宗像が小走りに、美奈代達に合流した。
普段、ほとんど感情を表に出すことのない宗像にして珍しいことに、その顔は怒りにゆがんでいた。
「どうした？」
「食後にでも話す」

宗像はそっけなく答えた。
「口にするだけでメシがまずくなるからな。メシが終わったら」
宗像は指の関節をならした。
「二宮教官を締め上げに行くぞ」
「？」

「どういうことですかっ！」
職員に美奈代の怒鳴り声が響き渡った。
候補生達が二宮を包囲している。
その顔はどれもかなり怒っていた。
「模擬戦は大目に見ますっ！」
「いや……あの」
二宮は教え子達の気迫に負けた様子で、つくり笑顔を浮かべている。
「しかしっ！我々が最下位になったら、優勝した分隊相手にコスプレ接待って何ですか！？」
「あ……あれはね？」
「我々が賞品になってどうするんですっ！」

美奈代達が真実を知ったのは、食堂に入ってからだ。
普通の候補生にとって、模擬戦は将来を見据えれば最も最初に手に入れることの出来るエリートコースの第一歩。
しかも、メサイアで思い切り戦闘が出来る初めてのチャンスでもある。
ちょうど、順調に訓練を重ねてきた候補生達が、騎体保護のためとはいえ、制約ばかりの“子供（ガキ）のお遊戯”じみた訓練に飽き飽きしだす頃だということも影響している。

――派手に暴れてエリートコースの第一歩を踏み出そう。

そう、考える方が候補生としては普通なのだ。

――――テキトーにやって、楽したいです。

そんな風に考える美奈代達の方が、どうかしているのだ。

無論、美奈代達がこんな風に考えるには理由がある。

その最大の原因は、この時点で美奈代達が、実騎搭乗経験を持っていないことだ。

問題は、教官たる二宮が徹底してカリキュラムを遅らせているせい。

いつまでたってもシミュレーターばかりの毎日。

“カメが甲羅に籠もっている”と他分隊にバカにされても反論さえ出来ない。

実騎に乗っても勝てる自信はあるが、実騎搭乗経験者の前で口にする度胸は第七分隊の誰にもない。

卒業までに必要な実騎搭乗経験時間は１００時間近く。

どう考えても毎日搭乗が必要。

訓練騎を遣り繰りするにも限界があることは、美奈代達の目にも明らかだった。

つまり、美奈代達は、この時点で卒業がかなり危ないのだ。

これ以上、どんなに頑張っても、卒業出来るかもわからない。

それなのに、エリートコースの第一歩目指して何かしろなんて言われても、ピンとこない。

むしろバカにされているんじゃないのか？

そうでなければふざけている。

それが、美奈代達の本音。

美奈代達なりの不満だ。

――模擬戦で勝てば卒業できる。

そう言われたとしても、

――実騎搭乗訓練を受けてない私達が勝てると言うのですか？

美奈代達はそう反論するだろう。

――私達で勝てるというなら、何のための実騎搭乗訓練なのですか？

そう、言い返すだろう。

はっきり言う。

美奈代達は、この時点で完全に近衛採用を諦めていた。

なんのために人を呼びつけたのか。

単なる噛ませ犬か。

そんな不満を、皆が心のどこかで抱いていた。

さっさと辞めてやる。

皆が皆、近衛をお払い箱にされた後のことを考え、せめて問題を起こさないようにと訓練しているだけなのだ。

その美奈代達が、食堂に入った時、模擬戦を心待ちにする候補生達が自主的に貼り付けた張り紙があちこちに貼り付けられているのが目に入った。

『必勝！第二分隊』
『目指せＶ２！第三分隊』

高校時代の球技大会を思い出す張り紙に微笑ましささえ覚えた美奈代達だったが、食堂に居合わせた他分隊の候補生達の視線が、普段とは違うことに気づいた。
普段の見下げたような視線ではない。
ちがう。
普段の視線の中に見え隠れしていた“モノ”があからさまになっていた。
それは、決して普通の女として受けたい種類の視線ではない。
「？」
思わず顔を見合った美奈代達は、それでも配食を待つ列の最後部に並んだ。
そして一枚の張り紙の前に立った。

「これは一体、何ですか！？」
美奈代が二宮に突きつけたのは、その張り紙だ。
「い……いや、だから」
女子生徒の怒りは、二宮は後ずさった程の迫力を持つ。
少し離れた所では、都築がニヤニヤと嫌な笑みを浮かべ、困惑気味の山崎と一緒に美奈代達を見ている。
「みんなの視線が妙にエッチになったからおかしいとは思ったんです！」
美晴は顔を真っ赤にして声を荒げた。
「優勝賞品の副賞は第七分隊のコスプレ接待って何ですか！」
「私達、未成年なんですけど」と祷子。
「こういうのはそういう職業の方に」
「風間のコスプレ接待は私だけでいいんです」と宗像。

「教官」
美奈代は張り紙を畳んで胸ポケットに入れると、言った。
「授業中に言いづらかったこととってこれですか？」
「えっ？」
「私、これはいいと思っているんです」
「なっ！？」
美奈代の爆弾発言に、分隊の全員が固まった。
「み、美奈代？あ、あんた何考えて」
「軍隊内で階級等を口実に性的関係を強要、年数名の女性兵が精神病を理由に退官、もしくは自殺に追い込まれていたことが発覚。今、陸海軍がマスコミの集中砲火を受けていることはご存じでしょう？その中で新たに、しかも、候補生同士に性的関係を命じる。その証拠ともとれる」
すうっ。
美奈代は息を吸い込んだ。
「この張り紙をマスコミに送りつけるだけで、反近衛系の朝刊の一面はさぞ楽しいことになるかと！」
二宮の顔色が青くなった。
「海軍は大臣更迭まで行きました。近衛ではどなたが更迭されるんでしょうか！？教官方も、ご家族共々、マスコミの集中砲火にさらされ大変でしょうね！」
「――――っ！」
職員室で事態を見守っていた他の教官達が目を見開いた。
何が起きているかわからないが、とばっちりが自分に来るだろうことは確かだと、直感的に理解したのだ。
皆が二宮の答えに注目する中、美奈代はさらに追い打ちをかけた。
「コピーはすでに美晴の実家に送りつけてあります！」
「なっ！」
「海軍少将、海軍第3航空群司令殿が、この張り紙から、御令嬢の貞操をどのように想像されるかは知りませんが！」

「きさっ！」
「一般人が見て問題があるシロモノを、神聖なる学舎に貼り付ける方が問題ですっ！」
「うっ！」
つかみかかった二宮の手が止まった。
「――答えてください。教官」
美奈代は座った目で、有無を言わさずに言った。
「何でこんなこと言っちゃったんですか」
「何でわかったの！？」
思わず叫んだ二宮は、口から出た言葉の意味に気づき、あわてて口を閉じたが、後の祭りだった。
「やっぱりっ！」
美奈代が悲鳴に似た声を上げた。
「何をどうしたら、教え子の貞操危うくするようなこと約束するんですか！」
「いや……だから」
「神城達にそんなことさせたら、児童福祉法違反で通報モノですよ！？」
「どういう意味だよ！美奈代っち！」

珍しい光景ではあった。
普段なら、質問に答えられない美奈代が二宮にとっちめられるのが、今は逆だ。

「模擬戦を巡って池田大尉と口論になったんだ」
横でやりとりを聞いていた長野大尉が、しかたない。という顔で口を開いた。
「口論の内容は一々、知る必要はない。知った所で意味はないからな」
「……」

「……」
「ただ、これだけははっきりしている。おまえ達はケンカを売られたんだ」
「ケンカ？」
「そうだ。女共に何が出来るかってな」
「最低っ！」吐き捨てるように言ったのはさつきだ。
「性別理由にするなんて、それでも男！？」
「少なくとも、そんなこと言うのは池田の野郎だけだ」
顔を真っ赤にして怒るさつきを前に、長野は苦笑しながら肩をすくめた。
まるでわがままを通そうとする娘を諭すような穏やかな口調だ。
「お前達がいるだけど、エリートたる息子のメンツを潰される。そう勝手に思いこんでいるバカ親がいるんだよ」
「バカ親？」
「ヤツにとって、第一分隊を為す息子達は、世界で一番立派な自慢の種だ。だから、こういう物言いは嫌いだが……」
長野はちらりと美奈代達を見た。
「その息子達が、お前ら女中心の部隊と一緒に、学校にいる事自体が、ヤツには気に入らないんだ」
「そんな理不尽な」
「だからバカだと言ったんだ。その親バカが……二宮中佐、失礼しますよ？別分隊の親バカにケンカをふっかけた。
いつもシゴかれているお前らにとって信じられないだろうが、二宮中佐にとって、お前達は可愛い娘達なんだ。カリキュラムが厳しい厳しい言っているが、可愛い娘達に死なれたくなかったら、今でも足りない位なんだぞ？」
「う……」
「うそじゃない」長野はさつきの言葉を封じた。
「実戦経験者から言わせてもらうと、今の近衛のカリキュラムは薄すぎる。俺の目からすれば、池田ご自慢の第一分隊でさえ、今の程

度なら、初陣の生還率は2割がいいところ。他分隊なら1割は無理だろう」

「……」

「お前達」

長野は誰に対してではなく、訊ねた。

「再来年から志願制が廃止になるのは知っているか？」

「……え？」

「施設老朽化と、演習地の問題から、来年には富士学校は北海道へ機能を移転する。それを期に、近衛は志願制を廃止する。それを知っているかと聞いた」

「い……いえ？」

美奈代は周りを見たが、全員が首を横に振った。

「志願兵は無駄死にが多すぎる」

長野は言った。

「俺もそうだが、お前達のようなスカウト組と、４４期のような志願兵組では、戦死確率が一桁違ってしまう。志願制が、再来年からは廃止になる理由は、そこにある。志願で入るのはいいが、安易に騎体を棺桶にされてはかなわない。なら、最初から騎士を学校が選ぶべきだという意見が強い」

「……」

「俺の頃は選抜組と呼ばれていたが、お前達も本当ならそう呼ぶべきだったのかもしれんな」

「わかりません」

そう言ったのは山崎だ。

「自分は、４４期生の方が実力があるとばかり思っていましたが」

「それは生徒の視点でしかない。俺達実戦経験者になれば、全く別な意見を持つことになる」

「別な意見？」

「初陣に４４期生全員並べてよーいドンで敵に突っ込ませたとしよう。余程運がよければの条件付きだが、全分隊のうち、生き残るの

は第一分隊の染谷と東……他には思いつかん」
「……」
「あっという間にメサイアの残骸の山が出来る。どいつもこいつも、いっぱしのツラばかりで、中身はカラだ。実騎もシミュレーターも未熟すぎる」
「……」
美奈代達は、長野の厳しい評価に言葉を失っていた。
第一分隊は自分たちの足下にも及ばない分隊内の猛者として選抜された身のはずだ。
それが、実戦経験者の身からすれば未熟以下だとするなら、私達はどうなるんだ？
「だからこそ、二宮中佐はお前達をカリキュラムの遅れを承知の上で育てている。他の教官達からなんと言われようと、今の早熟育成では、実戦に出ればお前らは確実に死ぬ。死なさないためには、じっくりと時間をかけた熟成が必要だ。
池田はその辺の遅れを口実に、お前らをボロクソにけなした。二宮中佐まで含めた意味で。
しかも、その根拠は、全員が女だからときやがった。
公にすれば女性騎士の全員を敵に回せる程、厳しいシロモノだ。
そんな池田に、二宮中佐は冷静に対処した。
“模擬戦で相まみえるなら、私の教え子が、正々堂々、お相手させていただきます”とな」
「……それで」
美奈代は、二宮と長野がどれほど自分たちを心配してくれているのかを知って、不思議なうれしさを感じながら訊ねた。
「どうしてこんな騒ぎに？」
「そいつぁ……」
ポリポリと、長野は短く刈った頭を掻いた。
「その後の売り言葉に買い言葉だ。第一分隊に負けたらそういうことになる」

「……いいでしょう」
突然、そう言い出したのは宗像だ。
「む、むなかたっ！？」
「つまり、池田教官との取り決めは、第一分隊との間でのみ有効。ということでしょう？」
「……まぁ、そう言い逃れることは出来るな」
「ならば、我々は第一分隊と当たらなければいいだけ。それに、我々は性的な接待をするわけではない……」
宗像は小さく小首を傾げ、“違いますか？”と訊ねた。
だが――二宮と長野は共に視線をそらせた。
「それが……だな」
「ちょっと待て宗像！」
驚いた美奈代が思わず宗像の両肩をつかんだ。
「お、お前！？」
「安心しろ。泉」
本人としては本気でなだめていると主張するだろうが、妙に淫靡な手つきで手をなで回された美奈代は、産毛まで逆立った。
「張り紙をよく読め」
その諭すような口調は、不思議と相手を従わせる不思議な威厳さえ持っていた。
「何も性的接待とは書いていないだろう」
「だ、だけど！」さつきは言った。
「コスプレなんて」
「コスプレがわいせつなら、日本中のコスプレ喫茶は風俗指定されているはずだ……お前と美晴の行きつけの執事喫茶が風俗か？ん？」
「な、何で知ってるのよ！」
「部外秘だ。単に、周りが盛り上がっているのは、お前達が実は男子候補生達にとって、あこがれの対象だってことさ。外に出れば、恋愛相手はメスの野良犬が関の山のあいつらが、ココを卒業するまでに女の子と接する可能性がある千載一遇のチャンスだ。しかも、

相手があこがれの誰かとなれば、萌えるのも無理はない」
「……は？」
「さっき確認したが、さつきに美晴は人気二分だな。祷子（マイラバー）は別格。当然ながら圧倒的な人気だ。コスプレもメイドからバニーまで、要求の幅は恐ろしいほど多岐に渡る。私も今から撮影機材を確保を急ぐべきと思っている」
「うっとりした声で恐ろしいこと言うな！」
「神城達はマニアな連中相手で大変だろうが……そうだ。泉は、染谷ががっちり確保しているから心配するな」
「はっ？」
「いずれわかることだ。とにかく、風俗接待なし。そういうことで判断してよろしいですね？教官方」
「……いや」
教官達は、どこか遠くに視線を彷徨わせたまま、呟くように言った。
「……少なくとも俺には、そんな意図は、決してなかったんだ」
長野は瞑目して深いため息をついた。
「せいぜい、妊娠させられない程度に頑張ってこい」
「……まさか」
「二宮中佐も、かっとなった挙げ句、人生損するタイプでな」
長野は気の毒そうに言った。
「池田の野郎にうまくそそのかされる格好で、接待はベッドの中と――こらお前らっ！手にした机や椅子を元に戻せっ！」
「……つまり」
怒りのあまり、肩で息をする美奈代達は、やっとのことで訊ねた。
「私達……負けたらそうなるんですね？」
「……すまん」
「教官、かわりにやってください」
「それは……」
言い淀んだ二宮が小さく、狂気を感じさせる笑みを小さく浮かべ

た。
「悪く……ないか」
「……おい」
一連の流れをあきれ顔で見ていた山崎の小脇を、都築が肘で軽くついた。
「お前、教官相手に勃つか？」
「いやぁ……僕は」
「俺なら無理だ――ぐあっ！？」
二宮の右ストレートをまともに喰らった都築が吹き飛ばされた。
「とにかく！」
二宮は怒鳴った。
「勝て！勝って勝って勝ちまくる！それしかないの！わかった！？ただでさえ、あんた達は大穴なんだから！私が給料一ヶ月に貯金全部突っ込んだのが間違いでなかったことを証明なさいっ！」
「賭博までやってるんですか！？」
「定期崩したのよ！？それに、胴元は校長よ！？なんか文句あるの！？」
「お前らっ！だから！机と椅子から手を離せっ！」
「……ちなみに」
肩で息をしながら、美奈代は訊ねた。
「私達、第一試合の相手は？」
対する長野は苦々しげに言った。
「……第一分隊だ」
職員室で暴れ出した美奈代達は、その晩を営倉で過ごすハメになったという。

●富士学校編　第五話

●宮内省近衛府　通称“富士学校”校庭

「第七分隊っ！」
汗だくになった候補生達に教官の罵声が飛ぶ。
夏の日差しが恨めしい候補生達は、弾かれたように駆け出して教官の前に整列する。
怒鳴るのは、髪を背中で束ねた女性士官。
胸のネームプレートには「二宮」と書かれていた。
階級章は中佐。
年の頃は３０前。
一般に軍隊は２０年で中佐を作るというから、この若さで中佐は、かなりの実力者だという証拠だ。
「整列っ！」
しかめ面の教官に、一人が大声で申告した。
「第七分隊、整列完了っ！」
「遅いっ！集合一つにいつまでかかっているかっ！」
教官は大声で怒鳴った。
「他の分隊はすでに解散しているのがわからないのかっ！」
教官達の前に並ぶ生徒達は、自慢げに歩く他の候補生達を目で追った。
皆が見下したような、バカにした目でこっちを見ているのがイヤでも分かる。
そんな候補生達に、教官は情けがない。
「貴様等は一体、ここに何をしに来たのか！」
「はいっ！教官っ！復唱っ！」
一人が怒鳴った。
「メサイアに乗るためでありますっ！」

「メサイアに乗るためでありますっ！」
居並ぶ候補生達がそれを大声で復唱する。
そう、教えられているし、他に答えようがない。
自分達は志願兵ではなく、学生上がりの強制徴募兵だ。
そんな自分達に、自分で選べる選択肢なんて最初からない。
なにより、これで教官を納得させることなんて出来ないし、むしろイヤミの口実を与えるにすぎないことも、わかっている。
候補生達は、内心諦めながら怒鳴るしかない。
案の定、教官はさらに怒鳴る。
「目的があるなら、その目的に向かってもう少し邁進しろっ！何だそのカメより遅い動作は！」
……そんなこと言われても。
候補生達の顔にはそうありありと書かれていた。
フルマラソンの直後だ。少しは休ませてくれるのが人情ではないか？
そう思うのだ。
「実騎訓練が間近だというのに、こんなカメ同然のザマでは、カリキュラムを見直さなくてはならないな！――カメならカメらしく、地べたに這い蹲れ！根性直しに腕立て３０、終わったらメサイア格納庫に行って、メサイアの清掃作業！私が舐めたくなるほど磨き上げておけ！わかったか！？」
「はいっ！教官っ！」
候補生達は一斉にグラウンドに手を付いて腕立て始めた。

「あのサディスト」
モップとバケツを手にした候補生達の中から、そんなぼやきが聞こえる。
長い髪をポニーテールにした、いかにも体育会系といった勝ち気な少女だ。

名を早瀬さつきという。
「あんなんじゃ、絶対結婚どころかオトコよって来ないね。少なくとも、私がオトコなら絶対！」
「欲求不満を私達にぶつけてるだけですよ」
早瀬の横を歩くおさげにメガネの少女が、時折、脚を引きずりながら頷いた。
「だいたい、私達、パイロット候補生なのに、なんでこんなに体力作りなんてやらされるんですか？」
マラソンでかなり脚に負担がかかっているんだろう。
少女は、歩くだけで顔をしかめた。
名を柏美晴（かしわ・みはる）という。
「文句を言うな」
二人の後ろを歩く少女が二人を窘めるように言った。
「訓練のうちだ」
「マジメだね。隊長ドノは」
早瀬からのからかうような視線に、少女はやや顔をしかめた。
「私だって、別に好きで隊長をやっているわけじゃない」
少女――泉美奈代（いずみ・みなよ）は、早瀬にそう反論した。
「やりたければ、かわってやるぞ？」
「遠慮する」
早瀬はきっぱりと言い切った。
「私、人を使ったりするのキライだし、面倒くさいのはもっとキライ――だから」
早瀬は、不意に足を止めると、“それ”を見上げ、そして泣きそうな顔で言った。
「コイツの掃除は大っキライっ！」
――そりゃそうだろう。
美奈代はため息をつきながらそう思う。
目の前に立つのは、全高２８メートルの巨人兵器。
名をメサイアという。

高さ３０メートルを超える巨体を掃除するのがどれほど大変か。
特に全体に固形ワックスを塗る作業は発狂したくなる。
信じられないだろうが、一度やってみればイヤでも分かる。
終わったときには悟りを開いた気分になれること請け合いだ。

「……こいつの掃除免除と、メシ抜き選べっていわれたら、どっちをとる？」

「早瀬……それ、究極の選択だぞ？」
バケツに水を張る美奈代はあきれ顔だが、
「美奈代はどっちをとるのよ」
そう聞かれると、返答に困る。
「そ……それは」
「私、一食抜きです」
美晴は、壁際に置かれたワックスの入った缶をカートに載せながら言った。
「一食でこの地獄のワックスがけ免除してもらえるなら、空腹抱えてた方がマシです」
「……ま、泉は掃除だろうな」
美晴と一緒にワックスが乗ったカートを押すのは、この中で最も大人びた少女。
宗像美沙（むなかた・みさ）がそう言った。
「何？宗像、美奈代の隊長としてのギム意識ってヤツ？」
クスクスと早瀬は笑うが、
「違う。この泉が、一食抜きの空腹に耐えられるはずがない」
宗像はあっさりとそう言い切った。
「納得」
「ど、どういう意味だ！？」
「あのぉ……」
反論しようとした美奈代を止めたのは、腰までのばした長い髪の

少女のおっとりした声だ。
「ワックス用のウェスが無くなってるんですけど」
「ああ――――祷子。私と一緒に探しに行こうか」
宗像はカートを美奈代に押しつけると、一瞬にして髪の長い少女――――風間祷子（かざま・とうこ）の横に立ってのけた。
しかも、その手は祷子の腰に回されている。
「隊長？倉庫まで行ってくる」
「――――いいか？すぐ戻ってこい。倉庫でナニしようなんて思うな」

「努力しよう――――さあ祷子」
「お手伝いしてくださるんですか？ありがとうございます」
「何――――祷子のためだ。行くぞマイラバー」
「うふふっ。ラバーってゴムのことでしたっけ？」
「ははっ。女同士にゴムは不要だよ」

「……宗像にも困ったもんだよね」
倉庫に向かって歩く二人を見送りながら、早瀬はあきれ顔になった。
「“私はホンモノの同性愛者だ！”なんて、人前で堂々と言う？普通」
「祷子の貞操、心配した方がいいかしら」
「……まぁ、分隊に実害はないし、いいんじゃないか？」
「美奈代、まさか」
「言っておくが、私はノーマルだ。神城達は？」
「キャットウォーク借りに整備に行ってる。山崎君は、校長室へ都築の回収」
「どうしてこう、ウチは団体行動でまとまりがないんだ？」
「そりゃ、あんたの分隊だもの」
「どういう意味だ」

「おーい。ドンガメ分隊」
へへっ。
笑い声を含むからかい声に、美奈代達は掃除の手を止めた。
見ると、美奈代達が掃除しようとしたメサイアの隣の騎のコクピットハッチの周囲に候補生達が何人かたむろしていた。
お世辞にも軍人らしい素行の良さはない。
袖章を見なくても分かる。
第一分隊。
入営前に、最も適性他が優れた人材と認められた選抜者、いわゆるエリート達によって構成される部隊だ。
当然、プライドの塊みたいな連中で、教官達の覚えもいいせいか、他分隊をあからさまに見下していた。
「せいぜい、しっかり掃除してくれよ？実騎演習で、俺様達が乗る騎だからなぁ」
「っ！」
早瀬が反論しようとしたが、美奈代は早瀬の肩を掴んだ。
「早瀬、待て。無視しておけ」
「美奈代！」
そんな早瀬達に、第一分隊は容赦がない。
「やっとシミュレーションって、どんだけノロマなんだよ」
「しょうがねぇだろ？所詮は女だ。親切にしてやれよ」
「ま、そういうことかな」
アハハハハッ！
モップを掴む手に力が入るが、それでも美奈代達は耐えた。
教官達から連日しごかれ、それでも歯を食いしばってカリキュラムをこなしてきた。
にもかかわらず、学生隊の中でダントツで進行が遅れているのは、美奈代達の分隊だということは、皆知っている。
ノロマの分隊。

ドンガメ分隊。
第七分隊ではなく、美奈代達がそう呼ばれるのは、そのためだ。
遅い理由は？
――連中がオンナ中心だから。
都築や山崎という歴とした男がいても、全体から見れば第七分隊は女の分隊だ。

「よぉ！メサイア操縦するより、俺達がベッドの中で操縦してやるぜ？」
「へへっ！俺の操縦桿を握ってくれよ！」
こういうのと同期だというのが、美奈代達は納得出来ない。

赤みがかったクセのある髪にくりっとした猫のような瞳に、美奈代は怒りをこめるに止めた。
「――ねぇ。アイツら、ぶんなぐっていい？」
そう言う早瀬の横で、美奈代はモップをせわしなく動かす。
モップと一緒にさつき自慢のポニーテールが愛らしく動く。
ポニーの尻尾とはよく命名したものだと、美奈代はその動きを見るたびに感心してしまう。
「やめておけ」
「けど」
「新潟にいる実家のご両親に、なんて報告する？“軍隊で傷害事件引き起こしました”か？もしやって見ろ。一生、日の目は見えないことになる。大体、あいつらのアレは、軍隊じゃセクハラじゃない。挑発だ。もし、殴ったりしたら損するのは私達だ。
あいつらは、それがわかっているから、ああやってからかっているんだ」
「なら言うけどさ」
早瀬もモップを動かす手を止めずに行った。

「あんた、くやしくないの？こんな仕打ちを受けてるなんてご両親が知ったら――――あっ」
しまった。
早瀬がしかめ面で舌打ちした。
「ゴメン。美奈代のご両親って」
「――――気にするな」
美奈代は言った。
「何があっても、生きて文句を言われることはない」
「……ゴメン……み、美晴はどう思う？」
早瀬は話の矛先を変えることにした。
でなければ息が詰まりそうだ。
「別に？」
美晴は平然と言った。
「言いたいなら言わせてあげればいいんです。私は気にしません」
「――――へぇ？」
「いつか、後方勤務に回ったら散々書類とかで苦しめてやろうって楽しみにしています」「……気が長いというか、何というか……」

美奈代達は、そんな会話を繰り返しながらメサイアの装甲を磨き上げることに専念した。それが、いつもの日課なのだ。
第一分隊からのセクハラじみた嘲りまで含めて……。

そんな忍耐の日々にも、いつかは決壊する日が来る。
騒ぎが起こったのは明日が月一度、認められた外出許可日だという日。
皆が浮かれていたのも原因の一つだろうと、教官の一人は後に語っている。

ことの発端はこうだ。
第一分隊の副隊長に恩田という男がいる。
がっしりとした体つきの体育会系の男。
指揮官としての素質もあり、将来は期待されているが、どうにも女癖が悪く、これが掃除中の柏美晴に後ろから抱きついたのだ。
“女子に抱きつけるか？”という度胸試しの一環だったことを、拘束された第一分隊の候補生全員が認めたが、第七分隊の女性候補生達は収まらない。
“いつか殴ってやる”と、第一分隊への反撃の口実を狙っていた早瀬や宗像達は、このチャンスを逃しはしなかった。
恩田の後頭部に早瀬の振り下ろした水入りバケツが、その尾てい骨に宗像のモップがそれぞれ命中した。

恩田の悲劇の幕開けだった。

他分隊候補生、整備兵に加え、偶然、視察中の軍高官の前で、恩田は裸にひん剥かれた挙げ句、ウィンチで天井近くに逆さづりにされたのだ。

――――よくもやりやがったな!?

第一分隊がようやく我に返って、第七分隊に殴りかかったのは、整備兵達が恩田の股間を見て笑い転げる中だ。

あれは誰だ？
何の騒ぎだ？
軍高官への事情説明に青くなる教官達でさえ無視した第一分隊は、第七分隊に襲いかかる。
「女だと思って甘くみてればぁっ！」
「いつ見たっ!?」

真っ正面から殴りかかってきた候補生の脚をモップで掬ったさつきは、返す刀で、その脳天にモップを振り下ろした。
「この野郎っ！」
「私達は女だっ！」

何だ！？
第一分隊が女を襲っているぞ！？
止めろっ！

さつき達がモップやバケツで武装し、体格で勝る第一分隊と渡り合う中、彼らを快く思わない他分隊候補生達が、これ幸いと、彼らに襲いかかる。

なにしてやがるっ！
女を襲うとは何事だ！

皆、口々に第一分隊への非難を叫ぶが、内心では日頃のうっぷんを晴らそうとしていることは、その殴り方からして明白だ。
しばらくの後、第一分隊の彼らが出来たことは、他分隊を迎え撃つどころか、袋だたきから逃れるためにあがくことだけだ。

候補生、そして整備兵にとって神聖な場たる整備ハンガーは、一瞬にして乱闘の場に成り下がった。

そこに教官達が率いる鎮圧部隊が突入。
全員が拘束された挙げ句、営倉に送られたのが一昨日のこと。
第一分隊に非があることは明白だと、候補生達だけでなく、教官や憲兵達までが口にする始末に陥った。

候補生達全員が連帯責任として一晩のメシ抜きを言い渡された事

件だが、不思議と第七分隊に対する抗議だけは出なかった。

しかし――

「――結果として婦女子に対し、不埒な振る舞いがあったことは、光輝ある第一分隊としてまことに遺憾とする所ではある。しかし、いくら恩田候補生に非があろうと、骨折するほど殴られ、あまつさえ全裸にされ、さらし者のようにつるし上げられることは、報復にしても行き過ぎであると言わざるを得ない」

職員室に、二宮の朗読が響く。

「なんです？それ」

横で聞いていた長野が、コーヒーカップを掴む手を止めた。

「染谷候補生、あの第一分隊隊長の」

「ああ――あれですか」

「あれが書いてきた抗議文です。何しろ、自分が留守だった間に分隊がセクハラやらかしたとあっては――ね？」

「あいつはどうも、騎士より政治屋になった方が成功するんじゃないですか？」

長野は顔をしかめた。

「祖父は貴族院議員殿。親父は――」

「ま、そういうことですな」と、長野は肩をすくめた。

「騎士の武勲を立て、それをバックに政界進出が人生の目標らしいですよ？本人というか、親の意向調査、読みますか？大尉」

「勘弁してくださいよ、んなモノ」

「とにかく、抗議は抗議ですけど、厄介なことになりましたね」

「へ？」

「第一分隊の池田教官」

「……ああ」

その名を聞いた途端、長野がしかめ面になった。

「染谷――教え子の、しかもそのオヤジ威光がなければ何も出来

ない、あの俗物野郎が何か？」
「どうにかしてメンツを取り戻したいと、第七分隊との模擬戦を求めてきました」
「……結局ぁ」
長野はコーヒーを喉に流し込んだ。
「柏に惚れていた恩田が小学生並みの愛情表現やってのけただけ。それがまぁ、あの騒ぎになって、しかも高官ドノの視察中に重なった……不運ではありますけどね。それでメンツもへったくれもあるもんですか」
コーヒーカップをデスクの上に置くと、長野は背中を伸ばした。
「子供（ガキ）のやるこった。あのバカ、池田の野郎が見えているのは、自分のメンツと保身だけです」
「今度の最終訓練。第一分隊全員分の“幻龍（げんりゅう）”を確保したとか。私も信じられませんけどね」
「……まぁ」
長野が周りを見回すと、小声で言った。
「開発局の一部にコネを作ったらしくて」
「開発局？」
その名前を聞いた二宮の眉間に皺が走った。
「池田教官が何故？」
「そりゃ、わかりませんよ」
長野は肩をすくめた。
「ただ、そんな噂があります。開発局の評価用に準備されていた“幻龍（げんりゅう）”を訓練用に借り受けたなんて、そんな裏事情でもなければ実現しませんからね」
「……イヤな予感します？」
「勿論――で？」
長野は楽しげに頷く。
「どうするんで？」
「抗議は抗議で受け取りますが、それだけです」

二宮は答えた。
「これを届けにきた染谷自身もわかっていました。罰せられるべきは誰か」
「じゃあ、この抗議文は」
「池田に書かされたことは白状しました。第一分隊のみんなも、さすがに悪いことをしたと反省している。恩田は副隊長剥奪、退院後は営巣入り一週間が決まっている。柏候補生は感情論として収まりつかないとは思うが、何とかこれで手打ちにして、穏便に済ませてほしいと」
「教官より教え子の方がマトモですね……どうするんです？」
「模擬戦は訓練校の制度上、避けることは出来ません」
「勝てませんよ！あんな奴らでも、その実力はご存じのはずだ！」
「勝たなくても、負けなければいいんです」
二宮は言った。
「池田大尉には言ってあります。もしも“選抜戦”の一環として認められれば、その時はお受けします。と」
「池田大尉、それで納得したんですか？」
「それはもう」
二宮は楽しげに笑った。
「顔を真っ赤にして」
「選抜戦の組み合わせは、明日でしたっけ？」
「ええ。選抜戦までに、戦場で死なない術を叩き込みます」
「……さてさて」
長野は深いため息をついた。
「本当に気の毒なのは、誰なんでしょうね」
「ふふっ。私は整備だと思っています」
「正論ですね――所で」
「はい？」
「アフリカ送り。あいつらにいつ教えるんです？選抜戦の書類提出の締め切り、明日の朝一ですよ？」

「え？私、長野教官がやってくれたものとばかり」
「……他分隊、手続き終えてますよ？」
「……やっておきます」
「今日――徹夜ですね」
長野は天を仰いだ。
「さっきの、本当に気の毒なヤツのリストに、私の名前を入れておいて下さい」
「……すみません」

●その日の夜
「泉候補生」
自習室から出た美奈代は、その不意にかけられた声に振り返った。
「あっ」
思わず出た声に、自分で驚いた。
知的で涼やかな顔立ち。クールなのに目元に優しさがある。
背はそれほど高くないが、適度に引き締まった体つきは、制服の上からでもよくわかる。
汚れ一つない詰め襟の制服。その襟元に付けられている分隊番号は1。
そして、その胸元で光るのは候補生全員をまとめる学生隊総隊長章と分隊長章。
候補生の中で最も成績優秀、素行良好だと、二つの記章が保証してくれる。
ただ、正直なことを言うと、この時点で、美奈代が逢いたい人物ではなかった。
第一分隊分隊長、染谷瞬（そめや・しゅん）だ。
分隊長の打ち合わせなどでの顔なじみに、美奈代は形ばかりの敬礼をした。

「すまないが」
答礼しつつ、染谷は言った。
「時間、とれないか」
その声には、普段にはない、何か緊張しているような色があった。
第一分隊とのもめ事があったばかりだ。
個別に報復されるのではないかと、美奈代はさすがに警戒していた。
「――何か、ご用ですか？」
「うん」染谷は頷いた。
「ここでは何だから……」
染谷はあたりを見回した。
「図書室は閉鎖だし――物陰だと君に警戒されるだろうし」
「……」
「……まいったな。女の子と安全に会話出来る場所……とは」
「……あの」
困惑する染谷を前に、美奈代は言った。
「今、ここには自分達しかいませんが？」
その言葉に、染谷は驚いた様子で、あたりを見回した。
「あっ」
美奈代の言うとおりだったと、初めて気づいたらしい。
校内消灯、１時間前。
今時、こんな時間に自習室にいる物好きはそう多くない。
「あ……ああ、。そう……だね」
「何です？」
「……」
どうやって切り出そうか。
染谷は何か迷いながら、しばらくの後、ようやく言った。
「手を貸してほしい」
「？」
美奈代は無言で右手を出した。

「……そうじゃなくて」
「は？」
「力と……知恵を貸してほしい」
「第一分隊は」
美奈代は真顔で言った。
「力も頭脳も、ウチのようなドンガメ分隊より優れていると思いますが？」
「……ううっ。そうじゃくて……」
「どう聞けばわかります？」
「……黙って聞いてほしい」
「はい」
「……まず、この前、僕がいない間に分隊が引き起こした不祥事を、分隊長として謝罪したい。非はすべて、こちら側にある」
「……」
「ただ……いろいろあって、それを認めない。受け入れないどころか、逆恨みする連中が……どうしたんだい？」
染谷は、無言で手をあげた美奈代に言葉を止めた。
「……発言を許してください」
「……君は僕を馬鹿にしているのか？」
「警戒しているんです」美奈代は答えた。
「こんな夜中に、人気のない所で男と二人っきり。しかも、あんなセクハラ分隊のトップとです」
「……返す言葉がない」
「昼間に声かけてください」
美奈代が染谷を避け、歩きだそうとした。
「待ってくれ！」
染谷はその進路に立ちはだかった。
「昼間だと、池田教官の目があるんだ。下手なことをすると、みんなが迷惑する！」
「……？」美奈代は足を止め、まっすぐに染谷を見上げた。

「頼む」
その美奈代の目の前で、染谷は頭を下げた。
「力を、貸してほしい」

「……は？」
話を聞き終えた美奈代は、あきれ顔で染谷を見た。
「個人的な怨念を晴らすためとはいえ、そこまでやりますか？普通」
「池田教官は、そういう意味では普通じゃない」
染谷は答えた。
「騎士としては確かに一流だけど、出世欲の権化だ。自分の出世を妨げるようなものはすべて認めない」
「その中に？」
「分隊の不祥事で始末書を書かされたことに激怒している。責任はすべて第七分隊にあると」
「そんな！」
「わかってほしい。そんなこと考えているのは、教官だけだと」
染谷は、美奈代の反論を妨げるように早口で言った。
「そのために、教官は第七分隊と僕達の模擬戦を仕組んだ。元々、“雛鎧（すうがい）”と“幻龍（げんりゅう）”では勝負にならない。それだけじゃない。
教官は、“どうあっても、第七分隊が負けざるを得ない”ことを仕組んでいる。
完璧な出来レースを進めようとしている」
「私達が――負けざるを得ない？」
「僕にも詳しいことはわからない。ただ、教官は常にそう豪語している。“二宮も終わりだ”とね……あの口調からして、教官はウソを言っていないのは確かだ」
「……」
「考えてほしい。泉候補生」

染谷は美奈代の両肩をしっかりと握ると、まっすぐにその目を見つめながら早口で、奇妙なことを言った。
「教官が“幻龍（げんりゅう）”をどうやって手に入れたかを、僕は知っているんだ」
「……あ、あの」
「何か、この富士学校の機密を他部署に売り飛ばして、その見返りとして借り受けたんだ。僕はその会話を聞いたんだ！」
「で……ですから」
「そこまでするからには、教官はもう、事故に見せかけてでも第七分隊と指導教官である二宮中佐を亡き者にしようとするに違いない。そのお先棒は僕達第一分隊が担ぐことになる。
模擬演習で候補生が死んだら事故死。
教官の責任は問われない。
だけど――実際に手を下す僕達は！」
「……染谷候補生っ！」
美奈代の声に、染谷は驚いた顔で言葉を止めた。
目の前、しかもものすごく間近に見える美奈代の顔は、真っ赤になっていた。
「……えっ？」
恥ずかしそうに伏せられたまつげさえはっきりと見えるほど、美奈代の顔は近い。
かみしめられた唇が魅力的にふるえているのがありありと見える。
「……あっ」
つまり、自分が顔を近づけているということだ。
「わわっ！」
染谷はあわてて美奈代との距離をとると、まるで“降参”といわんばかりに両手をあげた。
「す、すまないっ！ヘンなことするつもりはなかったんだ！」
「……」
胸元を押さえながら、美奈代は言った。

「話は、二宮教官にしておきます」
「もうしてある」
「なら、指示を仰ぎます」
美奈代は泣きそうな顔で後ずさった。
「正直、話が大きすぎて信じられません。それに私は」
「だけど――」
「第一分隊を信じていません」
「っ！」
「今の分隊同士の関係、それにこんな時間、全部を考えた上で、唐突にそんなこと言って、信じてもらえる関係かどうか。信じてもらえるように、何かしたのか、考えてください」
「……だけど」
「失礼しますっ！」
美奈代は駆けだした。
「待ってくれっ！」
その声は背中で聞いた。
その声から逃れるように廊下を走った美奈代は、自分がどうやって部屋にたどり着いたか。
どうやって眠ったのか。

ただ、染谷の顔と、掴まれた手の感触以外、美奈代は何も覚えていないまま、夜明けを迎えた。
はっきり寝不足だ。
寝坊して飛び起きて、ドアノブをつかんでようやく今日が休日だと思い当たった。

――いかん。

美奈代は鈍い頭を軽くふって食堂に入った。

まだ何名かの候補生達が食事をとっていたが、食堂そのものはがらんとしている。
時計を見ると、すでに食事の時間は終わろうとしていた。
「……？」
急いで配食用のトレーをとった美奈代が、奇妙な視線を感じたのはその時だ。

――ヒソヒソ
――マジ？
――ホントかよ

そんな声が視線の向こうから聞こえてくる。
我ながら地獄耳だと感心しつつ、美奈代は何も聞こえないフリをして食事を受け取り、空いている席に座った。
「美奈代さん」
「おっはよ♪」
振り返ると、美晴とさつき、そして第三分隊の大男、山崎がトレーをもって立っていた。
別な席に座っていたが、美奈代の姿を見て席を移ってきたらしい。
「おはよう」
そう答えた美奈代に、
「聞きましたよぉ？」
美晴は、興味津々の顔で言った。

「染谷君と深夜の逢い引きですか？」

ブッ！
美奈代は思わず飲みかけていたみそ汁を吹き出した。
「きったないわねぇ！」
心底むせぶ美奈代の背中をさすりながら、さつきが言った。

「染谷とあんたが自習室の前でキスしていたって噂が立ってるのよ」
「だ、誰が！？」
「ＭＣ（メサイアコントローラー）の誰かが昨日、見たらしいけど、二宮教官の耳に入ったら大変よ？」

「それにしても、染谷君とは」
何かを納得したように、美晴は何度も頷いた。
「理想が高いですねぇ。泉さん」
「――――で」
ぽんっ。というより、ガシッ！とさつきは美奈代の肩を押さえた。
「どうやって染谷をたぶらかしたのか、教えてほしいなぁ。なんて♪」
「だ、だからっ！」
「見苦しい言い訳はやめましょう。美奈代さん」
美晴はＩＣレコーダーをポケットから取り出した。
「ネタはあがっているんです」
「何もしていないっ！」
「じゃあ、二人で何していたんです？」
「美晴。そりゃもう、はっきりナニよ！」
「違うっ！」
「――――じゃ、何していたのよ」
「だからっ！」
美奈代は言葉に詰まった。
池田教官の話を、美奈代自身が信じていないと言い切った。
それをここで口にしていいはずはない。
かといって、下手なウソをつけば事態はもっとやっかいになる。
じゃあ？
「……っ」
美奈代は言葉に完全に詰まった。
「やっぱりそうなんですね？」

「……へ？」
「そんなに深い関係だったとは」
「……そうねぇ」
「ち、ちょっと待て。二人とも？」
「同期だから、仲間だと思っていたのに」
「いくら隊長でも――ひどい抜け駆けですよねぇ」
「な、何の話だ？なぁ、二人とも？」
席から立ち上がろうとした美奈代の耳に、不意にチャイムが聞こえたのは、その時だ。
「生徒の呼び出しを告げる。
泉美奈代候補生、染谷瞬候補生、至急校長室へ。
追伸、女性教官およびＭＣ（メサイアコントローラー）で、“協会”加盟者はしかるべき準備の後、校長室へ集合のこと。――繰り返す」
「……」
「……美奈代」
ポンッ。
さつきは気の毒そうな顔をしたまま、美奈代に言った。
「――ご愁傷様」
「お幸せに」
「……いっそ殺してくれ」

●富士学校編　第六話

演習地の一角に止まった高機動車から降りたのは二宮だ。
「ご苦労」
「本当に、すぐ間近までお運びしますが？」
運転手を努める上等兵が不思議そうな顔で言った。
「いや。それには及ばない」
二宮は軍人らしい仏頂面で言った。
「実騎演習で舞い上がるヒヨコ共を背後から襲ってみたいだけだ」
「ああ……成る程？」
上等兵がいかめしい顔を歪ませて笑う。
「そういうことでしたか」
「そういうことだ」
人の悪い笑みを浮かべ、二宮は歩き出した。

林を抜けた二宮は、目の前の光景に軽い頭痛を覚えた。

「すっぉごい！」
「ね！？私の戦闘装備、似合ってる！？」
「うん！カッコいい！」
そんな黄色い声を張り上げるのは、二宮が指導を担当する候補生の面々だ。

遠目に見ながら、二宮は一人一人を確かめた。

泉美奈代（いずみ・みなよ）
分隊長。
冷徹で完璧主義的な性格。

非常に面倒見が良く、周囲への思いやりもある、分隊の中では母親的存在。
父は元メサイア乗り。

早瀬さつき（はやせ・さつき）
豪快な性格の持ち主で負けず嫌い。分隊内の実行隊長的存在。

柏美晴（かしわ・みはる）
冷静で割り切っていながら、人なつっこい性格の持ち主。

宗像理沙（むなかた・りさ）
部隊内で最も視野が広く、的確な判断が下せる、分隊の知恵袋的存在。

神城一葉（かみしろ・かずは）
神城双葉（かみしろ・ふたば）
神城光葉（かみしろ・みつは）
三姉妹。
分隊内では宗像と肩を並べるお祭り騒ぎの元凶とされる。

都築真（つづき・しん）
分隊では貴重なオトコ。

山崎大輔（やまざき・だいすけ）
身長2メートル近い大男。
外見だけなら最も騎士らしいが、適正では操縦者と管理者（コントローラー）双方で高い適正値を持っているため、どちらに配属するか、実は未だにはっきりしていない。
巨体に似合わず、心根は優しく思いやりにあふれる性格のため、分隊の女性達からは意外な人気を集めているという。

別名「フラちゃん」

そして……

二宮はじっと目を凝らした。

そこに映るのは、ただぼんやりとメサイアを見つめる少女。

風間祷子（かざま・とうこ）

採用されれば、近衛史上でもトップクラスに入る適正値の持ち主。

だが――――

二宮はそこにひっかかる。

適正は確かに高い。

パラッ

二宮は手にしたファイルを開く。

開かれたのは彼女に関するデータ。

その最後に、こう書かれていた。

『実騎訓練に際しては、当該候補生のみ、開発局が指示する騎を常に使用すること。なお、その訓練の過程における、人的・物的損害は全て不問とする』

「……」

二宮は訓練生のために用意されたメサイアを見上げた。

雛鎧（すうがい）

征龍を訓練生向けに改装したトレーナー騎。

普通より大きくとられたコクピット部とメサイアコントローラールームは、それぞれ副座式である証拠。
つまり、普通のメサイアは2人乗りなのに対して、この騎は4人乗りだ。
不慣れな訓練生がどんなバカをやらかしても破損しないよう、軟式追加装甲を取り付けられたその姿は、お世辞にもカッコイイとは言い難い。
かつて世界に鳴り響いた栄光あるかつての愛騎、征龍のなれの果てと思うと、二宮は何だか泣きたくすらなった。

「整列！」
泉の号令に我に返った二宮は、緊張した面もちで自分に敬礼する生徒達に、バツの悪い思いで答礼した。
「ご苦労」
二宮は近づきながらもう一度だけ、全員の顔を見た。

二宮の任務。
それは、生徒達の実騎演習の総指揮を執ること。
何度も経験しただけに、その手際は見事なものだ。

「訓練騎はそれぞれ1騎ずつ割り当てられ、コントロールには教官が一人、実戦部隊から回してもらったコントローラーがつく」
騎体のそばに待機している一団を指さすと、生徒達がそちらに向き直り、
「敬礼っ！」
一糸乱れぬ敬礼をする。
訓練開始から半年近く。
よく育っている。
二宮はそう思ってわずかに口元を緩めた。
「搭乗する騎は、泉、1号機――――」

手元の資料をよどみなく読み上げる。
「風間１０号機」
「教官！」
そう言ったのは早瀬だ。
「なぜ、祷子……じゃない、風間候補生の騎だけ違うんですか？」
全員の視線が１０号機に集まる。
そう。
確かにおかしいと思われて当然だと、二宮も思う。
１０号機だけ、なぜか完全な単座騎だ。
その内部については、二宮も知らない。
ただ、生徒達の疑問に答えるという、教官の義務として、こう答えた。
「訓練騎はそう多くない。ベースとなる征龍は、いまだ一線で活躍中の騎であることを忘れるな」
騎体不足。
それで生徒達が納得したかはわからない。
恐らく、ないだろう。
「教官が同乗できないのは、風間候補生にとっては大変な負担だろうと思う。だが、シミュレーターの結果で判断する限り、貴様等の多くは、単座での演習参加は不可能ではないと判断されている」
「風間候補生に対する厚遇、そういうことですか？」
泉は冷たくそう訊ねる。
「そうですよ」
早瀬も食って掛かってきた。
「何か、祷子ばっかり大変じゃないですか」
「教官、真意はどのように？」
「近衛もまた、軍隊だ」
泉に対して、二宮は言った。
「そして貴様等は軍人のタマゴである。命令に従えばいい。戦場では、末端の兵士達の疑問に一々答えてくれる者なぞいない」

「……」
「……」
「搭乗は３０分後、それまでに用を足しておけ。いいか？コクピットで漏らすんじゃないぞ？」

関係者との短い打ち合わせの後、二宮は生徒達の様子を見た。

泉はマニュアルを熱心に読み直している。
手にするマニュアルのボロボロぶりから、普段からかなり読み込んでいるのは間違いない。
他の連中は一塊りになって緊張をほぐすおまじないに熱中している。

オトコ達はそんな女達から離れ、熱心にメサイアの回りを行ったり来たりしている。

そして――

「ん？」
二宮の目に止まったのは、褄子だ。

跪く格好で待機中のメサイア１０号騎の前で、褄子はじっとメサイアを見つめていた。
いや、メサイアに微笑んでいた。
メサイアから聞こえるメカニカルノイズに一々答えているように頷いてすらいる。
「？」
巨人と会話する妖精のようにすら映る褄子に近づいた二宮が訊ねる。

「候補生。何をしている？」
「あっ、は、はい」
慌てて敬礼する祷子に、二宮は言った。
「敬礼しろといったのではない。何をしている？と聞いたんだ」
「あ、この子とお話を」
「この子？」
「はい。この子……１０号騎です」
メサイアコントローラーや騎士の中には、メサイアを子供や娘、あるいは息子として位置づけ、「この子」と呼ぶ者が結構な数、存在するのは事実だ。
二宮もその中の一人。
見習いじみた格好付けのウソではないことは、祷子の眼を見れば二宮にはすぐわかった。
だから、訊ねた。
「何と言っていた？」
「はい。名前は“弥生（やよい）”ちゃん。お母さんが水城恵美子（みずしろ・えみこ）中尉だと」
「……」
二宮はポカンとした顔でもう一度、相手を見た。
空想癖でもあるのか？
本気でそう思ったからだ。
人間がメサイアと会話出来るはずがない。
出来るとしたら、それはメサイアコントローラーだけだ。
この子にその素質があるとは聞いていない。
「あの？」
祷子が不思議そうな顔を向けてきた。
我に返った二宮は、慌てて話を合わせるように、
「そうか。訓練で苦楽を共にするパートナーだ。仲良くしておけ」
そう言って踵を返す。
「はいっ」
明るい祷子の声は、背中で受けた。

わからない。

二宮は首を傾げながらCP（コマンド・ポスト）に入った。

何かがおかしい。

二宮はもう一度、資料を読み返した。

そして、見つけた。

「開発局の要請により採用？」

縁故採用はありえない。

あくまで実際の能力がモノを言うのが騎士の世界だ。

しかも、近衛関係者に知人がいる場合、関係者としてこの書類に載っているはず。

それが、一人として存在していない。

縁故の線は、ない。

「つまり――」

開発局、何を？

まとまらない考えを抱える二宮に、

「中佐」

背後から声をかけたのは、整備隊長だ。

「起動準備完了。メサイアコントローラー、配置に付きました」

「ご苦労――あ、待て」
「はい？」
「整備隊長、１０号騎については、何か知っているか？」
「？ああ。あの、開発局から回ってきた？」
「開発局から？」
「ええ。新型のテストベッドに使われた素体ですよ。何でも、空いたからって、訓練用に回してくれたとか。それが？」
「いや、いい。で？１０号機の精霊体の名前は？」
「えっ？そういや、なんだったっけ？」
整備隊長は書類を引っかき回した。
「ああ。さっきのメールにあったな……」
「我々にも報告がないが？」
「そうなんですか？俺は整備上、必要かと思って、開発局の仲間に頼んで教えてもらったんですよ……これだ。えっと？」

二宮はその名を聞いた途端、凍り付いた。

何も知らないはずの風間候補生が語った名。
まさにその名が、整備隊長から聞こえたから。

「“弥生（やよい）”ちゃんですね。メインコントローラーとして登録されているのが、水城恵美子（みずしろ・えみこ）中尉。――でも、この騎って、何の開発に使われたんだ？」
フィーッ
フィーッ
「搭乗開始、５分前！各員備え！」
サイレンと共に周辺に響き渡るオペレーターの張りのある声。
それがなかったら何時間、凍り付いていたか、二宮にも答えはわからない。

１０号機
風間祷子

すべては、これから知ることになるだろう。

そう思いつつ、二宮は訓練開始に備え、指揮を開始した。

一方、候補生達が危なっかしくコクピットに入る様子を、長野は複雑な顔で見ていた。
（最初なんだから、ベーススタンド位用意してやればいいものを）

「下見るなぁ……下を見るなぁ」
その長野の視線の先で、柏美晴は、半泣きになりながらメサイアの各部に取り付けられた足場を使って騎体によじ登っていた。
高校卒業したての１８歳。
メガネをかけた、何の変哲もないオンナノコだと、自分ではそう思っている。
ただ、まだ花も恥じらう乙女にとって、コクピットまでの道のりは、それなりの驚異だった。
飛び跳ねれば一発だと体ではわかっている。
だが、高いところが苦手な美晴にとって、この飛び跳ねるというのがどうしても出来ない。
跳躍の訓練の時、いつも敵に会う前に悲鳴を上げるのは、美晴だ。
「ううっ……怖いよぉ」
何とか胸部までたどり着いた時には、隣の騎はエンジン音を変えていた。
なるべく最後まで下を見ずにコクピットに転がり込むことに成功

した美晴は、隣の騎が何号騎だったかを思い出した。

１号機、泉騎だった。

「１号機、起動シークエンス開始……各部バランサーチェック……完了」

美奈代はコクピットで手際よく起動手順をこなす。

右翼騎士である厳格な父に育てられた、これまた厳格な子。

高校時代は風紀委員会で活躍していたというのが肯けるし、この経験から分隊長を任されている。

コクピットの各部にパワーが入り、モニターに外の風景が映し出された。

『ＭＣより泉候補生』

コントローラールームから通信が入る。

「泉候補生」

『全天周囲モニターは切って下さい。使用は禁止されています』

「泉候補生了解」

泉は手元のパネルを操作してモニターを３６０度全周囲のそれから前面に限定されたものへと切り替える。

騎士の見るモニターはこの場合、全部で２１枚。

メサイアの眼で見た光景が合成されて映し出される。

下手に足下が見えないだけ、美奈代はこちらのモードの方が好きだった。

視界の先に、美晴騎が映る。

彼女が全天周囲モニターに切り替えれば、気絶してるかもしれない。

「切り替え完了……」

そんな意地の悪いことを考えながら、次の手順に入ろうとして、泉は手を止めた。

モニターの一角に映し出されるのは、風間騎。
「……」
白を基調として、各所に黄色を配した色彩は、自分の騎と同じ。
ただ――――
（なんで褌子だけ）
そう思わずにはいられない。
こっちは複座。
むこうは単座。
単座の搭乗は、訓練過程でも後半だ。
まだ、中盤に入ったばかりだ。
しかも――――
「こら泉！」
後部座席に座った教官の怒鳴り声と一緒に、後頭部を激しくド突かれた。
ヘッドコントローラーの中に仕込まれたバーが後頭部めがけて飛び出してきたからだ。
「痛いっ！」
思わず悲鳴を上げる。
「さっさとやらんかぁ！」
「はっ、はい！」
泉は起動手順を慌てて再開しつつ教官に訊ねた。
「教官、分隊長としてお聞きします」
「む」
「風間候補生は――――大丈夫、なんでしょうか？その、単座で」
「コケても死にはしない……分隊全員でメシ抜き程度だが？」

「思いっきり、イヤなんですけど」
「お前がそう思うのも無理はないがなぁ」
島教官も褌子の悪評は聞いてはいた。
「あの子だろう？シミュレーションで万年ドンケツは」
「はい……脚部バランサー正常作動確認……1号機、起します」
グンッと来る不自然なまでの感覚が泉を包む。
「えっ？」
「引き上げすぎだ！バカモンっ！」
目の前のモニターに操縦権限が剥奪されたことを告げる表示が出、そして後頭部に激痛を感じた。
「す、すみませんっ！」
「ボンクラちゃんを笑っている場合じゃないぞ！」
教官に一喝され、泉は涙目で謝った。
「も、申し訳ありませんっ！」
「シミュレーターでボンクラちゃんは全戦全敗記録の持ち主だが、お前等候補生が知らないことが一つある――シミュレーターで一番早くメサイアを立ち上げたのは、間違いなくアイツだ」
「えっ！？」
レコードは私のはず。
あの子は騎体エラーを引き起こして教官から大目玉食らっていたはずだ。
「あまりに早すぎる……初講習の時で熟練騎士以上の手早さで、だ。教官である俺達からすれば、シミュレーター側で、何かエラーが起きたと判断した位な」
「初耳です」
「当然だ。とにかく、いろいろ試した結果、俺達教官が出した結論はこうだ。
あの子とシミュレーターは相性が悪すぎる。
まぁ、結果としてお前達からボンクラちゃんなんてありがたくもない愛称を頂戴したのまではどうしようもなかったけどな」

「相性？」
「ニックネームのことさ」
「いえ、シミュレーターとの相性」
「ああ。知っているだろう？
騎と騎士には相性があるって。
ボンクラちゃんはより強くでるタイプみたいだな。
あろうことか、ボンクラちゃんはそれがシミュレーターで出た。
いや、相性が悪いのは、シミュレーターそのものではなく、この雛鎧であり、征龍だったことは確かだ。
そう判断するきっかけがこうだ。
シミュレーターとの相性問題は、ボンクラちゃんも気にしていたらしくてな。
あの子、休日指定日にシミュレーター動かさせてくれって、二宮さんに頼み込んだ。
整備連中、しかたねぇ。空いてるのはこいつだけだって、上級特殊訓練用シミュレーターに乗せてみたら、これがあっさり動かしたあげくが、レコード更新総なめだ。
あれはどこの上級騎士だって、みんなが驚いていたぜ？」
「まさか！」
「そのまさかさ。征龍の性能では、ボンクラちゃんの操作にはついていけない。
それがボンクラちゃんのシミュレーター上の成績不良を引き起こしていた。
分析結果として導き出されたのがそういう答え。
――俺は、そういうの、天才っていうんだと思うぜ？」
「……」
「ただ、天才ってのにも二通りある。泉が努力による天才なら、ボンクラちゃんは生まれつきってタイプだな」
「……」
「まぁ、お前のようなタイプの方が実績は残せる。生き残れるのは、

運次第だが」
「それが、あの子が単座に乗せてもらっている根拠なんですか？」
「違う」
「どう？」
「あれは、乗っているんじゃない。乗せられているんだ」
「えっ？」
「詳しいことは知らん。ただ、あの子が望んであれに乗っているわけではないことは知っている」
「詳しく教えて下さい」
「出来るはずないだろう？」
島は言った。
「ここは軍隊だぜ？」
モニターを見つめながら、泉は唇をかみしめた。
「私だって――――っ！！」

さて。肝心の袴子だが……。

「うっわーっ！」
コクピットで感嘆の声を上げていた。
「わ、わ！シミュレーターとは全然違う！こ、これ、触っていいのかな」
袴子は感動と興奮に震える手で、恐る恐るコントローラーユニットに手を乗せた。
ふうっ。
全身がリラックスする。
不思議な安心感が袴子を包み込む。
「はぁっ……」
メサイアと一体になったようなこの感覚を表現する言葉を、袴子

は思いつかない。
『風間候補生』
「は、はい！風間！」
祷子は、慌ててシートから起きあがってＨＵＤに頭をぶつけた。
『起動開始して下さい。他の方はすべて終了しています』
「いたたっ……えっ？」
パッ。
無意識につけたモニターの向こうでは、神城三姉妹が同時に騎体を立ち上げるという離れ業を演じてのけていた。
「あら。さすがね。あの子達」
『風間候補生っ！』
耳がきーんっとするほどの大声がスピーカーから届く。
『何をしている！さっさと立ち上げんか！』
二宮からの罵声に近い命令だ。
「はっ、はい！風間候補生、１０号機、起動開始します」
祷子は、目にも止まらぬ早業でコンソールを操作し、
「システム・オールグリーン、１０号機、起こします」
『ち、ちょっと待ってください！』
ＭＣからの止めが入ったのは、少し遅かった。
『コクピットの仕様が違うんです！説明を――きゃああっ！？』
グンッと来る感覚を経て、１０号機は立ち上がった。
仕様が違う。
つまり、全く特性が違うことを意味する。
全く慣れない騎体を動かすのは至難の業。
だからこそ、シミュレーターがある。
それなのに、１０号機は、あっさりと、全く無駄のない動きで立ち上がった。
周囲で見ていた者達からも感嘆の声があがった。
「１０号機起動完了。ＭＣの……えっと？」
『水城中尉です』

「中尉、仕様、教えて下さい」
『もう、教えることないです』
「そうなんですか？。それでは、今日はよろしくお願いします」
『は、はい……もう止めたいんですけど』
「えっ？」
『なんでもありません。候補生、こちらの指示に従って行動して下さいね？』
「はい……あっ、それと」
水城は褄子の言葉に絶句した。
『弥生ちゃんにも伝えて下さい。一緒に頑張ろうって』
グゥオオッ
一瞬、エンジンのトルクが高まった。
褄子がエンジンのスロットルを開いたのかもしれないし、そうではないのかもしれない。
ただ、水城はＭＣとして、その音がまるで褄子の言葉を喜んでいるように聞こえて鳴らなかったのは、事実だ。

「よし……これで全騎立ち上がったな」
二宮は無線機のレシーバーを掴んだ。
「各騎、これより作戦内容を伝える」

メサイアの動力源。
Ｌクラス魔晶石エンジン。
魔晶石を動力とする、Ｌクラスに分類される魔晶石エンジンが魔法擬似生命体である「精霊体」を産み出すことはこの世界では常識。

そして、精霊体の自我は、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の命じる内容を理解出来、かつ、メサイアの全てを管理出来る、一種のコンピューターとして機能するに留められるのが普通だ。
兵器として、いや、道具として当たり前のことなのだが――

それを真っ向から否定してのける国がある。

それが、大日本帝国。

つまり、皇室近衛兵団だ。

少なくとも、美奈代は、そう、教えられていた。

「……」

スピーカーからの二宮の指示が響く雛鎧（すうがい）のコクピットで、美奈代は顔を引きつらせていた。

どうして？

何故？

スピーカー越しの教官からの指示が、耳に入らない。

耳にはいるのは、自分の心からの問いかけだけ。

何故？

それだけだ。

「……」

「……」

興味深そうに自分を見つめてくる二つの瞳。
それを前にして、他に湧いてくる言葉なんて、ない。
小さな女の子が、操縦者を守る最終装甲を兼ねたモニターカウルにちょこんと座って、自分を見つめているのだから、無理もない。
「ね、ねぇ」
美奈代はようやくのことで女の子に語りかけた。
年の頃は4歳くらい。
大きな目とやわらかそうなほっぺた。
幼稚園児の着るような白いスモック。
「？」
小首を傾げる愛らしい仕草。

どう見ても、メサイアという兵器の中にいるべき存在じゃない。

大体――
「あなた……どこから入ってきたの？」
閉鎖された狭いコクピット内に、例え子供といえど、潜んでいられる場所なんてない。　違う。
美奈代の目には、少女が突然、目の前に現れたように見えた。
「？」
少女は、意味がわからないらしく、また小首を傾げた。
「泉候補生」
島教官が言った。
「あいさつ位しておけ」
「あ、あの――」
「ああ……貴様等は、まだ精霊体に会ったことがなかったな」
「精霊体？これが、そうなんですか？」
「これじゃないもんっ！」

女の子は、頬を膨らませて言った。
「私は“さくら”だよ！？」
びっくりして声を失った美奈代に、教官がフォローするように言った。
「近衛が、メサイアや飛行艦の魔晶石エンジンに、疑似人格を持たせているのは習ったな？」
「は、はい」
美奈代はテキスト通りに答えた。
「魔晶石エンジンは、命令を兵器に伝達させるだけでは精霊体の本来持つ力が存分に発揮されることはない。疑似人格を与えることで眠っているパワーを引き出す事が出来る」
「５０点だ」
教官の評価は厳しい。
「共に戦うパートナーとして疑似人格を位置づけ、自発的な協力を受けることで、人類には引き出すことが出来ない、魔晶石の眠れる力を引き出させるのが、最大の狙いだ」
――それを言う前に点数つけないでよ。
と、美奈代は内心でそう毒づいた。
「さて――」
教官は言った。
「“さくら”？状況は？」
「はぁい！」
少女は手を挙げて、自信満々に答えた。
「ママに聞いてください！」
「――殴るぞ？」

作戦命令。
それを完全に聞き逃した美奈代は、周囲に合わせる形でメサイアを動かすハメになった。
どんな命令が下されているのか、まるでわからない。

「命令はすでに伝達された」
恐る恐る訊ねた教官からは、後頭部へのバーの直撃と、そんな返事しかもらえなかった。
「さくら……ちゃん？」
「“さくら”、黙っていろ」
教官からそうクギを刺された精霊体――“さくら”は、救難信号を送る美奈代を、気の毒そうな顔で見るだけだ。
「牧野中尉……どうした？」
先程から、何の報告もしてこないＭＣ（メサイア・コントローラー）に教官は問いかけた。
普通ならそろそろ、何か情報があってもいい頃だ。

「島教官、騎体バランスに気をつけてください」
「バランス？――こっちでは何も感知していない。動作も問題ない」
「騎体総重量が予定と異なっているんです」
「何？何か積んだか？――どれくらいだ？」
「予定重量より、４ｔも」
牧野の言葉を遮るように、“さくら”は顔を真っ赤にして怒鳴った。
「わたし、そんなに太ってない！」
「４トンって、太る太らないの問題じゃないと思う……」
という美奈代の呟きは正しい。
「あのなぁ。“さくら”」
教官は、怒る“さくら”をなんとかなだめようとして失敗した。

ばかぁっ！
チビっ！
飲んべえ！
貧乳！

……。

コクピット内では、唖然とする美奈代を後目に、教官と女の子の怒鳴り合いが続く。

それは親子喧嘩というより、子供同士のケンカだ。

「あの……私、どうすればいいんですか？」

「命令通りに動けばいい！おい、このチンチクリン！」

「鏡見れば！？」

「いい加減にしなさいっ！」

コクピットを制圧したのは、ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）にいる牧野中尉の一喝だ。

「何をやってるんですか！」で、始まった説教が二人の動きを封じるコクピット。

美奈代は外に助けを求めるように、モニターの外を見た。

他の騎はすでに移動を開始している。

肩のナンバーから、斜め前方を移動中なのが宗像騎だと知った美奈代は、そっと宗像騎との通話を試みた。

『ん？どうした？』

通信はクリア。ＨＵＤ（ヘッドアップ・ディスプレー）の片隅に設置された通信モニターに、宗像の顔が映し出される。

美奈代は小声で訊ねた。

「宗像、すまんが」

『どうした？』

「後ろのノイズは無視してくれ。どんな命令を受けている？」

『――右端の戦況確認ボタン一つでわかることだぞ？』

「あっ」

基本的なミスに気づいた美奈代は、赤面しつつボタンを押した。

「スマン……このまま前進、前方に潜む敵を撃破」

『典型的なお役所命令だな』

「成る程？」
しかし、そこで美奈代はひっかかった。
「風間はどうなる！」
そう。
風間の乗るメサイアは単座騎。
教官なんて乗っていない。
戦闘に巻き込まれれば最悪――
『私も心配だ』
宗像は真顔で頷いた。
『私のスイートハートがなぶり者にされるようなことがあれば……
そう考えただけで――』
「考えただけで？」
『濡れてくる』
背筋が寒くなる美奈代の前で、モニターの宗像は身をよじらせた。
『ああ――たまらん』
「……もう少し、普通に考えていいぞ？」
『私はめい一杯、普通だ――それと』
宗像は言った。
『直撃一回で12時間のメシ抜きだ』
「へ？」
『砲弾だ』
「実弾か！？」
『砲撃は前哨戦ってことだな。メサイアの装甲の前には無意味だが、
どっちにしても我々を嬲るつもりだろうさ』
「第一分隊は、訓練校を代表するエリートだぞ？」
美奈代は、まるで宗像に抗議するように言った。
「そのエリートが、我々のような女を嬲るというのか？」

『こういう時だけ、女を出すのは、女の狡さだ――――そうだ』
「誰が言った？」
『染谷』
「……」
『あいつ、面白いぞ？』
「……」
宗像は、美奈代の顔が曇ったことに気づかないまま続けた。
『隊長のツラ被っている時は冷血漢を装っているが……いや、それがないと馬鹿正直というか、単なる世間知らずというか……』
宗像は、からかうように、モニターの向こうで肩をすくめた。
『どっかの誰かと同じだ』
「……随分、よく知っているな」
『最近、よく話すからな――――知っているか？あいつ、仕事以外では、かなりの口べただぞ？』
「……そうか」
『――――どうした？』
「……宗像、お前」
美奈代は、楽しげに染谷のことを話す宗像に、
「お前、染谷とつき合っているのか？」
そう、訊ねた。
訊ねた途端、胸がちくりと痛んだ。
毅然とした態度で分隊を指揮する染谷は、凛々しさでは他分隊の男子候補生からも定評がある。
将来を渇望されるエリートの卵。
そう言われれば、美奈代はすぐに染谷の顔を思い出す。
美奈代は、分隊の指揮に自信を失いかけた時、染谷の顔をすぐに思い出すことにしていた。

――こういう時、染谷候補生ならどうしていたか。

美奈代は、いつだって、そう自問自答して問題を乗り越えてきた。

染谷は、美奈代にとっていつだって分隊長としての理想であり、尊敬や憧憬の対象である。

だから、いつでもその姿を追い求めていた。

追い求めていたからこそ、同期の女性候補生達の中では、彼の魅力を自分が一番分かっていると、美奈代はそう思っている。

それが、どういう気持ちか、美奈代はもう自覚しているのだ。

自分がその自覚を口にする資格がないという思いこみと共に。

その自覚を胸に、美奈代はモニターの向こうの宗像の顔を見る。

宗像美沙。

それは、宝塚スターで十二分に通用する美貌の持ち主だ。

自分のような平凡な顔ではない。

凛々しい染谷のような男の横に立つのは、こういう美人こそ相応しいんだろう。

そう思うと、美奈代はとても惨めな気分になった。

『あのな……どうしてそうなる?』

宗像はあきれ顔というより、むしろ心底嫌がった顔だ。

『私がどうしてあいつと?』

「えっ?ち、違うのか?」

『話せばつき合っているというのか?小学生かお前は』

「だ、だけど……」

『少なくとも、あいつの意中は私ではない。むしろ、私にその相手のことを教えてもらうために、私に接触した』

「あ、ああっ！」
美奈代はポンッ。と手を叩いた。
「風間か！」
『お前……どうして』
「な、何だ？早瀬か、それとも柏だったか！？」
『どうしてお前は自分のことになるとこうも鈍い』
「わ、私が何だと？」
「いずれ分かる」
クックックッ。
美奈代はレシーバー越しのその音が、宗像の笑い声だとようやく気づいた。
「宗像――楽しそうだな」
『ん？』
「状況を楽しんでいるようにも見える」
宗像は、心底楽しそうに答えた。
『そうだ。――全ては、怯えるためのものじゃない。楽しむためものだ』
「だけど」
『とりあえず、今は第一分隊との勝負に全力を注ごう。泉は染谷を相手に楽しめ』
「わ、私がか？」
『分隊長同士で戦って、分隊長に仕留められれば、染谷も分隊長としてのメンツが立つ。メサイア戦の後は』
「後は？」
『染谷騎のコクピットに潜り込め――優しくしてもらえ？』
「どういう意味だっ！？」
『泉が女になっている間に私はゴミ相手だ』
「だからっ！」
『事故に見せかけてあいつら何人殺せるか、とっても楽しみだ』

戦術モニター上に反応が出たのはそれからすぐのことだ。
「おっ。連中来たな」
美奈代達の移動先に立つメサイアのコクピットの中。恩田がやや上擦った声で言った。「染谷さん。レーダーに反応有。第七分隊、来ましたっ！」
「あん時の恨み晴らしてやる。宗像は俺が殺るっ！手を出すなっ！」
恩田の息巻いた声が通信機に響く。
「少しは落ち着け」
恩田騎の隣に立つメサイアを駆る染谷の冷え切った声に、皆が黙った。
「もう少し、様子を見ろ。相手は初めて歩いているんだ」
「で、ですけど」
恩田はせわしなくコクピットの計器類に目をやる。
「お、俺達だって、単騎操縦はまだ１０時間も」
「戦闘機動は単独で出来ると豪語していただろう？」
染谷は楽しげに言った。
「勝てるよ。恩田、あの時の仇を忘れたか？」
「う――討ちたいです」
「なら、もう少し待ってくれ」
「何かあるんですか？」
「……サプライズは用意してある」
染谷は楽しげに頷いた。
美奈代達が移動を開始して１０分後。
そろそろ、演習地は山から森へと景色を変えようとしていた。

ピーッ

コクピットに警告音が鳴ったのはその時だった。

「？」

「何の音だ？」

教官の質問に、美奈代は答えた。

「実体弾の飛来警告です！」

後頭部に見えない手を展開しつつ、美奈代は答えた。

「有効範囲は？」

「約３０キロ！」

「どうする？」

「移動、もしくは――――っ！！」

ドドンッ！

爆発音が雛鎧を揺るがしたのは、まさにその時だった。

ガンッ！

美奈代は後頭部の痛みに気を失いそうになった。

「このバカもんっ！」

教官が怒鳴る。

「いちいち答えてるヒマがあるなら、さっさと動かんかっ！」
「も、申し訳……」
こぼれる涙を堪えながら、美奈代は騎体の状況を確かめた。
雛鎧は、とっさに片膝をついてバランスをとりつつ、シールドで頭部をガードする姿勢をとっていた。
教官が自分から瞬時にコントロールを奪い、とった姿勢であることは、美奈代にはわかる。
「砲撃の後、どうするっ！」
「戦闘態勢に」
雛鎧を立ち上げようとして、美奈代は騎体が動かないことに気づいた。
「――――えっ！？」
コントロールユニットを操作するが、騎が全く動こうとしない。
“さくら”！どうしたの！？」
思わず怒鳴る美奈代に、“さくら”は半分、泣き顔で言った。
「腰が抜けましたぁ……」
「このバカっ！」
「バカもんっ！」
ガンッ！
美奈代の後頭部を再びレバーがどついた。
“さくら”！こんなことは山ほど経験してるはずだ！」
ガンッ！
ガンッ！
ガンッ！
教官が怒鳴るたびに、美奈代の後頭部に激痛が走る。
「いい加減にしてくださいっ！」
美奈代はたまらずに怒鳴った。
「ここは自分ではなく、“さくら”を叱ってください！」
「叱ってるだろうが！」
「レバーを押さないで下さいっ！」

「クセだ、気にするな！」
ガンッ！
「ううっ……」
「泉候補生」
「グスッ……はい？」
「１２時間、メシ抜き確定だ」
「そんなぁ！」
軍隊の数少ない楽しみ。
それは、メシと睡眠。
冗談抜きでそういうものなのだ。
それを取り上げられた美奈代は泣き顔で叫んだ。
「あんまりですっ！」
「あーあ。俺達はこの後、屋台のおでんで打ち上げだぁ」
教官は晴れ晴れした声だ。
「屋台のおでんって、おいしいんですか？」
さくらは興味津々で訊ねた。
「ああ。あれで一杯は最高だな」
「私も食べたいですぅ」
「ど、どうやって？」
「――――はぅぅぅっ」

『泉』
モニターに宗像が映る。
『状況、わかってるな？』
「状況？」
『……泉』
タダでさえ低い宗像の声のトーンが落ちた。
『後でシメるぞ』
「すまんっ！」
美奈代は戦況モニターを開いた。

周辺の地形図と自分達の現在位置が映し出される。
全騎が、今は無事。
そして――
「丘陵の向こうに１０騎」
『それだけじゃない』
それは、初めて聞く宗像の声。
宗像は緊張していた。
『教官達が状況を変えた』
「状況を？」
戦況モニターの上。
そこに映し出された最新情報にようやく気づいた美奈代は、我が目を疑った。
「被弾により――教官全員戦死！？」
思わず振り返った美奈代は、後ろで知らん顔を決め込んでいる教官の顔を見た。
「い――」
生きている！
そう叫びそうになった。
それはあくまで仮定の話。
現実ではない。
「パパ――死んじゃったの？」
“さくら”が心底嬉しそうな顔で美奈代に訊ねた。
「い、一応、そういうことになっている」
「やったぁ！」
ガンッ！
美奈代は、バーの一撃をモロに喰らった。
「な――」
美奈代はその痛みを忘れたように怒鳴った。
「何考えてるんだ！ウチの教官共は！」
ガンッ！

「――“さくら”っ！」
「は、はいっ！」
「これ以上バー使ったら、後ろを射出しろ！射出確認後、ＭＬ（マジックレーザー）で狙撃！」
美奈代の目は本気だ。
「殺せっ！」
「いいんですか！？」
“さくら”は美奈代の命令に、目を輝かせた。
「いいっ！」

ピクッ
バーに手をかけたものの、躊躇しているのが、後頭部の感触でわかる。

「例え教官といえど、死人から殴られるいわれはないっ！」
「――あーあ。お姉ちゃん、ブチギレ」
“さくら”は青くなったり赤くなったり忙しい教官に言った。
「パパが悪い」
「……何もしてない」
「しないから悪い」
「――ったく」
美奈代はブチブチと言い続けた。
「初の実騎訓練だぞ？普通なら歩行だの基礎的なことやるべきだ。シミュレーションと現実のギャップを」
『泉っ！』
今度は早瀬からだ。
『何してるんだよ！早くどうするか決めてよ！』
「――えっ？」
『命令、読んでないの！？』
『私達は、自力であの敵を撃破しなくちゃいけないの！美奈代が隊

長よ！？』
「なっ！？」
『美奈代さん』
美晴だ。
『しくじったら、コスプレ接待どころか、４８時間のメシ抜き。卒業までの外出止めですよ？』
「死ねというのか！」
『それはそれで言い過ぎだけど……』
「――――数はこっちの方が上だ！」
美奈代は言った。
「１対３で行く！１騎に対して３騎！それなら最悪五分まで！」
「１分にもならん」
後ろの教官が、ぽつりとそう言った。
「パーティを組め！」
美奈代はそれを無視した。
「弱いのはわかってる！」
そして、怒鳴った。
「弱者こそが強者を倒すことが出来る唯一の存在だ！無様でいい、格好悪くていいから、勝ってメシ喰ってフロ入って寝るぞっ！」
美奈代は周囲が驚くほど張りあるのある声で作戦を告げた。
「第一分隊は、染谷候補生一人で成り立っている！彼さえいなければ、プライドばかりの烏合の衆に過ぎない！他の連中には目もくれるな！」
「そ、それでいいの！？」
「いいっ！私と宗像で前衛！美晴と早瀬で中衛！風間、後方で待機！」
『えっ？』
祷子が驚いた顔をモニターに映した。
『いいんですか？』
「危険な時は支援に回れ！――――いいかっ！」

美奈代は気合いを込めて怒鳴った。
「教官達は気にするな！ここで我々がダメになれば、候補生を無駄死にさせたとして、教官達の年金をパーに出来るっ！」

ギクッ！
後ろからそんな音がした。
それを無視した美奈代は続けた。

「降格に減俸、それが理由の家庭崩壊！」

ギクッ！

「全部無視しろっ！教官は無視だっ！どうせ我々の金じゃないっ！」

ギクッ！

「日頃の恨みを晴らせっ！――中尉、染谷騎はどれかわかりますか！？」
「マーカー、C騎です」
MC（メサイアコントローラー）の牧野中尉から声が入る。
「他騎同様、第一種装備の「幻龍」です」

MDIJα－015「幻龍」
近衛騎士団のメサイアの代名詞。
雛鎧のベースとなった「角龍」の後継騎。旗騎「水龍」の流れも加わり、パワー・装甲。共に「角龍」より格段に上。
性能では――

「指揮官騎の信号発信中」

『律儀なのか誘っているのかわからないが……間違いなく、そいつが染谷騎だ』
宗像は言った。
『あのお山の大将がいなければ、あとは烏合の衆に過ぎない』
「……わかった。“さくら”」
美奈代はコントロールユニットを握りしめながら訊ねた。
「いける？」

無意識に自分の口から出た言葉に、美奈代は頷いた。

そうだ。
行くしかない！

美奈代はそう決意した。

勝てるはずはない。

それは明らかだ。

だが、
いつだって、
どんな時だって、
絶対勝てるなんて、誰にも言えないんだから。
勝てないんじゃない。
負けないんじゃない。
私は、違う！私達は、やることをやるんだ！

「はいっ！――――“マスター”！」
“さくら”は目を輝かせ、楽しげに言った。
「いざとなったら私をかついで逃げて下さい！」

「自重何百トンあると思ってる！」
「ううっ。ヒドい！。女の子に体重の話するなんて……こんな色白のカワイイ女の子に……」
「色白って――ペンキだろうが」
やりとりを聞いていた教官がポツリとそう言ったのを、“さくら”は聞き逃さなかった。
「ペンキだなんて、ひどいです！ＴＰ－４５Ｗ特殊ペイントです！。ワックスだってかかってます。全身のお化粧代だけで、パパの○○ハダシ、ミジメすぎる薄給よりかかってるんですよ！？」
「ちくしょぉぉぉっ！」
その一言に、教官はキレた。
「それでオレは家族４人養ってんだ！
長女は予備校生で二度目の大学受験！
次女は中学、長男は幼稚園だ！
おれの悲哀を……家族のために身を粉にしているオヤジの悲哀を……！！
ぬがぁぁぁっ！！
リーマンナメんじゃねぇぞっ！　このクソガキぃぃぃっ！」
「わーんっ！児童虐待で通報してやるぅ！」

「……」
いい所まで行っていたのに。
そう思った美奈代は、決意を再計算した。
「前衛２騎で血路を開く、それでいいなっ！？」
結局、やるしかない。
再計算はそう結論づけた。
『待て』
止めたのは都築だ。

『全騎、回線を隊内へクローズ』
「都築？」
『３騎同時なんて教官達はとうにお見通しだ』
「だから――」
『だから』
どこか楽しげに都築は言った。
『予想もしないほど、卑劣に行くんだよ――俺達は殺し合いをしてるんだ。オリンピックに行くわけじゃねぇ』
「卑劣？」
『ああ――』

都築は作戦を話した。

『クックッ……成る程？』
聞き終えた宗像が喉を鳴らして笑った。
『それはいい』
『こら都築っ！』
都築の後ろで教官が怒鳴るが、
『スミマセン。死人は発言しないでください。規則ですから』
『都築っち！』
一葉は興奮気味だ。
『それならなんとかなるかも！』
『だろう？』
『で、ですけど』
山崎はどこか不安げだ。
『相手は歴戦。しかもメサイアは弾丸すら避ける』
『こっちも同じだ！』
都築は怒鳴った。
『歴戦かどうかより、歩き回れるかを心配するんだ！バランスはＭＣにサポートを頼め。ＭＣが使えなければ自爆装置作動させてやれ

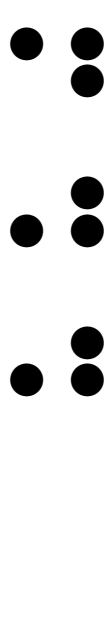
ばいい！』
『ロマンですね』
『風間、わかってるな』
『ふふっ……自爆はロマンです』
『で、誰がやるのよ？』
早瀬も興奮気味だ。
『決まってる』
美奈代は言った。
『ここから一気に敵前３００まで疾走。その中で最もバランスがいい者がやれ。各自、そこまででメサイアに慣れろ』
『たった２キロの疾走でメサイアに慣れろぉ？』
早瀬のため息混じりの声を否定する者はいない。
だが、状況が状況だ。
『やるしかないよねぇ』
「早瀬、そうだ」
『じゃ！』
双葉が言った。
『美奈代っちと都築っちのカップルの発案、早速実行っ！』
「よしっ！』
美奈代は騎を動かしかけて、そのコトに気づいた。
「まっ、待て双葉っ！何だそのカップルってのは！」
『あーっ！美奈代っち顔真っ赤！』
「光葉！う、うるさいっ！」
『とにかく行くぞっ！』
都築は怒鳴った。
「敵、射撃開始！」
『メシ抜きは御免だぞ！』
「――“さくら”っ！」
「バランスに注意して！――全ウェポン、セフティ解除！各部コンバットモード引き上げ！マスターフレーム、オン！各部同調良好

！――――行けるよっ！」

“さくら”の報告に力強く頷いた美奈代は雛鎧を前進させた。

１０騎のメサイアが、大地を蹴った。

敵――――第一分隊３騎の陣形は、典型的なくさび形陣形だ。



【注：ＡＢＣ＝敵騎　●友軍騎】

前面に展開する敵を相手に、３騎が臨機応変に対処するためには、横一列に仲良く並ぶ事自体がありえない。

だが、それこそが、今回の参謀役である都築のねらい目だった。

美奈代達は、３騎一組で突入を開始した。

前方に２騎。後方に１騎。

前方の２騎は剣を抜刀していない。

あくまで楯を前にするだけだ。

コクピット内部は慣性制御が効いているため、振動をほとんど感じないが、走るたびに巨大な針葉樹の枝が揺れ、葉や残雪が落ちていく。

『敵前方、２００メートル！』

「いくぞっ！」

美奈代は、コントロールユニットを操作して、隣の柏騎から何かを受け取り、同時に柏騎が美奈代の騎から何かを受け取った。

そして――

「あいつら、何を考えている？」

二宮は戦況モニターから視線を外さずに首を傾げた。

前衛2騎がぴったりと寄り添うように疾走する。

しかも、抜刀していない。

あれでは戦えない。

せいぜいが、

「シールドアタックでもかけるつもりか？」

二宮は各騎のステータスモニターに視線を移した。

シールドアタックとは、文字通り、剣の代わりにシールドで相手を殴りつけ、エッジで斬りつける技のこと。破壊力のわりにメサイアの関節パーツに負荷がかかるため、ほとんどの場合、緊急用とか、最後のあがきに使われるような技だ。

ステータスモニターに映し出される各騎の状況はグリーン。

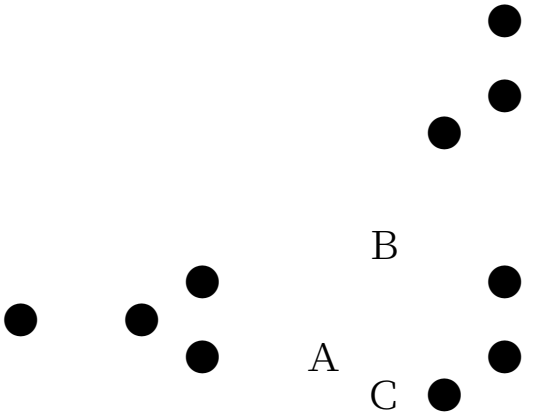
使用されている兵装が赤く表示されるモニター上で、実際に赤く表示されているのは、１０騎のうちわずか3騎。

「剣でやりあっても勝てないと判断したのか？」

情けない！

二宮がそう言いかけた時。

９騎が動いた。



【注：ＡＢＣ＝敵騎　●友軍騎】

逆楔陣を形成していた３パーティのうち２つが大きく迂回、楔形陣形をとる敵の背後に回り、敵を包囲する形をとったのだ。

「典型的なパターンか……」

何をしてくれるのかと期待していた二宮は、軽く失望した。

これで全騎同時突入。シールドで敵を押しつつ、後方の１騎で仕留める。

そういうことだ。

二宮は残念そうに呟いた。

「そんなもの、何度経験したと思っている……」

「何だあいつ等？」

Ｂ騎担当の恩田は、それでも候補生達の展開の速さに感心していた。

もしかしたら、俺より操縦が上手いかも。

立ち上げるだけで四苦八苦した頃を思い出し、恩田は、慌ててその考えを否定した。

メサイア初乗騎だというのに、やや荒削りだが、それでも自分の手足のようにメサイアを操っている。
そんなのは偶然に、そう、偶然に過ぎないんだ！
何しろ、俺達はエリート候補生の部隊なんだぞ！？
あんなドン亀部隊とは違うんだ！
「そ、染谷さん、どうします？」
「やらせてみようじゃないか」
染谷は楽しげに言った。
「どんな楽しいマネをしてくれるんだろうね」
染谷は、美奈代達の突撃を前にしても、泰然自若とした様子を崩さない。

「前方雛鎧2騎、展開」
「ん？」
MCからの報告。
彼の騎の前で、シールドを押し立ててくる2騎が左右に割れた。

●

●

C

●

【注：C＝敵騎　●友軍騎】

「どういう？」
染谷達には、その意味がわからない。
このままでは、シールドで自分を押し込むことは出来ない。
むしろ2騎が自分達を無視しているようにさえ思える。

（戦術も知らない女のお遊戯か？）
染谷は横を抜けようとする候補生騎2騎を何もせずに見送ることに決めた。
左右に分かれ、一斉に攻撃してくることもありうるが、そうなればなったでいくらでも対処の方法はある。
「子供の頃からシミュレーターをゲーム代わりにしてきた僕に勝てるかな？……どれ」
モニターの向こうで、雛鎧が左腕でシールドを構えつつ。何故か右腕が何かを操作するように軽く上下した。

その何でもない動きが、彼の騎士としての本能をして、彼に何かを警告した。

危険だ！

「何？――――ぐっ！？」

ビィィンッ！

騎が後ろに押されたのは、その瞬間だった。
すさまじい力が幻龍にかかっている。
だが、本来、その力をかけるべき2騎はすでに後方に下がっている。

「なんだっ！？」
何か、見えない力に引き倒されそうになる自騎を何とか立て直そうとするが、騎体を後退させなければどうしようもない。
その彼の目の前に、剣を構えた雛鎧が襲いかかってきた。
「何をしたっ！？」

「ワイヤーだと！？」
二宮がそれに気づいたのは、武装情報ではなく、偶然に装備情報に赤い点滅を見つけたからだ。
搦座したメサイアの回収等に用いるために、メサイアにはワイヤーが取り付けられている。
点滅は、そのワイヤーが展開していることを告げていた。

それで二宮は、奇妙な形で押される敵騎に何が起きたか理解できた。
「成る程？」
力業だが、損害を少なくできる点で加点ものだ。
敵はワイヤーを切断するか、ワイヤーから逃れるために後退を余儀なくされる。
それこそが、候補生達のねらい目なのだ。
「ここまでは褒めてやるべきか」
短時間でこういう作戦を展開するには、臨機応変の発案と、身内で連携できる信頼関係がなければならない。
それを彼女らは現実にやっている。
二宮は、端から見れば気色が悪いほど顔を緩めているのに気づいていない。
「うん――――さすが私の教え子だ♪」
その二宮に、背後に立っていた別な教官の声がかかった。
その声は呆れていた。
「ここまでですよ」

「やった！」
美奈代は歓喜の声を上げた。
美奈代と美晴、前衛2騎でワイヤーを二重に持ち、下からすくい上げる要領で敵騎の腰にワイヤーを押しつけ、後方に押しやる。
狼狽し、後退する敵に対し、余裕を与えることなく、一気に剣の一撃を加える。
それが都築の発案だ。
敵騎は完全に押され、バランスを崩している。
その敵騎に今、都築が襲いかかった。

●富士学校編　第八話

その敵騎に今、都築が襲いかかった。

「行けっ、都築っ！」

美奈代は思わずそう言ってしまった。

が――

ガンッ！

「――えっ？」

その鈍い音と同時に、宙を舞ったのは、

幻龍に突き技を喰らわそうとした雛鎧。

都築騎だ。

ドォォォンッ――――！！

吹き飛ばされ、宙を舞った都築騎が地面に叩き付けられるまでが、

もどかしいほどゆっくりとしていたように、美奈代には思えてならない。

「――――都築っ！」

美奈代の悲鳴に近い叫びの後、各騎から報告が入った。

『都築っちがやられた！』

『フランケンもだ！』

宗像は無事だ。

「神城っ！そっちは！」

『こっちは全騎無事！』

長女の一葉が答えた。

『紙一重で光葉が避けた！』

「よくやった！――――間合いをとれ！」
雛鎧を後退させながら、美奈代はちらと都築騎を見た。
大地に大の字になって倒れる都築騎はぴくりとも動かない。
「――――折角、惚れ直してやったのに」
ああもあっさりと吹き飛ばされるヤツがあるか！
美奈代が、都築騎の生命反応があることを確認した時だ。
「“マスター！”」
“さくら”が悲鳴に近い声を上げた。
「敵、動いたよ！」
「なっ！？」
そう。
第一分隊の逆襲が始まったのだ。
「下がれっ！」
プライドを傷つけられた彼らの手には今、エモノが握られている。
相手が女だあろうが情け容赦はないはずだ。
不運なことに、真っ先に襲われたのは美晴騎だ。
『――――ヒッ』
レシーバーに美晴が恐怖に息を飲んだ音が聞こえた。
「柏っ！死にたくなかったら戦えっ！」
『ヒッ……ヒャァァァァァッ！』
錯乱したような声と同時に、美晴騎が抜刀。
剣とシールドを装備する敵騎に突き技をかけた。
どうしても一番動きが鈍くなる腹部を狙った低めの一撃。
だが――――

ガンッ！

美晴騎は突き技の体勢のまま、横に吹き飛ばされた。

『グウッ！』

「柏ぁっ！」

何が起きたか？

美奈代にはそれがわかった。

楯だ。

敵は、美晴の突き技と交差するように楯を繰り出し、丁度、片刃の剣の下へ楯を突き入れた。

そして、楯表面の丸みを利用して剣をそらせ、体勢を崩した美晴騎にショルダーアタックをかけたのだ。

普通なら剣やメイスの一撃が入る所。

もし、その普通が行われていたら、美晴は今頃、靖国行きの片道切符を手にしているだろう。

「ベ、ベテラン並か！？」

どうする？

その疑問に、答えが出てこない。

そんな美奈代の耳に通信機越しの声が聞こえてきた。

『前の雛鎧、泉候補生か？』

染谷だ。

「――――は、はい」

『どう？ハンデをあげようか？』

「それ、騎士道精神に則っているつもりですか？」
『ご婦人には親切にっていうのがモットーなんだ』
「一応、断っておきますが、今、候補生がブッ倒したのは立派なご婦人ですよ？」
『騎士である以上、全力でお相手するのが親切。違う？』
「詭弁を！」
『まぁ落ち着いて聞いて欲しい。泉』
「――――何だ」
『一対一で勝負しないか？』
「一対一で？」
『ああ。君が勝てば、部下に攻撃を止めるように言ってやってもいい』
「……貴様が勝ったら？」
本来なら、“候補生”とでもいうだろう。
だが、今の美奈代にとって、それさえ恐ろしく丁寧すぎる気がした。
『僕のモノになって欲しい』
「……」
『……』
「……」
『……何故、反応がない？』
「……は？」
『告白されて、反応がそれ？』
染谷の声は、明らかな落胆の色を含んでいた。
『か、かなり傷ついたけど……』
「ち、ちょっと待ってっ！」
美奈代は怒鳴った。
「い、今のどこが愛の告白ですかっ！」
『私のモノになれと言ったけど……え？ち、違うのか！？ダメなのか！？泉候補生には、これでいいって！』

『泉っ！』
息巻いたさつきが怒鳴った。
『こんなヤツのペットだかオモチャだか奴隷になったら、許さないからね！？』
「露骨に表現するなっ！」
『ど、どういう扱いがお望み？』
「完全無関係っ！」
『それは――』
染谷は冷たく笑った。
『完全に嫌われているようだ』
「貴様を好きになる物好きがいるものですかっ！」
『なら、男らしく力ずくだな』
染谷騎が剣を抜いた。
模擬刀とはいえ、下手に命中すれば無事では済まない。
「っ！」
『第一分隊各騎、泉騎は私のエモノだ。手を出すな』
『了解っ！』

「“マスター”！」
“さくら”が言う。
「どうするの！？」
「やるしかないっ！」
美奈代は口ではそういいつつ、自問した。

どうやって？

あんな器用な技をかけてくるヤツ相手にどうやる？

装備は剣――長刀2本と短刀4本、そして楯。
MLは使用出来ないから――

美奈代は即座に雛鎧の武装を頭に思い浮かべた。

――自分でも勝てそうな武装が、ない。

「褌子じゃないが、スペシウム光線くらい欲しいな」
「あれだって、殴ったり蹴ったりした後だよ？」
“さくら”が言った。
「よく知っているな」
ん？
殴ったり、蹴ったり？
――そうか。

ガンッ

美奈代は突然、剣を鞘に収めた。
「“マスター”!?」
「泉候補生!?」
“さくら”と牧野中尉がほぼ同時に驚きの声を上げた。
「戦闘放棄か?」
後ろで教官が呆れたような、見下げたような声を上げた。
「それとも、本気でベッドの中に戦場を移す気か?」
「……剣が必要ないだけです」
美奈代は言った。
「剣では勝てませんが――せめて五分まで!」
美奈代は雛鎧のシールドだけを構えた。
「泉」
そんな美奈代に、教官は鋭く言った。
「戦いは――甘くないぞ?」

無論、戦っているのは美奈代ばかりではない。
この状況下で、第一分隊相手に五分以上に渡り合っているのは――
――
ギインッ!

「――ちいっ！」
鋭い舌打ちと同時に、宗像は騎を急速後退させた。
「あれをしのぐか！？」
恩田騎には、数回に渡ってダメージを与えている。
だが、その全てが致命的なダメージとはなっていない。
打ち込み時のパワーの程度がまるでわからず、攻撃がどうしても中途半端になってしまうのだ。
「本気で潰し合いになるとは思えないが――」
目前の幻龍は、すでに肩部装甲を吹き飛ばされ、それでも剣の正眼に構えている。
「――気に入らないな」
「宗像候補生っ！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）の当麻中尉からだ。
「間合いを正確にとってください。突っ込みすぎです！打ち込みが負けてます！」
「了解！」
汗ばむ手でコントロールユニットを握りしめた宗像の目前で、早瀬騎が突入した。
「早瀬っ！」

「このぉぉぉぉっ！」
さつきは一気に恩田騎に襲いかかった。
先程の攻撃で、楯はすでに吹き飛ばされている。
防御が装甲しかない。
それがむしろさつきをふっきれさせていた。

シールドマウントが破損した左腕で剣を掴み、飛びかかりざまの一撃。

それがようやく恩田騎に命中した。

「やった！」

ドギィィィ！！

コントロールユニット越しに伝わる衝撃に、さつきは歓声をあげた。

「致命傷じゃありませんっ！」

MCの武藤中尉からの警告より早く、さつきは動いた。

恩田騎からの足を狙った一撃。

それを地面に剣を突き立てることで凌いださつきは、左腕の剣を恩田騎に突き立てた。　左肩にめり込んだ剣。

恩田騎が大きくバランスを崩し、よろめいた。

「このっ！」

ガインッ！

体がとっさに動き、シールドのエッジが恩田騎に叩き付けられた。

恩田騎はそのまま横倒しになり、ぴくりとも動かない。

「宗像っ！」

さつきが宗像の助太刀を求め、わずかに視線を恩田騎からそらした瞬間。

ビーッ！

鋭い警告音がコクピットに響き渡った。

敵、接近の警告音。

「――――えっ？」

それはわずか数秒にも満たないわずかな時間。

ほんの一瞬といえる出来事。

それなのに――――

「しまった！」

数は向こうの方が上。

一騎にこだわっていると、他の騎に襲われる！

それを完全に忘れていたさつきは、側面から迫り来るモニター一杯に映し出される敵騎の姿を、呆然と見つめるしかなかった。

「早瀬っ！」

早瀬騎が東騎のシールドアタックに突き飛ばされた。

シールドアタックは模擬戦でも最大レベルのダメージを与える危険な技だ。

――――教官が何とかしてくれるだろう。これが模擬戦でよかった。

宗像は舌打ちしつつ、どこかでその言葉、模擬戦という言葉に甘えている自分に気づいた。

確かに模擬戦だ。

だが、第一分隊がそれで手加減してくれるほど甘くないことは、経験が実証済みだ。

勝てる自信はないが、それでもやれないことはない。
宗像の中で、何かがそう囁いていた。

対峙する敵は、あの恩田だ。

「レズの分際でっ！女の分際でぇっ！」
恩田は警告音が鳴り響くコクピットで顔を真っ赤にして怒鳴った。

「この俺に、どこまで恥をかかせるつもりだぁっ！」
迫り来る宗像騎。
恩田騎は逆襲に出た。
宗像の初手を下に構えた剣でうち払い、振り下ろして勝敗を決めてやるっ！
ガンッ！
互いのパワーに任せた一撃がぶつかり合い、あとは力押しだ。
ギギギギキッ！
あちこちの関節から悲鳴が上がる。
「パワーは“幻龍（げんりゅう）”の方が上なんだよ！」
恩田は口元を歪に歪めながら思った。
後はパワーで押し切ればいい。
パワーで勝てるんだから――――！！

一方、
「バカめっ！」
宗像騎のブースターが光り、宗像騎は斜め後ろへ急速後退をかけた。
力の押し合う相手が突然いなくなった恩田騎が前につんのめった後、すぐに宗像騎に迫る。
「お見通しだ！」
宗像は突っ込んでくる恩田騎に完全に合わせて動いた。

ブースターの加速にまかせて接近する恩田騎が上段から振り下ろした一撃を宗像は、ブースター操作だけで難なくかわし、体を入れ替える要領で、恩田騎の背後に回った。

「しまった！」

焦る恩田が反転するより早く――

「ふんっ！」

宗像は恩田騎を突き飛ばし、騎体を急旋回させた。

ガンッ！

急旋回で回した雛鎧の左脚部が幻龍の頭部に命中し、頭部装甲がパーツをまき散らしながら吹き飛ぶ。

「回し蹴りだと！？」

後席の教官が驚きの声を上げたのを無視した宗像は、即座に恩田騎に斬りかかった。

人間同士なら脳しんとうの一つも引き起こしているだろうが、相手はメサイアだ。

装甲が少し吹き飛んだ程度でどうこうなる相手ではない。

地面に背から落ちた恩田騎は、ぴくりとも動かない。

宗像は、その恩田騎に止めを刺すべく、剣を構えた。

ブンッ！

先に動いたのは、恩田騎だ。

突然起きあがった恩田騎の横薙ぎの一撃は、胸部を押さえつけるために上げられた宗像騎の右脚部を切断。左脚部に半ばめり込む形で止まった。

「――しまっ！」

宗像はバランスを崩して倒れる騎の中で、剣を逆手に持ち直すべくコントロールユニットを操作した。

モニターに、急接近してくる“幻龍（げんりゅう）”がズームで映し出されるのを、宗像は祈るような気持ちで睨み付けた。

「こいつらっ！」

実際、第一分隊の3騎のうち、もっとも苦戦を強いられたのは、東候補生が駆るA騎だ。

東が接触した3騎――神城三姉妹騎は、完全に相手を翻弄していた。

東は、時間と共に焦りすら感じていた。

問題は、3騎の連携攻撃。

1騎が引くと見せかけて、他の2騎が動く。

かと思えば、3騎同時に撃ちかかってくる。

「こんな連携プレー、教本にもないぞ！？」

「双葉！行けるよ！」

東騎を狙い通りの場所に追いつめた一葉が言った。

「ここなら！」

『うんっ！』

『お姉！やっちゃおう！』

双葉・光葉共に損傷は軽微。

対する敵は、関節各部の発熱が激しい。
自分達が敵を追いつめているのは間違いない。
何より、敵をここまで追いつめた。

そこは山の切り立った斜面。

東騎は後退が出来ない。

そこまで追いつめたのだ。

後は――――

「奥の手、いくよ！」
一葉の号令で、３騎の雛鎧は一斉に東騎へ襲いかかった。

「ばかなっ！」
東だけでなく、後席にいた教官までもが、思わずそう怒鳴った。
３騎同時に襲われたことは山ほどあるが、これは初めてだった。
それは、３騎の機動。
完全にシンクロしているとしか思えないほど、一糸乱れぬ連携攻撃。
熟練の騎士を３人集めてもこうはなるまい。
それを、初めてメサイアに乗った三人の騎士がやってのけている？
そんな馬鹿な！
東が応戦するより早く、３騎の剣の切っ先は、エモノを捕らえていた。

「宗像騎、マーカーＢを撃破」

牧野中尉からの報告に、美奈代は心が躍った。
しかし――
「宗像騎、行動不能」
「早瀬は！？」
「――マーカーC、来ますっ！」
残るは目先の一騎のみ。

一騎でも助太刀が欲しい。
それが美奈代の本音だ。
残されたのは、風間騎だけ。

風間騎はとてもではないが投入できない。

美奈代自身、何度風間に救援を求めようと思ったかわからない。
だが、教官も搭乗していないような風間騎。
あのシミュレーター訓練万年ドンケツの風間騎。

とてもではないが、時間稼ぎ程度しか出来まい。

だから、美奈代は袴子に救援を求めなかった。

その美奈代の視界に、染谷騎が襲いかかってきた。

「どうするんだ！」
引きつった声の教官の声に、美奈代は答えた。
「格闘戦ってのは、剣だけでやるもんじゃありませんっ！」
美奈代は雛鎧の左腕を大きく振った。
「“さくら”っ！シールドをパージ！」
「はいっ！」

「泉っ！？」
「死人は黙っていて下さいっ！」

バンッ！

楯のマウントラックに取り付けられていた爆破ボルトが作動し、雛鎧の腕から楯が離れた。

腕を振る遠心力が、雛鎧を離れる楯に伝わり、楯はすさまじい勢いで染谷騎めがけて飛んでいく。

美奈代自身、それが命中することなんて考えていない。

ただ、つけいる隙を作りたかっただけだ。

わずかな機動で避けた染谷騎。

そこに隙なんて見いだせない！

「泉っ！後退しろっ！」

教官は怒鳴った。

「染谷は並じゃないんだ！」

「誰だろうと！」

今や雛鎧は丸腰だ。

誰の目にも、雛鎧の敗北は明らか。

それでも、美奈代は戦うことを諦めようとすらしない。

その美奈代の目前で、幻龍が、高々と剣を振り上げた。

「――いけっ！」
それこそ、美奈代が待っていた瞬間。
美奈代は雛鎧を幻龍に向けて備えた。
轟音と振動が世界を支配する。
「……」
その支配から解放された島教官は、自分の乗る騎に何が起きたか、一瞬わからなかった。
目前に大映される幻龍の姿。
そして――
「ど、どういうことだ？」
戦況モニターには、
マーカーC。つまり、染谷騎が擱座したことを告げる表示が点滅しているし、前席では、“さくら”が飛び跳ねて勝利を喜んでいた。
教官は、戦闘記録を呼び出した。
モニターに、雛鎧のとった機動が映像として表示された。
染谷騎の一撃をかわした雛鎧は、その懐に飛び込み――。
「足払いかけて投げ飛ばしたぁ！？」
その通りだ。
雛鎧は、胸ぐらのかわりに装甲を掴み、脚払いをかけると、柔道技で組み伏せたのだ。
その結果――

彼の目前のモニターには、大地に大の字にねじ伏せられ、右肩を破壊された幻龍の姿があった。

信じられない。

教官は愕然として首を左右に振った。

幻龍と征龍では、性能的に差が歴然としている。

プロレスラーと子供のケンカといえば言い過ぎだが、そう言いたくなるほど、彼我の戦力差とはそういいうものなのだ。

それなのに――

「性能差は理解していました」

美奈代は教官に言った。

「だから――逆にそれを利用しました」

「利用？」

「柔術は、相手の力を利用するのが原則。そうおっしゃったのは、教官ご自身では？」

柔術教官を兼ねる彼は、言葉を失った。

あれは、白兵戦になった時に備えるもの。

それは確かに、自分の思い込みだ。

メサイアで技をかけるなんて、考えつかなかったのは、もしかしたら自分の限界なのかもしれない。

島教官はそう思った。

「倒した後、戦闘能力を奪うために敵騎の右肩を破壊。現在、敵は擱座――状況、敵、戦闘不能と判断……よくやった」

教官は教え子の成長ぶりを実感し、涙混じりの声で言った。

「よくぞここまで成長した！」

「――恐縮です。教官」

美奈代は右手を挙げた。

「何だ！」

「吐く許可を下さい」
「よし！」
教官は力強く頷いた。
「外に出て吐きまくれ！一生分吐いてこい！」
装甲キャノピーが開き、外気と共に太陽光がコクピットを照らし出す。
コントロールユニットを押し上げた美奈代が、口元を抑えながらコクピットの外へはい出すのを、教官は感慨深げに見つめた。
「かく言う俺も、初陣の時、“ミンチの出来損ない”みたいな敵兵の死体を見て、一生分吐いた！」
腕組みをしながら、教官は何度も頷きながら続けた。

ヴッ……ゲボッ……ゲッ……。

コクピットの外から、美奈代の吐く音が聞こえる。
“さくら”が心配そうに、サバイバルキットの中から水を取り出し、その後に続いた。
「あの時、一生涯分もどしちまった結果、頭脳と胃袋を分離する術を覚えたんだ！貴様ここで吐ければ一人前だ！」
吐くだけ吐いた美奈代は、あちこちで候補生達が似たような格好でへたばってるのを見た。
吐くのは情けないとは思いながらも、それでも自分だけでないというのが、美奈代の羞恥心を抑えてくれている。

「失礼しました」
美奈代は教官に詫び、口元を抑えながらコクピットに戻った。
「今晩、飲むか！」
「……私、未成年です」
「私、飲みたい！」

“さくら”が言うが、
「ガソリンでも飲んでろ！このチビ！」

ギャーギャー始まった痴話喧嘩を無視して、美奈代は部隊内通信を開いた。
「こちら1号機、泉だ。各騎、応答しろ」

『宗像だ――大破。本当に行動不能』
『ううっ……痛たたっ……9号、早瀬、中破判定』
『8号騎、都築だ』
「あんたは戦死」
『ひでえな！』
『7号騎、山崎です――小破判定』
「動けるか？」
『可動です。すみません――気絶してました』
「いい。後で医療班の診察を受けろ」
『3号騎、柏。判定大破……くやしいいいいっっ！』
「それでいい。神城」
『5号騎、双葉。戦闘継続可能。騎体はぎりぎり小破。4号騎、6号騎共に！』
「よくやった――風間」
応答が、ない。
「風間？」
戦況モニターに映し出されているはずの風間騎の姿が、ない。
「風間！」
「1号騎、島だ！」
島教官も、事態の異常さに気づいたらしい。司令部へ呼びかけてくれている。
「風間騎から返答がない！そちらで把握しているのか！？」

「可動各騎！戦闘態勢維持！“さくら”！風間騎を探して！」
美奈代はそう命じた。
「3キロ後方、山の向こうで戦闘音がするよ？」
“さくら”はそう答えた。
「戦闘音？」
「うん」
“さくら”は首を傾げながら言った。
「でも、ヘンなんだよ？」
「何がだ」
「山の向こう、何も効かないの。レーダーも赤外線も」
「？」
「絶対、ヘン」
美奈代は地図を開いた。
「……日村？」
聞いたことのない地名が、そこには表示されていた。

「これで終わったはずです！」
その頃、司令部では、二宮が士官に食って掛かっていた。
相手は黒服――左翼大隊だ。
「我々に科せられた任務はあくまで模擬戦で！」
「そりゃ、あんたに科せられた任務が、でしょ？」
そう言ったのは、その中で唯一、一般士官向けの制服を着た男。
やる気があるのか疑わしい顔つき。
軍人らしからぬ猫背。
だらしない昼行灯みたいな男。
だが、その胸に鈍く輝く部隊章は“特別高等管理局”――別名“特高”の所属を示している。
近衛全軍の情報統括管理を任務とする部隊。

兵士達にはそう認知されてはいるが、それはあくまで一般論の話で、二宮達上級将官にとって、“特高”はそんな甘い組織ではない。

近衛の情報機関というより、近衛の“秘密警察”というべき存在だ。

情報管理から内部粛正まで、その血なまぐさい行動は、決して表には出てこないものの、普通の神経を持つなら、絶対に関わりたい相手ではない。

しかも、二宮は、その持ち主が誰か知っている。

後藤中佐。

特高に属しつつ、実戦部隊の幹部まで兼ねる厄介者だ。

「こっちにはこっちの仕事があるの。わかる？」

「しかし！」

「メサイア全騎に測定装置つけてここいら動き回らせたのも、そのためだもの」

「なっ！」

二宮はとっさに後藤に掴みかかろうとして、長野に肩を押さえられた。

「いやぁ――ここで演習してくれて助かったよ」

「してくれて？」

二宮は冷たい視線を後藤に投げかけた。

「演習“させた”の間違いでは？……つまり、この騒ぎはあなたの仕業ではないのですか？後藤中佐」

「おろ？わかる？」

「――っ！」

「まぁまぁ」

後藤は両手を二宮の前で軽くふりつつ、無抵抗の意志を示す。

「こっちは一般人。あんた騎士。わかる？」
「――――で？」
二宮は怒りで肩を振るわせながら言った。
「ここに魔族でもいるというんですか？」
「ご明察」
「――――っ！？」
「ああ。その可能性有りってことで、万一に備えたらメサイアが一番いいって言うのが、上の判断なんだよ」
「上？司令部がですか？」
「――――そこは聞かない方がいいよ？」
まるでチェシャ猫さながらの笑みを浮かべる後藤に、二宮は言葉を詰まらせた。
「……まぁ、妖魔だか妖怪だか、そういうのは、エラーイ学者先生に聞いてよ。アフリカや南米で暴れている分、こっちは敵としか見てないから」
「そんないい加減な！」
「戦車と装甲車の違いみたいなもんさ――――多分ね」
後藤はテーブルに腰を下ろし、懐からタバコを取り出した。
「禁煙です」
「厳しいのね」
しぶしぶタバコを戻した後藤が言った。
「何しろ、遙ちゃんの“第三眼（サードアイ）”すら逃げちまう厄介もんだ」
後藤の目が変わった。
その場にいるだけで相手をすくませるほどの威圧感。
二宮は正直、押された。
「約２０メートル越えるバケモノが１０匹――――そんなものが市街地にでも入り込んだらどうなる？」
「で、ですけど――――！」
「偶然、開発局がβ騎を１騎、こっちに回してるって聞いたし、それでなくてもαメサイアが他にも１０騎近くだ――――よほどの作戦

でもなければ動員出来る規模じゃないでしょう」
「……それは」
αやβといった聞き慣れないメサイア呼称に二宮はどう返答していいかすら迷う。
「それをこの辺縦横に移動させた――結果は良好。後は」
「……風間候補生に」
「そのための子でしょう？」
「あの子はヒヨコです！」
二宮は怒鳴った。
「今日、生まれて初めてメサイアに乗ったばかりの！」
「……」
「……」
二宮と後藤の視線が交差した。
「……だから？」
「えっ？」
「初めて乗ったから――何？」
「ですから」
「メサイア乗って、妖魔とまともにぶつかった経験があって、なおかつ生き残った奴らなんて、「天皇護衛隊（オールドガーズ）」に何人かいるだけ――でもね？」
立ち上がった後藤が、二宮の肩に手を置いた。
「それじゃ、困るんだ」
「まるで」
肩に置かれた後藤の手を見ながら、二宮は言った。
「妖魔と……この日本で戦争になる。そう、言われている気がします」
「もう、そろそろだろうさ」
後藤は何でもない。という顔で言った。
「左翼騎士はそのための存在だ。帝国はしこたま弾薬に資源、必要なモノはアフリカの一件よりはるか前から買いあさっているさ」

「……な、なら」
「だが、それだけじゃ足りない。大型の妖魔を人間サイズの魔法騎士だけで相手するのは荷が重すぎる――意味はわかるでしょ？」
「近衛の方針に対し、一介の軍人である私が異議を唱えるつもりはありません」
二宮は答えた。
「ただ、そんな戦闘を、候補生一人に――私の生徒（ヒヨコ）にやらせる。それが、個人的感情として、納得できないだけです」
「個人の感情は関係ないけどね……」
後藤は二宮の肩から手を離した。
「気持ちはわかるよ？」

●富士学校編　第九話

祷子の駆る１０号騎が、突然の移動命令を受けたのは、美奈代達がワイヤー攻撃を開始した直後。
祷子には、それに従った。
指定されたのは、３キロほど先の山の中。

警戒態勢のまま、山中を移動しろ。

命令はそれだけ。

後衛になったから、教官達が別任務でメサイアに慣れさせようとしているんだ。

祷子はそう思っていた。
だから、祷子はブースト移動で山中に分け入った。

祷子を待っていたのは、葉を落とした木々を、まだ分厚い雪が覆う世界。

その自然美に祷子が見とれ、この世界にふさわしい曲名を考えていた時のことだ。

警告と共に、水城中尉が放った怒鳴り声が、祷子を幻想から現実に引き戻した。

「レーダー使用不能！各センサーオールダウン！」
「えっ？」
「警戒してください！」
「何の演習ですか？」
「実戦です！」
祷子は目の前の計器類を見た。
確かに、それまで機能していたはずのレーダーや、外部状況を知らせるセンサー情報を表示するディスプレーが軒並みブラックアウトしていた。
それさえ、祷子は演習だと思っていた。

実戦。

そう言われても、何の実感もわかない。
「“弥生”！オール・センサー、コンバットモード！全武装安全装置解除（オールウェポンズフリー）！」

「はいっ！」
「ＲＴ－０１よりＨＱ、状況レッド。繰り返します！状況レッド！」
緊迫した水城中尉の声。
それまで会話していた時ののんびりした感じはない。
“弥生”も同様だ。

何かが起きた。

祷子が、ようやくそう認識出来たのは、“弥生”の目を見たからだ。
“弥生”の、エモノに襲いかかる猟犬のような目。
その眼差しが、無意識に祷子をそうさせたのかもしれない。

「ＨＱ、応答を！こちら――」

グンッ！

騎体が動いた。
システムが処理しきれなかったＧにより、水城中尉は危うく舌を

噛みそうになった。

「なっ！？」

呆然とする彼女に、祷子が怒鳴った。

「中尉！あれは何ですか！？」

モニターの向こうに、“それ”は存在していた。

白い毛並みを持つ四つ足の獣。

狼だと、祷子は思った。

一方、中尉が問題としたのは、そのサイズ。

メサイアよりやや小柄。

子供とセントバーナードくらいの違いしかない。

つまり――

普通ならあり得ないサイズなのだ。

「妖魔です」

水城中尉は“妖魔”という“あり得ない存在”を前に、祷子に告げた。

「あれが、あなたのエモノです」

「あれを――倒せと？」

「そうです」

「……」
「怖いのはわかりますが」
「いえ。そうじゃなくて」
恐る恐る、祷子は言った。
「それって、動物虐待では？」
「……」
「？」
突然、中尉が黙ったので、祷子は彼女の機嫌を損ねたかと心配した。
「ち、中尉？」
「し、心配いりません」
ＭＣＬで中尉が精神安定剤をがぶ飲みしていたことを、祷子は知らない。
「あれは地球上では“動物”ではありませんから」
「はい？」
「詳しい説明は、“あれ”を倒してくれたらしてあげます」
「事前ではダメですか？」
「その前に――死にますよ？」

祷子は周囲を見回して青くなった。

モニターの向こう。
“妖魔”は、すでに祷子達を囲んでいた。

ピーッ！

「ちっ！」
舌打ち一つ。
祷子は騎体を急速後退した。

ガァァァッ！

それまで祷子のいた場所を、得体の知れないバケモノの顎が襲う。
顎の力がどの程度かはわからない。
ただ、さすがに噛られたい顎ではなかった。

「最近の映画は出来がいいですね」
額を汗が流れるのを感じながら、祷子は呟いた。
「本当、スゴい」
「いえ。コレ絶対、映画じゃないですから」
そう突っ込むのは、ＭＣの水城中尉だ。
「じゃ、ゲーム？」
「――――現実よ。げ・ん・じ・つ」
背後からの“妖魔”の一撃を、騎体を急旋回（スピン）させて祷子は凌いだ。

「とにかく、撃破して下さい」
「で、ですけど」
褄子はメサイアを回避させはする。
だが、未だに剣に手をかけようとさせない。
「か、かわいそうじゃないですか」
その弱々しい声に、中尉は怒鳴った。
「何がですかっ！」
「だって！」
褄子は必死に反論した。
「ただ、ここにいるだけなんでしょう！？実害があったわけじゃ！」

「あってからじゃ遅いんです！」
褄子はメサイアを微妙に後退させて、前後からの攻撃をかわした。

「あんなのが町に出たらどれほど死人が出るか！」
「やってみなきゃ！」
「知りたいのは犠牲者の数っ！？」
「あの子達が町に出るかどうかですっ！」
「４年前に出てる！」
中尉は言った。
「４年前のグリーンランド戦線で――」
苦虫を噛み潰したような声で、中尉は続けた。
「私の兄の仇よ……」
「お兄さまの？」
「グリーランド戦線に派遣されていた兄は、あの妖魔の奇襲を受けて、メサイアごと挽肉にされた」
「……」
「私は、今回の敵が“あれ”だと聞かされたから、こうして志願して来たの」
「で、でも」

「そうね」
中尉のため息が、祷子の耳にも届いた。
「……風間候補生。この質問に答えられる？こいつらは、わかってる限り、生肉が主食」
「……」
モニターの向こうで、“妖魔”がこちらを睨んでいる。
グウァァァッ！
その咆哮が祷子の耳に心理的な恐怖心を植え付ける。
「この周辺で、こいつらの胃袋を満足させられる数を誇る生物は――人間だけよ」
「！！」
「近くの集落まで約２キロ。あいつらは、そこの住民をご飯にしたくて、ここまで移動してきたとしたら？それを阻止出来るのが、あなただけだとしたら？」

祷子はコントロールユニットを握りしめた。
それが、祷子の答えだ。
「“弥生”ちゃん」
「はい」
心配そうに祷子を見つめるのは、“さくら”同様、年端もいかない女の子だ。
「――いけますか？」
「はいっ！」

ギインッ！
ついに祷子騎が剣を抜いた。

放たれる剣という殺意。
妖魔も、それで祷子騎が敵と認識したのだろう。

ギァオオオオオッ
グォウウウウウッ

咆哮を上げながら祷子騎に襲いかかってきた。

ズンッ！

祷子が狙いを定めたのは、正面から飛びかかってきた一匹。
体を滑らせるように移動した祷子騎は、すれ違い様の一撃で、その首を切断してのけた。
首を失った妖魔がもんどり打って地面に叩き付けられた。
「やるぅっ！」
それを感知した“弥生”が歓声を上げた。
「お姉ちゃん、スゴい！」
「……戦車並の装甲を誇る相手を一撃で？」
「“弥生”ちゃん！」
祷子が怒鳴った。
「敵の数は！？」
「約１０！――違っ！雪の中に伏せてる！数、現状１５！」

「報告より多い！」
中尉が焦った声を上げた。
「ＨＱ！敵は増大している！増援を！」
「１０時と４時から来るよっ！」
“弥生”の警告に、祷子は敏感に応じた。
ザンッ！
一匹の胴を、すれ違い様、シールドで切断し、
ズシャッ！
もう一匹の脳天に剣の切っ先を突き立てる。

――ズズンッ

祷子の前で、二匹が力無く地面に落ちた。

「やれるっ！」
兄のあだを討てる中尉は興奮気味だ。
「すごいわっ！」
本当にそう思う。
妖魔――
時にメサイアでさえ一撃で粉砕する文字通りのモンスターを、この騎は苦もなく粉砕していく。
本来の性能もあるだろうが、それを引き出しているのは、間違いなく――
「こ――――」

中尉は、レシーバーに、何かが入ってることに気づいた。
「？」

ブツブツブツ……

何を言っているのか、最初わからなかった。
それが言葉だと、
袴子の声だと、ようやくわかる始末だった。

「候補生？」
「……」
中尉の言葉に、袴子は応えない。

ただ――
“弥生”の声にのみ、袴子は鋭敏に答えた。

「7時から1匹！」

ブンッ！
逆手に持った剣が妖魔の喉を貫いた。

「11時、2時――6時からも！」

剣を手にしたメサイアが急旋回。
一気に3匹を血祭りにあげた。

「……心は則ち、神明（かみとかみともとのあるじ）の本主たり」

それが、祝詞だと、中尉にはわからない。

「心神（わがたましい）を傷（いた）ましむること莫（なか）れ」

ただ、祷子はメサイアを駆り、目の前の敵を殺し尽くそうとした。
間近に接近し、隙を狙う一匹に襲いかかり、その頭を粉砕した。
間合いをとろうという二匹を短刀を投げつけて仕留めた。

「……諸の法は影と像の如し」

一瞬、背後に潜んでいた妖魔の目が光った。
次の瞬間――――

ビンッ！

弦を弾いたような音と共に光が放たれ、雪山の一角が吹き飛んだ。

「“マスター”！」
“弥生”が怒鳴った。
「敵はマジックレーザーを使いますっ！他にも反応多数！」
「候補生！増援が来るっ！」

祷子は回答の代わりに動いた。

敵のマジックレーザー発射の直前、騎体を跳躍させ、同士討ちさせたのだ。

雪に覆われた世界を吹き飛ばす災禍の中、地面に降り立った祷子騎は、狼狽する敵に襲いかかった。

「……清く潔ければ仮にも穢るること無し」

ついに数匹が逃亡にかかった。

祷子騎は、瞬間移動に近い動きで、その前に回りこむ。

「説を取らば得べからず　皆花よりぞ木実とは生る」

妖魔達の死骸が最後の光芒と共に消え去る中。

祷子騎は何事もなかったかのように立ちつくしていた。

「無上霊宝（むじょうれいほう）　神道加持（しんとう）」
祷子の言葉が、静かにコクピットに流れた。

それからしばらくの後。

「ったく……とんだ騒ぎになったわね」
雛鎧のコクピットに戻った美奈代は、騎体をブースト移動させながらぼやいた。
「１２時間のご飯抜きは解除されないし」
「仕方ないです」
牧野中尉が気の毒そうに言った。
「みんな、そうやって一人前になるんですよ？」
「中尉も経験が？」
「私は最高７２時間です……最後は医務室に担ぎ込まれましたけど」

「それって虐待」
騎体が地面に着地。再びブースターを吹かし、雛鎧は跳んだ。
「でも」
クスクス。
牧野中尉は、吹き出した。
「騎体大破の責任で、教官達も今回はいろいろ大変みたいです」
「大変？」
「とりあえず、今夜のおでん屋はなしとか」
美奈代は、吐き捨てるように言った。

「――いい気味です」
モニター越しに映し出される景色が変わった。
美しい雪景色が、黒く焦げた一帯へと。
「ここで――風間が？」
「はい」
ピッ
牧野中尉によって、美奈代の前のモニターに情報が映し出された。
「“戦狼（せんろう）”級妖魔。サイズはM。主要な武器は牙と爪――そしてML（マジック・レーザー）」
「それが、１５体」

なぎ倒された木々。
えぐれた大地。
死骸こそないが、ここで何があったかは子供でもわかる。

「そうです。風間候補生は１５体１の勝負に完全勝利されたのです」
「……信じられない。というか、そんなに弱いのですか？そいつら。２０メートルの体格で」
「南米戦線ではかなりの犠牲を強いられています」
「……」

雛鎧が着地。

ブースト移動をかけた。
「それにしても」
美奈代は周囲を見回した。
「その戦域を飛び越えてシールドが飛んでいったなんて――“さくら”の馬鹿力」
「ちがうもんっ！」
“さくら”が怒鳴る。
「マスターがバカなんだもんっ！」
「こらっ！」
美奈代が怒鳴ろうとした時、
ピーッ！
警告音が鳴り響いた。
「候補生っ！」
「しまっ！」
グンッと来る落下の感覚。

ドンッ！

満足な準備もなく地面に落下したせいで、システムが処理しきれなかった衝撃が、美奈代の尾てい骨をモロに直撃した。
「……い……っ！」
尾てい骨から走った痛みが脳天を貫き、美奈代が固まった。
「あーあ。マスターのバカ」
その顔の前で、“さくら”が呆れた顔を見せる。
「……」

美奈代は口をパクパクさせるのが精一杯だ。
「痔になった？お尻割れた？」
「か……こ……」
「染谷さんとのこと思い出して感じちゃった？」
パカンッ！
美奈代のゲンコツが“さくら”の頭を直撃した。
「痛いっ！」
「誰があんなオトコと！」
「したんでしょ？お尻で」
「してないっ！」
「えーっ！？染谷さん奥手！」
“さくら”がびっくりした顔になった。
「まだ手を出してもらってないの！？」
「あ、あんなオトコに興味はないっ！」
美奈代が怒鳴った瞬間。
『ＨＱより１号騎』
司令部から通信が入った。
二宮だった。
「こちら１号騎、泉候補生！」
『痴話喧嘩を回線開放のままやるな！筒抜けだ！』
「――――！！」
美奈代の顔が爆発したように赤くなった。
「も、申し訳」
うつむく美奈代の横で、“さくら”がやーいやーいとはやし立てる。
『それより、シールドは発見出来たのか？』
「す、すぐ近くだと」
美奈代は慌てて周囲を見回した。
シールドの落下予測地点のすぐ間近を目指してジャンプしたのだ。

視界に入るはずだが――
「マスター、あったよ？」
“さくら”が指をさした先。
木々をなぎ倒し、地面に突き刺さっている白い金属物。
それは確かに、シールドだった。
「ホッ。……こちら１号騎。ＨＱ、シールドを発見。現在位置、日村――」
「マスターぁ」
“さくら”がそっと美奈代に抱きついた。
「ん？」
抱きつく“さくら”の体が小刻みに震えている。
怯えているのだ。
「どうした？“さくら”」
「は、早く帰ろう？シールドなんて放っておいて」
「そうもいかん」
美奈代はシールドに近づき、無造作に地面に突き刺さるそれを引き抜いた。
「っ！！」
“さくら”が息を飲んだのを、美奈代は確かに見た。
「何がそんなに怖いんだ？“さくら”」
「だ、だって――」
ガタガタ震える“さくら”は答えた。
「地面から――何かが出てる」
「ＨＱより１号騎ＭＣ、牧野中尉」
『こちらＨＱ』
「シールド落下地点。センサー異常。測定限界越えました――データ転送します」
『ＨＱより１号騎。現状のまま待機せよ』
「？」
「グスッ……マスターぁ」

どういうことだ？

美奈代は首を傾げた。

妖魔。
センサーの異常。
“さくら”の怯え。

ここに、何があるというのだ？

美奈代は、シールドがめり込んで陥没しただけの、何の変哲もない穴を、じっと見つめた。

長野県大字日村。

美奈代には、その地名だけしか理解できるものがなかった。

●富士学校編　第十話

美奈代達、第七分隊が他の分隊に比べ、成績的に著しく劣っているとされる根拠はただ一つ。

訓練が全く進まないこと。

それだけだ。

それさえ、理由と言えば、他の教官なら見逃すだろう細々としたことに一々ケチをつける主任担当教官二宮真理中佐の教育方針のせいであって、別段、美奈代達が騎士として、他の分隊に比べて致命的に劣っていることにはならない（実際、座学成績に関しては、美奈代と宗像、美晴は上から数えた方が早い）

とはいえ、やはり問題なのは他分隊がすでに最終訓練課程である、模擬戦闘を含むメサイアの単座操縦訓練の段階にありながらも、たった一分隊だけ、シミュレーター訓練にいそしんでいれば、どうしても「劣等生」の扱いは避けられないのは当然だ。

ここに、他分隊とは決定的に違うこと――性別が加わると、他騎士の男性としてのプライドの問題もあり、例えそれがいかに不当とはいえ、美奈代達の生半可な努力で扱いを変えることは不可能に近い。

その生半可な努力を覆すほどの出来事が起きた。

後の近衛メサイア部隊を担うエリート幹部候補生と見込まれた者達により編成された第一分隊。

成績優秀をもって他分隊の追随を許さないはずの部隊が、最も成績が劣るはずの第七分隊に全滅させられたというのだ。

「四月馬鹿（エイプリル・フール）はまだ早い」

訓練から帰還する両分隊を出迎える際、第2分隊長が呟いた言葉だが、その時、この言葉を否定した者は誰もいない。

あり得ない話なのだ。

だが――

訓練校に降り立った鵜来級輸送艦改、現分類は強襲揚陸艦「鈴谷（すずや）」の前には、全分隊候補生達が整然と並び、艦から次々と降ろされる“幻龍（げんりゅう）”、そして“雛鎧（すうがい）”を信じられないといった顔で見守る。

「一体、こりゃぁ……？」

自力移動が出来ないメサイアを運搬するための自走式重量物運搬装置“ストレッチャー”に乗せられた雛鎧が目の前を移動する。

ストレッチャーに横たわる“雛鎧（すうがい）”は、片脚が切断され、もう片方の脚も半ばまで切り落とされている。

第一分隊と第七分隊の間で模擬戦が行われたことは知っている。

ただ、ここまでメサイアが破壊される模擬戦なんて聞いたことがない。

各分隊から起きるざわつきは、“ストレッチャー”のエンジンの爆音にまぎれてとぎれとぎれに聞こえてくる。

“あの第一分隊が”

そんな声が大半だ。

“雛鎧（すうがい）”の搬出が終わり、頭部装甲を吹き飛ばされた“幻龍（げんりゅう）”が続く。訓練用にデチューンされているとはいえ、近衛メサイア正規部隊配備騎、言い換えれば、自分達の目標である騎が破損した状態で運ばれるのは、候補生としては不快だ。

最後に出てきたのは、自力歩行可能な“雛鎧（すうがい）”と“幻龍（げんりゅう）”。

一騎は右腕があさっての方向を向いている。

その騒ぎの中。

気づく者は気づいていた。

訓練生の数に対し、降りてきた騎体の数が1騎、足りていないことを……。

候補生が騎体を壊す。
訓練だから仕方ない。
むしろ訓練だから壊す。
いくらでも言い訳は出来る。
だが……。

●富士学校　第一整備ハンガー
「――――というわけだ。以後、気を付けろ！」
メサイアを整備するために建造された巨大なハンガーの中、破損したメサイア達の前で並んで正座させられているのは、第一分隊と第七分隊の候補生達だ。
説教のあまりの長さに、美奈代はすでに脚の感覚がない。
「これに懲りたらメサイア壊すな！わかったか！？」
官品だの国民の血税だの、いい加減にしろと喚きたくなるほどの“老整備班長殿の演説”がようやく終わった時、美奈代は自分の忍耐力に感動さえ覚えた。
「処罰を申し渡す」
さすがに聞くだけで疲れたのか、二宮はうんざりした声で美奈代達に言った。
「第七分隊は毎日、夕食前にメサイアの掃除。“雛鎧”整備完了まで、整備班の支援業務に就くこと」
げぇっ！
美奈代達は声こそ出さないが、表情で悲鳴を上げた。
「うるさいっ！」
二宮は怒鳴った。
「あんた達のおかげで、私まで始末書書かされるんだから、文句言うなぁっ！」

●富士学校　廃棄部品倉庫

「何が不満ってさぁ」
さつきが騎体から外されたパーツを運びながら美奈代にぼやいた。

メサイアの整備を手伝わされてからすでに数日が経過。
手や顔はオイルで汚れ、騎士辞めて整備に移ろうかなんて話が半ば本気で語られるようになっていた。
ハンガーの隣の建物に入ると、照明が落とされてやたら薄暗い。
足下に気を付けないと簡単に転びそうだ。
「第一分隊は、おとがめなしってことだよ」
「うん」
さつきと一緒に美奈代が運ぶのは“幻龍（げんりゅう）”から外された電子パーツ。
長くて重い。
何のパーツだったか、美奈代は思い出そうとしたが出来なかった。

「あいつら一体、何様のつもり？大体、私達はあいつらに襲われたんだよ？」
「言うな――行くぞ？」
せーのっ！
ガシャンッ！
得体の知れない残骸の山にパーツを放り込む。
「まぁ、これ一個、いくらするか考えれば、整備や訓練校が怒るのも無理ないけどね」
「……早瀬」
「何？」
「すまないけど、先に行っていてくれ」
「トイレ？」
「……まぁ、そうだな」

さつきの後ろ姿を見送った美奈代は、壁に立てかけてあったパー

ツの影に向き直った。
「こんなところで、何の用です？」
「……よくわかったね」
パーツの影から出てきたのは、染谷だった。
染谷を見る美奈代の目は、決して友好的ではない。
「……第一分隊の隊長殿が、こんな所で何をなさっておいでで？」
「何と言われたい？」
「すぐに消える」
「――ふん」
染谷は、鼻で笑うと、尊大な態度で近づいてくる。
今までの美奈代なら、“毅然とした”とか、“堂々とした”……
そう、表現したろう。
それが、今では何だか虚しくさえ感じられる。
一度、幻滅した男に再び思慕を抱くのは、並大抵のことではない。
「……っ」
美奈代は、近づく染谷に背を見せないように気を配った。
「一言、言っておきたい」
「何をです？」
「……人に対して、もう少し態度を改めるべきだとは思わないか？」
「それは失礼いたしました」
美奈代はわざとらしく敬礼した。
「自分は軍隊育ちとして、男とのコミュニケーションは“これ”しか知りませんので」
美奈代は握り拳を染谷の前に突き出した。
「――君は」
染谷は表情を変えることもなく、
「“マイ・フェア・レディ”を知っているかい？」
「型式は？」

「？」
「３１ですか？３２？」
「――い、一体、何の話だい？」
怪訝そうな顔になった染谷に、美奈代は真顔で言った。
「自分は、候補生の愛車がフェアレディＺであることなんて知りませんでした」
「……」
染谷は何故か、沈痛な面もちで天を仰ぎ見た。
「……君は、余程、文化というものに興味がなかったらしいな」
「？はい？」
「オードリー・ヘップバーンを知らない……か」
「……」
美奈代がその名を知らないことは、その表情で明らかだ。
「……恥をかく前に誰かに聞いた方がいい――いや」
染谷は思いついたように言った。
「たしか、あの劇場……そうだ、見に行くことにしよう」
「は？」
「士官たる者、一般教養にも詳しくないといけない」
「……はぁ」
何か、うまく言いくるめられつつあることに気づきはしても、美奈代は特に反論はしなかった。
戦術しか知らない“戦闘バカ”は出世出来ない。
それは、自分の父が大尉から少佐に昇進するのに１０年近くを必要とした際、父自らがこぼした愚痴だ。
実例を見ている上に、そのおかげでいろいろと苦労した覚えのある美奈代は、むしろそれを受け入れる素地が人一倍あるのだ。
ただし……。

「わかりました」
士官としての心構えを説かれたとしか認識していない美奈代と、

「そ、そうか」
男として申し出た染谷の溝は、意外と大きかった。

「で、では、今度の外出の際に。会場は確認しておこう！」

「……はい。よくわかりませんが、頼みます」

「うん！」
そう頷く染谷。
その瞬間、普段、冷静沈着なはずの染谷の顔が、美奈代にはまるで子供のように輝いて見えた。
――――悪くないな。
美奈代はクスッ。と小さく笑うと、染谷の後を追うように歩き始めた。

美奈代の焼けぼっくいに火がついた瞬間だった。

●富士学校　食堂
「えええええ～～っっっっ！！？」
夕刻、食堂に突如響き渡った怒鳴り声に、居合わせた全員の動きが止まった。
何人かは、驚いてみそ汁を鼻から吹き出し、死にそうな勢いでむせいでいた。

「み、美奈代っ！？」
さつきが青くなって美奈代の両肩をつかんだ。
「あんた一体、どうしちゃったの！？」
「だ、だから何だ？」
「ど、どうしちゃったんですか！」
美晴も席を蹴って立ち上がった。
「そんな申し出受けるなんて！」
「べ、別に間違ったことを言ってはないだろう！？」
美奈代は訳が分からない。という顔で反論した。
「士官が教養を持つというのは、確かに正しいことだ！」
「だからって！」
さつきと美晴は怒鳴る。
「それってデートでしょ！？あの染谷と！」

シン……。

一瞬、食堂が静まりかえった後……。

染谷はどこだ！？
あの野郎！抜け駆けしやがったな！？
染谷を探せっ！
叩き殺せっ！

食堂は騒然となった。

「……あらま」

周りを見回した祷子は、自分達、こと、美奈代に対しての視線が、さっきまでとは違っていること、さらに、美奈代がようやく自分が受けた申し出の意味を理解して凍り付いていることに気づいた。

「それにしても」

祷子はテーブルの上に置かれていたアルミ製の急須から御茶を注ぎながら言った。

「染谷候補生、なかなか素敵なお誘いじゃないですか」

「ああ……それにしても」

さすがの宗像もあきれ顔だ。

「お前、オードリー・ヘップバーンも知らんのか？」

「……だ、誰だソレ」

「歴史上最高と言っても過言ではない名女優中の名女優だ。妖精とまで呼ばれた彼女を知らないとは、お前、本当に人類か？」

「そ、そこまで言うか？」

「でも」

お茶、どうぞ？

祷子が皆の茶碗にお茶を注ぎながら言った。

「染谷候補生って、意外とロマンチストだったんですね。私もそんなお誘いには憧れちゃいますね」

「しかし」

クックックッ……！

宗像は腹を抱えて笑い出した。

「我が校のヒギンス博士は、とんだイライザを見初めたもんだ！」

「クスッ。理沙さんったら」
祷子もおかしくて仕方ないという顔だ。
「だ、だから！」
美奈代はたまらずに言った。
「なんなんだ！？その何とかフェアレディってのは、日産のZのことだろう！？教養と日産のスポーツカーがどう関係するか知らないが！」
「……美奈代さん」
ポンッ。
美晴が沈痛な面もちで美奈代の肩を叩いた。
「これ以上、恥かくような発言は慎みましょう。分隊長がそれでは、私達がいたたまれないから」
「……うっ」
「とりあえず」
宗像は言った。
「イライザでさえ、教授の元へは、精一杯のお洒落をして訊ねていった。負けてはいられない」
「素敵なマイフェアレディ計画ですね」
「祷子。お前は私のマイフェアレディだ」
「ふふっ。ありがとうございます。でも今は」
「か、風間？」
「理沙さん。お化粧品とお洋服、見繕ってあげてください」
「任せろ。泉は私服のセンスが最悪だからな」
「な、何だと！？」

「――成る程？」
夜。
美奈代は二宮の私室へ呼び出された。
否。

正確には、部屋から拉致られた挙げ句、ここに連行されてきたのだ。

パイプ椅子に座らされ、テーブルに置かれたライトを浴びる美奈代は、何故か女性教官達に取り囲まれていた。

教官達の殺気だった視線を一身に浴びる美奈代は生きた心地がしない。

警察の取調室の方が、まだ心地いいだろうな。と、美奈代は心底そう思いつつ、浴びせられる質問に答えるしかなかった。

「了解した」

そう答えたのは、座学担当の牧野中尉だ。

先に搭乗した“雛鎧（すうがい）”のMC（メサイアコントローラー）を担当してもらった人物だ。

「尋問は終わりました」

椅子から立ち上がった牧野中尉が振り返った先には、机に両肘を乗せ、手を組んで顔の前に置くという、某国連特務機関の最高司令官の如き姿勢をとる二宮がいた。

「――調書を読み上げなさい」

「はっ。二宮閣下（ヘル・ニノミヤ）。」

牧野中尉は恭しく頭を下げた。

「――被告は我が訓練校第七分隊所属候補生であります。

この者は、我が訓練校に属する女性として背いてはならない教義に反した容疑がかけられています。

曰く、被害者、第一分隊染谷隊長に対する売春行為未遂及び訓練校への背信行為。

この裏付けは、すでに容疑者の自白で十分と判断しています。

この事態に際し、わが独身女性保護同盟最高評議会は、いかにして容疑者が被害者をたぶらかしたかを徹底的に調べ上げた後、然るべき処置を」

「回りくどい」

二宮は姿勢を崩すことなく言った。

「結論を述べなさい」

「このガキ！候補生の分際でオトコたぶらかしやがって、羨ましいんですっ！」
「実にわかりやすい。報告は簡潔にして要領を得ていないとな」
「……あのぉ」
「泉」
「……はい」
「で？どうやって、染谷をたぶらかした？」
「べ、別にたぶらかしてなんて！」
「――――質問を変えよう」
二宮はどこからかハンマーを取り出し、美奈代の脳天めがけて振りかぶった牧野達を手で制しながら言った。
「染谷と初めて会話したのはいつだ？」
「え？えっと……？」
美奈代は、四方で振り上げられたハンマーにおびえつつ、ようやく思い出した。
「あの……5月の強歩訓練の時、水を配っていた時だと」
「ああ。図々しく生理中を理由にさぼった時だな」
「さぼってませんっ！」
「なら、5月に2回も生理が来たのは何故だ？」
「うっ」
「それで？」
「お疲れさまです……って、確かその程度」
「それ以降は？」
「時々、すれ違い様に敬礼する程度で」
「……むぅ」
「二宮閣下（ヘル・ニノミヤ）」
二宮の斜め後ろに立つ女性士官が書類を挟んだバインダーを手渡しつつ、
「ＩＬＯからの情報です。容疑者が自白しました」
「あ、ＩＬＯ？あの……二宮教官は、パレスチナに何か？」

「パレスチナは既に人の住めるところではあるまい」
二宮は書類に目を通しながら言った。
「“いたたまれないほど、ロンリーな、男達”の略でＩＬＯだ」
「いっそ合コンとか……どうです？」
皆さん、そのＩＬＯの女版でしょう？という言葉だけはかろうじて飲み込んだ。
「私達は高い理想に生きることを誓った女達だ。妥協はしない――どれ」
「……」
いろいろ言いたいことはあるが、生きてここを出たければ、下手なことは言うべきではないだろう。
美奈代はそう思ったので黙った。
「……成る程？」
二宮は書類から視線を外し、言った。
「染谷はＩＬＯ候補生実働隊により袋だたき、つるし上げを受けた後、医療隊の適切な処置により投与されたクスリにより自白した。それによると」
ゴクッ。
女性士官達が固唾を呑んで二宮の言葉を待つ。
「染谷は入営の際、泉を見初めた。つまり――」
ジロッ！
刺す様な視線が恐ろしく痛い。
「一目惚れしたんだ」

なっ！？
が、外見が全てなの！？
私の方が美人なのにっ！
こんな小便臭いガキのくせに！？

「わ、私が悪いんですか！？」
まるで一方的に美奈代が悪い！と言わんばかりの声に、美奈代はそう抗議するのが精一杯だ。
「泉は、亡くなった染谷の母親の、若い頃にそっくりなんだそうだ。そんなこともあって、その後も、気になって事あるごとに見ていたら、自然と異性として意識するようになった。つまり、好きになったと自覚した」
染谷候補生はマザコンだったのか！？
なら、母性の魅力でたぶらかせば！
「……」
一体、何なんだ？
美奈代は泣きたくなった。
自分はまだ、デートもしていない。
告白なんてされてもいない。
ただ、自分を好きになってくれた人がいてくれた事を知っただけだ。
た、確かに、フェアレディと聞いてすぐに車しか思いつかなかったのは、よく考えれば、女の子としてどうかとは思う。
それでも、デートの誘いらしいものは受けたんだ。
それは、一人の女の子として、喜ぶべきことのはずなのに、こんな風に吊し上げられるなんて、あんまりだ。
外見に自信は全くない。

ここに来るまで、男子生徒は皆、騎士だという理由だけで近づくことさえなかった。
早瀬じゃないけど、これはもしかしたら、千載一遇のチャンスなのかもしれない。
実際、美奈代は少しそう思う。
ただ、そう思った直後にこれだ。
私は――――まともな恋愛が出来ないのか？

「二宮閣下（ヘル・ニノミヤ）」
美奈代の瞳から涙がこぼれそうになった時、部屋のインターフォンが鳴り響いた。
「校長からです」
「貸せ――――閣下？染谷が死にましたか？――――はっ！？」
二宮があきれ顔になった。
「今、この時間にですか？……はい。わかりました」
受話器を戻すと、二宮は立ち上がった。
「泉」
「……ぐすっ。はい？」
「もういいぞ」
「へ？」
「閣下！？」
「すぐに部屋に戻って、神城三姉妹をたたき起こして教官室へつれてこい」
「神城達を？」
「――――連中の玩具がきた」

●富士学校編　第十一話

●富士学校校舎

「魔族軍が後退を開始した」

「後退？」

宗像は意味が分からなかった。

魔族軍との戦争は、戦略的には人類優位には推移している。

とはいえ、局地的には　まだ圧倒的に魔族軍が優位なのだ。

その魔族軍が自発的に後退する理由は？

宗像は、理由を一つしか思い浮かべることが出来なかった。

「また反応弾を使ったんですか？」

そう。

魔族軍を大きく後退させた兵器なんて、メサイアと反応弾くらいなものだ。

しかし、同時に、激しい放射能による傷跡を残す反応弾は、人類にとって好んで使うべきシロモノではない。

使用されたが最後、その土地は利用価値がなくなる。

それでは困るのだ。

「幸い、今度は魔族軍の自発的な後退だ」

「……理由は？」

「不明だ。ただ、大規模広範囲攻撃の実施を理由とした後退の可能性もある。前線の警戒レベルは高いままだ」

「気の毒に」

「そう言うな……さて、今日の座学では、妖魔共の呼称について学習する。まず、敵全体の呼称は魔族軍――“悪魔”の“魔”に“暴走族”の“族”だ」

――せめて“家族”の“族”と呼びましょうよ……教官。

さつきは口の中でそう呟く程度に抑えた。

「人型を魔族とし、それ以外は“妖魔”とする。分類に困ったらとりあえず妖魔としておけ」
「でも、悪魔なんでしょう？」
美晴が聞いた。
「いっそ、お祓いとかききませんか？悪魔なんて、エクソシストにでもお祓いしてもらえば一発で」
「柏――どうして“あいつ等”を、一々、魔族だの妖魔と呼ぶかよく考えろ」
「えっ？」
「今、暴れているのは、宗教上の存在じゃないからだ」
「ど、どういうことです？」
美晴には意味がわからない。
「だって、怪物ですよ？」
「それが悪魔だと呼ぶ連中は、世界中のあちこちにいる。だが違う。あれは異世界の生命体であることが、すでに判明している」
「――悪魔と、どう違うんですか？」
「あっちは神様の対、魔族は異世界である魔界の住人に過ぎない。我々人類が戦っているのは、そういう連中だ。この魔族と魔族に率いられた敵勢力の呼称は、魔族軍となる。覚えておけ」
「妖魔……魔族……魔族軍」
「そうだ。その魔族軍を構成するのは、体長３０メートル以上の大型妖魔、１０メートル級の中型妖魔、そして３メートル以下の小型妖魔、別には身長１７０センチ程度の人類サイズが確認されており――」
二宮が黒板に大判の写真を貼り付ける。
「見ていて、あまり気分のいいものではないが――慣れるだろう」
一体、二宮はファンタジー映画の販促でも始めたのか？

そう、聞きたくなる写真達が貼り付けられていく。
西洋の甲冑をまとった犬面のバケモノや、表現出来ない異形の怪物達の写真。
無論、もしこれが出来の悪いファンタジー映画の敵なら、ポップコーンとコーラでも片手に楽しむことも出来るだろう。

だが、これは現実なのだ。
こんな化け物が、遠いアフリカの地とはいえ、現実世界でうごめいていること自体が信じられない。

「種類は様々だ」
写真を貼り終えた二宮は、教え子達に向き直った。
「この授業では、国連において名称の統一が終わった種類だけを紹介する」
教え子達は無言で頷く。
「まず、この犬面豚鼻の人型は、“オーク”の呼称で統一された。
移動力は低いが、腕力は騎士並。
ダメージに強く。腕の一本切り落とした程度では暴れるのを止めようとはしない。
甲冑を貫通したければ、近距離でのフルメタルジャケット弾使用は必須。
故に、こいつらとまともに戦いたければ、１２．７ミリの対戦車銃が望ましい。
覚えておけ？
メサイアに搭載される白兵戦闘用小銃では連中に対抗出来ない。
早めにアンチマテリアルライフルの搭載を申請しろ。使い方は覚えているな？――泉っ！」
「はっ！はいっ！？」
完全に眠る一歩手前だった美奈代は反射的に飛び起き、立ち上がった。

ショックで膝を机にイヤという程ぶつけた痛みに顔を歪める。
「覚えているな!?」
「はいっ！」
美奈代は顔をしかめながら怒鳴った。
「たった今、忘れましたっ！」
「教官、それじゃ、どうしろというんですか?あんなデカブツ担いで逃げ回れと?」
「宗像。食べられる前に、口に銃口くわえて引き金を引け。それさえ恐ければ、手榴弾の安全ピンを引っこ抜いて、目をつむれ。お祈りしている間に――楽になれる。ただし、間違っても、コクピットでやるな?後が迷惑する」
「……」
要するに、そんな事態に陥らないようにしろ。
そういうことだと、美奈代達は判断した。
メサイアが搦座(かくざ)して、敵に取り囲まれるなんて、普通の戦争でも勘弁してほしい。
そういうものだ。
「我々は、あくまでメサイアで戦うのが任務ではあるが、しかし、知識として知っておくことは大切だ。
オーク共の主な武器は刀剣類と弓。
弓は長弓とクロスボウ。
クロスボウは、各種サイズがあり、我々の使用する自動小銃と同程度からそれ以上の破壊力を持つことは判明している。
長弓は魔力付与した矢を毎分１０発程度発射可能。
連射性は低いが、射程はかなり長い上に、破壊力も高い。
現在確認されている限りでは、砲撃に使用した場合、有効射程距離3万メートル、対空兵器として用いた場合、高度1万メートルを飛行中の航空機を撃墜するほどだ。
……まぁ、対空・対地双方において厄介な代物だ」
「教官、剣や槍は?」

「騎士が用いるそれとほぼ同程度。
蛇足だが、こいつらオークを、魔族軍は槍兵、剣兵、クロスボウを装備する弩兵（どへい）、長弓兵という感じで、装備によって兵種を分けているらしいことも判明している」
「……本当に軍隊なんですね」
感心したような美晴の声に、二宮は頷いた。
「顔が顔だからといって、なめると痛い目にあうぞ？――――次」
二宮は次に、オークの横に並ぶ写真を突いた。
「スライム。
毒性の強い溶解液の動く塊だ。
廃墟になった都市部にて多数確認されている。
こいつに触れられるだけで助からないと思え。
万一、肌に触れた場合、触れたカ所をすみやかに切断しないと、数時間で全身に毒が回り、発狂して死ぬ。小銃弾は効かない。テルミット弾か火炎放射器で焼き殺すしかない
「……」
「他にもいろいろと確認されているが、とりあえず、次は、我々が危惧すべきサイズの中型以上の妖魔達の説明に移る」
二宮は、写真を眺めた後、続けた。
「中型妖魔の定義は、全長１０メートルサイズを指す。
たとえば、コイツは６本脚のサソリ型“トゥース”。
コイツの脚の一撃は、主力戦車の正面装甲すらブチ抜く。メサイアでさえ、下手に接近されたらアウトだ」
銀色に輝く装甲の如き外骨格に鋭い爪を持つ巨大なサソリの写真を、二宮は指示棒で突いた。
「退治するなら、１２．７ミリ以上。可能なら２０ミリ以上の大口径機関砲が望ましい。こいつの機動性は自動車並み。脚が多い分、かなり複雑にして高いレベルの機動が可能だ」
「……質問」

手を挙げたのは、何と祷子だった。
「風間。珍しく居眠りしていないのは感心だ」
「……」
「質問だろう？どうした？眉間にしわをよせて」
「あの……騎士はいないんですか？」
「純粋な騎士の存在は確認されていないが、魔族は騎士と同等、もしくはそれ以上の戦闘能力を持つことが確認されている。しかも」
不意の二宮の沈黙。
それが、美奈代達の不安をかき立てた。
「……あの、まさかとは思いますが」
美晴は恐る恐る手を挙げた。
「魔法騎士とか？」
「……そうだ。そして」
「敵にメサイアが存在する可能性があるなんて……？」
二宮は、じっ。と美晴を見た後、頷いた。
「ありうる話になるだろうな」
「だったら」
そんな二宮に、さつきは口元を歪めながら言った。
「今頃、世界のどこかで、魔族のメサイアがご登場してるかもしれませんね」
「そんな立場に立ちたいのか？早瀬」
「絶対、イヤです」
「――同感だ」

●数日後の朝　食堂
演習が終わったら、候補生達にも、そろそろと進路に関する内示が出はじめる時期だ。
壁には内定が出た者が張り出されている。

染谷はメサイア第一中隊の配属が内定。壁に張り紙が出ている。
美奈代は、デートで何とお祝いを言うべきか悩みながら、沢庵をかじっていた。
その目の前で、
「眠い……」
茶碗を持ちながらうつらうつらするのは双葉だ。
一葉と光葉はご飯を食べながら器用に船をこいでいる。
「最近、夜になると別行動だけど、どうしたんだ？」
美奈代は訊ねた。
「うん……明日から私達三人、本格的にカリキュラムが別になるって」
「……へ？」
「昨晩ね？」
双葉は言った。
「新型のシミュレーターが入ったんだよ。それの本格訓練」
「新型のシミュレーター？」
「うん。何だか、戦闘機みたいなヤツ。普通のＳＴＲシステムじゃないの」
「私達、何も聞いていないぞ？」
美奈代は横にいたさつきの顔を見た。
さつきは無言で首を横に振った。
「私達三人専用だって」
「すごいじゃん！」
びっくりした様子でさつきは言った。
「カスタムモデルが与えられるってことは、双葉達、特務部隊（スペシャルフォース）配属でしょ！？」
「シミュレーターはゲームみたいで楽しいけど、それより眠いよぉ……」
「戦闘機といっていたな」
「うん……あんまりしゃべるなって言われているけど、普通のメサ

イアじゃないよ。手足ないし……大型の戦闘機みたいなヤツ。私達はみんな、大好きになったけどね」

ふわぁぁっ……と、生あくびをした双葉を前に、美奈代は少し複雑な顔になった。

「神城達も内定……か」

「私達は、後方勤務かな」さつきは、どこかほっとした顔でお茶をすすった。

「宗像も、二宮教官と一緒に中央に面接に行って、今朝帰ってくるけど」

「あいつも、どうなるんだろうなぁ」

「普通の部隊に行っても、あの素行だからねぇ」

おおっ！

不意に、食堂にいた生徒達から、そんな歓声が上がった。

見ると、脚立に登った長野が、壁に八切サイズの半紙を貼り付けていた。

祝内定　内親王護衛隊（レイナガーズ）　第七分隊　宗像理沙候補生

「内親王護衛隊（レイナガーズ）！？」

美晴が目を見張ったのも無理はない。

内親王にして近衛最高司令官である麗菜内親王の親衛部隊、それが内親王護衛隊。近衛最強部隊たる天皇護衛隊（オールドガーズ）と肩を並べるエリート部隊だ。

しかも、女性のみで編成された珍しい部隊でもある。

とにかく、普通ならば、候補生から直接入れる部隊ではない。

「さっすが宗像！」

思わずさつきは言った。

「レズが身を助けた！」

「おい。二宮教官の古巣でしょ？それなら教官も」
言いかけて、美奈代の思考は止まった。
「つまり……二宮教官って実は」
「あれ？泉知らないの？」さつきは、おや？という顔になった。
「二宮教官の別名」
「？」
「……白百合の守護者。つまり」
きょろきょろと辺りを見回した後、テーブルに身を乗り出して小声で言った。
「教官は両刀なんだよ」
「うぞっ！？」
「本当だって……一時は麗菜殿下のお手つきだったって聞いたこともあるし」
「……」

●宮内省近衛府　富士学校校舎
「……さて、今日の授業に入る前に、お前達の罰ゲームの件だが」
二宮はわざとらしい咳払いをした。
「よくやった……とでも言っておく」

美奈代達の罰ゲーム――コスプレ接待の件だ。

「第一分隊撃破によって、全てはお流れだ」
「それにしても教官」
山崎が挙手の後、訊ねた。
「連中はどうして定数で参加しなかったのですか？」
「“幻龍（げんりゅう）”を使いこなせたのがあの三人だけだった。それだけだ」
二宮はにべもない。
「それであの」という美奈代の声に、

「そうか！」
二宮はうれしそうに頷いた。
「そんなに行きたかったのか！」
「へ？」
美奈代達は思わず、皆で顔を見合わせた。
「……いえ、私達が」
「志願します！？教官としてうれしいぞ！」
「き、聞いてないし」
「アフリカ行き。予定では１０日後だ」
二宮は早口で言った。
「第一分隊とお前達、それと動ける連中かき集めたら丁度、定数がそろった」
「……へ？」
「後で正式に伝えるが、お前達の任務は、中央アフリカに巣くう中型妖魔達の掃討になる」
ポカン。とする美奈代達に、二宮は事務的に伝えたが、
「……質問があります」
美奈代は、棒読み同然の口調で右手を挙げた。
「生理その他、いかなる理由があろうとも、訓練課程の総仕上げである最終演習は参加が義務づけられている。日本に残る連中も実戦部隊相手に演習だ」
二宮はきっぱりと、反論を許さない厳しい口調で言った。
「退学という選択肢は、死亡以外では認めない。逃亡は問答無用で銃殺だ」
「……どうして」
美奈代は泣きそうな顔になった。
「戦闘経験豊富な実戦部隊ではなく、我々が？」
「その問題に対する答えを出せ」
「……対メサイア戦ではなく」
美奈代は本当に涙声で言った。

「単なる妖魔掃討作戦である以上、ベテランが参加するより、新兵の経験値確保の格好の機会だと上層部が見なしている」
「私の説明が必要か？」
「……当たっているなら結構です」
「ただし」
二宮は言った。
「――風間」
「は……はい？」
ぼんやりした顔で話を聞いていた祷子は、思わず自分を指さした。
「私ですか？」
「神代達も別カリキュラムに回っているが、お前もそうなることが決定した。お前は今回の演習には参加しない。内地で別なカリキュラムに入ってもらう」
「え？」
「ちょっ！？」
さつきが真っ青になって立ち上がった。
「き、教官！？それってまさか！」
「落ち着け早瀬――別に風間がクビとか、そういうわけじゃない。風間は他の候補生とは違う所に送る」
「精神病院？」
「聞こえているぞ泉。これは軍機に抵触するため、本人のみに内容は告げることになる。風間、あとで残れ」
「……はぁ」
祷子は、どうにも理解できない。という顔で小首を傾げた。
「――まぁ、風間も苦労するだろうが頑張ってもらうとして、問題は他の全員の演習だ」
「あ……あの？」
ようやく話が見えたらしい。さつきが恐る恐るという顔で手を挙げた。
「つまり、私達？」

「戦闘機動訓練も終わっている」
二宮は言った。
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の使い方は明日から始める」
「妖魔焼却のためですか？」
「その通りだ」
「我々だけ？」
「現地では、第二中隊より護衛が６騎、それから我々教官騎も出る。基本的には“征龍（せいりゅう）”及び“雛鎧（すうがい）”。一部生徒には“幻龍（げんりゅう）”が与えられる」
「“幻龍（げんりゅう）”は第一分隊？」
「そうだ」二宮は頷いた。
「欲しかったら、もう少し我々教官達の受けを良くしておくべきだったな。該当地域制圧完了までが期間だ。１日で終わるか１００年かかるかは神様仏様司令部様次第だ」
「……」
「富士学校は、もし、何かの間違いで貴様等が生き延びた場合のみ、卒業を認める方針だ。アフリカまでの間、みっちり実騎訓練してやるから楽しみにしていろ」
「……で」
それまで、腕組みをして話を聞いていた宗像が、まるで念を押すような口調で訊ねた。
「我々はメサイアに乗って、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で敵を焼き殺すだけ。対メサイア戦はないということですね？」
「ああ」
二宮は頷いた。
「演習としては簡単な方だ。私の場合はホンモノの対メサイア戦だった。各分隊までは、回された可動騎をローテーションを組んで使用した出撃となる」
「第一と、我々は？」
「第一分隊はともかく、お前等女性騎士と他の分隊の男性騎士がコ

クピットを共用で使い回すことは問題がある。富士学校所属騎を動かすから感謝するように」
「えっと？つまり」
「そうだ」
二宮はニヤリと笑った。
「お前達の棺桶は“雛鎧（すうがい）”――ヒヨコらしいものが与えられてよかったな」

●富士学校編　第十二話

「なぁにが“ヒヨコには相応しい棺桶”よ！」
乗騎訓練のため移動中、毒づいたのはさつきだ。
最終演習に向け、他分隊向けの“征龍（せいりゅう）”や“幻龍（げんりゅう）”が続々搬入され、にわかに忙しくなる別ハンガーはまるで戦場だ。
移動する“幻龍（げんりゅう）”達を見るだけで羨ましさを通り越して悔しくさえ思えてくる。
やっとたどり着いたハンガー。
目の前に並ぶのは、演習で美奈代達が使う“雛鎧（すうがい）”達。
一代前の近衛軍標準メサイア“征龍（せいりゅう）”を訓練騎（トレーナー）に仕様変更したモデル。
頭部ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）とコクピット双方を複座型にしているため、外見は乗りたくないほど不格好だが、美奈代達が唯一動かした、なじみ深いメサイアだ。
すでに他分隊は騎士が単独で動かす“征龍（せいりゅう）”や“幻龍（げんりゅう）”での訓練を受け続けているというのに、何故か第七分隊たる美奈代達は、いつまで経っても“雛鎧（すうがい）”の搭乗しか認められていない。

「こんな半端な騎体で実戦なんて出来るわけないじゃん！」
さつきが文句を言いたくなる気分もわかる。
練習機で戦闘機相手に戦えると思うのは素人以下だ。
「まぁ、そう言うな」
美奈代は苦笑しつつ言った。
「訓練が完了しないまま、卒業検定じゃ納得出来ないのは確かだけど」
「これで実戦部隊回されて」
“雛鎧（すうがい）”を前に、さつきは顔をしかめた。
「訓練騎以外、乗ったことありませんって言ったら、納得してもら

えるのかしら？」
「さぁね」
宗像が言った。
「女ってことで大目に見てもらえるんじゃないか？」
「それって良いこと？」
「役得だな――だが早瀬」
宗像は言った。
「“雛鎧（すうがい）”は、単に“征龍（せいりゅう）”の複座にすぎないぞ？。基本性能は高い」
「中身はそうかもしれないけど」
「しかも、転倒防止のバランサーシステムは“幻龍改（げんりゅうかい）”のＳ型（指揮騎仕様）と同じグレードが取り付けられています。コクピットブロックの装甲も追加されていますし……気休め程度ですけど」
美晴も“雛鎧（すうがい）”の弁護じみたセリフを口にする。
「……“雛鎧（すうがい）”も悪くないってこと？」
「ま、そういうことだ……というか早瀬」
美奈代が小声で言った。
「そろそろ褒めておかないと、精霊体がヘソ曲げるぞ？」

「うわぁ……スゴ」
“雛鎧（すうがい）”のモニターの中で、教官騎としても異例の“幻龍改（げんりゅうかい）”、その最上級グレードたる特殊部隊指揮官騎“アリアＳ３”がハンガーから出ようとしていた。
二宮がこの富士学校へ教官として赴任する際、最高司令官たる麗菜殿下より、個人的専用騎として与えられたとさえいわれる騎。
長野騎の駆る“征龍（せいりゅう）”がその後に続く。
「あんなの……よく使える」
それをスクリーン越しに見た美奈代の本音だ。
敵騎のデータを測定するための計測システムは、計測相手として

“幻龍改（げんりゅうかい）”を捉えて以来、レッドゲージに入りっぱなしだ。
メサイアの中でも細く女性的とさえ評されるその優美なデザイン故に、“幻龍改（げんりゅうかい）”が“貴婦人”の異名をとるのも納得出来る。

麗しき貴婦人。

だが、そのスペックは“悪魔”とさえ囁かれるまさにモンスターマシンだ。
“雛鎧（すうがい）”が相手になる存在ではない。

その“幻龍改（げんりゅうかい）”の動きが止まった。
不意にその顔が横を向き、しばらくするとコクピットハッチが開き、二宮が出てきた。
その視線の先にいるのは美奈代ではない。
美奈代騎の横のハンガーベッドに格納されている早瀬さつき騎だ。
「？」
美奈代が横を見ると、さつき騎のコクピットブロックにはさつきや整備兵が張り付いていた。
何故か、コクピットのハッチが開いていない。
半泣きになったさつきが何か怒鳴っている。
二宮の乗騎からさつき騎に飛び乗って、何かさつきや整備兵達と言い合っている。
「どうした？」
「あのね？」言いづらそうにそう口を開いたのは、美奈代騎の精霊体“さくら”だ。
白いスモックを着た幼稚園児。
外見は四歳位の愛らしい女の子。
だが、同時にこのメサイア“雛鎧（すうがい）”の搭載するエンジンの化身でもある。
「“他の騎がいい”って、さつきちゃんが言ったの聞いた“霧香（きりか）”

がヘソ曲げちゃったの」
「は？」
“霧香（きりか）”が一度ああなると大変だよぉ？」

実際、第七分隊のこの日の訓練は、騎体不調を理由に中止となった。

●翌日　富士学校　校舎
「メサイアが乗れないからといって」
未だに精霊体のヘソは曲がったままだ。
この騒ぎで、精霊体がかなり頑固な存在だと美奈代達も思い知らされていた。
「別段、訓練が中止になるほど、軍隊は甘くない」
二宮の口調は、あくまで冷たい。
「この際、お前達には、シミュレーターによる訓練を受けてもらう」
「しかし、私達はシミュレーターによる訓練課程は修了しています」
「国連軍で使用している特別プログラムだ。我々教官達もやっている」
「？」
「はっきり言っておく。今回のアフリカ送りに関しては、メサイア同士で何度、模擬戦をやろうと、何の意味もない」
「えっ？」
美奈代達は、思わず違いの顔を見合ってしまった。
メサイアはメサイア同士の戦いこそが本領だ。
それに意味がないとは？
「シミュレーターにおける敵は、大型妖魔だ」
「……そんなの」
さつきはポツリと言った。
「パルカンか何かでミンチじゃん」

「本当にそう思うか？」
二宮の地獄耳は、しっかりその声を捉えていた。
「シミュレーターを経験した４４期で全滅を免れた分隊は皆無。生還出来た候補生は――たった５人だ」
「……はい？」
お咎めが来るかと思って身構えたさつきには、目を点にした。
「生還すれば……いいんですか？」
思わず山崎が見当はずれな事を言う。
「いいわけないだろう？逃げることが出来た――その程度のこと。つまり、敵を倒せず、やれたことと言えば、尻尾を巻いて逃げることだけ。それが精一杯だったのが、５人だけ」
「……」
「このままなら、この５人が卒業主席だろうな」
「ま、まって下さい」
美晴が手を挙げた。
「逃げて、何で主席なんですか？」
「逃げられたからだ」
「意味がわかりません」
「シミュレーターに乗ってみればわかる。いいか？このシミュレーターで生き残っても、私は評価しない。私が評価するのは、勝つことだけだ。戦場では、勝たなければ兵士に存在する意味はない」
「……」
そりゃそうだ。
少なくとも、美奈代はそう思った。
「教官」
都築が手を挙げた。
「――で、そいつぁ、どんなヤツなんですか？」
「本日は説明までだ。明日までに、どうやって勝つか、それぞれに考えろ。内容を説明する」
二宮はチョークを手にした。

●大日本帝国皇室近衛兵団所属、メサイア“征龍（せいりゅう）”コクピット

「き、来たよっ！」

「ふ、フォーメーションはこれでいいの！？」

美晴とさつきの悲鳴じみた声が隊内通信に入る。

「教本ではこれでいいはずだけど……」

さつきに答える美奈代にも、自分たちが正しいのか全く自信がない。

目の前の世界を埋め尽くさんばかりの大型妖魔達を前にして、たった４騎が何が出来るはずもないという気持ちばかりが先に来る。

美奈代は、自分が焦っていることをはっきりと自覚していた。

震える手足が意味もなく動き、視線が一点を注視出来ない。

敵よりも情報にばかり目がいく。

戦うより、逃げるチャンスばかり考えてしまう。

美奈代達の駆る“征龍（せいりゅう）”が立つと“される”のは、アフリカの大地。

スクリーンに広がるその無限の大地――いや、その新しい主――が、彼女達を決して歓迎していないことは、その数からして明らかだ。

「敵、数推定４００以上。展開中――敵、突撃！」

「くっ！」

ＭＣ（メサイアコントローラー）の警告に、美奈代は右腕にマウントされた３５ミリ機動速射野砲のトリガーを引いてしまった。

右腕にマウントされた速射砲の反動で、右腕が大きく跳ね上がり、火線が空めがけて走る。

有効射程に敵が全く入っていないのに気づいた時には遅すぎた。
「しまっ！」
「何無駄弾撃ってるのよ！」さつきが怒鳴る。
「射程はまだ――来たぁっ！」
敵は重装甲重武装を誇る大型妖魔“ライノサロス”の大群。
甲冑を着込んようなだその容姿は、丁度、サイを巨大化させたような印象だ。
そんなフォルムを持つ、彼らのサイズは平均４５メートルから５０メートル。
正面装甲は１２０ミリ砲弾を受け付けない程頑丈。
そんなバケモノが数にモノを言わせて突撃してくるのだ。
しかも、その速度は音速を越える。

美奈代の暴発が呼び水になったのは誰の目にも明らかだ。

「このバカぁぁぁっ！」
「すまんっ！――く、来るぞっ！」

その大質量が音速で突撃して来る衝撃を前に、人類が築き上げた万物は、あまりに無力だ。
美奈代騎の前で、１２０ミリ速射砲で乱射に近い射撃を行い、何とか突撃を止めようと足掻いた結果、逃げそこなった2騎の“征龍（せいりゅう）”が、ライノサロスの衝角をマトモに喰らい、文字通り分解した。
「早瀬っ！柏っ！――ちぃっ！」
美奈代はギリギリのタイミングで“征龍（せいりゅう）”のブースターを開いた。

敵は音速で突撃している以上、小回りは利かない。なら、ギリギリで避けて、上空からの攻撃すれば――美奈代の考えでは、そんな試みは成功しつつあった。
その目の前、スクリーン一杯に、ライノサロス達が産み出す漆黒

の闇が広がる。
その壮絶な光景に、美奈代は一瞬、トリガーを押すことを忘れた。

グンッ！！

“征龍（せいりゅう）”が、まるで何か見えないモノに殴られたように弾かれ、騎体のバランスが完全に失われた。
「な、何っ！？」
美奈代はスピンを始めた騎体を何とかコントロールしようと足掻く。

ビーッ

背筋の寒くなるような警告音が鳴り響き、コクピットを激震が襲った。

●“鈴谷（すずや）”ハンガー
「――――全く」
床に正座させた自分の教え子を前に、二宮は心底情けないといわんばかりに顔をしかめていた。
「早瀬、柏！」
「はいっ！（×２）」
「１２０ミリ砲で正面装甲が割れないことは既に知っていたはずだ！」
「し、至近距離なら」さつきは悔しそうに言った。
「装甲を割れるかと思って……」
「シミュレーターの判定が厳しいんですよぉ」
美晴は、言い訳がましくそう言って口をとがらせた。

「実戦なら……多分」
「んなワケがあるかっ！」
二宮は怒鳴った。
「大体、群れで突撃しているんだぞ！？先頭の1体や2体倒した所で、敵が止まってくれると思っていたのか！？音速突撃の意味がわかっているのか！？泉っ！」
「は、はいっ！？」
脚がしびれたことにだけ気を回していた美奈代は、突然、自分の名を呼ばれて思わず素っ頓狂な声をあげた。
「音速突撃する集団の上空に出るバカがあるかっ！戦術講義で教えたはずだぞ！」
「す、すみませんっ！」
「講義中に目を開けたまま寝ていたからだっ！音速で移動する物体には衝撃波が生じることは常識だ！衝撃波に巻き込まれればバランスを崩すのは当然！そこを後続の別妖魔に狙撃されて吹き飛ばされたんだ！」
そう。
ライノサロスの大群上空をギリギリ接触しない程度の高度でかわし、上空からの攻撃を試みた美奈代を襲ったのは、音速突撃する大群が生じる円錐形の衝撃波。
数が数なだけにその規模と破壊力は想像を絶する。
それに翻弄され、騎体バランスを失ったところを、ライノサロスの大群の後ろに展開していた魔族軍の重狙撃部隊の標的（まと）にされ、美奈代騎は被弾１３０発、二宮曰く「ミンチの出来損ない」になった挙げ句、最後はライノサロス達に踏みつけられて最後を迎えた。
「宗像っ！後方に下がりすぎて孤立した挙げ句が、敵の集中砲火を浴びるとは、貴様は部隊の連携をなんだと思って――――ったくっ！！
いいか！？明後日には実戦だぞ？
本気で死にたいのか？

このままなら、確実に死ぬのはあんた達なのよっ！？
日本語わかってるの！？」

いつになく、二宮の説教が感情的になっている。
怒っているというより、泣きたい。そんな口調だ。

「図書室に行って、機動教本をもう一度読み直しなさいっ！読み終わった者から再度、シミュレーターにかかるっ！モード２３から３５まで終わるまで何度でも繰り返しなさいっ！生き残る方法を骨の随までたたき込む！一回でも勝てるまでメシ抜きっ！」
「い〝っ！？」
「飢え死にしたくなければ勝ちなさいっ！わかったわねっ！？」
「そ、そんな！」
「つべこべ言わずに図書室へ行きなさいっ！」

それから６時間後だ。

「きゃぁぁっっ！」
ズズンッ！
「そんなっ！？」
ガガンッ！
「またぁ！？」
ズーン！
「くそっ！」
ドドンッ！

「……本当に」
またもや正座する教え子達の目の前で仁王立ちになり、腕組みをする二宮の額の青筋がまた増えた。

「何回戦死すれば気が済むんだ。ん？」
「……」
「メサイアでの死に方を極めて本でも作ってくれるのか？」
「……っ」
「……どうした？何か言いたければ言ってもいいぞ？」
「……せめて」
涙混じりに、訴えるような声を上げたのは美晴だ。
「せめて……水を、ください。も、もうコントロールユニットを操作する力も……」
「音速突撃を阻止出来ない理由は、水不足か？早瀬」
「い、いえ……」
さつきも力無く首を横に振る。その顔はもう真っ青だ。
シミュレーターとはいえ、メサイアを6時間も戦闘機動で操縦してみれば、メサイアが騎士にかける負担の惨さがわかるだろう。
さつきの横に座る宗像も目をつむったまま、額を流れる汗をぬぐう力もない様子だ。
「泉？貴様の言い逃れは何だ？」
「あの」
正座しながら、ずっと何かを考え込んでいた美奈代は、二宮に言った。
「もういいですか？」
その一言に、居合わせたさつき達は、全身の疲労が吹き飛ぶ程の衝撃を受けた。
「……何が」
どう考えても反抗するとしか聞こえない口振りに、あきらかにカチンと来た様子の二宮が冷たく答える。
とんでもないことになった！
皆がそう心配する中、美奈代は仲間達からすれば信じがたいことを口にした。
「シミュレーター、もう一度乗せてください」

美奈代がそう言ったのだ。
「……どうにも気になるので」
「気になる？」
毒気を抜かれ、すっかりあきれ顔の二宮が首を傾げた。
「何がよ」
「……何度もやられたからかもしれませんけど……もしかしたら」
「はっきり言え」
「……奴らを倒せます」
「ほう？」
二宮は、楽しげというにはあまりに冷たい笑みを浮かべた。
「面白い……やってみろ。もし、撃破出来たら」
「出来たら？」
「明日と明後日、訓練を休みにしてやろう」
「わかりました」
美奈代は頷いた。
「ただし、お願いがあります」
「ん？」
「これまでの戦闘記録、全部見させてください」
美奈代はちらりと仲間達を見た。
「宗像達は休ませてください。私だけで結構です」
「……よし。3回、チャンスを与えてやろう。3回ともしくじったら」
二宮は頷いた。
「今度こそ、コスプレ接待だぞ？」

シミュレーターの前で死んだように眠るさつき達の前、シミュレーターに乗った美奈代は、ずっとスクリーンを見つめていた。
時間にしてすでに3時間近くが経過していた。
「……」

手元のコンソールを操作して、映像を再生しては巻き戻すことを繰り返している。
二宮が美奈代をずっと睨むように監視していた。

――――何を考えている？

そんな教え子を前に、二宮は自問していた。
美奈代が繰り返しているのは、ライノサロスの突撃前の動きだ。
シミュレーター上のライノサロスの動きは、各国から派遣された動物学者達の、徹底された観察上のデータを元にしているため、ライノサロス達の動きを完全に予想できるとされている。
問題は、一体何が気に入らないのか、その理屈が一切公表されていないこと。
つまり、何を根拠にそういう行動に出るのか。という、最も肝心な所が公表されないのだ。
そんな画面を、美奈代はそれを食い入るように見つめている。
仲間の休憩時間を確保するためではないことは、教官である二宮にはわかっていた。
仲間が鬱陶しい。
一人で考えたい。
美奈代がそう思っていることは明白だ。
ただ、そこまでして美奈代が何を調べようとしているのか、それが気になった。

「どうするのよぉ……」
再びシミュレーターに乗せられたさつきは、もう泣き出していた。
「もうやだぁ。痛いし怒られるしお腹すくし、あげくにコスプレ接待!?私、こんな思いするために軍隊入った覚えないよ!」
「喉からからで……痛いですぅ……ヒック……グスン」

美晴ももうやる気が疑わしいほどの弱々しい声でしゃくりあげている。
「絶対、除隊してやる……理由欄に、教官のイジメが原因だって書いてやる……」
「おい……泉」
宗像もまた顔色が悪い。表情にこそ出さないが、疲労の色は隠せない。
「どうするんだ？」
「あまり……自信はない」
「……おい」
「だけど」
美奈代は妙に感情のない声で言った。
「これ以外に方法はない。そう思うんだ」
「どうするんだ？」
「……あのな？」

「……さて？」
教え子達の打ち合わせが終わったようだ。
二宮はあえて打ち合わせの内容を耳にしなかった。
いや、したくなかった。
教え子が何をするのか、その行動で見届けたいと思ったから、二宮は、シミュレーターからの音声をカットしていた。
「何をどうするつもりだ？」
二宮の目の前、壁一面のスクリーンには、美奈代達の乗るシミュレーターに映し出される映像や美奈代達の顔、そして敵味方の状況を示す配置など、あらゆる情報が表示されている。
そんなシミュレーターに乗る美奈代達の立たされた状況は、こう推移している。

ライノサロス達はすでに美奈代達を発見している。
ただし、彼らにとって、美奈代達が敵なのか味方なのかわからない。
すると、群れの中から群れのボスが美奈代達を敵と認めるホルンのような雄叫びをあげる。
それを聞いた群れが突撃陣形を形成する。
後は突撃を待つだけ。
それが、このシミュレーションプログラムだ。
「……ここでも動かない？」
突撃寸前の敵を前に動かない教え子達に、二宮は眉をひそめた。
自分なら、ここで突撃を――
二宮はそう言いかけて強く頭を振った。
教え子達は、これまで先手必勝を模索した挙げ句が、何度もこの時点で突撃し、返り討ちにあっている。
なぜ、返り討ちにされるか二宮でさえ説明できないケースも何度かあった。
ただ、ライノサロス達の角がビームを発射する能力を持つことを、美奈代達が知らなかったと白状した時は、さすがの二宮も泣きたくなったものだ。
ライノサロス達に、さんざん痛めつけられた教え子達が、今度は何をしでかそうとしているのか、二宮も見当がつかない。
「さて……一体？」
群れのボスのホルンのような雄叫びが響き、群れが陣形を作り続ける。

ライノサロスのボスが、このホルンのような声で群れに配置を指示し続けていると、二宮も聞いている。
ボスのホルンにあわせ、アフリカの強い日差しをうけ、黒い皮膚を陽光に輝かせるライノサロス達が、その巨体を震わせて動き回る光景は、コンピューターによる合成と理解しつつも思わず見とれてしまうほど圧巻だ。

「……ん？」
二宮の教え子達が信じられない行動に出たのはその時だ。
スクリーン上で、不意に美奈代達の駆る“征龍（せいりゅう）”達が地面に伏せたのだ。
自分はこんなこと教えていない！
血が頭に上りかけた二宮だったが、血管が切れそうになったのは、それだけではない。
美奈代騎以外の“征龍（せいりゅう）”のエンジン出力が、アイドリングにまで低下したのだ。
「何！？」
アイドリングから戦闘機動に必要なコンバットモードに引き上げるには、タイムラグが必要だ。音速突撃をかけられたら、逃れることが出来なくなる。
これが実戦だったら、二宮はためらわずにぶん殴っている所だ。
「あいつら！」
いや。
二宮は言いかけて首を横に振った。
正しくは――
「泉め――――何を考えている？」

二宮は、訓練課程修了後の進路予定をまとめたファイルを開いた。
皆の進路先の内定が書かれている。
美奈代の項には、近衛参謀課程への進学、もしくは第一中隊前衛

部隊。
そう、書かれていた。
参謀としての素質を磨いてほしい。
それが二宮の親心だ。各所で見せる立案能力は、二宮も一目置いているのだ。
対して、長野はそれより染谷を倒した実力に着目し、実戦部隊への配属を主張している。
二宮は、それに同意していない。
染谷と同じ部隊に配属させて、二人の関係を後押しする仏心を二宮は持っていないからだ。
「……これは、お前の採用試験だぞ？泉」
二宮はそう呟くと、ファイルを閉じた。
美奈代達が伏せた途端だ。
まるでそれを待っていたかのように、ライノサロス達のボスのホルンと群れの動きが一瞬、止まった。
少しの間をあけて、今度はより強く、重いホルンが周囲に響きわたる。
しばらくすると、ボスが動いた。
焦っているかのように、前脚で立ちあがったり、体を震わせるなど、動作に落ち着きがなくなる。
まるで迷子かだだっ子が暴れているような、そんな感じだ。
群れの動きにも乱れが生じ始める。
ライノサロス達が互いに話すように、小さな鳴き声をあげ始めた。
美奈代騎が動いたのは、その時だ。

美奈代騎だけ――――だ。

腹這いに伏せていた美奈代騎が突然起きあがったかと思うと、手につかんだ何かを、部隊の伏せる場所から見て3時方向（ライノサロス達がいる方角が１２時方向）に投擲、即座に伏せた。

美奈代騎が投擲したのは、メサイアが装備するＭ２２型柄付手榴弾だと、二宮はすぐに理解した。

メサイアの握力で手榴弾が握りつぶされるのを防ぐため、あえてグリップを取り付けた投擲爆弾だ。

爆発と同時に大音響をもって周囲を圧倒する、音響爆弾としての機能も有する。

大地に転がって爆発した音と閃光を、シミュレーターが、人の感覚器に耐えられる程度に調整して表現してくれる。

柄に仕込まれた部分から、しばらくの間は鼓膜を破壊するほどの大音響を発し続けるおかげで、スピーカーから流れる、顔をしかめずにはいられないほどの音とつきあわなければならない。

二宮でさえ予想出来なかったライノサロス達の動きがあったのは、次の瞬間。

「何!?」

突然、ライノサロス達のボスが高い雄叫びをあげた。

それをきっかけに、乱れかけていたライノサロスの陣形が急激に形成され、再び、ライノサロス達が一斉に突撃体制に入った。

突撃にそなえ、槍襖（やりぶすま）さながらに並ぶライノサロス達の角達。

その矛先は、地面に伏せる美奈代達ではない。

音を発し続ける手榴弾だ。

「なっ!?」

目を見開いた二宮の前。スクリーンの中で、ライノサロス達が一斉に突撃を開始。

手榴弾が落下した周辺は一瞬にして数百体のライノサロス達によって制圧された。

敵がいないことにようやく気づいた。

そう言わんばかりに、先頭を走るライノサロス達が、まるでつんのめるようにその場に急停止、後続のライノサロスが、前を走っていた別のライノサロスに激突する。

推定重量数百トンの巨体が潰され、あるいは肉片となって宙を舞う。

勇ましいホルンではなく、鈍い何かが潰れる音や、ライノサロス達の悲鳴が、群れを支配する。

圧倒的破壊を生み出す陣形が、今度は逆にライノサロス達自身に襲いかかったのだ。

美奈代達が動き出したのは、まさにその時だ。

全騎がコンバットモードにエンジン出力を引き上げるのと同時に、先ほどの手榴弾を群れめがけて投擲。

手榴弾の爆発とタイミングをあわせ、散開しつつ突撃。

狼狽する群れめがけて、美奈代達は、手にした兵器――広域火焔掃射装置（パーズフレイム）のトリガー（スイー）を引いた。

その日の夜。

美奈代は二宮に呼び出された。

他の三人はコクピットで潰れて医務室送り。

美奈代は医務室で仮眠をとっただけでこの扱いだ。

“差別待遇だ”とぼやきつつ向かった場所は、候補生達にとっては地獄の閻魔堂――教官室。

殺風景な部屋には、二宮の他にも別分隊の教官達、さらに校長や副校長までがいた。

美奈代は、二宮から労いのコーヒーを渡されると、全員と向かい合う場所に座らされた。

「楽にしろ」

長野が絶対出来ないことを言った後、美奈代に尋ねた。

「今回のシミュレーションについてだが」

「――なるほど？」

美奈代からヒアリングを終え、感心した声を上げたのは長野だ。

「つまり泉、お前は」

ちょっと信じられない。といわんばかりに顔をしかめ、首を傾げる長野が訊ねた。

「ライノサロス達が、敵、つまり泉達を見ていないことに気づいたというのか？」

「は……はい」

美奈代は、手にしたコーヒーカップを弄びながら頷いた。

手のひらの中でコーヒーがぬるくなっていくが、飲んでいいのかさえわからない。

こんなに教官達に囲まれた経験さえない美奈代は、どうしていいのかわからないまま、質問に答えるしかない。

「群れが突撃陣形を作っているのに、みんなキョロキョロしている

です。獲物が目の前にいるのに、どうしてだろうって……それで」
「それで？」
シミュレーターの報告書から目を離した美夜が訊ねた。
「ライノサロスが獲物を音で探していると、どうして結びついた？」
「実は」美奈代は言った。
「……風間に聞いた話を思い出したんです」
「風間候補生に？」
「はい……あの、富士学校にコウモリが住んでいるの、ご存じですか？」

「ああ。裏の森の洞窟にいるぞ？」
そう答えたのは、指導教官の小山中尉だ。

「はい。風間もそれを見つけて……いえ、そんなことはどうでもいいんです。自分は彼女に」
美奈代は小さく咳払いをして言葉を句切った。
「コウモリは反響定位（はんきょうていい）――つまり、音の反響を受け止め、それによって周囲の状況を知ることで獲物を見つけるんだと、教わりました」
「一種のソナーだな……それが？」
「シミュレーターで、ライノサロスに、何度か肉薄まで持ち込んだことがありましたが……ずっとひっかかっていたんです。そのたびに、何だかすごく違和感があって」
「ん？」
「自分もそれが何だかわかりませんでした。それで、何度も映像を再現して……陣形形成の時、キョロキョロしている姿で、やっとわかったんです。ほら、敵が間近にいたら、どんな生き物でもやることがあるじゃないですか」
「……何だ？」
二宮が本気で訊ねた。

「わかりませんか？」
「はっきり言え。候補生」
しびれを切らせたようにせっついたのは、西島教官だ。
「シミュレーターとはいえ、ライノサロス４００体の大群をわずか４騎で――大型妖魔相手にキルレシオ１体１００は、世界新記録にして最高記録なんだぞ？」
「――へ？」
美奈代は目を丸くしてぽかんとした顔になった。
「……普通じゃないんですか？私達が単に成績悪くて……」
「バカを言うな！」西川少佐は怒鳴った。
「謙遜も度が過ぎると嫌みでしかないぞ！」
「す、すみません！で、ですけど」
「……泉」
二宮が言った。
「先を話せ。敵が間近にいたら、何をするんだ？」
「……あの」
美奈代は言った。
「敵を、見るんです」

「見る……？」

「そうです」
美奈代は頷きつつ答えた。
「必ず、敵を見ます。ところが、ライノサロスはそうじゃない。目線を感じないんです。まるで、見えていないような」
「それは……」
あきれ顔の長野が言った。
「単に、シミュレーターだからとか……」
「シミュレーターは目もしっかりと再現する。再現された映像から目線を感じる？なるほど……女のカンか？よく気づいたものだ」

とてもほめ言葉とは思えない口調で、池田大尉が言った。
「長野、その程度も知らずによく教官が務まるな」
「くっ！」
「１００回殺されて、それに気づいたわけだ」
「……実戦的な功績でないことはわかっています」
美奈代は少しふてくされたような声になった。
「ですけど……」
「１００回も死ぬほど間抜けで無様なマネをしたんだ。それくらいの発見はあって当たり前だ」と、池田大尉は平然と答えた。
「ヒト科のイキモノとしてな」
「……」
「で？」
訊ねたのは美夜だ。
「泉候補生は、ライノサロスの目は見えていないと？」
「……いえ」
美奈代は首を横に振った。
「シミュレーターの感覚では、おそらく１００メートル見えていません。最後の広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）射撃時の距離は、群れの外縁１３０メートルでしたが、自分たちが見えているとは思えませんでした」
「……体長の２倍までは見ることが出来るが、それ以上は、むしろ音波に頼っていると？そこまで仮定した上で、攻撃を仕掛けたか」
「自信はありませんでした」
美奈代は言った。
「ただ、他に方法が思いつかなかったのです」
「……まぁいい」
二宮は言った。
「ご苦労だった。約束通り、明日明後日は特別休暇をくれてやる。ゆっくり休め」
美奈代の退室を見送った教官達は言った。

「シミュレーターの信頼性は？」
「国際基準。本部からのダウンロードである以上、プログラムの信頼性は高い。むしろ泉は、学会で提唱されていた、ライノサロスの感覚器に関する学説を証明したことになる」
「視覚が弱く、音で補っている……か」
「人間界のサイもまた、目が小さい分、視力は弱いですが、鋭い嗅覚と聴覚をもつことで知られています」
「ほう？井上中尉は詳しいな」
「ついさっき、調べてみました」
「ふむ……それにしても」
西川少佐は感心した様子で言った。
「さすが二宮中佐の秘蔵っ娘ですな」
「まだまだ」
二宮はわざとらしく顔をしかめた。
「おだてるとつけあがる」
「しかし、ライノサロスの大群を全滅させたあの戦法は極めて有効です。自分はよくぞ考えついてくれたと」
「敵をやり過ごし、混乱させてから背後から叩くなんて、基本でしょう」
池田大尉は、バカにしたような口調で言った。
「二宮中佐のおっしゃる通り。この程度のことで、あのドンガメに参謀面されてはかないません……まぁ」
一体、ケンカを売っているのかと聞きたくなるほど、芝居がかった仕草で池田大尉は肩をすくめた。
「あのライノサロス部隊撃破シミュレーションは、世界中のメサイア乗りが血眼になって撃破を試みたものの」
池田大尉の視線が、周囲を見下しているのは確かだ。
「――誰一人、クリアできなかった。名だたる騎士達がこぞってしくじった」

――お前もそのウチの一人だろうが。
皆が内心、そう思った。

「大抵が１０騎から２０騎の大部隊で……それをまぁ、わずか４騎ですからね。公表すれば、近衛の名にハクがつくでしょう。富士学校も」

「さてさて」
フォローするような井上中尉の言葉を遮ったのは池田大尉だ。
「本当に信じられますかね」
「何？」
「たった４騎でキルレシオ１対１００？プログラムの信頼性が問われますな」
「大尉」
西川少佐が顔をしかめた。
「モノには言い方がある」
「おや？私は素直な見解を述べているだけです。プログラムのバグでもあって、ライノサロス共の動きにエラーがあった。あのドンガメ共はそれで勝てた――そうでなければ、キルレシオ１対１００は無理です。ありえない。皆がそう結論づけるでしょう。つまり」
その視線の先には、二宮がいた。
「連戦連敗の教え子の不甲斐なさを嘆いた教官が、手心を加えた――と」
「貴様っ！」
顔を真っ赤にして席を立ったのは長野だ。
「もう我慢ならん！貴様表に出ろっ！たたき殺してやるっ！」
袖をまくり上げる長野を周囲の教官達が止める。
「おやおや」
そんな長野を、池田大尉は鼻で笑った。

「我々の間での私闘は御法度ですぞ？」
「モノには限度というものがあるっ！」
「調べればわかることです」
「――私の潔白が証明されたら？」
「その時はその時」
二宮に、池田大尉は答えた。
「私は二宮中佐を疑っているとは一言も申し上げていませんからな」
「……いいでしょう」
二宮は頷いた。
「ただし、第七分隊のシミュレーター結果は上層部に報告はします」
「――ご随意に」

●富士学校編　第十三話

「今回のアフリカ派遣に際しては、コクピットにＭＧ－３軽機関銃の他に、小銃と拳銃、それぞれ一丁をコクピットに設置しておくこと」

二宮は言った。

「特に、拳銃についてだが」

場所は富士学校武器管理室。

富士学校で扱う銃火器のほとんどを管理している部署の一室。

会議用机の前に美奈代達が並んで座っていた。

そして、ほとんどの生徒の前には、Ｈ&ａｍｐ;Ｋ　Ｐ８自動拳銃とＧ３６Ｃが置かれていた。

弾薬は入っていない。

マガジンもないことを知っていながらも、実銃を前に皆の顔に緊張が見て取れる。

「幸せ者だ。私達の時は、トンプソンＭ１……知ってるか？昔のギャング映画で使われたシカゴタイプライターとも呼ばれる奴。あれ一丁だぞ？さすがに気の毒と思ってくれたのか。それともドイツの業者からいくらもらったか知らないが、近衛では近頃、後方要員向け及び、メサイアを含めた各種乗員向けに最新鋭のＧ３６Ｃをライセンス生産してくれるようになった。実戦に入る前に配られる実包は、２発を別にして……そうだな。袋にでも入れて、首から提げておけ。それからは、その２発が何より効くお前達のお守りになる」

「あの、質問」

美晴が訊ねた。

「それは――自決用ということですか？」

「そうだ」

二宮は平然と答えた。

「こめかみか、口にくわえるか……とにかく脳へめがけて、確実に

撃ち込むんだぞ？」
「それが……何故２発？」
「１発が不良だったらどうするんだ？不発のおかげで死に損なった不幸な奴を何人か知っている」
「……はぁ」
美晴は不承不承、頷いた。
「猟師だって、たった一発の弾丸を“守弾”と呼んで大切にしたんだ。この場合、お前達にとっては、メサイアぶっ壊した役立たずを、この世から一発で消し去ってくれる魔法の薬なる。大切にしろよ？」
「手榴弾の配備は？」
「サバイバルキットの中にある。そっちを使え」
「拳銃の意味が……」
「手榴弾と拳銃弾とどっちが高いと思ってる？」
美晴達は、目の前に置かれた見慣れない銃を前に緊張した顔だ。
「近年、我が国は陸軍が中心となって、欧州軍と武装の共通化を行いつつある。機甲部隊兵員向けの武装もこれに伴い、更新の時期を迎えているのだが……」
ジロリ。
二宮の視線が向けられたのは、美奈代と祷子だ。
「……希望者は別な装備が与えられるとはいえ」
祷子の目の前には、Ｐ－９０とＰ２３０が置かれている。
「本当に希望を出してきたのはお前達だけだ。風間、泉」
「そうですか？」と、祷子はきょとんとしている。
「訓練の時、私はいつもこれだったので」
「……ああ、そうか」
祷子は銃火器は左利き。
指導教官から、“お前はこっち方が良い”と勧められたのが、Ｍ（メサイア・コントローラー）Ｃ達が主に用いるＰ９０だ。
「射撃成績は悪くなかったな」
二宮はＰ９０を取り上げ、手の中で感触を確かめた後、デスクに

戻した。
「……さて」
二宮が次ぎ声をかけたのは、美奈代だ。
「“フルメタルジャケット”でも見たのか？」
「……いえ」
美奈代は答えた。
「この2挺が一番、扱いになれているんです」
そう答える美奈代の前にあるのは、M14とM1911コルトガバメントだ。
「……訓練でも使ったことないはずだぞ？おい。お家のモデルガンのつもりならいい加減にしろよ？」
「分解整備出来ます」
「……ほう？やってみろ」
二宮は面白そうに言った。
「何分で出来る？マニュアルは必要か？」
「どっちでやりますか？」
「M14で――2分くれてやろう」

●射撃場
「……まさか本当に」
二宮は、射撃を続ける美奈代の背中を見ながら、感心したように言った。
「野戦整備出来（フィールドストリッピング）るとは思わなかった」
「射撃の腕前もたいしたモンですよ」
射撃教官の牛島が満足げに言った。
「三八式渡した時に比べたら、比較にならない。銃が慣れている」
「銃に、じゃなくて？」
「銃も人を選びますからね」牛島は笑って言った。

「M－14もガバメントも、泉候補生との相性が良いんでしょう。三八やSIG扱っていた時と成績順位で比較すれば、一桁違いますよ」
「……ほう？」
二宮はポツリと言った。
「……お前も、裏があるってことか？泉」

●宮内省近衛府　富士学校

「……ここまでにするか」
少し早めに夕食を済ませ、自習室に籠もっていた美奈代は、本を閉じて席を立った。
国内に輸入される原油価格が暴騰した影響で、各地で電力規制がされているせいだ。
染谷と出会ったのは、その時だった。
まるで美奈代が席を立つのを待っていたような、恐ろしいほどのタイミングの良さだった。
「あっ」
「ああ、泉候補生……勉強は終わりか？」
「は、はい」
心臓が高鳴り、顔が熱くなるのを、美奈代自身、どうしようもない。
「そ……そうか」
染谷はややどもりながら言った。
「訓練が……その……延期されつづけで、残念だな」
「は、はい！」
美奈代の口からは、裏返った、すっとんきょうな声が出た。
思わず口を押さえるが、出たものを戻すことは出来ない。

「ま、魔族軍が戦闘範囲を停止、というか、縮小していると聞きましたが？」
「うん」
染谷は頷いた。
「こちらも体勢が整わないが、向こうも同じようだね。僕達にとっては、物資不足で訓練が遅れ気味の方が嘆くべきかもしれないが……」
不意に、染谷は周囲を見回した。
幸い、自習室は自分達しかいない。
「ちなみに、泉候補生は、何を読んでいたんだ？」
「狩野粒子についての資料です」
美奈代は脇に挟んだファイルのタイトルを見せた。
「ああ。学会に発表されたっていう、あの？」
「戦場で電子機器が使えなくなった原因が、魔力物質による“空間汚染”にあるとかで、興味があって、資料を借り受けたんですが……」
美奈代は顔をしかめた。
「半分以上がワケの分からない数式の羅列では……」
「魔法物質――“狩野粒子（かのうりゅうし）”の組成と、空間干渉作用の数学的証明だよ」
ファイルを受け取った染谷が書類上の数値を指でなぞる。
「ね？ここの変数作用が電子基板上の電力の流れに干渉してしまう。
このため、この空間汚染の中では、真空管以上の電子装置、ＩＣやＬＳＩは使い物にならなくなる。
メサイアは飛行艦のように、魔力力場（マジック・フィールド）の影響下に置かれている場合は、その例外ではあるが――」
染谷は、美奈代の視線が書類ではなく、自分の顔に注がれていることに気づいた。
「――何？」

「い、いえ」
美奈代は視線を書類の上に落とした。
「より理解出来るなと」
「これでも、入営前に数学オリンピックで優勝したことがあるんだよ？」
「……はあ」
正直、自他共に認めるコテコテ文系の美奈代にとって、数式はこの世の存在ではない。
あんなモノを見つけだしたヤツは悪魔に違いない。
美奈代は半ば本気でそう思っていた。
「――まぁ、いいさ」
染谷はファイルを閉じた。
「戦場では、電子機器は使い物にならない。従って精密誘導兵器による攻撃は不可能になったと覚えておけばいい」
「つまり」
美奈代は言った。
「先の赤色戦争以降、今まで進歩してきた航空機やミサイルは」
「そう」
染谷は楽しげに頷いた。
「人類の進歩は、メサイアや飛行艦という例外を除き、全て白紙に戻されたということさ」
「……」
「どうだい？その話は、これから食堂でコーヒーでも飲みながら」
「あ……申し訳有りません」
残念という顔の美奈代は言った。
「１９２５よりハンガーでメサイアの清掃任務が」
「そ、そうか」
染谷は心底落胆した顔で、ポケットから紙片を取り出した。
「ち、チケットがようやく手に入ったんだ。その件もあったんだが……」

「え？」
「マイフェアレディのだ。外出許可が下りる日だ。もしよかったら……その……教養のために」

美奈代の頭の中でファンファーレが鳴り響き、ゲートから各競争馬が一斉にスタート、上空では１００万発の花火が連続して炸裂（意味不明）した。
血管のプレッシャーは最大。
心臓は死に物狂いの超音波振動で血流を確保する。

――――デートだ。

生まれて初めて、男と一緒に過ごす時間。

初のデートの誘いを受けている。

「わ、私でわかる内容ですか？」

美奈代は泣きたかった。

――――デートの申し出を受けた第一声がそれか？

「だ、大丈夫だと思う」

ちらりと見た染谷の顔が赤く見えたのは、灯火管制のせいだろうか？

「何か事前に覚えていくことは？装備は？集合時間は？作戦は？」

「……とりあえず」

染谷は、まるで自分に言い聞かせるように言った。

「落ち着いて」

「あっ！」

美奈代は口元を抑えた。

装備って何？

作戦って何だ？

私は一体、戦争でも始める気か？

「開演は午後1時からだ。十分間に合う。詳細はその程度しか、私も知らない。でも、一応、外出の時間は合わせたいんだ。だから、当日は、衛門の外で待っている」

「は、はい」

美奈代は、コチコチになって思わず敬礼した。

「泉候補生、お供いたします」

「ご苦労」

染谷も思わず答礼し、二人は互いの顔をマジマジと見合ってしま

う。
そして、どちらとなく吹き出した。
「クススッ……染谷候補生って」
「ん？」
「もう少しカタブツかと思ってました」
「……もうやめたんだ」
染谷は肩をすくめた。
その顔は、全てを振り切ったようにすがすがしさすら感じさせる。

見るだけで体の芯まで熱くさせる顔に、美奈代は魅入る。
「威張っても、何しても、それじゃどうしようもない相手もいる。そう教わった」
「誰にです？」
「宗像候補生だよ」
「――は？」
「特別に泉候補生の口説き方教えてやるって言われて……かなり支払った」
「あ……あの野郎。ここ数日、なにしてるかと思えば」
「だけど」
染谷は笑った。
「おかげで肩の荷が下りた気分だよ――あっ」
染谷は思いついたように、
「今までの無礼な態度は、まず謝っておかなくちゃね……ごめん」
そう言って頭を下げた。
「や。やめて下さい！」
美奈代は慌てて染谷を止めた。
「が、生徒隊総隊長としての威厳っていうか、やむを得ないっていうか、あれはあれでカッコよかったっていうか！」
――あっ。
美奈代は口から出た言葉、

カッコ良かった。
その言葉に動きを止めた。
その言葉が、自分が染谷をどう見ていたか、その証なのだ。
「――――そうか」
目をパチクリさせた染谷は、少し誇らしげに微笑んだ。
「君がそう言うなら」
その笑顔は、美奈代の琴線に心地よく触れた。
「――――親が政治家で、家族も政府高官ばかりとなれば、小さい頃から“他人に舐められるようなことするな”の一点張り。そういう接し方しかゆるされなかった。……肩が凝って仕方なかった。だから、好きになった相手くらいは、本来のありのままで接してみたいと、そう思っていたから。
今、こうして君と会話していると、本当に楽しい」
「……染谷候補生」
話すときの明るさ。
自分に過去を語ってくれる程、信頼を寄せてくれている。
美奈代は、それまで持っていた染谷に対する偏見が、唾棄すべきものに思えてならなかった。
そして、自覚した。
自分は、この男が好きなんだ、と。
「今度の件、本気で楽しみにしています」
「僕もさ」
期待しているよ？
染谷は、そう笑って自習室を出ていった。

よく考えてみれば――――

染谷はエリート騎士の卵。
背も高い、ルックスはいい。
性格も実はかなりよさげだ。
そして親は政治家、兄は全て政府高官。
華族ではないが、平民としてもかなりのエリート一族の出だ。

――もしかして私、玉の輿に乗れる？

美奈代が浮き足立って廊下を歩いていた時だ。

「――――ん？」

ザザッ！

廊下の外を何かが走る音がした。
一瞬、黒い影が通り過ぎたと思ったのは、美奈代の見間違いでは決してないはずだ。

「……ま、いいか」

浮かれきった美奈代は、それが何なのか。気にも留めずに有頂天でその場を後にした。

その夜のうちに美奈代が二宮達に拉致され、二人が共に「教官達の温情」によって「特別訓練」送りになったことは言うまでもない。

合掌。

●富士学校編　第十四話

●イギリス　ロンドン　ダウニング街１０番地

ヒース首相がその報告を受けたのは、彼が朝食の締めくくりである紅茶に取りかかろうとしていた時だった。

「――どういうことかね？」

ヒースは信念の男であり、英国紳士として、朝食を食べることは、即ち一日の生を左右する重要な儀式であることを認識している。

特に、その締めくくりの紅茶は、その日の気分で茶葉を、室温や天気まで考慮して決定された抽出温度を厳格に守ることを給仕に求める程だ。

である以上、普段なら、例え女王が亡くなったと聞いても紅茶を手にするだろう彼の手が、その報告に止まった。

「魔族軍が地中海沿岸から消えた――だと？」

「事実です」

軍務担当の政務官は、表情すら変えずに頷いた。

「少なくとも、ジブラルタルからの報告では、海岸線から姿が全く消えたと」

「他の地点は？」

「どうようです。フランスも慌てています」

「――ふむ？」

ヒースは顎に手を回して考えた。

「地中海を越えないというのか……何故だ？連中はどこへ？」

「フランスの強行偵察によれば、魔族軍は現在、アフリカ内陸部へ移動中。おそらく、アハガル高原ではないかと」

「アハガル高原？」

ヒースは顔をしかめた。

「あんな岩石砂漠に何の用がある？軍は何と？」

「アハガル高原付近は防空体制が厳しく、この件に関して、軍からの報告は何も」
「アフリカに展開する魔族軍の数は？」
「推定１００万」
「……」
ヒースは、執務室の壁に貼られた世界地図を見た。
現在、地中海沿岸には各国のメサイア部隊を始め、海さえ渡れば即座にアフリカに展開出来る陸上部隊が集結している。
中部アフリカまでのほとんどを人類として制圧し、植民地化している現状、アフリカに橋頭堡を築くいいチャンスだ。
海を越えて行けばいい。

そう――海さえ、渡れれば。

「問題は――海、か」

地中海。
世界が愛するあの美しき海は、今やその胎内に魔物を飼っている。

水中種の妖魔。

かつて、アルジェやトリポリといったアフリカの港から命からがら逃げ出した難民達を満載した船達は、ほとんどが水中に潜んだ彼達によって沈められ、海の藻屑と化していた。
難民となったアフリカ人にとって、地中海は美しい墓標に成りはてたのだ。

被害はアフリカ人だけではない。

最近では、ここに水中型メサイアが加わったという未確認情報もある。

地中海を我が海としたヨーロッパ各国海軍の艦艇も大損害を被っていることだけは確かだ。

対潜用魚雷やミサイル、そして爆雷をものともせず、艦の竜骨（キール）をへし折り、あるいは艦の横腹に、巨大なかぎ爪で修復不能な大穴をあける――海軍将兵は“青い蟹”と呼び怖れるバケモノの被害は、半端なものではない。

つい先日も米軍の空母が巨大爪攻撃（クローアタック）により、艦体15カ所に大穴を開けられ、推進装置を元とした艦機能に致命的ダメージを受けたばかりだった。

幸い、沈没だけは割けられたが、海水に半分浸かった艦載機達は、ほぼ軒並み使用不能。艦自体も、イタリアまで曳航出来たこと自体が奇跡だとさえ言われる有様だ。

喫水線を遙かに越えて沈み込み、なかば傾斜した空母の惨状を看に、ヒースがとっておきのウィスキーを開けたのは確かだ。

だが、今や彼らを笑えない。

水中を征するメサイアをもつて制海権を握った魔族。

対する人類には、この脅威に対する決定的な対抗手段が――ない。

地中海から船団を組んで、全滅しないようにお祈りしながらアフ

リカを目指す？
出来る話ではない。
仮に上陸に成功しても、後が続かない。

目には目を

今まで当たり前だと思っていた格言が使えないことが、ヒースでなくても痛い。

元来、陸戦兵器として位置づけられているメサイアにとって、水中戦闘ははっきり想定外と言い切れる。
水そのものの抵抗により機動性の低下に加え、各種センサーなど電子装備の塊であるメサイアにとって、水は一般に想像されるよりかなり脅威だ。
水中の脅威にうち勝つメサイアは、未だ人類にとって夢物語の範疇のことだ。

そんな人類を尻目に魔族軍が荒らし回っている海を、無数の兵員と物資を貯め込んだ船で渡れなど、命じるだけで狂気の沙汰だ。
陸上戦力を維持する上では、物資や兵員の空輸だけでは到底、足りない。
何としても、船で渡れる海が欲しい。

……しかし。

ヒースは思考を中断して苦笑した。
七つの海を征した大英帝国が、海が渡れないと嘆く日が来るとはな！！
一体、これは何の冗談だろうか？
ヒースは、すっかりぬるくなった紅茶を口にして顔をしかめた。

●アフリカ大陸　アガハル高原
荒涼とした岩と砂だけの世界に、無数の妖魔達が列を作っていた。
列の目指す先には、巨大な穴がある。
妖魔達はサイズを問わず、その穴の中へと消えていく。
穴の中には、魔界から届いた後、工兵隊が突貫工事で設置した妖魔用の巣（ネスト）がある。
餌場の横には、妖魔の“巣”に加え、妖魔自体の“量産工場”、そして傷ついた妖魔の“再生工場”までもが組み上げ中で、明日には完成する予定と聞かされている。
当然、それだけの施設がすべて揃っているわけで、地下数キロにわたって広がるその空間は、一度見れば絶対に忘れることが出来ないこと請け合いだ。
これ以降、妖魔達はここから補充が出来るし、傷ついた妖魔を癒すことも出来る。
それは、妖魔を運用する彼らにとって最も心強い話だった。
おかげで、飲む酒が美味い。
小高い丘の上からその光景を眺める男達は一様に安堵の表情を浮

かべている。
「“巣（ネスト）”が間に合いましたな」
「……ああ。部隊のサイロス達の体積が3割も減っていたから焦ったよ――――いつ、自分がエサになるかってな」
笑い合う兵士達の手には、魔界の酒が満たされたグラスがあった。

軍服は魔界正規軍のものではない。
彼らは“中世協会”に雇われた民間軍事会社のスタッフ達だ。
「さすが天下の天原商会。納品は確実だな」
「それは、ライバル会社に対する嫌みですか？」
「おいおい。経営規模に実績……全ての面で、俺達がライバルになれると思うか？連中の仕事を、素直にほめているんだ――――おっ」

彼らの視線の先。
先ほどの巣（ネスト）入り口のさらに先に開いた漆黒の闇が巨大な口を開き、魔界からの物資を乗せた大型輸送艦が舳先をのぞかせていた。

先に門（ゲート）を越えた輸送艦達の腹からは、続々と物資が吐き出され、補給部隊が配給用の食事を作っている。

その前には、食事を待つオーク兵達の長蛇の列。
酒の配給とこの食事の配給を待つ列が、見たところ最も長い。
民間軍事会社から派遣された彼は、グラスを持つ手を休めて改めて景色を見回した。

まず目立つのは、直径1キロほどもある巨大な漆黒の闇。

神音商会が極秘に、かつ違法に作った門（ゲート）だ。

かつて魔界との行き来のため、国家プロジェクトとして建設され

たタイプよりも遙かに巨大な漆黒の口がイヤでも目立つ。
　これが魔界や天界双方にとって非合法に設置されたことを咎める者はここにはいない。
　これがなければ、今後、彼らは飢え死にする以外、未来がないことは確かなのだ。

　その門（ゲート）を越えて地上に現れようとしているのは、魔界の民間所属を示す黄色と黒のストライプが斜めに入った飛行船達。

　魔界の最新鋭大型輸送艦達だ。

　その中でも格段に規模が違う一隻が、直径1キロを越す門（ゲート）ぎりぎりに姿をあらわしつつあった。

　外見こそ流線型のおとなしいデザインだが、かなりの重装甲に重武装が施されている事は、艦艇に関して素人同然の彼の目にも明らかだ。

「うへぇ！魔界軍最新鋭の重戦艦を改装した強襲輸送艦“アマイモン”級ですよ」
　脇にいた男が驚いた様子で言った。
「魔界軍でも配備がほとんどされていないっていうのに！そいつを強襲輸送艦に変えちまうんだからなぁ！」
「それって、どれくらいの戦力なんだ？」
「辺境軍の規模なら、数個艦隊に匹敵する戦力と聞きます。さすがに魔界の辺境で正規軍に代わってドンパチやる天原商会――ウチとは何もかもが違う」
「おいっ！」
　横にいた別な仲間が、不意に彼の肩を叩いた。
「見ろっ！」

最後に到着した輸送艦のハッチが開いた。
中から出てきたのは――
「あれかっ！」
彼は思わずグラスから酒をこぼしかけ、せっかくの酒で袖を揺らしたことに顔をしかめたが、視線だけはハッチから出てきた“それ”から離そうとしなかった。
仲間達もまた同様だ。
皆が動きを止め、出現した“それ”を見守る。

魔族軍巨大人型兵器――メースだ。

全高約３２メートルの漆黒のメース達が輸送艦のハッチから姿を現し、アフリカの強い日差しにそのボディを輝かせる。
ハッチから現れた中の一騎が、不意に右腕を高々と掲げた瞬間、将兵達は、絶叫ともとれる歓喜の声をあげた。

「……ううっ……暑いのじゃぁ……」
その歓声どころではない騒ぎなのが、ゆったりとした白い服に大きな麦わら帽子を被り、日差しから逃れようと虚しい抵抗をする、カノンだ。
元来、室内用の彼女にとって、この過酷な環境は負荷が強すぎる。

帳簿を片手に、メースの数を数えているが、頭がクラクラして倒れそうだった。
近くにおいた扇風機は熱風しか送ってこない。
「ご主人様……絶対、暑いから妾を行かせたんじゃぁ……」
自らの主人に恨み言をいいつつ、カノンは思った。

今回、カノンの率いた輸送艦隊が運んだ荷のメインは、メース１２０騎とパーツのストック。そしてメースを運用する傭兵達。

そして、莫大な量の食料他の軍需物資。

肝心のメースは、すべて魔族軍の倉庫に眠っていた二、三線配備の旧式騎だが、別に人間相手なら十分やれるだけの実力はある。

すでに間近の封鎖門（クローズドゲート）は解放され、新たな門（ゲート）とリンクする作業が山場を迎えているとも聞いている。

補給線は断たれる心配はない。

線が生きている以上、自分達は確実に荷を送り届けてみせる。

「……後は」

カノンはわかっている。

ここで補給と増援を受けた中世協会が何をするか。

その矛先がどこに向かうか。

「……由忠」

カノンはそっと手に胸をやって祈った。

「上手くやれよ？」

教導艦隊

●太平洋上空

ついさっきまで針のように見えた艦がぐんぐん近づいてくる。

高度３５００メートルを航行する飛行艦達。

艦のサイズはまちまちだが、マッチ箱の大きさになって初めてその輪郭が分かってきた。

数は４隻。

近衛軍がアフリカに派遣するために用意した飛行艦達、教習艦隊だ。

巡航艦“沖波”

メサイア輸送艦“伊吹”

強襲揚陸艦“鈴谷”

補給艦“筑摩”

メサイア輸送艦“伊吹”には、第七分隊以外の候補生達と、護衛の実戦部隊が乗り込んでいる。

美奈代達は、何故か“伊吹”ではなく、斜め後ろを航行する一回り小型の艦への着艦を命じられていた。

“鈴谷（すずや）”という名前以外、美奈代は何も知らされていない。

軍艦なんて、どれでも住みづらい。

肝心なのは、慣れだ。

生前の父はそう言っていた。

自分の家にいるより、軍艦とメサイアのコクピットにいる方が長かった父の助言を、美奈代は素直に心の中で繰り返していた。

慣れるしかないんだと。

美奈代の駆るメサイアは、“征龍（せいりゅう）”と呼ばれるタイプ。
訓練騎（トレーナー・モデル）である“雛鎧（すうがい）”の元のモデルであり、演習時の破損の修復にかこつけて本来の姿に戻されたのだ。
コクピットユニットは新品。
素材のにおいが美奈代の鼻を心地よくくすぐってくれていた。

「鈴谷ガイドビーコン受信。高度、進入角良好」
「了解、第七分隊泉。鈴谷ＦＤ（フライトデッキコントロール）。着艦許可申請」
“鈴谷（すずや）”の発着艦を管制するＦＤ（フライトデッキコントロール）からの指示が入る。
すでに目の前には、“鈴谷（すずや）”の甲板が見えている。
誘導灯の明かりの連なりが、自分を誘っているように感じられる。
青みがかった軍艦色に塗られた“鈴谷（すずや）”の艦体は、巨大な正角柱（せいかくちゅう）を横倒しにして二つくっつけた上に飛行甲板や艦橋を取り付けたような、奇妙なデザインをしていた。
海に浮かぶ船然としている“伊吹”や“沖波”とは全く違う。
あちらが船なら、こっちは浮かぶ柱だ。
「元々がカーゴ船ですから」
牧野中尉が言った。
「あくまで物資を極限まで大量に輸送するためにコンテナにエンジンをくっつけたようなデザインが採用されています。“鈴谷（すずや）”は、それを2隻つなぎ合わせた艦です」
「ちょっと、不格好ですね」
「……まぁ、しょうがないですね」
クスクス笑う牧野中尉の笑い声を聞きながら、美奈代はふと、精霊体“さくら”を見た。
その顔はなぜか意気消沈していた。
「――“さくら”？」
「……マスタぁ」

声の暗さに驚きながら、美奈代は“さくら”の言葉を待つ。
「どうしても……行くの？」
「“鈴谷（すずや）”へか？」
「……うん」
頷くその顔は、心底“鈴谷（すずや）”へ行くのを嫌がっているように見えた。
「何か問題が」
「問題って訳じゃないんだけど……」
さくらは一瞬、言葉を詰まらせた後、こっそりと美奈代の耳元で言った。
「“鈴谷（すずや）”の精霊体、美鈴（みすず）姐さんは――怖いんだよぉ？」
「……ああ」
自分たち人間にも人間関係があるように、精霊体にも精霊体関係がある。
“さくら”にとってはどうやら“鈴谷（すずや）”の精霊体は苦手らしい。
「イジメられたら言ってきなさい」美奈代は言った。
「一言言ってあげるから」
「うんっ！」
やっと安堵したのか、“さくら”は満面の笑みを浮かべて力強く頷いた。
「――じゃ、着艦はじめよう！」

飛行艦への着艦。
それは戦闘機のそれとは事情が異なる。
メサイアは自重１００トンを越える人型兵器だ。
それが戦闘機同然の着艦をしたらどうなるかなんて、一々口にする必要もないだろう。
古典的な手動（マニュアル）着艦と、誘導電波（ガイドビーコン）を用いたフルオート着艦。

飛行艦とメサイア双方に被害を出したくなければ、着艦手段はこの二つだけ。

いずれかの方法を用いて、艦の方で用意してくれた着艦拘束装置か、いずれにしても、相対速度ゼロで甲板上にメサイアを降ろさなければならない。

速度に気をとられて、高度を下手に落とすと、飛行艦に激突するか、飛行艦の慣性重力場（フリー・グラビティ・フィールド）の反作用によって、いかに大質量のメサイアとは言え、塵になる。

だから、メサイアの着艦は戦闘機とは異なり、誘導電波（ガイドビーコン）によって艦側でメサイアを操作、速度ゼロにて甲板上に降ろすのが一般的で、着艦拘束装置に誘導電波（ガイドビーコン）なしで降ろす事態は緊急用を通り越して異常事態だ。

目玉が飛び出る程高価にして貴重なメサイアを、着艦事故などという、つまらない理由で失いたくなければ、安全な手段をとる。

美奈代も、ガイドビーコン受信とフルオート着艦開始の表示を確認すると同時にコントロールユニットから手を離した。

ガクンッ！

途端に高度が落ち、騎体のバランスが崩れた。ガイドビーコンロストを告げる警報がコクピットに響く。

「なっ！？」

とっさにコントロールユニットを掴み直し、騎体を復旧させる。

「ふ、フルオートでしょう！？」

驚いて見たモニター上のフルオート着艦の表示が消えていた。

「小隊全騎、マニュアルモードにて着艦せよ。いいか？着艦拘束装置上にだ」

二宮の声に、美奈代は口元を歪めた。

――そういうことは、まず着艦に慣れた後にするべきだ。第一、先に言え！

口にこそ出さないが、美奈代は二宮にそう文句を言いたかった。

――何でもかんでも実戦実戦で、手順を無視するにも限度というものが！

「候補生っ！」

牧野中尉が鋭い声をあげ、美奈代は現実に引き戻された。

すでに鈴谷の甲板が目の前だ。

「ちっ！」

甲板の上に出された巨大なサッカーゴール。

それが着艦拘束装置だ。

すでに騎体は甲板の上に入った。今から機動のやりなおしは効かない。

下手な回避はそのまま自滅を意味する。

「――くっ！」

美奈代は目を見開くと、メサイアの脚を叩き付ける要領で着艦拘束装置にメサイアを突っ込ませた。

●近衛兵団飛行艦“鈴谷”ハンガーデッキ

ギィィンッ！

ドンッ！
火花を散らした着艦拘束装置がメサイアを無理矢理止める。
制動ダンパーの凄まじい衝撃に、危うく舌をかみそうになった美奈代は、騎体を装置から降ろした。
「こちら鈴谷ＦＤ（フライトデッキコントロール）、着艦を確認。これより指揮をＨＤ（ハンガーデッキコントロール）へハンドオーバー」
「こちらＨＤ（ハンガーデッキコントロール）。泉騎、４番ベッドへ」
「泉了解」
ほう？
美奈代は少しだけ驚いた様子でハンガーを見た。
さすがに訓練校のハンガーに比べれば狭いが、何か雰囲気が違う。
――――もう二度と着艦拘束装置なんて使わないぞ。
そう心に誓いながら、美奈代は指定された４番ベッドへメサイアを寄りかからせ、規定の停止措置を開始する。
チラと見たモニターの向こう側では、仲間達の騎が次々と着艦、ハンガーへと入ってくる様子が映し出されていた。
「泉候補生」
「システム停止……はい？」
モニターを切り、ハッチを開こうとした美奈代は、牧野中尉の声に動きを止めた。
「飛行艦、初めてでしたっけ？」
「はい。あっ、でも、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は搭乗経験が」
「そうですか」
牧野中尉の声は、どこか楽しそう。
それが美奈代の不安をあおる。
何しろ、彼女が楽しげな声色になった時、美奈代はロクな目にあったためしがないのだ。
「では、お疲れさまでした。無事でしたら、着任式でお会いしましょう」

「は？」
牧野中尉からの返事はない。
「中尉？……“さくら”？」
さくらはニマニマした不思議な笑顔を浮かべて姿を消した。
気になった美奈代が異変に気づいたのは、コントロールユニットを上げ、ハッチの開閉スイッチを入れた時だ。
「……え？」
妙に体が軽い。
奇妙なまでにふわふわした感覚が美奈代を包み込む。
「……何？これ」
体調不良。
美奈代はそう判断し、ハッチから身を乗り出した。
そして――
「……え？」
メサイアのコクピットは、メサイアの胸の中にあり、当然、そのハッチは胸の上となる。
コクピットから外に出たければ、ハッチから勢いをつけなれば出ることは出来ない。
いつもの感覚でハッチから身を乗り出しただけのはずなのに――
美奈代は、自分の身に何が起きているのかわからなかった。
体がくるくると回転しながら宙を舞っている。
数十メートル下の床や天井が回転している。
――何か、ヤバい薬でも投与されたか？
一瞬、そう思った後で、美奈代はようやく思い出した。
重力慣性制御。

メサイアや飛行艦はジェット推進で飛んでいるわけじゃない。
空を浮いているのだ。
どうやって？
魔法の力。
重力を遮断する慣性重力場（フリー・グラビティ・フィールド）を展開し、力場の海を作り上げる。
その上に浮くのだ。
その影響としてよく指摘されるのが、力場の海より下に入った艦体内部の重力まで奪われること。
飛行艦の喫水線（ウォーターライン）より下は、確実に無重力下におかれる。
そして、今、美奈代達のいるハンガーは喫水線（ウォーターライン）より下。
つまり、美奈代は無重力下にいることになる。

「じ、冗談っ！」
「何これっ！」
見ると、さつきや美晴達が空中でジタバタやっていた。
宗像はまだコクピットハッチにしがみついて浮くのだけは回避しているが、どうやって動いたらよいか迷っているのは明らかだ。
「ど、どうしろというんだ？」
ガンッ！
焦って誰かに助けを求めようとして、周囲を見回すと、あちこちで自分達にニヤニヤ意地の悪い視線を送ってくる整備兵達に気づいた。
「い、痛ててっ」
「え？」
何とか体をよじって、顔から壁にぶつかるのを回避しようと藻掻く美奈代は、突然、何かに抱きつかれた。
「つ、都築！？」
「泉か……一体こりゃ」
天井に頭でもぶつけたのか、しきりに頭をさする都築がいた。
「っていうか！」

美奈代は赤面しつつ怒鳴った。
「離れろ！どさくさに紛れてドコ触っているか！」
「しかたねぇだろ！」
「お、女の胸をなんだと思っている！」
「不可抗力だ！」
「だったら力を込めるな！――――きゃんっ！」
「……こういう声はカワイイんだよな。お前」
「殴るぞ！」
抱き合ったままの二人はそのまま――――

ガンッ！

ハンガー全体に響くほどいい音を立てて壁に激突した。

●“鈴谷”艦橋
「第七実習隊の着任を許可する」
艦橋で美奈代達にそう告げたのは、寸分の油断もなく軍服を着込む女性士官だ。
階級は中佐。背は高く、すらっとしたボディラインといい、ショートカットにまとめられた髪といい、切れ長の紫色の瞳といい、いわゆる“出来るオンナ”の典型例ともいうべき存在だと、美奈代はそう思った。
「鈴谷艦長の平野美夜中佐である」
「敬礼」

二宮の命令に全員が敬礼する。
美夜が全員を冷たい視線で、まるで値踏みするように睨み付ける。

「二宮中佐も大変だな」
平野艦長の目にはどこか意地の悪い光が宿る。
「修学旅行の引率とは」
「お言葉ですが」
二宮は言った。
「最初は誰でもそういうものです」
「いっぱしの戦力だと？」
「はい」
「そうか」
「……」
「なら、私はこの子供達に死ねと命ずることも出来るわけだ」
「――――っ！」
「二宮中佐？」
美夜は、厳しい顔で言った。
「ここは学校じゃない。それを一番理解していないのはあなた自身ではなくて？」

初陣へ向けて

●“鈴谷”　メサイア整備デッキ

美奈代は、メサイア整備デッキで美奈代騎を整備中の整備兵と話していた。

鈴谷――白馬級輸送飛行艦三番艦を改造した急造メサイア母艦、分類上は強襲揚陸艦ではあるが、艦歴３５年、つまり、建造されたのは、美奈代が生まれるより前の老嬢だ。

壁なんかの油染みを見ているだけで、時間の経過を感じさせられる艦。

そこには、美奈代達のメサイアが整備ベッドに固定された状態で並んでいた。

「ほい――嬢ちゃん、そこの４番もとってくれ」

工具を手渡しながら、美奈代は不満そうに言った。

「自分は候補生です」

「なぁに」

肩部装甲の隙間に上半身を突っ込んで作業する整備兵が笑った。

「俺にとっちゃ、お前さんも、今教官やってる二宮の嬢ちゃんも、みんなヒヨコだ」

「教官、ご存じなんですか？」

「そりゃお前――二宮の同期だからな。艦長だって、こっちは候補生の頃から知ってるぜ？……ホレ」

整備兵から手渡されたレンチを工具箱に戻しかけた美奈代に、整備兵が言った。

「その工具、２カ所で曲がってんだろう？」

よく見ると、大型のレンチが２カ所で妙にゆがんでいた。

「本当は、工具としちゃ問題なんだが、歪み方が絶妙でなぁ。手放せねぇ」
「はぁ……」
何か固い物にぶつかって曲がったらしい。
こんな太くでゴツイレンチが曲がるなんて、何にぶつかったんだろう。
美奈代はそう思いながら、レンチをしげしげ眺めた。
「一度目が――お前のオヤジさんがまだ新米少尉の頃、メサイア大破させた時だ」
「えっ！？」
美奈代は驚いて整備兵を見た。
整備兵は装甲の隙間から上半身を出すことなく作業を続ける。
「ち、父をご存じなんですか！？」
「ああ――俺が整備班に配属されて初めて整備したのが、お前のオヤジさんのメサイアだ」
「そ、そうだったんですか」
「とにかく使い方がなぁ……新兵ってのは、肘にとにかく力が入るんだが、オヤジさんは最後まで抜けなかった……ああ、そういえば」
「はい？」
「俺も、嬢ちゃんのメサイアを整備て、“このクセ、どこかで見たなぁ”ってんで、そこから、嬢ちゃんがジュン……じゃねぇ、泉大佐の娘だって知ったんだったなぁ」
「私の？」
「ああ……親子だなぁ。肘関節部のアクチュエーターの摩耗具合がそっくりだ」
「……そう、ですか」
「んでな？俺があれほど“これだけはやるな！”って警告してた機動やった挙げ句が大破だ。こっちが文句言ったら、“３騎撃破だから問題ねぇだろが！”なんてぬかしやがった。とんでもねぇ。こ

っちは修理だ整備だで何日徹夜すると思ってやがんだ！って、レンチでガン！ってワケさ」

「あの……生前、父がそんなご迷惑を」

「迷惑？……フッ。そんなワケあるかい」

整備兵は笑いながら言った。

「俺達と騎士ってのは一蓮托生だ。あいつらは俺達がいなければ生き残れねぇ。その逆もまたしかりだ。だから、お互い信頼関係作りてぇから腹割って話し合う。それが出来ねえ奴ぁ、死んじまうしかねえ」

「信頼関係に……レンチですか？」

「ああ。やったな！？やったがどうした！？で殴り合い……丁度、陸軍と共同戦線張ってた最中だ。視察に来てた陸軍のお偉いさんに捕まって、お互いノされて営巣入りさ」

「……へぇ？」

「お前のオヤジさんとは、それ以来の仲だ。結婚式にも呼ばれたさ。それに、ヤツが最後に出撃した、あのメサイアも、俺が整備したんだ」

「……ありがとう……ございました」

美奈代は、深く頭を下げた。

正直、美奈代は生前の父の職場での話を、このとき初めて聞いた。何故か、皆が職場での父の話を、美奈代に聞かせようとはしなかったからだ。

だから――

近衛に入って、初めて父の話が聞けた。

それが、とてつもなく美奈代には嬉しく、また、その最後を聞くだけで、涙を堪えるのがやっとだ。

「へっ。これが仕事だ――それとな？」

整備兵がようやく上半身を装甲の隙間から出した。

「もう一方、二宮だが――――これがまた、すさまじい劣等生でな」
「教官が？」
「ああ……銃の分解は卒業検定の前日までかかっただの、シミュレーター乗せたら3秒で気絶した挙げ句、ゲロで喉詰まらせて死にかけただの……よく最後まで残ったもんだってくれぇ、ヒデエもんだった」
「信じられません」
「ああ……そうだろうな。で、こっちも整備の言うこと聞かねえで片っ端から騎体壊しやがったから、終いにゃアタマに来て、こっちも――――ガン、だ」
「し、しかし……」
「まぁ、それが今じゃ近衛有数のメサイア使いってんだから、世の中面白れぇじゃねぇか」
「はぁ……」
整備兵は、胸のポケットからサングラスを取り出しながら美奈代に言った。
「で？ここに来たのは、こいつを見たいって理由だっけ？」
「は、はい！」
「嬢ちゃん好きだねぇ」
「が、外見程度でいいんです。理屈はどうせわかりませんから」
「フン……俺たちの整備は心配か？」
「まさか！」
「……納入が間に合っていれば“鳳龍”が拝めたはずだがな」
「“鳳龍”？」
「試作騎だ。近衛も“幻龍”を配備したのはいいが、幻龍自体、バランスと整備性重視のあまり、本来のエンジン出力をかなり落とした上に、軽装甲ってシロモノだから、恐ろしくパワーと装甲不足が顕著だ。で、装甲追加と、エンジンの改修とかやって、“幻龍改”が生まれたわけだが……その開発と平行して、さらなる改良版を開発すべしって話が出た。

それで開発されたのが、“鳳龍”だ」
「幻龍の――後継騎？」
「いや。その選定には外れてはいるが……実際に開発されたこいつはもう、そんなレベルの騎じゃねぇ」
「えっ？」
「純粋にメサイア同士の、特にヤンキーの“スーパーキャバリー”や、露助の“ローマイヤ”が群れて襲ってきても、単騎で対処可能っていう……まぁ、無茶な話だが……そんな司令部の要求に答えたシロモノ」
整備兵が腕組みして見上げる先にあるのは“征龍”の顔。
それを見上げる整備兵の顔は、美奈代にはわからない何か幸福感に近い感情に満ちあふれていた。
「別な表現すれば、“鳳龍”は“幻龍改”より高性能な――駆逐メサイアだ」
「へぇ？」
なんだかすごいらしい程度の認識しかない美奈代は、適当に相づちを打った。
「すごいんですね」
「それを……都築だっけ？候補生が動かすんだからなぁ」
「えっ！？」
「なんで？って顔してるな」
「当たり前です！」
美奈代は言った。
「どうして、あんなヤツが？」
「相性だよ」
「相性？」
「ああ。こいつの精霊体もそうだが、どうにも近衛の精霊体ってのは、性能があがるにつれて、どいつもコイツも性格がねじ曲がりやがる。俺達も苦労してるんだぜ？」
「つまり、その精霊体が？」

「ああ……たしか、逆指名に近いと聞いた」
「精霊体が……パイロットを選ぶ？」
「パイロット、ＭＣ、精霊体。この三つのバランスってのは、嬢ちゃんの考えているより恐ろしく大切なシロモノだ。まさに一蓮托生の関係だから……教本じゃ倍なんていってるらしいが、三者のバランスがとれさえすれば、とれてねぇのに比べて、俺が知る限り、最悪、戦力として5倍の差が開くぜ？」
「そんなに？」
「ああ……結局、精霊体が都築を選んだってことだ。“鳳龍”と比較したら、“征龍（せいりゅう）”は確かに世代遅れだ。だけどな？“征龍（せいりゅう）”にはあって、“鳳龍”にはないものがある」
「何です？」
「戦闘経験さ」
坂城は楽しげに言った。
「コイツが未だに第一線にいるのは、征龍の精霊体の戦闘経験のおかげだ。“征龍（せいりゅう）”自体がベテラン騎士として、嬢ちゃん達ヒヨコでも高レベル騎士に仕立ててくれるってわけさ。それに、“征龍（せいりゅう）”搭載型精霊体は、近衛の中で最も安定がとれている。だから、嬢ちゃん、いいものもらってるんだぜ？」
「そういえば……」
美奈代は思いだしたように言った。
「征龍、大規模整備だと聞きましたが？」
「聞いてなかったのか？改修だ」
「改修？」
「開発局が、対妖魔戦用にいろいろ細工してくれるそうだ」
「大丈夫なんですか？」
「何かあったら、最後は目をつむって――――前非の数々を悔いることった」

練習艦隊は赤道を越え、インド洋に到達したのは1週間後のこと。
その間に、美奈代達の愛騎の改装は着実に進められつつあった。

――ギュインッ！
急旋回のGが、美奈代を襲う。
厳重な対G防御がかかっているコクピット内でさえこうなのだから、対G防御がなければ、自分が一体、どうなるのか、美奈代は考えたくなかった。

高度４５００メートル。

抜けるような青空の中、美奈代はメサイアを一気に急上昇させた。

高度４８００メートルで急旋回をかけ、今度は逆に急降下に入る。

ピーッ！

美奈代の耳に警報が鳴り響く。

「ミサイル２０接近中」
「迎撃！」
メサイアに装備されたＭＬ（マジックレーザー）が、近づくミサイルを次々と狙撃、爆

発が蒼穹の空に白華と咲く。

『次、想定３０（サンマル）――――対ＭＬ（マジックレーザー）回避運動』

「了解」

メサイアが再び戦闘機動を開始した。

ドンッ！

鈴谷に着艦した美奈代は、コクピットで深いため息をつくと、ハッチから身を乗り出した。

「大したもんだなぁ。嬢ちゃん」

先日の整備兵――――坂城整備班長が床を蹴ってコクピットに近づきがら、親しげに声をかけてきた。

重力慣性制御が施されたハンガーは無重力下に保たれている。

美奈代はようやく目的地まで移動出来るのに、さすがに整備班は慣れていた。

「扱いは完璧の域に来てるぜ？」

「ありがとうございます」

胸部まで上がってきた坂城の手を掴み、それ以上、上に飛んでいくことのないように止めた美奈代は、そう、礼を言った。

足下からは続々と整備兵が取りつきつつある。

「どうだい？改装された征龍の感じは」

「申し分ないです」

美奈代は微笑みながら征龍の顔を見上げた。

「力押しにでもならなければなぁ」

坂城もどこか誇らしげだ。

「それまで弱いとされていたカ所への補助装甲に、実体弾兵器用ウェポンマウントも増加。

関節部防御装甲は最新鋭顔負け、加えて対小型妖魔用カウンターシ

ステムと増加エンジン内蔵型バックパックまで搭載……空中機動性に至っては４５％アップだ」
「これ以上の贅沢は望めませんね」
「ああ。開発局の倉庫に眠っていたパーツの寄せ集めにしちゃあ、上出来だ」
「本当、最初は、それを聞いてやる気無くしたんですけどね」
「ははっ、開発局も呆れてたぜ？奇跡だ！って」
坂城がポンポンと美奈代の頭に手を乗せる。それだけで、美奈代の心には、父に褒められたようなうれしさがこみ上げてくる。
「征龍改――そう、正式に呼ばれることになるそうだ」
「そうですか」
美奈代は、与えられた騎の素晴らしさを皆が讃えてくれているようで嬉しくて仕方ない。
その美奈代に、坂城が言った。
「さぁ。嬢ちゃん」
「はい？」
「初陣が決まったかもしれんぞ？」
「――え？」
「士官はブリーフィングルームに集合だ」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム
「地中海沿岸で、国連――正確にはスペイン海軍の艦艇が襲撃された。相手は魔族軍と断定している。ここの所、地中海で暴れる謎の存在がいたのだが、今回、生き残った艦艇が持ち帰ったソナーが捉えた」
二宮は、黒板に写真を貼り付けた。
「国連軍兵士の間で“青蟹（あおがに）”と呼ばれる存在だ」
「カニ？」
「前線兵士の蔑称だ。何しろ、海中に潜む上にソナーを狂わせ続け

るから、全体像が今ひとつわからない。ただ、生還者からの目撃情報を元に割り出した大凡の姿が――これだ」

ずんぐりとした青いボディ。長く延びた腕。張り出した肩部装甲がモニターに映し出される。

「このお仲間があの悪夢の海、地中海で暴れ回っている」

「あの、教官？地中海に何かイヤな思い出が？」

「うるさいっ！」

二宮は怒鳴った。

「婚前旅行先でオトコに逃げられたことなんて、他にどう言えばいいっ！」

「……」

しん。となった室内に気まずい空気が流れる。

コホンッ。

二宮はわざとらしい咳払いの後、続けた。

「……忘れろ。これは厳命だ――泉、復唱はどうした」

「は、はいっ！」

美奈代達は慌てて立ち上がった。

「忘れますっ！復唱っ！」

「忘れますっ！」

皆が怒鳴ったが、その顔は、

無理ですっ！

そう告げていた。

「――よろしい。現在、この“スベスベマンジュウガニ”達が確認されているのは」

「スベスベ？」

「小さいカニだが、うまいぞ？」

「あれって有毒ですが……」

柏が唖然とした顔で言った。
「死にますよ？」
「そうか？私は当たったことはない――外見、似てるだろう？とはいえ、カニばかりを気にしていては何も出来ん。国連軍は戦力を集中し、地中海を一気に越えて侵攻を開始することになった」
「反応弾の使用も？」
「当然」
「あれだけ使ってですか！？」
美晴は目を見張った。
「アフリカも南米も、魔族がどうこう言う前に、反応弾使いすぎて放射能汚染が問題視されているのに？」
「その通りだが」
二宮は頷いた。
「その下でも敵は動き回っている。つまり、反応弾は、爆発時の熱線と衝撃波以外、何の戦果も果たしていないと言い切れる」
「……あの」
美奈代が恐る恐る訊ねた。
「放射能汚染って、そんなに酷いんですか？」
「汚染は雨に流されているだろうというのが、米軍の予測ではある」
「そんな所に行くんですか？」
「メサイアの装甲は、放射線や中性子を通過させない」
二宮はムッとなって言った。
「座学で何度も言ったはずだが？」
「心理的なもんですよ」
都築はたまらずに席を立った。
「俺達ゃまだ若いんです。特にこの部隊のほとんどは、未婚の女の子達ですよ？いくら女捨てたからって、嫁入り前の娘達を巻き添えにすることは」
都築は、言ってから青くなった。

目の前では、二宮が凄まじい形相でこっちを睨んでいた。
「……都築？」
つぅぅぅづぅぅきぃぃぃぃっ？
地獄の底から聞こえてきたようなその言葉は、美奈代の耳にはそう聞こえた。
「平野艦長のことです」
「――――よし」
その通りだ。
二宮はそう言うと、平静さを取り戻した。
「とりあえず、我々は牽制任務に就く。とはいえ、いまだ時間はある」
二宮は楽しげに言った。
「どうせ他にやることはない。たっぷりシゴいてやるからそう思え」

「そりゃいいんですが」
よくないっ！
美奈代は小さく横にいたさつきを小突いた。
「その牽制任務って……まさか私達、攻略の主軸、ですよね？私達、初陣ですよ？まさか単独でなんて！」
「残念だが」
真っ青になる美奈代達に二宮は言った。
「我々の主力は、現在の“征龍改（せいりゅうかい）”及び“アリアＳ１”、我々教官騎の“アリアＳ２”。そして都築の“鳳龍（ほうりゅう）”と、随分雑多な編成になる。
司令部としては、この機会に魔族に対する新開発の兵器の性能調査も求めてきている。むしろ、こちらこそが主任務だ。他国軍と共同戦線を張るのは、問題が多い」
「……」
「不安だろうが――――我々はそういう存在だ」

ソマリアにて

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「我々が目指すのは、旧ソマリアだ」
二宮が美奈代達に言った。
「なぜ、ソマリアかはわかるな？都築」
「そりゃあ」
都築は頷いた。
「ソマリアはヴェルサイユ条約で認められた日本領ですから」
「そうだ」

先の戦争で、南米とアフリカは戦勝国によって分割され、それまでの国家は全て消滅した。
人類として戦ったにしろ、戦争によって疲弊しきった世界経済には、廃墟に数十の国家を建築するだけの力は存在しなかった。
戦勝国が、無人の荒野と化した土地を、それぞれの都合で人間の領土として復興させる方が経済的にも、法的にも楽なのだ。
戦勝国――その大半はヨーロッパ。
この戦争が、欧州の復権の礎とされるのは、この膨大な領土と地下資源を彼等が手に入れたから。

かつての祖国復興に命を賭した南米やアフリカの人々を公然と裏切り、そしてかつての植民地主義の理論を現代にいたり復活させた国際条約が“ヴェルサイユ条約”である。
条約で利潤を約束された対象国の、ほぼ全てが欧州だが、アジアでたった一ヶ国だけ、分割を受けた国がある。

日本だ。

獲得したのは、未だに魔族軍が根城としているとはいえ、アフリカの角と呼ばれる、アフリカ大陸東端の、ソマリア全域とエチオピアの一部などを占める半島の全て。

インド洋と紅海を結ぶ上では海上交通の要衝。

メサイアと共に、海軍力を派遣し、多大な犠牲の元、インド側の海運の安全を保証した帝国海軍のために与えられたとさえ言われる名誉だが……。

「アフリカ分割を定めたヴェルサイユ条約において、旧ソマリアは大日本帝国の領土と明記されている」

二宮は頷いた。

「アフリカと南米の解放戦争で、日本はかなりの犠牲を支払って人類側の勝利に貢献したことは、世界が認めていることだ」

艦艇数十隻、メサイア約百騎、戦死2万近い犠牲の対価とも言うことが出来る。

しかし、これに異を唱える国が出た。

中国と韓国だ。

共に、アフリカや南米に兵力を投じず、むしろ世界の困窮を後目に金儲けに勤しんでいたような連中だ。

その彼等にとって、自分達より格下のはずの日本が新たな領土を手にすることは耐えられない屈辱でしかない。

だからこそ、彼等は、同じく参戦しなかったロシアを巻き込んで、強硬な態度で条約の破棄を求めた。

第三諸国にも領土の分割を。

それが彼等の主張であり、領土を得られなかった多くの国々がそれに賛同した。

無論、第三諸国とはどこかと聞かれれば、中韓露の参加国だけしか、彼等は名前を挙げないだろうが……。

とにかくこれが、新三国干渉と呼ばれる事態である。

これに対して、ヴェルサイユ条約により新領土を得られた国々は、同様の因縁をつけられないために日本を支持し、この三国との関係を悪化させている。

また、日本がソマリアの魔族軍掃討以外の、例えば測量を行ったというだけで、この参加国が合同で日本海軍事演習を実施するので、ソマリア復興と海上交通復興は深刻な妨げを受けている。

だがはっきり言う。

国際法的には、ソマリアは今、日本領だ。

「……」

新領土。

日本ではそう呼ばれるソマリアだが、美奈代達はそれがピンとこない。

むしろ当然だ。

何しろ、ソマリアは今でも、アフリカ最大規模の魔族軍残存部隊の根城であり、そのどこにも日の丸が翻ってはいないのだ。

日本人のいない日本の領土。

実に奇妙な場所。

日本の領土と言われてもピンとこない場所。

それが、多くの日本人にとってのソマリアであり、美奈代達もそ

の例に漏れない。

「ソマリア監視部隊――海軍によると、海岸部に妖魔の新しい“巣”が見つかった。我々はそこを潰すことを、最初の任務として命じられている。

なお、周辺は各国海軍が活動中で、特に、中国海軍の機動部隊が展開している。

こいつらには十分注意しろ」

「あいつらもまとめて潰したらどうです？」

「それは名案だと言いたいが」

二宮は苦笑いした。

「都築、その許可を親からもらってきてくれ」

ちっ。

意味が分からない美奈代の耳に、都築の舌打ちが聞こえた。

「周辺に展開中の各国海軍の目的は、アフリカ中央部で実施されている国連軍の支援だ」

それを無視した二宮が続けた。

「西アフリカ解放のきっかけとなったアビシニア作戦から丁度２０年目の節目を迎える今年、ＥＵ軍は悲願の北部及び中部アフリカ一帯の解放を目指す一大作戦に転じる」

アビシニア作戦。

かつて、西アフリカ奪還を目指してＥＵが単独で行った乾坤一擲

の大作戦。

狩野粒子の影響を受けない超高々度を飛行可能な重爆撃部隊による超高々度絨毯爆撃による露払いを受けたＥＵ軍上陸部隊が膨大な犠牲の元、進撃と勝利を重ね、作戦決行日からわずか数ヶ月で西アフリカのほぼ全域を支配下に納めることに成功した作戦のこと。

この勝利の結果が、ＥＵによるアフリカ独占を可能とした。

そして、作戦は失敗すると想定していた米露中といった、ＥＵ以外の有力国との関係に、決定的な溝を残すこととなる。

血の代償を支払った者とそうでないものの、埋めることの出来ない溝。

特にロシアは作戦前から戦後のアフリカの植民地化に反対を表明したが故に、その植民地獲得競争から完全に離脱することになった。対して、既に無人の地であるアフリカを勝者が奪取して何が悪い？というのがが欧州の言い分だ。

この相違が、後にアビシニア作戦参加国を除く、全ての国のアフリカへの資本参入を認めないとＥＵ議会で決議し、復興事業に参入できる資本を限定させ、利権をほぼ欧州に集中させる、欧州－アフリカ経済圏を確立させる遠因となる。

なお、南米、アフリカ共に血を支払ったからこそ、日本はアメリカに発足した汎アメリカ経済圏と共に２つの経済圏で特例的な立場を受けていることを補足しておく。

この作戦から２０年。

結果は火を見るより明らか。

すでにヨーロッパのマーケットは、新たなる市場としての植民地アフリカへの投資で史上類を見ないほどの勢いで活気づいている。
これに対し、欧州の経済圏から閉め出されたロシア経済は左前。
専門家は、その資本がヨーロッパへと流れていると警告を発し、今後はロシアの没落とヨーロッパ勢力の復権が本格化するだろうと口をそろえるようになってから久しい。

“魔族がくれた新たなる新天地”

アフリカは、皮肉を込めてそう呼ばれるようになっていた。

「我々の作戦は、いわば少しでもアフリカ大陸に巣くう敵の数を削るための掃討任務であり、国連軍の間では、国際貢献の一環と認識されている」
二宮は楽しげに言った。
「放射能が恐くてたまるか」
「そりゃいいんですが」
よくないっ！
美奈代は小さく横にいたさつきを小突いた。
「まさか私達、攻略の主軸ですよね？私達、初陣ですよ？まさか単独でなんて」
「残念だが」
真っ青になる美奈代達に二宮は言った。
「我々の主力は“征龍改（せいりゅうかい）”。司令部としては、この機会に性能調査も求めてきている」
「……」
「不安だろうが――我々はそういう存在だ」
「他の」
かすれる声で、さつきが訊ねた。

「他の分隊は？」
「第二中隊指揮下として作戦に参加する。ソマリア東部の鉱山施設周辺の現状調査だ」
「調査？」
「我々は、旧ソマリア共和国の首都モガディシュ周辺の残存妖魔他のデータ収集を任務とする。主に港湾と空港の状況は重要だ。とにかく、来るべきソマリアへの軍派遣に向けての事前調査だと思え。明日、日付変更と共に、本隊とは別任務となるため、“鈴谷（すずや）”は艦隊から離脱し、独自行動に出る」
「調査なんて、そんなこと出来るんですか？」
美晴が目を剥いた。
「沈静化した三国干渉問題をぶり返すようなものですよ？」
「今回のアフリカ派遣は、三国ですら無視出来ない理由もある」
「？」
「鉱山地帯で、妖魔共のかなり大きな巣窟の存在が、最近になってようやく確認されたのだ」
「あっ」
「領有権を主張しても、妖魔が邪魔では資源の確保もへったくれもない。だから、その調査を日本がやるというなら、文句は言わない――そんな所だ」
「汚いなぁ……」
「早瀬の言う通りだが、とにかく、妖魔の掃討は、我々の主要任務からは外れた。本隊の仕事だ」
「つーことは、染谷達は」
「鉱山地帯というが、ソマリア北東部、プントランド付近の掃討任務に就く。モガディシュの港湾、空港が使用不能な場合、二番目に期待されている辺りだ」
二宮は言った。
「せいぜい、連中の方がリスクは高いと思うことだ。よかったな」

●数日後。“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ

ハンガーデッキにメサイアや整備機器の作動音に混じって、整備兵達が殺気だった声が響く。

その日、３回目の出撃を控えた美奈代達は、コクピットで出撃の時を待っていた。

目的地は、ソマリアの首都だった都市、モガディシュ。

ソマリア最大の都市で、商業、金融、海運の中心地だった場所。

とはいえ、極東の日本人でしかない美奈代にとってはどうでもいいことだ。

地図を見て、ソマリアが赤道がすぐ間近であることを美奈代は初めて知った。

半乾燥地域に分類され、旱魃が頻発するのも当然だと、昼間に甲板に出れば思い知らされる。

平均気温は年間を通じ３０度Ｃ前後、最低は２５度Ｃ前後の環境は、美奈代に言わせれば人間の住んで良い場所じゃない。

旧ソマリア共和国は、５世紀から続く、世界的にも珍しい商人達によって統治された商業国家。ソマリ族と呼ばれる民族となった彼等は、大航海時代においても独立を保ち続けた。

少なくとも、彼等の国家の滅亡は、人類によってはなされなかった。

それだけは確かだ。

千年の商業都市――――モガディシュ。

今の支配者は、魔族軍だ。

旧ソマリア共和国の大日本帝国帰属が決定した後も、三国干渉のせいで日本政府による満足な調査や妖魔掃討が行われなかったことが、ソマリアへの魔族軍残党の集結を促し、また、周辺地域の妖魔被害の原因となっている。

隣国であるケニアを領有するドイツからの度重なる抗議と、損害賠償の動きに、日本政府がようやく重い腰を上げたというのが、今回のアフリカ派遣の本音と言えば本音だ。

美奈代達が行っている強行偵察から手に入るデータこそが、日本政府が知ることの出来る、ソマリアの現状である。

その結果、ソマリアの十年以上の放置が、日本政府は自らが想像していたより、はるかに大きな代償を求められていることを思い知らされた。

日本政府、そして三国干渉までした中華帝国が欲しがっているのは、豊富な地下資源――特に、石油利権だ。

資源採掘基地が多数存在していたソマリアの奪還と、その植民地化は当然の帰結と世論では語られるところだが、とにかくそのソマリアは今、魔族軍の巣窟になっている。

都市は要塞化され、草原に帰ろうとしているその肥沃な大地は大型妖魔達の縄張りと化し、対空攻撃能力を持つ妖魔達が港湾設備に巣くっている。

石油掘削基地はほとんど破壊され、プラントは使い物にならない。

情勢が判明すればする程、政府は次から次へと新たなデータを要求してきた。

それが美奈代達を次から次へと危険へと押しやっていくことになる。

美奈代達の任務は、海上からソマリアの海岸に超低空侵入、政府が求める場所に移動し、状況を撮影するという、一見すれば単純な

もの。
ほとんどの場所に妖魔がいるし、飛行中に突然、対空攻撃を受けることはザラにあった。
魔族軍の対空砲火から逃れる際の恐怖は、ちょっと表現が出来ない。
敵と真っ向から対峙出来ない上に、一方的に逃げるだけという立場が、美奈代達にはかなりのストレスとなっていることだけは確かだ。

「次の出撃は3時間後だ！それまでに直せっ！」

少なからず被弾し、騎体を破損させている。
敵メサイアと遭遇、戦闘により破損したならまだ面目も立つ。
ところが、騎体の破損は、全てが対空砲火をかわし損ねた結果だ。

「無理だ！腕の装甲換装は8時間はかかる！」
出撃の度に誰かがどこか破損して帰ってくる。
幸い、今の所は重度の損傷はないものの、そのたびに、整備兵に無駄な負担を強いる結果になる。
おかげで整備兵は休むヒマもない。
本当に申し訳なく思うのが人情だが――。
「あの小娘共！今度ぶっ壊して帰ってきたら、かまわねぇ、輪姦(まわ)しちまえっ！」
そういうのだけは、勘弁して欲しい。

甲高いエンジン音がして、先頭の二宮騎が動き出した。
次は、自分の番だ。
「ハンガーデッキコントロールより泉騎、ハンガーロック解除、第二カタパルトへ」

「泉、了解」
ハンガーロック解除を目視確認し、ハンガーのウェポンラックにかけられた１２０ミリ機動速射野砲を掴む。
初陣以来、美奈代は“征龍（せいりゅう）”の剣を抜刀したことがない。
それどころか、砲をまともに撃った覚えさえ、ほとんどなかった。
ただただ逃げ回るだけ。
一体、何のための任務なのかさっぱりわからない。
「……まってください」
牧野中尉が言った。
「新規情報。作戦内容が変更されます」
「え？」
美奈代はコクピットに潜り込んで発進シークエンスを開始した。
「救援要請です」牧野中尉が言った。
「救援？」
「ソマリアの内陸部、約２５０キロの地点で国際救難信号の発振を確認」
「？」
「付近にメサイアらしき反応あり。数は……１５」
「１５！？」
「国連軍の可能性も高いですが……識別信号無し。こちらの照会にも応じません」
「それで、こっちから何騎出るんです？」
「全騎へ！」
二宮の声が通信装置に入った。
「発艦待て！ここは私と長野大尉のみ出撃する！貴様等は待機！いいか！？出るな！」
「何ですかそれは！」
美奈代は怒鳴った。
「出ろと言ったり出るなと言ったり！」

「そうですよ！」
さつきも声を上げた。
「私達だって！」
「うるさいっ！」
二宮は負けじと怒鳴った。
「間違いなく相手はメサイアだ！貴様等の相手になる存在じゃない！足手まといだからおとなしくしていろ！」

私を誰だと思ってるの？

二宮達の発艦を、美奈代達はコクピットから見送った。

「むかつく」

「早瀬、聞こえているぞ？」

「いいよ。聞こえていたって」さつきは口をとがらせて言った。

「何よ。私達、何しにアフリカに来たのよ。留守番？」

「だけど！」

さつきは怒りを爆発させた。

「私達にはメサイアがある！ＳＴＲシステムのシートあったためるのが私達の仕事じゃないわよ！」

「そうですよ」

美晴も言った。

「私達の戦闘服は、流行のファッションじゃないんです」

「フン――なら？」宗像は楽しげに問いかけた。

「この後、どうする？」

「お……お前ら？」

美奈代はその会話に嫌な何かを見つけた。

「後で怒られるか、それともほめられるか」

「絶対、怒られますね」さつきに、美晴は自信満々に答えた。

「でも、それで一矢報いるなら――いいと思いますよ？」

「なら――やるか？」

「宗像さん、さすがの度量ですね」

「そうほめるな」

一体、この三人が何をしでかすつもりなのか、考えたくすらない美奈代の目の前で、ハンガー内で待機していた“征龍改（せいりゅうかい）”達が立ち上がった。

「お、おいっ！」
美奈代だけではなく、整備兵や候補生達が慌てふためく中、三騎はハンガーデッキの木出口めがけて移動を開始した。
「出撃命令も許可も出ていないっ！」
美奈代は怒鳴った。
「早瀬、柏！宗像！？」

「そこでおとなしくしてなよ――優等生さん？」
「私達は――やりたいようにやりますから」
「泉は止めたと、今ので記録は残るさ」

「なっ……」
三人からそう言われた美奈代は、言葉を失った。
三騎がハンガーデッキからフライトデッキに移動していく。
憲兵隊が小銃を手に追いかけていく。
整備兵を突き飛ばして、キャットウォークを動かしているからには、自分まで拘束しようとしているに違いない。
仲間が憲兵に追われているのがショックなのではない。
別に、三人が自分の部下だと思ったことはない。
ただ、こういう時に、自分がのけ者にされるとは思っていなかった。
それが、何よりショックだった。

――私は、その程度の信頼関係だったのか。
――いざという時、誘ってももらえない程度の扱いか！

そう思うと、とてつもなく悔しく、そして悲しい。
「泉候補生？」
牧野中尉が、まるで諭すような口調で言った。
「何をしているんですか？」

「――え？」
「営倉には、差し入れ持っていってあげますから」
通信モニター越しの牧野中尉は微笑んでいた。
「ま、牧野中尉？」
「このままでは二宮中佐達は返り討ちにされます。私達も、出撃しましょう」
「し、しかし」
「マスター！」
“さくら”は言った。
「行こうよ！」
「さ、“さくら”まで」
「マスターは！」
むっ。とした顔の“さくら”が怒鳴った。
「何のためにここにいるの？」
「――っ」

自分は何のためにここにいる？
なぜ、ここで待機している？
なぜ、皆からのけ者扱いされている？
わからない。
何もわからない。

――本当にわからない？

違うだろう？

泉美奈代。

お前は、一つだけ、一つだけ、あの三人が忘れていることを、お前はわかっているはずだ。

美奈代の自問がそこまで考えが至った時、

「嬢ちゃん」

通信機に割り込んできた渋い男の声。

「坂城だ。斬艦刀が一本、調整が終わっているから持っていけ」

「斬艦刀？」

「対メサイア戦用の試作刀だ。持っていって損はねぇぞ？」

「し、しかしっ！」

「こういう時――ジュンなら」

坂城は楽しげに言った。

「もう真っ先に飛び出していってるぜ？」

「――もらっていきますっ！」

ジュン。

つまり、お前の父親なら出撃している。

坂城はそう言ったのだ。

父親の存在が、美奈代の背を押した。

整備兵が腕を振って“これだ！”と示す先、壁にかけられた見慣れない長刀を、美奈代騎は掴むと、フライトデッキへ向かう。

青空が美奈代を出迎えてくれた。

「私は、あの三バカトリオに思い知らせてやるんだ！」

美奈代は声を上げた。

「私が一番……、一番！」

騒ぎが艦橋にまで届いたんだろう。

「艦長だ！泉候補生、これは何の騒ぎだ！」

通信装置から平野艦長の制止さえ聞こえてくる。

「説明しろ、泉候補生っ！私がいつ出撃命令を出した！？」

「こちら泉。勝手に出ますから、どうぞおかまいなくっ！」

ピッ。

美奈代は通信装置を切った。

“征龍改（せいりゅうかい）”が、ハンガーデッキからフライトデッキに出る。

目の前ではＦＤ（フライトデッキ）要員がシグナルライトを必死になって振り、発艦を止めようとしている。

美奈代はそれを踏みつぶさないように慎重にデッキに立った。

「エンジンシステム良好――――さぁ、いきますよ！？」

「はいっ！」

牧野中尉の操縦の元、美奈代騎が“鈴谷（すずや）”を離れた。

帰ったら無事では済まないだろう。

それでもなぜか、気分だけは恐ろしく晴れ晴れとしていた。

世界が、とてもすばらしいものにさえ思えてくる。

叫びたいほど、心が軽い。

「ねぇマスター」

“さくら”が訊ねた。

「マスターが一番って何？」

「簡単なことさ」

美奈代は言った。

「あの中で私が一番、営倉にぶち込まれた問題児だって……そういうことよ」

一方。

――――しくじった。

たった２騎。

１５騎の反応のうち、もっとも近くにいた２騎と接触しただけで、このザマだ。

国連軍の騎だと思って接触したら、相手は得体の知れない敵騎。

交戦したものの、まるで歯が立たない。

二宮は焦燥感を何とかねじ伏せるのがやっとだった。

目の前の、見たことのない騎にすでに１０回近く打ち込んでいる。

すべて致命傷になる一撃だ。

それが――

「どいてください中佐っ！」

「大尉！？――――っ！」

長野大尉の鋭い声を受け、二宮は横っ飛びに騎体を移動させた。

その途端、敵騎の緑色の騎体の表面がまるで弾けたように連続して爆発した。

長野大尉が撃った１２０ミリ速射砲の連続した直撃だ。

装甲で爆発そのものは止められても、爆発の衝撃までは止められないはずだ。

敵の騎体がグラリと揺らいだのが、爆発の煙の向こうに見えた。

「やったか？」

二宮が微かな抱いた微かな期待は、敵騎の握ったハルバードの一撃に粉砕された。

二宮にかわされ、ビルに命中したその一撃は、ビルそのものを真っ二つに切断した。

途端に二宮の視界を、ビル崩壊の土煙が塞いでしまう。

「――――くっ！」

呆然としていれば危険だ。

二宮は、即座に騎体を後退させる。

土煙が抜けたと思った瞬間――――。
「何っ!?」
まるで土煙を飛び越したように、敵騎は上空から来た。
真っ青になる二宮の目の前、スクリーン一杯にハルバードを振りかぶった敵騎が迫ってくる。
「――――速いっ!」
シールドを構えつつ、二宮は騎体ひねってその一撃をかわすのがやっとだ。
シールドの表面をハルバードの柄がかすり、鋭い火花が生まれた。
振り下ろされたハルバードの斧がアスファルトを吹き飛ばし、深々と地面にめり込んだ。
すると、敵騎はハルバードから手を離し、後退をかけた。
ハルバードに拘るがあまり、攻守が疎かになることを恐れていることは間違いない。
「いい判断だ!」
二宮は、誘われるように前進し、間合いを詰める。
「どうするんです!?」
MC（メサイア・コントローラー）の青山中尉が怒鳴る。
「実剣が効かないなんて!」
「実剣で切断出来ないなんて、いつものことだろう!」
「殴って効果がないことに驚いていますっ!」

実剣が効かない。
この言葉には意味がある。
メサイアとはいえ、その素材は所詮、人類が生み出した金属にすぎない。
金属が金属を切断することは、金属を剣の形にしたところで不可能。
一般に刃で切断する刃物としての機能を、メサイアの剣が持っていない。

明記しておく。
メサイアの実剣は、鈍器の一つでしかない。

対メサイア戦において使用される武器は、剣よりむしろ鈍器の代名詞たるメイス＝戦棍（せんこん）や、ウォーハンマー＝戦鎚（せんつい）、ウォーハンマー＝戦斧（戦斧）の方が主流。
騎士が、メサイアを駆り、剣で華々しく戦うなどという戦場は、その世界には存在しない。

「長野大尉！」
二宮は通信装置に怒鳴った。
「大橋達は！？」
「全員の脱出を確認！後退開始しますっ！」
「よしっ！」
二宮はけん制をかけるように、剣を振り回した。
「長野大尉も下がれ！私が時間を稼ぐ！」
「しかし！」
「命令だ！」
「――了解っ！」
長野の返答と同時に突撃、上段から振り下ろされた二宮の一撃を敵騎は寸前でかわす。
振り下ろされた剣を逆袈裟斬りの要領で、下から振り上げることも、最初から予想通りだったと言わんばかりにかわしてしまう。
敵騎はその間に、腰にマウントしていた戦斧を取り出し、逆襲に転じた。
「ぐっ！」
振り下ろされた一撃を、二宮は剣で受け止めた……違う。受け止めてしまった。
剣が、まるで蝋燭細工のようにスッパリと切断され、そのために

勢いを殺されていたとはいえ、十分すぎる勢いのついていた一撃が、メサイア本体の装甲にめり込んで停止した。
「左肩部損傷、左肩部アクチュエーター大破！左腕、動きませんっ！」
各種警報が鳴り響き、ステイタスモニターが赤く点滅を開始する中、青山中尉が怒鳴る。
「始まったばかりだというのにか！」
二宮は自分のうかつさを呪いながら、
「――――どんな素材を使っているんだ！？」
そう、思わず驚愕することを止められなかった。
切断された剣を放棄して、二宮は騎体を後退させることを決断した。
武器が違いすぎる。
勝負にならない。
「一体、どこの国のメサイアだ？」
当然、二宮は魔族軍のメースなんて、存在自体を知らない。
「これは――――魔族でしょう」
青山中尉は言った。
「こんなバケモノ、見たことありません」
「一番、考えたくない事態が起きた……か」
「どうしますか？」
「データはとれたな？なら撤退する――――私は勝てない戦はしない主義だ」
「了解」
敵騎は、ゆっくりと近づいてくる。
二宮騎に、驚異となる攻撃手段がないことに、いい加減気づいているからだ。
「一方的な受け身も嫌いなんだがな……」
苦虫を噛み潰したような顔でスクリーン上の敵を睨み付けた二宮は、

「……ん？」
二宮は、自分が立っている所が、はじめてわかった。
巨大な建物群が整然と並ぶ、工場だ。
建物は、妖魔の侵攻と長年の放置とで、かなり破壊されている。
「唯」
二宮はＭＣ（メサイア・コントローラー）に問いかけた。
「ここは――何の工場だったのか資料ある？」
「……化学工場です」
唯は答えた。
「正確には、化学肥料工場」
「……」
「敵、距離２５０」
「……」
二宮は、ゆっくりと近づいてくる敵騎よりも、敵騎と自騎の間の倉庫らしい建物から半ば出た状態で放棄された、横転したトレーラーに注目した。
トレーラーのコンテナは横腹を引き裂かれ、中身がこぼれている。
中身は袋。その袋には、“Ａｍｍｏｎｉｕｍ　Ｎｉｔｒａｔｅ”と書かれていた。
“Ａｍｍｏｎｉｕｍ　Ｎｉｔｒａｔｅ”――硝酸アンモニウム。
化学肥料としての他の使い道で一般的なのは、爆薬の原料だ。
二宮はふと、つい最近の授業でそれをとりあげたことを思い出した。
――あの時は誰を叱ったっけ。
この状況で、そんなことを考えてしまう自分が何だかおかしくて、笑ってしまう。

笑い。
それが、二宮の心に平穏を取り戻してくれた。
二宮は、青山中尉に言った。
「……このゲーム、私達の勝ちよ」
「……そう願います」
唯は、冷静な口調で言った。
「距離１５０」
二宮は、敵騎がトレーラーと倉庫に最も近づいた頃合いを見計らって、サイドスカートに取り付けていた手榴弾を倉庫の中へと投げつけた。
丁度、敵にぶつけようとして失敗したような、そんな軌道をとった手榴弾に、敵騎は全く関心を示そうともしない。
悠然と戦斧を片手に近づく脚を止めようとしない。
「……４……３……」

二宮騎のブースターに光が入ったのはその直後。

二宮騎は、背中を敵に見せることも躊躇せずにブースターを開き、その場から逃走にかかった。
メサイアの全出力をブースターに回す緊急脱出機動。
機動をかけたメサイアをわずか３秒後に高度１万メートルの高みへと逃がすことが出来る代物だ。
ただし、騎体と、パイロットとＭＣ（メサイア・コントローラー）にかける負担はかなりを覚悟しなくてはならない。
普通のメサイアの機動の場合は慣性制御によりＧの大半は相殺されるが、この機動の際は、その制御に必要なパワーまでを推力に回すため、下手をすると騎士でさえ気絶する程度では済まされないのだ。
これを目の前でやられると、メサイアが本当に一瞬のうちに消失したように見える。この機動が“消失トリック”とも呼ばれる由縁

である。

さすがに驚いたのだろうか。

二宮騎に斬りかかろうとしていた敵騎は、その場で動きを止めた。

――次の瞬間。

倉庫の中で手榴弾が炸裂した。

「なっ！？何っ！？」

突然、市街地から少し離れた場所に立ち上ったキノコ雲は、数キロ離れた場所を移動中のさつき達三人の目にも映った。

「どうしたの！？」

「二宮騎、緊急脱出！」

MC（メサイア・コントローラー）の言葉に、さつき達は驚いて通信モニター上の自分たちの顔を見合ってしまった。

一体、何のために来たんだ？

あのキノコ雲は、二宮教官達が、敵メサイアを撃破した際に生じた爆発で、その爆発に巻き込まれないために、二宮教官は緊急脱出したのだ。

皆が、口に出さないがそう思いこんでしまった。

それがまずかった。

「敵撃破の目的は果たしたんだから……」

「どうする？」

「とりあえず、合流しよう。４時方向１５キロに長野教官達の反応が」

「……怒られるね」

「やむを得ないよね」

3騎は、騎体を長野騎の反応のある方角へと旋回させた。
そしてそれは、正体不明のメサイア部隊に察知されていた。

「くそっ！」
実は、長野騎もまた、二宮騎と同じ立場に立たされていた。
しかも、こちらは都合のいい化学工場はない。
すでに１２０ミリ速射砲は弾を撃ちつくし、楯代わりに使って真っ二つにされている。
戦斧も切り刻まれてしまってどの辺で放棄したかさえはっきりと覚えていない。
だが、合流と同時に敵騎の新顔に襲われた。
自分が二宮騎から離れた所をつけられたのは間違いない。
敵の武装は手斧だ。
桁違いの破壊力の上、軽い分スピードがある。
一発でも食らえばどうなるかは、切り落とされた肩部装甲の惨状が教えてくれる。

「くっ！」
振り回される手斧が音を立てて騎体をかすっていく。
長野は何とか紙一重でそれをかわし続ける。
ホバー移動を後進で続けながら戦闘をするなんて芸当はそうそう出来る代物ではない。
長野がどう動こうが完璧にバランスを確保しつつ、障害物を避けまくるという、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の神業を越えたホバー制御技術の賜だ。
長野に残されている武装はもはやない。
あるのは左腕のシールドだけだ。
敵もそれがわかってるんだろう。

当たるはずもない大降りの攻撃を繰り返すのは、間違いなく――――
「俺をコケにしてやがるのか！」
そういうことだ。
追いつめたネズミを、猫が殺さず、徹底的に弄んで殺すのとよく似ている。
「……面白れぇ」
長野は額に青筋を走らせ、舌なめずりした。
敵と殺し合うのは慣れているが、ケンカはもっと慣れている。
敵は殺し合いじゃなくて、俺にケンカを売ったんだ。なら、俺もケンカで返させてもらおう。
敵は手斧をどう動かしているのか、長野はもう掴んでいた。
右から左。そして左から右。
丁度、Xを描くように2度振り回し、横一文字に薙ぐ。
その繰り返しだ。
遊んでいるからのパターンだ。
敵を追いつめているとして、さぞコクピットで楽しんでいるだろう。
長野は、わざとバランスを崩したフリをして、シールドを構える姿勢を解除した。
シールドが下に下がり、右腕が少しだけのばしたような姿勢になる。
防御もへったくれもない、完全な無防備状態だ。
敵はさらに面白がって手斧を振り回す。
その動きはさらにいい加減になっている。
長野が狙っていたチャンスはすぐに来た。
左上から右下へ向けての一撃。
右腕を破壊しようとする一撃を、肘をひねってかわし、敵の腕が伸びきった所で敵の、手斧を握った手首を捕まえる。

そして、力任せに敵騎を引っ張ると、その頭部めがけてシールドのエッジを叩き付けた。

シールドアタックと呼ばれるこの技は、シールドの質量を攻撃に転用する代物で、ベテラン騎士の間では、打撃系の中でもかなり高い破壊力を持つことで知られている奥の手に近い攻撃だ。

鈍い音を立て、シールドを頬部に食らった敵騎が吹き飛んだ。

シールドがめり込んだ衝撃で、顔面部分の装甲がゆがみ、頭部に至る内部パーツが装甲の隙間からかなりのぞき込めるようになった。

高速移動中にバランスを崩した敵騎は、何度も地面に叩き付けられながら数百メートル転げ回り、大の字になってようやく止まった。

長野は“征龍改（せいりゅうかい）”を急停止させ、敵騎の側に転がっていた手斧を奪い、逆襲に転じた。

「喰らえっ！」

手斧を敵騎の頭部めがけて容赦なく振り下ろした。

頭部に一回、さらに股関節めがけて三回。

長野は、動かなくなった敵騎と手斧を満足そうに眺め、言った。

戦斧でぶん殴って壊れなかった装甲が、まるでチーズのように割れた。

一体、どういう代物かわからないが、恐ろしく心強い武器だと思った。

「いいモノもってるじゃねぇか」

感嘆しつつ、長野はサイドスカートに取り付けられた手榴弾の弾頭を、2発分、割れた頭部装甲の隙間にねじ込み、

「代金代わりに――受け取っておけ！」

安全装置を解除すると、一気に離脱にかかった。

後方で鈍い爆発音が追いかけてきた。

装甲さえなければ、内部で爆発した手榴弾のテルミット効果で、内部機器は致命的ダメージを受けるだろう。

頭部にコクピットがあれば最高だ。

どっちにしても、厄介者が消えたのは確かだ。

長野は“鈴谷（すずや）”への帰艦のコースをとった。

「接近中の騎あり」

「友軍か？」

「二つ。一つは友軍――もう一つは識別なし」

「友軍？国連軍か」

長野は周囲を警戒しつつ訊ねた。

「こんな所へ？“伊吹”の救援か」

「いえ――識別は、第七小隊騎、宗像と柏、早瀬騎です。泉騎の反応はありません」

「何？どういうことだ？あいつらは“鈴谷（すずや）”で待機命令が」

「もう一つの勢力は明白な敵です。先ほどの敵騎と類似反応あり。騎数３」

「何っ！？」

「早瀬騎と接触！！」

「あのバカ娘共っ！」

美奈代の暴走

「きゃあっ！」
とっさに構えたシールドが左腕ごと切断された。
シールドを持った左腕が宙を舞い、地面に落下していく。
「な、何が！？」
シールドが全く何の役にも立たなかった。

装甲をチーズのように切り裂くという表現があるが、これじゃまるで豆腐だ。

「近衛の装甲って、飾りなの！？」
左腕を失ってバランスを失ったさつきは、騎体バランスをとろうとＳＴＲシステムと格闘しながら怒鳴った。
「装甲の役目果たしてないっ！」
「早瀬っ！」
宗像が怒鳴った。
「長野教官との接触は一時お預けだ。降りるぞ！」
「で、でもっ！」
「敵の機動性に、こっちがついていけない。このままなら一方的にこっちが不利だ！」
「――わかった！」
「美晴は私と一緒に敵騎をけん制。さつきは後退しろ」
「り、了解っ！」

敵は３騎。
長野大尉騎もまた、別な敵騎と交戦している。
助けに来た以上、今更“助けてください”はとても言いたくない。

「このっ！」
地上に降りるなり、美晴騎が１２０ミリ速射砲を放つが、敵騎はそれをあっさりと回避。
美晴騎に肉薄する。
「来るなっ！来るなぁぁぁっ！」
１２０ミリ戦車砲弾の直撃をものともせずに飛び込んでくる敵騎。
その光景に本能的な恐怖を覚えながら、美晴は後先考えずにトリガーを引き続けた。
ピーッ！
カチッ！
アラームの後、トリガーの感覚がなくなった。
「弾切れっ！？」
美晴は一瞬、残弾を確認しようと視線を動かしてしまった。
近衛のメサイアは、騎士に必要な情報を網膜に直接投影するため、視線の移動を必要としない。
敵から一瞬でも視線を外せばどうなるか――
美晴は、視線を敵騎に戻した時に、それを悟らされた。

「美晴っ！」
さつきの目の前で、美晴騎の両腕が、シールドと速射砲ごと吹き飛んだ。
シールドと速射砲を×の字状態で組み合わせたのだが、それさえも敵の戦斧はモノともしなかった。
敵の攻撃が弱かっただけだ。
美晴は警報が鳴り響くコクピットで、妙に冷静に状況を判断していた。

間合いを間違えたんだ。
もし――間合いが正確だったら。

背筋を、冷たい汗が流れた。

私は――死んでいた。

「美晴っ！」
呆然として動かない美晴騎を敵騎は蹴り飛ばした。
3騎で攻めてきながら、実際に手を下すのは一騎のみ。
両腕を破壊された柏騎を前に、さつきは嫌なことを思い出した。
高校時代のケンカだ。
弱い相手と知るや、たった一人で複数を相手にいきがるチンピラ共――。
やっていることは、それと同じだ。
本人はかっこいいつもりかもしれないが、端から見れば最低だ。
騎士同士の戦いとはとても思えない。
それでも、それを許してしまう自分たちも十分――
「くっ！」
さつきは、右腕で剣を構えた。
「候補生っ！」
MC（メサイア・コントローラー）が怒鳴る。
「後退を！左腕の喪失で戦闘力は半減していますっ！」
「冗っ談っ！」さつきは怒鳴り返した。
「一方的にやられてはい終わり！？ふざけないでよ！」
「ですがっ！」
「いくら私が女だからって、戦いまで受け身でたまるもんですか！」
さつきは、美晴騎を踏みつけて悦にいる敵騎に斬りかかった。
「さつき――加勢するっ！」
宗像騎から通信が入る。

二騎同時なら――――もしかしたら！

さつきは、その可能性に賭けた。

敵騎が、まるでズームしたように、スクリーン一杯に迫ってくる。

宗像騎とさつき騎は完璧なまでに同時に敵騎に斬りかかった。

――――が。

ガンッ！

攻撃が命中したにしては奇妙な感覚がＳＴＲシステム越しに伝わってくる。

「――――え？」

さつきは、自分の騎体に何が起きているのか、正直わからなかった。

ギギィィ……ッ

腕が――――動かない。

ギッ……ギッ……

「な……何？」

腕が、振り下ろされる途中で止まっている。

ＳＴＲシステムを力任せに押しても何も変わらない。

何？

何で？

その理由を知った時、さつきは、自分が賭けに負けたことを悟った。

敵が、２騎同時に、完璧に同じタイミングで、しかも同じ方法で襲ってきたとしたら？

それはある意味必殺の攻撃と思われるかもしれない。
だが、攻撃方法が同じならば、一つの攻撃を崩す方法を単に2騎に応用すればいい。
それだけだ。

敵騎が何をした？
振り下ろされようとしていた2騎の腕を掴んだ。
それだけだ。

後は力押し。

そして――その面でも、さつき達に勝ち目はなかった。

「離せぇぇっっ！」
さつきはコクピットで満身の力をこめる。
宗像でさえ、エンジン音からして同じことをしているだろう。
2騎同時に暴れているというのに、全く歯がたたないなんて！！

ミシッ……ミシミシミシッ……

掴まれた腕から奇妙な音がし始めた。

腕の装甲に亀裂が走る。

ベギィッ！！

背筋が寒くなるような音がして、さつき騎と宗像騎の腕から剣が落ちた。
腕は明後日の方角にねじ曲がった。

敵騎の握力の前に、握りつぶされたのだ。

「なんてパワーだ！」

普段、冷静沈着な宗像でさえ、我を忘れて叫び、思わずコクピットの中で身を乗り出してしまった。

「これほどの握力を確保するなんて、一体、どういう仕組みだ！？」

その返答は、二騎同時に襲ってきた敵騎の回し蹴りだ。

２騎は同時に横に吹き飛ばされた。

派手にスライディングして、２騎が並んで大地に転がった。

さつき騎は両腕を失い戦闘能力を完全に喪失。宗像騎も脇腹に受けた一撃でシステムがすべて飛んだ。

スクリーンもパネルもすべてがブラックアウトしたコクピットで、宗像はそれでもシステムの再起動を試みた。

システムのリカバリーにどれほどかかるか？

いや。

敵がどれほど待ってくれるか。

絶対、待ってはくれないだろう。

そう思うと、今、自分がやっていることが馬鹿馬鹿しくなってきた。

足掻いている所を殺されるなんて、ごめんだ。

死ぬならきれいに死にたい。

そう思う宗像は、再起動する手を止め、目をつむった。

――――やるならやってくれ。

誰となく、そうつぶやいた。

――私は、負けたのだ。

宗像の気持ちがわかるわけではないだろう。
戦斧を構える敵騎に襲いかかる2騎のメサイアがいた。

「このぉぉぉぉっっ！」
上空から戦斧を構える敵騎に襲いかかったのは美奈代騎だ。
着地する寸前に長剣を振り下ろした。
それまで、“征龍改（せいりゅうかい）”や“幻龍改（げんりゅうかい）”の装甲や武器を切り刻んだその戦斧が、真っ二つに切断された。
狼狽する敵騎に、美奈代は容赦なく襲いかかった。
「よくも――こいつぅぅっっっ！」
逆袈裟切りで敵騎の胴体を真っ二つに切断し、返す刀で脳天を唐竹割にした美奈代は、敵騎を文字通り4つに切り刻んでしまった。

近衛軍の最新鋭兵器――斬艦刀の威力だ。

「す……すごい」
その光景に目を見張ったのは敵だけではない。
使用した側の牧野中尉も同じだ。
歴戦の猛者である牧野中尉でさえ、こんな光景は見たことがなかった。
「装甲を……こんなにあっさりと……」
それまで傍観を決め込んでいた2騎がハルバードを構え、同時に襲いかかってきた。
「候補生っ！」
「仲間を守りますっ！」
美奈代は怒鳴った。
「私を仲間はずれにした落とし前つけてもらうまで、死なせてたま

るもんか！」

美奈代騎は接近する敵騎2騎に逆に襲いかかった。

守勢に回ると思っていた敵騎が突然、攻勢に転じたため、タイミングを失った2騎は、それでも振り上げたハルバードで美奈代騎を攻めた。

一騎が袈裟切りに。

もう一騎が横薙ぎの一撃に攻めた。

美奈代は、あえて突撃速度を早めると、ハルバードの懐に入った。

ハルバードは槍に斧をつけたような武器だ。

先端部である斧の内側に入れば――。

ガガンッ！！

鈍い音が連続してスピーカーから聞こえてくる。

そして――舌をかみそうな衝撃。

数瞬の間を置いて、

ズズゥゥンッ！！

何か、大質量の物体が地面に叩き付けられた音がした。

「やったぁぁぁっっ！」

“さくら”の歓声がして、牧野中尉は自分が死んでいないことに初めて気づいた。

「――えっ？」

恐怖のあまり、つむっていた目を恐る恐る開いてみる。

見慣れたMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）が目の前にある。

「あ……あれ？」

手であちこち触れてみる。

感覚がある――つまり、

「私……生きてる？」

「マスター、すごぉぉぉいっ！」

“さくら”が飛び跳ねて喜んでいる。

「2騎同時キルなんて勲章モノだよぉっ！」

2騎同時？

牧野中尉は、戦闘記録をあわてて再生させ、そして絶句した。

「あの敵を2騎同時に仕留めた！？」

“鈴谷（すずや）”と接触して初めて事態を知った二宮と共に、教え子の救援に向かおうとした長野は、その報告を最初は信じようとしなかった。

「何かの間違いでしょう！？」

本気でそう言ってのけた。

二宮でさえ一方的に叩かれたあのバケモノ共を3騎撃破。そのうち2騎は同時に撃破したなんて、候補生のやっていいことじゃない。

メサイアの回収作業が終わり、美奈代騎の戦闘データを見るまで、長野自身、何回、「冗談だ」とか「嘘だ」と言ったかわからない。

「まぁ、そう言うな」

長野をたしなめる二宮の視線の先には、仁王立ちになって怒鳴りまくる美夜と、正座させられて小さくなる美奈代がいた。

「勝手に出撃して、おかまいなくとは何事だ！」

美夜はカンカンだ。

説教はしばらく続くだろう。

「自業自得はいえ、少し気の毒だな……」

ぼやく二宮に、

「中佐」

整備兵が近づくと、二宮に一枚のディスクを手渡した。

美奈代騎の戦闘記録だ。
「……とりあえず」
二宮は長野にそのディスクを手渡した。
「これを見れば、いろいろとわかるだろう」
「絶対、何かの間違いですよ」
長野はディスクを胡散臭そうに眺めながら言った。
「もし本当だったら、俺は死ぬまで泉に逆らいません。誓ってみせますよ」

“征龍改（せいりゅうかい）”が突撃。
ハルバードの懐に飛び込むと、右から横薙ぎに襲ってきたハルバードの柄を右肘部装甲で、左から袈裟切りにきた方の柄は、シールドで受け流し、両方の柄をレールのように滑らせながら、何の躊躇もなく敵騎に襲いかかる。
右側の騎がハルバードを操作して対処を試みるが、もう遅い。
次の瞬間には、斬艦刀の切っ先が右側の敵騎の胴体を貫通し、同じタイミングでシールドのエッジが左側の敵騎の胴体に深々とめり込んでいた。

戦闘記録を元に、コンピューターが割り出した戦闘の光景が、３Ｄポリゴンで詳細に再現される。
戦闘再現システムといい、パイロットである騎士やＭＣ（メサイア・コントローラー）でさえ見たことのない、第三者としての視点から敵味方の戦闘時の動きがわかる優れものだ。

そのシステムが割り出した戦闘の光景を前に、言葉を失ったのは長野だけではなかった。
完璧すぎる。
長野が見たことすらない完璧の上を行く機動が示されていた。

メサイアの機動教本に掲載すべき内容だ。
「ぶ……武器の性能が……」
長野は口の中で言いかけて、その言葉を無理矢理飲み込んだ。
違う。
そんな簡単な話じゃない。
武器の性能ではない。
それなら敵騎の方が圧倒的に有利だと、自分でも嫌という位味わっている。
それに、泉は俺と同じ騎に乗っていたんだ。
では？
「これは……」
長野の口から出たのは、そんな言葉でしかない。
何と言うべきかは、長野自身が思いつかない。

映像が繰り返されるたびに、あちこちで驚嘆と歓声が上がる。
戦闘再現システムの映像は、余程の負け戦でもない限り艦内に筒抜けになる。
３Ｄポリゴンの映像の美しさと、自分たちが命がけで運用している、メサイアの戦闘記録は、乗組員達の丁度よい娯楽になるのだ。

「――――まぁ、長野大尉」
二宮は、ポンッと長野の肩に手を置いた。
「さっきの話は、聞かなかったことにしてあげます」
「か……感謝、します」

星を掴むような話

空にはアフリカの星が瞬いていた。
星座のことなんてこれっぽっちも知らない。
ただ、きれいだと思った。
男は、擱座したメースの黒こげになった騎体の上に寝転がった。
目の前に広がる満点の星空。

欲しいな。

そう思った。
こんなにたくさんあるなら、一つくらい、手に入れることが出来るんじゃないか？
そっと手を伸ばしてみるが、届くはずもない。

魔族の彼は、民間軍事会社“イシス”の雇われ兵。
エーランド少佐という。
白い肌に美しい金髪をした貴公子全とした美男子だ。

「星を掴むような……か」

彼の故郷では、“あり得ない話”という表現だ。
故郷とは全く違うのに、美しさだけは変わらない。
見るだけで、心が安らぐ。
彼は、まるで星空を抱きしめるかのように、目を閉じた。

――――ブロロッ
不意に、ガソリンエンジンの音がした。
光を感じたものの、彼は目を閉じたままだ。

――ギギィッ
耳障りな音がする。
「少佐」
そんな声がしたのは、エンジン音にまじってのことだ。
「ご無事で？」
「……遅いぞ」
彼はのっそりとした動作で起きあがった。
「勘弁してくださいよ」
横たわったメサイアの下に停車した立つ士官が肩をすくめた。
「まだ何もかもが整っていないんですよ？何しろ、士官の俺でさえ、移動用にって、人類が残したこんなシロモノ割り当てられてるんですから」
士官は、ウィルスジープのボディを拳で軽く叩いた。
「部隊を前線に送るなら、回収部隊もそろえて送るもんだろうが」
「“メースを送れ”と言えば、我々回収部隊がオマケでついてくると思っているんでしょうよ」
士官は手を振り下ろした。
すると、背後から強い光が走り、横たわったメースを照らし出した。
擱座したメースの回収を任務とする回収部隊だ。
「……派手にやられましたな」
「油断した」男はニヤリと楽しげに笑った。
「よくもまあ、ここまでやってくれたもんだよ。敵さんも」

男の駆るメースは、確実に敵騎を追いつめた。
あと一歩という所で、謎の爆発に巻き込まれ、騎体はこのザマだ。

「失礼しますよ」と断ってからメースによじ登り、ハッチを開いた士官に、男は訊ねた。
「なおるか？」

「我々は野整備部隊じゃないんで」
士官はハッチから顔を出さずに言った。
「……まぁ、何とかなるんじゃないですか？」
「通信装置まで破壊され、部隊の他の連中と連絡がとれない。通信装置を貸してくれ」
男はそう言うと、メースから飛び降りて、士官が乗ってきたジープに向かって歩き出した。
「ご存じなかったんですか！？」
士官は目を丸くした。
「――何がだ？」
「少佐の部隊は……」
士官は、メースの上に立ち上がり、うなだれたように頭を垂れた。
「……全滅です」
「――何？」

●夜　“鈴谷（すずや）”艦長室
「それで？」
二宮に、美奈代の説教で喉を痛めた。という美夜が、喉のあたりを気にしながら答えた。
「信号はブラフだったというの？」
「皮肉な話よ。国際救難信号は出ていたけど、肝心の人がいないんだもの」
「妖魔に襲われた？」
「かもしれない。でも、放置されていたジープのエンジンは確かにかかっていた」
「そんなくだらないことで、メサイアを送らなければ良かった」
「敵が誘ったのかと……今になればそう思う」
「信号がどういう意味を持つか知っていた？」
「……多分」

二宮は頷いた。
「知っていた上で、私達を誘った」
「目的は？」
「……遊びか訓練か」
「まさか」
美夜は首を横に振った。
「まるで私達のように、魔族軍も訓練生を送り込んでいる。そうともとれるわよ？」
「そうでもなければ、何のためにこんな所にメサイアなんて送り込んでいるのか、説明がつかないのよ」
「……まぁ、そうだけど」
ティーポットから紅茶を注ぎながら美夜は言った。
「正体不明のメサイアの残骸の確保。それが最優先課題となった」
「じゃあ、ソマリア各地の偵察任務は中止？」
「別部隊がやる」
「別部隊？」
「いるのよ。この近くに」
「……まさか」
二宮が目を見張った。
「それって」
「１５のメサイアの反応のうち」
美夜が意地の悪い笑みを浮かべて頷いた。
「結局の所、５騎しか倒していない。残り１０騎はどうなったんでしょう」
「……でも」
「斬艦刀は明日にはすべて配備されるけどね？
すでに配備済みの部隊が近くにいるのよ。
しかも、天皇護衛隊（オールドガーズ）の腕っこきから選別された特務部隊がね」
「天皇護衛隊（オールドガーズ）が！？」
「何で？っていうなら、知らない。元隊長殿のあなたの方がご存じ

じゃない？」
「まさか」
二宮は首を横に振った。
「あの部隊は軍事より政治的要請で動くような連中よ？」
「そうね。とりあえず、明日には残骸を回収。“あの子”が送り込まれてくるから、手柄にしましょ？
まあ、敵が黙って引き渡してくれると、私は思っていない。それだけはわかっていて」

●某所　不明
「困るんだよ」
静かな、しかし明白な叱責を含んだその一言に、神妙に頭を下げたのは、かつて神音の元を訪れたあの男、ユギオだった。
「ユギオ……もう何年だ」
「……はっ」
神音の前でみせた軽さはどこにもない。
「我々の投資額を、考えたことはあるのか」
「……申し訳ありません」
「我々にも投資するからには理由（わけ）がある。世論が言うような馬鹿げた慈善事業（きれいごと）に投資しているつもりはない」
「はい」
「今まで何をしてきた？レンファの怠慢ぶりにすべての責任を負わせるつもりだろうが、我々相手ではそうはいかんぞ？」
「……」
「レンファを選んだ選定ミスといい、その怠慢を放置したことといい、お前達の罪こそ叩くべきだという者が圧倒的多数だ。
状況は開戦時とは大きく変化しつつある。

世論は負けっぱなしのお前達に愛想を尽かし始めている――――誰の非かは、一々口の端に乗せるつもりもない」

「……」

「……1年だ」

「1年？」

「これが最後通告だぞ、ユギオ」

「1年で、せめて我々を説得するだけの功績をあげろ」

「……はっ」

「――――さて。状況を説明してもらおうか？その……ヴォルトモード卿封印解除の話を」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「残念なことになったわね」

「……そうね」

美夜と二宮の目の前で炎上を続けるのは、エーランドが放棄したメース、ツヴァイだ。

騎体の鹵獲（ろかく）を狙ったが、仕掛けられていた自爆装置が作動。

騎体は一瞬にして炎の中に消えた。

火葬を前に、敵騎の秘密がわかると期待していた面々には失望の色が走る。

「よっぽど私達に騎体を渡したくないみたいね」

「……“あの子”が暴れなきゃいいけど」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「正直」

二宮は苦い顔で言った。
「魔族軍にメサイアが存在したこと自体、私達ですら、初めて知ったことだ」
「慰めにもならないことだが、事実だ」
美奈代達は、無言で頷く。
「データは、すべて本国に送った。司令部もかなりのショックを受けたらしい。
情報は既に国連軍にも伝えられているが、国連軍には魔族軍にメサイアが存在するという共通認識さえない。だから、そを伝えるメディアの中には、巨人かそれとも破壊したメサイアに妖魔が取り憑いているなんて話まで出ている」
無理もない。でも、初めて、メサイアを見た連中に比べれば楽だろう。
連中、きっと、それが何物なのかさえわからなかったろうから。
「幸い」
二宮の視線が、美奈代達の背後に注がれる。
「我々には、魔族軍メサイアとの交戦経験もある。しかも、鈴谷には専門家が乗艦していたところだ。これより所見を拝聴する――中佐」
「はいはい」
そんな返事と共に壇上に上がったのは――どう見ても中学生の女の子。
赤い髪にあどけない顔立ち。
やたらと幼さが残る無垢な目元といい、どう見ても、中佐と呼ばれる存在ではなかった。
羽織った白衣でさえ、給食当番のスモック代わりといわれなけれ

ば納得できない。

「開発局特別顧問、津島紅葉技術中佐だ」

「あ、あの……」

柏美晴が挙手の姿勢で発言を求めるが、

「何？私が何歳か？１５歳。ただし、正規の近衛技術中佐の待遇よ？“うっそーっ！信じられなぁい！”とか言いたいなら、上官侮辱罪で投獄覚悟してからにして」

紅葉は一気にそう言ってしまう。

「な……」

おかげで美晴は、そのまま凍り付いた。

「ついでに、あんた達のメサイアの開発、調整もほとんど私の仕事。わかった？」

「は、はい」

上官侮辱罪。

それが恐ろしい美晴は手を下ろした。

「よろしい――結論から先に言う。こいつは、メサイアに極めて近い存在と言える」

「メサイアに……近い？」

「二宮中佐、メサイアを一番最初に実用化した国は？」

「ロシア帝國でしたね。たしか、１９５１年」

「正解。じゃあ、そのメカニズムとか理論、どこの誰が提唱した？」

「えっと……ロシア・魔法科学アカデミーが」

「それがね？私達の間では嘘だっていうのが常識なの」

紅葉は、嘘と常識を強調した口調でそう言った。

「？」

二宮は、その意味がわからない。

「魔法科学アカデミーは、何かをコピーしただけだ……そう言われているのよ。

まぁ、私は、あの時代、コピーだけでスターリン作り上げたのは褒めてあげたいけどね」
「まさか」
驚愕に刮目したのは都築だ。
「へぇ？あんた――わかる？」
「つ、つまり……メサイアは、こいつらのコピーだと？」
「正解♪」
「まさか！」
「そう考えるのが最も妥当なのよ。
根拠？
まず、メサイアの基本中の基本、こればかりはどうしようもないっていうベースフレームの構造や、魔晶石エンジンのマウント方法、他にも、あちこちが似すぎているの。
ううん？メサイアが、似せたといった方がいい。でなければ、あんな短期間でメサイアなんてバケモノを生み出せるはずがない」
「それだけですか？ただの偶然では？」
「それを証明するのが、今回のあんた達の仕事」
「また、あいつらと戦えと！？」
「正解♪」
紅葉はニコと笑って頷いた。
「他のメサイア部隊もいくつか、他でやってくれてはいる。だけど、これはあなた達のためにも必要な任務なのよ？」
「我々に？」
「昔から言うでしょあ？敵を知りってヤツ。あれよ、あれ」
「私だって、あなた達に無駄死にしてもらうつもりはないわ。ちゃんと、新装備はあげたでしょう？」
「新装備？」
「あの斬艦刀」
「……ああ」
美奈代は成る程。という顔で頷いた。

「あれは、あなたが？」
「私じゃないわよ。あんな問題作。あんた達にあげたのは、私が改良した自信作だから、それでも棺桶に乗ったつもりでいてよ！」
「敵前逃亡は……ダメか」
「あんな貧弱な通常装備で魔族軍メサイアブチのめしたあんた達だもん。大丈夫♪ね？ねねっ？」
「信じるしかねぇってことか」
「都築候補生だっけ？さっすがだね♪前衛出てもらうからね？」
「俺が！？」
「ああっ！そんな天井仰ぎ見ないでよぉ！ＤＥＳＥＥＤの調整一時ストップして来てるんだからぁ！」
「は？何スか？そのディー何とかって」
「あんなデリケートな子の調整、赤城のババアにやらせたらあの子がイカれちゃう！ね！？そんな大切な仕事止めてまで来てるの！わかる！？」
「わかりません」
「……」
突然、目の座った紅葉が手を動かし、抜く手も見せずに何かを投げつけた。
「ふさげんじゃないわよ！」

がんっ！

アルミ製の灰皿が都築の顔面を直撃。
紅葉はその都築の胸ぐらを掴み上げた。

「ああっ！？この紅葉様の“お願ぁい♪”を拒むたぁ！テメエ、一体どんな教育（しつけ）受けてきやがったぁ！？」

「は……灰皿って……ど、どこから」

「ゴラァっ！このクソ新兵！やんのかやらねえのか、どっちだ！？ああっ！？」

シャカッ

都築の口の中に銃口が突っ込まれた。

「この場で命令拒否とサボタージュで銃殺してやろうか！？それとも、メサイア細工して自爆装置とりつけてやろうか！？死にてえんだろう！？」

「わ……わかりました」

「――ちっ、最初からそう謙虚にいりゃあいいんだよ……クソが」

ぺっ。

唾を吐き捨てた紅葉は、都築を突き飛ばして壇上に戻った。

美奈代に助け上げられた都築だが、その目の前で、

「とにかく、紅葉のお願ぁい♪頑張って、このメサイアを1騎以上、搦座の上で確保して♪」

「確保？」

美奈代は、その意味がわかった。

「つまり、我々は、敵のメサイアの性能を把握するための調査材料となる敵メサイア確保のために動けと？」

「その通り！」

「あーっ、ヒデえ目にあった」

「口元、大丈夫か？」

「ああ……後で消毒してくれ」

「してないのか？」

「口で」

「……」

「わかった！悪かった！頼むから、“ソレ”で殴るな！」

都築騎が後ずさるのも無理はない。

征龍改が巨大な刀を振りかざしているのだ。
「っ……まだサービスしてもらってねぇってのに」
「本気で殴るぞ？帰ったら、絶対殴る！」
「生きて帰れたら――今晩こそ」
「こ、今晩はダメだ」
「何で」
「う、うるさいっ！」
「あーっ。美奈代って、今、そうなんだ」
「柏っ！」
「柏？」
「ふっふーっ。都築クン？オンナにはイロイロと事情があるのだよ♪」
「よくわからんぞ。宗像」
「わからんでいいっ！」
「ダメよ！」
「早瀬っ！茶化すな！」
「避妊はしっかりしないと」
「だぁぁぁぁぁぁっっっっ！！」
「コンドームじゃだめか？」
「あーあ。これだからオトコは」
「やめて下さいっ！泉候補生！トリガーを返してくださいっ！」
「いい加減にしろっ！！」

ギャーギャー始める教え子に、二宮がついにキレた。さすがにその教え子達は、その一喝で静かになる。
「全騎」
二宮は、あえて任務に集中することで事態の打開をはかった。
「この付近でメサイアの目撃がある。数は不明だが、もし、こちらより数が上なら、一切の戦闘は行わず、最大速度で撤退しろ。その

際は、僚騎を省みる必要はない」
「……了解」
山腹の斜面に隠れる形で集まる各騎がモニター越しに映し出される中、二宮は部下になった教え子達に命じた。
「とにかく、あらゆるデータを確保しろ。ＭＣは、肩部に設置されたデータポットの破損に注意」
「了解」
「武装は各騎、対メサイア戦と同じ。都築、お前の作戦で行く」
「俺の？」
「ああ――あの演習の時の、だ」
「上手くいきますかね」
「行かせるんだ。失敗を活かせ。教官にあれだけ罵られれば、二度と同じ失態は犯したくなくなっているだろう？」
「まぁ――やってみせます」
「よろしい。それと」
二宮は、右下に浮かぶ武器状況表示に視線を送り、詳細データを表示させた。
「各騎、ＥＬ刀のデータ表示」

ピピッ。

５５式ＥＬ刀――仮称“斬艦刀”。
刀身だけで１４メートルに達するまさにバケモノ刀だ。

「いいか？こいつは――よくわからん仕組みで刃の部分に接触したあらゆる物質を崩壊させ、切断する仕組みだそうだ」
「本当に使えるんですか？」
「しらん。試しに使ってダメならさっさと捨てろ」

「んなムチャクチャな」

「相手はあの津島紅葉だ」

「だいたい、あのクソガキ、何者なんですか？」

「都築が文句を言いたいのもわかる。あれは、開発局のキ印の中でも最悪のキ印だ」

「はぁっ！？」

「あれで、世界最高の“見通者（シーカー）”だというんだから……」

“見通者（シーカー）”

魔導師の一種。

驚異的な知識の持ち主で、複雑な科学問題を一目で解決出来る頭脳を持つ、いわば“天才”だ。

この世界では、魔法兵器の他、主な産業製品のほぼ全てが、彼らによって開発されている。

別名、“魔法の錬金術師”。

国際条約によって立場が保証された特権的存在でもある。

「まぁ」

さつきが通信に割り込んできた。

「とにかく、信じなくちゃ、始まらないんでしょう？」

「そうだな」

ピーッ！！

「ん？」
二宮は、コクピット内に響き渡った警告音に言葉を止めた。
「唯、どうした？」
「早期警戒システムに反応――メサイア級3、こちらに向かって移動中」
「来たな」
二宮は、即座に部下に命じた。
「各騎、戦闘態勢に移行――打ち合わせ通りに動け」
「了解」
騎体の振動が高まり、全てが戦闘モードに切り替わるのを体感しながら、二宮は言った。
「第一分隊、第二分隊、マーカーA、Bにあたれ、私と長野はCに」
「了解」
「かかれっ！！」

奇襲。

その戦いは、まさにその一言で語り終えられる程、あっさりとしたものだった。

突然の敵の出現に狼狽した敵は、満足な反撃の姿勢さえ見せる間もなく、斬艦刀の餌食となった。

それだけで、事が足りる戦闘だったのだ。

美奈代達は敵の増援が来る前に撃破した敵メサイアを回収、撤退に成功した。

回収した残骸は、すぐに“鈴谷（すずや）”に運び込まれた。
そして、津島紅葉を中心とした分析チームが割り出したその性能は――――

驚異的なものだった。

分厚い、肥満体を想像させるずんぐりとしたボディに単眼の独特な頭部や、分厚く広がった脚部。
お世辞にも動きが素早そうなデザインではない。

ハンガーデッキに横たわるその残骸は、整備兵や乗組員達の好奇と憎悪が混ざり合った視線の元に晒されている。
美奈代騎に集まって、調査を見守る美奈代達もその中の一部だ。

「それにしても」
さつきが征龍改の肩部パーツに腰を下ろしながらぼやく。
「結構、強そうなデザインだね」
「分厚い装甲……骨太のデザイン……これが、魔族のセンスなのか」
「そう……ね」
美奈代もただ、頷くしかない。
「重厚感っていうのかしら？繊細な近衛（うち）のデザインの対極ですね」
と美晴。
「コクピットは腹か……誰だ？あんな大穴開けたの」
美奈代の足下に腰を下ろした都築は、ちらちらと美奈代の太股に視線を送りながら言う。
「山崎だ」
美奈代は、それを知ってか知らずか、頬を赤らめながらもその場を動こうとはしない。
「はぁ……腹部は僕でした」

山崎は、手の感触を確かめるように、何度も手を握り直して言った。
「あの斬艦刀……あれだけの装甲を、まるで羊羹に包丁を差し入れたみたいにズパッといくなんて思いもしなくて、つい、力を込めてしまいました……」
「あれは画期的だ」
征龍改の面頬（フェイスガード）によりかかった宗像が、
「あれは使える」
そう、魔族軍のメサイアから視線を外さずに言った。
「あれだけの装甲厚をものともしないで、教官は真っ二つにした」
「それって、教官がバカ力だってことじゃね？」
「都築、面と向かって言って見ろ」
「冗談」
「えっとぉ……」
美晴は思いだしたように言う。
「メサイアのエンジンから直接出力とって、その魔力で電離層を形成、その効果で対象の原子的結合を瞬時に解除して、全てを破壊する？でしたっけ。最大連続使用時間は2時間。それ以上はコンデンサが焼き付いて使い物にならない」
「ウゲ……よくそんなの覚えてるよね。美晴は」
苦虫でも飲み込んだような顔のさつきが嫌悪感を丸出しにして舌を出した。
「さつきさん、コレくらいは覚えておきましょうよ」
「私は原理や仕組みより、現場で役立つことが大切だから――――おっ？終わったみたい」
「ま、ご褒美ってことで教えてあげる」
ブリーフィングルームで、紅葉は美奈代達を前に言った。

「聞いても、気分のいいもんじゃないけど」
紅葉の顔色は冴えない。
「それほど、敵の戦力は優れていると？」
「あたりまえでしょう？」
紅葉は、美奈代の言葉に、“何考えてんの？”という顔で答えた。
「メサイアが開発されてまだ半世紀。相手は多分、数百年、数千年、メサイアを研究し、データを持っているはずよ？それを考えれば、彼我の差は当然すぎる」
「そんなにすごいんですか？」
「ええ……今、開発中のβタイプ最新鋭機、基礎から再設計しても……それでも、とてもじゃないけど、単騎同士の相手は勤まらない」
「だけど！」さつきが言った。
「私達は、あれを倒したんですよ？」
「数と運。つーか、エモノが物言っただけ」
「なっ」
「――彼我の推定パワー差は、推定値の時点で既に征龍比で１０倍を遙かに超えるのよ？わかる？相手は１０倍を超える出力を誇るバケモノなの。
斬艦刀があった。
相手が弱かった。
勝因はそれだけ。
メサイア開発者の立場からは、そうとしか言い様がない」
「その技術を、メサイアにフィードバックすることは可能ですか？」
「宗像候補生の質問への答えは未知数。研究に１０年欲しい」
「戦争が終わります……我々の負けで」
「そうね」
紅葉はプロジェクターを作動させた。
映し出されるのは、あのメサイアの各部。
「簡単に、わかるところで――というか、あんた達にも理解できる所を説明する」

「まず、搭乗員は一人だけ。
コクピットブロックが両方とも破壊されているから、残骸からの推測だけど、操縦方法は、生体同調……つまり、メサイアの疑似神経とパイロットの神経を同調することで行われる。
このため、MCは搭乗していない。
固定武装は確認されていないけど、火器搭載の可能性は否定しないから、コンピューター類がどこかにあるはず。
装甲厚は、人類側メサイアで最も厚い装甲を誇るロシア帝國のローマイヤとほぼ同。
人工筋肉は見たことがない素材だけど、簡単な素材テストの結果、βタイプに搭載されている最新鋭素材と比較して数倍の強度があることは確か。
ただ――救いはある」
「救い？」
「そう。機動性は、メサイアとそうは変わらないはずだもん」
「重装甲と重武装、加えて高機動性ってわけにはいかないと？」
口を開いたのは、二宮だ。
「そう。脚部は間違いなくホバー移動装置を兼ねている。そのかわり、膝関節は曲げることは出来るけど、股関節の可動性からして、走ることは出来ないはず」
「それで？メサイアのホバー移動と速度的に」
「うーん。実際はテストしてみないとわかんないけど、それほどの違いはないはずよ？」
「何故？根拠は？」
「左翼大隊から報告があがってる。魔族の反射能力は、騎士並――騎士が処理しきれないものは、魔族も処理できない。わかるでしょう？」
「神経と、処理できる情報が人間とほとんど同じだとしたら……成る程？」
確かにそうだ。

二宮は思う。
結局、最後の枷になるのがパイロットであることは、人間も魔族も関係ないのだ。
「つまり、武装と装甲は一流だけど、動きは並――あなた達が、戦闘機動の時、ホバー移動するのと一緒。かなり速いけど――それに対処できれば、後はメサイアでもやれる」
「じゃあ！」
「相手が手練れなら、そんなもの、どうとでもなるけどね」

「どうしろっていうのよ」
食堂に移った面々の中で、さつきがため息混じりに言った。
紅葉は、あのメサイアの残骸を日本へ運び出すために“鈴谷（すずや）”を日本へ帰還させるべきだと開発局上層部へ進言した。
美奈代達が驚いたことに、紅葉という少女は、相当な権限を持っているらしい。
米軍基地のある中東のドバイまで移動し、現地に派遣する大型TAC（タクティカル・エア・カーゴ）に移動させることで、司令部と折り合いが付いたという。
“鈴谷（すずや）”は既にアフリカから離れ、ドバイへ向かうコースをとろうとしていた。

「機動性だけでも対抗できるように、全メサイアに増設ホバーユニット配備するよう進言するっていうけど、そんなんで戦えるの？」
「なんだかわかんないけど、とにかく相手が強いってことは変わらないのでしょう？」

「まぁ――――そういうことだな」
お茶を飲みながら、美奈代は頷くしかない。
「あとは、腕でカバーするしかない。本当にどんな代物かは、あたってみないとわからない」
美奈代は言った。
「精神論にしか聞こえないだろうが、我々は与えられたものが全てだ」

「まぁ――――そりゃそうだけど、さ」
さつきはコーヒーカップを指で回しながら言った。
「もっと楽したいって思うのは、罪じゃないでしょ？」
「まぁ、ね」
「染谷達、きっと派手に活躍しているんじゃない？都築、何か知ってる？」
「……」
えっ？
そんな顔をしたのは都築の方だった。
まじまじとさつきを見る顔が、途端に真剣なものになる。
「どうしたの？」
「早瀬……お前」
「？」

「死人が出たの、知らないのか？」

「えっ！？」
その一言に、居合わせた皆がギョッ！となった。
「ど、どういう事！？」
「だ、誰が！？」
「な、なんだよ。みんな、本当に知らなかったのか？」
「つーか、誰に聞いたのよ！」

「二宮教官達、箝口令敷いたな……」
「都築。どういうことだ。そう聞いたのだが？」
「宗像も知ってるだろ？第三分隊の高野と加藤」
「……誰だ？」
「高野はあれだ。入営からすぐの頃、お前に告白するという、オトコとして最低の間違いを犯したバカ」
「都築、ちょっと面貸せ」
「おお恐。とにかく、染谷達に次ぐほどの有望株だったヤツだよ。メサイアの操縦訓練では常に上位ランク入りしていた。加藤は平凡以下だったな」
「そんなヤツが何で」
「事故だよ」
「事故？」
美奈代達は互いに顔を見合わせた。
「メサイアから墜落したとか？」
「アホ。妖魔掃討作戦に出て、スライムの群を吹っ飛ばした。ところが、破片状態になったスライムをハッチに付着させたままで気付かなかったらしい。地上で休憩とかいって、そのままハッチ開けちまったんだ」
「……」
「スライムは破片状態でも生きる……MC（メサイア・コントローラー）が気付いて救難を宣言した時にゃ、コクピットブロックに入り込んでいた。除去された時にゃ、残った体はスライムの毒で土左衛門みたいになっちまってたそうだ」
「うぇ……」
さつきが、心底痛い。という顔で目をつむった。
「マジ？それ……」
「で、隣に駐騎した加藤も加藤で」
「何にやられた」
「殺蜂（キラービー）だよ……頭が三倍位に膨れあがって、脳みそが潰れるわ目玉

が飛び出るわ……」
「……」
皆が沈痛な顔を浮かべる中、都築が話をまとめた。
「休憩を命じた石田教官の責任問題になってるそうだぜ？」
「当然だろう」
宗像はうんざりという顔で言った。
「更迭程度では済まないだろうな」
「本来なら」
都築は不愉快そうな顔で、すっかり冷めたお茶に口を付けた。
「キラービーもスライムも、適切な駆除さえしていれば、簡単に根絶させることが出来るんだ。
アフリカでそんなのがまだ生きていた事自体、俺は驚いたよ。
他の地域で最後に根絶宣言が出されたのは俺が中学に入った年だぜ？
それがどうだ？
よりによって日本の領内で、日本人が死んだ。
こんなバカな話があるかよ。
日本政府が、中華あたりの顔色を伺ってばかりいて、適切なことしなかったせいだ。
高野と加藤は日本政府に殺されたようなものだ」
「おい……立場考えろ」
美奈代が周りを見回しながら言った。
「不用意な発言はするべきじゃない」
「……」
都築は苦虫を噛み潰した顔で、周りを一瞥した後、黙った。
「まぁ」
山崎が大きな急須でお茶を皆の茶碗に注ぎながら言った。
「えっと……その、大変な不幸はあったようですが、染谷さん達は候補生として活躍を」
「ああ。“妖魔狩り”は順調だ」都築は茶碗を受け取った。

「ソマリランド方面への足がかりとなるエイルを確保。この作戦で染谷が相当に名をあげたらしいがね」
「どういうことだ？」
染谷。
その名に鋭く反応したのは美奈代だった。
「何」
都築は苦笑いしながら答えた。
「エイルの妖魔掃討作戦を実質的に指揮したのは染谷だ。教官――特に池田大尉あたりは、自分が危険に曝されるのがイヤで、“伊吹”から降りることさえしない。
後ろから通じもしない通信装置であだこうだと言ってくるだけ。二人も死人だしている分、命がけで戦わされる候補生達もトサカに来てた所で、エイルの攻略が命じられた」
「……」
「事前情報が当たった試しがない。
だから、染谷は最初から事前偵察を強く要求したが、聞き入れられなかった。
池田の命令ってのは、敵の配置も装備も、何も知らずに、海岸線への正面からの突撃しろってんだぜ？
正気じゃねぇし、染谷の方が正しいに決まっている。
終いにゃ、染谷と池田が口論になった挙げ句、候補生達の前で池田が染谷をぶん殴って、“いざという時は、俺が何とかする”って啖呵切った。
で、エイル攻略が始まったら、教官達は誰も出やしねえ。
理由は“乗騎の不調”。
候補生達のメンテを最優先した避けられない結果――だそうだ」
「それで？」

「染谷達は、それでも行かされた。
行ってみたら、海岸から数キロは対空攻撃の出来る妖魔の巣。
黒い壁みたいな対空砲火に歓迎された染谷が機転を利かせて、部隊を安全なコースに乗せて、巣を側面から叩いた。
池田の命令通りに正面から攻略していたら、今頃、靖国は大賑わいだろうさ」

「そ、それで」
美奈代は茶碗を握りしめたまま、都築に訊ねた。
「染谷候補生は？」

「大金星さ。エイル攻略成功の立て役者は、誰が何と言おうと染谷であって、“伊吹”でぬくぬくしていた池田達、教官ドノじゃねぇ。
もう候補生達ゃ、池田に敬礼さえしないそうだ。
いざって時の尻ぬぐいをしたのは染谷だしな。
次に行われる、ソマリア最大の港湾施設を抱えるボサソ解放戦じゃ、染谷を艦隊司令部が部隊前線指揮官として“公式に”任官した。
池田達教官じゃない。この事の意味がわかるか？」
「おい……マズいぞ。それは」
宗像がやや顔を引きつらせながら言った。
「それじゃ、教官達のメンツが立たない。教官が染谷に何をするか」
「それは大丈夫だ」
都築はポケットから取りだしたチョコレートの包みを開いた。
「“伊吹”の立岡司令が、教官達を艦から叩き出す」
「何？」
「知ってるか？立岡司令ってのは、二代前の富士学校の校長だ。
“鬼の立岡”と恐れられた切れ者で、二宮教官の指導教官でもある。
その人前に候補生だけ危険に曝して自分達は後ろで指揮なんて許されると思うか？」

「そ……それは」
「“伊吹”は既に、独自の実戦部隊だ。その司令にして、元校長の酷評があったとなれば、教官達は日本に戻っても能力不足を理由に解任されて前線送り……気の毒に。ざまあみろってんだ」
「とにかく、染谷候補生は無事、なんだな？」
「ああ。候補生の肩書きは外された。すでにヤツぁ、戦時任官で前線指揮官だ……鬼の立岡の後ろ盾もあるし、“伊吹”の部隊はもう、染谷でまとまっている」
都築は、感動の余り舞い上がる美奈代に、わざとらしいため息をついた。
「ウチのヘッポコ分隊長ドノに爪のあかでも煎じて飲ませたいぜ」

「な、なんだ！それはっ！」

「――――まぁ？」
都築はチョコレートを口に放り込むと言った。
「明日以降は、ラムリアースとの共同作戦だ。二宮教官に叱られないように、課題さっさと終わらせた方が良いぜ？」

虎と狼と

ズンッ！
ズズンッ！！

幾重にもガードされたコクピットの中でさえ、腹に響く振動と音に襲われる。
何の装備もなしに外にいたいとは思えない。
当たらないと理屈ではわかっているものの、美奈代は不安げに空を眺めた。
青い群青色の空を、白い飛行機の軌跡が幾本も走っていた。

「当たってねぇ！」
振動が終わるかどうかのタイミングで怒鳴ったのは、都築だ。
「何やってやがるんだ、露助のヘタクソ共め！」
「わめくな都築」
長野が舌打ち一つ、教え子をたしなめた。
「成層圏からの確率爆撃では、この程度だ」
「そんないい加減な！」

――無理よ。
美奈代も、口にこそ出さなかったが、長野の言葉に同意した。
狩野粒子のせいで、アフリカの空ではレーダーが使い物にならない。
精密誘導装置なんて動きもしない。
爆撃機自体も、低高度で侵入しようものなら、地上から狙い撃ちにされて、目標に到達さえ出来ない。
魔族軍の弓兵部隊の攻撃が到達する最高高度は約1万メートル。
一発命中すれば重爆撃機でさえ粉砕する魔族軍の攻撃。

高度3千メートル以下の命中率は５０％を遙かに越える。
そんな条件下での爆撃に期待する方がどうかしているんだ。

１万メートル程度からの爆撃を試みればどういうことになるかは、世界最高爆撃機Ｂ－５２を投入して非撃墜率９８％という、南米解放戦争におけるアメリカ空軍戦略爆撃部隊の悲劇を考えればわかる。
レシプロ戦略爆撃機としては世界最大であるＴｕ－９５を擁するロシア空軍の爆撃編隊が、高度１万５千という非常識な高度からの空爆を余儀なくされているのは、そのためだ。

「命中率５％……ですか」
レシーバーに、美晴がつぶやく声が聞こえた。
「……税金の無駄遣い」
「だいぶに風に流されたな」
二宮は何でもないという顔で言った。
「ついさっき、南風が北風に変わったばかりだ。爆撃コースに入る前に風が変わってくれれば……」
「じゃあ、どうするんです!?」
都築がくってかかった。
「支援もなしにやれってんですか!?露助共の空爆の他に何か支援は!?」

もうもうとした白煙を上げる爆撃跡は、本来の爆撃目標点の遙か数キロの彼方だ。
たかが数キロではない。
爆撃において、誤差１キロは１光年より遠いのだ。

「そう興奮するな」
長野は落ち着き払った声で言った。
「俺たちが配置されているのは第三線だ。第二線までが食い破られ

るようなことでもなければ、今日の所は出番はない」
「で、ですけど」
都築は不満げに答えた。
「それでも破られたら？」
「生き残れ。そういうものだろう？」
「……はっ、はい」
不承不承頷いた都築の前。敵と対峙する最前列のレオニダス達は、丘の斜面をうまく利用して敵からの直接照準による攻撃を避けていた。
丁度、歩兵達が敵陣地を攻撃するのによく似ている。

土嚢に守られた機関銃座やトーチカで待ちかまえる防御側に対して、遮蔽物に隠れて攻撃のタイミングを計る攻撃側という図式は、メサイアサイズの巨大な塹壕と土塁に守られた魔族軍陣地と、わずかな丘陵地形を利用して隠れるラムリアース帝国軍という目の前の光景と全く同じだった。

丘を迂回すれば、あとは魔族軍陣地まで遮蔽物は何もない、丁度、丘の陰になる場所に、ラムリアース帝国軍は、整然とレオニダス達を配置している。
そのレオニダス達が手にするのは、戦棍（せんこん）や戦鎚（せんつい）といったいかつい殴打用武器とシールド。
剣や槍といった精悍な武器を持つメサイアはいない。
「よく覚えておけ」
長野は言った。
「結局、メサイア同士の戦闘なんて言っても、やることは歩兵の殴り合いと変わらないってことを」
「……」
長野教官が言いたいことを、美奈代はその武器で何となく悟った。
無意識につばを飲み込むその目の前。

レオニダス達が手にした武器をしっかりと構えた。
突撃の体勢に入ったのだ。

丘に張り付くようにして魔族軍陣地を見張っていた指揮官騎のレオニダスの肩部から信号弾が打ち上げられた。

「来るぞっ！」
二宮の怒鳴り声にあわせたかのように、レオニダス達が一斉に魔族軍陣地めがけて突撃を開始した。
丘の陰から飛び出し、一斉に魔族軍陣地めがけて駆け出す。

ズドドドドドォォォォォッッッッ――――！！

巨大な滝が流れているような錯覚さえ覚える爆音が周囲の音の一切を消し去る。
空高くまで真っ白になる土煙が立ち上り、大地がふるえ始める。
数百トンある騎体が、ともすれば小気味よい程、揺れる。
メサイアの集団戦闘時に発生する特殊な地震――戦闘地震（バトル・アースシェイク）というのがこれだと、美奈代はようやく理解出来た。

「戦闘地震（バトル・アースシェイク）、現在、震度４」
牧野中尉の声も、心なしか震えていた。
「中尉は」
美奈代は訊ねた。
「戦闘地震（バトル・アースシェイク）の経験は豊富ですよね？」
「バカ言わないでください」
牧野中尉は言った。
「戦闘地震（バトル・アースシェイク）が発生するのは、５０騎以上の集団戦闘とされています。

そんな規模での戦闘経験者なんて、世界中の騎士やMC（メサイア・コントローラー）探しても、そうはいませんよ」

「そういうものなんですか？」

美奈代はどうにもピンとこない。

アニメだって、ロボットが戦闘すれば数十騎がぶつかり合うものではないか？

「とりあえず、よく見ておいてください」

牧野中尉が美奈代の疑問を無視する形で言った。

「我々も、下手すればあの中に入るのですから」

レオニダス達が、魔族軍メサイア（メース）、ツヴァイ達とぶつかり合う。

その光景を、美奈代達は食い入るように見つめていた。

しかし――

「な……何……これ……？」

それまで、美奈代はメサイア戦というものを、何か特別で、崇高で、貴重で、かけがえのない儀式のように思っていた。

メサイア戦に関するテキストは、精神論的な表現を多く用いて、読む者にそんな思考を半ば強要していたし、。教官達もメサイアと騎士の気高さを強調する中で、メサイア戦とはそういうものだと語っていたのだ

美奈代は、それをまともに信じていた。

気高き騎士達が世界最強兵器たるメサイアを駆ることは、騎士と生まれた者の至高の栄誉であり、その戦いぶりは世界中の全ての勇

者に勝ると。

だが……

現実は――――

美奈代の空想を遙かに越えていた。

まるで煙幕でも焚いたかのような土煙の中。

ガギィィィンッッ！！

一騎のレオニダスが、ツヴァイの巨大な戦斧をまともに喰らって騎体を真っ二つにされた。

その戦斧が振り切られるタイミングを計っていたかのように、ツヴァイの背後からレオニダスが跳び蹴りを喰らわした。

避け損なったツヴァイがバランスを崩して大地に倒れた所を、他のレオニダス達がよってたかって戦棍（せんこん）や戦鎚（せんつい）で殴りまくる。

動かなくなった所で武器を奪った一騎が、まるで試すようにツヴァイの後頭部めがけて戦斧を振り下ろす。

また、別な場所では、戦斧をかわしたレオニダスが、背後からツヴァイの腰や腕に抱きつき、その動きを止めた所へ四方から戦鎚（せんつい）で襲いかかる。

一対一の正々堂々という言葉は、その戦いの中にはない。

「何よ……これ」

美奈代は唖然としながらその光景を見ていた。

美しくのなければ、崇高でもなんでもない。
戦い。
そう呼ぶにはあまりにも俗すぎる。
美奈代が見たメサイア戦とは、イメージしていた光景とはまるで違った。
全高３０メートルの巨大なロボット達が繰り広げる殴り合い。
そういう光景でしかなかった。

「これが戦場です」
牧野中尉は言った。
「候補生が戦いにどういうイメージを持っていたかは知りませんが、戦場なんて、こんなものですよ？」

ツヴァイの戦斧が横薙ぎに走り、レオニダスの首がモロに吹き飛んだ。
その背後から忍び寄ったレオニダスが、別のツヴァイから奪ったのだろう戦斧で脚をなぎ払う。
他のレオニダス達が、脚を失ったツヴァイに襲いかかる。

「戦いというより……」
美奈代は言った。
「これじゃ集団リンチです」
「経験が？」
「ありません」
「――じゃあ、ここでクイズです」
牧野中尉は言った。
「ラムリアース帝国軍が、これほどの規模でメサイアを投入した意味は何でしょうか？」
「え？」
突然の質問に面食らった美奈代だったが、それでも律儀に答えた。

「ですから……アフリカの解放」
「0点だったら――お嫁にいけなくなりますよ？」
「何ですか？」
「ヒントは、敵の損傷カ所です」
「敵の……？」
美奈代は目を凝らして戦場を見た。
背後からタックルを喰らったツヴァイが大地に転がり、待ちかまえていたレオニダス達に袋だたきにされる。
「1分間したら、答えを教えてくださいね？」

主な狙いはツヴァイの右腕だ。
牧野中尉がカウントダウンを開始した直後、美奈代は、ようやくそのことに気づいた。
美奈代の見る限り、撃破されたツヴァイで、右腕が無事だった騎はいない。
つまり……。

「……武器の奪取」

「はい正解♪」
牧野中尉は楽しげに答えた。
「少し残念でしたね。あと3秒で、楽しい世界に行けたのに」
「楽しい……世界？」
「ええ。淫靡で卑猥な倒錯の世界」
「結構です」美奈代は言った。
「そんな宗像の世界に行きたいとは思いませんから」
「すごい言い分ですね」

「第3小隊沈黙っ！」
「後詰めの第6小隊をDポイントへ向かわせろっ！」
カーメン大佐は顔を真っ赤にして、指揮所の中で怒鳴った。
まるで檻に放り込まれた獣さながらに、指揮所の中をうろつき歩き、軍靴の音だけを無駄に響かせる。
「敵の数はともかく、単独の戦闘能力はこっちの方が上のはずだ！」
怒鳴ってみても、その答えは彼自身がわかっている。
メース部隊のクセだ。
メース使いという職種に属する者は、規則に縛られる集団戦闘より、個々人が持つ技能を自由に駆使出来る戦いを好む傾向が強い。
対メース戦闘自体が、一対一の個々の戦いを基本とすることも、それを助長させている。

つまり、戦いが個人プレーに偏るのだ。

メース使いは、個人の技量が戦闘の単位になると信じて疑っていない。
個人の技量を駆使して、優雅に戦い、そして華々しく敵を倒すことこそ、己が使命だと。
そう、信じているのだ。

特に、戦闘未経験者は……。

「バカ共めがっ！」
カーメン大佐は、それがどれほど戦場で無意味で有害な発想か骨の髄まで味わっている。
「相手が、自分達の発想に素直に従うと本気で信じているのか！？」
そう。

誰だろうと、一対一の戦いを求めても、応じる義理はないのだ。

「戦場で行われるのは戦いだ！」

カーメン大佐の前。

戦況を告げるスクリーン上で、新たに一騎のツヴァイの反応が消えた。

「戦闘であって決闘じゃないんだぞ！」

ツヴァイの反応が続々と消えていく。

「ええいっ！」

カーメン大佐は怒鳴った。

「部隊を後退させろ！」

「た、大佐！？」

「第３地区を放棄する！部隊を隣接する第６区画に後退させろ！それと、搦座した騎はすべて爆破処分しろ！」

「まだ！」

副官の一人が怒鳴った。

「メース使いが戦場に残ったままです！」

「人類風情に敗北した恥を、死んで償わせて何が悪い！」

交戦開始から約１０分後。

魔族軍陣地のあちこちから信号弾が打ち上げられ、魔族軍メサイア部隊が後退を開始した。

ラムリアース帝国軍の勝利が確定したのだ。

勝利の鬨の声をあげる光景はない。

搦座したツヴァイ達から武器となりそうな装備を探すレオニダス達がいるだけだ。

ツヴァイが腰に下げていた剣を、あるいは戦斧を、とにかく使えそうな武器とわかるや、身内であるはずのレオニダス同士が奪い合いを始める光景があちこちで始まった。
ラムリアース帝国軍の通信は受信出来ないが、もし聞こえたらそれはすさまじい罵りあいだろう。
――まるで火事場泥棒だ。

美奈代は嫌悪感を感じるその光景をまともにみたいとさえ思わなかった。
胡座した騎体を蹴り飛ばし、あるいは足蹴にして背後に武器が隠されていないか調べあげるレオニダス達に、敵に対する敬意があるとは思えない。
ラムリアース帝国軍メサイアの振る舞いが、騎士としてのそれとさえ、思うことが出来ない。

「ひどいな」
誰かのぼやきが聞こえた。
レオニダスが、戦斧を握ったまま倒れたツヴァイから戦斧を奪おうと、右腕に戦棍を叩き付けている。
「……教官、あいつら本当にラムリアース帝国軍ですか？」
ラムリアース帝国は、騎士の発祥地とされる国だ。
それ故に、ラムリアース帝国の騎士となれば、騎士としての気位はかなり高く、同じくらい、誇り高いことで知られている。
その騎士がこんな振る舞いをすることを、驚かずにいられないのは、どうやら美奈代だけではなかった。
「武器を奪うという意味では」
二宮は自嘲気味に笑った。
戦斧をようやく奪ったレオニダスが、試すようにツヴァイの残骸にその戦斧を振り下ろした。

「……我々も同じだろう？」
「……っ」
美奈代はちらりと横の長野教官騎が持つ手斧を見た。
横のさつき騎と美晴騎の持つハルバードに、自分の他、皆が持つ剣もまた……。
「我々も、連中同様――――」
「教官っ！」
怒鳴ったのは都築だった。
「あれ！あそこで擱座したメサイアの物陰！」
都築騎が指さす先には横倒しになって擱座したツヴァイがいた。
頭を潰され、右腕を失ったツヴァイ。
問題は、そのツヴァイの腹部だ。
ハッチが小さく開かれ、その下にはしきりに周囲を見回す兵士の姿があった。
３０代半ば位の男性だ。
「ラムリアース帝国軍じゃ……ない？」
二宮も、その見慣れない黒い戦闘服に見覚えはなかった。
ラムリアース帝国軍の騎士が着用する戦闘服は、迷彩色を施されていた。
「あれ……魔族じゃないんですか？」
ツヴァイの腹に潜り込むようにして隠れるその兵士を、二宮はズームでとらえた。
二宮も、魔族を初めて見た以上、それが本当に魔族なのかわかるはずもない。
ただ、彼がおびえていることだけは、わかった。
「噂だと、角があるとか」
「私、しっぽがあるとか聞いたけど」
皆が、好き勝手なことを言い出した。
「どうします？」
長野はそれに加わることなく、事務的に訊ねた。

「ラムリアース帝国軍に通報しますか？」
「そう……ね」
通報してとらえられた彼がどうなるか。
それはあまり考えたくなかった。
「唯」
二宮がＭＣ（メサイア・コントローラー）に呼びかけたその瞬間――――。

目の前が完全にホワイトアウトしたかと思うと、激しい爆発音と衝撃が走った。

ズズズンッッ！

「なっ！？」

ビーッ！
ビーッ！

戦闘地震より激しい衝撃と爆発音が騎体を襲う。

ドスッ！
ドスンッ！
ビュインッ！

レシーバーにひっきりなしに意味不明な音が入り続ける。
騎体に激しく何かが連続してぶつかる振動が伝わる。

騎体のありとあらゆる警報が鳴り響き、騎体の状態を示すステータスモニターは真っ赤だ。

美奈代達にとって、とどめになったのは、MC（メサイア・コントローラー）達の警告だ。

「放射線及び中性子警報！」

「反応弾？」

「――そうだ」

二宮は硬い表情のまま答えた。

「TNT火薬換算で約15キロトン。

ウラン・タイプか、プルトニウム・タイプかは不明だ。

幸い、メサイアのコクピットは耐熱耐爆に加え、対放射線、対中性子防御は完璧だ。

原子炉の中に放り込まれても被爆することはない。安心しろ」

美奈代達女性騎士はそう言われつつも青い顔をしている。

「……生まれてくる子供が心配というセリフは、戦争が終わってからにしてくれ。コクピット内部で人体に影響するレベルの放射線障害は、記録（モニター）上、確認されていない」

「……心理的には大変ですが」

「他に質問は？」

「ら、ラムリアースは」

言いかけて、言葉を詰まらせたのは山崎だ。

フランケンシュタイン並の顔に、２メートル近い巨体を小さくさせている山崎自身、自分の質問が愚問に属することはわかっている。

“鈴谷（すずや）”に帰還した自分達の騎の状況を思い出せば、それで足りるのだ。

「知りたければ教えてやる」

二宮は肩をすくめた。

「全滅だ」

「……」

「いくらメサイアでも、その足下で１５キロトンの爆発があってはひとたまりもない。第二線に配備されていた連中を、第一線に投入したのが致命的だったな。世論からは、部隊の前進命令が犠牲を増やしたと叩かれるだろう」

「しかし」

山崎は尚も訊ねた。

「一体、どうして魔族軍が反応弾を？」

「そんなこと」

二宮は笑いながら言った。

「知りたかったら魔族軍に聞いてくれ」

●魔族軍陣地

「上層部はカンカンだ」

カーメン大佐は、生還したエーランド少佐を前に言った。

「人類が、一体、何を使ったのか。その情報を確保しろと来た」

「それで私が？」

「脚は遅いが、コンシール機能が充実した特殊艇とメサイア。それに部下を回す。あの艦から可能な限りの情報を収集しろ。
我々はもうすぐ、全面的な対人類戦闘に入る。
その備えが必要だ」
「……随分、大きく出ますね」
「ヨーロッパ大陸に派遣した調査団が、“鍵”の痕跡を発見したのだ」
「……“鍵”？」
エーランドは、しばらく考えた後、目を見開いた。
「ヴォルトモード卿封印の！」
「そうだ」
カーメン大佐は力強く頷いた。
「旧エジプト付近に隠された。天界軍の情報はそうなっていた。
少なくとも、このアフリカ大陸に存在すると。
我々はその確保のため、長年に渡ってこのアフリカで“鍵”を求めて戦い続けてきた。
その戦いに、皮肉なオチがついたのだ」
「……と、申しますと？」
「人類が、掘り出し物としてヨーロッパ大陸に運んでいたのだ」
「今の今まで、気付かなかったのですか！？」
「砂漠の中から砂金を探すというたとえがあるだろう。それに、これは調査団の怠慢であって私の責任ではない」
「はっ」
「とにかく、我々の調査の矛先はヨーロッパ大陸に移る。君もそっちの探求の方が名をあげられると思うだろうが、雇われ兵の立場だ。わかってくれ」
「ご希望には――」
エーランド少佐は答えた。
「お応えするのが私の仕事です」
「人類の艦は、移動を開始していてる。こちらが派手に行動すれば、

全人類を刺激する。言葉を正しく理解して、適切に行動してくれ。
　連中の目的地は、進路からすればドバイだ。そのまま、インド洋を抜けて極東の弓状列島へと動くだろう。この弓状列島こそ、やつらの本国だ」
「弓状列島？」
「そうだ」
　カーメン大佐は頷いた。
「先の大戦では最終決戦地となった場所だ。また、ヴォルトモード軍残党が封印されている」
「そこまで、人類に運ばせるつもりですか？」
「我々はそこまで横着ではない。それに今後は、連中が生きて祖国に帰ることの出来る可能性は低い」
「……は？」
「まぁ、連中を追いかける中で、見ていたまえ。」
　カーメン大佐は楽しげに笑った。
「我々に支配されていないと、人類がいかに愚かな連中に成り下がるか。ということを」

●　特殊艇“ヒューマー”艦橋
「トラウムへようこそ！エーランド少佐！」
　特殊艇“ヒューマー”艦橋に入ったエーランド少佐を出迎えたのは、ずんぐりとした体型の中年男、ゴトランド大尉だ。
　エーランド少佐とは、長年に渡って魔界の辺境紛争で死線をくぐり抜けてきた因縁深い仲だ。
「世話になるぞ。ゴトランド」
「なんの」
　ゴトランドは楽しげに肩をすくめた。
「ベネルスボリイ紛争以来ですな。すでに退役されたと聞いていたのですが」

「ぬるま湯の生活は性分にあわん」
「少佐は戦場の方がお似合いです」
「世辞か？」
「ハハッ！まさか！」
「まぁいい。“鍵”の現在位置は？」
「はっ――――おい」
ゴトランドに声をかけられた彼の副官が一礼の後、スクリーンを操作した。
スクリーンに映し出されるのは、アフリカからアラビア半島にかけての地図だ。
「目標は４時間前に“アフリカの角”を離れました。現在、アラビア湾を移動中。このままのコースをとると、オマーン湾、ホルムズ海峡を経由して、明後日にはドバイに入ります」
「ドバイ？」
「人類が作り上げた砂上の楼閣です」ゴトランドは言った。
「酒に女に――――ロクでもないところですよ」
「ずいぶん楽しんだらしいな」
「ガハハッ！少佐にはかなわない――――まあ、船乗りの特権とでも見てください」
「とがめてはいないさ」
スクリーンから視線を外すことなくエーランド少佐は小さく笑った。
長い金髪が照明を美しく反射して輝いている。
背の高い、すらっとした容姿といい彫りの深い顔立ちといい、俺なんかよりずっとドバイの女達にはモテるだろうな。と、ゴトランドは内心思った。
「どのあたりで追いつきそうだ？」
「艦そのものが追いつくのはアラビア湾上空、１６時間後を予想」
「よし」
エーランドは頷いた。

「ドバイで仕掛けるとしよう。それまでにメースの調整を終えておきたい」
「了解。メシの準備が出来ていますよ。艦のメシの味、忘れてないでしょうね？」
「フネのメシは世界で一番、美味いと相場は決まっている」
「その通りです！」

飛行艦が針路を変えたという報告を、エーランドが受けたのは、食堂でのことだ。

トレイに乗った夕食を目の前に、エーランドは報告を聞いていた。
そのエーランドの前では、マイナ技術大尉がさっさと食事を始めている。
人形のように美しく、普段は無口な女性なのに、食事の時は無言で食べ物に食らい付く大食漢と化すことは、長年のつきあいでわかる。
「予想針路は？」
船の生活で数少ない楽しみである食事をお預けされたエーランドは、厳しい士官としての表情を維持したまま、報告にきたムブナ中尉に訊ねる。
その間も、マイナ技術大尉の食事が止まることはない。
「情報では、ホルムズ海峡経由でドバイに入る予定でしたが」
「違うのか？」
「はい。ソコトラ島から北東へ針路をとっていたのですが、針路を真北にとりました」
「真北へ？」
マイナ技術大尉の持つフォークが、エーランドのトレイに伸び、チキンの照り焼きに突き刺さった。
「――ぐっ！」
「何かお心当たりが？」

「いや――続けてくれ」
「はっ。このままでは1時間後にアラビア半島に上陸します」
「敵の目的は何だ?」
マイナ技術大尉が、エーランドのトレイに伸びた。
「……実は」
ムブナ中尉が言いづらそうな表情になった。
マイナ技術大尉が、空になったトレイをエーランドの前に戻した。
「どうした?」
腹は減るが、それよりもエーランドの関心は、敵の動きにあった。
自分達が追跡していることを察知して針路を変えたというのか?
ムブナ中尉は答えた。
「……実は、現在、インド洋に展開中の水中戦隊を含む全部隊に、一時的なインド洋から撤退及びアフリカ大陸への帰還命令が出ました」
「撤退?」
「はい」
ムブナ中尉は頷いた。
「理由はわかりませんが、人類が何か、大きな行動に出ると」
「何だそれは?」
「末端の我々にはわかりません」
「司令部は我々に何と?」
「人類側の電波情報に注意しつつ、追撃を続行しろ。可能なら艦ごと仕留めろ……と」
「忙しいことだ。部隊の乗艦が済んだばかりだというのに……」
「前祝いですよ」
「そう願おう」
エーランド少佐は笑みを真顔に戻した。
「ゴトランド、出るぞ!」
「了解っ!」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「大陸から？」

「間違いありません」

メースを引き渡すため、ドバイへ針路を向けたばかりの美夜に答えたのは、レーダー要員の川村真由軍曹だ。

「電探、魔探共に反応ありませんが、衛星がとらえています」

「連中は、人工衛星というものを知らないらしいな」

美夜は、その間抜けぶりがほほえましくさえ思い、小さく笑った。

「どれくらいで接触しそうだ？」

「推定１０分後」

アデン湾上空１２００メートル上空。

あと１０分でソコトラ島上空にさしかかる。

海上では圧倒的に不利だが、陸地ならメサイアも本領を発揮して戦える。

進路は決まった。

「針路変更。ソコトラ島へ向かえ――全艦戦闘態勢、メサイアの発艦急がせろっ！」

“鈴谷（すずや）”の“目”が接近するメースをとらえたのはそれから5分後のことだ。海面すれすれを高速で移動してくる反応は3。

反応の大きさはメサイア級だ。

訓練のため発艦しようとしていたメサイア隊は即座に武装を演習用のそれから実戦用のそれに変更し、艦を続々と離れた。

皆がアフリカ大陸方面からの攻撃に備えていた。

何が来るかわからない。

レーダーが攻撃をとらえるかさえ不明。
美奈代達は、内心でおびえながら神経をアフリカ方面へと集中させていた。

――しかし

●紅海上空
太い光が走ったかと思うと、
「きゃっ！？」
左舷側に展開していた美晴騎から悲鳴が上がった。
「な、何！？」
「６時方向より艦砲射撃！」
牧野中が怒鳴った。
「魔族軍が後ろから！？」
「違います！この攻撃は――」

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「北イエメン軍だと？」
「艦艇数６，いずれも“２５型”コルベット艦タイプ」
「ずいぶんな骨董品だな……まだ浮いていたのか？」
「艦長。飛行艦“ホデイダ”より通信です」
「通信？」
「貴艦は我が領空を侵犯しつつあり。速やかに武装を解除し停船せよ。停船に応じない場合は……撃沈する」
「馬鹿な！帝国はソコトラへの寄港と上空通行の許可を――！」
わめきかけて、美夜は司令部が犯した大失態にようやく気づいた。
「通信……相手は、北イエメン軍と言っていたな？」

●紅海上空

「少佐。敵に増援の模様」

「さっきの一撃は、景気づけですかね」

「……さてね」

海面すれすれを高速で移動するメースのコクピットで、エーランドは小さく笑った。

ついさっき、観測された高魔法エネルギー反応。

それは、全く見当違いの方角を狙った一撃にすぎなかった。下手をすれば味方に当たっていたはずだ。

接触しようとする艦があの艦の味方なら、あんな発砲は、意味を為さない。

「……まさかな」

エーランドは、自らにわき上がった発想に首を振った。

「あれが、あの艦にとっての敵だなんて……」

「少佐、どうします？」

「エーリヒ、クンニ。このまま突っ込むぞ。お前達は後方の艦をやれ」

「了解っ！」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

イエメン共和国。

それが、現実世界の名だが、それは１９９０年5月２２日の南北イエメン合併があってこその存在だ。

かつての一大王国イエメン王国は１５世紀に王朝が分断し、南北両イエメン王朝が成立。ヨーロッパの植民地化など紆余曲折の末、再び両国が成立したのは１９６７年のこと。

南イエメン王国と、北イエメン共和国となって以降も、相手国は自国の領土と主張し、紛争が絶えない。

相手国は自国領。

つまり、ソコトラ島も片方の国からすれば領土なのだ。

だからこそ、ここを通行したり利用したければ、双方の国に許可を得る必要がある。

それがこの紅海を渡る際の常識だ。

ところが――

「北が来るとは……」

美夜が頭を抱えたのも無理はない。

帝国外務省は、国交がないことを理由に、北イエメンからの通行許可を入手していなかったのだ。

“鈴谷（すずや）”は北イエメン軍からすれば、領海・領土に侵入する敵でしかない。

「前門の虎……後門の狼……か」

「どうなさいますか？」

「“ホデイダ”へ通信開け。我、魔族軍の追撃を受け撤退中。通行を許可されたし」

返答は至近距離を狙った攻撃だ。

「図々しい……ってわけか」

もう苦笑するしかない。

「針路そのまま、艦隊を突っ切るぞ！」

●北イエメン軍飛行艦“ホディダ”艦橋

“鈴谷（すずや）”が向かう先に展開するのは、アヴドラ提督率いる北イエメン軍だ。

「日本軍、速度落とさずに接近します！」

レーダー手の報告に提督は無言で頷いた。

「恐れる必要はない」

「しかし」

アトバラ副司令は異議を唱えた。

「ここでの交戦は日本との国際問題に」

「あんな腰抜け共に気を使う必要なんてあるものか。だいたい、外交チャンネルのない国同士で、どうやって国際問題が起きる？」

「それは」

アトバラはそれでも食い下がった。

相手はメサイアをすでに発艦させているのだ。

「魔族軍の追撃から逃れてきたと宣言しています」

「欺瞞だ」

アヴドラ提督は言い切った。

「問題は、連中が我が国固有の領土を侵していること。違うか？」

「……はっ」

「なら、我々がここで国際法にのっとり、停戦命令を出すことに問題はないだろう」

アヴドラ提督は命じた。

「停船しないならば撃沈しろ！照準、日本軍艦艇！」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「北イエメン軍索敵レーダー、本艦を照射！」

「どうしても、やるつもりか」

「艦長！８時方向から魔族軍メサイア２騎、本艦を追い抜きます！」

「追い抜く？連中、どこへ？」

「針路には、北イエメン軍が」
「記録しっかりとっておけよ！？あの黒人共に警報を出せ！」
「本艦の対空砲は！？」
海軍艦艇が搭載する、実体弾を使用する対空システムは、砲弾一発ずつの一発必中を前提とはしていない。
敵機の予想針路に面で砲火を叩き込むことで、どれか一発ぶち当てるような、別な表現をすれば、下手な鉄砲を数撃って当てる仕組みなのだ。
これに対して、飛行艦の対空砲は、弾数こそ少ないが、ＳＣ（シップス・コントローラー）の火器管制によって射撃されるＭＬ（マジックレーザー）を使用する関係上、一発ごとに命中が期待出来る。
無論、一発必殺の狙撃がそう簡単に出来るはずもないし、こんなことが公然と言われるようになったのは、第４世代の火器管制装置が出回ってからだ。
現在、イエメン軍が装備する飛行艦とその砲は、ＭＬ（マジックレーザー）が開発されたばかりの頃の代物。
一発必中なんて夢物語。
撃てるだけマシ。
そんな頃の代物だ。
現在の艦艇の中でも一二を争う高額な装備である火器管制装置を、イエメンのような貧乏国がそう簡単に更新出来るはずもない。
さらに、イエメン軍の配備する飛行艦は、ＭＬ（マジックレーザー）砲を主砲以外に搭載していないフリゲート・タイプと、さらに小型のコルベット・タイプにすぎない装備の貧弱さもある。
つまり、何が言いたいかというと――
●紅海上空
魔法攻撃の火線が走り、すぐ近くの海面で連続した爆発が生じる。
「下手くそがっ！」

派手な爆発ではあるが、騎体が水を被ることさえない。
全く見当違いの場所に攻撃が降り注ぐ中、メースを駆るエーリヒは、僚騎を駆るクンニと共に海面を自在にメサイアで駆ける。
ＭＬ（マジックレーザー）を、右へ左へとかわすその機動は、とても人類側のメサイアの出来る芸当ではない。
エンジン出力と、そこから生み出される大推力に裏付けられた、魔族軍メースの真骨頂というべき機動だ。
「クンニ！やるぞ！」
エーリヒは、腰にマウントしていた銃を構えた。
人類の分類で言えば、ＭＬ（マジックレーザー）砲を連射出来るＭＬ（マジックレーザー）速射砲が陽光に照らされ、黒く鈍い光を放つ。
海面の爆発が段々と近づいてくる。
さすがに接近すれば敵狙いやすいということか。
エーリヒはそう思うが、恐怖だけは感じなかった。
これで恐怖を感じていたら、ずっと昔に死んでいるはずだ。
ズームしたように接近する人類側の飛行艦に、エーリヒは照準を合わせた。

●“ホデイダ”艦橋

飛行艦サヌアの真横を、メサイアがすり抜けた。
アヴドラ提督の目にはそうとしか見えなかった。
ただ――すり抜けた。
そう見えたのだ。
だが……。
ズンッ！！
次の瞬間、サヌアは上下二つに引き裂かれたように爆発、炎の塊

に変化した。
　爆発の衝撃が、斜め後方を飛行していた“ホデイダ”を激しく揺すった。
「なんだ！？」
「メサイアです！」
　突然の振動にバランスを崩し、手近にあったパイプを掴んだアトバラは怒鳴った。
「メサイアがやったんだ！提督！」
　その時、彼の目に映ったものは、席に座る提督と、その背後の船窓越しに見えるメサイアの青い騎体だった。

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「“ホデイダ”、撃沈！」
「これは……艦長！」
　目の前で一方的に沈められていく北イエメン軍飛行艦達を前にした高木副長は、すがるような目で美夜を見た。
「真理！」
　美夜はインターホンを掴むと、二宮に回線を開いた。
「敵メサイアをけん制して！その間に“鈴谷（すずや）”はソコトラに逃げ込む！」

●紅海上空
「了解した」
　二宮は答えると、教え子達に命じた。
「全騎、当てなくていいから、敵騎の“鈴谷（すずや）”への接近をくい止めろ！“鈴谷（すずや）”からの対空砲火の巻き添えになるんじゃないぞ！」
「了解っ！」
「２騎同時に動け！１騎がけん制のための砲を撃て、もう１騎は斬

艦刀を装備、敵が近づいたら振り回せ！」
ちらりと美奈代騎を睨んだ二宮は続けた。
「楯になってもいい！」
「何で私を見ながら言うんですか！？」
「ふんっ」と、二宮は鼻を鳴らした。
「泉は私と組め。長野大尉は柏と、さつきと宗像でペアを」
先の戦闘で捕獲したハルバードを装備するのは、さつきと美晴。
剣は二宮、手斧は長野が装備している。
さつきと美晴は長物が得意だということは、富士学校時代から体に叩き込まれているので、美奈代は文句を言うつもりもない。
飛行戦闘という、メサイア同士の戦闘では異例の戦いでも、リーチを稼げる長者使いを上手く使った方が効率がいいこともわかる。
ただ――なんで自分が二宮教官と？
そんな美奈代の疑問に答えるように、二宮がイヤミたっぷりに言った。
「男運のないオンナ同士、仲良くやろうじゃないか」

追う者と追われる者と

「エーランドが？」
「はい」
――エーランド隊、人類の艦と接触予定。
シグリッド大尉は、その報告にグラスに伸ばした手を止めた。
「相手は、エーランド少佐の隊を撃破した部隊が所属する艦です。場所はここからすれば目と鼻の先です」
「司令部は何と？」
「我々には何も」
「……ヤツに失態の責任をとらせるか？」
「おそらく。敵は多くても8騎程度。ただ、追撃までさせたのは、正直異例でしょう」
「異例？」
「普通でしたらアフリカから追い出す所で止めています」
「……成る程？」
「追撃は、何か理由があってのことと思います」
「……うむ」
ムブナ中尉の言葉に、シグリッドも頷いた。
「他の人類の動きは？」
「アデン湾は、我々の支配下と呼んでいいでしょう。先日の戦闘以来、湾内に人類側の陰も形も……」
「エーランドからは？」
「こちらも何も。というより、我々がここにいることを、エーランド少佐がご存じかすら、不明です」
「……そうか」
「――やりますか？」
「エーランド少佐は顔なじみだ。何より、シュバルツラント家に恩

を売っておいて損はあるまい？」
　シグリッドは席を立った。
「あのエーランド少佐が手こずった人類側メースには、私も興味がある」
「はっ！」

●アデン湾上空

「来るなこいつぅっ！」
　さつきは必死になってハルバードを振り回した。
　丁度、ハエ叩きで空振ったのとよく似た感じがした。
　すぐ間近では、けん制のために長野が１２０ミリ速射砲を乱射している。
　敵騎は目の前に撃ち込まれる砲弾を煩わしいとは思っても、脅威と感じているとはとても思えない。
　１発いくらの代物か知らない。
　ただ、さつきがお小遣いで買える程安くないだろうことは確かな砲弾が、まるで海に捨てられるも同然に消えていく。
　さつきには、それをもったいないと思う余裕さえ、もうなくなっていた。
「７時方向、後ろっ！」
「ちいっ！」
　メサイアとメースの決定的違い。
　それは、この空中戦闘時の機動性にある。
　爆弾を腹一杯ためこんだ爆撃機並の機動性しかないメサイアに対して、戦闘機どころか、小鳥か蝶さながらに飛び回ることの出来るメースでは勝負にならない。
　背後から接近する敵騎にようやく振り返った時、さつき騎を待っ

ていたのは、メースから放たれた蹴りだった。
「ぐうっ！？」
蹴り飛ばされた衝撃で、長野騎と激突したさつき騎めがけて、敵騎が戦斧を振り上げる。
ドンッ！
背後から突き飛ばされたさつきは、あやうく舌を噛みそうになった。
長野騎がさつきを突き飛ばし、ブースターを加速、ショルダーアタックをかけたのだ。
メサイアとメースの質量に加速が加わったその一撃を腹部に受けたメースは、その騎体をくの時に曲げた。
ガンッ！
長野騎が、あの手斧で頭部を殴りつける。
「早瀬っ！」
「は――――はいっ！」
落下しかけていたさつきは、あわてて騎体バランスをとると、ハルバードを構えて、長野騎の目の前の敵騎めがけて下から急接近した。
「いけっ！」
バンッ！！
ハルバードの斧部分に鈍く重い感触が走る。
斧が敵騎の胴体に深くめり込んでいた。
まるですべての力を失ったといわんばかりに、空中で棒立ちになった敵騎。
戦斧がその手から落ちる。
「――――おっと」
長野騎がそれを空中で拾ったのと、騎体が海めがけて落下していったのは、ほぼ同じタイミングだった。
「宗像、柏！そっちはどうだ！？」

敵騎が宗像騎めがけ、戦斧を振り下ろした。
宗像騎は、戦斧が生み出す轟音に押されるかのように騎体を下へと降下させ、その一撃をしのいだ。
攻撃に失敗したと敵騎が気づく間もなく、宗像騎の背後に潜んでいた美晴騎の一撃が、メースの首を吹き飛ばした。
「さっすが宗像さん！」
スピンしながら海に消えていく敵騎の首を見送りながら、美晴が歓声をあげた。
「空中戦は天下一品ですね！」
「――そうか？」
ドンッ！
宗像は美晴騎を突き飛ばした。
それまで美晴騎がいた場所を、敵騎の剣が走る。
「こいつら！」
宗像は驚嘆の声をあげた。
「頭部がなくても生きている！？――ちぃっ！」
敵騎の背後に入った宗像だったが、対抗手段がない。
剣が通じないのは、昨日、嫌と言うくらい味わわされている。
宗像は、敵騎のランドセルを掴むと、未だに火花をあげる切断された首部へ、右腕の３０ミリ機動速射野砲の銃口を突っ込み、引き金を引いた。

ヴォォォォォォ……ム！！

ガドリング砲の射撃音が終わった。
「……装甲内部に至近距離からだ」
宗像は自分に言い聞かせるように言った。
「これで死ななければ、冗談だぞ――美晴っ！」
「はいっ？」

「なにボッとしてるんだ！仕留めろっ！」

宗像達が有利な戦いをしていた頃――

むしろ間逆の戦いを余儀なくされていたのは、二宮と美奈代だ。
男運のなさが、戦果にまで響いているんじゃないかと、自分達にイヤミを言いたくなったとしても無理はない。
相手はエーランド少佐だ。

ピーッ！
「ちいっ！」

警告と二宮の舌打ち。

そして、

バンッ――ギュィィィンッ！！
ドンッ！！
二宮騎のシールドに光が命中、１秒足らずのタイムラグの後、爆発が生じた。
「ＭＬ（マジックレーザー）攻撃っ！」
牧野中尉が怒鳴る。
「前方、１１時方向、距離１５００っ！」
「速すぎるっ！教官っ！」
「ソコトラ島が見えた！」

二宮は怒鳴った。
「降りるぞ、高度を落とせっ！」
二宮騎は、半ば融解してへしゃげたシールドを構えたまま、地上へ降下した。
美奈代達もそれに続いた。
「注意して！」
“さくら”が怒鳴ように言った。
「何か海中に潜んでいる！」
「何っ！？」
「数５。騎種、ライブラリーなしっ！水中を追いかけてきている！」
「何だとっ！？」

「敵接近中、距離１２００」
二宮の目の前で、敵騎が滑るような機動で地面に降り立ったかと思うと、そのまま切り込んできた。
機動に無駄がない。
乗っているのがかなりのベテランだと、動きだけでわかる。

教本の掲載したいな。

二宮はふと、そう思った。
「泉、斬艦刀準備。弾幕を張れ」
「弾幕？効くんですか？」
「祈れっ！同時に煙幕（スモーク）発射っ！隙を見て逃げるっ！」

ポンッ。
気の抜けたような音がして、メサイアの肩に仕込まれた煙幕弾発射装置から煙幕弾が撃ち出された。
爆発すれば一瞬で騎体を覆い隠すほどの白い煙の柱が、撃ち出さ

れた弾の数だけ立ち上り、美奈代達の前方の視界を奪う。
美奈代達は、その柱の向こうへむけ、照準もつけずに火砲を乱射した。
二宮がやろうとしていることは単純だ。
敵から自分達の姿を隠した上で火砲の乱射を行い――とにかく敵の接近を止める。
その間に逃げる。
そういうことだ。
煙幕の別機能、レーダーと熱画像処理双方のシステムへの干渉が即座に始まった。
目の前のモニターのいくつかがブラックアウトした。
「よしっ！行くぞ、ついてこいっ！」
二宮騎からそんな号令がかかったのは、美奈代が１２０ミリ機動速射野砲を撃ち終わったのとほぼ同じタイミングだ。
「了解っ！」
美奈代は、浮き上がる二宮教官騎に続こうとした。
だが――

ピーッ！！

「――来ますっ！」
「ちいっ！」
煙幕をかいくぐって突撃してきた敵騎のシルエットが白い煙の向こうに見える。
美奈代はとっさに１２０ミリ機動速射野砲を煙幕の中へと投げつけた。
ザンッ！
砲が真っ二つに叩き斬られ、漆黒の敵が現れた。

「小手先の技が通じると思うなっ！」
エーランドは右太股にマウントしていた戦斧を抜き、敵騎にめがけてメース、ツヴァイを突進させた。
警報が鳴り響き、メースのエンジン音と戦闘機動の振動が体を揺さぶる。
これが戦場の醍醐味だ！
エーランドは歓声を上げたかった。
再び立った戦場（いくさば）は、今でも自分を歓迎してくれている！
そう、叫びたかった。
「いい感じだ！」
エーランドは、最初から目星を付けていた騎に襲いかかった。
「――さぁ。相手をしてもらおうか！」

敵騎に何の躊躇もなく突撃するエーランドには、先日の圧勝の記憶がある。
満足な抵抗も受けず、一方的に追いつめた記憶。
それが、彼を誤算へと導くなんて、予想しろという方が無理だった。
その瞬間まで、エーランドは敵を切り刻む自分の未来を信じて疑っていなかった。
その瞬間は――すぐにやってきた。
「何っ！？」
敵騎が、例え一瞬とはいえ、視界から消えた。
想定外の出来事に、エーランドの戦斧が空を斬った。
「何！？」
戦斧がおかしいことに気づいたのは、戦斧を振り降ろしきった後だ。
戦斧が――軽い。
「……何？」

戦斧の柄から上が――――ない。
敵の武器――――斬艦刀が、ツヴァイの戦斧を叩き斬ったなんて、エーランドには想像さえ出来ない。
「な！なんだと！？」
エーランドは、戦斧を真っ二つに叩ききられたことに、少なからず狼狽した。
「じ、人類の技術はここまで！？」
戦斧は単なる金属の斧ではない。
騎体から供給される魔力によって敵の装甲をかち割ることの出来る立派な魔法兵器だ。　それを真っ二つにしてのけるとは――――！！
「や、やるなっ！」
嫌な汗が背筋を流れ、体内を何か表現出来ない不快感が走る。
それが忘れかけていた恐怖という感情だと気づき、エーランドは自分を取り戻した。
「ふふっ――――ハッハッハァッ！！」
ツヴァイのコクピットにエーランドの笑い声が響く。
「楽しませてくれるわっ――――人類がぁっ！」
振り下ろされる敵騎の長剣。
エーランドはその柄を抑え、その腹部に蹴りを食らわした。
「ちぃっ！」
バランスを失い、ひっくり返る二宮騎に、エーランドは容赦なく襲いかかった。
腰に下げていた剣を抜き、倒れた二宮騎を串刺しにしようと、連続した突き技を繰り出す。
二宮騎は、それを大地を転げ回ることで回避する。
「教官っ！」
美奈代がけん制のために機動速射野砲を放つが、３０ミリ機動速射野砲程度で割れる装甲をツヴァイは持ち合わせていない。

一瞬だけ、その攻撃を止めたのが精一杯の功績だ。
「無駄なあがきを――いつまでも！」
ツヴァイの蹴りが二宮騎の腹部を蹴り上げ、二宮騎がくの字になって宙に浮いた。
「ぐっ！？」
そんな鈍いうめき声を、通信装置に聞いた美奈代は、何の躊躇いもなく二宮騎救援のために、エーランドへ向かって斬りかかった。
「このぉぉぉっ！」
美奈代は、ツヴァイめがけて、３０ミリ機動速射野砲をを乱射しながら接近、滅茶苦茶な太刀筋で攻めまくる。
美奈代にとって、目の前の敵を撃破するより、二宮騎から敵を引き剥がすことの方が、余程大切なのだ。
「な、なんだ！？」
ところが、相手にする方は驚くしかない。
人類の太刀筋とはこういうものですとでも説明されれば、納得するしかない立場なのだ。
しかし、それが形もへったくれもない、恐ろしくデタラメなのは確かなのだ。
「こいつは――ぐっ！？」
かわしたはずが、肩部装甲を切り落とされた。
先日の武器ではこうはいかなかった。
どうやら、秘密は長剣にあるらしい。
エーランドはそう判断し、武器を奪うチャンスを狙った。
隙を見て敵を倒すだけでいい。
理屈ではわかっている。
ところが、その太刀筋のあまりのデタラメぶりに、危なくて近づくことが出来ない。
しかも、敵の方がリーチが長いとあっては尚更だ。
「こいつ！」
エーランドは予想外の動きを見せる剣に翻弄されながら言った。

「余程上手いのか、それとも単なるバカか！？」
型もへったくれもあったもんじゃない。
これが剣術使いなら、素人も同然だ。
そうか。
だから、それだけに逆に攻撃を予測出来ないのだ！
「こんな――――っ！」
ようやくみつけた隙を見て、エーランドは敵騎の胸に蹴りを入れた。
吹き飛ばされた敵騎が、地面を抉りながらスライディングして止まった。
「デタラメがいつまでも通用するかぁぁっ！」
敵騎が立ち上がり、再び斬りかかってくる。
「まだやるのか！？――――ええいっ！」
エーランドは敵騎の剣を止めた。
「中のメース使いの面が見てみたいものだ！」

エーランドの駆るツヴァイは、シールドを構えて突撃してくる美奈代騎めがけて逆襲に出た。
ツヴァイの肩部シールドと、美奈代騎のシールドが激突。
斬艦刀が逆袈裟斬りに走り、ツヴァイが体勢を低くしてかわす。
ツヴァイが、美奈代騎の懐に飛び込んで突き飛ばし、その動きごと止める。
「――――くっ！」
全身にアドレナリンが走り、体が熱くなるのがエーランドにはわかる。
体中の血が沸き立つようなこの感覚。
生死の境、刃の上を歩くような緊張感。
このギリギリの感覚が、何より楽しい！！
エーランドは、その高揚した気分のまま、ツヴァイの剣を構えなおした。

「――さぁ、いくぞ人類っ！」

「くそ――しつこい男は！」

斬艦刀を振り回し続け、息が上がった美奈代は、荒い息のまま、目の前の敵騎を睨んだ。

「嫌われるんだぞぉっ！？」

息を飲み込んで呼吸を抑え、美奈代は逆襲に転じた敵騎に斬りかかった。

最初はありがたかった斬艦刀の長さが、今となっては重荷になりつつある。

１５メートルは長すぎる。せめて１０メートルだ。

美奈代はそんなことをつぶやきながら、“征龍改（せいりゅうかい）”を駆る。

両手で剣を構える敵騎が、騎体を自分の騎に突撃させて来るのがスクリーン一杯に映し出される。

敵騎が突き技で来るのは、その構えから嫌でも分かる。

大降りに振り下ろすより、ここは突き技で来る方が正しい。

――避けられない！

美奈代の心のどこかで、そんな警告が鳴り響いたのは、敵騎の剣をうち払おうと切っ先を下げた体勢をとった美奈代の心の中だ。

「ダメです！」

牧野中尉が悲鳴を上げる。

「回避可能性５％！脱出してくださいっ！」

迫り来る剣がコクピットへマトモに命中するだろう。敵の突撃スピードと構えは完璧だ。

剣をうち払った所で、体当たりをマトモに喰らう。

どうするか。

「――くうっ！」

美奈代が乾坤一擲のカケに出るべくＳＴＲシステムに力を込めたのは、攻撃が完全に回避不能になる直前のことだった。

そして、

勝敗は一瞬で決まった。

飛び込んでくる敵に対して、美奈代騎は、フェンシングの突き技と同じ要領で半身を前に出し、斬艦刀を片手で突き出した。

そして、斬艦刀の切っ先が敵騎の装甲にめり込んだのと同時に柄から手を離した。

突き技の衝撃で、斬艦刀を折らないためだったが、そのまま騎体を半回転させた所を敵騎はその勢いのまま駆け抜ける。

美奈代は、その背中めがけて容赦なくシールドのエッジを叩き付けた。

「――ぐぅっ！？」

騎体パーツがバラバラに粉砕される中、騎体が地面に叩き付けられる衝撃に、エーランドは歯を食いしばって耐えた。

「こ、こんな――」

騎体はもう動かない。

スクリーンはすべてブラックアウト。

操作系はどこかショートしたらしく煙が出ている。

「こんなデタラメな話があってたまるか！」

エーランドは、脱出装置を作動させた。

緊急救難信号が発信され、開閉操作が効かなくなったハッチが吹き飛ぶ。

密封されていたコクピットに太陽の光と空気が流れ込んでくる。

「――ここまで私に恥を掻かせるとは！」

チュインッ！！

毒づきながらコクピットの外に出たエーランドの手元で何かが弾

けたのはその瞬間だ。
「何だ!?」
手を思わず引っ込めた。
まだ爆発は起きていない。
だが、何かが弾けたのは確かだ。
「ん?」
パンッ!
チュインッ!
何かが弾けた場所を確かめようとかがんだ所を、何かがかすっていった。

黒い、小さな塊だった。

それが、高速で自分めがけて飛んできた。
弾けたのはその塊だと、エーランドは理解した。
飛ばして来た相手を求め、周囲を見回したエーランドは、自分の騎が搦座した場所がどこかようやく理解した。
自分を撃破した敵騎の前、自分が倒した敵の真横だった。
仰向けに倒れたその騎の胸部装甲が開かれ、そこから上半身を出したパイロットが、こちらめがけて右腕を伸ばしている。
その手に掴んだモノが、どうやら金属の塊を打ち出す武器だ。
エーランドはそこまで理解すると、即座に行動に出た。
一息で、武器を持つ相手の所まで跳躍、その腕を掴んだのだ。
相手が、再びあの金属の塊を打ち出す余裕をエーランドは与えなかった。
右腕を掴んで、相手をねじ伏せたエーランドは、その時初めて相手が女性であることに気づいた。
「――女?」
自分を睨み付けてくるのは、エーランドにとっては妙齢の女性。
その女性の口から何事か言葉が漏れる。

“離せ”とでも言っているんだろうが、エーランドにとってはどうでもよかった。
「まぁいい」
エーランドは喉で笑うと、相手の右腕を抑える腕に力を込めた。
グッ
「うっ！」
女は、うめき声を上げ、武器を掴む力を失う。
エーランドは、女から武器を取り上げ、そして言った。
「安心しろ。私は女は殺さん」
武器を取り上げられてもなお、戦う意志を瞳に浮かべる女に、エーランドは小さく吹き出した。
「夢見が悪いからな」
女がエーランドに飛びかかってきたのはその時だ。
だが、エーランドの一撃が女を襲う方が速かった。
みぞおちに入った一撃で女は力なくエーランドの腕の中に崩れ落ちる。
「――活きのいい女だ」
クイッ。
みぞおちの痛みに必死になって耐える女のあごを掴んだエーランドは言った。
「また逢おう」
そして――
「二宮教官っ！」
“征龍改（せいりゅうかい）”から降りた美奈代が駆け寄ってくる。
美奈代の手には自動小銃が握られていた。
「ご、ご無事ですか！？」
敵騎を搦座させた美奈代にとって誤算だったのは、敵騎のパイロットが二宮を人質にしたことだ。

なにがどうしたものか。
それとも魔族とはそういうやり方をするのかわからないが、二宮の最後の抵抗をねじ伏せた魔族は、二宮をその場にねじ伏せ、動きを止めた。
コクピットの中に入りこんだため、二人が何をしていたかはわからない。
ただ、二宮を巻き込む危険性が高すぎ、美奈代達は、何も出来なかったのは確かだ。
おそらく、時間にして数分とたっていないだろう。
その間、二宮を人質にとられた美奈代には恐ろしく長い時間が過ぎた気がした。
すべてを終わらせたのは、海からの攻撃。
重迫撃砲と思われる攻撃が連続して美奈代騎の周囲に落下する。
シールドを構え、防御姿勢をとる間に、海岸から突如、得体の知れないフォルムのメサイアが出現。
その手の中へと、魔族は消えていった。
美奈代がコクピットへ潜り込んで体勢を整え直すよりも速く、敵は海へと消えていった。
もし、敵が美奈代騎を狙っていたら、美奈代は確実に死んでいただろう。

「二宮教官っ！」
何故か呆然として口元を指で抑える二宮に呼びかけるが、二宮はまるで反応しない。
ただ、顔を赤くして、ぼんやりとしているだけだ。
「教官っ！？」
美奈代はその肩を激しくゆすった。
「……泉」
「はい！」
「……頼みがある」

「な、なんですか！？」
「……私が」
どこか焦点のあわない目をした二宮は、美奈代に言った。
「私が、あの魔族と何をしていたか、忘れてくれ」
「わ、忘れるもなにも……」
美奈代は困惑した顔で答えた。
「私、何も見えていませんよ！」
「そ……そうか」
二宮は安堵したという顔でため息をついた。
「それならいい」
「あの――教官？」
「忘れろ」
二宮はそう言うと、コクピットに潜り込んだ。
唖然としてコクピット前に立つ美奈代に、コクピット内部から二宮が届いた。
その声は、軍人としての、そして教官としての声でしかなかった。
「泉――ベルゲはどうなっているか？」

「人類の新型兵器……か」
カーメン大佐がスクリーンの向こう側でうなるような声を上げた。
「エルプス系魔法の応用技術であることは間違いありません」
エーランドの横に立つ女性士官が、書類片手に言った。
司令部から派遣されてきたマイナ技術大尉だ。
「物質の原子レベルでの結合を崩し、原子崩壊させることで物質そのものを破壊します。騎体の損傷痕に、エルプス系魔法独特の痕跡があることから明らかです」

「実体系武器では対抗出来なかったと？」
「武器がその役割を果たしません」
マイナ技術大尉は言った。
「エルプス系魔法の前で実体系兵器及び防御は一切無意味です」
「……そうか」
カーメン大佐は、数回、小さく頷くと言った。
「マイナ技術大尉を信じよう。エーランド少佐には悪いことをした」
「いえ」
エーランド少佐は、その外見故か、若干気障に見えるほど優雅に敬礼した。
「マイナ技術大尉がヒートサーベルを持ってきてくれました。同じ過ちは繰り返しません」
「当然だ」
「……」

数分後。
相次ぐメースの喪失をねちねちといびるカーメン大佐との通信を終え、瞑目して落ち込んだエーランドの横。
そこでは、マイナ技術大尉が表情を変えずにエーランドを見ていた。
人形のような美しく涼しげな容姿をしたマイナ技術大尉は、金髪の貴公子然としたエーランドの横に立つとちょっとした似合いだな。と、その様子を眺めていたシグリッド大尉は思った。
「？……ああ」
その視線に気づいたのか、エーランドはマイナ技術大尉に向き直った。
「すまなかったな。大尉」
無理に笑ってみたつもりだが、ぎこちないだろうとエーランドは自身でそう思った。
「いえ」

マイナ技術大尉は、愛想笑いを浮かべることさえなく、手にした書類をエーランドの前に突き出した。
「ツヴァイ4騎と、関連武装の受領書類です。確認の上、サインを願います」
エーランドは無言で書類を受け取る。
何故か一瞬、顔を引きつらせ、一番上の書類だけを自分のポケットにねじ込むと、二枚目にペンを走らせた。
「その……マイナ技術……大尉」
受け取った書類を確認したマイナ技術大尉は、引きつった顔を崩せずにいるエーランドに言った。
「騎体と部下を失ったことに関する始末書と進退伺いを3時間以内に提出してください。それと、一枚目に挟んでおいた、損害賠償と罰金の件ですが、お支払い方法はいかがなさいますか？」
エーランドは悲しげな顔をしながらも、精一杯胸を張って答えた。
「もちろん、漢（オトコ）らしく現金一括払いだ！」
「……低金利のクレジット会社、紹介しましょうか？」
「いらんっ！」

●魔族軍司令部
「人類側が動かない？」
「……少なくとも」
カーメン大佐はユギオに答えた。
「ここ12時間以内に、タナ湖付近に展開した人類側部隊は存在しません」
「……あの武器をちらつかせれば」
おっかしいなぁ。と、ユギオは首を傾げる。
「人類は乗ってくると思ったんだが」
「情報を人類側にリークしたのは確かなのですか？」

「間違いない。カーメン大佐。本当に、人類は動かないのか？」
「はい。メースの格納庫として利用していたあの洞窟に誘い込んで、敵を一網打尽にするという、閣下の計画は、やはり無理があったのでは？」
「そんなはずは……」

●大英帝国　ロンドン　ダウニング街１０番地
「出所はどこだ？」
「不明です」
大英帝国首相、ダニエル・ヒースの問いかけに、ロバートソン国防情報本部長はそう答えた。
「最悪でも、魔族軍が反応弾を作り上げたという報告はありませんが」
「私も、高速増殖炉をアフリカで見たという報告は眼にしたことがなかったな」
短く苦笑いしたヒース首相は、紅茶に手を伸ばした。
「かつてのアフリカは非反応弾地帯だったはずだ」
やりたまえ。
ヒースの誘いに一礼しつつ、ロバートソンは目の前の紅茶に手を出した。
「その通りです。閣下」
ロバートソンは紅茶を楽しみつつ、頷いた。
「戦前というより、アフリカに国家が存在した頃の１９７８年、アフリカ連合はアフリカ大陸全域を、非反応弾地帯化する宣言を実施しています。何より、反応弾を開発・保有するだけの力を持つ国家は、アフリカには存在しませんでした」
「新大陸軍が、敗北の腹いせにばらまいた代物が今頃になって爆発したとでも？」
「反応弾は全弾の爆発を我々が確認しています。ありえません」

「……だとすれば、誰かが持ち込んでいたと？作ることが出来る国が持ち込んだ代物が？」
「おそらく」
ロバートソンはティーカップを戻した。
「……そういうことかと」
「どこのバカだ」
ヒースは腕組みをしながら豪奢な革張り椅子に背中を預けた。
それでも、顔は皮肉めいた笑みを浮かべている。
「おかげで……何騎だ？」
「３６騎です。閣下」
ロバートソンは悲しげに肩をすくめた。
「反応弾は予想外でした」
「魔族軍が、アフリカに不法に持ち込まれていた反応弾を流用した……か」
「先の戦争で、かなりの苦渋を強いられたのですから、妖魔共も威力だけは知っていたというところでしょうか？」
「おいおい。君は本気でそう言っているのかい？」
「半分程度です」
ロバートソンは首を横に振った。
「すでにその犯人は、確保されています。ご存じのはずです」
「ああ。アフリカで中国人が捕虜になったと聞いたぞ？」
「はい」
「すばらしい。今晩は特上のウィスキーを開けることにするよ」
「何よりです」
ロバートソンはようやく笑顔を浮かべることが出来た。
ぬるくなった紅茶が喉を潤す感覚が楽しい。
「さて……そちらは後の議論としよう。問題は」
「反応弾の回収は日本軍に」
「違う。回収された後のことだ」
「……と言いますと？」

「利に聡い、黄色い連中が、今、何もしていない……君は本気でそう思うか？そう聞いたのだ」
「連中が悪魔の耳を持っているとでも？」
ロバートソンは苦笑いに近い作り笑顔を浮かべた。
「連中は、欧州から中東まで幅広く、国家間の連携の切り崩しに動いている。
事態が発覚して以降、連中が大陸の各国政府要人へ送った賄賂は我が国の国家予算並みだ」
「そ、それは」
ロバートソンの顔から笑みが消えた。
唖然とするロバートソンに、ヒースは冷たく言った。
「――無論、我が国の政府要人も含まれている。私が君をここに呼んだ理由はわかったな？」
「……っ！」
ガタッ！
ロバートソンの腰が椅子から浮き上がった。
「座っていたまえ」
ヒースの口調は有無を言わさない、大英帝国の第一大蔵卿としての威厳に満ちていた。
「君が情報の見返りに受け取った６００万ポンドは、国庫として有益に使わせてもらおう。
君の今までの国家に対する貢献には深く感謝している。
家族のことは心配しなくていい」
「――っ！」
顔を真っ赤にしたロバートソンは、椅子を蹴ると懐に手を伸ばした。
ダンッ！
銃声の後、ロバートソンは糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。
「……」

ヒースは、ぴくりとも動かなくなったロバートソンを冷たくみつめながら言った。
「――ご苦労だった」
「……残念です」
拳銃を懐にしまいつつ、カーテンの陰から現れたのは、仕立ての良い背広に身を包んだ銀髪の男だった。
高い背と骨格のしっかりした筋肉質の体つき。
外見はすでに老年に達しようとしているが、気品にあふれる精悍な雰囲気は、若い頃、さぞご婦人方にもてたろうと容易に想像出来る。
ヒースの腹臣、ボンド卿だ。
上質の子羊の手袋をつけたボンド卿の指が鳴ると、彼の背後に控えていた若い男達がロバートソンの死体を死体を片づけにかかる。
「ロバートソンは、敬虔な国王陛下の忠臣として、常に国家に貢献した方でした」
「札束は忠臣さえ狂わせるものさ」
そう答えるヒースの視線は、“お前は？”と訊ねている。
「金も女も、酒でさえ、最早私は飽きましたよ」
ボンド卿は笑って言った。
「飽きることのないのは――これだけで」
ボンドは、背広の中にしまった銃を軽く叩いた。
「それはどうかな？」
ヒースが苦笑するのも無理はない。
「彼女をからかうのが生き甲斐だと聞いているが？」
「……ああ」
ボンド卿は頬の湿布を上から軽く掻いた。
「ちょっとやりすぎました」
「何をした？」
「挨拶代わりにお尻をなでたら殴られました。生理中だったようで」
「往年のプレイボーイの面目が立つまい」

「何」
ボンド卿は笑って答えた。
「私にとって、彼女は娘です。問題はありませんよ」
「そう願おう。アフリカの状況は？」
「新大陸軍が反応弾回収のために特殊部隊を派遣しました」
「――――ん？」

●“鈴谷（すずや）”
美奈代達が真実を知ったのは、思ったより早かった。
エチオピア高原に向かう部隊へ物資を運ぶ補給ルート、別名“ジブチ・ルート”を移動していた補給部隊が、助けを求める東洋人の男数名を保護したのは、作戦が始まる数日前のことだ。
すでにメサイア部隊は上陸を完了し、エチオピア高原へのルートを確保していた。
補給部隊は、最前線へと放棄されたハイウェイを移動中に、彼等と接触した。
補給部隊の車列の前に飛び出してきた彼等は、魔族に襲われたのか、傷だらけの体をボロボロの服に包んでいた。
保護された時点で、重度の脱水症状を引き起こしており、すぐに国連軍の野戦病院に保護された。
メサイア部隊に物資を届ける補給部隊でさえ、徒歩で移動するはずはないから、アフリカにおける人類の生き残りかと思われた彼等だが、一切、自分達について語ろうとせず、頑なまでに会話を拒

み続けた。

当初は、極限状態におかれた結果による、精神的な影響で、他人と会話を拒んでいるだけとされたが、看護兵の目を盗んで互いに談笑しているのを、薄い壁越しに聞いた隣室の傷病兵が通報した。

会話はどうも、中国語らしい。

折しも中華帝国が勢力を拡大している最中だ。

事態を重く見た軍医達は憲兵隊と諜報部門に通報。

諜報部員が、彼等の会話を盗聴器で盗み聞きして、彼等の会話が中国語で行われていることを確認した。

彼等は、周囲に中国語がわからないだろうとタカをくくっていたのが災いした。

互いに階級で呼び合う程度なら、偵察部隊のなれの果てとして、捕虜収容所にでも送る程度で済む。

ところが――

問題はその会話に出てくるキーワードだ。

反応弾。

起爆装置。

取り調べは、憲兵隊ではなく、諜報部が行った。

“国に帰れば殺されるだろう?なら、アメリカで暮らしてみないか?”

それでも首を横に振らなかった彼等だったが、
“拷問は好きか？”
そう耳元でささやかれ、聞きもしないことまでベラベラと喋り出した。

自分達は、中華帝国軍特殊戦略部隊の士官である。
アフリカには、沿岸部から上陸艇を使って上陸した。
目的は、アフリカが失陥する１０年前、某軍高級官僚が管理する軍需系輸出会社が不正取得し、不正に輸出したことが判明したミサイル兵器の回収である。

１０年も整備せずに放置すればミサイルは使用不能になっているはずだとする諜報部に彼等は反論した。

欲しいのはミサイルではない。

元来、あのミサイルは失敗作で、発射と自爆の区別がついていない程度の代物だ。

問題は、その弾頭だ。

放棄された場所はすでに分かっていた。

だから、我々は命令を受けてその弾頭部分の回収に来た。

幾多の苦難と闘いを経て、ついにミサイルと接触した我々は、即座に解体を実施し、無事に完了する一歩手前で妖魔に襲われ、命からがら逃げ出してきたのだ。
以降、我々はお前らの捕虜になってやる。だから、ジュネーブ条約に基づく処遇を要求する。ありがたく思え。

「そして彼等はお魚さんのエサになりました」
ここまで語った二宮は首を左右に振った。
「アフリカに人類がいた頃、中国人はアフリカのどこぞの国に、軍からちょろまかしたミサイルを売りつけたわけだ。
それが今頃になって発覚した。
それに驚いた中華帝国政府は、極秘のうちに弾頭部を回収し、証拠隠滅をはかろうとして、失敗した」

「あいつら、アホですか？」
都築は椅子にふんぞり返るように座りながら顔をしかめた。
「なんで、そんな厄介な代物を売りつけたんです？」

「売りつけたというより、間違って売ったというのが本音らしい」

「……は？」
さすがに都築の目が点になった。

「面白い話だ。聞くか？」

都築は無言で頷いた。

「やらかしたのは、一人の軍で兵站を担当する官僚だ。
こいつがミサイルのキャリアを横流ししようとした。
お客がほしがっていたのはミサイルじゃない。
キャリアの方だ。
ところが、こいつは欲を出してミサイルキャリアをミサイルごとちょろまかしたわけだ。
ミサイルを別な所へ売りつけようとして」

「……はぁ」

「盗んだ時、そいつは、その弾頭が通常弾頭だろうとタカをくくっていたのだが」

「違ったんですか？」

「書類の上では通常弾頭、しかも解体廃棄の書類までついていた。その書類を偽造して、まだ使える兵器として、アフリカのどこかに売りつけようと買い手を捜した」

「き、きったねぇ」

「さすが中国人だとは思わないか？」

「真面目に商売してる連中に失礼ですよ。それは」

「……すまん。話を戻すか……さて、この解体と廃棄の書類はどこから出たと思う？」

「へ？……そいつの上層部？」

「少しはアタマがよくなったか？都築」

「よけいなお世話です」

「アタマが人並みになった都築クンの言うとおり、書類は上層部の一官僚が偽造したものだった。

こいつは、さっきの官僚に輪をかけたワルだったようだな。

廃棄されるミサイルに問題の反応弾頭を搭載して、全部をまとめてスクラップとして海外に持ち出そうとしたんだが、そいつを、さっき言った奴が横取りしたというわけだ」

「……は？」

都築は眉をひそめた。

「つまり、横流ししようとして書類まで偽造していたミサイルを、別な奴に横取りされた――――と？」

「そういうことだ。中華帝国政府の調べでは、書類上、廃棄予定だった、つまり、海外に横流しされたミサイルは全部で２０発。全てに反応弾頭が搭載されていたそうだ」

「質問」

片手をあげたのは宗像だ。

「今回、爆発した弾頭は？」

「その内のたった１発に過ぎない」

「っていうか、１０年ですよ？１０年も経って、何で今頃爆発したんです？弾頭を叩いた程度で起爆するとは思えませんが」

「……今回、捕まったアホ共のせいだ」

二宮は苦々しげに、深いため息と共に言った。

「このアホ共め。ＥＵ軍の専門技術者に解体方法を聞かれたら起爆方法を答えたそうだ」

「起爆……方法？」

「つまり、このアホ共は核の専門家を気取っているが、所詮は上層部におだてられただけのバカ連中だということだ。
連中曰く、ウランは元は液体で、中華帝国の特殊技術があって初めて固体になったとかと答える、アホを通り越した哀れな存在に過ぎない。
中華帝国政府は、回収を名目に、何も知らない兵士を送り込んで、実際には反応弾を起爆させて、証拠隠滅をはかろうとしたんだろう」

「そんな……」
「ひ、ひどい」

「下っ端というのは、どこの国でも同じ扱いさ。
とにかく、起爆出来る状態で妖魔に襲われた連中は、ミサイルをほったらかしにして逃げ出して捕虜になった。
弾頭は何も知らない魔族軍が回収。
そのうちの一発が、どういう経緯か、あの陣地に運び込まれていた。
そして、それが――――ドンッ」

二宮は握った手を、ドンッ。という声と共に離した。

「それで」
二宮の子供じみた仕草に反応さえしなかった宗像は訊ねた。
「残り１９発は？」

「教えてやろうか？」
二宮のその顔は、皮肉と悲しみがない交ぜになった、言いようのない色を浮かべていた。
「――――何発使われたか」

それぞれの誤算

「悪くない戦果だね」
デスクの上に書類を置いたユギオは、嬉しげに微笑みながら、デスクの上で組んだ手の上に顎を載せた。
「何年ぶりだろうね。君たちが勝ったという報告を受けたのは」

「お戯れを」
引きつった顔を、精一杯笑顔に作り替えたのは、ユギオのデスクの前に立つカーメン大佐だ。
本気でぶん殴ってやりたいが、立場的に出来ない彼に許されるのは、そのイヤミを聞かされることと、何か理由をつけて、後で副官でもぶん殴ってウサを晴らす程度だ。
「各地で人類側メース部隊が壊滅的な損害……か」

「今回の使用で計１５カ所で戦果をあげていますが」

「残りが？」

「エチオピアでの一発を加えて１６発が使用されています」

「人類側は、残弾の数は知っているんだろうか」

「そりゃそうでしょう」
カーメン大佐は肩をすくめた。
「元は人類の代物ですからね」

「……ふむ」

「まさか、もうどこからか、仕入れているんですか？総帥」

「本気でやってみようかと思っている」

ユギオはふと思いついた様子で言った。

「残りは？」

「４発ですが……実は」

「ん？何か問題でも？」

「……全部、爆発しないんです」

美奈代がやっと眠りについた所をたたき起こされたのは、時間的にはエチオピア高原での核爆発から３日目のことだった。

美夜から聞いた話だと、先日、二宮達が苦戦し、皆が死にかけたメースとの初接触の際、“鈴谷（すずや）”が受信した救難信号は、あの中国人達の乗っていたジープから発信されたものだという。

それを思い出すだけで、何だから腹が立ってくるのを抑えられない。

ラムリアース帝国軍は半ば意地になってエチオピアを支配下に置いているが、肝心のメサイア部隊が投入時点の１０分の１にまで激減した状態では、満足な戦闘は期待出来ない。

美奈代は、寝る前にようやく増援のメドがついたと聞いた。

「緊急事態が二つある」

ブリーフィングルームに入った二宮の瞼もかなり重たそうだなと、美奈代は思った。

「一つは、中東の政治情勢。

イエメンとオマーンが中華帝国に対して同盟を申請した。

つまり、アラビア海でＥＵ軍に味方する国が無くなったというか、もう中華帝国の属国になったといってもいいだろう。

また、トルコ帝国や中東各国もこれに同調する動きを見せ、親中華帝国圏を形成しつつある」

美奈代達は思わず顔を見合った。

アフリカで戦争をしているのに、中東が敵である中華帝国に味方したら、何なんだ？

「目下の我々にとって、これはどうでもいいことだ」

腫れぼったい顔で、二宮は書類をめくった。

「国際情勢が、こう動くなんて、子供でも最初からわかっていたことだ」

「……あの？」

「ＥＵと支援国への原油の禁輸措置？やれるもんならやってみろ。自滅するのはお前らだ……アフリカの後はアラビア半島を焼け野原にしてやる」

「あの……教官？」

「眠い……いいか？これを言ったら私は眠る。誰も起こすな？」

「は、はい？」

「米軍経由の情報だ。魔族軍の核兵器使用に、連中も余程関心があるのか、それともこの辺で恩を売りつける方がいいと思ったのか……とにかく、米軍の軍事偵察衛星がついに捉えた」

二宮が黒板に貼り付けたのは、拡大された白黒写真だ。

「――――む？」

写真を前に、二宮はしばらく考えてから言った。

「……逆さまだった……よし」

「どこですか？それ」

あくびをしながら都築が訊ねた。

「池だか湖だかみたいですけど？」

「タナ湖だ」

「タナ湖？」

「青ナイル川の源流に位置する湖だ。水深は１５メートル程度だが、面積は３千平方キロとかなりのものだ」

二宮は別な写真を貼り付けた。

「ここは、ナイル川の源流であり、ここからの水は、最大でナイル川の３分の２に達する。米軍はある方面からの情報を元に、ここに魔族軍の陣地があることを突き止めた」

スカンッ！

室内にいい音が響いた。

途端に悲鳴を上げて額を抑えたのが、美奈代とさつきだ。
その足下には割れたチョークが転がっている。

「タナ湖の西岸の拡大写真。今から6時間前だ」
かなり精密に映し出されたその写真には、長細い物体と、人らしき物体が数体、映し出されていた。
「この細長いのが、中華帝国軍の長距離ミサイル“東風”のミサイルケースで、人は全部魔族軍のメサイアだ。ミサイルケースは“東風”独特なそれなだけに、間違えようがないそうだ。私にはわからないがな」
「それで、こいつら」
「タナ湖で爆発されてみろ」
二宮は言った。
「タナ湖の水源が放射能で汚染されることになる。そして、それはつまり、そこから流れる水が汚染されることをも意味する。
エジプトやスーダンといった青ナイル川一帯が放射能に汚染されれば、綿花に牧畜、小麦の栽培に至る全ての沿岸部には壊滅的な打撃となるだろう。
これまで、水源地帯を反応弾の攻撃から除外してきた……いや、アフリカそのものを奪還することにつとめてきた国連軍の努力は水泡に帰しかねない」

「……」

「“そんな大げさな?”とか思っているだろう?だが、物事というのは、ほんの小さな出来事から、致命的な被害へとつながるものだ。今回の中華帝国政府高官の武器横流しが、何年もたってから、人類のために戦う我々に被害をもたらしたように」

「……」

「現在、各地で使用された反応弾により、ＥＵ軍の動きは止まっている。戦力を再編成して、再び、かつ、速やかに攻勢に出なければ、アビシニア作戦は完全に行き詰まる。
そうなればもう終わりだ。
アフリカ大陸の次の支配者には、魔族か中華帝国政府以外の選択肢がなくなるだろう」

「……それで」
宗像は冷たく言った。
「経緯はともかく、我々に核弾頭を奪還せよと？」

「その通りだ」
宗像は堅い顔で頷いた。
「核弾頭は、タナ湖付近の洞窟に運び込まれたことは、３時間前の偵察で確認されている。カシム大鍾乳洞だ」

二宮は、手元のノートパソコンを操作して、スクリーンに画像を表示させた。
「全長２６キロ。長さはそれほどではないが、メサイアが出入り出来るほどの巨大な迷路状態になっている――アフリカが平和だったら、お前達の戦闘訓練で使用したい作りだ」

「こんな所、他にないでしょう？」
美奈代はあきれ顔で言った。

「メサイアで室内戦闘をやれというんですか？」

「意外と知られていないが、皇居の地下は、こんな感じだぞ？」

「……へ？」

「ＥＵ軍からの要請に基づき、貴様等は、明日の１６００をもってこの地下洞窟に侵入する。目的は核弾頭の奪取だ。各員の健闘に期待する――以上だ」

「気楽に言うけどさぁ」

さつきがぼやく。

「自分はいいよ？騎体ぶっ壊して、未だ直んないんだからさぁ」

「……しかたないだろう？」

美奈代がため息まじりに言った。

「長野教官騎は胸部中破。二宮教官騎に至っては左腕全損だもの」

「……まぁ、私達も、装甲かなりやられてるけど、動くことは動くものね」

あの反応弾爆発によって、部隊全騎が何らかの損傷を負った。

その中でも重度のダメージを受けたのが、衝撃波に吹き飛ばされたメサイアをモロに喰らった長野騎と、同じく超音速でシールドを突き破って飛来したメースの破片によって、左腕を肩の根本から切断された二宮騎だ。

共にハンガーデッキで未だに損傷カ所の修理中。

詰まるところ、この作戦において教官達が動かせる騎体がないのだ。

では、美奈代達の誰かの騎を明け渡すことは？

そう考えるのが普通だろうが、個人専用の調整がいろいろと施されている関係上、信頼性の観点からすれば、こちらこそ、むしろコクピットを入れ替えた方が望ましい。

それだけに、今回の任務は、候補生達だけでこなすことになる。

いつ、どこで反応弾が爆発するかわからない状況を、戦闘経験が浅い美奈代達に不安がるなという方が無理だ。

「誰か核弾頭の解体方法、知ってるの？」

「ケースごと回収しろと言われていますけど？」

「山崎君……万一に備えてだよ。万一に備えて」

「……ああ」

山崎は、ぽんっとその巨大な手を叩いた。

「僕では放射線防御服が着られませんし」

その視線が、横を歩いていた都築に注がれる。

「……そうね」

美晴達も何故か無表情に頷いた。

「それしかないもんね」

「な……なんだよ」

「――ご愁傷様」

●北米大陸　アメリカ合衆国　ワシントンD．C

大陸と大西洋を挟んだ北米大陸。

そこにも、アフリカで爆発した反応弾が中華帝国製らしい。という情報は入っていた。

しかし、新大陸の主達は、その情報を握りつぶした。

中華帝国を刺激するような事態は極力避ける。

それが、彼等の習慣となってから久しい。
しないのではない。
出来ないのだ。

アメリカを率いる大統領、ジョージ・バラマ。

彼が、病的なまでに中華帝国との軋轢を認めなかったからだ。
彼が恐れたのは、中華帝国が保有する反応弾や軍事力ではない。
その経済力だ。
安い賃金で雇える労働者を売り物に、世界の工場、世界一の軍事大国、世界一の経済大国へと成長……いや、変貌した中華帝国は、今や世界最大の米国債の保有国となっており、米国の行動をかなりの範囲で制限することさえ可能な立場に立っていた。
その国を敵に回すことを、彼は恐れた。

アジア人なんて知るものか！
米国債は安全か！？

就任当初、中華帝国において、国内の少数部族が武装決起し、内戦の危機を迎えたことがあった。
その第一報を受けたバラマの放った言葉がこれと伝えられている。
無抵抗の女子供にどんな兵器が使われようと、数万の女子供が奴隷として北京に連行されようと、バラマが心血を注いだのは、影響が米国へ波及することを避けることのみだった。

2選を目指す大統領選挙はもうすぐ。
彼にとって戦争とは選挙のことでしかない。
ここで経済を混乱させ、失業者を増やすことは許されない。

経済を安定させ、票につなげることこそが大切だ。

国政より政府内部のパワーゲームに勝つことで大統領に就任した彼にとって、兵力とは支持者のことであり、武器は金。勝利は票だ。

彼は、選挙と票以外に関心を示さない。

彼にとって、外の国で起きたことなんて、地球上で起きたことではない。

かの国の首脳部を失笑させたとさえ伝えられているその外交下手が、世界のかなりの人々の運命を決めたことは確かだ。

中華帝国における国内内戦危機が勃発した４日後、米国は、国務長官フランクリン・パリスを北京に派遣し、江国家主席との会談を実施させた。

この時、世論は“アメリカが戦争反対に動いた”と見なした。

だが――

たった３０分で終わった会談の後の共同記者会見で発表された２国間の同意内容に、世論は度肝を抜かれると共に、バラマに対して深い失望を持つことになった。

――今回の“経済的混乱”において、中華帝国が米国債の売却を行わない見返りに、米国は中華帝国とより緊密な経済関係を構築する。

会談において、中華帝国軍の暴虐に対する抗議その他、経済以外の発言は一切記録されていない。

パリスが政府専用機で北京を離陸したのとほぼ同時刻、中華帝国は戦線において反応弾を使用し、地方都市２つを消滅させ、内戦を

終結させた。

米国は、これについてコメントさえしなかった。

その中華帝国にとって新たなる頭痛の種が、今回発覚した反応弾問題だ。

●数日前　アメリカ合衆国ワシントンD・C　ホワイトウス

「帝国は、事態が表に出ることを望んでいない」

豪奢な革張りの椅子にふんぞり返るのは、仕立てのよい背広に身を包んだ、肥満気味の男。

中華帝国駐米大使、偉武漢だ。

本人はダンディなつもりだろうが、低い背とぶよついた体つき。

童顔の頭をバーコードにしているせいで、醜悪なのかコミカルなのかわからない。

初めて彼を見た者は笑いをこらえるのに苦労すること請け合いだ。

威厳というより、子供が精一杯背伸びをしているような、そんな印象ばかりを受ける。

「全てを秘密裏に処理されることが望みだ」

「……それは確かに」

引きつった愛想笑いを浮かべているのは、バラマ大統領だ。

胸の辺りを抑えながら、青い顔をしている。

対する偉は、そんなバラマの様子に気づく神経すらない。

「帝国は現在、東南アジアにおける平和安定のため、全力を傾けている。アフリカに関わっているヒマはない。そこで、帝国の代役を貴国が果たすことを望む」

「……」

バラマはピルケースから薬を取り出すと、口の中に放り込んで水

で流し込んだ。
「見返りに米国債の購入額を、先の公約に倍増しする」
男は顔をしかめながら言った。
「まさか、それでは不満だとはいわないだろうな。大統領」
「部隊を派遣することは可能ですが……」
大統領の歯切れは悪い。
アメリカは、初戦において魔族軍との戦いに敗れて以降、アフリカに軍事力を派遣していない。
先の三週間戦争で、空軍を始め、派遣した軍が壊滅的損害を被ったことで議会世論が戦争介入に対する態度を硬化させた結果だ。

“偉大なる合衆国が敗北することは許されない”

ならば戦い続けるべきだと思うが、相次ぐ敗北の前に、世論は別な方向へ動いてしまった。
三週間戦争の末期、米国の世論を支配していたのは、

“勝てない戦に介入するな”

未だ死力を尽くすアフリカ・ヨーロッパ・中東連合全てから裏切り者呼ばわりされてもなお、アメリカは己の強者としてのメンツを保つため、勝てない戦であるアフリカ戦線から手を引いた。
そして、人類は敗北した。
落ちぶれ果てた大国アメリカは、その後のアフリカ植民地争奪戦にも乗り遅れ、単独での南米開発による地下資源の収益により、何とか死なずに済んでいるようなものだ。
バラマ大統領は、長年にわたり米国の中枢で政治に関与した経験を売り物にして大統領に就任した、名実共に、アメリカをそういう方向へとし向けた立て役者だ。
国際社会における権威の失墜を世論の眼から逸らすため、そのバ

ラマがやったことは、世界的発展を続ける大国、中華帝国との蜜月な関係づくりだ。

しかし、人類の大陸としてのアフリカを奪還せんと戦費を支払い続けるＥＵを後目に、世界の二極支配、Ｇ２を謳うが、それさえ中華帝国の甘言に乗った結果でしかない。

中華帝国は、そのバラマの無能さに徹底的につけ込んだ。

「このアメリカに、我が同胞が何千万人存在すると思っている？次の選挙で勝ちたくはないのか？」

「それは……」

「不法移民と言われた我が国の同胞に選挙権付きの市民権を発行したのは君だ。

多くの“市民”が君を評価し、支持してくれている。

その支持を失いたくなければ、君は我が国との関係をよりよきものにする必要がある。

そのためには、ここは首をたてに振るべきだ。わかっているな？」

「……」

何かを躊躇するバラマに、偉は畳みかけるように言った。

「選挙人の半数は抑えている。マスコミも我が帝国資本の下にある。君は我が国との安定した関係さえ考えていればいい。そうすれば君と、その支持者たる我々は安泰なのだ」

「……そうだな。大使」

「大使“閣下”だ！」

偉は不快感をあらわにして声を荒げた。

「立場をわきまえろ！」

「……はっ」

「ＥＵはアフリカでの反応弾回収を日本軍にやらせることに決定している。これはアメリカにとって幸いだろう？」

「幸い？」

「奴らに反応弾を回収させ、奴らごと反応弾を始末するのだ。そうすれば目障りなあの国にも一矢報いる事が出来る」

ブヨブヨの体を揺すらせ、偉はくぐもった笑い声をあげた。
「――私の考えた案だ。悪くはあるまい？」
「……はっ」
「いいか？大統領」
偉はサイドテーブルに置かれたグラスに手を伸ばした。
「国債の購入増額を本国に認めさせたのは私の功績だ。国債発行額を巡って受けている下院の反発は、我が国が抑えてやろう」
グラスの中身を一息で飲み干した偉は、ちらりと大統領をその細い眼で盗み見るようにした。
「この国の中では、それが君の功績となるのだ――バラマ大統領」
「た、確かに」
功績。
その言葉に、バラマはほっとした顔になった。
「経済を立て直せば、世論は私を支持する！」
「そうだ」
何故か笑いをかみ殺したような顔になった偉は頷いた。
顎が、巻き付くような首周りの脂肪にめり込んだ。
「君も、我が国にたてつくべきだという、ふざけた連合党の考えに同調するわけではあるまいな？」
「まさか！」
「なら――反応弾を我が国に代わって始末するんだ。あの国の部隊と共に」

●アフリカ大陸　タナ湖近郊　カシム大鍾乳洞
カシム大鍾乳洞は、世界でも有数の規模を誇る鍾乳洞とされる。
地下の巨大な石灰岩の岩盤が地殻変動の影響で大きく割れ、その割れ目が長い年月の間にカシム大鍾乳洞を作り上げたというのが、

学者達の意見だ。
　無論、そんなことに構っていることの出来る美奈代達ではなかった。
　カシム大鍾乳洞の最奥に存在する広大な空間。
　高さは有に１００メートルに達する信じられないほど高いホール。
　そこは、幾本もの巨大な柱が左右対称に並び、天然の産物とは思えないほど荘厳な建築物然とした印象を与えることから“大聖堂”と名付けられている。
　その中でもさらに奥。
　テラス状の石段の形状から、“祭壇”と呼ばれる場所には、濃緑に塗られた金属製のコンテナが無造作に積み上げられている。

「中を見なければ……なんとも言えません。とにかく」
　センサーで中身を調べていた牧野中尉が言った。
「内部に放射線反応はありません」

「爆発の危険性は？」

「Ｘレイ捜索ではトラップは確認されず……とにかくコンテナを開けてみないと……」

「そういうことですね――おい都築」
「何で俺なんだよ！」
　都築は怒鳴った。
「山崎だっているだろうが！」
「放射線防御服を着られるのはお前だけだ。一々、男がぐちゃぐちゃぬかすなっ！」
　いらだった口調で、美奈代は都築に怒鳴った。
「男だったら黙って行けっ！」
「こんな時ばっかり」

都築はコクピットハッチを開きながら大声でぼやいた。
「女持ち出すな、クソ泉」
「聞こえているぞ!?」

コンテナはカギさえかかっていない。
それどころか――

濃緑色のコンテナの扉が開かれ、都築が中に入っていく。
メサイアの駆動音以外、何も聞こえない沈黙の世界を照らし出すのは、メサイアから放たれる照明と、都築の持つ電灯だけだ。
「……あった」
電波状態が悪く、都築の防御服につけらけたライブカメラがデータを送ることが出来ない。いつ起爆するかわからない状態で、外に持ち出すことも覚悟しなくてはいけない瀬戸際の中で、頼りになるのは都築の声だけだ。
「こんなの、俺に分かるかよ」
へそを曲げた都築はぼやき続けてばかりだ。
「ったくよ? 何が男女平等だよ。こりゃ立派な男性差別だ」
「文句を言わずにやれって」
つっこみを入れたのは美奈代だけではない。
「こちら都築だ。コンテナ内部の状態だが、ひどい有様だ」
「こちら泉。どういうことだ?」
「ずいぶん乱暴に扱ったようだ。ロケット部分はグシャグシャ。液体燃料が漏れた痕跡がある」
「燃料が?」
「ああ。ただし、かなり以前の話だ。今、火をつけても燃えるかどうか疑わしいがね」
「弾頭は?」
「ん?……ああ、あった。あれ?ケースのハッチが開いているぞ?
……おいおい隊長さんよ」

「どうした？」
「……こいつはしてやられたぜ」
「ん？」
「爆発の心配はない」
都築は言った。
「こいつは訓練用のダミーだ」

「これが？」
都築騎によってコンテナから引き出された反応弾の弾頭部分は、円陣を組んだコクピットからのぞき込むことが出来る高さまで持ち上げられている。
コクピットハッチから身を乗り出して見た弾頭は、小さい頃食べたアポロチョコのような形をしていた。
「思ったより小さいな」
「サイズはともかくよ！」
都築は言った。
「本物と思って近づいた俺の心境を察してくれ！寿命が１００年は縮んだ！！」
「バカほっといて」美奈代は都築の懇願を受け流した。
「ひでえな！」
「――ここにどうして訓練弾があるんだ？」
「非常時の解体訓練用のダミーだろう」
コクピットから降りて、メサイアの腕を足場にして器用に都築騎の手に飛び移った宗像が弾頭を間近に見ながら言った。
「中国語の表記があるな……“手順１４：解体時はまずこのレバーを引け”……なるほど？」
クックックッ……と、宗像は笑って言った。
「これを横流しした奴らは本物だと思っていたが、奴らも偽物を掴まされていたわけだ」

「でも、これから……どうするんです？」
美晴が訊ねた。宗像は即答した。
「これを回収して引き上げる。弾頭が中国製だというまたとない証拠だ」
「全騎へ警報！」
突然、染谷騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）から鋭い声が走った。
「洞窟入り口より接近する騎あり。騎数多数――――早いっ！！」
美奈代達がコクピットハッチを閉めるのと、ホール入り口にそいつらが現れるのは、ほぼ同時だった。

漆黒のメサイア達が、ホール入り口を固める。
光を反射しない塗料が使われているのだろう。
居並ぶメサイアが、まるで亡霊のようにさえ見える。
「数は１個中隊規模――――かなりですね」
牧野中尉が言った。
「一体、どこの部隊です？」
「イギリス軍の“テンペスト”と思われますが……」
牧野中尉が首を傾げる。
「でも……“テンペスト”とはフレームが一致しません」

「前方のメサイアに告ぐ」
漆黒のメサイアから通信が入ったのはその時だ。
通信モニターに金髪をオールバックにした、いかにも軍人という感じのいかつい男が現れた。
「こちら英国陸軍第７０７メサイア隊、ウォーレン中尉だ。隊長と話がしたい」
ドスの利いた言葉は英語だった。
それに返答したのは、部隊長である染谷だ。
その染谷は、落ち着き払った声でとんでもないことを言った。
「こちら大日本帝国近衛兵団所属第２０６メサイア隊、泉大尉」

２０６メサイア隊
泉大尉。
共にウソだ。
生真面目で通っている美奈代が、そんなウソを他国の軍人相手についたことに、都築達ははっきり驚いた。
「―大尉にしては若いな」
ウォーレン中尉の疑問は当然だが、
「それは私に対する侮辱ですか？」
毅然とした態度で美奈代は訊ね返した。
「失礼した」
ウォーレン中尉は生真面目に返答した。
「司令部命令により、タナ湖周辺にて発見された反応弾の奪還に来た」
「任務ご苦労様です」
「ＥＵからの協力要請に基づいて行動していた日本軍とは君たちのことだな？」
「はい」
美奈代は頷くと言った。
「おかげで、こんな地下通路を探索です」
「目標は発見出来たか？」
「――そこに」
美奈代騎がコンテナを指さした。
「ご苦労だった。後は我々が引き受けよう」
「感謝します。イギリス軍が出張るとは聞いていませんでした」
「君たちの出撃の後、派遣が間に合ったのだ」
ウォーレン中尉の口調はあくまでそっけない。
「君たちが知らなくても当然だ」
ウォーレン中尉の部下が動き出した。
それは、戦闘を開始する直前の展開機動にしか、美奈代には見え

なかった。
ただ、都築達は、コンテナを引き渡せばいいのかな？
程度にしか事態を把握していない。
「……ところで中尉」
「何だ？」
部下の動きを止めることもないウォーレン中尉に、美奈代は訊ねた。
「イギリス人にしては、南部なまりのアメリカ英語をしゃべるのは、何故ですか？」

ヴォォォッッ！！
突然、鍾乳洞を機関砲の砲声が支配した。
ウォーレン中尉からの返答は、腰部にマウントされていた機関砲の乱射だった。
何発かに一発混じっている曳光弾が鍾乳洞内部で光り輝き、鍾乳洞の壁を砕いた。
普通なら蜂の巣にされることは避けられない攻撃だが、シールドを構えた染谷騎は、一瞬でその全弾を避けきった。
反射神経の優れた騎士が駆るメサイアが世界最強でありうるのは、その攻撃に対する高すぎるまでの回避能力故のことだ。
美奈代が至近距離からの機関砲の乱射を避けられたのは、騎士としての能力の賜以外の何者でもない。

「そちらの本当の所属を明らかにせよ！」
部隊が戦闘態勢をとっていることを確認した美奈代は怒鳴った。
「これは国際騎士法に基づく要求である！
国際騎士法第3章交戦規定に基づき、所属官姓名を予め明らかにしない場合、捕虜待遇を受けることは出来ないことを警告する！」

「――ふん」
その警告をウォーレン中尉は鼻で笑った。
「国際騎士法を戦場で順守する物好きがいるものか」
ウォーレン中尉騎が腰から抜いたのは大型のコンバットナイフだ。
鞘から抜かれた途端、ナイフの刃が怪しい光に包まれた。

「注意してください」
牧野中尉が言った。
「あのナイフ、対装甲貫通魔法がかけられています」
「対装甲貫通魔法？」
「魔法による装甲コーティングを無力化します。まともに喰らったらアウトですよ？」
「……了解」

「私をコケにしてくれたお礼はしっかりさせてもらおう！」
グウォォォォォォォッッッ！！
まるでウォーレン中尉の怒りを形にしたように、ウォーレン中尉の駆る“テンペスト”の魔晶石エンジンが吠えた。

「機種判明っ！」
牧野中尉達、近衛のＭＣ（メサイア・コントローラー）が一斉に怒鳴った。
「グレイファントムＭ１４！配備されているのは――」
その怒鳴り声をかき消すかのように、“テンペスト”達が一斉にナイフを抜いた。

「ソーコムです！」

「ソーコム？」
美奈代は斬艦刀を構えつつ、きょとんとした顔になった。
「何のメーカーですか！？こいつら、民間軍事会社の人ですか！？」

「何バカ言ってるんですか！違いますよ！」
牧野中尉は頭を抱えた。
「ＵＳＳＯＣＯＭ――アメリカ特殊作戦軍ですっ！」

アメリカ特殊作戦軍の配備するグレイファントムＭ１４。

それは、大統領警護騎士団向けに開発された重装備型グレイファントムＭ６４を高機動強襲型に改造した特殊騎中の特殊騎だ。
騎体の上半身を若干小型化し、装甲がＭ６４より薄くした分、防御性能は落ちるが、軽い分の機動性の向上と、任務にあわせた様々な改装が可能なのが強みだ。

一世代前の“征龍改（せいりゅうかい）”で勝負になる相手ではない。
最悪なことに、その数は美奈代達の倍を超えている。
メサイアの手が持つ小型速射野砲（ハンド・キャノン）のタクティカル・レーザーがなめ回すように美奈代達の騎体を走る。

相手騎の性能は圧倒的だ。
下手に戦えばひねり潰されるのがオチだ。

――どうする？
背中を、嫌な汗が流れたのを感じながら、美奈代は自問を続ける。

――どうする？

下手に動くだけで小型速射野砲（ハンド・キャノン）で蜂の巣にされる。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッド・タンクにでも喰らったら火だるまの究極形態にされてしまうだろう。

……。

……え？

……火だるま？

「おい、待てよ」

美奈代が自問する中、動いたのは都築だ。

横を見ると、武器を下げた都築騎のコクピットハッチが開き、中から都築が出てきた。

唖然とする美奈代の前で、モニターにズームされた都築は、両手をあげて薄ら笑いを浮かべていた。

「そっちの隊長さん。名前、なんて言ったっけ……まぁ、いいや。聞こえているか？」

「――聞こえている」

ウォーレン中尉は答えた。

「ちなみに、私はウォーレン中尉だ」

「ああ。そうそう、ウォーレン中尉だ」

都築は手を広げたまま、頷いた。

「若い頃のヴァル・キルマーかと思ったよ」

「――その態度の目的は何だ」

……少しはノレよ。

小さくそうつぶやいた都築は言った。

「こいつを収めたいだけさ」

「収める？」

「要するに、ことの発端は――」

都築の右手が美奈代騎を指さした。

「ホームズかマーロウだか、とにかくそこのバカが、名探偵だか、タフ気取りのアホ刑事になっちまったのが原因だ」

「……」

ウォーレン中尉は無言だが、“フッ”という鼻息が小さくスピーカーに入った。

「マーロウとは、フィリップ・マーロウのことか？」

「そうだ。俺の憧れさ」

都築は楽しげに言った。

「奴にならケツ貸しても良い」

「たいした心酔ぶりだ」

ウォーレン中尉は苦笑混じりに言った。

「だが、奴は私立探偵だ」

「検事局元捜査官だろ？」

「……ふむ」

ウォーレン中尉は都築の答えが気に入ったらしい。

「よろしい。話は聞いてやろう。何がしたい」

「ＯＫ」

都築は答えた。

「最初から無かったことにして欲しい」

「出来ると思うか？」

「――――何」

ウォーレン騎のタクティカル・レーザーが都築の腹部を照射する中、都築は肩をすくめた。

「ここにいるのは、どうせ俺達とあんた達だけだ。あんた達は、あのコンテナもって帰れば手柄になるし、俺たちは帰って泉を袋だたきにしてウサ晴らせば、なべて世界はこともなしで回るんだ」

「ムゥ……」

ウォーレン中尉は、少しの沈黙の後、訊ねた。

「名は、なんと言ったかな？」

「都築だ」

「冥途の土産に覚えておけ、若造」

都築の体が、ぴくりと動いた。

「我々の任務は、反応弾の回収ともう一つ、貴様等の口封じだ」

「俺達が帰らなければ、“鈴谷（すずや）”が黙っていないぜ？」

「お前達を始末したあと、ゆっくり料理させてもらうことになるだろう」

「……はぁっ」

都築は盛大なため息をつくと、大きく手を振り上げ、興奮した口調になってわめきだした。

「何が気に入らなかったんだよ！おっさん！何か金になるようなブ

ツが欲しいのか？それならはっきり言えよ！」
コクピットにも潜り込んだ都築の駆る“幻龍改（げんりゅうかい）”が突然、美奈代騎の広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクを掴んだ。

「――泉、タンクをはずせ」
突然、レシーバーに入ってきたのは都築の小声。

「え？」

「いいから、責任は俺がとる」

「……」

普段なら反論もしただろう。
だが、その真剣な声を聞いた美奈代の手は、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の整備用着脱スイッチを押していた。

「サンキュ」
都築は言った。

「お前、普段からそれ位素直なら可愛いんだよな」

「なっ！？」
都築騎が、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクを片手で持ち上げ、まるでウォーレン達に見せつけるかのようにちらつかせた。

「どうだ！？日本製の特殊リキッドが入った火炎放射装置だ！リキッドの成分は非公開だから、こいつ一つ、横流しすれば大もうけ出来るぜ！？」
都築は広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を何気なく地上に置いた。

「まだ不満か？――――なら、こいつもつけてやる！」
次に都築が取り出したのは、腰のサイドスカートにマウントされていた手榴弾の入ったウェポンラックだ。
都築はそれを広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の下に置いた。
「どうだ！？これだけでもかなりの金額になるはずだ！それとも女か！？そこの騎にいる泉って女なら、いくら楽しんでくれてもいいぜ？どうせ嫁のもらい手なんて期待出来ない女だ！」

「……き」

「これで見逃せ！それでいいだろう！？」

「……き、貴様ぁっ！！」
そんな声が挙がったのは、美奈代ともう一人。
ウォーレン中尉だ。
交渉を持ちかけられたはずのウォーレン中尉は、モニターの中で顔を真っ赤にしていた。
顔に浮き上がった血管と皺ですさまじい形相になったウォーレン中尉が、レシーバーが悲鳴を上げたほどの声量で怒鳴った。

「貴様、それでも軍人かぁぁっっっ！」

美奈代は、今までの人生の中で、ここまでの怒鳴り声を聞いたことがなかった。
「敵に機密兵器を渡して助けろだと！？貴様、軍人としての矜持はないのか！？日本軍はそんないい加減なことを認めるのか！？」
その怒鳴り声を聞いて、ウォーレン中尉が教官向きの人物だと思ったのは、何も美奈代だけではない。
「私の部下ならたたき殺している発言だ！取り消せ！」

「交渉持ちかけられて取り消せって、あんたどういう神経してるんだ？」

「こんなものは交渉ではない！」

「じゃあ、どんなのが交渉だと？」

「そんなことは自分で考えろ！」

「……はぁっ」

都築はわざとらしいほど盛大なため息をついた。

「……交渉決裂ってわけ……か」

その時、都築はちらりとウォーレン中尉を見た。

「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）、もう一発オマケしてあげるけど？ダメか？」

返答は、ウォーレン中尉騎からの一発だった。

「おいおい」

皆が武器を構える中、攻撃を受けた都築騎だけが、両手を広げて見せた。

「その返答も、ずいぶん、金がかかってるじゃねぇか」

「――次は外さん」

ウォーレン中尉は夢に見そうなほどドスの効いた声で言った。

「覚悟しろ。このクソガキ」

「はいはい。せいぜい、覚悟します――よっ！」

ドンッ！

突然、都築騎の背後でそんな音がしたかと思うと、何か巨大な物体が都築騎の背後から鍾乳洞の天井めがけて飛び上がったのは、都築騎が背負ってた広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクだ。

「――逃げろっ！」
都築の短い怒鳴り声を受け、美奈代達は一斉に脇穴の中へ飛び込んだ。
「逃がすかっ！」
M１４（ハンド・キャノン）が持つ小型速射野砲が一斉に火を噴いたが、飛び上がった広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）に気をとられた一瞬が命取りになった。
その射撃はシールドで防御され、美奈代達が全騎、脇穴に飛び込むのを止めることは出来なかった。
「クソッ！」
獲物を逃したウォーレン中尉が舌打ちした。
その頭上で鈍い爆発音がした。
「ち、中尉っ！」
「――――ん？」
不意に、頭上が明るくなったことに気づいたウォーレン中尉は、目の前で発生した光に包まれたのを、確かに感じた。
「なっ！？」

粘っこい、腹に響く音が背後から迫る。
「撃てっ！天井を壊せっ！」
都築がそう怒鳴ると、手にした機動速射野砲を、逃げてきた鍾乳洞の天井めがけて乱射する。

「落盤させて通路を塞ぐんだ！」

「そんなことしたら」

「し損なったら死ぬぞ！」
真っ青になって怒鳴る美奈代に、都築は答えた。

「それが狙いなんだよ！」
速射野砲の砲撃で、天井から剥がされた幾枚もの巨大な岩盤が逃げてきた穴を塞いでいく。
「？」
何事が起きたかと怪訝な顔をする美奈代の目の前。
落盤の煙を照らし出す光が穴を走ってくるのが見えた。
それは、炎の塊だった。
炎が通路一杯に自分達めがけて走ってくる。
「なっ！？」
美奈代はそれが何だかすぐにわかった。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のタンクが爆発した炎だ。
美奈代騎と都築騎の2騎分のリキッドタンクの爆発が生み出した炎が、広大な“大聖堂”を舐め尽くし、まだ獲物が足りないと、美奈代達めがけて襲いかかっているのだ。
あの炎がどれほどの破壊力を持つかは、使用者である美奈代には骨身にしみている。
「――ひっ！」
美奈代が小さく悲鳴を上げた、丁度の瞬間、今までで最大の落盤が発生。
美奈代の目の前で、洞窟が完全にふさがれた。

カシム大鍾乳洞が完全に崩落したのは、美奈代達が脇穴から鍾乳洞を脱出してからすぐのことだった。
崖を遮蔽物にして騎体を隠した美奈代達は、生きた心地さえしない。
「頭上と目の前でリキッドタンクが爆発したんだ」
都築の声がレシーバーに入った。
「目の前で火のついたリキッドが飛び散る。避けても頭上からもリキッドが降り注ぐ」

クックッ……続きは楽しげに言った。
「どっちにしても、あの中尉達が無事のはずがねぇ」
「……だ、大丈夫か？」
美奈代は訊ねた。
「何が」
「相手は米軍だ。それを」
「イギリス軍に偽装していたんだ。それに、あいつ自身は、自分達をアメリカ軍とは名乗っていない」
「……っ」
「あくまで国籍不明の部隊として処理出来る」
「もとを正せば」
都築は怒鳴った。
「泉っ！貴様がヘンなことしなければよかったんだ！」
「へ、ヘンな事？」
「あんな尋問じみたことしやがって！あれであの中尉、バケの皮剥がされて怒ったんだ！」
「そ、そんな！」
「それは違うだろう」宗像が言った。
「どう考えても、あれは都築、お前にコケにされたからだ」
「俺は普通に話していたぞ？」
「どこがだ？」

「――ちょっと静かにしてください」
言い争いになりかけたのを止めたのは、牧野中尉だ。
「“鈴谷（すずや）”と通信を回復させています」
「“鈴谷（すずや）”は無事ですか！？」
「通信が……」
「ま、まさか！」
最悪の事態が脳裏に浮かぶ美奈代に、牧野中尉はたしなめるような口調で言った。

「悪い方へ悪い方へ考えるのは、候補生の悪い癖ですよ？」
「す……すみません」
「こちら宗像騎、桜庭」
宗像騎のＭＣ（メサイア・コンダクター）、桜庭優（さくらばゆう）の声がレシーバーに入った。
「すぐ近くで戦闘音」
「どこだ？」
「はいお姉さま。１１時方向。騎数は複数。エンジン音の特性から、主体は魔族軍メサイア部隊と思われます」
「――――何？」

戦闘はそれから数分の後も続いていた。

行くか。
無視するか。

選択肢を巡って部隊は割れた。
結局、様子を見て判断することになって、斥候に出たのが美奈代と都築だ。
メサイアから降りて、崖を駆け上がった。
鍾乳洞の中にいたせいで、時間の変化に気づかなかったが、外はすでに真っ暗になっていて、月の青白い光が世界を照らし出していた。
美奈代達は、コクピットから出た時に目印にしていた一番高い崖の上に出た。
アフリカの夜の景色がパノラマとなって美奈代の目の前に広がる。
夜は闇。
その先入観がある美奈代の目の前は真っ暗なはずなのに、月の明かりで信じられないほど世界がはっきりと見える。
「頭が高い」

都築に言われ、景色に見とれ始めていた美奈代はとっさに伏せた。
乾ききったアフリカの土の感触が戦闘服ごしに伝わってくる。

ズーン
ズーン

鈍い音がする。
メサイアの戦闘音だと、すぐにわかった。

「俺が状況を確認する。お前、周囲を見張ってくれ」
腹這いになって暗視装置付きの双眼鏡を構えた都築に言われ、
「了解した」
美奈代は素直に従った。
二人で双眼鏡をのぞき込んでいて、振り向いたら妖魔に頭からかじられていたなんて、想像さえしたくない。
美奈代は、コクピットから引っ張り出してきたＭ１４の弾倉にフルメタルジャケット弾を装填した。
さっきのメサイアもＭ１４だったな。
美奈代はそんなことを思いながら、周囲を警戒することに専念した。
だが、美奈代の目にもはっきりと映るものがあった。

棒状に伸びた幾本もの光だ。
軽く見積もっても１０本以上。
その中でも一本の光の棒が最もよく動く。
そして、その棒状の光が動くたびに、まるで花火のような、短い光が生まれ、最低でも一本の棒状の光が消える。

「何だ？」
目を凝らす美奈代に都築は言った。

「一本は間違いねぇ」
だめだ。壊れている。
都築は双眼鏡をケースに戻しながら言った。
「斬艦刀だ」
「斬艦刀？」
「ああ。夜間訓練の時、斬艦刀の光を遠くで見ると、あんな感じだった」
「じ、じゃあ」
「そうだ」
都築は頷いた。
「俺達以外にも、このアフリカに派遣されていた部隊があるってことさ」
二人の目の前で、再び棒状の光が動いた。
「――戻るぞ」
都築は言った。
「ここで見物している位なら戻っていい」
「加勢しなくていいのか？」
「加勢が必要か？あれで」
都築が顎でしゃくった先。
すでにあれだけあった光は、ほんの2、3本になっていた。
「下手にかかわると厄介だ。下がろう」
「う……うん」
崖を降り始めた都築に、美奈代は黙って従うことにした。

美奈代の背後で、月明かりに照らされた世界から、鈍い戦闘音だけが聞こえてきた。

龍の目覚め

「人類だと？」

青い水を満面とたたえる美しい海辺。

そこに並ぶのは、魔族軍のメース“ツヴァイ”達。

片膝をついた発進待機姿勢のツヴァイのそれぞれの手には、大型のビームカノン砲、魔族軍側呼称“大型魔法弾発射筒”が握られている。

メース第２０３小隊。

それが彼らの所属。

その指揮官はシグリッド少佐である。

メース使いとして先の戦争でも敵味方に知られた歴戦の猛者。

神族軍メース撃破数２００騎を越えるエースの一人だ。

ただ、生粋のメース使いではなく、元が地質学者として人間界に来訪、そのままヴォルトモード卿の主張に呼応してその軍に身を投じたという、ちょっとした変わり種だ。

そんな少佐にとって南米は実に魅力的な土地であった。

むき出しの地層を興味深げに眺めつつ、海辺を散策していた少佐は、副官であるムブナ中尉から受けた報告に足を止めた。

「はい。地域防衛に配置された弓兵部隊からの報告です。司令部は、先日付近に現れた“白いメース”達であると断定しています。ただ、場所はもうパナマから目と鼻の先です」

「司令部は何と？」

「相手にしていません」

「ん？」

「敵は多くても８騎程度。偵察であることは明白です。下手にしかけて司令部の位置を明らかにしたくないというのが、本音でしょう」

「……成る程？」

「それにしても連中の動きはヘンです」
「……うむ」
ムブナ中尉の言葉に、シグリッド少佐も頷いた。
「他にもいくつか類似の動きを、沿岸部各地で観測しています。飛行機やメースや艦艇や……一体、人類は？」
「まるで我々を挑発しているともとれるな。それに関して、司令部は？」
「牽制だろうと……兵力はむしろアフリカに集中しつつあります。スパイの情報では、数日中に、海峡越えで侵攻が開始されます。我が軍は、各所に設置した地下陣地から迎え撃ちます」
「ほう？」
少佐は楽しげに頷いた。
「成る程？本命がアフリカなら、こちら側の戦力を少しでもここに貼り付けておきたいということか――けなげなことだ」
「どうなさいますか？」
「敵の現在位置は？」
「こちらへ向けて移動中。一昨日から定期便のようにルートが決まっています」
「そうか」
「――やりますか？」
「やってはならないというワケではあるまい？」
シグリッド少佐はきびすを返した。
「人類側メースというのには、私も興味がある」
「はっ！総員乗騎ぃっ！かかれぇっ！」

●アフリカ上空
本当に、世界は広い。

美奈代の目の前、スクリーン一杯に広がるのは、行けども行けども広がる大地。

国営放送のドキュメンタリーは好んでみていたが、その中の出来事でしかない風景は、美奈代の疲れ切った意識を癒してくれる。

本来、戦闘中は原則禁止されている全面モニターモードに切り替えると、美奈代の体はアフリカの空を飛んでいるような錯覚を覚えさせてくれる。

美奈代にとって、この“錯覚飛行”は、ちょっとした楽しみだ。

インド洋の島々を越え、そしてアフリカへ――。

無限とも錯覚する草原を動物の群が走っているのを追い抜く。

ふっと、口元が緩むのが止められない。

大地と空に抱かれていると、自分は戦争をしに来ているのに、それ自体がどうしようもなく馬鹿げてさえ思えてくる。

――本当に、いい所だな。

美奈代は見る物すべてが嬉しくて仕方ない。

まるで初めて玩具を買ってもらった子供並みにはしゃぐ心を表に出さないのがやっとだ。

「ポイントCまで後1分」

三騎フォーメーションの先頭、二宮騎から警告が入る。

「都築、騎体の予備パーツは残りわずかだ。こんどしくじったら、半身不随の騎体で動いてもらうぞ？」

「うわ……ロバが交尾してらぁ……えっ!?教官、何か言いました？」

「後で殴る！そう言った！」

「お、俺、何かしましたか!?」

「通信を聞き逃すなっ！」

言葉こそきついが、どこか楽しげな口調の二宮騎の顔が美奈代の騎をむいた次の瞬間――

ピーッ！

「ちいっ！」

警告と二宮の舌打ち。

そして、

バンッ――ギュィィィンッ!!

ドンッ!!

二宮騎のシールドに光が命中、１秒足らずのタイムラグの後、爆

発が生じた。

「ＭＬ（マジックレーザー）攻撃っ！」

牧野中尉が怒鳴る。

「前方、１１時方向、距離１５００っ！」

「そんな所に伏せていたの！？教官っ！」

「降りるぞ、高度を落とせっ！」

二宮騎は、半ば融解してへしゃげたシールドを構えたまま、地上へ降下。

美奈代達もそれに続いた。

「さくらっ！」

「１１時方向に敵、数５。騎種はこの前交戦したあの黒いヤツと同じ！３時方向と９時方向に２騎ずつ！――６時にも２騎っ！」

「囲まれたかっ！？」

「かくもあっさりと？」

シグリッドは、少しだけ拍子抜けした顔で敵を見た。

敵は既に自分達の完璧な包囲網の中。

部下の腕がいいのは当然だが、それにしてもあまりにあっけなさすぎる。

――わざとか？

シグリッドは、一瞬だけそう考えて、すぐにその考えを否定した。

ありえない。

包囲網に落ちたところで、敵に何のメリットがある？

「少佐。仕留めますか？」

「待て――人類側メースのデータが欲しい」
シグリッドは、ビームカノンを構える部下を制した。
「仕留めるのは、それからでもいい」
「――しかし」
「目の前の敵が恐いか？中尉」
「まさかっ！」
中尉は心底意外、という顔で言った。
「もし何でしたら、人類相手に一対一（さし）の勝負でも」
「よろしい」
シグリッドは中尉の言葉に嬉しそうに頷いた。
「それが、今の私達に出来る最大限の礼儀だからな」
「はっ！ヨーン、かかるぞ！？」
「はいっ！」

「敵接近中、距離１２００」
二宮の目の前で、敵騎が滑るような機動を見せる。
機動に無駄がない。乗っているのがかなりのベテランだと、動きだけでわかる。
ホバー移動の手本として教本に掲載したいな。
二宮はふと、そう思った。
前方に展開する５騎のうち、前衛に３騎を出し、２騎を後衛に回した。
それは？
「一対一の勝負を挑んできた？」
まずいっ！
二宮は舌打ちした。
「各騎、斬艦刀即時準備、弾幕を張れっ！」
「効くんですか！？」
「祈れっ！同時に煙幕（スモーク）発射っ！隙を見て逃げるっ！」

ポンッ。

気の抜けたような音がして、メサイアの肩に仕込まれた煙幕弾発射装置から煙幕弾が撃ち出された。

爆発すれば一瞬で騎体を覆い隠すほどの白い煙の柱が、撃ち出された弾の数だけ立ち上り、美奈代達の前方の視界を奪う。

美奈代達は、その柱の向こうへむけ、照準もつけずに火砲を乱射した。

二宮がやろうとしていることは単純だ。

敵から自分達の姿を隠した上で火砲の乱射を行い――とにかく敵の接近を止める。

その間に逃げる。

そういうことだ。

煙幕の別機能、レーダーと熱画像処理双方のシステムへの干渉が即座に始まった。

目の前のモニターのいくつかがブラックアウトした。

「よしっ！行くぞ、ついてこいっ！」

二宮騎からそんな号令がかかったのは、美奈代が１２０ミリ機動速射野砲を撃ち終わったのとほぼ同じタイミングだ。

「了解っ！」

美奈代と都築は浮き上がる二宮教官騎に続こうとした。

だが――

ピーッ！！

「――来ますっ！」

「ちいっ！」

煙幕をかいくぐって突撃してきた敵騎のシルエットが白い煙の向

こうに見える。
美奈代はとっさに１２０ミリ機動速射野砲を煙幕の中へと投げつけた。
ザンッ！
砲が真っ二つに叩き斬られ、漆黒の敵が現れた。

「小手先の技が通じると思うなっ！」
シグリッドは右太股にマウントしていた戦斧を抜き、敵騎にめがけてツヴァイを突進させた。
警報が鳴り響き、メースのエンジン音と戦闘機動の振動が体を揺さぶる。
これが戦場の醍醐味だ！
シグリッドは歓声を上げたかった。
再び立った戦場（いくさば）は、今でも自分を歓迎してくれている！
そう、叫びたかった。
「ムブナ、ヨーン、そのままかかれっ！私の相手は」
シグリッドは、前方に展開していた2騎をすり抜け、最初から目星を付けていた騎に襲いかかった。
「――――貴様だっ！」

「くそっ！」
戦斧がシールドにめり込む感触がＳＴＳシステム越しに伝わってくる。
シールドの予備がないことは、すでに承知済みだが、言ってる場

合でもなかった。
互いに力任せに押し合う。
メサイアの顔同士が、まるでメンチの切り合いさながらに接近している。
「ナメんじゃねぇ――ぞっ！！」
“鳳龍”の膝蹴りがツヴァイの腹を蹴りつけ、ツヴァイの頭突きが“鳳龍”の頭部を捉えたかと思うと、その回し蹴りが“鳳龍”の腹をまともに捉えた。
「都築准尉っ！」
“鳳龍”MC（メサイアコントローラー）の水上中尉が怒鳴る。
「ケンカやってるんじゃないんですからっ！斬艦刀を抜刀して下さいっ！」
「戦争がケンカ以下なはずねぇだろうが！」
都築が怒鳴った途端、コクピットを揺るがすほどの衝撃が再び走った。
「頭部に命中1っ！」
「――っのぉっ！」
都築はもう一度殴りに来たツヴァイの拳をぎりぎりでかすと、その背後に回るか否かのタイミングで、その腹めがけてもう一度膝蹴りを、おまけとばかりに背中にひじ鉄をくらわした。
ツヴァイが地面に叩き付けられ、都築はその顔面めがけて力任せの蹴りを食らわした。
「立てコラァッ！」
「こらぁっ！」
水上中尉がずり落ちかけたメガネを戻しながら怒鳴った。
「ケンカは止めなさいっ！」
「すぐに殺してやるから大丈夫っス！」
敵騎を容赦なく蹴り続ける都築は言い返した。
「補導歴8回、“西の狂犬”の名はダテじゃねぇ！」
腹部に入った蹴りの一撃で、ツヴァイが文字通り吹き飛ばされた。

「補導歴２４回、“聖高の鬼姫”と言われた私がやめろといってるんですっ！」
「ダメですっ！」
都築の横で怒り心頭の声をあげたのは“鳳龍”の精霊体“十六夜（いざよい）”だ。
幼い顔が怒りで真っ赤になっている。
「女の子の顔に傷（アヤ）入れたら、死んでもらうのが相場です！」
十六夜の顔に傷はないが、その器であるメサイアの“顔”に拳が入ったことに、十六夜は怒り狂っている。
「マスターっ！斬艦刀抜刀して下さいっ！今ならたっぷりオマケ付けますからっ！」
「――――よっしゃぁっ！」

「――――くっ！」
シグリッドは、一瞬、自分が失神していたことを悟った。
目の前の計器類はいくつも死んでいるか、悲鳴のような警報を鳴り響かせるか、はたまた死亡通知のような赤い警告を上げている。
モニターの向こうには、敵騎が長剣をぶら下げて近づきつつある。
軽く頭を振ったシグリッドは、迫り来る敵を前に、ツヴァイの手に戦斧を握らせた。
「なめるなぁぁぁっ！！」

ザンッ！

斬艦刀の一撃がツヴァイの戦斧を叩き斬った。
「な！なんだと！？」

「女の子の顔を張るとはぁぁぁぁぁっ！」
十六夜は目を見開いたまま怒鳴った。
「死ねぇぇぇぇっ！」
「瞬間最大出力が１２００％越え！？」
水上中尉は、たたき出された数値に目を見張った。
そして、その結果を即座に理解し、青くなった。
「十六夜、止めなさい！そんな高出力を供給し続けたら、斬艦刀のコンデンサーが持たないっ！」

「ぬぉっ！？」
シグリッドは、戦斧を真っ二つに叩ききられたことに、少なからず狼狽した。
「じ、人類の技術はここまで！？」
戦斧は単なる金属の斧ではない。
騎体から供給される魔力によって敵の装甲をかち割ることの出来る立派な魔法兵器だ。
それとぶつかって、真っ二つにへし折るとは――――！！
「や、やるなっ！」
嫌な汗が背筋を流れ、体内を何か不快感が走る。
それが忘れかけていた恐怖という感情だと気づき、シグリッドは

自分を取り戻した。
「ふふっ――――ハッハッハァッ！！」
ツヴァイのコクピットにシグリッドの笑い声が響く。
「楽しませてくれるわっ――――人類がぁっ！」
振り下ろされる敵騎の長剣。
シグリッドはその柄を抑え、その腹部に蹴りを食らわした。

「ちぃっ！」
バランスを失い、ひっくり返る“鳳龍”。
その手が持つ斬艦刀のあちこちから煙が立ち上り、刀身の光が消えた。
「コンデンサー破損、斬艦刀がっ！――――だからもうっ！十六夜、どう落とし前付けるんだい！このバカ娘がぁっ！」
「ご、ごめんなさぁぁいっ！」
「とにかく！」
ヤクザ顔負けのドスの効いた声で怒鳴る水上中尉と、その声におびえ、都築に縋り付く十六夜を前に都築は叫んだ。
「光剣を抜刀してくださいっ！」
「了解――――十六夜、寿命が延びたわね」
「ふぇぇぇぇんっ」
「十六夜――――大丈夫だ」
都築は、そっと首を回すと、おびえる十六夜の頬に軽くキスをした。
「俺を信じろ。お前の顔にアヤ入れたヤツは――――叩き殺す」
「はいっ！」

「このぉぉおっ！」
ツヴァイの右腕に仕込んでいた光剣を抜いたシグリッド騎に、敵は騎体に仕込まれたＭＬ（マジックレーザー）を乱射しながら接近、滅茶苦茶な太刀筋で攻めまくる。
「余程上手いのか、それとも単なるバカか！？」
型もへったくれもあったもんじゃない。
これが剣術使いなら、素人も同然だ。
だが、それだけに逆に攻撃を予測出来ない。
「こんな――――っ！」
隙を見て、シグリッドは敵騎の胸に蹴りを入れた。
吹き飛ばされた敵騎が、地面を抉りながらスライディングして止まった。
「デタラメがいつまでも通用するかぁぁっ！」
敵騎が立ち上がり、再び斬りかかってくる。
「まだやるのか！？――――ええいっ！」
シグリッドは敵騎の剣を止めた。
「中のメース使いの面が見てみたいものだ！」

シグリッドの駆るツヴァイは、シールドを構えて突撃してくる“鳳龍”めがけて逆襲に出た。
ツヴァイの肩部シールドと、“鳳龍”のシールドが激突。
“鳳龍”の光剣が逆袈裟斬りに走り、ツヴァイが体勢を低くしてかわす。
ツヴァイの横薙の一撃を、その懐に飛び込んだ“鳳龍”がツヴァイの動きごと止める。
「――――くっ！」
全身にアドレナリンが走り、体が熱くなる。
このギリギリの感覚が、何より楽しい！！

「さぁ、いくぞ人類っ！」
「少佐っ！」
シグリッドの通信機に部下の声が入る。
「人類側の増援が接近中っ！」
「何！？」
「ヨーン少尉がやられました！ムブナ中尉も大破、騎体、後退しますっ！」
「ちっ！」
――いい所なのに！！
シグリッドは、舌打ちすると部隊に命じた。
「後退するぞ！バンとシーンはヨーン騎及びムブナ騎の回収を！」
シグリッドはしつこく迫る敵騎の一撃をかわすと、大きく後ろにジャンプした。
「その騎体、覚えておくぞ！？未熟者のメース使いめっ！」

●“鈴谷（すずや）”ハンガー
「ごめんなさぁぁぁいっ！」
ベッチン！
ベッチン！
“鳳龍”のMCL（メサイア・コントローラー・ルーム）付近からそんな音と共に、女の子の泣き叫ぶ声が聞こえてくる。
水上中尉が十六夜のお尻をひっぱたいている音と、許しを請う十六夜の泣き声だ。
都築がなんとか止めようと思いはするが、どうしていいかわからず、MCL（メサイア・コントローラー・ルーム）のハッチの前でオロオロしている。
「――よく帰ってきたよ！」
その間近で、美奈代はさつきに抱きつかれた。
「敵のメサイアと戦闘って聞いた時は青くなったんだからぁ！」

さつきは泣きそうな声をあげ、美奈代の肩を何度も揺すった。
「さつきさんったら」
うっすら涙を浮かべる美晴が言った。
「聞いた途端に左腕が使えなくても良いから出せ！って」
「美晴だってハッチ開けろって！」
「――そうか」
仲間の思いに気づき、美奈代は目頭が熱くなった。
「ありがとう」
素直に頭を下げた。
「心配をかけたけど、生きて帰ってきた」
「よしてよ！」
さつきは言った。
「初陣で撃破４でしょ！？目出度い限りよ！」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「いい加減にしてくださいっ！」
美夜を夕食に誘いに来た二宮は、艦橋に入った途端に飛んできた美夜の金切り声に思わず飛び上がった。
一体、何を怒られたのかわからず、目を点にする二宮の前で、艦長席から立ち上がった美夜が顔を真っ赤にしてスクリーンを睨み付けていた。
「毎回毎回、どうしてそんな無茶ばかり！」
「これは命令だ」
スクリーンの向こう側。
そこは、アラビア海から遠く離れた東京だ。
一体、顔面に筋肉を持っているのかさえ疑わしい仏頂面を浮かべるのは、作戦部の田辺部長だ。

彼の後ろには、東京の夜景が映されている。
何故、東京タワーなのかはわからないが、少なくとも近衛軍飛行艦隊司令部が、東京タワーに近い場所に存在しないことだけは、二宮も知っている。
その目の前で、背景が次々と変わる。
春の富士山が映える田子の浦と近衛軍にどんな関係があるのかは、さらに知らない。
お祭りの山車に近衛が関係しているとは思えない。
日本を遠く離れた飛行艦乗り達への精一杯の配慮。とでも言うつもりだろうが、二宮には、怪しい外国人が日本を騙るためにでっち上げた背景としか考えられない。

「“鈴谷(すずや)”は針路を変更し、アラビア半島を横断、バーレーンに向かえ。海に出るな」
「何故、ホルムズ海峡経由ではないのですか！」
美夜は顔を真っ赤にして怒鳴る。
「この“鈴谷(すずや)”の貧弱な武装で、ただでさえ政情不安定なアラビア半島を、活きて横断出来ると？“鈴谷(すずや)”に沈めというんですか！？」
「作戦部は“鈴谷(すずや)”に対し、隠密行動をとることを命じる」
「飛行艦に隠密行動なんてとれると本気で考えているのですか！？副司令を出してくださいっ！」
「副司令は会議中だ」
「今度はどこの料亭です！」
「……アラビア海は明日から嵐だよ。平野艦長」
脅し文句を言いかけた美夜をとがめるように、田辺部長は言った。
「嵐？」
美夜は、田辺部長の映るメインモニター横の気象情報ディスプレーを見た。
「……サイクロンは」
「違う」

田辺部長は、その太い猪首を横に振った。
「嵐が吹くのだ」
「……は？」
「本来なら、バーレーンさえ……いや、バーレーンこそが危険なのかもしれない」
「……？」
怪訝そうな顔をする美夜に、作戦部の部長は続けた。
「しかし、すでに補給物資はバーレーンに納入されている。現地米軍基地で受領してもらうしかない。“鈴谷（すずや）”をどう動かすかは、それからだ」
「……一体？」
「これは一般回線だ。平野艦長」
田辺部長は、何かを振り切るような顔で、そして強い口調で美夜に言った。
「これは厳命である。“鈴谷（すずや）”はバーレーンの米軍基地にて物資補給後、現地にて別名あるまで待機せよ」
「……」
「――もう一度、言わせる気か？」
「わかりました」
美夜は敬礼した。
「実習艦隊と合流のためこれより変針、艦隊合流後はアラビア半島を横断し、バーレーン米軍基地へ向かいます」
「……幸運を祈る」

艦長席に乱暴に座ると、背もたれにもたれかかり、美夜は歯を食いしばる。その肩は小刻みに震えていた。
「一体……司令部は……何を……」

●“鈴谷（すずや）”　艦長室

夕食後、斬艦刀に関する報告書を読み終えた美夜は、前に座る二宮へウィスキーの入ったグラスを差し出そうとしてやめた。

「どう思って聞かれても」

二宮は首を傾げた。

「他に情報は？」

「別に」

美夜も困惑気味に答えた。

「心当たりがないから聞いているのよ」

「嵐なんでしょう？たとえば、気象情報とか」

「インド洋はタイフーンの時期だけど……そういえば」

美夜は席を立つと、新聞記事をまとめたバインダーを持ってきた。

「最近、妙に暗号レベルが高められてはいるのよ」

「近衛内部で？」

「おかげでこんな新聞記事まで暗号2種の圧縮便よ？解析に手間取って朝刊がお昼になってようやく届くの。私、朝に新聞読まないと調子が悪いっていうのに」

「カタブツらしい生活習慣ですこと」

「言っておくけど、競馬新聞は新聞じゃないからね」

「私が読むのはスポーツ新聞よ――それで？」

「世界はなべて事もなし。海軍がようやく予算手に入れて、大規模演習が出来るって喜んでる」

「演習？」

「そう。予備役まで動員するかなり大きいものになるそうよ。陸軍も負けじと演習準備中」

「この不況の時によくやるわ。お隣の中国ならわかるけど」

「……その中国はインド洋から南シナ海で活動を活発化させている」

「それが？」
「インド洋に3個空母部隊が展開している。数日前にマラッカ海峡を超えている」
「3個は多いわね」
「でしょう？裏情報ではあっちの陸軍部隊は無期限待機状態に入ったというし」
「……」
「――ま、連中の考えがわからないのはいつものことだもの」
美夜は肩をすくめた。
「飲みなさいよ。これからはアラーの縄張りに入るんだから」
「しばらくは――飲酒出来ないわね」
「禁酒の中東圏ですからね」
「いいじゃない。バレるもんじゃないわよ」
手を伸ばす二宮より先に、美夜は席を立った。
「私は紅茶にする」
「コーヒーよ」
「紅茶。あなた飲み過ぎよ？将来、絶対、胃に来るわ」
「コーヒー」
「……頑固者。それはそれで、教え子のスコア申請、認められたんだっけ？」
「そう！」
二宮はそれまでの渋い顔はどこへか、満面の笑みを浮かべた。
「魔族軍メサイア初撃破は長野大尉だけど、複数連続撃破はあの子が初めてなの！戦闘記録を見てよ！踏み込みから武器の使い方、最初から最後まで文句の付けようがないから！」
「……親ばか」
心底嬉しそうな二宮の顔を見て、美夜は笑いをかみ殺すのが精一杯だ。
「そう言えば――もう一人の秘蔵っ子だけど」
風間祷子のことだと、二宮はすぐに見当をつけた。

「何かわかった？」
自分用の紅茶をもって、美夜は席に戻ってきた。
「旦那経由（あのくそやろう）の情報だから確かだと思う」
紅茶に口をつけた美夜はソファーの背にもたれかかった。
「あっちもアフリカに送られていた。配属先は開発局直属の特務隊――例のアフリカに送られている部隊がそれよ」
「まさか」
「“笠置”は知ってるわね？開発局が保有する実験艦」
「……速度６０ノットの超高速艦だったわね。確か、人類最速とか」
「そう。“笠置”を母艦にしてモザンビーク付近に展開しているけど、そこで新型の性能調査中とか」
「……」
「問題は、新兵をそんな所に送り込んできたことだけじゃないの」
「えっ？」
「その部隊……いろいろ隠しているけど、派遣された騎士の正式な所属は、天皇護衛隊（オールドガーズ）よ」
「なっ！？」
天皇護衛隊（オールドガーズ）は、天皇を護衛することのみを任務とする最精鋭部隊。
その名を聞いた二宮は、危うくティーカップを落とすところだった。
「な、なんで！？」
「ダンナも、さすがにそこまでは……というか、あなたの古巣でしょ？心当たり、ないの？」
「……実は」
二宮は、長野での演習のことを美夜に話した。
「その新型騎……天皇護衛隊（オールドガーズ）主導で建造されたんじゃないの？」
「……いや、それはない」
二宮が首を横に振ったのは根拠がある。
あの演習の時、監視に来ていたのは麗菜内親王（レイナ）の護衛隊、内親王護衛隊（・ガーズ）だった。

あの騎の主導権を天皇護衛隊（オールドガーズ）が握ってるなら、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）が介入する余地はないはずだ。
「さすがに笠置は足が速いわ」
二宮の困惑に気づかないのか、美夜は言った。
「アフリカにもう到達していて、部隊出撃回数は１０回以上――――教え子のスコア、気になる？」
「スコア？」
二宮は目を丸くした。
「あのボンクラちゃんがスコアを獲得したの！？」
「あんたね……仮にも教官がそんな愛称で」
「風間候補生、怪我してない？おうち帰るって泣いてない？」
「どういう心配してるのよ」
「ガーズのオヤジどもにセクハラされてないかしら――――あーっ！もうお嫁に行けない体にでもされていたら！」
「……まぁ、素行不良中年全開オヤジ共の集まりだからねぇ」
「でしょう！？」
二宮は膝を叩いた。
「あんないろんな意味で危険な連中の所に、私の娘を送り込むなんて耐えられないわ！」
「スコア４８騎」
激高する二宮に、美夜は言った。
「……は？」
二宮は意味が分からない。
「昨日６時時点でのその子のスコアよ」
「……４８？シミュレーターの結果？」
「実戦よ」
美夜は眉をひそめた。

「初陣で１０騎を血祭り。あまりの活躍に、ガーズの連中、今じゃ“姫さん”って傅(かしづ)いているそうよ」
「……あの子が？」
「そう」
美夜は頷いた。
「あなたのアヒルの子は、白鳥どころか不死鳥にでもなったみたいね」

ビーッ！

美夜のデスクでインターフォンが鳴った。

「私だ」
美夜が受話器を取る。
相手は副長の高木だ。随分困惑した声をしている。
「司令部から緊急？」
その内容を聞く美夜の手からティーカップが落ちた。
「……わかった」
強ばった声で、美夜は頷いた。
「本艦には当面、直接の影響はないだろう。司令部は作戦継続を指示しているんだろう？……クルー達には明日、私から説明しよう。それまでは箝口令を敷け。明日、０７００にハンガーへクルーを集合させろ……うん……頼む」
ハァッ。
美夜の口から盛大なため息が出た。
「どうしたの？」
部屋の掃除道具入れから雑巾をとってきた二宮が、床を拭きながら訊ねた。
「あなたらしくもない」
「……してやわれた」

「何を？」
カップが割れていないことを確認し、床にひろがった紅茶の海を丹念にふき取る二宮は、床だけに意識を集中している。
「国連軍司令部が爆弾テロでやられた」
「……えっ！？」
「６時間前。それと３時間前」
「……」
「中華帝国軍が近隣国境線を突破した」

赤い龍　目覚める

中華帝国にも、戦時総動員法は存在する。
国防動員法という。
戦時体制下に入り次第、国家は国内のあらゆる人員、物資を無制限に動員出来ることを保証している。
その時、この法律が発令されたことは世界の多くの国が知っていた。
民間船数千隻が動員されたことも知っていた。
ところが、中華帝国はそれをすべて「長期間にわたる訓練にすぎない」と言い切っていた。
そして、世界は愚かにもそれを信じた。

その結果が、これだ。

東南アジア一帯の国々を、船舶に満載された兵士達が襲った。

●ベトナム　第8防空ミサイル基地
ベトナムの空を守る基地が炎上していた。
対空ミサイルが爆風にへしゃげ、ロケット燃料がタンクごと燃えていた。
生き残った兵士達が必死に消火を試みているが、一度火のついたロケット燃料はそう簡単に消えてはくれない。
「だ……だめです！」
生き残った通信装置に、兵士が苦しげに報告する。
「ミサイルが――――ぐっ！？」

ズンッ！

破損し、炎上を始めていたミサイルがついに爆発。
兵士は跡形もなく吹き飛ばされた。

「くそっ！」
その光景を司令部のビル――――今となってはビルの残骸だが――から見ていたのは、基地司令のグエン大佐だった。
自分の基地が、部下と共に焼かれていく。
表現のしようのない怒りが体を駆け回っていく。
「レーダーから報告！海からの攻撃と思われます」
副官の報告に、グエンは怒鳴った。
「そんなことはどうでもいい！」
ズズンッ！
また別なミサイルが爆発した。
「どこの攻撃だ！」
「国境防衛隊は中華帝国軍と交戦を開始！」
「……くそっ！」
怒りのあまり、ガラスがすべて割れたサッシに、グエンは手近なものを投げつけた。
あらい息のまま、グエンは一人呟くように言った。
「ベトナムが灰になるぞ……チンクめ！！」

●中印国境線
「早期警戒機より警報！“赤兎（せきと）”多数、国境線を突破した！」
「多数って、何騎だ！？」
「反応は１００以上！」
「１００！？」
「……情報入った！修正っ！２００！２００を越えている！」

「こっちは３０騎だぞ！？何をどうしろというんだ！」

●北京　紫禁城

「奇襲は各地で成功しています」

「――そうか」

鷹揚な態度で頷くのは、中華帝国の摂政だ。

「モンゴルはウランバートルを制圧。政府首脳部を捕縛に成功。すぐに無条件降伏文書及び帝国への国家編入宣言を出させます」

「中東の油田地帯はどうか」

「ペルシャ湾に展開した精鋭特殊部隊が米帝海軍基地を強襲しております」

「今のところ、戦果はどの程度だ？」

「艦艇３隻大破、弾薬庫及び燃料庫の破壊に成功。基地機能は喪失しております」

「よろしい。東南アジアはどうか」

「ラオスとタイは反応弾により沈黙。ベトナムは機甲部隊がサイゴンまで侵攻。特殊部隊がフエの王族の捕縛に成功」

「……インドもか？」

「前線のメサイアはほぼ全滅。“赤兎（せきと）”による掃討作戦が開始されつつあります」

「アメリカや日本、ロシアは？」

「すでにロビイストが押さえてあります。日本は、アメリカが動かなければなにも出来ません」

「よろしい」

摂政は満足そうに頷いた。

「これだけの戦果ならば、陛下にもきっとご満足いただけるだろう。総書記に言っておけ――しくじりは死を意味するとな」

「はっ」

●帝国海軍小松航空隊基地

「可動全機は、スクランブル体勢のまま待機だっ！」

「総員非常呼集っ！寝ているヤツはたたき起こせっ！」

「警務隊はすべての小銃に弾込めろっ！基地への出入りは原則禁止だっ！」

整備兵とパイロット達があわただしく動き回り、ブンカーからＳｕ－３５ＩＪが引き出される中、別な編隊が離陸しようとしていた。

「司令」

「――――うむ」

管制塔に入った柏少将は、その光景を厳しい表情で見つめていた。

在職３０年近く。少なくとも娘が生まれてからの１９年間、訓練以外でこの光景を見たことがなかった。

副官である黒田中佐が報告する。

「３０３が対ミサイル迎撃戦闘装備で出動待機中。３０６はすでに上がっています。防空隊、臨戦態勢」

「もう一度」

柏司令はため息混じりに言った。

「もう一度、状況を説明してくれないか？どうにもこう矢継ぎ早に事態が変わると、私の老いた頭では理解が追いつかない」

「はっ」

黒田は咳払いの後、上官に報告した。

「本日未明、中華帝国が近隣諸国へ向け侵攻を開始。侵攻の理由は、自国民及び自国に属する民族の保護。すでにアフガニスタン他、ほとんどの国は首都陥落」

「早いな」

「メサイアとヘリ主体の空中機動部隊、それと、民間船舶を偽装した海軍揚陸部隊による完全な奇襲です。何より、満足な装備のない近隣諸国では、あの人海戦術は止められません」
「帝国政府の対応は？」
「政治屋（ながたちょう）連中に満足なことが出来ると思いますか？」
黒田は肩をすくめた。
「口先では政治家主導なんてご大層なことといいますが、せいぜいが霞ヶ関（クソども）にお伺いを立てるのがやっとでしょう？」
「……」
柏司令は肩をすくめた。
「幸い、国防省の規定に基づいてデフコン2が発令されて現状があります」
デフコンは、戦争への準備態勢を5段階に分けるアメリカを真似た規定であり、デフコン2は、近隣諸国が他国に武力侵攻した場合に発令される最高度に準じる防衛準備状態と規定されている。
規定。
発令された理由は、それだろうと柏司令は思った。
「それと、君塚外相はロシア帝国大使を呼び、ロシアの対応を確認中」
「どうなった？」
「ロシア帝国は、中華帝国の膨張を望まない――その言質を得ています」
「中露のタッグ相手だけは回避出来たか」
「不幸中の幸いです。モンスーン級メサイアのコピー問題で国境戦争の一歩手前だったのも幸いしています」
「ロシアからの中華帝国への攻撃は？」
「ありません」
「……」
最初から期待していなかったらしい。
柏は当然、と言う顔で頷くだけだ。

「アメリカも、抗議するのが関の山だろう？」
「ヨーロッパ各国も、です」
黒田は不快そうに頷いた。
「国債をはじめ、世界経済の決定権は今やあの国にあります。債権者にケンカを売る債務者はいないでしょう」
「ましてやこの国では……」
深いため息と共に、柏は訊ねた。
「首相は？」
「後援会や支持団体と未だにゴルフ中とか」
「いいご身分だ」
「確かに――おう」
黒田が部下から紙片を受け取った。
「大韓帝国は中華帝国支持を表明。それと、台北を出港した中華帝国海軍機動部隊が南シナ海に展開。現在、バシー海峡は完全に海峡封鎖されています」
「我が国への侵攻はないと思いたいが……」
「残念ですが」
黒田は首を横に振った。
「大韓帝国からのミサイル攻撃で、対馬レーダーサイトに大打撃が生じています。現状、陸軍が対馬へ増援部隊を送り込んでいます」
「那覇レーダーサイトが攻撃を受けました。１時間前です。３０分後、那覇航空隊所属の対潜哨戒部隊が潜水艦１を撃沈。音紋から大韓帝国帝国の攻撃型と断定されています」
「……他レーダーサイトからの通報は？」
「いまの所、帝国領内に侵攻する航空機及びミサイルは確認されていません」
「確認されたらもうアウトだよ」
柏司令は、その厳つい肩を揺らせて笑った。
「撃ち落とすのが、我らの義務だがね」
司令達の見上げた空。

それは、いつもと同じ、抜けるような蒼穹の空。
いつも見上げてきた空だ。
「この空を、血で汚すのは避けたいものだな……」
柏司令は、ポツリとそう呟いた。

その日以降、世界は激変した。

後にそう呼ばれる日。

中華帝国軍による近隣諸国への武力侵攻。
そして、無関係に近いアメリカや周辺国を含めた無差別に近い電子戦。
これらが開始された日だ。

武力侵攻を受けた国が被害をより大きくし、それ以外の国の対応が遅れた最大の理由。
それが、電子戦闘専門の兵力数万を擁する中華帝国軍電子戦闘師団による電子戦闘攻撃。
彼らによって、念入りに準備された電子戦闘用ウィルスやハッキング、その他、あらゆる手段が用いられた攻撃が世界中を襲った。

先進国で特に被害を被ったのは、日本だ。

こうした攻撃に対して無防備に近い日本は、中華帝国軍が後に“拍子抜けした”と語ったほど、あっけなく国家としての機能を停止した。

公共機関や施設のサーバーやコンピューターをあらかた破壊され、町中では信号機すら動かない有様。

変電所に仕掛けられた爆発物の影響もあって、家庭への電力供給ですらストップ。

全国の7割近い世帯が２４時間以上電力供給を受けることが出来ない事態に陥った。

３６時間後に、政府があわてて海外とのインターネット回線を物理的に切断した後も、それを待っていたように、中華帝国軍は日本国内からの攻撃に切り替えた。

留学生を装って配置していた電子戦部隊が、ようやく復旧しかけた企業や政府へ攻撃をしかけ、予め用意してあったサーバーからのウィルス散布に切り替え、執拗に攻撃を継続する。

欧米でも類似の事態が発生したのは言うまでもないが、日本政府とほとんどの大企業が、非常手段として、すべての業務においてパソコンとサーバーの使用を禁止したのは、事態発生から実に１５０時間後のことであり、当然ながら世界で最も遅い結果となった。

その間隙を突き、中華帝国軍のメサイア“赤兎（せきと）”と“帝刃（ていば）”が、次々と国境を突破、隣国に侵攻する軍の先陣を切り、あらゆる敵を薙ぎ払う。

街を住民ごと焼き払い、抵抗する兵士を踏み殺す。

片鱗も躊躇もない攻撃の後、戦車や装甲車、そして兵士達が続く。

中華帝国という赤い竜は、虐殺と略奪、そして暴行の嵐を世界中

に吹きちらかした。

特に、歩兵部隊は、メサイア以上の破壊をもたらしたとさえ言われている。

占領地ですべてを略奪し、女を犯し、殺すのは、むしろ彼等の仕事。

その仕事ぶりは、中華帝国軍の侵攻を受けた街から命がけで逃げ出し、その中華帝国軍の暴虐の一部始終を撮影したテープを世界に配信した米国人ジャーナリストによって白日の下へと曝された。

抵抗する女を犯しながら酒を飲み、銃を乱射する兵士達。

赤ん坊を銃剣で串刺しにして放り投げる兵士。

燃えさかる街。

あちこちに転がる死体。

銃声と女の悲鳴がこだまする廃墟と化した街。

その光景は、あまりに残酷過ぎるとして、ほとんどモザイク処理してようやくテレビに流せた程であったが、それ故に、そのインパクトは各国に計り知れない衝撃をもたらした。

――中華帝国討つべし！

世論はそう動いたが、経済界を中心に、政府や社会上層部はまるで知らん顔を決め込んだ。

この振る舞いを非常識だと避難する前に考えてみて欲しい。

今、この地球上に住む以上、避けて通りづらいことがある。

中華帝国製の服を着て
中華帝国製の靴を履いて
中華帝国製の食い物を食べ

中華帝国製の玩具を子供に与え
中華帝国製の部品で動く車に乗り
中華帝国製の道具で仕事をして
中華帝国製の布団で眠る。

そして、いや、不可能に近いことは一つだ。

近隣にゴキブリと中国人がいない地域に住むこと。

これだ。

ここで言う人とは誰のことか？
この世界に住んで、中華帝国を非難する人々のことだ。
世界は中華帝国に依存しきっている。
かの国にケンカを売れば、国内の中華人達が暴動を起こし、国内の物流は止まる。
食料も、衣類も、何もかもが止まる。
そうなれば国境を封鎖されたのと同じだ。

世論の主張通り、対中戦争になれば、一瞬で経済は崩壊する。

財界はそれが骨身にしみている。
それが目先のことしか考えられない、自らの無自覚の結果だと反省もなく、火消しのために政府やマスコミに無視や静観を強制した。
特に酷い反応を示したのが、米国だ。
世論がどう言おうが、経済的に依存する中華帝国が対米債権を一度に放出するような事態を受ければ、米国経済は破綻する。
そのカードをちらつかせる中華帝国ロビイスト達に、米国政府は屈した。
自由と民主主義を標榜する米国がこの事態を前にしたこと。

それは、遺憾と懸念の意を示すだけ。
東南アジアで女子供が強姦され、奴隷として扱われても、米国はその程度しか動かない。
米国の関心はむしろ、中華帝国の持つ対米債権の行方そのものだ。

対米債権をもって米国は沈黙すると最初からわかっていた中華帝国は、侵攻作戦開始から、驚くほどの短期間でアラビア海、インド洋、アラフラ海、黄海、太平洋、東シナ海、南シナ海の7つの海を制圧してのけた。

「規模の大小はあれど、これほど短期間に7つの海を支配した国は他にはいない」と、かつて7つの海を支配したイギリスの新聞記者が嫉妬と軽蔑を込めて書き上げた通りだ。

その中で、“鈴谷(すずや)”が予定されていたアラビア海のコースではなく、突然、アラビア半島の横断を命じられたのは、この中華帝国軍との交戦を避けるためだと、すぐに理解できた者は、“鈴谷(すずや)”にはいなかった。
すでにアラビア海は中華帝国軍の空母部隊が我が物顔で遊弋(ゆうよく)している。
空母に核兵器を持つ中華帝国軍に対抗出来る海軍力を持つ国は、アラブには存在しないし、“鈴谷(すずや)”でもかなり厳しい。
針路変更を前に、まるでその姿を隠すようにアラビア海をゆっくりと航行する“鈴谷(すずや)”のハンガーデッキに集められた乗組員を前に、平野艦長が訓辞を始めた。

「近衛軍は、この状況に至って、ようやく、本作戦の中止を決定した」
――――やっぱり。

皆がそんな表情をする。
「事態が切迫しており、とてもこちらまで手が回らなかったというのが、司令部の言い分だ」
平野の額に青筋が走っているのを、美奈代は確かに見た。
「嫁が艦長を務める艦に対し、私は悪くないという弁明と、すべては中華帝国のせいだと思えという理不尽な言い分だけを……安否や労いの言葉さえなく、わざわざ暗号電文で送ってきた薄情者とは帰国次第、離婚することとして――だ」

離婚。
美夜の斜め後ろに立つ二宮の顔が、その言葉を聞いた途端に少しだけ緩んだのを、美奈代達は見逃さなかった。

それに気づかない美夜は、ハンガーに集められた乗組員を前に、平野は背後に容易した巨大な世界地図を指示棒で叩いた。

赤く染まっている所は報道を聞く限りでは中華帝国の支配地域だと、美奈代達にもすぐ見当がついた。

「現状、米国は中立を宣言しているが――」
指示棒がインドネシアに触れた。
インドネシア周辺は真っ赤に染まっている。
「インドネシアは開戦当日に首都ジャカルタに反応弾攻撃を受け、無条件降伏。近隣諸国も人海戦術の結果、中華帝国に占領されるか、反応弾を怖れて中華帝国の支配下に入った。――そして」
バンッ!!
平野の持つ指示棒が叩き付けられたのが、オーストラリアだ。
「白人の誇りさえ忘れたこのクソ共が、ついさっき、よりにもよって中華帝国支持を表明した!ニュージーランドとかいうオマケも一緒にな!」

「……」
それがどういう意味をもつかは、美奈代にもわかった。
太平洋とインド洋を遮る壁のように存在するインドネシア。そしてその壁の終わりを担うオーストラリア大陸。
それがすべて中華帝国の支配地域になったのだ。
ここを敵国である日本に属する美奈代達が生きて通れるとは思えない。

美夜は続ける。

「マラッカ海峡とその迂回路を完全に中華帝国に抑えられた格好だ。このままでは中東からの石油輸入が途絶え、我が国は経済的に枯死することになる」
「……」
「しかも、中華帝国は中東の石油を狙い、すでにペルシャ湾に揚陸艦隊を派遣している」

（うちの国も）
美奈代は思った。
（それくらい、段取りよく動けたらいいのにな）

「すでに奴らはサウジアラビアに上陸。海水淡水化プラントが連中に占領された。サウジアラビアは水資源に乏しく、必要な水の多くを海水淡水化プラントで生み出している。プラントを抑えられるとはすなわち、水を抑えられたこと、ひいては国家国民の生殺与奪権を握られたことにもなる」
「……」
「現在、サウジアラビア軍がプラント防衛及び奪還のため死力を尽くしている所だ。

バーレーンの米軍は、この事態を前に動けない有様だ。
中華帝国が、余程怖いと見える」

「……」

「その怖い中華帝国軍が遊弋するアラビア海を避けていくしかない。
何しろ、アラビア海をこのまま進めば、中華帝国海軍が相手になる。
アフリカに戻れば魔族、ペルシャ湾横断を目指せば、我々の相手は中華帝国かアラブ近隣諸国か、はたまたラムリアース帝国……いずれにせよ、選択肢にならない」

「……」

美奈代は、茫然として美夜の話を聞いていた。
アフリカからやっと逃れてきたというのに、今度は人類相手に出口のない状態に陥るなんて、何の冗談だというのだ？

「我々は当初の予定通り、バーレーンに向かう」
美夜は言った。
「地元ベドウィンでさえ通わぬこの砂漠が、我々の隠れ蓑だ。
想定される航路は約２１００キロ。
“鈴谷（すずや）”はこれ以降、低速でゆっくりと、時間をかけて向かう。
これ以降、我々にとっては、接近するすべてが、環境でさえもが敵だ。
各科は、最低限度の兵員以外、すべて２４時間の監視体制に参加すること。
絶対に、対空監視を怠るな。瞬きする間も惜しみ、空と砂漠に注意を払え。
バーレーンに入るまでの辛抱だ。
バーレーンに到着次第、我々は補給物資を受領し、次の作戦に移る。

それまでに、状況が何らかの好転を見せることを祈るしかないが、そんな希望を云々する前に、生きてバーレーンにたどり着けねば話にならない。

各員は、鉄の意志をもって任務にあたり、万事において最善を尽くせ――生きて祖国に生還するために！私が晴れて離婚届にハンコを押せるためにっ！！」

砂漠を超えて

●ルブアルハリ砂漠

ルブアルハリ砂漠は、アラビア半島南部の3分の1を占める世界最大級の砂漠の一つだ。

その名の語源に近い所では、「何もない所」となるらしい。

近年まで人が通うこともなく、知られることもなかった未開にして不毛の土地だ。

夏の気温でさえ夜は氷点下に下がり、正午には摂氏55度に達する激しい温度差。

エッフェル塔（324m）より高い砂丘もある荒涼とした大地。

その過酷な世界故に、「地球上で最も近寄りにくい環境の一つ」ともいわれる程だ。

「まさか砂漠で」

美夜は腕をさすりながら言った。

「暖房を使うハメになるとは思わなかった」

「昼間は冷房ですよ。艦長」と、副長の高木は言った。

船窓の外は夜明け。

朱に染まった“鈴谷（すずや）”艦橋で、ブリッジ要員達が普段通りの仕事をこなしていた。

普段より皆早い配置であるにもかかわらず、動きに乱れはない。

「艦長、時間です」

艦長席に座った美夜に、腕時計を確認した高木が報告した。

「よし」

美夜は、従兵の持ってきたコーヒーを飲み干すと、アームレストに装備されているインターホンをとった。

「真理？準備はいい？」

「良好よ」

艦橋の前に立つ二宮騎が軽くシールドを揺らした。
二宮騎の他、数騎のメサイアの右腕には、速射性能に優れた３５ミリガドリング砲がマウントされている。
ガドリング砲は背面に背負われたバックパックから補弾ベルト経由して弾丸を供給するシステムを採用しているため、長時間の弾幕展開が可能だ。
ＭＣ（メサイアコントローラー）の管制もあり、上空からのミサイル攻撃に対するＣＩＷＳの代わりには十分すぎる。
他の騎も、バックパックからベルトで補弾する１２０ミリ機動速射野砲を構えている。
対空戦闘能力は、これで万全だ。
何より――。

「ＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）、全周囲展開、即時待機っ！」
魔法の力場であるＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）は、接触するものすべてを原子単位に分解する絶対のバリアーでもある。
普段は艦を力場に浮かせる水として利用するため、喫水線下にのみ発生させるが、有事の際は、艦全体を包み込むことも出来る。
魔力をより強く必要とするため、長時間の展開は航行に支障を来すことになる欠点はあるが、少なくとも実体弾に対抗するこれ以上の防御はない。

――大丈夫だ。

美夜は自分に言い聞かせた。
艦はボロいけど、乗組員はベテラン揃い。
大丈夫だ。
私は夫（あいつ）を殴りに行けるっ！

「機関長」
美夜は命じた。
「機関前進、第三戦速――――“鈴谷（すずや）”、発進っ！」
「了解――――メインバイパス供給正常、機関エネルギー充填１２０％、フライホイール始動、フィールド形成を確認。“鈴谷（すずや）”、発進します！」
魔晶石エンジンからパワーを供給されたＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）推進機関が軽い振動を残して“鈴谷（すずや）”を前進させる。
前進を開始した“鈴谷（すずや）”の艦橋を始め、各部署では指揮官達の号令が怒号混じりに飛び交っていた。
「対空警戒、怠るな！」
「手空きの者はすべて対空監視に回せっ！」
「整備兵は機銃座へ！」
「ランチはすべてエンジンに火を入れておけっ！」
「メサイア隊への弾薬供給、大丈夫だろうな！？」
部下達のきびきびとした動きと言動に、美夜は満足そうな浮かべて何度も頷く。
「全く、あのバカ亭主」
美夜は悔しそうに唇をかんだ。
「書類不備を理由に作戦行動中の部隊を動かさないなんて！」
「後方勤務なんて、そんなもんですよ」
高木は肩をすくめた。
「ご主人のことで文句は言いたくないですが」
「何？」
「もし、帰ってからご主人殴るようでしたら」
美夜の目の前で、高木は笑いながら言った。
「一発多めに殴っておいて下さい。我々の代わりに」

「……ふっ」
パンッ！
美夜は右手の拳を左手の掌に叩き付けた。
「……楽しみだわ。いろいろと」

“鈴谷（すずや）”は航行を続ける。
何もない所を航行する初日は、敵どころか一切の船舶に遭遇することさえないままに過ぎた。

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「接近する機影有ります！」
艦長席の上、レーダー要員が報告をあげたのは、それから翌日の午前１１時。
あと半日でバーレーンに達する付近でのことだ。
レーダーを警戒して“鈴谷（すずや）”は高度を海面ギリギリ、わずか５０メートルほどの高度に設定して、速度１０ノットの無音航行を続けていた。
飛行艦の航行音から存在を把握されないための措置だが、時速に換算すれば１８キロとという速度はとにかく遅い。
そして、レーダーに隊商らしい反応がある度に針路を変えるため、未だに砂漠から逃れることが出来ない。
「どこからだ！？」
緊張の連続も少しだけゆるみ、うつらうつらしかけていた美夜は、その声に弾かれたように反応した。
「アラビア海方面から本艦へ向け接近中。距離２５０。呼称、ボギー１」

艦橋の真上に設置されたスクリーンに反応が表示される。
「機種、わかるか？」
「速度からしてプロペラ機です。反応は……Ｔｕ－１４２に類似」
「Ｔｕ－１４２？」
美夜は首を傾げた。
「ロシアか？」
「空警二号ではありませんか？」
レーダー要員はそう進言した。
「Ｔｕ－１４２の早期警戒機のコピーと聞いています」
「データ出せるか？」
「はい――あっ、ボギー1、針路変えます」
「気づかなかった……か？レーダー、現在の我々の位置は？」
「ライラから南西へ約２００キロ」
「こっちのレーダー攪乱装置が勝ったと思いたいが……中華帝国軍の陥落（おと）した航空基地で最も近いのは？」
「おそらく、昨日、陥落が確認されたアラブ首長国メダ空軍基地かと思われます。距離は約７００」
「航続距離は約一万五千……か。不可能ではないが」
「艦長」
高木が顔をしかめた。
「先程のが早期警戒機だとして」
「放っておけ」
美夜は言った。
「連中が警戒しているのは我々ではなく、米軍だ。こんなちっぽけなフネなんて相手にせんよ」

●アフリカ　キリマンジャロ　魔族軍司令部

「お招きいただいて感謝します」

豪奢なソファーに座った神音が、その細い足を組み直しながら言った。

「補給はいかがですか？」

「……完璧です」

神音と向かい合って座るのは、カーメン大佐の上官にあたるユム中将だ。

神音にとってはライバル会社の一社員であり、ユムからすれば、相手はライバル会社の大社長となる。

ユムは、背の高い細身の体つきで、死んだ魚のようなギョロリとした冷たい目を光らせている。ソファーにゆったりと座り、長い足を組んでいる。

人を見下した態度ともとれるが、この男には不思議と似合う姿勢だった。

「受領したメースの配置も……そういいたいが」

「ザンジバルあたりでは、部隊ごと敗北したとか」

「よく知っておられる」

ユムは、ちらりと脇に座る男を見てから頷いた。

「すでに損害は５０騎では足りん……増援も送る端から倒されて――現有戦力の下では、補充を送る余力さえない」

「一体？」

神音もその存在に興味を持った。

「人類の、どの国の、どれほどの規模の部隊です？」

「……実は」

ユムは深いため息と一緒に答えた。

「問題なのは――たった１騎なのです」

「たった……１騎？」

神音は目を見張って、その細い指を一本だけ立てた。

「たった１騎で……５０騎を？」

「昨日の被害で通算５８騎。白いメースで、前線では“白い死神”と呼ばれています」
「……白」
神音は、その色で所属に見当をつけた。
「……由忠にいろいろ聞くべきね」
「ん？」
「いえ、こちらの話です。それで」
神音は話題を変えた。
「今の人類は、魔族への抵抗どころの騒ぎではないでしょうね」
「これほどの年月を経ても、人が進歩していない証拠ですな」
「……ビジネスライクにお話ししましょう」
一口、口を付けただけで顔をしかめた神音は、紅茶をテーブルに置いた。
「今回、追加ご希望で“ツヴァイ”“サライマ”計五百騎とのことですが、納入予定は一ヶ月です」
「“ツヴァイ”と“サライマ”は３００年前のクロッツェリア動乱の際に大量建造された騎。現在の帝国軍では第二線と三線配備――第一線配備騎とは、性能的に隔世の差が」
「いや、それでもかまわないのです」
ユムは答えた。
「先の戦争に関する、我々が解除できる最後の封印を3日前に解除することに成功しました。ここにいたのは、メース乗りが中心。あまりグレードが最新過ぎると、彼等が扱いきれるか不安です」
「ツヴァイは確か」
「そうです。先の戦争当時の規格と同じですから――まだ」
「成る程？人類が操るメース、人類側名称はメサイア――あれ相手なら、ツヴァイでも余裕で主導権を握れます。問題は武器です」
「そうでしょう。我々もそう思っていました。ところが、エルプス系魔法を兵器に転用出来る技術力を、人類が持っていると、先程ようやく判明したところでして」

「白い奴も使っているんですか？」
「はい」
「同系統の対抗魔法を装甲に付与するのでしたら、追加料金が発生しますよ？」
ユムの横に控えていたユギオが疲れ切った顔で頷いた。
「……格安で頼みます」
「人類側のエルプス系魔法の普及率は低いでしょうけどね。むしろ問題は今後の継戦能力の確保」
「その通り」ユムが頷いた。
「補給線が細すぎます」
「人間達が残した宝石、現金、金……その他、各地に放棄された人類側兵器……要するに、人間側の金目のモノ全ての引き渡し、それと、例のお約束を御守りいただければ、赤字覚悟のお見積もりをお出しできます」
「滝川村、ですか？」
ユギオの問いかけに、神音は頷いた。
「日本、少なくとも滝川村に攻撃を仕掛けない。これが、我が商会との交渉開始条件です。維持していただきたい」
「向こうから襲ってでも来ない限り、攻撃はしかけません。ユム中将、よろしいですな？」
「反古にするつもりはないが」
ユムは喉を鳴らすような低い笑い声をたてた。
「クックックッ……全世界と、たった一つの村の安全を引き替えにするとは」
「――感謝いたします」
神音は、ハンドバッグから書類を取り出すと、ユギオに手渡した。
「……額的には、妥当な額ですな」
「恐れ入ります」
「追加で発注を希望する装備があるので、別室に控えている参謀達

に確認して下さい」
「はい。それで？」
神音は、ユギオとユムを見た。
「私をアフリカくんだりまで呼びつけた用件は終わりですか？」
「いえいえ」
ユギオは楽しげに微笑んだ。
「現状、人類は互いに疑心暗鬼になり、互いを牽制することに精一杯で、全てを結びつけることまで思考が出来ません」
「中華帝国が動くのも？」
「――――ああ」
ユギオは、ほくそ笑んだ。
「あれは……ちょっと、耳元で囁いてあげただけですよ――――今なら、アメリカは動けませんよ？とね」
「呆れた！」
神音は言った。
「全ては、あなた達のお膳立て――――気づかぬは当人ばかりなりって具合に」
「おやぁ？長年、アフリカ方面での人類側侵攻を阻害し続けていたのは、我々中世協会だけでなかったようですが？」
神音はそっぽを向いた。
「……いただくモノをいただいていませんもの」
「アフリカの鉱物資源採掘に、ドワーフ族を大量動員していたと聞きますが？」
「まぁ、いろいろと方法はあるものです――――」
黒いゴスロリ風のドレスを着込む神音は、衣擦れの音と共に、テーブルに乗った紅茶に手を伸ばし、ユマの質問を誤魔化した。
「少なくとも、国連軍司令部を建物ごと爆破したのは、私ではありません」
「あれは――――どなたの仕業でしょうねぇ」
「あなたではなかったの？」

「まさか」
ユギオは、首を横に振った。
「どうしようかなぁと考えながら街のスタバでコーヒー飲んでいたら、新聞に爆破されたって書いてあるじゃないですか。思わずコーヒーをおかわりしてしまいました」
「人類の仕業だと？」
「おそらくは、アフリカに債権を持つ国の謀略ではないかと」
「それこそ、中華帝国の仕業では？あなたにそそのかされた」
「まぁ、そうでしょうねぇ。何しろ、あの国は紛争当事国に武器を売り込んで、政治的対立を内戦に、内戦を無政府状態に引き込む天才的な連中ですから」
「あのテロの翌日よ？あの連中が国境を越えたのは」
「……成る程？ハハッ。あまり興味がなかったので忘れていました」
ユギオは、そこで突然、真顔になった。
「ところで」
「そろそろ、本題に入りませんか？」
「――本題？」
「うむ」
「我々が神音様にお越しいただいたのは、他でもありません」
ユギオは真顔になった。
「――お知恵をお借りしたいのです」
「私の？」
「ヴォルトモード卿の封印についてですが」

1時間後。
部屋を辞した神音は、別室に控えていた神音とそっくりな顔をした部下、かのんにバッグを手渡した。
「物資引き渡しは?」
「順調ですじゃ」
かのんは、そう言って、主人たる神音の後に続く。
「兵糧、大型妖魔用飼料、薬品からトイレットペーパーまで、よくこれだけ物資が不足したままで戦争が出来たもんじゃ」
「戦争は偉大な浪費というでしょう?取りこぼしはないわね?」
「ございませんのじゃ」
「そう。こっちも商談成立よ――かのん」
「おめでとうございますじゃ」
「急いでタヨトに“ツヴァイ”500騎と“サライマ”300騎、それとキズスには“ヌーヴェル・エッジ”を急いで手配するように通達。かのん、あなたはこのリストに載ってるだけの装備を3日以内に確保なさい。」
「歩兵用速射槍に甲冑に楯……兵糧に……ふむふむ。しめて三万ラガは確実じゃが」
かのんは最後の項目に凍り付いた。
「……ご主人様?」
「何?」
「こ……この……最後の項目は、本気ですか?」
「――そうよ」
「ガ……ガストラフェテスなんて、何に使うつもりなのじゃ?あれは妖魔とはいえ、特級の」
「いいこと?かのん」
神音は言った。
「我々は商人であって、求められた物を売るのが商売。売ったあとのことまで責任はとれないわ」

「……」
「手配しなさい」
「……了解じゃ。それよりご主人様」
かのんはこっそりと自らの主人に告げた。
「あのチョビが殺されたのじゃ」
「……中世協会を調べていた？」
「そうじゃ」
「……」

紆余曲折の末、“鈴谷（すずや）”がバーレーンに入ったのは、命令から実に3日目の昼すぎのことだ。
魔族軍の攻撃は一切なかった。

ただし、まるで“鈴谷（すずや）”と入れ替わるかのように、ラムリアース帝国軍をはじめ、各国がアフリカめがけて兵力を大量動員しているという情報が美夜達に届けられただけだ。

「暑い！」
手でパタパタと風を送ってみたものの、熱風しか来ないことを知ったさつきは、信じられない。という顔つきで空を仰ぎ見た。
「何よこれ……ここ、本当に地球？」
「言い過ぎだと思うが」
「美奈代は、暑くないの？」
「私も暑い」
「二宮教官も平野艦長も、これじゃあ外に出ないだろうしね」

「仕事で忙しいんだろう？」
「何言ってんのよ」
さつきは楽しげにポンッ。と、美奈代の肩を叩いた。
「この太陽の下、この暑さに“あの二人”が出てごらん？すぐにシミになって、メイクが崩れてそれはもう――」
そこまで言いかけ、愕然とするさつきの前を通りかかったのは、その二人だった。

「――ふむ」
甲板の上で女性士官が腕立て伏せをしている。
「この炎天下の下、真面目な士官だ」
エーランドはそうつぶやくと双眼鏡から目を離した。
「それにしても」
ベドウィンに変装したシグリッド大尉がその双眼鏡を受け取りながら言った。
「これは派手にやられましたな」
シグリッド大尉が言うのも無理はない。
船舶が停泊する港周辺の建物のいくつかが黒く焼けこげ、燃料タンクは原形さえ留めていない。何隻かの船が横転したり喫水線をはるかに越えて浸水し、甲板の残して水底に沈んでいる。
ここまで来るまでにも、その余波だろうか。市街地のあちこちが破壊されていた。

中華帝国の破壊工作の結果だ。

本当なら高台から港を見たかったエーランド達だが、銃を持った

兵士達が高台や道のあちこちに立っているおかげで、下手な動きが出来ない。
半日がかりであちこち歩き回り、小高い丘にある繁華街の放置された古いビルの残骸から港が一望出来ることを、ようやく悟ったばかりだ。
このビルは火災にあったらしい。
焼けこげた建材や家具が散らばるビルの物陰に隠れているものの、人間で言うならば白人種に属するエーランドは、その豪奢な金髪を白い民族衣装で隠した。
「水中戦隊の仕業、ではないですな」
「人類の仕業だよ。アフリカ近海から太平洋に至るまで、派手に暴れた結果がコレだ」
「そいつは豪勢だ！」
シグリッド大尉は、その浅黒く日焼けした顔をくしゃくしゃに笑って双眼鏡をエーランドに戻した。
「我々も、どうせならそれ位、やってみたいもんですな！」
「――――しっ」
エーランドは小さく、しかし鋭くシグリッド大尉に言った。
「静かにしろ」

ビルの面した通り。
何か罵声のような大声が聞こえてくる。
すさまじいほどの罵声と銃声、そして悲鳴が聞こえてくる。

銃を手にした男達が集団で大通りを歩いている。
その真ん中にいるのは、黄色い肌をした男女だ。
首からは、エーランド達が読めない文字が書かれたプラカードらしいものをぶら下げている。
男女は１０名近く。
皆、顔から血を流し、立っているのもやっとという有様の者も少

なくない。
そんな彼等を、男達は殺気だった顔で小突いて歩かせている。
立ち止まろうものなら、容赦なく銃尻が叩き付けられ、蹴り飛ばされる。
殴られ、蹴られたくなければ歩くしかない。
エーランド達の目の前で、不意に倒れて動かなくなったのは、まだ服装からして若い女性だ。
ひげ面の男が、銃尻で頭を殴るが女はぴくりとも動かない。
男達が罵声を浴びせ、女を周囲から容赦なく蹴りつける。
それでも動かないとわかるや、体格のいい男がわざとらしい仕草で自動小銃を天に突き上げ、何事か大声で怒鳴ると、銃口を女に向けた。

鈍く乾いた銃声が数発、町中にこだました。

「少佐……あれは」
男達は、小銃弾で蜂の巣にされた女の死体の脚にかけたロープで引きずっていく。
「私刑だ」
エーランドは言った。
「おそらく、この街を攻撃した軍の仲間と思われているんだろう」
「じゃあ、あいつら」
エーランドは無言で手刀で首を切る仕草をした。
「うへぇ」
たまらない。という顔で、シグリッド大尉は舌を出して嘔吐の仕草で返すが、すぐに二人は仕事に戻った。
「とにかく、“鍵”の反応は間違いなく、あの飛行艦から出ている」
「“鍵”は、ここでは降ろさないんですね」
「本国は弓状列島と聞いている。そこまでは、あの船の中だろうな」
「どうします？」

「メースで急襲してとも思うが……」
唸るエーランドの視線の先。
米軍基地に並ぶのは、小豆色のメサイア達。
米軍の主力メサイア“グレイファントム”だ。
無骨なデザインの重装甲が与えられた重厚なフォルムをした巨大な鎧が、四方ににらみを利かせている。
グレイファントムが単なるメサイアだったら、エーランドもここまで躊躇しないだろう。
エーランドは、そっと双眼鏡を構え、グレイファントムを見た。
ざっと見るだけでその騎数は２０騎近く。
そのすべてが武装して周辺を警戒している。
エーランドの双眼鏡に仕込まれた魔力分析装置が、その内の一騎を包む魔力反応を分析する。
装甲に張られた装甲魔法は大したことはない。
多くの騎が持つ速射砲も脅威ではない。
問題は、その手が掴む巨大な戦斧だ。
その無骨なまでの刃先には、攻撃系魔法がかかっている。
エルプス系魔法とは違う。
ダメージ増強系の魔法だ。
だが、その魔法の詳細が分からない。どんな効果があるのだろう？
人類のオリジナル魔法だとすれば、あまりにデータ不足だ。
「あの魔法がどの程度のものかわからないと……」
エーランドが危惧するのは、あの斬艦刀の破壊力を知っているからだ。
数十騎があの武器をもっていたら、わずか４騎で戦を仕掛けるのは愚の骨頂だ。
「リスクが高すぎる」
そう、結論づけるしかない。
「どうします？」
「メースでの下手な攪乱は、逆に連中を警戒させかねない」

すぐ近くで歓声と銃声が響き渡った。

「シグリッド。貴様の艦で、潜入工作に長けたは者は？」

「ウチは元々、そういうのが本業です」

「上等だ」

エーランドは嬉しそうに頷いた。

「今晩、かかるぞ」

誰にとっての悪夢

バーレーンに浮かぶ“鈴谷（すずや）”。
その艦内で警報が響き渡ったのは、もう、真夜中に近い時間だ。
少なくとも、美奈代達は、その音を聞いたことがなかった。
「何？」
美奈代は、ベッドから起きあがろうとして、その手を止めた。
艦内放送が流れた。
「憲兵隊より警告！艦内に侵入者あり！各ブロックを緊急閉鎖、各員はマニュアル所定の対応をとれ。各憲兵隊員は自由発砲許可、各騎士は憲兵隊の指揮下にて対処せよ」

結局、侵入者は見つからず、徹底した調査の結果、艦内での破壊工作等は確認されなかった。
ただ一つ、犠牲者が出ただけだ。
山科という通信科の水兵だった。

一体何故、その場にいたのかわからないが、普段は閉鎖されている物資貯蔵Ｆブロックから外部に通じる“Ｆ４５”緊急脱出用ハッチの間近にある隔壁に頭を潰される格好で死んでいた。
物資貯蔵Ｆブロックは、メサイアのパーツを保管するための区画であり、深夜、人がいるべき場所ではない。
それが問題になった。

憲兵隊が、各通路のセンサーを確認した結果、侵入者が入り込んだのは、その“Ｆ４５”緊急脱出用ハッチだと断定したのだ。
根拠は十分にある。
“Ｆ４５”緊急脱出用ハッチの真下は5メートル程の高さで海面に接している。
不時着水時に艦内から脱出するために用意されたもので、普通は使用されることはない。
そのハッチ周辺から複数の海水に汚れた靴痕と、脱出用のハシゴを引っかけるフックに何かロープのようなモノで擦ったような痕が発見されたのだ。
さらに、ハッチの操作レバー付近に、拭き忘れたと思われる彼の指紋が残されていたことが決定打となった。
彼がハッチを操作し、外部からの侵入者を招き入れたとしか思えない。

しかし、その理由は？

それを解き明かしたのも憲兵隊だった。
水兵の部屋を徹底的に調べた結果、ベッドのフレームにガムテープで貼り付けることで隠されていたのは、白い錠剤の入った袋だった。

「簡易検査の結果、合成麻薬であることが確認されました」
憲兵隊長の鬼塚軍曹が独特の塩辛声で美夜に告げた。
美夜は、顔をしかめながらテーブルに置かれた錠剤を睨み付ける。
「……鬼塚軍曹」
「はっ？」
「全員の簡易検査を。反応が陽性だった者は構わないから営倉にぶち込め」
「了解であります」

「……頼む」
「……それと」
普段なら、命令があればすぐに動く鬼塚軍曹がその場に立っている。
軍人にとって憲兵は関わりたくない兵種の最たる連中だ。
鬼塚軍曹もそれがわかっており、仕事の用件を除いては、普段から誰とも関わろうとしない。
それはつまり、まだ話が終わっていないことを意味した。
「どうした？」
「米軍憲兵隊からの協力要請がありました。同行を願いたいのですが」
「同行？どこへだ」
「米軍憲兵隊本部です」

美夜と副長の高木は、鬼塚軍曹をつれてバーレーン米海軍基地内部にある憲兵隊本部の正面玄関をくぐった。
憲兵隊を率いるマーロウ大佐がオフィスで出迎えてくれたかと思うと、すぐに美夜達は地下にある死体安置室に連れて行かれた。
清潔感とは違う、言いようのない飾り気のない内装をした死体安置室。
ステンレス製の筒がいくつも壁に詰め込まれて並んでいる。
その一つ一つが、死体を保管するための冷凍ケースだと、さすがに美夜も知っていた。
「こちらです」
鬼塚軍曹同様の寡黙な人物で、鍛え抜かれたフットボール選手を連想させるいかつい体格の持ち主のマーロウ大佐は、部下に命じて、美夜達の前に台に乗せられた死体袋を6体、引き出した。
「死体を見たことは？」
「私は軍人です」

美夜の答えに納得したのか、マーロウ大佐はあごで部下に指示を出した。
部下は、無言で死体袋のジッパーを下げた。
「……うっ」
死体袋をのぞき込んだ美夜が思わずうめいたのも無理はない。
真っ白にふやけてた肉塊がそこにあった。
人間の頭部だが、ザクロのように裂けた頭から青白くなった脳漿がみてとれる。
胃液が逆流しなかったのは幸いだ。
「今朝、スズヤの近くの海で発見された――黄色人種であることは間違いない」
マーロウ大佐の部下が、すぐに死体袋のジッパーを戻した。
「遺留品はこれです」
ストレッチャーが音もなく運ばれてきた。
銀色に輝くストレッチャーの上には、着衣だろうウェットスーツや酸素ボンベなどが並べられていた。
「さすがに身元を示すようなモノはなにもない。物好きがダイビングでもして、スクリューに巻き込まれでもしたか？普段ならそうとも考えたが」
マーロウ大佐が手にしたのは、酸素ボンベの脇に置かれていたゴム製のケース。
「状況が状況だ。しかも」
マーロウ大佐はゴム製のケースを開いた。
中からはゴルフボール大の黒いブロックがいくつも出てきた。
「こんなものをダイバーが持っているはずがない」
「……これは？」
マーロウ大佐は、慣れた手つきでブロックを指に挟んで美夜達に見せた。
「爆薬です――他にも」
爆薬をストレッチャーに戻すと、さらに横に置いてあったモノを

美夜達に見せた。
銃身をすっぽりと覆うサイレンサーのバケモノのような銃だった。
「６４式消音短機関銃です」
「……その名前が来るということは」
「そうです」
マーロウ大佐は頷いた。
「昨晩、スズヤに侵入を試みたのは、中華帝国軍ということになるでしょうな」

「我々としても情報が欲しいのです。出航を差し止めることはしませんが、ご協力を」
マーロウ大佐にそうオフィスで告げられた後、
「艦長」
憲兵隊からの帰り道、高木が問いかけた。
「どうされますか？」
「司令部には報告する」
車に乗り込んだ美弥はそっけなくそう答えたが、
「だが……辻褄が合わん」と、腕組みをして唸りだした。
「……は？」
「考えてみろ、高木少佐」
美夜は言った。
「仮に山科がチンク共に買収された内通者だったとして、奴を用済みだと殺したのがチンク共だと見なしてもいい」
「だが……何故、奴らが殺されるんだ？誰に殺されたんだ？」
「そ……それは」
「山科？バカな。あいつは頭を潰されたんだぞ？いくらなんでも、頭を潰されてなお、相手を殺す？ありえた話ではない。何より」
「……」
「……銃ではない。あれは何か、鈍器に近い武器で殺された痕だった」

「では……相手は騎士」
「……鬼塚軍曹」
ハンドルを握る鬼塚軍曹に、美夜は訊ねた。
「聞き忘れていた」
「――はっ」
「侵入者は、どこから逃走をはかった？」
「D区画と思われます」
「……思われる？」
「D区画での目撃情報を最後に、行方をくらませています」
「待ってくれ軍曹、D区画とは」
「……部隊には箝口令を敷いています」
鬼塚軍曹は、後ろを振り返ることもなく、まっすぐ前だけを見ながら答えた。
「佐官以上の高級将校向け居住区画。そこから海に逃れたとしか考えられません」
「なっ……」
「何しろ、ハッチを開かずに脱出するためには船窓が必要です。船窓があるのは、あの辺りだけです」
「しかし！」
高木は信じられないという顔で、鬼塚軍曹と美夜を交互に見るだけだ。
「現在、D区画を使用している佐官は一人だけです」
鬼塚軍曹は乱れることもなく言う。
「誰か、報告しましょうか？」
「いらない」
「……いかがなさいますか？」
しばらくの沈黙の後、美夜は言った。
「二人共」
「はっ」
「……はい」

「この件は、私に任せてもらいたい」
「……はっ」
「……憲兵には、難しい依頼ですな」
「個人的感情を交えるつもりはないが……今、彼女を失うことは、“鈴谷（すずや）”にとっては自滅を選ぶようなものだ」
「……戦時の特別判断としましょう」
鬼塚軍曹は言った。
その言葉には、美夜達も頷くしかなかった。

「“白百合の守護者”が銃殺台の露に消えたなんて話は、自分も聞きたくないですからな」

アメリカ海軍バーレーン基地近くの貧民街。
ビルの廃墟の中で、数名の、見るからに貧民とわかる服装をした男達が暖をとっていた。
流れ者が寝るところもなく廃屋に入り込む光景は、この辺りでは見慣れたものだ。
彼等に誰も注意を払う者はいない。
ただ、もし、彼等に注意を払えば、その中に一人だけ、金髪の貴公子然とした白人系の男が混じっていることに気づいたろう。

エーランドだ。

「まさか」
たき火に手をかざしながら、エーランドは苦笑した。
「始まりから人類と鉢合わせするとはな」

「悪い冗談でしたよ。少佐」
派手なくしゃみをして、シグリッド大尉が鼻をすすった。
「水ん中は得意ですけど、向こうだって武器をもっていた」
「水の中なら百人力だといっていたのは、大尉ではなかったか？」
「モノにゃ、限度というものがありますよ」
「……そうだな」
エーランドはそういうと、ポケットから取り出した酒瓶をシグリッド大尉に手渡した。

潜入工作に慣れたシグリッド大尉の部下と共に敵艦へ侵入し、“鍵”を奪取することを目指したエーランド達は、水中から敵艦に接近。甲板から乗り込むつもりだった。
水中移動用の装備で、ゆっくりと敵艦に接触したエーランド達は、すぐに侵入に適した場所を見つけた。
開けっ放しになったハッチがあったのだ。
エーランド達がそのハッチの真下へと移動して――人類と鉢合わせした。
狼狽したのはお互い様だったらしい。
ただ、人類もすぐに水中でナイフを抜いて襲いかかってきたが、水に慣れた種族であるシグリッド大尉の部下達に勝てるはずがなかった。
彼等により、即座に人類側を仕留め、エーランド達は、人類のフリをして敵艦に乗り込んだ。
ハッチを開いて待っていた人類側の士官の唖然とした顔は、今でも忘れられない。
悲鳴をあげようとしたので、口を押さえて力任せにハッチに叩き付けた。

問題は、それからだった。

「人類の艦の中」
シグリッド大尉は、酒を舐めるように飲みながら言った。
「一体、どうして俺たちが侵入したことがばれたんでしょうね」
「……さぁな」
魔族であるエーランド達が、監視カメラやセンサーを知らなくても当然だ。
「まるで、俺たちがそこにいることが分かっていたように、人類は兵隊を送り込んできた。俺たちは“姿隠し”のスーツを使っていたんですよ？」
「……あれには参った」
「司令部に報告すべきですな」
シグリッド大尉は真顔で言った。
「姿を隠すだけでは通じないなんて、冗談じゃありません。対策を練らなければ、犠牲が増えるだけです」
「――――うむ」

通路の各所に仕掛けられた赤外線センサーの反応を頼りに憲兵隊がエーランド達を追いかけたのだ。
そして、エーランド達は二手に分かれた。
大人数で移動することは極めて危険であるし、しくじった以上、シグリッド大尉とその部下を危険にさらすのはエーランドの美学に反したのだ。
転移魔法により脱出するシグリッド大尉達と分かれた直後、尚も“鍵”を探すエーランドの目の前で開かれたドアから顔を出したのは、妙齢の女性士官だった。
「なっ！？」
驚きの声を上げた女性士官の口を押さえ、エーランドはその部屋に転がり込んだ。
抵抗する女性の手をねじ上げた時、エーランドは奇妙な感覚に囚われた。

この相手とは――――どこかで出会っている。

室内は、最低限度の照明しかない。

その中で、夜目の効くエーランドは、相手の女性士官の顔を再び見ることで、その奇妙な感覚に答えを見いだした。

ソコトラ島で自分めがけて銃を撃った、あの女性士官だった。

薄暗い照明の下

引き裂かれた衣服から除く女の肌

恐怖におびえ、屈辱に泣きそうになる表情

鼻腔をくすぐる女の香り

そして――――女の生殺与奪さえ自由になった自分。

エーランドは男として言った。

「あの時の続きを楽しもうか？」

その翌日　艦長室に二宮が現れた。

「侵入者に殴られたってわけね？」

「……そう」

二宮は、腫れた頬に残る痣を湿布で隠した顔で、美夜の前に立つ。

「それで、殴られたショックで昏倒して気がついたら逃げられた？」

「……そう」

「何で早く言わないの」

「無理言わないでよ。目が覚めたら朝だったのよ？それに」

二宮は頬を指さした。
「殴られたこの顔を見られたいと思う？」
「……」
じっ。と二宮の顔を見た美夜は、ため息混じりに言った。
「もういいわ――下がっていい。不問にしてあげる」
「……失礼します」
二宮は敬礼すると足早に艦長室を出ようとした。
「……真理？」
不意にかけられた声に、二宮はその場に立ち止まった。
「……ごめんなさい」
美夜は言った。
「あなたとは友達だと思っている。何でも助けることが出来る、いい友達だと、そう思っている」
「……」
「でも、ダメね。こういう時、上手い慰めの一つも言えない、ヒドイ奴だって、自分自身でそう思う」
「……」
「――何があったか聞かないし、言わなくていい」
「……」
「ただ、悔しかったら、その感情は敵にぶつけて頂戴。それだけは立場上、言っておく」
「……」
「……」
二宮が、か細い声で言葉を紡ぎ出したのは、それからかなりの時間がたってからだ。
「……ありがとう」

こんなことがあっても――

いや、あろうがなかろうが――

二宮達には、戦いの運命から逃れる術はなかった。

侵入者の騒ぎが一段落した、さらにその翌日のことだ。

その時、艦橋にいた全員が同じ考えを抱いたという。

曰く――

平野艦長が発狂した。

本当に、そう思ったという。

それは、美夜が通信兵から受け取った、一枚の通信文を美夜が読んだ時に起きた。

読み終えるや、美夜は周りが凍り付いた程、甲高い声で笑い出したのだ。

泣きながら、

その細い体をしならせて、

そして、

笑い続けた。

謹言実直の手本のような厳格な人物の、突然の振る舞いに、艦橋にいた全員が、どうしていいのかわからなかった。

否、

どうするべきかを考えることさえ、出来なかった。というべきだろう。

笑うだけ笑って、泣くだけ泣いた美弥は、息を整えつつ、ハンカチで目頭を押さえたまま言った。

「……おい、高木少佐」

クックッと鳴っている喉は、泣いているのか笑っているのか、高木少佐にもわからない。

「……はっ」

「司令部は……我々に、死ねと命じてきたぞ？」

「……は？」

高木は、それでも美夜が何を言いたいのかを察した。

察したが故に、高木は目を見開いた。

「ま、まさかっ！？」

「そう……そのまさかだ」

高木は本気で自分こそが発狂したい。いや、何故、今、この瞬間に自分は発狂出来ないのかが知りたかった。

狂って、イカれて、鎮静剤でもブチ込まれて、それでも後方に下げられるなら、俺はさっさと狂いたい！

いや――――

誰か、俺を狂わせてくれ！！

高木の心の叫びをかなえてくれる者は、高木自身を含めてこの“鈴谷（すずや）”の艦橋には誰もいなかった。
美夜は高木に通信文を手渡そうとして、その手を止めた。
「どっちだと思う？」
「どちらでも同じです」
高木は答えた。
「どちらも、靖国までちょっと遠いか近いかの違いでしょう」
「……上手いことを言うな」
「……どうも」
高木は通信文を受け取った。
「……なるほど？」
そして、高木もまた笑った。
「人生４６年生きてきましたが、これほどの皮肉を喰らったのは、あなたの下への配属命令以来ですな」
「私もだ」と、美夜は頷いた。
「私も、旦那のプロポーズを聞いて以来だ」
「……では、やりますか？」
「目標は――靖国だな」
「アフリカに戻れ！？」
“鈴谷（すずや）”艦内でその命令を聞いた途端、司令部の正気を疑わなかった者はいなかったろう。
司令部は、“鈴谷（すずや）”にアフリカに戻ることを命じてきたのだ。
“鈴谷（すずや）”が命令を受けてすぐにバーレーンから出航したのも、脱

走兵を出さないための措置だと、かなりの乗組員が本気でそう思ったという。

「国連軍は、まず」

やり場のない怒りと不満を抱える乗組員達をハンガーデッキに集め、美夜は説明した。

「中華帝国を叩く前に、邪魔なアフリカ大陸の魔族軍を叩くことになった」

「……」

美奈代はその話をほとんど聞いていなかった。

ただ、美夜の斜め後ろにぼんやりと立って沈痛そうな表情を浮かべる二宮が心配で仕方なかったのだ。

そんな美奈代の心境に構うことなく、美夜は続ける。

「ヨーロッパからの物資輸送のルートを考える上で、そして、今後の戦争継続の上で、アフリカ大陸はやはり極めて重大な意味を持つ。紅海を経由し、インド洋を経由、太平洋に至る海上交易ルートを確保しない限り、我々に勝利はない！

そのため、昨日、ＥＵ各国元首達による極秘会合が開かれ、アフリカ大陸全土における、すべての国境紛争の無期限休戦条約が締結に至った。

これにより、国連軍はアフリカ大陸の全戦力を動員した本格的な魔族軍狩りに転じる。

メサイアの他、使える兵器はすべて投入されるだろう」

「ま……まさか」

――すべての兵器。

柏美晴の脳裏を横切ったのは、その言葉に対する、嫌な予感だった。

「……反応弾が」

「つい先ほど、ロシア帝国空軍空爆隊から派遣されてきた決死隊が、超大型水素爆弾“ツァーリボンバ２”１０発を投下した」

ＲＤＳ－２２２“ツァーリボンバ２”。

爆弾の皇帝を意味するその爆弾は、かつての実験で人類最大の５０メガトンの破壊力を示したＲＤＳ－２２０“ツァーリボンバ”の発展改良型だが、この時点では美晴達がその性能を知るよしもない。

「人工衛星から確認された限りでは、北アフリカ周辺の魔族軍防衛陣地は、壊滅的な打撃を被ったという」

そりゃそうだろう。

美晴は思った。

ツァーリボンバは、爆弾が目標から離れた地点に投下された場合でもお構いなしに、目標を含む周辺の施設を「余すところなく」消し去ることができるように設計された代物だ。

致死性の熱線の効果範囲は実に５８キロに達したという。

その発展版を１０発も喰らって無事で済むはずがない。

一体、人類は地球を守りたいのか、それとも破壊したいのか。

魔族に問いかけられたら、美晴はどう答えるべきか、答えが思いつかなかった。

「現状、魔族軍にこの打撃から立ち直る間を与えることがないように、国連軍はメサイア部隊を中心に攻勢に出ている。我々は、アラビア半島と紅海を越えてエチオピア高原に侵攻中のラムリアース帝国軍と共同でこの地を制圧する」

●アフリカ　キリマンジャロ

「どれくらい」

神音はユギオに訊ねた。

「どれくらい、もちそうですか？」

「持たせろといわれれば、いくらでももたせます」

ユギオは肩を軽くすくめた。

「そう――言いたいのですが」

「無理ですか？」

「無理です」

ユギオは頷いた。

「敵は、アハガル高原からエチオピア高原至る一帯に戦力を集中しています。こちらもケニア・タンザニアに配置していたメース部隊が頑張っていますが……」

「魔界との補給ルートさえ叩かれなければ……？」

「それで2ヶ月と報告を受けています」

「人類は、砂漠と知ってかアハガル高原に反応弾を使用しました。通常、この手の大型爆弾は、空中爆発させる関係上、パラシュートを開傘します。

我々は、そこを弓兵達によって狙撃し、地面に叩き付けることで破壊、もしくは地面に叩き付けることで、破壊力を減衰させるのですが」

ユギオが悲しげなまでに首を横に振った。

「一発が――地面どころか地面を貫通して、妖魔の巣の中に飛びこんだのです」

「――あらま」

神音は天を仰ぎ見た。

妖魔の巣は地下の広大な空間にある。

その密封された空間に巨大な反応弾が飛び込んで炸裂したらどうなるか。

興味はあるが、被害者の立場には立ちたくなかった。
「巣は完全に崩壊。中にいた妖魔部隊は壊滅です」
「戦力はかなり落ちた……と？」
「我々も商売ですから」
ユギオは笑って言った。
「そろそろがアフリカからの引き時と」
「……その方が、懸命かもしれませんね」
「ただし」
「諦めたわけではない？」
「――その通りです」

アフリカ　支配者　交代

●アフリカ　某所

門付近に展開した輸送艦隊のランプが開かれ、妖魔達が列をなして乗り込んでいく。

物資運搬用の車両が砂塵をあげて駆け回っている。

「急げっ！」

「ぼさぼさしている奴は置いていくぞ！」

士官達が殺気だった声を上げる。

「搬入出来る物資は全て積み込め！人類にくれてやる理由はない！」

「……正直」

そんな光景を一望出来る小高い丘の上。

民間軍事会社“イシス”から送り込まれたユム中将は、苦々しげに見つめていた。

空は気象操作によってここ数日、暗い雲で一面覆われている。

そんな天気のせいでもないだろうが、高い背を白い軍服で包み、カイゼル髭を生やした昔の海軍将校さながらの外見を誇る彼の顔には、明らかな疲れが見て取れる。

目の前で、彼の部下達がやろうとしているのは、１０年間多大な犠牲の元、守り続けてきたアフリカ大陸からの撤退なのだ。

勝利もなにもない。

敗北に敗北を重ね、それでもなお、戦い続けてきた彼等は、司令部からの紙切れ一枚、撤退命令一つでこの地を放棄しようとしているのだ。

彼はそれを指揮しているのだ。

それだけに――

「この命令は受け入れがたいものがあります」

それが本心だ。

「……ま、そうでしょうな」
硬い表情のまま頷くのはユギオだ。
「しかし、これが最も効率的なのです」
「……我々は」
ユム中将は手にした指揮杖を掴む手に力を込めた。
「さほどに無力でしたか？」
「……人類の共闘者が」
ユギオはその問いかけに答えなかった。
「予想以上に頑張ってくれた。すぐ近くまで軍を進めてくれたのです。ここで我々が血と資金を浪費するより、彼等に後を託す方が効果が望めるのです」
「この大陸で、この日を迎えるために、一体、私の部下が何万、犠牲になったかわかった上での発言ですか？」
「リームトスの英雄と呼ばれた閣下の発言とも思えませんね」
ユギオは言った。
「あなたの勤務する“イシス”は、利益を追求する民間会社です。主義主張や、兵隊の意地によって戦いを続ける存在ではありません。あなたとも、そういう雇用契約のはずだ」
「……」
ユム中将の目の前で、輸送艦がよろめきながら離陸を開始した。舞い上がった砂塵の嵐が地上の他の妖魔達の姿をかき消してしまう。
「戦争における効率と利潤を追求するのが、あなたの務めです。つまらない意地で、会社に損害を生じさせるのはあなたのすべき事ではない」
「……正直」
ユム中将は答えた。
「いろいろと言いたいことはありますが、ここで言うべきではありますまい」
「……どうも」

「して？」
ユム中将は訊ねた。
「我らが心強いお味方でいらっしゃる、その中華帝国軍というのは、どの辺にいらっしゃるのです？」

アフリカからの魔族軍の突然の撤退。

それは、魔族軍残存部隊への最終攻撃作戦を意味する、アビシニア作戦第四段階開始の半日前になって確認された出来事だった。

順調に攻略作戦が推移した場合、魔族軍が立てこもるだろう場所は、ＥＵ軍司令部にもあらかじめ分かっていた。

作戦の開始数ヶ月前から、魔族軍自身が半径数十キロを越える一大塹壕陣地を構築し始めたからだ。

そこは、どんな気象学者にも理由が分からない、半径５０キロにわたる雲のカーテンがかけられた“クラウド・フィールド”――――魔族軍の門（ゲート）付近から西へ１００キロの地点。

塹壕構築の見本として保存したい。

これは芸術だ。

ドイツとフランス双方の工兵隊長が絶賛した程の塹壕陣地が完成したのは、第二段階の攻略半ばのことだ。

第三段階がすでにスタートした時点で、ＥＵ軍は全軍に動員をかけ、この陣地攻略に向けた準備を始めた。

対する魔族軍も、各地の陣地を放棄し、ここに集結を開始しつつあった。

連日、ＥＵ軍参謀部では、発狂者や自殺者が出るほど模擬戦闘シミュレーションが繰り返され、そのデータを元に、攻撃手順が厳密に定められた。
アフリカに送られた補給物資は、各集積所に山のように積み上げられていた。
総兵力６０万がアフリカの土を踏んだ。
全ては、第四段階。
この陣地攻略のためだ。

そう。

この陣地攻略とはすなわち、

史上空前絶後の一大陣地攻略戦。

そう呼ぶにふさわしい代物だったのだ。
勝利すればしたでよし。
敗北したところで、それでもよい。

戦うことこそに意義がある。

ＥＵ軍司令部には、戦う前からそんな空気が生まれていた程、人を熱狂させる規模の作戦となるはずだった。

所が、ＥＵ軍は歴史に残るべきその戦いを前に――

「敵に逃げられただと！？」

そういうことになった。

“消滅”

マスコミは、魔族軍を“撤退”したと報じなかった。

“消滅”した。

そう報じた。

この表現ほど、EU軍にとって、目の前で起きたことを適切に表す表現は存在しない。

何しろ、数日間、魔族軍陣地の上空を覆っていた雲が晴れた後には、魔族軍陣地は全て痕跡すら残っていなかったのだ。

撤退なんて生やさしいものじゃない。

消滅という言葉以外に、表現のしようがなかった。

「一体、我々は魔族軍に勝利したのか？それとも見捨てられたのか？」

魔族軍陣地跡に立ったEU軍総司令官ハンス・E・ミューゼル大将が、そう困惑した顔で語ったというが、まさにその通りだった。

EU軍には、勝利したという実感はこれっぽっちも存在していなかった。

そして、その翌日にはEU軍を新たな問題が襲った。

この作戦のために投入した兵力の処遇だ。

余剰に近い大兵力をそのまま撤退させるのか？

現場での2日間の混乱と、4日間に渡る国家首脳レベルの会議が、この問題のためだけに費やされた結果、ヨーロッパ各国首脳は声明を発表した。

「我がヨーロッパには、未だ脅威が存在する」

後にミュンヘン宣言と呼ばれる宣言は、その一言から始まった。

「かつて13世紀、ヨーロッパを窮地に追い込んだタタール人の恐怖が、再び我々に襲いかかろうとしている。

文明を破壊し、人々が営々として築き上げてきた全てを焦土と化し、奪い、殺し尽くしたタタール人。

多くの都市が彼等の略奪と虐殺としてこの地上から消え去ったことは、歴史が教えている。

彼等が人類に与えた罪は、はかり知ることが出来ない。

彼等の罪、そして、彼等の暴虐を、我々は過去の出来事として忘れようとしていた。

だが、それは歴史の闇から突然に現れた。

すでに、アジア、中東、世界中が彼等によって攻め落とされ、多くの罪なき人々が殺され、或いは奴隷となっている。

このまま彼等の暴虐を放置することは、我々の滅亡を意味しかねない。

彼等をヨーロッパに近づけてはならない。

彼等を中東から駆逐し、アジアに叩き返さねばならない。

我ら文明の指導者たるヨーロッパは、そのために武器をとらねば

ならない」

大凡、そんな趣旨だ。

かつて一大帝国を築き上げたモンゴル人と中国人を同一視する辺りはどうかという意見はあるが、かつて中国人は、モンゴル軍の主として工兵部隊に属し、バグダッド周辺の灌漑施設を破壊しまくった過去がある。

バグダッド周辺の環境悪化の一因が彼等にあることを考えれば、大凡間違いとも言い切れない。

西欧人にとって中国人とモンゴル人を区別しろという方が無理だ。

すでにサウジアラビアの首都バーレーンは陥落し、王族はヨーロッパへ亡命。

トルコ帝国を始め、中東方面の大半の国が中華帝国に恭順している。

これにより、中東からの原油の対欧州向けの輸出は実質停止。

中華帝国はＥＵ全体に対する対話を完全に拒み、各国の個別交渉によるＥＵの切り崩しに動いていた。

中華帝国が中東において強く出られたのは、トルコを同盟に取り込み、地中海のＥＵの動きをけん制出来たこと、そして、アフリカの魔族軍を警戒するがあまり、ＥＵ軍が中東に軍を進めづらいという判断があったからだ。

今、その脅威がアフリカから消えた。

中東の原油資源確保のため派遣された中華帝国軍は２５万。

彼等に、ＥＵ軍は狙いを定めようとしていた。

●サウジアラビア米軍陣地

目の前の光景に青くなっているのは俺だけじゃない。

こんなの、冗談じゃねぇ！

ロバート・キャッチャー中尉は、自分にそう言い聞かせ、無線めがけて怒鳴った。

「司令部！機甲部隊が出現したぞ！あれは敵か？」

●サウジアラビア駐留軍司令部

「こっちに砲を向けてているなら敵に決まっているだろうが！」

駐留軍司令官デビット・クラークソン中将は部下の報告に怒鳴った。

「暑さで脳みそがくさったのか！？」

「し、しかしっ！」

参謀長が反論した。

「うるさいっ！必要なことだけ報告しろ！敵の装備はどの程度だ！？中古戦車に恐れを抱く必要がどこにある？」

「それが……」

参謀長と参謀達が互いに顔を見合った。

自分の上官が、全く現状を把握していないことを、その言葉で知ったのだ。

この目の前の人物は、このサウジアラビアに中東の貧国が攻め込んできた程度の認識しか持っていないのだ。

「エリア３６の第６９１大隊からの報告では、チャレンジャー２。同じくエリア７５の第６８３大隊からはレオパルド２」

「……何だと？」

クラークソン中将は、懸命に頭を働かせて訊ねた。

「どこの部隊だ？この辺でレオパルドを装備した国はトルコ……」

「ＥＵ軍です。閣下」

参謀長は語気を強め、言った。

「我々の目の前に展開しているのは、ＥＵ軍なのです！」
「……っ！」
さすがにクラークソン中将の顔色が青くなった。
欧米が武力を持って相争う事態――それは「世界大戦」と呼ばれる、あの赤色戦争以来の事態だ。
もし、そんなことになったら……。
冗談じゃない。
しかも、そうなるか否かは、自分の判断にかかっているのだ。
もっと、冗談じゃない！
「閣下！」
駆け寄ってきた別の通信兵が通信文を手に敬礼した。
「ＥＵ軍ヨーゼフ・ミュラー大将より通信です」
「……読め」
「はっ……しかし」
「何をためらう」
「はっ」
通信兵は通信文に目を落としながら言った。
「……発ＥＵ軍司令部　宛ヤンキー共　本文。“どけ”。以上です」

……クックックッ。

クラークソン中将は歯を食いしばって喉の奥で笑った。
その目は血走っていた。
「この俺様めがけて、どけ？だと？」
声が震えていた。
「しかも……俺はテキサス人だぞ？レッドリバーから北側の連中と私を同格に扱うとは……」
「……閣下？」
恐る恐るという感じで声をかけた参謀長に、クラークソン中将は言った。

「参謀長」
「はっ」
「文明国らしい回答をしてやれ」

●アメリカ合衆国　ワシントンD・C　ホワイトハウス

ＥＵ軍から“どけ”という命令に近い通信を受けた、クラークソン中将曰く“文明国らしい回答”。

つまり、中指を立てるジェスチャーがなされ、ＥＵ軍から親指を下に下げるジェスチャーが返されたことで、対立は決定的となった。

ＥＵ軍が本気で米軍とぶつかりあう覚悟があることは、その布陣でわかる。

彼我の兵力差は圧倒的だ。

陸軍中東派遣軍からは、増援を求める要請が矢継ぎ早に送られてくる。

だが、大西洋の主要ルート全域がＥＵ軍によって抑えられている限り、兵力を送りたくても送る手段がない。

「悪夢だ」

大統領は、疲れ切った顔で執務椅子に身を沈めた。

「なんてザマだ」

世界に冠たる大国アメリカ合衆国。

その最高司令官たる大統領の口からはき出されるのは、国民を鼓舞する演説ではない。世界最強の軍隊を動かす命令でもない。

失望のため息だ。

「一体、何がどうしてこうなった……？」

それはもうわかっている。

比喩に困る程の劇的な変化が、世界に訪れたのだ。

大統領にとって悲劇なのは、その中心軸がアメリカでないこと。

主導権がアメリカにあるなら、大統領だってここまで苦労しない。

だが、主導権は中華帝国にある。

アメリカは常に受け身を強いられてしまう。

ＥＵ軍が、魔族軍の一方撤退で使用しなかった兵力を移動させ、紅海を越えて中東に侵攻する動きを見せたことは先に述べていた通りだ。

その行動を、大統領は黙殺した。

当然、ＥＵはアメリカの暗黙の了解と受け取った。

だからこそ、ＥＵ軍の行動は派手になった。

最悪のケースが、親ＥＵの立場を利用したラムリアース帝国軍だ。

彼等は半ば奇襲に近い方法でトルコの国境線を突破。

トルコ軍は、ＥＵ軍と魔族軍の万一の侵攻に備え、地中海方面には十分な備えをしていたが、隣国からの横やりまでは想定していなかった。

世界最強クラスのメサイアと魔法騎士部隊による首都アンカラに対する強襲攻撃により、トルコはわずか１日で無条件降伏に追い込まれた。

ラムリアースは、自らの支配圏にトルコを組み込む代償として、同盟国であるＥＵ軍を通過させた。

対価は支払われ、ラムリアース帝国によるどさくさまぎれの隣国征服を、世界は黙認した。

地中海からトルコを通過することが可能になったＥＵ軍は、これに呼応してシナイ半島に上陸。

わずか3日で現地を制圧。

中東諸国の多くにとって、このラムリアースの動きが命運を決めた。

地理的に、ヨーロッパからの攻撃に対する防壁を任されていたトルコを失ったことで、イラクはアナトリア半島とザグロス山脈の2方向からEU軍とラムリアース帝国軍を相手にすることを余儀なくされた。

オイルダラーの国とはいえ、資金を全て軍事力に回しているわけではない。

バグダッド周辺は2日でEU軍のメサイアによって制圧されたのに代表されるように、中東の親中国家は、満足な抵抗もなくEU軍に蹂躙された。

彼等の頼みの綱である中華帝国軍は、ペルシア湾周辺に展開する米軍を楯にEU軍の追跡をかわし、アラブ首長国まで後退。

中東は、EU軍の草刈り場と化した。

伊吹の最後　第一話

●飛行艦“伊吹”艦内。

魔族軍主力部隊の撤退。
その後のアフリカでの任務は、それまでが信じられない程、簡単だった。
掃討すべき妖魔がいない。
それを確認するだけでよかった。
どこへでも飛べた。
どこへでも行けた。

安心して空を飛ぶことが、これほど楽しいものかと、偵察任務に出た候補生達は天にも昇るような気分だった。

その気のゆるみこそが、悲劇の元凶となった。

魔族軍は――――完全には撤退していなかったのだ。

「ご苦労だった」
偵察任務が終了した。
その日の午後、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に乗せられ、伊吹に送られた美奈代達は、久しぶりに他分隊の面々と再会、艦隊内で実施された作戦会議に参加した。
会議はブリーフィングルームではなく、空いていた倉庫で行われた。
美奈代達は全員、床に直に座り、平たい木箱を演壇代わりに、壁に貼り付けられた地図の前に教官達が立っている。
その殺風景さが、むしろ戦場の近さを美奈代に教えてくれている。

「数度にわたる偵察の結果、敵の撤退が確認された」
実戦部隊指揮官の西川少佐が壇上で地図を背に口を開いた。
ひげ面の厳めしい、まるで昔の侍みたいだというのが、美奈代の印象だ。
「敵の意図は不明だが、我々の任務は果たしたと判断された。ご苦労だった」

これで終わった。
日本に帰れる。
皆が、そう思った。

「本艦隊は明日早朝のの定期訓練をもって作戦を終了し、ヨーロッパ、北極海を経由して日本に戻る。本日はその前祝いだ」

その後はどんちゃん騒ぎとなった。
とはいえ、戦闘艦艇で出来ることは限られている。
参加者の大半が未成年ならなおさらだ。
やっとのことで関係を修復したばかりの教官達は、候補生達をせめて楽しませたいという親心と、気を引き締めておきたい指揮官としての心理に板挟み。無礼講だと言いつつ、一人一人に声をかけ、激励する程度しか何も出来ない。
候補生達も、思い思いの相手と話をするか、手拍子で軍歌の大合唱する程度。

そんな建前は時間と共に吹き飛ぶ。

せめて酒の味を知ってくれ。
それが教官達の親心だ。
とはいえ、全員が全員、その中で楽しんでいる訳ではない。

特に男子候補生に知り合いがいるわけでもない美奈代は、壁際でジュースを片手にぼんやりと騒ぎが終わるのを待つだけだ。
気がつけば、女子候補生の姿が見えない。
その美奈代の視線の向こうには、酒の入った教官達の説教を受ける染谷の姿があった。
逃げだそうとする度に別の教官に絡まれ、また逃げだそうとして――。

染谷候補生は人間関係で苦労するタイプかもしれない。

美奈代はふと、そんなことを思った。
自分が染谷と二人っきりになることを最初は心待ちにしていたが、どうも無理のようだ。せめて顔だけでも心に焼き付けておこう。そんなことを考え、自分の心に浮かんだ意外ないじらしさに、美奈代自身が驚いていた。

「まいったぁ」
しばらくして、首のあたりをコキコキ鳴らしながらやってきたのはさつきだ。
「１０人から告られた」
「ほう？」
「全部、それとなく断ったけど……」
さつきは怪訝そうな顔をして、美奈代にそっと尋ねた。
「何人から告られた？」
「一人も」
「……さっすが」
なにがさすがなのかわからないが、素直には喜べない。
「――で？誰にＯＫを出したんだ？」
「誰が出すもんですか！」
「……もったいない」

「日本へ帰ったらヤらせてくれなんて、真顔で言われて断らないわけにいかないでしょう？」
「それ……告白か？」
「らしいよ？美晴もすごかったよ？ムネもませてくれとか何とか、本人大まじめなだけに笑うことも出来ず……交際宣言して逃げたけど」
交際宣言。
つまり、柏美晴が誰かとの交際を自分から宣言したことになる。
「か、柏が！？」
「そ。山崎君。前々から噂はあったんだけどさ？彼、性格いいからお似合いじゃない？」
「そ、そうか」
「宗像はオペレーターの女の子の用意した別室でハーレム状態だし」
ふと、思い出したようにさつきは手を叩いた。
「皆……いろいろスゴいな」
「なに言ってるのよ！」
さつきは美奈代の小脇を肘でついた。
「ちょっと待ってな」
なぜか腕まくりしたさつきが談笑の輪の中に入っていく。
絡まれるのはわかっているのに、さつきは足を止めずに入り込む。
その先には染谷がいた。
何を言っているかはわからない。
たぶん、教官達から輪に入れ。とか、酌をしろと言われているに違いない。
だが、軽く悪戯っぽい敬礼をしたさつきが何かを口にした途端―
――
おおっ！
輪の中から歓声があがり、その視線が一斉にこちらを向いた。

「？」
小首を傾げる美奈代は、なんだかイヤな予感がした。
「よしっ！行って来い染谷っ！」
「男になってこぉいっ！」
「くそぉっ！ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）発艦は２時間後だ！さっさと済ませてこいよっ！？」
染谷が輪から追い出されるようにしてこちらに歩いてくる。
その背後からは冷やかしじみた口笛が一斉に響く。
皆が何を冷やかしているのかはわかる。
染谷と視線が合った途端――
美奈代はその場から逃げ出した。

一体、どうやって“鈴谷（すずや）”に帰ったか覚えていない。
何で逃げ出したのか。
何が怖かったのか。
なにもわからない。
ただひたすら、とにかく眠ること。ひたすら眠ることだけを考えて、布団に潜り込んだことだけは覚えている。
夜明け前の午前４時、起床を命じるサイレンにたたき起こされた美奈代は、身支度を整え、食堂に向かった。
すでに宗像達が食事にかかっていた。
元来狭い食堂だ。空いている席を見つけるだけでいつもながら苦労する。
やっと見つけた席に座る。
食事は消化のいい、軽めのものを選んだ。
「いい選択だ。新兵」
斜め前に座って食事をとっていた老軍医が言った。
「腑（はらわた）がやられた時、メシが残っていると大変なことになる。出撃前

は軽く抑えておくもんだ」
「ありがとうございます」と礼を述べると、食べるというより飲み込むといった方が正しいような食事を済ませ、さっさと席を立った。
最後のメシがこれじゃぁね。
食堂から出た所で苦笑してしまう。

まぁ、いい。

日本に戻れば盛岡冷麺も食べられるだろう。
それだけが希望だ。
女の子としてはどうかと思うけど、でもそれでいいと、美奈代は自分に言い聞かせた。

●アフリカ上空　魔族軍飛行艦“メルストロム”
「タイミングが悪すぎるな」
“メルストロム”艦長、カーナボン中佐は、苦虫をかみ殺したような顔で外を眺めている。
激しい砂嵐のせいで視界が十分にとれない。
だが、この砂嵐のおかげで、人類の目から逃れているのもまた事実だ。

人類同士が戦争状態になったおかげで、国境線の警戒が恐ろしく厳重になったせいで、“鍵”を回収し、アフリカに残っていた拠点へ移送するために、それまでなら遊び半分で出来た、飛行艦でのヨーロッパ大陸侵入自体が困難になってしまった。
ヨーロッパ大陸から外に“鍵”を持ち出すためにも、艦はどうしても必要だった。

カーナボン中佐は、高い報奨金につられて、そのリスクの高い仕事を引き受けた。
“鍵”がなんだろうと知ったことか。
俺は報償が欲しいだけだ。
それが、カーナボン中佐の言い分だ。
伝説になるだろうと彼自身が自負する程の綿密な計画の結果、“鍵”は無事にヨーロッパ大陸から持ち出すことが出来た。
アフリカに入り込めば、後は楽だ。
そのはずだったのに、アフリカに入った途端、目的地が指定と変わった。

アフリカの拠点は全て放棄。

目的地は極東、弓状列島。

――詐欺だ。

そう思った。

だが、目的地まで運ぶ。
それが、どこだろうと。
それが、彼の仕事だ。
ビジネスパーソンらしく、ユギオは納期をしっかりと指定している。
遅れることは、同じく民間軍人会社というビジネスパーソンである彼の社会的信頼にかかわる。
「――まぁ、いい」
カーナボン中佐は、自らを慰めるしかない。
「“鍵”はあるのだ。これで――人類は終わりだ」
「大佐」

観測要員が報告したのは、エチオピア高原を抜けるかどうかの頃だった。
「前方に人類の飛行艦らしき反応。数４」
「――何？」
「電波を感知。向こうはメースを発艦させようとしています！」
探知されても逃げようと思えば出来る。
カーナボン中佐は、魔族同士の艦隊戦を想定して事態の把握と対処にかかった。
問題は、メースだ。
メース相手に飛行艦は沈むしかない。
なら、どうする？
「メースは何騎出た？」
「やや小型の艦から７騎。大型艦はまだ、甲板上と思われます」
「よしっ！」
知らずにガッツポーズをとった。
「艦隊戦用意っ！主砲っ！すぐにそいつを仕留めろっ！」
“メルストロム”の艦内に警報が鳴り響いた。

美奈代がハンガーデッキに入ったのは４時３０分。
“メルストロム”が“鈴谷（すずや）”達を発見する３０分前。
デッキ脇の黒板前に集合した皆は、昨晩のことは一切口にしない。
神妙な顔つきのまま、恐ろしく無言で、ただ、二宮の言葉を懸命に覚え、メモをとることに集中する。
そこで聞かされたのは、予定の変更。
第七分隊が先に発艦を済ませ、“伊吹”からの他部隊の発艦完了までの直援任務につくというものだ。
何でも、伊吹の第一カタパルトの電圧が上がらず、発艦がいつ止まるかわからないという。

アフリカを横断してヨーロッパ大陸に入るための、警戒任務。
ただ、立っているだけで済むようなものだと、皆が聞かされていた。
その最初で“伊吹”が故障したことは、後々になって考えても、“前触れ”だった。
美奈代達はそのおかげで1時間近く早く発艦を開始。
全騎が艦隊の全周囲警戒ポジションについた。
美奈代がついた警戒位置は、艦の右斜め後ろ方の上。
艦隊全部が俯瞰出来る場所だった。
左上には二宮騎。そして、艦を挟んで真下に長野騎が見える。
「二宮騎より第七分隊全騎――さらに悪い知らせだ」
ランプが点灯する“伊吹”のカタパルトから発艦するメサイアがいないことを怪訝に思っていた美奈代達に、二宮から知らせが入った。
「“伊吹”カタパルトが完全に故障。復旧のめどは立たない。繰り返す」
「……何それ」
美奈代は思わず顔をしかめてしまった。
これから大仕事だというのに、その初っぱなで大きなケチがついた。
縁起が悪いにも程がある。

すでにソマリアの海岸が近づきつつある。
沿岸の様子がはっきりとわかる。
何故、アデン湾を通らないのだろう。
美奈代がそう思った。
その耳には通信がひっきりなしに入ってくる。
「5分後に自律発艦が開始される。第七分隊全騎は――」
ブンッ！！
「――えっ？」
幾重にも保護されているメサイアの目を通じてさえ、世界が真っ白になった程、強い光が走ったのはその時だ。
美奈代は最初、それが艦砲射撃の光だと思った。
“沖波”や“鈴谷（すずや）”が艦砲射撃を開始したのだと、本気でそう思った。
だが――。
「た、隊長っ！？」
「な、何が！？」
「どこだ！？どこからの攻撃だ！？」
「“鈴谷（すずや）”、“鈴谷（すずや）”応答しろ！」
思わず目を腕で覆った美奈代の耳に届くのは、悲鳴に近い仲間の声。
そして、連続する鈍く粘っこい音。

開かれた目に映し出されたのは、美奈代が見たことのない光景だった。

美奈代はそれが最初、何かさえわからなかった。
何が起きているのかわからなかった。

巨大な松明か、子供の時見た火事の現場。

一番近いのはそんな光景だ。

まさか、飛行艦が撃沈された光景だなんて、理解さえ出来なかった。

そんな美奈代の目の前で、紅蓮の炎と黒煙を吐き出しながらゆっくりと高度を落としていくのは、“伊吹”だ。

「……えっ？」

艦のあちこちで連続した爆発を引き起こしながら、ゆっくりと高度を落としていく。

「……」

耳には、爆発音に混じって仲間達や上官達の命令や交信がひっきりなしに響いているはずなのに、何一つ耳に入らない。

美奈代はバカのようにぼんやりと飛行を続けた。

ガクンッ！

思わず舌をかみそうになったのは、一体、どれほどの時間が経過した後だったろう。

首が痛くなったほどの衝撃を受け、美奈代は我に返った。

「ぼっとしているな！」

いつの間にか、長野騎がびっくりするほど間近に現れていた。

艦の真下にいた彼が美奈代騎を発見、高度を上げたのだ。
「何をしているか！」
「す、すみませ――――」
その時、全身を炎にまかれ、まるで踊り狂うかのように甲板に現れた乗組員達が、次々と舷側を乗り越え、そして“不可視の海”へと落ちていくのを、美奈代は目の当たりにした。
炎に包まれた人間の体が、体をバラバラにされた次の瞬間、塵になって消えた。
艦の構造物も、人間も、何もかもが“不可視の海”で原始単位に分解されているのだ。
何が目の前で起きたか理解した美奈代は、胃袋の中身が逆流してくるのを必死になって抑えた。
「伊吹が……沈む」
長野が感情の少ない声で言った。
「今の進路だと、艦を海岸にでも座礁させるつもりだろう」
「“沖波”はどうしたんです！何で支援砲撃が！」
美奈代は目の前の光景から逃れるように怒鳴った。
「これじゃあ作戦は！」
「さっき、真っ二つに折れて沈んだよ」
「他の分隊は！？第一分隊は！」
「“伊吹”から発艦出来た騎を確認したか！？」
「うっ」
燃えさかる“伊吹”が、よろめきながら海岸線に向かって進む。
短く呼吸を整えた後、美奈代は死に逝く艦に、小さく敬礼した。
やっと、通信機の言葉に耳を傾ける余裕が生まれたのは、その時からだ。
「こちら“鈴谷（すずや）”。艦隊司令部権限、我にあり」
「“鈴谷（すずや）”司令部より残存メサイア部隊。残存するメサイア部隊は海岸へ向かい、海岸線を確保せよ。繰り返す」
「む、無茶よ！」

さつきが悲鳴に近い声を上げた。
「何騎で攻めるつもりだったのよ！たったこんだけの頭数で何が出来るって！？」
「文句を言うなっ！」
二宮が怒鳴った。
「これ以上ぶーたれたら、敵前逃亡罪で銃殺だぞ！」
「そ、そんな無茶なっ！」
「無茶をやるのが軍隊だ！」
二宮騎が大きくシールドを前後に振った。
前進の合図だ。
「高度を下げろっ！さっきの攻撃がまた来るぞ！」
“鈴谷（すずや）”からの艦砲支援は！？」
“鈴谷（すずや）”は高度を下げて後退する！全騎、敵艦を仕留めるっ！続けっ！」

「飛行艦2隻撃沈を確認！」
ワッ！
“メルストロム”司令部に歓声が上がる。
「よしっ！最大戦闘速度準備っ！このまま逃げるぞ！」
「メサイアからの電波、本艦を照射！」
「見つかった！？早すぎるぞ！」

「いたっ！」
超音速突撃をかけた美奈代達の前に、見たことのないデザインの飛行艦が現れた。
空を飛ぶ流線型のボディは、かなり美しい部類に入ると思う。
「教官、攻撃許可を！」
「無礼講だ！嬲り殺せっ！」

二宮が殺気だった声を張り上げた。
「教官の弔い合戦だ！」
その声と共に、二宮騎から１２０ミリ砲弾が放たれた。

ズンッ！

加速を開始したのがまずかった。
“メルストロム”はそういう意味では不幸な艦だった。
最初に命中した１２０ミリ砲弾の破孔に加速による合成風力が加わり、船体の火災による被害を悪化させた。
そこに接近するメース達から容赦なく放たれる砲弾が次々と命中。
一瞬にして“メルストロム”は炎に包まれ、そして、落下していった。

「敵艦、沈みますっ！」
美晴は、煙を上げて敵艦が大地へと落下していくのを確かに見た。
大きな狼煙をゆっくりと地面に下ろしているような、そんな錯覚さえ覚えた。
「……墜落地点、タナ湖湖畔っ！」
その報告と同時に、地面に墜落した“メルストロム”は最後の断末魔と共に、船体を爆発させた。

「撃沈を確認っ！」
あまりのあっけなさに驚きながら、美奈代は声を挙げた。
「教官！？指示を！」

「全騎、続け」
二宮騎が降下を開始した。
「せめて、どこの国籍か。それだけでも調べるぞ」

伊吹の最後　第二話

海岸線を制圧した美奈代達の目の前で、“鈴谷（すずや）”がランディングギアを降ろす。

扇状地の地形が天然の防壁となってくれるというのが、平野艦長の判断だ。

その美夜とやりとりした二宮が、通信モニター越しに言った。

「部隊を分ける。泉と宗像は私と残れ。長野大尉は残りを連れて“鈴谷（すずや）”へ。帰る所が沈んだら洒落にもならん」

「了解」

「まず、生存者を捜せ。それから、国籍の判断につながりそうな物資を。火災がひどい。急げ」

あちこちに散らばった破片で、地面が見えない。

何が何だか破片一つ見てもわからない。

それはまさに、地獄のような光景だった。

こんな所にいたくない。

美奈代は本気でそう思う。

「被害は甚大どころではないが……な」

そうだ。

「墜落現場ってのは……こういうものか」

「山の向こうでは」

牧野中尉が言った。

「“伊吹”が似たような光景を曝しているでしょうね」

「他の艦は」

「海に沈みました。生存者は確認されていません」

「調査は？」

「するだけ無駄です。でも」

「どうしました？」

「これ……この艦はヘンです」

「え？」

「こんなレーダーを通さない物質が山ほど使われた艦なんて、見たことありません」

「レーダーを通さない？」

「ええ。こんな特殊素材で作る理由は？どうして、この艦が“伊吹”を？」

「……」

“伊吹”は沈んだ。

一体、どれだけの人が死んだのか想像さえ出来ない。

山の向こうに消えた伊吹の中で、あの燃えさかる艦の中で、一体、何人死んだのだろう。

美奈代は、伊吹のデータを開こうとして指を止めた。

そんなことして、何の意味がある？

死者の数を数えることに、何の意味がある？

その問いかけに、答えられない。

ただ、美奈代にとって、一生この戦いがついて回ることだけは、心のどこかでわかっているのだ。

これは、美奈代達にとって、人生一度の初陣なのだ。

美奈代達第七分隊は、初陣で任務を達成した。

任務が戦いなら、勝利したのだ。

ただ、それはあくまで建前にすぎない。

肝心の美奈代にあるのは虚無感だけだ。

これが初陣で、しかも初勝利だと言われても、何の実感も沸かない。

ぽっかりと、心に穴でも空いたような、言いようのない感覚だけが心を支配する。

「マスター、どうしたの？」
精霊体の“さくら”が、心配そうな視線を向けてくる。
こんな小さい子にまで心配させたくないと、無理に笑ってみたが、うまく笑えた自信はない。

「二宮より部隊宛伝達」
二宮から通信が入った。
「現在、総司令部に対し事後の指示を仰いでいる所だ。それまで、我々はこの場を動けない」
「宗像です。洋上への待避は？」
「選択肢ではあるが、宗像。忘れるな？敵が水中型メサイアを保有していることを」
「――――っ」
「洋上も必ずしも安全ではないということさ。“鈴谷（すずや）”のセンサーなら感知は出来るが、逃げられることまで保証しない。いいか？全騎。言いたいことはあるだろう。やりたいこともあるだろう。だが、今は動くなと命令が出ている。軍隊での命令の意味を一々口にさせるな」

「……くっ」
美奈代は目をつむった。
皆、補給が終わり次第、何がしたいのかと聞かれれば、やりたいことは一つしかないのだ。
一瞬でも早く。
一歩でも先に。
“伊吹”に救援へ！
そうすれば――――
そうでなければ、
助かる命も助からない！

なにより、助けにいけない自分が悔しい。

ガンッ！

それは、そんな美奈代の焦りが生み出したミスだった。

半ば砕けた艦の構造物の端に、脚部装甲をぶつけた。

しまった。

そう思った時には、構造物は蹴り上げられたように宙を舞った。

そして、派手なバウンドを見せて大地を転がった。

教官に怒られるな。

美奈代が言い訳を考え出した途端だ。

「生存者っ！」

牧野中尉が緊張した声をあげた。

「人間の反応1――――生きてますっ！」

“伊吹”へ向かえ。

総司令部からそんな命令が下されたのは、正午どころか、すでに15時を回った頃のことだった。

遅すぎる！

平野艦長が命令文を床にたたきつけたという話を聞いて、無理も

ないと思ったのは美奈代だけではない。

１４時過ぎに“伊吹”が墜落した方角で大規模な爆発音と煙が立ち上ったのが観測されている。

“伊吹”が沈んだと、誰もがそう思った。

それだけに、司令部の決断の遅さに、皆が怒りを覚えていた。

“伊吹”沈没の報告を受けた時点で救援を許可してくれたら、一体どれだけ助けることが出来たと思っているんだ――と。

しかも、その司令部の命令は乗組員の逆鱗に触れる代物だった。

最優先目的は、暗号書類の破棄及びメサイアの回収。

それが不可能な場合は、艦とメサイアの、テルミット弾による爆破処分。

さらに可能な場合、“伊吹”の機関部を回収しろ。

そこに、乗員の安否という言葉は書かれていなかった。

「気楽に言ってくれるな！山の向こうに何がいるかわからないというのに、回収任務だと！？」

「偵察ポッドのデータから、沈没地点はわかっていますが……本当に行くんですか？」

艦長席の横に立つ高木副長が訊ねる。

「本艦を危険にさらすことになりますが」

「行けという命令だろう？」

美夜は艦長席に座り直すと、制帽の位置を正した。

高木の経験上、美夜がこの仕草をとる時は一つだけ。

怒りを内部でねじ伏せている時だ。

制帽から手を離した美夜は言った。
「二宮中佐騎回収、中佐を艦橋へ」

所属不明艦の調査を中断した二宮は、生存者の搬入を美奈代達に任せて艦橋に入った。

「偵察ポッドのデータから、“伊吹”の不時着地点はここよ」
美夜が手元のパネルを操作して、艦橋の壁一面を占めるメインモニターに表示された地図に丸を描く。
扇状地を形作る山を越えて、すぐ裏手に広がる小さな市街地のど真ん中だ。
「距離にして約5キロ。被弾時に艦橋を破壊されたのは、メサイアから回収されたデータでわかっている。迷走してここに墜ちたのね」
「生存者からの通信は？」
「狩野粒子のレベルが高すぎて通信不能。何とも言えないわ」
「……っ」
「“鈴谷（すずや）”も回収に出るからね。護衛よろしく」
「沈むわよ？」
「仕方ないでしょう？」
美夜は肩をすくめた。
「“伊吹”のエンジン回収しろっていうんだから……」
「回収してどうするのよ」
「再利用するのよ。当然でしょう？幸い、エンジンブロックのタイプは“鈴谷（すずや）”と同じだから、ロックを解除してドッキングさせるだけ。作業は半日もかからない」
「そこを敵に狙われたらアウトよ？」
「艦内の生存者探すのにかかる時間は同じくらいを見ているわ」
「……ねぇ」
「ん？」

「エンジン回収は命令？それともあんたの欲望？」
美夜はニヤリと意味深げに笑った。
「――――どっちだと思う？」

ロンダ・シティ。

かつて、そう呼ばれた地方都市があったこと自体、美奈代は知らなかった。
かつて人口は３０万人を数え、この国では首都に次ぐ規模の都市だったというが、美奈代にとっては廃墟でしかない。
主を失ったビルや木造の家屋の群れの中を、美奈代達はゆっくりと進んだ。
道路の真ん中、アスファルトの割れ目からは、驚く程成長した木々が幹を延ばし、倒壊した家屋は草の中に消えようとしている。

街が、ゆっくりと緑の中に帰ろうとしているような、そんな錯覚さえ覚えてしまう。

「“伊吹”周辺をまず焼き払え」
二宮は美奈代達に命じた。
「遮蔽物の一切を破壊し、視界を確保するんだ」
「そんな派手な動きをして」美奈代は訊ねた。
「敵を誘うんですか？」
「敵はすでに我々の存在をご存じだろうさ」
ふんっ。と、二宮は鼻で笑った。
「我々の行動がお目こぼしいただけるかどうかは、敵さんの胸先三寸だ」

“伊吹”の位置はすぐにわかった。

ロンダ・シティの中心部を為すビル群をなぎ倒し、市中央の幹線道路を使用不能なまでにえぐりながらスライディング、舳先を巨大なビルの根本に叩き付けた状態で停止していた。

崩壊したビルが艦の舳先を押しつぶすように倒れているので、最初、二宮が「見つけた！」といったものの、美奈代はそれがどこにあるかわからなかったほどだ。

艦体は被弾と不時着時のダメージで見るも無惨な状態。

というより、艦の形を維持しているとは言い難い。

もはや、艦としての命運は尽きているのは誰の目にも明らかだ。

「こ……これって」

それが、つい昨日まで自分たちが乗艦した艦だとは誰にも思えなかった。

さつきは目を見開いた。

「せ、生存者は！？」

「……か、艦内に妖魔が侵入していますっ！」

それはすぐに悲鳴のような声に代わった。

「教官っ！」

美晴までが悲鳴に近い声を上げた。

「あ、あそこっ！ビルの根本のかげっ！」

美晴騎が指さす場所。

それは、“伊吹”の体当たりを受けて折れた巨大なビルの根本。

その残骸に隠れるようにして倒れているのは――

“幻龍（げんりゅう）”だ。

大の字になって倒れている騎には、無数の白い虫がたかっている。

人間の死体にたかる蛆虫そのままの光景に、美奈代は思わず視線を背けた。

「全騎っ！脚を地面につけるな！唯っ、だ、誰の騎かわかる？」

「識別受信……」
二宮の耳に、MC（メサイア・コントローラー）の青山唯中尉（あおやまゆい）が息をのんだ音が聞こえた。
「い……池田大尉です。生存反応、MC（メサイア・コントローラー）と共になし」
「――――くっ！」
「コクピットブロックのハッチに何か障害があって」
長野は言った。
「そこにこいつらに入り込まれたんでしょう。両方のコクピットに虫がたかっている」
「これが虫ですか？」
「泉、他に表現があるのか？……これは……中佐」
「テルミットを。騎体を焼却し、エンジンブロックのみ回収する」
「……了解」
長野騎が投擲したテルミット弾が“幻龍（げんりゅう）”の騎体の上で跳ね、爆発した。
炎が騎体を包み込み、逃げ遅れた虫達が炎の中に消える。
メサイアのエンジンは構造上、超高熱超高圧に耐えられる特別な魔法コーティングが施されている。
騎体が高熱によって焼き払われても、エンジンだけは残る。
このエンジンを回収し、再び組み付ければ、メサイアはいつでも再生出来る。
なにより、エンジンは機密の塊だ。
下手に敵や他国に回収されれば、騎体の性能がわかってしまう。
それだけに、エンジンをそう簡単に放棄することは出来ない。
例えそれが、どれほど憎らしいヤツの乗騎でもだ。

「各騎」
二宮は美奈代達に命じた。
「どこにどんな妖魔がいるかわからないぞ。警戒を怠るな。着陸する前に着陸地点をまず焼き払え」

ロンダシティの一角を焼き払い、その焼け跡に着地した美奈代達は、二宮の指揮の元、“作業”を開始した。
外部を美奈代達が焼き払い、“伊吹”の生存反応がなく、妖魔が密集する区画を二宮達が焼き払う。
「乗組員の生存者達のほとんどは、艦内の機関部に逃れたらしい」
長野は言った。
「機関部の分厚い隔壁を閉鎖してその中に逃れた。そこまでたどり着けんかった者は妖魔の餌になった……そういうことだな」
その口調は決して楽しげではない。
「どうするんです？」
「飛行艦の機関部はそれ自体が艦だ」
二宮は言った。
「通信装置が破壊されているんだろう。外部からのアクセスが出来ない。機関部に潜り込んで話しをつける」
「危険です」
宗像が止めた。
「こんな状況下に置かれたんです。誤認されたら蜂の巣ですよ！？」
「それでも」
二宮はハッチを開いた。
「誰かが行かなくてはなるまい……宗像、護衛を頼んだぞ。ついてこい」
「教官っ！？」
二宮がハッチから身を乗り出した時。
「……ん？」
二宮は、視線の端で何かが動いた気がした。
「気のせい……か？」
「中佐」
青山唯（あおやま・ゆい）中尉の声が耳に届く。
「平野艦長からです。陸戦要員を回すので早まらないようにと」
「誰が死に急いでいるのよ」

「“死ぬなら貸した金返してからにしてくれ”と」
「美夜めぇっ！」

「落ち着けっ！」
「諦めるなっ！」
「今から助けに行くぞ！」
“鈴谷（すずや）”から到着した兵士達が、開かれたハッチめがけてメガホンで怒鳴る。
その横では整備兵がバーナーでドアを焼き切ろうとしている。
ドアの向こうからはひっきりなしに、
カーン
カーン
という音がしている。
中で乗組員達がパイプか何かで壁を叩き、生存を教えているのだ。
皆、その音のみを希望として作業に没頭する。

「泉騎はハンガーデッキへ侵入。ハンガー内のメサイアを外に引きずり出せ」
「了解っ！」
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を構えながら、甲板に移動した美奈代がまず目にしたのは、カタパルトに固定されたまま放棄された“幻龍改（げんりゅうかい）”。

……いや。

“幻龍改（げんりゅうかい）”の“一部”だったモノだ。

美奈代の目の前に広がるのは、黒く溶けた床だ。
まるで延ばされたアメのようになって、溶け落ち、下のデッキが丸見えになっている。
その真ん中で溶けずに残ったのは、リニアカタパルトのシャフト

部分だ。
その上には、カタパルトと“幻龍改（げんりゅうかい）”の脚部とおぼしき物体が乗っている。

「こ……これは……」

「発艦待機中に被弾して、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドが」
牧野中尉は顔を引きつらせながら言った。
「……引火したんでしょう。」
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドは引火すれば、一瞬にして数万度に達する炎を生み出す代物だ。
それが艦内で引火したとなればどうなるか。
美奈代は身をもってそれを知った。

「その引火した……騎体は？」

「原型さえとどめていないでしょうね……エンジン以外」
牧野中尉は言った。
「下に４つのエンジン反応――騎士のＭＣ（メサイア・コントローラー）も助からなくても、エンジンだけは残りましたね」
「……」
「引火、爆発はこの飛行甲板を吹き飛ばしただけで済んだようです」
ズタズタになった飛行甲板の構造物を一別した牧野中尉は言った。
「ここからの侵入は厳しいですね。下デッキは構造上、メサイアの重量に耐えられません。一度外に出て、第２ハッチからハンガーデッキに入りましょう」
「この辺、生存者の反応はありませんか？」
「この周辺では考える必要さえありません」
「で、ですけど」

「リキッドの爆発は、一瞬で周辺の酸素を燃やし尽くす、一種の気化爆弾です」
牧野中尉は言った。
「その中で生存していたら――それこそ冗談です」

墜落の衝撃で吹き飛んだのか。
“伊吹”のハンガーデッキ物資搬入出用ハッチから侵入した美奈代は、少しだけ安堵の表情を浮かべた。
前衛作家の作品のようになったフライトデッキとは違い、ハンガーデッキはまだまともだった。
ハンガーベッドから吹き飛ばされたらしい“幻龍改（げんりゅうかい）”達が、直立した姿勢のまま床に倒れている。

大丈夫だと思ったのは、デッキの入り口までのことだ。

被弾した時、ハンガーデッキ内部で移動作業中だったのが災いしたのだろう。
内部で固定されていなかったメサイア達がハンガー内部でかなり派手に転げ回ったことは、ハンガーデッキ内部の破損を見れば用意に想像が出来る。
“征龍改（せいりゅうかい）”のライトに照らし出された壁は床から天井まで、あちこちがめちゃくちゃにへこんでいる。
左側の壁では、“幻龍改（げんりゅうかい）”が半ばめり込んでいる。
床にはメサイア達が機材や兵器の残骸と共に転がっている。
ひっくり返った補助動力装置の下には、何かを引きずったようなどす黒い跡が残っていた。
壁にも、似たような痕跡がいくつも残っている。
その跡が何かを考えないようにする美奈代の目の前に転がる“征龍改（せいりゅうかい）”達は、手足が失われた騎ばかりではなく、騎士、ＭＣ（メサイア・コントローラー）用のハッチが爆破解放された物も少なくない。

美奈代は、五体満足な騎体を探した。

「あった」

整備用のハンガーベッドに固定されていた一騎の“幻龍(げんりゅう)”だけだ。

ハンガーロックを解除するだけで一苦労と気づいたのは、すぐのことだ。

床に転がる“幻龍改(げんりゅうかい)”達を前に、正直、何から手を付けていいのかさえわからない。

「まさかと思いますが」

美奈代は牧野中尉に尋ねた。

「ここに妖魔が侵入してる可能性は？」

「ありえますね」

牧野中尉は何でもない。という顔で言った。

「整備部隊とベルゲを入れますから、妖魔の探索を優先しましょう。“さくら”？」

「はぁい」

“さくら”が片手をあげて返事をした途端、“征龍改(せいりゅうかい)”のセンサー感度が一気に高まった。

「いるよ」

「どこ？」

さくらは不意に、指先を上に向けた。

次の瞬間――

ボトッ！

本当にそんな音がして、スクリーンが真っ暗になった。

「えっ？」

ゴソゴソゴソ

そんな音だけが聞こえてくる。

「な、何？」

ゴソゴソゴソ

不意に、スクリーンの映像が回復した。

まるで、何か遮蔽物が上に移動することで視界が広がったような

――――

問題は、その視界の隅で動いているもの。

恐ろしく悪趣味な色彩を持つ何かが、“征龍改（せいりゅうかい）”の光学合成によって、照明に反射した色を鮮明に輝かせる。

「あのぉ……」美奈代は声が震えていた。

「これ……何かで見た気がします」

「何に見えます？」

牧野中尉の声も涙混じりだ。

「でっかいクモのお腹」

「たぶん……正解です」

牧野中尉が言った。

「私――――もうダメです」

プシュン

そんな音がして、“征龍改（せいりゅうかい）”のパワーゲージが一瞬にして半分になった。

それだけではない。センサーは軒並みダウンしている。

「――へ？」

ピーピーピーピー

聞き慣れない警告音が響き渡り、“ＭＣ（メサイア・コントローラー）に異常事態発生”を告げる警報が視界に表示されたのは次の瞬間だ。

「気絶している可能性あり？――ちょっとぉ！」

警告を読んだ美奈代があわてたのも無理はない。

メサイアを管理するＭＣ（メサイア・コントローラー）がいなければ、メサイアはまともに動かないのだ。

「起きてください、牧野中尉っ！」

美奈代はたまらず大声で怒鳴った。

「たかがクモ一匹、ちょっとデッカイだけじゃないですか！」

当然、返事はない。

「クモなんかよりずっと厄介でバケモノな人が何やってんですか！」

クモが目の前で動いた。

尻から出ているのは、間違いなく糸だ。

本能的な危険を感じた美奈代は、恐ろしく重くなったＳＴＲシステムを操作して、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを上に向けた。

その灼熱地獄は、かすって無事で済む代物ではない。

センサーのかなりにダメージが来ることは避けられない。

だが、ここで死ぬわけにもいかない。

“さくら”――恨むなら中尉を恨みなさい！」

ノズルを慎重に調整しながら、

「これは――中尉のせいっ！」

美奈代はそう怒鳴り、トリガーを引いた。

ギシャァァァァァッッッ！！

騎体表面温度の急上昇の警報が鳴り響く中、騎体の間近を紅蓮の

炎が走り、背中を焼かれた巨大なクモがハンガーデッキの床に落下。のたうち回る。

「――こいつっ！」

美奈代は腹を見せながらもがくクモにもう一度、トリガーを引いた。

外に絶対出たくない！

絶対、恐ろしいにおいが立ちこめているに違いない。

火葬されたクモの腹からは吐き気を催すような色の液体がにじみ出し、床に広がっていく。

「クモはいなくなりましたから！」

今、美奈代の感心はクモの死骸ではなく、自分の頭上でノビている牧野中尉にあった。

「起きてください――よっ！」

美奈代は“征龍改（せいりゅうかい）”の上半身を激しく揺すった。

「これで起きない！？どれだけ神経が図太いんだ、あのクソ中尉！」

「マスター」

ひょっこり顔を出したのは“さくら”だ。

「私、起こしてこようか？」

「頼めるか？」

「うん」

“さくら”は頷くと、両手の握り拳をリズミカルに繰り出す動きをした。

“さくら”の愛らしい仕草からすぐに気づかなかったが、それか。ボクシングだと気づいた美奈代が何か言う前に“さくら”は姿を消した。

そして、次の瞬間――

ガスッ！

ドカッ！

牧野中尉のいるMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）から、そんな鈍い音がした。
美奈代は、何か恐ろしくイヤな予感がした。
不意に、エネルギーゲージが戻った。
牧野中尉が意識を回復した証拠だ。
普通なら喜ぶべきだろうが、背筋が寒い。

「テメェ、よくもやりやがったな！？」

ドカバキグシャッ！！

聞き取れないほどの牧野中尉の怒鳴り声がコクピットに響き渡り、ドスンバタンと激しい揺れが伝わってくる。時折、“さくら”の悲鳴と命乞いが混じっている。

「――お待たせしました」

牧野中尉が通信モニターに現れたのはそれからすぐのことだ。
両方の頬が真っ赤に腫れ、右目に痣が出来ていた。

「あの……“さくら”は？」

「ちょっと、足下で“勉強”してもらっています。大丈夫です」

牧野中尉は堅い表情に残酷な笑みを浮かべて頷いた。

“さくら”にも、オトナの仁義と礼儀ってモノを教えてあげなくてはいけないと思っていた所でしたから」

「あ、あの？映像、見せてもらっても……」

「子供が見ていいものではありません。それより」

牧野中尉は言った。

「艦内に、かなりの妖魔が侵入しているようです」

「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）はもう危険ですよね」

美奈代騎の装備する広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）は、文字通り広範囲の敵を焼き殺す兵器であり、こんな狭い場所、しかも友軍の艦内で使用してよい代物ではない。

「歩兵隊が持っている火炎放射器の方が有効ですが……」
牧野中尉が顔をしかめたのは、床に転がっている兵器の残骸だ。
ハンガーデッキの床には機動速射砲の潰れたマガジンや砲弾が散乱している。光を反射するのは、メサイアや機材からあふれたオイルだろう。広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドだったらシャレにもならない。
「ここで火器を使うのは、自殺行為ですね」
「どうします？」
「小口径の火器で対処するしかありません」
牧野中尉は言った。
「陸戦隊の仕事ですね。要請しましょう――“さくら”？お尻と前のソレ、誰が抜いていいって言ったの？」

伊吹の最後　第三話

メサイア輸送艦“伊吹”。

“入間”級２Ｌ級補給艦２番艦として建造され、後にメサイア輸送艦に改造された。

艦の大半を占める左右の大型コンテナブロックがその名残だ。

撃沈された時点での乗組員は、メサイア整備部隊まで含めて７２１名。

生還者はたった１０６名。

艦司令部は艦長以下、総員戦死。

犠牲者の大半は、整備部隊。

ハンガーデッキの惨状から容易に想像できる通り、彼らが犠牲者の大半を占める。

艦司令部を除く機関部要員など、メサイアに関係しない部門の生還率が高かったのは、彼らの大半が配置されていたのが機関ブロックだったためだ。

これは、“伊吹”のみならず、“鈴谷（すずや）”も含む補給艦や輸送艦の構造的な理由による。

飛行艦における補給艦や輸送艦は、外見上の巨体の大半はコンテナブロック。

輸送艦＝空飛ぶコンテナ。

そう呼ばれる由縁でもある。

つまり、艦の構造物の大半は、本当にコンテナでしかないのだ。

それだけに、あれほどの巨体を持ちながら、乗員はわずかしか乗り込むことない。

艦そのものは最悪、ＳＣ（シップ・コントローラー）一人だけでも動かせる程度の代物なのだ。
だから本来的に、乗組員の居住に必要な設備はすべて艦の心臓部である機関部に付随する形で十分事足りる。
“伊吹”の場合、コンテナブロックはすべてメサイアの運用にのみ必要な設備に割り当てられており、艦本来の運用に必要な施設は存在しない。

この構造が、兵種ごとの乗員の命運を分けた。

不時着の際、このコンテナブロックの左半分が衝撃と火災に陥り、最終的には弾火薬庫が誘爆。
左舷コンテナブロックはこの誘爆により、内部に配置されていたメサイアや整備兵、そして候補生達と共に吹き飛んだ。
二宮達にとって割り切れないのは、この誘爆が不時着から数時間後に発生していることだ。
通信記録から、左舷コンテナブロックにいて生き残った相当数が、何とか火を消そうとして艦内にとどまり、結局助からなかったのは明白だ。
司令部がすぐに救援命令さえ出してくれれば、かなりの数は助かったろうことは容易に想像できる。

今、二宮達の目の前には、その爆発の傷跡が口を開けている。

２５０メートルのコンテナブロックが吹き飛ばされた傷跡は、とてもこれが艦の残骸とは思えないほどの無惨な光景だった。
高価なメサイア整備用機材が得体の知れない残骸になり果てている。
「機関部は無事なのね？」
二宮は通信モニターに映る美夜に訊ねた。
「ええ」

美夜はモニターの中で頷いた。
「着脱レールがゆがんでなくてよかったわ。アレがやられていたら、無理矢理ドッキングブロック壊して、機関部だけで日本まで戻ってもらう必要があるからね」
「出来るの？」
「機関の規格は一緒だから簡単よ。“鈴谷（すずや）”のレールが錆びてなければね」

飛行艦における輸送艦は、コンテナを運ぶ艦と言ってもいい。
そのため、任務によってコンテナを交換させる必要がある場合が予想される。
そのため、コンテナの後ろには２０メートルほどの長く太いＬ字形のレールがせり出している。
ここに飛行艦の機関部を乗せ、コンテナ本体とドッキングさせたあと、爆破ボルトで固定。輸送艦としてコンテナを運ぶ。
少なくとも、輸送艦が出自の“鈴谷（すずや）”はそんな感じで艦として成り立っているし、輸送艦は皆、機関部にも同様のレールがあり、必要に応じて機関部を増設することが出来る対策が予めなされている。
“重連”と呼ばれる措置だ。
これにより、機関部出力が上がり、かなりの重量物を輸送することが出来るようになる。
美夜がやろうとしているのは、まさにそれだった。

「機関部に立てこもっていた候補生や整備兵の生き残りは回収を進めている。それと」
美夜は、手にした命令文を握りつぶした。
「御真影もね」

「ああ……あったんだ」

「ええ。海で沈んだ艦の分は、さすがに諦めたらしいけど」

“伊吹発見セリ”

その報告に触れた司令部は、最高レベルの暗号、さらに命令文の閲覧後の焼却の厳命付きで、美夜に新たな命令を下した。

曰く――御真影と軍艦旗を回収せよ。

御真影――天皇の写真のこと。

海軍と近衛飛行艦隊では、艦の最後において、その安全を確保することは艦長と、彼等を指揮する司令部の義務だとされる。

司令部が、その回収を命じてきたのは当然だが、司令部が御真影と軍艦旗の回収を当初忘れていたことは、その命令の送り方からして明白だ。

そんな所に体面を求める司令部の体質が、美夜にはどうにも許し難い。

「機関ブロック。しかもSC（シップコントローラールーム）にね」

「井上艦長の聡明さかしら？あそこがやられる時は、艦が文字通り最後の時だから」

二宮はふと気付いたことを訊ねた。

「美夜？“鈴谷（すずや）”の御真影は？」

「機関部、精霊体エンジンルームの中」

「……そっちもありか」

「そうよ。写真は命令に過ぎないからともかく、乗組員を何人かでも助けられたことは嬉しい事よ」

「不幸中の幸い……」

「離脱作業が始まるわ。こんな時、敵に襲われたらシャレにならな

いから、警戒よろしく」
「了解している」
ハンガーデッキから運び出され、“幻龍改(げんりゅうかい)”とその残骸がストレッチャーに乗せられて“鈴谷(すずや)”と“伊吹”を往復する。
機関部の“伊吹”からの分離と“鈴谷(すずや)”へのドッキングが終わらないと、“鈴谷(すずや)”は再び地面に降りることが出来ない。
二宮達は、その間の警戒を怠ることは出来ない。
今朝から一体、何時間メサイアに乗り続けているのか考えないことにした。
「……そういえば」
二宮は美夜に訊ねた。
“あの艦(フネ)”にいた生存者は？」
「……それについては」
美夜が硬い表情で言った。
「後で話す」

「白人の女の子？」
二宮はその報告を正直、素直には信じられなかった。
「この国に生存者がいたの？」
「考えられないわ」
横を歩く美夜は、首を横に振った。
「この国が魔族軍の支配地域に落ちぶれて何年経過していると思っているの？その間、一人で生き残るなんてあり得ない」
「どこか地下施設とか」
「名作映画が出来るわね……ところがね？」
小銃を持つ憲兵が二人、入り口を守るのは艦の奥にある営倉だ。
憲兵達の敬礼に答え、美夜と二宮は営倉に入った。
艦で問題を起こした者を押し込めておくための牢屋である営倉。

通路の両側に並ぶ金属製のドア。
その一番奥のドアの前に置かれたパイプ椅子に座るのは、憲兵ではない。
女性看護兵だ。
「小林少尉。ご苦労」
「いえ」
“衛生”と書かれた腕章をつけた、中年の坂にさしかかりつつある小太りの女性士官が立ち上がって敬礼した。
「かなり警戒していて、何とか身振り手振りで何もしないとわかってもらえた様子ですが」
ドアの覗き窓を開きながら小林少尉は言った。
「正直、自信がありません」
「説得はしたんだんろう？」
「……それが」
小林少尉は、ちらりと美夜に目配せした。
「真理……実はね」
言いつつ、美夜は覗き窓の中を見た。
ベッドの上で膝を抱え、頭から被っている毛布からこぼれる少女の金髪が、通路の灯りに照らし出され、美しく輝いている。
「まぁ、見てご覧なさい」
「……どれ？」
彼女を見た時、二宮は本気で見とれた。
人形か。
それとも妖精か。
神の御技がいかに偉大かを、少女はその存在で物語っていた。
だが……その体は、小刻みに震えていた。

気の毒なほど、震えていた。
「余程のことがあったのか……」
二宮は見とれながらも、その震えに女として哀れみを感じてしまう。
「というかね」
美夜は、困った。という顔で言った。
「日本語は当然だろうけど、帝国語も通じないのよ」
帝国語。
この世界の世界共通言語として認められている言語だ。
「英語もフランス語もドイツ語も……どんな地方言語もダメ。言葉は喋ることが出来るけど、なんと言っているのか一切不明」
「……人間なの？」
二宮は眉をひそめた。
「もしかして――その」
「食器についた唾液から人間と同じＤＮＡが検出されているわ」
美夜は言った。
「というか、この艦の分析能力ではこれが精一杯」
「……」
こちらの視線に気づいたのだろう。
そっと毛布の下から見えた目が、二宮と視線が合った途端、少女はあわてて毛布を強く被った。
完全に警戒されている。
その仕草を見て、二宮はため息をついた。
「……厄介なことになりそうね」

ズンズンズンズンッ！！
不意に、外から砲撃音が響き渡った。
「何だ！？」
思わずその場で首をすくめた二宮達は、それぞれに通信機に怒鳴った。
「二宮だ！誰だ！？誰が撃った！？」
「宗像候補生です！」
青山中尉が答えた。
「あの艦から小型飛行物体１が発進」
「救命艇か？」
「可能性あり。ただ、反応が早いです……レーダーロスト」
「……すぐに向かう。即時発進待機」

それから数時間後。
「バカモンっ！」
残務整理のため、アフリカに残されていた司令部跡にカーメン大佐の叱責が飛ぶ。
機密書類破棄が仕事のようなものだ。
要員は書類の価値が分かる高級士官数名と、従卒を含めても２０名といない。
切迫した中にも、どこかのんびりとした空気が流れていたのだが、“メルストロム”が搭載していた輸送機を救命艇代わりに脱出した乗組員達がたどり着いてからは、事態は一変した。
「貴重な飛行艦を沈めにれた挙げ句、人類に捕まりましただと！？」
「も、申し訳……」
カーメン大佐の目の前でうなだれるのは、“メルストロム”から脱出出来た数少ない乗組員のうち、最も階級が高かったフグラ中尉

だ。
「人類側のメサイアと交戦状態に陥った後は」
「中尉、君はどこに配置されていた」
「主計課、食料庫です。戦闘状況は艦内放送で聞きました」
「小型輸送機を君が操縦したのか」
「いえ。チェルノフ軍曹、パイロットです。
自分のいた“メルストロム”第二食料庫は格納庫のすぐ隣でした。
格納庫の生存者は彼と3名の格納庫要員のみ。
私は生き残った部下を集めて、彼等と共に、格納庫に残っていた
輸送機で脱出しました」

「……もういい」
カーメン大佐はフグラ中尉の言葉を遮った。
「司令部要員かと思ったが、主計課では責任は問えない。医務官の
診察を受け、ゆっくり休め。ワーキン！」
「はっ」
フグラ中尉が敬礼の後、部屋を辞した。
カーメン大佐は、副官の一人、ワーキン少佐に命じた。
「――手段は問わない。奪還しろ」
「……は？」
「手段は問わない。奪還しろ。そう言ったのだ」
「し、しかし……」
「貴様は、あれがどういう存在かわかっているのか！？」
ドンッ！
カーメン大佐はデスクに拳を叩き付けた。
「メースを手配してやる。あれが人類に渡って、人類がその意味を
知って見ろ！もうシャレにならんぞ！」
「……はっ」
「ったく、本部に報告しなくては……俺までどんな叱責を食らうか
わかったもんじゃない。他人の尻ぬぐいを何で俺が……」

「で、では私は」
「まだいたのか!?とっとと行って鍵を取り戻してこいっ!」

“伊吹”の機関部の回収は夜8時までかかって完了した。
その間、“伊吹”から収容された元“伊吹”乗り組みの将兵のうち、手術等の処置が必要な重傷兵がドバイの医療施設へと送られた。
血まみれの負傷兵がTAC(タクティカル・エア・カーゴ)に乗せられ、“鈴谷(すずや)”を離れていく光景を言い表す言葉を、美奈代は思いつくことさえ出来ない。

「ほらぁ!そっち持て!」
「ぼっとしているな!」
教官達の激を受け、メサイアのパーツを手にハンガー内を駆け回るのは候補生達だった。
「破損させた騎体を整備兵様達にお直しいただくんだ!テメエ等わかってんだろうなぁ!」
「はいっ!教官っ!」
山科教官の怒鳴り声に、候補生達が怒鳴り返すような声を上げる。
何か、恐ろしい気迫のようなものを、彼らは“伊吹”から“鈴谷(すずや)”へと持ち込んでいた。
「あれだけの目にあったんだから、休ませてあげてもいいと思うけど」
美晴がぼやくのも無理はない。
“伊吹”から収容された候補生達は皆、着の身着のまま。袖や裾が破けている服を着ている者も少なくない。少なくとも富士学校にいた頃のように、清潔な服装をしている者は誰もいないし、それで誰もとがめようとしない。
そんなことにかまっている余裕はない。
何かに追われるように、皆が動き回っている。
「こういう時は、何かさせておいて方がいい――二宮教官はそう

言っていた」

とはいうものの、“鈴谷（すずや）”の空いてるハンガーベッドに寝かされた、修復が容易な程度のダメージしか受けていない“幻龍改（げんりゅうかい）”へと、パーツを手に駆け回る候補生達を前にする美奈代の目には、教官達の怒鳴り声はシゴキかイジメにしか見えない。

「バカ」

そう言ったのは宗像だ。

宗像は、その白く細い指で候補生達を指さした。

「あいつらの目をよく見ろ」

「目？」

「あいつら、仇をとることしか考えていない。自分達が生きているのは、死んでいった連中の仇討ちのためだと――――考えるなら、そんなところだろう」

「……」

美奈代は目をこすってもう一度、候補生達を見た。

候補生――――それは、あの染谷だ。

他の候補生達と一緒に何十キロもある重量パーツを持ち、油にまみれることを厭いもしない。

頬に出来た傷をかまうそぶりさえ見せない。

それは、整備兵達も同じだ。

包帯を腕に巻いた整備兵達が、血走った目でスパナを握っている。

自分の傷を治すヒマがあれば、騎体を直す！

本当にそう言っているように見えた。

彼らを突き動かしているのは、宗像の言う通り仇討ちなのだろうと、美奈代も思わずにはいられない。

「奴らにだって騎士としての矜持がある。何も出来ず、騎体を失い、仲間まで失ったなんて、許されることではないさ」

「だけど……」

さつきは首を傾げた。

“伊吹”を沈めた妖魔は、美奈代が倒したじゃん」

「連中にとってのカタキは、魔族軍そのものさ」
「じゃあ、アフリカから魔族をたたき出して初めて？」
「そのために、連中も我々もここにいる。マトにされるためじゃない――違うか？」
「まぁ……ね」
さつきは自分に言い聞かせるように頷くと、
「わ、私達も、何か出来ないかな」
「“征龍改（せいりゅうかい）”をいつでも出られるようにしておけ」
宗像は言った。
「連中が仇を討つ前に、このフネと一緒に沈んだらシャレにもならないからな」
「う……うん」
なぜか、さつきは納得できないという顔だ。
「――どうした？」
「あのさ……こう」
さつきも、それを口にしていいのか躊躇しているようだ。
「女の子らしいこと……なんだけど」
「ショーツとブラ外して相手してやれ」
「いや……さすがにそれは」
「ここで女の子ってのが、お前らしいな」
宗像は苦笑混じりの顔で言った。
「何だ？壮行会で告白されて色気づいたか？」
「な……何だかさ」
さつきは複雑そうな顔で言った。
「もったいなかったような……断っておいて正解だったような……」
「フン。告白もしない、されないまま、あの場から逃げ出したヘタレ女よりマシだ」
「そうそう！」
ポンッ。とさつきが手を叩いた途端、美奈代はその場から立ち去ろうとした。

「どこ行こうってのよ」
「トイレだ」
「さっき行ってきたばかりでしょう？」
「調子が悪い」
「何よ」
さつきは美奈代の首に腕を回した。
「染谷を慰めてやれば？泣いて喜ぶかもよ？“染谷さん。私が慰めてあげる”みたいな！」
「ダメですよぉ」美晴は言った。
「しばらく、シャワーの使用禁止ですから」
「ああ――それはキツいわ」
「でしょう？」
「いくら何でも、何日もお風呂に入っていないのに」
「……」
美奈代は思わず、袖のあたりのにおいをかいでみた。
「染谷候補生だって汗まみれでしょうし――そういうのがお好きなら別ですけど」
「ち……ちょっと……それは」
「でしょう？」

「――貴様等？」

女の子の黄色い話がスタートするかと思った矢先。
美奈代達は背後からかけられた冷たい声に凍り付いた。
恐る恐る振り向いた背後では、微笑んでいるのか、睨み付けているのか理解に苦しむ表情を浮かべた二宮が立っていた。

「何を話しているんだ？」

「――ったく！あのバカ娘共！」
艦長室に入った二宮は、吐き捨てるようにそう言うと、ドカッと乱暴にソファーに腰を下ろした。
「ロクに操縦も覚えないクセに、色気づくのだけは一人前なんだから！」
「今、あの子達どうしてるの？」
コーヒーを出しつつ、美夜が訊ねた。
「メサイアのコクピットから一歩も出るなと言ってあるわ」
コーヒーを受け取りつつ、二宮は訊ねた。
「……“幻龍改（げんりゅうかい）”、どんな感じ？」
「坂城さんからの報告だと、即時稼働騎は６騎。３６時間以内に２騎追加出来るそうよ」
「“伊吹”搭載は２０騎だから、だいたい半分が失われた勘定ね」
「そう――“伊吹”左舷デッキごとね」
「エンジンの探索は、夜明けと共にやらせてもらうわよ？」
「ええ。その探索がうち切られた時点で……」
美夜は深いため息をつくと目をつむった。
「……ねぇ」
テーブルにコーヒーカップを置き、二宮は訊ねた。
「やっぱり……他の艦でも沈むのは……」
「簡単に、コンテナ吹き飛ばすだけだと言い切りたいけど……さすがに簡単には割り切れないし他人事とは思えないわよ」
苦笑気味に美夜は言った。
「いつか、私のこの“鈴谷（すずや）”も、同じ運命を……なんて、どうしてもね」
「……苦労性は相変わらずね」
「そうでもなければ、管理職なんてなれるもんですか。それより」
「……あの子のこと？」
「ええ。せめて名前くらいはわからないの？」

「無理よ」
美夜は首を横に振った。
「言葉が通じないどころか、ほとんどしゃべらないんだもの」
「……どうするのよ」
「人間なら方法があるわ」
美夜は立ち上がって壁に貼られた地図の前に立った。
「真理は、帝国語をどうやって覚えたの？」
「小学校の時、修学旅行で神戸に行った」
「そうでしょう？みんなそうなのよ」

普通、帝国語は学習して覚えない。

帝国語は、呪具による魔法処理で脳みそに理解させる方法でマスターする。

そのために必要な呪具が、“語り石”だ。

日本語以外の外国語と接する機会が皆無に等しかった日本では、幕府隠密衆によって忍者同士にのみ通じる会話を可能にする石として重宝されていたという。
この石に触れるだけで、脳が帝国語を理解するようになるという優れものだ。

「――まさか」
「そう。神戸以外にも、世界中にあるのよ？語り石って」
美夜はそう言うと、地図に指を当てて言った。
「ここから６０キロ。海岸沿いの街、アンティータムよ」

翌日。

乗組員総出で“伊吹”からめぼしいものを運び込む作業が終了。
“鈴谷（すずや）”がその場を離陸したのは正午すぎのことだった。
甲板には、“伊吹”と“鈴谷（すずや）”の乗組員が整列する中、ラッパ手が国の鎮めを演奏する。
美奈代達もまた、甲板に“征龍改（せいりゅうかい）”を並べ、捧げ剣の姿勢をとる。
目の前の“伊吹”の残骸には大量の爆薬が設置されている。起爆装置が作動次第、“伊吹”はその存在をこの世から消すことになる。
「“伊吹”に対し――敬礼っ！」
“伊吹”乗組員の中で最も階級が高かった井上機関長の号令の元、甲板に出た全員が敬礼する。
美夜は手にしたそれを、無言で井上機関長に渡そうとした。
「――私には、その権限はありませんよ。艦長」
短く刈られたごま塩頭に日焼けした赤ら顔の井上機関長は、悲しげな笑みを浮かべ、それを受け取ろうとはしなかった。
「私は、単なる機関要員にすぎません」
「……」
美夜は無言で頷くと、それ――“伊吹”の爆破処理装置のスイッチレバーをひねった。

現地時刻１３時０３分３５秒。
内部から生まれた紅蓮の光に包まれ“伊吹”が、最後の瞬間を迎えた。

金色の髪の少女　第一話

「そこひっくり返して！」
紅葉の命令が耳を打つ。
美奈代はモニターにマーカー表示された得体の知れない残骸をひっくり返す。
夜明けからずっと、こんなことをさせられていた。
“伊吹”関連の作業から外されていた美奈代は、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に乗る紅葉の指揮下で動いていた。
あの“メルストロム”の残骸を、紅葉は調べている。
その手伝いだ。
紅葉と他のスタッフらしき白衣の男女が、残骸を前に何事かを話し合っている。
美奈代はそんなことに興味はない。
“伊吹”が沈んでから気になることなんて、染谷のことだけだ。
教官は既に候補生達からの信頼を失っている。
生き残った教官達に候補生達が従っているのは、表面的なことだと、教官自身がわかっている。
前線指揮官としての責務を全うし、亡き“伊吹”司令部からも信頼を受けた、候補生達にとって支えであり、心の拠り所。
染谷はそんな存在だ。
染谷候補生。
“伊吹”にいた候補生達は、誰もそんな呼び方をしない。

染谷さん。

敬意を込めてそう呼ぶ。

それは素直に敬意に値するし、それ以上に誇らしく、嬉しい。

だが――

同時にそれが、染谷が遠い存在になったことを、美奈代に教えていた。

“伊吹”から回収された候補生達は、皆が殺気だってただでさえ声をかけづらい。

“鈴谷（すずや）”に乗っていたことで難を逃れた美奈代達は、彼等にどこかで避けられていることを、イヤでも味わわされている。

“征龍改（せいりゅうかい）”を見上げる候補生達の視線に羨望どころか殺意に近い、何かを感じる時がある。

“伊吹”が沈んでから、“鈴谷（すずや）”の艦内の空気がどこか変わったことは、美奈代にもわかる。

そんな中だ。

恋人面して染谷の前に立つことは、美奈代には躊躇われた。

何と声をかけていいのかさえわからず、美奈代はただ、染谷から声をかけてもらうのを待ち続けていた。

しかし、四六時中、候補生達をまとめ上げるという責務に追われる染谷とは、近づくことさえ出来ずにいた。

それが、もどかしくさえ感じられる余裕を、美奈代自身が与えられていない。

ほんのちょっとした息抜きの時でなくては、染谷の存在さえ忘れている。

全てが忙しく、目の前の任務に思考さえ奪われてしまう。

プライベートなんて考える余裕さえない。
美奈代自身が軍隊という組織の中で歯車として動いていることの証明のようなものだ。
歯車に、私は――ない。

「何よこれは」
銀色に輝く残骸を前に、紅葉は顔をしかめるしかない。
「成分の8割が成分不明」
「新種の合金ですか？」
「アホ。合金だって、“コイツ”の前では、含有される成分がわかって当たり前でしょう？」
紅葉は手にした小型の筒を部下の白石技術大尉の前で軽く振って見せた。
成分解析筒。
ライフルスコープのような物体は、魔法科学技術の産物の一つ。
筒先に触れた物体の成分を一瞬で分析する力を持つ“呪具”だ。
使い手は“見通者（シーカー）”に限られ、しかも、そのレベルによって分析機能にも差が出る。
紅葉のような超高レベル者に扱われれば、世界最高峰の電子顕微鏡とスーパーコンピューターを組み合わせるより分析機能は高くなる。

問題は――そのレベルで目の前の物質の成分がわからないことだ。

「……まぁ」
紅葉は周りに転がる残骸を苦々しく一瞥した後、目の前に立つ“征龍改（せいりゅうかい）”を見上げた。

ドズゥゥゥゥム……

ズゥウゥウム……

遠くから粘っこい音が連続して響いてきた。

「……“伊吹”が」

白石は時計を見て、その意味を悟った。

“伊吹”の爆破処分が始まった。

つまり、“伊吹”が最後の瞬間を迎えたのだ。

「開発部総員」

紅葉は、爆発音のした方角に向き直って姿勢を正した。

「“伊吹”に対して黙祷、一分――始め」

目をつむり、頭を下げた紅葉は、この先のことだけを考えた。

“伊吹”に対して抱くのは哀れみではない。

仇をとる。

その決意だけだ。

憐憫の情なんて、あの艦が欲しがっているはずがない。

誇り高き軍艦と軍艦乗りが殺された時は、哀れまずに仇を討つ。

それが、礼儀だ。

幼い頃から、そう教えられてきた紅葉は、仇を討つことだけを考える。

とにかく、情報が欲しい。

一体、この艦の所属は？

その鍵を握るのは？

この艦の唯一の生存者。

あの金髪の女の子。

絶対、あの娘は何か知っているはずだ。

言葉が分からないと聞いた時は驚いたけど、生き残った“幻龍改（げんりゅうかい）”があの娘を乗せて“語り石”に向かっている。
会話さえ出来れば情報は絶対に入る。
連れて行ったパイロットは確か――――染谷とか言ったな。
あれ？
確か、染谷って……。
紅葉の思考がそこまで行った時、丁度1分が経過した。
そして、紅葉は自分が考えていたことを忘れてしまった。
科学系のこと以外に興味も関心もない。
この時点での津島紅葉とは、そんなキャラだ。
興味がないから、染谷については、そこで忘れ去った。
それだけのことだ。

「触らないで」
訓練騎使用の2人乗りコクピット。
教官用のシートに陣取る染谷は、そっとパネルに指を伸ばす少女の動きを止めた。
何度も言ったせいか、言葉そのものはわからないが、動くな。程度の意味はわかってくれたらしい。
チラッ。と後ろを見ると、ニコリと微笑んでくれた。
無理もないが、染谷はこれほどの美少女を見たことがなかった。

外国人の女の子は、こんなに可愛いのかな。
発艦の時も、普通の娘なら冷やかしの一つも言ってくるだろう都築達が何も言わなかった。
皆、この娘に見とれていたのは確かだろう。

ガクンッ！

騎体が強く揺れた。
操縦ミスだ。
びっくりした顔の少女が、不安そうにこっちを見る。

――――恥ずかしいな。

染谷は頬を赤くしながら、引きつった笑みを浮かべるのが精一杯だ。

安心して。

そう、言いたいのに言葉が出てこない。
ちらりと通信モニターを見るが、助け船を出して欲しいＭＣ（メサイア・コントローラー）は、まるで気付いていない様子だ。
純粋に、操縦ミスとして片づけているんだろう。

……まぁ。

染谷は思った。

言葉がわからないんだから、助け船なんて出してもらっても、この娘が混乱するだけか。
結局、染谷に出来ることは、カッコイイ所を見せられない、冴え

ない気持ちで操縦に専念する事だけだ。

「……ん？」

戦況モニターを見続けていた染谷は、不意に視線に気付いた。
モニターから顔を上げると、少女がじっと、自分の顔を見つめている。

「どうしたの？」

分かるはずもないと知っていても、訊ねてしまう。
小首を傾げる動作をしたら、少女は、ただ無言で、ニコリと微笑み返した。
そして、生徒用のシートに潜り込んでしまった。

その笑顔のかわいさに、染谷はしばらく操縦を忘れ、結局はＭＣ（メサイア・コントローラー）から大目玉を食らうことになった。

「“鍵”が敵艦から出ただと？」
「間違いありません」
ワーキン少佐は、部下からの報告に気色ばんだ。
「敵から逃げたのか！？」
「そ、それは……」
“鍵”のことをほとんど知らない部下は首を傾げるしかない。
「不明――――です」
そう、答えるしかない。
「ただ、敵メースに搭乗して移動中なことだけは判明しています」
「メースに？」

「はい。騎数は1」
「追撃してくるメースは」
「ありません」
「敵、飛行艦の針路は」
「海上にて待機中。メースと針路は一致しません」
「……」
ワーキン少佐は、しばらく考え込んだ。
脱走したなら、追撃するメースがいて当たり前だ。
何故、それがない？

「……情報が少なすぎる」

ワーキン少佐に与えられているのは、“鍵”と呼ばれる存在がいる。という程度だ。
それが人間なのか犬なのかさえ、実はワーキン少佐は知らない。
わかるのは、与えられた得体の知れないレーダーの反応だけ。
それで対象を回収しろだなんて、理不尽にも程がある。
下手なことをして責任問題になったら冗談じゃない。
「――周辺に友軍の存在は？」
「エーランド少佐の部隊がいます」
レーダー担当の士官が答えた。
「現在、ソコトラ島付近」
「狙えるか？」
「すぐに出撃させれば、接敵まで推定30分」
「よし……ヤツに伝えろ」
ワーキン少佐は、ちょっとだけ考えてから言った。
「貴殿の判断と責任の元に最善を尽くせ――それでいい」

エーランド達が、“鈴谷（すずや）”をすぐに襲わなかったのには十分な理由がある。

補給に手間取ったのだ。

アフリカに存在した魔族軍は、即ち彼等の上位機関であって、それが根こそぎアフリカから消えた。

これはすなわち、アフリカ周辺でエーランド達が補給を受けることが出来ないことを意味する。

だが、エーランド達に任務を与えておきながら、司令部は予定通りにアフリカから撤退した。

エーランド達のことなんてお構いなしだ。

その理由は、エーランド達の乗艦ヒューマーには十分な物資が存在し、作戦行動には支障がない。そう、判断されていたからだ。

その原則は、いともあっさりと崩れ去った。

バーレーンから移動中、海底付近を潜行移動した際、海底に放置されていた係維機雷に引っかかったのだ。

被害は甚大であり、潜行そのものは可能だったにしろ、かなりの物資が水浸しになった。

最悪だったのが、水と食料だ。

貯水タンクにヒビが入って、真水がなくなったことをエーランド達が知った時には、すでに機関冷却装置が停止した後だった。

ゴトランドが人類全てを呪おうが罵ろうがもう遅かった。

エーランドは2日待ってやっとのことで接触した整備艦からの補給と整備を受けている最中だ。

警戒に出続けたエーランドにとって、ここで出撃を依頼されても断りたいのが本音だが、ヒューマーの修復や補給にどれ程の費用がかかっているか、さらに今後のことを考えると、無下には出来ない。

元から、エーランドに与えられた選択肢は、依頼に応じる以外にはないのだ。

光学迷彩を放つフィールドが、景色を歪める中、整備艦“アブラウド”の中に収容され、破損を修復中のヒューマー。

その甲板には、発艦準備中のメース、“デュアリス”の姿があった。

魔族軍では特務部隊向けに開発された、“サライマ”と同世代のメースだ。

「とはいえ、少佐ぁ」

通信モニターの向こうで、ゴトランドはあきれ顔で言った。

「ここで一々、俺達が出る必要があるんですか？」

「補給と修復費用、誰が支払うんだ？ゴトランド」

「頼んますよ。少佐」

「そうしよう――部隊、出るぞ！」

「……セコいよなぁ。少佐も」

ゴトランドはハァッ。とため息混じりに艦橋からエーランド達を見送った。

「前に壊したメースの弁償代、ヒューマーの修復費用に上乗せして計上してるんだから」

「仕方ないですよ。少佐の場合」

ゴトランドの副官が顔をしかめながら言った。

そのしせんの先には、ハンガーデッキの様子を映し出したモニターがあった。

そこでは相変わらずのポーカーフェースで仕事に励むマイナ技術

大尉の姿がある。
「彼女の半端ない食事代、負担するだけでスッテンスッテンでしょう？」
「毎回毎回、あの細っせえカラダのどこに入ってるんだろうな……あの食いモノ」
「テッセン主計長が泣いてますよ。彼女が来てからってもの、食料の消費が3倍じゃ効かないって」
「さもありなん……」
ゴトランドは、天井を見上げた。
「全ては、少佐の稼ぎにかかってるってワケだ」
そう言ってから、首を左右に振った。
「……無理だろうなぁ」

エーランドが率いるのは3騎の部隊。
「目的はメースの破壊じゃない。いいな？」
エーランドは部下に命じた。
「あくまで搭乗者の無傷での捕獲だ」
「了解」
「少佐。一体、メースにゃ誰が乗ってるんです？」
「私も知らない」
エーランドは素直に答えた。
「ただ、確保した際の報奨金は、我々が1年間は遊んで暮らせる額だ」
ヒュウッ。
誰かが品のない口笛を吹いた。
「上等♪」
「ただしっ！」
部下がやる気を出した頃を見計らってエーランドは畳みかけた。

「乗員に傷つけた場合、最悪、殺したらゼロどころかマイナスだぞ！そこを理解しろっ！」
「応っ！」

その時、染谷は、身振り手振りで語り石に触れさせたばかりだった。

かつてはアフリカ中から人々が語り石に触れるためにやってきた都市は、今や見る影もない。
１０年の歳月と戦禍によって崩れかかった建物群。
生い茂る草によってめくれ上がったアスファルト。
語り石は、そんな中に放棄される形で残されていた。
かつて数万――否、数千万の人々を受け入れたその場所を見つけた時。
染谷は安堵したものだが、その荒れ果てた光景が、女の子にとって安堵できるかといえば、そんなことはない。

こんなところで、何をするの？

少女があからさまにおびえだしたのが、時間のかかった原因だった。
結局、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の伊月中尉の手助けがあって、やっと語り石に触れさせた苦労は、本当に誰かに語って聞かせたい位、大変だった。
語り石に触れた途端、ぐったりと倒れた少女を抱きかかえた染谷が、小走りに“幻龍改（げんりゅうかい）”に向かう。
「急ぎましょう」
手にＰ－９０ＩＪを持った伊月中尉が染谷をせかす。
「メサイアのコクピットを騎士とＭＣ（メサイア・コントローラー）が同時に離れることは、戦場

では原則禁止ですからね」
伊月中尉は、生きていれば染谷の母と同い年という古株だ。
――あんなババアと組まされるなんて、染谷さんも気の毒だ。
そういう連中は多いが、ベテラン故に頼りになることこの上ない。
むしろ、染谷はいいパートナーが出来たと感謝すらしていた。
「艦長の許可は得ていますよ」
その接し方は、自然とむしろ母に対するそれになると、染谷は何となく、そう思う。
「……ま、いざという時は、それで文句も言えますけど」
伊月中尉は、抱きかかえられた少女の横顔をちらと見ると、苦笑気味に訊ねた。
「この娘について、泉候補生には何と言ってきたんです？」
「えっ？」
「この光景を泉候補生が見たら、どうなるでしょうね」
「ど……どうなるんですか？」
「さあ？」
伊月中尉は、意地の悪い笑みを浮かべながらＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）に通じるリフトグリップを握った。
「ひっぱたかれる程度は、覚悟しておいた方がいいわよ？女の嫉妬は恐いからね」
「だ……だけど」
染谷は眠り続ける少女の顔をのぞき込んだ。
綺麗でカワイイと思う。
語り石に触れた副作用で、意識を失ってしばらく眠り続けるケースがあることは、経験者である染谷にはわかる。
この娘は、そういう状況にあることもわかる。
もしかしたら、ちょっとキスしてもバレないんじゃないかな。
そんな、下心がないといえば嘘になる。

だけど、その向こうに怒り狂った美奈代の顔があると思うと、なんだか喜ぶことが出来ない。

女の子の恐ろしさって、こんなものかなぁ。

ふと、そんなことを思ってから、染谷はコクピットへのリフトグリップを握った。

先に登ったＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）のハッチの前で、伊月中尉が手順通り、銃のマガジンを抜いている。

その危なっかしさから、彼女が銃の扱いになれていないのかな？と、そう思った。

「面倒くさくてイヤなのよね」

その視線に気付いたのか、伊月中尉は恥ずかしそうに笑いながら大声で言うと、片手でＰ９０ＩＪを掲げて見せた。

染谷にはカバンにさえ見える奇妙な外見の銃。

ベルギーのＦＮ社製の銃のライセンス生産品で、近衛では後方支援部隊向けに配備された後、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の護身用にも配備されつつあると、座学で聞いたことを思い出した。

そんなの、妖魔相手にどの程度の意味があるかは、あまり考えたくなかった。

「むかしのグリースガンの方が好きだったわ」

「使ったことがあるんですか？」

「あるわよ？」

マガジンをポーチに終い終えた伊月中尉は、笑いながらハッチの解放作業に入った。

「前のダンナの時ね？

夜営で他の女のテントに入り込んだ所を取り押さえてやった時、

持ち出したのよ。
あいつ、銃口を口に突っ込んでやったら泣いて命乞いするんだもの。
情けなさのあまり、その場で離婚してやったわ」

プシュンッ

静かな作動音をさせながら、MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）のハッチが開くと、伊月中尉はハッチの中に潜り込んでいった。

伊月中尉の過去について考えるのはやめよう。

そう心に近いながら、染谷は少女を生徒用のシートに固定した。

「あの……泉候補生、これは、浮気とかそういうんじゃないからね？」

脳裏に浮かんだ美奈代に、我ながら言い訳がましいと思いつつ、染谷はどうしても弁明せずにはいられなかった。

さっさと帰って、この娘と離れよう。

それがいいに決まっている。
忙しかったから、最近は彼女に声もかけていない。
それを神様だか仏様だかが叱っているんだ。
そうだ。
帰ったら、二人きりの時間をとろう。
どこか、いいところはないかな。
教官用シートに座り、起動シークエンスを開始した染谷がモニターに見たものは、迫り来る得体の知れない巨人の姿。

「えっ！？」
「メサイアっ！」
ＳＴＲシステムの起動を確認するより早く、振りかざされた赤く光る戦斧が、自分めがけて襲ってくるのを、染谷はほとんど呆然として眺めるしかなかった。

金色の髪の少女　第二話

染谷騎からの通信ロスト。

それはすぐに“鈴谷（すずや）”に伝わった。

候補生に任務を与える以上、その行動は全てモニターされている。

データリンクされているモニターに現れたメサイア。

それを監視していた長野は、すぐに現在稼働中のメサイアに救援に向かうように命じた。

偶然にも、それが美奈代だった。

命令は、美奈代と染谷にとってよかったのか、それとも悪かったのか。

それは、終わってみなければ、当の二人にもわからなかった。

「染谷候補生が！？」

染谷騎遭難。

その報に触れた美奈代は、真っ青になって通信モニター上に映る長野大尉に尋ねた。

「候補生の安否は！？」

「不明だ」

長野は真顔で答えた。

その厳つい顔が、事態がどれほど深刻かを美奈代に教えてくれる。

「とにかく、敵は染谷騎をどこかに連れて行こうとしている。その狙いが何だかわからん」

「大体、おかしいですよ！」と、美奈代は言った。

「何で、染谷候補生が単独で出たんです？一体」

「艦長と二宮中佐達の命令で動いていること以外で俺が知っていることは」

「？」

「女連れで出たこと位で」

しまった！
長野は美奈代の顔を見た途端に、口を押さえた。
「ど、どういうことです？それって」
「いや……その」
「……あの、私達が発見した金髪の女の子のことですか？」
「ま……まぁ、そうだ」
「長野大尉」
通信に割り込んできたのは牧野中尉だ。
「それはつまり、染谷候補生とあの子のデート」
「いや……それは違うと思う」
「メサイアのコクピットを不純異性交遊の場に提供するのは、いささかやりすぎでは」
「というか、牧野中尉」
「はい？」
「悪戯に痴話喧嘩の火種を大きくしようとしないでくれ」
「まぁ……わかりました？」
「とにかく、今、出撃できるメサイアは泉、お前の騎だけだ」
「……」
「そこからなら」
「イヤです」
「……は？」
「イ・ヤだと言ったんです」
「何言ってるんだ？染谷候補生の安否が」
「死ねばいいじゃないですか」
「泉っ！」
「……」
普段なら縮み上がったろう長野の怒鳴り声にも、美奈代はそっぽをむいたままだ。
「もう一度言ってみろっ！」
「脱走でしょう？女連れで。アフリカのどこに逃げるかしりません

けど、女連れで、どこかでのたれ死ぬまで放っておけばいいんです」
「貴様、それでも！」
「……」
はぁっ。
美奈代はため息一つ、言った。
「女連れで脱走した騎士を殺せ――――そういうご命令ですか？」
「……お前、本気でいい加減にしろよ？個人的な感情でメサイアに乗っているのか！？」
「染谷候補生は女連れで脱走したのか。そう訊ねているのです」
「もうそうならどうする」
「その女ごと、染谷候補生を殺傷する許可を求めます」
「候補生を殺していいなら、命令を受け付ける……そう言いたいのか？」
「それ以外は、お断りします。営倉に入れというなら従います。このまま“鈴谷（すずや）”に帰艦した後にしてください」
「……はぁっ」
長野は深いため息の後、言った。
「染谷……苦労するぞ。将来」
「殺傷許可を」
怒りを含んだ高圧的なまでの声に、
「まだ脱走と決まったわけではない」
長野は、噛んで含めるように答えた。
「染谷候補生を確保して、何が起きているのかを確認しろ。無実の罪で処刑したとあっては俺も寝覚めが悪い」
「了解」
美奈代は頷くと、ＳＴＲシステムに力を込めた。
「あの浮気者……じゃなくて、染谷候補生の捕縛、必要に応じての殺傷許可で任務を受け付けました」
「程々にしておけよ？」
長野大尉は言った。

「いろいろいと――――後悔するのはお前だぞ？それから泉候補生」
「はい？」
「そのおっかねぇ面、どうにかしろ。心臓に悪い」

何をしていたのかはわからないが、とにかく敵のメースは動かなかった。
自分達は動かない敵を襲っただけ。
動くまで待ってやる義理なんてない。

一気に両腕、両足を切断して反撃手段を奪った。
だが、敵はブースターを吹かし、飛んで逃げようとしたので、背後からブースターを滅多切りにした。

頭部と胸部は、コクピットがある可能性が高いので、破壊は避ける。

それがルールだったのに、何度忘れかけたかわからない。

とにかく、動力系統のパーツを破壊し、騎体が全く動かなくなるまでじっくり時間をかけた。
憂さ晴らしと言われれば、それまでだ。
同型騎に負けた恨みが心の中からどす黒く沸き上がってくるのを抑えることが出来たのは奇跡だと思っている。

とにかく、探索装置は悲鳴を上げるほど働かせ、中の生存反応をモニターし続けたから、敵騎の中には3人の反応があり、全員が生きているのはわかる。

脱出なんてされたらもっと厄介だ。
敵が逃げ出す前に、テック軍曹に傷だらけの騎体の襟首を掴んで移動開始を命じた。

砂漠と岩だらけの荒涼とした大地がどこまでも続く空をエーランド達は飛び続ける。

――盛大にグチを言い合いながら。

グチ？
そう。
愚痴だ。

本来ならもうそろそろ母艦に戻って祝杯を挙げている頃だ。
だが、エーランド達は未だに海にたどり着くことさえ出来ない。

理由はある。

「人類側の索敵機が海にさしかかった。ここで下手に動くと、人類に位置を悟られかねない」

そう、ゴトランドが報告して来ただけではない。
何よりも、捕獲に成功したと報告した途端、ワーキン少佐から横やりが入ったのが致命傷だった。

曰く、
――最寄りの司令部へ連行し、直接引き渡せ。

別にいい。
エーランドが知っている“最寄りの司令部”は、ルート上。

逆に近くていいな。
命令を受領した時、エーランドはそう思った。
ところが……。
司令部があるべき場所は更地になっていた。
ワーキン少佐に問い合わせて、ほとんどの司令部が撤退したことを知った。
さっさと言え！
情報を確認していないのか！
エーランドとワーキンの間で、文句のやりとりはすぐに口論となり、凄まじい罵り合戦にエスカレートした後、とにかくもエーランドは、この時初めて軍司令部の場所を知った。
エチオピア高原のほぼ真ん中。
となれば、ルートは逆の上に、かなりの遠回りを余儀なくされる。
「勘弁してくれよ」
部下から沸いて出る文句に、エーランド自身が頷いてしまう。
「これでただ働きになったらどうしてくれるんだよ」
「連中、移動にかかったコストは別会計で負担してくれるんでしょうね。少佐」
部下からの不安に、エーランド自身、答えられない。
「少佐」
リナ軍曹が訊ねた。
「ワーキン少佐が要求してきたのは、反応のある三人のうち、誰で

すかね」
「わからない」
この質問には、エーランドは素直に答えることが出来た。
「依頼のあったのは、このうちの誰かだろうし、もしかしたら3人ともかもしれない」
「どうします？」
「とにかく引き渡す。我々は、捕獲が仕事であって、選別は仕事じゃない」
「ごもっとも……少佐！」
リナ軍曹が鋭い声をあげた。
「接近する敵あり！数1」
「たった1騎！？どこから出てきた！？」
“メルストロム”の墜落地点から出現。まっすぐこっちへ向かってきます」
「人類がこっちを捉えることが出来るのか！？」
「まさか！」
この中ではエーランドより長い軍歴を誇るタッホウ少尉が目を見開いた。
「人類側の探知能力では、こっちを捉えることは出来ないと聞いていますよ！」
「しかし」
エーランドは、ハッ！となると、リナ軍曹騎が襟首を掴んでいる敵騎の残骸を睨み付けた。
「くそっ！」
「少佐！？」
「こいつが出している信号を追いかけているんだ。
リナ軍曹、電波妨害のレベルを最大へあげ、司令部へ飛べ。
こっちとも通信が出来なくなるが、こうなれば、軍曹の運にかけるしかない。
俺とタッホウ軍曹であいつを止める！

タッホウ軍曹、やれるな！？」
「俺ぁ、給料もらってるんですよ？」
「――――そういうことだ！リナ軍曹、幸運を祈る」
「はいっ！」
メサイアの残骸を片手に遠ざかるメース２騎を護るため、メース２騎が戦斧を構えた。

「敵の数３」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）で、牧野中尉が感心したように言った。
「まさか、染谷候補生達も考えましたね」
「……ええ」
「まさかモールス信号なんて使って、彼我の情報を伝えてくるとは」
「……まぁ」
美奈代はウェポンセフティを解除しながら言った。
「敵はもうお見通しのようですがね」
「２騎が分離、こちらに」
「空中戦だと……分が悪いです」
「地上に引き込みたいのですが、それだと、染谷候補生達に追いつかなくなる恐れが」
「……賭けましょう」と、一瞬、顔をしかめた美奈代が言った。
「賭ける？」
牧野中尉が眉をひそめた。
「何に？」
「染谷候補生達の幸運に」
美奈代は、騎体を地上へと降下させた。

「ほう？」
エーランド達のモニターでも、美奈代が地上へ降下する様子は見

て取れた。
「少佐、あいつ、俺達とやる気ですよ」
タッホウ軍曹は嬉しそうに、その大きな顔をくしゃくしゃにして笑った。
「機動性じゃ勝てないのがわかってるんだ」

「やるか？軍曹」

「とりあえず」
笑いながらタッホウ軍曹は言った。
「一対一（サシ）の勝負は久々なんで、楽しませてくださいよ。少佐」

「なら、手出しはしないぞ？」

「当然♪」

金色の髪の少女　第三話

ズンッ！

派手な音を立て、“征龍改（せいりゅうかい）”がアフリカの大地に降り立った。
武装は斬艦刀とシールドだけ。
目前では、飛行雲を引きながら敵騎が接近中。
普通なら絶対に消すだろう飛行機雲を派手に引きながら接近してくる意味が、牧野中尉にはよく分かる。
――バカにされている。
そういうことであり、
――相手として見下されている。
そうとも言える。
「どうします？」
「……そうですね」
牧野中尉に訊ねられた美奈代は、接近しつつある敵騎を睨み付けながら言った。
「とりあえず、コクピットから引きずり出して」
「いえ――あのね？」
敵騎に対する戦闘手順を確認したかった牧野中尉は、美奈代のトンチンカンな答えに、思わず目が点になった。
「な、何を？」

「顔が腫れるまで往復ビンタ喰らわして」

「あの……？わ、私が聞いているのは」

「生きたまま――ミンチにして」

「……頑張ってください」
どうするの？心配そうな顔の“さくら”の前で、牧野中尉は首を左右に振った。
「つける薬がありません」

敵騎はすでに地上に降りて、こちらを待ちかまえている。
「さぁて」
タッホウ軍曹は舌なめずりすると、騎体を地上に降下させた。

ズドンッ！

着地の衝撃が、鼓膜に響くほどの爆音と、緩衝装置が殺しきれなかった、舌をかみ切りそうなショックに変換されてタッホウ軍曹の脳髄を突き抜ける。

「くぅぅぅぅっっ」

ショックに悲鳴をあげた脳が静まるのを、歯を食いしばって耐えたタッホウ軍曹は、キッ！と目の前の敵騎を睨み付けると、
「うぉぉぉぉっっっ！」
雄叫びをあげた。
彼は、人間界に来て、メースで地上に降りたのは、これが初めてだった。
だが、ここが人間界だろうと魔界だろうと、彼が立つのは、いつだって戦場だ。
数百年、変わることのない真実が、それだ。

ここが戦場であることに、何も変わりない。

なぜなら、タッホウ軍曹がメースに乗って立つ以上、ここは戦場なのだ。

「たまんねぇぜっ！」

真理を告げられた信者のような感動的な興奮がタッホウ軍曹を包み込む。

戦場に立つという恩寵に預かった身として、彼は常に敵騎という供物を主に捧げてきた。

血の生け贄が、目の前にいる。

「俺は戦神、マイリーの猟犬！」

興奮した脳は、騎体後部を、土煙がもうもうと立ち上っていくことさえお構いなしだ。

他の敵にも自騎の位置を知らせる土煙や飛行機雲を生み出すことは、普通のメース使いは忌み嫌う所だが、それさえ気にしないあたりが、彼が如何に興奮しているか、そして、人類のメースが何騎だろうとまとめて相手をしてやろうという、高揚と高慢の現れでしかない。

「さぁ、生け贄さんよぉ！」

戦闘機動でのホバー移動。

その時速数百キロを超える高速移動のおかげで、敵騎がまるでカメラの中でズームアップしたかのように接近してくる。

だが、肝心の敵騎は、最初に見た姿勢のまま微動だにしない。

「ほう？」

こういう時、全く動かない敵は二つだけだと、タッホウ軍曹は知っている。

冷静に戦闘の段取りが組める熟練のメース使い。

そしてもう一つは――

どうしていいか分からず、凍り付く未熟者。

今回は？

タッホウ軍曹は一瞬、自らの中に沸き上がった判断に顔をしかめた。

「……馬鹿な」

彼は顔をしかめると、頭（かぶり）を強く振り、その判断を頭から追い出した。

「相手は人類だぞ、何を考えた？……俺は」

そう。

相手は人類。

俺達より圧倒的に“弱い”存在だ。

俺達からすれば虫けらのような存在。

だから、そんな連中の作ったメースの出来損ないなんて、恐れるに足らない。

あんなものにやられるなんて、エーランド少佐も地に墜ちたものだ！

タッホウ軍曹にあるのは、そんな驕りだけだ。

戦斧を構え直すと、彼は相手の殺し方に思考の全てを切り替えた。

瞬間的に叩き殺すのもつまらない。

徹底的に痛めつけて、

徹底的に追いつめて、

無様に嬲り殺してやるのが一番だろう。

「まぁ、俺自身」

死に物狂いでかなわぬ抵抗を試みる敵を殺すのは、ちょっと他では味わえない快楽だ。

血まみれの快楽に飢えた体が、目の前にぶら下げられたご馳走に熱くたぎる。

「久々の戦場で腕がなまってるかもしれねぇがなぁ」

戦斧の間合いはすぐに来た。

「悪く思うなよぉぉっっ！？」

ブンッ！

彼は戦斧を敵騎めがけて一気に振り下ろした。

その戦いは、エーランド少佐騎のモニターにもはっきりと映っていた。

突撃の最終過程で跳躍、戦斧にメースの自重をかけることで破壊力を増大させる、メース使いの間は、技量はいるが一般的な攻撃だ。

機動とタイミングの絶妙さは、さすがのベテランだとエーランドも敬意さえ抱いている程だ。

問題は――――

「……」

目の前で起きたことについて、エーランド自身、考えがまとまらない。
タッホウ軍曹騎が空中で戦斧を振り下ろす姿勢のまま固まっている。
その斜め後方には、長い剣を構えた敵騎が剣を横に振りきった姿勢で立っている。

目の錯覚だ。
あまりのことに、その瞬間だけが、目に焼き付いただけだ。

エーランドにも、それはわかる。

“絵”としては受け入れることは出来る。
だが、
それを、
“現実”として受け入れることはどうしても出来なかった。

ズンッ！

現実逃避したエーランドを現実に引き戻したのは、そんな音だ。
タッホウ軍曹騎が胴の辺りで真っ二つに切断された。
上下に分かれた騎体の断片が、アフリカの大地に投げ捨てられたゴミの転がって爆発の炎の中へと消えていった。

「た……タッホウ軍曹っ！」

肺の中身と一緒に吐き出した自らの声が、エーランド少佐を鞭打つ。
胴体のコクピット付近を真っ二つにされた。
あれでは脱出もなにもない。
タッホウ軍曹戦死。
現実に引き戻ったエーランドは、タッホウ軍曹に何が起こったかを冷静に分析した。
戦斧で襲いかかったそのがら空きの胴を真っ二つにされた。
敵が微動だにしなかったのは、パニックになっていたからでも何でもない。
こちら側の隙を狙っていた。
それだけだ。
タッホウ軍曹の完全な敗北としか言い様がない。
熟練のメース使いだろうが新兵だろうが、死ぬ時は死ぬ。
そんな戦場の暗黙のルールをまざまざと見せつけられたエーランド少佐は、短くタッホウ軍曹に哀悼を捧げると、戦斧を構えなおした。
次の相手は――――自分だ。
戦場で単騎同士が相まみえる興奮は――――エーランド少佐は感じ

られなかった。
猫のつもりでじゃれかかったら、実は虎だった。
そんな心境のエーランドの背中を、冷たい一筋の汗が走った。

「まず――1騎」
居合いの要領で敵騎の胴をなぎ払った美奈代は、すっかり座った目で言った。
「次は――あの浮気者」
その声は、とりつく島と言うべきものが、今の美奈代にはまるでないことを告げていた。

「敵、移動の様子なし」
――もうやだ。何、この非常識。

牧野中尉は小さくそう呟くと、自らの任務に没頭することにした。
個人的感情でどうこうより、職務で接してる方がまだ気楽だ。
「――どうします？」
「染谷騎は？」
「現在、距離８０００。遠ざかります」
「……」
美奈代は、無言でブースターを点火、まるでエーランド騎なんて存在しないといわんばかりに、“征龍改（せいりゅうかい）”を地表すれすれの超低空に入れた。

「ば、バカにしているのかっ！？」
足下を加速しながら遠ざかっていく敵騎に、エーランドは激高す

るしかない。
当然だ。
自分という相手がいるのに、それを敵は公然と無視しているのだ。
「わ、私では役不足だとでも言うのかっ！？」
体が怒りに震える。
こんな屈辱、久しぶりだ。
闘うべき相手に無視される。
戦士として、これほどの屈辱はない。
その足下を悠然と通過されるということはつまり、歴戦の猛者として、魔界では名の売れた身だという自覚のあるエーランドは、その存在全てが、公然と否定されたことにほかならないのだ。
「ふ……ふざけるにも程があるぞ！」
血走った目で遠ざかっていく敵を睨み付けると、エーランドは敵騎めがけて騎体を急降下させた。
「この非礼、死んで詫びてもらうおうか！」
その目前には、敵騎のがら空きの背中が近づきつつあった。

「ち、ちょっと！？」
牧野中尉は何度も後ろを見るしかない。
ＭＣＲ内。（メサイア・コントローラー・ルーム）
ＭＣ用のシートの後ろなんて何度見ても、別に何も映っているわけじゃない。（メサイア・コントローラー）
下手に外の光景なんて映し出された日には、仕事に集中できない。
それでも、牧野中尉は後ろが気になって仕方ない。
機材ばかりのシートの後ろを何度も見てしまう。
敵騎が上空、しかも背面から接近しつつあるのに、牧野中尉が乗る“征龍改（せいりゅうかい）”はまっすぐに飛び続けている。
「て、敵騎接近中！距離１２５０！」
どうするんですか！？

牧野中尉の問いかけに答えたのは、武装や騎体の状態を表示するステイタスモニターだった。

ピピッ

モニターで反応したのは、腰部にぶら下げていたモノ。
それが点滅したということは、使用された。
そういうことだ。

「――――えっ？」

牧野中尉が驚くのも無理はない。

それは普通、

空中戦では絶対に使わない代物だったからだ。

敵騎から小型の物体が一つ、放出されたのはエーランドの目にも映った。
ただそれがあまりに小型で、別に熱も何も持っていないこと。
先程の戦闘のショックで脱落した部品か何かだろう。
つまり、危険性はない。
そう、判断したのは、彼が結局の所、人類の科学技術とは縁のない魔族だというまたとない証明となった。

「ん？」

エーランドがギリギリで“それ”をかわそうとした、まさにその瞬間だ。

ドンッ！

網膜が破壊された。

鼓膜が破れた。

エーランドは、本当にそう思って、思わず目をつむった頭の耳を強く押さえてしまった。

メースのコクピットにいる以上、外からの音や光には万全な対策は取られている。

メースには、メサイア同様、明らかに搭乗者が肉体的に耐えられない強い光や音は、モニターやスピーカーが自動的にリミッターを作動させて搭乗者を護る仕組みが採用されている。

数十メートルを誇る最強魔法兵器に乗っていて、鼓膜をやられたのが原因で負けましたなんて、冗談もいいところだが、肝心の搭乗者の心理的なパニックまではどうしようもない。

リミッターが入る直前までのモニターが真っ白になった強い光。

耳を襲った強い音。

一瞬でもそれが入ったら、いくら歴戦の猛者と呼ばれても所詮は脳が耐えられない。

何度も目をしばたたかせ、視覚情報を脳に送れと命じて、目がやっと見えてきた。

リミッターが作動したモニターが回復に入る。

時間にして１０秒がいいところだ。

だが、

戦場で、

この状況で、

１０秒は長すぎた。

涙にぼやけるエーランドが回復したモニター上に見たものは、自らに襲いかかってくる敵騎の姿だった。

エーランド騎の爆発音は背中で聞いた。

「……追撃します」

騎体が再び加速を開始する。

牧野中尉の返答は声にならず、バカのように頷くしかない。

斜め後方。

圧倒的不利な位置から攻め込んだ敵騎に、美奈代は何をしたのか。

“征龍改（せいりゅうかい）”の腰部にマウントしていたある“モノ”を使った。

Ｍ２２型柄付手榴弾。

あの対ライノサロス模擬戦で美奈代が使った、あの閃光弾と音響弾を兼ねた手榴弾だ。

広範囲に広がる敵を無力化するために作り出された代物だけに、その音と光は、開発者は殺傷力はないと主張しても、まともに喰ら

ったら失明や難聴どころではすまないあたり、殺傷力を持つのと変わらないと、現場からまで非難される程の代物だ。
すぐ間近で爆発したらメサイアだって無事では済まない。

美奈代は、M22型柄付手榴弾を接近するエーランドめがけて放り投げ、タイミングを見て起爆。エーランド騎のモニターと音響センサーを潰した後、自らはその被害を避ける為に音響センサーをカットした。

そして、その状態で、エア・ブレーキをかけた。

突然の空気抵抗を受けた騎体が急減速し、同時に上昇に入る。

つまり、後方から接近するエーランド騎に、自分から急接近することと同義だ。

M22型柄付手榴弾の閃光から逃れた、まさにその絶妙なタイミングで美奈代騎は振り向き様にエーランド騎に斬艦刀を振るった。

騎体に走った衝撃でわかる。
撃破は確実だ。
あれで無事だったら、私は何も信じられなくなるだろう。

信じられない？

そう。

私は一つだけ、信じられないものがいた。

自分の足下、この騎のコクピットにいる娘だ。

――い、一体、この娘は何者？

牧野中尉は、候補生評価用のデータをそっと開いた。

あり得ない。

こんなベテラン騎士同然の戦い方が、候補生に許されるはずがない。

モニターに映し出される経歴は、牧野中尉の目と常識からすれば違和感のないものだ。

そう。

“この子達”は皆、“一般的”な存在として扱われている。

その裏を知るものは、自分を含めてそうは多くない。

知ったからこそ、

知ってしまったからこそ、

自分はここにいる。

だから、

知る者として、

“この子達”に命を預ける身として、

牧野中尉は“知る権利”を要求した。

手にしたのは“あの人”から渡された、パートナーを組む泉美奈代についてだけ。

――他、知る必要もないでしょ？

相変わらず、楽しいのかバカにしているのか。あのにやけた面は

思い出す度に腹立たしくなる。
牧野中尉は胸ポケットから一枚のカードを取り出すと、アームレストに隠れるように設置されたカードリーダーに読ませた。

データを渡されても、何だか興味がわかなかった。
手にすることが大切であって、その中身は問題ではない。
大体、“あの人”が素直に私に真実を渡すとはどうしても信じられなかった。

だが、今となっては、放置された情報にどうしても触れておきたかった。

暗証番号は念じるだけで神速の速さで画面に入力される。

数万桁に上るプログラムでさえ一分とかからず、完璧に入力してのける程、コンピューターと精霊とに脳や神経を同調させる事の出来るＭＣ（メサイア・コントローラー）の特記すべき能力だ。

モニターに映し出された情報は――

牧野中尉の理解を超えていた。

「こ……これって！」

半ば呆然とした牧野中尉がモニターに指を走らせる。
「この機関が……どうしてこの娘に関わって……っていうか！こ、この子の父親って！？」

「中尉っ！」
コクピットにいる美奈代の怒鳴り声に、牧野中尉は思わずシートの上で飛び上がった。
「何してるんですか！？１２０ミリ砲のセーフティー解除してくださいっ！」

「あ、ご、ごめんなさいっ！」
候補生達の事故防止のため、砲火器に関しては候補生達に操作権限は与えられていない。
全てＭＣ（メサイア・コントローラー）のコントロールが必要だ。
モニターを切り替えると、敵騎はすぐ間近だ。
１２０ミリ砲の射程に入っているのは見てすぐわかる。

一つの情報を追いかけて、安易に現実から乖離する傾向有り。

候補生時代の教官のコメントは、今でも履歴書に書かれたままだ。

自分の傷だらけの経歴の中で、一番傷つく評価だが、マトは外れていない。
そのいい証拠のようなものだと思うだけで、急に牧野中尉は恥ずかしくなった。

「狙いは！？」
「敵騎の腕を狙ってください！」
「でもっ！」
今、染谷候補生の騎体は大破している。
空中で放り出されたら地上に落下することは避けられない。
いくらメサイアの中といえど、つきあわされた人間が耐えられるはずがない。

「――――ＭＬ（マジックレーザー）で敵騎のブースターを狙います」
牧野中尉は狙撃モードを立ち上げた。
「ＭＣ（メサイア・コントローラー）の判断です。尊重してください」
「……了解」
絶対、ここで事故に見せかけて殺すつもりだったな。
自信を持ってそう思える牧野中尉は追撃する敵騎の動きが思ったより鈍い事に驚きながら、そっと言った。
「ねぇ、泉候補生？」
「はい？」
「小学生の頃って、何してました？」
「何ですか？こんな時に」
「こんな時の質問に答えてくれないと」
クススッ。
牧野中尉は喉で笑った。
「外すかもしれませんよ？」
「……私に聞かれても困ります」
美奈代は答えた。
「私、中学の時に交通事故にあって、小学校時代の記憶がそっくり抜けているんです」
「……へぇ？」
「ど、どうせ、不運だって、笑っていいんですよ！？」
「笑いませんけど」
狙撃は完璧だ。
出力を調整しながら、牧野中尉は最後に訊ねた。
「事故についても、記憶がないでしょう？どうせ、外に出た覚えもないのに、気が付いたら病院のベッドの上だったとか」
「ど……どうしてそれを？」
驚愕する美奈代への牧野中尉の答えは、一発のＭＬ（マジックレーザー）だった。

金色の髪の少女　第四話

「こちらエーランド隊、リナ軍曹！司令部応答を！」
レシーバーには雑音しか入らない。
見捨てられたかと思うほどの絶望感が、リナ軍曹の心胆を寒からしめる。
指定されたバンド入力を間違えていたことに気付いたのは、かなりの時間が経ってからだ。
末尾一つケタならすぐ気付くが、二桁以上を間違えていると、なかなか気付かない。
魔族の発音、特に中央部族の出であるエーランドと、なまりの強い南方部族の出である自分では、同じ音でも聞き間違いが起きやすいんだ。
リナ軍曹はそんな言い訳を心の中で何度も呟きながら、やっとつながった司令部へむけて怒鳴った。
「すでに部隊壊滅！残存は我のみ！救援を求める！繰り返す！至急、救援を！」
「了解した。周辺の索敵任務中の部隊を回す。貴官はすみやかに“捕獲物”を司令部に搬送せよ」
「その肝心の司令はどこ！？」
「貴官から見て１０時方向。すでにこちらのレーダーには捉えている。ガイドビーコンを照射するから――」

ズンッ！

突然の大爆発音に、思わず司令部の管制官は、レシーバーを耳からもぎ取ってしまった。
耳が無事であることを確かめると、すぐに床に転がったレシーバーを耳につけた。

「くそっ!?リナ軍曹?応答しろ、大丈夫か!?リナ軍曹!」
「撃たれたっ!ブースターがやられたっ!推力が維持できない!」
「救援騎は接近中だ。ガイドビーコン照射開始」
「だめだ!騎体高度が――――う、うわぁぁぁぁっっ!?」

プッ。

レーダーロスト。
通信ロスト。

通信が途絶え、レーダーから騎影がロストした。
その意味はイヤでもわかる。

ロストの直前、敵騎がリナ軍曹騎に接触したのも、はっきり記録に残っている。

「……」
管制官は、歯を食いしばって瞑目すると、リナ軍曹の冥福を祈った。
そして、背後に立っていた上官に指示を求めるように、その顔をみつめた。
「一番近くのメース隊は?」
あのワーキン少佐だ。
「……第３０３偵察小隊。接触まで１０分かかります」
「遅いな」
「現在、この周辺のメース隊の任務は訓練でありまして」
「戦えるのだろう?何をしている。すぐに３０３小隊に敵の殲滅を

命じろ。損害は問わない」
「はっ」
「……全く」
管制官の背中を一瞥したワーキン少佐は踵を返すと内心で呟いた。
「何が歴戦の猛者だ。エーランドも地に墜ちたものだ」
本当にそうだ。
ワーキン少佐は、この失態の全責任をエーランドに負わせるための言い逃れを急いで作り上げた。
現場の判断と責任で捕獲を命じた以上、自分に責任はない。
悪いのはエーランドだ。
“デュアリス”まで受領しておきながらこの体たらくだ。
そう。
悪いのは私ではない。
上層部には、そう報告しなくては。

ワーキン少佐の脳裏にあるのは、“鍵”ではなく、自らの保身でしかなかった。
組織の利益ではなく、その裏にある保身こそ大切。
功績は自分に。
責任は他人に。
ワーキン少佐は、こんな発想で生き延びてきた。
皮肉な意味で、彼は実にビジネスパーソンだった。

ブースターに装甲は付けられない。
牧野中尉の狙撃は、そこをついたものだ。
魔族軍メースの背中にあるブースターノズルからまっすぐに入ったＭＬ（マジックレーザー）の一撃は、ブースターを内部から破壊し、その破壊に曝されたブースター自身を爆発させた。

推進手段を奪われたリナ軍曹騎は煙を噴きながら墜落を余儀なくされた。

地面に叩き付けられたメースのへしゃげたコクピットで緩慢な死を迎える過酷な運命をリナ軍曹が避けられたのは、その背中から胴めがけて貫通した斬艦刀が、コクピットごとリナ軍曹を原子単位に分解したからに他ならない。

地面に叩き付けられたリナ軍曹騎の残骸。

その間近に降り立ったのは、“幻龍改（げんりゅうかい）”の残骸を抱きかかえた“征龍改（せいりゅうかい）”――美奈代騎だ。

「どうですか？」

「意地を張らないで、自分で呼びかけなさい」

「イヤです」

「ホントに……隣の嫉妬で首でも吊りかねないって言葉がありますけど」

苦笑する牧野中尉は言った。

「全ての電源が飛んでいるようですね。予備電源どころか、生命維持装置が働いている形跡すらなし……」

「生命維持装置が？」

「このままですと、換気も出来ませんから――酸欠で死にます」

「ＭＣ（メサイア・コントローラー）の回収だけ。騎士は放置して帰りましょうか」

「残念ながら」

牧野中尉は強く言った。

「あなたにそんな決定権はありません」

「……っ」

「“鈴谷（すずや）”から命令です。マジック・エジェクトシステム使用許可、出ました。“鈴谷（すずや）”にて受け入れ態勢完了。泉候補生は、騎士達を

脱出させ、騎体はテルミット弾で焼却して下さい。それと、またもや残骸の回収です」

「……了解」

騎体の焼却なんて、やりたい仕事じゃない。

残骸抱えた敵を追いかけて、今度は自分が残骸抱えて帰るなんて、どういう冗談だ？

「泉候補生？」

あくまで意地を張る美奈代が、何だか意地らしくすら感じた牧野中尉は囁くように言った。

「染谷候補生は泉候補生しか見えてませんよ？」

「……知りません」

「そんな意地ばっかり張ってると、誰かに奪われちゃいますよ？」

「……降ります。コクピットハッチ、爆破しますから」

「了解。頑張ってくださいね？」

コクピットから降り立った美奈代は、“幻龍改（げんりゅうかい）”の腰部に降りた。

両手足に股関節。喉の周りまで、メサイアの弱いところを徹底的にたたき壊された騎体は、無惨という他に言葉が思いつかない。

これで染谷候補生は生きているのか？

そう自問しても全く自信がない。

騎体同然に、体が壊れているんじゃ。

脳裏に浮かんだ光景に、胃が締め付けられそうになる。

美奈代は、規定通りに腰部装甲に設置されているハッチ爆破装置に暗証番号を入力、爆破ボタンを押した。

ドンッ！

爆破ボルトが作動して、ハッチが高々と宙を飛んだ。
ハッチが地面に落下したのを確認した美奈代は、急いでコクピットハッチに潜り込んだ。

「染谷候補生っ！」
爆破ボルトが作動した後の硝煙の煙が立ちこめるコクピットブロック。
「あ……ああ。泉候補生か？」
弱ってはいるものの、しっかりとした声が美奈代の耳に届いた。
生きていてくれた。
それだけで、美奈代は目頭が熱くなるのを抑えられない。
「はい。大丈夫ですか？」
「ぼ、僕は大丈夫だと言いたいけど」
うっ！
染谷の声に苦痛が混じった。
「ＳＴＲシステムから体が抜けない。歪んだフレームに足が挟まった」
「足、切断しますか？」
「勘弁して！」
自分がどんなトンチンカンなことを言ったか、怒られて初めて気付いた美奈代は情けなさでうつむくしかない。

「足の感覚はあるから、大丈夫。それより」
染谷は言った。
「伊月中尉や、あの子は？」
自分よりも周囲を心配する辺りはさすがだと思うし、美奈代自身が誇らしくさえ思う。
「確認します」
美奈代はコクピットの中、染谷に触れないように細心の注意を払いながら二人乗りコクピットの前席――生徒用シートの中をのぞき込んだ。
そこには、シートベルトで固定された金髪の少女がぐったりとした様子で目をつむっていた。
「ねぇ……ねぇってば！」
美奈代は軽く頬を叩いてみるが、反応はない。
「反応なし」
「ああ、多分、語り石の影響だよ」
「語り石？」
「そう。この子は――御免。この事は、艦長から箝口令が敷かれている。だから、答えられない」
「べ、別に」
「？」
「こ、この子とデートとか、そういうんじゃないんですね？」

「そ、そんなことあるわけないでしょ！？」
染谷はびっくりした声で言った。
「泉候補生とのデートだって、結局はお流れになったんだし！」

「……すみませんでした」

「別に謝る必要もないけど」
染谷は苦笑気味に言った。
「もしかして、僕がメサイアで女の子とデートに行ったとでも？」

「……」

「面白い発想するね。泉候補生って」

「と、とにかくっ！」
染谷の苦笑から逃れるかのように、美奈代は声を張り上げた。
女の子としてこんなのってどうなんだろう。
そう思うと情けなさを通り越してしまう。
「“鈴谷（すずや）”から命令です！コクピットをマジック・エジェクトします。騎体は焼却。“鈴谷（すずや）”で受け入れ体勢が整っています」

「……そうか」
染谷が沈んだ声でそう言うと、コクピットに深いため息が漏れた。
「いくらなんでも……これじゃ、終わりだな」

「何がですか？」

「……いろいろと……かな」

その沈んだ顔に、美奈代は染谷が何を言いたいのかを察した。
鈍い美奈代にもわかる。
騎体を潰した騎士。
それは賞罰欄に負の意味で書かれることだ。
候補生の段階で騎体を破壊したとなれば、例え、それが候補生という立場でも、経歴上に大きな傷を残すことになる。
染谷の候補生としての将来に、大きなハンデとなることは明白だ。

「何言ってるんですか！」
美奈代は教官用シートに潜り込むと、染谷の両肩を力一杯押さえた。
「あなた、まだ生きてるんでしょう！？」
そして、その肩を強く揺すった。
「まだ生きてるなら、どうしてあっさり諦めるんですか！」
「……」
「“伊吹”と一緒に死んでいった、今、苦しんでいる仲間に、あなた何て言うの！？」
「っ！？」
「……情けないこと言わないで」
肩から離した手が、言葉を失った染谷の頬に触れた。
「みんな、仇を討って欲しいと思っている。誰に？指揮官として仰ぎ見たあなたに……指揮官にと推挙したあなたに……みんなが、仇討ちを望んでいるのは、あなたです」
「……」
「仇を討つ者は、苦境に耐えても、屈することは許されていません。違いますか？」
染谷の頬を流れた涙が、美奈代のグローブに触れた。
「両手両足無くしても、歯で齧り付きなさい。歯がなければ魂だけでも戦いなさい。それが出来る男を――私は好きになったはずです」

バンッ！

“征龍改（せいりゅうかい）”から電力の供給を受けた“幻龍（げんりゅう）”のマジック・エジェクトが作動し、コクピットブロックとＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）、そしてエンジンが一瞬でテレポートしていく。

もう、“鈴谷（すずや）”で二人とエンジンは回収されているはずだ。

少なくとも、無事を祈るしかない。

その光景を、美奈代は“征龍改（せいりゅうかい）”のコクピットで見つめていた。

美奈代に“すまなかった”と散々詫びた染谷は、コクピットから出る直前、美奈代に言った言葉が、美奈代の脳裏を駆け回っている。

「――君を好きになってよかった」

その言葉が脳裏に浮かんでは消えていく。

初めて好きと言われた。

好き。

単純な言葉なのに、心から言葉が離れない。

嬉しくもあり、恥ずかしくもある。

感情の整理がつかない。

「……さて、泉候補生」
牧野中尉が楽しそうに言った。
「散々、お楽しみを聞かせていただいたお礼です」
「えっ？な、何ですか？そのお楽しみを聞かせていただいたって」
「通信装置で二人の会話ばバッチリ、モニターされていました」
「なぁっ！？」
「公開されたくなかったら、言うことは聞いて下さいね？」
「と、当然ですっ！」
赤面するやら、半泣きになるやら、随分と顔が忙しいことになった美奈代に、牧野中尉は言った。
「騎体焼却の完了を確認しているヒマはありません。残骸回収の後、すぐにここを撤退します」
「……敵ですか？」
「小隊規模が接近中――勝負になりません。撤退します」
「了解――テルミット、使用します」
「封印から解放されれば、このザマだよ」
メースから降りた魔族達は、未だ高熱を発し続ける、かつての“

幻龍改（げんりゅうかい）”だった残骸に唾を吐きかけた。
ジュッという音を残して唾は一瞬で蒸発するる
「“デュアリス”って言えば、新型だろ？もったいねぇなぁ」
「人類に持っていかれたって聞きましたよ？」
「ああ。追撃もへったくれもねぇ……俺達の仕事はここで終わりだ」
「そう……ですね」
「陣地へ戻るぞ！？おい、カヤノ！ぼさぼさしてんな！」

金色の髪の少女　第五話

●“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ

「まぁ、これで」

美奈代騎と整備によるデュアリスの残骸の回収作業を見守りながら、二宮が言った。

「魔族の狙いが、間違いなくあの娘だと、はっきりしたわね」

美夜の見る限り、デュアリスの外見は、先に回収したツヴァイとは全く違う。むしろシャープないいデザインだと思う。

墜落によって左肩周辺が大きく破損しているが、調査上は問題ないだろうと、ついさっきまで横にいた紅葉は言っていた。

だが、美夜と二宮の関心は、敵騎ではなく、敵騎が狙った獲物にこそあった。

「語り石に連れて行ったのは正解だったわ」

美夜は頷きながら言った。

「こんな……思わぬお土産がついたけどね」

「泉の大金星――褒めておくべきか悩んでいるのよ」

「ちょっとくらいはいいんじゃない？新型の魔族軍メサイアの残骸回収に成功――下手すれば勲章モノよ？」

美夜は言った。

「司令部にとって、騎体の破損や損失より、そっちの方が大きいわ。おかげでアフリカ離脱後の補給についても便宜がはかってもらえそうで、助かるわ」

「……今回は、死人が出なかったのが奇跡よね」

「“征龍改（せいりゅうかい）”は全騎４８時間以内に戦線投入可能。“幻龍改（げんりゅうかい）”は３騎。それが、“鈴谷（すずや）”の戦力のすべてよ」

「候補生達は？」

「イギリスで国際線。民間機で帝国に戻す」
「……それがいいでしょう」
二宮は安堵のため息と同時に頷いた。
「一生分、戦ったんだから」
「本気でそう思う？」
「今日明日で任官希望のアンケートをとる。第七分隊と違って、４６期は志願だからね。彼等はこの航海の後、任官するかどうかは自由意志――拒否や辞退は許される」
「教官として、どう見ている？」
「半数が残れば奇跡でしょうね」
「……そうね」
美夜もそう思う。
プライドの塊として育てられた候補生達。
それが戦場で目の当たりにしたのは、
母艦の沈没。
炎に撒かれて死んでいった仲間達。
血まみれになってのたうち回る仲間達。
……。
すでに精神的異常を訴えて艦を下ろされた候補生の数は、５本の指では足りない。
プライドを傷つけられたんじゃない。
折られた者達が、このまま残るとは思えない。

「こんなつもりじゃ、なかったんだけどね」
二宮は悲しそうに目をつむった。
「……でも」

「これが現実よ」
デュアリスの残骸がハンガーベッドにワイヤーで固定された。
整備兵の間を、銃や火炎放射装置をもった憲兵が行き来して危険

な生命体が隠れていないか調べて回っている。
美夜は、ポンッ。と二宮の肩を叩いた。
「とにかく、メサイア1騎犠牲にした効果が上がったか、見に行きましょう」
「――――そうね」

●“鈴谷（すずや）”営倉

「――――あっ」
営倉のドアの前。パイプ椅子に座っていたのは。衛生兵ではなかった。
染谷だ。
美夜達に気づいた染谷は、立ち上がって敬礼した。
「ご苦労。様子はどうだ？」
「今、眠っています」
「そうか」
覗き窓から見ると、あの金髪の少女が毛布にくるまって眠っていた。
年の頃は14歳くらい。
あどけないがよく整った顔立ちに白い肌。そして金髪が、まるで少女を人形のように魅せる。
「……正直」
染谷は言った。
「今日の騒ぎは一体、何だったのかまるでわかりません。あの子を語り石に連れて行けといわれたり、得体の知れないメサイアに襲われたり……一体、あの子は」
「私もそれが知りたい」
そっと覗き窓を閉めながら美夜は答えた。
「そう思ったから、お前達に“幻龍（げんりゅう）”を預けて、語り石まで移動させた。すまんな。尋問まで任せて」

「いえ、そんな」
「収穫はあったか？……ああ、その前に」
美夜は言った。
「二宮に、彼女のことを説明してやれ」
「……は？」
「早くしろ」
「……はっ」
染谷は不承不承という顔で、二宮に向き直った。
「二宮中佐殿に報告します。現在、この営倉内で眠っている少女は、先日“伊吹”を撃墜した後、撃沈された所属不明艦から発見・保護された少女です」
「……堅苦しい表現はいらん」
苦笑気味に二宮は言った。
「砕けた表現でいい」
「……はっ」
染谷は小さく咳払いした後、
「会話可能な言葉を知らない模様でしたので、平野艦長ご命令で、この国に放置されていた語り石に連れて行きました。
語り石に接触させ、現在は帝国語と日本語双方で会話が可能です。
そこから聞き出した所、名前はフィア・ツヴォルフ。
年齢、出生地、家族構成等は一切不明……本人が黙秘しています」
「破壊工作員の可能性は？」
「身体検査の結果、爆発物等は確認されていません……それに」
「ん？」
「実は彼女、今が西暦何年なのかさえ知らないというのです」
二宮は美夜を見た。
美夜は小さく頷いた。
「？」
二宮が小さく頭の上で指をくるくる回すと、美夜に小突かれた。
「国の名前も何もかも……フォークという単語でさえ、それが目の

前の食器を示すことを知らない……と」
「馬鹿な」
たまらずに二宮は言った。
「絶対、その子、嘘ついているわよ」
「それがね？」美夜は言った。
「尋問用の嘘発見装置は全部シロ……あの子が嘘を言っていないことは、憲兵隊でさえ認めている」
「……みんなで私を担ごうとしていない？」
「そこまでヒマじゃないわ。候補生、続けて」
「……はっ。なら、今まで、どうしていたかについては語ろうとしません。ただ、“逃げられなかった”としか」
「……性的なものかもしれないわ」と、美夜は言った。
「身体検査で、性的交渉の経験が見て取れると軍医が」
「……染谷」
「自分ではありません！」
「冗談だ。貴様にそんな甲斐性があれば、今頃泉は寿除隊だ」
「……っ」
「このヘタレのことはともかくも。あの子は一体？」
「これはあくまで私の推測」
美夜はドアに視線を向けながら言った。
「でも、そんなに外れてもいないはず」
「……」
「……」
「あの子は――人間じゃない」
「……は？」
染谷の目が点になった。
「そ、それは」
「もしくは、人間であったとしても、私達と同列に扱っていい存在じゃない」
「で、ですが」

染谷は、意味が理解できない。という顔だ。
「平野艦長に質問いたします。そのご意見の根拠をお教え下さい」
「魔族の艦に乗っていた娘だ。普通には扱えまい。違うか？候補生」
「なっ！？」
「津島中佐から報告が上がっている。あれは間違いなく、魔族軍の所属艦だ。残骸に刻印された文字は、世界中、人類で用いられている文字ではない」
「……そんな艦にいた。しかも、あの墜落で助かったということは、彼女が余程悪運があるのか、さもなければ、余程厳重に護られていたか。いずれかだが、私は後者だと思っている。墜落し、爆発した飛行艦の惨状を舐めてかかるほど、私は飛行艦を知らないわけではない」
「ですが、実際には自分達は」
「“伊吹”は２５度という、なだらかなコースを描いての“不時着”だ」
美夜は言った。
「だが、あの艦の墜落コースは、文字通りの撃墜。墜落角度は４８度。いいか？４８度となれば、そのダメージは垂直に墜ちたのと大差ない」
「……はっ」
「恐らく、連中はあの娘をどこかに潜んでいる魔族軍に引き渡そうとして、偶然にもわが艦隊と接触。回避せずに攻撃した理由まではわからないが、単なる偶然ではあるまい」
「……まさか」
染谷の視線がドアに向けられた。
「染谷候補生には悪いが、あの子を乗せて単騎で出したのは、魔族軍の狙いを知るためでもあった。他の候補生達も単騎で何騎か出したが、敵が狙いを付けたのは貴様の騎だけ。つまり、消去法からして同乗者であったあの娘だとなる」
「……」

「……」
「魔族軍にとってはメサイアを投入する程大切な存在だと、これでわかった。
魔族軍にとって、あの娘は絶対、人類に渡してはいけない存在。
だからこそ、我々は意地でもあの子を守って、それが何なのかを知る必要がある」
「……」
「……」
「あの子は、これからの戦いの趨勢を決める上で大切な存在になるわ……きっとね」

●翌日　“鈴谷（すずや）”士官室
泉美奈代が２０年近い人生の中で、この日、初めて自覚出来た感情が一つあった。
嫉妬だ。

「……」
「いや……だから」
美奈代達の目の前では、食事をとる染谷達の姿があった。

染谷達といっても、染谷と後は二人。
小林少尉と、あの金髪の少女――フィアだ。
あどけなさの残るものの、恐ろしいほど愛くるしい体を、艦内用に支給されているスウェットスーツに包んだフィアは、まるで体を染谷にすりつけるような、甘えた仕草をしながら食事を続けている。
目の前の美奈代達なんて眼中にないといわんばかりだ。

「行こう？。美奈代」
「そうだな」
「ち、ちょっと待って！」
女子候補生からのあからさまな冷たい視線を、半分泣きそうな顔にやっと笑みを浮かべて誤魔化そうとしていた染谷は、その冷たい言葉に悲鳴に近い声を上げた。
「あ、あの、その！」
声がうわずって、うまくしゃべることが出来ない。
「こ、こういう女の子は、女の子が面倒を！」
つまり、代わってくれ。と言いたいのだ。
ところが、頼んだ相手は――。
「私達メサイアパイロットの候補生だし」
さつきは汚物を見るような目つきで言った。
「任務じゃないわね」
「そういうことだ」
「だから誤解だ！ぼ、僕は！」
立ち上がろうとした染谷だったが、腕を掴まれ、動きを止めた。
フィアが甘えた顔で染谷の腕に抱きついたのだ。
染谷の腕に頬をすり寄せるフィアの表情は、恍惚としている。
「……はいはい」
美晴が冷たい声で言った。
「ごちそうさま」
「まさか……染谷がロリコンだったなんて」
「よく憲兵隊が何も言わないものだな、この性的病人に」
「恐ろしく言いたい放題言われている気がするのは何故だろう」
「私達、これから訓練だから」
「通りかかっただけなんです」
「病気が移ると困るので。失礼します」
「一体、君たちは僕をなんだと思って！」
抗議する染谷に、美晴とさつきが揃って答えた。

「性犯罪者」
「なっ！？」
「……その格好で」
中学生位の少女とベタベタしている光景を冷たく指さして宗像は言った。
「自分がノーマルだと言う方がどうかしている……訓練に遅れるぞ？行こう」
宗像に促され、じっと二人を見つめていた美奈代は、しぶしぶという顔で踵を返そうとした。
不意に、フィアの視線が美奈代のそれとぶつかったのは、その瞬間だ。
感情を殺した美奈代の視線と、好奇心さえ感じるフィアの視線。

動いたのフィアだ。

まとわりついていた染谷の腕から体を離し、一瞬だけ美奈代に挑発的な笑みを浮かべたかと思うと、首を伸ばして瞳を閉じた。

チュッ

そんな効果音が、小さく響いたのは、その直後のことだった。

●“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ
「一体、誰なのよ？あの子。ねぇ、美奈代？」
しきりと拳銃の手入れを続ける美奈代は、妙に何かをぶつぶつ言い続けていた。
「？」
さつきが、そんな美奈代の口元に耳を近づけた。

「……暴発による業務上過失致死は……」
「やめなって！」
「……劇薬を、食事に混ぜるのはどうだろう。メサイアのグリスは確か舐めるだけで死ねるとか」
「勘弁してよ！」
さつきは美奈代の肩を揺すった。
「私、ワイドショーで“あの子なら、絶対いつか何かやるだろうと思っていました”なんて言いたくないからね？」
「早瀬……せめて“あんな真面目そうな子が”程度にしてやれ」
宗像は言った。
「初めて出来たオトコに、別のオンナが出来たんだ。嫉妬するなという方が無理だ」
「それが流血沙汰ですか？美奈代さんらしいというか」
「お前ら、私を何だと思っているんだ！」
美奈代は声を荒げた。
「まるで、二宮教官の男運のなさが乗り移ったみたいに！」
「どういう解釈かわかんないけど……そうか」
ポンッと手を叩いたのはさつきだ。
「そう考えれば、染谷が美奈代に惚れるなんて前代未聞の珍事も納得出来る！」
「結果は１００％の失恋ですね！」
「かなり手ひどい終わり方になるな……なにしろ、あの人の男運だ」
「ちょっとぉ！」
「泣くな泉。オンナに走ればいいことだ。いつでも協力してやろう」
「それで……二宮教官の男運が普通になれば」
美晴が言った。
「二宮教官も今年こそ本命のカレが出来ることに！」
「１年前に、これが現実になっていればよかったのにねぇ……」
さつきはしみじみと言った。
「欲求不満を、私達へのシゴキで発散するなんていう、不毛な生活

を、教官も味わわずに済んだのに」
「風邪だって、誰かにうつすとよくなるって言いますしね」
「あんなにヒドイ男運もらってたまるもんか！」
美奈代はたまらずに怒鳴った。
「あれは不幸どころじゃないぞ！あんなヒドい男運をもって、それでもオンナとして――」
次の瞬間、美奈代は、目の前で腕組みしながらにっこりと微笑んでいる相手を見て二つのことを思いついたという。

一つは、フィアというオンナ殺して自分も死ぬか。
もう一つは、ここで死ぬか。

……しかし、相手はそんな美奈代の子供じみた発想を認めてくれるほど、甘くはなかった。
何しろ、相手は、美奈代達にとって鬼より怖い相手なのだ。

金色の髪の少女　第六話

●“鈴谷（すずや）”教官室

「ひでぇもんだ」

長野は、書類をデスクに放り投げると、コーヒーを飲もうと椅子から立ち上がった。

コーヒーメーカーの横に置かれたインスタントコーヒーの瓶を掴むと、中身を慎重に確かめた。

日本から持ってきたお気に入りのストックは、残り1本。

それでさえ、残りは瓶の半分にも満たない。

「……シャレにならねぇ」

「誤字脱字、ありましたか？」

長野のぼやきを聞いて声を上げたのは、長野の隣のデスクでパソコンを動かしていた美晴だった。

「いや？」

長野はコーヒーを淹れながら首を横に振った。

「損害が大きすぎると思っただけさ」

口ではそう言いながらも、長野が顔をしかめたのは、今回の“伊吹”戦没に伴う艦隊の現状を知らせる報告書を読んだからだ。

「メサイアは“幻龍改（げんりゅうかい）”がかろうじて2騎残っているだけで、他は訓練騎からの出戻りが出自の“征龍改（せいりゅうかい）”だけ」

「……」

「お前の親父さんにわかるように言えば、Ｆ－４改が7機とＦ－１５が2機だけで、最新鋭のＳｕ－３０だか３７だかが、ゴマンといる世界に放り出されたようなモンだ。

たとえが適切かどうか自信がないが」

飲むか？

長野はコーヒーの入ったマグカップを美晴に手渡した。

「仰りたいことはわかりました。ただ……考えたくないですね」
一礼した後、美晴はコーヒーを受け取った。
「戦力が一気に3分の1以下。それに、対メサイアにおいては想定外に置かれていた“征龍改（せいりゅうかい）”が主力になった」
「……よく知っているな」
「整備兵から聞きました。対メサイア戦になったら、教官達と“伊吹”が担当するから、逃げてきていいって」
「シゲさんあたりだな……ったく」

現在の“鈴谷（すずや）”には、“伊吹”から引き出して修復した騎を加えてもメサイアが１０騎存在しない。
その中で、長野は、生き残った騎体の割り当てに関する書類の作成を命じられていた。
“征龍（せいりゅう）”は元々第七分隊が使うことになっているし、今更使用者たる候補生の人選を変更して、セッティングを変えるくらいなら、第七分隊に使わせた方がいいと、長野は判断していた。

余談ではあるが、どうにもパソコンが苦手な長野は、柏美晴に代筆を依頼した。
美晴に頼んだ理由は、長野曰く、彼女が候補生の中で最もキーボードの入力が速いと定評があることと、何よりＭＣ（メサイア・コントローラー）に頼むと高くつきすぎる。

それにしても……。

「４４期生は、これからどうなるんですか？」
「明日のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）で後送だ。後でアンケートの集計を手伝ってくれ」
長野は答えた。
「本来なら、進路希望のとりまとめを候補生に手伝ってもらうのは禁止されているが、人手が足りない。教官達のほとんどが死亡、も

しくは後送された後だ。何より、あの沈没がトラウマになって、艦から降りたがっているヤツがゴマンといる」

「……鎮静剤投与されている候補生がいると」

「ざっと見た所、死亡率が高い分隊の生き残りほど、任官辞退希望が多いし、将来に置いて使い物になるか疑わしいほどの精神的ショックがある。対して第一分隊と第三は辞退ゼロ――さすがだな」

「私も聞きましたよ？染谷候補生の影響がかなり強いって」

「ああ」

教官戦死。

司令部全滅。

混乱する現場で、候補生達が生還できたのは、染谷候補生の存在が大きいことを否定出来る候補生はいない。

見事だと、長野でさえ感服する程、染谷は働いたのだ。

“伊吹”被弾の時、染谷は“幻龍改（げんりゅうかい）”に搭乗し、死亡した池田大尉の背後、第一分隊二番騎につけてハンガーデッキで待機していた。

発艦準備中のフライトデッキ内部に飛び込んだ一撃は発艦待機中のメサイアを吹き飛ばし、メサイアが装備していた広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のタンクを爆発させた。

そこから発生した消火困難な火災を含む爆発は、ハンガーデッキからフライトデッキへの進入経路までを一瞬のうちに、乗組員や騎士、そしてMC（メサイア・コントローラー）を焼き殺し――いや、蒸発させた。

染谷達の証言から、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のメサイア搭載を強硬に主張したのは、池田大尉達、教官だ。

飲み会で、司令達とある程度の和解が成立したと勝手に判断した教官達が、“伊吹”司令部にねじ込んで、少なくとも自分達の騎体

だけでもと、半ば勝手に搭載していたという。
本来、不要な装備を搭載した挙げ句、艦の運命を決めるような事態を引き起こしたのが、よりによって同じ教官であることに、長野は言葉が思いつかない。

とにかく、
元来、弾薬や可燃物には事欠かないハンガーデッキだ。
爆発は爆発を生み出した。
染谷騎も爆発に巻き込まれ擱座した。
他の教官や候補生達の騎も、ほぼ全騎が似たような状況、もしくは破損した騎の下敷きになって動かすことが出来ない有様だった。
メサイアに搭乗したままでは艦内から出ることが出来ないと判断した染谷は、教官である池田大尉に騎体放棄の許可を求めたが、池田大尉は染谷達にかまうことなく、自分だけ強引に脱出を試みた。
結果は、池田大尉は妖魔の群れに襲われて死亡。

反面、その後の染谷の行動は優等生の典型的模範例を示していた。
まず、MC（メサイア・コントローラー）と共に騎体を放棄し、負傷者だらけとなったハンガーデッキを駆け回り、まだ動ける者達をまとめると、彼らと共に、負傷兵達を安全な場所へ移した。
デッキ内部にあふれたリキッドやオイルが引火すれば自分たちが危険になると判断したのも染谷が一番速かった。
ハンガーデッキに侵入した妖魔達から逃れるため、生存者と共に居住ブロックへ逃れ、たった一カ所のエアダクトを除き、すべての通気口と通路を閉鎖し、籠城の構えを指揮したのも染谷だった。
生存者達が、池田大尉のように逃げ出していれば妖魔達の餌食は避けられなかっただろう。
すべては染谷候補生の英雄的な決断力と行動力によると、二宮で

さえ賛辞を込めて報告書をまとめている。
長野も否定はしない。むしろ肯定的にとらえている。
「息子に持つなら、ああいうのが欲しいな」と、そこまで考えて、長野は美晴に訊ねた。
「染谷候補生はどうしている？」
美晴はコーヒーを受け取りながら意味ありげな笑みを浮かべた。
「お忙しいと思いますけど？いろいろと」
「？」

●“鈴谷（すずや）”第3層通路

グイッ！
「きゃっ！？」
ハンガーデッキからの帰り道。
候補生同士の打ち合わせを終えた美奈代は、部屋に戻る途中、突然、通路の角から飛び出した腕に手首を掴まれた。
何だと思うヒマさえなく、真っ暗な部屋に放り込まれた時には遅かった。
ガチャッ。という音を、背後で聞いた。
「なっ？」
振り返った美奈代が見たものは、ドアの前に立つ金髪の少女だった。
日本人ではマネ出来ない、その西洋人系特有の容姿。
“金色の妖精”という言葉が脳裏に浮かんだ。

そのあまりに美しい少女は、すでに艦内で知らない者はいない。
美奈代は、目の前の相手について、フィアという名前と、自分にとって個人的に好ましくない相手だという認識だけは持っていた。
「あの……」
「――お願いってわけじゃないんだけど」

美奈代の言葉を遮るように、やや敵意をむき出しにした声で、フィアは言った。
正直、フィアの声を初めて聞いた美奈代は思わず後ずさった。
（こ……声まで可愛いなんて）
外見だけでなく、声まで愛らしいなんてあんまりだ。
美奈代は、女として自分が負けていることを、嫌でも自覚させられた。

神様、私、何かしましたか？

「……聞いているの？」
ドアを背に美奈代を睨みつけるフィアにそう言われ、神様に文句を言いに逝った美奈代は、現実に戻った。
「え？うえええっ！」
「……」
その素っ頓狂な声に、一瞬だけ怪訝そうな表情を浮かべたフィアは、美奈代に言った。
「これ以上」
その声色で、暗闇の中でも、美奈代にはわかった。
この子は、私を嫌っている。
でも――どうして？
フィアはそんな美奈代の心境に構うことなく言った。
「――瞬（しゅん）に近づかないで」
瞬。
染谷瞬（そめや・しゅん）。
それは、美奈代にとって意中の男性の名だ。
「なっ？」
「瞬は私のものよ」
フィアは勝ち誇ったような、むしろ美奈代を哀れむような表情でドアノブに手をかけた。

「彼……優しくしてくれるの」

●“鈴谷（すずや）”食堂

「そんなものは」

コーヒーを飲みながら美奈代の話を聞いていた宗像は、表情さえ変えずに言った。

「ハッタリだ」

「で、でも……」

美奈代は、染谷がフィアに気に入られていることを理由に、その身の回りの世話を命じられているのを知っている。

フィアを“語り石”に運ぶ際、フィアをコクピットで守っていたのが染谷だった。

自分のために必死になってくれる染谷の姿に、フィアが惚れたというのが実情らしい。

「あの染谷にそんな甲斐性があるなら」

宗像は、落ち込む美奈代に手を伸ばし、その腹のあたりをなでた。

「お前の“ここ”は大変なことになっているぞ？」

「なっ！？」

「ふむ……すでに大変なことになっているな」

宗像が美奈代のお腹の肉をつまんでいる。

「レーション食べ過ぎたな。スカート、大丈夫か？」

「ち……ちょっと心配だけど……」

「全く」

美奈代の腹から手を離し、クックックッ……喉を鳴らして笑う宗像は、尊大なまでにゆったりと落ち着き払った様子で美奈代に言った。

言葉と態度に、不思議な威厳を感じる。

「お前の悩み事といえば、どうしてそう子供じみているんだ？」

「だ……だけど」

「恋のライバルからケンカ売られて？それだけで負けたとでも？」
「……」
「あの容姿だから、無理もないとは思うが」
「……そういえば、宗像は」
おや？と思った美奈代は宗像にたずねた。
「あの子には手を出そうとか、考えないのか？」
「外人は専門外だ」
宗像は言った。
「私は……そう、日本人形のような女の子は大好物だが、西洋人形はどうにもダメだ」
「……はぁ」
「菓子は和菓子に限る。日本人としてそう思うだろう？泉」
「……まぁ」
「……ずいぶんと生返事だな」
「和菓子と女の子を同列に語られても……返答に困る」
「全く……美意識のない奴だ」

その日の夕方。

美奈代は自騎の調整のためハンガーデッキに入った。
すでに魔族軍メース６騎を仕留め、実質、人類初の対魔族軍メース戦エースとなった美奈代が駆る騎だ。
整備兵達の整備にも力が籠もるのも無理はないし、担当整備兵達の誇らしげな顔に光る目は、自信にみなぎっている。
この騎が持つ、エース騎という意味と共に、もう一つ整備兵達が理解しているからだ。

対峙した敵を生かして帰したことのない騎。
対峙：撃破の比率が１：１の騎。

それは、メサイアの世界では、“死神”と呼ばれる騎。

世界でもこの名で呼ばれるだけの実績を持つ騎を数えたければ、１０本の指で足りる。

美奈代騎は間違いなく、その中の１騎なのだ。

単なる候補生。

軍隊のヒエラルヒーの中では、自分達より圧倒的に下の存在である美奈代に、皆が敬礼を送るのは、その実績故だ。

ところが――

「ワケわかんないわよぉ……」

半泣きになって教本片手にコクピットの調整に勤しむのが、この頃の美奈代だ。

「何よこれ……インターフェースのモード設定変更なんて、いつ習ったのよぉ……」

「第３過程だよ」

開かれたコクピットハッチの向こうからの声に、美奈代はびっくりして顔を見上げた。

のぞき込んでいるのは――染谷だった。

「……」

「……あの」

染谷は、咳払いした後、言った。

「一瞬だけ――嬉しそうな顔してくれたけど、その後は？」

「あの娘はご一緒じゃないんですか？」

「あの……ね？」
染谷は苦笑いして言った。
「僕、ホントにロリコンじゃないからね？」

「……今、忙しいんで」

「手伝ってあげるよ？」
染谷はコクピットに首を突っ込みながら言った。
「モード設定、そこで間違えると整備、呼ぶハメになるよ？坂城さん、激怒するだろうなぁ。コクピットの電源抜いて、メモリ全消去する必要あるから」
楽しげな染谷は、悪戯っぽい顔で、小首を傾げた。
「どうします？お嬢さん？」

「……お願いします」
そうとしか、美奈代には返答できなかった。

「……わかった？」
狭いコクピットで二人きりだ。
しかも、相手は惚れた相手。

狭いところに二人きり。

それなのに、舞い上がるヒマさえ与えられず、美奈代はメモ片手に必死だ。
「ここのモード設定は機動にモロに影響するからね？試運転は戦闘前に必ず実施すること」

「わ、わかりました」
美奈代はメモにペンを走らせながら頷くしかない。
「な、何でこんな難しい設定、騎士がやるんです？」

「う～ん」
染谷は少し考えてから、意地悪く答えた。
「設定はＭＣ（メサイア・コントローラー）ばかりに任せてないで、騎士もやりなさいって所かな？」
「ＭＣ（メサイア・コントローラー）と整備の調整だけで十分ですよぉ」
メモと操作を確認しながら、美奈代は泣きそうな声で抗議した。
「どうせ私、脳みそ筋肉の騎士なんですから」
「う～ん。騎士が全部そうなら、僕もそうなるかな？」
「……あ」
「僕も脳みそ筋肉だったのかぁ……」
「そ！」
「それは心外だ」
「そんなに！」
美奈代は怒鳴るような声で抗議した。
「そんなに意地の悪い人だとは知りませんでした！」
「僕も」
チラリ。と美奈代を見る染谷の顔は、勝ち誇っているというより、むしろ、とても意地悪く美奈代には見えた。
「泉候補生が、あんなに嫉妬深いとは思わなかったよ」
「――――っ！」
カッ！と、頬が赤くなるのが分かった。
「随分、ひどいこと言われたなぁ」
「……で、ですけど」
口元を尖らせながら美奈代は言った。
「た、例えば……私がどこかの候補生とあんな風に二人きりで出撃したり、仲良さそうに食事していたら、染谷候補生はどう思うんで

す？」
「……まいったな」
「ほらっ！」
美奈代はやっと勝ち誇った様子で言った。
「わ、私っ！私は悪くないんですっ！」
「――わかった」
染谷は両手をあげた。
「僕の負け」
「勝った！」
その横でガッツポーズをとった美奈代は、自分が何をしたのか気付いて、赤面した顔で咳払いをした。
「コホン……それで？」
「ん？」
「――何か、おっしゃりたいことって、私の態度に対する抗議ですか？」
「……いや」
染谷は首を横に振った。
「あの娘のことなんだけど」
「……なんです？」
「なんだか、妹が出来たみたいでね。それ以上の感情はないよ」
「……へぇ？」
「ず、随分と剣呑な顔しているけど」
「……それで？」
「信じてよ。僕だって、妹に甘えられれば悪い気はしないけど、妹を異性とて意識するのは難しいよ」
「あの娘は本気ですよ？」
「へ？」
「あなたに近づくなとか言われました」
「……そのことは、宗像候補生に聞かされたよ」
「宗像から？」

「彼女、随分と面倒見がいいんだね。君のことは、彼女に聞けばいろいろ教えてもらえる――高いけど」
「たか？」
「何でもない。とにかく！」
染谷は力説した。
「あの子がそう言うのは、宗像候補生に言わせると、大好きなお兄ちゃんに近づく女は全て敵だっていう、妹の心理で説明が付くんだって！」
「……宗像の女子校的発想」
「言い過ぎだよ。だけど、本当だと思うよ？心理学的に何というかは知らないけど」
「それを……私に信じろと？」
「だからっ！」
「僕が好きなのは君だけ！それだけは覚えておいて！」
「……」
染谷の真剣な顔に嘘はない。
それは、美奈代も認めるしかない。
否。
信じるしかない。
だから、
「……わかりました」
としか、言い様が美奈代にはなかった。
ほうっ。
染谷の口から安堵のため息がもれた。
「……よかった」
「……でも」
グイッ！
突然、美奈代は染谷の胸ぐらを掴みあげ、その顔を自分の顔のすぐ間近にひっぱった。
「浮気したら――どうなるかは覚悟しておいてくださいね？」

驚く染谷に、美奈代は真顔で言った。
「私――相当、ヤキモチ焼きみたいですから」
「……みたい、じゃなくて、そのものだよ」
「何か？」
「何でもありません」
「……もう」
美奈代はそっと胸ぐらから手を離した。
「ただでさえ、あなたはモテるタイプなんですから。私の心配も考えてください」
「……自覚がない」
「その自覚のなさが問題なんですけどね」
「ん？」
「……ホントに鈍いんだから」
「何か言った？」
「……明日、行くんですよね」
「うん」
染谷候補生は、寂しげに頷いた。
「中華帝国の空母部隊が太平洋にまで進出してるおかげで、民間機も危険なんだ。本数の関係で、軍隊にいる僕達も、乗れる便が限ら

れてね」

「……そう、ですね」

「そのお別れと……その」

「わかってます」

美奈代は言葉を遮るように言った。

「あの、フィアって女の子も連れて行く。だけど誤解しないでくれって――そう言いに来たんでしょう？」

「……う、うん」

「何だか惨めです」

「……へ？」

「私のことは心配しないでください。むしろ、心配なのは貴方の方ですから」

「僕が？」

「だってそうでしょう？」

美奈代は、染谷を下から睨み付けるような姿勢で言った。

「撃ち落とされるかもしれない航空機に乗る。しかも、疑わしい愛人付きで」

「あ、愛人って！」

「日本に帰って、あの子とどうこうなっていたら」

美奈代は人差し指で染谷の胸を突いた。
「私、バンッって、いっちゃいますからね？」
「……覚悟しておくよ。だけど」
「えっ？」
そっ。
美奈代は、自分の腰に染谷の手が回されたのを確かに感じた。
「……その」
一瞬の躊躇いの後、染谷は美奈代を抱きしめた。
「……御免。だけど、わかってほしい」
固い軍服越しに伝わる染谷の鍛えられた体の感触。
ほのかに芳る染谷の体臭を嗅いだ時、美奈代の体から力が抜けた。
「僕だって……男だから」
「……」
「好きな君と……こういう時があっても」
「……あの」
「……ん？」
「す、すみません。今、気付きました」
なぜか美奈代の声は、無機質に凍り付いていた。
「……何を？」
美奈代の感触にしか感心がないのか。
反対に染谷は気のない返事だ。
そんな染谷に、美奈代は言った。
「……ここ、ギャラリーが多すぎます」
美奈代の視線の先には、ニヤニヤとした意地の悪い笑みを浮かべる仲間達の顔があった。

●フランス　パリ市内ホテル・リッツ

「……完全な失敗ですな」

ユギオが苦々しげに床を蹴った。

「どこまで悪運が強いんでしょうね。あの“鍵”は」

「まぁ、そう吠えるな」

悠然と腰を据えるスーツ姿の男が、長いあごひげを揺らしながら言った。

「その悪運とやらは、納期最優先を貫き、飛行艦に迂回を許さなかった、そして、メースによる追撃を命じたお前の判断ミスのことじゃ」

「……相変わらず、手厳しいですな。カールトン殿は」

「ふん……本当の事じゃろうが」

カールトンと呼ばれた男は、グラスを揺らしながら言った。

「――人間界の酒はどれ程不味いかと思ったが、悪くはないな」

「そりゃ……一本、ン十万フランの高級品ですからねぇ」

「何じゃ？」

「いえ。お口に合えば何より」

「ふむ……それで？」

「はい。カールトン殿をこんな辺鄙な場所にお呼びしたのは他でもありません」

「ヴォルトモード軍の封印が見つかったとは本当か？」

「可能性のある所――――です」

ユギオはテーブルに地図を広げた。

「この地方、人類の呼称で“ノルマンディー半島”と呼ばれる地域で発見されました」

「聞いてはおるぞ？“鍵”はこのパリとやらの古ぼけた古物商の倉庫でホコリを被っていたとか」

「はい。ちなみにパリは昔から天界軍の動きも活発な場所であり、同時に、あの古物商は、天界軍の息のかかった商社経由で引っかかった所でもあります」

「……臭いな」

「はい。パリから数百キロ。我々魔族や神族には近すぎます」

「封印されているのは？」

「ヴォルトモード軍第四軍と推定されますが」

ユギオは言葉を詰まらせた。

「封印の時点の戦況が気になります。

停戦の時点でこの周辺――――欧州は地上唯一の天界軍の広域支配地域でした」

「知っておる」

カールトンは顔をしかめた。

「ワシの父が敗死した場所じゃ……それが？」

「第四軍の残党はアフリカに送られているのです。ここに封印があること自体がおかしいのです」

「ヴォルトモード卿の封印地点は地球の反対側、弓状列島じゃろうが」

「それです！」

パンッ

ユギオは手を叩いた。

「何故、ここに封印があるのか。ここに天界軍は何を封印したのか」

「……」

「本来なら、順を追って追跡調査するのが筋道なのですが」

ユギオはブランデーの瓶を弄びながら言った。

「天界軍は、ヴォルトモード卿の封印地点を弓状列島だと正式には認めていません」

「……ん？」

「戦史にお詳しいカールトン殿でしたら、ご存じでしょう？ヴォルトモード卿暗殺の噂は」

「……ああ」

カールトンは、ブランデーグラスをあおると、空のグラスをユギオに突き出した。

「封印の儀式はブラフで、どこかにテレポートさせられたヴォルトモード卿は、その場で暗殺されたとか」

「そうです――信じますか？」

グラスにブランデーを注ぎながらユギオは訊ねた。

「まさか」

グラスを受け取ったカールトンは、笑って否定した。

「ただ――火のないところに煙は立たぬ。“何か”があったのは間違いあるまい」

「何か――とは？」

「封印されたはずのヴォルトモード卿を見た。という兵士の証言が各地に伝わっていることを考えると、弓状列島に封印されていないと考えることはむしろ妥当じゃから」

言いかけて、楽しげにこちらを見ているユギオの視線に気付いた。

「……天界軍の監視を欺くために、その封印を開けてみる――そういうのか？」

「はい♪」

ユギオは頷いた。

「もし、ヒョウタンから駒なら大歓迎、第四軍の残党なら残念賞。妖魔なら」

「妖魔なら？」

「――まぁ、いいでしょう」

ユギオは自分のグラスにブランデーを注ぎ込んだ。

「この欧州で妖魔が暴れたとなれば、我が親愛なる中華帝国に対する、人類の足並みは乱れます。そして、妖魔狩りは、人類の仕事になるのですから」

「何が封印されていると思う？」

「開けてみてのお楽しみですよ――明日、行ってみませんか？」

「歌劇に誘うように言うものではないぞ……本当に」

「歌劇ですよ――上手くいけば喜劇、しくじれば悲劇なんですから」

金色の髪の少女　第七話

「ここにいたんだ」
フィアがいなくなった。
通報があって、染谷が艦内を探して回るハメになった。
フィアがいなくなった。
それはそれで美奈代は心配してくれるだろうが、単独で探しまわっていることを知ったら、どうなるんだろう？
なんだか、自分は美奈代の尻に敷かれそうだな。
そんな確実に近い予感が、染谷の中で沸き上がった。

結局、染谷はそんなに探さずに済んだ。
フィアは艦内居住区の通路にいた。
まだ“鈴谷（すずや）”が輸送艦の指定を受けていた時分の休憩スペースだった頃の名残で、通路の一区画だけが広くなっており、採光のため大きくとられた窓からは夜の帳が降りるアフリカの雄大な景色が楽しめるところだ。

銀色の光がフィアの金髪を照らしだし、言い様のない美となって染谷の目を奪う。
染谷に声をかけられたフィアは、驚いた風もなく、ただ、ニコリと微笑んで見せた。

「綺麗でしょ？」
その細い指が指し示すのは、窓の外。

所々、雲の浮かぶ外の世界は、月の光に照らし出され、一枚の名画のようだった。

「お昼に、艦内をうろついている最中に見つけたお気に入りの場所なの」
「そうなんだ。でも、もう、部屋に戻らなくちゃ」
「――狭い部屋は嫌いなの」
「何故？」
「だって」
「だって？」
「牢屋みたいじゃない」
「牢屋？だって、君、そんな所に」
「船は嫌いあんなちっちゃい窓しかないなんて、牢屋じゃない。私、ここがいい」
「船の窓は、みんなあんなものなんだよ」
「そ、そうなの？それでも、嫌いよ。あんな狭い窓から世界を見ていたら、本当の世界まで狭くなるわよ？」
「それは違うと思う」
染谷は言った。
「人が視野を、世界を、狭くするんじゃない」
「この広い世界で迷わないように、わざと狭くするんだ――目標になる部分だけに絞って、わき目もふらず」
染谷は、自分の両手を顔の両側に添えて見せた。
「そうすれば、どんな広い世界でも迷わない――目指す場所だけ見えているから」
「……」
フィアは、きょとん。とした後、そっぽを向いた。
「バカみたい」
「うっ」
「視野狭くして、どこが目標かわかるの？本当にそこが目標だって、どうしてわかるの？」
「そ、それは」
染谷は反論に窮した顔で息をのんだ。

「そう思うところが、目標じゃないの？」
「そこが目標だなんて、誰が決めたの？」
「だから……自分」
口べたってのは、こういう時に困る。
染谷は、内心でそう思った。
「なら聞くけど――あなたの目標って、何？」
「――なんだろうね」
染谷は、しばらく考えた後、笑って言った。
「親や周囲から、いろいろ言われてきたけど、自分からこれっていうのは」
「あの泉美奈代とかいう女は？」
「人をそんな風に呼ぶのはよくないよ？」
「あの女でいいのよ。あれは、目標じゃないの？」
「うーん。僕の考える目標っていうのは、その……人生というか」
恋愛はちょっと違うと思ってるんだ。
そう照れる、その屈託のないまでの笑顔が、フィアに言わせた。
「――私、なってあげようか？」
「えっ？」
フィアは、驚く染谷の目をじっと見つめながら言った。
「――あなたの目標に」
「……あの？」
「あなたが気に入った」
フィアは、そっと染谷の頬に触れた。
「――私だけを見なさい。私があなたの目標。この広い世界でどんなに迷っても、帰ってこれる母なる港、あなたのしとね。それが私よ？覚えていてね」
「……」
染谷は、目をパチクリした後、笑ってフィアの腕に触れた。
「……ありがとう」
「目標を見失えば、あなたが終わる。気をつけて」

「……わかった」
「――じゃ」
不意に、フィアは数歩下がった。
「私、探しに来てくれたんでしょう？もう戻るから」
「そう？送っていくよ？」
「ううん？だいたい、女性専用区画にあるのよ？私の部屋」
「あっ。そうだった」
「それに――」
「ん？」
「もう少しだけ、ここで一人にさせてほしいの」

染谷が遠ざかるのを見送って、フィアは顔に血が上るのがわかった。
今更ながら、何という大胆なことを言ったんだろう。
恥ずかしくてたまらない。
勢いといえは勢いだ。
だけど――だけど！！

「――っ！！」
フィアは顔を押さえてその場にうずくまってしまった。
私はなんて言う大胆な女の子なんだろう！
いくらライバルのあのブスから瞬を引きはがすためだとはいえ、瞬にしてきたことだけ思い出せば、まるで恥知らずの娼婦じゃない！
違う！
娼婦以下の恥知らずな痴女だ！
今のところ、瞬は私を受け入れてくれているけど、一体、駿は私をどんな女の子だと思っているんだろう！

心配だ！
心配すぎるっ！

「――おい」
突然、背後からかけられた言葉に、フィアは飛び上がって驚いた。
自分がどんな悲鳴を上げたかさえ定かではなかった。
「……楽しいな」
美夜だった。
「あ……こ、こんばんわ」
窓に張り付いて挨拶するフィアに、美夜はちょっと微笑んで小さく会釈した。
「何だ。最初の頃にはずいぶん警戒されていると思ったが」
「だっ……だって」
フィアはぷぅっと頬をふくらませ、そっぽをむいた。
「こ、怖かったし……何もわかんなかったし……」
「そうか」
隣、いいか？
そう断って、美夜はフィアの横に立つと、無言で船窓から夜景を眺めていた。
艦内放送が始まったのは、その時だ。
飛行艦の単調な時間の推移の中ではストレスも貯まる。
だから、食後のこの時間に、艦内に音楽を流すことにしている。
美夜が艦長になる前からの伝統だ。
静かなピアノの調べと、艶めかしくさえある歌手の歌声を、フィアと美夜はただ黙って聞いていた。
「……あの」
フィアも、相手がこの船で一番偉い人物だと知っている。
「今の、なんて歌ですか？」
「――ああ」
美夜はちょっと笑って言った。

「Ｆｌｙ　ｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｍｏｏｎ――私を月へ連れてって」
「……」
フィアは不意に歌い出した。
「Ｆｌｙ　ｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｍｏｏｎ
私を月へ連れてって
Ｌｅｔ　ｍｅ　ｓｉｎｇ　ａｍｏｎｇ　ｔｈｏｓｅ　ｓｔａｒｓ
星達の間で歌わせて
Ｌｅｔ　ｍｅ　ｓｅｅ　ｗｈａｔ　ｓｐｒｉｎｇ　ｉｓ　ｌｉｋｅ　Ｏｎ　Ｊｕｐｉｔｅｒ　ａｎｄ　Ｍａｒｓ
木星や火星の春を私に見せて」
「……ほう？」
美夜はかなり驚いた。という顔でフィアを見た。
「きれいな歌声だな」
「ありがとうございます」
「……」
「……」
「……？」
「……続きは？」
「……ああ」
続きの歌詞を思い出し、フィアは小さく笑った。
「この続きは」
「続きは？」
「瞬のベッドで」
「……は？」
「生きて帰ってきたご褒美にとっておきます」
「……そうか」
美夜は苦笑しながら頷いた。
「あの甲斐性なしのどこがいいのかわからないが」

「ムッ――瞬は！」
フィアが言いかけた瞬間。
ドンッ！！
爆発音がして、艦が激しく揺れた。
艦内の照明が消え、赤い予備電源がともる。
「きゃっ！？」
宙に浮いたフィアを抱きかかえた美夜は、腰の艦内通信装置を手にした。
「平野だ！何の騒ぎだ！？」
「敵襲ですっ！」
副長の高木が艦橋で美夜に答えた。
「敵メサイア数４、本艦に向けて接近中！――はいっ！」
美夜の指示を受け、高木は怒鳴った。
「ＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）、即時全周囲展開！“伊吹”機関部の出力は全てそっちへ回せっ！」

金色の髪の少女　第八話

“鈴谷（すずや）”に襲いかかったのは、あのエーランド達だ。
バンッ！
機関部を狙った一撃が、空中で消えた。
「ほう？」
エーランドはその光景を前に顔を楽しげに緩めた。
「重力防御か！」
部下の騎も艦橋や船体めがけて砲撃を続けているが、全て艦に届く前に無力化されている。
「全騎、攻撃を対重力防御壁用弾頭へ切り替えろ！」

「何とか逃げられそうか？」
フィアに部屋へ戻るよう命じた後、美夜はすぐに艦橋に入った。
「ＦＧＦで防御だけは出来ていますが」
高木は顔をしかめたままだ。
「こっちからも反撃出来ません」
「――――やむを得ないな」
いわば魔力によって展開された楯であるＦＧＦは、魔法だろうが実体弾だろうが全て防御出来る万能の楯だ。
しかし、万能過ぎて身内の攻撃までを無力化してしまう。
ＦＧＦを展開している間は、敵も味方も何も出来ることといえば、お祈りする位だ。
「最大戦速発揮、ジブチのＥＵ軍に救援信号を出せ」
「し、しかし！」
美夜はインターフォンをとると言った。
「メサイア隊は！？」
「ＥＵからの要請に従って、今、アフリカ方面へ！」

しまった！
ＥＵ軍に貸しを作っておきたくて、文句をたれる二宮達を送り出したのは、美夜自身だ。
「戻せるか？」
「間に合いませんっ！」
「何騎か残しておくべきだったな……艦長より整備！メサイアは出せないのか！？」

「そいつは無理だ！」
インターフォンに怒鳴りかえしたのは坂城だ。
その背後では装甲を外され、フレームが丸見えになった二騎のメサイアが並んでいた。
美奈代達がコクピットに入ろうとしているが、その騎体でさえ、いくつかの装甲が外されていた。
「完成まで、あと４５時間はかかるぞ！文句ならぶっ壊した奴らに言ってくんな！山科のを！？それならさっさと言ってくれ！早く終わるぞ？コクピット調整に６時間だ！沈むのが早いか、コクピット調整が終わるか？そんなこと、俺が知るか！」
艦が激しく揺れた。
「周囲の雑音にかまうな！野郎共っ！さっさと仕事続けろっ！」

「――――きゃっ！？」
通路に押し出されるようにして、ハンガーデッキに飛び出してきたのはフィアだった。
誰もが自らの任務に集中して、フィアに構っている余裕なんてどこにもない。
「あ……あれ？」
フィアは、自分が道を間違えたことを知った。
ここは知っている。

あのメサイアとかいう兵器の格納庫だ。
2騎のメサイアがあちこちから火花をあげながら整備を受けている。
でも――――
フィアは床を蹴ると、宙を舞った。
「どうして！」
その2騎とは別に、さらに奥で1騎がほったらかしになっている。
フィアはその騎の側で整備兵を捕まえた。
「どうしてこの騎は動かないの！？」
「しかたないんだよ！」
突然の闖入者に驚きながらも、若い整備兵は言った。
「操縦システムが故障していて、下半身が動かないんだ！」
「何よそんなの！」
フィアは、そのメサイア――――“伊吹”で回収された“幻龍改（げんりゅうかい）”を睨み付けた。
無言で立つ“幻龍改（げんりゅうかい）”は、フィアに何も答えない。
整備兵に手を引かれ、フィアは再び床に降り立った。
「嬢ちゃん！」
その整備兵はフィアに言った。
「ここ、危ないから！安全な場所へって……お、おいっ！」
その整備兵の前で、フィアは再び床を蹴ると、“幻龍改（げんりゅうかい）”の方へと流れていった。
「整備班長っ！」
「こ、これって……ここから入るのよね」
フィアがたどり着いたのは、“幻龍改（げんりゅうかい）”の頭部。
胸部装甲ハッチの開き方がわからないフィアは、偶然開かれたままになっていたMC（メサイア・コントローラー）用のハッチから中へと入り込んだ。
フィアにはわからないが、ハッチから中へ潜り込んだ途端、MC（メサイア・コントローラー・ルーム）

Rの中の計器類が点灯を開始し、モニター類が全て動き出した。
「……へぇ？」
何をどう動かして良いのかまるでわからない。
勢いでここまで来たことを、フィアはさすがに後悔し出していた。
だけど――――

「このままじゃ」
恐る恐る、フィアは近くのレバーに手を伸ばしかけた。
その瞬間――――

ズンッ！

今までで一番激しい振動が鈴谷を襲った。

「きゃっ！？」

耳がキーンとする程の音の後、けたたましい警報が鳴り響いた。
「火災発生っ！」
「整備班は速やかに消火作業へ！」
「手すきは対空銃座へつくんだ！」
整備兵達の動きが今までとは別な方向へとあわただしく動く。
フィアはその間にＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の中をあわただしく動く。
とにかく、これを動かしたいと思うフィアに、肘が何かボタンに触れたことに気づく余裕さえなかった。
「これって、どえやって動かすのよ」
「あ……あの？」
シートの下をのぞき込んでいたフィアは、恐る恐るという感じでかけられた声に、弾かれたように思わず頭を上げて――――

ゴンッ！！

「す、スゴい音がしましたけど……大丈夫ですか？」
うずくまって頭を抑えるフィアに近づいてきたのは、６歳くらいの女の子。
精霊体“ちあさ”だ。

「だ……大丈夫……グスッ……いっ、痛い……」

「い、痛いの痛いの飛んでけぇ」
「あ……ありがと……」
フィアは数回頭を振ると、“ちあさ”の肩を掴んだ。
「あなた――精霊よね？」
「は？はい？」
突然、フィアの手が“ちあさ”の頭を両手でがっちりと掴んだ。
「……道理でね」
フィアは、何度も頷きながら言った。
「道理で、妙に精霊の匂いがする場所だと思ったのよ――ここ」
「あ……あの？」
“ちあさ”は本能的なレベルで恐怖を覚えた。
「ちょっと……痛いけど、がまんしてね？」
「……やっ」
泣き顔になる“ちあさ”に、フィアは微笑んだ。
「いい子だから」

やぁぁぁぁぁっっっ！！

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の中で悲鳴がしたことに整備兵の誰も気づく者はいなかった。

ズンッ！！
対重力防御壁用弾頭がＦＧＦに穴をあけ、艦に傷を付ける。
一発でも命中すれば艦に重大なダメージを与えることの出来る対艦兵器なのだが……。
ＦＧＦに命中した時は派手な音と光をあげるが、艦そのものに命中しても、艦に穴を開けるだけだ。
火災もろくに起きていない。

「重力防御が――――強すぎる？」
防御が強すぎれば、対重力防御壁用弾頭によって開く穴も小さくなり、効果が減るのは道理だ。
「弾頭の力が負けているだと！？」
エーランドは目を見張った。
この弾頭なら、一昔前の戦艦だって無事では済まないはずだ。
「人類は……ここまでの力を！？」
「少佐っ！」
ツヴァイ３号騎を駆るマオが艦の後部を指さした。
「重力防御のジェネレーターですっ！」
「よくやった！マオ、アーク、対重力防御壁用弾頭を集中しろ。どうせ向こうからの攻撃はない――――いくぞっ！」

敵のメサイアが艦の後部に集中した。
その意味は嫌でもわかる。
「くそっ！」
美夜は歯ぎしりするが、この状況では何も出来はしない。
「沈むとは思いたくないが……」
メサイア達がバズーカ砲を構える。
「全対空砲をあの三騎に集中させろ！砲術、対空ロック、外すなよ！？」

「了解っ！」
砲術長は舌なめずりしながら答えた。
「でっかい獲物だ！おいしくいただこうぜ！」

ズンッ！

ビーッ！
ビーッ！
ビーッ！

「上部ＦＧＦ消滅っ！」
爆発音と同時に、一瞬、艦内の全ての照明が落ちた。
すぐに日所言う電源が点灯し、視界は復旧する。
その中で、砲術長が怒鳴る。
「砲門開け――撃てぇっ！」
“鈴谷（すずや）”甲板上からツヴァイを照準していた全ての火器が砲門を開き、激しい火線がツヴァイを襲う。
ツヴァイ達は右へ左へと攻撃をかわしながら“鈴谷（すずや）”への攻撃を試みる。

“鈴谷（すずや）”の甲板に３発の攻撃が命中した。
攻撃は甲板を貫通した。

「何だと！？」
驚いたのはエーランド達だ。
「対重力防御壁が無くなったら、こんなに脆いだと！？」

「敵騎３騎、接近してくるっ！」
「――――くっ！」

飛行中のメサイアの機動性は爆撃機並に低い。
それがメサイアに関しては常識だというのに、魔族軍のメサイアの機動性は――
「早すぎるっ！弾幕どうした！」
ズンッ！
「左舷直撃っ！第６７区画閉鎖っ！」
「６９区画で火災発生！」
「ダメコン急げっ！」
「艦軸足弱まる！」
「艦長！速度低下、現在１８ノット！」
「――くぅっ！」
今の美夜に出来ることは、蝶のように舞う敵騎を睨み付けるだけだ。
「ふらりふらりと――っ！」
ズズンッ！
艦が激しく揺れた。
ガンッ！
いや――
揺れ続けた。
「な、何だ！？」
「ハンガーデッキより艦長！」
整備兵の悲鳴のような声がスピーカーから流れた。
「予備の“幻龍改（げんりゅうかい）”が！」

「平野だ！予備騎がどうした！」

「暴走した！今、長野大尉と二宮中佐が止めようとしているが」

「何っ！？」

「二宮だ！美夜、予備騎には、騎士の搭乗は確認されていないっ！コクピットに対人反応なしっ！」

「騎士が乗って無くて、どうしてここまで動けるのよ！」

「乗ってる奴に聞きなさいよ！」

バキィィィッ！

背筋が寒くなるような音がした。

「ハッチぶっ壊しやがった！ハンガーデッキからフライトデッキに向かっている！」

「フライトデッキのハッチあけろ！あそこまで壊されたらまずいっ！くそっ！こんな時にっ！？」

美夜は艦長席のアームレストに設置されているインターフォンを“幻龍改（げんりゅうかい）”の予備騎、そのＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）へとつないだ。

「こちら艦長だ！誰が乗っている！？所属官姓名を述べろ！」

「えっと！」

聞こえてきたのは、耳にも心地よい美しい女の子の声だった。
幾分緊張している様子だが、はっきりと張りがある声色に、一瞬、毒気を抜かれたのは美夜だけではなかったはずだ。

「文句は第七分隊の泉候補生に言ってください！」

「そ、その声は！？」

「私、フィアです」

「な――――どうしてメサイアを！？」

「このままじゃ！」
フィアは大声で言った。
「瞬が帰るところがなくなっちゃうから！何か武器は！？」
「武器っ！？」
「“この子”の武装じゃ、どうあっても“アレ”には勝てない！」
「斬艦刀を！」
通信に割り込んできたのは、二宮だ。
「何、それっ！？」
「壁にかかっているデカイ刀をもっていけ！」
「はいっ！」

“幻龍改（げんりゅうかい）”の手が伸びて、壁のウェポンラックにかかっていた斬艦刀をわしづかみにすると、手近のシールドラックに固定されていたメサイア用のシールドを一刀の元に切り捨てた。
「やれるっ！」

「艦内で試し切りは禁止だ！バカぁっ！」

必死になって対空砲を打ち上げる“鈴谷（すずや）”に、ほぼ一方的に攻撃を仕掛けるエーランド達の前に、“幻龍改（げんりゅうかい）”が現れた。
「少佐」
その姿を認めるや、通信に入ってきたのはアークだ。
「仲間のカタキを討たせてください。彼奴等の敵をどうあっても！」
「――油断するな」
エーランドは言った。
「あの長刀にだけ神経を注げ。装甲はないに等しい――かわすことが出来れば、お前でもやれる」
「はいっ！」
「マオ、私と共にこの艦の脚を止めるぞ！」
「了解っ！」

ガンッ！

派手な音と振動を伴いながら、甲板にツヴァイが降り立った。
甲板のダメージをまるで考えずに着艦したものだから、甲板が派手にへこんだ。
「さぁて！」
メサイア使いとして経験の浅いアークにあるのは、目の前の敵をなぶり殺しにすることだけだ。
敵騎を細切れにした後、この飛行艦も戦斧で切り刻んでやるっ！
「さぁ――かかってこい、人類っ！」
戦斧を頭上で派手に振り回すアーク騎に、“征龍改（せいりゅうかい）”は斬艦刀を横薙ぎに振り払った。
「甘いっ！」
激しい音と共に斬艦刀の峰がはじかれた。
大きく体勢を崩した“幻龍改（げんりゅうかい）”に、ツヴァイが迫る。

「こうもあっさりと！」
ツヴァイが再び戦斧を振りかざした。
「――――終わらせるなぁっ！」

「ワァッ！」
艦橋で推移を見守っていた皆が悲鳴に近い声をあげたその瞬間――

ガンッ！！
“幻龍改（げんりゅうかい）”のアームガードがツヴァイの顔面をモロに捉えた。
戦斧を振り下ろしかけていたツヴァイは、その直撃を避けることが出来なかった。
顔面装甲が吹き飛び、メインカメラが粉砕される。
「くそっ！？」
それでもアークは、ツヴァイの戦斧を振り下ろそうとした。

敵がこの騎をぶん殴ったとしたら、敵は真っ正面にいる！

サブカメラにツヴァイの眼が切り替わった頃には、敵は真っ二つだ！
アークは、その若い顔を勝利の予感に緩めたが……。

ガンッ！

戦斧を振り下ろすツヴァイの手が止まり、コクピットを、そんな音と共に激震が襲った。
モニターや計器類が火を噴き、電源が全て落ちた。
「なっ！なっ！？」
「アーク！脱出しろっ！」
予備電源が入った途端、レシーバーにマオの怒鳴り声が響いた。

「こっちで仕留めるっ！」
「まだやれるっ！」
アークはマオに怒鳴り返した。
「予備電源が入るんだからっ！」
アークは戦斧を手放すことにした。
なぜか振り下ろそうとすると、両手が動かないのだ。
敵騎に片手で両腕戦斧の柄を掴まれているなんて、想像さえ出来なかった。
ましてて、片手で腹部のコクピットハッチを殴りつけられているなんて尚更だ。
いや、殴られ続けた衝撃で、段々とコクピットハッチ部がゆがんで、コクピット内部にいても、イヤでも外で何か恐ろしいことが起きていることを思い知らされる。
「――――くっ！」
「アークっ！」
マオ騎が接近を試みるが、対空砲火に邪魔されて思うように“鈴谷（すずや）”に近づくことが出来ない。
敵も死に物狂いだ。
そう簡単には――――！
「くそっ！」
マオは舌打ちした。
「アーク、脱出もダメなら、せめてそいつを抑えろっ！狙撃するっ！」
その言葉に、アークはさすがに、それしかない。と判断した。
スクリーンが映らなければ、敵がどこにいるかわからない。
ハッチを爆破して目視も考えたが、さすがに自殺行為だ。
「……了解した！」
戦斧を手放し、アークは再び、ツヴァイの手を大きく上に振り上げた。
敵の手から放れたツヴァイの両腕で、アークは敵騎の両肩を掴ん

だ。
「やったぞ！マオっ！」
アーク騎が飛行艦の甲板上で敵騎の両肩を掴む姿は、“鈴谷（すずや）”を大きく回り込んだマオ騎からも目視出来た。
「こちらでも確認した！」
敵騎はすでにロックオンしている。
「この距離だ！外しようが……」
トリガーにかかったマオの指に力が入った。
マオ騎からの一撃が、敵騎に向かって放たれた。
だが――
ズンッ！！
その一撃をまともに胴に喰らったのは敵騎ではなかった。
アーク騎だ。
直撃を喰らったショックで関節がイかれたのだろう。
四肢をピンと伸ばした、X字の状態で敵騎に持ち上げられていた。
「なっ！？」
唖然とするマオ騎に、敵騎からの一撃が襲ったのは、その時だった。
「マオっ！」
アーク騎から奪ったライフルからの一撃は、マオ騎のコクピットを直撃した。
操縦者を失ったマオ騎がまっすぐに地面に落下していく。
「くっ！？」
一瞬、頭に血が上ったエーランドは、戦棍（せんこん）を構え、敵騎めがけて

襲いかかった。
「何度も何度も！」
アーク同様、甲板に派手に着艦した途端、エーランド戦棍が“幻龍改”を襲った。
アーク騎を楯にした“幻龍改”が、楯になったアーク騎ごと吹き飛ばされる。
フィアは、危うく甲板から落下する寸前でこらえ、逆襲に出た。
「このっ！！」
戦棍で殴りかかったエーランド騎を、“幻龍改”が乱射に近い射撃を続けるライフル攻撃が襲う。
「甘いっ！」
それを大きく跳躍してかわしたエーランドは、膝蹴りを“幻龍改”に見舞った。
「あぐっ！」
その膝蹴りを最小限度の体勢で裁いた“幻龍改”は、逆にエーランド騎の背めがけてハイキックを決めた。
「ば――ばかなっ！？」
ブースターを全開にして不可視の海への落下を回避したエーランド騎は、急上昇を駆けた。
加速が乗り出した瞬間、その両足が吹き飛んだ。
「ぐうっ！？」
“幻龍改”のライフル攻撃が命中したのだ。
警報が鳴り響くコクピットで、エーランドはそれでもなお、敵騎に挑んだ。
「これだけ騎体を潰されて――――！！」
武器は戦棍だけだ。
ライフルが数発、脚と肩の装甲に命中し、左腕を肘の根本から吹き飛ばされてなお、エーランドは戦いをやめようとしなかった。

左肩の装甲が吹き飛んだのを最後に、敵のライフルは火を噴かない。
弾切れだと、エーランドはそう判断した。
勝てる！
勝たねばらなない！
でなければ――――！！

「おめおめと、どの面さげて、手ぶらで帰れるというんだぁっ！」
バランス補正が終わらない騎体を無理矢理ねじ伏せながらライフルを乱射するが、当たるものではない。

ガチンッ！

ライフルの残弾警告が短く響いた。
残弾が尽きたんじゃない。
ライフルが故障したのだ。
「くそぉっ！」
エーランドは罵り声をあげた。
「どこまで私は――――っ！」

ライフルを逆手に持ち、自分でも意味不明の叫びをあげながら襲いかかったエーランドの視界一杯に、敵騎が映し出される。

だが……。

彼が覚えているのは、そこまでだった。

エーランド騎の胸を貫いた敵からのライフル攻撃と、側面をたた

きつぶした戦斧の一撃がエーランド騎を襲ったのはほぼ同時。
騎体を文字通り潰され、“鈴谷（すずや）”の甲板で一度大きくバウンドしたエーランド騎は、炎をあげながら闇の中へと消えていった。

金色の髪の少女　第九話

●“鈴谷（すずや）”艦長室

「――正直な話」

美夜は言った。

「あの子が、あんなこと出来るなんて、びっくりしたわ」

「まぁ、ね。それにしても」

二宮は船窓の外を眺めた。

「航行灯の灯りが、こんなにきれいだったなんてね」

「――そうでしょう？」

頷く美夜の顔は、どことなく嬉しげだ。

「――まぁ、しばらくのことだけどね」

船窓の向こう、ヘッドライトの列が走っていく。

EU軍が移動しているのだ。

「――中華帝国の連中、何か言ってるの？」

「いろいろオドシはかけているみたいよ？」

美夜はクスクス笑った。

「EU軍が紅海を確保出来るかどうかが、運命の分かれ目でしょうね」

「EU軍の動きは？」「陸（おか）の上じゃ、もう派手にやってるわ。中東を植民地化したくて血眼になってるし、海でもドイツとイギリスの潜水艦部隊が、ホルムズ海峡周辺で頑張っているみたいよ？他にも、飛行艦も何隻か、各国から派遣されて」

「先にネをあげた方が負けってことね」

「そういうこと」

美夜はサイドボードからウィスキーのグラスを取り出した。

「どう？」

「いただくわ……それにしても」
ウィスキーが注がれる間に、二宮は続けた。
「あの子、どうするの？」
「フィアのこと？」
コクン。
二宮は無言で頷いた。
「……気にするな。という方が無理よね」
「ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）からの単独コントロールで、あのレベルの戦闘機動かましたなんて、ありえない」
「……」
二宮が言う通りだと、美夜も思う。
「元候補生にして学生隊総隊長経験者に言うのもなんだけど、ＭＣ（メサイア・コントローラー）は結局の所、人間で言えば体と感覚器を司る大脳。対する騎士は運動を司る小脳。大脳たるＭＣ（メサイア・コントローラー）が小脳を兼ねるなんて、ちょっと信じられない」
「厳密には違うというべきでしょうけどね」
美夜は苦笑しながら言った。
「言いたいことはわかる。でもね？真理」
グラスに口を付けた美夜は、諭す様な口調で言った。
「今、私達に必要なのは――戦力よ」

「ターゲット、距離２６００。こちらフィア・ツヴォルフ騎。射撃、開始します」
甲板に寝そべった“幻龍改（げんりゅうかい）”が大型の狙撃砲を構える。
目標はアデン湾の岩場にペンキで書かれた×印。
フィア騎の横には弾着観測のため、染谷騎が片膝の体勢で待機している。
「こちら“鈴谷（すずや）”司令部。ツヴォルフ騎へ。射撃許可」

「了解」

「レコードだって！」

さつきが興奮気味に言った。

「スゴイよあの子！」

「着弾範囲が2メートル？ＭＬ（マジックレーザー）でもあるまいに」

宗像もあきれ顔だ。

一人、面白くないという顔をするのは美奈代だけだ。

「あれなら安心だな」

「嫌っ！」

美奈代達が通路にさしかかったところで、そんな怒鳴り声が響き渡った。

「絶対にイ・ヤッ！」

フィアの怒鳴り声だ。

「わかってくれ、フィア！」

相手は染谷だと、その声でわかった。

美奈代達は、思わず互いの顔を見合うと、そっと通路の角に近づいた。

通路の角の向こう側。

困惑する染谷と、顔を真っ赤にしているフィアがいた。

「何で！？どうして！？」

フィアはその愛らしい瞳に涙まで浮かべ、肩で息をするほど怒っている。

「私、言われた通りに狙撃した！頑張ったもん！艦長だって成績認めてくれたでしょう！？」

「だから！」

染谷も珍しく感情的になっている。

「君を戦場に連れて行くわけにはいかないんだって！」

「だからどうして！」
「よく考えて。フィア！」
染谷はフィアの細い肩を両手で抱きしめるように押さえた。
「君は立場がわかっていないんだ」
「わかっている！私はあのメサイアっていうのを動かせる！私は“メース使い”の能力あるから、あんな精霊体と同調することなんて簡単なんだから！」
「そういうことじゃくて！」
染谷は、一度、天井を仰ぎ見てから言った。
「君は間違いなく、魔族に狙われている」
「そんなの関係ないでしょう！？私は瞬と一緒にいたいの！瞬が側にいなければ、私の時間は動かないの！」
「僕は君を危険に曝したくないんだ！」
染谷は、そっとフィアを抱きしめた。
「好きな子に危険な思いをさせたくない」
「……あの女はいいの？」
「誰のことかは聞かないよ。大切なのは君だけだ」

染谷にとって、フィアを戦場に送りたくない。
その一心しかないことは確かだが、ここで言うべき言葉では、決してなかった。
染谷に、もう少し、配慮というか、人生経験があれば、違う答えも出ただろう。

だが、この時の染谷には、この答えがある意味で限界だった。

そう、フィアの耳元で囁く染谷の声を聞いた美奈代は、突然、その場を走り去った。

――きっつ～い。
――ちょっと……いくらなんでも。

それを見送ったさつきと美晴が、小声でそう言い合うのも無理はない。
誰のことかは、皆が知っているのだ。

そんな彼女たちの前で、染谷は言った。

「君が一体、何者で、どうして魔族が君を狙っているのかは聞かない。誰にも言うつもりもない。だけど」
「――だって」
フィアは悲しそうな眼で言った。
「それを知ったら……」
「……」
「――瞬は絶対、私を愛してくれなくなるから」

ドンッ！

「のわっ！？」
ドアから飛び出してきた美奈代にもろにぶつかったのは都築だ。
「痛ってぇ～っ」
ぶつかったショックで、後頭部をモロに壁にぶつけた都築は、ぶつかった相手が美奈代だと知って、怒鳴ろうとしたが――。
「て！……って」
その顔を見た途端、都築の毒気が全て抜けた。
美奈代は泣いていた。
涙を流しながら、都築の前から逃げ出そうとしていた。
「――待てよっ！」

都築はとっさに美奈代の腕を掴んだ。
「ど、どうしたんだよ！」
「かっ……」
ヒック！
しゃくり上げた後、美奈代は怒鳴った。
「関係ないでしょう！？離してっ！」
「落ち着けって！」
乱暴に都築の腕を振り払おうとするが、都築の方が力は強い。
逃れられるものではなかった。
逆に抱き抑えられてしまった。
「何が起きた！」
その胸に抱きしめられたせいだろうか。
それとも、単にそれが我慢の限界だったのか――
「――っ！！」
美奈代は、都築の胸の中、大声で泣き出した。
泣くだけ泣いた。
自分の中で、何かが終わったことを。
何も出来ずに、何かが終わってしまったことを。
美奈代が痛い程思い知らされた結果だ。
そして――
都築は、美奈代が泣き続ける間、ずっと美奈代を抱きしめていたが……。
「落ち着いたか？」

「……」
美奈代は無言で頷いた。
「……ならいい」
まるで軽く突き放すように美奈代から離れた都築は、そのままどこかへ消えていった。

その晩。
美奈代は体調不良を理由に夕食に出てこなかった。
染谷が薄情だと怒りをあらわにするさつき達が、この夕食の席で聞いたことは二つ。
一つは、狙撃能力を買われたフィアが、艦防衛のために狙撃砲付きの“幻龍改（げんりゅうかい）”に搭乗することが決定したこと。
もう一つは――
都築が、染谷をぶん殴って営倉に送られたことだった。

この時点での中東に関する簡単なメモ書き

一晩営倉にぶち込まれた都築は、翌日の朝には営倉から出された。取り調べに当たった美夜曰く、「ガキの色恋沙汰に関わっていられる程、軍隊はヒマではない」。

何より、構っている状態ではなくなっていた。

アフリカ奪還成功からずっとアフリカ近郊で待機を命じられ続けた“鈴谷（すずや）”に、ようやく指令が下ったのだ。

曰く――――

「インド洋を突破し、本国へ帰還せよ」

遠回しな自決命令下る。

美夜が艦長日記にそう書き残したのも無理はない。

輸送艦を改造しただけの飛行艦に、単独で敵が制海権と制空権を持つ空域を、数週間かかって移動して帰ってこいなどと言う方がどうかしているのだ。

だが、その背後には、実は重大な世界情勢の変化があったことを、どうか理解して欲しい。

ＥＵ軍によるアフリカ奪還からの１０日間。

それは、美奈代達がアフリカ上空で干されているだけでは終わらなかったのだ。

三週間戦争以上。

そう評価する歴史家も多いほどの劇的な変化が、世界に訪れたのだ。

まず第一に、中東の親中国家の崩壊と、中華帝国軍の中東からの撤退開始だ。

ＥＵ軍はアフリカで使用しなかった兵力を移動させ、紅海を越えて中東に侵攻する動きを見せたことは先に述べていた通りだ。

これが実行に移されたことも述べた通り。

オイルダラーの国とはいえ、資金を全て軍事力に回しているわけではない。

むしろ、アフリカで戦い抜いてきたＥＵの相手になる力を、経済以外で彼等は持っていなかった。

その時点で、バグダッド周辺を含む中東の主要都市はメサイアによって制圧された。

中東の親中国家は、満足な抵抗も出来ずに、蹂躙されるに任せることになったことを意味する。

彼等の頼みの綱である中華帝国軍は、ペルシア湾周辺に展開する米軍を楯にＥＵ軍の追跡をかわし、アラブ首長国まで後退。

ＥＵ軍と米軍がサウジアラビアで対峙するという、信じられない事態が発生したのもこの時である。

中東での利権を、中華帝国の行動を黙認することで確保しようとした米国の目論見は完全に崩れ去った。

この混乱に終止符を打ったのが、第二の出来事だ。

アメリカ大統領、ジョージ・バラマの急死である。

公の報道はこうなっている。

某日深夜、ジョージ・バラマ大統領は、ホワイトハウス内のバスルームで倒れているのを、様子を見に来たバルモア夫人によって発見された。

死因は心臓発作。大統領は心臓に持病を抱えており、連日の激務により、最近では疲労を訴えることが多くなっていたという。

ただし、バルモア夫人の強い希望により、検屍の類は一切されず、大統領はその体を棺桶の中に横たえた後、翌日には本人の希望を楯に、家族だけの密葬が行われ、火葬によりこの世から消えた。

バルモア夫人はこの後すぐにアメリカを離れ、フランスのニースに隠棲した。

この際、その生活費の名目で中華帝国からかなりの金額を、極秘裏に受け取っていた事実もある。

中華帝国にとって助けとなる決定打を打ち出せなかった大統領に対する報復により暗殺されたと、まことしやかに囁かれる彼の死因が、本当に心臓麻痺による死亡だったのかは、永遠に闇の中だ。

そのバラマの後釜になったのが、副大統領のジェームズ・タイラーだ。

彼もまた、親中派の一人と目される一人であり、中華帝国からバラマの後継者として期待された人物だった。

二選を目指し、志半ばで倒れたバラマの後任として大統領選挙に出馬することを表明した彼だったが――

出馬表明の翌日、シカゴで暗殺された。

犯人は中国人によって仕事を失ったと主張するヒスパニック系の移民。

背後からサタデーナイトスペシャルの22口径3発を脳に受けた“タイラー候補”は、初演説ではなくその無惨な死体で翌日の朝刊の一面を飾った。

時間的に後継者を選択する余力を失った与党・民政党に、野党連邦党が送り出したニコラス・J・ベネット大統領候補を止めることは出来なかった。

実は、このベネットというギリシア移民の子孫を、中華帝国は理解しかねていた。

経済的にも中道的な発言を繰り返し、右派なのか左派なのか判然としない、日和見的な態度を繰り返すせいで、大統領候補でありながら、対するバラマに全く歯が立たないだろうと囁かれ続けた存在だ。

この男が大統領に就任したら？

その図式を、中華帝国は描くことが出来なかった。

むしろ、就任こそあり得ないと切って捨てる程度がふさわしい程度の認識しか持ち合わせていなかったともいう。

それが、中華帝国にとって最大の誤算であり、最大の悲劇の原因を生み出すことになる。

ベネットが対抗馬なしを理由に大統領に就任したのが、バクダッド陥落の日だ。

すでにサウジアラビアでは米軍とＥＵ軍が一触即発の事態に陥り、その背後では中華帝国軍が中東から逃げ出す準備を進めている。

この事態を収拾する手腕を、世界がベネットに期待していた。

国連を仲介として、早期終戦に向けた協議は、ＥＵ軍の本格的反抗の前から進められていた。

新大統領として、この会議で親中の立場で主導権を発揮して欲しいからこそ、中華帝国としては、自らベネットに協力を求めた。

就任の当日、中華帝国は駐米大使の偉をホワイトハウスに送り込み、大統領となったベネットとの接触を果たした。

先のバラマ同様の尊大な態度を崩さない偉に対し、ベネットは全く動じることなく、やんわりとした態度ですべてを受け流し、狐につままれたような顔をした偉をあっさり追い返した。

それでも偉は、自分の威圧でベネットをうち負かしたと本国に報告した。

――彼はバラマ以上に人形として有益でしょう。

ＣＩＡが諜報した偉の報告は、そんな感じでまとめられていた。
何をどうしたらそう思えるのか。
偉が本気でそう思っていたことは、後の関係者の証言からも明らかだ。

だが、偉は、それに全く気付いていない。
自らの地位と権力に酔いしれた男が、外交という海に浮かぶ国家を、数十億の民の未来を狂わせようとしていた。

インド洋にて

●“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は、“鈴谷（すずや）”を発艦後、イギリス領“エジプト州”の州都カイロに向けて針路を取った。
搭乗するのは、“伊吹”の生存者達。
そのうち、候補生達の半数以上が、“伊吹”戦没の恐怖から抜け出せず、帰国後の任官を辞退する意向を表明している。

――選別する手間が省けた。

生き残った教官達は、そう怒鳴っていたが、その肩を落とした様子を見る限り、かなり落胆しているのは確かだ。

「国境線まであと3分」
横を飛ぶ宗像騎から警告が入る。
漆黒の闇の中。
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の航行灯だけがはっきりと見える。

“鈴谷（すずや）”はカイロには入らない。
イギリスへ許可をとりつけたのは、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）だけ。
しかも、遭難者の帰国支援を要請するという、訳ありでだ。

そんなことは美奈代達にとってはどうでもいい。

日本に帰れる。

美奈代達にあるのは、それだけだ。

同じ候補生なのに、皆、日本に帰る事が出来る。
任官を拒む事も出来る。
それが、羨ましい。
同じ地獄を味わったはずだ。
彼等は乗っていた船が沈んだだけ。
彼等はそこから生きて帰っただけ。

それが、彼等の戦いだというなら――

私達は、妖魔とも戦った。
魔族軍とも戦った。
私達だって、命がけで戦ったはずだ！

何故、私達は帰ることが出来ないんだ？

任官拒否が認められる？

なら――私達は？

……

美奈代達は、誰も口に出さないが、内心は激しく波立っていた。
生還
任官拒否
４４期生を、これほど羨ましいと思ったことはなかった。

ただ、日本に帰って、任官拒否が出来る。

それが――言い様もなく羨ましかった。

美奈代達が、自由参加と言われた離艦式に誰も参加しなかったのは、その心境の現れだったのかも知れないし、二宮達が参加を強制せず、自由参加としたのも、それがわかっていたからだろう。
強制参加させられ、日本に帰ることが出来るなんて、４６期に騒がれたら、何をしでかしたか、美奈代は考えたくもない。

何より。

美奈代が参加しなかったのは、染谷の横にいる女の子と関わりたくなかったからだ。
女の子――フィアだ。
事情調査のため、日本へ移送する。
その際の護衛を染谷が命じられたのだ。
当然、フィアと染谷は一緒に行動することになる。

妹程度の感情しかない。

染谷はそう言うが、美奈代は、それに納得はしていない。
フィアは、はっきり染谷に好意を寄せている。
あれほどの美少女に言い寄られて、男がどれ程耐えられるか。
美奈代は自分が嫌になるくらい、冷静にその辺りを分析してしまう。

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の護衛に志願したのは、メサイアのコクピットに入っていれば、二人を見ずに済むという、自他に対する言い逃れの口実だ。

「“ウィスキー４”から“ツグミ”へ」
「こちら“ツグミ”」

「国境線が近い。我々はこの辺で離脱する。また迎えに来る」
「“ツグミ”より“ウィスキー４”。感謝する。帰還の際はよろしく頼む」
指定ポイントに達した宗像騎と美奈代騎は、速度を落とした。
目の前、１キロほど行けば国境線だ。
別に、本当に線が引かれているわけではない。
だが、遠ざかってくＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を見ると、そこに引かれているのは、４４期と自分達の決定的な境界――そんな気分になる。

「染谷はいいのか？」
「何が」
「愛してますとでも言っておけばよいものを」
「バカ」
美奈代は言った。
「人の甘い時間をぶっつぶしておいて、そのセリフか？」
「私はその場にいなかった。やったのは美晴達だろうが」
「ちっ」
「明後日にはアメリカ……１週間もしないうちに日本……か」
「帰りたいか？」
「泉は？」
「……帰りたい」
「帰ったら、何をしたい？」
「死ぬほど辛い盛岡冷麺を食べに行く」
「染谷という名前が出ないあたりが、お前の欠点だ」と、宗像は喉の奥で笑った。
「宗像は、どこの愛人のところへ行くつもりだ？」
「さぁな。……国境警備隊と接触するといろいろうるさいことになる。反転して帰艦するぞ」
「了解」

事件は、その日の夕方。
“鈴谷（すずや）”には緊急電で伝えられた。
「ノルマンディー地方だ」
壇上に立つ二宮の顔は、厳しい。
「他乗組員には、朝食後に美夜から伝えられる事だ。それまで他言無用だ」
二宮は、黒板に地図を張り付けた。

フランスの地図だと、美奈代にも見当がついた。

「イギリス海峡に臨むフランス北西部の地方で、大した産業はないが……」
しばらく、目をつむった後、二宮は吐き出すように言った。
「この地方で妖魔の出現が確認された」

美奈代は、自分が何を言われたのかわからなかった。
妖魔が……何だって？

「出現した妖魔の群は驚異的スピードで侵攻中。現状、６つの村が全滅。犠牲者は数千人で止まっている」
「……」
候補生達の顔は真っ青。
誰からも言葉はない。
「フランス軍が防衛線を展開している。幸いにして、最新鋭兵器が使えるから、妖魔達の侵攻はある程度抑えることは出来るだろう。フランス人の意地と根性に期待するしかない」

ホウッ
奇しくも候補生達の口から漏れた安堵のため息が、重なって聞こ

えた。

「つまり、自分達は何もしなくて良いということですか？」

都築のその問いかけに、

「そうだ」

二宮は短く頷いた。

「目の前で妖魔が暴れ、無辜（むこ）の人々がエサになっているのを、我々は見殺しにするといってもいい」

「そっ！そんなっ！」

「我々は、もっと洒落にならない命令を受けた。覚悟して聞いてくれ」

美奈代は、本気でイヤな予感がした。

絶対、これは生きて帰ることが出来ない。

そんな命令が下されるという、奇妙な確信が、美奈代にはあった。

「命令を伝える。“鈴谷（すずや）”は予定を変更し、インド経由にてジャワ海へ展開せよ」

「ジャワ……って、どこですか？」

発想が既にヨーロッパ周辺しかない美奈代も、ジャワカイという地名だと本気で思った。

都築の問いに、二宮は無言で世界地図に指示棒を当てた。

世界地図の下。

インド洋があって、その隣辺りの、海だった。

「ま、待ってください」

意味が分かった美晴が唖然、とした顔で訊ねた。

「インド洋は現在、中華帝国の縄張りですよ？」

「マラッカ海峡もそうだ」

二宮は答えた。

「我々は、目の前にいる人類の敵から反転し、人間同士で殺し合うことになる」

「司令部は何を考えているんですか！」
思わず怒鳴ったのは都築だ。
「俺達ゃ使いっぱしりですか！？」
「まぁ、そういう事になる」
「そんなあっさり言わないでくださいよ！」
「インド洋の大陸側沿岸部には現在、２個機動艦隊の存在が確認されている。連中のＳｕ－２７の作戦範囲からして、いつ空襲を喰らってもおかしくない。弾丸とミサイルの雨の中を突き抜け、我々は命じられた場所へと赴く。それだけだ」
「……なんてこった」

「都築じゃないが、本当になんてこった。だ」
それから既に１週間が経過していた。
“鈴谷（すずや）”はインド洋上空。
かなり低高度で航行を続けている。
昼飯の席、食堂で一緒になった二宮は、ハンバーグにかぶりつきながら言った。
その驚くべき健啖ぶりには、毎度感心させられる。
「フランスの事態はようやく沈静化の動きを見せ始めた」
二宮は言った。
「メサイア部隊が、かなりの善戦を見せた。さすがにフランスの銃士隊は強い」
「なによりです」
美奈代は、ニンジンをフォークで突きながら頷いた。
甘味が貴重な艦内生活。
甘く煮付けたニンジンは、貴重な甘味にして、美奈代の隠れた楽しみだ。
「ん？いらないならもらうぞ」

「へっ？」
返事より先に、ひょいと伸びた二宮のフォークが、手の付けられていない美奈代のハンバーグを突き刺した。
「あ……あの」
「一体、何が起きたのかは興味深いな」
「は……はぁ」
上官に文句を言うことも出来ず、美奈代は小さく切ったニンジンを口に運んだ。
席についてまだ数分と経っていない。
「インド方面は、インド軍と英国軍が死に物狂いで防戦に務めているが、ニューデリーは昨日陥落した。
インドシナからインドネシア方面は完全に中華帝国の勢力下。
オーストラリアがどう動くか――すべてはそこにかかっている」
「というと？」
「泉はオーストラリアに行ったことはあるか？」
「いえ？」
美奈代は首を横に振った。
「自分はパスポートさえ持っていません」
「行かない方が良い」
二宮は頷いた。
「あからさまな対日民族差別が待っているぞ？人種差別に根ざした差別意識を持つ白人達と、民族意識に根ざした中華系双方のな」
「……あれ？」
美奈代は言われたことに首を傾げた。
「オーストラリアって、英国連邦ですよね？」
「名目上はな」
二宮は何故か苦笑した。
「あの国は、英国連邦の中で、最も中華帝国の経済的“侵攻”を受け続けた国だ。
バカのように中華系移民を受け入れた挙げ句が、経済も政治も乗

っ取られ、国内では英語より中国語の方が遙に通じる。
町中歩けば、白人を捜すのに苦労する程だし、都市部にあるのは薄汚い中華街だけ。
もう、ああなれば、実質的に中華帝国と呼んでも差し支えない」
「……はぁ」
「まあ、あの国がどうなろうが、日本にはそれ程の影響はない。地下資源から牛や羊まで、対日禁輸が元で日本との交易は観光以外、ほとんどないからな」
「対日禁輸？」
「新聞を読めと教えたはずだな？」
「……すみません」
「オーストラリアは、中華系に押さえられている。日本に売るなら、中華帝国に売るべきだとか」
「差別じゃないですか」
「差別だよ。オーストラリアの学校じゃ、日本人は人間じゃないと教えているそうだ。
国策として、はっきり教科書にも書かれている。
曰く、日本人とクジラはどっちが生命体として価値がありますか？泉なら、なんと答える？」
「そりゃ……」
唐突な質問に、美奈代は面食らった様子で答えた。
「日本人でしょう？我々は人間です」
「答えはクジラだ」
「……は？」
「日本人はクジラより格下の存在。
生命体として格上の存在を食べる日本人は、生命体として異常だ。
そんな異常生命体が人間であるはずがない。
そんな所か」
「価値観云々より……なんですかそれは」
「去年、日本人の観光客が殺害された事件があった。食事の席で済

まないが、知っておけ」
　二宮はナイフを一度置いた。
「“日本人か？”そう確認した後、ツアー客めがけて散弾銃をぶっ放した。死者は確か３０人程。バス一台分のツアー客全員が殺されるか、重傷を負った。中には幼児も多数含まれていた」
「……」
「重傷者は、搬送された病院で死亡――――死因は？」
「う、撃たれたから？」
「日本人と知った医者が施術を拒んだからさ」
「はぁっ？」
「私は人間専門の医者だ。そういう理由だ」
「……」
「逮捕された犯人と、医師は共に裁判にかけられた。
　そして、二人は同じ事を言った。
“あいつら日本人は人間ではない。人間でない存在を殺しても、殺人になるのか？”
　陪審員は全員が無罪判決――――二人は一躍国家的英雄に祭り上げられた。
　それでも、外交問題を恐れる今の政権は、抗議すらしなかった」
「何故」
　美奈代は怒りを覚えて訊ねた。
「国民が殺されたんですよ？しかも国家ぐるみの差別のせいで」
「もめ事が大嫌いなのよ。あのクソ共」
「……敵と判断した方が正しい気がしますね」
「同感だ。あいつらが、英国につくか、中華につくかが問題なのよね。中立なら、インド洋からアラフラ海を経由して太平洋に出られるんだけど」
「横から殴られますよ」
「……となれば」
　二宮は窓の外を見た。

どんよりとした、鉛色の空が未来を暗示しているような、そんな気がした。
「マラッカの強行突破しかない」
「選択肢が共通しています」
美奈代は言った。
「我々の全滅。“鈴谷（すずや）”の沈没で」
「……そう思うか？」
「はい」
美奈代は頷くしかない。
「死ぬからつきあえと言われているとしか思えません」
「嫌か？」
「……」
美奈代は、一瞬、躊躇した後に答えた。
「私は軍人の端くれです。死ねと命じられれば死にますが」
「ん？」
「意義のある死を与えてくださるよう、お願いします」
「自らの死に、意味があるかは自分次第。命令は、そのきっかけに過ぎない――違うか？」
「……教官がそう仰るなら、そうと思います」
「話を戻す」
二宮は再び食事を始めた。
「お前が平野艦長の立場なら、どうする？マラッカを通るのか、別ルートを通るか」
「目的地は？」
「ボルネオだ」
「……インドネシアの上でしたね。地図上では」
「そうだ。現状、中華帝国の勢力下だ」
「奪還作戦ですか？」
「ああ。日本本土から部隊を派遣すると、中華帝国を刺激する恐れが高いという政府判断がある反面、米国からの支援要請にも応えな

ければならない。結果として、トラックから戦艦部隊。要望の強いメサイア部隊として、我々に白羽の矢が立った」
「……なんてこと」
「なんてこと。その通りだ。悪夢だよ」
「時間的には？」
「かなり厳しいな。下手に迂回すれば、現地で米軍に合流して体制を整える余裕を失い、作戦時のリスクが増える。かといって、マラッカをのこのこ通れば、鴨がネギどころか、鍋にコンロまで背負っていくようなものだ」
「鉄火場にガソリン被って行くようなモノ……か」
「平野艦長はそんな状況で、“鈴谷（すずや）”を、刃の上でダンスさせようとしている」
「……」
美奈代は、ため息一つ、窓の外を見た。
「……ん？」
「……どうした？」
「……いえ」
美奈代は、そう答えながらも、窓から視線を外さない。
「天気が悪いなって……」
「サイクロンの季節だからな」
「……仮面ライダーの？」
「サイクロン号じゃない……お前、今、いくつだ本当に」
「二十歳前です」
「そっちの方がムカつくわね……マイフェアレディと聞いて、日産のZしか連想できなかったと聞いたが？」
「……聞かないで下さい」
「染谷も苦労するだろうな」
「……どうせ」
美奈代はふてくされた様子でそっぽを向いた。
「あの……何でしたっけ」

美奈代は、しばらく考えた後、ぼやくように言った。
「あの……キャロライン洋子みたいな子」
「おま……だから、いくつだ」
「二十歳前ですって」
「フィアだ。フィア・ツヴォルフ」
「聞くだけで殺意を覚えさせるなんて、スゴい名前ですね」
「帰国してからでいい。耳鼻科に行け。それで？」
「はっ？」
「脱線しまくりだが、何か案はあるか？」
「……ああ」
美奈代は頷いた。
「忘れかけてましたけど……ちょっと失礼します」
美奈代は、もう一度、窓の外を見ると、席を立った。
「？」
怪訝そうにその動きを見守る二宮の前で、美奈代が歩いていったのは、新聞記事などが張り付けられている掲示板。
美奈代は、そこから一枚の紙を剥がすと、席に戻ってきた。
「失礼しました」
「掲示板のものを勝手にはがすな」
「すぐに戻しますよ――これです」
美奈代がテーブルに広げたのは、天気予報の記事。
航行科の乗組員が作る艦内新聞の一つだ。
「天気がどうした？」
「サイクロン……要するに、台風が発生したんですよね？すぐ近くで」
「ええ。美夜――平野艦長は、“鈴谷（すずや）”を台風を避けるルートに乗せている」
「サイクロンは観測史上でも珍しい程、大きいって記事に書いてあったんで覚えていたんです」
「そうね。航行科長が言っていたけど、発生時点で小型台風を凌ぐ

っていうから、かなりじゃないの？」
「針路はインド洋からマラッカ方面へ」
「正確にはマレー半島を突っ切る動き」
二宮は記事を読みながら生返事をした。
「マラッカ方面の防空網は、台風で目つぶしが出来るんじゃないかって、平野艦長は期待している」
「……私の意見なんて必要ないじゃないですか」
「何が？」
「サイクロンを目つぶしにすれば防空網をかわせる。そこまで考えていらっしゃるなら、私の意見は不要だと思います」
「？」
二宮は訊ねた。
「ちょっと待って。サイクロンは確かにマレー半島を通過する。でも、私達はマラッカ海峡を通過する。ルートが違うでしょ？」
「……」
きょとん。とした顔になった美奈代は、それで自分と二宮の意見の違いを自覚した。
「……あの」
美奈代は怪訝そうに言った。
「どうして、マラッカ海峡を通過しなくちゃいけないんですか？」
「どうしてって。わかる？海峡通らなければ――――あっ」
「そう。“鈴谷（すずや）”は、空を飛んでいるんですよ？」
「……で？」
「サイクロンの中に入るんです。サイクロンの激しい風雨が中華帝国の防空網を黙らせてくれます。我々の脅威は、その雨風だけ。操舵の腕前は、ハリケーンに負けるほどヤワじゃないでしょう？」
美奈代は、サイクロンの予想針路を指でなぞった。
「防空網がサイクロンで沈黙している間に、我々はマレー半島を悠々と通過。一気に南シナ海へ進行出来る」

「……成る程？」
二宮は楽しそうに頷いた。
「理論上は被害はなく、しかも直進する以上は最短コースだな」
「そうなります。南シナ海上の中華帝国の防空網という新しい脅威はありますが」
「その時はその時だ」
二宮は言った。
「インドシナ情勢はまだ混沌としている。警戒意識は内陸にこそ向いているはずだ。警戒機のレーダー監視は、メサイアの電波妨害で潰せばいい」
「……はぁ」
「よし。これは平野艦長に進言しよう。採用されたら、礼は後でする」
「頼みます」
「うん」
二宮は席を立った。
「ただ、もう少し」
「はい？」
「もう少し――奇抜な意見が出るかと期待したのだが……意外と平凡な所に落ちたな」
「は？あの……意味がわかりませんが」
「そうか？」
二宮は楽しそうに笑った。
その顔を見た美奈代は、内心で二宮が何を考えているのかを悟った。
「まさかと思いますが」
「……何だ？」
「すでに平野艦長は、台風を利用した敵陣突破を想定されていたのでは」
「どうしてそう思う？」

「……リスクが高い作戦です。作戦を立案し、万一、失敗した場合、無謀な作戦を強制されたと、立案責任が問われ」
そこまで言いかけた美奈代は、ハッとなった。
「まさか！」
「ん？」
その時の二宮は、まるで、悪戯がバレるのを心待ちにする子供のようにさえ、美奈代には見えた。
「立案者が誰か別な者ならば、責任を他人になすりつけることが出来る――それで！」
「悪く思うな？だが」
クックッ……。
二宮は喉で笑いながら言った。
「お前は本当に、楽しいヤツだ」
「ず……ズルイ！」
「こういうのが、大人のやり方だ。文句言われたくなければ、神様にでも祈っていてくれ。成功したら、メシ位はおごってやるわよ」

ボルネオ島攻略戦　第一話

交通の要衝であるマラッカ海峡。
ここを確保することは、世界の海運、そして物流を制すると言っても過言ではない。
日本と中東を結ぶ石油の大動脈でもあるマラッカ海峡は現在、中華帝国軍によって制圧され、通過する船舶はそれまでの１０倍以上の通行税を支払うことを余儀なくされている。

これに対して、米国は東南アジアの安定に対する懸念を表明しても、すぐには軍事行動には出なかった。
バラマ大統領が、テコでも軍事行動を認めようとしなかったのだ。
これに対して、米国と軍事同盟関係にあった各国からは激しい突き上げがあり、米国世論もこれに荷担。次の議会選挙を間近に控えた議会議員が、票目的で世論を煽り立てた。

結果として、議会の力が軍を動かすこととなった。

中華帝国との全面戦争は望まないにしても、東南アジアを彼等にタダでくれてやるつもりは、米国議会にはなかったのだ。

反攻を命じられた米軍の第一目標として白羽の矢が立ったのは、ボルネオ島。

熱帯雨林が生い茂り、象からニシキヘビまで生息する豊かな自然に恵まれたこの一帯は、交通の要衝、マラッカ海峡と共に地下資源の宝庫としても知られている。
それだけに中華帝国軍からは大量の部隊が送り込まれている。
これに対して、米軍は、その資源を島ごと奪還し、インドシナ半

島方面へ侵攻する際には橋頭堡とすべく、フィリピン方面から部隊を送り込んだ。
その部隊には、トラック島に配備されていた日本海軍戦闘部隊も含まれている。

空母赤城と葛城主力の空母打撃部隊、戦艦金剛級４隻で編成される砲撃打撃部隊。

隣国がすでに敵国という日本にとって、これほどの戦力を派遣すること自体が、一種の賭けに近い。
しかし、米軍が戦力として期待しているのは、実は海軍戦力ではない。
期待されるのは、メサイア部隊。
つまり、美奈代達だ。

結局。
美奈代の祈りが通じたのか。
サイクロンの渦の中に身を潜めた“鈴谷（すずや）”は、ＦＧＦ（フル・グラビティー・フィールド）の殻の中に籠もり、風雨の被害をさけつつ、マレー半島を悠々と突破。
南シナ海の半ばで消滅したサイクロンから離脱。
夜陰に紛れて米軍と合流するという奇跡を果たした。

サイクロンが過ぎ去った後の、どこまでの青い抜けるような空を、真綿が浮かんでいるような純白の雲が流れていく。
エメラルドブルーの海面が、陽光を優しく照らし出す。
そんな中――――。

キュィィィッ――――ズンッ！
キュィィィッ――――ズズンッ

背筋が寒くなるような音の後、腹に響き、鼓膜がどうにかなりそうな音が響き渡る。

美奈代の目の前。

“鈴谷（すずや）”の開かれたメサイア発艦用ハッチの向こう側。

上陸地点、コード“ジュノー”海岸は、この音と共に黒い悪魔のような爆発が連続して発生している。

発生源は、４０センチ砲８門を搭載した戦艦――――正確には戦闘砲撃支援艦「金剛級」４隻の艦砲だ。

「全体としてはすでに上陸に成功はある」

「主力Ｃ中隊は敵と接触、剣火（けんか）を合わせつつあり」

「Ｂ中隊はどうした！」

「Ａ中隊前進！他の部隊に後れをとるなっ！」

通信機には英語で様々な会話がダイレクトに飛び込んでくる。

爆発音。

様々な兵器の動作音

殺し合う人間の生の声。

立ち会った世界に悪酔いしそうになった美奈代は、軽く頭を左右に振った。

呼吸を整えようとするが、どうにも息が荒くなる。

水が欲しいが、どうしようもない。

心臓の鼓動が爆発しそうなくらい高まっている。

「小隊各騎」

突然、通信機に入った二宮の声に、美奈代は背筋がビクッとなった。

「はっ！」
「これより発艦を開始する」
――来た！
美奈代は死刑判決を受けた囚人の気持ちがわかった気がした。
死ねと言われるのは、こんな感覚なんだろう。
「状況は見ての通りだ」
――冗談だろう。
美奈代は首をすくめた。
何しろ、今や海岸線は艦砲支援によって、黒い壁が一面に立ちはだかっているのだ。
あそこに突っ込めというのか？
冗談じゃない。
「二宮より泉」
二宮は、発進直前になって、突然美奈代を名指しで呼んだ。
「こちら泉」
応答しつつ、美奈代ははっきりと二宮からロクなことはいわれないだろうと予測した。
いつものことだ。
「我々の上陸地点は“ジュノー”海岸のポイント“フォックスロット”だ。お前は私の後ろについてこい。いいか？離れるな？」
「り……了解」
後ろについてこい。
どうでもいいことに聞こえるが、美奈代ははっきりと、自分がその言葉にカチンと来たことを自覚した。
――お前は不安だから、私の後ろについてこい。
そう、言われた気がしたからだ。
見返してやる。

そう、心に誓う美奈代の目の前で、二宮騎が発艦しようとしていた。

一方、ここで米軍を出迎えるのは、中華帝国第三方面軍第８２機甲師団だ。

その師団長である朱少将は、米軍上陸地点の様子をモニター越しに眺めていた。

砲撃の激しい振動でカメラが揺すぶられ、何が映っているか判りづらいが、もう慣れた。

この様子では、前線の兵士達は塹壕に籠もるしかないだろうなと、朱少将は考えた。

ただ、無駄な行動は、砲弾の破片や爆発の衝撃波で損害を増やすだけだ。

今は、それでいい。

「日本軍の砲艦が出てきましたな」

参謀がコーヒーの入ったカップを手渡ししてきた。

「政治屋共はともかく、さすがに軍人は骨があるな。同業者として喜ぶべきか嘆くべきか」

「対艦攻撃装備はまだ使うべきとは思っていません。現在展開中の部隊は、橋頭堡を築くための斬り込み隊にすぎません。本隊上陸時の上陸舟艇用に備えておくべきかと」

「斬り込み隊相手に本気になっていいかな？」

「勿論」

参謀は肩をすくめた。

「切り込み隊の大出血で攻略を諦めてくれればおめでとうです。何より、無傷で敵を内地に誘い込めば、消耗するのは我が軍の方ですが、それにしても」

参謀は憮然として言った。
「４０センチ砲３２門の報復は勘弁して欲しいです」
「全くだ」
朱少将は、小さく笑って頷くと、モニターを切り替えた。
別なカメラからの映像が入る。
前のカメラより５００メートル後方の陣地からの映像だ。
画面一杯に、真っ黒い闇が広がっている。
「一体……？」
朱少将は首を傾げざるを得ない。
「日本軍は、砲弾に何を詰め込んだんだ？」
爆発するたびに恐ろしく濃い暗闇が立ちこめる。
報告によると、目視、レーダー、赤外線……とにかく観測兵器の全てが役に立たないという。
「不明ですが」
参謀は言った。
「はっきりしたことは、あの“闇”の向こうでは、米軍が上陸しつつあることです」
「参謀として」
朱少将は頷いた。
「あと、どれくらいで米軍は前進を開始すると思う？」
「そうですな」
参謀は少し考えた。
「上陸開始からして……時間的な転換点は」
参謀は腕時計をチラと見て、
「１０分です」
そう、答えた。
「それより早ければ無謀、遅ければ無能です」
参謀の言うとおりになった。

きっかり１０分後。
“闇”の向こうで信号弾が上がった。
色つきの煙幕と閃光で命令を伝えるのだが、それは“闇”をはるかに越えた高さで炸裂したため、中華帝国側陣地からも丸見えだった。
「敵に動き！」
前線指揮官の一人は、塹壕から双眼鏡で信号弾を確認した。
撤退信号なはずはない。
ここで打ち上げられる信号は一つだけだ。
「各員備えろっ！メサイアが来るぞ！」

「さぁいくぜっ！」
米軍グレイファントム部隊の上陸時点での任務は、橋頭堡の確保だ。
上陸地点の前に出て、後続の機甲部隊や歩兵達の上陸ポイントへの敵メサイアや航空機攻撃の阻止役とも言う。

その彼らが前に繰り出す。

主力部隊――正確には上陸部隊（えらいさんたち）司令部が、やっと強襲揚陸艦から追い出され、重い尻を海岸に乗り上げ、上陸が一段落したこと。
そして、艦砲射撃支援が最終弾着を迎えたこと。
つまり、もうここに彼らが待機する理由はなくなった。
様々な要因が、グレイファントム達を待機命令から解き放ち、前へと駆り立てた。

彼らは漆黒の闇に向かって突撃していく。

「きゃぁっ！」

「なっ！？」

通信機に、そんな声を耳にしたクルツ中尉は、不意に、斜め前方を移動していたイーサン中尉騎の右腕が吹き飛ぶ光景に出くわした。

腕が後方に引きちぎられたように吹き飛んだかとおもうと、今度は左足の膝装甲付近に爆発が走り、イーサン騎はバランスを崩して横転した。

「イーサンっ！」

「く、くそっ！」

イーサンは何とか立ち上がろうとするが、脚を破壊された以上、もがくのが精一杯だ。

「大丈夫か！」

「俺のことは放っておけ！」

イーサンは通信機越しに野太い声で吠えた。

「貴様こそ前に出ろっ！」

「し、しかしっ！」

他の僚騎が、彼らの横をすり抜けて闇の中へと飛び込んでいく。

クルツはイーサン騎を一瞥すると、

「後で逢おうぜ！」

そう言って、騎体を闇へと向けた。

闇の向こうにいる敵を倒すために。

イーサン騎の仇を討つために。

だが――――

敵は闇の中から襲いかかってきた。

オレンジ色に輝く物体がクルツ騎を――――いや、グレイファントム達に一斉に襲いかかったのはその時だった。

「なっ！？」

漆黒の闇からの敵は、クルツ騎の左腕を根本から引きちぎった。
「砲撃っ！？」
まずいっ！
クルツは舌打ちした。
左腕をやられた以上、シールドがない！
楯を腕ごと失い、バランスまでも失いかけた騎を必死で操作するクルツ中尉の目の前。
スクリーン一杯に、オレンジ色の光が迫りつつあった。

高価な電子兵装の塊であるグレイファントムの上半身がまともに吹き飛ばされた。
「誰の騎だ！」
闇の中へと入る直前、その光景をちらと見た騎士が怒鳴る。
「クルツ騎！」
「くそ、あの野郎！」
「ヴィット大尉！」
MC（メサイアコントローラー）が怒鳴る。
「シールドを構えてくださいっ！闇の向こうからの砲撃が――――」
ガンッ！！
ヴィット大尉はその衝撃で、首の骨が折れたと思った。
それほど激しい振動が彼を襲い、彼は意識を失った。
頭部MCL（メサイア・コントローラー・ルーム）付近に直撃弾を受け、MCはMCL（メサイアコントローラー・ルーム）ごと爆死。騎体は大破したことを、彼はこの時点では知る術すらなかった。

シールドに激しい衝撃を幾度も感じながら、闇を抜けたグレイファントム達の運命もまた、過酷だった。
闇を抜けた先。
そこは本来あるべき南方特有の強い日射しに照らされた光の世界。
ボコボコに変形し、使い物にならなくなりつつあるシールドを構えたグレイファントムの騎士達は、突然の浮遊感に襲われた。

「なっ！？」
もんどり打ってグレイファントムが地面を転がる。
それも一騎や二騎ではない。
何騎ものグレイファントムが同じような目に遭わされた。
砲撃地点の前方少し前にあったメサイアサイズの塹壕に落ちたのだ。
「くそっ！」
落下の衝撃で故障した各部からの警報が鳴るコクピットで、マックス大尉が、やり場のない怒りを爆発させていた。
彼の騎は大の字になって塹壕の下に転がっていた。
こんな目に遭わせてくれた敵以上に、こんな無様な醜態をさらしている自分自身が許せない。
「畜生のコンコンチキのクソッタレのマザーファッカー！」
落下のショックはシートが吸収してくれたが、怒りばかりはどうしようもない。

ガンッ！

激しい音と共に、何かが落下してきた。

どこのマヌケが――

自分のことを棚に上げ、音がした方角を向いたマックスの視界に入ってきたのは、垂直に落下して砲塔がへしゃげた戦車だ。
しかも一両や二両ではない。
軽く２０メートル近くの落下だ。いくら戦車でも無事では済まない。
特に、中の戦車兵達は――

「畜生めがっ！」

マックスは騎体を無理矢理操作して立ち上げ、速射砲を準備した。
まだ撃てる。
「マーク、セドリック、返事をしろっ！まだ図々しく生きているヤツがいたら、誰でもいいっ！ラードック、モーリスっ！応答しろっ！」
「カークスですっ！」
「イーリッド、生きてますっ！」
通信機に生き残った騎士達の声が入る。
「よしっ！」
マックスは心の底から満足したという顔で頷いた。
「集まれっ！借りを返すぞっ！」
「了解っ！」

艦砲射撃によって産み出された闇が薄らぎ、後続のグレイファントム達越しに海が見えてきた。
「林っ！下がれっ！」
その声に呼応するように、１５０ミリ速射砲を持った“赤兎（せきと）”が塹壕に滑り込んだ。
ズンズンズンッ！
その“赤兎（せきと）”に襲いかかるように、無数の砲弾が雨霰と塹壕の付近に着弾。激しい爆発の連鎖を引き起こす。
「後方でＭＬＲＳが発砲！」
「よしっ！」
目視出来る限り、ほぼ全てのグレイファントムが塹壕の中に飛び込みつつある。
戦車部隊は塹壕を避け、その間近に近づくことさえ出来ないらしい。
「これほど上手くいくとはな」
“赤兎（せきと）”部隊を率いる李少佐はほくそ笑んだ。

子供時代、苦労して仕掛けたイタズラが成功した時を、ふと思い出した。

李少佐の見る限り、グレイファントム達の射撃精度はそう高くない。

グレイファントムは、ＭＬ（マジックレーザー）装置の配置の問題から、塹壕からＭＬ（マジックレーザー）を発射出来ず、速射砲に頼っているせいだ。

元来が砲弾をばらまくために作られた速射砲だから、命中精度を求めるのもどうかとは思うが……。

対する中華帝国軍は、単発とはいえ、命中率の高い狙撃砲を多数に配備しているし、センサーの配置から、ＭＬ（マジックレーザー）も余裕で撃てる。

さらに、メサイアではないが、機動性の高いジープにガドリング砲を搭載した自動車部隊が頑張っている。

口径は２０ミリと、装甲目標相手には小さいが、それでも速射性の高い機関砲が歩兵達と共に必死に撃ちまくっている。

メサイアのセンサーにでも当たればこれでも十分アウトだ。

おかげで、グレイファントム達は、塹壕から頭を上げることさえ出来ない。

――頃合いだ。

李少佐は思った。

おい米兵達よ。

その塹壕を掘ったのは俺達だ。

俺達がその塹壕を放棄したと思っているのか？

それとも、お前達にくれてやるために掘った？

ありえないね！

さぁ――教えてやる。

そいつはな？

“赤兎（せきと）”達の後方。
小高い丘に小さく目立たないように土嚢を積んだだけの陣地に陣取っていた中華帝国の士官が後方に控えた兵士に手で合図した。
兵士の手には、ポケットサイズのウィスキーのビンによく似た装置が握られている。
キャップの上に取り付けられたTの字のレバーを、兵士が捻った。

すると――

敵の砲撃が緩んだ。
「さぁいくぞっ！」
マックスは野太い声で怒鳴った。
その声を合図にしたかのように、グレイファントム達が一斉に塹壕から飛び出そうとした、まさにその瞬間――

ドンッ！

美奈代は、その光景を目の当たりにした。
「なっ！？」
光の柱が地面に走った。
そう思った次の瞬間、この世の物とは思えない程の爆発音が光をかき消し、地面を揺すぶるほどの爆発が発生した。
「何が！？」
「――――やられた」
二宮は唸るような声に、美奈代は思わず訊ねた。
「な、何が起きたんですか！？」
「中華め……塹壕に、爆薬をしかけていたんだ」
「爆薬？」

「予め爆薬を仕掛けた塹壕を用意しておく。敵をそこに誘い込んで、頃合いを見て爆破する」

塹壕だった跡からは朦々とした黒煙が立ち上る。

「爆発の規模と特徴から見て、1トン爆弾クラスにハイパーナパームのカクテル攻撃でしょう」

牧野中尉が言った。

「狭い中を駆け回った爆発エネルギーとナパーム……無事では済みません」

「グレイファントムの反応は？」

「消えました」

「これで、戦力の半分以上を喪失――」

二宮騎のMC（メサイアコントローラー）、唯は悲鳴に近い声をあげた。

「高熱源体複数接近！」

「何だ！？」

「空中で爆発――クラスター砲弾っ！？」

上陸部隊はもう死に体だった。

グレイファントム部隊を喪失。

他部隊も、子爆弾を無数にばらまくクラスター砲弾の連続した飛来を前に、軽装甲以下の車両にも乗れずにいた歩兵達は逃れる術さえないままに挽肉にされた。

生き残った戦車達でさえ、メサイア達の放つ砲撃の前には単なる的でしかなかった。

美奈代達が“鈴谷（すずや）”に撤退する中、塹壕の淵に立つ“赤兎（せきと）”達が、塹壕の中でもがくグレイファントム達に速射砲を乱射する光景が開始された。

上陸部隊司令部はすでに全滅。
その機能は揚陸艦司令部に委譲。
揚陸艦司令部は、即座に撤退を命令した。

結局、美奈代達はこの日、ボルネオ島の土を踏むことはなかった。

米軍上陸部隊第一波の全滅はこうして現実のものとなったのである。

「ぼさっとしているヒマはないぞ」
“鈴谷（すずや）”の飛行甲板に着艦しただけで、騎体から教え子達に降りることさえ許さなかった二宮は言った。
「で、ですけど……」
さつきは恐る恐るという口調で言った。
「な、何千人と死んでるんですよ?」
「被害集計はまだだが、軽く見積もって三千という所か」
「三千って……」
さつきは目を丸くした。
「ウチの村の人口より多いじゃないですか！」
「だからどうした?」
「ど……どうしたって言われても」
「三週間戦争では、一度の戦いで万の単位で戦死者が出るのが相場だった」
「……」

「米軍も、三千人の兵隊殺されて黙ってるはずがない。斬り込み隊はやられたが、本隊がその仇を討つ」
「うっ」
「“伊吹”一隻で何人死んで、我々がどう動いたか考えろ」
「攻撃は、いつです？」
「金剛級の弾薬補給が終了してからだから……おそらくはあと6時間後だ」

「急げっ！」
海岸周辺は、中華帝国兵が汗だくになって動き回っていた。
上空を友軍の戦闘機が警戒に出ている。
たった1機にすぎないが、それでもいるといないとでは大違いだ。
空から襲われたらシャレにもならない。
「地雷は二重に埋めろっ！」
「そこっ！対戦車地雷はもう少し間隔をあけるんだ！」
砂浜をシャベルで掘る兵士達に指揮官は矢継ぎ早に命令を下す。
その背後、あのメサイア用塹壕の周囲では、あらたな爆弾の埋設や、グレイファントム達の処理が続いている。

パンッ
パンッ

メサイアや重機の音に混じって、乾いた音が響く。
歩兵隊第二班指揮官の一人、治軍曹は、その音に顔をしかめた。
砲撃で開いた大穴の辺りだ。
「よう治」
休憩に出ていた第三班指揮官の悟軍曹がズボンのベルトを直しながら意気揚々と近づいてきた。
恐ろしくすっきりとした顔をしていた。

「交代は３０分後だったな」
「……」
悟軍曹が何をしてきたか知っている治軍曹は、無言で部下を見張っているフリをした。
「何だよ」
ポンッ
悟軍曹は、楽しげに治軍曹の肩を叩いた。
「米兵の女も悪くなかったぜ？」
「……お前」
「おいおい。そんな怖い顔すんなよ――なんでも、初物だったらしいぜ？米国の女って、９歳位で体売ってるって聞いてたけどな」
「……」
「しょうがねぇだろ？メサイア一気に仕留めた対戦車攻撃班が一番手柄だ。捕虜の女一番にヤれたって。あー畜生っ、俺が３０人目だったおかげで、女の反応悪い悪い」
「捕虜虐待って言葉、知ってるか？」
「オトコの方は皆殺しだぜ？」
悟軍曹は驚いた顔をした。
「女も、始末が始まっている。早くしろよ？残ってるのはそう多くない。我慢出来ずに、メサイアから死体引き出してヤってるヤツもいる……この気温だ。腐るの早いから気を付けろ？」
治軍曹は、そう言い残して部隊に戻る悟軍曹の背中に毒づいた。
「地獄に堕ちろ――この馬鹿者が」

正直、朱少将達は捕虜の処遇に構っている余裕は全くなかった。
憲兵隊が処理してくれるだろう程度にしか考えていなかった。
よもや、憲兵達が金をとって、捕虜になった女性を兵士達に強姦させることで、私腹を肥やしているとは全く予想さえしていなかった。

前線各地で無数に発生した事態ではある。
耐えられず、舌を噛みきったり、抵抗してその場で殺された女性捕虜の正確な数は、戦後いつまでたっても、いや、永久にわからないままだろう。

第一、朱少将にとって、問題は次に来るだろう米軍上陸部隊に対する備えをいかに構築するかだ。

すでにこちらの手の内は一度、明かしている。
いくら米兵でも、二度も三度も引っかかるほど愚かではないだろう。
効率的に敵を殺す方法を考えなければならない。
「敵のメサイアの数はどの程度だ？」
「スパイの情報では、斬り込み隊の2倍です」
参謀は答えた。
「斬り込み隊に戦力を集中し、メサイア隊だけで戦局を決めるのが米兵の腹づもりでしたが」
「我々が、それを覆したというわけか」
クックックッ……朱少将は楽しげに頷いた。
「よろしい。久々に楽しい気分だ」
「ただし、メサイアの戦力差は、それでようやく均衡がとれたにすぎません」
「――――そういうことになるか」
「まぁ」
参謀は目をつむって頷いた。
「手は打ちました。後は――――」
「そうだな」

メサイア隊による上陸作戦が開始されたのは、斬り込み隊の全滅から約7時間後。

グレイファントム達が、海面をホバー移動して突撃する。

海岸線には敵の姿はない。

グレイファントム達は海岸に上陸に成功、一気に内陸を目指す。

沖合では、上陸部隊本隊がようやく上陸用舟艇を発進させつつあった。

メサイア隊が、艦砲支援の元、上陸部隊の揚陸をのんきに待ち続けていたことが、敵に反撃の余裕を与えたというのが、米軍司令部の判断だ。

だからこそ、今回、メサイア隊は一気に敵陣地に攻め込ませ、その敵の戦力をメサイア隊に集中させる。その間に上陸部隊は揚陸を完了させる手はずになっている。

実際、グレイファントム12騎で構成される“ゴースト・ライダー”隊は、海岸からあの悪夢の塹壕を一気に飛び越え、“赤兎(せきと)”達が待ちかまえる塹壕への斬り込んだ。

塹壕同士の距離は約1キロ。

塹壕に籠もり、速射砲や狙撃砲を構える“赤兎(せきと)”達からの反撃はない。

“ゴースト・ライダー”隊の誰もが自分達の勝利を確信した。

グレイファントム達が半ばまで来た時だ。

ズンッ！

激しい爆発音がして、ホバー移動していたグレイファントムが2、3騎、脚部を吹き飛ばされ、ホバー移動のスピードのまま、大地を

激しく転がった。
それが合図だったように、“赤兎（せきと）”達から速射砲や狙撃砲、そしてＭＬ（マジックレーザー）による攻撃が開始された。
右へ左へとホバー移動で移動するが、それが逆に彼らの寿命を縮めることになった。
そのランダムな動きは、地面に仕掛けられていた対メサイア用地雷への接触の可能性を高めるだけだ。
足を地雷で吹き飛ばされ、大地に転がったところのもう一発で胴体に風穴を開けられ、そこに火砲を叩き込まれる騎が続出。
“赤兎（せきと）”達の塹壕へと無傷でたどり着けたグレイファントム達は、一騎もいなかった。

「ど、どうするんです！」
その光景を目の当たりにしたのは、“ゴースト・ライダー”隊の後続に命じられた部隊。つまり、美奈代達だ。
右足が吹き飛ばされ、何とか動こうと藻掻くグレイファントムが、集中砲火を浴びて目の前で沈黙した。
「このままじゃ！」
「全騎っ！」
パニック寸前の教え子の声を遮るように、二宮ば怒鳴った。
「おとなしくしてろっ！艦砲が来るぞっ！」

ギュィィッ！
ギュィィィッ！

その背筋が寒くなるような音の後、何かが雨のように目の前に降り注いだかと思うと、連続した爆発が辺り一面で発生した。

「――――時雨弾」

美晴のポツリとした言葉が、通信機に入った。
「時雨弾？」
「海軍が開発した集束砲弾だ」
二宮は怒りを込めた声で言った。
「泉――座学で教えたはずだぞ？」
「……え？」
「いつもいつも座学で寝ているからだっ！」
「そういうことじゃなくて！」
美奈代は慌てて怒鳴った。
「目の前、わかってますか！？」
「――ちっ、泉、後で覚悟しておけ」
「グスッ……戦死したい」
「全騎っ！地雷は吹っ飛んだ！これから斬り込むぞ！」
「艦砲支援は！？」
「都築、吹き飛ばされたいのか！？」
「――くそっ！」
「長野だ。各MC（メサイアコントローラー）は攪乱弾幕準備。発射タイミングを二宮騎に同調させろ。ジャマー散布開始とタイミングを同じくしてブースター突撃する」
「こちら二宮騎――攪乱弾幕発射……今っ！」
バンッ！
各騎に背部ラックに装備されていたロケットランチャーから数発のロケットが飛び出した。
強力な攪乱幕を展開する特殊魔法が施された重粒子が詰め込まれたそのロケット弾は、“赤兎（せきと）”達の狙撃によって、その頭上で爆発した。
その途端、美奈代の目の前、戦術モニター上に並んでいた“赤兎（せきと）”達の反応が一斉に消えた。
「攪乱幕の効果は3分だ」
二宮は言った。

「それまでに始末する。陣形楔、全騎――――続けっ！」

美奈代達は、二宮騎を先頭に一騎に敵陣に向けてブースター全開で飛び込んだ。

ホバー移動の機動性はないが、それでも突撃のスピードはこちらの方が早い。

攪乱幕でモニターにまで被害が出た“赤兎（せきと）”達に、その突撃から逃れる術は無かった。

スクリーン一杯に迫り来る“赤兎（せきと）”。速射砲を構え直すヒマもなかったらしい。

人間の顔が付いていたら、唖然としたいい表情が見えるだろう。

二宮はふと、そんなことを考えつつ、“赤兎（せきと）”めがけてシールドエッジを叩き付けた。

“赤兎（せきと）”の喉元に命中したその一撃で、“赤兎（せきと）”の頭部が吹き飛ばされ、宙を舞った。

二宮騎がシールドを構え直すよりもはやく、その教え子達もまた、目の前の敵に食らいついた。

さつきの槍が連続した突き技で一気に2騎の“赤兎（せきと）”の喉に命中した。

「よっしゃっ！」

2騎目の喉に、槍を命中させたさつきは歓声をあげた。

槍が引き抜かれると同時に、“赤兎（せきと）”が力無く塹壕に転がる。

「次っ！」

その横では美晴騎が薙刀を振るっていた。

塹壕に飛び込むこともなく長いリーチを活かせる長物を使える2騎は、このような戦場では圧倒的に有利だ。

美晴の薙刀が一降りで2騎の“赤兎（せきと）”の首を切り落とした横から山崎騎が塹壕に飛び込んだ。

「――ふんっ！」
その斧で片端から“赤兎（せきと）”を切り刻む。
僚騎が脳天から騎体を真っ二つにされたのを見た“赤兎（せきと）”が速射砲を逆手に持って襲いかかってくる。
ガンッ！
速射砲がへしゃげ、斧との力押しの勝負になる。
「このぉっ！」
山崎が力押しに負けまいとＳＴＲシステムに力を込める。パワーがレットゾーンにまで一気に飛び込み、“赤兎（せきと）”の脚が塹壕にめり込もうとしていた。
「山崎君っ！」
山崎の耳に、美晴の鋭い声が響く。
途端、
山崎は自分の騎体に背後から何かがぶつかった衝撃を受けた。
「くっ！」
山崎は、力押しの勝負になっていた目の前の“赤兎（せきと）”の腹を蹴りつけてバランスを崩し、ふりかぶった斧で、一気にその頭部を粉砕した。
ふりかえった山崎が見たモノは、自分の騎にもたれかかるようにして倒れる“赤兎（せきと）”だった。
塹壕の上からは、美晴のアリアが薙刀の切っ先を降ろした格好で、自分を見下ろしていた。
攪乱幕の影響で、恐ろしく接近しないとセンサーが作動しない。
前にばかり神経を集中して、後ろを疎かにした自分の醜態だと思うと、山崎は恥ずかしくなった。
「美晴さん」
「貸しておくね♪」
そのあっけらかんとした声が山崎にはありがたい。
「それはどうも」
山崎はそういうが早いか、美晴騎の脚を掴むと一気に塹壕に引っ

張り込んだ。
「きゃっ！？」
山崎騎が塹壕に落下してくる美晴騎を右手で受け止めると、左手で美晴騎から薙刀を奪い、そのまま塹壕の上に突き出した。
ガンッ！
薙刀の石突が美晴騎の背後から襲いかかろうとした“赤兎（せきと）”の装甲の隙間に飛び込んだ。
石突が動力バイパスに重大な損傷を与えた“赤兎（せきと）”は、斧を振りかぶった姿勢で動けない。
山崎は美晴騎を立ち上がらせると、薙刀を手渡した。
「――これで勘弁してください」
「勿論♪」
ガンッ！
美晴の一撃が、“赤兎（せきと）”の両脚を切り払ったのはその直後だ。
ザンッ！
“赤兎（せきと）”を袈裟切りに切り倒した二宮は、自分のパートナーである唯に尋ねた。
「戦況は！？」
「この一帯は制圧。後続のグレイファントム隊が続きます」
攪乱幕が引き始めている。
ブラックアウトしていたモニターに情報が次々と戻りつつある。
「くそっ。美味しいところだけ独り占めするつもりか？」
二宮は、ちらりと海岸から接近しつつあるグレイファントム達を恨めしそうに睨んだ。
「バカ娘達は？」
「かなりスコア稼いでいますが……あっ！」
「どうした？」
「都築騎が奥へ入り込んだ模様。泉騎がその支援に」
「奥？」

「敵、後詰め部隊のいる方角です」
「あのバカっ！」
二宮がそう怒鳴った途端だ。

ズンズンズンズンッ！

二宮騎だけではない。
塹壕周辺にいたメサイア達の周囲で一斉に爆発が発生した。
「何だ！？」
「トーチカです！」
唯が怒鳴った。
「トーチカからの重砲撃。ここは十字砲火交差地点ですっ！」
「――戦艦部隊へ通報！」
即座にそう命じた。
トーチカを潰すだけの装備は持ち合わせていない。
「了解」
二宮は、トーチカからの火砲を避けるため、塹壕の中に飛び込もうかと考えたが、直前になってやめた。
横で飛び込もうとした長野騎を押しとどめ、怒鳴る。
「万一のことがある――下がれっ！」
教え子達が塹壕に飛び込んでいないことを確認した二宮は、３５ミリ速射砲を塹壕の中めがけて乱射した。
ズズズズンッ！！
地面が激しく揺れた程の爆発が連続して発生。塹壕から大量の土砂とメサイアの残骸が吹き上がった。
「なっ！？」
「ゆ、友軍の塹壕にしかけたというのか！？」

ビュンッ！

騎体の真横を砲弾がかすった。

一々感慨に浸っている場合ではない。

二宮は塹壕に騎体を飛び込ませた。

「どうします？」

横に滑り降りた長野が訊ねた。

「このまま行きますか？」

「いくら何でも、トーチカの火砲をＭＣ（メサイアコントローラー）がコントロールしているなんて冗談はないだろう」

喉で笑ったつもりだが、二宮はうまく笑えなかった。

二宮の目の前。

小高い丘に過ぎないと思っていた場所は、よく見ればコンクリートで固められた砲塔が並ぶ立派なトーチカだった。

「くそっ。情報が違いすぎる」

二宮が、そう恨めしそうに呟いた次の瞬間、

金剛達が放った４０センチ砲弾がトーチカ一帯に降り注いだ。

「ち、ちょっと待て……？」

美奈代は自分の周囲を見回して青くなった。

「完全に包囲されています！数１０！」

どういうわけか、美奈代は都築が相手にしている１騎を除いた敵１０騎に、一瞬のうちに包囲されていた。

理由は簡単だ。

塹壕に飛び出した１騎の“赤兎（せきと）”と斬り結んだ都築騎の“鳳龍”だったが、まるで“赤兎（せきと）”に翻弄されているかのように、塹壕から離れ、奥へ奥へと動いていったのだ。

“赤兎（せきと）”３騎を切り倒した所でそれに気づいた美奈代は、そのがら空きの背にぞっとするほどの危険性を感じ、都築騎を追った。

その結果がこれだ。

すぐ間近では都築騎がいまだしつこく追ってきた“赤兎（せきと）”としのぎを削っている。

なら自分は都築に助太刀するか？

否。

そんなことしている余裕はない。

都築が追った“赤兎（せきと）”は逃げたのではない。

通信が通じないと判断し、後詰め部隊に直接増援を求めに動いたのだ。

当然、そこには後詰めの部隊がいた。

美奈代は、そのまっただ中に飛び込んだのだ。

“赤兎（せきと）”達が、美奈代騎を取り囲んでいる。

１対１０。

どう考えても、マトモに勝負を挑むだけムダなレベルの戦力差だ。

今更、間違えましたは通じないだろう。

「だっ、脱出は！？」

普通、こういう時、一番最初に考える対処方法を美奈代が口にしたのも当然なのだ。

「不能！」
牧野中尉は言った。
「私だけでしたら脱出装置で可能ですが、自爆装置作動しますよ！？」
「“さくら”も！」
精霊体ですら言った。
「マスター！自爆するなら、エンジン、エジェクトしていい？」
「薄情者ぉっ！」
ピーッ！
背後から2騎、同時に斬りかかってきた。
「都築っ！貴様ぁっ！」
一騎と押し合いになっている都築は全く頼りにならない。
返事すらない。
「2騎、5時6時方向！」
「ちいっ！」
美奈代は自分から急速後退をかけつつ、シールドと斬艦刀の切っ先を後ろへ向けた。
ガンッ！
まさか敵が自分から飛び込んでくるとは予想していなかったのだろう。
振りかざした青龍刀を振り下ろすタイミングを逸した“赤兎（せきと）”達の腹部装甲に、同時に斬艦刀とシールドのエッジがめりこみ、2騎の脚が衝撃に宙に浮いた。
ズンッ――――ズシャッ

美奈代はエモノを敵の腹から引き抜いた。

それが始まりだった。

美奈代は飢えた狼同然に、“赤兎（せきと）”達に襲いかかった。

反応が遅れた“赤兎（せきと）”の胴を横薙ぎの一撃で切断、その切っ先を、真横の騎に起きた惨劇に狼狽する、別な“赤兎（せきと）”の胸部装甲の隙間に叩き込む。

「何っ！ば、ばかなっ！」

「隊長殿がっ！」

さすがに肝を潰したのは、“赤兎（せきと）”の騎士達だ。

中華帝国の精鋭達４騎が、剣を交えることもなく潰された。

そして、先程の２騎が大地に崩れ落ちるよりも早く、メサイアは動いた。

「に、日帝の騎は悪魔か！？――――ヒイッ！」

横に薙ぎ払う長剣の一撃をかろうじて避けた“赤兎（せきと）”の騎士だったが、真っ正面から放たれたシールドのエッジアタックまでを避けることは出来なかった。

グシャッ！

グギャッ！

何かが壊れる音と、蛙が潰されたような音を残して、騎士と共に“赤兎（せきと）”が吹き飛ばされた。

「あ、悪魔だっ！白い悪魔だっ！」

「に、日本軍は死に神だっ！」

騎士達からは恐怖の叫びが聞こえて来る。

「ど、同時に行けっ！」
誰かが叫ばなければ、彼らは武器を捨て逃亡したろう。
もう、彼らには恐怖はあっても戦意はなかった。
持っているモノと失ったモノ。
それを逆転したのが、そんな一言だ。
「同時なら何とかなるっ！」
美奈代騎から最も離れた騎からの声。
それが、騎士達を地獄へと導く。

この地に降り立った死に神は、まだ獲物が足りませんと――――。

「お、応っ！」
美奈代騎から見て、左斜め正面と右斜め後ろの騎が同時に動いた。
左斜め正面の騎が槍を突きだし、左斜め後ろの騎が青龍刀で襲いかかる。
槍の切っ先が、メサイアのがら空きの胴に吸い込まれようとしている。

――――殺った！

槍を繰り出した騎士は、勝利を確信した。
だが――――

ガッ！

「何っ！？」
メサイアは、騎体を最小限ひねるだけで槍を回避。
あまつさえ、繰り出した槍を掴むと、力任せに引っ張った。
「しまったっ！――――うわぁぁぁっ！」
出力差が違いすぎる。

グンッ！
槍を繰り出さした勢いに、敵騎のパワーが加わった“赤兎（せきと）”は、槍と共に後ろに放り投げられた。

その先には――

「避けろっ。黄っ！」
その叫びは遅かった。
彼の槍は、後ろから襲いかかろうとしていた仲間の“赤兎（せきと）”の胸部装甲を貫通した。
「黄ぉぉぉっ！」
騎士は味方騎に突き刺さった槍を手放そうとしたが、

ザンッ！

気づいたときには、斬艦刀が、彼を騎体ごと切断していた。

「畜生っ！」
生き残った3騎は自暴自棄同然の突撃にかかった。
剣を並べ、3騎同時の突撃で串刺しにしようというのだ。
「仲間の敵だっ！」
「死ね、小日本（シャオリーベン）！」
「消えろ悪魔っ！この世からっ！」
黄騎に突き刺さった槍を引き抜いたメサイアが彼らの視界に迫る。

――キュイッ

メサイアは、左手で槍を構えると、左の騎に襲いかかった。
「この程度！」
左の騎を駆る騎士が青龍刀を振り下ろして槍をうち払う。

青龍刀を振り下ろしきった途端――――
メサイアは、急加速をかけ、相互の間合いを一瞬で詰めた。
「――――ひっ」
騎士は、慌てて青龍刀を構え直そうとしたがもう遅い。
ガンッ！
エッジアタックをモロに喰らった“赤兎（せきと）”はくの字に曲がって吹き飛び、すれ違い様に真ん中の騎が胴を薙ぎ払われ、上下二つに分離させられた。
「――――なっ！？」
動きが早すぎる！
目を見開くのは、最後に生き残った騎士。
彼は逃げるために騎体を旋回させようとした。
だが、それより早く、斬艦刀の一撃が、彼の騎に襲いかかってきた。

「……か、各部異常……なし」
震えを通り越して、涙声になった牧野中尉が言った。
「後は……都築准尉が相手する1騎のみ」
「……ぜぇ、ぜぇ……」
その間、美奈代は、肺に無理矢理空気を送り込む要領で、肩で息を続ける。
言葉が出てこない。
自分がやってのけたことが理解さえ出来ていない。
その横では、“さくら”がびっくりした顔で美奈代を見つめていた。
「ま、牧野中尉……ゲホッ……い、生きてます？」
ようやく喋れたのはそんな言葉だけ。
それでも、喋れるだけ奇跡だと思う。
「生きてますけどね……。正直、どう言っていいんでしょう……こ

ういうの」
足下は“赤兎（せきと）”の残骸だらけ。
まるで集団戦闘の跡さながらだ。
だが、間違いなくこの敵を残骸にしてのけたのは、この娘ただ一人だ。
「１０騎を……３０秒かかってませんよ？どこのアニメですか」
「き、騎士のスピードなら、この程度……」
「ひ、非常識です」

美奈代が何かを言い返そうとした時だ。
ギャンッ！
都築に襲われていた“赤兎（せきと）”がついに力尽きた。
まるでメサイアそのものが悲鳴をあげたような音を立てた“赤兎（せきと）”は、騎体の半ばまでたたき割られ、動きを止めた。

「次っ！」
“赤兎（せきと）”が倒れる音を聞きながら、都築は怒鳴るが、

「何がだこのバカっ！」
美奈代はたまらず怒鳴った。
「一人でんなマネしてる間に、私が何騎相手にしたと思ってる！」
「あ？」
都築が見ると、周囲は“赤兎（せきと）”の残骸で埋め尽くされていた。
「おいっ！俺の獲物は！？」
「１０騎だぞ！？１対１０だったんだ！」
肩で息をする美奈代が半泣きになって怒鳴る。
「グスッ……。一斉に私めがけて襲いかかってきたんだ！滅茶苦茶怖かったぞ！？どうしてくれる！貴様は全く！」
「俺を放っておいてスコア１０騎だと！？」
「問題はそこか！？」

怒鳴るというか、突っ込んだ格好になった美奈代騎の背後で、連続した大きな爆発が発生した。
「な、何？」
もうもうと立ち上る黒煙は、かなり大規模な攻撃であることを告げていた。
「艦砲攻撃です」
牧野中尉が言った。
「で、でもあっちって」
「着弾点は、上陸地点です」
「海軍の誤射ですか？」
「まさか」
牧野中尉は否定した。
「いくらなんでも、そこまでマヌケではありません」
「じゃあ――」
「落下から見て攻撃は山の向こうからです」
美奈代は、間近にそびえる山を見た。
標高は数百メートル。
そう高い山ではない。
また、新たに爆発が発生した。
「艦砲の支援、求めますか？」
「それもいいんですけど」
牧野中尉は言った。
「金剛隊はもう移動する時間です」
「そんな！」
「他上陸地点もかなり苦戦しているんです。艦砲射撃支援は、全部隊が渇望している。中華帝国も死に物狂いですからね」
「二宮教官達は？」
「通信つながらず」
「――ちっ！」
美奈代はチラリと横に立つ都築騎を見た。

「都築」
「やるしかねぇだろ」
都築はコクピットで、開いた左手に右手の拳を叩き付けた。
「戦艦沈めたなら勲章モノだぜ」
「やれるか？」
「やるさ」
「信じられないが――牧野中尉。一気に山を越えて斬り込みます。いいですか？」
「やってみましょう」
牧野中尉は、騎体のブースターに火を入れた。
「さくら――いくわよ？」
「はいっ！」
「あ、おいっ！ちょっと待てっ！」
都築の声を残し、美奈代騎は一気にブースターを開いて、山を飛び越える機動に出た。

――そして、自分のうかつさを本気で呪った。
美奈代は、山の向こうに、大口径の砲兵陣地があると判断していた。
砲兵陣地を強襲、これを殲滅する。
美奈代は自分の目標を、そう判断していた。
相手は砲兵陣地だと。

だが、都築は言っていた。
「戦艦沈めたなら勲章モノだぜ」
何故、都築が「戦艦」という言葉を用いたか、美奈代は何も考えず、都築に聞こうともしなかった。
その結果がこれだ。

山を飛び越した美奈代が見たモノ。

それは、だだっ広い平原に陣取る“鉄のフネ”だった。

“鉄のフネ”

即ち、軍艦だ。

灰色に塗装された船体が美奈代の目の前で移動している。

「な……何で？」

美奈代は目を疑った。

フネは水に浮かぶものだ。

陸を移動するものではない。

「准尉っ！」

牧野中尉の鋭い警告が飛び、“征龍改”はブースターを開くと、山の谷間に飛び込んだ。

向こうも、山越えに飛び出してきた美奈代騎に十分な対応が出来なかったらしい。

幸いにも美奈代騎が山の谷間に騎体を沈める間、フネからの攻撃は一発も飛んでこなかった。

「な、何ですか！？アレは！」

美奈代がコクピットで思わず大声で牧野中尉に訊ねた。

「艦名不明。艦形状、ライブラリーに照合なし」

牧野中尉は言った。

「現物は――私も初めてみました」

「いくら何でも、なんで地面にフネがいるんですか！？」

「――陸上戦艦」
「は？」
「陸戦艇（ランドバトルシップ）ともいいます。飛行艇のような完全な浮遊装置ではなく、ＦＧＦ（フリーグラビティフィールド）を応用したホバー移動で陸上、水上お構いなしに走行可能の艦船です」
牧野中尉は思いだしたように言った。
「……また、座学で寝てたことが発覚しましたね」
「一々覚えていないだけです！」
美奈代は泣きそうになって怒鳴った。
「何で一々、私が忘れていることを、寝てた寝てたって！」
「本当のことでしょう？」
「ううっ！」
ズンズンズンズンッ！
山の斜面で連続した爆発が発生した。
その陸戦艇が、何かを狙って発砲したらしいことは、美奈代にも容易に想像がついた。
着弾で吹き飛ばされた土砂が容赦なく降り注いでくる。
「おい泉っ！」
都築の“鳳龍”が美奈代騎の横に滑り降りてきたのは、その時だ。
“鳳龍”が、砲撃を連れてくるような、そんな錯覚さえ起こしてしまう。
「あ、アブねぇ！」
敵の狙いは都築騎だったらしい。
「大丈夫か？」
「それはこっちのセリフだ！」
都築はくってかかった。
「強行偵察だけで済むだろうが！」
「……え？」
「えっ！？じゃないだろう！」
美奈代の素っ頓狂な声に、都築は思わず怒鳴った。

「まだ戦艦の有効射程だ！戦艦に叩かせればいいだろうが！」
「だ、だけど通信が」
「後退して通信つなぐって考えがどうしてわかない！」
「……すみません」
「くそっ！何で俺は……」
「……え？」
「なんでもねぇよ！」
美奈代の目の前で、都築騎が動き出した。
「ね、ねぇ、ちょっと！」
美奈代が止めようとするが、都築は言った。
「さっき、メサイアを3騎確認した。俺が引きつけるからお前は下がれっ！」
「な、何なのよ……」
美奈代は頬が赤くなるのを抑えられなかった。
都築がこう呟いたように聞こえたからだ。

――何で俺は、こんなの好きになっちまったんだ。

美奈代の目の前で、さくらがニマニマと、まるでチェシャネコのような表情をしている。
その表情から、どうやら聞き間違いではないらしい。
そう判断した美奈代は、まるで恥ずかしさから逃れるように、美奈代はブースターを開き、谷間から飛び出した。
……何も考えずに。

ズンズンズンズンッ！！
谷間から飛び出した途端、待ちかまえていたように美奈代騎を陸

戦艇の砲火が包み込んだ。
命中弾こそ出ていないが――
「くっ！」
牧野中尉は、上昇を諦め、急速降下に切り替えた。
それが幸いした。
美奈代騎の上昇コース。山頂から若干下付近に、陸戦艇の主砲弾が着弾した。
タイミングを間違えれば――考えたくないオチがついただろう。
「……正解だったわね」
背筋を流れる気持ち悪い汗を感じながら、牧野中尉はそう呟いた。
「泉准尉の悪運が移ったかしら」
「何か言いましたか？」
美奈代は背部にマウントしてあった速射砲を取り出した。
３５ミリガドリング砲が軍艦相手に聞くのかは、試してみるしかない。
「中尉――相手の武装は？」
「どう見ました？」
「３７ミリ機関砲……いち、に」
「……６門です」
目をつむって飛んで来た火線の数を思い出そうとした美奈代に、牧野中尉は言った。
「両舷併せて推定１２門。２５ミリ砲もかなり積んでいますね」
「プラス４０センチ砲？……でも、４０センチにしては破壊力が」
「残念――６０センチ臼砲です」
牧野中尉は言った。
「６０センチ！？」
「ええ……カール自走臼砲の後継モデルを参考にしたんでしょう。
何しろ、陸戦艇そのものが、ドイツの――きゃっ！？」
美奈代は“征龍改”を急速移動し、その一撃を避けた。
谷間めがけて高角度で臼砲を放ったらしい。

砲撃は初弾で谷間に飛び込んできた。
砲弾は美奈代騎がいた辺りに見事に落下、辺りを跡形もなく吹き飛ばした。
美奈代は知らないが、この時発射された６０センチ臼砲（きゅうほう）の砲弾は一発約２トン、高性能火薬５００キロが入った代物だ。
――敵の砲術長は、いい腕をしている。
美奈代は素直に感心した。
臼砲（きゅうほう）の射撃がどの程度難しいかは知らないが、さっきの砲撃といい、その技術は申し分ない。
何だか、それが恐ろしくもったいない、そんな気分になった。
「――中尉っ！」
美奈代は、そんな気分から逃れようとするかのように、怒鳴った。
「あいつを仕留めますっ！」
「ど、どうやって！？」
「やってから考えますっ！」
「そんな無茶な！」
美奈代は、牧野中尉の意見をそれ以上聞かなかった。
聞く前に、美奈代は“征龍改”を突撃させていた。

中華帝国陸軍陸上戦闘艇“玄武”級ネームシップ“玄武”。
それが、美奈代の目の前にいる艦の名である。
全長２２０メートル。後部甲板に飛行甲板があり、ヘリやＶＴＯＬの運用が可能。
メサイアの移動ベースとしても申し分ない輸送力を持つ。
元は中華帝国で飛行艦を運用する海軍によって、新型飛行艦とし

て開発されたが、飛行システムの不具合から、完成してみたらホバー移動のみ可能という、飛行艦としては致命的な欠陥品だった。
試験も中止され、岸壁に放置されていたものを、広大な大地を防衛する陸軍が、高い走行性能と陸上の移動手段としては破格の輸送力に着目し、海軍からスクラップとして譲り受けた後、“飛行艦ではなく陸戦艇だ”と主張し、同型艦の独自開発と運用を開始したという、いわくつきの代物だ。

「3時方向、メサイア1、接近しつつあり！」
陸上では的になりかねないことから、低く設計された艦橋の上。装甲板が張り巡らされた防空艦橋で見張りが叫ぶ。
砲塔旋回と射撃警告それぞれのブザーが入り交じってその叫び声をかき消す。
船体前面に設置された４０センチ砲塔がゆっくりと右舷に旋回、照準を合わせた。

ズンッ！

鼓膜がどうにかなったんじゃないか。
本気でそう思うほどの砲声をあげ、４０センチ砲が火を噴いた。
船体が砲撃の衝撃で大きくぶれる。
メサイアの背後、かなり遠くで爆発が発生した。
「砲撃遠いっ！」
艦橋で着弾を確認した艇長は怒鳴った。
「近すぎて主砲では無理だ！それ以外の砲で仕留めろっ！」

「――――くっ！」
飛び来る機関砲弾の嵐に襲われた美奈代は、騎士としての反射能力だけで飛来する砲弾を回避するハメになった。
「こっちに満足な対艦攻撃装備がないからってぇっ！」

ギュインッ！
ギャンッ！
機関砲弾がメサイアをかすめる、背筋の寒くなるような音がレシーバーに次々と入ってくる中、美奈代はオレンジのアイスキャンディーにしか見えない砲弾や、目の前で発生する爆発を全てかわしきった。
メサイアを世界最強の兵器へと押し上げたのは、まさにこの時見せた美奈代のような、騎士の反射能力を、メサイアが機械として反映させることが出来るからに他ならない。
騎士こそがメサイアであり、騎士故に、メサイアは世界最強なのだ。
メサイアの前に、いかなる重武装を施した要塞然とした存在であろうとも、全くの無力であることが今、証明されようとしていた。
「畜生！当たれっ！」
「バケモノがぁっ！」
兵士達が必死に撃ち出す砲弾をメサイアはすべてかわしてしまう。
「弾種切り替えろっ！弾種を近接信管に！」
怒りのあまり、艦橋のヘリを殴った砲術長は叫ぶ。
「着発信管なんて使うな！相手は戦車じゃないんだぞ！」
もし、この陸戦艇を運用しているのが海軍なら、少しだけ状況が違ったかもしれない。
陸軍兵士達がこの陸戦艇で想定していたのは、戦車であり、機関砲は接近する戦車を破壊するための存在として位置づけられている。
航空機を撃ち落とすための近接信管の使用は例外的扱いだ。
何しろ、機関砲は海軍からのお下がりで、手動操作する代物にすぎず、高速移動する物体に対する対空砲として使える代物ではない。
だが、この近接信管を最初からメサイアに使用していたら、かな

りのダメージを与えることは出来たろう。
兵士達が対空砲の射撃を停止し、弾薬を交換するその間に、美奈代騎は玄武の懐に飛び込んだ。
右手に装備した３５ミリ機動速射野砲の至近射撃が、艦の構造物を滅茶苦茶に引きちぎる。
それまで美奈代達に向けて砲弾を放っていた機関砲達は、兵士達と共に挽肉にされた。
兵士達の呆然とする顔。
恐怖にひきつる顔。
泣き出す顔。
美奈代は、その全てを見た上で、彼らめがけて引き金を引いた。
罪悪感とか、恐怖感とか、そんなものは何もなかった。
ただ、機械的に引き金を引いた。
美奈代自身、そこには一切の感情は、なかった。

兵士達が砕かれる光景の後、美奈代は斬艦刀を構えながら“征龍改”をジャンプさせ、艦橋に飛び乗った。
自重数百トンというメサイアの重量で艦橋が一瞬で潰れる。
美奈代は、騎体が沈み込む中、騎体のバランスをとると、３５ミリバルカン砲を玄武めがけて叩き込んだ。
軍艦とはいえ、３５ミリ砲弾の雨を浴びることは想定されているはずばない。
艦中央の機関部冷却システムが破壊された玄武はつんのめるように急停止し、内部の熱の出口を失った機関部から、得体の知れない音が響き始めた。
その音を聞いた美奈代は、再び騎体をジャンプさせると、３５ミリ砲の残弾を、玄武への土産とばかりに乱射した。

美奈代騎が大地に降り立った時、玄武はその姿を、立ち上る黒煙へと変化させていた。

「戦果としては申し分ないですね」
牧野中尉がねぎらうように言う。
「陸戦艇1、メサイアがじゅう――――」
ピーッ！
突如、コクピットに鳴り響いた警報。
牧野中尉の鋭い声。
「砲弾飛来警報っ！」
スクリーンが一瞬、真っ白になった次の瞬間――――
空気の壁に叩き付けられたような衝撃が美奈代を襲った。
激しくシェイクするコクピットの中。
美奈代は意識を失った。

ボルネオ島攻略戦　第二話

●ボルネオ島　米軍上陸地点　仮称「フォックスロット」海岸付近
上陸用艦艇で埋め尽くされた海から陸にはい上がった海兵隊のＡＶ７装甲兵員輸送車部隊がエンジン音をまき散らしながら砂浜を走る。
その横では、揚陸艦から続々と戦車と海兵隊員が吐き出されつつある。
「第一班は戦車の後に続け！」
「第二班、右へ展開！第三班は俺についてこいっ！」
「斬り込み隊の仇討ちだ！」
「応っ！」
斬り込み隊として先に上陸、死体さえ回収出来なかった戦友達の仇討ちを心に誓う隊員達は、戦車に続いてランプから飛び降りると、ついにボルネオ島の砂浜に降り立った。
戦艦の艦砲射撃はすでに止んでいる。
海岸から見える限り、あらかたの施設が叩かれ、あちこちから黒煙が高々と上がっているように見える。
中華帝国を思わせるモノは何一つ存在しない。
海兵隊員達が見たボルネオ島は、むっとする熱気が体にまとわりつき、何か得体の知れないモノが焼ける、吸い込むだけで肺が爛れそうな、そうでなくても吐き出したくなるような、恐ろしい臭いを運ぶ黒煙に満ちあふれた最低の世界だ。
本来の青い海、青い空、緑に満ちあふれた大地という、神に祝福された世界ではない。
いつ砲撃が飛んでくるか。
どこに狙撃手が潜んでいるか。

地雷が埋まっているんじゃないか。

考えるだけで精神がどうにかなってしまいそうな中、海兵隊員達の視線は、一度ならずとも必ず“それ”に向かう。

グレイファントム達。

自分達を守ってくれる神像さながらに立ち並ぶグレイファントム達に視線を送るだけで、不思議な勇気を与えてくれる。

――戦場における神とは、グレイファントムのことだ。

誰が言い出したことかは知らないが、否定する者はそう多くない。その存在感だけで、この世に降り立った“戦の神”は自分だと、グレイファントムは見る者に信じさせてしまう。

――大丈夫だ。

その姿を横目に見ながら、海兵隊員達は、自然と自分に言い聞かせる。

――“アイツ”がいる。だから、俺は生きて帰ることが出来る。

そう、言い聞かせることが出来るのだ。

グレイファントム達はゆっくりと移動を開始。
すでに前衛に出ている部隊の後を追う。

「聞けクソ共！」
小隊指揮官達が部下を怒鳴った次の瞬間だ。

ギィィィィッッッ！！

背筋が寒くなるような音があたりに響く。

「伏せろっ！」

海兵隊員達は、その音が何だか知っている。

さっきまで散々聞かされた音だ。

訓練通りでなくても、彼らはとっさにその場に伏せた。

ズンッ！！

ズンッ！！

鼓膜が破れそうな音。

背中の肉がそぎ落とされそうな勢いで突き抜けた衝撃波。

遅れて走った熱風。

その中で、海兵隊員達は、その光景を見ていた。

ゆっくりと移動を開始したグレイファントムの3騎小隊のど真ん中で恐ろしく巨大な爆発が発生。

グレイファントム達が一瞬にして爆煙の中に消え去った光景を。

呆然とする海兵隊員達が次に見たのは、奇妙な格好で倒れ伏すグレイファントム達のなれの果てだった。

「じ、ジャップのご、誤射か？」

「違う」

小隊の新米兵士の呟きを、小隊指揮官である古参の黒人軍曹は聞き逃さなかった。

伏せた時にヘルメットが外れたことさえ気づいていない新米兵士へ転がっていたヘルメットを放り投げた軍曹は言った。

「“コンゴ”級なら近すぎる」
「じゃあ」
ヘルメットを抱きかかえるようにして受け取った兵士は、あわててヘルメットを被った。
中に入り込んだ砂が頭に降りかかった。
顔をしかめてヘルメットを脱いだ彼を無視するように、軍曹は部隊に命じた。
「一番近い砲撃孔はどこだ！」
「あそこです！」
一人が１０時方向を指さした。
何両の戦車が巻き込まれたのか。浅いクレーター状態の穴の周囲には、原型を止めないほどに破壊された戦車の残骸が転がっている。
距離は２００メートルほど。
若干起伏のある地形が、爆発の衝撃波から自分達を上手く守ってくれたなんて複雑なことは、ハイスクールでさえ出ていない軍曹にはわからない。
ただ、彼が爆撃や砲撃によって開いた穴について知っていることがある。

――一度開いた穴に再び砲弾や爆弾が落ちることはない。

それは、彼の経験に基づいても証明されていた。
だからこそ、彼はそれに基づいて部隊に命じた。
「あの穴に移動するぞ！」
「単なる誤射でしょう！？」
移動を開始した軍曹の後ろを、先程の新米兵士が慌てて追う。
「銃が砂を被っていないかチェックしておけ。終わったらコンドームで銃口を塞いでおけ」
軍曹は言った。
「砲撃はしばらく続くぞ？これは誤射じゃねぇからな」

彼らが砲撃孔にたどり着いたその時から、

ギィィィッ――――ズズン！
ギィィィッ――――ズズン！
ギィィィッ――――ズズン！

海岸には無数の艦砲が飛来しだした。
「司令部！艦砲を止めさせろっ！」
「敵はずっと後方だぞ！」
これが日本軍の戦艦部隊の誤射だと判断した指揮官達は通信装置で必死に司令部と交信を試みる。
その間にも、狼狽する兵士達の周囲で、艦砲射撃の着弾と、それに伴う爆発が連続して発生し続ける。
一発の爆発で、グレイファントムや戦車が粉々に砕かれ、付近にいた不運な兵士達と共に破片となって周囲に降り注ぐ。

「ジャップめ！どこ狙ってやがる！」
「やめさせろっ！」
「司令部！艦砲支援をどこに要請しやがった！」

砲撃が止んだのは、最初の着弾から１０分後。
後続の上陸は一時停止。海岸付近では、上陸のタイミングを逸した上陸用舟艇が立ち往生している。
数発、海岸近くの海面に飛来した砲弾が高い水柱をあげたせいで、砲撃から逃れようと舟艇達が列を乱したせいだ。
海岸では砲撃から逃れるべく海兵隊員が組織的に、あるいは個人で勝手に右往左往した結果、部隊間の連携どころか、部隊内部の連携でさえ寸断された状態に陥っていた。
きっとホワイトハウスにでもおうかがいを立てているんだろう司

令部からは海岸線の確保と、すでに移動を開始した前衛部隊に合流しろという、上陸当初からの指示が通信機に入るだけだ。
あまりに同じ事ばかり繰り返す通信に業を煮やしたある小隊指揮官が、「司令部の連中、テープを流して女と飲みに行ったに違いない」と毒づいたとしても、誰も文句さえ言えなかった。

上陸作戦に際して適切と選ばれた広い海岸は、海に接する範囲も広いが、奥行きもかなり広い。
先日、グレイファントム達がひっかかったメサイア用塹壕のさらに先、敵が潜んでいるとされ、砲撃の的になった小高い丘まで余裕で2キロはある。
海岸の砂はおそろしく細かく、気を付けていないと足場がとられる。
後続の部隊がようやく上陸を開始し、すでに上陸した後、砲撃のせいで動きを止められた先発の部隊がその針路を塞ぐ格好になった。

――――前進せよ

司令部からは借金の督促同然にそんな命令が飛んでくる。
それが司令部の命令なら、それに従うしかない。
指揮官達はとにかく自分の部隊をまとめ、前進を開始した。
戦車の大半は既に砂浜を抜け、メサイア用塹壕を迂回するルートをとっている。
徒歩で移動する海兵隊員達だけが未だ砂浜を抜けられない。
偽装された塹壕やトーチカに潜んで米軍の攻撃に耐えていた中華兵達の放った砲火が彼らに襲いかかったのは、その時だった。

ズダダダダッ――――!!
「敵襲っ!」
「どこだ!どこから撃っている!」

「狙撃兵だ！」
「違う！空からだ！」
突然の銃声、悲鳴を上げることもなく倒れる隊員達。
生き残った兵士達は、再び混乱の中に叩き込まれた。
中華帝国兵が作った塹壕やトーチカは、徹底して海岸側からはそれと判断出来づらいように工夫されていた。
それだけに、海岸に上陸した海兵隊員達にとって、ほんの少し海岸から進んだ所に中華兵達がいるなんて想像さえ出来なかった。
「馬鹿な！」
指揮官は混乱する部下を怒鳴った。
「ここは阻止線の中だぞ！」

――お袋の腹の中より安全

ある海兵隊指揮官は、阻止線の中、つまり、今の彼らの立ち位置をそう評していたし、隊員達もそれを信じ切っていた。
だが、それが油断という彼らの悲劇を産み出す元凶となった。

海岸に伏せる彼らめがけてトーチカから放たれる濃厚な集中砲火が降り注ぐ。
海岸のゆるい砂は逃げまどう海兵隊員達の足をもつれされ、その逃げ足を遅くする。
火線になぎ倒される米兵達によって、海岸は今や死体の山だ。
少しでも頭を上げれば吹き飛ばされる恐怖が走る。
吹き飛ばされなくても、恐ろしくて頭を上げようという発想そのものがわかない。
今や海兵隊員の中で立っている者はいない。
皆が海岸の砂浜にしがみついて、この銃火の嵐が去るのを待つしかない。
弾を避ける楯になるなら、戦友の死体まで使うしかなかった。

「塹壕を掘れっ！」

誰かが叫ぶと、隊員達は脱ぐか戦死者の被っていたヘルメットで必死に砂浜を掘ろうとする。だが、

「くそっ！何だこれは！」

砂質のせいで隊員達が命がけで掘る穴は、端から埋まってしまう。

ある隊員は、泣きながら穴を掘る戦友をちらと見た。

――向こうの方が深い。

ふとそう思った次の瞬間、その戦友が頭を吹き飛ばされ、脳漿と血をまき散らしながら穴の上に倒れ伏した。

隊員は、その戦友の死体の傍まで這っていくと、死体を突き飛ばして穴を掘り続けた。

その穴を掘っているのが、自分で3人目だということを、彼は知らない。

人がやっと入ることの出来る穴が掘れたのはかなり長い時間が過ぎた後だ。

安心感から息が切れ、ふと見上げた向こうから何かが飛んでくるのを、彼はただぼんやりと見つめるしかなかった。

「前進しろっ！」

彼らを追い立てるように迫撃砲弾まで飛来した。

狙いは上陸用舟艇。

無蓋の舟艇の中に飛び込んだ砲弾が、容赦なく兵士達を切り刻み、舟艇の中を阿鼻叫喚の地獄絵図に変える。

砲撃が弾薬箱に命中した舟艇は一瞬で沈む。

それでも舟艇部隊は海岸を目指す。

海岸に部隊を吐き出せば彼らの仕事は終わる。

終われば、彼らはこの地獄から逃れることが出来るのだ。

だが――

「軍曹！」
シュルツ軍曹は、横にいたマーク一等兵に肩を叩かれた。
マークは引きつった顔で空を指さした。
軍曹は空を見た。
青い空に星が瞬いていた。
星？
――違う。
軍曹は、星の正体が何かを理解して青くなった。
それは、自国軍が世界各地で敵兵女子供構わずに撃ち込んだ恐怖の嵐。
「ＭＬＲＳだ！」
もう遅い。
こんな場所に撃ち込まれたらもう終わりだ。
軍曹は思わず首から提げていたロザリオを握りしめた。
――これから、無数に近い子爆弾が自分の周りで炸裂し、自分はこの祖国から遠く離れた場所で挽肉にされるんだ。
――くそっ！神様っ！
軍曹は神へ何と祈りを捧げて良いのか迷う間に、“それ”は彼らめがけて襲いかかった。
艦砲とは違う奇妙な飛来音があたりを支配する。
そして――爆発音。
「軍曹っ！」

ロザリオを握りしめた姿勢で目を固くつむった彼は、再びマークに叩かれて目を開いた。
無事だ。
自分も部隊も――――無事だ。

「ふ、不発か？」
「違いますよ！」
マークは泣き出しそうな顔で海岸を指さす。
そこにはランプが開いた上陸用舟艇が停まっている。
海兵隊員が勢いよく飛び出してくる――――はずだ。
「ん？」

様子がおかしい。

誰も出てこない。

「今の攻撃は」
マークは言った。
「俺達じゃなくて、舟艇を狙ったんですよ」
やっと、恐ろしくゆったりとした、千鳥足に近い歩調で一人の海兵隊員が顔を出した。
全身が血まみれで性別さえわからない。
ランプ半ばまで歩いて、力尽きたように海に落ち、そのまま浮かんでこなかった。

それだけで、中がどんな有様か聞かずともわかった。
そのうち、何かに引火したんだろう。何隻もの舟艇の中で火災が発生し始めた。

盛大な松明、もしくは死体焼き場となりつつある舟艇の炎を見な

がらマークは呟くように言った。
「あ……ありゃダメです」
「くそっ……貴重な人手を」

戦車部隊が血相を変えて舞い戻ってきたのは、すぐのことだ。
トーチカめがけて無茶苦茶に近い発砲を繰り返し、片端からトーチカを潰していく。
海兵隊員達が沈黙したトーチカに這い寄ると、中に手榴弾を放り込み、直後に小銃をその中へ乱射する。
数名の中華兵の死体が転がる中、隊員達はトーチカの中へと飛び込んで生き残りを捜す。
「誰もいない！」
一文字に掘られた穴を材木で補強し、遮蔽物で偽装しただけのそのトーチカには、機関銃一丁と無数の空薬莢、そして三人分の死体が転がっているだけだ。

あとには何も残っていない。
「爆発物はない」
床を調べていた隊員が言った。
「壁にも金属反応はないから大丈夫だ」

安全な場所を確保出来たおかげで、隊員達はその場に思わずへたり込んだ。

「馬鹿な」
隊員達は周りを見回した。
周囲には、仲間しかいない。
敵が、どこにもいない。
死に物狂いで攻めるハメになったこのトーチカだというのに。
戦車砲の爆発で頭をやられたんだろう、妙に臭い死体だけだ。

「まさか……たった三人で俺達をここに釘付けにした？」
「馬鹿な」
薬莢を調べていた別な隊員が言った。
「口径が違う。間違いなく、ここでは他の銃も使われていた」
「じゃあどこに！」
うち続く緊張に、思わず殺気だった声を荒げる。
「死体にでも聞け」
その隊員がにべもなく言った途端――

ズンッ！！

トーチカの外から、そんな音がした。

このトーチカを砲撃した戦車の砲塔が吹き飛び、砲塔跡から盛大な炎と煙が上がっていた。
「地雷だ！」
トーチカの外にいて、その光景を見ていた隊員が言った。
「地雷にやられた！――この辺一帯、地雷原だ！他も酷いことになっている！」

隊員は、興奮気味に何かを話そうとしたが、

パンッ！

隊員はその音を残して永遠の沈黙に入った。

「狙撃兵だ！」
トーチカの外でそんな声がした次の瞬間。
中華帝国軍の攻撃が再び始まった。
「トーチカに入れっ！」

その号令と前後して外にいた隊員達が続々とトーチカに入る。
攻撃は、トーチカの背後から襲ってきた。
それまで沈黙していたトーチカが、突然発砲を開始したのだ。
「どういうことだ！」
「知るかよ！」
隊員達はトーチカの中から応戦する。
一人の隊員が射撃ポジションを求めたが、床に転がる死体が邪魔だった。
「どけっ！」
彼は死体を蹴飛ばした。
死体がゴロンと音を立てて転がる。
その動きにあわせて、細いワイヤーが宙を舞った。

ドズンッ！！
腹に響く音がして、目の前のトーチカが吹き飛んだ。
米兵の肉片がトーチカの天蓋に降り注ぐ音を聞きながら、中華兵達は歓喜の声をあげる。
「脳なしの米兵め！」
「ざまあみろっ！」

米兵は、その物量で押しまくる戦術からして、正攻法で勝てる相手ではない。
米兵と比較して数十年の格差で装備に劣る中華兵が米兵とまともに戦うためには、頭を使う必要がある。

朱少将が着目したのは、海岸の地質と、この島に放棄されていた鉱物資源採掘ロボット達だ。

海岸の地質は地下2メートルまでは砂質だが、その下はかなりし

っかりした地質であることが判明している。

そして、

――どんな土地でも穴を掘り、坑道を作り上げることが出来る。

鉱山で捕まえた日本人技師はロボットをそう説明した。

地質とそこに穴を掘るロボット。

朱少将は、躊躇うことなくそのロボットで地下陣地を構築する工事に取りかかった。

その結果がこれだ。

全ては朱少将の作戦通りに進んでいる。

二度に渡って米兵を阻止しつつある。

俺達は、勝とうとしている！

――朱少将は智将だ。

兵士達は心酔にも似た感情で米兵達が吹き飛んだトーチカを見る。

一カ所ではなく、何カ所でも同じようにトーチカに逃げ込んだ米兵達が殺されているのは明らかだ。

米兵はトーチカに近づこうとさえしない。

不意に、目前のトーチカから旗が上がった。

中華帝国旗だ。

友軍兵士が誇らしげにトーチカから旗を振るっている。

トーチカを友軍が奪還した証拠だ。

戦車が近づいてくるなり、トラップを仕掛けて重火器すべてを即座に坑道に移動し、壁に偽装した坑道入り口を塞ぐ。

米兵がトーチカを占領した後、壁に仕掛けられていたトラップが作動し米兵は即死する。

その後、坑道から出た中華兵が再びトーチカに入る。

単純だが、確実な方法だ。

地上を這い蹲る米兵を、安全な地下を移動しつつ、中華兵達は翻弄する。

米兵にとって悪夢となった戦いの主役が登場したのは、このトーチカの攻防の後だ。

戦いの趨勢を決めた主役の名は、９７式９３ｍｍサーモバリック弾ランチャー。

気化爆弾は、従来の火薬による爆発ではなく、霧状に散布された燃料（爆薬）と、空気が適度な比率で混合されることで発生する爆発的な燃焼効果により、高い破壊、殺傷効果が期待出来る兵器である。

半径５０メートル以内の兵士を無差別に殺傷する能力と、車両内部までを一瞬にして酸欠状態にしてのける特性が、海岸の海兵隊員を――例え戦車や装甲車に乗っていたとしても変わらない――容赦なく殺傷した。

米軍は米軍呼称“フォックスロット・ビーチ”からの攻撃を断念し、上陸部隊は即座に海上へ撤退を開始。

上陸作戦参加約５千名。生還者３５０名。

海兵隊史上最悪の敗北となった戦いがこうして終わった。

米軍呼称“フォックスロット・ビーチ”。

戦後、その名で呼ぶ者はいない。

米軍呼称“フォックスロット・ビーチ”。

そこは、こう呼ばれている。

俗称“ハンバーガービーチ”

隊員達がトラップと砲撃、そして気化爆弾によって文字通り挽肉にされたことを皮肉った呼び名だ。

司令部は、ボルネオ島の海上封鎖と、フィリピンに待機していた戦艦主体の打撃部隊、そして航空部隊の動員を決定した。

目的を、占領ではなく、中華兵の殺傷という単純な目的に切り替えたのだ。

ただ、今は、今のみ、海兵隊員達の戦いは終わった。

だが、忘れてはならない。

戦いを終えた。

それは、海兵隊だけの事だ。

海兵隊が全滅したことで予定を大きく狂わされた司令部は、“赤兎(せきと)”達のゲリラ的攻撃に翻弄され続けた阻止線担当部隊、つまり、前衛に出た戦車隊とグレイファントム隊への撤退命令を出しこそねた。

その結果――

阻止担当部隊は中華帝国軍の包囲網に、完全に孤立した。

当然、その中には美奈代達が含まれていた。

ボルネオ島攻略戦　第三話

「まずは勝利を」
参謀が朱少将にグラスを手渡した。
グラスを受け取った朱少将が軽くグラスを掲げて見せ、参謀が無言で頷くと互いにグラスを傾ける。
戦闘が終了し、すでに夜の帳が降りている中、兵士達の志気は最高潮に達していた。
世界最強と称えられるアメリカ軍相手に上陸を阻止。
メサイア３５騎、戦闘車両５６両、海兵隊員５千名。舟艇１２隻。
それが、たった一日で米軍が支払った上陸作戦失敗の対価であり、中華帝国軍の戦果だ。
未曾有の勝利はすでに中央政府によって国内全土、いや、全世界に喧伝されている。
ラジオから流れてくる脚色まみれの戦果報道を聞く兵士達は、ニュースの時間の度に歓声を上げたとしても、誰にも文句は言われたくない。
「しかし」
グラスを置いた参謀は、ため息混じりにデスク上の書類と地図を見た。
「第一波を阻止したに過ぎません」
「……うむ」
「サーモバリック弾はすでに底を尽きました」
「……」
「補給線はすでに米軍によって寸断されています。本土からの補給

艦到達の見込みさえありません」
「……花火のようなものだったか」
朱少将は握った拳をパッと開く仕草の後、苦笑した。
「本土の軍司令部に要請は？」
「１０分単位でやってます」
「それでメドが立たないか」
「軍司令部は」
参謀は固い声で言った。
「我々が全滅した後に、新たな部隊を派遣。それで穴埋めするつもりかも知れません」
「……」
「それで――――米軍が止められると、本気で信じているのでしょう」
「……島内に潜んでいる米軍の残党はどの程度だ？」
「確認されている限り、グレイファントムＭ１６タイプが１２騎、日本軍の形式不明騎が１０騎程です。米軍の残存部隊と共にＧ地点、仮称“パパイヤ山”の山腹に潜んでいます」
「我が方のメサイアは？」
「第３５０２メサイア大隊の“赤兎”１２騎、先程、到着した第３３０９メサイア大隊から“帝刃（ていば）”１４騎」
「大盤振る舞いだな」
「簡単なことです」
参謀は苦笑しつつ頷いた。
「壊滅した第３３０２メサイア大隊との交代として第３３０９メサイア大隊が予定通り到着しただけなんです。夜明けと同時に、両大隊は残存部隊掃討に出ます」
「連中にとっては悲劇――――か」
朱少将は、チラと参謀を見て、
「勝てるか？」
「これだけの戦力でも、五分を維持出来るかどうか」
参謀は断言した。

「“帝刃（ていば）”とM16は世代が違いますからな。メサイアの性能差ははっきりしています。最悪なことに、両大隊には実戦経験はありません」
「連中を突破された挙げ句、メサイアに暴れられては――」
朱少将は、背筋にイヤな汗が流れるのを止められなかった。
「玄武を潰されたのは痛いですな」
参謀は、グラスを片づけると、従兵にコーヒーを持ってくるように命じた。
「連中の仇討ちもしてやりたいが」
私は砂糖抜きでいい。今晩はそんな気分だ。と、朱少将が従兵に告げる。
「海岸で上陸部隊を阻止する戦法がとれなければ、我が軍に勝ち目はありません」
「また来るだろうか？」
「私なら――」
参謀は窓の外、またたく星の世界に視線を向けた。
「飛行艦を派遣して空から叩きます」
「はやり――そうだろうな」
「山林地帯」
参謀は視線を戻した。
「ゲリラ戦に向けた体勢の構築は進んでいます。山林地帯は、狩野粒子の影響が低いですから、対飛行艦用ミサイルランチャーも撃てるはずです」
「後は――補給か」
「国が我々を見捨てなければ、我々は最悪でも生きてこの島から逃れることは出来ます」
「私の権限で、いかなる犠牲を払っても補給線をつなぐよう、軍司令部に要請してくれ。さもなければ」
「さもなければ？」
その問いかけに、朱少将は楽しげに肩をすくめた。

「次に攻撃を受けた時点で、部下まとめて降伏してやるとな」

「歯ぁ食いしばれっ！」

ガツンッ！！

美奈代がコクピットを降りた時、すぐに耳に入ったのはそんな音。

都築が長野大尉に殴られた音だ。

「都築ぃっ！」

吹き飛ばされた都築の胸ぐらを掴んだ長野が怒鳴る。

「誰がこんな馬鹿げたマネしろと教えたっ！」

メサイア３騎撃破の殊勲を挙げたとはいえ、都築の教官も兼ねていた長野はカンカンだ。

独断で部隊を離れ、敵の包囲網に落ちたこと。

部隊がその救援のために脱出のタイミングを逸した挙げ句、こうして孤立していることを考えれば、殊勲なんてないに等しくなる。

弁解の余地さえない大失態だけが残るのだ。

「教え子にそんなことされた俺は、情けなくて涙が出てくるわ！」

「で、ですけど！」

「男が言い訳するなっ！」

ガンッ！

どうしようかとオロオロする美奈代の背後。

ポンッ。

美奈代の肩を叩いたのはＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）から降りた牧野中尉だ。

「お疲れさまでした」

「――あの」

美奈代が必死に都築と長野に視線を送る。

――何とかしてほしい。

視線でそう訴えるが、

「ああ」

牧野中尉は平然と言った。
「親子の会話です」
「親子？」
「親鳥とヒナ鳥の――――ほら」
「こんの――――大バカ野郎っ！」
ガンッ！
また都築が殴られた。
「バカな子ほど可愛いっていうじゃないですか。特に、長野教官みたいなタイプは」
長野の説教にかける熱意というか執念というか、不思議なオーラさえ感じた美奈代は、その言葉を、何だか否定出来なかった。
「そ、そういうものなんですか？」
「二宮中佐にとってのあなた同様」
牧野中尉は穏やかな顔で言った。
「長野大尉が一番眼をかけていたのが、都築准尉ですからねぇ」
「あの――――二宮教官は？」
「米軍のところです」

山腹の地形を活かし、周囲から見えづらい場所に片膝をついた状態で待機するグレイファントム達。
損傷はほとんどないのが唯一の幸いだ。
その足下で、米軍側メサイア部隊指揮官と打ち合わせが終わった二宮は、その場を辞した。
隊長はアメリカ大統領警護騎士団第２０２メサイア大隊所属ミッキー・マーカス少佐。
背の高い白人男性。
白人の歳はよくわからないが、二宮とさほどは違っていないはずだ。

尖った顎に高い鼻。総じて整った顔立ち。
長い足。
――とりあえず、さすがに男性としては合格点だな。
歩きながら、二宮はミッキーを品定めした結果を頭の中ではじき出した。
「……したかないか」
二宮はチラリとメサイアの脇に停車しているＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に視線をむけた。
ほとんどの車体が、砲撃を受けたのだろう、無惨な破孔に彩られているが、もっと無惨なのは、その周囲に寝かされている負傷兵達だ。
赤十字が書かれたＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）周辺が臨時の野戦病院らしい。
野戦テントに薄く赤十字の書かれた下は灯火管制のせいではっくりと見ることは出来ないが、苦しみに耐えるうめき声が、まるで二宮を包み込むように聞こえてくる。
野戦病院に入りきらず、道ばたに寝かされている兵士達の多くは、血まみれの包帯を巻かれ、力無くぐったりと横たわっている。
その何名かは、四肢のどれかが欠けている。
肌の色から、すでに死んでいることがはっきりしている兵士も少なくない。
戦場特有の腐ったチーズのような臭い――死臭が立ちこめ、死肉を求めて蠅が集まり始めていた。
死体袋に入れられた兵士が一人、二宮の前を運ばれていった。
負傷兵と死体にあふれた野戦病院。
入ったことのある者でなければわからない――この世の地獄。
二宮は、死体袋に敬礼すると、その場を立ち去った。

二宮は部隊に戻った。
待機命令中の騎は、米軍部隊の横に片膝尽きの状態で待機してい

る。
　エンジンはアイドリング状態のまま。静かなジャングルの闇夜に魔晶石エンジン特有の低い重低音が響く。
「しみるんだ！もう少し優しく！」
「我慢しろ！」
　ケミカルライトの灯りの下、ようやく長野の怒りが静まったらしい。両頬が真っ赤に腫れ上がった都築に美奈代が薬を塗っていた。
「大金星だな。泉」
　その声に弾かれたように美奈代は立ち上がって敬礼した。
「わ、私、代わりにやる」
　横にいたさつきが美奈代から薬を受け取った。
「あ、あの……」
　都築は命令違反でここまで殴られた。次は自分だという自覚がある美奈代は、どんな罰が下るか内心恐々として二宮の言葉を待った。
「陸戦艇１にメサイア１３――これでトリプルエースか」
「……は？」
「１対１０の戦闘に勝利したというのは――本当に驚くしかない」
「……」
　二宮は手にしていたＰＤＡの画面を見ながら唸るように言った。
「他の連中も十分すぎる戦果……か」
「あ……あの」
「ん？」
「じ、自分は命令に」
「ああ」
　二宮は何でもないという顔で言った。
「泉の分まで都築を殴って良いと長野大尉に言ってある」
「――へ？」
　背中越しの都築の視線が恐ろしく痛く感じられる。
「それとも、私に殴られたいのか？」
「い……いえ」

「弾薬は？」
「３５ミリ速射砲、残弾ゼロ――自分の騎で使用可能な火砲はありません」
「都築」
「――“鳳龍”は元から火砲積んでませんよ」
「……使えないな」
理不尽だ！
美奈代は内心、そう怒鳴りたい気分だったが、どうしようもない。
「救援は？」
「“鈴谷（すずや）”が来てくれると？」
「来てさえくれれば」
美奈代は、米兵達の集合地点に視線を送った。
風に乗って、時折、苦痛に呻く負傷兵達の声が聞こえてくる。
嗅いだだけで吐き出しそうな臭いに、吐き気を抑えるのがやっとだ。
「彼らは助かります」
「中華帝国軍が見逃してくれると思うか？」
「……いえ」
「とりあえず、明日の日没までの救援はないと思え。ミーティングを行う。総員集合」
「はいっ！」

「現在、我々は完全な中華帝国側の包囲網の中にいる」
時刻は２０時を少し回っていた。ケミカルライトの灯火で地面に広げた地図を照らしながら、二宮が状況を説明する。
「我々の現在位置は、米軍呼称“ミシシッピ川”沿いの谷間に近い扇状地。見ての通りのジャングルだ。
ここの谷は急傾斜のため山越えの強襲を受ける心配はないし、艦砲も恐らくはない。上空からの空爆を心配するのは、明日の夜明け

以降。
谷間に入るルートは3つだ。
米軍呼称ルート６６――つまり、ミシシッピ川沿いに走る国道両面。
米軍は、このルートしか見ていない」
二宮の持つ指示棒が谷間にそって走る道をなぞった。
「どうするんです？」
さつきが訊ねた。
「国道沿いで敵を迎え撃つんですか？」
「それだけでは単なる消耗戦になる。それに」
二宮は地図を再び指示棒で突いた。
「我々は米軍と行動を共にしない」
「えっ？」
「米軍側から“丁重に”お断りするとのことだ」
「……私達」
その言葉の意味がわかったのは、美晴だ。
「つまる所、信じられていない？」
「その通りだ」
二宮は頷いた。
「……」
否定出来ない美奈代は黙った。
「我々はこれを幸いにして、勝手にやることにする」
「撤退ですか？」
「都築、もう一回、長野大尉に殴られてこい」
「か、勘弁してください」
「我々は米軍支援のため、後方攪乱につく。敵戦力を可能な限り引き裂き、米軍側の負担を軽くする」
美奈代は二宮の言葉に思い当たる節があった。
「メサイアでゲリラ戦を？」
「その通りだ」

少し嬉しいという顔で、二宮が美奈代を見た。
「我々は部隊を分散させ、各地に出没するだけでいい」
「戦闘は？」
「その辺に潜んでいるというだけの未確認情報は、お前達が考えているよりずっと戦力を長時間に渡って引き裂くことが出来る」
「……はぁ」
ピンとこない美奈代は首を傾げるだけだ。
「米軍が無視した細い谷間を通っていく。メサイアなら一騎がようやく通れるサイズだ。おそらく、地雷かセンサー類が仕掛けられているだろうが、“幻龍（げんりゅう）”なら中華帝国製センサーなぞ怖れる必要もない。よしんばひっかかっても、それで敵を攪乱させることも出来る」
「作戦決行は？」
「夜明けの1時間前――各員、コクピットに戻って仮眠をとっておけ」
二宮は言った。
「目覚められる眠りのありがたさを、身をもって味わっておくんだ」

夜の帷が白く染め上げられていく。
川面を白い靄が走り、梢から羽ばたいた鳥達が軽やかな歌声で新たな一日の始まりを告げる。
そんな中、朝靄をかき分けるようにして川を移動するメサイア達の中に、美奈代がいた。
二宮は「メサイアが一騎ようやく通れる」と言っていたが、実際の所は2騎が並んで通れる広さがあるところがほとんど。
情報部はいい加減だから困る！と怒りっぱなしの二宮と美奈代が前衛を担当し、後衛に長野がついていた。

眠い。

美奈代は心底ゆっくり寝たいと思いながら、重い瞼と格闘していた。

「センサーの反応なし」

牧野中尉が事あるごとに話かけてくれるが、有り難いような迷惑なような、美奈代には何とも言えない。

メサイアのコクピットはシートすら満足にない設計だ。

シートの代わりになるのは腰部固定装置だけ。

ソファー顔負けと賞賛されるMCL内部のMC用のフローティングシートとは訳が違う。

コクピットで寝ろというのは、立って寝ろと命じられたのと変わらないのだ。

おかげで睡眠不足も甚だしい。

――これで戦ったら絶対死ぬ。

美奈代には、その自信があった。

「宗像より二宮教官」

通信機に宗像の声が入る。

一体、どうしたらそんな平然としていられるのか教えて欲しかった。

きっと、MCと一緒に寝たとかいうとんでもない理由が帰ってくるだろう。

「チームは私と早瀬でよいのですね？」

「いい」
二宮が言った。
「柏と山崎、都築は長野大尉と組め」
――あれ？
美奈代はそこで気づいた。
私は？
「泉は私とだ」
「――へ？」
美奈代は思わず素っ頓狂な声をあげた。
「私と教官……ですか？」
「イヤか？」
「め、滅相もない」
「とりあえず、隊列はこのまま――全騎、注意しろ。センサー類がまともに作動していない」
その言葉に、美奈代はセンサー系統を表示する戦術モニターを見た。
いくつものセンサー類がブラックアウトしているのにようやく気づいた。
「敵のジャミングかもしれない。気を付けろ」
「泉准尉」
牧野中尉が言った。
「極めて濃い霧です。ジャミングもあって前方の様子がわかりません。注意してください」
「了解」
美奈代は目をこすると言った。
「斬艦刀、準備願います」
それから3分ほどで谷間の半ばまで来た。

谷川の流れが、大きく、くの字に曲がる所。
谷から転げ落ちたんだろう。
出っ張った大岩が邪魔でメサイア1騎がようやく通れる幅しかない。

ザン
ザン
ザン

歩く度に、メサイアの脚部が水を切る音が響く。

ザン
……
ザ……ン
ザ……ン

「……あら？」
不意に騎体の移動が停まったのは、牧野中尉がこっそりレーションの封を切った時だ。
センサー類は異常を捉えていない。
「どうしました？」
「……しっ」
モニター越しの美奈代は人差し指を口元に当てた。
「……」
美奈代が視線をさまよわせ、頭部保護のヘッドユニットにセットされているイヤホンを耳に押し当てる。
――音だ。
牧野中尉は、美奈代が何をしているのか、それでわかった。
メサイアの耳が拾ってくる音は、自騎から発せられる音と、後続

の騎の音がせいぜい。
他の音は谷間を走る川の激しい流れの音でかき消されてしまう。
牧野中尉も、耳を澄ませてみたが、何も判らない。
ただ、騎体がそっと斬艦刀を背部に格納し、アフリカで取得したメースの剣に切り替えたのだけはさすがにわかる。
一体、美奈代が何をしようとしているのか、牧野中尉にはわからない。
救いを求めるように、精霊体の“さくら”を見るが、“さくら”自身もわからないという顔で首を横に振った。
スクリーンの向こうは、濃い霧ばかりの世界。
川岸の岩以外、何も見えない。

「……あの？」
どうしました？
牧野中尉がそう問いかけた直後だ。

グンッ！
弾かれたように騎体が動いた。

「――――えっ？」

左腕が何かを掴み、無理矢理重い物を引っ張ったような感覚が走る。
そして、右腕が動いた。
騎体が、濃霧の中から何かを引っ張り出した。
そんな感じだ。
何を引っ張り出したのか、牧野中尉はすぐにわかった。

霧の中から現れたのは、自分の騎に腕を掴まれた“帝刃（ていば）”だった。
胸部から背中にかけてを光剣に貫かれた“帝刃（ていば）”の眼から光が消えた。
胸部装甲から無造作に剣が引き抜かれ、“帝刃（ていば）”が力無く崩れ落ちようとする。
美奈代騎が動いたのは、その時だ。

撃破した“帝刃（ていば）”を担ぎ、一気に谷を曲がった。

ズガンッ！
――――バッシャァァァンッ！
“帝刃（ていば）”同士がぶつかり合う音がして、一騎の“帝刃（ていば）”が川面に転がった。
美奈代騎は躊躇せずにその“帝刃（ていば）”を踏みつけると、剣を頭部に突き刺した。
剣の一撃が容赦なく“帝刃（ていば）”の頭部装甲と、その中身を溶解させる。

辺りは濃霧。

数メートル先がわからなくない濃霧の中。

剣に貫通された“帝刃（ていば）”のＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）に開いた破孔から川の水が流れ込んでいく音でさえ、川の流れにかき消されてしまう。

「……」
美奈代は、じっとスクリーンの向こう側を食い入るように見た後、呟くように言った。
「敵は２騎……後続なし。二宮教官」

「……」

通信モニター上の二宮は、ポカンとした顔をしていた。

「二宮教官」

美奈代にもう一度、名前を呼ばれ、ようやく自分が呼ばれていることに気づいた二宮は、やや裏返った声をあげた。

「あ、ああ！私！？」

「このまま、移動を継続しますか？」

「え？……そ、そうね」

二宮はとってつけたような声で言った。

「このまま移動しましょう……谷を抜けたら、分散して移動。それでいいわね？」

「了解です」

“帝刃（ていば）”を踏みつけ、美奈代騎が移動を開始した。

ボルネオ島攻略戦　第四話

●ボルネオ島　米軍呼称“ルート６６”Ａ地点

ガンッ！

鈍い金属音が響く。

グレイファントムのメースが“赤兎（せきと）”の胸部装甲に命中した音だ。

“赤兎（せきと）”の動きが鈍る。

メースの打撃がコクピットにまで達した証拠だ。

「よしっ！」

ミッキーがコクピットで歓声を上げた。

「とどめっ！」

振り下ろしたメースが“赤兎（せきと）”の頭部装甲を粉砕し、“赤兎（せきと）”は大地に倒れた。

「セラ、次は！？」

「２時方向、グレッグ騎が押されています」

「よし」

ミッキーの右前方で斧同士でしのぎを削っている騎がいた。

「グレッグ！そのままでいいっ！」

「すまんっ！」

ミッキーのメースが“赤兎（せきと）”の脇腹に命中し、“赤兎（せきと）”の姿勢がくの字に歪む。

グレッグ騎の斧がその顔面を捉えたのは、その直後だった。

「ふぇぇっ……焦ったぜ」

「貸しにしておく」

「了解だ――指揮官（コマンダー）」

グレッグ騎が不意に動き、斧をミッキー騎めがけて――いや、正確にはその背後めがけて投げつけた。

ミッキー騎の真後ろで斧を胸部装甲にまともにくらい、斧を振り下ろそうとした姿勢のまま、“赤兎（せきと）”が後ろへ倒れた。

「ミッキー、利子はついてないだろうな？」

●ボルネオ島　中華帝国軍司令部

「“赤兎（せきと）”隊、被害甚大」

「後退命令を出せ」

朱少将は言った。

「可動機はすべてだ」

朱少将はシートにもたれかかり、深いため息をついた。

「……世代の違いとはいえ」

倍する戦力を持ちながら、“赤兎（せきと）”隊は一方的に倒されたとしか言い様がない。

グレイファントム達を相手に撃破の戦果が挙がっていてないのに、大破騎が投入戦力の3割に達している。

司令官として、これ以上の損害は看過出来ない。

戦いはまだ続くのだ。

徒に貴重な戦力を浪費すべきではない。

「本土からの返答は？」

「飛行艦隊が重い腰を上げてくれました」

参謀は言った。

「この島の鉱物資源を、飛行艦で安全に運びたいというのが本心でしょうが」

「戦場に空荷で来る馬鹿もおるまい」

朱少将は参謀からコーヒーを受け取った。

「負傷兵は集めておけ。本国へ後送する。それと」

コーヒーの香りに満足げな笑みを浮かべた朱少将は、参謀に訊ねた。

「メサイアが確認されたというのは、どこだ？」

「はっ」

参謀は島の地図を指さした。

「島東南部。偵察隊が発見しています。近くでは島北東部でも」
「回せるメサイア部隊は？」
「夕刻までお待ち下さい」
参謀は言った。
「本国から教導隊が到着します」
「教導隊？」
怪訝そうな朱少将に、参謀は自信げに答えた。
「“帝剣（ていけん）”の運用部隊です」

●ボルネオ島北東部ジャングル
時折、中華兵に見つかるように動くだけでいい。
中華兵が時折思いついたように小銃を発砲するが、メサイア相手では豆鉄砲にすぎない。装甲を傷つけることさえ出来ない。
その前に当たらない。

美奈代は島の北東部でそんなことをしていた。
モグラ叩き。
その任務をそう評したのは、精霊体の“さくら”だ。

「ねぇマスター」
騎体をジャングルの中に潜ませた時、“さくら”が訊ねた。
「この後、どうするの？」
「この後って？」
「この島、いつ出ていくの？」
「今、二宮教官が洋上に出て“鈴谷（すずや）”と通信を試みているが……」
美奈代が戦況モニターに目をやると、二宮騎が戻ってきた。
ジャングルの上空すれすれを飛んで音もなくジャングルの中へと潜り込むという、恐ろしいほど高い操縦技術の手本を見たような気

がした。
「つながったぞ」
二宮の声はどことなしに嬉しげだ。
「日没と同時に、ここに来る」
その言葉に、美奈代は時計を見た。
日没までの時間は3時間30分
「ここへ？」
「オトリだ」
二宮は言った。
「我々が通過したルートを通って別動の米軍のTAC(タクティカル・エア・カーゴ)部隊が兵士達の救出に向かう。“鈴谷(すずや)”はその間のマト担当だ」
「……被害……担当艦」
ゴクッ
美奈代は自分の口から出てきた言葉に思わず唾を飲み込んだ。
戦闘において一方的に被害を受け持つことで友軍を有利にする、それが被害担当艦だ。
艦が沈むことで、戦闘に勝利する人柱に近い立場だ。
「よく平野艦長が認めましたね」
それが、信じられない。
乗組員千人の命を預かる身が、あまりに軽率にしか見えない。
「あいつが認めたんじゃない」
二宮は言った。
「認めさせられた――いや、それさえ違う」
「……」
“命じられただけ”というのが正しいな」
「そんな！」
美奈代は目を見開いた。
「命じられたら、部下と一緒に死ぬとでも言うんですか！」
「泉」
二宮はため息混じりに言った。

「軍隊だけではない。組織の中間管理職とはそういうものだ。自分が望む望まないお構いなしに仕事を押しつけられる。部下と共に死ぬし、時に部下を殺す」

「……私」

美奈代は言った。

「そんなんなら、一生ヒラで結構です。組織になんか加わりたくないです」

「フン……お前はヒラでは済まないよ」

「え？」

「お前は絶対、私を越えるからな」

通信モニター越しに自分を見つめてくる二宮の声は、不思議と自信に満ちあふれた誇らしさが滲み出ているように見えた。

それは思い上がりかも知れない。

そう思った美奈代は、コンソールを見る振りをして視線を外した。

――二宮教官が、私のような問題児を評価してくれているはずがない。

そう思う。

――だけど

それでも、

――もし、そう思ってくれているなら、何という嬉しいことだろう。

そう思えてしまうのだ。

「“鈴谷（すずや）”の上陸地点はここなんですか？」

美奈代は不思議なほどはやる心を抑えながらそう訊ねた。

「ああ。このジャングルの上空を移動することで敵を引きつける。先に海上で別れた米軍のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が正反対の方角で動くことになる」

「なら皆を集合させますか？」

「ポイントＣでのランデブーが３時間後だ。３０分もあれば十分だろう。そこでいい。というか、下手な通信は逆に危険だ」

「そ……そうですね」

「我々の任務はこの北東部に敵を誘い出すこと。そのためにやることがある」
「米軍が相手にしている敵を背後から叩く？」
「その通りだ」
二宮は楽しげに頷いた。
「ここに誘い出し、後は頃合いを見て撤退。今夜は、“鈴谷（すずや）”でゆっくりシャワーが浴びられるぞ」
二宮の楽しげな声に、美奈代も顔がほころんだ。
「楽しみです」

美奈代騎と二宮騎の作戦は、正直、無駄に近いものとなっていることを、日米両軍で知っている者はいなかった。
中華帝国側、朱少将は、すでに米軍の残存部隊に対する攻撃は貴重な戦力の浪費と見なしており、「撤退するなら勝手にしろ」というスタンスだ。

すでに中華帝国側の米軍残存部隊への攻撃は停止している。
米軍も撤退の通信を受け取っており、負傷兵のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）への移乗準備と、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に搭載出来ない兵器や機密文書の処理が進んでいる。
状況は悪くない。
日没まであと1時間。

夕日が眩しい。
金色に染まるジャングルの中、美奈代達はただ、“鈴谷（すずや）”の到着を待っていた。
「もう少しで長野大尉達も到着する」
二宮騎からそんな通信が入った。

すでに敵の攻撃はない。
敵の集結地点はここからかなり離れているし、その方面からの侵入はセンサーで感知出来る。
センサーに反応はない。
「この島ともこれでおさらばだな」
「米軍は、この島を放棄するんですか？」
「違う」
二宮は笑って言った。
「中華帝国は、このままなら降伏するよ」
「――えっ？」
「連中の補給線を止めた上で小さく叩く。小出しに戦力を使わせれば連中の物資は底を突く」
「……」
「泉。補給線が切れるっていうのは、お前が想像しているより遙かに怖いことだぞ」
「――はい」
補給線が断たれる恐怖。
そう言われても実戦経験の浅い美奈代には、どうしてもピンと来ない。
ただ、バカみたいに頷くだけだ。
「米軍はこれから制海権と制空権を奪取に動く。後は空から空爆で中華帝国を叩く。こうなればほとんど一方的な戦いになる」
「うまくいきますか？」
「行ってもらわねば――」
ピーッ！
「熱源っ！」
「何っ！？」

ズンッ！！

二宮騎のＭＣ（メサイアコントローラー）、青山唯中尉の警告。

二宮の驚いた声。

そして、二宮騎が吹き飛ぶ音。

それを美奈代はすぐには理解出来なかった。

目の前で半身を吹き飛ばされた二宮騎が、ゆっくりとジャングルの中に倒れようとしていた。

「泉准尉っ！」

美奈代より早く現実に立ち戻ったのは牧野中尉だ。

彼女の鋭い怒鳴り声が、茫然自失の美奈代を無理矢理に現実に引き戻した。

「――――な、なんですか！？今の！」

「大口径ＭＬ（マジックレーザー）の狙撃！」

牧野中尉は引きつった声で言った。

「ま……まさか」

「二宮教官は！」

「バイタル反応正常……せ……センサーに反応なし？そんなバカ……な」

牧野中尉の意識は、敵攻撃に備えたエネルギー感知モニターに集中していた。

ログを見ても、何の反応もない。

「魔法反応まで……ど……どうやって？」

「中尉っ！」

ギンッ！

美奈代の声と、鋭い戦闘機動で、牧野中尉は我に返った。

「て、敵は！」

「センサーに反応なしっ！」

「じゃあ、アレはなんですか！？」

牧野中尉が見たスクリーンに映し出される3騎のメサイア。
重装甲をまとった“歩く要塞”さながらの騎だった。
それは、牧野中尉が見たことのない騎だった。
即座にライブラリーが開かれるが、
「不明っ、該当騎なしっ！」
そう答えるしかなかった。
「い……一体！？」

美奈代達は知らない。
中華帝国側の参謀が言った“帝剣”。
否、それさえ違う。
目の前にいるのは――

「おそらく、中華帝国側の試作メサイアです」
牧野中尉はそう結論づけた。
「エンジン出力、その他の反応、“帝刃（ていば）”や“赤兎（せきと）”とは比較になりません」
パワースペックは間違いなく“帝刃（ていば）”の倍では効かないだろう。
フレーム反応も最新型だろうことを示している。
あの厚さの重装甲が本物なら、実剣は通らない。
牧野中尉はデータがとれていることを確認しながら、背筋を震わせた。
「こ……こんなの量産されたら！」

厄介じゃ済まない！

その声が上がる前に、3騎は動いた。
「准尉っ！後退を！」
牧野中尉は叫ぶ。

データがない敵と斬り結ぶことが如何に危険か知っている牧野中尉の判断は正しい。
だが、
「教官を見殺しにする気ですか！」
美奈代にとって、敵が何だろうと、ここで逃げることは出来なかった。

二宮教官を助ける。

それこそが、美奈代の全てだったのだ。

迫り来る敵は長い柄に斧を付けたハルバードを振りかざす。
対する美奈代騎は斬艦刀を抜刀。

戦いの火ぶたが切って落とされた。

「くそっ！」

鳴り響く警報

魔晶石エンジンから発する甲高い戦闘出力音

スクリーン一杯に迫る甲冑のバケモノ。

美奈代は倒れた二宮騎の前に立ちはだかると、斬艦刀を構えた。
距離はまだかなりある。
あれほどの重量級だ。接近するまでにはかなり間があるはずだ。

ダンッ！

大地を蹴って敵騎が動き出した。

「――――え？」

敵の装甲の厚さは一目瞭然だ。

楯攻撃（シールドやエッジ）の効く相手じゃない。

グリーンの角張った恐ろしく分厚い装甲が美奈代めがけて襲いかかってくる。

「速いっ！」

その動きに、美奈代は目を見開いた。

重装甲をものともしない素早い動きを見せる。象のような鈍重な外観からは全く想像が出来ない機動性だ。

「あの装甲で！？」

重装甲に高機動性ではシャレにもならない。

美奈代は必死に隙を見つけようとした。

装甲がいくら分厚いとはいえ、どこかに弱点があるはずだ。

――――どこだ！？

美奈代は焦りながら視線を激しく移動させた。

正面から撃破出来そうな場所が思いつかない！

――――背後に回り込めば。

美奈代は、ふと、そう思った。

“装甲は、正面装甲が最も厚いが、後方や上面は得てして薄い”

かつて、授業で聞いた言葉を思い出したのだ。

戦車かメサイアか、一体、何の装甲について語った言葉で、誰から言われた言葉かさえ思い出せないが、それでも、このタイミングでこの言葉を思い出したことを、美奈代は誰かに褒めて欲しかった。

美奈代は背面に回り込もうとＳＴＲシステムに力を込め、即座にその無意味を悟った。

否、悟らされた。

ブンッ！

突然、敵騎の上半身で白い光が走った。

メサイアの腕ほどもある三角の円錐状の光が、肩や頭部に走る。

その光に本能的な危機を感じた美奈代は動きを止め、目を見開いた。

「な、何？」

「レーザースパイクです」

牧野中尉が言った。

「固定式の光剣と思ってください。タックルでも喰らったら串刺しです」

「――――くっ！」

背後から斬り込むことはやめた。

三騎であんなものにプレスされたらたまらない。

肩部装甲のレーザースパイクが装甲の動きに合わせて激しく揺れる。

不用意な接近は、自殺行為だと、その動きが教えてくれる。

――――どうする？

接近のため、激しい動きを見せる敵騎を睨み付けていた美奈代が“そこ”に気づいたのは、そんな瞬間だった。

美奈代は結局、その三騎に何もしなかった。

牽制のためのＭＬ（マジックレーザー）攻撃さえしなかった。

三騎から見れば、今の美奈代騎は、突然、仲間が倒されて動揺している程度にしかみえないだろう。

だらりと下げられた長い剣もシールドも構えられてさえいない。

戦闘の意志さえ感じられない。

そんな姿で立ちつくすのが、今の美奈代騎だ。

当然、敵はそんな美奈代騎にかける情けなど持ち合わせていない。

殺されたくなければ、全てを殺せ。

それこそが、戦場における騎士の規範（ルール）だ。

三騎のメサイアを駆る騎士達は、自らの規範に従順過ぎるほどに従った。

それだけだ。

楔形陣形で迫り来る三騎。

前衛騎がハルバードを振り上げた。

槍に斧を付けた斧槍（おのやり）

それがハルバードだ。

斧と槍双方として使え、「突き」「切り」「刺し」「払い」――凡そ近接用武器に求められるほぼ全ての攻撃が出来る優れものだ。

その破壊力の源は、長い柄を操作することによる遠心力や慣性力――そして操作する者のパワー。

メサイアのパワーを上手く遠心力に乗せることが出来た場合のハルバードの破壊力は、およそメサイアの扱う近接用武器の中では最

強の部類に入るだろう。

まともに喰らえば、美奈代騎は真っ二つだ。

ピピピピピピ――ッ！！

センサーが脅威を感知し、操縦者である美奈代に警告を告げる。

長い柄を両手で握って振り上げつつ接近する敵騎を、美奈代は強ばった顔で見つめていた。

――チャンスは一度だ。

美奈代は自分に言い聞かせていた。

――しくじったら……終わりだ。

終わり。

つまりは――死。

死ねば、全てが終わる。

そこまで考えるのが、今の美奈代にとっては精一杯だ。

目の前に迫る敵騎を前に焦る心を押さえつけるのがやっとなのだ。

「――くっ！」

歯を食いしばった途端、

ブンッ！！

凄まじい音を立てながら、敵騎がハルバードを振り下ろした。
まともに喰らったら、メサイアは脳天からかち割られるだろうその攻撃だったが、

ガンッ！！

その斧が捉えたのは、何の変哲もない大地。
メサイアの魔晶石エンジンが産み出す大出力を遠心力に変えて繰り出された一撃は、大地に深々をめりこみ、砕かれた大地が土砂となって舞い上がった。

――――かわされた！！

前衛騎の騎士は、即座にハルバードを大地から引き抜こうとして――――出来なかった。

「！？」

ハルバードの斧の根本。
何かが押さえつけている。
必殺の一撃をかわしたメサイアの脚だとわかった次の瞬間、

グガンッ！！

コクピットを凄まじいほどの振動が走った。
コクピットを形成していた様々な装備が吹き飛び、モニターや計器類が一斉に消えた。
振動が収まった時にはコクピットの中は暗闇となった。
手元でさえ見えない事態に、予備電源まで切れたことを悟った騎士が次に感じたのは、奇妙な重力感。
立っていることが出来なくなった自騎が倒れる感覚だった。

メサイアの弱点である喉部防護用可動式装甲と騎体の隙間に斬艦刀を突き刺された前衛騎は、頭部にあるＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）と本体を結ぶ操縦系統を根こそぎ破壊されたことで動きを止めた。

人間でいえば、頸骨を切断されたのと同じ。メサイアといえ、ここを破壊されればどうしようもない。

ズズゥゥ……ンッ！！

奇妙な程ゆっくりと前衛騎が倒れる。

その光景に狼狽した後続騎達が一歩、後ずさった。

美奈代にはそう見えた、その次の瞬間――

ブンッ！！

突然、左騎の腕が光った。

「ぐっ！？」

騎体に激しい振動が走り、警報が一斉に鳴り響いた。

「さっきの一撃ですっ！」

牧野中尉が怒鳴った。

「シールド４３％融解、左部異常加熱警報！」

「くっ！？」

騎体の状態を示すステータスモニターをちらりと見る。

騎体の左側が危険なほど加熱していることを示す赤色で点滅している。

「一体！？」

後衛の二騎のうち、美奈代から見て右騎が何かを構えているのに、美奈代が初めて気づいたのは、その時だった。

巨大な筒――――バズーカだ。

とっさの牽制用に撃ったんだろう至近弾だけでシールドが溶け、騎体は半身が焼けた。

一体、どれほどの高出力のＭＬ（マジックレーザー）が発射されたのか、美奈代はそんなことを考えている余裕さえなかった。

キュィィッ

筒の中が光り出した。次は外さないだろう。

「えっ！」

美奈代騎が動いた時、美奈代が急速後退をかけてその攻撃を回避する機動をとると思っていた牧野中尉は、眼が点になった。

自分の乗っている騎体は後退したのではない。

前進したのだ。

「ちょっ！？」

ここで前進すれば、自分から的になりにいくようなものだ。

いくらなんでも、美奈代だってそれがわかっているはずだ。

それなのに――――？

唖然とする牧野中尉の目の前にバズーカを構えた敵騎が急速接近してくる。

よく考えられて配置された装甲は、幾重にも重なって鉄壁の防護とはどういう代物かを牧野中尉に教えてくれる。

この位置から喉部を狙うことはまず無理だ。

美奈代にどういう勝機――――いや、美奈代自身が正気なのかさえ、もうここまで来たらわからない。

そっと脱出装置の位置を確認した牧野中尉の耳に美奈代の声が響く。

「さくら、シールドパージっ！」

「はいっ！」

美奈代の声に、美奈代騎の左腕が大きく振られ、溶けたシールドが左騎めがけて飛んでいく。

右騎は、シールドを難なくかわした代わりとして、射撃のタイミ

ングを失った。
そこが、美奈代の付け入るタイミングだ。
「そこっ！」
美奈代騎が右騎の懐に飛び込んだ。
ピーッ！
ピピピッ！
ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）にそんな音が響く。
スクリーンに映し出されるのは、敵の装甲だけ。
そのあちこちが光り始めていた。
牧野中尉は、敵騎の近接防御用のＭＬ（マジックレーザー）が発射態勢に入ったことがすぐにわかった。
――まずいっ！
この至近距離からＭＬ（マジックレーザー）を喰らえば無事では済まない！
「准尉っ！後退を！」
たまらず牧野中尉が叫ぶ。
その目の前で、自分の乗る騎が奇妙な動きを見せた。
ザンッ！
大地に斬艦刀を突き刺した右腕が、右騎の腰回りを防御している巨大な装甲プレートの端を掴むと、一気に持ち上げたのだ。
ベギッ！
奇妙な音を残して装甲プレートの可動部を止めていたボルトが破断、装甲プレートが外れた。
装甲プレートに隠れていた右騎の股関節部が丸出しになった。
そこへ――
ガンッ！
再び斬艦刀を握った美奈代騎は、斬艦刀の切っ先を股関節に突き込んだ。
股関節から真上に突き入れられた斬艦刀は、熱せられたバターナイフがバターを易々と溶かし切るように、内部構造物を解かし、破壊した。

騎体の中からは、何かが連続して砕け、爆発する音が響く。
斬艦刀から手を放した美奈代は、とっさに右騎の腕からバズーカをもぎ取ると、撃破したばかりの、その騎体の背後に回った。
背後から襲いかかろうとしていた左騎が、右騎にハルバードを振り下ろそうとする。
右騎の背後から突き出されたバズーカの筒先が左騎の装甲とぶつかった瞬間――
美奈代はバズーカのトリガーを引いた。

「泉准尉が撃破した正体不明の騎は」
作戦終了後、洋上に撤退した“鈴谷（すずや）”のハンガーで、美夜は二宮に言った。
その背後には、美奈代が撃破した三騎のメサイアの残骸が転がっている。
「中華帝国軍の最新鋭メサイア――それも」
整備兵達が忙しく立ち回るのをチラリと見た美夜は続ける。
「王制党親衛軍の次期専用騎と見て間違いないわね」
こうして見ると、その装甲の分厚さは信じられないほどだ。
整備兵達が騎体のあちこちを調べているのを眺めながら、美夜は嬉しげに言った。
「この騎をこの程度の破壊で確保出来たことは、実に有益な事よ」
そして、苦い顔をしている二宮に言った。
「あんたの騎体中破は、部下の功績で不問にされるだろうし」
「……感謝、します」
二宮は、むすっとした顔で敬礼した。
その顔が余程気に入ったのか、美夜は嬉しげに微笑んだ。
「あんたの弟子にしておくにはもったいない素質ね。あの子」

「……」
「育てた甲斐があったんじゃない？」
「このことで」
二宮は言った。
「つけあがらなければ良いけど」
「大丈夫じゃない？」
“鈴谷（すずや）”帰艦時点のスコア１６騎、陸戦艇１の戦果は、むしろ伝説の世界だ。
美奈代騎担当の整備兵達の足取りが明らかに軽いのがわかる。
「――――とはいいたいけど」
美夜は、ちらりと二宮を見た。
「あの子、抜擢されるかもよ？」
「抜擢？」
「内親王護衛隊（レイナガーズ）か、天皇護衛隊（オールドガーズ）」
「まさか！」
「なにがよ」
美夜はあきれ顔だ。
「宗像准尉だって、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）配属が内定していたんでしょう？それに、あなただって――――」
「おおいっ！艦長っ！」
ハンガーの隅々まで届くその大声を発したのは、坂城だった。

「あの騎体のことだが」
今、艦長室にいるのは、坂城とその部下のシゲ、美夜と副長の高木少佐。そして二宮と長野だけだ。
壁にもたれかかった姿勢で腕組みをする坂城の表情は、愛用のレイバンに隠れてわからない。
「エライことがわかった」
「エライこと？」

「電磁筋肉はアメリカ製のE&H社製の最新型。去年の冬、シンガポールの見本市でお披露目になったばかりの量産されていないヤツだ。ついでに電子機器の大半はドイツ製」
「……」
「……」
皆がポカンとした顔で坂城を見た。
撃破したのは中華帝国騎だ。
戦闘後、捕虜となった騎士とMC（メサイアコントローラー）は中華帝国人だ。
「どういうことです？」
長野が訊ねた。
「対立する国のパーツで組み上げた騎だというのですか？」
「そんなこと、俺が知るか」
坂城はにべもなく答えた。
「俺は技術屋で、政治屋や外務の役人じゃねぇ」
「……」
「といっても、俺からすればもっと厄介なことがある」
坂城はそう言うと、ポケットから何かを取り出すと、長野に放り投げた。
「外せたのは、それだけなんでな」
それを長野は両手でキャッチした。
銀色に輝く金属の塊。
サイズはタバコのフィルターくらいだ。
恐ろしく軽い。
「検査は中央に任せるつもりだ。“鈴谷（すずや）”の機材じゃ詳しいことはわからねぇ」
「これは？」
手の上で転がすように眺めていた長野が訊ねた。
「泉の嬢ちゃんがブッ倒した騎が掴んでいたエモノから外したのさ」
「獲物？あのバズーカですか？」
「ああ」

坂城は顎で合図すると、脇に控えていたシゲがテーブルに写真を数枚、ひろげた。
「長野大尉さんよ――――そいつが何で出来ているか、わかるか？」
「……アルミですか？」
二宮や美夜達も長野からその金属を受け取った。
「そうね……でも、アルミにしては感触が」
「詳しくないけど……セラミックかしら？」
「硬度からしてアルミでもセラミックより固てぇ」
「じゃぁ、なんです？」
「さぁな……学者先生にでも聞いてくれ」
壁から離れた坂城が、写真に広げられたテーブルに両手をついた。
「俺からすれば、泉の嬢ちゃんの最大の功績は、“こいつ”を捕獲したことだ」
テーブルの上に広げられた写真は、すべてあのバズーカの各部を撮影した物だ。
「単なる……」
長野は、そこまで言いかけて口を閉ざした。
実体弾ではなく、大口径高出力のＭＬ砲（マジックレーザー）だ。

それだけなら、長野は発言を止めなかったろう。

問題は、発射時にＭＬ（マジックレーザー）特有の反応は何もなく、メサイアのシールドを瞬時に融解させるほどの破壊力を持つ。
トドメとして、横にいる上官、二宮が感知するどころか、避けることさえ出来なかったことだ。

ＭＣ（メサイアコントローラー）二人が“攻撃はセンサーで拾えなかった”と主張しているし、ログもその通りだったことを示している。
ＭＬ（マジックレーザー）攻撃飛来を告げるセンサーが、ＭＬ（マジックレーザー）攻撃を検知出来なかった。
かすっただけで、対ＭＬ（マジックレーザー）コーティングが施された装甲が溶けた。

それは、看過出来る話ではない。

「これから話すことは、俺の仮説に過ぎねぇと思われるだろうが」

坂城は言った。

「こいつは人類の造った代物じゃねぇ」

「……は？」

二宮と美夜が目を点にした。

「どういう？」

「まず、こいつにはネジがねぇ」

二宮が見る限り、坂城は本気だ。

「それらしいモノぁあるんだが、バラし方がわからねぇ。もし、中華製だとしても、工業規格ってもんは今時世界共通だ」

「……」

「わざわざ、この砲のためだけに、特別な規格を造ったなんてこたぁありえねぇ」

「……よろしいですか？」

坂城とほぼ同い年の高木が言った。

「憲兵隊からの報告によれば、捕虜が興味深いというか、おかしなことを」

「ん？」

「あの兵器は、中華帝国でも知っている者はごく一部で、単に“筒”とだけ呼ばれていたそうです。捕虜達も数日前に初めて見たと」

「“筒”？」

「はい。装弾数6発。実は」

高木が首を傾げた。

「おかしい。というのは、ここからでして」

「言ってみろ」

「はい――パイロットやMC（メサイアコントローラー）達が知っているのは、その砲の使い方……単に、トリガーを引くことだけなんです。しかも、彼らは、

この兵器をＭＬ（マジックレーザー）を発射出来るバズーカ程度としか聞かされていません。使用後は梱包の上本国送り。なにより分解整備は禁止されていたそうです」

「……で、だ」

坂城はテーブルの上にあった写真の一枚を掴んだ。

筒の端に取り付けられていた金属製のプレートが写っていた。

「何て書いてあるかわかるかい？」

「ん？」

美夜が写真を受け取ったが、

「……？」

首を傾げるしかなかった。

「少なくとも、目にしたことのある表記じゃないわね」

「北京語、ハングル、アラビア語にサンスクリットまで調べたが、該当するモノぁねぇ」

「じゃあ？」

「……シゲ」

「へい」

脇に控えていたシゲが鍵の付いたアタッシュケースを開いた。

「……こいつは、アフリカの記念にもらっておいた代物だ」

アタッシュケースの中身は、半ば焼けこげた金属のプレートだった。

「これは？」

「魔族軍のメサイアの残骸さ」

「！？」

その一言に、二宮と長野の表情が強ばった。

「アフリカで撂座した魔族軍メサイアで、“鈴谷（すずや）”に収容されたのがあったろう？あの騎体から剥がれ落ちたプレートが、これだ」

坂城は写真とプレートを横に並べた。

「――――比べてくんな」

「……い」
何度も見た。
目が痛くなるほど見比べた。
そして、そういう結論にイヤでも達した。
「一体……これは」
長野が救いを求めるように上官達の顔を見た。
その表情は硬く強ばっている。
「……坂城整備班長」
美夜は殺気だった声で言った。
「情報に感謝する」
「プレートは返しておくさ」
坂城は言った。
「これから、イヤでも手にはいるだろうからな」
坂城がアタッシュケースから取り出し、写真の上に乗せたプレート。
写真とそのプレートをみれば、イヤでもわかるだろう。
一つは魔族の兵器からとったプレート。
もう一つは、中華帝国軍メサイアの兵器のプレート
接点はない。
あってはならない。
そのはずなのに。
「中国人っては、誰と商売しているんだ?」

二宮の皮肉を咎める者は、ここにいはなかった。

誰でも一目でわかること。

プレート同士の言語は――共通していた。

●3日後　レイテ島沖合　“鈴谷（すずや）”

ほとんど休養もなしで航海と戦闘に明け暮れた“鈴谷（すずや）”に、ようやく補給艦“能登”が接触した。

“鈴谷（すずや）”より大型の補給艦が、洋上でドッキングアームを伸ばして、“鈴谷（すずや）”とドッキング。

そのまま平行して航行する光景は、ちょっとした見物だ。

飛行し続ける飛行艦同士を伸ばしたアームで接続。その状態で物資や人員の行き来を可能にするには、速度、高度、あらゆる条件を双方の艦が満たし続けなければならない。

ちょっとしたきっかけでドッキングアームが外れでもしたら、中の物資や人員は、アームごと“不可視の海”に叩き込まれ、原子の塵と化してしまう。

飛行士ながらの飛行艦同士の補給は、それほど高い操艦技術を要求されることなのだ。

「“鈴谷（すずや）”と“能登”両方のMC（メサイアコントローラー）さん達がデータリンクして動かしているんだって」

飛行艦同士が一糸乱れぬ平行を見せる、その航行技術に半ば感動していた美奈代にさつきが言った。

「この間、MCさん達、ずっとSCLの中詰めっぱなしで、少し可哀想だけどね」

「まぁ……みんなのためだから少し我慢してもらうしかないような気も」

ドッキングアームのハッチが開き、双方の行き来が開始された。

外からはわからないが、中が物資や人員の搬送エレベーターになっているドッキングアームからは、“能登”が積み込んできた様々な物資が“鈴谷”へと送り込まれる。

「知ってる？“鈴谷”のMCって、私達とかわんないんだって」

「へえ？」

「たしか榊心少尉とか聞いたなぁ。食堂で見たことあるけど、かわいい女の子だよ？」

「女の子がこんな飛行艦扱うのかぁ」

ドッキングアームに入りきらない大型物資を運ぶキャリアが能登を発艦したのを眺めながら感心したように頷いた。

「すごいな。機会があったら顔くらい見ておきたいなぁ」

「でね！？」

待ってました！と言わんばかりにさつきが目を輝かせた。

キョロキョロと辺りを見回すと、美奈代に小声で言った。

「その子に……宗像がフラれたって」

「へぇ？」

突然の言葉に目を丸くしたかと思うと、美奈代の目には野次馬根性丸出しの光が宿る。

「詳しく聞きたいな」

「うん♪実はね？」

そんな会話をする二人の真下。一機のTACが“鈴谷”に着艦しようとしていた。

●“鈴谷”ハンガーデッキ

「程度は申し分ないわね」
“能登”へ運び込むために大型ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）へ移し終わったばかりの緑のメサイアの残骸。
その頭部を見上げる場所で、そんな声をあげたのは白衣を羽織った背の低い女の子。
赤毛のショートカットにクリッとした目が可愛らしい。
名を津島紅葉（つしま・もみじ）という。
近衛では中佐という破格の待遇を与えられている。
「――で？」
「こっちだ」
横に立つ坂城が親指で指さしたのは、検証のため装甲を外されたメサイアの腕。
メサイアの動力部――電磁筋肉が丸見えだ。
「へえ？」
飛行艦内の無重力に慣れているらしい。理系には珍しいほど機敏な動きで床を蹴った紅葉は、手助けもなくメサイアの腕部にたどりつくと、白衣が汚れるのも気にせず電磁筋肉の中に顔を突っ込んだ。
「――どう見る？」
「Ｅ＆ａｍｐ；Ｇの」
あちこちを触りながら、紅葉は答えた。
「ＥＭＳ２２－３０８Ｇね。見通者（シーカー）仲間のＤｒ．プーキシンが、借金返済のために作ったヤツ。よく出来た作品だから覚えている」
「よくわかるな」
坂城は事前に何も言っていない。それでも何一つ間違うことなく紅葉は答える。
「……さすがというべきか」
「こっちはイギリス……こっちのセンサーピンはドイツ……あっちこっちで盗んできた代物でしょうね。こりゃ、建造費高いのか安いのか」
紅葉はようやく腕部から顔を出した。

「肩部装甲のフローシステムはラムリアースから盗まれたヤツ。手配回っているからはっきりわかる。あっちこっちにシリアルナンバーを削り取ったり、何か偽装した痕跡がある。メサイアのパーツなんて戦略物資の最たるものだから」

「……あの国のこった。闇マーケットとでも繋がってんじゃねぇのか？」

「あの国そのものが、闇マーケットだもん」

紅葉は笑って答えた。その視線の先には、修復や整備を受けるメサイア達がいた。

二宮騎は右脚部を根こそぎ吹き飛ばされ、“能登”が運んできた交換パーツの組み付けが始まっていた。

「で？私にわざわざＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）使ってまで見に来いって誘ってくれた、面白いモノってのは？」

「こっちに保存してある」

それは、メサイアの残骸が山積みになっている大型ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の横に停止していた、一回り小型のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）。

ペンキが劣化しているのか、ペンキがあちこちで剥げかけている巨大な筒がそこに横たわっていた。

「何しろ、Ｘ線を通さねぇから中の構造がわかんねぇ」

「……でしょうね」

紅葉は強ばった声で言った。

「これは――こんなところで実物拝むなんて思わなかったわ」

「ん？」

「アフリカ戦線で魔族軍が使っていた大型砲よ。まともに喰らったメサイアが蒸発したって報告、読んだことがある」

「やっぱり、出所はそっちかい」

筒の横に転がされているのは、その直撃を受けた美奈代騎のシールドや二宮騎の装甲が参考用として積まれている。

分厚いメサイアのシールドが、まるで熱であぶられたプラモデルのように溶けている。

整備生活３０年近い坂城も、メサイア携帯用ビーム系兵器の攻撃で装甲がこんな風になったなんて、聞いた試しがなかった。
「原理が応用出来れば、ＭＬ分野（マジックレーザー）での革新的結果が残せるわ」
「出来るかい？」
「やってみる」
紅葉は筒にとりついた。
触った手にひやりとした感触が走る。
「問題は」
その感触に、思わずポツリと呟いた。
「コイツを私がコピー出来るかね」

●ボルネオ島中華帝国軍陣地
鼓膜が破れそうな音と、口を開けば舌を噛みそうな程激しい振動が支配する世界。
空爆を受ける世界とは、大凡そういうものだ。
米軍の猛烈な反撃は、鉄の嵐という言葉を具現化した形で行われた。
上陸用舟艇から発射されるロケット弾攻撃。
艦の種類を問わない艦砲射撃。
昼夜を問わない爆撃機による空爆。
地下陣地を駆使して死に物狂いの抵抗を見せていた中華帝国軍だったが、火炎放射装備のグレイファントム部隊の前には為す術もなかった。
戦闘開始から3日。
中華帝国軍は、すでに沿岸部陣地を放棄。
ボルネオ島の山間部への移動し、少数によるゲリラ攻撃に戦術を変更していた。

一方、米軍は中華帝国軍が潜んでいるとおぼしき場所に容赦なく絨毯爆撃を続け、グレイファントムを投入し、将兵をジャングルごと焼き払った。

中華帝国軍将兵は、戦闘と呼ぶにはあまりに一方的な戦況の中、米兵を震え上がらせる程の戦いを見せた。

導火線に火のついた爆薬を背負い、全身に銃弾を浴びながら米陣地へ飛び込んだ少年兵や、戦死者の山に数日間潜んで米軍の後背から攻撃を仕掛け、倍する戦力の米軍と差し違えた部隊などは枚挙に暇がない。

昼夜を分かたず、死を怖れず、果敢、いや、狂ったように攻撃してくる中華兵、そして彼らがジャングルの中に仕掛けた様々なトラップに、米軍兵士達は心身ともに追いつめられた。

肝心のグレイファントム相手にでさえ、中華兵達は生身で立ち向かったのだ。

火炎掃射のため接近するグレイファントム。

その予想針路にあるタコツボや砲撃孔に水を入れておき、グレイファントムが近づくとその孔に身を潜める。

グレイファントム達の熱源探索にひっかからないための工夫だ。

そして、その巨大な脚が近づくなり穴から飛び出してグレイファントムの脚に踏みつけられる。

背中に背負っていた高性能爆薬がその代償として、グレイファントム達の足を吹き飛ばす。

突然この攻撃を喰らい、ショックで火炎放射装置のトリガーを引き、前方を移動していたグレイファントムを火達磨にしたケースもある。

あるいは、対戦車ランチャーを火炎放射装置にむけて発砲。一瞬で火葬された騎も一騎や二騎ではない。

最も弱いはずの歩兵が、世界最強のグレイファントムを喰う。

苦肉の策として、前進するグレイファントムの周囲を歩兵が守るに至っては、グレイファントムは、米軍将兵にとっての守護神の位置から引きずり降ろされ、単なる兵器に落ちぶれることを余儀なくされた。

米軍再上陸作戦開始から一週間が経過。

負傷を理由に後送される米軍兵士の内訳は精神的異常者――つまり、発狂したり精神に何らかの障害を生じたと判断された者が、肉体的負傷者の2倍に達した。

それだけで、中華兵達がどれほどの戦いぶりを見せたかがわかるだろう。

その中華兵達達を率いた朱少将は、すでに陸戦艇を降りていた。

朱少将達司令部スタッフに銃を向けてまで降ろした陸戦艇艇長以下、陸戦艇乗組員は、海岸に上陸する米軍上陸部隊に対する阻止砲撃を敢行。

日米両軍の航空隊数十機を撃墜し、グレイファントム6騎、戦車25両、数百名の海兵隊員達を吹き飛ばし、第一次上陸作戦を失敗に追い込んだ代償として、戦艦と砲撃部隊の集中砲火を浴び、乗組員全員が戦死した。

“赤兎（せきと）”や“帝刃（ていば）”達も可動騎はすべて米軍陣地に斬り込み、搦（から）め座（くざ）した騎から、手近なグレイファントム達に抱きつくなどして、米軍を巻き添えにした壮絶な自爆を遂げて逝った。

脚をやられるなどして稼働しない騎はＭＬ砲台（マジッククレーザー）として戦闘に参加。

集中砲火を浴びて倒れて逝った。

すでに、中華兵達には弾薬も食料も医薬品も、何一つ残されていなかった。

戦闘開始から１０日目を過ぎた辺りから、ジャングルの動植物を食べ、毒に当たって死ぬ兵士が続出。

それでもなお、米軍に投降した兵士は数える程しかいない。

投降するフリをして、米兵に隠れたところで手榴弾の安全ピンを抜く兵士ばかりが目立った。

おかげで米兵は蠅の集った中華兵の死体にまで銃撃を加えてからでなければ恐ろしくて近づけない。

動く中華兵は例え投降の意志があったとしても、撃ち殺す。

そうしなければ、自分が殺されるという恐怖感が先に走るのだ。

部隊からはぐれた挙げ句、空腹に耐えかね、食べ物を求めてジャングルをさまよっていた少年兵が、今、米兵達に取り囲まれていた。

跪かされ、両手を掲げた少年兵は、まだ歳の頃は１８程度だろう。

ボロボロの軍服から見える白いうなじが痛々しい。

「殺さないで」

少年兵は泣きながら懇願した。

「死にたくありません」

言葉が違う。

通じるはずがない。

それでも、懇願するしか、少年兵に出来ることはなかった。

涙に歪む顔を覗き込む米兵達の顔には何の感情も浮かんでいない。

その中の一人が、顎で少年兵をしゃくった途端――――

バンッ！

バンバンバンッ！
ジャングルの中にそんな音が響いた。
両手を掲げた大の字の姿勢で、少年兵の死体が兵士達の輪の中に転がった。
銃弾を浴びて穴だらけになった軍服から血が噴き出し、ジャングルを血で染める。
「――――おい」
くわえタバコを少年兵の死体に放り捨て、軍靴で踏み消した兵士が隣にいる兵士に声をかけた。
少年兵と年端は変わらないだろう若い兵士は、上官である人物の声に弾かれたように反応した。
「はいっ！」
「銃剣はつけているな？」
米兵達は、時にナイフや先端を鋭く削っただけの即席の槍だけで襲ってくる中華兵に対応するために、小銃に銃剣を装着していた。
「はい」
「――――やれ」
若い兵士は、何を命じられたかわかっている。
上陸してからというもの、死体に出会うたびにやらされている。
最初こそ、その手に走る感触に気絶しそうにさえなったが、今では何とも思わない。
兵士は小銃を構えると、少年兵の死体を数回、刺した。
心臓と肝臓を中心に数回。
米兵達の言う、死体チェック。
本当に死んでいるか、銃剣で突き刺して調べるという代物だ。
もし、何かの間違いで少年兵が生きていたとしても、これで致命傷になるはずだ。
「終わりました」
少年兵の死体に深々と刺さり、血まみれになった銃剣を引き抜いた兵士は報告した。

「――よし」
新しいタバコに火を付けた兵士は、何でもないという顔で死体を一瞥し、
「移動するぞ」
そして、少年兵を刺すことを命じられた兵士に言った。
「ジャック、“耳狩り”をしてからついてこい」
「はい」
ジャック。
そう命じられた兵士を除き、他の兵士達は移動を開始する。
残された兵士は、小銃から銃剣を引き抜くと少年兵の耳を掴んだ。

中華帝国軍がかくもあっさりと敗北した理由。
それははっきりしている。

補給だ。

米軍が南シナ海の補給路を破壊した。
これに対し、中華帝国軍司令部は満足な対応をとらなかった。
朱少将が熱望した補給は、最後まで満足に行われなかった。
補給の代わりに司令部が朱少将に命じたのは、地下資源の予定通りの納入だった。

地下資源補給のノルマを達しないなら、補給はないと思え。

補給線を断たれ、輸送手段も失った朱少将達に司令部はそう言ってのけた。
再三に渡る補給要請はすべて握りつぶされた。
そして、米軍上陸阻止失敗の報告を受けた司令部は、朱少将の更迭と地下資源採掘施設の全ての破壊を命じて来た。

敗北の責任を現地司令官の朱少将一人に負わせ、ボルネオ島の資源を敵に渡さないための措置だった。

米軍上陸開始から１２日目

朱少将はジャングルの中にあった洞窟で自決。
自らの意志ではない。
命令によるものだ。

洞窟の周囲は、負傷兵や戦死者の死体にまじって、まだ動ける兵士達が飢えと闘っていた。
周囲に米軍の姿はない。
弾薬切れ、燃料切れ、修復不能――補給一つでどうにでもなりそうな理由で、彼らは米軍と戦うどころではなくなっていた。

米軍の重爆撃隊がこの洞窟付近を空爆し、グレイファントム達が周囲を焼き払ったのが丁度１４日目。
米軍はこの日正式にボルネオ島の占領を宣言。フィリピンから東南アジアへと通じる反撃ルートをようやく開くことに成功。

対する中華帝国軍は、インドネシアにかなりの戦力を割かれる結果に陥った。

実はこの日――

北京ではちょっとした動きがあった。
中華帝国軍補給部門の軍官僚６名と民間海運会社の幹部２５名が逮捕されたのだ。

容疑は、ボルネオ島守備隊に対する補給物資の横領及び横流し。

食料１５０トン、武器弾薬２個師団分を搭載した大型コンテナ補給艦“成都６０５号”及び同“大興３０１号”が軍司令部命令によって海南の軍港を出港したのは米軍上陸作戦の前。

続いて“広西７０５号”が出港。

その後も数隻が守備隊向けに補給物資を書類上は輸送していた。

帳簿上の結果は――米軍の攻撃により沈没。

全ての物資が朱少将達の元に届いていれば、ボルネオ島守備隊将兵はあと１ヶ月は戦え、戦況は大きく変わっていただろうという点で、米中の研究家の意見は統一されている。

それほどの物資の輸送を担当したのが、軍の依頼を受けた“長福海運”だ。

補給担当の軍官僚と海運会社は結託してボルネオ島守備隊向けの物資を洋上で別の船舶に載せ替え、船舶は、途中で、あるいは任務達成の後、帰途に攻撃を受けて沈没したとして軍から補償金を受け取った。

沈没していないのに沈没したと虚偽の報告をした船は、艦名を塗り替えて船籍名簿に別な船として記載、即座にベトナムなど東南アジア方面の別業務に就かせた。

再三に渡る補給が届かないのは補給線が断たれているせいだ。

朱少将達はそう思っている。

一方、少なくとも何割かの物資は届いていると報告を受けている上層部は、物資不足は朱少将の焦りによるものという補給部門の虚偽報告を鵜呑みにし、地下資源が届かないことに苛立ちを募らせていた。

補給要請はすべて補給部門の軍官僚によって握りつぶされ、その補給物資は彼らの私腹へと消えた。

結果としてボルネオ守備隊は文字通りの玉砕に追い込まれ、中華帝国軍の東南アジア方面の作戦手順に致命的な影響が生じた。

それが、皇帝に告げられた事態の“真相”だ。

だが……

考えてみて欲しい。

軍官僚とはいえ、補給部門のスタッフが再三に渡る補給要請を完全に握りつぶすことが出来たのか？

横流しで得た利益の7割が戦後もどこに消えたのか、その流れがようとして掴めないのは何故か？

オーストラリア軍と中華帝国軍が両端から攻める形でインドネシアが完全に両軍の支配下に置かれた日、軍官僚達は　家族諸共、火刑台に消えた。

彼らは、一切の真相を口にすることもなかったが、多くの国民はわかっていた。

この事件の黒幕がどういう連中かを――

鬱陵島事件　第一話

●スイス　ベルン

「全く」

高級ホテルの一室に、憮然とした声が響く。

「ユギオ。あれはないだろう？」

「まったくです。悲劇になりましたな……」

「封印されてたのが、よりにもよって、“あいつら”の解除“鍵”だとは」

「……」

「どうするんだ？」

「指導部は、解除を命じてきました」

「本気か？」

「はい」

「指導部は、“不死の軍団”をコントロール出来ると、本気で思っているのか！？」

「指導部の命令は、私にとって絶対です」

「……そうか」

「解除命令が出ている以上、それが神だろうと悪魔だろうと、封印を解くだけです」

「封印地点は、あの弓状列島の近くだったな」

「ええ。すでに解除部隊は派遣しています」

「……気の毒な任務に就く者もいたもんだ」

「まったくです」

●大韓帝国領　糖花島（とうかじま）周辺海域

大韓帝国領鬱陵島から東南東へ約６５キロに位置する島。
現在の国際法上においては、大韓帝国領に属する。
総面積約は約１０２平方キロ。面積は鬱陵島より広い。
糖花島の由来となった糖花山の山頂から海岸の下にまで達するなだらかな斜面があるだけの島。
目立つのは、山頂付近から出る有毒ガスによって赤や黄色、そして白に彩られた糖花山だけ。
この色から、かつては朝鮮と日本を行き来した船舶の目印とされ、愛されてきた。
同時に、この島は、近づく者はいない、死の島として恐れられてもきた。
周辺の潮流は強く、さらに周辺は岩場が多い上に、糖花山からつながる斜面のせいで海岸は極めて水深が浅い。さらに、風の流れによっては、いつ有毒ガスに襲われるかわからぬ危険な島なのだ。

今、その島を取り囲むように、大韓帝国海軍のコルベット艦隊が展開していた。

「愛国観測隊からの通信が途絶してからすでに２５時間です」
コルベット艦隊を率いる提督に、参謀が報告した。
「有毒ガスに襲われたとしても、異常です」
無言の提督に、参謀は続けた。
「愛国観測隊は、熱烈な愛国者からなる糖花島気象観測部隊であり」
「ああ。そうだろうな」
提督は参謀の言葉を遮った。
「政治犯に愛国者のレッテル張って、あそこに送り込んでいるのをそう呼ぶならな」
「王制党の方針に逆らう気ですか？」
提督は、この参謀が一体どんな仕事を兼務しているか思い出した。

「まさか」提督は口元を皮肉そうに歪め、肩をすくめた。
「給料くれる限り、文句はつけんよ」
「……」
「通信、ヘリで向かった連中からの報告は？」
「いまだありません」
「……提督。やはり本国の言うとおり」
「それはありえんよ」
「しかし！」
「政治指導部が言う、あれだろう？日本の特殊部隊上陸？あり得るか」
「指導部の言うところは常に正論であり！」
気色ばむ参謀に、提督は深くため息をついた。
「君――ここは政治討論の場ではない。まして私は軍人として、政治に口は挟みたくないのだ。軍人として、目の前の職務。糖花島（とうかじま）において発生した観測隊通信途絶の原因究明にのみ、専念させてくれないか？」

●糖花島（とうかじま）観測隊兵舎付近
ガスマスクをつけた兵士達が警戒しながら兵舎に近づく。
濃い霧が立ちこめる中、濡れた足場に顔をしかめながらの前進。
目の前にプレハブ作りの簡素な建物が見えてきたのは、本当に建物から数メートルとは離れていない距離に近づいてからだ。
建築現場によくある古ぼけたユニットハウスというか、掘っ建て小屋という方が近い建物が3、４棟並んでいる。
――毒ガスが立ちこめる島にこんな建物で生活出来るのか？
部隊長はそう思って顔をしかめた。

一番大きな建物の入り口には、ハングル語で「糖花島観測隊」と書かれた看板が掲げられている。

「金、応答しろ、金」

部隊長が斜め後ろの兵士に通信機越しに声をかけるが、何故か兵士はこちらに気づいていない。

装備しているガスマスクのせいで、部隊内でも声が伝わりづらい。

通信機はそのための必需品だ。

だが、その通信機に応じようとしない。

痺れを切らせた部隊長が兵士の胸ぐらをつかんだ。

「貴様、何故返事をしないっ！」

「えっ!?」

胸ぐらをつかまれた兵士は驚いたように言った。

「た、隊長殿は自分を呼んだのですか!?」

「通信機を切っているのか!?」

「いえっ！」

兵士は叫んだ。

「自分は通信機を切っていませんっ！」

「隊長っ！」

大型通信装置を担いだ通信兵が部隊長に言った。

「通信機が使用不能。ＧＰＳも反応消失」

「何?」

「敵の強力な電波妨害下にある模様。警戒してください」

「……日本軍が上陸?」

「可能性は否定出来ませんが……他には」

通信兵が小銃を持つ手に力を込めたのが、部隊長にもわかった。

皆、実戦の経験はない。

「……各員」

その中の一人である部隊長は命じた。

「日本軍上陸可能性が高まった。ただし、観測隊の反乱の可能性も

また捨てきれない。抵抗する者があれば速やかにこれを射殺しろ」

ガンッ

「っ！！」

「！？」

不意に、兵舎のドアが開き、誰かが出てきた。

部隊の皆が、突然の出来事に数歩、後ずさった。

「お……おい？」

意を決して部隊長が声をかけてみる。

出てきたのは、本当に白い肌をした生気のない顔の男だった。

まだ若い。多分、２０代前半だろう背の高い男が、妙にふらついた足取りでこちらに近づいてくる。

――――毒ガスの影響か？

部隊長が疑ったのはそれだ。

こんな掘っ建て小屋で毒ガスが防げる訳がない。多分、逃げ遅れるか何かして、観測隊が毒ガスに襲われた。

そう、思ったのだ。

「しっかりしろ！衛生兵っ！」

部隊長は衛生兵の腕を掴むと、近づいてくる彼に近づくように命じた。

衛生兵は、頷くと彼に向かって駆け寄っていく。

その衛生兵を残し、部隊長は残りの部下に命じるべく、円陣を組ませ、その中で大声で怒鳴った。

「総員！観測隊はガスにやられたらしい！生存者を捜せ！」

「はいっ！」

部隊長が、部下達に捜索範囲を命じようと、地図を開いた直後。

ギャァァァァァッ！！

一度聞いたら一生忘れない。そうとしか言い様のない、凄まじい悲鳴が響き渡った。

「何だ！？」

全員が悲鳴のした方角を見る。

そして、絶句した。

あってはならない立場で、あの男と衛生兵が、そこにいた。

あってはならない立場？

そう。

あってはならない立場で、だ。

本来なら、男が横たわり、衛生兵がその看護を行っているはず。

それなのに、倒れているのは衛生兵だ。

「なっ！？」

部隊長が、いや、その場に居合わせた全員が目を見開いたのも無理はない。

その男の所行だ。

その男は、倒れた衛生兵のボディアーマーを開き、何か赤黒いモノを引きずり出し、口に運んでいた。

衛生兵の内臓だと理解出来たのは、かなりの時間が必要だった。

血まみれの手で熱心に口に臓物を運ぶ男。

その光景に、部隊長達は感覚が麻痺したように動けなくなった。

「な……ど……」

ヴゲェッ！

ゲェッ！

何人かがガスマスクを開き、地面に吐いた。

衛生兵の臓物が少しずつ男の口に運ばれるたびに、衛生兵の手足がわずかだがビクビクと動く。

「こ、このぉっ！」

ズダダダダッ！

部隊長の小銃が男を蜂の巣にする。

男は、臓物を口に運ぶ姿勢のまま、小銃弾の嵐に頭を吹き飛ばされ、手足をもがれ、ようやく動きを止めた。

「こ……この……バケモノめがっ！」

マガジンに装填した弾丸すべてを撃ち尽くした部隊長は、いまだ銃口から煙がのぼる小銃を手に、震える声で命じた。

「総員、一時ヘリへ戻る！ここは危険だ！」

「り、了解っ！」

ヘリポートからここまで約３００メートル。

部隊長は部下に率先してヘリまで駆け出した。

ヘリまでの数百メートル。

濃い霧の中に、何がいるか知らずに――

●島内某所

ピチャ
ピチャ
ズリュ
ズリュッ

息が詰まるほど濃い、血の匂いが立ちこめる中。
そんな音がする。
何かをすすり、
何かを食いちぎるような音。
その音は、ドレスが汚れるのも構わず、男の首筋に吸い付く女の口から出ていた。

音がするたびに、男の全身がビクリと動く。
痙攣しているのだ。
その顔は蒼白。
目の焦点は合っていない。

力無く、ただ、投げ出された手足が、ピクピクと動く。

しかも、男は、その襟首を女に片手で持ち上げられていた。

「……」
不意に、女が男の首筋から口を離した。

そして、男をまるでゴミのように壁に叩き付けた。
グシャッ
そんな鈍い音を立て、男が奇妙な姿で壁から床に落ちた。
人間離れした力を見せた女は、恍惚とした顔で、辺りを見回した。
先程の彼のように、力無く倒れる多くの死体が足下に散乱している。

「……お前は」
暗闇の奥から、しわがれた声がした。
「礼儀というものを知らぬのか」

「……そんなこといわれても」
女は、無表情に答えた。
「せっかく、解放されても力が足りないのです」

「だからといって、封印を解除してくれた恩人に食らい付くこともあるまい」

「お礼ですわ」

「……それで？」

「見ての通りじゃ」

「あらあら。大したことのない」
壁のモニターを黙って見つめていた女が、楽しそうにほほえんだ。
「二千数百年の未来ですもの。人類ももう少し骨があるかと思えば」
「……そんなものだ」
「それでも……」

女は不服そうに言った。
モニターの向こうでは、彼女たちが見たことのないカーキ色の服を着た男達が、観測隊の服を着た男達の食事にされていた。
「たかが屍鬼（グール）ですわよ？」
「そんなものじゃろうて」
「ふふっ」
室内に灯りが点った。
広い室内は、モニターの他、様々な計器類に埋め尽くされていた。
計器類に張り付くように魔族軍の軍服姿の兵士達が何事かの操作にかかりっきり。
二人はその奥、数段高い場所に据えられた椅子に座っている。
一人は髪の長い切れ長な目をした美女。背は高く、すらっとしたボディラインを体にぴったり張り付くような黒いドレスに潜めている。
艶容という言葉そのものの女の声に何の感心も抱かぬのか、平然とした男がただモニターに視線をむける。
黒いローブからのびる手足は骨張っていて、生気はまるで感じない。
フードの闇に隠され、男の顔もわからない。
「所詮は……ロクでもない方へとばかり進歩したらしいな」
「それで？」
女は訊ねた。
「どうするのです？」
「……間違った進歩なら、正すのみだ」
「そういうことですね」
「そのために、我々は眠りから目覚め、こうしてここにいる」

「では、そういうことで――――“天壇”、始動します」
「――――うむ」

ズズズズッ……

「なっ、何だ!?」

突然、襲ってきた高波に翻弄される艦の中で羅針盤にしがみついて転倒を避けた提督達は、目の前で起きる事態に絶句した。

霧に包まれながら浮かぶ糖花島(とうかじま)が震えていた。

違う。

糖花島(とうかじま)が、浮かび上がっていた。

「ば……馬鹿な」

そうとしか言い様がない。

「島が……浮いた?」

まるで夢のようだ。

海水を吐き出しながら、飛行船のように、巨大な島が浮いていた。

「提督!」

救いを求めるような部下の叫びに、提督はやっと、自らの果たすべき義務を思い出した。

「つ、通信!現状を本国へ通報しろ!糖花島(とうかじま)が浮上したと!」

「ば……馬鹿な」

「映像を党指導部へ送れ!」

提督は参謀に怒鳴った。

「頭の固い連中が、これを見てどう思うか、はっきり聞いてみたいわ!」

「党に逆らうつもりですか!」

「現実だろうが!」

バキッ!

提督の拳が参謀の顔面を捉えた次の瞬間。

提督と、その艦隊は――――消滅した。

●“天壇”内部

「防御力は、大したことないですね」

「ダユー……お前はとことん、遠慮というものがない」

「ですけどぉ」

“ダユー”と呼ばれた美女がはにかむように微笑んだ。妙齢の美女が、それだけで初々しい少女にさえ見えてくるから不思議だ。

「コルヌアイユ家の娘ならもう少し慈悲を持て」

「ふふっ。あの連中を使う身の慈悲と言えば、さっさと殺してあげること――――違います？」

ダユーの細い指が指し示すのは先程のモニター。

男達は兵士達の骨にしゃぶりついていた。

「我が屍鬼（グール）の軍団――――久方ぶりの復活じゃわい」

「では、グラドロン様はヴォルトモード軍と再び？」

「あの男は、正直気に入っておる」

男――――グラドロンは言った。

「ヤツのためにもう一働きしてやろうと思う――――とはいえ、今はその下準備が必要じゃ。封印が解除されたばかりで、屍鬼（グール）共の力が足りん」

「どうなさいます？」

「コランタン……天壇の進路を島へ向けろ。上陸部隊は揚陸艇に移乗。“食料”を確保せよ。近づく敵はかまわん。全て殺せ」

「了解」

二人の背後に控えていた白いローブ姿の男が恭しく頭を下げた。
コランタンが部下に命じる号令を聞きながら、ダユーは思い出したように訊ねた。
「念のため、メース隊は出しておきますわよ？」
「――――好きにしろ」
「ふふっ。グラドロン様の“不死の軍団”と私の“不死鳥軍団”…
…未だに健在であることを、世界中にアピールしてみせましょう」
「――――思い出す者は、そう多くはあるまいがね」

●日本海上空
糖花島（とうかじま）に異変があったらしい。
糖花島（とうかじま）付近に展開していた第２艦隊と通信が途絶した。
政府は、日本軍の攻撃と断定した。
空軍が出撃するが、念のためだ、貴様等も行け。
後発で第２中隊が出る。
韓国軍第１２２メサイア小隊グレイファントムＫＡ４騎を率いる李大尉の受けた命令はそんなものだった。
李大尉には、上官の命令の意図はわかっている。
日本軍が攻めてきたというのに、空軍にばかり大きな顔をされたくない。
要はそういうことだ。

「た、大尉」
困惑した部下の声通信機越しに聞こえてくる。
「あ……あれは一体？」
「金ＭＣ（メサイアコントローラー）、あれは……まさか」
「全長１５キロ、間違いなく、糖花島（とうかじま）……です」

「……馬鹿な」
糖花島は、島だ。
海面に顔を出しているものだ。
それがどうして空に浮いている？
「まさか……日本軍が？」
「バカか。張」
部下のつぶやきを李大尉は即座に否定した。
「いくら何でも、糖花島を空に浮かせて、日本軍に何のメリットがある？」
「そ……それは」
「原因は不明だが、幸い、空軍の対艦ミサイルが命中したところからして、満足な対空兵器はないと見える。全騎、これより糖花島に接近する」
――続け。
李大尉はそう言った。
確かに言った。
部下からの返答は――
白い光だった。
ズズゥゥゥム……！！
「なっ！？」
突然、自らの騎を襲った衝撃の意味を、李大尉はとっさにはわからなかった。
ブースターのスロットルを開く姿勢のまま凍り付いたのが精一杯

だ。
ＭＬ（マジックレーザー）の攻撃？ミサイル？
何が起きた？
「ど、どうした！？」
「小隊全騎反応消失！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）が悲鳴を上げた。
ピーッ！
「攻撃、来ますっ！」

李大尉達を襲ったのは、魔族軍メース“ヴィーズ”を駆るアニエス達だ。
アニエスはコントロールユニット越しに伝わる剣の感触に、決して満足していなかった。
一通過でメースを真っ二つにしてのけたというのに、全く面白くない。
「何だいこの連中は！」
背後で粘っこい爆発音がするが、それさえアニエスの神経を逆なでする。
「全くもってホネのない！」

「１２２小隊、全滅っ！」
「絶対にあの島の侵攻を阻止しろ！」
グレイファントムＫＡ２８騎を率いるメサイア第２中隊長の宗中佐は、せっぱ詰まった声で部下に怒鳴った。
「方法は各自で考えろ！とにかく止めろ！」
冗談じゃない！
彼にはわかっていた。
これは日本軍じゃない！
違うっ！

日本軍であってたまるか！
日本軍は、「南米とアフリカに魔族とかいう得体の知れないバケモノが出た」と称して軍事予算の増額を計り、我が国への領土的野心を燃やしている。
政府はそう言っているし、世論もそう信じてはいる。
この光景を見たら、政府は狂ったように日本を批判し、国民はそのリズムに乗って狂ったように踊るだろう。

だが――違うんだ。

彼の中の、冷徹な軍人としての何かが叫ぶ。

――これは違う！
――あんな島を浮かせるなんて、人間の魔法技術では不可能だ。
なら何が？

分かり切ったことだ。

分かり切っているから――彼はそれに恐怖した。

少なくとも、バケモノに降伏という手段が通じるとはとても思えない。
降伏出来なければ？
その時は……。

「アレの予想進路は？」
自分の駆る騎のMC（メサイアコントローラー）に訊ねる声は、幸いにして震えていなかった。
それだけが、今の救いだ。
「このままでは1時間後に鬱陵島（うつりょうとう）上空へ」

「鬱陵島に攻められたら終わりだぞ？島民の避難は？」
「島に動きなし。島に対する警報も出ていません」
「……」

鬱陵島はただでさえ、有事の際の対日侵攻拠点であり、同時に防衛拠点となる島とされている。
軍事拠点として、本当に意味があるかどうかわからないが、とにかく大韓帝国の繁栄を貧弱なる日本に思い知らせるためとして、政府によって建設された１０万人規模の都市まである。
最近では日本への軍事的圧力を強めるという政府の思惑で、その規模は確か３０万人近くに……。

彼は、そこまで思い出して青くなった。
このバケモノは、そこに攻め込もうとている。反応弾でも撃ち込まなければ止められはしないぞ？

つまり――

そう。
鬱陵島には、防御する手段はない。
島にいる３０万人には逃げる手段はない。あったとしても――遅すぎる。

「政府は？司令部は！」
「未だ正式な命令はなし。現場の判断にゆだねると」
「――ちっ！」
現場の判断にゆだねる。
それは聞こえはいい。
しかし実際は、「現場で判断しろ。結果に責任を持て」というこ

とだ。
上層部は何もしない。
判断さえしない。
ただ、兵隊が血を流して、指揮官が責任をとらされる。
それを、ただ、そう表現しているだけだ。
この国の政府はいつだってそうだ！
「俺達韓国人と日本人の共通点を言ってやろうか？」
「？」
「ロクな政府を持っていないってことさ！」

「俺達韓国人と日本人の共通点を言ってやろうか？」
「？」
「ロクな政府を持っていないってことさ！」
「……政府批判は死刑です」
「どうせこれから死ぬ！くそっ。日本に亡命してやろうか？」
中隊長は小声で毒づいた。
「メサイア手みやげにすれば、そこそこ……」
「ダメですよ」
その声が聞こえたのか、ＭＣ（メサイアコントローラー）がうんざりしたという声で言った。
「こんな騎、近衛軍の使う“インペリアル・ドラゴンシリーズ”に比べたらクズですよ」
「……スクラップ代請求されるか？」
「大隊長と師団長が２０騎連れて島を大きく迂回、その“インペリアル・ドラゴンシリーズ”が着陸した独島へ」
「その分の戦力をこっちに回せ！」
「そういう――敵２、戦闘機動開始！」
「全騎、各個にかかれっ！武器使用自由！何としてもあの２騎を突破！島へたどり着けっ！」

●韓国軍鬱陵島防衛隊司令部
「第二中隊が糖花島（とうかじま）へかかりました」
鬱陵島（うつりょうとう）のほぼ中央に存在する韓国軍鬱陵島司令部の大型モニターには糖花島（とうかじま）へと接近するグレイファントムが白い点として表示されている。
２９騎。
数としては申し分ない。

凡そ軍司令部には似つかわしくない革張りのソファーにふんぞり返りながら、黄司令は鷹揚に頷いた。

「よろしい。戦果は？」

黄司令が望んでいるのは、接近しつつあるグレイファントムＫＡの戦果だけ。

この鬱陵島（うつりょうとう）周辺は、即ち軍管区としては、司令官である彼の持ち場であり、その持ち場での戦果は自動的に彼自身の戦果となる。

横取りなどではない。

立場上、そうなるのだ。

だからこそ、彼はグレイファントムＫＡがもたらす自らの戦果という“当然の結果”を、どうやって最大限に活かすかを考えながら待っていた。

無謀にも鬱陵島（うつりょうとう）に接近を試みた、愚かな日本軍を撃破。

明日の新聞の見出しはそんなものでいいか？

あとは大写しの自分の写真――いっそ、撃破した日本軍メサイアや戦闘機の残骸と一緒にしたほうがいいか？

子供達を使うのはどうだろう。

次の選挙に打って出るのもいいか。

――まぁ、いい。

どちらにしろ、相手が日本軍なら、少なくとも勲章と中央への栄転は確実だろう。

うむ――いいことだ。

ソファーにふんぞり返りながら、従兵の持ってきた焼酎入りのグラスに手を伸ばした黄司令は、部下の報告がないことに気づき、手を止めた。

「どうした？集計が間に合わないのか？」

「いえ……その」

彼の部下達は、目の前の光景をどう報告してよいのか、本気で迷っていた。

上官の機嫌を損ねれば、あの糖花島（とうかじま）に送られかねないし、実際、彼らの多くが、そうやってこの司令部から去っていった仲間達を見てきたのだ。

「はっきりしろ！」

顔を見合わせる部下達の態度がカンに触った黄司令は、グラスをつかむと部下達めがけて投げつけた。

「俺の機嫌をそんなに損ねたいのか！？イ少尉！」

「い、いえっ！」

名指しされた気の毒な士官が弾かれたように立ち上がると、直立不動の姿勢のまま大声で怒鳴った。

「自分は司令官閣下に忠誠を誓っておりますっ！」

「ならさっさと報告しろっ！日本ブタ共を何匹始末した！」

「――――っ！」

彼は、モニターを確認すると、覚悟を決めた声で怒鳴った。

「既に第二中隊は半数が脱落！糖花島（とうかじま）に上陸出来た騎はありませんっ！」

ガンッ！

鈍い音と、くぐもった悲鳴が司令部に響く。

従兵の持っていた盆を顔面で受けたイ少尉が口元を押さえてのたうち回る。

「誰がそんな報告をしろと言った！」

黄司令はソファーから立ち上がると、床にうずくまったままの部

下を、磨き上げた軍靴で蹴り上げた。
「俺の栄光に泥を塗るつもりか!?おい!パク大尉!貴様の指導が悪いせいだ!部下を敗北主義者にしてどうするか!」
「し、しかし!」
「俺の都合のいい報告をしろ!」
「モニターを見てくださいっ!」
司令部でオペレーター任務を担当する兵士達を束ねる立場のパク大尉は、黄司令から見えないように、隠し持った拳銃のグリップを握りながら怒鳴った。
「敵は圧倒的です!戦力が足りませんっ!」
「なっ!」
黄司令は気色ばんだが、
「――グレイファントムＫＡ２０１号騎、２０３号騎反応消失。続いて２０９号騎が!」
「糖花島進行速度変わらず!」
「鬱陵島上空までの予想時刻修正、マイナス２５０秒!」
「く、空軍はどうした!海軍は!」
敵がこの島に接近しつつある。
それだけは黄司令にもわかった。
「空軍の攻撃は!」
「爆装したＦ－４部隊が再接近中ですが、メサイアをまずどうにかしないと」
「たるんでいる!」
「……」
「島の全部隊に動員を!」
「黄同士」
黄司令の背後に、ずっと無言で立っていた士官が黄司令の耳元で

囁いた。
「それは党によって禁止されています」
「……」
ハッ。という顔になった黄司令は困惑した顔で言った。
「し、しかし……それでは」
「ご心配なく」
士官が二言三言黄司令の耳元で囁く。
黄司令は目を見開いたまま、ただ頷くだけ。

そして――

「パク大尉」
「はっ」
「コホン……ああ。私とヨン少佐はこれより席を外す。以降の指揮は君がとってくれたまえ」
「……は？」
「これは命令だ。最善を尽くしてくれたまえ」

●糖花島（とうかじま）付近

光の矢が、まるで吸い込まれるように、濃紺色に塗装されたグレイファントムＫＡの胴体に風穴を開けた。
直後、騎体のあちこちからオレンジ色の炎が吹き出した。
「クソッ！やられた！コントロールが！」
騎体を操る騎士が混乱していることは、まだ生きているコントロールユニット越しの動き、つまり、グレイファントムＫＡそのもののパニック動作でわかる。
「キムっ！かまわんっ！脱出しろ！聞こえているな！？」

その騎の間近にいて、一部始終を目撃していたペ中尉が怒鳴る。
「わ、わかった！――――２０６号騎、脱出（ベイル・アウト）！」
バンッ！
グレイファントムＫＡの頭部と胸部で小さな爆発が起きた。
爆破ボルトとロケット推進装置が作動し、ハッチが吹き飛んだのだ。
頭部をほぼ完全に吹き飛ばし、ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）を構成するユニットが射出されたのを、ペ中尉は確かに見た。
「よし。ＭＣ（メサイアコントローラー）は大丈夫だ」
ほうっ。と、ペ中尉の口から思わず安堵のため息が漏れる。
「大丈夫でしょうか？」
ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）からイ少尉の心配そうな声が聞こえた。
「大丈夫さ――――グレイファントムは、脱出装置についてはロシア製の“スターリン”より信頼性が高いと聞く」
敵を警戒しつつ、ペ中尉はしゃべり続けた。
――――敵は近くにいない。多分、第３小隊の生き残りを狙っているんだ。
ペ中尉はしゃべり続けていたかった。
無言になった途端、死にそうな、そんな予感がしたからだ。
「だけどね？もっとスゴイのがあるのさ。アングラ雑誌で読んだけど、日本軍の“インペリアル・ドラゴン・シリーズ”は、ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）をユニット単位で安全区域にテレポートさせる“テレポート・エジェクト・システム”を導入たってさ」
「魔法で脱出？」

「ああ。だから、MC（メサイアコントローラー）は騎体が吹き飛んでも怪我さえしないって。後はエンジンもだそうだ」
「騎士は？」
「責任とれってことかな――っていうか！」
ペ中尉は、そこでようやく横を飛行しているグレイファントムKAのコクピットから誰も脱出していないことに気づいた。
もう、騎体が完全に炎に包まれつつあった。
「キム、早くしろっ！MC（メサイアコントローラー）はもう脱出した！」
「脱出出来ない！シートが、シートが動かない！騎体のフレームが歪んだんだ！ハッチが飛ばない！」
「キムっ！今そっちへ！」
「た、助けてくれっ！火が、火がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！」

ズンッ！

光が走り、キムの乗るグレイファントムKAを串刺しにした。

それはむしろ、救いだったのかもしれない。

苦しまずに死ねる。

それは――救いだ。

ペ中尉は、魔法攻撃の直撃を受け、グレイファントムKAが四散する光景を、ぼんやりと眺めながらそう思うしかなかった。

「中尉っ！」
MC（メサイアコントローラー）の怒鳴り声がなければ、ペ中尉はいつまでもそうしていたろう。

だが、ペ中尉は軍人で、しかもここは戦場だ。
軍人として鍛えられ、世界に冠たるグレイファントムＫＡを預かる彼は、即座に我に返った。
「少尉！敵は！？」
「索敵レーダーに反応！後方２時、距離１２５０！」
とっさに騎体をひねり、騎体を反転させる。
そこにペ中尉が見たモノは、巨大な剣を振り下ろそうとする漆黒の騎体だった。
「い、いつの間に！？――――ええいっ！」
ギュィィィィンッ！
ペ中尉は、胸部追加ブースターを全開に開き、敵との距離をとる。
ザンッ！
振り下ろされた剣が、グレイファントムのシールドを、まるでチーズの如く切り裂く衝撃が、コントロールユニット越しに伝わってきた。
「つ、追加ブースターが無ければ死んでいた！」
「まだ来ますっ！」
「くそっ！」
まるで龍の骸骨を連想させるような禍々しいデザインの敵が再び剣を構え、襲いかかってくる。

シールドを切断された以上、実斧では意味がない。

とっさにそう判断したペ中尉は、グレイファントムの主力装備である実斧を放り捨て、腰部にマウントされていたレーザーソードを抜いた。

ギインッ！

剣とレーザーソードがぶつかり合い、目もくらむような光があた

りを照らし出す。

「正解だった！」

ペ中尉は思わず大声で。

「光剣じゃなきゃ死んでいた！」

「中尉！」

MC（メサイアコントローラー）が悲鳴を上げた。

「パワーが負けていますっ！」

「こっちはグレイファントムだよ！？」

ペ中尉はコントロールユニットを握りしめ、パワーを引き出そうと必死だ。

「米軍の本国防衛用に開発されたＭ６４ほどじゃないけど、Ｍ１６フリーダムファイター並の出力はあるって……司令部が！！」

「一々解説してないで、何とかしてくださいっ！」

「両方一緒にやるっ！リミッターをカット！」

「はいっ！」

ギィィィィ――――ギュィィィィィンッ！

エンジン音が数オクターブ高いものに切り替わった。

「リミッター解除、稼働時間が限定されます。注意してください！」

「わかった！何分！？」

「１０分！」

「１０分！？」

ペ中尉は悲鳴をあげた。

「たったそれだけ！？」

「韓国製の素材ではそれで限界ですっ！」

「日本製を使ってくれっ！」

「ほうっ！」

ペ中尉に襲いかかったメース“ヴィーズ”を駆るアニエスは楽し

げに鼻を鳴らした。
「ふんっ。やっとホネのあるやつが御登場かい？」
メースの出力も
騎士の技量も
何一つ満足出来ない相手ばかり。
一言で言ってダニ。
そんな連中ばかりだ。
それが、アニエスの下した韓国軍メサイアとそのパイロット達への評価だ。
数千年ぶりの戦いに勇んで望んだアニエスの興奮を差し引いても、かなり辛辣な評価ではある。
しかし、アニエスはすでにわずか半時にも満たない戦闘でメサイア１６騎を難なく撃破しているのだ。
しかも、そのほとんどがアニエス満足に剣を合わせることさえ出来ず、アニエスは何回敵と剣を合わせたか、片手で数えてまだ余っていた。
それだけに、あんな柔らかい素材で出来た斧では意味がないと判断し、レーザーソードを抜いたペ中尉の出現に、アニエスは驚喜した。
「ハハハァッ！さぁ、歓迎してやろうじゃないのさ！」
「くそっ！」
リミッターを解除した負荷稼働状態のグレイファントムＫＡを駆るペ中尉は、凄まじいスピードで襲いかかる敵の剣を何とか捌くだ

けで精一杯だ。
「装甲に意味がないっ！」
かわし損ねた攻撃は、グレイファントムＫＡの装甲を確実に切断していく。
すでに肩部装甲は半分ほどまで削れている。
人類にとってはロシア製メサイア“スターリン”と並ぶ世界的スタンダードメサイア。
それがグレイファントムだ。
一概にその名を呼んでも、各国で全く形状が異なるケースがほとんどだ。
理由は簡単。
メサイアを導入する国の多くは、メサイアを単なる兵器としてだけでなく、その国の力を現す象徴を求める。
故に、その国の伝統、文化、為政者の嗜好、その他様々な要素が加わることになる。
そのほとんどが、戦闘装束に身を包んだ兵士のイメージだ。
当然、韓国軍のグレイファントムＫＡもその中に入る。
するとどうなるか？
かつての兵士達の装束のイメージによって装甲の形状や厚さが変わってしまうのだ。
元が厚い西洋甲冑をイメージ出来る欧州各国は、特殊任務のために機動性を重視した“機動型”と呼ばれる軽装甲タイプを除けば、ロシア軍のローマイヤに代表れさるように、基本が重装甲タイプが基本だ。
加えて甲冑の伝統が薄い中東や米国もまた、これに対抗するため、グレイファントムＭ６４やＭ１６に代表されるように、やはり重装

甲タイプになる。

問題は、伝統的に兵隊が甲冑を身につけ、しかもその甲冑が革張りなど、軽量だった場合。そして、このデザインに為政者が固執した場合だ。

グレイファントムＫＡはまさにこの典型例だった。

伝統的なイメージに、一応こだわりつつ、それでも装甲厚に神経を注いだ中華帝国や日本とはワケが違う。

その結果、グレイファントムＫＡはグレイファントムシリーズの中で最も装甲が薄いことで知られる結果となった。

敵の破壊力を差し引いても、これでは気休めにもならないだろうというのが、ペ中尉の偽りのない判断だ。

「くっ！」

振り下ろされた剣をギリギリで受け止め、騎体をひねって背後をとろうとする。

装甲が薄い分、機動性だけはいい。

だが――

ガギィンッ！

「ぐっ！？」

鈍い音と共に騎体に走った衝撃に、ペ中尉は一瞬、気絶しそうになった。

衝撃の意味はすぐにわかった。

背後に回られることを嫌った敵の蹴り技をモロに喰らったのだ。

「くそっ！」

「中尉！」

MC（メサイアコントローラー）がペ中尉に告げた。
「空軍が攻撃を開始しますっ！」
「何っ！？」
「このまま敵をこの場で喰い止めてください！これは命令ですっ！」
「どこからだ！」
「軍総司令部からですっ！」
「無茶苦茶だぞ！」
鋭い突き技を何度となくかわすペ中尉は、本人は気づいていないが確かにこのメサイアを喰い止めてはいた。
「やってるじゃないですかっ！」
そのMC（メサイアコントローラー）の言葉は、彼にとって決して慰めにはなっていなかった。
「空軍はどれ位の戦力を持ってきたんだ！？」
「約８０機。全機対地攻撃用に爆装しています」
「そりゃスゴい」
ペ中尉は、Ｆ－４が８０機で大編隊を組む光景を見てみたかった。
残念ながら、今の状況ではとてもムリな話だが――

●“天壇”司令部
「へえ？」
接近しつつある見慣れぬ乗り物がスクリーンに映し出され、ダユーが感心したように言った。
「あれ、人間が乗っているのですよね？」
「……らしいな」
グラドロンは大した感慨もない口調で頷く。
「おそらく、あの翼の下の黒い物体は、先程の白い筒と変わらないじゃろう」
「ドーンッって？」
ダユーは握った手を大きく開き、クスクスと笑い出した。

その可憐な少女さながらの仕草でさえ、グラドロンの感心を誘わない。
「まぁ――あの程度、どうとでもなるが」
「どうなさいます？」
「コランタン」
「はっ」
「アニエス達の現在位置は？」
「Ｓフィールド。ポイント２５です」
「ふむ……なら大丈夫……か」
「グラドロン様？」
「コランタン……防壁のよいテストじゃ。――やれ」

●日本海上空　糖花島付近
「狙いは１５キロの大物だ！」
糖花島へ接近しつつあるＦ－４編隊長はＥ－７３７　からの誘導を確認しつつ、部下に怒鳴った。
「日本軍からの花火は上がっていない！一気に殺るぞ！」
「了解っ！」
部下からの威勢の良い返答に満足した彼は、操縦桿を握り直した。
憎悪する日帝が攻めてきたのだ。さすがに１５キロの糖花島を空に浮かせるなんて信じられないことをしでかすとは予想出来なかっただけだ。
「いつの間に糖花島を占領していたか知らないが」
「許せませんね」
Ｆ－４の後席に座るＲＩＯがまるで編隊長の機嫌をとるかのように大仰に頷いた。
「落とし前はきっちりとってやる。距離は？」
「――敵の電波妨害のようです。レーダー、レーザー使用不能。

計器類にも被害が」
「ちっ！高度計が狂いだしてやがる！」

狩野粒子の脅威を知らされていない彼ら韓国軍人は、目の前で狂う計器類を日本軍の電波妨害兵器によるものと切り捨てた。

そして――

「編隊長！」
新米の李大尉が興奮気味に言った。
「第一波の攻撃指揮は是非、自分に！」
「……お前のオヤジさんは、確か王制党の」
「はいっ！首都圏第二区幹事を！」
「よし……オヤジさんによろしくな。第一波２５機の指揮をとれ」
「はいっ！第一波参加機へ。李大尉だ！これより俺が指揮をとるっ！俺を先頭に編隊を組めっ！」
李大尉機を中心に爆撃編隊が組まれる。
無線のノイズがさっきからひどくなる一方だ。
「電波妨害にすぎない！全機、怯むなよ！？――続けっ！」

糖花島（とうかじま）の上面。かつて観測所のあった付近を爆撃ポイントとすることは、出撃前から決められた通りだ。

李大尉は、当初の打ち合わせ通り、その爆撃ポイントめがけて機体をコースに乗せた。

ドズゥゥゥゥム！！
ズズンッ！

粘っこい爆発が編隊長の耳を、その機体ごと打った。
攻撃の直撃を受けたのか!?
そう編隊長に誤解させるほど派手な衝撃だ。
音の発信元は糖花島(とうかじま)方面。

「25機の爆撃による衝撃がこれほど強いとは思わなかったな……」
編隊長はそう思ったが――
「編隊長!」
RIOが悲鳴を上げた。
「編隊長はご覧にならなかったんですか!? さっきの!」
「何? どういうことだ?」
「第一波は全滅です!」
「なっ!?」
「連中、見えないバリアみたいなモノに突っ込んでバラバラに――」
「馬鹿な!」
「間違いありませんっ!」

●“天壇”司令部
「あらら……」
ダユーが呆れた。という声で言った。
「たかが防御壁……凌げないにしても、避ければよいものを」
「気づけなかったんじゃろうよ……マヌケめが」
「気の毒に思われてます?」
「哀れんでおるわい」
「では――残りは私のエモノで」
「フン……好きにせい」

●日本海上空　糖花島（とうかじま）付近

「しつこいんだよ！」

グレイファントムＫＡでヴィーズ相手に渡り合うペ中尉だったが、騎体がもう限界だった。

何度目か忘れた敵の剣を受け流すビームサーベルの光が最初の半分も無くなっていた。

コクピットは警報とアラームがもうすこしで騎体を占領することを告げていた。

「空軍はかかったんだな！？」

「すでに全滅！」

「全滅！？」

「第一波が、あの島のＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）に激突して、残りは敵の攻撃で！」

「ＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）なんてわかりそうなものだろうが！」

「戦闘機にそれは酷です。我が国はＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）を発生させる大型飛行艦を保有していません！」

「無知は恐ろしい罪だな……」

チラと見た計器類は半数以上が真っ赤かブラックアウトしている。

いわばエンジンから無理矢理パワーを搾り取るリミッターカットの悪影響だ。

関節系、推進系、すべてが危険域に達している。

「ええいっ！」

ペ中尉は全てを振り切るように頭を激しく振った。

「残存するグレイファントムは！？」

「あと２騎……あと１騎！」

「そいつに通報してくれ！」

「この騎のことです！」

「……脱出するっ！攪乱幕、照明弾、構わないから、目つぶしになるもの全部叩き付けろっ！」

「はいっ！」

「あとはブースターが吹き飛ぶまで逃げるっ！海に落ちたら泳いで

でもな！」

●“天壇”司令部

「“エサ”の捕獲は順調です。抵抗は散発的」

コランタンは事務的な顔を崩さずにグラドロンに報告する。

「上陸時点でのエサの数は推定2万5千。エサとしては十分です」

「他の物資は？」

「現在、陸戦隊が調査中です。調査完了には今しばらく」

「急げ」

「はっ」

●韓国軍鬱陵島防衛隊司令部

「な、何なんだあれは！？」

突如現れた巨大な岩塊。

そこから舞い降りたのは――

「撃ちまくれっ！」

司令部の前にバリゲートを築いたパク大尉が自動小銃を手に怒鳴る。

「他の部隊との連絡は！」

「無線、有線、共に通信不能！他部隊との連絡、一切つきませんっ！」

「――くそっ！」

司令部へと通じる通路。

その向こうから迫り来るのは、生きた人間ではない。

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）らしき飛行物体が大量に着陸したのが市街ブロックの市場のど真ん中。

それ以来、命令系統は寸断され、他の情報はすべて伝令に頼り切っている。

そして、その伝令さえ、今ではつながらない。
何しろ相手は――
「銃弾を喰らっても死なないなんて！」
自動小銃のマガジンを交換しつつ、部下の一人が悲鳴に近い声をあげた。
「日本軍は一体、どんなヤバいクスリ使ってやがるんだ！？」
「イ、手榴弾貸せ。通路を吹き飛ばす。その後は……」
「その後は！？どうするんです！大尉！」
「救援を待つ。ダメならそん時ゃ覚悟決めろっ！」

●“天壇”司令部
「屍鬼（グール）達のエサに新しい仲間……と」
ダユーはコランタンの報告にそこそこの満足感を示した。
「後は、２、３００体、半島のあちこちに放り込んであげれば完璧ね♪」
「そういうわけにもいかんぞ？ダユー」
「えっ？」
「何故、我々がこんな島に来たか……そして、我々が、何故にこんな海にて降伏するハメになったかは、一々言わんでもわかるだろうな？」
「……ハァッ……ほとんど忘れかけてましたわ？」
「コランタン。“バイパイス”の状況はわかった。取り込み口周辺の土砂を吹き飛ばし、バイパスとの接続を可能に――」

ドォォォォォォォォォォン！！

鬱陵島（うつりょうとう）が揺れたのは、その瞬間だった。
そのままだったら確実に鼓膜をやられるような派手な音を伴い、ダユー達の目の前で巨大な土煙が立ち上った。

「何！？」
土煙の中、パラパラと落下する土砂が“天壇”にも容赦なく降りかかる。
「何が起きたの！？」
「“天壇”に被害なし！謎の飛行物体１飛来、鬱陵島（うつりょうとう）に命中！」
「飛行物体？」
「ヴォルトモード軍からの情報にある、人類側の「大砲」なる物による攻撃かと思われます」と、コランタンが言った。
「――ふむ？」
「警戒が不十分でした。砲弾なるものは、撃ち落とすことは可能です」
「そうか……いや？」
グラドロンは思いついた。という顔で言った。
「コランタン」

●韓国領内
鬱陵島（うつりょうとう）に対する砲撃。
それを実現したのは、日本軍侵攻に備えて興南（フンナム）沿岸砲兵隊から移動中だった２門の砲。
８０ｃｍ列車砲――“グスタフ改”“とドーラ改”という。
ドイツクルップ社によって１９３０年代に製造された、総重量約１３５０トン、全長４２．９ｍ、全高１１．６ｍ。この世界でも、実体弾を撃ち出す砲としては世界最大を誇る。まさにモンスターだ。
砲身長２８．９ｍ、口径８０ｃｍのカノン砲をもって、４．８トンもの砲弾を最大４５キロの彼方まで届かせることが出来る砲なぞ、他にありはしないし、稼働には５千人近い人員と、さらに移動だけで専用のディーゼル機関車２台が必要とする贅沢なシロモノなんて、他に存在するはずがない。

陸の上で存在が困難なのは、クジラと巨砲。この砲もまた、長距離の移動の際には分解されて運ばれ、実際に砲撃するまでに、整地、レールの敷設までを要求した挙げ句、準備完了に数週間を要する。トドメの如く、百発撃ったら４００トンの砲身交換が必要な砲を「贅沢」と言わずに何と呼べばよいのだ？

こんな砲だから、さすがの陸軍大国ドイツも、開発後数年で、試作２両を大韓帝国により二束三文で買い叩かれたとしても無理はない。

韓国人は、この砲に取り憑かれたといわれている。

何しろ、大型貨車４台（台車は８台分）に載せられた本砲を動かすには、線路が複線で計４本、必要。組み立てたければさらに４本必要という、普通の国ならサジを投げるようなシロモノだ。

だが、それでさえ、彼らはクリアした。

幹線幹線鉄道に「予備用線路」、「非常時線路」と「軍用線路」を通常の線路に付け加える「国鉄８線化計画」を実施。列車砲が国土全てで運用出来る環境を、１０年がかりで作り上げてのけたのだ。

日本が解体することなく運べる限界サイズである２８センチ砲と４０センチ列車砲の量産に取り組むのを後目に、クルップ社から買い取った予備砲身をベースに自国生産した「８０センチ列車砲」を後に４両（トール、ロキ、レオポルド、ベルタ）追加していることも、彼らがいかに列車砲に取り憑かれたかの証拠みたいなものだ。

配備から半世紀。

韓国人の誇りとまで言われた列車砲。

日本軍が４６センチ砲や５０センチ砲の戦艦を作っても、列車砲は作れまい。

その気になれば対馬まで狙えることから、韓国国民がつけた名が、「対馬砲」もしくは「海峡砲」――砲は彼らのプライドなのだ。

ちなみに砲弾の射撃スピードは毎分２発。

装弾のテンポが著しく遅いように感じるだろうが、実際は違う。むしろ逆だ。

ドイツ時代のドーラの射撃スピードとは比較にならない程、“早い”のだ。

「第４射撃、完了！」

ドーラ改の真横には、砲撃の衝撃に耐えられるよう、専用に設計された砲弾運搬用貨車と、シールドを構えた４騎のグレイファントムがいた。

装甲はほとんど外され、カラーリングも異なる。

回収用に変更された騎体、“ベルゲ・ファントム”と呼ばれるタイプだ。

「座標修正――次弾装填開始！」

８０センチ砲の恐ろしい程の衝撃を、シールドでしのいだベルゲ・ファントム達の一騎が砲兵司令部の命令に従い、砲身の尾栓を開き、空薬莢を砲から引き出す。

別なベルゲが２騎、砲弾運搬用貨車の両脇に立つと天井の外された貨車から一発ずつ砲弾を取り出し、ドーラの砲身へ装填。さらに別な騎が尾栓を閉める。

この間、わずか３０秒。

そう。

クレーンによる揚弾・装填といった作業をすべて砲兵であるメサイアに代行させるという信じがたい方法を採用すべく改良したのが“ドーラ改”。

人間は砲撃位置の修正だけをすればよい。

機械にデータ諸元を入力すれば、あとはモーターと歯車が勝手に砲を動かしてくれる。

そして――

「第3射、弾着結果はどうなっているか！」

「風に流されている！錨頭2修正！」

何しろ、40キロとはいえ、これほどの巨弾の着弾だ。

トンヘ付近に並んだ2門は近くのテベク山山頂の観測班から着弾はかなりはっきり確認出来る。

「データ入力――反映！」

「撃てっ！」

●“天壇”司令部

砲弾が次々と着弾し、地面が抉られる。

「成る程？」

コランタンは感心したように言った。

「我々が一々、穴を掘る必要はありませんな」

砲弾が着弾するたびに、あちこちに巨大な穴が開く。

一々掘る手間が省けるだけに、これは楽だと言わざるを得ない。

「そういうことだ――“防壁”が破られる可能性は？」

「相手が砲弾とやらを“中和”する必要に気づかない限りは」

「――そうか。陸戦隊に被害は？」

「ございません。連中の狙いはどうやらこの“天壇”ですが、“防壁”にまだ一発も命中していない有様で」
「しばらくは……大丈夫だな」
「はい」
「うむ……島民の確保、急がせい。島を占領後、バイパスを、“天壇”のエネルギーを確保する」
「はっ」

●数時間後、ソウル・韓国軍総司令部
「対馬砲はどうなっているか！」
「すでに砲弾を撃ち尽くしました！砲身を交換すべく後退中」
「――ちっ！糖花島へ与えた被害は！？」
「皆無！」
「何ぃ！？」
「敵は不可視の防壁を展開、我が軍の砲撃を全く受け付けませんでした。それより、鬱陵島の砲撃による被害が……」
「――マスコミへは日帝の空爆と説明しておけ。対馬砲に対する信頼を傷つければ陸軍の名誉にかかわる。――黄司令」
「はっ……」
「偶然にも司令部へ来た君だけが、守備隊の生き残りだ。よく生き延びたというべきだな」
「恐縮です」
「うむ……同族のよしみだと思ってくれ。――おい、島へは渡れないのか？」
「糖花島に接触して墜落したＦ－４部隊の二の舞です」
近くにいた士官がそう答えた。
「島との通信は？」
「電波妨害がひどく、通信は一切不能」

「総長！」
将官が通信士官から渡されたバインダーを手に敬礼した。
「島で新たな動きが」
「何だ」
「糖花島が沈降。鬱陵島と接触しました！」
「何！？」

●“天壇”司令部

ギギッ――――
バキバギバキバキバキ……ッ！
ズズズズズッ……

岩が砕け、街が潰されていく。

空から巨大な岩塊が降りてきて、島を潰そうとしている。

そんな、光景だった。

「よし！そのまま降ろせ！」
“天壇”のコントロールを担当する士官が部下に怒鳴る。
「バイパスはすぐ間近だ！よーしっ！速度そのまま！」

「入るよ？」
音もなく開いたドアから顔を見せたのは、アニエスだ。
「ご苦労だな。アニエス大尉」
「ヘン……大尉なんて肩書き、堅苦しくってキライだって、何度も言ってるだろ？ダンナ」

「フッ……そうだったな」
「まいったよ。無理して出したジームの隊がエネルギー切れおこして、結局私達二人で大立ち回りさ……で？これで？」
「ああ。人類の砲弾のおかげでこの島の表層地盤はガタガタだ。この“天壇”の質量で押せば、バイパス口に詰まってた土砂はすべて押し出せる」
「まったく、神族もマヌケっちゃあ、マヌケだねぇ」
グラドロンが座るシートの背もたれにしなだれかかりながら、アニエスは笑った。
「戦後処理に大童だったとはいえ――敵の武器やエネルギーを封印地点のこんな間近に置くなんて……私なら宇宙にでも放り出しちまうさ」
「そのおかげで、我々が生き残れるのだ」
「マヌケに感謝……」
「そうだ。バイパスさえ開けば、エネルギー切れのため稼働不能状態のメサイア部隊もようやく動かせる。冬眠状態のままの“飛龍”達もじゃ」
「ふふっ……屍鬼（グール）達の不死の軍団。私達の黒死騎士団、そして飛龍軍団。昔を思い出すねぇ……神族相手に大立ち回りを演じたグラドロンの軍団の復活かぁ」
ん？という顔で、アニエスは訊ねた。
「そういや、ここの人間共は？」
「子供や赤子は選別してダユーのラボへ。選別から漏れた者は食料庫行きじゃ」
「年寄りも？」
「これからゆっくり選別しますわ？」
ダユーは楽しげに言った。
「屍鬼（グール）になったのが２０万。捕獲出来たのが５万匹。残りはエサになっちゃって……クスクス」
「――ま、そういうことかい？」

ダユーのラボ
食料庫
エサ
……どういう意味かわかるアニエスにこの時出来たことは、表面上だけは平静さを保つだけ。
それだけで、アニエスは誰かに褒めて欲しいと本気で思った。

鬱陵島（うつりょうとう）への糖花島（とうかじま）接触から７２時間後、糖花島（とうかじま）は再び離陸。日本海を日本列島へと移動を開始した。
８４時間後、決死隊として鬱陵島（うつりょうとう）に上陸した陸軍兵士達が見たものは、砲撃によって廃墟と化した島と、屍鬼（グール）化した少数の民間人。
鬱陵島（うつりょうとう）被災時に存在したはずの２８万人の姿は、島から完全に消えていた。

この事件の翌日。
韓国社会は、日本軍による鬱陵島（うつりょうとう）侵攻と断定。
国際社会が鬱陵島（うつりょうとう）に潜んでいた魔族軍が動いたと断じたのとは一線を画す動きを見せた。
この世論を受け、韓国議会は満場一致で対日全面戦争に向けた権限を李首相に付与。
李首相指揮下の元、韓国軍が動き出す。

後に、「鬱陵島（うつりょうとう）事件」と呼ばれる出来事が、これである。

トラックへ向けて

“鈴谷（すずや）”は、予定通り海軍基地にて補給を受けるためにボルネオを離れた。

その“鈴谷（すずや）”を指揮する美夜にとって最悪の誤算。

それは、ハワイを出港した米空母艦隊を警戒して展開していた中華帝国軍機動部隊が、南シナ海に展開していたこと。

そして、空母1隻を含むその艦隊は、早期警戒機からの通報をすでに受信していた上に、悪いことは重なるもので、針路上、“鈴谷（すずや）”と直交するコースを航行していたこと。

この二つだった。

●中華帝国軍空母“鞍山”

「日本軍だと？」

――フェニックス諸島沖合にて航行中の飛行艦を確認。

その報告を受けた中華帝国海軍第四機動艦隊司令李提督は食事の手を止めた。

「はい。白馬級輸送艦1。随伴艦なし」

「……近衛騎士団（インペリアルガーズ）か」

李提督は壁の海図を見た。

「位置からして……針路はトラック基地か？」

「おそらく」

副官の海大校は顔色一つ変えずに頷いた。

「まずいな。このままでは直交する」

「現在、横須賀を出港した日本軍はサイパン付近を航行中。トラッ

クでランデブーする腹づもりでしょう。いかがなさいますか？」
「ここで我々の存在は明らかに出来ない。針路を変更しよう。本国からは？」
「返答ありました。現場の責任有る判断により善処せよ。ただし、無用の混乱は避けよ」
「有り難いお言葉だ……」
李提督は茶をすすると、席を立った。
「例の作戦は準備中なんだろう？」
「はい」
「なら、それに任せておけばよい。それに、一々我々から仕掛けることで、我々の存在を暴露する必要もないだろう」
「党もその判断のようです」
海大校は頷いた。
「日本軍撃滅は現在の我々の任務ではありません」
「そうだ」
制帽を正しながら李提督は楽しげに頷いた。
「今の――な」
「はい。今の、です」
「よろしい。今回の日本軍撃滅の手柄は、潜水艦隊に譲るとしよう。手出しは無用。必要なら接触回避の手段を厭うな」
「了解です」

海大校は提督との打ち合わせを済ませ、艦橋に戻ろうとした。
甲板からは航空機の発艦音が轟き渡っている。
「――ん？」
海大校は足を止めた。
発艦命令は出ていないはずだ。
それなのに何故？

海提督はすぐ近くの艦内通話の受話器を取った。
「飛行管制か？この発進は何だ？」
「“天津”から上がった航空隊が！？すぐに引き返せっ！」
艦橋に怒鳴り込んできた李提督は顔を真っ赤にして怒鳴った。
「艦長！誰がこんな命令を出した！」
艦橋で目を丸くしているのは、張艦長だ。
「で、ですが」
何故、自分が怒鳴られているのか全く分からない。
艦長はそういう顔をしていた。
「日本軍ですよ！？」
「自分の任務をわきまえろっ！現在においての艦隊の任務は哨戒だろうが！」
「しかしっ！」
姿勢を正した張艦長は叫ぶが如き声を張り上げた。
「小日本撃滅は、党から命じられた至上任務の一つでありますっ！」
党――中華帝国における唯一の政党。皇帝支持者の集まり、“王政党”のことだ。
皇帝の権限をかさにやりたい放題、今回の開戦も皇帝の意向ではなく、党の判断によるとまことしやかに語られている。
その権限は、逆らえば中華帝国国内では生きていけない程。
当然、彼ら軍人にとって絶対服従の対象だ。
実際の所、海外大使館勤務も経験した李提督は、王政党のやり口

は嫌ってはいたが、軍人である以上、その名には逆らえない。
対する張艦長は、軍人としてより党員として出世したような人物だ。
党の名を出せば全てが沈黙する。
党の正しさが全てに優先する。
それを地で主張して出世レースに勝ってきた、軍人としてはむしろ危険な人物だ。

「……艦長」
李提督はなだめるような声で艦長に告げた。
「我が国は、日本に対して正式な宣戦布告をしていない。ここで勝手に奴らを攻撃したら、日本に我が国に対する宣戦を許す口実を与えかねないのだ」
「し、しかしっ！」
「日本に対して宣戦布告していないのは、党の方針だ。その方針に横やりを入れるつもりか？」
「そ、それは……！」
艦長は狼狽しつつ、ようやく思いついた反論を答えた。
「すでに大韓帝国は」
「日本の経済力を甘く見るな。韓国は資産を凍結され、わずか数日で経済が破綻したんだぞ？同じ目を我が国にあわせるつもりか？」
「し、しかし……っ！」
「小日本だなんだの、敵を舐めてかかると痛い目に遭うぞ中佐。軍人たる者、常に敵を侮るな」
提督は真顔でそう諭した。
何しろ、日本は反応弾保有国だ。
互いに反応弾でつぶし合いになることなんて考えたくない。
何より、その口実を自分が作ったなんて御免被る。

「――海大校」
李提督は、脇に控えていた海大校に命じた。
「攻撃部隊の撤退を確認するまで飛行隊の指揮を任せる。それと、本国にこの事態を報告しろ。いいか？絶対に本国を刺激しないように、報告の文面には気を付けろ」
「本国が攻撃命令を下したら？」
「――その時は話は別だ」
「絶対に命じますっ！」
艦長は怒鳴った。
――狂信者。
その目は、彼がそういう存在だと告げていた。
「このタイミングこそ、党が与えてくれた千載一遇のチャンスです！」
「党から与えられた命令は哨戒任務だっ！ここで我が艦隊の位置を暴露することは、党の命令に反しているぞっ！」
「――っ！」
「これは艦隊司令としての厳命だっ！交戦は認めない、さっさと部隊を引き上げろっ！航空隊の指揮権及び艦隊の交戦権が私にあることを忘れるなっ！」

ここで手違いが生じる。
李提督にとっては、海大校に対する指示で自分の任務が終わったと思いこんだこと。
肝心の海大校は、通信管制を無視した党から送り込まれてきた莫大な通信への返答に手一杯になったこと。
最悪なことに、艦隊から離れて独立遊撃隊として通商破壊にあたる別働隊から敵輸送船団発見の報告がこの時入ったことは、後々まで海大校を後悔させることになる。

遊撃隊の位置はビアク島の沖合。
セレベス海から侵入する敵艦隊の哨戒も兼ねている。
そこからの通報だ。

「グアム島沖合、艦種不明。一隻はタンカーと思われる」
それが遊撃隊からの報告だ。
ただ、“本当”に“タンカー”ならその腹の中の油が敵に堕ちることだけは避けたい。
幸い、“タンカー”は、遊撃隊から発進した航空機の攻撃可能なポジションにいる。
遊撃隊の指揮権は、提督から自分に移っていることもある。
だから、大校は“別働隊に”命じた。

――航空隊は、各個に攻撃に移れ。

いつもの命令だ。
命じられた航空隊は、航空管制官の命令通りに戦うことになる。
本当に、いつものことなのだ。
それに、今の彼の敵は目の前の書類だ。
提督から命じられた報告や、党幹部を満足させるためだけに求められる現在状況の報告――しかも、党の定めた形式と時間を厳守する必要のある――頭の痛い敵だ。

だが――

「本当にいいんですか？」

通信管制官の一人がしつこくそう聞いてくる。

提督の命令通り、日本軍接近の報告を、波風立てないように準備していた大校は、その管制官を見ることもなく怒鳴った。

「いいと言っているだろう！いつも通りだ！武器使用自由、全力で叩けっ！」

「り、了解――大校の命令と判断します」

管制官は震える声で命じた。

「艦隊司令部より紅６へ、攻撃を許可する。対艦ミサイル使用自由」

「――おい」

紅６

対艦ミサイル。

その名にひっかかった中佐は、文面を書く手を止めた。

嫌な予感どころ騒ぎではない。

しらずに、声が震えてしまう。

「貴様――今、どこに命令を出した？」

「ですから」

管制官の顔を見て大校は青くなった。

それは、日本軍に向かった部隊と通信を続けていた管制官だった。

「攻撃命令を発しました。大校の命令で」

「馬鹿者ぉっ！」

紅６は日本軍に向かいかけ、管制官からの撤退命令に断固抗議しつづけていた空母航空隊のコールサイン。
対艦ミサイルは、言うまでもないだろう。
「間違いないな？」
隊長はジャミングのひどい通信記録を、部下に確認を命じつつ、自らも耳で確認した。
「艦隊司令部は、攻撃を許可しました」
「録音、しっかり保存しておけ？。――日本軍を叩くっ！」
「了解っ！」

「ミサイル接近っ！数１０っ！」
レーダー担当の木村が悲鳴に近い声をあげた。
「墜とせっ！」
“鈴谷（すずや）”に設置されているＭＬ砲（マジックレーザー）が火を噴いた。
南半球の抜けるような青空に、光が走った後に白煙の柱が生まれた。
「ＦＧＦ、全展開しますかっ！？」
「まだ早いっ！」
美夜は言った。
「ＭＬ（マジックレーザー）だけで十分だ。余計なエネルギーを消費するな！生きて帰れなくなるぞ！？」
「はいっ！」

「うわ……すごっ」
戦闘機が編隊を組んで接近する。
戦闘機を間近で初めて見たさつきはしきりに感心するだけだ。
チカチカチカチカッ！
“鈴谷（すずや）”の舷側にあるランプが激しく点滅を開始したのはその時だ。
緑の点滅と赤と黄色の3色。
「何？」
「警告です」
教えてくれたのはさつき騎のMC（メサイアコントローラー）、愛沢中尉だ。
「国際法規定のFGF（フリーグラビティ・フィールド）警告です」
「何でそんなもの出すんです？」
「FGF（フリーグラビティ・フィールド）は目に見えません通常航行時には、接触しないように警告する必要があります」
「今、戦闘中ですよ？」
「これでぶつかったら、向こうが悪くなるんです」
「――――成る程」

「バカ者っ！」
同じ頃、海大校は李提督から大目玉を食らっていた。
「誰が攻撃しろと命じたっ！飛行隊には戦闘停止を命じろっ！飛行艦だ、メサイアを搭載してはずだぞ！？」
「間に合いませんっ！」
そんな口論に近い会話を続ける二人の後ろで、艦長が手に持つ金属の筒が火を噴いた。

迎撃されたミサイルが光と煙の球に変わった。
ズズン……ッ！！
遠くで爆発音が響く。
もう恐怖感すら感じない美夜は木村に訊ねた。
「都合、これで何発目だ？」
「４８発目ですっ！」
「その数、四方八方から――――よく撃つ」
対艦ミサイルは決して安い代物ではない。
それを４８発だ。
感心する以外にない。
いい加減、あきらめてくれないだろうか。
美夜は内心でそう願っていた。
だが――――
「艦長、二宮中佐からです」
「――――私……えっ！？」
美夜はインターホン越しに伝えられた情報に思わず驚いてしまった。
「今度は爆装してきたぁ！？」

空母“天津”の艦橋から運び出されたのは、李提督と海大校。
その頭部からは血を流し、力無く手足を伸ばしている。
死んでいるのだ。

「――党は小日本と戦えと命じられた」
張艦長とその部下が銃を手に艦橋から送り出される二人の死体を見送る。
「その命令に従えない敗北主義者は、我が国には要らない」
艦橋の通路から放り出された死体が海に消えていく。
「Ｓｕ－３０飛行隊の収容急げ。対艦ミサイルが効かないなら、爆撃にて出撃しろ」

それから一時間後。
中華帝国軍の爆撃を試みた機すべてが空母に引き返してきた。
全機生還だ。
「畜生っ！」
パイロットの一人が、キャノピーを叩いて降りてきた。
「何てザマだっ！」
パイロットは、即座に機体の下、パイロンを取り付けているハードポイントを見た。
「――くそっ！」
翼下の１０個あるハードポイントは、一つ残らずきれいに破壊されていた。
「たった一通過だぞ!?それでこれかっ!?」
ガシャンッ！
ハードポイントに、そのパイロットが触れようとした時だ。
コクピットの近くですごい音がした。
パイロットがその音に驚いて後ろを見ると、機体の破孔から金属の棒が１本地面に落下していた。
何だ？

パイロットは、その金属の棒が何か、即座にはわからなかった。
「中尉――よく無事でしたね」
駆け寄ってきた顔なじみの整備兵に気づき、彼はその金属の棒の正体を訊ねた。
整備兵は言った。
「機関砲の銃身ですよ。敵の攻撃が砲を撃ち抜いたんです」
「そんな馬鹿な！俺は敵艦に1万程度しか接近していないぞ！？そんなまぐれが！」
「まぐれじゃないですよ。自分は経験がありますけど……メサイアの攻撃ってのは、それくらい正確なんですよ。中尉」
「……」
「中尉、これが初陣でしたっけ？」
「……ああ」
「ならよかった。メサイア相手に生きて帰ることが出来ただけでもハクが付きますよ。そういうものです。それに」
整備兵は中尉の肩を叩いた。
「敵は属国がとってくれますよ」
「属国？」

Ｓｕ－３０部隊が去った後は静寂のみが支配する航海が続く。
「中華の脅威は去った……か？」
「私、しばらくラーメン食べたくない。中華って言葉見るだけで吐き気がする」
「早瀬、同感だな」
「美奈代、いい機会だからダイエットしなよ」
「うるさいっ！」

「何、この後は」
都築は笑って言った。
「牛肉もラム肉も食いたくなくなる――――やせるぜぇ？」

その意味がわかる一同はただ押し黙った。

「それにしても」
美奈代はそれが疑問だった。
「こんな所に何で中華帝国軍が？太平洋のど真ん中だよ？」
「哨戒ですよ」
牧野中尉が答えた。
「敵がハワイからの米軍の進出を怖れている証拠です。もしかしたら、我々を米軍と誤認したのかもしれません」
「ってことは？」
「“鈴谷（すずや）”の警戒レーダーは捜索範囲が狭いです」
牧野中尉の言葉に、コンソールを操作する音が混じる。
「我々の出番ですよ？」
「敵は一体？」
「ここまで来るなら敵は空母機動部隊。そのお腹にはとっておきの厄介者が入っているはずです」
「厄介者？」
「はい」
コンソールパネルを操作する牧野中尉は、ちらりと通信モニター上の美奈代を見た。
「このフネを地上から蒸発させることの出来る厄介者です」

ビュンッ！

光の矢が、美奈代の目の前を突き抜けたのは、まさにその時だ。
オレンジ色のアイスキャンディーがまっすぐ通り抜けていったように見えた。

「なっ！？」
「ＭＬ（マジックレーザー）の至近弾っ！」
「どこからっ！？」
「計測範囲外、超遠距離射撃っ！」
牧野中尉は言った。
「ＭＬ（マジックレーザー）をなめないでください。敵はすでにこちらの位置を掴んでいるんです」
「っていうか！」
もう一発がシールドをかすった。
「艦に当たるんじゃないですか！？」
「この程度」
ふんっ。
牧野中尉は再び鼻でわらった。
「オージーの低出力ＭＬ（マジックレーザー）なんて怖れる程じゃありません」

バンッ！！

空間が歪むような現象を残して、美奈代の目の前で爆発が発生した。
シールドへの直撃。艦橋間近に立つ美奈代騎の立ち位置からして、シールドに命中しなければ、かなりの損害になっていたろう。
「……あらまぁ」
「中尉？これでもですか？」
皮肉めいた美奈代の言葉に牧野中尉が応えるより早く、もう一発が“鈴谷（すずや）”の側面装甲に命中した。

火災を告げるアラームが艦橋に鳴り響く。

「右舷甲板側面装甲に被弾っ！」
「火災発生っ！」

「くそっ！オージーの分際でっ！」
ガンッ！
美夜はアームレストを拳で叩いて怒鳴った。
「あの毛唐共、牛の世話か鉱山で労働してればいいんだっ！」
美夜が怒るのも無理はない。
プルトニウムやウラニウムにも匹敵する危険な鉱物、魔晶石を産出する鉱山を中国人に抑えられ、オーストラリアから産出される魔

晶石は軒並み中華帝国へとピストン輸送される。
そして、それがメサイアや魔法系兵器に生まれ変わり、今や世界各国を襲っているのだ。
それを知る各国は、中華帝国支援国であるオーストラリアとの国交を断絶しているほどだ。

「艦長っ！」
「メサイア隊の武装換装、津島中佐の持ってきた“ブラスター”を装備させろっ！」

白い敵

「こんなモノ、どこから持ってきたのよ！」
さつきが目を丸くするのも無理はない。
格納庫から引き出されたのは、メサイアが担ぎ上げる程巨大な“砲”だった。
１８０ミリバズーカより二周りは大きく、かなり無骨な外見をしている。
そして、砲の後ろには、反対側が艦に設置されたエネルギーバイパス接続口に接続された、２本の長く太いケーブルがつなげられている。
「全長２０メートル、口径は３６０ミリＭＬ砲（マジックレーザー）に相当」
さつき騎のＭＣ（メサイアコントローラー）、春日中尉が転送されるデータを見ながら感心したように呟く。
「射程５００キロ……よく考えたものね。エネルギー・バイパス・ケーブル付きとはいえ」
「こんなもの、使えるんですか？」
ＳＴＲシステム越しに伝わる“砲”の重さに顔をしかめつつ、さつきはバズーカ砲の射撃体勢をとる。
「ちっ――ケーブルが邪魔よ……」
「祈りましょう――都築騎、宗像騎、それと長野騎発艦」
春日中尉の声に横を向くと、長野騎が艦から離れる所だった。
反撃をより正確に行うためには“鈴谷（すずや）”搭載の探索システムだけでは不安が残る。
そこで、メサイアとのデータリンクを用いて探索システムの不備を補おうというのだ。

「司令部からは？」
「今、入りました」
美夜からの心なしか強ばった声に、通信担当のオペレーター、神崎鈴（かん・ざき・りん）が答える。
「反撃は自衛の範囲に止めよ」
「三発で済ませてやろうと思ったけど……」
美夜は拳を掌に叩きつけた。
「十発でも済ませることは出来ないな」
「艦長。データリンク騎、配置につきました」
「よし――全チャンネル解放で通信……“我が帝国は、貴国との交戦を望まず。願わくばこのまま通行を許されたし”」
美夜は口にしながら、どこかで無理だろうとわかっていた。

オーストラリア軍を率いているのは、オーストラリア軍唯一の飛行艦隊、第一飛行艦隊司令、オークニー少将だった。
「――成る程？」
司令官用シートにふんぞり返る彼は、通信兵からの報告を一笑に付した。
「さすがに臆病なジャップだけのことはある」
「……提督、まさか」
その不敵な笑いを見た参謀が青くなったのは無理もない。
――彼の上官は、間違いなく、やる気だ。
「本国からは威嚇発砲以上は許可を受けていません！」
「向こうが先に撃ったと言えばいい」
オークニー少将は自信たっぷりに答えた。
「記録は改ざんするためにある」

“鈴谷（すずや）”の針路をＭＬ（マジックレーザー）の光がかすめた。
「……ダメか」
美夜の落胆の合間にも、何発ものＭＬ（マジックレーザー）が“鈴谷（すずや）”の艦橋からイヤでも観測出来る。
すべて、自分達を狙ってのことだ。
「オージーは、どうあっても我が国と戦争がしたいようですな」
「鉱物資源と牛と羊……」
美夜はうんざりとした声でそう言うと、シートの背もたれに体を預けた。
「誰が一番買ってると思ってるんだ……」
「貿易相手という意味では、中華帝国です」
副長は顔色一つ変えずに答えた。
「今の連中は、独立国ではありません。中華帝国の属国です」
「経済侵略……経済的植民地……」
美夜は首を強く左右に振った。
「黄色人種の私が言うのも何だが……私は白が色つきの下に立つのは好まない」
「それが今までの世界秩序ですからな――ただ」
「……わかっている」
美夜は制帽を被り直した。
「今は、主義主張ではなく、目先の処理が大切だ」
「――そういうことです」
「メサイア接近中！数６――機種グレイファントムＲＡ！」
「警告を出せっ！これ以上接近する場合は、貴国からの宣戦布告と判断すると！」

「メサイアが来るぞっ！」
二宮の張りのある声が通信に入った。
機械ノイズや様々な騒音の中、二宮の声だけは恐ろしくよく通る。

美奈代はそれが内心羨ましいと思いつつ、指示を待った。
「長野は宗像と都築と共に阻止（ピケット）につけ、私と柏、早瀬は“ハイパー・バズーカ”で敵を撃ち落とせっ！」
「メサイアに飛び道具が効くんですか？」
――しまった！
美奈代は思わず口にした質問を心底後悔した。
「バカっ！」
鼓膜が破れたかと思うほどの罵声が美奈代を襲った。
「メサイアが弾丸を避けきれるのは騎士の機動があってのことだ！バーニアとスラスターのみに機動を任せる空中戦における機動性は爆撃機並みだと座学で何度言った！」
「す、すみませんっ！」
「許さんっ！宗像ぁっ！」
「はっ！？」
宗像が突然の指名に驚いた声をあげた。
「何か？」
「今晩、泉を好きにしていいぞ！？」
「――いいんですか？」
「教官っ！」
美奈代より先にそう怒鳴ったのは、何と都築だ。
「そ、それは俺がっ！」
「ダメだ」
二宮は即座に言った。

「お前では確実に孕みかねない！それでは面白くないし、何より」
「なっ、何ですかっ！？」
「染谷から“泉さんの面倒を是非よろしく”と折り詰めをもらっている」
折り詰め――軍隊用語で賄賂のことだ。
「無事に返せばさらに詰めてもらえるだろう。ここでチャンスを失うわけにはいかん」
「あんの野郎ぉぉぉぉっっっ！」
都築の絶叫の下、美奈代は赤面した顔を思わず両手で覆ってしまった。
「生きて帰ったらぶっ殺してやるっ！」
息巻く都築だが、
「貴様らぁぁぁっっっ！！」
恐ろしくシャウトの効いた美夜の絶叫に動きを止めた。
「目先の事を考えろっ！」
「見ろ都築、貴様のせいだっ！」
「理不尽だっ！」
「――泉っ！」
「は、はいっ！」
美奈代は思わず叫んだ。
「染谷と幸せになりますっ！」
「違うっ！」
「は、破談はイヤですっ！まだデートもっ！」
「マジメに聞けっ！」
二宮は言った。
「貴様は艦へのダメージを最小限度に抑えろ。シールドの性能を信じろ！」
「――は？」
「攻撃を意地でもシールドにあて、これ以上の艦の損害を阻止しろっ！」

「――っ！？」
その意味がわかる美奈代は青くなった。
「多少の騎体破損は大目に見てやる。ここで“鈴谷（すずや）”に沈んでもらうわけにはいかん」
「り……了解」
「よし。各騎！泉を二階級特進させないためにも、敵を倒せっ！」
「はいっ！」

「――くそっ！」
スクリーンに映し出される弾着予測に従って、甲板上を行ったり来たりする美奈代は艦橋の横で止まると、シールドを構えた。
途端に強い衝撃が騎体を押し、シールド表面の異常加熱警告がコクピットに響く。
表面の様子はわからないが、シールドから立ち上る煙が美奈代の心配をイヤでも引き立てる。
「シールドが持つの？」
「大丈夫です」
牧野中尉は答えた。
「この程度でしたら……まだ」
牧野中尉には、敵のＭＬ（マジックレーザー）の攻撃がこうも弱い理由はわかっている。
距離だ。
遠距離過ぎて、途中の空気によってＭＬ（マジックレーザー）の出力が削がれているんだ。
そこから判断するに、敵のＭＬ（マジックレーザー）はそれほど大口径ではない。
艦砲なら間違いなく１２６ミリ程度。
近衛のアンチマジッククーティング処理で十分に阻止出来る。

「いい加減当てろっ！」
オークニー少将が怒鳴るのも無理はない。
彼の指揮下にある飛行艦は小型のコルベット艦とはいえ数は６隻。
その６隻が撃ちまくっているのに、敵の速度は一向に落ちない。
つまり、ダメージを与えていないのだ。
「し、しかし――命中は確実にしているんですが……」
まさかメサイアのシールドで命中弾を無効化されていることなぞ思いもつかない砲術長は首を傾げるしかない。
「ええいっ！ミサイル撃て！クジラを喰う野蛮人共にハープーン（銛）を喰らわせてやれっ！」
レーダー担当のオペレーターが報告する。
「メサイア隊、かかりますっ！」
「艦を前進させろっ！」
オークニーは叫ぶ。
「ここで当てなければ世論の笑いモノだぞ！」
「敵、射程に入りますっ！」
二宮騎のＭＣ（メサイアコントローラー）、青山唯の報告に、二宮は頷いた。
すでに騎体はハイパー・バズーカの射撃体勢をとっている。
敵のデータはモニター上に表示される。
敵はまっすぐに突っ込んでくる。
それを見ていた二宮は思わず舌打ちした。
「戦場で直線運動するな……馬鹿者」

「ターゲット・ロック」
「唯――――やってくれ」
「はい」
ハイパー・バズーカの筒先から黄色の光が放たれた。
近衛の誇る射撃システムとＭＣ（メサイアコントローラー）のタッグだ。
精度は他国の比ではない。
命中は確実だ。
二宮は光が走った空の向こうで死に逝く敵騎士に呟いた。

――――死んで出直してこい。

グレイファントム
それは欧米のメサイアのスタンダード騎であり、基本的に重装甲を施された重メサイアとして認識されている。
装甲に用いられているのは魔法科学の産物であるＭセラミック。
硬度と耐熱性に優れ、戦車以上の耐弾性能をメサイアに与えているが、３６０ミリのＭＬ（マジックレーザー）砲の直撃は想定外だ。

「敵弾、来ますっ！」
「ちっ！」
そのグレイファントムを駆る騎士は、最初の一発目は避けた。
だが、その回避機動を予測していたとしか思えない二発目をまともにコクピットブロックに喰らって消滅した。

友軍騎の残骸が破片と煙をまき散らしながら海に堕ちていく。
「ジョージがやられたっ！」
「クソジャップがっ！」

弾丸を避ける。
それが身上の騎士だ。
彼らは正面から弾に当たって死ぬことを昔から不名誉としている。

唯一の例外は――
「敵は狙撃した！」
そういうことだ。
いくら弾丸を避けるとことが出来ても、弾丸の飛来を予測させない射手――狙撃手からの一撃は、その不名誉の例外だ。
仲間の死は、その範疇であると、彼らはそう断じたが――

「回避運動を――ぎゃっ！？」
「ロック！――なっ！？」
二騎が満足な回避運動も出来ないままに撃ち落とされた。
世界最強のグレイファントムだ。
それが抵抗も出来ずに一方的に撃ち落とされる？
――馬鹿なっ！
「い、一体、日本軍は何を！？」
「大尉っ！」

MC（メサイアコントローラー）からの警告じみた声に、騎士は我に返ることが出来た。
「上空から3騎っ！」
「――――なっ！？」

「こうも簡単に！」
上空――――グレイファントムから見れば太陽の中から襲いかかったのは、長野達だ。
まるでズームしたようにグレイファントムがスクリーン上で迫ってくる。
「上を取らせるなぁっ！」
光剣を抜刀し、長野が放った気迫の一撃は、すれ違い様にそのグレイファントムを真っ二つに叩き斬った。

「やるうっ！」
それを間近で見た都築は歓声を上げた。
背後でグレイファントムの爆発音が花火のようにさえ感じられる。

「さっすがっ！」
「都築、宗像ぁっ！」
「はいっ！」
「騎体を直線で飛ばすなっ！撃ち落とされたいのかっ！？」
「す、すみませんっ！」
「敵艦隊が接近中だ！退路を断つ、付いてこいっ！」
「はいっ！」

「全滅！？」
オークニー少将は、その報告に愕然となった。
「グレイファントムが６騎だぞ！？」

ズンッ！

ズズゥゥンッ！！

粘っこい爆発音が艦橋を、艦ごと揺るがした。
「だ、ダメコン急げっ！」
「被害報告っ！」
艦橋の要員達がてんでにバラバラの事を叫ぶ。
「提督っ！」
艦長が悲鳴に近い叫びをあげ、左舷を指さした。
オークニー少将の目に飛び込んできたのは、横を併走していたコルベット艦“アデレード”。
その側面装甲は、ＭＬ（マジックレーザー）の直撃により完全にえぐり取られ、着弾の余波により灼熱化した装甲や艦構造物が真っ赤に染まっていた。

“アデレード”の速度と高度がゆっくりと落ちていく。
墜落もしくは不時着水は避けられないだろう。
炎に包まれ、まるで踊り狂うようにして艦の破孔から外に飛び降りた乗組員が重力力場によって目に見えない原子の塵に変えられていく。
「――――くっ！」
正視に耐えない光景をオークニー少将に見せつける“アデレード”の艦橋が吹き飛ばされたのはその瞬間だった。
「“アデレード”、サヨナラを連発しています」
「くそっ！」
「レーダーロックされた模様っ！攻撃、来ますっ！着弾まで5秒！」

「回避っ！」
艦橋の向こうで強い光が迫ってくる。
口では回避を叫ぶが、それが無理だということはわかっている。
なにより、“アデレード”の被害からして、こちらも無事では済まないことは確実だ。

――――神よ。
彼は死に逝く部下達のために祈った。
――――我が部下に魂の安らぎを与えたまえ。
そう、祈ったつもりだった。
だが、部下達の耳に聞こえたのは、

「畜生っ！」

そんな声だ。
「チンクに尻尾を振った挙げ句がこのザマだっ！」
長野達がオーストラリア艦隊に向かって襲いかかったのは、まさにその時だった。
「敵、沈みますっ！」
レーダー要員の木村が明るい声をあげた。
「レーダー上に敵影なし！」
副長もモニターを見ながら浮かれた声をあげた。
「すごいですよ艦長！敵艦隊撃滅ですっ！勲章モノですよっ！？」
「――さて、どうかな」
美夜は深くため息をついた。
副長の目に映る美夜は戦勝を全く喜んでいなかった。
「艦長？」
「……副長」
シートに体を預け、まるで祈るような仕草を見せた美夜は、目をつむったまま言った。
「これで我が国は完全にオーストラリアと交戦状態に陥った」
「……しかし」
副長は納得出来ないという顔だ。
「う、撃ったのは向こうですよ！？」
「撃った撃たれたでは済まないのが外交だ」
「……」
「政治と外交でさっさとケリをつけもらわなければ……」

美夜の額に深い皺が刻まれた。
「人類は魔族に食いつぶされるぞ……」

トラック入港

大日本帝国南洋県トラック海軍停泊地

トラック諸島は、米国の植民地であるフィリピンと太平洋艦隊母港のハワイ真珠湾を結ぶライン上に位置する地理的条件と、太平洋の荒波から環礁によって隔離された広大な内海という泊地能力の高さから大日本海軍によって基地化が進められ、現在一大拠点として機能している。

とはいえ、航空戦力はほとんどなく、救難艇であるＵＳ－２と、その対潜哨戒機バージョンのＰＳ－２（別名プレステ２）が、さらに巨大な６発機の八式大艇達と共に、水に浮かぶ海鳥さながらに穏やかなトラック環礁の中に翼を休めているにとどまる。

その日、副官の穂積碧大尉（ほづみ・みどり）は“中華帝国軍見ユ”の報告電文を手に司令部を飛び出すと、司令部の横に止めてあったホンダ・ズーマーに飛び乗った。

陸戦隊から銀蠅したフリッツヘルメットを被ると、エンジンをスタートさせる。

ナンバーの所には「碧専用っ！」と書かれたステッカーが貼り付けられているが、その下、「重量物輸送専用」と書かれた落書きは碧の手でかき消されていた。

南方特有の日差しの下、椰子の木並木を抜け、ホンダ・ズーマーで２分。

自然石を用いた堤防の上に腰を下ろしている海軍将校を見つけた。背丈は低く、貧相な体型をしていることは、その後ろ姿から明らかだ。

軍服を着ているのに全くさえないオヤジ。

それが碧の印象であるし、本国に戻って夜道を歩かせれば、オヤジ狩りに会うことは保証出来ると思っている。

碧はズーマーのエンジンを止め、その人物に駆け寄った。
「有馬中将！」
「――ん？」
釣り竿を手にした貧相な男が振り向いた。
やや細い目をした穏和な顔立ちがそこにあった。
トラックの海軍トップ、有馬貞文（ありま・さだふみ）中将だ。
「今日は当たりが悪くて、河岸を変える所だったよ」
ゆったりとした手で竿を揺らす中将に、碧が言った。
「大変ですっ！」
「中華帝国軍はどこまで来た？」
中将は再び海に視線を向けたまま、そう言った。
「――え？」
電文を読み上げようとした碧はそれでかたまった。
「Ｓｕ－３０かね？それとも空警１号かい？」
「――両方です」
――さすがだ。
碧は内心、舌を巻いた。
海軍の乃木希典だ。
違う、あれは秋山真之か竹中半兵衛だ。
貧相な外見からは想像も出来ないが、人徳と戦略家としての才能を併せ持った、海軍きっての逸材に数えられているのが、今、碧の目の前で釣り竿をいじるさえないオヤジだ。
――全てを先読み出来る男
その異名はダテではない。
碧は電文を元に報告した。
「フェニックス諸島南南西沖合１５０キロ地点にて近衛の飛行艦が空警１号と接触。南西１９０キロ地点にてＳｕ－３０部隊からの攻撃を受けました」
「被害は」
「この戦闘における損害なし」

「……ふむ」
ピッ
竿を引くが、当たりはない。
「昨日は大きいのがとれたんだが」
「ごちそうさまでした」
「……ツバル近海まで連中が進出していたと見るべきだな」
浮きの調子を慎重に見極めながら有馬は呟いた。
「米軍の進出を警戒しての哨戒任務だろう……それにしても、何故攻撃した？」
「それと」
碧は報告を続けた。
「フェニックス諸島西の沖合３００キロの地点で豪州軍からの攻撃を受け、艦の一部を損傷。敵飛行艦隊は全滅、メサイア６の撃破を確認」
「……さすがは近衛だな」
喉の奥で有馬は笑った。
「一々、無駄な敵を造るとは」
「提督？」
「中華帝国軍の南太平洋進出は、豪州の黙認あっての事だ。近衛との交戦により、豪州世論は対日開戦へと転ぶ。厄介なことをしてくれたよ」
「しかし」
碧は驚いた様子で言った。
「近衛は撃たれたんですよ？」
「そのまま沈んでくれれば良かった」
「なっ！？」
「すまない……言いすぎだとは思うが、それが本音だ」
有馬は竿を仕舞いにかかった。
「宣戦布告をすることなく一方的に沈められれば、攻撃を「豪州のだまし討ち」として、国際世論を対豪州戦へとリードしやすくなる。

だが、逆襲で全滅させたとあれば、どう動くか想像がしにくい」
「我々軍人が」
碧は訊ねた。
「そこまで考える必要があるんですか？」
「戦争はね」
竿を片づけ終えた有馬はゆっくりとした動作で立ち上がった。
「外交の延長線上にあるのさ」
有馬は碧のズーマーを見てぽつりと言った。
「ジープで来てくれると嬉しかったな」
「す、すみませんっ！」
「まぁいいさ。ゆっくり歩いていく時間くらいはある――敵を警戒するのは、艦隊到達の後さ」

“鈴谷（すずや）”がトラック入港を果たしたのは、それから4日後のことだ。
「美奈代、美奈代っ！」
長旅によりついに食事から麺類が消えた食堂で、ハム定食と鯖缶定食のどっちを食べようか迷っていた美奈代を興奮気味の声が招いた。
窓際に立ったさつき達だ。
何人か、乗組員達も興味深げに外を眺めていた。
「どうした？」
「ほらほらっ！」
美奈代が窓をのぞくと、そこには“鈴谷（すずや）”と平行して飛行する緑のバケモノがいた。
ずんぐりとした機体にプロペラが6つ回っている。
機体のサイズはメサイアよりはるかに大きい、空を飛ぶ様はまさに“バケモノ”だ。

「何だ、随分と大きいな」
「八式飛行艇ですよ」
美晴が私物の一眼レフのデジカメを構えながら言った。
「八式？」
「往年の名機、二式飛行艇の後継機です。半世紀かかって、すべての性能でようやく二式を越えることが出来た、現代の名機です」
「ふぅん？」
美晴は熱心にそう言うが、美奈代はピンとこない。
ただ、“大きいのが飛んでいる”程度にしか思えない。
翼幅４８メートル、最高速度５５０キロ、偵察時の航続距離は９５００キロに達する飛行艇は他には存在しないとはいえ、機械音痴の美奈代にとって“飛べば皆同じ”程度の認識しかない。
しきりに“乗ってみたい”を繰り返す美晴とは違う。
「それで」
美奈代は窓から顔を離した。
「連中、何でこんな所飛んでいるんだ？」

「くそっ！」
受話器をアームレストに戻した美夜の口から舌打ちが漏れた。
「艦長？基地司令部は何と？」
「警戒任務にメサイアを回せ。その一点張りだ」
美夜は苦々しげに言った。
「基地司令はかなりの頑固者だ」
「哨戒ですか？」
「ミサイルの哨戒迎撃任務だ」
「ああ、それならメサイアは適任ですが――」
副長はそこまで言ってようやく言葉の意味が理解出来た。
「つまり！」

「トラックに反応弾が撃ち込まれる公算大。近衛も警戒任務上、協力願いたし。言い分はそういうことだ」
「どうします？」
「明日には米艦隊も入る。敵の狙いはそこだろう」
「大陸間弾道弾？」
「大陸間弾道弾なら、日本の防空司令部からの通報一発で済む――――水と食料、任務終了後の休養、その辺が交換条件かな」

「“鈴谷（すずや）”からの条件は以上です」
「まぁ、妥当なところだろう」
碧の報告に有馬はお茶をすすりながら頷いた。
食料も限界だろうし、兵員を休養させたいというのは、艦長経験がある者ならば当然だ。
「条件は承知したと伝えてほしい」
「はっ」
「海軍の下で近衛が動くなんてそうはないから、見物だろうなぁ」
司令部の窓の向こうには、接近する“鈴谷（すずや）”がはっきりと見えていた。

「南国だぁ……」
目の前に広がるエメラルドグリーンの海。
抜けるような紺碧の空。
白い砂浜。
かなり見慣れてきた光景とはいえ、空で見るのと海で見るのでは少しは違う。
美奈代達は着水した“鈴谷（すずや）”の甲板で、そんな景色をぼんやりと眺めていた。

陸上を行き交う人の姿まではっきりと見える所に停泊する船に乗っていながら……。

――メサイア部隊に上陸許可は出ない。

二宮のその一言で、上陸を破壊された彼女たちにとって、それ以上のことは何も出来ないのだ。

「トラック産のパパイヤって美味しいんですよねぇ」

「私、椰子の実ジュース飲みたかった……」

皆、遊ぶより食べる方に気が向いている。

そんな彼女たちの目の前を、“鈴谷（すずや）”を発艦したＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が島に向かって移動していく。

中には半舷上陸を許可された乗組員達が詰まっている。

「船は行く行く煙は残る。残る煙がシャクの種……か」

美奈代はふと、そんな一節を口にした。

「何それ」

「昔の歌さ」

詳しくは知らない。と、美奈代は肩をすくめた。

「こんな所にいたのかっ!?」

振り向くと二宮がいた。

「ミーティングを行う！」

「は……反応弾……ですか？」

「そうだ」

甲板に地図を広げ、地図の周囲に美奈代達を座らせた二宮は頷いた。

「帝国海軍はすでに入港を済ませている。そして明日、米艦隊が入港する」

「米軍が？」

美奈代は眉をひそめた。

「連中は中立を宣言しています。それが何故？」

「かといって備えないわけにもいかん」

二宮は答えた。

「米国人も、東南アジア各国ではすでに観光客を中心に、かなり巻き添えになっている。連中も同国人の危機をこれ以上放っておけないんだ」

「在留邦人の保護――ですか？」

「そうだ。特にシンガポールの米国大使館に立てこもっている米国人の保護。その口実で軍を派遣する」

二宮は地図を指示棒で突いた。

「現状、パナマ、スエズ両運河に加え、地中海と紅海の制海権を奪還したばかりの人類にとって、ヨーロッパとアジアの行き来はまだ困難なところがある――わかるな？」

美奈代達は無言で頷いた。

「従来のスエズ越えではなく、古くからの喜望峰越えを余儀なくされるのだが、何しろ途中の中継地はすべて魔族軍の支配地だ。そこで、英国やヨーロッパ各国は、セントヘレナ島とマダガスカル島の施設を拡充し、艦隊規模での停泊・補給を可能にした。このルートからの切り替えが、完全ではないのだ」

「しかし」
都築が疑問を口にした。
「喜望峰まで距離がありますよ？」
「英国軍の残滓が浮いているんだ」
「残滓？」
「氷山空母――――知っているか？」
「ハボクックですか！？」
目を見開いたのは美晴だ。
「全長１．７キロの浮かぶ氷山を空母にしてのけたあれが！？」
「そうだ」
二宮は頷いた。
「アフリカ撤退戦の際は、機関故障で半ば漂流していたものだが、今となっては絶妙な位置にいる」
「じゃあ」
さつきは地図を指さしながら言った。
「ヨーロッパからセントヘレナ、喜望峰、マダガスカル経由でインド洋ですか？」
「そうだ」
「それが？」
美奈代には二宮が何が言いたいのかわからない。
問題はマラッカのはずだ。
「インドでの利権を失いたくない英国の艦隊は、すでに喜望峰に到達している。米国としても、相手が相手なだけに支援しないわけにはいかん。物資の補給ルートとしてマラッカは必須。意地でもスマトラ島とマレー半島は押さえたい算段だ。在留邦人保護なんてのは、そのための口実にすぎない」
「――――成る程」
「当然、中華帝国軍もそれは知っている。だから、米軍とそれを支援する帝国軍は意地でも消えて欲しいんだ」
「このトラックに米艦隊が入った所を狙って、日米の艦隊を反応弾

で一網打尽……」
「泉、その通り。中華帝国軍はその戦術をとるだろう」
「戦術っていうんですか？そんなの」
「勝てば正義だ。それが戦争だ」
「……で」
都築が訊ねた。
「俺達ゃどうするんです？」
「トラック島の主要島に配置する。東京の防空監視センターに加え、米国の軍事衛星も捜索には加わってくれる。弾道ミサイルならすぐに落とせる。問題は潜水艦発射型の巡航ミサイルだ。おそらく、敵はそっちで来る」
「有効射程は？」
「約１０００キロ」
「トラックならグアムまでが捜索範囲ですよ？」
「そのために、帝国軍が血眼になって潜水艦狩りをやってるんだ」

数時間後

「まぁ、要するに」
征龍改の操縦をオートに切り替えた牧野中尉が美奈代に言った。
「現状、パナマ、スエズ両運河に加え、地中海と紅海の制海権さえ喪失した人類にとって、ヨーロッパとアジアの行き来は極めて困難な状態です」
「はぁ」
美奈代は頷いた。
「それはわかります」

「ええ。従来のスエズ越えではなく、古くからの喜望峰越えを余儀なくされているのだから無理もありません。しかも、途中の中継地はすべて魔族軍の支配地です。そこで、英国やヨーロッパ各国は、急場しのぎに、セントヘレナ島とマダガスカル島の施設を拡充しました」

「つまり」

美奈代はモニター上に表示された世界地図を見ながら言った。

「ヨーロッパからセントヘレナ、喜望峰、マダガスカル経由でインド洋ですか？」

「そうです。もう一つ、別なルートもありますが」

「別なルート？」

「ええ。セントヘレナに寄港せず、喜望峰の沖で補給する方法です」

「え？」

美奈代は地図を見た。

喜望峰は魔族軍の支配地域だ。

「正確には、喜望峰の沖合５００キロ」

「島なんてないですよ？」

「島ではありません。氷山です」

「氷山？」

「知りません？氷山空母」

「……は？」

「ハボクックといって、人口の氷山を空母化したものです。全長１．７キロの大型氷山。見物ですよ？」

「なんか……寒そうですね」

「ふふっ。そうかも知れませんね」

「でも、それと今回の出撃と何の関係が？」

美奈代にそれがわからない。

問題はマラッカのはずだ。

でも、アフリカを失った人類がマラッカに固執する理由は？

牧野中尉は答えた。

「英国はインドでの利権を失いたくないんです。それに加えて、いずれ来るだろうアフリカ争奪戦に備え、アフリカへの足がかりになるインド洋側の拠点は確保出来る限りを確保しておきたい。セイシェルやモーリシャスに英国が海兵隊を派遣して制圧下においているのはそのせいです」
「英国によるインド解放ってワケじゃないんですね」
「残念ながら、国際社会はそんなに甘くありません。とにかく、この方針に従った英国艦隊の先遣隊はマダガスカル島に到達しています。英国軍のメサイア隊が加われば、インド戦線の戦況は一変するでしょう」
「中華帝国軍は意地でも避けたいでしょうね」
「彼らは反応弾を使用してでも阻止に動きたいでしょうけど、未だ沈黙を続けていたラムリアース帝国とロシア帝国を刺激しかねません」
「連中が動けば」
「そうです」
牧野は頷いた。
「中華帝国軍は北側と西側両面から横腹を刺されます」
「なりませんかね」
「なって欲しいですけど――中華帝国は我が国と比べ、外交経済、すべての面で政治的には上です。そう簡単にボロは出さないでしょう」
「……」
「……言っても仕方ないことですけどね。英国軍のインド派遣に米国も反応。これがマラッカ制圧の目的になります」
「米国からの」
美奈代はようやくわかった気がした。
「物資補給ルート？」
「その通り♪」
牧野はニコリと微笑んで答えた。

「米国から物資、燃料、弾薬を運ぶ海上ルートが必要です。そのためにはどうしても太平洋からインド洋に入るルートが必要なんです……逆に、ここを押さえることが出来れば、中華帝国の動きを止めることは出来ない。中華帝国軍にとっても生命線なんです」
「なら米国も」
美奈代は地図を見直した。
「マラッカを確保する意味で、意地でもスマトラ島とマレー半島は押さえたい算段でしょうね」
「――――当然、中華帝国軍もそれは知っています。だから、米軍とそれを支援する帝国軍は意地でも消えて欲しいんですよ」
「海軍が怖れる理由が分かる気がしますね。このトラックに米艦隊が入った所を狙って、日米の艦隊を反応弾で一網打尽……」
「その通り。中華帝国軍はその戦術をとると見ています」
「戦術っていうんですか？そんなの」
「勝てば正義です。それが戦争ですよ」
「……イヤなものですね」

美奈代は自分の立場に立ち戻った。

太平洋上空１０００メートル
もうすぐグアム島の防空圏内に入る。

「巡航ミサイルの有効射程が１０００キロなら、そろそろ射程限界ですね」
すでに飛行を開始してから6時間近く。
全く何も変化がない。
「ええ。他が見つけてくれていれば良いんですが……」
牧野中尉がシートの下からコーヒーの缶を取り出した時だ。
ピピッ……ピピッ
「通信？」

牧野中尉はコーヒーのプルにかけた手を離し、通信を開いた。
「……え？」
「どうしました？」
「針路変更してください」
「どうしたんです？」
「潜水艦が」
「はい？」
「沈んだみたいです」

問題の海域には１０分ほどで到達した。
すでにその海域には八式飛行艇が２機、海面に着水していた。
場所はマリアナ海溝のほぼ真上。
青い海面が真っ黒な油に汚れ、その中に様々な浮遊物が浮かんでいた。
八式飛行艇から出されたボートに分乗した兵士達が浮遊物を調べている光景が、上空からではっきりとわかる。
「潜水艦の油だと思います」
「海軍が撃沈したんですか？」
「いえ」
牧野中尉は言った。
「戦闘記録はありません。情報では、八式飛行艇がこの油を確認したそうです」
「事故……ですか？」
「まさか」
牧野中尉は首を横に振った。
「浮遊機雷に接触したにしても……こんなところに？」

「浮遊物から見て」
その夜、美奈代達は、二宮から話を聞いた。
「沈んだのは、中華帝国海軍の攻撃型原子力潜水艦“長征7号”だ」
「沈没の原因は？」
「専門家による分析では、内部爆発による沈没ではなく、むしろ外部要因による沈没、つまりは撃沈された事は確実らしい。撃沈の事実を米軍は完全に否定した。我が国もだ」
「……じゃ、一体何が？」
「一つ、気になることがある」
「……」
二宮はプロジェクターに一枚の写真を映した。
へしゃげた金属片だ。
「潜水艦の外部パネルだ。かなり大きいが、海上に浮いているのを海軍が回収した――泉」
「はい？」
「意味が分かるか？」
「自分には」
美奈代は答えた。
「たんなる破片にしか見えません」
「覚えておけ。この破壊痕は、爆発によるものではない」
「爆発では――ない？」
「メサイアで言ったら、ヴェイルアタックによる貫通痕はこんな感じだ」
「――まさかっ！？」
美奈代達はそれでようやく理解が出来た。
「この潜水艦を沈めたの！」
「私はそう見ている」
二宮はニコリともせずに言った。
「喜べ――富士学校の仇が討てるぞ」

翌日。
美奈代達は精神的に緊張した朝を迎え――――ていなかった。
「うわぁ」
さつきが感慨深げに何度も足で土を踏みつける。
「久しぶりの土の感触だけどさぁ……」
「それにしても……」
美奈代は妙な感覚に襲われていた。
体が重いのだ。
「何で、こんなに体が重いの？」
「気持ち悪い……」
皆が緊張しているのは、その体の方だ。
せっかくもらえた上陸許可なのに、体がこれでは楽しむことは出来ない。
「飛行艦慣れですよ」
丁度、別なＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に乗っていた牧野中尉が楽しげに笑って言った。
その後ろには同じＭＣ（メサイアコントローラー）達がいる。
「飛行艦慣れ？」
「ええ――――無重力に慣れている筋肉に重力がかかるから疲れを感じるんです」
「中尉達は慣れていますね」
「体がもう――――ね？」
「それにしても」
美奈代は、牧野中尉達、ＭＣ（メサイアコントローラー）達は一様に手にバッグを持っているのに気づいた。
「どこかにお出かけですか？」
「ええ」
牧野中尉は頷いた。
「中華帝国軍の脅威も去ったことですし、米軍のグレイファントム

部隊が監視任務についてくれるわけですし」
妙に浮かれた声だ。
「何より午後は半舷上陸ですっ！南国でバカンスとしゃれ込もうと！」
「わ、私達もぉっ！」

「こう見ると……」
都築は砂浜に寝そべりながら、海辺で戯れる牧野中尉達、MC（メサイアコントローラー）に視線を向けていた。
「いい体してんだよなぁ……みんな」
「そうですねぇ」
山崎はパラソルを運び、ジュースの入ったクーラーボックスやシートの設置に余念がない。
「山崎ぃ」
「はい？」
「お前も少しは遊べよ」
「いやぁ……」
山崎は照れたような笑い声を浮かべて言った。
「僕はどうも、こういう準備の方が楽しいらしくて」
「損な性分だ……おっ？」

そこに現れたのは宗像達だ。
かなりきわどいラインの水着を難なく着こなす宗像が、海岸にいる男女問わず視線を独り占めしているのは間違いない。
都築には、さつきと美晴が何とか距離を取ろうと虚しく足掻く理由が分かる気がした。
「待たせたな」
「待ってねぇよ」
「何だ」

宗像は砂浜に寝そべってそっぽを向いた都築の顎を、その細い指でなでた。
「私の体を見て起きあがれなくなっているのかと思ったぞ？」
「わけねえだろ」
「なら起きあがってみろ」
「……いろいろ事情があるんだよ」

「さすが宗像さん、都築さんが玩具にされてますねぇ」
「ふふっ。コントみたい」
「にしても……都築、うつ伏せの下、どうなってるんだろ」
クーラーボックスの中に入れていた椰子の実を取り出すと、コンバットナイフで器用に穴を開け、ストローを通したものを美晴達に手渡した。
「やりっ！」
さつきが歓声をあげた。
「山崎君、さっき何か買っていると思ったら！」
「冷えているのが売っていましたから――早瀬さん飲みたい飲みたいいっていましたし」
「美晴っ！あんたの亭主は大したヤツだよっ！」
ストローに口を付けながらさつきは満足げに美晴の背を叩く。
「うんっ！これよこれっ！」
「おいしいっ！」
「久しぶりの果物ですよね」
「おいコラッ！助けろっ！」
「なら起きあがってみせろ」
「お姉さまっ！オトコなんてフケツなモノに何てコトしてるんですかっ！」
「優――やってみろ。面白いぞ？」
「……」（実験中）
「面白くないですっ！――うっ、ブタにも劣る感触……気持ち

悪……」
「フッ……こっちの方がいいか？」
「お姉さまぁ……もっと抱きしめてくださぁい♪こんな便所コオロギに触れて汚れた体を綺麗にしてくださぁい♪」
「ふふふっ……素直だな……都築？何を泣いている？」
「あらぁ？都築君、どうしたの？」
「中尉、都築准尉はピーチボーイとしての生理現象に悩んでおりまして」
「まぁ♪」
三人が満足している向こうでは、宗像が都築の背中に胸をこすりつけ、それを見た宗像のMC（メサイアコントローラー）、桜庭優が乱入。さわぎを聞きつけたMC（メサイアコントローラー）達に囲まれた都築が玩具になっていた。

「ところで……」
山崎はそれに気づいた。
「泉准尉は？」
「美奈代？」
さつきが思い出したように辺りを見回した。
「更衣室まで一緒だったんだけどなぁ……」
「無理もないですよ」
パイナップルをかじりながら、美晴は意味ありげに頷いた。
「美奈代さんって、本当に世間知らずなんですね」
「無理ないよ」
さつきは言った。
「美奈代、小さい時から近衛の保護施設で育ってたんだもん」
「そうなんですか？」
「うん。ほら、お父さんが近衛騎士で出征ばかり。お母さんは3歳の時に亡くなって、他に身寄りがないんだって。だから、近衛の保護施設に入れられて、そこでずっと」
「それで……ですかね」

「美晴さん、どうしたんです？」
「美奈代さん、水着買いに行って、“アレ”を選んじゃったんですよね」
「……ああ」
「多分、みんなが着ている水着見て、“これもしかして違うんじゃない？”って気づいて、それで……出て来られなくなったんじゃないか……と」
「いえ」
山崎が新しい椰子の実をクーラーボックスから取り出しながら言った。
「来ましたよ？」

美奈代は何故かしっかりとジッパーを閉じたパーカーに身を包んでいた。

「美奈代？」
「……う」
「どうしたの？始まっちゃったら、海は入らない方がいいよ？」
「いや……大丈夫だが……」
ちらちらと視線を送るのは都築だ。
「ああ。心配ないよ。あのケダモノなら、みんなが押さえてくれているし」
「……う、うん」
「飛行艦慣れを直すには、１時間位、水に浸かっているといい。しかも海水ならなおベターなんでしょ？」
「そうだな……」
美奈代は立ち上がると、皆から少し離れた所に向かって歩き出した。
「どうした泉」

突然、美奈代を背後から抱きしめたのは宗像だった。
「きゃっ！？」
「そんな色っぽい声をあげて――ん？こんなパーカーは邪魔だ」
「や、ややめっ！」
美奈代の手が、パーカーのジッパーにかかった宗像の手をなんとか止めようと力を込める。
「ふふっ……恥ずかしがり屋だな」
宗像の舌がうなじを走る刺激に驚いた泉は思わず手の力を緩めてしまった。
そこを見逃す宗像ではない。
ジッパーが一気に下がり、美奈代の水着が皆の前にさらけ出された。

「い……泉」
皆が驚いたのも無理はない。
「み、美奈代さん？そ、それはマジっすか？」
「な、何のコスプレ？」
「そ……それは反則……」

「だっ、だけどっ！」
美奈代は胸元を押さえながら抗議した。
「み、水着といえば、これしか想像出来なくてっ！」

「い……泉」
ようやく皆から解放された都築は、思いっきり体育座りになっていた。
「おい都築……どうした？鼻から出血が」
「そ……それは」
「とりあえず鼻血を止めろ」
「教えてくれ――その水着は」

「だから何だっ！悪かったなっ！」
「お――――俺を、誘っているのか？」
「誰がだっ！」

トラック基地襲撃サル　第一話

「いぃーちっ！」
「にぃいぃいっ！」
“鈴谷（すずや）”甲板上。
強い日差しに焼かれる甲板に手を付いて、腕立て伏せに勤しむ美奈代達の声が響く。
海で遊んだ帰り、二宮から命じられた挙げ句のことだ。
（せっかくシャワー浴びたばかりなのにっ！）
海水浴の仕上げといわんばかりに、艦内では満足に使えないシャワーをたっぷりあびて体を洗ったばかりの美奈代達はすでに汗だく。
海のじっとりとした空気と、南方特有の強い日差しが恨めしい。
「ごっ、じゅうぅうっ！」
バタッ！
皆が力尽きたようにその場にへたばった。
「――まったく」
その様子を見届けた二宮は、心底面白くないという顔で言った。
「慣れてきたようだな……腕立て……」
「そんなことはありません」
さつきは額を流れる汗を拭いながら言った。
「響きます」
「そうか？」
「そうです」
「じぁ、あと１０回追加」
「……」

３０分後
「ありゃ、誰からも誘ってもらえなかったことを根に持ってのことだぜ？」

甲板上でひっくり返りながらさつきは文句を言った。
「ですけど」
美晴は海に浮かぶ米軍艦隊を興味深そうに眺めながら答えた。
「艦長は“二宮中佐は一日忙しい”って言うから、誘っちゃ悪いなって」
「“部下から誘われましたのでっ！”……教官、その口実で仕事から逃げたかったらしい」
比較的平然とした様子の宗像は手すりに寄りかかった。
その背後では、米海軍空母“シャングリラ・テキサス”が補給艦から燃料を受け取っている。
米艦隊と帝国海軍の艦艇５０隻。
上陸部隊を含めれば１０万近い兵力が、このトラックに集結している中だ。
爆音を轟かせながら、“プレステ2”が“鈴谷（すずや）”上空をフライパスしていく。
「――――なぁ」
甲板に大の字に転がって、その様子をぼんやりと眺めていた美奈代がぽつりと言った。
「“アレ”には、どうやったら乗れるかな」
“アレ”？」
美奈代は無言で遠ざかっていく“プレステ2”を指さした。
「ＰＳ２ですか？」
「メサイア操縦資格じゃ無理かな」
「無理無理」
さつきは笑った。
「戦車兵に潜水艦操縦させるようなもんだよ」
「……そうか」
「ここが気に入っちゃったんでしょ」
「……うん」
美奈代は「うんっ」と伸びをした。

「青が一杯の――なんて言うのかな？こんな広くて、どこまでも行けそうな……吸い込まれそうな――上手く言えないけど、とにかくそんな世界……私は好きだ」
「この戦いが終わったら」
美晴は悪戯っぽく笑った。
「南方県の事務官にでも転属希望出したらどうです？パラオやグアムあたりで」
「――悪くないけど」
美奈代は小さく笑った。
「あの飛行艇のパイロットを目指したいな」
「本気？」
さつきはあきれ顔だ。
「海軍のシゴキはきついよ？」
「私は――」
美奈代は、もう遠ざかってしまった飛行艇が飛び去った方角を指さして、
「この“青い世界”を自由に飛べる、あの“飛行艇”っていうのに乗ってみたいだけだ」
「ＰＳ－２は綺麗なデザインですもんね」
美晴は笑った。
「それなら美奈代さん、民間のパイロット目指した方がいいですよ。ＰＳ－２の民間版は、八式飛行艇と一緒に、東亜航空の南方航路路線で就航してますし」
「……そうか」
そっちもあったか。
美奈代はそう思ったが、
「やめておけ」
そう言ったのは宗像だ。
「人の命は重いぞ。下手をすれば、重みで翼が折れる」
「……それでも」

美奈代は海の向こうを指さした。
「ああいうのより、よっぽど私の趣味には合う」
「ジェットよりプロペラ――デジタルよりアナログな泉にはお似合いだな」
宗像は笑って美奈代が指さした海の方を見た。
黒い点が１０以上、こちらに向かってくる。
ぽつりぽつりと、黒い点は時間を経るごとに増えてくる。
「――待て？」
「ん？」
「今日、発進した戦闘機があったか？」
「宗像ぁ、あるわけないじゃん」
さつきは首を横に振った。
「トラックは戦闘機離着陸出来ないもん」
「じゃあ、アレはなんだ？あれ、スホーイだぞ」
皆が立ち上がって海を見たその瞬間、

サイレンが鳴り響いた。

「高度を上げろっ！」
無線機に怒鳴るのは、中華帝国海軍空母“天津”攻撃隊長呉大尉だ。
迫り来る島と無数の船舶を前に、彼は歓喜するよりむしろ驚愕していた。
「こうも簡単に取らせるかっ！？」
米軍と帝国海軍。
海軍大国として名を馳せる二大国の機動部隊が集結している海域

に、何の抵抗もなく入り込めたことが、呉大尉には信じられない。
「一体こりゃ？」
すでに爆撃の射程に入ったというのに、未だに対空砲さえ上がってこない。
天佑だ。
呉大尉は自分をそう言い聞かせた。
「――――いけっ！」
呉大尉は、パイロンに吊した爆弾を敵めがけて投下した。

ズズゥゥゥンッ！
“鈴谷（すずや）”の上空をＳｕ－３０が通過する衝撃が走り、美奈代達は半ば吹き飛ばされて甲板に転がった。
「な、何っ！？」
後一歩で甲板から海に落ちるところだった美奈代は、驚いて空を見上げた。
「見てわからないのか？」
宗像だ。
「教えてやろう。これは空襲というのだ」
「いや、そういうことじゃなくて」
美奈代が驚いたのは、こんな事態でも平然としていられる宗像の神経であり、同時に――――
「宗像ぁっ！」
「なんだ？」
「どさくさに紛れて何してるっ！――――きゃんっ！」
「うむ――――８５のＢと見た」
抱きすくめる要領で、美奈代の胸をわしづかみにする非常識さだ。
「違うっ！」
美奈代はムキになって怒鳴った。

「これでもCはあるっ！」
「む？それは違う。絶対カップが合っていないはずだ」
「二人ともっ！」
反論しようと口を開いた美奈代を止めたのは美晴だ。
「現状、わかってますっ！？」
「すまん」
美奈代達が立ち上がろうとした途端――
ズンッ！
「きゃっ！？」
爆発音に、思わず美奈代は甲板に伏せた。
空母と“鈴谷（すずや）”の構造物が邪魔でわからないが、どこかに被害が生じたのは間違いない。
恐る恐る顔を上げた時、その視界に紅蓮の色を含んだ黒い柱が映る。
「やられたのは！？」
「あっち――米軍の方っ！」
「何で反撃しないんだ！？」
「するのは私達ですよっ！」
「ちっ！総員搭乗っ！」

――ついていない。
米第9任務部隊司令官ジョージ・キャンベルは部下の肩を借りながら、内心でそう毒づいた。
さっきまで質素だが、きちんと整理整頓が行き届いていた感のあった室内は、惨憺たる有様だった。
窓ガラスは全て砕け、窓から侵入した爆風が調度品のすべてをひっくり返し、風に流れて入り込む煙が呼吸さえ困難にさせる。
何より、負傷したり、死んで床に転がる将校の死体は目も当てられない。

その光景を目の当たりにする自分もまた、体中に痛みが走る。
「提督――ご無事で？」
副官のリー大佐がキャンベル提督の額にハンカチを当てながら訊ねる。
「大したことはない――何が起きた？」
「中華帝国軍の奇襲です」
「……最悪だな」
キャンベル提督がそう思うのも無理はない。
この場に居合わせたのは、日米両軍の司令部同士。緊急の会合中だった。
議題は――

トラック諸島を含むカロリン諸島一帯におけるレーダーの使用不能、通信障害が発生している。

これだ。

原因に関する見解は日米共に一つ。

狩野粒子。

レーダー上と、通信における障害程度なら、粒子レベルは低い。
問題は、狩野粒子が何故、この海域で確認されたか。
――原因はともかく、現実の事態に対処すべきだ。
――両軍共に、哨戒機を上げ、警戒に徹する。
会合は、そんな軍人らしい現実主義的な結論で終わろうとしていた。
その時、こう言ったのが誰だったのか、キャンベル提督は思い出せない。

――狩野粒子を中華帝国軍が使ったものなら、笑えませんな。
――全くだ。一体、連中はどこから狩野粒子を手に入れたんだ?

(……決して笑えなかったな)

キャンベル提督はため息一つ、頭を強く振ると、自力で立ち上がった。

「チンクも、絶妙なタイミングで仕掛けてきたな」

「提督」

副官の一人、ハスラー大佐がキャンベル提督に進言した。。

「安全が確保されるまで、シェルターに入ってください。今、艦隊に戻るのは危険です」

「その前に艦隊に対空戦闘を命じろ。メサイア隊は全騎戦闘態勢」

そこまで言いかけたキャンベル提督の声を遮ったのは、トラック基地の有馬司令の怒鳴り声だ。

「対潜警戒怠るなっ!」

壁にかかっていた電話相手に、それまでの温厚さは微塵も感じることは出来ない。

「水中から来られたらアウトだぞ!それから、“鈴谷(すずや)”を上げろっ!空襲が終わったら送り狼をさせるんだ!」

日本語がわからないキャンベル提督には、彼が何と言っているかわからない。

ただ、

タイセン。

ケーカイ

職業柄、キャンベル提督が知っている数少ない日本語の語彙にその言葉があった。

アリマは対潜警戒を命じた。

何故？

狩野粒子。

その存在が念頭にあったキャンベル提督は、その理由に即座に思い当たった。

彼は部下への命令を追加した。

「全艦、ソナー警戒。対潜兵装は即時発射可能にしろ、何隻か、対潜任務のため環礁から出せ。最悪――」

提督は空襲の続く窓の外を睨んだ。

「トラック環礁の外なら、アトミック機雷の使用を」

「し、しかしっ！」

「“あれ”の使用は、大統領から私に一任されている」

「潜水艦相手にですか？」

「ジャック。メサイア隊を攻撃に出せ。それから君」

キャンベル提督は狼狽する副官をあきれ顔で見た。

「それは、地中海で我が軍が、何にどんな目にあわされたか分かった上での発言か？」

同じ頃、

大型輸送艦隊の中では、詰め込まれたメサイア“グレイファントム”達が目覚めようとしていた。

「なんてザマよ！」

モニターやスクリーン、そして計器類の光が走るコクピットの中でそう喚いたのは、ステラだ。

本国へ戻った途端、ハワイでメサイアごと輸送艦に押し込められた彼女もまた、他の乗組員や騎士同様、数週間ぶりになる明日の上陸を楽しみにしていた矢先だった。

この騒ぎでは上陸はお預けだろう。

「こちらステラ・コールマン！ハッチ開けてっ！」
「こちら発艦司令所だ！メサイア使用許可は下りていない！」
「このままフネごと一緒に沈めっていうのっ！？」
「――今、許可入った！」
直立不動の体勢で搭載されているグレイファントムの頭上でハッチが開かれる。
油圧でゆっくりと開く仕組みのハッチは、まるで亀の歩みさながらに遅く、たまらずステラは――
「邪魔よっ！」
ベキィッ！！
グレイファントムの左腕でハッチを殴り飛ばしてしまった。
「こらっ、ステラっ！」
ハッチが海面に落下する音を聞いたイルマが怒鳴る。
「あーあっ！あなたこれ、給料から天引きされるわよ！？」
「恐いこと言わないでよっ！必要な措置でしょ！？こちらステラ、緊急発進のため、すべての発進シークエンスを省略するっ！」
「ステラっ！始末書は書けよ！？」
発艦司令所の士官もステラに怒鳴った。
「発艦司令所よりグレイファントム全騎。ハッチ解放次第、自力浮揚開始許可！」
「サンクスっ！」
重力力場の理論を用いた一種のブースターを吹かしながら、グレイファントムが甲板上に出る。
甲板上に設置されていたウェポンラックが開き、ステラはそこから９０ミリ速射砲を引き出した。
「敵はどこっ！？」
すでに対空砲が全艦から盛大に打ち上げられている。
「右っ！」
「右？」
ピーッ！

ステラは右を振り向き様、コクピットに響いた接触警報の意味を即座に悟ることが出来た。
スクリーン一杯に、炎上しながら迫ってくるＳｕ－３０が映し出されていたのだ。
速射砲で撃墜するヒマはない。
「うそぉぉぉっ！」
ドンッ！
鼓膜がどうにかなりそうな爆発音と、シェーカーの中に放り込まれたような衝撃がステラ達を襲う。
とっさに構えたシールドにＳｕ－３０の体当たりをまともに喰らったステラ騎は、一度海面まではじき飛ばされた。
そのまま落下しなかったのは、イマラのブースターコントロールが絶妙だったからとしか言い様がない。
「な、なんてことしてくれるのよぉっ！」
ステラは騎体を甲板に再び降ろすと、辺りを見回した。
「い、一体、何がどうなって――――？」
グレイファントムの目から見たトラック基地は酷い有様だ。
滑走路は爆弾で穴だらけで、車が何台かひっくり返っていた。
青い空も、今では黒い煙に覆われている。
そんな中、ステラ達の輸送艦の間近では、爆撃をまともに喰らい、真っ二つにへし折られた別な輸送艦が、舳先を天に向けて沈もうとしている。
さらにその隣。
もう一隻、輸送艦が激しく炎上していた。
艦の構造物のあちこちで走る爆発は、艦内に残っていた弾薬が激しく誘爆を繰り返している証拠だ。
最近の輸送艦は乗組員がほんの数名だとステラは誰かに聞いていた。
だから、乗組員が脱出出来ればいい。
そう思っていた。

だが――
ステラはモニターをズームさせてその輸送艦を見て青くなった。
炎上しているのは、物資輸送艦じゃない。
兵員輸送艦だ。
兵士達が炎と煙に巻かれ、甲板から次々と海に転がり落ちていく。
艦の横腹にまともに爆弾を受けたらしい。
もうもうと立ち上る煙の中、大きく抉られた艦体が見て取れる。
艦自体が受けた被害からして、艦内にいた兵士達は無事ではないはずだ。
「……神よ」
全身を炎に包まれ、まるで踊るように海に飛び込んだ兵士を見たステラは、思わず首から提げたロザリオを握りしめた。
その直後、輸送艦のボイラーに海水が侵入したんだろう、艦の後部、煙突の下あたりから今までで最大級の爆発が発生。
煙突を含む艦上部構造物が、甲板にいた兵士達を巻き込んで根こそぎ吹き飛んだ。
「……っ」
「ステラ」
呆然とするステラに、殺気だった声のイマラから通信が入る。
「敵空母の位置が判明したわ」
「どうするの？」
「今、この海域にある飛行艦は一隻だけ。インペリアルガーズの、“スズヤ”ってフネ」
「それが？」
「――“スズヤ”は敵空母艦隊に殴り込むわ」
「私達は？」
「飛んで帰ってくる位のことは、このグレイファントムにも出来るでしょう？」
ハッチが開き、グレイファントム達が次々と甲板に出てくる。
「成る程？」

その光景を見たステラは、楽しそうにコントロールユニットを握った。

「お手伝いくらいは、させてもらえそうね」

トラック基地襲撃サル　第二話

●中華帝国海軍空母“天津”
リュールカ・サトゥルン製ＡＬ－３１Ｆターボファンが唸りを上げ、Ｓｕ－３０の着艦フックがワイヤーに噛みついた。
着艦は成功だ。
甲板要員達が一斉に駆け出し、所定の作業に入る。
その光景を、張艦長は艦橋で満足げに見守っていた。
「まずは目出度いですな」
艦長にそう声をかけたのは、現・艦隊参謀長の毛中佐だ。
「うむ」
張艦長は、ふりかえりもせずに頷いた。
「浮遊機雷にひっかかって沈没した連中の穴埋めを我々がしてやったのだ」
「まさに」
毛中佐は、参謀としての能力ではなく、王制党と上官に媚びる“幇間”として政治的に出世してきた人材特有のそつのなさで言った。
「艦長の決断があったからでしょう」
「艦長」
飛行甲板士官が一礼の後、報告した。
「攻撃隊の損害がまとまりました」
「どの程度だ？」
「参加６０機、未帰還６。中破４、小破１２――小破機は２４時間以内に前線に戻せます」
「１２時間で終わらせろ」
「はっ」
「毛中佐。本国には報告したのか？」
「はい。戦果撃沈１０、大破１５、基地滑走路を完全破壊」
「よろしい」

張艦長は再び頷いた。
「レーダー誘導による対艦ミサイルが使用出来なかったのは返す返すも残念だな」
「地磁気の乱れによる障害かと思われます」
「厄介なことだが……」
張艦長は思いだしたように言った。
「それと、こいつのおかげで米帝からの攻撃を怖れる必要もない」
張艦長は、そう言って船窓の外を見た。
遙か遠くに、天に立ち上る柱があった。

「一発ぶん殴って引き返す!?」
“征龍改”のコクピットで、美奈代は思わず顔をしかめてしまった。
すでに
「どういうことです!?」
「安心しろ」
二宮は“幻龍改”のコクピットで美奈代に答えた。
「場所が場所だ。漂流させれば、勝手に沈む」
「――ああ、成る程?」
感心したような声をあげたのは都築だ。
「“アレ”に叩き込むと?」
「都築、そうだ――泉、地図を見ろ」
美奈代は戦況モニターに映された周辺4千キロの地図を見た。
「中華帝国軍は、トラックから見て真南から攻撃を仕掛けてきた。真南に、なにがある?」
「えっと――マーシャル諸島が」
「そうだ。1975年のビキニ環礁実検、通称“禁忌実検”によって魔力異常地帯化し、人が住めなくなったあの土地だが」

二宮は続けた。
「近すぎる。Ｓｕ－３０の戦闘範囲は3，０００キロだ」
美奈代は戦況モニターを指でなぞった。
その先にあるのは――
「カナンの大渦？」
「そうだ。推定直径８００キロの世界最大の渦潮――大渦だ」
「――はぁ」
「流れに巻き込まれれば１０万トン級船舶でも逃げることは出来ない。
数日に一回、流れが止まることがあるというが、正確には、幅５０キロの大渦の流れが弱まるだけで、それでも5万トン級以下では流れに巻き込まれるのがオチ。
渦の中は激しい嵐の巣。難破は避けられない。
別名“死の海域”と呼ばれ古くから船乗りに怖れられ、現在でも航行禁止海域に指定されているのはダテではない」
「どうして」
さつきはあきれ顔で言った。
「“禁止”って言われると、あの国の連中はそれをやりたがるんでしょうね」
「そういうお国柄なんだろうよ――連中はそんな海域にいる」
「海域にいても」
美奈代は首を傾げるしかない。
「それが何なんですか？別に渦潮に乗っかっているわけでもない」
「カナンの大渦は」
二宮は言った。
「かつて半径９００キロと言われた。理由がわかるか？」
「環境の変化で縮んだ？」
「その範囲では、８００キロの本流に向かって、１００本近い支流が水面下を海流として走っている。しかも、周辺は常に無風に近いため、この海流に巻き込まれたら本流にまっしぐらというわけさ。

帆船時代、ここに近づくだけで死を意味したろう。何しろ、風任せの航法では、逃れる術がない」
「……はぁ」
「要するに、空母を沈めるんじゃなくて、大渦に投げ込む方法をとる理由は何だ。そんな不確実な方法でいいのか？そう聞きたいのか？」
「そうです」
「――教えてやろう」
二宮は楽しげに言った。
「これは人体実検だ」
「人体――実検？」
「ああ。現在、“鈴谷（すずや）”には米軍から提供されたものも加え、多数のＭＳＦ（魔力飛行偵察ポッド）が搭載され、同時に米軍の魔法科学スタッフも乗艦している」
「は？」
「――カナンの大渦の奥にな？泉」
通信を聞いていた宗像が言った。
“龍の巣”という巨大な積乱雲が存在する」
「……どこかで聞いたような」
「直径１５０キロ。例え飛行機で“カナンの大渦”を越えたとしても、この龍の巣には近づくことが出来ない。特に最近の飛行機はカナンの大渦の外でも危険だ」
「危険？」
「レーダーも通信も、満足に使えない。近づけば近づくほど、危険だ」
「……待て」
泉はしばらく考えてから言った。
そんな現象を引き起こす物体と、似たような場所に心当たりがあったからだ。
「それってまさか？」

「狩野粒子の発見者、狩野博士は、“龍の巣”研究の第一人者だ」
二宮が答えた。
「狩野博士がわずか1週間で、アフリカ・南米戦線における電波障害の原因、狩野粒子の存在を明らかに出来たのは、長年の“龍の巣”に対する研究の成果にすぎない」
「――じゃあっ！」
美奈代はそれで青くなった。
「それって！」
「そうだ。泉」
二宮は頷いた。
「我々は、カナンの大渦の中に空母を追い込み、そこで連中に反撃させる。狩野粒子影響下で、中華帝国軍の兵器がどれほどの効果を持つかを見極める絶好のチャンスだ」
「……」
美奈代は通信モニター越しの二宮から視線を外した。
「任務は遂行します――ただ」
「……」
「私の中の騎士としての何かが、納得させてくれません」

空母“天津”によるトラック基地襲撃。
北京でそれを聞いた中華帝国軍と政府首脳は青くなった。
「誰が命令を下したか！」
王制党党中央軍事委員会主席、江党総書記は緊急会議の席上、居並ぶ委員会の重鎮めがけて怒鳴った。
「今、ジュネーブで我が国と米国がどんな会議をしているかわかっていたのか！」
中央軍事委員達は一様に黙った。
江総書記の言わんとしていることはわかる。

何しろ、現在、ジュネーブでは早期終戦を求める米国相手に我が国の外交官達が有利な交渉を進めている最中。
実行支配地域であるラオス・タイ・ベトナム、そして長年の懸案であるチベットまでを含んだ地域の中華帝国支配を米国に承認させる一歩手前との報告をわずか3時間前に受けたばかりだ。
あと数時間で、この戦闘の本願がついに成就するというこの土壇場で、会議の場にもたらされたのは――

トラック基地奇襲受ける。
米艦隊の損害多数。

これだ。
この報告がジュネーブを駆け抜けた途端、米国とEUは、まるで事前に申し合わせていたかのように、会議の席を蹴った後、それぞれの大使館に引き上げた。
以降、中華帝国との一切の交渉に応じようとはしない。
第四艦隊の空襲が与えたのは、米軍への打撃ではない。
自国外交への致命的な打撃だ。

「現時点において」
外交部代表の黄大臣は言った。
「欧米が我が国の要求を呑む可能性は限りなくゼロです」
「元からだろう」
江総書記は自嘲気味に歯を見せて喉で笑った。
笑い声が出てこない。
「元からゼロのことをやってのけようとした――どこぞのバカが愚かなことさえしなければ!!」
どんっ!
江総書記は机に拳を振り下ろした。

江総書記にとって、状況は最悪だ。
元来、アフリカで発生した未曾有の混乱に乗じ、かねてよりの悲願東南アジア征服に乗り出した時は、十分な勝算があった。
スエズを失い、アフリカを越えることが出来ない欧州。
世界最大の米国債負担率を楯にすれば沈黙するしかない米国。
共に怖れるに足らない。
何より、目先のバケモノ共をどうにかするだけで手一杯のはずだ。

つまり――怖れる物がなにもなくなったのだ。

そう判断した。
だからこそ、彼は判断した。
これは、代々の王朝がなしえなかったアジア全域を支配する一大帝国に発展させる絶好の機会だと。

東南アジアに我が軍の攻撃を止めることが出来る兵力は存在しない。
経済的に依存する国からの経済制裁は怖れるに足らない。
もし、そんなことをすれば干上がるのは奴らだ。
奪うだけ奪い、破壊するだけ破壊し、混乱が一段落した所で、占領を既成事実として欧米に認めさせるだけでよい。
連中の世論が何と叫ぼうと、実際に占領している既成事実こそが全てだ。
チベットでさえ我が国から奪えない欧米なぞ怖れるに足らない。
後はどうとでもなる。

東南アジア占領こそ全て。

それさえ出来れば、我々の勝ちだ。

彼はそう判断したからこそ、全軍の８割を動員した大博打に打って出たのだが――。

「……総書記」

顔を真っ赤にして怒りに肩を振るわせる総書記に、秘書官が耳打ちした。

「何っ！？」

それを聞いた総書記は目を見開いた。

「テレビをつけろっ！」

会議室にあるテレビに電源が入る。

映し出されたのはスーツ姿の男女が並ぶ集会。

――違う。

江総書記にはイヤでも心当たりがあった。

これは、米国議会だ。

そして今、壇上に立つの金髪の小太りの男こそ、Ｊ・ベネット――米国大統領だ。

大統領の演説が始まった。

「本日、アメリカ合衆国は何の予告もなく、計画的に空と海から中華帝国の攻撃を受けた。

しかも、我がアメリカ合衆国が平和への熱意と希望を捨てずに、彼の政府を相手に誠意を持って交渉を続け、アジアに和平をもたらさんとする交渉の最中にである。

中華帝国軍の航空部隊が大挙して、友好国にして、快く港の使用を許してくれた親愛なる同盟国、大日本帝国トラック基地にあった我が国の艦隊を爆撃した。

そして、我が艦隊および大日本帝国基地に対して重大な打撃を与

えた現在にあってもなお、中華帝国政府からは、この事態に関して、満足のいく説明は何もない。

既存の外交交渉を続けることは無用であった。

我が国は、東南アジア方面の危機に際し、中立を宣言することで、我が軍に対する軍事行動はないものと信じていた。

だが、中華帝国に対する信頼は、中華帝国自身の手によって覆された。

中華帝国軍が南太平洋まで進出していたのは、まさに中華帝国とその支援国であるオーストラリア政府が、我が軍を狙い、以前よりこの海域に、軍事力を展開していた証拠にほかならない。

今、ジュネーブにおいて行われている和平交渉に一縷の希望をつないだ我が国の努力は水泡に帰した。

その期間中、中華帝国政府は、真相を隠し平和の継続への期待を表明して米国を欺き続け、友好国諸共、だまし討ちした。

トラック基地への攻撃は、米国陸海軍に多大なる被害を与えた。

残念ながら非常に多くのアメリカ人の命が失われたのだ。

すでに中華帝国軍による残虐なる仕打ちにより、各国で米国の同胞が殺されたと報告されている。

中華帝国軍は、インドを攻撃した。

中華帝国軍は、ベトナムを攻撃した。

中華帝国軍は、ビルマを攻撃した。

中華帝国軍は、インドネシアを攻撃した。

中華帝国軍は、シンガポールを攻撃した。

中華帝国軍は、平和を願う国々を攻撃した。

従って、中華帝国は、インド洋から太平洋にかけての全域にわたる奇襲攻撃をおこなったのである。

過日より続く魔族軍の攻撃に乗じた卑劣なる攻撃は、中華帝国がみずからを語っている。

アメリカ国民はすでに世論を形成しており、国家の安全にとって

それが何を意味するか十分に理解している。
陸海軍の最高司令官として、私は軍に対しあらゆる防衛策を命じた。
そして、我が国の国民は決して我々がやられっぱなしの国民ではないことを忘れてはならない。
我々は、この計画的な侵略に打ち勝つのに、いかに長い期間がかかろうとも絶対的勝利を得るまで全力をもって戦い抜くであろう。
私はこの卑劣な行為によって再び我が国が危険にさらされないために、議会と国民の意思の判断が下されんことを確信する。
中華帝国の敵対行為は現実のものとなった。
私は、わが国民、わが領土、そして我々の権益が重大な危機にさらされている事実を見て見ぬふりをすることはできない。
私は国民と共に重大なる決意で立ち上がり、勝利への道を歩みます。
神よ――我らを守り賜え。
私は今議会に要請する。
中華帝国は、卑怯にも一方的に攻撃を仕掛けてきた。
よって、本日只今より、米中両国が戦争状態にあることを議会は、ここに宣言していただきたい」

大統領の演説が終わり、議会は割れんばかりの拍手がわき上がった。

「総書記っ！」
椅子に崩れ落ちた江総書記を、側近の秘書官達が抱き起こす。
「……」
口をパクパクと開くのが精一杯の江総書記の口に、秘書官が水を流し込んだ。

「――ふ……ふざけたことを！」
江総書記は怒鳴った。
「何だこの演説は！まるで――まるで我が軍が攻撃することを知っていたような口振りではないかっ！」
「総書記っ！」
部屋に駆け込んできた政府高官が泣きそうな顔で総書記に告げた事。
それは、中華帝国の経済的な死を意味していた。
「……」
「ど、どうなさるんです？」
「ど……どうするって言われても」
江総書記は呆然とした顔で、何度も弱々しく首を横に振った。
「こんなの……どうしようもあるものか」

「お見事でした大統領」
議会での演説を終え、ホワイトハウスに戻る車内、ワーナー大統領特別補佐官が隣に座る大統領をねぎらった。
「ふん……大したことはない」
大統領は楽しげに車窓を眺めながら言った。
「中国人と、その支援者達の抱える米国債がいくらだったかな？」
「およそ６０００億ドル――因縁を付ければ８０００億ドルは固いでしょう」
「素晴らしい」
大統領は楽しげに笑った。
「見たまえ」
大統領が窓の外を指さした。
ワーナーが窓の外を見ると、そこには着飾った東洋人の姿があった。

体に合わないことが明白なスーツと時代遅れのヘアスタイル。そしてどう見ても慇懃な態度。

この街であああいう連中がどこの出身か、ワーナーも知っていた。

「彼らが何か？」

「明日から、ああいう連中がこの街でどうなるかと思うとワクワクしてこないか？」

「……」

「滅亡したアフリカ、南米各国に加え、今度は中華帝国とその支援国向けの発行済み国債を合法的に帳消し出来るんだ。これは我が国の経済建て直しにおいては、千載一遇のチャンスだ」

「……はっ」

ワーナーは言った。

「ところで大統領」

「中国人が泣きついてきたか？」

「全面戦争だと恫喝していますが」

「各地での中国人とその協力者の監視を強めろ。議会と政府関係からの排除を最優先に」

「世論の誘導を含め、お任せ下さい」

「それと、南太平洋の司令官に言ってくれ――報復は、派手にやれと」

「航空隊の連中、怒り狂ってますよ」
通信モニターの向こうからの声に、ステラはあきれ顔で言った。
「あの悪名高い“龍の巣”の間近だよ?戦う前に落ちたいとでもいうの?」
「そりゃそうなんですけどね」
皮肉そうに笑って肩をすくめたのは、マーチン少尉だ。
下士官からのたたき上げなだけに、微笑んでいるのか睨んでいるのか、長年のつきあいがなければわかったもんじゃない。
「“我が国の国民は決して我々がやられっぱなしの国民ではない”んでしょ?」
「ったくさぁ」
ステラは顔をしかめて周囲を見回した。
周囲はトラック島から発進したグレイファントム達。
目指すはカナンの大渦付近に展開する中華帝国艦隊。
「絶対、あの大統領、知っていたんだよ。中華帝国軍がこの辺にいたこと」
「っていうか」
マーチン少尉はあきれ顔で答えた。
「俺達だって、昨日知ったでしょ?日本軍が中華帝国軍の機動部隊と交戦したって」
「――言ったっけ?」
「……中尉、ブリーフィングの最中に居眠りするのやめましょうよ」
「そうだ!」
張提督は通信機に怒鳴り続けていた。

「メサイアを送ってくれればいいっ！メサイアが必要なんだ！」
その顔は真っ青になっている。先程までの戦勝に酔いしれる余裕はどこにもない。
甲板上では、Ｓｕ－３０が次々と出撃体勢を整えつつあるのに、彼はＣＩＣに籠もったままで、部下達のそんな姿には感心すらない。
「――何分後だ！？」
通信機からの返答は、決して彼の希望にそったものではなかった。
「６時間後！？間に合うかっ！」
彼は通信機にヘッドホンを叩き付けた。通信機を抱きかかえんばかりに突っ張った腕が、否、全身が震え、今にも崩れ落ちそうだった。
「張司令代行」
ＣＩＣ長が心配そうに張の顔を伺う。
「ご指示を」
「進路変更――カナンの大渦の中に逃げる」
「し、しかしっ！」
「メサイアが来るんだぞ！」
張は怒鳴った。
「なぶり者にされたくなければ、渦を越えろっ！」
「危険ですっ！」
「百も承知だ！だが、それをしなければ、我々は全滅するぞ！？」
唖然とするＣＩＣ長を後目に、張は立ち上がって制帽を被り直した。
「幸い、今は潮の流れが緩い。このままなら越えられる！――全艦に発令っ！機関最大、針路を“龍の巣”にとれっ！それから、空母搭載機は全機発艦、対空戦闘用意、近づく奴はすべて敵だっ！」
張は言った。
「叩かれる前に、叩くぞっ！」

――中華帝国軍史上、最も無謀な艦隊。

後にそう呼ばれることとなる、張艦隊司令代行率いる中華帝国海軍第４機動艦隊は、カナンの大渦を越えた。

潮の流れが一時的に弱まったまさにそのタイミングで全艦が渡りきれたことは、もしかしたら張の悪運のなせる技かもしれない。

だが――結果として、カナンの大渦の中に入り込んだことが、彼らの運命を決めてしまった。

「どうしたんだ！？」

カタパルトに接続され、発進体勢が整っていたにもかかわらず、パイロットは発艦士官に首を横に振ると、手を十字に組み合わせた。

――発艦出来ない。

その宣言が出されたのだ。

その場でキャノピーが開かれ、整備兵がコクピットによじ登る。

「レーダーの整備はどうなってるんだ！」

パイロットは、その士官の首根っこを掴み上げて怒鳴った。

「レーダー？」

「見ろっ！」

パイロットが指さすのは、Ｓｕ－３０のレーダースコープ。

普段なら走査線が走っているのに、何故か真っ黒にブラックアウトしていた。

「ヒューズが飛んだんじゃないのか！？」

整備兵はそう言われて、後ろに座る航法要員の顔を見た。

「こっちもダメだ！」

彼はそう答えた。

「貴様等、ちゃんと整備していないのか！？」

「そんなはずはないっ！」

彼は整備兵としてそう怒鳴り返した。

「少なくとも、上は承知のことだ！これで飛べってさ！」

「……はぁっ！？」

「こちらコールマン。編隊全騎に通達」
グレイファントム隊を率いるステラは言った。
「“ポッド”が配置につき次第、攻撃を開始する。いい？まず、先に撃たせて」
「了解したけどよ――ステラ？」
ナッセ中尉が訊ねた。
「何だ、このレーダーノイズは。レーダーがまるで役に立たん。マジックレーダーだけが頼りだなんて――ブリーフィングで聞いてはいたが、まるで」
「南米戦線以来じゃない。こういうの」
軽い口調で応じたステラの首筋をイヤな汗が流れた。
「またもや私達ゃモルモットってワケさ」
「いずれ、ロクな死に方できないぜ……」
「ごもっとも」

中華帝国軍第四艦隊旗艦である空母“天津”の艦橋は、蜂の巣をついたような騒ぎになっていた。
「敵、目視範囲に入りますっ！」
「何としても全機を発艦させろっ！今の発艦で何機目だ！？」
「――今、全機上がりましたっ！」
「よしっ！金砲術長、対空戦闘任せるぞ！？」
「はいっ！左舷対空戦闘用意っ！ＣＩＣ、情報どうした！？」
「ＣＩＣ、情報入りませんっ！」
「ＣＩＣ長は何をしているか！この期に及んでサボタージュか！？」
「違いますっ！艦隊データリンクどころか、艦のレーダーまで使え

ませんっ！」
「修理急がせろっ！」
「艦長っ！機関室他、各所で電子装備使用不能との通報多数っ！」
「ど――――どういうことだ!?ええいっ！ミサイルを何故撃たないっ！」

「――――あれ、か」
ステラはモニターの端に中華帝国軍の艦隊を捉えた。
モニターに映るというのに、ミサイルの一発も飛んでこない。
いや――――今、撃った。
派手な白煙を上げながら、艦隊から一斉にミサイルが打ち上げられた。
こっちを狙っているのは間違いない。
だが、
「な……何?あれっ！」
ステラが驚いたのも無理はない。
一斉に打ち上げられたミサイル達は、てんでに迷走を始め、酷いものになると友軍艦に命中して爆発するありさまだ。
こちらに“飛んできた”ミサイルは一発もない。
海に墜ちたのが8割、味方に命中したのが1割、発射と同時に爆発したのが1割。
ステラの感覚ではそう見えた。
ミサイルを盛大に発射した艦隊は、今や自損によって炎上している。
「――――ちょっ！?」
いくら何でもありえない光景に、ステラは思わず敵艦に襲いかかるタイミングを失った。
「ち、中華の製品ってのは、こんなにタチが悪いの！?」

「違うわよ。ステラ」
「へ？」
「狩野粒子のせい」
そう告げたのはイルマだ。
「今頃、学者センセ達が喜んでいるわよ？誘導ミサイルが使えないことが判明したって」
「え？で、でも――あれって不良品じゃ？」
「中華帝国軍の対空ミサイルは、ロシアからのコピー品。電子基板は日本から盗み出したものよ――これに低価格が加わって、“世界で最も使える対空ミサイル”の座についている」
「バケの皮がはげただけじゃないの！？」
「――ステラ」
イマラは窘めるように言った。
「狩野粒子は電子装備を破壊する。わが合衆国軍が南米を救えなかった理由はまさにそこ――いい？この光景は、下手すればウチの海軍でも起きうることなのよ？」
「……まさか」
ステラは首を横に振った。
世界最強無比の合衆国海軍。
世界最精鋭の合衆国軍。
それが、こんな無様な姿を晒す？
ありえない。
あってはならないことだ！
「うそよ！」
「現実だから、トラックで海軍は叩かれた。そして、その報復として、狩野粒子影響下でも戦える私達が、海軍の代わりにここにいる。答えはそういうことよ――Ｓｕ－３０の編隊が接近中。機数約３０。艦隊上空に２５。ヘリも２０近く確認されている」
「――了解」
ステラはコントロールユニットを握った。

「“あれ”が単に、中華連中の不良品のせいにすぎないことを教えてやるわ」
「……あなたが証明する必要ないのに」
ステラは、部隊にＳｕ－３０部隊に対する攻撃を命じた。

「雑魚は無視しろっ！」
ステラは怒鳴った。
既に海には白いライン――艦隊の航跡が見えている。
「艦隊上空にさえ到達出来れば――」
ステラはとっさに騎体をひねって機動速射砲を背後に向けて発射した。
背後についたＳｕ－３０が1機、９０ミリ砲弾の直撃を浴びて四散した。
そして――雲を抜けた。
（ついてるっ！）
ステラはそう思った。
敵艦隊の姿がくっきりと眼下に見えたのだ。
「全騎、突撃っ！」

空母“天津”の艦橋は最早混乱に陥っていた。
「攻撃隊、引き返しますっ！」
「畜生めがっ！艦隊上空を飛行中の直援（ＣＡＰ）連中をどうにかしろっ！砲が撃てないっ！」
「敵メサイア隊、４隊に分離っ！」
「ＣＡＰ、全く歯が立ちませんっ！」
張の構えた双眼鏡の中で、炎上するＳｕ－３０が黒煙を引きながらまっすぐ海面に墜ちていった。
艦隊の砲は上空を向いているのに、沈黙を守ったままだ。

――下手に撃てば友軍機に当たる！
艦隊上空で直援部隊が編隊を組んでいる最中に敵に踏み込まれればこんなものだ。
世界最強レベルのＳｕ－３０をもってしてもどうしようもない。
張の双眼鏡の中で、また１機、墜とされた。
「……馬鹿な」
張は白昼夢を見る思いで双眼鏡から目を離した。
双眼鏡から目を離せば、白昼夢から逃れられる――そんな希望を持っていた。
だが、現実は変わらなかった。
「馬鹿な」
張はもう一度、そう呟いた。
世界最強の中華帝国軍。
ずっと、そう教わってきた。
米軍も、メサイアも、怖れるに足らない。
そう、教わってきた。
信じてきた。
それなのに――
一瞬、あの敗北主義者、李提督の顔が脳裏に浮かんだ。
――小日本だなんだの、敵を舐めてかかると痛い目に遭うぞ中佐――軍人たる者、常に敵を侮るな
「うるさいっ！」
張は怒鳴った。
「わ、私にそんな教訓を垂れるな！わ、私は海軍の党政治将校でもあるんだぞ！？」
「司令代行っ！」
防空任務を委ねた参謀が、張の肩を掴むと、奇妙に顔を引きつらせながら言った。
「対空射撃を許可して下さいっ！このままでは全滅しますっ！」
（こいつ――何を言ってるんだ？）

張は眉をひそめた。
この場での指揮権はもう、目の前のこいつのモノだ。
対空射撃なんて、当然ながらその権限の内だ。それを求めてくる？――――余程、混乱しているんだ――――張は参謀の横面を張った。
「やれっ！何をぼさぼさしているかっ！」

「狙い通りだっ！」
ステラ達は、あっさりと艦隊上空に飛び込むことが出来た。
すでに眼下には空母がはっきりと見える。周囲は未だ敵の戦闘機が飛んでいるから、連中は弾幕は張れない。
奇襲というワケにはいかないが、これはこれで絶妙なシチュエーションだ。
「まずは周囲のザコを叩けっ！」
ステラは機動速射野砲を構えながら部下に命じた。空母の防空装備は大したことはない。ただ、防空担当艦は邪魔だ。
だから、ステラはまず、艦隊内側の駆逐艦に狙いを定めた。
ピンッ！
速射野砲の照準がロックされた次の瞬間――――

ステラ達の周囲に、黒い花火が上がった。

「ば、バカなっ！」

その言葉を叫んだのは、ステラだけじゃない。
米中両軍の騎士とパイロットが叫んだ言葉だ。

何しろ、中華帝国海軍第四機動艦隊各艦は――――

上空の友軍機を無視する形で、激烈な対空射撃を開始したのだ。

それまで生き残ってＳｕ－３０隊を率いてきた呉大尉が艦隊上空にさしかかったのは、まさにそんな時だった。

主翼に大穴を開けられ、錐もみ墜落する寸前の機体を立て直した挙げ句、ようやく艦隊上空に戻れたのだ。

その彼のヘルメットのレシーバーに、母艦からの通信が入る。

「飛行中の各機は……ザザッ……ザザッ……」

ジャムが酷く、はっきりとは聞こえない。聞き逃した所を推測で穴埋めすれば、きっとこういう意味だろう程度の通信だ。

（まだ母艦は生きている！）

呉は少しだけ安堵すると、周囲を見回した。

３０機近くで襲いかかって返り討ちにされた。

今、自分と共に飛んでいるのはたった２機。共に損傷が酷く、飛べるのがやっとの有様だった。

幸い、艦隊上空は敵味方入り乱れている。

この隙に母艦に収容してもらおう。

（それも――――だめか？）

ついにエンジンから煙を吐き出し始めたその内の１機を心配する呉大尉のレシーバーに、母艦から別の通信が入った。

「対空射撃警報、対空射撃警報、これより艦隊は対空射撃を開始する。秒読み開始――――１０、９、８……」

「ちょっと待てっ！」

呉大尉は真っ青になって叫んだ。

「まだ味方が――――」

その叫びが終わる前に、彼の目の前で出来損ないの花火が咲いた。
彼のレシーバを、逃げる間もなく味方によって撃ち落とされるパイロット達の悲鳴と叫びが満たす。
「大尉っ！」
呉大尉と共にここまで来たＳｕ－３０のパイロットが叫び声を上げた。
すでに航空燃料に火が回っている。
脱出する以外に方法はない。
だが、パイロットは被弾と火災のパニックでコクピットで叫ぶだけだ。
「助けて下さい大尉っ――――火、火がっ！
「脱出しろっ！」
「やだっ！やだぁっ！た、助けてっ！」
ズンッ！
そのＳｕ－３０に引導を渡したのは、友軍からの対空射撃。
コクピットを貫通した一撃が、パイロットを一瞬にして殺傷してのけた。
「くそぉっ！」
呉大尉はスロットルを開くと、手近にいたメサイアめがけて突撃した。
「貴様等がっ！」
機関砲のトリガーを力の限り引き続けながら、彼はメサイアに襲いかかった。
「貴様等がいるからぁぁぁぁっっっ！」
――――消えろっ！
――――俺の目の前からっ！
呉大尉は意味不明に近い叫びをあげ、機体を操作する。
機関砲がメサイアの背中の装甲で弾けた。
メサイアが振り返る。
その醜悪な顔の中で光った目と、呉大尉は視線が合った気がした。

「――っ！」

呉大尉めがけてグレイファントムの戦斧が振り下ろされたのは、その直後だった。

「――なんて事だ」

眼前に広がる甲板は穴だらけにされた。

艦内ではあちこちで火災が発生している。修理のため格納されていたＳｕ－３０の航空燃料に火がついて、格納庫は手が付けられない状態だ。

運良く沈没が避けられても、自分の軍人としての経歴はこれで終わった。

そう思った張は、その場に力無くへたり込んだ。

あの時――

参謀は一々、対空射撃の許可を求めたんじゃない。

対空射撃で友軍機を巻き添えにする許可を求めてきたんだ。

今更、参謀を射殺した所でどうしようもない。

いや。

艦橋を真上から撃ち抜いた挙げ句、内部で爆発した砲弾で、あの参謀の上半身はどこにあるかさえわからない。

他の参謀達も軒並み同様の有様だ。

上空からメサイア達が放つ砲火の雨が、艦隊に降り注いだ。

空母だけでも１００発以上を被弾。

その一発だ。

海軍自慢のイージス艦は、ＶＬＳ内部のミサイルが誘爆して粉々になった。

他の駆逐艦も、煙突から飛び込んだ砲弾が機関の中で爆発し、単

なる砲弾の爆発では考えられないほどの破壊を引き起こし、艦を内部から破壊してのけた。
爆発の度に、艦の構造物が吹き飛び、破孔から、かつて艦を構成していた物体と、かつて乗組員だった肉片を吹き出した。
こうなればもう、米帝から盗み出した軍事技術なんて何の意味もない。
「駆逐艦４号、沈没！」
「フリゲート８号、軸足止まったっ！」
艦橋で見張りにつく水兵達も血まみれだ。
せめて、そんな負傷を負いながらも任務を放棄しない水兵達を勇敢と賞賛すべきだろう。
張は思った。

――中華帝国海軍水兵は、世界最強だ。
――故に、中華帝国海軍は、世界最強なのだ。

不意に、電気が走ったような痛みに、張は顔をしかめた。
腰が妙に痛い。
そっと手を回してみると、ぬるっとしたなま暖かい感触がした。
「……」
手が血で染まっていた。
傷を見るのが恐くて、張は思わず上を見上げた。
「メサイア接近するっ！」
「フリゲート４号、横転っ！」
水兵達からの報告は続く。
ただ、段々と報告の声が遠くなっていく。
（いかん）
張は、艦長としての命令を出そうとした。
――総員退艦、艦から離れよ。
張は大声でそう命じたつもりだった。

――逃げてくれ
心から、張はそう願った。
張の目の前が真っ暗になったのは、それからすぐのことだった。

その張を、甲板に強行着艦したグレイファントムの影が覆い尽くそうとしていた。

中華帝国海軍空母“天津”
それは、中華帝国軍初の空母として、同時に、メサイアによって初めて撃沈された空母として歴史に名を止めることになる。

第四艦隊は全滅。
艦隊乗組員は、戦闘後、すぐに再開されたカナンの大渦に巻き込まれ――生きて祖国へ帰ることは出来なかったことを、ここに併記しておく。

一方、美奈代達はどうしていたかというと――？

破局のはじまり

中華帝国軍中央軍事委員会が第四艦隊の命運の行く末を知ったのは、傍受した米軍の通信からだ。

「……」

居並ぶ委員の視線を背に受け窓際に立つ江総書記は、報告を受けた後も、無言のまま身じろぎ一つしなかった。

状況は最悪だ。

元来、アフリカと南米で発生した未曾有の混乱に乗じ、かねてよりの悲願東南アジア征服に乗り出した時は、十分な勝算があった。

スエズを失った以上、アフリカを越えることは出来ない欧州。

世界最大の米国債負担率を楯にすれば沈黙するしかない米国。

共に怖れるに足らない。

何より、目先のバケモノ共をどうにかするだけで手一杯のはずだ。

つまり――怖れる物がなにもなくなったのだ。

だからこそ、彼らは判断した。

これは、代々の王朝がなしえなかったアジア全域を支配する一大帝国に発展させる絶好の機会だと。

東南アジアに我が軍の攻撃を止めることが出来る兵力は存在しない。

経済的に依存する国からの経済制裁は怖れるに足らない。

もし、そんなことをすれば干上がるのは奴らだ。

奪うだけ奪い、破壊するだけ破壊し、混乱が一段落した所で、占領を既成事実として欧米に認めさせるだけでよい。

連中の世論が何と叫ぼうと、実際に占領している既成事実こそが全てだ。
チベットでさえ我が国から奪えない欧米なぞ怖れるに足らない。
後はどうとでもなる。

東南アジア占領こそ全て。

それさえ出来れば、我々の勝ちだ。

彼らはそう判断したからこそ、全軍の8割を動員した大博打に打って出たのだが――。

「――これが結果か？」
総書記の口から出たのは、そんな言葉だった。
「梁君……これが、君の言った結果か？」
「……」
「答えろっ！」
「……軍事的には勝っています」
梁総参謀長は冷たく言い放った。
「すでに東南アジアのの8割が、我が軍の占領下にあります。少なくとも、私の計画通りには進んでいます」
「計画通り……だと？」
振り向いた江総書記が、血走った目で梁総参謀長をにらみつけた。
「米国債のすべてを踏み倒され、元対ドルレートは停止！
いいか！？
我が国の通貨は既にドルとの換金が出来ない有様だっ！
対欧米輸出は全面停止に陥り――」
「経済は軍事の問題とは別です」
梁総参謀長は答えた。

「それは、経済部門の問題です。私の担当は、あくまでも軍事に限定されています」
「――貴様っ！」
「軍が行動を起こした場合、経済政策責任者として、経済がどう動くかを予測し、対策をしておくのは当然のこと……つまり」
梁総参謀長は、江総書記にむしろ哀れむような視線をむけた。
「――経済部門の怠慢です」
「海軍は空母艦隊を失ったぞ」
「――ああ」
梁総参謀長は、隣に座っていた海軍司令員に気の毒そうな視線を送った。
「あれは第四艦隊内部でのクーデターによるものです。第四艦隊司令部を殺害し、艦隊を乗っ取ったのは、政治部に属する一派でしたな」
「政治部が誘導したというのか！？」
「だまれっ！」
激高して席を立った軍政治部長を、江総書記が一喝した。
「今更、あんな艦隊の責任なんてどうでもいいっ！問題はこれからだ！」
「“死亡”した張艦長等は――」
少しは落ち着いたのか、朱軍政治部長が襟元をゆるめながら言った。
「米国に買収された結果、国家に対する致命的な反逆行為に及んだ――国民と皇帝にはそう報告しましょう」
「――紫禁城の軒先にぶら下がりたくなければな」
「“この戦争は貴様等のものだ”――陛下はそう仰せでしたな」
梁総参謀長は小さく鼻白んだ後、江総書記に言った。
「“そうです。全責任は私めが――戦果は陛下がお取りになればよいのです”」
それは、紫禁城で江総書記が切った大見得だ。

「少なくとも、その中に我々は入っていない。陛下も責任はすべて総書記にあるものと見ているでしょう」
「――――っ！」
まるでゆであがったように顔を真っ赤にする江総書記を無視するように、梁総参謀長はタバコに手を伸ばした。
「――――ふぅっ。閣下、ここまで来たのです。そのまま続ければよいのです」
「どうやってだ」
江総書記は干涸らびて固まったような声を絞り出した。
「輸出を止められ、国内経済は実質上破綻することは確定した。町は物乞いと失業者、借金取りで溢れかえる。昨日まで栄華を誇った国内企業は軒並み倒産寸前になるだろう。そんな連中が反政府勢力と結びついて見ろ」
「ですから」
喋るも煩わしい。
そう言わんばかりの声を、梁総参謀長は紫煙と共に吐き出した。
「欧米とより有利な立場で和平を結ぶまで戦えばよいのです」
「――――出来るのか？」
「勝算はあります」
梁総参謀長は灰皿にタバコをねじこんだ。
「隋第二砲兵司令員」
「――――はっ」
梁総参謀長の声に、隅に座っていた小柄で陰湿な印象を受ける男が立ち上がった。
「例の件、江総書記にご報告しろ」
「はい」
隋がファイルを広げた。
「欧米の軍事力は、我が軍より数段優れているとされますが、これはあくまで電子装備の話に過ぎず、逆に言えば、これさえなければ欧米と我が軍は肩を並べることが出来る――――いえ、数で勝る以上、

我々に有利です」
「……」
「そして、欧米軍が魔族なる物共に敗北したのは、まさにこの電子装備が使えなかったからに他なりません」
「……」
「幸い、我が軍の兵器がその影響下でも動くことは、アフリカ各国軍の戦闘記録からも明らかです」
「――何が言いたい」
「つまり」
隋はファイルをめくりながら答えた。
「人為的に、そんな状況を作り上げればよい――そういうことです」
「――馬鹿な」
江総書記は、隋の言葉を一笑に付した。
「あれは未知の電波妨害兵器だと聞くぞ？そんなものをどうやって――」
「手に入れることは出来ます」
梁総参謀長が隋に代わって答えた。
「……貴様？」
「入手ルートは確保している――そう言ったのです。閣下」
――続けろ。
梁総参謀長は隋にそう命じた。
「はっ。それを爆撃機及び弾道ミサイルに搭載。戦域に大規模に散布します。これにより、例えいかなる最新鋭兵器でも、連中は使用することが出来なくなります」
「……そ、そんなことが……梁総参謀長……き、君は一体？」
「入手ルートは合法と言えるでしょう――続いて今後の戦闘兵器についてですが――」

「……馬鹿げている」
シドニー湾に浮かぶのは、中華帝国第2機動艦隊の獰猛達。
その中で最も巨大な空母。
“天津”級3番艦“長江”の艦橋でそう呟いたのは艦隊司令黄提督だ。
背は低いが、筋肉質のがっしりとした体格の持ち主で、鋭い眼光と共にいるだけで威圧感を感じさせる強者だ。
いかなることがあっても弱音を吐いたことがない黄提督が、そんな言葉を吐いたことを、艦隊参謀長は内心意外に思った。
黄提督の手の中には、本国から送られてきた通信が握りしめられている。
「提督？」
参謀長は思いきって訊ねた。
「本国は何と？」
「――前進だ」
「前進？」
「ああ」
黄提督は従兵の持ってきたコーヒーを飲みながら言った。
「万難を排し、前進に前進を重ねよ。軍事委員会の許可なく停止することを禁ずる――派閥で出世する御方は言うことが違う」
「中央委員会は、狂ったんですか？」
参謀長は自分の口から出た言葉を慌てて飲み込もうと口元を押さえた。
恐る恐る見回した艦橋に政治将校がいないことを、彼は神に感謝した。
「――安心しろ」
黄提督は苦笑しつつ言った。
「私も同感だ――それで？」

「恐縮です。オーストラリア軍とは話がつきました」
「“モスキート”……“スピットファイア”……か」
フゥッ。
黄提督は、眼下に広がる甲板に並ぶＳｕ－３０を見つめながらため息をついた。
「最新鋭戦闘機が使い物にならなくなるから、本国へ戻せ？代わりにプロペラ機を送る？オーストラリア軍にも売却する？何の冗談だ」
「ミサイルが使えない以上、図体ばかりデカイジェット戦闘機に意味はありません。ＶＴ信管がある以上、対艦戦にも使えませんし」
「対地攻撃任務が主眼となることはわかる……だが」
「狩野粒子散布戦は、第二砲兵隊が実施します」
「やめろと言ってくれ」
黄提督は苦笑いしながら言った。
「俺達の職場を狭くするな」
「木製機を生産することで」
参謀長は言った。
「国内の木工業者に、また、ジェット戦闘機の数十分の一という低価格で済む通常型戦闘機でさえ、国内の金属、金属加工……その他、数えていたらキリのない業者に仕事を与えることになります」
「……俺の実家は電気業者だ」
「お気の毒です」
「……生産は進んでいるのか？パイロットは」
「パイロットの養成は急ピッチで進んでいます。また、各工場で連日生産される戦闘機及び爆撃機の数はすでに１万機近くに達していると聞きます」
「……飽和攻撃……か」
――パイロットは消耗品じゃないぞ。
黄提督は天井を仰いだ。
「戦争は勝たなければ意味がありません」
参謀長は言った。

「中央は、米国と有利な条件で和平を結びたいというのが本音でしょうし」
「……そう願おう。ところで」
黄提督はコーヒーをテーブルに戻した。
「日本軍が第三勢力と交戦しただと？」
「放棄された諸島。マーシャルでです。日本軍の通信を傍受しました」
参謀長は頷いた。
「――――間違いなく、魔族軍です」

水中の敵

●アフリカ　キリマンジャロ　魔族軍第一軍司令部

「補給は順調なのですが」

ユギオの前で苦い顔をするのは、彼の幕僚の一人、ラクトだ。

かつて正規軍で高速打撃妖魔軍団を指揮していた経歴を買われたのだが、今やそんな彼の手元に残っている兵力は中隊規模にも満たない。

「あくまで“現有規模に対する”補給にすぎません」

「わかっている」

ユギオは表情を変えずに答えた。

「兵力が足りないというのだろう？」

門解放（ゲート）後のアフリカ占領戦は彼自身、かなりの無理があったことを認めている。

あの三週間で、一日１００キロ規模での戦闘移動が出来たタイプ、先の戦争におけるヴォルトモード卿軍主力妖魔達を軒並み失った。

移動速度が遅いせいで被害が少なかった第二線級妖魔たるオークタイプや、解放が間に合わなかった雑多な妖魔がその穴埋めをしているにすぎない。

先の戦争開戦時点から比較すれば、質量共に１００分の１というのが、彼自身の自軍に対する評価だ。

目の前のラクトはその中でも最も割を食っていることも認めている。

コストや在庫の関係で、ラクトが望む高速系妖魔は全く回せないからだ。

「オークタイプは弓や剣、そして槍で人類相手ならかなりのところまでやれます」

ラクトは言う。

「しかし、一体、いつになったら高速打撃型のファーシャル・タイプや、ライノサロス・タイプの大型妖魔達の補充が……」
「しばらくかかるだろうな」
ユギオは頷いて、そう答えた。
現状、巣（ネスト）に運べた、傷ついた手持ちの妖魔達の修復だけで手一杯の上、人類側からの攻勢はない。
何より、次の攻略は高速系が得意な平地ではなく、ほぼ使えない山谷の多い地形だ。
むしろ飛龍（ワイバーン）などの飛行系の配備こそ急務だ。
ときいえ、生粋の高速系畑を歩んできたラクトに、飛行系妖魔部隊を動かせと命じて素直に応じるとは思えない。
今、ラクトがここに来ているのも、高速系妖魔配備の嘆願が目的なのだ。

――どうしたものか。

かつてキリマンジャロが一望出来るリゾート地として開発された場所に立つ高級ホテル。
その最上階ロイヤルスイートが、今は第一軍司令官執務室。
大きくとられた窓からは、キリマンジャロ門（ゲート）と名付けられた魔界とつながる門（ゲート）から出てきた輸送艦がゆっくりと航行する光景がはっくりと見える。
「神音商会はよくやってくれているが、今は我々魔族向けの補充物資だけで手一杯だ」
「しばらくの辛抱ですな」
無理だ。
そう聞こえたラクトは、深い失望のため息をつくと、難しい顔で腕組みをした。
「人類も、あちこちで戦闘状態ですから、アフリカにのこのこ攻め込んでくる物好きもいないでしょうし」

「――それが元からの狙いだ」
窓の外に視線を向けていたユギオは、ちらりとラクトの顔を見た。
「して？」
「……閣下からの催促です」
いい加減、うんざりだ。という顔のラクトが肩をすくめた。
「ヴォルトモード卿の解放はいつになるか」
「待てと伝えろ」
ユギオは言った。
「打つ手は打っている」

●セレベス海洋上　“鈴谷（すずや）”艦橋
「艦長」
艦長席でうとうとしかけていた美夜は、その声に弾かれたように目を開いた。
高木副長が手にしたコーヒーを美夜に近づけながら言った。
「スンダ海峡の制圧は完了したそうです」
「そうか」
コーヒーを受け取った美夜は、不愉快そうに顔をしかめた。
「我々にとって、面白い話ではないな」

スマトラ島とジャワ島の狭間――スンダ海峡。

マラッカ海峡を中華帝国軍に抑えられている現状、ここを確保出来ればインド洋と太平洋を結ぶことが出来る海峡であり、現状、スマトラ島側で中華帝国軍、ジャワ島側でオーストラリア軍が海峡を通る船ににらみを利かせている。
互いにとっての価値は、それほど高くない。
共に米軍の次の狙いはマレー半島とスマトラ島の間、マラッカ海

峡だと断じている。
マラッカ海峡は、米英軍にとっては、兵力の移動上、そして日本にとっては、インドや中東からの資源輸入を考える上で極めて重要な場所である。
対する中華帝国軍からすれば、ここの突破は、インド側の戦線が崩壊しかねない危険を秘めている。

シンガポール方面への空爆や偵察機の飛来回数はボルネオで友軍が頑張っている間より確実に増えた。
通信回数も鰻登りに増え、シンガポールやマラッカという単語がしきりに聞き取れる。
フィリピンやボルネオ島周辺に展開した諜報部隊からも、マラッカに米軍が侵攻する“ＬＤ作戦”という情報が伝わっている。

――米軍が次に攻めてくるのはここだ。

中華帝国軍司令部はそう判断する、スマトラ島侵攻部隊までかき集めて兵力を海峡付近に集中。
対艦ミサイル部隊や、沿岸砲部隊は、拿捕した分まで全てをマラッカ防衛に回せという、他部隊からすれば反対したくなる程度では済まないような命令が出されたのも、そういう理由からだ。

一方、
現地住民を強制労働させてまでその防衛体勢を急速に整えていることは、米軍司令部も十分にわかっていた。
だからこそ、米軍は、あえてそこを狙わなかった。
ボルネオ島で島内の掃討作戦と平行してシンガポールを空爆し、欺瞞情報を友軍にまで流し続けていたのは、その意図を読ませないための欺瞞にすぎない。

このおかげで、米軍上陸部隊がレイテ沖を出た後、セレベス海、マラッサル海峡を経由してジャワ海に入ったという報告を受けても、中華帝国軍司令部は、米軍の狙いはあくまでマラッカ海峡だと信じて疑わなかった。

だが、深夜、ビリトン島沖合に達した米軍は、突然進路を変えた。

――――我、米軍の砲撃を受けつつあり

スンダ海峡の鼻先。

ジャカルタ港に置かれた現地部隊からの緊急電に司令部が接した時にはもう遅かった。

米合衆国海軍がこのスンダ海峡を制圧するのに投入した兵力はかなりのものだ。

本隊には、戦艦アイオワ級２、駆逐艦１０、上陸用舟艇含む輸送艦４５隻。

そこに大日本帝国海軍から金剛級戦艦４、駆逐艦１０。他にも別働隊が数隻加わっている。

戦艦――――

この時代の戦艦は、上陸戦において砲撃により打撃を加えることを目的として使用される代物で、対艦戦闘は二の次以下というより想定外だ。

海軍にとってあくまで自分達の兵器の主流は、潜水艦と空母であり、海軍の認識も「対艦兵器」ではなく「巨大な砲艦」程度でしかない。

１９４０年代、赤色戦争において確定した航空機・空母全盛時代は、戦艦の死ぬ時代の幕開けとなった。

海軍の伝統的象徴と扱われても、実戦では第二線でなんとか活躍

出来る程度の代物。

１９５５年の第一回目の大軍縮の際は真っ先に除籍対象の艦種とされた。

未だ、戦艦至上主義者が幅を利かせていた当時の帝国海軍でさえ、戦艦大和を始め、長門・陸奥などの歴史的な艦がスクラップにされるか記念艦として公園に収められ、海から消えた。

１９６０年代に戦艦を運用しているのは、第三諸国程度で、戦艦ミズーリとヴァンガードをインド海軍が、ブラジル海軍がプリンス・オブ・ウェールズを運用していたといえば凡その想像が付くだろう。

歴史の転換点は１９７０年代。技術の発展に伴い、各国輸出型艦艇の性能も向上したこともあり、第三諸国海軍でも（余程高性能な対艦ミサイルでも投入されない限り）、随伴艦を護衛するに足る防空能力を持つ艦艇が獲得出来たことが大きい。

その随伴艦とは？

それが、海の砲兵と化していた戦艦だった。

フォークランド紛争やカリブ海戦争、さらにカナダ動乱において、第三諸国海軍が運用していた老嬢達は対地攻撃兵器として使用され、一躍歴史の檜舞台に復活した。

対艦ミサイルを随伴艦の対空防御で防ぐ戦法で守られた戦艦は、はっきり猛威だった。

戦艦部隊に対抗する軍は、航空機や潜水艦を使い、戦艦の撃沈を狙うが、随伴艦に阻止されて成功した試しはない。

むしろ戦艦が敵を引きつけるオトリとなり、攻撃側は大損害を被る図式が定着した。

結局、戦場から戦艦を引きはがしたのは、兵力ではなく外交だ。

一撃で都市の一区画を丸ごと吹き飛ばすその破壊力から、戦艦の

投入は「非人道的」であるとして、１９７０年代以降の沿岸部を戦域とする全ての戦争において、講話条件で常に一番最初にあげられたのが、「戦艦の戦域よりの撤退」だった。

日本もその例外ではない。

元来、戦艦大好きな海軍は、この流れをむしろ歓迎した。

海軍は、上陸戦を担当する海軍陸戦隊や沿岸部へ展開する陸軍からの要請をとりつけ、「戦艦」という艦種を復活させる（様々な政治的理由によるが、正確には「対地砲撃“戦”支援“艦”」の略とされている）

時代錯誤
税金の無駄遣い
イージス艦作れ

その配備はマスコミから散々叩かれ、野党による与党批判のネタにまでなったものの、第一陣として４０センチ砲搭載艦、金剛級１隻を４隻建造する計画が６年がかりで完了。

４隻そろっての初陣は１９８７年のペルシャ湾戦争。

運用してみると、それまで懸念されていた問題は全くなかった。

大型艦故に乗組員からの受けも良く、大型空母ほど敵から血眼になって狙われず、潜水艦ほど様々な意味で気を遣う必要もない。

イージス艦ほどの電子防御能力はいらず、随伴艦に対空戦闘の運用は委ねればいい。

デカイ砲とそこそこの対空砲を積んで幾度と無く戦艦は運用上、むしろ使い勝手のよさで好評を得た。

そして多大なる戦果を上げ、米軍や国際的な要請、そして何より、海軍の戦艦大好き熱が加わり、２１世紀に入った現在では長門・大和・武蔵を始めとした戦艦が１６隻も海軍の軍籍簿に名を連ねてい

る。

話を戻す。

現代に生まれ直した戦艦達の砲撃をまともに喰らったスンダ海峡一帯は、瞬く間に吹き飛ばされ、中華帝国軍から上陸部隊を阻止する力を奪った。

結果、米海軍はスンダ海峡奪還にわずか1日で成功した。

「海軍はこれで」

全てを報告し終えた高木は、皮肉げに頬を歪めた。

「来年には、イージスシステム搭載型戦艦の予算を要求してくると思いますがね」

“播磨”……か」

カップに口を付けた美夜が顔をしかめた。

「ダンナがうらやましがっていたわね……60センチリニア砲搭載艦か」

「建造費で通常動力型の“赤城”級空母2隻でしたか？」

「もう一隻追加して“信濃”を建造するほうを奨めるわよ」

美夜はカップをアームレストに置いた。

目の前の甲板では、騎体の修復を終えた二宮が部下の発艦訓練を行っている。

「それにしても」

その光景を見ながら、高木が言った。

「今回は、新兵達に助けられましたな」

「新兵ばかりのメサイア部隊に用はない」

戦線参加を求めた美夜が受けた米軍司令部からの返答を思いだし、美夜は顔をしかめた。

「その新兵達が陸戦艇潰してメサイア３０騎近くを撃破した？」
ぷっ。と、わざとらしく美夜は吹き出した。
「米軍じゃなくても信じないでしょうね」
“鈴谷（すずや）”は、南シナ海方面の警戒任務に就かれたし――――まぁ、楽な任務だけどねぇ」
「二宮中佐としては、面白くない様子ですがね」
「――――そうね」
美夜は頷くと二宮から提出された訓練プログラムを見た。
発艦に飛行訓練に、模擬戦――――
「……あの子達も気の毒に」
美夜は視線を海に向けた。
青い、青すぎる海が広がっていた。

「現在、バラバーク環礁上空１５００」
高木が言った。
紺碧の海に走る線――――環礁が見える。
美夜は一瞬、夫の実家の側にある天橋立を思い出した。
円周５０ｋｍのラグーンとその周囲約４０の島から成立するバラバーク環礁。
ここ半世紀近く、ほぼ手つかずのままにされてきた美しい海が、美夜の前に広がっている。

魚一匹いない死の世界として。

「失礼」
「……」
美夜は、艦橋に入ってきた米国人科学者に何か言おうと思って止めた。
白衣を羽織った仕立ての良い背広に身を包み、白髪をオールバックにした小柄な老人。

元・アメリカ海軍魔法科学開発局の嘱託科学者。
かつて、魔法科学実検の結果として、この環礁を死の世界に変えた張本人。
現在はフリーの科学者として、教え子の紅葉の要請で艦に乗り込んでいる。

世界最高の頭脳の持ち主。
一言で言えば、“天才”だ。

「バラバーク環礁に入ったと聞きましたので」
澱みのない帝国語は見事としか言い様がない。
「――どうぞ」
美夜は手で外を示した。
「現在高度１５００です」
「――ほう」
老人は、外の景色をしばらく魅入った後、ポツリと言った。
「先の三週間戦争では、ホワイトハウスは使用を検討しましたよ」
その科学者――エドワード・フェルミ博士の口元だけが笑っていた。
「――無論、アフリカは大英帝国が」
何を使おうとしたかは聞かずともわかる。
「使わずにいてくれたことに感謝します」
美夜は、フェルミ博士の顔を見ずに答えた。
「この世界の上にいると、そう思います」
「――科学者としては」
吸血鬼。
美夜はどうしてか、フェルミ博士を見るたびにそれを連想してしまう。
不健康そうな色白の肌のせいか。
冷たい義眼のような瞳のせいか。

美夜にはわからない。
ただ、生理的な嫌悪感に近い物を抱かずにはいられない。
それだけは確かだった。
「見てみたかった――それが本音です」
「正気ですか？」
「無論」
フェルミ博士は頷いた。
「中佐は人道の観点からおっしゃっているのでしょう。しかし、私は人間性から離れたところにいる科学者です。兵器が有れば、その威力を試してみたいと思うのは悪いことですか？」
「――学術的探求心、そう判断させていただきます」
「そうして下さい。幸い」
白衣の下、スーツのポケットからシガーケースを取り出す手を、フェルミ博士は止めた。
「失礼――魔力反応爆弾（マジックリアクターボンブ）は国際法で一切の開発、製造、配備が禁止されています。
ただ、人類未曾有の危機。超法規的措置の一環として、あの爆弾を使用する決断を、大統領が――いや、全ての国家元首の誰一人としてとれなかったことが、現状を産んだと思います」
「それほどの威力があると信じていらっしゃる」
「科学的データから、です」
フェルミ博士の言い分は、美夜にもわかる。
何しろ、それが使用された世界がどうなるか。
それを目の前の光景が証明している。
魔力反応弾（マジック・リアクター・ボンブ）――別名をセルフギロチンという。
魔晶石が産み出す膨大なエネルギーを利用した爆弾だ。
爆発時の想像を絶する破壊力は、ウランやプルトニウムを利用した通常型反応弾（つまり、我々の言う原子爆弾）や水素反応弾を遙かに越える。

何より恐ろしいのは、爆発地点に与える魔法的後遺症。
爆発に巻き込まれた地点は、魔力異常により一切の生態系が死に絶え、草木一本生えることの出来ない死の世界へと変貌し、復活することがないとされる。
人類が把握出来ている限り、被爆した者の致死率は、爆心地から１００キロの地点で１００％。
数日以内に確実に体を構成する原子が崩壊して想像を絶する苦しみぬいた挙げ句、確実に死ぬ。
その後も、被爆地は、入り込んで1日といたら同様の死を避けることは出来ない死の世界となるのだ。

そんな兵器が実戦に使用されればどうなるか？
それは人類が味わったことだった。

１９６８年８月６日。
イスラエル軍のヨルダン首都アンマンへの魔力反応爆弾使用。

ほぼヨルダン川以東が魔力異常地帯化。
犠牲者は１２０万人。

その膨大な犠牲者は、“ユダヤ人国家の虐殺行為”として国際的非難を引き起こし、3日後の8月9日、アラブ連合軍のエルサレムへの報復攻撃としての魔力反応弾使用を黙認させるに十分だった。
イスラエルはそれに対し、さらに数発の魔力反応爆弾を使用して報復の連鎖につなげた。
結果として、ヨルダンもイスラエルも国家滅亡に追い込まれ、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教共通の聖地たる地エルサレムを含むヨルダン川一帯は、人が立ち入ることさえ困難な死の世界へと変貌を遂げた。
この故に、魔力反応爆弾は、“禁忌の兵器”として、国際法上、

使用どころか、開発も配備も一切を認められていない。
国連加盟国が原則義務づけられる国際法の最後には、罰則が書かれている。

――この条約を破った国は、国際社会、全国家、全民族、全人類に対し、宣戦を布告したものとする。

国際法がセルフギロチンと呼ばれる由縁であり、どれほど国際社会から忌み嫌われているかわかるだろう。

美夜達は、その魔力反応弾が世界で初めて使用された実検の跡地を飛んでいた。
「１９５８年１１月１日午前１１時丁度、このラグーン上空に投下された魔法反応爆弾“ベルダ”は、目標とされた島を蒸発させる程の効果を示した。“ラグナロク作戦”……ご存じのはずだ」
美夜は無言で頷いた後、
「衝撃波は地球を４周、太平洋沿岸各地に対し、１０万人近い死傷者、行方不明者を出した大津波による被害をもたらした挙げ句、この環礁を生態系の住めない魔力異常地帯へと変えてのけた」
ちらりと見たフェルミ博士の顔には何も感情らしきものは浮かんでいない。
「これはすべて、米軍が予想さえしていなかった世界的大惨事ですよね？」
「……左様」
フェルミ博士は頷いた。
「劇薬に副産物はつきもの。ただし、その劇薬を開戦当初に使用していれば、犠牲はアフリカと南米の半分で済んだというのが私の持論です」
「……」
殴ってやろうか。

美夜は本気でそう思った。
「――まぁ、もっとも。繰り返すようですが、私は科学者です。興味があるのはその破壊力のみ。兵器の使用に関する政治的事情云々は、人道とかいうのと同様、とんと興味がありません。それより」
フェルミ博士は海ではなく、訓練を繰り返すメサイアを見ながら言った。
「……さすがにインペリアル・ガーズのメサイアはよく出来ている」
「――恐縮です」
頷きつつ、美夜は高木に命じた。
「警戒怠るな？どうも何か気になる」

そして――

美夜のカンは外れていなかった。

「人類側のフネだと？」
この環礁の水底に潜んでいたのは、富士学校を襲ったシュナー少佐達だ。
環礁の最も深い場所。
かつての爆心地のクレーターの中に潜む魔族軍巡航艦“シナベール”から発進した魔族軍水陸両用型メース“カプラーヌ”のコクピットでその情報を聞いたのは、シュナー少佐だ。
その後ろには2騎のカプラーヌがついている。

「はい」
“シナベール”の管制官がモニターの向こうで頷いた。
「先程上空を通過したメースの母艦と思われます」

「ただ通過するだけか？」
「コースを変針しました。環礁上空を旋回する模様」
「変針？」

――しまった。

シュナー少佐は、内心で共に出撃した部下の人選を後悔した。
シュナー少佐騎の後ろを移動するカプラーヌを操縦するのは、部隊で最も経験の浅いルサカ軍曹なのだ。

――戻そうか？

シュナー少佐が躊躇したが、今更どうしようもない。
下手に戻せばそれだけで敵にこの場に潜んでいることを察知されかねない。
何しろ、相手は上空を旋回している。
妙な動きをするだけで、ここに潜んでいることが分かってしまう。
「――ルサカ」
「はっ、はいっ！」
緊張しきった上擦った声が通信機に入る。
モニターがシナベールの管制官から、若い青年士官に切り替わる。
北方部族の出身だろう、浅黒い肌をしたあどけない顔が、突然上官に声をかけられておびえていた。
「な、何でしょうか!?」
「間違ってトリガーを引かなかったことは褒めてやる」
シュナー少佐は噛んで含めるような口調で言った。
「ルサカ。現在、我々がここに潜んでいる理由を言って見ろ」
「は、はいっ！」
ルサカは答えた。
「南米方面から弓状列島へと進む場合の中継基地として環礁を使用

する下準備。そ、それと、弓状列島に送り込んだ特別部隊が任務を終了するまでの待機」

「まぁいいだろう」

シュナー少佐は頷いた。

レシーバーに入った、ルサカの安堵のため息は聞かなかったことにした。

「どちらにしろ、我々はここで目立つワケにはいかん。この環礁は魔力バランスを著しく欠いているため、人類が近づかない好条件の場所であり、そのために我々の待機場所にも指定された場所だ。いいか？訓練中に人類の艦と接触して沈めたあの失態を、ここで繰り返すことは許さん」

「は……はい」

「アミラント」

シュナー少佐はもう一騎を駆るアミラント中尉と通信をつないだ。

「ルサカを見張っていろ」

「了解――ルサカ。いいか？火器の全安全装置をかけておけ」

「し、しかしっ！」

「少佐に殺されたいのか？」

「は……はい」

ルサカはコクピットのコンソール脇にある火器管制装置の安全装置をかけながら、内心で泣きたいほど悔しがった。

シュナー少佐が言う訓練中の失態――あれはルサカに言わせれば、まさかあんな所に、水の中を進む人類側のフネがあるなんて予想も出来なかっただけだ。

フネと接触し、即座に撃沈したのはむしろ褒めて欲しい。

なのに、報告した途端、一晩腫れが引かなかったほど殴られた。

あんまりだ。

ルサカは内心で思った。

絶対、ここで良いところを見せて、少佐達を見返してやろうと。

「上空警戒態勢のまま、潜望カメラ深度５０まで上がる」
カプラーヌの頭部から有線カメラが音もなく射出され、その一部が海面から出た。
コクピットスクリーンに上空の様子が映し出される。
「……あれか」
モニターにはっきりと映し出されているのは、まさに上空を飛び去ろうとしている飛行艦の姿だ。
その甲板上には、メース達の姿も確認出来る。
「……連中、こんな所で何を？」
シュナー少佐にはそれがわからない。
弓状列島の門（ゲート）解放失敗からかなりの時間が過ぎている。
今更、まさか自分達を追いかけてきたとは考えられない。
人類の同士で殺し合っていることは想像出来なかった。
スクリーン一杯に腹を見せた飛行艦が遠ざかっていく。

「……よし」
海中に潜むカプラーヌの中、シュナー少佐は安堵した。
このまま通り過ぎてくれればそれで良い。
この環礁から出ていってくれ。
それだけでいいんだ。

だが――

「――ちっ！」
シュナー少佐の目の前で、飛行艦が針路を変えた。
まだここに居座るつもりだ。
「少佐」
ルサカが言った。
「どうするんですか？」

「何もするな」
シュナー少佐は言った。
「こっちが何もしなければ、連中も危害を加えることはない」
「……し、しかし」
「耐えられなければ操縦を切って海底に沈んでいろ。後で引き上げてやる」

「訓練監視用のＭＳＦ（魔力飛行偵察ポッド）が被弾した？」
「はい」
オペレーターが頷いた。
「二宮騎が接触しました」
「……あのバカ」
美夜は思わず頭を抱えた。
「あのポッド１基いくらすると思って」
「飛行は可能です」
「データを転送してポッドは破棄しろ」
「転送が不可能です。それに、ポッドの回収は絶対命令です」
「……わかった。該当するポッドを下げろ。待機中の予備ポッドを出せ」
「はい」

予備ポッド。
その球形の飛行物体は、人類から見れば一目で偵察用ポッドであることがわかる。
だが、魔族はそうではなかった。

飛行艦から突然、出現した得体の知れない、球形の物体――

「飛行砲台だっ！」
気の遠くなるような長い時間、海中に潜んで、攻撃を禁じられたいらだたしさと、いつ敵に攻撃されるかの恐怖感に板挟みにされていたルサカはとっさにそう叫ぶと、メースのコントロールユニットを握りしめた。

途端――――
バンッ！！
右腕のクローに仕込まれていたＭＬ（マジックレーザー）が火を噴いた。

「馬鹿野郎っ！」
自分が何をしたか？
その判断をルサカが理解するより先に、シュナー少佐の罵声がルサカの耳を打った。
「何をしている！」
「ルサカっ！安全装置はどうした！」
「……えっ？」
ようやく、自分が何をしたのか理解が及んだルサカは慌てて火器安全装置を見た。
安全装置はレバー式になっており、すべて安全装置作動中を示す緑に――――
違う。
ルサカは青くなった。
一つだけ、レバーが中途半端な位置で止まっていた。
つまり、かかっていなかった。
「……なっ！」

「アミラント！」
シュナー少佐は怒鳴った。
「ここであのフネを仕留める！シナベール、聞こえるか！？」

「こちらシナベール」
「人類側の通信を止めろ！ここで仕留めて情報を隠滅するっ！」
「了解」

「い、いまの何ですか！？」
美奈代は艦の左舷を抜けていったオレンジ色の光を見て、誰と言わずにそう訊ねてしまった。
「海中からの攻撃っ！」
牧野中尉が答えた途端、“鈴谷（すずや）”の甲板が震え、“鈴谷（すずや）”が急速に高度を上げた。
「どこっ！？」
美奈代は甲板ぎりぎりまで“征龍改”を移動させ、海面をのぞき込んだ。
ＭＬ（マジックレーザー）が突き抜けた海域が、小さく白く泡立っているのがわかる程度だ。
美奈代はとっさに３０ミリ機動速射野砲を海面にむけた。
「無駄です」
牧野中尉はそう言って美奈代を止めた。
「こんなもの、海中に撃っても効果は期待出来ません」
「じゃあ、“鈴谷（すずや）”が？」
「メサイア母艦の“鈴谷（すずや）”には元から対空用ＭＬ（マジックレーザー）しかありません」
牧野中尉は冷たく言った。
「よく見てください。対艦装備もないのに、対潜装備があるわけないじゃないですか」
「……で、ですけど」
「すぐに武装変更命令が出ます」
牧野中尉が言った途端、
「二宮より各騎」
二宮から通信が入った。

「武装変更――ビームランチャーを装備し、海面を狙え！」

「どこからの攻撃だ！」

“鈴谷（すずや）”艦橋に美夜の鋭い声が飛んだ。

「艦直下の海中です！深度不明！」

オペレーターの城下美芳（しろした・みよし）中尉が答えた。

「先程の至近弾ＭＬ（マジックレーザー）の照合――ライブラリ該当なしっ！」

ほぼ全ＭＬ（マジックレーザー）を網羅しているはずのライブラリに該当がない。

第一、水中から発射可能なＭＬ（マジックレーザー）なんて聞いたことがない。

水中から撃てば、水と大気でＭＬ（マジックレーザー）そのものが消滅してしまう。

じゃあ何が？

美夜は、たった一つだけ心当たりがあった。

「――っ！」

自らが出した答えに、美夜は一瞬、言葉を失った。

美夜の出した答え。

それは――魔族軍。

しかも、艦の真下だ。

「艦長？」

フェルミ博士は平然とした顔で訊ねた。

「この艦に対潜攻撃兵器は？」
「――ありません」
美夜は顔を強ばらせたまま答えた。
「飛行艦に爆雷を搭載する馬鹿がいるものですか」
「――ふむ」
フェルミ博士は思案げに顎を撫でた。
「――では、どうするんです？」
「高度上げろっ！操舵、Ｚ字航行開始。機関、出力最大、ＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）戦闘展開。砲術、海面方向に対してジャミング散布――トラックと通信出来るか！？」
「通信不能っ！短波、長波、レーザーまで、強力なジャミングを受けていますっ！」
「――っ！」
艦橋の外では、甲板に待機してたメサイア達が巨大な砲を担ぎ上げて両舷に並ぼうとしている。
突発的な事態だというのに、艦全体の動きに無駄はない。
むしろ予定されていたことのように整然と事が運んでいく。
艦長としては当然だが、それでも美夜はそれが頼もしく、また嬉しい。
「成る程？適切な対応だ――いい艦（フネ）に乗れた」
矢継ぎ早に出される命令に、フェルミ博士は一々頷いた後、丁度、艦橋に入ってきた紅葉に命じた。
「偵察ポッドを全て出したまえ。戦闘データをとる」

舷側に立ち、海面を見渡すさつきの目の前を、海面から立ち上ったＭＬ（マジックレーザー）が飛び去った。
一瞬で装甲の表面温度が危険値に跳ね上がった。
「あ、危なぁっ！」
「海面を狙えっ！」

二宮からの命令が飛ぶ。
「ど、どこにいるかわかんないのに！？」
さつきはスクリーンのズームを繰り返しながら海面を見るが、敵の姿はどこにもない。
「海中に潜む敵を、この高度から見分けろというんですか！？」
美奈代が二宮に文句を言う気持ちが、さつきにはよくわかる。
「当てろとはいわないっ！」
二宮は怒鳴った。
「海面を叩いて連中の攻撃を散漫なものにすればいいっ！」
――成る程。
さつきはそれで納得がいった。
二宮が求めているのは、敵の撃破じゃない。
敵の頭を押さえて、この海域から逃げ出すチャンスを作り出すことだ。
「春日中尉」
さつきはＭＣ（メサイアコントローラー）の春日春乃（かすがはるの）中尉に言った。
「敵の攻撃が反撃の合図です」
「その通りです」
春日中尉は頷いた。
「敵、ＭＬ（マジックレーザー）の発射直前のエネルギー集束現象を狙って射撃します」
ＭＣ（メサイアコントローラー）側のＦＣＳを調整しながら、春日中尉は答えた。
「上手くすれば対消滅を――」
ブンッ！
再び、艦をＭＬ（マジックレーザー）がかすった。
「……出来るかしら」

艦の下腹にＭＬ（マジックレーザー）が突き刺さったが――。
「くそっ！」
その結果に、シュナー少佐は舌打ちした。

一瞬、命中カ所の空間が歪んだだけで、艦には何のダメージも与えていないのは明白だったからだ。

「中和フィールドか！？」

重力を中和するフィールドである重力力場（フリー・グラビティ・フィールド）なんてシュナー少佐が知るはずがない。

魔族軍も使用する浮揚システムであり、同時にバリアシステムも兼ねる優れものである中和フィールドとしてシュナー少佐の目には映った。

そのフィールドを破るには、高出力のＭＬ（マジックレーザー）がいる。

ただでさえ海水で出力を削られるカプラーヌのクロービーム程度をいくらぶち当てても意味はない。

「シナベールっ！」

シュナー少佐は覚悟を決めた。

敵艦をここでさっさと仕留めてしまうに限る。

下手な躊躇は命取りだ。

使えるものは何でも使わねば――――！！

「艦の主砲で敵艦を仕留めろっ！」

チカッ！

飛行艦の舷側で強い光が生まれたのは、その時だった。

海面で連続した爆発が発生、一斉に水柱が立ち上った。

「やった！？」

さつきのその期待を込めた言葉は、水中からのＭＬ（マジックレーザー）攻撃によって否定された。

「ちっ――――くそっ！」

美奈代は海面を睨み付けながら舌打ちした。

敵が見えない上に、海水というバリアが邪魔して、ＭＬ（マジックレーザー）攻撃が本

来の性能を発揮出来ないのだ。
おそらく、ＭＬ（マジッククレーザー）が到達しているのは深度２０メートル程度のはず。
敵に届かない。
「せめて――――敵さえ見えれば」
恨めしいのは、ビームランチャーにつながった出力ケーブルだ。
これがあるおかげで、甲板から離れることが出来ない。
「隊長っ！」
不意に、都築の声が通信機に入った。
「俺がオトリになりますっ！」
「何っ！？」
“鳳龍”の飛行能力は戦闘機並みッス。海面でオトリをやるには十分な機動が」
「――――っ！」
二宮は唸るような声をあげ、言った。
「都築、海面で敵を誘い出せ。各騎は海面に出る敵に対し、精密射撃っ！」
「教官っ！」
美奈代が言った。
「自分も志願しますっ！」
「泉っ！？」
「無茶だっ！」
宗像が言った。
「単騎でオトリになるなんて、死にに行くようなものだっ！」
「だけど！」
美奈代は怒鳴り返した。
「二騎ならまだ！」
「……わかった！」
二宮が言った。
「泉――――そこまで言うには、策があるんだろうな」
「は、はいっ！」

美奈代は思わずそう答えてしまった。
目の前ではさくらがびっくりとした顔で自分を見ている。
「命令を変更する」
通信機に二宮の声が入る。
「泉、都築両騎で敵を誘え。自殺志願者同士――――夫婦で行って来いっ！」
「絶対に違いますっ！」
「了解っ！」
通信機に美奈代と都築の声が重なった。

「くそぉっ！」
ルサカは狂ったようにカプラーヌのＭＬ（マジックレーザー）を乱射していた。
艦には命中するが、すべて無効化されている。
敵に位置がばれているのは、集中する反撃の砲火から明らかだ。
それにも関わらず、ルサカが乱射を止めないのは、
「このままじゃ、少佐達に殺されちまうっ！」
その恐怖心故だ。
「ルサカっ！」
アミラントの声に我に返ったルサカは、アミラント騎が自分の騎の背後から接触していることにようやく気づいた程だ。
「馬鹿野郎っ！なにやってやがるっ！」
罵声と同時に、ルサカ騎は海中に引きずり込まれた。
それと同時に、ルサカがいままでいた場所を、ＭＬ（マジックレーザー）の爆発が駆け抜けた。
「海面に浮上してどうする！的になりたかったのか！？」
そう。
興奮したルサカは、自分が海面すれすれまで上昇していたことに全く気づかなかったのだ。
「す……すみ」

ルサカは謝ろうとして、やめた。
警戒システムが、敵艦から2騎のメースが発艦し、海面に降下してきたことを告げている。
「ですがっ！」
ルサカは陽光に輝く海上を睨み付けると、アミラント騎を振り切った。
「俺だってやれますっ！」
ルサカ騎のブースターに光が走った。
アミラントには、ルサカが何をしようとしているのか、すぐにわかった。
「ルサカっ！」
伸ばされたアミラント騎の手をすり抜けるようにして、ルサカ騎が海上めがけて飛翔を始めた。

「――敵はどこだ!?」
都築が海面から数十メートルの高度を飛行する。
「十六夜。海面下でのエネルギー反応警戒――都築准尉、“鳳龍”の戦闘エネルギーの半分をセンサーに回します。よろし？」
「――任せます」

「水中から急速上昇する物体ありっ！」
突然、MC（メサイア・コントローラー）が警報をあげたのは、まさにその時だ。
「ちっ!?」
ブースターを吹かし、海面から距離を取ろうとする都築騎より、海面に上昇してきたカプラーヌの方が早かった。
ガッ！
海面に飛び出したカプラーヌの腕が、その左足を掴んだ。
「ぐっ!?」
垂直に海めがけて引っ張られる衝撃に、都築は舌を噛みそうになった。

ブースター出力を最大に引き上げ、海中に引きずり込まれまいと足掻いた。
「なめんじゃ……ねぇぞっ！」

都築騎が海中から出現したメサイアに海中へ引きずり込まれそうになっているのは、美奈代も目視出来た。
「都築っ！」
美奈代はとっさにさくらに命じた。
「さくらっ！シールドパージっ！」
「はいっ！」
左腕を大きく振るい、振り切る寸前にシールドをパージ。
遠心力をつけて敵に叩き付ける美奈代とさくらのオリジナル技。
さくら曰く「シールドどん」
シールドの質量が加わった攻撃は、実際かなりのダメージを与える技で、シールド喪失による始末書というオマケがつくある意味禁忌の技だ。
“征龍改”から放たれたシールドが激しく回転しながら、海中から伸ばされた腕の根元にめり込んだ。
衝撃で離れた手から逃れた都築騎が斬艦刀を抜刀、海中に沈み行く敵騎に剣を突き立てたのは、その直後だった。

アミラントの目の前で、ルサカ騎が、一瞬痙攣したようにビクッと動いたかと思うと、糸の切れた人形のように、力無く海中へと沈んでいった。
「ルサカ！」
ルサカ騎に接近したアミラントは、ルサカ騎のコクピット頭部――コクピットブロックを貫通した破孔を確かに見た。
破孔から盛大に海水がコクピットへの流れ込んでいる。

それがどういう意味を持つか、考える必要さえない。

「くそっ！」

アミラントはコクピットのコンソールに頭を叩き付けた。

脳天から全身を走る痛み。

それが発狂しそうな程、アミラントの体内を駆け回る慚愧の念…

…いや、自暴自棄に近い報復の念を押さえてくれる。

額を走る生ぬるい液体を、アミラントは舌で拭った。

鉄の味がした。

「……少佐」

「ルサカは落とし前をつけただけだ」

シュナー少佐は冷たくそう言った。

「アミラント。シナベールに戻るぞ。カプラーヌではこれ以上はどうしようもない。艦隊戦になる前に収容してもらう」

「――――了解」

アミラントは、ルサカ騎が消えていった海底をちらりと見た。

光の届かない漆黒の闇が、底には広がっていた。

「……戦場で、勝手なマネするヤツはそうなるんだよ……馬鹿野郎が」

「敵騎、海中へ沈みますっ！」

オペレーターの明るい声に、艦橋が湧いた。

「よしっ！」

美夜は力強く頷いた。

「海域の離脱もあと少しだ！」

「泉騎より通報！海底より上昇する物体有。質量――――空母クラスっ！」

「何っ！？」

驚愕の表情を浮かべる美夜の目の前。
スクリーン上に映し出された海面の色が変わった。
そして――――

「ルサカの件は」
艦橋に戻ったシュナー少佐に、艦長席の男が振り返りもせずに言った。
がっしりとした体格。長年の風雪に耐えたたたき上げ者特有の貫禄ある顔がそこにあった。
魔族軍巡航艦シナベール艦長、オイゲン大尉だ。
「残念――――そう言って良いですか？」
すでに艦橋は海面から出ようとしていた。
「そうだな」
シュナー少佐は艦長席の横に立つと、窓の外に視線を向けたまま頷いた。
「またしても、私は未熟者を制することが出来なかった」
「我々、ロートルは」
久しぶりに見た太陽光のまぶしさに顔をしかめつつ、艦長は言った。
「若手相手には後悔と不満ばかり――――そういうものですよ」
「艦長っ！」
砲術担当士官がその席から報告する。
「主砲射撃準備完了っ！照準はあの艦で！？」
「うむ――――仕留めろ」

「ひ、飛行艦だと！？」
美夜達の目の前。
静かなはずの海面に突如現れたのは、“鈴谷（すずや）”より二周りは大き

い巨大な飛行艦だ。
「全長３８０メートル、推定排水量１０万トン――」
“鈴谷（すずや）”の“目”が捉えたデータを前に、美夜の出来ることは、それを音読する程度だ。
元来、輸送艦改造型の“鈴谷（すずや）”に、この艦に対して対抗出来る兵器はない。
あるとしたら、メサイア達の持つビームランチャーが精一杯だ。
そんな美夜の目の前で、メサイア達が一斉に動いた。
「砲門は６門――」
二宮が着眼したのはそこだ。
「長野、早瀬」
二宮は命じた。
「相互データリンク展開、敵Ａ砲塔砲身の発射タイミングを狙って狙撃しろ。同様に柏、山崎はＢ砲塔。宗像、私と共にＣ砲塔を叩け。対消滅によるダメージで敵艦を仕留める」
「――了解」
各ＭＣ（メサイアコントローラー）達は一斉にＦＣＳを精密射撃モードに切り替えた。

――だが、
ズンッ！
艦を走る激震が、彼女たちを搭乗したメサイアごと襲ったのは、その直後だった。

その瞬間、美夜は自分がどんな声をあげたのかまるで覚えていない。
いや。
その瞬間、世界に音があったのかさえ、美夜は覚えていなかった。
覚えているのは、ただ、体をシェーカーに放り込まれたような衝撃が走ったことだけだ。
「被害報告っ！」

「艦橋より各部、被害報告を！」
「艦橋見張りより報告っ！右舷命中弾２、至近弾４、命中弾は艦を貫通しました！」
「――ちぃっ！」

「ちぃっ！」
ＦＧＦを突き抜けた“鈴谷（すずや）”への攻撃命中に関し、舌打ちしたのは美夜だけではなかった。
シナベールの砲術長もまた、自らの射撃結果に舌打ちしていた。
至近弾が４
命中弾はたったの２
せっかく命中した弾も、出力が高すぎて艦内で爆発することなく貫通してしまった。
「各砲塔誤差修正っ！ＭＬ（マジックレーザー）出力を半分に下げろっ！――ええいっ！オンボロの人類艦めっ！」
「一番砲塔修正完了」
「二番完了」
「エネルギー充填。出力４０％でホールド。撃てますっ！」
「よしっ！」
砲術長が砲撃命令を下そうと、管制システムのアイピースに顔を押しつけた。
砲撃用カメラと連動するシステム上で、敵艦の様子が手に取るように分かる。
黒い煙を吐き出しながら飛ぶ敵艦。
その艦橋に並ぶメース達がこちらに武器を向けているのまでがわかる。
「敵艦からの砲撃――来ますっ！」

船底から斜めに抜けた2発の攻撃は、幸いにして竜骨を傷つけずに済んだとはいえ、そのダメージははっきり大きい。
それだけは確かだ。
その“鈴谷（すずや）”からの報復が果たされたのは、その直後だった。
「ぐうっ！？」
丁度、都築と共に、肉迫攻撃を試みていた美奈代は、突然発生した敵艦上の爆発の衝撃に吹き飛ばされた。
一度、海面に叩き付けられ、大きくバウンドした後、騎体の姿勢制御を取り戻した美奈代が見たものは、無惨に打ち壊され、空を浮かぶ残骸に成り下がった敵艦の無惨な姿だった。
「き……教官達がやったの？」
「ち、違います」
牧野中尉が強ばった声で答えた。
「“鈴谷（すずや）”からの攻撃はすべてバリアに弾かれました」
「じ、じゃあ？」
驚く美奈代の目の前で、敵艦の舳先が南東を向いた。
「事故？砲塔が爆発した？」
「別なＭＬ（マジックレーザー）が命中したのは確認しています」
あと一歩で巻き込まれる所でした。
大きな安堵のため息と共に、牧野中尉はそう呟いた。
「友軍の攻撃ですか？」
「おそらく。ただし、レーダーに反応なし。推定射撃距離６００キロ以上の射撃です」
「……飛行艦？」
「この海域に、近衛軍の飛行艦は存在しません」
黒煙を吐きながら遠ざかる敵艦を見送りながら、美奈代は都築騎に接触した。
「都築。大丈夫か？」
「ああ……ありゃ、放って置いても沈むだろう」
「……そうだな」

「誰だ？」
美夜は敵艦から逃れることが出来た安堵感より、そちらの方が気になっていた。
メサイア隊のＭＬ（マジッククレーザー）攻撃をはじき返した敵のバリアを貫通し、敵艦の砲塔を吹き飛ばした攻撃。
それは、“鈴谷（すずや）”とは別な攻撃だ。
「一体、誰の攻撃だ？」
「恐ろしいほど高出力のＭＬ（マジッククレーザー）砲を装備した艦が展開しているのは間違いないです」
副長は言った。
「これはメサイアの攻撃ではあり得ません」
「……しかし」
美夜が気にするのは、レーダースクリーン上の反応だ。
数は３
飛行艦にしてはサイズが小さすぎる。
「艦長」
通信オペレーターが報告を上げた。
「通信です」
「通信？」

３０分後。

被害復旧の進む“鈴谷（すずや）”の甲板に降り立ったのは、すでに収容された美奈代達ではない。
甲板には３騎の異形のメサイアが並んでいた。
長大な砲と手足のない戦闘機じみたフォルムを持つ、メサイアらしくないメサイア。

近衛軍の開発した高々度戦域支配メサイア、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ（フライ・ルーラー）だ。

収容作業が完了し、甲板から引き出された固定ワイヤーに拘束されたＦｌｙ　ｒｕｌｅｒ（フライ・ルーラー）のハッチが開いた。

整備兵がラッタルをハッチにひっかけ、それを伝わってＭＣ（メサイアコントローラー）達が降りてきた。

「へえ？」

感心した声をあげたのは、それを見物していたさつきだ。

「騎士一人にＭＣ（メサイアコントローラー）が２人？」

「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ（フライ・ルーラー）は」

二宮が言った。

「先の改造で、バリアを強化した関係で、ＭＣ（メサイアコントローラー）が一人では処理出来なくなったそうだ」

「バリア？――うわ。ゼータクな騎体」

「バリア……欲しいですね」

「柏。気持ちはわかるが……騎士が降りてきたぞ？」

「……」

「……」

「……」

甲板に降り立ったＭＣ（メサイアコントローラー）達はまだいい。

問題は、そこに並んだ三人の騎士だ。

「せ、整列っ！」

緊張した声は、恐ろしくあどけない。

小学生が戦闘服を着ているようにしか、美夜には見えなかった。

それだけじゃない。

騎士達は、三人が三人。同じ顔をしているのだから余計タチが悪い。

「名札を用意しろ」

美夜は横に立つ副長にそう命じたのも無理はないし、その方がありがたかった。
「く、クローンですかね」
「ありえるか」
そんなやりとりをする美夜と高木の前で、一人が声を張り上げた。
「し、申告しますっ！葉月実検センター所属第７特務隊ラグエル隊隊長、神城一葉少尉以下、神城双葉少尉、神城光葉少尉、以上３名。着艦の許可願いますっ！」

「都築っち、サイダー！」
「パシリ。私、あんパン」
「私両方っ！」
食堂にそんな声が響く。
その度に都築が駆け回り、恨めしそうな視線でも向けようものなら無言で階級章を指さされる。
階級万能の軍隊で、階級の違い一つがどれほど大きいか、少なくとも都築はこの三人にコキ使われることで思い知らされた。

「ひっさしぶりだねぇ！」
「ホントだよぉ！」
食堂で和気藹々とした会話が花咲く。
神城三姉妹は、美奈代達と苦楽を共にした大切な同期生だ。
同じ顔をした三人の少女は、ほぼ同時に頷いた。
“神城一葉　長女”と書かれたネームプレートの少女が言った。
「それにしても」
宗像が呆れた。といわんばかりの顔で三姉妹を見た。
「よくもまぁ……あんな騎体を与えられたものだ」
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒはね？」
一葉が自信満々に言った。
「“ラグエルシステム”っていう、三騎連携の電子戦闘装備を持ってるの。三騎の連携が取りやすければ取りやすいほど、戦力が上がる仕組み」
「……成る程？それで三姉妹のお前達が抜擢された」
「元のテストパイロット。訳ありで二人が降りちゃって、三人募集していたんだよ。で、開発部の希望が、“三つ子”だったの」

「ああ……三つ子なら意志の疎通がしやすいって？」
「そう。ほら。騎士って、遺伝子弱いから子供出来づらいじゃない。双子でも数百万分の一なのに、三つ子っていうと、数億分の一の確率なんだって」
“神城双葉　次女”と書かれたネームプレートの少女が続けた。
「お父さん達は“宝くじに当たった方がよかった”とか言われたことがある」
“神城光葉　三女”は最後に、
「でも、娘三人同時に近衛入りって、地元の新聞載ったんだよ？」
「ね～っ」（×３）
「へえ？」
美奈代は改めて目の前の三姉妹を見た。
本当にそっくりすぎて、鏡でも見ているようだ。
正直、三つ子なる存在を初めて見た美奈代は、“同じ母胎から生まれれば、こんなに似るものか”としきりに感心するしかない。
その目の前で、三姉妹はしゃべりまくる。
ただ、美奈代達が気になるのはたった一つ。

戦闘服に縫いつけられた階級章だ。
少尉。
階級章が、三姉妹がすでに任官を受けていることを示していた。

「ほらよ」
ドンッ。
都築が三姉妹の前にサイダーを置いた。
「金」
一葉達は、無言で階級章を指さした。
「階級を、無銭飲食に使うんじゃねぇ」
「ふふん？なぁに？」
「何でもありません！少尉っ！」

「よろしい♪都築っち、私もう一つあんパン。お金払っておいて」
そう言って、双葉は続けた。
「さっき、言ったみたいに、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ（フライ・ルーラー）、初陣で一騎大破してパイロットが死んじゃって」
「戦死したの？」
美奈代は思わず顔を見合わせてしまった。
「うん――知覧校出のテストパイロットの一人。コクピットブロックを魔族軍の攻撃に撃ち抜かれて戦死」
双葉が俯きながら言った。
「――初陣の女の子だったって」
「……」
「でね？他のパイロットも異動希望出すし、そっちの修理と、新システムの搭載とかやってたら“紅龍Ｂ”の開発予算なくなっちゃったからって、私達がパイロットになったわけ」
「配属は開発局のまま？」
「ううん？教導隊実験小隊。母艦は“最上”」
あんパンにかじりついていた光葉が言った。
「トラックから出る艦隊に参加するの。
“鈴谷（すずや）”交戦中って聞いたタコ艦長が“お前等も行ってこい。副司令のヨメに貸しを作っておきたい”って。
それで私達、送り出されたんだよ」

「ごちそうさまでしたぁ！」
三姉妹が笑顔を残して“鈴谷（すずや）”を離れたのはそれから1時間後のことだ。
「二度と来るなっ！」
発艦後、遠ざかっていくＦｌｙ　ｒｕｌｅｒ（フライ・ルーラー）に、都築が中指を楯ながらそう怒鳴った。

「――で」
美奈代は二宮に訊ねた。
「私達、どうなるんですか？」
“鈴谷（すずや）”の被害は半端じゃない」
艦内で火災があったせいで、きな臭い臭いがする通路。
機材を持った乗組員が行き来する中、二宮は美奈代に言った。
「甲板はカタパルト使用不能。メサイアの格納庫こそ被害は免れたが、あるカ所に致命的ダメージを受けた」
「どこです？」
「被弾は二発。共に厄介なことになっている。
一発がメインの真水タンクと、発電施設だ。
発電施設をやられたおかげで艦のほとんどの電子装備がダウン。
さらにそこに、破損した真水タンクから漏れだした水が襲った。
配電系統がかなりショートして、交換するしかないそうだ。
それと、真水の備蓄は、飲み水だけで2日分しかない」
「……」
「平野艦長は戦闘継続不能を宣言。間近で修復可能なトラックも海軍艦艇の修復で手一杯。“鈴谷（すずや）”はもう内地まで下がるしかない」
「じゃあっ！」
「――もし、何かあって出撃するなら、我々の代わりに出るのは」
ぱっと明るい顔になった美奈代に、二宮は冷たく言った。
「染谷達だ」
「……」
――内地に帰れる！
皆が浮かれ騒ぐ中、美奈代は一人、ぽつんと一人、通路にたたずんでいた。

船窓の向こうはもう真っ暗。
雲より上を飛んでいるから星だけは見える。
「どうした？」
偶然、通りかかった宗像が声をかけてきた。
「……うん」
美奈代は言った。
「私達が内地に帰れる代わりに、何かあったら、染谷候補生達が出陣するらしい」
「……何もなければいいだろう」
宗像は頷いた。
「それで落ち込んでいたのか」
「……悪いか？」
「悪くはないが」
クックックッ……。
宗像は喉で笑って言った。
「何。内地に帰っても、別に遊べるわけじゃない。すぐに我々も出ることになるだろう」
「……それもイヤだけど」
「あれもイヤ。これもイヤ」
宗像は茶化すような口調で言った。
「そんなわがままを言っていると、いずれ、大きな天罰が下るぞ？」

宗像のその言葉は、本当になった。

●アフリカ　ソマリア　魔族軍司令部

「特務隊からの報告は以上です」
居並ぶ将官の前で、その士官は敬礼した。
中世教会を名乗る組織との連絡を任務とする士官だ。
「……そうか」
ユギオは思案げに頷いた。
「偶然とはいえ、巡航艦1隻にカプラーヌまで喪失するとはな」
「巡航艦は大破しましたが、南太平洋基地に収容。現在修復中です」

「特務隊の隊長は誰だ?」
「シュナー少佐です」
「この失態はいずれ埋めさせるとしよう。それで?」
ユギオは、シュナー少佐達のことをそこで斬り捨てた。
「封印の解除は中世協会の方で引き受けてくれるというんだな?」
「はい。あくまで封印解除は人類に実施させると」
「……ふむ」
「ただし、学術部隊からは念を押されています」
「何と?」
“倉木の封印に、本当にヴォルトモード卿が封印されているか、保証出来ないと”」
「ん?」
ユギオは、意味が分からなかった。
「ヴォルトモード卿の封印地点は倉木ではないのか?」
「それが……」
士官は手にした書類をめくりながら言いづらそうな顔で続けた。
「封印に携わった神族側の退役将校の話として、倉木の封印には細工がされていると」
「細工?」
「はい。封印をかける前、情報軍のイツミが直接何か細工していたのを見たというのです」
「細工とは何だ?」

「中世協会が確認した所、弓状列島の封印だけで８カ所。どこに何を封印したのか、報告資料を天界軍が既に処分しており、詳細は一切不明です」
「……」
「捕虜移送の記録から見て、倉木に封印されたと見るべきだというのが調査担当者からの報告だそうです」
「待て」
居合わせた将官の一人から声が上がった。
「封印は一度だけだ。複数の部屋を作ることは出来ない」
「その通りです。ですが閣下」
士官は頷いた。
「イツミは空間操作のエキスパートです」
士官は言った。
「倉木山にヴォルトモード閣下を封印するように見せかけ、別な場所に封印した可能性も捨てきれない。中世協会はそれ故に、倉木解放、即、ヴォルトモード閣下の解放とはつながらないと言うのです」
「全ては、倉木の封印を解いてからか」
「はい」
士官は再び頷いた。
「――――やるしかない」
ユギオは頷いた。
「すでに我が軍の残存兵力は２４時間以内に弓状列島への侵攻を可能にしている。倉木の封印が解除され次第、門（ゲート）をリンクさせ、弓状列島に兵を送る。協会にはそれを伝えろ」
「はっ」
「封印解除決行は一週間後だったな」
「はい。その前に、陽動としての、太平洋沿岸部の封印解除は？」
「やらせろ――――あのカプラーヌを潰してくれた馬鹿者に落とし前をつけさせるんだ」

「シュナー少佐に？」
「ああ。そいつだ」
「了解――少佐に命じます。妖魔が出てくれれば、混乱した状況を作り出せます」
「……楽しみだ」
そう、ユギオは不敵に笑った。

富士学校壊滅　第一話

“鈴谷（すずや）”は葉月湾に入った。
日本に帰ってきたのだ。
出迎えもなければ、式典もない。
ただ、ひっそりとした入港だった。
「……日本だぁ」
美奈代達は、それでも満足だった。
見慣れた都市の景色。
日本語の看板。
そんな些細なモノを見ても、涙があふれて止まらない。
「私達……帰ってきたんだぁ」
感極まったさつきはその場にへたり込んで声を挙げて泣き出した。
「うん……私達……帰ってきたんだ」
「うん……グスッ……うん……」
美奈代も涙をこぼしながら何度もその背中をさすった。
都築も目に涙を一杯にため、山崎は男泣きに泣いている。

泣くだけ泣いた後、美奈代達は、富士学校へ戻ることになった。

時間までに行けばいい。
それまでは自由行動だ。
それは、二宮の親心というものだった。

あれ食べたい。
これ食べたい。

皆、艦から降りる前からさかんにそんなことを話題にしていた。

東京から電車とバスを乗り継げば、富士学校まで半日のコースだ。
その間、腹一杯に美味いモノを食べる！
皆が、それだけを楽しみに、艦を降りた。

ところが――

「どうだった？」
「ダメだ」
駅前で、都築が肩をすくめた。
「セブンもローソンもみんな店閉めている」
「……そうか」
宗像は、自分が出てきたデパートを見上げた。
「店の中はからっぽだ」
「仕方ないみたいですよ」
すぐ目の前のタバコ屋で一礼して出てきた山崎が言った。
「海外からの輸入がほとんど止まって、石油も何も手に入らなくなったのが原因です」
「……何も？」
「ええ。砂糖も小麦も……生活必需品のほとんどが」
「このままじゃ、滅ぶぞ」
「アメリカと南米経由のルートが止まれば、全てが終わる――タバコ屋さんはそんなこと言ってましたよ」
「……だろうな」
宗像は頷いた。
「このままじゃ――マズい」
「ったくよぉ」
都築はため息をつくしかない。
「せめてマック位はあってほしいぜ」

「マクドだろう？」
「マックだよ」
「……私、モス」
「どっちでもいい。不毛な言い争いはやめろ」
「……」
「バスに乗ろう。駅の立ち食いのかけそば一杯８００円は洒落にならん」

「富士学校前」
行く先にそう書かれたバスに揺られる美奈代達は無言だ。
艦を降りた時の希望の満ちた光はその顔にはない。
呆然とした顔。
それが表現として正しいだろう。
「何なんだよ」
都築はバスに揺られながら町の様子を眺めるしかない。
駅前から続く商店街は、外出許可が出るたびに入り浸った繁華街だ。
人々が盛んに行き交い、店からは激しい呼び込みが聞こえてきたものだ。

それが――

「みんな、誰もいないじゃないか」
車窓から見る商店街は、皆、シャッターを閉め、商店街を歩く人もまばら。
人が集まっていると思えば、そこはハローワークだった。
「こんなことってあるかよ」
都築の愚痴に反論する者はいない。
「俺達、命がけで戦って帰ってきたのに、日本がこんなになったな

んて……ありかよ」

富士学校に戻った美奈代達は、すぐに校長室に通された。

「よく帰った」

時代がかったプロペラ髭が似合う老将が、何度も頷きながら言った。

「これでお前達も一人前だ――――卒業式までは少しある。ゆっくり休め」

「はっ！」

美奈代達は敬礼した後、校長室を辞そうとした。

「――――ああ、待て」

校長は、踵を返した美奈代達を呼び止めた。

「招魂社へ行け。先に逝った連中にも、帰国の挨拶はしておくんだ」

「……はっ」

富士学校には、殉難者の魂を奉る社（やしろ）がある。

それが、招魂社だ。

社の周りには、殉難者の数だけ桜が植えられている。

その参道の途中。

新しい桜の苗木かたくさん植えられていた。

その苗木の群こそが、それまで同じ学舎で学んだ４６期生達の新しい姿だと思うと、美奈代は目頭が熱くなるのを押さえられない。

「それにしても」

社からの帰り道。
都築はぽつりと言った。
「校長も老けたな」

「もとから老けているだろうが」

「そうじゃねぇよ。宗像」
都築は苦笑いしながら言った。
「“伊吹”の件、校長も相当に響いたらしいな。そういうことだよ」

「よくわかるな」
宗像にとって、校長は相変わらず厳めしい面構えにしか見えなかった。

「ああ」
都築は頷いた。
「事ある事に呼び出して、散々、ぶん殴ってくれた相手だ。俺は、校長のツラ見ただけで、何で何発殴られるか察することが出来る」

「そんなこと出来るのはお前だけだ。なぁ、泉？」

「……いや」
何故か、美奈代が首を横に振った。
「確かに校長は……相当、響いたらしい」

「お前にもわかる……わけだな」
宗像は、納得した様子で言った。
「考えてみれば、殴られるのが都築なら、叱られるのはお前の専売だったな」

その日の夕方。
学校に到着した二宮は、生徒達を教室に集めた。
「日本海での出来事は、魔族軍の仕業と断定された」
話題は、日本海で発生した鬱陵島事件のことだ。
二宮が壇上で続ける。
「糖花島は、鬱陵島を全滅に追いやり、その後再浮上。現在は鬱陵島から南南東に１５キロの位置に浮いている。
国連軍はこの糖花島を、浮遊する城――浮遊城と名付けた。
以降、そのように扱え」

都築や宗像が何事か質問し、二宮が答えている。
いつもの光景だ。
だが、美奈代はその中にいて、何も聞いていなかった。
ただ、ぼんやりと時間が過ぎるのを待っていた。
二宮を見ているフリをして、黒板の上に据えられた時計を見ている。

「大韓帝国政府は、本件を我が帝国の仕業だと主張し、謝罪と賠償を要求しているが、その根拠すら示せない有様だ。ただ、覚えておけ。韓国軍のグレイファントム部隊が、浮遊城から出現したメサイア部隊によって一方的に全滅させられたことを」
「でも、勝てますよね」
「やって見なければわからん。他人の評価があてになった試しはない」
「……」
「それと、本日１８００時、第３ハンガーでテスト騎の搬入作業が

行われる。
本騎は機密騎の指定が解除されていないため、ハンガーと演習フィールド周辺は、終日立ち入り禁止となる。
間違っても問題起こすな？
開発局はいろいろうるさいんだ。
細かいしねちっこいしイカれてるし……ロクなのいないからな？
これから白衣の連中をみかけたら視線を合わせるな？お前らのためだ。
なお、数日前に校内に不審者が侵入したことを受け、憲兵隊が警邏に回っている。
ご自慢の“おいこら”で捕まったら、我々教官達でも引き取りに苦労するんだ。
そのお眼鏡にかなうようなバカはしないようにきつく言っておく。
それから、明日は外出は許可できないが、休暇にしてやる。
宿舎でゆっくり休め。
食糧事情は最悪だし、物資もないから、何も出せないがな」

懲罰並に質素な夕飯を済ませた後、美奈代は明日、寝坊しないように布団に潜り込んだが、頭の中では、今日見た日本での風景が走馬燈のように回転して眠れない。

このままではまずいと思った美奈代は、夜風に当たるために部屋から出た。

灯火が押さえられた通路を歩き、夜間通用口に向かう。
夜間の外出は原則禁止だが、中庭に出る位は許されている。
美晴はお化けが怖いから、夜の外出なんてしたくないというが、美奈代はむしろそういう神経がわからない。
明るいのと暗いとの違いだろう程度の認識しかないのだ。

眠れないとよく夜風にあたりに美奈代は外に出る。
夜風に身を任せると、かなりぐっすり眠れる。

当然、廊下に候補生の姿はない。
不意に感じた、ひんやりとした空気に思わず身震いしてしまった。

その時だ。

「――――ん？」

ザザッ！

廊下の外を何かが走る音がした。
一瞬、黒い影が通り過ぎたと思ったのは、美奈代の見間違いでは決してないはずだ。
「不審者か？」
美奈代は、周囲を見回すと、そっと通用口を開け、外に出た。

――――靴跡から見て、こっちだ。

スパイや破壊工作員なら手も足も出ないだろう。

候補生にすぎな美奈代がこんな行動に出るのには理由がある。
分隊長としての義務感ではない。
騎士としての正義感でもない。

数日前、校内に数名の侵入者があったと聞いた。
憲兵隊の派遣は、そのせいだ。

そう、聞かされていたことへの好奇心だ。

美奈代はそれを自覚していない。
物音を立てないように気を配りながら後を追う。
やはり通報するべきだったか？
美奈代は内心、かなり逡巡しながらそれでも不審者の後をたどり、そしてハンガーの前でその不審者を見つけた。
「お……おい」
不審者の片割れはびっくりする程の巨体。
そう。
何と、相手はあの都築と山崎だった。
二人は、すでに入り口がロックされたハンガーの通気口を破って中に入ろうと四苦八苦しているところだった。
「何をしている！」
突然、背後からかけられた誰何の声に、二人が飛び上がって驚いたのが美奈代には手に取るように分かった。
「……な、何だ。泉か」
恐る恐る振り向いた二人が、相手が誰かわかったせいか、その場にへたり込んだ。

「び……びっくりしましたよ。泉さん」
「お、脅かすなよ。泉」
「何しているかと聞いたんだ」
「黙っていてくれ」
「じゃあ警務隊に通報しよう」
美奈代はポケットからホイッスルを取り出した。
普段、校内の警備を担当する警務隊が使う警備ホイッスルだ。
一吹きで警務隊が飛んでくること請け合える代物だ。
「ま、待てっ！」
都築が慌ててその手を止める。
「わかったよ！」
「なら喋れ。何が目的だ？」
「――――メサイアだ」
「メサイア？“幻龍（げんりゅう）”は」
「バカ。寝言言っているな。昼間、飛行艦が運んできたのがあったろう？性能評価だろうな。ここの教官達は、性格は最悪だがパイロットとしての腕はピカ一だ」
「お前、何という恐ろしいことを」
「ところが、そんなメサイアだが、整備から聞いた限りでは、俺達には公開されないと来た。明日からしばらく、演習場が閉鎖されるのはそのためだ」
「だからお前」
「ああ」
都築はニヤリと不敵に笑った。
「向こうが来ないなら、こっちから訊ねてやる。道理だろう？」
「だからといって、進入禁止区域に入るバカがあるか！」
「バカッ！」
都築の手が美奈代の口元を抑えた。
「声がデカイ！」

その時だ。

「誰だ!?」

マグライトの強い灯りが辺りを生き物のように蠢く。

警備兵だ。

「誰かいるのか!?」

「やばいっ!」

とっさに物陰に隠れた都築は美奈代を抱きかかえると、山崎に言った。

「山崎、あそこから入るぞ!」

「はいっ!」

「ちょっと待てっ!」

「じ、冗談じゃない」

通気口から忍び込んだハンガーの中、美奈代は半泣きになっていた。

「よりによってこれじゃあ、謹慎モノじゃないか」

「営倉の主と言われたお前にとっちゃどうってことないだろ?」

「ふざけるなっ!」

美奈代は爆発した。

「まだ36回だ!」

こんっ。

「ん?」

こんっ。

美奈代の頭に何か固い物が当たった。

床に落ちたそれを手にしてみる。

ビスだ。
「何だ？」
ハンガーの中を見回してみる。
中を見回すのに必要な最小限度の明るさだが、それでも大体の所はわかる。
自分達が隠れているコンテナの反対側で、白い手がヒラヒラと動いていた。
手がひっこめられ、そこからのぞいたのは――
「に、二宮教官っ！？」
とっさに、山崎と都築が逃げ出そうとするが、
「待て」
二宮はそれを声だけで止めた。
「別に罰しはしない。安心しろ」
「へ？」
「何だ。お前も来ていたのか？」
二宮の背後からの声。
それは、宗像だった。
「宗像？それに、早瀬、美晴まで！？」
「私達もいますよ？」
罰の悪そうな顔を出したのは、牧野中尉達（メサイアコントローラー）ＭＣの女性士官達だ。
「い、一体？」
「開戦以来、動きがあわただしくなっている中で搬入された新型騎だ。興味が湧いた所で、忍び込む寸前の宗像達と牧野中尉達に出会った」
「巻き込むと悪いと思ってな。あと、ＭＣ（メサイアコントローラー）は必須だから」
誘わずに悪かった。宗像は小さくそう言った。
「で、ですけど！」
喚きだした美奈代の口を、二宮が押さえた。
「ばかっ！ここにいることがバレたら大目玉なんだから！」
「き、教官？」

「私達も、忍び込んできたのよ」
「中佐、警備兵ノシてね」
美晴が殴る素振りを見せた。
「え……営倉入り」
「ばれなきゃいいの！モトは取るわよ！？」

腰に手をやり、仁王立ちになった二宮が見上げた先。
そこには、２騎のメサイアがあった。
１騎は先の訓練で使われた“幻龍（げんりゅう）”だが、形状が少し違う。
「胸部装甲が厚くなっている？」
「違う。胸部ジェネレーターが強化されているんだ。
“幻龍改Ｓ３（げんりゅうかい・エス・スリー）”。
内親王護衛隊仕様の最新バージョン騎。
正確には、次期内親王護衛隊（レイナガーズ）主力騎のコンペ騎でもある」
「コンペ騎？」
「紺碧ではないぞ？」
「わかってます」
「……」
「ボケが滑った件はスルーしますから、続きをどうぞ」
「……Ｓ３と競うことになるのは、隣の騎の先行量産型だ」

二宮が指さした先には、近衛実戦部隊（レイナ・ガーズ）独特の、海洋迷彩に包まれた威圧感のある精悍なデザインに包まれた騎がいた。

決してマッシブではなくむしろメサイアとしては線が細い部類に入る。が、見れば見るほど、美奈代はむしろ不思議と男性らしさを感じた。

「“鳳龍（ほうりゅう）”だ」
「“鳳龍”？」
「そう。αタイプメサイア最新鋭騎のテストベッドとして開発されたワンオフ騎だ。建造が高額すぎるのが難点だな。
設計を見直した先行量産型が、明日、ここに入る。その騎のテストは私が担当だ。
お前達の当面の仕事は、この2騎の運用テストになる」

「……あの」
美奈代は恐る恐る訊ねた。
「私達がテストするなら、一々、ここに忍び込む必要はないんじゃ？」

「そういうワケにもいかないわよ」
二宮は言った。
「見たいと思ったら我慢なんて出来るもんですか」
宗像やさつきはしきりに頷いている。
「見たもの勝ちよ」

「……はぁ」
美奈代は、もう一度、“鳳龍”を見上げた。
「それでは、我々の任官先は、実験部隊ですか？」

「まぁ……そういうことになる」

「なんか……エリートっぽいですね」
さつきは苦笑いしながら言った。
「実験部隊なんてカッコイイ♪」

「……開発局のキ印が思いつきで、予算無駄に使って作ったロクで

もない代物を扱わされるのよ？」
　二宮はうんざりした声で言った。
「おかげで、１年いただけでよ？死にかけたり、病院に担ぎ込まれた回数は、五本の指じゃ足りなかったわ。私なら御免被りたいわ」

「でも……」
　美晴が、おや？という顔になった。
「教官は富士学校に残られるのでしょう？」

「……私も異動なのよ」

「ま、まさか」

「あんた達の配属先はまとめて同じ。その指揮官は私」

　げぇっ！？

　ハンガーに響く程の、そんな声が皆の喉から漏れた。

「な、何よっ！」
　二宮は、ぎょっ！？となって言い返した。
「わ、私じゃ不満だっていうの！？」

「いっ、いえっ！」
　美奈代は声を張り上げた。
「名誉なことですっ！なぁっ！？」

「そ、そうっ！」
　さつきが相づちを打った。
「今まで、ずっと教官の下でしたからっ！」

「むしろ安心できますっ！」
美晴も焦った様子でフォローに入る。
「……むぅっ」
疑わしい。
二宮はまさにそんな顔だ。
「さっき、やっとあんたとおさらば出来ると思ったのに――――そんな顔に見えたぞ」
「錯覚です！」
「……力説する所が怪しい」
「勘弁してください」
山崎が言った。
「ただ、教官の異動に驚いただけです」
「……都築が言うと嘘に聞こえるが、山崎がそういうなら、信じよう」
「……あの？」
都築は訊ねた。
「その待遇の違いはなんですか？」
「基本だ。
それで主に我々が担当するのは、内親王護衛隊（レイナガーズ）や特務部隊向けを主眼に次期主力コンペ騎として開発された騎体の運用データ収集任務だ。
テストに従事するに当たっての、サポート騎には、“征龍改（せいりゅうかい）”が

与えられる」

「“鳳龍”は、誰が？」

「――喜べ都築」

二宮は複雑そうな顔で言った。

「選抜の結果、お前が命じられることになる」

「俺が？」

「――そうだ。染谷との競争になったが、結果はお前だ」

「……あの？」

喜ぶかな？

美奈代はそう思ったが、都築の反応は違った。

「それってまさか」

恐ろしく冷たい。

内心で何かを拒絶した顔だった。

「バカか貴様」

二宮は都築を見据えながら言った。

「テスト騎運用に、パイロットの親を考える程、我々は酔狂じゃない」

「……本当ですね？」

「感謝するなら精霊体に感謝しろ。お前との相性が抜群によいことが、決定打だ」

「……じゃ、さっそく乗ってみるか」

腕まくりしながら、都築は“鳳龍”の足下に置かれたリフトへ向かって歩き出した。
「こらっ！」二宮がその腕を掴んだ。
「こういうのは教官からだ！」

「警察かっ！？い、今、何かデカいモンが俺ん家吹き飛ばしていきやがった！……デカイもんって何かって！？デカイもんはデカイよ！……そうそうっ！メサイアだ！メサイアをエライ低く飛ばしてやがるんだ！近衛は一体、なにしてやがるんだ！警察、文句言ってよ！損害賠償出来るよね！？うち新築なんだから、築４０年の！」

「セツナ、ついてきているか？」
「左２０時、距離３５０」
「よし。注意しろ？メースの存在が確認されている」
「シュナー少佐。前回の借りをついに返せますね」
「ああ。利子は高くつけてやろう」
「了解っ！」
「隊長。メースと接触した場合は捕獲ですか？それとも破壊？」
「破壊しろ」
「こいつでですかい！？」
驚きと不平をまぜたような声が通信装置に響く。
「コイツは、メーカーが廃棄物扱いでおいていった試作騎ですよ！

？」

「不満を言うな。現状、稼働出来るメースに限りがある。むしろ水陸両用騎を回してもらえただけでも感謝しろ」

「じゃあ、隊長。とにかく適当にあしらえと？」

「そういうことだ。ただし、施設は徹底的に叩け。やっとわかった門の在処（ありか）だ。目指すは門解放（ゲート）と心得ろ」

「了解。ブルーダ。チルダ。わかっているな？」

「了解です」

「あいよ！目に物みせてやりましょうや」

「よし……目標視認！――――開演（ショータイム）だ！」

「へへっ……一番乗りってか？」

“鳳龍”のハッチを開き、都築がコクピットに乗り込んだ。

結局、全員のじゃんけんという原始的かつ幼稚な方法で都築が一番乗りのチケットを手に入れた。

Ｓ３の最初の搭乗権は宗像が獲得していた。

素材の匂いがとれていないコクピット内部。ひんやりとしたＳＴＲシステムに触れるだけで、興奮に背筋が震える。

「ＳＴＲシステムは――筑波に聞いたとおりだ。これのテスト担当は藤崎教官だな。体格一緒だから間違いない……よし。これなら調整なしでいける。スクリーンのスイッチは……これか？」

スクリーンにパワーが入り、都築は自分が宙に浮いているような錯覚を覚えた。

「ふぇっ、こりゃ映りが段違いだ」

かなり高性能なスクリーンを使っているのは間違いない。

自分のナマの目で見るよりモノがはっきり見える。

丁度、自分の足下にいる二宮達の表情さえはっきりとだ。

ふと、視線が美奈代の胸元にいく。

固い軍服越しでもわかる、女としての小さな膨らみ。

横に立つ美晴と比較するとかなり残念に思えてしまうが、それでも、

「やっぱ……あいつ、カワイイよな」

そう思う。

男子候補生の間では、風間祷子は半ばアイドルを通り越して神聖視までされているし、柏美晴は胸のデカさでグラビアアイドル並の人気を誇る。早瀬さつきはボーイッシュなアイドルだし、神城三姉妹はチャイドル扱い。

唯一に近く、普通の扱い――つまり、候補生達の異性について

の話題にほとんど上らないのが美奈代だった。
女子候補生の中で一番キュートだと内心で思う都築は、それが不思議でならない。
じっくり見つめる事の出来る、こんな機会に巡り会うと、熟々そう思う。

「“鳳龍”ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）より都築候補生」
その声に、都築は思考を少し軌道修正した。
この場は美奈代の鑑賞会じゃない。
「そっちはどうです？……えっと、水上中尉？」
「さすが最新鋭です！あーっ！もうスゴイっ！」
水上中尉はＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）で歓声をあげた。
「お局様」の異名をとるお堅い女教師然とした中尉の興奮した声に、都築は少なからず驚いた。
冷静な冷たいタイプと思っていたのに、こうも興奮しやすいとは思っていなかったのだ。
「本当に、都築候補生って恵まれてますよねぇ！こんな騎、最初から与えられるなんて！」

そんなことないですよ。

都築はそう言ったつもりだった。

だが――――

それは、言葉にならなかった。

連続した爆発音が都築の聴覚を一時的に奪った。

自分が何か叫んでいたかもしれないが、それさえ耳は音として何も伝えない。

「――――っ！」

都築はキーンと響く耳が再び音を拾うのを待った。

待つ間に、開かれたハッチの向こうの光景を見た。

ハンガーが半壊し、床に資材が散乱している。

その中に美奈代達が駆け回っているのが見えた。

一人残らず無事だ。

「……よかった」

初めて聞こえたのは、自分の安堵のため息だ。

「候補生！」

水上中尉の叫びにも似た声がレシーバーに響いたのはその時だ。

「敵、メサイアらしき反応有！」

「どこですっ！」

「ハンガーの外っ！」

「騎体、出せますか!?」

「はいっ！ハンガーロック解除します！」

「一体、何が！?」

「敵の奇襲です！」

メサイアの機動シークエンスをかけながら水上中尉は言った。

「海から！」

「海軍は何を?」

「知るモンですか！ロック解除！」
バキィッ！
その直後、ハンガーの外壁を突き破って水色の見たこともない不気味な外見をしたメサイアがハンガー内に入り込もうとしていた。
「武装はないけど――行きますっ！」
都築は“鳳龍”を駆って、その騎に飛びかかった。
ズガァァンッ！！
都築がラグビーのタックルの要領で水色のメサイアにぶつかった光景を、美奈代は隣のハンガーに通じるドアの前で聞いた。
「くそっ！カギがっ！」
力を込めてノブを回すが、ドアはビクともしない。
「泉、どけっ！」
美奈代を押しのけたのは二宮だ。
二宮はホルスターから拳銃を抜くと蝶番（ちょうつがい）に向けて発砲した。
「教官、拳銃なんてもっていたんですか？」
「普段から持っている」
「何のために！？」
「目的は一つだ――決まっているだろう？」
ガンッ！
二宮に蹴りつけられたドアは奇妙に歪んだ状態で開いた。
「なんです？」
美奈代達は開いた隙間から通路に入り込む二宮に続く。
「貴様を射殺するためだ！」

ズンッ！
ズズズンッ！

ギィィィィンッ！

爆発音に混じってメサイアの駆動音が響く。
まだ電源が生きているらしい。
最低限度の照明に照らされた通路を美奈代達は進む。
「宗像がＳ３を起動させたし、音からして、Ｃハンガーでも“幻龍（げんりゅう）”が動いたな――全員、このままＢハンガーのシェルターに入るぞ！」
「な、我々が何か戦う手段は！？」
「メサイアに通常の武器が通じるか！」
「Ｂハンガーは確か“雛鎧（すうがい）”の！」
美奈代は言った。
「定数からして、ここにいる全員が搭乗する数はあったはずです！」
「せっかく生きて帰ってきたというのに、ここで実戦をやれと！？」
「都築達はやっていますっ！」
「死ぬぞ？」
「生き残ってみせますっ！」
「よし」
二宮は口元を不敵に歪め、怒鳴った。
「――続けっ！」
「はいっ！」
「何だとっ！？」
Ｃハンガーをのぞき込んだ青い騎体のパイロットは、チルダという魔族だった。
苦み走った顔が、突然の巨人の出現に驚愕を浮かべた。

「人類側に“メース”が！？」
満足に武装しないで飛び出してきたのが幸いだ。
もし、剣を携えてこの状況に陥ったら、自分は死んでいた！！
相手は、この建物に自分を入れまいとして、体当たりで力押しに押しているに違いない。
まさか、慌てていて、武装を忘れていたなんて、そんなバカな話は――――！
「チルダより少佐！ポイント３で“メース”と接触！現在交戦中！」

「都築っ、よけろっ！」
突然、通信装置に入った宗像の声に弾かれるように、都築はとっさに騎体を謎のメサイアから放した。
途端に、連続した爆発が、謎のメースの正面で発生した。

「や、やったか！？」
ハンガーのウェポンラックからもぎ取った１８０ミリバズーカ砲を３発、叩き込んだ宗像は、硝煙の向こうに意識を集中した。
初陣で敵１を撃破。
それは悪くない称号だ。
「敵、動きますっ！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）からの悲鳴が、その淡い期待をうち破った。
「このバケモノがっ！」

「――くっ」
意識が一瞬、飛んだのは間違いない。
チルダは警報が鳴り響くコクピットで舌打ちした。
何かが着弾したその衝撃が、装甲こそ貫通しなかったものの、騎体内部をかなり痛めつけたことは間違いない。
水に潜って帰れるか、正直、自信がない。
「何だ？……何をした？」
困惑するチルダに、通信が入ったのはその時だ。
「チルダ、後退しろ！」
指揮官のシュナー少佐だと、さすがにすぐに分かった。
だが、
「いえっ！」
チルダは首を横に振った。
「まだ戦えますっ！ここを維持しますっ！」
「他施設は軒並み叩いた！残るはお前のポイント３だけだ！」
「なら増援を――ぐうっ！？」
「向かっている！チルダ、どうした！？チルダ！」

突然、チルダ騎は、横からの衝撃に襲われた。
破壊力はそれほど大きくはない。
機体表面で連続する小さな爆発。
それが衝撃の正体だ。
都築達は、その正体を知っている。
１２０ミリ機関砲弾。
それを撃ったのは――。

「そこの騎！念のために聞くが、友軍騎だな！？」

シールドと１２０ミリ機動速射野砲を構える３騎の“幻龍（げんりゅう）”達。
候補生達にとって、一生忘れることが出来そうにないその声は、指導教官の大野大尉の声だ。
この混乱の中、彼らは“幻龍（げんりゅう）”達をハンガーから引き出し、操っているのは間違いない。
「だ、第三分隊、都築です！」
「第七分隊、宗像！」
「貴様からが、何故、そんな騎に乗っているのかは後で聞く！」
大野は怒鳴った。
「とにかく下がれっ！新型をこんなところで破壊されるわけには！」

「大野大尉！」
大野騎のＭＣ（メサイアコントローラー）が怒鳴る。
「３時方向、急速に接近する騎３！」
「何っ！？」
ドシャァァァァンッ！！
ハンガーを吹き飛ばして大野騎ともう１騎に吸い込まれた光の矢。

ドッシャアアアンッ――――！！
大野騎が、糸が切れたようにその場に崩れ落ちた。

「……なっ」

大野騎達に何が起きたのかは、宗像にもすぐにわかった。

ハンガーを貫通したＭＬ（マジックレーザー）の直撃を受けたのだ。

「い、大野大尉？」

「大野大尉騎……生体反応……なし。ＭＣ（メサイアコントローラー）の木村少尉……も」

感情を失った声が、宗像に現実を教えてくれた。

モニター上の友軍反応から、大野騎の反応が消えている。

生体反応がない異常、反応は消えることは、理屈として知ってはいる。

ただ、感情的に、人の死がこれほどあっさりとしたものだと、受け入れられない。

「……っ！」

「敵、動きますっ！」

「そ、そこの新型、都築か！？」

「その声は――染谷かっ！？」

「生きていたか！」

「まだくたばらなかったのか！」

「な、何だ！？どうしたんだ、都築？」

「貴様、どうしてここにいる！？」

「騎体を取りに来たんだ」

染谷は言った。

「開発局が学校に貸し出し中の騎の回収に」

「んなことはどうでもいいっ！」

都築は怒鳴った。

「テメェ、ちょっとツラ貸せっ！」

「目の前に何がいるか、わかった上でのセリフか！？」

「――ちっ！」

都築は散乱した残骸から見つけた剣を抜いた。

「まず、あっちをぶっ殺してからだな――逃げんじゃねぇぞ」

「何の話だ？染谷候補生より早見中尉！」

染谷は機関速射野砲を構えた。
「指示を！」
「――――お、おうっ！」
通信に裏返った声が聞こえる。
大野大尉の副官として、今、部隊の指揮をとる早見教官の声は、明らかに震えていた。
「大尉を殺った連中は、俺と井上中尉でやるっ！染谷は都築や宗像と組めっ！」
「り、了解っ！」
「ふざけるなっ！」
染谷が動きを止めたのは、そんな都築の怒鳴り声のせいだ。
「テメエなんかと組めるかっ！」
都築はそう怒鳴ると剣を構えた。
「テメエはそこで指でもくわえてろっ！」
「なっ！？」
「手を出すなっ！こいつは俺のエモノだ！」
「単騎で勝てる相手か！？」
「勝ってやる！こいつの次は貴様だっ！」
都築は戦棍（せんこん）をウェポンラックから引き出すと、ハンガーの外に出た。
「い、一体、何を怒っているんだ！」

ガギィィンッ！！
鈍い音が響く。
腕を跳ね上げられ、敵が懐に飛び込もうとしている。
「ちぃっ！」
チルダは機体を急速後退させた。
「ふざけたマネを！」
長い腕を振り回し、敵との距離をとる。

相手は複数だ。
単騎だけ一々相手にしているワケには――
敵は、剣を大きく振りかぶって再び襲いかかってくる。
それは、チルダにとって勝機だった。
「そこだっ！」
長い左腕が動き、振りかぶられた敵騎の両拳が一度に握られた。
これでは剣を振り下ろすことなぞ出来はしない。
すでに右腕に仕込まれたＭＬ（マジッククレーザー）は臨界だ。
「これで終わりだな！」
チルダは勝利を確信しつつ、トリガーに力を込めた。
「くたばれっ！」

「――なっ！？」
封じられた両腕。
左に不気味に光る砲。
鳴り響く警告音。
シミュレーションとは全く違う。
覚悟を決めることも許されないまま、連続した鈍い音が都築の鼓膜を撃つ。

「……あ、あれ？」
生きている。
おかしい。
あの状況で見逃すほど、敵は愚かじゃないはずだ。
だが――
敵の動きは停止し、光っていた砲も今は冷たい闇の中に沈黙している。

「な、何が？」
都築はスクリーンに映し出された映像で、全てを理解した。
沈黙した敵騎の両側に、宗像騎と染谷騎が回り込み、未だ煙を上げる銃口を、至近距離の敵騎に向けていた。
染谷と宗像の２騎が敵騎の両側に回り込むと、機動速射野砲をありったけ叩き込んだのだ。
１２０ミリ戦車砲をばらまくことを目的に造られた砲――――機動速射野砲。
それをゼロ距離射撃で喰らったはずの敵は――――

「こ……こいつ、バケモノか」
宗像の声が震えていた。
「この距離で戦車砲をくらって、装甲を貫通しないだと？」
敵の青い装甲は、どうひいき目に見ても少し凹んだだけだ。
「そ……装甲内のダメージで、ようやくつぶせたな」
中のパイロットが、連続した爆発によってコクピット内部をはね回った破片で死んだ。　それが不思議とわかった染谷は、空になったマガジンを再装填しながら言った。
「なんてヤツだ。一体？」
動かなくなった敵を、染谷は思わずのぞき込もうとして――――

「――――染谷ぁっ！」
都築と宗像が同時に叫んだが、それは遅すぎた。
染谷の背後。闇の中から突然現れたツメの一撃が、染谷騎の胴を貫通。
染谷騎の足が、宙に浮いたのは、その瞬間だった。

バキッ
グシャッ
メキッ

鈍い音が連続して染谷騎から発生し、その度に、染谷騎が痙攣したように動く。
機体内部の機材が破壊されている音だ。
染谷騎が手にした機動速射野砲がその手から力無く落ちた。

「染谷っ！」
宗像は、とっさに染谷騎からの生命反応を見た。
信号は――ない。

「こいつ、どこからっ！」
宗像は、染谷騎を片手で持ち上げている敵騎に問答無用で機動速射野砲の銃口を向け、発砲した。
だが――
「っ！！」

まるで敵はわかっていたと言わんばかりの動きを見せた。
その砲弾に耐えるために敵が用意した楯は――染谷騎だった。
「なっ！――ぐっ！？」
敵の掌が光り、ＭＬ攻撃（マジックレーザー）が放たれた。
ドンッ！
光の矢は、宗像の持っていた機動速射野砲を真っ二つに切断、爆発した。
爆発の衝撃をシールドでかろうじて凌いだ宗像は、背後にマウントされていた斬艦刀を抜いた。
「都築っ！」
宗像は怒鳴った。
「戦棍（せんこん）はダメだ！――斬艦刀を使えっ！」
「どこにあるんだよ！」
「背中にマウントされている！武器情報をよく見ろっ！」
「悪いっ！」
都築は戦棍（せんこん）を放り捨てると、背中のウェポンラックに装備されていた斬艦刀を引き抜き、敵に襲いかかった。

ブゥンッ！
ムチのようにしなる敵の腕が都築騎に向かって襲いかかる。
「んなものっ！」
右腕をかわし、左腕を弾く。
「よくも染谷をっ！」
敵がリーチに入った。
斬艦刀の一撃がようやく敵の肩部に命中した。
だが――
「なっ！？」
装甲の表面をへこませた程度で、斬艦刀が押し戻された。

「出力を上げますっ！」
MC（メサイアコントローラー）が言った。
「設定がプア！設定レベルでは装甲を割れませんっ！最大出力ですっ！もう一度っ！」
「よしっ！」
斬艦刀がそれまでとは比較にならないほど力強く光った。
「染谷のかたきっ！」
滅茶苦茶に振り回された斬艦刀が、敵騎の両腕を切り落とし、その脳天をたたき割った。

「ブルーダ！」
友軍騎が脳天をかち割られて崩れ落ちた光景を、セツナは確かに見た。
「このぉっっ！」
頭に血が上り、ワナワナと体が震える。
セツナは思わずブルーダの騎を潰した敵に斬りかかろうとした。
「セツナ！」
空気を引き裂かんばかりの張りのある声がこの時響かなければ、セツナは間違いなく戦死していた。
「さがれっ！」
シュナー少佐だ。
「任務は果たした！ここで貴様が倒れても無意味だぞ！」
「しかしっ！」
セツナは上官に怒鳴りたかった。
ここで死ぬのが無意味っていうなら、死んでいったブルーダとチルダはどうなんだ！？
歯を食いしばるセツナに、シュナー少佐は厳しい口調で言った。
「ブルーダとチルダの騎はすぐに自爆する。貴様は下がれ。母船とのランデブーに遅れるな！」

「――っ！」
「これは命令だっ！」
「はいっ！」
「よし。ここは俺が食い止める。攪乱幕（ジャマー）を展開するから、それに併せて下がれ」
「了解っ！」

シュナー少佐の騎から放たれたのは、単なる煙幕ではない。
“メース”のほとんどのセンサーをダウンさせるほど強力な攪乱幕だ。
人間側の“メース”のセンサーがどの程度かは知らないが、最低でもかなりのダメージを見込めるはずだ。
シュナー少佐は、目の前に広がった真っ黒い煙の中でセツナ騎が動いたのを音で理解した。
「――――さて」
シュナー少佐にとって誤算だったのは、敵に“メース”が存在したことだけではない。
部下であるチルダが撃破されたことに我を忘れたブルーダが暴走、敵の返り討ちにあったこと。
まさにそこだった。
直情型のブルーダをコントロール出来なかったのは、指揮官としての自らの失態に他ならない。
「……俺の怠慢か」
結局、シュナー少佐はそう断じると、対峙する“メース”に躍りかかった。
メサイア
“幻龍（げんりゅう）”

そんな名は知らない。
ただ、今のシュナー少佐にとって、それは倒すべき敵にすぎなかった。

シュナー少佐は、ハンガーの影に隠れながら、敵騎からの得体の知れない攻撃に耐えていた。
どうやら、何か化学物質で撃ち出され、命中すると爆発する特殊な兵器らしい。
魔法系兵器に似たようなモノは山ほど有るが、魔法を伴わないこんな攻撃を見たのは、少なくともシュナー少佐は初めてだった。
「俺達が眠っている間に、人類は一体？」
シュナー少佐は、一瞬、自分達が封じられていた時間の長さに思いをはせ、首を横に振った。
今、考えるべきは、そんな気の長くなるほど長い時間のことではない。
そう。
今、考えるべきは――――
「――――ままよっ！」
シュナー少佐は、騎体を突撃させた。

「司令部から返答は！？」
早見教官は、同僚の井上教官と共に、敵をＡハンガーの裏に追いつめた。
そう判断していた。
敵からの攻撃はない。
むしろ、敵は後退しつつあった。

強力なジャマーが展開されたが、それさえ、敵の苦し紛れの一撃だと、そう判断していた。

Aハンガーは弾薬庫として使われている。

下手に流れ弾でも当てようモノなら、この辺一帯は壊滅。

自分達は刑務所送りでは済まないだろう。

タダでさえ狙撃に向いていない機動速射野砲の発射速度を落として、一々チマチマと撃たなければならないことに、早見教官はいらついていた。

「司令部と通信がつながりませんっ！通信反応なしっ！」

「ジャマーか？それともやられたのか？――ハンガー内の“雛鎧（すうがい）”はどうした！」

「全騎、コクピット改装中です！そうでなくても、調整に手間取って！」

「くそったれめっ！」

戦況モニターは先程のジャマーの影響で、彼我の一度教えてこない。

目に頼る有視界戦闘が全てだ。

幸い、地の利はこちらにあるが、少しでも人手が欲しいのは本音だ。

とはいえ、ヒヨコ共に加勢を頼んだら教官として末代までの恥だ。

やるしかない。

「井上、次に撃ったら突っ込むぞ！」

「了――なぁっ！？」

「どうした！？」

マガジンの装填が終わった早見教官の目の前で井上騎が倒れた。

頭部を敵の巨大な腕にわしづかみにされ、引き倒されたのだ。

「井上っ！」

もう一度言う。
機動速射野砲は、狙撃には向いていない。
速射性能を偏重するあまり、戦車砲のように、砲弾を目標に命中させるより、目標周辺にバラ撒くために造られたようなシロモノだ。

早見教官は、井上騎の下にいるのが敵騎だと判断した。
そして、体が勝手に動いた。
トリガーを引いてしまったのだ。
「――しまっ！」
慌てる早見教官の目の前で、放たれた砲弾は井上騎に吸い込まれるように命中。爆発した。
「井上っ！」
「――たっ！助けっ！」
井上の悲鳴が聞こえたのはその時だ。
その時まで、井上は生きていた。
そして――
安堵する早見教官の体を、敵の攻撃がコクピットごと粉砕したのは、その直後だった。

富士学校壊滅　第三話

夜が明けた。

崩れ落ちた校舎。
未だ炎上する倉庫群。
各所に転がるメサイアの無惨な骸。
目の前に広がる惨状を前に、皆がため息をつく暇さえ与えられなかった。
「都築、宗像、メサイアのセンサーで生存者を捜せ！」
残骸の中に横転していた演習用の野戦指揮車から引っ張り出した通信装置を手に指示を飛ばすのは長野教官だ。
その横では、美奈代達が、その野戦指揮車を高機動車に結びつけたワイヤーで引っ張って元に戻そうと悪戦苦闘していた。
全員、顔や制服はすすで汚れ、あの事件以降、水の一滴も飲んでいない。
「敵の再襲来は！？」
「あったら終わりだ。考えるな！」
「“雛鎧（すうがい）”はどうしたんです！」
「再組み立てをやっている人手がない！大体、トレーナー騎で戦闘が出来るわけないだろうが！つべこべ言わずにさっさと生存者を捜せっ！」
怒鳴るだけ怒鳴ると、長野大尉は通信を切った。
あちこちに指示を出し続けていたので、張り付くような喉の痛みに、少しだけ顔をしかめた。
強い日差しが焼けたアスファルトに照り返す。

――せめて水がほしいな。

長野大尉はそう思うが、戦闘でライフラインは完全に破壊されている。

おかげで飲み水どころか、負傷兵の医療用の水も不足している有様ではどうしようもない。

「――ご苦労。引き続き、生存者の発見・保護に全力をあげてくれ」

警備隊の生き残りから報告を受けていた二宮が、長野に振り返った。

「さっき、岩見教官の上半身が見つかった。これで校長以下、昨晩、施設内にいた教職員の半数が――」

二宮は言い淀んだ後、

「“戦死”したことになる」

そう、言った。

「――生徒達は？」
長野は、近くに転がっていた燃えさしを拾うと、口にくわえたタバコに火を付けた。
煙の向こうに転がる“幻龍（げんりゅう）”達には、未だ誰も手を付けていない。
生存者を捜す手でさえ足りない中だ。
例え騎士だろうと何だろうと、確実に死んでいる死体一つを引っ張り出すなら、まだ生きているかも知れない場所に埋まっている不明者捜索にこそ人員を割くべきだ。
「北海道へ機能移転中だったのが幸いした」
二宮が視線を向けた先。
瓦礫の間をゆっくりと進む二騎のメサイア達からは何の報告もない。
装備がないため、メサイアとのデータリンクが出来なければ、二宮達といえど待つしかない。
「行方不明の連中も、瓦礫の下で頑張ってくれていることを祈りたいが――」
「現在、生存が確認されている生徒達は――」
長野大尉は近くの瓦礫に腰を下ろした。

せーのっ！
せーのっ！
指揮車をひっくり返そうと躍起になってワイヤーを引っ張る女子生徒達の声が、高機動車のエンジン音に負けじと響く。

「――約４割程度にとどまります」
「よく生き残ったものだ」
「染谷も、無事だったんですね？」

「ああ。ＭＥＳ（マジック・エジェクト・システム）を上手く使った結果だ。コクピットブロックごと回収されている」
「さすがですな」
「ああ……救援部隊がもうすぐ来る。一本、くれ」
二宮は、長野のポケットからタバコを抜き取った。

――1時間後。
上空をＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が盛んに行き来する。
地上では、重機が動き出し、赤十字の天幕が張られ、衛生兵達が駆け回る。
「災難と言えば、これ以上の言葉はないわ」
二宮にそう言ったのは、美夜だ。

「ニュース速報で富士学校で大規模爆発事故っていうじゃない？びっくりしたわよ」
「“鈴谷（すずや）”はドック入りしたはずよ？何してたのよ」
「嫁が数ヶ月ぶりに帰ってきたってのに、接待で飲んで帰ってきた旦那ぶん殴っていた
「ご愁傷様」
「……もう離婚してやりたいけど」
「お金？」
「子供っていったら、どうする？」
「はぁっ！？」
「うそよ――で？」
「ご覧の有様」
美夜は横たわる“幻龍改（げんりゅうかい）”の残骸を見た。
コクピットハッチが吹き飛び、中から煙が出ている。
「“幻龍（げんりゅう）”の全騎喪失は痛いわよ」

「安心なさい」
美夜は瓦礫の中を縫うように歩き出した。
「真理に責任負わせようなんて、誰も考えていないから」
「イヤミ？」
「ん？」
「私達が“雛鎧（すうがい）”を動かすことも出来ず、みすみす指をくわえて“幻龍（げんりゅう）”の全滅を見ているしかなかったこと」
「まさか！」
美夜は肩をすくめた。
「真理からの報告の通りだったことは、すでに司令部も承知しているわ」
「一騎でも動いてくれれば、みすみす犠牲は出さなかったわよ」
二宮はそう言うのが精一杯だ。

命がけでハンガーに飛び込んでみたら、“雛鎧（すうがい）”はエネルギーバイパス周りの整備のため、主骨格（マスターフレーム）から主要部品がほとんど外されていた。

つまり、“雛鎧（すうがい）”はメサイアとしてどころか、機械としてすら動かなかったのだ。それを知った二宮が、皆をすぐにシェルターへ退避させたのは、教官として妥当な判断だった。

もしかしたら、敵が“雛鎧（すうがい）”を“メサイアの残骸”と誤認して攻撃しなかったおかげで、“雛鎧（すうがい）”は無事だったかもしれないことも含めて、二宮はなにやら複雑な思いで美夜の後を歩く。その耳に聞き慣れたディーゼルエンジンの音が聞こえ出した。

指揮車がようやく動けるようになったらしい。
二宮達の横を、ジープに乗った美奈代達がすれ違う。
二人に気づいて敬礼する顔が浮かないのは、なにも自分達の母校が破壊されたせいだけではない。
彼女たちの次の任務だ。
死体の回収作業。
自分で命じておいてなんだが、年頃の女の子達が喜ぶ仕事ではない。
美晴あたりが吐きまくるか、失神することは覚悟の上だ。
「……それと」
目的地に到着した美夜が足を止めた。
「……司令部も、“あいつ”にはかなり興味があるみたいね」
そこは、あの“鳳龍”達が入ってたハンガー。
ハンガーの床にころがされている“それ”は、“鈴谷（すずや）”から降ろされたベルゲ騎達によって、大型のベースキャリアに移動されつつあった。

昨晩、撃破された魔族軍のメサイアだ。

二宮にも、たかが訓練校が奇襲攻撃を受けたからといって、どうして飛行艦を司令部が差し向けるなんて大盤振る舞いに出たのか、それだけでもう察しがついていた。
おそらく、魔族軍のメサイアと聞いただけで、開発局から相当な圧力が加わったのは確かだろう。
「魔族軍のメサイアが、まさか日本に来るなんて」
「近衛開発局は、全力を挙げてこいつの解析にかかる。そのために彼女も送られてきた」

「また？」
「――お気の毒様」

日付が変わる頃、雨が降り出した。
静かに降り続ける雨音を聞きながら、美奈代達は焼け跡から見つけだした毛布にくるまっていた。
「きっと、涙雨ですね」
教室の一角、雨風が入らない程度の中、誰かのそんな呟く声が聞こえた。
「そう、だな」
美奈代は小さく頷いた。
染谷が生きていたと聞いたときは、涙が出るほど嬉しかった。
その安堵感があったものの、体がこの異常事態に反応して、興奮して眠れない。
建物の残骸に雨が当たる音に回収作業が続く音が混じる。
ザッザッ。
不意に、軍靴が2つ、壁の向こうを歩いていく音が聞こえた。
「気を付けろ」
声がした。
「下手に扱うとワタがこぼれるぞ」
「……ああ」
二人が何を運んでいるか。それでわかった。
「重いな」
「ああ」
美奈代は頭まで毛布を被ると、無理矢理目を閉じた。

どんな夢を見たのか。
夢を見たのかさえはっきりしない中、結局、美奈代は朝を迎えた。

講堂で食事の配給が始まるぞ！
そのメガホンでの声に誘われるように目を覚ました美奈代達は、他の多くの生き残った者達がそうだったように、無言で講堂に向かった。
雨は止んでいた。
途中、死体袋の山の横を通る。
気温が低いので腐臭はしない。ただ、自分達が血の臭いに鈍感になっていることに気づかないだけかもしれないが、心の中には、はっきりと違和感も恐怖も、なくなっていた。
天井が半壊した講堂に入ると、整備兵や警備兵達が配給にありついていた。
皆、憔悴しきった顔で、手の中の一時の暖かさにすがっていた。
美奈代達も、列に並んでようやく配給にありついた。
列に並ぶ数の少なさが、犠牲者の数を教えてくれる。
食事はポタージュに非常用の乾燥米をかけただけのもの。
それでも、口に広がる暖かさとポタージュの甘さが、何より有り難い。
その後、指示を求めて二宮の姿を探した。
見つかったのは、瓦礫の影で誰かと立ち話をする後ろ姿。
立ち話が終わってからと思い、美奈代は物音を立てないように慎重に二宮に近づいた。

「つまり」
二宮は苛立った声をあげた。
「ここは意図的に狙われた、というのですか？後藤中佐」
そっとのぞいた美奈代は、すぐに顔を引っ込めた。
二宮の話す相手は、黒服だ。
黒服――近衛左翼大隊所属者だ。
左翼大隊――魔導師や魔法騎士によって編成される特別部隊。
その関係者。
一般的に言って、下手に関わるべき相手ではない。
単なる教官に過ぎないはずの二宮が、なぜ黒服相手に、こんな所で話しているのか、美奈代は気にはなるが、あえて話を聞くつもりもなかった。
だが、耳にどうして入ってきてしまう。
「まぁ、そうなっちゃうねぇ」
「何故です？」
「一般の騎士が知っていいこっちゃないけど」
「……」
「まぁ、二宮中佐は今の立場もあるし……この地下にね？」
やる気があるのか疑わしい声が言った。
「門（ゲート）があるんだそうで」
「門（ゲート）？」
「アフリカや南米で暴れた連中が閉じこめられていたトンネルみたいなもんだそうで」
「この地下に？」
「そう。連中、それを復活させようって、動いてるんだわ」
「この施設を吹き飛ばし、その――門（ゲート）とやらを解放……トンネル

ってことは、アフリカとここをつなげようとした？」
「もしくは、この地下にも仲間が眠っているのかもしれないねぇ」
「……」
アフリカで暴れる無数の妖魔達。
それが自分達の足下に巣くっていると言われ、美奈代は足下が急に不安になった。
「まぁ、ここの襲撃が失敗したから？しばらくは大丈夫でしょう」
「本当に、その確認だけで、ここに来たんですか？」
「おろ？」
「本当は、後藤中佐がここにいらしたのは、“あの騎”の安否確認では？」
「ははっ。こりゃ鋭い」
「この中では、祷子ちゃんの騎体が一番貴重だからね」
「本当なら、風間が搭乗して敵と交戦。その戦闘データが収集出来れば最高だったんでは？」
「ご名答っ！」

……風間？
あのぼんくらちゃんがなんだと言うんだ？
美奈代は耳を澄まして二人の会話に聞き入ろうとした。
だが――

「とりあえず、ハンガー行きましょうや。あの安否、目で確認してこいってうるさくて」
「御苦労様です」
肝心の二人が遠ざかってしまう。
美奈代は肩をすくめて、その場を立ち去った。

それから1時間ほど後、美奈代達は教室に呼び集められた。

「お勉強は終わった」

二宮の声が響く教室が、普段とは違う。

崩れ落ちた校舎の隅。復旧作業の邪魔にならない所に、かろうじて無事だった椅子と机を見つけてきて並べているだけ。

それが、今の美奈代達の“教室”だ。

凡そ帝国最強兵器を駆る騎士の養成施設の有りようではない。

すでに美奈代達の服も、今着ている作業服だけで、本来の軍服は、その私物の一切と同様、宿舎と共に灰。

ここには、テキストもなにもない。

あるのは、瓦礫と死体の山だけだ。

そんな中、二宮は教官としての威厳をもって言った。

「魔族軍がこんなところを叩いてくるとは、正直、予想さえしていなかった」

教壇に立つのは二宮と長野。

椅子に座って話を聞くのは、あのハンガーにいた連中だけ。

「すでに訓練校には、貴様等に与えることの出来るものは何もない」

二宮は少しだけ疲れたという顔になった。

「卒業式もなく、もうしわけないとは思うが、貴様等は本日付けを持って、正規部隊に配属となる」

「え？」

「最早、この学校にいても仕方ない。そのうえ、コンペ騎の運用テストは、予定通りに実施するように司令部から通達が出ている。

該当する生徒で戦死・負傷者はいない。
使用騎体は予定通り搬入される。
テストそのものは何とかなるだろう」
「で、ですけど」
「出発まではまだ若干の日時がある。それまではこの富士学校の片づけだ。泉。何かあるか？」
「い、いえ！」
「教官――――質問」
突然、二宮に声をかけられ、とまどう美奈代の横で、都築が手を挙げた。
「根城っていうか基地はどこです？どこに移動するんですか？それともここで？」
「都築。いい質問だ。根城はここじゃない」
「どこへですか？」
「“鈴谷（すずや）”だ」

開戦前

●東京都内某所　天原骨董品店

「私、忙しいのよ」

窓際に立ち、魔法合成された庭の映像を眺める神音は開口一番、そう言った。

「何よりです」

ソファーに座り、苛立った声の神音の前で小さくなるのは、４０代前半の男。

背が高く、すらりとした体格に知的な中にその年頃特有の苦みが走る顔立ちは、女性を魅了させる何かを放っている。

「何なら、帰りましょうか？」

「親に呼び出されて、手みやげも無しとは……どこで育て方間違ったのかしら」

「普通……それはないと思うのですが」

「戻ってくる時、お金持ってこい。って、お父さんに言われた……少し前、悠理がそう言って私の所に相談に来たわよ？」

「……遥香に告げ口したクセに」

「折角、修行から戻ってきた息子に“金持ってこい”とは何事ですか！」

「それを、あなたが言いますか！？」

「私は貴男の母親ですよ！？」

「無茶苦茶だ！」

「……ったく、この後、“あの連中”が来ます」

「斬っていいですか？」

男は、脇に置いていた日本刀に手を伸ばした。

「ばぁか」

神音は踵を返すと、彼の真向かいの席に座った。

端から見ると、父親と娘のようにも見えるが、立場はその真逆だ。

神音は、息子である水瀬由忠に言った。
「あいつらはトカゲの尻尾。しかも、ユギオは有能そうに見えて、意外なところで抜けている。下手に始末して、あいつより有能なヤツが来たらどうするの？」
「……ご依頼のシロモノは」
由忠は、ブリーフケースから一冊のファイルを取りだした。
「コイツです」
「タダね」
ファイルを受け取るなり、神音は勝手に値付けした。
「左翼大隊（グリーン・レフト）の隠密衆にとって、お頭は未だにお袋ですからね。僕も上司に報告を求められた――その程度と認識しています」
「私の代行でしょう？束ねなさい。それでも水瀬家の当主ですか」
「努力はしていますよ。あのバケモノと変態集団の中で」
「結果を伴わない努力は無駄です」
「……」
「……へえ？」
ファイルの中身を速読し始めた神音は、パラパラとファイルをめくる手を止めることなく、感心したような顔になった。
「近衛でこんな人体実験じみた計画があったんだ」
「……ええ」
由忠は、目の前に置かれた空のティーカップに舌打ちした。
そして、ソファーから立ち上がると、サイドボードのドアを開けた。
「その理論は、親父が生きていた頃に魔導兵団の方から上がったものです。丁度、β級メサイアの開発がスタートした頃ですね」
「懐かしいわね……水龍だっけ」
「そうです。今でも現役ですよ？」
由忠は、中にあったブランデーの瓶を満足げに眺めると、それを手にソファーに戻った。
「元来、水龍は天皇専用騎。その潜在能力を騎体にフィードバック

する方法の一つ、といった所でしょう」
「採用はされなかったのね」
「当然です」
ブランデーをカップに流し込みながら由忠は答えた。
「天皇を人体実験に使えと？」
「……まさかと思うけど」
「彼女の出自は全く別です……いや」
瓶をテーブルに置いた由忠が、言葉を止めた。
「……むしろ、彼女の存在が知れたことで、この計画が始まったとも言えますね」
「子供なんて、そう簡単にポロポロ作れるシロモノでもないでしょうに」
「オヤジがいた頃の魔導兵団の内実はご存じでしょう？あの狂気の日々の中、そういう研究もされていたことも」
「……思い出しただけで背筋が寒くなるわ」
「全ての糸は、彼女へとつながっています」
「……成る程？他の子供達で、彼女と同程度の子はいるの？」
「まさか」
由忠は首を横に振った。
「類似した能力を生み出すことが出来なかったからこそ、そっち側の計画は潰れたのです」
「被験者は――――３７５人」
「生まれた子供はたった二人ですけどね」
「能力者からのＤＮＡ提供による出生……か」
「こうなれば、実験の性格が全く異なりますからね。“あの力”を持つ、消耗の効く“天皇の影”を量産して、左翼大隊の中枢を担わせたいなんて、指揮する僕からしたら御免被りたいしろものですよ」
「……そうね」
「ところで」
「何？」

「こんな情報、何に使うのですか？」
「仕事よ。それより」
「はい？」
「滝川の籠城計画はどうなってるの？報告がないけど？」
「遥香に報告させていますよ。電話口でペチャクチャやってるから忘れたんでしょう？」
「当主の貴男から報告なさい」
「食料、水、その他、生活必需品、燃料、医薬品の備蓄は、全村民が一年暮らせるだけの備えがあります。また、小型艦艇通行可能な門（ゲート）の敷設も完了」
「……よろしい。不足品は、門（ゲート）経由で補給しましょう」
「……あの？」
「何？」
「何が起きるんですか？」
「さぁ？」
「……悠理が面白い情報を持ってきましたよ」
由忠は、カップをあけた。
「天界軍が、人間界への監視強化に動いていると」
「情報ソースは？」
「イツミさんですよ。僕にまでワザと伝わるようにしたんでしょう。あいつ、どっかのどなたかの影響らしくて、最近、いろいろ聞く度に金をせびるようになっていますが、それだけはタダで教えてくれました」
「よく育ってるわね」
「どこかのどなた様のご指導がよろしいみたいでね。“情報”＝（イコール）“お金”と勘違いしているところが」
「何が勘違いですか」
神音は憮然として言った。
「それは正しい考えです！」
「親子ですよ？」

「ビジネスに親子も何も関係ないでしょう？」
「……滝川村の過去については、遥香から聞きましたよ」
「……そう」
「魔族軍のメース襲撃、その目的も、その辺から察することが出来ました」
「どうするの？」
「お袋が、何をしでかそうとしているか。そんなことは僕は知りません」
由忠は言った。
「敵なら敵。味方なら味方、そうはっきり切り分けることも出来ない。曖昧な存在に徹するからこそ、お袋は、ここまで企業を大きく成長させてきた。その手腕を否定はしない」
「……よく言う」
神音は小さく、しかし、楽しげに笑った。
「それが気に入らないからこそ、あなたは子供時代にあんなになったクセに」
「現地の土地買収が上手くいくとは思っていません」
由忠は、話題を変えるかのように早口で言った。
「ただ、やれることはやっておきます」
「そういうことね」

●東京都葉月市　葉月軍港
首都周辺において、神奈川県横須賀軍港と肩を並べる軍港が葉月軍港である。
横須賀軍港が海軍主体の軍港であるのに対して、葉月軍港は近衛軍主体で運用されている。
日本においては、光菱重工と肩を並べる軍需系企業狩野重工の本拠地である葉月市は、近衛軍の主要な兵器生産拠点でもある関係上、

軍港といっても、元来、艦艇の数が少ない近衛軍のこと、出入りする船のほとんどは民間船。
“鈴谷（すずや）”は、巨大タンカーや鉱物運搬船の間を縫うようにして指定された海域にて投錨した。

●東京都内某所　天原骨董品店
「暗号は全て解析が終了しました」
ユギオは自信満々で紅茶に手を伸ばした。
「やはり――扉は弓状列島でしたよ」
「そう……ですか」
「ご心配なく。滝川村はお約束通り、被害が出ないように“細工”はさせていただきます」
「他の地への被害は」
「契約外です」
「……」
「明日から細工にかかります。一週間程で全ての準備を整えてご覧に入れますよ。それで」
ユギオは分厚いファイルを神音の前に置いた。
「予想される必要物資のリストです。５日で手配していただきたい」
「急な話ですわね」
神音はファイルをペラペラとめくりながら言った。
「ビジネスはビジネスで対応する。それがどうやら、私達の不文律のようですね」
「互いにビジネスに関わる身。当然のことでしょう」
「――ですね」
パンッ
神音はファイルを閉じた。
「納品場所は？」

「こちらで門（ゲート）を用意します」
「一週間以内に連絡が？」
「保証しましょう」
「生鮮食料品は納期が遅れると全額買い取りいただきますよ？」
「心得ておきますよ。それよりあなたこそ」
「この情報は」
神音はティーカップに手を伸ばした。
「――非売品扱いです。たとえ親子でも」
「感謝します」

倉木山事件

長野県小県郡に滝川村という小さな村がある。
村民は約5千人とまずまずの規模。
美しい山々に囲まれた自然豊かな村――
そう書けば「ああ。いい村なんだなぁ」と思うかもしれない。
これは遠回りな表現というもので、実際はといえば、
「ド田舎」
この三文字で済むほど、何もない村だ。
主要産業は農業と林業。後は温泉と酒造りが盛ん。
……この程度の村だ。

この村の隣は日村（ひむら）と和名村（わなむら）。
滝川村よりさらに田舎。
村民はほぼ2千人ずつ。
昔ながらののんびりした田舎。とでも書いておけばそれで十分。
その程度の、とるに足らない村々。

騒ぎといえば、どこぞの爺様が山菜取りに行ったっきり帰ってこないとか、その程度のこと。
本当にのどかな村々。
そして、その日も、山林に囲まれたこれら村々は平穏なはずだった。

●舎田不動産
壁時計が9時の時報を打った。

日村には、この周辺で唯一の不動産屋がある。

物件といっても山林と田圃、若干の中古住宅程度で、満足なモノは何もない。

いわゆる田舎不動産屋だ。

社屋も貧弱で、築何十年かを建物自体が訊ねているような錯覚すら起きるプレハブ平屋建て。その中もガムテープで穴を塞いだ応接セットとスチールデスクがある程度。

電話に至っては黒電話。

社長は中年太りのバーコードハゲの典型的オヤジ。時代遅れのヤクザまがいのスーツが似合わない。

「またかい」

応接セットに向かい合わせに座るのは、この不動産屋の社長と、着物姿の妙齢の女性。その背後には背広をビシッと着込んだ、いかにもそのスジとおぼしき方々が直立不動で立っていた。

「どうしても、やるというのですか？」

「あんたもしつこいな」

安いガラス張りのテーブルに片足を載せ、だらしなくふんぞり返る社長は言った。

「あの土地はもう売り手がついてるんだよ」

「ですから、我々がより高値で」

「あの土地だけ、なんだろ？」

ジロリと値踏みするように社長は女を見た。

「あそこはゴルフ場にするって決まってるんだ。東京の……ああ、なんて言ったかな」

「帝都開発」

「ああ！そこだそこ！そこのエラーイ開発部長様がな？俺様に直々にお願いされた件だ！ゴルフ場にすればレストランとかな？いろいろ儲かるわけだ」

「つまり、我々には売れない……と？」

「そう！」

社長は胸ポケットからタバコを取り出して火をつけた。
「あそこだけ売れ、利用はしない……それじゃあんた、売りたくても売れないよ！」
「そこをなんとか……」
困惑した様子の女に、社長は冷たく言い放った。
「ダメダメ！」
「ですけど……」
「いかに水瀬様ん所の奥様のお願いでも、これだけはダメ！」
「……原市長に衆議院の真田様、貴族院の岡本様、それに、帝都開発会長の浅里様、それから」
不意に、女は指折り数えながらそんなことを言い出した。
「……うちの人に……加納コンツェルンの加納様、あ、県知事の村田様も」
「……あんた、何の話してんだい」
「開発したら、社長様の敵になる方々ですわ？」
「はぁ！？」
「ですから」
女は微笑みながら言った。
「あそこにショベルカーなんていれたら、あなたを敵に回すっておっしゃる方々です」
「ち……ちょっと待ってよ！」
タバコを口から落とした事にも気づかず、社長はテーブルの上に身を乗り出した。
「ど、どういうことだ！？あの開発は帝都開発だって！」
「あ、プロジェクト進めていた方々は全員あの世へ旅立たれました――残るは、あなただけです」
「……」
顔は微笑んでいても、女の目は、決して笑っていなかった。
（言っている意味はわかるな？）
そう、如実に語っていた。

その眼光に気圧されたように、男はソファーに崩れ落ちた。
「……どうなさいます？」
「あんた……消したのか？」
「はい？」
「あの連中を」
「まさか」
女は心外。という顔で言った。
「不幸に遭われただけです。そこまでの面倒は」
「あんたの後ろにいる連中のことさ……」
「下手な詮索は、後追いになりますわよ？」
女の後ろに控える男達が、突然、懐に手を入れた。

「ひっ！？わかったわかった！」
社長は必死に手をバタバタさせて無抵抗の意志を示す。
「よ、余計なことはしねぇけどさぁ……」
困惑気味の社長は、ネクタイを緩めながら、どうしたものか。と思案顔になった。
「どうしたのです？」
「あそこ……整地が今日からなんだよ」
「はぁっ！？」

それから３０分程度のこと。
「うわっ！？」
猛スピードで田舎道を走り抜ける数台の高級車に跳ねられそうになった制服姿の男の子が、転びそうになるのをなんとか堪えて、遠くなる車めがけて中指を立てた。
「くそっ！水瀬ん所の車だ！」
「みっちゃん！」
その男の子を咎めるのは、セーラー服姿に三つ編みの女の子だ。

「お行儀良くないよ！？それに、水瀬様でしょう？」
「へんっ！魔法騎士の家だろうが、元領主だろうが、知ったことか！」
「そういうこと、言うもんじゃないよ」
女の子は、周囲に人がいないか確かめながら、男の子の袖を引っ張った。
男の子は言った。
「ついこの間だって、山向こうで演習なんてやりやがって！」
「だから！」
「へっ。東京育ちはそんなこと、気にしないんだよ！」
「東京育ちって……みっちゃん半年いただけじゃない。おじさんの仕事の都合で」
「うっ……うるせぇ！」
赤くなってそっぽを向く男の子。
「だいたい、みっちゃんが寝坊するから、こんなに遅くなってるんだよ？バスだってこないし……学校までって、結構歩くんだから」
「田舎はこれだから困る」
「知った口聞くなっておじさんからいつも怒られているクセに」
いいながら二人は田圃が広がるのどかな景色の中を、学校に向けて歩いていた。

同じ頃
「たかが発破にどんだけ時間がかかってやがる！」
監督の罵声が現場に響いた。
「そ、それが……」
発破担当者は困惑したという顔だ。
「こ、こんな固い岩初めてで」
「はぁ！？テメエ何年現場やってんだ！」
監督に胸ぐらを掴まれた担当者は、小さく息を飲んだ。

「岩くらいなんだってんだ！そこに穴開けて吹っ飛ばすのが、お前等の仕事だろうが！」
「そ、それは……そうですが」
担当者は困惑の表情を強張らせていた。
「折角、メサイアが開けてくれた穴だろうが！それ吹っ飛ばして広げるだけだろうが！」
「理屈ではそうなんですが……」
「ならやれ！」
突き飛ばされるように解放された担当者は、恐る恐るという感じで監督に尋ねた。
「監督……本当にやるんですか？」
「あぁ！？」
その凄まじい眼光に、担当者は怯えながらも、意を決して言った。
「演習以来、この辺の開発を近衛が反対してて、会社にもかなりの圧力が」
「知るかよ！」
鈍い音がして監督の作業靴が担当者の腹にめり込んだ。
「やれっていわれりゃどこでもやる！それが俺達だ！――――おう！こんなヘタレ野郎のかわりに、俺が吹き飛ばしてやる！スイッチ貸せ！」
「ま――――待ってください！」
苦しい息の下、監督にすがりつこうとした担当者の目の前で、監督は爆破スイッチをひねった。

そして――――

ドォォォン……

遠くで花火のような音がした。

「何？」
先程の三つ編みの少女が思わず立ち止まって辺りを見回す。
「みっちゃん、花火の音、しなかった？」
「へ？……気のせいじゃねぇか？」
「そうかな」
「歳とると耳が遠くなるっていうぜ？」
「こらぁ！」
拳を振り上げた少女から逃げようと男の子は少しだけ小走りに走る。
「待てぇ！」
「待つかよ！ひなっちに殴られたら頭潰れちまう！」
「どういう意味よ！」

二人は日村へ通じる近道――丘越えの道を進んでいる。
木製の手すりが道筋を示す木漏れ日の心地良い道。
村がハイキングコースとして作ったが、地元の人間ですらあまり歩いている者を見たことはない。

「所で、今何時だ？」
「みっちゃん、時計持ってないの？」
「――忘れた」
「ウソ！神田君達と何か賭け事してもってかれたんでしょ！」
「ち、違わぁ！」
「どう違うの？私、見てたんだから！」
「あ、あれは……いいから！今何時だ！？」
「えっと……」
少女は腕時計を見た。
「９時５５分になるところ――って！もう完全に遅刻じゃない！」

男の子が何かを言い返そうとした次の瞬間――――

この日の午前９時５５分３５秒。

公式記録は、推定としながらもその時間を記録している。

……その時、私は訪問看護を終えて車に乗り込む所でした。
ぴかっ。
強い光でした。
最初、鏡かガラスに何かの光が反射したのかと思いました。
私はびっくりして光った方を見ました。
鈴木さん家の納屋の屋根越しに、それは光っていました。
日村の方でした。
何が起きているのか、わかりませんでした。
それまで、ただただ青い空が広がっているばかりだったのに、日村の方に白い大きな光の柱が立っていたのです。
本当に高くして、そして太い光の柱でした。
今考えると、日村の集落が丸ごと入る位の太さだったと思います。
「あれぇ。なんだべなぁ」
私を見送りに出てくれていた鈴木さんところのおじいさんも、その柱を見て首を傾げていました。
次の訪問予定のある私は、とにかく、車を出そうと車に乗り込み

ました。

時間は1分と経っていないでしょう。

突然、その柱が消えたと思った、次の瞬間――――。

この世界中の騒音を一つに集めたような爆音がして、私は意識を失いました。

『滝川村一年戦争体験記録　ある女性からの口述記録より』

「――――ちゃん！」

「――――え？」

「みっちゃん！」

何だろう。

男の子は、ぼんやりとする意識の中で目を開いた。

何が起きたかわからない。

ただ、自分が気絶したらしいことは朧気ながらにもわかる。

「みっちゃんてば！」

自分を揺すっているのが日奈だということもわかる。

そこまでわかって、男の子は起きあがった。

「ひ、ひなっち？」

日奈の顔は煤けて汚れていた。

制服も真っ黒だ。

きれい好きのこの子が、こんな汚れた格好をしている理由がわからない。

それに。

男の子は鼻をひくつかせた。

何だろう？

この焦げ臭い臭いは。

「ど、どうしたんだ？俺は」

「た……大変だよ」

日奈はまるですがるように男の子に言った。

「な、何かが起きたんだよ」

「何かって？」

「わ、わかんない……でも、日村の方だ」

日奈につられて男の子も日村の方――ハイキングコースの先を見た。

小高い丘の向こう。

青い空が消え、もうもうと煙が立ち上っていた。

「な……」

山火事。

男の子がまず思い浮かべたのはそれだ。

「か、火事だ！」

男の子は日奈の手を握って立ち上がった。

「に、逃げるんだ！火にまかれちまうぞ！」

「落ち着いてよ！」

その手をふりほどいた日奈が怒鳴った。

「回り見て」

男の子はその時初めて回りを見た。

整備された綺麗なハイキングコース。社会奉仕の名目で、先週、自分達がゴミ掃除をやらされた道。

それが、焼けこげた木や得体の知れない残骸で埋め尽くされてい

る。
「な、何だ？これ」
「わかんない」
日奈は気丈にも言った。
「でも、大変なことが起きたんだよ！」
グイッ。と日奈は男の子の手をとった。
「行こう！みんなが心配だわ」
みんな。クラスメートの顔を思い浮かべた男の子は、呆けたように何度も頷いて、日奈に手を引かれるまま、丘を駆け上がった。
なだらかな丘が爆風をそらせてくれたこと。
偶然が重なって、爆風で吹き飛ばされた障害物に襲われずに済んだことなど、その頭の中には全く思いつきさえしなかった。
「な、何があったか……ハァハァ……わかんないけど」
丘を駆け上がりながら、男の子は言った。
「俺がのんびりしてたおかげで助かったな」
「バカいわないでよ！」
日奈はむきになって言った。
「絶対に許さないんだら！幼なじみがせっかく毎日起こしにいってあげてるのにさ！」
「許嫁なんだからそれくらいしろって！」
「親同士の決めた事なんてしらないわよ！私、絶対、東京の学校受かって、みっちゃんのいない世界に行ってやるんだから！」
「冷てぇなぁ……」
息が切れかかりながら丘を登り切った二人。
丘の向こうには、日村の肥沃な田園風景が広がるはず――――。
それさえ見れば、それさえ見ることが出来れば、二人はそれだけでよかった。
日村が無事。
学校のみんなも無事。
丘のあたりで何か爆発があって、それに巻き込まれたとあったら、

親には怒られるかもしれないけど、学校では注目の的だ。
それでよかったのだ。

「……」
「……みっちゃん」
どこか凍りかけたような声で、日奈は言った。
その視線は、丘の向こう側に注がれたまま。
「村……どこにあるの？」

山間の肥沃な田園地帯。
その真ん中に集落があって、
自分達の通う学校がある。
駅もある。
３つの村で唯一のコンビニも最近出来た。
それが――

「……なんだよこれ」
二人の前に広がる光景。
それは、一面の窪地。
クレーターだ。

村の中を流れる川の水が、蒸気をあげてクレーターの中に流れ込んでいる以外、何もない。
全ては黒く焦げた土地が広がっているだけ。
鳥の声もなく、ただただ、ザワザワという紙がこすれるような音が四方八方から聞こえてくるだけだ。

見慣れた景色はどこにもない。

「ひなっち！」
突然、男の子が叫んだ。
「逃げよう！」
「ちょっ、ちょっとどういうこと！？」
「反応弾だ！」
「はっ！？」日奈はきょとんとして、青くなった男の子を見た。
「わかんないけど、反応弾が使われたのかもしれねぇ！学校でみたろ！？あの爆発！あれでもなければ、ここまで吹っ飛ぶことはねぇ！」

反応弾（はんのうだん）
俗に言う原子爆弾のことだ。
この世界では戦場で数回使用され、その放射能汚染を理由に忌み嫌われている。

「ほ、放射能！？」
「わかんねぇ！」
二人は一気に丘をかけ下った。
「やだぁ！」
「俺もだよ！」
「私、赤ちゃん産めなくなるの！？」
日奈が泣きじゃくりながらわめく。
「俺が責任とってやる！」

丘を駆け下りた二人は、とりあえず人のいる場所に向かった。
丘の斜面ですでに日村に通じる道路に、たくさんの人がいるのを見つけていた二人は、手を取りながら人々めがけて駆け寄った。
人々の群れは農家を営む連中だった。
「おう！国府ん家の光男君に、木村ん家の日奈ちゃんじゃねぇか！」

そう言ってくれたのは、近所のおじさんだ。
知っている顔を見ただけで、二人は泣きたい位嬉しくなった。
「お、おじさん！」
切れる息の下、男の子は言った。
「な、何が起きたの？」
「わかんねぇ」
野良着姿の男は、「農協」と書かれた帽子を被った頭をひねった。
「なんだか突然、光の柱が立ったと思ったら、どーん。だ。わかりっこねぇ」
「ひ、日村が」
「ああ……日村の衆も、大変なことになってるみてぇだな。今、駐在さんと消防団の何人かが車で日村に向かったけどな……」
男も心配げに日村の方をみつめる。
「ありゃ？」
別な農家の男が言った。
「車がものすげぇスピードで走ってくるぞ？ありゃ、駐在さんの車だ」
つられて二人も見たが、確かに猛スピードで車が走ってくる。
「でも、あの後ろ、なんだ？」
男の子には、車が何か巨大なモノに追いかけられているように見えた。
駐在の乗っているのは４駆の軽自動車。
それよりずっと大きい何かが、車に追いつこうとしている。
駐在の顔が見えた。
いつもいかめしい駐在の顔が、泣いていた。
車の中で、何かを叫んでいた。
助けてくれ。
口が、そう動いた気がした。

その途端――――

グシャッ。

一度だけ聞いたことのある、車同士がぶつかったような音を立てて、駐在の乗った軽自動車は後ろから追ってきた何かに踏みつぶされた。

「……」

「……」

ポカン。

それが最も正しい表現だろう。

その場に居合わせた人々は、一様にそんな顔をしていた。

目の前で、アメリカの特撮映画を見ている気分だった。

駐在の乗った車を踏みつぶし、その残骸を宙高く舞いあげたソレ。

銀色に輝く鋭い爪を持った節足動物。

男の子の目にはそう映ったが、他の連中も同じだろう。

「に、逃げろっ！」

農家の男達は一斉に軽トラックに飛び乗った。

「ぼ、僕達も！」

男の子は慌てて女の子を軽トラックの荷台にのせ、自分も飛び乗った。

トラックの発進に振り落とされそうになるのをこらえつつ、男の子はもう一度だけ、日村から襲いかかる連中に振り向いた。

彼らは、自分達の村に向かって走り出している。

ザワザワザワザワ……
生理的な嫌悪感すら感じるその音――――。
あれはついさっき、聞いたばかりの音じゃない。

グンッ。
カーブを猛スピードで曲がった軽トラックの荷台で男の子は思いついた。

他の軽トラック達も村へ走るが。

「おじさん！」
男の子は運転席に向かって怒鳴った。
「村へ逃げちゃダメだ！」
「何！？」
「丘の方でもあいつらの動く音がした！あいつら、丘越えで村に向かってる！」
「じゃあどうする！？」
「滝川へ！」
男の子は叫んだ。
「滝川ならこの村と、独狐山（とっこやま）が邪魔してくれる！」
「よしっ！」
男はハンドルを滝川村へ向けた。

ついてくる車は……なかった。

魔族軍、動く

●長野県上田市跡
ズドドドッ！
滝のような音が辺りに響き渡る。
兵士達の軍靴の音だ。
漆黒の闇の中から、続々と兵士達が姿を現してくる。
「止まるなっ！」
士官か指揮官らしき兵士が、大声で怒鳴る。
「門（ゲート）からすぐに出ろっ！」
「いつまでも開いてるわけじゃないんだぞ！」
その号令に従うように、地響きを鳴らせながら兵士達の長い列が移動を開始する。
皆、信じられないという顔で周囲を見回しながら移動し、時に後ろから小突かれる。

その光景を、少し高い丘陵状の場所から見つめているのは、漆黒の甲冑に身を包んだ一団。
その後ろには、巨大な軍旗が翻っている。
あのヴォルトモード卿封印の際も翻っていた、魔族軍軍団旗だ。
その中。
最も目立つのは背の高い、髪をオールバックにした、恐ろしく冷酷な顔立ちの人物だ。
名をガムロという。
その甲冑につけられた階級章は、将のそれ。
その胸飾りが、彼が一個の軍団を指揮する司令官であることを示していた。
それが、まるで彼の皮膚のように当然として輝いている。
将という立場が、恐ろしいほど似合う人物であった。

「大凡の規模はわかったか？」
その声は、低くて冷たいが、よく通り、そして有無を言わさぬ迫力がある。
「――――はっ」
控えていた副官らしき甲冑の男が小さく頭を下げた。
「今のところ、各門（ゲート）共に、封印されていた兵力に減少は確認されていません。問題は」
「……武装か」
ガムロは、自らの腰を見た。
そこには何もなかった。
彼自身が、丸腰だという証拠だ。
「猫平の門（ゲート）が解放された際、親衛軍と接触した組織からの武装供給がなければ、我々も果たして……」
「……うむ」
ガムロは頷いた。
彼の目の前で列を作る、彼の部下達も武装している者は誰もいない。
皆、封印された際の丸腰のままだ。
ここを叩かれたらもう終わりだ。
せっかく、封印を解かれたというのに、ここで殺されては身も蓋もない。
「その組織が、我々の封印を解除したのだろう？」
「はい」
副官は頷いた。
「我々の封印されていた門（ゲート）に混ぜて、この周辺に建造していた門（ゲート）から、魔界より物資を搬入、先に封印を解かれたムシュラ卿率いる親衛軍に武装を引き渡し済み」
「連中の狙いはなんだ？」
「様々です」
副官は言った。

「詳細は、彼等との面談の際にでも」
「……そうだな」
ガムロは頷いた。
「して？ムシュラやズルドはどうした」
「伝令によるとも中世協会の部隊と連携して、まずヴォルトモード卿の封印解除に動いています。ズルド閣下率いる部隊は、南東方面からの人類に備えて布陣しつつ、武装中」
「……忠義者だな」
クックックッ。
ガムロは喉で笑った。
その彼の目の前に、飛行艦の船団が雲をぬって現れた。
彼が見慣れたタイプの船ではなかった。
「中世協会……か」

剣や槍が入った木箱が山積みにされ、その前に兵士達が列を作っている。
「武装を受け取った者からさっさと前線につけっ！」
いかなる喧噪にも勝る怒声で、矢継ぎ早に命令を発するのは、身の丈2メートルを超える巨漢だ。
顔に走る傷の数が、彼の人生がどれほど苛烈だったかを教えてくれる。
第三軍司令官。
名をズルドという。

「弓兵隊はあの丘の背後へ展開しろっ！私についてこいっ！」
「長槍隊は丘に陣地を構築する！」
その部下たる指揮官達も、大声を張り上げて自分の果たすべき任務につく。
数千年ぶりに解放されたことを喜ぶ間もなく、兵士達は武器を手に駆け回る。

先の戦争において、勇将と畏怖されたズルドの下に、弱兵はいない。
兵士達は手にしたスコップで大地を掘り、陣地構築に必死だ。
土煙がもうもうと立ち上る中、兵士達の駆け回る姿が、恐ろしいほど勇壮に見えてくる。
「マーリン」
ズルドは脇に待機していた副官に尋ねた。
「ヴォルトモード卿の安否は」
「未だ不明」
マーリンは答えた。
「ムシュラ卿率いる部隊が、封印されているという場所にむけて移動を開始」
「早いな……補給がつながるか？」
「中世協会の部隊の支援がありますが……」
マーリンの顔は厳しい。
「封印の解除と、ヴォルトモード卿の御身柄の確保だけなら――――なんとか」
「……」
ハァッ。
ズルドの口から深いため息が出た。
「第一軍のズルド大将の安否を確認してくれ。兄貴の指示を仰ぎたい」
「了解です」

●同じ頃　東京都内天原骨董品店
「悲しいかな」
午後の穏やかな日差しが絹のカーテン越しに室内を照らし出す。
ソファーに座る神音の前には、かのんが座っている。
互いに顔は見ず、ただ、手にした古ぼけた革張りの本に視線を落

とすだけ。
神音の口から、まるで子供に読み聞かせるかのような、ゆっくりとした言葉が紡ぎ出された。

「わたしは夏のくだものを集める者のように、
ぶどうの収穫の残り摘む者のようになった。
もはや食らうべきぶどうはなく、
わが好む初なりのいちじくもない」

そこで区切られた言葉の続きを、かのんがつなぐ。

「主の慈しみに生くる者、この国より滅び、
人のうちに正しき者（もの）はなし。
皆、密やかに命を狙い、
おのおの投網をもってその兄弟を捕える」

「彼等の手は悪事を努めてやまない。
役人も裁判官も報酬を求め、
大いなる人は、その心の悪しき欲望を言いあらわし、
しかもその悪を包み隠す」

「彼らの最善の者もいばらのごとくあり、
正しき者とて、茨の垣にも劣る。
彼らの見張が告げる日、
すなわち彼らの刑罰の日が来る。
いまや彼らの混乱が近い」

「隣人を信じてはならない。
親しき者を頼みとするな。
汝の懐に休らう女にも、

汝、口の戸を守れ」

「むすこは父を賤しめ、
娘はその母にそむき、
嫁は姑にそむく。
人の敵はその家の者」

「しかし、わたしは主を仰ぎ見、
その救いを待つ。
主はわたしの願いを聞かれる」

「我が敵よ、我について喜ぶべからず。
たとい我が倒れるとも起きあがる。
たとい我が暗やみの中に座するとも、
主は我が光となられる」

聖書の朗読。
それは、神音の趣味のようなものだと、かのんは理解している。
人生の参考書。
神音は聖書をそう評価している。
何かあると、こうやって、互いに一節ごとに語り合うことを、神音はかのんが作られて以来、何度と無くやっている。
おかげで、かのんのメモリーは、聖書のほとんどを暗唱できる程覚えている。
だが――

「ご主人様？」
「何？」
聖書を閉じた神音の顔は、どこか冴えない。
「どうしたのじゃ？ミカ書は嫌いだとおっしゃっていたではないか」

「気分よ」
かのん?お茶。
神音はそう言うと、ソファーにもたれかかった。

「主は多くの民の争いを裁き、
遙かなる遠方まで、強き国々を戒められる。
そこで彼らは剣を打ちかえて鋤とし、
その槍を打ちかえて鎌とする。
国は国にむかってつるぎをあげず、
再び戦いのことを学ばない」

かのんは、メモリーの中にあった一節を読み上げた。

「当時の社会批判ばっかり、罵倒のオンパレードでイヤとかこき下ろすが、本当にご主人様が一番嫌いなのはここじゃったな」

「武器商人がこれを口にしたら偽善でしょ?」

「そうじゃな。妾は好きなんじゃが」

「そうなの?変な自我つけちゃったかしら?」

「創造物でも、物事の分別や善し悪しは分かるものじゃ」
かのんは紅茶を神音の前に置いた。

「聞け。
ヤコブのかしらたちよ、
イスラエルの家のつかさたちよ。
正義を知ることが、汝等の努めのはず。
善を憎み、悪を愛し

我が民の身から皮をはぎ、
その骨から肉をそぎ、
またわが民の肉を食らい、
その皮をはぎ、その骨を砕き、
これを切りきざんで、釜の中の肉のようにする」

「どこの政治屋のこと?それとも役人共?」

「魔界も天界も、人界も同じじゃ。そうおっしゃったのはご主人様じゃ」

「死の商人が、批判できない?」

「違う」
かのんは首を横に振った。
「なんだかんだと言っても、ご主人様は取引相手を熟慮されておいでじゃ。
第三章にある。
聞け。
ヤコブの家のかしらたち、イスラエルの家のつかさたちよ、
すなわち正義を憎み、すべての正しい事を曲げる、流血をもってをシオンを建て、不義をもってエルサレムを建てる者達よ。
その頭達は、賄賂をとって裁き、
その祭司達は代価をとって教え、
その預言者達は金をとって占う。
しかもなお彼らは主を頼りにして言う。
「主は我々の中におられるではないか、だから災はわれわれに臨むことがない」と。
その通りじゃ」

「御偉方（あぁいうれんちゅう）にとって」
神音は紅茶に手をのばした。
「それが正義なのよ。その一節はこう読み替えてご覧なさい。
狭隘な都合を正義とし、道理をねじ曲げる。
万民の血は、己が都合如何で流されることが許される存在。
故に、我が都合が求めれば、万機公論は即ち我が決めることなれば、いかなる不義もそれは言いがかりというべき代物。
賄賂は対価。
全ては金。
神の救いでさえ金次第。
しかも、金を持ってくるのはお前達の方。
私じゃない。
何故か？
神も正義も、全ては法が決めること。
法を作る我らが決めること。
創造主が被造物に刃向かわれることは」
神音は、そこまで言ってから口を閉じた。
「……口が滑ったわね」
「……御主人様」
かのんは、そっと神音の手を握った。
「妾は、ずっとお側にお仕えしてきた。
だから、御主人様が人間界でどんな目にあったかは知っている。
人間を深く愛したことを知っている。
つまり……だから、その」
かのんは、まっすぐに神音を見つめながら、もどかしそうに言った。
「つまり、妾がいいたいのは、こういうことじゃ。

御主人様が、人間界に絶望して、その建て直しをはかりたい。
本来ある、よき人間達の世界を再建したいと願っていることは知っている。
ユギオ達の言うこと。
人間の数を減らし、進歩を止める。
それは、人が進化でもしない限り、御主人様が望むそんな世界を作る唯一に近い方法だと、妾も思う」
「そのために、何人の罪もない人が死ぬのかしら？」
「それこそ、武器商人の言葉じゃない。
普段の御主人様なら、五分の魂って言葉があるでしょ？虫けら殺すのに躊躇しないクセに、同じサイズの魂持つ人間様殺すのに、なんで躊躇うのよ！位はいうべきじゃ」
「まるで人をろくでなしみたいに……」
「ユギオの接触が無くても、御主人様はどこかで、一人でやろうとしていた。だから、たった一代で商会をここまで拡大したはずじゃ。
人を信じ、人に裏切られて死んだ武興様のご無念をお晴らしするために。
どこかで不退転の決意をお持ちになっていたからこそ、ここまでやってきたのじゃろう！？」
「……私は」
神音は冷たい、感情を殻に閉じたような声で言った。
「そこまで悲壮な女じゃないわよ」
「そう。悲壮じゃない。悪女でもない反面、善女でもない。御主人様は中途半端な御方じゃ」
「……ぐーで殴るわよ？」
「言い過ぎたつもりもない。妾をこういう風に作ったのは御主人様じゃ」
「……由忠といい、あなたといい」
神音は、ふっ。と笑みを漏らした。
「私は人を育てるのがとことん下手だったみたいね」

「……嘆くならそうしてよい」
かのんは笑みを一瞬だけ浮かべ、すぐに真顔に戻った。
「今、ユギオが来たぞ」
「……通しなさい」

数時間後
「……大凡のことは理解しています」
マホガニー製の執務机越しに、神音は目の前に立つ背広姿の男を睨んだ。
ユギオだ。
「随分、派手にやってくださった模様で」
「恐れ入ります」
ユギオは小さく笑った。
「戦域は上田市を中心に、北は坂城千曲市境界、南方面は小諸佐久境界まで」
言いかけて、男はおや。という顔で言った。
「滝川村は無事のはずです。私達が妖魔避けの結界を展開していますから」
「……どうも」
神音は苦虫をかみつぶしたような顔になった。
「戦果は、上田市一帯、ざっと２０万というところですか」
「肝心のヴォルトモード卿の居場所はおわかり？」
「ええ！」
ユギオは笑顔で頷いた。
「解析に成功したとの報告を受けています。データはとれました」
「……どこかは」
神音は白けた顔でほおづえを付いた。
「教えてくださらないのね」
「まだ確証がありませんから」

「……」
「お約束通り、滝川への攻撃は避けています。利益の供与も行います。故に、物資の供給は是非とも怠りないように」
「心得ています」
神音は強ばった声でそう、答えた。
「――――では」
ユギオは、満足そうに頷くと、神音の執務室を後にした。
パタン
分厚い古代オーク製のドアが静かに閉じられた。
バンッ!!
執務室にそんな音が響いた。
神音が手近に置いてあったファイルをドアに叩き付けた音だ。
無論、神音が叩き付けたかったのはドアではない。
ユギオだ。
ドアに張り付いたファイルが、ゆっくりと絨毯に落ちていく。
「２０万人殺して――――データがとれた？」
神音の顔は真っ赤になっていた。
「我が夫の一族が、代々治めてきた上田の地を灰にして……領民の末裔を２０万殺して……データがとれた？」
握りしめた拳から血が滲んでもなお、神音は拳に力を込めることをやめない。
「いくら……」
神音は、今まで誰にも見せたことのない程の凄まじい形相に、涙を浮かべ、男が出ていったドアを睨み付けた。

「夫の仇というべき……連中でも……」

次の瞬間――――

「――――っっ！！」

執務室の中から罵声とも怒鳴り声ともつかない叫びが響き渡った。

●東京都　葉月市　近衛軍葉月実験センター　ブリーフィングルーム

――――長野県で、何か大変なことが起きたらしい。

美奈代達が、日村の事件を知ったのは、食堂のテレビでだ。

“長野県東信地域で大規模な爆発”

テロップはそう流れていたが、後に映し出されるのはアナウンサーと地図だけだ。

長野県に通じる鉄道と道路は、ほぼ全てが警察と陸軍により閉鎖され、報道ヘリは戦闘機や戦闘ヘリによって引き替えさせられている。

各地で電話が不通。アナウンサーは長野への電話を自粛するように呼びかけ続けている。

一体、そこまでする理由は何だ？

訝る美奈代達がブリーフィングルームに呼び出されたのは、翌日の朝食後のことだった。
「ようやく、お前達にも説明しろという指示が出たんだ」
二宮は開口一番、そう言った。
「完全な事はわかっていないが、軍事衛星のデータを見る限り、事件の中心地は長野県の小県郡日村だ」
「日村？」
「お前達は思い出深いだろう？あれだけメサイア壊せば」
「あの演習地ですか？」
「そうだ」
二宮は頷いた。
「今では、“日村跡”だがな」
「……は？」
「昨日、人の住む集落としての、長野県小県郡日村は消滅した」
二宮が長野に命じてプロジェクターをつけた。
軍事衛星の撮影だろう。写真が二枚、並んでいた。
「こっちが1ヶ月前に撮影されたもので」
指示棒の先にある右側の写真は、雲に隠れている所はあるが、何の変哲もない写真。
緑の中を走るのが道だろう。と、美奈代は見当をつけた。
「こちらが昨日15時の撮影だ」
左側の写真は、真ん中が真っ黒で、いくつもの窪みが見える。
「わかりづらいだろうが、この丸いのは、すべてクレーターだ」
二宮は言った。
「クレーターが集中しているのが、かつての日村集落。クレーターに河川の水が流れこんでいる。あと数日で日村は、水の中に沈む」
「……」
「問題は――――これだ」
二宮の指示棒が突いた場所がズームアップされる。
荒いドットの集まりに画像処理が施されると、ぼんやりとしたも

のが恐ろしいほどはっきりと見える。
「推定４５メートル。国連軍呼称“ライノサロス級”だ」
それは、大型妖魔の背だった。
「集団突撃であらゆる物をなぎ倒すバケモノだ。シミュレーターでイヤというほど戦った相手だな」
「……」
「……教官」
感情のない声で、美晴が訊ねた。
「つまり……日本に妖魔が出た、と？」
「そうだ」
強ばった顔で、二宮は頷いた。
「南米にアフリカ……人類が失った土地のリストに、日本が加わるか否かは、すべて我々にかかっている。我々が如何に足掻くか……だな」
二宮はプロジェクターを消すと、黒板に貼り付けた地図を指示棒で突いた。
長野県の地図だ。
「日村跡から動きを見せたバケモノ達は、新興住宅街が広がる猫平（ねこたいら）を経由して、上田市に侵攻。上田市周辺を徹底的に破壊した後、夜明けと同時に、千曲川を北上を開始した」
「……」
「現状、新潟方面から陸軍機甲師団が千曲市に展開。阻止作戦を試みているが」
「……」
「状況は芳しくない」
「質問」
都築が手を挙げた。
「近衛は、どこで出ているんです？」
「出ていない」
「――――は？」

「出ていない。そう言ったんだ」
「な……何故？」
「決まっているだろう？」
二宮は肩をすくめた。
「政府から出動要請が出ていない」

●東京都永田町首相官邸
「敵、犀川を突破します」
長野県県庁所在地である長野市を目前にした犀川。
長野市から見て、川向こうにあるのが、川中島だ。
平地が多いことから戦闘車両の運用に適しているとして、陸軍は、この川中島に機甲部隊を展開。
県庁所在地である長野市の絶対防衛線をこの地に構えた。
理由は一つ。
県庁機能を無事に新潟県へ脱出させるまでの時間稼ぎ。
戦闘の詳細は、首相官邸に設けられた災害対策本部にリアルタイムで告げられる。
「陸軍はどうしている」
いらついた声でバンバンとテーブルを叩く５０過ぎの男。
それが、内閣総理大臣岡山一郎だ。
経済政策を筆頭にした、かつての与党、憲政党の失政を逆手にとった選挙戦で圧倒的勝利を収め、組閣と同時に選挙公約全てを放棄するという信じがたいマネをした挙げ句、国家財政を破綻寸前に追い込むバラマキ施策で人気をとろうとして、組閣からわずか半年で国民から「さっさとやめろ」の大合唱を受けている人物。
苦労知らずの三代目らしく、他人からの批判は大嫌いで、権力闘

争を生き甲斐とするような人物であることは、その瓜実顔と一癖ある捻くれた目つきでわかる。
「千曲市展開の部隊は壊滅」
陸軍参謀が報告した。
「戦車及び砲兵隊では、敵の飽和攻撃は阻止出来ません」
「――首相」
真っ青になった岡山首相に、閣僚の一人が言った。
「近衛にメサイアを出させては」
「ダメだ！」
岡山首相は怒鳴った。
「何を考えてるんだ！ここで出したら陸軍のメンツは潰れるだろうが！」
閣僚の視線が、陸軍大臣に集まる。
陸軍大臣鈴木廉也が無言で頷いた。
「メンツと国民のどっちが大切なんです！？」
たまりかねた閣僚の一人が席を立った。
「中華帝国にも、これ以上、メサイアは出さないと、メサイアの活動は控えると伝えたばかりなんだ！ここで反古にしてみろ、私の首相就任時、訪中した時の共同宣言が無駄になる！」
「他国との約束で、国民を殺すんですか！？」
「私が殺すわけではない！」
不愉快そうに岡山首相はそっぽをむいた。
「殺すのはあのバケモノ共だ。……ったく、俺を人殺しみたいに言うな」
「――首相、それでは」
菅野官房長官が訊ねた。
「再三に渡る近衛からの協力の申し出は断る――と？」
「当然だ」
首相が視線を向けた先にいる陸軍大臣は、満足そうに頷いた。
「私は民主主義者だ。天皇なんて“システム”は不要だと、そう思

っている」
「……」
「……公には、言うな？」
「……はっ」

●東京都　統合参謀本部

本来、軍事的意味合いで国家に危険が生じた場合、陸海軍、そして近衛軍の三軍の参謀は統合参謀本部に集結し、善後策を協議する決まりになっている。

明治政府発足以来、帝国を幾度となく守ったシステムだ。

ところが、国民党政権になった途端、数十年間、国家が軍事的危機に曝されていないという、信じがたいことを理由に、統合参謀本部はマスコミによって“税金の無駄遣い”のレッテルを貼られ、実質的機能を首相官邸の災害対策本部へと奪われた。

わずかに残された権限を楯に、東南アジアへ派兵出来た事自体、奇跡というか憲政党と野党が意地になって、“気に入らない採決＝欠席”の野党根性が抜けない国民党を出し抜いたおかげだ。

そこまで制度を変更させた元凶は誰か？

鈴木陸軍大臣。

野党時代から、袖の下を受け取っていた鈴木は、陸軍大臣になる前から“岡山首相の男妾（おとこめかけ）”と揶揄されるほどの幇間（たいこもち）。

その緊密さは、海外のマスコミから、岡山首相の同性愛疑惑が出るほどだ。

それを良いことに、海軍や近衛との協議が面倒くさい彼は、統合参謀本部の機能を首相権限で剥奪させ、軍の権限を自分の思い通りになる災害対策本部へと移した。

それが全ての元凶だ。

陸軍が一国の軍事のほぼ全てを決定するシステム。

海軍と近衛はその蚊帳の外にされた格好だ。

それでも国防を担う者としてのメンツがある海軍と近衛は、「抗議ばかりするより現実的だ」と、独自に協議の場を設けた。

それが統合参謀本部を生き残らせることに繋がった。

統合参謀本部があるからこそ、国内内部では海軍の航空兵力と近衛のメサイアによる立体作戦を展開出来るのだ。

……しかし。

「岡山首相は、あくまで我々に出るな――――と？」

「そうです」

陸軍から派遣されている参謀が答えた。

遠藤少佐。

もう退役寸前で、鈴木大臣とは対立する派閥に属する上に、大佐以上が出ている海軍や近衛から派遣されている参謀達と比較しても階級は恐ろしく低い。

災害対策本部付きが大佐以上で、鈴木のお眼鏡にかなったエリート達を大量に送り込んでいるのとは雲泥の差だ。

「――――まぁ、理由は想像出来るでしょう」

「ホモ野郎（すずき）に踊らされているとも知らず」

海軍参謀の一人が吐き捨てるように言った。

「あの野郎なら、今頃、２０万人以上の犠牲を他人事のように片づける原稿、官僚共に書かせてる頃だろうさ」

「不本意だが、国土を徹底的に叩かれて、その座から引きずり降ろされるまで、如何ともしがたいな」

「それでは死んでも責任を感じまい」

「元から感じる神経なんてもってないんだよ。あの三代目殿は」
「売国と唐様で書く三代目……か？」
苦笑が場に響く。
「――――して？」
「魔族の狙いは？」
「このままのルートだと、新潟へ出る」
「東京方面は？」
「何故かわからないが、連中は佐久、軽井沢の辺りで停止している。松本市方面への侵攻も見られない」
「ん？」
「……戦力を、新潟へ急行させている？」
「そう、考えるのが妥当でしょうな」
「ウラジオストックに停泊中の米艦隊の支援を仰いではどうか」
「無駄だ。中国べったりの岡山首相が認めるはずがない」
「中国からの賄賂にべったり――――の間違いだろう」
バンッ！
そこに飛び込んできたのは、海軍側の士官。
真っ青になった上に、かなり走ってきたと見え、肩で息をしていた。
「し……失礼致しますっ！」
「バカもんっ！ここをどこだと！」
「米軍が！」
「米軍がどうしたっ！」
「新潟へ侵攻を開始っ！」
「何っ！？」

●新潟県直江津港
「あらら」

直江津港を一望出来るビルの屋上で、くわえタバコで双眼鏡をのぞき込んでいた男があきれ顔でそう言った。
「アメさん達、本当にやらかしたよ」
横に立つ中年太りの男が後藤から双眼鏡を受け取りながら言った。
「太平洋に日本海、オホーツクまで2個艦隊だっけ？大西洋方面のフネ根こそぎかき集めて集結させているって新聞では読んでたけどさぁ」
上空を米軍を示す白い星マークのついた大型ヘリが編隊を組んで通過していく。
埠頭では揚陸艦がその腹から戦車や装甲車、そして歩兵を吐きだし続ける。
「これじゃ、警察は何の役にも立たないわ」
「新潟県警は米軍の指揮下に落ちたよ。後藤さん」
「早いね」
「まあ、元同僚のよしみで教えることだが、本部長や偉いさんは、本部接収どころか、米軍上陸開始の報とほぼ同時に逃げ出したそうだ。今、県警本部や署は、ヘリから降りた米軍兵士であふれかえっている。
放送局、役所、その他主要施設は軒並み御同様って寸法さ」
「さすがだね……」
「後藤さん……あの岩田さん。知ってるでしょ？あの一件で島流しされた彼。新潟県警本部で彼、かなり頑張ったみたいでさ。県警まとめて、現状は米軍に協力することで組織と治安崩壊を阻止している――さすがだよ」
「こういう時、役に立つ人材が最も優れた人材だよね……太田さんよ」
「ん？」
「奴さん達」
後藤はタバコの吸い殻をコンクリートの床で踏み消した。
「うん？」

「何でこんなに展開早いんだろね」
「アメさん達か？」
「うん――まだ帝国軍もロクに展開出来ていない。事態も把握出来ていない。それなのに、まるで米軍だけが全てを知っているかのように、よどみなく動いている。おかしくない？」
「……」
太田はしばらく考え、刑事としてある答えに行き着いた。
「後藤さん……まさか」
「元刑事として言わせてもらえば……ま、そう考えるのも説だけどさ」
「しかし、まさか今回の事態は、米軍の仕業だなど」
「ありえなくはないが、俺は少し違う考えだ」
「どう？」
「踊らされているんじゃないか――米軍も。俺は……そう見ている」
「だ、誰に？米軍を踊らせてこれほどの規模で軍を動かした？そんな発言権があるヤツが」
「いるんだろうよ……俺は、それが誰か見てみたい」
「おいおい……よしてくれよ。後藤さん」
太田刑事は肩をすくめた。
「近衛にトラバーユして誇大妄想に取り憑かれたのか？アメリカを影で動かす謎の組織？俺達はくだらないアクション映画の主人公じゃないぜ？」
「……ま、少なくとも俺は書き割りが精一杯なツラだな」
「本気かい？」
「このツラだもん」
「いや、そうじゃなくて」
太田刑事は言い直した。
「その……米軍が操られているっぽい物言い」
「まだ俺の中でも疑問符がついてはいる。しかし……そうでもなけ

れば、この米軍の展開は速すぎる」
「……近衛中佐としてかい？」
「元警官としてさ」
「仮定を証明してどうする？」
「どうも」
後藤は肩をすくめた。
「そんときゃ、俺達軍人も、太田さん達刑事も、誰も何にも出来ないだろうさ」
「それでも……真実を見るんだろ？」
「どうにも、職業病だね。このクセは」
「せっかくの再就職先だ。恩給、大事にしなよ？」

●新潟県　第十三師団（鏡兵団）司令部　師団長執務室

「……もし、貴殿が私の立場なら、それに何と答えるというのか？」
伝統ある鏡兵団司令部。
明治という古き良き時代の香りがする光輝ある執務室で、目の前の一団に、苦々しく言ったのは、吉村師団長だ。
歴戦の強者にだけ許された威厳ある容姿は、今ややり場のない屈辱に歪みきっていた。
「答える必要はありません。閣下」
吉村の目の前に立つ一団の先頭から、冷たい声があがる。
米軍より派遣されたクラリス・ミュラー中佐の声だ。
「帝国政府は、自らの国を自らの手で守ることを放棄したのです」
「我々帝国軍人は、誰一人として自らの義務を放棄などしておらん！」
ドンッ！

吉村は机を叩いた。
「この師団の誰一人、帝国軍人としての誇りを微塵ほども失ってはおらんわ！」
「――――同情いたします。そう、お答えした方がよろしいようですね」
ドイツ人の血が混じっているのだろう、鋼のように冷たい声でクラリスは言った。
「ナオエツ・シティは現在、我々の支配下にあります。閣下率いる第十三師団は、そのことをご理解の上で行動していただきたい――――すなわち、我々を黙認せよ。そう申し上げたことについて、改めてご承諾いただきたいのですが？」
クラリスを絞め殺さんばかりの憤怒の表情をみせる吉村に、クラリスはトドメの一言を言った。
「帝国政府からはすでに師団に対する無期限待機命令が下っているはずですが？」
無期限待機命令――――聞こえは良いが、ようするに、「準備はしてよし。ただし、何もするな」といっているのと同じだ。
「――――よかろう」
吉村は震える声で言った。
「敵が何者か知らぬバカモノが、どんな無様な戦いを見せてくれるか、ここから高みの見物とさせていただこう」
その目は静かな怒りをたたえていた。
「長野に侵攻した貴国の航空隊は3次攻撃隊まで全滅。ほとんどが原因不明の墜落による。さらに、ご自慢の弾道ミサイルは迷走の挙げ句、避難民の列に突っ込んだそうだな」

「日本語にありましたね。……弱い犬ほどよく吠える」
「何だとっ！？」
吉村の背後に居並ぶ師団将校が席を蹴った。
「――これは忠告だ」
片手をあげて部下を制した吉村は言った。
「一国に匹敵する航空兵力をわずか1日と経たずに失った。その理由も何もわからず、遮二無二突撃していくのがどれほど愚かか考えろ」
フンッ。
吉村とクラリスが同時に鼻を鳴らした。
「空軍と海軍は共に愚かです。敵は防空兵器を迅速に配備しているだけ。我々、陸軍はそれを的確に潰します――ご心配はご無用」
クラリスはとがった形の良い顎をそらせ、吉村達を睥睨した。
「我々が行うのは正義。我らは、神の敵を前に躊躇する腰抜け共には分からぬ気高い誇りを持つ、正義の軍。我々には神の加護がある。恐れるものなぞありはしない」
「……」
吉村は、何事か考える様子で、腕組みをして
「そうか」
唸るようにそう言った。
「神の軍隊……か」
何度も頷き、そして、
「……もう一度、名前を聞いておこうか？」
吉村はクラリスに訊ねた。
「君達が神とやらの元に召された後、葬式くらいはしてやりたいのでな」
「……アメリカ合衆国陸軍クラリス・ミュラー中佐」
「覚えておこう……身の程知らずのバカと言ったな」
ピクリ。
クラリスの眉がつり上がった。

「バカ？」
「ああ。バカモノよ。好きにすればいい。迷惑だからさっさと行って死んでこい。貴様等のような狂信的なものの見方で戦場に立てば、待っているのは犬死だけだ。この極東の島国の僻地で、ジャンヌ・ダルクのつもりでドンキホーテをやってくるがいいわ！この道化共が！」

●直江津港埠頭
「大統領警護騎士団は、予定通りに展開したんだな？」
「はい。現在、ナガノ・ニイガタ県境に展開。“ギャラクティカ４”搭載の騎は、３時間後に揚陸を開始します」
「師団の移動を急がせるよう、司令部に通達しろ。大統領警護騎士団ばかりに手柄を立てさせるな――せっかく、ヨシムラ達を黙らせたのだ」
「はっ――全く！」
赤ら顔をさらに赤くする士官がクラリスにわめいた。
「ジャップの考えることは自分にはわかりません！自分達は、奴らを助けるために来ているのですよ！？」
「――そう怒るな。大尉」
直江津埠頭を歩くクラリスは、士官の顔を見ることなく言った。
「あれはあれで正しいのだ」
「あのヨシムラの言い分がですか？」
「ヨシムラは、我々に警告したのだよ」
「警告？」
「敵を知り己を知れ――東洋の格言通りのことをな」
「敵は悪魔で我々は」
「単なる人間、軍人だ」
クラリスは表情を変えることなく、埠頭に接岸されている一隻の艦艇に通じるタラップをのぼり始めた。

「神も悪魔も関係ない。戦場でまみえれば敵と味方。……少し言い過ぎたのは私の非だ」
「中佐は悪くありません！」
タラップをのぼるクラリスの形のいい尻に視線を奪われていた士官は、驚いて言った。
「中佐の協力要請を、あんなひねくれた返答で認めたのはヨシムラの非です！」
「さて……ひねくれていたのはどちらかな？」
クックックッ……。
クラリスの喉から忍び笑いがもれた。
「私も私で、神だの悪魔だの……見たこともない存在からの加護なんぞ、よく言えたものだと思う。ヨシムラの立場だったら、あの程度では済ませはせん」
「中佐……？」
士官には自分の上官の意図がわからない。
クラリスはタラップから薄暗い艦内へと入っていく。
薄暗い艦内には、艦の主機によるものか、ただ、何か機械の鈍い音だけが響きわたる。
「敵を……知り、己を知る」
独り言のように呟くクラリスの脚が止まった。
「……」
クラリスがみつめるのは、小豆色に塗られた巨大な神像。
メサイア。
ＭＤＵＳＭ－１グレイファントム。
それが、神像の名だ。
限りなく万能にして最強の魔法兵器。
クラリスにとって、メサイア、こと、このグレイファントムは神なのだ。
初めて“こいつ”を見たのは、孤立無援の包囲網の中、ただ黙って全滅の時を待っていたあの戦場。

圧倒的優位を誇っていたあれだけの敵を、文字通り殲滅していくあの光景を見た時、クラリスは初めて神を信じた。
だから思う。
「……これを間近で見れば、神を信じたくなるさ」
クラリスのその呟きは、誰にも聞こえなかった。

●東京都　統合参謀本部
「どういうことだ！」
たまらないのは、その戦場に立たされる日本人だ。
「既に米軍の一部が本土に上陸。新潟・静岡を押さえられました」
「閣下、政府より通達です！」
飛び込んできた別の若い士官が、一枚の書類を手近の将校に手渡した。

「……外務に対し、米国大使館より連絡があったそうです」
書類を読んだ将校が怒りに震える声で言った。
「アルマゲドン遂行に日本人の手は借りない――と」

「手は借りなくても土地は借りるつもりか！？」
海軍大将の階級章をつけた男が怒鳴る。
「政府は何と！？」
「それに対し、政府は事態が把握出来るまで一切の関与を見送る……と」
「肝心の所で知らぬフリか！？自国で他国の軍隊が軍事行動をとっているというのに！」
怒鳴り声が上がるのも、無理はない。
「……どうせ、アメリカからの圧力があったんでしょう。あの総理にモメごと解決する力はないですよ」

戦場の現実

ここで断っておくことがある。

大日本帝国は、軍事力を保有している。

それなのに、日本国内で発生した軍事的緊張に対し、組織だった“反撃”に真っ先に出たのは、アメリカ合衆国軍だった。

横に軍事大国であるロシア、そして中華帝国が存在する地政学的事情から、日本はアメリカと軍事的同盟関係にはあるが、それでも――――

「勝手に他国でドンパチやっていいってことにはならないでしょう!?」

都築が怒るのも無理はない。

もし、アメリカ軍が勝ち続け、日本から敵を叩きだしてくれたというなら、都築でなくても、アメリカに感謝の一言くらいは言うだろう。

だが、事実は全く違う。

米軍は、北極海ルートで兵力を送るＥＵ軍の先遣隊の地位を自称し、国連において、自らの地位を“国連軍”として認めさせた。

つまり、米軍のしでかすことは国連軍のそれなのだ。

それを良いことに、戦闘地域だろうが、被戦闘地域だろうがお構いなしに好き勝手に空爆を加える。

具合が悪くなったら民間居住区に平気で戦闘機を墜落させる。

都築が握りしめている新聞の一面は、米軍がＭＬＲＳを誤射。民間居住区に降り注いだロケット弾により市民５００人以上が犠牲に

なったと報じていた。
社会面には、小学校に墜落し、炎上する戦闘機の姿が大きく写されている。
まだ米軍が反撃に出てから3日と経っていないのに、報じられるのは米軍の戦果ではなく、戦禍の方だ。
「あいつら、日本人を殺しに来たんですか！」
「……だからといって」
二宮は、鬱陶しい。という顔でコーヒーに口を付けた。
「私に文句言ってどうする」
「あいつら追い出して、俺達が！」
「……都築」
二宮は心底見下げ果てた目つきで言った。
「文句を言う相手、間違ってないか？」
「……っ！」
「そのテのことなら、家に電話をかけろ。入営以来、一度も帰省していないどころか、連絡さえとっていないそうじゃないか」
「――あんな家」
都築は不愉快そうに視線をそらせた。
「人間の住む家じゃないですよ」
「……そうか」
二宮は、何故かさみしそうに頷くと、
「お前の場合、他の連中と違って、別な将来性がある。政治面は読んでおくことだ」
「……はっ」
不承不承。という顔で、都築は頷いた。

米軍の国土蹂躙に等しい軍事攻撃をマスコミはそれほど問題視していない。
もし、これが自国の軍が行ったら狂ったように罵り、大臣どころか内閣の首まで要求するはずのマスコミが、むしろコメントを避け

ようとしているようにさえ見える。

国民の多くは知らないが、この時点で、戦争報道について圧力が加わっていた。

政府からではない。

新聞社やテレビ――民間企業上層部からだ。

――問題視するな。

――批判的な記事を書くな。

――なるべくなら記事にするな。

国民党のトップのバックボーン。

それは教育界と、流通業界、そしてマスコミだ。

関東が主な流通範囲となる新聞企業の代表を父に持ち、身内に世界的スーパーチェーンの幹部を持つ。共に自身が大株主という人物が首相をしているのだ。

首相に都合の悪い報道はなるべく避ける。

それが、外交問題になる危険性があれば、特に回りからの圧力も加わる。

米軍の日本で軍事行動の本当の狙いを知っていれば、特に。

米軍は建前では正義だの神だの聖戦だの言っているが、実際の所、中華帝国の間近に、合法的に軍事的足がかりが欲しいだけなのだ。

中華帝国は、それがもうわかっている。

魔族軍に対抗するために軍事力を派遣したという口実は、中華帝国でさえ公に批判することは出来ないだけだ。

それを良いことに、米軍はメサイア部隊を中核に、兵力を続々と日本に送り込んでいる。

はっきり、卑怯というべきだ。

もし、これが中華帝国に矛先を向ければ、中華帝国はためらいも

なく反応弾を日本にめがけて雨霰と撃ち込んでくるだろうことも、容易に想像が付くし、在中大使館からは、暗にそんな脅しを受けたことが報告されている。

本来的には、日本からすれば、米軍の軍事派遣は歓迎すべき事ではあるが、これでは中華帝国を刺激しかねない。

なら、せめて世論だけでもなるべく大人しくいてほしい。

報道管制は、報道を通じて下手な反応を政府として見せるわけには行かないという、実にオトナの判断なのだが……。

「ま……あのガキにはわからんだろうな」

二宮は、ポケットからタバコを取り出すと火をつけた。

都築は米軍の侵攻を怒っているのではない。

怒りの理由は、おそらく、多くの国民と同じだ。

市民を巻き添えにする米軍のやり口が気に入らないのだ。

――政府も政府なら、米軍も米軍。

二宮は紫煙を吹かせながら思う。

――どっちもどっちだ。

市民の避難が間に合わない……いや、戦闘地域をどこまでにするか政府でもまとまっていない。それを確認することもなく米軍が戦闘を展開する。

その結果がこれだと、二宮にはわかっているのだ。

「カタギを巻き込むな……巻き込ませるな……か」

うんっ。
背伸びをすると、愛用の灰皿を引き出しから取り出した。
「……それが一番、戦場では難しいんだが」

●長野県小県郡日村跡付近
日村跡地に生じたいくつものクレーターは、日村を流れる河川の流入により、日村そのものを湖へと変貌させていた。
新たに生まれた湖を囲む山々も、門（ゲート）解放時のエネルギーで焼き払われた黒い肌を露出してる。
その黒々とした山の斜面は、アフリカや南米と接続された門（ゲート）を通って移動してきた魔族軍の軍勢によって半ば埋もれていた。
その一角、湖の袂には、魔族軍の軍旗がひるがえり、甲冑姿の将校達の前に兵士達が整列していた。
将校の筆頭はあのガムロ。
対する兵士達は、年端もいかない少年兵ばかりだ。
その数はかるく１００名を越える。
突然、雲の上の人物の前に立たされた彼らは、気の毒なほど緊張していた。
「第二軍の所属と言ったな」
「は……はい」
少年兵達にとって、目の前のガムロという人物は、雲の上のさらに上の人物だ。
そんな人物に、直に声をかけられた少年兵の一人が、がくがくする膝をなんとか押さえながら答えた。
「じ、自分達は、第二軍第２４５重妖魔大隊であります」
「階級は」
「自分達は、全員二等兵であります」

「士官はどうした？」
「この門（ゲート）へ移動する際、士官や兵とは離されました」
「神族軍の指図か？」
「はい」
「……そうか」
ガムロは、その少年兵の肩に手を置き、その冷徹な顔からは想像も出来ないほど、優しげな声で言った。
「屈辱によく耐えてくれた。これよりその仇を返す。しっかりやってくれ」
「は、はいっ！」
少年兵は、顔を紅潮させ、瞳を輝かせながら心からの敬礼をした。

●日村跡地付近　ハイキングコース
「ほう？」
後を部下に任せ、副官兼愛人のアイリーンと共に、人間達が整備した道を歩くガムロが足を止めた。
「見ろ。藤が見事に咲いている」
「はい」
アイリーンもガムロが指さす方を向いた。
白と紫のコントラストが、荒れ果てた大地に見慣れた目を癒してくれる。
「綺麗な花ですね」
アイリーンは藤を見るのは初めてだった。
「ああ」
「……封印解放時に行われた中世協会の分析では、門（ゲート）のリンクは柏崎門（ゲート）に繋がっていたそうです」
「日本海側、か」
「現状、第二軍のユウラ司令官以下、幹部の所在もようとして知れません」

「解放された戦力は決して多くないが、高速型妖魔が主力だというのが有り難い」
「どうなさいます？」
「柏崎に軍を向かわせ、柏崎の門（ゲート）を確保してから決める」
ガムロは手にした藤の枝を弄びながら言った。
「しばらくは、イツミに翻弄されることになるだろうな」

●長野・新潟県境　米軍メサイア部隊
「もう一度、確認しておく」
ステラ・コールマンは無線から聞こえてくる司令部からの戦況説明に耳を傾けていた。
メサイアのコクピット内の戦況表示ディスプレーの地図に点滅するいくつかの点。
それが自分達と仲間の展開図。
それに向かってくる太い矢印。
それが、敵。
表示は、司令部の指揮機能とリンクしている。
ステラはそれを見つめる。

先日の夜、魔族軍がナガノシティまでかなりの距離、後退したと知らされている。
補給がつながらず、やむを得ない後退であることを期待するしかない。

「敵3個師団規模、ナガノ・シティから再び、長野・新潟県境に向かっている。目的は不明」

ニイガタという聞き慣れない地名が、自分達が上陸した方面の地名だと、ステラは地図で知った。

「斥候からの通信では、見慣れないタイプとのことだ。各員留意」
ステラはコントロールユニットを不安げに握りしめながら思った。
敵が何者かわからずに戦えと、正気で言ってるのか？
「敵情報の収集を最優先」
ほうっ。と、ステラの口から安堵のため息がこぼれた。
情報収集戦なら、それほどの交戦はしなくても済む。
MC（メサイアコントローラー）のイルマにも危険な目にあわせずに済む。
それでいい。

「それと平行して、侵攻する敵を何としても阻止せよ」

やっぱり、司令部は狂っている。

ステラはそう感じた。

世界最強を謳うグレイファントムだが、この地で最初の交戦から一週間。
結果は前進ではなく後退している。
敵が後退してやっと今までよりも前進出来たとして、それを誇る者はいない。

「貴官等の不満はわかる」
通信の声は重い。
「だが――わかってくれ」
それは、絞り出すような声。

「貴官等も見たろう。あの避難民を……見ただろう？都市に住む人々を。女子供までが命からがら住み慣れた土地を追われ続けている。我々は、彼らを救わねばならない。これ以上、悲劇を産んではなら

ない。
騎士としての誇りにかけて、彼らを護れ――――幸運を祈る」
そうだ。
私達は騎士。
世界最強の合衆国大統領警護騎士団の騎士。
誇り高き騎士の名において、私達には弱き者を護る義務がある！
どこか、心の奥底で自分のことを単純だと嘲りながらも、ステラは覚悟を決めた。
それが命令なら、義務なら、やるまでだ。

「イルマ」
ステラはＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）にいるパートナー、イルマに声をかけた。

「敵の展開は？」
「現在、トヨノ・ステーション周辺に集結中……戦闘陣形を形成中と思われます」
『中隊本部より各騎』
その通信に弾かれたように、ステラは、自らの騎――――グレイファントムＭ１６“フリーダム・ファイター”のコントロールユニットを掴み直した。
その独特な感触をステラが感じたのと同時に、愛騎の各所からそれまでとは違う音と振動が伝わってくる。

『斥候騎より、ムレ・ステーション付近に難民多数。
このままではトヨノ・ステーション付近にて戦闘準備中の敵に襲われる可能性大。
従って、中隊はこの避難民保護のため、トリイガワ・リバーを越える。
後続の機甲部隊も既に前進を開始。
各小隊展開ポイントは渡河地点より約３００メートル先の工場。

これをランドマークにしろ。
現時点をもって各騎、フォーメーション・アルファ展開。
全武器使用自由』

「ステラ了解」
ガンッ
ガキン
カンッ
あちこちから伝わる小さい振動とモニター表示が、グレイファントムに搭載された武器の全安全装置の解除を告げる。
「ん？」
その間に、モニターの端をグレイ・ファントムが移動していった。
肩のマーキングはB小隊所属騎。
奴らがどう動くかはわからないが、恐らく我々同様のことなんだろう。と、ステラは思った。
B小隊の流れを追うステラの視線が止まった。
「……」
高原のリゾート地と言われても、何ら違和感のない土地。
のどかな田園風景が広がる緑豊かな土地。
モニター越しに映る世界は、平和の象徴ともいえる光景。
それなのに、その緑豊かな大地を踏みつけながら、破壊の象徴が歩いている。
皮肉だと、ステラはそう思う。
国（アメリカ）では見ることの出来ない、オリエンタルな美しい風景。
神の恩寵。
それを破壊の神が踏みにじっている。
この地を護るために――
それは、ステラにとって十分すぎる皮肉だ。
では、メサイアが似合う世界とは？
ステラにはその答えが出せそうもなかった。

『中尉』
イルマからの通信が入る。
『前方１２００に避難民の列。留意してください』
「了解。――避難民の列？車？」
『いえ。ほとんどが徒歩です』
「え？日本人って、車使わないの？トヨタとかアキュラとか、あんだけ輸出してるのに」
『車を使わないのではなく、使えないのです』
「？」
『原因は不明ですが、妖魔出現地点からかなりの範囲で電子機器が使用不能になる事態が発生しています。機甲部隊が後方展開を余儀なくされているのはそのためです』
「そうなの？」
『ステラ？』
イルマが中隊内通信を切った。
『これ、座学で何度も言われたこと』
「あっ……アハハッ！」
『笑って誤魔化さない……もうっ！』
「はいはい」
『……本当にわかってる？』
「分かってます――多分」
『ステラっ！』

生きる術。
あればいい。
あるだけマシ。
そう、ステラが痛感させられたのは、それからすぐのこと。

指定ポイントに到着したステラ達を待ち受けていたのは、北国街道を徒歩で北上する避難民達の長い列、そして――――。

「Ｓｈｉｔ！」

ステラは舌打ちしながら、その光景を見た。

小型妖魔の群れに、避難民達は襲われていた。

まるで遊んでいるかのように妖魔達は避難民の列に突っ込み、気の毒な何人かを血祭りにあげ、離脱。喰らい、そして再び列に――――。

避難民にあるのはその身だけ。

自分のような力も、メサイアも、何もないのだ。

抵抗する術など、ない。

悲鳴を上げ、両手を振り回す男が、妖魔によって上半身を食いちぎられて絶命したのを、ステラ達は何もせずに見ているだけ。

世界最強を自負するグレイファントムを駆る自分達が、虐殺を指をくわえて見ている？

冗談じゃない！

ヘッドレシーバー越しの通信は、この光景を前にした中隊の混乱を如実に示していた。

『おいっ！小隊長！前進の許可を出せっ』

中隊で一番血の気の多い“アニマル・マザー”ことアダム・ボールドウィンの荒々しい怒鳴り声が響き渡った。

その判断は、ステラだって正しいと思う。

一人でも多くを救わなくては！

だが、アーリス・ホワイト小隊長は頑としてこれを認めなかった。
『ダメだッ！許可できない！各騎、現状から狙撃にて対応しろ！』
『目の前で難民が殺されている！マジックレーザーでチマチマやってたって！』
『あれは敵の戦術だ！しっかりしろっ！典型的な誘出だ！すでに前方ではＢ小隊が交戦中！俺達はその後衛に――』

戦況モニターに映し出される妖魔の群れはモニターの一角を埋め尽くすばかりの数。
メサイアの眼で見た現実の世界は、その数に翻弄される哀れな避難民の末路を映し出す。

若い、母親だろう女性が、転んだ子供をかばって、妖魔の前に両手を広げた。
「やめっ――っ！！」
ステラは悲鳴に近い叫び声をあげた。
母親が何をしたいのかわかる。
同じ女として痛いほどわかる。
女として世界で最も賞賛されるべきだろう振る舞いを、その女は見せた。

だが――。

「やめろっ！貴様っ！」
届くはずはない。
それでも、ステラはシートから身を乗り出し、手を伸ばした。
「やめてぇぇぇっ！！」
コクピットにステラの絶叫が響く中、モニターは、女が子供ごと妖魔の爪に串刺しにされた光景を冷たく映し出す。
「――っ！！」

母子の体が妖魔の顎により引きちぎられる中、ステラに出来たこと。
それは、ただ歯を食いしばって目をつむり、母子の冥福を祈るだけ。
『今の見たろうが！』
ボールドウィンの怒鳴り声がエスカレートしている。
『そうだぜ！小隊長！』
小隊の騎士達がボールドウィンの怒鳴り声に影響されて息巻いている。
『ここでやらなけりゃ、俺達ゃ何のためにここにいるんだよ！』
『司令部に許可を求めている！』
負けじとホワイトも反論するが、
『もういいっ！許可なんざクソ食らえだ！！見殺しのホワイトッ！！』
鼓膜がどうにかなったかと思うほどのボールドウィンの怒鳴り声が終わらないうちに、ステラの目の前を、グレイファントムが一騎、避難民達めがけて駆け出していく。
ボールドウィンの騎だ。
『クソッ！●●●野郎！くたばりやがれっ！』
斧を高々と振りかざしながらボールドウィンは突撃していった。
『畜生！いくぜっ！』
『了解っ！』
それに弾かれたように周囲の騎も駆け出し始める。
『戻れっ！――――くそっ！各騎、アニマルマザーに続けっ！』
ホワイトの騎がそれに続いた。
「了解っ！」
ステラは騎を駆り、避難民達へ向けて動き出した。
「このぉっ！」
ステラの駆るグレイファントムのマジックレーザーが小型妖魔を

狙撃、その巨大な斧がそれを避けた妖魔を寸断する。

『各騎！避難民を避けろっ！』

「やってるわよっ！」

上官の指示に怒鳴り返すなんて、普通にやれば軍法会議モノだが、構っていられる状況ではない。

グシャッ！

妖魔を潰した鈍い感触がコントロールユニット越しに四肢に伝わってくる。

「今、踏みつぶしたので何匹め！？」

『１０から先は覚えてません！――――まだ来るっ！』

妖魔達は、“エサ”を前に、どんなに蹴散らされても、そう易々とは引き下がらない。

ステラ達のスキを見つけてなんとか“エサ”へと躍りかかろうと必死だ。

「このおっ！」

脇を抜けようとした犬型の妖魔をひじのスパイクで地面にたたき落とし、一気に踏み殺す。

それを無視するように襲いかかる、表現の使用もない不気味な妖魔達を斧やシールドで叩き殺す。

「ったく！忙しいわね！」

突然現れた妖魔、そしてメサイアに混乱しつつ、難民は何とか逃げようとグレイファントムのわずか後方で右往左往している。

「Ｅｓｃａｐｅ！」

通信を外部スピーカーに切り替えたステラが叫ぶが、それを避難

民達は理解した様子はない。
「Ｗｈｙ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｙｏｕ　ｅｓｃａｐｅ！　Ｄｏ　ｎｏｔ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　ｗｏｒｄｓ！？（何で逃げないのよ！言葉わかんないの！？）」
『英語です！』
イルマが突っ込むように怒鳴った。
『帝国語……ううん！日本語で！』
「そんなもの知るもんですか！私は帝国語だって知らないわよ！」
『Ｎｉｇｅｒｏでいいはずです！』
ステラは何度もそれを叫びながら妖魔を撃破する。
外部の状況を伝えるヘッドレシーバーの中に、Ｎｉｇｅｒｏという声が何度となく入ってきた。
通じた！
「私、日本語教師出来るわ！」
『バカッ！』

『中隊司令部よりＡ小隊各騎』
ステラのレシーバーに司令部からの通信が入る。
『全騎、Ｂ小隊の救援に向かえ。現在交戦中の敵は別部隊を当てる』
「冗談！」
ステラは戦いながら毒づいた。
目先には敵。後方には避難民。
今の自分達は氾濫する川を護る堤防のようなもの。
その役目を放棄したら、人々はどうなる！？
『繰り返す。Ａ小隊はＢ小隊の救援に向かえ』
戦況モニターに司令部からのデータが表示される。
ステラはそれを一瞥しただけ。
とてもではないが、他に視線を向けたらそれだけで妖魔の侵入を許してしまう。
『Ａ小隊ホワイトだ！今はこっちも手一杯だ、他を当たってくれ！』

いつの間にかステラ騎の横で妖魔相手に戦っていたホワイト小隊長騎から罵声に近い怒鳴り声が聞こえてくる。
『A小隊はB小隊の救援に向かえ』
『避難民はどうなる！』
『A小隊はB小隊の救援に向かえ。これは命令だ』
『せめて後続のクリステル達を出せ！俺達が下がったら、一人残らず殺されるぞ！』
『C小隊は貴重な後詰めだ。投入できない。ホワイト、これは命令だ』
『クソ食らえ！クリステルが中隊長の愛人だからだろうが！危険な任務は俺達に、愛人は安全なところにか！？ふざけるんじゃねぇ！』
『ホワイト。CPO要員として、今のは聞かなかったことにしてやる。すでにB小隊は壊滅的な損害を被っている。避難民と味方と、どちらを選択する？』
『くっ！』
『砲兵隊が支援射撃を開始する。着弾を合図に動け』
『――ちっ』
ホワイトが判断に迷っているのは分かる。
目の前の避難民。
先の仲間達。
共に自分達の支援を求めているのだ。
「小隊長！」
ステラはホワイトに言った。
「戦力を分散させましょう！後退支援なら小隊の半分で済みませんか？」
『――目の前の敵を半分で倒せるか！？』
「避難民は一カ所に集中しつつあります。砲兵隊の支援が入るんでしょう？部隊は12騎、展開範囲を狭めれば8騎で何とかなります。だからまず先発で4騎出せば」
『よし！』

ホワイトは頷いた。
『ステラ、スノーボール、エイトボール、ジョーカー、行け！』
「了解！」

「B小隊の現在地は！？」
ステラはグレイファントムをホバリング移動させながら通信機越しにイルマに訊ねた。
「ここから約10キロ、ゼンコージ・テンプル付近」
「ナガノシティは敵に占領されているんでしょう！？そこまで突っ込んだの！？」
「データ入った――敵が退却を始めたため、これを追撃、一時はナガノシティ中心部まで侵攻したものの、敵に包囲された模様」
「バカじゃないの！？」
ステラはあきれ顔で怒鳴った。
「わざと退いて敵を誘い出すなんて、戦術の基本じゃない！」
「正しくは、戦わされたのよ……ステラ」
イルマは沈んだ声で言った。
「B小隊だってその程度のことはわかっていたはず。B小隊のグッドヴォー大尉は無能ではないわ」
「命令に忠実すぎるのは無能の証拠よ」
ステラはモニター越しの光景を見ながら、騎体をB小隊の反応がある方角へ向けた。

モニター越しの光景は、先程から何も変わらない。
建物はあらかた破壊され、燃え残りが細く灰色の煙を上げている。道路やあちこちに人間の屍の残骸が転がっている。――しかも、ステラはまともな死体を一体も見ていない。

「B小隊は間違いなく、中隊……ううん。もっと上からの命令で動かされたのよ」
「何のために？」
「敵と戦ってみろ。敵はどんな装備をして、どんな攻撃を仕掛けてくるか。どんな装備が敵に有効なのか」
「実験のためだけに？」
「そう……ともいえる。ううん？その通りなのよ。多分……私達も」
ＭＣＬ内部のイルマは、Ｂ小隊と通信を試みようと、通信装置の全チャンネルを開放しながら言った。
「だから、どんな状況でも、小隊は敵と戦う必要があった。それが敵に誘われていると知っていても」
「……バカっていいたいけど、言えないのよね」

ピピッ……

コクピットに短いデジタル音が響き、モニターの一角に情報が映し出される。

「ＩＦＦ（Ｉｄｅｎｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ　ｏｆ　Ｆｒｉｅｎｄ　ｏｒ　Ｆｏｅ　敵味方識別装置）に反応！」
イルマの緊張した声に弾かれたようにステラはコントロールユニットを握りしめる。
「続いて敵！」
モニターに警告を告げる表示が出、戦況モニターにグレイファントムの周辺の状況が表示された。

前方２キロにグレイファントム３騎の反応。丁度、ステラ達の前方を横切るように移動している。
その後ろをグレイファントム以上のスピードで迫る大型の反応が

約４０。

「いたっ！」

ステラは隊内通信を開いた。

「こちらコールマン。各騎、戦闘態勢」

通信が通じない。

すさまじいノイズに顔をしかめたステラは、通信を通常電波のそれから魔法通信装置に切り替えた。

「ステラよ。応答して」

『エイトボールだ』

先程までのノイズが嘘のようにクリアな通信が実現した。

「Ｂ小隊と合流するわよ。このままＢ小隊と合流、同じ進路に変針する。いいわね？」

『俺は反対だ』

「はぁっ！？」

『Ｂ小隊と合流する際、スピードが落ちる。Ｂ小隊は』

「ステラっ！」

イルマが悲鳴のような声を上げるのと同時に、戦況ディスプレーに警告が出る。

「前方、大規模な魔法反応！」

『ステラっ！お前が分隊長だぞ！』

エイトボールが鋭い声を上げた。

「各騎減速、散開！」

戦闘機動をとりつつ、ステラは確かに見た。

――大きい。

逃げるＢ小隊を追っているのは、“猛牛（ブル）”と呼ばれるサイのバケモノ。メサイアより巨大な“それ”は、全身を灰色の分厚い装甲で包んでいるような錯覚すら覚えるほど逞しい体をしている。

問題は、その体格だけではない。

走る“そいつら”の角だ。

グレイファントムの“眼”と“脳”は、角の先端に集まる光が、高圧縮された魔法エネルギーであることをステラに教えていた。

エネルギー量は米軍の配備している戦略反応弾の爆発に匹敵する。

グレイファントムはステラに警告する。

逃げろ、と。

まさか――――。

あんなサイのバケモノが走り、最強のグレイファントムがそれに追われて逃げる。そんな目の前の光景が信じられないステラは、その光に引き寄せられるようにグレイファントムを直進させてしまう。

「ステラっ！」

イルマが怒鳴った。

「B小隊とアクセス出来た！」

「B小隊、応答して！こちらA小隊ステラ・コールマン――――っ！」

何の予兆もなかった。

あったとしたらせいぜいがあの光だけ。

それなのに――――

メサイアの眼は幾重にも防御されている。

そう知りつつ、それでもステラは思わず腕で目を覆うことを止められなかった。

突然の閃光。

それは間違いなく巨大なエネルギーの放出に他ならない。

「い、イルマ！」

ステラはグレイファントムを停止させつつ、イルマに叫んだ。

「なっ、何が起きたの！？」

「大規模なＭＬ（マジックレーザー）攻撃です！」

イルマはパニック寸前の声で報告してきた。

「飛行戦艦の艦砲射撃なんてもんじゃありません！」

「Ｂ小隊は！？みんなは！？」

「Ｂ小隊、反応消滅。分隊は全騎無事！サイは反転、こっちに向かってくるっ！」

「エイトボール、みんな！後退する！逃げてっ！」

『ジョーカーだ！ステラ！後方をとられた！』

「なっ！？」

ステラは驚いて後方を確認した。

そこには、直径５メートルほどの黒い球が数十、宙に浮いていた。

「なによあれっ！」

『あれが“ボール”だ。ステラ、あのサイを相手にするか、あのボールを相手にするか。急いで決めろ！包囲されるぞ！』

「あのサイの上を飛び越えて逃げるっ！全騎続けっ！」

自分の判断が正しかった自信は全くない。

ステラがグレイファントムをサイめがけて前進させた直後、

「後方から熱源！」
イルマの報告が入り、
『サイが突撃し――――ブッ』
エイトボールからの通信が途絶えた。
何が起きたか？
後方のボールからの魔法攻撃により、周辺には気化爆弾で焼き払われたのと同じ被害が出た。その影響でメサイアのほとんどのセンサーが破壊された。
メサイアが感覚を奪われたのとほぼ同時にサイが音速突撃をかけたのだ。
熱こそ、グレイファントムに張られた特殊装甲で凌げたものの、サイの突撃まではどうしようもなかった。
激震
警告
何かが破断する悲鳴のような音
それがイルマが理解することの出来た感覚のすべて。
幾重にも施された耐Ｇシステムの上にシートベルトを締めていても凌ぎきれなかった衝撃で、イルマは肋骨が折れた痛みに気絶した。
一体、自分が何分、いや、何時間気絶していたか？
ＭＣＬは真っ暗になっていた。
「す、ステラ……」
ＭＣＬの全ての機能が停止、非常灯ですら点灯しない中、イルマはコクピットのステラの安否を確認しようと、騎内通信のスイッチを入れた。
反応はない。
「ハァ……ハァ……」

肋骨が気が遠くなりそうなほど痛い。
喉が渇いた。
水が飲みたい。
飲みたい。
水。
水。
イルマはＭＣＬ装備のエマージェンシーキットを探したが、暗闇の中、どこにあるかわからない。
「ハァ……ハァ……水、水が」
カチッ
バンッ！
痛みで混乱したイルマは、シートの下にある緊急用ハンドルをひねり、ハッチのロックを爆破した。
先程まで灼熱の地獄が支配する世界。
それは頭の中では理解してる。
だが、水を飲みたいという欲望と、肋骨の痛みが、イルマから普段の冷静さを奪い去っていた。
ガランッ！
ハッチがグレイファントムの肩から下へと落下する音を聞きながら、イルマはＭＣＬの外へとはい出し、
「熱っ！」
慌てて腕を引っ込めた。
コクピットスーツが溶けていた。
「い、生きているってことね」
痛みの意味。それは生きているという証拠だと教官から言われた言葉を思い出した。
日の光に照らされたＭＣＬ内部。イルマはシート横からせり出していたエマージェンシーキットを見つけ、そこから水の入ったボトルを見つけだし、乱暴に飲み干した。
長期保存だけを考えた水。

冷たくも何ともない。
そんな水だが、今のイルマにはどんな美食にも勝る、まさに甘露に他ならなかった。
「……ンクッ……ンクッ……ハァッ」
乱暴にボトルを投げ捨てたイルマは、ガンタイプの無針注射器に痛み止めをセット。自分の脇腹に突き立て、トリガーを引いた。
「うっ！」
理性の上では、痛み止めが判断を鈍らせるのはイヤだったが、痛みから逃れたいという体の欲求はどうしようもない。
痛みが引くまでシートに横たわり、じっとしたイルマは、よろけながらＭＣＬを出た。
騎体の熱が大夫引いたらしい。
未だ空気を熱くするほどだが、それでもブーツの底を溶かす程ではない。
「ステラっ！」
頭部にあるＭＣＬからグレイファントムの肩に降り、イルマは下――コクピットのあるグレイファントムの胸部をのぞき見た。
コクピットハッチは閉まったままだ。
「世話のかかる……」
イルマは精一杯毒づきながら、緊急用操作パネルを操作、ハッチを爆破開放。ロケットモーターでハッチが吹き飛ぶ衝撃を、マニュアル通りの動作で凌いだ。
「ステラ？生きてる？」
エマージェンシーキットから取り出したライトで照らされるコクピット内。
ステラはコントロールユニットの中で伸びていた。
死んではいない。
それは、長年のつきあいからわかる。
恋人は、一目見ただけで、相手が生きているか、死んでいるかわかるものだ。

ヒョイッ
イルマはステラの顔めがけて近くに転がっていたボルトを投げつけた。
ガンッ！
「痛っ！」
ステラが悲鳴と同時にコントロールユニットの中で飛び跳ねた。
「えっ！？えっ！？」
状況がわかっていないらしいステラは、驚いたようにあちこちを見回して驚いている。
「起きなさい。このネボスケ」
安堵しつつ、イルマはステラに言った。
「脱出するわよ？」
コクピットから身を起こし、イルマは周囲を見回した。
敵はすでに見えない。
もう、移動したのだろうか？
それに……。
イルマは、周囲の状況を確かめた。
グレイファントムが山の斜面にめり込む形で擱座していることはすぐにわかったが、問題はそれ以上に周囲にあった。
「こ……こんな」
一時呆然としても、どんな絶句したい光景が眼下に広がっていたとしても、それでもイルマはその“現実”を受け入れた。
そうやってイルマは生きてきたのだから。
「わ、私達、どうなっちゃったの？」
コクピットからようやくはい出してきたステラに、イルマは言った。
「さっきまで私達がいたのはあそこ」
指さす先は、黒こげになった大地。
もう、建物も土地も何もかもが焼けただれている。
「そして私達はここにいる」

イルマは指で足下を指さした。
「約1キロはある」
「つまり？」
「あのサイの突撃の時、私達はここまで吹き飛ばされた。そうでもなければ、今頃、ああなっていたわ」
その指の先にあったのは――黒く焦げ、ようやく原型を留めるまでに破壊されたグレイファントムの残骸だった。

数時間後。
「よく無事で戻ってきた」
結局、民家からカブを“接収”、それに乗って命がけの逃避行を続けたステラ達は、A小隊の仲間によって救助された。
ステラ達より後方に配置されていた部隊に犠牲がなかったことは、ステラにとって少しは喜ぶべきことなのだが……。
「ナガノ・シティ方面に向かった連中で生き残ったのはお前達だけだ」
憔悴しきった顔のホワイト大尉は、そう言ってステラの肩を叩いた。
「イルマは？」
「肋骨が2本骨折している。治療中だ」
「避難民は？」
ステラにとって、それが気がかりだった。
回収してくれたメサイアは、ステラ達が最初に布陣していた場所を大きく迂回するルートをとったし、何より、そこから未だに盛大に立ち上る黒煙が何か、それを知りたかった。
「……聞くな」
ホワイト大尉は踵を返してステラの前から立ち去ろうとした。

「見殺しにしたんですか？」
「俺達は守ろうとした！」
ステラの問いかけに、ホワイト大尉は目を剥いた。
「文句を言うなら、砲兵のバカ野郎共に言え！」
「……砲撃支援とは名ばかりで、避難民をねらい打ちにしたんですね？」
ホワイト大尉は苦しそうな口調で頷いた。
「貴様等が移動を開始してすぐに砲兵から砲撃支援が来たのは事実だ。
弾は対地掃討用の散弾。最悪なことに、砲兵の連中、それを“俺達の頭上”にばらまきやがった。
……俺達はメサイアに乗っていたから被害なんてない。
あのバケモノ共はメサイアほどの装甲がないから、散弾で挽肉になった。
それはよかった。
それだけならよかったんだ！
だが……それは避難民も同じ。
俺の目の前で、俺の娘――――シンディと同じ年頃の子供が散弾に、その小さな体を砕かれたのを、俺は見たよ……。
砲撃が終わった頃には、避難民で生き延びていた奴なんていない。
……その後、俺達は撤収。
戦闘地域はハイパーナパームで焼き払われた。
建前は、モンスターの復活を妨げるため。
本音は、証拠隠滅のためだ。
それでたくさんだろう」
「……」
言葉が出ないステラの肩を、ホワイトはもう一度、力無く叩いた。
「なぁステラ……悪魔って、あっちか？それとも俺達か？」
救いに来たはずなのに……。
救うべき人々の頭上に砲弾の雨を降らせた。

今や私達は虐殺者だ。
悪魔。
それが人殺しなら、
私達は……
何者だろう。

ステラには、ホワイトにかけるべき言葉がなかった。

死者の樹

魔族軍は、ついに長野県と新潟県境まで達した。
その背後、長野県東信地域から北信地域に至る一帯は、すでに魔族軍によって蹂躙が始まっている。
しかし、何故か県境に達した所で、魔族軍は動きを止めた。

●長野県上田市　旧ＪＡ信州うえだ塩田支所　現魔族軍第一軍司令部

魔族軍司令部が置かれた日村に飛龍が荒々しく着地した。
担当兵が飛龍に駆け寄って、暴れる飛龍のその轡を慌てて抑えにかかる。

「どういうことだ！」
司令部に顔を真っ赤にして怒鳴り込んできたのは、ヴォルトモード卿の親衛隊長ムシュラ卿だ。
「あともう少しで閣下の元にいけるんだぞ！？」
「落ち着け。ムシュラよ」
司令部と言っても、その内実はかなり貧相だ。
３階建ての古ぼけた農協のビルが司令部だと言えば、それでわかるだろう。
「ＪＡ信州うえだ塩田支所」と書かれた看板が壁に貼り付けられたままだ。
使われている丁度類は、その辺の民家の方がまだ高級だ。
すぐ横のＡコープ（ＪＡ関連のスーパー）や塩田中学校、中塩田小学校跡地は魔族軍部隊のそれぞれの司令部施設となっている。
住宅地はすべて兵士達の宿泊施設になっている。

そこから数キロの日村跡地では、すでにヴォルトモード卿のための居城の建設にむけた工兵隊の測量が開始されつつあった。

「進軍停止命令とは何事だ！」

壁に貼り付けられた簡易照明の灯りを頼りに、最上階に据えられたガムロの執務室に怒鳴り込んできたムシュラ卿が声を荒げた。

「ガムロ！貴様にそんな権限が――――！」

「ある」

ガムロは会議用の折り畳みテーブルの上で腕組みをして頷いた。

「忘れているのか？ムシュラ。ヴォルトモード卿不在の際の総軍指揮権は、第一軍司令官たる私にあるのだ」

「――――っ！」

「共同戦線をとる中世協会から新潟方面への進軍停止要請が出ている。知っているはずだ」

「……通達は受けていた」

ムシュラ卿は、しぶしぶという顔で頷いた。

「しかし！その情報でさえ、連中からのものだ！それに、目の前に閣下が！」

「いるという確証はない」

ガムロは遮るように言った。

「可能性があるという仮定での話だ」

「貴様は閣下がいないことを良いことに、また何かよからぬことをたくらんでいるんではないのか！？」

「……もう一度言う。落ち着け。ムシュラ」

その言葉の威厳は、頭に血が上ったムシュラでさえ黙らせるのに十分だった。

「くっ！」

「現状、解放された部隊全部に補給が行き渡らない。下手に補給線をのばされると、それだけで無駄な消耗を強いられるのだ」

「閣下の救出が無駄とは何事だ！」

「短絡的に言葉尻をとるな。閣下を救出申し上げた時点で、補給線が切れているとなれば、閣下をむしろ危険にさらすことが何故わからん」
「……っ」
「まぁ座れ」
折り畳み会議机の前に置かれたパイプ椅子をガムロは顎で示した。
パイプ椅子は、ムシュラの体重と甲冑の重さに悲鳴を上げた。
ムシュラの前に、ガムロの副官であるアイリーンがお盆に乗せた茶碗を置いた。
「人間界の茶も久しぶりだろう？悪くないぞ」
「……いただこう」
深く息を吸い込んだ後、ムシュラは茶碗に手を伸ばした。
「中世協会が」
ガムロが徐(おもむろ)に言った。
「新潟方面に“種”を蒔く」
「種？」
緑茶を舌の上で転がし、苦みを楽しむムシュラは、その言葉に動きを止めた。
「何の種だ？」
「カオルーンの種」
「……あんなモノを蒔いて、何の意味がある」
ムシュラは首を傾げた。
「妖魔共のえさ場でも作るつもりか？」
「カオルーンのはき出すガスは、人間界の生命体にとっては危険な程の浄化作用があることは知っているだろう」
「……かつての」
ムシュラは言った。
「私の荘園でも、食害避けに植えていたのを思い出した」
「それを新潟全域にまき散らす。そうすれば」
「どの程度、待つことになる？」

「１４日」
「……待とう」

「まぁ――――ヘンな一日だったな。トム」
ステラ達の後方で野営につく米陸軍機甲部隊所属の兵士、スノウは、横にいた戦友のトムにそう語りかけた。
「メサイアは確かにやられた。だけど、俺達はこうして生きている」
暖をとるために焚かれた木の枝がパチンと弾けた。
「それでいい」
「――――まぁ、そうしておこうか」
トムは、火の前で手をこすった。
「戦車から何から、全部が故障。俺達の個人装備も電子装備がオシャカになったのまで、いいと言うならな」
トムはため息混じりに、それまでいじっていた無線機を後ろに放り投げた。
彼にとっては、散々な一日だった。
安全だと聞かされた場所で布陣中だったのに、戦車があちこちで立ち往生して、砲兵はレーダーが動かないと大騒ぎ。
聞いた限りだと、電子機器が全部故障したという。
結局、トム達歩兵は数百人がかりでワイヤーを戦車につなげ、一台一台引っ張って移動させるなんて信じがたい事態に陥った。
砲兵の布陣に回された連中はもっと悲惨だ。
砲撃支援の必要があるとかで、砲兵があちこちで勝手に撃ち始め、歩兵は逃げ場を求めて右往左往。
終いには砲撃をやめさせるために砲兵めがけて発砲する始末だ。
同じ軍隊で撃ち合いになるなんて、考えもしなかった。

「やれやれ――」
空には満天の星空。夜の冷気が体を冷やす。
「ん？」
トムは一瞬、星空が暗くなった気がした。
「どうした？」
「ん？――いや」
トムは、目をしばたたかせながら、もう一度空を見上げた。
街の灯りのない空は、いつだって暗い。
「何か、通らなかったか？」
「何かって――何が？」
トムにつられてスノウも空を見上げた。
本国とは違う星空が広がる世界は、スラム育ちのスノウにとって新鮮だった。
「綺麗な星空じゃねぇか。何だか歌いたくなってくる」
「歌うって……何を」
「えっと……ほらっ！ジャーンジャーンッって！」
「わかんねぇよ」
ほとほと呆れた。という顔で、トムはもう一度、空を見上げた。
（間違いなく）
トムは思い浮かべた。
（あれは飛行機だ）
三角形の平べったい独特な機体。
（B2爆撃機か？）
（違う）
トムは否定した。
飛行機に付き物の騒音が何もない。
いくら何でも、上空を飛行機が飛べば、この隣のバカでも気づく。
それが――
「スノウ」
トムは立ち上がった。

「万一のことがある。司令部に報告するぞ」

米軍陣地上空を通過したのは、魔族の飛行部隊。

狩野粒子の影響で機能しないレーダーにおかまいなしに、永い眠りから目覚めた彼らの機は、数千年前同様に快調な飛行を続けていた。

パイロット達は、懐かしい風の感覚が、まるで自分を出迎えてくれているかのように感じていた。

マンタそっくりな機体に乗る魔族は、知らずに顔がほころぶのを止められない。

数千年ぶりの飛行だというのに、命じられた飛行時間は短いし、任務の内容が内容だから面白くはないが、それでも飛べることは大歓迎だ。

そう思いながら、魔族は一緒に飛んでいる隊長機が機体を右にバンクさせたのに続いた。

遠くに人間の街が昼間のような明るさを放っている。

一瞬、自分が産まれ育った魔界の街を思い出し、懐かしさすら感じた。

その街の上空にさしかかった時、魔族は機体に吊したラックの中身を空中にまき散らした。

翌日。

午前6時。

糸魚川市から新潟市にかけての住民は、町中にまかれた奇妙な種に戸惑っていた。

ひまわりの種のようにも見える得体の知れない種が、街のあちこちに散乱していた。

連日の魔族絡みの事件と関係があるか？
人々はそれを疑ったものの、多くの人々はそれを珍事として斬り捨て、日常の生活に戻っていくのが常だった。

正午。
街の片隅に転がっていた種が芽吹いているのを見つけたのは、偶然通りかかった主婦だった。
テレビでは、昼の番組で新潟市内に謎の種の雨が降ったと報じている。
主婦は、アスファルトの上で芽吹いた種に、生命の強さを感じ、不思議な感慨を抱いた。
保健所は市民からの問い合わせに苦慮していた。

午後6時
道行く人々は、街のあちこちに季節外れの雑草が生えていることに気づき始めた。
雑草なんて普段は目もくれない人々だが、雪を割って現れた緑に、早い春さえ感じていた。

4日目
魔族が長野県境付近に集結している報道を前に、人々はあちこちで雑草刈りに精を出していた。
前日までヨモギに似た植物だと思っていたが、夜半からの雨を受けたせいか、よく見ると幼木になっていた。
「珍しい草だ」
「もしかしたら木かもしれない」
人々はそう思いながらも、自宅の庭や職場の駐車場に生えた名も知れぬ雑草を引っこ抜き、鎌で刈り取った。

5日目

人々は夜明けと同時に青くなった。
何がどうしたかわからない。
誰も刈り取らずに放置された雑草が、今や木となってあちこちに生えている。
刈り取った雑草が生えていた所からも、新しい芽が生え始めている。
行政や土建屋が木を切り倒しにかかるが、上越市市街地だけで数百本にのぼる木々は関係者を苦慮させるだけだった。
何より、切り倒した木を焼こうとした多くの市民が、弾丸並みのスピードではじけ飛んできた種を浴びて死亡。焼却を止めるように緊急の広報を流すに至っては、増え続ける木の処理に行政として対応の困難が予想された。
そして、消防に体調不良を訴える１１９番通報が、保健所にはあちこちで松や杉の木が枯れ始めているという通報が寄せられ始めたのも、この日である。

6日目
早朝から謎の木々の周辺に住む人々が死んでいると警察に通報がひっきりなしに寄せられ、現場に駆けつけた警察官や消防隊員の多くが犠牲者となった。
この事態を受け、警察と消防は木の側に近づかないように広報車を走らせようとしたが、アスファルトの下で成長していた木によって交通網は各所で寸断され、市街の交通はパニック状態。
せめてもと思い、外出を控えるように広報を流すが、焼け石に水だった。
市内に毒ガスが流されたという流言が飛び交い、市内は無政府状態に近い状態に陥った。

7日目
謎の大量死の死因が判明した。

――オゾンの大量吸入による死亡。
市内に設置されたオゾン監視装置は、木々が大量のオゾンを放ち続け、最大濃度が１００ｐｐｍを越えていることを告げた。
新潟県はオゾン濃度の高い地域、木に近い地域からの避難を市民に呼びかけ、多くの市民が住み慣れた街を離れ始めた。
その間にも木は成長を続け、木に近い種類と思われる草もこの日、確認された。

８日目
新潟県は木による被害から県民を守るべく多くの市町村を立ち入り禁止区域に指定。

９日目
退路を断たれることを恐れた米軍が退却を開始。
市民の保護に当たっていた第十三師団が退却支援に合流。

１０日目
軍によるナパーム、火焔放射器による掃討作戦が開始。だが、木は引火すると同時に爆発、内部の種を数百メートルにわたって飛び散らせることが再確認された。
被害地域を拡大するだけと判断され、焼却作戦は即日停止する。

１２日目
木の勢力範囲は拡大する一方。
長野県境に近い妙高市、上越市、糸魚川市の主要な市街地が緑に埋め尽くされたことが確認された。

●新潟・富山県境
そして悪夢の１４日目。

「――魔族軍、動きました」
富山県境にまで後退した第十三師団司令部の幕僚が、重々しい声で吉村師団長に告げた。
すでに政府は、新潟県全域の放棄を決定している。
新潟県境は新潟県から脱出する県民であふれかえっている。
第十三師団はその支援に連日従事している。
魔族軍なんて見たことがない。
県民の脱出を阻むものがあれば、それがすなわち彼等の敵だ。
「１４日……」
種が蒔かれて以来、×印が付けられたカレンダーと、その横に貼り付けられた戦況を示す地図を前に、吉村はじっと考え込んだ。
「敵は、何を考えている？」
敵の狙いがわからない。
何故、新潟県へ、日本海側へ動く？
日本を制圧するつもりなら、何故、関東方面へ、太平洋側へ動かない？
「関東管区からの連絡は？」
「何の連絡もありません」
「敵は、オゾンで我々を皆殺しにするつもりだったのでは？」
「そうともとれるが……」
敵は２６００年前、人類と神族の連合軍によって長野県倉木の地に封印されていた魔族の軍勢である。
政府はそう告げている。
それを鵜呑みにして考えても、どうしても辻褄があわない。
もし、我々が２６００年前の人々だったとしよう。
だとしたら、一々オゾンなんて使わなくてもそれこそ虫けらのように殺せる相手のはず。
それなのに、何故、オゾンなんて面倒くさい手段を使う？
どうしても、吉村には敵の狙いがわからない。

「参謀長」
吉村は側に控えていた中村参謀長に声をかけた。
「はっ」
「近衛は――何か言ってきたか？」
ロクな命令も送ってこない軍司令部はあてにならないと判断した吉村は、越権行為に該当することを覚悟で、正式な要請として近衛に状況分析と情報の提供を求めた。
近衛から渡される情報は、近衛自体が把握している情報と比較すればかなり制限されたものだろうが、軍司令部より送られてくる情報よりは圧倒的に有益な情報が含まれていた。
「それですが」
参謀長は一冊のファイルを取り上げた。
「近衛も慌てています」
「そりゃそうだろう」
吉村は思わず吹き出した。
「こんなことがあって慌てない方がどうかしている」
「それが」
参謀長は表情を変えずに言った。
「敵の狙いは、正しくは新潟県の制圧ではありません」
「――ん？」
吉村は笑いを止めた。
それはそうだ。
連中が海へ出る必要もないだろう。
海には連合艦隊が集結し、最悪の事態に備えてはいるが……。
なら――何が目的だ？
「近衛の見る、連中の目的は」
師団司令部の全員が注目する中、参謀長は告げた。

「柏崎です」
「柏崎？」
吉村はイヤな予感がした。
「既に海軍には伝達され、“最上”以下で成る近衛飛行艦隊と、戦艦大和以下でなる連合艦隊による砲撃作戦が準備中です」
「……敵の目的は」
吉村がそう言えたのは、かなりの時間というより、覚悟が必要だった。
目の前が真っ暗になるのを押さえながら、吉村は軍人としての根性だけで持ちこたえた。
「原発」
「……」
司令部に重々しい空気が漂う。
原発を押さえられれば最悪の事態が襲う。
放射能汚染は本土の何割に達する？
陸戦兵力はオゾン被害で動かせないんだぞ？
「つまり」
釜沢参謀が立ち上がって発言した。
「魔族が原発を狙うと？」
「正しくは、その地下だ」
参謀長はちょっとだけ参謀を見て、ファイルに視線を落とした。
「原発の地下に……“門（ゲート）”が眠っている」
“門（ゲート）”？」
聞き慣れない言葉に、参謀は訝しげな表情を浮かべた。
「魔族が眠っている空間といっていいそうだ」
「仲間を呼び覚ますつもりか！」
吉村はそれで合点がいった。
敵は仲間を、戦力を増やすつもりだ。
恐らく、オゾンを散布したのも、その方が活動しやすいからに違いない。

「原発設置の際、原発で蓋をするつもりだったというのが近衛の発想で」
「バカか！」
司令部の誰かが悲鳴に近い声を上げたが、非難する者は1人としていなかった。
「ぶっそうなモノをさらにぶっそうなモノでフタをするバカがあるかっ！」
「原発はすでに運転とすべての機能を停止。それに原子炉の防御は要塞以上です」
参謀長はファイルを閉じた。
「日本海に展開中の近衛と海軍は、艦砲をもって柏崎原発を襲うと予想される敵を、米軍と協力して迎撃します」
「――待て」
吉村は参謀長の最後の言葉に引っかかった。
「米軍と協力して？」
「そうです」参謀長はただ頷いた。
「米軍のメサイアを陸戦兵力として展開させ、阻止に加わらせると」
「米軍を見殺しにする気か？」
一瞬、クラリス中佐の顔が吉村の脳裏をよぎった。
「米軍に一矢報いる機会を与えてやる――失敗するか否かは米軍次第と」
「反応弾でも撃ち込まれたらどうなるっ！」
参謀長の報告を聞いた吉村は、米軍がとりそうな手段の中で、水爆の次あたりに厄介そうな事態を想像した。
「あのバカ共ならやりかねんぞ！」
「その点については軍司令部より」
釜沢参謀が書類を広げた。
「先日、米国議会は周辺国との外交問題となることを避ける意味で、戦域における反応兵器の使用を認めないと議決しました。反応兵器を撃ち込まれたくない政府と、放射能汚染が自国に及ぶことを恐れ

たロシア帝国からの圧力がありました」
撤退戦の指揮に追われ、新聞を読むことを忘れていた吉村の前に、その記事の切り抜きが置かれた。
「――これを信じろというのか」
「一介の軍人には」
参謀長はため息まじりに言った。
「こういう時、信じるか祈る位しか、方法はありませんよ」
「後は……」
吉村は天を仰いだ。
「海軍任せか」

人の怒り　狗の生き方

●日本海海上

この世界の連合艦隊は想像されるような常設の艦隊ではない。

実世界では大正１２年（１９２３年）以降常設となっているが、この世界においてはこれがないのだ。

長野県における魔族軍出現を受け、臨時に編成された合同艦隊が連合艦隊である。

その中から砲撃戦用に戦艦８を中核とする部隊が日本海に展開していた。

この時代の戦艦は、上陸戦において砲撃により打撃を加えることを目的として使用される代物で、対艦戦闘は二の次以下というより想定外だ。

海軍にとってあくまで自分達の兵器の主流は、潜水艦と空母であり、海軍の認識も「対艦兵器」ではなく「巨大な砲艦」程度でしかない。

１９４０年代から盛んになった航空機・空母全盛時代は、戦艦にとっては冬の時代だった。

海軍の伝統的象徴と扱われても、実戦では第二線でなんとか活躍出来る程度の代物。

１９５５年の第一回目の大軍縮の際は真っ先に除籍対象の艦種とされた。

戦艦大和を始め、長門・陸奥などの歴史的な艦がスクラップにされるか記念艦として公園に収められ、海から消えた。

歴史の転換点は１９７０年代。

フォークランド紛争やカリブ海戦争、さらにカナダ動乱において、三流海軍が何とか運用していたオンボロ艦が各地で対地攻撃兵器として使用され、一躍歴史の檜舞台に復活したことによる。

対艦ミサイルを随伴艦の対空防御で防ぐ戦法で守られた戦艦は、

はっきり猛威だった。
その破壊力から「非人道的」として１９７０年代以降の沿岸部を戦域とする全ての戦争において、講話条件で常に一番最初にあげられたのが、「戦艦の戦域よりの撤退」だったというのが、どういう意味か考えればわかるだろう。

日本もその例外ではない。

上陸戦を担当する海軍陸戦隊や沿岸部へ展開する陸軍からの要請もあり、海軍は１９５０年代には半ば消滅した艦種「戦艦」を１９８０年に復活させた。
かつて連合艦隊旗艦を勤めた長門や陸奥は記念艦として公園に収められ、大和や武蔵はスクラップになっている中、「対地攻撃戦支援艦」の略として海軍は「戦艦」を復活させたのだ。
運用してみると、それまで懸念されていたほどの問題はなかった。
大型空母ほどの意味はないし、潜水艦ほど気を遣う必要もない。
イージス艦ほどの電子防御能力はいらず、随伴するこれらの艦に対空戦闘の運用は委ねればいい。
デカイ砲とそこそこの対空砲を積んで幾度と無く戦艦は運用上、むしろ使い勝手のよさで好評を得た。
そして多大なる戦果を上げ、今では長門・大和・武蔵を始めとした戦艦が１６隻も海軍の軍籍簿に名を連ねている。

その内の約半数が、日本海に展開しているのだ。

鉄（くろがね）の城――

その言葉そのままに、今、戦艦達は砲を柏崎原発に向けていた。

連合艦隊司令長官に任命された小沢少将は戦況モニターを見つめ

た。
予め用意された地形図以外に何も映し出されていない。
司令部のスタッフが応急班に用意してもらった敵陣を示す凸が地図の上に置かれ、それで大体の位置を掴むのがやっとだ。
「敵の展開が早すぎます」
連合艦隊旗艦とされた戦艦大和艦橋において、参謀長が司令長官にそう告げた。
「予想では後2日はかかるものと」
「それだけ」
「敵はのんびりやっていたということさ――今の我々みたいに」
その通りだと参謀長は思う。
レーダーも使えず、対地ミサイルは一発も撃っていない。
航空機は使えないからという理由で空母を連れてきてさえいない。
一体いつの時代の編成か？と聞きたくなるような陣立てを考えると、そうとしか言い様がない。
「敵の兵器は？」
小沢の質問に、参謀長は短く答えた。
「ＭＬ（マジックレーザー）です。射程は不明」
「近衛が貸してくれた魔力検知装置と、レーザー拡散幕だけが頼りか」
「後は」
参謀長は海を見た。
彼らの前面に浮かぶ青い機械がイヤでも目に入る。
ＳＦアニメに出てきそうな戦闘機然とした騎体は、海軍機と同じ青い塗装が施されていた。
長細い流線型のボディに意味不明な装備がゴテゴテついている。
小沢が初めて目にしたそのメサイアはそんな形状をしていた。
初めて目にしたときは理解できなかったが、あれでもメサイアだという。
二本足で地面を走るメサイアしか見たことのない小沢には理解で

きる代物ではない。
「ＭＤＩＪα－Ｘ４０８Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ（フライ・ルーラー）です」
参謀が小沢に告げた。
「近衛の試作メサイアか」
試作騎を示すＸナンバーがついているところから、小沢はそう見当をつけた。
「はい。高々度戦闘に特化した騎体で、現在は対空戦闘能力以外、全て防御用の装備をつけていると」
「艦隊を守るためか？」
「飛行艦は、自前のバリアーが展開出来ますから」
「フライなんとか言うアレは、最上並のバリアが展開出来るというのか？」
「米軍の飛行戦艦並みのバリア展開は、理論上可能とのことです」
参謀は、地図の上で動かされる凸を見ながら返答した。
「我々にとって、気休め以上になるかと」
「何騎来ている？」
「試作全騎……３騎です」
「気休めになればいいが……」
小沢はため息混じりにメサイアを眺めた。
その先には柏崎原発。
さらにその先には、侵攻してくる魔族がいるはずだ。
「参謀長」
小沢は息と共に言葉をはき出した。
「何キロでやれる？」
「４万メートル」
参謀は即答した。
「わが艦隊の砲撃技術ならば可能です。４万メートルまでの到達時間、推定５分」
「よろしい」
小沢は艦橋の奥に控えていた一団に振り返った。

すでに兵士達は砲撃戦の体勢に入っている。
一々改めて指示することは何もない。
「最上より入電！敵、侵攻スピード上げました！４万メートル到達まで後３分！」
「参謀長」
「全艦、統率射撃をなせ！艦長！」
「はっ！」
大和艦長の有賀大佐が敬礼の後に叫んだ。
「砲術長――やれるか！？」
「はいっ！」
砲術長の緊迫した返事と同時に、帝国海軍の誇る戦艦達が破壊を生み出した。

展開する艦艇で巡洋艦以上は、全て有効射程４０キロの１５センチ砲以上を搭載した艦で編成されている。
目的は対地攻撃任務。
戦艦が戦艦めがけて砲弾を発射したことのない時代に生まれた、主砲を主力とする彼女達は、圧倒的な破滅を産み出すために作られた存在。
世界が割れたかと錯覚するほどの砲声。
それが、彼女達の産みの叫び。
砲撃。
――１００門を越える砲の作り出す、破壊という名の気高き生誕の儀式。

生まれた子供達――砲弾に鸛（こうのとり）は必要ない。子供達は、自ら音を遙かに越える速度で生誕の場を目指す。

子供達が指定された生誕の場は、柏崎原発から約１５キロ地点。

あたりに広がるのどかな風景は、一瞬にして鉄の暴風の真っ直中へ変貌した。

使用された砲弾は対地掃討用のクラスター散弾。

主力戦車の上面装甲を打ち抜ける成型炸薬能力のある子爆弾を数百発抱き込んだ、敵戦車部隊を面で破壊するために開発された帝国海軍自慢の砲弾。

対地攻撃のスペシャリスト達が選択した砲弾は、地上に災禍をあますところなく振りまく。

装甲のない妖魔達は子爆弾を浴びて四散し、或いは列を乱して逃げまどう。

それでも妖魔達の進軍は止まることがない。

仲間が砕かれようが、潰されようが、痛痒を感じないかの如く、彼らは進み続ける。

「敵、進撃スピード変わらず！」

「なぜだ！？」

連合艦隊司令部の誰かが悲鳴に近い叫びを上げた。

「たかがケダモノ、何故仕留められない！？」

原発周辺に展開するメサイアと、上空1万メートルで観測を続ける最上から入るデータが艦隊司令部に告げた。

攻撃は無効の可能性があると。

「撃ち続けろ！」

参謀長は怒鳴った。

「出し惜しみはするな！対地散弾をありったけ撃ち続ければいい！」

敵を減らす。

参謀長にとってそれが至上命題だ。

それでいい。

それでいいのだ。

原発をやらせるわけにはいかない。

あれをやられれば、もう戦争どころではない。

日本本土の半分が人の住めない世界に変わるのだ。
冗談では、ない。

「すさまじい光景だな……」
最上艦橋では、現地上空に送られたスパイシステムが送ってくる映像を、司令部要員が感心したように見入っている。
「海軍の砲撃継続、あと何分可能だ？」
「あと３０分ともたないでしょう」
艦長席に座った有賀艦長の問いかけに、高野砲術長が短く答えた。
「その前に敵が原発に取り憑きます」
「その程度……か」
頬髭に隠れた大きな傷跡を撫でながら、有賀は苦笑しつつ、艦のステイタスモニターに視線を移した。
「艦の対レーザー防御、即時全開。準備は怠るなよ？」
「下の艦隊はどうなることやら」
「何のために新型を貸してやったと思っている」
自分達は魔法防御が出来るが、海軍にはそんなご大層なシステムはない。
それを知る高野のぼやきを後目に、有賀は手元のディスプレーを操作して連合艦隊の前面に展開しているメサイアのデータを開いた。
「ったく、“Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ”の初陣をこんな風に飾るとはな」
「艦隊防衛戦用メサイアですよ？きちんと本来任務を」
「艦隊とは、どこの艦隊だね」
「いいじゃないですか」
高野は言った。
「これで連中（Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ）が海軍を守ってやれば、それだけで連中に対する大きな貸しになります」
「全騎喪失ではシャレにもならないぞ？」
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒのリフレクション・シールドは、最上（こいつ）の主砲

斉発をそらしてのけたじゃないですか」
「それが面白くないっ！」
有賀は怒鳴った。
「あのおかげで俺は紅葉のガキに冬のボーナス巻き上げられたんだぞ！？」
「んな賭けするから……」
「それが女房にバレて、女房は娘を連れて実家帰っちまうし……散々だったんだ」
「お気の毒です――さて」
高野はモニターに向き直った。
「敵が動きましたぞ？」
モニター上の敵は、くさび形陣形で一気に進撃する動きをとっていた。
それが――
「真っ二つに割れた！？」
敵の動きが、鳥が翼を広げたような陣形――鶴翼の陣に変わった。
小沢達には、いや、人類側には、その動きの意味が理解できない。
そして、陣形の変化に伴い、妖魔の進撃は停止――。
「原発まで後何キロだ！？」
参謀長がオペレーターに尋ねた。
「約３キロ！」
返答は即座に返ってきた。
「そんな所で、何を？」

小沢が戦況モニターを前に目を凝らした次の瞬間――
「敵陣地よりマジックレーザー反応多数っ！」
「何っ！？」

●最上艦橋
「敵！マジックレーザー発射！」
最上艦橋でオペレーターが悲鳴に近い声を上げた。
「何っ！？」
モニターにはマジックレーザーを示す青白い線が無数に映し出されている。
「マジックレーザーにしては速度が遅いぞ！？」
そう。
レーザーなら光速の速度で飛んでくるはずなのに、それが、まるで砲弾のようにゆっくりとしたスピードで飛んでくる。
「艦長」
高野は有賀に振り返った。
「敵はマジックレーザーを使ったんじゃありません！」
「何？」
「敵は魔力付与した飛び道具を使ったんですよ！」
「狙いは？」
高野のかわりにオペレーターが答えた。
「すでに原発は飛び越しています！――弾道計算終わりっ！敵の狙いは連合艦隊です！」
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒに防御させろっ！」

●戦艦大和艦橋
「敵、本艦隊を攻撃！弾着まで1分！」
「回避！レーザー拡散幕放てっ！取り舵一杯、機関全速！」

大和艦長は、出せる限りの指示を出す。
「全艦行動自由！回避させろっ……陣形の意味は」
機関の激しい振動を足で感じつつ、小沢は呟いた。
「このためか」
視界の向こうで、それまで砲撃の射界を確保するために海面すれすれにいたメサイアが上昇していく。
一定高度に達したメサイア達は、三騎横一列のフォーメーションを展開。
飛び来るＭＬ（マジックレーザー）の前に立ちふさがった。
メサイア達に白く光る無数のＭＬ（マジックレーザー）が襲いかかった次の瞬間。
辺りを白い光が支配した。
Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの防御が敵の攻撃を根こそぎ阻止した光だ。
これが、魔法の力か。
小沢は、その光景に畏怖に近い感情を抱いた。
「提督！」
通信兵が怒鳴る。
「最上からです！すぐに撤退せよ――Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの防御システムに異常発生！」
「何だと！？」
「防御展開可能回数、あと１０回ですっ！」

●最上艦内
「どういうことだ！？」
最上では、開発局のスタッフ達が青くなっていた。
「システムに異常！」

「んなことはわかっている！」
チーフスタッフが怒鳴った。
「原因は！？」
「バリア展開素子破損！シグナルが発生しませんっ！」
「――素子の精製が甘かったか」
チーフスタッフはモニターを見つめながら唸った。
「予備装置切り替えは？」
「やってますっ！」
「やってて１０回か！？」
「そうですっ！」
「チッ！９回で後退！」
「はいっ！」

●戦艦大和艦橋
「砲撃は続行させろ！」
「了解っ！」
「提督！」
「戦いはこれからだ！」
帝国海軍随一の猛将の異名をとる小沢は言った。
「まだロクな損害も与えていないのだぞ！？」
「しかし！」
「対空砲で敵の攻撃は阻止出来るな？」
「物理的攻撃ではないので無理です」
「試してから言えっ！」
「ＣＩＷＳが敵弾を認識しません！」
小沢の怒鳴り声に、砲術士官が怒鳴り返した。
「近衛から借り受けたマジックレーダーは、火器管制システムと連動していません！」
「――っ！」
ドンッ！

小沢は羅針盤の柱を拳で殴った。
「……提督」
「敵の攻撃を回避しつつ、攻撃続行は可能か？」
「敵の攻撃は陸用の１０番（陸上攻撃用１００キロ爆弾）に相当」
「戦艦なら凌げる」
「それが１０００門以上です」
「凌ぐんだ！」
小沢は怒鳴った。
「凌ぎつつ、戦え！原発を殺られたら、国土の半分が汚染されるんだぞ！？」
「――提督」
砲術担当の参謀が、青い顔で報告した。
「先程の第４８射ですが」
「どうした！」
「全弾、敵に破壊されました。敵に与えた損害皆無」
「……」
「我々の攻撃は、最早何の効果も」
「戦艦８杯が揃いも揃って……何も出来ないだと？」
小沢は笑った。
笑うしかなかった。
ここにいても、敵に何のダメージも与えられず、徒に殺されるだけだ。
「砲をもってすれば人類最強の兵器に乗りながら！指をくわえて死ぬしかないだと！？」
「提督」
参謀長が進言した。
「……挽回の時を待ちましょう。ここは」
「……」
小沢は命じた。
「通信。司令部へ打電。本作戦ハ失敗。敵阻止不能。ワレ、コレヨ

リ撤退ス。……それと、近衛に」
小沢の視界を、白い光が照らし出した。
敵の第2射が襲ったのだ。
「ワレ、コレヨリ撤退ス――――支援求ム。それだけでわかってもらえるはずだ」
「……了解」

●北海道　近衛軍演習地　メサイア研修センター
「出撃許可はまだ出ないんですか！」
都築がたまらずに怒鳴った。
場所は食堂。
朝食でにぎわう食堂が、一瞬、静かになった。
「――――まだだ」
味噌汁を飲んでいた二宮が、眉間に皺を寄らせながら答えた。
「都築――――食事は静かにとれと教わらなかったか？」
「新潟が完全放棄ですよ！？近衛は何を指くわえて見てるんですか！」
「命令がない」
「命令って――――」
都築は“信じられない”という顔になった。
「命令がなければ何も出来ないんですか！？」
「そうだ」
「じゃあ、その命令ってヤツは、いつ出るんですか！」
二宮は、ますます周囲の視線が集まっているのを感じていた。
長野に次いで、新潟は完全放棄。
次に魔族軍が攻め込むのはどこになるか。
何故、出動命令が出ないのか。

皆がそれを知りたがっているのだ。
「近衛は近衛で」
味噌汁を飲み終え、二宮が言った。
「独自に準備はしている。貴様だって、“鳳龍”のメンテナンスがあるだろうが」
「終わってますよ」
都築は苛立った声で言った。
「とっくの昔に！」
「――そうか」
「新潟で何千人が死んだか、上層部はわかってるんですか！？」
「……都築」
「早瀬の家族も死んでるんです！」
「……だからどうした」
「――え？」
「だからどうした――そう聞いた」
「っ！」
「都築准尉っ！」
都築より先に、二宮の怒鳴り声が、食堂に響き渡った。
「貴様は近衛の騎士、陛下の狗だ！狗に個人の感情なぞいらんっ！命じられてもいないのに、獲物に襲いかかろうとするな！」
「俺は人間だっ！」
都築はたまらず怒鳴り返した。
「そこらのワン公じゃねぇっ！」
ガンッ！
都築の頬に決まった二宮の一撃が、都築を横に吹き飛ばした。
「――ここまでの発言は、上官反抗罪で抑えてやる」
食堂に居合わせた憲兵が倒れた都築の両脇を抱え、無理矢理立たせた。
「我々は、“陛下の狗”であることを誇りとすべき身だ。その身が自らを、“陛下の狗”ではなく、“人間”と語るな――愚か者め」

その言葉には、物静かな口調だが、あきらかな怒気が込められていた。
「――――っ！」
怒りと悔しさと、その迫力とで、都築は言い返す言葉がとっさには思いつかなかった。
二宮は、憲兵に言った。
「私の権限の範疇で処理する。私がいい。というまで、都築准尉を営倉にぶちこんでおけ」
「はっ」
憲兵達は、都築を引きずるようにして食堂から出ていった。
「二宮教官っ！」
引きずられながら、都築は叫んだ。
「俺は人間だ！間違ったことは言っちゃいねぇからな！」

●同センター　教官控え室
「……あのバカは」
二宮は憮然とした顔でコーヒーカップに口を付けた。
目の前には、都築のことを心配した仲間が、都築の助命嘆願のために整列していた。
「あれだけの腕と、これほどの仲間を台無しにする」
「……教官」
美晴が言った。
「早瀬准尉の」
「――――知っている」
二宮は言葉を遮った。
「早瀬准尉」
「は、はいっ」
さつきが、一歩前に出た。
二宮はコーヒーカップをテーブルに置くと、立ち上がってさつきの肩に手を置いた。

「ご家族のことは、残念に思う」
「……」
俯いたさつきの肩が震え、大粒の涙が床に落ちた。
「都築が、お前のことを心配し、同様に、新潟で死んでいった人々の無念を思えばこそ、ああやって連日、バカのように出撃許可を求めてくるのはわかっている」
なら。
美奈代は、二宮がすぐに都築を不問に付してくれると期待した。
「問題は、都築の発言だ」
二宮は言った。
「――あれは、絶対に許されない」
「しかし」
美奈代は言いかけて口をつぐんだ。
下手な発言は、都築の二の舞になる。
「――いいか！」
二宮は突然、大声で怒鳴った。
「我々近衛騎士は、“陛下の狗”だ！
貴様等に下される命令は、すべて恐れ多くも、天皇陛下のご命令だ！
死ねと言われれば、笑って死ぬ！
殺せと命じられたら女子供でも殺す！
我々にとって、陛下からのご命令は命より重い！
都築は、その程度のことがわかっていない！
それとも！」
突然、二宮が美奈代の胸ぐらを掴み、美奈代の顔が自分の顔の間近に来るまで引っ張った。
「貴様等も同じ考えか！？」
「いいえっ！」
美奈代はとっさに答えた。
「我々は陛下の狗であり醜の御楯！この身は全て、陛下の所有物に

すぎませんっ！」

それは、美奈代達が富士学校入営当時から毎日のように叩き込まれていた、近衛軍兵士としての基本原則だ。

自分達は人間ではない。

陛下の狗、醜の御楯にすぎない。

つまり――モノだ。

自分というモノの所有者は？

――天皇陛下。

それが、近衛兵士の立場であり、これに疑念を抱くこと自体、許されない。

そういう、ものなのだ。

二宮は、無言で美奈代を突き飛ばすように胸ぐらから手を放した。

「今、長野大尉が“指導”にむかっている――私の許可があるまで、都築との接触は一切禁止する」

その視線の先に、自分がいることに気づいた美奈代は、とっさに姿勢を正した。

「わかったか！」

「はいっ！わかりましたっ！」

●同センター　食堂

「――ったく、あのバカ！」

宗像がコーヒーを飲みながら毒づく。

「おかげで朝食どころか、昼飯までフイだ！」

「海鮮丼、残念でしたねぇ」

山崎が残念そうにぼやいた。
「……」
「気にするな。早瀬」
美奈代は、横でしょげているさつきに言った。
「お前は、何も悪いことをしていない」
「……だけど」
「差し入れなんて、持っていくだけ無駄だ」
宗像が言った。
「長野教官にしこたまぶん殴られて、今日明日、何も食えないだろうよ」
「それでなくても、今日一晩は食事抜きでしょうけどね」
美晴も頷いた。
「ホント、びっくりしました。上官反抗罪で済んでよかったです。反逆罪なら銃殺台ですよ」
「二宮教官の温情だよ」
美奈代は、二宮に胸ぐらを掴まれた感覚が未だ抜けない首周りを撫でながら言った。
「都築は、あの性格だから、誰かの狗扱いされたのにキレたんだろうが……」
「心底のバカだ」宗像は容赦がない。
「黙っていればよいものをいちいちつっかかるなんて……アイツは精神年齢何歳児だ」
「……このあと、どうなると思います？」
「すぐにでも出撃となれば、営倉から出られるだろうが……」
宗像は、朝食の仕事が終わった食堂スタッフが見ているテレビを見た。
丁度、国家中継が流れていた。
「政治がどう動くか……か。あいつらしいよ」

柏崎事件

●東京　首相官邸災害対策本部

海軍の阻止戦失敗の報告に、

「無様だな」

岡山首相はそう呟いた。

「軍艦というのは――高いのだろう？」

「その通りです」

鈴木は深く頷いた。

「結局は無駄な犠牲に過ぎませんでしたな。首相、やはり海軍向けの予算は、我が陸軍へ」

「検討しよう。柏崎の様子は？」

「現地に展開した米軍メサイア部隊も撤退しました。柏崎原発は魔族軍によって占領されます」

「安全対策は大丈夫なんだろうな」

「新潟放棄の時点で、原子力発電所の火は消してあります」

「新潟選挙区選出の議員は、我が党にはいない。問題ないだろう」

「はっ」

●新潟県柏崎原発付近

長弓兵達の矢襖（やぶすま）を浴びた人間達の船が煙を上げながら逃げていく。

何隻もの船が無惨に焼けこげて海に沈んでいく。

その光景を後目に、魔族軍は原発施設内に侵入することに成功した。

コンクリートで作られた原発施設に妖魔達は何の感心も示さない。

放射線警告も、彼らには関係ない。

ただ、その一角にいる一団だけは違った。

黒い西洋甲冑を着込んだ、中世の騎士然とした一団。
絵画から抜け出してきたような一団が、原発を睨んでいた。
「……ここか？」
「はい」
「この地下に――――公爵様が？」
「結論として」
一人が答えた。
「そう判断するしかありません」
「……天界軍もしでかしてくれたな」
甲冑の中から、苦々しげな声が響いてくる。
「ムシュラ卿――――妖魔に地下を掘らせますが」
「わかってる」
“ムシュラ卿”と呼ばれた甲冑姿の騎士は、悠然と頷いた。
「封印を解除するから撤退しろというのだろう？」
「はい」
「――――作業担当部隊を除き、すべての部隊を下げろ」
ムシュラ卿は、施設の残骸を一瞥した。
「公爵様を出迎えるのだ。すでに周辺に敵はおらん」

原発の地下
約１００メートル。

地下を活動拠点とする妖魔達が、目標にたどり着いた。

妖魔達の前には、封印を意味する巨石が立ちふさがっている。

一匹が、その封印に触れた――――

●東京都　気象庁防災監視センター

――ズズンッ

「うわっ！？」

突然の激しい揺れに、職員達の何人かが足下をすくわれた。

「な、何だ！？」

イヤという程、床にキスを余儀なくされた職員の一人が怒鳴る。

「何だ！？」

「地震です！」

事態が一瞬、把握できなかった職員は、自分の勤め先を思い出し、赤面した。

棚に置かれたファイルは軒並み床に散乱し、固定されていなかったパソコンが床の上で無惨な姿をさらしている。

「Ｍ５クラス！」

「震源は！？」

「新潟！柏崎！震源の深さは――ほぼ地表！」

●横須賀　帝国海軍衛星監視センター

「……」

「……」

スタッフの全員が、その光景を呆然と見つめていた。

人工衛星が映し出しているのは、高さ数千メートルに達するキノコ雲だ。

「核……か？」

職員の一人の乾いた声に、誰かが答えた。

「放射線の反応は――基準値以下だ」

「原発は！？」

「待て。今、計測中だ」
コンピューター相手に格闘する別の職員が結論づけたのは、意外な答えだった。

●東京都　統合参謀本部
「消滅？」
「はい」
居合わせた将官を前に、スタッフが答えた。
「観測結果を精査しました――あの爆発の結果」
スタッフは、言葉を一瞬、飲み込んだ後、続けた。
「柏崎原発、そして刈羽村地一帯が、物理的に消滅しました」
スタッフの操作でプロジェクターに写真が映し出される
軍事衛星の写真だ。
柏崎原発付近の写真が二枚。
最新の写真は、それまでの陸地が海に変わっていた。
「一体、何が起こったんだ？」
「原発の……いや、周辺一帯の質量がどの程度の代物かわかった上で起きたのか？」
「空間がねじ曲がりました。未だに周辺には空間異常が発生しております」
「敵は、目的を果たしたというのか」
「敵の目的が原発の制圧なら――正直、失敗なのか成功なのか、その判断さえ出来ません」
「海軍（われわれ）があれほどの損害を被ったオチがこれか」
「派遣艦隊の被害は？」
「大損害だ」
海軍参謀の一人が、近衛側参謀に答えた。
「小型艦艇は半数近くが戦没。小沢提督の決断が遅ければ、全滅さえありえた。とにかく、生還できた艦も、津波と衝撃波で艦構造物

のかなりに損害が出ている。放射線に備え、艦の内部に乗組員を避難させていたおかげで、人的損害だけは最小限度に抑えられたものの……」

「フム――周辺地区への被害は？」

「私的見解では――最悪です」

スタッフが答えた。

「原発から半径３キロが消滅。約３０キロ以内は焦土と化し、爆風は北陸どころか、大陸にまで届きました。日本海沿岸の広い範囲で、熱を含んだ衝撃波と津波により壊滅的損害が生じています」

「魔族軍の動きは？」

「不幸中の幸いは――そこです」

●長野県小県郡日村跡　魔族軍幕営

「全滅？」

ガムロはアイリーンの報告に目を剥いた。

「どういうことだ！２０万近い大兵力だぞ？」

「門（ゲート）の封印解除まではモニターされています」

アイリーンは答えた。

「現在、情報部が解析中ですが、全部隊が爆発に巻き込まれたことは間違いない模様。続報をお待ち下さい」

●東京都　首相官邸　災害対策本部

「魔族軍を吹き飛ばしたのは事実何だな？」

「はい。その通りです首相」

「我が軍の勝利、か」

「我が陸軍の、です」

鈴木は頷いた。

「加茂付近に展開した我が陸軍のＭＬＲＳ部隊の一斉射撃により、

原発付近の敵を殲滅しました。現状、原発付近での魔族軍の動きは確認されていません」
「よくやった。さすが鈴木君だ」

●長野県小県郡日村跡　魔族軍幕営
「ブービートラップ？」
「はい」
柏崎門（ゲート）で何が起きたかを調べていた技師が、ガムロの前で青い顔で頷いた。
「門（ゲート）開放と同時に、作動する罠（トラップ）が仕掛けられていました。門（ゲート）が開放されるエネルギーにくわえ、主門周辺（メイン・ゲート）に、超小型の支門（サブ・ゲート）をいくつも設置し、全ての門（ゲート）に爆発物を仕掛けておき、主門（メイン・ゲート）が開放されると同時に、支門（サブ・ゲート）まで含め一斉に爆発の連鎖が発生する仕組みです」
「巻き込まれた者は」
「粉々で済むはずがありません」
技師は答えた。
「支門（サブ・ゲート）は、日村に仕掛けられていた防護用トラップと同じモノが流用されたことは間違いありません。現実に地形が変わりました」
「……」
「ヴォルトモード卿は」
「詳しく調べてみる必要はあります」
技師は言った。
「このトラップで、卿が亡くなられたと誤認させること。それが最大の罠である可能性があります」
「……」

腕組みをして、しばらく瞑目していたガムロは言った。
「アイリーン」
「はい」
控えていた副官が一歩前へ出た。
「奴らに連絡をとれ。今回の事態に対し、どう責任をとってくれるのかとな」

●東京都　統合参謀本部
「柏崎が壊滅したという、この事態を」
本部の一角。
利用者が基本的にいない区画の喫煙室がタバコの煙で満たされる。
入り口には、“清掃中”の立て看板がかけられている。
「誰が、どのように陛下にご報告申し上げるか、それが問題だ」
「そんなものぁ」
タバコをくゆらせる作業着姿の男が答えた。
あの後藤だ。
「お偉いさん達の仕事でしょう？」
くわえタバコの後藤は、相変わらずのやる気のない目つきで、脂（ヤニ）で汚れた天井を見上げた。
「それこそ総理大臣の仕事だ。あたしゃ、連中ほどの給料もらってないですからね」
「後藤君」
「首相に、普段通りに陛下の悪口雑言喋らせて、んで、それを宮内省のホームページなり、ウェブに流したらどうです？首相お得意の報道管制も、草の根レベルじゃザルだってご存じでしょう？」
「人の口に戸板は立てられんよ」
男は太い鼻の穴から紫煙を吐き出した。
「……で？」
「蹂躙だけでも我慢できないのに、国土の一部を消滅させられたん

です。あたしの“上司”連中ならね？“かなりヤバい”こと考えてますよ。それはもう」
「首相達は気づくだろうな」
「“上”は、“それ”を意図的に流すでしょうからねぇ」
フゥッ。
二人が同時にタバコの煙を吐き出した。
「流されたら、どうなると思う？」
「政府としては、世論操作に必死こいて政権維持したい所でしょう。何しろ、国民騙して選挙に勝って、まだ1年だ。連中にとって、国民の犠牲は考える必要さえないことでしょうし」
「各地の避難が相当遅れていると聞く」
「当然でしょう」
後藤は笑った。
「世の中、そんなに上手く運ぶもんじゃありません」
後藤はタバコを灰皿でねじった。
「まぁ、あんたも大変ですな。反鈴木派は風前の灯火だというのに」
「内心では、皆がおかしいと思っているんだ」
相手は懐から新しいタバコを取り出した。
「だからこそ、私がここにいる」
「……成る程？」
後藤は頷くと喫煙室のドアをあけた。
「まぁ、こっちもこっちでいろいろあるんで？協力する所はさせていただきますよ？遠藤少佐」

●長野県佐久防衛線
柏崎原発消滅。
後に柏崎防衛戦と呼ばれる戦いは、こうして幕を閉じた。
人類側の敗退とも呼べず、魔族軍を全滅させた壮挙とも呼べない、奇妙な終わりだった。

人類対魔族軍の勢力図の中に生じた一時的な空白を埋めたのは、魔族軍の方だった。

満足な抵抗が出来ない人類相手に勢いづく魔族軍は、そのまま石川県及び福井県方面へと侵攻を開始。

柏崎の爆発で生じた大津波に襲われた沿岸部を抱える同地に抵抗する術はなかった。

主君の奪還に失敗したものの、魔族軍は決して、その侵攻の手を緩めなかった。

魔族軍は機動性に優れた中型・小型妖魔を大量に投入。

各地で飽和攻撃主体で人類相手に優位な戦いを進めている。

人類は、山間部の地形を活かした地形防御で、何とか防衛線を維持したいと躍起だ。

そんな戦場の一つが、東京方面への重要なルートとなる佐久・軽井沢防衛線だ。

――ったく、なんてザマだ！

陸軍から米軍の観戦武官を命じられた佐伯少佐は、泥まみれになりながら、そう毒づいた。

ついさっきまで、

相手は戦車も持たないせいぜいが槍と弓だ。

世界に誇る米軍の圧倒的な弾幕の前に、あんな装備では為す術もなく潰されるぞ？

……本気でそう思っていた。

ところが今はどうだ？

他国から派遣され、自分と同じく観戦の任務についていた軍人達は、表現のしようのない肉塊に姿を変えている。

頭を半分割られたどこかの陸軍将校の死体が一番原型をとどめて

いた。
それをまともに見たせいでこみ上げてきた吐き気をなんとかおさえ、震える手で鉄兜を被ると、佐伯は塹壕から頭を出そうとした。
状況を知りたい。
ただ、それだけの理由だ。
だが、不意に首根っこをつかまれ、塹壕の中に引き倒された。
引き倒したのは、自分より年上の厳つい顔の部下だった。
階級は軍曹。
その彼が、佐伯に怒鳴った。
「少佐！あんた、死にたいんですかっ！？」
実戦経験は圧倒的に、この軍曹の方が上だ。
軍も、むしろ彼の観戦報告にこそ期待しているといって良い。
その軍曹に怒鳴られ、佐伯はバカのように何度も首を横に振った。
「こんな砲撃にさらされてる中で、バカみたいに突っ立たないで下さいよっ！」
軍曹はアゴで周囲をしゃくってみせた。
「――こうなりますよ？」
先程まで人間だった肉塊を前に、佐伯は、ただ、頷くしかなかった。

地雷原を突破した魔族軍は、驚くほどのスピードで米軍陣地へ肉薄。
砲台として機能していた戦車兵達に襲いかかっていた。
まず、先陣を切ったのは、サソリを連想させる中型妖魔、トゥース。
全長１０メートル程度。節足動物さながらの六本脚で移動するこの妖魔を視認したＭ１の戦車長は、即座に戦車砲による攻撃を命じた。
「撃てっ！」
ドンッ！

至近距離からの戦車砲の直撃を受け、一体が四散した。
「撃ち続けろっ！」
戦車長は、悲鳴に近い叫び声で部下に命じた。
「撃ってくれっ！」
数が違いすぎる。
一匹倒しても、即座に別な一匹がその穴を埋めてしまう。
戦車砲の発射速度では、そのスピードに対処出来ない！
「同軸機銃撃てっ！エンジンかかるかっ！？」
遠隔操作で動く１２．７ミリ機銃を操作しつつ、戦車長が怒鳴った。
「ノーサー！」操縦手が答える。
「かけろっ！」
「かかりませんっ！」
「全員、戦車を放棄！逃げろ！」
「む、無茶だ！」
装填手が怒鳴った。
「ここで撃ち続けなきゃ、俺達は――――！」
ドンッ！
金属が潰されるような音。
その中に、
カシャッ
卵の殻を割ったような音が混じったのを、戦車長は聞いた。
それが、装填手の頭が潰された音だと、彼は知らない。
「何だ！？」
ドンッ！
ドンッ！
音が響くたびに、戦車が揺れた。
「そ、装甲が！」
砲手が悲鳴を上げた。
「装甲が破られてるっ！」

馬鹿な！
戦車長はそれを否定しようとして、
ドシャッ！
自分の目の前に、突如、現れた物体に言葉を止められた。
銀色の尖った金属物体。
違う。
戦車長は即座に理解した。
目の前のそれは、ペリスコープからのぞいた時に見た、敵の脚だ。
――敵は、戦車の装甲を、こんなに簡単に？
だめだ！
戦車長が、再度、部下に脱出を命じようとした次の瞬間、トゥースの爪が、装甲を貫き、信管の装着された砲弾を砕いた。

ズゥゥンッ！

その爆発は、佐伯の目にも入った。
すでに最前線であるＭ１部隊は壊滅状態だ。
理由ははっきりしている。
戦車の機動性を無視し、砲台扱いしたのは問題ではない。
数だ。
毎分１０発程度の戦車砲では、対処しきれない飽和攻撃が原因だ。
すでにあちこちで白兵戦が始まっている。
機銃の音。
兵士達の叫び。
悲鳴。
この世におけるあらゆる“負の音”が、佐伯の耳を支配する。
それでも、米軍は情勢を盛り返そうと躍起になっている。

――こんなんじゃ。

佐伯は痛切に思った。

――勝てない！

上層部は“決戦兵器”とか呼んで新型戦車に血眼になっているが、世界最強のＭ１戦車で止められない敵を相手に、新型戦車なんて配備して何の意味がある？

――もっと

――もっと効果的な兵器がいる！

それが何か、佐伯もすぐには思いつかなかった。

ただ、“それ”が必要だという焦りにも似た感情だけは、抑えられないほど強く生じている。

「砲兵隊は！」

「全滅した！」

状況視察に、塹壕を駆け回った佐伯に、ある兵が答えた。

「最初の攻撃で根こそぎ殺られた！他ももうズタズタだ！」

「どうするんだ！」

「もう少し持ちこたえろ！そう、命じられた！」

「誰に！」

「上に決まってるだろうが！」

「撤退命令は！？」

駆け出そうとする兵士の肩を掴んだ佐伯。

その手を払いのけた米兵が、小銃を佐伯に向けた。

「メサイアが来るんだ！それまでの辛抱だってよ！」

兵は、そう怒鳴ると、持ち場に戻るのだろう、弾帯を首に幾重にも巻いて駆け出していった。

メサイアが来る？

それで戦局を挽回させるつもりか？
ええいっ！
ここにいても何もわからん！
「軍曹っ！司令部へ行くぞ！」
「少佐っ！」
軍曹が駆け出した佐伯を塹壕の底へと押し倒した。
ぬかるんだ塹壕の土が顔面を汚す不快感にたまら顔を上げた佐伯の頭上を、何かが抜けていった。
銀色の兵器。
佐伯の目にそう映ったのは、陣地にまで侵入したトゥースだった。
陣地の中に敵が侵入した証拠。
その意味はイヤでもわかる。
全滅だ。
ギャアッ！
鈍い音と共に、短い悲鳴が佐伯の元に届いた。
先程の兵士が、塹壕の角で肉片に変わっていた。
「ここは――死んだフリしましょうよ。少佐」
その光景を目の当たりにした佐伯は、股間になま暖かいものを感じた。
「命あってのモノダネだからな」
佐伯は、濡れた股間を恥ずかしく思いつつ、すぐ近くに壊れたドアを見つけた。
丁度、肉片に変わった兵士のすぐ近くだ。
「軍曹」
「はっ」
「あの部屋に籠もろう。ドアは――」
ドアの近くには、他にも何人もの米兵の死体が転がっていた。
「“アレ”でいい」
軍曹は短く頷くと、佐伯と共にドアめがけて一気に駆け出した。

「撃ち続けろっ！」

シェリダン戦車隊を率いていたジョン・エリック大尉の怒鳴り声が、機関銃の射撃音をかき消した。

全く。なんてラッキーなんだ。

戦車から降ろした機関銃２丁を両手で撃ちまくるエリックは、自分が神に祝福されていることを肌身で感じた。

エリックのシェリダン部隊は、弓兵の第二射攻撃により、正面装甲を破壊されて即座に擱座したが、全車が射撃だけは可能の状態で、砲弾が尽きるまで撃ち続けることが出来たのだ。

抵抗し続けるだけでも、エリック達の生存の可能性は格段に違う。

さらにエリック達にとって幸運は続いた。

Ｍ１部隊支援のための移動中に攻撃を受けた場所が、弾薬集積所の真横だったのだ。

弓による攻撃は、集積所に一発も命中していないのも、エリック達の幸運の証といえる。

集積所の弾薬は、ほとんど小銃弾か機関銃弾に限られたが、エリック達は、集積所の備蓄弾薬を湯水のように撃ちまくることが出来る。

「近づけさせなければ何とかなる！」

部下を激励しつつ、機銃のトリガーを引き続け、指揮官としての規範を示すエリックの部下達は、既に“銀色のサソリ”、トゥースを１０匹以上、槍兵を２０体以上、仕留めていた。

だが――

他の部隊は惨憺たるものだった。

槍兵の持つ槍の長さは約６メートル。

一突きでトーチカを中の兵ごと貫き殺す。

もっと厄介なのは、クロスボウを装備する弩兵（どへい）だ。
最初こそ、敵が手にするクロスボウを、一発一発、弦を引かねばならない長弓と混同していた米兵達だったが、今ではそんなことを考える愚か者はいない。
クロスボウの形状こそしているが、発射速度そのものは、自動小銃と変わらないのだ。
エリック達の判断では、このクロスボウについては、以下の通りとなる。
・口径は9ミリ～12．7ミリ相当。
・魔法の矢を撃ち出し、連射速度は同口径の機関銃と大差ない。
・唯一の救いは、弾丸の速度が弓矢と変わらず遅い。
・上手くすれば避けることが出来る。
そんな弩兵のクロスボウの支援射撃を受け、槍兵が突撃、敵を殲滅。
それが、魔族軍の攻撃パターンだ。
クロスボウ攻撃で土嚢を吹き飛ばされたトーチカ部隊は、槍兵に突き刺し殺されていく。
ある兵士が、槍で貫かれたまま、宙を舞い、エリック達の近くに投げ捨てられた。
自分達への完全な威嚇だ。
「くそっ！」
その様子を目の当たりにしたエリックは、自らを叱咤した。
考えろ！
どうすれば、生き延びられる？
それを、考えろ！
クソッ！
考えろ！
俺っ！
エリックはガンガンと頭を叩いた。
自分は指揮官だ。

部下を無駄死にさせるワケにはいかないんだ！

――そうか。

考えてみればそうだ。

敵の有効射程は最も近くて５メートル。

つまり、５メートル以内に近づけさせなければいい。

敵の攻撃は（航空兵器か、長弓が襲ってこない限り）シェリダンの残骸が凌いでくれる。

５メートル以内に近づいた敵を皆殺しに出来る兵器があればいい。

機関銃だけでは頼りない。

何か、敵の足りない脳ミソでも恐れさせることが出来る兵器は――

――

エリックは素早く、弾薬集積所を見回した。

弾薬ケースが散乱するその中。

エリックは見つけた。

ケースに書かれたその名。

ｆｌａｍｅｔｈｒｏｗｅｒ（火炎放射器）。

「――ジャクソンっ！」

――もうダメか。

佐伯は死を覚悟した。

上で聞こえてくる銃声は、圧倒的に数が減っている。

米兵の残存数が少ないことの証拠だ。

一方、佐伯がいる塹壕は、敵に制圧されたと見ていい。

塹壕に掘られた部屋の入り口。

山積みになった米兵の死体を、槍兵達が剣や槍でメッタ刺しにして、その死を確かめる光景を、佐伯と軍曹は、部屋の中に転がって

いたベッドの残骸の下からのぞいていた。
ギャウォ
槍兵の一匹が、その犬面で吠えると、
ギャ
他の槍兵が頷き、どこかへと走り去っていった。
佐伯達は、あたりが静かになるまで、じっ。としていた。
「た、助かった……」
佐伯は安堵のため息をこぼした。
「ヤンキーに悪いですが……なんとかなりましたな」
軍曹もため息を漏らす。
「少佐の機転に感謝するだけです」
「止せ」
佐伯は一瞬、吹き出しそうになって慌てて口を押さえた。
「腰抜けで、戦功より人事で出世しただけだ――それより軍曹」
「はっ」
「――どうしたものか。意見を聞きたいんだが？」
「そうですねぇ……」
軍曹にもどうしようもない。それは、その口調でわかる。
「私が、もっと勇敢なら、ここでバシッと妙案が出るのかもしれないが」
「勇敢と無謀は違いますよ。少佐」
軍曹は言った。
「あなたは、自分では腰抜けといいますが、そこそこの奇策で危機をくぐり抜けてきたのです――ここで生きているのが、その証拠ですよ」
「最後の最後で、部下に評価されていたと知れたか……軍曹」
「はっ」
「ありがとう……今のうちに言っておく」
「生き残ったら、言ってください」

次の瞬間――――

二人は耳を押さえて蹲ってしまった。

塹壕の中にいても耐えられないほどのすさまじい音が、空間を支配した。

全く、耳が聞こえない。

音響爆弾か？

その佐伯の判断は、大凡、間違っていなかった。

それは確かに、大音響で敵の判断を狂わせる兵器が使用されたからだ。

Ｍ２２１音響爆弾。

ロケット発射によって撃ち出され、敵陣上空で爆発。大音響で敵陣を混乱させるための兵器。

佐伯は、そしてエリックは、それがどういう時に使われるか知っていた。

「軍曹！」

耳鳴りする耳を無視して、佐伯は怒鳴った。

「メサイアが来るっ！

同じ頃、

「塹壕に逃げ込めっ！」

火炎放射器のトリガーを引きつつ、エリックも部下に命じた。

「メサイアが来るっ！」

弾薬集積所近くの塹壕に、兵士達は一斉に駆け出した。

エリックが塹壕に飛び降りたのと、爆風がエリックを襲ったのは、ほとんど同時だった。

「うおっ！？」

爆風に吹き飛ばされたエリックには、何が起きたかすぐにわかった。

「司令部め、陣地全体に対する攻撃を許可しやがったな！？」

ドドド

ミシンのように切れ目のない爆発音が世界のあらゆるモノを揺らす中、エリックとその部下は、鼓膜が破れないことだけを祈りつつ、歯を食いしばり続けた。

ドンッ！

それが、最後の音だった。
塹壕の中からでもわかる。
見上げた空を遮るように立つ小豆色の神の像。

グレイファントムだ。

「――――やった！」
「騎兵隊だっ！」
突然の救援――――騎兵隊の登場に、唖然としたエリック達は、歓声をあげた。
「やっちまえっ！」
「仇を討ってくれっ！」
米兵達の歓声に答えるように、グレイファントム達は動いた。
巨大なタンクを背負った一騎が、トリガーを引き、逃げまどうトゥースや槍兵達を焼き尽くす。
自動小銃を構える騎が、その速射攻撃にでトゥース達を粉砕し、槍兵や弩兵を踏みつぶす。
人間が蟻を踏みつぶすように、グレイファントムは、魔族軍を文字通り抹殺していった。
その圧倒的な攻撃の前に、魔族軍は為す術もなく潰走していくしかない。

ドーン！ドンドンドンッ！

銅鑼の音が響き渡り、魔族軍が後退していく。

「た……助かった」

佐伯はその場にへたりこんだ。

地面の感触が、今はとても素晴らしく感じる。

「騎兵隊……ですな」

軍曹が感嘆のため息と共に、そう呟く。

その視線の先には、小豆色のグレイファントムが立っている。

「今回ばかりは、感謝どころじゃないな」

うわーっ！

やったぁぁっ！

かろうじて生き残っていた兵士達があちこちで歓声を上げている。

佐伯もその中に入ろうと、立ち上がった。

その直後――――

ガギィィィンッ！

ズギィィンッ！

連続する鈍い音が全てを支配した。

「……」

何が起きた？

得体の知れない水色のメサイアが、グレイファントムの胴体とつながっている。

水色のメサイアの腕らしい部位とグレイファントムの胴が――

違う。

水色のメサイアの腕、正しくは拳がグレイファントムの胴を貫通しているのだ。

「……」

ポカン。

佐伯はその光景を前に、再びバカのように突っ立ってしまった。

グレイファントムの胴から拳が引き抜かれ、グレイファントムが倒れ伏す。

もう一騎のグレイファントムは？

騎兵隊がこうもあっさり潰れていいはずがない。

佐伯は助けを求めるように、グレイファントムを探した。

いた。

頭部を異様に長い腕にわしづかみにされ、もう一方の腕に仕込まれていたらしい火砲で蜂の巣にされた残骸。

それが佐伯の求めた騎兵隊の姿。

――救いの騎兵隊が全滅したら？

――ありえない。

――理由は？

――作品にならないから。

――それが現実なら？

――関わらないことだ。

水色のメサイアと視線があった。

自分の出した結論に、佐伯は肩をすくめた。

どうやら、関わらずにはいられないらしい。

光が――迫ってきた。

さつきの決断

●太平洋上空
日本晴れ。
そんな言葉がぴったり来る雲一つ無い空を飛行するのは、雛鎧（すうがい）。
そのコクピットに収まるのは美奈代だ。
どこまでも、永遠に広がっているかの如き蒼穹の空が世界を包む。

メサイアに搭乗して以来、最も難しいが、一番楽しみなのが、この飛行訓練だ。

高いところは苦手だが、ここまで高くなれば勝手が違う。

海軍の航空隊にでも志願しておけばよかったな。

美奈代は、ふと、身勝手なことを考えた。

「景色に見取れている場合じゃありませんよ？」
ＭＣ（メサイアコントローラー）の牧野中尉は言った。
「飛行訓練中です」
「……よくわかりますね」
「まぁ、不幸中の幸いは」
牧野中尉は言った。
「都築少尉が釈放されることですか」
「……そうですね」

美奈代は、牧野中尉の言葉に、昨晩のちょっとした騒ぎを思い出した。

深夜、二宮が突然ミーティングを行うと言い出し、美奈代達を集めたが、何故かさつきが出てこなかった。
部屋はものけの空。トイレにもいない。
他に行くところはない。
どこへ行った?と皆が首を傾げていた時、ブリーフィングルームのインターフォンが鳴った。
二宮宛の内線。
呼び出したのは、憲兵隊だ。

――お宅の教え子を捕まえたから引き取りに来てくれ。

さつきが何故捕まったか?
憲兵隊取調室で、廊下にいても聞こえるほどの大音声で二宮に怒鳴られたさつきが白状したところによれば、都築に差し入れをしたかったというのだ。
深夜、灯火管制もあるから、闇夜に紛れて動けばばれないだろうと決行に及んだが、まさかその直後に自分に出頭命令が下り、結果、士官一名所在不明で憲兵隊が動くとは予想さえ出来なかったという。
さつきの不運としか言い様がない。

新潟の家族全員が“死者の樹”のオゾン被害で死んだ。

さつきによれば、傷心の自分を親身になって心配してくれた。
上官に、仇討ちの機会を求めてもくれた。

それが都築だ。

しかも、都築はその結果として、営倉送りになった。

何とか、せめてお礼だけでも言いたい。

さつきはその一心で営倉にむかい、捕まったのだ。

――――反逆、その他危険はなし。

憲兵隊にかなり頭を下げた二宮と長野のおかげで、事態はもみ消されることになったが、さつきは一晩、自室で謹慎処分になった。

目の辺りを真っ赤にして俯くさつきが、美奈代達の前を二宮に付き添われて部屋に向かう。

そんなさつきに、美奈代はかけるべき言葉さえ思い浮かべることが出来なかった。

「――――ま、女心だな」

騒ぎが一段落した後、美奈代相手に宗像が言った。

場所は宗像に割り当てられた個室。

何故かダブルベッドなのが気になるが、美奈代は奨められたパイプ椅子に腰を下ろし、コーヒーをもらった。

「そうだな」

コーヒーをすすりながら、美奈代は頷いた。

あまりのことに眠気が吹き飛んでいた。

このまま部屋に戻っても眠れそうになかった。

「惚れた弱みだな」

ブッ！

その言葉に、美奈代は思わずコーヒーを吹き出し、激しくむせた。

「熱くなかったか？」

吹き出したせいでカップから派手に飛び散ったコーヒーを顔や腕に派手に浴びた美奈代がその場でのたうち回る。

「キープ君にライバル出現でパニックになるのはわかるが」
タオルを渡しながら、あきれ顔の宗像が言った。
「そこまで派手に反応することもあるまい」
「誰がだ！」
美奈代がタオルで顔を拭いながら言った。
「な……何？早瀬って、都築のこと」
「気づかなかったのか？」
宗像は信じられない。という顔で美奈代の顔を見た。
「あれほど都築にモーションかけていながら」
「……かけていたのか？」
美奈代は記憶を探したが、心当たりがなかった。
「……ああ、すまん」
宗像が軽く片手で拝むような仕草をした。
「よく考えれば、お前が知らないのは当然だ。さつきはお前に遠慮して、お前のいないところでいろいろと」
「……何していたんだ？」
「都築に差し入れとしてにぎり飯作っていったり」
「ど……どこで材料を手にれたんだ？」
美奈代には、全く想像がつかない。
食事がちゃんととれるのは、食堂だけだ。
はっきり、飲み物以外、間食が出来る環境はない。
自分の飯を確保するだけで精一杯なのに、一体、どうやって？
その疑問に、宗像が答えた。
「最初は、自分の分をこっそりさらしに隠していたが、食堂のオバちゃんが気づいて、それ以来、オバちゃんにわけてもらっていたんだ」
「それを都築が？」
「あいつも大食らいだからな。疲れた。か、腹減った。があいつの定番の文句だろうが」
「……」

「自分の食事を削ってまで、あるいは危険を冒してまで……」
「で、でも……都築もよく」
「さつきも、あの性格だ。“自分も食べるから、あんたも食べなよ”と誘っていたんだよ」
「……」
「女として負けた。と思ったろ？」
「うっ！」
「マッサージまでしていたからな」
「マッサージ？」
「……」
「……」
「どういうマッサージを連想した？」
「宗像っ！」

それが前日のこと。
おかげで寝不足で眠い。
さつきなんて一睡も出来なかったろう。
朝食の時には「ドジっちゃった♪」と普段通りのサバサバした顔をしていた。
二宮もあえて昨晩のことに触れようとしない。
それが、美奈代には有り難かった。
「１０００からは模擬演習訓練です。模擬戦の相手は」
牧野中尉が言った。
「早瀬少尉です」

●近衛軍演習場
二宮に言わせると“落とし前”。
それが、この模擬戦だ。

一人一人と3回戦勝負。
全員から3回の勝ちをとるまで終わらせない。
それを聞いた時、“ちょっと待て”と本気で思った。
一対一の勝負を一回やるだけでも、かなり体力と精神力を消耗する。
ジョイスティックを動かして終わりのゲームではない。
演習弾やレーザーで命中判定を行うのではない。
実際に殴れば装甲が凹むどころでは済まない模擬刀を使用しての戦闘だ。
下手すれば、死人も出る。
否、死人が出るべき戦い。
それがメサイアの模擬戦だ。
美奈代・宗像・美晴・山崎……1人3セットで12回渡り合えというのか？
演習場に移動した美奈代は、すこし離れた場所に停車している指揮車両を見た。
中には二宮達が乗って演習の様子を見守っているのだ。
――教官は、事故に見せかけて早瀬を殺そうとしているんじゃないか？
美奈代はそう思った。
疲労のあまり発生した事故は、丁度良い言い逃れだろう。
――冗談じゃない。
美奈代はそう思った。
さつきの演習相手一番手は宗像だった。
演習用の長刀と楯を装備した宗像騎と対峙するさつき騎。
しかし、その騎は、演習用の槍を装備しているが、楯を装備して

いない。
槍一本しか、さつき騎は装備していない。
――――正気か？
槍の穂先をゆったりと下げた姿勢のさつき騎は、美奈代の目には驚くほど自然体に写る。
気負いもなにもない。
まるでその辺を散歩しているような錯覚を受けるほど、落ち着き払っている。
「いいのか？早瀬」
「いつでもおいで」
宗像とさつきの間で、そんなやりとりが交わされている。
「攻撃が命中した方が負け。そういうことだよね？」
「ああ」
「ねえ宗像」
さつきは楽しげに言った。
「カケしない？」
「賭け？」
「私が勝ったら言うこと聞く」
「負けたら私にどんなこと要求されるかわかってるんだろうな？」
宗像は、どこか楽しげにそう訊ねた。
「おっけ♪」
「――――のった」
ダンッ！
美奈代達の前で、長刀と楯を構えた宗像騎が突撃。阻止すべく、

さつき騎が鋭い槍の一撃を繰り出す。
宗像騎が、即座に槍の穂先を弾き、さつき騎の懐に飛び込もうとする。
すくい上げるように振られた刀が槍を弾き、槍が上に跳ね上げられる。
宗像騎は、すでに槍の内側に入り込んでいた。

――宗像の勝ちだ。

美奈代はそう思った。

ガンッ！

その音で、勝負がついた。
「判定　胸部大破――勝者、早瀬」
二宮の声が通信装置に入った。
「――え？」
美奈代には、何が起きたかわからなかった。
槍は弾かれ、楯を持たないさつき騎に宗像騎を阻止することは出来ないはずだ。
「って……な、何が？」
通信モニター上の宗像も、信じられないと言う顔になっていた。
「どう？宗像」
さつきはむしろ楽しげに訊ねた。
「もう終わり？」
「――まだだ！」

宗像は頭に血が上っていることを自覚していた。
はっきり言う。

宗像は、さつきを自分より格下の弱い存在と見なしていた。
その弱い存在に、一矢報いることもなく倒されたことは、宗像のプライドをかなり傷つけた。
自分より格下に、演習ででも敗北することは、宗像にとって耐えられることではない。
弾かれた槍を即座にひっこめ、突き技で来たことはすぐにわかった。
ただ、その速度に速さに、体が反応しきれなかっただけだ。
「二回目――いくぞっ！」
「あいよ」
間合いを取り直し、再び突撃する宗像。
その宗像騎を槍の突き技が襲う。
「くっ！」
紙一重でかわし、懐を目指す宗像騎を接近させまいとするさつき騎からは、弾丸のような突きの連続技が繰り出される。
槍の穂先が弾丸のように回転して見える。
その手数の多さに、宗像は接近することが出来ない。
楯を前面に出しそうとすれば、足を狙ってくる。
足を守ろうと楯を下げれば、頭部を槍がかすめていく。
接近すれば接近したで、遠ざかれば遠ざかったで、決して槍の突きが鈍ることはない。
距離を完全に無視した格好で、宗像は槍に翻弄されていく。
致命傷ではないという理由なんだろう。
槍がかする度に、宗像の騎体に傷が付く。
その瞬間の鈍い音が、宗像の神経を逆撫でする。
「このおっ！」
完全に熱くなった宗像は、突き出された槍めがけてシールドで殴りかかった。
ガンッ！
シールドが槍に命中。そのショックはかなり大きかったらしい。

真横に飛ばされそうになった槍を抑えようと踏ん張ったため、さつき騎のバランスが大きく崩れた。
「――――そこっ！」
ついに剣のリーチにさつき騎をとらえた。
槍は宗像騎から見て真横を向いている。
槍を引っ込めて繰り出すより先に仕留められる！
宗像は必殺の念を込め、長刀を振り下ろそうとして――――

ブンッ！

真横から襲ってきた一撃をかろうじてかわした。

「なっ！？」

槍の柄の一撃だ。
さつきは、槍を一回転させて宗像を襲った。
攻撃のタイミングを失った宗像騎を、再び槍の一撃が襲った。

●研修センター食堂
「全戦全勝♪」
美奈代達全員からせしめたデザートをほおばりながら、さつきは楽しげにVサインを出した。
「……」
「何？」
さつきが覗き込むような仕草で、目の前の宗像を見た。
「負けたのが、そんなに悔しい？」
「……別に」
宗像は額に青筋を立てながら、そっぽをむいた。

その仕草が、宗像の今の心情を語っている。
「ふぅん？」
さすがに気分がいいんだろう。
ニマニマとした顔でさつきが何度も頷いた。
「さすがですねぇ」
美晴は感心した声をあげた。
「宝蔵院流槍術――――噂には聞いていましたけど」
「美晴の鈴鹿流薙刀術もかなりだよ」
さつきは言った。
「三度目は正直、ヤバかった」
「それにしても」
何故かげんなりしているのは、美奈代だ。
実際、さつきに勝ったのは美奈代だけといっていい。
だが、
「教官から勝ち星取り上げられたの、そんなに残念だった？」
「……いや」
何故か美奈代はしきりに足を押さえていた。
「装甲板の上に正座させられて説教じゃ、さすがに……」
「あの装甲って三角形の木を並べたようなものですから、正座なんてしたら……痛いでしょう」
「山崎君の言うとおりだよ。いくらそこに正座しろっていわれたからって、あんな所に正座するなんて」
「すぐ終わると思ったんだ……」
美奈代が怒られた理由。

それは、美奈代の戦い方にあった。

一回戦で、美奈代は、即座に突き出された槍を腋（わき）に挟み込んで突き技でさつき騎を仕留めた。
二回戦、美奈代は足を狙った槍をシールドで地面に叩き付け、タ

ックルする要領でさつき騎に襲いかかり、居合いの一撃で仕留めた。
三回戦、突き出された槍を掴むと、そのまま後ろに引っ張り、バランスを崩したさつき騎を逆袈裟切りに斬って仕留めた。

脇に挟まれた際に変形し、或いは地面に叩き付けられてへしゃげ、力任せに握りしめたせいで潰れたりと、美奈代がメサイアのパワーを省みないことをしでかしたそのおかげで、模擬槍三本が使い物にならなくなった。

美奈代は、これで怒られたのだ。

演習前に渡された交戦規則には、しっかりと書かれていた。
・相手の武器を掴むなどして武器を使用不能にすることは禁止する。
・武器破壊攻撃は、これを禁止する。

「書類をよく読めと、何度言ったらわかるっ！って、二宮教官、カンカンでしたもんね」
「柏……知っていたら止めてくれ」
「実戦なら絶対勝っていたと思うけどさ……まぁ、とにかく」
早瀬は宗像に言った。
「カケは私の勝ち。いいわね？」
宗像は憮然としてそれに頷いた。
「――女に二言はない」

●研修センター　宗像の部屋
宗像に呼び出された美奈代は、宗像の部屋に入った。
「来たか」

「どうした？」
何度か来ているので、慣れていることもあるんだろう。
美奈代はパイプ椅子に勝手に座った。

時間は８時。

美奈代は何故か、しきりに時計を気にしている。

「飲むか？」
宗像は、ベッドの下からポケット瓶を取り出した。
「ち、ちょっと待て！」
美奈代はびっくりして止めた。
「お前、未成年だろうが！」
「固いこと言うな。寝酒は子供でも飲むだろう？」
「訳ないだろうが！兵営内は禁酒だ！教官にバレたら大目玉だぞ！？」
「こっちのブランデーは二宮教官、こっちのウイスキーは長野教官からまきあげた」
「――は？」
「二宮教官達と、カケをしたんだ」
「お、お前」
「乗ったのは向こうだぞ」
「……何を賭けたんだ」
「さつき相手にお前が勝つ方にさ」
「――へ？」
「相手は宝蔵院流槍術の使い手。いいか？槍術使いってのは、剣術より遙かに実戦では強い。しかもあいつ……さつきは小学校から数えて１０年連続で全国大会一位の伝説を作った女槍術使いだ」
「……お前」
「私も……立ち会った時点で、負けは覚悟していた」

二宮はポケット瓶のふたを開けると、まるで舐めるように飲んだ。
「……さすがにいい酒を飲むな。内親王護衛隊（レイナガーズ）のうわばみの異名を持つだけはある」
「だが、私は負けたんだぞ？」
「実戦なら、勝っていたのはお前だ」
宗像は言った。
「私は教官とのカケに条件をつけた。“メサイア乗りとして、実戦の視点から見て、泉が勝てるか賭けませんか？”とな」
「……あの二人は？」
「負けに賭けた」
「……っ」
「ストレートよりロックが似合うな……そう怒るな」
冷蔵庫を開けながら宗像は言った。
「二宮教官達は、そっちに賭けるしかなかったんだ」
「え？」
「入営前、スカウトで二宮教官と長野教官はさつきを訊ねたことがある。さつきの家の道場でさつきの槍術を確かめるためにな。そこでボロ負けしたんだ」
「……早瀬が？」
「柏の薙刀も同じだ。あっちも全国大会出場回数は5回以上だ」
宗像は、冷蔵庫の中にあった氷を入れたグラスに注意深くウィスキーを入れる。
「自分達が負けた相手だ。ここでお前が勝つ方に賭けたとなれば、二人はお前より弱いと宣言するのと同じだ」
「……」
「ま、無論、剣同士の勝負なら、私は絶対に誰にも負けないが」
「否定しないさ――――で？」
「ん？」
「その話をするために、私を呼んだのか？」
「都築が8時に営倉から出されたのは知っているな？」

「――ああ」
「どうする？」
「とりあえず、様子を見に行こうかと」
「それでそんなにソワソワしているのか？」
「……っ」
「すまないが」
宗像は言った。
「今晩は、諦めてくれ」
「え？」
「……」
「……」
きょとんとして、宗像の顔を見た美奈代は、宗像が何を言いたいのか、察しをつけた。
「……早瀬が行っているのか？」
「約束させられたんだ」
宗像は言った。
「ここで美奈代を足止めするとな」
「っ！」
「怒るな」
宗像は言った。
「お前には染谷がいるだろうが」
「――うっ」
「今頃、解放された都築にさつきが告ってる頃だ」
「わ、私……ちょっと用事が」
「だから待てというに」
宗像は美奈代の腕を掴んだ。
「野暮なマネはするな」
「……うっ」
「二股かけるのは、やめた方がいい。傷つける相手を増やすことになる」

「……そんなつもりはない」
「じゃあ」
「……」
「染谷も好き。都築も嫌いじゃないってのは、どういうつもりだ？」
「……」
「……」
「……」
「……自分でも」
「……」
「よくわからない」
「……泉らしい答えだ」

●翌日　研修センター

夜、美奈代が図書室に呼び出された。
呼び出したのはさつきだ。

図書室への道すがら、美奈代はその日一日のことを思い浮かべていた。
さつきと都築の様子はあからさまにおかしかった。
さつきはチラチラと都築を見ては頬を赤く染め、都築もどこか落ち着かない。
昨晩、二人に何かがあった。
女として、それは何となくわかる。
わからないのは、自分の気持ちだ。

参考資料を収めた図書室は、夜間でも希望者が資料を閲覧出来るように開放されている。
「ご、ごめんね？」
本棚にもたれかかるようにして待っていたさつきは、美奈代の姿

を見ると弾かれたように立った。
「いい。どうした？」
「あ……あのさ」
さつきはどもりながら、まるで言葉を探すように言った。
「つ、都築のことなんだけど――――さ」
「……うん」
「い、泉は、つきあってるんじゃないよね？」
「……うん」
「……そっか」
さつきは言った。
「……惜しいことしたかな」
「ん？」
「あのね？願をかけてみたんだ。槍に」
「槍に？」
「そう。昼間の演習で、全員に勝てたら、都築とつきあってみようって」
「……」
美奈代は青くなった。
それがもし、さつきの願掛けなら、それを破ったのは自分になる。
「でも、ダメだった」
「……すまん」
「ああ！いいのよ！」
さつきはサバサバした顔で言った。
「自分でもさ」
さつきは窓の外に顔を向けた。
青白い月の光が、さつきをスポットライトのように照らし出す。
「――――よく、わかんなかったんだ。都築のこと」
「……えっ？」
その横顔が、美しいと、美奈代は思った。
「で、でも、好きだったんだろう？都築のこと。だから、いろいろ

と」
「……美奈代は」
優しい笑みを浮かべながら、さつきは訊ねた。
「男の子とつきあった経験は、ある？」
「……いや」
「男の子を、好きになったことも？」
「たぶん……ない」
考えてみれば、女としてはかなりさみしい人生だ。
「でしょうね」
さつきは悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「もし、あったら、その質問は出なかったかもしれない。そう思う」
「……」
「私ね？好きだった人と、あいつが似てたから、それでそいつと、都築を重ね合わせてただけかもしれない」
「そ、それは」
「つまり、私は都築に、好きだった人を重ね合わせて、都築に熱を入れてただけかもしれないって、そう思うんだ。
ほら、都築にはいろいろ親切にしてもらったし、それは感謝している。
でもね？
それは同期としての話。
女としては別。
なんか、ずっと違和感感じてたんだ。
それに――」
「それに？」
「都築、好きな人いるって、はっきり言ってたし」
「……」
ハァッ。
さつきはため息をついた。
「何だか、それ聞いたら、私も誰を好きになっているのかわかんな

くなっちゃってさ」
「早瀬なら」
美奈代は言った。
「都築なんてもったいない。もっと早瀬につりあう、素敵な男性は、それこそ掃いて捨てる程いる。私が保証できる」
「……プッ。なにそれ」
「本気で言ってるんだぞ?その、年収とか、いろいろと」
「そっか」
さつきは笑いながら頷いた。
「私も、さっさといい男みつけるように頑張るか」
「そうした方が良い。私も応援するよ」
「……ありがと。それでさ」
「ん?」
「頼みがあるんだ。聞いてくれる?」
「ん?」

さつきの眼は本気だった。

「近いうちに」

その背中から、オーラのような殺気が出ているのを、美奈代は確かに感じ取った。

「――――もう一回、勝負して」

「し、勝負?」

「そう。槍で三連敗したのは、どうしても許せないの。だから、もう一度」

「……わかった」

「約束だよ？」

さつきが伸ばした手を、美奈代は優しく握りしめた。

鳥井峠防衛戦

佐久市防衛線が突破され、魔族軍が群馬県へと侵攻したその日の夜のことだ。

美奈代達のいる研修センターは、天地をひっくり返したような騒ぎになっていた。

サイレンが鳴り響き、ハンガーではメサイアの出撃体勢が整えられようとしている。

美奈代達は戦闘装備のまま、ブリーフィング・ルームに集合を命じられた。

やがて、同じように戦闘装備の二宮と長野が壇上へと立った。

「――――都築」

二宮は言った。

「ずいぶんと待たせたな」

都築は無言で頷いた。

「現在、魔族軍の一部が群馬県まで侵攻。

このまま放置すれば、魔族軍側遠距離攻撃の有効範囲に帝都がかかる。

この状況に対し、近衛はこれ以上、事態の静観を行えないと判断した。

つまり――――

陸軍では最早相手にならない。

そう断じたのだ。

先程、関係省庁全てに対し、近衛軍独自の軍事行動を通達した。

陸軍はかなり文句を言ってきたが、最早近衛は陸軍との戦闘も辞さない旨を通達している。

日付変更をもって、近衛は帝国内における魔族軍と交戦状態に入る」

――――来た！

美奈代は背筋が寒くなるほどの興奮を覚えた。

「当初の目的は、長野群馬県境に展開しつつある魔族軍の迎撃」

美奈代達は、席に着いたまま、緊張しきった目を二宮に向け続ける。

地図を背にした二宮は、指示棒で地図を突いた。

「現在、長野県佐久市付近に展開中の敵の一部が、国道１８号経由で碓氷峠に向かっている。碓氷峠を越されると、敵はそのまま高崎を経て、関東へ侵入する。

これを阻止するため、近衛は陸軍と協力。碓氷峠を絶対防衛線と設定。敵の関東侵入を阻止することになった」

「……」

確かにそうだ。

皆がそう思った。

長野県民には悪いが、群馬経由で関東全域に侵攻して、そのまま暴れられたら、犠牲の数が違いすぎる。

「なお、この攻勢に際しては、少数の部隊が別動部隊として各地の敵陣に対する限定的攻撃を実施する。

目的は、各方面にて人類が攻勢に転じたと魔族軍に誤認させ、敵の矛先が碓氷峠に集中することを避けることだ」

「……」

成る程。

美奈代達は感心したように聞き入っていた。

その美奈代達に、二宮は告げた。

「出撃は今晩２１００。夜戦になる。十分覚悟の上、任務にあたるように」

「敬礼」

整備兵達の帽フレに送られ、教導隊を出撃した美奈代達は、暗闇の中、飛行を続けていた。

『作戦は命じたとおりだ。夜明けまでには全部を終わらせるぞ！』

「はいっ！」

『了解っ！』

鳥井峠は長野県と群馬県を繋ぐ、かつての交通の要衝。

深夜、美奈代達はその鳥井峠に向けて国道１４３号線を移動していた。

「ったく、何考えてこんなモノ」

通信機越しに聞こえてくるさつきのぼやきに、無理もない。と、美奈代は思った。

騎体の状態を示すステータスモニター上は、すでに右腕は負荷を訴えるランプがつきっぱなし。

いざという時、右腕が使えるか、正直、心配だった。

「大体、どこのバカがこんなもの作ったのよ！」

「早瀬、気持ちはわかる。だがわめくな」

「だって！」

モニターの向こうで、さつき騎が手にした“それ”を指さした。

「重いんだもん！」

メサイアの操縦システムであるＳＴＲシステムは、メサイアの状況を疑似感覚として伝えてくる。

つまり、重い物を持てば、操縦者がその重みを感じるのだ。

ズシリと来るそんな重さを感じながら、美奈代も内心、“その通りだ”と頷いた。

「自重だけで、メサイア一騎分ですからねぇ」と山崎。

「メサイア４騎で担いで移動って――――絶対、何かが間違ってる」
と美晴。
「文句を言うな」
美奈代達の前を移動する二宮騎から通信が入った。
「もし、重機関銃隊にでも配属されれば、そんなモノは」
「私達は歩兵じゃありません！」さつきはくってかかった。
「メサイア乗りですっ！」
「やかましい。命令は絶対だ。文句を言わずに移動しろ。それとも、もう一度そのレベルからやり直させるつもりか？」
「そ、それは……」
不承不承、という顔でさつきが頷いた途端だ。

ズリッ！

さつきのメサイアが路肩を踏み外し、バランスを失いかけた。
「わっ！？わわっ！！」
たたらを踏んでさつきは持ちこたえた。
メサイアでコケて胴座なんて、末代までの笑いモノだ。
「バカっ！」
二宮が怒鳴った。
「武装でバランスがかなり違う！特に今回は重武装だ！気を抜くと死ぬぞっ！」

重武装。

確かにそうだろう。

美奈代は騎体のステイタスモニターを見て、そう思った。

３９式３５ミリ機動多砲身重機関砲にロケットランチャー、機関

砲弾を満載したマガジンケース。
これに固定武装と刀剣類、さらにシールドがつく。
過重扱いされて当然なほどの装備だ。
さらに、今回はスゴイおまけがつく。
「折角、国鉄が珍しくその輸送力を発揮して、おおまえ駅まで運んでくれた兵器だ。ムダにすると運賃が上がるぞ。山崎。砲のシステムは理解出来たな？」
「はい。シミュレーション運用は問題有りません」
「よし。期待しているぞ」
二宮達の会話を聞きつつ、移動を開始した途端、メサイアを見に来た地元住民や、避難民達が目を丸くしていたのを、美奈代は忘れることが出来そうもなかった。

担架を持つ要領で運ばれているのは、巨大な重機関銃――41式127ミリ試作機動多砲身重機関砲。
要するに、戦車砲弾を撃ちまくるガドリング砲だ。
重量は100トン。
試作段階でお蔵入りしたのが当然なシロモノだ。
「猫からロケットまで」何でも運ぶをモットーとする国鉄が運び、「水洗トイレからメサイアまで」何でも整備してやるがモットーの近衛軍整備部隊が組み上げたバケモノ。
それが今、鳥井峠近くの山腹に据え付けられた。

「敵は国道144号線と406号線が合流する地点に展開している」
二宮が、部隊のメサイア全騎とデータリンクされた戦況モニターを使って、美奈代達に説明する。
美奈代の目の前で、戦況モニターに国道の合流点が“ポイントA”と表示された。
「我々は、作戦開始の号令を合図に、この地点めがけて、この地点

からロケット砲撃を開始、敵を誘出する。しかる後に敵を砲で叩く。なお、敵が前面1キロ地点に来た時点で後退、この砲は放棄する」
「いいんですか？」
美奈代は思わず訊ねた。
「いい」
二宮はあっさりと答えた。
「後で回収すればいい。第一、こんな重いシロモノ、持ったまま後退戦なんて出来るか」
「……成る程」
砲を死守しろと呼ばれるよりずっとマシだと、そう思った。
「教官、柏です。質問が」
「ん？」
「ミサイルや航空機による支援は？」
「砲兵隊からの支援があるが、空からの支援はない」
「な、何故ですか。敵の数は？敵の種類は？」
「わからん……しかたないだろう」
二宮は眉間に皺を寄せた。
「レーダーの類は無効化されているし、ミサイルは誘導不能。航空機は下手に近づくだけで撃墜される。とにかく、魔法防御されていない電子装備は全く使い物にならない。
我々は目や耳を潰されたも同然なんだ」
「えっ？」
美奈代は耳を疑った。
レーダーが使えない？
ミサイルが誘導不能？
どういう意味？
「お前……世界でも上から数えた方が早いほどの兵力を持つ帝国が、どうしてこうもあっさりと敵の侵攻を許したか、本気で考えたことないのか？」
「……て、てっきり奇襲の成果かなって」

「座学で居眠りばっかりしているからだ――――。だいたい、最後まで待っていたが、米軍の侵攻失敗の原因が何か、貴様等の中で聞いてきたのは宗像だけだ。やっぱり、貴様等全員、再訓練だな」

二宮はどこか楽しげに喉を鳴らした。

「教官」

遅いとは思いつつ、美奈代は訊ねた。

「もう少し詳しく願います」

「……狩野粒子だよ」

二宮は言った。

「狩野粒子影響下では、敵が何を用いたかは不明だが、確実に言えることは、精密誘導装置をはじめ、魔法による防御のない一切の電子装備が役に立たないことだ。

また、極めて強力な電波障害も確認されており、戦場全域が強力なＥＣＭ妨害の中と同じ状況と判断して良い。

だから、索敵に関してはレーダー、その他、電子装備は一切期待するな。

後方の第三眼（サードアイ）部隊の広範囲検索と、個別には魔法探知装置（マジックレーダー）……そして自分自身の目と耳が頼みの綱だ」

「そんな中で、わ、私達、どこまでやれるんですか？」

さつきが上擦った声で言った。

「目も耳も潰されてるようなものじゃないですか」

「メサイア同士のデータリンク、サーチ機能は生きている。互いに情報交換を密にしろ」

二宮は言った。

「魔法の恩恵だな。――――早瀬、貴様が今、何に乗っているかわかっているのか？」

こういう時は、凛とした二宮の声が、美奈代には有り難い。

声だけで不思議とほっとする。

「第一、貴様等のようなヒヨコに何もわからない敵に当たらせるほど、我々は酔狂ではない。

全騎楔壱陣形。
山崎、射撃位置へ移動後、動作確認しておけ。
泉、早瀬、柏の三騎は前面に展開、警戒に当たれ。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を取りに行った宗像と都築もすぐ合流する。
各員、データリンク及び戦域管制官との通信は命綱だぞ」
「了解。フォーメーションかかります」
返答と同時に、各騎が規定通りのフォーメーションを組む。
「小隊指揮官より戦域管制官。こちらは準備完了」
『戦域管制官了解。指示を待て』
『小隊指揮官より各騎、作戦開始まであと１０分。警戒怠るな』
「泉了解」
美奈代は返答しつつ、暗闇の中を見渡した。
メサイアの眼が捉えた情報。そして戦闘に必要な情報は、すべて網膜に投射される。
最初は違和感を覚えたが、今では逆に、こうで無ければ不安になる。
美奈代は目に映る全ての情報に注意を払いつつ、“さくら”に言った。
「それにしても……“さくら”、あんたがパートナーでホッとした」
「うんっ！マスター！」
“さくら”は嬉しそうに美奈代の首に抱きついた。
この子にマスターと呼ばれて以来のつきあいだが、美奈代には、何だか本当の娘のようにさえ思えてならない。
「よしよし♪」
甘える“さくら”をあやす美奈代だが、
「……」
不意に“さくら”を離した。
月に照らし出された木々が風に揺れる。
ただ、その揺れが、一部だけ異様だった。
そう、感じたからだ。

「どうしたの？」
「“さくら”。索敵レベルは？」
「Ｃ２レベルの拡散照射。戦時待機中の平均レベルだよ？」
「拡散ってことは、弱いってことだよな？」
「うん」
“さくら”は頷いた。
「魔法レーダー波をブワァッってシャワーみたいに出しているんだもん」
「それだけ、弱いってことだよな」
「うん。広く浅くだから」
「――“さくら”。１１時方向へ指向索敵一回」
「？うん」
それまで全周囲に均等に放たれていたメサイアの索敵センサーが、１１時方向に向け集約された。
「１１時方向にアンノウン多数、数は――測定限界以上！」
“さくら”が悲鳴に近い声を上げた。
「泉より教官！」
『データリンクは通じている』
二宮がすぐに返答を返した。
『よくやった。小隊指揮官より戦域管制官！監視はどうなっていた！』
『こちら戦域管制官、衛星よりのデータは正常。周辺にストレンジャーは発見されていない』
『米国製なんて買うからだっ！――第三眼はどうしたんだ！』
『買わされたの間違いだ。衛星は正常。繰り返す。衛星からの情報は正常。状況グリーン』
『画面より外を見なさいっ！――戦闘開始許可を求む！このままでは、ここを支えきれない！』
『戦闘を許可する。後方に待機中の陸軍砲兵隊からの砲撃支援は時間がかかる。推定１２００秒』

『その前に潰されるぞっ！――――全騎、全武装使用自由！戦闘態勢に移行！』

泉はその声に力強く頷いた。

ガンッ！

ガンッ！

フレーム越しに伝わる振動が武装のセフティが解除を伝える。

『各ＭＣ（メサイアコントローラー）はランチャーコントロールを唯に渡せ。唯、最初が肝心だ。仕留めろ』

『了解』

美奈代の前で、ステイタスコントロールの一部、武装のうち、ロケットランチャーの横に『外部コントロール』の表示が出る。

これで、ロケットランチャーは美奈代達の手から離れた。

『山崎、機関砲に実包装填』

『り、了解』

メサイアの手が機関砲のレバーを操作。機関砲に１２０ミリ戦車砲が装填された。

毎分の発射レートが１００発では効かないバケモノだ。

あるのは心強いが、

ごくっ。

美奈代は唾を飲み込んだ。

数が、違いすぎる。

機関砲につながる巨大なリングベルトに繋がれた戦車砲の数は三千発。

兵士達数百人が必死にベルトにはめ込むこと１０時間かかったという代物だ。

それでも、一発一発で妖魔を仕留めても三千匹。

敵の数は、その数倍と見繕って良い。

「マスター」

“さくら”が、ぽんっ。と美奈代の肩を叩いた。

「ん？」

「――震えてるよ？」

「えっ？」

自分では自覚がなかったが、見ると、コントロールユニットを握っていた手が無意識に震えていた。

情けないっ！

美奈代は自分を叱った。

父が見たら泣くぞ！？

そう、叱った。

だが、それでどうなる？

震えが止まるはずもない。

「……怖い？」

“さくら”が心配そうな顔でのぞき込んでくる。

「いや。心配ない」

美奈代は強がった。

「“さくら”を守るんだからな！」

「――うんっ！」

『ロケット弾発射――着弾まで12秒。同時に各騎、照明弾発射』
地上では爆発の閃光が、天空では照明弾が辺りを昼間のように照らし出した。
そこに美奈代達が見たのは――異形の集団だった。

『な、何よアレっ！』
さつきの悲鳴は、聞いた美奈代の悲鳴でもあった。

タコに似た頭部を持つサソリ。
イカのような触腕を無数に生やしたイモムシ。
ぬらぬらした鱗に覆われた山のように大きなゴム状の身体を持つ、分類不能のバケモノ。
まるで百鬼夜行さながらの光景が美奈代達めがけて迫ってくる。

『撃てっ！死にたくなかったら撃てっ！』
二宮教官の叱咤に弾かれるように、美奈代はMC（メサイアコントローラー）に告げた。
「少尉っ、射撃準備！」
「り、了解！火器管制はこちらが！」
「目標選定、願いますっ！」
「了解！右4番から！」

近衛軍のメサイアは、
メサイアの眼に映る映像を映すスクリーン（スクリーンモニター）

の他に、
メサイアの状態を示すステータスモニター。
戦場の情報を示す戦況モニターがある。
これらを『基本モニター』と呼ぶ。
だが、激しい動きをする中で、モニターを確認しようとする騎士の視線の移動は、時として情報の見落としや、致命的な状況を産み出しかねない。
したがって、戦闘中は、これらをオフにし（マニュアルにて使用は可能）、戦闘継続に必要な様々なデータを、騎士の網膜に情報を直接投射し、基本モニターに視線を移動させずに済ませるシステムを採用している。

『疑似空間モニター』と呼ぶ。

美奈代の目が、スクリーンモニターを見ると、他に必要な情報が自然と空間に浮かんで見える。

各種兵装の残弾といった数値やターゲットに関する情報。
彼我の布陣状況。
ターゲットへの照準。
戦闘に必要なほぼ全てだ。
暗視装置を含むメサイアの複合眼と搭載システムが合成した映像。
そこに映し出される敵に赤い丸がつく。
赤い丸。
それは、敵を意味する。
丸の真ん中にはすべて番号がふられ、美奈代はその中から素早く４を探し、その数字を睨み付けた。
網膜の動きを感知するセンサーが４を感知。
メサイアは４の番号が振られた敵に照準を合わせる。

メサイアの右腕にマウントされた３５ミリ機動速射野砲のＦＣＳが敵を捉え――

美奈代が、トリガーとなっているコントロールユニットの右腕人差し指を引いた。

ＶｏｏｏｏｏｏＭ！！

「ぐっ！」

速射野砲の反動が思ったより激しい。

射撃開始と同時に、右腕が上に跳ね上がりそうになるのを、美奈代は何とか堪えた。

「マーカー４撃破――そのままマーカー３、５，６，の順で！」

「３５６了解！――山崎の射撃はまだ！？」

『編隊指揮官騎より全騎！』二宮だ。

『４１式にトラブル！射撃開始まで時間がかかる！』

『うそっ！』

さつきと美晴。それぞれの騎が、メサイアの大腿部を覆うサイドスカートに取り付けられたメサイア用大型手榴弾を投擲した。

柄付手榴弾をそのまま巨大化させたようなシロモノだが、中身は違う。

投擲から数秒で弾頭部分が分解、子爆弾をばらまく一種の集束爆弾だ。

手榴弾が妖魔の群の上空で、柄の中に仕込まれた点火装置が作動し、妖魔達を次々と吹き飛ばした。

『電圧上がりません！これからコクピットを降りて電気系統を調べます！』

『山崎だけじゃ不安だ！二宮中佐、自分も降りますっ！』

『長野大尉、頼むっ！全騎、山崎達が騎を降りる！注意しろ！』

『砲撃支援はいつですか！？』美晴の悲鳴に近い声。

『あと、１５００秒にも達していない！』二宮は怒鳴る。
『全騎、ミサイルランチャー排除！もたせろ！――――柏っ！５５式を！』
『はいっ！』美晴はシールドを構えつつランチャーを排除（パージ）、左肩マウントに装備していた兵器を構えた。
５５式１２７ｍｍ機動速射野砲。
１２７ミリ砲弾を連射することが出来る砲。
同口径の４１式が使えない状況では、最も破壊力のある実体弾兵器だ。
ドンッ、ドドンッ！
３５ミリとは異なる激しい音が辺りに響く。
『柏！フルオートで撃つな！』
『で、でもっ！』
『弾がもたんぞ！』
４１式のマガジン装弾数は３０発。
マガジン自体、美晴騎は４つしか装備していない。
『は、はいっ！』
『編隊指揮官より全騎！補給弾薬を持った増援が前線基地を発進した！到着まで３００秒！』
美奈代は残弾を確認した。
残り二千発。
すでに半分を使い果たしている。
使い果たし終えれば――――白兵戦だ。

メサイアとは全く勝手の違う敵。

その敵を、今は砲撃で止めている。

止められている。

だが、弾薬が尽きれば――

「早くしろっ！」

美奈代は、射撃スピードを半分に落とし、弾薬の節約に入った。

『長野大尉！まだか！』

『電圧がやっとあがりました！システム正常、射撃開始まで１２０秒！カウント、開始します！長野大尉、先に戻ってくださいっ！』

『わかった！編隊副長（チック・サブリーダー）より各騎、敵の先陣はすでに距離５００！白兵戦に備えろっ！』

「泉了解！」

目の前の敵に３５ミリ砲弾が有効なのもそろそろ限界だ。

斜面を登って攻めているせいか、敵は軽量な小型妖魔が先陣に出ている。

重装甲を誇る大型妖魔は後陣。

美奈代達は、その先陣を叩いているだけなのだ。

先陣を全滅させた所で、大型妖魔達の分厚い皮膚に３５ミリ砲弾は冗談でも有効とは思えない。

「１１時方向！下から来るっ！」

「――ちいっ！」

美奈代は、斜面をはい上がってくる人間サイズの妖魔に照準を定め、トリガーを引いた。

近くをかすめるだけで無事では済まない３５ミリ砲弾が、妖魔達

を肉塊へと変えてゆく。

ピーッ！

コクピットに被弾警告が響き渡ったのは、美奈代が新たな敵に向け、照準を定めようとした、まさにその時だ。

「くそっ！」

美奈代は、とっさに騎体を伏せた。

ドドンッ！！

光のシャワーが伏せた美奈代の騎体の上空を通過していった。

かつて、ステラ達が見たあの攻撃だ。

メサイアすら蒸発させるほどの威力を誇る魔法攻撃――。

伏せるのが遅ければ、美奈代は体の一部さえ残すことが出来、消え去ったろう。

かなり離れた場所を通過したのに、騎体表面の異常加熱警告が出た。

――勝てるのか？

美奈代は震える体を励起しつつ、それでも疑問に思わずにはいられない。

――あんな、バケモノ相手に、勝てるのか？

『各騎、被害報告！』

『柏、無事です！』
『早瀬、被害無し！』
『泉！』
「ぶ、無事ですっ！」
美奈代は怒鳴ると同時に、機関砲を構え直した。

残弾１５００

考えてもしかたないのだ。

今は、やるしかない。

やらなければ、勝つ負けるじゃなくて――死ぬんだ！

死にたくない！

死にたくないっ！

まだ、アイツに抱いてもらってさえいないんだ！

美奈代は機関砲で近づく敵を薙ぎ払い続ける。
腰にマウントした手榴弾を投擲、敵を吹き飛ばすことにだけ専念する。
前線の兵隊として、当然のことだけに専念する。

残弾１０００

『１４３号線に敵が集結中！』
『峠を越させるな！突破されたらアウトだぞ！』
『美奈代！敵がそっちにいく！』

「まかせろっ！」

残弾５００

『増援がそろそろだ！』二宮が怒鳴る。

『よくもたせた！』

すでに敵はモニターを埋めつくばかりの勢いで、美奈代達を半分包囲下に置いていた。

敵は引きつけた。

後は――

『４１式、射撃開始！』

美奈代がその声を聞いたのは、機関砲の残弾が０になった、まさにその時だ。

『よしっ！全騎、増援が弾薬を持ってくる！機関砲を排除（パージ）するな！』

あやうく、パージのレバーを引くところだった美奈代は、すんでの所でレバーを引かずに済んだ。

キィィィィィィッッッ！！

山崎の騎体が構える長大な砲身から、そんな音が聞こえてくる。

砲身が回転を開始した音だ。

敵は面前だ。

――間に合うのか？

美奈代は、祈るような気持ちで山崎騎を見た。

そして、

ＤｏｏｏｏｏｏＭ！！

４１式１２７ミリ機動多砲身重機関砲が火を吹いた。

圧倒的

その言葉がしっくり来ると、美奈代はそう思った。

迫り来る妖魔達は、その火線に砕かれ、吹き飛ばされる。

小型妖魔達を、その衝撃波で砕き、大型妖魔達に直撃して粉砕する。

――勝てるか？

否。

妖魔達が文字通り粉砕される光景を前に、美奈代はすぐにそう結論づけた。

モニター上の敵は射撃開始からすでに半数近くが反応を消している。

――まだ、半分だ。

敵は、損害を全く省みない様子で、斜面を登り続けてくる。
『各騎、接近する小型妖魔をＭＬ（マジックレーザー）で仕留めろ！山崎、撃ち続けろっ！』
二宮が山崎を叱咤する。
『大型妖魔だけでも潰せっ！――――各騎、砲撃支援が早まった！後、３００秒だ！』
『増援が来た！』長野の声に、美奈代は思わず振り返った。
スクリーンに映し出されたのは、斜面すれすれで接近する飛行艇。
そして、それを護衛するように飛行する２騎のメサイアだった。
「味方？」
美奈代は、その２騎共に、見覚えがなかった。
『こちらアエカ０１、チックリーダー、スマン！遅れた！』
『よく来てくれた！』
美奈代達の前で、飛行艇のコンテナベイが解放され、パラシュートのついた何かが落下を開始した。
落下物の四辺に設置されたライトの弱々しい点滅だけが、落下ポイントを教えてくれる。
『荷物はこれだけだ。幸運を！』
『感謝する――――泉、補給コンテナの回収急げっ！柏、早瀬はそのまま！』
「はっ、はいっ！」
美奈代は、敵に背を向け、落下物、つまり、補給物質の詰まったコンテナの落下ポイントに向けて騎体を駆け出した。
『了解っ！』

『４１式の弾薬はないんですかっ！？』
『そいつで終わりだっ！』
二宮がそう怒鳴り終える直前、二宮騎は手にした速射砲を放棄。
抜く手も見せずに抜きはなった刀で上空からの敵を一刀の元に斬り捨てた。
『くそっ！弾幕が薄ければこうなる！――――覚えておきなさいっ！敵は地面を這ってばかりは来ない！』
「はいっ！」
返事をしつつ、美奈代は背後から敵が襲ってこないことだけを願って、コンテナに迫る。
その横を、二騎のメサイアがすり抜けていった。
共に白いメサイアが、敵に向かって進んでいく。
「穴を埋めてくれるのか！？」
『任せろ！』
教官騎を含む編隊所属騎を駆る騎士とは違う声が、美奈代の耳に届いた。
『泉、コンテナ開放の仕方、知っているな！？』
「都築！それに――――宗像！？」
そう。
つい数時間前に別れたはずの仲間の声だった。
『俺達じゃご不満かよ！』
『キャンセルは出来んぞ！？――――教官、宗像です！』
『二宮だ！よく戻ってきた！――――ま、待て！』
二宮騎の真横に着陸した白い騎体。
その背に背負われたタンクと、巨大なホースでつながれた長いノズル。
丁度、巨大な掃除機を背負ったような騎体は、二宮にとって、嫌でも思い出のある存在だった。
『って言って、お前、その騎体はどうした！？それは親王護衛隊（レイナ・ガーズ）専用の』

『はい、“Ｓ３”です』

ＭＤＩＪα－０１５－Ｓ３「幻龍改　アリア」別名・Ｓ３（エススリー）。

指揮官騎兼特別部隊向け専用騎であり、戦場に出ることが多い麗菜殿下の護衛部隊（別名レイナ・ガーズ）向けに開発された特殊騎だ。

今、二宮が駆る幻龍をさらにパワーアップさせた幻龍改をさらに強化した、この時点で一般騎士の駆ることが出来る最強の騎と言える。

……つまり、候補生にすぎない宗像の駆ることが許される騎ではない。

『どうしてそれに乗っている？』

『餞別にもらってきました――ってのは冗談で』

宗像騎が、掃除機のノズルにあたる部分を敵に向けた。

『麗菜殿下直々に命令されました。この騎を貸してやるから、実戦における二宮教官のお墨付きと、折り紙と、のし紙つけて出直してこいと――都築、用意出来ているな！？広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）だ！』

『了解っ！』

『殿下が！？っていうか、各騎！対閃光防御！』

二宮が怒鳴った途端、ノズルから閃光に近い光が放出された。

シュワッ！

背筋の寒くなるような音と共にはき出された音。そして、辺りを真っ白に照らし出す閃光――そして、灼熱の炎が、敵を襲った。

山間部の斜面を登り、接近戦を挑みかけていた妖魔達は、メサイアの作り出した地獄の炎に、ある者は焼き尽くされ、ある者は火だるまになって転げ回った。

『４１式の射撃手、山崎だな！？残弾は！？』

火炎を操る宗像の問いに、山崎が即座に答える。

『あと――――５００発！』

『後方の重装備をやれ！前衛には我々が片づける！』

それまで、近づく敵にまんべんなく展開していた火線が、かなり離れた場所めがけて移動したのを確認した宗像は、そこで思い出したように言った。

『教官、それでいいですね？』

『文句はないと、言いたいが――――』

ズンッ！

二宮騎が、宗像騎の頭上に襲いかかってきた敵を剣の一撃で切り倒し、

『礼にとっておけ！――――頭上がおろそか過ぎる！これでは、折り紙どころか、のし紙もやれん！』

あくまで教官としての態度を崩しはしない。

その二宮に、宗像は、舌打ちしながら答えた。

『チッ……感謝――――しますよ』

「やっ、やっと着いた……」

コンテナを担いだ美奈代騎が皆とようやく合流した。
パラシュートは何の意味もなさず、加えて斜面に落下したものだから、そのまま斜面を転げ落ちていった以上、美奈代が関節への負荷を覚悟の上でコンテナを担いで斜面を登りきるハメになったのだ。
「関節への負担は？」
「軽微」
「了解――ったく、何よ」
美奈代は、二宮達の後ろでコンテナを下ろし、そのハッチを開放しながらぼやいた。
「肝心なところで役に立たないなんて――まるで都築じゃないか」
『なんだとぉっ！？』
宗像騎の横で火炎を操っていた都築騎から怒鳴り声が届いた。
『泉、てめぇ！今、何つった！？』
「っていうか、二人とも」
美奈代は、前面で仁王立ちになって広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を操る宗像達に言った。
「そんなに仁王立ちになると――危ないぞ？」

ドンッ！

美奈代の言葉を証明するといわんばかりのマジックレーザー攻撃が、二騎をかすめた。

いや、一発が都築騎のシールド表面を融解させながらかすり、その衝撃で都築騎は大きくバランスを崩した。
『痛ぇ！熱ちぃっ！くそぉっ！――うわっ、たたたっ！』
二宮騎と長野騎に支えられて、ようやく転倒を避けた都築騎が広域火焔掃射装置（イーパーズフレイム）を構え直して敵に立ちはだかった。
『くそっ、やりやがったなぁ！？』
『都築！熱くなるな！』という二宮の警告も、どうやら都築には聞

こえていない。
『くたばれ！この○○共っ！』
『ちょっ！都築っ、止めてよ！』
美奈代騎の投げた弾薬ケースを片手で受け取ったさつきの言葉に、美奈代は小さくため息をついた。
「教官、３５ミリです。早瀬、放っておけ」
『そんなそっけない！』
「トリガーハッピーの単細胞に、落ち着くなんて辞書、最初から乗っていないんだから」
『い……言いやがったな！？』
「本当のことだろうが――悔しかったら、冷静沈着な行動ってのをとってみろ」
『や……やってやろうじゃねぇか』
都築の声が怒りに震えているのが、美奈代には手に取るようにわかる。
「出来もしないことを出来るなんて言うな」
『やれるさ！』
都築はムキになって答え、騎体をなるべく低い体勢に移した。
『見てろよ！？』
「ああ――せいぜい、やってみろ」
『ゴ○ゴ１３並の俺の冷静さ、見せてやらぁっ！』
「……言ってる時点で熱すぎるって」
全騎に３５ミリ機関砲の弾帯を渡し終えた美奈代は、自騎の機関砲に３５ミリの弾帯を装填、チャージングを開始した。
『泉』
その美奈代に、心底感心した様子の二宮からの通信が入った。
『参考にさせてもらう――いろんな意味で』
「それはどうも」
チャージングの完了を示すランプを確認した美奈代は、騎の体勢を低くして前面に移動を開始する。

『……泉』

その美奈代に、さつき達からも賞賛の声が上がるが、

『負けないからね』という、さつきの声は、正直、素直に喜べない。

一方、肝心都築は、シールドを楯として地面に突き刺し、それを二脚代わりにして広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を操作しつつ、メサイアに装備された火砲で敵を掃討しつつあった。

マジックレーザーの攻撃は、即座に伏せることで対応。上空からの攻撃でさえ、シールドを巧みに使いこなすことで巧みに回避している。

「大型、来るぞ！泉、予備タンクをくれっ！」

『ええいっ！指揮官は私だ！編隊各騎、大型でも動きは鋭い！突撃（ラッシュ）に注意！受け止めようなんて考えるな！？いくらメサイアでももたんぞ！』

「了解っ！」

すでに大型妖魔達が美奈代達に向かって突撃しつつある。

その振動だけで足下が揺れ、照準が狂う。

――――す、すごい。

美奈代は、心底、そう思った。

醜悪な姿とは思う。

だが、その醜悪な存在が群れとなって突撃する姿は、むしろ壮観でさえある。

恐らく、人類の誰も見たことのない、この光景。

それを、自分は見ているのだ。

『泉っ！』
さつきの怒鳴り声がなければ、泉は死ぬまでその光景に魅入っていたかもしれない。
『撃って！撃ってよ！』
『ただでさえ、弾幕薄いんだからぁっ！』
「り、了解っ！」
「照準は３番から！」
「あれか――――当たれっ！」
ドンッ！
３５ミリ砲とは異なる重い衝撃が、肩部を疑似感覚として襲う。
それに耐えながら、美奈代は着弾を確認した。
サイのバケモノの眉間に当たった、完璧に近い直撃。
それなのに――――
「ダメか！？」
「一発じゃ無理！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）からの怒鳴り声に、美奈代は慌てて照準を取り直し、トリガーを引き直す。
３発目を受けた目標が、ようやくその動きを止めた。
「３発も必要なの！？」
１２７ミリ砲弾の直撃なんて、戦車でも無事では済まない。
それでようやく仕留められたのだ。
「なんて奴だ！」
「相手はバケモノなんですよ！？」
「次、照準は！」
『編隊指揮官より編隊各騎！後方の砲撃が開始された！』
『砲撃規模はどのくらいですか！？』
『砲兵４個大隊だ。かなりのが来るぞ！砲撃支援　着弾３０秒前！』

戦況を示す映像には、砲撃ポイントがグリーンの点滅で表されている。

自分達は、その範囲に含まれているのだ。

つまり、砲撃は、自分達さえ巻き添えにする恐れがある。

美奈代は、教えられた体勢をとるべく、騎体を動かし始めた。

『各騎、防御態勢とりつつ応戦！』

「了解！」

二宮の命令に答えつつ、美奈代は騎体を寝そべらせ、伏射姿勢をとりつつ、シールドを背に回す。

砲弾の破片、最悪、直撃からメサイアを守るためだ。

敵は自分達に向けて進撃をやめようとしない。

１個大隊で１５５ミリ砲が約２０門として、約８０門。

――――何とかなるかな。

美奈代は、祈るような気持ちで、目の前のカウントが０になるのを待った。

そして――――

激震が、美奈代達を襲った。

空気が壁となって襲いかかる感覚。

美奈代はメサイアのコクピットで、それがどういう感覚かを知った。

演習で味わった、あの１５５ミリ砲の至近弾の着弾の衝撃と変わることはない。

だから、砲撃なんて平気だ。

美奈代は、最初こそ、そう思ってタカをくくっていたのだが――。

「な、何よこれっ！？」

舌を噛まないように苦心しつつ、思わず言わずにはいられない。

砲撃によるノイズが酷すぎて、無線から入ってくる二宮達の声も、何を言っているのかわからないが、それでも明らかに狼狽だけは伝わってくる。

二宮教官でさえ知らない何かが、敵に襲いかかってきていることは確かだ。

美奈代はそう判断した。

では何だ？

美奈代の目の前で、柏美晴の騎が頭を上げようとするのを、横にいた長野教官騎が引き倒した。

二宮教官騎は、しきりに左手を前に倒しては起こす、“伏せろ”の指示を繰り返している。

「少尉、聞こえますか？」

美奈代は、MC（メサイアコントローラー）に問いかけた。
「情報を下さい」
「了解」
数瞬の後、目前に表された情報に、美奈代は刮目した。
「１５５ミリ砲に加えて――――２８００ミリと４０００ミリ！？」
「そうです」
「そんなモノ、どこに据え付けられているんですか？艦砲の口径ですよ？」
「列車砲です」
「列車砲？」
「そうです。鉄道の車体に搭載された砲――――ご存じありません？」
「欧州の沿岸防衛砲として若干残っていると聞いていましたが」
「――――まぁ、今はこの砲撃が去るのを待つしかないから、教えてあげます。
帝國では、未だに配備が続いています。
理由？
ここまで発展した鉄道網を利用しない手はない。
まさにその一点につきます。
ですから、新幹線規格からローカル鉄道の規格まで、各種砲が全国で３００門以上配備されています」
「そう、何ですか？」
「……泉候補生？」
「はい？」
「座学で習っているはずです――――説明、私が担当しましたから」
「え〝っ！？」
「――――泉候補生の居眠り発覚につき、評価減点の必要あり。っと」
「少尉ぃぃぃっ！」
「冗談はさておき」
「どこまで冗談なんですか？」
「下手なツッコミは命取りですよ？」

「黙りますけど、どこから撃ってるんですか？」
「安中榛名あたりかしら？弾道からすればそっちから。三式――つまり、一般規格は、吾妻線にでも入っていますね」
「弾種は？」
「着弾音から判断して榴弾と、一部徹甲弾まで使われてます――陸軍の鉄道砲兵隊、かなり頑張ってますね」
「あと、どれくらい続くんですか？」
「音が消えれば、終わったと思ってください」

１５５ミリ砲
２８センチ列車砲
４０センチ列車砲
これらによる深夜３時間に及ぶ砲撃の結果。
国鉄には、数知れない抗議の電話がひっきりなしにかかり、鳥井峠周辺は地形が変わった。

敵は壊滅的損害を被り、撤収。
美奈代達が自分達の勝利を知ったのは、午前７時を回ってからだった。

一面の雪化粧だったろう山々は今や黒こげの山肌をさらし、木々は砕かれ、煙をくすぶらせている。

『状況グリーン。全騎、戦闘態勢解除、警戒シフトへ移行』
二宮からの指示を、砲撃の悪影響で耳が痛む美奈代は、やっと聞き取れた。
「泉了解。教官、それで碓氷峠方面は？」

『作戦は成功。米軍主力はもう少しで佐久市内に入る。碓氷峠を突破して以来、満足な抵抗を受けていないそうだ』
ほうっ。
美奈代は無意識に安堵のため息をついた。
喉が張り付いたように痛むのに気づいたのは、その時だ。
コクピットの空気が肺を腐らせるような錯覚さえ覚えてしまう。
「教官、外気吸っても良いですか？」
『許可する――ただし』
「えっ？」
『全騎担当ＭＣ、近隣僚騎をサーチ。各関節部等に妖魔が潜んでいる可能性がある。サーチ完了騎から外気を吸って良し』
美奈代は感心した様子で頷き、ＭＣの言葉を待った。
「泉候補生――大丈夫です」
「ありがとうございます」
美奈代はハッチを開けた。

スクリーン越しと同じはずなのに、実際に見るとどこか違う光景を、美奈代はただ、じっと見つめた。

あの暗闇。

無数の妖魔達。

そして――この光景。

これが、戦場なんだ。

そう思うしかない。

ただ、納得出来ないのは、これが、自分の祖国だということだ。

昨晩は、あちこちで戦闘が開始された。
碓氷峠は勝ち戦。

みんな、無事なのか？

美奈代は、コクピットに戻り、二宮との通信を開いた。

川中島強襲作戦　前編

美奈代達が死に物狂いで戦っている地点から１００キロと離れていない地点では、魔族軍が新たな動きを見せていた。

“ガストラフェテス”

天原商会より引き渡されたばかりの大型妖魔。

平均全長８０メートルに達する巨大な蟻に近い形状をしている。

そんな外見をした巨大妖魔が、壊滅した長野県の市街地跡で蠢いていた。

ズリュ……ズリュ……ブリュ……。

聞くだけで生理的な嫌悪感さえ感じさせる気味の悪い音を立てながら、“ガストラフェテス”が腹部をふるわせる。

それを破壊されたビルの背後から見守るのは、彼らの飼い主である魔族達――第７０２砲兵隊を構成する魔族達だ。

神経に取り付けられた装置により“ガストラフェテス”を管理する彼らの目の前で、その腹が青白い光を放つ。

腹部の構造が光によってわかるほど光り輝いたのを見た魔族達は、“ガストラフェテス”に一斉に攻撃目標を告げるべく、装置を動かす。

「撃てっ！」

「てっ！」

指揮官の号令を合図にしたかのように、“ガストラフェテス”の腹部が宙を向き、そして、巨大な光球が宙へ放たれた。

光球はそのまま、宙へと消えていく。

「第三斉射完了！」

「よし――第四斉射急げ！」

彼らの標的にされたのは東南アジアの国々。
その中の一つ、木造のバラックじみた店が並ぶある湾岸の町。
店からこぼれる電球の光に照らされた道を、様々な商品を荷台に積んだ自転車や人々が行き交い、食事を提供する店先では、母親が子供を膝に乗せ、食事を与えている。
偶然、その真向かいに座った老夫婦がそんな母子に暖かいまなざしを向けている。
ここでは日常の、何の変哲もないありふれた光景。

ゴゴゴゴゴッ――――！

空気をふるわせる不可思議な音が、町を襲った。

強い風が道を走り、道ばたに転がっていたゴミを巻き上げる。

道を行き交う人々が足を止め、店の主と客が同時に空を見上げた。

空は分厚い雲が覆い、何物も見えない。

人々が首を傾げた時

まさにその瞬間――――

町を
人々を
光が襲った。
“ガストラフェテス”
その腹が産み出すのは彼らの子供ではない。
魔法のオブラートに包まれた超高圧縮されたエネルギーの塊だ。
彼らの腹から撃ち出された塊は、有効射程約５００キロ以上最大５万キロ。
最大速度は実にマッハ３０。
日本国内のほとんどが近すぎるため射程に入らない。
その一撃が襲来したのだ。
衝撃波を伴いながら、超音速で襲いくるエネルギーの塊。
衝撃波が高い建物を吹き飛ばし、衝撃波が走った道に沿って光球が地上を目指す。
地上にめり込んだ途端、エネルギーの塊を覆っていた魔法のオブラートが破壊され、エネルギーが一気に解放される。
都市が、真っ白に染め上げられた。
翌日。
「観測の結果、昨晩の攻撃は合計２００発に達した」
二宮の説明に、美奈代達は苦い顔で聞き入るだけだ。
わずかばかりの戦勝、その歓喜を吹き飛ばして十分すぎる話だ。
命がけで戦って帰ってきた美奈代達を出迎えたのは、そんな報道だった。

「覚えておけ。奴らの攻撃は、空間封印された魔法エネルギーを、目的地に撃ち込んで、着弾の瞬間に封印を解除、魔法エネルギーを解放する代物だ。

一発の破壊力は推定６０から８０メガトン。爆風による人員殺傷範囲は、爆心地から約３０キロメートル以上。爆発に伴う致命的な火傷を負う熱線の効果範囲は８０キロメートルにも及ぶ。

しかも、あまりに高速なため、防御のしようがない上に恐ろしく正確だ。間違いなく都市のど真ん中に命中させている」

二宮は読み上げた書類をテーブルに置いた。

美奈代達は沈黙するしかない。

ひどいことになったことはわかるが、それがどの程度の被害がまったく想像出来る範囲を超えているのだ。

「今回の犠牲者は？」

宗像の問いかけに、二宮は答える。

「被害規模が大きすぎるせいで集計すらとれていないが、億の単位に達することは免れまい――攻撃を受けた２００の都市は痕跡すら残さずに。きれいさっぱり吹き飛ばされたんだ。

東南アジアに展開していた中華帝国、米軍……無差別に……巻き込んでな」

「中華帝国の反応は？」

「今のところ、自国軍の被害把握で精一杯だろうな。米軍もだが」

「あの、教官」

美晴が眠そうな目で訊ねた。

「中華帝国軍が魔族軍と手を結んでいたってあの噂、本当なんですか？」

「――狩野粒子の入手先を考えれば、間違いないだろう」

「あいつら、本当に人間ですか？」

「あいつらはそんなことお構いなしだ」

二宮はそんな美奈代を諭すように言った。

「連中にとって大切なのは、目先の利益だ」
「魔族も」
都築が投げやり気味に言った。
「どうせ攻撃するなら、北京にしてくれよ。世界中が感謝するぜ？少なくとも俺が」
「私も大いに賛同したいが」
二宮は言った。
「我々の今の敵は、連中ではない。魔族軍だ」
美奈代達もそれに異存はない。
「この攻撃が旧長野市、魔族軍支配地域から行われていること以外、一切のことがわかっていない。妨害（ジャマー）と対空防衛網がキツすぎる」
「じゃあ、教官はこのまま殺（や）られ続けろと？」
「違う」
さつきの言葉に、二宮は首を横に振った。
「我々人類は、黙って殺されるほど善人の集まりではない。国連軍は第一目標を、この砲撃兵器と設定――つまり」
二宮は顔をしかめ、言葉を詰まらせた。
「攻撃……目標と、している」
「いい事じゃないですか」
都築は首を傾げた。
「米軍あたりが攻め込んで叩いてくれりゃ、俺達は楽出来る」
「……その攻撃方法が」
教壇を降りようとした長野を、二宮が止めた。
「反応弾だとしてもか？」
都築は、その一言に言葉を詰まらせた。
「待ってください」
真っ青になった美晴が言った。
「国連軍は、反応弾は使わないって」
「覚えておけ。反対しているのは、日本海の水産資源が放射能汚染されることを嫌うロシア帝国だけだ。アメリカ、中華帝国、その他

反応弾保有国は、帝国に対する反応断行撃に“基本的に”前向きだ」
「なっ！？」
「日本は極東の島国にすぎない。人口もたかが1億数千万。その程度の犠牲で人類が――自分達が助かるなら、安いものだと」
「……」
「そうならないためにも、我々がやらねばならない」
二宮は黒板に向かい、チョークをとった。
さすがに教官だけに、その姿はよく似合う。
面倒見もいいし、美人だし、マジメだし……。
一般人に生まれていたら、きっといい先生になったろう。

美奈代はその背を見つめながら、ふと、そう思った。

何事か書き終えた二宮と視線が合い、美奈代はあわてて視線を逸らした。

黒板には、

回天作戦。

そう書かれていた。

「これは、帝国軍独自の名称であり、国連軍ではA作戦と呼称される」

「隊長」
意味がわかったのだろう。
山崎が立ち上がった。
「そいつらを――攻撃するんですか？」
「そうだ」
二宮はうなずいた。
その目には、何か歓喜に近い光が潜んでいた。
「――この砲撃陣地を叩く」
「あの……誰が？」
まぬけともとれる美奈代の問いに、二宮は平然と答えた。
「私達だ」

「よお。嬢ちゃん」
鈴谷の格納庫で、征龍改を整備していた坂城に近づいた美奈代の顔色を見た坂城は、ボルトを締める手を止めた。
「どうした？」
「えっ？」
美奈代は、きょとん。とした顔で坂城を見た。
「えっ？じゃねぇだろうが」
坂城は美奈代の腕をつかみ、整備用キャットウォークの上に降ろした。
「んなにボーッとしてちゃ、死んじまうぜ？」
「はぁ……」
「何だ？近々、大規模な作戦があるとは聞いたが。そのことか？」
「……」
蒼白な顔の美奈代が無言でうなずいた。

「そりゃ――無茶だ」
美奈代の話を聞いた坂城は、額に手を置いた。
「んなこたぁ、自殺兵のやることだ」
「でも、その部隊は、我々と」
「いくら実験小隊とはいえ……βタイプ主力のオールド・ガーズがやるべきこった」
「征龍改の性能があれば」
「アリアだって耐えられるか保証できない」
「それでも、やるそうです」
「そうか……」
征龍改を見た坂城は言った。
「整備は万全にしてやる――それだけは心配するな」
「ありがとうございます」

通路の手すりにもたれかかりながら、美奈代はぼんやりと自分の愛騎が整備を受ける光景を眺めていた。
頭の中で繰り返させるのは、二宮から聞いた一言。
「高度3万メートルからの降下強襲作戦!?」

「そうだ」
二宮は、何でもない。という顔で言った。
「部隊は我々と八八特務隊が担当する――文字通りの斬込(きりこみ)だ」
「……そんな作戦、誰が」
「私だ」
二宮の言葉に、全員が言葉を失った。
「文句があるか?」

「ありすぎて言葉になりません」
宗像の言葉に反論する者はいない。
「世辞と受け取っておく――国連軍が長野市に向け陽動作戦を実施。包囲網を混乱させ、その隙に砲撃陣地を叩く」
「砲撃陣地はどのようにして割り出すんですか？」
「作戦の開始は、敵の砲撃が合図になる」
「……どこか、犠牲が出るんですよ！？」
「他に方法はない」
二宮はにべもなく言った。
「国連の情報収集能力をフル活用して、射撃地点を割り出す。そのために、最上他の情報収集担当艦がこれを担当。割り出された情報を元に、我々が斬り込む」
「……」
「他に方法があるなら聞くが？」
「……」
「作戦決行は明日夜。鈴谷は本日中に八八特務隊が搭乗する笠置他、作戦参加部隊艦艇と合流する」
「八八？」
その部隊番号に心当たりがあったのは美晴だ。
「……あの、ボンクラちゃんも参加するんですか？」
「ああ――ただし、敬礼を忘れるな？向こうは昨日の戦功により少尉へ昇進している」

祷子と再会できるのがうれしくないといえば嘘になる。

だが、

高度３万メートルからの降下強襲作戦。

それが、どうしても気になる。

メサイアが耐えられるギリギリの上昇高度。

突入時に予測される最高速度はマッハ４０。

突入開始から1分とたたずにブースト全開の逆噴射。

その際、騎体制御を１００万分の1失敗しただけで騎体が粉砕する。

生還率２０％

――ただ、単に突入するだけでこれだ。

敵からの攻撃だって十分に考えられる。

何しろ、敵は砲弾でさえ撃ち落とすんだ。

「……」

美奈代は、そっと手を見た。

今度こそ、死ぬかもしれない。

その恐怖心が形になったんだろう。

その手は震えていた。

情けないと思う心さえ、その震えの前には出てこない。

手すりに突っ伏し、ふるえを抑えようとするが、体中の震えに、
立っていることさえ出来ず、思わずその場にしゃがみ込んでしまう。

死にたくない。

死にたくない。

口から出てくる言葉。

普段なら、怯懦と罵り、軽蔑する言葉。

それこそが、美奈代の正直な気持ちだ。

だが――――

「くそっ！」

美奈代は手すりに頭を叩き付けた。

激しい痛みが脳みそを揺るがす。

考えてみろ！

心の中で、美奈代は自分に怒鳴った。

一億もの人々は、抵抗の術さえ与えられずに死んでいったんだぞ！？

殺されたんだぞ！？

美奈代、貴様はどうだ！？

世界最強の皇室近衛騎士団のメサイアを与えられている！

戦う術が与えられている！

それでも尚、死ぬのか！？

戦わずに死んでいった人々と同じように、無抵抗なまま！？

違う！

美奈代は、もう一度、手すりに頭を叩き付けた。

「……私は」

痛み。

生きているからこその感触。

それを味わいながら、美奈代は言った。

「私は……戦える……戦って、生き延びることが出来るんだ」

美奈代は立ち上がり、整備を受ける愛騎を再び見た。

「やってやる」

そう。

やるしかない。

「死んでいった人々の無念……必ず、晴らしてやるんだ」

格納庫の壁に設置された時計の日付が変わろうとしていた。
時刻を告げるデジタル表示の下。
そこには作戦開始までのカウントが表示されている。
そう。
すでに作戦に向けて、すべてが動いている証拠だ。
美奈代達は臨時編成された第５０５特務戦隊に編入された。
特務戦隊といっても、通常編成の実質２個小隊。
１個小隊は美奈代達、もう一つは別部隊だという。
これで敵の防衛網を突破して陣地を攻撃しようというのだ。
はっきり、無謀すぎる。
「奇襲は大軍をもって為すものとは限らない」
二宮はそう言う。
「少数をもって敵を襲うことにこそ、その意義はある」
その言葉を前に、美奈代達はただ、「二宮教官が言うんだから間違いない」と自分を説得するのが精一杯だ。
自分達が何をしようとしているのか、まるで実感がわかない。
ふわふわとした、不思議な感覚だけが、少なくとも美奈代の感じる全てだ。

敵を倒し、戦場を駆け抜ける。

ただ、それだけなんだと、数時間前に自分を説得したばかりなのに。

船窓から覗く外は真っ暗だ。

弾道飛行の関係上、戦隊が最大出力で移動する先は、ミクロネシア。

この世界では南洋県と呼ぶ。

――もう行きたくない。

さつきが冗談でぼやいた理由。ほんの数ヶ月前に体験した南太平洋での戦いが、遠い昔のことに思えてくる。

ハァッ。

目を閉じて深いため息をついた途端、

「何辛気くさいため息ついてんのさ！」

パンッ！

誰かに後頭部をはたかれた。

振り返ると、さつきがいた。

「隊長さんが、そんな辛気くさいツラしてたら、部下がたまんないでしょ？」

「……代わりにやってくれ」

「い・や」

さつきは船窓の縁によりかかるようにして外の景色を眺めた。

「――大丈夫？」

「えっ？」

さつきからの突然の問いかけに、美奈代はどう反応していいか迷った。

「さっき、通路で頭ガンガンやってたから」

「あ、ああ……だ、大丈夫だ」
「ふふっ。気合いいれてたんだ」
「まぁ……な」
「怖い？」
「怖い」
「私も」
さつきは笑いながら言った。
「死んでも別にいいけどさ。でも、怖い」
「……何故？何故、死んでもいいんだ？」
「ん？ほら……私、新潟の出だから」
「……」
「家族、みんな死んじゃったし、高校時代に好きだった人もね」
「妖魔に……やられたのか？」
「ううん？死者の樹」
さつきは船窓にもたれかかるような姿勢で美奈代と向き直った。
「家族はあのオゾンにやられた。庭に生えていた樹の伐採やったんだ。業者雇うお金もったいないからって」
「……」
「ほら。あの樹って、中の樹液が爆薬みたいなもんなんでしょ？そんなの、みんな何も知らないから、オヤジが切り倒したあの樹にガソリンまいて火をつけて――ドンッ」
さつきは握った手を開いてみせた。
「即死だったって……聞いた」
「……」
「お袋と妹は重傷負って病院送り。そこであのオゾンにやられた。……だから、死ねば死んだで、みんなに会える――だから、怖くない」
「割り切りが……いいんだな。早瀬は」
美奈代は、心底うらやましそうにさつきを見た。
「へへっ。ウジウジ考えるのがイヤなだけ。っていうか、ほら私、

バカだから考えることが苦手だし」
「ふっ……あやかるとしよう」
「よしてよ」
「他の連中は？」
「宗像はオペレーターの子の部屋。山崎と美晴は空いてる倉庫。都築は整備のシゲさんに捕まって調整作業中」
「つまり、他は多忙ってことか」
「宗像や美晴はどうか思うけどね」
「二宮教官にバレたらしらんぞ？」

戦闘装備に身を固めた美奈代達が二宮達の前に整列したのは、それから2時間後のことだ。
「敵の砲撃は、平均して２１００時から２４００時にかけて実施されている」
白い布をかけられたテーブルの向こうで、美夜が訓辞を述べる。
修復中の“鈴谷（すずや）”の作業を一時中断してまで美奈代達を送り届けようと言うのだ。
「我々は奇襲攻撃を敢行する」
白いテーブルの上に載せられた人数分の杯。
杯に満たされた液体がアルコールなはずはない。
「現在、人類は存亡の危機に立たされている」
美奈代達は直立不動のまま、その訓辞に聞き入る。
「これ以上の無関係の民を見殺しにすることは出来ない！」
美夜の目には尋常ではない光が宿っている。
「貴官達は、まさに人類を救う先鋒となったのだ。ただ、死ねとは言わん。だが、その任を全うすることだけを期待する――成功を祈る」

美夜の敬礼に、全員が答礼を返す。

後は、全員が杯を手にするだけ。

一礼の後、美奈代は杯に口をつけた。

案の定、水だった。

水杯。

別れの杯。

今生で最後に口にする水。

死に水。

いろんな言葉が脳裏に浮かんでは消えていく。

美奈代は、全てを忘れるかの如く、杯を一気にあおった。

「集結地点は高度３０００――各騎、発艦をしくじるな！？」

二宮からの激に小さくさつきがぼやいたのを美奈代は聞き逃さずにすんだ。

「ＭＣ（メサイアコントローラー）がやってくれるじゃん」

「そういう問題じゃない」

「やば。聞こえてた？」

「ふん――早瀬」

「何？」

「死に急ぐなよ？それじゃ、ダメだ」

「……」

「都築はかなり浮気性な男だ」

「ふふっ……ハッアハハハハッ！」

通信機をさつきの笑い声が満たす。

「わかった。覚えておく」

「……ふ、複雑だな」

「美奈代」

「ん？」

「ありがと。あんた、本当に隊長とか、教官向きだよ」

「……よせ」

美奈代達は戦隊の上空に出た。

平行して航行する二つの艦。

一つが鈴谷で、もう一つ、鈴谷よりやや大型の艦の姿が視界に入る。

飛行艦笠置。

全長３００メートル近い、かつての近衛飛行艦隊の旗艦だ。

「発艦終了騎からすみやかに編隊を組め」

「泉、了解――牧野中尉」

「はい？」

「あと、頼みます」

「はい――さくらと一緒に、がんばりますね？」

「了解。さくらも、頼んだぞ？」

「うんっ！」

美奈代は二宮騎の右後方につきながら、武装を確認した。

斬艦刀１

１２７ミリ機動速射野砲１

３５ミリ多銃身機動速射野砲１

３０連サーモバリック弾頭ロケット弾発射筒１

実刀２

レーザーソード４

シールド１

マジックレーザー

これだけが全てだ。

「十分。上等だ」

首を傾げるさくらの前で、美奈代は自分に活を入れた。

「さくら――がんばろう」

「はいっ！」
「編隊各騎」
二宮から通信が入る。
「敵の攻撃は未だ確認されていない」
「国連軍の陽動攻撃は？」
「敵の攻撃開始と同時だ」
「巻き込まれはしませんよね？」
「祈れ」
「……了解」
結局、何が起きるかわからない。
そういうことだ。
笠置のデッキに光が入り、続々とメサイア達が発艦を開始する。
白い騎が角龍であることは、座学で知ってはいる。
装甲形状が違うから、角龍改というべきだろうか。
ぼんやりとそう考える美奈代の目の前で、白いメサイア達が見事な機動で、瞬時に編隊を構成する。
一騎たりとも無駄な動きをする者はいない。

これが、ベテランの動きか。
そう思うと、美奈代は畏怖に似た感情を抑えられない。
「こちら八八特務隊隊長、瀬音だ」
美奈代達に平行するように飛行する編隊から通信が入る。
「３３１小隊、二宮」
「久しぶりだな。真理」
「忘れてました」
「ヒデえ話だ」
隊長同士のやりとりの間、美奈代が気になって仕方なかったのは、八八特務隊の編隊に守られるように飛ぶ白いメサイアだ。
関係ないだろうが、角龍というだけに角張った無骨なまでの装甲形状とは異なり、曲線をもって構成される、むしろ女性的な優美さ

さえ感じさせる。

白い宝石。

そんなことばが脳裏をよぎる美しい騎だった。

部隊間の勝手な通信は厳禁されているため、問いかけることは出来ないが、おそらく、かなりの使い手が乗っているんだろうと、美奈代は見当をつけ、牧野中尉にこっそりと尋ねた。

「牧野中尉。あの白い騎の性能はわかりますか？」

「詳細不明。ただし」

ごくっ。

牧野は唾を飲み込んだ。

「パワー、トルク・バランス、共に“幻龍（げんりゅう）”の比ではありません。私の知る全ての騎を、遙かに凌駕しています」

「角龍より？」

編隊を崩さぬよう注意しながら、美奈代は牧野に問いかける。

「若干、小型に見えますが」

「比較になりません」

「……」

「編隊各騎」

二宮からの通信に我に返った美奈代だが、それまで自分が何を考えていたか、すぐに忘れた。

「敵の攻撃が開始された」

「！！」

「隊長、敵の狙いはどこですか！？」

「弾道からして再び東南アジアだ」

「阻止は？」

「我々の任務ではない。なんでもかんでもやろうとするなっ！」

「っ！」

「各騎！データリンク開け――敵陣地がようやくわかった」

MC（メサイアコントローラー）達がデータリンクから伝わる情報の解析にとりかかる。「攻撃目標は長野市川中島。――各騎、高度3万まで上昇！続けっ！」

ブースト機能全開。

二宮騎の背面が光り輝く。

美奈代もそれに遅れないように、牧野に怒鳴った。

「牧野少尉っ！」

「対G最大、耐熱フィールド最大展開！――行きますっ！」

グンッ！

一瞬、

潰されたんじゃないか。

このまま、挽肉にされるんじゃないか。

そう錯覚するほどのGに襲われ、美奈代は文字通りコクピットに押さえつけられた。

メサイアのシートは脊椎防護用のクッションしかない。

そこに押さえつけられ、息が詰まる。

とにかく、過ぎていく時間が長い。

人生でこれほど一秒が長く感じられる時はそうは無かったように思える。

とにかく、この時間が早く終わってほしい！

体中の骨がきしみをあげるのを確かに聞きながら、美奈代はめまぐるしく動く高度とブースト出力のメーターを、そして確かに見た。

青白い光球が地上から打ち上げられたその光景を――

一発で何万、何十万という人が殺される一撃が、光と共に天へと駆け上がって行く。

「――くっ」

美奈代は止めたかった。
なんとしても、あの一撃を、止めたかった。
だが、照準を合わせることも、トリガーを引くことも出来ない。
Gに押さえつけられ、指一本動かせないのだ。
目の前に敵がいるのに、指一本動かすことが出来ない。
その無念さが、美奈代を襲う。
「こ……これでも……」
やっと喋ることが出来る舌で、美奈代は自分を呪った。
「これでも……騎士か……」

ピーッ

予定高度に達したことを知らせる警告と共に、美奈代は一時的にGから解放された。

暗黒の世界と水の世界の境界線が、そこには広がっていた。

「……綺麗」

本やテレビでしか見たことのない、一生縁のないと思った言葉に表せない世界が、美奈代の目の前に広がっている。
暗黒の世界にぼんやりと光り輝く美しき世界。
だが、美奈代達は、その光景にそれ以上見とれていることを許されなかった。
「！！」
真っ暗な地上に光のドームが誕生した瞬間を、美奈代達は目の当

たりにした。
その下で何が起きているかはわかる。
だが、それはあまりに美しすぎた。
グンッ。
ぽかんと開けた顎が急激なGに押さえつけられ、危うく舌を噛み切るところだった。
美しき景色は灼熱の地獄へと変貌した。

「やめてやるっ！」
コクピットでそうわめいたのは、さつきだ。
「これ、生きて帰ったら、絶対、絶対、除隊申請出してやるんだからぁっ！」
騎体が軋むほどのGと灼熱の摩擦熱。
ちょっとしたミスがそのまま騎体の分解、即戦死へとつながる世界。
騎体の軋みがコントロールユニット越しに伝わってくる。
そのちょっとした振動でさえ、騎体の分解が始まったのではないかと錯覚してしまう。　さつきはもう半泣きだ。
「ううっ……こんな世界に行きたがる宇宙飛行士って、絶対、マゾだっ！」

灼熱の地獄が終わった。
弾道飛行も終盤だ。
後は――
メサイアのブーストが逆噴射を開始。
圧倒的推進力を誇るメサイアのブーストだが、それでも速度は落ちない。
「こ、これで！」
自分の騎体の落下速度を知ったさつきが再び悲鳴を上げた。

「これで、降りられるの！？」
地上の灯りがどんどん近づいてくる。
近づくなんてもんじゃない。
まるで地上を撮影するカメラを急速にズームしたような、そんな錯覚すら覚えるほどの速さでだ。
どこかの飛行士は、「翼よあれが」何とか言ったらしいが、さつきには、そんな余裕はない。
翼よ止まれっ！もう少しゆっくり！
さつきにもう少し余裕があれば、そう言ってのけたろう。
引きつる顔で地上を見守るさつきは、コントロールユニットに思わず力を込める。
コントロールをＭＣ（メサイアコントローラー）に取り上げられている今、そんなことをしても意味はないのだが、それでも力がこもってしまう。
ついに、雲を抜けた。
それまで見ていた町の灯りは何もない。
せいぜい、篝火らしい小さい光がちらほら見える程度の闇の世界。

ついに、さつき達はここまで来たのだ。
「編隊各騎！ショータイムだ！」
「早瀬准尉、コントロールをお返ししますっ！」
「り、了解っ！」
暗視装置を組み込んだメサイアの目が、落下地点を昼間のように画像変換してくれる。
そこに蠢くのは、サイズをどこかに置き忘れたような蟻達だった。

「あんたらのせいでぇぇぇっ！」
さつきは腰にマウントした１２７ミリ砲を構えた。
「私がこんなに怖い思いしたんだからねぇっ！？」
照準もそこそこにさつきは砲を乱射した。

「責任とれぇっ！」
地上では１２７ミリ砲の連続した爆発が続く。
ドンッ！
さつき達は、その爆発のまっただ中へと着地。
即座にＭＣ（メサイアコントローラー）管理による３０連サーモバリック弾頭ロケット弾発射筒が火を噴いた。
一種の気化爆弾であるサーモバリックを弾頭に搭載したロケット弾は、突然の敵に狼狽する敵の頭上で爆発。辺りを一瞬のうちに灼熱の地獄へと変える。
「私たちは、こんな思いしてここまで来たんだからねっ！」
１２７ミリ砲の残弾を、未だに蠢く巨大な蟻の頭部めがけてゼロ距離で撃ち込む。
砲弾の破片と共に、蟻の残骸が吹き飛んでくる。
予備マガジンを装填。
「このおっ！」
辺りめがけて撃ちまくる。
横では美晴騎が散弾砲を乱射している。
撃つしかないのだ。
「各騎！」
二宮から命令が来る。
「ショータイムは終わりだ！砲台は潰した！引くぞっ！」
「引くって！？」
さつきは１２７ミリ砲を構えながら叫ぶ。
「どうやって！？」
四方全周囲に無数の妖魔の反応。
測定限界値は突入の時点で超えていた。
突入した時こそともかく、すでに敵は包囲を完成させている。
「上だ！」

「狙い撃ちにされるっ！」
「やって見なければわからん！」
「二宮中佐！上空に敵飛行部隊！」
「――ちぃっ！」
「隊長っ！」

川中島強襲作戦　後編

蛇とヒラメの間の子のような不気味な銀色の妖魔が夜空を舞い、筆舌に尽くしがたい異形の存在が地を埋め尽くす。
美奈代達は、そんな世界のまっただ中にいた。
逃げ場は、どこにもない。
「戦隊長より戦隊各騎！」
八八特務隊長騎から通信が入った。
「国連軍が攻勢に出る！その隙に一丸となって敵陣を突破する！」

無茶だ。

美奈代はそう思った。
鳥井峠の時は、防御に徹した。
それでも、砲撃支援が無ければ、確実に全滅していたのだ。
今回は、戦況モニターに映し出される着弾予想地点は、自分達の展開地点を大きく外れている。
間違いなく、国連軍の展開は自分たちを支援するものじゃない。
つまり……
砲撃支援は――――ない。
「演技を終えた役者は舞台を去る――――何」
瀬音と呼ばれた男は、喉で笑いながら言った。
「俺達にゃ、観客の拍手の代わりに砲弾や牙が飛んでくるだけだよ」

「舞台じゃなくて人生の間違いでは？」
宗像はそう言うし、美奈代のその通りだと思う。
「最後は、妖魔に喰われて、クソになるのがお望みか？」
「……」
「あいにくだか、俺の場合、人生の最後は、美女とベッドで迎える

と決めている」
「戦隊長、お供いたします」
「宗像だったな」
「はい」
「――いい趣味だろう？」
「感涙です。山紫水明以上の何かを感じました」
「よろしい――真理」
「はい」
「行くぞ？俺達“オールド・ガーズ”が先陣を勤める。ヒヨコが迷子にならないよう、しっかり保母さんやってくれよ？」
「了解です――各騎！」
二宮が命じる。
「色魔共がお通りだ！背後につく！――個人的に、近づくのさえ心底ごめんだが、やむをえない。伝染（うつ）ったり、孕まされないよう、注意しろ！」
「おいおい、二宮さんよぉ！」
八八特務隊から抗議が入る。
「そりゃないぜ！」
「二十歳前の子供達の前で、過去の悪行の数々をばらされたいのですか！？」
「“内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）”に入る前にゃ、ご同僚様だろう！？」
「今となっては過去の汚点ですっ！」
「クェッ……相変わらずだねぇ……」
「それによぉ……真理ちゃん」
「に・の・み・や・ちゅ・う・さ！！」
「八八（こっち）特務隊にゃ、真理ちゃんの娘がいるんだぜ？」
「独立愚連隊とまで言われたあなた達の下に送られるなんて知っていたら、無理矢理にでも止めました！」
二宮はもう半泣きだ。
「風間をお嫁にいけない体にしてないでしょうね！？」

「お姫様は俺達の女神様だぜ！？」
心外極まりない。という声があがった。
「そういうことだ」
戦隊長が騎を移動しながら、自信満々に言った。
「俺達は紳士なんだよ」
そうそう！
ゲヘヘヘッ
背筋の寒くなるような笑い声が戦隊長の言葉を認めるように響く。

「ど、どこが……」
二宮は心底信じられないという声だが、
「二宮教官」
特務隊側から聞こえてきた落ち着いた女性の声に二宮は言葉を止めた。
「お久しぶりです。風間です――大丈夫です」
鈴が転がったような、優雅ささえ感じられる声が二宮の怒りさえ打ち砕いた。
「みなさん、いい方々ばかりです」
うぉーっ！
背後で特務隊の面々が粗野な歓声を上げた。
「戦隊長がおっしゃるように、我々が先陣を勤めます。背中はお任せします」
「そういうこった！」
戦隊長騎が斬艦刀を抜いた。
「特務隊各騎、斬艦刀抜刀！戦隊陣形、楔！」
ちっ！
二宮の舌打ちを残して、特務隊が正面突撃に最も適した楔形陣形を組む。
「３３１小隊各騎、特務隊の後ろにつき、砲撃支援を実施する。火器は残弾終了次第、放棄してかまわん。斬艦刀他、適宜、武器の使

用を許可」
「り、了解」
とはいえ、先程の強襲で残弾はかなり心許ない。
撃ちすぎた。
美奈代は内心で舌打ちした。
「各騎、ホバー移動。歩くなんて考えるな！速度が全てに勝る！突破が目的だ！」
「はいっ！」
八八特務隊戦隊長騎の右斜め後方、二番騎の位置についたのは、Ｄ－ＳＥＥＤ。
祷子の騎だ。
動きには微塵の躊躇さえない。
「特務隊、花火を咲かせろ！」
背面に武装を持たないＤ－ＳＥＥＤ以外の騎から、白煙と共に盛大な炎があがった。
３０連サーモバリック弾頭ロケット弾発射筒が火を噴いたのだ。
包囲する敵陣、メサイア達の作り上げた楔の先で炎の壁が生まれた。
「――続けっ！」
八八特務隊のメサイア角龍達が、その壁めがけて一斉に斬り込む。

「小隊、続けっ！」
二宮の号令にはじかれたように、美奈代は征龍改を前進させる。
「一体、ロケット弾の残弾がまだあんなに！」
「とっておきは最後までとっておくのが俺達の流儀だ！」
八八特務隊の誰かはわからないが、そんな怒鳴り声が美奈代の耳に入った。
「撤退も考えず、あんなにバカスカ使いやがって！」
「も、申し訳……」
「泉、謝るな」二宮が冷たい口調で言った。

「我々に撃たせて、自分達の分を節約しただけだ」
「真理ちゃんは全てお見通しか」
戦隊長は、そう言って喉の奥で笑う。
敵は美奈代達の突撃に一瞬、ひるんだ様子だったが、すぐに防御陣形を作り上げた。
先頭は装甲に勝る大型妖魔。
その後方に弓兵を中心とする射撃部隊。
それを突破しても、同じように大型妖魔と弓兵の陣が待ちかまえる数段重ねの構えだ。
一陣を突破しても、安堵は出来ない。

移動速度が、時速に換算して数百キロに達した征龍改の前で、角龍達が四つ足の大型妖魔の頭部を斬艦刀で粉砕、その背を蹴って後陣へと躍り込む。
「なっ！？」
全く無駄のない機動に、美奈代は目を見張った。
速度が、まるで落ちていないのだ。
何もなかったように敵第一陣を乗り越えていく角龍達の機動はマネの出来る代物ではない。。。
「こ、これがベテラン！？」
最前線たる第一陣を突破する特務隊に続く形で、美奈代達も大型妖魔を乗り越え、いまだもがくその背に火線を叩き付ける。
一瞬だけ、火線に砕かれる大型妖魔に視線を動かし、再び前を見た時――――
「うそっ！」
さつきが驚きの声を上げたのも無理はない。
特務隊はすでに第三陣まで食い込んでいたのだ。
「置いていかれる！」
美晴が悲鳴をあげた。
「なんて機動なの！？」

「各騎！」
二宮が怒鳴る。
「特務隊は、我々にパンくずだけ残してくれる！家にたどり着きたかったら、小鳥に食べられるなよ？」
「あれが小鳥ですか？」
「モノのたとえだ」
「道はすぐにふさがれる。パンくずが食べられたら、ふさがれるんだ！家に戻れないぞ！？」
Ｖｏｏｏｏｍ！
二宮騎が機銃を乱射して、後方左右から襲う敵を阻止する。
「都築と泉、前面に出ろ、早瀬と宗像は側面、柏、山崎は上空からの攻撃に備えろ。我々は殿（しんがり）をとる！」
「了解！」
美奈代は第二陣に開いた穴を埋めようとする妖魔達を次々とロックオンすると、トリガーを引いた。
「柏、山崎！上は任せた！」
「了解！榊少尉、移動はすべて任せます！ＦＣＳはすべて私に！――山崎君！」
「了解！今井中尉、こちらも同様に！」
ギィンッ！
都築と美奈代、そして宗像が前面の敵にかかるべく、三騎で楔形の陣形をとるその背後で、美晴と山崎の騎が、突如、背後を向いた。
その腕が持つ銃口は、空を向く。
「――――墜ちろっ！」
ドドンッ！
美晴は、空に向けた散弾砲のトリガーを引いた。
散弾の破壊力はそう高くない。
面で敵を叩くだけが狙いの武器にすぎないが、上空を飛来する妖魔達には十分な効果があった。

ギャァァァッ！

密集して襲いかかろうとした妖魔達は、襲い来る散弾に挽肉にされ、次々と地面へと落下していく。

ギャッ！？

上空から襲おうとした他の妖魔達も、突如、仲間に起きた出来事にひるんだ様子で、上空からの攻撃を一瞬、止めた。

美晴にとって、それで十分だった。

残弾は決して多くない。

だから、襲い来る敵を的確に殺すか、敵に攻撃そのものをやめさせられれば、それで良いのだ。

「山崎君っ！」

視線を空から移すことなく、怒鳴った美晴に、

「応っ！」

山崎が短く答え、機体を旋回させる。

狙いは美奈代達の斜め前方。

何の躊躇もなく、山崎はトリガーを引いた。

ドンッ！

狙いを外さず、妖魔達が砕かれる。

「やる……」

美奈代が驚きを通り越してあきれた様な声になった。

「あいつら……いつの間に」

「感心している場合か！」

都築の怒鳴り声。

「前見てるか！？しゃんとしろっ！敵陣は目の前だぞ！」

「くっ！」

「山崎や柏だって、やるべきことやって、ここまで生き延びてきたんだ！努力が自分の専売特許だなんてタカくくってたんじゃないだろうな！？」

「――ちっ！このバカにそこまで言われるとは！」
「何だとぉっ！？」
美奈代達が前面に出た大型妖魔を次々と火砲で吹き飛ばし、側面を宗像達が固め、そこを山崎と美晴が通る。
背後から追いすがる敵は全て二宮達が蹴散らす。
八騎が一体と化し、敵陣を突き破ろうとしている。
先行する特務隊の背後がようやく見えた。
家へと導いてくれる水先案内人にさえ見えるその背が、見えたのだ。
だが――
「くそっ！」
希望は淡い夢と消えた。
ザッ！
特務隊の背後を美奈代達の視線から覆い隠したのは、大型妖魔の群れだ。
今までの中で最大規模の大型妖魔達の作り出した壁が、美奈代達の前に立ちはだかる。「どけえっっっ！」
美奈代はトリガーを引くが、
Ｖｏｏｏｏ……ガランッ！……ガラガガラガラッッッ……キュィン……
「弾が！？」
「機銃残弾切れ！パージ！」
バンッ！
爆破ボルトが作動、騎体から機関砲が落ちていく。
「火砲アウト！」
「斬艦刀を！」
「了解！」
征龍改の右腕が斬艦刀をつかむ。
「このぉおおおっ！」
征龍改の一撃が、最前列にいた妖魔の脳天を砕き、その背を蹴り

つけ、宙を舞った時だ。「ML（マジックレーザー）反応！」
牧野少尉からの報告は、遅かった。
「なっ！？」
ドンッ！
左から来た攻撃が、征龍改のシールドを直撃。
征龍改が吹き飛ばされた。
「ぐうっ！？」
歯を食いしばって衝撃に耐えた美奈代だったが、征龍改は横を移動中の鳳龍に激突した。「いっ……」
大地に叩き付けられた騎体のあちこちからダメージを知らせる警報が鳴り響く。
左側モニターは修正が追いつかないのか、ブラックアウトしたままだ。
戦略モニター上の部隊は停止した。
「く……くそっ」
騎体は動く。
それだけで十分だ。
自分のミスで、部隊を止めてしまった！
美奈代には、それで十分だった。
「泉っ！」
都築の叫びと共に、鈍い衝撃が騎体を揺るがす。
美奈代は知らないが、地面に転がった征龍改を踏みつぶそうとした大型妖魔を、都築が力任せに粉砕した衝撃だった。
「立てっ！」
鳳龍が征龍改の腕を掴んで立ち上がらせる。
「左腕が無くても、戦えるだろう！？」
「なっ！？」
美奈代は驚いてステイタスモニターを見た。

喪失　左腕部

喪失　シールド
喪失
喪失
喪失

喪失。

その言葉がモニター上に並んでいる。

腕がなくなった。
戦う手段が減った。
「……うっ」
震える手が、脱出装置のレバーを掴む。
一瞬、パニックになりかけた美奈代を、現実にすがりつかせることに成功したのは、牧野少尉の怒鳴り声だ。
「准尉！まだやれますっ！」
牧野少尉は怒鳴った。
「私とさくらが、どこまでも守りますっ！
――私達を、信じてくださいっ！」
「そうだよ、マスター！」
さくらの目は、いまだに戦いを諦めていない。
「まだ大丈夫！私、まだやれるよ！？」
「――よしっ！」
さくらの決意を秘めた目を見た美奈代は、征龍改を立ち上がらせ、斬艦刀を振った。

美奈代達を包囲している大型妖魔の一体がその一撃で吹き飛ばされる。

「大丈夫か！？」
征龍改の背後をガードするポジションについた都築が、
「負傷しているのか！？」
「大丈夫だ！戦闘は可能！」
「よし！それでこそ女房だ！」
「女房をこんな目にあわせておいて、亭主面するな！」
美奈代は大型妖魔達に斬り込んでいった。
「あっ！おいっ！」
「全騎！泉に続けっ！早瀬、宗像は泉の横に出ろっ！」
「離婚だ！早瀬にくれてやるっ！」
「何っ！？都築、いつの間に！？」
「宗像、マジにとるな！泉、いつ俺が！？」
「自分で考えろっ！」
「だから、そう熱くなるなっ！」

片腕が無くても！

美奈代は死にものぐるいで斬艦刀を振るい続けた。
自分がパニックになっていることなんて気づきもしない。
剣が唸るたびに、大型妖魔達の肉片が宙を舞い、断末魔の叫びが当たりにこだまする。
それは、恐怖を知らないはずの大型妖魔達に、本能的なレベルで美奈代騎を襲うことを躊躇わせる。

まさに鬼神の如き戦いを見せる美奈代は、内心で完全に焦っていた。

なんてザマだ！
真っ先に騎体を壊し、
仲間を窮地に追いやるなんて！

あってはならない！
あってはならないことだ！

それを――

それを私はっ！

この失態、必ず帳尻を合わせるっ！

「准尉っ！」
「マスター！ダメッ！」
牧野少尉とさくらの声さえ、今の美奈代には効果がない。
「右肘関節部が焼き付きます！」
「右腕がなくなったら！」
「うるさいっ！」
美奈代は血走った目で怒鳴った。

「敵陣を突破しなくては！」

それしかないのだ。

斬艦刀で大型妖魔をなぎ払い、
倒れた妖魔の分だけ開いた道を突き進む。

そうでもしなければ……

そうでもしなければ！

みんなが死ぬ！

それだけは……

それだけは！！

「泉っ！」

二宮が怒鳴った。

「戦争を一人でやるつもりか！？」

「しかし！」

「貴様のせいで全滅してたまるか！泉、中衛に入れ！早瀬、宗像、前面に出ろ！牧野中尉、これ以上泉が暴れたら、コントロールを取り上げろ、指揮官命令だ！」

「――くっ！」

「准尉――悪く思わないでください」

ピーッ。

警告音と共に、モニター上にコントロールがMC（メサイアコントローラー）へ移管されたことが告げられた。

モニターの全てが停止し、コクピットが真っ暗になる。

その間に、牧野中尉のコントロールで騎体が後退、さつき達が前衛に出る。

「泉……仲間を信じろ」宗像が言う。

「一人で全部抱え込むのが、おまえの悪い癖だ」

「泉――死に急いでるのは、あんただよ」

さつきが努めて明るい声で言った。

「それじゃいけないって言ったのは、あんただよ！」

「……」

コクピットでうつむいて歯を食いしばる美奈代の体が小刻みに震えている。

ヒクッ……

「……マスター」

おそるおそる近づいたさくらは、突然、自分の体を美奈代に抱きしめられたことに驚愕した。

「ま、マスター！？」

びっくりした顔のさくらだったが、自分の服を何かが濡らしていることに、そして、それが何かを知り、言葉を失った。

それは……美奈代の涙だった。

「さくら」

「うん」

慈しみさえ浮かべたさくらが、そっと美奈代の頭に手を置いた。

「がんばったね。マスター……偉いっ！」

「……すまん。こんな……結果になるなんて」

ステイタスモニター上の騎体はもうボロボロだ。

喪失した左腕。

加熱して焼き付く寸前の右腕。

斬艦刀も使用限界に達している。

冷静な時の美奈代なら、戦闘不能の判定を下す状況だ。

冷静な状態。

それは、今の美奈代には辛すぎるほど痛い言葉だ。

戦場で自己を見失った者は死ぬ。

だから、常に冷静たれ。

その父の言葉が、
それに背いたことが、
美奈代を容赦なく追いつめる。

「大丈夫！」

さくらは、そんな美奈代を励まそうと、元気いっぱいに言った。

「仲間を助けようって、頑張ったんだもんっ！さすが私のマスター！」

「……すまない」

全ての緊張の糸が切れた美奈代は、声をあげて泣いた。

入営以来、今まで、どんな苦難を前にしても泣いたことのなかった美奈代が、傷ついた征龍改の中で――泣いたのだ。

「さあっ！美奈代がここまでやってくれたんだ！」

さつきが震える声を気丈なまでに張り上げた。

「あとは私達が！」

「一緒に暴走しろ」

宗像はそっけない。

「……とはいえ、確かに、よくやったよ」

美奈代が斬り込んで切り倒した大型妖魔の数はかるく見積もっても１０体や２０体ではきかない。

美奈代騎の通った後は無惨な妖魔の死骸だらけ。

妖魔達の包囲網の半ば以上まで部隊がこれたのは、間違いなく美奈代の功績だ。

「あれを、冷静さを維持したままやってのけたら勲章モノだ」

「美奈代、あれで結構、熱血だから」

「さつきと同類か？」

「時々、シンパシー感じちゃう――あんたもだけど」

「熱血青春時代のまっただ中だからな。教官にはわかるまいが」
「あははっ！言えてる言えてるっ！」

軽口を叩きながら敵陣を切り開く二人。

「はぁっ！」
「ふんっ！」

二人の気迫と共に振るわれる斬艦刀。
敵は確実にその数を減らしていく。

だが――――

それさえ、敵の狙いだったと気づくのは、すぐのことだった。

「特務隊だ！このバカ！」
戦隊長から通信が入った。
「遅れるなと言ったろう！？」
「あなた達が非常識すぎるんです！」
二宮が部下をかばう。
「機動力が違うんですから！」
「ついてこいと上官が命じたら、ついてくるのが部下の務めだろうが！」
「リストラされたら絶対、再就職できないタイプの発言避けてくださいっ！」
「こっちも戻っている！」
「気にしてるなら直しなさいっ！」
「何の話だ！俺はお前の元彼だぞ！？」
「だから別れたのよっ！一週間も私の彼氏が勤まらなかった癖に！」

「一週間もったら奇跡だぜ！」

「右から来るっ！」

「側面より前方に火力を集中すればいいっ！都築、“クラッカー”を使えっ！」

全員が戦闘不能になった泉を守るために懸命に斬艦刀を振るい、血路を開こうとする。

それを、戦場のすぐ近く。

妖魔達になぎ倒されるのを免れた木の枝から見物している者がいた。

妖魔達をメサイア達がなぎ倒し、妖魔達は開いた穴を数で塞ぐ。

そんな攻防が続く光景を、ずっと見物していた。

「あっ」

近くの廃墟で見つけてきたポテトチップスの袋に突っ込んだ手を止めた。

妖魔の一部が、動きを変えた。

メサイア達に群がる妖魔達とは違うその動き。

それが、何を意味するか、はっきりとわかる。

「いけない」

小さな影が、ポテトチップスの袋を放り捨てると、木の枝から飛び降り、宙に飛んだ。

救援。

「特務隊の救援が来る！」

それが、全員の励みであり、希望になった。
少しでも、
少しでも、特務隊に、救援に近い場所へ！

さつき達は斬艦刀を振るい続けたが――
MC（メサイアコントローラー）達が、ほぼ同時に、悲鳴に近い声をあげたのはその時だった。
「斬艦刀、コンデンサー供給出力低下！出力が維持出来ませんっ！」
「斬艦刀、使用限界、コンデンサーが！」
見る間に斬艦刀の刀身を形作っていた光が失われていく。
「ちいっ！」
斬艦刀の最後の力を使って、斬艦刀そのものを大型妖魔の体半ばまで突き立てた宗像は、そのまま斬艦刀を放棄、空いた右腕で実剣を掴み、居合いの一撃で別な大型妖魔を切り倒した。

他の騎も、続々と斬艦刀を放棄し、実剣や光剣に主要武装を切り替える。

「斬艦刀の使用限界が早すぎる！」
「カタログスペックを維持出来ないなんて！」
山崎と美晴は、斬艦刀を放棄すると、背面にマウントしていた長刀を装備、敵と渡り合った。
「敵の数が、大分に減ったみたいだけど――」
美晴には、そう見えた。

何故、減った？

その答えを真っ先に知ったのは、各メサイアのMC（メサイアコントローラー）達だ。

「敵、間合いをとっています！現状の敵による阻止線を突破すれば」

つまり、半円の陣形を展開し、遠巻きになっている。

何故？

攻撃の可能性は？

ＭＣ（メサイアコントローラー）達が、その結論に達するより早く、敵陣を突破するドアを叩いたのは、さつきだった。

唐竹割の一撃を喰らった妖魔が倒れ、その背後に、月夜に照らし出された青白い暗闇が生じたのを、さつきは確かに見た。

「開いた！」

感激のまなざしは、すぐに驚愕のそれにとって変わった。

大型妖魔達。

その額に生じる光を見たからだ。

「敵、大規模ＭＬ反応っ！」

ＭＣ（メサイアコントローラー）からの悲鳴のような報告に、二宮はようやく合点がいった。

ＭＬのエネルギーを収縮して、最大出力の一撃を、自分たちにお見舞いするつもりなんだと。

「泉を吹き飛ばした一撃は、やつらの攻撃か！」

そう。

メサイアのシールドを腕ごと吹き飛ばした一撃。

メサイアを蒸発させるあのサイの一撃に比べればたいしたことがないとはいえ、破壊力は圧倒的だ。それが最大出力で？

そんな集中砲火を受けたら――――！

敵は仲間を犠牲にしても、我々を殺すつもり。
それはわかる。
わからないのは、それをどうやって回避するか。

「ＭＬ（マジックレーザー）でやれるか！？」
「はいっ！」
二宮騎からＭＬ（マジックレーザー）が放たれるが、

ビインッ！

ＭＬ（マジックレーザー）は妖魔の前で弾かれた。

「敵、マジックシールド展開っ！」
「どこまで器用な奴らだ！？」
それでなくても、周囲は敵だらけ。
切り倒し続けなければ倒される。
ＭＬ攻撃を避けるには、周りが制限されすぎている。
ここで死ぬか。
ＭＬで蜂の巣にされるか。
嫌な二択だが、どうしようもないのだ。
「特務隊は！？」
「間に合いませんっ！」
妖魔達の前に生じている光が、より強くなる。
「――――くっ！」
ここまで来て！
二宮は、唇をかみしめながらその光を睨んだ。

回避不能。

全滅

死

そんな言葉が頭の中で駆け回る。

そして――

ズンッ！

幾重にもガードされたメサイアの目をしても、ホワイトアウトを免れなかったほどの強い光と激しい振動が、二宮達を襲った。

「くっ！？」

思わず腕で目をかばい、その光と衝撃に耐える。

「な、何が！？」

光が去り、元の暗闇が支配権を取り戻す。

「――えっ？」

二宮は、その光景に対して、やっと言えたのは、それだけ。

それまで、居並んでいた大型妖魔達が、その姿を消していたのだ。

「ど、どこに！？」

「敵包囲網、全滅！」

MC（メサイアコントローラー）からの報告に、二宮だけではなく、居合わせた全員が混乱した。

いや。

人間だけでなく、大型妖魔達までが動きを止めていた。
「な……何が？」
「周囲２０キロ。移動した形跡なし。可能性は――――消滅」

大型妖魔。
全長数十メートルの大質量を消滅させた？

「馬鹿な！」
「隊長！」
さつきが怒鳴った。
「その前に、周囲にコイツ等を！」
「はっ！そ、そうだな！」
現実に立ち戻ったのがわずかに早かった人間達が、妖魔達に剣を振り上げた。

「……ふう」
最後の一体が倒され、メサイア達が前進を開始。
向こうには敵はいない。

長野市方面からの増援に襲われる前に逃げ切れるだろう。

「やっぱり……」
月夜に照らし出された銀色の髪が美しいまでに輝く。
それを嫌うように、ウィンドブレーカーのフードをかぶる。
「サイクロトロン……発射の手間、どうにか考えないとなぁ……」

マジックサーチャーやマジックレーダーから逃れる方法もとっていたから、メサイア達が気づくことはなかったろう。

それにしても、

新潟からの帰り道。

久々に生きた人間と出会えたっていうのに、あんなモノに乗っているなんて。

「――ま、いいか」

ポケットから市販の地図を取り出し、月夜に照らす。

「お父さんも、何で歩いて帰ってこいなんていうんだろ。飛行やテレポート、なんで駄目なんだろ」

あちこちに、人間以外の言葉で書き込みのある地図。

「えっと……今、川中島だから、明日にはたどり着くよね」

――クゥッ

お腹の鳴く音が小さく響く。

「お腹空いたな……」

難民収容所

鈴谷に収容され、コクピットから降りた美奈代を待っていたのは、二宮の平手。

その一撃を喰らった美奈代に、二宮は無期限の独房入りを命じ、美奈代はそれに従うしかなかった。

命令無視。

暴走により、騎体を破損させ、部隊を危機に陥れたこと。

それが理由だ。

営倉に入ってからすでに半日が過ぎているが、そっと触れた頬の痛みはとれない。

「美奈代さん、生きてます？」

ドアに開けられた鉄格子付きの窓から顔を覗かせたのは、美晴だった。

陸（おか）では憲兵の仕事だが、人手の足りない艦（ふね）では勝手が違う。

「ご飯ですよ？」

ドアの下から食事がのったトレーが差し入れられる。

「柏――戦況は、どうなっている？」

「……」

美晴の顔が曇った。

「ど、どうした？」

「最悪」

うんざりした声で、美晴はドアにもたれかかった。

「中華帝国がまた反応弾使った」
「なっ！？」
「せっかく開かれた国連安保理は中華帝国が拒否権を発動して、実質機能停止。
アメリカ軍は、南米の対応にも追われて、帝国の前線へ兵力を送れない。
ＥＵ軍主力部隊も、北極航路の嵐と、インド方面の攻勢のおかげで足止めされている」
「ぜ……全滅するぞ！？」
美奈代は格子を掴みながら怒鳴った。
「前線が崩壊して、みんな死ぬ！」
「……国内戦線への反応弾投入、帝国政府はまじめに検討しているって噂だよ？」
「――――っ！」
「せめて、オーストラリアとニュージーランドさえどうにかなれば違うでしょうけど」
「あの国は、他国をなんだと思ってるんだ！」
「化外の民――――そう言うそうだよ？
自国民以外は一段……ううん？数段、落ちる存在で、価値はない」
「せ、世界を敵に回すつもりか！？」
「でもね？所属する国が中華帝国にとって敵だろうと、国内での企業の経済活動は保護するっていうの。１３億人のマーケットに参加して利益を得たい――――そんな企業は、軒並みそれを甘受している」
美晴は、思い出したように言った。
「日本の大企業は特にね」
「なっ！？」
「美奈代さん」
美晴は口元を歪めながら言った。
「人道じゃ動かない。取引先が悪魔だと知っていても、利益が生まれるなら喜んで取引する――――それが、企業だよ？」

「……っ！」
美奈代は床にへたりこんだ。
「私達の敵は――――」
震える声を絞り出す。
「私達の敵は、何なんだ？一体、私達は誰と戦ってるんだ！？何と、何のために！？」
「……魔族」
美晴はそう答えた。
「私達は、魔族と戦う――――理由？」
美晴は口元を歪めた。
「私達が兵隊で、戦うのは命令だから」
「っ！」
「美奈代さん？私達が戦うのは、他から見れば、私達の義務であり、ビジネスだから。それは、企業や、それで生きてる人達には当然のこと。
そういう人達はきっと言うよ？
自分達を守るのは軍の務め。
当然、自分達は守られる権利がある。
軍や政府は、それを保証するための存在にすぎない。
つまり……私達が前線で戦って、何千、何百万人が死のうが、それは、企業の人達にとって、私達の勝手にすぎない」
「……勝手？」
「そう。私達が、自分達の都合で、勝手に死んでいくだけだって――そういうことでしょ？私達がたとえ全滅したって、企業は痛みどころか、痒みさえ感じない」
「……」
美奈代は、血がにじむほど拳を握りしめた。
「その理屈で……」
「……」
「私達は、死んでいくのか……？」

「……近衛軍だけじゃなくて、前線兵士達の間で囁かれてる噂がある」

「……」

「魔族軍の狙いは、人間の数を減らして、破壊された自然環境を回復させることにある。人口集中地域や、自然破壊が激しい工場群を狙うのは、そのためだって。

つまり、魔族は自然の味方。

私達は、自然破壊の企業の手先。

この噂のおかげで、前線兵士の志気も、かなり落ち始めている。

拝金主義者の手先になるか。

自然という神の恩寵を回復させる者達と共にあるか。

……個人の憎悪だけで戦うには限界あるわ。

でも、そんな世界に一矢報いる方法がある」

「？」

「――あの攻撃、無視するのよ」

あの攻撃――それがガストラフェテスの攻撃であることを、美奈代はすぐに察した。

「なっ！？」

「私がここに来て言いたかったのは、そのこと。

帝国政府はあの攻撃を黙認することにした。

理由？

中華帝国のせいで、兵力が割かれて阻止することが出来ない。それは中華帝国の責任で、そうである以上、責任は連中にあるから。

さっき、３０発近くが中華帝国に降り注いだのが確認された。

場所は奉天（ほうてん）一帯――奉天工業公司の軍需工場がある辺り。観測衛星からの情報で、もうボッコボコにされたって――いい気味よ」

笑いながら、美晴は言った。

「知ってる？奉天工業は中華帝国最大の軍需メーカー。その工場がやられたら、中華帝国軍は武器の供給に大打撃を受ける――東南アジア方面での軍事的被害に、供給面での被害で、絶対に連中、こ

れ以上派手に動くことは出来ない」
「あの国が、これ以上我慢してるはずが」
「ええ」
美晴は頷いた。
「しっかり、帝国めがけて大陸間弾道弾撃ち込んできたけど、魔族軍は全部阻止してくれている」
「……」
「本当、どっちが味方で、どっちが敵か、わかんないわよね。今の世界って」

――同じ頃。
「入るわよ？」
“鈴谷（すずや）”の艦長室に二宮が入った。
「御苦労様」
「ええ」
二宮は右手の手首を気にしながらソファーに座った。
「右手、痛めたの？」
「かもしれない」
二宮は出されたコーヒーに口を付けながら言った。デスクの上に放り出されたままの書類に目をとめた。
「……美夜、本気でやるつもり？」
「いいじゃない」
美夜は当然。という顔だ。
「あのビームバズーカは部隊のものだし？ここはその部隊の母艦」
「……使わない間は、母艦にて格納する」
「その格納する場所が砲塔なだけよ」
「……あのね？美夜」
二宮は珍しく諭すような声になった。

「あのビームバズーカは、２８センチＭＬ砲（マジックレーザー）と同じ出力だから」
「２８センチ砲１０門装備よ！」
声を大にする美夜の目に、危ない光を感じた二宮は即座に黙った。
「四捨五入すれば３０センチ！予備まで組み上げれば１２門！」
「……」
「もう二度と“鈴谷（すずや）”を“空飛ぶ格納庫”なんて言わせるもんですか！」
「あ……あ、そう」
――修復が遅れてるんじゃなくて、砲塔組み付けに時間がかかっていることを、あの子達が知ったら何て思うかしら。
二宮が顔をしかめたのは、コーヒーの苦さだけとは限らない。
「そうよ。これで装甲さえあれば、強襲揚陸艦としての任務も果たせるわ……で」
美夜は思い出したように訊ねた。
「……あの子、どうするの？」
「泉のこと？」
「そう。あなたのカワイイ秘蔵っ子」
「……騎体の修理が完了次第、懲罰任務に出す」
「懲罰任務？」
「最前線の強行偵察任務」
「……もしかして佐久平へ？」
「違う」
二宮は言った。
「上田」
「上田へ？」
美夜は目を丸くした。
「……あの子を買いかぶりすぎよ。上田は敵の本拠地よ？それがわかって言っているの？」
「仕方ないでしょう？上層部（うえ）から命令として出ちゃったんだから」
二宮は顔をしかめた。

「あの馬鹿娘……通話記録や戦闘データから暴走していたのは明白よ？そのおかげであいつは騎体を破損させたんだから。上層部だって黙っているワケないわ」
「……可哀想に」
「言わないでよ……私だって心配は心配なんだから」
「でも、何だって上田なの」
「近々、松本方面からの国連軍の攻勢があるの。事前の情報察知のための強行偵察は必須。
何しろ、偵察衛星は打ち上げる端から撃ち落とされるんだから」
「攻勢なんて初耳よ？」
「私も命令を聞いて初めて知った。松本のＥＵ軍が中心になって行われる。メサイアは“ロンギヌス”――騎種からして、中核はフランス銃士隊辺りね――ただ」
「？」
美夜は、二宮の表情に奇妙なものを見た。
辛い。
そう、顔が語っていたのだ。
「他にも任務があるみたいね」
「……接触あればの条件付きだが」
二宮は頷いた。
「任務には、屍鬼（グール）狩りが含まれる」
「屍鬼（グール）？」
美夜は、その言葉が何を意味したか、即座には思いつかなかった。
「ゾンビのこと」
「ま……まって」

思わず、美夜が手を挙げた。
「ゾンビって……つまり、人間ってことよ……ね？」
「正確にいえば、元・人間ね」
二宮は言った。
「妖魔・魔族に襲われた犠牲者がゾンビ化することは、魔導師連中の間では、昔から知られていること。上田市や佐久市、長野市など、戦場で犠牲になり、屍鬼化した死体が、松本方面で人を襲いだしている」
「人を、襲う？」
「魔族は屍鬼（グール）を兵隊として使っているってこと」
「なっ！？」
美夜はその言葉に目を見開いた。
「何しろ、遠目には人間にか見えない。なかなか狡猾らしくて……しかも既に死んでいるから早々倒せない。群馬県に紛れ込んだあるケースでは、警官隊が拳銃で倒せないからと言って、猟銃店から持ち出した大型猟銃で、頭部を吹き飛ばしてようやく止めたというわ」
「そ、それが」
美夜は訊ねた。
「泉准尉の強行偵察とどう？」
「一昨日、別部隊のメサイアが、先に上田方面の強行偵察に出た――知っているでしょう？あのＦｌｙ　ｒｕｌｅｒの類似騎」
「ああ。あれ？」
美夜は、太平洋上空でランデブーした3騎を思い出した。
「それで？」
「同乗していたサードアイが、屍鬼（グール）達の大きな反応を上田市内で発見した」
「珍しい所に乗ったモノね。サードアイなんてＭＣ（メサイアコントローラー）以上の最重要兵器指定なのに」
「上田市はほぼ日本のど真ん中だからね。周辺に妖魔や屍鬼（グール）を送り込むには都合のいい地点なのよ。泉にはその拠点の現状確認と、可

能な限りの破壊が命じられる」
「……本当に」
美夜はあきれ顔だ。
「あの子に死ねというのと同じよ？」
「それより心配なのは」
二宮は、ソファーにもたれかかると、天井を仰ぎ見た。
「元とはいえ――泉が人間を殺せるかよ」
「……」
「ゲーム感覚で人が殺せるなら、話は早いんだが」
「ゲームと言ったら」
美夜は思い出したように訊ねた。
「誰だったかしら。八八特務隊に送られている」
「風間か？」
「あの子は？」
「任務の候補には挙がっていたけどね」
二宮は首を横に振った。
「乗騎には広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）が搭載出来ないから見送られた」
「あれが搭載出来ないメサイアなんて、近衛にあった？」

広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）
メサイアの“本当の基本装備”である火炎放射装置を魔法科学で製造した、別名“悪魔の兵器”。近衛のメサイアの任務は、対メサイア戦をのぞけば基本的にこれを使用するために運用されていると言っても良い。

「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒを始め、新型のワンオフ系はそうらしいわね。開発コード“飛燕”と呼ばれた騎。現在は制式化され、Ｄ－ＳＥＥ（ディー・シード）と名付けられているのが、風間騎よ」
「ディー……シード」
美夜は言った。

「そっちにやらせるべき任務じゃないの？強行偵察に屍鬼狩り（グール）なんて。敵地強襲と同じじゃない……本気でやらせるつもりなの？司令部は」

「文句はダンナに――――どうなったんだ？」

二宮は、美夜が昨晩ダンナである艦隊副司令から司令部に呼びつけられたことを知っていた。

「アレなら今、集中治療室で寝てるわ。いつものことよ……で？」

「泉は承知してはいる。

屍鬼（グール）は人間ではない。

従って、これは人殺しではない。

敵の狙いは、今の貴様等のように、同族殺しを忌避する心情を沸き立たせ、余計な行動に陥らせ、そして犠牲を増やすことにある。

一種の心理作戦だ。

……そう、説得した」

「ヤバければ逃げろ――――ちゃんと言ってあげた？」

「――――ええ」

「彼女、何て言っていた？」

「汚名返上」

「マジメな子ね」

美夜の視線が、艦長室を泳ぐ。

普通の士官室より広い室内には、落ち着いた雰囲気の内装と観葉植物が、合金と樹脂の塊である飛行艦の中にいることを忘れさせてくれる。

その視線が、ガラス扉のついた棚に止まった。

「今日はもう仕事上がりでしょ？……飲む？」

●“鈴谷（すずや）”整備ハンガー

「あーあ。また派っ手に壊してくれたわねぇ」

鈴谷のハンガーベッドに寝かされた征龍改を見上げため息混じり

に言ったのは、一見、小学生かと思うほど小さい女の子。

津島紅葉技術中佐だ。

魔導師の一種にして、この世界の天才の別名“見通者（シーカー）”の力を持つ。

幻龍改、“征龍改（せいりゅう）”、斬艦刀等、近衛の最新兵器のほとんどの開発を一手に担っているといえば、その能力の高さが分かるだろう。

「C整備で足りるの？」

「D整備だ」

紅葉の横に立つ坂城が腕組みしながら、紅葉と同じように征龍改を見上げる。

「腕吹き飛ばされた時、肩部フレームがかなり歪んじまってる。改装の負担も考えると、メーカー送って、構造検査もさせてぇんだが……」

「普通、大破っていうんだよどね」

見上げる征龍改は、あちこちの装甲やメンテナンスハッチが開かれ、整備兵達がとりついている。

こと、きれいになくなった左腕部の付け根からは、整備兵達の工具から盛大に火花があがっていた。

「大型妖魔の撃破数（スコア）、レコード更新したんだっけ？」

「ああ」

坂城は腕組みしたまま頷いた。

「各戦線での撃破記録広報が撤回されたそうだ」

「あんなの」紅葉は皮肉そうに頬を歪めた。

「“公の”発表にすぎないのに」

「特務隊の仕事は公表出来ねぇだろうが」

坂城の目の前で、一番弟子のシゲが乗った左腕がウィンチで移動していく。

「ジュンとこの嬢ちゃんが独房から出るまでには復活させてやるさ――それにしても」
坂城は思い出したように言った。
「斬艦刀……ずいぶん、つるし上げくらったらしいじゃねぇか」
「赤木のババアに言って欲しいわよ！ったく！」
紅葉は頬をふくらませた。
「EGS（エルブス・ジェネレーター・システム）のコンデンサーなんて、設計したのはあの老いぼれなのに！」
「まだ30前だろうが」
「30の足音聞こえたら、女はみんなババアよ！棺桶準備する歳よ！」
「おいおい……」
「あ、坂城さんは別ね？」
紅葉はくるっと回ると、坂城に悪戯っぽい目で言った。
「オトコは燻銀の魅力がついて初めてオトコなんだから」
「――へっ。ありがとうよ」

「――津島中佐」
背後からかけられた声に、紅葉は露骨に顔を歪めた。
「何をなさっているの？」
「あんたの許可がいるの？」
不機嫌そうな顔で振り返った視線の先。
そこには、白衣姿の女性技術士官が立っていた。
どこといって特徴のない、ただ、神経質そうな目だけがやたらと目立つ、そんな女性だ。
「この鈴谷は、私達αチームの管轄のはずでは？」
「戦時下において、両チームを一時合併し、国難に対抗できるメサイアの開発・改良を行うべしっていうのが、開発局の方針でしょう？」
「どさくさに紛れるのがお好きなようね」

「――どっちが？」
紅葉は剣呑な目つきで赤木を睨んだまま、
「私が開発したＤ－ＳＥＥＤの操縦システム。あれにブラックボックスつけてくれたのは中佐でしょう？あれに比べれば」
「あれが何か、まだわからないの？」
そのあからさまに人を見下した視線が、紅葉の逆鱗に触れた。
「――くっ！」
「あなたが無茶苦茶デリケートに設計しすぎた操縦システム。普通じゃまともに操縦できないから、その補正として組み込んであげたんでしょう？感謝なさい――それと」
赤木は征龍改を一瞥した後、言った。
「このどうでもいいのはともかく、鳳龍には関わらないで頂戴――いいわね？」
そう言い残して、赤木は鳳龍が格納されているハンガーベッドへと歩いていく。
「なによあの女（アマ）！」
それが理性の限界だったのだろう。
赤木が去った後、顔を真っ赤にした紅葉が怒鳴った。
「人の作品には平気で横やり入れるクセに！自分のには入れるな？何様のつもりよ！」
「まぁまぁ」
年の功というべきか、坂城がやんわりと紅葉を止める。
「――で？赤木さんが斬艦刀の設計を？」
「そう」
口に出すのも汚らわしいといわんばかりに、紅葉は舌を出した。
「あのババア……理屈と思いこみだけでモノ設計するから、こうなるのよ」
「カタログスペックと実際の使用可能時間がかなり食い違っていたと聞いたぜ？」
「あのババアが考えているのは、単に斬艦刀にパワーを入れている

だけ。それならカタログ通り、2時間はもつわよ」
「違うのか？」
「ジェネレーターで発生させる魔法の刃、エルプスは、物質と接触すれば反作用で物質ごと消滅する。それをずっと埋め合わせ続けることで、あの破壊力を維持しているの」
「ただ作動させているのと、その埋め合わせを行うんじゃあ、消費されるパワーが違うってことか」
「そう！」
紅葉は手を叩いた。
「あのババアは、それがわかってない。ま、だから私の改良案が通って、あの落ち目の老いぼれババアは斬艦刀のプロジェクトから放逐される。大体、あの鳳龍だって」
「何か――――あるのか？」
「設計上、穴だらけだもん」
「そいつぁ……聞き捨てならねえな」
「知りたい？」
「当然だ」
「じゃ、協力して」
紅葉は言った。
「八割は簡単な微修正で終わるから」

●長野県第6難民収容所

帝国国民を襲うのは、何も魔族だけではない。
中華帝国からの食料供給停止。
原油の高騰。
産業の停滞。

海外に術を依存し、発展してきた日本経済は、国内戦という未曾有の出来事により、海外との交易が停止した時点で完全に破綻。生活に必要な全ての物資の供給停止が、国民を襲う。

国内のスーパーでは満足な食料品さえ並んでいない。
国民一人当たりの栄養摂取量が過去１００年間で最も低くなったのは、この年だ。
国民の批判は、食料安全保障を軽んじ、国民に満足な食料を供給できない政府と、何より、そんな状況下で利益を追求する大企業に向けられた。

物資の買い占め。
供給制限による価格の暴騰。
そこから生まれる暴利。

同国人に餓死者が続出する中、ある外資系商社の会長は、食料買い占め疑惑否定の記者会見の席上で「企業は利益追求集団ですから」とだけ答えた。
その翌日、この商社の倉庫から、発表された在庫にはない小麦や米が数万トンの規模で発見された。
この商社は、これを通常の数十倍の価格で売り出し、莫大な利益を上げた。
その言い分が、「こうでもしないと国際競争力が確保出来ない」。

なお、同日に発表された政府確認の餓死者数の累計は、この企業の全従業員数の二倍に達している。

失業者達は生活の糧を求め、難民は食料を求めて、各地で暴動を引き起こし、大企業の工場やビルを破壊する。

同じ頃――

避難民向け仮設住宅が立ち並ぶ難民収容所。
着の身着のままで逃げ出してきた人々が、そこでわずかな食料で命をつなぐ。
どこで暴動が起きようが、略奪が生じようが、ここにいる人々には関係ない。

犯罪が横行し、誰もが他人に猜疑心をむける。
盗んで盗まれ、騙して騙され、殺して殺され――生きていく。
今、この瞬間を生きるだけで精一杯な世界。
それが、この収容所

いや……違う。

――日本だ。

「お嬢ちゃん、一人かい？」
避難民達を強制的に収容する難民収容所。
食糧配給所の長い列を経て、ようやくありついた薄いスープをする少女に、年老いた女性が声をかけた。

こくん。
少女は、無言で頷いた。

「そうかいそうかい」
女性は、少女の真向かいに座り、スープをすする。
「私もだよ。逃げてる最中に、娘夫婦と生き別れさ……どうしようもない」
「……」
「ここにいる連中、みんなそうさ。魔族に襲われて、命からがら逃げ出したら、今度は政府に襲われる。……嬢ちゃん、お金はあるかい？」
こくん。
少女は、無言で頷く。
「そうかい……大事にしなよ？政府の連中、仮設住宅に住むのに家賃をとるっていうのさ。着の身着のまま放り出された私達にゃ、服以外、何もないっていうのにねぇ。
……ひどい話さ。
昨日だけで何人、この寒さで死んだかわかんないのにねぇ」
女性は、ふと気づいたように、少女にわびた。
「悪かったねぇ。お嬢ちゃんに言っても、何の意味もないのに」
ふるふる。
少女は、近くのゴミ捨て場にスープの容器を投げ捨てると、立ち上がった。
少女が立ち去る間際、女性はスープの中に何かが落ちたのを知った。
「？」

一万円札が数枚、スープに浮いていた。
驚いて、再び、少女の姿を探すが、避難所の雑踏の中、少女の姿は消えていた。

少女は、避難所を抜けて、目的に向かうべく歩き始める。
滝川村に戻る前に受けた、新たな指示。
それを実行すべく。

避難所を囲うフェンスは、あちこちで穴があいている。
少女は、そこから避難所の外に出ようとしたのだが――

「ちっ」
小さく舌打ちすると、フェンスにそって、素知らぬ振りで歩くことを余儀なくされた。

フェンスの外側に、銃を持った兵士達が立っているのが見えたからだ。

避難所のあちこちから悲鳴や怒鳴り声が聞こえてくる。

「？」
避難所に戻った少女の目の前で、何人かがもみ合いになっていた。
警視庁騎士警備部の制服を着込んだ男達が、まだ２０にもなっていないだろう男を取り押さえていた。
避難民達は、それを遠巻きに、恐れの眼差しで見つめるだけ。
中には、手を合わせる者までいた。
「おとなしくしろっ！」
警棒で何度も殴られ、男がうずくまった。
「手間かけさせやがって！」
動かなくなってもなお、数発、警棒で殴り続ける警官達。

「よし――ここのノルマはあと5人だ」
避難所には場違いの、仕立てのいいスーツ姿の男が、顎で鉄格子のついたトラックを指した。
「お、お願いですっ！」
その男にすがりついたのは、包帯だらけの女性。
かなりの怪我を負っている。
「む、息子なんです！たった一人の！」
男は、心底汚らわしいという顔で言い放った。
「――そんなの、あなたの勝手でしょう？連れて行け」
「そ、そんな！」
「我々は帝国政府のために働いているのです。あなたのためではない」
「あ、あの子がいなくなったら、私は！」
「死亡時までの年金、他の税金は、しっかり納めてくださいね？義務なんですから」

手錠をかけられ、トラックに押し込められた男が、逃げだそうと暴れ出す。

「おとなしくしろっ！」
再び、警官ともみ合いになるが――

バンッ！

もみ合いの中、鈍い音が響き渡った。
頭から血を流す、男の死体があった。

女性の喉から意味不明の叫びが響き渡る。

「――困るじゃないか」
拳銃を持つ警官に、男は言った。
「ノルマが減る」
「も、申し訳……」
「始末書モノだ。……はぁっ。ここで私の経歴にドロを塗ってもらっては困るのだ」
「は、はっ」
「やむをえず“処理”したと報告しておきたまえ。代わりの者を捕まえてこい」
「はい！」
「私達、厚生省は、騎士を本来あるべき場所、戦場へと送り込み、帝国の勝利に貢献する義務がある。そして、私には、日々、騎士を割り当てられた数、送り込むノルマがあるのだ」
「は、はい」
「――それがね？私の出世のためには必要なのだ。私の栄達を、そんな安い鉄砲玉と、騎士の命で邪魔されてはね？困るんだよ」
死体と、それにすがりつく母の前で、男は眼鏡を直した。
「公安騎士たる君にも、その点は、しっかり理解して欲しいものだ」
男は、そこで思い出したように、やや大きい声で言った。
「厚生省への言論以上の抗議、反抗的態度があった場合、数日間、食糧の供給が停止することを、改めてここの連中に教えておけ」
「はっ！」
警官は、敬礼すると、部下に号令をかけ、部下達が再び、警棒を手に駆けだしていく。
「所長――死体を処理しておけ。自殺だ」
「はっ」
太った男が、死体を前に平身低頭で頭を下げた。

この男の死が、

女性の希望が失われたことが、
少女にはわかった。

「……さて」
男は、懐から懐中時計のようなものを取り出した。

――騎士探索装置

人間には、指紋同様、各個人に独特の霊的波長がある。
その波長を分析すれば、相手が一般人か、騎士か、それとも魔法騎士かがわかる。

少女は、話には聞いていたが、それがそうだとは思いもよらなかった。

男が、少し驚いた表情で、少女を見ると、そばに控えていた別な警官達に、何かを指示したのを、少女はただ、眺めているだけ。

警官達がすぐに少女を取り囲む。

「お嬢ちゃん」
「……」
男の冷たい言葉に、少女は無言で応じる。
「いくつだ？」
「……１４」
「ほう！」
男は無遠慮に少女の肩に手を置いた。
「戦時騎士動員法、知っているな？」
無言で少女は首を横に振った。
「なら、教えてやろう」

男の手に力がこもった。
「１３歳以上の騎士は全て戦力として動員する。我々はその徴用役だ。魔法騎士１人確保で、騎士１０人分のノルマが達成できる。臨時賞与は私のものだ」
男は心底うれしいという声になった。
少女は、その目の奥底で光る嫌らしいまでの光に、生理的な嫌悪感を感じずにはいられない。
「局長賞も夢ではない――厚生大臣の夢も、捨てたものではない……いや！私こそふさわしいのだ！」
「……」
狂ってる。
少女はそう思った。
戦場で人が死ぬのも、
こうして今、生死の境をさまよう人々を前にしても、
人を殺しても、
痛痒さえ感じない。
あくまで己の保身、出世のみに固執する。
人外の獣が、目の前にいる。
少女は、そう思って、考えを改めた。
父は言っていた。
人間界で出世したければ、人間を捨てろ。
人間でいる限り、出世はない。

目の前の男は、人を捨てたんだ。

人ではなく、官僚になったのだ。

だから――仕方ない。

「騎士収容所に送る。騎士ランクによっては、そのまま前線という、君達のいるべき場所に住むことが出来る――素晴らしいことだろう？え？」

「……」

「トラックに押し込め。厳重に注意しろ？魔法騎士だからな」

他にも何人か、騎士が捕まったらしい。

血まみれの男達。

中には、まだ小学生かと思う子供までが手錠をかけられ、トラックに放り込まれる。

「さあ、乗りたまえ」

男に促され、少女はトラックに乗った。

バンッ

その前でドアが閉められ、施錠される。

「よしよし――今日のノルマはこれで達成だ。こんな汚らしいと

ころまで来た甲斐があった」
男は大きく頷いた。
トラックが走り出す。
避難民達が、ぞろぞろと道に出てきて、手を合わせてくる。
トラックの中の騎士達は、格子にしがみついて泣き叫ぶ。
少女は、避難民達の中に、さっきの女性がいたことに気づいた。
女性は、跪いて手を合わせていた。
「……」
「こちらは厚生省です。みなさまには平静をお願いします。投石行為等、一切の厚生省への敵対行為は、みなさまに多大な被害を及ぼします。投石があった地域へは、食糧の供給が遅れます――」
そんなテープが、少女の乗るトラックを送る。
「さて」
トラックの運転席からスピーカー越しの声がした。
「名前、騎士ランクを申告しろ。意識のない者はたたき起こせ。早くしろ」
騎士達がおそるおそる申告する。
「何？まだ１２だと？」
自分は１２歳だと名乗った少年に、スピーカー越しの男は冷たく言い放った。

「仕方ない。今からお前は１４だ。何。書類上のミスはある」
「そ、そんなっ！」
「下手なこと考えるな？このトラックの荷台には、床に散弾が仕掛けてある。暴れたら、ここにあるボタン一つでお前等は挽肉だ」
「……」
「次、――――何？６５？よかったな。棺桶は国家が用意してくれる。次――――魔法騎士のガキ。お前、名前と騎士ランクは？」
「……」
「早くしろ！挽肉になりてえか！？」
「……です」
「聞こえん！」
少女は名乗った。
「水瀬、悠理です――――騎士ランク、ＡＡ」

上田市強行偵察

人類が頭を悩ませるのは、何も魔族軍相手の戦いだけではない。
つまり――いずれ魔族軍に勝つとして、アフリカと南米両大陸の戦後処理をどうするか。
人類は、この時点で、すでにそんなことを議論していた。
植民地と、その経営の失敗に伴う経済的破綻が原因で、放棄同然に独立“させられた”国が多い両大陸だ。
当初、ヨーロッパは宗主権をもってかつての植民地を復活させようとした。
これに対し、“民主主義と自由の執行者”を自負する米国が反発、三週間戦争前の国家の独立維持を求めた。
ヨーロッパはこれに冷笑をもって答えた。
「今、海外にいて生き残ったほとんどが、かつて国を捨てた移民達だ。
彼らはその国の国民ではない。
しかも、国によっては世界中からかき集めても国民が５０人に満たない国もある。
５０人に国を動かせるか？
その面倒をアメリカが見てくれるというのか？
わずか５０人から選ばれた代表が率いる国を独立国として認めるのか？
――アメリカと対等な独立国として」
それが彼らの理論であり、米国はその理論を覆せなかった。
独立支持国がその国に必要な費用すべてを負担するという議論までふっかけられた日には、米国は完全に沈黙した。
資源産出国を抱える南米は、彼らにとっても魅力的な土地であった。
欲しいか？と聞かれれば欲しい。

だからこそ、彼らは取引に応じた。
ヨーロッパによる宗主権承認と引き替えに、南米における利権を確保する方向へと米国が動いたのは、国際社会の中ではむしろ自然の流れである。

その流れを決定づけたのが、フィンランドの都市オウルにおいて行われた国際会議。

議題は魔族軍と中華帝国の侵略に対する国際社会の対応について。

会談の結果は声明文にまとめられた。

――国際社会は魔族軍を地上より一掃することで団結しなければならない。

後に“オウル会談”と呼ばれる会談の成果をまとめた声明文は、その一文から始まっていた。
世界はこの声明文に驚愕した。
魔族軍に対する国際社会の団結を訴えるのはいい。
問題は、魔族軍“及び中華帝国”支配地域の戦後処遇が盛り込まれていたことだ。
――魔族軍支配地域における領土においては、かつて宗主権を持っていた国による復興とその後の領土支配を承認する。

つまり――旧宗主国の権利復活。

これが明示されていたのだ。
全文はこうだ。
宗主権が国家間を移動した過去がある場合、該当国の最後の宗主権所有国とする。

「また、植民地とならず独立を維持し続けた国は、魔族軍の打倒及び、その地域解放に最も貢献したと認められ、最もその土地を確保した国家に帰属するものとする」

各国は目の色を変えた。

魔族軍の打倒に貢献した国は、領土が与えられる。

どこが？

明確でなかったが、旧オランダ領インド。

アフリカは南アフリカとエチオピア、そしてソマリアなど。

南米はペルー及びアルゼンチンと見込まれていた。

とにかく、その地域に攻め込んで魔族軍をうち破れば、そのままその国の領土になる。

多くの経済問題と失業者を抱える欧州国家はこぞってこれに賛同した。

アメリカもだ。

そして、魔族と中華帝国と戦うために、兵力を派遣する。

アフリカと南米を人類の手に取り戻すため。

その建前と、

新たな領土を手に入れるため。

その本音。

人類が戦う理由は――――この程度の代物だ。

“この時点において、自然界の回復という魔族軍の戦闘目的を高尚と称える者はいても、人類の目的をそう呼んだ者はいない”

後に、ある歴史学者が語るとおりのことである。

●大日本帝国

とはいえ――――

俗と利権にまみれていようが何だろうが、戦力が欲しいというのが、この頃の日本の本音であった。

現在、米国とフランスから派遣された部隊が展開する松本市。その隣の旧上田市は既に魔族軍の支配地域だ。

魔族軍の侵攻を受けるまで、長野県東部の中核都市として総人口約１６万を誇った上田市は、わずか半日で魔族軍により地上より消滅させられたため、上田市が現在どういう状況にあるのか、実はほとんどわかっていなかった。

魔族出現地点付近である以上、魔族の本陣があるのは間違いない。

それだけに、情報が欲しい。

美奈代が懲罰任務として強行偵察に駆り出された理由は、まさにそこにある。

日村に門（ゲート）から近い上田市において、どれ程の戦力が展開しているか。

或いは、どれほどの陣地が形成されているかがわかれば、日村における大凡の戦力がわかる。

それがわかれば、一気に日村の門（ゲート）を制圧し、国内おける魔族軍の動きを止めることも不可能ではないのだ。

かといって、リスクは高い。

正規部隊のメサイアを危険にさらすことは避けたい。

そこで選ばれたのが、問題を起こした新米騎士――――即ち、美奈代だった。

●長野県真田町付近

「屍鬼（グール）狩りは最後でいいんです」

群馬県側から鳥居峠を越え、国道１４４号線にそって山の稜線をなぞるような飛行を続ける“征龍改”。

そのコクピットの美奈代に、牧野中尉が言った。

「どうせ、大した戦果にはなりませんし」

「そういうものなんですか？」

「上層部が期待するのは、上田市への侵攻が出来るか否かの判断材料となる情報です。屍鬼（グール）狩りを命じてきたのは、それとは別系統でしょうから」

「別系統？」

「情報は参謀本部。屍鬼（グール）狩りは――どこかしらね？」

「ふぅん？……そういうものなんですか？」

連なる山を乗り越える際の微弱なＧを感じながら、美奈代は牧野中尉の判断に、しきりに感心するだけだ。

「そういうものです――真田、入ります」

山間の谷に沿った道がスクリーンに映し出された。

先日の攻撃が効いたのか、魔族の姿はない。

道に沿って数件の家々が立ち並ぶ、日本のどこにでもありそうな山村の光景が、そこには広がっていた。

「あーあ。ダボスは行きつけのスキー場だったのになぁ……」

“またお越し下さい。真田町”そんな看板を通り過ぎた辺りで、牧野中尉が残念そうな声をあげた。

「菅平でスノボやって、上田でお蕎麦食べて別所温泉で一泊ってのが、冬の定番だったのに……」

「奪い返せば――それで」

「……そうね」

牧野中尉は頷いた。

「――さて、准尉」
「はい？」
「上田市市街地に侵入して、敵の反応を探ります」
「はい」
山間部を抜け、開けた土地がスクリーンに映し出される。
上田市だ。
「まだ敵は――」
ピーッ
「“さくら”？」
「戦狼タイプ３――５、７。８時方向から接近中」
「早速いらっしゃったわよ？准尉」
「――了解。“さくら”、全ウェポンセーフティ解除」
「了解っ！」

ズンッ！
ギャウォォォォォォォォッッ！！
腕にマウントされた３５ミリ多銃身機動速射野砲が最後の戦狼級中型妖魔を撃破したのは、菅平ＩＣ付近でのことだ。
戦狼がもんどり打って、国道沿いのコンビニに突っ込んで動かなくなった。
「ラスト１撃破」
戦狼の死体を一瞥すると、美奈代は騎体を上田市街へ向けて移動させた。
――慣れてきたな。
美奈代はそう思った。
「騒ぎは辺り一帯に知られています」
牧野中尉は言った。
「なるべく早めに任務を達成しましょう」
「上田市市街地へ」
「そう。だけど、ルートを変えます」

牧野中尉は手元の戦況モニターを切り替えた。
モニター上に上田市の詳細な地図が表示される。
「どうせ魔族が動くなら、先に屍鬼（グール）を始末しましょう」
「どこで発見されたんですか？」
「市内踏入――――ここと、ここです」
「信州大学と――――ここですか？」
「そうです。このショッピングモールです――――まぁ、はっきり言っちゃえば、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）でこの一帯全部焼き払えば終わりなんです」
「し……しかし」
美奈代はさすがに躊躇した。
地図上には大学に高校、保育園まである。人々の生活の場なのだ。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の射程範囲は約５００メートル。
一回の攻撃で一面火の海だ。
「この周辺に人は住んでいません」
その被害を考え、俯いて躊躇した美奈代に、牧野中尉は明るい声で言った。
「ブワァーって、一回トリガー引けば、後は全部、灼熱どころじゃない炎が全部焼き払ってくれます。ちなみに、“掃除”は命令ですよ？」
「……うっ」
「なんでしたら――――」
その声は背筋が凍りそうなほど冷たかった。
「私がやりますけど？」
「……いえ」
美奈代はきっと顔を上げ、
「騎士の務めですから」
そう言った。
「そういう生真面目な所」
それを聞いた牧野中尉は、悪戯っぽい顔で小さく笑った。

「――嫌いじゃないです」

美奈代は“征龍改”を、信州大学の間近。常田３丁目交差点に通じる丘の上に停止させた。

「中尉――広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を」

「了解」

“征龍改”の腕が、腰部にマウントされていたフレイムノズルを掴んだ。

ノズルの移動にあわせ、背部のリキッドタンクに引き込まれていたリキッドホースが延びる。

「ノズル伸展します」

牧野中尉の操作で、“征龍改”の手にしたフレイムノズルが面白いように延び、伸展完了時には、“征龍改”とほとんど倍近いサイズにまで延びた。

「伸展完了」

「使用しつつ移動します」

「了解。トリガー、任せます」

（使いたくないけど）

美奈代はどうしてもそう思ってしまう。

何しろ、目の前で伸展したノズルがここまで長い理由は、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）から発せられるプラズマ火炎は１万２千から８千度。

鉄の融点が１５３５　度と言えば、その温度がいかに非常識か分かるだろう。

それ故に、その発射時の高温で、使用した騎体そのものが溶けて破壊されてしまうのを防止するために、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のフレイムノズルは恐ろしく延長せざるを得ないのだ。

眼下に広がるのは、人々の築き上げてきた町並み。

何の罪もない街だ。
人気はない。
あるのは、戦況モニター上に表示される無数の小型妖魔――屍（グール）鬼（レル）の反応だけ。
――私は火葬場の代わりだ。
美奈代は心の中で自分に言い聞かせた。
――死んだのに死にきれなかった人を、楽にしてあげるんだ。
自分に罪はない！
私がするのは、人殺しじゃないっ！
美奈代は、自分に強くそう言い聞かせると、トリガーを引いた。

ギュワァァァァッッッ！！

背筋の寒くなるような、まるでバケモノの断末魔のような音を立て、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）から激しい光が放たれた。
プラズマ火炎だ。
有効射程５００メートル。
一回の使用で、街の景色が一変した。
炎が到達した場所だけが面白いように破壊され、周辺が類焼。一面が火の海と化した。
――ごめんなさい。
美奈代は心からそう呟くと、炎上する市街地へと“征龍改”を前進させた。

妖魔の反応が左側に強く現れたのは、県道７９号線に沿って上田東高等学校横まで来た時だ。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で校舎を半分近く消滅させられ、激しく炎上を始めた高校の校舎を一瞥した美奈代は、“征龍改”を止めた。
反応は左側――信州大学のキャンパスだ。
サーチ結果とキャンパスの地図を照合させると、校舎と反応の集中が合致する。
校舎の中にびっしりと屍鬼（グール）達が潜んでいる証拠だ。
東高校の校舎に潜んでいる数に比べれば大したことはない。

――ごめんなさい。
――でも、こうしないと！！

フェンスを踏みつけ、すでに広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で原型がわからないほど破壊されたスーパー横のテニスコートに移動した美奈代は、内心でそう詫びながら、再びトリガーを引いた。

トリガーを引く間、美奈代はゆっくりと“征龍改”を一回転させた。
周辺全てを焼き払うためだ。

ギュワァァァァッッッ！！

それが、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の発射音なのか、それとも地獄の炎に焼き殺される屍鬼（グール）の断末魔なのか、もしかしたら、殺されていく街の叫びなのか、それは美奈代にはわからない。
恐怖より虚しさばかりが先走る音だと美奈代は思った。

トリガーから指を離した時には、すでに信州大学の広大なキャンパスは――いや、街は原型を止めない一面の焼け野原の中になっ

ていた。
　美奈代は溶けてねじ曲がった建物の礎石が、灼熱地獄に転がる墓石にさえ思えた。
「……」
「感傷に浸っている時間はありませんよ？准尉」
「……慣れてるんですね」
「おかげさまで――次はショッピングセンターです。念のため、その近隣を焼き払ってください。終わり次第、そのまま上田駅経由上田市役所、上田城から一気に塩田方面へ」
「……了解」
「准尉」
「はい？」
「あなたはいいことをしているんです――ウソでもそう自分に言い聞かせなさい。これは近衛軍中尉としての命令です」
「……ありがとうございます」

『前方に８騎――“デミ・メース”だ！』
千曲川方面から、民家を踏みつぶして移動するのは、魔族軍第１８９哨戒隊。
騎数は６。
前方を進む隊長騎からの突然の通信に、二番騎を操るカヤノは、外の景色に見とれるのをやめ、規定通りの操作にとりかかった。

――デミ・メース。

メースの紛い物。
カヤノ達魔族がつけた敵兵器の蔑称だ。

『久々のエモノだ！』

『前の戦では、バムロの隊にしてやられたが、今度はそうはいかねえぞ！？』

舌なめずりさえ聞こえてくる品のない通信。

背筋に悪寒が走ったのをこらえつつ、カヤノは訊ねた。

「隊長、本陣へ連絡は？」

『首を上げてからでいい』

カヤノの問いかけに、隊長であるガバラはそっけなく答えた。

『見習いは見習いらしく、小さくなってろ！余計なことすんな！』

「は、はい」

『初陣なんだ。力みすぎるなよ？』とギーン。

「あ……ありがとうございます」

ガバラの粗暴さをフォローするようなギーンの言葉がありがたい。

『ヤバければ逃げろ。無理してメースを壊してくれるなよ？』

『ギーン、袋だたきにしてやろう。やれるな？』

『腕はなまっていません。ご安心を』

ガバラ隊長は、自分達だけで敵を撃破するつもりだ。

カヤノはそう思った。

その理由は――

『カヤノ、お前は足手まといだ。下がっていろ――何もすんじゃねえぞ？』

そういうことだ。

「り、了解……」

戦闘経験がない新入りのカヤノに、隊長という肩書きを持つ相手に逆らうことは許されない。

先の戦争でも、最後のメース補給と共に配属され、結局、見習いのまま戦争を終えたカヤノは何千年経ったとしても、見習いのまま。

例え、メースから降りれば降りたで自分を女として蔑むガバラであっても、その嫌悪感を反抗という形で示すことは許されないのだ。

カヤノは騎の移動速度を落とし、残り5騎のかなり離れた位置についた。

哨戒隊が千曲川を越えた辺りで、カヤノは悲鳴を聞いた。
「な、何ですか!?」
一瞬、強い光が走ったかと思うと、人間達の巨大な建造物が消滅した。
「なっ!?」
『じ、人類めっ!?』
『な、何をした!?』
ガバラ達にも事情が分からないらしい。通信の声色が明らかに狼狽していた。
カヤノはその時、センサーが1万度を超える熱を捉えていたのを見た。
メースの装甲でさえ、そんな熱を受けたら危険だ。
ガバラ達がそれに気づいているのかわからない。
だが――殴られたくもない。

『ガオ、ニアメとカンガンで仕留めろ、昨晩のカードはそれでチャラだ』
『おうっ!』
ガオ副長騎が後続の2騎と共にカヤノを追い抜いていく。
隊長騎と副長騎が二つの部隊に別れた。
一体、どっちについていけばいいんだろう。
躊躇するカヤノを後目に、ガバラ達の騎が抜刀、突撃していくのを、カヤノは黙って見ているだけだ。
もし、下手に一緒に突撃したら、後で殴られる。
カヤノは経験から、それを知っている。
メースと同調している手足が、動きたくてウズウズしているのを、カヤノは堪えるしかない。

建物が消滅した先。
千曲川方面からだと丘陵の上にあたる場所。
カヤノは知らないが、ショッピングセンターがあった場所に立ったのは、カヤノが初めて見る、人間側のメース――デミ・メースだった。
巨大なタンクを背負い、恐ろしく長い筒を持っている。
それが、カヤノ達の見た敵の姿だった。

『あいつ、剣をもっていないぜ！』
『ありゃ槍か！？』
『たんなる筒だ！』

ガオ副長騎達の通信が、勝ち誇ったような声になる。
ただ、カヤノの何かが、早鐘のように叫んでいた。

――あの敵は危険だ！
そう、告げていた。

敵はまだこっちに気づいていない。目的を果たしたのか、そのまま移動を開始した。
奇襲のチャンスだ。
カヤノの目の前で、丘陵の斜面をホバー移動で一気に駆け上ったメースがデミ・メースに躍りかかった。

「っ！」
美奈代はとっさに騎体を後退させた。
神社の社殿を踏みつぶして停止した所で、美奈代は自分が何に襲

われたかを知った。
魔族軍のメサイアだ。
「――ちっ！この装備の時にっ！」
美奈代は“征龍改”が手にしているフレイムノズルを恨めしく睨んだ。
普通、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）なんて、対メサイア戦で使える代物ではない。
――放棄するか？
美奈代がそう思った時には遅かった。
スクリーン一杯に3騎のメサイアが自分めがけて襲いかかってきていた。
「くそっ！」
美奈代は騎体を急加速でホバー移動させ、民家を薙ぎ払いながら間合いを取った。
「この辺――無傷だったんですけどねぇ」
牧野中尉が呆れたような声をあげた。
「准尉が暴れたおかげで壊滅状態――どうするんです？」
「知るもんですかっ！」
美奈代は怒鳴った。
「大体、なんてこというんですか！？」
「本当のことでしょう？」
美奈代は敵の執拗な攻撃をかわしながら怒鳴った。
「やれっていうからっ！」
「責任のなすりつけはいけませんよ？」
美奈代は鷹匠町の中部電力の施設を楯にすることに成功した。
「しゃらくせぇっ！」
ガオ副長は怒鳴りながら敵が回り込んだビルに襲いかかった。
彼が駆るメース、ツヴァイが手にしているのは巨大な戦斧。

人間のビルを余裕で叩き斬れることは実証済みだ。
ガオ副長は、本気でビルごとデミ・メースを叩き斬るつもりで戦斧を振りかぶった。
今、まさに戦斧が振り下ろされようとするその瞬間、
ビルの背後から敵が飛び出してきた。

デミ・メースの持つ恐ろしく長い筒先から、強い光が放たれたのは、その瞬間だった。

「きゃっ!?」
強い閃光に襲われたカヤノは、思わずメースの腕でメインカメラをガードした。
高い建物の背後に回り込んだデミ・メースに、ガオ副長達が襲いかかった直後のことだった。
警報が鳴り響いたほどの強い熱風がカヤノ達のメースの周囲を突き抜けた。
「な――――何?」
キョロキョロと周りを見回したカヤノは、敵が何かとてつもない兵器を使用したことだけはわかった。
わからなかったのは、ガオ副長達の姿が消えたことだけだった。

「こういう使い方……」
牧野中尉はあきれ顔で言った。
「准尉が初めてです」
「それ褒め言葉ですか?」
“征龍改”は大きく跳躍すると上田駅お城口前ロータリーに着地した。

「半分は褒めてます」
牧野中尉は頷いた。
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の炎を槍の代わりにして突き出したなんて、聞いたことがありません」

そう。
美奈代は広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）から吹き出した炎を単なる面の制圧に使わなかった。
フレイムノズルのノズル幅を絞って、プラズマ火炎を集束、炎を槍の穂先状にして敵メサイアに突き出したのだ。
さすがの魔族側メサイアも、１万数千度の高温には耐えられなかった。
直撃を喰らった敵メサイアは、一瞬で上半身を蒸発させた。
美奈代はその瞬間、ノズル幅を最大に拡大し、掃射モードに切り替え、残り２騎にノズルを向けたのだ。
指揮官騎が一瞬で倒され、状況がわからない２騎に、それをかわすことは出来なかった。

「交戦時間ジャスト３０秒で３騎撃破ですよ？」
「それより」
美奈代は言った。
「ガドリング砲準備してください」
「――了解」
駅前ビルを飛び越えて襲いかかって来たのは、ガバラとギーンの騎だ。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）ではそのスピードには対処出来ない。
美奈代は牽制のために左腕にマウントした多銃身機動速射野砲を２騎に向けた。
駅前ビルを粉砕しながらガラバ騎を襲った３５ミリ砲弾の雨だったが――

「痒いわっ！」
数発が命中したが、ガバラ騎の装甲で派手な音を立ててはじき返されてしまう。
まるでからかうように機関砲弾を受けつつ、ガバラ達の騎は、上田駅の向こうへと消えた。
「この程度の力で――――っ！」
上田駅に停車したまま放棄された長野新幹線の車両を、駅のホームごと美奈代騎から放たれる機関砲弾が破壊するが、ガバラ達にとってはどうでもいいことにすぎない。
ガバラは腰にマウントしていた魔法弾発射筒を引き出し、肩に構えた。
「なめるなぁっ！」
魔法弾発射筒、つまり、一種のバズーカは上田駅をぶち抜いて美奈代騎に逆襲した。
寸前でかわせたものの、発射された一撃は、駅前ビルの中に飛び込んで爆発。
衝撃で、残っていた駅前ビルの窓ガラス全部が炎と共に吹き飛んだ。
ガバラは魔法弾発射筒を放棄すると、戦斧を構えた。
「ギーンっ！かかるぞっ！」
「おうっ！」

「――――ちぃっ！」
背後からの爆発はフェイクだ。
美奈代はそう判断して、あえて視線を上田駅方面から離さなかった。
案の定、敵は再び上田駅を飛び越えて襲ってきた。
美奈代は広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を再び構えた。

――ああ、2騎がシールドで押して首をとるつもりだな。

カヤノはその光景を少し離れた場所から、見物していた。

他にすることはない。

下手なことをすれば、ガバラ隊長に殺される。

それはイヤだ。

カヤノの目の前で、ガバラ騎とギーン騎が連係プレーで敵を押している。

敵はロータリーの中を器用に逃げ回っている。

間合いを詰められるのを嫌っているのだ。

そして、駅前の交差点から別道に入り込んだデミ・メースが迫るガバラ騎に長い筒先を向けた。

「!!」

それは偶然といえば偶然だ。

カヤノの目は、その瞬間、その筒先に走った光を見逃さなかった。

――危険だ。

考えるより早く、カヤノはメースに内蔵されているML（マジックレーザー）を発砲した。

両肩に装備されたMLは、ガバラとギーン、それぞれの騎の真横をかすめ、目標――広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドホースに命中した。

「当たった!」

敵騎が筒を離し、ガバラ騎を突き飛ばした瞬間――
それまで敵のいた場所で大爆発が発生。ガバラ騎を、荒れ狂う炎の嵐が襲った。
デミ・メースはあからさまな狼狽を見せている。
しかも丸腰だ。
今ならやれる！
カヤノは、メースの剣を抜いたが――

『カヤノ！』
ガバラの怒鳴り声が響き、カヤノはメースの操縦を止めた。
『テメエ！余計なマネすんな！』
「で、でも！」
『見てればいいんだよ！』
戦斧斧を装備するガバラが、再び、デミ・メースに襲いかかった。
デミ・メースは、シールドでガバラの斧の受け流し、間合いをとる。

――ダメだ！

カヤノは、一瞬で、デミ・メースがガバラより圧倒的に上手であることを見抜いていた。
敵の動きは、粗暴さが滲み出ているガバラに対して、まるで流れる水のように滑らかだ。
そこにはほとんど無駄がない。
斧を振り回し、デミ・メース達を近づけまいとするガバラの動きは、品性のカケラもない。むしろ野獣そのものだ。
対する敵は、まるで猛獣を罠に追い込もうとする狩人の如く、連携がとれた無駄の少ない動きをする。
カヤノの目には、デミ・メースのパイロットは、かなりの使い手に見えた。

「人類は……ここまで」
もう、カヤノは感心するしかなかった。
自分達が門（ゲート）に封印されてから数千年の年月が流れたことは知っている。
その間に、人間は、ここまでのモノを作り上げ、そして使いこなしているというのか……。
カヤノが不思議な感慨を胸に、目の前の光景に見入る中、事態が動いた。

「ちいっ！」
振り回される斧をシールドでそらした美奈代が、シールドに装備していた斬艦刀を抜いた。
突き技を繰り出した。
敵は、その一撃を騎体をひねってかわす。
それが、美奈代のねらい目だった。
「そこっ！」
攻撃をかわすことで体勢を崩した敵に、再び斬艦刀の一撃が襲った。

「ぬぉっ！」
その一撃をシールドで受け止めたガバラだったが――

ズンッ！！

敵の一撃は、シールドを突き抜けた。

「何だと！？」
シールドと左腕を突き抜けた白く輝く切っ先が自分めがけて襲い

かかってくる。
「ぐっ！――――このおっ！」
騎体胸部に切っ先が突き刺さったのを感じつつ、ガラバは自分のメースに剣を突き立てた相手を殺そうと藻掻いた。
腕を動かし、メースを後退させることで、何とか胸に突き刺さった剣を抜こうとする。
そして、
「俺一人が！俺一人が死ぬことなんて――――あるもんかぁぁぁぁっっっ！」
剣が抜けないと知るや、剣めがけて何度も斧を振り下ろした。
斧が斬艦刀にぶつかる度、斧が砕けていく。
それでも、ガラバは斧を振り下ろすのを止めようとはしない。
「俺は死なん！俺は死なんぞぉぉぉっっ！」
『ガラバ隊長！』
「カヤノ！お前は下がれっ！本部へ、本部へ――――！」
「ガラバ隊長！」
カヤノの目の前で、ガラバの騎から巨大な剣が抜かれ、再び、深く、そして強く突き刺された。
その衝撃か、ガラバの騎の足は宙に浮き、その手から斧の柄が落ちた。
正面から撃ち込まれ、背を貫く剣は、間違いなくメースのコクピットを貫通していた。
「……なっ……」

ガンッ！

その音に気づいたカヤノは、さらに酷い光景を目にすることになる。

「ギーンさんっ！？」

隊長騎が倒されたことで我を忘れたのか、反応が遅れたギーンの騎が、シールドと剣で上からの攻撃に備える姿勢をとっている。

その前方では、ガバラを仕留めたデミ・メースが、ギーンを前に、何もしていない。

いや。

正面の騎は、巨大な剣を振り下ろした姿勢になっている。

「ギーン……さん？」

呆然とするカヤノの目の前で、ギーンの騎が真っ二つになって崩れ落ちた。

「っ！！」

ギーンを斬ったデミ・メースが立ち上がり、その視線を、カヤノに向けた。

「ほ、本部！本部！」

カヤノは悲鳴を上げながら、本陣を呼び出す。

「こちら第１８９哨戒隊！敵のデミ・メースに襲われ、ガラバ、ギーン両名が戦死！」

『こちら本陣。すでに増援が動いている！かまわん！貴官は後退せよ！』

「了解！」

後退せよ――

その命令がなければ、カヤノはそのまま、だまって敵に殺されて

いたかもしれない。

今のカヤノに出来ること。
それは、迫り来るデミ・メースに、

「このおっ！」

攪乱爆弾（ジャミング・ボム）と煙幕弾（スモーク・グレネード）をありったけ叩き付けるだけ。

カヤノは一気に本陣に向けてメースを後退させた。

あれが――――敵なんだ！

カヤノは、背後から飛び来るＭＬをかわしつつ、自覚した。
あれだけ、威張っていた。
あれだけ、過去の武勲を自慢していた！
それでも、こうもあっさりと死ぬ。
死んでしまう！
これが――――戦場なんだ！

本陣が見えた所で、カヤノはメースを着地させた。
相当な距離をメースが滑ったらしい。
カヤノのメースの背後には、メースがほじくり返した跡が長々と残っている。
一方、メース達が並ぶ陣では、次々とメース達が動き出している。
味方の姿に安堵したカヤノは、その時初めて、自分が震えていることに気づいた。

「敵大規模部隊が接近中。どうします？」
「逃げます」
美奈代はそう言うと、敵が迫り来る千曲川方面から背を向け、ブースターを全開にした。
「あれだけ敵がいるってわかっただけで、任務は終了したものと判断します」
「――賢明です」
牧野中尉は満足そうに頷くと、上空をみつめた。
――まさか、准尉も。
その高度１万メートルに何が潜んでいるか知っているのは、この場では彼女だけだ。
――実は、自分がオトリだったなんて知ったら、どうするかしら？
牧野中尉は、こっそりとメサイアの“眼”を上空に向けた。
情報はＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）内のみに限定。
――いた。
コンシールされたメサイア特有の空間の微弱なゆがみ。
普通なら熟練のＭＣ（メサイアコントローラー）でさえ見逃してしまうそんな現象を、牧野中尉は見逃さなかった。
開発局のテスト用メサイア――紅龍Ｂ。
近衛軍の試作可変メサイアのベースモデルであり、あのＦｌｙｒｕｌｅｒとは姉妹騎にあたる。その騎に情報収集ポッドを満載し、美奈代達、つまり、自分達を見張っているのだ。
理由は様々だ。
自分達をオトリにして、魔族軍の展開に要する時間を測定したり、戦闘に必要な情報を確保したり、オトリが脱走しないように監視したり――。
脱走。

そんな言葉が脳裏を横切った牧野中尉は、小さく笑った。
「大丈夫です」
かつて、女として死んでも忘れられないほどの屈辱を与えてくれたその言葉。
「私……もう逃げませんから」
牧野中尉は空に向かって小さく――――誓った。
「そう約束したじゃないですか……後藤中佐」

美奈代達の背後で、上田市が遠ざかっていった。

松本、陥落

「よく帰ってきたものね」
ドック入りした“鈴谷（すずや）”に着艦出来ないため、臨時の根城となった開発局葉月開発センターに戻った美奈代騎の収容作業を見ながら、二宮は小さくそう呟いた。
「真理？」
横に立つ美夜が笑いをかみ殺しながら言った。
「――お顔がにやけてる」
「……」
パンパンと軽く頬を叩き、口元を締めた二宮がわざとらしく言った。
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を喪失したことについては、きつく言っておかねばな」
「そういうのは――大目に見てあげなさい」
「ダメよ！」
二宮は目を見開いた。
「つけあがったらどうしてくれるのよ！」

「そのままで聞けっ！」
美奈代騎の受け入れ作業のため、ハンガーを駆け回る整備兵達が、動きをとめることなく、メガホン片手に怒鳴る坂城整備隊長の声を聞く。
――動きを止めなくていい。そのかわり聞き逃すな。
メサイアと整備機械の爆音の中で整備任務に従事する整備兵にとって、手順無視と警告を聞き逃すことは、直接的に死を意味する。
整備兵達は、坂城から日頃、徹底してそのことを叩き込まれている。

しかし――
「２２５号騎のスコアが確定した！」
自分達が死ぬ思いで整備する騎がどれほどの戦果を上げたか。
それだけはさすがに人として興味がある。
皆が、配置につくフリをして、耳をそばだてる。
「――戦果、メサイア５、中型妖魔７、小型妖魔５００以上！全て戦果確認である！」

整備兵達の歓声が、風に乗ってハンガーから二宮の耳にまで届く。
「だからぁ……」
美夜はあきれ顔で二宮に言った。
「そのにやけ顔、どうにかならないの？」
「……」
二宮が頬を叩いて顔を引き締めるが、すぐに顔が緩む。
「教え子がエース認定されたの、そんなに嬉しいんだ」
「当たり前でしょう？」
二宮は嬉しそうに頷いた。
「わずか数ヶ月でエースよ！？ダブルどころか３０騎越え！いくらなんでも、これほどの戦果、単独で上げたなんて、他にいるもんですか！」
「――まぁ、制圧掃討任務装備でメサイア５騎返り討ちだものねぇ……」
美夜はプリントアウトされた戦況データを見ながらコーヒーに口を付けた。
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）でメサイア３騎撃破……スゴイ技もってるのね。この子」
「そうだろう？」
うんうん。と、二宮は緩んだ顔で頷くだけだ。
「観測隊の報告だと、青木村方面に展開していた魔族軍メサイア部

隊が一斉に動いたという。青木村付近には、フランス部隊がいたというのに！――つまり」
「目先に迫る部隊より、泉騎の方が危険だと判断した」
「そうっ！」
二宮はパンッ！と膝を叩いた。
「敵に脅威と認められるほどの活躍だ！」
「――あ、そう」
美夜は呆れた顔で数回、頷いた。
「とりあえず、話を続けるわよ？」
「――ああ」
「つまり」
美夜はテーブルに広げられた地図に置きっぱなしになっていた手にした指示棒をしまった。
「東信地域一帯を囲む山間部が邪魔をしてくれているおかげで、魔族軍は思うように移動が出来ないというわけ」
「長野県から新潟県にはあれほど派手に出たけど？」
二宮が、当然の疑問を口にしたが、
「あっちはそれほどの山がない。特に、千曲川沿いに進めば、そのまま新潟――近隣の県へは、海岸線沿いに進めればいい。それだけよ」
平野はそう答えた。
「山がなければ？」
「日本中が魔族に制圧されている」
「……自然に感謝……か」
「敵の当面の目的は、長野県全域の確保。その試金石になるのが、松本市」
「人類側の最前線基地だから……当然か」
二人の前にある地図を前に、二宮が腕組みをする。
「そう。敵としても、北陸方面への再度の進出を、当然、想定しているはず。だから、松本は邪魔なのよ。いろいろと」

「だけど、こっちにとっては頼みの綱よ？」
「そう。山越えで敵地に攻め込むには、松本と諏訪の二つが有力ルート。
だから、魔族も松本を攻める。
攻略ルートは、東信地方から松本に通じる青木峠方面か、諏訪に通じる和田峠のどちらかになるはず。近衛はそう見ている」
「三才山は？有料道路がある。高速も」
二宮は地図を指さすが、
「途中の橋やトンネルをいくつか爆破済み。特に三才山は、かなり険しい山の中を作った道だから、橋を通らなければ普通の山を移動するのとかわらない。逆に困難よ」
「……互いに戦力を集中した上で……かなりの攻防戦になるだろうな」
「ええ……青木峠と和田峠。どっちにしても、防御陣地の構築は急ピッチで進んでいるけどね」
「肝心の防御兵器は？」
「陸軍がやっと頭数揃えることが出来た戦車、自走砲、対空砲が、東海方面から移動中」
「――後手後手か」
「仕方ないでしょう？むしろ、ここで新型を投入できるのは賞賛すべきよ」
「我々は、いつ？」
「“鈴谷（すずや）”は改装もあるから、物資補給とメサイアの整備、それから、斬艦刀の改装テストまで考えると、正味2週間ね」
「まぁ、私は明後日で異動だから」
「レイナ・ガーズへ？本当に後藤さんの代役だったのね」
「というか、ガーズ向けの新型騎の受領が明後日なの。それまでの約束だから」
「敵が、そこまで我慢してくれるかが勝負ね」
「神様にでもお願いしましょうか？」

「ぷっ。らしくないわね。現実主義者の看板、いつ降ろしたの？」
「ま、失礼ね」

互いに笑いあった時だ。

ピーピーピー
インターフォンの呼び出しが鳴った。
艦橋からだった。
「艦長だ」
インターフォンをとったまま、平野は何故か凍り付いた。
「そうか……戦隊司令部からは……わかった。すぐに行く」
カチャ。
平野は、インターフォンを戻すと、うつむいたまま黙ってしまう。
二宮の目には、テーブルに両手を突っ張って、ようやく立っているようにも見えた。

「どうたの？」

「二宮中佐」
固く、震えた声で平野は言った。
「ブリッジへ」

「だから、何？何が起きたの？」

「――――松本が」

「ええ」

「――――陥落した」

●長野県松本市

国連軍最前線基地――松本基地

陥落時、施設だけでみれば、完成度が５０％をようやく上回る程度に過ぎなかったのは確かだ。

とはいえ、兵力７万、メサイア１５０騎、飛行艦２０隻を誇る、下手をすれば一国の軍隊並の規模を松本基地は誇っていた。

つまり、魔族軍襲撃時の兵力は、のべ１０万近くに上るのだ。

それほどの兵力を誇りながら、松本は半日で陥落した。

何故？

魔族軍の攻勢か激しかった？

是であり否

国連軍に問題が？

是

理由は――中華帝国にある。

自国への魔族軍攻撃への報復として、中華帝国がとった手段。

それは、魔族軍展開地域への大陸間弾道弾攻撃。

各地に配置された魔族軍長弓兵に片端から撃墜された中、一発が奇跡的、というか、皮肉なことに長野県内に被弾、墜落した。

墜落場所は、松本基地付近の工場跡。

調査の結果、弾頭部の起爆装置が最初から故障していたため、不発だったことが判明したのは、まだよしと出来る。

問題は、その弾頭だ。

魔力反応爆弾（マジック・リアクター・ボンブ）

別名、セルフ・ギロチンであることが判明したのだ。

魔力反応爆弾（マジック・リアクター・ボンブ）

魔力爆発反応を利用した、核物質利用の反応弾より圧倒的破壊力が望めはするが、被爆地点を魔力異常地帯とすることで、半永久的に生物の住めない土地に変える恐怖の代物として、国際法によって開発から所持、当然、使用も含めて認められていない、禁忌の兵器。

この兵器が使用された事態に、司令部以上に恐怖したのは、基地の兵士達だ。

中華帝国の攻撃が、自分達を巻き添えにすることを厭わない形で実行された。

皮肉なことに、魔族軍がミサイルを阻止してくれたおかげで助かったが、そうでなかったら、皆がとうの昔に死んでいたことになる。

魔族軍の前に中華帝国に殺される！

兵士達はこぞって松本からの撤退を司令部に要求し、反乱寸前まで基地を恐慌状態に陥らせた。

魔族軍に向けられていた砲口が基地司令部へと向き直った時、各部隊指揮官は部隊の統率が出来なくなった。

司令官執務室に乱入した兵士達の銃口に促される形で国連軍司令官は、全部隊に対し、諏訪への“転進”を発令。

各地に造成された防衛戦は放棄され、兵力が次々と諏訪へ向け移動を開始する中、松本は魔族軍の襲撃を受けたのだ。

基地司令官が唯一、兵士達に認めさせることが出来た条件である、夜陰に紛れた移動命令に従い、兵士達や物資を満載した輸送機が離発着を繰り返すのを、順番待ちする中に、英兵の一人、キースがいた。

松本空港に通じる道は長い行列が出来、キースは部隊と共に、その列に加わっていた。

灯火管制が敷かれ、滑走路を照らし出す光も最小限度のレベルに抑えられ、辺りは暗闇同然。彼は、国道を経由して移動する部隊ではなく、輸送機で移動する部隊に回されたことに、言いしれぬ不安を感じていた。

狩野粒子は影響を及ぼしていない。

上官達はそう言う。

信じるというより、信じるしかない。

爆音を轟かせ、延長された滑走路めがけてＣ－１３０が移動を開始するのを見ながら、キースはぼんやりと、

コーヒーが飲みたい。

そう思ったが、作戦中の今では望むべくもない。

ひんやりとした夜気に誘われるように、キースは空を見上げることしかできない。

「？」

空に黒い何かが浮いている。

「おい」

横にいた仲間を肘で突き、

「アレ、何だ？」

空を指さした。

およそ１０メートルほどの黒い球体が、風に乗って流れてくるのが、暗闇に慣れた目には、星明かりでわかる。

「向こうからアドバルーンが流れてきたんじゃないか？」

横にいた兵士はそう言うが、

「数が多いぞ？」

兵士達も何人かが、アドバルーンに気づいたらしい。

あちこちで空を見上げ、何事かを話し合っている。

キースが見つけたアドバルーンの数は優に十以上。もしかしたら、それ以上かもしれない。
「輸送機の離陸の邪魔にならないか？」
「まだ滑走路にはかかっていない」
そういうものか。
キースが首を傾げながらそう思った瞬間、

バッ！

フラッシュをまとめて焚いたような閃光が、世界を支配した。

とっさに腕で目を守ったキースの周りは、一瞬でパニックになった。

「敵襲っ！」
誰かが叫び、あちこちで明後日の方角への射撃が始まる。
「撃ち方やめっ！」
「撃つな！撃ってどうするんだ！」
キースが、その中に入らずに済んだのは、すぐ間近で小隊長が怒鳴ったからだ。
「撃ち方やめろっ！このメス豚共！誰か敵を見たのか！？」
撃ち方やめ。
その命令が伝言ゲームのように各所に伝わり、銃声だけは止まった。

先程の閃光で離陸を止めたＣ－１３０が再び、離陸体制に入り、そして、機体が離陸する光景が、キースの目に入った。
少なくとも、あれに乗れれば、横田か厚木まで移動できる。
生き延びることが出来るんだ。

「あれが戻ってきたら、俺達が乗る！」
小隊長は恐ろしくドスの効いた声で怒鳴るが、
「おいっ！」
誰かが驚いて叫んだ。
皆が、輸送機を指さす。
その前で、離陸を開始したＣ－１３０が突然横転。垂直尾翼が地面に接触、そのまま爆発した。
「何だ！？」
「敵か！？」
中に何人が乗っていたかは知らない。
だが、あの墜落の仕方では、無事では済まない――いや、全員絶望だろう。

航空燃料がＣ－１３０と乗員達を盛大に火葬する光景を兵士達は呆然と見るだけだ。

整備不良？
過積載？
操縦ミス？

様々な原因が兵士達の間で語られる中、

「狩野粒子だ！」

誰かが叫んだ。

「狩野粒子だ！――敵が来る！」

キースの小隊で最も臆病とされるジョンだ。

臆病者ジョンの戯言。

普通なら、そう一笑に付す兵士達も、この時ばかりは青くなった。
それが、どういう意味かわかるからだ。

タキシング中の輸送機は次々とエンジンを止め、輸送機から兵士達が転がり出てくる。
輸送機が放棄されたのだ。
この場から逃げる方法は、歩くか――

「車両を奪え！」
小隊長の命令に、兵士達が近くに止まっていたトラックの運転席によじ登る。
「な、何をするっ！」
トラックの運転席にいた兵士が殴られ、引きずり落とされ、代わりに別な兵士がトラックの運転席に座る。
「乗れっ！乗れる限り乗れっ！」
運転手になったのは、小隊長だ。
――電子装備を完全に外したオンボロではあるが、これに頼るしかない。
――エンジンがかかっているだけ、ここでは奇跡に近いんだ。
他の兵と一緒に、キースはトラックの荷台によじ登りながらそう思う。
乗せろ！
乗せろよ！
乗せてくれ！
兵士達がトラックや、あらゆる車両に殺到する。
軍用トラック
放置されていた自家用車
工事現場に遺棄されたダンプ

一部では一台の自転車を巡って何人もの兵士が殴り合いを演じている。
狩野粒子下でも走れる限り、根こそぎ現地徴用された車が兵士達に埋め尽くされる。
くそったれ！
キースはその光景を見ながら毒づいた。
肝心のメサイア部隊を真っ先に下げた司令部の怠慢だ！
メサイアで防衛しながら、俺達歩兵が逃げるのが筋道だろうが！
動ける車両が次々と兵士達を満載し、ヨロヨロと動き出し、飛行艇がその腹に兵士達をたらふく貯め込み、地面から離れた時――

ズズズズッ！

地面が揺れた。

「何だ？」
「見ろっ！」

走り出したトラックの荷台から、キース達は確かに見た。
あちこちで盛大に地面が爆発し、土煙の向こうから何かがはい出してくる巨大なバケモノ共の姿を――
それは、キース達が初めて見る敵の姿だった。
５０メートルでは効かない、まるでメサイアを四つ足にしたようなバケモノ共の姿。
まるでダンゴムシだ。
イルミネーションのように赤い光が体のあちこちで光っている。
その敵が、続々と穴から這い出ると、ゆっくりとこちらに向かって移動してくる。
そんな光景を前に、キースに出来ることは、自分が生き残れるよう、神に祈るしかなかった。

●長野県松本市元松本少年刑務所

「ふうん？」

同じ頃、松本市内にあるかつての少年刑務所の独房の一つで、水瀬は目の前に座る少女と話し込んでいた。

かつての松本少年刑務所。

現在の騎士短期養成所。

戦時騎士動員法に基づき、刑務所を騎士専用の収容施設に指定。戦闘訓練を受けたことのない騎士達に、形ばかりの戦闘訓練を施し、「訓練はさせた。あとは戦ってもらう」ための施設。

全国に１２カ所存在する。

管轄は厚生省と警察庁。

訓練期間は、陸軍騎士部隊が訓練指導担当になる予定だった時は八週間。

ところが、施設を効率よく運用したい厚生省は警視庁騎士警備部幹部と結託して、陸軍を排除、この訓練計画に横やりを入れた挙げ句、施設の管理・運営全てを軍から横取りし、騎士警備部が訓練を担当することになった。

その結果、訓練期間は、最短７日という信じられないような短期間となり、満足な訓練も受けられない哀れな騎士達は、前線へと送られることになる。

すでにすかりの数の騎士が、陸軍に臨時編成された騎士部隊に編入されているが、陸軍は騎士達をまず自らの施設に送り込んで再訓練なければ兵隊として使えない有様だ。

何しろ、施設で教えるのは、軍服の着方、剣の装着の仕方、軍における階級。その程度。戦闘訓練と称するランニングや筋肉トレー

ニングしか肉体訓練を受けない。
武器に関する様々な法律の規制によって、騎士達は真剣を手にすることさえ出来ない有様だ。
あまりに酷すぎることは、世人の目にも明らかだった。
「騎士達を無駄死にさせるための施設」
「騎士の人権無視」
陸軍にこうとまで呼ばれた施設の名目上の責任者であるはずの厚生大臣は、日本語になっていない答弁でのらりくらりと逃げ延びるだけ。
自己の正当性に固執し、自分達は騎士を前線に送っているのだから、むしろ感謝されるべきだと、逆に陸軍を非常識扱いする始末。
その間にも、「出来損ない」「肉の弾よけ」と揶揄される騎士達が前線へと送り出されていく。
騎士達に志気はない。
あるのは、命令と、絶望だけだ。

――俺達は兵器じゃない。生け贄だ。

自分達をそう呼ぶ騎士達には、明日への希望さえない。

この時の水瀬は、そのまっただ中にいた。

「――うん」
本来、二人用の独房には、簡易ベッドが二つ持ち込まれ、水瀬ともう一人が、そこに放り込まれていた。
ベッドに腰を下ろして水瀬と話す少女が、小さく頷いた。
「あのね？」

この独房に押し込まれてからすでに七日。
魔法騎士の訓練期間は一律二週間というから、すでに半分が過ぎ

ていた。

ポツリポツリとだが、自分の口で喋る少女を見つめながら、水瀬は口元をゆるめた。

数日前まで泣いてばかりだった少女が、ようやく話しが出来るまでに心を開いてくれたのだから、水瀬でなくてもうれしいはずだ。

一条楓（いちじょう・かえで）

戸隠の出身だという。

近所の住民と共に避難していたが、その最中、米軍の誤爆により全員が死亡。

一人でさまよい歩いた後、収容所に収容され、魔法騎士であることを理由に、ここに送られた。

わずか十歳だが、魔法騎士を前線に送ることで評価があがる厚生省独自のシステムの犠牲となって、今、楓の年齢欄は十三歳になっている。

楓の口から語られるのは、戸隠の四季、蕎麦のこと、家族のこと、友達のこと、楓の知っている世界の全て。

それがどれほど素晴らしいか。

楓は熱心に語り続ける。

純粋なまでの会話に、水瀬もいつしか引き込まれるように語り続けている。

水瀬にとって、問題は、楓が自分のことを女の子だと思いこんでいることだけだ。

楓の魔法騎士ランクはＡＡＡ。

近衛の高位魔法騎士並のレベル。

魔法騎士は近衛のみの配備という、暗黙のルールを破ろうとする

陸軍が、厚生省と結託して水瀬と共に陸軍魔法騎士部隊創設時の要として期待する存在なのも、無理はない。

目の前の無垢な少女が戦場に立つことを、水瀬は決して歓迎していない。

住み慣れた戸隠に家族と共に戻してあげたい。

そう思う。

それが、もう無茶な願いであることを知りながら、水瀬は、どうにかして、この子を戦場に送らずに済む方法がないか、出会ってからというもの、楓の顔を見るたびに、そればかりを考えていた。

お父さん達に身柄を預ける。

そう決めたのは、昨日になってから。

それまで近衛に預けることを考えていたが、教官である公安騎士が楓に言った一言で考えを変えたのだ。

「おい。陸軍が嫌でも、近衛に送られるのがオチだぞ？」

そう。

近衛だって、この子を兵器として扱うだろう。

そう結論に達した結果だ。

だからこそ、水瀬はこの晩、行動に出ようとしていた。

脱獄。

本来、こんな所に押し込めておく方が問題なんだし、阻止するなら、誰であれ殺す。

水瀬は、この子を守るために本気でそうしようと決意していた。

ただ、水瀬がそれをこの子に告げるタイミングをつかめないまま、無駄に時間ばかりが過ぎていく。

「あ、あのね？」

楓のおしゃべりが一段落ついたと思った水瀬は、やっとそう切り出すことが出来た。

その時――

ズズズンッ！

地響きと共に、独房が激しく揺れた。

「きゃっ！？」

楓が悲鳴を上げ、水瀬がその上に覆い被さる。

「な、何っ！？地震！？」

「――違う」

水瀬は険しい視線で、壁を、その向こうに広がる世界を見た。

「わからない？」

「……ま、まさか」

楓が青くなって両手で頭を覆った。

「これ……この感じ」

「そう――これが妖魔の感じ。覚えておいて」

「ここに来たの！？」

「そういうこと」

ドアの向こう側も大騒ぎになっている。

独房、雑居房に押し込められた騎士達には何もわからない。
何が起きたか、それだけを知りたくて、騒ぎ立てているのだ。
「うるさいぞ！」
看守を勤める公安騎士が怒鳴った。
「静かにしろ！単なる地震だ！」

嘘だ。
水瀬達はお互いの顔を見合った。

「これから房の鍵を解除する！いい機会だ！貴様等に夜間訓練を施してやる！全員、すみやかに中庭に集合！」

看守の命令と同時に、独房の鍵が音を立てて開いた。

――――チャンスじゃない。

水瀬はそう思った。

脱獄のチャンスは、この訓練中だ。

水瀬は、楓の手を握りながら、中庭に移動した。

騎士達が不安そうな顔で並ぶ中、水瀬達もそれに習う。

施設の外からは、言いようのない叫び声が聞こえてくるのが、騎士達の不安をあおる。
「いいか！」
騎士達の前。演壇の上に立つ公安騎士が、メガホン片手に怒鳴る。
「これより、夜間訓練を実施する！各員、剣をとれ！」

別な公安騎士が水瀬達の前に放り出すのは、刃の無い訓練刀。
剣としての殺傷力は皆無に等しい代物だ。

何をするんだ？
あの叫び声は何だ？

騎士達は、不安げに剣を手にする。

「これより、“ある敵”が、この施設を襲う！貴様等は、それを阻止し、この施設を守ればいい！――簡単なことだ！」
公安騎士は、居並ぶ騎士達を軽蔑した眼差しで一瞥すると、言い放った。
「それが、貴様等の義務だ！なお、この訓練に際しては、指揮官はつけない！貴様等の独自性を養う意味でも、その方が効果的だとの判断からだ！――かかれっ！」

公安騎士は、そう言い放つと、さっさと壇を降りて建物の方へ向けて走り出す。

「そ、そんなこといわれたって」
中年の男性――おそらく、剣とは無縁な世界にいたろうことは、その肥満体が証明してくれる――が、困惑した声をあげる。
「て、敵って……なんだよ？」

皆がそれぞれ、思い思いに寄り集まってそんな話をする中、水瀬は楓の腕を掴んで中庭の立木の陰に隠れた。

「楓ちゃん――よく聞いて」

剣を抱きしめながら、楓は驚いた顔を、無言で頷かせた。

「これから――ここを逃げる」
「えっ？」
「襲ってくるのは魔族軍。看守達は僕たちを見殺しにして、自分達だけ逃げた。ここにいれば死ぬ。だからね？逃げるよ？」
「で、でも！」
楓は騎士達の方に振り返って、
「こ、この人達は？」
水瀬は無言で首を横に振った。
「君だけでも逃がす」
楓の腕を掴む手に力がこもる。
「……そ、そんなこと」
それでも、何故か楓は覚悟が決まらない様子だ。
「大人は大人で、生きる方法位、自分で見つけるよ。君は子供だから」
「……」
「逃げるのも方法だよ。きっと、みんな逃げ出すし」
気休めにもならないことは、水瀬にだってわかっている。
「みんな逃げる。だからね？僕たちも逃げる。それだけ」
「みんな……逃げられるの？」

「うん」
水瀬は頷く。

「……わかった」
楓は頷いたが、
「でも、ちょっとだけ待って」
「えっ？」
「部屋に大切なモノを隠してあるの」
「……」
水瀬は、止めようと思った。
そんな時間があるかわからないのだ。
「お願い！」
真剣な楓の目に、水瀬は折れた。
「……5分で」
「うんっ！」
満面の笑みを浮かべた楓が建物へと駆けだしていく。

「看守や教官はどうした！？」
「どこにもいねえぞ！？」
騎士達が騒ぎ出したのは、楓が駆けだした時だ。
「お、おい！」
一人が興奮気味に言った。
「これ、チャンスだ！」
皆が、その声に注目した。
「看守がいねえ！逃げられるぞ！」
「そ、そうか！」
皆が興奮気味に互いを見合う。
水瀬は、そんな彼らから距離をとり、立木の中へと姿を隠す。
「塀位、越えられるぜ！？」

「よし、やるぞ！」
「止める奴を殺せ！」
「応っ！」

水瀬の目の前で、騎士達が塀めがけて駆けだしていく。

その壁が爆発したのは、先頭を走る騎士が壁にとりつこうとしたまさに直前のこと。

ギャッ！？

奇妙なうめき声を残し、何人かの騎士が挽肉になった。

「なっ……なんだ？」

吹き飛ばされた塀。

その向こうから、何かが施設へと入り込んできたのは、両生成物のような、表現の方法がないほどグロテスクなバケモノ達だ。

決して友好的な相手でないことは、騎士達にもわかる。

「に、逃げろっ！」

誰かの叫びに弾かれるように、とっさに騎士達がバケモノに背を向けて逃げ出そうとするが、

ドドドドドッ

次々とその背に矢が突き刺さり、もんどりうって絶命する。

「く、くそおっ！」

何人かは血路を開くべく、剣を握りしめてバケモノに襲いかかるが――――

ギャッ！？

ガッ！

バケモノから放たれた触手の一撃で肉片に変えられた。
為す術がない。
水瀬の前で、騎士達は次々と殺されていく。
それを、水瀬は何もせずにみつめるだけ。
その水瀬の目の前で、塀を越えた妖魔と魔族が施設の中へと入り込む。
「まずい」
水瀬はようやく動き出した。
騎士達の死骸を乗り越え、建物へと。
その目前で、
ドンッ！
魔法攻撃の直撃を受けた建物が吹き飛んだ。
白煙を上げる建物に、次々と魔族や妖魔がとりつく。
「！！」
しまった！
水瀬は舌打ちして建物に急ぐ。
その間にも、施設へむけた魔法攻撃は続いていた。
「あ、あった！」
独房に戻った楓は、ベッドの薄いマットレスの下に隠したそれを

手にすると、安堵に似たため息をついた。
手にするのは、ペンダント。
楓の母の、今となっては唯一の遺品だ。
そして、楓がドアに向かって駆けだした瞬間。

ドンッ！
「きゃっ！？」
爆発が、楓を襲った。

建物の中に侵入した妖魔と魔族はかなりの数に上る。
魔族が、この施設を軍事施設と判断したせいだろうと、水瀬はそう判断し、魔法で隠していた刀を抜いた。

水瀬達が押し込められていた独房は三階。
階段は半ば崩れ落ち、妖魔達が張り付いている。

シャァァァッ！
一階のロビーに巣くう、不気味な口に乱杭歯（らんくいば）を見せながら襲い来る妖魔達を、刀の一撃で切断してのけた水瀬は、階段を一気に飛ぶことで楓の元へと急ごうとしたが――

ドドン！

二階の踊り場に立つ存在を前に、それを断念せざるを得なかった。

黒い甲冑に黒い楯。
豪華な文様が施されたそれらを纏う魔族達が、そこにいた。
数は１０近い。
三階への侵攻を阻止する目的があることは明らかだ。

普通なら、水瀬は問答無用で魔族達を斬り殺すだろう。
だが、それを止めたのには理由がある。
魔族の甲冑を飾る文様、それが何を意味するか知っていたからだ。
ヴォルトモード卿に近い部族を示す文様。
つまり、魔族軍の中でもかなり高い地位にいる存在だということだ。
それが、水瀬に決定的な手段をとることを止めていた。
「――――どいて」
水瀬は、人間以外の言葉で魔族に言った。
「友達を助けたいだけなの。どいて」
魔族からは言葉ではなく、魔法攻撃が返ってきた。
「ちっ！」
一階のロビーを吹き飛ばすほどの破壊を引き起こす攻撃を回避した水瀬は、一端、外に出て、それから三階を目指すことにした。
「こんな時に！」
水瀬は毒づきながら外に出ようとしたが――――
ドドンッ！
爆発が、崩壊する建物というバケモノの顎（あぎと）へと、水瀬を放り込んでしまった。

「なっ！？」

その少し前だ。

「軍事施設ではなかったか」

巨体を豪奢な甲冑に包んだ魔族――ズルドが獣の様な声で唸った。

「無駄なことをした――兄貴と一緒に、他を攻めるべきだった」

ズルドの前にあるのは、照明が落ちた監獄の残骸だけ。

誰もいない。

監獄の壁に大きく開いた破孔の向こうからは、炎上する松本市街の炎が見て取れる。

いい気味だ。

本気でそう思うと、笑い声さえ喉から出てくる。

「コラック」

ズルドは、後ろに控えていた騎士に命じた。

「この施設は妖魔に任せ、市街地の掃討に動く。人間は構わず殺し、あらゆる人間の施設を焼き尽くせ。この地を本来の緑あふれる地に変えよ」

「はっ！」

「――待て」

ズルドが、残骸の陰からのぞく、それに気づいたのは、本当に偶然だった。

コンクリートの残骸の下。

白い何かがあった。

「人間です。まだ生きてます」

「――よし」

ズルドが腰の大剣を抜き放つと、剣からは、強い魔力が放出される。

ズルドの持つ魔剣の咆哮さながらの光が、ズルドの巨体すら照らし出す。

「三千年ぶりに人間を斬り殺してやろう。連れてこい」

「はっ」

ズルドは本気で殺すつもりだった。

神族に味方し、最後まで刃向かい続けた憎き人間。

それは、ズルドの妻子の敵でもあった。

最愛の家族を奪った憎き人間共を殺す！

いかなる人間も皆殺しだ！

ズルドは、その憎しみだけでこの場にいた。

だが――

コンクリートの残骸の下から引き出された人間を見た途端、ズルドの鋼鉄の意志が揺らいだ。

煤に汚れているが、それは紛れもなく、年端もいかない少女だ。

しかも――

「……フィーリア」
ガンッ！
構えられた剣の切っ先が力無く床にめり込んだ。
呆然とするズルドの前に引き出された少女――――楓――――を前に、面に隠れたズルドの顔には困惑が広がっていた。
先程まで漲っていた殺気ですら、すでにない。

「閣下。獲物は小さいですが」
コラックは、ズルドに問いかけた。
「殺しますか？」

「……」

「閣下？」

「ハッ！……い、いや……よそう」
ズルドは声をうわずらせながら、大剣を鞘に戻した。
「コラック」
コラックから――――いや、少女に背を向け。ズルドは命じた。
「その娘――――保護しろ。傷をいやし、風呂に入れ、暖かい服と食事を与えろ。部屋は俺の部屋の別室でいいだろう。女官をつけろ」

「はっ！？」
コラックは目を丸くした。
「一軍を率いる閣下のお言葉とも思えませんが……あの」

「うるさいっ！」
ズルドは怒鳴った。
「俺がやれといったんだ！」

貧乏くじ

松本陥落――――

世界はその事態に嘆いている暇を与えられなかった。

松本基地陥落の報と、ほぼ同時に世界に伝えられたのは、中華帝国軍によるこれまでで最大規模の侵攻だ。

ベトナムの南北線（ハノイ―ホーチミン。１７２６キロ）をはじめ、占領地域の鉄道と国道を駆使。それらに被害があり、復旧が必要となれば地元住民を強制労働させてまで復旧させ、兵力・物資移動を実施した中華帝国軍は、艦船不足で南シナ海での兵力移動に苦心している国連軍を後目に、開戦時の勢力を復活させていた。

一方、マラッカ海峡を抑えられ、南シナ海が“中国人の海（チャイナシー）”になることを恐れる各国から派遣された艦隊が、この阻止に向けてスンダ海峡沖に集結しつつあった。

すでに魔族軍の攻撃により、ほとんど人が住めなくなりつつある東南アジア一帯において、人々は助け合うのではなく、殺し合おうとしていた。

だが、人々はわかっていた。

この状況が、間違いであることを。

●フィリピン沖　大日本帝国第二機動艦隊　旗艦「飛龍」艦橋

「松本が陥落しました」

参謀長の報告に、艦隊司令の有賀提督は、難しい顔を崩さないまま、無言で頷いた。

「残念だが――陸軍に期待しよう。我々は、与えられた任務をこなせばいい」
「はっ」
有賀は作戦モニターに映し出された海図を睨む。
「追撃している中華帝国海軍の機動部隊、規模と場所は把握しているか？」
「空母3、護衛艦25、米軍の軍事衛星が追跡中です」
「どこだ？」
「シンガポール沖合――おそらく、こちらがマラッカ海峡を攻めると予測していたのでは？」
参謀長が、海図に艦隊を示す駒を置いた。
「おそらく」
「どちらにせよ、両軍の航空部隊の勢力圏です」
「……」
ふうっ。
有馬はため息混じりに甲板を見た。
今、甲板に並ぶのはジェット戦闘機ではない。
プロペラ機だ。
かつての赤色戦争当時の海軍主力戦闘機“烈風”と、米国から詐欺同然に製造権をカワされた“スカイレーダー”のリファインモデル機達だ。
とはいえ、Ｓｕ－３５を見慣れた眼には、何の冗談だろうとしか思えない光景ではある。
狩野粒子の影響で、スピードと攻撃力に勝るものの、レーダーと電子装備が使えなければ無駄に図体がデカイだけのジェット戦闘機は使い物にならない。
所詮、ジェット戦闘機は音速が出ようと出まいとミサイル運搬機に過ぎない。
その理屈はわかるし、米軍Ｆ８Ｆ（ベアキャット）を、英国軍と中華帝国軍がスピットファイアやファイアフライ、陸上機ではモスキートやＢ－２９

までを復活させている。
それもわかる。
無論、最新の技術をふんだんに取り込んだ大日本帝国側国連軍と、昔の設計のまま悪戯に量に頼む中華帝国側枢軸軍では、性能に相応の差が出ているのは事実だ。
例えば、英国軍スピットファイアと中華帝国軍のスピットファイア同士の空戦では、キルレシオは1：2とされているし、これが格闘戦に最も強いベアキャットで1：4。総合力でダントツ性能を誇る烈風で1：5は確実とされる。
プロペラ機になったところで、連合側の優位はそう簡単には崩れないのだ。
……数以外では。
「……米軍はどうしている？」
「わが艦隊の南西５０キロに展開中」
「……馬鹿げているな」
「はっ？」
「すでに魔族相手に何億もの犠牲を出す中で、こんな所で人類同士で戦い続けるなぞ、馬鹿げている」
「……」
「早く、一刻も早く、人類同士の殺し合いを止めなければ」
「帝国政府は、事態の早期打開にむけ、主体的に活動すると」
「あんな馬鹿共に何が出来るというのかね？」
有賀はあざけるように口元を歪め、参謀長を見た。
「いいか？役人共の言う、主体的にという言葉は、子供が精一杯頑張りますというのと同レベルだ。奴らが国際的に主体的に動いて、成果が上がったなぞ、聞いたことがあるか？」
「……ありません」
「そういうことだ」
有賀は、視線を真っ暗な海に戻した。
「奴らが主体的に動くより、我々が主体的に武力を用いる方が、圧

倒的に事態の打開につながる」
「はっ」
有賀がさらに何かを言おうとした時だ。
「司令！」
通信参謀が報告をあげた。
「米軍からです――夜明けと共にカムラン湾の中華帝国艦隊に対し、総攻撃を開始。これを撃滅する！」
「米軍へ返信。貴信了解。これより準備にかかる。以上だ」
「はっ！」
「参謀長」
「はっ！――総員起こせ！戦闘態勢！合戦準備だ！」

中華帝国軍による狩野粒子大量散布の代償として、航空機や船舶の航行が危険になった南シナ海海域における日米連合軍と中華帝国の戦いは、中華帝国本土から発進した攻撃機まで加わり、混戦の様相を呈しつつあった。

帝国海軍の烈風と米軍のベアキャットがスピットファイアやモスキートと空中戦を繰り広げ、接近する攻撃機に対する対空防衛のため艦艇が火砲を打ち上げ応戦する。

帝国軍空母２　航空機１２０機
米軍空母２　航空機１４０機

中華帝国空母３　航空機１６０機

未だに両軍が航空戦――つまり、間合いをとっているのにはきちんとした理由がある。
メサイアだ。

互いにメサイアの数がわからない状態で間合いを詰めれば全滅に追いやられる。
それを知る以上、うかつに手が出せない。
下手に手を出せば、一瞬で全てが終わる。
互いに、それを知っているのだ。

ズンッ！
中華帝国海軍のスピットファイアが撃墜され、海面に激突する。
「海軍の意地にかけて、敵機を通すな！」
第二機動艦隊所属の駆逐艦「初霜」の艦橋で艦長が怒鳴る。
「１１時方向、機数６、来ますっ！」
「落とせぇっ！」
２０ミリバルカン砲が咆哮をあげ、７６ミリ対空砲が叫ぶ。
「空母をやられたら終わりだぞ！」
「大型の飛行物体――メサイア、マジックレーダーコンタクト、来ますっ！数２５！」
「よし来た！シールド展開！」

駆逐艦「初霜」の艦中央部に設置された不格好な装置がうなり声をあげる。
すると、「初霜」の艦構造物の中でも重要施設の真横にあたるカ所で光の爆発が発生したが、艦には傷一つつけていない。

七八式簡易魔法障壁装置。

中型飛行艦が搭載する魔法障壁――対ＭＬ（マジックレーザー）バリアを発生させる装置だ。
近衛が狩野粒子下でも機能する魔法技術応用型レーダー“マジックレーダー”と共に、海軍向けに高額でリースした代物だ。
艦隊全部に配備したらリース料だけで往復の燃料代が支払える程

だが、このおかげで、「初霜」はＭＬ（マジックレーザー）攻撃から身を守ることが出来る。

何より、各艦のＣＩＣ要員が仕事を失わずに済んでいた。

「米軍、グレイファントム、前面に出ます！」

「近衛のあのガキ共は！？」

「――赤兎（せきと）６を狙撃！赤兎６、レーダーロスト！」

「近衛、メサイア隊が出ますっ！」

「行くよ二人とも！」

そのかなり後方に展開していたＦｌｙ　ｒｕｌｅｒで編成されたラグエル隊――神城三姉妹の長女、一葉が怒鳴る。

「この私のナイスバディ見て、ガキ扱いした司令部のオヤジ共を見返すんだから！」

「お姉……聞いてて惨めになるからやめようよ」

「同感」

「いいからやる！空戦なら赤兎なんてメじゃない！」

「了解」

「やっちゃおう！」

Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒから放たれるＭＬ（マジックレーザー）が艦隊上空を越え、艦隊に迫る中華帝国のメサイア赤兎（せきと）に吸い込まれるように命中。

赤兎が爆散した。

「やりっ！」

命中を知り、舌なめずりする光葉に、ＭＣ（メサイアコントローラー）から警報が入る。

「魔力探知（マジックレーダー）に反応、赤兎８、海中を接近中！」

「冗談！ＭＬ（マジックレーザー）じゃ、海中なんて撃てない！」

「マジックコンシールで海軍も気づいていません！」

「座標と進路割り出して！海軍に通報！」
「了解！」
「双葉、光葉！」
光葉の耳に、一葉からの通信が入る。
「空母をやるよ！？」
「私達が！？」
「スゴっ！」
「座標把握出来てるよね！？空母の弾薬庫狙って！三騎主砲最大出力で狙撃！」
「了解！」
双葉の目の前で、主砲出力が増大していく。
「海中の赤兎、沈没！」
「慣れないっていうか、出来ないことするから！」

海中を進む赤兎奇襲部隊は、光葉騎からの通報を受けた艦隊から放たれた対潜攻撃により発生した爆発の衝撃波を喰らい、海中深く沈んでいった。
元来、メサイアは海中を戦闘領域としていない。
理由は簡単だ。
防水対策はしてあっても、被弾カ所に浸水したら電子装備があちこちでショートして、いかにメサイアといえど、機能が停止のは明白なのだ。
それを無理矢理やるとこうなる。
アフリカや南米の魔族軍水中部隊に人類が打つ手がないのは、まさにこういう理由なのだが……。

「主砲、臨界点！」
「撃てっ！」

編隊を組むＦｌｙ　ｒｕｌｅｒの主砲から放たれたＭＬ（マジックレーザー）。

その光は、中華帝国空母の艦体に突き刺さった。
艦乗組員は、何が起きたか全くわからない。
ただ、強い光が来たと思ったら、空母の艦体に大穴が開いた。
その程度しかわからない。

ＭＬ攻撃（マジックレーザー）とは、そういう代物だ。

甲板にいた者は、随伴するもう一隻の空母にも光が刺さったのを目撃した。
そして、自分の艦に開いた大穴に海水が流れ込む音とは別に、
ギュィィィィンッ！
乗組員の多くが聞いたこともないような音が艦の中から響くのを聞いた。

そして――――

空母は一度、海上に飛び上がった。

艦内の航空弾薬が次々と誘爆し、艦内のあらゆる構造物を破壊。
あちこちに開いた破孔から、艦の構造物と人間の破片を吹き出した。

ダメージコントロールに必要な機材を、それを操作する乗組員ごとズタズタにされた空母に、自らの運命を変える力は残されていなかった。
ＭＬ攻撃（マジックレーザー）から５分後、空母は横転、沈没した。

中華帝国艦隊の悲劇は、それだけで終わらない。

赤兎を突破したグレイファントム部隊が、生き残った艦隊に襲いかかったのだ。

何とか海域から脱出しようともがく空母に襲いかかったグレイファントムを操るのは、あのステラだ。
「このおっ！」
ステラはグレイファントムの１２７ミリ速射砲を乱射しつつ、空母の甲板にスライディングで突っ込み、甲板に並んでいたをなぎ払い、艦橋を蹴り潰した。
「よくも一々！」
手にした１２７ミリ砲を艦橋めがめて情け容赦なく撃ち込み、艦橋そのものを倒壊させた。
甲板上に並んでいた航空機に搭載されていた武器弾薬、そして燃料が次々と誘爆する。
「前線でみんな苦しんでるってのに！」
ステラは、甲板を逃げまどう乗組員を何の躊躇もなく踏みつぶしながら甲板を移動した。
そして、先程の攻撃のせいで半ばまで上昇したまま、停止していたエレベーターに乗った。
艦の中、格納庫が丸見えだった。
「魔族の味方！人類の敵がぁっ！」
格納庫の中に１２７ミリ砲の残弾すべてをたたき込み、置き土産として、サーモバリック爆薬の詰まったロケット弾を撃ち込む。
「くたばれ！死んでわびろ！この裏切り者共！」
それでも満足できないのか、足下のエレベーターを蹴りつけると、サーモバリック爆薬の爆発が発生する前に、ステラのグレイファントムは空母を離れた。
艦内で発生した気化爆発のダメージは、艦の竜骨（キール）にまで達し、空母は横転する余裕もなく爆沈した。

ステラは、その爆発をモニターで見るなり、歓声を上げた。
「キャッホーッ！ザマぁ！」
「ステラ！」

イルマが怒鳴る。
「な、何よ！」
ステラは口をとがらせて抗議した。
「あいつら、魔族の尻馬に乗って」
「違っ！――――もうっ！」
ステラの目の前で、ＦＣＳがＭＣ（メサイアコントローラー）に移ったことを意味する表示が点滅、グレイファントムから何本ものＭＬ（マジックレーザー）の光が雲の向こうへと飛んでいく。
「何？」
雲の向こうはステラには見えない。

だが――――

雲を突き破って襲ってきた存在だけはわかった。
鼓膜が破れそうな爆音
衝撃波

「ぐっ！？」

とっさにシールドで騎を守るが、確実に高度が数十メートル落ち、あと一歩で海面に叩き付けられるところだった。
ピーピーピーピー！
騎体を立て直すのに四苦八苦するコクピットに、聞き慣れない警告音が響き渡る。
「な、何！？」

「中性子および放射線警告！」
イルマが悲鳴に近い声をあげる。
「敵、反応弾使用！」

「馬鹿なっ！」

反応弾。

我々の言うところの核兵器。

中華帝国は、それを使ったというのか？

「大陸から発射されたミサイルでした。衛星でも確認されています！数１２、残りも全弾撃破！」

「人類の存亡より、自分ん所の領土広げるほうが大事なの！？」

ステラはコントロールユニットを殴った。

「あいつら――狂ってる！」

「艦隊に戻ります。これ以上、ここにいるのは危険です」

イルマの言葉を裏付けるように、司令部からの緊急帰投信号を受信した。

「海上の中華帝国の兵は？」

進路を艦隊展開海域に向けながら、ステラはそう訊ねた。

炎上する艦の残骸

艦や航空機の破片

そんなものと一緒に海上を漂うのは、

人間だ。

不安げな顔で空を見つめている。

彼らの上に白い何かが舞い降りようとしていた。

「すぐ、フォールアウトが始まります。助かりません」

「……」

ステラは、中華帝国の誇る空母機動艦隊の終焉の地となった海を忌々しげに睨むと、艦にもどるべく、コントロールユニットを握りなおした。

●大日本帝国領内　近衛軍葉月演習場

福井が陥落し、福井県の原発すべてが人類の手を放れた日。
「ターゲット・ロックオン」
「射撃開始」
美奈代の乗る征龍改が演習地の一角に立てられた的めがけて射撃を開始する。
３９式３５ミリ機動多砲身機関砲が咆哮をあげて的を食い破る。
照準の調整は悪くない。
設定に苦労した甲斐があったと、美奈代が口元をゆるめた時、

キィーン
キィーン

コクピットに警報が鳴り響いた。
「接触警報？」
広い演習地とはいえ、射撃訓練中の騎体への接触は禁止されているはずだ。
センサーに異常か？
「なんだ――ぐっ！？」
ガンガン！
センサー情報に視線を移した途端、激しい振動が征龍改を揺るがした。
「な、何だ！？」

「背部、演習弾命中！」
「え、演習弾？――誰が、誤射？」
「索敵レーダーは感知していました――騎数８、６時方向より接近中！警戒！」
「なっ！？」
驚いて振り返った美奈代は、さらに激しい振動に襲われた。
「きゃあっ！」
征龍改のコクピットが激しくシェイクされ、背中に走る痛みに息が止まる。
一瞬、本気で意識を失いかけた美奈代は、はっきりしない眼でモニターを見た。
赤い人が映っている。
人？
違う。
メサイアだ。
赤いメサイア――
「！！」
美奈代の脳裏に浮かんだのは、あの“サライマ”だ。
“サライマ”が自騎を押し倒し、胸を脚で押さえつけている。
それが、美奈代の下した状況判断だ。
「このっ！」
狼狽する美奈代の体は、敵と認識した相手に対し、即座に動いた。
腰にマウントされた光剣を抜き、脚を切り払いにかかる。
ブンッ！
“サライマ”の脚を狙った一撃が空を斬り、“サライマ”の脚が美奈代騎から離れた。
「中尉、ＭＬ（マジックレーザー）！」
立ち上がり様、速射野砲を“サライマ”めがけて乱射する美奈代は牧野少尉に命じた。
“サライマ”は後退し、間合いをとっている。

「――仕留めますっ！」
「ま、待ってくださいっ！」
牧野少尉は言った。
「あれは――友軍ですっ！」
「見たことない！」
“サライマ”は、信じられないほどの機動性で３５ミリ機関砲をかわしつつ、ホバー移動で美奈代に襲ってくる。
「友軍が何でここで襲ってくるんです！」
「向こうに聞いてください！」
“サライマ”が光剣を抜いた。
「ほらぁっ！」
「あれはＩＬＳ（イミテーション・レーザー・ソード）ですっ！」
「い、イミ？」
「こっちは真剣抜いてるんですっ！やめてくださいっ！」
「そのイミなんとかって――演習用の光剣のことですか？」
「訓練で使ったでしょう！？」
美奈代は光剣を腰へマウントさせつつ、騎体を急速後退させた。
「私達の時は、模擬光剣って呼ばれてました」
「二宮教官……それ、ん十年前の呼び方……」
「とにかく――宗像、柏、早瀬、山崎、どうでもいいが都築！」
美奈代は通信機に怒鳴った。
「生きていれば返事しろ！」
「生きてはいる！」
返事は宗像からだ。
「生きてはいるが、襲われている！」
「どこだ！？」
「泉の騎から見て４時方向、２騎に襲われて――なっ！？」
プッ
宗像からの通信が切れた。
「宗像っ！――ちっ！」

目の前の“サライマ”が剣を振りかざして襲ってきた。
騎体をひねってその一撃を回避すると同時に、エッジアタックをかける。
エッジが命中する直前。
“サライマ”は自騎のシールドを巧みに駆使して、美奈代のシールドの切っ先をそらしてしまう。
「かわした!?」
驚きに目を見開く美奈代の前で、“サライマ”がスクリーン一杯に映った。

「これは一体、どういうことです!」
コクピットを降りた美奈代達の目の前で、二宮と長野が顔を真っ赤にして怒鳴っている。
怒鳴る相手は、赤木博士と騎士達だ。
「演習規定違反は明白ですよ!?」
「――敵はいつ、どこから来るかわからない」
赤木博士は、冷たく言い放った。
「常在戦場――おたくの部下はその程度の心構えも出来ていないだけでは?」
「私の教え子は戦争狂じゃない!そこに並ぶガイキチ共と一緒にしないでいただきたい!」
「ガイキチ?」
赤木博士は鼻で笑った。
「戦技教導隊ですわよ?部隊名も覚えられなくて――」
「ガイキチで十分です!こっちは実験小隊です。戦技教導隊といえど、無闇な接触は禁止されているのですよ!?いいですか!私達の部隊は、一般部隊とは違うのです!」
「演習中であることにかわりはないでしょう?」
「演習ではなく、兵器の性能評価任務です!」

二宮は、各騎の装備した機動速射野砲を指さした。
「性能評価中の騎体への接触は処罰対象です！法務へは申請しますよ！？」
「ふ――――ふん」
法務――――つまり、憲兵隊の名を出された赤木博士は、さすがに旗色が悪いと思ったのだろう。
「ちょっと奇襲を受けただけで、満足に抵抗も出来ずに倒されたヒヨコちゃんで構成されるなんて、情けない実験部隊もあったモノですわ」
そう捨てぜりふを残してきびすをかえした。
「そのヒヨコ相手に」
去っていく赤木博士に二宮は怒りを押さえた声で言った。
「ここまで反撃された戦技教導隊は？」
「……」
赤木博士は答えなかった。

「――――ご苦労だった」
未だ怒りが残る顔で、二宮は居並ぶ教え子達に言った。
美奈代達の目の前には、美奈代が“サライマ”と誤認した赤い迷彩を施されたメサイア達が８騎、並んでいた。
それを眺めながら、美奈代は首を傾げずにはいられない。
よく見れば、幻龍や征龍の方がデザイン的には近い。
それを何故、敵のメサイアだと思ったんだろう？
……。
結局、乗っている連中の悪意がにじみ出ていたせいだと、美奈代は結論づけた。

そして、その足下には、こちらへニヤニヤとした視線を送ってくる一団がいた。

「いいか？」
二宮はそれを一瞥した後に、彼らにも聞こえる声で、
「絶対に関わるな。あいつらとの一切の会話を禁止する」
そう、命じた。
「破ったら、次の任務まで独房だぞ！？」

――――とはいえ。
この手の命令は、あらゆる命令の中でも、最も守られない類の命令であることは、誰にだってわかるだろう。
何しろ、自分達が守ろうとしても、相手が守ってくれないのだから。
「まぁ、移動しよう」
「そうだな」
ブリーフィングルームへ移動しようとした都築が、肩を掴まれた。
「おい」
都築は乱暴にその手を払いのける。
「待てコラァ！」
バキッ
ドカッ
都築の頬に拳がめり込むが、反対に都築の拳が相手の鼻へめり込んだ。
「やめろ都築っ！」
美奈代が慌てて止めに入った時には遅かった。
都築は二人目の顎めがけてアッパーカットを決め、山崎の太い足が別の男をまともにとらえていた。
「宗像――――って！」
宗像は宗像で、一人の股間を見事に蹴り上げ、美晴とさつきは、山崎の背後で二人がかりで相手に襲いかかっている。
「お前までっ！」

「この野郎っ！」
「私は女だっ！」

ケンカだケンカ！
おっ、チャンスだ！
いつもいつも！
やっちまえ！畳めっ！
気が付けば、何か恨みでもあるのか、整備兵までがこの騒ぎに乗じて相手に襲いかかっている。
「や、やめろ貴様等っ！」
８対８がそれこそ５０対８位の、むしろ戦技教導隊へのつるし上げ、もしくは袋だたきに発展している。
「もうっ！」
状況を制するため、美奈代はやむを得ず、ホルスターから拳銃を抜いた。
「えっと――」
床を撃つべきか？それとも天井？
床だと跳弾が心配だし、天井だと何かが落下する恐れがある。
そう美奈代が躊躇していたら、

ダンッ！

鋭い銃声が辺りを制した。
皆が動きを止めた。

美奈代は銃声のした方を見た。
場所は、赤いメサイアの肩。
そこには、肩に登って妙に決めポーズをとる騎士がいた。

高い背、細身だが筋肉質の体つき。

やたらと怖い外見。
サングラスでもしていたら、マル暴以外には見えない。
本能的に近づきたくない顔。
そんな男だ。

その男が、ジロリと乱闘の場を睨むと、肩から飛び降りた。
ちなみに高さは約３０メートルだ。

おおっ！
下からは歓声が上がる。
歓声を浴びながら、男は、数回、とんぼをきって床に着地した。

重力慣性切れてるの、知らなかったんだ。
あれ、脚にかなりの衝撃受けてるぜ？
痛いんじゃね？
顔や態度に出ないだけだ。
すげえな！――いろいろと。

皆が好き勝手なことを言う中、男は乱闘の中へと近づいてくる。
美奈代は、その時、その男の階級が大尉であることに気づき、皆と共に道をあけた。
「た……大尉」
鼻から血を流し、床に倒れる騎士の前まで来ると、男、つまり大尉はその騎士の胸ぐらをつかみあげ、有無を言わさずに殴りつけた。
「このバカモノっ！」
思わず耳元を押さえたほどの大音声が辺りに響き渡る。
「教導隊の名を汚すようなマネをしおって！恥を知れっ！」
居丈高な声が騎士達を容赦なく罵る。

それを、美奈代は呆然と聞いていた。

まるで死んだ父親と同じ怒鳴り声なのだ。

「ちょっと――美奈代、美奈代ってば」

肩を乱暴に揺すられなければ、美奈代はいつまでも大尉の説教に聞き入っていたかもしれない。

皆がそっと逃げ出す中、気が付けば美奈代とさつき、そして、いつのまに捕まったのか、大尉にヘッドロックを喰らって逃げられない都築だけが取り残されていた。

「逃げよう？」

「しかし、都築が」

「俺のことは放っておけってさ」

「そうか」

言ってねえよ！

都築は眼で訴えている。

「こんな殻付きのヒヨコ共に言い様に殴られおって！」

やばっ。

美奈代達は、大尉の説教がマズイ方に流れたことを察し、即座に逃げようとした。

「待てっ！」

その声に、全力疾走の姿勢で固まった。

「敵前逃亡は銃殺だぞ！」

「は、はいっ！」

美奈代は直立不動の姿勢で答えた。怖くて後ろを振り向くことが出来ない。

「……おい、青二才」

背後の様子はわからないが、どうやら絡まれているのは都築のようだ。

「部下が迷惑かけて――悪かった、なっ！」

ドカッ！
ぐっ！
ガンッ
ぬぉっ！
バキッ！
がっ！？
美奈代の横を都築がスライディングしながら吹き飛んできた。
「つ、都築っ！？」
ぴくりとも動かない都築に駆け寄った美奈代に、大尉が怒鳴る。
「そこの女っ！」
「は、はいっ！？」
一度抱き起こした都築だったが、美奈代が直立不動の姿勢をとったため、都築は頭から床に落ちた。
「そいつを医務室へ連れて行け……それから、目が覚めたら伝えておけ。“この借りは必ず返す”とな！――総員搭乗！」
「はっ？」
驚いて振り返った美奈代の前で、戦技教導隊の騎士達が大尉を囲むようにしてメサイアへ向かう。
「？」
美奈代は、何故か内股というか、前屈み気味に歩く大尉が気になってしまった。
「何だろう？」

「……とんでもない貧乏くじ引いてくれたな」
それから数時間後、乱闘騒ぎを引き起こした教え子達を前に、椅子に座る二宮は苦々しげに言った。
「教官」
美奈代が訊ねた。

「自分達の不祥事は自覚しております。しかし、それが何故？」
「戦技教導隊の連中は、わざとお前等に殴らせたんだ」
「はっ？」
「いいか？熟練のあいつらがお前等風情で相手になるわけはないだろう？」
二宮は顔を真っ赤にして席を立った。
「何か！？私はそんなに難しいことを言ってるのか！？もめ事を起こさないことが、貴様等はそんなに難しいのか！？」
「し、しかしっ！」
「殴ってきたのは向こうですっ！」
「階級は向こうが上だぞ」
長野はあきれ顔で言った。
「戦技教導隊は騎士の負傷を理由に次の作戦行動不能とぬかしやがった。いいか？お前等のせいだと言っているんだ」
「そんな理不尽な！」
唖然とする美奈代に、二宮が言った。
「奴らの任務は確かにヤバい。だから、奴らは我々に目をつけた。代わりに作戦に従事させるために。だからやめろといったろう！」
「……っ」
「先程まで、長野大尉と共に上層部に呼びつけられ、加藤大尉ともう一人は、股間に大ダメージを受け、静養が必要だとか、こじつけだとしか思えない理由の羅列をつきつけられた」
「いや……加藤大尉の方はマジかなって」
都築のボヤキは聞こえていない。
「……とにかく」
二宮は深呼吸した。
「奴らの相手にケンカしたバツだ。すべての任務を切り上げ、明日、我々は山梨県へ移動する」
「山梨へ？」
「そうだ――任務は地獄の門番だ」

「地獄の門番？」
美奈代はふと、魔法騎士で編成される近衛左翼大隊のエンブレムを思い出した。
地獄の番犬――ケルベロス。
力と恐怖の代名詞たる黒服と共に、その紋を身につけられるのは――。
「……魔法騎士大隊が何か？」
「……地獄の門の前で扉を守るのが任務だ。精神が地獄の向こう側の住人は関係ない」
「具体的に」
「説明する。気をしっかり持て？」
二宮は告げた。
「我々の次の任務は――数千、数万単位と予想される魔族軍の進軍を、我々だけで喰いとどめることだ」

部隊、全滅

富士見町防衛線。
山梨と長野の県境。
山間のとるに足らないのどかな地が、今では戦場だ。
農地には、巨大な波上のコンクリートブロックが、数百メートルに渡って、大型妖魔用の阻止構造物として敷き詰められている。
その後方には、コンクリートと分厚い複合装甲を幾重にも重ねた防御壁。
防御壁手前はクリークになっており、大型妖魔の突撃を阻止可能、さらに壁はUの字型に構築され、必要によっては十字砲火攻撃でさえ可能な作りになっている。
美奈代達はその防御壁に開けられた銃眼から砲口を出し、迫り来る妖魔達の阻止にあたる。
それが、任務だ。

「泉！」
「了解！」
１２７ミリ機動速射野砲がうなりをあげ、“サイ”の群れを吹き飛ばす。
「下！小型妖魔多数！クリークを越えてくる！」
観測所から美奈代達に警報が入る。
「数は！？」
目の前で残弾数を示すカウンターがダンスする中、照準を合わせるので手一杯だ。
「一々数えてられるかよ！」
観測所もいろいろ手一杯らしい。
「山崎、美晴！広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）！」
「了解！」

「はいっ！」
美奈代達が使う銃眼のかなり下。
地面から5メートルほどの所に設置されたシャッターが開かれ、
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルが突っ込まれる。
そして――
ゴウッ！
熱風が壁を走り、速射野砲を揺るがす。
「射撃終了まで後1分！」
司令部から通信が入る。
「小隊、突撃準備！」
「了解」
美奈代は戦況モニターを一瞬だけ確かめる。
場所は山間部をくの字に抜ける地形。大型妖魔達の魔法攻撃は、
その地形故に発揮出来ない。
野砲で叩けるだけ叩き、がむしゃらに突撃し、魔法攻撃を放とう
とする大型妖魔を仕留める。仕留められる前に、仕留める。
美奈代達はここ数日、そうやって生き延びてきた。
だが――
「――よし」
美奈代は命じた。
「第一分隊各騎、ロケット発射と同時に跳躍、斬り込むぞ」
「了解――やってやろうじゃねぇか」
「かかれっ！」

「ふぇぇぇっ。お疲れ」
コクピットから降りてきた都築に声をかけられ、美奈代は軽く頷いた。
「ご苦労」
「ハァッ……今日も弾薬届かなかったな」
「ああ。今日と同じ規模の攻撃を受けたら、後数日しかもたない」
「物資不足か……」
都築はため息混じりに言った。
「こんな派手な建築物造ったって、肝心のタマがないんじゃ、ハナシにならんぜ」
「鬼の洗濯板というそうだ」
「へえ？」
何故か都築は、美奈代の体を舐めるように見た。
「な……なんだ？」
「成る程――納得した」
「……ちょっと待て。どういうことだ？」
「つまり」
都築の指が美奈代の胸の当たりで止まり、そのまま体のラインをなぞるように下へと下がる。
「こういうことだ」
「……わからん」
「鬼の洗濯板」
「いい加減にしろと、何度言えばわかる！」
目の前で小さくなる二人に、二宮は怒鳴った。
「ここは小学校じゃないんだぞ！」
「で、ですが」
美奈代は恨めしそうに言った。

「都築が……その」
「いかなる理由があろうと、仲間めがけて発砲することはあるまい」
「……はい」
「都築もだ。いい加減、泉に甘えすぎだ」
「……はぁ」
「ったく、こっちは弾薬不足で頭抱えているというのに」
「教官」美奈代が訊ねた。
「何だ？」
「弾薬は、何故届かないんですか？」
「中華に備えた九州方面へ優先的に回されている。生産ラインはフル回転してもらっているが、こっちに回す余裕がない」
「我々に全滅しろというのですか？」
「そうは言わん」
二宮はコーヒーメーカーに手を伸ばしながら言った。
「我々の背後、白州を抑えられたら、今度こそ近衛は終わる――――意味はわかるな？」
「白州は、国内最大規模の魔晶石の産地です」
「そうだ。質的に言えば世界最高といってもいい。ここを抑えられれば、メサイアも、飛行艦も、帝国が必要とする魔法兵器の全てが生産不能に陥る」
「なら！」
美奈代は強い口調で二宮に言った。
「どうしてその最前線に弾薬が届かないのですか！？」
「後方の連中だって、死にものぐるいでやってくれているさ」
二宮はコーヒーを紙コップに注ぐと、美奈代達に手渡した。
「何にだって限界はある。弾薬製造に必要な資源が、国内に残り少ない」
「……」
「米国やロシアから緊急輸入している。だが、連中だって足りていないんだ」

美奈代は、腹の中にわき上がるやり場のない思いを、歯を食いしばって処理した。
「魔族相手に使わねばならない貴重な資源を、何に使わざるを得ないか、一々、口に出す必要はないな？」
「……っ」
「補給は明後日の予定だ。これからの戦いでは、全ての弾薬は貴重な存在だ。無駄弾は一発も撃てない。認めない」
「無茶ですよ」
都築は言った。
「戦車が対大型妖魔戦において、有効な兵器足り得ないのは、毎分１０発ちょっとの、その発射速度の遅さからだって、そう言ったのは教官ですよ？」
「都築。私の話を、きちんと聞いていなかったようだな」
「えっ？」
「戦車で大型妖魔相手に一対一（サシ）で渡り合うことは、不可能ではない。ＦＣＳ、こと、レーザー等の照準装置が有効で、急所に命中させることが出来ればな」
「……この状況では」
「モノは同じだ。急所に命中させることが出来れば、戦車でも相手になる。状況は関係ない」
「つまり」美奈代は言った。
「一発必殺――メサイアによる照準なら不可能ではない」
「そうだ。ついでに、私の方で、津島中佐にはかなり無茶を言って作ってもらったモノがある」
「モノ？」
「ＭＬ（マジックレーザー）砲だ」
「メサイアに搭載されていますが？」
「メサイアのパワーがとられて、いざというときにパワー不足になる恐れがあるし、大型妖魔相手には威力不足だ。だから、外部から出力をとるタイプを手配した。

あの“鈴谷（すずや）”に試験的に配備されていたのより数段出力が高いモデルだ」
「それでは、魔晶石エンジンが」
「ああ。開発局の倉庫に眠っていた艦艇用エンジンをここに輸送してもらい、それをつなげる。艦艇用なら何とかなる」
「艦艇搭載用のＭＬ砲（マジックレーザー）を流用した兵器？」
「そうだ」
二宮は、何でもないという顔で頷いた。
「ビームバズーカというそうだ。弾薬がなくても、レーザーなら何とかなる。安心しろ。近衛で以前、試作型を作って、そのままお蔵入りした実績が」
「なぜ、お蔵入りを？」
「爆発したんだ」
「は？」
「砲塔内で暴発して……いや、あの時２ヶ月入院した」
過去を懐かしむように何度も二宮は頷くが、美奈代達は青くなるどころか白くなった。
「……そんな恐ろしいシロモノを、我々に使えと？」
「津島中佐が改良している。私の時は原因不明だったが、中佐のアタマなら何とかなると思ってな。ま、面倒くさいとかいろいろゴネられたが」
「津島中佐、よく引き受けましたね」
「美夜――平野艦長に協力してもらった」
「は？」
「艦長室にあるヤオイ本全部くれてやるといったら、１２時間後に２０丁完成のメールが来た。何でも、“自分の全精力を注ぎ込んだ渾身の出来！”だそうだ」
「試射は？」
「平野艦長がやってくれた」
「平野艦長、騎士だったんですか！？」

「ああ」
二宮は少し考えて、怪訝そうな顔をした。
「知らなかったのか？」
「聞かされていません」
「そうか」
二宮は感心したように頷いた。
「候補生として私とは同期だ。向こうは生徒隊長だ。バリバリのエリートで面倒見がいい、頼れるというか――出来れば近づきたくないカタブツ殿だったよ」
そこまで語った後、二宮は顔を曇らせた。
「ところが、ある日の演習で事故を起こした。コクピットが完全に潰れるほどの事故だった。コクピットから救出されるまでに3時間以上。回収された美夜だったが、全身骨折に数カ所の内臓破裂。医者から“あと少し放っておけ。勝手に死ぬ”とまで言われたと聞く」
「そ……そんな」
「療法魔導師がいなければ死んでいたろう……文字通り、九死に一生で助かったが、騎士としての力は失ったも同然だった。近衛からお払い箱にされるはずだったが」
二宮は、そこで自分の頭を軽くつついた。
「あいつはここがいい。指揮官としての才能を買われて艦隊乗り組みになったんだ」
「芸は身を助ける」
「そうだ……騎士としては、ベルゲ動かせる程度だが――それでヤオイ本、全部コピーで勘弁してもらったそうだ」
「……」
謹厳実直。
キャリアウーマン
出来る女
同性の凄腕として平野を尊敬していた美奈代の中で、何かが音を立てて崩れ始めた。

「とにかく、モノは明日早朝には到着する。マニュアルは明日の朝食時に配るからな？」

魔晶石。

魔力を持つ石のこと。

水晶の一種と考えられているが、詳細は一切不明。

天然の魔力発生装置（マジック・ジェネレーター・システム）。

同時に、人類が唯一保有する魔力動力源でもある。

混じりけのない無色透明が最高級とされ、大型結晶の多くは魔晶石エンジンの基幹部に、米粒ほどの小型結晶でさえ、様々な利用が行われている。

この貴重性故に、鉱物としての扱いはウラン並で、個人が保有することは認められていない。

日本国内で有名な産地は山梨県白州。

ここにある皇室資産の一つに数えられる鉱山からは、安定した品質の大型結晶が産出されることで知られ、その質と産出量をもって、世界最大の鉱山とまで言われる。

魔晶石の供給源、白州。

近衛にとっては意地でも守らねばならない生命線。

当然、そこは魔族のねらい目でもあった。

すでに数次にわたる大型妖魔主体の攻略がなされたが、山間部を抜けるという大型妖魔にとって困難な地形条件により、攻略は全て失敗。

魔族軍側は深刻な損害を余儀なくされている。

「八ヶ岳を抜けるルートは」
ズルドがいらだった声をあげた。
「たかがデミ・メースが１０騎足らず、それにこうも足止め喰らうなぞ！」
「あってはならんことではある」
ガムロは能面のような顔を崩さずに頷いた。
「魔力攻撃手段まで投じてきたとなれば、さらに問題だ」
「俺が出る！」
ズルドは背負った剣の柄を握った。
「デミ・メース風情、この俺が！」
「血気にはやっても勝てんぞ？ズルド」
「しかし、兄貴……」
「敵の防衛網はかなり厳重だ。八ヶ岳方面からの攻略も、大型妖魔達に山越えをさせる点ですでに困難極まりない」
「このまま黙ってやられろというのか！？」
「メースにやらせる。いい訓練にもなろう」
「八ヶ岳で何騎殺られたと思ってる！正気か兄貴！」
「デミ・メース人間共の言うメサイアについて、情報もかなり入っている。連中にとって最強の駒がメサイアというなら、我々も我々も最強の駒を当てるのは当然だ」
「鉱山なんざ吹き飛ばせ！」
「魔晶石が鉱脈として暴走して見ろ、地形が一変する程度ではすまん。あの辺が火山地帯だということを忘れるな」
「どうせなら、人類を火山爆発で」
「神族と交わした交戦規定は未だ健在だ。次の敵は人類ではなく、神族になるぞ？」
「ちっ！」
「えり抜きの部隊が白州を防衛する部隊と交戦する。結果に期待しよう」

魔族軍陣地から発進したメースは１２騎。

すでに戦線に大量投入され、人類から「魔族軍のメサイア」と認識されている“ツヴァイ”とは違う。

甲冑を思わせる重装甲を纏い、左肩にスパイクのついたシールド、右肩にもシールドがつく。

“サライマ”

そう、呼ばれる騎。

“ツヴァイ”の後継騎にあたる。

「すごいな……」

そのコクピット。

目の前の光景を前に、感心した顔でつぶやくのはカヤノだ。

上田で見せた驚異的な狙撃能力を買われ、魔族軍に配備されたばかりの“サライマ”の一騎を任された。

任務は狙撃。

そのため、カヤノの駆る“サライマ”の肩には狙撃用の魔法弾発射筒が搭載されている。

「パワー、装甲、全部が“ツヴァイ”の二倍……ううん。四倍はある」

パワーゲージの桁が確実に違う。

肩の魔法弾発射筒だって、パワーがありすぎて“ツヴァイ”が撃ったら、逆に“ツヴァイ”の方が危険なほどだ。

「“ツヴァイ”は扱いやすくて好きだったんだけど」

“サライマ”は、カヤノが慣れていないせいか、パワーをもてあましているようにも思えてならない。

先行した大型妖魔達が疾走する光景が一瞬で通り過ぎた。

「しかたないか」

カヤノは割り切ることにした。

兵隊に過ぎない自分は、与えられた兵器で戦うしかないのだ。

「小隊各騎」

小隊長のアーコットからの通信が入る。

「これより突入する。獲物は食い放題だぞ！」

「了解！」

「大型妖魔達の突入開始後６０秒で、我々は敵陣地側面から飛行突入。カヤノは突入開始地点から狙撃だ。しくじるな？」

「くっそぉっ」

“鬼の洗濯板”監視所で双眼鏡を覗く紅葉が言った。

双眼鏡の向こう。

鬼の洗濯板の上には、英帝国軍“ロンゴミアント”と独帝国軍“ノイシア”が列をなして迫り来る敵に備えている。

ＥＵ軍の主力を為す英独連合軍がここに布陣した理由は簡単だ。

数次にわたって魔族軍の攻撃を退けた難攻不落の要塞。

ここを支援することで彼らは魔族軍と戦ったことになる。

その実績ほしさのためだけに、彼らはここに来たのだ。

彼らがここに布陣することに、戦略的意味なんてない。

各国が勝手な理由で勝手に戦う。

それが、この時点における国連軍だということを証明するような事態だ。

ぺっ。

そんな“ロンゴミアント”の背を見ながら、紅葉は苦々しげに唾を吐いた。

「紅葉様……ここは軍の施設ですよ？」

監視兵の一人が紅葉を睨む視線に気づいた白石があわてて紅葉を

たしなめる。
「だってさぁ」
紅葉は不満顔だ。
「こっちが要請してないのに勝手に乗り込んできて、感謝しろといわんばかりじゃない！」
「それはそうですが」
白石にも紅葉が怒る理由はわかる。
３３１小隊がビームバズーカの初陣を迎えるその直前になって英独軍が飛来、「この先は我々が敵とあたる」だなんて言われてはたまらない。
ビームバズーカは隠さなければならないし、連中のメサイアが邪魔で撃つことは出来ない。さらに今までの手柄まで、下手すれば連中に持っていかれかねない。
全てが邪魔なのだ。
「どう戦うかは知らないけど」
紅葉は双眼鏡から目を離し、警告音を立て続ける魔力探知装置（マジッククレーダー）のスクリーンに目をやった。
「あんな編成で、どうやって戦うのか、とくと拝見させていただきましょうか」
「しかし……連中だって、東北方面では」
「東北で頑張ってる連中は移動してないわよ」
「えっ！？」
白石は目を見張った。
「あいつら、東北防衛線から回ってきたんじゃないんですか！？」
「対魔族戦の経験はないと見たわね」
紅葉は魔力探知装置（マジッククレーダー）に映し出される反応――妖魔の数を数えながら言い切った。
「一回でも妖魔と戦った経験があるなら、“サイ”相手に密集陣形はとらない」
「えっ？」

白石には意味がわからない。
「……あ、そうですね」
紅葉がいいたいことはわかる。
“サイ”もまた密集陣形を組む。
その理由は、その大規模ＭＬ（マジックレーザー）攻撃を有効に使うため。そして、突入時の破壊力を上げるため。
共に、密集陣形で立ち向かうべき相手でないことを教えていた。
紅葉が操作するのは、魔力探知装置（マジックレーダー）の出力装置だ。
「でもね？――おかしいのよ」
「何がです？」
「Ｄ４区画の風力センサーが異常値を示した。なのに反応はない」
「まさか、コンシール？」
「可能性あるわ。交戦開始まで？」
「あと、推定２００秒切りました」
「飛行艇２５号は緊急発進。後退して――二宮中佐、私、聞こえている？」

「敵の伏兵？」
「そう」
アリアに乗る二宮は、周囲を見回した。
両面共に切り立った、絶壁に近い断崖。
高さは優に２００メートル以上。
大型妖魔が侵入することは出来ない。
「まさか」
「いつから敵が大型妖魔だけになったの？中佐」
「小型――メサイアですか？」
「小型妖魔、そう答えたら、もう二度と協力しないところだったわよ？」
二宮達の背後で、飛行艇が離陸していく。
「ビームバズーカは？」

「英独軍の手前、まだ使えない――――それに、メサイアの機動性の前に、あれがどれほど意味がある？」
「ちっ！」
「壁の向こうは英独軍に責任もってもらっていい。理由は後でなんとでも言える。対メサイア戦だけを考えて――――壁のこっち側は、死んでも守って」
「了解」
二宮は頷くと、部下に命じた。
「各騎、敵の奇襲攻撃が想定される。ビームバズーカのお披露目は延期だ」

――――せっかくの武器を。
美奈代は、ビームバズーカの入ったコンテナを恨めしそうに見た。
まるで、エサを前にお預けを喰らった犬みたいだと思う。
「障壁の向こう側は英独連中に任せろ。死のうが何しようが知ったことか。こっちは救援出来る余裕なんてないことは、最初から通達済み。向こうも承諾済みだ」
「向こうから逃げてきたら？」
宗像の言葉はもっともだ。
「臨機応変に対応しろ。楯にでもなんでも」
「了解です」

ズドドドッ
連続した爆発に似た音と振動が、近づいてくる。

「隊長、地震です！」
“ノイシア”を駆る一騎士が隊長騎に報告する。
「違うぞ……中尉」
隊長騎からはすぐに返信があった。
「敵だ」

「敵？」

地響きを立て、“サイ”達が突撃してくる光景がコクピットのスクリーン一杯に広がる。

立ち上る土煙
巻き上がる土片
激震を纏いながら、巨大な四つ足の大型妖魔、“サイ”が突撃してくる。

恐怖よりむしろ荘厳ささえ漂う光景。

その前に初めて立った騎士達は、一瞬、我を忘れた。
体が震える。
それが、目の前に示された絶対的な死によることを、騎士達はどこか本能に近い所で理解していた。

「全騎、備えろっ！」
ジャカッ！
ガシャッ！
隊長騎の号令と共に、メサイア達が一斉にシールドと槍を構えるが、
「違うっ！」
隊長騎は、騎士達に意外なことを命令してきた。
「全騎、浮上しろ！一時上空に退避、突入をやり過ごした後、上空から襲いかかれっ！」
「はっ！」

「ドイツ軍、浮上します！」
「隊長！我々も！」

「馬鹿な！」
一方、“ロンゴミアント”隊長騎は部下の進言を退けた。
「メサイア同士の突撃、防御なんて何度やったと思っている！」
「質量が圧倒的に違う！」
「臆したか！」
「違う！あんたが狂っただけだ！」
「何を！」
「隊長！――――来ますっ！」
「備えろっ！」
「大規模ＭＬ（マジックレーザー）反応！」
「全騎、逃げろっ！」

ズズズズンッ！
全てを白く染め上げる閃光。
全ての音を消し去る爆発音。
激震。

障壁に敵のＭＬ（マジックレーザー）攻撃が命中したのだ。

「す……すげぇ」
逃げ遅れた“ロンゴミアント”が何騎か巻き込まれた“サイ”の突撃。
“サイ”達はメサイア部隊の展開していた地点を制圧して止まった。
それを、英独の騎士達は上空から見た。
空に回避するという方法は、正解だった。
多くの騎士達がそう思った。
“サイ”達は、突然、敵を見失ったことに狼狽しているのは明らかだ。

「いくぞ！」
“ノイシア”部隊の隊長騎が怒鳴り、“ノイシア”達が地上めがけて襲いかかった。
それを見た“ロンゴミアント”部隊の隊長騎が叫ぶ。
「独野郎（クラウツ）に遅れるな！各騎――――」

ズンッ！

“ロンゴミアント”隊長騎が突如爆発し、四散した。

「隊長！？」
「な、何が！――――ぎゃっ！？」
狼狽する“ロンゴミアント”達もまた、次々と爆発を余儀なくされた。

「す、すごい」
カヤノは“サライマ”のコクピットで目を見開いていた。
“ツヴァイ”どころの話じゃない。
破壊力、速射性、圧倒的だ。
すでにカヤノは8騎のデミ・メースを仕留めている。
突然、攻撃を受けたデミ・メース達が、被弾を回避するためか、それとも本気で“サイ”に立ち向かう気なのか、急速に降下を開始する。
「ちっ！」
舌打ち一つ、カヤノは魔法弾発射筒（まほうだんはっしゃとう）から必殺の一撃を放ち続けた。

飛行装置をやられたのか、メサイアがまっすぐに墜落する光景を

目の当たりにした美奈代達は、メサイアに搭乗しているパイロット達の死を悼むことさえ許されなかった。

「散れっ！」

その二宮の鋭い声がなければ、美奈代は自分がどうなっていたかわからない。

騎体を急速後退させた途端、それまでいた場所が吹き飛んだ。

「ＭＬ（マジックレーザー）攻撃！」

「どこから！？」

「２時方向！」

「えっ？」

そっちは崖だ。

指示された方角に視線を向けた美奈代は、見た。

崖を駆け下りながら、自分達に襲いかかるオレンジ色のメサイア達を――

「回避不能！――――来ますっ！」

斜面を滑り降り、襲い来るメース――“サライマ”その腕に持つ光の剣が美奈代めがけて振り下ろされる。

「ちいっ！」

征龍改を急速後退させ、かろうじてその一撃をかわすが、シールドの一部が切断された。

「このぉっ！」

抜刀した剣で抜き打ちの一撃を喰らわせる。

“サライマ”は、身を翻してかわす。

「各騎！斬艦刀抜刀、フォーメーションを組めっ！」

二宮の命令が部隊を走る。

「斬艦刀のリーチを活かせ！」

三騎がそれぞれの背を守る陣形を組むべく、各騎が動く。

「中尉、斬艦刀抜刀！」
「了解――――斬艦刀抜刀開始」
「さくら――――もう、ドジらないから、力を貸して」
「はいっ！マスター！」
征龍改が斬艦刀を装備する。
「斬艦刀、出力安定！」
「よしっ！」

「宗像、どうする？」
フォーメーションを組んだのは早瀬と山崎だ。
「いい手があったら教えてくれ」
「倒しまくるしかないんじゃない？」
対する敵は3騎。
「泉達にも3騎、教官達に2騎。塀の向こうには5騎」
山崎が言う。
「平等ですね」
「ここで一人だけ負けたら、一生の恥だぞ」
「笑い話で許して欲しいです」
「同感だが――――これは戦争だ」
「そう、ですね――――とりあえず、目の前の敵をそれぞれ倒すしか」
「そうだろうな。早瀬、それでいいか？」
「しくじったら、守ってね？」
「祈れ」
宗像はコントロールユニットを握りながら言った。
「生き残れますように――――最低でも、苦しまずにあっさり死ねますように」
「前者を祈ることにするわ」
「そうしておけ。一時、フォーメーションを解く。いけるな？」
宗像はとりあえず、目の前の敵に集中することにした。

オレンジ色のメサイア――“サライマ”。
データは一切存在しない敵。
弱点がどこか、何もわからない。
それで当然だと、宗像はそう思う。
「当たると痛いぞ！？」
アリアの騎体をかがめ、左手に刃を横に寝かせた斬艦刀、右手をそれに添える。
突き技の態勢だ。
「私は、手加減できるほど上手くないんだからな！」
ダッ！
アリアが突撃、“サライマ”に襲いかかった。
“サライマ”は横に身をかわしたが、それこそ宗像の思うつぼだ。
「ふんっ！」
斬艦刀をかわした“サライマ”の首筋に叩き付け、力任せに引く。
ガンッ――ズシャンッ！
斬艦刀の切っ先が“サライマ”から離れた時には、“サライマ”自身の首が胴体から離れていた。

近衛右翼大隊の前身、新撰組が編み出した突き技――平突き。
突き技を交わされても、横薙の攻撃が可能な技。
宗像が使ったのは、その変形版。
相手が人間なら、突き技を“わざと”回避させ、刃を首筋に押しつける。
後は剣を引くだけだ。
相手が勝手に死んでくれる。
人間ではなくても、メサイアでも有効なのは、幾度となく繰り返したシミュレーションで証明済みだ。
……実戦で使ったのは初めてだが。

「だから言ったろう？」
首を失い、倒れた“サライマ”の胴に斬艦刀を突き立てた宗像が言った。
「私は上手くないと」
「宗像がやった！」
「殺られたのか！？」
「逆だこの馬鹿！」
美奈代と都築は、連携プレーを見せてすでに2騎の“サライマ”を撃破していた。
美奈代が唐竹割の一撃を繰り出し、敵がそれを剣で止める。
そこを都築が斬艦刀の一撃により串刺しにする。
単純だが、効率的な連係プレーが功を奏した結果だ。
「3騎目、いくぞ！？」
「おうっ！
「山崎君！」
「柏准尉！」
山崎騎と美晴騎が背をかばいながら接触した。
「何よ、フォーメーションなんてないに等しいじゃない！」
「結局、息の合う連中で組めということなんでしょうね」
「山崎君、私と組む気ある？」
「喜んで」
その直後、剣を振りかざしながら背後から襲ってきた“サライマ”。
山崎と美晴の2騎は、振り返ることもなく、片手で斬艦刀を突き出し、串刺しにしてのけた。
衝撃で“サライマ”の脚は宙に浮き上がり、斬艦刀によって宙づり状態にされた。
手にした光剣から光が消え、地面に落ちた。

「とりあえず、リーチを活かした攻撃だから」
「教官からは文句はこないでしょう」
「だよね？」

「くそおっ！」
一番割にあわない思いをさせられているのは早瀬さつきだ。
肝心の宗像は単独で渡り合ったし、コンビを組もうとした美晴は山崎と組んでしまう。
つまり、宗像同様、さつきも単独で渡り合うしかないのだ。
「みんなの薄情者！」
ブンッ！
さつきの槍が一騎を串刺しにする。
「特に都築っ！」
最も長い武器を使用するため、その邪魔にならないよう、皆が遠慮していることを、さつきはこの時点で全く気づいていなかった。

「ちいっ！」
ガキィッ！
光剣と斬艦刀がしのぎを削り、“サライマ”と“アリア”が離れた。
もう、何度目の光景か、双方のパイロットは忘れていた。
「何てザマだ！」
“サライマ”のコクピットでアーコットが怒鳴った。
「何が最新鋭だ！“ツヴァイ”に毛が生えたほどしか使えん！」
その原因が、自分の腕にあるとは、死んでも認めたくない。
敵は人間。
弱者だ。
なら、そんな敵に原因を求めるのはもっと間違いだ。

「おかげで私の部下が！」

「生徒達は！？」

“アリア”のコクピットで、唯に怒鳴るのは二宮だ。

「全騎無事――敵はすべて撃破」

「私達だけか！？」

「長野大尉も撃破済み」

「私……だけか」

「はい」

「……みっともないな」

二宮の口から苦笑が漏れた。

“これは悪い見本だ”なんて言って納得してもらうわけにもいかんな」

「敵は、私達が交戦した敵の中で最強に類します」

「――麗菜殿下以下だ」

「それはそうですが」

唯は言いづらそうに言った。

「あれは非常識です」

「同感だ」

敵はホバー移動を開始、半円を描きながらＭＬ（マジックレーザー）攻撃を仕掛けてくる。

二宮騎は、シールドでそれを防ぎつつ、ＭＬ（マジックレーザー）と応戦、逆方向へ向けホバー移動をかけ、突撃タイミングをはかる。

「小物がぁっ！」

「どっちが！」

突入タイミングはコンマ数秒まで同時。

二騎は同時に互いめがけてＭＬ（マジックレーザー）を乱射しながら突撃した。

間合いが一瞬で狭まる。

「くたばれっ！」
アーコットは殺傷力の高い実剣を、腰から抜き放とうとした。
抜きざまの一撃――――居合いの一撃で敵を仕留めようとしたのだ。
敵の巨大な剣の切っ先をかわした！
勝てる！
アーコットの口元が来るはずの勝利にゆるんだ。
だが――――

二宮は斬艦刀を使わなかった。
斬艦刀を振りかざすことによる抵抗を嫌ったのだ。
このスピードで突撃をかけてくる、敵の腕前からすれば、斬艦刀の突き技がかわされるのは、むしろ当然。
案の定、切っ先がかわされた。
そして、敵が近づいてくる。
「甘いっ！」
それこそ、狙い通りに――――二宮騎は、敵の懐に飛び込んだ。
ガィンッ！
二宮騎は、最小限度の動きで敵の胸部めがけてシールドのエッジを突き立てた。
剣の柄に手をかけていた“サライマ”に、それを回避することは出来なかった。
鈍い音を立て、シールドが“サライマ”の装甲にめり込み、“サライマ”は吹き飛ばされた。
「隊長！」
全てのモニターがブラックアウトし、警報が鳴り響くコクピットの中、薄れていく意識の中で、アーコットは誰かの叫び声を聞いた気がした。

「このぉぉぉぉっ！」
狙撃地点からでは、アーコット達の敵が狙撃出来ないと判断、独断で移動したカヤノだった。
敵味方の動きが激しく、下手な狙撃は同士討ちになる。
それを恐れて、狙撃タイミングを狙ううちに、味方が次々とやられていく光景を目の当たりにした。
「あ……ああっ」
モニターの向こうでアーコット騎が煙を上げながら動かなくなる。
「ああっ……」
カヤノを初めて褒めてくれた上官が、動かなくなった。
「ああっ！」
そして、カヤノの中で何かが弾けた。
「このぉぉぉぉっ！！」
ギィィィン――――
ドンッ！
カヤノの“サライマ”は、ブースター全開で宙を舞い、魔法弾発射筒（まほうだんはっしゃとう）を乱射しつつ、敵めがけて突撃した。
敵はシールドで攻撃を防ごうとするが、こちらの魔法弾発射筒（まほうだんはっしゃとう）の出力が敵のシールドの防衛能力を上回っているのは確かだ。
敵の構えたシールドが、一瞬のうちに敵の腕ごと吹き飛ぶ。
狙いはアーコットを倒した一騎。
カヤノはその一騎目指して“サライマ”を突撃させた。
すぐ側にいた一騎が、どこから持ち出したのか、実体弾を乱射してくるが、カヤノはそれを恐れることなく、一気に敵の陣中に“サライマ”を躍り込ませた。
「よくも隊長をぉぉぉぉっ！」
魔法弾発射筒（まほうだんはっしゃとう）を、実体弾を放ち続ける敵のコクピットがあるだろう胴めがけて撃ち込む。
至近距離からの一撃が、その敵の胴を吹き飛ばす。
「ちいっ！」

アーコット騎を倒した敵騎からのするどい一撃が、魔法弾発射筒（まほうだんはっしゃとう）を切断、カヤノが発射筒を手放した途端、爆発した。

「これで！」

魔法弾発射筒（まほうだんはっしゃとう）を切断すべく、剣を振り切った状態の敵騎にカヤノは内蔵されているＭＬ砲（マジックレーザー）をありったけたたき込む。

敵騎の装甲があらゆる所で吹き飛び、そのまま仰向けに倒れる。

その光景に熱くなったのだろう。

周囲の敵騎が一斉に襲いかかってきた。

だが、それさえ、今のカヤノには恐るるに足らない。

隊長の仇を討つ！

それだけがカヤノの全てだった。

敵への憎悪。

戦場において、兵隊が抱くべき感情に支配されたカヤノは、敵を殺すことへに塵程の躊躇も、敵への一切の憐憫も、何もない。

敵を憎み、殺すことが、カヤノの全てだった。

「あんた達なんて！」

カヤノは“サライマ”を突撃させた。

敵の突き技をかわし、懐にまで飛び込むと、左肩のスパイクシールドを前にしたシールドアタックで敵の一騎を吹き飛ばした。

「人間なんて！」

吹き飛ばされる敵騎の腕を掴み、関節をへし折り、手にした巨大な剣を別方向から襲いかかる敵騎に向ける。

激しい衝撃の後、その巨大な剣、友軍の剣の突然の裏切りを回避できなかった敵騎は、胴を貫通されて動きを停止した。

「私達が、何をしたというんだ！」

倒れる二騎を踏みつけ、“サライマ”は両手で光剣を抜き、狼狽する敵騎に襲いかかる。

一通過で2騎が騎体を切断され、擱座（かくざ）する。

さらに2騎が連携攻撃をかけてくるが、逆に剣を持つ腕を切断してしまう。

「思い知れっ！」

“サライマ”の持つ剣が2騎の胴を貫通した。

「隊長！」

圧倒的な戦闘能力を示したカヤノは、アーコット騎の残骸を抱え、宙に浮いた。

「副長、副長は！？」

塀の向こうから返信が入る。

「アーコット隊長がやられました！部隊の損害甚大、後退の許可を！」

副長騎は即座にカヤノの後退を許可。

生き残った部下に塀の向こうの占領と、接近しつつある敵の迎撃を命じた。

隊長騎からは弱い生命反応を示すシグナルが送られてくる。

――いそがなくちゃ！

カヤノがブースターを全開にしようとした、まさにその時だ。

カヤノ騎は、白い何かに襲われた。

ピーッ！

コクピットに警告音が鳴り響き、騎体が激しく揺れた。

「何っ！？――――きゃっ！」
ディスプレーに警報が表示される。
両足損傷。
そう、表示されていた。
「一通過で！？」
一瞬、何が起きたのかわからないカヤノは呆然としたが、
ドドドンッ！
騎体をシェイクする振動に、すぐに我に返った。
敵のＭＬ（マジックレーザー）攻撃だ。
このままうかうかしていたら、アーコット隊長を助けるどころではない。
アーコット騎をしっかりと抱きかかえると、カヤノはブースターを開いた。

戦場に現れた新たな敵と副長達との交戦する様子がディスプレーに表示される。

カヤノは増援が来ることを、副長達の勝利を祈りながら、安定性を失った“サライマ”を操作することに集中することにした。

第十一次白州防衛戦。
その記録にはこう書かれている。

３３１小隊全滅。

美奈代達がどうなったのか、それは戦闘が終わった後に判明することになる。

敗北と新型騎と

第十一次白州防衛戦の被害は以下の通り。

大日本帝国　投入メサイア１４　０２喪失、同０６大破
英独連合軍　投入メサイア３８　２６喪失、同６大破
鬼の洗濯板防衛ライン　中破

結局、八ヶ岳に展開していた八八特務隊――――祷子達の参戦により、決定的な事態だけは回避することが出来たにすぎない。

こと、英独の被害は、国連軍による、戦略戦術的視点の欠落した無謀な戦線投入が原因だったとして、世論の批判を浴びることになる。

●“鈴谷（すずや）”整備ハンガー

「こりゃ……ダメね」

ようやく改装が終わり、ドックから出た“鈴谷（すずや）”。

そのハンガーが出迎えたのは、残骸になったかつての所属騎達。

そのメサイアのなれの果てを前に、紅葉はため息をついた。

「修復って言われても……再組立てとレベル変わんないわよ？」

「ですよねぇ」

紅葉につられるようにため息をつく白石の前。ウィンチに吊された長野教官騎の上半身は、床に転がされた下半身と泣き別れしている。

他の騎も、ほとんどが胴体に大きな風穴が開いている。

「脊椎、ダメですね。あれ」

「……開発局に持ち込んで、使える部品取りにするのが精一杯ね」

「あ、津島中佐！二宮中佐がお呼びです！」

「わかった、今行く！」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「ま――よく生き残ったって、そう褒めてあげるのが人情でしょうけど」

紅葉は居並ぶ３３１小隊の面々を前に言った。

場所は鈴谷艦内ブリーフィングルーム。

血のにじむ包帯を巻いた二宮達がその前に座っている。

「はっきり言って、３３１小隊で使える騎は一騎もない」

「……」

「征龍改、鳳龍、“アリア”――全部、スクラップ」

「……」

「エンジンが回収出来たのが不幸中の幸い。あれが無くなっていたら、弾一発だけ入った拳銃手渡されて、どこかの部屋に押し込められる程度じゃ済まないわよ？」

「……あの」

挙手をした美奈代がおそるおそる訊ねた。

「征龍改は、ダメなんですか？」

「ダメ」

紅葉はいらだった様子で答えた。

「メサイアの脊椎はメサイアの基幹システムが納められている。そこが切断されてる。脊椎を作り直して再セッティングするなんて、もう一回組み上げるのと変わんない。

第一、これだけの数の脊椎を実験部隊に回せる余裕は、今の近衛にはない」

「……そ、そんな」

「一体、誰のせいか言わなくてもわかるでしょ？」

「……」

「これからの予定を通達します」

紅葉は事務的に言った。

「３３１小隊は、本日１２００、葉月市の近衛府開発局へ移動を開始します」
「開発局へ？」
「そう、部隊は実験小隊の任務を継続してもらう――――何人死んでも、やってもらう」
紅葉の目は冷たい。
「わかってる？メサイアは私達開発者にとって子供なの。その子供、８体も墓場に送られて、無事で済ませるつもりはない――――覚悟していて」
紅葉は、そう言い残してブリーフィングルームを出ていく。
メサイア８騎喪失。
全滅した部隊。
その烙印を押された３３１小隊の面々は、それを黙って見送るしかなかった。

●“鈴谷（すずや）”整備ハンガー
ハンガーはメサイアの残骸で埋め尽くされている。
通路からそれを眺めるのは、美奈代達だ。
「そうは言われても」
都築がぼやく。
「あれほどの敵だぜ？」
「それを倒すために、我々は給料もらってるんだ」
「俺、初任給、手をつけていないんだぜ？」
「私だってそうだ。だがな？」宗像が言った。
「せっかく、敵がミスしたおかげで残った命だ。大事にしろ」
「何？」

●“鈴谷（すずや）”食堂
「敵が、ミスをした？」
鈴谷艦内の食堂で好物のオムライスにかぶりつく紅葉を前に、二

宮て長野が怪訝そうな顔をした。
「もぐもぐ……そう」
紅葉は口の周りをケチャップで真っ赤にして頷いた。
「おかげで、敵のメサイアは標準的にコクピットがどこにあるかわかったけどね」
「……胴？」
「そう。敵がくどいほど胴への攻撃にこだわったのは、コクピットの破壊を狙ったから」
「……」
「幸い、こっちのメサイアの胴回りは、駆動系システムと脊椎以外、何もないし、胸部のコクピットは厳重な装甲に守られているから、お腹に風穴開けられた程度じゃ、死人だけは出ずに済んだ――メサイアはダメだけど」
「……」
「……」
「あの乱戦で、それだけはしっかりやってのけた。大した腕よ。あのミカン野郎のパイロット」
「……それで、我々は」
長野は心配そうに訊ねた。
「どう、なるのですか？」
「３３１小隊の本来の任務は新鋭兵器の実験だけど、もうそんなこと言ってる余裕は全くない。近衛は、クック・クレイギー計画に沿って、試作騎・試作兵器を作らず、まず量産型として前線に投入する方針に転換した」
「そんな無茶な」
「そう。無茶なのよ。おかげで私達開発者はエライ目にあってるんだから」
紅葉はスプーンをクルクル回しながらため息をつく。
「はぁっ……それでね？３３１小隊の受領騎なんだけど」
「あるのですか！？」

「――あっちゃ悪い？」
「いえ！」
「中佐、それはまさか」
「長野大尉、多分、その通り。私の開発した試作騎よ。８騎組み上がってる。エンジン以外」
「それ……ちゃんと動作テストとか」
「エンジンないのにテストなんて出来るもんですか」
紅葉は恐ろしいことは笑いながら言ってのけた。
「征龍改からアリアまで、エンジンのサイズは同じだし、出力差は技術でカバーしてもらうしかないわ。他にもう、即時投入可能なメサイアはないんだから」
「……」
「一体、どんな代物で？」
「敵のメサイアの構造とか、ある程度わかったから、それをフィードバックしている」
ポンッ
紅葉はテーブルの上に一冊のファイルを放り投げた。

――ＭＤＩＪＸβ－０２２改仕様書

そう書かれたテプラが貼り付けられていた。
「ＭＤＩＪＸβ－０２２改？」
「本当は、βタイプじゃないの」
紅葉は苦笑いを浮かべた。
「私が勝手にβタイプに分類しただけ。本来なら、αタイプに属すべき代物なんだけどさ……さすがに敵のメサイアを参考にしたら、ねぇ？」
「どういうことです？」
「機密」
「中佐」

「……」
「……」
じっ。と、二宮に睨み付けられた紅葉が、我慢出来ずに口を開いた。
「機密中の機密なのよ」
「教えてください」
「他言無用出来る？バレたら私達、仲良く銃殺台よ？」
「私達には部隊幹部としての責務があります」
「……あのね？」
紅葉は、ポケットから何かを取り出した。
盗聴防止装置だ。
その動作を確認すると、小声で言った。
「魔族側からの技術供与があったのよ」
「なっ！？」
何事かを叫びそうになった二宮の口を、長野と紅葉が抑える。
「……落ち着いて。魔族って言っても、ヴォルトモード軍じゃない」
「――へ？」
「今、私達が戦っているのは、魔族全体じゃなくて、二千何百年前に封印された部隊に過ぎない。いわば、魔族にとっても始末に困る連中なのよ」
「そ、そんな情報、どこから」
紅葉の妄想かと、二宮は半ば本気で勘ぐっていた。
「御前会議」
「どこから！」
再び、口を塞がれる二宮。
「私も呼び出されたのよ。……口が軽いから言いたくないって、きっぱり言われたけど」
「それは正しい見方です」長野は言った後で口を閉じた。
「むぅ……本題に戻るわよ？魔界、魔族の住む世界の方、そこから陛下へ技術供与があった。向こうではメースっていわれている、メ

サイアの技術の一部。さすがに限定的だけど、動力、駆動系……近衛のメサイア技術はかなり進歩したわ。……せっかく完成度７５％まで行った“白龍”は全部バラして開発やりなおすハメになったけど」

「でも……どうして」

「魔界のエライ人、今回の件について、なんだかとても後ろめたいところがあるみたい」

「……」

「それで」長野が訊ねた。

「中佐は、その技術をメサイアにフィードバックすると？」

「全部は無理」紅葉は笑った。

「実現に必要な素材がこの世界にないんだもん」

「……」

ハァッ。

二宮と長野が同時にため息をついた。

「とりあえず、代用品でやれる範囲はやった。後は、乗って使えるかを判断してもらうしかない」

「大丈夫なんですか？」

「まぁ、何とかなるんじゃない？」

紅葉はあっさりと言い切った。

「それしかないんだから」

メースとフィーリア

●長野県小県郡日村跡　魔族軍幕営

「作戦は失敗したが――貴殿はよくやった」

ガムロは、前にかしこまるカヤノを前にそう言った。

「敵のデミ・メースを２２騎撃破。内訳、狙撃１４、接近戦８――申し分ない」

「あ、ありがたき幸せ」

カヤノは上擦る声で、ようやくそれだけ言うと、頭を垂れた。

礼服の襟には、真新しい大尉の階級章と、勲章が光る。

“サライマ”１１騎の喪失から考えると、わが軍の敗北というべきだが」

「……」

「その中で、敵に一矢報いた貴殿の功は大きい。魔界でも、貴殿の名は轟き渡っている」

「――は？」

「当代有数のメース使い……そう評する声があちこちからあがっておる」

「……」

「意味がわからない。という顔だな」

「で、ですけど……閣下」

「ん？」

「わ、私、メースをまた大破させて」

「両脚の破損程度。１対８の勝負に圧勝し、帳消しにした。違うか？」

「……はぁ」

「ふっ……その功績には褒美をもって報いよう。貴殿に我が軍に配備される最新鋭メサイアを１騎預ける。

名は“ヤクト・エッジ”。
魔界の魔族軍最新鋭重駆逐メサイアだ。
使いこなし、さらなる武功をたてよ」
「はっ！」

血が頭に上って、体が熱い。
雲の上の人物。カヤノにとってガムロとは、そういう存在だ。
そんな人物に褒め言葉をもらったカヤノは、冷めやらぬ興奮と緊張の中、ふらつきながら廊下を歩いていた。
せいぜい、一命を取り留めたアーコット隊長のお見舞いに行こうか、それとも、霊安殿に、戦死した副長達の冥福を祈りに行こうか。
そんなことを考えるのが精一杯だ。

かつて、日村があった場所にようやく完成したヴォルトモード卿を迎えるための居城。

その広い廊下を、そんな様子で歩くカヤノは、廊下の端から歩いてきた少女に真っ正面からぶつかった。
「きゃっ！？」
「痛っ！」
ぶつかった相手は後ろに転ぶ。
「ご、ごめんなさい！」
カヤノは涙目の少女をあわてて抱き起こし、服についた埃を払う。
「ぼうっとしていて！怪我はない？」
「グスッ……大丈夫です」
「あ、そうだ！」
カヤノはポケットから飴玉を取り出し、少女に手渡した。
「これ、お詫び。おいしいから」
「ありがとうございます」

涙を抑え、無理に笑う少女。
カヤノは不意に、疑問に思った。
こんな所に、こんな小さい子がいるとは聞いていない。
「あの……あなた、誰？」
「わ、私――フィーリアです」
「フィーリア？」
その名に覚えがない。
少女は困った顔で言った。
「ズルド閣下の養女です」

――私、カヤノ。メース使いなの
――メースって、何ですか？
そんな会話の後、カヤノは楓を連れてメース用のハンガーへと足を運んだ。
小さな街が一つ入りそうな程の巨大な建物は、楓にとっても興味深い存在だったが、正直、今まで何に使われている建物か全く分からなかった。
それがメースという、よくわからないが、とにかく巨大な兵器を格納する施設であると聞かされ、楓はなんとなく納得がいった。

「ここよ？」

入り口で衛兵に止められたカヤノが、押し問答の挙げ句、大尉の階級章と、「ズルド閣下の養女」とか、「閣下の機嫌そこねたいの？」といった脅し文句が効いたらしい。
衛兵が不承不承ながら、不思議そうな顔をして通してくれた。

様々な機械の作動音が、一瞬、楓の聴覚を奪った。
楓が初めて見たハンガーの中は、まるでメースという巨大な木々

が生い茂る林のような印象さえ受けるほど、メースによって埋め尽くされていた。
「スゴ……」
「魔界から増援部隊が続々と合流しているからね――こっち」
「あ、はい」
見上げるほど巨大なメースの脚元を抜けるカヤノに案内されるまま、楓は一騎のメースへとたどり着いた。
“サライマ”
先の戦いでカヤノが両足を切断されたあの騎だ。
「“サライマ”っていうの。これは私の騎」
“サライマ”？」
「そう、北方部族の英雄の名前」
「へぇ……」
整備兵が徹夜で換装した両足で立つ“サライマ”のオレンジ色の騎体を見上げながら、カヤノは思いつくままに、目の前の少女にメースについて説明した。
「魔界に住む魔族は、大きく分けて東西南北と中央の5つの部族からなる。私は北方部族の出なの。
私達の住む所は、切り立った山脈ばかりの寒い地方で、農業には適さない分、地下資源が豊富で、魔界ではトップクラスの科学技術の集積地でもある。
でもね？北方は同時に、巨人族の住処でもあるの。メースが生まれる昔は、食料が乏しくなると、巨人族は魔族の住処を襲ってきた。わかる？メースは巨人達の平均サイズを元にしたから、こんな大きなサイズなのよ？」
「……」
楓は、メースの天辺からつま先までを何度も視線を往復させたが、どうしてもこんなバケモノじみた生き物を想像することさえ出来なかった。

カヤノは続ける。

「何千年、何万年も、私達、北方の魔族達は、巨人族のエジキにされてきた……酷い時には、数十万の単位で食料にされたことだってある。それこそ毎年のようにね」

「そ、そんなに？」

「ええ……私達北方部族は、中央部族のような飛行能力や魔法の力はない。人間の騎士と同じくらいの力しかない。

だからというわけでもないんでしょうけど、幾度と無く巨人達にせっかく作った作物を荒らされ、住処を台無しにされた。

最悪で部族の7割が死んだとされる“死の冬”の伝説は、子供心に恐ろしかった。

食欲しかないような連中だけど、反面、強靱な肉体はどんな毒にも耐えるし、私達の手で扱える武器は通じない。

つまり、ご先祖達には、巨人に対抗する手段がなかったのよ。

だから、私達北方部族のご先祖達は考えた。

どうしたら、生き残れるか？

どうやったら、巨人族にうち勝つことが出来るか？

――その答えが、これ」

カヤノは“サライマ”を見上げた。

その視線は、どこか誇らしげにさえ見える。

「巨人族を相手にするなら、巨人族と同じ巨大な機械を作ればいいって発想ね。

持っていた科学技術の粋をかき集めて作られたのが、このメース。

そして、私達のご先祖はみんな、メースに乗って戦った。

部族の生き残りを賭けて。

部族の未来のために。

――結局、巨人族が北方部族を襲った最後の記録が残っているのは、メース完成から千年後のこと。
だから、この間のことを、“千年戦争”とか“巨人戦争”って呼ぶ人もいる。“サライマ”は、その戦争中に活躍したメース使いの英雄なの」
「へぇ？」
「――ま、私達北方部族にとって、メースは神様みたいモノ。これに乗れて一人前って言われているわ。男も女も」
「じゃ、カヤノさんも？」
「――まぁ、ね」
楓の前で、カヤノははにかんだような、苦笑しているような、複雑な顔をして頷いた。
「私は――そんな立派なメース使いじゃないけどね」
「ふぅん？」
カヤノの戦果を知らない楓にとって、カヤノがそう言えば、そういうものかと考えるのが精一杯だ。
「せっかくだから、コクピット入ってみる？」
「いいんですか？」
楓が興味深そうに頷いた時、
「おーい。カヤノ……じゃねぇ、カヤノ大尉」
オイルまみれの作業服に身を包んだ整備兵が手を拭きながら近づいてきた。
「“ヤクト・エッジ”の組み上げ、終了したぜ？試運転頼むわ」
「え？今ちょっと」
「えーっ！？関節の当たりを今日中とらねぇと、後に響くんだわ」
「っていうか、もう来たんですか？」
「ああ。あんな役立たずと一緒にな」
「役立たず？」
「アレだ」
整備兵が顎でしゃくった先には、装甲を完全に外され、内部が丸

見えのメースがあった。
整備途中なのか、右腕をはじめ、あちこちのパーツが外されていた。
「あれって？」
「試しに組み上げてみたんだけどよ――龍人族向けのメースさ」
「龍人族の？」
あ、龍人族ってね？龍みたいな翼と尻尾のある種族のことよ。
カヤノは楓にそう説明しつつ、そのメースを見た。
成る程。
普通のメースにはない尻尾があった。
しかも、隣で組み上げ中のツヴァイと比較してもかなり大型だ。
「最新鋭は最新鋭なんだけどよぉ。何しろ俺達が使いこなせるシロモノじゃねぇし」
「操縦システムを換装すれば？」
「ダメだダメだ」
整備兵は手をパタパタ横に振った挙げ句、肩をすくめた。
「さっきも中佐が挑戦したけど、腕一本動かせねぇ」
「そんなにクセが？」
「ああ。恐ろしくな。どうせ伝票ミスで送り込まれてきたシロモノだ。送り返して、もう一騎、ヤクトエッジ仕入れてやろうかって話になってる」
「もったいないですねぇ……あれ、ヤクトエッジより高性能だって聞きましたよ？」
「ああ。広域制圧任務用だからな。本気になればそりゃスゴいさ。だけどよ？その分、コストが高すぎるわ、ジェネレーターの冷却システムが追いつかないわで、欠点ばっかりさ。
実験機１騎で製造中止になったのもムリはねぇ。
そんなシロモノだ。
まぁ……完全状態で、あれ一騎、まともに投入すれば、メース１個中隊でも止められるかどうか」

「……それにしても」
「ん？」
「よく動いてるじゃないですか」
「へ？――――なっ！？」
整備兵が驚いたのも無理はない。
さっきまで誰も動かせないとサジを投げられていたメースが、立ち上がろうとしていたのだ。
「お、おいっ！誰が動かしている！？」
「――――あれ？」
その時になって、カヤノは青くなった。
いつのまにか、楓の姿がなかったのだ。
「ま……まさか！？」

白雷

●東京都葉月市　近衛軍開発局開発センター

東京都葉月市。
幕末動乱の際、魔法騎士同士の戦闘における魔力暴走の結果誕生したクレーター“葉月湾”に面した軍事都市。
日本最大の軍需メーカー“狩野コンツェルン”のお膝元だ。
その葉月市には、近衛軍の施設が多数存在する。
その内の一つ、開発局。
その奥に、紅葉が所属するβタイプ開発チームの研究施設がある。

「これが？」
美奈代達３３１小隊の面々は、目の前に並ぶメサイアを見上げた。
幻龍改や征龍改より妙に迫力がある、不思議な感覚を抱かせるメサイアが、そこに並んでいた。
「ＭＤＩＪα－０２２“紅龍（せきりゅう）”の改装騎」
紅葉は、美奈代達にそう説明した。
「米軍が開発……昨日、先行量産型が東南アジア戦線と東海防衛線に投入されたっけ……とにかく、米軍の可変メサイア“プラッティ・ファントム”に対抗する意味で作り上げたのが、この騎」
「……すげ」
都築は感心したようにメサイアを見上げた。
「まるでバケモノだ」
「そうよ？――今のコイツは、“紅龍（せきりゅう）”として開発された基本フレームに、設計見直し直前の“白龍”のパーツを組み込んでいる。結果、関節駆動系、推進系は今までとは次元が違う代物になっている。理由？魔族軍のメサイア……メースに勝つためよ」
「……」

「メースの恐ろしさは肌身でわかっているでしょう？相手がメサイアならこんなバケモノ作りはしない」
「それほどまでに」
「死にたいなら、拳銃口にくわえて引き金引きなさい。それですぐ死ねる。
でも、あんた達には意地でも勝ってもらう。
勝って死んでもらわなきゃいけないの！
そのためには、ここまでやらなきゃいけないのよ！」
紅葉の目に宿る炎は美奈代達を黙らせるのに十分すぎた。
「――――はい」

それからすぐ。
一応の解散が命じられ、皆が三々五々、思い思いに解散したが、その中で、美奈代だけは、次に自分の騎になるはずのメサイアの側を離れようとしなかった。
いや、離れられないのだ。
何が出来るわけじゃない。
ただ、側にいたいだけなのだ。

「何？解散は命じたはずよ？」
側を通りかかった紅葉がそう言う。
「は……申し訳ありません」
「気になる？この子」
美奈代の横に立つ紅葉が整備を受けるメサイアを見上げる。
「……はい」
美奈代もつられてメサイアを見上げる。
「はっきり教えてあげようか」
「何を、ですか？」
「ここに並んでいる騎の半分は、可変メサイアとして開発されてい

ない」
「え？」
“紅龍（せきりゅう）”なんて、ほとんどペーパープランの域を出ていない」
「……そ、それは、どういう？」
「二宮中佐にまで内緒なことよ？黙っていてね？」
「はぁ？」
「ここに並んでいるのは、私が独自に開発したβタイプメサイア達。……そういう意味じゃ、“鳳龍”なのよ」
「ど、どういうことですか？“鳳龍”は都築の」
「そう。都築准尉の搭乗した“鳳龍”は、私の設計した“紅龍”の基本計画を、赤木博士が性能向上の建前の元、思いっきりデチューンしてくれたどうしようもない代物。だから、本来はβタイプなのに、αタイプの烙印を押された……言ってて腹立ってきた」
「納得できません」
美奈代は言った。
「αとかβとか……そういうのって、そんなに境界線が曖昧なんですか？」
「それほど、性能落とされたのよ！」
紅葉はそれにムキになって反論する。
「あのバカ女、理解できないからって人の設計めちゃくちゃにした挙げ句、自分の設計だなんて言い張りやがって！」
「……」
「で、アタマに来た私が陛下に直談判して“鳳龍”の可変騎バージョンってことで設計が許されたのが、“紅龍Ｂ”。
でも、それさえ１騎造ったのがバレたら赤木のババアに潰された。だからさらに陛下にねじ込んだのよ。
今、目の前に並ぶまでに至ったのは、私から言わせれば、本来あるべき“鳳龍”なのよ」
「さ、詐欺じゃないですか。陛下は“紅龍Ｂ”を認めただけなのに、その許可乱用して別な騎体、こんなに組み上げるなんて」

「黙れ。次期天皇騎、タダで設計するからって条件ついてるんだから」
「次期――天皇騎？」
「そう。“皇龍”っていうの……“白龍”の指揮官騎でもある。下手なもの作れないから、神経使うのよ？」
「……はぁ」
「――どっちにしても、この子達にエンジンを組み込めなかったのは、私が極秘にやっていたから。……まぁ、非合法だからって安心して？決して非合法じゃない。フレーム研究用ってことで、別口の許可は得てるんだから」
「戦えるんですか？」
「ストレートね」
「申し訳ありません」
「戦えるから回すんでしょ？まぁ、“Ｄ－ＳＥＥＤ”ほどじゃないけど、かなりいけるわよ？」
「Ｄ－ＳＥＥＤ……風間の騎ですね？」
「そう。あのお姫様の」
「戦力的には……たとえば、征龍改とでは、どの程度違うのですか？」
「カタログスペックで１０倍以上。騎士の差が出れば、どのくらいになるかわからない」
「――は？」
「“あれ”は普通の騎士じゃ動かせる代物でさえないわ」
「……それを、風間が」
「言っておくけど」
美奈代の考えがわかるんだろう。
紅葉がフォローするように言った。
「技術云々の問題じゃないからね？」
「え？」
「そりゃ、お姫様の戦闘能力は、正直、芸術レベルだけど、それだ

けじゃないんだから」
「もう少し詳しく！」
「軍事機密」
「……」
「とりあえず」
紅葉は話を切り上げるように言った。
「ベースは“鳳龍”だから、都築准尉からいろいろ聞いてみたら？それと、“Ｄ－ＳＥＥＤ”だって」
紅葉の顔が曇った。
「必ずしも、メースに常勝出来る存在とは限らないわよ？それにもこいつだって、フレームの基本性能は、“白龍”に準じる。ただ、エンジン出力の関係で、各騎にバラツキが出るのは仕方ないわよ。
そこら辺は、後で個別に説明する。エンジン組み込み完了までは３日。それまでに白石が作ったマニュアルは読んでおいて――参考にもならないでしょうけど」

夜
皆と食事を済ませた美奈代の脚は、自然とハンガーへと向かう。
行くところがないわけじゃない。
仕事がないわけでもない。
ただ、気になって仕方ないのだ。

Ｄ－ＳＥＥＤ。

“征龍改”の１０倍の戦力？
それを褄子が動かしている？
何がどうなっているんだろう。

「しかし、すごいな」
居並ぶメサイア達を前に、いつの間にか横にいた宗像が感慨深げに言った。
エンジンこそまだ搭載されていないが、その優美にして力強いデザインは、宗像の嗜好にマッチしていた。
「“白龍”開発計画、白紙になったんだろう？」
「よく知ってるな」
“白龍（はくりゅう）”――近衛の最重要機密指定を受ける開発中メサイア。
その名が宗像の口から出たことに、美奈代は少し驚いて宗像を見た。
「まぁな」
視線をメサイアに向けたままの宗像の中性的な横顔は、美奈代もみとれるほど美しい。
宝塚にでも行けば、かなりのスターになれるだろうと、美奈代はつくづく思う。
だが――
「開発局の恋人が教えてくれた」
という理由だけは受け入れがたいものがある。
「ベッドの中で？」
「ああ。それが？」
「……聞いた私がバカだった」

二人がいるのは、壁を何段にも走る通路の途中。
丁度、整備を受けるメサイアが一番よく見える位置になる。

「だが、あの子でさえ、量産化の一歩手前の“白龍”開発計画が、どうして白紙に戻ったかはわからんそうだ」
「そうか――よっぽどのことがあったんだな」
美奈代はそう言って、通路の手すりにもたれかかった。

「しかし」
目の前で、装甲が運ばれていく。
「そのおかげで、“白龍”用に用意されたパーツを、我々が使うことが出来る」
「開発再開の時に、このパーツが使われている保証はないが？」
「現段階の“白龍”でも十分だ。私はそう思う」
「……そうだな。ただ」
宗像は壁にもたれかかった。
「残念なのは」
宗像は言う。
「“白龍”のエンジンが使えないことだ」
「津島中佐が、我々の騎のエンジンをパワーアップしてくれるんだろう？」
「“白龍”用エンジンは、“幻龍改”用エンジンと比較して桁外れの出力を誇ると聞く」
紅葉の言葉を思い出し、美奈代は無言で頷くと同時に、宗像が“白龍”にこだわる理由がわかった気がした。
そんなに高い出力を誇るエンジンを搭載したメサイアなら、どんな敵を相手にしても戦えるはずだ。
「ああ――騎体がエンジン出力についていけず、それ故に開発が難航していたそうだ」
「むぅ……」
「欲しいだろう？」
「だが……“さくら”と離れるのは辛い」
「成る程？」
宗像が口元をゆるめた時だ。
「ちょっと」
通路の真下から突然顔を出したのは紅葉だ。
「ち、中佐！？」
自分達の足下から睨み付ける紅葉を前に、二人は驚いて後ろに後

ずさった。
「ど、どうしたのですか？」
「どうもこうも――――よいしょっと」
通路によじ登りながら、紅葉は言った。
「いくらここでも、軍事機密を気楽に話さないでよ」
「あの子は、津島中佐から聞いたと言っていましたが？」
「むぅ。相手が誰かは大体、推測がついた」
「ところで中佐」
「何？」
「敵の大出力ＭＬ（マジックレーザー）への対抗は可能ですか？」
「“鬼の洗濯板”にも使われた魔法障壁コーティングはしてあるほう。」
宗像は感心したように、美奈代は安堵のため息として、
同じ言葉を口から出したが……、
「メースの攻撃には意味無いけどね」
紅葉はあっさりと言ってのけた。
「メース？」
「敵のメサイアのこと」
「あのオレンジ色のヤツですか？」
「ううん？私達が言うメサイアと同義語」
「……」
「敵の兵器調べてわかった。あいつらが使う攻撃は、私達の言うＭＬ（マジックレーザー）とは異なる。荷電粒子砲とプラズマ砲くらいの違いだけど、魔族側のは、ある程度の防御魔法を打ち消すことが判明している。魔法障壁コーティングはその前には気休めね」
「それこそ軍事機密では？」
「うるさい。ためになるお話と言え」
「はっ。感謝します」
宗像は真顔で敬礼した。
「――――あんたがやると、イヤミにしか見えない」

「その通りです」
「……」
「それで？中佐は何かご用ですか？」
「怒りで一瞬忘れたけど――――」
紅葉は大きく深呼吸して、
「お姫様が来るわよ？」

「お姫様？」
美奈代は首を傾げた。
「麗菜殿下が？」
「風間少尉よ」
「祷子が？」
宗像の目に、獲物を狙う光が宿る。
「ＤＥＳＥＥＤと、“Ｓ４”のオーバーホールのため。あと少しで」
「八八特務隊が下がるのですか？」
美奈代は驚いて訊ねた。
「戦線、大丈夫なんですか？」
「お姫様達だけで戦争は出来ないわよ？」
紅葉は冷たい視線を美奈代に向けた。
「それとも、お姫様達に全部押しつけるつもり？」
「け、決して、そんな意図は」
「――――まぁ、いいわ」
「それより、中佐。その“Ｓ４”とは？」
「宗像准尉。マヌケにもあんたがぶっ壊した幻龍改をβタイプに改装したタイプ。
“白龍”が間に合わないから、天皇護衛隊（オールドガーズ）向けに作ってあげたのよ。
レイナガーズも全てこのタイプに改装中」
「出来るのですか？あれはαタイプです」
「この私が出来るって言ってんだから、出来るのよ」

どうやら心証をかなり損ねたらしい紅葉に睨まれた宗像は、
「エンジンの改装ですか？」
「――ぶっちゃけ、そう。というか、それに合わせた改装しかしてない。大体、魔晶石エンジンの要は魔晶石。これぱっかりはどうしようもないじゃない。問題というか、エンジン出力を決めるのは、魔晶石から放出される魔力をいかに効率よくエネルギーに変換するか、まさにその変換システムにかかっている。知ってるでしょう？」
「はい。中佐はその分野でも第一人者だと言うことと共に」
「やだぁ！おだてないでよ！」
照れ隠しだろう。
宗像の言葉に、紅葉は何度も宗像を叩きながら言った。
「ちょっと、人の百億倍どころか1京倍、才能があるだけなんだから♪」
「はい。その通りです」
ほほえむ宗像が、後ろ手にした右手の中指を立てているのを、当然ながら紅葉は知らない。
「でね！？あんた達のエンジンも、改装は進めてあげてるから！」
「我々の？」
「そう！元々の規格があるから、“白龍”並ってわけにはいかないけど、征龍改で4倍。幻龍改で2倍。征龍改のレベルで、グレイファントムを一撃で粉砕できるわよ？」
「“白龍”以下ですか？」
宗像は不満げだ。
「何故？エンジンのサイズは同じだと、中佐ご自身が」
「同じサイズでも、構造全部違うし、“白龍”用のエンジン周りのパーツは門外不出なんだもん」
「コピーを作るとか」
「考えたけど、だめ。やるなら、精霊体を一度殺さなくちゃいけな

いんだもん」
「精霊体を――殺す？」
美奈代には意味がわからない。
「エンジンを破壊するとも聞こえますが？」
「そう。その通り」
紅葉は頷いた。
「それほどの“処置”が必要だし、それだと、これまでの精霊体の戦闘データがすべてオシャカだもん。そっちの方が問題」
「では、“さくら”はそのままで、出力だけ高めると？」
「“幻龍”から“幻龍改”への改装で実績あるから安心して」
紅葉はにこりとほほえんだ。
「そんなこと、この近衛、そして、この私じゃなきゃとても無理だけどね♪」
「ありがとうございます！」
美奈代は喜んで頷いた。
「で、どれほどのパワーアップが？」
宗像は事務的なまでの冷たさで訊ねる。
「“白龍”……Ｄ－ＳＥＥＤやＳ４と張り合える？」
「無理」
紅葉はきっぱりと、そう断言した。
「あの子達はすべて同一エンジンを持つ。元が違うんだから」
「……」
「宗像、“白龍”にこだわりすぎ」
「しかし……」
「目の前のこの子達は」
紅葉がメサイア達に優しげな、どこか誇らしささえ感じさせる視線を向ける。
「私が開発した、“私の白龍”達。エンジン出力以外なら、開発が停止する直前の“白龍Ｖｅｒ－５”より上。Ｓ４を圧倒出来る」
「エンジンが問題だと？」

「はっきり言ってあげる」
紅葉は優しげな口調で宗像に言ってのけた。
「“白龍”は、今のあなた達じゃ、天地がひっくり返っても扱いこなせない」
「っ！！」
宗像の顔が険しくなる。
「自分の騎体を破壊するほどのパワー。それを使いこなすにはよほどの才能が必要。だいたい、Ｖｅｒ－５の時点で、“白龍”を使いこなせる近衛騎士は、二宮中佐を含めて」
紅葉は宗像に指を開いた手をつきつけた。
「これだけ」
「五人だけ？」
「そう。メサイア使いとしては世界トップの近衛。その精鋭中の精鋭の中でさえ、これだけ」
ぐいっ。
紅葉は宗像にさらに手を突きつけた。
「自分が、そこに入るとは思っていないでしょう？」
「――っ！」
「思い上がるな。バカ」
「――」
「たかが数回の実戦で、生き残ったからって、粋がるのもいい加減にしろ」
「宗像」
震える拳を握りしめる宗像の肩を美奈代が掴んだ。
「中佐のおっしゃるとおりだ」
「――わかっている」
重いため息と共に、宗像はやっとそう言った。
「自分が最強だなんて思っていない」
「そう」
紅葉は満面の笑みで頷いた。

「最強じゃない――――だから、最強になるの」
「？」
「安心して。この子達、あなた達に預ける以上、あなた達は、最強に最も近い所までいける――――生き残ったらね」
「……生き残ったら」
「そう。生き残ったら。それが絶対条件。どんな状況でも、生き残った者が最も強いのよ」
「中佐」
宗像は、眉をひそめながら訊ねた。
「中佐がおっしゃる最強と、私の考える最強は、違うのでは？」
「わかってるわよ」
紅葉は頷いた。
「アニメのヒーローみたく、敵をばったばった倒すのが最強ってのが、あんたの考え。私の言う最強は、そんな幼稚なレベルじゃなくて、もっと大人の考える意味での最強」
謎かけとも詭弁とも、どうとでもとれる言葉に、宗像は困惑気味に訊ねた。
「……それは？」
「見つけなさい」
紅葉は床を蹴ると、宙を舞った。
「それをわかって、体現出来れば、あなたは最強に――――“白龍”を任せるに足る騎士になれる」
紅葉の体がメサイアにむかって流れていくのを見つめながら、宗像はつぶやいた。
「最強……“白龍”……」
ビーッ！
ビーッ！
サイレンが工房内に響き渡った。

「工房内全作業員に警告！メサイアが工房内に入る！各員、事故防止に留意せよ！繰り返す」

重々しい音を立て、工房の巨大なドアが開き、白いメサイア達が搬入されてくる。

「各員かかれっ！」

号令一下、白いメサイア達に向かって整備兵が近づく。

「八八特務隊か」

美奈代はメサイア達の先頭に立つその騎に見覚えがあった。

ＤＩＳＥＥＤ

川中島強襲の際に見た騎に間違いない。

「ひどくやられている」

宗像は、各騎の装甲を見て口元を歪めた。

各騎の装甲は傷と煤に汚れきっていた。

深い傷が走り、へしゃげた装甲をかろうじて着けている騎も少なくない。

「かなり派手にやりあったな」

美奈代はしきりに感心した様子で、一連の光景を見入る。

「風間は特に」

「なあ……泉」

「……それはわからない」

「まだ何もいっていない」

「風間が、津島中佐のおっしゃった5人の一人に入ると思うか？そう聞きたかったんだろう？」

「先読みのしすぎだ」

「違っていたか？」

「チッ」
「最強を目指すなら、そうもさもしいことにこだわるな」
美奈代は諭すように言った。
「二流は他人を追う。超一流は己を追う」
「何だ？それ」
「私の父の言葉だ。誰かを目標にとか、誰かがこれだけ強いとか、視線を他に向けている限り、二流で終わる……父はよく言っていた」
「……私は二流か？」
「他人に動じるな。お前は一流以上だ。麗菜殿下からアリアを預かったのは、それが認められているからだ」
「……だが」
宗像はあくまで最強という言葉にこだわる。
自らが強者であることにこだわる。
美奈代は、それが危険だとわかっている。
「己の理想は、己の中に求めろ。他人がどうこう言うのは、言い訳にもならん」
「……」
「他人が気になるから、ならなくなるまで己を磨け。お前になら出来る。麗菜殿下も、それを期待していたからこそ、アリアをお前に託したのだろう？他人や“白龍”にこだわっている、今のお前の姿は、殿下への反逆に等しいぞ」
「……」
「お前は最強の器なんだ。せっかくの器を、つまらん感情で傷つけるな」
「そんなつもりはない」
宗像は言った。
「死にたくない。だが、生きているなら、上を望む。それだけだ」
白いメサイア達のハッチが開き、騎士達が出てくる。
遠目に見ても貫禄のある騎士達が二人の目に映る。
それは、近衛メサイア使いのトップ――天皇護衛隊（オールド・ガーズ）から抜擢さ

れた、文字通り超一流の騎士達。
二人の目標を具現化した存在だ。
「私はいつか」
宗像は言う。
「あそこに立ってみせる」
「……」
美奈代は無言で宗像の目を見た。
その目は、決意にあふれている。
「お前は危険だというだろう。だが、私はその危険の先にあるものを手にしてやる」
「死ぬぞ？」
「死を越えた先にあるんだ。死を恐れて何が出来る？」
ハァッ。
美奈代はため息を抑えられなかった。
宗像に失望したのではない。
決意はわかる。
だが、美奈代には、宗像の決意が、単なる権力志向にしか思えないのだ。
生死をかけた戦場に持ち込むべき決意ではない。
危険すぎる。
その先に待つのは、確実な破滅だとわかる。
にもかかわらず、美奈代は宗像を止められない。
そんな自分自身に失望したのだ。
「――栄光も名声もいらん」
「えっ？」
「私はあくまで自分が満足するレベルまで行きたいだけだ。いいか？私は出世なんてどうでもいいんだ。騎士として、メサイア乗りとして、いきつく所まで、高みまで登りたいだけだ」
「……」
「楽しみは個人的に、私はいい意味で個人主義者だぞ？」

宗像はそう言って小さく笑う。
その笑みを見た美奈代は、ようやく落ち着くことが出来た。
そして、自らを恥じた。
友の心が読めない自分を、恥じた。
「私はまだまだだな」
「ん？」
「何でもない」
そう答える美奈代の視線の先。
髪の長い女性が騎士達に取り囲まれている。
恭しいまでの態度で扱われる女性は、間違いなく祷子だ。
騎士達の顔は、祷子に傅くことそのものに誇りを感じている。
そんな表情を浮かべている。

――無理もない。

美奈代は祷子を見てそう思う。
美奈代の目には、何だか、祷子には圧倒されそうな気品というか、高貴ささえ感じられるのだ。
騎士達に傅かれる様こそ、祷子にふさわしい。
同性の美奈代の目にも、そう映る。
紅葉ではないが、確かにこれでは“お姫様”だ。

「どうした？」
「……ああやって、オトコ共に傅かれるのが宗像の目的かと思ったぞ？」
美奈代は悪戯っぽくそう言ったが、
「私はオトコは大嫌いだ」
宗像は言い切った。
「傅かれるなんてとんでもない。その屍の上に立つほうが、私の望みに近いぞ？」

後藤隊長、着任。

●葉月演習場。

「なぁぁぁぁぁぁっ！」

メサイアのコクピットで、美奈代が悲鳴を上げる。

ピーッ！

ビーッ！

ピピピピピッ！

コクピット内にはあらゆる警告音が鳴り響き、警告表示がいくつも美奈代の網膜に表示される。

「このぉっ！」

力任せにコントロールユニットを操作し、強制的にメサイアを停止させることに何とか成功したが、急制動に対して、慣性制御システムが消化出来なかったGにモロに襲われ、骨から根こそぎ肉を引きはがされた錯覚さえ覚えた。

ぜぇっ

ぜぇっ

荒い息を整え、美奈代はたまらずに叫んだ。

「な、何なんだこれは！？」

美奈代達にとって待望の新型メサイアの初乗りは、わずか１５分で停止した。

コクピットから降りて来て満足そうな顔をする者はいない。

むしろ、消耗しきった顔がほとんどだ。

「俺達を殺す気かっ！」

都築に至っては、怒り狂って開発者の紅葉の胸ぐらを掴みあげた

ほどだ。
美奈代はそれを止める気力すら残っていなかった。
むしろ、都築にああも文句を言う体力のあることが信じられない。
都築と紅葉がギャーギャー怒鳴りあうのを後目に、美奈代はその場にへたり込んで、重い首でようやく自分が降りてきたメサイアを見上げるのが精一杯だ。

「こ……こんなモノ」
冗談じゃない。
「こんなバケモノ……使いこなせるか」

征龍改のエンジンを改装して搭載している。
そう聞かされただけで搭乗した。
開発者の紅葉が詳細を告げなかったのは、メサイアの操縦に関して、紅葉が「メサイアの操縦は、考えるな。感じるんだ」と、どこかのカンフー映画の名台詞を引き合いに出してまで、口で言うより肌身に感じさせる方が有益だという立場にいるからだ。

――だが……

「地雷原が目の前にあるなら、警告するのが人情だろうが！」
という都築の意見の方が正しいし、支持したいと思う。
「“鳳龍”の倍程度よ！慣れればどうってことないって！」

そう。

美奈代達は、メサイアから生じる圧倒的なまでのパワーに振り回され続けたのだ。
指一本動かすだけでも、それまでの愛騎とは勝手が違う。
丁度、小学生がプロレスラーの体に頭脳を移植したような、そん

な感じだ。
とにかく、メサイアの力を理解することさえ出来なかった。
動かして、止めるのが精一杯だった。

ガンッ！
ぐおっ！？
「情けないわねぇ」
都築の股間をハンマーでぶん殴って沈黙させるという荒技を見せた紅葉が、股間を押さえて泡を吹く都築の顔を踏みつけながら言った。
「特に宗像――――あんたねぇ」
おそらく、コクピット内部で吐いたんだろう。
しきりに口元を抑える宗像に紅葉は容赦がない。
「コレが使えなくちゃ、“白龍”は無理よ」
「……やって……みせます……ウッ」
「あーあ。こんなところで吐かないでよ。ほら、水飲んで」
紅葉はポケットからペットに入った水を宗像に手渡すと背中を撫でる。
「いい？口、濯(ゆす)いだら、再度搭乗だからね？」
美奈代達は目で拒否するが、
「ここは軍隊よ？」
紅葉は情け容赦なく、そう言った。
反論が言葉にならない中、美奈代は別な場所から風に乗って聞こえてくるメサイアの駆動音を聞いた気がした。

「真理も残酷なことするなぁ」
メサイアのコクピットに入った通信が、二宮を非難する。
「児童虐待だ」
「わ、私が命じたわけではありません」

対峙するメサイアから突然入った通信に、二宮はバツが悪そうに答えた。
「これは成り行きです」
「それでもさぁ」
どこか軽さが先走る男の声。
「まだ殻付きのヒヨコだ」
「それでも、扱ってもらいます」
「母親としては、子供達を信じたいわけだ」
「当然じゃないです――――かっ！」
二宮が騎を突撃させ、振りかぶった剣をメサイアめがけて振り下ろす。
ガンッ！
その一撃をあっさりかわしたメサイアの左腕が、振り下ろされた二宮騎の腕を押さえる。
「はい終わり」
二宮は、自分の騎の首筋につきつけられた光剣の輝きを前に、敗北を知った。
「――――くっ！」

「それにしても」

音声：2騎限定

その表示と共に男の低い声が二宮の耳に届く。

「無茶しやがる」
「あの子達は、実戦を生き延びてきたんです」
「聞いてるさ。さっすが真理の子供だって褒めてやりたいよ」
「……」
「親バカは時に子供を殺すっていうぜ？」

「βタイプ普及のためのテストケースとしては不可避です」
「そうやって――子供を騙すのか？」
「……」
「フウッ……命令、なんだろ？」
「……」
「真理はそういうオカタイ所が魅力なんだけどなぁ」
「……」
「ハメ外して暴走した方がよっぽどらしいぜ？」
「褒めてます？」
「あれ？聞こえなかった？」
「全っ然」
「へへっ――ま、かつての恋人が一人で頑張ってるからって、こうして将来棒に振ってまで来たんだ。歓迎くらいはしてほしいもんだね」
「一つ、言っておきましょうか？」
「愛してるって？」
「女にとって、前のオトコって、歴史書の存在にすぎないんです」
つまり、昔のオトコはずっと昔の存在にすぎない。
そう言ったのだ。
「へぇっ。そいつは！」
だが、言われたオトコはそうとらなかった。
「歴史書に載せてくれるほど、大切な存在ってわけだ！」
「ちがっ！」
「じゃ、今晩は歓迎会してくれよ。ベッドの上で」
「ば、バカっ！」
赤面して怒鳴る二宮は、オトコがコクピットの中で悪戯っぽくウィンクしている様子を、メサイアの装甲越しに確かに見た気がした。

結局、この日の訓練は日没まで続けられた。
「こ……コツがわかったぜ」
へへっ。
都築はその場にひっくり返りながら言った。
「な……なんだ。大したことねえな」
都築の口がモゴモゴと動くが、もう言葉にならなかった。

「み、美晴さん？生きてます？」
「……山崎君、私もう死にたい。死んだ方がマシ……死んだ」
「靖国は近いです。頑張りましょう」
「あたし、家がお寺だから、十万億土といって」

「……くそっ。泉、生きてるか？」
「美晴じゃないが、死んだと思ったぞ？早瀬こそ大丈夫か？」
「胃液が出なくなるまで吐くなんて……何ヶ月ぶり？」
「今日は何も食えないな……というか、いらん」

身動きすらままならない元３３１小隊の面々の前で、次々とメサイアがハンガー入りしていく。
１騎はＤ－ＳＥＥＤ。
３騎は自分達と同じメサイアだ。

「二宮教官と長野教官、よくもああ平然と動かせるもんだ」
「残り２騎は？」
「さぁ？」

「生きてるかい？」
聞き慣れない声に美奈代が振り向いた先。
そこには、昼行灯という言葉がしっくり来るような男が立っていた。

猫背にポマードで固められた時代遅れの髪型、ぼんやりとした三白眼。
だらしない中年サラリーマンといえば、これほどしっくり来る人物もそうはいないだろう。
まるでよく聞く昼行灯だ。
ただ、襟の階級章は中佐。
はっきり、美奈代達にとってはかなり雲の上の人物だ。
美奈代達は何とか立ち上がろうと動き出す。
「ああ。いいよ？二宮さん達が来るまで休んでて」
男は、手で美奈代達を制止する。
とぼけた口調だが、どこか人を従わせる不思議な声だと、美奈代は思った。
「鬼のいぬ間のなんとやらって言うじゃない？」
「あ……あの」
「ああ。俺？」
男は自分を指さしながら言った。
「後藤。後藤中佐――ああ、だから敬礼いらないって……あらら。やっちゃったからにはしかたないか。ご苦労さん」
後藤中佐はだらしない敬礼の後に言った。
「君たちの配属される新部隊、八八独立駆逐小隊隊長に任命されたから、よろしくね？」

●翌日
「このぉぉぉっ！」
「ふんっ！」
ガンッ！
殺気だった声をあげる美奈代と宗像が駆るメサイア同士が激突する。
互いのＩＬＳ（イミーテション・レーザー・ソード）が火花を散らし、両騎は即座に離れる。

派手に発生した土煙が騎体を覆い隠す。

「うわぁ……派手だねぇ」

演習場を見渡せる、小高い丘の上。

そこに停車したCP（コマンド・ポスト）仕様の半軌道装甲車の上にあぐらをかいた後藤が感心したともあきれたともつかない声をあげる。

「メサイアを手足のように使ってるよ」

「……」

CPの横に立つ二宮が双眼鏡を手に教え子達の活躍を見守っている。

「やっこさん達、よっぽど頭にきたんじゃない？二宮さん」

「え？」

後藤から声をかけられたと知った二宮が振り返った。

「二宮さんの小隊長解任が悔しいってことさ」

「……しかし」

二宮は視線をメサイア達に戻しながら言う。

「３３１実験小隊の全滅は否定出来ない事実です」

「――他国相手なら自決命令もんだからねぇ」

「だから」

「だから」

後藤はなぜか靴を脱ぎながら言った。

「そんな失態を母親に味わわせたことが悔しいんだよ。子供として。見てごらんよ」

メサイア同士が互いの技量を尽くして剣を交えている。

「昨日まで使いこなせないって泣いていたメサイアであそこまでやっている。泣かせるじゃないの」

「そう……ですね」

「まぁ、こっちもこっちで？あんた立てて後ろでのんびりしたいってのが本音だから、よろしくね？」

靴下を脱いだ後藤は、ポケットから何か薬を取り出した。

「足、負傷でも？」
「ああ、これ？水虫――――やる？」
後藤は薬――――タムシチンキを二宮に突き出す。
「結構です」
「ま、そうだよね。――――そういや、あのメサイア。ＩＤシリーズ（インペリアル・ドラゴン）には認定されなかったね」
「しかたありません。“白龍”ベースとはいえ、やはり」
「スクラップを寄せ集めたハリボテ――――上層部（えらいさん）の評価ってのは辛辣だ」
「……」
二宮は、内心で複雑な思いがした。
確かに目の前のメサイアは他のメサイアからパーツをかき集めた寄せ集めだ。
それは否定しない。
だが、目の前で動くメサイアが、上層部の言う通りにスクラップなら、それが扱いこなせないと嘆く教え子達は、一体何なんだろう？
「どうせ」
二宮は、教え子をフォローするつもりで言った。
「政治的な理由を隠す方便でしょう？赤木博士あたりが随分、暗躍していると聞きますが？」
「お堅いねぇ」
「“白雷（はくらい）”――――そう、命名だけはされたそうです」
「不肖の子にも名前だけはくれてやる……か」
後藤は興味がないかのように、足にタムシチンキをつけ、
「痛ててっ――――フーッ、フーッ！」
悲鳴を上げると、息を吹きかける。
「中佐」
二宮がたまらずに言う。
「不謹慎です。今は仕事中ですよ？」
「痒いもんは痒いんだもん」

「もうっ……あらっ？」
演習場に新たに現れたのは４騎の“白雷（はくらい）”だ。
装備するのは剣ではなく、薙刀にハルバード。そして槍。
「えっと？薙刀が柏准尉と神谷中尉、それとハルバードが山崎准尉と、槍が早瀬准尉だっけ？」後藤が双眼鏡を除きながら訊ねる。
「はい」
二宮は答えた。
「元々、柏や早瀬は、実家が道場をやっているほどで、剣より余程慣れています。山崎は山暮らしでやはり斧系が」
「成る程？――生活感にじみ出てるのがいるねぇ」
「まぁ、山崎は……そうですね」
「騎士の力で樵（きこり）か……いい生活だ」
「今回、部隊配属された神谷中尉は」
「そりゃ、あんた」
後藤はあきれたように言った。
「元はあんたの部下でしょ？」
「……いえ、そうじゃなくて」
二宮は言葉を間違えたことに気づいた。
「彼女も槍が得意ですから、武器の選択は間違っていないと」
「成る程？天皇護衛隊（オールドガーズ）にいた瀬音（せおと）少佐の弟子でもあるし。何より、少佐自身もいる」
「あ、あんなのは……」
言葉を詰まらせる二宮の目の前で、薙刀やハルバードを持った“白雷（はくらい）”達が演習を開始する。
「いい動きをする」
後藤は靴下をはきながら言った。
「――ま、ここは戦場だから？私情の持ち込みはやめましょうや。中佐」
「私は任務に私情を挟むような――」
「例え教え子とはいえ、部下の素性を興信所に探らせたのは？」

「……」
「二宮さん……俺達は管理されているんだ」
後藤はポケットからタバコを取り出した。
吸う？
箱を二宮の前に出した。
「部下に疑問があれば調べるものです」
一本、箱から取り出すと、二宮はポケットからライターを取り出した。
「……私がタバコを吸うの、よくご存じでしたね」
「調べましたから。メンソールって、よく吸えるね。俺はもうピース一筋ん十年」
「……後藤さん、元は情報部に？」
「過去の事なんて忘れちまったよ……で？」
「風間のことですか？」
「そう。どこまでわかった？」
「ご想像にお任せします」
二宮は挑むように言った。
「どうせ、私の手にした情報なんて、とうにご存じでしょう？」
「教官としての意見も欲しいんだけどなぁ……」
「……メサイア乗りとしては申し分ないでしょう」
二宮は言った。
「ただ……戦闘能力は、はっきり異常です」
「……まぁ、そうだろうね」
後藤は言った。
「前線のベテラン達をビビらせたほど、敵をなぎ倒しまくった挙げ句が、“姫さん”なんて異名をとったんだもんねぇ」
「正直、その戦果が、風間の騎士としての素質か、あのＤ－ＳＥＥＤというメサイアのせいか、判断つきかねています」
「……成る程？」
「後藤中佐は」

「後藤でいいよ？」
仲良くやりましょうや。と、後藤は口元を歪めた。
「……後藤さんは、どこまで調べたのです？その……部下のこと」
「さぁ？」
後藤は肩をすくめてみせた。
「俺、そういうの興味ないの」
「……そういう姿勢が、組織で長生きする秘訣ですか？」
「わかってるねぇ」
「わかりました。私も見習うとします――風間のことは、何も知りません。興味もありません」
「……そう」
頷いた後藤の顔は、ぞっとするくらい冷たかった。
「――リストに載りたくなければね」
「……そのつもりです」

新兵器

ヴォルトモード卿の城から1キロと離れていない、かつて新興住宅街が広がっていた場所。

道路のアスファルトは、大型妖魔やメースの移動でめくれ上がり、かつては軒を連ねていただろう建て売り住宅達は、土台でようやく間取りがわかる程度まで破壊されている。

その一角に立つのは、グレイファントムだ。

アメリカ軍のメサイア、グレイファントム。

魔族軍の支配地域にその騎が立つ。

アメリカ人が知ったら驚喜するだろうが、事情はそう簡単ではない。

グレイファントムは立っているのではない。

立たされているのだ。

背後を見ればいい。

地面に突き刺された太い柱がそこには見える。

グレイファントムは、その柱に固定され、立たされていることがわかるだろう。

そして、そのグレイファントムから少し離れた場所。

かつての小学校校庭跡に立つのは、漆黒のメース。

その手には巨大な銃が構えられている。

「別所小学校　寄贈　〇〇年卒業生一同」

そう書かれた天幕の中の下、計器類の乗ったテーブル越しにメー

スを見上げるのは魔族達。
その中の一人が通信機に怒鳴った。
「撃てっ！」
メースの構える巨大な銃からグレイファントムめがけて火線が走る。
すさまじい音と共に、グレイファントムの装甲が引きちぎられていく。
「撃ち方やめっ！」
号令が火線を止める。
グレイファントムは正面の装甲のほとんどを撃ち抜かれ、右腕は数本のケーブルでぶら下がっているような有様だ。
その光景に満足したらしい魔族が、力強く頷きながら命じた。
「よし！カヤノ大尉、降りてこい」
グレイファントムが騎体を分解させながら崩れ落ちたのは、その時だった。
「これ、何ですか？」
天幕に入ったカヤノは、自分の騎が持つ不思議な兵器を見上げた。
「人間の言う所の機関銃さ」
「機関銃？」
「ああ。金属の弾を連続して発射する装置のことだ」
魔族は、どこから取り出したのか、カヤノの前にＭ－１６自動小銃を取り出すと、グレイファントムの残骸めがけて引き金を引いた。
連続した射撃音と共に、弾丸が連続してグレイファントムの残骸に命中するのがわかる。
「――な？こっちは人間用で化学反応を用いる。大尉が撃ったのは、魔法反応を利用している」

「はぁ」
カヤノは首を傾げた。
「でも、どうしてこんなモノを？」
「ん？」
「メースの機動力を考えれば、金属弾なんて、避けられるほどトロいじゃないですか」
カヤノの目は、Ｍ－１６から飛んでいった弾丸すべてを個体として認識していた。
「魔族が未だに弓兵隊を配備する理由と同じさ」
魔族は、Ｍ－１６を、それ以上興味ない。といわんばかりに放り捨てた。
「弾幕ってヤツ？」
「ああ――成る程？」
「こいつが持っているのも、要するには魔法弾発射筒の一種さ。サライマが搭載する魔法弾発射筒より破壊力は落ちるが、速射性能が圧倒的に上。それでも貫通力は高いから、デミ・メース相手なら、かなりやれる」
「そう、ですね」
効果は目の前のグレイファントムの残骸が証明してくれた。
これなら乗っているパイロットが気の毒だ。
「業者経由で、魔族軍の装備がかなり入ってくる。中にゃ、こういう人間界の兵器を参考にしたモノも多い。“ヤクト・エッジ”は、武装、装甲共に搭載出来る幅が恐ろしく広い。だから、リスト見て使えると思ったら申請してくれ。回すぜ？」
「感謝します」

飛び道具を研究していたのは、別に魔族軍だけではない。
こちらは人類側、葉月演習場。

ズダダダダッ！
メースの残骸から外した装甲に、連続して機動速射野砲の３５ミリ機関砲弾が命中する。
「――ダメか」
紅葉達はその光景に苦虫をかんだように顔をしかめた。
「なんて装甲よ」
「戦車相手に拳銃撃つようなものですね」
白石もあきれたような声になる。
「こりゃ――凄い」
砲弾の嵐を受けた装甲は、かるく凹んだだけだ。
「主力戦車（ＭＢＴ）の正面装甲顔負けですねぇ」
「そんなヤワなもんじゃないわよ」
紅葉は、目の前の装甲を睨む。
別に紅葉の眼力で動いているのではないが、ワイヤーで吊された装甲が風に揺れた。
「厚さ３ミリよ？たった３ミリでＭＢＴの正面装甲と同等って……魔界の金属って、どういう代物よ」
「成分分析しても、半分が不明。有効口径が２００ミリ徹甲弾じゃねぇ……ビームバズーカはどうなんです？」
「拠点防御用に勢いだけで作ったアレじゃ野戦に回せないでしょ？第一、パワーをどうやって？」
「あの――そこなんですけど」
白石は、ものすごく言いづらそうに言った。
「ようするに、ビームバズーカがあれだけ大きいのは、飛行艦の主砲並の破壊力を確保しようとしたせいですよね？」
「そうよ。実体弾にしたら口径３００ミリ相当よ」
紅葉は顔をしかめた。
「い、いやあの！」
白石は、紅葉の顔を見て青くなった。

「破壊力を落として、メサイア搭載のＭＬ（マジックレーザー）並に落とせばどうかなぁって」
「――――あ・の・ねぇ」
紅葉はポケットからハンマーを取り出すと、柄の握り具合を確かめ始めた。
「パワー、どうやってとるのよ。え？空気からでもとる？それともお日様？風？」
「ま、魔晶石です」
白石は後ずさりながら言った。
「メサイアの場合、余剰エネルギーを回す関係上、下手すると騎体のパワー不足を招きかねない危険性があります。ですが、パワーを騎体エンジン以外の魔晶石にあらかじめ充填すれば、どうでしょうか」
「あ？」
「ほら、ビームバズーカは、大出力の関係上、どうしても飛行艦並のエンジンからのエネルギー供給が必要でしょう？
でも、メサイア搭載のＭＬ（マジックレーザー）クラスなら、かなり小型の魔晶石に充填しておくことが出来ます」
「……仮にＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のエンジン搭載タイプをいじったとして、幻龍改搭載タイプのＭＬ（マジックレーザー）の出力を撃つとする。装弾数は１０発程度よ？何？魔晶石をマガジンにして交換すればいいって発想？」
「そ、そうですけど」
「アホ」
紅葉はハンマーで机をぶん殴った。
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）用でも、魔晶石一個がいくらするかわかってんでしょうね？最充填してリサイクルするにしても、コストがかかりすぎ。それに、私が欲しいのは、速射性能を持つ、メースに有効な兵器」
「赤木中佐が」
白石は覚悟を決めた。
「中佐の実用化したＤクラス魔晶石応用の低コストエネルギー封入

技術を」
「バカっ！」
紅葉は今度こそ白石めがけてハンマーを振り下ろした。
「あんた、あれがどういう目的で作られた代物かわかってんの！？」
「え？」
ハンマーをなんとかかわした白石が、きょとんとした顔で、
「だ、だから――レベルが低すぎてエンジンに使用できないクズ魔晶石にエネルギーを」
「あのババアが、そんな代物、何に使うつもりだったかわかってんのかって、そう聞いたのよ！」
「も、紅葉様？」
「近衛が、あれを意地でも認めない、あの技術発表後、魔晶石関連の開発から赤木のババアが追放されたのはねぇ」
ハンマーを振りかぶった紅葉が言う。
「あの技術が、禁忌だからよ」
「禁忌？――あの」
「足りない脳みそ総動員なさい。時間は三秒」
紅葉は言う。
「いい？そこに封入した魔晶石の魔力を一気に解放すれば、どうなるか。いってごらん？」
「えっと、原子崩壊に近い……」
白石は、自分の言葉で青くなった。
「ようするに……」
「魔力反応爆弾（マジック・リアクター・ボンブ）」
その華奢な腕に持つにはハンマーは重すぎるのか、紅葉はハンマーを降ろした。
「その弾頭そのものの理屈なのよ。
――いい？あのババアがどういうつもりだったかは知らない。
でも、結果としてそれは、国際的に禁忌とされる、あの爆弾の開発となるの。

しかも最悪なことに、あんまりに簡単だから、魔法技術に少しでも長けたテロリストに渡ったらどうなるか……。
近衛がそんな研究してたなんて知れてごらん？
世界中が敵になるわよ？」

「セルフギロチンですからね……」
白石は真顔になった。
「しかし」
「わかってるわよ」
紅葉は言った。
「絶対に爆発させない、安全でクリーンな方法を開発しろっていうんでしょう？」
「え？」
「あんたの考えてることなんて、この私には全てお見通しなんですからね？」
紅葉は少しだけ悪戯っぽく笑った。
「じゃ、白石」
「ははは……さすがです。紅葉様」
「はい」
「倉庫行って１２番コンテナ持ってきて」
「その魔晶石を使ったマガジンの試作版が入ってる」
「も、紅葉様！？」
「うるさいわねえ」
紅葉は煩わしそうに手をパタパタ振った。
「あんたの案なんて、結局は、別な連中が歩兵携帯用のマジック・ブラスターとして実用化してるのよ？もうそろそろ、先行量産型が近衛兵団に配備されるはずだし」
「へ？そうなんですか？」
「他の部署の研究にも目を通せって、何度言ったのよ……」

「すみません。でも、それって？」
「あっちは、魔晶石エンジン作る時に出た魔晶石の破片。５ミリほどだけど……それに魔力封入して、単発の魔法の矢を発射出来る仕組みにしたの。第４課に頼まれて教えてあげた」
「結局、紅葉様が作ったんじゃないですか！」
「うるさいわねえ。ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）搭載用マジック・ブラスターはエンジンから直だけど、単発ならそれで間に合うでしょう？」
「ううっ……何だか僕、バカみたいです」
「みたいじゃなくて、その通りなのよ」
「くっ……」
「ほら、さっさと１２番コンテナ持ってきて。マジック・ブラスターをメサイアサイズにサイズアップしたのが入ってる」
「コストとか……いろいろ言ってたのに」
「赤木のババアの理屈なんて無くても、同じこと以上を考えるヤツはいるのよ？」
紅葉は自分を指さした。
「詳しい理屈は教えてあげないけど、とにかく、攻撃レーザー変換直前の魔力を保持・蓄積することには成功している。
だから、あんたの言いたい所の、ＭＬ（マジックレーザー）のエネルギーマガジンとしては、実用レベルにあることは確か」
「よくそんなものを」
白石はあきれるしかない。
破壊用の魔力を一カ所に封印するなんて、並大抵の技術ではないのだ。
それを目の前の子は、実用化したのだ。
「ま、あんたが気づかせてくれたおかげだけどさ」
「え？」
白石は意味がわからない。

「勢いで作って」
紅葉は心なしか、頬を赤くした。
「何かに使えるだろうって……そのまま忘れてたのよ」
「ははっ……」
白石は思う。
「紅葉様らしいです」
「イヤミ？」
「褒めてます」
「……まあいいわ。急ぎなさい」
「はい」
白石は、一礼の後、倉庫へむかって駆け出そうとして、その腕を紅葉に掴まれた。
「へ？」
驚いて振り返る白石の頬に、何か柔らかくて暖かいものが触れた。
「――――」
間近に見える紅葉の顔。
そして、頬に触れるのは――――
「ま、気づかせてくれたお礼よ？」
紅葉は白石の頬から唇を離した。
「これ以上が欲しかったら、協力してよね？」
「了解です！」

「木曽福島戦線は防衛に成功した」
二宮は告げた。
「敵の一方的撤退によるものだが、その考えられる理由は二つだ。
一つが、魔族側がメースを投入してこないこと。
もう一つが、大型妖魔の投入が極めて限定的なこと。
その理由は共に不明だが、おかげで、我々は新たな戦いに備える

こことが出来る」
「まぁ、敵が次の攻勢に備えていると見る方が正しいでしょうね」
壇上で、二宮の横に立っていた紅葉が言った。
「魔族側兵力不足なんて楽観論は厳に戒めるべきよ？」
その通りだと、美奈代達も思う。
そんなに楽な相手と戦争をしているつもりは、ない。
「……ま、あんた達の場合、そんな記事は検閲で読めないか」
軍では、反戦・反軍的な記事は全て戦意維持の妨げとして削除したものを兵士達に配布するのが普通だ。
下手すれば2、3ページが白紙ということもある。

飛行艦の場合、艦隊司令部経由で、最後には艦長の検閲を受け、軍にとって都合のいい記事だけが壁新聞として兵達に伝えられる。
艦長以下、乗組員が男ばかりの飛行艦ではギャンブル記事とエロ記事が壁一面に公然と貼り付けられ、航海から帰還した乗組員達は、一般的な出来事には疎いが、ウマと風俗にはやたら詳しくなるという。

――話を戻す。

「いい？あなた達が感じていいのは、この状況がまたとない建て直しのチャンスだってことだけ。――さて」
紅葉は、背後に立つメサイアを見上げた。
美奈代達が注目するのは、その手に握られた銃だ。
「制式化されてないから、仮称“ビームライフル”」
紅葉はふと思い出したように、隊員達を睨み付けた。
「……まんまだとか、アニメの見過ぎだとか、思ってんじゃないでしょうね？」
隊員達は無言だ。
「少しは突っ込んでよ……さみしいじゃない」

「中佐」
二宮が言った。
「先をどうぞ」
「何よ……面白くないわねぇ……パワーは近衛標準規格の艦砲と同程度。
エネルギーは新開発の“ＭＳ（マジック・サーバー）パック”からとる。
１つのパックの装弾数は標準弾（ノーマルレベル）で１００発。
パックは破壊されようが切断されようが、とにかく爆発しないから安心して」
「試したんですか？」
「長野教官がやってくれた」
紅葉の言葉に、全員の視線が長野大尉に向かう。
長野はきょとん。としているが……。
「昨日の夜、メサイアに乗って、やってもらったのよ」
そういえば……。
美奈代は、昨晩、夜遅くにメサイアの駆動音を聞いたのを思い出した。
「あ、あの……」
長野は首を傾げながら言った。
「自分は昨晩、メサイアに搭乗した覚えが」
「あれだけ飲んでればねぇ」
紅葉はニヤニヤした、チェシャ猫の様な笑みを浮かべた。
「飲み屋で捕まえて飲ませたけど、二宮中佐と奥さんが聞いたら無事じゃ済まないようなこと、いろいろと喚いていたし」
「中佐ぁっ！」
長野（ちなみに御歳４５、家族構成は両親、妻、子供二人）は青くなって叫ぶ。
「か、勘弁してくださいっ！」
「ププッ……記録はあるからね？」
「あ……悪魔」

「何とでも。――予めはっきり言っておく。このMパック……原理は魔力反応爆弾（マジック・リアクター・ボンブ）に極めて類似、っていうか、ほとんど同一だから」

ザッ！居合わせた全員が一斉に後ろに下がった。

「――何よ」

紅葉が眉をひそめた。

「昔みたく、反応弾からエネルギーとろうってわけじゃないんだからね？」

「あれ、アメリカでやって」

美晴が言った。

「か、核爆発が起きたって聞きましたけど」

「だから最初から壊してみたんだって――私はしっかり逃げたけど」

「と、とにかく」

二宮は何度も深呼吸しながら言った。

「安全なんですね？」

「これから試験射撃をするから、よく見ていて」

“幻龍改（げんりゅうかい）”の特別仕様騎、アリアＳ４は、まっすぐ伸ばした右腕にビームライフル、コクピット前に３重に重ねたシールドを構える。

それがどういう意味か、美奈代達はイヤでもわかる。

「わ、我々は？」

「祈って」

その返答に、皆が一斉に逃げ出した。

キュィィィン――

ビームライフルの銃口に光が集まり、

ギュインッ！

ＭＬ（マジックレーザー）特有の独特な射撃音を残し、光弾が走った。

的になったのは、メースの残骸だ。

「――よっし！」

紅葉は、その光景を見て満足そうに頷いた。

「厚さ２０ミリ撃ち抜いた！――――こら」
近くの車の陰に隠れていた隊員達に、紅葉は冷たく言い放った。
「敵前逃亡を類推適用するわよ？」

「冗談じゃねぇ！」
都築は震える声で言った。
「目の前で魔力反応爆弾爆発されて、ビビるなって方が無茶だ！」
工房の隅にある自販機の前。
都築は震える手で強引に紙コップに残ったコーヒーをあおった。
「あ……あれ、冗談じゃなかったんですよね？」
さっきまで恐怖のあまり泣いていた美晴は、山崎に頭を撫でられてようやく平常心を取り戻しつつあった。

「しかし、よく考えたな」
宗像は仕様書のコピーに何度も目を通しながらしきりに頷く。
「メサイアに内蔵しているＭＬ（マジックレーザー）は、中佐が言う通り、パワーダウンを招く以上、あくまで対人、対装甲車両掃討用で、メサイア戦では緊急用以外の使用は禁止されている……だが、これなら」
「……なぁ」
都築は訊ねた。
「飛行艦はどうして大丈夫なんだ？向こうの方がデカイＭＬ（マジックレーザー）積んでるのに」
「飛行艦は砲撃用の魔晶石エンジンを装備しているんだ」
美奈代が言った。
「推進用・発電用・砲撃用……この３つのシステムを一つにして、艦艇用魔晶石エンジンが作られているし、ここに魔法障壁（バリア）展開用の別システムを組み込む場合もある。
だから、メサイア用と比較して、飛行艦用は圧倒的にデカいんだ。
仕組みに関しては、同じことがＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）にもいえるがな」

「ＴＡＣって……そんなに大きくねえじゃん」
ＴＡＣは、陸軍の兵員輸送用装甲車両を二周りほど大きくした程度のサイズが標準だ。
中に入ったことはあるが都築はそれほど狭いと思わなかった。

「たかが基本重量２０トン程度の代物。そんなにデカイエンジンはいらん。
精霊体が発生する以前のサイズで十分事足りる。
ＭＬ（マジックレーザー）だって、低出力だし。
だが、それだけで、近衛のＴＡＣは５０トンの爆装したまま、戦闘機顔負けの戦闘機動さえ出来るんだ」

「ふぅん？」

「都築……座学の基礎講座で習ったことだぞ？」
美奈代は心底情けないという顔だ。

「よく聞いてたな」

「都築ぃっ！」

「まぁ待て泉」
都築につかみかかった美奈代を全員で引き離し、宗像は諭すように言った。
「どっちにしろ、我々はあのメース相手に有効な兵器を手に入れることが出来たんだ」
「……それはそうだが」
美奈代は両手をあげて“降参”する都築を苛立たしそうに睨む。
「このバカだけは救いようがない」
「調教しておけ。速射砲とこれを使い分けて、戦場に出ろってこと

だ」
「ああ。バカと火器は使いようだ」
「上手いな」
「あっ。みなさん」
どこかおっとりした声が聞こえた。
「こちらでしたか」
祷子だった。

ギュインッ！

本当に一瞬にして、米兵達の頭上を、木々を揺らしながら、青い迷彩塗装を施された、得体の知れない飛行物体が3機編隊でフライパスしていく。

「何だ？」

「ジャップの最新鋭メサイアです」

「そうか――――びっくりさせやがる」

海兵隊のメルグ少尉は、もう一度空を見上げた。

熱帯地方特有の抜けるような青空が広がっている。

視線を戻した地上。

家が燃え、人間だった死骸が転がり、あちこちで散発的に銃声が響く。

「メルグ少尉！」

粗末な小屋の陰から軍曹が顔を出した。

「こっちへ」

少尉が小屋の陰で見たのは、一カ所に集められている男達。地面に座らされ、おびえた目をしていた。

「村人か？」

「ここの村人なら、あっちの穴の中ですよ」

「じゃ、こいつら何だ？」

「中国兵ですよ――――ヤバくなったからって、村人の残した服を着ているんです」

「ヤン、通訳しろ――――まずは所属だ」

「はい」

ヤンと呼ばれた目の細いアジア系の部下が近くにいた男に声をかけた。

少尉には何を言っているのかわからないが、妙に甲高い声のやり

とりが、少尉の神経に触れた。
「陸軍の第８０２歩兵師団だと言っています」
「師団司令部は」
「――自分達に死守命令を出して、後退したそうです」
「後退する先は」
「――聞かされていないといっています」
「村人をどうした」
「――老人は命令で殺した。女は強姦して、男と一緒に奴隷として3日前に後送した」
「……子供は」
「――同じだ。赤ん坊まで全部」
「軍曹」
「はい」
「こいつらに穴を掘らせろ。それから、新兵を集めておけ」
男達と会話していたヤンが突然、男の一人を銃尻で殴り始めた。
男が頭を割られて動かなくなってもなお、ヤンは殴るのをやめようとしない。
「ヤン」
少尉は潰れた頭めがけてそれでもなお、銃尻を叩き付けようとするヤンの肩を掴んだ。
「どうした」
「こいつら、腹立ったんですよ」
死体となった男を蹴りつけたヤンが言った。
「銃剣を何本、赤ん坊に突き刺すことが出来るか賭けていたそうです」
「？」
「何本の銃剣で刺されてそれでも生きているか、商品は、母親の体だったそうです」
「母親の目の前で？」
「そう言っていました」

「軍曹」
「はっ」
「穴を掘らせろ――ヤン」
「自分は、アメリカ人です」
ヤンは言った。
「自分は、こんな国の連中とは違います」
「ああ。そうだ」
少尉は力強く、何度もヤンの肩を叩いた。
「お前は文明国、アメリカの国民だ――俺達の仲間だ」
「はい」

３０分後、穴が掘られた。
穴の縁には蜂の巣になった死体が転がっていた。
「どうした？」
実戦に出たばかりで、満足に戦闘に参加していなかった若い兵士達が少尉の後に続く。
「スコップ貸した途端、襲いかかってきたんですよ」
軍曹が死体の頭を踏みつける。
「無駄に手間をかけさせる」
どういう運命が待っているのか。
男達は青くなっていた。
「ヤン。通訳しろ――穴を埋める位はやってやると」
「はっ」
甲高い声で喚く男達だが、後ろ手に縛られて身動きがとれない。
「ルーキー」
少尉は、後ろに並ぶ兵士達に訊ねた。
「こいつらは何だ？」
「中国人です。サー」
「中国人とは何か？」
「人類の裏切った豚共です。俺の兄貴は、こいつらのせいでマツモ

トで」
「……なら、どうする？」
「殺します」
「よろしい――――構えろ」

「司令部。こちらラグエル１」
青い宝石を敷き詰めたような海。
緑の絨毯のような森。
白い雲。
自然を作り上げた神の御技に感謝したくなる世界を駆けるＦｌｙｒｕｌｅｒ。
その１号騎を駆るのが一葉だ。
「エリア２５の制圧に成功。当該地域に残存するメサイア、戦車は確認できず」
「司令部了解――――そのままエリア２８侵入中のメサイア撃墜にかかってくれ」
エリア２８は基地のあるエリア２１とはほぼ正反対。
「えーっ？」
一葉は、騎体をバンクさせ、妹達を導く。
強い日差しを受け、青迷彩が施された騎体、特にハッチ横にびっちりと書かれたキルマークが輝く。
「仕方ねえだろ？ベトナム方面から８騎、海越えで飛来して来た。エリア２８はＥＵの機械化歩兵部隊しかいねえ」
「ＥＵ軍も、メサイア連れてこいって言ってくださいよ」
「インドだなんだでそんな余裕はねぇんだよ――――ほら。キルマークつける絶好の機会だぜ？」
「了解――――エリア２８、敵メサイアは８、撃墜します」
「司令部了解――――御武運を」

「双葉、光葉！またゴミが血迷ったって」
「エリア２８でしょう？何騎叩き落とされれば気が済むの？」
「昨日だけで３騎だよ？」
Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ編隊が高度を上げる。
「あっちのエライ人、アタマ悪すぎなんだよ」
一葉は言った。
「机の上の数字だけで戦争するからこうなる」
「ははっ。美佐代っちの受け売り？」
「でも、正しいよ？」
「お姉、光葉！レーダーに感！」
ピーッ！
三騎のセンサーを連動させることで、驚異的なまでの索敵能力を誇るＦｌｙ　ｒｕｌｅｒのコクピットに警告音が響く。
Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの索敵から電子戦までをこなす情報システム、ラグエル・システムから逃れることは出来ない。
「ゴミは８、司令部の言ったとおりよ」
「そうだね」
すでにＦＣＳは敵を捕捉、ＭＣ（メサイアコントローラー）がＦｌｙ　ｒｕｌｅｒから突き出している戦艦主砲並の大口径（マジックレーザー）ＭＬ砲のパワー調整してくれる。
後はターゲットをロックオンするだけだ。
トリガーを弄びながら、光葉が優しげに言った。
「……心配しなくていいよ？Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ隊（わたしたち）が、瞬殺してあげる」
ピンッ！
ロックオンの表示と同時に、大口径（マジックレーザー）ＭＬ砲を発射。
「敵３消滅――敵５、左右に展開」
「こっち見つけてる？」
「レーダー波、感知せず」
「双葉、光葉」
「お姉、どうする？」

「いつも通り、早い者勝ちで」
「うん――照準急いで、今度は、この光葉ちゃんが冥土に送ってあげるんだから」
「了解。接近戦になる前に片づけます」
「了解！――っ！」
光葉はＦｌｙ　ｒｕｌｅｒの高度を一気に落とした。
急激なＧとは明らかに別な振動と、陽光とは異なる光がＦｌｙ　ｒｕｌｅｒをかすめる。
「ＭＬ（マジックレーザー）！？」
「敵、寧波級巡航艦１」
「よくやる！」
「ラグエル・システムを上回るほどの索敵を？」
「違います」
ＭＣ（メサイアコントローラー）は言った。
「射撃軸推測攻撃です」
「射撃？」
「単に、こちらからのＭＬ（マジックレーザー）の射撃軸から騎位を割り出し、そこめがけて射撃してきただけです」
「あてずっぽうってこと？」
「そうです。その証拠に、次の攻撃がまだ」
「そっか」
光葉はわかった。
二発目がこないってことは、敵はこっちを完全に見つけていないってことだ。
なら――
「ターゲットをロックオンしたら、すぐに移動するよ？」
「正解です」
「普通のメサイアならともかく、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの機動性なら――やれるっ！」
光葉はコントロールユニットを掴む。

「右から来ます！ロックオン、どうぞ！」
「いけっ！」
トリガーを引くのと同時に、垂直上昇。
2秒の間隔を開いて、発射時の機動をなぞる格好でＭＬ（マジックレーザー）が襲ってくる。
「敵1、大破――――洋上に墜落、反応消滅！」
「次！」
「ロック！」
「撃って――――っ！」
今度は右斜め下への急旋回。
やっぱり、2秒後にＭＬ（マジックレーザー）が飛んできた。
「正確だけど――――」
光葉は無理矢理唾を飲み込んだ。
「遅いっ！」
「双葉、光葉！」
一葉から通信が入ったのは、3騎目をロックオンした時だ。
「何！？」
トリガーを引いて急旋回。
「飛行艦を叩くよ？」
「マジ！？」
「大物だよ！？」
「れっきとした司令部命令。数は3。後ろの輸送艦6もね」
「……スゴ」
光葉は、モードを切り替えつつ、驚きを隠せない。
「歴史に残るんじゃない？私達」
「全騎、対艦攻撃モード切替、バリア全開、最大推力で突入、一撃で仕留める。ＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）に注意して」
「了解――――いける？」

「勿論」
MC（メサイアコントローラー）は答えた。
「艦載エンジンを改装したこの子の心臓なら、空は任せてください」
「地上戦は無理だって言われてるしね」
「この子は、空駆ける天使なんですよ？」
「鳥は空に、獣は地に――」
「詩人なんですね」
「へへっ……じゃ、行きますか」
「はい♪」

光葉達に立ちはだかるのは、メサイア部隊向けの支援物資を満載した輸送艦を護衛する任務にあった寧波級巡航艦3隻。
ロシアから売却された旧式飛行艦を参考に開発された艦。
艦体後方から流線型の支柱が伸び、その下から左右斜め下方にエンジンがつくという、ロシアの独特なデザインが特徴的な艦だ。
背負い式に装備された主砲の連装ＭＬ（マジックレーザー）砲3基が火を噴く。
「ダメです！」
巡航艦の一隻、淮南艦橋にいた士官は、砲術担当士官の悲鳴を聞いた。
「馬鹿者っ！」
艦長が馬上鞭を振りかざし怒鳴る。
「何をやっているか！」
「敵3、接近中！」
索敵担当士官が悲鳴に近い声で報告する。
「ＭＬ（マジックレーザー）反応！」
「何っ！？」
士官が、艦橋の外に視線を向けた時だ。
ズンッ！
鼓膜が破れそうな音と振動、艦橋の中のが彼を炒り豆のように弾

いた。
「な、何がっ!?」
艦橋の床にたたきつけられた彼に青い機械の塊が迫り来る。
噂に聞く、日本軍のメサイアだ。
そう思った彼が最後に見たのは、艦橋へ、自分へ向けて襲いかかる光だった。

至近距離から放たれたＦｌｙ　ｒｕｌｅｒの主砲は一騎あたり３発。
すべてが背負い式に配置された寧波級巡航艦の主砲砲塔の正面装甲をたたき割った。
そして、すれ違い様に展開された、全長３０メートルにまで達する大型光剣――レーザー・バスター・ソード――が、艦橋を完全に切断してのけた。
主砲と艦橋を吹き飛ばされた艦に戦闘能力は残されていなかった。
一瞬の間合いを残し、３隻の巡航艦は炎の球へと変化、進路を海へと向けた。

「無抵抗だけど……戦闘艦艇じゃないけど……」
飛行艦を仕留めた一葉は、輸送艦に襲いかかった。
好きでやることじゃない。
輸送艦なんて沈めても褒められもしない。
無抵抗な輸送艦なんて、仕留めて楽しいわけがない。
「ここで見逃せば、何人死ぬかわかんない。だから」
モニターに輸送艦のブリッジが大きく映し出される。
乗組員の狼狽する姿まで、無慈悲に映し出すモニターに、一葉は囁いた。
「――ごめんね？」

ドンッ！

すれ違い様の一撃は、輸送艦のブリッジではなく、飛行推進システムを正確に撃ち抜いた。
攻撃後、旋回した双葉は、推進力を失って海面に降下していく６隻の輸送艦の姿を確認した。
推進システムを破壊しただけだから、すぐには沈まないだろう。
中身が何かは知らないが、少なくとも乗組員のいくらかは助かる。
双葉はちょっとだけ安堵のため息をついた。
他の二人も殺さずにいてくれた。
それが姉妹としてたとえようもなく嬉しい。

この交戦により、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ3騎で構成される一葉達“ラグエル隊”の攻撃を受け不時着水、漂流を開始した中華帝国軍輸送艦隊は、３時間後に接触した帝国海軍第二水雷戦隊に降伏、その管理下に置かれる。
当初、小銃等による反撃や最悪、自沈を警戒しつつ、水雷戦隊は輸送艦を包囲したが、すぐに異変に気づいた。
飛行システムを破壊され、不時着水しただけで、艦からは煙一つあがっていない。
外から見る限り、沈没の恐れはない。
それなのに、乗組員はこぞってボートに移乗、艦から離れようとしているのだ。
水雷戦隊はボートを一カ所に集め、臨時編成した陸戦隊を輸送艦に送り込む。
そこで彼らが目にしたのは、あまりにもショッキングな代物だった。

再び、南方へ

「砲弾型の反応兵器？」
「そう」
鈴谷艦長室。
コーヒーを飲みかけた手を止めた二宮に、美夜はうんざりした声で新聞を手渡した。
「他にも毒ガスやら化学兵器やらが多数発見されている」

砲弾型の反応兵器。
我々のいうところの核砲弾だ。
射程の短さと、放射能汚染をもたらす禁忌の兵器であること、この二つの欠点を無視する神経があれば、皮肉な意味でかなり使える兵器ではある。

「東南アジアを放射能で汚染するつもりだったの？」
「まさか。あくまで反応弾の破壊力が欲しかっただけ。それで、輸送艦に乗り込んでいたのは中華帝国の特殊戦略軍の部隊――連中もさすがに自爆はしたくなかったそうよ？」
「本気で使うつもりだったの？」
「使うつもりだったから、戦場に運ぼうとした――違う？二宮中佐？」
「……米国下院が中華帝国本土へ向け、予防的措置としての反応弾使用に関する法案を審議中。オーストラリアやニュージーランドがそれに抗議したら、英国がキャンベラに対する使用を検討していることが判明？」
「あっちには東南アジアから逃れてきた架橋がいるからね。連中のカネは大事だもの」
「……混乱する一方ってワケね」

二宮は、天井を仰ぎ見ながらコーヒーに手を伸ばした。

一方、

「あの子達の功績だな」

宗像は新聞を畳むと美奈代に手渡した。

「大戦果だ。三騎で東南アジア戦線における戦線の半分近いスコアを担っていると聞く」

美奈代はお茶の入った紙コップをテーブルに置くと、新聞を受け取った。

「すごいですねぇ」

祷子が感心した声をあげた。

「金鵄章功五級受勲ですって」

「ああ。3人で戦線支えているようなものだ」

祷子の横に座った宗像が、祷子の腰に手を伸ばした。

「我々も頑張らなくてはな」

祷子の長く美しい黒髪に顔を埋める宗像に、祷子が笑いながら言った。

「やだ。美沙さんったらくすぐったい」

「ふふっ……首が弱いんだな」

「おいこら」

周囲からの奇異の視線に耐えかねた美奈代があきれたように言った。

「ここは食堂だ。周りの目を考えろ」

「ムゥ……公開プレイになるところだった」

残念そうに祷子から離れる宗像。

「だから……お前なぁ」

そんな宗像に美奈代はかける言葉が思いつかない。

「そんなことより祷子」

「はい？」

「八八特務隊が解体されるというのは本当か？」

「はい」
祷子は頷いた。
「元々、天皇護衛隊（オールドガーズ）が前線に出る必要がないこともあって、β級次期主力騎“白龍”先行開発騎の実戦運用テストを兼ねた部隊でしたところが」
ピンッ。としなやかな人差し指を天井に向け、もったいぶった口調で話す祷子。
「“白龍”は開発中止、兵力不足で天皇護衛隊（オールドガーズ）もそんな悠長なことを言ってる余裕はなくなった」
宗像が祷子の言葉をつなげた。
補足する言葉がどうしても思いつかない祷子は、そのまま固まった。
「――ちょっと、待て」
美奈代は、それまでの会話にひっかかるものがあった。
「天皇護衛隊（オールドガーズ）に余裕がない？」
「そう……です」
やっと解けた祷子が言った。
「私はそう聞きましたが？」
「陛下護衛を任務とする部隊に余裕が……ない」
ふぅむ。と、しばらく考え込んだ美奈代は、祷子に訊ねた。
「祷子、それは公になっていることか？」
「いいえ？八八特務隊自体、公式記録に残らない部隊ですから」
「……」
「泉さん？」
「我々の騎が完成するのが明日、祷子達の騎が本格的整備を受けている」
「あの？」
首を傾げる祷子の前から美奈代は立ち上がった。
「ちょっと、教官の所に行って来る」

「本当に」
丁度、美夜の部屋から私室へ戻っていた二宮は、美奈代からの質問を聞くなり、深いため息をついた。
「貴様は、情報関係に進むべき人材だな」
「当たっていましたか？」
「他言は無用だ。部隊の誰にも言うな」
「はい」
美奈代は頷いた。
「今の戦況はわかっているな？」
二宮はどこからか持ち込んだテーブルの上に地図を広げた。
軍機の判子の押された書類はともかく、その間に見え隠れする、美少年達の書かれた薄いマンガについては見なかったことにしようと、美奈代はそう決めた。
「現状、東北戦線は膠着状態で戦闘は行われていない。関東戦線、東海戦線共に小競り合いが続いている。
恐ろしいのは、この静けさだ」
二宮の目、指揮官の目をちらと見た美奈代は、信ずべき上官の言葉を耳に地図に視線を落とした。
「これまでの魔族軍の進撃のパターンから考えて、この静かな時間の後には圧倒的な嵐が来ることは間違いない」
「進撃の再開が？というか、何故我々の方が反撃に転じないのですか？」
「余裕がないのだ」
二宮は小さく笑ってみせた。
「前にも言ったろう？資源があまりに足りないのだ」
二宮はちょっとだけ小首を傾げた。
――この先、帝国がどういう動きをとるかわかるな？
美奈代はそれがわかる。
わかるから、答えた。

「侵攻をあえて諦め、防戦に徹することで消耗を抑え、余剰分を東南アジア戦線へ、資源輸送ルート確保のために送る」
「――戦争が終わったら、情報局への紹介状を書いてやる」
二宮は嬉しそうに言った。
「本題に戻るぞ？魔族軍の兵力移動にあわせ、我々も阻止戦を行う。主力は当然、メサイアだ」
二宮の指が日本地図に書かれた各地の防衛戦のラインをなぞる。
「敵兵力がどこに展開するかで戦線が決まる。だから、それがどこかは今のところ、わからない」
「はい」
「時期は未定。ただ、私はかなり早いと見ている――気を抜くな？」
「はい」
「よろしい。部隊の新編成もなったばかりのことだから、気合いを入れ直すには丁度良いだろう」
「ちょっと待ってください」
美奈代は目を丸くした。
「今頃、どうして再編成が？」
「わからんか？βタイプへの乗り換えが行われる以上、我々の部隊も、実験小隊としての任務を終えるのは当然だ」
「新しく、神谷中尉と……瀬音少佐が入るそうですが」
「あいつらには気を付けろ」
席を立った二宮は、壁に作りつけの棚に置かれたコーヒーメーカーからカップにコーヒーを注ぎながら言った。
「あいつらは――危険だ」
「は？」
突然の二宮の言葉。
美奈代にはその意味が分からない。
「天皇護衛隊（オールドガーズ）と内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）……共に政治色が恐ろしく強い部隊だ」
「政治……色？」

「共に国家天下は関係ない。忠義を尽くすは主君のみ……しかも、天皇護衛隊（オールドガーズ）はともかく、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）は陛下ではなく、麗菜殿下に個人的忠誠を誓った立場だ」
「それが――我々の部隊へ？」
美奈代は首を傾げた。
「二宮中佐が人員を手配したのでは？」
「馬鹿をいうな」
二宮はコーヒーを手渡しながら言った。
「私ならあの二つの部隊からの配属を受け付けるはずがない」
「……」
コーヒーの香りを嗅ぎながら、美奈代の脳裏に浮かんだのは、新型メサイアと後藤の姿だ。
「二つ――要因がありそうですね」
「……何だ？」
「新型メサイアの情報収集……可能な限りの実戦でのデータ収集――違う」
美奈代は、目をつむると首を横に振った。
そして、しばらく考えた後――
「……Ｄ－ＳＥＥＤ」
美奈代は目を開いた。
「Ｄ－ＳＥＥＤの実戦データを内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）が欲しがっている？」
「……理由は？」
「それこそ政治？天皇護衛隊（オールドガーズ）指揮下の――」
美奈代は自分の出した結論に驚いた。
「麗菜殿下が、天皇陛下直卒部隊の開発騎を欲しがっている？」
「おしい。外れだ」
二宮は残念そうに首を横に振った。
「お前がもし、天皇護衛隊（オールドガーズ）か、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）のどちらかに在籍したら違った答えが出たろう」
「では？」

「――残念だが、これ以上は言えない」
二宮は缶の中に入っていたチョコレートを美奈代に勧めながら、思い出したように訊ねた。
「それで？もう一つは？」
「後藤中佐です」
「後藤中佐？」
「はい――その」
美奈代は言いづらそうな顔で、チョコレートを受け取った。
「先程の言い分と矛盾するんですが」
「――言ってみろ」
「後藤中佐と、その背後にある存在に、天皇護衛隊（オールドガーズ）と内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）が共に危機感を抱いた――二人はその対策として送り込まれてきた」
「……」
二宮は突然、黙ったまま美奈代をじっと見つめたままになった。
――言い過ぎた。
美奈代は少し焦りながら詫びた。
「す、すみません。思い上がったことを」
「――泉」
「は、はい？」
「とりあえず、聞いておきたい」
「はい」
「貴様こそ――ヘンな背後関係はないんだな？」
「は？」
「入営時点で両親は死亡、幼少時から近衛軍保護施設で育ったお前だ。どこかでヘンな機関と接点を持ったりしてないだろうな」
「――へ？」
美奈代は、二宮が言いたいことが分からない。

「き、教官？」
「……泉」
「はい」
「覚えておけ。軍隊や組織で長生きするためには、不要な才能がある」
「……」
「余計な詮索で真実を掴んでしまう――そんな才能はその最右翼だ」
「……教官？」
「忘れろ。その欠点をフォロー出来るのは、忘却だ」
「――はい」
美奈代は立ち上がった敬礼した。
「泉は、只今の発言、全てを忘れます」
「よし」
二宮は笑っていった。
「ただでさえ、あのカスが仲間になるだけで頭が痛いんだから、余計な心配させないでくれ」
コーヒーが苦いのか、それとも別な何かか、二宮は顔をしかめた。
「か……カス？」
「……オンナ好きでセクハラばっかりで、少し甘い顔をしたらすぐに彼氏面して、人にあんなことしておきながら、さっさと他のオンナに乗り換えて」
「ち……ちょっと、教官？」
「あの……最低男が……」
「教官」
美奈代が驚いて、ブツブツ言いだした二宮の顔をのぞき込んだ。
自分の世界に入り込んでいた二宮は、突然、アップで視界に入ってきた教え子の顔に飛び上がって驚いた。
「なぁっ！？」
「きゃっ！？」

「い、泉。いつからそこに!?」
「最初っからです!」
「そ――そうか。……ああ、そうだったな」
「あの」
美奈代は思いきって訊ねた。
「その、祷子と一緒に来る人って」
上官に訊ねるべきことではないかもしれない。
だが、女としての美奈代は訊ねずにいられなかった。
「そんなに問題のある人なんですか?」
「風間に聞け」
「風間の人物評価なんて信じられません」
美奈代は言い切った。
「あいつはどこか常識のベクトルが人と正反対、下手するとあさってどころか、別次元を向いていますから」
「そこまでいうか?」
「1年近く一緒にいたんです。それくらいはわかります」
「……ふむ」
「一体、どういう育ち方すればああなるのか、自分にはよくわかりませんが」
「葉月市内の」
二宮はコーヒーを飲みながら言った。
「神社の娘だそうだ」
「ああ。風間、ここが地元だったんですか」
「そうだが?」
「それにしても教官」
「何だ?」
「風間のこと、何故?」
「――気にならないか?」
「は?」
“アレ”が、最初からβタイプのパイロットとして採用されたん

だぞ？」
教官もかなり口が悪いな。
美奈代はそう思いつつ言った。
「それで、教官は……その」
「個人的にな――個人として調べた。気になるからな」
「で？どうだったんです？満足しました？」
「気になることばかりだ」
「――は？」
「風間は個人データの全てを開発局に管理されている。教官の権限による照会には一切応じてもらえなかった」
「何かが裏に？」
「そう思うだろう？だから、個人で興信所まで雇った。あいつの出自から何かがわかるだろうと思ってな」
「結果は？」
「わからないことだらけだ」
二宮はそういって肩をすくめた。
「ただ――」
「ただ？」
「……泉は聞いたことないか？騎士以上にメサイア乗りとして適した存在について」
「騎士……以上？」
「ああ」

あり得ない。
騎士の運動能力。
反射能力。
あらゆる条件からして、メサイアのパイロットとして、騎士を越える存在なんて考えられない。

「そんな存在が」

「いるんだ」
二宮は言った。
「生まれながらにして、騎士以上、いや。騎士を支配すべき存在が」
「……は？」
美奈代は目を見張った。
「な……なんですか？そのバケモノみたいな存在は」
「――――まぁ、公にはほとんど出ない情報だからな」
二宮はチラと時計を見た。
「私が話せる内容はここまでだ。泉、就寝の時間だぞ？」
「いつか」
美奈代は言った。
「話してくださいますね？その続きを」
「ああ――――戦争が終わって、生き延びていたらな」
「約束です」
「うむ。明日はついに集団戦だ。ゆっくり休んでおけ？」
「はい――――失礼いたしました」
美奈代は敬礼の後、部屋を辞した。

アーコットの恨み

●長野県小県郡日村跡　魔族軍幕営

「呼び出しに全く応じようとしないとは」

ガムロは静かに、しかし怒りをこめた声で目の前の男に言った。

「ずいぶんと、我々を軽く見てくれたものだな」

「そう言わないでください」

男は笑って言った。

ユギオだ。

「これでもいろいろ調べていたんですから」

「――ほう？」

ガムロは、その顔を胡散臭いといわんばかりに訊ねた。

「なら、今度はどこだ？」

「意外なオチがつきましたよ」

男は肩をすくめた。

「イツミから、何かわからないか調べていたんです。――あ、時間がかかったのは、そのせいですからね？」

「それで？」

「徹底的に調べた結果、こういうことがわかりました」

「……」

「封印の式典の際、ヴォルトモード卿は門（ゲート）の中に入ったように周囲には見える。ところが、実際には、門（ゲート）入り口にしかけられていた空間転移魔法で、全く別の場所に転送され、そこで封印されていたのです。

ヴォルトモード卿は、あなた方同様、門（ゲート）に封印されたという考えが、そもそも間違いだったのです」

「……」

「おかげで我々は……いや、肝心の神族でさえ、倉木門（ゲート）にヴォルトモード卿が封じられたと思っている。というか、イツミによって思

いこまされた故に、倉木が外れとなれば、倉木とリンクしている門（ゲート）が怪しいとなる」
「その結果として」
ガムロは言った。
「柏崎では、開放した途端にブービートラップが作動。投入戦力全てを喪失した」
「あれには参りました」
男は頭を掻いた。
「門（ゲート）同士のリンクは間違いなかったんです。まさか門（ゲート）を必要としない空間転移魔法を使用しているとは予想していませんでした」
「……で？」
「かつてのイツミの副官をちょっとイジってみました」
イジってみる。
その言葉の意味をたずねなかった。
「そっちのほうが速かったです。東南アジアにイツミが勝手に作っていた封印用プールがあることが判明しました」
「東南アジア？」
「正確にはスマトラ島の山中。門（ゲート）封印解除のための部隊が開放作業を実施中」
「今度しくじれば」
「――わかっていますとも」
薄ら笑いを浮かべる男を前に、ガムロは東南アジアに実験部隊を派遣していることを思いだしていた。

●“鈴谷（すずや）”整備ハンガー
「困りますっ！」
「少しくらいいいじゃないか。減るモンじゃなし」

ハンガーに入った美奈代は、そんなやりとりを聞いた。
声のした方角は、Ｄ－ＳＥＥＤのコクピット辺りだ。
背の高い若い士官がコクピットをのぞき込んで、整備兵に止められていた。
Ｄ－ＳＥＥＤの隣に立つ自騎ではなく、そんな二人めがけて何故、床を蹴ったのか、美奈代にも説明が出来ない。
「新型だろ？興味あるんだよ」
「機密騎なんですよ！」
「尚更興味あるねぇ――――パワースペックどれくらい？」
「ですからぁ」
整備兵は、坂城班長の一番弟子を自称するシゲさんだ。
相手は知らない。
映画俳優のような甘いマスクと、細い割に鍛えられた体つき。
軽妙な喋り方。
すべてが、異性を引きつける目に見えないフェロモンを放つ蝶のようだ。
それが、女としての美奈代を捉えていること自体、美奈代は気づいていない。
「βクラスだろ？おや？操縦、ＳＴＲじゃねぇな……何？このシステム」
「部外秘ですっ！」
「頭部保護のヘッドギア……違うな……何だ？これ」
「ああもうっ！この騎、常時監視対象なんですよ！？後で艦長に何て説明するつもりなんですか！？少佐！」
「え？決まってるだろう？」
“少佐”と呼ばれた士官は、振り向き様、不敵に笑った。
「――――平野艦長！艦長の気を引きたくてわざとやったことです！」
「二宮中佐、この艦にいるんですよ！」
「うわぁ……じゃあ、訂正だ。二人の気を引きたくてわざとやったことです」

「……最低」
つい、ポツリと出た言葉だが、
「ん？おやお嬢ちゃん」
二人の耳には届いてしまったらしい。
士官は、親しげな口調で声をかけてくる。
「“これ”、君の騎？」
「いえ……となりの騎です」
「ああ……泉少尉だったね」
「泉准尉です――よくご存じですね」
「そりゃもう」
士官は胸を張って言った。
「一度出会った女の顔と前は絶対に忘れないさ――例え、部隊名簿でもね」
「……」
「あ、忘れてた。俺、瀬音少佐。君たちの部隊配属だから、よろしくね」
ポイッ。
瀬音が美奈代に何かを放り投げた。
「これ、コクピットに忘れていったこと、真理には黙っていてあげるよ」
教本だった。

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム
「“白雷（はくらい）”受領を受けて」
後藤が壇上で言った。
「我々は本日２１００時、鈴谷に移乗。同２２３０時、鈴谷は葉月を離れる」
「作戦ですか？」

美奈代の質問に、後藤は頷いた。
「そう――今度はちょっと、国外だけどね」
ざわっ。
美奈代達に動揺が広がった。
「我々は第一中隊の一部として派遣される。派遣期間は1週間」
「そんなに短く？」
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒで編成されるラグエル隊の消耗が激しく、国内に戻ってD整備が必要だ。その間の穴埋め」
「それで我々が？」
美奈代は納得できない。
「我々はβタイプを」
「だからさ」
後藤は身を乗り出して言った。
「だから、やるんだ」
「？」
「これは極秘。口外しちゃダメだよ？」
「……」
「数日前、東南アジア戦線のアメリカ軍メサイア部隊が2個小隊、全滅した。
相手はどうも、中華帝国の“赤兎（せきと）”じゃない。それどころか、中華帝国軍の情報だと、“赤兎（せきと）”もかなりの数、やられているんだわ。
戦場に、どうも厄介なヤツが混じってるらしくてね」
「？」
「奇跡的に撤退に成功したメサイアが収拾したデータ。これがさ？
魔族軍のメースにそっくりなんだわ」
「なっ！？」
皆が驚く顔を見た後藤は、満足そうに口元を歪めた。
「これでわかったろう？俺達がどうして派遣されるか」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「長野から？」

鈴谷艦長平野美夜中佐がその報告を聞いたのは、南大東島付近にさしかかった頃のことだ。

「はい」

副長の高野少佐が報告書を片手に頷く。

「飛行艦艇1、朝鮮半島経由で中華帝国領内を移動中」

「正確な位置はわかるか？」

「不明です。ただ、日本海上空で確認された際のデータを元にすると、現在は杭州付近を航行中と」

「中華帝国の艦艇か？」

「足が速すぎます。寧波級ならまだ山東あたりです」

「魔族か」

「司令部（うえ）はそう見ています。先週、同様のルートをたどった艦が1隻存在するそうですし」

「……ふむ？」

艦長席に座る美夜は顎に手をやって考えた。

「中華帝国と本格的に魔族が提携した？……馬鹿な。それにしては規模が少なすぎる」

気になるのはその数。

たった一隻。

そこだ。

「予測コースは？」

「先週のコースでは、このままベトナム上空を通過、インドネシア方面へ」

「そうか」

美夜は艦長席に座り直した。

「情報を得るには距離がありすぎる。司令部は監視しろとは言ってないんだろう？」

「さすがにこの艦でそこまでは要求しないでしょう」

「ふん……鵜来（うくる）級輸送艦改造艦だからな」

鵜来級は、メサイア輸送・整備を目的として建造された純粋な輸送艦だ。

エンジンを増設するなどの改装を受けまくった経歴だけに全長は３５０メートルと、飛行艦艇としては大型の部類に入るが、その内実はかなりさみしい。

整備用設備は、建造当時はかなり充実してはいた。

これは確かだ。

だが、それ以外については、その設備の老朽化同様、問題だらけ。

カタパルトやＭＬ（マジックレーザー）を含む対空武装、すべてが他の艦やメサイアから降ろされたあり合わせなのだ。

対艦戦なんて出来る代物ではない。

戦域を単艦で行動すること自体が想定されておらず、索敵能力も限られている。

とてもではないが、偵察艦たる最上のような能力はない。

戦闘艦としてはないないづくしの存在でしかない。

従来なら、そう言えば大目に見てもらえたろう。

だが、今は違う。

“鈴谷（すずや）”

全長４６０メートル。

基準排水量６万トン

機関　大型艦艇用魔晶石４連エンジンシステム×２

予備エンジンシステム×１

武装　２８０ミリ相当ＭＬ（マジックレーザー）三連装砲×４

１５５ミリ相当ＭＬ（マジックレーザー）連装砲×４

２０ミリ相当ＭＬ（マジックレーザー）砲×１２

４０ミリ対空連装実弾砲×２０
搭載　メサイア１２（内、ベルゲ２）
ＴＡＣ４（タクティカル・エア・カーゴ）

……

……

はっきり言う。

この時点で、“鈴谷（すずや）”の火力は巡航艦のそれを遙かに越え、戦艦のレベルに達していた。

装甲以外でこの艦を越えられるのは、近衛飛行艦隊旗艦“信濃”だけだ。

では、どうしてそんなことが可能になったか？

理由は――――美夜だ。

彼女が、美奈代達用の備品として回されていた武装を、すべて書類上、部隊母艦たる“鈴谷（すずや）”にて管理しているとして、実際に“鈴谷（すずや）”そのものに据え付けてしまったのだ。

他にも美夜のやったことは、艦長の権限からすれば、実はほぼ全てが合法か黙認可能すれすれの範囲というか――――普通なら左遷は当然という代物だ。

例えば、対空ＭＬ砲（マジックレーザー）、センサー類は、すべて白州防衛線で大破した３３１部隊のメサイアに組み込まれていたものだし、２８０ミリ相当ＭＬ砲（マジックレーザー）も、白州で日の目を見なかったあの砲に他ならない。

美夜はそれを全て再生可能にもかかわらず、“艦長判断”で廃棄や在庫として処分とした。

……そう。

ちょろまかしたのだ。
それを、整備部隊が改造して砲台化した挙げ句、開発センターから試験用に提供されたとして、増設エンジンまで取り付けた結果として、今の“鈴谷（すずや）”がある。

増設エンジンについては、紅葉が絡んでいるらしいが、そのことを追求されると、紅葉は泣いて嫌がり、ヒステリー状態に陥るというから、美夜がどういう手段をとったかは聞く必要もないだろう。

……どちらにせよ、２８センチ砲と１５５ミリ砲をここまで搭載したのだから、代償は無論ある。

それまで使用されていた飛行甲板はすべて砲を配置した関係で廃止。
建造当時、強襲揚陸艦としての活躍も視野に入れて建造された“鈴谷（すずや）”自身がもっていたハンガーデッキの予備カタパルトをもって穴埋めした。
廃品リサイクルにすぎないというのが美夜の言い分だが、ドックを出た途端、最前線送り、しかも再び単艦というのは、少し複雑なモノを感じてしまう。
「どうなさいますか？」
副長の問いかけの意味はわかる。
やろうと思えばやれないことない。
それを知っている美夜は、鼻で笑った後、副長である高野少佐に命じた。
「向こうから攻撃してでもこない限り、無視しておけ。インドネシアを出た“利根”とのランデブーまであと何時間だ？」

●魔族軍巡航艦「エルキーザ」艦橋

「おう」
魔族側戦闘艦「エルギーサ」の艦橋に立つムー艦長が、艦橋にあがってきたアーコットに気づいた。
「サライマの整備は順調です」
アーコットがムーのすぐ横に立ってそう報告する。
「お前の体は？」
「問題ありません――あの失態のツケは必ず」
「……そうか」
「それにしても」
アーコットは艦橋から見える夜景に目を向けた。
人間達が産み出す地上の星達。
その美しさはアーコットにとって心地よい物では決してない。
夜は闇こそが似合う。
光は空にあればよい。
それがアーコットの考えだ。
「……人間界の市街地上空、よく平然と通過できますね」
「ふん。外交努力ってヤツさ」
「外交？」
「ああ。所詮、人間だ。金の輝きに弱い」
「成る程？――それで」
「エッジ隊の仕上がりは順調だ。残されたヤクト・エッジの追加武装の性能調査が終われば、エッジ隊があそこに残る意味はない」
「その後、連中は？」
「寒冷地か砂漠にでもデミ・メースが展開すればそっちに行くだろうが、そんなことはそうそうないからな」
「かなりの戦果をあげたと聞きましたが？」
「あそこは今、デミ・メースがかなり展開している。「チャイナ・タイプ」と呼んでいる出来損ないのデミ・メースが中心だが」
「チャイナ？」
「今、俺達が通過している国のことさ」

ムーは艦橋の床をコツコツと足の裏で軽く叩いた。
「つまり、我々に味方している？」
「そうだ。そのおかげで、この国は世界中から敵扱いされている」
「当然ですね」
アーコットはそう思う。
もし、魔界が天界に攻め込まれた時、いかなる理由があっても、天界に味方する部族があれば容赦するつもりはない。
そういうことだ。
「裏切り者は死ぬべきです」

「ま……その裏切りのおかげで、今、俺達はこうしてのうのうと飛んでいるわけだ」
ムーが口元を歪めてそう言った。
「……ヤクトエッジ、戦果は、かなりあったんですよね？」
「ん？」
ムーはアーコットの表情が硬いことに気づいた。
「カヤノの件か？」
「はい」
「そりゃ、あのカヤノがあれほどの使い手だなんて、誰も想像しなかったさ」
ムーはちらとアーコットを見た。
「お前もだろ？」
「……はい」
アーコットは素直にそれを認めた。
全滅した部隊の生き残り。
射撃能力は高い。
その程度の存在。
足手まといにならない程度の存在。
それが、アーコットの見るカヤノだ。
しかし、あの戦いで死にかけた自分を助けたのがカヤノだと、そ

う知らされた以来、アーコットの内心は複雑なままだ。
命の恩人にして、最新鋭騎を預かったカヤノ。
戦線に立つたびにスコアは確実に増え続け、その名声は高まる一方だ。
対する自分は、部隊を壊滅させ、病床に横たわってカヤノの活躍を聞くだけだった。
納得できることではない。

「焦るなよ？」
アーコットよりかなり年上のムーは、諭すように言った。
「焦ったってどうしようない」
「わかっています」
「フン。本当か？」
アーコットが抗議しようと口を開いた途端、ムーは言った。
「ヤクト・エッジは順調な仕上がりだそうだ。親衛軍開発部も別便ですでに現地入りしている」
「人間界で魔界の最新鋭騎のテストなんてそうそう出来ないですからね」
「そういうことだ」
「現地到着は？」
「明日の夜明けと同時。海岸線お前等を送り出した後は海中に潜んで、夜陰に紛れて撤退する」
「ふふっ。闇と水に紛れての移動……ご苦労様です」
「ハァ……まったくだよ」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム
「はい。おさらいね」
出撃を前に後藤は言った。

「現在、インドネシア方面は、帝国の属する連合軍と、中華帝国に属する枢軸軍が入り乱れている」
後藤は、背後の黒板に張られた地図を指示棒で突いた。
「先に行われた南シナ海海戦に勝利、上陸に成功した連合軍は、艦艇が帝国が。メサイア他、陸上兵力は米国が主体。
とどのつまり、ここは帝国海軍の縄張りだ。
連中の目的は総合的に見れば、インドネシア領内に侵攻した枢軸軍の駆除。究極にはマラッカ海峡を確保し、東西の海洋交通網を復活させることにある」
後藤は部下を見回した後に言った。
「ご存じの通り、マラッカ一帯はすでに敵の攻撃でクレーターだらけの焼け野原だ。軍事的空白が生じた後、米中両軍が支配権巡って激戦を繰り広げている。
中華帝国としては、後方攪乱とスマトラ方面での資源確保のため、兵力を送り込んでいるわけだ。
一般向け最新情報としては4日前、韓国軍が枢軸側として参戦（エントリー）。
まぁ、こいつらはどうでもいいとして、問題は、どっちに属しているかわからない第三者の存在が確認されたことだ。
3日程前、中華対米の小競り合いに介入、米軍は8騎のグレイファントムを喪失した。
中華帝国側の被害は不明だが、傍受した通信内容等から鑑みて、その倍以上と見ていいだろう。それだけの戦闘能力を考え、帝国はこの第三勢力を魔族軍と断定したというわけ」
無言で自分に視線を送る部下達を前に、後藤は頭をかいた。
「いや。何だね……魔族ってのはよくやるもんさ」
「後藤隊長」
二宮が訊ねた。
「我々の作戦は」
「ああ――そうだね」
後藤は指示棒で肩を軽く叩いた

「正直、敵に出てきてもらうしかない」
「え？」
皆が後藤の言葉に驚いた。
「どこにいるかわかんないんだもん」
そりゃそうだ。
皆がそう思ったのは確かだ。
「だけど……奴さん達がどうやって米中のメサイア達の交戦を知ったのか。俺はそれが知りたい」
「……」
「米中が小競り合いを演じる中に割り込んで両方とも喰っちまったんだぜ？まるで狙い澄ましたように」
「つまり」
ブリーフィングルームの端に座っていた瀬音少佐が手を挙げた。
「敵はこっち、人類側の動きを知っていると？」
「そう」
「どうやって？」
「さて……やってかねぇ」
「……後藤隊長」
あまりに他人事のような後藤の言葉に、瀬音は言葉を詰まらせた。
「瀬音少佐、あんたならどうする？」
「俺？」
瀬音が驚いて自分を指さした。
「そう。あんたが魔族の立場なら、敵がどこにいて、何をするか、どうやって知る？」
「うーむ」
瀬音は腕組みをして、しばらく顔をしかめた後に言った。
「まぁ……敵の無線傍受して、敵の居場所突き止めて……襲う」
「そうだろう？」
後藤はニマッとしたまるでチェシャ猫のような笑みを浮かべた。
「警察時代によくやった手だ。抗争起こしそうな敵対するセクト同

士は、まず監視して、通信傍受して、抗争現場を包囲、一網打尽にする」
「魔族は人間の通信を傍受していたと？」
二宮が信じられないという顔で言った。
「しかし」
「狩野粒子影響下でも、魔法系の無線通信は可能さ」
後藤は二宮に言った。
「でなきゃ、俺達だって無線じゃ通信出来ない」
「後藤隊長」
神谷中尉が手を挙げた。
「偽情報を流し、敵を誘い出し、殲滅する手ですか？」
「近い！」
まるで講談師のように、どこから取り出したのか、扇子で壇を叩いた。
「近いけど違う」
「は？」
「さすがにそれじゃ、敵だって警戒するさ」
「では、どうやって？」
「誰かわかる？」
「昨日の米軍の立場に、我々が立つ」
椅子に座ったまま、腕組みした宗像が答えた。
「昨晩の友軍全滅が、まさか魔族の介入によるものだとは考えすらしていない。米軍と同じに動けば、魔族側はのこのこ出てくるはず――そういうことですか？」
「はい正解」
後藤は頷いた。
「しかし！」
長野が目をむいた。
「米軍と同じということは」
「――ま、多少の犠牲になってもらおうよ」

後藤は意地の悪い顔で言った。
「どっちにしろ、敵には変わりないんだし。魔族が出てこなくても戦果にはなるわな」
「……」
「こっちの居場所、バンバン無線で流して、君らに派手に移動してもらって、それで敵がのってくれれば御の字だ。あらら」
後藤は腕時計を見るなり、
「時間がかかりすぎたな――作戦を告げる」
その顔は、威圧感すら感じさせる何か、強い意志が込められている。
皆が黙って後藤の声に耳を傾けた。
「本日１５００、八八独立駆逐小隊は、インドネシア領内、中華帝国軍陣地を攻撃する。
目的は、魔族軍メース部隊の誘出及びその殲滅ある――各員の努力に期待する。以上」
後藤の敬礼に、全員が席を立って答礼した。

その日の正午。
鈴谷から発進した八八独立駆逐小隊は、熱帯特有のジャングルの中へと降下した。
「気を抜くな」二宮からの警告が届く。
「気象条件、その他全てが帝国とは違う。各ＭＣ（メサイアコントローラー）は、緯度経度の修正、気圧変化に注意しろ」
「了解」
見上げた上空では鈴谷が離れていく。
対艦ミサイル用の最低限度の対空火器しか搭載していない彼女が、この空域にとどまるのがどれほど危険かは、誰の目にも明らかだ。
帝国軍が確保している空域まで後退すると、美奈代達は聞かされ

ていた。
「さて」
メサイアと共に降りた戦闘指揮（タクティカル・エア・カーゴ）ＴＡＣから通信が入る。
通信権限は、美奈代の駆る“白雷（はくらい）”が今、受信できる通信の中で最も高い。
声の主は後藤だ。
「これからは一方通行だ――生き残りたかったら戦って勝つことだ」
そうだ。
勝たなければ全てが終わる。
勝たなければならない。
美奈代は無意識にコントロールユニットを掴む手に力を込めた。
その美奈代達に後藤は言った。
「ま――気楽に行こうよ。力みすぎると、逆に失敗すること多いし」
この人は。
美奈代はコントロールユニットから手を離し、たまった力を抜くように軽く動かす。
その顔はほころんでいた。
まるで、今の私達のことがすべてわかっているようだ。
美奈代は、後藤という男に素直すぎるほどの敬意を持った。
「じゃ、これからの作戦ね。現在、１３２２時。１３２５時をもって移動開始。１４００時にはここから７０キロ先の中華帝国軍陣地を攻撃する」
「了解」
「で、気づいているのは誰？」
「えっ？」
美奈代は後藤の声にきょとんとなった。
「あのねぇ……」
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中で、後藤が額に手を当てた。

「君たち、物見遊山にわざわざここまでメサイア乗って来たの？」
「……」
「否定しなさいよ」
「いえ！」
美奈代は怒鳴った。
「我々は戦争に！」
「でしょう？」
「あの、後藤隊長？」
そう言ったのは祷子だ。
「センサーに反応のある、８時と２時から接近中の部隊のことですか？」
「そう」
美奈代はあわてて戦況モニターを見た。
美奈代はコンソールを操作して、部隊内データリンクを開いた。
センサー範囲が格段に広がり、それまで見えなかった反応が見えた。
後方、８時方向に集中する反応と、２時方向から接近する反応。
８時方向からの反応は米軍だ。
対する２時方向からは、メサイアと飛行艦の反応。その背後にもメサイアの反応がある。
「米軍に対し、ＭＬ（マジックレーザー）攻撃！」
「魔族軍か！？」
「反応分析中――――終了！」
美奈代は次の言葉の意味がわからなかった。
だから、聞き返した。
「……えっ？」
「ですから！」
牧野は怒鳴った。
「ＯＴＵメラ社製の艦載ＭＬ（マジックレーザー）砲です！」

ＯＴＵメラ社はイタリアの軍需メーカー。
米軍や大日本帝国等の国々で標準となる艦船搭載型兵器の大手だ。
ロシア帝国から武器供与を受ける立場の中華帝国には当然、このメーカー製は配備されていない。
つまり、中華帝国軍の攻撃ではない。

「友軍誤射？」
「違います――米軍、戦闘開始」
美奈代の目の前。
戦況スクリーンに映し出される米軍が戦闘陣形をとり、何かと戦闘を開始した。
「相手側騎種判別終了――ロンゴミアントです」
「英軍が」
「違います。エンジン反応はオーストラリア軍ロンゴミアントＲＡですが、フレームの反応が違います。“中国軍の赤兎（せきと）”に酷似」
牧野の言葉には自信が欠けていた。
「中国軍ですか？」
「エンジンだけなら、オーストラリア軍ですけど……？」

「馬鹿なっ！」
迫り来るロンゴミアントの脳天を斧でたたき割ったグレイファントムのコクピットで悲鳴に近い叫びをあげたのは、ステラだった。
「何で！？」
その問いかけに誰も答えてくれない。
あるのは、自分達に襲いかかる、かつての友軍メサイアの姿だけだ。
「畜生！」
右翼に立つマイクが怒鳴る。

「俺はオーストラリアに2年間派遣されたことあるんだぞ！？」
「オージー共、完全に俺達を裏切ったのか！？」

「司令部よりグレイファントム部隊各騎」
突然のオーストラリア軍からの襲撃に、司令部も狼狽しきった声で指令を飛ばしてきた。
「先程、オーストラリア及びニュージーランドが中華帝国支援のため、軍事行動に移ったと宣言した」
「宣言と同時に、よりによって私達に！？」
膝を曲げ、体勢を低くしたステラは、ロンゴミアントの胴めがけて斧の一撃を喰らわした。
斧が深々とロンゴミアントの胴に喰いこみ、ロンゴミアントがくの字に折れ曲がって吹き飛んだ。

司令部はさらに指令を出す。
「現在、飛行戦艦部隊がオージーの戦艦相手に交戦中！歩兵部隊の収容が遅れている！歩兵部隊を守れ！白人の恥さらし共から歩兵部隊を守るんだ！」

「馬鹿野郎っ！」
大声で怒鳴ったのは、ステラの左翼で戦うアスコットだ。
「俺は黒人だ！白人のもめ事で戦えるか！」
「じゃあ、何で戦ってんだ！？」
アスコットとペアを組む同じく黒人のグレッグからの問いかけに、アスコットは答えた。
「向こうが襲ってくるからだ！」

恨み辛みは晴らすために

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が何とかロンゴミアント達から逃れようと急加速で逃げ出していく。

ステラ達は、そのＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）をかばうようにロンゴミアントの前に立ちはだかる。

「歩兵部隊保護を最優先」ステラは部下に命じたが、

「やっている！」

部下から怒鳴られた。

そんな部下の一人、やけくそ気味に叫ぶマイクがロンゴミアント３騎を相手に渡り合っている。

――――オーストラリア軍も気の毒に。

ステラはターゲットを絞りながら、ふとそう思った。

元から軽量メサイアとして設計されたロンゴミアント。

対するは、重装甲重武装のグレイファントムＭ６４。

相手にするのは、騎体性能だけ考えれば、かなり荷が重い。

さらに、メサイア同士の戦闘で最もモノを言う騎士の戦闘経験。

その点でも、自分達は、世界中に派遣された実戦経験がある。

つまり――――オージーに同情すべきだろう。

だが、ここは戦場だ。

敵にかける情けはダイヤモンドより貴重、というより存在しない。

「各騎！情けは無用だ！人類の敵を殺せっ！」

「応っ！」

「白人から人類か――――格が上がったなオージー！」

オーストラリアやニュージーランド。

太平洋とインド洋方面双方への進出を目指す中華帝国は、親中華

国の確保を外交手段の最優先課題としていた。
その矛先に立たされたのが両国だ。

中華帝国のやり口はある意味で合法的。両国間の結びつきを固くしようというタテマエの元、大量の資本と移民を両国に投入する。
目的は、両国の資源の搾取と人的な浸透。
両国はその背景にあるものを全く理解することなく、両手放しで歓迎した。
中華帝国の政府、そして企業から送られる金、中華帝国から来る人々のもたらす金。
金金金……。

それこそが大事。そんな状況が数十年。

両国はいつしか、中国人に対する警戒心というか、大切な常識のようなものを、完全に失っていった。
気がつけば、大英帝国の要が、最も有効な言語は中国語と言い切って良い状況。
経済は中華帝国の傘下に入り、政府、そして世論は、こぞって大英帝国国王ではなく、中華帝国皇帝へ敬意を示す。
そんな国になっていた。
その国が、この世界情勢でどう動くか？
もう、決まっていたのだ。

ガンッ！
グレイファントムの斧が“ロンゴミアント”を文字通り叩き潰した。
「パワーが違うんだよ！オージー！」
「イージーに行こうぜ」
「OK！オージーをイージーに逝かせろ！」

誇り高きグレイファントム部隊は裏切り者に容赦はない。
「こいつら、本気で私達を襲ったの？」
「司令部が面白いこと言ってきたわよ？ステラ」
イルマが言う。
「オージー達は、私達じゃなくて、この先に展開する日本軍を攻めようとした。私達がここに展開したことを、彼らは知らなかった」
「私達、ジャップと間違われたの？」
ステラはグレイファントムを駆りながら訊ねた。
目前のロンゴミアントの胸部装甲に斧がめり込み、“ロンゴミアント”がその場に倒れた。
「不愉快だわ！」
「言わないの……このままなら殺されるわよ？」
「肝心の日本軍は何してるのよ！」
「前方で中華帝国軍と対峙。下手に動けない」
「さっさと済ませてこっち支援しろって言って！」
「逆にそっちこそさっさと済ませろって言われるわよ」
ピピッ。
イルマは、MCL（メサイア・コントローラー・ルーム）に響いた警告音に気づいた。
「――ステラ」
「何っ！？」
「部隊後退」
「へっ！？」
「急いで！」
「な！？」
「馬鹿っ！――こちらイルマ、部隊各騎！敵メース反応有！すみやかに当該戦闘範囲より後退！」
「来たかっ！」
「ステラ。ジャマーとスモーク展開――よろし？」
「ううっ。納得いかないけど、打ち合わせでそうなってたもんね」
「そういうこと♪」

圧倒的劣勢にさらされていた“ロンゴミアント”達は、突然のことに狼狽した。
３０騎で襲いかかったのがまさか米軍だとは思いもしない誤算だったことは認める。
だが、グレイファントム達は確かに自分達を撃破出来た。
それは間違いないのだ。

それなのに、後退した。

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）と共に戦線から離れていく米軍の反応を前に、“ロンゴミアント”コクピットの騎士達は首を傾げるしかない。

理由が、わからない。

「か……勝ったわけじゃ……ないよな」
ロンゴミアントのコクピットで、許はカラカラに渇いた喉に何とか唾を送り込んだ。
スクリーンに映し出される光景。
倒れ、炎上するのは友軍騎ばかりだ。

「許、そ、それより」
狼狽した仲間の声。
それが、この世界に自分以外の存在がいることを教えてくれる。

許は、やっとのことで自分の任務を思い出した。

「ああ……この騎を軍に届けなくちゃ」

「全く、驚いたぜ」
各騎のコクピットでは、騎士達が安堵のため息をつく。
コクピットの騎士達は全員が中国人。
歴とした中華帝国軍の騎士達だ。
「全部、宗が悪いんだ」
一番右端に立つロンゴミアントを駆る騎士が言った。
「日帝なんて弱いから叩こうなんて言い出しやがって」
「宗は死んだよ。俺も驚いたぜ？まさか米帝だとはな」
曹が周囲を警戒しつつそう言った。
「ばれなかったかな」
「何が」
「これ、“ロンゴミアント”の装甲つけてるけど、エンジン以外、中身は全部“帝刃（ていば）”だってこと」
「だから納得できない」
中程に立つ“ロンゴミアント”を駆る趙が憮然とした声で言った。
「俺は上官に“帝刃（ていば）”は米帝の“青霊（グレイファントムのこと）”の１０倍は強いって言われた。いくら豪州製だからって」
「ああ……俺もだ」
許は、コクピットを眺めながら不満げに言った。
「諜報部が盗み出したグレイファントムの最新鋭騎のデータをもとに、豪州で米帝側の技術と資材で作ったはずだ。それなのに、なんであんな」
「全然、相手になってなかったぜ？」
隣に立つ温の声も怒りに震えていた。
「畜生、白豚の作ったモノなんて使うからだ」
「まぁ言うな……みんな、先を急ごう。こんな所で立ち止まっていても仕方ない」
「ああ。あれだろ？この先で、第２０５中隊が日帝相手に大勝利を納めたんだろ？」
「ああ！その前には――」

グレイファントムには負けた。
それは米帝相手だからだ。
不本意だがやむを得ない。
だが、少なくとも我々は敵を撤退に追い込んだ！
都合のいい話だが、他部隊の功績に勝るとも劣らない勝利だと、誰かが言い出せば、それを否定するどころか受け入れてしまう。
上層部にそう報告すれば、褒美として東南アジアから“輸入”された女奴隷がもらえるはずだ。
奴隷をどう扱おうが、主人の自由。
徹底的に女を味わうことが出来る！
通信機越しに、卑猥すぎる内容の通信が取り交わされ、皆、先程までの恐怖をその場に置き去りにして、興奮しながら移動するが――。

「……」

移動は5分と続かなかった。
いや、興奮は、というべきだろう。

「な……なんだよこれ」

ジャングルの一角。
そこには、彼らの見慣れた存在がいた。

“帝刃（ていば）”達。

騎数にして約２０が一カ所に集められていた。
約？
そういうしかない。

原型をとどめているのが半数ほど。
残りはバラバラにされ、残骸となって山積みになっているのだ。

「おい許！」
宗が悲鳴に近い叫びをあげた。
「見ろっ！」

曹騎の指さす先を許は見た。
そこには“帝刃（ていば）”がジャングルの巨木に寄りかかるように倒れていた。
騎体は散々切り刻まれたことは、その損傷の酷さが物語っている。

「に……日帝の仕業か？」
世界最強と教えられた“帝刃（ていば）”の死骸達を前に、許は体の震えを抑えられない。

極悪非道の日帝共。
ことあるごとにその残虐さを教えられてきた悪しき国、大日本帝国。
世界最強の“帝刃（ていば）”がその犠牲になることなんて、あってはならない。
その、“あってはならない”ことが目の前で起きたことは間違いない。

「に……日帝達は、几帳面だって聞いたことがあるぜ？」
曹は言った。
「これって……撃破した“帝刃（ていば）”を片づけたんじゃないのか？」

「戦場の後かたづけってわけか？――ん？」
許は、先程の騎の肩部装甲を見た。

肩部装甲に白で書かれた部隊番号は「２０５」

第２０５中隊騎。

先日、日帝相手に大勝利をあげたと聞かされた部隊だ。

「曹！」

「……ああ。ど、どういうことだ？」

部隊番号に気づいたんだろう。曹も困惑した声だ。

あり得ない。

許はそう強く思った。

出撃する前、俺達は、テレビで、撃破された日帝のメサイアが炎上する様子や、２０５中隊凱旋の様子を見たんだ。

中隊はすでに寧波に収容されて祖国へ向かったはず……。

テレビではそう言っていた。

軍放送が嘘をつくはずが……。

「許！」

張騎から緊急を告げる通信が入ったのは、その時だ。

「朝鮮人共が動いた！こっちへ向かってくる！」

「なっ！？」

許は目を見張った。

「あいつら、昨日だって日帝に恐れをなして逃げ出したって、テレビで！」

「俺達が“ロンゴミアント”、しかも米帝に追われた敗残騎だって思ってるに違いない！」

「ニンニク臭いハゲタカ共めっ！」

許は怒鳴った。

「構わん！全騎、移動しつつ迎撃体勢！二鬼子（アーグイズ）共を迎え撃てっ！」

「了解っ！」
「“帝刃（ていば）”の恐ろしさ、教えてやるぜ！」

ゴオッ！

頭上を、いくつものデミ・メース達が通過する様子を、ヤクト・エッジのコクピットから見ていたのはカヤノだ。
調査のために集めたデミ・メースの残骸のあった地点で、敵の一部隊が停止。
そこめがけて全く別の部隊が襲いかかろうとしている。
奇妙なものだと、カヤノは思う。
魔界でもこれほど狭い地域で、敵味方が入り乱れた場所なんて、即座には思い出すことが出来ない。
中国、日本、米国、豪州、韓国――そんな国名こそ知らないが、カヤノはとにかく5つの勢力が入り乱れる戦況表示を見つめる。
先程、上空を通過した勢力がメースの残骸近くに展開する勢力に襲いかかった。
後はもう少し待ってつぶし合いが終わるのを待てばいい。
人間同士で殺し合いをさせ、疲弊しきった所を襲う。
バラライト隊長が立てたこの作戦は、今まで大成功を納めてきたのだから、今回も上手くいくに違いない。

ズーン
ドォォォン
ズーン
遠くから戦闘音が聞こえてくる。

「バラライト隊長」
カヤノがヤクト・エッジの横に、片膝状態で待機するバラライト隊長騎と接続した有線通信を開く。

「あと、どれくらいで襲いますか？」
「待て」
バラライトは苦い顔で言った。
「アーコット達、サライマ部隊の展開がまだだ。連中の展開終了と同時だ」
「アーコット隊長、いつ退院されたんですか！？」
「部隊を離れるとそういうのは伝わらないのか？少し前だ。もう復帰している」
「よかったぁ……」
ほうっ。と、カヤノのため息が通信機越しにバラライトの耳にも届いた。
「いろいろあって、一度もお見舞いに行けなかったから心配してたんです」
「そうか……」
バラライトは、戦況表示を見ながら苦い顔をさらに苦くした。

――アーコットめ。何を考えてる？

サライマ隊は海岸線に上陸し、速やかにバラライト達と合流する手はずだった。
それなのに、移動の途中で全く別の場所に無断で進路を変更した。

――まさか。

バラライトには思いつくところがあった。

「カヤノ」
「はい？」
「アーコット達が全滅した敵は、どんな連中だ？」
「えっと……白いデミ・メース達です」

カヤノは答えた。
「この……対峙する勢力の中に、私の騎の足を切断してくれた騎が混じっています」
「何っ!?どれだ!」
「この騎です」
カヤノ騎からのデータは、まさにサライマ部隊が接近中の敵だ。
つまり――
「アーコットめ!」
ガンッ!
バラライトはコンソールを殴った。
「た、隊長!?」
驚いたカヤノの声も、今のバラライトには届かない。
「自分の復讐心を満たすつもりか!」
アーコット達の支援は期待できない。
2騎でやれと言われればやるが、バラライトの騎は観測機器を装備している関係で、戦闘には参加出来ない。
仕方ない。
バラライトは、司令部との直通回線を開いた。

殴り合い　前編

「うわぁぁぁぁぁっ！」
曹騎が悲鳴を残して倒れた。
「曹！――――わぁぁぁっ！」
続いて趙騎がやられた。

“帝刃（ていば）”が相手にしたのは、グレイファントムＫＡ。
グレイファントムに軽装甲を施したタイプ。
大韓帝国騎だ。
グレイファントムの中でも最弱とさえ囁かれる騎だが、元々の性能から考えれば、納税者たる大韓帝国国民からすれば納得のいく戦果を上げている。

「くそっ！二鬼子（アーグイズ）！」
許騎がグレイファントムの中でも薄いとされる韓国騎を剣で串刺しにした。
グレイファントムの胸を貫通した一撃。
その胴を蹴りつけ、許は剣をグレイファントムから引き抜いた。
「これでもかっ！」
許達は死にものぐるいで戦い続け、今や2倍の兵力を誇った敵は、同数以下まで減っている。
「やれるぞ！」
許は、勇んで怒鳴る。
「二鬼子（アーグイズ）共なんて、恐れるに足らないっ！」
「応っ！」
味方も許の戦いぶりに励まされたように剣を振るい続ける。
米帝相手には分が悪かったが、二鬼子（アーグイズ）相手なら――――
「次っ！」

許が新たなグレイファントムに狙いをつけたその瞬間――

ドンッ！

狙いをつけたグレイファントムが、許の前で粉砕された。
許は、砲撃を喰らった人間が粉々になった瞬間を見たことのある。
グレイファントムが吹き飛ぶ光景は、それと何ら大差なかった。
つまり――

「か、艦砲か！？」
友軍からの支援砲撃。
許がまず考えたのはそれだ。
だが、それが大きな間違いであることに、許はすぐに気づかされる。
「ML（マジックレーザー）、照合出来ない！」
自騎のMC（メサイアコントローラー）からの報告が入ったのだ。
「照合できない？」
「友軍のML（マジックレーザー）じゃない。かといって、我が軍の把握している米帝側の、どのタイプとも違う！」
「じゃ」
「不明。一切不明――注意を！」
思わずシールドを構えた許の周り。
敵味方が戦闘を止め、周りを見回していた。
朝鮮人にも心当たりがないらしい。
許はそう判断した。
なら――

くそっ！
許は苦渋の選択を強いられた。
すでに豪州から輸送中の“帝刃（ていば）”は3分の2が失われた。

生きて帰れても、銃殺は避けられない。
それでも、全滅よりマシだ。

「全騎！」
許は命じた。
「最大戦闘速度で軍陣地まで移動！ブースターが壊れても構わない！これ以上の」
許の命令は、最後まで周囲には届かなかった。
視覚上の世界は白に。
聴覚上の世界は無音に。
全ては無に。
許の世界は、無になった。

激しい振動がコクピットを、許の駆る“帝刃（ていば）”を揺るがす。

「なっ……なっ？」
気が付けば、自分の騎が横倒しになっている。
それは、姿勢計ですぐにわかる。
ただ、何が起きたのかわからなかった。
被弾した様子はない。
「だ、誰か」
許は通信機に怒鳴った。
「誰か応答しろ！被害は！？」

騎体を起こし、許は見た。

周囲に倒れる“帝刃（ていば）”とグレイファントムの残骸。

そして、許を、許の駆る“帝刃（ていば）”を見つめる黒い天使を。

漆黒の甲冑に身を包み、漆黒の翼を広げた天使が、宙に浮きながら許を見つめていた。

その手に握られた銃が、自分に狙いを定めている。

「……あ」

ポカンと口を開けた許が最後に見たのは、その銃から放たれた強い光だった。

騎体が焼かれ、許と共に火葬にふされる“帝刃（ていば）”。

その光景を目の当たりにしながら、漆黒の天使は憐憫の情さえ示そうとはしない。

漆黒の天使が求めるのは、犠牲者のみ。

その武装で倒れる敵のみ。

漆黒の天使――ヤクト・エッジのコクピットで、炎上するデミ・メースを一瞥したカヤノは、新たな敵を求め、移動を開始した。

後藤は、しばしの沈黙の後、部隊に命じた。

「小隊各騎、すみやかに敵陣地へむけ突撃、突撃開始から３０秒後、３時方向へ全速移動」

「はっ！？」

「いいからやりなさい」

「り、了解――第一分隊、突撃するぞ！」

「聞いての通りだ。第二分隊、続け！」

第一分隊隊長、二宮。
第二分隊隊長、瀬音。
二人の指揮官の号令と共に、美奈代達は敵陣へ向け、ブースター全開で移動を開始する。
理由がわからない。
突撃開始から３０秒。
敵と渡り合う直前。
１２時方向に敵を見ているから、３時といえば真横に移動することになる。
つまり、後藤隊長は、敵陣の鼻先をかするように移動しろと命じているのだ。

そんなタイミングで敵前を移動する。
敵からの攻撃は不可避。
危険すぎる行為だが、美奈代達にそれを拒否する権利はない。

ジャングルを抜け、目前に敵が見えた。

シールドを構える敵メサイア達が立ち並んでいる。
それは、美奈代達が初めて見るタイプのメサイアだった。
「なっ！？」
「回避しろ！各騎、急旋回！」
突然、目の前に敵が現れてあわてたのは、むしろ敵の方だったらしい。
開かれたコクピットハッチにパイロットが転がり込む光景を、一瞬だけ、美奈代は視界にとらえることが出来た。
「い、今の、何ですか！？」
美奈代は、ターン直前に見た、得体の知れないメサイアについて二宮に訊ねた。
上半身は中華帝国軍のメサイア“帝刃（ていば）”。

だが、下半身は――――2本脚ではなかった。
「“四脚（よつあし）”だ」
「“四脚（よつあし）”？」
「二脚のヒューマノイドタイプでは扱いが困難な重火器等を大量に搭載するためのデザインだ」
二宮は冷たい声で美奈代に言った。
「座学で教えたはずだが？」

「た、たった今！い、今、思い出しました！」
美奈代はどもった口調で言うが、どう聞いても嘘だと声色が証明している。

「情報コード“ガルガンチュア”。データを言ってみろ」

「……た、たった今、忘れました」

「敵騎情報モニターくらい見なさいっ！」
二宮は怒鳴った。
「どうしてお前はそう、細かい所に気づく反面、肝心な所に神経がいかん！」

「というか！」
戦況モニター上に表示された敵メサイア関連情報を一瞥しつつ、美奈代は言った。
「そんな重武装ってことは」

「そういうことだ！」

二宮が頷いた途端――――

Ｖｏｏｏｏｏｍ！
ドドドドドッ！
ズガガガガッ！

幾本もの火線が美奈代達を後方から襲いかかった。

「弾種、１２７ミリ、７５ミリ、３５ミリ、２５ミリ、２０ミリ、１２．７ミリ、７ミリ」

牧野中尉が引きつった声で自分達に撃ち込まれてくる砲弾のデータを報告してくるが、騎体をかすめる砲弾の雨という視覚的事実だけで、美奈代は十分だった。

すでに十分だというのに、あちこちで爆発までが発生する。

「ロケットにミサイル、迫撃砲まで！？」

さつきがわめく声が通信機越しに聞こえた。

「何これ！？何！？

自分達、こんなに火器武装してますっ♪みたいに自慢したいわけ！？

最低っ！バカじゃないの！？」

「あ、当たりそうですか！？」

美奈代はこっそりと牧野中尉に訊ねた。

「回避運動は任せます。――まあ、やってみてますけどね」

牧野中尉は手元のコントロールパネルを操作しながら言った。

「こっちからの強制介入を拒絶出来ない程度だし――よしっ！」

ピッ

牧野中尉が最後のキーを叩いた。

「データ攪乱成功。敵ＦＣＳ他、電子装備はパーになりました」

「ぱ、パー？」

「データをぐしゃぐしゃにして、おバカにしてやったってことです」
牧野中尉はあっさりと言った。
「敵メサイアのデータリンク、近衛のそれに比べれば幼稚すぎます。グレードに換算して4つは下。
だから、こっちのMC（メサイアコントローラー）総掛かりでデータリンクに強制介入して、リンクつなげている全てのデータ、ぐちゃぐちゃにしてあげました♪」
「ど、どうなるんですか？」
「もしこの子なら、騎体の全電子装備を停止して、再起動しなくちゃいけません」
牧野中尉は自信満々というか、むしろ楽しげにそう言ってくれた。
「メサイアは力業ばかりの兵器じゃないんですよ？」
「はぁ……つまり、この火線は当たらないと？」
「そうです♪FCSどころか、ほとんど操縦不能ですから、直接目視射撃以外、撃てません」
火線は相変わらず迫ってくるが、FCSを司るMC（メサイアコントローラー）が言ってるんだから間違いないんだろう。
美奈代はそう見当をつけた。
「それより」
「えっ？」
「流れ弾のかなりの数が何かに当たりました。跳弾が妙な位置に流れています」
「どこです？」
美奈代は戦況モニターを見たが、モニター上は変化は見えない。
「敵陣の目の前――えっ！？」

牧野中尉が怒鳴る。
「中華帝国軍メサイア部隊、何者かの攻撃を受けています、こちらの観測に反応なし！」
「なっ！？」

「敵、すでに４割の反応消失！」
「おいでなすったな」
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中で、オペレーターの報告を受けた後藤は、通信機を掴んだ。
「各騎反転！敵を喰え！」

その鼻先をかすめるように逃走した日帝のメサイア達めがけて射撃を続けるのは、ＮＡＴＯ軍コード“ガルガンチュア”。
戦闘で下半身、もしくは脊椎を損傷した“帝刃（ていば）”の上半身ボディを流用し、バランスと出力に勝る、ホバー駆動する四つ脚タイプの下半身の上に据え付けた異形のメサイア。
刀剣による白兵戦は不可能にして機動性にもかなり劣るが、反面、四つ脚ならではのバランスと安定性のよさを活かし、二本脚では使用が困難な、大反動を伴う実体弾系射撃兵器をハリネズミのように搭載した、いわば歩く砲台だ。
無論、機動性に勝るメサイアを相手にすべき兵器ではなく、むしろ戦車主体の機動部隊を掃討することを最適の任務としている。
ＭＣ（メサイアコントローラー）管制による世界最高レベルのＦＣＳを持つ移動砲台。
小型の飛行戦艦といってもいい。
中華帝国軍の東南アジア侵攻に際しては、先陣にてあらゆる機甲部隊、航空機を葬り去ってきた悪夢の存在だ。
移動中の“帝刃（ていば）”部隊が日本軍を追い込むので、その火力支援のために展開していた。
ところが、肝心の“帝刃（ていば）”部隊とは通信不能。

戦闘が始まる気配さえない中、ぼんやりと命令を待っていたら、突然、日帝のメサイア部隊が鼻先をかすめるように横切り、あわてて射撃を開始したという有様だった。

そして、トドメとして戦闘態勢を整え終わる前に、すべてのシステムがエラーを引き起こし、騎体操作が思うようにいかなくなった。

その彼らに、ジャングルの中から無数の弾丸が襲いかかってきたのだ。

無論、襲った方にも誤算はあった。

存在を隠蔽するマジック・コンシールのバリアフィールドに、ガルガンチュアの放った砲弾のかなりが流れ弾となって命中。

盛大に明後日の方角へと弾いてしまったのだ。

魔法の光を放ち、弾かれる砲弾。

当然、そこに何がいるか、いわずともわかってしまう。

「しくじった！」

ジャングルの中から飛び出すなり偽装（コンシール）を解除。

光剣で“ガルガンチュア”をまっぷたつに切断してのけたのは、オレンジ色のメース。

“サライマ”。

アーコットだ。

その一撃により破壊された“ガルガンチュア”の弾薬コンテナに搭載されていた、あらゆる弾薬が次々と誘爆。

ガルガンチュアそのものを吹き飛ばした爆風をシールドで凌いだアーコットは、続々とジャングルから出て来る部下達に怒鳴った。

「さっさとしろ！こんな出来損ない共に手間取るな！」

「応っ！」

近衛による電子戦により騎体操作が十分に行えないガルガンチュア達へ、“サライマ”達は手にした速射砲を乱射する。

速射砲。

魔界製の実体弾兵器。

人間界での使用調査がアーコット達に科せられた任務の一つである以上、ここで自分達がこの兵器を使用しても問題はない。

アーコットは、そう打算した結果、部下にこの兵器の使用を認めた。

実体弾の口径は約１０５ミリ。

火薬ではなく、魔力によって撃ち出す、一種のレールガンだ。

初速が火薬発射方式と比較して圧倒的に速いため、砲弾自体の運動エネルギーが比較にならないほど高い。

そのせいで、口径こそ１０５ミリと小型だが、運動エネルギーから考えれば、その数倍の口径を備えた砲と何ら変わることはない。

その砲を前に、対戦車戦及びミサイル戦を想定し、メサイアの域を超えた重装甲を施されているはずのガルガンチュアが蜂の巣にされていく。

弾丸は分厚い装甲を紙のように撃ち抜き、内蔵されている装備を尽く破壊してのける。

「ひゃっはぁっ！」

全くの七面鳥撃ちに、“サライマ”のパイロットからは歓声があがる。

「こいつは楽だ！」

“サライマ”の一騎が、楽しげに、ボロボロになったガルガンチュアの騎体を踏みつけ、引き金を引く。

元から操縦が出来ないガルガンチュアの哀れなパイロット達は、騎体ごと挽肉にされる運命を避けることが出来なかった。

一番悲惨だったのは、武装のほとんどを破壊され、動くことさえままならない状態で放置されていた最後の一騎だ。
“サライマ”に包囲されたガルガンチュアのコクピットから騎士達が逃走を試みるが、“サライマ”の速射砲の的を増やしたのが精一杯だった。

“サライマ”達は、放棄された騎体めがけて四方八方から弾丸を浴びせかけた。

「騎体調査は近くにいるバラライトにでもやらせればいい！」

爆発、炎上するガルガンチュア達を後目に、アーコットは怒鳴った。
アーコットにとって、こんなデミ・メースを相手にすること自体が時間の無駄なのだ。
目的はもっと別にある。
その達成のためには、無駄な時間は使っていられない！

「あの白い連中を殺るぞ！」
「応っ！」
部下から殺気だった返答が来る。
「副長達の仇討ちだ！」

「まぁ――――ひっかかってくれたわけだ」
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中で、後藤は戦況モニターを見ながらタバコをくわえた。
部下達に行動を命じるまで、戦況モニターを見続けていた後藤が気になったのは一つ。
各軍の展開位置だ。

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を引き連れた米軍の展開が遅いのはやむを得ないとして、陣地を出た中華帝国軍があの位置で止まった。

さらに、米軍の背後から襲いかかったオーストラリア軍が、米軍を追撃しないで中華帝国軍の陣地へ向かうコースをとった。

……まぁ、大韓帝国はどうでもいい。

中華帝国軍とオーストラリア軍の間に開く距離の差が気になって仕方なかった。

何かがひっかかる。

何故、中華帝国軍は、米軍と交戦状態に陥ったオーストラリア軍の支援に回らない？

何故、ここで停止する？

目の前に敵が展開しているのに？

後藤はＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が入手できる限りのデータを元に、一つの結論に達した。

中華帝国軍は、俺達が間近にいることを把握していない。

オーストラリア軍は、ジャングルの中に潜む俺達をあぶり出し、中華帝国軍の有効射程まで追い込むつもりだった。

ただ、接触したのが俺達じゃなく、米軍だっただけ。

そのオーストラリア軍も、何故か反応が消失。

それは、敵に撃破された証拠だ。

じゃ、次は？

俺達だ。

どう来る？

背後から襲うさ。

俺ならそうする。
俺達は敵陣地に目を向けている。
背後はがら空き。

敵はオーストラリア軍を撃破した勢いを買って自分達の追撃に転じている。

だから、後藤は命じたのだ。

背後から襲ってくる敵を、中華帝国軍にぶつけろと。

敵陣地目前のターンはそういう意味だ。

幸い、敵はひっかかってくれた。
中華帝国軍と交戦状態に陥った所を狙うつもりだったのが、俺達が敵前から逃亡したから狼狽し、対応が遅れた。
そう見て間違いないだろう。

「とにかく」
火をつけようとして、オペレーターにタバコを口から奪われた。
タバコがゴミ箱に放り込まれ、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）内の壁に貼られた「禁煙！」を指さされる。
思わず苦笑して肩をすくめた後藤は、一人ぼやいた。
「敵の鼻をあかすことは出来たわけだ」

「小隊、戦闘開始します！」
オペレーターの声に、後藤は戦況モニターに視線を送った。
メサイアを示す反応同士が接触した。
頭数はほぼ同。
把握できている限り、性能差もそれほどの開きはない。

残されるのは、騎士の腕と運だけだ。
「やってくれよ……？」
後藤は祈るような気持ちでタバコを加えた。
「ああ……火はつけない。約束するから」

「敵、数１２！」
牧野中尉の声に、美奈代は緊張した眼差しを戦況モニターに向けた。
「熱源反応！」
「――――っ！」
コントロールユニットを乱暴なまでに操作して、“白雷（はくらい）”に襲いかかる攻撃を回避。
白いアイスキャンディーのような攻撃が“白雷（はくらい）”をかすめる。

鬱蒼と茂るジャングル。
木々の高さは、場合によってはメサイアの肩どころかメサイアそのものを覆い隠すほどだ。
悠久の時を刻むジャングル。
生命の宝庫、ジャングル。
その自然の財産をなぎ払って出来た道を、美奈代達は突進する。
美奈代達が先程作り上げた道ではある。
普通なら環境破壊だと問題になるだろうが、今は環境より自分の命を優先したい。
何しろ、ここは戦場なのだ。
――――勝手に戦場にしたクセに！
ふと、自分の思考に自分で突っ込んでいることに気づいた美奈代

は、口元だけ軽く歪ませた。
戦闘の恐怖に飲み込まれていないことに気づいたからだ。
悪くない。
美奈代は、道の向こうでシールドを構えるオレンジ色のメース達にビームライフルの照準を合わせた。

「――聞こえているか！」
ノイズ混じりの声が美奈代の耳を打ったのは、照準が合った直後だった。

若い女の声だった。

「おっかしいなぁ……もしもーし」

「……へ？」
美奈代は目を丸くして、トリガーを押すのを忘れた。

「くそっ。やっぱり規格が合わなかったんじゃないのかなぁ……マグルめ。使えるとかなんとか言って、私から散々金だけふんだくりやがって……もしもーし」

突然の怪電波。
そうとしか言い様のない通信を耳にした美奈代達が思わず周囲を見回してしまう。

「た、隊長？」
モニター越しの二宮騎は、無言で手を軽くあげ、部下を制止した。

「くっそぉ！呼びかけられたら返事するのが礼儀でしょうが！」
通信機の声は大声で怒鳴った。

「前方の白いデミ・メースの操縦者、聞こえているか！」

どこからの声かそれでわかった。

前方といえば、メース達しかいない。

美奈代は射撃をためらい、二宮に訊ねた。

「たっ、隊長？」

「――全騎、停止。敵との距離をとれ。それと、撃つな」

ズザザザッ――――！！

地面をハデにほじくり返して戦闘機動を停止した“白雷（はくらい）”達は、シールドを構えながら、それでもビームライフルをメース達に向けることをやめはしない。

二宮騎だけがシールドを構えることなく、部隊の前面に出ると、よく響く凛とした声で言った。

「聞こえている」

「えっ！？……あ、ああ。そ、そうなの？……よ、よし」

敵からの返信があったことに驚きの色を隠せないアーコットは、それでも弱みを見せまいと気勢をあげた。

「返事をしたことを褒めてやる！」

「それで？」

対する二宮は冷たく言った。

「魔族がどうやって人間の言葉を喋る？」

「貴様等の乗るデミ・メースから通信機を頂戴した。翻訳は機械がやってくれる」

美奈代達は、ビームライフルの照準を幾度も修正しながら、会話を聞く。

おそらく、この戦争始まって以来、初の敵同士による会話は続く。

「通信の目的を知りたい」

二宮は発音に気を配りながら、そう言った。
「……白州戦で、私のこの騎体にシールドを突き立てたヤツがいる。知っているか？」
「？」
二宮は、端正な眉をひそめて、もう一度、敵騎を見た。
オレンジ色のメース。
あれは確か……。
「ああ」
ようやく思い出した二宮があっさりとした口調で言った。
「それは私だ」
「なっ！？」
アーコットの顔がすさまじい形相になった。
「何だ？わざわざ礼を言いに来たのか？義理堅いな」
「誰が！」
二宮の目の前で、メースが剣を構えなおした。
「私の目的は――仕切直しだ！」
「仕切直し？」
つくづく、すごい翻訳装置使ってるな。と、二宮は感心する。
「もう一回、負けたいのか？」
「違う！」
アーコットは怒鳴った。
「もう一度、一対一（サシ）で勝負しろ！」
「あの時は調子が悪かったとか、そう言いたい？」
「そうだ！」
「そういうのはやめておけ……聞いているだけで惨めに思えてくる」
「っ！」
「――まぁ、いい」
二宮は、肩にマウントした斬艦刀を抜いた。
「一つ、条件がある」
「条件？」

アーコットはさらに顔をしかめた。
「人間風情に選択肢があると？」
「勝負だろう？なら、対等のはずだ。それとも、最初から対等以下のつもりだったの？」
「……面白いじゃない。何よ、条件って」
しかめた顔を無理矢理引きつった笑顔にしたアーコットに、二宮は言った。
「私が勝ったら、ここを撤退する。負けても、部下には手を出さない。お前の私怨に基づく勝負なら、その程度は認められるはずだ」
「……」
「……」
「……いいわ」
アーコットは言った。
「！！」
「！！」
途端、二宮の耳に、聞いたことのない言語でやりとりが入る。
おそらく、相手の部下達が抗議して、相手がそれを止めたんだろうと、そう、見当をつけた。
「そっちも同じ。いい？」
「わかった……それで、名は？」
「人間風情に」
「やり合う以上、名乗るのが礼儀だろう」
「……魔界フォーミリア第３方面軍第２メース師団所属クレア・アーコット魔族軍大尉」
「大日本帝国皇室近衛兵団所属、二宮真理中佐だ」
「一対一（サシ）よ？」
「無論だ――全騎、国際騎士法規定の決闘の条項に従い行動せよ。もしもの時は、瀬音が全部隊の指揮。後藤隊長の指示に従え」
ズザザッ――ジャカッ

フィィィッ――――ザンッ

双方が前進し、適度な間合いで剣を構えた。

殴り合い　後編

ズザザッ――――ジャカッ
フィィィッ――――ザンッ

双方が前進し、適度な間合いで剣を構えた。

人類対魔族の決闘。
しかも、よりによって女同士の。

張りつめた空気が空間を支配する。

「唯」
コクピットの二宮は泰然自若とした、ベテラン騎士の姿勢を微塵も崩さない。
「やれる？」
「勿論です」
その戦いを支え続けてきたＭＣ（メサイアコントローラー）の唯は短く答えた。
「全力発揮、いつでもどうぞ」
「よし」
幾多の戦場で敵を葬り続けた二宮の目が、メースの一点に注がれた。

別に、アーコットに秘策があったわけではない。
アーコットにあるのは、私怨を晴らしたいという一心だけだ。
自分は勝つ。
それが当たり前。
相手は人間風情だ。
魔族である自分が、そんなヤツに負けたなんて、何かの間違いだ。

だから、私は絶対に勝つ！
……これが、アーコットの全てといっていい。
「――――いけっ！」

……す、すごい。
目の前で繰り広げられるメサイア戦を、美奈代は固唾を呑んで見守った。
剣と剣がぶつかり合う殺し合い。
ただ、それだけのはず。
それなのに、美奈代の目には、まるで別物に映った。

舞踏

そう、映ったのだ。

そもそも舞踏という言葉自体、坪内逍遥と福地源一郎による造語で、日本の伝統的なダンスである舞（まい）と踊（おどり）をくっつけたものだという。
音楽に合わせてすり足などで舞台を回るものが舞。
同じく、足を踏み鳴らしリズムに乗った手振り・身振りをするものが踊。
この二つをくっつけたら舞踏になる。

滑らかな動きで敵を狙う二宮騎。
スピーディな動きで敵を襲うアーコット騎。
それはまさに舞と踊のぶつかりあい。
二騎は、まるで事前に申し合わせたかのように、ぶつかり合っては離れる動作を繰り返す。
剣とシールドがしのぎを削っても、互いに騎体に命中させることが出来ない。
勝敗が決まらないのは、技量の未熟さが問題ではない。

逆だ。
互いの技量が高すぎて、致命傷を負わせることが出来ないのだ。
美奈代は、それを牧野中尉に教えてもらった。

ギィンッ！
「ちっ！」
１２回目の打ち込みが弾かれた。
「これでもか」
二宮は騎体を後退させ、間合いを開く。
アーコット騎は、一瞬だけ後退するが、すぐに間合いを詰めた。
逆袈裟斬りの一撃が騎体をかすめる。
「――――やるな」
二宮は気づかずに口元をゆるめた。
楽しいのだ。
ギリギリの緊張感と、自分が殺しという人間のタブーを犯そうとする罪悪感がないまぜになった複雑な感情が、二宮をとてつもなく楽しくさせる。

これほどの技量を持つ相手は久しぶりだ。
この私を、ここまで楽しませてくれる相手は、久しぶりだ！

フフフッ。
アーコットは口からこぼれる笑い声を止めることが出来ない。
おかしくて、愉快で、楽しくて、幸せだった。
相手がこれほどの技量なら、自分が殺されかかったのも無理はない。
そう、実感できるから。
剣と剣が文字通り絡み合い、シールドが鈍い音を立ててぶつかり合う衝撃すら、アーコットには性的な快楽を与えてくれる。

下半身に熱を感じながら、アーコットは快楽に酔いしれた。
「さぁ――もっと楽しませて！」
騎体をジャンプさせ、メースの質量までを載せた一撃。
普通なら重装甲のメースだって切断する一撃を、相手は軽々と止めてのけた。
「フフッ……あはははははっ！」
アーコットは狂ったように笑った。
「楽しい！楽しいじゃない！」
ドカッ！
“サライマ”の蹴りでさえ、相手はシールドで阻止、退き様に横薙の一撃で逆襲にかかる。
「どこまで楽しませてくれるの！？」
ガンッ！
シールドでその一撃をそらしつつ着地。
体勢を低くとると、脚めがけて突き技を繰り返す。
二宮騎は、全く無駄のない脚裁きでアーコットの攻撃を回避し、要所要所で反撃に出る。
「もう――濡れたどころか」
ザンッ！
アーコットのシールドに、突き技に出た二宮騎の斬艦刀がめり込んだ。
バンッ！
シールドを掴む左腕を力任せにひねると、二宮騎から斬艦刀が離れた。
わざとシールドを刺させて剣を奪う、アーコットの策は成功した。
「イっちゃったじゃない♪」
「――チィッ！」
ブンッ！
舌打ち一つ、二宮は腰の光剣を抜いた。

魔法騎士の使う霊刃をメサイアのサイズに拡大したビーム剣がまばゆい光を放つ。
相手が光剣を使う以上、実剣は無意味。
二宮はそう判断した。
「やってくれる！」
「中佐！」
唯が警告を発したのは、まさにその時だ。
「中華帝国軍、動きました！」
「何っ！？」
「南沙級空母が展開しています！メサイアとおぼしき反応多数！現状、騎数１５、増大中！」
「この楽しいときに！」
二宮はアーコットの攻撃を剣でさばきつつ、アーコットに呼びかけた。
「待て、魔族の！」
「アーコットだ！」
「決闘の邪魔が入る！」
「無視しろ！こっちはお楽しみの真っ最中だ！」
「気持ちはわかるが――」
「寧波級よりＭＬ（マジックレーザー）反応！」
唯の警告と、アーコットの背後に控えていた“サライマ”達が動いたのはほぼ同時。
ＭＬ（マジックレーザー）独特の着弾音が周囲から一切の音を奪い去る。
「大尉！」
アーコットは、横から飛んできた魔法攻撃を、部下達がシールドで防御してくれたことに気づき、今までの快楽に浸る女から、冷酷な指揮官へとモードを切り替えた。
「全騎、大丈夫か！？」

「損害なし！」
「熱量だけです！たいしたことない！」
「よし――――おい！えっと……に、にの」
「二宮だ」
「そう言った」
「言ってない」
「言ったと言ったら言った！」
一瞬でも、決闘相手の名を失念したアーコットは、ムキになって怒鳴った。
「決闘は一時お預けだ！」
「仕方ないか」
二宮もまた、部下を率いる指揮官として判断を下した。
「いろいろあって、共闘の形はとれないが」
「わかっている」
アーコットは言った。
「我々はここから去る。その方が後々、面倒がないだろう？」
「いい方に回ったわね」
「うるさいっ！」
アーコットは怒鳴った。
「後退ルートは丁度、敵を引きつけるルートにもなる！
こっちに敵を引きつければ、お前達が我々に味方したなんてふざけた理屈は通じないはずだ！我々が人類と戦うのはいいが、下手するとお前等が我々の味方と思われるぞ！？それでいいのか！？にのナントカ！」
「二宮だ！」
「そう言っている！全騎、ランデブーポイントまで後退！続け！」
アーコット騎がきびすを返して飛び立った。
「いいか！？決闘はお預けだ！それまで死ぬな！にのナントカ！」
“サライマ”達が一斉に飛び立ち、ジャングルの向こうへと消えていった。

「はらぁ……」
そのやりとりを、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中で見守っていた後藤が額に手を当てた。
「魔族ってのも、自分勝手というか、何考えてんだか」
口にくわえたタバコに火をつけようとして、またオペレータに奪われた。
「とにかく……どうすんのよこれ」
後藤の目の前。
戦況を示すスクリーンは大変な騒ぎになっていた。
「寧波級４、後方に南沙級空母３！」
「……はらぁ」

南沙級飛行空母。
全長４００メートル。
近衛の保有する信濃級に対抗する意味で建造された武装飛行空母。
大型武装輸送艦にスキージャンプ甲板とを取り付けただけの簡単な構造ながら、Ｓｕ－２７を７０機。メサイアを２０機搭載可能と、空母としての機能は決して侮れない。

「甲板から続々とメサイアが発艦しています！発艦騎数、都合５０騎！うち２０騎が魔族軍追跡へ動きます！残りはこっちへ！」
「後藤隊長！」

「応援は」
「間に合いません！」
「ちっ……先行させすぎたか？」
後藤は舌打ちと共に部下に命じた。

「全騎、ポイントＦ４２、米軍展開地域へ移動開始。魔族のお姉ちゃんの言うとおり、こっちが魔族に味方したなんて思われたらたまらん」
「り、了解！」
「米軍へ協力を要請して」
その時、オペレーターが悲鳴に近い声をあげた。
「後方８時から豪州軍！」
「何？メサイアか？」
「メサイアの反応……今度こそ“ロンゴミアントＲＡ”です！数２０以上、他、爆撃機とおぼしき反応５０以上！反応増大中！」
「おいおい……」
後藤は肩をすくめた。
「そんな戦力なら、日本に来てくれよ……ホント」
オペレーターは頼りない上官を無視して、自分の職務に忠実になろうとした。
「爆撃機、機種判明！ランカスターです！」
「はぁ？」
後藤は目を丸くした。
「ランカスター？」
後藤の記憶が間違いなければ、イギリスが赤色戦争に投入した四発重爆撃機だ。
「あんな骨董品、博物館から持ち出したの？」
「バカ言わないでください」
年かさが後藤に近い年輩、もとい、熟練のオペレーターが言った。
「大日本帝国軍が何で烈風だの、スカイレーダーだの今更になって作り出したと思っているんです」
「成る程？狩野粒子の影響……か」
狩野粒子が南半球に及んだことで、豪州政府は戦線投入可能な兵器として、かつて英国連邦時代に運用していた爆撃機を生産ラインに載せたのだ。

「そういうことです。ちなみに、護衛戦闘機はモスキートです」
「やだやだ」
後藤はもう一度肩をすくめた。
「何、この状況。できの悪い仮想戦記じゃない。そんなもの使いたかったら日本に来てよ。本当に頼むからさぁ」
「ぐちゃぐちゃいってないで、戦闘指揮をとってください。瀬音少佐達が困ってますよ？」
「あー。はいはい」
後藤は通信機を掴んだ。
「各騎、お待たせ。こちらも動くけど、いい？」

「はぁ？」コクピットですっとんきょうな声をあげたのは瀬音だ。
「だから」
通信機の向こうで後藤は言った。
「全力で米軍陣地に飛び込んで。こっちを護衛するのお忘れなく」
「米軍陣地に？」
「そう」
後藤は言った。
「味方の支援が得られなければ、味方を作るまでさ」
「無理矢理、米軍に戦わせると？」
「そういうこと」
懲りずにポケットからタバコを取り出す後藤。
「――ま、米軍さんがそれでどういう反応示すかは、その時になって腹決めようや」
「……」
瀬音もわかった。
他に選択肢はない。
機密騎を米軍陣地に飛び込ませるという、高い代償を支払うのだ。
後藤にとっても責任問題は免れない作戦。

だが、他に手はない。
海岸線を通過したり、衛星軌道で逃げるなんて、この作戦に比べたらリスクが高すぎる。
相手の陣地には、ＭＬ砲（マジックレーザー）搭載の飛行艦が控えているんだ。
下手をすれば、上昇開始と同時にやられかねない。
「ただし」
後藤は言った。
「部隊を三手に分ける」
「了解」
前面から来るだろう敵を阻止する部隊。
側面で敵の砲撃をしのぎつつ、指揮部隊を護衛する部隊。
殿を勤める部隊。
瀬音はそう理解し、了承を告げた。
「第一分隊は前衛、敵の攻撃を攪乱しろ。第二分隊は後衛につき指揮部隊を護衛。共に米軍陣地へ向け移動に全力を尽くせ」
「もう一隊は？」
「風間」
「は、はい？」
突然、自分の名を呼ばれた祷子はひっくり返った声で言った。
「わ、私ですか？」
「遊撃隊となって中華帝国艦隊の攪乱につけ」
「隊長！」
二宮が怒鳴った。
「風間に死ねというのですか！？」
「風間の騎は生粋の“白龍”タイプだ」
後藤は言った。
「機動性、その他、艦隊戦にも投入できる性能がある。今、その性能を遊ばせるわけにはいかないんだよ」
「で、ですけど！」
「風間、復唱」

後藤は二宮の抗議を無視して祷子に復唱を求めた。
「り、了解」
祷子はコントロールユニットを握りしめ、言った。
「風間、敵艦隊の攪乱任務に就きます」
「よし――文句は生き残ったら聞いてあげる」
後藤の目の前で、敵の反応が近づきつつある。
攻撃可能距離に達するまであと数十秒だ。
「全騎、作戦開始！艇長、移動任せる！」
「了解！」

第一分隊　瀬音少佐以下、神谷、柏、都築、山崎
第二分隊　二宮中佐以下、長野、泉、早瀬、宗像
第三分隊　風間

……この編成で作戦は実行に移された。

「さて」
指を鳴らしながら、前衛に立つ瀬音は楽しげに鼻を鳴らした。
「祷子ちゃんのことは気に入らないが――とにかく、いつも真理のお尻ばかりってのは、俺の趣味じゃないからね」
ピピピッ
移動をすべてMC（メサイアコントローラー）にゆだね、瀬音はビームライフルの照準に神経を傾けた。
飛行中のメサイアの機動はかなり落ちる。
それでもなお、敵は精一杯の回避機動をかけながら接近しつつある。
「――やってみるか」
ビンッ！
瀬音騎からビームライフルの光が放たれた。

「少佐！？」
都築は、突然の攻撃に驚嘆の声をあげた。
敵はまだ照準に十分入りきっていない。
実体弾とは違い、空気による拡散が心配されるビームライフルは、十分に引きつけて使用すべき代物のはずだ。
それなのに、瀬音はまるで実体弾兵器同然にビームライフルを放ってしまった。
「早い！早すぎる！」
ビームライフルの光が走った先で、メサイア達が少しだけ動きを変えた。
起きたことといえばそれだけ。
命中は、当然ながらしていない。
反対に、敵からの実体弾兵器が雨霰と襲いかかってくる。
「ったく」
周囲で断続的に続く爆発に舌打ちしつつ、都築は照準を定めた。
「こういう時は、あわてたら負けだって」
カチッ
ビンッ！
都築騎のビームライフルから放たれた一撃は、メサイア――“帝刃（ていば）”の胴体に吸い込まれるように命中し、“帝刃（ていば）”そのものを吹き飛ばした。

「美晴さん」
山崎がビームライフルをかまえつつ、隣の美晴騎に警告した。
「数が違う。注意してください」
「了解。ありがと」
そう、返事をした美晴の目の前で、戦況モニターに映し出される敵影は、二手に分かれた。
「ちっ！左右に分かれた！」
美晴と山崎は接近しつつある“帝刃（ていば）”達にめがけ、トリガーを引

き続けた。
美晴の目からすれば、“帝刃（ていば）”の動きはかなり巧みといえた。
ビームの射撃コースを螺旋を描くように回避する“帝刃（ていば）”達に、美晴は目を丸くした。
「上手いけどっ！」
一騎の“帝刃（ていば）”が美晴の一撃をまともに喰らい四散。
その背後から飛び出した一騎が、美晴騎の頭上をすり抜けていった。
「抜かれたっ！？――――きゃっ！」
美晴は自騎周辺で断続的に起きる爆発に襲われ、その騎を追うことが出来なかった。

「敵、続々と第一分隊を突破していきます！」
「敵の狙いは俺達か」
メサイアと、その手に持たれたシールドに護衛される形で移動するＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に乗る後藤は、戦況モニター上の敵の動きから、その狙いを判断した。
前面に出た第一分隊をロクに相手せずにその上をすり抜けていくのだ。
狙いは一つしかない。
「俺達が敵将ってわけだ――――偉くなったねぇ。俺も」
「後藤隊長」
通信機越しに二宮が言った。
「米軍陣地まであと１０分です」
外では“白雷（はくらい）”達がビームライフルで阻止戦を展開している。
中華帝国軍の反応は次々と消えていくとはいえ、決して安穏としていられる状況ではない。
「……祈る程度しか、俺達にゃ出来ないか」
「隊長」
先程のオペレーターが席を立つと、そっとライターを差し出した。

「吸っていいですよ？」
「いいの？」
「ここでパニックになられては皆の迷惑です」
「ならないさ」
「それと、ヘビースモーカーがタバコを切らすとロクなことがおきないと聞きました」
「おろ？わかってるね」
後藤はタバコをくわえ、オペレーターに火をつけてもらった。
「うん。美味い」
戦場にいながら、後藤は深い笑みを浮かべてタバコを吸った。
「結構です」
オペレーターは、ライターをポケットに戻すと、椅子に座った。
「では、吸った分だけ、幸運を発揮してください」
「了解」

「ちいっ！俺達ゃオマケか？それともゴミか！？」
瀬音は、次々と敵に突破され、まともにぶつかることがないことに毒づきながら怒鳴った。
「後藤さんよ！そっちの護衛に回るぞ！全騎、続けっ！」
第一分隊はブースターを開き、宙に舞った。
「背後に気をつけろ！」
瀬音は部下に命じた。
「艦相手に下手に背を向けると撃たれるぞ！」
「了解！」

「くそっ！」
さつきは3騎目を仕留めたところでビームライフルから手を放し、槍を手にせざるを得なかった。
「これ、肩にマウントさせた方がいいっ！」
ビームライフルを右足に取り付けたホルスターに突っ込むことで臨時のマウントはするが、長物を扱うさつきにとっては、ビームライフルと槍が干渉しないか気になって仕方ない。
接近する“帝刃（ていば）”が剣を抜いて接近する。
さつきは鋭い槍の一撃を“帝刃（ていば）”の喉元に突き立て、“帝刃（ていば）”を擱座（かくざ）させた。
「４騎目！――――次っ！」
連続した突き技を“帝刃（ていば）”達の装甲の隙間に正確に突き入れ、次々と“帝刃（ていば）”を倒す。
もう亜音速と言っていいほどの速度で移動中の空中戦だ。
体勢を崩して地面に墜落すれば、それだけで騎体は無事ではすまない。
“帝刃（ていば）”達は騎体の構造物をバラバラにまきちらし、地面を何度

もバウンドしながら派手な回転を見せ、そして爆発した。
「接近させなきゃいいんでしょ！？」

「そういうことだ！」
紅葉に頼み込んで作ってもらった短めの斬艦刀を振るい、そう叫んだのは宗像だ。
一撃をわざと大降りに振り、敵が回避したところを見計らって蹴り飛ばし、あるいはシールドのエッジを叩き付け、とにかく敵を地面に叩き付けることに専念する戦法を採る。
剣による撃破を狙っていては、この多数相手では圧倒的に不利。
そう判断した、機動戦闘に優れた宗像ならではの技が光る。

その隙間を狙うように、二宮達がビームライフルによる射撃を繰り返しつつ、飛来する砲弾からＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）とベルゲをガードする。

「ええいっ！」
南沙級飛行空母ネームシップ「南沙」の艦橋で苛立たしそうに舌打ちしたのは、中華帝国軍第３機動飛行艦隊司令官の毛提督だ。
「どういうことだ！」
提督は怒鳴った。
「敵は二手に分かれる。一つは日本軍だとわかったが、その日本軍が敵対した部隊は所属不明だと！？」
「全く、データにないタイプです」
メサイア担当の参謀が報告した。
「ただし、そいつらが日本軍と交戦したのは事実」
「どっちにしろ、敵だろうが！」
提督の視線の先、壁に吊された戦況スクリーンには、オレンジ色のメサイアと戦う部隊の様子が映し出されている。

２０騎を向かわせて、今でも生き残っているのはわずか２騎。
いや、今、２騎共やられたから全滅だ。
「砲撃を！」
提督は反応消滅を前に、椅子を蹴った。
「後衛の第１０２小隊を後退させろ！こちらからの砲撃の邪魔だ！空母護衛隊を１０２小隊と合流させてあのオレンジ色のメサイアを仕留めろ！」
「了解！」
提督指揮下の各艦からＭＬ砲（マジックレーザー）と実体弾がオレンジ色のメサイア――アーコット達めがけて放たれる。
艦橋にいても鼓膜が破れそうなほどの射撃音と、靴越しにしびれを残すほどの振動が提督達を襲う。
「提督！」
参謀の一人が突然、提督に近づいて報告したのは、空母に搭載された火器が火を噴く最中だ。
「日本軍の」
「何！？聞こえないぞ！」
その怒鳴り声に、参謀は大声で怒鳴った。
「日本軍の一騎がいないそうです！」
「逃げたのか！？」
「わかりませんっ！」
空母艦橋の真横に“帝刃（ていば）”が接近する。
「あの“帝刃（ていば）”は！」
「艦隊総隊長の李大佐です。メサイア部隊も確認していないと言っています」
「……逃げた？まさか」
提督の聞く近衛という組織は、「血と鉄の軍紀」をもって維持される恐怖の組織だ。
メサイアで逃亡することなんて考えられる話ではない。
では？

「各員、監視態勢を厳に！」
提督は結論を出した。
「メサイアが来るぞ！」
「魔法探索、感有！」
魔法探索担当士官（マジック・レーザー）が怒鳴った。
「どこだ！」
提督は彼の元へ駆け寄った。
「艦隊上空！」
士官は告げた。
「太陽からです！ＭＬ（マジックレーザー）反応――来ますっ！」
「どこだ！？どこを狙う！？――ええいっ！ＦＧＦ戦闘展開！」
飛行艦は魔法の反作用で浮揚、航行する。
その反作用の有効範囲を、ＦＧＦ、フリー・グラビティ・フィールドと呼ぶ。
言い換えれば、ＦＧＦが作り出す力場という擬似的な海に浮かぶのが飛行艦。
力場は出力をあげれば容易にバリアとなる。
このことから、大型戦闘艦艇は、バリアとしてＦＧＦを展開することがある。
無論、飛行空母という艦の性格からすれば、航空機やメサイアの離発艦を不可能にするＦＧＦのバリア展開は本当に非常手段なのだ。
だが、提督の判断は遅すぎた。

提督の目の前。
飛行空母「南沙」の横を航行する南沙級二番艦「海南」の甲板に光の柱が突き刺さったのは、その命令が発せられた直後だった。
光の柱は５本。
艦橋に１本。機関部に２本、主カタパルトに２本。
見事に配分されていた。

「なっ！」

ズンッ！

ズズンッ！

連続した鈍い音を立て、それまで雄姿を示していた「海南」は炎に包まれ、高度を落としていった。

「ば、馬鹿な！」

愕然としつつ、提督は思った。

く、空母が一瞬で撃沈だと！？

あ、あり得ない。

思わず後ずさった提督が救いを求めるように視線を送ったのは、同じ南沙級空母三番艦「東沙」だったが――

ドドンッ！

弾薬庫が誘爆したのだろう。

全長４００メートルの巨体が真っ二つにへし折れ、そのまま墜落していった。

「く、空母が！」

「攻撃、来ますっ！」

「回避いっ！」

提督は死にものぐるいで叫んだ。

「何としても回避しろっ！艦隊が、俺の艦隊が」

全滅する！

名誉ある中華帝国軍艦隊を率いる提督として、その一言を口にすることなく死ねたのは、むしろ提督にとって唯一の救いだったかもしれない。

直後、艦橋を抉ったビームライフルの一撃は、提督他、艦隊司令

部全員を、艦橋ごとこの世界から抹殺してのけたのだから。

南沙が煙を上げながら、重々しく錐もみを始める光景を目の当たりにした中華帝国軍は、各個の判断で、空母を仕留めた敵に立ち向かわざるを得なかった。

撤退命令も何も発信することなく、艦隊司令部は全滅。

この事態を受け、寧波級で構成された第４０１巡航戦隊司令部は、艦隊指揮権の移管を宣言。

前面に出たメサイア部隊に後退を下命。艦隊護衛に当たるよう指示、オレンジ色のメサイア達にむかった艦隊護衛部隊にも同様の命令を発した。

さもなければ艦隊が全滅する。

死ぬ。

それだけは、彼らもまた、避けようとしたのだ。

だが、それは遅すぎた。

太陽に隠れるようにして熱源探索から逃れるのは、祷子の駆るＤ－ＳＥＥＤ。

その手に持つビームライフルは、恐ろしいほどの正確さで寧波級の機関部と艦橋を次々と撃ち抜いた。

爆沈する寧波級達の間をすり抜けるようにして、艦隊護衛の“帝刃（ていば）”達が上昇。敵めがけて殺到する。

その“帝刃（ていば）”達でさえ、Ｄ－ＳＥＥＤは逃しはしない。

寧波の横をすり抜けようとした“帝刃（ていば）”２騎が一瞬で撃墜されたのをきっかけに、Ｄ－ＳＥＥＤは艦隊めかげて突撃を開始した。

ようやくキャッチした敵めがけて、“帝刃（ていば）”達があらゆる射撃系兵器をたたき込もうとする。

まるで帯のように襲い来る弾の雨を前に、Ｄ－ＳＥＥＤは全く速度を落とすこともなく、騎体を軽くひねって、雨を回避すると、反

撃に打って出る。
　3騎がビームライフルの餌食となり、炎上しつつも、いまだしぶとく飛行を続ける寧波の上に落下することを強制する。
　寧波の爆発に巻き込まれた3騎の命運は、そこで尽きた。

　D－SEEDを駆るのは、当然、祷子だ。

　目の前に広がる炎の地獄を前に、祷子は顔色一つ変えずに騎体を駆り、敵の攻撃をかわし、敵を葬り続ける。
　微塵の躊躇も、容赦も、そこにはない。

　D－SEEDが、“帝刃（ていば）”2騎を前に突然、ビームライフルを放すと、腰にマウントされた光剣を抜きはなった。
　D－SEEDの魔晶石エンジンが産み出す莫大な出力に支えられた光剣は、D－SEEDと同じ25メートル近いサイズまで伸び、“帝刃（ていば）”達に襲いかかった。
　すれ違い様の一撃。
　わずか2秒に満たない攻撃。
“帝刃（ていば）”達は、その攻撃により、騎体をバラバラに切断され、爆発の炎に変えられた。
　対する祷子は、光剣を腰に戻すと、宙を落下するビームライフルを掴み、エネルギーを確認する。
　直後、D－SEEDが艦隊の下に出た所で、祷子はブースター全開で制動をかけ、残存する寧波めがけてビームライフルを放った。

　艦隊が全滅したのは、それから5秒後のこと。

　任務達成と判断した祷子は、いまだしつこく追撃の手を止めない中華帝国軍メサイア部隊との交戦を続ける本隊と合流すべく、米軍が展開する方角へと向け、D－SEEDのブースターを開いた。

「米軍陣地(ゴール)まであと１５００！」
ビームライフルのエネルギーパックを交換。
充填が確認され次第、撃つ。
美奈代の放った一撃を頭部にまともに喰らった“帝刃(ていば)”が黒煙を上げながらジャングルに墜落していく。
「エネルギーパックは！」
「残り２つ！」
さくらが美奈代に告げる。
「終わったら内蔵ＭＬ(マジックレーザー)を！」
“帝刃(ていば)”達から放たれるＭＬ(マジックレーザー)が騎体をかすめる。
「ちっ！了解した！」
「第一分隊より第二！」
瀬音の怒鳴り声が耳を打つ。
「ビームライフルを乱射するな！こっちが近づけない！」
「そんなこと言ったって！」
美奈代の目の前一杯に、剣を振りかざした“帝刃(ていば)”が映し出される。
その背後にも一騎。
剣を振りかざす一騎をビームライフルで仕留めても、もう一騎を回避出来ない。
そして、背後にはＴＡＣ(タクティカル・エア・カーゴ)がいる。回避すら出来ない。
出来ない尽くしだ。
「くそっ！」
美奈代は、“帝刃(ていば)”からの一撃をかろうじてかわし、弾避けに構えていたシールドで“帝刃(ていば)”の胸部装甲を力任せに殴りつけた。
ガィンッ！
鈍い音を立て、装甲の破片を巻き散らかしながら、“帝刃(ていば)”が後

ろにはじき飛ばされ、その背後に潜むもう一騎の“帝刃（ていば）”とモロに衝突した。
「そこっ！」
願ってもないチャンスを逃す美奈代ではない。
ビームライフルの照準もそこそこに、トリガーを引く。
元来が魔族軍メースの非常識なまでの装甲を破壊するために作られたビームライフルだ。
最新の金属技術を他国から盗みまくった中華帝国軍のメサイアの複合装甲とはいえ、その破壊力を前にしては無力に近い。
体勢を失った“帝刃（ていば）”二騎の腹部に命中した一撃は、二騎をまとめて貫通してのけた。
「泉っ！」
二騎を同時に仕留めた殊勲者たる美奈代の耳に、突然の罵声が届いたのはその時だ。
相手は都築だった。
「このバカっ！」
「な、何がだっ！？」
「貫通した一撃が今、どこに飛んできたと思ってる！」
「え？」
「俺めがけて飛んできたぞ！」
「す、スマン！」
「ったく！よく考えて撃てっ！」
「わっ、わかった！」
言い終わって、美奈代は小さく毒づいた。
「――避けろ。へたくそ」
「聞こえたぞ！？」

「敵、半数が脱落」
「中華帝国軍達（やっこさん）のフネは全滅したのに、よくやる」

通信オペレーターの後ろに立つ後藤は戦況モニターから視線を外さない。
「後は……背後の豪州軍か」
戦況モニター上の豪州軍は接近することをやめない。
上空は爆撃機の大編隊。
その下を数十騎のメサイアが固める。
さらに後方には数隻の巡航艦だ。
「……こりゃ、本当に戦争だ」
「どうなさいます？」
先程、後藤のタバコに火をつけた女性オペレーターが後藤に訊ねた。
胸のネームプレートには三枝と書かれていたのを、後藤は気づいていない。
「前門の虎は排除しつつありますが、後門の狼は」
「門の内側にいるのが味方か敵かわかんないのにねぇ……」
後藤はそっとタバコを三枝の前に出した。
「いただきます」
三枝は一本を受け取ると、ライターで火をつけた。
「禁煙、じゃなかったの？」
「験担ぎです」
三枝は紫煙と共にそんな言葉を紡ぎ出した。
「悪いですか？」
「いえいえ……さて。門の内側を味方につけるか」
「中佐？」
「通信」

その通信を傍受したのは、ランカスター爆撃隊の爆撃先導機に搭乗する通信士官だ。
発信先は日本軍。

全回線解放、しかも平文で発信されていた。
通話は爆撃隊にも筒抜けだろうことは、発信される通信の強さからも明らかだ。
通信はたった一文。

「貴軍に感謝する。これより貴軍陣地に向かう」

貴軍――つまり、米軍だ。
日本軍が米軍陣地に逃げ込む。
米軍はそれを受け入れた。
そう、判断して構わない内容だ。

通信士官の報告は、即座に爆撃隊隊長機の通信士官経由で、後方の司令部に通報され、爆撃隊はすぐに新たな指示を受け取った。

「当該戦域に展開すると思われる日本軍に協力する米軍陣地を攻撃せよ」

爆撃先導機の通信士官は、これを当然だと思った。
米軍は戦闘を停止したと宣言したが、実際はどうだ？
日本軍を自国陣地へと導いているではないか。
これが利敵行為でなくてなんだ？
裏切りでなくてなんだ？
だから、米軍はやっぱり敵なんだ。
通信士官はそう判断すると、通信文を機長へと送った。

度肝を抜かれたのは、ステラ達米軍だ。
突然、ジャングルの向こうから戦闘しつつ、こちらに向かってく

る一団が現れたのだ。
白いメサイア。
そして――中華帝国軍。
あらぬ方角からは爆音を轟かせて爆撃機の大編隊だ。
「な、何だ!?」
狼狽する米兵達。
その間近に、流れ弾が着弾、トラックが数台吹き飛ばされた。
「敵だ!」
「総員、騎乗!」
サイレンが鳴り響き、兵士達が持ち場に向けて駆け出す中、ステラも座っていた椅子を蹴り、愛騎へとむかって駆けだした。
コクピットめがけて地面を蹴った時、丁度、イルマがMCL（メサイア・コントローラー・ルーム）に乗り込むところだった。
「イルマ、行けるわね!?」
コントロールユニットを引き出しながら、ステラがイルマに怒鳴る。
「システムはすべてアイドル――コンバットモード引き上げ!」
「さっすが私の女房!」
「どうも――各騎、順次、起動開始!」
「よし!部隊全騎、起動終了騎から戦闘態勢に移行!続けっ!」

「よしっ!」
“帝刃（ていば）”を一刀のもとに切り捨てた瀬音が歓声を上げた。
「寝床が見えたぞ!」
接近する米軍陣地。
ジャングルを切り開き、土嚢を積んだ粗末な陣地だが、そこに立つグレイファントム部隊が、何だか心強い。
「後は一気に行けっ!」
「はいっ!」

「司令部、どうするんだ！？」
「とりあえず威嚇射撃しろ。陣地に近づけるな！現在、ムスタング部隊が上空支援のため発進している！」
「了解！――――各騎、イエローデビルを狙え！共に戦ったよしみだ、ジャップに当てるな！？」
「ま、待て！ステラ！全部だ全部！」
「だから、イエローデビル全部を近づけなきゃいいんでしょう！？」

白雷、初陣

「よしっ！そのまま突っ切れ！」
後藤の率いる部隊は、米軍陣地を飛び越え、その裏手に強行着陸した。
ザザザッ！
強行着陸の振動がＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を揺るがす。
振動が終わっても、誰一人として声をあげる者はいない。
ただ、目を固くつむって黙りこくる者達がいるだけだ。
「ふぅっ」
後藤でさえ、ため息一つつくのに気の遠くなるような時間が必要だった気がした。
「艇長、機体の損害は？」
「損傷なし。オールグリーン」
「よし……各騎のステータスは？」
「第一、第二、共に戦闘可能……ただし」
オペレーターが震える声で報告した。
「第三は……反応なし。シグナル途絶状態」
「……わかった」
ようやく自らの任務に戻りつつあるオペレーター達の背後で、後藤は言った。
「米軍はどう動いている？瀬音少佐、見えるか？」

「すごいことになってますよ」
その光景を前に、瀬音はそう言うしかなかった。

体勢を低くしてシールドを構える瀬音達の目の前は文字通り凄いことになっていた。

グレイファントム部隊と“帝刃（ていば）”や“帝刃（ていば）”、さらに“ロンゴミアント”が入り乱れての大乱戦。

上空からはランカスター爆撃機が爆弾を投下し、どこから飛んできたのかＰ－５１　ムスタングとモスキートが空中戦を繰り広げている。

地上ではロボット同士が戦い、レシプロが宙を舞う。

出来る悪いＢ級ＳＦ映画でさえやらないだろう無茶苦茶な光景としか言い様がない。

「はらぁ……」

瀬音騎の“眼”から送られてくる映像を前にしては、さすがに後藤もコメントをつけることさえ出来なかった。

「まぁ――ここまでやるとは思ってなかったけどね」

「後藤中佐」

通信オペレーターが報告した。

「米軍が支援を求めています」

「俺達に？」

「場所代払（しょばだい）えと」

「成る程？」

米軍陣地からは歩兵や負傷兵を満載したＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）達が続々と超低空飛行でこちらに逃げてくる。

「ま、考え方によっちゃ、俺達が蒔いた種だもんなぁ」

「それ以外に、この状況をどうとれと？」

三枝はあきれ顔だ。

「いいでしょう？」

後藤はいたずらっぽくウィンクまでした。

「米軍の戦闘停止放棄と引き替えは帝国にとっても大歓迎だからね？」

「まぁ……それは」
「艇長、米軍に紛れる格好で移動する。部隊全騎、戦闘許可。喰いまくれ」

「っしゃあっ！」
歓声をあげたのは都築だ。
「四方八方敵ばっかり！食い放題だ！――――隊長っ！」
斬艦刀を抜いた都築は命令を待つ。
「そうがっつくなよ」
対する瀬音は冷静さを崩さない。
「真理、中豪どっちからやる？」
「両方敵です」
「じゃ、手当たり次第、いきますか」
「そういうことで――――各騎、行けるな？」
「はいっ！」
「よし――――全騎、続けっ！」

ガインッ！
「何だっ！？」
突然の衝撃に、転倒を避けるのがやっとだった“帝刃（ていば）”の騎士は、驚いて騎体を見回した。
気づけば左腕が吹き飛ばされ、腕の根本からこぼれるオイルが火花に引火し、燃え始めていた。
周囲には、同様の攻撃を受けたらしい僚騎が2、3騎、倒れていた。
「ば、ばかな！？」
“帝刃（ていば）”のシールドや装甲は、反応弾攻撃でさえ防ぐ。

彼自身、オーバーだと思うが、上官達は口々にそう言って胸を張っていたし、これまでの戦闘でも、戦車砲の直撃でさえしのいでくれた。

それが、たった一撃で腕ごと粉砕されたのだ。

とても信じられない。

「いっ、一体？……何だ？」

煙を上げる左腕損傷を告げる警告がひっきりなしに鳴り響く中、騎士は事態を把握しようと必死になって周囲を見回した。

「被害は！」

「左腕、肩部付近から脱落！損傷大！」

「何の攻撃だ！」

「ＭＬ（マジックレーザー）です！」

「馬鹿なっ！どこの誰からだ！？」

動く右腕で青龍刀を構え、新たな攻撃には備える。

「１０時方向！出力から推定して大型巡航艦の主砲、３００ミリ級！」

「３００！？巡航艦どころか、軽戦艦並だぞ！？――こちら張！左腕大破、後退するぞ！」

「攻撃、来ますっ！」

「なっ！？」

ドンッ！

喉元に命中した一撃は、“帝刃（ていば）”の胸から上を吹き飛ばした。

「張騎被弾っ！」

「ひっ、飛行戦艦でも持ち込んだのか！？」

居合わせた中華帝国騎士達には、原因がわからない。

“帝刃（ていば）”を一撃で葬り去ったのは間違いなくＭＬ（マジッククレーザー）攻撃。

だが、そんな破壊力のある大口径ＭＬ（マジッククレーザー）砲は、飛行戦艦の主砲程度のはずだ。

なら、張は何にやられた？

飛行戦艦？

違う。

攻撃は、正面からほぼ水平に飛んで来た。

その彼らの前に、新たなＭＬ（マジッククレーザー）攻撃を放ちながら突撃してきたのは、彼ら中華帝国軍騎士の誰も見たことのない、白いメサイア達。

美奈代達だ。

白いメサイア――“白雷（はくらい）”達の中で最も先陣を切ったのは、美晴とさつきの2騎を従えた神谷騎だった。

長物を構え、すばやく敵の配置を確認。

「柏、早瀬――食い放題だ」

「太ってもいいですよね♪」

「美晴。山崎に嫌われるよ？」

３騎により初の犠牲者に選ばれたのは、三騎フォーメーション（トライアングル）で迎撃体勢に入った“帝刃（ていば）”達だ。

神谷は、３騎の真ん中に“白雷（はくらい）”を飛び込ませると、

「しゃあっ！」

奇妙な声と共に薙刀を一閃した。

ブンッ！
衝撃波に近い音を立て、薙刀が3騎を襲う。
無謀とも言えるたった一撃だが、効果は絶大だった。
美晴騎を取り囲む“帝刃（ていば）”達が装甲をたたき割られ、文字通り吹き飛ばされた。
「さすがに――――やるっ！」
神谷騎のすぐ横に展開したのはさつきだ。
槍のリーチを活かした連続した突き技を繰り出し、ほぼ同時に“帝刃（ていば）”2騎を仕留めていた。
「私もっ！」
ギンッ！
背後から襲いかかる“帝刃（ていば）”から振り下ろされた青龍刀をかわし、美晴はためらわずにシールドのエッジを叩き付けた。
ザンッ！
エッジを脇腹に喰らい、体勢を崩した“帝刃（ていば）”の胸部装甲の隙間に、さつきの放った槍の穂先が根本まで突き刺さった。
“帝刃（ていば）”の動きが止まり、その場に崩れ落ちた。
「7時からっ！」
MC（メサイアコントローラー）の警告に、美晴は舌打ちした。
「さすがに戦慣れしているっての！？」
振り返った背後には、斧を振りかぶった“帝刃（ていば）”がいた。
「――――くっ！」
とっさにシールドを構えた美晴の目の前で、“帝刃（ていば）”の胴体が何かに真っ二つにされた。“帝刃（ていば）”の上半身が、切断された勢いで宙を回転し、地面に落下した。
「大丈夫ですか？」
「山崎君っ！」
「美晴さん、背後が薄いですから、注意してください！」
「了解っ――――！！」
美晴はとっさに薙刀を投擲した。

薙刀は、山崎騎の横をかすめ、その背後に迫る“帝刃（ていば）”の頭部に命中した。
山崎騎の斧がその“帝刃（ていば）”の両脚を薙ぎ払ったのはその直後だ。
「……人のこと言えないね」
「……すみません」
「お互い、背中護りながらでいい？」
「……はい」
山崎はバツが悪い思いでそう返答した。
「山崎君？」
「……はい？」
美晴は笑顔で言った。
「さっきの、カッコよかったよ？」

「泉っ！」
「ああ、いくぞっ！」
神谷達が開いた突破口をくぐり、都築と美奈代は、斬艦刀を構えたまま“帝刃（ていば）”の群れに襲いかかった。
「１１騎の大集団だ、無茶するなよ！？攪乱するだけでいい！」
「ああ。泉こそ気を付けろよ！？――喰らえっ！」
ギィンッ！
上段から振り下ろされた都築騎からの一撃を、“帝刃（ていば）”がかろうじて受け止めたが、
「ぐうっ！？」
“帝刃（ていば）”の騎士は驚いて目を見張った。
剣の一撃が信じられ中程重い。
いや、重すぎる。
ズガンッ！
ギャンッ！
ビビビビビビビッ！

ビーッ！ビーッ！

脚が地面にめり込み、関節が一斉に悲鳴を上げ、コクピットをアラームが鳴り響く。

「ば、バカなっ！」

相手は日本製だ。

信頼性が低く、模造品しか作れない劣等民族の作るものなんて、みんな駄作だ。

駄作だから、我が祖国ではどこにも売っていない。

彼はそう教わってきたし、日本製品なんて見たことさえなかった。

なぜなら、それは日本人が、光輝ある中国臣民が使うに足る価値のある物を作れないから――。

そんな日本人の作った欠陥メサイアなんて恐るるに足らないはず……。

彼は、それを信じたかった。

だが――

その“欠陥メサイア”相手に栄光ある“帝刃（ていば）”が押されている！

中華至上主義を叩き込まれて来た彼には、目の前で起きている事態が信じられない。

否、受け入れられなかった。

「あ、あってはならんことだぞ！？う……ウソだ！こ、こんなのはウソだ！」

彼は恐怖に叫んだ。

「し、小日本（シャオリーベン）が……こんな！こんなバケモノを！？」

ギギッ！

「関節部、危険領域！」

関節部の監視センサーが一斉に警告をあげ、ＭＣ（メサイアコントローラー）が叫ぶ。

「このままでは関節が破壊されます！」

ＭＣ（メサイアコントローラー）が怒鳴るが、騎士にとって問題は、首もとまで近づいてくる剣の方だ。

「作れるはずがないっ！作ってはならないんだっ！」
コントロールユニットを力任せに操作するが、剣そのものが破壊されようとしているのが目の前に映し出される。
特殊セラミック製の青龍刀にヒビが入り、その刃が崩れ始める。
「青龍刀が！？な……なんてパワーだ！」

「新型か！？」
「パワー出力他、“ロンゴミアント”とは違いますっ！」
皆が目の前に立ちはだかる重装甲を張られた騎体の正体を知らない。
見たことすらなかった。

豪州が中華帝国経由で入手したロシア軍旗騎“ローマイヤ”のデータを元に、宗主国である大英帝国に無断で開発したのが“ロンゴミアントＯＯ（ダブル・オー）”
ダブル・オーはシャチの学術名であるＯｒｃｉｎｕｓ　Ｏｒｃａ――「冥界よりの魔物」がその開発コード。
――いわば、英国の保有する技術（無論、この中には米国の技術も含まれる）によって改良された“ローマイヤ”と言える。
そんな厄介者と自分達がぶつかっていることを、誰一人として知らないのだ。

「長野、瀬音、戦況は！？」
「３騎撃破」
一刀の元に“ＯＯ（ダブルオー）”を仕留めた長野は、泰然とした声で答えた。
「損傷なし」
「こっちも３騎」
“ＯＯ（ダブルオー）”の喉部に剣の切っ先を突き立てた瀬音も同様。
「神谷」

「問題ありません」
複数の“ＯＯ（ダブルオー）”を相手に、シールドと薙刀だけで渡り合う神谷中尉は冷たく答える。
「敵は――雑魚です」
槍を振り回しながら接近する“ＯＯ（ダブルオー）”達の一撃をシールドで防ぎ、刹那の瞬間をもって薙刀を敵騎の装甲の薄い部分に突き刺す。
右下胸部装甲の継ぎ目――脇の下から入った薙刀の切っ先が、左肩の装甲を内部から突き破った。
神谷は、ほんの一瞬、薙刀の切っ先に伝わった鈍い感触で、コクピットの騎士を潰したことを理解した。
「ちっ……薙刀がさびる」
“ＯＯ（ダブルオー）”は、“白雷（はくらい）”の薙刀につり上げられる格好で、脚が地面から浮いたままだ。
舌打ちした神谷の脳裏に、“ＯＯ（ダブルオー）”の頭部――ＭＣＬをＭＬで潰そうという考えがよぎったが、やめた。
自分の美学に反する。
それだけの理由だ。
軽く首をふった神谷は、二宮に言った。
「ついでに、搭乗者はオージーではなく、チンクだと思います」
「チンク？」
襲いかかる槍を難なくかわし、“ＯＯ（ダブルオー）”の懐に飛び込むと、斬艦刀で胴をなぎ払った二宮が神谷の言葉をわかりやすい言葉に翻訳した。
「中国人が？」
「そうです」
神谷は、“ＯＯ（ダブルオー）”が突き刺さったままの薙刀を振り回し、未だ戦いを諦めようとしない残存の“ＯＯ（ダブルオー）”達めがけて、“ＯＯ（ダブルオー）”の残骸を投げつけた。
仲間の残骸を叩き付けられた“ＯＯ（ダブルオー）”達が狼狽しているのは、その動きから明らかだ。

「後でコクピットを確認してください。私の経験では、中華帝国軍皇帝親衛軍の槍術部隊と動きがそっくりすぎます」
「オージー共が教えてもらったとは？」
「ありえません」
神谷は言った。
「槍の動きは一朝一夕で得られた動きではありません」
「……了解」
足下に転がる“ＯＯ（ダブルオー）”の残骸。
その装甲の隙間からは煙が立ち上っている。
内蔵した冷却系機器を破壊され、熱暴走が始まっている証拠だ。
こうなればコクピットの断熱効果なんて無いに等しい。
コクピットにあるのがオーストラリア産か中国産か。ハッチを開けば、いずれかの人間の丸焼きが出てくることになる。
戦場で幾度見ても慣れることの出来なかった死体達を思い出し、二宮は眉をひそめた。
戦況モニター上。
後ろから“帝刃（ていば）”達を相手にしていた教え子達が合流しつつある。
グレイファントム達も、包囲網を広げつつある。
退路をふさがれつつある敵は目の前。

その敵に、

――逃げろ。

二宮は内心で念じた。

――お前達はよくやった。
――これ以上は無駄死にだ。
――だから、逃げろ。

煙幕弾（スモーク）と、攪乱弾（ジャマー）を展開して遁走する。
それでいい。
そうするんだ。

二宮はそう願ったが――

ピーッ！

「敵、来ますっ！」

「バカがっ！」

槍を振りかざしながら迫る敵に、二宮は吐き捨てるように叫んだ。

「死に急ぐのは――」

突き出された槍をかいくぐり、左手で脇に挟み込む。
そのまま突進してくる敵の勢いを借り、斬艦刀を“ＯＯ（ダブルオー）”の騎体の根本までたたき込んだ。
斬艦刀のエルプスが“ＯＯ（ダブルオー）”の装甲を融解させ、かつて装甲だった金属が滴となって地面に落ちる。

「愚か者のすることだぞ……バカが」

ドガンッ！
斬艦刀から手を放し、“ＯＯ（ダブルオー）”をシールドで殴りつける。
斬艦刀を腹に突き刺されたままの“ＯＯ（ダブルオー）”は、そのまま地面に倒れ、動かない。

斬艦刀を引き抜く時も自分包んで放さない不思議なむなしさを感じながら、二宮は周囲を見回した。
長野と瀬音、神谷がそれぞれ“ＯＯ（ダブルオー）”を仕留め終えたところだった。

内蔵された弾薬にでも引火したのだろう。
“ＯＯ（ダブルオー）”の残骸が小さく爆発する。
先程まで、米軍を脅かしていた“ＯＯ（ダブルオー）”達はすべて地に伏している光景を前に、二宮は勝利の喜びを感じられずにいた。
「敵、全滅」
「……よし」
唯の報告に、二宮は深い安堵のため息をついたが、
「後藤隊長からです」
その一言に、動きを止めた。
まだ早い。
指揮官として気を抜いていいところではないと気づいたからだ。
「うむ」
襟元を正し、唯の言葉を待つ。
「全騎移動。ポイント7で交戦中の風間騎の救援に向かえ――以上です」
「交戦中？」
二宮はギョッ。となってモニターに映る唯を見た。
「はい」
唯の操作で戦況モニターが広域のそれに切り替わった。
「ポイント7。ここから６０キロの地点で風間少尉騎が敵と交戦中」
「数は？」
「一騎です」
「風間が一騎に手こずっている？」
二宮は驚いて戦況モニターと唯を交互に見た。
「おい真理」
瀬音から通信が入った。
「お姫様がお困りだ――こりゃ、ヤバいぜ？」
「瀬音少佐。風間が手こずる相手とは？」
「はっきり言ってやる」
瀬音は真顔で言った。

「それだけで――人間じゃねえ」
本当に、そう言ってのけた。
「あのお姫様相手に渡り合うなんて、俺か水瀬閣下に麗菜殿下、あとはラムリアースのナターシャ殿下がいいところだ」
「それほどの相手？少佐、心当たりは？」
「俺が二人存在するか、水瀬閣下が魔族のオンナにひっかかったとでも言わない限り、敵ははっきりしてるさ」
「……つまり」
「相手はメースってこと！」
「全騎、集まれ！」
瀬音の言葉にハッ。となった二宮は、弾かれたように部下達に命じた。
さすが“白雷（はくらい）”というべきか。
ヒヨコたちが成長したというべきか。
全騎が無傷で二宮の前に集まった。
「風間を助けに行くぞ」
「風間が！？」
「と、祷子、やられたんですか！？」
「まだよ！」
二宮は言った。
「でも、いくら何でも危険すぎる！」
「教官！」
美奈代が言った。
「行きましょう！」
「ああ！」
二宮は強く頷き、コントロールユニットを握った。
「全騎、ポイント7へ移動する！続けっ！」

祷子ｖｓカヤノ

ギィンッ！

ビーム同士が激突し、激しい爆発を引き起こしたのを合図にしたように、ホバーの推進圧で木々をなぎ払いながら移動した2騎が、ブースターを開放し、ジャングルから飛び出す。

熱帯特有の強い日差しの元、ジャングルから舞い上がるのは、白と黒の2騎。

共に銃をホルスターに納め、居合いの要領で光剣を抜く。

すれ違い様、光剣のビーム同士が再び激突し、激しいスパークが発生する。

「ちっ！」

「やるっ！」

すれ違う敵を睨みながら、舌打ちするのは、祷子とカヤノだ。

すでに何回目の斬り合いか、二人とも忘れるほど激しく二人はぶつかり合っていた。

ズンッ！

慣性制御のきいたコクピットに収まっていても、舌をかみそうな振動に耐えたカヤノは、ヤクトエッジの武装をビームライフルに切り替えながら、即座に横っ飛びに移動した。

振り向くことさえしない。

そんな余裕がないことを、カヤノ自身がわかっていたからだ。

神速というべき移動を見せるヤクトエッジの残像にビーム弾が何発も命中する。

自分の判断に内心で感謝しつつ、カヤノは騎体を敵へと振り向かせ、ビームライフルを放つ。

「何てヤツ！」

放ったビーム弾が喰らったのは敵の残像でしかなかった。
「避けたっ！？」
それに驚愕の表情を浮かべたのは祷子だ。
「あれで！？」
「来ますっ！」
「ちっ！」
騎体をビーム弾がかすめ、ビーム弾の通過痕にそって、木々の緑が抉られる。
「らちが明きませんね」
「明かなきゃ明けるまでです！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）の水城恵美子からそう言われた祷子は、ちょっとだけ口元をゆるめた。
「ごもっともです」
ビームの撃ち合いではらちが明かない。
明かないから明ける！
祷子は光剣を抜き、騎体を突撃体勢をとらせた。
「そういうの――嫌いじゃないです」

白いメサイアが迫る。
「このおっ！」
ビームライフルをフルオートで乱射する。
撃破なんて、カヤノ自身、考えていない。
敵の動きを止めるだけ。それだけが狙いだ。
だが――
「うそおっ！」
カヤノは悲鳴を上げた。
白いメサイアが、弾をかいくぐってる！

「来るな！来るなぁぁぁっ！」
カヤノは叫びながらビームライフルの引き金を引き続ける。
毎分数千発を誇るフルオートで乱射されるビーム弾の雨を、敵は容易にかいくぐってくるのだ。
そして、敵の剣がカヤノを襲った。
「きゃっ！？」
メースとリンクしている右腕にしびれたような痛みが走る。
敵の一撃がビームライフルを切断したのだ。
とっさにビームライフルを手放し、シールドを構える。
ドンッ！
ビームライフル内部に残っていたエネルギーが誘爆し、すさまじい爆発が発生する。
「ぐっ！！」
ヤクトエッジのコクピットで、カヤノは感心したように言った。
「人間の技術は……ここまで」
人間界の技術は、魔族に近づきつつある。
それは驚嘆すべきことだ。
だが、それだけに悲しい。
「……何で」
カヤノは、ヤクトエッジと同調した四肢に力を込めた。
ギュィィィンッ！
ヤクトエッジのパワーがアイドルモードからコンバットモードへ引き上げられ、エンジンが咆哮をあげた。
「それだけの技術（ちから）を！」
光剣を抜きはなち、一気に敵との間合いを詰める。
一瞬で音速を超えた突撃。
敵がそれに対応できているとは思えない。
いや――――
今のカヤノにとって、そんなことはどうでもいいことだ。
「何で！」

光剣を敵の頭めがけて振り下ろす。
頭を割られる寸前で、敵は身を翻し、光剣は敵のシールドの先端を切断するのがやっとだった。
今のカヤノにとって、その一撃は、失われた命の怒りだ。
人間の技術に奪われた罪のない生命の無言の叫びだ。
それをかわされたことに、カヤノは激怒した。
「逃げるなっ！」
下からすくい上げるような一撃から、力任せに袈裟斬りへと切り替えるという、半ば光剣を力任せに振り回すような力業を繰り出した。
「これだけの技術（ちから）を！」
ギィンッ！
ついに敵が剣を交えた。
コンロトールユニットがその衝撃を伝えてくる。
骨まで響く衝撃に、一瞬、顔をしかめたカヤノが叫ぶ。
「どうして！」
ギィィィンッ！
カヤノの怒りに満ちあふれた操作に従い、ヤクトエッジは力任せに敵を押す。
交わった光剣は、徐々に敵へと迫っていく。
「どうして！」
ギュィィィンッ――――ドンッ！
形勢不利と判断した敵騎からＭＬ（マジックレーザー）が放たれ、カヤノは寸前でそれをかわすと、騎体をかすめるＭＬ（マジックレーザー）にひるむことなく、後退する敵に襲いかかる。
「自然のために使わないんだぁぁぁっ！」
敵は恐るべき性能だ。
祷子は正直、舌を巻いていた。
パワー、スピード、ついていくのがやっとだ。

もうすぐ限界が来る。
「こんなのが何十騎と揃ったら！」
「少尉！」
水城中尉が怒鳴る。
「いつまでもこうしているワケにはいきません！」
「わかってますっ！」
「なら、どうするんです！」
「とりあえず……」
祷子は、一瞬だけ躊躇して、コントロールユニットを動かした。
「こうしてみますっ！」

「懲りずにっ！」
シールドを構え、光剣をひっさげて突撃する敵騎。
その数は1騎。
たった1騎のはずが――
「――えっ？」

カヤノの眼には、敵騎の数が4騎に映った。
4騎？
「違うっ！」
カヤノは自らの眼を疑い、即座に疑いを否定する。
全く同じ騎体が突然複数出現したかと思うと、自分めがけて襲いかかってきたのだ。
「残像（パラレル）っ！」
迫り来る敵騎が、同時に光剣を振りかざす。
その統一された動きこそが、残像――分身の術であることをカヤノに教えてくれる。
「……」
カヤノは、振り下ろされる剣を全く避けようともしなかった。

ただ、じっ。と、襲い来る敵をみつめる。
そして――
「そこっ！」
振り下ろされる刹那の瞬間、カヤノは敵を見切った。
ギィンッ！
光剣同士が再び交わり、互いの動きが止まった。

「やるっ！」
褄子は敵を睨み付けながらも、内心で舌を巻いた。
「これでもダメなんて！」

「このバケモノっ！」
「よくも言いましたね！？」
「っていうか、誰と話しているんです！」
「ご都合主義にツッコミ入れないでくださいっ！」
わずかな力押しの後、二騎は再び離れ、再び激突した。
光剣がぶつかり合い、離れ、再びぶつかり合う。
その繰り返しだ。

「いい加減に！」
カヤノがいらだった声で怒鳴る。
「落ちろっ！」

「受験生が聞いたらどう思うんですっ！」
褄子がその一撃をシールドでさばき、光剣を突き出す。

「知るもんですかっ！」
カヤノが騎体をひねって紙一重でかわす。
「落ちるヤツは落ちる！すべては自己責任よっ！」
光剣から手を放し、腰にマウントしていた速射砲を抜きざまに乱

射する。
「ずるいっ！」
急速移動で回避をかけるが、数発がシールドを貫通し、騎体をかすっていく。
「飛び道具禁止っ！」
いいつつ、祷子もビームライフルで応戦する。
「弥生」
水城中尉は弥生に問いかけた。
「敵の力をどう思う？」
「マスターと拮抗しています」
弥生は澱みのない声で言った。
「拮抗しすぎていて、勝負になりません」
「やっぱり、そう思う？」
「騎体各部の関節の加熱上昇率４５％。危険域まで１５％」
「友軍は？」
「現在、こちらへむかって移動開始。ただし」
ピピッ。
弥生が水城中尉の目の前で戦況モニターを指さした。
「豪州軍飛行艦隊も接近中。レーダー索敵波を感知」
「潮時ね――風間少尉」
「はい？」
「撤退します」
「えっ！？」
「らちが明きません。後方から豪州軍が接近中。この騎のデータをとられるワケにはいきません」
水城中尉の言いたいことは祷子にもわかる。
敵は、この一騎だけじゃないんだ。
「り、了解！」

祷子は弥生に命じた。
「弥生ちゃん、煙幕、攪乱弾展開！」

「なっ！？」
敵騎から突然放たれた白煙を回避したカヤノの耳に、バラライト隊長からの通信が入る。
「カヤノ！」
「隊長！？」
「後退しろ！この地域からの撤退命令が出た！」
「り、了解！」

敵の反応は遠ざかりつつある。
なら、自分が撤退しても問題はない。
カヤノはそう判断した。
「次は絶対に――――！」
ヤクトエッジのブースターが開かれ、黒い天使が空に舞い上がった。

狗と飼い主と

「まぁ。派手にやりましたなぁ」

米軍将校と共に、戦場と化した米軍陣地を歩く後藤は、感心したように言った。

後藤の目の前で、何騎ものベルゲ騎が擱座（かくざ）したグレイファントムや“赤兎（せきと）”の回収に当たっている。

時折、散発的に銃声が響く中、後藤は米軍将校に案内される形で、陣地を歩いていた。

「日本軍の」

後藤を案内する米軍側情報将校、ライアン大佐は後藤の襟元の階級章に気づき、言い直した。

「失礼、近衛軍（インペリアル・ガーズ）の協力には感謝しています」

「いやぁ」

後藤は頭をかきながら言った。

「こっちこそ、迷惑かけちゃって」

「いえ」

後藤のよくて軽妙、悪く言えば軽薄な声に何も感じる所がないのか、ライアン大佐は後藤をちらと見た後、視線を間近に擱座（かくざ）するグレイファントムに向けた。

斧で胸部装甲を割られた痕が生々しく残るそのグレイファントムの手には、折れた斧が握られている。

そのグレイファントムの足下には、頭部に斧をめり込ませた“赤兎（せきと）”の残骸が転がっていた。

共にコクピットハッチはすべて開かれ、中から騎士やＭＣ（メサイアコントローラー）の死体が運び出されている最中だった。

「私も」

ライアン大佐は足を止めた。

「政府の突然の戦闘停止命令には到底、同意出来なかった一人です。

むしろ、その破棄の口実を与えてくれたことに感謝しています」
その口元は、皮肉に歪んでいた。
「中佐のあの電文には、正直参りましたが」
「ああ、あれですか？」
「貴軍に感謝する。これより貴軍陣地に向かう――取り方によってはどうとでもとれますから」
「いやね？」
後藤は言い訳のように言った。
「“いてくれてありがとう”て意味で貴軍に感謝する。これより貴軍陣地へ向かう“けど、撃たないでください”って意味だったんですけどね」
「省略しすぎましたか？」
「そういうことです――ところで」
後藤達の横を、負傷兵を乗せた担架が運ばれていった。
「その結果が」
後藤もグレイファントムの残骸を見上げる。
「この犠牲じゃ、いくらなんでも、割に合いますか？」
「いずれは支払うべき犠牲でした」
ライアン大佐の声は、どこか自分に言い聞かせているような口調だ。
「正確な数字は出ていませんが……この数時間の戦闘における連合軍側が支払った犠牲は、東南アジア戦線全域で3千人に達するものと考えられています」
「……」
「たったというべき数字ではありませんが――犠牲者の数字は、扱いが難しいですよ」
「――ですね」
後藤の前に転がる“赤兎（せきと）”。
そのMCL（メサイア・コントローラー・ルーム）のハッチから引き出されたのは、血まみれの女性の死体。

長い髪が血でべったりと体に張り付いていた。
後藤の目の前で、死体の横に立つ米兵が、腰のホルスターから拳銃を抜いて撃った。
2発を受けて動かないことを確認した兵士同士が頷き、両手両足を二人がかりで持ち上げ、振り子の要領で、女性の死体を“赤兎（せきと）”の頭部から地面へ向けて放り投げる。
グシャッと嫌な音を立てて、死体が地面に落ちる。
かなりの骨折を負っていたのか、手足が奇妙な向きで落ちていく死体を前に、後藤はぼんやりと眺めるしかなかった。
“赤兎（せきと）”の下にいた別な米兵達が、死体の頭を蹴りつけると、待機していたトラックの荷台に死体を放り投げた。
トラックの荷台には、中国軍側騎士やMC（メサイアコントローラー）とおぼしき死体が半ば山のように積まれ、死体から流れ出る血が荷台からしたたっていた。
「枢軸側に与えた損害は？」
タバコを取り出すと、後藤は死体から目を背けるようにして火をつけた。
「我々の数倍は確実です」
一本、いただけますか？
その死体こそが戦果であるライアン大佐にそう言われた後藤は、頷いてタバコの箱を差し出した。
「何しろ、あなた方が中華帝国軍の飛行艦隊を全滅させたのですから」
「――――ああ」
紫雲をはき出しながら、後藤は思い出したように言った。
「そういや、そんなこともさせましたなぁ」
祷子にそんな命令を出したことを、後藤は本気で忘れていたのだ。
「ご謙遜を」
タバコから口を放したライアン大佐は、羨望にも似た顔だ。
「史上、艦隊を全滅させたメサイア部隊なんて聞いたことがありませんよ。一体、何騎でどのように戦ったのです？」

「いやぁ……」
成る程？
後藤はそれでわかった。
米軍が撤収しようとした自分達を止めたのは、やはり、米軍が申し出たベルゲ騎の支援要請だけでは決してなかった。
中華帝国軍第３機動飛行艦隊を文字通り全滅してのけた近衛軍の戦力と戦闘の詳細を知りたいのだ。
「これだけです」
興味津々という顔のライアン大佐に、後藤は指を１本だけ立てて見せた。
「たった、これだけで」
「……まさか！」
意味がわかったのだろう、ライアン大佐は肩をすくめると笑い出した。
「中佐はジョークがお好きだ！」
「本当のことですよ？たった一騎（これ）だけで、相手は全滅です」
「……」
後藤の言葉に、ライアン大佐は顔を引きつらせた。
「一体」
唾を飲み込んだライアン大佐の喉元の動きに目がいった後藤の前で、ライアン大佐が言葉を選びながら訊ねた。
「あのＦｌｙ　ｒｕｌｅｒといい……近衛軍は一体」
「ああ」
後藤は左手を左右にふり、否定を表した。
「あれは単に、パイロットが非常識なだけです」
「非常識？」
「――そうとしか言い様がありません」

「すごいわ！」
「大戦果だ！」
鈴谷艦内。
ＤＥＳＥＥＤの周りには、美奈代達、騎士やＭＣ（メサイアコントローラー）、そして整備兵が群がって祷子を出迎えていた。
無論、美奈代達の帰艦の際も整備兵達は歓声を上げて出迎えたのは事実だ。

撃破確実戦果
“赤兎（せきと）”１７騎
“帝刃（ていば）”２８騎
“ロンゴミアントＯＯ（ダブルオー）”１２騎

これが美奈代達の戦果。
まるまる２個大隊ほどの規模。
整備兵を含む鈴谷乗組員は、これを艦長である美夜が行った艦内向け戦果結果通達で知った。

たった１０騎で５倍以上の敵。
５７騎のメサイアを撃破。

文字通りの大勝利――――いや、“歴史的な”大勝利だ。
近衛軍があげたこの勝利を前に、兵として、日本人として、この戦果に興奮するなという方が無理だ。

その興奮を決定的な驚喜へと変えたもの。
それは、美夜が最後に告げた、祷子一人の戦果だ。

ＤＥＳＥＥＤが敵に与えた戦果。

撃沈確認、南沙級飛行空母3、寧波級巡航艦6
撃破確実“赤兎（せきと）”8騎
――以上。

なお、この戦闘により、中華帝国軍第3機動飛行艦隊は全滅したものと認められる。

たとえメサイアといえど、艦隊を全滅させた話は古今東西、聞いた試しがない。

メサイア1騎の攻撃により艦隊が全滅。

信じられない、奇跡的な戦果を聞いた兵士達の歓喜の叫びが、鈴谷艦内に響き渡った。

特に年の若い者達は踊り出さんばかりの勢いだ。

興奮した整備兵や仲間達にもみくちゃにされる祷子と水城中尉達。

その光景を、少し離れた所から見つめるのは、二宮だ。

じっと祷子を見つめる眼は、厳しい。

「どうした？」

ポンッ

軽く肩を叩かれて振り返った視線の先には、瀬音がいた。

「シワになるぜ？そんな顔してると」

「余計なお世話です」

さらに顔をしかめ、二宮はそっぽを向いた。

目の前で、宗像がどさくさ紛れに祷子の頬にキス。皆から歓声があがった。

「ちょっと……考え事をしていただけです」

「そうか？」

瀬音は二宮の横に立ち、祷子達を見た。
お祭り騒ぎのまっただ中にいる部下達を見る瀬音の眼は、優しい光に包まれていた。
「いいじゃねえか。せっかく生きて帰ってきた。戦果もあげた。これで何が不満だ？」
「そうじゃなくて」
「まるで部下を疑っているって眼だぜ？」
くいっ。
二宮の形のいい顎をとらえ、そっと自分の方に向けようとする瀬音。
その手を、二宮は乱暴に払った。
「セクハラで査問委員会に送られたいですか？」
「怖い怖い」
苦笑しつつ、瀬音は肩をすくめた。
「怖い怖い教官殿は、教え子の戦果を素直に認める度量はお持ちではありません」
「違います！」
二宮は厳しい口調で言った後、あわてて口元を抑えた。
「――ただ」
「ただ？」
自分の顔をのぞき込む瀬音への不快感をあらわにしつつ、二宮は答えた。
「戦果が異常すぎる……そう、思っただけです」
「別にいいだろ？」

瀬音は平然と言ってのけた。
「今、俺達に必要なのは、大戦果を上げてくれる仲間なんだから」
「……それは、そうですけど」
「確かに、おかしいとは思うさ」
瀬音は肩をすくめて見せた。
「たとえβタイプとはいえ、8騎が護衛する艦隊相手に一方的戦果をあげるなんて不可能に近いさ」
「……」
「でも、それでいいんだ」
「えっ？」
「それが出来る奴が仲間にいてくれる。それでいいんじゃないか」
「……」
「深く考えたって、どうしたって、何が変わる訳じゃないさ。なら、彼女がそれだけのことが出来るってだけでいいじゃない。それを受け入れるだけでいいんだ」
「少佐って」
二宮はあきれ顔で言った。
「本当に、何も考えていないんですね」
「そうだよ？」
瀬音は少しおどけてみせた。
「気づかなかった？」

「ふぇぇっ。参った参った」
士官室。
米軍陣地から戻った後藤が、二宮達を前に、パイプ椅子にふんぞり返った。
テーブルの上に投げ出された後藤の靴は、いつの間に履き替えたのか、サンダルにかわっていた。

「奴さん達、意地でも信じないんだもん。単騎で艦隊攻めたなんて」
「普通ですよ」
従兵からコーヒーを受け取りながら、長野はそう答えた。
「自分だって、戦闘記録を見るまで、まともには信じられませんでした」
「まぁね」
後藤はコーヒーカップを手にしながら頷いた。
「俺だって、戦闘情報ナマで見ていたけど、正直、信じられなかったさ。夢でも見ているんじゃないかって」
「それで」
一人だけコーヒーに手をつけない神谷が後藤に訊ねた。
「我々は？」
「俺達は撤収する方針。もう、メース達が撤収する以上、俺達がここでふんばる理由はない」
「一体、我々は何しに来たのですか？」
神谷はややあきれ顔だ。
「メース撃破を命じられ、まともにメースと戦ったのは二宮隊長だけ。それが」
「いいじゃない」
後藤は感心のない様子で、パイプ椅子を揺らした。
「1個飛行艦隊、メサイア2個大隊、これが戦果だよ。さすがに消耗に供給が追いつかないのか、中華帝国軍はスマトラ島から撤退した。オマケとしては十分すぎるさ」
「……了解」
「さぁ。悪ガキ共が浮かれている間に、オトナはオトナの仕事だ」
後藤はテーブルから足をどかすと、パイプ椅子に座り直った。
「魔族軍が“かなり派手な”動きを見せた」
「！！」

ザワッ
居合わせた皆の顔に緊張が走る。
「妖魔とメースの大部隊が移動中。敵の目的地は愛知県方面なのは確実だ」
「愛知？」
「ああ。東海地方の工業地帯を破壊して、人類側の抵抗力を削ぐつもりだろう」
「東海地方の工業地帯って」
「そう」驚いて目を見開いた神谷に、後藤は小さく頷いた。
「八式と烈風の組み立てラインがある。現在、第三中隊が防衛線張ってるけど、とても阻止出来る規模じゃない」
「しかし」
長野が首を傾げた。
「木曽方面は、大型妖魔主体の魔族軍にとっては障害の連続。あの複雑な山間部を」
「だからさ」
後藤は厳しい目で部下達を見回した。
「規模、種類。そんなあたりから判断すると、メースを露払いとして、メサイアや戦車部隊を掃討。小型、中型妖魔による飽和攻撃で撃ち漏らしを始末するつもりだろうさ」
「……」
「……」
言葉を失った部下達に、不適に口元を歪めた後藤は言った。
「――俺なら、そうするがね」
「……それで」
瀬音がやっとのことで口を開いた。
「近衛は」
「東海だろうが、関東だろうが、大都市部や工業地帯を叩かれたら終わりだ。こういう所は平地だからな。敵を地理的に阻止する方法がない。

だから――」
後藤は、口元をしかめ、部下をもう一度見回し、続けた。
衝撃の内容を、口にしたのだ。
「近衛は、意地でもそれを阻止する。
いかなる犠牲を支払ってでも。
どれほどの存在を危険にさらしても」
「……」
「……」
「……ん？」
長野が眉をひそめた。
「待ってください」
「ん？」
「どういう、ことです？“どれほどの存在を危険にさらしても”って」
「言葉通りさ」
「言葉通り？……わ、わかりません」
「俺達、近衛にとって、“絶対に危険に曝すことが許されない存在”が出るってことさ」
「……！！」
しばしの思案の後、目を見開いたのは長野だけではなかった。
「ば、馬鹿なっ！」
ガタンッ！
椅子を蹴って立ち上がったのは長野だけではなかった。
気が付けば、後藤以外の全員が立ち上がっていた。
「――まだ極秘中の極秘だ。他言しないでね？」
驚愕の視線を向けてくる部下達を前に、後藤はペースを崩さない。

「戦局は芳しくなく、国際的な歩調も整わない。八方塞がりの現状を憂慮された末のことだ」
「と、止めたんですよね？」
卒倒しかねないほど青くなった二宮の口から出る声は、震えていた。
「い、いくらなんでも！」
「――“近衛は狗”。そう自分達を揶揄するのは俺達だよ？」
「詭弁です！」
二宮は叫ぶように怒鳴った。
「そんな！そんなこと！まるで私達が！」
「――それはないと思いたいさ」
後藤はテーブルの上で手を組んだ。
「だけど、上には上の考え方がある」
「……」
「俺達の戦果が芳しくないっていうのは、その決断の背景にあるとは思う。だが、それを公言したり、暗喩するような態度とる人じゃないでしょう？」
「そ、それは……」
「ああ。当然、麗菜殿下も出る――でも、それだけじゃダメなんだ」
後藤は強い口調で言った。
「娘が戦場に出ているのに、東京の地下に籠もっているんじゃ、示しがつかないんだ。
それじゃ、この時局を、立場上、乗り切ることは出来ない。
誰も、ついてこない」
「我々はその代行者として！」
神谷がテーブルを拳で殴った。
その肩が震えているのは、決して痛みのせいではないことは、後藤自身がわかっていた。
「――上が決めたなら、俺達下っ端は、それに従うだけさ。

“笑って死ね”と言われれば、笑って銃口コメカミに押しつける。
――――そういうもんだろう？」
「……それで」
瀬音は顔を真っ赤にして言った。
「いつ、どこで？」
「それは俺にもわからんさ」
後藤は肩をすくめた。
「そこまで明らかにすることは、無駄に危険を増やすだけだ。おそらく、直前まで、場合によっては、コトが始まってから初めて明らかにされるだろうよ。
兵隊達どころか、世界がどう反応するか、俺は楽しみだよ」

「……あの」
瀬音が何か言う前に、後藤は言った。
「自分が生きていることに感謝しろ。
そして、何かが出来る立場に自分達がいることに感謝しろ。
――――俺達は今、歴史に立ち会おうとしているんだ」

「……」
士官室。
そこは今、二宮達の沈黙が支配する。
固い表情の部下に、後藤は続ける。
「日本開闢以来、未曾有の国難。そして、史上類を見ない“コレ”」
「……」
「……俺達は、最前線に配属される予定と通達が来ている。
もし、“あのお方”を危険に曝したくないと思うなら、そこで全

ての敵を阻止すればいい。それだけだ」

「――了解」

瀬音はそう言って頷いた。

「意地でも、死んでも、絶対に」

「よろしい」

後藤は小さく頷いた。

「ま、いい意味での歴史を作りましょうや」

「隊長？」

後藤の顔をじっと見つめていた二宮が口を開いた。

「ん？」

「この状況――楽しんでません？」

「おろ？わかる？」

沼津会戦　第一話

●葉月演習場

「せっかく戻ってきたばかりで何だけど、静岡方面では、富士宮市と富士市がすでに陥落。軍は沼津と清水からも撤退中――これで、日本は分断された」

“白雷（はくらい）”達を前にした美奈代達の耳に、紅葉の言葉が響く。

「状況は最悪だけど、まだ終わってない。終わらせるなら、私達にとってハッピーエンドにしなきゃいけない」

その通りだ。

美奈代はそう思う。

「何とかこいつが間に合ったから、持ってきた」

紅葉が指示棒で指し示すのは、“白雷（はくらい）”達の持つ武器だ。

「ＡＡ－４４試作速射３０７ミリ散弾砲――んで」

助手の白石がフォークリフトで運んできた巨大な筒。

「これが、その弾。口径は３０７ミリ。ちょっとした戦艦の主砲並ね。中身はいろいろよ？中型妖魔用の散弾、小型妖魔掃討用キャニスター弾、大型妖魔用スラグショット弾……弾の種類は、下手な軍用小銃顔負けなほど広いわ。

アメリカやラムリアースにも設計図渡して製造と評価を依頼している。

歩兵携帯用は、各国軍で配備が急ピッチで進んでいるわ。

メサイア代わりに、兵隊が１６分の１にダウンサイズされたコイツを持って戦う姿想像して頂戴。だいたい、そんなもんだから」

美奈代は、“白雷（はくらい）”の持つそれを見た。

まったく飾りらしいものがない、愛想のない直線デザインの銃。

そこにまるでめり込んだようにつけられた円筒状の物体。

そんな外見をしていた。

紅葉は説明を続ける。

「ドラムマガジンと通常のマガジンのセレクト式。だから、マガジン交換で使用弾薬が選択出来る。本来は対人、今回だけは小型妖魔掃討用の――言っても実感湧かないわね」

口での説明が先走り過ぎていることに気づいた紅葉は、無線機に怒鳴った。

「都築？いいからちょっと一発撃って！いい！？一発よ！？」

一騎の“白雷（はくらい）”が銃を構え、まるでそれが返事だ。といわんばかりにトリガーを引いた。

ドンッ！

１２０ミリ砲とは違う、桁外れの射撃音に、思わず美奈代は耳を押さえた。

何しろ口径は３００ミリ。

戦艦の主砲と同クラスだ。

間近に立っているだけで死を逃れることは出来ない。

おそらく、メサイアとの彼我の距離もギリギリといったところだろう。

そう判断した空気が振動となって美奈代を襲う。

不意に、父親に連れられて花火見物に行った時、炸裂した花火の音と衝撃に驚いた子供の頃を、美奈代は思い出した。

「単発で――あれ」

紅葉が親指で示した先には、コンクリートの壁。さらにその手前には無数の標的が設置されている。

そのうちの数個が、散弾の直撃を受けて吹き飛ばされていた。

「単発じゃ、普通の速射砲との違いがわかんないかなぁ……いいわ。最初に言っておく。この散弾砲は、セミ・オートのセレクト、トリガーの引き加減で選択出来る。一回引けばセミ、引き続ければオート――んで、単発でこうなら、フルオートではこうなる。都築？フルオート射撃」

ドン、ドドドドドッ！！

――まるで花火大会だ。

美奈代は耳を押さえながらそう思ったが、さつき達は別な所に気をとられ、そして唖然としていた。

コンクリートの壁と、その前に並んでいた標的は、射撃完了までにズタズタになっていたのだ。

「これ……元は」

乾いた声をあげたのは、宗像だ。

「対人海戦術対応の」

「そう――米軍のＭ１戦車採用の１２０ｍｍ滑腔砲Ｍ２５６用の散弾をベースにしたもの」

「元は……対人用」

一体、どんな状況でこんな非道なシロモノを使うつもりだったのか、美奈代は本気で制作者の人格を疑った。

「――そうよ？」

紅葉は満足げに頷きながら言った。

「中華軍の人海戦術に対抗する上では、戦車砲や機関銃の弾幕だけでは役不足――そこで開発されたのが、戦車砲搭載型の散弾……宗像准尉？」

「……今の、我々の状況にそっくりです」

「良く出来ました♪」

紅葉は満面の笑みで頷いた。

「ま、論より証拠よ。白石が夜なべ仕事で作ったマト相手に撃ってみて」

一時間後

「――ま、武器の有効性はわかってくれた？」

後藤が美奈代達の前で訊ね、二宮が答えた。

「非装甲兵器相手の近接戦闘ではかなりの有効性が期待出来るものと思われます」

「あっそ」

後藤は軽く頷いた後、言った。

「もう、こんなシロモノ渡されるからには覚悟出来てるとは思うけど……作戦を伝える。

本日１４００、小隊は沼津へ移動。明日０５００をもって同地点にて実施される国連軍反攻作戦に参加する。なお、同作戦主力部隊はラムリアース帝国とドイツ帝国軍となる。以上だ」

●沼津　国連軍陣地

上空から見た国連軍陣地は、かなり壮観だった。

巨大なメサイアがびっしりと並ぶ姿は、そうとしか言い様がない。

「うわ。“ロンゴミアント”がわんさかと」

「Ａ５じゃない。あの装甲Ａ６Ｍだよ？」美晴が感心した様子で言った。

「本国仕様騎、送り込んできたんだぁ」

「それだけじゃないな」

「宗像、何か見つけた？」

「ラムリアースはギャランホルンに……ああ、ナターシャ殿下がいるな」

「エンプレス・ローズが！？」

「ラムリアース軍先頭だ」

「うわっ！本当だ！エンプレス・ローズだ！」
「……んで？」
「だから美奈代……そうふてくされることないじゃん」
さつきはフォローするように言った。
「都築は都築で、新型騎の受領があるんだし」
「名誉だと思った方がいいですよ？」美晴が恐る恐るという感じで言った。
「ダンナ様が恐れ多くも陛下と操縦データが類似しているから、天皇騎のセッティングと受け渡し任務に当たれるなんて」
「……それで“白雷（はくらい）”は一時取り上げ、あいつは部隊任務を外れて津島中佐と。こっちはこっちでフル装備だからって、セッティングに時間が……」
……まったく。私は都築とほとんど話も……と、ブチブチ言い続ける美奈代。
「不可抗力だろうが？」割り込んできたのは宗像だ。
「今晩のお楽しみがダメになったのを恨むなら、あいつじゃなくて、自分の月に言え」
「……うっ」
「クスッ……何だ？そんなに欲求不満だったのか？」
「い、一大決心だったんだぞ？」
「ねぇ、宗像ぁ、月ってあの月？」
「……ああ、美奈代さん、今、そうなんですか？」
「う、うるさいっ！」美奈代は真っ赤になって怒鳴った。
「私だって女だ！何か文句あるのか！？」
「いえいえ」ニヤニヤした声のさつきが首を横に振った。
「ご愁傷様」
「――――っ！」
「マスター」“さくら”が首を傾げながら訊ねた。
「月って、お月様？」
「そうだそうっ！」

「……クスッ。うそつき」
「さくらっ！」
「部隊全騎っ！」
二宮の怒鳴り声が美奈代達の聴覚を強制的に奪った。
「女子校の遠足じゃないんだぞ！？」
「は、はいっ！」
「男くわえ込むヒマがあれば訓練に勤しめっ！泉っ！課題の提出はどうした！」
「わ、忘れていましたっ！」
「……おーい、二宮中佐」
「はっ！？」
「女教師（オールドミス）やってるんじゃなくて、他にすることあるでしょ？」
「し、失礼しました。後藤隊長……コホンッ。全騎、これより着陸する。我々は間借りしている身だ。頼むからもめ事は起こすな？」
「了解っ！」

駿河湾に展開した戦艦達の砲撃が、妖魔達を区画単位で吹き飛ばす。
爆装した烈風隊のナパーム攻撃が、妖魔達を生きたまま焼き殺す。
それでも、妖魔達の侵攻は止まることを知らない。

近づく物には波のように襲いかかり、全てを飲み尽くす。
遠くにある物は砲撃で吹き飛ばす。
人間が火薬の爆発を用い、魔族が魔力爆発をもって応じる。

それは――――爆発の応酬という、凄惨な殺戮劇だった。

「こちらデルタ小隊、敵の脚が止まらない！砲撃支援を頼む！」

「司令部よりデルタ小隊、現状、砲撃支援に回せる余力はない。自力で切り抜けろ」
「ふざけるな、全滅するぞ!?砲撃支援を!高海艦隊はどうした!」
「司令部よりデルタ小隊、独力にて現状を維持せよ。繰り返す――」
「シエラ小隊より司令部!どこ狙ってやがる!艦砲が近すぎる!測定をやりなおせ!」
「シエラ小隊、こちら艦隊司令部、通信が混線している模様。受信は当方でいいのか?」
「ホテル小隊及びベクター小隊へ。後退命令は出ていない。持ち場に戻れ!脱走と見なすぞ!?」
「こちらホテル2、ホテル・リーダー戦死!戦力はすでに半分を切った。ベクター小隊と合流させてくれ!」
「ベクター3より司令部。弾薬(タマ)をくれ!誰でもいいから、とにかく弾薬(タマ)を!弾薬の補給線が断たれたら後退するぞ!」

――しくじった。
美奈代は何度、そう思ったかわからない。
移動中に側面から接触したメースと斬り結んだのは、部隊を護るためだと言い訳も出来る。
だが、その結果として移動中の部隊からはぐれ、今では単騎で戦場のど真ん中に孤立していたのだ。
乱戦の中、近くに開いた巨大な爆発孔を塹壕(タコツボ)がわりにして逃げ込めただけでも運がいいと思う。
喉がカラカラに乾き、息をするだけで痛む。
目はモニターとスクリーンを行ったり来たりで瞼が引きつりそう。
体の節々が痛む。
「泉大尉」
索敵装置から目が離せない状態の牧野中尉から通信が入る。

「接近する騎が」
やはり場数が違うのか。
牧野中尉の声は落ち着いている。
美奈代は、自分がパニックにならずにいるのは、この声のおかげだと、内心で牧野中尉に感謝していた。
「敵ですか？」
「友軍騎、宗像中尉」
「宗像が？」
「――泉、生きてるか？」
人類と魔族――どちらの爆撃で開いたのかわからないが、メサイアがすっぽり入るほどの爆撃孔で戦っていた美奈代騎の横に滑り込んできたのは、宗像騎だ。
「宗像？」
「弾薬を持ってきてやった――そういいたいが」
メサイアが立って入れるほどの巨大な孔を開ける兵器が何かはわからないが、美奈代にとってはありがたすぎる代物だった。
美奈代はこの穴に立てこもる前に、近くに転がっていた“ノイシア”の残骸を引きずって砲撃よけの楯にしている。
即席の塹壕だ。
コクピットハッチが、騎士用、ＭＣ（メサイアコントローラー）用両方とも開かれていないことを、美奈代はあえて気づかないフリをしていた。
宗像騎が美奈代騎の横に移動し、散弾砲をノイシアの残骸の隙間に突っ込んだ。
「私も教官達からはぐれたんだよ。お前のすぐ後で」
「……そうか。よく無事でいてくれた」
「……」

宗像は、ちらりと美奈代騎がいつでも抜けるように地面に突き刺した剣を見た。
斬艦刀ではない。
間違いなく、魔族軍のメースが使う実剣だ。

美奈代騎の周囲は、散弾砲の空薬莢で足の踏み場もない。
その先に広がる戦場は、メサイアとメース、そして大型妖魔達の墓場と化していた。
差し違えたまま倒れている騎や、敵騎に馬乗りになって、敵の胸に剣を突き刺したまま擱座（かくざ）、背後から突き立てられた剣が貫通している騎もある。
別な騎は、胴体の半ばで切断され、下半身だけが立ちつくしている。
その中の一騎に、斬艦刀が半ばから折れた状態で突き刺さっていた。

まさに修羅の宴の後さながらだ。

並の戦いではなかったろうことは、それだけでわかる。

メースの残骸のかなりの切り口が、斬艦刀特有の融解痕を見せていることから、美奈代が宴の後、のこのこと、この場に迷い込んだだけではないことも、だ。

戦場を逃げ回っていた宗像は、目の前に広がる光景ほど、凄まじく凄惨な戦いの跡を見ていなかった。
宗像は、数百メートル手前で炎上するメースを、チラと確認して言った。
「泉？ここはオランダ軍がいたはずだ。戦闘開始時点で1個大隊が展開していたはずだ。どうなった？この辺では一番数がいる。私も

連中を頼ってきたんだが」
「――迷子になった私がここにたどり着いた時、丁度、最後の１騎が撃破された」
「何騎とやりあった？」
「その場にいた全部」
美奈代は小さ笑った。
「間が悪かった」
美奈代は言った。
「何騎倒したか、５から先は忘れたよ」
「２５騎です」
通信に割り込んできたのは牧野中尉だ。
「１対２５――逃げようかって、本気て思いましたけど、やってみるもんですね」
「よく生き延びたものだ」
「おかげでしばらく、全部の関節が異常加熱。このタコツボがなければ死んでました」
「私もトータルスコアが５０を超えた。泉は１００か？」
「――超えた。代わりにタコツボの中で震えていたよ」
「タコさんに感謝」
さくらが悪戯っぽく笑った。
「その後は――たった一騎でメースや大型妖魔達を歓迎するのに大忙しだ。何しろここは」
美奈代は、塹壕（タコツボ）の後ろに転がっている穴だらけのコンテナの山を指さした。
「国連軍の物資投下ポイントでもあるんだ。おそらく、敵も知っているんだ」
「散弾砲の補給は？」
「輸送機が投下していったコンテナの中に混じっていたよ」
足下には細長い、弾薬輸送用コンテナが転がっているのに、宗像は初めて気づいた。

「連中、投下ポイントを間違えたのか、投下途中に被弾して慌てたか――おかげで物資の大部分が向こう、敵の手に墜ちた」
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドはないか？」
「コンテナ投下中に火達磨だ。下にいたメースが2、3騎巻き込まれたよ」
「……」
美奈代は笑いながら言った。
「びっくりしたなんてもんじゃない！」
「……だろうな。投下してくれた輸送機は？」
「翼端を吹き飛ばされたのを見たが、機体には喰らっていない。きっと、上手く脱出してくれたろう」
マガジンのぎっちり詰まったケースを開き、美奈代は小さく笑った。
一人でも近くに味方がいてくれるのは、本当に心強い。
体に力が漲るようだった。
何より、自分でも信じられないほど心が落ち着いている。

「そろそろ八式対空砲部隊と戦車部隊が前進する時間だ。我々は連中と共同でこの方角からの侵攻を阻止することになる」
宗像はマガジンを散弾砲に装填しつつ言った。
「首都に侵攻させるわけにはいかんとはいえ……」
美奈代は宗像にそっと尋ねた。
「知っていたら教えてくれ」
「ん？」
「静岡市方面は？」
「実質放棄だ。もう戦力がない」
「……ちっ」

美奈代は目の前の光景に顔をしかめた。

そこには、黒こげ、原型がなんだったかわからなくなっている街があった。
街路樹は根こそぎ倒され、街頭や電柱が熱でねじ曲がり、踏みつぶされた車が炎上している。
半分潰れたケーキ屋のマスコット人形の微笑みが、美奈代にこの世界の現実を教えてくれる。
ああ……あの店、こっちにもあったんだ。
子供の頃、最高のデザートと信じて疑わなかったあの店の１００円のショートケーキ。
甘いモノが大嫌いだった父に、あれを買ってもらうのに四苦八苦した思い出。
懐かしいな……。

「この辺は」
美奈代はぽつりと言った。
「私の母の出身地だと聞いたことがある」
「……そうか」
宗像は、背にした広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッド残量を確認しながら頷いた。
「皆、故郷を奪われてばかりだな。私も、早瀬も、そして泉も」
「……」
「……奪われたら奪い返す。もう、それしかない」
「そうだな」
ビーッ！
「来るぞ！」
「魔族軍、砲撃開始！つづいて２キロ前方に停止中の敵が前進再開っ！」
「中尉、艦砲射撃は？」
「長門以下の第二戦隊とドイツ高海艦隊が頑張ってますけど――――数が」

「ちっ！」
「やれるか？泉」
その声に、美奈代は怒鳴った。
「やるんだ！やるかやらないか？じゃなくて、やる！そうだろう！？やるんだ！宗像っ！」
「ふっ」
その剣幕に、一瞬度肝を抜かれた形の宗像だったが、突然吹き出しながら頷いた。
「……そう……だな。やるって、言うべきだな。こういう時は」
そう。
やるかやらないか、ではダメだ。
やらなければ――死ぬ。
それは御免だった。
宗像は広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを腰に固定すると、美奈代と共に、ボコボコになったシールドの上に、その辺に転がっていたロンゴミアントのシールドを載せ、頭上に掲げた。
その時だ。

一瞬、太陽が暗くなった。
「？」
ポカンとして、空を見た美奈代の耳に、ＭＣ（メサイアコントローラー）の怒鳴り声が響いた。
「砲撃、来ますっ！」

音のない世界が、こんなに揺れるとは思わなかった。

「！！」
「！！」
連続する爆発にすべての音がかき消され、自分がどんな声をあげ

ているか、それさえわからない。
必死になって叫んでいるつもりだが、一切、耳に入らないのだ。

その中で、美奈代は知った。
一瞬、太陽が暗くなった理由。
それは、魔族軍の砲撃が、太陽を覆ったからだと。

それほどの砲撃。

それが、自分達を襲っている。

では、美奈代に出来ることは？

ただひたすら、砲撃が終わるのを待つだけ。

ただ、それだけだった。

美奈代が砲撃の終了を知ったのは、それまでの振動とは全く違う揺れを感じた時だ。
「？」
宗像騎が自分の騎を揺すっているのだ。
「――――？」
自分が何と言っているのか、もしかしたら宗像も何か言っているのかもしれないが、何もわからない。
耳が酷くキーンとして、音が判断出来ないのだ。
宗像騎がしきりに散弾砲を前に押し出す仕草を繰り返す。

――――敵だ。

そう判断した美奈代は、崩れかかった土砂に埋もれかかった散弾砲を引っ張り出し、射撃体勢に“白雷（はくらい）”を操作した。

再び見た街の景色は、さらに変わっていた。

先程のケーキ屋は跡形もない。

それまで辺りに散らばっていたメース達も、民家や工場の残骸も、すべてが吹き飛ばされていた。

美奈代はただ、奥歯をかみしめるのが精一杯だ。

戦況モニターに周囲の状況が映し出される。

前方から接近中の反応は地図を埋め尽くしている。

それでも、美奈代には、不思議と恐怖がなかった。

――数が減っている。

根拠はないが、美奈代ははっきり、そう感じた。

この突撃を凌げば、生き残ることが出来る。

美奈代の何かが、そう告げている。

それが本当かどうか？美奈代には何もわからない。

ただ、信じるに値“したい”と願うだけだ。

MC（メサイアコントローラー）の攻撃順番に従い、ターゲットをロック。トリガーを引く。

ドンッ！

単発の速射砲なら一体仕留めるのがやっとなのに、散弾砲は違う。

口径の大きさからくるはずの反動が全くないまま発射された散弾は、砲口から離れた途端、恐るべき広範囲に広がり、妖魔達に襲いかかる。
ビルの残骸を乗り越えようとする小型妖魔数体が直撃を受けて挽肉のようになる。

そして――

ズズズンッ！

ようやく音が聞き取れるようになった美奈代の耳に届いたのは、その音だ。

美奈代の目の前で、数十発の砲弾が空中炸裂。
何かを地上へ向けまき散らした。
子爆弾をその中に詰め込んだ収束型砲弾だ。
中型妖魔以上の装甲を持つ妖魔相手に徹甲弾や榴弾を撃っていた戦艦部隊がついに対地攻撃砲弾に切り替えたことを示していた。

戦況モニター上の妖魔の反応が、目に見えて減っていく。

後、もう一押しだ。

美奈代は、砲撃に励まされたようにトリガーを引き続けた。

「泉っ！」
誰かが、そう言った気がした途端、美奈代は自分の騎体が激しく前に押され――突き飛ばされたことを知った。
「ぼっとしているな！」
宗像だ。

「えっ？」
「泉准尉！」
牧野中尉が悲鳴に近い声をあげ、ステイタスモニターに警告表示が出る。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）リキッドタンク破損――強制排除要請。
「中尉っ！宗像っ！」
「了解っ！」
「このドジっ！」
宗像の罵りと同時に、美奈代は広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクを強制排除、タンクから漏れた超高燃焼リキッドが引火。穴の中は火焔地獄に包まれた。
散弾砲の弾薬も一瞬でダメになった。
「な、何が？」
炎の柱を上げる穴から這い出し、唖然とする美奈代に、宗像は怒鳴った。
「真上から襲われて気づかなかったのか！？」
「へっ？」
「説明してやるが――ったく、弾薬に砲まで」
「す、すまない」

宗像の説明によればこうだ。

１０時方向から跳躍した黒いメースが美奈代の騎に襲いかかった。メースの剣の一撃がタンクに命中。黒いメースは、剣を引き抜き様、跳躍して移動した。
「タンクじゃなきゃ、一撃で殺されていたぞ？」
「タンクをやることで、我々を一挙に殺すつもりだったかもしれん」
「……我々と交戦した経験が？」
「火炎放射ユニットを持った部隊とな」
「……まさかな」

「心当たりが？」
「東南アジア戦線で袴子とやり合った騎かと思ったんだ」
「まさか」
「――いえ」
ＭＣ（メサイアコントローラー）は言った。
「戦闘記録から割り出しました。２時方向、メサイアとメースが交戦中」
「メースが出たのか！？」
「さらに１０時方向――メース以上の反応有」
「メース以上？」
「出力が計測測定可能範囲外。質量は５００トン近く」
「な、何です？」
「１０時方向、ＭＬ（マジックレーザー）反応！」
「っ！？」

５００トンの重量を持つ敵が何か？
その答えを美奈代が知る前に――

ズッ！

「！？」

光の柱が、全てをえぐり取っていった。

沼津会戦　第二話

「――――えっ？」

美奈代は、目の前で起きた事態が理解出来なかった。

ただ、光の壁が走った。

そうとしか思えなかった。

「な……なに？」

強い光に対する補正が間に合わないのか、未だ白くモニターに残像が残っている。

それまで真横に広がっていた建物群が、一瞬にして消滅していた。

「准尉っ！」

美奈代を現実に引き戻したのは、彼女より少しだけ冷静でいられた牧野少尉だ。

「前方１１時方向、距離３５００から大規模ＭＬ（マジックレーザー）攻撃！」

「――――っ！！」

ハッとなった美奈代は、すぐに“白雷（はくらい）”を移動させた。

もし、敵の攻撃が自分達を狙ったものなら、動かなくては！

「宗像っ！」

右後方へ跳躍移動させ、傾きかけたビルの残骸を楯にする。宗像騎は美奈代の騎のすぐ間近。跳躍する前と全く変わらない距離へと着地した。

「い、今のは、一体？」

“白雷（はくらい）”の中でも、教官騎を除けば唯一指揮官騎仕様の宗像騎は、情報収集・分析能力が一般騎と比較して倍近い。しかも、宗像騎のＭＣ（メサイアコントローラーさくらば・ゆう）である桜庭優は、元々が情報分析機関に配属されていた程の、いわば情報戦のプロだ。

普段、女の子の情報収集にしか使われないとはいえ、いざという時、この二人の判断力ははっきりスゴい。

宗像と桜庭のコンビによる分析能力に幾度と無く救われた経験の

ある美奈代は、宗像の判断を仰ごうというのも無理はない。
「凄まじいなんともんじゃないぞ……」
ゴクッ。
レシーバー越しに宗像が唾を飲み込む音がした。
宗像がこの音を立てるのは、おそらく本人も自覚がないだろうが、二通りしかない。
性的に欲情する程の美人に出会った時（特に風間祷子）
理解出来ないほど危険な立場に立った時。
共通項は、“興奮した時”だ。
「信濃の艦砲……いや、あの“サイ”を上回る攻撃だと？」
「被害は？」
「直径１００メートル、直線距離に換算して約２キロが消滅」
「し――――」
ピーッ！
「ＭＬ（マジックレーザー）反応！」
二騎は同時に後方跳躍、攻撃を回避した。
「敵にロックされていますっ！」
牧野少尉が絶望的なことを言ってくる。
「教官達は？」
「被害はないが、小型妖魔達を阻止するのが精一杯だ。しかも」
ズンッ！
民家を踏みつぶし、二騎が着地する。
普段なら一発投獄モノだが、言っている場合じゃない。
「敵は教官達に関心を払っていない」
「何？」
「教官達は我々より前にいるにもかかわらず、敵は我々を攻撃している」
「さっき、私を狙ったヤツは？」
「祷子が出た。交戦中」
美奈代はチラと戦況モニターを見た。

2時方向、小型妖魔達がまだ展開していない地点に、風間騎の反応がある。
そして、その風間騎の間近の反応は――――敵。
しかも、
「これって」
「――――そうだ」
宗像は頷いた。
「あの東南アジア戦線で、祷子と一対（サシ）一で渡り合った、あの騎だ」

「――――くっ！」
しくじった！
カヤノは本気でそう後悔していた。
敵の前衛を攪乱する任務を引き受けた時点で、失敗だったんだ。
最初こそよかったけど、４騎目がまずかったんだ。
ザルドフォラスの砲撃で開いた大穴に潜んでいたメース２騎。
背中の箱には火薬が詰まっている。
そう判断して、箱を狙った。
狙いは良かった。
箱は大爆発。
でも、メースは逃した。
攻撃の時、チラッと見ただけだったけど、ヤバいとは思ったんだ。

メースは、あの南方で戦ったアレの仲間だった。

やっぱり、朝の星占いは外れていない。

今日の私の星回りは最悪。

アレに出会いたくないと思ったから、後方へ跳躍したら、なんと目の前にアレがいた。

私は、アレが潜んでいた所に降りてしまったんだ。

厄介ごとの尻尾を踏んだ私が、厄介ごとに狙われるのは当然のことだ。

今日は、ツいていない。

カヤノは心底、そう思っていた。

カヤノの駆るヤクトエッジに、祷子のＤ－ＳＥＥＤが迫る。

シールドを構えながら繰り出される突き技は、前に戦った時より鋭くなった気がした。

「くっ！」

シールドの曲面を利用し、剣の切っ先を逸らし、反撃の機会を待つ。

数度の突きがシールドを削り、最後の突き技が大きく出された。

敵騎の右肘が延びきろうとしている。

「そこっ！」

鈍い音を上げ、ヤクトエッジの左脚がＤ－ＳＥＥＤの右腕を蹴り上げる。

関節部こそ外したが、Ｄ－ＳＥＥＤは衝撃に剣を落とした。

途端に、Ｄ－ＳＥＥＤの各部に仕込まれたＭＬ（マジックレーザー）が火を噴き、ヤクトエッジによるそれ以上の反撃を阻止する。

「――――やるっ！」

「右腕に軽度のダメージ。戦闘継続に支障なし」

ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）からの報告に、祷子は軽く舌打ちした。

水城中尉は声こそ平坦だが、コクピット内部にいくつも現れる情報スクリーンは、「この下手クソ！」だの「再訓練だ！」だのと、罵詈雑言の限りを尽くしている。

「ＭＬ（マジックレーザー）のサポート、感謝します」とだけは言っておくことにしたものの、

――――声とスクリーンと、どっちが本心なのですか？

そう、祷子は一度聞いてみたい気がした。

「決まってるじゃないですか」

中尉の性格からして、にこりとそう言うだろう。

問題はその次だ。

「スクリーンです」

そう、答えられた後、中尉とコンビを組んでいられる自信は、ちょっとなかった。

「だからコイツは！」

カヤノは肩部に仕込んだＭＬ（マジックレーザー）を発砲した。

弾幕を張るほどの速射性はないが、一発の威力と命中精度が高さが売りだ。

とはいえ、最初から命中は諦めていた。

これが命中する相手なら、最初から苦労はしていない。

案の定、Ｄ－ＳＥＥＤが数騎に分離したような回避運動が展開され、Ｄ－ＳＥＥＤの背後のビルが吹き飛ぶ。

「やっぱりね！」

残像を残すほどのスピードで回避されても、カヤノは驚かなかった。

「ちっ！」

接近して来るＤ－ＳＥＥＤ。

カヤノはヤクトエッジ腰部から何かをＤ－ＳＥＥＤの前に放り投げると、急速後退した。

ズンッ！

凄まじい爆発音が辺りに響き渡り、Ｄ－ＳＥＥＤの周辺が一瞬にして吹き飛ぶ。

魔族軍のメース用の手榴弾が炸裂したのだ。

その爆発音を、カヤノはヤクトエッジをビルの影に潜ませながら聞いた。

「とにかく……アレを近づけないようにしなくちゃ」

カヤノはカラカラになった喉に無理矢理、唾液を送り込んだ。

喉が張り付くように痛い。

「最悪……あの子の初陣にこんなのがいるなんて」

ビルに爆発時の破片がパラパラと当たる音かする。

今の爆発でアレが遠ざかるか、後退してくれればいい。

このまま前進させるようなことだけは避けたい。

何しろ、この敵を呼び起こしたのは、自分なんだから。

ピーッ！

鋭い警告音がコクピットに響く。

「しつこいっ！」

ビルをブチ抜いて襲いかかってきたＤ－ＳＥＥＤに、カヤノはそう毒づくと、襲い来る剣をかわし、右腕を押さえ、そして膝蹴りの一撃を容赦なくその腹部にたたき込んだ。

グガンッ！

凄まじい音がしてＤ－ＳＥＥＤの脚が宙に浮いた。

「これでっ！」

さらにもう一発膝蹴りを加えると、今度はその背に肘の一撃だ。

装甲がどんなに厚くても、内部の機器にこの衝撃はかなりのダメージになる。

「出直してこいっ！」

回し蹴りの一撃が見事にＤ－ＳＥＥＤの胸部装甲を捉え、Ｄ－ＳＥＥＤは吹き飛ばされた。

テナントビルいくつかをなぎ払ってスライディング。ようやく止まったＤ－ＳＥＥＤはピクリとも動かない。

あれだけの衝撃だ。

パイロットも無事では済んでいないだろう。

トドメ？

――うぅん？

カヤノは抜いた剣を止めた。

カヤノの頭の中で、何か早鐘のような振動が響く。

――何か、おかしい。

違う。

――危険だ。

カヤノは迷った。

そして、決意した。

後退のため、ヤクトエッジのブースターに火が入った途端、

Ｄ－ＳＥＥＤが突然起きあがり、ヤクトエッジに斬りかかってきた。

装甲があちこちへしゃげてはいるが、戦闘の意志だけは露骨なまでに現れている。

「しつこいって言ってるでしょう！？」

おそらく、ブースターを全開にしているのだろう。騎体の推進スピードまで加わった鋭い突きを前に、カヤノは顔を真っ赤にして怒鳴った。

「せっかく、見逃してあげたのにっ！」

ザンッ！

Ｄ－ＳＥＥＤの剣がヤクトエッジのシールドに根本まで突き刺さる。

そのタイミングにあわせ、カヤノはシールドをひねった。そのひねりに剣を奪われたＤ－ＳＥＥＤを、肩部のＭＬ（マジックレーザー）が襲う。

「なっ！？」

超至近距離から放たれた一撃を、Ｄ－ＳＥＥＤはあっさりと回避、シールドによるエッジアタックを仕掛けてきた。

騎体をひねって胴体周辺への命中こそ避けたが、肩部根本に命中した一撃は、ヤクトエッジの右腕を根本から切断。右腕が吹き飛ばされた。

右腕が吹き飛ばされた衝撃で、コクピットのハッチが吹き飛び、カヤノは危うく外に放り出される所だった。

「きゃあっ！」

騎体損害が痛みとしてカヤノに伝わるわけはない。

だが、カヤノはとっさに右肩を押さえ、悲鳴を上げた。

「よくも――――よくもおっ！」

警報が鳴り響く中、剣が突き刺さったままのシールドをパージし、カヤノはヤクトエッジの左腕でＤ－ＳＥＥＤに殴りかかった。

「よくもやったなぁっ！？」

滅茶苦茶に殴り、倒れたＤ－ＳＥＥＤに馬乗りになると、ヤクトエッジの左手部構造物が飛び散ってもカヤノは殴り続けた。

「このぉっ！」

ガンッ！

何発目かで、Ｄ－ＳＥＥＤの胸部ハッチが吹き飛んだ。

凄まじいパワーで起きあがろうとするＤ－ＳＥＥＤと、それを押さえつけようと、ヤクトエッジが押す。

「とどめっ！」

左腕部使用警告にパワー警告まで加わったヤクトエッジのコクピットで、カヤノはハッチの中、つまり、敵のメースのコクピットに左の一撃をたたき込もうとした。

いくら何でも、生身の人間に、メースの一撃が耐えられるはずはないのだ。

だが――――

「っ！？」

カヤノは、驚愕せざるをえなかった。

コクピットの中。
そこには、一人の女性がいた。
「お……女の人？」
――コクピット内でおびえる無様な男。
そんな敵を想像していたカヤノにとって、それは意外どころの話ではなかった。
人類も、ついに女が戦いに出るようになったのか？
「……」
カヤノが振り上げた拳を止めた。
殺すのは簡単だが、女を殺したくない。
カヤノが、一瞬の躊躇を見せた。
躊躇は、そのままヤクトエッジの動きに反映され、ヤクトエッジはＤ－ＳＥＥＤとの力押しに破れた。
「しまっ！」
ブースターを開き、体勢を整えたカヤノの前で、Ｄ－ＳＥＥＤが立ち上がった。
カヤノは無意識に、ズームでコクピットの女性の表情を見た。
色の白い、端正な顔立ち。
まるでお姫様だ。
そのお姫様が、全く何一つ諦めない強い意志を秘めた目でこちらを睨んでいた。
「……」
Ｄ－ＳＥＥＤからＭＬ（マジックレーザー）が襲いかかる。
ヤクトエッジもそれに応戦。互いの騎体の数カ所が吹き飛ぶ。
――まだ、負けたワケじゃない。
カヤノは自分に言い聞かせた。
戦場で敵メースの使い手を見る。

つまり、敵兵を生で見る。
それは、実戦経験の浅いカヤノにとって、実は初めての経験だった。
メースは生身の身じゃない。
だから、“殺しやすい”。
カヤノはずっとそう思ってきた。
そのカヤノが初めて見た“殺しにくい”相手。
それが、目の前の敵。

「カヤノ大尉っ！」
通信機にバラライトの声が響く。
「救援信号を確認した！救助に行く！」
「――――えっ？」
カヤノは、それが誰の騎のことかわからないかった。
まさか――――あの子か？
戦況を確認しようとしたカヤノの前に現れたスクリーン一杯の文字。

――――騎体損傷：重度　救難信号強制発信中。

騎体があまりの損傷に、救難信号を勝手に発信した。
どこのバカが付けた機能かしらないが、余計なマネだ。
「問題有りません！」カヤノは通信機に怒鳴った。

「後退可能。これより後退します。“銀龍”護衛を優先してください！」

全く、今日はなんて日だ。

カヤノは残存の煙幕弾とハンドグレネードをばらまくと、ブースター全開で急速後退にかかった。

厄介な敵とはぶつかる。

騎体は壊す。

敵は殺し損ねる。

守ると言ったあの子の護衛まで割かせた。

本当に、ついていない。

「騎体ダメージ、大破です」

「無理もないですね……」

「この騎が始まって以来の大破……ヒドいものです」

祷子は痛む脇腹を押さえながら無理に笑った。

痺れから肋骨が折れているのは間違いない。

内蔵に影響が出ていないことを祈るだけだ。

「中尉、お怪我は？」

そう言うだけでやっとだ。意識がいやにぼんやりしてくる。

「無事です……ちょっと肩骨が折れた程度で」

「……も、申し訳」

「弥生？この騎を失うわけにはいきません。オートパイロット、モード7。後退を」

「はい」

「こちらＤ－ＳＥＥＤ、これより後退。騎体大破、負傷二名。収容願います」

「こちら司令部了解。療法魔導師隊が待機中――――」

祷子はそう聞いた気がした。

脇腹の痛みがひどい。

――――療法魔導師ならすぐだし、ちょっとラッキーかな。

口元を少しゆるめた後、祷子は意識を失った。

沼津会戦　第三話

光が走り、また街が消えた。

「くそっ！」

“白雷（はくらい）”の目が、ようやく“敵”を捉えた。

それだけでいい。

急激なGでさえ、もうどうでもよくなった。

宗像は舌打ちし、騎体を着地させた。

一体、どんなバケモノかと思ったら、思った以上のバケモノがそこにいた。

「データ、とれたか？」

「はいお姉さま」

宗像のMC（メサイアコントローラー）、桜庭優は答えた。

「全高約５０メートル。推定６５００ミリ級ML（マジックレーザー）砲２０門他、武装多数」

「何だそれは！？」

宗像でなくても悲鳴を上げたくなるだろう。

はっきりバケモノだ。

戦場で膝をまっすぐにするな。すぐに動けるよう身構えておけ。

教官である二宮に、メサイアに乗る前から叩き込まれた教訓ではないが、宗像は体勢を低くして次ぎの手を考えた。

――どうする？

手にした散弾砲ではどうしようもない。

虎の子のビームライフルを使うか？

そんな宗像の頭上を通り過ぎたのは、ドイツ軍のメサイア、ノイ

シア達だ。
メサイア同士の通信に使われる近距離通信が混線しているらしい。
不意にドイツ人達の会話が宗像の耳に入った。

Ｅｉｎ　Ｚｉｅｌ　ｉｓｔ　ｇｒｏ&ａｍｐ;ｓｚｌｉｇ;！（エモノはデカいぞ！）
Ｅｉｎｅ　Ｄｅｋｏｒａｔｉｏｎ　ｋａｎｎ　ｓｅｉｎ，　ｂｅｋａｍ，　ｗｅｎｎ　ｄａｓ　ｈｅｒｕｎｔｅｒｇｅｄｒ&ａｍｐ;ｕｍｌ;ｃｋｔ　ｗｉｒｄ！（アレをブッ倒したら勲章モノだぜ！）

血走った声は、正気とさえ思えない。

ただ――

「やめろっ！」
宗像は通過するノイシアの背中に怒鳴った。
「死にたいのかっ！？」
モニターの一部で、ノイシア2騎がＭＬ砲（マジックレーザー）の集中砲火を浴びて騎体を吹き飛ばされた。
地上で二本脚で立つ限り、運が良ければ避けられたろうが、空中でブースターに頼る機動では例えメサイアといえど、ＭＬ砲（マジックレーザー）の集中砲火を避けることは出来ない。
「……あっ」
コクピットから投げ出され、落ちていくのは騎士かＭＣ（メサイアコントローラー）、どちらかはわからない。
ただ、確実に死ぬことだけははっきり分かる。
必死に手足をばたつかせ、空を飛ぼうと足掻くその姿は、むしろ滑稽を通り越して哀れでさえあった。

――主よ。彼の魂に安らぎを与えたまえ

短く祈りを唱えた宗像は考えた。
どうする？
オトリになって、その間に泉にでも襲わせるか？
いや。
泉では役不足だ。
こういう時に役立つ非常識なヤツはいなかったか？
「優、祷子は？」
「あっちもお取り込み中です」
「……ちっ」
ピーッ！
「くそっ！」
「どうします？」
宗像は、跳躍しながら答えた。
「とりあえず、こっちのエモノが効くか試す！」
「了解――ビームライフル、装備します」

「姫様」
コクピットの中に通信が響く。
「お加減はいかがですか？」
「大丈夫です」
その声は、“ここ”に響くにはあまりに幼すぎた。
「エネルギーチャージ中、あと……15秒」
モニターに表示されるカウンターを読み上げ、白く細い指が操縦システムとリンクする。
「周辺護衛は、我らメース隊にお任せ下さい。ただし」
通信機の向こうから念を押す声がした。

「お父上――ズルド閣下とのお約束を違えませぬよう、くれぐれも」
「ありがとうございます」
……えっと。
周りの大人の言うことを聞く。
危なくなったら下がる。
これがお義父様との約束。
破ったら二度とこの騎（こ）に乗らないと約束した。
この騎（こ）は好き。
だから、約束は守る。
「チャージ完了。次はどこですか？」
「とりあえず、先程逃した敵を狙ってください。狙撃のいい練習になります。それが終わり次第、最終テストです」
「はい」

「ちいっ！」
鼓膜が破れそうな爆音を轟かせ、ＭＬ（マジックレーザー）が着弾。エネルギー開放による大爆発が発生した。
砲撃の度に精度が上がっている。

近づこうとすれば、あちこちに潜んでいる敵の集中砲火が待っている。
敵にとりつけない。

あの巨大な図体はいい的になるはずなのに、その的に近づけない。
あいつの周辺には、かなりの数の敵が存在している。
そいつらからの砲火まで加わって対空陣地と化した現状、あいつを狙うのは至難の業だ。

――どうする？

宗像は思案した。

戦力は泉と自分だけ。

他の部隊は姿さえロクに見えない。

――どうする？

心だけが焦る宗像は、戦況モニターに表示されている文字列を見た。

作戦命令だ。

そして、気づいた。

ここでの任務は、“敵を殲滅する”ことじゃない。

宗像は、その意味の重さを痛感した。

任務は、“敵の脚を止める”ことだ。

“敵の脚を止め、帝都方面への進行を阻止する”

それが命令だ。

なら、一々、今のように飛び回って、たった一騎の敵を倒すことに苦心する必要はどこにもないのだ。

では――下がるか？

否

宗像はそれを拒む。

理由は？

あの敵を倒したい。

倒して――手柄にしたい。

そんな、功名心だ。

第一、理由は分からないが、こうもしつこく自分達を狙ってくる以上、敵は撤退を許してはくれないだろう。

敵にとって、自分達が砲撃練習の的にすぎないなんて知ったら死にたくなるだろうが、宗像はそんなことは知らない。

とにかく、ここからでも出来る攻撃を！

それが、宗像の打ち出した方針だ。

「泉、やれるな！？」

「了解っ！」

宗像は“白雷（はくらい）”を跳躍させ、ビームライフルの照準に敵を捉えた。

「きゃっ！？」

まるでバッタやイナゴのように飛び上がった敵から強い光が走ったかと思ったら、モニターの中で、いくつもの光の球が生まれた。

「対魔法結界は万全です。ご心配なく」

バラライトは言った。

「人間の破れる代物ではありません」

本当だろうか？

球体を崩した白光が、騎体の周りを雷のように走って消える。

それだけだと、何かのＳＦ映画みたいだと思う。

「姫様。攻撃は前面にある全てをなぎ払います。我々は非有効射程内、つまり、姫様の騎の後ろ１００メートルにつきます」

「えっと……“死乃息吹（デス・ブレス）”だから、有効射程は前方角１５０度の範

囲で、２００メートルから2千メートルの範囲」
少女は細い指を折りながらそう呟く。
「正解です。姫様」
バラライトは、情報モニターに表示されたデータを見て、少しだけ驚いた。
余程勉強したらしい。少女の呟きにミスはない。
問題とすれば、全くデータにない、後方への脅威警告が少女のメースから発せられていることだけ。
バラライトは、整備不良かデータトラブルによる誤報と判断したし、彼の部下達もまた、バラライト同様にしか考えていなかった。
戦況モニターに映し出される攻撃予想範囲は全周囲約３０キロ。
その攻撃範囲は彼らの予想を越えすぎていた。
その彼らの目の前で、敵からのＭＬ（マジッククレーザー）攻撃をはじき返しながら、攻撃発射
の最終シークエンスに入った。
肩や背にマウントされた攻撃拡散システムが１２枚の翼のように大きく開く。
それは、まるで人間が描く天使さながらの光景だった。
そのコクピットで、少女は発射の最終段階を迎えていた。
あとはトリガーを引くだけ。
「“デス・ブレス・システム”パワー、臨界！」
声が震えていた。
恐い。
本気でそう思った。
この子が産み出すモノは――――破壊。
でも、相手だって自然を破壊し続けたんだ。
人間は、無数の自然を殺してきた。
なら、今度は――――！！
それがウソだと、心のどこかで叫ぶ声がする。
その叫びを振り切るように力強く、トリガーを引いた。

その瞬間――――

世界が光りに包まれた。

一体、どれくらいの時間が経ったんだろう。

宗像は、自分が気絶していたことを嫌でも思い知らされた。

ぼんやりした視界の中、それでも騎体のステイタスを確認する。

どうやら、騎体の損害は軽微だ。

頭がはっきりしない。

損害が軽微だとわかっても、何をどうしたらいいのか、まるでわからない。

「――――た！」

誰かがしきりに何かを言っている。

「宗像！」

どうやら、自分の名前らしい。

自分の……名前？

はっとなった宗像の脳裏は、もやが晴れたようにはっきりとした。

「生きているか！？」

美奈代だった。

「あ……ああ。生きてはいる」

「そうか」

「状況は？」

「敵の新型兵器だろう」

「新型兵器？」

「放射能が出ない反応弾のようなもの……らしいぞ？」
「なっ！？」
反応弾。
宗像は、その言葉にギョッとなった。
「半径２０キロが熱線で焼き払われた」
宗像は、そこで初めて外の様子を見た。
一面の焦土が、そこに広がっていた。
「て、敵は！？」
「攻撃の後、後退した。おそらく、敵も予想外の被害だったんだろう。かなりの妖魔が巻き込まれた」
「損害は？」
「風間が大破。他は中破止まり――――騎体はな」
「……そうか」
安堵していいのかわからない。
目の前のモニターは警告で埋め尽くされていた。
「司令部からだ。魔族軍撤退により戦線の防衛には成功した。ただし戦線は崩壊状態。次に来る敵を阻止する方法は――――ない」
「あの大物の暴走が、人類を救ったと、そう覚えておこう」
宗像は言った。
「教官達と合流しよう」

その巨大な騎体が膝をつく。
それだけでも、騎体の胸部にあるハッチは、ツヴァイの頭部とほぼ同じ高さだ。
整備兵と衛生兵を乗せた専用クレーンが胸部にあるハッチに接続され、ハッチが開かれた。
ハッチの向こうから顔を出したのは、まだ年端もいかない幼い女

の子。
あの楓だった。
「お疲れさまです。姫さま」
「……はい」
楓が頷こうとした時、

「なんて様だ！」
罵声が楓の動きを止めた。
見ると、騎体の足下で何人かがもみ合いになっていた。
「どういうことだ！なぜ味方を巻き込んだ！」
「文句はメーカーに言え！聞いていた効果範囲は、現実の１０分の１以下だ！」
「試しもしないで戦場に送り込んできたのか！？」
「それの何が悪い！」
「俺の部下が何人死んだと思ってやがる！」

「――姫様」
整備兵が気を利かせ、楓をクレーンに載せた。
「姫様のせいではありません」
「で、でも……」
引き金を引いたのは自分だ。
それは確かなんだ。
動き出したクレーン。
その下で、さっきの男が取り押さえられ、連行されていった。
「あの人……どうなるんです？」
「……裁きは受けますけど」
整備兵は言葉を選びながら答えた。
「すぐに戦場に戻ります」
「そうなんですか？」
楓はほっとした。

つまり、怒られてもそれ以上のことはない。
そういうことだと判断したからだ。
その安堵した顔に頷くと、整備兵は黙った。
おそらく、彼がここに来たのは、あの攻撃を実施した、この騎のパイロットへ抗議するか、或いは殺された部下の敵として、パイロット殺すためだったんだろう。
彼にとって最悪なのは、何も味方に部下を殺されただけじゃない。
このパイロットが、ズルド閣下の養女、つまり、雲の上の存在だったということだ。
気の毒なあいつは営倉にぶち込まれる。
そして、簡易裁判の後、懲罰大隊送りは決定されたようなものだ。
最前線で捨てゴマとなる懲罰部隊に送られることはまあ、つまり、再び戦場に送られることだから、少なくとも自分はこの子にウソはついていない。
整備兵は、自分をそう言い聞かせた。

しかし、楓の一撃は、さすがに上層部も軽視することは出来なかったのは事実だ。
「――――以上、静岡方面第一次侵攻作戦は戦力の４０％を喪失。作戦継続は困難と判断するに十分であり、１０１０をもって主力部隊は富士宮へ後退。部隊の再編成と建て直しにかかっています。なお、最前線は富士市内で可動するメースを集めた混成部隊が防衛線を展開中」
参謀長が現状の報告を続ける。
「人類の反抗は？」
「彼らも被害甚大。斥候によると、敵主力部隊は三島まで後退。水上戦力は下田まで後退が確認されています」
「……ふむ」
「時間的には、すでに熱海まで占領下においている予定でした」

「――よもや、身内の一撃で戦線が崩壊するとはな」
作戦報告を聞いたガムロが苦い顔をするのも無理はない。
何しろ、ほぼ勝ちが決まっていた勝負が土壇場でひっくり返ったのだ。
しかも、身内が原因で。
「半径２０キロが一瞬で数千度の灼熱地獄です。さらに半径３０キロまで到達する衝撃波が発生。非装甲型の小型妖魔達には耐えられません」
「回避も出来なかったのはメース隊も一緒だ。搦座（かくざ）した騎のパイロットや回収任務中の騎がかなり巻き込まれた」
「メース隊の多くが、被害予想範囲は半径３０キロという情報を受信。しかし、事前に技師隊から受けていた説明と全く異なることから、誤報と判断」
「それは前線司令部もか？」
「当然です」
参謀長は言った。
「この失態は、前線の我々ではなく、確認を怠った技師の責任です」
「操作は間違っていませんでした」
騎体の操作記録を調査した技師が言った。
「マニュアル通りの完璧な操作です」
「それで何故？」
「マニュアルの誤記が訂正されていませんでした」
「ん？」
「搭載されたシステムは、改良型の広範囲殲滅型でした。しかし、マニュアルでは、前面投射のみの型として説明が」
「成る程？」
ガムロは納得したように頷いた。
「操作説明のミス。つまり、技師の責任でもないと？」
「――はい。しかし」技師は言った。
「満足な武装試射試験も実施せず、いきなりの戦線投入です。その

……」
「これは許容されるミスの範疇だと？」
「用兵者が覚悟すべきミスの範疇です」
「厳しいな」
「閣下」
技師は言った。
「正直、我が軍の運用するメースと、新たに入ってくる最新鋭メースでは技術的差が大きすぎます。整備兵の手に負えずにいるモノも多く、このままでは整備ミスにより、さらに無用の被害が」
「……再び、このような過ちが繰り返されると？」
「このまま、閣下が組み上げ即実戦の姿勢を維持すれば」
「……整備大隊への補充、技術更新には最善を尽くそう」
「はっ！」
「ズルドはどうした？」
「そろそろ到着予定です」
参謀長は目を閉じた。
「何しろ、娘の大失態が戦線を崩壊させたのです。親として」
「兄貴ぃっ！」
ドア蹴破らんばかりの勢いで飛び込んできたのは、ズルドだ。
余程慌てて戻ってきたのだろう。顔は真っ青だ。
「ふ、フィーリアが、フィーリアが何をしただと！？」
「案ずるな。ズルドよ」
ガムロは窘めるように言った。
「フィーリアは何も知らなかった。ああなるとは、誰も知らなかった」
「じゃあ、フィーリアは！」
「不問は当然といいたいがな」
「なっ！？」
ズルドは言い淀むガムロに食って掛かった。
「俺達の何とか役に立ちたいという、あいつの一心を罰で報いると

！？」

「違う。落ち着けズルド。あの兵器は有効なのだ。そして、今、あれを使いこなせるのは、あの娘以外にはいない」

「じ、じゃあ！」

「使い方を間違えただけだ。次は、上手くやってもらうさ」

「あ、兄貴……」

「案ずるなズルド」

ガムロは口元を少し歪めた。

「弟の娘だ。どうして無碍にしようものか」

沼津会戦　第四話

第一次静岡攻防戦

後にそう命名された本作戦において、国連軍は投入戦力の実に70%を喪失した。

味方すら巻き込む熱線及び衝撃波攻撃が来るとは、予想しろという方が無理だ。

戦死・行方不明は実に3万名以上。

戦闘終結から6時間近くが経った時点でも、いくつかの部隊の所在がわからない有様だという。

戦線は完全に崩壊。

各国軍のメサイアをかき集め、緩衝線を挟んで対峙するのが精一杯。

斥候部隊の話では、敵もかなりの損害を被っている模様だということしか、美奈代達の耳には入ってこない。

太平洋上空の“鈴谷（すずや）”のハンガーデッキに降りた途端、美奈代は口元を抑えた。

緊張の糸がほぐれたせいだろう。

胃液しか出てこないが、吐き気が止まらなかった。

――二宮教官の所へ。

MC（メサイアコントローラー）の牧野中尉に背中をさすってもらった礼を言うと、美奈代はふらつく脚で立ち上がった。

「……」

その美奈代の前には、先に回収されたＤ－ＳＥＥＤの姿があった。
装甲はねじ曲がり、大きく歪んだ装甲と装甲の隙間から内部構造が見て取れる。
コクピットハッチが大きく開かれ、整備兵達が騎体の周囲でなにやら作業をしていた。
「風間少尉達は生きています」
牧野中尉が言った。
「共に骨折した程度だそうですが――」
その視線は、Ｄ－ＳＥＥＤに注がれたままだ。
「騎体がこれでは……」
「修復はかなりかかりそうですね」
「そうね……突貫工事の最優先でやっても、再組み立てと同じでしょうから、１月は無理でしょうね」
「……１ヶ月」
羨ましいな。
美奈代は素直にそう思った。
肋骨の骨折の治療も兼ねて一ヶ月、戦場から離れることが出来る。
戦わずに済む。
ふと、手がサバイバルベストのホルスターに触れた。
「……」
――痛いかな。
――でも、それで一ヶ月……もしかしたら、一生、戦場から逃げられるなら？
――痛いのは、一瞬で済むはずだ。
――その、一瞬にさえ耐えられれば？

「……」
自分の指先が、ホルスターのカバーを開こうとしていることに、美奈代自身が気づいていない。
「こらっ！」
コンッ。
不意に、額に痛みが走ったことに驚いて正面を見ると、怒った顔の牧野中尉が自分の顔をのぞき込んでいた。
「座学で習わなかったの！？自傷行為は負傷ではなくて敵前逃亡扱い！銃殺よ！？」
「……えっ？」
「結構、多いらしいから注意するように通達受けてるの！」
牧野中尉はそう言うと、美奈代のホルスターから拳銃を抜き取った。
「あなたに持たせると危険そうだから、預かっておきますね？」
「べ、別に私は自分を撃つつもりなんて……」
「うそおっしゃい」
牧野中尉は勝ち誇った顔で言った。
「お顔にウソですって、書いてありますよ？」
「……」
「銃はとっても危険なものです」
牧野中尉は、無重力下を流れるような仕草で通路を目指す。
説教が続いている以上、美奈代はその後についていくことにした。
ここで別れたら後が恐い。
牧野中尉は、銃を弄びながら自信満々に説教を続ける。
「……ほら。ここをこうして、安全装置を解除して引き金なんて引いたら」
辺りに乾いた音が響いたのは、その直後だった。

2時間後。

「――憲兵隊からは報告を受けている」

美奈代は三角巾で吊した腕に走る鈍い痛みに顔をしかめながら、美夜の前に立っていた。

「准尉が、二宮教官の教育通り、一発多く弾丸を装填するため、遊底（イド）を操作しない前に弾丸が薬室（チェンバー）に送り込んでいた」

ジロリ。

美夜の鋭い視線が、横に立っている二宮を突き刺さんばかりの勢いで放たれ、二宮はその視線から逃れようとそっぽを向く。

「二宮教官の教育に従ってだな」

「……申し訳ありません」

「牧野中尉は暴発時の銃の反動で頭を打って気絶。弾丸は准尉の左腕をかすり――」

苦虫をかみつぶしたってこうはならないだろうという顔をしているのは、長野教官だ。

どうしたものか、その頭はきれいにそり上げられていた。

「長野教官の頭を逆モヒカンにして壁に穴を開けたわけだ――二宮教官の教育に従った結果！」

「……弁明の余地はありません」

「二宮教官はな――泉准尉」

「はい」

「返事が小さいっ！」

「はいっ！」

「一歩前へっ！」

弾かれたように、美奈代は一歩前に出た。

途端、

パンッ！

美夜の平手が美奈代の頬を張った。

「牧野中尉が拳銃を奪ったのは、准尉に自傷行為に及ぶ危険があると判断したからだと聞く！本を正せば、貴様の責任だぞ！？そんなマネをして、私が貴様を生きて艦から降ろすと思ったか！？よくも私をナメてくれたものだ！」
「――っ」
「何か申し開きがあるか！？無ければ、この“鈴谷（すずや）”の船底をくぐる名誉を与えてやる！」
「じ、自分はっ！」
美奈代は声を張り上げた。
「自慰行為なんて考えていませんでした！」
「自傷行為だっ！」

「……美奈代ぉ」
結局、独房入りは避けられたものの、まる一日、医務室から出ることを禁止された美奈代は、ベッドの上で腕に走る痛みに耐えていた。
そんな美奈代を訪ねてきたのが、美晴達だ。
「……なんだ」
「艦橋でオナニーって叫んだって本当？」
「……誰から聞いた？」
「艦橋オペレーターの娘達」
「……ちょっと、間違えただけだ」
「間違えるにもほどがあるだろう？」
さすがに宗像もあきれ顔だ。
「どうしてこう、お前はそっち方面の伝説ばかりつくりたがる？」
「どっちの方面だ」
突然、腕に走った強い痛みに、美奈代は顔をしかめた。
「痛む？」

さつきが心配そうな顔で訊ねてくる。
心配してくれる仲間がいてくれるのが、美奈代にとってはとても有り難い。
「艦長から、罰だって、麻酔の投与禁止されたって聞いたけど」
「何」
美奈代に代わって言ったのは宗像だ。
「船底くぐるよりマシだろう？なぁ？」

船底くぐり。
ｋｅｅｌｈａｕｌ、もしくはｈａｕｌｉｎｇ　ｕｎｄｅｒ　ｔｈｅ　ｋｅｅｌというらしい。
乗組員を縛り上げ、船底を左舷から右舷へくぐらせる刑罰。水に浮く船でやるから、凄まじく運が良ければ死なずに済むが、魔力によって発生したフィールドという海に浮く飛行艦でやれば、確実に死ぬ。問答無用だ。

「牧野中尉もそれはそれは反省しているそうですよ？」
「ああ。さっき、謝りに来た。別に中尉は知らなかったわけだし。私からも不問としてもらうよう、艦長に頼んで受理された」
「……まぁ、あの艦長の場合」
どこから持ってきたのか、美晴はリンゴを剥きながら言った。
「不祥事をもみ消したいってハラでしょうけど」
「ハラ……きっと真っ黒よ？あの艦長」
「二宮教官、お説教続いて未だに艦長室から出られないって」
「それより気の毒なのは、長野教官よ」
さつきは言った。
「ただでさえ“薄い”の、気にしていたのに、これで完璧禿げちゃったんだから」

「……ヒドいメにあった」
相変わらずといえばそれまでだが、生徒隊長やっていた時より、確実に説教の長さに輪がかかっていた。
「耳の中にまだ説教が残っている気がするわ……」
二宮は、片耳を抑えて片足でトントンとジャンプしてみた。
「……はぁっ」
大体、泉も泉だ。
あれは野戦用のことで、誰も普段からやれとは言っていないはずだ。
ただ、緊急で実施された候補生達の拳銃点検で、全員が薬室に弾丸を装填していたこと。
そして、それが規定違反だとは知っていたが、それでも自分の指導に従っただけだと言い張ったことは、確かにマズかった。
なにより、長野大尉を完全にハゲさせたのは――非常にマズイ。
大尉に何てわびを入れようか？

二宮は、それを考えながら通路を進む。
「……ん？」
二宮が、そのドアに気づいたのはそんな時だ。
メサイアの運用データを管理するデータ管理室。
少しだけ開かれたドアの向こうに、靴のつま先を見た気がした。
軍艦でドアを半開きにして放置することは許されない規則違反だ。
しかも、そこがメサイアのデータ管理室となれば？

シャカッ

二宮は拳銃を抜いた。

ドアの向こうからはとぎれとぎれにキーを打つ音がする。
「……っ！？」
ドアの向こう。
倒れているのは若い整備兵。床にはデータカードが散乱している。
そして、その向こうでコンソールパネルを叩いているのは、瀬音少佐だった。
「……」
二宮は、音もなく室内に忍び込んだ。
そして――――

瀬音は、後頭部に感じたその感触に、動きを止めた。
「……やあ」
軽い言葉をかけつつ、両手を軽くあげ、無抵抗の意志を示す。
「――――何してるの？」
グイッ。
押しつけられているのが銃口だとは、すぐにわかる。
そして、それを押しつけているのが、かつての恋人であることも。
「お散歩……かな？」
「整備兵殴り倒して？」
「倒れていただけさ」
「この部屋――――データ管理室は」
元・恋人の声に感情は込められていない。
もし、感情が込められているとすれば、それは怒りに過ぎない。
「許可を受けた者のみ入室が許可される。あなたに許可は下りていないはずよ？」
「彼にはお願いしたさ」
瀬音は言った。
「調べものがあるからって」
「――――許してもらえたとは思えないけど？」

「ああ」
瀬音は軽く肩をすくめたが、
チャッ
銃の音に動きを止めた。
「――全く、そのお堅いところは変わらないな」
「……」
「憲兵隊に引き渡す？」
「いいえ」
二宮は言った。
「まだ憲兵隊には報告していない。バレたら無事じゃすまないわよ？」
「……そうだな」
「何を考えてるの。“白雷（はくらい）”のデータなら実騎からいくらでも」
そこまで言って、二宮はハッとなった。
目の前の男の求めているのが何か、察しがついたのだ。
「……あなたの上官として聞きます」
「……」
「一体、誰の命令で、こんなマネしているの？」
「そいつは言えないな」
「……マジメに答えて」
「……これだははっきり言える」
瀬音は真顔で言った。
「これは、頼まれなくても俺自身が知りたいことでもある」
「……」
「真理だって、これを知ったらどうするか」
「……何？」
「何もしない。これは誓うから、モニターを見てご覧？」
「……」
二宮は、銃口を瀬音の後頭部に押しつけたまま、視線を瀬音の背中越しに見えるモニターに移した。

「……？」
そこには、誰かの個人情報が表示されていた。
そして、そこに表示されている顔写真は、二宮にとってイヤでも見覚えのある顔。
「……」
そして、そこに書かれている中身は――――？
「……ば」
二宮は、思わず拳銃を落としそうになった。
「馬鹿なっ！」
瀬音の存在を忘れたように二宮はすがりつかんばかりの勢いでモニターに近寄った。
「……そんな……どうして……あの娘が？」
「どうしてっていうのも……」
瀬音はそんな二宮の背中に言った。
「ヘンな表現だとは思うけどさ……それだけじゃないんだ」
「……だって」
二宮はモニターから視線を外さず、何度も表示されている文章を繰り返し読みながら、
「これじゃ……この娘は」
「その娘を使っての実検が――――この部隊結成の、そしてこの厚遇の背後にはある」
「……実検？」
「そう」
瀬音はポケットから一枚のカードを取り出した。
「“これ”を偽造するのに随分手間取ったよ。犠牲もハンパじゃない」
そう言いながら、モニターの横に置かれたカードリーダーにカードを通す。
「犠牲の分も……有効に使わせてもらうさ……」
モニターの表示が切り替わり、パスワードを要求する画面に切り

替わる。
瀬音の指が素早くキーを叩き、再び、画面が切り替わった。
「……あった」
瀬音の顔がオモチャを与えられた子供のようにほころんだことに、二宮は気づかない。
「俺も断片しか知らない。だが、少しでも読んだらわかる。真理、これを読め――読んでから、今後の自分の身の振り方を決めろ」
「……“新統合計画？”」
「すでに２０年前から発動されていた極秘計画だ」
瀬音は言った。
「あの子達が集められたことも、そして今、逼迫する近衛の状況においてもあの子達に破格の立場が与えられていることも――その答えがコレだ」
「……」
「読めば、近衛に対する見方が変わるぜ？」
「風間はしばらく入院。Ｄ－ＳＥＥＤも再組み立てに相当な時間がかかる」
「風間の容態は？」
「艦から降りている。療法魔導師により骨折は完治したらしいが、大事をとってしばらくの入院措置だ」
「それにしても……あの風間がやられるとは」
宗像は、信じられないという顔でコーヒーの入った紙コップに口を付けた。

「艦隊叩き潰した娘だぞ？」
「戦闘経過記録を後で見ておけ。あれは戦闘じゃない」
照明をうけて光る頭を撫でた長野は憮然として言った。
「あれは――殴り合いだ」
「でも、風間は勝ったんでしょう？教官」
「敵が下がっただけ。あれじゃよくて相打ち。俺なら負けと判定するだろうよ。あんなものは、メサイアの戦いじゃない」
記録的なまでに派手に殴られた挙げ句、騎体のコクピットユニットをはじめ、Ｄ－ＳＥＥＤはフレーム単位で再度組み立てが必要な程の被害を被っていた。

無論、それは何も袴子だけの話ではない。
「あの……その間の部隊は？」
美奈代達の騎もまた、あの爆発の熱風で焼かれ、少なからず騎体を破損していた。
坂城整備班長にいわせれば、全部Ｃ整備送りだ。
「また壊しやがって！」と、怒り狂った整備班が恐くて恐くてハンガーに近づけない。
「近衛も大規模な改編が実施される。二宮中佐から話があるとは思うがな」
「改編？」
「ああ。俺達の部隊は増員を加えて2個小隊、中隊に昇格だ。」
「中隊長は、二宮中佐ですよね？」
「中隊は後藤隊長のままだ」
「……あの人、あんまり好きじゃないんですよね」
ぼやくのはさつきだ。
「何考えてるかわかんないから恐いんですよ」
「元公安関係だからな。そりゃ、俺だって恐いぞ？違う意味で」
長野はコーヒーを飲みながら頷いた。
「――まぁ、公安が何でメサイア部隊指揮するかは知らないが」

ほうっ。
長野は深いため息をついた。
「深入りするな。いいか？どんな組織でも、上司の下手な詮索する暇があれば、己の保身に動く方が利口だ。ネズミみたいにちょろちょろ嗅ぎ回ると痛い目に遭うぞ？」
「……でも、やっぱり苦手ですよぉ」
さつきは言った。
「大尉が隊長なら安心ですけど」
「あ、そうそう！」
美晴がぽんっと手を叩いて頷いた。
「大尉なら安心です」
「……いい意味でか？」
悪い気はしないぞ。
長野は少しだけ笑った。
「ええ。わかりやすいですし」
「……ん？」
「ほら、上の人の考えが分かるって、下の人間にとって大切じゃないですか」
「それって――俺が単純だってことか？」
「いえ……それは」
「まぁ、いい。改編は既に決まっていることだ。しばらく、二宮さんを含む俺達とお前等のほとんどはバラバラだがな」
「バラバラ？」
「ああ。俺と都築、山崎は二宮さんと一緒に一時的だか、東南アジア戦線にしばらく送られる。期間は区切られていない」
「……」
「泉、ダンナや俺がいなくなってさみしいか？」
「あ……あ？い、いえっ！」
美奈代は慌てて言った。
「いなくなって清々しますっ！」

「むぅ……それはそれでかなりさみしいが……まぁいい」
「あの……そうすると」
さつきは恐る恐る言った。
「私と美晴に宗像、美奈代しか」
「だから。新入りが入る」
「４６期が？」
「いや？一般部隊からの異動だ。ただし、戦闘経験はたいしてないはずだ」
「男ですか？」
「女だ」

「“白雷（はくらい）”後継騎はお蔵入りが決まった」
後藤は冷たく言った。
「結局、“白龍（はくりゅう）”の基本パーツの寄せ集めに過ぎない。“白雷（はくらい）”の高性能は、それによるだけだというのが、上層部の判断だ。紅葉ちゃんは、随分暴れたらしいがね」
「……」
感情を抑えた瞳が自分を見つめている。
何かがあったらしいが、それは後藤が感知することではないだろう。

――まぁ、いい。

そう。
いいのだ。
後藤が求めるのは、二宮の心の中身ではない。
仕事の結果でしかない。

彼女の心なんて知ったことじゃない。
それが、軍隊であり、組織だ。
今のところ、戦果以外の仕事結果は、満足するレベルに達している。
なら、一々、俺から何か言う必要はない。
何しろ、俺達は――

「俺達のやったことは戦果として高く評価されたよ。何しろ？艦隊一個にメサイア・メース束ねりゃ1個師団にゃなる。特に風間と泉のスコアは異常って評価されている程だし？おかげで近衛ん中じゃ、“最強部隊”って言われているし？そんなんだから、騎体の運用そのものは継続だ」
「……しかし」
「何か不満？」
「今回、我々は2個小隊に分けられます」
「うん」
「その結果の人事がこれですか？」
「いいじゃない？」
後藤は言った。
「泉は成長させてやらないと後に響く。それに、二宮さん達の第一小隊は正規ルートで開発された歴とした新型が配備されるんだよ？」
「新型は、確か」
「そう。今まで死んだフリしてた赤木さんの開発騎。今までのゴタゴタで使われなくなっていたヤツね」
「……」
「あ、それが不安？」
「……はい」
二宮は頷いた。
「自分は、あの博士とは相性が悪くて」

「まぁ、モノで判断しましょうや――――まぁ、ここだけの話」
咳払いをした後藤を制するように、二宮は言った。
「人類版のメースとか言いませんか？」
「おろ？どこで聞いたの？」
「カマかけただけです」
二宮はあっさりと言った。
「MC（メサイアコントローラー）も精霊体も不要。しかも、それらを必要とするメサイアを圧倒する力を引き出すシステムの開発は、噂には聞いていましたから。今更驚きません」
「――――そう？」
「そうです」
二宮は小さく頷くと敬礼した。
「書類整い次第、二宮は第一小隊と共に鈴谷より異動します」
「――――はい。ご武運を」
後藤が立ち上がり、答礼する。
二宮は敬礼を解くと、ドアノブに手をかけた。
「後藤さん」
「ん？」
「一つ、アドバイスしてあげます」
「何？」
「ウソつく時、視線をさまよわせるの、悪い癖ですよ？」
「……覚えておくよ」

夕方の日差しが窓から入る中、ドアが閉まった。

「元気出して？」
心配のあまり周囲に当たり散らすズルドからようやく逃れた楓―

――フィーリアは、しょんぼりと自分のメースのつま先に座っている。
　メースによりかかるようにして立つカヤノが、その頭を優しく撫でる。
「フィーリアちゃんのせいじゃないって」
「でも……」
「そりゃ、びっくりしたわよ？私も爆風で危うく死にかけたし」
　破損騎の集結場所がかなり後方だったのが幸いし、カヤノ達は爆風を浴びるだけで済んだのは確かだ。
　とはいえ、コクピットから降りる途中だったカヤノはかなりの高さでダイビングするはめになって、今ではあちこち骨折や打撲用の治療用湿布だらけだ。
「……ごめんなさい」
「だけどねぇ。フィーリアちゃんはよくやったって」
　カヤノは自分がよりかかっている巨大なメースを見上げた。
　銀色に輝く騎がまぶしい。
「この――“銀龍”だっけ？」
「――はい」
「この子は、単にスゴ過ぎただけよ。使い方間違えたとも言うけど？」
「？」
「つまり……ああっと、私バカだから上手く言えないけどさ？要するに、この子にはこの子の向いた戦い方があって、その通りに動かせば、全然問題なかったのに、相応しくないっていうか、適さない戦場に投入しちゃったから、こんな結果になったって……いいたいことわかる？」
「……はい」
　フィーリアは頷いた。
「この子に、向いていないことさせちゃったから、みんなに迷惑をかけたんですよね？」

「そのさぁ……」
ぽりぽりとカヤノは頭を掻いて、体を走る痛みに顔を歪めた。
「いたたっ……迷惑かけられたのは、フィーリアちゃんだって。わかってる連中は、みんな言ってるよ？あんな小さい子に何がわかる。ロクに教えないで引き金引かせた上層部の責任だって」
「……それだと……困る」
「ん？」
「それだと、お義父様が悪くなるし」
「……」
成る程？
この子が、ここまで頑なに自分が悪いと言い張る理由に、カヤノはようやく合点がいった。
自分が悪くないと、義父であるズルドが悪くなる。
フィーリアは、それを恐れているのだ。
「あのね？」
ポンッ
カヤノはフィーリアの頭に手を載せた。
「覚えておいて？組織じゃね？一人の失敗はみんなの責任って言葉」
「一人の失敗は……みんなの」
「そう。今回の失敗は、フィーリアちゃんだけじゃなくて、みんなが分かち合うべきもの。だったら、その償いも、みんなでやればいい。フィーリアちゃんが、自分だけが悪いって泣いていても、それは意味ない。ズルド閣下も、そんなことしてほしいなんて思っていないよ？絶対」
「……」
「失敗、挽回して、みんなの役に立ちたい？」
「……はい」
「よし。なら、方法は一つだよ？」
「？」
「知りたい？」

「――はい」
「次は失敗しない。それだけ」
「……」
「どうしたの？顔が曇った」
「む……難しいです」
「大丈夫だよ！」
カヤノはポンポンとフィーリアの頭を軽く叩いた。
「フィーリアちゃん、この子の操縦あんなにあっさり覚えられたんだもん。私なんかより絶対、アタマいいんだから！」
「……そ、そうですか？」
「そう！ズルド閣下にお願いして、まだ使っていない機能、全部テストしてごらん？機能を全部、体で覚えれば、後は楽だよ？」
「……」
フィーリアは、立ち上がると、自分の騎をじっ。と見つめて、
「――やります」と言った。
「よろしい」
「お義父様にお願いしてきます。それとカヤノさん」
「――ゴメン」
カヤノは両手を合わせて頭を下げた。
「私の騎、もうしばらく使えないの。整備隊長から蹴飛ばされた位、派手に壊しちゃって」
「お義父様にお願いしてみます。何とかしてくれって」
「つまり？」
「的になってください」
「……練習相手の間違いでしょ？」
グリグリグリ。
「痛い痛いっ！でもぉっ！」
「でもじゃないの」
「ごめんなさぁいっ！」
「よろしい♪」

部隊再編成

「異動！？」
思わず立ち上がってしまったのは、何も美奈代だけではない。
ほとんど全員が、席を立っていた。
「まぁ、当然といえば当然なことだ」
二宮は平然とした顔で言った。
「時期的にも総隊規模での再編成が行われる時期だ。私達も、それぞれに別部隊への転属命令が出た」
「あ、後、どうするんですか？私達は」
「後藤隊長の下で今まで通りにやればいい。何も私や長野大尉が手を引かなければならない時期は当の昔に過ぎ去っている」
「そ……それは」
「そういうことだ。なお、私と長野大尉の後任には、新人が入る。皆、しっかり育ててやれ」
「……あの」
山崎が恐る恐る訊ねた。
「異動は――いつ行われるのですか？」
「今、“鈴谷（すずや）”とランデブーしている輸送艦に私達は移る。それで終わりだ」

「……結局」
整備を受ける“白雷（はくらい）”を見上げながら、さつきはぼやいた。
「壮行会も何にもなしだったね」
「しかたないさ」美奈代は肩をすくめた。
「異動手続きや騎種転換だの、やってる余裕がないって断られたんだ」
「教官達、辞令が発せられてから異動までたった４時間だって……

軍隊ってのはスゴイ人使いが荒いんだねぇ」
「……ホント」
二人の後ろで、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のハッチが開いた。
様々な理由で、臨時に“鈴谷（すずや）”に乗艦していた者達が手に荷物を持ってその前に並ぶ。
その中に、美奈代達が見送りに出た人がいた。
二宮達と、それぞれのＭＣ（メサイアコントローラー）だ。
「頑張れよ？」
長野はそう言って、美奈代達の頭をポンポンと叩いた。
「お前達は――本当に出来の悪い娘だからな。嫁に行くまでしっかり見届けさせてもらうぞ？」
「まだ早いですよぉ」
さつきは笑うが、
「何を言う」
長野は憮然として言った。
「訓練生時代のお前達の悪事の数々を祝辞代わりに朗読してやる俺の楽しみを邪魔するな」
「……人の幸せを邪魔しないでください」

その横で小さく苦笑するのは神谷中尉だ。
「また轡（くつわ）を並べる日を楽しみにしているぞ」
「こちらこそ」
「皆、素質はある。戦争が終わったら内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）へ来い。紹介状は書いてやろう」
「ありがとうございます」
「うむ。今まで出来なかった分、ベッドの中でピロートークを楽しもう」
「遠慮します」

そして――

「……」
「……」
二宮も、そして美奈代達も、言葉が出てこなかった。
言葉より、涙が出そうになった。
美奈代は、二宮を涙で送りたくなかった。
だから、無言で精一杯、顔を強ばらせて敬礼した。
二宮も、静かに答礼を返す。

ジリリリリッ

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の発艦を告げるサイレンが鳴り響く。

二宮は、敬礼を解くと、無言でＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中へと消えていった。

美奈代達が敬礼を解いたのは、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が完全に視界から消え去った後のことだった。

「――――え？」
二宮が異動した後、実質的に美奈代達が頼るべきは後藤だが、あいかわらず士官室で水虫相手に格闘している。
「ですから」
「後任人事？前線指揮官は泉。副官は宗像、他の穴は新入りが埋める」
「……あの」
美奈代は怪訝そうな顔で訊ねた。
「私、何の辞令も受けてませんけど」

「二宮さんから聞いてない？」
「昇任の話も？」
「何も」
「……おっかしいなぁ」
後藤は引き出しを開くと、中に入っている封筒の束を漁りだした。
「二宮さんに頼んだよな、俺……」
「せめて、新入りの話だけでも」
「あ、そう？夜には来るよ？」
「えっ？」

別便のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が鈴谷に入ったのは２０時を過ぎた頃だった。
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）から出てくる人々の中に大きなバッグを背負った士官が２名いた。
出迎えは、後藤隊長に率いられた美奈代達だ。
先頭は、ライトパープルのロングヘアをリボンでツインテールにした女性士官。
階級は少尉。
つり目のしっかり者というのがも美奈代の印象だ。
その背後に、水色の髪を腰まで伸ばした恐ろしく小柄な女性士官。
階級は同じく少尉。
後藤の前に二人で並んで敬礼すると、ツインテールの方が、
「申告します。小清水涼（こしみず・りょう）少尉、平野芳（ひらの・かおる）少尉、×月凸日をもって独立駆逐中隊配属を命じられました！」
と申告した。まじめそうな性格がそのきびきびした声に滲み出ている。

――――泉と仲良くなれそうだな。

さつきはふと、そう思った。

「はい――ご苦労さん。隊長の後藤。細かいことは後でゆっくりやろうや。飯、まだだろ？」

「はいっ！」

「とりあえず艦長に報告いれて、荷物、部屋に入れてこいや。おい、宗像ちゃん。案内してあげて」

「はっ――その前に」

涼は、脇に挟んでいた封筒を後藤に手渡した。

かなり分厚い封筒だ。

「皇居発進前に、二宮中佐から預かって参りました」

「二宮さんから？」

「伝言です。“後藤さん、ごめんなさい。笑って許して！”――だそうです」

「はて？」

後藤は封を開き、中の書類を引っ張り出した。

「――おいおい」

「？」

「みんなの辞令だよ。昇任の」

「――へ？」

「二宮さん、何で忘れてたんだ？少尉と中尉の両方でしょ？これ階級章まで入ってるよ」

艦橋へ歩きながら、宗像は二人に言った。

「いきなり失態を見せたな」

「いえ。あの……二宮中佐って」

「ん？」

「あの二宮真理中佐ですよね？“白百合の守護者”って言われた」

「ああ」
宗像は二宮のパーソナルエンブレムを思い出した。
白百合と交差した剣。
「そういえば、二宮教官、そんな二つ名があったな」
「スゴい人なんでよね！」
涼は興奮気味に言った。
「メサイア５０騎撃破のスーパーエースで、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）の隊長や、天皇護衛隊（オールドガーズ）にも在籍したことのある！」
「現在のスコアは７６騎だ。ここにいて、生きていればスコアは稼ぎ放題だ。まぁ、それだけ、ここが忙しいということだ」
「はぁ……」
「詳しいことが知りたければ、夜、私の部屋へ来い。それと、これ以降、うちの実戦部隊としての指揮官は泉――大尉だが」
「あの後藤隊長の横にいた？」
「ああ――あれも中華のメサイア相手に１対１０で圧勝出来るバケモノだ」
「あの人なんですか！？」
宗像の前で、二人が目を丸くした。
「単騎で１０騎を撃破した女性騎士って！」
「――そんなに驚くほどのことか？」
「で、ですけど！」
涼が目を見開いて言った。
「史上、１対複数の戦闘記録の中で、二桁相手に勝利した記録なんて、他には！」
「メサイア関連雑誌、先月分はその話題だけでもちきりですよ！？」
芳が割り込むように大声で言った。
「中帝の“赤兎（せきと）”をたった１分足らずで１０騎仕留めたなんて、信じられません！」
「先日の戦闘記録、ライブラリーにあるから見ておけ。おかげで精霊体達にとって、泉はマスターどころか神様扱いだ」

「あ、あの人って、ば、バケモノですか？」
「非常識ではあるな」
宗像はあきれ顔だが、そこで二人の言葉の裏に気づいた。
「ん？何だ？あの作戦、公にされていたのか？」
インドシナ方面での作戦について公表されていなければ、部隊の外にいたこの二人が知るはずがない。
「はい。っていうか、新聞1面載ったんですよ？近衛の活躍で、中華軍のインドシナ方面メサイア部隊を壊滅したって――あの、ご存じなかったんですか？」
「……この艦に乗っていたら、というか、この部隊にいると、地上を下界と呼びたくなるぞ？私は少なくとも、この艦に回されてから一度も、艦から降りることの出来る休暇をとらせてもらえた覚えがない」
「……」
「――ま、この状況では仕方ないが」
宗像は自嘲気味に笑った。
「その分、楽しませてもらっている」
「仕事熱心なんですね」
「己に与えられた義務だと思っているからな」
宗像は、胸を張ってそう答える。
一体、宗像の言う“楽しみ”や“義務”が何なのか、全く理解していない二人は感心したように頷いた。
「さすがですね。対メサイア戦から艦隊戦まで経験されただけのことは」
「艦隊戦？」
「ええ。ほら、中華の第三艦隊を」
「あれは……私達ではないぞ？」
「――えっ？」
「マスコミ報道ではどうなっていた？」
「独立駆逐小隊が総掛かりで艦隊に突入したって……」

芳がちらりと涼を見た。涼は頷くことで同意を示す。
「そう、聞きましたけど……あの」
「――――ＤＥＥＤのことは、何も？」
「何ですか？そのデーシーなんとかって」
「……今はいい。忘れろ」
「は？」
「……」
どういうことだ？
宗像は内心困惑した。
何故だ？空母機動部隊を沈めてのけたのは私達じゃない。
祷子だ。
彼女こそが英雄としてたたえられるべきだ。
それが、何故祷子の名を出さない？

上層部は、何を考えている？
「あ、あの……」
突然、上官に黙られたせいで、宗像以上に困惑した二人を前に、宗像はわざとらしく、何かを思いついた素振りで、ぽんっ。と手を叩くと二人に言った。
「――――泉について教えておこう。いいか？」

翌日。

さつきと共に食堂に入った美奈代に気づいた涼達が青くなって立ち上がった。
「お、おはようございますっ！」
「あ、ああ……おはよう」

別に戦死したわけでもないのに、一夜にして二階級昇格した美奈代にとって、大尉の襟章はどうにも落ち着かない。
実戦部隊配属により准尉昇進は、長野教官から聞いていたが、渡された辞令を読むと、“白雷（はくらい）”受領と前後して少尉任官の辞令が来ていたらしい。
美奈代を悩ませたのは、その後の措置だ。

東南アジア戦線以降の活躍に対する“特別な配慮”として、大尉に任ずる。

俗に言う二階級特進。

美奈代の父が中尉から大尉に昇進するのに6年かかったことを考えれば、異例どころの騒ぎではない。
教官である長野と肩を並べたのだ。
この“特別な配慮”が何を指すのか全く分からない美奈代は、一晩考えぬいてついに答えを出せなかった。
正直、将校士官兵牛馬犬猫士官候補生という歴然とした階級ヒエラルヒーの最下層から抜け出せたと素直に喜ぶさつきが、美奈代には羨ましい。

「……どうした？」

「いっ、いえっ！」
目の前の二人は、そんな美奈代以上に落ち着きがない。
まるで教官を前にした訓練兵並だ。
尉官としてのキャリアは確実に二人の方が長いはずなのに。美奈代は思わずさつきと顔を見合ってしまった。

「す、すぐにお食事を――――芳！」
「お茶でよろしいですか！？」
「あっ……ああ」
何だ？
駆け出していく二人を見送りながら、美奈代は首を傾げてしまう。
いくら大尉とはいえ、そこまでおびえるのはおかしい。
近衛は陸軍じゃないんだ。
こんな上げ膳据え膳はありえない。
「美奈代」
さつきが小声で訊ねた。
「あんた、何したの？」
「私が聞きたい」
「あんたが宗像なら、昨日の夜を疑うけど」
「こらっ」

「どうぞっ！」
食事のトレーを持ってきた涼。お茶を持ってきた芳。
二人とも、食事を中断したまま、直立不動の姿勢だ。

――――これで食べろと言われても。

美奈代は顔をしかめた。
「とりあえず、二人とも、座って食事を続けていいぞ？」
「ありがとうございますっ！」
「感謝しますっ！」
着席したものの、二人とも、食事に手を付けようとしない。
「艦内は慣れた？」
さつきは親しげに話す。
「はいっ！」
「宗像にいろいろと教わった？」

「は……はい」
ちらり。なぜか二人は顔を見合わせた。
「ち……ちょっと」
何故か青くなったのはさつきだ。
「昨日、何かあったの？」
「えっと……？何かって？」
「その……いろいろと、夜の方」
「？」
「……小清水少尉」
白百合が似合う濡れ場を想像し、泡を食うさつきの横で、美奈代は冷たく訊ねた。
「宗像に、何を言われた？」
「……」
「……言え」
「……怒りませんか？」
「黙っていたら怒る」
「……」
「……」
「え、えっと……」
「私のことを、何と説明受けた？」
「……」
涼が覚悟を決めた顔をする横で、芳が平然と言ってのけた。
「今度の人事で、ついに旦那さんに逃げられたせいで、万年欲求不満状態が悪化している。下手なことすると殺されるぞとか」
「こら芳っ！」
「艦内では“彼女にしたくない女性士官ワースト１０”で平野艦長とトップ争っているとか……他は……えっとお局様は確定してるとか」
さつきは笑いを堪えるのに必死。
涼は失神寸前だ。

「……まぁ、いい」
食事を終えた美奈代は、ナプキンで口元を拭くと、席を立った。
「私はそこまで厳しくない。戦場では皆が一蓮托生だ」
「そ……そうですよね！？」
涼がフォローするように言った。
「やっぱり、チームワークが！」
「そうだ」
美奈代は顔こそニコリと笑うが、目が笑っていなかった。
「二人とも、あとで“本気の歓迎”をしてやるが、もう少し、艦内のことを知っておいたほうがいいだろうな」
「あ、はい。後藤隊長からも、午前中は艦内見学に回るように言われています」
「よし。じゃあ、トレーニングも兼ねて、飛行甲板３０周走ってこい」
「さ！？」
「装備は第三種」
「た、対戦車戦闘装備ですかぁ！？」
「そんなに嬉しい？」
さつきは楽しげだ。
「泉大尉。対戦車誘導弾、予備弾は６発がよろしいかと」
「そうだな。小銃ではなく分隊支援火器。ベルトリンクでな？」
「……ぐすっ」
「泣くほど嬉しいか？小清水少尉」
「やっぱり最初は、厳しい方がいいですよねぇ。泉大尉」
「ああ」
「二人とも？これは愛のムチだからね？あ・い・の・ム・チ」
「か……感謝します……芳ぅ……覚えてなさいよぉ？」
「それと、いい話をしてやろう。お前達が気を付けるべきは私じゃない。宗像だ」
「は？」

「いいか？」

「熱心だな」

甲板の端でへたばっているのは涼達に声をかけたのは、偶然通りかかった宗像だ。

リュックに括り付けられた対戦車誘導弾とその予備弾、さらに分隊支援火器といった武装の下から顔を出した小清水達の顔は、さすがにもう蒼白だ。

「泉からは、自主的なトレーニングと聞いているが？感心だ。私も見習いたいものだな」

涼は答える気力すら残っていなかった。何か言おうと口を金魚のようにパクパクさせるのが精一杯だ。

一方、芳はまだ喋ることは出来た。

「宗像中尉。あの……」

「ん？」

「中尉が梅毒とエイズを自力で克服したって、大尉から聞きましたが……本当なんですか？」

「全く、困るよね」

宗像に言われて、装備の上に、さらにお互いを背負いながら腕立て伏せをさせられる涼達を眺めながら、後藤は肩をすくめた。

背にかかる総重量は軽く見積もって１５０キロは越える。

こんな状態で腕立てなんて、とても騎士でなければ出来るシロモノではない。

「後輩イジメだよアレ」

「まぁいいじゃねぇか」

後藤からタバコを受け取った坂城は、ライターを取り出しながら苦笑気味に笑った。

「コミュニケーションってやつだろ？」
「随分、歪んでますけどね」
「まぁ、そんな世間話しに来たわけじゃねぇんだろ？」
「わかります？」
「二宮さん達を引き抜いた赤木さんの件だろ？」
「――へへっ」
「整備兵に網張ってみたが……後藤さん」
坂城はタバコを灰皿にねじ込んだ。
「あんたの読み通りさ」
「そうなりましたか」
「ああ。表じゃかなりの革命的レベルの開発をいくつも実現させたってことになってるがな。間違いなくあいつはどこからか情報を引き出している。でなければ説明がつかないことばかりだ」
「……出所は、魔族軍ですか？」
「そう見て間違いないだろう……おい、大丈夫か？」
「何がです？」
「二宮さん達だよ。その「革新的開発」の実証部隊ってことで前線送りなんだろう？俺から言わせれば、無謀すぎるぜ」
「大丈夫でしょ」
後藤はタバコを深々と吸い込んだ。
「二宮さんは――プロだから」
「……」
「俺にとっちゃ、目先の問題で手一杯でして」
「……瀬音さんは残念なことした」
「本当ですよ……おかげで指揮官不在。泉を大尉まで引き上げて指揮官権限与えてますけどね？生徒隊長しか経験はないし、あいつ自身、参謀の体質な上に舌足らずだから、部隊をまとめられるかどうか……」
「宗像は？」
「あいつは一匹狼ですしね。早瀬や風間はそういうの、全く向いて

いないし。俺はメサイア乗れないし。後任せようとした長野さん達は部隊離れちゃうし」
「指揮官不在……か……」
「レイナガーズもこれ以上の派遣は無理ってことで神城下げるとは思わなかったですよ。いや、まいった」
「どうするんだい？」
「まぁ、どうにかなるとは思いますよ？やらなきゃ死ぬのはあいつらだし。俺はクビ」
「はぁ……次の作戦、あるんだろう？」
「まだ数日あります。それまでに新入りには“白雷（はくらい）”に慣れてもらう。泉には指揮官として経験積んでもらう――どっちにしろね？あいつらにとって一番辛い時期が来たと思いますよ？」
「乗り越えてもらうしかないか」
「そのために給料もらってるんですからね……あいつら」
「……後藤さんよ」
「はい？」
「……腹ぁ割って話そうや」
「やだなぁ……俺はいつだって」
「……瀬音さん」
坂城はポケットからタバコを取り出しながら言った。
「どうするんだい」
「……何のことです？」
「瀬音さん……随分と“白雷（はくらい）”の情報……違うな」
タバコに火を付け、坂城は続けた。
「Ｄ－ＳＥＥＤの情報、個人的に随分集めていたそうじゃねぇか。シゲから何度も相談を受けていたぜ？中村の野郎がデータ管理室の近くでノビていた件、あれも隊長であるお前さんが知らねぇはずがねぇ」
「……まぁ、あっちも同じですよ」
後藤は紫煙と共に口からそんな言葉をはき出した。

「使えるウチは戦力として利用する。それに」
「……」
「“鈴谷（ここ）”入手出来る情報なんて、たかが知れているでしょ？」
「……というより」
坂城は煙缶を引き寄せた。
「偽データ掴ませたな？」
「見抜けない方が悪いんですよ。そんなモノぁ」
「偽データ掴んできたとなりゃ、瀬音さんの立場も危なくなるぜ？」
「元から危険な橋渡ってるんですよ。何考えてんだか知りませんけどね」
「で――利用するだけ利用したら？」
「そりゃ、俺の決める事じゃないです」
「……粛正は専門外だと？」
「俺は血を見るのは嫌いなんで」
「そうかい？」
「そうです」
「――まぁ、俺も」
坂城は短くなったタバコを煙缶にねじ込んだ。
「何人も……本当に何人も、そうやって消されたヤツを見てきたよ――泉のオヤジとかな」
「……」
「ま、俺もそれだけの経験はしてるってことさ――後藤さんよ。教えてくれ」
「……はい？」
「一体、あんたの背後にゃ、何がいるんだ？」
「泉のオヤジさんは」
後藤は言った。
「何で消されたんですか？」
「俺が知るか」
坂城は空になったタバコの箱を、顔をしかめて握りつぶした。

「何も知らねぇ。俺だってもうすぐ年金暮らしだ」
坂城はぽつりと言った。
「お払い箱寸前の整備屋の戯言さ……忘れてくれ」
「……それでいいんですよ」
後藤は再び、タバコを取り出した。
「触らぬ神に祟りはないです」
「……恐い奴だねぇ。後藤さんは」

相性

「却下」
ポンッ。と、デスクの上に放り投げられた書類を前に、美奈代は眉をひそめるだけに抑えた。
「何故ですか？」
「さぁ？」後藤は椅子にもたれかかりながら、相変わらずのやる気のない声で言った。
「何でしょう？」
「――っ！」
「あのなぁ。泉」
後藤は続ける。
「お前、あいつらを何だと思ってるんだ？」
「同僚――いえ」
美奈代は言い直した。
「部下です」
正直、その答えで合っているのかさえ、自信がない。
「撃破記録はないけど、出撃回数６回と５回だ」
「……」
「いいか？まがりなりにも実戦経験者だぞ？お前さん、その意味わかってんの？」
「はい」
「わかっていて、機種転換訓練を一から地道にやる必要があるって、本気で言う？」
「自分の経験からです」美奈代は語気を強めながら言った。
「“白雷（はくらい）”は、普通ではありません」
「連中、乗せてみた？」
「まだです」
「だからさ」

後藤の大きなため息。それが美奈代の神経に触れた。
後藤はデスクに放り出された書類を指さしながら、
「まず、連中の腕前見てからこういうの作ってよ」
「……」
「わかった？」
「――はい」
「短い休暇だ。無駄なことで浪費しないの」
「……」
美奈代は姿勢を正すと、
「失礼しました」
一礼の後、後藤の部屋を出ていった。
「……やれやれ」
後藤は、ぼんやりと美奈代の出ていったドアを眺めながら、タバコを取り出した。
「親心というか、完璧主義というか……」
後藤は、デスクの上に放り出した書類の題名をもう一度見た。
“白雷（はくらい）”機種転換訓練計画。
そう書かれていた。

涼と芳のために“白雷（はくらい）”転換訓練に美奈代が要求してきた期間は一ヶ月。
書類の上ではかなりタイトなスケジュールが組まれているのは確かだ。
メサイア部隊を率いる以上、後藤にもそれがわかる。
普通のメサイア機種転換訓練なら花丸をつけてやりたい内容だと、後藤も思う。
だが――
「次の作戦は……すぐだからねぇ」
今は戦時中だ。
一ヶ月もくれてやる時間はない。

そして涼達は実戦経験者。
対象者自身が、自分を新人同様に扱われるのをよしとするはずがない。
なにより、後藤が美奈代に要求しているのは、
涼達をとにかく“白雷（はくらい）”を“動かせる”状態にしろ。
それで戦死すれば、それはそれで仕方ないし、なにより死んだ奴らが悪い。
つまり、性能を１００％完璧に引き出せるようにしろとは決して言っていない。
「やれやれ……」
後藤は引き出しから人事関係のファイルを取り出し、美奈代のデータを見た。
「大局を分析する能力に秀でており、参謀としての素質は大。ただし、細部を見落とす傾向と、緊急の事態に対する対処能力に欠陥有」
二宮の字で、評価欄にそう書かれていた。
「ようするに、見落としが多いマジメな試験秀才ドノってことか……戦場じゃ一番いらないタイプじゃないか」
ポリポリと頭を掻いた後藤は、
「俺なら、こう続けるけどねぇ……」
“富岳生命”と書かれたボールペンを取り出すと、何かを書き込もうとした。
ジリリリッ！
デスクの上の黒電話がなったのは、その時だ。

軍艦の中でダイヤル式の黒電話というのは、さすがに後藤もどうかと思うが、文句を付ける立場にないことは自覚していた。

「はい後藤」

ボールペンで何事かを書き込んでいた後藤は、

「ああ。みなみちゃん？……わかりましたよ。名前で呼んだらセクハラってのはよそうよ高崎先任軍曹。いやしかし、先任軍曹って、長いよね。みなみちゃんってのが一番……はいはい。どうしたの？何？俺の声、聞きたくなったの？いや。嬉しいなぁ……そりゃ厳しいな……ううん？ワルガキ共のおかげ。どっちにしても今度減俸されたら俺タダ働きだよ？頼むよ。助けると思って……ありがと――で？」

後藤はタバコに火を付けた。

「魔族軍が動いたって、どっち方面で？」

●近衛軍演習地

「そりゃぁぁぁぁぁっ！」

「甘いっ！」

“白雷（はくらい）”同士が剣を交える。

その動きはよく訓練された兵士のそれだ。

“白雷（はくらい）”を駆るのは涼と芳。

美奈代達はそれをコクピットから見ていた。

「悪くないんじゃない？宗像、どう思う？」

「うぅむ……」

「どうしたの？」

「何か……こう……ヘンなんだ」

「欲情した？」

「平野は絶対にペットにしてやる……そうじゃない」

「こ……こっちは冗談だからね？」
「そんなものは通過儀礼だ。第一、あの二人は訓練校を出ていないんだぞ？」
「なら、あの子達いくつ？」
「今年で１８だという」
「私達より年下じゃん！」
「中学卒業と同時に近衛軍生徒として採用になった関係だ。ちなみに二人とも、オトコはいない」
「オトコ関係ない」
「さつき。嫉妬（やく）な」
「誰がよ！」
「宗像」
通信に割り込んできたのは美奈代だ。
「どういうことだ？」
「二人とも軍隊生活だ。ロクでもないオトコばかりのおかげで、見る目が養われても」
「違う」美奈代は言った。
「ヘンだと言う言葉の意味だ」
「辞書を引け」
「宗像」
「……見てわからないか？」
「わからないから聞いている」
「私にもよくわからん」
「？」
「ただ――あの二人の操縦には奇妙な違和感を感じるんだ……何だ？」
「違和感？」
「ああ……泉や早瀬、都築や美晴に山崎。皆の動きを見てきたが、彼女たちの動きはどこか違う」
「腕は確かだぞ？」美奈代はモニターに二人のデータを開きながら

言った。
「幻龍、幻龍改、あのＦｌｙ　ｒｕｌｅｒの初陣も彼女たちだ」
「……それが、ヘンなんだ。恐ろしく違和感がある」
「模擬戦やって見たら？」
「いや……やめておこう」
「上官としての威信にかかわる？」
クスクスと笑うさつきのツッコミに宗像は冷静に答えた。
「逆だ」
「逆？」
「下手すると殺してしまう。そんな気がする」

●「鈴谷」ハンガーデッキ
美奈代と宗像が坂城に呼び出されたは、昼食が終わる頃だった。
「……」
室内に入った美奈代に何と声をかけようか。
メサイアのデータ管理を行う坂城の顔は明らかに迷っていた。
美奈代達の敬礼に答礼するのがやっとだ。
「あの？」
「あの二人のことなんだが」
“あの二人”
それは小清水と平野以外にはいないことくらい、美奈代にもわかる。
「はい」
「嬢ちゃんはどう思った？」
「……それについてなんですが」
美奈代は、ちらと宗像を見てから言った。
「私も宗像も、どこか不思議な違和感を覚えています」
「違和感？」

「はい。動きに問題はない。技術面でもです。これは確かだと、宗像も認めています。しかし、どこかひっかかるんです。何かがおかしいって」
「……成る程？」
坂城は納得した顔で頷いた。
「大尉や中尉への大抜擢は伊達じゃねぇな」
「どうしたのです？あの二人に何か問題が？」
「大ありだ」
「？」
「違和感の正体ははっきりしている」
坂城がアゴでしゃくったのは別な整備兵の操作するモニターだ。
「何です？」
のぞき込んだモニター上には棒グラフや折れ線グラフがひっきりなしに動いていた。
チラリと宗像を見るが、宗像も首を横に振った。
「二人とも初めてか？コイツを見るのは」
「はい」
「見たことはありません」
「こいつが、精霊体と騎士、ＭＣ（メサイアコントローラー）のバランスを見るセンサーだ」
「同調率のことですか？」
「さすがだな。宗像さんよ。その通りだ」
「それで？」美奈代は訊ねた。
「あの二人は？」
「これでよく相性がいいなんて言われたもんだ」
「そんなに悪いんですか？」
「Ｄ－ＳＥＥＤの姫さんは別だが」
坂城はそう断った。
「トップはまず都築と十六夜（いざよい）。このコンビは伝説レベルだ。……ああ、嬢ちゃんと“さくら”コンビ以下、この部隊の古株は恐ろしくバランスがとれている」

「それが？」
そう言って、美奈代は嫌な予感がした。
「嬢ちゃん達見てるせいだ。そう言いてぇのは山々なんだが」
坂城は頭を掻きながら言った。
「同調率７５％じゃなぁ」
同調率１００％で、メサイアの力を１００％引き出しているとされる。
だが、５０％、つまり半分以上は引き出しているなら十分ではないか？
実際、座学でそう教わった覚えもある。
「坂城整備班長。５０％なら許容範囲と聞いていますが？」
「宗像さんよ。そりゃ量産騎レベルでのことだ」
坂城は首を横に振った。
「こいつは特殊騎だ」
「？しかし」
「７５％じゃ特殊騎は乗せられねえよ」
「どうしてです？」
「どうしてって……」
坂城があきれ顔で言った。
「嬢ちゃん達、まさかとは思うが」
「は？」
「自分達の“白雷（はくらい）”との同調レベル知らないわけじゃねえだろうな」
「知りません」
「……本当か？」
「はい」
「ハァ……二宮さん、今度出会ったら、レンチでブン殴るとするか」
坂城は肩を落としながら言った。
「嬢ちゃん……そう言うところは似るんじゃねえぞ？草葉の陰でオヤジさんが泣くぜ？」
「あの……自分達はそんなにヒドいんですか？」

「“白龍”搭乗資格上の同調率は５００％だ。教官達や瀬音さん、あとは都築は合格してんだよな」
「都築が？」
「ああ。ただし、精霊体が十六夜（いざよい）限定でな」
「……気にいらん」
「宗像、落ち着け」
「何しろ、都築は同調率９００％、伝説の瞬間最大出力１５００％をたたき出したことだってある」
「……」
あまりの数値に、美奈代は言葉を失った。
「通常戦闘時、部隊平均が３５０％だ。いいか？
みんながみんな、それほどのレベルで騎体の潜在ポテンシャルを完璧以上に引き出して勝って――いや、ようやくに生き延びてきたんだ。
それと比較してみろ。７５なんてないに等しいんだぜ？」
「どうする？」
「どうすると言われても」
自販機の前で美奈代と宗像は途方に暮れていた。
せっかくの新入り。
仕事は出来そうだと思っていたら、全く使えないどころか足手まとい確定だと言われてしまった。
「こういう時」
こぶ茶を飲みながら、美奈代はぼやいた。
「責任押しつけられる分、教官達の存在がありがたかったな」
「どういう言い分だ」

塩入コーヒーを飲みながら宗像は言った。
「大体、なぜ昆布茶だ？趣味が悪いぞ」
「塩入コーヒーなんて、お前は海軍か」
「飲んで見ろ。美味いぞ」
「コーヒーなんて飲んだら眠れなくなるぞ？」
「子供か」
「……はぁ。とりあえず、“白雷（はくらい）”としての戦いは期待しない方がいいな」
「ああ。後方支援に回すしかない」
宗像は頷いた。
「あの違和感は、レベルの違いだったワケか」
「剣の動きは同じでも破壊力が全く違う。だから違和感を覚えたんだな」
「使えない……か」
「それでも」
美奈代は言った。
「軍の適当な穴埋めで派遣してきたわけじゃないだろう。貴重な特殊騎だ。無駄にするつもりはないだろう。残り４騎は天皇護衛隊（オールドガーズ）に回されるそうだ」
「だといいがな」
「とりあえず」
美奈代はこぶ茶を飲み干した。
「戦ってもらう。それしかない」
「……見殺しにする気か？」
「あの子達だって」
紙コップが見事な曲線を描いてゴミ箱に消えた。
「子供じゃないんだから」

それから４時間後。

「ほら……食べろ」
食堂で、宗像が涼達にそう言ったものの、肝心の涼達は青い顔をしたまま首を横に振るだけだ。
近衛軍最新鋭メサイア“白雷（はくらい）”に乗れる。
搭乗前まで興奮していた二人の顔に、喜びはない。
倒れていい。
そう言われたら本当に倒れてしまうだろう。
二人とも、コクピットであちこちぶつけたんだろう。湿布と絆創膏だらけだ。
「吐くモノがないと、あとで辛いのはお前達だぞ？」
宗像に食事の載ったトレーを突き出される。
料理の匂いに胃が刺激され、涼は吐き気を堪えようと口元を押さえた。
「――――っ」
「喰え。これは部隊副指揮官としての命令だ」
宗像はそう言うが、体はどうしようもない。
無理もない。
宗像もそう思う。
何しろ、美奈代が情け容赦なく模擬戦で叩きのめしまくったのだ。
だが、この後も模擬戦がまだ続くのだ。
しかも、夜間集団戦闘。
危険性は昼間の単独模擬戦とはケタが違う。
「もう一度言う――――これは命令だ」
「……っ！」
一瞬、恨めしそうな視線を送ってくるが、それでも二人とも箸を

手にした。
「……」
ドンッ。
そこへ、二人の前にお茶の入った急須を置いたのは美奈代だ。
「食堂のおばちゃんにお願いして、即席だが茶漬けを用意してもらった。無理にでも胃に流し込め。胃に落とせば何とかなる」
「は……はい」
「せめて明日の朝飯は生きて食べられる状態にしておけ？あまり弱っていると、死ぬか宗像に喰われるぞ？」
「……どういう意味だ」
訝る宗像を無視する形で、美奈代は涼達に告げた。
「出撃が決まった」
「早すぎる！」
食って掛かったのは宗像自身だ。
「こいつらを殺す気か？」
「しかたない」
訝る宗像に、美奈代は軽く肩をすくめた。
「これは命令だ――鈴谷は明日２２００をもって出撃。明後日０５００時、我々は再び静岡戦線へ移動する」
「……瀬音教官の弔い合戦とでも言いたいの？」
「早瀬、その通りだ。あの一帯を焼け野原にしてくれた魔族軍が再び軍を集結させている。このままでは、あの戦いで払った犠牲の意味が無くなる」
「……あの“キングギドラ”は？」
“メカゴジラ”のことか？」
「だっけ？とりあえず、言いたいことは伝わったでしょ？」
「現状、発見されていない」
「よかった！」
さつきは安堵のため息をついた。
「あれ倒しに行けっていわれたらどうしようって、本気で焦った！」

「その通りだ」と美奈代は言った。
「だよね？」さつきは楽観的に何度も頷いた。
「いくら何でも、そりゃあんまりよ」
「そのあんまりが、今度の仕事だ」
「……へ？」
「敵の侵攻を阻止するのと同時に、奴さんが次に現れたら叩き殺す――それが、我々の任務だ」
「……誰よ。そんな命令出すヤツは」
「上層部（おかみ）のことは知らんが」
美奈代は青くなっている涼達に告げた。
「安心しろ。前衛には絶対に出さない――“白雷（はくらい）”は棺桶じゃない」
「泉？」
「二人には、我々3騎のバックアップを任せる」
「はっ――はいっ！」
おびえた様子の芳に、美奈代は微笑んで見せた。
「心強いな。これよりの訓練は、戦闘機動に加え、銃の操作も加わる。“白雷（はくらい）”のＦＣＳは“アリア”より上だ。期待しているぞ？」
「はいっ！」
「はいっ！――って」
美奈代の言葉の意味に先に気づいたのは、芳の方だった。
「銃の操作も加わる……って？」
「訓練は続行する。夜間戦闘機動訓練の前に射撃訓練。いいか？時間がない。食事を済ませたらさっさと搭乗しろ」
「……」
「……」
「――な？鬼だろ。泉は」
宗像に耳元で囁かれた涼は思わず頷いてしまった。
「あ！い、いえその！」
「時間がないんだ！」美奈代は語気を強めて言った。

「死にたくなかったら、今が堪え時だぞ！？」

●近衛軍演習場

ギィンッ！

涼騎の操る薙刀が美奈代騎の刀を弾き、刀の切っ先が明後日を向いた。

「やったっ！」

メサイアの重量を乗せた薙刀の一撃が敵騎の脳天にむかって振り下ろされる。

「そこぉっ！」

――勝った！

本気でそう思ったが、

「――へっ？」

次の瞬間、薙刀が斬ったのは空しい宙だけだった。

敵騎が涼の視界から消えた。

「どこっ？」

その答えは、後ろから来た。

ドンッ！

「ぐっ！？」

背中に受けた衝撃に息が詰まる。

ピーッ

MC（メサイアコントローラー）から通信が入る。
「コクピットブロック大破――小清水少尉、戦死です」

「……へ？」
涼には、何が起きたかわからなかった。
ミスはしていなかった。
絶対勝ったはず。
それなのに？
「な……何？私、ミスなんて」
呆然とする涼へMC（メサイアコントローラー）が答えてくれた。
「背後に回った隊長騎からの一撃が、コクピットを貫通しました。レーザーソードなら消し炭ですよ？小清水少尉」

「……」

「唖然としてるヒマはないぞ？小清水少尉！」
美奈代の叱責にも似た声に、涼は思わず肩をすくめた。
「訓練は始まったばかりだ。私から一本とるまで終わらせない！そのつもりで続けろ！」
「そ、そんなぁ！」

涼と芳

●鈴谷ブリーフィングルーム

「まぁ……これで俺達独立愚連隊も、一端のチームになったわけだ」

美奈代達を前に、後藤はやる気の疑わしい声で続けた。

「前衛は宗像と早瀬、それと都築。中衛に山崎に柏。中衛指揮を泉、後衛を小清水、平野っと――後衛騎は現在、追加武装の装着作業中。ブリーフィング終了したらすぐに訓練プログラム入ってくれ」

「了解」

「了解――あの？」

芳が敬礼しつつ、首を傾げた。

「追加武装って？」

「いいモンだよぉ？」

後藤はニンマリしながら言った。

「アニメで言えば無敵モードさ」

「うっわぁ！」

ハンガーデッキで歓声をあげたのは芳だ。

「すっごぉ！」

そこに立つのは二騎のメサイア。

自分達の“白雷（はくらい）”だが――最早別物となっていた。

どちらかと言えば、優美なデザインに属するその騎体は、今や無骨な重装甲によって包まれているのだ。

「フルアーマーだ！」

「制作者の趣味丸出しね……さすが津島中佐」

「“白雷（はくらい）”第四種装備……すげぇのは装甲だけじゃねえぞ？」

背後からの声に驚いて振り向くと、坂城が立っていた。

「肩部追加エンジンで出力を増強。ブースターやスラスターの増設

で機動性はそれほど落ちちゃいねぇし、一部のアーマーは各関節部の最大可動域に影響しないようフローティング装甲だ。機体の駆動性に最大限配慮した設計はもう芸術のレベルさ。

しかも、多重空間装甲の上にＡＭＬＣ（アンチ・マジックレーザー・コーティング）の最新型を施しているから、大口径のＭＬ（マジックレーザー）の直撃にも５秒間耐えられるオマケ付きだ」

「うわ――スゴッ」

手元の端末でデータを見たさつきが驚きの声をあげたのも無理はない。

「加速性能や出力が圧倒的じゃない！？ねえ、坂城さん。これって私の騎体には？」

「ジェネレーターの強化はともかく、無茶言うなよ」

坂城は肩をすくめた。

「こりゃ全部、ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）ぶっ放すためだけのシロモノだ」

「へ？」

「つまり――嬢ちゃんの足りねぇアタマでもわかるように話すとだな？この追加武装の全部は、大型の大砲を撃つための安全装置なんだ」

「で、でもさ」さつきは不満げに言った。

「加速性能が加わっているし、これ装備したらシールドいらないでしょ？」

「万一の時の逃げ足確保してるってだけさ。いいか？こんな重装備だ。肩だの関節だの、あっちこっちに負荷がかかりまくる。常時負荷状態ってヤツだ。そんな状態で格闘戦なんてやって見ろ。すぐに関節異常過負荷、各部破損、機能停止のオンパレードだ。何より」

ビーッ！

ビーッ！

警報が鳴り響く中、ウィンチで吊された異様にデカい砲が“白雷（はくらい）”に装着されようとしていた。

「あれがＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）――近衛でもこの２騎にしかまだ装備されちゃいねぇ」

「津島中佐のビームバズーカとは違うんですか？」
「魔族軍のＭＬ（マジックレーザー）と同じ理論でこのサイズだそうだ。ＶＴＲは見たが、破壊力が段違いだ。まともに食らえば戦車を蒸発させられる」
整備兵がＨＭＣを肩にマウントする作業を見守りつつ、坂城は肩をすくめた。
「捕獲したのはいいが、完璧にコピーするには紅葉のアタマでも無理らしい」
「ふぅん？あの天才児でも、無理はあるんだぁ」
「あのぉ……」
話から置き去りにされた芳が手を挙げた。
「誰ですか？その紅葉って人」
「開発局の天才児だ。この“白雷（はくらい）”やＦｌｙ　ｒｕｌｅｒの開発者さ」
「へぇ？」
芳がちらりと涼の顔を伺うが、涼も首を横に振った。
「ん？Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの初陣を担当したんだろう？出会わなかったのか？」
「大尉、開発担当として私達がお会いしたのは白石技術大尉です」
「……そっちの方が誰だか忘れかけていたな」
「泉……誰だ？」
「宗像、お前はオトコのことはすぐに忘れるな。津島中佐の奴隷というか腰巾着というか――とにかくそんなヤツいたろう？ほら、白衣を着た」
「……お前もかなりヒドいこと言ってるぞ？それで坂城班長」
マウントが終了。各部接続が開始されるのを見守りつつ、宗像は訊ねた。
「――こうして見ると、“白雷（はくらい）”とはまるで別物としかいいようがないですが」
「そうだな。華奢な女が“白雷（はくらい）”なら、こいつはまるで相撲取りだ」
サングラスに隠れた坂城の眉が歪んだ。

「……ったく、こんな分厚い装甲が吹き飛んでミサイルが飛び出すとか、ロケットパンチを繰り出すくらいのギミックは欲しいもんだぜ」
「あの？坂城班長？」
「……ブツブツ……いつになったら司令部はマジンガーZを作ってくれるんだ」
「だから！」
不満げに口元ほとがらせたのはさつきだ。
「どうしてこのカッチョイイのが、この二人のだけなんですか？」
「鉄人はもうちょっとパスしてぇしなぁ……ありゃヒドすぎだ……だから……このＨＭＣをぶっ放すためだって」
「……坂城班長？」
ようやく、その意味に行き当たったのは涼だ。
「それってつまり」
「そうだ」
坂城は気の毒そうな声で頷いた。
「まじめな話、この重武装は、正確には敵からの攻撃に備えたもんじゃねぇ」
全員の視線が“白雷（はくらい）”にむけられる。
「――このＨＭＣが爆発した時の保険だ」
「……」
「ついでに、これはマジメな話だから覚えておけ」
「……」
「装甲の付け方というか、一番命中しやすい場所という関係で、胸部装甲は異様に分厚い。そのせいというか……俺は絶対、設計ミスだと思うが……とにかく、装甲の緊急射出が効かない上に、騎体本体も重量増加分を補うために、余計なパーツを外している。たとえば――コクピット射出装置とかな」
「……あの？」
「ハッチ塞ぐ装甲が飛ばない以上、射出装置なんて意味ねぇだろう

？整備班のよしみで、コクピットの裏にバーナーとレンチを置いてやった。もしもの時は、それ使って、蒸し焼きか丸焼きにされねえウチに逃げろや」

「整備班長」

真っ青になってコクピットに向かう涼達を前に、美奈代が坂城に言った。

「いくらなんでも……冗談がすぎます」

「半分はあたりさ」坂城は答えた。

「ＨＭＣは素材の関係で連射まで時間がかかるしジェネレーターの耐久性能にも問題がある――暴発の可能性は、あのビームライフルやビームバズーカとは一ケタ違う」

「そんなに危険なものを実戦配備する？」

「安心しろ」

ポンポン。と、坂城は美奈代の頭を撫でた。

「万一の際は排除してビームライフルに切り替え可能だ。追加装甲は排除可能だ。射出装置だって試作型のが入っている。あいつらが射出装置を作動させられるなら、絶対に死にゃしねえよ」

「何故、それをあの子達に教えないのです？」

「そりゃお前」

坂城は肩をすくめた。

「自分で知るもんさ――それと」

「はい？」

「昨日の模擬戦以降、面白いことがわかった」

「面白いこと？」

「ああ」

坂城の顔は厳しい。

「二人の同調率の差が、一気に開いた……たった一晩で、な」

「ははっ……ホントに射出装置、外されてるよぉ……」
ぐすっ。と鼻をすすりながら、自らのコクピットの背後から顔を出したのは涼だ。
「私……ようするに死ねって言われてるのかなぁ……」
ひょこっ。
コクピットを守る装甲カウルの顔を出したのは、小さな顔――この騎の精霊体“時（とき）”だ。
製造年次が新しいせいか、顔立ちが恐ろしくあどけない。
“時”は、何か涼に言いたげだが――
「邪魔」
肝心の涼が全く取り合おうとしないのだ。
「……」
ハッチから出ていく涼を後ろ姿を、時はさみしげに見送るしかない……。

「ちょっと、芳？――なっ！」
なぜか閉まっていた隣の平野騎のコクピットを手動開放（マニュアルオープン）した涼は、コクピットから響く大音量に思わず耳を塞いでしまった。
「ちょっ――か、芳っ？」
「あれ？涼？どしたの？」
驚く涼の前で、コクピットに入った芳が首を傾げていた。
「じゃなくて……あ、あんたコクピットで何やってんのよ」
「へ？」
涼が驚いたのも無理はない。
コクピット内部にはいつの間にかベタベタとアニメの切り抜きやシールが貼り付けられ、モニターでは傍若無人ヒロインが嫌がる巨

乳の子の服を脱がそうとしていた。
そして、コントロールユニットにちょこんと座る格好で、精霊体が興味津々という顔でモニターに魅入っているのだ。
「アニメの鑑賞会」
「一人で？」
「ううん？“静夜（しずや）”と」
指を指された精霊体はぺこんと頭を下げた。
「あ……あんた、精霊体に何見せてんのよ」
「へ？“静夜（しずや）”はアニメ大好きだよ？」
芳は言った。
「いやぁ。前のマスターがアニメ大好きだったらしくて、びっくりしたよ？ガンダムはファーストから全部知ってるし」
「……」
「でね？深夜アニメで面白いのやってるって言ったら、見たいっていうから、昨日のうちに録画したのを見せてあげてるんだ」
「絶対、怒られるよ？そんなことしたら」
「どうして？」
芳は平然と言った。
「コミュニケーションの一環じゃん」
「あの……ねぇ」
「だめだよ？精霊体をモノ扱いしちゃ――喜怒哀楽あるんだし、戦場じゃMC（メサイアコントローラー）さん達と同じくらい、一蓮托生の間柄なんだから」
「……」
「こんなにカワイイのに――ねぇ？静夜（しずや）”」
「……」
芳と、抱きしめられはしゃぐ“静夜（しずや）”を前に、涼は何故か冷めた顔を崩さなかった。
「同調率が変わった？」

「ああ。ほとんど正比例している」
坂城は言った。
「二人ともコクピットにいるからわかるが――平野少尉が現在１５０％上昇中。対して小清水少尉は５０％を切った」
「まずい……ですね」
「ああ――このままなら、小清水少尉にゃ悪いが、戦わずにお払い箱になってもらうしかない」
「同調率変化の原因は、わかったのですか？」
「ああ――これに気づいたのは俺じゃねぇ。立花大尉だ」
「あの変態（ペド）！――もとい」
美奈代はあわてて口を閉じた。
「きつい言い分だなぁ」
「……大尉には“さくら”を任せません。絶対に」
「まぁ――あの嗜好だから、母親としてはそうなるか」
立花大尉は近衛軍に知れ渡った幼女愛好者（ロリコン）にして、あの二宮真理中佐に惚れられた人物でもある。
“さくら”を自分の娘や妹のように思っている美奈代にとって、とてもではないが“さくら”に近づけたい人物ではない。
「どっちにしても、大尉には前から仮説があってな？精霊体は主に３つの要素で騎士を選ぶ。
一つが、自分（メサイア）との性能的相性。これは説明するまでもないな。
二つ目が、性格的相性。精霊体の擬似人格とのコミュニケーション関係。まぁ、人間関係上の相性。
そして三つ目が、精霊体そのものの個人的感情だって、そう言うんだ」
「個人的感情？」
「ああ。精霊体が自らの主（マスター）を選ぶ要素はこの３つ。どれを重視するかは精霊体次第だ。たとえば、嬢ちゃんの“さくら”や都築んトコ

の“十六夜（いざよい）”は、明らかに個人的感情が強い。宗像さんトコの“涼”は性能と感情の双方から――まぁ、立花さんから言わせると、どう考えても性的な意味での主従関係に近いらしいが……」

「む、宗像……お前ってヤツは……」

フフン。と、鼻で笑った宗像が、美奈代からの疑惑の視線を肌ではじき返す。

「それで？平野と小清水は？」

「平野はコクピットに潜っているだけで精霊体“静夜（しずや）”との相性はあがりっぱなしだ」

ピッ。

モニターに平野騎のコクピットの映像が映し出される。

「な……何をやってるんだ、あいつは」

芳がモニターにアニメを映し出し、“静夜（しずや）”と大はしゃぎで楽しんでいた。

「し、神聖なるメサイアのコクピットで……何を！」

「落ち着け泉」

宗像が言った。

「つまり――平野は精霊体と共通の趣味を見いだして、それから関係を深めたということか」

「お前はどうだったんだ？」

「企業秘密だ――で？問題の小清水だが……ああ」

小清水騎のコクピット映像を見た宗像がため息をついた。

「泉」

「ん？」

「小清水は……間違いなくお前だ」

「ん？」

「つまり……他人とのコミュニケーション能力に欠けている」

「ど……どういう意味だ？」

美奈代がのぞき込んだモニターの中で、マニュアル片手にパネルを操作するのは涼だ。

そして――
「……っ」
沈痛な面もちで美奈代はモニターから視線を外した。
モニターの隅で、精霊体が何か言いたげにずっと涼を見つめているにもかかわらず、涼はそれを無視している。
涼が精霊体との関係を拒絶しているのは明白だ。
「私も……こうなっていたかもしれないのか」
「我々の場合、挨拶のロクにしない間に、即一蓮托生の模擬戦だった。
互いの信頼関係がなければ死ぬほどのな。
……考え方によっては、あれは二宮教官が、そこまで見抜いた上でのことだったのかもしれない」
「……二宮教官には、感謝どころではないな」
「恨みも多いが……そうだな」
「で？どうするんだ？嬢ちゃん」
「……」
モニターの向こうで正反対の対応を示す二人を見比べた美奈代は言った。
「どうもしません」
「何？」
「泉？」
「二人とも、このまま実戦に投入します」
「正気か！？」
「無茶だ！このままなら小清水は」
「他に兵力はない」
美奈代は宗像に決然と言い切った。
「既に部隊戦力は半減。増援のメドは全く立たない。たった1騎でも貴重な戦力だ」
「捨てゴマにするつもりか！？」
「違うっ！」

「どう違う！私は絶対認めないぞっ！？」
「落ち着け宗像――私は指揮官だ。部下を見殺しにはしない」
「後衛だから喰われないとでもいうつもりか？貴様は――」
「奴らが喰われないためにも、我々が前衛で踏ん張る。後衛で奴らには死に物狂いで支援してもらう。その中で、精霊体とのつきあい方を、小清水なりに見つけてもらうしかない」
「見つけられなかったら？」
「その時は――」
美奈代は言った。
「小清水大尉の誕生だ」

「――へ？」
「だから」
夜、美奈代と宗像は、士官室に呼び出した芳に言った。
「小清水少尉と精霊体の関係をより良いものにしたいと」
「事情は、お話からわかりましたけど」
芳は首を傾げた。
「……ある意味簡単で、ある意味難しいですよ？」
「だから、戦友であるお前にも協力を」
「涼、融通が利かないっていうか、単に頑固っていうか、そんなキャラですからねぇ」
「いや。彼女の性格は関係ないと思うんだが」
「大尉……それがですね？精霊体に関しては、大ありなんですよ」
「どういうことだ？」
「ほら、涼と私、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒのテストパイロット外されたじゃないですか」
「うん」
「私は涼が降ろされたから、無理言って一緒に降ろしてもらったんです。で、肝心の涼がＦｌｙ　ｒｕｌｅｒ降ろされたのは、精霊体

が原因なんです」
「ん？」
「涼って、カワイイものに目がないんですよ。猫とか犬とか……んで、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの精霊体も、そりゃもう猫かわいがりして――挙げ句がかわいがりすぎて、精霊体に逆に嫌われちゃったんですよ。
いません？カワイイもの好きなあまり可愛がり方が度を超してしまうタイプ。
涼はその典型的っていうか、最悪レベルなんです。
そりゃもう、ベッタベッタでしたからね。それがいろいろあって、最後にゃ精霊体調律師まで巻き込んで大騒ぎ」
「……」
「涼、もの凄いショックだったみたいで、それ以来、精霊体を“モノ”扱いするようになっちゃったんですよねぇ……」
「精霊体を拒むのは、一種の自己防衛ってことか？」
「宗像中尉、それだと思います」
「泉も一緒だ。要するに不器用ってことだろう？」
「やっぱりそうですよね？」
「……どういう意味だ。二人とも」
「いやぁ……最初、大尉って涼のお姉さんか何かかと思った位で……」
「そうだろう？」
「……少尉、先を話せ」
「違うんですか？……何だ。涼のお父さんって近衛騎士だって聞いていたからてっきり」
「私の父は、４年前に戦死している」
「え？……涼もですよ？」
「何？」
「涼は私生児で、お母さんに育てられたんですけど、去年、お母さんが亡くなって身寄りがないんです」

「……今は、小清水少尉本人のことだ。平野少尉、戦友としていい知恵はないか？」
「いい知恵ですか？」
うーん。
芳は腕組みしつつ唸った後、言った。
「放っておくのが一番ですよ」
「何？」
「私のお父さん、魚河岸で働いているんですけど、漁師さん達同士でケンカになったら、仲裁方法は一つだそうです」
「どうするんだ？」
「二人を同じ部屋に放り込んで、徹底的にケンカさせるんです。しばらく放っておくと、それまでのあら不思議。険悪ムードはどこへやら。二人で仲良くチンチロリンなんてやってるそうですよ？」
「……青春ドラマでよくあるパターンだな」
「中尉、そうです。大尉とケンカになったらやってあげますよ。ベッドとシャワーは必要ですよね。ロープも」
「平野少尉、気が利くな」
「恐れ入ります♪」
「ひ、平野少尉。すまないが、わ、私には心に決めた相手が」
「泉――オンナ同士は、お前が知る以上に素晴らしいぞ？」
「心底遠慮してやる！――とにかく、平野少尉は、小清水少尉を放って置けというんだな？」
「はい」
「それは、小清水少尉が危険にさらされることにもつながるとは思わないのか？」
「涼は近衛騎士ですよ？」
芳はあきれ顔で言った。
「大尉って、部下思いなんでしょうけど……でも、それじゃ、涼は成長しませんよ」
「――っ」

「手を引かれなければ歩けないほど、涼は子供じゃないです。第一」
「第一？」
「――涼、本当は子供や精霊体が大好きなんです。知ってます？　涼、近衛退役したら医学部進学して、小児科医になるか、このまま近衛に残って精霊体調律師になるか、涼の進路希望ってそうなんですよ？」
「それが？」
「そんな娘が、小さい子供っていうか精霊体を見殺しになんてしませんよ。涼が精霊体に冷たいのは単に、精霊体を傷つけたくない一心なんです」
「……泉」
「……ああ」
「このまま――放っておけ」
「……そうするか」
「というわけで、私達、後方で援護しますんで、頑張ってください」
「……それにしても」
宗像は感心したように言った。
「平野少尉は、余程小清水少尉が気に入っているようだな」
「へへっ……」
芳は頬を染めて照れ笑いを浮かべた。
「涼は私のお嫁さんだから♪」

「杞憂……だったか？」
芳が去った士官室で、美奈代は肩をすくめた。
考えてみればそうだ。
騎士とＭＣ（メサイアコントローラー）、そして精霊体は一蓮托生の関係。
涼達はまだ、本当にそんな関係まで達していないだけだ。
この戦いで関係が変わることを祈ろう。

突き放しているのではない。
むしろ、期待すればこそだ。
美奈代はそう思った。
「……ああ」
宗像は楽しげだ。
「平野は、よくわかっている」
「いい友人だ」
「……お嫁さん……か」
「宗像……」
ぽんっ。
美奈代は宗像の肩に手を置いた。
「頼むから、平野を毒牙にかけるのはやめてくれ。頼む……部隊内でそんな」
「毒牙？私の快楽のトゲは、一度味わえば、二度と抜こうとさえ考えなくなるぞ？」
「……」

翌日。
鈴谷の甲板は戦場と化した。
「全騎発艦体勢をなせっ！」
「カタパルト一番エンゲージ、進路クリアーです！泉大尉騎、発進どうぞ！カタパルトト二番、宗像中尉、続いてどうぞ！」
「カタパルト一番、シャトル戻りますっ！」
「本艦はこれより第3戦隊と合流、後方より砲撃支援に入るため変針。ポイント――」
様々な通信がひっきりなしに入ってくる中、
「よっ……と」
こういう時、舌で上唇を舐めるのは、女の子としては悪いクセだと自覚はしている。

それが、平野芳が足の裏に感じた擬似感覚により自分が操縦する“白雷（はくらい）”がカタパルトに脚を乗せた時に思った唯一のことだ。

場所は鈴谷のハンガーデッキカタパルト。

発艦のような、“精緻な動きを要求”する動作は、基本として騎体とＭＣ（メサイアコントローラー）によるプログラム動作に基づいて実施される。

とはいえ、騎体が自分の意志に反して勝手に動くプログラム動作というシロモノは、どうしても芳に違和感を抱かせてしまう。

何しろ、起動した時からずっと違和感ばかりだ。

とにかく騎体が重い。

右肩に担いだＨＭＣとかいうバケモノ砲が擬似感覚として肩に重くのしかかってくる。

バランスを崩せばすぐに横転すること請け合いだ。

「フレーム強化してくれたんだよね……これでも」

ピピッ

ビビッ

アラームを伴い、ステータスモニターがカタパルト接続終了を告げる。

「３号騎平野、１番カタパルトエンゲージ。カタパルトロックを確認」

エンジン調整に忙しいＭＣ（メサイアコントローラー）に代わって報告を挙げるのが、こんな時の芳のせいぜいの仕事だ。

「ＦＤＣ（フライトデッキ・コントロール）より平野少尉」

通信が入った。
相手は鈴谷からの発艦任務一切を指揮するフライトデッキコントロールだ。
「はい？」
「ＦＡ（フルアーマー）の発艦は本艦としても初めてだ。
最悪の事態に備え、ＥＰＡＵ（エマージェンシー・パワー・アシスト・ユニット：この場合、非常推進装置の意）の使用を許可。
作動判断は一任する。
通常シークエンスと平行して即時最大噴射待機状態維持」
そういうのは、管理しているＭＣ（メサイアコントローラー）に言って欲しい。というのが芳の本音だが、残念ながらそうもいかない。
「了解……って、そんなに危険なんですか？」
芳は、全ブースターのコクピット側非常点火装置を確認しながら、それでも訊ねずにはいられなかった。
「当たり前だろう？」
通信機の向こうでＦＤＣの士官が言った。
「通常装備の“白雷（はくらい）”と比較して2倍近い重量がかかっている。下手すりゃカタパルトが動くかどうかさえ怪しいんだ。こんなデブ打ち上げた経験がない」
デブという言葉に、“静夜（しずや）”が顔を真っ赤にして頬をふくらませた。
「よしよし……それだけ――スゴいってことですよね」
「おうよ」
士官は言った。
「鈴谷のボロさをナメるんじゃねぇ」
「……はいはい」

元は武装も何もない鵜来（うくる）級輸送艦は、巨大なコンテナが空を飛んでいるようなものだ。

経費削減のためとはいえ、そんな艦に正規艦のお下がりの空母としての装備を半ば無理矢理に取り付けた曰く付きの艦。
それが鈴谷だ
確かに、そんなシロモノが、長年空を飛んでいられたこと自体がスゴイことだと芳でも思う。

「カタパルト、途中で止まったらどうなるんでしたっけ？」
「心配するな」
――なんだ。途中で止まるだけか。
芳はそう思ったが、
「そのまま前に、“不可視の海”に放り込まれる」
「……げ」

飛行艦は魔法による慣性制御で浮いている。
周辺に結界を展開して“不可視の海”を作り、その上に艦を浮かべていると言って良い。
艦を重力の束縛から解放する“不可視の海”は、落ちた全てを、容赦なく“原子の塵”に変えてしまうシロモノなのだ。
かつて古き良き時代の船乗り達が言った“板子一枚下は地獄”以上の恐怖の海。
それが、“不可視の海”だ。

「安心しろ。痛いと思うヒマもねぇだろうよ」
「勘弁してくださいよぉ……」
「ほら。後ろつかえてるぜ？コケやがったら許さねぇからな」
「はいはい……美由紀っち。お願いね？」
「はい」
平野騎のＭＣ（メサイアコントローラー）、川崎美由紀少尉がモニターの向こうで頷いた。
「ステータスグリーン。出力安定、発艦前シークエンス０１番から

３５番までクリア。こちら平野騎川崎、鈴谷フライトデッキコントロール、発艦許可を申請します」
鈴を鳴らしたような美しい声が通信機に流れ、
「はいはい。美由紀ちゃんのお願いと来ましたからねぇ――――野郎共っ！気合いいれてかかれよ！？」
士官がぞっとするような猫なで声になった。
「……鈴谷コントロール。平野ですけど」
「おう――――どうした？」
「川崎少尉と私とで、態度というか、声色というか、いろんなモノが、全然違う理由を教えてください」
「鏡を見ろ――――平野騎、カウントスタート」
「な、何て失礼な！」
「文句は生きていたら聞いてやるさ――――幸運を！」
「巨乳がそんなにエラいのかぁっ！」
芳は頬をふくらませながらも、目の前に表示された発艦秒読（ラウンチ・カウント・ダウン）を前に、気絶しないように急いで体勢を整えた。
「私レベルの貧乳はむしろ稀少なんだぞぉっっ！？」

「戦力は半減……では効かない……か」

鈴谷ＣＤＳ（戦闘情報指揮所）のメインスクリーンには戦況が映し出されている。

彼我の布陣状況を一瞥すると、美夜は部下に聞こえないように、小さくため息をついた。

敵の分厚い布陣の前には、まるで紙切れ同然の、布陣と言えるのかさえ疑わしい人類側の状況。

予定侵攻ルートが表示されても、美夜は鈴谷艦長として、どう撤退するか、そのルートを考えてしまう。

「これでは……な」

軍人として、その発想が問題だとは確かに思う。

だが――

スクリーンは、敵性反応を示す赤で半ば埋まっているのだ。

戦力差は考えるだけ無意味に近い。

そんな状況なのだから、その発想はむしろ、艦と数百人のクルーを預かる身としては当然だと自己正当化してもみたくなる。

鈴谷の武装をちょっと増やした程度でどうこうなる数では決してないのだ。

「これはまぁ……スゴイよねぇ」

美夜の横に立つ後藤の言葉に、美夜は思わず後藤を睨み付けた。

「司令部（おえらいさん）も」

「はっ？」

「これで戦えってんだもん……俺なら戦う前に逃げる算段考えるなぁ」
「相手の数は大して増えていない。魔族側もさすがにあのダメージは効いたんだろうと思いますが？」
強がってみたものの、美夜自身が、後藤の言葉を正しいと思う。
「そう思う？――本気で」
と、後藤はチェシャネコを彷彿とさせる嫌な笑みを浮かべた。
「……では？」
「こっちの数が減っているだけ。でも、ここでやらなければならない？」
「当然です」
平野は視線をスクリーンを睨み付けた。
「敵も先の戦闘で痛手を被ったのは間違いない。その回復を待ってやる必要はどこにもないです」
「こっちもかなりでしょう？むしろ俺達の方が傷は深い」
「……傷が深くなる前にやるだけです。そうでしょう？後藤中佐」
「俺に言わせれば、自分の傷口無理矢理広げて、練りワサビでも塗り込むようなもんですけどねぇ」
後藤はタバコを取り出し、口にくわえた。
「ああ、火はつけませんよ？単なるゲンかつぎ」
「……」
「でも、エライさんってのはどこの組織も同じですなぁ」
「ん？」
「あんなバケモノ共前に歩兵隊なんて何の役に立つのやら」
「……後方に軽装歩兵2個師団が展開している。メサイア隊が突破されたら」
「記念のエサにでもする気ですかねぇ」
「……」
一瞬、ぶん殴ってやろうか。と、美夜は拳を固めた。
「後藤中佐」

「はいはい……冗談が過ぎますか？でもね。艦長……」
「ん？」
「ここに歩兵持ち込むことの方が、俺は最悪に冗談が過ぎる気がしますけどね」
「……あくまで個人的に」
美夜はスクリーンを睨みながら言った。
「同感です」
「……どこのエライさんも――――犠牲になる下っ端の痛みってのは、考えないもんですな」

楓（フィーリア）の暴発により大打撃を被ったのは人類側だけではない。
魔族も投入戦力のかなりを失った。
それでもなお、魔族側が攻勢に出た理由。
それは、損害はむしろ人類側の方が高く、ここで無理してでも侵攻をかければ、満足な防御が出来ないだろうと、そう判断したからに他ならない。

つまり――――

「この戦力で敵陣に斬り込めだと！？」
アーコットは、配下のメースを一瞥しただけで青くなった。
静岡に攻め込んだ時は１２騎だった部下の数は今や４騎にすぎない。
その４騎でさえ、損害に補給が追いつかず、通常武装でさえ満足に装備していないのだ。
「司令部は狂ったのか！？どういうことだ！私達は警戒任務のはずだ！」
「文句を言うな」

通信担当の司令部要員は、くってかかったアーコットに言い放った。
「戦況はすでに変化したんだ。敵の布陣が完了する前に、前に出なければ勝ちはないぞ」
「敵だって寝てるわけじゃないんだ。わかっていたはずだ！」
「こっちだって全てが見えているわけじゃないっ！」
司令部要員は怒鳴った。
「“どうぞ殺してください”って敵をお誘いしたワケじゃないんだよ！」
「せ、せめて補給をくれっ！」
ここで司令部要員と怒鳴り合って何が変わるわけじゃない。
アーコットは前線の兵士として必要な要求を口にした。
「魔法弾発射筒のエネルギーでさえ、最低限度しか持ち合わせていないんだ！」
「第８補給所で準備が出来ている。２号コンテナを受領しろ。受領後に第８小隊と合流。以降は第２、第３中隊の残存部隊をもって構成される混成戦隊司令部の指揮を受けろ」
「最初からそういう事を！」
「言う前に怒鳴ったのは誰だっ！」

一方、
「部隊全騎に伝達」
美奈代からの通信を受けた涼は、思わず体を硬直させた。
騎体が揺れたのは間違いない。
――――後で泉大尉に怒られるかな。
涼はそう心配しながら、モニターに映し出される光景を見た。

目の前に広がる一面の焼け野原。

かつて、ここには巨大な工場群が建ち並んでいたというが、正直、信じられない。

焼けて曲がった鉄骨と元が何だかわからない歪な黒い塊が埋め尽くす平地。

目の前に広がるのはそれだけにしか見えない。

あちこちに開いた爆撃痕が、ここでかつて何があったかを物語っている。

涼達は、シールドを構えながら低速で空を舞っている。

その背後には、電子装備を狂わせる狩野粒子影響下でも活動可能な用に再設計（単に電子装備なしで飛べるように設計されただけ）軍用ヘリ、ＵＨ－１ＮＥＥが機体に吊した８７式地雷散布装置を使って地上に地雷という名の種を蒔いている。

最低でも１２．７ミリ相当の破壊力を持つ魔族軍の弓兵からすれば、ヘリなんて空飛ぶマトでしかない。

飛来スピードが遅いおかげで、こうしてメサイアとそのシールドで防御することが出来るのが唯一の救いだ。

飛来物体を告げるアラームがいつ響くか、涼は内心でびくついていた。

何しろ、回避は許されない。

シールドと装甲に意地でもぶつけなくてはならないのだ。

「地雷散布終了。ヘリが後退する。後退確認後、ポイント０４に展開する。フォーメーションは逆楔」

その言葉が何より嬉しい。

「小清水了解」

「司令部より追伸。敵主力部隊に動きなし。全部隊は別名あるまで

現状を維持」
　ほうっ。
　知らずに安堵のため息が出た。
　待機命令が出ている間は、少なくとも戦わずに済む。

「現状、対戦車・対人ミックスの地雷原が敵陣地との間に展開されています」
　騎体を指定陣地に展開させた涼は、ＭＣ（メサイアコントローラー）の高良中尉から説明を受けた。
「突撃が予想される敵を地雷でなるべく食い止め、突破してきた敵を撃破する。メサイア部隊は先の戦闘で大幅減。
　実質、この地域でのメサイア投入数は、戦闘開始時点と比較して６８％に低下。
　その穴を戦車隊と砲兵隊が埋めます」
「火力で敵を圧倒する策ってことですか？」
「それが唯一の策です」
「第一波だけしか地雷原は効かないですよね」
「まぁ、そうですけど、他に方法もないですし。幸い、沿岸部のため、艦砲と列車砲による砲撃支援は期待出来ますけどね」
「……はぁ」
「最悪は歩兵隊が出ます……戦力としての意味があるのか、私には言えませんが」
「……」

「各騎、泉だ」
　通信機に美奈代の声が響く。
「待機命令が延長された。敵に動きなし。今のうちにコクピット内で休息をとれ」
「小清水騎了解」

メサイアの駆動音と振動のみが伝わるコクピットで、涼は目を閉じる。

――――何か、暖かいものが飲みたいな。

ふと、そう思った。

エンジン音で目を開ける。

ドイツ軍のメサイア隊が通過していく所だった。

「？」

不意に、コクピット内に甘い香りが漂っているのに気づいたのは、その時だ。

見ると、精霊体“時（とき）”が、紙コップをおずおずと差し出していた。

「……あの」

「何？」

「高良中尉が“どうぞ”って……」

「……ありがと」

中身はどうやらココア。

涼が手を伸ばし、コップを掴もうとしたが、

「あっ！」

ＳＴＲシステムに袖をひっかけ、危うくコップを落とすところだった。

ココアの飛沫が涼と“時”の手に飛んだ。

「熱っ！」

グローブをはめている涼はともかく、白いスモックを身にまとうだけの“時”は素手だ。

「バカっ！」

コップをＳＴＲシステムの窪みに置くと、涼は慌てて“時”の腕を掴んだ。

「大丈夫？火傷した？」

「……えっ？」
「もうっ。精霊体って火傷の薬使えるの？……えっと、とにかく冷やさなくちゃ」
「あ……あの」
「エマージェンシーキットは……もうっ、取りづらい所に入れるんだから」
「わ……私、大丈夫です。私達精霊体は、この姿でいる時は……って、あの……？聞いてくれてます？」
“時”は手をさすりながらそう言ったが、
「ダメよ！」
涼は怒鳴った。
「女の子でしょう？痕が残ったらどうするの！」
「で、ですから」
「とにかく手を出しなさい。……何よ、メディカルキットに火傷の薬がないじゃない」
「火傷対策の薬は……それですけど」
「え？これって、火傷の薬なの？」
涼は驚いた様子で手にしたクリーム入りのチューブを見た。
「はい」
「わ、私……洗顔ローションだと思ってた」
「……いえあの」
「だってこれ！すっごくお肌のツヤがよくなるのよ？私、毎日使ってるのに」
「た、確かに成分には肌細胞の活性化が期待出来る成分があるんですけど」
「……もしかして、呆れている？」
「……はい」
「……」
「ああっ！ご、ごめんなさい！つい本音が！」
「余計悪いっ！」

「ううっ……」
「と、とにかく」
コホンと、わざとらしい咳をした後、涼は赤面しつつ言った。
「ココア、こぼして悪かったわね」
「ココア？」
紙コップの中身をじっと見た“時”は首を傾げた。
「これ、ホットチョコレート」
「……同じでしょ？」
「えっ？そうなんですか？」
“時”は、うーん。という顔になった。
ようやく情報に行き着いたらしい。
「ホット・ココアはココアパウダー、砂糖、濃縮剤から作られますけど、ホットチョコレートは、板チョコレートへ直接お湯や温かいミルク等を注いで作るか、あるいはダーク、セミスウィートまたはビタースウィートのチョコレートを小さく刻んで、砂糖を加えたミルクへ入れかき混ぜて――痛い痛いっ！」
“時”は突然、涼にヘッドロックをかけられ、頭を拳でグリグリとやらた。
「――あ・の・ね・ぇ」
“時”の頭をグリグリし続けながら涼は言った。
「――そんな小難しいことはどうでもいいの」
「そ、そうですか？ホットチョコレートはフランス語でショコラ・ショーとも言って――痛ぁいっ！」
「蘊蓄傾けているヒマがあるなら、味わいなさい。冷めちゃうじゃない」
「で、でもこれって、小清水少尉にって」
「もの凄く飲みたいって顔してるでしょ？それともいらないの？」
「で、でも」
突き出されたココア入りのコップ。
“時”は困った顔でコップと涼の顔を交互に見た。

「小清水少尉に渡すっていうのが、私の受けた命令ですから」
「受け取ったわよ」
「……まだ、飲んでいません」
「受けた命令は、“渡せ”でしょ？“飲ませろ”じゃなくて」
「……それ屁理屈。わぁぁんっ！」
「どっちが屁理屈かましてるのよ？ほら」
ココア入りのコップが“時”の目の前で揺られ、甘ったるい湯気が“時”の小さな鼻をくすぐる。
ごくっ。
“時”が唾を飲み込んだ音がコクピットに響く。
「――ほら」
コップを手渡され、“時”は困った顔を涼に向けた。
「飲みたいなら飲みたいって素直になる。子供は素直が一番」
「あ……ありがとう、ございます」
一瞬の躊躇を見せはしたが、“時”は思い切ってコップに口を付けた。
甘く、暖かい液体が舌を包む感触に、“時”の顔が思わず緩む。
「うん」
涼はその顔に満足したように頷いた。
「いい顔する」
「――えっ？」
「おいしいって顔してる。いいことよ？」
「あ、ありがとうございます」
「それにしても……」
涼は感心したように“時”を見た。
「あんた、アタマいいんだね」
「え？」
「ホットチョコレートとココアの違いとか、よく知っているじゃない」
「あ……ありがとうございます」

「ショコラ・ショー……か」
うーん。と唸った後、涼は一言、
「決めた」
と言った。
「えっ？」
「あんた、これから“時”じゃなくて、その名前にしてあげる」
「あ……あの？」
「うん。“ショコラ・ショー”、略して“ショコラ”……もっと略して“ショコたん”かぁ……かわいいじゃない」
「こ……困ります」
「慣れなさい」
「……でもぉ」
“時”はそっとコップを涼の顔の前に出した。
「冷めちゃいますよ？」
「ありがと」
涼はコップに口を付けた。
他人が口を付けたコップなのに、不思議と嫌悪感がわかない。
やや冷めかけているが、それでも口いっぱいに広がる甘さが心地よい。
「“しょこら”」
「……せめてカタカナ変換してください」
「緒湖裸」
「……ううっ……怒りますよ？私、ホントに怒っちゃいますよ？あんまりヒドイ冗談はイジメなんですよ？嫌いになっちゃいますよ？それでもいいんですか？」
「……高良中尉みたいなこと言わないの。いい？ショコラ、覚えて置いて？」
「何をです？」
「私、ココアは角砂糖３つ」
目をぱちくりさせたあと、“時”改め“ショコラ・ショー”は微

笑んで頷いた。
「――はい♪でも……」
「ん？」
「これはホットチョコレートです」
「あんたも結構、強情ね」

「――まぁ、そうなるよねぇ」
うんうん。とコクピットで頷くのは、涼達の会話を通信機越しに聞いていた芳だ。
あの可愛いモノ好きの涼が、精霊体という、いわば「愛らしい」という言葉を具現化したような存在を前に冷たい態度をとり続けることなんて出来るはずがない。
ダイエットに成功したことのない“あの涼”のこらえ性のなさは天下一品だ。
涼にとっては不本意だろうが、その芳の読みは外れていなかった。
「お二人とも、仲良くなったみたいで、よかったです」
同じように聞いていたMC（メサイアコントローラー）、川崎美由紀少尉がのんびりした声で言った。
「ホットチョコレートがつなぐ友情――ですか」
「ココアでしょ？」
「違います。ホットチョコレートは――」
一通り、ホットチョコレートとココアの違いについて蘊蓄を傾け終えた美由紀に、芳は言った。
「あのね？美由紀さん」
「はい？」
「……もし、“時”が人間だったら、美由紀さんの妹だって、私、かなり本気で思うよ」

「補給が間に合ったってワケかい？」
サライマのコクピットから降りたアーコットに声をかけられた整備士官が答えた。
「マッコイ商会が手配した業者、ようやく送ってきたんですよ。魔界から人間界に通じるルート、この騒ぎでかなり混乱しているようで」
「――けっ。ドンパチの勝敗が運送業者の都合で決められちゃ、死んでも死にきれないよ」
「ごもっともで」
整備士官はコンテナを親指で指しながら言った。
「魔法弾発射筒――口径は８０番を４丁、マガジンは１丁につき４、弾薬は合計２千発」「接近戦装備は？光剣はないのかい？こっちは実剣しかない」
「勘弁してくださいよ。こっちもこれが精一杯です。でも、いい方法がありますよ？」
「――敵から奪えってのかい」
「ご明察」
舌打ちした後、アーコットは手にした端末上で戦況データを開いた。
端末のモニター上に周辺の敵味方の布陣状況が表示される。
「敵の補給拠点は……ここから約１０キロか」
「ここは、戦闘開始と同時に後退します。戦況に注意してください？」
「……ありがとよ」
アーコットがサライマに戻ろうと、歩き始めた瞬間。
ズズズズッ……ズンッ。

鈍く粘っこい、連続した爆発音が響き渡った。

「どっちだい？」

「人類側ですね。海から攻撃でしょう」

「フネがあれば……贅沢な話かねぇ」

「贅沢です」

「そうかい」

「海軍の砲撃、定刻通りスタートです」

「うん」

美夜はスクリーンを目にしながら頷いた。

駿河湾に展開した艦隊は、大日本帝国海軍連合艦隊から第一戦隊、ドイツ帝国から派遣された高海艦隊（ホーホゼーフロッテ）から第二機動戦隊。

「派手ですなぁ……」

「砲撃は３８０ミリ砲以上の戦艦が計１０隻、１５５ミリ砲以上の巡洋艦が１２隻。あとは商船に無誘導式ロケット砲が積めるだけ」

「さすが軍隊……無茶苦茶しますな」

「そんな無茶でもやらなければ、この戦（いくさ）は勝てないよ」

「……ごもっとも」

平野の言う“無茶”をやっているのは、軍艦ではない。

大型コンテナ船にロケットランチャーを搭載しただけの別名「ロケット船」だ。

「ロケット船」は、中華帝国との交戦状態突入と同時に、帝国領内で拿捕された元中華帝国船籍の大型コンテナ船を改装、ロシアと共同開発した９Ｋ６２－３型３００ミリ２０連多連装ロケットランチャーを１０基、ランチャー交換用のクレーンを同数搭載しただけ

の簡単な艦。
その船内には莫大な数のロケット砲を貯め込んでいる。
ロケット砲自体は、有効射程は約３５キロと短いが、沿岸攻撃に限定すれば十分であり、無誘導故の命中精度の低さも、面攻撃という使用法を考えれば、問題にもならない。
撃ち尽くしたロケット砲発射筒を交換してケーブルを差し込むだけで発射可能という、とにかく全般に渡って取り扱いが容易な特徴が評価され、この戦争が始まるまで、トヨタ製トラックと共に大量に海外輸出されていたシロモノだ。

船に乗り込むのは、陸軍から派遣されたロケット砲兵ではない。
彼らから最低限度の操作訓練を受けただけの商船員だ。

“エンペラーのオルガン”
９K型独特の発射音はそう呼ばれるほど、オルガンの音に近い。

――俺は一生、オルガンが嫌いになれる。

簡単な装甲が張られた艦橋でロケット砲発射の光景を見守っていた、コンテナ船“無双丸”の加藤船長は本気でそう思った。
軍艦が嫌いで商船乗りになったのに、気が付いたら軍艦並に改装された船を任された。
とにかく忙しい。
数キロ先で戦艦達が頑張っているらしいが、司令部からは矢継ぎ早に「早く撃て」「次を撃て」の催促ばかりだ。
本気で戦艦達が撃っているのか聞きたくなったとしても、文句を言われたくさえない。
「９……１０！船長、４回目、終わりっ！」
各ランチャー担当要員が頭の上で丸を作って発射の完了を告げる。
それを確認した見習いが加藤にそう報告した。

「よしっ！5回目装填しろっ！」
「次のタマは！？」
「えっと……クラスター――――違うっ！気化爆弾だ！6回目はクラスターだぞ！」
「5回目装填！種類は――――気化爆弾っ！事故に注意しろよ！？」

ギュイィィィンッ

「伏せろっ！」
背筋の寒くなるような音が近づいてくるのを感じ、弓兵隊を指揮していた魔族軍指揮官エウレカは、とっさにそう叫んだ。
部下全員に聞こえた自信はない。
だが、そう叫ぶしか彼には選択肢がなかった。
彼が大地にしがみつくか否かの刹那――――

ズズズズッ……ズンッ！

爆発音と共に襲いかかってきた爆風に吹き飛ばされた。

「くそっ！大丈夫か！」
「はいっ！」
昨日洗濯したばかりの服はもう泥まみれだ。
部下達は全員無事。
それだけが唯一の救いだ。
「畜生……」
敵はすぐ近くを進んでいた大型妖魔達を狙ったらしい。
数体の大型妖魔が体を切り刻まれ、のたうち回っていた。
いくら何でも、あれほど暴れ回ってはコントロール出来ない。

処分されるのが関の山だ。
無数と言い切れるほどの規模を誇る妖魔部隊の中の数頭に過ぎないが、ああされてはさすがに気の毒だとは思う。

「軍曹っ！」
通信装置を持った部下が怒鳴る。
「第二波、突入しますっ！」

「砲撃を突破されたぞ！」
連続する爆発音と地響きに、涼は我を忘れていた。
通信機のスピーカーから入る美奈代の怒鳴り声にようやく現実を取り戻すことが出来た。
陣形は逆Ｖ字。
自分と芳の射界を確保するため、泉大尉が命じた配置だ。
涼はそこまで理解すると、“ショコラ”に言った。
「しょこら」
「カタカタ」
「カタカナでしょ？」
「……ううっ。高良中尉は第４射までの射撃予定完了してます」
「……ホント、砲撃任務に就いてると、あんたとＭＣ（メサイアコントローラー）だけで戦争出来るわね」
「そんなことありません」
「そうかな？」
「そうです」
「じゃ、私は何すればいいの？ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）は射撃は高良中尉の仕事よ？」
「無事に当たるようにお祈りするとか、応援してあげるとか――――あっ、そうだ」

ショコラはどこからから、板チョコと簡単なコーヒーメーカーを取り出した。
「ホットチョコレートを作るって手もありますが？」
「……お祈りすることにするわ」
涼は言った。
「後で、あんたのお尻ペンペン出来ますようにって」

コクピットで精霊体相手にギャーギャー始めた涼騎を後目に、芳はＭＣ（メサイアコントローラー）の美由紀との打ち合わせに余念がなかった。
「第４射までが限界だね」
「はい。第５射目を撃つ前に敵がここに殺到します」
「数は大型妖魔だけで１００以上……こっちはドイツ軍を入れてもメサイア３５騎……」
ポリポリ……思わず頭を掻く。
「これで侵攻しろって……元から無茶だったんだよねぇ」
「どこかにリセットボタンが欲しいですねぇ」
「ホント……美由紀っち、そろそろお願い」
「了解――全騎へ通達。こちら平野騎川崎、ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）、射撃最終シークエンス突入。射撃体勢完了」
「こちら泉だ。突入する妖魔は新型。正直、ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）だけが頼りだ。射撃可能になり次第、各個に撃て。早瀬、宗像は散弾砲にスラッグショット装填。３０７ミリなら何とかなると信じろ。ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）第４射発砲と同時に散開。ポイント６５へ後退」

モニターに捉えた早瀬騎がマガジンを交換する様子が見て取れた。
地面が揺れだしたのは、その時だ。
「敵、大型妖魔がこちらへ殺到中、数４０」
「美由紀っち――お願いね！」

「了解――射撃、開始します」
“白雷（はくらい）”が構えた大型砲がついに火を吹いた。

敵のモノは私のモノ

大地を揺さぶる大型妖魔達の突撃。
それは、これまでの戦いにおいて全てをなぎ倒してきた絶対的な破壊。
小高い丘に設営された司令指揮所に立つ魔族側指揮官オーツ大佐は、突撃して行く大型妖魔エディ達の後ろ姿を頼もしげに見つめた。
体長３０メートル前後。体重は１００トン以上。
現在、ヴォルトモード軍が保有する大型妖魔の中では中堅サイズの存在で、新潟コロニーで生まれたばかりの新顔だ。
まだ若いことを示すシワのない皮膚装甲が黒く、頼もしげに陽光を反射する。
「大隊指揮官」
近づいてきた副官が、バツの悪そうな顔で言った。
「弓兵による弾幕応射、開始されます」
「中尉」
「……１５分です」
「何がだね？」
「敵の砲撃を受けてから、です」
「最初から弓兵を適切に配置して、弾幕応射任務に就かせていたら、第一波の損害のかなりは免れた――そうは思わないか？」
「……し、しかし……かくも全てが混乱した状況では」
「それを何とかするのが君の役目だろう」
「も、申し訳……」
「人類の武装が、我々の予想を遙かに超えたレベルであることは、作戦参謀として理解していたんだろうな」
「返す言葉も……ございません」
副官は悔しそうに俯いた。
オーツ大佐自身、副官の言い分もわかるし、むしろ慰めの言葉の

一つもかけてやりたいのが本音だ。
いくつもの司令部やかなりの数の指揮官があの爆発で消し炭になった後だ。
指揮官を失い、混乱する兵達を兵科ごとに収容するだけでも大佐自身、泣きたくなるほどの苦渋を味わったのは確かだ。
末端の部隊の指揮命令系統が未だ破壊されたまま、軍としての体勢が十分な回復を見せているとは言い難い状況の中で、ここまで体勢を復活させた副官の努力は賞賛されるべきだということは、上官である彼自身が認めるところだ。

だが、それはあくまで指揮命令系統の復活という点に限定しての話だ。

戦闘陣形を形勢する上で、対空防御の要である弓兵の配置を忘れた挙げ句、味方に少なくない損害を与えたことは、むしろ罰せられるべき失態だ。

――――かなり、疲れているな。

長年、生死を共にしてきた関係が、普段の副官らしからぬミスの理由を教えてくれる。
指揮命令系統に心血を注ぎすぎた挙げ句が、肝心の布陣に神経が回らなくなったのだ。
そして何より、その布陣に許可を与えた、決裁権者である彼自身の失態であることは否定のしようがない。
とはいえ、攻撃を受けて部下を失ってはじめて自分の失態に気づいたことは、指揮官として隠しておきたい。
安易に欠陥のある布陣を許可した指揮官の失態ではなく、布陣を立案失態ということで、彼に泥をかぶってもらう。
そして、ここは、適当に慰めの言葉の一つもかけて貸しを作って

おくことにしようか。
それが、全ての世界における“適切な”上下関係というものだ。

そう決めたオーツ大佐が副官に振り返り、何事かを言おうと口を開いた瞬間だ。

ズドォォォォン
ズズゥゥゥゥゥン

鈍い粘つくような爆発音が連続して発生。
オーツ大佐はとっさに身をかがめた。

「何だ！？」
「エディ達の進路で爆発！」
副官が怒鳴った。
「エディ達に被害が！」
「なっ！？」
バカな！
オーツ大佐は副官の言葉を疑った。
ついさっきまで、あれほど勇壮な突撃を見せてくれていたではないか！
――だが、

ギャォォォォッ！
ヒーアァァァッ！

「……」
その光景を見たオーツ大佐は言葉を失った。
脚を吹き飛ばされ、体液をまき散らしたエディ達が悲鳴を上げて地面をのたうち回っている。

それも1体や2体ではない。
「な……何が？」
「大隊指揮官！」
副官は己の職務にしがみついた。
「敵の攻撃です！」
「一体、何を使ったというんだ！飛来音は無かったぞ！？」

突撃してきた大型妖魔達が地雷を踏んで脚を吹き飛ばされる光景は、涼達も目撃した。
「敵１６脱落。敵、侵攻速度変わらず」
「地雷原はすぐに？」
「前衛突破まで３０秒――第４射発射します」
「……ちっ」
次の第４射を撃ったら後退だ。
“白雷（はくらい）”が担いだ巨大な砲、ＨＭＣ（ハイメガカノン）から放たれる光を見ながら涼は舌打ち一つ、ブースターを臨界に入れた。
キィィィン――ズンッ！
腹に響く重低音を奏でつつ放たれたＨＭＣの一撃は、高良中尉によって狙いを付けられた哀れなエディの額に命中。その真後ろを走っていたエディの頭部から尻尾までを文字通りバラバラにした後に、３体目のエディの胴体半ばを、得体の知れない巨大な肉塊に変えて消滅した。

それでもエディ達の進撃は止まらない。

「第４射完了！」
高良中尉が涼に告げた。
「砲身加熱、冷却中。パワーセルＮｏ５装填、敵、接近しすぎてい

ます！」
「大尉！」
「小清水、平野、先に下がれ！宗像、早瀬、時間を稼ぐ。ここは我々が！」
「ああ」
「了解っ！」
ドンッ
ズンズンズンッ！
涼の目の前で、それまで塹壕に潜んでいた3騎の“白雷（はくらい）”が突然立ち上がり、307ミリ散弾砲を乱射に近い速度で射撃する。
その弾丸は、単なる散弾ではなく、大型妖魔用に開発された一弾である炸裂型のスラグショット弾。
どこから仕入れたのかは知らないが、紅葉曰く“戦艦の徹甲弾を改造した”その一撃は、つまりは戦艦の徹甲弾を至近距離の水平射撃されたのと同じだ。
例えエディといえども、まともに食らえばひとたまりもない。
「芳っ！」
「うんっ！」
エディ達が次々と倒される光景を前に、フルアーマー化された涼と芳の騎のブースターが点火され、一気に後方跳躍。
稼いだ距離を活かして5射目を放つ。
涼騎から放たれた一撃が、1体のエディを切断してのけた。

「ポイント65に移動したら備えろ！」
美奈代は後ろを確認しないで怒鳴る。
「予備弾倉を踏むんじゃないぞ！？」
「わかってます！」
いいつつ、涼は山積みにされた弾薬を危うく踏みつける所だった。
「あ……危なぁ……」
「マスター……下手」

「わ、悪かったわねっ！」
ショコラの冷たい視線を浴びつつ、涼は赤面して怒鳴った。
「それよりパワーセル、さっさと装填出来る限り装填して！中尉、ここからでも射撃出来ますか？少しでも大尉達の支援を！」
「ダメです！ここからでは――」
ピーッ！
コクピットに警報が響き渡る。
「敵！？バカなっ！」
一瞬、陽光を遮って通過するものがあった。
オレンジ色の見慣れない騎体が頭上を通過していった。
「――ちっ！」
高良中尉の舌打ちがヘッドユニットのスピーカーに響いた刹那、“白雷（はくらい）”から放たれたＭＬ（マジックレーザー）がオレンジ色の騎体を狙うが、間に合わない。
芳の騎も射撃を試みるが、やはり相手のスピードが速すぎる。
「騎数４、飛行艇１――かすることもできないなんて！」
「それ、私が傷つくんですが！？」
高良中尉のササクレだった声に、涼は思わず口を押さえたが、それこそ後の祭りだった。
「私、射撃管制は、そんなに下手じゃありませんよ！？むしろかなり自信が！」
「だったら当ててくださいっ！」

「ひぇぇぇっ……まさか直交コースだったとはね」
アーコットはアゴを流れた冷や汗を手の甲で拭った。
敵の観測網を警戒して地上すれすれの超低空を移動中、突然、敵部隊が後退してきた時には、正直、アーコットも肝を冷やした。
移動速度をとっさに上げ、敵を強行突破した判断は、決して間違っていなかったと思うが――

「あれ、あの騎体……？」
それが、白い独特なデザインの騎だったとなれば、事情が少し違ってくる。
アーコットはモニターを操作して、やり過ごした敵の画像を取り出した。
やや無骨な分厚い装甲。
見たことのない巨大な砲。
それは、かつて自分が苦汁をなめたあの騎とは違う。
「にのなんとか言うのとは……違う？何だ？あの悪趣味なデザインは」
「隊長っ！」
部下から通信が入る。
「――やばっ！」
巨大な煙突の残骸が急速にズームアップしたように目の前に迫り来る。
サライマをとっさにひねって回避。
「あ……危な……」
「ご無事で？」
「え、あ、ああ――ラズリ、さっきの騎を見たか？」
「はい。ただ、先に隊長が交戦した部隊とは、形状がやや違うと思います」
「別部隊かな」
「おそらく」
「じゃ、とりあえず今は――！」
焼けこげた大地が終わり、半壊したとはいえ人間の建物が並ぶ光景が目に入ってくる。
大型の天幕と車が集結している。天幕の付近は様々な大きさの箱が山積みされている。
こちらに気づいたのだろう。人間達の動きがにわかにあわただしくなった。

大きな建物の近くに2騎、黒いメースが片膝状態で待機しているが、こちらをやり合うには時間的に間に合うまい。
アーコットは部下に怒鳴った。
「全騎っ！食い物は後でいい。今は武器を探せ！」
「了解っ！」

「第8補給所が！？」
涼達と合流、弾薬を補給中の美奈代は、その報告に耳を疑った。
「敵の奇襲を受けました」
牧野中尉は冷たい声でそう言った。
「ドイツ騎士団の後衛は！司令部は！？」
「防衛隊は全滅。反応ありません。司令部からは何も」
「――――っ！」
「敵の狙いは後方攪乱、もしくは」
「もしくは？」
「――――いえ」
牧野中尉はそれを否定。
口の中で呟く程度に抑えた。
「いくら何でも……補給物資を狙ったなんて」

魔法弾で蜂の巣にされたドイツ軍メサイア“ノイシア”が無惨な残骸を晒す中、アーコット達は補給物資の入ったコンテナを片っ端から物色し、アーコット達が護衛した補給艇から降り立った兵士達が各所で逃げる敵の掃討を開始している。
アーコットは、目の前で両手を挙げた人類側兵士がオーク兵に真っ二つにされたのを一瞥するに止めた。

今は、そんなことに構っているヒマはどこにもない。
「これは……何だこれ？おい、あったか！？」
アーコットはコンテナからこぼれた得体の知れない、金属の塊（メサイアの駆動パーツ）を蹴り飛ばし、部下の戦果を問いかけた。
「あった！」
簡易倉庫の屋根を引っぺがした“サライマ”から通信が入る。
その“サライマ”が手にしているのは、アーコットの見る所、どうやら実弾系の発射筒らしい。
「ここに山ほど並んでいる！そこのメースが握ってるのと同じでさ！」
「よくやったマーキー、タマを探せ！それから、他の連中は使えるものは片っ端から奪え！剣、槍、シールド、全てだ！」
「隊長！タマあった、形が似ているから間違いない！」
「よし貸せ！――多分」
アーコットは手にしたＭＧ－３３ラインメタル製メサイア用汎用機関砲と、“ノイシア”の残骸が手にしたものとを見比べながら、
「これで――どうだ？」
自信はなかったが、とりあえず弾丸を装填してみる。
そして、“ノイシア”の残骸へ向けて引き金を引いた。
ズガガガガガッ！
連続した１２０ミリ砲の発砲音と反動がアーコット騎を襲い、“ノイシア”が壊れた人形のように踊る。
「反動の割にゃ……大したことないねぇ」
アーコットは呆れたように銃口から煙を上げるＭＧ－３３を見た。
「何だい。人類はこんな程度のシロモノか？」
「隊長、実剣もあったぜ！」
「今のうちだ、いただけるモンは全部もらっちいまな！スーフィ、モーリン、さっさとコイツを持って警戒につきな！」
「応っ！」
「隊長、酒だ！酒があったぞ！」

「最優先で詰め込め！クーリーズ、工兵隊に命じて“例のブツ”をどっかに仕掛けろ！」
「了解！」

エンプレス・ローズ

「ええいっ！」

ザンッ！

マガジンの交換が間に合わないと判断、散弾砲を放棄した美奈代は、突撃してきた最後のエディめがけて居合の一撃を喰らわせた。

ギイッ！

エディが奇妙な声をあげ、美奈代騎の後ろで上下真っ二つになって地面に転がった。

「牧野中尉、状況は！？」

剣を鞘に戻すヒマも惜しんで散弾砲を拾った美奈代は、マガジンを交換、砲へ砲弾を送り込んだ。

「ラムリアース帝国軍メサイア部隊が合流。これにより戦術的には五分五分になりました」

牧野中尉は答えた。

「ただし、全体的には第３波を食い止めたに過ぎません。敵、すでに第４波突撃に向け陣形を整えつつあります。敵の数を考えると、連続波状攻撃を仕掛ける余裕はまだかなり残っているものと思われます」

「海軍の砲撃支援は」

「敵の阻止攻撃が凄まじく、効果をあげるまでには至っていません」

「泉」

横に移動した宗像騎から通信が入った。

「まずいぞ。ここは部隊を移動させるべきだ。

すでに隣の６４ポイントに入ったドイツ軍がこっちにも布陣する動きを示している。

今がチャンスだ。

今のうちに鈴谷に後退して補給を」

「ど、どうしてだ？」

美奈代には宗像の言い分が理解出来ない。
我々は、ここで敵を食い止めているではないか。
「我々は数的には少数だ。そして我々という防衛網としての層は、全体から見て最も薄い」
美奈代は味方の布陣状況を見た。
最前線に配置されているメサイア部隊の布陣状況はへの字状。
その後方に戦車、砲兵、歩兵がそれぞれ横陣形をとっている。
「え？あ、あの？」
「……泉」
宗像はいらだった声で言った。
「今晩、寝られないと思え」
「い、いやあの！」
「二度と都築のフニャチンなんぞ興味もわかない体にしてやる」
「部隊通信で何て事言うんだ！大体、都築はフニャなんかじゃないっ！」
「確かめたのか？」
「ええっ！？美奈代いつの間に！？」
「早瀬！突っ込む所はそこか！？」
「突っ込まれたんでしょう！？」
「ちがぁうっ！――ハァ、ハァ……司令部、後藤隊長へ」

「はいはい……聞こえてるよ？
あ、その会話について俺からはノーコメント。
セクハラになるからね。
色々うるさいんだわ。
艦長が横に立ってるし」
「そうじゃなくて！」
「宗像の言い分は正しいな」
「――へ？」
「前衛に配置されているドイツ軍メサイア部隊にラムリアース帝国

軍メサイア部隊が合流しつつある。敵が再び狙うとしたら、最も備えが薄いところを狙うさ」

「……」

美奈代はようやく意味が分かった。

敵の弱いところを叩く。

戦術の基本だ。

「し、しかし！」

「安心しろ」

後藤は言った。

「お前達が守っている地点が、防衛線の中で最も弱いことは、国連軍でも理解している」

「なら増援を！」

「回している余裕はない。むしろ、お前達をオトリにしてそこに敵を誘い込む動きだ」

「――――っ！」

「後退を許可する。それから、鈴谷はこれより敵飛行艦隊との艦隊戦に入る。補給物資は発進した飛行艇がこれから投下する。

回収しろ。

艦隊戦に入ったら、一々お前達と通信している余裕はない。

だから、今のうちに言っておく――――生き残れ、幸運を祈る。以上だ」

珍しく真顔で敬礼した後藤との通信はそれで切れた。

「艦隊戦！？」

美奈代は目を見張った。

「敵には飛行艦まで！？」

「２００キロ先、敵飛行艦隊が出現。２５０メートル級飛行艦１０。国連軍飛行艦隊が艦隊戦闘機動開始」牧野中尉が後藤の言葉を補足するように告げた。

「上も下もか……」

「泉、どうする？」

「残弾どれくらいだ？」
「あと幾程もない」
「泉大尉、鈴谷から発進した飛行艇より補給物資が投下されました」
「投下ポイントは？」
「ポイント５５。真後ろです。続報、現在、ラムリアース帝国軍メサイア部隊が接近中」
「後退する。宗像、早瀬、小清水達を護衛しつつ移動。かかれ」
「了解。芳、涼、続け！」
「はいっ！」（×２）
美奈代達が敵に背を向け、ブースターを点火させようとしたその瞬間。
「敵、第５波突撃開始！」
「何っ！？」
「敵、超音速突撃！接触まで１０秒！」
「くそっ！」
美奈代は怒鳴った。
「全騎、浮けっ！」

まるで黒い波のように見えた。

美奈代はこの時のエディ達による突撃を、後にそう表現した。

黒い波がザッと襲ってきたと思ったら、全てを破壊していった。
単体の自重が数百トンを誇る群れ突撃。
それはまるで砂の城に襲いかかった波そのものだ。

回避する方法は一つだけ。

――――逃げる。

それしかない。

美奈代達は、再び突撃を試みようとするエディ達の頭上を越え、ポイント５５へ移動した。

「どうやらこいつら、再度の突撃には時間がかかるらしいな」

「しかも、あの“サイ”に似ているが、ビーム攻撃が出来ないらしい」

「こいつらにあれが出来るなら、今頃、私達は戦死しているよ」

美奈代達の間でやけくそ気味の会話が交わされる。

エディ達の上空に砲撃の雨が注がれ、エディ達の背に乗った弓兵達から放たれた魔法の矢が雨と交差、連続した爆発を引き起こしたのは、その時だ。

何度見たかわからない。

見るたびに、“敵を殺してくれ”

そう願って、敵わなかった光。

美奈代達は、それでも祈った。

“敵を殺してくれ”と。

その祈りが効いたかどうかわからない。

爆発の雨は、それまでとは明らかに違った。

そのままオレンジ色に輝く流星雨となって、エディ達に注がれたのだ。

「な、何？」

「あれ？あれ……確か、教本で」

「時雨弾か！？」

砲弾の種類に即座に思い当たったのは宗像だ。

対地掃討用の子爆弾を砲弾内に詰め込んだのが時雨弾と呼ばれる特殊弾。

最新型は滑走路を貫通するほどだと聞く。

おそらく、空中撃破されることをわかりきったこととして、海軍が弾種を選んだんだろう。
大型妖魔達の分厚い装甲を抜くには心許ないが、随伴する小型妖魔達にはたまったモノではないはずだ。
「大型妖魔達を倒す前に、弓兵を殺すつもりか」
――成る程。
宗像は、感心した様子で何度も頷いた。
「将を堕とす前に、腰巾着を――うむ。人生の教訓だ」
「宗像ぁ……あんたが人生語ると、どうしてこう……ワイセツに聞こえるのかなぁ」
「早瀬。それはお前の心の中の小悪魔がときめいているからだ」
「理性の間違いじゃない？私はノーマルだからね」
「それでノーマルか？」
「う、うるさいっ！」
――そういえば、早瀬って、どういう異性が趣味なんだろう？
宗像は何か知っている様子だが？
美奈代がそんなことを考えた時だ。
「ガイドビーコンを受信。補給コンテナ確認、すぐです」
「どこ――そこか。全騎、コンテナ付近にて迎撃体勢をとる。展開急げ。コンテナの中身はＨＭＣの予備弾と……」
地上に転がったコンテナを開放。
各騎が迎撃体勢をとる中で、補給が開始される。
「敵、動きました！」
牧野中尉からの報告が入ったのは、美奈代が散弾砲の予備マガジンを騎体のマガジンラックに装着し終わった時だ。
「山梨県上空にて艦隊戦、開始されました！
後方に新手のメース部隊出現！」
「メースが出ただと！？」
美奈代は目を見張った。
「くそっ！こっちは対妖魔戦闘装備だ。対メース戦装備は――」

「ビームライフルのエネルギーパックは1騎につき3つが限度です」
「シールドに貼り付けてあるヤツですね」
「みなさん、今までよく使わずにいたものです」
「泉より各騎」
美奈代は言った。
「武器を慎重に選べ。ビーム系の無駄弾はなるべく避けろ」
「了解」
「了解した」
「小清水、平野両騎はコンテナを楯に砲撃支援に専念。早瀬、宗像、意地でもここで食い止めるぞ」
「あいよ！」
さつきが折り畳んで背中に格納していた槍を装備した。
「やっとこいつの出番ってわけね！」
「敵、メース部隊突撃。数」
牧野中尉の声が悲鳴に変わった。
「数４０以上！他ポイント――ダメです、阻止出来ませんっ！」
「するんだ！中尉！」
美奈代は怒鳴った。
「普段のあなたらしくもない！」
「ご、ごめんなさいっ！」
黒い大型妖魔達の頭上を飛び越え、一つ目のメースが続々とこちらへ向かって殺到してくる。
手にした斧が陽光を反射して鈍く輝いているのが癪の種だ。
「全騎！」
ビームライフルで必中のスキを狙いながら美奈代は部下達に言った。
「ここで止められなかったら、後ろには戦車や砲兵、歩兵だけだ――全てをここで食い止めろっ！近衛メサイア乗りの意地にかけて！」
「かっこいいっ！」

「ふん――一世一代の大演説だな」
「少しは劇的な反応示せ！」
「わ、私達は」
涼が震える声で言った。
「感動しましたっ！」
「付いてきますっ、大尉っ！」
芳もノリノリで言う。
「天国と地獄以外、どこへでも！」
「地獄はここだぞ？少尉」
「あ、そりゃそうですね」

接近するメースは４０では効かない。
やはり、防衛網が薄いこの地点に戦力をまとめて投入。
メースによる一点突破を狙ったと見て間違いない。
大型妖魔達が後退しているのは、メースをここに投入する間に下がらせ、メースの対応に戦力を割いて薄くなった防衛線の一点に再び突撃させるためだ。
しかも、今度は数度まとめて来るはずだ。
美奈代にはその確信があった。
だからこそ――
「本来なら、ここで我々こそが突撃すべきなのに！」
そう思うと悔しい。

「――そう思う？」

「ああっ！そう思うっ！」
そうだ。
いつだって後手後手で、負け戦ばかりだ。
そろそろ勝ち戦を味わいたい！
美奈代は本気でそう思ったからこそ怒鳴った。

「戦争は勝たなきゃ意味がないんだ！」

「そうよねぇ……クスクス」

「ん？……なんだ？今、私は誰と話を？」

「なら」

「ま、待て、今、私と交信したのは誰だ？所属、官姓名を」

「ちょっと――どいていて？」

通信の相手は言った。

「ヒロインのお通りよ？」

その瞬間、美奈代達の前面に躍り出た騎があった。

薔薇を連想させる深紅に染め上げた装甲。

精緻な工芸品を彷彿とさせる華やかにして優雅な騎体のライン。

一瞬で前に出た機動。

そして、一挙手一投足、全てが、不可解にも美奈代達の本能レベルで告げた。

――この騎士は、ただ者ではない。

――絶対に、刃向かってはいけない相手だ

少なくとも、美奈代はそう思った。

「い、一体？中尉？」

「……ハッ」

牧野中尉の息を呑む声を、美奈代は確かに聞いた。

「ば、バカ……な」

「おい、宗像？前の騎士、所属官姓名を！」

「無礼者っ！」

怒鳴ったのは、何と宗像だ。

「泉、貴様は嫁として亭主と同じドジを踏む気か！？」

「な、何の話だ？国籍マークも付けていないんだぞ！？」

「“エンプレス・ローズ”は一輪だけでいいんだ！」

「え……エン？」

「ははっ。上手いこと言ってくれるじゃない？」

深紅のメサイアからの通信から聞こえる妙齢の女性の声は楽しげだ。

「““エンプレス・ローズ”は一輪だけでいい”……か。気に入っちゃった♪」

「き、恐縮です」

「後でよかったら一緒に飲みましょうね？

私が誰か？

１２人で出てきたらあんた達はあの世行きだけどねぇ」

すでにメース達は手にした戦闘斧を振りかざし、目の前のメサイアに殺到しつつある。

「ええいっ！」

美奈代がとっさにビームライフルの引き金を引こうとした刹那。

「1人で出てくるのは勝利の女神よ！」

ズバンッ！

信じられないことが起こった。

深紅のメサイアに一斉に襲いかかったメースの数は１０騎。

その１０騎が、目に見えないバリアにでもぶつかったように、同時に吹き飛ばされた。

しかも、騎体はバラバラだ。

「――な？」

目の前の光景が信じられず、美奈代はトリガーを引くタイミングを逸したことさえ忘れ、呆けたように深紅のメサイアを見るしかなかった。

「よっしゃ♪１０騎同時♪」

ヒャッホウッ♪という歓声と同時に、そんな声が上がった。

「少なくとも、同時は人類史上、私が初めてよねぇ……うん！私ってスゴい！」

「あ……あの？」

敵もさすがに狼狽しているのか、深紅のメサイアを遠巻きに取り囲み、警戒するにとどまっている。

「――あっ、さっきからごめんなさいね？ここは私達ラムリアース帝国軍メサイア部隊がお相手するわ？あんた達、日本の近衛って

ことは、麗菜の部下でしょ？」

「は？は、はい」

「文句は私が聞いてあげるから、お願いだから何もしないでね？下手に麗菜に借り作りたくないのよ。わかって」

「は……はぁ」

美奈代はバカのように答えた。

「わ、わかりました」

後は言葉にならない。

「ありがと♪全騎へ通達。ここは私がやる。メースは無視して大型妖魔狩りに動け！」

「えっと、も、モーリス騎です。了解しました――全騎、続けっ！」

やたらと若いというか幼い声の号令の元、美奈代達をすり抜けるようにしてラムリアース帝国軍メサイア部隊が大型妖魔達めがけて襲いかかっていく。

「――ったく、ねぇ？」

深紅のメサイアは、文字通り敵をなぎ払いながら、息を乱すこともなく、親しげに美奈代達に語りかけた。

「１０騎よ？１対１０で勝ったなんて信じられないわ。私じゃないのに！……あーっ！もうアタマきちゃう！どんな騎士？女って聞いているけど、もし出会ったらお嫁に行けない体になるまでいたぶってあげるけど」

「早瀬、宗像、ついでに平野っ！」

美奈代はとっさに怒鳴った。
「何も言うな！頼むから、それはこいつだと、余計なこと言うな！私だってお嫁には行きたいんだ！――――ハッ！？」

「……」
「――――“さくら”……お願いだから、何も言わないで」
後の祭り。
よく言ったものだ。
美奈代は呆然としながらそう思った。
“さくら”のあきれ果てたというか、冷たい視線が何より痛い。

「――――ああ。何だ、アンタなの？」

ピッ。

どういう方法を使ったのか、通信モニターに部隊以外の女性の顔が映し出された。
赤いウェーブのかかった見事な髪。
白い陶器のような肌。
青い瞳。
大人の色気と、美奈代には絶対マネさえ出来ないだろう、洗練された優雅さが絶妙にマッチされた高貴な雰囲気を当然の如く放つ白人の女性が、興味津々という顔で自分を見つめていた。

「お初にお目にかかるわね。
ラムリアース帝国、聖導皇家（せいどうこうけ）次期皇位第一位、ナターシャ・レイソン・コーダンテ――――以後お見知り置きを♪」

ズルドの苦悩

「邪魔」
ナターシャにそう言われ、エンプレス・ローズとギャランホルンで構成されるラムリアース帝国軍親衛隊、つまり、ラムリアース帝国軍最精鋭部隊が魔族軍と斬り結ぶ中、美奈代達は補給物資を抱えて移動を開始した。
「そんな頭数で何が出来るのよ」
はっきりそう言われれば、返す言葉もない。
かといって、他国軍と勝手に共同作戦をとることも許されてはいない。
美奈代は部下に命じた。
「移動、ポイント４５に展開する近衛軍本隊と合流するぞ」
「しかし」
異を唱えたのは涼だ。
「移動ルート上には、あの第８補給所が」
「ついでに叩く」
美奈代は言った。
「手ぶらで合流するより、メースの首の２つ３つぶら下げていった方が、少なくても格好はつく！」
「り、了解っ！」
「泉、それでいいのか？」
「宗像――私達が後藤隊長から受けた命令は、“生き残れ”だ」
「……クックックッ……そういうことか」
「そういうことだ」
「なら、いくか」
「いこう」

「それにしても」
宗像は言った。
「第８補給所を叩くとは、敵も考えたものだ」
「そうだな」
「泉」
「ん？」
「知ったかぶりしているなら、後でおごってもらうぞ？」
「そ、そんなことはないっ！」
「焦る所が尚更怪しい」
「……ちっ、だ、だからっ！」
美奈代はどもった口調で言った。
「第８補給所は、我々のいる右翼防衛線の後方ど真ん中にある。補給、移動共に中継点（ハブ・ルート）になる。我々にとって、ここを抑えられたら右翼防衛線は前後両面から叩かれる。反面、敵はその逆で叩けるわけだ」
「今晩、ベッドでパーティしてやろう」
「あ……あの」
涼が信じられない。という声で言った。
「い、泉大尉って……」
「何だっ！」
美奈代は、指揮官としての素質を疑われた気がして、むきになって答えた。
「私だって、いろいろ考えているぞ！？」
「そ……そう……です、よね？……だから……その……両刀……」
「小清水少尉っ！」
美奈代は怒鳴った。
「通信上の発音は明瞭を心がけろっ！」
「はっ――――はいっ！」
「泉大尉っ」
牧野中尉だ。

「前方に大規模空間異常！」
「どこですっ！？」
「第８補給所っ！」

「よっしゃぁっ！」
わき上がる金色の光を前に、アーコットは歓声をあげた。
光の中からは、続々と黒いメース達が現れてくる。
心強い増援だ。
この状況での援軍がどれほど心強い存在か。
その姿を見るだけでキスの一つもしてやりたくなっても、むしろ当然だといいたい。
「アーコット大尉、よくやった！」
そうやって現れた一騎から、そんな通信が入った。
「これで敵の後方を叩ける！」
「礼はいい！“簡易転送陣”の追加、さっさと開きな！」
「わかってる！ホウチョ、工兵隊はどこか！？」
「今、来ますっ！」

第８補給所を確保したアーコットが工兵隊に命じて設置したもの。
それは、集団空間移動（テレポート）を可能にする野戦型空間移動装置――簡易転送陣。
作動時間は限られるが、仕組みは簡単で、工兵隊だけで簡単に組み上げられる。
一度、作動させれば、予めリンクされている別の簡易転送陣上から、地上のどこへでも、あらゆるものを転送させることが出来る、いわば“どこでもドア”だ。

アーコットは、これを使って混成戦隊のメース達を敵の後方に呼

び出したのだ。
本来なら、大型妖魔達も呼び出したいが、短い作動時間と、メースが一騎ようやく通れるほどの狭い装置の幅を考えれば、どだい無理だ。
だから、メースと一緒に、他の転送陣を転送してもらい、その数と規模を増やすことで対応する。
即席の案だったが、ここまでは順調だ。

「アーコット！混成戦隊から２０騎、引っ張って来た！」
アーコット騎の真横に移動したサライマは、アーコットとは旧知の仲であるエトラ少佐の騎だ。
「２０？戦況は大丈夫なのかい？厳しいんだろ？」
２０騎といえば、混成戦隊の戦力の半分近くだ。
戦線を維持出来るとはとても思えない。
「義勇軍が６０騎、戦闘に加入」
「ハン……義勇軍に頼るたぁ……私達もとうとうヤキが回ったかね」
「言うな！第２、第３小隊は私と共に敵陣を背後から突く！第１小隊はここを確保しろっ！工兵隊はどうか！」
「私達はどうなるんだい！」
「君はどうとでも動け」
エトラは言った。
「その方が、やりやすいだろう？」
「――――そりゃ、そうだ」

「前方にメースの反応！数増大中！」
「馬鹿なっ！」
反応は見る間に増え続け、４騎が２４騎にまで増えるのに１分を必要としなかった。

「て、敵は一体！？」
「方法は不明ですが、瞬間移動（テレポート）を使ったようですね」
「瞬間移動？」
美奈代は愕然として言った。
「まるでそれじゃあ……」
「人類でも、不可能じゃないんですよ？ただ、いろいろ危険なだけで」
牧野中尉は言った。
「さすが魔族ってところですね」
敵を褒めないで下さい。
本当ならそう言いたいが、美奈代もこの時だけは思わず頷いていた。

「……メース２０騎」
分が悪い。
――どうする？

指揮官として、どうする？
こういうとき、誰かに判断を任せられないのが辛い。
全ての責任が、自分に来る。
それが――恐い。

「泉っ！」
宗像が怒鳴る。
「敵が動いたぞ！」
「こちらでも確認している！」
戦況モニター上を移動していくメース達の反応を見て、美奈代は答えた。
「くそっ！前方からは大型妖魔、後方からメースでは！」
「違うっ！」

「何が――――ぐっ！？」
一瞬、スクリーンがホワイトアウトした。
恐ろしく強い光に襲われた証拠だ。
「こ……これは！？」
「ＭＬ（マジックレーザー）！照合データ合致！」
牧野中尉が叫ぶような声で言った。
「あの……例の大型メースです！」

「むぅ……」
太平洋上空高度１万メートルに浮かぶメース、“銀龍”のコクピット。
そこで口をへの字に曲げるのは、楓（フィーリア）だ。
「む、難しい……」
まるで算数の宿題でも前にしたように、楓（フィーリア）は唸った。
「照準が……ずれる」
「さぁ、どうしてでしょう♪」
通信機越しの楽しげな声に、楓（フィーリア）は頬をふくらませた。
銀龍の横を飛ぶサライマを駆るカヤノからだ。
「……教えてくれないでしょう？」
「教えてくださいって言うまではね」
「……教えてください」
「遠距離射撃は、ただ照準すればいいってもんじゃないの。敵の速度や進路、それから自分との距離といった、細かいデータ入力が必須」
「頑張ってしたもんっ！」
「してないの」
「したっ！」
「距離の設定、一桁間違えてるわよ？」
「……うっ」

「緯度経度は逆、高度が２０で気温が１万５千？」
「……ううっ」
「これでデータ入力したことになる？それとも、こんないい加減な入力で、よくあんな近くに当てたって褒めたほうがいい？」
まるで母親が子供を叱るような、静かな口調に楓（フィーリア）は、
「……ご」
「ご？」
「ごめんなさぁいっ！」
大声でそう言った。
「よろしい♪」
楓（フィーリア）から白旗を奪ったカヤノは楽しげに頷いた。
「懲りずにもう一回、やってみましょう。今度は――――そうね」
この子に必要なのは自信だ。
自信をつけるためには、大きな戦果をあげるのが一番。
だったら？
――――ここだ。
「敵防衛線左翼。射撃は１０秒ホールド。列の真ん中をなぞる感じで狙ってご覧なさい？」

「砲撃警告だと！？」
結局、アーコットは補給物資から奪った人類側兵器を補給艇に詰め込む方を優先した。
部隊や騎体のコンディションがこんな状況で、まともに人類側のデミ・メースとはぶつかりたくない。
その現実的打算が、アーコットにはあった。
調べた限り、軍内部では統制されている酒や食料、そして人類の用いる火薬系兵器は、アーコットの小隊にとっては潤沢な数、手に入った。

残念なのは、実剣系兵器が全く役に立たない程度。
それでも、何もないよりマシな結果だ。
補給艇の中に続々と物資が詰め込まれるのをほくそ笑んで見守っていたアーコットの騎体が、砲撃警告を受け取ったのは、エトラ少佐達の部隊が、敵陣の後方へ襲いかかる直前。
海からの砲撃。
しかも、その砲撃元は――――
「あ、あの疫病神が!?」
疫病神。
アーコットでなくても、ヴォルトモード軍兵士にとって、それはそういう存在に成り下がっていた。
銀龍だ。
「図体ばかりの味方殺しが!」
砲撃範囲は、敵防衛線左翼。
「隊長っ!」
「ビビるんじゃないよっ!」
砲撃警告を受け、逃げだそうとした部下を怒鳴りつけた。
「二度も同じマネするわけないじゃないか!馬鹿だねっ!」
「だ、だけどよぉっ!」
「またドシりやがったら、アタシがあいつをぶっ殺してやるさ!。補給艇への物質積み込み、遅らせるな!シンチョ、そこらに転がってるデミ・メースの残骸は立てておきな!敵への欺瞞になる!」
「へ、へいっ!」
「ズルド閣下の娘だろうが何だろうが、知ったことかい」
アーコットは空を睨んだ。
「落とし前、とってもらおうじゃないか」

「泉、どうする!?」
「やるしかないだろう!?」

泉は言った。
「他の部隊は空まで対処しているヒマはない。やれるとしたら、遊軍になった私達くらいだ」
「大尉、小清水です。本隊への合流は！？」
「斬艦刀一本でも渡り合え」
「そんなっ！」
「小清水と平野は後方からの狙撃にのみ神経を注げ、接近戦は私達がやる」
「本隊と共同して！」
「本隊に戦力を割かせれば本隊そのものが危ない。何より」
「何より？」
「飛行艦隊までが挟撃されたらどうなる！？帰るところがなくなるぞ！」
「――了解っ！芳、カノンの残弾はあるわね！？」
「まかせてっ！」
涼が力強く頷いた瞬間――

それは、国連軍防衛線左翼に飛来した。

一瞬、光が走った。
そう思った途端、大爆発がまるで地面からそそり立つカーテンのように走った。
とっさにシールドを思わず構える。
「左翼防衛線方面で大規模爆発！」
「敵の攻撃――って！？」
爆発の後、風にながれた土煙が視界を奪い、その中を、ガンガンと土砂や様々な残骸が降り注いでくる。
その中には――

グシャッ。

「っ！！」

シールドの端に引っかかるようにしてぶら下がったものが何か知った途端、涼は胃液が逆流した。

人間のちぎれた上半身が、両手を万歳する格好で、シールドにぶら下がっていた。

「いっ――――つっ！っ！！」

死体をはがそうとシールドを振るうが、どうしたものか、死体はシールドからはがれようとしない。

まるで、涼をからかっているかのように、手をぶらぶらと強く振るだけだ。

「な、何でっ！？」

「小清水少尉っ！」

MC（メサイアコントローラー）の武田中尉が怒鳴る。

どうやら、中尉はシールドに死体が張り付いていることに気づいていないらしい。

「やめて下さいっ！突撃ですよ！？」

「――――っ！」

ここで遅れることは出来ない。

遅れたら――――ああなる。

涼は、シールドをなるべく見ないようにして、操縦システムを操作。

離陸を開始した僚騎に続いた。

「――――来たわね」

敵の接触警報に、カヤノは一切動じることはなかった。

「フィーリア？今日はここまで」

「えっ？」

「敵が接近中。そろそろ逃げるわよ？」
「まだやれます」
「私がダメっていっているの」
「でもぉ」
「接近戦になったら、この銀龍は不利よ？騎体壊してお父様に怒られたい？」
「……下がります」
「よろしい。攪乱幕と目眩幕を散布。戻るわよ？」
「はぁい」

夕刻。
カヤノはズルドの執務室にいた。
執務室とはいえ、中は殺風景なもので、装飾のかけらもない。
ただ、２１０センチという巨体を誇るズルドの体格に合わせて、天井は高く、調度品も頑丈に造られているのは確か。
とはいえ、司令官の執務室なんだから、もう少し豪華にしてもいいんじゃないか。
カヤノは来るたびにそう思う。
「――以上です」
「……そうか」
ズルドは、娘の活躍を報告として受けたのに、浮かない顔だ。
その理由がわかるだけに、カヤノまで顔を曇らせる。
「閣下」
カヤノは怒鳴られる覚悟で言った。
「このままでは、危険です」
「危険？」
ズルドは顔をしかめた。

「戦場が危険でないはずはなかろう？」
「そうじゃなくて」
「？」
「フィーリアちゃん自身のことです」
「フィーリアの？」
ズルドは意味が分からない。
「どういうことだ？」
「フィーリアちゃん、兵器を扱うことに何の恐怖感も、罪悪感も感じていないようなんです」
「……む」
「まるで――遊びのように」
「……」
机の上で組まれたズルドの手に、力がこもる。
「自分が扱っているものが、一体、何なのか。そして、その結果、何が起きているのか、あの子は今ひとつ分かっていません。――いえ」
カヤノは決然として言った。
「あの子は、理解することを拒んでいるのです。
それは、あの子の優しい心が戦場に立つためには必要なことかもしれません。
あの子がおかれた立場で、閣下のために役立つためには、ああするのが最も手っ取り早いですから。
ですけど、あの子は女の子です。
閣下。このままでは、フィーリアちゃんのためになりません。
あんな優しい子は、戦場に立つべきではないのです」
「……気楽に言ってくれるものだ」
ズルドは深くため息をついた。
「まるで、何も出来ない愚かな父をなじっているようだぞ？」
「――なじっています」
カヤノは言った。

「あの子は私にとってもカワイイ存在です。そのカワイイ存在を危険にさせる全てが、私にとっては敵です」
「上官侮辱罪で手打ちにされたいか？」
その大型妖魔が唸るような声さえ、カヤノは動じない。
「殺されても、私は本当のことを言ってると、信じます」
「……お前のように」
ズルドはカヤノから視線を外した。
「はっきりモノを言い過ぎるタイプの女は、どうも苦手だ」
「――――どうも」
「銀龍は、あいつにしか操れない。先の攻略ではしくじったが、使い方さえ誤らなければ、これほどの戦果を産み出す」
「戦果が、逆にフィーリアちゃんを深みに追いやりますよ？それでいいんですか？」
「カヤノ大尉」
ズルドは席を立つと、カヤノの前に立ちはだかった。
カヤノはそれほど身長が高くない。
１５５センチほどと、魔族の中でも小柄な方だ。
当然、体つきも華奢だ。
対するズルドは2メートルを越える筋骨隆々とした大男。
そして、まるでそびえ立つ巌のようなその男は、カヤノの属する軍という組織上、カヤノの生殺与奪の権を持つ男でもある。
軍司令官。
フィーリアの父。
それが、目の前の男、ズルドだ。
対して、カヤノはあくまでフィーリアの友人であり、メース操縦の教官に過ぎない。
その立場は歴然としている。
その男が、カヤノに訊ねた。
「貴様は今、何者だ？」

カヤノが去った執務室。
ズルドはソファーにその巨体を沈めていた。

「――女、か」

――私は、女として意見を言わせていただいています！

カヤノは毅然としてそう言い放った。

――女だから、あんな小さい子が戦場に立つのはおかしいと思いますっ！

「……言われなくても」
ズルドは呟いた。
「俺だって、父親として反対しているわい」
腕を組んで目をつむる。
そして、今日の娘の戦闘結果を思い出した。
敵防衛線左翼への砲撃は、敵に戦線を維持出来ないほどの甚大な被害を与えた。
右翼に対する奇襲もあって、人類側戦線は完全に崩壊。
勝利は、拍子抜けするほどあっさりと魔族軍の手に転がり込んできた。
現状、人類側は防衛線を放棄、３キロ後方にまで下がった。
おかげで、魔族軍側は戦線の建て直しが極めて容易に進んでいる。
その戦果の半分は、フィーリア一人の功績と言って良い。
それは、司令部も認めていることだ。

父親として、子供がそれほどの大戦果をあげたとすれば、それは嬉しいことだ。

ただ、その子供は――――年端もいかない娘だ。

「娘に戦場に出て欲しい親なんて、いるものか……馬鹿者が」

ズルドはソファーから起きあがり、テーブルの上に置かれた酒をあおった。

「カヤノ大尉……お前の父親と話がしてみたいわ。娘が戦場で戦う父親とは、どういう気分か」

ため息混じりに見上げた先。

そこには、壁に掲げられた一枚の肖像画があった。

椅子に座った母子が、ズルドに微笑みかけている。

ズルドの亡き妻、コーシウスと、娘、フィーリアが、そこにいた。

「……コーシウス」

ズルドは、ただ微笑むだけの妻に訊ねた。

「フィーリアが戦場に出たと知ったら――――お前も、俺をなじるか？娘を戦力として扱う俺を、非情だと、そうなじるか？」

コーシウスは、生前と変わらぬ優しい微笑みを浮かべるだけだ。

戦力が限られる中、銀龍は、いわば最強戦力として位置づけられつつある。

兵力も物資も、全てが不足する中で、たった1騎で戦線を崩壊させる銀龍は、今の魔族軍にとって何より稀少な戦力だ。

すでに、次とその次の侵攻作戦への投入が決定している。

一度、決定された作戦を覆すことは、ズルドにも出来る相談ではない。

ただ――――

それは、ズルドの愛娘なのだ。

一度、その愛娘を失った恐怖を、再び味わうことを、ズルドは何より恐れる。
自分の命と引き替えに、娘を助けると言われれば、ズルドは喜んで自ら命を絶つ。
それくらいの覚悟はある。

しかし、それはあくまで、個人の問題だ。
軍司令官としてはそんな感傷を作戦に持ち込むことは許されないのだ。

「コーシウス……俺は……どうしたらいい？」

肖像画の中で微笑む妻は、その問いかけに、答えてはくれなかった。

謀略の中で

「大凡のことは理解しました」
ダユーは、ティーカップをソーサーに戻しながら答えた。
「何故、私達がこの時代で復活出来たのか」

「恐縮です」
ユギオは頭を下げた。
場所はあの天壇の中。
その周辺には、徹底した人類側の監視網が敷かれ、ユギオでなくても訊ねてくるのに四苦八苦した挙げ句のことだ。
しかも、その中たるや――
「……」
ユギオは冷静を装って、目線だけを動かし、周囲を見た。
豪奢な装飾のされた室内に、ユギオとダユー以外に人の姿はない。
だが、カーテンの影や飾り付けの中から自分に注がれる視線は隠しようがないし、相手もそれで無言の圧力をかけているつもりなのは、交渉の場数を踏んだユギオにはわかる。

「あなた方のお節介が原因とは」

「ははっ」
愛想笑いでいい。
ここで反論なんかして、相手の機嫌を損ねようものなら、命はない。
死にに来たんじゃない。
交渉に来たんだ。
ユギオは続けた。
「お節介でしたか？」

「二千年以上も眠っていたのです」
ダユーは、ユギオの持ってきたチョコレートを興味深そうに口に放り込んだ。
「感謝すべきなのか――判断が出来ません」
「感謝は求めません。欲しいのは協力です」
「ヴォルトモード卿の封印地点は私達にも不明ですよ?」
「……やっぱり」
「卿の封印より、私達の封印の方が早かった。それは確かなはずです」
「しかし、弓状列島に封印が存在する公算が最も高いはず」
「元天界軍司令部所在地……イツミ率いる第一親衛軍と、第一軍、第三軍が束になって戦った最後の激戦地」
「天壇は?」
「側面支援位しましたよ?」
少しだけ、ムッとなったダユーは口を尖らせた。
「ガムロ様と私の関係はご存じでしょう?愛人として後方攪乱から補給線の破壊まで、やりたい放題させていただきました」
「天壇が、いの一番で封印された理由がわかった気がしました」
ユギオは引きつった笑みを浮かべた。
「さすが知謀にかけてはイツミと共に賞賛された貴方だ」

「あの子供以上ですわ。あの子ですら、この城は陥落せなかった」

「さもありなん……それで」

「お話を聞く限りでは、卿は弓状列島に封印されているのですか？」

「可能性が最も高い――――そうは申し上げましょう」

「その封印を解いて、全てを元に戻すおつもり？」

「その通り」

ユギオは再び、ティーカップを手にした。

「人類の数は多すぎる――――文明は進みすぎた。人類はこのままなら、この地球と共に自滅します」

「本心は存じませんが」

ダユーはクスリと小さく、ほんの小さく笑った。

「タテマエとしては、お見事ですね」

「戦争をするためには、大義名分こそが大切なのです。それがしっかりしていれば、カネも兵も集まる。支持は言うまでもない」

「そこまで単純かしら？まぁ、いいでしょう。私達も思うところはありますから、協力出来る所はやりましょう」

「感謝します」

「要望した物資補給は」

「日本海側に門を確保します。それからです」
「具体的に」
「弓状列島への門敷設は完了しています。
ヴォルトモード卿の封印地点とされる倉木山門開放は3日後の予定。
倉木山の門開放と同時に、その他の門を開放。
部隊を送り込んで周辺の制圧作戦を開始。
補給部隊の現地到着はそれから2日後――正味5日後ですね」
「生活上の物資はともかく」
ダユーは小さくため息をついた。
「メースが足りませんの。城の対空・対メース防御兵器の封印解除に一苦労してましてよ？」
「メース150騎のご要望にはお応えいたします。とりあえず、サライマタイプを先発して30騎をお持ちしたところです」
「ええ。性能的には、さすがに“我々”の作品の方が性能は上のようですね――人線何百年も過ぎたのに」
「獄族の技術は我々にとっていつだってオーバーテクノロジーですよ」
ユギオは、勘弁してくれ。と言わんばかりの顔になった。
「獄族のメースの入手は無理です」
「当然」
ダユーは笑って頷いた。
「入手しても、あれをメンテナンス出来るのは獄族である我々だけ」

「……ですね」

「あなた方からいただいたもので“我慢”してあげますわ？」

「重ね重ね、感謝いたします」

ユギオはわざとらしく頭を下げた。

「我々としては、その忍耐と」

「――――私の知識？」

「先の戦いでも、戦時簡易型メースの開発には、随分と関与されていたとか」

「両軍の戦時簡易型の８割は私の設計でした」

「さすがです。その知識で、新たな設計をお願いしたいのです」

「……人類でも組み上げられるようなタイプ？」

「慧眼に感謝します」

「面白そうですね。わかりました。ただし」

「――――は？」

「我々は、我々の理論と原理で動きます。あなた方からの束縛は受けませんし、“協力”以外はしません――――よろしいですね？」

●東京都内　某所　天原骨董品店

「……というわけです」

ユギオはほとほと参った。という顔で目を閉じた。

「天壇が日本海に浮かぶことで、人類側が警戒。日本海側に戦力が動く。内陸部は手薄になるし」

「良いことですね。城壁の向こうに敵がいれば、視線は壁の外へ向く。内側で騒ぎを起こすには丁度良い」

神音はそう答えた。

「いいことだらけのはず。
だったのですがね？
肝心の天壇は言うこと聞いてくれないとなれば、困りますよ」

「癖のある連中だと、十分ご存じのはずだったのでは？」

「考えが甘かったことは認めましょう。まぁ、手違いはいろいろありましたが」

パンッ

ユギオは手を叩いた。

「――今一度、お訊ねしたい」

「……何です？」

「あなたが、人類をどう思っているのか」
「唐突な上に、初めて聞かれた気がしますわ？」
「……」
「……恨みはあります」
神音は答えた。
「夫の仇」
「……十分です」
ユギオは小さく、ほんの小さく頷いた。
「お約束通り、滝川村は、協会が全力で防衛いたします。我々にも、その覚悟だけはあります」
「……お願いします。とも言いづらい立場です」
「お察しします」
「弓状列島の人類はどうします？」
「この地に一億三千万は多すぎます。全てを“元に戻した”後、滝川村に生き残った者達を、新たな弓状列島の住民として配置します。適切な管理の元、その数を適度に増やします。
列島の自然が許容できる範囲でね」
「……」
「弓状列島制圧の後、ユーラシア大陸へ侵攻。アフリカ、アメリカへと侵攻を続けます。それぞれの大陸に割り当てる人口は１００万

から５００万程度を想定しています。
それぞれ５００万匹もいれば、それで十分。我々の適切な管理下に置き、自然界の一員に過ぎない人類の立場を明確にします」

「……出来ますか？」

「人間の欲望を管理さえすれば」
ユギオは楽しげに笑った。
「自然の奴隷として、逆らう発想を奪い続けます。必要なら新たな遺伝子操作で」

「……徹底していること」

「さもなければ、この世界は死にます。我々の創造物の愚かさを理由として」

「……」

「この半世紀だけで結構です。
破壊され、絶滅していく種族がどれ程いましたか？
どれ程の河川が汚染され、どれ程の魚介類が絶滅しましたか？
今、この世界では、不要とされた罪無き生命が、まるでゴミの如くに、必要ならば万の単位で処理されている。
単なる非創造物の分際に過ぎない、愚かな人類の都合一つ、身勝手一つで、創造主でさえやりはしないことを、人類はやっている」

「……」

「その負担を、自然が、物言わぬ自然が支払っている」

「……」

「その負担も限界だと、天界も魔界も認めている。このままでは、本当に狂ってしまう。それを食い止めるためにも、誰かがやらねばならないことなのです」

「アフリカと南米で、総人口は４０億人近くに減少したのに――足らないということですね？」

「全く足りません。総人口は3千万人を超えることは許されません」

「……」

「ご心配なく」
ユギオは言った。
「あなたに縁のあるこの弓状列島は、適切な気候管理の元、四季豊かな美しき国として存在し続けます。滝川の人々が、我々の管理の下に生きれば」

「それを、生きているというかは知りませんが」
神音は答えた。
「――少し、見てみたい気はしますね。あなた方が、どういう世界を築こうとしているのか」

飼い犬の挽歌

かなり、本気でマズい。

そんな事態に立たされているのは、日本と中華帝国、そして大韓帝国。

極東三カ国がそろいも揃ってそれぞれに“マズい”立場に追い込まれていた。

マラッカ海峡を始め、主要貿易ルート上の海上封鎖に伴い、輸出入が途絶え、あまつさえ国土が戦場になった日本。

東南アジアに侵攻し、一時はほぼ全域を手中にすることに成功したものの、対米最強カードであるはずの米国債を始め、欧州各国各国から買っていた国債を踏み倒された挙げ句、資産を差し押さえられ、英国のように送り込んだ輸出品は港で燃やされるか、アメリカのように、中華帝国製であることが判明次第、無料配布されてしまった中華帝国。

各国に送り込んだ中華系不法・合法移民は、ＥＵ各国で輸送船に詰め込まれ、国外追放処分を受けた挙げ句が、中華帝国中の港をにぎわせている。

国内は大混乱だ。

米国の参戦はないと見込んだ戦いは、結局、東南アジアを舞台に米国との全面戦争に発展している。

軍司令部はこの戦争を対外進出戦争ではなく、国家防衛戦争と位置づけ、全軍に対し本土防衛戦を指示。

戦争継続のため、全軍に備蓄のリストを元に予備役部隊動員を決定した。

そこで判明したのは、戦闘機３６０機、戦車１，８００両、小銃３０万丁、軽油１７０００バレル、野戦ベッド２０万床、軍靴・テント２０万セット、その他大量の薬品などが盗難被害にあっていたことだ。

軍需工場が魔族軍の被害から復興するに至っていない中、この物質喪失はあまりに痛い話だった。

開戦を決断した江総書記が、相次ぐ敗戦と失政を理由に、王制党幹部と軍司令部の家族諸共、紫禁城前で火あぶりにされた程度で済む問題ではない。

欧米からは、承認すれば領土を削られるオウル宣言が出されている。

これを無にするためにはどうするべきか？

対等以上の立場で講和条約に持ち込むしかない。

人口と経済力には勝るものの、戦争が国庫に与える負担は半端ではない。

経済相に泣きつかれた新任の総書記が同盟国に対して支援を求めたのは当然なのだ。

では、その支援を求められた国とは？

オーストラリアは、すでに米英軍の上陸を間近に控え、ニュージーランドは戦わずに英国軍に降伏。

中東各国は、いつアフリカから魔族軍が攻め込んでくるかわからない以上、自国を守るだけで精一杯。

残されたのは、同盟国とは名ばかりの属国、大韓帝国だ。

●大韓帝国　首都漢城、徳寿宮。

「そんなこと……出来るのか？」

「不可能にございます」

場所は大韓帝国首都漢城、徳寿宮。

大韓帝国皇帝、光隆帝を前に首を横に振ったのは朴宮内府大臣だ。
宮内府は、大韓帝国の皇室（李王家）の家政を所掌する機関であり、それを所管するのが彼の役目である。
疲れ切った顔の朴大臣は言った。
「中華帝国から要求された戦費の負担、兵力の派遣……我が国に耐えられる代物ではありません」
「……しかし」
「我が国は倭国により、一度は冊封国を脱し、国名を大韓帝国と改称、陛下も国王から皇帝になられた」
「……」
「それから約１世紀……途中、１９４５年に中華帝国から侵攻を受け、再度の朝貢を余儀なくされた」
朴大臣は、皇帝の沈痛な顔から視線をそらせた。

「大清皇帝功徳碑」という石碑がある。
清王朝に李氏朝鮮が降伏した丙子胡乱の記念碑である。
その現代版が１９４５年に建立された「大西皇帝功徳碑」。

大韓帝国が西王朝（現在の中華帝国）の冊封体制下に入ったことを示す記念碑であり、韓国では先の「大清皇帝功徳碑」と共に「恥辱二碑」と影で呼ばれている。

その記述はほぼ共通している。
「大西皇帝功徳碑」の大凡の記述は次の通りである。

――愚かな朝鮮王は皇帝を名乗り、偉大なる西国皇帝に逆らった。
――西国皇帝は、愚かな朝鮮王をたしなめ、この大罪を諭して

やった。

――良心に目覚めた朝鮮王は、自分の愚かさを猛省した。

――朝鮮王は、偉大な西国皇帝の臣下になることを誓った。

――我が朝鮮は、この西国皇帝の功徳を永遠に忘れず、また西国に逆った愚かな罪を反省するために、この石碑を建てることにする。

高さ４５メートルに達する巨大な石碑は、韓国の首都・漢城のど真ん中。漢城駅の真っ正面にそびえており、駅を利用する人々はイヤでもその石碑を毎日見させられている。

まさに恥辱だ。

それだけではない。

朴大臣の前にいるのは、大韓帝国皇帝。

この国の所有者であるはずだ。

だが、それは違う。

対外的に、彼は自らを「大韓帝国国王」と名乗らねばならない。

中華帝国への遠慮から「皇帝」さえ名乗ることが出来ないのだ。

外交はすべて中華帝国に握られている上、皇帝自身が国内で皇帝を名乗れるのは、「西王朝皇帝の“お情け”による」と、国民は子供の頃が教えられている。

それは制度的にも認められ、中華帝国の支配政党「王制党」の管理指導下にある「韓国王制党」が政府の実権を握っている。

その理由を、国民は石碑に刻まれた言葉で教えられているのだ。

皇帝は議会に呼ばれることさえない。

伝統行事に引っ張られ、ただ座っているのが関の山の存在。

何故？

議会は中華帝国皇帝のものであり、韓国皇帝は中華帝国皇帝の臣下に過ぎない。
第一、大韓帝国は中華帝国の領土だ。
つまり、中華帝国皇帝の代理に過ぎない。
そういうことになる。

詰まるところ、朴大臣の目の前にいるのは、単なる飾りに過ぎない。
彼が何をしようと、この国では紙一枚動かない。
しかし、それを口にすることどころか、態度で示すことは、朴大臣の全てが拒絶する。
彼は先祖代々、李氏朝鮮王族に仕え続けた伝統ある一族だ。
その一族の血を引く身で、そんなことは微塵も許されることではないと、朴大臣は自負していた。

――その朴大臣もまた、現状では政府の決定事項を皇帝に伝えるしかなかった。

「そして今再び……いえ、未曾有の規模での朝貢が求められている」
「朕は」
それは絞り出すような声だった。
「朕は――どこで間違えたのか。
代々の中華帝国からの恩義に答えるべしという家訓を守り、いかなる屈辱にも耐え、国家繁栄を願い続けてきた……今度のことも、先の韓首相の言うとおり、倭国に刃を向けた……それが、中華帝国への忠誠の証だと言われ……」
「何も間違っていないのです――陛下」
朴大臣は言った。

「すべては、我ら臣民の過ちでございます」
「……朕の不徳……素直に言ったらどうか」
「王制党は国民を見ていません」
朴大臣は言った。
「――見ているのは、北京です」
「……」
「北京の王制党本部の機嫌を損ねたくない。彼らに認められれば、この国……いえ、王制党幹部の言葉を借りれば」
朴大臣は思いきって言った。
「――“半島部分”での利権を食い物に出来るのですから」
「……大臣」
「――はっ」
「……日本と和議は結べないか？」
皇帝は言った。
「日本へは何度か行ったことがある。天皇は皇帝とは違う。皇帝は朕をモノ扱いするが、天皇は暖かく迎えてくれた。日本は我が国を冊封（さくほう）体制から外してくれ、独立国としてくれた過去がある。我が国は少なくとも、日本から刃を向けられたことはない。つまり――」
「無理です」
朴大臣は断言した。
「王制党が黙っていません。それに」
「……」
朴大臣は、皇帝の泣きそうな顔を見るのが辛かった。
「中華帝国は、我が国に対日戦線への参加を要求しているのです」
「朕は反対だ！」
皇帝は玉座を叩き、立ち上がった。
「東南アジアへグレイファントムを送った！命じられた通り、対馬にミサイルを撃ち込んだ！すべて要求には従った！これ以上は無理だ！」
「……陛下」

「朕には、この国を、国民を守る義務がある！朕のなすべき事は、中華帝国へ尻尾を振ることではなく、国家国民の安寧を守ることだ！」

「……」

「朴大臣！朕は必要ならこの身で日本に向かう！直に話せば天皇も」

「……この徳寿宮から」

朴大臣は身を切り刻まれる思いで言った。

「出ることが出来るとお考えですか？陛下」

「……っ！」

そう。

皇帝とはいえ、その動きは全て王制党に握られている。

王制党の許しがなければ、皇帝は王宮から出ることさえ出来ない。

「よしんば、ここを抜け出して、陛下が日本に向かったとしましょう――おそらく、王制党は陛下の命を奪うでしょう。そして、日本の仕業だと喧伝し……」

「……っ」

朴大臣が何を言いたいか、皇帝にも分かる。

「私が動けば……天皇陛下にも迷惑がかかる……そう言いたいのだろう？」

「私の見る限り」

朴は言った。

「天皇を陛下が憧憬の念を持って接するお気持ちはわかります。あれは大器……いえ、天子の器でございます」

「……そうだ」

皇帝は頷いた。

「宮廷に押し込められ、家族の情も知らぬ朕を家族同然に接してくれた。家族と共に」

キュッ……

皇帝は拳を振るわせた。

皇帝が思い出すのは、来日した時の宮中でのこと。

皇族以外、誰もいない部屋で食べた皇后の手料理。
興味津々で韓国のことを聞いてくる三人の娘達。
あの時食べた料理の温かさ。
それまで教え込まれた日本への差別意識はすべて吹き飛び、憎しみが憧憬に代わった。
それまで口にしていた日本への差別的発言の全てを承知の上で、天皇とその家族は私を客人として認めてくれたのだ。
並のことではない。
その器の広さに、朕は心打たれた。

あの皇女の微笑みと共に――――。

帰国して以来、常に思うことは一つ。

あの国には――――ここにはない全てがあった。

そういうことだ。

「朕は、あの暖かみを未だ忘れることが――――出来ない」

「……和議を」
しばらくの沈黙の後、朴大臣は言った。
若い皇帝陛下の心の内を分からぬ程、朴は馬鹿ではない。
「和議をお望みでしたら、私めも何とか努力してみましょう」
「出来るのか？」
皇帝の顔が明るくなった。
それは、戦争開戦以来、朴が初めて見る表情だった。
「スイス経由で日本政府と接触してみましょう」

「頼むっ！」
皇帝は壇上を降りて朴の手を握りしめた。
「朕は、それに全てを託すっ！」

●大韓帝国　漢城　景武台
「――そうか」
王制党当主、李首相は、情報機関からの報告にそう答えた。
宮中の皇帝の会話は、独り言でさえすべて情報機関を経由して首相に伝えられる。
「朴大臣にも困ったものです」
李首相の腰巾着と国民から嫌われる武部明内務大臣が言った。
「首相の温情で生きていることを忘れている。早速、大臣を拘束しましょう」
「……そうか？」
李首相は言った。
「私はむしろ、放っておくつもりだ」
「首相？」武は首を傾げた。
「どういう意味です？」
「倭国にとっても、中華帝国との間にいる我々が味方につくと言われれば、乗ってくるだろう。やつらの気が緩んだ隙をついて――」
李首相は、手刀で首を斬る仕草をした。
「成る程！」
武は手を叩いた。
「さすがは首相！」
「――北京の指示だ」
李首相は言った。
「すでに北京はそういう事態も想定しているのだよ」
「……」
そう。武はこの国全てが中華帝国の思惑通りに踊らされているこ

とを、それで悟った。
「それにしても」
李首相は窓際に立つと、外を見た。
雲一つない、抜けるような青空が眩しい。
「皇帝にも――あの坊やにも困ったものだ。おとなしくしていれば、日本から憧れの皇女をもらってやったのに」
「ほう？」
武は幇間特有のそつのなさで話しに食らいついた。
「確か、倭王には三人娘がいましたな」
「ああ。三女のハルナとかいうのがお気に入りらしい。歳の同い年だからかもしれんが、写真を常に懐に忍ばせているし、夜は夜で……」
クックックッ……。
下世話な笑い声が響く中、李は続けた。
「皇帝陛下が続けておられる「練習」がムダにならないよう、見張っていればいい。動きがあったら教えてくれ」

警告と謀略と

●魔族軍　静岡戦線メース隊陣地

目の前を、メース達が移動していく。

実験大隊から回されてきた1騎だ。

サイズはツヴァイより一回り小型で、試験騎を示す黄色に塗装されている。

外見は無骨というより、むしろ醜悪。デザイナーの趣味を疑いたくなるほど悪趣味にズルドには見えた。

一応、動きに問題はなさそうだが――

「どうだ？」

ズルドはいかにも疑わしい。という顔をしかめた。

「気休め程度にはなるでしょう」

マーリンは言った。

「操縦は至って楽ですから、満足な操縦技術もない義勇兵に配備します」

「信頼性は」

「歩く程度で爆発はしません。さすがに人間界の素材で、しかも人類製ですから、耐久性の面で落ちるのはどうしようもありません」

「……そうか」

「お父様」

ズルドはその声に後ろを振り返った。

ビールの乗ったお盆を持った楓（フィーリア）がそこに微笑んでいた。

「はい♪」

「おおっ！」

一年間飲まず食わずの挙げ句、やっと食事にありついたような、そんな印象さえ受ける程、ズルドは顔をほころばせ、ビールに手を伸ばした。

「すまんなぁ！楓（フィーリア）！」

「いいの」
父親がビールを飲み干す姿を嬉しそうに見つめる楓（フィーリア）を、マーリンは不思議そうな顔でみつめた。
この娘は人間のはずだ。
だが、間違いなく、その容姿と声、そして印象は在りし日に無くなったズルドの愛娘、フィーリアそのものだ。

それに――

ビールを飲み干したズルドの肩に抱き上げられ喜ぶ楓（フィーリア）。

――この娘には邪気がない。

ビールを持ってきたのも、ズルドに媚びているのでさえない。
純粋に、ズルドに喜んで欲しいからだ。
軍隊の人間関係にもまれてきたマーリンにはそれがよくわかる。
本当に、娘として父親と接しているだけだ。
そして、ズルドもそれを純粋に受け取っている。

種族さえ違うのに、この二人はまるで本物の親子そのものだ。

「おお」
ズルドは空を見上げた。
「フィーリア。流れ星だ」
その声は実に嬉しそうだ。
「願い事を言うとかなうぞ？」
「……」
ズルドの指の先。
白い光が星々の間を抜けていった。
「……あれ？」

それが何か気づいたのは、楓（フィーリア）が人間だったからだ。
「お父様」
「ん？」
ズルドはバケ猫が猫なで声を出したような声で言った。
「願い事は言えたか？」
「あれ――流れ星じゃないわ」
「ん？」
「あれ、人工衛星だよ？」
「人工……衛星？」
「うん。ロケットで宇宙に運んで、例えばお星様を調べたり、天気を調べたり」
うーんっと、楓（フィーリア）は少し考えてから言った。
「地球の写真とったり」
「写真？」
一瞬、鋭い視線がマーリンと重なった。
「うん」
それに気づかない楓（フィーリア）は頷いた。
「すごいのよ？あんな高いお空にいるのに、私達がここにいることもわかるんですって」
「……ほう？」
「学校の先生に教わったのよ？夜に天体観測で」
「そうか」
ズルドは嬉しそうに言った。
「じゃあ、父が星を教えてやろう」
「知ってるの？」
「ああ。これでも昔は船乗りだ。あの星は――おい」
「……猫座です」
「猫座だ」
「……」

●北米航空宇宙防衛司令部

「“ＮＡＳ１”通信途絶っ！」
「“ヒマワリ”消えましたっ！」
北米航空宇宙防衛司令部はパニックに陥っていた。
地球上を回る衛星が、次々と消えていくのだ。
その光景はむしろ何かの芸術作品さながらにさえ思えてしまうほど、整然と続いていた。
「何が起きているか！」
司令官が青くなって席を蹴った。
「説明しろっ！チンクの仕業か！？」
「不明っ！」
副官は言った。
「地上からの攻撃は確認されていませんっ！」
司令達の目の前で、また一基、衛星の反応が消えた。
「司令――大統領からのホットラインです」
「貸せ――シャウプです。はい。現在、我が軍だけではなく、無差別に近い攻撃が続いています。中華帝国軍の可能性は低いと思います。連中には衛星軌道まで到達するミサイルはあっても、ＭＬ（マジッククレーザー）はありません。……はい。ミサイルの発射は確認されておらず……はい……はっ？……はい。ご連絡をお待ちしております」
司令はホットラインの受話器を戻した。
「司令？」
「……わからん」
彼は答えた。
「何が起きているんだ？」

衛星軌道上に展開するのは、ズルド秘蔵の魔族軍特務隊。
人類で言えば魔法騎士だ。
その数は約2千。
約2千の魔法騎士達が衛星を片端から撃墜していることなんて、この時点では、人類は想像さえ出来なかった。

早期警戒衛星も、偵察衛星も撃墜されたことで、米軍は目を失った。
GPS衛星を失ったことで、米軍は腕を失った。

米軍主体の連合軍の圧倒的優位は、物量と人的数に勝る中華帝国軍に覆されようとしていた。

その破壊工作の最中。

中華帝国政府は、生き残っていた通信衛星を用いて、全世界に向かって宣言した。

我が帝国政府は、魔族側よりの申し出に基づき、魔族側と和議を結び、共存の道を選択した。
数ある民族の中で、我が中華民族に対して魔族側が接触を試みたのは、ひとえに我が民族が世界の中心的民族であり、なおかつ、民族を統治する中華帝国皇帝の威厳を、魔族側も知っていたからに他ならない。
それは、中華帝国皇帝と魔族側代表との怪談における、魔族側代表の態度にも表れている。
彼らは、我が中華帝国に対して刃を抜いた愚かさを悔いた。

中華帝国皇帝は、この愚かな行為をたしなめ、この大罪を諭してやった。

そして、人類を率いる資格のある唯一の民族としての中華民族の地位を改めて認め刺させ、その発展に魔族が貢献することで同意した。

寛大にして思慮深い中華帝国皇帝は、他民族の行く末を常に深く憂慮されており、未だに中華民族の指導に従わない、思い上がった愚かなる他民族に属する人々と魔族軍が戦いを続ける現状に関して、速やかな措置を講じるよう、魔族側に求めた。

魔族側は、敵対する他民族にまで思いを馳せる中華帝国皇帝の海より広い心にうたれ、全人類が中華帝国皇帝の支配下に置かれることが、人類の未来のために、唯一にして最善の人の有りようであると述べた。

そこで、中華帝国皇帝と魔族側は、中華帝国に従った国に対しては一切の攻撃を行わないことで同意した。

愚かにも中華帝国皇帝と中華民族に対し、刃を向ける愚かさに気づくことが出来ない盲目なる者共よ。

よく聞け。

我が中華民族は寛大である。

貴様等を生き延びさせるために、魔族軍との同意をとりつけた。

貴様等が生き延びる唯一の方法は、我が中華民族に臣従し、その指導下の入ることである。

そうすれば、貴様等の国は攻撃を受けないで済む。

臣従を望む国は、これより４８時間以内に名乗り出よ。

さすれば助かる。

さもなければ。

心せよ。

貴様等の頭上に、死の星が落ちるであろう。

●大英帝国　ロンドン

「それで？」

英国のヒース首相は、政務官に訊ねた。

「あの狂った宣言が出されてら、すでに２４時間が経過した。現時点での各国の反応は？」

その声は、まるで悪戯の結果を待つ子供のようだ。

「反応は極めて限定されています」

政務官は答えた。

「かつてあの国が血眼になって確保していたアフリカの親中国家はすでになく、一方的に恨みを買いまくった東南アジアは戦場です」

「インド、オセアニア方面は考えるまでもないな」

「はい。我々と新大陸軍を恐れるアラブ諸国に、どれ程、あの宣言を聞く相手がいないでしょう」

「あの連中、アフリカの支配権を譲り受けただと？」

ヒースは肩を揺らせて笑った。

「成る程？そういう口実もあったか！」

「アフリカ大陸の鉱山、金属精錬施設を確保するために、中華帝国が人員を派遣するという報道が」

笑みを浮かべながら、ヒースは言った。

「楽しいことになりそうだ」

●アメリカ合衆国　ワシントン　ホワイトハウス

「チンクが魔族軍と手を結んだという報道は、かなりの破壊力がありました」

政務官の言葉に、ベネット大統領は頷いた。

その顔には余裕さえ感じられる。

「元から魔族との関係が疑われていたのだ。噂の追認に他なるまい」

「はい」

「それで？アフリカと南米に、あの国から人員が送られるというのかい？」

「正しくは」

政務官は言った。

「我が国や旧大陸からです」

「ん？」

「在留中国人達が、船で渡ります」

「よく許可出来たな」

「国から中国人が消えるのです。先の国外追放議決を強化した程度で、実質、問題は何もありません。上院、下院共に決議はすんなりと」

「――ふむ」

「アフリカに放棄された鉱山資源の確保を目指すものと思われます」

「資源を確保して」

ベネットは訊ねた。

「どうやってあの国まで運ぶつもりなんだい？」

ベネットの疑問はもっともだ。

太平洋にインド洋――中華帝国が交易に用いることの出来る海の制海権は既に連合国軍のものだ。

海路を運ぶことは出来ない。

それに、中華帝国相手に交易を行う物好きな国はない。

よしんばアフリカや南米で資源の採掘が行えたとしても、それを

どうやって本国へ運ぶつもりだ？
「魔族軍の物資輸送ルートを使うものと思われます。閣下」
「魔族軍の？」
「空間転移魔法の応用です」
「……どこまでも」
ベネットは蔑んだ声で言った。
「魔族に魂を売り渡したらしいな」
「すでに国内では中国人達が、各企業に対し、資源の売りつけに動いているとの報告が」
「買うバカがいるのかい？中華帝国製品の輸入販売禁止は解除されていないだろうに」
「そのせいで跳ね上がった物価に、国民の批判が集中しています」
政務官は言った。
「我が国の国民は、安価な中華帝国製品に慣れすぎているのです」
ベネットも言われなくても判っている。

中華帝国製品の締め出しを行った翌日以降――

スーパーマーケットから商品が消えた。

冗談ではない。

本当に消えたのだ。

米国人の民族衣装とも言うべきジーパンにカウボーイハットでさえ、店先から消えた。

何もないガランとした店先を目の当たりにした米国人が、いかに自分達が中国人に依存した消費生活を行っていたかを思い知らされても、それは後の祭りだった。

それから数ヶ月。

暴騰した生活用品に悲鳴を上げる米国人が望むのは、最早、世界平和ではない。

神の再臨でさえない。

それまでの日常生活の復活。

安価な大量生産品に囲まれた浪費の出来る生活に戻ること。

それだけだ。

その供給者が、“虐殺者”とか、“黄色い悪魔”と呼ぶ中国人でも、彼らにとってはもう関係ない。

もし、彼らが自分達の欲求する製品を、より低価格で供給することが出来るなら、彼らが魔族だろうと米国人の多くは受け入れ――むしろ歓迎するだろうと、世論調査は語っていた。

「だからといって、あの国に従えと？」

ベネットは、韓国系に押さえられたワシントンポストをゴミ箱に放り込んだ。

「対等に近い立場で講和条約を締結しろという意見はあります」

「――バカな」

ベネットは吐き捨てるような口調で言った。

「とどのつまり、得をするのは中国人と魔族ではないか。我々が、東南アジアや彼らが要求した占領地の領土化を認めなかったのは何のためだと思っているんだ。」

「世論はすでに戦争に飽き始めています。何故、極東の島国やアフリカ、南米といった、アメリカと関係のない国のために、国民が戦

費を負担し、戦場で死ななければならないのか」
「その意見を先導しているのは、ピース……なんだっけ？」
「平和十字軍（ピース・クルセイダーズ）です。閣下」
「平和団体だったな」
「中華系の信仰宗教団体を母体とする政治的団体です。アメリカ唯一主義を唱え、他国への武力干渉を否定するマーガレット・ワン代表の主張は、国民に受け入れられつつあります」
「アジアはアジア人に――――か」

平和十字軍（ピース・クルセイダーズ）。
アメリカの世界的重要性を説きながらも、アメリカの戦争介入に強く反対する団体。
特に、中華帝国との戦争には一貫して反対の立場を表明している。
その根拠が、アジア人のためのアジア。アメリカ人のための世界というフレーズに込められている。

彼女たちの意見はこうだ。

アメリカは、世界を任されているのだ。
アジアの“些細な問題”に莫大な費用と人員を投じる暇はない。
アジアのことはアジア人に任せればよい。
いかなる結末だろうとも、それはアジア人の意志の結果にすぎないのだ。
アメリカ人は、それを受け入れるだけでよい。
アメリカ人は、もっと広く、全人類を高いレベルに引き上げるために思索し、行動すべき存在なのだ。

代表を務めるマーガレット・ワンは、中華系美人の典型的顔立ちと美しいトーンの声で聴衆を魅了し、この主張に従わせる。
例え、不法入国者として、あるいは売春で数度に渡る逮捕歴が有

ろうとも、整形前の顔がどうであろうとも、今の彼女は全米に支持者を広めつつあることを否定出来る者はいない。

アメリカと中華帝国の講和締結。
アジアからの米軍の撤退。
中華帝国との貿易再開による消費復活。

これらを唱えるワンの主張は、単純明快だ。

戦争の戦費は国民に負担を強いる。
国民が他国のために死ぬ必要はない。
安価な製品で国内の消費を拡大させよう。

戦費負担を厭い、安価な製品に囲まれる消費生活を楽しみたい国民にとって、高邁な理論を掲げながらも、国民に強い負担を強いるベネット達よりもワンの主張の方が耳に心地よいのだ。
実際、彼女の支持者達は、戦争反対のデモや軍需工場への不法侵入を繰り返している。

「――――まぁ、いい」
ベネットはワンの顔をその脳裏から追い払った。
「今、連中のことをどうこう考えても意味はない。それで？“死の星が落ちる”とは、どういう意味だ？」

●中華帝国　北京　紫禁城
米国世論は和平に向けて動いている。
それは中華帝国政府もわかっていた。
だが、和平に同意しない存在をどうしても避けて通れないのは、

米国も中華帝国も同じだ。
米国の場合、勝ちが見える中で戦いを主導する国防総省であり、敗北が続く中華帝国では世論であり、宮廷だった。
その中心が、目の前の載賢だ。

「よもや」
紫禁城謁見の間で、彼は言った。
暗い御簾の向こう側。
冷たい床に跪いて言葉を待つ周総書記には、顔を上げることさえ許されていない。

卑しい農民の末裔に過ぎない男。

それが、国家を代表する男に対する宮廷の評価だと、周自身がわかっていた。
「このままで終わらせるつもりはあるまいな？周」
「――――はっ」
周は答えながらも落胆した。
何とかして、和平に対する好意的な意見を引き出したかった周だったが、これではどうしようもない。
「３０万近い将兵を失ったこの戦（いくさ）、国家に与えた打撃は計り知れない」
「はっ」
それでは。
そう言いかけた周の言葉を、載賢が遮った。
問いかけに答える以外、周には発言は許されていない。
「東南アジアでの失態について江を火あぶりにしたが、それでもなお、俺は納得していない」
「……」
前任者が、失政の責任をとらされ、皇帝の目の前で家族もろとも

火あぶりにされて死んでいった光景は、彼も目の当たりにしている。
泣き叫びながら炎の中に消えていったその姿を、今でも悪夢に見る。
同じ立場に立ちたいか？
そう聞かれれば、絶対に否だ。
それは、自分の生殺与奪権が目の前の摂政にあることと同じくらい、はっきりしている。
「何故、反応弾を用いない。我が国に何発存在すると思っている？」
「お、恐れながら」
周は震える声で答えた。
「米軍の報復使用を許しかねません」
「この神国たる中華の国に反応弾を用いるだと！？」
載賢が御簾の中で立ち上がったのを、気配で周は感じた。
「許せんっ！」
「……」
「何としても、我が国に刃向かいし愚か者に一矢報いるのだ！」
いきり立つ載賢を前に、周は愕然とした。
一体、この人は世界が見えているのだろうか。
周は頭痛を通り越してめまいがした。
そもそも、周が総書記に就任した理由は一つだ。

終戦工作。

そう。
この戦いの落としどころを上手く掴み、より有利な立場で講話に持ち込む。
周に科せられた最大の仕事は、そういうことだった。
だが、肝心の載賢はそれがわかっていない。
叱責や不興を恐れる宮廷雀共が、都合のいい情報のみを伝えているせいだろう。

この人は、我が国が負けていることを知らない。

「一度は攻め落とした東南アジアを、外交上の失敗で譲るしかなかったとはいえ！」

ほらやっぱり。

「周よ！策はあるのだろうな！？」

●北京　王政党本部

党本部に戻った周の顔色は冴えなかった。

周自身、倒れないのが不思議なくらいだ。

紫禁城に呼び出された後は、幹部達に皇帝からの命令を伝えるのがいつもの習わしだ。

集まってきた党幹部達もまた、その慣例に習って周の言葉を待っている。

「皇帝陛下のご命令である」

周の言葉に、形だけでも幹部達が背筋を伸ばした。

「憎き敵、米国を平らげ、その領土を皇帝に差し出せ」

ぽかん。

幹部達が周の言葉を前に、唖然としているのが、周にもわかる。

恐らく、自分が何を言われたのかさえ、分かりかねているのだろう。

幹部達は怪訝そうに周の顔に視線を送っている。

「……」

周は、口を開きかけて言葉を詰まらせた。

小日本。

そうバカにしていたあの小国、日本でさえ制するどころか、都市一つ確保出来ずに終わったというのに。あの広大な合衆国を征服しろ？

絵空事もいい加減にしろ。

周自身がそう言いたい。

「皇帝陛下は」

周は言った。

「米国をお望みだ」

そう言った後、周は目をつむった。

「――――魔族側とコンタクトをとってくれ。我々は皇帝陛下の御為に、全人類を敵に回してでもあの土地を手に入れるのだ」

自分の口から出た言葉なのに、それが、どこか遠い世界の言葉のように、周には聞こえてならなかった。

●ワシントンＤＣ　世界貿易センター

閉じられたドアの向こうから、割れんばかりの拍手と、聴衆達の歓声が未だに響いてくる。

スタッフ達も、顔を赤くして、ある者は目に涙を浮かべている。

「すばらしい演説でした、マム」

「ありがとう」

黄色い肌をした女がニコリともせず、差し出されたトレイからカクテルグラスを受け取ると、中身を一息で飲み干した。
「ヨン、お客様は？」
そう問いかける脚は止まらない。
ヨンと呼ばれた男は、空のグラスの乗ったトレイを近くのスタッフに押しつけると、女性の後を追った。
「最上階のスイートに」
「そう」
女は振り返りもしなかった。
「しばらく部屋に誰も近づけないようにして」
「はい。マム」

世界貿易センタービル最上階。
世界経済を牛耳るほどの財力のある者のみが利用を許される、いかなる歴史上の王侯の想像さえ及ばない豪奢な貴賓室。
音もなく開いたドアの向こうで、男がソファーに座ったまま、女を出迎えた。
「見事なものだな」
男は開口一番、テレビモニターを軽く指さしたまま言った。
「観衆がお前の演説に引き寄せられていたぞ？」
威圧的な態度と尊大な口調。
中華帝国の偉在米大使だ。
「政治指導部の原稿を読み上げているだけですわ」
しなだれるようにしてソファーの手すりに座った女が微笑んだ。
「私はただ、原稿を読んでいるだけ」
「ふん」
スーツをなぞるように動く女の指を一別した偉は続けた。
肥満体の体が、ぶよぶよとスーツの下で醜く動く。
「女優崩れの本領発揮か？迅（シュン）」
「あらひどい」

喉の奥から、ぞっとするような忍び笑いが漏れる。
「その名は捨てましたし、今の私は」
女は偉の首にしがみつくようにしなだれかかった。
高い背と細く柔軟な体は、なぜか蛇を連想させる。
「マーガレット・ウォン。ハリウッドどころか、この国を支配する女よ？」
「おいおい」
偉は言った。
「言い過ぎだろう」
「くすっ。そうね」
マーガレット・ウォンはその端正な唇を偉の頬に軽く触れさせた。
「私とあなたの――よね？」
「この国が、わが帝国の北米特別自治府となるのはもう目前だ。俺が自治府総督となれば、お前はその夫人。富は思うがままだ」
「そういえば」
マーガレットは訊ねた。
「本国からの放送は聞いたわ？何、あの“星がふる”って」
「――知りたいか？」
「ええ。それと」
腰に回される卑猥な手の動きに淫らな動きで反応しながら、マーガレットは思い出した様に言った。
「しばらく、どこかに連れて行っていただけると聞きましたけど？」
「次の演説は西海岸だろう？」
「ええ。ラスベガスでも連れて行っていただける？」
「そうだな」
偉は言った。
「事態を知った、あの着飾った白豚共がカジノで青くなるのを見物するのも悪くない」
グッフッフッ。
偉は、とても人間の声とは思えない気味の悪い笑いをこぼした。

「どういうこと?」
「作戦がついに実行される」
「作戦って」
視線を泳がせ、ようやく記憶にたどり着いたマーガレットは、その意味を悟った。
そして、驚愕のあまり、偉の膝の上から飛び跳ねた。
「まさか!」
「そう。そのまさかだ」
偉は満面の笑みを浮かべた。
「東南アジアで、我が国に苦渋を舐めさせているこの国だが、よもや」
「――そうね」
マーガレットは笑って言った。
「さすがだけど、私は巻き込まれるのは御免だわ」
「私だってそうだ。迅(シュン)」
「マーガレットよ。私は明後日からサンフランシスコの集会に出るから、夜にはワシントンを立つけど、まさか今夜ってことはないでしょうね」
「そこまでのことはせん」
偉は首を横に振った。
動きにあわせて、首周りの肉が醜く歪む。
「軍事力で勝っていられるのも、ここまでだ」
偉は、マーガレットの腕を強引にひっぱると、その体を抱きしめた。

●世界貿易センタービル　地下駐車場
「ぞっとしない内容だ」
駐車場に止められた車の中で、ヘッドホンをかけた男が顔をしかめた。
黒塗りの大型バンの中は、通信機材と機材を扱う男達で埋まって

いた。
「……やれやれ」
ヘッドホンから耳を話した男が首を左右に振った。
「お楽しみだぜ」
「へっ。すげえ乱れ方だ。男のテクなのか、女がよっぽどの淫売なのか……演説の背後で、あのあえぎ声流してやりたいもんだぜ」
「記録はとっておけ？この手の映像は使い勝手が良い」
「中華帝国駐米大使殿と、アメリカ愛国者団体、平和十字軍代表殿の濡れ場か」
その一角で、男は通信機に言った。
「ソープ。無駄話をやめろ。こっちにつつぬけだ。ショート、本部へ報告」
どうしていいのか。
その声は困惑を含んでいた。
「信じられないことが起きるとな」

日本本土防衛戦　第一話

中華帝国が東南アジアに攻め込んだ理由は、はっきりしている。

“少なくとも”数千年前まで、東南アジアは我が国の領土“だった”過去がある。

つまり、東南アジア諸国の宗主国家とは、我が国のことである。

その我が国が、領有権と支配権を求めて何が悪いのか。

強引もここまでくれば褒めたくなる程の暴論の元、彼等は“かつての領土”にむけて国境線を突破したのだ。

これに触発されたというか、これと全く似たような理屈をこねた国がある。

大韓帝国。

その目指したところは、大日本帝国領対島。

対島は韓国領である。

その領土を奪還して何が悪い。

この主張が国際社会どころか、韓国国内で主張されるようになったのは、実は２０世紀の半ばのこと。

突然、当時の政権が対島返還を要求する議決要求を国連に突きつけ、“根拠を示せ”と逆に求められ、“我々が主張しているのだから間違いがない”と公式に返答。

さすがにこの時は議決以前に門前払いされた。

それでも懲りずに主張を繰り返し、相手である日本からまで相手

にされていないのが現実だが、中国が動いたことに刺激を受けた大韓帝国与党、王政党は、軍に対して対島攻略を命じたのだ。

無論、動いたところで、対馬は元来、大韓帝国領であり、その領土奪還を目指しただけのことだという主張が、世界中でまともに受け取られることはなかった。

彼等がしてのけたことは、世の混乱に乗じた火事場泥棒でしかないのだ。

問題は、この時の日本政府の対応だ。

先年の夏に政権を奪取した時の与党、白州党がこの事態に及んで危惧したことは、大韓帝国との関係の悪化だった。

冗談ではない。

戦争をしかけてきた相手の顔色を、一国の与党が心配したのだ。

世論は、背後にいる中華帝国を恐れたのだと判断したが、とにかく、対島を防衛すべき大日本帝国軍は、対馬での防衛戦そのものを断念した。

大韓帝国と比較して十分勝てるだけの海上輸送能力を持つ海軍が本気になれば、十分な増援を送り込めた。

それによって、対島の防衛は最初から可能だったことは、後の戦史家が一致して認める所である。

ところが、政府はそれをやらなかった。

政府が軍に命じたことは、島民の避難。

それだけ。

すべては政府の命令によってだ。

結果とし対馬は大韓帝国軍があっけにとられたほどの短期間。
わずか1日にして、彼等の手に無血で落ちた。

島民の生命財産の保護を最優先した。
政府は、そう国民に説明したが、国土失陥が国民に与えた影響は計り知れない。
全てを滅茶苦茶にした中心人物が、鈴木陸軍大臣。
彼が対島放棄を命じた理由は単純だ。

「防衛戦は、海軍の海上支援こそが要となる。つまり、対島を護ったことのうまみを海軍に持って行かれる。陸軍は被害ばかりじゃないか。そんなふざけたことが許されるはずがない！」

陸軍部隊は速やかに対馬より撤退せよ。

対馬要塞は、この彼の鶴の一声で放棄された。それはつまり、国民の血税数千億円を投じた意味が、たった一言で無になったというのに、
「陸軍は被害をゼロに抑えることに成功した」
敵が対馬に押し寄せる中、彼は、のうのうと出かけた地方の講演会の席上、堂々と胸を張って、そう言い切った。
与党のマスコミ管理によって、この事はでほとんど報じられることもなかったが、ネット上では袋だたきにされたし、何より、対島放棄はその無能故と国民から総すかんというか、とんだとばっちりを食らっていた陸軍、特に反鈴木勢力が猛烈に噛みついた。
「敵を阻止することは軍の任務だ！戦わずに国土を失ってそれを被害ゼロとは何事だ！」

鈴木を出せ！

対馬要塞に大韓帝国軍旗と中華帝国軍旗がひるがえる様子が世界中に流された日、陸軍大臣室に抜き身の軍刀を下げた若手士官が乱入を試みて衛兵に射殺された事件が起きた。

この日の午後、鈴木大臣は体調不良を訴え、都内の病院に緊急入院。

その権限は、甲村副大臣に移された。

これを絶好の機会とみたのが、先に述べた反鈴木派の一部。

“紆余曲折の末”。

甲村副大臣が権限付与の当日、そう表現した“何か”があったのは確かだ。

その日、何故、習志野市に設置された陸軍空挺部隊が市ヶ谷の陸軍省に展開していたかなどは考えてはいけない。

とにかく、副大臣命令で、今後一切の作戦指揮権限が陸軍大臣から陸軍参謀本部本部長に無期限で移管する命令が発せられた。

記者会見の席上でも、発表の席に立つ副大臣の後頭部にレーザーポインターが照射され続けていたことを知る記者はいない。

とにかく、この記者会見を見た鈴木大臣が、病院から飛び出して陸軍省に向かった時には既に時遅く、九州方面部隊は完全に戦闘態勢に移行していた。

この時点から、陸軍の全作戦を指揮することになったのが、陸軍元帥立花重治。

凡そ日本陸軍が関わった全ての戦争において軍を指揮し続けた陸軍の重鎮だ。

反鈴木派が彼を担ぎ上げたのは、鈴木でさえ文句が言えないという、彼の重さ故だ。

鈴木は嫌いでも、反鈴木派も嫌い。そんな中道派を含め、陸軍の大親分である立花が自分達の指揮をとるとなれば、話は別だ。

陸軍の志気は、この時点でかなり高まっている。

「対馬に展開中の兵力のほとんどは韓国兵ではありません」

陸軍の反鈴木派が半ば占拠する統合参謀本部で、立花元帥に参謀長は報告した。

海軍、近衛共に立花の就任は歓迎しているらしい。

何を勘違いしたのか、近衛からは花輪が送られていた。

「待て――どういうことだ？」

「韓国兵は輸送艦の中に押し込められ、対馬沖にて待機中です。対馬に上陸しているのは、中華帝国軍です」

参謀長がスクリーンに映し出したのは、軍事衛星から撮影された対馬の様子。

道路沿いに戦車が移動しているのがはっきりとわかる。

「……韓国軍のＭ６０ではないな」

陸軍幹部は、その写真を見ただけで判断した。

「Ｔ－５５……違う。５９式か？」

「その通り。そして」

参謀長はスライドを切り替えた。

対馬沖に並ぶ戦車揚陸艦の姿が映し出されていた。

「ＬＴ－２５、米軍の払い下げだ。この艦上で訓練を受けている兵士達の持つ自動小銃は、韓国軍制式ライフルだ」

「何故、連中が対馬にいて、大韓帝国軍が輸送艦に押し込められているんだ？」

海軍側からもっともな質問が来る。

「おそらく、メサイアの攻撃を怖れているんだよ」

参謀長は言った。

「メサイアの侵攻をうければ、揚陸艦なんて即座に海の藻屑だ。だが、陸の上なら――そんなところだろう」

「成る程――それで？」

「対馬が侵攻上の中継拠点となったことに変化はない」
「反応弾でも撃ち込んでやろうか？」
「中華帝国からの反撃はすさまじいぞ？……すでに対馬沖は中華帝国と韓国からかき集められた漁船だの揚陸艇だのがひしめいている」
「……どこを狙ってくる？」
「暗号を解読した結果」
参謀長は、居並ぶ将官を一瞥した後、
「福岡だ」
「ふむ」
白い髭を撫でた立花は訊ねた。
「陸軍の対応は？」
「すでに九州全域に対し、無期限の空襲警戒指示は出しています。航空部隊、対空部隊は配置済み。沿岸防御部隊は言うまでもありません」
「航空兵力は？」
「航空隊の現有戦力でも何とか食い止めています。中華帝国が東南アジアに戦力を向けているおかげです」
参謀は言った。
「飽和攻撃で攻められたらアウトでした」
「……海軍」
「玄界灘にはイージス艦と潜水艦隊を集結中。すでに福岡周辺は機雷封鎖完了。佐世保は無期限の警戒態勢に」
「近衛」
「メサイア１個中隊を展開――これ以上は無理です」
「中韓共にメサイアの消耗は激しいはずだ。中隊規模なら十分しのげるはずだな」
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ隊も展開していますし、戦況次第では、あと１個小隊の手配が」
「上等だ――敵上陸作戦決行予定は明後日、現地時間で０８００時。政府は既に沿岸部住民に対し、内陸部への疎開を命じている」

そこまで言った立花は、思い出したように訊ねた。
「狩野粒子は？」
「中華帝国軍が来るとなれば、間違いなく使われますぞ？」
参謀は答える。
「万一に備え、沿岸部は８式を展開していますが、２時間ほどの距離に９０式を待機。それと、鹿児島空港にはグリペン部隊を伏せてあります。８式でも５９式なら十分相手になるはずです」
「いや。それ以前に、メサイアで斬り込んでくるのは目に見えている。近衛が頼りになる」
「……何とかなるでしょう」
近衛軍代表としてこの場にいる将官は歯切れの悪い声で言った。
「派遣する部隊は、実戦経験は浅いですが、装備だけは一流ですから」

へっくしっ！
コクピットにそんな音が響いた。
「風邪でもひいたかな」
鼻をすすったのは染谷だ。
海岸線に並ぶメサイア――ＭＤＩＪα－０１５Ｂ２“幻龍改カノン”達の隊長騎として与えられた同騎の指揮官騎兼特別部隊向け専用バージョン、“カノンＳ１”のコクピットには、周囲の情報がリアルタイムで転送されてくる。

場所は福岡県生の松原。
かつての元寇の際、築かれた防塁が未だ残る眺めのいい場所だ。
黒松林から望む海の景色が美しく、海水浴や潮干狩りも楽しめる。
今、そこは軍によって閉鎖された。
貝の代わりに工兵隊によって撒かれたのは機雷と地雷、そして揚陸艇阻止のコンクリート製バリゲード。
周辺には塹壕が掘られ、即席のトーチカがあちこちに構築されて

いる。

海の中は機雷だらけだ。

美観もへったくれもない。

道路を進むのはパトカーか軍用車両がほとんど。

市民の姿は疎開命令が出て以来、驚くほど減った。時折、職務質問を受ける市民がいる程度だ。

大抵は韓国人で、しかも事前に送り込まれていたスパイだ。

その場では証拠不十分で保釈した後、部屋に踏み込めば大抵の場合、通信機が見つかるという。

すでに韓国方面に対しては凄まじいほどのジャミングが展開されていることも、どこかで通信が試みられていることも、コクピットにいればイヤでもわかる。

通信の方は発信場所を概略で警察に通報してやると意外と警察から便宜を受けることが出来るので、染谷は重宝していた。

「染谷中尉」

横に立つ幻龍改から通信して来たのは、あの“伊吹”から奇跡的に生還した候補生達の生き残り。

今は染谷の副官になった東候補生だった。

「どっちが来ますかね」

「何が」

「大韓帝国と中華帝国」

「大韓帝国が先陣を切らされ、我々がへたばったところで中華帝国が来る。そして――」

「……」

「我々の首を奪る」

染谷は言った。

「そういうものさ」

「……グレイファントムと“赤兎（せきと）”を相手にするなんて、どこのゲームの話です」
「現実さ。共に、私達が殺し合う相手だ」
大きく息を吐き出すように染谷は言った。
「魔族じゃないことを感謝すべきだろうな」
騎体に書かれたキルマークで魔族を示すマークは、染谷でさえ2騎にすぎない。
それも補給所を総掛かりで襲ってわずかな護衛部隊を倒したという、自慢できない結果だ。
たった2騎。
それでも、単独撃破で2騎はこの中で一番多い。
それが、現実だ。
「フィアちゃんが出られないのは痛いですね」
「……まぁね」

●中華帝国　北京　紫禁城　太和殿
「……と仰せである」
豪奢な装飾が施された太和殿にそんな声が響く度に、
「――――はっ」
一々、畏まって頭を垂れなければならない。
バカな話だ。
そう思う。
ここの主である皇帝との距離は5メートル程。
「速やかに日本を征伐せねばならない――――その先兵としての任につけてやろう」
その言葉は聞こえるのだ。
それなのに、
「――――皇帝陛下よりのお言葉である」
取り次ぎが一々間に入り、そのたびに聞く方は頭を下げなければ

ならない。
「――――はっ」
「対島に続き、間違いなく倭国を征伐せよ。朝鮮王には、その先兵としての任を与える」
「光栄に存じます」
「投入可能な兵力はどの程度か」
「皇帝陛下よりの御下問である」
「光栄に存じます」
「朝鮮の人口はどの程度か」
「……」
“朝鮮王”と呼ばれた“大韓帝国皇帝”は、言葉に詰まった。
目の前の玉座に座るのは中華帝国皇帝。
その口からは、“兵力”という言葉が出たはずだ。
「答えよ。人口はいかほどだ」
「……約5千万人にございます」
「陛下、恐れながら5千万人にございます」
「……多いな」
皇帝は何度か頷いた後、言った。
「3千万を戦線に投入せよ」
「陛下よりの御下命である」
「……」
「全てを動員し、戦線に投入せよ」
「……お」
大韓帝国皇帝は青くなって言葉を詰まらせた。
5千万は全人口だ。女子供までいれての数だ。軍人の数ではない。
それを全部戦闘要員として投入しろというのか？
無茶どころの話じゃない！
「聞こえなかったのか？それとも、ありがたさのあまり、言葉を失ったか？」
「……」

取り次ぎの男の高慢な声。
それに逆らうことは出来ない。
ここでは、大韓帝国皇帝より、彼の方が地位は上なのだ。
反駁することは許されない。
黙って言葉を受ける以外、何も許されてはない。
「……ありがたき幸せに存じます」
「――――下がれ」
「失せろ」
大韓帝国皇帝は、無言で頷いて立ち上がった。
太和殿の床の冷たさから解放された喜びは、そこにはなかった。

「陛下」
肩を落として歩く大韓帝国皇帝に誰一人敬意を示す者はここにはいない。
大韓帝国の民族衣装を珍しげに眺める者が少しいる程度だ。大抵は、衣装を一瞥しただけで、聞こえるような音をたてて鼻で笑う。
一国の皇帝である彼には、側近さえつけることを許されていない。
そんな彼に、太和殿の外で待っていた政府高官が声をかけた。
「皇帝陛下より何と?」
「全戦力どころか、全国民を戦線に投入せよと仰せだ」
彼は天を仰ぎ見た。
「日本と戦争?出来るものか」
「全国民。そう仰せでございますか?」
政府高官は、そんな彼の呟きには気づかなかったらしい。
「摂政王陛下は……そう仰せだった」
私の意志ではない。と、彼は自嘲気味に笑った。
「わかりました」
着慣れない民族衣装に顔をしかめながら、高官は頷いた。

「国家総動員法は先程、栄えある王制党により成立しております。また、対馬への侵攻は順調に推移しています」

●“鈴谷（すずや）”艦内

「今回の国家総動員法成立により、大韓帝国は完全に戦時体制に入った」

後藤は指示棒で肩を軽く叩いた。

「静岡で頑張っていた俺達がここまで送り込まれてきた理由も、まさにそこにある」

後藤は演壇上のパネルを操作してスクリーン上の情報を切り替えた。

地図が表示された。

「世界の現状は、わかっているな？」

美奈代はそれを思い出しながら頷いた。

オーストリアは、米英連合軍の首都奇襲攻撃によりわずか2日間の戦闘の後に無条件降伏。

“現地指揮官の暴走”と批判されているが、占領軍に拘束された内閣は全員が議会前で銃殺に処された。

占領軍である大英帝国によりオーストラリア軍は完全に解体され、政府はその機能を停止。独立国としての機能を喪失した。

今回の事態を引き起こした中華帝国支持者達を令状なしで逮捕出来る“チャイナ・パージ”、別名“人間狩り”があの大陸全土で始まっている。

その振る舞いに異議を唱える者は容赦なく中華帝国支持者のレッテルを貼られて投獄され、“敵性国民”として扱われる。

それを批判するマスコミはいない。

中華帝国側につくことを是とした彼ら自身が、今となっては“狩

られる”対象だからだ。

批判＝中華帝国支持者。

その図式に自ら望んで乗り込む馬鹿はいない。

わずか数日で、それが激化した結果、オーストラリア国旗を掲揚する者さえいなくなった。

町中は英国旗が翻り、国家である「アドヴァンス・オーストラリア・フェア」の代わりに「女王陛下万歳」が流れる。

１９０１年の独立から約１世紀を経て、再びオーストラリアは英国の植民地に墜ちたのだ。

それを批判する声さえ、オーストラリアの広大な国土には聞こえない。

一方、インド方面は、ラムリアース帝国軍と連携した英国軍が中華帝国軍をチベットまで追い落とした現状、英国軍がインドの大半を再び英国領として取得した旨を宣言した。

中華帝国軍の殺戮と略奪の嵐、そして、それを前に何も出来ないまま、首都と運命を共にするしかなかった自らの政府の無能ぶりを経験したインド国民は、旧支配者達の来訪を諸手をあげて歓迎した。

「問題は、中華帝国がここで連合軍との講話に応じるかどうかだが」

後藤はわざとらしく首を横に振った。

「ありえないわなぁ」

「……」

「で、連中は考えた。すでにインド洋から南シナ海までの海洋ルートを奪われたが、まだ台湾海峡とバシー海峡がある。ここを閉鎖し、日本が干上がるのを待つ。日本を交渉の材料に使うって寸法だ。最悪でも、日本の備蓄を根こそぎ奪えばいい」

南シナ海から東シナ海、そして太平洋に抜ける海域に要石のように存在するのが台湾。中華帝国領だ。
「台湾の地政学的優位性を利用した手だとは思うが――なんで最初からこれを使わなかったのか」
イヤイヤ……。
後藤はため息混じりに言った。
「台湾から揚陸部隊が出港済み――まぁ、揚陸部隊って言ったって、漁船だの民間船だけどね。尖閣諸島を潰しながら“ここ”に向かっている」
後藤が指示棒でついたのは、今、“鈴谷（すずや）”がいる沖縄島だ。
「沖縄と大島を押さえ、台湾方面から九州、本土に対する侵攻の足がかりにしたいというのが、本音だろう。
よしんば、足がかりを失ったとしても、連合国との和平交渉の上でいろいろ便利だ――“領土を返して欲しいなら、こちらの条件を呑め”とかね」
「……汚ねぇ」
「外交ってのはそういうものさ。都築。
おかげで俺達下っ端が苦労する」
後藤は指示棒を壇上に置いた。
「作戦は簡単だ。沖縄海域に展開する海軍の支援。予想されるメサイア部隊の殲滅。
ただし」
後藤は部下を一瞥した。
「すでに日本は備蓄を食いつぶして生きているんだ。戦いを長引かせると日本は連中の思惑通りにするか、餓死するかの選択肢しかない」
美奈代が無言で頷いた時、演壇に置かれた後藤の端末からアラームが鳴った。

「中華帝国軍も本気で来る。我々もフル装備で出るからな？大盤振る舞いを楽しめ」
フル装備。
たしかにそうだろうと思った。
美奈代の見た手元の資料、予定武装の項目は、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）、ビームライフル、散弾砲に斬艦刀――ありったけの武装の羅列がされていた。
「武装のほとんどは軍機だ。破棄する場合には爆破処分を忘れるな？」
後藤は楽しげに言った。
「お願いだから、無傷で敵に渡すような真似、しないでね？」

●中華帝国　南京郊外
同じ頃、南京郊外の軍施設には、中華帝国軍のメサイア“赤兎（せきと）”と“帝刃（ていば）”が整列していた。
メサイアが整然と並ぶその光景は、見ていて身が引き締まる思いがする。
それを前に、顔に深い皺を刻んでいるのは、このメサイア達を率いる魯大佐だ。
彼の顔に皺を刻ませているのは何か？
“赤兎（せきと）”の前に並ぶ騎士達はいい。
問題は、“帝刃（ていば）”の前に並ぶ騎士達だ。
若い。
５０の声を聞く魯大佐にとって、“帝刃（ていば）”の前に並ぶ騎士達は、子供という言葉でさえ、大人扱いに思えてしまう。ほどあどけない。

「南京メサイア操縦士養成校第６５期学生隊第一選抜隊、計２５名、整列いたしましたっ！」
若い声が響き、
「大隊長殿に敬礼っ！」
若さにあふれるきびきびとした動きが若者達に一糸乱れぬ敬礼姿勢をとらせる。
――よく訓練されている。
普段の魯大佐なら、目を細めて頷くところだろう。
だが、今は違う。
厳しい顔のまま答礼した魯大佐は言った。
「そこの貴様、メサイアの操縦経験は何時間か」
「はいっ！」
魯大佐の目の前に立つ若い騎士が一歩前に出て答えた。
背筋を伸ばすと、真新しい少尉の襟章が陽光に光り輝いた。
「１０時間でありますっ！」
「戦闘訓練でそれか！」
「いえっ！」
彼は答えた。
「第一基礎動作訓練で１０時間でありますっ！」

第一基礎動作訓練。
メサイアを歩行させ、手でモノを掴ませる技術を習得させる、メサイア操縦の上では基礎中の基礎だ。
魯大佐の知るこの訓練は最低７２時間を必要とする。
大事を取れば１００時間は必要というのが、熟練騎士の意見だ。
その訓練をわずか１０時間しか受けていない。
人間で言えばハイハイさえした事がない。
つまり、彼は――――いや、彼等は、メサイアの操縦経験がないに等しい。
そういうことになる。
「操縦したメサイアは！」
「一号型でありますっ！」
まだ使っていたのか！と、魯大佐は内心で愕然とした。
一号型は、ロシアから入手したスターリン型の最初期型騎を用いた訓練騎だ。
魯大佐が訓練校に入った時点ですでに旧型扱いされていたほど古く、操縦システムも“帝刃（ていば）”とはかなり異なる。
世代的に言っても、第一世代に属する一号型訓練用メサイアと第三世代に属する“帝刃（ていば）”では、操縦のクセも何もかもが違いすぎるのだ。
「“帝刃（ていば）”の操縦経験は！」
「ありませんっ！」
「……」
魯大佐は苦々しげに頷くと、言った。
「……よろしい」
その声は、目の前に並ぶ騎士達というより、自分に言い聞かせているような口調だった。
「この時局だ……やむを得まい」
何度も頷く魯大佐の横で、彼の副官が声を張り上げた。

「大隊副官の武少佐だ！貴官等の第６０５大隊への編入を許可するっ！」

「面通しはどうだった？」

魯大佐は先に控え室に戻っていた李大佐にそう声をかけられた。

「最悪さ」

ソファーに腰を落とし、ぐったりともたれかかった魯大佐は天井を――いや、天を仰ぎ見た。

「使い物になるとは、到底思えん」

「ハハッ……こっちもだよ」

李大佐は笑った。

「何がおかしい」

「おかしいだろうが！」

李大佐は手を叩いた。

「もう笑うしかないだろう！聞いたら、ＭＬ（マジッククレーザー）の射撃を見たことがないとぬかしやがった！」

「……」

「司令部は、ハイハイも出来ない子供を戦場に送り出して、何をさせようと言うんだ！」

ガシャンッ！

李大佐の手がテーブルに置かれたコーヒーカップをつかみ、壁に叩き付けた。

壁にコーヒーのシミが出来るのを、魯大佐はぼんやりと見つめるだけだ。

「えっ！？魯よ！俺達はいつから教官になった！？メサイア戦で一々生徒の面倒なんて見ていられると、本気で思われているのか！？」

「……李」

「貴重なメサイアと、貴重な若者をこんなことで失うのか！？失って良いのか！？」

「李っ！」
魯大佐は怒鳴った。
「俺達は、命令に従うしかないだろう」
そう答える魯大佐にも事態の深刻さはわかっている。
原因なんて紙切れ一つ。
命令。
通達。
軍隊における兵隊（モノ）は、その前には何の価値もない。
チベット高地で有効に戦える騎士部隊の減少を危惧した現地軍高官が、中央政府高官に賄賂を渡し、騎士を大量動員する命令を出させたことが全ての発端だ。
『動員令１４４９号
白刃隊に対し、各騎士部隊はその員数充足に貢献すべし』
白刃隊。
つまり、騎士がその肉体を武器にする騎士戦闘部隊の兵員が不足しているから、軍各部隊はその兵員確保に貢献しろ。という通達だ。
新たに動員される騎士を優先的に白刃部隊に回せ程度の通達のはずだが、これを拡大解釈した白兵戦部隊司令部は、自らの軍内部での発言権拡大の絶好の機会と捉えた。
使い物になるかわからない新兵より、すでに他部隊に配属された騎士をまず確保し、戦える騎士の数をもって主導権を奪取しようとしたのだ。
他部隊はその翌日から、白刃部隊からの騎士引き抜き攻勢にさらされることになる。
ひどい部隊に至っては、最前線で目の前に敵の騎士部隊がいると

いうのに、騎士を全員引き抜かれ、事実上、戦う前に“消滅”した部隊も存在する。
その最も矢面に立たされたのは、メサイア部隊だ。
メサイアが存在しても騎士がいないという、笑えない事態に中華帝国が陥っているのは、まさにこのためだった。
「貴様はいつでもそうだっ！」
李大佐は立ち上がり、叫んだ。
「命令命令、それだけが全てか！？命令さえあれば、あんな子供を無駄死にさせることもためらわんのか！？」
「違うっ！」
魯大佐は歯を食いしばって首を横に振った。
「李！俺だって人の子だ！これ以上言わせるな！！」
「……」
魯大佐の顔に刻まれた深い皺。
そこに長年の友の苦悩を見た李大佐は毒気を抜かれたようにソファーに腰を下ろした。
「……すまん」
「いいさ」
魯大佐は何事もなかったように頷いた。
「気持ちは同じだ」

「失礼します」
控え室に入ってきたのは、整備隊長だった。
あちこちにオイル染みが出来た整備服を着た厳つい顔の整備隊長が一礼の後、言った。
“赤兎（せきと）”、“帝刃（ていば）”の整備状態の報告にうかがいました」
「ご苦労」
「整備万全です――そういいたいんですが」
整備隊長は申し訳なさそうに言った。
「この時局、不足するパーツが多くて」

「“帝刃（ていば）”は、歩ければいい」
李大佐は言った。
「“赤兎（せきと）”隊の整備だけは万全に頼む。“帝刃（ていば）”達を守りながら戦わなければならないからな」
「……何とかしましょう」
整備隊長は頭を掻いて頷いた。
「それにしても大佐」
「ん？」
「数ヶ月前なら考えられませんよ？あんな子供を」
「今でも考えられんさ」
二人は苦笑しつつ頷いた。
「メサイアと騎士、１対３の配備がされていたというのに、今や逆転している」
「何だって、国もメサイア操縦士まで騎士として戦場に送り込むなんてマネしたんですかねぇ」
「騎士は訓練しなくてもメサイアを乗りこなせる。そんな風聞をまともに信じたんだろうさ」
「世界で最も操縦が難しい機械の塊を？」
「クーラーの利いた豪奢な執務室でハンコだけ押していると、人間その程度になる」
「ごもっとも」
苦笑した整備隊長は言った。
「とにかく、整備は最善を尽くします。部品はありませんし、皆、疲れ切っていますが」
その目には決意があった。
「この戦いに負けたくない。その愛国心だけはあります」
「……愛国心だけで戦は勝てないがね」
「李大佐」
整備隊長は、咎めるように言った。
「今の我々にはね？その程度以外、何もないんですよ」

同じ頃。

「このままでは、戦う前から崩壊が確定しているわ」

ユギオに面と向かって言ったのは、神音だ。

「何がそんなに不満なの〝てす？」

「不満とか、そういうことじゃなくて」

神音は言った。

「仮に、この日本に攻め込むとしても、確保出来る補給線が、予想される部隊規模に対してあまりに細すぎる」

「わかっています」

ユギオは苦い顔で頷いた。

「それは言われなくても、わかっています」

「我が商会はあなた方、中世協会に、魔界から人間界への物資輸送を一括契約で承っています。ヴォルトモード卿復活近しという噂が――どうせ、あなた達がばらまいたんでしょうけど、とにかく。魔界各地の倉庫は義捐物資で溢れかえっていますが、現状、大型輸送艦艇が通行できる門（ゲート）が一本では、開始時点から補給が破綻する恐れがあります」

「それで？」

ユギオは内心、うんざりとして神音に訊ねた。

「門（ゲート）建築云々は、我々の為すべきところではないはずでは？」

「それは存じています。ただ、大規模な門（ゲート）が必要であり、その建設にご協力いただきたいのです」

神音はテーブルに置かれた紅茶に手を伸ばした。

「三次元上に門（ゲート）を作る以上、避けて通れないモノがあるでしょう」

「土地ですか？」

「門（ゲート）建設は我が商会が請け負います」

「神音殿」
ユギオは言った。
「大型門（ゲート）は、そう簡単には作れませんよ？土地の空間属性やその他」
「調査済みです」
神音はあっさりと答えた。
「我が商会の物資輸送集積地であるカーンデザールから、最短ルートとしての門（ゲート）建設に適した場所は」
神音は控えていた部下をチラと見る。
部下――――つまり、かのんは無言でテーブル上に地図を広げた。
「ここです」
地図は日本地図。
神音が指さしたのは、その一角だ。
「佐渡島？」
「そうです」
神音は頷いた。
「国中平野をそっくり吹き飛ばし、門（ゲート）に作り替えます」
「よいのですか？」
「引き受けた仕事は完璧に遂行するのが我が商会の主義です」
「ハブ門（ゲート）は？」
「対岸の新潟県に建設します。現状、新潟の他に敦賀、松本と浜松の3カ所を予定」
「建設にどの程度かかるので？」
「門（ゲート）建設物資はすでに確保済み。ご承認いただければ着工から1週間の完成を保証いたします。問題は、あなた達が土地を確保出来るかどうか」
「規模に対しては早いですね」
「必要な資材を事前に組み上げ、現地では組み付けるだけですから」
「発案というか、依頼先は中世協会か？」
「それで」
ユギオは、妙にくつろいだ顔で訊ねた。

「この特売――裏は何です？」
「裏？」
神音の美しい眉が少しだけ動いた。
「裏――とは？」
「貴女ほどの商人が」
ユギオは、テーブルに置かれたカップに手を伸ばした。
「こんな赤字を出すとは、すなわち余程のことだ」
「我が商会の先代は」
神音は答えた。
「ヴォルトモード卿との商売は、結果として店を傾けた程の大赤字だったと、事あるごとに嘆いていましたわ」
「ああ――そうでしょうねぇ」
楽しげな忍び笑いが漏れた。
「混乱に乗じて、粗悪品を売り込みたいというのではありますまい？」
ユギオは静かな口調で言った。
「貴殿から仕入れた品で不良品が混じっていたとは一切報告がない。あれほどの規模で供給されるにしては信じられない」
「品質保証は当商会のモットーです」
神音は毅然として答えた。
「お客様の信頼こそが第一ですわ？」
「それで？」
そう応じた。
「その信頼第一の神音商会が、赤字覚悟で大型門（ゲート）を建設するとは？」
「……」
「その裏は何です？」
「……実際の所、私は」
神音はため息混じりに言った。
「この仕事を引き受けたことを心底、後悔してますの」

――意味が分かるか？

神音の視線はそう語っていた。

「大凡」

ユギオは、動じることもなく答えた。

「先代の話を聞いて興味を持っていた。赤字続きだった商売――自分なら黒字にしてやったのにと、事あるごとに思っていたことを現実にするチャンスだ」

その眼は、まるで孫娘を慈しむような優しい眼差しをたたえていた。

「最初は、そんなつもりだったのではないのか？」

「――お人が悪いですわ」

神音はつまらなそうに頬をふくらませた。

その子供じみた仕草が、外見の幼さをさらに際だたせるが、どちらにしても、その態度が言葉を是認したことは確かだった。

「すぐに本当の所にたどり着いて」

「その考えを覆させたのは何だ？」

「……」

神音は、もう一度ため息をついた。

「ここには私達しかおらんぞ？」

「……魔界、そして天界におけるヴォルトモード軍への支援の声は、日村の解放以降」

神音はしぶしぶながら口を開いた。

「日増しに高まるばかりです」

「……」

「アフリカでの批判を帳消しにしたい中世協会には、それでいいのですが……」

「……」

「あなた方は、世論の動きを甘く見すぎです」

「ん？」
　ユギオは首を傾げた。
「どういう意味だ？」
「わかりません？」
「わからないから訊ねている」
「……世論とは、波のうねりのようなものです。上手く起こせば恵みをもたらしますが」
　カチャ
　何が気に入らないのか、神音は自前のティーセットを開いた。
「下手をすれば、全てを台無しにします――特に、唐突に生じ、生じた波が大きく動いた時には」
「世論の動きが激しすぎると？」
「アフリカ侵攻初期と動きは同じです。あの失敗からすれば、旗色が悪くなれば、すぐに資金の遣り繰りに支障をもたらすでしょう。世論はただ、人類に一矢報いることに浮かれているだけです」
「一矢報いることが悪いことですか？世論は人類を通して、神族に一矢報いたと思っているでしょう？現在の魔界の世論は、増えすぎた人類の滅亡。人間界の浄化を望んでいる」
「その通り。ですが、世論に後押しされる者は、得てして、両手放しに世論の言葉を受け入れるがあまり、自ら考えることをしなくなる。
　人類を根絶やしにすることが良いことなのか、そして、その後をどうするか――全く考えず、他人の放つ心地よい声ばかりに耳を動かし、踊らされる」
「……」
「そんな世論の動きから利益を生み出そうとする連中が加われば最悪です。いえ、現実に事態は混沌とし始めている」
　神音はティーカップに紅茶を注ぎながら頷いた。
「世論は容易く人類絶滅を叫びますが、その後のこと。人類無き後の世界をどうするかとなれば、まるで思考が停止した状態です。お

そらく、互いが互いに、人間界を自らの陣営が所有し、その都合のいいように作り替えられると本気で信じているようで」
「……それは収拾がつきませんね」
差し出されたティーカップから立ち上る芳香を楽しみながら、ユギオは頷いた。
「お祭り騒ぎに踊らされているだけ……我々を、そう呼びたいのですか」
「そう――特に魔界の小貴族達は、先手を打って人間界に領土を得ようと眼の色を変えて義勇軍に加わる始末です。噂では、シュロスベルク公国の名門、ヴァルホイザー家までが家名再興のために動いたとか」
「それで？」
「私が見る限り、義勇軍に関しては、中世協会は世論のコントロールに失敗するのは明白です。
協会が魔界や天界で世論を煽るのは、支援の名の下に資金を引き出すためですしょう？
ですが、それ増大すればするほど、人類絶滅の主張が高まることが分かっていない」
「あなたが言わんとしていることこそ、わからない」
ユギオは眉をひそめた。
「義勇軍に加わるのですよ？そんな連中は、人類絶滅を希望するからこそ」
「中世協会の願うところは、かつて人類創製当時同様、自らの命令に従う奴隷としての人のありよう。絶滅ではないでしょう？」
神音は皮肉たっぷりにわらった。
「狙いは人間の数を減らして、家畜化しやすくすることであって、根本的な絶滅ではない。
最初から私も、あなたから“絶滅”という言葉は聞かなかった。
――つまり」
「……」

「人類絶滅を標榜するヴォルトモード卿と世論――それとあなた方中世協会は、決定的な段階、最後の最後で折り合いがつかないようになっているのです。最初から」
「――よくご存じだ」
「無責任です」
神音は憮然として言った。
「――まぁ、正直、ヴォルトモード卿が復活さえすれば流れは変わるでしょう。どちらにせよ、私にとっての問題は」
神音は紅茶に一口、口を付けただけでソーサーへカップを戻した。
「あなた方が、状況によって私達をどう扱うか」
「下手な勘ぐりというか、杞憂ですよ？」
「そうでしょうか？」
「……」
「私の立場をご存じの上で、杞憂と申しますか？」
「……」
「私は、いずれはあなた達にとって邪魔者になるでしょう」
「本音を言って下さい」
ユギオは、腕組みをしながら神音に命じるような口調で言った。
「何を望むのです」
「戦争はバクチです。これほどのバクチにしくじれば、我が商会も潰されかねません。負けたら、それこそ投資の回収どころか、事態収拾さえ出来ません」
ユギオは、無言でじっと神音を睨むようにしてたが、やがて口を開いた。
「つまりは――事態の落とし所を教えてもらいたいと？」
「そうです」神音は頷いた。
「全人類の滅亡となれば、言っては失礼ですが、ヴォルトモード卿の独断ではどうにもならない。あなた達、中世協会でも無理。天界と魔界、そして獄界をも巻き込んだ“最終決定”が必須」
ここまで言いかけて、神音はユギオの顔をのぞき込むようにして

訊ねた。
「独断で、そこまでやれるとはお考えではないでしょう?」
「雇われているという、私の立場を考えて下さい」
「無論、貴男方の主張する人口激減には反対する理由はありません。人類を叩けるだけ叩いて数を減らしてもらう。
そして私は、その間にいただけるものは徹底していただく。
最低条件は、この極東で二度とこの弓状列島に盾突く国が無くなるほど、周辺国は徹底して疲弊してもらう。あるいは滅亡してもらう。
これは最低ライン。落とし所以前の問題です」
「……この国の滅亡ですら望んでいないと?」
「親バカとお笑い下さい」
神音は、はにかんだ笑みを浮かべた。
「息子と孫がこの国にいるのです」
「……」
「ですから、あなた達に下手に潰れてもらっては非常に困る。
かといって、この戦い、人類には圧勝してもらっては困るし、事態が天界と魔界の領土問題に発展してもらってもさらに困る――
それだけに、落とし所が極めて難しい」
「どの辺りだと見ているのです?」
「世論が沈静化しだした頃。タイミングが難しいですわよ?」
「人類がどう動くかですが、その前に」
ユギオは空になったティーカップの縁を指で撫でた。
「肝心のヴォルトモード卿に復活していただかなくては」
「……お茶、もう一杯いかが?」

対馬沖から動いた中韓合同軍の大艦隊は、船舶数数百隻を誇った。
上はタンカーから下は漁船、遊覧船まで。

ほとんどは大韓帝国から徴用された船だ。

上陸軍の第一陣は大韓帝国軍。

その数約3万。

韓国海軍は、この船団に艦艇の可動艦艇の8割を動員した。

対日征討上陸軍先遣隊――そう名はついているが、実際の所、本隊である中華帝国軍が安全に通行出来る海路を開く体の良い露払いに過ぎなかった。

大船団は、対馬沖で中華帝国軍の指示により数日間に渡り謎の足止めを喰らった後にようやく出港を許された。

その間、韓国兵達は一切の上陸を認められず、日射病や持病の悪化でかなりの死者を出している。

王制党から派遣された政治委員がメガホンで精神論を唱えるが、焼け石に水で、兵士達の志気は極めて低い。

艦隊旗艦であるイージス駆逐艦「世宗大王（セジョンデワン）」の艦橋に陣取る艦隊司令劉中将は、それが極めて面白くない。

大韓帝国海軍。

一独立国の艦隊を、他国の海軍将校が動かす。

それは、彼が中華帝国海軍から出向しているから――建前はそうなっているが、実質的には中華帝国軍の一部隊という韓国軍の立場を証明しているような話だ。

つまり、独立国家の軍隊として扱われていない。

「日本本土まで何時間だ？」

「約5時間」

「世宗大王（セジョンデワン）」の艦長が答える。

その愛想のかけらもない答えさえ、劉には面白くない。

劉は顔をしかめながら言った。

「船団護衛に抜かりはないな？」

「大韓帝国海軍は」

艦長は言った。

「最善を尽くしています」
「当たり前だ。だが、その最善を尽くした挙げ句が失敗だったら、お慰みのしようもないな」
「貴国が」
艦長は言った。
「適切な作戦命令さえ出していただければ、犠牲は少なくて済みます」
「我が軍の命令は常に適切だ」
劉は艦隊司令席を蹴った。
「貴様、どういう意味だ？」
「期待しているのですよ」
その眼は暗く沈んでいる。
「我々、愚かな朝鮮民族でも戦争に勝てるように、適切な指示をいただけるものと」
「ふん」
愚かな朝鮮民族。
その言葉に、少しだけ心証を良くした劉は、再び艦隊司令席に座り直し、脚を組んだ。
「私が立派に導いてやる――従兵、酒はどうした？」
「作戦行動中ですが？」
従兵――それも若い女の酌で酒を飲み始めた劉に、艦長はそう問いかけたが――。
「まず飲んでからだ」
劉はにべもなく酒を飲み干すと女にグラスをつきつけた。
軍服こそ着ているが、その沈んだ彫りの深い顔立ち、中華語を理解していないらしい素振りから、艦長は、彼女がどこの出身か大凡見当を付けていた。
「大体、貴様等も」
劉は酒を飲み干すと言った。
「戦功を立てれば、運が良ければこういう」

女の腰に手を回した劉が強引に女を抱き寄せた。
「“肉人形”が手に入るぞ？」
「……」
艦長は愛想笑いさえせず、視線を外に向けた。
横で行われている痴態には一切関与しようとさえしない。
劉中将。

その名は、ハノイ攻略時の住民虐殺と略奪を指導した人物として、国際的に有名な身だ。
つまり――戦争犯罪人として。
“ハノイの虐殺者”
欧米のマスコミからそう叩かれ、国際司法裁判所に訴えられたのは確かだ。
欧米からの身柄引き渡し要求に応じないよう、王制党中央の幹部でもある彼は、その立場を活かし、各方面に略奪品をばらまいた。
そして、政府は欧米に答えた。
「愛国故の行為であり、それ故に劉中将の振る舞いはむしろ賞賛されるべきである」
ハノイでの民間人犠牲者推定１０万人。
奪われた資産、推定２５０万ドル以上。
ハノイ陥落以降、中華帝国へ向けて出発する“特別鉄道便”には、宝石や美術品、そして、“女”が乗せられていたことを知らぬ者はいない。
米軍がハノイの鉄道輸送部隊施設から押収した文書から、少なくともベトナム人女性５万人が鉄道で運ばれたことはわかっているのだ。
それがすべて、愛国心故だというのだ。
艦長は、中華帝国の愛国者を、虫ずの走る想いで艦に迎え入れた。

軍人の恥さらしだと、艦長も思う。
その元凶がこうして他国の艦艇に堂々と乗り込み、痴態を重ねている。

――悪い夢だ。

艦長はそう思うことにしていた。

――栄光ある大韓帝国海軍が、このような者に動かされるなんて、悪い夢だ。

そうとでも思うしかなかった。

韓国艦隊が、日本軍からの洗礼を受けたのは、それから3時間後。
「世宗大王（セジョンデワン）」の前方を航行していたのは、メサイア大隊を輸送中の輸送艦だ。
メサイアの飛行能力から考えると、半島から飛ばしても問題はないと思われがちだが、それは日本側にメサイアの襲来を予め知らせる愚策に過ぎない。
メサイアは空中機動力の面で極めて鈍重で、大型爆撃機並の機動力しかない。
対空ミサイルをＭＬ（マジックレーザー）で撃ち落としそこなえば無事では済まない。
あるいは対空ＭＬ（マジックレーザー）でも用意されていれば、的にしかならない。
上陸作戦の場合、奇襲的な運用こそがメサイアに最も適した運用方法なのだ。
メサイアを輸送艦で運ぶのは、そういう理由からだった。

ズズゥゥゥンッッ！！
その輸送艦の脇腹のあたりで巨大な水柱が立ち上った。

１０万トンの巨体が真っ二つに割れ、舳先とスクリューを見せた輸送艦は、文字通りあっという間に海底へと沈んだ。

「な、何だ！」
劉が怒鳴る。
「艦長っ！」
「機雷です」
艦長は答えつつ、艦内通信を開いた。
「ソナー、警戒、どうなっていた！」
「ソナーに反応なし！」
ソナー室から反応が返る。
「ソナーは機雷を認識していませんっ！」

ズズゥゥ……ム

鈍い音が再び轟き渡った。
先程、沈没した輸送艦の真横を航行していた大型輸送艦の後部で水柱が発生、艦の真下、スクリューが機雷をひっかけたらしい。艦後部の構造物が一瞬でえぐり取られたようになる。
破孔から大量の水が艦に侵入している。

ズズンッ！！

再び、爆発が発生した。
破孔から流れ込んだ海水が、機関室内で水蒸気爆発を引き起こしたのだ。
「やられたのはどの艦だ！」
“オーキッド”と“ピア３世”です」
副長が答えた。
「共にメサイア輸送艦搭載数は合計１２。予備系の武装、機材を搭

載していました」
「――――っ！」
艦長は強く拳を握りしめると、劉に言った。
「司令、メサイア隊を発艦させて下さい」
「馬鹿なことをいうな！」
さすがに目の前の爆発で酔いが醒めたのか、劉は怒鳴った。
「上からの指示がない！」
「ここでメサイアをこれ以上失えば、責任は閣下に覆い被さりますが！？」
「うっ」
劉は顔色を青くした。
「すでにメサイア１２騎です。これ以上の喪失は明らかな指揮官の失態です。譴責を」
ズンッ――――ズズスンッ！
船窓の外でまた爆発音が響き渡った。
「避けられますか？閣下」
劉は首を横に振った。
虎の子のメサイアを１２騎も喪失した。
それまでならば、奇襲を受けたからだと言い逃れも出来る。
しかし、これ以上は……。
劉は上擦った声で言った。
「艦長、まかせる」
「はい」
艦長は従兵達に不思議な目配せした後、言った。
「司令部は気付けに一杯どうぞ。従兵の方、お酒を」
「あ、ああ」
劉は酒をあおると、司令部要員に命じた。
「お前達も呑めっ！」
「は、はぁ……」
中華帝国から劉と共に派遣されてきた司令部要員は、どうしたも

のか。という顔で酒が満たされたグラスを受け取った。
「閣下の酒が飲めないのですか？」
艦長にそう言われ、司令部要員は覚悟を決めたようにグラスをあおる。
全員がグラスを飲み干したのを確認した艦長は大声で命じた。
「――全艦停止！海面に対して掃海砲撃戦闘用意っ！」
掃海作業は一時間で終了した。

「被害はどの程度だ？」
「船の数だけなら３５隻」
掃海作業の後、艦長の問いかけに副長は答えた。
その手には、司令部要員から奪った拳銃が抱えられている。
「大型艦は軒並みやられました。戦車揚陸艦どころか、兵員輸送艦までやられました。被害は歩兵２個中隊、戦車１個大隊」
「一体、日本軍は何をしたんだ？ソナーは情報をつかんでいたのか？」
「水中自走式の機雷はこの世界では普及したタイプです。日本軍は、ＧＰＳを使用した誘導機雷を使用したものと思われます。つまり、我が軍は何も知らずにのこのこと機雷原に入り込んだ。そして、日本軍は、衛星からの情報を元に我が軍の大型艦をねらい打ちにした」
「メサイアは」
「艦長の判断が功を奏しましたな。沈没した艦に搭載された騎は脱出不能で全騎海の藻屑ですが、残りは上空待機には成功」
「最悪だが、喪失よりマシだろう……それにしても」
艦長は艦橋の隅で固まっていた女性達に、ベトナム語で言った。
「君達の協力に感謝します」
相手はベトナム人女性達だと聞かされている。
目の前で起きたことに思わず脅えていた彼女たちが、突然かけられた母国語に、びっくりした顔で艦長を見つめている。

何しろ、劉以下艦隊司令部要員は、全員眠りこけているどころか、乗組員達によって縛り上げられている。
艦長が手配した睡眠薬入りの酒のおかげだ。
その酌をしたのが彼女たちなのだから、礼の一つも言っておくべきだろうと、艦長は思ったのだ。
「副長、ゾディアックを使える、一番若い者を選抜しろ」
「はっ」
「君達は船室にいなさい。これ以上、地獄を見る必要はないでしょう」
艦長は女達に言った。
「すぐに解放します。大韓帝国の名誉にかけて」

地獄。

艦長の表現は、正解だった。

機雷原を抜けた艦隊を待ちかまえていたのは、海底に潜んでいた日本軍潜水艦隊だった。

「水雷、来ますっ！」
「“赤鮫”はどうしたっ！」
「“クンサン”に魚雷、直撃っ！」
「“プサン”、沈みますっ！」
日本沿岸にたどり着いた所で、臨時に艦隊司令となった艦長は、その後襲ってきた海面下からしつこく攻撃を繰り返す日本海軍潜水艦隊と刃を交えていた。
海底に潜んで待ち伏せしていた潜水艦達を発見出来なかったのは、ソナーを無効化する日本軍潜水艦達の装備もあったが、雑多な艦が密集して航行することによるソナー使用制限の方が大きい。
各艦の放つ雑多なまでの推進音がソナーをかき乱し、ソナーその

ものの騎の腕制限しているのだ。
対する日本軍は、撃てば何かに当たるのだから、容赦も何もない。
海底から一斉に攻撃をかけ、次々と艦艇を食い散らかすだけだ。
「畜生っ！」
艦長は目の前で転覆する最後の大型輸送艦を目に焼き付けた。
貴重な最新鋭戦車が満載されていた輸送艦の中で弾薬が転がったのだろう。
船腹の半ばから大爆発が発生。
艦は乗組員や兵員を巻き込んで黒い煙に変わった。

潜水艦は、デコイを散布しつつ、輸送艦だけを狙ってくる。
理由は？
こっちを上陸部隊だと知っているからだ。
潜水艦の目的は上陸作戦の阻止。
護衛艦なんて何隻沈めても意味はない。
むしろ、潜水艦は輸送艦を削るべきだと知っているのだ。

ならば、護衛艦の相手は？

その答えを知ったのは、潜水艦隊の奇襲から数分後のこと。
船団は空襲を受けた。
ＣＩＣから告げられたミサイル警告。
ＣＩＷＳがうなり、対空ミサイルが盛大に撃ち出された。
潜水艦達はその間に姿を消した。
日本軍にとっての誤算。
それは大韓帝国軍がメサイアを空中に展開していたこと。
メサイアのＭＬ（マジックレーザー）が飛び来るミサイルを次々と撃墜する。
空襲をそれで避けられたのが、船団の唯一の救いだった。

ところが――

「艦長。司令部からです」
通信兵が通信文を持ってきた所で、艦長は絶望的に嫌な予感に襲われた。
「……」
通信文を一読した艦長は、深いため息と共に瞼を閉じた。
口からはため息しか出てこない。
「艦長」
副長が信じられない。という顔で艦長の顔を覗き込んだ。
「司令部はまさか……メサイアを」
「福岡に上陸させろと言ってきた」
「この騒ぎで、上陸部隊はまだ準備も出来ていません！船団上空を、何でどう守れというんです！」
すでに船団はメサイアという楯で守られているからこそ、空襲を避けられているようなものだ。
その楯を失えば、船団は赤裸にされたのと同じだ。
「命令だ――メサイア隊は前進する」
艦長は首を横に振った。
「私の権限ではどうしようもない。メサイアを恐れて空襲を停止してくれることを祈るだけだ」

メサイア達が船団上空を通過していった。

「艦長っ！」
副長は叫ぶように言った。
「狩野粒子の対空使用許可を！」
「ダメだっ！」
艦長は怒鳴り返した。
「ここで狩野粒子を散布すれば、逆にこちらが丸裸になるぞ！」
世宗大王（セジョンデワン）のＶＳＬに搭載されたミサイル――その弾頭には、福

岡一帯を狩野粒子で覆い尽くすだけの狩野粒子が詰め込まれている。

だが、艦長が指揮するのはイージス艦。

狩野粒子が無力化させる電子装備の塊なのだ。

その艦が自艦を守るためとはいえ、艦の間近に狩野粒子をばらまけばどうなるかは火を見るより明らかだ。艦を預かる身として、そんなことは御免被る。

「メサイア隊が前に出れば、航空部隊は下がるしかない。そうすれば、あとはどうとでもなるっ！」

艦長の言葉は正論だった。

対馬司令部がそこまで考えていたとは到底考えられないが、それでもメサイアが前進したことで、ＭＬ（マジックレーザー）による狙撃被害を怖れた日本軍は、航空部隊を後退させた。

ぱったりと空襲が途絶えた船団だったが、損傷を癒すヒマもなかった。

上陸開始時間は目前だった。

「揚陸部隊司令部より入電。これより上陸準備開始する」

「――了解だ」

生き残った船が自らの科せられた任務を果たすべく、満身創痍の中、動き出す。

ボートが降ろされ、ロープを伝って兵達が乗り込んでいく。

揚陸艇が揚陸に向け、機動を開始する。

「副長」

その光景を見ながら、言った。

「ゾディアックの準備は出来ているか？」

「はい」

副長は頷いた。

「一番若い水兵４名を選抜、２隻に分乗させています」

「海岸までの距離は？」

「約２０キロ」
副長は続けた。
「福岡まで直線では３キロですが、北九州に向かわせます」
「白旗は掲げさせろよ？」
「水兵を説得するのに苦労しましたよ」
「やむを得まい」
艦長は肩をすくめた。
「まだ若いんだ。やり直しはいくらでも効くさ」
艦長と副長は、ひとしきり笑った後、言った。
「さて――対艦ミサイルは使えるか？」
「ＶＬＳ管制装置被弾――現在修復中」
「何だと？」

揚陸艇に乗り移ったイ少将は、揚陸艇の中を満たす機関の推進音に負けないよう、参謀の肩を掴むと、耳元で怒鳴った。
「狩野粒子は散布出来てるんだろうな！」
「ダメですっ！」
参謀は怒鳴り返した。
「何だと！？」
「ダメだって言ったんです！」
「何でだ！」
「空襲で、「世宗大王（セジョンデワン）」のミサイル発射装置が故障したんですよ！」
「俺達に死ねというのか！？」
狩野粒子影響下であれば、中韓の旧式装備でも最新装備を誇る日本軍と互角以上で戦える。
理由は、電子装備が使えないことで、日本軍は戦闘にかなりの支障を被る。狩野粒子が使える我が軍の勝ちだ。
イ少将は、司令部からそう言われ、そう信じていたのだ。
だが、狩野粒子が使えなければ、ミサイルや空襲から身を守る方

法がないに等しい。
　中華帝国のお下がりを後生大事に使用する韓国軍の装備は６０年代のそれ。
　彼が持つ武器も、中華帝国軍がすでに第二線装備に指定する５６式自動小銃だ。
　装備があまりに古すぎる。
　勝てる自信が、一気に崩れ去ったのを、イ少将自身が確かに感じた。
「仕方ありませんよ――――時間ですっ！」
　参謀は時計を指さした。
「くそっ！」
　イ少将が毒づく中、参謀が信号弾を打ち上げた。
　上陸作戦の開始だ。

　船団の周りに無数の砲弾が降り注ぎ始めたのは、その時だった。

2021

日本本土防衛戦　第二話

シュンッ

空気が抜けたようなその音を聞く度に、寿命が縮む。

ズンッ！

近くに砲弾が落ちた音だ。

恐ろしく近い。

上官達は、“日本軍は満足に砲の操作もできない無能共だ”というが、どう考えても違う気がした。

ズズゥゥゥンッ！

揚陸艇の鉄箱の中から外を見ることは出来ない。

東海の荒波にもまれる度に、誰かがヘドを吐く音と、酸っぱい臭いが箱中に立ちこめる。　この箱に乗せられてから、何分、何十分――いや。何年経ったかわからない。

時計を見る気にもなれなかったし、外を見るのは恐すぎた。

ズンッ！

また音がした。

シャアアアアアッッッ

2022

シャワーのような音がして、上から雨のように海水が降りかかってくる。

ただでさえ重い軍服の生地が水を吸ってまるで鉄のように重く体に張り付く。

体が震えているのは恐怖のせいばかりではない。

ズゥゥゥゥンンッ

腹に響くのは、さっき聞こえたのとは別な音。
音そのものの重さが違う。
ズンなら砲弾が海に落ちた音。腹に響けば、砲弾が気の毒な船に命中している音だ。

兵士達は、不安げに空を見上げた。

シュンッ

また、空気が抜けたような音がした。

ズズゥゥゥムッ

「うわっ！？」
船内に悲鳴が響く。

――あんまりだ。

朴は、恨めしげに空を仰いだ。

隣を走っていた戦車揚陸艦に砲弾が命中、火柱が人間と鉄の破片を空へとまき散らした。

艦の真ん中から盛大な炎を挙げる戦車揚陸艦がゆっくりと動きを弱める。

もう沈没は避けられれないだろう。

兵士達の乗る船達から脱落していった。

――僕が何をしたと言うんだ？

召集令状を受け取ったのが二週間前。

兵営の門をくぐったのが一週間前。

軍服と装備を渡された後、貨物列車に詰め込まれて釜山へ２日かけて運ばれた。

モノのように貨物列車から引き出された後、こんな粗末な船に乗せられて日本海で漂っていた。

鉄柵の上に帆布の覆いがかけられた船内は、プラスチックの座席が並ぶ質素な造り。

士官に聞いたら元は観光船だという。

そんな船で敵国に攻め込めだなんて、他になんて言えばいい？

「情けない悲鳴を上げるなっ！」

メガホン片手の士官が怒鳴る。

「栄光有る韓国軍兵士がなんてザマだ！いいか！？貴様等は先祖がなしえなかった――」

ズンッ！

ズンッ！
海岸線が近くなるにつれて、砲撃が激しくなってくる。
前方を航行する船が両舷を水柱に挟まれた。
「先祖がなしえなかった対日征伐に向かっているのだ！」
船が針路を変えた。
右へ左へとジグザグに動き出している。
他の船もそうだ。
よく接触しないものだと感心する余裕さえない。

ズンッ！
ズンッ！

水柱が立ち上り、帆布の覆いがない場所にいた兵士達が頭から水を被る。
本で読んだ三途の川だってもう少し穏やかだろうと、朴は思った。

「今日は、貴様等が生涯で最も誇れる日になるだろう！全力で日帝のファシスト共を殺せるからだ！一人十人以上を殺せ！臆病者、敗北主義者は容赦しない！敵に背を向けた者は誰であろうと射殺するっ！」

ズゥゥゥンッッ！
巨大な水柱が立ち上り、船が木の葉のように揺れる。

「あたるわけないだろう！」
士官は怒鳴るが、朴達は、恐怖のあまりその場にうずくまってしまう。
「水、食料、武器弾薬に至るまで、我が軍には十分な備えがある！日帝にどれほどの備えがあろうとも、それは我が軍には遠く及ばないだろう！貴様等は福岡市に上陸次第――」

キュイイイイイッッ――――

ズズゥゥンッ！

前方を航行していた魚船が、突然、炎に包まれた。
「機雷にでもぶつかったんだろうよ！」
――――そうかも知れないけど、でも砲撃音はした。
朴はおっかなびっくり沈み行く船を見た。

「敵にあるのは脅えだけだ。まともな交戦手段を持っていない！我々は数で勝り、気迫で勝り、そして正義で勝っている！怖れる者など何もないっ！本来、この日本はわが中華帝国の領土であり――――」

士官達が相変わらずメガホンで何かを怒鳴るが、もうと何を言ってるかさえ、朴達はわからなかった。

ギィィィィィンッッ！！
ゴォォォ……ッッ！！

それまでとは違う、空気を切り裂くような甲高い音がしたのは、その時だ。

士官が後ろを振り向いた。
「敵機だ！」

誰かが叫んだ。
朴の目に、濃緑色に染められた大きな飛行機が迫ってくる。
Ａ－１０。
朴はそんな名前は知らない。
ただ、やたらと大きい。
そうは思った。
その敵機から無数の爆弾が雨のようにばらまかれ、獣が吠えたような音が辺りに響き渡る。
密集しつつあった船団のあちこちに水柱が立ち上り、船が何隻もバラバラに引きちぎられた。
３０ミリガドリング砲を撃たれたことなんて、朴にはわからない。
引き上げた時、翼に赤い日の丸が見えただけだ。
士官達が小銃を空に向けて発砲した時には、敵はすでに明後日の方向に逃走していた。
朴は帆布の覆いが邪魔で空を見ることは出来ないが、続いて来た音がエンジン音だということはわかった。
今度はプロペラ機だ。
執拗なまでに機銃掃射を繰り返してくる。
朴が、自分の乗っている船が撃たれたのを知ったのは、周りから立ち上がる悲鳴だった。
士官が倒れ、船にすし詰めにされる兵士達が逃げることも出来ず、船の間近に着弾し、破裂した機銃弾の破片で体を引きちぎられる。
破片で体が引きちぎられたなら、直撃を受けたらどうなるか？
朴はその光景も見ている。

――何かの悪い冗談だ。

朴には、そうとしか言い様がなかった。

体を丸くしてうずくまった兵士。

うずくまることさえ出来ず、立ったまま震えている兵士。

彼らが、朴の目の前で“バッ”という音と、体の一部を残して“消え去った”のだ。

２０ミリ機銃弾の直撃が、兵士達の体を吹き飛ばした。

航空砲弾の直撃は、ハリウッド映画のように、人体に小さな穴が開く程度では済まない。

体が文字通り、一瞬で砕け散る。

いや、

血の煙を残して消える。

それが答えなのだが、朴にはそんなことはわからない。

本当に、一瞬にして人間が消えたようにしか見えなかった。

――何の手品だ？

朴は本気でそう思った。

敵機が遠ざかっていく。

「軍医……軍医を……」

「腕が……俺の腕がぁぁぁ……」

朴の周囲は、船の推進器の音に混じって、うめき声が満ちあふれる。

鼻腔を刺激するのは、潮の香りと兵士達の体臭、そして血の臭い。

水柱を浴びて船内は水浸しだが、その水が真っ赤に染まり、無数の肉片が浮いている。

そこに半分沈みながら、あちこちに血まみれで藻掻く兵士達が転がっている。

呆然と立つ朴は、船の揺れに思わず脚を踏ん張り直した。

赤く染まった海水がバシャッと音を立てた。

その途端――――

「……おい」

足下の方から、低い声がした。

口から血を吐いた若い兵士が、恨めしそうな眼で朴を睨んでいた。

「俺の……を……踏むな」

朴は、とっさに脚をどかした。

そして、自分が何を踏んでいたかを知った。

ピンク色の管。

違う――――

その兵士の腑（はらわた）だった。

若い兵士が、必死に臓物を腹に戻そうと泣きながら腹を押さえている。

敵機が戻ってきた。

再び、機銃掃射が船を襲い、その若い兵士は頭を撃ち抜かれて動かなくなった。

呆然とする朴の目の前で、その若い兵士の他にも、何人もの負傷

兵となった兵士達が今度こそ、“楽”になっていった。

「静かにしろっ！」
「動くなっ！」
士官が銃口を向けたのは朴達へだ。
何人かが敵から――――いや、船から逃れようと船縁にしがみついて士官に引き戻された。
「敵前逃亡は銃殺だっ！」
「やだっ！」
錯乱した兵士が何人も船縁を越えて海に飛び込んだ。
「糞がっ！」
士官達は海面めがけて銃を発砲した。
ギャッ！！
泳ぎだした兵士が背中を撃たれ、のけぞるようにして海中に沈んでいった。
海に飛び込んだまま、浮かんでこなかった兵士もいる。
「手間かけさせるなっ！」
小銃のマガジンを交換しつつ、士官は怒鳴った。
「ここまでは戦死扱いだ！次から敵前逃亡罪で処刑だ！」
士官は手近にいた兵士の頭を蹴りつけた。
「わが国で、敵前逃亡罪を犯した兵士の家族がどういう扱いをうけるかわかってるんだろうな！」

ズゥゥゥン
ズゥゥゥン

それまでと違う音が響きだしたのは、その時だ。
砲弾の爆発音が違う。
船の針路に陸地が見えた。
初めて見る日本だった。

「さぁ！栄光ある兵士諸君っ！」
士官はポケットから取り出した紙を読み上げた。
「恐れ多くも中華帝国皇帝陛下は貴様等の活躍に期待している！」
――何でだよ
朴は内心でそう思う。
――俺達は漢民族じゃない。朝鮮民族だ。
――異民族の皇帝のために、何で地獄を見なければいけないんだ。
「上陸次第、銃を受け取れ！受け取った者から順次戦え！
いいか！？
学徒動員兵に過ぎない貴様等だ！
正規軍が上陸するまでに、安全な上陸地点を確保するのがお前達の務めだからな！」
「敵上陸部隊、上陸開始」
MC（メサイア・コントローラー）からの報告に、染谷は感心したように頷いた。
「よくたどり着いたものだ」
「我が海軍の潜水艦隊により」
MC（メサイアコントローラー）は戦況を報告した。
「上陸船団は４割が海上で阻止に成功です」
今、染谷達が立つのはそこから数キロ下がった高祖山山麓。
近衛部隊司令部が置かれた場所だ。
「メサイアの動きは？」

「韓国軍のメサイア揚陸艇の大半は、潜水艦の魚雷攻撃で沈んでいます」
「……出番、なさそうだね」
「だといいんですが――早期警戒機からの情報に注意してください」

朴は、海岸線を前に止まった船の中で不安げに周囲を見回した。
「何をしている！」
士官は怒鳴った。
「海に飛び込めっ！」
――冗談だろう？
「浅瀬だ！沈みはしないっ！」
士官は再び、銃口を朴達に向けた。
「ここでサボタージュ容疑で殺されたいか！？」
体格の良い士官の一人が、兵士の胸ぐらを掴むと船縁に引き上げ、海に放り込んだ。
「そいつに続けっ！」
士官は怒鳴った。
「大学で無駄飯喰らっていた罪を、今こそ償えっ！」

ほら行け行け行くんだよっ！

士官達によって船から海に放り込まれる要領で、兵士達は次々と海に飛び込んだ。
その中に朴もいた。

大学で中華古典文学を研究していた朴の不健康な体に、冷たい海水が容赦なく襲いかかる。
小学校どころか、中学校でようやく泳ぎを覚えた朴は、海水を吸

って重くなった軍服に四苦八苦しながら犬かきの要領で海岸を目指すしかない。
クロールなんて腕が重すぎて出来る話じゃない。
途中、船の破片だろうか。手頃な木材を見つけた朴は、胸に抱きかかえるようにして浮き輪代わりにした。
周囲に見つかれば絶対に奪われる。
海岸まで５０メートル足らずだが、この役得を無駄にしたくない。
時折、後ろから悲鳴が聞こえた。
後ろを振り返ると、さっきまで自分達が乗っていた船の上で、士官達が忙しげに動いていた。
――助けてくださいっ！
――殺さないで！
泣き叫ぶ声は、そこからした。
朴は確かに見た。
士官達は、先程の機銃掃射で負傷した兵士達を海に放り込んでいた。
一瞬、死体かと思った。
だが違った。
死体の腕が暴れていたのだ。
――僕は死にたくないっ！
彼は泣きながら叫んだ。
――お母さんっ！助けて！
士官達が振り子の要領で彼を海に放り投げた、その信じがたい光景を、朴は目を見開いて見つめた。
確かに、彼には――足がなかった。
砲撃の水柱に翻弄され、浮かぶ死体を避け、死に物狂いで海岸にたどり着いた朴達を待っていたのは、奇跡的に上陸に成功していた

トラックだった。
トラックの上で、士官がメガホン片手に怒鳴っていた。
「並べっ！」
「並んで武器を受け取れっ！」
軍隊に呼び出されて朴が習った最初のことは、士官の命令に逆らうな。ということだ。
朴は他の兵士達と共に列に並んだ。
海水を吸った軍服が無情に体温を奪い続ける。
負傷した兵士達が何人かは海岸に倒れたまま動かない。
士官がそんな兵士の一人を軍靴で小突くが、ぴくりともしない。
それを確かめた士官は、ホルスターから拳銃を抜くと、2発、その兵士めがけて撃ち込んだ。

――僕達はモノか？

血は流れているし、殴られれば痛い。
士官と同じ人間じゃないのか？
戦争とは無関係な学生を戦場に送り込んで、使えないと知るやこうも簡単に殺してしまうなんて！
朴はそんな人間としての怒りに震えながら列に押されつづけた。

「なぁ――知っているか？」
突然の後ろからの声に、僕は思わず振り返った。
ソバカスだらけの同い年くらいの男が引きつった顔で微笑んでいた。
「俺達がどうして、上陸開始前に武器を受け取れなかったか」
朴は無言で首を横に振った。
「建前は反乱と脱走防止――本音は」
「ほ……本音は？」

前が詰まっているのに、後ろから士官達が兵士達を押し続けるため、兵士達は胸で前の兵士の背中を押すような格好を余儀なくされていた。
おかげで息が苦しい。
「士官が武器を横流ししてるんだよ――俺、武器コンテナを士官達が売り飛ばしているのを見たぜ？」
「ウソだろ？そんなこと」
「本当さ」
二人は小銃を弾帯をうけとった。
マガジンは2つだけ。
心許ないこと甚だしい。
「敵を殺してこいっ！」
士官に怒鳴られ、二人は他の兵士達と共に駆け出した。
「ど、どうするんだ！？」
朴は目の前を走る兵士に尋ねた。
「君は一体！？」
「俺か？俺は――」
コンクリートの残骸に潜り込んだ彼は、はにかんだような顔で言った。
「……呉とでも呼んでくれ」
それが偽名だとすぐにわかる。
コンクリートの間に潜り込むようにして、朴はこっそりと周りを見回した。
兵士達が海岸から市街地へと死に物狂いで殺到している。
まだ日本軍の銃声はしないから、上陸は成功しつつあるんじゃないのか？
「じゃ、呉」
シュン
シュン
シュン

海上で聞き慣れた音に、朴は溜まらずうずくまった。
ドンドンドンっ！
激しい爆発音が連続して辺りに響き渡る。
「君――どうするんだい？」
「知り合いが日本にいるんだ。この福岡さ」
呉は言った。
「俺はこんな軍隊、おさらばして日本で暮らす。カネを貯めたらアメリカに行くんだ！」
呉はそう言うと、コンクリートの残骸から飛び出し、煙の中へと消えていった。
――どうしよう。
朴はその背中を目の当たりにして、本気で迷った。
このまま軍隊に残りたいか？
否。
生きていたいか？
是。
――なら、どうする？
朴は懐に手を突っ込んだ。
懐に隠されていたのは、白い布。
死にたくない。
たとえ日本人でも、白旗をあげてしまえば、無碍にはしないだろう。
殺される前に降伏してしまえばいいんだ！
朴は、手近に転がっていたパイプに白い布を括り付けた。
立派な白旗。
朴にとって銃より余程大事な“生き残るための武器”だ。
「よしっ」
朴は、その“武器”を頼もしげに眺めた後、駆け出そうとしたが、
ギィィィィィィンッ！
「わっ！？」

その上空を、超低空で侵入した巨人達が通過。
衝撃波で朴は吹き飛ばされた。

濃緑色に塗装されたメサイア――グレイファントムＫＡが地面を削りながら福岡に上陸した。

上陸部隊の支援という司令部命令を受け取ったものの、どの部隊を支援するのか、どの戦域に展開するのか、その肝心な情報が全くなかったせいで、大韓帝国軍メサイア隊は肝心の上陸作戦支援に完全に失敗した。
彼らの失態というより、むしろ適切な命令を出さなかった司令部の責任だ。

「中隊、上陸成功っ！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）からの報告を受けたイ大尉は頷いた。
「敵は、メサイアはどこだ!?」
「日本軍のメサイア部隊、１０時方向、距離２千。騎数８騎」
「８騎？」
イ大尉は呆れたような声をあげた。
「こっちは４０騎だぞ？」
「間違い有りません」
「日本軍陣地は？」
「市街地に散開布陣。わが軍は海岸線より市街地へ向け移動中」

――どうする？

イ大尉は迷った。
戦力を分散するか？
１０騎回して日本軍のメサイア部隊を叩かせる。

その間に、残り３０騎で日本軍を掃討するか？

司令部とは通信が繋がらない。

これほどの戦場で、たった８騎しかメサイアがいないなんてあり得ない。

絶対、その数倍はいるはずだ。

８騎はオトリではないのか？

「大尉」

副官が指示を仰ぐために通信を送ってきた。

「指示を」

「――メサイアを叩く」

イ大尉は答えた。

「メサイアさえ叩けば、後はどうとでもなる！」

イ大尉は命じた。

「全騎、使用武器を戦斧へ！」

グレイファントムが手にした速射砲を脚部固定装置に固定、武器を戦斧に切り替えた。

「抜刀っ！」

ジャカッ！

戦斧が電磁固定装置から解放された叫び声をあげた。

「――よしっ」

指揮官にとってたまらないその音が心地よい。

イ大尉は、満足げに頷くと、再び命じた。

「戦闘展開っ！全騎一丸となって敵メサイアに突撃っ！押しつぶすぞっ！」

メース。

魔族軍側メサイアの総称。
人類の通常兵器では太刀打ち出来ない装甲と、抜群の破壊力を持つ攻撃兵器を持つ、人類にとっては“悪夢の存在”だ。
国連軍が把握しているキルレシオは、メースが確認された時点で1対３０。
メサイア３０騎が撃破されて、ようやくメース１騎を倒せる勘定だ。
さすがにこれを問題視した各国は競って対策を考案し――
ほとんどに失敗した。
その最たるものが、メースの攻撃に耐えられる装甲の開発であり、莫大な費用をつぎ込んだ結果、“殺される前に殺すしかない”という結論に達するだけだった。

結局、人類は戦う手段としての楯ではなく、矛を選ばざるを得なかったのだ。

では、どのような矛が？

代表的な矛が、大日本帝国近衛軍の“斬艦刀”であり、ラムリアース帝国の“スパイラル・スパイク”、アメリカ軍の“ヒートアックス”。

無論、矛だけでは勝てない。
効果的な使い方が求められる。

――効果的な使い方

その顕著な例が、戦史上、人類が初めてメース相手に勝利を収めた“第三次八ヶ岳会戦”におけるメサイア“レオニダス”主力のラムリアース帝國騎士団の戦い方だ。

メサイアは元来、それ単体で決戦兵器であり、相手がメサイアの場合、1対1の単独戦闘に陥りがちな性格を持つ兵器である。

ラムリアース帝國騎士団は、連敗するメサイア戦の敗北の原因を、この傾向にあると判断。

集団戦に発想を切り替えて戦うべし。

そう、決定した。

そして、彼らが採用した戦法こそが、メサイアを機動性に優れた騎兵としてではなく、重武装、重装甲を誇る、重装歩兵として扱う密集陣形（ファランクス）戦法による戦法だ。

密集陣形（ファランクス）戦法編成のために“レオニダス”に与えられた武装は、全身を覆える大楯と、重装甲貫通用の特殊魔法処理が施された槍。

密集陣形（ファランクス）戦法の弱点である側面からの攻撃には、機動性に優れたベテランのメサイアで編成された部隊を防衛隊として配置することで対応する。

かつての典型的戦法――密集陣形（ファランクス）戦法

この時、ラムリアース帝國騎士団により編成されたメサイア部隊は約50騎。

下手をすれば、一国のメサイア部隊に匹敵する規模の部隊を投入した最初の戦いが、この戦いだった。

結果は予想以上のものをもたらした。

キルレシオが初めて1対3にまで持ち込むことに成功したのだ。

ただし――

各国が注目したのは、ラムリアース帝国軍の戦法ではなく、その兵器でしかなかった。

メースの装甲という“楯”を貫ける“矛”さえあればいい。

それが、一般的な考え方であり、実際、各国軍でラムリアース帝国同様の戦法を採用した国はほとんどない。

むしろ、騎士が集団戦法をとることに対する批判さえ持ち上がった。

その例外的存在が――日本の皇室近衛騎士団、その一部。

染谷率いる第303小隊だった。

実戦経験もないまま戦場に送り込まれた彼らは、新米ばかりで戦法らしい戦法がとれない。

個人戦に持ち込まれれば不利だ。

そこで彼らが考え出したのが――“袋だたき戦法”。

一対一のケンカでは不利な相手でも、寄って集って袋だたきにすれば何とかなる。

発案者は染谷だ。

この時の染谷達の立場は、美奈代達と比較しても冗談抜きで最悪だった。

指揮官は航空機事故で戦死。

武装は通常装備のみ。

送られてきた試作型斬艦刀は、刀身の故障で、まともに使えるのが切っ先だけという欠陥品。

これで前線で戦えといわれたのだ。

――俺達は敵じゃなくて身内に殺されるんだ！

候補生の一人がそう泣き叫んだとしても無理はない。

その中で、染谷は考えた。

一人でも生き残るために。

皆を――死なさないために、何が出来るか。

彼が産み出したのが、奇しくもラムリアース帝国騎士団と全く同じの密集集団戦法。

人類相手に使用するのは、これが初めてだった。

「敵、海岸線上陸、騎数増大中、数４０」

「騎種は？」

「グレイファントムＫＡ――エンジン反応からタイプＧと思われます」

福井市に布陣した染谷隊は、楯を並べて敵に備えている。

敵は大隊規模のメサイア。

８対４０の勝負だ。

普通なら逃げ出しても良い。

だが――

「準備は？」

染谷の問いかけに、上田が答えた。

「ＯＫです」

上田の口調には、微塵の恐怖も感じられない。

まるで当然のような平静さをにじませていた。

上田騎は、軽く槍を振って見せた。

「染谷さん――気合い入れてやってください」

「うん――――」
こほん。
染谷は大声を張り上げた。
「勇敢なる近衛騎士団諸君！」
騎士達は、自分達をここまで引っ張ってきた“騎士団長”の声を聞く。
「祖国の土を、あの汚らわしき連中にこれ以上、踏みにじらせるワケにはいかん！身の程知らずの敵をこの場でくい止めろ！祖国の土を踏みにじった代償がどれほど高いか、思い知らせてやれっ！」
「応っ！」
“征龍改”達が、鬨の声と共に、一斉に楯を突き上げた。
「――――血の代償を支払わせろ！」

「敵、こちらを見つけました！戦闘展開開始っ！」
「――――遅いな」
染谷は戦況モニター上で敵の動きを見て舌打ちした。
「東――――敵は僕達より遅いぞ」
「そりゃ――――俺達ゃ滅茶苦茶練習しましたもん」
東は苦笑した。
「そういうことに関しちゃ、俺達染谷騎士団は世界トップですよ」
地響きの様な音。
地震のような振動と共に、グレイファントム達が突撃を開始した。
こちらを排除する意志は明白だ。

何度見ても、メサイアの集団突撃は、相手をすくませる迫力がある。
「ひるむな！」
“征龍改”達は、楯を構え、槍を突きだした。

迫り来るグレイファントム達の動きが、奇妙にスローに見える。

染谷達は知っている。

この瞬間が一番怖いのだ。

感覚が恐怖に麻痺している証拠。

冷静な判断を失いかけている証拠。

死が最も近い場所にいる証拠。

ビーッ！

衝突警報が鳴り響く。

「備えろっ！」

ドンッ！

彼我のシールドがぶつかり合い、メサイアの脚が地面にめり込んだ。

彼我の戦力差は5倍。

染谷達は5倍の兵力を持つ敵の突撃を食い止めたのだ。

「パワー最大っ！押せっ！」

地面にめり込んだ足が、徐々に後ろへと下がって行く。

関節への負荷を知らせる警告がひっきりなしに鳴り響く中、染谷は叫んだ。

「押し返せぇっ！」
フレーム越しに伝わってくる振動と甲高い音が、メサイアのエンジンがフルパワーに入ったことを教えてくれる。
「この程度が、近衛騎士団の力かっ！」
その声に反応したかのように、“征龍改”達は、メサイア同士が押し合う中、ついに攻撃を開始した。

シールドの隙間から槍を突きだし、前衛部隊を滅多差しにした。
そして、各騎が敵をシールドで押し返す。
敵がそのパワーに負け、体勢を崩した所に鋭い槍の一撃を喰らわせる。
４０騎が集中しているのが災いし、敵は前衛を倒されたことで対応に乱れが出た。
再び襲いかかろうと戦斧を振りかざすグレイファントム達は、槍の餌食になっていった。
胸部を貫通するほどの鋭い槍を喰らったグレイファントムが崩れ落ち、或いは腹から脊椎を貫かれ、滅茶苦茶なまでに破壊されていった。

攻撃を可能にしたのは、武器の長さと破壊力だ。
敵メサイアから奪った槍は、３０メートル近い長さを誇る。
この槍で作られる槍襖と全身を覆うサイズの楯が邪魔で、斧中心の韓国軍メサイアでは、有効な攻撃が出来ない。
対する染谷隊は、槍という武器の長さを活かして攻撃が出来る。
その違いだ。

そして何より染谷隊の出色は――――シールドの使い方と騎体同士の連携の巧みさだ。

敵に対する攻撃には槍襖を展開。

反撃に対しては、一斉にシールドを展開し防御。
一糸乱れぬ見事なまでの機動がなし得る芸術的動きがそこにはあった。

楯と楯の間から繰り出された槍の一撃が、次々と前衛に出たグレイファントムの装甲を貫き、一騎、また一騎と倒していく。

対するグレイファントム達は、何とか戦斧をもって反撃に出るが、攻撃を弾かれる度に繰り出される槍の一撃から逃れられない。

戦闘開始からわずか2分足らず。

グレイファントム達はその戦力を半減させていた。

「やるぞっ！」

ドンッ！

ついに染谷隊が前進を開始した。
擱座（かくざ）したグレイファントム達が次々と槍でとどめを刺されていく。

単純だが、その連携された動きは、確実に敵を仕留めていく戦法に、グレイファントム達は為す術がない。

「押せっ！」
「応っ！」
いかにグレイファントムが斧でかかろうが、一糸乱れぬ連携された楯の動きの前に、それはあまりに無力だった。
グレイファントムが数騎、斧で染谷騎に襲いかかる。
“征龍改”達の楯は、一斉に壁となってその前に立ちはだかり、

敵が再度斧を振り上げたタイミングで動き、槍を繰り出す。
楯と槍の連携の前に、グレイファントム側は太刀打ちする術もなく、ただひたすら撃破されていくだけ。
一方的なまでの戦いが、繰り広げられた。
「前へっ！」
染谷隊は、グレイファントム達を踏みつけながら前進する。

楯と槍。

リーチというものを熟知した騎士達の繰り出す攻撃は、まるで敵を嘲り笑うかのように、残虐に、しかし、確実に敵を仕留め続ける。

確実に。

元から数がない。
確実に仕留めなければ、どんな反撃を受けるかわからない。
当初、１４騎で編成された部隊が８騎まで減った背景には、倒したはずの敵からの、予想外の攻撃による犠牲がある。
皆、それで死んでいった仲間を見ている。
仲間が死をもって教えてくれた教訓を、彼らは決して無駄にしないだけだ。

「早期警戒機より警告入りますっ！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）が言ったのは、５倍の数を誇った敵が同数まで減った時だった。
「洋上、玄海島上空で敵メサイア部隊が戦闘編成中――――数６０！」
「大盤振る舞いだな……さすがというか……機種はグレイファントムか？」
「“赤兎（せきと）”と思われますが――――」

MC（メサイアコントローラー）は首を傾げた。
「問題は、そこに接近中の部隊です。数２０。全くのアン・ノウン騎」
「進行方向は」
染谷は槍を繰り出しながら訊ねた。
「竹島方面から」
「竹島？」
染谷は少し考えてから言った。
「上田、東っ！」
「はいっ！」
「生きてますっ！」
「――部隊後退っ！残りを仕留めろっ！」
「染谷さんっ！？」
「魔族軍が来るっ！」

日本本土防衛戦　第三話

「福岡に上陸したメサイア隊が壊滅！」
「馬鹿なっ！」
対馬に設置された上陸軍司令部は、その報告に青くなった。
韓国軍のグレイファントムＫＡで編成されるメサイア部隊は、米国製グレイファントムが素体である以上、ロシア製“スターリン”を素体とする中華帝国軍の“赤兎（せきと）”や“帝刃（ていば）”よりも基本性能的には上だ。
特に、今回投入されたのは大韓帝国軍が入手出来た米国の最新技術が盛り込まれた最新モデル、タイプＧ。
グレイファントムの輸出用モンキーモデルの中では、最も本国仕様（Ｍ６４）に近い基本性能を持つとされる。
それが４０騎、一度に喪失したなど、にわかには信じられない。

「相手は日本軍だぞ！？他、上陸部隊の被害は！？」
上陸軍司令官黄大将の声に参謀長が答えた。
「日本軍の砲撃及び航空攻撃が激しく、各部隊に甚大な被害が生じています」
その手にした指示棒が地図の上で動く。
「韓国軍第一派のうち、上陸に成功したものは2割程度。洋上の艦隊も壊滅しており」
「属国の被害なんてどうでもいいっ！“我が軍”の被害を知らせろ！」
「……大将」
苦々しげな声で黄大将と参謀長の会話に割り込んできたのは、大韓帝国軍側司令官ペ中将だ。
「我が大韓帝国軍も、合同軍である以上――その、“我が軍”の範疇に」

「黙れっ！ロクに戦果もあげずに犬死する属国の兵と、栄光ある中華帝国軍を同列に扱うつもりか！？思い上がりも大概にしろっ！」
「――――っ！」
「貴様等は、黙って私の命令を聞いていればいい、それ以外、何もするな！この場にいられるだけでも這い蹲って感謝すべきだと何故わからんっ！」
「なっ！？」
「参謀長、日本海側から侵入する部隊があると言ったな――――参謀長」
殺意に満ちあふれた、ペ中将の視線を無視した黄大将の問いに、参謀長が頷いた。
「はい。詳細不明ですが――――おそらく友軍と思われます。後衛として待機中の“赤兎（せきと）”部隊と合同で」
「閣下！」
オペレーターが悲鳴を上げた。
「敵軍、対馬に上陸！待機中のメサイア隊、攻撃を受けていますっ！」
「何っ！？」

「だ、誰かぁ！」
「助けてくださいっ！」
通信を悲鳴が支配する。
「“赤兎（せきと）”隊は前面へ出ろっ！“帝刃（ていば）”各騎は後方へ下がれっ！」
李大佐は“赤兎（せきと）”を駆りながら真っ青になっていた。
“赤兎（せきと）”を日本側に配置し、“帝刃（ていば）”を後方に配置していた。
敵が日本側から来るという判断からだった。

ところが、敵が後ろから来た。

「愛鈴っ！敵は一体！？」
「不明っ！」
李大佐騎のMC（メサイアコントローラー）が悲鳴に近い声で答える。
「騎種不明、フレーム、エンジンノイズ、ライブラリーに該当なしっ！」
「日本軍か！？」
「わかりませんっ！」
その目の前で、逃げまどう“帝刃（ていば）”達が次々となぎ倒されていく。
「――ちいっ！」
李大佐は叫んだ。
「“赤兎（せきと）”隊、突撃っ！ヒヨコをこれ以上（や）殺らせるなっ！」

対馬に強行着陸した銀色のメースが剣を振るう。
ギンッ！
陽光を浴び、金色に輝く剣が一閃するたびに、“帝刃（ていば）”の装甲がたたき割られ、胴体と脚部が泣き別れる。
真っ二つに切断された“帝刃（ていば）”の胴が宙を舞う間に、銀色のメースは次のエモノに食らいつく。
戦闘開始からたった1分。

いかに奇襲を受けたとはいえ、中華帝国軍メサイア隊はあからさまな混乱に陥っていた。

無理もない。

実情を知れば、誰もがそう思うだろう。

「だ、誰かっ！」

“帝刃（ていば）”から悲鳴が上がる。
千鳥足になりながら逃げようとする騎がある。
ひっくり返ったままもがき続ける騎もいる。

皆が、自らの乗る騎を満足にコントロール出来ないのだ。

「おとなしく操縦権を放棄しろっ！」
「な、何をどうするんですかっ！」
「スイッチを押せっ！右下の黄色いヤツだ！」

“帝刃（ていば）”各騎のＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）では、パニックに陥った騎士から操縦権を奪ったＭＣ（メサイアコントローラー）が騎の姿勢を取り戻そうと対応に追われている。

騎によっては、操縦権を巡り、騎士とＭＣ（メサイアコントローラー）が対立することさえあり、ＭＣ（メサイアコントローラー）が、騎士が錯乱したなど、やむを得ない場合に発動する「強制制御権」発動を宣言、ようやく騎士から操縦権を奪取する。

しかし、それは多くの場合、遅すぎる判断だった。

「だ、誰か助けてっ！」
目の前で仲間の騎が吹き飛ばされたのを直視し、パニックに陥った騎士がコクピットで泣き叫ぶ。
「戦えっ！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）が怒鳴る。
「貴様は騎士だろうが！」
その叱責に騎士は答えない。
意味不明な言葉をさかんに口走り、コントロールユニットを滅茶苦茶に操作する。
直立することも出来ず、“帝刃（ていば）”はその場にひっくり返った。
騎士はそれでも“帝刃（ていば）”の手足をばたつかせることをやめない。

「くそっ！」

――――冗談じゃない！

MC（メサイアコントローラー）はコンソールの横。鍵付きの透明なカバーを開いた。

――――今回だけ、こいつの鍵が最初から外されているのはこのためか！

カバーを開くと、警告文のシールが貼られたボタンが現れた。

コクピット内で錯乱、もしくは暴走した騎士鎮圧装置装置の作動ボタンだ。

押せばスタンガンが作動し、騎士は一瞬で気絶――――もしくは高い確率で即死する。

それでも、

――――俺が死ぬわけじゃない。

――――こいつのバカに巻き込まれてたまるか！

MC（メサイアコントローラー）は何の躊躇もなく、そのボタンを押した。

ピーッ！！

短いアラームが鳴り響き、

ビクンッ！

“帝刃（ていば）”が強く痙攣した後、動きを止めた。

そして、MC（メサイアコントローラー）の前に「操縦権限委譲完了」の表示が現れた。

騎士の脳波と心拍数に異常が発生している警告が合わせて表示された。

スタンガンを受けた騎士が極めて危険な状態であることは明白だ。

「パニックになれば死ぬって教わらなかったのか！」

ＭＣ（メサイアコントローラー）は、“帝刃（ていば）”をひっくり返った姿勢からようやく立ち直ることに成功した。

騎士がメサイアの運動神経を司るなら、頭脳を司るのがＭＣ（メサイアコントローラー）だ。

頭脳が体を制御出来るのは当たり前のことだ。

ＭＣ（メサイアコントローラー）が考える通りに、“帝刃（ていば）”は無駄のない動作で動き出す。

「よしっ！」

騎体バランス良好。

被害軽微。

――――やれる！

ＭＣ（メサイアコントローラー）は通信装置に怒鳴った。

「こちら“帝刃（ていば）”２０３１号騎！騎士戦闘不能により戦線離脱する！」

ピーッ！！

後方警戒装置が作動した。

「何っ！？」

ＭＣ（メサイアコントローラー）は、騎体を振り向かせようとして、そこで意識を失った。

背後から接近する銀色のメサイアの振るった剣を騎の頭部に受け、ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）ごと切断されたことを、彼は最後まで理解出来ずに、その一生を終えた。

「何だいこいつらっ！」
背中を見せた敵騎に剣を突き立てた銀色のメサイア――魔族軍メース“ヴィーズ”を駆るアニエスはあきれ顔になった。
敵を目の前にして露骨に背中を見せる騎がほとんど。
そんな馬鹿な。
やる気がないのか？
友軍騎が倒されたというのに、満足な応戦さえしてこないなんて。
「こんな敵相手にするためにっ！」
その惰弱ぶりにカッとなったアニエスはコントローラーに力を込めた。
「アタシャ、連日徹夜でコイツを整備したっていうのかいっ！」
その剣が、背中を見せた“帝刃（ていば）”の胸部装甲を貫通した。
「姉御っ！」
横に降り立ったヴィーズから通信が入る。
「何なんですかコイツ等！」
「知るかい！アンタは何騎やった？」
「俺一騎で6騎でさぁ！弱い弱いっ！」
「全くつまらない話さね！」
“帝刃（ていば）”を唐竹割で真っ二つにしたアニエスは思いついたように言った。
「スリハレ、弓状列島にむかったトヒラに戻るように言いな。こんな連中相手じゃ、エネルギーの無駄だ」
「へいっ！」

ガインッ！！
アニエスの駆るヴィーズ。
その剣が、“赤兎（せきと）”が振り下ろした斧を止めた。
李大佐の騎だ。

「これ以上好き勝手させるか！」

李大佐が力任せに押す。
エンジン出力が一気にレッドゾーンに叩き込まれた。
しかし――――

「ほうっ！？」
アニエスは少しだけ驚いた顔をした。
「ちょっとは骨があるか！」
面白い。
アニエスは頷くと、斧を一気に押し返し、李大佐騎の腹を蹴りつけた。
「パワーが違うんだよ！」

李大佐騎が吹き飛ばされ、“帝刃（ていば）”の残骸の上に落ちた。

“帝刃（ていば）”と“赤兎（せきと）”の破片が巻き上がる中、それでも李大佐は自らの騎を起きあがらせようと足掻いた。
コクピット内に損傷を告げるアラームが鳴り響く。
「くっ……“赤兎（せきと）”各騎に告げる！」
李大佐は通信機に怒鳴った。
「“帝刃（ていば）”各騎後退っ！“赤兎（せきと）”隊は“帝刃（ていば）”残存騎の後退を支援しろっ！この場に踏みとどまれっ！」
騎がようやく起きあがった。
李大佐自身、腹に恐ろしいほどの痛みが走る。
何が自分の体に起きているのか、正直、知りたくない。
「ヒヨコ共を逃がすんだ！」
李大佐は自らの愛騎に斧を握りなおさせた。
目の前に立つ銀色のメサイアが接近しつつある。
ヒヨコを食い荒らす蛇。
その鱗のような嫌悪感を感じる騎体色。
いや。

蛇そのものだ。
李大佐は斧を振り上げ、“蛇”に立ち向かった。
「この毒蛇がぁっ！」

突き出されたヴィーズの剣が腹部正面から胸部背面装甲までを貫通。
李大佐騎は、斧を振り上げた姿勢で動きを止めた。

「――――間合いってものを知らないのかい」
ペッ。
アニエスは、唾を吐くと、ヴィーズの剣を目の前の敵から引き抜いた。

ズズンッ

土煙をあげながら倒した敵騎が倒れるのを、アニエスは背中で聞いた。

――――まったく！

アニエスは心底面白くなかった。
敵が弱すぎる。
神族軍のメサイア隊が見せた強さが微塵もない。
あいつらと比べれば、大人と子供の差どころではない。

――――弱すぎるっ！

強い敵と戦う。
その願望が乾きにも似た欲望となってアニエスを襲う。

彼女は、それから逃れるように叫んだ。

「ヘボにこれ以上つきあうな！さっさと皆殺しにしちまいなっ！」

上陸軍が司令部を置く対馬が魔族軍の奇襲を受けた。

それは中韓連合軍上陸部隊にとてつもない悲劇をもたらすことになる。

対馬が奇襲を受けた時点で、すでに前線指揮官達は後退もしくは降伏の許可を司令部に申請していたのだ。

ところが、その結果を知らせる前にメサイア同士の戦闘に巻き込まれた司令部は機能を停止したということは、つまり、前線は撤退も降伏も出来ないまま、戦闘を継続せざるをえない立場に追い込まれたことに他ならない。

本来なら撤退すべきなのは誰の目にも明らかだった。

だが、止まることのない狂った歯車が兵士達を地獄へと導き続けた。

福岡海岸に戦車揚陸船団がたどり着いた。

阻止砲撃で満身創痍の０７２型戦車揚陸艦前面のランプが開き、５９式戦車がエンジン音をまき散らしながら砂浜をゆっくりと走り出す。

そして百メートルもいかない所で、

ドンッ！

突然、戦車の真下で爆発が発生した。

それまで背筋をピンと伸ばして車外に上半身を出していた戦車長が倒れ伏した。

走り続ける戦車からは煙が立ち上り始めたかと思うと、砲塔と車体の隙間から盛んに炎が吹き出し始め、そして最後には砲塔そのも

のが吹き飛んだ。
海岸に埋められていた対戦車地雷が爆発したのだ。
擱座(かくざ)た戦車を避けるようにして後続の戦車達が揚陸艇を離れるが、次々と地雷に接触、炎に包まれた戦車兵達がハッチから転がり出てくる。
戦車に続く兵員輸送車両が地雷に触れようものなら、見るも無惨な地獄絵図が生じる。
それでも揚陸艦達は戦車や装甲車を吐きだし続けた。
結果、海岸線は戦車と歩兵部隊で埋め尽くされようとしている。

高祖山に設けられた近衛軍司令部からはその光景がはっきりと見える。
「あのタイプの揚陸艦は１０隻建造されただけのはずだから」
双眼鏡で海岸を覗き込んでいたのは、黒髪の女性士官。
饗庭樟葉だ。
「それが８隻……」
「それだけ戦力を投入しているんですよ」
副官の守屋が言った。
「戦車揚陸部隊は揚陸を完了。福岡市街地前面に展開された陸軍防衛隊にむかって殺到しています」
「騎士の動きは？」
「戦力を温存しているのかもしれません。上陸部隊には確認されていません」
「陸軍は韓国軍を海岸線に貼り付けている。我々の出番はないか？」
「そう願いますが」
守屋は三式装甲服をガチャガチャ鳴らせながら頷いた。
「世論が許さないでしょうな」
「うん……後退した染谷隊には、広域火焔掃射装置(スイーパーズフレイム)を装備させろ」
「独断で後退した判断は処罰対象ですよ？」

「適切な判断だ」
樟葉は言った。
「Uターンしたとはいえ、魔族軍メサイア部隊が接近。自分達が呼び水になっていると一瞬で判断したが故に、部隊を後退させた。染谷のその判断がなければ、今頃、この辺りまで魔族軍に制圧されているぞ？」
「軍事法廷は避けられませんよ？」
「弁護人に私が立つ」
樟葉は言った。
「規則や軍規ばかり前面に押し立てると、兵が萎縮する。それでは勝てる戦も勝てない」
その声は冷たいというより、秘めた怒りに震えていた。
「現場の判断がそんなに信じられないのか！そんなヤツは、部下を使う資格はないっ！」
「……法務部隊には戦況の特殊性故の不可避の判断と見なすよう、要請しておきます」
「頼む――大体」
ズンッ！
海岸線で、信じられないような大爆発が発生したのは、その瞬間だった。
「――後退しなければ、“アレ”が撃てないだろうが」

「近衛がメサイアを後退させた！？」
福岡市街地前に張られた防衛線で、通信兵からの受けた報告に、歩兵小隊を率いる仙石少尉は顔を引きつらせた。
「あの無駄飯ぐらいが！こういう時くらい、役に立てっ！」
市街地付近に放置されていたトラックや車両を並べ、土嚢と共に構築されたバリゲードの中から顔を出せない。

敵からの攻撃は凄まじい。
１発撃てば１００発打ち返してくる。
そんな言葉を地で行くほど、中華帝国軍は容赦がない。
先程まで相手にしていた韓国軍とは同じ人類かと疑いたくなる程、レベルが違う。
すでに２両の９０式戦車が歩兵携帯用ロケットＲＰＧ７により撃破され、無惨な姿を仙石達の前に晒している。
穴埋めに回されてきた八式対空戦車がガドリング砲の弾幕で敵を阻止しているにすぎない。
戦車が出たらアウトだ。

「小隊長！」
通信兵が怒鳴った。
「航空支援が入りますっ！」

すでに戦車が出ていることは、その砲声から明らかだ。
元来、海岸上陸阻止に用意されていたＡ－１０攻撃部隊が上空を通過した。

――――やってくれよ？
仙石の祈りに答えるように、特有のガドリング砲の咆哮と同じくして連続した爆発が繰り返される。

「やったか！？」
黒煙が幕のように立ち上る。
ばらまいたのはナパーム弾とクラスター爆弾のカクテル。
灼熱の炎に焼かれれば、戦車部隊も無事では済むまいし、クラスター爆弾なら歩兵は挽肉だ。
少しでも敵が減ったことはありがたいが――――
「小隊長！」

兵士が指さす先、攻撃に参加したＡ－１０がエンジンから煙を吐き出しながら引き返していった。
Ａ－１０は頑丈さが売りだ。
エンジン１基失った程度で――
Ａ－１０の損傷を、我が事のようにさえ思う仙石は歯を食いしばって空を睨む。
「……畜生」
仙石はうめく。
なにがメサイアだ。Ａ－１０の方が様々だ。
あの近衛の無駄飯ぐらい。
名ばかりの騎士様が何してくれたっていうんだ！
その彼に通信兵が怒鳴った。
「小隊長！砲撃警告ですっ！」

「お前、韓国軍か？」
敵に見つからないことだけを祈っていた朴は、突然の中国語に飛び跳ねて驚いた。
自分がどこにいるのかさえ、朴はわからない。
方角さえ、今の朴にはわからない。
あの兵士と別れて、上陸した海岸方面に引き返したはずなのに、海はどこにもない。
砲撃と爆撃の中、武器も弾薬も無くした朴に出来ることは、ただ、廃墟の中で震えているだけだった。
その朴に銃口を向けているのは、日本軍ではない。
中華帝国軍だ。
「そ、そうです」
大学で中国語を習った朴は震える舌でそう答えた。
中国語を身につけていて良かったと、この時ばかりは朴は本気で

思った。
「大韓帝国軍、朴二等兵」
「部隊はどうした?」
「わかりません」
朴は答えた。
「ここにたどり着く前にちりぢりで……」
「よし」
少尉の階級章をつけた中華帝国軍士官が言った。
「後方に下がれ。ただし、下手に動くな?チョロチョロしていると、撃たれるぞ?」
そして、朴には聞き取れないほど早口の中国語で何事か命令すると、士官とその部隊は福岡方面に移動を開始した。
徴兵されて士官にはじめて優しい声をかけられた朴は、無意識にその部隊を追いかけようとした。
中華帝国軍が気に入ったのではない。
ただ、その士官なら、自分を人間として扱ってくれるんじゃないか。
そう思っただけだ。
朴が廃墟から出ようとしたその直後――

信じられないほどの衝撃が、朴を襲った。

「砲撃が開始されています――衝撃で窓ガラスが割れる恐れがあります。繰り返します。こちらは警察の広報車です」

パトカーから放送が流される中、軍事路線に停車した列車の周りで鉄道職員達がせわしなく動き回る。

国鉄鉄道砲撃隊。

国鉄総裁指揮下の軍人待遇職員達で編成される砲兵達だ。

普段は国鉄職員、有事の際は軍人となる彼らが動かしているのが普通の列車なはずはない。

国鉄ご自慢の列車砲だ。

日本で列車砲とは、元艦載砲を転用した代物であり、口径は４６センチ砲と４０センチ砲、そして２８センチ砲が主流。今回の作戦では、すでに６０門が国鉄総裁命令で福岡県近隣に集められ、陸軍砲兵隊と共に砲撃に参加している。

だが、この時、朴を襲った衝撃波を産み出したのは、彼らとは違う、別な存在だ。

射撃地点は九州でさえない。

撃ったのは広島県岩国に展開した国鉄鉄道砲撃隊の９９式６０センチリレ砲。

世界最大級６０センチ砲が射撃可能なレールガンだ。

国内にも2門しかないため、魔族軍の砲撃陣地攻略のため本州に駆り出されていた所を、中韓軍九州侵攻の報を受けて引き返していた所で間に合わず、こんな遠距離からの射撃となったが、撃ち出される砲弾は誘導装置を組み込んでいるため、精度は恐ろしく高い。

下手をすれば、推進装置の制御が必要なミサイルよりも高いとされる。

その列車砲を操作する３００人近い国鉄職員を率い、指揮をとるのが藤井車掌だ。

車両は２０両編成。

電源車に牽引車、そして客車までと恐ろしく雑多な編成となっている。その最後方に連結された管制車両の中、藤井車掌は背筋が寒

くなるような音を聞いた。
――何度聞いても好きになれない。
藤井は沸き立つ周囲をよそに、一人平然とした顔つきだけは保った。
こんな所で射撃命令をくらった時はどうしようかと思ったが、それでも地元管区には感謝だな。
藤井はそんなことを思った。
周囲では、彼の部下がきびきびとした動きで任務に励んでいる。
「3発目、正常に発射」
「1発目の弾着を確認。目標地点ど真ん中！」
通信員からの報告に、車内がさらにわき上がる。
「よし――弾種そのまま射撃を継続しろ」
「了解っ！」
「……」
脳しんとうを起こしているのかもしれない。
周りを見回しても、何が何だかわからない。
砕けて黒く焦げたアスファルトの上を、ふらつく脚で歩く。
自分がどこに向かっているのかさえ、今の朴にはわからない。
カンッ
朴の脚が何かにあたった。
「？」
黒くて何だか奇妙な、でも、どこかで見たような形をしていた。
「……」
朴は、かがみ込んでそれを手にした。
――何だろう。

少し重くて握ると表面は柔らかいけど、中は少し固い。
裏返してみたり、何度か手の中で弄んでいるうちに、朴はそれが何だかようやくわかった。
人間の手だ。
「……」
胃液がこみ上げてきた。
朴の手が、“それ”を思わず落としてしまう。
そして、朴は自分がどこに立っているかわかった。

先程の中華帝国軍少尉達が倒れていた。

何か強力な砲爆撃を受けたんだろう。
兵士達が見るも無惨に引き裂かれてアスファルトの上に転がっていた。

「う……ううっ……」
小さいうめき声がした。
アスファルトの上に倒れた士官の体が弱く動いていた。
先程の少尉だ。

生きている！

朴は慌てて少尉に近づき、肩をゆすった。
「大丈夫ですか！？」
「……ううっ」
どこを負傷しているのかわからない。
全身が真っ黒に煤け、赤黒い血で顔が染まっている。
全身負傷しているといえばそれまでだ。
喋ることさえ出来ない少尉を抱き起こし、朴は背中に背負った。
「い、医者はどこだ？軍医は？」

あたりを見回しても、目に入るのは廃墟だけ。
それでも彼は少尉を背負いながら、廃墟をさまよった。
砲撃は続く。
「が、頑張ってください……少尉」
爆風に吹き飛ばされそうになりながら、何とか踏みとどまった朴は廃墟の角を曲がった。

ヒュンッ！

何か鋭い風が通り抜け、頬に痛みが走った。

銃撃を受けたのだ。

角を曲がった先にあったのは、瓦礫をバリケードにした、中華帝国軍の陣地だった。
瓦礫のあちこちに潜んだ兵が、自分めがけて銃口が向けている。
「ま、待ってくれっ！」
朴は中国語で怒鳴った。
「負傷兵を連れてきた！僕は韓国兵だ！敵じゃない！」
しばしの沈黙の後、怒鳴り声がした。
「よしっ！そのままゆっくりこっちへ来い！」

ズンッ
ズン、ズンッ、スズスゥゥゥンッ……

背後では未だに砲撃の音が続いている。
いや、それまでとは比べ物にならないほど激しさを増している。
地震さながらの爆発音と振動があたりを支配し、バリゲードがわりの瓦礫がそのたびに少しずつ崩れていく。

４０センチ列車速射砲が砲撃に参加したらしい。
これでは福岡方面への侵攻は無理だ。
朴はそんな兵士達の会話を聞きながら、目の前に横たわる少尉の遺体に手を合わせていた。

もう死んでいる。

軍医は少尉の脈を取った後、そう告げただけで何もしようとしなかった。
「せ、せめて治療を！」
縋り付いた朴に軍医は冷たく言った。
「死体に何をしろというんだ？朝鮮人」

せめてとばかり、少尉の顔を水を浸したハンカチで拭いた。
それが、朴に出来た唯一のことだ。
乾いた血は少尉の肌にしつこくこびりつき、落とし終わるのにかなりの時間を必要とした。
どす黒い血だまりが取り除かれた後を見ると、まだ二十歳ばかりのあどけなさを残した顔がそこにあった。
苦悶の表情はない。
むしろまるで眠っているような穏やかな顔をしていた。
「おい」
背後からの声に、朴が振り返ると、中華帝国軍兵士が数人、立っていた。
「死体を処理する。お前は原隊に戻れ」
「し、しかし……」
朴は迷った。
帰りたいとしても、その原隊がどこにいるかわからない。
「大韓帝国軍の部隊はどこにいますか？」

「俺が知るか」
兵士は答えた。
「前線は混乱している。お前の面倒なんて見ている余裕はない――だから、さっさとここから消えろ」
兵士達はそう言うと、少尉の腕と脚を乱暴に掴んだ。
そして、引きずったあげくに近くの穴の淵に立った。
爆撃で開いた穴を広げたらしいその穴の中は、戦死者の死体で埋まっていた。
兵士達が、ちぎれた手足を乱雑に放り込んでいる。
穴の底では、まだうめき声が聞こえている。
生きている重傷兵を、死体として捨てているのは明らかだ。
朴は、地獄の釜さながらの光景を見て、兵士達が何をするのか察しを付けた。
「ちっ――――この程度か」
兵士達が、朴の目の前で少尉のポケットから財布を抜き取り、中身を抜き取ると、財布を穴の中へ放り込む。
「金歯もないぜ」
一人が乱暴に少尉の口を開け、中を覗き込む。
「さっさと捨てちまえ――――いくぜ?」
「おう」
唖然とする朴の目の前で、案の定、少尉の死体が、その中に投げ込まれた。
穴のふちに一度ぶつかった少尉の死体は、
「い、いくらなんでも!」
朴は怒鳴った。
「同じ同国人でしょう?それをこんな穴に放り込むなんてあんまりだ!」
中華帝国軍兵士の返事は、言葉ではなく拳だった。
朴の鼻骨が折れ、血の臭いが鼻腔を満たす。
吹き飛ばされた朴は指一本動かすことが出来ない。

青い空を見ることだけが、精一杯だ。
「おい、どうするコイツ？」
「どうせ朝鮮人だ。この穴の中に放り込んでおけ」
朴は、そんな声を聞いた気がした。
体が激しく揺すられる中、朴の意識はとぎれた。

最後続の中華帝国軍の兵士が海岸に上陸した。

よく生きて上陸出来た。

多くの兵士は心底そう思いながら、辺りを見回した。
上陸前の支援砲撃もなく、空爆もなかった。
海を見れば、兵士達を運んできた輸送艦ばかりだ。
輸送艦の武装は、歩兵携帯兵器を撃つ程度に過ぎない。
対艦ミサイルでも撃ち込まれたら対抗する手段はない。
実際、中華帝国軍主力部隊の上陸開始の直前になって日本軍の砲撃がぱたりと止まなければ、すべてはどうなっていたかわかったものではない。
「前進っ！」
兵士の属する部隊が号令の元、海岸から廃墟と化した市街地へと進む。
兵士は視線を前方に戻すと、部隊と共に海岸を歩き出した。

ズンッ！

斜め前方を歩く兵士が、突然吹き飛ばされたのは、その時だ。
その兵士の左足が吹き飛び、兵士が宙を舞った。
兵士は爆発音にとっさに伏せた。
海岸に埋められた対人地雷が未だに生きていたのだろうか。

あるいは、韓国軍を挽肉に変えたクラスター爆弾の不発弾を踏んだのかもしれない。

原因は分からないが、とにかく、脚を吹き飛ばされた兵士が、ぞっとするような悲鳴をあげ、切断された脚の根本を押さえてのたうち回る。

助からないことは本能的にわかる。

「畜生！ドジりやがって！」

「衛生兵っ、衛生兵は！」

「しっかりしろっ！――おいっ！そこに転がっている脚もってこいっ！」

仲間の兵士が彼のサスペンダーを掴んで後ろに下がる。

真っ赤な血の跡が砂浜に残る。

その赤い線をまたぎ、兵士達は前進する。

瓦礫の山と化した市街地の入り口では激しい戦闘が繰り広げられたらしい。

得体の知れない肉塊や、弱々しく動く重傷兵が置き去りにされたままだ。

負傷した兵士の腹からはみ出た臓物に黒々と蠅が集るが、兵士にはそれを払いのける力さえもう残っていない。

――殺せぇぇぇっっ

――殺してくれぇぇっ

――銃を、銃を貸せぇっ

あちこちでそんな声が聞こえる。

――衛生兵、衛生兵を

そんな声はまだマシだ。

――お願いです。助けてください。

前方を進む小隊指揮官の脚を、負傷兵が掴んだ。
顔を焼かれ、歳も性別さえわからない見るも無惨な姿をしていた。
目が見えなくなっているのを藻掻いて、ようやく小隊指揮官に縋り付くことが出来たのだ。

――お願いです。軍医の所へ

ガンッ！

小隊指揮官は、情け容赦なく、その負傷兵の顔めがけて銃尻を何度も振り下ろした。
……顔色一つ変えることなく。

グシャッ！

血混じりの脳漿が飛び出し、小隊指揮官の顔に飛び散った。

「これも情けってもんだ――なぁ？」
小隊指揮官は楽しげに微笑むと、部下達を一瞥した。
「死ぬ時はさっさと死ね。祖国に迷惑をかけるな――わかったか！？」
「はっ、はいっ！！」
兵士達は青くなって頷くだけだ。
「よし。進むぞ」
死体を踏みつけ、小隊指揮官を先頭にむかった前方。
対戦車ミサイルの直撃を受けたらしい、擱座（かくざ）した戦車が数両、止まっていた。
撃破された時、戦車の内部で生じた火災から逃れられなかった戦

車兵の焼死体が、戦車のハッチから半ばはい出した格好のままくすぶっている。
無事に脱出したとしても、戦車兵がどうなったか。
それを、戦車の横に転がっている死体達が語ってくれた。
「狙撃兵に注意しろ」
戦車兵の死体を一瞥した副小隊指揮官の軍曹が言った。
「一発で仕留められている。こいつは狙撃兵の仕業だ」
軍曹は兵士達に命じた。
「遮蔽物を活かして行くぞ！俺のケツについてこいっ！」
前方からは凄まじい銃撃戦の音が続く。
すでに先に進んだ部隊が激しい戦闘を繰り広げているのだ。
兵士は軍曹の命令通りに動き出した。

中華帝国軍兵士達が不思議に思ったこと。
その第一が、自軍の航空支援のなさだ。
対地攻撃機を盛んに繰り出してくる日本軍に対して、中華帝国軍は戦闘機すら出さなかった。
その理由を兵士達は知らない。
ただ、先程まで聞こえていた列車砲の攻撃が突然止んだことだけは確かだった。
その理由を思い知らされたのは、実は敵である日本軍だった。

警報が鳴り響き、壁のモニターがいくつもブラックアウトしたままだ。
「予備電源、作動します」
「第９レーダーサイト沈黙っ！」
血まみれになったオペレーターが時折、咳き込みながら報告する。
施設内の照明はすべて落ち、非常電源が弱々しい光を灯すだけだ。
「列車砲部隊は！」

自分の上に覆い被さっていたテーブルを何とか払いのけ、立ち上がった将校が怒鳴る。
「列車砲部隊の砲撃はどうなっているか！」
「現在停止！」
オペレーターが答えた。
「空爆で送電線が破壊されました！」

福岡上陸作戦において、中華帝国軍航空部隊は、ある意味で適切な行動をとったとされる。
福岡に上陸する部隊に関する航空支援ではなく、日本軍の後方部隊の攻撃に徹したのだ。
日本軍の目が福岡に注がれる間に、彼らは洋上より九州のどこに日本軍が配置されているかを分析。
その結果を元に、射程２００キロを誇る長距離対地ミサイルで日本軍の施設を次々と攻撃した。
戦果はかなりのものとなった。
九州の発電所、送電施設は、根こそぎ空爆の被害を受け、送電が各所でストップ。
このため、国鉄砲撃部隊は電力の供給が受けられず、装弾装置が停止。
レーダーサイトを始め、後方支援のかなりの部隊がミサイルの餌食となった。
「復旧急げっ！」
ここ、熊本城にある陸軍第六軍管区司令部は、その中でも最も被害が大きい施設の一つに数えられる。
九州全域の陸軍を統括指揮する施設だから当然だが、ミサイル数発の直撃を受けた今、施設のあちこちで火災警報と衛生兵を呼ぶ声が響き渡る。
「九州防衛を任務とする第六軍管区司令部が狙われるのは当然ですが」

参謀長の中村中佐が、管区司令官曽我少将に言った。
「防空部隊、ミサイルの撃墜に失敗しましたな」
「ＧＰＳ誘導だろうな」
曽我は不機嫌そうに言った。
「衛星撃墜ミサイルの開発予算を議会が認めなかったオチがこれだ！来年を見ていろよ！？」
「とにかく」
中村は言った。
「近衛から通信が入っています。“掃除にかかる”と」

戦場は、日本軍対中韓合同軍の戦闘ではなく、日中両軍の戦闘へと変化していた。
韓国軍が組織として全滅したからだ。
「世宗大王（セジョンデワン）」を始め、艦艇は根こそぎ戦没。
韓国海軍が水上兵力の大半を喪失する代償として上陸に成功した海兵隊、陸軍もまた、共に前方から日本軍、後方から日本軍と誤認した中華帝国軍に挟撃される形で全滅に追い込まれた。
戦闘開始からまだ半日と経っていない。
にもかかわらず、大韓帝国軍は九州の地から消えたと言って良い。
彼らの代わりに日本軍と対峙するのは、中華帝国軍だ。
市街地の狭い路地を、韓国軍の死骸を踏みつぶしながら、彼らの戦車が前進する。
８８式戦車が3両。
後続に歩兵達が続く。

2号車の戦車長席に座るのは、武少尉だ。
まだ戦車長を任されてから半年に満たない新米だ。
気の知れた部下と一緒でなければ、この極限状態の下、拳銃自殺

でもしかねないほど、気の弱い男だった。
戦車長席のスコープからのぞく日本の景色は、灰色がかっていて、見るモノはすべて瓦礫ばかりで、美しくも楽しくもない。
杭州の演習地の広大な景色が懐かしい。
数ヶ月と離れていないはずなのに、もうそう思ってしまう。
現在、彼の出来ることは、前方、一号車の戦車長、孔大尉がスピードを落としてゆっくりと進むのに付いていくだけだ。
彼の所属する第3戦車大隊は、すでに戦力の大半を上陸時に失っている。
上陸艇が海岸に乗り上げるまで、戦車の中に入ったまま、海に沈んでいった仲間達の助けを求める断末魔の声を、彼自身、何回聞いたかわからない。
そうまでして上陸した日本だが、彼には死んでいった仲間の仇を討つといったご大層な意志も、国家や民族がどうのという理屈もない。
彼にあるのは、たった一つだ。
――死にたくない。
それだけ。
死にたくなければどうする？
勝つだけだ。
勝って、生き延びるしかない。
狭い戦車の中。
密閉された空間。
兵士達の体臭まじりのよどんだ空気と、むっとする熱気が、武少尉の喉をカラカラに乾かせる。
水が欲しい。
そう思うが、スコープから目を離す勇気もない。
前方では、一号車が交差点にさしかかろうとしていた。
ズンッ！
「止まれっ！」

武少尉は思わず戦車を停止させた。
停止した一号車の腹の下あたりから盛んに煙が上がっている。
地雷にひっかかったのだ。
「くそっ――――」
武少尉は、一号車と通信を開こうとレシーバーに手を回した。
一号車の隊長の安否を確認。
三号車を後退させ、必要なら一号車を牽引する。
彼が必要なこと、出来ることを頭で考え、一号車からの返答を待とうとしたその直後。
ズズズンッッ!!
「何だ!?」
背後から走る凄まじい爆発音に、首をすくめてしまった。
「三号車、後方の様子わかるか?」
「こちら三号車、後方で爆発有り。歩兵部隊との通信が途絶」
この時点で武少尉達は知らなかったが、戦車達の後方で身構えていた兵士達めがけて、道路脇に仕掛けられていた爆発物――――地雷除去用の爆索を転用した即製品――――が爆発したのだ。
地雷を吹き飛ばすほどの爆発に、生身の兵士達が無事なはずはない。
兵士達は瞬時に挽肉にされ、崩れた瓦礫の下敷きになった。
「三号車、下がれるか?」
「やってるが――――瓦礫が邪魔で動けない」
「一号車、井大尉、応答してください」
「こちら一号車――――エンジン停止。再起動しない。残念だが車両を放棄する」
「了解」
答えつつ、武は内心で舌打ちした。
せめてどけ。
そう思ったからだ。
戦車達は前後をふさがれた。

一号車のハッチが開き、戦車兵達が煙に追い出されるように戦車から転がり出てくる。
せめてみんな無事だったから――――
スコープ越しに一号車の戦車兵達の無事を確認し、武少尉が小さくため息をついた途端――――。
一号車のあちこちで何かが弾け、戦車兵達がのけぞって倒れた。
ビルのあちこちに潜んでいた日本軍兵士達が、その戦車兵達めがけて小銃の引き金を引いたことは、何故かすぐにわかった。
「くそっ！三号車、下がれっ！」
武は砲塔を操作して日本兵が潜んでいる位置を割り出そうとした。
だが、肝心の日本兵はすぐ間近いにいた。
日本兵達が、立ち往生した後続車めがけて駆け寄る。
まず、三号車の死角から近づくなり、キャタピラに爆発物を仕掛けた。
爆発でキャタピラが吹き飛ぶ。
「三号車っ！」
「やられたっ！キャタピラが両方だっ！」
「脱出出来るか！？」
「やってみるっ！」
「よし――――操舵っ！かまわんから前後両方にぶつかって道をあけろっ！」
「了解っ！」
ガンッ！
ギュイイイイッッ……
ガンッ！
急に動き出した二号車から辛くも逃れた日本兵の前で、二号車が後続と先頭の車両に滅茶苦茶にぶつかって道を開こうとする。
装甲が歪み、各部パーツが脱落してもお構いなしだ。
三号車に近づこうとした日本兵達でさえ、その勢いのすさまじさに近づくことを止めた。

ガンッ……ズズッ……ギュィィィィッッ……ズンッ！！
一号車が二号車に押される形で交差点からかなりの位置に動いた。
もう少しだ。
もう少しでっ！！
武少尉は握った拳に力を込めた。
もう少しで逃げられるっ！
だが……
ズンッ！！
突然、音が聞こえなくなった。
全身を見えないバットで殴られたような衝撃が走り抜け、意識がもうろうとする。
車内に真っ白な煙が充満し、息が苦しくなる。
――――被弾した。
武が考えたことはそれだ。
だが、どこへ？
訓練で叩き込まれた手順通り、武は乗組員の安否を確認しようとした。
声を限りに叫ぶが、耳に音が届かない。
喉が痛むほど叫んでいるのに、音が届かない。
武少尉は、いつの間にか、耳に当てていたレシーバーが外れていることに気づいた。
そして、恐る恐る耳に手を当てた。
音が聞こえなくなっている。
武少尉は、自分の鼓膜がやられたことを思い知らされた。

武少尉の戦車に何が起きたか？
理由は一つだ。
日本兵が、対戦車地雷をその腹下に放り込んだのだ。

戦車は動かない。

武少尉は指揮が出来ない。
操舵手と装填手は衝撃にやられたのか、ぐったりして動こうとさえしない。
その武少尉の真上で、ハッチが小さく開いたかと思うと、何かが車内に転がり込んできた。

「吹っ飛ぶぞ！」
兵士の怒鳴り声の数秒後、二号車の各部ハッチが、内部から吹き飛んだ。
爆風が、それまで中の乗組員だった肉片混じりの破片を車外に放り出す。
「よしっ！」
擱座（かくざ）した戦車がブロックを閉鎖する遮蔽物となったことを確認した吉岡少尉は、満足げに頷くと、兵士達に怒鳴った。
「これで市街地へ通じる全ての道を閉鎖できた！陣地構築急げっ！」
「少尉っ！」
通信兵が怒鳴った。
「メサイアが掃討に動きますっ！耐熱、対閃光防御を！」
「あの役立たずっ！美味しいところだけいただく腹か！？」
吉岡少尉は舌打ち一つ、部下に命じた。
「総員、遮蔽物に退避しろっ！黒こげにされるか閃光で目を潰されるぞ！」

広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を装備した染谷隊が戦場に駆け戻ったのは、それから数分後のことだった。

ズンッ！

いつの間に潜んでいたのか、砲塔側面に対戦車ロケットの直撃を受けた９０式戦車がついに沈黙した。

「くそっ！根性なしがっ！」

ハッチから戦車兵達が脱出するのを見守りながら、歩兵小隊を率いる飯島軍曹は舌打ちした。

敵の戦車は食い止めたが、こっちの戦車も次々と喰われては話にならない。

この戦車がやられたら、もう戦車はない。

対戦車装備はもうとっくの昔になくなっていた。

「中華帝国軍の歩兵携帯用対戦車装備が、こんなに破壊力があるとは聞いていないぞ！」

飯島軍曹は誰になくそう喚くと、部下達に命じた。

「そっちだ！」

飯島軍曹が指さしたのは、ロケットが飛んできた方角。

崩れ落ちた民家の塀。

中華帝国軍兵士が数名、そこに潜んでいるのがわかる。

「テメエ等、よくもっ！」

軽機関銃を持つ工藤二等兵が即座に民家めがけて弾幕を張る。

２、３人の中華帝国軍兵士がのけぞってその場に倒れた。

「村田と江藤、二人で調べてこいっ！弾と武器を奪えっ！」

「はいっ！」

中華帝国軍兵士達が潜んでいた民家の跡までは１００メートル程。

この距離まで敵に気づかなかったのは確かに自分達の失点だ。

――戦車兵達にゃ、悪いことしたな。

飯島軍曹は村田達を見守りながら、少しだけそう思った。

その戦車兵達は、機銃２丁を戦車から降ろして飯島軍曹に近づいた。

「第二戦車大隊の原田大尉だ」

「第三歩兵大隊、飯島軍曹」

「すまんが白兵戦は未経験だ。何の役にも立たないと思ってくれ」
原田大尉と名乗った４０過ぎの戦車兵は、飯島軍曹達の後ろに腰を下ろした。
背の低い、どことなく頼りない顔を煤で真っ黒にしていた。
その背後では、彼の部下だろう戦車兵達が青い顔で体を縮ませている。
「戦車から降ろした弾薬と機銃がある。必要なら」
「何。大尉」
飯島軍曹はニヤリと笑った。
「ここはね？実はついさっきまで、中華帝国軍の弾薬集積地だったんですよ」
飯島があごでしゃくった先には、木箱がいくつも積んであった。
開かれた木箱からは弾薬が転がり出ている。
「ここから各方面に弾薬を補給するつもりだったらしくて。おかげで助かってます」
原田大尉がよく見ると、飯島軍曹が使っているのは日本軍の三八式自動小銃ではなく、中華帝国軍の８１式７．６２ｍｍアサルトライフルだった。
「――ま、弾は潤沢ですけどね。そっちも貸してくださいよ」
飯島軍曹は這うようにして戦車兵達から機銃と弾薬を受け取った。
「白兵戦は歩兵の本領です」
飯島軍曹は笑いながら言った。
「白兵戦なら、戦車兵さん達の出番はもう終わりですよ」
「そうか」
原田大尉は小さく笑いかえした。
「なら、ここで高みの見物としゃれ込ませてくれ」

そう、笑っていられたのは数分に過ぎなかった。
ひっきりなしに銃声が響き渡り、弾薬の補給が追いつかない。

銃身が真っ赤に染まっても、引き金を引く指を止めることが出来ない。

「中華製にしちゃ、よく持つじゃねぇか！」

すでに日本軍としての弾薬は使い尽くした。

中華帝国軍の戦死者の側に転がっていた銃と弾薬をかき集め、戦線を維持しているに過ぎない。

ただ、前方に展開する敵の数はどう贔屓目に見ても、自分達の１０倍はくだらない。

必死に撃ち返すが、耳元といわず頭上と言わず、ビュンビュンと音を立てて飛んでくる弾丸が、文字通り雨の様にさえ感じられてしまう。

負傷兵が出ていないのが不思議なくらいだ。

「こういう時に戦車があればっ！」

その時、飯島軍曹は初めて、原田大尉達がいないことに気づいた。

――逃げたか？

本気でそう思った。

機銃と弾薬を置き土産にして、逃げた？

辺りを見回すが、大尉達の気配はどこにもない。

気になるのは、すぐ近くで放棄された八式対空戦車だけだ。

３０ミリガドリング砲を車体に搭載した化け物だが、先程の戦闘で、対戦車狙撃ライフルの集中砲火で車内を滅茶苦茶に破壊され、戦車兵達が挽肉になっていたのは、飯島軍曹自身が確認していた。

対戦車ライフルは、Ｍ８２。

日本軍から奪ったモノだったことは、狙撃手を撃ち殺した飯島軍曹達にはわかっている。

敵（かたき）は討ったモノの、肝心の戦車が動かない。

中は何しろ血と肉のゴミ捨て場さながらで、何がどう壊れているのか。どうすれば動くのか全く知識がない飯島軍曹達の手に負える代物ではない。

結局、「使えればなぁ」としきりに残念がったまま放置した代物だ。

――まさかな。

いくらなんでも、原田大尉達、あの対空戦車を？

ありえない。

――大尉が３０ミリガドリング砲の弾幕張ってくれれば、キスくらいしてやらぁ。

そう毒づくしかない。

あり得ないから、腹立たしさと不安が同時に飯島軍曹の腹の中を駆け回った。

チュインッ！

チュインッ！

飯島軍曹は、自分の周りで生じる跳弾の音に現実に引き戻された。

「通信、貸せっ！」

今、他の部隊を心配している余裕はどこにもない。

飯島軍曹は通信機をもぎ取るように掴むと、司令部を呼び出した。

「こちら第三小隊、敵の大規模攻撃を受けている！支援はどうした！？」

「砲撃支援は出来ない。駆逐戦車隊から2両、そっちへ移動中だ」

「砲撃支援を先にくれっ！」

「貴様等も巻き添えになるぞ？メサイアの掃討がすぐに開始される。それまで耐えろ」

「もう弾薬が――」

バンバンッ！

村田一等兵が飯島軍曹の腕を叩いたのはその時だ。

彼が「向こう向こう！」と言いながら、必死に指さす先にあるのは、あの放棄された対空戦車だ。

その対空戦車のエンジン部から白い煙が上がっていた。

炎上？

違う。

飯島軍曹は、対空戦車に何が起きているか、ようやくわかった。
エンジンが動いているのだ。
「だ、誰が動かしている！？」
驚く飯島軍曹達の前で、対空戦車がゆっくりと動き出す。
スウェーデン陸軍制式戦車Ｓｔｒｖ．１０３の上にＧＡＵ－８Ｉ
Ｊ、３０ミリガドリング砲を搭載した分類不能に近い兵器だ。
中華帝国軍も気づいたらしい。
歩兵達が対空戦車めがけて必死に弾幕を展開するが、小銃弾は装
甲にすべて弾かれてしまう。
ギュイイイイ――――ッッ！！
奇妙な音を立て、ガドリング砲が回転を開始する。
そして――――

Ｖｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！

バケモノの咆哮さながらの音を伴いながら、必殺の３０ミリ機関
砲をばらまいた。

中華帝国軍側は一瞬で目も当てられない程の惨状を呈した。
元来が、対中小型妖魔掃討用に開発された対空戦車だ。
妖魔を殺すための装備が生身の人間を相手に使われたのだから、
かすっただけで無事では済むはずがない。
それまで圧倒的優位に立っていたはずの中華帝国軍兵士達の銃声
は、一瞬で途絶えてしまった。

「……」
あまりの圧倒的戦果に、飯島軍曹は言葉を失って思わずその場に
へたり込んでしまった。
その飯島軍曹の側に近づいた対空戦車の戦車長席のハッチが開き、
顔を出したのは原田大尉だった。

「役に立ったか？軍曹」
「……」
飯島軍曹は、強ばった顔で何度も頷くと、立ち上がって敬礼した。

メサイア達がその上空を通過し、彼らの前に立ちはだかったのは、その時だった。

「……まいったね」
染谷は心底困ったという顔で呟いた。
「こりゃ……陸軍に相当な恨み駆ったろうなぁ」
自分達がもっと早く出ることが出来れば、戦場の被害はもっと少なくて済んだろう。
だが、そうならなかった理由は簡単だ。
中華帝国軍の航空機からのミサイル攻撃。
あれの一部が、広域火焔掃射装置換装準備中の部隊を襲ったのだ。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）そのものに被害は出なかったが、換装装置を動かす電源車がひっくり返され、各騎はメサイアの手動で装備の換装をやるハメになった。
ただでさえ動きを制約される大型装備のため、この被害はかなりの時間的ロスを産み出すことになった。

染谷達のせいではない。

だが、結局それはメサイア隊の遅れという意味で、陸軍の恨みを買うだろうことは、染谷には容易に想像がついた。
――――なるべくなら、作戦終了後の合同ミーティングに出たくない。

――若い士官っていうだけで、何言われるかわかんないもんなぁ。

染谷は本気でそう思いながら、“幻龍改（げんりゅうかい）”を駆る。

戦車が擱座（かくざ）し、歩兵達が頑張っている丁度前に着陸させた。

「ここでいいかい？」

「ベストポジションです」

MC（メサイアコントローラー）は答えた。

「ここから広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を発射しつつ前進。海岸に達すれば終わりです」

「――了解」

染谷は部下に命じた。

「小隊全騎へ。これより前進する。片鱗の躊躇もいらない。人道という言葉を忘れろ」

「了解」

「小隊、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）ノズル展開――構え」

長いノズルが展開され、各所に隠れているだろう中華帝国軍兵士達に向けられる。

「ノズル解放時間8秒に設定――撃てっ！」

メサイアが戦場に立って以降、最も怖れられた装備は何か？

答えが、この火焔放射装置だ。

実際、世界初のメサイア“スターリン”が投入された際、メサイアは剣を装備していなかった。

目玉装備は火炎放射装置。

陣地に強行侵入し、すべてを焼き払う。

敵だろうと民間人だろうと、家だろうと車だろうと、何もかも容赦なく――。

全てを焼き殺す巨人。

それが、殺されていく立場に立たされた者にとってのメサイア。

ロシア軍の繰り出すメサイアの存在を知らなかった米兵達が、メサイアのことを最初、「炎の巨人（ファイア・ジャイアント）」と呼んだのは、そういう理由があるのだ。

メサイアにとって、最も古く、そして最も基本的な兵装――――火炎放射装置。

そして今、染谷達が装備するのが、近衛が開発した広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）。

それは、世界各国のメサイアに装備される火炎放射装置の中でも最悪最強、……いや。最悪にして最狂の代物だ。

出力も破壊力も、すべてが従来の火炎放射装置とはワケもケタも違いすぎる。

八騎が一回発射しただけで、辺りは地獄の釜を開けたような炎に包まれた。

海岸から数キロ離れた場所だというのに、爆風に近い熱風が海岸まで達し、燃え残っていた木造家屋があちこちで炎上を開始した。

炎が届く範囲と、炎の温度は、他国が装備する火炎放射装置とは比較にならない。

まさに広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の名にふさわしい破壊力だ。

一瞬で生まれた炎の海の中で藻掻く兵士達が断末魔の踊りを繰り広げる。

染谷達はその悲劇をまき散らしつつ前進。

海岸に達するまで存在した全てを灰燼にしてのけた。

中華帝国軍に、それを止める術は何も残されていなかった。

「……っ」

朴は顔に走った痛みに意識を取り戻した。

ぼんやりする意識の下、重い瞼を開けると、誰かが自分の顔を覗

き込んでいた。
その軍服は、中華帝国軍でもない。ましてや大韓帝国軍でもない。
日本軍だった。
「……」
もう体が思うように動かない。
疲れ切っていた。
――殺されるかな。
それが何かおかしくて、朴は小さく笑ってみた。
すると、日本兵が驚いた顔をして、大声で何かを叫んだ。
「軍曹！こいつ生きてますっ！」
そう言ったのだが、朴はその言葉がわからない。
――日本語も、勉強しておけばよかったな。
朴の意識は再び遠のいた。

再び、朴が目覚めた所は、中華帝国軍と大韓帝国軍の兵士達――
――日本軍にとっては捕虜が集められているところだった。
「ああ――鼻の骨は無事だな」
軍医が朴の顔を診察しながら言った。
「鼻の中で内出血しているだけだ。すぐに治る」
――信じられない。
朴は目の前で起きていること。
そして、自分達捕虜が治療を受けていることに驚いていた。
「――あの」
朴は世界共通言語、帝国語で軍医に話しかけた。
「聞いて良いですか？」
「何だ？」
「どうして、我々捕虜に治療を？」
「ん？」
軍医は首を傾げた。
「私は医者で、君は患者だ。それでは不満か？」

「……あの」

あまりと言えばあまりに当然な返答に、すっかり面食らった朴は、思い切って友軍の死体どころか負傷兵まで穴に捨てていた中華帝国軍や、負傷兵を海に捨てた大韓帝国軍の振る舞いを語った。

「それに比べれば――――その」

「まぁ、いろいろあるのさ」

だまってその話を聞き終えた軍医は、治療の手を止めずに言った。

「その韓国軍の中にも、エライ手柄立てたのもいたそうだよ？」

「？」

「国際指名手配を受けていた中華帝国軍の将校達を我が軍に引き渡したんだ。連中に一服盛って、ボートで送り届けたらしい。」

「……」

あの劉中将達のことだ。

「世宗大王（セジョンデワン）」から離れ、北九州市沖合を警戒中のヘリによって発見されたゾディアック2隻は、急行した帝国沿岸警備隊によって拿捕された。

沿岸警備隊のパトロール艇に引き上げられたのは、中華帝国軍の軍服を着た女性達十数名と、将校達計２０名程、そして大韓帝国海軍の水兵４名。

沿岸警備隊の隊員達が目を見張ったのは、全員が手錠に猿ぐつわを締められ、ゾディアックの床に転がされた将校達だ。

水兵達は言った。

これは中華帝国軍の劉中将達だ。

「世宗大王（セジョンデワン）」艦長命令により、こいつらとこいつらの女奴隷を引き渡す。我々は投降する。国際法に基づいた処遇を要求する。

朴は、その話を移送されるトラックの荷台で聞いた。

両手を縛られてはいるが、何か気楽だった。

殺される心配が無くなっただけで、こうも気持ちが違うかと思う

だけで不思議な気分になってくる。

――これ以降は、国際条約に基づいた処遇がなされるだろう。
君達の安全は保証される。

トラックに乗せられる前、捕虜となった朴達を前に、日本軍の士官はそう言った。

日本軍に捕まったら殺されるぞ。
日本兵は捕虜の生き肝を食べるらしい。
わずかに生き残った大韓帝国軍兵士達は、口々にそう言った。

もうだめだ。
俺達は殺されるんだ。

絶望の淵にいた捕虜達は、その言葉に正直驚いた。

――君達の安全は保証される。

士官はもう一度、そう言った。

――君達が祖国へ戻れる日もそう遠くはあるまい。それまでの辛抱だ。
――我が国は現在、魔族との戦闘に追われている。それだけに、君達を羨ましく思いつつ、次の言葉を贈ろう。

――君達の戦争は終わった。

――おめでとう。

そう。
朴は頷いた。
自分の戦争はもう、終わったんだ。
焼け野原となった市街地も、血まみれの海岸も、もう見ることはないだろう。
もう、僕は武器を持たなくていいんだ。
きっとそれが、僕がこんなに気楽な理由なんだ。
ククッ。
朴は喉で笑い出し、隣に座っていた兵士からヘンな目で見られた。
戦争は終わった。
その言葉が、とても嬉しい。

朴達を乗せたトラックは、市街地を抜け、田舎道にさしかかった。
どこに行くかわからないが、戦争が終わった朴にとって、どうでもいい問題だった。
緑が目に眩しい。
故郷によく似た景色を見るだけで郷愁に誘われる。
――故郷に帰ったら、何をしようか。

朴がそんなことを考え出した時だ。

「おいっ！」
朴は、沿道で自分達を見守る日本人達の中から声をかけられた。
笑顔で手を振る若い男。
一瞬、それが誰かわからなかった。
ちょっと派手な服に身を包んだその顔。
どこで会った顔だ？

朴は立ち上がろうとして監視兵から止められた。
首だけ回して見るが、いつの間にかその男は消えていた。

「……あっ！」
朴が目を見開いたのは、それからしばらくのことだ。
あの、呉と名乗った男だった。

――知り合いが日本にいるんだ。この福岡さ。
――俺はこんな軍隊、おさらばして日本で暮らす。
――カネを貯めたらアメリカに行くんだ！

そう、言っていたあの呉だ。

脱走に成功したらしい。

――上手くやったな。

朴は心底そう思った。
上手く逃げて、念願のアメリカに行けるんだろうか。

さしあたって、朴は黙っていることにした。
自分が騒げば呉は逮捕されるかもしれない。
下手すれば射殺されるだろう。
ただ、朴はそこまでしたくなかった。
同国人として、戦友として、あの地獄を味わった者同士、生きて欲しいと思ったのだ。

――頑張れよ。

朴は、本当に素直な気持ちで、呉にエールを送った。

その朴が、呉を殺さなかったことを死ぬほど後悔したのは、それから数ヶ月語のこと。

自称、呉。
本名　文机明。

ある事件を引き起こし、後に祖国を滅亡へと導いたとして、歴史に名を刻む男であることを、この時点では誰も知らない。
その彼が今、祖国の軍隊から脱走し、日本の闇に溶け込もうとしていた。

沖縄防衛戦　第一話

ズンッ！
ズンズンズンッ！

一つの爆発が発生した。
そう思った次の瞬間、連続した爆発が島を揺るがせた。

「うわ……スゴ」
さつきの感心した声が通信機ごしに聞こえてくるが、本当にそう思う。
中華帝国軍が違法コピーしたＴｕ－９５大編隊による絨毯爆撃が沖縄本島を襲った。
市街地や港湾、飛行場は根こそぎ爆撃の対象とされ、島は穴だらけになった。
“鈴谷（すずや）”を発艦した美奈代達は、市街地から離れた丘陵地帯で爆撃の一部始終を見ているしかなかった。

――待機しろ。
――敵上陸まで、何があっても動くな。

それが、後藤からの厳命だった。

まるで街が内部から弾けていくような錯覚さえ覚える爆撃の光景を前にしても、美奈代達が何も出来なかったのは、そのせいだ。

理由はわかっている。

沖縄にメサイアが配備されていることを敵に察知されたくないの

だ。

だから、“白雷（はくらい）”達は、爆撃機から身を隠すよう、偽装網をかけた状態で待機している。

陸軍部隊がなけなしの対空砲や対空ミサイルを打ち上げるが、数が違いすぎる。

――――せめてＭＬ（マジックレーザー）を撃つことが出来れば。

美奈代はそれが悔しくてならない。

「大尉」

涼が言った。

「いつまで待機しているんですか？」

「後藤隊長からの命令が下るまでだ」

美奈代は苛立った声で言った。

「騎体が吹っ飛ばされても、命令があるまで動くな」

「でもっ！」

「悔しさを貯め込んでおけ――――ぶつかる敵をすべて殺すために」

「……了解」

「本当なら」

通信に割り込んだ芳が妙にのんびりした声で言った。

「みんなが旅行で来てくれたら、いろいろ案内してあげるんですけれどね」

「ん？平野は沖縄出身か？」

「石垣島です」

「……そうか」

「島のみんな、もう逃げ出しているでしょうし」

芳はポキポキと指を鳴らした。

のんびりとした口調だが、声色はかなり厳しい色を含んでいる。

「大尉。沖縄防衛の後は、すぐに石垣島奪還ですよね？」
「……ああ」
美奈代は頷いた。
「この沖縄本島でメサイアを潰し、宮古島、石垣島のルートで動くはずだ」
「はいっ！」

それから1時間。
美奈代達が見守る中、数十隻に上る中華帝国軍上陸船団が沖縄海域に展開。
その旗艦から信号弾が打ち上げられた。

沖縄上陸作戦開始の合図だ。

海を埋め尽くした上陸用の小型舟艇のディーゼルエンジンが一斉に煙を吐き出し、雄叫びの如き音を立てながら動き出す。
沖縄に一番乗りするはずの上陸用舟艇を一気に飛び越し、爆撃機と入れ替わりに本土から飛来したのは、“赤兎（せきと）”と“帝刃（ていば）”から成る中華帝国軍メサイア突撃大隊５０騎だ。
大隊を率いるのは魯大佐。
彼が率いる部隊は、陸軍部隊が上陸する海岸線を防御するポジションに着陸した。
幸い、着陸は各ＭＣ（メサイアコントローラー）が管理しているので、事故はない。
とはいえ、“帝刃（ていば）”の騎士達の実情を知る身としては、正直、生きた心地がしない。
“赤兎（せきと）”で編成された直近の部隊はいい。
問題は“帝刃（ていば）”で編成された部隊だ。
「……ったく」
部下との通信を終えた魯大佐は、コクピットの中で、今日だけで何度目か忘れたが、とにかく舌打ちした。

「大佐」
通信機にはまた別な騎士からの通信が入る。
「あの……搭乗日誌の書き方なんですけど」
――勘弁してくれ。
――上陸作戦の真っ最中だぜ？
魯大佐はうんざりしながら、それでも表面上は冷静に答えた。
「何だ？」
通信の相手は、“帝刃（ていば）”の騎士。
メサイア操縦士養成校の訓練課程を途中で切り上げさせられた気の毒な連中だ。
ここまで墜落させずについてきただけで褒めてやるべき、そんな連中なのだ。
魯大佐は、慰めにもならない言葉を自分になげかけた。
今回が初陣の彼らにとって、やることなすこと全てがわからないことだらけだと、魯大佐自身がわかるからだ。
何より、魯大佐自身が、出撃前の訓辞で「不明な点はその都度訊ねて良い」と言ったのだ。
男に二言はない。
――それもこれも
魯大佐は質問に答えながら、内心で恨めしく思うことがあった。
突然、祖国を襲った熟練騎士の不足問題。

「売るほどいる」とされた祖国の騎士だったが、軍が東南アジア戦線に大量の騎士部隊を投入し、ほとんどを失ったおかげで、あちこちで騎士が不足する事態に陥った。

騎士を均一の製品としか見ない文官共の書いた命令文一枚で、穴埋めにメサイアの操縦しか出来ないような者達まで、騎士となれば根こそぎ動員する命令が下ったのが1ヶ月前。

――あの滅茶苦茶な動員命令のおかげで、こっちはこの有様だ。

おかげで、中華帝国軍メサイア部隊から熟練騎士が次々と別部隊に異動を余儀なくされ、メサイアに乗せれば百戦錬磨の精鋭達が、慣れない剣を握らされ、満足な戦果をあげることもなく、無念の死を余儀なくされているこの現実は、一人の騎士として憤りを感じずにはいられない。

祖国には肝心のメサイアはあっても、操縦する騎士が不足するありさまで、やむを得ずメサイア操縦士養成校の訓練課程を1年近くも短縮。メサイアがようやく動かせる状態で訓練校の生徒達を前線に引き出した。

魯大佐の部隊の大半は、そういう連中で成り立っていた。

すべては、騎士を管理する部署にとって都合の良い、帳簿上の員数合わせに過ぎない。

それで苦労するのは、魯達、前線部隊指揮官だ。

訓練校で教えてくれればいいことを一々、魯達は生徒達に教えなければならない。

はっきり、心身共に負担だった。

――李の奴は一体どうしているんだろう。

魯大佐はふと、そんなことを思った。

李大佐は日本本土攻略部隊のメサイア部隊に送られた、養成校では魯大佐の同期だ。
共に生徒達とは親子ほど歳が離れている。
最後に別れた時、「若い連中の考えが分からん」と散々愚痴っていたが、大丈夫なんだろうか？
――考えていても仕方ない。

魯は自分にそう言い聞かせた。
そして、部下に命じた。

「全騎、警戒を怠るな。不明な点は、すべてＭＣ（メサイアコントローラー）に聞け」
そう。
騎士はともかく、騎士をサポートするＭＣ（メサイアコントローラー）までは動員されていなかった。
それだけは幸いだ。
ＭＣ（メサイアコントローラー）まで動員されていたら、ほとんどのメサイアが本土から発進することさえ――否。エンジンを始動することさえままならなかったろう。

生徒達は、実騎搭乗時間が１２時間あれば多い方なのだ。

「貴様等に言っておく」
本音として、本土からここまで洋上をメサイアで飛行してきただけで褒めて欲しい気分の新米達は、疲れ切った顔をひきつらせながら、ベテラン騎士である魯大佐からの指示に耳を傾ける。
「これ以降は、３つのことのみに神経を傾けろ。一つ、俺達指揮官の命令を聞き逃さないこと。二つ、ＭＣ（メサイアコントローラー）の指示を聞き逃さないことだ。
覚えておけ。

たった今から、貴様等殻付きのヒヨコの母親はMC（メサイアコントローラー）、そして父親は俺達指揮官だ。
親には絶対服従しろ。
一言の反論も許さん。
貴様等の母親達は世界でも高水準の戦闘経験を持つベテラン達だ。
熟練騎士達と共に幾多の戦場を駆け抜けた世界に冠たる、誇るべき母親達だ。
その母親が進めと言ったら進め。引けと言ったら引け。
命令に逆らったり、服従しない場合は、国家に対する反逆罪を適用する。
命令を一言も聞き逃すな――以上だ」
「あ……あの」
騎士の一人が恐る恐る訊ねてきた。
「３５６号騎の武准尉です。大佐殿に質問が」
「どうした」
「その……自分達が神経を傾けるべき三つ目とは？」
「わからんか？」
「は……はい」
「――生き残れ」
魯大佐は言った。
「格好悪くてもいい。無様と笑われてもいい。メサイアと共に生きて祖国に生還せよ。それが三つ目だ」

「……まずいなぁ」
“白雷（はくらい）”から降りて宗像と共に偵察に出た美奈代は、双眼鏡から顔を離した。
海岸を一望出来る丘の上。
すでに砲撃や爆撃でそれまでの美しい緑はどこにもない。
白い硝煙と鼻を刺激する臭いが充満する息苦しい世界に変貌して

いた。
　美奈代達は、砲撃で開いたらしい丘の上の窪地から這いだし、海岸を覗き込んでいた。
「歩兵部隊に戦車――WZ－121、俗に69式と呼ばれるタイプが24両。歩兵隊もかなりの装備だな」
　双眼鏡からようやく顔を離した宗像は、再び双眼鏡を構えようとした美奈代の頭を後ろから力一杯押した。
「頭が高い。相手はメサイアだということを忘れるな」
「す……済まない」
　美奈代は頭を高くしているつもりはないが、端から見ればそう見えるんだろう。
　美奈代達は窪地に戻った。
「宗像、上陸部隊ってのは、この程度の代物か？」
「ん？」
「何か……多いのか少ないのかわからない」
「問題は」
　宗像は図嚢（ずのう）に地図をしまいこんだ。
「上陸部隊の後ろにいる連中だ」
「“ガルガンチュア”」
「ああ」
　宗像は頷いた。
「東南アジア戦線では大した脅威とは思わなかったが、砲撃部隊として相手をするとなれば話は別だ」
　コードネーム“ガルガンチュア”。
　それは、中華帝国軍が開発した、脊椎を破損して歩行に支障を来したメサイアの上半身を大型TAC（タクティカル・エア・カーゴ）に搭載した兵器のことだ。
　白兵戦は無理だが、メサイアのエンジンと搭載武器の多様性を活かした“空飛ぶ機動砲台”としての性能は、決して侮れない。
「全く、何の支援もなしにのうのうとやって来たと思えば、とんでもない厄介者がいたわけだ」

「とりあえず、海岸に向けて強襲だな」
「そうなるな」
宗像は頷いた。
「連中を海岸に貼り付けさせれば、こっちは上陸部隊を巻き添えに出来るし、向こうはそれを恐れて砲撃が出来なくなる。“赤兎（せきと）”達を仕留めれば、あとは砲撃戦でガルガンチュア達を――」
宗像はそこまで言うと、突然動いた。

美奈代は何が起きたかわからなかった。
「！！」
「！？」
突然、脱兎の如く宗像が窪地から飛び出した途端、甲高い声とくぐもった悲鳴が聞こえた。
美奈代には何を言ったのかさえわからない。
ただ――

ドサッ

窪地の目の前に、突然転がってきた物体が何かだけはわかった。

首が変な方向に曲がった兵隊の死体。

さすがにそれはわかった。

「む、宗像？」
突然のことに反応出来なかった美奈代は、助けを求めるように辺りを見回した。

いた。
いつの間にか宗像は窪地の中に戻っていた。
違う。
誰かを引っ張り込んでいた。
引きつった顔をする軍服姿の男。
彼の上に馬乗りになった宗像は、左手でコンバットナイフをその喉元に突きつけ、右手で彼の口元にある通信機のマイクを握っていた。
美奈代が驚いたのは、もう一つだ。
宗像と彼は、美奈代が分からない言葉できちんと会話していた。
……会話というより、宗像が脅し、それに彼が従っている。
美奈代にはそう見えた。

――――まずいな。

美奈代はそこまで見て、やっと自分が何をすべきかわかった。
彼は中華帝国軍の兵士。
おそらく、斥候兵だろう。
もし、美奈代が歩兵だったら、捕虜として後送も選択肢のうちに入る。
だが、現実の美奈代はメサイア乗りで、しかもこの場には斥候で来ている。
捕虜をとるという選択肢そのものがないのだ。

（た、助けてくれ）
（よし。まず、通信機に答えろ。異常なしだ）
（……第二班、丘に到達。現在異常なし）
（よし。いい子だ）
（じ、ジュネーブ条約がある。俺は投降する。だから！）

――どうする？

会話の内容が全く分からないまま、美奈代は顔をしかめながら、宗像と兵士のやりとりを見守るしかなかった。

宗像の冷たい笑みが兵士の不安をあおるのか、兵士は泣きながら何か懇願している。

対する宗像は、その兵士から目を離すことなく、一言何かを言ったのだけはわかった。

（悪く思うな？）

その途端――

宗像の持つコンバットナイフの刃が兵士の胸の中に消えていった。

兵士は、何かを訴えようとするように目と口を大きく開くが、そのまま動かなくなった。

「――すぐに戻るぞ」

兵士の軍服でコンバットナイフをぬぐった宗像は、まるで何事もなかったように美奈代に言った。

「１０分程度だ。斥候がやられたことを知れば、敵はこっちに来る」

「あ……ああ」

「しくじった」

宗像は舌打ちした。

「メサイアに気を取られて、斥候兵が出ていることを忘れているとは！」

「あ……ああ」

「？」

宗像は、「ああ」としか言わない美奈代を見た。

美奈代はその場にへたり込んでいた。

戦場で、あれほどの戦果をあげる近衛メサイア乗りのトップエース。

泉美奈代。

メサイアを駆れば、１０倍の敵でさえ葬り去る彼女が、兵士の死体を前に動けなくなっている。

その理由が宗像にはわかる。

美奈代は生まれて初めて、人が殺される瞬間に立ち会ったのだ。

決して気分のいいものではない。

むしろ、一生立ち会いたい光景じゃない。

それは宗像にもわかる。

自分だって、初めて人を殺した時は無様すぎるほど泣いて震えて吐きまくった。

それはわかるんだ。

だが――

そんな美奈代に同乗している余裕は宗像にはなかった。

「泉」

ぐいっ。

宗像は美奈代の胸ぐらを掴むと、右手を一閃した。

パンッ！

「――正気に戻ったか？」

「……うっ」

頬にあざを作るほど叩かれた美奈代は、何度も頷いた。

「しっかりしろ」
そんな美奈代に宗像は諭すような口調で言った。
「いずれ慣れる。指揮官がそれでは部下がたまらんぞ」
「わ……わかった」
くすっ。
美奈代のマジメな答えに宗像は小さく笑った。
「な……何がおかしい」
「お前らしい。そう思ったんだ」
「悪いか？」
「悪くないが……」
宗像は突然、思いついたという顔で言った。
「もう一つ、気合いを入れてやろう」
「へ？」
驚く美奈代に宗像の顔が近づいてきた。
「……っ？」
その瞬間――
美奈代は、自分が何をされたかわからなかった。
ただ、瞳を閉じた宗像の顔が恐ろしく近い。
そして、唇を何かにふさがれた。
その程度しかわからなかった。

理解した時には遅すぎた。

「……」
「うむ……美味だ」
「……」
「？どうした？そんなに凍り付いて」
「……」
「そうか。そんなに私にキスされたのが嬉しかったか？」
「……」

「ではもう一度」
「もういいっ！」
「何だ、恥ずかしがり屋さんだな」
「そうじゃないっ！」
美奈代は半泣きになって後ずさった。
「わ、私のファーストキスだぞ！？」
「何だ」
宗像は少しだけ驚いた、という顔で言った。
「染谷も都築も、どっちも手を出していなかったか」
「わ、悪かったな！」
「――まぁいい」
「よくないっ！」
「泉――もう一度言う。斥候兵が殺された以上、敵はこちら方面へ来る。時間がないぞ」
「――っ！」
「急いで戻ろう。海岸に強襲をかけるチャンスはもう残り少ない」
「――っ！」
ひっぱたかれ、キスまでされた悔しさから逃れるように、美奈代は走り出した。

偽装網をくぐり、美奈代は“白雷（はくらい）”のコクピットにもぐこんだ。
「全騎、出るぞ！偽装網外せっ！ビームライフル装備――敵メサイア部隊を叩く！」
「了解」
「あれ？」
美奈代を見た“さくら”が首を傾げた。
「マスター？何食べてきたの？」
「ん？」
「口紅ついてるよ？」

“白雷（はくらい）”が動き出したまさに同じタイミングで、魯大佐は部下に命じていた。
「各隊は俺に続けっ！」
部隊指揮官騎である“赤兎（せきと）”達のエンジンが一斉に吠えた。
「日本軍のメサイアはそう多くないはずだが、部隊指揮を命じられた者は、生徒達がバカやらないように十分注意しろ！生徒達は――いいか？俺の命じた三訓に逆らうな！」
「はいっ！」
「よし――返事だけは一人前だ！」
李大佐は通信機に怒鳴った。
「部隊――前進っ！」

「敵部隊、前進開始っ！」
「くそっ！遅かったか！？」
「大尉っ！」
「小清水、平野は丘陵地帯からの狙撃につけ。すまんがこの状況では中衛はつけられん。ヤバくなったら――」
「私達だけ逃げるんですね！？」
「小清水っ！」
「すみませんっ！つい本音がっ！」
「この――宗像ぁっ！」
「ん？」
「生きて帰れたら、ベッドでいろいろと教えてやれ。部隊長として許可してやる」
「いいのか？」

通信用モニターに映る宗像の目が、獲物を前にした猛獣のように光り輝いた。
舌なめずりさえ聞こえた気がして、涼は全身が総毛立った。
「いい」
「大尉っ！」
大声で割り込んできたのは芳だった。
その声はかなり切迫している。
「そ、それは――涼の“初めて”は私がぁっ！」
「……好きにしろ……ったく！」
美奈代はさっき自分がされたことを思い出して頭を抱えた。
「な、何っ!?平野ってレズだったの!?」
さつきが驚いた声をあげた。
「はいっ！」
対する芳は開き直った声だ。
「うわっ、この子、カミングアウトしてるし！」
「ですから大尉っ！涼の初めては私にっ！」
「……ぅぅぅっ」
「大尉」
さくらに頭を撫でられながら呻く美奈代に、牧野中尉が言った。
「現状――わかってます？」
「……部隊全騎っ！」
すべてを振り切るように、美奈代は怒鳴った。
「全武装安全装置解除（オール・ウェポンズ・フリー）っ！ビームライフル構えろっ！これより敵へ斬り込むっ！」
「了解っ！」
大推力を誇る“白雷（はくらい）”のブースターが一斉に火を噴いた。
大きく丘を飛び越える機動をとった美奈代達。

目の前の丘が一瞬で消え去り、海岸付近に展開する敵がスクリーン一杯に映し出される。
突然、目の前にメサイア飛び出してきたのだ。
中華帝国軍からの反撃はなかった。

奇襲は――成功だ。

「――撃てっ！」
美奈代の号令と同時に、速射モードに設定されたビームライフルが一斉に火を噴いた。
牧野中尉等、MCと“白雷（メサイアコントロールはくらい）”の火器管制装置は、毎分数十発の速射モードで放たれるML（マジックレーザー）を最も効率よく敵にぶつけていく。
泉、宗像、さつき、美晴、そして山崎と都築。
六騎により放たれたML（マジックレーザー）は一発も外れることなく、中華帝国軍のメサイア達にダメージを与えた。

「なっ！何っ！？」
シールドを穴だらけにされ、左肩部にダメージを喰らった魯大佐は、突然のことに驚いた顔で怒鳴った。
「か、各騎っ！散れっ！」
そう。密集陣形で移動する今、巨大なメサイアは敵からはいい的に成っているはずだ。
敵が潜んでいることに気づかなかったのは確かに自分達の失態だが――。
「いっ、一体、どうして気づかなかった！？」
魯大佐は、むしろそちらがわからない。
丘という地形条件があったとはいえ、これほどのメサイアが展開する中、丘の向こうに潜んでいるメサイアがわからないなんて、そんな馬鹿な！

「さすがに、私達のＥＣＭは見抜けなかったようですね」
ブースター操作を美奈代と“さくら”に任せた牧野中尉は、着地前に最後の的として、手近にいた“赤兎（せきと）”と“帝刃（ていば）”を選んだ。
残弾はもう残り少ないが、この２騎を倒すには十分だ。
“赤兎（せきと）”のホバー部熱量が増大した。
“帝刃（ていば）”は未だに動いていない。
目標（ターゲット）をロックした牧野中尉は呟いた。
「――遅いです」
美奈代騎から放たれたビームライフルの一撃が“赤兎（せきと）”の左膝関節を撃ち抜き、もう一撃が“帝刃（ていば）”の頭部を吹き飛ばした。
「各騎、武装変更っ！」
美奈代から命令が飛ぶ。
残弾はあと１０発。フルチャージした場合の丁度１割だ。
――この子は、本当にいいタイミングで命令を出す。
牧野はそれが嬉しくさえあった。
ほころぶ顔をそのままに、美奈代に尋ねた。
「斬艦刀でいいですね？」

「はい――海上及び歩兵からの攻撃に注意しろっ！ナメてかかると痛い目にあうぞっ！」

「泉っ！」
横に出た都築騎から通信が入る。
「――かかるぞっ！」
「ああっ――全騎っ！都築騎が楯になるっ！続けっ！」
「おいっ！」

「くっ……くそっ！」
奇襲を喰らった部隊は酷い有様だった。

すでに半分が行動不能に陥り、生徒達はあからさまなパニックに陥っていた。
ＭＣ（メサイアコントローラー）や教官達が怒鳴りまくり、パニックを沈静化させようと躍起になっている。

もう、“無理もない”などと知った顔をする余裕さえ、魯大佐達にはなかった。
目の前に立ちはだかるメサイア達はわずか８騎。
ズンッ！
ズズンッ！
突然、後方からの爆発音が鼓膜を打った。
「何だ！？」
「ガルガンチュア部隊、被害甚大っ！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）が怒鳴った。
「敵、丘からガルガンチュア部隊を狙撃っ！使用したのは大規模（マジック）砲型（レーザー）ＭＬと推定――――砲幅４００ミリ以上っ！」
「４００！？――――ちいっ！」
文字通りの戦艦の主砲並みだ。

「ば、バケモノがぁっ！」

沖縄防衛戦　第二話

「“帝刃（ていば）”隊はコントロールをＭＣ（メサイアコントローラー）に委譲、各ＭＣ（メサイアコントローラー）は騎体を散開させろ！」

魯大佐は怒鳴った。

「“赤兎（せきと）”隊は突撃するっ！敵騎を“帝刃（ていば）”達に近づけるな！」

「了解っ！」

“帝刃（ていば）”達が一斉に散開し、“赤兎（せきと）”達は密集突撃陣形を形成する。

ＭＣ（メサイアコントローラー）が告げた。

「ガルガンチュア隊、反撃を開始しますっ！」

「“帝刃（ていば）”３５騎に“赤兎（せきと）”１５騎」

美奈代の目の前。

戦術モニター上で、敵がほぼ二手に分かれた。

“帝刃（ていば）”は残らず散開。“赤兎（せきと）”は突撃のために陣形を組む。

「“赤兎（せきと）”の突撃を“帝刃（ていば）”が支援するというところですね」

中華帝国軍の実情を知らない美奈代は、“帝刃（ていば）”の散開をそう判断した。

そして――

「前衛全騎へっ！」

美奈代は号令した。

「斬り込めっ！」

「了解っ！」

「敵、突撃っ！」

ＭＣ（メサイアコントローラー）の報告に魯大佐は舌打ちした。

何の躊躇もなく圧倒的な数を誇る我々に向け、少数で斬り込んで

きた。
敵ながら見事なまでの思い切りの良さだ。
こちらが密集突撃をかけて、吹き飛ばす前に斬り込んできた。
直感と決断力が少しでも欠けていれば早々出来ない決断だ。
「敵ながら見事だ！」
魯大佐は何故か不思議な嬉しささえ感じながら部下に命じた。
「迎え撃てっ！」

魯大佐の目の前。
白いメサイアが振り下ろした長剣が、“赤兎（せきと）”が真っ二つに切断したのは、その時だった。

――――日本軍は、新型の刀剣を採用した。
――――かなりの破壊力を持つらしい。

魯大佐はそれを噂で聞いてはいた。
あくまで噂だ。
まさか、目の前の敵が“それ”を持っているとは考えなかっただけだ。

「ば、馬鹿なっ！」
騎士達が驚愕の声を残して消えて逝く。
日本軍のメサイアが装備するのは長大な剣。
その剣を受け止めようと、“赤兎（せきと）”が構えた斧。
剣は、斧を易々と“赤兎（せきと）”ごと叩き斬ってしまう。

一瞬にして４騎が仕留められた。

「よしっ！」
第一突撃で４騎を仕留めた。

残り１１騎。
約２倍まで数を減らせた。
美奈代が何としても早く敵騎の数を減らしたいと願う――いや、焦るのは、後方で砲撃を続ける２騎の存在だ。
小清水騎と平野騎は近接戦闘装備がない。
敵に攻め込まれたら終わりなのだ。
「――そこっ！」
美奈代は、３騎が立ちはだかるまっただ中へと騎体を飛び込ませた。
シールドで１騎を突き飛ばし、斬艦刀の切っ先を１騎の喉元に突き刺す。
生き残った１騎が襲いかかろうとするのを、シールドのエッジを叩き付ける“エッジアタック”で仕留める。
この間、わずか３秒。
「……お見事」
牧野中尉は戦果に舌を巻くしかない。
「宗像っ！」
「問題ない」
宗像騎の斬艦刀が“赤兎（せきと）”の両脚を薙ぎ払い、そのまま振り下ろされた。
頭部から胸部に至るまで、装甲を真っ二つに割られた“赤兎（せきと）”が動きを止めた。
その横では、美晴騎の薙刀と早瀬騎の槍、山崎騎の斧が、それぞ

れに獲物を仕留めていた。
「都築は？」
「くそっ！」
ガンッ！
都築が渡り合ったのが魯大佐だったのは、都築としては不運だったろう。
中華帝国軍有数のメサイア使いであるベテランの魯大佐。
その腕前の違いは、騎体の性能差を容易に越えた。
打ち込みがかわされ、そのたびに反撃でダメージを受ける。
ダメージは常に軽微だが、それでも焦燥感が重くのしかかってくる。
都築にも、それが敵の策略だとわかりはする。
わかった上で――
「くそがぁっ！」
都築は熱くなった。
「ふんっ！」
魯大佐は繰り出される長剣の一撃を余裕で見切った。
まだまだ荒削りだが、筋がいい。
魯大佐は、自分が敵を品定めしていることに気づき、思わず苦笑した。
相手は生徒ではない。
敵なのだ。
「どうも」

逆袈裟切りの一撃をかわしながら魯大佐は呟いた。
「生徒が多すぎるせいだな」
そう。
後ろには生徒達がいる。
大隊長として、ベテランとして、そろそろいい所を見せておかねばなるまい。

魯大佐は反撃に転じた。

ガッ！

一瞬で間合いを詰めた魯大佐騎が、都築騎の腕を掴んだ。
「長剣を使う時は」
“赤兎（せきと）”の拳に装備されたナックルガードが都築騎の頭部に叩き付けられた。
「間合いにもっと神経を使えっ！」
滅茶苦茶に殴られた都築騎の頭部装甲はかなりのダメージを受けた。
都築騎から、逃れようとする力が弱まったのを感じた魯大佐は戦斧を振り上げた。
「その重装甲をつけた設計者に――――感謝するんだな！」
ガンッ！
都築騎の胸部装甲に戦斧がめり込んだ。
コクピットブロックを直撃だ。
重装甲でも騎士が無事ではいまい。

魯大佐の目の前で都築騎が倒れた。

「た、大佐殿がやったぞ！」

「やったぁ！」
“帝刃（ていば）”のコクピットで騎士達が歓声をあげた。
半分にも満たない数しかない日本軍相手に、半ば一方的に潰されていく“赤兎（せきと）”隊。
その光景を前に、真っ青になって震えながら戦況を見守っていた騎士達が初めて見た敵を倒した友軍の姿。
それは、歴史上のあらゆる武人達をも凌ぐ存在として、騎士達の目に映った。

一方。
「都築騎大破っ！」
その報に美奈代達は青くなった。
都築は技量はそれほど低くない。
むしろかなり高い。
それは美奈代も認めている。
その都築騎がたった一騎に潰された。
「都築達は！？」
「バイタルシグナル受信――生きてますっ！」
ホウッ。
美奈代は自分でも驚いたほどのため息をついて、思わず口元を押さえた。
「あのバカ」
美奈代は恥ずかしさから逃れようと、悪態をついた。
「貴重な騎体を」
「大尉」
「私が後で坂城さんや艦長にどれほど怒られると」
「大尉ってば！」
「あーっ。もう胃が痛い……」
「大尉っ！」

「マスターっ！」
牧野中尉とさくらが同時に怒鳴った。
「敵接近中っ！」（×2）
「――へっ？」

スクリーン上で、魯大佐騎が大きく迫りつつあった。

都築騎を仕留めた魯大佐騎が、手近にいた美奈代騎に襲いかかってきた。
ただそれだけなのだが――

「うそっ！」

ブンッ！

振り下ろされた戦斧をかろうじてかわし、間合いを開く。
敵騎は間合いが開くのを極端に嫌っているらしく、間合いをすぐにつめてしまう。

「これでは斬艦刀が！」

美奈代は自分の口から出た言葉で、敵の意図が理解出来た。
間合いが近すぎれば、斬艦刀のような長剣は威力を振るうことが出来ない。
敵は、それがわかっているのだ。

「――くそっ！」
美奈代は敵の戦斧の攻撃をシールドでそらしながら反撃のチャンスをうかがった。

「“帝刃（ていば）”に動き有り！」
「宗像っ！」
美奈代は怒鳴った。
「残りを狩れっ！こいつは私が！」

「ほう？」
敵がシールドを構えながら、長剣を背部にマウントしたことに、鲁大佐は正直に感心した。
「こちらの意図がわかるのか？」
しかも、友軍騎に助けを求めない。
むしろ、自分をたった一人で相手にすることで、友軍の攻撃を継続させようとしている。
「――成る程？」
鲁大佐は頷いた。
「――お前が指揮官か」

ズンズンズンズン――ッ！！

連続した爆発が丘を襲ったのは、その時だ。
ガルガンチュア部隊が、丘から狙撃する平野と小清水の2騎を一斉に攻撃し出したのだ。
一瞬で丘が炎に覆い尽くされるほどの砲撃。
それは、“空飛ぶ機動砲台”ガルガンチュアの真骨頂たる光景だった。

「まずっ！」
丘から吹き飛ばされた土砂が雨のように降り注いでくる中、さつきは青くなった。

「あ、あの二人、大丈夫なの！？」
「その前にっ！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）、春日中尉が怒鳴った。
「目の前の敵を！」

ギィンッ！

――上手いっ！

美奈代は受けた攻撃に、正直に舌を巻いた。

何が上手い？

戦斧の使い方だ。

一瞬で柄の持つ位置を変えることで攻撃がどこに来るかを惑わせる。
柄を持つ位置が数メートルも違えば、攻撃を読み切ることはかなり困難になる。
おかげで美奈代騎のシールドは傷だらけだ。

「――くそっ！」
美奈代は言った。
「こういう人材こそ！！」

惜しい。

本当にそう思う。

もし、これほどの騎士が人類同士の殺し合いで失われたなら、

もし、それが本当なら、

人類はなんて愚かなんだろう。

「本当に戦うべきは、人間同士じゃないのにっ！」

だけど――――これが現実だ。

相手は人間。

私も人間。

どちらも魔族では――――ない。

「くそぉっ！」

美奈代は振り下ろされた戦斧に合わせるように、シールドを突き出した。

ガンッ！

シールドに戦斧が深くめり込む。

今までにない手応えを、美奈代は確かに感じた。

ＳＴＲシステムが“白雷（はくらい）”の腕に響く激しい衝撃を、擬似感覚として伝えてくる。

骨が折れたかと錯覚するその衝撃に耐えながら、美奈代は怒鳴った。

「さくらっ！シールドパージっ！」

バンッ！

「しまった！」

敵のシールドにめり込んだ戦斧を引き抜こうとしたが、敵はシールドそのものを放棄。

体勢を低くとった。

戦斧を振り上げようとする腕に、シールドの重量が加わり、魯大佐騎は動きを止めた。

しかも、シールドが邪魔で敵の動きが読めない。

魯大佐は、何の躊躇もなく戦斧を放棄。

背中にマウントしていた予備戦斧を掴むべく右手を動かした。

シールドを突き破って、魯大佐騎を敵の攻撃が襲ったのは、その時だった。

シールドが邪魔で目視は出来ないが、コントロールユニット越しに、敵騎に長剣が突き刺さっている感触が伝わる。

命中は確実だ。

牧野中尉はもう感心することさえ忘れて、呆然とするしかなかった。

一体、どういう機転が働けばここまで出来るんだろう。

本当に、それがわからない。

敵にわざとシールドに武器をめり込ませ、引き抜こうとする動きをとらせる。

その動きに合わせるようにシールドを放棄。

シールドの重量が武器にかかることで動きを鈍らせる間に斬艦刀を装備。
シールドの影から、シールドごと敵を突き殺す。
並の発想ではない。
戦場の追いつめられた中で、泉大尉はこれをやってのけたのだ。
本当に、並のことではない。

ズズンッ！

魯大佐騎が大地に倒れる。

「やったか！？」
「――――ああ」
宗像の歓声に近い声に、美奈代は頷いた。
「都築のカタキは討ってやった」
「部隊葬は立派にやってやろうな」
「……そうだな」
「テメエ等っ！」
通信に割り込んできたのは都築だ。
「人を勝手に殺すな！」
「何だ、生きていたのか？」
「悪かったな！」
都築は言った。
「コクピットブロックのフレームカウル一枚で助かった！」
「坂城整備班長に何て言われるか、覚悟は出来てるんだな？」
「――――今、戦死したくなった」
「後で回収してやる。それまで無様にひっくりかえっていろ」
宗像は言った。
「奥手の君にはお似合いだ」
「くそっ！どういう意味だ！？」

「泉の唇はいただいたぞ」
「――――は？」

「ぜ、全騎っ！」
明らかに狼狽した声の美奈代が怒鳴った。
「“赤兎（せきと）”の掃除は終わった！“帝刃（ていば）”狩りに移行――――」
「大尉っ！」
牧野中尉が言った。
「“帝刃（ていば）”、後退しますっ！」
「何っ！？」
驚いた美奈代の目の前。
海岸周辺に散開していた“帝刃（ていば）”達が、次々と離陸。海岸を離れようとしていた。

沖縄に侵攻したガルガンチュアは、正式には、中華帝国軍正式名称“撃滅４型”の改良型というか、東南アジア戦線各地で産み出された破損騎を流用した、“撃滅４型”の簡易版だ。
戦時急造型“撃滅４型Ｍ２”がその呼称だ。

“撃滅４型”の主砲が３００ミリなのに対し、こちらは海軍の１３０ミリ速射砲４門を両肩に搭載し、砲単体の破壊力の低下を砲撃スピードの向上で補っている。
副砲や近接防御用火器も豊富に搭載しており、ＭＣ（メサイアコントローラー）が管理する火器管制システムに支えられた打撃力は、（純粋に打撃力だけなら）他国のメサイアの比ではない。

このタイプが現在の沖縄に５０騎近く配備され、その全てが丘の

上で上陸阻止砲撃を試みる2騎の“白雷（はくらい）”に火力を叩き込んでいた。

一方、叩き込まれた方はたまったものではなかった。

一発撃てば百発撃ち返すとはよく使われる言葉だが、ガルガンチュアの反撃は、まさにそれを地でいく。

丘は１３０ミリ砲弾の雨を受け、穴だらけにされた。

“白雷（はくらい）”とハイメガカノンの最強タッグとはいえ、砲を叩き込まれている間は、顔をあげることさえ出来ない。

丘に張り付いて命中弾が出ないようにお祈りするのが精一杯だ。

涼の目の前で砲撃の度に丘が面白いように削れていく。

「い、一体、どれだけ弾持ってるのよ！」

機動性を完全に無視したガルガンチュアの背後はそれ自体が弾薬庫だということを、涼は知らない。

「た、大尉達は！？」

「“赤兎（せきと）”隊は全滅、“帝刃（ていば）”隊が後退」

ＭＣ（メサイアコントローラー）の高良中尉がそう答えた。

「て、撤退ですか！？」

「違います」

ＭＣ（メサイアコントローラー）は答えた。

「海岸全域を砲撃対象にするためです」

「か、海岸は中華帝国軍の上陸部隊が！」

「敵の第一波上陸は成功。つまり」

高良中尉が言葉を詰まらせた。

「我々の上陸阻止が失敗したんです」

「……」

どだい無理だったんだ。

涼は唇をかみしめた。

たった8騎でどうやって万の単位で襲いかかる敵を阻止出来るというんだ。
私達は神様じゃない！
もし、こんな少数で勝てるなら、私達はパナマであんなことには――――

涼の脳裏を、戦死した仲間の顔がよぎる。
面倒見のいい、物静かな女の子だった。
あのパナマ運河撤退支援の際、魔族軍の攻撃がＦｌｙ　ｒｕｌｅｒのコクピットハッチを貫通。
コクピット内部で発生した爆発で、死体も残らない最後を迎えた。

もし、ここで敵の阻止が出来るなら、あの子は死なずに済んだはずだ――――！！

「泉大尉達が下がります。“鈴谷（すずや）”の艦砲支援、入ります」
「陸軍の砲兵は？」
「敵の的を増やしてあげるだけです」
高良中尉はそっけなくそう言う。
「ガルガンチュアの火器管制は、私達、ＭＣ（メサイアコントローラー）がやっていることをお忘れなく」
「ハッキングはダメですか？」
「東南アジア戦線の教訓が活かされていますね……と言いたいんですが」
ククッ。
通信装置が、高良中尉の苦笑を伝える。
「データリンクシステムが搭載されていないらしいです。多分、ガルガンチュアに改装された時、外されたんでしょう」
「単独射撃しか出来ない？」
「そうです。おかげでこっちからの介入が出来ないんです」

砲撃が一段落した。
朦々と立ち上る白煙の中、頭上を美奈代達が通過していった。
擱座（かくざ）した都築騎を2騎で担ぎ、その周囲をシールドを構えた騎が護衛する。
美奈代達が着陸したのは、涼達が頑張る丘からかなり後ろに下がった場所だ。
「山崎は都築騎を“鈴谷（すずや）”へ移せ。ここに置いておくわけにはいかん」
美奈代の声が通信機に入る。
「都築の処遇は艦長と坂城さんに任せる。山崎、せっかくの所、ベルゲの代わりをやらせてすまん」
「いえ」
山崎は答えた。
「何か、持ってくるモノはありますか？」
「予備シールドがあれば有り難いが……」
美奈代は思いついたように“鈴谷（すずや）”に通信をつないだ。
「司令部」
「はいこちら後藤」
後藤は通信に答えた。
「ご苦労さん。いや、泉は強いねぇ」
「冗談言ってる場合じゃなくて」
「一時的な後退を許可してくれ。“鈴谷（すずや）”の砲撃でガルガンチュアを叩いている間に。そういいたいんだろ？」
「――はい」
「大の字つけて却下」
後藤は却下と言う言葉に力を込めた。
「何考えてんの。“帝刃（ていば）”がまだわんさか残ってるんでしょ？」
「し、しかし」

「いい？“帝刃（ていば）”は撤退のために後退したんじゃない。砲撃の邪魔になるから後退しただけ。その意味分かってる？」
「は……はい」
美奈代はどもりながら頷いた。
「で……でも」
「ここでお前達が後退したら、敵を勢いづかせるだけだ。認められないよ」
「……」
美奈代は何故か、戦況モニターを何度もチラチラと見た後で、どうしても説明出来ない。という顔で頷いた。
「わかりました。敵の撃破に努めます」
「そういうこと――ま、頑張れや」
後藤は頷くと通信を切った。
「……っ」
美奈代は悔しそうに唇をかみしめるだけだ。
「おい……泉？」
「……すまん」
宗像に美奈代は答えた。
「上手く言えなかった。それに、私もこれでいいのか全く自信がない」
「現在の我々の位置が嘉手納で、“帝刃（ていば）”達は読谷村付近に展開している。上陸部隊は嘉手納海軍航空隊基地をすでに制圧」
「……ああ」
宗像の状況確認に、美奈代は律儀に頷いた。
「そのまま敵は嘉手納を通過し、宜野湾、普天間の制圧へ動くだろう」
美奈代騎の戦況モニターとリンクした宗像騎の戦況モニター上で、美奈代の操作するペンが中華帝国軍の予想針路を描く。
「つまり、敵が我々が後退したと判断してくれる動きを見せつつ、途中で潜んでいれば」

「いれば？」
「我々は進撃する敵の背後から襲いかかることが出来る」
「……お前は」
宗像は心底情けない。という顔で言った。
「後藤隊長に、それがいいたかったんじゃないのか？」
「……そ、そうだ」

つまり、後藤と美奈代では敵に襲いかかるタイミングに完全な違いがある。
後藤は即座に進撃を阻止しろという。
沖縄に配置されている部隊の規模からすれば当然だ。

対する美奈代は、敵を有る程度進撃させた後に、その背後から攻撃したいというのだ。

こちらはこちらで当然なのだ。
正面からまともにぶつかりたい規模ではない。
“赤兎（せきと）”は１５騎だったが、“帝刃（ていば）”は３０騎を越えるのだ。
都築騎を失い、山崎騎を後退させている現状、白兵戦力は自分を含めも４騎しか存在しない。
１騎で１０騎近くを相手にする必要がある。

現場指揮官としては、無茶としか言い様がないのだ。

だから、せめて一度後退し、再びタイミングを狙って攻撃をかけたい。

本当は、美奈代はそう言いたかったのだ。
だが、美奈代の口べたがそれを許さなかった。
単に楽がしたい。

後藤にそう判断され、結局、その誤解を否定出来なかった。
おかげでこの体たらくだ。

「とにかく、全騎、ＥＣＭ作動。ここに潜んでいることを、敵に知られるわけにはいかん」
「了解」
“赤兎（せきと）”達のサーチから逃れた近衛軍のＥＣＭ装置が作動する。
別名で“結界”とも言われるＥＣＭ装置が産み出す電波妨害は、通常電波から魔法電波まであらゆる探索から騎体を守る優れものだ。
反面、自分達からの探索も出来ず、通信もつながらなくなる欠点には目をつむるしかない。
「泉は会話の教室に通った方がいい」
宗像はため息混じりに呟く。
心底残念だ。
美奈代の参謀、指揮官としての才能はかなり高い。
にもかかわらず、全てを台無しにするのは、その口べただ。
説明能力というか、コミュニケーション能力が恐ろしく欠けている。
訓練生の頃から、美奈代はそのおかげで余計な苦労を背負い続けている。
大尉に昇進してもこの有様だ。

――子供の頃から、何をするにもずっと一人だ。一週間ぐらい、学校と食堂以外で誰とも会話しないのはいつものことだった。

かつて、美奈代が語ったことがある。

同じ年頃どころか、大人とさえロクな会話もなく成長した少女。
誰かから物事を学ぶことなく、ほとんど全てを独学でこなしてきた少女。

他人と関わらざるを得ない社会での生き方の全てを、知らずに育った少女。
それが泉美奈代だ。
おかげでここまで苦労している。
普通では考えられない苦労ばかりだ。
ここまで来れば気の毒しか言い様がない。

「泉」
宗像が何かを言おうとしたその時――――

ズズンッ！
――――ギュイイイイインッ！！
ズズゥゥゥム！！

丘の向こう側、海岸の方で連続した爆発音が響き渡った。
着弾と同時に独特な空間干渉音が響き渡る。

大口径ＭＬ（マジックレーザー）砲の着弾音だ。

“鈴谷（すずや）”が搭載しているのは、津島紅葉が開発したビームランチャー。
口径は２８０ミリ。
艦載ＭＬ（マジックレーザー）砲としては小型ではあるが、砲身内圧縮加速装置を組み込んでいるせいで、恐ろしいほど高初速・高貫通・高破壊力を可能としている。
涼騎と芳騎が装備するハイメガランチャーの原型ともなった砲だ。
これを、“鈴谷（すずや）”は連装砲塔として５基、１０門を装備する。
メサイアのパーツを整備部隊に命じて砲塔に仕立て、フライトデッキを兼ねた最上甲板をつぶして設置。
紅葉のラボで埃を被っていた魔晶石エンジンを組み込んでパワー

不足を補った挙げ句、すべてを結果報告という形で艦隊副司令たる夫につきつけ、妻の立場を利用して運用を認めさせたという、いわくつきの代物だ。

分類上は、Ｍクラス速射型ＭＬ砲（マジッククレーザー）に属する２８０ミリＭＬ砲（マジッククレーザー）。

破壊力は、世界中の同クラスのＭＬ砲（マジッククレーザー）の中でも群を抜く。

それが１０基。

はっきり言う。

そんな重装備は、少なくとも、砲の数だけなら、同クラスの飛行戦艦にも存在しない。

その砲が火を噴いた。

砲撃地点は、美奈代達には海岸に思えたが、実際は、嘉手納海軍航空隊基地付近。

基地に殺到していた中華帝国軍が大打撃を被ったのは言うまでもない。

ＭＬ砲（マジッククレーザー）の直撃を受けた戦車が一瞬で蒸発し、着弾の後に解放された魔力が暴走、大爆発を引き起こす。

その爆風が容赦なく兵士達を挽肉に変え、全てを宙にまき散らす。

攻撃から逃れようと、中華帝国軍兵士達は航空隊基地の広い滑走路上を逃げまどう。

“鈴谷（すずや）”の射撃が、そんな彼らを容赦なく襲う。

「泉」

「……っ」

美奈代は悔しそうに唇をかみしめた。
言葉にならない。
「きちんと説明しない後藤隊長も悪い」
宗像は慰めるように言った。
「“鈴谷(すずや)”で正面を止める。後ろから叩け――後藤隊長は、そう言えばよかったんだ」
結果として、“鈴谷(すずや)”の攻撃は、中華帝国軍の進撃を止めた。

とにかくも、中華帝国軍は混乱している。
今、敵の視線は、甚大な被害の出ている嘉手納海軍航空隊基地に注がれている。
その意味を、理解出来ない美奈代ではない。
「各騎」
美奈代は言った。
「ビームライフル装備。もう一度射撃から斬り込むぞ」
「――了解」
「大尉」
突然、牧野中尉が言った。
「“帝刃(ていば)”達が動きます！」

「ここまで役立たずだったとは！」
沖縄攻撃部隊を指揮する夏少将は苦々しげに離陸する“帝刃(ていば)”達を見送る。
「メサイアの排除を要請したら、対メサイア戦闘不能だと？」
メサイアはメサイアを倒すためにある。
戦闘機が戦闘機を撃ち落とすために存在するのと同じだ。
それが、メサイアと戦えませんだと？
何の冗談かと勘ぐったが、MC(メサイアコントローラー)の説明で分かった。

悪いのは上層部だ。
「戦闘経験どころか満足な操縦経験もない騎士を戦場に送り込んでくるな！」
「閣下」
「――ああ」
参謀に彼は頷いた。
「砲撃はすぐに止む。嘉手納基地を一気に横断し、宜野湾に侵入する。市街地に入り込めば、奴らも砲撃は出来まい」
「はい。それと、第二次上陸地点の変更、許可が下りました」
「那覇港だな？」
「はい」
「よっし！」
夏少将は力強く頷いた。
「主力部隊がそっちから上陸出来れば、こちらの勝ちだ！」

「敵はどっちへ？」
まるで美奈代達を無視して飛び去ろうとする“帝刃（ていば）”達。
その背に向けてビームライフルを連射するが、ブースター全開で逃げる“帝刃（ていば）”達は、かろうじてその攻撃のほとんどを回避する。
運のない2、3騎が直撃を受けて撃墜された程度だ。
「――“鈴谷（すずや）”ですっ！」
牧野中尉の言葉に、美奈代は目の前が真っ暗になった。
「我々を無視して飛行艦を叩くつもりか！」
「母艦を失えば我々は補給の口を失いますからね」
牧野中尉の皮肉めいた口調も、どこか引きつっていた。
「ここからで間に合いますか！？」
「止めることは出来るでしょう」
牧野中尉は答えた。
「でも、敵部隊、前進再開。上陸第二波が接近中」
「――くっ！」

「上陸地点は――」
割り出された情報を見た牧野中尉が悲鳴に近い声をあげた。
「那覇港です！」
「那覇港？」
「あっちは現在、沖縄市方面からの避難民が殺到しています。このままでは！」
このままでは。
牧野中尉が言葉を詰まらせた理由が分かる。
これで美奈代達には４つの任務が生じたことになる。
一つ、母艦の防御。
二つ、目の前の敵ガルガンチュアの排除
三つ、嘉手納から宜野湾に向かう中華帝国軍の撃破。
四つ、新たなる敵上陸の阻止
――出来るわけがない。
一人一騎で一任務を引き受ける位のことをしなければとても出来た話ではない。
「――ええいっ！」
美奈代は何かを振り切るように強く頭を振った。
「宗像、柏、早瀬。広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を装備しろ。
母艦防御は“鈴谷（すずや）”と山崎に期待するから考えるな！
早瀬、柏は装備終了次第、嘉手納基地に侵入した敵の掃討にかかれ！
小清水と平野はガルガンチュア部隊を砲撃。

宗像は、私と一緒にガルガンチュア部隊を突破の先陣を切る！」

「……随分と欲張ったな」

宗像はたまらず笑い出した。

「“鈴谷（すずや）”は見殺しにするとしてだ、成る程？よく単純化したものだ」

「む、宗像？」

さつきが訊ねた。

「ど、どういうこと？」

「泉は、部隊に那覇港への移動を命じたんだ」

宗像は答えた。

「単に、ゴールである那覇港にいる敵をすべて排除すればいいだけ。――そうだな？泉」

「……そうだ」

「……成る程？」

美晴は頷いた。

「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）、さっさと装備した方がいいですね。市街地の被害が広がります」

「そうね」

“白雷（はくらい）”は“幻龍（げんりゅう）”シリーズと異なり、追加武装の着脱を最初から前提に設計されているため、“幻龍（げんりゅう）”シリーズとは比較にならないほど、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の装着が容易になっている。

茂みの中に隠されていた広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を装着するのにかかった時間はわずかに3分程度。

「うわ……重い」

擬似感覚として伝わってくる広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の重みに、さつきが顔をしかめた。

「気が進まないんだけどさぁ……私、こういうの」

広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを伸展し、即時使用に備えつつ、これから使う武装の効果と性格を考えると、さつきは暗うつとした気分になる。

「誰だってそうですよ」

美晴は言った。

「生きたまま人を焼き殺すのを好むなんて、まともじゃないです」

「そのまともじゃないことを、正気でする私達は？」

「……」

美晴は答えた。

「正気の皮を被った狂人――――ですかね」

「準備はいいか！？」

「ＯＫ！」

美奈代のかけ声に、皆がそう答えた。

「よし！いくぞっ！」

ブースターが点火され、グンとする加速感が騎体を包む。

美奈代達の第二次攻撃が開始された。

「かかれぇっ！」
美奈代騎と宗像騎がビームライフルを乱射しつつガルガンチュアに突撃。
それと別れる形で早瀬騎と柏騎が海岸から嘉手納海軍航空隊基地を目指す。
ガルガンチュア達は突然の敵の出現にも比較的冷静に対処する。
つまり、接近する敵に砲火を集中したのだ。

「バカかっ！」
メサイアが2騎、こちらに突撃する光景を前に、ガルガンチュアを狩る騎士の一人、王中尉はあきれ顔で怒鳴った。
ガルガンチュアは現在、密集しつつ鶴翼の陣形を展開している。
砲撃を一カ所に集中するためだ。
敵はのこのこと、その火力が最も集中する陣のど真ん中に突っ込んできている。
バカでなければ狂っている！
「あいつら、自殺する気か！」
王中尉がそう思ったのも無理はない。
１３０ミリ砲４門、３０ミリ機関砲６門、対空ミサイルランチャーまで装備するガルガンチュアのまっただ中に飛び込んでくるのだ。
しかも、場所は海上、遮蔽物はない。
メサイアといえど、無事では済まない集中砲火を避けられない。
そこに速射砲と剣だけで突撃してくるなど、自殺行為以外、何でもない。

「撃てっ！」
騎士は砲術担当のＭＣ（メサイアコントローラー）に怒鳴った。

「ぶち殺せっ！」

「了解っ！」

ＭＣ（メサイアコントローラー）が火器管制装置が敵を捉える。

索敵にどうして引っかからなかったのか。

それが全く分からないが、ＭＣ（メサイアコントローラー）は、敵メサイアを火器管制装置で追跡しつつ、内心で呆れていた。

ガルガンチュアの弾幕のすさまじさは先程の対地攻撃で骨身にしみているはずだ。

それでも何故、突っ込んでくる？

日本軍は狂っているのか？

ピンッ

ガルガンチュアの全ての火器管制装置が迫り来るメサイアをロックオンした。

１３０ミリから７．７２ミリまで、あらゆる口径の弾幕があの狂ったメサイアを襲うのだ。

ＭＣ（メサイアコントローラー）は、ガルガンチュアに射撃開始を命じようとした。

２騎のメサイアが、自らの進行方向の海面めがけて手にした速射砲を乱射したのは、まさにその時だった。

王の目の前の海上。

無数とも言うべきＭＬ（マジックレーザー）が叩き込まれ、海面で激しい爆発が連続して発生する。

鶴翼の陣形による包囲網のど真ん中で、激しい水柱が立ち上る。

そして、ＭＬ（マジックレーザー）の熱量が海水を蒸発させ、ゆっくりと引きつつある水柱さえ覆い隠さんばかりの勢いで、水蒸気の霧を発生させた。

「しまった！」

ＭＣ（メサイアコントローラー）達はその爆発の意味を即座に理解した。

一度はロックオンしたものの、敵の姿を見失った。
水蒸気の立ち上る海面にいるのかもしれない。
だが――敵が見えない。

――どうする？
――水蒸気の立ち上る海域に火力を叩き込む！

ガルガンチュアのMC（メサイアコントローラー）達が躊躇したのは、ほんの数秒。
本当に、一瞬の躊躇だった。

鶴翼陣形をとるガルガンチュア達が、その驚異的な砲火を開く前に、地獄の業火が彼らを襲ったのは、その一瞬の躊躇の後だった。

「ガルガンチュア部隊、全滅」
「――――えっ？」
高良中尉の言葉を、涼はすぐには信じられなかった。
「だ、だって、私達、まだ何も」
「する必要が無かったんですよ」
高良中尉にそう言われ、無理矢理にでも納得するしかなかった。
たった2騎で20騎以上のメサイアを仕留めるなんて、絶対に信じられない！
「涼っ！」
芳からの通信が入った。
「早瀬中尉達が嘉手納を制圧したっ！」
「――――ここの人達ってバケモノ！？」

美奈代達が広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）でガルガンチュア達を始末した頃、
さつき達もまた、同じ兵器、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）をもって地上部隊の

掃討に動いた。
突然のメサイア出現に狼狽する中華帝国軍兵士達がスクリーンの至る所に映し出される。
“白雷（はくらい）”の目は、兵士達の表情さえはっきりと映し出してくれる。
皆、恐怖に顔が引きつっているのがわかる。
泣いている若い兵士がこちらに両手を挙げているのもわかる。

――――悪く思わないでね。

さつきは内心でそう呟くと、トリガーを引いた。

地上を熱風が走り、芝生の緑地帯が黒く変色する。
その上にいた兵士達は跡形もなく消え去った。
蒸発したのだ。
熱風だけで数千度に達する高熱を発する広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の一撃に、タンパク質と水分の塊が耐えられるはずがない。炎の到達する有効射程範囲にいた兵士達は、塵一つ残さず、この世から消滅した。
そして、５００メートルに到達する数千度の炎を直接浴びなかったとしても、それほどの距離に炎を届かせる死の風が、兵士達に容赦なく襲いかかった。
炎の直撃を浴びずにすんだ兵士達を、幸運と呼ぶことは出来なかった。
駆け抜けた熱風は、浴びただけで衣服が炎上し、露出した肌は見るも無惨な重度の火傷を負わせた。
炎に包まれ、あるいは重度の火傷を負った兵士達が炎上する芝生の上、あるいは施設の中で転げ回り、断末魔にさえ見放された己の不運を嘆くしかない。
戦車や装甲車の中にいた兵士達も、オーブンと化した車内で、丸焼きになる運命を避けられなかった。

――楽なものね。

自分がやったことをスクリーン越しに直視した美晴はふと、そう思った。

トリガーを引いたのは3回くらい。

それだけで、目の前にあれほどいた敵はいなくなった。

罪悪感もなにもない。

自分がやったことに実感がない。

何百人といた敵を殺した。

人を殺した。

それなのに、何だか、実感がわかない。

――戦争って、こういうものかしら？

美晴はそこで考えることをやめた。

考えた所で、何が出来るわけでも、何が変わるわけでもない。

目の前の兵士達のようになりたくなかったら、考えないことだ。

全てを振り切るように、通信装置に言った。

「さつきさん。このまま移動しましょう！」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「小隊、海上と陸上双方から那覇港に突撃」

ＣＩＣから報告が入る。

「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）による攻撃で上陸部隊はほぼ全滅」

「――ま、そんな所ですか」

後藤は戦況が映し出されるスクリーンをぼんやりながめながら気のない返事をした。

「――ま、こっちがこれほどの目にあってるんだから、その程度

の戦果は挙げて欲しいですな」

「全くだ」

美夜が艦長席で頷いた。

バンッ！

バンバンバンッ！

艦橋の向こうで無数の爆発が起きる。

ＭＬがＦＧＦに命中。魔法反応で中和、拡散する作用が爆発に見えるのだ。

全周囲でＦＧＦを展開することで一種のバリアを作り上げている今はいい。

完璧な防御は、反面においてこちらからの攻撃をも封じてしまう厄介者だ。

「こちら山崎です！」

艦内通信モニターに山崎が出た。

「このままでは！発艦許可を下さい！」

「ダメだ！」

美夜は一喝した。

「たった１騎で３０騎近い“帝刃”を相手にするつもりか！？」

「し、しかしっ！」

「後退している。ＦＧＦを突き破ろうなんてヤツがいたら容赦なく潰せ！」

「は、はいっ！」

――――どうする？

山崎に言われるまでもなく、美夜はメサイアを出したいのは確かだ。

とはいえ、手持ちの駒はたった一騎。

一騎では何も出来ない。

ＦＧＦが全周囲展開出来る間に何とかしなくてはならない。
反撃するか？
それこそ向こうの思うつぼだ。
「ＣＩＣ」
美夜は艦内通話を開いた。
「那覇港の敵、損害はどの程度だ？」
「上陸は完全阻止。洋上の敵はすでに撤退を開始」
「撤退を開始したんだな！？」
「針路を東シナ海方面に向けています」
「よしっ！」
美夜は後藤に命じた。
「後藤中佐、小隊を呼び戻せ！」
美夜は決断した。
「敵の沖縄上陸は阻止したものと判断する！」

「後退命令が！？」
「出ましたっ！」
「しかし、まだ敵が！」
「陸軍も出ました！」
牧野中尉が言った。
「もう中華帝国軍に組織戦闘を行う余力はありませんっ！」
そう。
上陸した中華帝国軍は、軍としての指揮命令系統も、戦車も、装甲車も、何もない。
嘉手納基地で逃げ延びることが出来たか、沈む船から逃れ、海上に浮かぶか出来た恐ろしく幸運な兵士達がいるだけだ。
そして、その数は決して多くない。
「このままでは母艦が沈みますっ！」

牧野中尉が焦る理由もわかる。
いくら“鈴谷（すずや）”が重武装艦とはいえ、元は装甲がないに等しい輸送艦なのだ。
敵が強行突入してＦＧＦを突破、内部に侵入でもされたら一巻の終わりだ。

その敵の数は３０騎。

「全騎っ！」
美奈代は通信装置に怒鳴った。
「“鈴谷（すずや）”救援に向かうっ！行けるか！？」
「大丈夫っ！」さつきは手にした広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを突き上げて見せた。
美晴もそれに倣う。
「いい加減、私達にも見せ場を下さいっ！」
芳が大声で言った。
「何もしてませんよぉ！」
「泉、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）は排除する」
宗像が言った。
「もう使わないだろう？」
「よし――宗像。平野と小清水のガードを頼む」
「引き受けた」
宗像は頷いた。
「二人とも、ベッドまで付いてこい」
「涼と一緒で」
「勘弁してくださいっ！」
「――全騎、ビームライフルの残弾報告」
「早瀬、残弾２００」
「柏、残弾１２５」
「宗像、残弾１６０」

「平野、ハイメガカノン残弾３０」
「小清水、同じく残弾３２」
「――――上等だ。距離を取れ。“帝刃（ていば）”のＦＣＳ相手なら余裕で勝てる！」
「はいっ！」

“帝刃（ていば）”達は最早撤退して良い立場だった。
ところが、撤退を具申する先を失い、指揮官を失っていた。
結局、受けた命令に従うしか、彼らには選択肢が残されていなかった。
戦う武装でさえ、彼らには選択肢がなかった。

ＭＬ（マジックレーザー）をちまちま撃つ程度。
その程度で目の前の飛行艦が沈むはずはない。
それは十分に理解していた。
“帝刃（ていば）”隊々長騎のＭＣ（メサイアコントローラー）、馬中尉は内蔵ＭＬ（マジックレーザー）砲の残弾数を確認して首を横に振った。
このまま撃ち続けていたとても、戦果はあげられない。
飛行艦に対する対艦戦闘機動をやれといわれればやってのける自信はある。
だが、“帝刃（ていば）”の“目”が見たＦＧＦは、“帝刃（ていば）”を原子単位に分解させるほどの出力だ。
突撃しても無意味だ。

――――何とか、付け入るスキを！

馬中尉は必死にセンサーを操作して、飛行艦の死角を探すが、全周囲に展開されたＦＧＦにそんな余地はどこにもない。
手にする武装は戦斧だけ。

実体弾発射型の速射砲さえ与えられていない。
飛行艦攻撃用の対艦ＭＬ砲（マジックレーザー）、通称「ＦＧＦクラッシャー」がなければどうしようもない。
それを具申するべき大隊司令部はすでに通信途絶。
上陸軍司令部さえ呼びかけに応じない。
自分達が太平洋のど真ん中に放り出された格好だと、馬中尉もわかっている。
わかった上で、どうしようもない。

ピーッ！

レーダーに反応が出た。

――友軍か！？

一瞬、そんな淡い期待を抱いたが、馬中尉はすぐにそれを否定した。
敵だ。
おそらく、“赤兎（せきと）”隊を叩き潰した日本軍が、母艦救援のために向かってきたんだろう。
遠距離のガルガンチュア達を仕留めた大口径砲を装備した部隊だ。
そろそろ何とかしなければ――

馬中尉はチラリとモニターを見た。
そこに映し出されているのは、コクピットの騎士。
騎士と呼ぶには若すぎるほどあどけない顔が、涙混じりの表情で映し出されていた。

「……くそっ」
馬中尉は小さく毒づいた。

普通、作戦上のことは騎士が責任をとるものだ。俺達、MC（メサイアコントローラー）がどうして作戦をここまで動かさなければならない？

こいつが責任とれるとでもいうのか？

モニターの向こうで震えている騎士は、養成校で生徒隊長だったという、ただそれだけで隊長を押しつけられた気の毒な奴だ。

おそらく、女も知らないし、酒の味も知らないだろう。

人生の楽しみも、苦しみも、何もわからないだろう。

そんな奴に、責任を押しつける趣味は、馬中尉にはなかった。

馬中尉は自問した。

部隊をどうする？

責任を――――誰がとる？

ビャンッ！！

馬中尉は、“帝刃（ていば）”の耳が捉えた音を聞いた。

彼の操作する“帝刃（ていば）”の近くで包囲網を展開する2騎が、一瞬のうちに吹き飛ばされた。

戦艦の艦砲並の一撃が胴体を――――いや、“帝刃（ていば）”のボディを完全に引きちぎってのけた。

頭部と四肢だけが煙を引きながら海面へと落下して行く。

「なっ！？」

あまりの破壊力に驚愕する馬中尉の目の前で、さらに2騎が最後を迎えた。

「――――っ！」

馬中尉は、首から提げたロザリオを握りしめ、神に祈った。

――主よ。

――私に力を！

「ち、中尉っ！」

メサイアを飛行させる方法さえ分からない騎士がモニターの向こうですがるような表情を浮かべていた。

「た、助けてくださいっ！」

「……」

馬中尉は、彼を助けたい。

そう思った。

“帝刃（ていば）”より高性能な“赤兎（せきと）”をああもあっさりと仕留めた日本軍に対抗出来る武装はない。

ＭＬ（マジックレーザー）でさえ、残弾は心許ないのだ。

「中尉っ！」

さらに2騎、逃げることも出来ずに撃ち落とされた。

「――くぁうううっっ！」

馬中尉は、そんなうめき声をあげると、決然とした声で怒鳴った。

“帝刃（ていば）”隊残存各騎は、速やかに本国へ帰還せよ！これは私、馬中尉の命令であるっ！」

「ち、中尉っ！？」

騎士が驚愕の表情で言った。

「て、撤退命令は出ていませんっ！」

騎士がそう言うのも無理はない。

独断での撤退は敵前逃亡であり、銃殺の対象だ。

「私が出したっ！」

馬中尉は答えつつ、“帝刃（ていば）”を旋回させた。

「全ては私の命令だ！」
僚騎が次々と彼に従う。
「すべての責任は私が負う！誰かがやらなきゃいけないことなんだ！覚えておけ新兵っ！軍隊での責任とは！」
加速する“帝刃（ていば）”のＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）の中、航法をフルオートパイロットモードに切り替えた馬中尉は懐のホルスターから拳銃を取り出し、銃口をこめかみにあてた。
「こうやってとるもんだ！」

バンッ！

祖国へと飛び続ける“帝刃（ていば）”のＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）の中に、そんな音が響きわたった。

今回は、最後にこの“帝刃（ていば）”隊の後日談を話して終わりにしよう。
“帝刃（ていば）”隊は上海基地に帰還し、その場で拘束。
軍事裁判にて、馬中尉の越権行為により撤退を余儀なくされたことを認められ、原則として騎士、ＭＣ（メサイアコントローラー）共に無罪となった。
無罪をもってほぼ全員が“帝刃（ていば）”を降ろされ、そして一般騎士として激戦の続くチベット防衛隊に異動させられた。
公式記録では、チベット高原で彼らの部隊は配属から2日目、宿舎に対する英国軍の航空爆撃により全員戦死となっている。
例外は、首謀者とされた馬中尉ともう一人、隊長騎搭乗騎士。
名を胡少尉という。
彼は、馬中尉と共に“帝刃（ていば）”に乗っていたというだけで、馬中尉との共謀容疑をかけられ、裁判の末に自決を命じられた。

軍事裁判法廷から即座に引き出され、部屋の中に押し込められた彼の後頭部に政治部将校の放った弾丸が命中、絶命することで、中華帝国軍沖縄攻略部隊総員1万5千名のうち、本国へ帰還出来た者は、捕虜を含めてもわずか75名となった。

「ひどいものですな」

北京の王制党本部の一室。

窓から見える北京の景色に目を細める背広姿の男が、そんな言葉を口にした。

「ボロ負けではないですか」

「……」

苦々しげにその男を睨むのは、周王制党総書記だ。

神経質そうな目が血走っている。

「中華帝国軍は福岡、沖縄の作戦失敗をもって対日攻略作戦を中止。翌日には石垣島を含む全日本領からの撤退を完了。極東方面での渡洋交戦能力を喪失……」

男は肩をすくめた。

「極東だけではなく、東南アジアもそうでしたな」

「……ケンカを売りに来たのか？」

「まさか」

男はわざとらしく肩をすくめた。

「私はビジネスに来たのです」

「……」

「そんな恐い顔をしないで下さいよ。耳寄りな話しなんですから」

「……さっさと話せ」

「必要なら」

その声に、それまでの軽さはない。

あるのは、ぞっとするほどの冷たさだけだ。

まともに視線のあった周は背筋に電気が走ったように感じられた。
「――我々が支援しよう」
「ど、どうやって？」
周は彼に抵抗するような口調で怒鳴る。
「すでに海外との交易は不能！少数民族が独立を叫んで各地で蜂起！軍は兵力不足でメサイアを動かすことも出来ないんだぞ！」
「――メサイア」
男はそう呟くと嬉しそうに何度も頷いた。
「そうだ。メサイア、メサイアと言ったな」
「？」
「メサイアという名の“人形”はそんなに扱いが難しいのか？」
「当たり前だ！」
「熟練騎士とMC（メサイアコントローラー）が必要だ！その程度のことも知らないのか！？」
「――なら」
男は、周の横まで近づくと、その肩に手を置いた。
周はそれだけで、布越しだというのに、背筋に氷柱を突っ込まれたような錯覚を覚えた。

――な、何者なんだ、こいつは！

周は総毛立つ思いでその場に凍り付いた。
目の前の男の素性を、周は知らない。
自分を傀儡として扱う梁総参謀長から“優秀な支援者”と聞かされている程度だ。

ただ、本能的に逆らうことの無意味さを、この瞬間、思い知らされたのは確かだ。

「私達が支援しよう。そのメサイアとやらが、たった一人で、肉体の一部として扱えるようにしてやろう」

「そ、そんなことが……」
周は総書記としての威厳を声に込めようとして出来なかった。
うわずった声が、空回りする舌から出るのがやっとだ。

「出来る」
男は深く頷いた。
「我々を信じろ。我々の技術力は、人類風情とは格段に違う」

「じ、人類？」
周はぎょっとなって、改めて相手を見た。
その時、初めて気づいた。
男は色つきの眼鏡をしていた。
その眼鏡の奥で光る目の色は――真っ赤だった。

「き――貴様っ！？」

「安心しろ。周同志よ」
グイッ！
肩を掴む手は万力のように周を捉えて放さない。
恐怖のあまり、言葉を失った口が空気だけを咀嚼する。
「江の時は失敗したが――貴様はもっと有効に使ってやろう」
周の目の前で、男が口を大きく開いた。
真っ白な歯が近づいてくる。

周は見た。

その犬歯は、牙のように尖っているのを――。

「我が、中世協会を信じるのだ――同志よ」

周の意識は、そこで途絶えた。

馬中尉にとっての悲劇は、敵とみなした反応が、実は友軍だったこと。
そして、この友軍こそが、美奈代達にとって最悪に近いほどの強敵だったことだ。

突然、襲いかかってきた得体の知れないメサイア達。
友軍反応もなければ、国籍を示す識別さえない。
ただ、その反応はベテランのそれを遙に超えていた。

一騎を撃破したそのタイミングを狙っていたように、別な一騎が右から戦斧を袈裟斬りに振り下ろしてくる。
絶妙なタイミングで左から別な一騎が機関砲を発砲。
最悪なことに、この2騎を迂回するように別な騎が背後に着地、ワンアクションで背後から迫ってくる。
「くっ！？」
右からの一騎を槍で仕留めた所で、さつきはとっさに騎体を一回転させた。
いままで騎体が立っていた場所を砲弾が走り、砲弾と交差する格好で敵騎がさつき騎をかすめた。
それでもなお、砲撃と戦斧の攻撃が入れ替わったにすぎない。
しかも――
「なっ！？」
敵騎は、さつきの得意とする槍のリーチギリギリまで接近すると、攻撃を戦斧ではなく機関砲射撃に切り替え、或いは機関砲を発砲後、すれ違いざまに戦斧を繰り出してくる。彼我の距離。そして相対速度を正確に把握していなければ出来る芸当ではない。
それを、敵は容易にやってのけている。

しかも、驚くほど素早い！

「なんて奴ら！？」

まるで１０倍速で映画を見ているような錯覚さえ覚えたさつきは、とっさに美晴達に怒鳴った。

「美晴、山崎君、フォーメーションをとらせて！」

「はいっ！」

「了解っ！」

フォーメーション。

この場合、互いの背中をカバーしあう三角陣形のことだ。前面からの攻撃だけで手一杯の敵にはこれしかない。

ちらと見れば、宗像と都築も互いの背中をカバーしながら敵を近づけないようにするのが精一杯な状況だ。

幾多の戦場で数多の敵を屠ってきた武器が、敵を近づけないためにむなしく空を斬る。

屈辱だった。

「美奈代！どうするの！？」

「教えてくれ！私が知りたい！」

美奈代は怒鳴り返した。

部隊の統率がとれない。

皆が、自分一人生き残るのが精一杯だ。

「狙撃部隊は最大推力で後退！離脱後に狙撃継続してくれ、ただし、離脱時にスモークは焚くな！こっちが困る！」

「了解っ！」

涼と芳（かおる）がブースター最大噴射で丘から離れた。

敵が追撃しなかったのは幸いだ。

美奈代の斬艦刀が、敵騎の右腕を根本から切り落とした。切断された敵の腕が、戦斧を握ったまま宙を舞う。

「よしっ！」

美奈代は敵の撃破を確信した。

だが、腕を吹き飛ばされた敵は、そのまま加速をかけてきた。

「なっ！？」

軽く膝を曲げ、ブースターを全開にした敵は、驚愕する美奈代の目前、モニター一杯に迫ってくる。

膝蹴りだ。

「くっ！」

騎体をわざと転ばす手前まで倒し、ブースターを点火してバランスを無理矢理確保する。

転倒だけは避けたが、反撃に切り替える余裕はなかった。

大質量同士がすれ違う衝撃に騎体がぶれる。

騎体制御のため、ブースターをふかしながら体勢を戻す美奈代の目の前で、敵騎は地面をほじくり返しながらの派手なスライディングをみせた。そして、丘から落下する一歩手前で停止。何事もなかったかのように立ち上がり、再び美奈代騎に向き直った。

「信じられません！」

牧野中尉が悲鳴に近い声を上げた。

「一体、どんなバランサーを？パイロットはどんなバランス感覚を？」

高速度で移動中に腕を切り落とされる。それは、突然、機体重量のバランスが大きく崩れることを意味している。メサイアは、普通に腕を吹き飛ばされるだけでも、平衡感覚を司るバランサーシステ

ムの修正にしくじれば横転する代物だ。
高速移動中に腕を切り落とされても尚、一切の補正的動きをせず、高機動性を求められる膝蹴りまで見せた敵の動きは、メサイアを知る者にとっては信じられない。

次の瞬間、
ドンッ！
美奈代騎に向き直った敵の背面で爆発が生じ、敵騎の上半身と下半身が泣き別れした。
寧々（ねね）の狙撃が命中したのだ。
数が減ったと喜ぶヒマもなく、美奈代は死角から襲ってくる敵への対応を迫られる。
さっきより攻撃のタチが悪くなっている。
「こ、こいつら！？」
「敵はこっちの死角がわかっているんです」
牧野中尉は言った。
「索敵装置の反応をどこかでモニターしているのでしょう。私達（メサイア・コントローラー）Mでも出来ますけどね」
「気楽にそういうことを！」
敵が突き出してきたものは戦斧ではない。
手槍だ。
戦斧のリーチばかりを考えていた美奈代は、敵の突然の武器変更に反応が遅れた。
ギャンッ！
鈍い音がして、左背後からの一撃が美奈代騎のサイドスカートを大きく削った。
「くっ！？」
美奈代は左に振り返ろうとして、即座に急加速をかけて前進した。
真後ろから飛び込んできた敵が脳天めがけて振り下ろした戦斧がむなしく地面にめり込んだのはその時だ。

「速射砲を！」
美奈代は怒鳴るが、
「こんな乱戦の中でですか？」
目の前では祷子が別の敵を横薙ぎの一撃で仕留めている。そのすぐ近くでは、宗像と都築が頑張っていた。こんなところで３５ミリ多銃身機動速射野砲を乱射すれば味方の被害の方が大きい。
「くっ！」
躊躇する間に、敵が一列になって襲ってきた。
一騎が手槍を繰り出し、それをかわした所で、その背後から現れた別な騎の戦斧が美奈代を狙ってくる。かろうじてそれを回避してなお、その背後から機関砲弾が襲いかかる。
一騎目を騎体をひねってかわし、戦斧を剣で弾いてそらした後、機関砲弾を楯でかろうじてかわすのが精一杯だった。
「三位一体ってこういうのですかね」
無理に冗談を言ってみたが笑えない。喉が痛いくらい乾いている。
「私は、あの攻撃を全部回避してのけたあなたを、どう表現するかに困っています」
「大尉っ！」
通信装置に悲鳴に近い声が入った。涼だ。
「こっちにも敵が接近中！数３」
「何っ！？」
「ＨＭＣじゃ、チャージに時間がかかりすぎます！第四種装備排除許可を！」
「ダメだって言ってるだろう！？」
美奈代は再び“三位一体”の攻撃を始めようとする敵を前に、これをどう凌ぐか、とっさの判断を迫られていた。
せいぜい考えついたのは、急速離脱でこの３騎から離れる――――つまり、逃げ出すことだけ。
しかし、それでは話にならない。美奈代に求められているのはこの三騎の撃破であって逃げることではない。

「……」
戦況モニター上の反応も、敵がきれいに並んでいる。その前に立つのが自分の騎。そして――
「小清水！」美奈代は通信装置に怒鳴った。
「私が救援に向かう！」
「頼みますっ！」
「行ってやるから、ＨＭＣ（ハイメガカノン）の支援をくれ！」
「どこに――」
ハッ。という息をのむ涼の声がレシーバーに入った。
「大尉。いちにのさんで右へ。目視で仕留めます」
「頼む」
「いち――にの――」
敵の最前列にいた騎が手槍を引いた。
「さんっ！」
ドンッ！
美奈代はブースターを開いた。
ズンッ！
途端、あれだけ美奈代を苦しめていた三騎がまとめて光弾によって串刺しになった。
解放されたエネルギーの爆発が騎体を引きちぎり、破片をまき散らす。小清水騎からのＨＭＣ（ハイメガカノン）による狙撃が命中したのだ。いかに機動力が高かろうと、狙撃はそう簡単に回避出来る代物ではない。それが狙撃の恐ろしいところだ。
「よくやった！」美奈代は歓声に近い声を上げた。
「お礼はいいですから！」涼は半分泣きながら叫んだ。
「助けに来てください！」
美奈代が接触した時、小清水達は美奈代が展開していた丘が、何とか望める高台に陣取っていた。敵はその高台に登ろうとして、陸軍の砲兵部隊の攻撃に阻止されている。

ブースターを開いて宙を舞った美奈代が見た光景は、そんなものだ。
「今回、スコア振るいませんね」
「アレ相手にですか？」
「相手は誰でも、スコアが全て。騎士の価値はスコアです」
「むぅ」
言われてみればそうの通りだが、
「熱くなって死に急ぐ程、私はバカじゃありません。速射砲、ターゲット選定願います」
「よく出来ました♪」
美奈代は腰部にマウントしていた３５ミリ多銃身機動速射野砲を右腕に装着、上空から敵めがけてトリガーを引いた。

「泉達は！？」
「小清水少尉達の救援に出てそのまま――――」
「くっ！」
「司令部、後藤中佐より通信――――」
宗像騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）、桜庭優が言った。
「後退命令です！」
「何っ！？」
「部隊後退、後退命令が出ました！」
「泉達はどうなるっ！」
怒鳴りつつ、宗像は斬艦刀のエネルギーゲージが下がっていくのを否定出来なかった。
「司令部は後退命令を連発しています！」
「――――くっ！」
宗像達は軍人だ。
意地や根性は大切だが、それを理由に戦争しているわけじゃない。
命令は絶対だ。

「山崎、次の打ち込みで煙幕展開、後退するぞ！」
宗像は言った。
「涼、後退する！弾幕準備！」
「宗像さん！？」
「泉達なら――」
斬艦刀のゲージを苦々しげににらみ、宗像はやっとのことで敵を仕留めた。
「このまま冬眠して、春になったらノコノコ出てくるだろうさ！」

ザンッ！
ズンッ！
美奈代騎の一撃が、２騎を同時に仕留めた。
さすがに息が上がってきた。

――しくじった！

美奈代は本気で自分の立案を悔いていた。
小清水少尉達の救援に回ったのはいい。
だが、その後は？
部隊が分断され、狙撃隊から目を逸らすために、サポートに入ってくれた祷子と共に敵の包囲網に落ちることを避けられなかった。

右を見ても左を見ても敵ばかりだ。

「さすがに」
レシーバーに入る祷子の声も息が荒い。
「疲れてきました」
「何騎仕留めた？」
「１０から先は忘れました」

包囲網の下、祷子は答えた。
「はっきり言えることは二つです」
「まず一つは？」
「この戦いで」
祷子騎たるＤ－ＳＥＥＤが、戦斧を振りかざして突撃してきた敵騎を、下から掬うような一撃で真っ二つに切り裂き、返す刀でサライマを唐竹割で仕留める。
美奈代もまた、敵騎の両足を切断し、エッジアタックの一撃で別騎を、くの字にして吹き飛ばした。
敵達はこの２騎を相手に完全に攻めあぐねていた。

「一度の戦闘であげたスコア記録を更新すること」

「もう一つは？」
「もう一つは」
ズンッ！
祷子騎が舞うような、滑るような、全く無駄のない戦闘機動でさらに３騎を血祭りに上げた。
「私の中で、美奈代さんがバカの代名詞になったことです」
「……すまん」
バカ。
その言葉の意味は、こんな状況に自分を追いやったことに対する祷子の精一杯の文句だろうと、美奈代は勝手に思った。
だが、美奈代は美奈代で祷子に言い返した。
「しかし、風間」
「何です？バカの代名詞」
――怒っているなぁ。
美奈代はそのトゲのある声に、正直、首をすくめた。
なまじ美人が怒ると迫力があるというが、美奈代はそれを身をもって味わった。

その間にも、敵は、何とか美奈代達を仕留めようと、様々な方法で攻めてくる。
包囲網の中、バズーカを構えた騎を認めた美奈代は、大地に転がっていた敵騎の残骸の装甲を掴むと、力任せにその騎体を引き上げた。
ドンッ！
すさまじい音と振動が美奈代騎を襲ったのは次の瞬間だ。
“バズーカ”の一撃が敵騎の残骸に命中したのだ。
残骸を突き飛ばした美奈代は、敵騎の腰にマウントされていた短剣を引き抜くと、投げナイフの要領でその敵に投げつけた。
短剣がのど元に命中した敵は、操縦系統が破壊されたらしい。
そのままひっくりかえった。

「私も反論させてくれ」
「却下」
「……誰かが敵の包囲網の中へ中へと移動して、後退してくれなかったせいだと言いたいんだが」
「……」
「……」
「……」
「わかったようだな。大バカの代名詞」
「ひどいっ！」
祷子が文句を言った。
「人のことバカって言ったら、自分までバカになるって先生に教わらなかったんですか！？」
「あんたが言う！？」
「それはそれです！」
「……大尉」
祷子騎のMC（メサイア・コントローラー）、水城中尉が申し訳ない。という顔で通信に割り込

んできた。
「幼児化した風間中尉に何言っても無駄です」
水城中尉は言った。
別な通信モニター上では、牧野中尉が頭の横で指をクルクルしたあと、肩をすくめている。
「一度こうだと決めると、そう簡単に引くタイプじゃないんですよ。おしとやかな外見と違って」
――外見。
美奈代はそこにひっかかるものがあった。
「そういえば風間」
「何です？」
「実は――」
ズンッ！
美奈代は2騎同時に襲いかかってきた敵を返り討ちにして仕留めた。
「帰ってからでいい」
「そうですか？じゃぁ、教えてください」
「ん？」
「退路はどっちです？」
「……」
美奈代は戦況モニターをざっと見回した。
３６５度。全周囲、敵の重厚な包囲網のまっただ中であることに代わりはない。
「……どっちだと思う？」
「棒でも倒してみますか？」
「ははっ……そりゃいい」
笑いながら、美奈代は敵から奪った槍を掴んだ。
白雷（はくらい）の手を離れた槍は美奈代騎から見て左側に倒れた。

「そっちにするか」
「そっちは台湾ですよ？」
「……やるか」
「面白いですけど、反対にしましょう」
「じゃ、鹿児島方面へ」
「了解♪」
美奈代と祷子は互いに武器を構え、後退方向の敵に狙いをつけた。
「ピータンじゃなくて、豚骨ラーメン食べに」
「――おごってね」
「いやです」

「そこの2騎！」
不意に、通信に割り込んできた声に、美奈代達は思わずお互いを見合ってしまった。
互いの声じゃない。

「友軍？どこから？」
「急速に接近する騎あり」
牧野中尉が言った。
「3時方向――空からです！」
「空？」

「聞こえているなら、返事しなさいっ！」
「――えっ？」
美奈代は返事をしようとして声が出なかった。
この声は――聞いたことがある。
「死んでるなら帰るわよ！？」
「ちょっ！？ま、待って！」

狭まりつつある包囲網の中、美奈代は怒鳴った。
「こちら独立駆逐中隊第一小隊の泉とバカの代名詞！」
「こらぁっ！」
「そこの漫才コンビ！」
声の主は、心地よい位の声を張り上げた。
「シールド構えてお祈りしなさいっ！」
「飛来する物体有り！」
牧野中尉が怒鳴る。
「当該騎から、データ入りました！新型の攪乱幕！センサー飛びます！注意してくださいっ！」

美奈代達の目の前。

包囲網を形成していた敵騎数騎をなぎ倒し、大地に強行着陸したのは、深紅のメサイア。
それは、美奈代が見たことのない騎だった。
まるで優美な女性を想像させる、モニターに一瞬、映し出されたその騎の容姿に見とれた美奈代の目の前。
その騎から強い光が走った。

「大尉……ザザッ……気ジャミング……ザザッ……」
牧野中尉が怒鳴る声さえまともに通じない中、美奈代の目の前ではモニターがブラックアウトした。
「モニ……ガガッ……センサーがアウト！」
同じ騎体の中にいるのに、通信さえ確保出来ない。
それは美奈代にとって初めての経験だった。
「ど、どうするんですか！？」
その声が通じたとは思えないが、

ピーッ！

美奈代の視界に“緊急事態”の表示が出た。
“緊急事態５０５発令宣言。コントロール権限、ＭＣ（メサイア・コントローラー）へ移行”
そう書かれた表示か点滅する。
白雷（はくらい）が美奈代のコントロールを離れ、勝手に動き出したのは次の瞬間のことだった。

美奈代達が無事に脱出出来たのは奇跡に近いことだった。
飛行を続ける美奈代騎中で、ブラックアウトしていたモニターやセンサーが次々と回復する。
そして、コントロール権限が美奈代に戻った。
「い、一体？」
美奈代はしきりに周囲を見回した。
すぐ隣を、Ｄ－ＳＥＥＤが飛んでいる。
そして美奈代騎と祷子騎の前には、深紅の騎体が飛んでいた。
「前方の騎」
美奈代は言った。
「聞こえている？」
「聞こえているわよ――泉候補生」
不機嫌そうな声がレシーバーに入った。
「何よ！あんただったの？だったら助けなければ良かった！」
「なっ！？」
通信モニターに現れた顔は、美奈代にとって出来れば忘れたい顔だった。
「あ、あなた！」
「――お久しぶり」
モニターの向こうでそっぽを向いたのは、金髪の目の覚めるような美少女だった。

「――あの」
褄子が訊ねた。
「お知り合いですか？」
「あ、ああ」
何を言ってるんだ！
そう言いかけて、美奈代は思いだした。
褄子は、この女に会ったことはなかった。
「か、彼女は」
「――お初にお目にかかります♪」
金髪の美少女は、目の覚めるような笑みを浮かべた。
「はい♪どうも」」
モニター越しに金髪と黒髪の、共に驚くほどの美少女同士がのほほんとした声で挨拶を交わす。
「私、フィア・ソメヤといいます」

フィア・ソメヤ（自称）

「……」
「……」

一時間後。
騎士の休憩用に用意されたテントの下。
険悪。としか言いようのない空気がその一帯を支配していた。

泉大尉から男を奪ったオンナ。

フィアに対するそんな評価を聞いた芳と涼は、興味津々で二人に近づいたが、そのあまりの空気の悪さに逃げ出していた。
恐ろしい程空気が読めない褄子だけが、二人の間に入って平気な顔をしてお茶を淹れていた。

「……」
「……」
「……なんかしゃべりなさいよ」
たまらず口を開いたのはフィアだ。
「何か」
「うわぁ。面白ぉい」
フィアはセリフを棒読みして、手をぱちぱち叩いた。
「面白すぎて死にそうだった」
「なら死んだら？」
美奈代はニコリと笑って言った。
「葬式には出てあげるし、棺桶に唾吐いてあげる♪」
「先に死んで？」
フィアも負けてはいない。

「それ、私もやってみたい」
「……何しに来たのよ」
「命の恩人様めがけてすごい態度ね。瞬にフラれる前に、忘れられて当然だわ」
「――――っ！」
「お茶、どうぞ？」
「ありがとうございます。風間中尉……新型騎のテスト中に、孤立した部隊の救援に向かえっていわれたのよ」
「新型騎……？」
美奈代はテントの外に立つ、フィアの乗ってきた赤いメサイアを見た。
深紅に塗られた派手な塗装が施された、こんな目立つ騎を、美奈代は見たことはなかった。
「殲龍（せんりゅう）って名前」
袴子から受け取ったお茶に口を付けるフィアが言った。
「殲龍（せんりゅう）？」
飲みなさいよ。
さめるわよ？
そう言いながら、フィアは楽しげに微笑んだ。
「とにかく、私が動かしている。というか、私しか動かせないといった方が正しいでしょうね」
「どういう意味だ？」
美奈代は、お茶を口に含んだだけで、モロに噴き出した。
「きゃあっ！」
噴き出したお茶は、フィアを直撃した。
ゲホッ！ゲホッ！
口元を抑え、激しく咳き込む美奈代。そして、お茶をもろに顔面に浴びたフィアは、ポケットからハンカチを取り出そうと大騒ぎになった。
「な、なんらこれっ！」

舌が痛くてまともに喋ることが出来ない。
まるで犬のように舌を出す美奈代の前。
フィアの戦闘服の胸ポケットから落ちてテーブルの上に転がったのは、小さな缶だった。
「大辛　一味唐辛子」
そう書かれていた。
フィアがそれに気づいて、慌てて掴もうとした時には、すでに美奈代がそれを掴んでいた。
「――――なんだ、これ」
それに対して、フィアはしれっと答えた。
「何でしょうね」

「全く……お前さんはさぁ」
顔にひっかき傷や手形を作った美奈代とフィアを前に、沈痛な面もちを見せるのは後藤だ。
「子供じゃないんだ。もう少し分別というものを持ちなさいよ。いいトシして」
「す……すみません」
美奈代は素直に謝った。
やーい。
フィアが本当に小さくそうつぶやいた。
「それと、お嬢ちゃんも」
「フィアです。おじさん」
「俺、後藤中佐」
ニヤリと笑った後藤は、自分の階級章を指さしながら言った。
「一応言っておくね？」
「わかってます」
フィアはつまらないという顔でそっぽをむいた。
「私、軍属待遇ですから」

「――まぁ、いいさ」
後藤は椅子にもたれかかりながら言った。
「殲龍（せんりゅう）の実戦での性能調査があるんだろ？整備部隊もあと少しで到着するし。しばらくは仲良くやろうや。お嬢ちゃん」
「フィアです。おじさん」
再び、後藤はニヤリと笑った。

「何考えてるんだ！」
先ほどのテントの所で、美奈代の罵声が飛んだ。
「中佐めがけて、おじさんとは何事だ！」
「……はぁ？」
フィアはきょとんとした顔になった。
その態度は恐ろしいほど尊大だ。
「何言っているの？」
「何だ、その言いぐさは！」
「……」
はぁっ。
フィアはあきれ顔で美奈代を見たあと、わざとらしいほどのため息をついた。
「あんた、悪いのは顔と性格だけじゃないのね」
「――っ！」
「目まで悪いなんて。病院行ったら？」
「き――きさ！」
拳を震わせる美奈代の前で、フィアは、無言で自分の戦闘服の襟章を指さした。
金色の横線が二本、走っていた。
「そういうこと――わかった？お馬鹿」

「ど、どういうことですか！？」
美奈代はそのまま後藤の元に駆け込んだ。
顔は悔し涙でぬれまくっていた。
「何であの娘が！？」
「しょうがないでしょう？」
後藤はやれやれ。という顔で言った。
「あの娘はすこぶる付きの“特別”なんだから」
「は？」
「本当のこと言えばさ」
後藤は周囲を見回した後、小声で言った。
「どうでもいい子なんだよ」
「……」
「どうせ、殲龍（せんりゅう）はあの子しか扱えない」
「それがわかんないんです」
美奈代は言った。
「あれって、都築達が操縦出来なくて、お蔵入りしたヤツですよね？」
「そう」
後藤は頷いた。
「脳波コントロールによる操縦システムでの運用が考えられていたんだけど、誰にも使いこなせなかった代物さ」
「それを、あの色ガキが」
「珍しい娘でさ」
タバコ、いい？
後藤はそう言ってポケットからタバコを取り出した。
「“精霊使い”なんだよ。あの子」
「“精霊使い”？」
美奈代は、そんな言葉を聞いたことがなかった。
「“精霊体調律師”とは違うんですか？」
「うーん」

タバコに火をつけた後藤は、腕組みをしながらしばらく唸った。
「あっちは……“精霊体”のお医者さんだな。“精霊使い”は、MC（メサイア・コントローラー）をさらに悪化させたような厄介者だ」
「？」
「MC（メサイア・コントローラー）は、精霊体をコントロールして、メサイアの操縦に反映させることが出来る特殊能力の持ち主だ。これに対して、“精霊使い”は、精霊体そのものを乗っ取って、我が身・我が精神として扱うことが出来る……」
わかる？
と、後藤は美奈代の顔をのぞき込んだ。
「……えっと」
美奈代は眉間に皺を寄らせた。
「ようするに、精霊体との関係の違いなんですよね？調律師やMC（メサイア・コントローラー）が接触するというか、同調といっても、むしろ協調に近い、緩い関係なのに対して、精霊使いは乗っ取るというか、強い支配関係を強要する」
「お前さんは」
後藤は楽しげに言った。
「一を聞いて百を知る」
「……当たってました？」
「そして全てを間違えて損をするタイプだなぁ」
「……は？」
「つーかさ」
後藤はむしろ哀れむような目で言った。
「なんで襟章に気づかなかったの」
「で……ですけど」
「軍隊で人見る時は、階級章をまず見るのは当然でしょ？」
「――うっ」
「年が若かったし、顔見知りだったから？そんなこと言い訳になると思う？」

「も、申し訳も」
「まあ、殴り合いは向こうにも非があるし？俺が不問にさせるけど、気をつけようよ」
「……はい」
「罰ってワケじゃないけども泉。これからしばらく、あの子の面倒見てね？」
「――――はい！？」
美奈代は目を見開いた。
「わ、私がですか！？」
「他に誰かいる？お前、隊長だろう？それとも、中佐待遇の軍属殴ったことで、営倉送られたい？」
「そっちでお願いしますっ！」
「……本っ当にキライなんだな」
「そうじゃなければ、ここまで関係がこじれることはありません！」
「俺達は、あの子の所属する実験部隊と行動を共にする。その間だけさ……あの子が生き残ればよし。残らなくても、俺達は咎められることはないさ」
「……」
「軍隊で特別扱いされてるヤツの戦死ってのは、そういうものだからね」
「……一体」美奈代は訊ねた。
「何の実験ですか？」
「その実験のおかげで、お前さんは助かったんだろ？」
後藤はチェシャ猫のような意地の悪い笑みを浮かべた。
「ありゃ、スゴいよ？」
美奈代は、後藤が何を言いたいのかすぐにわかった。
「あれは」
美奈代は、頭の中で、撤退する時の出来事を思い出しながら訊ねた。
「精霊使いだから出来たことですか？」

「んにゃ？」
後藤は言った。
「単なる殲龍に取り付けた装備がモノ言っただけ」
「じゃあ、精霊使いを駆り出す必要は？」
「その実験だけなら、意味はない」
「意味が分かりません」
美奈代は訊ねた。
「何のための実験ですか？」
「精霊使いってのは、数億に一人の割合でしか存在しない。だから、そんなヤツがメサイア扱ったらどうなるか……程度かな？」
「研究データがお蔵入りするのは明白じゃないですか」
「そう。精霊使いのデータなんて、そこまで貴重だから、収集したところで活用する場所がない分、たいした価値はない。
だから、そこに新兵器のデータ収集を加えて元とらせるつもりなのさ。
ところが、その新兵器も、そう簡単に出来る代物じゃない。
データ収集で終わるだろうさ。だから」
「……ああ」
「いずれ殲龍は実験部隊ごと解体されて、あの子は軍からお払い箱って寸法だ」
「お払い箱にされた後は？」
「本人に聞いたら？」

目の前で殲龍の整備が進んでいる。
フィアは、整備兵に混じって整備の手伝いだ。
その美しい金髪が油に汚れることも厭わず部品を運び、食料の配給を手伝い、熱心に働く。
「ご苦労様です！」
「配給です！頑張ってください！」

整備兵にかける労いや励ましの明るい声。
それは、聞く者を不思議と励ます何かを含んでいた。
整備兵達の志気が高いのも肯ける。

本当にかわいい。

美奈代でさえ、そう思う。

その華やかにして清楚な笑顔といい、優雅な仕草といい、フィアの全てが、自分がマネ出来ることは何もないようにさえ思えてくる。
染谷が惚れたというのも、この娘なら無理はないと、不本意ながら認めるしかないような、そんな気がした。
それは、女として、はっきり惨めとしか言いようのない感情だった。
「……」
フィアに声をかけ損なった。
いや。
何を言いに来たのかさえ忘れた美奈代は、殲龍（せんりゅう）を足下から見上げた。
αタイプの典型的顔立ちをした騎が、そこにはあった。
大型のアクティブバインダーを装備してるし、装甲はかなり軽量なタイプだと、一目でわかる。
武装も斬艦刀だけで、小型シールドが左腕に申し訳程度についているだけだ。
ただ……。
「……何だ？」
美奈代が気になったのは、背中についている装備だ。
巨大なランドセルにも見えるそれは、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクではない。
サイズ的にはそれより一回りは小さいが……。

「何だ？」

「沖縄は防衛に成功したけど」
後藤は言った。
「九州は、状況が全く違う」
「えっ？」
美奈代達は、きょとん。とした顔になった。
「待ってください。福岡上陸阻止戦は成功だったと」
「そこはね」
後藤の顔は固い。
警察時代、彼が“カミソリ”と呼ばれた理由。
それが、見る物全てを切り裂くようなその鋭い眼にこそあると、美奈代は本能的にそう思った。
「――泉」
「はい」
「中華帝国とその関係者が、日本全国に何人いるか知っているか？」
「えっ？えっと……」
「６０万人では聞かない」
「ろ、ろくじゅうっ！？」
「その何割かが、動いた」
「……まさか」
「祖国から密輸した武器を手に各地で輸送部隊を襲ったり、交通機関や重要施設を破壊したり、強盗に入ったり、やりたい放題だ。既に警察と軍を含めてかなりの犠牲が出ているし、あちこちで市街戦なみの騒ぎだ。
自動小銃に手榴弾に対戦車ロケットランチャー……もう武装だけは立派な軍隊だ。
さすがに警察もサジを投げた。
これは国内テロというより、準軍事行動。つまり、武装した中国

人連中は、軍人に準じて軍で始末してくれと」
「それで、軍は？」
「即刻射殺宣言。正規軍でもなく、義勇軍でもない。市民軍でもない以上、捕虜にはなれない」
「まさか！？」
「そのまさかさ。例を教えてやる。愛国心を楯に、実際は金目当てだったんだろうな。パチンコ屋に押し入った連中に、陸軍のヘリ部隊がロケットと機銃掃射しかけてケリをつけた。犯人が機銃弾で挽肉になったよ。全国放送で生中継される中だ。意味がわかるか？」
「……警告」
「そうだ。同じマネしたらどうなるかわかるな？そんな所だろう。中華系企業や在日所有の土地建物は、軍と警察が虱潰しに武器を探しまわっているが、この中継以降は大人しいものさ」
「日本の人権思想はどこ行ったんですか？」
「人権？一般の善良な市民の人権踏みにじるヤツにまで認めろっての？
　第一、拳銃だけで自動小銃で武装した集団に立ち向かう度胸が、お前にあるか？都築」
「……」
「話が逸れたな。問題は、その中華系企業が九州に持っていた佐賀県の工場だ」
「？反応弾でも出てきましたか？」
「中華帝国軍が出てきた」
「そいつはスゴい！」都築が手を叩いた。
「あいつら、兵隊まで輸出していたんですか？」
「俺もびっくりさ。連中、簡易テレポートシステムを使った」
「簡易？」
「魔法騎士が使う空間転移――テレポートを魔法科学技術を使って魔法騎士以外でも使えるようにした設備――知らない？」
「知ってはいますけど」

美晴が驚いた様子で言った。
「あれは、国際法で使用・設置が厳重に管理されています。多国間に設置する場合、国際機関への届け出と、承認が必要だと」
「中華帝国は、その国際法に批准していない」
「ず、ズルい。日本は批准国なのに」
「狡猾というより現実的なだけさ――日本政府（うちのえらいさん）も、見習って欲しいもんさ」
「隊長――それはつまり」
「どこの誰が持ち主でも、システムそのものは工場の中に収まっていたんだ。外からわかるもんじゃない。考え方によっては――福岡に侵攻した彼奴等は、このシステムを隠すための囮だったのかもしれないな」
「何ですか？それは」
美奈代はあきれ顔だ。
「数万人の犠牲が出たと聞きましたが？それが囮？」
「たった数万――しかも、犠牲の大半は韓国人だ。中華帝国軍じゃない」
「……」
「属国の兵隊なんて、消耗品さ」
「……そんな」
美奈代は、胸の中に沸き上がったどす黒い感情を表現する言葉を知らない。
黙るしかなかった。
「筑紫平野に展開したのは、推定2個機甲師団と3個歩兵師団。兵力は6万を超えている。システムのおかげで、補給は潤沢だ」
「空爆や精密誘導兵器で、システムを破壊することは？」
「周辺をミサイルや対空砲でびっちり護衛している。システムのことは衛星で確認するのがやっとだ」
「――九州全域の状況は？」
「後詰めだった熊本の機械化2個師団と、福岡の機甲2個師団。歩

兵1個師団が応戦体勢に入っているが、いかんせん、数が足りん」
「本州からの」
言いかけて、美奈代は言いようのない嫌な予感に囚われて言葉を詰まらせた。
「――まさか」
「関門トンネル、関門橋ともにやられたよ。復旧のメドさえ立っていない。在日中国人が現場付近で射殺されたり、逮捕されている」
「軍の攻撃じゃ――ない？」
「在日中国人の愛国行動とでも言おうか？関門橋の上に乗り捨てられたバンが爆発して橋は落下。九州から脱出する連中が長い車列を作っていた最中だ。死者・行方不明者は推定でも数百人は下らないだろうな」
「そ……そんな」
「福岡は上陸阻止戦で戦力を激減させている。太宰府の辺りで阻止線を張っているが、それで現状は精一杯だ。
さらに最悪なことに、連中は戦域全体に狩野粒子を散布した」
「なっ！？」

「……まさか」
塹壕に入った八式改駆逐戦車の後ろ姿を眺めながら、駆逐戦車中隊中隊長の新井中佐は顔をしかめるしかなかった。
駆逐戦車の筒先の向こうには、筑後平野が広がっている。
ずっとその先には、中国軍が我が物顔で振る舞っていることだろう。
「初デビュー戦が国内とはな」
彼が軍から与えられたのは、八式駆逐戦車１２両。
八式駆逐戦車は、狩野粒子影響下でも確実に機能することを前提に開発された砲塔を持たない装甲戦闘車両。
砲塔を持つ八式戦車の車体をベースに、前面装甲および側面上部

を上方へ延長して戦闘室を構築、ここに八式戦車そのものよりも口径の大きい１２７ミリ砲を搭載している。

海軍で余っていた１２７ミリ砲を譲り受け、無理矢理取り付けたシロモノとも言えるが、ＦＣＳ満載の１０式戦車や９０式戦車に慣れた身からすれば、それより大きい砲を持っているとしても、満足な電子機器を搭載しない戦車なんて与えられても、嬉しいはずもない。

ゲーム感覚で戦争が出来る事に慣れた世代である新井中佐にとって、アフリカや南米で戦った連中とは、数十年も昔の年寄りにしか思えない。

そんな連中の教訓に従って開発された戦車なんて、骨董品もいいところだ。

今までは、戦闘の全てをＦＣＳがやってくれたというのに――

「面倒くせぇなぁ……」

ポリポリとアタマを掻いた彼は、四苦八苦して戦車の戦闘室に入り込んだ。

赤色戦争当時、有名を馳せたヤークトパンターそっくりな外見に喜ぶ連中もいるが、その中に彼はいない。

「中隊長――司令部は何と？」

先に乗り込んでいた砲手の広野兵曹が訊ねた。

「ここで気張れとさ」

新井は答えた。

「幸い、制空権はこっちにある。上空から“飛鳥”が爆撃を加える。それでもこっちに攻めてくるなら、こいつと」

ガンッ。

新井は駆逐戦車を軽く叩いた。

「３０ミリガドリング砲搭載型の対空戦車で何とかしろとさ」

「砲兵と航空支援は、あるんですよね？」

「ああ――烈風とスカイレーダー隊が飛鳥の撃ち漏らしを始末してくれることになっている」

飛鳥――戦略爆撃機。
中華帝国軍は地表周辺で狩野粒子を散布したおかげで、高度1万メートル以上にその影響が出ていないことは確認されている。
そこに投入されるのは、日本が誇る大型戦略爆撃機。
爆弾搭載量、航続距離共にＢ－５２に匹敵する爆撃機は、アフリカ戦線で魔族軍相手に戦い抜いたベテランでもある。

「うへぇ」
飛鳥のばらまく数十トンの通常爆弾の雨と嵐を想像し、広野は身震いした。
「今度ばかりは、チャンコロが気の毒に思いますよ」
「……同感だ」

ドドドドドッ
ズズズズズッ
遠くで、雷のような音が微かに聞こえてきたのは、その時だった。

●“鈴谷（すずや）”艦内
「とはいえ」
後藤は言った。
「俺達にとって、問題はそっちじゃない」
「でも、九州は」
「おいおい」
後藤は肩をすくめた。
「近衛ってのは、俺達だけじゃないんだぜ？」
「……あっ」
「福岡に展開したメサイア部隊は無傷だし、制空権はこっちにある。連中が熊本空港を制圧するまではな」

「……」
「俺達の仕事は、連中の裏の裏をかくことだ」
「裏の裏？」
「そう。連中は、福岡に攻め込んでしくじったと思わせておいて、きっちりと佐賀に上陸した。俺達は、そのさらに裏をかく」
「？」
「作戦内容を伝える」
後藤は指示棒で手を軽く叩いた。
「対象は対島。目的は、島の奪還だ。本作戦は、陸海軍共同で行われる。まず、我々が島に上陸。残存するメサイア、もしくはメース部隊を駆逐。この際、海軍戦艦部隊からの艦砲支援を受けられる。大和級2隻が出ることになっているから、巻き込まれないように十分に注意しろ」
「島が吹き飛ぶんじゃ……」
「要塞部分は出来るだけ無傷で残せ。市街地は――尊い犠牲だ」
「……」
「なにもかも、そう都合良くはいかんよ――割り切るんだ」

●佐賀県　中華帝国軍対日征討軍陣地
辺りを静寂が包み、悪夢のような時間が終わったことを教えてくれた。
否。
耳がおかしくなっていただけだ。
耳が聴力を取り戻すと、音として入ってくるのは、負傷兵達の呻く声。
「負傷者を集めろっ！」
誰かの、そんな叫ぶ声がして、生き残ったのが自分だけじゃないと知り、心の底から安堵することが出来た彼は、それまでうずくまっていた、半ば埋まりかかった穴の中から這いだした。

「衛生兵はどこだ!?」
「しっかりしろっ!畜生っ!軍医はどこだ!?野戦看護所はどこにあるんだ!」
耳に、声は入ってくるというのに、その意味がまるでわからない。
「おいっ!」
そんな音と一緒に、瞼に火花が飛んだ程の衝撃が走った。
殴られたのだ。
「何してるんだ!」
地面に吹っ飛ばされた彼を、泥まみれの兵隊が見下ろしたかと思うと、乱暴に彼の胸ぐらを掴んだ。
「お前、衛生兵だろうが!」
強く揺すぶられた彼の意識をはっきりさせた。

そうだ。

私は衛生兵だ!

「誰か負傷したんですか!?」

「馬鹿野郎っ!」
また一発食らった。
「周りは負傷者だらけだ!誰でもいいから、手早く動けっ!」
「わ、わかりましたっ!」
彼は、すぐに殴った兵隊にとりついた。
「何してやがるっ!俺は負傷なんてしてないっ!」
「左腕が!」
メディカルバックから包帯を取り出しながら、彼は怒鳴った。
「なくなってるじゃないですか!」

その兵士を横にして、モルヒネを投与した彼は、我が身に起きた

ことを思い起こした。

自分達はただ、道を歩いていた。
田圃の中を走るアスファルトの道。
祖国とは何もかも違うが、それでも稲が育つのは、どこも同じだなと、その緑に心を和ませていた。
自分が所属する歩兵隊は、道を長い列を作って歩いていた。
その横を、トラックに乗った部隊が通り抜けようとした、まさにその瞬間までは覚えている。
何しろ、トラックの運転席にいた兵士と目があったのだ。
次に、凄まじい地震に襲われたような感じがして、その先の記憶がない。
何の音もしなかった。
何も警報も出ていなかった。
何だかわからない。

わかることなんて、目の前の光景だけだ。

周りを見回せば、それまでの見事なまでに整備された田園は跡形もない。
巨大な穴だらけの泥濘だけが、そこには広がっていた。

「……何が起きたんだ」
「空爆だ」
腕を失った兵士が言った。
「1万以上の高々度から空爆すれば、地上じゃこうなる」
「――――よくご存じですね」
兵隊の襟章を見たら、大尉だ。
二等兵の彼は、とっさに敬語を使った。
「俺は空軍から派遣された爆撃管制官だ。わかって当たり前だ」

「……出血がひどいので、これ以上喋らないでください。モルヒネをもう一本、打ちますから、眠ってください」
「……頼む」
大尉は小さく笑った。
「俺にも、会いたい家族がいるんでな」
モルヒネをもう一本投与した後、大尉が目をつむったのを確かめた彼は、立ち上がって辺りを見回した。

「敵襲っ！」
「空襲だぁっ！」

ブロロッ

遠くから、プロペラのエンジン音が響いてくる。
飛行機の編隊が、自分達めがけて襲いかかってくる姿を、彼ははっきりと見た。
「っ！」
次に彼がとった行動は、すぐ横の側溝に飛び込むことだった。

ババババッ！！

地面で激しく何かが弾ける音がして、得体の知れないシロモノが、空中をビュンビュン音を立てて飛んでいった。

「くそっ！」
側溝を流れていた水で濡れ鼠になった彼は、側溝から這いだして毒づいた。
「高々度から空爆した挙げ句が機銃掃射か？もうたくさんだろう！」
地面に等間隔で開いた穴の列。
それが何かは、病院から軍隊に送り込まれた彼でもわかる。

戦闘機の機銃掃射の跡だ。
どれ程の機銃を搭載していたかは知らないが、とにかく一発でも食らえば無事では済まない。
そう。
そこに転がっている肉片のようになるんだ。
――肉片？
彼は目を凝らし、それが何かを知って愕然とした。
肉片には脚がついている。
そして、すぐ横には、彼が側溝に飛び込むまで使っていたメディカルバックが転がっている。
つまり、その肉片とは、機銃掃射で上半身を吹き飛ばされた、あの大尉のなれの果てだということになる。
「移動できる者は集まれっ！」
まだ無事だったトラックの荷台で、指揮官らしき男がメガホンで怒鳴っている。
「前線で戦闘が開始された！急ぐぞっ！」

「空軍は何をやってやがるんだ！」
新井中佐は地団駄を踏んでわめいた。
目の前には、中華帝国軍の機甲部隊が展開している。
狩野粒子影響下でも戦闘が可能なタイプ。
Ｔ－３９型戦車と呼ばれるそれが存在することは知っていたが、新井中佐は生で見たのは初めてだった。
「Ｔ－７２がベースですかね」
「砲塔だけならＴ－３４だな――どっちにしても」

ドンッ！
すぐ間近で戦車砲が炸裂した。

耳がキーンと悲鳴を上げる。
新井中佐は顔をしかめると怒鳴った。
「俺は好きになれん！」
照準ど真ん中に入ったＴ－３９めがけて、彼はトリガーを引いた。

南米とアフリカにおける魔族軍、こと、妖魔との戦闘は、人類の戦争の概念を大きく変えてしまった。

基本的に航空戦力が出て、制空権の奪い合いとなった後、機甲部隊が前進し、随伴した歩兵部隊が土地を確保する。

結局、戦争とは護るべき土地か、戦い続ける力のいずれかを失った方が負ける椅子取りゲームのようなもの。

それまでの戦争とは、そんなものだった。

これに対して、魔族軍との戦争は、よく表現して防衛戦。悪く言えば負けばかりを強制された戦いだった。

電子装備を破壊し、レーダーを使い物にしなくなる厄介者、狩野粒子の影響と、対空ミサイル並の命中率を誇る魔族軍弓兵の防空網は、単に魔族軍の飽和攻撃以前に、人類を十分苦しめた。
ミサイルは使い物にならず、航空戦力は戦域に到着する前に墜落する。
高度１万メートルからの高々度爆撃のみが可能だが、それでも損害率は４割が相場。
精密爆撃は一切不可能。
その現実の前に、制空権という概念は早々に各国軍司令部の脳内

から消えた。

翼も目も知恵も、全てを奪われた人類に残されたのは、大砲と機関銃だけ。

大地を覆う程の数で攻めてくる魔族軍相手に、人類はほとんど生身で戦うしかない。

そう言い切っても過言ではなかった。

こうなればもう、陣地を掘って、敵を死に物狂いで凌ぎ、陣地を護り続けることが出来れば、それだけで十分な勝ち戦と言い切る――いや、言うしかなかったのだ。

しかも、

十分な。

ではない。

奇跡に近い勝利。

――こちらの方が表現としては正しい。

だからこそ、戦争中期までは、この防衛陣地確保さえ叶わず、常に退きながらも、軍は前進していると言う、奇妙な表現が当たり前のように使われていたのだ。

この流れを変えたのは、確かにメサイアだ。

メサイアの量産が可能となった戦争中期からは、メサイアが前進して妖魔達をなぎ倒し、機甲部隊が、メサイアの踵によって描かれたラインを確保する。

ラインはそのまま新しい防衛線として規定され、メサイアは再び前へと出ては新たなラインを描く。
機甲部隊は新たなラインの確保に動き――

そんな戦いが可能になったのは事実だ。
そうでなければ、いつまで経っても戦争は終わらなかったろう。

肝心なことは、人類にとって二つの大陸における戦争は、基本的に侵略的な意味での戦争ではなかったということだ。

そう。

攻めるより守ることが基本。

戦争運営の基本は、防衛が中心。

機甲部隊が華々しく前進し、妖魔をなぎ倒して土地を奪還するなんてことは基本的にやらないし、やれる余裕は誰にもなかった。

部隊を失いたくなければ、まず、陣地構築に適切な土地をメサイアで確保し、Wの字型の陣地を構築。
機甲部隊で妖魔の群を待ち伏せし、V字の谷間に誘い込んだ所を十字砲火で撃破する。
目的は、その地域の妖魔を少しでも減らすこと。
数を減らしさえすれば、その分、魔族軍の攻撃は弱まっていく。
魔族軍の妖魔の数を、ある程度減らしたところで、次の陣地構築に適した土地に狙いを定め、メサイアを前進させる。
そこが確保されて、妖魔の数が減ったら再び――

これが人類の戦法の基本だ。

この戦法においては、対機甲部隊戦を前提に開発された最新型の戦闘車両を必要としなかった。

M1やチャレンジャーなんて、戦争初期の段階で役立たずのレッテルを貼られて戦場から消えた。

アパッチ攻撃ヘリなんて見たことのある者はいない。

狩野粒子の影響で電子装備は使い物にならず、エンジンを電子制御にしようとすれば、確実にエンジンすら使い物にならない。

さらに、弓矢で戦車の正面装甲を貫通力するという、非常識なまでに強力な魔族軍を前に、戦車砲から身を守るための装甲なんて気休めに過ぎないという絶望的な意味での現実があったからだ。

戦車の装甲というものが、この時代程、軽んじられた時代もそうはなかったろう。

全ての軍で共通していたのは、装甲で魔族軍の攻撃を止めることは出来ないという認識だけ。

ならどうする？

いたずらに撃破されろと？

――違う。

答えは二つに分かれた。

そらすか――諦めるか。

矢を逸らすために曲線を多用した戦車を開発した国もあるし、あるいは命中したら諦めろと開き直った国もあるということだ。

前者の中心がアメリカやイギリスで、後者が日本やドイツだ（実際には、日本やドイツ軍の方が、戦車単体での装甲は厚い。あくま

で彼等が諦めたのは弓兵戦闘上の防御力だけ）

いざという時、従来の機甲戦闘で魔族軍を圧倒し、逆に機動性と、その数で押し切ってやろうという、都合のいい概念を捨てられなかった米英は、かつての主力戦車Ｍ４８パットンをベースとした戦車を大量生産し、戦場に送り込んだ。

これに対して、陣地防衛のための移動砲台やトーチカ程度の役割しか戦車に与えなかった日独は、パンターやヤークトパンターをベースにした八式戦車シリーズ、あるいはレオパルトやカノーネンヤークトパンツァーをベースにした戦車を送り込んだ。

両勢力の機甲部隊運用概念の違いは、機動戦と防衛戦のいずれを重視するか――そして、戦車の形状という目に見える差異となって現れた点では、極めて興味深いものがある。

どちらの判断が正しかったか？

それを判断する明確な基準はない。

損害で判断するか、或いは、撃破した妖魔の数か。

論者によって勝敗は様々であり、論議は尽きることはないだろう。

しかし、この概念の違いにおいて特筆すべきは、日独が奇しくも同じタイプの戦車を送り込んだことだ。

駆逐戦車。

砲塔を持たず、その分、装弾数や砲を大型化させた戦車達。

あくまで機動性重視の米英軍に対して、待ち伏せ戦術における火

力を重視した日独軍の性格の違いというしかない。

戦争後期においてはメサイアと随伴する英国軍が、その機動性故に他国を随分出し抜いて広い領土を確保出来たことは間違いない。ただし、その損害たるや、（対弓兵戦では）装甲を無視したドイツ軍の3倍。

新領土と呼ばれるアフリカの植民地が、一部の者から“血肉の土地”と呼ばれるのは、そのためだ。

――話を戻す。

駆逐戦車は、敵戦車の撃破を目的とした、固定式戦闘室に対戦車砲と重装甲を有する対戦車自走砲を表す。

厳密には戦車ではない。防衛戦に投入されることが多く、機動性を生かして攻撃的に運用する戦車とはその役割が異なるのだ。

主砲を半ば固定しているため、戦闘正面の転換に際しては敏捷性に欠け、砲の範囲外を指向する際に車体ごと旋回する必要があり、結果として変速機、足回りの負担が強く、信頼性に問題があるのが、そんな使い方をされる理由だ。

日本軍とドイツ軍は、機動戦をほとんど考えていなかったので、これで十分だった。

相手は魔族軍――妖魔――バケモノ――人間では、ない。

駆逐戦車は、そんなバケモノ相手に使うことを前提に作られている。

それが、人間相手に使われたらどうなるか。

九州での戦いは、まさにそれが試された。

新井中佐達は、本人達にとっては不本意だろうが、まさにそんな実験に立ち会っていると言える。

川の土手をうまく使った壕が掘られ、駆逐戦車もそこに巨体を埋めている。

地形的に、壕は侵攻してくる側からはほとんど見えない。

侵攻してきた中華帝国軍の戦車部隊は、川の向こうに敵がいるとは思っていなかった。

突然、川を渡りきった辺りで直撃を受けて、先を進む戦車の砲塔が吹き飛んで、初めて自分達の目の前に何がいるかを知った。

気付いた時には遅すぎた。

「よしっ！次発装填っ！」

こちらに向かってくる戦車に直撃だ。

砲塔基部に命中して小さい爆発が見えた。

間違いなく、装甲を抜けて中で炸裂したはずだ。

実際に戦車相手に実弾を発砲した事が初めての新井中佐は、映画のように、すぐに戦車の砲塔が吹き飛ぶ派手な光景が見られると思った。

しかし、戦車はそのまま走り続けてくる。

「馬鹿なっ、あ、あれでか？」

こっちは直撃させたんだ。

それでどうして――

「……ん？」

新井は、驚きのあまり目を離したスコープをもう一度、食い入るように見つめた。

走ってくる戦車から徐々に煙が上がっている。

砲塔がバコバコと音を立てて上下している。

――なんだ？

そう思った途端、戦車からマグマのような粘っこい光が噴き出した。

まるで、首を切られた人間から噴き出す血のように、強い光が辺りに撒き散らかされる。

新井中佐は、南部鉄器を作る実家の工場を思い出した。

そう。

あの光は、溶鉱炉で溶かされた鉄そのものだ。

つまり――

「うわっ？」

操縦手が奇妙な声を上げた。

「何だ？奴ら、中にドラゴン花火でも入れていたのか？」

――成る程？

若い連中にはそう見えるか。

噴き出す炎が戦車を包み込んでいく。

あれでは乗組員の脱出は不可能だ。

一瞬で炭にでもなったんだろう。

「――次っ！」

初撃破の感慨は何もなかった。

きっと雄叫びくらい上げるだろうと思っていたのに、炎上する戦車に何の感慨もわかなかった。

訓練通り、次の獲物に新井中佐はトリガーを引く。

それだけだった。

対馬奪還作戦　第二話

「佐賀県での戦況は――」
明日に出撃を控えた美奈代達を前に、後藤は言った。
「上々だ」
黒板には、佐賀県での戦況報告が張り付けられている。
「佐賀県内のテレポートシステムから出現した中華帝国軍は、佐賀県や熊本県方面へと侵出を開始していてるが、各地にて防衛線を構築した陸軍と海軍がその前進を阻止。
熊本で大量生産されていた駆逐戦車が工場から引っ張り出されて、自分達に襲ってくるなんて、中国人共も思いもしなかったろうなぁ」
「数的には、かなりなのですよね？」
「ああ。戦車がダメとなった途端、歩兵による飽和攻撃に切り替えてきたよ」
何が起きたかは、後藤の顔でわかる。
こういう話する時、この人は本当に楽しそうだな。と美奈代は思った。
「よせばいいのに、機甲部隊相手に集団突撃だよ。旗翻してラッパや銅鑼ならして“わーっ！”だなんて、いつの時代の戦い方してるんだろうねぇ」
「しかし」
美晴が訊ねた。
「駆逐戦車がいるってことは、対戦車陣地ですよね？なら、逆に数に勝れば歩兵が陣地に浸透、陣地を内部から破壊することは？」
「さすがによくご存じだと思いたいが、柏の発想は、陸軍の教本通りに過ぎない。言い換えれば、中華帝国軍の指揮官の発想だ」
「？」
「元から敵の集団突撃――飽和攻撃に備えた陣地を構築していた――とでも言っておこうか？日本軍の想定は、人間じゃなくて妖

魔に対するそれだ」
「まさか！」
美晴が目を剥いた。
「まさか、人間相手に妖魔だなんて！歩兵相手に対戦車戦を想定してるようなものじゃ！」
「――泉」
後藤は美晴を無視するように訊ねた。
「お前ならど思う？」
「……」
しばらく考えた後、美奈代は答えた。
「柏には悪いが、いい発想だと思います」
「み、美奈代さん？」
「小銃でも相手が出来る小型妖魔の代わりに人間。大型妖魔の代わりに戦車――ただ、それだけのことでしょう？」
「……そう思うか？」
「ただ、隊長？」
「ん？」
「アフリカでの教訓。ただそれだけと判断すべきですか？それとも」
美奈代は冷たい目で後藤を見据えたまま、言った。
「これは、何かの事態を想定した演習なのでしょうか？」
「……演習？」
「そうです」
美奈代は頷いた。
「陸軍の動きが、あまりにも整然としすぎています。混乱や齟齬が生じたという情報はない。戦力の配置から陣地構築までが、どうしてこうもスムース過ぎるのですか？私には、前々からこうなることがわかっていたようにも見える」
「……さぁね」
後藤は肩をすくめた。
「何が言いたいんだ？」

「国内での対妖魔戦闘を予め想定していた」
美奈代は答えた。
「今回は、その想定ケースを、対中華帝国軍に適用することで場をしのぐことが出来た。その意味では、この戦果は単なるケガの功名……とか」
「……国内で」
後藤は頷いた。
「対妖魔戦闘を想定するのは、アフリカや南米を見たヤツなら誰でも考える。陸軍は、国内のどこだって戦場になった場合のことを考えて、模擬戦やってるさ」
「……」
宗像は、ちらりと美奈代を見た。
口のあたりがモゴモゴしている。
何か言いたいが、上手くまとまっていない時の美奈代のクセが出ていた。
「――隊長、それはつまり」
そっと、宗像は挙手した。
“あくまで仮想”であって、妖魔が日本に現れるという“決定された未来”に備えたことではない。そういうことですか？」
「……」
宗像は、すぐに後藤が否定すると思った。
何か皮肉の一つでも言って煙に巻くだろうと、そう思っていた。
だが、後藤はまるで豆鉄砲を喰らった鳩のように目を丸くした後、わざとらしい咳払いをした。
「……ああ。そいつは」
「……」
「あくまで仮想――だ」
「本当ですね？」
「当たり前でしょう？俺は予言者じゃないし、占い師でもない。そんなことが出来るなら、俺は今頃、大もうけしてるか刑務所だ」

「後者を進んでいただきたかったものですが――いえ、何でもありません」
「ヒデえ言い方だが、とにかくだ」
パンッ
後藤は黒板の戦況報告を指示棒で叩いた。
「陣地側面に迂回。歩兵による飽和攻撃を試みた中華帝国軍だったが――残念だったねぇ。日本軍からすれば、そこは迂回出来るポイントじゃなくて、十字砲火の交差地点だったんだよ」
「そこまでバカなんですか？中国人って」
「アタマがいいヤツは、お前の１００万倍いいだろうさ。都築」
「俺、褒められたんですか？」
「そう思いなさい。人間以上相手に屍山血河を築いて戦術を磨いた国相手にするにゃ、連中はあまりに幼稚にすぎた」
「……具体的には？」
「駆逐戦車ってのは、移動トーチカでしかない。妖魔の飽和攻撃に対処するためにぶっ放したのは、お前達の使う散弾砲と同じキャニスター弾だ」
「あんなものを！？」
都築が思わず席を蹴った。
「軍は、あんなものを、人めがけてぶっ放したんですか！？」
「落ち着けよ都築――もともと、あいつは人めがけてぶっ放すために開発されたシロモノだ」
「……」
都築は、無言で椅子に座り直した。
「中国軍が行うであろう、人海戦術に対抗するために米軍で開発されたのがＭ１０２８　キャニスター弾……日本軍は、その有効性というか、“こういう事態”に備えて独自に開発はしていたんだよ。感謝しなさいよ？その技術が、お前達の散弾砲の技術につながって、おかげで今まで助かってるヤツだっているんだろうから」
「……」

「兵器の善悪なんて、誰も語る権利はないさ……とにかく、散弾の十字砲火を受けた連中はその場でミンチさ。生き残っても、火炎放射装置や対人地雷が待っている。
中華帝国軍の攻撃は、一回で壊滅的な打撃を受けておしまいさ。無論、侵攻した中華帝国軍そのものが崩壊すんぜんだからねぇ」
「どういうことです？」
「出現した場所が悪すぎたよ。テレポートシステム付近に対する集中攻撃が始まった。国鉄の誇る列車砲と陸軍のロケットランチャーに自走砲、さらにゃ、烈風改や飛鳥の集中爆撃だろう？後は」
後藤は、ニヤリと笑った。
「これからの俺達にとっての守護天使様達の手の届く所にいたからねぇ」

「――――大和だよ」
休憩室に入った所で、コーヒー片手に都築は言った。
「有明海に大和を展開させたんだ」
「大和？」
「４６センチ砲搭載艦だ。５０口径に延長した主砲の射程距離は４５キロ。有明海なら、佐賀のほとんどに届く。あいつらの艦砲射撃なんて喰らったら、無事で済むはずがない」
「佐賀県ねぇ」
コーヒーを飲みながら、芳（かおる）がぼやいた。
「佐賀県なんて、みかん位しか知らないけど」
「おいしいですよね。佐賀のみかん」
「和歌山だって、負けてませんよ」
「ああそうか。大ちゃんって、和歌山だっけ」
「はい。実家でも栽培してるんですよ？」
「覚えておかなくちゃね♪」

「はいはい。ごちそうさま」
フィアが面白そうに笑って言った。
「ところでさ?みかんって――何?」

●“鈴谷(すずや)”　艦橋
「子供達の準備は終わりましたよ?」
「ご苦労」
メインスクリーンから視線を外さないまま、美夜が小さく頷いた。
「状況は?」
「上々――そう、言うべきでしょうね」
メインスクリーンには、九州周辺の日中両軍の展開状況が示されている。
九州に布陣した中華帝国軍を示す勢力は、佐賀県の数カ所に小さく表示されているだけだ。
総攻撃が始まったのは昼過ぎのはずだ。
「福岡と熊本方面に機甲部隊を引きつけて、有明海から叩くってのは知っていましたけど」
後藤が艦橋を離れたのは総攻撃が開始される少し前。
その時の中華帝国軍の勢力は少なくともこの数倍はあったはずだ。
「陸海軍の総攻撃で、どんだけ始末したんですか?」
「推定3個師団。大和級4隻の集中砲火です。1隻あたり砲兵1個師団に匹敵するとさえ言われています。艦砲射撃に頭を押さえられたまま、上空から飛鳥の絨毯爆撃を受けたなんて言えば、壊滅は避けられないでしょうね」
「念入りというべきか、税金の無駄使いというべきか」
「日本人の死人が出るよりマシでしょう」
「……ごもっとも」
「福岡の支援のためとはいえ、戦艦部隊の中でも最悪の奴らが長崎に待機していたのは、敵にとっては悪夢でしたね」

「……大和と武蔵」
後藤は指を折りながら訊ねた。
「他、何でしたっけ？」
「信濃と紀伊です」
「羨ましいですか？」
「……そりゃ」
美夜は肩をすくめて小さく笑った。
「大和武蔵は日本の誇りなんて詩を聞きながら育った世代ですからね」
「……ああ、そうか。艦長はその世代でしたね」
「言っておきますけど、私の世代の大和は、戦闘支援艦の方ですからね？」
「もちろん。アフリカ沿岸での軍事貢献で、大和の果たした功績は、他国に戦艦建造ラッシュを引き起こしたほどですからねぇ」
「あの頃は、大和に憧れた若い世代が海軍に入営するなんて、羨ましい副産物もありましたし」
「そりゃ、今でもでしょう？海軍のＣＭにゃ、よく出てる」
「そうですね――こんな四角いブロックみたいな飛行艦より、あっちの方がお客を呼べますからね」
「拗ねないでくださいよ。そのうち、大和だって飛行艦型が建造されるかもしれませんよ？」
「そうなったら面白いことになるでしょうね――ところで？」
「大和級は有明海から離れつつあります。予定通り、長崎沖にて補給の後、対島へ」
「問題は」
美夜が睨むのは、対馬の沖合に浮かぶ小さな島。
あの天壇だ。
「魔族軍がどう動くか――ですね」
「福岡侵攻の時は、対馬にちょっかい出したそうで」
「対馬に配備されていたメサイア部隊に壊滅的打撃を与えたのは事

実です。問題は、私達が攻め込んだ時、連中がどう動いて、どちらに味方してくれるか――かと」
美夜は、後藤の顔に眉をひそめた。
「どうしたんです？」
「は？」
「何か、浮かない顔してますけど」
「そうですか？」
後藤は、わざとらしく顔を手で叩いた。
「自分じゃわかんないものですね」
「……子供達に何かあったのですか？」
「……まぁ、艦長ならいいか」
「？」
「宗像が――あいつにしては他意はなかったでしょうけど、奇妙なこと言いましてね？」
「奇妙なこと？」
「ええ――妖魔が現れることは、“決定された未来じゃないか”って」
「決定された――未来？」
「そう。すでに決まっていること……とでもいいましょうか？」
「まさか」
美夜はぷっと噴き出した。
「そんなことが」
「――考えると」
対する後藤は真顔だ。
「最近の全てが納得できるんですよ」
「最近……の？」
「中華帝国軍の日本侵攻は、極めて奇襲に近いほどのスピードで行われた。にもかかわらず、陸海軍、そして近衛は事前にわかっていたかのように部隊を配備……いや」

後藤は首を横に振った。
その顔――否、眼光の鋭い光は、美夜でさえ居すくむほど。
つまり、後藤は真剣に話しをしていることは、美夜にも分かる。

「もっと前だ――ずっと前。そう２０年前だ……軍需系企業の生産拠点分散の動きが活発化した頃。
あれ以降、戦車や戦闘機の生産は四国や九州地方で行われるようになった。
重火器や弾薬の生産もかなりを瀬戸内海の企業が行っている」

「……」

「かつては長野県や静岡が中心だった武器生産拠点は、言ってみれば日本の中心にあった。
それを西へと移動させた。
米や食料の生産拠点の開拓も九州、東北、そして北海道にシフトする政策が打ち出されたのも、北海道に世界最大級の食料生産プラントが建造したあのプランも２０年前」

「失礼。後藤さん」
美夜は言った。
「この戦争と、日本の工業、農業政策の関係は」

「あるかもしれませんよ？」
ニヤリと後藤は笑った。
「あらかじめ、この世界で何が起きるか知っていたヤツがいる。だから、それに備えて２０年もかけて日本をいじったヤツがね」

「まさか」
美夜も笑った。

「後藤さん？随分、お疲れでは？」

「事が済んだら、のんびりさせてもらいますよ。ただね？艦長。俺は別におかしくなったワケじゃないんですよ。そうとでも考えると、全てが説明できる。それだけなんです」

「中華帝国軍の日本侵攻も？」

「正確には、侵攻を受けた日本の対応が――――です」

「……」

「本来、呉が母港の戦艦部隊が、定期訓練もない時期に、長崎沖に展開していたのは何故？潜水艦隊のほとんどの戦力が、下関沖で大規模演習を、極秘に行っていたのは偶然ですか？」

「……」

「陸軍も同じ。飛鳥の部隊は、ここ数日、無期限の戦闘待機状態――反応弾を爆撃機で空中投下していた時代じゃない。反応弾を警戒するなら戦略ミサイル部隊がいる」

「……」

「おかしいのは陸軍もです。わかんなかったんですよ。今、佐賀県に展開している部隊は、新潟と静岡の戦車部隊ですよ？歩兵部隊は長野周辺の連中。九州や四国の部隊は第二線に展開している。まるで、日本中部から部隊をかき集めて、奴らに経験値を積ませていると見ても、反論できますか？この状況で」

「……しかし」

「最悪におかしいのは、我々ですよ」

「私達？」

「沖縄の次は石垣島攻略と命じられていたにもかかわらず、攻略にかかる前に九州へ戻れ。その挙げ句が、対馬に攻め込めと来た。歩

兵や機甲部隊を運ぶというのがタテマエではありますけどね？それなら、近衛にゃ、輸送艦が空いているはずだ。それを、何で使わない？」

「……後藤さん」

美夜は言葉を遮るように言った。

「それがあなたなのですか？」

「ん？」

「犬のように詮索するのがあなたなのか。それとも、犬のように職務に忠実な故に、知らなくても良いことを嗅ぎつけてしまっただけなのか」

「――狗は狗らしく」

「そう」

美夜は瞑目すると、シートにもたれかかった。

「我々、近衛兵は陛下の狗」

「狗らしく死ぬ……ですか？」

「……あなたは」

美夜は目をつむったまま、ぽつりと言った。

「狗と呼ぶには大きすぎるようですね。いろいろと」

「元警官……んなことは関係ないか」

後藤は、そのチェシャ猫のような表現に困るような顔で、“降参”とばかりに両手を挙げた。

「正義の味方――とでも言うかと思いましたよ」

美夜は苦笑気味に後藤を見た。

「ヒーローショーに出て、子供達に喜ばれるツラじゃないですけどね」

「――キツいなぁ」

「それでも、あなたは正義を――それは国家や近衛や、そんな組織の掲げる正義じゃない、自らの掲げる正義を現実にしようとする。それは棒を投げられたらくわえて戻ることを悦びとする狗のすることじゃない」

「俺は危険ですか？」

「さぁ？あなたが私の味方でいてくれる以上、あなたは危険どころか心強い。

はっきり言っておきますが、私はあなたがどこに行こうと、何を目指していようと、関係ない。

私は私の正義のために、あなたを利用する。

――あなたが、私達を利用するようにね」

「……取引は成立ですな」

「そうしましょう。さて？下らない観念論なんてどうでもいい。正義を議論しても、世の中がよくなった試しなんてない。通信？司令部から何か言ってきたか？」

●“鈴谷（すずや）”　ブリーフィングルーム

「事態はかなり切迫気味だ」

夕食前に、後藤は皆を集めた。

「強行偵察隊からの情報によって確認された。戦術型反応弾が、対馬に搬入された。

同時に、本日１２００。大韓帝国は、反応弾保有を宣言した。射

程距離が短いタイプだが、それでも広島までは届く」
「まさか！」
「東南アジアに続いて、極東でも反応弾を使用したとなれば、中華帝国軍は国際社会の報復使用を認めさせかねない。だから、属国である韓国に二、三発引き渡して、代わりに使わせることを考えたんだろう。韓国は、日本に謝罪と賠償、ついでに対馬と日本海側の全ての島嶼（とうしょ）の韓国返還を要求している」
「き、きたねぇっていうか！奴ら、反応弾でどこ狙ってるんですか！？」
「未だに宣言さえ出ていない」
「日本の反応は？」
「政府は正式な声明の一切を出していない――こういう時、いつものことさ」
「税金払うのがバカらしくなりますね」
「言うなよ都築――お前達の給料は、その税金から支払われていることを忘れるな？」
「……ちっ」
「反応弾の護衛だと思うが、大韓帝国からグレイファントムがかなりの数、対馬に入ったのが確認されている」
「歩兵や機甲部隊は？」
「対馬は元来、韓国領だそうだからな。明日には、民間航路の“復活”第一便」が釜山から出るそうだ――兵隊の動きなんて、それで大抵わかるだろう？」
「それだと、民間人が巻き添えになる恐れがありますけど」
「戦場にノコノコ行くバカがどんな末路たどろうと、兵隊の知る事じゃないよ。対馬ではすでに略奪が始まっている。火事場泥棒に情けかけてやるか？普通」
「人道家なら、国に送り返せとでも言うかと思いますが？」
「おや？お前なら、火事場泥棒なら殺してやるのが慈悲だとでも言うかと思ったぜ？宗像」

「豚の血で祖国の土を汚したくない。それだけですよ」
「ものは言い様だねぇ――――まぁ、いいさ。予想される戦力はグレイファントム４０程度。歩兵や機甲部隊は皆殺しにしてやれや」
「皆殺し？」
ギョッとなった美奈代が訊ねた。
「それは――――命令ですか？」
「命令だとして、拒否するか？」
「そこまでやる理由がわかません！」
「命令だからさ」
「納得のいく理由を求めたいです！」
「命令だ」
後藤は言った。
「韓国人に、二度とバカな発想を抱かせないように、日本の土地を欲しがるだけで、どれほど高い代償を求められるかを、やつらのＤＮＡにたたき込め」
「……」
「いいな？泉」
「……だからですか」
「ん？」
「だから、正規部隊が投入されない。私達みたいな、消耗というか、抹消や処罰が楽な部隊が対馬に投入される」
「……」
「私達、この戦いが終わった後、どうなるんですか？私は、みんなの身の安全という保証をまず求めます」
「……」
「……」
しばらく、じっと互いをにらみ合うように見つめていた後藤と美奈代だが、
「安心しろよ」
視線を外したのは後藤の方だった。

わざとらしい程、そっぽをむいた後藤が軽い口調で言った。
「用済みになったらポイってのは、お前達だけじゃない」
「それ、何の安心材料にもならないのですが」
「一蓮托生っていうでしょ？死ぬ時ゃ一緒さ」
「……」
「それとも何？お前達を切り捨てて、俺だけ助かろうとか？イヤだなぁ。俺って、そう見えるの？心外だなぁ」
「そういう長セリフが、逆に怪しいですけど」
美奈代は言った。
「少なくとも、切り捨てるにはまだもったいない。そんな立場にはいるみたいですね」
「何とでも考えろ――どうして泉はこう、被害妄想が激しいんだろうねぇ」
「上官のご指導のおかげです」
「二宮さんには言っておくよ。ただ、メサイアに乗っている以上、後続の揚陸部隊の揚陸成功の責任はお前達にダイレクトに来るぞ？揚陸部隊に無用の損害が出た場合、気の荒い兵隊達が“鈴谷（すずや）”に乗り込んできて、お前達をぶっ殺した挙げ句、死体を輪姦（まわ）しても、俺は知らないからね？その頃ぁ、俺も蜂の巣だろうし」
「……っ」
「下手すりゃ、味方が敵になるぞ？それがイヤなら、敵は徹底的に叩け。俺はそう言いたいだけ。他意はないさ」
「そう願います。それで？私達、どう動くのですか？」
「かなり忙しいぞ？
“鈴谷（すずや）”発艦の後、対馬空港を強襲し、これを制圧することが第一任務だ。
お前達の攻撃開始から1時間としないうちに、歩兵を満載した第一便が空港に入る。
間違っても滑走路を破壊するな？」

「……メサイアの撃破と滑走路の確保が最優先。歩兵の掃討は基本的に、その歩兵の仕事？」

「お前達がしくじれば、対馬空港は戦艦部隊の艦砲射撃のマトに格下げだ。

いいか？地図をよく見ろ。

対馬ってのは、大きく南北二つの島で構成されていることがわかるだろう？

北部を上島（かみじま）、南部を下島（しもじま）と呼ぶそうだ。

対馬空港はその真ん中辺にある。

お前達は、空港を制圧の後、韓国軍メサイア部隊の大多数が配備されている下島へ移動。いいか？途中のメサイアは無視していい。問題は、久田小学校と中学校の校庭に配置された反応弾だ。メサイアとの戦闘に手間取って、こいつらのブースターに火がついたとなれば、対馬どころか、日本が終わっちまう。

第一、メサイアが海に出られると、戦艦部隊でも保たない。

後ろは気にするな。上島については、考えなくていい。

福岡の部隊から増援を回してもらった。奴らに押しつける」

「本当に、いいんですね？」

「いい。空港の防衛まで面倒見切れる程の頭数はない。戦力の分断は絶対に出来ない」

後藤はきっぱりと言った。

「メサイアとにかく、メサイアを叩き出せばそれだけで、日本は航空優勢の元、戦うことが出来る。メサイアがいる限り、航空戦力は海軍も陸軍も投入できない。

そういう意味では、お前達が“鍵”だ」

「……」

「対馬を奪還することは、そのまま日本を守ることになる。お前達にしか出来ない仕事だ。胸を張って、どうどうと暴れてこい――」

健闘を祈る」

「総員起立――――敬礼」

対馬奪還作戦　第三話

●数ヶ月前の泉美奈代の日記より

昨日、０８５０時。飛行訓練のため、太平洋上空に出る。

天気は快晴。抜けるような青い空は無雲。世界にある色は青だけ。

モニターを全天視界に切り替えて飛ぶと、空に浮かんだ自分の身体が青く染まっていくような、不思議な感覚を覚える。

私はこの空が大好きだ。

空を飛んでいられる飛行訓練は、とても好き。

だから最近、近衛に入る前に海軍か民間、どっちでもいいから、パイロットを目指しておけばよかったな。と、つくづくそう思うことがある。

このことは、空を飛んだ者にしかわからないと思うのだが、気候がいいせいか、牧野中尉もほとんど居眠り同然だし、“さくら”は眠そうにうとうとしている。

この二人は、感動というものがないのだろうか。

相模湾上空で規定のコースに乗せた所で、白い航跡が1本、綺麗な飛行機雲のように海に現れた。

コースとほぼ重なったので、そのまま進んだら、とても大きな軍艦が航行していた。

戦艦だ。

あの軍事オタクの美晴あたりなら、詳しいだろうけど、私が軍艦で区別出来るのは、空母と潜水艦くらい。

きっと、大きい大砲を積んでいるから戦艦だろうという推測が出来る程度だ。

航行中の海軍軍艦を上空から見る機会なんてそうはない。

そう思った私は、針路を少しだけずらして艦のほぼ真上に出た。
ズームで甲板を見る。
甲板上を水兵達が忙しく走り回っているし、指揮官らしいのが指揮棒を振るっている。
兵隊がこき使われるのはどこも同じかな。
ふと、そんなことを思うとおかしくて笑ってしまった。
だけど――

ピーッ！

不意に、コクピットに響き渡った警報。
船をこいでいた牧野中尉が、通信モニターの向こう、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）のシートの上で飛び上がったのが、はっきり見えた。
“さくら”もぎょっ。としている。

二人ともどうしたんです？

そう、私は聞こうと思ったんだけど――

ドンッ！

突然、針路の少し先に、黒煙が立ち上った。

「何やってるんですか！」
警報と一緒に牧野中尉が怒鳴って、ＭＣ（メサイア・コントローラー）権限で操縦権が剥奪されたことが宣言された。

途端に、騎体が急旋回した。

まさか！

私は言葉が出なかった。

間違いない。

私は撃たれたんだ。

でも、相手は海軍。

私は近衛。

同じ国の軍隊なのに、どうして？

学校に戻ると宣言した牧野中尉に、その理由を尋ねたら、「後で二宮中佐にでも聞きなさい！」と、怒られた。

そのまま、牧野中尉は結局、帰還するまで口を利いてくれなかったし、操縦権を返してくれなかった。

どうしたっていうんだろう？

あれは――――事故じゃないのか？

学校に戻った途端、司令塔から二宮教官が飛び出してきた。

「貴様、一体どこ飛んできた！」

スゴイ剣幕で怒鳴るコクピットから半ば引きずり出され、胸ぐらを掴まれた。

びっくりしてしどろもどろになりながら、指示通りのルート上で飛行訓練をやっていたと報告したら頭を叩かれ、そのまま校長室へ連れて行かれた。

子供じゃないんだから、耳を掴んだままひっぱらなくてもいいと思う。

校長室では、校長と教頭がカンカンになって待っていた。

校長のハゲ頭が真っ赤になると茹で蛸みたいだ――――なんて、冗談を言ってる場合じゃない。
さんざん絞られて、自分が何をしたのかやっとわかった。

宛　皇室近衛兵団富士学校校長殿
発　帝国海軍第二艦隊副司令
本文
本日　０９３１時
貴校所属機が作戦行動中の本艦隊上空を許可無く通過。
本件は、重大なる法定違反である為、厳重に注意されたし。
以上。

営倉入り
外出止め
メシ抜き
トイレ掃除
……云々。

座学で居眠りなんてするもんじゃない。
海軍の艦隊上空を飛んじゃいけないなんて、私は知らなかったんだ。

●壱岐島沖　上空
「……とまぁ」
美奈代は顔をしかめた。
「そんなこともあった」
「あった。じゃないだろう」と、宗像がトゲのある声で言った。

「あの時は連帯責任で私達までメシ抜きだったんだぞ？」
「そ、そうだったのか？」
「そうだ。学校も、司令部に校長が監督不行届とかで譴責受けるし。お前、あれほどの騒ぎ起こしておいて他人事みたいに言うな」
「だ、だけど」
「富士学校開設以来、海軍の軍艦に撃たれたケースなんて、お前を含めて二件だけだ。どうしてお前はそう、レアな記録に挑戦したがる？」
「だれが挑戦してるか！」
「なんか、泉さんって呼吸するのと同じ要領で墓穴掘ってませんか？宗像さん」
「柏……それは真実だが、身内にそんな疫病神がいると思いたくない」
「私……散々だ。グスッ」
「前世でどんな悪行を重ねたかしらないが、他人を巻き込むな――で？」
宗像が真顔で訊ねた。
「なんの話から、泉のマイナス武勇伝になったんだっけ？」
「あれですよ」
柏騎が指さしたのは、斜め前の海面。
白い航跡を引きながら航行するのは――
「大和級改砲撃支援艦」
美晴の声が震えている。
「５０口径４６センチ砲９門、基準排水量７万トンの浮かぶ怪物――やっぱり、すごいですね。大和、武蔵、信濃、紀伊の４隻で編成される第一打撃戦隊。周辺を第三防空戦隊が護衛――鉄壁のシールドに、全てを砕く破城鎚が進んでいきます」
「あいつらに狙われるなんて、敵が気の毒だよ」
「全くです――それで、泉さんが撃たれたのはどれでしたっけ？」

「……武蔵だよ。もう勘弁してくれ。せっかく、あの美しい姿を拝んでいるんだ」
「すみません。無粋でしたね」

世界最大口径の砲を天に向けながら突き進む艨艟達。
石炭の煙をあげているわけではないし、ガスタービン推進機関から花火が上がるわけでもない。
ただ、軍艦が航行しているだけ。
それでも、戦艦というものは、ただの軍艦とはワケが違うと、美奈代達は全員がそう思った。
同じフネなのに、重みがまるで違う。
存在感が違いすぎるのだ。
駆逐艦やイージス艦がどれほど強くても、どれ程高価でも、これほどの威圧感を見る者に与えることはないだろう。
本当に、単に航行しているだけ。
それなのに、その光景は、見る者の背筋を引き締める何かがある。
ただの鉄の塊なのに？
そういうものじゃない。

戦艦。

それは、不思議なまでの偉容がある存在であり、その存在だけで、彼女が護るべき国家と、国民としての何かを刺激せずにはいられない。

戦闘機や戦車では簡単には出来ない、不可思議な力を持つ存在。

それが戦艦だ。

航行する姿を見るだけで高揚感を覚えた美奈代達は、飽きること

なく航行する大和級戦艦を見つめている。

「守るも攻むるも黒鉄（くろがね）の」

誰かがポツリと口にしたのは、軍艦行進曲。

たった、そんな一節だけなのに、

「浮かべる城ぞ頼みなる」

皆の口から、次々と続きの節が紡ぎ出される。

それはまるで、皆が自分の興奮と感激を、歌に乗せて表そうとしているかのようだ。

「浮かべるその城日の本の、皇国（みくに）の四方（よも）を守るべし」

気が付いた時には大合唱になっていた美奈代達は、遠ざかろうとする大和に心からの敬意を込めて敬礼を贈った。

「……さて」

針路を固定した宗像が呟いた。

「フネは行く行く煙は残る。残る煙が――ん？どうした？泉」

「……いや」

なぜか、美奈代は憮然とした顔だ。

「ふと、理不尽だと思って」

「自分の存在が？」

「何だと？」

「何だ？せっかく眼福モノの光景を見たばかりだろう？」

「……どうして、同じ作戦行動中なのに、あの時は怒られて、今はいいんだろうって」

「説明が必要か？」
「わかってはいる」
美奈代は言った。
「ただ、感情的に納得出来ない」
「世の中はそんなものさ」
宗像は哀れむような声で、
「理不尽ばかりがまかり通る――それで世の中回ってるのさ」
そう言った。
「そのとばっちりを受けやすいのが泉みたいなタイプというワケさ」
「バカにしてるのか？」
「笑って欲しいならお望み通りにしてやるが？」
「――結構だ」
わざとらしい咳払いの後、美奈代は言った。
「編隊全騎へ。大和の奇襲攻撃が成功するかどうかは、我々にかかっている」
美奈代達の前方には、どんよりとした雲が一面を覆っている。
「我々が敵を引きつける間に連中が斬り込む。戦闘機や攻撃機相手なら周辺の防空担当艦で十分だが」

美奈代は、一列に進む大和達の周囲を固めた駆逐艦を思い出した。
秋月級防空駆逐艦と大淀級イージス艦。
本来の海軍における水上部隊の花形達だ。
普通の戦場において、大淀級イージス艦一隻で大和級４隻を仕留めることは不可能ではない。
大和級も近接防御用のＣＩＷＳを備えてはいるが、あくまで対地砲撃支援を目的として建造された戦闘砲撃支援艦という分類名が示す通り、対艦戦なんて、二の次どころか使用目的の中に基本的に入っていない。

現代の対水上艦艇戦で使われるカードは基本が対艦ミサイル。

砲弾は攻撃手段ではなく、防御手段の内に分類されてしまう。

対艦ミサイルが主役武装となる、現代の駆逐艦と、艦艇を攻撃目標としない砲が主力武装の戦艦は、戦う土俵が元から違う以上、この二つを競わせること自体に無理がある。

そしてそれは、韓国軍の保有するイージス艦や対艦ミサイルを装備する全ての兵器に言えることだ。

対艦ミサイルに狙われたら、大和は危険な立場に立たされる。

敵はすべて引きつける位の覚悟がなければ、数千名の将兵をムダな危険にさらすことになる。

数千の命。

自分は近衛の軍人であって、海軍の面倒まで責任がとれるか。

そう言い切って、逃げたい位だ。

数千名の将兵の命なんて――私は将軍じゃない！

コントロールユニットを握る手が妙に汗ばんで、指を開いたままでいいのかさえ分からない。

「――焦るなよ」

諭すような宗像の声が、不思議と心に染み渡る。

「世界の未来が自分の双肩にかかっているなんて、そんなのはバカな政治屋か、ケツの青い子供にでも思わせておけばいい」

「私は期待されていないってことか？」

「――そう思うことで、肩の力が抜けるなら、そう思うことだ」
「そうは言うが……しくじったら……そう思うとな」
「海軍だってバカじゃないし、きっとあっちはあっちで艦隊護衛がつくはずだ。後藤隊長が言っていたろう？福岡から増援があると」
「そ……そうか！」
「そうだ」
「そうだな――丸腰で敵陣に斬り込ませるほど、海軍も近衛もバカじゃないよな。ははっ。私、何考えてるんだろう」
「――そういうことだ」
「ありがとう宗像。いいことに気付かせてくれた。全騎、すまない。引きつけられる限り、我々が引きつければいい。我々は島の中央部に攻め込む。第一目標は対馬空港。空港制圧後、下島へ移動を開始する。敵は発見次第、片っ端から殺せ」
「本当にいいんですか？」
「いい」
心配そうな美晴に、美奈代は言い切った。
「歩兵だって対空ミサイルで武装している可能性がある。下手に見逃せば、それだけで数百人を危険にさらすことになる。後衛は広域火焔掃射装置（スイパーズフレイム）装備。全てを焼き払え」
「……っ」
「何なら」
言葉を詰まらせ、顔をしかめた美晴に、美奈代は言った。
「斬り込みと変わろうか？」
「……いえ！」
美晴はきっぱりと答えた。
「私達がやるのは殺しです。一人と百人。数は違っても、やってることは変わりませんし、何より」
「何より？」
「――後衛の方が楽ですから」
「……そうか」

美奈代は頷くだけに留めた。
「斬り込みは私と宗像、そして都築でやる。後衛は美晴と山崎がつけ」
「了解」
「ちょっと！」
通信に割り込んできたのはフィアだ。
「私達は！？私と芳に涼は！さつきだっていないじゃない！」
「涼」
美奈代はフィアを公然と無視して言った。
「足手まといの護衛を頼む」
「なっ！？」
「殲龍の電波妨害で、戦域の情報網を全て制圧する。フィア？お前の敵は目の前でドンパチやる連中じゃない。目に見えない、敵の電波だ」
「……それ、違う」
怒りに震えるフィアは首を横に振った。
「私の敵は、いつだってあんたよ」
「ああ。そう――早瀬、第四種装備の涼達に接近戦は無理だ。お前の槍が頼りになる。心細いかもしれないが、二人の命は預ける」
「了解」
さつきは意地の悪い笑顔を浮かべながら頷いた。
「任されて♪涼、芳？私達は海の上でフィアちゃんを護ることが仕事よ？近づく敵は片っ端から撃墜なさい」
「で、ですけど」
芳が困惑気味に答えた。
「私達、メサイアですよ？」
「砲撃支援主体のあんた達は、逆に空の上の方が有利なのよ？わかんない？」
「――あっ！」
「そう。目立つから敵はひきつけられる。電波妨害は空の方がかけ

やすい。格闘戦に入る前から片っ端から打ち落とせる」
さつきは楽しそうに笑いながらビームライフルを装備した。
「私達の戦闘は、ワン・サイド・ゲームよ。美奈代に感謝しなさい？あんた達に背中を任せなかったんじゃなくて、命あずけてるんだから。滅多にないわよ？何も言わずに部下に命運預けることの出来る指揮官って」
「そ、そうですね」
涼は驚きながらも頷いた。
ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）の扱いには自信がある。
近づくだけでメサイアを撃ち落とせるはずだ。
一騎でも多く撃ち落としてやれば、それだけみんなの危険が減る。
私達にしか出来ないことだ！
「芳（かおる）！頑張ろうっ！」
「うんっ！」

「……はぁっ」
二人で熱をあげるのを後目に、ため息をついたのはさつきだ。
「っとにもう。美奈代ってものよ」
ぽりぽりとさつきは頭を掻いた。
「人選も展開も間違って無いどころじゃないのに、言葉ってものが足りてないのよねぇ……私達のフォローがなければ、まだ指揮官としては甘いよねぇ」
ぼやくさつきの前で、美奈代達が高度を下げ始めた。
「敵、レーダーコンタクト。こちらをみつけた模様」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）からの報告が入ったのは、美奈代達が海面で水平飛行に入った時だ。
敵のグレイファントムか？それとも戦闘機か？
「機種は？それと、美奈代が見つかった可能性は？」
「対馬空港を離陸した偵察機。斬り込み部隊が発見された可能性は否（ネガティブ）」

「フィア？」
「――――やってるわよ」
フィアは余裕の表情で答えた。
「私達は指向性のマジック・レーザー通信でしか通信できない。固定周波数をのぞいて全部潰しにかかってる。島の半分以上――――下島の８割はもう電波通信が飛んでいない。だから」
「やるじゃない。ところで、だからって、その続きは？」
「さっさと斬り込まないと危ないって事」
「へ？」
「……はぁっ。さつき？美奈代並って言われたい？」
「どういう意味？」
「バカって意味。電波妨害なんてかけたら、“これから襲いかかりますよ”ってわざわざ敵に教えてるのと同じだって事！戦場で通信が出来なければ、何か起きるって警戒するのが普通でしょう？“よーいドン”で襲ったって変わんないわ。あのバカの発想はいつだって幼稚なんだから！」
「じゃ、やめる？」
「まさか！反応弾搭載型のミサイルがあるのよ？涼、芳（かおる）？最悪の場合――――出来る？」
「その時は電波妨害をカットしてください」
芳（かおる）が言った。
「ミサイルの推進装置だけ狙います――――後は」
「後は？」
「お祈りでもして下さい」
「――――心強いお言葉で」

「第一打撃戦隊より入電！」
牧野中尉が怒鳴った。
フィアの電波妨害の直前で通信が拾えたのは幸いだったが、耳が

キーンとなるジャミングのひどさに通信のボリュームを下げるしかなかった。
　耳がおかしくなったのか。大声を出さないと自分でも自分の声が聞き取れない。
「砲撃開始っ！目標は上島方面っ！」
「早いっ！」
　美奈代は目を丸くした。
「いくら何でも早すぎるっ！砲弾が届くんですか？」
「ＧＰＳ誘導砲弾の射程は対艦ミサイル並ですからね」
　耳をトントン叩きながら牧野中尉は平然と答えた。
「８０キロで誤差１０メートルないですよ？」
「そんなに？」
「ええ。狙いは上島――私達が上島に橋頭堡を確保しようとしている。敵は大和級投入の狙いをそう見るでしょう。そうすれば」
「そうすれば？」
「下島にいるメサイア部隊が動いて、対馬空港辺りが主戦場になるでしょう」
「……って」
　美奈代は、牧野中尉の言葉の意味が分かって少し思考をフリーズさせた。
「１時間後には、歩兵を乗せた航空便が届く」
「正確には５２分３２秒です。既に第一便は空港でタキシングに入ってる時刻ですよ？」
「中止は」
「権限あります？」
「……くっ」
「第一便の中には、私達の補給物資もありますよ？それを無視出来ます？」
「斬り込むしかない、ですね」
「そういうことです。陸に乗り上げれば、敵も海に戦力を回す余裕

はないはずですし」
「私達が囮ですね」
「そのために斬り込み部隊を編成したんでしょう？」
「そうですけど」
美奈代は呻いた。
「ううっ……言うは易し行うは……」
「自業自得――命、預けますよ？」
「……了解」

美奈代の目が、陸を捉えた。
航空機用の誘導灯が光っている。
間違いない。
対馬空港だ。
そして――

「目標視認（イン・サイト）っ！全騎っ！かかるぞっ！」

「来るぞっ！」
サイレンが鳴り響き、韓国軍の騎士達がグレイファントムに乗り込む。
「バカがっ！」
機動シークエンスを開始しながら、騎士の一人が吐き捨てるように言った。
「俺達が何のためにここにいるかわかってるのか！？倭人め！」

彼等が対馬に送り込まれ背景に、実は日本軍なんて存在しない。
真相としては中華帝国軍が、アニエス達によって壊滅的な損害を被った穴埋めとして派遣されてきたに過ぎないのだ。
自分達で対処出来なかった敵に、“赤兎より性能的に劣る”グレイファントムＫＡで対応させようという辺りが、上位指揮権を持つ中華帝国軍司令部の認識を物語っている。

よく言って天壇に対する備え。
悪く言えば捨て駒だ。

ところが、メンツを重んじる韓国軍司令部は、騎士達にこう告げた。
“中華帝国軍のメサイアでは対抗できないため、貴様等の出陣が求められている”
天壇から襲ってきた謎のメサイア達は、“赤兎で対応できない”から、“赤兎より性能で勝る”グレイファントムＫＡを駆る自分達が、中華帝国軍から求められた。
そこに騎士達は満足していた。
本気で自分達より格上として振る舞う中華帝国軍将兵の鼻をあか

してやろう。相手が誰だろうと、“世界最強のグレイファントムＫＡ”で殲滅してやるんだ。と、力んでいた。

ところが、実際に攻めてきたのは、何と日本軍。

拍子抜けどころではない。

“自分達より圧倒的に格下”な日本軍なんて、戦った所で勝って当然。そんな弱い奴らと戦うだけ無駄だ。

「倭人共も思い上がりやがって！」

「俺達相手に勝負になると思ってるのか？」

騎士達の間にあるのは、そんな怒りにも似た心境だけ。

日本軍相手に勝ったと宣伝しても、自慢にもならない。

「日本軍はどこに来ているんだ？」

対馬高校の校庭で起動を終えた騎士がＭＣ（メサイア・コントローラー）に訊ねた。

「情報をくれ！」

「電波妨害が激しく、司令部とも通信不能ですが、メサイア同士のマジックコンタクトは可能」

ＭＣ（メサイア・コントローラー）は答えた。

「日本軍はどこに上陸した？どこかの部隊が接触したのか！？」

「日本軍は空港付近に上陸。すでに空港防衛隊は全滅」

「奇襲攻撃か」

「それもありますが……全く歯が立たなかったというべきでしょう。戦闘開始から全滅まで2分とかかっていません」

「じ、冗談だろう？」

騎士は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「空港防衛には2個小隊、１０騎が送り込まれたはずだぞ？」

「双方の部隊、シグナルはすでにロスト」

「第６小隊！」

彼は通信装置に怒鳴った。
「聞こえているな!?空港へ向かうぞ!」

指揮官騎が戦斧を指揮棒代わりに振るい、それに追い立てられるようにグレイファントム達が空に舞い上がる。
一般的な電波とは異なる、魔法科学技術の粋をこらしたマジック・レーダーをどうやって妨害しているのかはわからない。
とにかく、敵がどこにいて、前方にどんな障害があるのか全く不明。
障害物を避けるために彼等は無意識に高度を上げ、海に出た。
空港は海岸に面している。
方向さえ間違わなければ、海岸線をたどっていけば間違いなくたどり着ける。
彼等の動きの背景には、そんな理屈があったのだが――

ドンッ!
ズンッ!

海岸線に入った途端、彼等を待ち受けていたのは――圧倒的な破壊でしかなかった。

「2騎っ!」
「1騎目っ!」
HMC(ハイ・メガ・カノン)から空となったエネルギーカートリッジが排出される。
その音さえ爽快に聞こえてくるから不思議だ。
「2騎同時キルは、何度やっても嬉しいねぇ」
芳(かおる)は満足げに、騎体をこちらに向けた新たな獲物に狙いを定めた。
「真面目にやんなさいよ」
射線上に2騎が重なるタイミングを予測してそこめがけて砲撃を加えるなんて神業じみた芸当、私にはマネ出来ないな。と、涼はち

ょっとだけ悔しそうに顔をしかめた。
「とにかく、空港へは行かせないで！こっちで食い止めるわよ！？」
「了解っ！」

「宗像、“あれ”は引き受ける。空港制圧に動け！」
「わかった！」
海岸線から空港の滑走路に飛び込んだ美奈代は、滑走路脇に立っていたグレイファントム2騎に狙いを定めた。
相手もこちらを視認したのは間違いない。
手にした戦斧をしっかりと構え、迎撃に備えている。
飛行速度が速いせいで、敵がまるでズームアップしたようにグングンと近づいてくる。
「そこぉっ！」
右腕で斬艦刀を突き出し、右の騎を串刺しにしてのけるのと、ほぼ同時にシールドのエッジで左の騎をぶん殴った。
騎体のスピードに武器の破壊力が上乗せされたのだからたまらない。
装甲を吹き飛ばされ、美奈代騎の左右でグレイファントム2騎が吹き飛んだ。
右の騎は斬艦刀で頭を断ち切られ、左の騎は右胸部装甲が大きくへしゃげたまま、大地にひっくりかえった。
美奈代は戦果を確認することもなく宗像達に合流すべく騎体を操った。
「中尉っ！広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を！残り時間何分ですか！？」
「その調子なら」
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを準備しながら牧野中尉は言った。
「歓迎パーティの飾り付けまで出来るんじゃないですか？」
「これが」
滑走路脇を地獄の炎で掃射しながら美奈代は怒鳴った。

「歓迎ですか？」
炎に巻かれた兵士達が滑走路の脇でのたうち回って、そのうち動かなくなる。
「手荒いですねぇ」
「仕方ないじゃないですか――それで？」
「空港設備は宗像中尉達が制圧にかかっています。空港設備は今後の勝敗にモロに影響しますからね」
「揚陸部隊もあるんでしょう？」
振り向き様に、火炎放射の範囲を最大に広げた。
ゴウッ！
スプレーの様に広がった炎が、背後から迫るグレイファントム達を包み込む。
「くそっ！滑走路が壊れるっ！」
舌打ち一つ、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルをマウント位置に戻した美奈代は、斬艦刀を引き抜いた。
「グレイファントム、数１２接近中――先程の攻撃で３を焼却。それと、宗像中尉達も戦闘開始。あちらの数は７、いえ８」
「数が少ない分、代わって欲しい」
「いつだってあなたは貧乏くじを引くみたいですね。つきあう私の身にもなって下さいな」
「す、すみません……」
「謝ればいいってもんじゃないです」
「っていうか！」
美奈代は騎体を前進させ、すれ違い様に一騎を真っ二つに切り裂いた。
「何で私、怒られなくちゃいけないんですか？」
「さぁ？……あら？」
牧野中尉が異変に気付いたのは、その時だった。
「電波妨害が」
「はいっ！？」

左からの戦斧の一撃をシールドでそらし、右の騎に斬艦刀を突き立てるパターンは美奈代の定番のような攻撃方法だが、確実に相手を仕留めることが出来る分、不満はない。

隙を見せたら殺される。

美奈代は倒れようとする左騎を蹴り飛ばし、左側からの攻撃を牽制。右側へと斬り込んだ。

「電波妨害が止まりました！」

「それがどうしたっていうんです！」

戦斧ごとグレイファントムを真っ二つに断ち割り、シールドで殴り倒す。

「ツヴォルフ騎に何か起きた模様！」

「早瀬がいますっ！」

美奈代は答えた。

「あいつは、私の知っている限り、一番面倒見がいいヤツですから！」

「――了解っ！」

牧野中尉は力強く頷いた。

「仲間を信じましょう――第一打撃戦隊が、空港周辺への砲撃支援を開始すると宣言！」

途端に、警報が鳴り響き、戦況モニター上の自分の立ち位置周辺が真っ赤になった。

「大和の艦砲射撃が始まります！」

「後退ですか！？」

「ここで敵を食い止めて下さい！」

「無茶な！」

「艦砲射撃で機甲部隊を叩きます！」

「スコアは減りますけど」

戦斧をかわし、その背中に斬艦刀を突き立てた美奈代は呟くように言った。

「……任せたい心境ですね」

「ただ、なるべく、急いだ方がいいですね」
「文句は海軍に言って下さい」
「違います」
牧野中尉は答えた。
「ツヴォルフ騎が上島へ向かって移動を開始」
「フィアが？」

「諸元入力完了」
「砲塔、各部連動よし」
「弾種榴弾――信管調整高度２００で設定」
対馬沖合を航行する第一打撃戦隊旗艦大和のＣＩＣでは、主砲射撃準備が着々と進められていた。
砲弾の種類は空中炸裂するように設定された榴弾。
メサイアや装甲戦闘車両にも十分な脅威だ。
「……どうにも」
ＣＩＣから出た小沢司令は、昼戦艦橋に急ぎながら呟くしかなかった。
「ワシのようなロートルは、ああいう場所は好かん」
１８で海軍に志願して以来、４０年に渡る人生のほとんどを艦と海軍施設で過ごしたという彼は、白いものが目立つようになった頭に制帽をかぶりなおした。
「司令――対馬への砲撃はすぐですが」
「艦橋で指揮を執る。ＣＩＣには艦長もいる。コンピューターは若い者に任せて、年寄りは邪魔にならんところにおるとしよう」
ズンッ！
通路にいても腹に響く音と衝撃が身体を叩く。
一瞬、顔をしかめただけで耐え抜いた彼は、艦橋へ通じるラッタルに脚をかけた。

「やれやれ。骨身に染みるわ。コイツの見た目は、ワシと同じ相変わらずのロートルぶりだというのに」
誰に言うでもなく、小沢の口からポツリと言葉が漏れた。
「……ワシばかりが年老いていくわ」

「ちょっと、フィア！？」
さつきが騎体を殲龍（せんりゅう）の前に出して、その針路を止めようとするが、殲龍（せんりゅう）はあっさりとさつきの騎体をかわしてしまう。
「どこへ行くつもりよ！」
その針路の先にあるのは上島。
海軍が砲撃を加えているが、その目的はあくまで日本軍の上陸は上島だと思わせるための欺瞞に過ぎない。
上島方面に味方はいない。
どんな敵がいるのかもわからない。
フィアは、そんな方角へ向かおうとしていた。
しかも、
「フィア！？」
「フィアちゃん、応答して！」
邪魔がなければフラフラとまっすぐ飛び続ける殲龍（せんりゅう）にどれ程呼びかけても、返答がない。
コクピットで何か起きたのか？
通信モニター上に映るフィアの姿に変化はない。
ただ、フィアは何か焦点の定まっていないような虚ろな目をしているだけ。
騎体の動きを見る限り、フィアは意識を失ってるわけではない。
それはさつき達にもわかる。
わからないのは、フィアの身に何が起きているかだけだ。
「涼、芳（かおる）っ！フィアを止める！力ずくででも止めなきゃ！私が前に

出るから、後ろから羽交い締めにしてでも止めて！」
「はいっ！」
「フィアちゃん、悪く思わないでね！？」
涼と芳（かおる）。
二騎の手が殲龍（せんりゅう）に届こうかという所で、殲龍（せんりゅう）のアクティブ・バインダーが開き、殲龍（せんりゅう）が急加速を開始した。
「わわっ！？」
前方に回り込もうとしたさつきは、その騎体を回避するのがやっとだった。
「どこへ行こうってのよ！フィアっ！？」
「中尉、これじゃあ！」
「ちっ！」
無理な機動をしたせいでスピンを開始した騎体をなんとかねじ伏せたさつきは、苦虫を噛み潰したような顔でＭＣ（メサイア・コントローラー）に命じた。
「青山中尉、回線を“鈴谷（すずや）”へ繋いでください！後藤隊長を！」

「宗像中尉達が空港周辺のメサイア掃討を完了！」
牧野中尉が美奈代に朗報を告げたのは、美奈代が７騎目にかかろうとしている時だった。
「さっさと――――」
助けに来いっ！
美奈代はそう言いかけて、声を止めた。
今、宗像達を自分の救援に向かわせて正しいのか？
否
否だ。
「宗像っ！」
「今、都築を救援に向かわせた。もう少し耐えろ」

「都築！？消耗品に用はないぞ！」
「なんだとぉっ！？」
「うるさいっ！」
美奈代は怒鳴った。
「フィアに何か起きたらしい。都築、フィアと接触してくれ。早瀬の手に余るとなれば余程だ！」
「まさか――」
一瞬、都築の脳裏にイヤな言葉が浮かんだ。
そしてそれは、すぐに都築自身がうち消すには十分な言葉だった。
「いや、そんなはずはない」
都築は頭を強く振って言葉を頭から追い出した。
「わかった！というか、いいのか！？」
「ここは何とかする、信じろっ！」
「了解っ！」
都築は戦況モニター上にある殲龍（せんりゅう）の反応めがけて騎体を飛ばした。
「待て都築！」
「何だ？」
「お前、ロリコンじゃなかったな？」
「言うに事欠いてそれか！」
「違うな！？」
「安心しろ！俺は綺麗なお姉さんは大好き系だ！」
「うわっ……最低以上に痛いなお前」
「お前に言われたくないわ！」

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「――早瀬、都築と合流してツヴォルフ騎の様子を見ろ」
後藤は冷たい声で命じた。
「許可のない限り、止めるな」

「は、はいっ！？」
さつきは目を丸くした。
「ど、どういうことです！？」
「中佐が何をしたいのか、それを見たい」
「えっ？」
「もし、脱走だというなら、ツヴォルフ騎の撃墜は許可してやるよ。だけど、どうも違うようだから」
「そう願いますよ」
さつきは心底イヤそうに言った。
「私も都築も、仲間殺しなんて心底御免ですから」
「あいつが仲間かどうか、これからの動きで判断出来るさ」
「……っ」
「ただ、小清水と平野は泉達と合流。指示に従え。下島の通信が回復したとなれば――戦況はまずいことになる。泉達には、下島への侵攻を急ぐように伝えろ。それと、艦内待機中の風間の発艦準備を始めさせて」
「へ？」
「お前ね」
「――あっ！」
「思い出してくれたかい？韓国軍が対馬に何を持ち込んだのか」

「もう、ちまちまやってるヒマもないか！？」
8騎目と9騎目を一刀の元に切り捨てた美奈代は、そのバケモノじみた強さの余韻を味わうこともなく、接近してくる涼達に命じた。
「涼、芳（かおる）、海上で対ミサイル狙撃戦、備えろ！一発でも日本に落ちたら終わりだ――頼む！」
「はいっ！」
「了解っ！」
「後は――宗像！」

「うむ」
「３８２号線沿いに進んで対馬市街地に出たい。どう思う？」
「敵がメサイアを隠している恐れもあるが」
宗像はうーむ。と考え込んだ。
「戦力をこれ以上分断するのはリスクが大きい気がするが」
「空港の制圧維持には、柏と山崎に任せて私達２騎で強行偵察がてら、どうだ？」
「敵の数がわからんのに？」
「わからないから、だよ。宗像」
美奈代は言った。
「わからないから、偵察と言ったんだ。敵の数が上なら逃げて、頭数揃えて襲いかかればいい。こっちは、元から多い駒の数じゃない」
「割り切ったな。反応弾は、最悪、小清水達に任せるとして」
「とにかく、下島方面への揚陸部隊の支援には回らなくちゃいけない。大和達の艦砲だけに頼っているわけにもいかないだろう？」
「行くか」
「行こう」

●美津島町（みつしままち）付近

対馬の上島と下島の丁度中間部、浅茅湾（あそうわん）に面した町が対馬市の一部、美津島町（みつしままち）だ。
浅茅湾（あそうわん）のリアス式海岸のおかげで、海岸線の総延長４０３．３ｋｍと、日本一海岸線が長い町として知られる。
地形的には、標高は低いが全体に山がちで、陸地のほとんどは山で、一部には５００ｍ級の急峻な山が連なっている反面、国道沿いには大規模な店舗が出店し、対馬の新たな商業の中心地域となっている。
元から陸海軍双方の防衛隊が置かれていた関係で、海軍・陸軍共に地理にも明るいし、揚陸部隊の艇長達も何度となく訓練で慣れた

海岸であることから、揚陸部隊の揚陸地点としてこの町が指名されたのはむしろ自然だ。
狩野粒子に備えて準備された八式戦車がエンジンとキャタピラの音を響かせながら海岸に上陸を開始する。
その間近では、歩兵達が揚陸艦から飛び出していく。
美奈代と宗像は、その前面。
かつての厳原町（いづはらまち）へと通じるトンネル付近に到達していた。
「それにしても……」
美奈代は、それまで通ってきた商業地域の惨状を思い出した。
「あれはひどいな」
「……ああ」
宗像も頷いた。
「軒並み略奪された後だったな。ゴミはともかく、トイレの便器まで道に転がっているとは、朝鮮人ってのは、どこまでどん欲なんだ」
「私、犬の死体を見た。あれ、食べられていたぞ？」
「私も見た。犬を食べるとは野蛮人め。島民の脱出が行われていなければ、ゴミと一緒に死体がゴロゴロしていたろうな――考えたくない光景だが」
「同感だな」
美奈代はコントロールユニットに力を込めた。
「一気に行こう。相手に反撃のチャンスをくれてやる必要はない」
「そうだな。ところでフィアは？」

対馬奪還作戦　第五話

「ちょっと！」
無駄だとわかっている。
それでも語りかけずにはいられない。
さつきは何度、同じ事を繰り返したか自分でも忘れた程だ。
「フィア！聞こえているんでしょう！？」
返事は――――ない。
ただ、フィアの駆る殲龍（せんりゅう）は、対馬の上島上空を行ったり来たりしている。
「何だか――――」
さつき騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）、青山中尉が首を傾げた。
「何かを……探しているようですね」
「何かって？」
「わ、私に聞かれても……」
「……」
後藤隊長は、様子を見ろと言っている。
どうやら、脱走ではない。
対馬上空から出ない以上、
他の誰かと通信を行っていない以上、
それだけは間違いない。
さつきは、そう判断してほっと胸をなで下ろした。
「都築？周辺に脅威を見つけた？」
「いや？」
都築は旋回飛行を続ける殲龍（せんりゅう）を怪訝そうに眺めつつ答えた。
「こっちも何も見つけていない。それにしてもあのガキ、何やってんだ？」
「だから、私が知りたいんだって。それ」
「……えっと、本田中尉？」

都築はＭＣ（メサイア・コントローラー）に訊ねた。
「この辺について、何か情報は？」
「韓国軍の展開情報はなし。軍事施設等の事前警告もなし」
本田中尉は首を傾げた。
「浅芽湾付近……韓国軍の軍艇はすでに厳原港へ移動していますし、こんな所に何で……あら？」
殲龍（せんりゅう）が旋回を止め、降下を始めた。
「目標が見つかったようね」
さつきは通信装置に呼びかけた。
「後藤隊長、聞こえますか？」
ザザッ
通信装置は奇妙な音ばかり。
「……」
ザーッ
チャンネルを変えても、何も聞こえない。
通信が、出来ない。
「そんな？」
さつきは通信モニターを見た。
青山中尉が首を横に振っていた。
「都築？」
都築騎からも応答がない。
通信モニター上の表示は、通信がつながっていない“Ｎｏ　ｃｏｎｎｅｃｔ”になっている。
ついさっきまで、しっかりあのバカ面が映っていたのに？
ぎょっとしたさつきは周囲を確かめ、青山中尉に訊ねた。
「殲龍（せんりゅう）によるものですか？」
「……いえ」
青山中尉は真顔で答えた。
「これは――――こんなタイプのジャミングは初めてです。何があるかわかりません。警戒してください」

「――了解」
さつきは槍を自分の騎に構えさせた。
全国大会制覇を果たしたさつきの槍の技術はベテランというより、達人の域だ。
アフリカでは戦斧や剣だったから後れを取ったが、エモノが槍なら世界中の、例え二宮教官だろうと仕留めてやれる自信がさつきにはあった。
呼吸を整えたさつきは、再び青山中尉に訊ねた。
「フィアが降りた場所は？」
「えっと」
地図を照合した青山中尉が答えた。
「神社です」
「神社？」
「はい――って、これ、何て読むのかしら？……わ、わた？」
「？」
「ローマ字変換でわかりました。和多都美神社です」
「あの子、神社で願掛けでもやるのかしら？」
さつきは呟いた。
「美奈代呪い殺すなら、丑の刻参りでしょ？まだ早い気がするけど……」
ガンッ
騎体に軽い震動が走った。
「？」
見ると、都築騎の腕が肩部装甲を掴んでいた。
「聞こえるか？」
通信モニターに都築の顔が映る。
「スゴいジャミングで、接触回線しか開けない」
「うん。これ……どうしよう？」
「とにかく、下に降りたフィアをとっつかまえよう。アイツが何をしたいのか、そいつを知らなきゃ、何も出来ない」

「そ、そうだね」
「俺達も降りよう。殲龍が着地した。今なら、騎体を押さえられる」
「わかった」
さつきは騎体を降下機動に入れた。

さつきが上空から見た限り、殲龍が降りたのは鳥居の近くだが、さつきは奇妙な感じがした。
鳥居は普通、赤くて木で出来ているものだというのが、さつきの感覚だ。
それが、石造りの上に、海の上にぽつんぽつんと2つ、存在している。
そして、社殿の近くにある別な鳥居の横に殲龍が片膝をついた姿勢で着地しているのだが、すべての鳥居が、なぜか石造りの台の上に乗っているし、鳥居と鳥居の間がほとんど海に沈んでいて、参道があるようには見えない。
「何ここ？水で沈んでたの？」
「多分」
青山中尉は言った。
「海の神様でも奉っているんでしょう。水と関係があるから、参道が海になっている。鳥居があんな建て方をしているのも、鳥居同士の間が、満潮の時は沈むからでしょう。今は干潮だから、礎石が見えているだけで」
「かんちょう？」
「潮の満ち引きはご存じですよね」
「……ああ。そっちの」
「何だと思ったんですか」
「いえ……最近ちょっと、使おうかなって……その」
「納豆食べなさい。新潟生まれでしょう？」

「関係ないですよぉ。私、納豆の臭いダメなんです」
「贅沢言わない……じゃなくて、ツヴォルフ中佐、騎体を降りました」
「殲龍を拘束して、それからすぐに追います」
「了解」

さつき達は知らなかったが、フィアが降りた所は和多都美神社という。
祭神は御祭神は、彦火火出見尊、豊玉姫命。
わからなければ、日本神話に出てくる山幸・海幸伝説を思い浮かべて欲しい。
あの神話の中で、彦火火出見命（＝山幸彦）」が釣針を探しに訪れた海宮、もしくは竜宮城が、この地だとされている。
鳥居は全部で5つ存在し、外側から一の鳥居から三の鳥居までが満潮時には水没してしまう珍しい神社ではあるが、フィアに関係があるとはとても思えなかった。
フィアはアフリカにいた。
日本語を知らず、日本どころか世界の基本的な知識がかなり欠けていることは、さつきも知っている。
それが、どうして日本のこんなところに？
さつきは、殲龍の横に騎体を下ろすと、ハッチを開くと、コクピット下に設置されたラックから自動小銃――P－90を取り出し、セフティを解除した。
何があるかわからない。
それで銃を取りだしたものの、不安はぬぐえない。
「中尉、殲龍をお願いします」
気丈に平静を装っても、声が震えてしまう。
「了解。拘束は私の方で行います。外部通信が全然出来ません。何かあってもこちらでは判断できません」

「万一の場合、信号弾を打ち上げます。色で判断してください。赤なら“救援求める”、青なら」

ごくっ。

さつきは唾を飲み込んだ。

「……こいつで殲龍（せんりゅう）を回収、撤退してください」

「――――御武運を」

ジャリッ……

玉砂利の音が奇妙に大きく感じられる。

人気のない神社は、それだけで厳粛な空気を孕んでいるが、今のさつきにとって、その空気が、声を挙げて逃げ出したい程の恐怖となっている。

後ろから聞こえてくるメサイアのエンジン音が無ければ、脚が震えて動けないかもしれない。

「……都築」

銃のトリガーに無意識に指がいく。

訓練の時に何度も怒られた悪癖だとわかっているが、それでも指がトリガーに触れていないと、丸裸でいるような、嫌な錯覚を覚えてしまうのだ。

「何だよ」

ドイツ軍の自動小銃Ｇ３６を持つ都築が周囲に目配せをしながら答えた。

「フィアはどこだ？」

「奥へ歩いていった」

「奥？」

目を凝らすとと、鳥居の向こうに神社の拝殿が見えた。

「ったく、神社なんて久しぶりだぜ」

「学校の招魂社以来なら最近じゃん。月イチでお参りしてたでしょ？」

「そうじゃねぇよ」
都築は右手の親指と人差し指で、何かをつまむようにすると、それを口元に持っていって息を吐いた。
「――わかるだろ？」
「何だ」
さつきは苦笑いした。
「都築も、タバコやってたんだ」
「入営してからの禁煙はキツかったぜ？タバコ吸いたくて吸いたくて」
「ふふっ。言ってくれればニコチンパッド、分けてあげたのに」
「へ？お前、まさか」
「私、セブンのメンソールだったけど？」
「俺はマルボロさ」
「重いの吸ってたんだねぇ。私、あれはダメだった」
「……まぁ、男らしさってのは、タバコで示すみたいなところはあったな。学校の近くの神社がたまり場でさぁ」
「私と同じだぁ」
さつきは笑いながら言った。
「田舎だから、公園なんてなくてさぁ。神社の後ろでみんなで吸って、吸い殻でボヤ騒ぎ起こして大変だったなぁ」
「お？結構な武勇伝持ってるじゃないか」
「まぁね？都築はケンカでしょ？」
「ああ。そっちなら任せろ」
「誰とやるのよ。行くわよ？」
二人は銃を構えると、最後の鳥居の前で二手に分かれた。
そして、社殿を囲う白い壁に身を隠すと、そっと拝殿をのぞき込んだ。
フィアの姿は見えない。
互いに頷きあうと、さつき達はその中へと飛び込んだ。

そして――意識を失った。

「殺したのか？」

「いや」

玉砂利の上でぐったりとしているさつきと都築。

その二人を見下ろすように立つ男達がいた。

その内の一人、ボウガンを片手に持っていた男が、腰からロープを取りだして、都築の腕を乱暴にねじ上げた。

片目に眼帯をはめている厳つい顔立ちには、幾本かの傷が走っている。

がっしりとした体格を黒い戦闘服に包んでいるが、短くまとめられた髪はすでに白い。

「麻痺攻撃で気絶しているだけだ」

「ほう？殺したのかと思った」

「……俺はね？」

男は、眼帯に隠れていない方の目で、背広姿の男を睨むように見た。

「子供は殺さないことにしてるんでね」

「武器を持っている。立派な兵士だろう？サイベル」

「――まさか」

“サイベル”と呼ばれた男は二人の近くに転がっている銃を大した興味もなさげに片手で掴んだ。

「武器を持っていても、こんなのが俺達に通じるはずもない。それに、こいつらは大した訓練も受けていない。動きで分かる」

「……そうか」

「それより」

ロープを伸ばし、さつきを縛りあげたサイベルは訊ねた。

「ユギオ殿？あの娘をどうする？」

そう。
背広姿の男は、あのユギオだ。
「……まぁ」
楽しげなユギオの視線の先にいるのは、フィアだ。
しかも、フィアはまるでユギオ達なんて存在しないといわんばかりに立っている。
「“鍵”が“鍵”としての使命を果たそうとしているんだ。もう少し、見物していてもいいだろう」
「天界が動かないか？」
「動いているよ」
ユギオは嬉しそうに空に向かってニコリと微笑むと、手まで振って見せた。
「見たいなぁ。“彼女”が今、どんな顔してるのか」
「……リスクが高すぎないか？」
「ここで動いてリスクが高いのは“彼女”の方さ」
「……」
「――リスク回避のために、私もね？」
ユギオは上空を指さした。
「いろいろと細工はしているんだよ」

「くそっ」
「どうします？お師匠様？」
「最悪、あんた投入するつもりで、ヨミエル様の許可もいただいてきたけど」
監視モニターを睨む目が怒りに燃えている。
「……駄目ね。あいつ、この騒ぎを録画している」
「録画を止めることは？」
「それが狙いなのよ。頭使いなさい。このバカ弟子」
「……やっぱり？」

「何よそれ。ここで襲いかかったら、それを根拠に天界の関与――協定違反を主張するハラなのよ。あーっ。クソっ！」
「一時的な協定違反だからって行動すれば、思うつぼ？」
「そう。不幸中の幸いは――――」
「？」
「“あれ”が直接的な扉じゃない。それだけ――――でも」
「でも？」
「問題は、あれを作った時、私ね？何かとんでもないミスしてる気がするのよねぇ……若気の至りで」
「若気って、お師匠様、“あの時”確か」
「それ以上言ったら獄門よ？」
「黙ります」

和多都美神社の拝殿の奥には本殿がある。
その本殿の横。
そこにフィアは立っている。
焦点の定まらない目で見つめる先にあるのは、不思議な鳥居だった。
上から見れば三角形に組まれた鳥居。
三柱鳥居。
三本の柱で結界を張っているような錯覚さえ覚えさせる中には、石が奉られている。

「あれが？」
サイベルはそっとユギオに訊ねた。
「あんなんじゃ、わかんないよねぇ」
ユギオは感心した様子で腕を組んだ。
「あれが扉だとしたら、世界中の岩を探さなくちゃいけないもんな

あ」

スッ。

ユギオ達の前で、フィアの白い腕がそっと伸ばされる。

ビンッ！

弓で矢を放ったような、空気をつんざく音がしたかと思うと、三柱鳥居が一瞬にして吹き飛んだ。

まるで、邪魔者が消えたと言わんばかりのフィアは、石に向かって手をかざした。

不意に、フィアの手から光が放たれ、その光が石の一部を照らし出す。

光を受けた石は、卵の殻が砕けるように風化した外部の石がパリパリと割れ始め、そして、石の中からは魔法陣が現れた。

「見つけた！」

ユギオが呻くように言った。

「あれが――――扉だ！」

フィアの手から放たれる光を魔法陣全体がその光を吸い込みつくしたのか、魔法陣そのものが青白い強い光を発し始める。

広げられていたフィアの手が握られたのはその時だ。

フッ。

フィアの手から光が消え、魔法陣だけが光を放っている中、その親指と人差し指が何かをつまむように曲げられた。

クイッ

そのまま、フィアの手首が動いた。

すると――――

「おおっ！」
ユギオ達が声を挙げたの無理はない。
その目の前で、魔法陣が真っ二つに開いたのだ。
開かれた魔法陣から、辺りを真っ白に染め上げるほどの強い光がほとばしる。
「扉が開いた！」
ユギオは思わず身を乗り出した。
「これでヴォルトモード卿が復活する！」
ユギオの瞳が歪んだ希望に妖しく輝く。
「これで、私の勝ちだ！」

しかし――

扉から現れたのは、彼が期待する者ではなかった。
人でさえなかった。
「な……なんだ？これは」

「ア〝ーッ！」
監視モニターの前でスゴイ絶叫が響き渡った。
「思い出したぁぁぁぁぁっっっ！！」
「お、お師匠様？ぼ、僕、耳がキーンってしてる……」
「シルフィーネに引き継がないで、そのまま封印かけちゃったんだぁぁぁぁっっ！」

グイッ！
力一杯、その細い腕で目の前の少女の胸ぐらを掴むと激しく揺すりまくった。
ぐぇぇぇっ
少女は蛙が潰されたような声を挙げるが、その手が止まることない。
「誰よ、こんな初歩的ミスやらかしたのぉっ！――――って、悠理っ！？この私を指さしてるの意味は何っ！」
グキッ！
ミギャァァァッ！
今度は、猫が尻尾を踏まれたような声があがった。

「……成る程？」
ユギオの前。
正確には、フィアの前に現れたのは、光り輝く文字の列だった。
人類には読むことの出来ない文字の列。
ユギオを、それを満足そうに眺めると、部下に命じた。

「急げ。画像として保存しろっ！」
「は、はいっ！」
「今回は、直接の扉ではなかったが、これ自体が重大な“鍵”となるだろう」
ユギオはカメラを構える部下の前で嬉しそうな顔を浮かべたまま、フィアに近づくと、乱暴に抱き寄せた。
意識があるのか疑わしいフィアは、ユギオの胸の中に顔を埋めた。

「よくやったぞ――――玩具の分際では上等だ。褒美をくれてやろう」
グイッ
ユギオはフィアの顎を掴むと、乱暴に唇を奪った。
「――――どうだ？身に余る栄誉だろう？」
唇を離したユギオは、値踏みするようにフィアの端正な顔をしげしげと見つめた後、フィアを乱暴に突き飛ばした。
「用済みだから、すぐ消してやろうと思ったが、やめた」
携帯電話を取りだしたユギオの眼中にフィアはもう存在しない。
「運が良ければ、生き残るだろうな――――サイベル」
「ん？」
「合図をしたら、さっきの人間を起こせ。
――――ああ。私ですよ。
お元気でしたか？
おやおや、そちらは涼しいですか？
こっちはそろそろ暑くなり始めてましてねぇ。
いや、羨ましい。
……え？ああ。ヴォルトモード卿の封印ですか？
ええ。遂に情報をつかみました。天界軍が用いたＳＳ級暗号電文と同じ文法です。分析すれば封印地点を割り出せます。
そうですね……いや、さすがに姫は読みが早い。そうです。そっちの“エモノ”をここめがけて一発ぶち込んで欲しいんですよ。人類に情報を渡したくないんで。……いや、喜んでなんて嬉しいなぁ。射撃は一応、規定通りにお願いしますよ？人類どころか、天界の蛆虫どもにも分かるように。はい。では」
律儀に携帯電話を手にして一礼したユギオは、頭を下げた姿勢のまま携帯電話を胸のポケットにしまい込んだ。
「もうここに用はない。撤退開始だ」
「しかし」
サイベルは訊ねた。
「ここはどうするんだ？俺の立場上、あの情報は何かは聞かないが、

人類に知れたら問題ではないのか？」
「ああ。その通り」
ユギオは平然と頷いた。
「これはゲームだよ」
「ゲーム？」
「もう我々の勝ちが決まった出来レースだがね」

「何だ？あれは」
その光景は、“鈴谷（すずや）”の艦橋からも確認出来た。
空から走る赤い光。
まるで、対馬から天に伸びる赤い柱のようにさえ見える。
「ＣＩＣ、情報は？」
「否（ネガティブ）、光そのものは、衛星軌道上から発せられていることは確認出来ますが、この艦の分析能力を超えています」
「……ん？」
プルルッ
不意に艦橋で呼び出し音を立てたのは、後藤の携帯電話だった。
「……」
後藤は、液晶に表示された名前を見てギョッとした後、急いで携帯電話を開いた。
「――後藤です」

戦闘行動中の戦闘艦の中で携帯電話というのも珍しい話だし、乗組員としては後藤の振る舞いは常軌をやや逸していると言っても良い。
ただ、携帯電話をとる後藤の顔は真剣そのものだ。
「……はい。了解しました。海軍の艦艇には、撤退命令を出したのですね？……わかりました。メサイア隊を至急、引き上げさせます。

情報に感謝いたします……では」
携帯電話を閉じ、ポケットにしまい込んだ後藤の顔は、艦長席に座る美夜には、直接は見ることが出来ない。
ただ、その背中が発するオーラは並大抵のものではない。
「後藤さん」
それでも、美夜は立場上、言った。
「戦闘中ですよ？」
「……艦長」
「はい？」
「……メサイア隊に緊急撤収命令。可及的かつ、速やかに上島周辺から離れるように指示を。それと、“鈴谷（すずや）”は全周囲バリア展開、衝撃に備えてください」
「はい？」
美夜はきょとん。とした顔になった。
「通信、全チャンネル解放。泉達に対馬から離れるように命じろ」
「ご、後藤さん？」
「断っておきますが」
そこで初めて後藤は振り向いた。
美夜が見たのは、いつもの昼行灯然とした後藤ではない。
カミソリだった。
「これは、勅諚（ちょくじょう）です」
「……っ！」
「あの光は、魔族軍の警告です。しかも、対馬に対して、衛星軌道上からの砲撃を加えるという類のね」
「まさか！」
“あるルート”から、陛下の元へ情報が走った。警告発信時間は10分……すでに7分が経過……間に合うかな」
「陸軍は！」
「下島は衝撃波が走る程度でしょうかね……山とリアス式の地形が上手く被害をそらしてくれることを祈るしかないですな」

「……」

「あーっ。畜生！」

フィアを背負いながら、都築は愛騎の掌に乗った。

神社が壊れるのも構わずメサイアを前進させたMC（メサイア・コントローラー）の判断の後ろにあるのは、ただごとではない。

それだけは都築にも察しが付いた。

「痛たたっ……何が起きたってんだ畜生め」

「急いでください！」

同じようにコクピットに潜り込んださつきを青山中尉がせかした。

「殲龍（せんりゅう）をかかえたまま、ここから逃げますよ！」

「はっ？っていうか！」

メインスクリーン上に映し出される辺りを照らし出す赤い光。

さつきは、おろおろしながら訊ねるのが精一杯だ。

「この光はなんですか！？」

「魔族軍の攻撃が来ますっ！着弾まであと1分っ！」

「急いでっ！」

「そっちの被害無視で緊急脱出かけますっ！祈ってくださいっ！」

星が降った話

●大英帝国　ロンドン　ダウニング街１０番地
「ミラー衛星？」
「はい」
ボンド卿が、ヒースの前で写真を広げる。
「ＭＩ６の功績ですな。数日前、ミラーを搭載した衛星が、中国大陸全土から３６基、打ち上げられました」
「３６とは豪勢なことだ」
ヒースは顔を歪ませ、肩をすくませた。
「我が国ではマネが出来んな」
「うち、１２基が打ち上げに失敗し、何発かは付近の村に墜落」
ボンド卿は顔色一つ変えずに言った。
「少なくとも４つの村が焼け野原です」
「……で？」
「打ち上げ失敗分の１２基の予備衛星は魔法騎士部隊の人海戦術で衛星軌道上に設置されました」
「犠牲無視に人海戦術……羨ましい環境だな。色々な意味で」
「発射装置そのものはチベット高原に設置されたビーム兵器のシステムです」
「……ふむ」
ヒースは、苦々しげな顔で写真を手にした。
「地上から発射された光線を、衛星軌道上にある衛星のミラーにより、自在に標的へ命中させることが可能。ミラーを増やせば、地表から衛星軌道に至るまで、死角が無く射撃が可能です」
「ミラーが耐えられるのか？」
「魔族軍の技術でしょう」
ボンド卿は肩をすくめた。
「そもそも、地上から衛星に到達可能なレーザー兵器自体が、人類

の技術を超えているんです」
「……むぅ……ボンド卿」
「は？」
「これが……使用される可能性は？」
「……」
ボンド卿は、深いため息と共に、瞑目した。
「……まさかとは思うが」
「２時間ほど前です」
ボンド卿の声には、沈痛な色が含まれていた。
「日本と、そしてカンボジア戦線において、使用が確認されました」
「何だと？」

●合衆国　ＮＯＲＡＤ
「カンボジアとタイの状況は最悪です」
補佐官は言葉を詰まらせた。
「国土の８９％で数千度の熱線が走りました。最早生存者の可能性は低でしょう。そういう意味では全滅と言うより絶滅……そう言った方が良いでしょう」
「……よくもやる」
ベネット大統領は吐き捨てるように言った。
「連中には人道という概念はないのか？」
「都合のいい相手は人道を語り、悪いと無視するのはどこの国も一緒でしょう」
「それは祖国に対する批判か？」
「……何とでも」
「一発目はどこだったかな？」
「日本と韓国の境にある日本領の島、ツシマです」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「――よく無事だったわねぇ」

紅葉が心底感心した。という顔で言った。

「あんた達の悪運には敬意さえ抱くわ」

「……陸軍や海軍は」

美奈代が皆を代表して訊ねた。

「対馬の地形の関係で、着弾地点からの衝撃波は山の斜面が空へむけてそせらてくれた。だから、あれほどの攻撃でも、下島に展開していた陸軍や海軍には損害らしい損害はない」

「……よかった」

「対馬は最悪だけどね」

紅葉は言った。

「浅茅湾は地形が変わったわ。神社だっけ？都築達が脱出した地点は完全に消滅。クレーターになって海に没した――偵察機から撮影したのが、これ」

航空写真上に映し出された浅茅湾の入り組んだリアス式海岸に、はっきりとわかる円形の痕跡に、美奈代達は言葉もない。

「推定エネルギーは――難しいけどね？カンボジア戦線でのことを考えると」

言いかけた紅葉は、美奈代達をジロリと眺めてから咳払いした。

「わかりやすく言うと、艦艇用魔晶石エンジン２０隻分から３０隻分の全出力を、ＭＬ（マジックレーザー）に変換して発射しているのと同じ」

「撃ったのは、どこですか？」

「世界各国がすでに確認しているけど――チベットよ」

「チベットって、あのチベットですか？」

「どういうチベットか知らないけど、とりあえず、東経７７から１０５度、北緯２７から４０度に至る地域を占める地域。そこから発射したエネルギー体を、ミラー衛星で軌道修正して、それを対象に

ぶつけた……よく考えたわ」
「エネルギー体？」
「あんた達の使うＭＬ（マジックレーザー）と一緒。エネルギーをカプセル状の魔法作用で包み込む。それを撃ち出すだけ。この時のメリットは、大気中の抵抗によってロスするエネルギーはカプセルに使われるエネルギーだけ、目標に命中したカプセル・エネルギーは衝撃で破壊されて、中の純粋なエネルギーが解放されて――ドンッ！」
紅葉は掌を握って離した。
「放射能を出さない戦略級大型反応弾って思っても良い。まぁ、そんなの顔負けの破壊力だけどね」
「一体、誰が？」
「そんなの」
紅葉は笑って言った。
「チベットが今、どこの領土か知った上での発言かしら？」

●米国　ホワイトハウス
「次の狙いは、インドか日本、最悪、我が国となる可能性も」
「衛星を破壊することは？」
「中華帝国の発表を鵜呑みにする限り、衛星には魔晶石エンジンが搭載され、常に防御魔法がかけられています。衛星破壊ミサイル程度では蚊が指した程度でしょう」
「……かといって」
「反応弾を使用すれば、宣戦布告と同じ意味を生み出すことになります。地理的には海からの侵攻は絶望的。陸上からは、チベット高原のあらゆる自然環境が牙を剥きます」
「発射装置本体に対する、ミサイルでの処理は？」
「周辺に張り巡らされた対空陣地は、首都北京に迫る勢いです」
「どうしろと？」

「統合参謀本部から作戦が立案されています。大統領」
「……聞こう」
ベネットは、渋い顔で頷いた。
「破壊するのではなく、乗っ取るのです」
「おいおい」
ベネットは肩をすくめた。
「ハリウッド映画を見すぎたんじゃないのかい？」
「私は本気で申し上げています」
補佐官は表情を変えることもなく言った。
「これほどの兵器、手にしたいというのが、参謀本部の本音です」
「……だろうね」
「我々としては、どうあってもこれが欲しい。そのため、この地域に少数精鋭の部隊を送り込み、施設の制圧を試みます」
「中華帝国軍も無能ではあるまい？かなりの防衛部隊がいると言ったのは君達だろう？」
「ですから」
補佐官は言った。
「我々も精鋭をもって当たります。問題はありますが」
「言いたまえ――この砲を米国本土に撃ち込まれたら終わりだ。そうならないためには、私も出来る限りをしよう」
「閣下にお願いしたいのは、ただの黙認です」
「黙認？」
「我が軍は、この作戦に参加しません」
「何だって？」
「参加しない、その理由は、ここで米軍が中華帝国本土を攻撃したと認識された場合、中華帝国政府をどのように刺激するか推測がつかないからです。従って、リスクを他国にとらせることで、アメリカはそのリスクを回避することが出来ます」
「卑怯なことだ」
「中華帝国軍を刺激して、反応弾搭載型の東風でも撃ち込まれたら

アウトです」
　少し多弁になりかけたことを自覚した補佐官は、ややわざとらしく咳払いした。
「相応の見返りは与えます。ＳＡＳに頼るのは、何も我が特殊部隊の面々が、ＳＡＳに劣るというのではないのです。ご了承下さい。閣下」
「……わかった」

●“鈴谷（すずや）”
「また海外ですかぁ？」
「文句言わないの」
　いい加減にしてくれ。という顔の美奈代達に、後藤もほとほと困ったという顔になった。
「俺ぁ、近頃、二宮さんが本当にスゴい女（ひと）だなぁって思うよ」
「？」
「まぁ、いいや」
　後藤は指示棒で軽くトントンと肩を叩いた。
「タイやカンボジアで何が起きたかは、対馬のこともあるし、わかるね？」
「……」
　無言で感情のない顔つきになる。
　それが答えだ。
「次はインド……もうボッコボコにされた挙げ句、イギリス軍はマトにされないよう、自分達の部隊がどこに展開しているか、身内にさえ明らかにしていない位だ。ＥＵ世論の中には、巻き添えになることを恐れて、中華帝国との単独和議を模索する国が出始めている」
「そんな！」
「まぁ、たった一国でもそれやられたら、後はドミノ倒しだろうねぇ」

「……」
「EUも、相次ぐ被害以前に、植民地問題に民族問題に移民問題に……問題は山積。決して一枚岩じゃない。何より、自分達が生きるか死ぬかの瀬戸際だ。他国に何と言われても、国民を生かすことが一番大切さ」
「……」
「選挙ばっかり考えて、国民の生命軽く見る、どこぞの国の偉いさんよりは、ずっとマトモな対応だと、俺は思うけどね」
「……隊長」
宗像が全てを諦めきったような顔で言った。
「我々が派遣されることで、我が国、少なくとも近衛が、何か見返りを？」
「正直」
後藤は指示棒を肩から降ろし、姿勢を正した。
「――そういう意味では、俺達は人柱になる」
「人柱？」
「中華帝国政府は、極東・アジア方面からの米軍の完全撤退を要求している。言い換えてみれば、ここで俺達が行かなければ、アメリカはアジアでの戦闘から手を引きかねない。継戦能力の低い帝国軍だけであの国相手にケンカするのは分が悪い」
「そんな！」
思わず椅子を蹴ったのは都築ばかりではない。皆が驚いて立ち上がっていた。
「なんていう非常識ですかそれは！」
「怒るなよ都築」
後藤は小さくため息をついた。
「言ったのは俺じゃない」
「……っ」
「席につけ。作戦は実行される。俺達兵隊は、命令に従うだけだ」
「……」

都築は無言で床に転がったパイプ椅子を戻して腰を下ろした。
「この作戦には米軍は直接は関与しない。インド方面は英国の支配下だ。英国陸軍から第２１ＳＡＳ連隊と、魔法騎士部隊が派遣される手はずになっている」
「魔法騎士が？」
「本来なら、あいつらがいれば、メサイア扱う俺達が出る幕ないとは思うけどね。神聖国教騎士団が、ようやく重い腰あげたんだよ」
「まず目標地点は、チベット高原のここ」
後藤は背後に貼り付けられた衛星写真を指さした。
解像度が高くないのでわかりづらいが、どうやら平原らしい。
「地名さえないような辺鄙な土地さ。
このだだっ広い土地のど真ん中。
ここに攻撃衛星のシステムが設置されている。
俺達の任務は、この周辺に展開するメサイアの撃破と、周辺の制圧。
俺達がメサイアを押さえている間に、英兵（ライミー）が施設を制圧。数日間持ちこたえた後、イギリス本国から派遣される飛行艦に満載したメサイア部隊に、システムの防衛を引き継ぐって手はずだ」
「最初から」
美晴が不思議そうに訊ねた。
「その飛行艦隊で総攻撃をかけたら」
「美晴ちゃんよ……そりゃ無茶だ」と、後藤は言った。
「艦隊が集結しているなんて知れた途端、そこめがけてこの兵器が火を噴くんだよ？」
「――――あっ」
「そういうこと。美晴ちゃんは飲み込み早くて助かるよ」
何故かちらりと後藤の視線が美奈代を見た。
「……まぁ。ここで何もしなかったら帝国だって吹っ飛ばされる。
世界中が吹っ飛ぶ。そう考えれば、俺達ゃ今回、世界を救うのが仕事ってわけだ」

後藤の口元には皮肉な笑みが浮かんでいた。
「正義の味方ごっこを楽しんでみようよ。みんなでさ」

「まぁ、場所はこんな感じ――――遙ちゃん。映像出して」
モニターに三次元化された立体地図が浮かび上がった。
「時計で言ったら、9時から時計周りに1時まで、きれいに包むようにそびえる山脈の裾野にある。基本的には平野だけど、6時方向は湖と湿地帯が広がっている」
「なんだか」
宗像が呟いた。
「風水上、イヤにおめでたい土地だな」
「元は皇帝のチベット離宮があったんだ。北側に離宮の一部がまだ残っているよ」
「離宮？」
「ああ。チベット併合記念で作ったんだよ。あの国の離宮としては小さいけどさ。一度も使われることもないままに破棄されて、今じゃこの有様」
「衛星写真では小さいですけど」
「直径約3キロってところかな」
「3、3キロ？」小清水が素っ頓狂な声をあげた。
「3キロで小さいんですか!?」
「大半が庭だからねぇ。ま、俺にゃ雲の人たちの発想はわからんよ」
「国営放送とかで使われそうな景色ですねぇ」と祷子は、別に映し出されている風景画像を見て、うっとりとした声で言った。
「どこまでも続く広い平原に青い空……こんな所でお昼寝したいなぁ……」
「祷子。現地に行ったら、世界の広さと愛の深さを二人で感じ合おう」
「お姉さま……私達も」
「頼む二人とも……黙っていてくれ。今は仕事中だ」

「泉……少しは俺の苦労が分かってきたか？」
「……はい。おかげさまで」
「そいつはいいこった。ざまあみろってところかな」
「……くっ」
「大尉？胃の辺りを押さえてどうなさったんですか？」
「いろいろあるんだ。とにかく後藤隊長、指示を下さい」
「指揮官は胃に穴あけて一人前さ。さて」
後藤は指示棒で軽く肩を叩いた。
「今回の作戦は、極めて危険な作戦だ」と、後藤は真顔で言った。

何を言ってるんだ？
一瞬、美奈代はそう思った。
今まで楽な作戦なんてさせてもらった覚えは……。
……ああ。
そういうことか。

「中華帝国の国土に侵入し、施設を強襲する。わかる？これは完全な、中華帝国に対する侵略戦だ」
「外交上の危険ってことですか？」
「その通りだよ」
「待ってください。隊長」
都築が挙手の上で異議を唱えた。
「あいつらは他国を平気で侵略しているじゃないですか。それに比べたら」
「他国を攻めることに鈍くても、攻められることには敏感になるものさ。誇り高き漢民族ドノが、国土を日本軍に攻め込まれたなんて知った日にゃ……」
後藤は態とらしく肩をすくめた。
「イヤイヤ……俺はおっかなくて日本にいられないよ」
「……反応弾でも使いますかね」

「実際、松本に魔力反応爆弾ぶち込んだからねぇ……不発だったけど」

そうだ。

美奈代は、その一言で中華帝国軍の危険性を改めて思い出した。

敵対するには、連中は本当に危険すぎる。

「だから俺達は、国籍マーク一切出さないからね？残留品を残さないように注意して。万一、騎体が破壊された場合、ハイパーナパームで焼却する」

「そこまで」

「日本軍だって証拠残してご覧？俺達が戻ったら頃にゃ、東京が砂漠になってるかもしれんのだぜ？」

「……」

「これは、日英米、三軍の共同作戦ではある。

米軍は軍事衛星でサポートしてくれる。

イギリスはＳＡＳを出す。

俺達はメサイア出して現地を制圧し、英国飛行艦隊到着まで持ちこたえるのが役目だ――フィアちゃん」

「はい？」

「悪いけど、単独で行動してもらうよ？フィアちゃんの騎の空中機動性と、電子戦闘能力を使わせてもらう」

「何をするんです？」

「この目標周辺の通信設備の破壊とジャミング――まぁ、一言で言えば、基地と外部の通信全てをつぶせとも言えるけどさ」

「……わかりました」

「部隊は５つにわける。

泉と風間で第一斑、泉隊と呼称。切り込み任務。

宗像、都築、早瀬で第二班。宗像隊と呼称する。制圧・掃討任務。

柏と山崎、第三班。山崎隊と呼称。狙撃チームの護衛。

第四班は狙撃チーム。

第五班はフィアちゃんね」

「了解」
「手順はこうなる。作戦開始は０４００。ベンガル湾に展開する“鈴谷(すずや)”から発進。途中、ＳＡＳの部隊と合流し、部隊を護衛しつつ移動。現地到着予定０５４０。
時計を前提に話をする。
時計の中心に目標があると思って。そんなものだから。
１２時方向距離２キロの所に、メサイアの陣地がある。
まず、宗像隊、山崎隊、狙撃隊はすべて7時に展開。
４時には泉隊が展開。
まず、泉隊がメサイア部隊を引きつけるため、陽動としてメサイア陣地へ移動を開始。
泉、決してまっすぐ飛ぶな？３２１時の位置を舐めるように動け。
それで十分な時間は稼げる。
フィアちゃんはこの時点でジャミングを開始して。
狙撃隊と山崎隊は9時の山頂に移動し、対空砲等、有害な設備は全て排除。
宗像隊はＳＡＳのヘリ部隊が強襲を開始する前に地上を掃討する。
この兵器が敵の手から奪えるなら、戦局は大きく変わる。しっかりやってくれ。以上だ」

「結局よぉ」
ベンガル湾上空で“鈴谷(すずや)”から発艦した都築は、独り言のように言った。
「これってイギリスのボロ儲けってことだろう？」
「都築もそう思うか？」と宗像が言った。
「ああ」都築は頷くしかない。
「かつで帰るわけにもいかない以上、英国はこの施設を破壊するか占領下に置く必要がある……つまり」
「……チベットの併合」
「チベットは地下資源の宝庫であり、それ故に中華帝国は１９５０

年代に武力併合に至ったと聞いたことがある」
「宗像……俺達ゃ本当に何と戦ってるんだ？」
レシーバーに都築の苦笑が混じる。
「戦争って言われてこの方、俺は半分以上を海外で戦っている気さえする。アフリカ、東南アジア……沖縄……人類のためって言われて、肝心の人類様と戦っている。俺ぁ、自分達の敵ってのが一体、誰なのかわかりゃしねぇ」
「――――都築」
美奈代が言った。
「お前、騎士って言葉の語源知ってるか？」
「いや？」
都築は首を横に振った。
「元は貴重な武士（もののふ）の意味だというが、父に言わせると違うそうだ」
「違う？そんなはずはないだろう」
宗像が異議を唱えた。
「それは辞書にも載っている」
「……問題は騎の字だよ」
「ん？」
「古くは棋士と書いたそうだ。現在では将棋のプロのことだが、我々騎士に対しては……将棋の駒って意味になる。時代の流れの中で、騎の字に変わっただけだ」
「……くっ」
「わかるだろう？駒は無駄遣いしていたら負ける。有効に使ってこそ意味がある。貴重な駒なら尚更……」
「俺達ゃ、兵隊だからな」
「そうだ。駒が動く理由を考えても意味はない。割り切れ……都築。我々は世界を動かす英雄なんかじゃない。単に軍隊から給料をもらってる兵隊だ。――――風にはなびけ。さもなければ折れるぞ」
「……」
はぁっ。

都築は盛大なため息の後、言った。
「泉」
「ん？」
「――俺とつきあえ」
「どこへだ」
「そうじゃねぇよ……ニブいな」
「何？」
「つまり、俺とつきあえってこと」
「だからどこへ？」
「……都築」
宗像が言った。
「泉を口説きたかったら実力行使しかないぞ。強引にキスを奪ってわからせるしか」
「そうか……こ、小清水っ！？ＨＭＣ（ハイメガハノン）の照準レーザーをこっちに照射するなっ！」
「一体、何の話だ！」
「……あんたがバカだって言っていたのよ」
「フィア！？」
「聞いていて笑うの通り越して痛かったわ。本当に残念なヒトね。あなたって」
「痛いとか残念とか……」
美奈代は不愉快そうに視線を前方にむけた。
「いいから任務に専念しよう！前方、ＳＡＳ部隊と接触まで１分だぞ！？」
「逃げた逃げた♪」
「さくらっ！」

「こちらホテル１。マクミラン大尉だ。よろしく頼む」
「こちらウィスキー１。よろしく」

「国連軍最強部隊の護衛とはありがたい。大船に乗った気持ちでいる。施設内部の制圧は任せてくれ」
「頼みます」

国連軍最強部隊。
その奇妙な言葉に首を傾げつつ、美奈代は部隊に命じた。
「全騎、散開してポイントにつけ。私と風間はこのまま前進。陽動を兼ねてメサイア陣地に攻め込む」
「了解。武運を祈る」

フィア騎がレーダーを黙らせる中、山間部を抜け、美奈代達は宗像達と分かれた後、大きく旋回する機動をとった。
「私達が囮ですよね？」
「そういうこと。……そろそろね」
レーダーが著しく乱れ始めた。
フィアの電子妨害が強まった証拠だ。
山間部をぬけた先にあるのは、見とれそうになる美しき世界。残念だが、二人とも広い平原に青い空に見とれているヒマはなかった。
平原に強行着陸しようとして、美奈代はやめた。
「風間、飛行したままで行く」
「えっ？」
同じく着陸しようとした風間はその声に思わず着陸を止めた。
「メサイア用地雷がまかれていたらアウトだからな」
「……成る程？」
ジャミングの影響でセンサーが地下の様子を伝えてこない。
それだけに、用心した美奈代の判断は正しいと祷子は思った。
「超低空侵入、いくぞ？」
「はい♪」

「敵襲だと！？」
突然の奇襲に泡を食ったのは中華帝国軍第８２３メサイア中隊だ。
サイレンが鳴り響く中、騎士とＭＣ（メサイア・コントローラー）がメサイアに駆け上る。
「なんでこんな所へ！？」
「知るか！」
張少尉はＭＣ（メサイア・コントローラー）に怒鳴りながらコクピットに潜り込んだ。
「敵に聞いてくれ！」
「了解っ――――敵、新型騎。所属、国籍不明、急速に接近中！」
「対空部隊は寝ているのか！？全騎、弾幕張れっ！脚を止めろっ！」
３７ミリ機関砲を構えた帝刃（ていば）達が一斉に引き金を引いた。
火線が走り、平原を超低空で侵入する白い敵騎めがけて襲いかかる。
火線に接触するか否かの刹那――――

バンッ！

二騎は地面をつま先で蹴った。
その途端――――

「なっ！？」
張は目を見張った。
敵騎が一瞬、姿を消したのだ。
機関砲弾が、何もなかったように敵騎の向こう側に消えていく。
「ど、どうやったんだ！？」
空中移動中のメサイアの機動性は大型爆撃機並。
だからこそ、メサイアは戦場で飛行することは滅多にしない。
なら、今の地面に脚がついている時と同じ機動は？
張は、ＭＣ（メサイア・コントローラー）に何が起きたかを聞こうとした。
だが、

ピーッ！

接触警報がコクピットに鳴り響いたのと、敵騎が自分の横をすり抜けるのと、コクピットめがけて光を放つ剣が襲いかかろうとしているのが、モニター一杯に映し出されたのは同時だった。

張は、答えを知る前に絶命した。

帝刃を横薙ぎの一撃で真っ二つにし、返す刀で別な騎の脳天を唐竹割にする。

振り下ろした斬艦刀を別な騎めがけて突き出す。

この一連の動きを、美奈代と祷子は何の事前打ち合わせもなく、完全にシンクロした状態でやってのけた。

この間、わずか3秒にも満たない。

わずか3秒で、敵メサイア6騎があの世行きだ。

「相変わらず……お見事すぎ」

牧野中尉も舌を巻くしかない。

さくらも目を丸くして頷くだけ。

「中尉！」

美奈代は怒鳴るように牧野中尉に尋ねた。

「敵の増援の可能性は？」

「ご希望でしたら」

牧野中尉が言った。

「陣地にまだ4騎残っています」

「風間、陣地を潰すぞ。続け！」

「了解」

宗像隊が7時ポイントから侵攻を開始したのは、その時だ。

「小清水です！」

山間部に陣取った狙撃隊の涼からだ。

「狙撃開始します！ＭＬ（マジックレーザー）を潰しますから、それが終わってから侵入してください！」
「宗像だ。了解した――頼む」

「芳（かおる）！寧々（ねね）ちゃん！」
「やるよ！？」
「……いきます」

狙撃地点から見ると、丁度、鉄道の向きを変える丸い天車台のような施設が見える。
真ん中に大きな穴が開いていて、カバーが閉まっているので中はうかがい知る事が出来ない。
「あの中に目標の兵器が？」
「そうです」ＭＣ（メサイア・コントローラー）の高良中尉が頷いた。
「攻撃は絶対厳禁、ＭＬ（マジックレーザー）はマーカー済みです」
「了解。マーカー１から片っ端で」
「了解。トリガーをどうぞ」
マーカー１。小型のＭＬ（マジックレーザー）砲座めがけて、涼はトリガーを引いた。
次の瞬間――
「えっ！？」

涼にとって信じられないことが起きた。
ＭＬ（マジックレーザー）砲に、ＨＭＣの砲撃が届いていない。
ＨＭＣの砲撃は、まるでかき消されたかのように、空中で消滅した。

「――ね？」
それを別な場所で見守る一団がいた。

その中に一人、黒いドレスをまとった美女がいた。
あのダユーだ。
「このシステムは、元来、飛来する天体障害物破壊用に作られたものです。当然、システム自体、超高速で飛来する物体から守る術がなくてはいけない」
「ＭＬ（マジックレーザー）もですか」
美女の説明を聞いていた男が引きつった顔で言った。
「どうやって？」
「それが、魔界の技術ですよ？」
ダユーは楽しそうに微笑む。蠱惑的な笑みを見るだけで、男は恐怖を忘れてしまう。
「不思議ですねぇ」
「ははっ……とにかく、助かった」
「そうですね。……さて」
ダユーは視線を窓の外に向けた。そして、独り言のように呟いた。
「……私をどこまで楽しませてくださいますの？人類？」

「バリアだと！？」
ＨＭＣが目に見えない何かによって阻止される光景は、宗像騎からも見えた。
まるで手品か映画でも見ているような、しかしそれは現実の光景だった。
「このままでは！」
宗像は時計を見た。
ＳＡＳ部隊、つまりヘリ部隊がここに到達するまでの時間はあとわずかだ。
ここでバリアに手間取っていたら、部隊は全滅。
ここに来た意味が無くなる。
「優っ！あのバリアについて情報を！」
「はい。サーチ開始します！」
再び、ＨＭＣと狙撃砲の攻撃がバリアに命中し、無力化された。
「小清水！弾薬は限りがある！こちらでバリアの破壊を試みるから、それまで待機しろ！」
「は、はいっ！」

「今、わかりました！」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の優から、その声が届いたのは、ほんの１分足らずのはずなのに、その時間が恐ろしく遅く感じられた。
「このバリアシステムは、地下埋没式。地下から地上にバリアとなるエネルギーを噴水のように放出し、上空で対象を覆い尽くす仕組みです」
「コントロールしているのは！」
「回答不能。データ不足」
「――――っ！」

「ただ、破壊方法はわかります」
「ん？」
「バリア外周部に沿ったチューブからエネルギーを放出する仕組み。つまり」
「チューブの破壊は可能か？」
「最も手近には、２時方向、５０メートルに点検用と思われるハッチがあります。そこに手榴弾を。チューブが破壊されれば」
「よくやった優！」
宗像は、手榴弾をサイドスカートのウェポンラックから取り出しながら言った。
「後でご褒美くれてやる！」

ズドンォォォム！
鈍く粘っこい音がしたかと思うと、地震が襲った。
「３番バリアシステムに障害っ！同区画バリア停止！」
連続した爆発がひっきりなしに続く。
天裁司令部は、突然の出来事に大混乱だ。
「山からの狙撃！防空施設が次々に破壊されていきます！」
「メサイア部隊はどうした！１０騎もいるんだぞ！？」
「すでに全滅！」
「全滅！？」
「メサイア陣地は敵に制圧されました！」
「何と無様な！相手はどこの国だ！？」
「国籍不明！国籍を断定出来る要素なし！」
「増援の可能性もか！近隣の基地へ救難を出せ！」
「レーダーは全て沈黙！敵の妨害が激しく、通信が飛びませんっ！」
「――――成る程？」

右往左往する周囲に、ダユーは笑みを浮かべて頷いた。

通信網の遮断。
バリアの無力化。

奇襲攻撃としては、理にかなった戦い方だ。

「まぁ……正解かしら？」
「あ、あのっ！」
ダユーの横で事態を見送っていた男が、震える声で訊ねた。
「こ、これは一体！？」
「こういうのはですね？」
ダユーはにっこり笑って言った。
「奇襲攻撃っていうんですよ？」
「そりゃわかりますけど！」
「防衛部隊の頑張りに期待しましょう」
「しかし！メサイアはもう！」
「……そうねぇ」
ダユーは少し考えた後、ハンドバッグから携帯電話を取り出した。
「……あ、アニエス？私」
まるで友達に語りかけるような口調のダユーが平然と言った。
「出番よ？」

「次行くぞ！」
手榴弾の爆発。そしてバリアの無効化を確認した宗像は通信装置に怒鳴った。
「都築、早瀬！ＳＡＳが入り込む余地を作るだけでいい！対空兵器を探してたたき壊せ！歩兵携帯用のミサイルランチャーに注意しろ

よ！？まともにくらったら、“白雷（はくらい）”でも危ないぞ！」

シュウウウウッ……。

突然、そんな音がして、アスファルト製の地面から煙が立ち上った。

もうもうと立ち上る煙は、まだ白雷（はくらい）の膝丈までだが、急速に白雷（はくらい）を包み込もうとしていた。

「何だ？」

「警告！」

優が怒鳴る。

「レーダーに障害発生！周辺状況が掴めません！」

「狩野粒子か！全騎！周辺警戒。新たな敵が来る可能性大。都築、早瀬。背中は任せるぞ？このままではＳＡＳが突入出来ない」

都築騎の目の前で、宗像騎が移動を開始した。

都築が、その背中をちらと見た、まさにその時だ。

ズンッ！

そんな、音がした。

「――――えっ？」

都築は、目の前で起きたことが理解出来なかった。

宗像騎の背負った広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンク。

そこに突然、棒が突き刺さった。

都築にはそう見えた。

その目の前で、ゆっくりと宗像騎が地面に倒れていく。

「む、宗像？」

それはさつきも同じだった。

否。

宗像騎を真横から見ていたさつきは、宗像騎の腹部装甲が内側から吹き飛んだように見えた。

「……」

呆然とする二人を現実に引き戻したのは、それぞれのＭＣ（メサイア・コントローラー）の怒鳴り声。

「宗像騎、損傷！」

「ど、どうするのよ！」

「いいから早瀬！リキッドタンクに突き刺さったコイツを抜くぞ！椿少尉！さっきのはどこから！？」

都築騎が乱暴に掴んだのは、宗像騎に突き刺さった棒――槍だ。

「タンクからリキッドが漏れている！このままじゃ宗像は火葬だ！」

「――宗像だ」

二人の耳に宗像の声が響く。

「騎体の脊椎は無事のようだ。すまんな。油断した」

「騎体がリキッドまみれだ。電源落とせ。それと、脱出出来るか？」

「メイン電源はすべて、さっきのショックで飛んだ。優とエンジンはマジックエジェクトさせた。私も脱出する」

「マジックエジェクトなら大丈夫だな」

「残念だが。私の分は、作動しない。さっきの攻撃でやられた」

「なるべく離れて、ＳＡＳと合流しろ。このままじゃ、白雷（はくらい）ごと火葬にされちまう。脱出に爆破ボルト使うなよ？リキッドが引火するぞ？」

「了解。宗像、現時刻をもって騎体放棄（ベイルアウト）する。ベイルアウトの後、一切の通信は出来ない」
「えっ？」
「脱出する」
「ち、ちょっと待て宗像！」
都築は驚いて宗像の姿を探すが、宗像は煙幕の中に消えて見ることは出来ない。
「いっ、一体？」
「少尉」
都築はＭＣ（メサイア・コントローラー）からの声に我に返った。
宗像の安否も心配だが、目の前の厄介者をどうにかしないと。
「……」
リキッドがあふれ出すリキッドタンクに突き刺さった槍に手をかけた都築は、そのまま動きを止めた。
「何やってんのよ！」
さつきのせっぱ詰まった声がする。
「さっさとそいつをタンクから外さなくちゃ！」
「……」
「……」
「……」
「……どうしたの？」
「早瀬っ！」
突然、都築騎が、さつき騎に襲いかかった。まるで押し倒されるようにさつき騎が地面に大の字に転がる。
「きゃっ！？」
背中に痛みを感じ、顔をしかめるさつきの前で、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の春日中尉が言った。
「投擲槍です！」
「へっ？」
「３時方向から飛来」

「――ちっ！」
都築は舌打ちした。
「早瀬！動くぞ！」
「だから、宗像騎が！」
立ち上がりながら抗議するさつきに、都築は怒鳴る。
「ここでドンパチやったら、それこそ俺達まで火葬されちまう！敵を引きつけるぞ！」
「そ、そうか！」
突然、宗像騎から離れると言い出した都築の言葉の意味が、やっと理解出来た。
地獄の炎を生み出すリキッドにまみれた宗像騎の近くでは、気化したリキッドもあって危なくて火器が使えない。斬艦刀どころか、実剣から発する火花一つでもアウトだ。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の恐ろしさは、一度でも使用経験があれば骨身に染みる。
メサイアを蒸発させるほどの破壊力のある液体が気化し、大気に充満している中。
そんな中で戦いたいか？
誰だって答えは否。
それしかない。

そんなさつきの前。
煙幕の中に、巨大な影が現れた。

――何？

「戦闘機動で回避しろっ！」
「わわっ！？」

都築の声に弾かれたように、さつきは白雷（はくらい）に戦闘機動をかけた。
一般兵には、メサイアが突然消えたようにしか見えない、騎士のみに可能な超高機動。
騎士ならでは。そして、メサイアを最強たらしめる最たる理由。
それが、この戦闘機動だ。
巨大な影は、それに対応しきれなかった。

それまで、都築達が立っていた場所めがけて襲いかかったのは、見たことのない漆黒のメース。
その手に握られた斧が、むなしく宙を斬る。
攻撃が空振りした漆黒のメースは、ゆっくりと立ち姿勢になった。
その顔が、一瞬で距離をとった都築達を睨み付けていた。

「ほう？」
漆黒のメースの中。
感心したような声をあげたのは、かつて韓国軍グレイファントム部隊を壊滅に追い込んだ、あのアニエスだ。
「こんな辺鄙なトコじゃ、仕事なんてないと思っていたけど」
アニエスの顔には、邪悪な笑みが浮かんでいた。
「いい動きするじゃないか――この」
アニエスの駆るメースが戦斧を力強く振ると、再び構え直した。
「私の一撃をかわす奴がいたとはねぇ！」

ガインッ！
「やるっ！」
都築もさつきも、目の前のたった1騎に自分達が翻弄されていることを、嫌でも思い知らされた。
幾度と無く敵を屠ってきた都築の斬艦刀が、さつきの槍が、まと

もに敵を捉えることが出来ない。
相手は戦斧を巧みに使って剣と槍を完璧に捌いてしまう。
槍の間合いが絶妙にはぐらかされているのを、さつき自身がわかってしまう。
はっきり、並の相手ではない。

「くそっ！さっさとぉ！」
管槍の要領で滅茶苦茶なまでのペースで槍を突き出すが、それさえ、敵騎はあっさりとかわしてしまう。
「早瀬！」
都築が怒鳴る。
「冷静になれ！遊ばれているぞ！」
「――――くっ！」
「下がれ！」
「そんな！」
さつきはカッとなった。
“下がれ”
都築の言葉が、
“お前じゃ役不足だから下がれ”そう聞こえたのだ。
「わ、私でもやれる！」
「違う！つーか！」
都築はせっぱ詰まった声だ。
「美晴達が押されている！」
「はっ！？」
彼我のリーチをしっかり見据えた上で、さつきはもう一度、槍を構えなおした。
「狙撃チームが山脈の反対側から攻撃を受けている！阻止で手一杯。ＳＡＳの支援をやれる奴がいないんだ！」
「わかった！」
さつきは怒鳴るように言った。

「支援に回るから、犠牲になって！」
「おいっ！」
「時間稼ぎくらいは出来るでしょ？」
「後で犯してやる。くそ早瀬」
「聞こえてるわよ！」

「くそっ！」
戦斧がシールドにめり込む感触がＳＴＳシステム越しに伝わってくる。
シールドも武装にも、一切予備がないことは、すでに承知済みだが、言ってる場合でもなかった。
互いに力任せに押し合う。
メサイアの顔同士が、まるでメンチの切り合いさながらに接近している。
「ナメんじゃねぇ――――ぞっ！！」
都築騎の膝蹴りがツヴァイの腹を蹴りつけ、アニエスのメース“シュヴァルツ”の頭突きで応酬する。そうかと思うと、その回し蹴りが都築騎の腹をまともに捉えた。
「都築少尉っ！」
ＭＣ（メサイアコントローラー）の水上中尉が怒鳴る。
「ケンカやってるんじゃないんですからっ！斬艦刀を抜刀して下さいっ！」
「戦争がケンカ以下なはずねぇだろうが！」
都築が怒鳴った途端、コクピットを揺るがすほどの衝撃が再び走った。
「頭部に命中１っ！痛ぁぁぁっ！」
「――――っのぉっ！」
都築はもう一度殴りに来た“シュヴァルツ”の拳をぎりぎりでか

すと、その背後に回るか否かのタイミングで、その腹めがけてもう一度膝蹴りを、おまけとばかりに背中にひじ鉄をくらわした。
“シュヴァルツ”が地面に叩き付けられ、都築はその顔面めがけて力任せの蹴りを食らわした。
「立てコラァッ！」
「こらぁっ！」
水上中尉がずり落ちかけたメガネを戻しながら怒鳴った。
「ケンカは止めなさいっ！」
「すぐに殺してやるから大丈夫っス！」
敵騎を容赦なく蹴り続ける都築は言い返した。
「補導歴８回、“西の狂犬”の名はダテじゃねぇ！」
腹部に入った蹴りの一撃で、“シュヴァルツ”が文字通り吹き飛ばされた。
「補導歴２４回、“聖高の鬼姫”と言われた私がやめろといってるんですっ！」
「ダメですっ！」
都築の横で怒り心頭の声をあげたのは都築騎の精霊体“十六夜（いざよい）”だ。
幼い顔が怒りで真っ赤になっている。
「女の子の顔に傷（アヤ）入れたら、死んでもらうのが相場です！」
十六夜の顔に傷はないが、その器であるメサイアの“顔”に拳が入ったことに、十六夜は怒り狂っている。
「マスターっ！斬艦刀使って下さいっ！今ならたっぷりオマケ付けますからっ！」
「よっしゃぁっ！」

「――――くっ！」
アニエスは、一瞬、自分が失神していたことを悟った。
目の前の計器類はいくつも死んでいるか、悲鳴のような警報を鳴

り響かせるか、はたまた死亡通知のような赤い警告を上げている。
モニターの向こうには、敵騎が長剣をぶら下げて近づきつつある。

軽く頭を振ったアニエスは、迫り来る敵を前に、喉の奥で笑った。

「楽しい！楽しいねぇ！ははっ！コイツは久しぶりだよ！」
その目は狂気に近い喜びを称えていた。
「このあたしを気絶させた男は、ベッドの中でもそうはいなかったさ！」
たった一動作で大地に横たわった“シュヴァルツ”が、逆襲にかかった。
「あんた――――惚れたねぇ！」

脳天めがけて振り下ろされる戦斧。
それは、敵を撃破するためのものだ。
だが、現実は――――

ザンッ！

長剣の一閃が、戦斧を叩ききった。

「な！なんだと！？」

「女の子の顔を張るとはぁぁぁぁぁっ！」
アニエスが驚愕の表情を浮かべる前で、十六夜は血走った目を見

開いたまま怒鳴った。
「死ねぇぇぇっ！」
「瞬間最大出力が１２００％越え！？」
水上中尉は、たたき出された数値に目を見張った。
そして、その結果を即座に理解し、青くなった。
「十六夜、止めなさい！そんな高出力を供給し続けたら、斬艦刀のコンデンサーが持たないっ！」

「このっ！？」
アニエスは、戦斧を真っ二つに叩ききられたことに、少なからず狼狽した。
「じ、人類の技術はここまで！？」

戦斧は単なる金属の斧ではない。
騎体から供給される魔力によって敵の装甲をかち割ることの出来る立派な魔法兵器だ。
それとぶつかって、真っ二つにへし折るとは――！！
「や、やるっ！」
嫌な汗が背筋を流れ、体内を何か言いようのない不快感が走る。
それが忘れかけていた恐怖という感情だと気づき、アニエスは自分を取り戻した。
「ふふっ――ハッハッハァッ！！」
コクピットにアニエスの笑い声が響く。
「楽しませてくれるわっ――人類がぁっ！」
振り下ろされる敵騎の長剣。
アニエスはその柄を抑え、その腹部に蹴りを食らわした。

「ちぃっ！」
都築騎は、その一撃でバランスを失い、ひっくり返る。
その手が持つ斬艦刀のあちこちから煙が立ち上り、刀身の光が消

えた。
「コンデンサー破損、斬艦刀がっ！――――だからもうっ！十六夜、どう落とし前付けるんだい！このバカ娘がぁっ！」
「ご、ごめんなさぁぁいっ！」
「とにかく！」
ヤクザ顔負けのドスの効いた声で怒鳴る水上中尉と、その声におびえ、都築に縋り付く十六夜を前に都築は叫んだ。
「予備の斬艦刀を抜刀してくださいっ！」
「了解――――十六夜、寿命が延びたわね」
「ふぇぇぇぇぇんっ」
「十六夜――――大丈夫だ」
都築は、そっと首を回すと、おびえる十六夜の頬に軽くキスをした。
「俺を信じろ。お前の顔にアヤ入れたヤツは――――叩き殺す」
「はいっ！」

「このぉぉぉっ！」
“シュヴァルツ”の右腕に仕込んでいた光剣を抜いたアニエス騎に、敵は騎体に仕込まれたＭＬ（マジックレーザー）を乱射しながら接近、滅茶苦茶な太刀筋で攻めまくる。
「一体！」
太刀筋は滅茶苦茶すぎて読むことが出来ない。
戦闘機動は乱暴すぎる。
それだけに、アニエスのような“まともな”メース使いは、逆にそれが恐ろしくて間合いを本能的に開いてしまう。
「余程上手いのか、それとも単なるバカか！？」
型もへったくれもあったもんじゃない。
これが剣術使いなら、素人も同然だ。
だが、それだけに逆に攻撃を予測出来ない。

「こんな――――っ！」
隙を見て、アニエスは敵騎の胸に蹴りを入れた。
吹き飛ばされた敵騎が、地面を抉りながらスライディングして止まった。
「デタラメがいつまでも通用するかぁぁっ！」
敵騎が立ち上がり、再び斬りかかってくる。
「まだやるのか！？――――ええいっ！」
アニエスは予備の戦斧で敵騎の剣を止めた。
「中のメース使いの面が見てみたいものだ！」

“シュヴァルツ”は、シールドを構えて突撃してくる都築騎めがけて逆襲に出た。
“シュヴァルツ”の肩部シールドと、“白雷（はくらい）”のシールドが激突。
“白雷（はくらい）”の頭部めがけた一閃が走り、“シュヴァルツ”が体勢を低くしてかわす。
“シュヴァルツ”の横薙の一撃を、その懐に飛び込んだ“白雷（はくらい）”がシールドでさばき、その動きごと止める。
「――――くっ！」
全身にアドレナリンが走り、体が熱くなる。
このギリギリの感覚が、何より楽しい！！
アニエスは笑いながら叫んだ。
「さぁ、いくぞ人類っ！」

「アニエス？」
シグリッドの通信機に声が入る。
ダユーだ。
その優美な声は、聞くだけで戦意が１００万光年の彼方に吹き飛

ばしてしまう。
「何だい！こっちは取り込み中だ！」
「人類側の歩兵部隊が施設に入り込んだわ」
「そんなもの！施設の連中にどうにかさせな！」
「私達は逃げるわ」

先程まで将兵が右往左往していた中華帝国軍司令部で、動き回るのはダユーと、その手下だけだ。
左手に携帯電話。右手に拳銃を持つダユーの前で、どこから持ってきたのか、部下が死体にガソリンをかけていた。

「ふざけるなって、しょうがないでしょ？」
ダユーは周囲に全く感心のない様子で答えた。
「私達は“ここ”でドンパチするつもりないもの。ビジネスで来ているのよ？ビ・ジ・ネ・ス」

窓の外では、別棟の屋上めがけて、人類の乗り物が建物を攻撃している。
“ヘリ”というらしい。
面白い動きをするな。と、ダユーは興味深げに眺めながら続けた。
「敵兵はすぐ近くまで来ている。ここで人類の捕虜になったり、蜂の巣にされるのは御免だわ。と・に・か・く」
窓から離れながら、ダユーは語気を強めて言った。
「私達が撤退するまで、そのデミ・メース共を押さえていて。その間に撃破しようが何しようが自由だけど」
そして、壁際に来ると、この場でたった一人生きている人間の目の前めがけてトリガーを引いた。
「……えっ？ああ、今の音？ちょっと遊んだだけ」

ピーッ！
敵騎の接近警告が鳴り響いた。
背後からだ。
1対3。
普段なら何とも思わない数だ。
だが、目の前の非常識一騎でも手間取っている現状だ。
自分より相手の方が強いとは死んでも認めたくないが、下手をうってリスクを背負い込む程、アニエスもバカではない。
潮時を見定めなければいけない。
――いい所なのに！！
気分的にすっかり水を差された。アニエスは、なんだかここで戦うこと自体がバカらしくなった。
そう。
自分の任務はあくまでダユー一行の護衛。
その契約だ。
アニエスはしつこく迫る敵騎の一撃をかわすと、大きく後ろにジャンプした。
「脱出までの時間、もう少し遊んでもらおうか！？未熟なメース使い共！」

リノリウムの床が砕け、砕けた破片が、腹這いにされ、屈強な数人の男に取り押さえられた顔に飛び散る。
「人類って」
未だ硝煙の煙が立ち上る拳銃を手にして、楽しげにその顔を見下ろすのはダユーだ。
「面白い武器を使うのね」
「……」

羽交い締めにされた相手は、無言で睨み返してくる。
取り押さえられた時、殴られた頬からはうっすらと血がにじんでいた。
「あらあら♪」
ゴトッ。
拳銃――H&K　USPが、無造作に、その目の前に放り出される。
「言葉が通じているのかしら？」
ダユーがその細い指で弾いたのは、耳につけられたイヤリング。
「魔族の最新モデルって聞いたんだけど」
「……」
「お耳が聞こえないのかしら？それとも言葉が喋れないの？」
「……っ」
「まず、お名前から伺いましょうか？」
「……名を聞くなら」

こんな場所には不釣り合いという意味では、ダユーの声と張り合える。

その声は――

「自分から名乗れ」

女だった。

床に腹這いにされた挙げ句、腕をねじ押さえられている女がそう言った途端、腕を押さえている男の腕に力がこもった。
「ぐっ！」
女の顔に苦痛が走る。
しかし、その目から闘志は消えていない。

「――成る程？」
ダユーは笑っていった。
「ダユー……この名だけ覚えておきなさい」
ダユーは小首を傾げた後、微笑んだ。
「あなたのお名前は？」

「……宗像理沙」

そう。
女とはすなわち、宗像だった。

「……ムナカタ」
何度か、ムナカタ。と繰り返したダユーは微笑んだまま、
「気に入ったわ。その名前。そして」
そう言うと、不意に宗像の顎に手を這わせた。
宗像は、ダユーの顔から視線を外さない。

「その目。こんな状況でも戦いを諦めない強い目は、大好き」

「……そりゃどうも」
ダユーの手が、ドレスのポケットから何かを取り出した。

「ご褒美あげなくちゃね」
ダユーの唇が、そんな声を紡ぎ出した次の瞬間――

「っ！？」

宗像は、自分が何をされたのか理解するのに若干の時間を必要と

した。

自分の唇がふさがれている。

そして、ダユーの顔がこれ以上ない位、近くにある。

女同士でキスすることは、宗像にとっては当然のことだ。

何度もしているし、何人ともしている。

それなのに――――

宗像の体中の血が熱くなった。

体が脳天からしびれる。まるでクリームのように体が溶けていく

錯覚が未知のレベルの快楽となって宗像を捉えて離さない。

「……んっ」

驚愕に開かれた眼は快楽に浸食される中でゆっくりと閉ざされていく。

口の中で動き回るダユーの舌に無意識に自分の舌を絡めていく。

まるで初めてキスした少女のように、そのぎこちない動きが、我ながらもどかしい。

相手が誰か？

人類でさえないのは明らかだ。

そんな“異なる存在”に陵辱されているのに、宗像はむしろさらなる陵辱を求め、必死になって舌を動かしてしまう。

何分が経過したのだろう。

1分と経っていないかもしれないし、永遠にそうだっのかもしれない。

脳天をはいずり回る不思議な感覚に何度となく、女としての絶頂

を味わった宗像の唇から、ダユーが自分の唇を離した。

「私」

ダユーは、にっこりと淫靡なまでのほほえみを浮かべたまま、宗像の耳元に唇を寄せた。

「――――んっ」

ダユーの吐息を感じた宗像は、目を閉じて、ピクリと体を反応させた。

「私が」

ダユーの声が、宗像の耳元に届く。

「――――世界で一番、あなたを理解している」

「……」

「私だけが、あなたの全てを知っているのよ？理沙」

「……」

「私にはわかる」

ダユーの声を、宗像は焦点の合わない顔で聞いた。

「あなたは、この世界に何一つ満足していない。何をしても乾く心をもてあましている。心の渇きから逃がしてくれる、心を満たしてくれる、何かを求めている」

ダユーは再び、軽く宗像と唇を重ねた。

「うんんっ♪」

宗像の口から、くぐもった快楽に酔いしれる歓喜の声が漏れる。

「――――私なら、それが出来る」

ダユーは唇を離すなり、宗像の顎を楽しげになで回した。

「あなたを救うことが出来るのは、私だけよ」

ダユーは、宗像の戦闘服に、何かをねじ込むと立ち上がった。

「救って欲しければそれを使いなさい。今の理沙には、使い方が分かっているはずよ？」

男達から解放された後も、宗像は力の入らない体のまま、まるで主人に捨てられた犬のように、悲しげな顔を浮かべて、ダユーを見つめるまま。

銃声が近づいている。

「あなたが欲しいの――――理沙」

その言葉が、宗像の心に、深く突き刺さったまま。

ダユー達は、部屋から消えた。

宗像騎搦座。

都築、美奈代、そして祷子は、たった1騎を相手に交戦中。

狙撃犯と護衛の山崎達は、山脈の反対側から接近する中華帝国軍のメサイアを阻止するのに手一杯。

肝心のＳＡＳの突入を支援したのは、実はさつきのたった1騎だった。

「敵がヘリから降下中！」

「撃ち殺せっ！」

ヘリから降下したＳＡＳ隊員達だったが、中華帝国軍も負けてはいない。

自動小銃を構えた兵士達が窓という窓からＳＡＳ隊員達めがけて引き金を引く。

「対空砲はどうした！？」
「邱、屋上のガトリング砲を使え！段、白！お前達は弾を運べ！」
「ＲＰＧ、持ってきました！」
「よしっ！敵の所属は不明だが、容赦はするな！弾薬をケチるな！大盤振る舞いで出迎えてやれ！」
「了解っ！

「ワッチッ！」
突然、足下に走った銃撃に、ＳＡＳ隊員達はとっさに遮蔽物の影に飛び込み、応戦を開始する。
ほんの数十メートル挟んだ建物との間で火力の応酬。
そう言いたいが――

「畜生っ！火力が違いすぎらぁ！」
ＳＡＳ隊員達は、雨霰と降り注ぐ銃弾の雨に反撃どころの騒ぎではない。
「くそったれめ！メサイアはどうした！？」

時間が経つにつれて確実に戦闘態勢を整える中華帝国軍に対して、ＳＡＳ隊員達は圧倒的に不利に陥っていく。

奇襲攻撃は時間との勝負だ。

守り側の体勢が整った後では奇襲は奇襲でなくなる。

そういう意味では、もうＳＡＳ隊員達は奇襲に失敗していた。

ＳＡＳ隊員は、まさにそんな状況に陥っていた。
予想外のバリアとメースの存在に時間を食われたのが原因だ。

決して、ＳＡＳ隊員達の責任ではない。

だが、その責任は彼等がとらされることになる。

建物の屋上に設置された対空機関砲が空と地上めがけて火を噴く。機関砲のすぐ近くに積まれた土嚢と土嚢の隙間に突っ込まれた機関銃を何とかしてもらおうと、航空支援を試みたヘリ部隊だったが、濃厚な弾幕を前に近づくことさえ出来ない。

命からがらの撤退を余儀なくされても、ＳＡＳ隊員達は文句もいえない。

むしろ、内尾とされなかったことを感謝すべき立場にいた。

建物の屋上には続々と中華帝国軍の兵士達が銃口を並べつつある。対空砲まで持ち出した中華帝国軍は、容赦なくＳＡＳ隊員達が頼みとする遮蔽物さえも粉々に砕く。

その破壊力を前に、小銃と手榴弾が頼みのＳＡＳ隊員達は、物陰に一塊りになってしまうのがやっとだ。

「聞いていた情報と違うぞ！」

降り注ぐ砲弾の破片を浴びる隊員達の中から、困惑の声があがる。

「ここにこんな大部隊がいるなんて、聞いていない！」

「黙れっ！」

部隊指揮官のマクミラン大尉は、銃声と部下の声に負けじと大声で怒鳴った。

「経験から何を学んでいた！？あの情報部の情報が当たっていたことが、今の今まであったのか！？」

「大尉っ！」

マクミラン大尉の横にいた兵士が怒鳴る。

「屋上、ＲＰＧっ！」

マクミラン大尉は、通信装置に怒鳴った。

「ウィスキー中隊、メサイア共！誰でもいい！支援をくれっ！」

「こちらウィスキー４」
さつきは通信装置越しにマクミラン大尉に言った。
「近くにいる。これから支援に向かいたい……けど……」
さつきは、ＭＣ（メサイア・コントローラー）、春日中尉にこっそり訊ねた。
「支援って……何するんです？」
「……まぁ」
春日中尉は、唐突な質問に面食らった顔に、困惑気味の笑みを浮かべ、答えた。
「イギリスさんのご要望を伺ってみたら？」
「そうします」

「何して欲しいかって！？」
一瞬、絶句したマクミラン大尉は、顔を真っ赤にして通信装置に怒鳴った。
「正気かてめぇ！」

キーンッと鳴る耳に顔をしかめながらさつきは怒鳴り返した。
「そんなに怒んないでよ！やったことないんだから！」

「やって欲しいこと！？敵の排除に決まってるだろうが！」

「だからどこの！」

「目玉ついているのか！？Ｄ棟、目の前だ！」

「建物吹き飛ばすけど、いいの！？」

「ちょっと位、ぶっ壊してもかまうもんか！てめえの脳みそ並に吹っ飛ばせ！」

「ムカッ……火炎放射攻撃でもいい？派手にいくよ？」

「俺達を殺すつもりか！」

「そんなモノしかないんだもん！」

「もう少しソフトなのが欲しい！俺達はデリケートなんだ！少なくとも俺達に被害のないようなシロモノを要求する！」

「んなこと言っても……後は」

さつきはシールドの背部に固定していた３５ミリガドリング砲を引き出した。

「こんな物騒なシロモノしかないんだからさぁ！」

「前方、メサイア来るっ！」

シールドを構えつつ、ガドリング砲を装備したメサイアが接近してくる。

中華帝国軍の指揮官達は、その敵を前に、命令することは何もなかった。

兵士達は、誰に言われるまでもなく、当面、倒すべき敵をメサイアと断定したのだ。

機銃座に据えられた重機関銃が火を噴き、歩兵携帯用対戦車砲が構えられる。

それまでＳＡＳ隊員達めがけて放たれていた火線が、すべてその

メサイアめがけて集中する。

「メサイア接近！」

「撃てっ！接近を止めろ！」

メサイアの破壊力は知っているし、何よりその巨体が接近することは、生身の歩兵の立場からすればたまったものではない。

機関砲から拳銃まで、兵士達は狂ったようにトリガーを引き続けた。

すべては、銃火を目の前の巨人に叩き付けるために。

そうしなければ、

自分達が殺されることがわかっているのだ。

そのための死に物狂いの攻撃。

だが――――

ブンッ！

中華帝国兵士、そしてＳＡＳ隊員達の前で、さつき騎は一瞬にして飛び来る火線をかわしてのけ、反撃に出た。

３５ミリ機関砲弾が建物に容赦なく浴びせられ、建物を構成していたあらゆるものが、その場に居合わせた不運な兵士と共に、文字通り引きちぎられ、粉砕されていく。

その攻撃は、あまりに一方的すぎる。

中華帝国軍で反撃する者はいない。

否

生きている者はほとんどいない。

「建物内部、三階階段付近に微弱な生命反応あり。サーチ完了。建物から地下施設へと侵入が可能です」

「どれくらい仕留めました？」

目の前の四階建ての建物は、今や爆撃でも受けたような、無惨な姿をさらしていた。

壁は３５ミリ機関砲の攻撃で穴だらけ。窓ガラスは一枚も残っていない。

外からビルの中身が丸見え。

屋上の対空機関砲は攻撃で吹き飛ばされ、ビルの下、駐車場に無惨な残骸を転がせている。

あちこちから煙が上がる中、ＳＡＳ隊員達が建物の中へと続々と入り込んでいく。

「１０や２０で聞くと思います？３５ミリ砲弾なんて、間近をかすっただけで挽肉です」

「うっわぁ」

人間が挽肉になるのを想像して、さつきは顔をしかめた。

「近づきたくない。絶対吐くわ」

「……撃った人がそれを言いますか？」

ピピピッ

あきれ顔の春日中尉は、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の中に響いた、その音に反応して、視線をモニターに向けた。

「――新たな反応？」

目の前で岩場を超えようとした中華帝国軍の“グーク”。
その胴体にＨＭＣの一撃が命中して爆発。
“グーク”の上半身が、まるで打ち出されたロケットのように上空に吹き飛ばされた。
「８騎め！」
涼騎の持つＨＭＣから使用済みのパワーセルが吐き出される。
巨大な薬莢が地面に弾け、山の斜面を転がっていく。

一体、何なんだ？
やつら、一体何者だ？

遮蔽物の影から、その光景を睨んでいたのは、中華帝国軍メース中隊の王少佐は、混乱する頭を酷使して事態を把握しようとした。
インド戦線へ向かう途中、ここを通りかかった所で、突然、攻撃を受けた。

第二砲兵隊最重要指定区域。

地図上に示されたそんな場所に、自分達が迷い込んだことを知ったのは、この攻撃を受けてからだ。

禁止区域に侵入したため、警告発砲された。

王少佐は当初、本気でそう思った。
だから、全チャンネル解放で相手に呼びかけたが、返答はなかった。

結局、彼が目の前の存在が敵であると断定した理由は一つ。

その攻撃があまりに強力すぎたから。

少なくとも、騎体を真っ二つにする魔法攻撃兵器を、中華帝国軍は保有していないし、もし仮に、あれが友軍だったとしても、国内を移動する部隊に、警告もなしに発砲が許されるほど、中華帝国軍の軍規はいい加減ではない。

後で軍事裁判になろうとも、戦闘記録さえ保存しておけば、十分勝てるという打算もあるが、何よりも王という指揮官が、部下を殺されて黙ってる程腰抜けではないということだ。

２４騎で構成された彼の部隊は、相手が敵だと決心するまでに７騎が騎体のどこか、下手すれば騎体そのものを吹き飛ばされて大地に転がっている。

朱と馬が山の麓。敵からは死角になる位置にある窪地への侵入を試みたが、王達の目の前で騎体を吹き飛ばされた。

相手はたった５騎だ。

やってやれないはずはない。

数は圧倒的にこっちが上だ。いつまでもこんなことはしていられない。

とにかく、敵を倒さなければ話にならない。

ズンッ！

まるで誘っているように、強力な魔法攻撃が王騎の間近で炸裂。
大量の土砂がまき散らされた。

「――――っ！」

その爆発音を、歯を食いしばって耐えた王は、一度、強く山を睨むと、メサイアのセンサーによって収集した地形図に視線を向けた。
この地形に勝機を見いださなければ負ける。
否、死ぬ！

「……」

勝機は
勝機は

何度もその言葉を口にしながら、王は地形図を睨んだ。
裾野にある大きな窪地。
そこは山脈を形成する岩場が大きくオーバーハングした地形で、逃げ込むにはもってこいの場所だ。
問題は――――

その岩場だ。
庇（ひさし）のように張り出したオーバーハングから上は、ほぼ垂直に近い切り立った崖。
よじ登ることも出来ない。
人間が徒歩で登ることの出来る道は、かなり遠い。

大きく迂回して、分散して攻めるか？

否。

最も近い山脈の切れ目そのものだって十分な崖。
地形も険しく、メサイアで登ることは出来ない。

王は、そこまで考えが至って初めて疑問に思った。

――敵は、どうやってあそこに陣取った？

敵の陣取っている場所は、平らに開けた絶妙な場所だ。
ただ、そこに至るには恐ろしく険しい山を登るしか……。
「あっ！」
王は自分の考え違いを思い知らされた。

俺は一体、何を考えているんだ！

相手はメサイアだ。
ブースターを吹かせて飛び上がればそれで済むじゃないか。

なら――ここで俺達もブースターで？

否。

それこそいい的になる。

だけど――それしか。

ズンッ！

地面が揺れた。

ズズンッ！

そんな音がして、部隊の中で悲鳴に近い声が駆け回る。

「どうした！？」

「彭がやられました！」

田騎から報告が入る。

田騎が抱きかかえているメサイア。

その頭部には貫通した穴が開いていた。

コクピットブロックたる頭部を貫通された以上、パイロットが無事であるはずがない。

「あいつら、ちょっとした隙間でも平気で弾を叩き込んでくる！」

「――――くっ！」

座して死を待つか？

否！

断じて否だ！

相手は5騎。

狙撃の力は驚くほど正確だ。

どうする？

どうする？

どうする？を5回呟いた王は、ようやく作戦を思いついた。

「第3、第4小隊の生き残りは機関騎槍を装備しろ！搦座した騎を

楯にしろ！」
　王は自らも機関騎槍――メサイアサイズの自動小銃。を太股もウェポンラックから引き抜いた。
「第１小隊と第２小隊の生き残りは！？」
「孫中尉です！自分を含めて５騎！」
「よし！孫、あの窪地に飛び込む。俺に続け」
「はいっ！」
「第３、第４小隊はここで待機！俺の命令と共に敵へ制圧射撃。ありったけの砲弾をあの陣地へたたき込め！」
「ここは俺達の土地だ！これ以上、誰にもいいようにさせるな！」
　２５ミリ機関騎槍（マシンガン）にマガジンを装填した王は、部下に怒鳴った。
「楊、劉、スモークを！」
「はいっ！」
　王騎の横で王の命令を待っていた楊騎と劉騎が、手榴弾型のスモークグレネードを取り出し、投擲した。
　地面に落下して大きくバウンドしたスモークグレネードからは盛大な煙幕が生まれ、それまでの、はっきりとした景色は真っ白な煙の中へと消えていく。
　王は叫んだ。
「一気にいくぞっ！」
「応っ！」

天裁破壊作戦　第三話

とてもこちらを正確に射撃しているとは思えない。
滅茶苦茶ともいえる砲撃。
当たればいい程度の命中精度だが、その手数だけはやたらだ。
山肌が砲弾の爆発で吹き飛ばされ、巻き上げられた土砂が豪雨さながらに降り注ぐ。
寧々（ねね）達はその間、反撃すら出来なかった。

砲撃はすぐにやんだ。

寧々（ねね）には、その意味が分かる。

突撃する友軍に対する火力支援。
こっちが砲撃に当たらないように頭を低くしている間に、敵は移動を完了。
目的を達したのだ。

「敵！真下に移動！」
MC（メサイア・コントローラー）の報告が、それを裏付ける。
「手榴弾（グレネード）は？」
「品切れです」
「……そうでした」
寧々（ねね）はSTRシステムを操作して、狙撃砲から手を離した。
「武装をビーム、いえ、散弾砲へ」
「散弾砲で？」
狙撃砲から離れた“白雷（はくらい）”の腕が、横に置かれていた弾薬コンテナの中から、散弾砲を引き抜いた。

「こういう場合、面で叩いた方が阻止能力が高いですから。散布界は最大で」
「了解――安全装置解除。砲弾装填。砲弾、散布界は最大に調整」
ガシャ――ジャコッ！
“白雷（はくらい）”の手が丸い散弾砲弾マガジンを散弾砲にはめ込み、ポンプを操作して弾薬を装填する。
トリガーの上のレバーが操作され、散布範囲が調整される。
機構そのものは、生身の人間が使う銃火器と何も違わないが、それをメサイアのサイズで作り上げるあたり、開発者の頭が正常かを疑いたくなる。

寧々（ねね）はふと、そんなことを考え、軽く頭を振った。
考えている場合じゃない。
使えればいい。
それだけだと割り切るしかないんだ。

寧々（ねね）の横では、芳達（かおる）がビームライフルや３５ミリ多銃身機動速射野砲を装備している。
敵が接近戦を試みようとしている時に、巨大なＨＭＣでは対応しきれない。
万一に備えて後方に待機している山崎騎と柏騎の位置を確認する。

さすが。

寧々（ねね）は正直に感心した。
一回の動作ですぐに自分達の前面に出ることが出来る位置を占めている。
訓練校を出てたった数ヶ月でトップエース部隊に上り詰めた連中

は、やっぱり少し違う。

「――真下の敵、熱源増大！ブースターで一気に上昇するつもりです！」

「涼、芳っ！伏射姿勢のままで！立ち上がったら吹っ飛ばされる！」

「はいっ！」

「任せてっ！」

そう。

今の自分達の全高は訳３０メートル。

焦って立ち上がろうものなら、赤ん坊でも砲弾を命中させられる格好の的だ。

寧々（ねね）達は、最初の伏射姿勢を崩さない。

敵の攻撃を阻止する防壁は、手にした武器による弾幕のみだ。

「敵、移動開始――来ますっ！」

MC（メサイア・コントローラー）の声とほぼ同時。

寧々（ねね）達の目の前に、濃紺の物体が出現した。

メサイアだと、脳が認識する前に、寧々（ねね）は散弾砲のトリガーを引く。

散弾一発ごとの破壊力は低いが、面で叩く力は抜群だ。

敵は“グーク”。

装甲の薄さは、寧々（ねね）達自身が、騎体に触れることで味わっている。

あの車のボンネット並の装甲で、散弾をはじき返したらそれこそ奇跡だ。

散弾砲を、速射モードで発砲。

空薬莢が連続して排出され、山の斜面を転げ落ちていく。

ビームライフルと35ミリ砲弾の雨がそれに彩りを添える。

寧々（ねね）の目の前で、戦斧を振りかざした“グーク”に命中。

散弾を浴び、ビームライフルや機銃弾で蜂の巣にされた“グーク”達のブースターは、破壊された自らを、未だ高みに登らせ続ける。

「やった！」

芳が歓声を上げた途端、“グーク”達は上昇をやめ、そして力つきたように落下を開始する。

“グーク”から吐き出される煙が、視界のかなりを阻害している。

それまで後方に待機していた山崎と美晴が動いたのはその瞬間だ。

「敵、第二波来ますっ！」

「えっ！？」

突然のMC（メサイア・コントローラー）の警告に、思わず涼はぽかんとしてモニターを見てしまった。

煙を噴いて落下していく“グーク”。

「……えっ？」

煙の影に何かいる。

ギィンッ！

ザンッ！

鈍い音が連続してレシーバー一杯に響く。

そして、

ガンッ！

「きゃっ！？」

騎体に走る振動。

何かが騎体の背に覆い被さっていることはわかる。

ただ、伏射姿勢をとっているため、視界がとれず、その正体はわからない。

「な、何？」

「――すみません。小清水少尉」

山崎の声がした途端、騎体が軽くなった。

不意に、視界に大きく映し出されたのは、“グーク”の上半身だった。

腹の辺りで真っ二つにされた“グーク”の上半分が、山崎騎のよって下に放り捨てられた。

「や、山崎中尉？」

「敵騎３を撃破――下の敵はお任せします」

「私達の任務は」

美晴がなんでもない。という声で言った。

「あんた達の護衛だからね。ね？大ちゃん」

「そういうことです――残りの敵、まかせますよ？」

「……了解」

涼は、万一に備え、ビームライフルを抜きやすい太股のウェポンラックに装着。ＨＭＣに武装を切り替えた。

ここに至って、涼はようやく、敵が何を仕掛けたか理解出来た。

突撃のタイミングを二つに分け、第一波が敵を引きつける間に、第二波が斬り込む。

恐らく、こちらが純粋な狙撃部隊に過ぎず、近接装備を持ち合わせていないと判断したのだろう。
対接近戦用に2騎を待機させていたこちらの備えの勝利だ。

「芳？ＨＭＣ、第三射まで時限炸裂でやろう」
「時限炸裂？」
同じようにＨＭＣを再装填しようとしていた芳は、一瞬首を傾げた後、
「――成る程？」
楽しげな顔になった。
「そりゃいいや♪一方的にボコれるし」
「そうそう♪」
涼は嬉しげに頷いた。
「ここで大手柄挙げたら、お姉さまも今夜こそ、“涼。ご褒美だ”とかいって♪」
「……」
「さ。芳？さっさと敵を皆殺しにして、お姉さまに報告に戻りましょう」
イヒヒヒヒッ。と、涼の口から気味の悪い笑い声が漏れる。
「マスター、よだれ」
「あ、ごめんね？“しょこら”」
涼が精霊体“しょこら”に口元を拭いてもらっている間。
「……」
通信モニター上の芳は、泣きそうな顔をしていた。
「……どうしたの？」
「……何でもない」
芳はそっぽをむいたまま、呟くように言った。
「私にとって……本当の敵って誰なのかわかった気がする」
「は？」

「……涼は」
「何？」
「……私のこと、嫌い？」
「まさか！」
突然の質問に、涼は驚いた顔で答えた。
「訓練校からずっと、私達は親友でしょ？悪友ともいうけど」
その顔は真顔だ。
その言葉に嘘はない。
だが、
そこに芳（かおる）が期待した答えは――――なかった。
「……」
「……何よ。それじゃ不満？」
「……」
芳は無言でＨＭＣの調整を始めた。
「？」
通信モニターに映る顔を不思議そうに眺める涼に、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の高良中尉が呆れたような顔で言った。
「小清水少尉って」
「は？」
「鈍感っていうか、恐ろしくニブいですね」
「何ですか？」
「ここでその答えが出てくるっていうのが、ニブいっていうんです」
「？」
涼の近くで、“しょこら”が、気の毒とも呆れているともつかない、不思議な表情で涼を見ていた。
「ね、ねぇ？」
“しょこら”に語りかけた涼の耳に、新しい通信が入った。
「山崎隊、狙撃隊、生きているか！？」

その声はせっぱ詰まっていた。

「まだ生きていたら返事しろっ！」

「お姉さまっ♪」

涼は、まるで通信モニターに縋り付かんばかりの勢いだったが、

「……こちら平野」

芳の声は冷たい。

「現在、敵メサイア６騎と交戦中。手が離せません」

「いいから戻れっ！」

「いやです」

「芳っ！？」

芳の口から出た言葉に、涼と寧々はぎょっとした。

相手は前線指揮官。

命令拒否は罪に問われるというのに！

「命令はここでの敵の阻止のはずです。私達は、その命令を果たしていません」

「言っている場合か！」

「命令は絶対です」

一触即発。

まさに、そんな険悪な空気が部隊を包んでいることを、このやりとりを聞いていた全員が感じた。

「――大尉。鬼龍院です」

そのやりとりは寧々と美奈代の間だけでかわされた。

時間にしてほんの数十秒。

通信モニター上に、寧々（ねね）が再び現れた時、寧々騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）、夏目中尉は、何故か必死になって笑いをこらえていた。

「……平野」
何か内面で、ものすごい葛藤をしている。
難しい表情で、何とか笑顔を作り出そうと苦労している。
今の美奈代の顔は、まさにそんな状態だった。
何故か、美奈代の横では精霊体の“さくら”がメイク道具をもって右往左往している。
「命令を遂行します」
芳（かおる）は頑ななまでに騎体の操作に集中する。
「ＨＭＣ、Ｎｏ．２５パワーセル装填完了」
「こっちに支援にくれば」
「ターゲットロック済み。パワー臨界まであと８、７」
「小清水との全ての関係を部隊として公認してあげる」
「行きます」
「早っ！」（×聞いていた全員）
「っていうか、お姉さま!?」
たった一人、涼だけは美奈代に噛み付いた。
「わ、私は、お姉さまだけのものになりたいんです！」

そう。
涼にとって、たった一人のお姉さまが美奈代だ（注意：涼の視点で）。
その美奈代が、まるで芳（かおる）に涼を譲るといわんばかりのことを言ったのだ。
好きになった相手から、「別人とつきあえ」と言われて納得出来る者はいない。
涼の反応は、そういう意味では、むしろ自然だ。

「安心しろ――涼」
美奈代は、彼女としては精一杯の優しさの籠もった笑みを浮かべ、涼にそっと囁いた。

「お前のたった一人のお姉さまとしての地位は渡さない。お前のお姉さまは、私一人だ」
「……うっ」
「そのお姉さまが、大切な涼にお願いしているんだぞ？」
「わ……わかりました」
多分。という言葉は、小さく言った。
お姉さまの命令なら仕方ない。
そう、割り切るしかないのだ。
その涼に、とびきりのご褒美がきた。

「愛してるぞ？涼」

「はいっ♪」

「……で」
もう、ＭＣ（メサイア・コントローラー）達はモニターの外で悶絶して笑い転げていた。
お腹のあたりを抱えながら、モニターに現れたのは、芳騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）、川崎少尉だ。
「ククッ……い、泉大尉。川崎です。どうなさったんですか？」

「すぐにＨＭＣの支援が欲しい！」
美奈代は大声で言った。
「ポイント９－６に魔族軍の飛行艦が出現した！」

ＳＡＳによる基地制圧作戦は……。

はっきり言う。

彼等だけに限定すると、失敗した。

ＳＡＳ隊員達の、いや、彼等を送り出した英国軍司令部の予想を上回ることがあったのだ。

中華帝国軍部隊の装備だ。

全ての面で先進国であると自負する英国ＳＡＳ隊員達でさえ装備していない高性能照準装置、暗視装置、ボディアーマー、防弾シールド、数え上げればきりがない。

何がどうしたのか、とにかく死者がほとんど出ていないだけが奇跡だ。

結局、ＳＡＳ隊員達は、メサイアによる建物ごとの攻撃しかないと判断し、美奈代達に火力支援を求めてきた。

アニエスを相手に、１対３でようやく均衡を保っていた美奈代だったが、ＳＡＳ部隊の支援要請を断るわけにはいかない。

やむを得ず、都築を追加の支援として回すしかなかった。

都築が離脱した途端、まるでそれを待っていたかのように、基地から少し離れた湖の中から突然、巨大な飛行艦が出現した。

「泣きっ面に蜂もいいところだ。ここで艦砲射撃なんてくらったらシャレにもならん！」

ヒュウ

美奈代騎から転送されるデータを見た芳が口笛を吹いた。

「こりゃ、いい獲物だよ。涼、寧々（ねね）ちゃん」

「そうね」
「ええ」
二人は、顔を強ばらせながも、口元だけは笑って見せた。
「楽しいイベントです」
「じゃ、そういうことで」
「はい」
涼はＨＭＣを担ぐと通信モニター上の美奈代に言った。
「狙撃隊、移動開始しますっ！」

「頼むっ！」
頷く美奈代の一撃が、それまで距離をとって対峙していたアニエス騎に襲いかかる。
だが、
「くっ！？」
アニエス騎は、それを紙一重で完全に回避してのける。
反撃はない。
それは、自分が遊ばれていると、美奈代に理解させるのに十分だった。
「美奈代さん」
不意に祷子が言った。
「この方との、これ以上の戦闘は無意味です」
「――――は？」
頭に血が上った美奈代は、祷子の言いたいことが最初、わからなかった。
戦闘が、無意味？
「この方は」
祷子は、相変わらずのおっとりとした声で言う。
「本気で私達と戦うつもりはないのです」
ちらと見たＤ－ＳＥＥＤは、斬艦刀を抜刀してはいるものの、そ

れ以上は何もしようとさえしていない。
「ど、どういうこと？」
アニエス騎と距離をとり、美奈代は斬艦刀を構えなおしながら言った。
「この方の目的は、私達を倒す事じゃなくて」
祷子の視線が、後方で低い高度に静止浮遊する飛行艦に注がれる。
「あの飛行艦の主の護衛です」
「……つまり」
美奈代は、祷子の言いたいことに察しがついた。
「放っておけば、この敵も、あの飛行艦も消えると？」
「ここに魔族軍の飛行艦が現れた。それが大切です」
「……そうね」
祷子は頷きながら答えた。
恐らく、この施設のどこかに魔族がいる。
飛行艦は、その魔族の回収を、メースはその護衛を任務としていると見て間違いないだろう。

「狙撃隊の出動は、無意味かしら？」
「むしろ危険かもしれません」
「……」
美奈代は、ちょっと考えた後、言った。
「涼」

「撃つな？」
寧々（ねね）と山崎達が中華帝国軍を牽制する間に移動した涼達は、もう既にトリガーを引く一歩手前だった。
「何ですか？どうしたのですか？」
「敵の動きがわからん。艦砲の的になりたくなかったら、今は撃つな」
「は……はい」

涼騎の“眼”は、数キロ離れた場所に浮かぶ飛行艦を捉えている。
全長４００メートルは超えるだろう大型艦だ。
砲塔は確認出来ないが、魔族軍がどういう方法で艦砲を撃つのか全く分からない以上、下手な攻撃は自殺行為だ。
美奈代が攻撃中止を命じた理由が、何となくわかった気がする。
かといって、見た以上、この敵に背を向ける勇気もない。
「ここで攻撃を仕掛けてこないということは、撤退するつもりのようですね」
高良中尉も、褄子と同じ判断だ。
「小型艇が一隻、飛行艦に接触します」

「お姉さま。発砲の許可を」
「待て」
舌なめずりしながら飛行艦に照準を合わせる涼に、美奈代は言った。
「涼。敵艦からの策敵レーダー波、感知しているか？」
「……いえ？」
涼は、敵からのレーダー、レーザー、その他、脅威となりうる“何か”を探知すれば警報を発する警戒システムの表示を見た。
反応は何もない。
「直接照準でこちらを狙っているのでは？」
「砲門はどこだ？」
「……」

なめらかな流線型の船体が、チベットの陽光を受けて美しく輝く。
艦の真ん中のハッチが開いた。
小型の飛行艇が接近しつつある。
涼はもう一度、飛行艦を眺めた。

水滴を押しつぶしたような、あまり見たことのないデザインの艦。
そこには、砲などという無骨なものはない。

「涼。お前があの艦にいたとしよう。この状況で、砲を用意しないのか？」
「敵の出方を待っていたら、逃げられます」
美奈代の疑問がわからないではない。
しかし、涼にとって大切なのは、ここで敵艦を仕留めることであり、敵艦の武装についてではない。
その涼に、美奈代は意外なことを言った。
「逃がしていい」
「えっ？」
「我々の任務はこの施設の制圧と、ＳＡＳの支援だ。私がお前達の支援を求めたのは、あの艦からの艦砲射撃を恐れたからにすぎない」
「……」
「だが、敵に戦闘の意志がなければ、こちらから仕掛けるいわれはない」

飛行艇が飛行艦の中に消えた。

「このまま消えてくれ……頼むから」
美奈代のその小さなつぶやきを、涼は聞き逃さなかった。

次の瞬間――――
飛行艦が回頭を開始。
美奈代達に艦尾を向けた状態で回頭が止まったと思った次の瞬間、飛行艦は美奈代達の視界から一瞬にして消えた。

「し、信じられません」
牧野中尉の声は震えていた。

「い、今の瞬間速度――――マッハ２０……ど、どうやって飛行艦でそんな速度を」

時速換算で１００キロも出せないのが人類側飛行艦だ。

それにも関わらず、さっきまで浮かんでいた飛行艦は、間違いなく一瞬で視界から消えるほどの加速を生み出した。

あり得ない。

一体、どうやって？

その理屈を巡ってブツブツと自問を始めた牧野中尉を無視した美奈代は、部隊に命じた。

「全騎、武装再確認、残敵の掃討に動くぞ！」

「了解っ！」

それから3時間後。

美奈代達は、生き残っていた中華帝国軍メサイア部隊を掃討。

施設に翻っていた黄龍旗が引き下ろされ、ユニオンジャックが翻る。

爆音をとどろかせながら、英国軍のＣ－１３０輸送機が3機、滑走路に指定された平地に強行着陸した。

あたりには濛々とした土煙が立ちこめている。

そんな中――――

「――――だから、機嫌直せって」

騎体から降りた美奈代の前で頬をふくらませてそっぽをむいているのはフィアだ。

フィアが怒るのも無理はないと、美奈代も思う。
何しろ、電波妨害任務のため、単独で別行動になったフィアは――
――
はっきり言う。
美奈代に完全に忘れられていたのだ。
作戦行動停止を“鈴谷（すずや）”に宣言しようとして、強力な電波妨害を受けていることを牧野中尉に指摘され、初めてフィアが何をしているか思い出したのだ。
「忘れてたって、はっきり言った」
「だからぁ」
「もういいわよ。悪かったわね。影が薄くて」
フィアは半ば崩壊したビルを見つめながら、ぶすっととした声で美奈代の言葉を遮った。
さつきの攻撃で破壊されたビルの間近では、涼騎と芳騎が、地下施設の残敵掃討を継続するＳＡＳ部隊支援のために配置についている。
都築とさつきは、擱座した宗像騎の背中から広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクを外す作業を続けているし、山崎と美晴、そして寧々は、山脈の尾根に展開し、周辺の警戒に出ている。
「状況は？」
フィアは不機嫌さを沈めた声でそう訊ねた。
「施設制圧は完了」
美奈代は事務的に答えた。
Ｃ－１３０から降りたランドローバーが美奈代達の近くを通り過

ぎていく。
二人は敬礼で見送った。
「英国が派遣してきた後続の専門部隊と合流次第、システムの試射を行う」
「試射？」
フィアは、その言葉に、その端正な眉をひそめた。
「どこへ？」
「私が知るもんですか」

ランドローバーと入れ違う形で、ＳＡＳ隊員達が鹵獲（ろかく）した中華帝国軍の小型軍用車両に乗ってどこかへ移動していく。
方角は北。
メサイアの陣地があった方角。
今、祷子が哨戒に出ている方角だ。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で焼き払ったから、陣地にはまともなものは、それが生きている人間でさえ、何もいないことは、トリガーを引いた美奈代自身がわかっている。

そういえば――
通過する途中、放棄された廃屋同然の家々があったのを、ふと思い出した。
古い建物が密集していたが、あそこを調べに行くのかな？
そんなことを考え、車両から視線を外した美奈代は、フィアに向き直った。

「――まぁ、北米大陸でしょうね」
「北米？」
「他に撃つところないわよ。北米大陸の中華帝国軍に大打撃を与える。これで英国は米国へ恩を売ると同時に、世界に対して、このシステムの保有を宣言することになる。それが一段落したら、日本へ」

「さっさと日本へ撃ち込んでほしいわ」
「全く」
美奈代とフィアは、プッ。と噴き出すと楽しげに頷き合った。
「ただ、この騒ぎでいい面の皮になったのは、造ったこの国ってわけね」
お気の毒様。
そう呟くと、
「さて」
フィアは笑って美奈代の肩を叩いた。
「――え？」
今までにない親密な態度に、美奈代は鳩が豆鉄砲を喰らったように、きょとんとした顔で、微笑むフィアを見た。
「とにかくお疲れさま。大変だったわね。これからＳＡＳと接触するんでしょ？」
「う、うん……」
「……どうしたの？」
「い、いや……その」
美奈代は言葉が喉に詰まったように口ごもる。
「でもよかった♪」
フィアは心底嬉しいという顔で美奈代に言った。
「あんたがレズに転向してくれたなんて♪」
「――へ？」
ぽかん。
美奈代は、まさにその一言でケリがつく。
そんな顔をしていた。
「小清水少尉との会話は聞いていたわ。もう笑ったけど」
「あ、あれは違う！」

美奈代はムキになって答えた。
「あれは牧野中尉が用意したセリフを読んだだけだ！」
「――へえ？」
フィアは勝ち誇ったような、ニヤニヤした顔で言った。
「いいのよ？恥ずかしがらないで――あ。それでも、私はノーマルだからね？わかっていると思うけど」
美奈代は、そんなフィアをジッと見た後、
「女として一言、言っておく」
そう、言った。
「私はもう――染谷候補生のことは諦めている」
「……へ？」
「だから」
心底面白くない。
そんな顔で、美奈代はそっぽを向きながら言った。
「私は染谷候補生に、本気で好きになってもらうことが出来なかった。お前とは違う」
「……」
「私は……あの人に告白する前に逃げた。好きな人から逃げ出すような卑怯者の腰抜けに、人を好きになる資格はない」
「……」
「だから……上手く言えないけど」
「……」
美奈代は、フィアに頭を下げ、そして言った。

「……あの人を……お願いします」

「……何よ」

フィアは真顔で言った。

「この嘘つき」

「……えっ？」

「あーっ！もうっ！」

顔をしかめたフィアは、心底嫌悪感をあらわにして、頭を振りながら言った。

「何嘘言ってるのよ！」

「う、嘘なんて！」

「諦めている？好きになってもらう資格がない！？それが嘘だって言ってるのよ！」

「だ、だから！」

「だったら、なんで諦めた男のために泣いてるのよ！」

「……え？」

美奈代の手が瞼に触れようとした。

「ばかっ！」

とっさにのばされたフィアの手が、美奈代の腕を掴んだ。

「パイロットスーツのグローブで顔なんて触れたら肌が傷つくわよ！？」

フィアがポケットから取り出したのはハンカチだ。
「ったく――女の子としての嗜みってものを学びなさい！素質は悪くないんだから！」
「……年上みたいなことを」
瞼に押しつけられるハンカチが濡れていることを、肌が教えてくれた。
「……悪かったわね」
丁寧にハンカチを動かしながら、フィアは不機嫌そうに言った。
「化石みたいな年上で」
「……へ？」
「……何でもない。忘れて」
「……あ、あの」
「とにかく！」
ハンカチを美奈代から離したフィアは言った。
「あんた、初恋だったんでしょ？瞬のこと」
「……うん」
「初めて好きになった人の事を、そんな簡単に忘れることなんて出来るもんですか。何年年月が過ぎても、何人と恋をして、何人と寝ても、それでもあの時、私はあの人を好きだったんだって、そう思い出せるのが初めての恋なのよ――そういうものでしょ？初恋って」
「な、何が言いたいのかわからない」
「この鈍感……」
フィアは、むしろ気の毒そうな顔で美奈代に言った。
「好きになった相手に、別な恋人が出来たからって、そこまで卑屈になる必要がどこにあるのよ。その平べったい胸をせいぜい張って、“ゆずってやる”くらいのこと言ってよ！そんな態度とられたら、私、ムカつくのよ！」
「平べったいとは何よ！」
美奈代は顔を真っ赤にして怒鳴った。

「こ、これでもBはある！」
「カップの大きさと胸の大きさは関係ないでしょ？」
「そ、そうなの？」
「……ったく」
ほとほと呆れたというか、むしろ哀れむような顔でフィアは言った。
「あんた、本当に女？」

●天壇護衛艦隊巡航艦“バルザス”艦橋
「“システム”を放棄して大丈夫なのですか？」
「ご心配なく」
巡航艦“バルザス”艦長の問いかけに、ダユーは平然と答えた。
艦長席の横。臨時に設けられた席で、ダユーは悠然と紅茶を楽しんでいた。
「玩具は、使う子供がおいたをしないように工夫されているものです」
「小官のような愚物には」
艦長は表情を変えることなく言った。
「そのようなお答えは、とんと意味をはかりかねますな」
「くすっ。私は艦長のそういうところが好きです」
「……どうも」
「まず、あのシステムには制限がかけられています」
「制限？」
「ええ」
ダユーは見とれるほど悠然とした仕草でティーカップをソーサーに戻した。
「あれは南米・アフリカ、そして日本には撃てません」
「射界の問題？」

「ホホッ。まさか」
ダユーは背筋がとろけそうな程、甘い声で笑った。
「制限がなければ、地球どころか、宇宙空間まで全周囲の攻撃が可能なシステム。射程に入れば、逃れる術はありません」
「……場所的に射撃禁止とプログラムした？」
「正解です」
「……ふむ。最低でも、魔族側に使用されないように……と」
「その通り」
ダユーは頷いた。
「敵に与えた剣で刺されたなんて、シャレにもなりませんからね」
「左様……ちなみに、他にも何か？」
「それがですね？」
待ってました。と言わんばかりに、ダユーは嬉しそうに頷いた。
「あのシステムは」

Ｃ－１３０輸送機３機が平原に強行着陸し、荷物と乗客を降ろすと、すぐに飛び立っていった。
ＳＡＳを率いるマクミラン大尉達と美奈代が接触したのは、地下施設への入り口でのことだ。
英国人というから、てっきり白人だと思っていたが、マクミラン大尉は黒人だった。
モヒカンに刈り上げられた髪にいかつい顔。
軍服の上からでもわかる筋骨隆々とした体つき。
本能的に怒らせたら無事では済まないだろう雰囲気。
はっきり、美奈代のようなタイプの女性は、近づきたいとさえ思わない漢（おとこ）臭い、臭すぎる程の漢（おとこ）がそこにいた。
「貴国の本隊はいつ？」
「このシステムの試射が終わってからだ」

システムの司令部位、見ても罪にはならないだろう。

マクミラン大尉は、そう言うと地下施設へと美奈代達を案内する道すがら、外見とは異なり、意外なほど気さくな面を見せてくれた。

大尉の祖父の時代に英国へ移民した移民3世であること。

日本へは10年ほど前に訪れたことがあること。

寿司は食えないが、和牛のステーキの味が忘れられないこと。

その口から出る内容は様々だ。

恐らく、美奈代達が女性だから親切にしてくれているんだろうと、美奈代はマクミラン大尉の配慮に内心で感謝していた。

「――これが、今回の俺達の獲物の中枢だ」

SAS隊員達がどこからか持ち込んだらしい土嚢を積み上げ、機関銃座を拵えいる間を通り、入った先は、壁一面をモニターと様々な計器類が埋める広い室内。

白衣を着た中国人技師達が、先程到着したC－130に乗っていたのだろう白人技師達に何事かを問いつめられていた。

中には銃口を口の中に突っ込まれ、泣いて手を挙げる中国人技師もいる。

とてもではないが、技師同士のやりとりではない。

むしろマフィアが中国人を痛めつけていると言われれば、そのまま納得しそうな、そんな光景だった。

「ここは？」

美奈代は事務的に訊ねた。

「システムのコントロールルーム。地下施設のおかげで破壊を免れることが出来たわけだ」

マクミラン大尉は満足そうに頷いた。

「これで――――このバカげた戦争も終わる」
「……はい」
美奈代は一瞬、返答が遅れた。
戦争が終わる。
その言葉を、理解出来なかったのだ。
自分は何のために戦っている？
戦いに勝ちたいから。
死にたくないから。
戦う理由はいろいろ自分に言い聞かせてきた。
だが――――
戦争を終わらせるため。
その言葉だけは出てこなかった。
自分は駒に過ぎない。
駒が、戦を終わらせる事が出来るはずがない。
美奈代は、都築にもそう言った。
亡き父もまた、美奈代にそう言っていた。
駒は駒に過ぎない。
替えの効く駒に過ぎないのだ。

そう、思っていたのだ。

「これで……終わりますか？」

美奈代はマクミラン大尉に尋ねた。

「これが使われれば」

「かつて反応弾を戦場に投入した連中は」

マクミラン大尉は、腕組みをしながら、視線を白人技師に脅されながら働く中国人技師達に向けたまま、答えた。

「反応弾の投入で戦争が終わる。若者が戦場で死ぬことは止まると信じていたと聞く」

「……」

「それが無駄だったこと、そして火に油を注いだことを、俺達は知っている」

「……はい」

「……もし、イズミ大尉が」

「はい？」

「一文無しの腹ぺこで、道を歩いていたとしよう」

「？」

突然のたとえ話に、美奈代は面食らった顔でマクミラン大尉を見た。

「道ばたに宝石が1つ、転がっていた――どうする？」

「……拾います」

「拾って、金に換える？」

「そうですね」

「金に換えればメシが食える？」

「そうです」

「嬉しいだろうな」

「当然」

「そう、大尉が意気揚々と宝石を質屋に持っていったら、それは盗品だと言われ、大尉は刑務所に送られた」

「……なんですかそれは」

「出獄した後、大尉は再び空きっ腹を抱えて道を歩く羽目になった。するとまた、道ばたに宝石が……」

マクミラン大尉が楽しげに美奈代を見つめながら訊ねた。

「――どうする？」

「……」

美奈代は、まるで目の前に宝石が落ちているかのように、返答に躊躇した。

宝石を拾って投獄され、再び道ばたで宝石を拾う。

次は斬首かもしれない。

縛り首かも。

でも、これが本当に――

「俺なら拾う」
美奈代が答える前に、マクミラン大尉はきっぱりと言った。
「それが、このシステム奪取作戦に参加した理由であり、今の俺の心境だ」

「……そう、ですね」

「そう。百万分の一でもいい。チャンスがあるなら活かす。そうしなければ――」

マクミラン大尉がそう言いかけた時、

「大尉！」
彼を捜していたらしいＳＡＳ隊員が駆け寄ってきた。
「こっちへ来てください。どうもヘンな事態になりました」

その部屋の床は、どす黒い赤で染まっていた。
「っ！？」
美奈代はその部屋に入ろうとするなり、口元を押さえて後ずさってしまった。
部屋の空気は、まるで美奈代に入るな。といわんばかりに血の臭さに満ちあふれていたのだ。
「ご婦人が入るにゃ、きついぜ？」
ＳＡＳ隊員の一人が、彼なりに気を使っているのだろう。美奈代に言ったが、
「ご、ご心配なく」
美奈代は深呼吸すると、部屋の中へと一歩を踏み出した。

室内には、血だまりの中に、大の字に転がった１０を超える死体が折り重なるようにして転がっている。
美奈代は、なるべく見ないようにしたかったが、室内の至る所に転がる死体全てを見ずにいることは出来なかった。
美奈代はそっと、壁側のなるべくきれいな床を選んで立った。
「こ……これは？」
マクミラン大尉も、あまりの惨状に目を見張っている。
「何が起きたんだ？これは」
彼は、近くに転がっていた若い将校らしい男性の死体の前で片膝をついて、銃の筒先でその死体を小突いた。
ごろん。と音を立てて転がった死体。
その右目があったあたりが、無惨な血まみれの肉片の巣窟に変わり果てていた。
「至近距離からの一発……？」
別な死体は、間違いなく後頭部を斜め下から撃たれた跡がみてとれた。
意外なことに、これだけの人数がいるのに、誰一人として銃を抜いていない。
「……違う」
マクミラン大尉は、死体達がつけている階級章を改めて見直し、そして理解した。
金色に輝く階級章。
それは、ここにいる死体達が、マクミラン大尉達とは比較にならないほどの高級将校達であり、そして、それ故に彼等が一切武装していないことを教えてくれていた。
「隣室もヒドイものです」
隣の部屋から出てきたマクミラン大尉の部下が言った。
「俺はしばらく、フリカッセとソーセージが食えません」
「……俺もだ」

「大尉」
室内を調べていた別な隊員が、室内の大理石で出来たテーブルの前でマクミラン大尉を手招きした。
大理石のテーブルの上には、紙を大量に焼いた後がはっきりと残されていた。
「機密書類を処分したものと思われます。随分と細かい奴ですね。天井のスプリンクラーまでご丁寧に破壊してやがる」
「それにしても、この死体の山は？」
「階級は、ほぼ全員が金星……か？」
「金星は……こいつが１つ、こいつは３つ！？」
「すげえぜ！」
ＳＡＳ隊員の一人が叫ぶように驚嘆の声をあげた。
「これやってのけた奴はヴィクトリア十字章モノだぜ！」
「まさか、俺達が来たから集団自殺した？」
「キース、そんなことがあると思うか？自殺を命じる奴が死ねるはずがない」

「……口封じのため」
美奈代のぽつりとした言葉が、マクミラン大尉にも届いたらしい。
「間違いなく、そうだろうな」
マクミラン大尉の言葉に、美奈代は思わず口を押さえた。

「キース、写真をとれ。これほどの金星揃いなら、個別に当たれば何か情報に行き着くことが出来る」

「了解――イズミ大尉。済みません」
ポケットからデジタルカメラを取り出したＳＡＳ隊員に場所を譲った美奈代は、壁際に数歩、下がった。

カツン

その軍靴が何かを踏んだことを教えてくれる。

「？」

美奈代は、かがんで踏みつけたものを手にした。

ボタンだ。

「……」

美奈代の目が、見開かれたのも無理はない。

美奈代は自分の服のボタンを確かめた。

自分が落としたわけじゃない。

自分でなければ？

答えは単純だ。

単なるボタン。

そのはずなのに。

それは、あまりに美奈代には見慣れ過ぎたものだった。

単なるボタン。

それは――

美奈代達、近衛軍メサイア搭乗員向け戦闘服のボタンだった。

天裁破壊作戦　第四話

北側の旧王宮に向かった連中が指示を求めている。
そう、報告が入ったのは、マクミラン大尉達がその部屋から出た所だった。
戦闘で破壊を免れたその建物から見た外の景色は、広い草原と抜けるような青空が見事な調和となって美奈代の目を楽しませてくれる。

美奈代は、この土地が好きになり始めていた。

どこまでも続く、この空を飛んでみたい。
どこまでも続く、この大地を走ってみたい。
こんな美しい景色を眺めながら、ゆっくりと暮らしてみたい。

そう、思い始めていたのだ。

「何？何が起きているって！？」
無線装置に怒鳴るマクミラン大尉のドスの聞いた声が廊下に響く。
その声に、遠くへ旅立っていた美奈代の意識が引き戻された。
通信の感度がよくないらしい。
大尉は四苦八苦して通信を試みて、驚いた声を挙げた。
「民間人が立て篭もっているだと！？」

この天裁システムの建設用地は、元々は離宮の跡だったことは先に述べたはずだ。
一体、広大な土地は他にもあろうに、何がどうして一般人が近づ

くことさえ出来ない離宮を潰してまでこの土地にこんな兵器を作り上げたのか。
それを知る者は、少なくともここにはいない。
ただ――――

ダンッ！
ダンダンダンッ！！
中華帝国軍の車両で移動してきたマクミラン大尉達は、建物内部から響く銃声に、車から出るのをやめた。
付近には白いメサイアが待機している。
そして、背後には美奈代の騎が追いつきつつある。
大抵のことはこれで何とかなるはず。
そう思うだけで、マクミラン大尉の心理的負担はかなり軽い。

先に出発した部隊の車両の横に車を止めた。

「音からして」
マクミラン大尉の横に座っていた、スコープのついた狙撃銃を持つ兵士が耳に手を当てながら言った。
「81式7．62mmアサルトライフルが3、88式5．8mm機関銃が1。数はたいしたことないですが……」
その兵士は首を傾げた。
「どうした？」
「兵士の撃ち方じゃない。まるでおっかなびっくり撃ってるようだ。はじめて射撃した時の訓練兵のそれとそっくりですよ」
「……ラドグリフ！」
大尉達を見るなり、建物の物陰から駆け寄ってきた若い隊員に怒鳴った。
「どういうことだ！」
「建物の哨戒を目的に、内部へ侵入。各所に設置されたバリケード

どに行く手を阻まれました」
「バリゲートの向こうにいたのが？」
「間違いなく、民間人です。いや、自分は民間人と判断しました。でなければ――」
ラドグリフという名の隊員は、困惑気味にマクミラン大尉の顔を見る。
「はっきりしろ！」
マクミラン大尉は部下を怒鳴った。
「そんな言葉が報告になると思っているのか！？」
ラドグリフは怒鳴り返すように大声で言った。
「問題は、奴らの衣装です！」
「？」

ナイフの先にくくりつけた鏡でバリゲートの様子を確認したマクミラン大尉は、むしろ自分が混乱したい心境だった。
厳めしい軍服姿の男達は山ほど見てきた。
それこそ世界中の軍隊、テロリスト、経験は豊富だ。
だが、こんな敵を見たのは、その彼をしても初めてだった。

緑や紅い煌びやかな衣装を身にまとい、奇妙な形に結い上げられた髪型の女性達が、自分達めがけて銃口を向けている。
いくら何でも、中華帝国軍の女性兵士の正装というわけではあるまい。
何より、彼女達が銃の取り扱いに全く慣れていないのは一目で分かる。
放棄された機関銃はベルトリンクが逆に入っている。
小銃を構え方も滅茶苦茶だ。

もし、彼女たちが敵だったと仮定しよう。

どうして、あんな格好をしている？

あんなドレスみたいな――

ドレス？

成る程？

理由はどうやら簡単そうだ。

マクミラン大尉は、自分のいる場所を思い出し、答えを見つけた。

離宮は放棄されたのではない。

この施設は、離宮としてまだ生きているのだ。

つまり、あの女性達は――

「こりゃ参ったぞ……おい」

「降りて、騎士として戦ってくれ？」

美奈代は、突然のマクミラン大尉からの要請に正直、驚いた。

「で、ですけど」

「白兵戦で殺せと言ってるんじゃない」

マクミラン大尉は諭すように言った。

「取り押さえてくれればいい」

「はい？」

「相手は民間人の女性、しかも、どうやら身分はかなり高い」
「身分が高い？」
「この建物が離宮だということは知っているな？」
「離宮の跡……では？」
「違う！」
マクミラン大尉は強く首を横に振った。
「我々は思い違いをしている。ここはまだ、離宮として生きている」
「……ちょっと待ってください」
美奈代もようやく事態が理解出来た。
「離宮にそんな身分の人がいるってことは！」
「――そうだ」
マクミラン大尉は頷いた。
「この離宮に、恐らく帝室に関わる身分の誰かがいるはずだ。幸か不幸か、銃を持っているから取り押さえた程度なら言い訳が出来るが、殺したとなると、中華の連中にとんでもない報復の口実を与えることになりかねん」
「……万一の際は、我が国をスケープゴートにするつもりですか？」
「それはない。安心しろ」
どうやって。
美奈代はその言葉だけは口の中だけに抑えた。
「責任は私が持つ。私を信じてくれ（トラスト・ミー）」

トラスト・ミー

それは、日本で新聞を読んでいると、「私を信じるな」という意味に聞こえる言葉だ。

「了解」
美奈代は言った。
「英国軍の先方として、全責任を英国軍マクミラン大尉にあると記

録。大尉？今の発言は記録済みです。よろしいですね？」
「頼む」
マクミラン大尉の返答に、一片の躊躇もなかった。
大尉の言葉に嘘のない証拠だと、美奈代はそう判断した。
「泉」
マクミラン大尉達と随伴していた宗像が通信に割り込んできた。
「私と祷子が行こう」
「お前達が？」
「白兵戦でお前は役に立つとは思えん」

「というわけで」
「はい」
通路を折れた先には家具で造られた即席のバリゲートがあり、ＳＡＳ隊員達がそこで釘付けにされていた。
ＳＡＳ隊員達は、何度か世界共通言語である帝国語で説得を試みたが、彼女たちは帝国語がわからないらしい。
キーキーとガラスをひっかいたような、異様に甲高い怒鳴り声ばかりが返ってくるだけで、さすがの隊員達もさじを投げていた。
そんな中、ＳＡＳ隊員達が自分達を見ているのを十分承知の上で、宗像と祷子はコクピットから引っ張り出してきたスタンブレードを腰に下げた。

スタンブレード

ハードラバー製の刀身にスタンガンを組み込んだ模造刀の一種で、

騎士の間では訓練用に用いられるのが一般的だ。
あくまで模造刀にすぎない。

真剣以外にも、魔法刀たる霊刃（サイコブレード）の携帯が許され、それが身分証のかわりとなる魔法騎士。

真剣の携帯が許可される一般騎士。

これら以外の存在として身分が形成される美奈代達メサイア操縦者たる騎士は、せいぜい短剣の携行が認められる程度で、刀身が長い真剣の携帯は許可されていない。
剣一本でこれほどの厳格な身分制度があるのが騎士の世界を覆すことは、例えメサイア操縦者が個人的に剣に熟練していようと、出来る相談ではない。
彼等メサイア操縦者が携帯出来る唯一の長刀は、真剣でさえないということが、騎士の世界で彼等がどういう待遇にいるかを如実に示しているといえよう。

乗り物を乗りこなせるだけなら騎士といえない。
騎士はその身で剣を振るってなんぼの身分。

そういうことだ。

「二人を取り押さえる。ブレードはスタン機能だけで良い」
「ですね」
祷子は宗像の指示に落ち着き払った顔で頷く。
祷子達のいる通路は、バリゲート用に用意された家具の残骸が無惨に転がっている。

それでも職人が丹誠込めて造ったことが明白な細かい細工が施された建具に飾られていることに変わりはない。
レースのカーテン越しに入る午後の柔らかな木漏れ日に照らされる褄子の姿は、ＳＡＳ隊員ですら、仕事を忘れて魅入る程の何かを秘めている。

「殺さなくていい。何かあったら言ってくれ。いち、にのさんでいくぞ？」
「はい」
「よし。いち、にの――――」

ダンッ！

一瞬にして、ＳＡＳ隊員達の前から二人の姿が消えた。
隊員達がそう思った次の瞬間、バリゲートの向こうからくぐもった音が連続して聞こえた。

「さすがに違うってわけだ」
縛り上げられた上に、猿ぐつわを噛まされた女性達が床に転がされている。
銃を持ったＳＡＳ隊員達に取り囲まれ、恐怖の表情を浮かべるのは、まだ若い女性達。
「宗像さん、縛るの上手いですね」
「慣れているからな」
宗像は、彼女たちの前にしゃがむと、帝国語と、知っている広東語で語りかけた。
「言葉はわかるか？」
その女性が首を振って、何事かを呟いた。
「……だめか」

「手首が痛いそうです」
祷子だ。
「宗像さん、ちょっと手首を緩めてあげてください」
「しかし」
「ちょっと待ってくださいね？」
祷子は、その女性に宗像の知らない言葉で二言、三言語りかけた後、無警告でその女の目の前めがけて拳銃を発砲した。
目を見開いて失神寸前におびえる女性に、再び祷子が語りかけると、その女性は泣きながら頷くだけだ。
「中華帝国の」
拳銃をホルスターに戻した祷子は、帝国語で言った。
「紫禁城を中心とした宮廷語ですよ。私も使っている人に、初めてお会いました」
「よく知っているな」
宗像は女性の手首を縛ったロープをゆるめた。
「子供の頃、習ったんです」
「で？何で発砲したんだ？」
「警告したんです」
「警告？」
「ええ」
にこりと微笑んだ祷子は、再びホルスターから拳銃を抜くと、あろうことかその女性のスカート状の衣装の中へそれをつっこんだ。
女性が甲高い悲鳴をあげるのも、さすがに当然だと宗像でさえ思った。
「ロープは緩めますが、ここで暴れたら、この状態で引き金引きます。冗談かどうか試してみますか？って」
「……」
ここはチベット離宮。

自分達は宮廷より派遣された女官だ。
ここにいる、ある御方の身の回りのお世話のために来ている。
離宮は、突然乗り込んできた軍によってほとんど潰され、我々もここから自由に出ることが出来ない。
軍が離宮を潰した後、何をしていたのか、全く分からない。
食料と水を軍から供給されていたため、逆らうことも出来ずにいた。

言葉がわかると知った途端、女達は矢継ぎ早にしゃべり出した。
祷子が一々、それを帝国語に翻訳してＳＡＳへ伝えた中で、およそ有益な情報はそれだけだ。

問題は――

“ある御方”とは誰のことだ？
その御方は、どこにいる？

その問いかけには、何故か女官達は一斉に黙り込んでしまった。
それだけは語るまいという、強い意志がその双眸に見て取れる。

「ハァ……どうやらこの先に」
マクミラン大尉は、心底困ったという顔でため息をついた。
「俺達が想像も出来ない恐ろしいモンスターが鎮座しているらしいな」
「どうします？」
「……進んで退治するしかあるまい？」
宗像に、マクミラン大尉は肩をすくめてみせた。
「ドラゴンスレイヤーは趣味じゃないが」
「それは騎士の名誉です」
不敵に笑った宗像の横では、祷子が猿ぐつわを緩め、女官達に水

を与えていた。
「彼女は」
マクミラン大尉は不思議そうに宗像に尋ねた。
「日本人だろう？」
「ええ」
「なら、何故、普通の中国人でさえ知らないはずの宮廷言語を知っているんだ？」
「……誰かに習ったと聞きましたが」
「……」
マクミラン大尉は、首を傾げると、部下に命じた。
「移動を開始する！」
「祷子。女官達に水を与え終えたら、後からついてこい。合い言葉はフィッシュ・アンド・チップスだ」
「はい」
宗像達が移動したのを見送った祷子は、宗像達に聞こえないように、女官達に訊ねた。
「お聞きしたいことがあるんですが？」
水をもらったことに感謝し、そして心を許したんだろう。
女官達はそれなりに気安く答えた。
その祷子の質問は、女官達の度肝を抜いた。
「――西姫殿下が、ここにいらっしゃるのですね？」
「っ！？」
女官達の顔色が変わった。
それが、答えだ。

「……すでに他界されていたと聞きましたが、やっぱり」

「あ……あなた」

女官の一人が、恐る恐る訊ねた。

「い、一体……何者ですか？」

「私ですか？」

祷子は、きょとんとした顔で自分を指さした。

「私は……えっと……日本人です」

他になんて答えたら良いのでしょうか？

そう笑う祷子に、女官達はあからさまな不審な視線を向けてくる。

当然だ。

１０億を超える中華帝国人の中でも、自分達の使う宮廷語を知っている者は恐らく１万人いないだろう。

極端すぎる程の少数言語をこうもあっさりと使いこなす外国人がいるはずがない。

だから、女官達は祷子をどう見たか？

敵に寝返った元女官のスパイ。

つまり、祷子は同国人だ。

そう、見なしたのだ。

だが――――

「昔、隣に住んでいた中国人のおばあさんが、元々、宮廷で料理人をしていた時に習ったからって、教えてくれたんです」

祷子はその不審な視線に気づかない様子で、あっけらかんと語り続ける。

「おばあさんは、冬になると小籠包（シャオロンパオ）を作ってくださったんです。おいしかったですよぉ？」

祷子は水筒を片づけると、真顔で訊ねた。

「さて――教えて下さい。事故死されたはずの西姫殿下が、何故、こんな所に？そして、西姫殿下がどうしてこんな扱いを受ける必要があるのです？」

「……」

「……」

女官達は口を閉ざした。

最初に見せていたおしゃべりはどこにもない。

あるのは不信感だけだ。

「……殿下が女性だからですか？」

祷子はそれでも問いかけを続けた。

「西太后の遺言にありますよね？「以後女をして国を当たらしむるべからず。これ本朝の家法に違背すればなり」。それを厳守する、王朝の政治姿勢はある意味立派だと思いますけど」

「……殿下におありなのは」

しびれをきらしたように、最も年上の女官が答えた。

「そんなことだけではありません」

「？」

「殿下は、皇帝のあまたの皇子達にはない、“真のお力”をお持ちです」

「真の……力？」

「あなたは、それを知りたいのでしょう？」

「いえ？」

祷子はきっぱりと否定した。

「離宮に囲うなら、最初は愛人かなって思いましたけど、愛人ならこんな離れた所に幽閉同然に扱うはずがない。皇子？それも違うだろうとなれば、姫君。だけど、皇帝の姫は、死んだはずの西姫殿下だけ。どうしてだろうって、単なる好奇心です」

「うそ」

「本当ですよ」

祷子は笑って言った。

「それに、それを知ったからといって、一兵士に過ぎない私に、何が出来るというのですか？」

「……でも」

「でも、よかったら教えて下さい。真の力って何ですか？」

「……姫様のお力は、皇帝陛下さえ恐れられているものです」

女官は覚悟を決めた声で言った。

「騎士統率する特殊なお力――ご存じですか？」

祷子がその問いかけに反応する前に――

ダンッ！
ダダンッ！

銃声とは違う。
丁度、重いものを床にたたきつけたような、そんな音が響き渡った。

宗像達の向かった通路の奥だ。

「ここを動かないで下さいね！？」

祷子は、通路を駆けだした。
角を曲がった先。
そこには、マクミラン大尉や宗像達が倒れていた。
ＳＡＳ隊員の中で、立っている者は一人もいない。
皆がぐったりとして身動き一つしない。

「だ、大丈夫ですか！？」
慌てて駆け寄ろうとした祷子だったが――

「きゃっ！？」
まるで空気の塊をぶつけられたような衝撃を全身に受け、壁に叩き付けられた。
骨をガードするプロテクターがなかったら、無事では済まなかったろう。
祷子は、一瞬、息が止まった。
「――ぐっ」
よろける脚を堪え、何とか呼吸を整える。
頭を打たなかったのが不幸中の幸いだ。

意識を失ったら――死ぬ。

「こ……これは？」

祷子は、先程の女官達の言葉を思い出した。

“騎士統率する特殊なお力”

そう。

それは要するに――

「くっ！？」

祷子は意識を集中し、次の一撃に備えた。

普通の眼には見えないエネルギーが、祷子には青い奔流となって自分に襲いかかるのが見えた。

祷子の体から発せられた紫色のエネルギーが、また奔流となってそれとぶつかり合った。

その衝撃のせいだろう。

周辺のガラスが、一瞬して砕け散った。

「――っ！？」

幼い女の子の息をのむ声が、物陰から聞こえたのを、祷子は聞き逃さなかった。

「自分以外で、この力を持つ者がいると知らなかったのでしょう？」

祷子は、物陰にめがけて語りかけた。

「驚きました？」

「……」

「出てきなさい？今なら、この人達をこんな風にしたこと、怒らないから」

「……」

「出てこないと、お尻叩いちゃいますよ？痛い痛い思いしてもらいますよ？」

「……」

「出てきなさい」

毅然とした、不思議と威厳にあふれた口調の祷子の声に、物陰のカーテンが動き、小さな影が、恐る恐るという仕草で動く。

出てきたのは、中国宮廷伝統の衣装に身を包んだ、まだ１５にも満たない、一人の少女だった。

祷子は、その少女めがけ、恭しくお辞儀をした。

「近衛軍中尉、風間祷子と申します。初めまして。西姫殿下♪」

天裁破壊作戦　第五話

天裁が攻撃された。

実は、これを中華帝国政府が知ったのはかなり後のことだった。
天裁は機密施設であり、一般部隊にはチベットの僻地に超国家レベルの重要施設が存在すること自体、知らされていなかった。
また、何かあっても、それを察知出来る範囲に軍事施設は存在せず、また、機密施設であるが故に、施設周辺の移動や飛行は原則禁止されていた。

つまり、何かあったら、天裁からの通信を受ける以外、周囲は何が起きても察知すること自体が出来なかったのだ。

「天裁には満足している」
御簾の前に座る摂政は、満足そうに頷いた。
「タイとカンボジア戦線での戦果は、まさに我が国の裁きの鉄槌であったわ」

「それはそれは」
その前に座るのは、ユギオだ。
「ご満足いただければ慶賀の至り」

「うむ。そちが提供する新しい兵器と技術によって、我が国は今後より一層、発展するだろうと聞いておる」

「何よりですが」
そっと、ユギオは訊ねた。
「何故、チベット離宮を潰して天裁を建設したのです?我々として

は別な場所にしても」

「……」

それまで笑顔を浮かべていた摂政の顔が固まった。

「個人的な興味なんですよ」

ユギオは軽薄な笑みを浮かべながら言った。

「せっかくの離宮を潰す必要がどうしてもわからないのです」

「……まぁ」

摂政は、肩を落とすと、

「そちには随分と世話になっている。所で」

摂政は、のぞき込むような視線をユギオにむけた。

「そちは、口は固いか？」

「無論」

ユギオは肩をすくめた。

「私のビジネスは、信頼第一です」

「なら、良い」

ほっとした表情を浮かべた摂政は、皇帝の玉座と自らの席を遮る御簾をちらと見た。

「事情は――――およそ察していると思うが」

「――――御崩御は、いつ？」

「そちが最後に拝謁した日の夜じゃ」

摂政は席を立つと、ちらりと御簾を動かした。

そこには、主のいない玉座だけが存在していた。

だが、公には皇帝はこの玉座に座って政務を執り続けていることになっている。

そう。

皇帝は生きていることになっているのだ。

「ご遺体は？」

「既に処理は済ませてある。後は」

摂政は自らの席に戻った。

その足取りは、ユギオの眼にも疲れ切っていた。

「この戦を、どう終わらせるかじゃ。戦が終わらぬのに、皇帝が崩御したことを公にされれば大変なことになる」

「お世継ぎの問題……ですか？」

「……そうじゃ」

摂政は力なく頷いた。

「太子密建（たいしみつけん）によって、後継者の指名がどうなっているか儂でもわからぬ。

生まれたとされる３０人の皇子のうち、成人したのがわずか５人にすぎんが。いいか？公に生まれたとされる数で、３０人と５人じゃ。

この中の誰が指名されているかわからぬ」

「その……どういうことです？」

ユギオは首を傾げた。
「公に生まれたとされる……とは」
「生まれる前に、あるいは、生まれた事が公に確かめられる前に命を終えた……いや、奪われた赤子の数は、この倍では効かない」
「暗殺……ですか？」
「そちは知らんじゃろう？
後宮とはな？
世継ぎを巡って、女という悪鬼が跋扈する地獄じゃ」
「地獄とは……穏やかではありませんな？」
「見目麗しく着飾った、虫さえ殺さぬような顔をした女共が血にまみれ、骨肉相食むことを厭わぬ世界。
常にいがみ合い、憎み合い、殺し合う。
その中をのぞき込めば、そう言いたくなるし、女という汚らわしい存在を、近づけたいとさえ思わなくなるだろう。
本当じゃぞ？
いがみ合う理由は互いの外見の美醜どころではない。
衣の糸一本が気に入らないという理由で、相手を殺したなんて話もあったな。
そんな中でも、最大級の危険な話題は――――わかるだろう？
世継ぎじゃ」
「……」
ユギオは無言で頷いた。
「自らの産んだ子が皇帝になれば、権威は欲しいままじゃ。子の栄

達を理由に、己と己の一族の栄華を求め、女は猛り狂う。
自らが孕めば栄誉。
他が孕めば、それは悪夢じゃ。
悪夢は晴らさねばならん。
後宮に入り、そうやって死んで消えていった女の数は、余も把握しておらん。
妊娠の兆候が現れたと疑われただけで、毒を盛られて殺された妃が何人いたか。
産褥の床で、生まれた途端に乱入した女官によって、生まれたばかりの赤子を床にたたきつけられて殺された者もいた。
まだ、母の手にも抱かれもせず、ただ、後宮に生まれたというだけで――な。
他にも、ちょっと子から眼を離した途端、誰かに攫われて……見るも無惨な屍が後々、ようやく発見されただの……余が見た後宮がどういうものかは、これで知れたろう」

「恐ろしいものですな」

「そうじゃ。その地獄の中から生まれ育った皇子にまともな者がいると思うか？」

「恐れながら」
ユギオはおや？という顔で訊ねた。
「それは……摂政殿下の仰り様とも思えませんな」

「皇子として幼き頃より傅かれ、忍耐という言葉を知らぬ。傲岸でわがまま放題。それを許され続け育った者が、万上の君として君臨することが出来ると思うか？」

「失礼。私は一人も皇子を知りません。皇子はそれほど……その」

「はっきり言って良い」
摂政は笑って言った。
「人としてはクソ以下じゃ。第一皇子は、酒と女に入り浸り、第二皇子は金を知らぬ妃にうつつを抜かし、第三皇子に至っては、東南アジア戦線で略奪と暴行の代名詞のような振る舞いじゃ。
帝位につけば、それだけで世界を敵に回せる。
彼等は、夏の桀王、商の紂、周の？王にも例えられる暴君の代名詞のようなものだ。
他は無能無策の愚物ばかり。何も出来ぬ。何より、帝位につくべき力を持たぬ」

「……」

「かつては、将来を期待された者もいた。だが、皆、愚かな後宮の女共のせいで今では土の下じゃ。そんな連中が、ここで皇帝が崩御されたと知って見ろ。自らの器を省みることもせず、帝位を要求し――」
ユギオの視線は、握りしめられ、怒りに震える摂政の拳を見つめていた。

「もし、そうなれば、内乱になりますよ？本当に、君子の器というか、帝位を次ぐにふさわしい世継ぎはいないのですか？」

「いるにはいる」
摂政は答えた。
「聡明で、下々にかける情けというものを知る、聡明な御方だ」

「なら」
ユギオはほっとした態度で言った。

「すぐにその方を皇位に」

「問題は……」

摂政はため息をついた。

「その方が――女だということだ」

「へ？」

ユギオはきょとん。として訊ねた。

「それって、何が問題なのです？」

「……わかっておらぬな」

「はい？」

「我が国は、皇祖西太后により女は政治に関わることが出来ないとされているのじゃ。いくら聡明とはいえ、そう簡単に姫殿下は帝位につけぬ。

今の我らは、極限の選択を迫られているのじゃ。

遺訓を守り、国家を滅亡へと追い込むか……それとも」

「それで、摂政殿下はどのように？」

「王朝内部にも良識ある者はおる。

王政党も余と数名をもってが抑えた。

何より世論は、戦争に疲れはじめておる。

ここで新たな暴君を生み出せば、それこそこの国は、民によって滅ぼされるだろう。

新たなる名君を生み出すためなら、余は喜んで民にこの身命を捧げて良いと思っているが、それが暴君ならば御免被る。

余はな？それほどの力を持つ世情を、その辺の政治屋共が考える

より、ずっと恐ろしいものと認識しておるのじゃ。これでもな」

「世情は……ご存じと？」

「王政党のバカどもを黙らせるために、知らぬフリをし続けていただけよ。軍部がこれほど無能とは知らなかったが、どっちに転んでも、これで王政党は終わりじゃ」

「……」

「絶望的な負け戦で終わらせることも出来ぬ。せめて五分以上で終わらせ、世論を納得させねばならぬ。犠牲を支払ったのは民じゃからな。何のための犠牲かを理解させることが出来ねば、民は怒りの矛先を、我らに向けてくる。矛が突き刺さるのは王政党で止めねばならぬ。帝室に傷がつくことはあってはならぬ」

「いっそ」

ユギオは言った。

「あなたが帝位につけばどうです？皇帝陛下の弟、その片腕とされたあなただ」

「余は兄ほどの器ではないし、何より、余にはそれほど時間がないのじゃ」

摂政は楽しげなまでに微笑みながら、腹のあたりを撫でた。

「どうやら、早々に、あの世とやらで陛下のお相手をせねばならぬ定めのようでな」

「……医者を」

ユギオはそう言いかけたが、

「末期のガンで、延命処置も何も、もはや手遅れだと言われている。余命はもう1年とないそうじゃ」
摂政はその言葉を遮った。
「自然の摂理に従って最後を迎えるのは、余に与えられた最後の自由と認識しておる」

「……」

「それまでに、何としても、その姫殿下に帝位を用意せねばならぬのじゃが」

「……」
ユギオは、意外な方角へ向かい始めた会話の内容をもう一度、脳内で繰り返し、一つの疑問にたどり着いた。
「待って下さい？」

おかしい。
何かがおかしい。
何で、こんな会話になったんだ？
私はこの国の皇位について会話に来た覚えはないぞ？
一体、何の話だった？
そうだ。
あれだ。

「チベット離宮がどうして、こんな話に？」

「……全てがつながっておるからじゃ」
摂政は呆れた。という顔で言った。
「なんじゃ？余が余興でこんな大切な話をしたとでも？」

「……いえ」
ユギオは、自分がいい加減、この摂政に肩入れしていることに気づいた。
ビジネスは非情。
それがユギオのモットーなのに。
目の前の摂政は、不思議とユギオを引き込んでしまう。
何より、この人物との会話を、自分は楽しんでいる。
「続きをどうぞ」
そう、促された摂政は、ユギオの想定外のことを口にした。
「その姫殿下は、公には死んだことになっている」
「――――へ？」
「事故で死亡したことになっておるのじゃ」
「一体……何故？」
「陛下のご意志じゃ」
摂政の視線が御簾に向けられた。
「さすがに、後宮のことは陛下も疲れたのじゃろう。
最後に生まれた姫殿下をいたく愛されておいでな？
後宮で育てるしきたりを完全に無視し、常にお側において育てられた。
それが高じて、“もしこの娘が死ねば、後宮の全ての者を皆殺し

にする”と触れまで出したほどじゃ」

「それでも……？」

「逆に、そこまで脅しをかけたのがまずかった……その偏っているというべき愛情を知った後宮の女達は、そして皇子達は、その姫殿下を恐れた。……いや」

摂政は、少し考えこんだ後、言った。

「その娘の力を恐れた。恐れるしかなかった。というべきだな」

「？」

「騎士共を統率するための特殊能力。統べる力――世界中の君主の多くが持つ力。ラムリアース帝国の聖導皇家、日本の天皇家はその中でも最高峰の能力を誇る者を代々生み出しておる。

その力の前には、騎士は全く無力。

命じられれば、自ら死ぬことさえ拒絶出来ぬ。

戦の全権代理人たる騎士。

それを従える力を持つ者は、いわば、武力を統べることになる。

――言いたいことはわかるな？」

「……魔族の立場から言わせていただければ」

ユギオは答えた。

「その特殊能力には心当たりがあります」

「そうだろうな」

摂政は頷いた。

「自分を神とやらの産物とは言わぬわ。とにかく、その力を持つ者は、帝室……いや、この帝国領内で、一人しかおらぬ」

「それが……その姫殿下」

「そうじゃ。陛下が愛したのは、殿下が最後の御子であるだけではない。その力もじゃ」

「……それで、どうしてその姫殿下が死んだことになっているのですか？」

「この力を持つ者が相応しい地位は？そう聞かれれば、この世界では君主と答える。

そちも考えてみよ。

自らの子こそが、我こそが次の帝位に相応しいと考えながらも、その力だけはない。

そんな母子の前に、力を持つ娘が現れたとしたら？」

「……考えたくない事態が容易に想像されますね」

「そう。その考えたくない事態は、実際に起きた。

後宮は団結して姫殿下殺害に動いた。

毒殺に始まり、寝具に仕掛けられた毒針に通路の崩壊……姫殿下は考えられる限り、ありとあらゆる暗殺未遂の対象になった。

身代わりとして、女官達の何人が犠牲になったか知らぬ。

これに業を煮やした陛下は一計を案じられた。

公には、殿下に死んでもらったのじゃ。

ある日、外に出た所を乗っていた車が爆発したという仕組みじゃ。

姫殿下爆殺。

それは、一般には悲劇だが、後宮の方は、誰かが抜け駆けして成功した程度にしか考えぬ。

疑心暗鬼になる位なら、後宮にとっては素直に喜ぶべき事態じゃからな。

そして――」

「？」

「後宮は潰された」

「潰された？」

「陛下は後宮の柱という柱全てに爆薬を仕掛けられておいでだった。後宮の出入り口全てを閉鎖し、ある晩、爆薬を炸裂させたのじゃ。運良く一命を取り留めた者は、その場ですべて殺された。生き埋めになった者達の頭上には、トラックで運ばれた土砂とコンクリートが注ぎ込まれた。すべては陛下の命によってな」

「自らの……妻でもあるんですよね？」

「陛下は最早、そのころには女を必要とされるお体ではなかった。男としてよりむしろ、娘に徒なす害虫にしか、後宮を見ることが出来なかったのだろう。皇子達は、母と、その一族という後ろ盾の多くを失ったことになるが。

後で見ておくがよい。

小高い丘がある。

そこが元の後宮の跡地じゃ。

死体は回収されることもなく、土砂で埋め尽くされ、その上に木々が植えられておるわ」

「とにかく、それで後宮の勢力を始末した陛下だが、安心は出来ぬ。まだ皇子達がおるのだ。もし、姫殿下が生きていると知れば、それまでの努力は水泡に帰す」

「……成る程？」

「だからこそ、姫殿下の存在を知る者は限られておる。せいぜいが儂と、ほんの数名のみじゃな」

「……ようやく話が見えてきましたよ」

ユギオは興味津々という顔で言った。

「姫殿下の居場所が」

「ようやくわかったか」

摂政は頷いた。

「あのチベット離宮は、陛下より儂が下賜されたことになっておる。しかし、近頃、あのバカ皇子共の中に、チベット離宮を疑いだした者がいる。

陛下が後継者について何も語らないことに焦り、そして、望みもしないのに真実に近づこうとする愚か者がな」

「だからあなたは」

「名目上、チベット離宮を破壊したのだ。離宮を破壊し、軍施設とすれば、いくら何でも、連中も警戒を解く」

「しかし、実際には離宮は生きている」

「数名が生きる環境なら、その程度も十分な環境は残してある。姫殿下にはもうしばらくのご辛抱じゃ」

「……上手くいくといいですね」

ユギオは、営業としてではなく、心の底からそう思った。

「いってもらわねば困る」

そう、摂政が笑った所へ、飛び込んできたのは摂政の腹臣ともされる中年の文官だった。

ユギオがいることを知って、しまった。という顔になった。

「――かまわぬ」

摂政は威厳ある声で言った。

「ユギオよ。客人に礼を失することは詫びる。じゃが、この時局故、許されよ」

「いえ」

ユギオはバッグの横でなり始めた携帯電話を掴みながら言った。

「私も、携帯電話を切り忘れていましたから」

「――して、何用ぞ」

「はっ、摂政殿下に謹んで申し上げます」

「なっ!?」

ユギオが携帯を手に、悲鳴に近い声をあげた。

その視線は、携帯電話にむけられたまま凍り付いている。

「……どうした?」

「はい、実は……」

ユギオが引きつった顔のまま、摂政に視線を向けた。

「――待て」
文官の報告を手で制した摂政は、ユギオに訊ねた。
「天裁に何かあったのか」
「……」
ユギオは無言で頷いた。
「その報告でございます。殿下」
文官は言った。
「先程、軍より入った報告によりますと、英国軍による奇襲攻撃を受け、天裁防衛部隊は全滅。天裁は、英国の手に落ちました」
「離宮跡はどうなっておるか！」
摂政は真っ青になって立ち上がった。
「不明。しかし、天裁と共に敵の手に墜ちたと考えるべきかと」
「……軍に命じよ！」
摂政は文官に怒鳴りつけた。
「全軍、全戦力をもって、離宮跡の奪還をはかれと！なお、離宮への一切の攻撃は禁止する！離宮への流れ弾一発でも許さぬ！背きし部隊は、連隊単位で死罪を適用する！これは厳命として伝えよ！」
「はっ！」
黒髪の美しい少女。
鼻筋がしっかりと通っており、大きい目が愛らしさを醸し出している。
歳の頃は１５歳にも満たないだろうというのが、祷子の読みだ。

女になり切れていない、細い体をゆったりとした桃色の美しい王宮衣装に包んでいる。
容姿に深く残るあどけなさが、この年頃の少女特有の不思議な色気を放つ。

――かわいい娘だな。

祷子はそう思った。
日本人に生まれていたら、アイドルとして十分通用するだろう。
祷子は、少女にニコリと微笑んで見せた。
微笑んだ本人としては、親愛の情を示したつもりだったのだが、微笑まれた少女は、そうはとらなかった。

バンッ!!

少女の体から放たれた青い奔流が、祷子を襲う。

しかし、まるであざけるかのように祷子から放たれた紫色の奔流が、青い奔流を飲み込んでしまった。

「……っ!?」

予想さえしなかったのだろう。
目の前で起きたことが信じられないのか、唖然とした表情を少女は浮かべた。

――どうして?

口にこそ出さないが、顔がそう語っていた。

そんなことが、無言の中で数度、続いた。

「無駄です」
最初の半分も奔流が届かなくなった少女は、祷子から視線を外すことなく肩で息をする。
対する祷子は、悠然とした態度を崩そうとさえしない。
「“力”をそんな風に使えば、そうなります」
「……っ」
「次は、何をなさいます？姫」
「……」
震えた体。
そして、泣きそうな顔を精一杯強ばらせ、少女は祷子に対して敵対する意志を示し続けてる。
勝てないことはわかっている。
それでも、あなたは負けない！
負けることは出来ない！
その瞳が、そうが語っていた。

「あのですね？」
祷子が、そう語りかける。
長い袖の中に隠れていた少女の右手が動いた。
袖の中から出てきたのは、白く細い美しい腕と、そしてその腕が掴む短剣だ。

恐怖に歪む顔。
固くつぶった瞳。
ぐっと噛み締められた口元。

ガタガタと震える腕が掴む短剣の切っ先が、少女の首筋に近づこうとしていた。

「……それで？」
祷子は訊ねた。
「どうするんです？」

「……私は」
数回、小さく深呼吸した少女は、かすれる声で言った。
「あなた達、東夷の者に辱められる位なら……」

「辱められる位なら……どうするんです？」
まるで楽しんでいるかのような口調で、祷子は言った。
「痛いですよ？やったことないですけど」

「……それで」
少女は、え？という顔で思わず祷子を見た。
開かれた少女の目に映る祷子は、笑っているような、不思議な顔をしていた。
バカにしているのではない。
侮蔑もない。
むしろ、まるで何かを愛でているような、そんな表情を浮かべていたのだ。
「……あの」

「ああ、ごめんなさい。あなたみたいな可愛い女の子が死ぬ様を、こんな間近で見られると楽しみで」
祷子は、何かを思いだしたという顔で、ポンッと手を叩いた。
「そうそう」

「？」

「――――そんな風に首斬ったら、そう簡単に死に切れませんよ？」

「……え？」
少女は思わず、手にした短刀に視線を落とすと、信じられない。という顔で祷子を見た。
「そんなにおびえながら、恐る恐る首を切ったら、中途半端に首周りの神経や筋肉を傷つけるだけ。血まみれになってのたうち回って」
うーん。
祷子は、人差し指を口元に添え、天井に視線を彷徨わせると、思いついたように言った。
「そうそう。失血が不十分で、楽になるために、何十時間も苦しむことになりますね」
「っ！？」
数十時間の苦しみ。
祷子の声に、少女はビクリと反応した。
「人間って、かなり丈夫なんですよ？傷が浅いと、死ぬに死ねない。苦しみばかりが続く、そんな地獄から解放されたいから、あなたは私に殺してくれるよう懇願することになるでしょう――さぁ。西王朝の姫君が、どんなカワイイ声で“殺してください”っていうのでしょう。とっても楽しみです♪」
「あ……あなた！」
少女は声を荒げた。
「それでも人間ですか！？」
「何に見えます？」
「鬼っ！」

「――それはどうも」
祷子は楽しげに、軽く会釈した。
「親からもらった命を、こうも軽々しく扱う人に、何と言われてもほめ言葉にしか聞こえません」

「……わ、私が！」
少女は再び、短剣を構え直した。
「死ねないと、死ぬ覚悟がないと、そう仰せなのですね！？」

「――さあ？」
祷子は笑みを浮かべたまま、小首を傾げた。
「死にたいなら、死なせてあげるのも優しさですし」

「わ、私は！」
少女は泣きながら大声で言った。
「これでも王室の端くれ！王室の名に傷を付けることは出来ませんっ！」

プッ。
それを聞いた祷子は、突然、噴き出した。

「な、何がおかしいんですか！？」

「だってあなた」
何がおかしいのか、祷子は笑いをかみ殺しながら、少女を指さした。
「――公には死んでいるんですよ？」

「……っ」

「今から8年前、移動中の車に仕掛けられた爆発物により、骨も残らず死亡」

「……」

「死人が死ぬって、面白いですね。どういう冗談かしら」

「――――っ！」

少女の手に力がこもった。

短剣の刃が、そのきめ細やかな肌に食い込もうとしている。

「かまいませんから、さっさと首を切ってくださいな。死体はあとで、英国兵達（ライミー）がさんざんに弄んでくれるでしょう――――よかったですね。純潔を失う痛みは味わわずに済むのですから」

クススッ。

褥子の冷たい笑いが、余程響いたのか。

それとも、その意味がわかったのか。

「中華兵は、民間人、女性捕虜、それでも足りなければ、道ばたに転がる死者まで犯したそうです。中華帝国王室の女性が、同じ辱めを受ければ、そんな地獄を味わった女性達も少しは溜飲が」

「我が国の兵士は、そんなことはしませんっ！」

少女はムキになって答えた。

「それは、あなた達、東夷の兵の振る舞いでしょう！？恥を知りなさいっ！」

「まぁ」
祷子は、驚いた顔で言った。
「それこそ言いがかりですわ？」

「違いますっ！我が国の精強な兵は、皆高潔で立派な、世界中の軍人の手本と成る程の者達です！」

「――ご立派♪」
パチパチ。
祷子はわざとらしく手を叩き、そして目をつむった。

「――とまあ、ご託はいいですから」
すうっ。と息を吸った祷子は、
「――死になさい」
冷たい声で、
本当に凍り付いたような声で、少女に命じたのだ。

目の前の女性に突きつけられたのは武器ではない。

死、そのものだ。
自分自身の手でもたらされる、自分自身の終わり――。

「……」
少女は、祷子と首筋に自ら突きつけた短剣を何度も見比べ――

「そんな泣きそうな顔しても」
祷子は本当に楽しそうに言った。
「お姉さんは助けてあげませんからね？」

「――っ」

少女は、瞳を固く閉じると、思い切って短剣を自らの首筋に押しつける。
だが、その手を引けばよいのか、押せばよいのかさえわからない。
ただ、無意識に開いた瞳で、目の前の祷子に、まるで救いを求めるように視線を送るのが精一杯だ。
頬を大粒の涙が幾筋もこぼれる。

「力をこめて、首筋に押しつけたら一気に引きなさい。いいですか？引く力が弱いと、傷が浅くて簡単には死ねませんよ？――――さぁ」

……ひっく。

少女の喉から、そんな音がした。

……ひっく……ひっく。

――――カラン。

短剣がその手から、落ちた。
少女は、力無くその場に崩れ落ちた。

「……死にたくないというのですか？」

その、祷子の問いかけに、少女は無言で何度も頷いた。

「それでよいのですよ」
祷子は、少女に近づくと短剣を拾い上げた。
「生きてこそ、出来ることがあります」
「……」

「砂漠の中で砂金一粒を探す奇跡だって、不可能ではないのです。生きていればこそ、生きようとする強い意志があればこそ、奇跡は起こせるのですから」

変な例えでごめんなさいね？

祷子はそういって笑うと、ポケットからハンカチを取り出し、少女に手渡した。

「……西王朝第一皇女、西姫殿下でよろしいですね？」

ハンカチを受け取った少女は、無言で頷いた。

この世界には、“統べる力”という特殊能力がある。

一種の精神攻撃に属する魔法能力で、その影響下に置かれた相手を、自らの意のままに操る。もしくは支配下に置くことが出来る。

世界中で最も恐ろしい魔法の力とも言われる。

恐ろしい。

熱線で生きたまま焼き殺し、あるいは真空波で切り刻み、およそ人類が想像出来るあらゆる殺し方が可能とさえ言われる攻撃魔法をさしおいて、この力がそう呼ばれるのには理由がある。

相手に自殺でさえ強制可能であり、この力の前には、騎士でさえ立ち向かうことは出来ない。

一人がどれ程の強い魔法を使い、腕力を誇ろうとも、社会を支配出来るこの力の前には無力。

個人対社会で、個人は勝てない。

一人の力が社会を動かせる所が、この力をして恐ろしいと言わしめる根元だ。

それはまさに王侯の権力を具現化したような力であり、実際、現在まで存在するほとんどの王朝支配者は、この力を持っている。

ローマ法王、英仏独各国国王、ラムリアース帝国皇帝、カンタベリー大司教、そして、日本国天皇――。

この力を持つ者は、ありとあらゆる事情を飛び越え、優先的に王位継承権が与えられ、それが当然と世論にも見なされる。

全てを統べ、全てを支配する者の力。

まさにこの力はそういう存在だ。

この力を持つ者は、それ故に恐れられ、そして、求められた。

反面、この力無き王は軽んじられ、そして、力を持つ者を羨望する。

「本当に、やるのですか？殿下」

「心配するのは当然じゃ」

謁見の間にほど近い狭い部屋。

普段は誰も使うことさえない物置のような部屋。
閉められたカーテンからこぼれる日差しに、室内に舞い上がった埃が見える。
よどんだ空気が満ちあふれるそこに集まっているのは、この国の影の重鎮とささやかれる男達だ。

「じゃが……北米戦線に送った載賢の手の者が、陛下の崩御を嗅ぎつけたらしい。載賢は弟達を招集した」
「普段は、何をしても利害が一致しないというのに、こういうことだけは、早いですな」
「その通りじゃ。王宮廷長官。あの連中が太子密建（たいしみっけん）を正しく行うとは思えない」
「だからといって……あのようなことを行うとは」
「準備は出来ておる。不本意であり、伝統を重んじる立場からは反対も多いじゃろうが」
摂政は覚悟を決めた。という顔で言った。
「責は余がとる――どうせ、長くない命じゃ。正当なる後継者を選べばまだ面目も立つというものよ」
「……」
「末期に暗君を生み出し、この国を破滅させるわけにはいかんのじゃ」
「……王政党は、私が抑えてあります。党総書記も、あの愚物共に傅くのは御免というのが本音でしょう」
「……あとは人の手配だけじゃ。宮廷長官、儀官達の準備は？」
「すでに完了。儀官達は準備済み」
「黄、お主の方は？」
「手はずは済んでおります。儀式が開始次第、全てが動きます」
「周」
「乾清宮周辺は、すでに封鎖済み」
「よろしい」

摂政は懐から懐中時計を取り出した。
「音を立てるな。静かに、しかし、確実に事を成すのじゃ。よいな？これからなす事は、この国があと千年、生き延びさせるために、我らが出来る唯一のことじゃ」
室内にいる者は、無言で頷いた。
「ワシは何としても、離宮からあの御方を連れ戻す。あの御方が、我らの、我が国の唯一の希望じゃ」
「……」
「後宮などという、馬鹿げた女の理屈と欲望が、この大国を、人という側面から蝕んだ挙げ句のことじゃ」
「その物言いですと」
「わかっておる。――毒を以て毒を制する。それでよいじゃろう」
「……」
「正午をもってことを為せ――かかれ」

「兵がいないとは何事だ！」
それから一時間後。
謁見の間に、摂政の怒鳴り声が響いた。
摂政の前にかしこまるのは、軍と宮廷の間を取り持つ連絡官。
宮廷服に身を包んだ彼は、真っ青になってその場にひれ伏している。
「お、恐れながら」
連絡官は震える声で言った。
「その――軍は」
「はっきりしろ！事態は一刻を争うのだ！あの離宮に誰がいるのか、

わかっているのか！？」

「――――誰がいるんだ？」

謁見の間の入り口から、そんな声がした。

摂政は、その声に、嫌でも聞き覚えがある。

その声は、ここで聞こえるべき声ではない。

摂政は、入り口に視線をむけた。

そこに立っていたのは、５人の男達。

背広姿もいれば軍服姿もいる。

ただ、はっきり言えることは、全員が全員、まっとうな人間ではないことを、その尊大な態度が宣言していることだ。

その先頭にいるのは、第一皇子、載賢。

醜いほどの肥満体を窮屈そうに陸軍高級将校の軍服に押し込んでいる。

他の４人も含め、全員が、皇帝の残した種が後宮という悪魔の花園で咲かせた、皇子という名の悪夢の果実だ。

摂政はその顔を見るなり嫌悪感をあらわにした。

「載賢――――北米はどうした」

「テレポートシステムを使えばすぐだ」

載賢は見下したような口調で言った。

「安心しろ。米国の最新鋭の機材は片端から本国へ運び込んでいる。連中が美術館に並べていた美術品や宝石類も、すぐに我が国で見ることが出来るだろう……で」

「占領地で、り、略奪をしているのか！？だ、誰がそんなマネをしろと命じた！」

「チベットのあの離宮に何があるんだ?あの離宮は、天裁の発射基地になっているはずだ」

「載賢っ!質問に答えろっ!」

「叔父貴こそ俺の質問に答えろ。これでも忙しいんだ。皇帝(オヤジ)がやっと死んでくれたと聞いて、北米の植民地から飛んできたんだぜ」

「まだ生きておる!」

摂政は嫌悪感をあらわにして、連絡官に下がれ。と命じた。

「棺桶の中は見たよ」

巨漢の影に隠れるようにして歩く小柄な猿を思わせる背広姿の男、第二皇子が言った。

「ガチガチに冷凍されてた。寒かったよ」

「あの部屋に入ったのか!?」

「あの部屋とは何だ。叔父貴」

海軍将校の制服を着た男、第三皇子が言った。

「皇帝を冷凍庫に押し込めてよくも言う」

「まぁ、いいじゃないか御兄様達」

最も若いだろう男、第四皇子が楽しげに言った。

「太子密建(たいしみつけん)の方、確かめれば」

「まだ早い!」

摂政は声を荒げた。

「この戦を終わらせた後でなければ、世情が混乱する!」

「何を言うか！」
載賢が怒鳴った。
「皇帝（オヤジ）の死を隠し、冷凍庫に押し込めた叔父貴の罪は万死に値する！何より、第一皇子たるこの俺様が跡をとればそれで済むわ！」
「必要なことだ！」
「叔父貴は摂政の地位を利用し、国政を私（わたくし）のものとした！その失政の挙げ句がこのザマだ！」
「何を言うか！北米侵攻は、勝算あってのことだ！第一、その軍の司令官は誰だと思っておる！」
「命じたのは誰だ！」

「おいおい」
今まで黙っていた第五皇子は言った。
「太子密建（たいしみっけん）が全てだ。偽造はしてないだろうな。兄貴」

「北米大陸で今まで戦っていたんだぞ？」
陸軍将校は不快そうな顔で言った。
「第三皇子とはいえ、舌の使い方に気をつけろ！」

「戦場って、ベッドのこと？」
第二皇子が言った。
「戦場で捕まえた白人女には、ハリウッドの有名女優が何人もいるって聞いたけど？」
「ああ。白人も悪くないぞ？それより載儀。貴様は妻を連れて高級品店から物資を略奪し放題だったな。軍用トラックを俺の所から何台持っていった？」
「さぁ？でも、彼女が望むんだから。それに、載頂は銀行から金塊だのドル札だの、金ばかりだよ」

「いいなぁ。少しは僕にも分けてよ」
「載信、東南アジアはもういいのか？」
「あっちの女は飽きたよ。僕も白人女が欲しいよ」

「載賢、載儀、き、貴様等っ！」
会話を聞いた摂政が席を離れようとした。
手には錫杖が握られている。
「国の政（まつりごと）を司る王族が、一体、戦場で何をしている！？そんなマネをして許されると思っているのか！そこになおれ、この愚物共め！」

だが、
「な、何をするっ！？」
突如、影から現れた男達が摂政の手足を押さえた。
「離せっ！余を誰と心得るか、この無礼者めっ！」
摂政は老いた体で男達をはねのけようとするが、全く歯が立たない。

「――その老いぼれ、始末しておけ」
陸軍の軍服姿の男。
第一皇子、載賢は言った。
「乾清宮に行くぞ。帝位は俺の物だ」
「何を言う。第三皇子の私にも」
「誰でもいいから、僕を忘れないでね？」
遠ざかっていくその声の主達で、摂政に視線を向けた者は一人もいない。
まるで、摂政なんてその場にいないといわんばかりだ。

「離せっ！離してくれっ！ここであいつらを止めなければ！この国が滅んでしまう！お前達、それがわかっているのか！？この国を滅ぼすつもりか！？」

摂政は声を限りに叫んだ。

老いた体を死に物狂いで暴れさせる。

だが、まるで刃向かい出来ない。

「彼奴等を止めなければ、皇帝の意志は――――帝国の将来は潰れてしまう！」

ついに摂政は床に引き倒された。

「誰か！誰かおらんか！チベットへ！離宮へ兵を送れ！あの御方が、あの御方こそが！」

姫様ぁぁぁぁっ！

仰向けに抑えられた摂政の顔に、無慈悲にも、濡れた紙が押しつけられたのは、摂政がそう叫んだ、まさにその瞬間だった。

天裁破壊作戦　第六話

清朝において作り出された、最も評価出来る政治システムは、太子密建（たいしみっけん）ではないかと、密かに思う。

皇帝が存命している限り、世継ぎを公にしない。

これが、素晴らしい。

そう思うのだ。

世継ぎの地位に後継者になりうる皇帝の息子たちが、後継者指名を受けるべく努力をすることで後継者の質的な維持にも貢献出来る。

さらに、誰が後継者かわからないために、臣下が将来的な利権を求めて派閥に別れて争いをするような、馬鹿げたことを防ぐことにもなる。

また、予め後継者を定めておくことにより、皇帝急死という不測の事態にも十分備えておくことも十分可能だ。

後継者を決める制度としては、ある意味理想的だ。

しかし、これほど素晴らしい制度をもちながら、現実の清王朝は崩壊している。

その事実は、制度がいかに素晴らしかろうが、結局は、運用する人間に全てが左右されることを我々に教えくれている。

摂政達が恐れたのは、その崩壊そのもの。

後継者全員が目に余るほどの暗君の卵だと知っていれば、誰一人

として後継者になって欲しくないと願うのが人情だろう。
だからこそ、摂政は皇帝の弟として、皇帝家の一員として、そうせざるをえなかったのだ。

――――摂政命令により、立ち入り禁止

「な、なんだこれは」
自らを王朝の後継者と自負する載賢は、目の前に張り出された掲示に目を見張った。
掲示板の張られたフェンスが邪魔で、前に進めない。
高さ3メートル近い巨大なアルミ製フェンスは、まるで鉄格子のように彼等の行く手を遮っている。
載賢は、乱暴にフェンスを掴んで揺するが、びくともしない。

「おいっ！」
載賢は、近くにいた警備兵の胸ぐらを掴んだ。
「これは一体、なんだ！」

皇帝家の皇子に囲まれた気の毒な警備兵は、青くなって答えた。
「摂政殿下よりの厳命です。乾清宮周辺は現在、特別警備体勢が実施されています。フェンスの内側には、誰も入れません」
「警備だと！？」
「は、はい」
「ふざけるな！」
突き飛ばされるように胸ぐらを掴んだ手を離された警備兵は、なんとかバランスをとって後ろに転倒することだけは避けた。
「貴様、俺達を誰だと思っている！？殺されたいのか！？」

「し、しかし」
警備兵は答えた。
「こ、皇帝陛下御崩御により、陛下の御柩を安置する「停霊」の場が用意されている最中ですので」
「皇帝(おやじ)が何だというんだ！」
載賢の振り上げた拳を止めたのは、第二皇子の載儀だ。
「待て兄上――おい、お前」
載儀は眉をひそめた。
「今、何と言った？」
「で、ですから」
警備兵は自分に振り上げられた拳におびえながら答えた。
「皇帝陛下御崩御により、乾清宮は陛下の御柩を安置する「停霊」の場が用意されている最中でして、儀官以外の立ち入りは、例え殿下達でも許されていません」
「――っ！」
言葉の意味を理解した載儀は、顔を真っ赤にして怒鳴った。
「叔父貴めぇっっ！」
「おい、どういうことだ、兄上！」
「載儀！？」
顔を怒りに歪めた載儀の後を小走りに進む皇子達に、載儀は答えた。
「叔父貴がやりやがった！」
「何を！」
「皇帝の崩御をこのタイミングで流すことで、僕達抜きでやらかすつもりだ！」
「だから――」
「決まっているだろう！？太子密建だよ！」

「な、何っ！？」
皆の眼が、ハッと見開いた。
「僕達は皇帝の息子だ！
それを抜きで跡取りが決まる！？
そんなこと、あってたまるか！
叔父貴めぇぇっっ！」

バンッ！

載儀と載賢によって蹴り開けられた扉の向こう。
そこには、顔一面に濡れた紙を貼り付けられた摂政の亡骸が転がっていた。
先程の男達の姿はどこにもない。
がらんとした室内にひんやりとした空気が立ちこめる中、窒息の苦悶に歪んだ摂政の体が、空気より冷たい床の上に転がっているだけだ。

「叔父貴ぃぃっっっ！」
載儀は、自らの叔父の遺体を蹴りつけた。
「よくも！よくもやってくれたな！
最近になって、普段は使われていないこの間を職務に使っていたのも！
乾清宮から遠くて、それでも使って怪しまれないここを使ったのも！
全て――全て、僕達をハメるためか！」

載儀は、摂政の胸ぐらを掴むと、力任せに殴りつけた。

ピーピーピー

不意に、携帯電話が鳴った。
四男の載勝が懐から携帯電話を取り出した。
「……何だ……ああ、李か。どうした?」
載勝の顔色が変わった。
「……わかった」
載勝はそう言うと、携帯電話を懐に戻し、
ガンッ!
彼もまた、自らの叔父を蹴りつけた。

「悪い話か?」
死体、しかも叔父にあため人物の死体に暴行を加えるという、弟達の振る舞いを見ているだけの長兄・載賢は言った。
「太子密建は、俺が選ばれればよし。さもなければ、儀式参加者を皆殺しにして」

「もう無理だよ――兄上」
載勝は言った。
叔父を蹴る脚は止まらない。
「全ては、世界中の連中に知れた」

「何?」

「俺達の誰もが、跡取りに選ばれていない」

「そんなことがあるか!」
載賢は愕然として怒鳴った。
「俺達以外に、誰が皇位をとれる!?皇位継承権は、俺達だけのものだ!」

「……“以後女をして国を当たらしむるべからず。これ本朝の家法

に違背すればなり”」

「……まさか」

「そのまさか、さ」

載勝は頷いた。

「皇帝は、西太后の家訓を破棄すると宣言した上で、後継者に女を指名した。西太后は間違っている。女に政務が勤まらなければ、あなたは何だと言い残してな」

「馬鹿なことを――――！」

「――――その、馬鹿なことが現実に起きたんだよ。兄上」

「だ、誰だよ！その女は！」

末男の載武の問いかけに、載勝は答えた。

「叔父貴がチベット離宮に匿って、呼び戻そうと躍起になっていた女さ。俺達にとっては、妹になるが」

「い、妹？」

「西姫だよ。間違いない」

「馬鹿なことを！」

叔父を殴り続けていた載儀が手を止めた。

「西姫は8年前に、兄上とその母親が始末したんだ！」

「……そうだ」

載賢は重々しい口調で頷いた。

「“統べる力”を発現させたあの娘は、どうあっても邪魔だった。だから……母上は」

「そのせいで、俺達は全員、母親を失うという代償を支払ったんだ」

載儀は言った。

「その怒りの矛先を、皇帝に向け、その地位をいつか簒奪することを目指して、俺達は生きてきた」

「……兄上がやらなければ、いずれは誰かがやっていたことだからな」

そう、載賢も頷いた。

「俺達はあの日、後宮が吹き飛んだあの日、自らの母親が生きたまま焼かれていく炎の前で、一蓮托生を誓ったんだ」

「神に誓う。俺は、その言葉を忘れていない」

載賢は重々しい声で言った。

「皆で、この国に、皇帝に復讐してやろうと誓った、あの日のことは忘れていない」

「兄上」

落ち着き払う上の兄達を前に、載武はおろおろしながら訊ねた。

「ど、どうする？」

「言ったろう？もう無理だって」

載勝は摂政の顔を踏みつけながら言った。

「こいつめ……こいつのおかげで、全ては、世界中の連中に知れた。いくら俺達が何と言おうと、世界の誰もが、認めようとしないだろう」

「どういうこと？」

「太子密建は」

載勝は言った。

「一部始終がテレビ中継されたんだ」

中華帝国皇帝崩御

そのショッキングなニュースと同時に世界に、少なくとも中華帝国全土に流されたのが、本来極秘であるはずの、次期皇帝選定の儀式。

乾清宮に持ち込まれたカメラが、ライブ中継する中、城内の儀式を司る儀官達を映し出す。

突然、緊急中継された乾清宮の様子に、皇帝崩御という驚くべき事態を前にした中華帝国国民は、否応なしに引き込まれた。

皇帝の死を嘆くことも大切だが、後継者選びは、その跡取り達の問題行動の多さから、批判と不安で世人の口の端に登ることが多かったからだ。

――あんな中から皇帝が決まったら大変だよ。

――誰が皇帝になっても、この国は終わりだ。

建国から約1世紀。

植民地時代を乗り切り、いかなる動乱を相手にしても独立を維持し、世界最大級の経済大国に上り詰めた西王朝。

その命運が今、恐ろしいほどの岐路に立たされていることを、誰もが分かっているのだ。

不安げに見守る国民の前で、儀官は作法に則った儀礼を繰り返し、

そして設けられた壇を登り、宝座の上。清朝の順治帝筆とされる「正大光明」の額の裏に手を入れる。

引き出されたのは、厳重に封がされた錦に包まれた文箱だ。

儀官達が、封が破れていないことを一つ一つ調べる。

儀官の代表が、封印は完全であることを宣言する。

カメラが文箱をズームで撮影し、テレビ越しに見守る人々にも、封が破られていないことがはっきりとした頃、豪奢な装飾が施された短刀を抜いた儀官が一つ一つ、その封を破いていく。

最後の封印が破られ、錦の中から文箱が現れた。

質素な飾り気のない文箱に大きく貼り付けられた封を、儀官が破る。

文箱には、一通の書状が入っていた。

封印を破った儀官が一礼の後、席を外し、別な儀官がその書状を取り出す。

恭しく頭上に掲げたまま、儀官はその前に立つ技官達と立ち会いの者達に、その姿勢のまま、書状を開いて見せた。

――――おおっ！

儀官と人々の口から驚きの声が挙がったのも無理はない。

そこに大きく書かれていたのは、皇帝の息子達の名前ではなかったのだ。

――――では？

そこに書かれていたのは、８年前に死んだはずの皇帝の娘、西姫の名だった。

「静まれ！」

ざわつく儀官や立ち会いの者達を前に、宮廷を取り仕切る宮廷長官が大声を張り上げた。

宮廷に巣くうバケモノじみた俗物を相手に３０年以上、その職務を果たし続けた宮廷長官は、後ろになでつけられた銀髪を照明に照らし出しながら、毅然とした態度と、そして鋭い眼光で人々を黙らせた。

「次期皇帝は決まったのだ！次期皇帝陛下は、西姫殿下ぞ！」

――――そんな馬鹿な。

――――死人に帝位を譲るのか？

人々の疑問の視線を前に、宮廷長官は続けた。

「西姫殿下は８年前に亡くなっていない！」

ザワッ！？

「“先帝陛下”のご命令により、その御身は“とある場所”に移さ

れ、本日に至っている！」

「――――左様」

宮廷長官の横に立ったのは、皇帝の補佐役の一人、軍務補佐担当の大軍機（軍務大臣）だ。小柄ながらも、いかにもクセある頑固オヤジといった印象の男が言った。

「皆の者が疑問に思うのも無理はない。西姫殿下は現在、チベット離宮にてご健在である。ただし――――」

二人は、ちらり。と目配せをした。

「大変なことが起きている！全国民は知って欲しい。恥知らずの英国が、つい先程、我が国の領土を侵し、現在、チベット離宮は的の占領下にある！」

ザワワッ！？

「――――そうだ」

大軍機は頷いた。

「次期皇帝陛下は現在、英国に囚われた状態である！我らはいかなる手段を以てしても、英国人達より陛下をお救い申し上げねばならない！

先帝陛下が王朝最後の望みとされた新たなる皇帝陛下をお守りするため、軍務顧問たる大軍機として、私は全ての中華帝国国民、そして軍人に求める」

大軍機は、スウッと息を吸うと、はっきりとした力強い口調で、自分をまっすぐに捉えるカメラに向けて宣言した。

「武器を手にしろ！チベットへ向かえ！新たなる帝国の未来は、皇帝陛下の安否こそかかっている！新たなる皇帝陛下をお守りして、初めて我々は、陛下への忠誠を誓うことが出来るのだ！」

ウォオオオオオオッッッッ！！

その叫びは、乾清宮という限られた環境では、儀官達の挙げた声に過ぎないだろう。

だが――

中華帝国全土という視点でみれば、それは１０億を超える中華帝国国民の挙げた雄叫びだった。

自らの新たなる主を求め、中華帝国という龍が、怒りと共に動き出す。

目標はチベット。

チベット離宮。

そこには、何も知らない美奈代達がいた。

●大英帝国　ロンドン　ダウニング街１０番地

「随分と」

ヒース首相は、ブルドックのような顔を楽しげにしかめながら言った。

「激しい変化が起きたな」

先程まで、太子密建の儀式を映し出していたテレビが、アナウンサーの解説に切り替わっていた。

事前に何も聞かされていなかったのだろう。アナウンサーも困惑が隠せない様子だ。

おかげで、同時通訳が滞って、何を言っているのかさえわからない。

リモコンを握るヒース首相は、テレビ音声をミュートにした。

「さすがに天裁システムについては語っていませんでしたな」

彼の前に座るボンド卿が、テレビから視線を離した。

「さすがにそれはないだろう」

ヒース首相は答えた。

「あのシステムがどんなもので、それが敵の手に落ちたと知らされたら、国民がどう動くか、私でも予想がつかん」

「しかり」

ボンド卿は頷いた。

「中華帝国政府にとって、この事態――皇帝崩御はむしろ歓迎すべき事態だったかもしれませんな」

「そう思うか？」

「システムを失ったことを公にすることなく、皇帝家の跡取りを救出するという建前のもと、世論のほぼ全面的な支援の元、軍を動かせる」

「成る程？君の考えだと、勝利の女神は未だ中華帝国に未練があるらしい」

ヒース首相は何度も頷くと、ティーカップに手を伸ばした。

「やるかね？このブランデーはこの茶葉によく合う」

「いただきましょう――天裁システム制圧の状況は？」

「技術団は到着しているが、未だ発射可能になったという報告は受けていない。それと」

「……」

「姫君の件についてだが、中華帝国とは既に交渉が成立しつつある。海の怪物の生け贄にされたアンドロメダさながらのあの姫君をＳＡＳが保護してから既に一日が経過しているが、私が把握しているのはその程度だ」

「その姫君は」

ボンド卿はふと思いついた。という顔で言いかけた言葉を、

「写真を見てみるがいい」

ヒース首相は遮った。

「――ほう？」

書類に添付されていた写真を手にしたボンド卿は、西姫の顔を見ると眼を細めた。

「アンドロメダよりは、黒髪のラプンツェルというところですな。個人的に」

「よくわからん例えだが、とにかく、君に孫娘は近づけたくないな」

「姫君を巡っての動きは？中華帝国政府とのチャンネルはあるのでしょう？何と言ったのです？“８年前に死んだはずの、お宅の姫君をお預かりです”ですか？――冗談にもなりませんな」

「中国外務省に照会を求めた最初の返事が、“ふざけるな”だったことは認めよう」

「当然ですな」

ボンド卿は、従者の持ってきたティーカップに口を付けた。

「年端もいかぬ、しかも死んだはずの姫君なれば」

「そう思うだろう？」

ヒース首相はリモコンを操作してチャンネルを変えた。

ＢＢＣでは、英国軍のチベット侵攻と、次期皇帝たる中華帝国の姫君を保護したことを報道していた。

「――こうも早く公にしてよろしいのですか？」

「下手に隠し立てして、殺したなどと因縁をつけられたいか？」

「正直、あまり感心はないのです」

ボンド卿はティーカップをソーサーに戻した。

「帝位につけばか弱い姫君は敵になる。何より、私は姫君よりあの兵器にこそ価値を見いだします」

「そこが私と君の違いだろうな」

「無論、諜報部の私と、政治家のあなたでは優先順位が異なるのは当然です。して？この姫君は連中に引き渡すのですか？それとも処刑でも？」

「決定権は私にはない」

ヒース首相は、顔をしかめながら何度も首を横に振った。

「姫君のことは、全てはバッキンガムの預かりとなる。これから話

すことは、私も聞かされた話でしかない。それをわかってくれ」

バッキンガム――すなわち王家が関与するとなれば、首相であろうとも知ることさえ出来ないことが出てくる。

それを熟知しているボンド卿は、無言で頷いた。

「ありがとう……実は」

そして、ヒース首相は、ボンド卿が予想さえしていなかったことを口にした。

「皇帝は昨晩亡くなったのではない。かなり前に亡くなっている。そして、姫君の件は、それとは別に交渉がまとまりつつあることだったのだ」

「……は？」

ボンド卿は、言われた言葉の意味がわからなかった。

「皇帝は先程崩御し、宮廷はそれにあわせて即座に動いた。そういうものではないのですか？」

「数年前より、皇帝は体調が優れず、政務を弟の摂政にゆだねていたことは知っているな？」

「重度の認知症の疑いがあるとも」

ボンド卿は、おや？という顔になった。

「確か――ここ数年、皇帝を間近で見た者は誰もいない……と」

ボンド卿は、答えを求めて彷徨う、漆黒のトンネルの先に、ぼんやりとした光を見た気がした。

「高齢による認知症の噂は本当だという追認だ。支える摂政が、そ

れを必死になって隠したせいで、誰もボケた皇帝を見ることがなかっただけだ。国民にとっては幸せだ」

「身内に対しても？」

「身内に対してもだ」

ヒース首相は何度も頷いた。

「理由はわかるな？」

「……放蕩息子達だとは聞いています」

ボンド卿は、頷きながらも顔をしかめた。

「長男は権威を傘に非道の限りをつくす愚物。

東南アジアと北米で略奪と暴行、虐殺の先陣に立っている。

サイゴンの市民１５万人に対する虐殺は、彼の命令であることははっきりしています。

次男は色狂い。

元女優を妻に迎え、妻と共に金を湯水のように浪費して放蕩三昧にふけっている。

彼は略奪専門です。

妻が望めばね。

三男は金狂い。

各地の銀行、宝石商から奪った金品の額は天文学的なものなるでしょう。

四男、五男はこいつらのおこぼれを求めてうろつくハイエナです。

無為徒食を地で行く四男はともかく、五男は国家諜報機関を掌握しています。場合によれば、上の兄弟達より恐ろしい。警戒すべきは激発した時の長男とこの五男です」

「手厳しいな」

「――まとめましょう」

ボンドは懐からシガーケースを取り出し、細身の葉巻に火をつけた。

「皇帝の息子全員は、中華帝国軍の行った略奪、暴行、虐殺、その他あらゆる犯罪に関与した第一級戦争犯罪者として国際的に認定されています」

「その誰かが帝位につく」

ヒース首相は、ボンド卿の顔をのぞき込むように訊ねた。

「――その即位式に立ち会いたいか？」

「サタンの即位式に参列する方が気楽ですな」

ボンド卿は紫煙をくゆらせながら笑った。

「しかり。幼いとはいえ、罪のない者が帝位につくことは、歓迎すべき事態だ」

「話を戻してください」

ボンド卿は言った。

「皇帝の死の時期がどうしてこんな話に？」

「こんな時期だからさ」

「わかりません」

「西姫生存は、このままなら、いずれはばれることだ。そうなれば

放蕩息子共が何をしでかすかわからない。だから、摂政は、跡取りである姫君の保護を、我が国に求めていたのだよ」

「――――は？」

「皇帝崩御を秘匿していたのは、放蕩息子共が帝国を私物化して帝国そのものを分割でもされたらかなわんという、摂政以下、政府の良識ある連中の危惧によるものだ」

「まさか」

「中国の歴史上、皇位を巡って大国が分裂、そのほぼ全てが滅亡したケースは希ではない」

「……」

「祖国に必要なこと。そう思った摂政の密使が、第三国経由で英国入りした。目的は、その姫君の政治的亡命を我が国に認めさせるためだ」

「亡命？何の冗談です？相手は次期皇帝ですよ？冗談にしても笑えない」

「しかも、既に死んだはずの姫君だ。バッキンガムから聞いた時の私の衝撃がわかったかね？」

「直に聞いたらショック死するかもしれませんな。あなたが死んだと聞かされても、これほどの衝撃は受けないでしょう」

「無理するな。祝杯の準備を始めるだろう？」

「いくら何でも」
ボンド卿は首を横に振った。
「バーテンに命じるだけです」

「……皇帝家は、帝位を巡って混乱の極みに陥るだろう。混乱が一段落し、正当なる皇帝として即位出来るようになるまで、姫君を預かってくれ――――そういうことだ」

「混乱……とは、それぞれの皇子が継承権を主張して、帝国が分裂することですか」

「一歩間違えれば、かつて我々の先人達が苦杯を飲まされたあの西王朝の滅亡も意味する。その最中に、姫君が失われることを想像してみろ。後はどうなる？戦争犯罪者の跡取りの誰かが帝位をとる？それとも、無政府状態か？間違っても民主主義国家など生まれるはずもない」
ヒース首相はティーカップをあおり、中身がないことに気づいた。

「１０億余の国民を抱える国が崩壊する余波がどの程度か考えてみてくれ。ルイやカイザーあたりは眼の色を変える事態だろうが、その中に我々文明人は含まれていない」

「……考えたくない事態になりそうですな。して？我が陛下はその申し出を受け入れに？」

「迷惑な話だが、それしかあるまい？バッキンガムでは受け入れの準備が進んでいる」

「しかし、先程の放送では、政府は国民に我が国との戦（いくさ）を呼びかけ

ていたように覚えていますが？あの国の政府の本意はどちらなのです？
　姫を預けるとは、すなわち我が国との和議を求めているようにも思えるのですが」

「あんなものはパフォーマンスだ」
　ヒース首相はティーカップにブランデーを注ぎ込むと、ボトルをボンド卿に手渡した。
「君が中華帝国軍司令官だとしよう。大英帝国軍との戦闘となれば、姫君を巻き込むことは不可避。その中で、君は姫君の安否を、絶対に保証出来るのか？
　かといって、あの場で姫君を他国に預けますと言えるか？」

「……本当に、全てが矛盾しています」
　ボンド卿は困惑気味に答えた。
　手にしたボトルはそのままだ。
「姫君を救うために戦えといってみたり、姫君を他国へ亡命させようとしたり。中華帝国政府も、そしてあなたも、言葉と行動がまるで正反対だ」

「共通してはいる。今は、国民を騙すしかない。無用の混乱を生み出す前に、ことを全て丸く収めるためにな。後に待っているのは、国民全てからの罵倒だろうが、それさえ覚悟の上だ」

「……」

「事が収まった……いや、明らかになった後の対価を考えると、一人の政治家として、今の連中には深い同情を禁じ得ない」

　ジリリリッ！！

不意に、ヒースの脇に置いてある年代物の電話が呼び出し音を響かせた。

「――私だ」

ヒースは、受話器をとった。

「……ふむ。そうか。それで、姫君の安否は？……いや。飛行機ではダメだ。墜落したら終わりだ。メサイアを護衛につけろ。ロバートソン外務大臣に命じろ。通過する各国に対して、通行許可をとれ。それと、陛下にご報告だ」

ガチャン。

受話器を戻したヒース首相は、まるで祈るかのようにテーブルの上で手を組むと、目をつむった。

「……ボンド卿」

「少し待ってください」

ボンド卿は、ティーカップになみなみと注いだブランデーをあおった。

「――ふう。これで悪魔が目の前に現れても怖くない。何が起きたのです」

「――クーデターだ」

同じ頃――

「どういうことだ！」
マクミラン大尉が、顔を真っ赤にして怒鳴った。
その声量は、怒鳴り声という衝撃波だと、美奈代は耳を塞ぎながら思った。
「俺達が命がけで奪ったというのに、それを撃てないとは何事だ！俺達が悪いのか！？」

「そ、それが」
厳つい黒人士官にスゴまれた技師は引きつった笑みを浮かべたまま、後ずさった。
「わ、私達には、インターフェースが理解出来ないのです」

「何だそれは！」
マクミラン大尉が技師の胸ぐらを片手でつかみあげた。

「ヒイッ！」
真っ青になった技師は、ずれた眼鏡を直すことも出来ず、何とかこの黒人士官の手から逃れようともがくが、どうしようもない。

「貴様等、俺達よりいい給料もらってるはずだろうが！給料分の仕事をしろ、この税金泥棒が！」

「そ、そうは言われても！」
技師は半分泣きながら怒鳴り返した。
「このインターフェースは、ＭＣ（メサイア・コントローラー）によるメサイア・コントロール・アクセス・システムと原理の類似が見られ！」

「ようするに、ＭＣ（メサイア・コントローラー）達の支援がいると、そういうことか！？」

「そうですっ！」

「なら最初からそう言え！次に似たようなこと抜かしたら、その無意味な脳みそカチ割るぞ！」

「……やれやれ」

通信装置に牧野中尉からの呼び出しが入った。

美奈代は、英国軍兵士達で賑わいだした天裁のコントロール・ルームから出た。

ズン……ズン……

自重数百トンのメサイアの移動する振動は、厳重な防御が施された地下施設でもわかる。

英国軍の飛行艦隊が、戦闘態勢のまま、上空に待機している。

艦艇からは続々とメサイア達が発艦しているはずだ。

最新鋭のテンペストあたりでも持ってきてくれていると心強いんだが。

そう思いつつ、美奈代は牧野中尉との通信を開いた。

近衛の司令部から命令が下った。

英国側で話がついたから撤退してよい。

美奈代は、そういう命令が来ると思っていた。

だが、現実は違った。

「“鈴谷（すずや）”が来るんですか？」

「はい」

牧野中尉は言った。

「宗像騎の収容のためです」

「TAC（タクティカル・エア・カーゴ）で事が――」

言いかけて、美奈代は口ごもった。

インド洋上空は混乱している。

インド洋からここまでの制空権全てを英国が確保しているかと聞かれれば、そんなことはないと答えるしかない。

「そういうことです」

牧野中尉は楽しげに答えた。

「武器弾薬の補給もありますし――まぁ、私達は、これで待機任務にシフト出来ますけど」

「え？」

どこの防御に回されるかと、地図を思い浮かべていた美奈代は、その言葉にきょとん。となった。

「私達、待機なんですか？」

「戦いたいのですか？」

「……いえ」

美奈代は首を横に振った。

「楽したいです」

「それも答えとしてどうかと思いますが」

牧野中尉は、苦笑しながら答えた。

「戦争狂（ウォーモンガー）じみた答えよりは、よしとしますか。我々が待機を命じられたのには、きちんとした理由があります」

「理由？」

「風間中尉ですよ」

「ああ」

ついさっき、マクミラン大尉から頼まれたことだ。

「よくわからないんですけど、通訳としてどうしても必要だとか」

「そうです。それにしても宮廷語なんて、よく知ってましたね。風間中尉」

「食べ物くれたおばあさんに習ったというのが、あいつらしいというか」

「……その食べ物欲しさに覚えた。というのが正しいと思いますけどね」

「大いに同意します。“鈴谷（すずや）”はいつ？」

「インド領空内で英国飛行艦隊と合流。到着は2時間後の予定です。それと……」

牧野中尉は声を潜めた。

「中華帝国軍の通信が止まりました」

「？」

「３０分前から、中華帝国軍の一切の通信回数が一気に落ちました」

「連中、ここを攻めるつもりですか？」

「それにしてはおかしいんです」

牧野中尉は、手元の通信装置を操りながら首を傾げた。

「この子、通信装置は下手な情報収集艦並ありますから、その気になれば泉大尉の寝言やいびきまで」

「それって、どういう！？」

「――皇帝崩御はご存じですね？」

「だから！」

「恥ずかしい寝言を“鈴谷（すずや）”艦内で上映会されたくなかったら、“はい”か“イエス・マム”で答えましょう」

「……はい」

身に覚えがないが、拒絶が死を意味すると本能的に察知した美奈代は頷いた。

「続きをどうぞ」

「どうも――中華帝国政府は、その後継者選びの場で、このチベット離宮の奪還を軍に命じました。そしてすでに軍は動いている……その軍への命令まで含めて、ほとんどの通信が途絶えました。

ここから５００キロの地点まで進軍していた敵部隊も動きを止めています。

連中はひっきりなしに指示を寄こせと司令部に要求していますが、司令部からの通信は途絶えたままです」

「一体？」

「とりあえず、何がどう動くかわかりません。どうします？」

「……我々はもう主役ではありません」

美奈代は答えた。

「舞台での見せ場は、英国軍のものです。我々は彼等の後ろでゆっくりさせてもらいましょう――我々は待機命令は受けていますが、侵攻する中華帝国軍を迎え撃てとは命じられていませんから」

「よく出来ました♪」

牧野中尉は満面の笑みを浮かべて頷いた。

「とはいえ、警戒は必要です。皆にコクピットでの待機命令出してください。今晩も私達」

ハァッ

美奈代はため息混じりに肩を落とした。

「寝床はコクピットですね」

実は、ほとんどの中国人がチベットに離宮が存在していることを、この時初めて知った。

それほどの秘密のベールに隠されていたチベット離宮は今、英国軍の支配下にある。

中華帝国軍は、その奪還のため、かなりの数のメサイア部隊を移動させようとしていた。

メサイアの規模は１個師団１００騎。

配備されている騎は、重装甲・重武装を誇る帝剣や、前線で回収されたグレイファントムのデータを反映させた赤兎改達だ。

宮廷防衛のために編成されたエリート部隊、宮廷騎士団の中でも、次期皇帝奪還のために選抜された選抜部隊だ。

彼等を司令すべき、北京中央司令部からの通信が途絶えたのは、彼等が第一次集合地点とされたチベット離宮まであと５００キロという地点に到達し、司令部から待機命令が出された後だ。

上空に展開する飛行艦に座乗したメサイア師団司令部も、中央司令部から何の指示も受けることが出来ない。

「どうだ」

「――ダメです」

メサイア師団司令部が置かれた飛行艦“大連”。

その艦橋で通信兵が首を横に振った。

「妨害ではありません。これは司令部が通信を切っていると断言出来ます」

「馬鹿な」

返答を受けたのは、師団長の孔少将だ。

「中央司令部が通信を切る理由があるか？」

「もしくは」

師団長の機嫌を損ねそうだと感じた通信兵は慌てた様子で言った。

「司令部の通信装置に、何か障害が」

「正副予備、何系統の通信手段があると思う？」

「……しかし」

「呼び続けろ。出るまで続けるんだ」

孔少将は手にした制帽を白髪交じりの頭に載せた。
「――艦長」
「待機命令が出ている以上、これ以上先には進めませんぞ？」
“大連”を預かる龍大佐は艦長席から答えた。
「艦隊司令部は中央司令部にいるのです」
「師団司令部には従えないと？」
「閣下を運べとは命じられたが、閣下に従えとは命じられていない」
龍艦長は、小馬鹿にした口調で、孔少将に言った。
「待機命令はあなた方にも出ているはずですよ？閣下」
「――くっ」
孔少将は、一瞬だけ顔をしかめた後、艦長を見ずに訊ねた。
「敵に動きは？」
「飛行艦は」
艦長は背もたれにもたれかかりながら言った。
「その飛行時の魔力でもって、ＯＨＴ（オーバー・ザ・ホライゾン＝超水平線）レーダー反応でさえ消してしまう」
ＯＨＴレーダーは数千キロ先まで探知が可能なレーダーだが、飛行艦の生じさせる重力力場は、レーダー波をはじき返さないため、レーダーそのものを照射する意味はない。
「徒に戦力を増強させるのを指をくわえてみていろというのか」
「私に言ってもしかたない。私は艦長として、待機命令に従っているだけですよ。閣下」

「――っ！」

顔を真っ赤にした孔少将は通信兵に怒鳴った。

「通信は何をしているか！」

天裁破壊作戦　第七話

皇帝陛下崩御。

その報を受け、七大軍区のひとつである首都北京一帯の守りを固める北京軍区司令部は、半旗をもって主君の死を悼んでいた。

司令部には、紫禁城からは何も命令は来ていない。

戦時下ではあるが、首都に対する直接攻撃は警戒してもいいが、現実的な話ではないというのが、軍区司令官である房中将の内心での見解だった。

戦争に近いようで遠い場所。

そういう意味では、房中将ははっきり閑職に回されているといえた（前線指揮官に送られた彼の同期からすれば羨望の的だろうが）

北京は戦時体制下とは思えないほど平和で、人々は不景気とはいえ、それなりに活気をもっているし、夜になればネオン街が妖しい魅力を発揮してくれる。

食料は豊富で、物資に困ることはない。

何もかもが、戦争前とほとんど変わらない。

ここにいれば自分達の国が戦争をしていることを忘れてしまう。

それが、その時までの北京だった。

世界に冠たる大都市北京。

繁栄の都、北京。

平和の都、北京。

それが、その時までの、中華帝国の首都だったのだ。

「防空司令部より“護龍1”。所属不明の編隊がそちらへ向かっている。急行されたし」

首都防空司令部のレーダーが、その部隊を捉えたのは午後5時を少し回った頃のことだ。

日没まで後わずか。

防空司令部の指示を受け、丁度、交差点で発生した交通渋滞の調査からの帰りだったのは武装警察航空隊のヘリ、呼称“護龍1”だ。

「こちら“護龍1”。防空司令部、編隊の種別は」

「速度からしてヘリと思われる。民間居住区付近から出現した。数は多い」

「陸軍のヘリ部隊の可能性はないのか？陸軍とのもめ事は御免被る」

「“護龍1”。現在、首都上空の飛行は原則禁止されている。防空任務にヘリの要請はしていない」

「こちら“護龍1”。了解――ったく」

白く塗装された機体を操る陳機長は、通信を切ると隣に座る周副機長に毒づいた。

「人使いが荒いよなぁ。燃料位よこせってんだ」

「通信はモニターされていますよ？さっさと終わらせて定時に帰りましょう」

「そうしよう。指定された進路はこっちか？」

「そのままでどうぞ。連中の鼻先に出ます」

陳機長達がその部隊に空で出くわしたのは、商業区画から離れた、古くからの民家が建ち並ぶ開発の遅れた区画だ。
雑然として、傾きかけた家々が並ぶ世界。
美しく整備されたビルが建ち並ぶ商業区とは別世界だ。

「おいおい……」
そこにさしかかった陳機長の声が引きつった。
向こうから飛来して来るのは、濃緑色に染められた軍用ヘリ。
しかも攻撃ヘリだ。

Ｍｉ－２８

陸軍がロシア製攻撃ヘリをコピー生産して配備していることは知識として知っていたが、現物を見たのは陳機長も初めてだった。
数は４機。
いかついデザインのヘリが、ダイヤモンド編隊を組んで堂々とした飛行を続けている。
その背後には大型輸送ヘリの編隊が続いている。
陳機長にも、相手がただ者ではないことはわかる。
はっきり、逃げてもいい相手だ。
だが、首都の空を預かる武装警察航空隊の一員としての職業意識

が、彼に行動をとらせた。

彼はヘリの姿勢を変えると、戦闘を行く攻撃ヘリに並んだ。

ヘルメットのバイザーを降ろしたパイロット達の顔が見える距離だ。

陳機長はヘリに呼びかけた。

「こちら武装警察航空隊所属“護龍１”。前方のヘリ。所属を名乗れ」

返答はない。

「軍用ヘリといえど、首都上空にて、無許可での――」

ズズゥゥゥム――――！

遠くから粘っこい爆発音が響いたのはその瞬間だ。

「な、何だ？」

「防空司令部より“護龍１”。今の爆発音は何だ？」

通信をモニターしていた防空司令部にもその音は届いたらしい。

「こちら“護龍１”。現在確認中――――周、何か見えるか？」

「１０時方向……軍用区画方面に大きな煙が見えます」

周副機長の言葉に、陳機長が１０時方向を見ると、盛大なまでの黒煙が立ち上っていた。

事故にしては煙が大きすぎる。

「こちら“護龍１”。この不明機の相手と、今の爆発音の調査はど

っちを優先する？」

「こちら防空司令部」

「――編隊全機へ」

通信に、重々しい男の声が響いた。

それを聞いた途端、陳機長は、背筋にイヤな汗が流れたのを感じた。

「狼煙は上がった。演習を開始する」

「ちょっと待て。今の誰だ？演習って何だ？おいっ！」

陳機長が通信装置に怒鳴るが、攻撃ヘリは、彼等を無視するかのように速度を上げ、機体をバンクして進路を変えた。

「待てっ！貴様等」

グウォォォッツツ！

バリンッ！

ドンッ！

ドドンッ！！

ビーッ！ビーッ！

獣が吠えるような音。

世界が引き裂かれるような音。

そして機体の挙げる悲鳴。

ビュンビュンと音を立てて自分の周囲をいくつもの得体の知れない何かがかすめていった。

フロントキャノピーにいくつもの穴が開き、卵が割れるような音がして、何だか得体の知れない液体がぶちまけられ、キャノピーの

半分が見えなくなった。
警報が鳴り響く。
機体のどこからか発生した煙がコクピットにも流れ込んできて、呼吸さえ困難になりつつある。
それまで素直だった機体が全く言うことを聞かなくなる中、陳機長は、操縦桿を力任せに動かし、バランスを失いかけた機体を立て直そうとする。

長年、軍のヘリ部隊にいた経験からわかる。
撃たれたのだ。

「メーデー、メーデー、こちら“護龍１”。墜落する！周！テールローターをやられたらしい！エンジンを見てくれ！」
両手両足を使って機体制御に忙しい陳機長は、周副機長に怒鳴るが、何故か周副機長からの返事はない。
「周！」
高度を急激に落としつつある中、彼が副機長席に見たものは、頭部を吹き飛ばされた周副機長の変わり果てた姿だった。

“護龍１”が墜落していくのを後目に、ヘリ達は集団で飛行を続ける。
その進路には、北京軍区司令部を擁する北京軍用区画が広がっていた。

それから数時間が経過していた。

ズーンッ！
ズーンッ！

商業区画で働く会社員達は家路につこうとしていた。
普段なら、繁華街に出向こうとする者も多いだろうが、今日は違う。

軍用区画に通じる交差点は全て戦車とバリゲートによって閉鎖され、軍事区画が見えるビルの窓はすべてブラインドを下げるように命じられていた。
“灯りをつけておけ。狙撃兵が狙っているからな”
兵士達はビルの一部屋一部屋のブラインドを確かめつつ、会社員達に脅しともとれる警告をする。

「かかった？」
「ダメ」
携帯電話をバッグにしまうＯＬが、隣の同僚に首を振って答えた。
「全然通じないわ。会社の電話もつながらないっていうし」
「３課の鄭が言っていたわ。インターネットもダメだって」
「もう……仕事にならないじゃない」
「だから定時で帰されたんでしょう？私達」
その横を、装甲車とトラックが列を作って走り抜けていく。
トラックの幌の中に、銃を持った兵士達の姿が見えた。

そのＯＬ達は――――いや、道を行く皆が、不安げに軍事区画に視線を向けてしまう。

連続した爆発音。
正月でもあるまいに、爆竹のような破裂音。
夜を照らし出す盛大な炎。

誰もが、何も分からない。
外に出て、誰かに聞けばと思うが、誰も何も知らない。
街頭テレビは、さっきからずつと同じ風景映像を流し続けている。

「何が……起きているのよ」

それは、ＯＬ一人の疑問ではない。
北京市民全員の疑問だった。

未だにあちこちが炎上を続ける軍用区画の中。
護衛の武装ヘリを伴って着陸した大型輸送ヘリ。
そこから降り立ったのは、あの載賢達だ。

「載武」
載賢は、敬礼して出迎える部下達に答礼もせず、その横を通り過ぎる。
「軍情報部は大丈夫だろうな」

載賢の後ろを歩く背広姿の小柄な童顔の男。
五男の載武という。
国家諜報局局長といえば、彼がどんな人物か分かるだろう。
「ご心配なく」
載武は笑って答えた。
「情報統制は全国規模さ。北京からの外部への連絡は一切出来ない」

「マスコミは」

「通信施設は全て押さえてある。通信衛星もジャミングをかけてあ

る」
　載武は、思い出したように言った。
「王政党も部下が抑えたし、紫禁城は載勝兄達が制圧している頃だろう」
「よし」
　ここで初めて載賢は立ち止まった。
「状況は！」
「はっ！」
　彼を敬礼で出迎えた将校の中から一人が載賢に駆け寄った。
「中央司令部施設は全て制圧、北京軍区司令部機能も掌握済みであります！」
「残党の抵抗が激しいようだが？」
「鎮圧は時間の問題です。現在、降伏勧告を」
「全て殺せ」
　載賢は吐き捨てるように言った。
「降伏など認めるな」
「は？」
　将校は目を点にした。
「今……何と？」
「殺せと命じた」
「……し、しかし！」
　彼の背後にいた将校達は、思わず顔を見合った。

その前で、彼は載賢に抗議した。
「我々は殿下こそが次の皇帝と信じるからこそ従っております。しかし、彼等は元来、友軍です！それを全て殺せなど――」
パンッ！
銃声の後、将校はその場に崩れ落ちるように倒れた。
頭から噴き出す血が、血だまりを作り出し、彼の軍服を汚す。
「俺が次の皇帝だ」
載賢は、銃口から硝煙を上げる拳銃を掴んだまま、将校の死体を軍靴で踏みつけた。
「その俺にたてついたからには――こうなるのだ。わかったか？」
ギロリ。と、まるで巨大な獣を想像させる鋭い眼光に、居合わせた将校は居すくんだ。
「皇帝反逆罪はこいつ一人にしてやる――抵抗する者は全て皇帝への反逆者だ。すべて殺せ」
「はっ！」
「――載武」
「載勝兄から連絡が入った。向こうも紫禁城を制圧したけど」
載武は、軍用無線から耳を離した。
「どうした」
載賢は、死体を蹴り飛ばした後、中央司令部へ向けて歩き始めた。

「まず第一。大軍機と宮廷長官達、宮廷の重臣のほとんどが逃げ延びている」

「何だと？すぐに捕まえて殺せ！」

「第二。載儀兄が裏切った。載勝兄は死んだ」

「……まさか」

載賢の顔が青くなった。

「そのまさか」

載武は冷ややかに頷いた。

「載儀兄は、玉璽を奪った後、載勝兄を殺した。そして、城に残っていた儀官達を太和殿前に並べて即位を宣言した」

「あいつめぇ！」

ガンッ！

載賢は手にした拳銃を力任せに床にたたきつけた。

砕けてバラバラになった拳銃を軍靴で踏みつける載賢に、載武は続けた。

「西姫生存説と、太子密建は全て宮廷長官達によるでっち上げであり、長官達が自らの利権を守るため、すでに死んだ西姫を生きているなどという、途方もない嘘をでっち上げ、皇帝の権限である太子密建の真似事までしてのけた――つまり」

「……」

「……西姫の皇位継承権は、全くの作り話で、西姫は死んでいると、

そう宣言した……まぁ？報道は全部僕の規制下だから、紫禁城でどれ程わめいても無駄だけどね」

「チベットの西姫はどうするつもりだ？載武。このままだと」

「殺すに決まってるでしょう？」

載武は笑って言った。

「載儀兄と、載陣兄を血祭りに上げた後で、辺境でガタガタ震えている、西姫とかいう、目障りなその女を殺す」

その顔に浮かぶ歪んだ笑顔が、載賢には何だか頼もしかった。

しかし――

「載武？」

「何？」

「載陣はどうしたというのだ？あいつは」

「南京軍区を抑えに向かったよ？」

「それを何故……」

「決まってるじゃないか」

載武は笑みを浮かべたまま言った。

「南京は元から、載陣兄の支配地域さ」

「はっきり言え！」

「載陣兄は南京と広州軍区を掌握した」

「ど、どういう！？」

載賢は、その巨体を強ばらせながら載武に訊ねた。
「奴は、何をするつもりだ!?」
「南京と広州軍区をもって、中華帝国から独立、新たな帝国を作るつもりじゃない？」
「ば、馬鹿なっ!?」
「まぁいいじゃない。兄」
ポンッ。
載武は、楽しげな笑みを崩さず、載賢に言った。
「僕が兄を帝位につけてあげるからさ」
「手があるのか？」
「もちろん♪」
歌うような声で答えた載武は頷いた。
「諜報部を抑えなかったのは、兄達の限界だよ。諜報部という僕の手足は、闇の中に隠れているけれど、その動きは恐ろしく早くて、何より早いんだ」
クックックッ。
炎上する中央司令部を前に、載武の楽しげな笑い声が響いた。
美奈代達が……いや、世界の人々が中華帝国国内で発生した皇子達の血みどろのクーデターを知ったのは、夜が明けてからのことだった。

中央司令部を制圧した載賢に命じられた部隊が、夜の内に紫禁城に乗り込み、載儀拘束を目指したが、軍が乗り込んでくることを予め察知していた載儀は妻と共にヘリに乗り込み、紫禁城から逃げ延びた。

弟に逃げられたことを知った載賢が、即座に指揮下の空軍に命じて載儀の乗ったヘリを撃墜させていればよかったのだが、怒り狂った載賢が下した命令は、載儀を逃した部隊全員の処刑の方だった。

夜明けと同時に紫禁城に戻った載賢は、載武のお膳立ての元、載儀が準備してついに外部に伝えることの出来なかった原稿を読み上げ、自ら皇帝に即位することを宣言した。

一方、瀋陽(しんようぐんく)軍区に逃げ込んだ載儀、そして南京と広州の軍区を掌握する載陣は、それぞれの軍区を中華帝国から独立させることを宣言。

そして、自ら皇帝を名乗った。

●大日本帝国軍

「帝位簒奪(ていいさんだつ)ってんだよ。こういうの」

タバコをくゆらせながら、テレビ報道を見る後藤は食堂のソファーにふんぞり返った。

素足に履かれたサンダルが親指のあたりでプラプラと揺れる。

「どうなると思います？」

テーブル越しに後藤の前に座る美弥は紅茶を飲みながら、ちらと後藤を見た。

「そりゃアンタ」
ぽわぁ。
後藤は紫煙で輪っかを作ってみせた。
「俺達みたいな、他国の軍人にゃ、関係のないことですよ」

「しかし」
美夜は窓の外を見た。
並行する英国飛行艦隊の中から3隻が針路を変えた。
周囲をメサイアが4騎。護衛のために飛行している。
中華帝国の姫君を英国まで届けるためだ。

「……まぁ。誰がどう動くかは予想が全く立たないけどさ」
言いかけて、後藤は美夜に訊ねた。
「艦長ならどうする？」

「私？」
美夜は思わず、自分を指さしてしまった。
「私なら」

「たとえば、紫禁城を抑えた載賢の立場」

「ああいうのは苦手なんですけどね」

「いいじゃない」
後藤は皮肉めいた笑いを喉から漏らした。
「ハリウッドの有名女優、何人も性奴隷にしてるって噂だし」

「それ、どういう意味ですか？」

「深い意味はないよ」

後藤は肩をすくめた。
「たんなる入れ知恵」
「不要です……ばらけた軍区をまとめ上げて、弟たちが抑えた軍区を叩く」
「軍人らしい回答ですねぇ」
パチパチと後藤は手を叩いた。
「……どういうイヤミですか」
「おろ？正攻法だってほめたんだよ？これでも？」
「聞こえませんでした」
「ヤダなぁ。艦長。耳が遠くなるトシじゃないでしょ？」
「――後藤さんならどうするというんです？どんな模範解答が？」
「俺？」
後藤は自分を指さした。
「俺なら……」
後藤はすっかり短くなったタバコを灰皿でねじ消した。
「何もしないけどね。しばらくは」
「リキッドの処理は終わっているから心配するな！」
「よーし。ゆっくりやれ！」
“鈴谷（すずや）”から発進したベルゲ騎達の宗像騎回収作業を、美奈代達

はコクピットから見守る。
美奈代達の騎は、簡易検査の結果、整備の必要なしと判断されている。
狙撃部隊だけが、補給のために“鈴谷（すずや）”に収容された。
さつきと都築は、さっさと寝たい！とかメシ寄こせ！とか、いろいろわめいていたが、取り合う余裕のある者はいない。

「泉より坂城整備班長、宗像騎の修復にはどれくらいかかりますか？」

「腰部丸ごと交換だ。１２０時間は見てくれ」

「１２０！？ほぼ一週間じゃないですか！」

「無茶いわんでくれ！」
坂城は言った。
「腰まわりの機材、全部外すのにどれくらい手間かかると思ってるんだ！」

「ううっ……」
美奈代もそう言われれば反論の余地はない。
予備騎がない“鈴谷（すずや）”の現状では、修復すれば動くと言われるだけありがたいと思うしかない。
「よ、よろしくお願いします」
そう、言うしかなかった。

「泉大尉」
牧野中尉から通信が入る。
「補給は順調とのこと。追加データ入ります」

「はい」
美奈代は戦況モニター横のパネルを操作して、“鈴谷（すずや）”から送られてくるデータを受信した。
「それとも艦長から、機体大破の始末書、夕食までに出せと」
「ううっ……」
美奈代が号泣する目の前。
メインモニターの向こうでは、英国軍のテンペストが隊列を組んでいる。
手にする武装は槍とシールド。
一部の騎が大型のバスーカを装備している。
「……で」
美奈代は牧野中尉に訊ねた。
「敵の戦力は？」
「帝剣と赤兎改、約１００騎が確認されています」
「……その」
「テンペストでは相手になりません」
牧野中尉は言った。
「魔族軍のメサイアのデータとノウハウを手に入れた中華帝国のメサイアは、下手すれば米国のグレイファントム本国使用と余裕で張り合えます。それは」
「……」
「かつて交戦した経験のある大尉ならわかるでしょう？敵の攻撃が

特殊だったとはいえ、二宮大佐が倒された相手は、帝剣ですよ」

「……」

「幸か不幸か」

牧野中尉は、さくらが用意した紅茶に口を付けた。

「中華帝国軍は、５００キロの位置で待機したままです」

「理由は？」

「中央の混乱のせいで、彼等」

紅茶の香りを楽しみながら、牧野中尉は平然とした口調で、

「忘れられてるんじゃありません？」

牧野中尉の言葉は、半分当たっていた。

司令部からの進撃命令がなかったのは確かだ。

孔少将達は、もう通信を送ることさえ半ば諦めていたし、メサイア部隊の騎士達は、ＭＣ（メサイア・コントローラー）と共に設営された野戦テントの中でくつろぎきっていた。

一人、軍務に忠実な孔少将だけが頑張っていたが、彼自身、最早万策尽きていた。

彼等がそんな立場に立たされたのは無理もない理由があるのだ。

まず、最初から彼等を司令していた中央司令部は壊滅。

当時の司令部スタッフは、司令部急襲時の混乱の中で炎の中に消えた。

チベット離宮の資料と共に。

……
……

ここで補足しておくことがある。

チベット離宮跡に作られた天裁システムは、あれほどの戦果を挙げながらもその所在は軍内部でも把握している者はほんの一握りであり、この中に載賢達は入っていないと言うことだ。

超秘密兵器――天裁システム。

もし、その所在が簡単にわかれば、世界各国は、所在地に対する反応弾使用さえためらわないだろう。

それだけに、天裁システムの所在は、計画の時点から、皇帝以下、本当に一握りの軍高官だけしか知らされていない。

摂政達が毛嫌いする載賢達が外されているのは当然だ。

そして、彼等の大半は、ダユー達によって殺された。

生き残った者もまた、今回のクーデターで鬼籍に入った。

載賢達は、チベット離宮が未だ離宮として存在していると思いこんでいるし、それを否定出来る確かな情報を、載賢達は持ち合わせていない。

何が言いたいか？

中華帝国軍側の誰もが、チベット離宮の本当の危険性を把握していない。

さらに――孔少将達にとって致命的なことは、彼等がここに展開していることを承知している軍司令部要員が誰もいないというこ

とだ。

なら、孔少将側から接触すれば？

そう思うだろう。

それもままならないのだ。

中央司令部の通信設備はクーデターで軒並み破壊され、孔少将側からの通信を傍受することさえ出来ない。

さらには、各方面への通信に兵士達が忙殺されており、例え孔少将側からの通信が奇跡的に受信できたとしても、取り合っているヒマがないのだ。

そして、ここにもっと厄介な事情が加わる。

彼等が展開するチベットが属する蘭州軍区（らんしゅうぐんく）の所属を巡ってだ。

第２１集団軍、第４７集団軍、新疆軍区、２個武装警察師団を傘下に収めるこの軍区は、地下資源の宝庫でもある。

載賢と載儀。

共に喉から手が出るほど欲しいし、互いに所有宣言を出している。

だが、この蘭州軍区司令官、王中将は、実は大軍機と宮廷長官達を匿う、反クーデター派の領袖の一人なのだ。

“我が軍は皇帝陛下とその股肱のものだ！帝位を簒奪し、皇帝を詐称する者達の玩具ではないわ！”

“我が軍を動かしたければ、天地に恥じぬ正々堂々とした方法で皇位を継いでからにしろ！”

載賢から説得を命じられた彼の部下が積み上げた金品を乱暴に払いのけた彼が言い放った言葉がこれだとされる。

これが伝わり、皇帝を名乗る二人に抑えられた周辺の軍区からは、彼を慕って兵士達が最大で師団単位で集結しつつある。

いわば、彼を中心として第四の勢力――――表現すれば、正規軍残党が出現したといえる。

中央を掌握した載賢といえど、この勢力下には下手に軍を送り込めない。

軍を送り込んだ所が、下手をすれば寝返りを受けかねない上に、そんな所に展開していれば、載賢達にとっては王中将の配下としか見なされないこともある。

結局、孔少将が銃殺覚悟で部隊に移動を命じたのは、その日の夕方だ。

短期決戦を前提に兵力も兵站も決められて出撃してきた部隊だ。

食料、特に水の欠乏は致命的だ。

このままではメサイアの運用にも支障を来す。

そう判断した孔少将は、戦線から離脱。最も近い補給が受けられる基地、旧新疆軍区、新疆ウイグル自治区ウルムチ市がその目的地と定めた。

“永遠にここにいて、乾涸らびるがいいわ！”

孔少将にそう言い放たれた龍大佐は、表面上、渋々ながら“大連”の針路をウルムチ市に向けた。

彼等が遠ざかっていく中。

英国軍による天裁システムを用いた攻撃の準備は、着実に進みつつあった。

天裁破壊作戦　第八話

●大英帝国　ロンドン　ダウニング街１０番地

「我が麗しの姫君は？」

「ハイデラバードの空港を3時間前に離陸。明日には麗しいお顔を拝見出来るでしょう。そんことより吉報です。天裁システムが射撃可能と判断されました。現地スタッフは、攻撃命令を待っています」

「君は本当に……」

クックックッ。

ヒース首相は苦笑しながら頷いた。

「ルシフェル以外の女の子には冷淡だな」

「そりゃ、私にとっては？」

ボンド卿は嬉しげに肩をすくめた。

「かわいい娘のような存在です。その娘と比べたら、世界中のいかなる美姫もドブ鼠同然です。当然でしょう？」

「それで」

ヒース首相は楽しそうにボンド卿に訊ねた。

「その可愛い娘相手に、何をどうしたら、そんな顔になるんだ？」

「これですか？」

ボンド卿は、左目の青あざを指さした。

「娘の成長を確かめてやろうと思いまして」

「胸でも掴んだか？」

「よく成長していました。まだ少し固いかなと思いますが」

その声は感慨深ささえ感じられた。

「そのうち、脳みそ潰されんかね？」

「あれはあれで、手加減してくれているんですよ。アリスが言ってましたが」

「アリス？ああ、あの娘の双子の姉だったか？」

「優秀な部下ですが、反撃が容赦なくて……ルシフェルなら、ぶん殴られる程度で済みますから、お得です」

「一度、性犯罪者として法廷に立ってみることだ」

「手厳しいことで……して？天裁システムの攻撃対象は」

「君とのバカ話で忘れるところだった」

ヒース首相は言った。

「新大陸政府からの要請があった場所に撃ち込むことになる」

「新大陸へ？」

「こんなものを自らの国に撃ち込んでくれとは、ベネットもかなりヤキが回ったな」

●チベット離宮跡付近　“鈴谷（すずや）”艦橋

「施設内、要員の待避、完了です」

「英国艦隊旗艦“レナウン”より入電。被害回避のため、艦隊は山脈の裏側へ待避行動を開始する。“鈴谷（すずや）”は我に続け」

「通信、返信しろ。了解、我、艦隊に続く。操舵、艦隊の最後尾に

つけろ」
「通信、了解」
「操舵了解。艦隊最後尾につけます」

天裁システム発射準備が完了し、施設のシェルターに入ることが出来ない部隊。つまり、飛行艦隊とメサイア部隊は山脈の裏手に移動した。
当然、そこには美奈代達と“鈴谷（すずや）”が含まれる。

「無茶しますなぁ」
“鈴谷（すずや）”艦橋、メインモニターに表示される攻撃地点を眺めながら、後藤はぽつりと呟いた。

「どういうことです？」
それを聞き逃さなかった美夜が訊ねた。
「目標は北米大陸に侵攻した中華帝国軍占領地域のど真ん中」

「占領地に何人の住民が逃げ遅れているか、捕虜になった友軍兵士が何人いるか、全く不明なままですよ？」
後藤は言った。
「攻撃を要求するアメさんもアメさんなら、撃ち込む方も撃ち込む方ですわ」

「それは……」
美夜は、今ひとつ、後藤の言いたいことが分からない。
「民間人や友軍を巻き添えにするリスクをあえてとるのは……最悪とはいえ、やむを得ないものがありますが」

「そう答えられるのが」
後藤はニヤリと笑った。
「艦長の軍人らしい所ですよ」

「ほめてませんね？」

「ほめてますって」

「……それで？撃ち込む方も方だって言うのは？」

「市民巻き添えにして、国土を焦土にする」
後藤は口元を歪めながら言った。
「そんなことされたら、世論がどう動きますかね」

「……平和十字軍（ピース・クルセイダーズ）」

「それ以外の、もっと危険な連中まで目を覚ましますよ」
青くなる美夜に、後藤は無言で頷いた。
「連中の米国至上主義があそこまで受け入れられたのは、あの国の国民に、それを受け入れるだけの素地、というか自負があったから。何より、英国とは数度にわたって戦った因縁のある間柄。再び、国土が黒こげになる程の被害を、その英国から受けたとなれば、連中はどう反応するんでしょうね？
やむを得ないで諦める？
英国はよかれと思って、アメリカに恩を売るつもりで撃ち込むでしょう。
共通の敵、中華帝国軍を撃破するために。
でも、それを米国の世論が額面通りに受け入れる可能性は低いでしょうね。
民間人、軍事問わず、アメリカ人がイギリス人に殺された。

誰かがそう言い出したら？
世論は英国の“協力”に感謝するどころか、むしろ“よくもやりやがったな！”ってことになる。
今、平和十字軍は叩かれているけれど、国民の怒りをまとめ上げることが出来れば、ああいう連中がアメリカの主導権を握ることになるでしょうな」

「まさか」
美夜は噴き出した。
「北米大陸の戦いは、中華帝国を追い落とす解放戦ですよ？それに、平和十字軍は、中華帝国に利便を働いたと」

「俺達ゃ、魔族軍撃滅という大義名分で修善寺焼け野原にして、暴動の挙げ句、死者まで出した身ですからね」

「……」

「ま？俺がそんなこと危惧しても始まりませんけどね。ウチの国よりはるかに立派な、両国の政治屋さん達のお手並み拝見とまいりますか」
後藤の最後のつぶやきは、美夜には聞こえなかった。
「……世論ってのは、おっかないものなんだぜ？」

「総員、対閃光防御を厳に！」
矢継ぎ早に天裁コントロールから指示が来る。
「メサイア全騎は、閃光防御、バイザー確認のこと。飛行艦乗り組みは発射時に外を見るな、もしくはサングラスの着用を――」

「山の向こうに待避するんだ。大丈夫だろう？大げさすぎる！」

「知るか！こっちだって一発も撃ったことないんだ！責任がとれるか！」

「泉より各騎、聞いての通りだ。閃光に備え、バイザーを確認。報告しろ」

「小清水騎、バイザー確認」

涼は通信に返答した後、メサイアの眼を防御する閃光防御用バイザーが降りているのを確認、美奈代に報告した。

閃光防御用バイザーは、人間の眼に極めて近いメサイアのメインモニターを強い光から防御する分厚いサングラスのようなものだ。

ビーム系兵器であるＨＭＣを使う小清水騎は常に降ろしているが、それでも作動を確認して返答する義務を免れはしない。

「……ん？」

小清水騎の目の前には、先日の戦いで撃破された飛鼠（ひそ）達の残骸が転がっていた。

頭部を破壊され、或いは四肢のいずれかを失い、放棄された騎達だ。

「……」

涼は、そのうちの一騎が妙に気になった。

大の字に転がって、半ばを土砂に覆われているその騎は擱座したと判断出来る。

頭部のコクピットハッチが外れているのは、多分、いいだろう。

だが――。

「あれ？」

メサイアが付近を移動する振動で、メサイアを覆う土砂が崩れていく。

崩れた土砂の下。
胸部ハッチから、長いケーブルが装甲の上を走っているのを、涼は見逃さなかった。
一瞬、搦座した時にケーブルが外れただけかと思ったが、どうも違う。
ケーブルは、装甲の隙間に差し込まれているとしか思えない。
それに、ケーブルが伸びている先には、飛鼠達がかつて潜んでいた窪地がある。
「？」
そこで、何かが動いた。
「……高良中尉？」

「……み、みつかったか？」
窪地の中、身を潜めているのは、飛鼠達を率いていた王少佐以下、生き残ったパイロット達だ。
搦座した騎から逃げ延びた彼等は、窪地の中に潜んでいた。
窪地の奥には清水がわき出しており、王少佐達は、それを飲んで、サバイバルキットの食料を食べ、脱出のチャンスをうかがっていた。
飛鼠のバッテリーから電源をとり、無理矢理つないだケーブルを這わせ、この窪地に通信装置を取り付けていた。
そのケーブルが、命取りになった。
こちらを向いたメサイアと視線を合わせるのを恐れ、王達は窪地の一番下まで潜ると、その場で一塊りになり、皆で息を殺した。

味方はいない。

武器はナイフと拳銃だけ。

相手はメサイアに飛行艦。

これで勝てたら、それこそハリウッド映画化されるだろう。
だが、王少佐は英雄になるつもりはなかった。
英雄になるより、生きたかった。
生きて故郷に帰りたかった。

――降伏するか？

躊躇する王は、ポケットの中に隠してある白いハンカチを思い出したが、やめた。
下手なことをすれば、徹底交戦を叫ぶ部下達に殺される。
王は、首を回して彼の背後で頭を低くする部下を見回した。
パイロットスーツの首周りに赤いマフラーをしている二十歳前後の顔が、そこにあった。
義務教育時代に学業優秀であることを示す赤いマフラーを軍隊に入っても身につけているバカ共。
それが、王の部下だ。

くそったれが。

部下達にバレないように、王は内心で舌打ちした。
王政党のヤバい教育を受けたボンボンの志願兵なんて、これだから引き受けたくなかったんだ。
漢民族が世界で最も優れているなんて、根拠が怪しいことを子供の頃から叩き込まれ、親に傅かれて育ったこいつらは、こんな状況になっても、自分達の方が強いと間違いなく思いこんでいる。
ここにいれば、敵を誰かが倒して、手柄は自分達のものだと言い張るつもりだ。
もしかしたら、素手でメサイアが倒せるとでも言うかもしれない。
戦闘の無意味さを口にしたら、俺がこいつらに殺される。
言ったが最後、俺はこいつらにとって格好の獲物になる。

間違いなく殺される。
冗談じゃない。
だが、ここでむざむざ殺されるのも御免だ。
こんなバカ共と同じ墓に入るなんて悪夢どころの話じゃない。
――どうする？

ピピピッ

ピピピッ

通信装置が呼び出し音を響かせたのは、その時だ。
突然の音に、王達はビクッとなったが、それが何の音かわかると、むしろ安堵のため息が、皆から漏れた。
友軍との通信回線が開いた知らせだった。

●英国飛行艦隊旗艦“レナウン”艦橋
「通信が流れているだと？」
「はい。いかがなさいますか？」
「通信内容は」
「こちらの編成を告げる程度」
「……なら問題あるまい」
飛行艦隊を指揮するバッテン提督は、興味がないという顔で答えた。
「今更、そんなことを告げられたとして、連中に何が出来るというのかね？」
「……はぁ」
「発射してしまえば、どうということはない」
提督は、悠然とした態度で足を組んだ

「敵が、脅威に気づいた時には遅いんだ。発射までの時間は？」
「2分です。提督、サングラスをお付け下さい」
提督は部下からサングラスを受け取りながら言った。
「メサイアに命じて、手榴弾でも投げ込んでおけ」
「了解です」

●情報収集機13号
同じサイズの航空機と比較して、数倍の搭載量を誇るTAC（タクティカル・エア・カーゴ）を改造し、各種探索装置を搭載したのが、中華帝国軍の情報収集機だ。
センサー類は、中華帝国軍が保有する中でも最上級のグレードが搭載され、空中警戒管制機としても使用可能という、恐るべき“感覚器”の持ち主だ。
その中では、通信管制官が、ジャミング混じりの通信を、何とか聞き取ろうと四苦八苦していた。

「どこで何が起きているって！？」
恐ろしく電力を喰うため、普段は禁止されているノイズキャンセラーを最大にして、ようやく聞き取れた。
相手は第931メサイア中隊。
部隊リストには存在するから、敵の欺瞞ではあるまい。

「こちらの座標は――」

通信管制官は、目の前の機器を使って座標を入力。
そこは、照会任務を受けたチベット離宮のすぐ間近。
彼等はチベット離宮に最も近い所にいる部隊となる。
目視でチベット離宮を確認出来る兵士達との通信は、彼等にとっては予想外の僥倖だ。

「こちら情報収集機13号。そちらの所属、官姓名を」

通信管制官は、録音装置をオンにした。
「第９３１メサイア中隊、中隊長の王少佐だ！周辺にメサイアが――３７騎、ほとんどがテンペストだ。１０騎近く、見たこともない騎がある。俺達が全滅させられたのは、そいつらだ。それと、飛行艦が８隻、確認出来る」
「敵が集結しているのは、離宮側ではないんだな！？」
「離宮？」
王少佐の言葉が一瞬、とぎれた。
「離宮って何だ？何かの暗号符丁か？」
「少佐、その山の向こう側に何かなかったか？」
「見たこともない、軍事基地ならあったぞ！？」
「ぐ、軍事基地？」
「夜明け頃に、山脈の上に出て偵察した時撮影したデジタルカメラの映像でよければ送る。俺にはミサイルサイロに見えたがね！」
「了解。データはオンラインしているから、そのまま送ってくれ」
「了解した。一体、英国軍はいつのまにこんな施設を」
「離宮は見なかったか？」
「だから、その離宮って何だ！俺達の目に映ったものは、カメラの映像だけだ！」

――その瞬間。
通信管制官が、何かを言った。
王少佐は、それはわかった。
だが、目の前に迫り来る英国軍のメサイアの姿でさえかき消した程の激しい閃光が、少佐達の体も神経も――いや、心でさえも白く染め上げてしまった。

ズズズゥゥゥゥゥゥム！！

激しい振動で窪地の天井から剥がれた岩が落下してくる。
少佐達は頭を抱え、落下してくる岩がぶつからないことを神に祈るしかなかった。
口の中が砂だらけになりながら、王少佐は通信管制官に呼びかけた。
「聞こえるか！？」

「こちら情報収集機１３号。王少佐、聞こえるか？状況を知らせろ。今、そちら側で光の柱が立ったぞ！？」

「穴蔵の中にいてわからなかった！何が起きたか、俺が聞きたい！」
王少佐が、そう答えた。
彼の目の前では、先程の光に驚きでもしたのか、英国軍のテンペストが立ち止まっていた。
明らかにテンペストとは違う、自分達を蜂の巣にしてくれた憎い敵騎達は、テンペストと入れ替えに遠ざかっていく。
間違いなく、奴はこっちに何かするつもりだ。
テンペストの手が、サイドスカートから何かをもぎ取った。

通信管制官が何か言っているが、もう少佐の耳には入らない。

テンペストは、まるでゴム鞠でも投げるような気軽さで、こちらめがけて何かを放り投げた。
テンペストのサイズからすれば、たいしたことはないが、少佐達からすればドラム缶波のサイズになる。
そして――少佐達は、それが何だか知っていた。
メサイア用の手榴弾だ。

「――逃げろっ！」
王少佐は通信装置を放り出すとそう叫んだ。
隣に転がされていた負傷兵を担ぎ、窪地の縁で一度跳ねた手榴弾と入れ違いに、少佐達は窪地から飛び出した。

爆風と熱風が、少佐達を容赦なく襲う。
少佐は、爆風に持ち上げられる格好で、空中を吹き飛ばされた。
そして――地面に叩き付けられた瞬間。
少佐は意識を失った。

●紫禁城

北米大陸侵攻軍に壊滅的損害。

その報告は、皇帝として昼の眠りについた載賢を叩き起こすには十分すぎる破壊力を持っていた。
載賢は、皇帝の権限をかざし、慰み者にした宮中の見目麗しい女

性を突き飛ばし、床から飛び起きた。
途端に、夜明けまで飲んだ祝杯が、今では悪酔いとなって体を襲う。

「どういうことだ！」
頭に走った痛みに顔をしかめ、載賢は獣じみたうなり声と共に声をあげた。
「俺の軍に何が起きた！？」

「そ、それが」
軍参謀長は震えながら言った。
「チベットからの攻撃です」

ガンッ！

室内に鈍い音がして、参謀長の顔面に載賢の拳がめり込んだ。

「ふざけるな！」
文字通り吹き飛ばされ、口元を抑えてのたうち回る参謀長に、載賢は怒鳴った。
「チベットは我が領土だぞ！？貴様ぁ、皇帝たる俺様の威光が、あの僻地には伝わっていないと、そういうつもりか！？」

「い、いえっ！」
脇に控えていた参謀長の副官が一歩前に出て叫ぶように言った。
「先の摂政が、チベット離宮に大型攻撃兵器を作り上げていたのです！」

「――――何だとぉ？」

「過日、我が国がタイ周辺を一撃のもとに破壊したのは、魔族軍による支援攻撃と聞かされていましたが、実は、あれはその兵器からの攻撃であると思われます！」

「……わかった」

載賢も、決してバカではない。

軍人、指揮官としての才能は、低くないどころか、むしろ高すぎる程高い。

乱世にでも生まれていれば、奸雄して歴史に名を残すことさえ出来るだろう傑物だ。

倒すべき敵がわかれば、敵めがけて襲いかかるために、いかなる努力も惜しまない。

何を犠牲にしても、全ての敵を倒す。

そうやって生き延びてきた漢。

それが、載賢だ。

載賢の眼光からは怒りが消え、凍り付くような冷徹な光が宿る。

それは、軍人の眼だった。

「参謀共を集めろ！データは採取しているんだろうな！？」

●“鈴谷（すずや）”艦内ブリーフィングルーム

「一体、いつまでここにいるんですか！？」

美奈代が後藤にくってかかった。

「我々はこの施設の制圧が任務だったはずです！」

「――――まぁ、そうなんだけどさ」

後藤は少しだけ顔をしかめた。

「泉も、言うようになったね」

「おかげさまで」
美奈代は顔を引きつらせながら言った。
「こんな所にいる間に、日本はどうなっているか！」

「……それがさ」
後藤は申し訳ない。とでもいわんばかりの顔になった。
「動けないんだわ。俺達も」

「……は？」
美奈代には後藤の言っている言葉の意味がわからない。
こちらは飛行艦だ。やろうと思えば逃げようなんていくらでも――。
「インド洋方面で、何があったんですか？」

「あったんですよ」
後藤は嬉しそうに頷いた。
「こういう方面、泉は話が早くて助かるねぇ」

「――教えて下さい」

「ミャンマーに、中華帝国軍の最新鋭飛行艦多数を含む戦闘艦艇が集結中だ。艦隊決戦やって、絶対に勝てるというならともかく」
後藤はそこで言葉を句切って挑発するように笑って見せた。
――わかるだろう？
口元は、そう語っていた。
「カンボジア戦線はすでに天裁システムの攻撃で焼け野原ですよね？そんな所へ何で」
「さぁ？どっちにしても、下手に動くと追撃されかねない。英国艦隊と行動を共にして、しばらく様子を見ないと危険だと、そういう

理由さ。
　最新の情報だと、蘭州軍区に他の軍区からも部隊が集結しつつあるっていうし」
「蘭州軍区？」
「このチベットを含む軍事的な区割りのこと。そこの司令官は、正統なる後継者の命令がなければ軍は動かさないと宣言しているんだ。かなりのカリスマらしくて、こいつを慕って、各地の飛行艦も集結しつつある。
　ああ、そうそう。飛行艦隊だけじゃなくて、陸軍も師団単位で」
　後藤は、思い出したように付け加えた。
「ついでに、メサイアもね」
「……もし」
　美奈代は言った。
「もしですよ？その蘭州軍区からここへ侵攻するとしたら？」
「――というか、ここを攻めることが出来るのは連中だけ。それで？どうして連中がここへ攻めてくる？」
　後藤は本当に楽しげに、美奈代へ訊ねた。
「その……何とか言うお姫様が、ここにまだいると、そう思っていれば」
　美奈代は答えた。
「そして、この天裁システムを手に入れたいと思えば」
「……ま、模範回答だよな」
　後藤はポケットからタバコの箱を取り出した。
　いいかい？

一本を抜くと、美奈代の返事も聞かずに火をつけた。

「――――なぁ、泉」

今、ブリーフィングルームには二人しかいない。

室内は、機関室から響く単調な推進音だけが低く響くだけだ。

「この天裁システムを死守しなければ、人類に未来はないんだ」

「……」

「北米大陸への攻撃はまだ続いている。

北米大陸で米軍は本気で反撃に出ている。

その大きな支えが天裁システムだ。

敵の掃討攻撃の見返りは、米軍の天裁システムの護衛。

本国叩かれているって意味じゃ日本だって同じだが、連中だって十分厳しいんだ。

その中で、空母だのイージス艦だの引き抜いてインド洋に派遣させる理由はなんだと思う？」

「……は？」

美奈代はきょとんとした。

米軍がインド洋に出ていることを初めて知ったのだ。

「ここめがけて襲ってくるだろう反応弾攻撃を、宇宙レベルで阻止しますってわけ。

わかる？

米軍にとっても、コイツは意地でも守らなければならないシロモノだってこと。

何しろ、こいつは世界のパワーバランスを一気に崩すしろものだ」

「そこに、日本が関与する必要があるんですか？どうせ所有権は日本にはないし、日本へ使用してくれる保証もどこにもない。日本にとってのメリットがわかりません」

その答えに、後藤はニヤリと笑った。

「――ここまで言って、まだわからない？俺達がここにいる価値が」

「……」

美奈代は少しだけ首を傾げたが、答えた。

「中華帝国軍の意識をこの施設に集中させることで、日本へ向けさせないためですか？」

「そういうことさ」

後藤はくわえタバコのまま、頷いた。

「日本へ軍を向けるだけの余力は、今の中華帝国軍にはない。ただ、魔族軍向けの輸出も、それを管理する政府機能がマヒしている限りは止まる。

実際、衛星偵察によると、南京や重慶の飛鼠（ひそ）生産ラインは停止したままだ」

「関連がわかりません。それってクーデターの影響では？」

「クーデターが一段落しても、この天裁システムの争奪戦を考えたら、おちおちメサイアを輸出なんてしてられる？」

「……あっ」

「そういうこと。

この天裁システムは、全ての軍隊にとって、喉から手が出るほど

欲しいシロモノだ。
……まぁ、金払ったのは連中だろうし。
それは現在、中華帝国を分割している４つの勢力にも言えることだ。
これから、天裁システムの争奪戦が始まろうとしているんだ」

「……あの」
美奈代は怪訝そうに訊ねた。
「もしかして、後藤隊長達、ここを武力だけで守ろうとしてません？」

「小手先の技が通じる相手じゃないでしょう？やばければ逃げる。戦力差は」

「こういう時こそ、小手先が有効なんですよ！」
美奈代はじれたように言った。
「どうして大人の男って、こうもバカなのかしら！」

「おいおい……お前がいうか？」

「私、女ですから！」

「……で？」
後藤は訊ねた。
「女の妙案、拝聴しましょうか？」

「簡単に、私達は手を汚さずに、中国人にここを守らせる方法があるんですよ！？」

「……へ？」

後藤のくわえタバコから、灰がこぼれた。
「何で気づかないんですか!?これって後藤隊長の専門領域じゃないですか!」
「……俺の?」
後藤は思わず自分を指さした。
「そうです!」
美奈代は力強く頷いた。
「私達は、ジョーカーを握っているんですよ!?」
「ジョーカー?」
その言葉で、後藤はハッとなった。
「……成る程?」
クツクックッ……。
タバコを手でもみ消し、後藤はボリボリと頭を掻いた。
「成る程成る程?教え子に教えられるってのは、こういうことか」
歳はとりたくねぇなぁ……。
後藤はそういって、喉の奥で笑った。
「ま、ご褒美兼ねて、お前さんのプランを聞こうか?」
「ですから」
計画は決まった。
英国も、ここで天裁システムを防衛するために膨大な費用と犠牲が求められていることは知っている。
だからこそ、後藤達から具申された計画は、即座に了承を受けた。

だが、たった一つ。

二人にとっての誤算は、計画が実行段階に入るより先に、相手が動いたことだった。

補給を終えた孔少将率いるメサイア師団が、チベット離宮奪還のため襲いかかってきたのは、計画が完成するよりも早かった。

最新鋭メサイア１００騎を誇る中華帝国軍最精鋭部隊を相手にした戦いが、今、幕を開こうとしていた。

天裁破壊作戦　第九話

「前方５０キロに中華帝国軍メサイア部隊、布陣」
「……はやいな」
美奈代は戦況モニターを感心したように見入る。
中華帝国軍は戦場を天裁システムを望める平原地帯に指定したらしい。
圧倒的な数の敵性反応が見て取れた。
「帝剣や赤兎改の３キロ後方に陸戦艇部隊。その後方に移動砲台“ガルガンチュア”部隊が展開。火力を基準とした戦力比較では」
牧野中尉はそこまで言うと、小さくため息をついた。
「……戦うだけ無駄ですね」
「敗北主義的ですね」
「現実主義的なだけです」
牧野中尉は平然と言ってのけた。
「玉砕戦なんて私の趣味じゃありません――それより、何か後藤隊長と悪巧みしてたみたいですけど」
「……結局、ダメでした」
美奈代は深いため息をついた。
「何、するつもりだったんです？」
「西姫を預かっている。殺されたくなかったら下がれと」
「……それって」
「というのは冗談で」
「――こら」
「この施設周辺からの中華帝国軍の撤退を西姫に認めさせるつもりだったんです」

「妙案ですね」
牧野中尉は感心したように言った。
「西姫を引き渡すのが条件なら、敵も飲むしかないはず。いいことなんじゃないですか？」
牧野中尉は首を傾げるしかないが、
「本気でそう思います？」
美奈代は訊ねた。
「え？ですけど、今頃、イギリスでしょう？なら、そこでチベットから撤退しろと命じさせれば」
「されたら私達、終わりですよ？」
「――え？」
「敵が襲ってこないのは、ここに西姫がいるのではという危惧からです。
戦闘に姫君を巻き込んだとなれば大変な事態になりますからね。
おかげでこっちは助かっているというのに、それが、肝心の姫君がいないと、こっちから公表したとなれば」
「考えたくもない、間抜けな話に聞こえますね」
「死ぬほど間抜けなんですよ」
美奈代はメインモニターに映る景色に視線を動かした。
青い空と美しい緑の景色が広がっていた。
「そうなったら」
「なってくれないことを祈りますか」
「あ、よくわかんないけど、さくらもお願いする！」
「はいはい。さくらもお願いね？」
「はぁい！」
全く意地の悪い存在もいたものだ。
牧野中尉とさくらのお願いは――聞き入れられなかった。

●バッキンガム宮殿　政府首脳控え室

「馬鹿者が！」

顔を真っ赤にしたヒース首相がテーブルに書類を叩き付けた。

「これだから女という俗物は！」

控えていた秘書官がその剣幕に驚いて、一瞬言葉を失った。

「あ、あの？閣下？」

「リチャード！」

「はいっ！」

「ベネットから追加での砲撃要請は来ていないな！？」

「は、はいっ！」

「ベネットに伝えろ。しばらく砲撃は出来ない――継続を望むなら兵力をチベットへ回せと」

「しかし！」

秘書官はさすがにくってかかった。

「北米大陸上空の監視衛星によると、中華帝国軍の門（ゲート）は壊滅状態。明日からの新大陸軍の掃討作戦の成否は天裁システムにかかっているわけで」

「大いに結構！」

ヒースは秘書官の言葉を遮るように怒鳴った。

「すばらしい！

物事のうまみは全てベネットのものだ！

あのシステムを制圧するのに、わが大英帝国がどれ程のリスクを冒した！？

ベネットの申し出にうかうかと乗ることが、どれ程のリスクなのか！」

「……」

秘書官には、ヒースの言いたいことがわからない。

半径数十キロを焼き払うシステムの破壊力は、世界最強とも言え

るだろう。
そのシステムを放棄するとでもいうのか？
「それがわからんのだ！あのバカ女は！」

バカ女。
それが誰か、秘書官はすぐに見当をつけた。

「閣下、一体、何があったのですか？」
「よく聞け」
ヒースはバッキンガムでの出来事を語った。

英国国王ジョージ7世の妻、メアリー王妃のことだ。
王妃の地位を楯に、詮索好きで個人的感情だけで政治に口を挟んでくるメアリー王妃とヒースとの関係は表面的にはともかく最悪に近い。
ヒースが立案したとなれば、それが神さえ認める正義だとしても、彼女は反対するだろう。
そう、国王自らがテレビのインタビューでそう語っていたのを秘書官は見たことがあった。

神がヒースに味方しているなら、彼女は悪魔の仲間だ。

そんなジョークからついたあだ名が、“悪魔のメアリー”。

はっきり、英国内での評価は最悪な女性だ。

首相就任以降、アフリカに植民地を確保した。
戦争を指揮して勝った。
没落しかけていた英国経済を短期間のうちにＥＵで最も豊かな財政へと立て直した。

世界に冠たる大英帝国の復活を成し遂げた、全てはヒースの功績だと、国民が認めている。
それだけに国王ジョージ7世はヒースを重用しているし、世論もヒースを支持しているが、それは政治の話だ。
国家元首同士の問題は、政治と言うよりむしろ王室のプライベートに近い。
西姫亡命は、亡き中華帝国摂政から英国政府に依頼されたのではない。
英国国王自身に直接託されたことであり、この件に関する決定権は全て国王にある。
だが、その影響を最も受けるのは英国政府なのだ。
故に、国王はヒースに善処を求めたのだが――
そこに横やりを入れてきたのはメアリー王妃だ。
本当のことだが、西姫亡命の件を国王は妻であるメアリー王妃に伝えていなかった。
話がこじれることを嫌ったからだ。
西姫の扱いは、かなうなら最初から無かったことにして欲しいほど、恐ろしく微妙な問題なのだ。
中華帝国は、未だにチベット離宮に西姫が存在していると見なしている。
そのおかげで、天裁システムは攻撃を受けずに済んでいる。
守る英国にとっても、奪還を目指す中華帝国にしても、西姫の扱いは、

――刃の上でワルツを踊るようなものだ。

そう、国王が語る通りだ。

ところが、どこからかこの情報を嗅ぎつけたらしいメアリー王妃は、ここに平然とくちばしを挟んできた。

しかも、各国マスコミの前で。

――中華帝国のお姫様が今晩、バッキンガムに入りますのよ？

――私、仲良くなろうと思いますの。

無知とかお茶目などという愛らしい表現では済まない。

ヒースは当然だが、肝心の国王までを激怒させたこの王妃の発言は、瞬く間に世界中に広まった。

――西姫はチベット離宮には存在せず。

――西姫は英国に囚われている。

市民が紫禁城前広場で英国に対する反応弾使用を叫ぶ市民の姿が映し出される。

中華帝国軍首脳部は、天裁システムに陣取る英国軍に対する“最終的な処置”を通告して来た。

蘭州軍区で補給を続けていた孔少将率いる部隊は即座に発進、チベット離宮から５０キロの地点に布陣した。

ヒースと国王の元には矢継ぎ早に最悪の報告ばかりが届く。

全ては、たった一人の口の軽い女の無責任な発言の結果だ。

ただ一つ、国王にヒースが言い放ったという一言に、多くの国民が溜飲を下げた。

「謹んで陛下に申し上げます。今回の戦闘によって、我が大英帝国は甚大きわまりない被害を被ることになるでしょう。

どうか陛下におかれましては、ご安心下さいませ。

この原因は、西姫の亡命を受け入れるという、陛下のご英断ではございません。

すべては、王妃をめとった、陛下の女性に対する見識の無さにこそございます。
何か反論はございますか？」

●中華帝国　北京　紫禁城
「北米征討軍の被害は甚大です」
載賢のお気に入りである参謀の言葉を、載賢は会議室の椅子に座って聞いた。
玉座は使わない。
自らがその器ではないなどという、自制的な理由であるはずがない。
“俺が座るには古くて汚い”
そんな理由だ。

「派遣部隊の８割以上の状況が不明。敵攻撃の被弾地域と展開地域が合致することから……」

「……もういい」
載賢は顔色一つ変えずに言った。
「予備門（ゲート）復旧はいつになる」

「電源が確保出来ました。残存兵力が確保している元米陸軍基地に設置した第３予備門（ゲート）が、４時間後には接続可能です」
「門（ゲート）一つでは足りないぞ」
「第３予備門（ゲート）から、別門（ゲート）を電源車混みで本国から輸送します。２４時間以内に門（ゲート）は全能力を復旧出来ます」

「兵站部長。投入可能な戦力はどの程度だ」
「人民動員兵４５万が、門開放（ゲート）を待ち望んでいます」
「上等だ」
載賢は強く頷いた。
「あの白豚共に、我が国にとって２０万程度の損害は、蚊に刺された程度だと理解させろ」

●チベット　天裁システム付近
「英国全軍に対し、天裁システムの死守命令が出た」
通信装置の向こうで後藤は言った。
通信モニターに映るその顔は真剣そのものだ。
「英国軍は増援を含め、メサイア４７騎をもって中華帝国軍と渡り合う」
――無理だ。
美奈代は沈痛な思いで顔をしかめた。
世界最強とも言われるメサイア“ローマイヤ”のコピーである帝剣の重装甲は、並の兵器でどうこうなる代物ではない。
テンペストの戦斧で割れる装甲じゃない。
一体、英国軍は何を考えて帝剣や赤兎改と渡り合えると確信しているんだろう？
美奈代は、本気でそれが知りたかった。
重装甲の帝剣が前面に並ぶ、四列横隊に及ぶ中華帝国軍の重厚な

戦列は、中華帝国軍が波状攻撃可能なほど豊富な戦力を擁していると宣言させている。
対する英国軍は、予測される正面突撃を真っ正面から受け止めるつもりはない。
横隊による集団突撃を無意味化させるために、3騎で編成される分隊規模で広く散開させている。
少数が突撃を誘っても、他部隊が散開しつつ敵と交戦する作戦だ。
この状況において、古典的な横隊列をとるのと、散開させるのと、どちらが有効なんだろう。
美奈代はふと、そんなことを考えていた。
自重数百トンのメサイアが激突する。
それは最初からかなりの損害が出ることを意味する。
見た目は派手だろうが、それは無駄な犠牲だ
それに、密集陣形が有効なのは、突撃するまでだ。
突撃した後の乱戦まで考えたら、ここで密集陣形はとるべきではない。
それが、美奈代の出した結論であり、その後は、すでに英国軍の一部隊だったら自分の部隊をどう率いるかを美奈代は考えていた。

自分達は山脈に最も近い右翼最端に位置している。
この位置を活かすには？

「俺達の任務は、英国軍の側面支援だ」
後藤は続けた。
「真っ正面から激突する華々しいのは連中に任せる」

「しかし！」
構築しかけていたプランを根底から破壊された美奈代は思わず食ってかかってしまった。

「泉」
後藤は諭すというより叱るような口調で言った。
「帝剣撃破スコアを人類でたった一人持つからといって――お前が全騎相手にすることは出来ないぜ？それともそのつもりか？」
「そ、そんなつもりは――」
「英国さんは英国さんで」
後藤は美奈代の言い分に最初から耳を貸すつもりはない。
会戦なんて派手な戦闘は後藤の趣味ではない。
何より、部隊の損害は後藤の責任問題になる。
部隊指揮官が最も考えなければならないのは、いかに部隊の損害を抑えるかであって、派手に勝つことではない。
だから後藤は最初から戦うつもりさえなかった。
「イギリスさんのお手並み拝見としゃれ込みたいが、そうもいかん。全騎、部隊を移動させる。データ転送するから、作戦モニターを見ろ」
アップデート表示の後、作戦モニター上に各騎の配置が表示された。
「まず、敵の戦力について通達する」
その声に、美奈代はデータを見た。
【中華帝国軍戦力】
帝剣　２５騎
赤兎改　４５騎
ガルガンチュア　３０騎

飛行艦　４隻
陸戦艇　８隻

【日英連合軍戦力】
英国軍　４７騎
日本軍　９騎
飛行艦６隻

「数値を見る時、注意して欲しいのは、メサイア単体の戦力と飛行艦の火力だ。
先に鹵獲（ろかく）した帝剣のデータを元に割り出したものだが、パワーと装甲、共にテンペストと比較して軽く３倍。赤兎改は不明だが、最低でも倍と見るべきだろう。
また、英国軍の飛行艦は、５隻中３隻がメサイア輸送のみに主眼を置いた輸送艦であり、対艦戦闘能力はないと思っていい。対する中華帝国軍は逆にメサイア輸送能力はないが砲撃能力が高い。陸戦艇の大型臼砲も侮れない。ガルガンチュアについては言わずもがなだ」

逃げようかな。
美奈代はかなり本気でそう思った。

「布陣状況からして、飛行艦と陸戦艇、ガルガンチュアによる集中砲火の間にメサイア達が突撃。敵を殲滅する密集陣形突撃を実施するつもりだろう」

「どうするんです？」

「どうするって」
後藤は意地の悪い笑みを浮かべると言った。

「お前らのやりたいようにやれや」
「私達の目的は、後方攪乱に限定しますよ？」
「それでいいなら、そうだな」
「……」
じっと戦況モニター美奈代は息を吸い込むと、言った。
「全騎」
「ふざけないでよ！」
フィアの怒鳴り声が通信機一杯に響きわたる。
キーンッとなった耳を涼は思わず押さえてしまった。
「私が囮！？」
「しかたないだろう？」
美奈代は言った。
「殲龍（せんりゅう）の空中機動性は、“白雷（はくらい）”よりはるかに上だ。それを活かさなくていつ活かす？」
「やり方ってもんがあるでしょう！？」
「難しいことを注文している覚えはないわよ」
美奈代はフィアの抗議を無視した。
「敵メサイア部隊が突撃を開始と同時に、連中の上空に強行侵入。攪乱幕を撃ち込んでくれればいい。その隙に“鈴谷（すずや）”と狙撃隊に敵の頭数を減らさせる。
よーいドンで敵が突っ込んできて、そのまま英国軍に突撃させたら、あっさり全滅するのは目に見えている。帰る所がなくなるわよ

？殲龍（せんりゅう）とあなたにしか出来ないんだから」

「……うっ」

「敵の眼を英国軍に釘付けにしておきたいの。これでも頼りにしてるのよ？お願いだから」

「……」

「……」

「……わ、わかったわよ」

フィアはほんのり頬が赤くなったまま、言った。

「任されていいわよ！」

「お願い――――狙撃隊は稜線に狙撃ポイントを確保しろ。飛行艦の狙撃能力を侮るようなマネだけはしてくれるな？」

「了解」

「布陣急げ」

「はい、お姉さま。狙撃隊、展開開始します！芳、寧々（ねね）ちゃん。行きましょう」

涼は狙撃隊に号令をかけた。

「狙いは大物よ？」

「シップエースが出ることを期待して」

美奈代は独り言のように呟いた。

「全てを任せてくれたことはむしろありがたい。攻撃のタイミング

は」

美奈代が示したのは、陸戦艇のデータだ。

“玄武”級改“朱雀”級陸戦艇。

全長２３０メートルにわたる巨大な船体を、無骨な装甲と鉄柵状のスラット装甲で覆っている。

まるで鉄くずの塊のようにさえ見えてしまうが、後部甲板でメサイアの運用支援が可能になっている。

そして、せり出された艦首付近には大型の臼砲が設置されている辺りは、かつて美奈代が仕留めた“玄武”級陸戦艇と同じだ。

ただ違うのは、その臼砲が一回り大型になったこと。そして、玄武にはなかった４本の接地アームが取り付けられていることだ。

「臼砲を大型化したために、発射時の衝撃が強くなってアームを取り付けたんだろう。逆に言えば、こいつを地面に降ろした時がねらい目になる。そう思わないか？宗像」

宗像。

その名を出した後に、今、宗像がいないことに気づいた。

騎体が大破した彼女がここにいないのは当然だ。

ただ、いるのといないのではこうも違うかと思うと、美奈代は宗像の存在の大きさを痛感するしかなかった。

宗像の存在を頭から追い出すように、美奈代は首を左右に振った。

「……陸戦艇の停止と接地アーム作動を突撃の合図とする。

敵の攻撃が為される前に高速で突撃、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の一撃で焼き殺す。

突撃した騎はそのままガルガンチュア部隊に切り込め。

スピードがすべてだ。

全ての面で、微塵の躊躇も許されないぞ」

「こっちの部隊編成はどうするの？」

「山崎、柏、早瀬でペアを組め。すまないが、私の騎は換装時のトラブルでラックがイかれて広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）が使えない。広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の広範囲への使用は連係攻撃した方が効率的だ。三人の連係プレーを見せて欲しい。私と風間は単独――風間、やれるな？」

「はい」

通信モニターの向こうで祷子は頷いた。

「ご心配なく」

「後藤隊長？これでよろしいですか？」

「はいはい」

後藤は頷いた。

「好きにやって頂戴。英軍も同じ事言われているし」

「というか」

美奈代は意地の悪い笑みを浮かべた。

「連携を拒まれたんでしょう？」

「――そうとも言うさ」

美奈代の言葉を、後藤は認めた。

「会戦規模のメサイア戦だ。檜舞台は独占したいんだろうさ」

「私達の知ったことではありませんが」

美奈代の目の前で中華帝国軍が前進を開始した。

移動速度は、予想していたよりもはるかに早い。

すべてが時速８０キロ以上で移動している。

「狙撃隊、展開は？」

「終了！」

涼から返答が入る。

「現状、索敵レーダーや射撃レーザーの脅威反応なし。第一目標は敵旗艦で固定」

「よし……こちらの指示を待て」

美奈代が食い入るように見つめる戦況モニターの中で、陸戦艇部隊が停止した。

メサイア部隊は前進速度を落とし、突撃のタイミングをはかっている。

英国軍のテンペスト達も迎撃体勢を整える。

陸戦艇の後方にガルガンチュアが停止。

ガルガンチュアの主要武装はロケットとミサイルだと、それでわかった。

陸戦艇との距離は５キロ。

“白雷（はくらい）”のブースター全開で数十秒。

敵の迎撃は間に合わない。

まさか、メサイアに目もくれずに陸戦艇に斬り込む部隊がいるとは思いもしないだろう。

――よし！

「全騎、移動開始する。フィア、英国軍との連携、頼んだわよ？」

「――任されて」

「上空から飛来する物体多数！」

牧野中尉が叫ぶように告げた。

「ミサイル？……違う！上空で炸裂しました！」

「何！？」

「ＭＬＲＳ！弾種不明！」

●英国飛行艦隊旗艦“レナウン”艦橋

７つの海を制した旗、ユニオンジャックが翻る飛行艦“レナウン”の艦橋の戦況モニター上では、英国軍のメサイア達が整然と隊列を整えてゆく光景が見て取れる。

つまり、英国軍の戦闘準備は着実に整いつつあることになる。

目下、唯一の問題は、中華帝国軍の新鋭メサイアの性能がわからないことだけだ。

日本軍にも情報を照会したが、“情報なし”との返答を受けている。

しかし、未知の敵に対して、英国軍には警戒の素振りさえ見せない。

艦隊を、そしてその隷下のメサイア部隊を率いるバッテン提督は、未知のメサイアを前にしても警戒する心さえ持っていなかったのだから当然だ。

慢心。

普通なら、その一言でケリがつくだろう。

だが、バッテン提督はその自覚さえなかった。

彼にとって、英国軍とは常勝無敗の軍隊であり、対する中華帝国

軍は今や敗北が決まった弱卒の集団に過ぎないのだ。

「見てくれは、ロシア軍の……ローマイヤというのに似ているというのか？」

「左様。見てくれだけでしょう」

モニターに映し出された敵騎情報を前に、ホランド参謀長は、自慢の髭を指でしごきながら頷いた。

「ローマイヤは重装甲のハイパワーエンジン搭載型のウルトラヘビー級です。それは白人種の誇りとすべきもの。それを、例え真似事とはいえ、人以下の黄色猿（イエローモンキー）が作り上げたなど、神が許されるはずがありません」

「その通り」

バッテン提督は、参謀長の言葉に、満足そうに頷いた。

「我ら白人は、世界を支配するために神によって生み出された人種だ。全ての面において、有色人種（カラー）の下に立つことは許されない」

「しかり。見かけ倒しのポンコツをいくつ並べても、意味はありません。

ここで我々が、連中を本当の姿――つまり、スクラップにする。そして、陸軍の機甲部隊を満載した輸送飛行艦隊の到達を待つ。最後にユニオンジャックが盤石な我が新たなる領土の上に翻る」

「……日本軍にはバレていないんだな？」

「ロドネイクラスのステルス性能は、ジャップの技術力で読み解けるほど簡単ではありません」

ホランド参謀長の顔には自信以外の何も浮かんでいない。

「我が神聖なる大英帝国と同盟関係にあるなどという、思い上がった国には、さっさとご退場願いましょう」

「タイミングはいつにする？」

「この戦闘で全滅してくれるのがベストです。無論？連中は家電製品と車をメサイアに仕立てただけでしょうから、放っておいても全滅は避けられないでしょうが」

ホランド参謀長は言った。
「帰れ――――我々が、そう言えば引くしかないような連中ですからな」

●中華帝国軍飛行艦“大連”艦橋。
「戦闘態勢、完了です」
「……よし」
孔少将は苦々しげに顔をしかめた。
「ふざけたマネしやがって」
「あのまま、艦隊で制圧をかけていたら北米戦線は」
「言わないでくれ」
参謀の意見を、孔少将は遮った。
「俺も反省はしているんだ。落とし前を付ける意味でも、ここは勝つ」
布陣状況。
火力。
全ての面において、こっちの勝ちだ。
向こうで勝るものを無理矢理にでも挙げろというなら、絶望と敗北だけだろう。
孔少将には、それが勝ちというのかはわからない。
軍人として、自分に科せられた任務を淡々とこなそうと思うだけだ。
たとえ、それが負け戦だろうと、任務は遂行する。
敵だってそうだろう。
だから、そんな皮肉はさっさと忘れた。
「敵はまだ撃ってこないな？」
「はい」
間抜けな質問だと、孔少将自身が思った。
弾が飛んだ来てもわからないほど、自分は鈍いといってるような

ものだ。
幸い、参謀は律儀に答えてくれた。
「移動途中を狙ってくるとばかり思っていましたが」
「向こうの司令官に余程自信があるのか……それとも」
「それとも？」
「単なるバカか」
「そう願いますな」
参謀は手元のコンソールを操作して、データを開いた。
「テンペストの武装は実体系戦斧のみ。帝剣の装甲を割ることは出来ません」
「ああ」
孔少将の口元が少しだけゆるんだ。
「バカにはお灸が必要だな」
「では、手順通りに？」
「手順通りだ」

孔少将の言う“お灸”で一番最初に火を噴いたのは、ガルガンチュア部隊の搭載するＭＬＲＳ。
弾頭は攪乱幕。
狙いは、英国飛行艦隊が集結しているど真ん中と前方。
何故か迎撃されることさえなく、目標高度で炸裂した攪乱幕は、即座に英国艦隊を包み込んだ。
単なる攪乱幕ではない。
魔法処理された攪乱幕としては破格の性能を持った代物だ。
その威力が絶大だということは、日本軍がかつてのボルネオ島上陸作戦で実証済み。
レーダーや電波をすべて遮断する攪乱幕に襲われ、混乱に陥る英国艦隊を前に、

「――ドンピシャですな」
孔少将と参謀は苦笑するしかない。
陸戦艇もメサイア部隊の牽制のために砲撃を開始している。
圧倒的だ。
これで、勝てる。
「たった数発のミサイルで会戦にケリがつくとは」
「日本軍から弾頭を盗み出したスパイに、俺は勲章でも――」

「英国軍、動きます！」
ハッ。となった二人が見上げた戦況モニターの上で、いくつかの反応が動き出していた。
対峙する英中両軍の主力部隊ではない。
チベット離宮から少し離れた場所に固まっていた部隊。
後詰めだと思っていた部隊が一気に動いた。
そう思った、次の瞬間。
「攻撃――来ますっ！」
レーダー要員の悲鳴に近い声。
「な……？」
攪乱幕は？
レーダーも効かないのにどうやって照準を？
そんな自分への問いかけがいくつも脳裏に浮かんでくる中、孔少将は、自分達めがけて襲いかかってくる光の塊を――目の当たりにした。

「平野騎が旗艦を喰いました」
「よくやった！」
布陣する二つの勢力を横目で見ながら、美奈代達は大きく迂回するコースをとって敵陣の後ろを狙うために、超低空での飛行を続け

る。
激しく炎上しながら高度を落としていく中華帝国軍艦隊。
降下しながら、必死にＭＬ（マジックレーザー）やミサイルを打ち出しているが、命中を狙っているというより、これ以上の被弾をさけるための牽制にしか見えない。
ＭＬ（マジックレーザー）が主砲を粉砕、飛行艦に大きな爆発が走る。
平原を移動しているとはいえ、美奈代達は全く敵の攻撃を受けていない。
すでに、こちらの姿は飛行艦のレーダーで捉えられてるはずだが、ガルガンチュアや陸戦艇から砲火が飛んでこないことが、中華帝国軍側の混乱を暗示している。
敵を刺激しないためにも、ここで派手な行動はとれない。
多少、時間がかかっても、確実に敵の背後に回り込むことが大切だ。
それだけに、美奈代達はマジックレーダーの反応を回避する特殊偽装網をメサイアの頭から被るという、あまり見せられない格好で、低速移動している。
ブースター全開で移動したら、それだけで熱源反応を悟られて偽装も迂回も意味を無くしてしまう。
「鬼龍院中尉騎の攻撃により2隻戦闘不能。小清水少尉騎、1隻大破確実」
「飛行艦隊はこれで確実に――」
美奈代は言いかけて、あることに気づいた。
「フィアは？」
「――だから！」
英国軍メサイア隊指揮官、フォレスト中佐のレシーバーに入ってくるのは、せっぱ詰まった、それでいて場違いな、少女の声。
フィアの声だ。

肩書きが中佐で、日本側メサイア隊の隊長というフィアのハッタリをフォレスト中佐がまともに信じた結果、こうやって会話が成立している。

たった1騎でも部隊長を名乗るフィアの機転といえば機転の功績だ。

「新型兵器の攪乱幕を展開する。敵のメサイアの感覚器を一時的にダウンさせることが出来るから、それを狙って攻撃かけて！」

「下手なバクチは打たない主義なんだがな！」

フォレスト中佐は怒鳴った。

「出来るのか！？」

「日本製品、ナメんじゃないわよ！」

フィアの気迫に負けたつもりはないが、フォレスト中佐は怒鳴った。

「全騎火砲による攻撃準備――――おい、嬢ちゃん」

「何？」

「リコール起こしやがったら許さねえからな！？」

フォレスト中佐達の駆るメサイア――――テンペスト。

それは決して弱い騎体ではない。

欧州各国軍騎のスタンダード騎の一つであるロンゴミアントをベースに、アメリカ軍の誇るグレイファントムＭ６４を強く意識した設計で、エンジン出力と装甲厚はＭ６４に匹敵するものを得ているとされている。

重装甲に高出力エンジン。

それは魅力的ではないのか？

それでも、たとえば牧野中尉はテンペストを酷評している。

何故か？

テンペストにおける重装甲に高出力エンジンとは、装甲を厚くした結果、パワー不足に陥り、それを補うためにエンジン出力を拡張

させたことを示す言葉に過ぎない。
しかも、その装甲も、対メサイア戦闘を想定したものではない。
あくまで戦車や航空機からのミサイル攻撃に備えたものだ。
純粋に対メサイア戦に特化したが故に重装甲、高出力化したＭ６４とは根本から違う。
敵機甲部隊を撃破するために、Ｍ６４並の装甲が必要だから無理矢理取り付けたらこうなった。というのがテンペストだ。
ヒース首相でさえテンペストを「重メサイア“みたいなもの”」と評したのはこのためだ。
ここに派遣されてきたテンペスト隊も、付近の戦車や装甲車の駆逐を目的に派遣されてきた部隊であり、そんな部隊である以上、騎士も決して対メサイア戦が得意というわけではない。
フォレスト中佐以下、メサイア戦でスコアを持つ者が一人も存在しないことが、その実力の程を教えてくれている。
そんな彼等にとって、武装とは本質的に火砲になる。
フォレスト中佐の命令とはいえ、敵メサイアと対峙する騎士達がさっさと慣れない戦斧から火砲に乗り換えたこと自体がその証拠だ。
１２７ミリメサイア携行型大型速射砲。海軍艦艇が搭載していた速射砲を改造した代物が、帝剣達に向けられる。
ピピッ！
ＦＣＳが帝剣達をロックオンした音が響く。
戦車ならトリガーを引けば終わりだ。
だが――
「当たるか……？」
フォレスト中佐はトリガーを弄びながら、自分の判断が適切だったか、本気で迷っていた。
メサイアは砲弾を余裕で避けるほどの高い機動性を持つ。
砲撃無意味化は、メサイアを世界最強の兵器たらしめる要因の一つだ。

それを撃つ相手が同じメサイアでも、飛んでくるのが砲弾である以上、変わりはしない。
当たらなければ、何発、何万発撃った所で意味はない。
フォレスト中佐にとって、見たことのない中華帝国軍の新型メサイアは、見るからに装甲が分厚い。
重厚なフォルムは、見るだけで戦ってはいけない相手だと、対峙する者の本能に警告してくる。
「……成る程？」
フォレスト中佐はつい、言ってしまった。
「頼むぞ……お嬢ちゃん？」

警告が鳴りっぱなし。
眼下に敵メサイア部隊がズームアップしているように迫ってくる。
しかも、かなり恐るべきスピードで。
無論、移動しているのは、フィアの駆る殲龍（せんりゅう）の方だ。
“鳳龍改”用の追加ブースターを流用・装備する上に、自騎防御用の攪乱幕発生装置を取り付けているので、隠密行動をとらせたら右に出る騎はあまりない。
帝剣や赤兎改達からしても、唐突に上空に現れた敵騎に、あからさまに混乱しているのがわかる。
これが演習で、相手が美奈代だったらフィアは狂喜乱舞するだろう。
だが、これは実戦だ。
敵陣地上空にさしかかるより前に、ＭＬ（マジックレーザー）が飛んでくる。
レーダーやレーザーにも反応しない状況では、ＭＣ（メサイア・コントローラー）達も照準を合わせるのは至難の業だと言うことは知っている。
つまり、余程運が悪くなければ、致命的なダメージは喰らわないことになる。

とはいえ、眼が“システム”が展開するバリアの作動をつい、確認してしまう。
大丈夫。
フィアは自分に、何度も言い聞かせながら殲龍を駆る。
これで被害が出たら、悪いのは敵じゃない！
こうしろと命じた美奈代だ！
全ては美奈代が悪い！
そう心の中で断言したフィアは、搭載していた攪乱幕発生装置を作動させた。

天使が魔法の粉を撒いた。
フォレスト中佐には、殲龍の通過を、そのように見た。
赤い殲龍が通過した跡に、七色に光る粉――攪乱幕が散布される光景は、まさにそんな感じだった。
途端に、ＦＣＳやレーダー、様々な電子装備がブラックアウトしていく。
「こ、これがそうか！」
警報の中で、フォレスト中佐は思わず呻く。
攪乱幕が光る空間では、レーザー、レーダー共に使い物にならない。
メサイアでさえ、その動きをかなり封じられてしまうことは、美奈代達がかつて体験済みだ。
それまで、上空を通過する敵に狼狽していた敵は、完全に動きを止めている。
フォレスト中佐は、軍人として、目の前で生じた珍しい光景から、すぐに自分がなすべきことを把握した。
レシーバーめがけて彼は怒鳴った。
「全騎！撃てっ！」

帝剣部隊にとって、それは最悪の出来事だった。
砲弾を回避する機動力もなにも、騎体が動かなければどうしようもない。
「な、何が起きたんだ!?」
「た、隊長!?」
「MCは何をしている!?騎体の状況を知らせろ!」
騎士達は全く状況がわからない中、必死になって騎体を操縦しようとする。
だが、STRシステムは全く言うことをきかない。
モニターや計器類はすべてブラックアウト。
騎体間どころか、MC(メサイア・コントローラー)達との会話でさえ通じない。

こんな中で、敵の砲弾を避けろという方が無理だ。

最前列の帝剣達に待ち受けていたのは、ロンゴミアントによる無慈悲なまでの集中砲火。
これに攪乱幕の混乱から回復した飛行艦隊の砲撃が加わり、砲撃が終わった頃には、最前列と第二列の帝剣達は、為す術もなく砲火を叩き込まれる。

装甲にまともに直撃弾を受け、横転する敵騎。
フォレスト中佐が射撃中止命令を下した時には、既に状況は決したように彼には見えた。
倒れ伏す中華帝国軍メサイア達。
例え、実体弾とはいえ、撃破は確実だ。

そう思って、フォレスト中佐は気をよくした。

――中華帝国軍のメサイアなんて怖くねぇ！
――メサイアでも、十分に砲で仕留められるじゃないか！

勝った。

そう思った。

だから、倒れ伏すメサイア達を前に、彼は部下に命じた。

「部隊前進！」

砲を構えていた彼の部下達が、その命令の下、一斉に動き出した。

「ち、ちょっと！」

上空のフィアがあげた、驚きとも困惑ともとれる声が彼の耳にも届く。

「まだ敵は！」

「ご協力に感謝する。お嬢さん」

フォレスト中佐は、彼なりに紳士的に対応した。

「後は、俺達の仕事だ」

「何言ってるのよ！」

上空を通過した後、攪乱幕を再チャージしていたフィアは、目を見開いた。

「あんた、正気なの！？」

フィアは血相を変えて怒鳴るが、フォレスト中佐からの返答はない。

「バカっ！」

フィアは怒鳴った。

「どうしてトドメを指さないで――」

ピーッ！
ドンッ！
警報の直後、騎体が激しくシェイクされた。
「ぐぅっ！？」
ピーピーピー！！
アラームが鳴り響き、モニター上に警告が表示される。

右腕にＭＬ砲（マジックレーザー）直撃。
右腕大破。
右腕部喪失。
自動消火装置作動。
バランサー修正作動中。
攪乱幕システムに軽度障害発生。

「しくじった！」
バランスを失い書けたコントロールと格闘しつつ、フィアは英国軍を批判できないと、自分で自分の迂闊さを呪った。
「“鈴谷（すずや）”、聞こえますか？」
炎と煙を上げ始めた殲龍（せんりゅう）は、今や後方のガルガンチュア達のいい的だ。
「こちらツヴォルフ騎、騎体損傷のため後退します！」
“鈴谷（すずや）”の座標を確認し、騎体進路を“鈴谷（すずや）”へと固定したフィアは、遠ざかっていく英国軍部隊をちらと見た。

彼等の目の前で倒れていたはずの中華帝国軍騎が次々と起きあがり、混乱する英国軍騎に襲いかかろうとしていた。
対する英国軍は大混乱だ。
砲を乱射する者。
流れ弾が命中して粉々になる者。
戦斧をラックから取り外そうとする者。

そこに部隊としての統一された行動は見ることが出来ない。
「バカ……いわんこっちゃない」
砲を放り投げて逃げ出そうとした一騎が、背後から真っ二つにされる光景がイヤでも目に付いた。

敵は、攪乱幕で動けないから、仕方なく地面に伏せていただけ。
攪乱幕の中でも音と振動位は騎体越しに伝わるものだ。
考えてもわかりそうなことだ。
それが何故わからなかったんだ？

「私、知らないからね？」

騎体をかするＭＬ砲（マジックレーザー）への回避行動をとりつつ、“鈴谷（すずや）”を目指すことだけを考える。

フォレスト中佐からの救援要請は、聞かなかったことにした。

天裁破壊作戦　第十話

殲龍（せんりゅう）という、予期せぬ穴馬（ダークホース）による奇襲攻撃で出鼻をくじかれた中華帝国軍メサイア隊。

攪乱幕によって数騎が１２７ミリ砲の集中砲火で不本意にも撃破を余儀なくされたのは事実だ。

なら、彼等はこのまま黙って全滅したのか？

否。

絶対に否だ。

降り注ぐ砲撃の着弾を、耳と振動で感じ取った多くの騎士達は、自らの騎体を守るために、即差にコントロールの効かない騎体を苦心して大地に伏せさせた。

あるいは、着弾の衝撃を活かして、大地にわざと倒れた。

伏せろという指揮官の命令がなければ伏せることも出来ないほど、彼等は未熟ではない。

そして、騎体のコントロールが正常に戻るのを待つ。

第一陣と第二陣を撃破してくれた相手を倒すために、栄光の騎体を四つん這いに伏せさせる屈辱に耐えながら。

英国軍は、そこへ警戒もなしに踏み込んでいったのだ。

「くらぇぇぇっっっ！」

仲間を失った怒りと、味わわされた屈辱を、中華帝国軍のメサイア乗り達は爆発させた。

グォォォッッ！

ドンッ！

グシャッ！

戦闘機動に伴うエンジンの甲高い音。

駆動部が挙げる雄叫びにも似た響き。

そして、何かが潰れるような音。
その瞬間、コクピットは様々な音に満ちあふれた。
メインモニター上で、自分の駆る帝剣の持つ戦斧が、両手で掲げられた１２７ミリ砲ごと、テンペストの脳天をかち割り、胸部装甲の半ばで止まっていた。

テンペストは半ば万歳する姿勢で動きを止めている。
「この程度でぇ！」

グワッ！
ブゥンッ！
「済むと思うなぁぁぁぁっっ！」

騎士は、未だに立っているテンペストの胸部装甲を無造作に掴むと、近くに立つ別のテンペストめがけて、その無惨な残骸を片手で放り投げた。
自重数百トンの残骸が片手の一撃で宙を舞い、仲間のテンペストめがけて飛んでいく。
仲間の残骸をシールドで受け止め、動揺するテンペストに、獲物を狙っていた帝剣達の持つ槍やハルバードが襲いかかった。
四方から襲いかかった槍の穂先が、テンペストの装甲を容赦なく突き破る。
その衝撃でテンペストの脚が宙に浮いた。
各部のハッチやカバーが吹き飛び、白煙と火花、そして小さな爆発が生じる。
槍が乱暴に引き抜かれ、そのテンペストは力無く跪いて最後を迎えた。

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「ツヴォルフ騎、収容します」

「敵陣後方に向け、援護射撃！ＦＧＦ、全周囲展開即時待機、大丈夫だろうな！」

「はいっ！」

「砲術長より艦長、撃ち方続行！」

「やれっ！」

美夜は言い放った。

「友軍誤射でも、ごめんなさいしなくていい状況だ！」

●“鈴谷（すずや）”砲術管制指揮所

「了解！」

“鈴谷（すずや）”の砲術長、加藤志帆大尉が艦長との通信を終えた。

飛行艦隊内でも“非常識”とか、“嫁の暴走”と揶揄される超、重武装艦“鈴谷（すずや）”の火器全てを預かるのが、この砲術管制指揮所だ。

近衛の飛行艦は、メサイア・コントローラー（ＭＣ）が管理されているのと同様、シップ・コントローラー（ＳＣ）によって管理されている。

その能力は、命中精度、即応性、その他ほとんどの面においてＣＩＣの類で一般兵とコンピューターが管理するより圧倒的な性能を誇ることで知られている。

先の改装でようやく搭載が完了した最新鋭の砲撃管制システムは、未だに素材のにおいがとれない。

“鈴谷（すずや）”がこの戦争ですでに武勲艦として知られつつあっても、この船が建造から３０年近い老嬢であることに変わりはない。

そんな老朽艦に、こんな最新鋭の砲撃管制システムを搭載する理由は何か？

問題は、その武装だ。

武装　２８０ミリ相当ＭＬ（マジックレーザー）三連装砲×４
１５５ミリ相当ＭＬ（マジックレーザー）連装砲×４
２０ミリ相当ＭＬ（マジックレーザー）砲×１２
４０ミリ対空連装実弾砲×２０

このハリネズミに近い砲撃管制をこなすのに、どれ程苦労するか？
はっきり、どんな優秀なＳＣ（シップ・コントローラー）でも、脳みそが耐えられる代物ではない。
そこでとりつけられたのが、建造中の防空飛行艦“天城”級に開発されたこのシステム。
導入まで経緯は、美夜の家庭の事情もあるので削除する。

「さぁて♪」
ポキポキと指を鳴らした志帆が、シートを直した。
分厚い防弾装甲と防炎装置に守られた卵形の室内の中心部に志帆が座り、外向きに、他のＳＣ（シップ・コントローラー）達が並んでいる。
「２８０ミリのお味を」

ピピピッ！

ＳＣ（シップ・コントローラー）達によって次々と狙いが定められていく。

「ご堪能ください！」

「っ！？」
何の前触れもなく、散開して布陣していたテンペスト部隊に襲いかかろうと移動を開始していた帝剣部隊のど真ん中で大爆発が生じた。

騎体を爆風と衝撃波、そして熱波が容赦なく叩く。
土煙が立ち上る直前、前方を移動していた帝剣が空中に巻き上げられる光景を、騎士の一人は確かに見た。
艦砲射撃だと、彼は即座に理解した。
いくら重装甲を誇る帝剣でも、艦砲射撃の直撃に近い攻撃には弱いことを、彼はまざまざと見せつけられた。
爆発によって巻き上げられた土砂が煙となって彼の視界は覆い尽くされた。
「な、何てことだ！」
「大規模ＭＬ（マジックレーザー）攻撃飛来！」
狼狽する騎士に、ＭＣ（メサイア・コントローラー）は答えた。
「推定２５０ミリ以上、遠距離高々度から！」
「被害は！？」
「友軍にかなりの損害が生じた模様！部隊の３割が脱落！」
「狙えるか！？」
「可能ですが、有効な火器がありません！」
「くっ！」
「第二小隊全騎！」
部隊長から通信が入った。
「分かる限り、呉と黄がやられた！残存騎はそのまま敵陣へ突っ込むぞ！」
「黄が！？」
ＭＬ（マジックレーザー）着弾時特有のノイズが戦況モニターに影響を及ぼしている。
友軍内でも彼我の位置や反応がわからない。
隊長も、倒れた部下を構っている暇はない。
「乱戦になれば下手に撃ってこれない！死にたくなかったら突っ込め！」
土煙が薄らいだ向こうに、バズーカを構えるテンペストが３騎、見えた。

騎士は赤兎改を、テンペスト達へ向けて突撃させた。

●英国飛行艦隊旗艦“レナウン”艦橋

旗色が悪くなった英国軍飛行艦隊は山脈の向こうへと後退を始めていた。

「テンペスト部隊を集結させろ！」

バッテン提督は蒼白な顔で参謀長に怒鳴った。

「な、何という無様な体たらくだ！」

レナウン艦橋のメインモニター上では、次々とテンペストの反応が消えていく。

状況は乱戦。

強がればそう言えるだろう。

だが、長い軍歴を持つバッテン提督にはわかる。

この状況は、乱戦ではない。

こういうのは、掃討戦というのだ！

圧倒的な部隊が、敵残存部隊を根こそぎ刈り取る掃討戦。

掃討すべき立場にある英国軍が掃討を受けている。

まがい物のはずの中華帝国軍メサイアが、圧倒的な戦力としてテンペスト達を喰っている。

レナウンから放たれたスカウトカメラからの映像は、テンペスト達が徹底的な劣勢に立たされていることを、嫌でも教えてくれる。

横薙ぎの戦棍（せんこん）の一撃をまともにくらったテンペストが吹っ飛ばされる光景を前に、司令部からは悲鳴に近いどよめきが上がる。

「部隊を集結させて、防御態勢を整えさせろ！」

バンッ！と、バッテン提督はアームレストを何度も叩く。

「陸戦部隊が近いんだ！ここで敗北したら、私の履歴に傷がつくだろうが！」

「提督――ロンドンからです」

通信兵が近づくなり、通信文の挟まれたバインダーを提督に手渡した。

「ロンドンから？」

怪訝そうな顔をした提督は、通信兵から受け取った通信文を一読するなり、顔色を変えた。

「……参謀長」

視線を通信文から外し、まっすぐに艦橋の外に視線を固定する。

提督から通信文を受け取った参謀長の顔も、すぐに青く、そして呆然となった。

「ろ、ロンドンは」

提督に通信文を返そうとしたが、提督は両手を祈るように組んでいる。

参謀長は通信文を脇に挟んだ。

「この作戦を、どのように評価したというのでしょうか」

「しくじった」

提督は視線を外に向けたまま、言った。

「しくじったから、さっさと引き揚げてこい……そういうことではないか？」

「騎士達は、まだ戦ってるのです！」

参謀長は激したように怒鳴った。

「提督には見えないのですか！？騎士達が今、どれ程の劣勢の中、どれ程見事な戦いをしているのか！」

「……参謀長。私の眉の下にあるのはチョコレートの包み紙だとでもいうのか？」

「……」

「我々は意地で戦っているのではない。命令によって戦っている。

天裁システム要員の脱出は済んでいたな？」
「……はい」
参謀長は頷いた。
「すでに輸送艦“ローバー”に待避済み……しかし」
「原因はともかく」
提督はやっと参謀長に首を向けた。
「――命令には従う。それが軍人だ。違うかね？参謀長」
「……はっ」
「全メサイア部隊に撤退命令を出せ。艦隊全艦、敵メサイア部隊に向け、牽制の艦砲射撃――届く砲は全て動員しろ」
「……はっ」
「ステファニー君」
「……はい」
それまで、参謀達の中で最も後方、目立たない場所に控えていた女性士官が一歩前へ出た。
すらりとしたボディラインに、腰まで伸ばしたブロンドを大きなリボンで束ねている。
緑がかった黒い瞳が、ややきつい印象を与える。
階級は少佐。
その階級の割には、年の頃は恐ろしく若い。
「天裁システムは……この場合」
「地下に大型発電所並みの魔晶石ジェネレーターが確認されています」
ステファニー少佐は感情のない声で事務的に言った。
「安易な自爆は、この魔晶石にどのような影響を及ぼすか不明」
「自爆？危険？」
「然り」ステファニー少佐は頷いた。
「規模からして、魔晶石の暴走としては歴史的な被害をもたらすでしょう。この周辺の地形が変わり、かのヨルダンを遙に超える魔力危険地帯が生じるはずです」

「その責任は、我々のものか？」
「防衛に失敗したことが直接的責任であるというならば、その通りでしょう」
「……神よ」
「そのため、破壊はコントロール室周辺及び、発射装置に限定。魔晶石とのバイパスは遮断を確認しています」
「それを早く言ってくれ」
「この場合、放射線で汚染される程度です。コントロール室と発射装置の予備を中華帝国軍が持ち込んでも、システムを継続使用することは絶対に避けねばなりません」
「……待ってくれ」
バッテン提督は手を軽くあげた。
「……」
ステファニー少佐は、律儀に止めた。
「君は」
バッテン提督の声は心なしか、何か信じられないことを聞いた。といわんばかりだった。
「技術者集団と一緒に……ここに、何を、も、持ち込んだのかね」
「提督は」
ステファニー少佐は、不思議そうに首を傾げた。
「我が国が、反応弾保有国であることをお忘れですか？」
「……」
バッテン提督は懐からロザリオを取り出すと、小さく祈りを捧げた後、言った。
「敵がシステムを奪還しても使用不能にする手段とは」
「……」
「……爆発による放射能汚染のことか」
「はい」
「起爆は誰がする？」
ステファニー少佐は無言でバッテン提督を指さした。

「お任せします。そういう規則ですから」
バッテン提督が何かを言い返そうとした時だ。
レーダー要員が声を挙げた。
「レーダーに新たな反応！」
「何？」
「敵部隊の一部が移動していました！」
「何！？どこだ！」
提督が思わずシートから身を乗り出した。
「１１時から１０時の方角へ向け、メサイア１０が移動しつつ散開開始。本艦隊後方を包囲する模様」
「何だと！？」

バッ！
土色に塗装されたシートがはぎ取られ、移動によって生じた風に吹き飛ばされていく。
「まさかこんなに！」
ホバー移動を続ける赤兎改を率いる習大尉は後方に流れていくシートを見送った。
マジックレーダー類の反応を消す特殊な素材が塗布された、中華帝国軍にとって最も有効な“透明マント”。
普段は使い物にならないと勝手に判断していた代物だったが、今では開発者に勲章でも授けてやりたい位の心境だった。
視線を戻すと、英国軍の飛行艦達の尻が丸見えだ。
「よしっ！」
習は、自騎の肩にマウントしたバズーカを構え直しつつ、部隊に命じた。
「全騎！各個に撃て！手柄は立て放題だぞ！」

●英国飛行艦隊旗艦“レナウン”艦橋

ズズンッ！

突如、後方から響き渡った音に、提督以下、艦橋にいた全ての将校が首をすくめた。

「被害知らせ！」

艦長が艦内通信に怒鳴る。

「どこだ！どこがやられた！」

「艦隊最後尾、アバークロンビーに直撃！」

艦隊の状況をモニターしていた参謀が悲鳴を上げた。

「被害甚大！」

「テラーもやられました！軸足低下！」

「両艦とも、ＦＧＦ全周囲展開！」

「本艦もだ！」

飛行艦を浮かせている重力力場は、その特性から物理的攻撃を遮断するバリアの機能も併せ持つ。

力場で艦体全体を包み込む全周囲展開は、人類がとれる最高の対物バリア展開手段である。

「ＦＧＦ、全周囲展開開始っ！」

ジリリリリッ！

警告のベルが鳴り響き、一瞬だけ視界が歪む。

ズズズンッ！

連続した爆発が艦を揺るがし、提督がシートから投げ出されたのは、まさにそのタイミングだ。

「提督！」
とっさに顔を左腕でかばったものの、あちこちに体を強打したバッテン提督は、参謀達によって抱き起こされた。
「ご無事で！？」
「も……問題ない」
強がってみせたものの、立ち上がるだけで体に痛みが走る。
「被害は？」
参謀から制帽を渡され、深くかぶり直す。
「幸い、ＦＧＦで防御出来ました。本艦の被害は皆無。しかし」
「……メサイア隊の収容は不可能……か」
「それだけではありません。情報部からです。チベット方面の監視衛星によると、中華帝国軍の航空隊が出撃体勢を整えつつあるとのことです」
「……」
「このままでは、メサイアの大半を喪失した挙げ句、脱出もままならないという、最悪のシナリオを演じるしかなくなります」
「悲劇物は嫌いなんだよ」
バッテン提督はシートに座り直した。
「私は喜劇の方が好きだ」
「自分もです」参謀長は頷いた。
「インド方面への脱出は、自殺を意味します。そうである以上」
「後退するなという、神のご意志だと受け取ろう。神はいつだって、我々の敵だ」
提督は深く息を吸い込むと、命令を発した。
「全艦後退停止、機関戦闘速度へ。敵陣上空を突破する。メサイア隊には死力を尽くし、敵陣を突破、艦隊の露払いを果たすように命じたまえ」
「……了解」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「敵、トップアタックタイプの新型ミサイルを使用した模様」

「下から狙っても、力場に粉砕されるだけ」

美夜は言った。

「よく考えたわね……敵ながら」

戦況を見ても、これが自分達の負け戦だとわかる。

敵の戦闘力に圧倒されている。

メサイアの数が一方的に減っていく。

これで勝てたら嘘だ。

敵の飛行艦隊を壊滅させた功績で、自分達を欺くしかない。

そう、自分に言い聞かせようとした美夜に、レーダー監視員が報告した。

「英国艦隊、後退を停止」

「停止！？」

美夜はギョッとなった。

「何故！？」

「待って下さい――前進！英国艦隊、微速前進開始！」

「ここで」

後藤はくわえタバコのまま、平然と言った。

「全周囲展開していたら、メサイアを収容出来ない。だから、全周囲展開を解除できる場所へ移動する。それが前だってことでしょう？」

「後退して――」

言いかけて、美夜はその無意味さを、艦長として悟った。

仮に後退を強行したとしよう。

メサイア隊は敵の包囲網と、山脈という大きな阻害要因にぶつかることになる。

これだけで、かなりの数が脱落を余儀なくされるだろう。

ならば、敵陣を突破した先の方がまだ――。

「で？」

後藤は訊ねた。
「“鈴谷（すずや）”はこのまま後退するんで？」
「えっ？」
美夜は、ハッとなって辺りを見回した。
英国艦隊が前進を始めているのに、“鈴谷（すずや）”は後退したまま。
このままでは英国艦隊から取り残される。
「機関停止！前進準備、急げ！」
そう叫ぶ美夜の顔は、少しばかり赤面していた。

――まず、将を潰す。
それが美奈代の作戦の根幹だった。
敵の司令官は飛行艦に座乗しているはず。
ならば、飛行艦を叩く。

発想は恐ろしく単純だが、しかし、効果は絶大だった。
中華帝国軍の指揮系統は、一瞬でマヒした。
無論、彼等とて最悪の事態想定していた。
飛行艦に座乗した司令部がその機能を停止した場合、即座に陸戦艇旗艦に座乗した陸戦艇部隊司令部が、その権能を引き継ぐことは事前に打ち合わされていたことだ。
だが、現実において、こうした事態が生じた場合、即座に。という訳にはいかない。
陸戦艇部隊からすれば、飛行艦隊司令部が本当に壊滅したのか、一時的な混乱にすぎないのか、判断が付かない。
司令部の安否の確認から始まって、飛行艦から直前まで発せられていた命令内容の確認等、陸戦艇の司令部は普通にとるべき手順に、即座に忙殺された。

何より、こういう事態において司令部権限が委譲されることは、決して歓迎すべき事ではない。

誰だって、厄介事を背負い込むことは御免被りたいのだ。

「“大連”、被害甚大！」

双眼鏡を構え、艦橋横の見張り台に立つ見張り兵が怒鳴る。

飛行艦隊の旗艦“大連”は、艦首側に備え付けられた３つの砲塔が全て吹き飛ばされ、黒煙を上げている。

高度は下げているが、いまだ沈没とまではいかないようだ。

「……バカが」

陸戦艇“船山”艇長は、双眼鏡を構え、炎上する“大連”を見た。

“大連”の艦砲ならば５０キロ遠方からでも狙撃できる。

なぜ、こんな近距離に敵がいる所で、あのデカブツが浮かべば的になるしかない程度のことが理解できないのだ。

「通信、司令部は死んだのか！？」

「……“大連”より通信！」ヘッドフォンを耳に押しつけ、通信装置と格闘していた若い通信兵が歓声を上げた。

「通信が回復！」

「バカがっ！」

艇長は吐き捨てるようにそう怒鳴った。

自分が何故怒鳴られたか分からない通信兵は、きょとんとして艇長の指示を待つ。

「通信、ボッとしているな！あの死に損ない共から、何か通信は入っているのか！？」

「は、はいっ！」

通信兵は再び通信装置にかじりつき、答えた。

「司令部機能健在、陸戦艇部隊は即座に艦砲射撃をもって敵部隊を攻撃せよ」

「……バカか」

艇長が呆れるのも無理はない。
陸戦艇に精密射撃能力はない。
ガルガンチュア部隊もそうだ。
共に、火砲によって面で叩くしかないのだ。
その部隊に、敵味方入り乱れて乱戦に陥っている所へ攻撃を仕掛けろというのか？
艇長は、司令官席で腕組みをしたままの陸戦艇部隊司令官、湯少将に訊ねた。
「司令、どうされます？」
「……」
すでに退役間近の湯少将は、短く刈り込んだごま塩頭を、軽く横に振った。
「全艦、緊急停止、部隊急速後退。ガルガンチュア達も下げさせろ」
「よろしいので？」
「元来」
湯少将は苦笑いしながら言った。
「我々は宮殿騎士団から給料をもらうわけではない。それに」
「それに？」
湯少将の腹の内を知る艇長はニヤリと口元を歪めた。
「……通信」
湯少将は首を回して通信兵に言った。
「回線を切り替えろ。北京からの指示を確認するんだ。それから、“大連”に言え。後退の理由は、側面から接近中のメサイア部隊を警戒してのものだとな」

陸戦艇部隊のあたりで盛大な土煙があがった。
ホバー移動で地上を滑るように移動していた陸戦艇が前のめりに

なったのが美奈代の目にもはっきりと見えた。
間近にいたら、派手な音が聞こえたろう。
「ここで停止？」
美奈代は、陸戦艇が停止した理由がわからなかった。
砲撃は可能だが、陸戦艇のとる楔形陣形は、砲撃の面からすれば有効な陣形ではない。
むしろ、部隊防衛のための陣形だ。
その陣形のまま、停止した理由が美奈代にはわからない。
「こちらを見つけた？」
「もう見つかってますよ」
牧野中尉は言った。
「連中の顔にだって、眼はあるんですから」
「……余計な」
随分、理不尽なことを言って舌打ちした美奈代は、部隊に命じた。
「全騎、砲撃警戒――」
「陸戦艇、後退開始――急速後退をかけた模様」
停止したはずの陸戦艇が、今度はバックで下がっていく。
「ガルガンチュア部隊の反応も同様……すごいスピードで後退を開始しています」
「メサイア部隊の動きは？」
「現状において動きなし……一体？」
美奈代は戦況モニターを見た。
被害を被った飛行艦が後退するのはわかる。
だが、砲撃支援専門の陸戦艇やガルガンチュアがここで後退する理由がわからない。
砲撃支援を行うため？
そんな馬鹿な。
それならとっくの昔に停止して砲撃準備を開始しているはず。
メサイア部隊と間合いをとっている？
何故？

美奈代は周囲を見回し、適当な窪地をみつけた。
「全騎、あの窪地に一時潜むぞ。続け。牧野中尉」
「はい？」
“鈴谷（すずや）”の後藤隊長と回線開けますか？」

「陸戦艇部隊は何をしているか！」
飛行艦“大連”艦橋では、孔少将が怒鳴り声を挙げていた。
艦橋から見ても、“大連”は重大な損傷を受けていた。
芳騎から放たれたＨＭＣは、“大連”の右舷を深くえぐり取った。
３つある艦首側砲塔は飴細工のようにねじ曲がり、艦の右舷側構造物は攻撃によってえぐり取られたようになって使い物にならない。
着弾時の衝撃で吹き飛ばされ、額を割って気絶した孔少将が復活したのは、衛生兵が艦橋にたどり着いてからだった。
シートから投げ出され、脳しんとうを起こしているというのが衛生兵の見立てだった。
すでに外ではメサイア部隊は乱戦に突入する中、陸戦艇部隊やガルガンチュア部隊は後退を開始している。
「何故、ここで下がるというのか！」
「落ち着いてください！傷が開きます！」
衛生兵によって担架に押さえつけられた孔少将は、天井を眺めながら怒鳴る。
「止血だけでいい！起こせ！」
乱暴に担架から起きあがった孔少将は、その途端に頭に走った激痛に顔を歪めた。
はっきりしない眼で見上げたメインスクリーンに映し出されている部隊展開状況。

砲撃指示を出したポイントから陸戦艇部隊はすでに大きく後退している。
「誰が後退命令を出した!?陸戦艇部隊司令部と通信を開け!」
「ダメです」
通信兵が事務的に答えた。
「通信、開きません」
「呼び続けろ!」
脳しんとうの影響がまだ残っている。
よろめく脚で何とか立ち上がった孔少将は、自分のシートに座り、大きく息を吸い込んだ。
「状況は」
龍大佐が言った。
「我が軍有利という所ですな。赤兎改第二部隊が英国艦隊の後方から追い落としにかかっています。帝剣部隊は英国軍を駆逐にかかってますし」
大佐は、醒めたような眼で孔少将を眺め、そして言った。
「施設……いや、離宮の奪還は目前ですな」
「姫君がいないとなれば、せめてここで施設だけでも奪還しなければ、メンツがたたない」
「……しかり」
「だからこそ、陸戦艇部隊は何をしているのだ!大型臼砲はお飾りか!?」
「乱戦の中に撃ち込むつもりですか?友軍を巻き込みますよ?」
「違う!」
孔少将が睨み付け、そして震える手で指さすのは、左舷。
英国艦隊が敵陣突破を成し遂げつつあった。
「せめてあいつらだけでも仕留めたいだけだ!」
「我々の目的は、施設の制圧でしょう?それに、英国軍はすでに撤退を開始している。無駄な戦いはするべきではありませんよ。帝剣部隊が相手にしている敵メサイアも、戦場を離脱するための血路を

開くためだけに戦っている。帝剣部隊もそろそろ、それに気づいている様子ですが？」
「我らの戦いを無駄とは何だ！」
孔少将は顔を真っ赤にしてシートを蹴った。
「我が宮廷騎士団を侮辱するつもりか！？」
「……」
龍大佐は無言で首を左右に振ると、ゆったりとした態度で胸の辺りで手を合わせた。
「――陸戦艇部隊の後退は、接近しつつある敵メサイア部隊と、我が軍の包囲網を突破して退却中の敵メサイア部隊、双方に挟撃されるおそれがあるためです。――衛生兵、少将閣下は少し混乱されておいでだ。安静剤を投与して司令室へお連れしろ」
「貴様！」
「……全く」
龍大佐は艦長席に威厳ある態度で座ったまま、足を組んだ。
「あなたが艦隊の運用をまるで知らないことは、今までの稚拙な指揮で思い知らされました。私の艦をこうもしてくれるとは、いい迷惑だ」
「なっ！？」
「一体、艦隊をメサイアのすぐ間近に展開するとか、敵飛行艦を前にバリアも展開しないとか、一体、どういう経験というか教育を受ければ、ここまでヒドイ発案が出来るんだ――おや？」
龍大佐は、思い出したように言った。
「そういえば――西姫様から皇位を受け継いだ載賢様が帝位に就かれることが決定しましたな。西姫様の名で、全軍に新皇帝陛下への忠誠を誓うようにとの布告が先程」
「バカな！」
孔少将は目を見開いた。
「西姫様は今、イギリスだぞ！？」
「あれは偽物だそうで」

「嘘だ！」
「北京はそう言っています」
ギロリ。と、龍大佐が鋭い眼光で孔少将を睨み付けた。
「北京を疑うのですか？」
「考えて見ろ大佐」
孔少将はそんな大佐の反応に全く気づかない。
大佐を諭すような口調で言った。
「どうやって西姫を載賢殿下は見つけだしたのだ？摂政殿下達が仰っていたチベット離宮の姫君とは誰のことだ？つまり」
「我々の知ったことではありません」
龍大佐は鬱陶しいと言わんばかりに顔をしかめた。
「政治的なことは政治に関する連中がやればいい。我々は、彼等から給料をもらっている身です。余計なことは考える必要ないでしょう。陸戦艇部隊は、接近しつつある敵メサイア部隊に備え、メサイア部隊の派遣を要請していますが？」
「……赤兎改部隊を回せ。陸戦艇部隊は後退を許可する」
「本来なら」
龍大佐は言った。
「蘭州軍区から引っ張ってきたとはいえ、あの連中があなたの指揮に従う理由はないのですがね」
「私は皇帝陛下の代理たる、宮廷騎士団の司令部に属する身だぞ！」
「ところが」
龍大佐は、待ってましたといわんばかりに楽しげに肩をすくめた。
「新たな皇帝陛下から、直々に命令が下りましてね」
「新たな……皇帝？」
孔少将は、それが誰だかすぐに見当を付けた。
あの載賢だ。
「英国部隊より、チベット離宮及び周辺施設を奪還せよ」
「なら、失敗したな」
孔少将は、バカにしたように笑った。

「最初から、私にそう言っておけばよかったものを」
「最初、あなたも施設の奪還を目指すというから、湯少将も私も黙って従ったのです」
「……」
「ところが、メサイアが出て来るなり、そっち相手にばかり神経を使って、小手先というか、稚拙なことするからこの有様だ」
龍大佐は言った。
「戦況はリアルタイムで北京に送られています。北京は、あなたを許さないそうです」
「私の責任ではない！」
「……では、誰の？」
「第一、そんなは――――そんなのは、私を排除したいがための出来レースだろう！？載賢にとって、私が邪魔だから、最初からそう決まっていたんだろう！ふざけるな！わ、私の責任じゃない！こ、これは英国軍の責任だ！そうだろう！？私はメサイアを撃破して――――」
必死に下を回そうとする孔少将の視界の中で、龍大佐が小さく頷いた。

ダンッ！

艦内に一発の銃声が響き渡ったのは、その直後だ。
孔少将は、脳漿や血と共に、目玉までが頭から吹き飛ばされ、肉片と共にあたりに散らばった。
彼にとって幸いだったのは、誰が自分を殺したのかを知らずに済んだことだろう。
彼を殺したのは、彼が最も信頼していた彼の副官、そして、彼の愛人とされる女だった。
「よくやってくれた。毛大尉……といいたいが」
毛中佐と呼ばれた妙齢の女性は、未だ煙を上げる銃をホルスター

にしまう手を止めた。
軍服がもったいないほどの艶のある顔立ちは、男なら誰でも性欲をそそられるはずだ。
龍大佐は、床や天井に散らばった血痕を前にため息をついた。
「殺すなら、もう少しソフトにやってくれないか」
「この石頭でしたから」
毛大尉は笑ってホルスターを閉じた。
「徹甲弾位なきゃ、通らないと思いました」
「それはダムダム弾というのだよ……では、大尉」
毛大尉の背後。
宮廷騎士団のスタッフ達は、一様に両手を挙げている。
いつの間にか入り込んでいた兵士達の握る自動小銃の銃口が、その背中に押しつけられているのだ。
「帝剣部隊に戦闘停止命令を出してもらおうか？」
毛大尉はにこやかに微笑むと、
「はい。大佐」
そう、答えた。

「戦闘停止！？」
帝剣部隊を率いる王少佐は、司令部命令がにわかには信じられなかった。
部隊は勝っている。
にもかかわらず、どうしてここで？
「どういうことだ、司令部！？」
司令部に問いかけたところで返答はない。
戦闘を停止しろという命令だけが繰り返されるだけだ。
「くそっ！」
満身創痍になりながらもそれぞれに退路を見つけだしたテンペス

ト達が逃げ出し続けている。
それを駆逐しなければ、絶対無敵の宮廷騎士団の面子にかかわる。
何より、全滅させてはいけないという理由はないはずだ。
司令部の命令を一時的に無視して、敵を殲滅後、戦闘を停止するのが筋道だろう?
戦果が全てに優先する。
それは、王少佐の甘えでもあった。
だが、王少佐は、それに気づくこともなく部隊にむけて怒鳴った。
「司令部の命令は無視しろ!敵を刈り取れ!」

「……申し訳ありません」
毛大尉は、形だけ頭を下げた。
反省なんてしていないことは、その態度から明らかだ。
「まぁ、いいさ」
龍大佐は喉の奥で苦笑しながら言った。
「宮廷騎士団は、この後、蘭州軍区の指揮下に入る予定だったのだろう?」
「はい」
毛大尉は素直に頷いた。
「その通りです」
「宮廷騎士団が、北京、そして紫禁城に従わないとは、どういう冗談だ」
「……」
「従わなければ殺すまでだが……」
毛大尉は無言で頷いた。
「孔に色仕掛けで取り入って情報を流し続けてくれた、諜報部の君には深く感謝している」
再び、毛大尉は頷いた。

そして、言った。
「個人的な見返りをお約束いただいていましたね？」
「ああ」
龍大佐は、にこりと頷いて答えた。
「受け取ってくれ」

艦内に、連続した銃声が響き渡った。

「――お前さんにしちゃ、読みを外したな」
通信モニターの向こうで、後藤は頷いて言った。
「敵がメサイアを囮にしているっていうのは、ちょっと違うと思うぜ？」
「……私にとっては幸いです。ただ、敵の陸戦艇部隊が、ここで後退する理由がどうしてもひっかかるのですが」
「メサイア部隊が足止めしている間に、陸戦艇部隊とガルガンチュア部隊を射程限界まで下げて、砲撃着弾タイミングギリギリでメサイア部隊を後退させる……」
後藤はため息をついた。
「お前、本当に恐ろしい作戦考えたね。やられたいの？」
「いえ。しかし」
美奈代は困惑気味に答えた。
「他に理由が考えつかないのです」
「泉」
後藤は諭すように言った。
「陸戦艇に拘りすぎるな。連中はメサイアを相手にすればゴミのよ

うな連中だ。大局でモノを見ろ。お前にとって大切なのは？」
「勝利」
「なら、それにどう貢献する？」
「……メサイアの撃破」
「英国軍は現在、負けっぱなしでそっちに逃げつつある。後方に待機していた赤兎改部隊が追撃中。英国軍がメサイア部隊を収容するのはかなり後だ。それまではお前達しかいない」
「陸戦艇は考えなくて良い。そういうことですね？」
「メサイアっていう邪魔者を掃除した後、お腹減っているなら食べなさい」
「――了解」
美奈代は言った。
「全騎、作戦を変更する。陸戦艇部隊強襲を中止。英国軍の撤退を支援する。涼、現在位置知らせて」
「ちょっと！」
割り込んできたのはフィアだ。
「わ、私は！？」
「あっ……御免、忘れてたわ」
「――っ！」
「損傷してるんでしょう？そんな騎で出てこられても迷惑なだけ。わかって」
「迷惑って――ものの言い方っての知らないの？」
「ごめん。言い直すわ」
美奈代は言った。
「私の部隊では、足手まといはぶっ殺す決まりなの」
「聞いたことない！」
「今、対象者をフィア限定で決めたことだから」
「――っ！」
「いいわね？出てきたらぶっ殺すわよ？」

“大連”艦橋から毛大尉達の死体が運び出され、水兵達が血の海の掃除を始めている。
まさか。
そう言わんばかりに見開かれた眼のまま、血の海に沈んだ毛大尉の死に顔は、しばらく忘れられそうにない。
「スパイが信じられていると思ったのか？メス狐め――唐副長」
龍大佐は、副官に訊ねた。
「北京からの指示は？」
「部隊の出撃体勢は完了。こちらの準備完了を待つのみと」
「そうか……」
龍大佐は言った。
「全艦、前進。全艦の門（ゲート）を作動させろ」

「何を考えている！」
帝剣部隊を率いる王少佐は、頭上で起きた事態に目を見開いた。
飛行艦が頭上に展開している。
いくら、敵飛行艦隊が逃げたからといって、艦隊がメサイア戦の上空に来るなんて、聞いたことがない。
「一体？」
王少佐は、思わず敵にとどめを刺すことを忘れて上空を眺めてしまった。
「少佐」
MC（メサイア・コントローラー）から報告が入った。
「飛行艦、全艦の後部甲板に重力異常発生」
「重力異常？」
「詳細不明。見たことのない反応、データライブラリーなし」

「……なんだ？」
後部甲板。
その言葉に、王少佐はひっかかるものがあった。
チベットを離れた当たりで、補給艦が全ての艦の後部甲板に得体の知れない枠のようなものを据え付ける作業を開始。
作業そのものは2時間ほどで終わったが、それ以降、メサイアの甲板着艦が禁止された。
あの枠が何か関係があるのか？

後部甲板に突然発生した漆黒の闇を前にしては、さすがに龍大佐も顔を引きつらせるしかない。
「パワー、臨界」
見慣れない機器を相手にする技官が報告する。
「空間接続完了。通行可能です」
「まかせる」
龍大佐にはそれしか言えなかった。
何が出てくるのかさえ、彼は知らなかったのだ。
彼が知っていたのは、北京からの命令。
敵部隊上空で装置を作動させろ。
それだけだ。
何が通行してくるのか。
そんなことを、一介の艦長である彼が知るはずもないのだ。

「了解――物体移動を確認――来ます！」

グォォォッッ！
彼の目の前で、エンジン音を響かせながら、巨大な物体が漆黒の闇を突き抜けていったのは、次の瞬間だった。

天裁破壊作戦　第十一話

「敵、飛行艦隊にメサイア出現！」
“鈴谷（すずや）”のマジックレーダーは、その反応を即座に捉えた。
「メサイア！？」
ギョッとなった美夜と後藤が思わず顔を見合ってしまった。
「まだ、飛行艦内に蓄えている余力があったのか！？」

「い、いえ！」
マジックレーダー担当士官は、困惑した様子で言った。
「それが、正確には、各飛行艦の　後部甲板、重力異常フィールドの中からです」

飛行艦から続々と飛び降りてくる人型の物体。
メサイア。
チベットの澄んだ空気の中、強い陽光を反射する騎体が、自分達めがけて降下してくる。

「友軍か？」

「飛鼠（ひそ）です」
MC（メサイア・コントローラー）は答えた。
「数２５……３２、増大中」

「飛鼠（ひそ）だと？」

王少佐は苦笑した。
飛鼠。
それは中華帝国軍の中でもメサイアと認められないような、低性能な騎体であり、量産性と簡易操作性能以外に見るべき所のない代物に過ぎない。
つまり――駄作だ。
「舐められたものだな。英国軍も」

「ち、違います」
MCの声は引きつっている。
「ライブラリーで識別可能。降下中の騎は全てタイプD」

「タイプD？」
王少佐は、何のことだかわからず、すぐ近くに着地した飛鼠達を珍しげに眺めるだけだ。
ブースターを吹かし、着地と同時に両膝のダンパーを使ってショックを殺した飛鼠が立ち上がる。
大きな瓶を被ったような大きな頭は、首といえる部分がない。
それは、写真でも見たことのない、初めて見るタイプだった。
「新型か？」

飛鼠がこちらを見つけたらしい。
背中にマウントしていた巨大な鎌をゆっくりと構える。
大鎌の刃に黄色い光が生まれた。

「……おいおい」
王少佐は、なぜか、その飛鼠のターゲットが自分だと、本能的にそう思った。
そう、思わせる何かが、その飛鼠からは放たれている。
「冗談だろう？俺は……味方じゃ……」

「すぐに後退してください！」
MC（メサイア・コントローラー）は怒鳴った。
「あれは――――ジェノサイドタイプです！」

ザンッ！
複合装甲に守られた頑強な帝剣の首が、肩部装甲と共に宙を舞った。
「み、味方なのか？」

「馬鹿なことを」
美奈代の独り言に、牧野中尉は突っ込んだ。
「単に、仲間割れしているみたいですね」

「仲間割れで殺し合いですか？」

「大尉とフィア中佐みたいな、すてきな関係ですね」

「……どういう意味です」

「半分冗談はともかく」
牧野中尉は真顔で言った。
「撤退支援はいいですけど、“あれ”が近づいてきたら逃げてください」

「えっ？」
美奈代は思わず怪訝そうな顔になった。
「どういう――――ことです？」
ガンッ！

指導バーが飛び出してきて、後頭部に激痛が走る。瞼の裏に星が飛んだ。
「痛ぁっ！」
「どういう記憶構造してるんですか！」
「な……何ですか？」
「あの頭！見覚えないんですか！？ないって言ったら、そのトリ頭潰して、つみれ鍋にして、今晩食べちゃいますからね！」
何だか恐ろしい牧野中尉のセリフに、美奈代はズームアップで捉えた新たな敵の姿をマジマジと見た。
「あ、あれ？」
「――お祈りしなさい」
「あの無人型のって、い、今の何ですか！？今のチッって！聞こえましたよ！？舌打ち！」
ガンッ！
「ママぁ」
「――なんです？“さくら”」
「マスター、魂が外れちゃってるよ？」
「さっさと戻しなさい」
「……な、何だか」

美奈代は苦しげに呻きながら言った。
「普通の人なら死んでいた気がします」
「気のせいです。とにかく、テンペスト部隊がこちらに向かって撤退を開始しています。撤退支援は？」
「狙撃隊の到着は？」
「現在、急行中ですが、この窪地に赤兎改部隊が殺到する方が先ですね」
「せっかくの狙撃ポイントだと思ったんですが」
「こちらが前に出て、ピケットを構築するしかないでしょうね」
「――――そのようで」
美奈代は舌打ちしたから部隊内通信を開いた。
「全騎」
「み、美奈代！？」
さつきの狼狽した声が入った。
「よ、よかったぁ！」
「び、びっくりさせるなよ！システムエラーか！？」
美晴や都築の驚いた声が次々と入ってくる。
「ど、どうしたんだ！？」
「ついさっき、泉騎、騎士生命停止って表示が出たから、何が起き

たかと思って！」
美晴は涙混じりの声で言った。
「重責に負けて自殺したんじゃないかって、都築君がいうから！」
「本当にやりかねないから怖いんだよな！」
「都築ぃっ！」
「1割ちょっとは冗談だ！そう怒るなよ！」
「9割近くは何なんだ！？」
「そういうこと言ってる場合じゃねぇだろ！」
都築は怒鳴った。
「敵が混乱から復活しつつある！このままなら、赤兎がイギリス軍を横から喰うぞ！」
美奈代は、ハッとなって戦況モニターを見た。
テンペスト達は、こちらに向かって死に物狂いで逃げてくる。
背後からは帝剣達までが、まるで飛鼠（ひそ）に追われるかのように続く。
一方、帝剣達の混乱を知らないのか、それとも何か策があるのかわからないが、赤兎達が大きく迂回したルートをとってこちらに向かっていることは確かだ。
テンペストと帝剣達、そして赤兎改達のルートが重なり合うのは、美奈代達の潜む窪地から約1キロの地点。
「……」
「おい泉！」
「うるさい。涼、聞こえているな？狙撃隊はここから3キロ後方へ

展開。狙撃ポイントを確保しろ」
美奈代は言った。
「展開完了までの時間、知らせ」
「3分ください」
「よし。全騎、コンシール最大。事態が落ち着くまで、ここで死んだフリだ」

「い、泉っ!?」
突然の美奈代の言葉に、皆がギョッとした声を挙げた。
「英国軍はどうするんだ!」

「英国軍の支援は、連中がここを通過した所で良い」
戦況モニターから目を離すこともなく、美奈代は言った。
「都築」

「んだよ!俺に斬り込めとでもいうのか!?」

「黙れこの単細胞。お前の判断が間違っていると、そう言いたいんだ」

「俺の判断が間違っているって?」
都築は眉をひそめた。
「どういうことだよ。そりゃ」

「もし私の判断が正しければ、これから私が命じる対応は――――すごく」

「?」
モニターに映る美奈代の顔に、都築は迷いを見いだした。
「……泉?」

「卑怯、なのかも……しれない」

「……」

「いや、卑怯すぎる。そう言われるだろうな」

「……敵の戦力を」

戦況モニターに視線を落とした都築は言った。

「消耗させた上で叩くつもりか？」

「……そう、とも言える」

「そのための生け贄に、テンペストを見殺しにするつもりか？」

「……違う」

美奈代は首を横に振った。

「どう？」

「都築の見方が違うっていうのは、そこだ」

「まどろっこしいな」

都築は不快そうな顔になった。

「はっきり言えよ。時間がない」

「……そうだな。帝剣達は、テンペストを追ってるんじゃない。赤兎達は、テンペストを帝剣と挟撃するために動いているんじゃない」

「――――は？」

「中華帝国軍は――逃げているんだ」

何から。

そう言いかけて、都築はいい加減、自分の口から出そうになった言葉の愚かさに気づいた。

追いかけているはずの帝剣。

その背後にいる飛鼠達は、帝剣の支援を行っているのではないのか？

泉は、それが違う。そう、言っているのだ。

考えてみれば、確かにそうだ。

飛鼠は、帝剣を襲っている。

つまり、この状況では、追われているのはテンペストではない。

帝剣こそが、追われているのだ。

重装甲、重武装を誇り、テンペストを一方的に狩っていた帝剣が、一瞬のうちに追われる身になっている？

この発想からすれば、赤兎達の狙いは帝剣部隊の支援となる。

中華帝国軍は、身内という危険から身を守るために今や敵を相手にしている余裕がないことになる。

「どういう皮肉だよ、そりゃ！？」

都築は、自分の、そして美奈代の出した結論に、そう言わずにはいられなかった。

「単独で出るな！」
通信装置には、何度目かわからない部隊長の警告が響く。
帝剣達は横一列に並んで後退するという、あまり褒められない後退戦を余儀なくされていた。
「連携してあたれ、一人で出たら袋だたきにされるぞ！」
――――そんなこと言われたって！
ガンッ！
騎体のどこかに敵の攻撃が命中したらしい。
騎体ステイタスモニター上で、左腕の警告ゲージが上がる。
「騎体損傷、３５％に増大！」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）の声と同時に、コクピットにアラームが鳴り響く。
「赤兎の支援は！」
「合流まであと２分！」
「もたないぞ！」
目の前の飛鼠（ひそ）が、信じられないほどの機動を見せて斬り込んでくる。
彼めがけて黄色に輝く大鎌が振り下ろされる。
「このぉっ！」
騎体をひねってかろうじてかわすが、大鎌の刃を形成するエネルギーの余波が騎体表面を焼く。
「半端モノのクセにぃぃっっ！」
世界最強のメサイア――――帝剣。
それを操ることの出来るのは、中華帝国十数万の騎士の頂点に立つトップエリート。
騎士達にはそのプライドがある。
帝の剣たるメサイア。

帝を冠する名の語る通り、敗北が絶対に許されない存在。
その歴史は無敗と栄光によってのみ語られるべき存在。
それが帝剣だ。

それが、こんなメサイアといえない、半端な代物に破壊されるなんてことは、絶対に認めたくない。
そして、許されることではない。

帝剣３５号騎を駆る楊中尉は、飛鼠(ひそ)めがけて戦斧を振り下ろした。
だが――
ブンッ！
戦斧が空を切り裂くむなしい音だけが響き渡る。
「何故だ！」
楊中尉は、頭に血が上ったまま叫び、再び戦斧を振り回す。
だが、飛鼠(ひそ)は、まるで戦斧の動きが分かっているかのように、次から次へと紙一重で戦斧を回避してしまう。
その動きは、凄腕のベテラン騎士でもなければ出来ない芸当。
当然、飛鼠(ひそ)などという低級メサイアに許される動きではない。
それを――
「そんなものに乗っている分際で！
俺でさえ出来ないことを、貴様がするなぁぁぁっっ！」

楊中尉は、関節の異常加熱警告を無視して戦斧を振るい続ける。

その度にむなしく戦斧は空を斬り、そして中尉の心には焦りと怒りが積み重なる。

「楊中尉！」
「バカッ！一人で出るな！」
部隊を組む列騎からの警告に楊中尉が気づいた時には遅すぎた。

ハッ。となった中尉が見たもの。
それは、左右から振り下ろされる大鎌達だった。

「とどのつまり」
戦況を見守りながら、後藤は言った。
「敵さんもいろいろあるみたいですねぇ」

「いろいろ――――とは？」

「そりゃ、いろいろですよ」

「はっきりしてください」
美夜は、しびれを切らせたように言った。
「それでは、何が何だか」

「正直、俺にもね？」
後藤は相変わらずのチェシャ猫の様な笑みを浮かべて肩をすくめた。
「何が何だかわかんないんですよ――――困ったことにね」

「それでも、後藤さんの方が私より真実を見透かせる事が出来る」

「そりゃ、買いかぶりってもんですよ」

「見解をお聞きしたい」

「……」
ポリポリ。
後藤は頭を掻いた後、言った。
「こいつぁ、俺の推測ですがね？」
こくん。
美夜は無言で頷き、先を促した。
「中華帝国軍が割れてるんですよ」
「割れている？」
「より正確にいえば、あの帝剣達、メサイア部隊が見捨てられたというべきでしょうな」
「まさか」
美夜はプッと噴き出した。
「世界最高レベルの帝剣と赤兎改部隊を？頭数は師団級ですよ？」
「そう」
後藤は頷いた。
「信じられないことに、そうなった。
俺がそう思う理由はいくつかあるんですよ？
まず、このタイミングで西姫の偽物っていうか、何というかわからんのが北京に現れて、帝位継承権を放棄した。
これで載賢は皇帝として好き勝手出来る。
戦争犯罪者のお尋ね者が皇帝っていうんだから笑っちゃいますけどね？
とにかく、ヤツは全てにおいてフリーハンドを与えられた。

あいつ奴と国内で対立するのは弟達だけじゃない。
蘭州軍区。つまり、このチベットを管理する軍区もそう。
ここの司令官は傑物と見えて、あちこちの部隊がこの軍区に集結しつつある。
宮殿騎士団でさえ、載賢の支配を拒んで、司令部も紫禁城を出て、蘭州軍区に移動していたことは、さっき、英国軍から渡された情報でご存じでしょう？
……まぁ、そこまでカリスマというか、信望がないっていうのも、気の毒な気がしますけどね」

「それで？それがこの混乱と、どのような関係に？」

「つまり、帝剣は宮廷騎士団配備騎。となれば、今まで英国軍が戦っていたのは、宮廷騎士団。
連中は――勝った。
そう、言えるでしょう。
でも、それじゃ、載賢にとっちゃ都合が悪すぎる。
だってそうでしょう？
ここで宮廷騎士団が勝ったとしましょう。天裁システムの所有者は誰になります？」

「それは……」
載賢。
という言葉が出かかった美夜は、後藤が違う答えを出すだろうことを理解した。
「……蘭州軍区司令部」

「その通り」
後藤は頷いた。
「それじゃ、北京が吹っ飛ばされるかもしれないでしょ？載賢とし

ちゃ、そんな事態が起きたらおちおち夜も眠れない」

「しかし、それなら一体、あの飛鼠達は」

「宮廷騎士団は飛行艦を保有していない。そこに答えがあるんですよ。

ウチにぶっ飛ばされた艦は、中華帝国軍の飛行艦隊のうち、北京駐留艦隊の所属。

そして、この艦隊は載賢の支配下に入っている。

今や、あの艦は載賢のモノといって良いでしょう」

「陸戦艇も？」

「誰が司令官か知りませんけど、司令官や司令部の人脈あたってみたら、北京とのつながりが強く出てくるでしょうね。

だから、連中は今のところ、攻撃を仕掛けてこない。

そこへ、どういう仕掛けを使ったか知りませんけどね？

飛鼠部隊を大量に送り込んできた。

理由は？

厄介な宮廷騎士団を叩き潰して、天裁システムを我がモノにするって寸法、考えたらすべての辻褄が合う」

「……このまま」

美夜はぽつりと言った。

「撤退した方が？」

「敵がそれを許してくれるなら、そうするべきでしょうな」

「出来ると思います？」

「敵にとっちゃあ、英国も俺達もどうでもいい存在。
連中が欲しいのは天裁システムですからね。
英国もいい加減、それに気づいてテンペスト達をホバー移動じゃなくて飛行させて逃がせばいいんですけど」

「私の方から進言しましょう。状況は悪化する一方です。飛鼠(ひそ)対帝剣の勝負が続く間に撤退した方がいい」
美夜は艦長席のアームレストに備え付けられている受話器をとった。

「――――頼みます」
そう、言いかけて、後藤はおや?という顔になった。
「艦長、すいませんけどね?英国軍に交渉する時、ついでに一言、伝えてもらえませんか?」

「何です?」

「やるならさっさとやれ――――それだけです」

帝剣に赤兎改が合流。
宮廷騎士団の精鋭達は、ついに飛鼠(ひそ)達相手に、その場に踏みとどまった。
帝剣達がその重装甲にモノをいわせ、襲いかかる飛鼠(ひそ)達の前に立ちはだかる。
飛鼠(ひそ)達が帝剣達と対峙する間に、その背後を赤兎改達が襲う。
それが、彼等の起死回生の、そして、唯一の逆襲の手段だった。
しかし――――

あれだけやって、騎士の体が耐えられるのか？

本気でそう疑いたくなる程、急速なホバー移動を続けたままの急ターンを決めた飛鼠（ひそ）が迫ってくる。

この距離と横一列に並ぶ陣形によって、敵は大鎌の使用が満足に出来ない。

固定武装の３０ミリ機関砲は帝剣の装甲を割れない。

こちらは防御に徹して、隙を見て攻めればいい。

焦れば殺される。

連係プレーこそが大切だ。

死にたくなかったら。

無駄死にしたくなければ。

ここで連携を崩すな。

騎士達は、無意識にそう判断していた。

連携こそが、勝機につながる唯一の手段だと。

右腕に無造作に持たれた大鎌が嫌らしく鈍い光を放つ。

グンッ！

「なっ！？」

カメラを急速ズームして、それをさらに倍速させたようなスピードで、飛鼠（ひそ）が迫ってきた。

騎士の動体視力をもってしても、その動きに追いつくことは出来なかった。

ビンッ！

一瞬にして距離を詰めた飛鼠（ひそ）に、自動設定された近接防御用のＭ（マジック）レーザー

Lが発射された。
センサーに命中したらしい、その一撃を食らった飛鼠（ひそ）は、着弾のショックで万歳する姿勢で宙に持ち上げられた。

チャンスだ。

その騎士は、無意識に戦斧を、その飛鼠（ひそ）めがけて振り下ろした。
巨大な戦斧が飛鼠（ひそ）の脳天をマトモに捉えた。

「やったぞ！」

擬似的な感覚として伝わってくる、頭部の構造物が戦斧によって潰される衝撃に、騎士は歓声をあげた。

「やった！俺がやったぞ！」
頭部に戦斧をめり込ませたまま、力無く両膝を大地に崩した飛鼠（ひそ）を、騎士は興奮気味に見る。

ブンッ！

一瞬。
ほんの一瞬。

何か、影のようなモノが動いた、そんな気がした。

「――――へ？」

それが何かわかった時には遅すぎた。

大鎌を両手で振り上げた飛鼠（ひそ）が、自分に襲いかかろうとしている。

騎士にとって、コンマ数秒足らずの間に、騎体を貫通し、コクピットごと騎士を粉砕したその一撃を、避けることは、あまりに酷な相談だった。

帝剣部隊が壊滅していく光景は、美奈代達の眼にはっきりと映し出されていた。

「はっきり」

牧野中尉が言った。

「効率的で、一番、いい方法かもしれませんけどね」

「……」

「……これほど、色々と納得できないことも少ないでしょうね」

「アレを前にしたら逃げろと言ったのは牧野中尉です」

それが、美奈代にとって精一杯の反論だ。

「あれほどの強敵が」

牧野中尉はそんな反論は聞いていない。

データ収集に躍起になっている。

「ああも脆く潰されていくなんて……どうするんです？」

「えっ？」

「一生、このまま穴蔵で過ごすつもりですか？」

「テンペストの撤退を見送り次第、このまま無言で逃げます」

美奈代は答えた。

「こんな状況で、のこのこ出ていったら、私達もああなりますよ？」

「……そう、ですね」

普段なら、楽するとなれば率先するはずの中尉の声が重い。

「何が、面白くないのですか？中尉」

「いえね？」

牧野中尉は答えた。

「思い上がりってわけでもないんですけど、あれほど派手な戦いを見ると、興奮しちゃいますね。やっぱり」

「血の気が多いんですから」

美奈代は苦笑して言った。

「残存のテンペスト部隊、そろそろ撤退を完了します。私達の仕事はこれで終わりです」

「――――だと思う」

ピピピッ

牧野中尉は、入ってきた通信に言葉を止めた。

「電文――――命令？」

「どうしました？」

「新規命令が入りました。英国軍司令部からの要請です」

「うわ……本気でイヤ予感がする」

嫌な予感。

美奈代の場合、外れたことはない。

今回も、大当たりだった。

「……ったくさぁ」

さつきがぼやく。

「白旗挙げちゃえっての、そんなの」

「本当ですよね」

美晴も憮然とした声を挙げる。

「迷惑するの、誰だと思ってるんでしょうね」

「まぁまぁ」

山崎がそっと止める。

「美晴さん？それも仕事ですよ。人助けだと思って」

「……まぁ、大ちゃんがそう言うなら、手伝うけどね？」

「ありがとうございます。泉さん？」

「はいはい、ごちそうさま」

美奈代はそうぼやくと言った。

「ここから2キロ。撤退途中に擱座した騎の騎士とMC（メサイア・コントローラー）が集まって救助を待っている」

「んなの」

都築が不平を口にした。

「国際法に基づいて投降の手続き踏めって言えば終わりだろうが」

「無人機にそこまで理解しろというのか？出来るなら、飛鼠（あれ）はお前より頭いいんじゃないか？」

「この――――っ！」

「まぁまぁ、都築さん」

祷子がおっとりした声で言った。

「美奈代さん、甘えてるんですよ。都築さんに」

「――――ああ。そういうことか」

「はい♪」

「……は？」

目が点になった美奈代の前で、都築と祷子の会話が続く。

「いゃあ。もてる男はつれぇなぁ！」

「泉大尉！斬艦刀で何をするつもりですか！」

「操縦権限、返してください中尉っ！そ、そこのバカの脳天かち割るだけで！」

「ほら、照れている♪」

「まいったなぁ」

「都築、風間ぁっ！」

「お姉さまっ！」
耳がキーンとなるほどの怒鳴り声が響き渡った。
涼だ。
「何やってるんですか！この忙しい時に！」

「す、すみません」

「ったく……狙撃隊、配置完了。それと、英国軍のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）も展開完了。
お姉さまの命令で救出にかかります！
人命がかかっているんですから、しっかりしてくださいっ！」

「り、了解した……ごめんなさい」
すっかり気圧された美奈代に、涼からの返事はなかった。

「……さっすが、次期隊長候補筆頭」
さつきが感心したような声をあげる。

「ああ。小清水少尉って、そうなんですか？」

「大ちゃんってば。そりゃもう、美奈代さんの子飼いだもの。きっと美奈代さん亡き後でも立派に」

「全騎傾聴っ！」
美奈代は怒鳴った。
――――あ、逃げた。
そんな“さくら”の言葉は聞かないことにした。
「現状はさっき述べた通りだ。問題は」

皆の視線が窪地の向こう。

帝剣達に向かう。
赤兎改が合流した時と比べ、その数は半減どころではない。
壊滅状態といっていい。
帝剣もしくは赤兎改１騎に対して飛鼠（ひそ）は１０騎近い規模で襲いかかっている。
もはや、勝敗どころか、帝剣達の終わりは時間の問題だ。

このまま、飛鼠（ひそ）が撤退してくれれば御の字なんだけど。

美奈代じゃなくても、皆が内心でそう強く願うしかない。
だが、相手はメサイアを撃破するためだけの存在。
殺戮マシンだ。
そんな都合のいい動きをしてれるとは全く思えない。

機動性は中に騎士がいない分、機械が耐えられる限界まで高められている。
反射能力だけで相手にするのは、とても無理だ。
その反射能力に、あの武装となれば、近づくだけでもかなり危険な話だ。

「前衛全騎、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）装備。円陣を組め」

「円陣？」

「不本意だが、私と祷子は広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を装備していない。３騎で私達２騎を中心に組んでくれ。万一に備えて私達は散弾砲を装備する」

「どうするんだ？」
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを伸展させながら都築が訊ねた。

「何」
美奈代は口元をにやりと歪めた。
「簡単なことさ」
美奈代は、腹に秘めていた案を皆に話した。
「成る程？」
都築は感心したように言った。
「何だか――――みんな、覚えているか？」
「何を？」
さつきが小首を傾げた。
「初めての模擬演習の時も、こんな奇抜な案で敵に立ち向かったんだよな」
「やめてよ」
さつきは苦笑いした。
「あの時、判定中破だったんだから」
「僕は気絶しましたしね」と山崎は懐かしそうに笑った。
「もう、何十年も昔のようにさえ思えます」
「私はもう、記憶から削ってる」と美晴。
「そんなこんなで――――私達は生きてきた」
美奈代は笑みを浮かべながら言った。
「今回だって、きっと大丈夫だ」

「そう願おう」
都築は頷いた。
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズル調整が難しいがな」

天裁破壊作戦　第十二話

●“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ

「くっそぉ～っ！」

整備員がとりつき、腕から火花をあげる殲龍（せんりゅう）のコクピットに浮かぶフィアは、コクピットから引っ張り出した通信用ヘッドレストを通信モニターめがけて投げつけた。

「こ、殺す！？私めがけて？美奈代のクセに、美奈代のクセにぃぃぃっ！」

地団駄を踏んで悔しがるフィアは、ヘッドレストを再び掴むと、艦橋と通信を開いた。

「艦長！」

「忙しいんだ。何だ？」

「出撃許可下さい！あいつ、何もわかってない！」

「あいつ？」

通信モニターの向こうで美夜がきょとん。とした顔になった。

美奈代以外、美夜は誰も思いつかなかった。

「ああ……泉のことか？」

「あのバカのノータリン以外、私があいつ呼ばわりすることはありません！」

「おま……ここは軍隊」

「とにかく！」

まるで通信モニターにかじりつくような姿勢でフィアは怒鳴る。

おかげで、艦橋から見るとフィアの顔がドアップで映る。

美少女らしからぬ振る舞いに、美夜は噴き出しそうになった。

こういうことは、なまじ美人がやると本当にギャグになる。

「あんな無人騎の群れは、チマチマ美奈代達が出るより、殲龍（せんりゅう）が出る方が有効なんです！」

「――――何？」

「艦長はこの騎が搭載している電波妨害システムの有効性をお認めになって下さっていると思ってました！」
「……」
「まさか、忘れていたんですか！？」
「そ、そんなことはない！」
「今、すっごくハッとなったのが気になりますけど、上空をちょっと舞えば戦況は変わります！」
フィアは言った。
「やらせてくださいっ！」
「危険すぎる！」
美夜は目を丸くして反論した。
殲龍（せんりゅう）は、肘から下の腕部を根こそぎ吹き飛ばされて収容されている。
戦闘手段の９割近くを腕に頼るメサイア。
そんな状況で満足に戦えるはずがない。
「もうボケたんですか！？殲龍（せんりゅう）の最大の武器は腕じゃなくてランドセル内の電波妨害システムだって、何度も言ってるじゃないですか！」
「――――っ！」
「腕なんて、シールドでも貼り付けてくれればいい！」
「そんな無茶な！」
「上空から妨害かけるだけで、どうして五体満足でいる必要があるの！？」

ギィンッ！
帝剣の右腕が、真っ正面の飛鼠（ひそ）が振り下ろした大鎌を戦斧で受け

止めた。

――――ダメだ。

美奈代は、それだけで帝剣の最後を悟った。

帝剣と飛鼠（ひそ）は一対一で勝負しているのではない。

帝剣は飛鼠（ひそ）の包囲網の中、帝剣を殺すチャンスを虎視眈々と狙っている飛鼠（ひそ）達のまっただ中にいるのだ。

だというのに――――

どうして、あそこで逃げないんだ！

私なら、すぐに急速後退をかけて――――

口の中だけで言葉をかみ殺す美奈代の目の前で、帝剣の背後に回っていた飛鼠（ひそ）の大鎌が帝剣の右肩を根本から切断した。

ズルッと音を立てて、戦斧を握ったままの右腕が騎体を滑るように下へと落ちていく。

それを待ちかねていたかのように、帝剣の背後に立つ別な騎が、大鎌を容赦なく振り下ろす。

帝剣の左腕が飛び、別な騎が脚をなぎ払った。

脚を失い、横転する帝剣に、飛鼠（ひそ）達は一斉に大鎌を振り下ろす。

グシャグシャと背筋が寒くなるような音が、大鎌が振り下ろされる度に当たりに響き渡る。

帝剣のパーツが全身から吹き飛ばされ、オイルや破片が血肉のように宙を舞う。

飛鼠（ひそ）達は、それが楽しいと言わんばかりに何度も大鎌を振り下ろし続ける。

「――――っ！」

その光景を前に、美奈代は思わず顔を背けた。

それは美奈代にとって、戦いというより殺し――――いや、屠殺（とさつ）の現場でしかなかった。

例え機械といえど、正視に耐えられる光景とは思えない。

そんな美奈代の身上にお構いなしで、大鎌を振り下ろすのに飽きた飛鼠（ひそ）達が、ゆっくりと大鎌を構え、わずかに片足を半歩下げた。

その途端――――

ズンッ！

ズズンッ！

ＭＬ砲（マジックレーザー）の光が帝剣の残骸に突き刺さった。

「残骸を相手に、そこまでする？」

「違います」

牧野中尉は、沈痛な面もちで首を横に振った。

「狙いはコクピットブロック――――直前まで生命反応がありました」

牧野中尉が困惑とも怒りともつかない、震えた声で言った。

「コクピット及びＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）、生命反応なし」

ズームされた映像の中。

帝剣の頭部からは炎が噴き出している。

頭部ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）ハッチから、半ばはみ出るようにして燃えているのが何か、牧野中尉は考えることを止めた。

「泉大尉」

「まだです。あっちから攻めてくるのを待ちます」

「飛行艦部隊は撤退中。浪費出来る時間はありません。何より、擱座した英国軍の騎士とＭＣ（メサイア・コントローラー）の生命上のリスクを把握した上での発言ですか？」

「……ちっ」

軽く舌打ちした後、美奈代は言った。

「中隊全騎へ。これから仕掛けるぞ」
「了解」
「狙撃部隊の活躍に期待する。涼、信じているからな？」
「はいっ！」
「よし。可愛い娘だ。前衛全騎、いいか？我々は囮だ――――だから平野っ！ＨＭＣの照準をこっちにむけるな！」
「どうしてわかったんですか！？直接目視ですよ！？」
「そんなに殺気を放っていたら嫌でもわかる！上官殺しは銃殺だぞ！？」
「事故ですから」
「……っ！」
美奈代は強く頭を左右に振った。
「全騎、コンシールを解除しろ。すぐに敵はこっちを見つけて――――」
「敵弾飛来警報っ！」
ピーッ！
警告がコクピットに響き渡る。
ハッとなって見た戦況モニター上、砲撃の軌道が点となって映し出される。
後退したはずの陸戦艇部隊がいつの間にか再度前進、有効射程ギリギリからこちらを狙っていた。
その砲撃の数たるや、一発や二発ではない。
砲撃の反応は、びっしりとモニターに映し出されている。
とてもではないが、迎撃出来る数ではない。
「何で気づかなかったんだ、私のバカっ！」
「どうするんだ！」
「前衛に都築と早瀬、後衛を山崎夫婦で！いいか！？後衛だからといって気を抜くな？連中の移動速度は半端じゃないぞ！」
「了解っ！大ちゃん！」
「了解です」

「風間、散弾砲散布界に注意しつつ、敵の隙を狙え！」
「攪乱には出ないのですか？」
「狙撃部隊の邪魔よ」
「了解」
「砲撃着弾まで２０秒切ります！飛鼠、戦闘展開開始！」
「頃合いだな。全騎、ホバー移動開始！陣形崩すな！」

砲撃の着弾は、全騎が窪地から飛び出してすぐに飛来した。
背後で発生した大爆発の連鎖。
幾重にも防御されたレシーバーに守られていると、理屈ではわかってるが、それでも鼓膜が破れそうな音に耳がマヒしそうになる。
後方からの爆風と衝撃波で騎体が吹き飛ばされそうな中、美奈代は自分でもはっきりしない耳に堪えながら怒鳴る。
「陣形固定っ！砲撃の狙いは、こっちの戦力を分断することだ！陣形を崩したら、個別に喰われるぞ！」
「り、了解っ！」
「前方、敵動きます！」
「待てって！」

飛鼠達はこちらを見つけた。
もしかしたら、砲撃の目的は、飛鼠達に敵の存在を見つけさせるためだったのかもしれないと、へんな勘ぐりもしたくなる。
とにかく、飛鼠達は、爆発の煙に隠れそうになる美奈代達をはっきりと見つけた。
巨大な蛭を連想させる頭部を持つ不気味な騎体が、こっちを向くなり大鎌を構え、集団で襲いかかってきた。
「――――なっ！？」
目の前で起きた出来事に、美奈代は目を見開いた。
飛鼠達は地面を蹴った。
そのわずかな動作で彼我の距離約数百メートルを一瞬で詰めての

けたのだ。
まだ余裕があると思った彼我の距離は、瞬きする間にゼロどころかマイナスになった。
ホバー移動とも違う、全く不可思議な程の超高速移動をかけた飛鼠（ひそ）が美奈代達めがけて襲いかかってくる。
「ひっ」
悲鳴だけは上げずに済んだ。
それだけが救いだ。
「都築、早瀬っ！」
美奈代の悲鳴に近い号令に、都築達はとっさに広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のトリガーを引いた。
「このっ！」
「早すぎんのよ！」

ゴウッ！

ノズルから噴き出したプラズマ炎が、数億度に達する巨大な灼熱地獄の壁を作り上げた。
突撃を開始していた飛鼠（ひそ）達は、自らのスピードに負け、次々とその炎の中に自ら飛び込んでいく。
自重１００トン近い金属の塊が、ほんの一瞬で消し炭を通り越して蒸発していく。
灼熱地獄の炎から抜け出ることの出来た飛鼠（ひそ）達の多くは、溶けた金属の塊と化して宙を舞う。
その後方。
ぎりぎりで灼熱の壁を回避することに成功した、残存の飛鼠（ひそ）達が宙を舞って間合いをとる。

「あ、アブねぇ！」
「ホント！」

都築とさつきが同時に安堵の声をあげた。
「ノズルギリギリまで、一瞬で突っ込んできやがった！」
「な、なんて動きするのよ！」
その声は驚きに震えていた。
「トリガー引くのが一瞬でも遅れていたらアウトだったぜ！」

「狙撃隊より泉隊長」
寧々（ねね）からの通信が入る。
「敵の動きが早すぎて狙撃不能。敵の足を止められませんか？」

「かなり無理な注文ね」
美奈代はそれでも寧々（ねね）が言いたい言葉の意味はわかる。
「現状を狙えない？」
「やってみたのですが――」
少しの間があって、寧々（ねね）は残念そうに言った。
「命中率は１０％を確保できません」
「……わかった。そのままチャンスを狙って」
「了解」
「上空、ＭＬＲＳ飛来、到達まで３０秒！」
牧野中尉から警告が出る。
「さらに情報、後方、飛鼠（ひそ）達の一部が離れていきます」
「えっ？」
「数４、要救助者達の出しているビーコンを感知したものと思われます」
「――っ！」
美奈代は血の気が引けたのがわかった。
要救助者、つまり、戦場に取り残され、美奈代達の救助を待つ騎士とＭＣ（メサイア・コントローラー）達に、あのバケモノ達が向かっている。
牧野中尉はそう言っているのだ。
「都築っ！」

美奈代は即座に怒鳴った。
「ここで飛鼠を引きつけてくれ！」
「何っ！？」
「ＭＬＲＳは避けてくれよ！？私と風間で要救助者達を確保する！」
「無茶だ！」
「それをするのが私達だろう！？」
「わかったよ、このバカッ！」
都築は怒鳴った。
「お前が死ぬ前に言っておく！」
「聞いてる暇なんかないっ！」
「一回殴らせろっ！」
「いやだっ！風間！」
「はい？」
「黙って私についてこい！余計なこと言うなっ！」
「……つまんないです」
祷子は口元を尖らせた。
「面白いのに」
「いいからっ！都築、風間と二人で出るぞ！」
「好きにしろっ！早瀬、山崎と柏、背後をとられるな！？頭上注意！」
都築が周りに指示を出すのを聞き流しながら、美奈代と祷子はブースターを開いた。

要救助者達が隠れている場所までわずか数キロ。
ビーコンの反応はあるが――
「なんでビーコンなんて使ってるんでしょうか。敵にここにいますと教えているようなものだって、どうして気づかないのでしょうか？」
「心理的に不安なんだろう」

美奈代は言った。
「敵地のど真ん中に丸腰同然に放り出されたら、誰だって助けを求める術にすがりたくなる」
「――――成る程」
「幸い、私達もそのおかげで――――」

ズゥォッ！
ズンッ！
ズズンッ！

背筋が寒くなるような音が背後から襲ってきた。

「都築少尉達、交戦状態突入！」

「のんびりしているヒマはない。いくぞ風間」
「はい♪」
美奈代はモニターの中に映し出された情報から、要救助者の居場所を見つけ、ゆっくりと移動している飛鼠（ひそ）達めがけて上空から襲いかかった。

降下をかけながら、無防備に見えるその背中めがけて散弾砲をフルオートで叩き込む。
散弾砲の着弾で、地面が一瞬にして土煙の中に消える。
しかし――――

「熱源増大っ！」
「来たっ！」
牧野中尉の警告とほぼ同じタイミングで、土煙の中から飛鼠（ひそ）が飛び出してきた。
すれ違い様にその大釜が騎体を狙って襲いかかってくる。

「ちぃっ！」
美奈代は“白雷（はくらい）”の上半身をひねってその一撃を回避するが、
「またっ！？」
かわした騎の背後にぴったりと張り付いた飛鼠（ひそ）を、完全に見落としていた。
振りかぶった大鎌がまさに振り下ろされようとしている。
「くっ！」
ブースターを開き、敵との距離をこちらから詰める。
相対速度の関係から、飛鼠（ひそ）が大鎌を振り下ろすより早く、美奈代騎は飛鼠（ひそ）の懐に飛び込んでいた。
飛鼠（ひそ）のボディに、突き出したシールドのエッジが深々とめり込んだ。
飛鼠（ひそ）は、真っ二つに引き裂かれ、上半身と下半身が別々に宙を舞った。

美奈代と祷子は地面に着地した。
上空でかわした飛鼠（ひそ）が降下しながら襲ってくる。
散弾砲を構えた美奈代の目の前で、飛鼠（ひそ）達が爆発した。
「狙撃隊の攻撃が命中！」と、牧野中尉が報告をしてくれる。
目の前の飛鼠（ひそ）は残り2騎。
都築達に殺到しているはずの飛鼠（ひそ）のうち、何騎かが、戦況モニター上でこちらに移動を開始している。
とにかく、一騎でも叩き潰して敵の脚を止めなければならない。
その間に救援を行うしかない。
飛鼠（ひそ）達を全滅させなければ、救難活動どころではない。
「風間、いくぞ！」
「はいっ！」
斬艦刀をかまえ、美奈代と祷子は飛鼠（ひそ）達に斬り込んでいった。

●“鈴谷（すずや）”フライトデッキ

「本当にいいんだな！？」

カタパルトには、すでに殲龍（せんりゅう）が待機している。

「かまいません！」

カタパルト情報は射出可能レベルへ向けて準備が進んでいることを示している。

そこに乗る殲龍（せんりゅう）は片腕がない。

よりによってほとんどの武器を扱う右腕がやられているのだ。

冷静に考えたら、確かにこれで戦場に出るのは自殺行為だ。

左腕はシールドだけ。

武装は騎体内蔵のＭＬ（マジックレーザー）だけが頼りだ。

「……左だったらよかったんだけど」

ちょっと不安になったフィアは、それでも気丈な顔だけして、通信モニターの向こうにいる美夜に言った。

「艦長、今回の全部の責任は、どうか部隊長の泉大尉に！」

「後藤隊長じゃなくて？」

「ご迷惑かけられません」

「了解した」

美奈代が聞いたら泣き出すだろうな。

不思議な程、悪戯心が騒ぐ。

美奈代は本当にイジメ甲斐のある娘だ。

あの娘は、人を不安にさせる。

だから――あの娘を助けたい。

フィアにあるのは、そんな複雑な心だ。

「フライトコントロールよりツヴォルフ騎、射出準備完了――どうぞ！」

「フィア・ツヴォルフ。殲龍（せんりゅう）――出ます！」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

殲龍（せんりゅう）が出撃していくのを美夜は艦橋から見送った。

「本当に」

艦長席にもたれかかりながら、疲れ果てた顔で美夜は言った。

「最近の若い娘のことがわかりません。私があの頃は、もっと大人しかったというか、現実が見えていたような気がします」

「――少しは俺の苦労、わかってくれました？」

「いい先生になれますよ。後藤さんは」

そんな会話を交わす二人の前。

メインモニターに映し出される戦況。

Ｄ－ＳＥＥＤが斬艦刀を振い、飛鼠（ひそ）の首が吹き飛んだ。

その背後を狙う飛鼠を、美奈代騎が容赦なく仕留めていく。

互いをカバーしつつ、二騎は確実に飛鼠を仕留めていく。

「戦況は――まぁ、上々ですな」

“鈴谷（すずや）”艦橋。

メインモニターに映し出される監視ポッドからの映像を前に、後藤は相変わらずのやる気の疑われる態度を崩さない。

「まず問題ないでしょう」

「そう願います」

美夜は言った。

「早瀬中尉達を包囲している飛鼠（ひそ）達も、戦況不利と判断したようですし」

美夜が見ているのは、美奈代達ではない。

後方で飛鼠（ひそ）達に十重二十重に囲まれている都築達だ。

数度にわたる波状攻撃は、すべて広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）が生み出す灼

熱地獄の壁によって阻まれている。
やむを得ず、飛鼠達は間合いを開いて攻撃のチャンスを狙う。
「この戦法は……泉大尉の発案でしたね」
「来年あたり、教本に載るかもしれませんな」
「どうですか……この部隊の戦法はある意味エキセントリックですからね」
「……ごもっとも」

飛鼠が右へ動こうとしている。
それはフェイクだ。
右へ動くフリをして――
「……そこっ！」
美奈代は“白雷”を突進させた。
敵に先手を打たれた飛鼠は、横薙ぎに大鎌を振り回す。
柄で“白雷”を横からぶん殴るような格好になったが、間合いを詰めた“白雷”のシールドに阻まれ、攻撃の意味をなさない。
“白雷”はもう飛鼠の懐に飛び込もうとしている。
形勢不利と判断した飛鼠が頭部のＭＬを発砲するより速く、斬艦刀がその頭部を貫いていた。

ハァ……ハァ……ハァ……

飛鼠の連続撃破。
それがまぐれに近いと、美奈代はそう思っていた。
体や神経が飛鼠との戦いに慣れ始めているなんて、そんなことはないと、そう思っていた。
一騎倒す度に、もう無理だと思いながらも、生き残るために次の

獲物を探し出す。
左11時方向、距離102に1騎。
右4時方向に風間騎がいるから、同3時方向、距離87の敵は任せていい。
美奈代が余計なことを考えない。
考える余裕がない。
ただ、現状の把握だけが精一杯なのだ。
「間合いをとらないで！」
褄子の声が聞こえたのは、対峙する敵とのポジションを取り直そうと、後退を開始した時だ。
その鋭い声に、ハッ！となった美奈代は、力強く頷くと、逆に“白雷（はくらい）”を一気に飛鼠（ひそ）めがけて突撃させた。

間合いをとるな。

それは美奈代も認める正論だ。
飛鼠（ひそ）の売りは何か？
その機動力だ。
逆に言えば、その機動力さえ潰してしまえば、飛鼠（ひそ）はそれほど恐るべきしろものではない。
懐にさえ飛び込めば、その大柄な武装と共に、恐れるのはML（マジックレーザー）だけになる。
斬艦刀を正眼に構えると、美奈代は飛鼠（ひそ）めがけて斬り込んだ。
「――――くっ！」
斬艦刀の切っ先が飛鼠（ひそ）にめり込む直前。
飛鼠（ひそ）は横に飛んで攻撃を回避した。
置きみやげとばかりに残されたのは大鎌。
自らの突撃スピードがその刃をギロチンのように首に近づける。
斬艦刀を上にむけ、大鎌の峰を叩く。
大鎌を弾き、足を軸にして急旋回。

斬艦刀を地面に突き刺すと、空いた右腕で、大きくバランスを崩した飛鼠の持つ大鎌の柄を無造作につかんで、力任せに引っ張った。
力比べとなれば、“白雷”に飛鼠がかなうはずはない。
飛鼠は宙を舞って“白雷”めがけて飛んでくる。
美奈代は大鎌の柄から手を離し、斬艦刀を掴むと、飛鼠へと突き出した。
斬艦刀が飛鼠の胴体を貫き、飛鼠のボディから破片が一気に噴き出した。
ここで油断すれば、死ぬ。
それを教えてくれるのが、頭部で妖しく、しかし力強く光り出したＭＬ砲の発射口。
「――中尉っ！」
美奈代は飛鼠を地面に叩き付ける要領で斬艦刀を操る。
飛鼠が地面に叩き付けられ、はげしくバウンドした。
“白雷”の肩部に装備されたＭＬ砲が、飛鼠のそれより速く、飛鼠の頭部に風穴を開けた。
「泉大尉」
牧野中尉は言った。
「突き技は、やめましょうか」
「……そうします」
ピピッ
戦況モニター上に通信が入った。
「インフォメーション？“鈴谷”からです」
「？」
「今、殲龍が発艦しました」
「――はぁ？」

ビィンッ！
「きゃっ！？」

殲龍（せんりゅう）の騎体ギリギリの所を、ＭＬ砲（マジックレーザー）が通り抜けていった。
「もう見つかったの！？」
騎体をすぐにジグザク機動にいれ、狙撃から何とか逃れようとする。
その途端――
「何しに来た！」
通信装置のレシーバーに響き渡る怒鳴り声。
それは――
「美奈代！？何！？今、撃たれたんだけど！」
「警告だ！とっとと帰れ！」
「今のアンタなの！？」
「今度は当てるぞ！？」
「後で絶対、殴るからね！」
フィアは顔を真っ赤にして言った。
「あんた、現状わかってるの！？」
「わかってるから戦っている！」
「わかってない！」
「わかってる！」
この後、わかってる。わかってないを、美奈代達は互いに１０回以上言い合った。
次の瞬間。
ガンッ！
美奈代の後頭部に激痛が走った。
「――いい加減になさい」
通信モニターの向こう。
牧野中尉の眼が座ってた。
「ここは幼稚園じゃないんです」
「は……はい」
「ツヴォルフ中佐？お話をどうぞ」
「感謝します。っていうか！あんた、英国軍の救助、何しているの

！？」
「え？」
美奈代はきょとん。とした顔になった。
「だ、だから、連中の救助のために厄介な敵を始末……」
「私を呼びなさい！」
フィアは言った。
「殲龍（せんりゅう）の“戦域妨害システム”を使えば、そこいらの無人機なんて黙らせることが出来る！」
「――――へ？」
「まだわかんないの！？この能なし！」
「何だと！？」
「無人騎でシステムエラーが起きたら、誰が再起動するのよ！自動で再起動出来るの！？」
「あっ！」
「ちょっとは考えなさいよ！この顔面ゾウリムシ！」
「コントロール返してください、牧野中尉！私、やっと本当の敵を見つけたんです！」
ガンッ！
ガンッ！
ガンッ！
「……次は銃声になりますよ？この音。……“さくら”？さっさと魂を戻して」
コホン。
牧野中尉が咳払いをした。
「ハァ……ハァ……疲れます」
「どうも」
「殲龍（せんりゅう）の有効性は、私達も救われた経験がありますからわかります。有効範囲を教えて下さい」
「データリンクします――――見えますか？」
牧野中尉は、戦況モニターに映し出された妨害範囲を見た。

「思ったより広いですね」
「中華帝国軍が、救難用ビーコン波をマトに砲撃を加える前に英国軍を救助する必要が」
「飛鼠（ひそ）の壊滅がターニングポイントですね」
「それがわかっていないんですよ。そのバカは」
「敵を倒すことと、英国軍の救助」
牧野中尉は小さくため息をついた。
「順序が逆ですよねぇ」

●中華帝国軍飛行艦隊旗艦“大連”艦橋
「飛鼠（ひそ）２４３号騎、行動停止！」
「飛鼠（ひそ）部隊、戦力３割に落ちます！」
オペレーター達が状況の悪化を告げている。
「くそっ！陸戦艇部隊はどうした！」
「陸戦艇司令部は飛行艦隊をどうにかしろの一点張りで！」
「あいつら、後で覚えておけ！？」
龍艦長は床に制帽をたたきつけた。
「飛鼠（ひそ）の増援はないのか！？」
「ありません！」
「要請を出せ！通信、北京につなげ！敵戦力は類を見ない程強力。増援を要請する！」
「は、はいっ！」
「艦長」
副長が敬礼の後、言った。
「システム上空に到達。陸戦部隊、降下準備完了」

●英国飛行艦隊旗艦“レナウン”艦橋

「敵艦隊、システム上空に到達」
バッテン提督達、艦隊司令部は、その報告を沈痛な面もちで聞いた。
つい先程まで手にしていたはずの絶対のジョーカーが、今、敵の手に戻りつつあった。
このカードは、負けだ。
「テンペスト残存部隊、収容準備入りますか？」
「艦隊高度下げろ。生き残ったメース部隊の収容急げ。戦時国際法に基づき、回収作業開始を宣言しろ」
「了解」
「提督」
ステファニーが表情を変えずにバッテン提督の横顔に視線を送った。
その視線には、明らかに提督に決断を強いる色が含まれていた。
「もう少し、待ってもらおう」
「起爆に失敗すれば、ロンドンは消滅します」
「脅しているつもりかね」
「事実を述べています」
「あのシステムについて私は門外漢だが」
バッテン提督は、艦橋の外を眺めながら言った。
「これだけは言える」
「……」
「そんな危険な玩具を敵の前で放棄する場合、それなりの処理はするべきだと」
「処理？」
「……君は」
「……」
「システムを稼働状態でほったらかしてきたのかね？」
「データをとることに時間をとられたのは認めましょう」
「子供の頃、片づけが出来ないと、母上から叱られた経験があるだ

ろう？」
「私は孤児院で育ちました。親の顔は知りません」
「……君を見ていると、親の大切さがよくわかる」
「……何か？」
「軍情報部は、実にいい加減だと、そう言ったのだ」
バッテン提督は言った。
「我が海軍は反応弾を保有していない。今回、反応弾を輸送、設置したのは全て情報部の仕業だ。その入手ルートは聞かん。だが、使うというならば、全て情報部で責任をとってもらおう」
「……」
「そして、メサイア部隊を含む艦隊を指揮する身として言わせてもらうが」
「……」
「私の艦隊の壊滅は、敵が強かったからではない。敵に関する謝った情報を鵜呑みにさせてくれた情報部の怠慢が原因だ。
これ以上の被害を出すことは出来ない。
残存メサイア部隊の収容、そして生存者全員の救助を最優先とする。
システムがどうのは二の次だ」
「数名の部下と祖国を天秤にかけるおつもりですか？」
「具体的数値と、抽象的数値を混ぜ合わせるのは詭弁というものだ」
バッテン提督は、アームレストに置かれた反応弾起爆装置をステファニーに放り投げた。
「私にとって大切なのは、ここで部下を見殺しにしないことだ。
黙って本物の起爆装置を渡したまえ。
さもなければ」
バッテン提督が顎でしゃくると、屈強な海兵隊員がステファニー達に銃を向けた。
「海軍伝統の、船底くぐりツアーを堪能してもらうことになるぞ」

●陸戦艇部隊旗艦“船山”艦橋

「英国艦隊、高度下げます」

レーダー要員からの報告を受け、艇長は鼻をピクリと動かした。

「メサイアの収容を始めたか――閣下、どうされますか？」

「攻撃は届くか？」

「射程有効範囲」

「なら撃て」

「しかし。メサイア収容作業中の宣言が出ています。戦時国際法に基づき、この時点での攻撃は禁止されてますが」

「君は随分と」

湯少将は見下した様な視線を艇長に送った。

「“お勉強”が足りないようだな」

「はっ？」

「ここは我が国の領土だ。国際法より国内法が優先されるべきだ」

「と、おっしゃいますと？」

「“侵略者に死を”……君が知るべきは、それだけだ」

「し、しかし、国際法違反は死刑が」

「そんな国際法、我が国は国内で適用するとは言っていない。艇長、これは命令だ。到達可能な全砲門開け。目標、英国艦隊」

●英国飛行艦隊旗艦“レナウン”艦橋

ズズンッ！

突然、降り注いできた砲撃が、容赦なく艦隊を叩いた。

FGF（フリーグラビティフィールド）の全周囲展開を解除していた“レナウン”にも容赦なく砲弾の雨が降り注ぎ、艦全体が激しく揺れる。

「敵弾飛来っ！」

「各部に被弾！各ブロック担当者は被害状況知らせ！」

「提督！」
アームレストを強く掴んで衝撃に耐えたバッテン提督に、参謀達が指示を求める。
だが、どうしていいのか知りたいのはバッテン提督の方だった。
「何が起きた！？」
「中華帝国軍の砲撃です！」
「馬鹿な！」
提督は目を見開いた。
戦時国際法では、メサイアの収容作業中は戦闘を停止することが、戦闘当事者の義務として認められている。
つまり、メサイアの収容を宣言した英国軍に対する中華帝国軍の攻撃は、国際法上、禁止されていたはずだ。
それが中華帝国軍は攻撃をしかけてきた。
それは完全に許されるべき行為ではない。
「メサイアの収容宣言が届かなかったのか！？通信は何をしていた！」
「間違いなく、通信は届いていました！」
参謀が言う。
「チンク共はこちらの宣言を無視したのです！提督！」
「――――っ！」
「どうなさいますか！？提督！」
「収容を急がせろ」
提督は瞑目した。
「とにかく、今は悪魔に祈れ。神なんてクソ喰らえだ」

●英国軍メサイア収容地点
砲撃の被害は艦隊だけでは済まなかった。

艦隊を突き抜けて地面に落下した砲弾の被害をまともに浴びたのは、収容を待っていたテンペスト達だ。
爆風と砲弾の破片を嫌というほど浴びたテンペストの騎士達は、帝剣や赤兎改の猛攻から逃れた時に自らの幸運を使い果たしたことを思い知らされた。
８０センチ臼砲の破片に足を切断され、擱座したテンペストが大地に転がる。
テンペストのコクピットハッチが吹き飛んだ。
騎士が脱出装置を作動させた証拠だ。
「やめろアレックス！」
運良く擱座する手前で被害を抑えられた別なテンペストの騎士が怒鳴る。
「今、騎外に出たら死ぬぞ！」
「だ、だけど！」
「肩を貸してやる！騎体ごと収容する。でなければ挽肉にされるぞ！」
「頼む！アイリーン！脱出するな！ルームにとどまるんだ！」

天裁破壊作戦　第十三話

「中華帝国軍の飛行艦が天裁システムにとりつきました」
「……」
「英国軍艦隊は国際法を無視され、砲撃を受けています」
「……」
「――――で」
牧野中尉は言った。
「私達は、いつの間にか後詰めにいた飛鼠(ひそ)達に包囲されています」
「……」
見ればわかる。
美奈代はその言葉を口の中でかみ殺した。
どこにいたというのだ？
そう、聞きたくなる飛鼠(ひそ)達の群れが美奈代と祷子の2騎を囲んでいた。
その数は両手の指では足りない。
「ここでクイズです」
「……どうぞ」
「泉大尉的にどうしたいですか？」
ハァッ。
美奈代は深いため息をついた。
「どうすべきか、模範解答があったら聞かせてください」
「実戦に“こうすべき”というお手本はありませんよ？」
「……フィアに頭を下げろと？」
「只(ロハ)で命が助かるんです。それとも、敵に首を刎ねられる方がお望みですか？」
「もう好きにしてください」
「そう投げやりになるもんじゃないですよ？」
ハァッ。

もう一度、美奈代はため息をついた。
「風間？」
「やってやれないことないですけど」
袴子はしれっと言ってのけた。
「楽したいんで」
「――同感だ」
美奈代は頷いた。
「楽する合間に人生やるのが部隊のモットーだ」
「誰の名言ですか？」
「私だ。聖書にまで採用されている」
「それはそれは」
「フィア」

「お願いしますはどうしたの？」
上空で勝ち誇ったように言うフィアだが、
ドンッ！
美奈代からの返答は、散弾砲の一撃だった。
「次はスラグショットまともにいくわよ？」
「か、帰るわよ！？」
「味方を見殺しにして、どこにノコノコ帰るの？」
「――っ！」
フィアは顔を真っ赤にして怒鳴った。
「ああ言えばこう言う！あんた、ホントに可愛くないっ！」
「そりゃどうも♪」
美奈代は笑顔で言った。
「あんたの文句は褒め言葉にしか聞こえないから」
「帰ったら殴らせてもらうからね！」
「そんな頃にはいろいろ忘れてるわ。あんたへの恩義と一緒に」
「時間がないから、すぐかかる！騎体を散布界の外へ向けて移動させて！この鳥頭っ！」

「その程度？もっと言い返したら？」
「バカとブスが伝染るから、これ以上は無視！」
「なんですってぇ！？」
「風間中尉以上の美人なら喜んで聞いてあげるわよ！このドブスが！」
「ぐっ――――！」
「このブスブス！巻き添えになるな！？」
フィアは“白雷”とＤ－ＳＥＥＤがブースター全開で飛鼠達と間合いを取り始めたのを確認すると、電波妨害システムを作動させた。
「――――いけっ！」

ズガガカッ！
レシーバーに鼓膜が破れそうなノイズが走る。
モニターは全て砂嵐が走り、何もわからない。
コントロールが本当にイカれたかと思うほど、ＳＴＲシステムが動かない。
「ったく……冗談じゃないわよ！」
美奈代は言うことを聞かなくなったＳＴＲシステムに顔をしかめながら毒づいた。
コントロールはすでに牧野中尉に移っている。
美奈代が出来ることは、せいぜいがこうしてぼやくだけだ。
「これで飛鼠には妨害が効きません。なんてことになったら、どうするつもりよ！」

ズズンッ！

舌を噛みそうな衝撃が走る。“白雷”が後退を止めたのだ。
距離をとったせいで、モニターが次々と復活していく。

耳障りなノイズのかなり軽くなった。
「泉大尉」
騎体内通信ははっきりと聞き取れる。
「生きてます？」
「幸いにして」
「大変残念です」
「――は？」
「コントロールお返しします」
「あ、あのっ！？今の残念って何ですか！？」

ガンッ！
コクピットに、そんな音が響き渡った。

飛鼠達は、両膝をついた状態で動かない。
――チャンスだ。
美奈代は即座に袴子に言った。
「風間――散弾砲で始末しろ。飛鼠の装甲ならやれる」
「了解」
「フィア」
「無視！」
「美人のフィア様」
「無視って言った」
「……酒保でおごってあげる」
「何？」
「……」
「何か用？」
「あ、あんた……こ、ここまで現金だと思わなかったわ」
「うるさい。で？あんみつ一年分のお願いは何？」

「……っ。都築達の方は？」
「もう始末が始まってるわ」
フィアは言った。
「狙撃隊が擱座同然の飛鼠（ひそ）の始末始めている。っていうか、急ぎなさいっ！リブート本当にかかったら厄介なの、わかってるでしょう！？」
「すまんっ！」

ドンッ！

再起動（リブート）がかかる一歩手前で散弾砲のスラグショット弾が、最後の飛鼠（ひそ）の頭部を吹き飛ばした。
衝撃で、両膝をついた状態で上半身を立たせていた飛鼠（ひそ）が、前のめりに倒れた。
両膝をついた状態で並んで擱座する飛鼠（ひそ）達の後ろを歩きながらそうの後頭部めがけて散弾砲のトリガーを引くのは、正直、複雑な気分だった。
少なくとも、こういう行為を、美奈代は好きになれそうにはなかった。
「周辺に脅威なし。敵の掃討完了と判断」
牧野中尉が言う。
「こんなにあっさりと決まるなんて、便利なものですね」
「……そうですね」
美奈代は内心、何だか複雑だった。
「あのまま切り結んで勝ちを掴みたいっていうのは、騎士として間違いなんでしょうか」
「現実は理想と違いますよ」
苦笑しながら牧野中尉は言った。

「理想を押し通して現実から目を背けなかっただけ、褒めてあげます」
「都築達は？」
「あちらも終結ですね。狙撃隊も頑張ったようです」
ホウッ。
安堵のため息が漏れた。
「牧野中尉、都築達を救難隊の護衛につけるよう指示してください。救難隊前進」
「了解――――都築少尉騎、聞こえますか？」

●数時間後　“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム
「最後は派手な大立ち回りでケリかと思ったけど」
“鈴谷（すずや）”に収容された美奈代達に、後藤は言った。
「意外なダークホースが活躍してくれたな」
「どうも」
フィアは小さく頭を下げた。
「おかげで損害は最小限度に済んだからよしとしましょう」
後藤は指示棒の先で軽くおでこをかきながら、バインダーに挟まった書類を見た。
「戦況は――――まぁ、こっちの敗北だ」
敗北。
その言葉にも後藤が何を思うか。その表情から読みとることは出来ない。
「天裁システムは放棄。メサイア部隊は壊滅。残存部隊を収容出来ただけでも幸いとすべきだろう」
「……あの」
挙手の上で、美晴が訊ねた。
「英国艦隊の方は」
「艦隊の被害も甚大だよ」

後藤はわざとらしく肩をすくめた。
「被弾した輸送艦が1隻、ついさっき放棄された。2時間前に爆破処分された別の1隻を含めたら、艦隊は2隻を永遠に失ったわけだ」
「爆破処分？」
「輸送艦の機関部を切り離して、コンテナ部だけ爆破して中身を吹っ飛ばす。機関部に乗組員全員逃してね」
「じゃあ……無事に」
「いかなかった」
「……は？」
「中華帝国軍の砲撃の直撃で、機関部をかなりやられていてね。最後はどうしようもなくなって、脱出用のランチで生存者全員脱出した所で――――ドン」
「……」
「いやはや、艦に乗ってる時間が長かったせいか、フネが沈むってのは、聞くだけでヤなものがあるねぇ。他の艦もかなり長くドック入りするはずだと平野艦長が言っていたよ」
「テンペスト達も？」
後藤が“飲んでいいよ”とブリーフィングの前に渡してくれたスポーツドリンクに手をつけた者はほとんどいない。
都築でさえ、相変わらずふんぞり返りながら、左手でドリンク入りのチューブを弄んでいる。
「中破以下で回収された騎はない」
後藤は答えた。
「五体揃って戻った騎はほんの数騎。スクラップ同然で収容された騎の方が圧倒的だ」
「……」
「一応、英国艦隊のバッテン提督の名前で、お前達宛に救難支援に対する感謝と労いのメッセージが届いているけど――――読む？」
美奈代は無言で首を横に振った。
「――――ま。これほどの損害を被ってなお、英国がほしがった天裁

システムだけど」
問題はそこだ。
北米大陸を蹂躙しつつあった中華帝国軍を壊滅させたあのバケモノがどうなかったか。
無傷で中華帝国軍に奪還させたら、それこそ何のための戦いだったかわからなくなる。
「英国も思い切ったことしやがるよ」
「えっ？」
「――ま、することはわかっていたけど、ここまでとは思わなかったよ」
後藤は試すように、美奈代の顔を見た。
「わかる？」
「……」
美奈代は、眉をひそめて後藤の顔を見つめながら頭の中で後藤の言いたいことを考え、そして結論に行き着いた。
その顔は、ポカンとしていた。
「まさか」
「起爆は１１５０。あと――１０分だ」

●紫禁城
天裁システム奪還せり。

中華帝国にとって、それは吉報のはずだ。
事実、載賢の腰巾着ともいうべき参謀スタッフ達は一様に喜びの表情を浮かべ、この会議室に顔を揃えている。
「おめでとうございます。陛下」
「さすがですな！」
参謀の一人がそう口火を切ると、皆が媚び諂(へつら)いの口上を思いつく

ままに述べる。
しかし――
「……ふんっ」
載賢は顔をしかめたままだ。
天子の御気色（みけしき）が悪いと悟った参謀達は一様に互いに顔を見合い、そして黙ってしまった。
「紅」
「――はっ」
会議室の末席に座っていた銀髪をオールバックにした男が小さく頭を下げた。
「どう見る」
「派遣艦隊は全滅――天裁システムは使い物になりますまい」
「貴様もそう見るか」
「……残念ながら」
「あ……あの」
陸軍大将の階級章をつけた、太った将校が息も苦しそうに訊ねた。
「何のお話ですか？」
「――決まっている」
載賢はニヤリと笑った。
「今、天裁システム上空にいる、あの間抜け共の末路さ」
間抜け共。
天裁システム上空にいるとなれば、それは龍艦長以下の自国軍の艦隊のことだ。
「彼等が――全滅？」
「あの飛行艦隊に命じろ。さっさと撤退しろとな」
「さ、さすが！」
真っ青になりつつ、それでも太鼓を持とうという将校が席を立って手を叩いた。
「部下の危機を知り、窮地から救おうとは」
「――バカを言うな」

載賢はギョロリとした眼でその将校を睨み付けた。
「撤退しろと命じることだけが大切だ。逃げられなかったら、後はあいつらの責任だ」

●アメリカ　北米航空宇宙防衛司令部
「“システム”は英国の手にも余った……か」
英国とのホットラインを切ったベネット副大統領は、感慨深げにデスクの上でを手を組んだ。
「合衆国としてはよかった。そう言うべきだろうが」
「英国はシステムを放棄すると？」
ターナー補佐官に、ベネットは頷いた。
「ああ。中華帝国軍相手にかなり手ひどくやられたらしい。システムの基幹部を破壊した上で、撤退したとヒースから連絡があった。無論、手ひどい目にあったのは、我が国も同じだが」
「数次に渡る反攻戦により、合衆国に侵攻した中華帝国軍は壊滅的打撃を被っています。閣下」
ターナー補佐官が顔色一つ変えずに報告した。
「陸軍、海兵隊、そして空軍が残存する敵の掃討作戦を展開。来週の日曜までには、敵は消滅するでしょう」
「あのシステムはもう必要ない？」
「今後の世界を考えるならば必要でしょうが、地政学的にも、保有するリスクの方が高すぎます」
「……まぁ、そうだろうね」
ベネットはデスクの上に積まれた書類に目を落とした。
戦況報告だ。
「捕虜は殺していないだろうね」
「ございません。閣下」
ターナーは答えた。

「捕虜をとっていませんから」
「それは……戦時国際法違反ではないか？」
「前線兵士の報復行為を止められません。まして、民間の報復は」
「……そう、か」
顔をしかめたベネットは言った。
「大きな貸しをヒースにしたものだ」

●英国　ロンドン　ダウニング街１０番地
「……最悪だな」
モニターの向こうに映し出されているのは、衛星からのライブ映像。場所はチベット。
あのシステムを衛星のカメラは捉えている。
システムの周辺には中華帝国の飛行艦が数隻、浮いている。
システム内部に人が入り込んでいるのは間違いないだろう。
あれを世界に使われたら終わりだ。
そのための作戦だった。
だが、全ては失敗に終わった。
騎士や兵士達が無力だったとは思いたくない。
否、思えない。
相手が悪かった？
たかが中国人相手に使いたくない言葉だ。
「一体」
戦況報告をまとめた書類をデスクの上に放り投げたヒースは、革張りの椅子の背もたれにもたれかかった。
「何が悪かったというのだ」
「相手ですよ。閣下」
ボンド卿は言った。
「連中は魔族から技術を手に入れている。中国製のメサイアではなく、魔族製のメサイアだと思えば、納得も出来るでしょう」

「国家間の争いという点では、我々は中国人に負けたことになる」
「経済の次に？」
「――――そうなるな」
ヒースは憮然として頷いた。
「人の価値が低いだけで、世界の工場になったあの国に、またも負けることになる」
「市街地では中国製品を身につけていると敵国人扱いです。中国人だと分かればスパイ扱いで私刑。これでは黄色人種は下手に町を歩けますまい」
「我々の責任か？」
「まさか」
「なら、しばらくの我慢を願おう。マークス」
「はっ」
マークス外務英連邦大臣（作者注：我が国の外務大臣に相当）が答えた。
「これからの行為について、国外へどう説明する？」
「メモ書きからすべてを処分するよう徹底しております。本件に関して、我々がやったなどと、一言も漏らしませんし証拠も残しません」
マークスは言った。
「すべては閣下と軍からの要望通りです」
「中華帝国軍が仕組んだことだと？」
「軍と、ここにいる全員が黙っていれば、自ずからそうなります」
「安易すぎるとは思わないか？ボンド卿」
「あのシステムが」
ボンド卿は言った。
「破壊されることで人類の手を離れることに、異議を唱える国があると思いますか？まして、あの中華帝国絡みで」
「……レジー。紅茶をくれたまえ。これからの事は、それなりに覚悟がいる」

「起爆装置は作動しています。起爆まであと3分」

●中華帝国軍飛行艦隊旗艦“大連”艦橋

「撤退しろだと!?」

龍艦長は、北京から伝えられてきた意外な命令に目を丸くした。

「ふざけたことを!北京は寝ているのか!?」

「では」

「無視だ無視!」

龍艦長は、煩わしいと言わんばかりに、バタバタと手を左右に振った。

「システムを使えるようにすれば、北京も黙る!それで!?」

「あ、はい」

参謀の一人が慌ててメモに目を通した。

「システム地下倉庫にて、不審物が発見されました」

「だから、なんだそれは」

「不明。システムのコントロールルームに近い場所に設置されており、一部が壁にめり込む形でコンクリートで埋められています」

「本来、あったものか?」

「かもしれませんし、そうではないかも」

「はっきりしろ!」

「現時点では、発見されたとしか言い様がありません。さらなる調査が必要です」

「……調べろ」

「はっ」

●“鈴谷(すずや)”ブリーフィングルーム

「あと少しで“鈴谷(すずや)”はインド洋に出る」

後藤は言った。

「インド洋方面の中華帝国軍を回避しつつ、だ。お前らが本気で休めるのは、もう数日後。南シナ海突っ切って、懐かしのボルネオにたどり着くまでだ」
ウヘェ！
都築やさつきからそんな声が挙がる。
「特別手当は出るさ。いいねぇ」
「金いらねぇから寝たいんですけど」
「コクピットで仮眠とっていいよ？」
「いや、絶対、ベッドで」
「俺は畳だなぁ」
「そっちでもいいんですけどね」
「まあ、後少しで宗像の騎体も直る。泉は始末書連発で大変だろうけど、頑張ってね」
号泣する美奈代の前で、後藤が腕時計を見た。
「――そろそろだな」
「あの？隊長」
さつきが訊ねた。
「さっきから、何なんですか？あと何分って」
「モニター、見ていればわかるよ」
「へ？」
さつき達がマジマジと見つめるモニターの向こう。
人工衛星の映像。
映し出されているのは、ヒース達が見ているのと同じ映像。
つまり、システム上空からの映像だ。

「――あの？」
さつきが何かを言いかけた、次の瞬間。
映像の真ん中。丁度、建物が密集している場所の真ん中から、白い光の塊が生まれたかと思うと、飛行艦を巻き込んで――そして、全てを白く染め上げた。

天裁破壊作戦　第十四話

●天壇内部

「システムが吹き飛んだようですね」

ユギオは、テーブルを挟んで座るダユーに言った。

「あらま」

ダユーはとってつけたような返事をした。

「まだ数発、発射しただけですのに」

「もったいない？」

「そう思いません？」

ダユーはティーカップに口を付けた。

「天界のお茶も悪くないですけど」

「人類のも捨てがたい。そう思います」

「――それで？」

ダユーは訊ねた。

「何が起きたのです？」

「あのシステムに、人類が爆弾を仕掛けたのです」

「……ああ」

少し、視線を泳がせたダユーは、記憶の中に該当するものを見つけたらしい。

「あの、反応弾とかいう、プルトニウム反応兵器」

「よく知りませんけど。恐らくそれでしょう」

「あの中華帝国が？」

「国際世論はそう見なしていますが、中華帝国は否定しています」

「真実は？」

「イギリス……あのシステムを攻めた国ですが、それが仕掛けたと見るべきでしょう」

「それなのに、世論は何と？」

「万一の際の自爆装置が作動しただけ。イギリスは危機一髪で難を

逃れたんだとか」
「……単純ですこと」
「人間ですから」
「そうですわね――――それで？」
ダユーはユギオにニコリと微笑んだ。
「世間話のために、ここに来たわけじゃないでしょう？」
「半分はそうですが」
「あの国相手の商売は、今のところ、私がメインですからね」
「ええ」
ユギオはうんざり。という顔になった。
「私は前政権に肩入れすぎました。それに、戦争捕虜を“加工”して生体兵器化する技術というか、度胸を私は持ち合わせていませんので」
「ちょっと切り刻むだけですよ？それでも殿方？」
「チキン野郎とでも何とでも」
「フライド野郎」
「それはちょっと……意味不明です」

天裁システムの破壊に反応弾が使用されたことは、本来なら隠せたことだった。
たかがチベットという辺境での出来事にすぎない。
それに、天裁システムによる東南アジアに対する無差別攻撃は、魔族軍の仕業として人類の認識ができあがっていたのだ。
その驚異的な破壊力は、国際的なパワーバランスの面からすれば、一国が保有してよいレベルではない。
国際世論を刺激しないためにも、全てを闇の中へ消し去ることが、中英共に懸命な判断というべきだったのだ。
下手に公にすれば、反応弾の報復と、そのまた報復という、際限

なき破滅へとつながる道を突き進むことになりかねないことは明白だ。

報復の使用は、その報復を産むことは、為政者ならわかっていて当然。

だが――

わかっていない者達がいた。

載賢達だ。

彼は、天裁システムの存在は明確に否定した。

もし、それを明らかにすれば、東南アジアに対して使用した責任を、皇帝たる彼がとらなければならなくなる。

彼は、そのリスクと失われた兵器を天秤にかけた上で、収まらない腹の虫の矛先を英国に向けた。

反応弾が中華帝国国内において使用された。

得てして加害者は、自らが他人に与えた傷は都合良く忘れるが、被害者となれば狂ったような反応を示すものだ。

特に中国人のように鼻っ柱が強く、他人を軽んじる連中はそうなる。

中華帝国は、天裁システムで他国を灰燼に帰したことを棚に上げ、自国に反応弾を使用されたことを口実に、宣言後４８時間以内の英国への反応弾報復使用を宣言した。

単なる恫喝でないことは、ミサイル運用部隊である第二砲兵隊に、

核ミサイルへの反応弾弾頭搭載を命じたことで明らかだった。

王政党主導下でも実施されなかった核ミサイルの使用。

それを載賢は命じたのだ。

力こそが全てと信じる載賢は、核という明白にして圧倒的な破壊力を目の前に突きつけられれば、英国は屈すると本気で思ったのだ。

それが載賢という人物の政治家としての限界を露呈させた。

王政党が東南アジア以外において反応弾を使用しなかった理由。

それを載賢が理解していたら、決してこんな手段はとらなかったろう。

載賢の中には、東南アジアへの反応弾使用という実績しかない。

東南アジアで使用したのだから、欧米へ使用しても問題はないだろう。

それが載賢の理屈だ。

そんな理屈を英断と称える者はいても、止める者がいなかったのが、載賢の不幸というべきだと思う。

載賢には、相手からの報復という発想がなかった。

載賢には、欧米が核ミサイルを撃ち込んでこないという確信があった。

それは何故か？

載賢にとって、ミサイルを打ち落としてくれるのは自国の信頼に問題のある迎撃ミサイルではない。

欧米の企業が中華帝国各地に建設した工場や施設であり、投資をするに足りる１０億人の市場だ。

投資をフイにしたくなければ、攻撃さえしてこないだろう。

１０億人を超える我が国の市場は、各国企業にとっても魅力的だ。

だから、そんな市場を抱える我が国を敵に回すはずがない。

我が国がどれ程の専横を働いても、市場欲しさに黙る。

載賢の強気の姿勢は、そんな判断に裏付けられていた。

はっきり言う。

それまでの王政党指導下での戦争運用でさえ、ここまで楽観的ではなかった。

“この戦争において、王政党と軍部が打った最大のバクチは、戦争を開始したことではない。

東南アジア方面への限定的反応弾の使用だ。

当初から奇襲的な電撃戦により、一気に東南アジア各国を制圧し、その事実を国際世論に認めさせることだけが、我が国にとって唯一の勝利に通じる道であることを、当時の首脳部は、皆がわかっていた。

反応弾は、その道を開く、たった一つの“鍵”だった”

王政党幹部として、この戦争に存命する限り最後まで関与したある人物の回顧録は、そうはっきり明記している。

戦後、彼の記したその著書から引用しよう。

“反応弾の使用は江書記長が強く軍部に命じたことだ。

反応弾の残虐性は、さすがに皆がわかっていたから、党幹部からも異論は出た。

肝心の軍部でさえ、無抵抗の女子供まで巻き込む破壊を口実に反対した。

江書記長は彼等の異論を封じた。
彼等軍人達が、何故、反応弾の使用を拒絶するか、その理由を見抜いてたのだ。

――（中略）――

「軍部が何故、反応弾の使用に消極的か、君にはわかるかね？」

開戦と同時に反応弾の大量使用を主張する一派と連日の如く激論が繰り返され、いい加減、皆が疲れ始めていたそんな頃、私は江書記長に個人的にそう訊ねられた。
私は軍部の主張を額面通りに受け止めていたので、軍人としてのモラルだろうと、そう答えた。

「モラル？」
江書記長は、見下したように鼻で笑った。
私は、書記長の機嫌を損ねたと青くなって背筋を伸ばした。
「君。なら、軍部は東南アジアに侵攻に賛成している理由を、どう考えているんだね？」

――それは。
私は、党幹部としての模範解答を答えたつもりだ。
――祖国の繁栄のためです。

「君が真面目で」
ついに笑い出した江書記長。
私はきょとんとした顔で彼を見つめるしかなかった。
「忠実な人物であることはわかった」

――褒め言葉ですか？

「当然。といいたいが、君のために助言させてもらおう。物事の裏に気をつけたまえ」

――裏？

「軍部の奴らが反応弾の使用を拒むのは、君の言うようなきれい事じゃない」

――では？

「都市に攻め込んだ時に手に出来るエモノが、放射能でフイになることを嫌がっているのさ」

――エモノとは？

「わかるだろう？都市にある全て。宝石だろうが金だろうが」

江書記長は、楽しげに言った。

「――女だろうが」

――それでは、党は反応弾の使用を？

「実施する。

軍部は略奪しか考えていない。

奴らは政治を考えていない。

いいかね？

反応弾の使用は、軍事的には敵国の政府機能を消滅させ、占領を容易にする。

そして、政治的にはまたとないデモンストレーションなのだ。

おいおい。

デモンストレーションの意味がわからないわけじゃないだろう？
そう。
反応弾の東南アジアへの使用は、欧米に対するまたとない示威行動となるからだ。
私が軍部の恨みを買うことを覚悟の上で、強硬に反応弾使用を押し進めるのは、それがあるからだ。
略奪にしか脳のない馬鹿な軍部が持ち合わせていないもの。

つまり――国際政治だ。

使用は、国際世論を敵に回す？
そうだろうな。
愚昧なる大衆は感情でしか世界を見ることが出来ないからな。
そんな連中が作り上げるのが、国際世論というヤツだ。
それは確かに敵にまわるだろう。
だが、我々政治家が作る国際政治は少なくとも敵にならない。
我々が神経を使うべきは世論じゃない、政治だ。
考えてみろ。
反応弾の使用は、明確の破壊という明確な意志の現れだ。
邪魔立てする者は女子供でも容赦しないという、意志。
その破壊という意志を見せつけられて、君が欧米の首脳だったらどうする？

抗議する？

正気か？

敵対行動とみなされれば、その業火で次に焼き殺されるのは自分達だぞ？

……わかってきたようだな。

国を守るためには、黙るのだ。

報復しろなんて叫ぶ者が国内にいても、まともに受け取る必要はない。

世論がどう叫ぼうと、その声は反応弾を打ち落としてはくれない。

打ち落とすのはミサイルだからな。ハハッ！

世論に押された馬鹿な首脳が出てきたら？

そいつめがけて囁いてやるだけさ。

喰らいたいのか？とな。

それでいい。

少なくとも、我が国が東南アジアを制圧した頃まで連中は黙るしかない。

……何？

その頃には、反応弾の報復を本気で叫ぶヤツも出てくるだろうって？

考えてみたまえ。

連中が我が国に一発撃ち込んだといって、それがどうした？

その一発で１０億を超える我が国の国民を全て殺せるというなら、やってみるがいい！

全てを殺される前に、お前達を殺してやる！

戦略反応弾の放射能汚染範囲がどれ程広いかわかってるんだろうな！

……。

……。

……すまん。

君に怒鳴ってもしかたないが、とにかく、そういうことだ。

軍部の求めるご褒美を心配するあまり、大局の視点を見失ってはならないぞ？」

そう。
江書記長は、国際政治を黙らせるための見せ札として、反応弾を使うといっているのだ。
しかし――

――（中略）――

「……何？」
江書記長は、私の意見には呆れた。という顔をした。

「君は、私の言葉を聞いていなかったのか？
……聞いていた？
なら、どうしてここで“欧米に撃ち込んだ方がいいのでは？”という言葉が出てくる？
いいか？
東南アジアなら、反対抵抗勢力は、武力でどうとでも弾圧出来る。
反対勢力は殺せばいい。
欧米は、その理屈が通らん。
脅しにならんのだ。
もし撃ち込んだら何となるか？
決まっている」

江書記長は楽しげなまでの顔で、こう言い切った。

「我々中国人を殺してくださいって……そういうことだ」

（以上、元王政党幹部・王文拓著：『私の王政党回顧録　第二巻　黄色戦争秘録』より抜粋）

国際政治。

国家間のパワーゲーム。

載賢には、この視点が完全に欠けていた。

自分の意見を押し通すことが当然の中で生きてきた彼にとって、自分の言葉こそが世論で、その行動こそが政治なのだ。

それがいかに間違いであったか。

載賢がそれを思い知らされたのが、宣言からわずか数時間後のことだ。

米英、そして静観すると見られていたドイツ、フランスといった欧米の反応弾保有国の議会が軒並み報復使用を承認。

各国軍は核ミサイルの針路を中華帝国主要都市にむけた。

並行して行われたのが、英国に亡命した西姫とその一派を、中華帝国の亡命政権として国際社会が承認すべきだという動きだ。

西姫達の掲げる主張が国際世論と、世論によって形成される国際政治を動かした。

中華帝国のような一党独裁政権国家ならば、国際政治と世論は分離できるが、選挙によって政治が成立する他国ではそうはいかない。

世論は西姫達を支持した。

その理由は？

西姫達が求めたものだ。

領土ではない。

金でもない。

ただ一つ。

数十年に渡る戦争の後、世界中の誰もが望み続けたもの。
平和だ。

中華帝国亡命政権は、領土的な野心は一切放棄する。
ただ、麗しき悠久の大地たる祖国にて、揺るがなき安寧の日々を求める。

たどたどしく、しかし、精一杯に願いを訴える西姫のいじらしいほどの姿勢に、世論はうたれた格好になった。
国連は、英国提案の緊急動議として亡命政権の正統性、及び、以降、国連は皇帝を詐称する載賢等の政権を中華帝国の正統なる政権とは認めないとする議決を賛成多数で決議。
載賢達は国際社会では“簒奪政権”と呼ばれるようなる。

しかし。
それで載賢達が青くなったかと聞かれれば、そんなことはない。
国際社会や世論というものに動じる神経は持ち合わせていない。
唯我独尊の彼等は、東南アジアと北米大陸に対して侵攻を継続中。

アメリカ軍は自国軍隊の2倍近い兵力を繰り出され、他国に関与している余裕は全くない。

ＥＵは経済的な問題――主に中華帝国からの経済的圧力――により、足並みは乱れ続けている。

対魔族軍戦闘のために日本に派遣した兵力も、現在では補給線が断たれたに等しいため、行動が出来ない有様だ。
日本政府が国際社会で魔族軍との戦いに協力を求めても、すでに欧米にとって、魔族軍との戦闘は過去の悪夢に近い。

世論は、極東の島国、日本という国で再び起きた悪夢に関わろうとしない。
極東の島国が滅んだ所で、欧米にとってはどうでもいいことなのだ。
問題は、中華帝国と自国の経済だけ。
現状。
人類はこの状態だ。

●“鈴谷（すずや）”甲板
「俺達ゃ、何のために戦ったんだ」
そんなぼやきがあちこちから聞こえてくる。
結局、“鈴谷（すずや）”が日本に戻ることが出来たのは、天裁システム消滅から2週間も後のことだった。
魔族軍との戦線は膠着状態のまま。
とはいえ、領土のかなりを失った現状、美奈代達が戻った後も、日本はまだ混乱の中にいた。

海も同様で、佐世保軍港が海軍艦艇で一杯という理由で、民間船と一緒に長崎港にようやく入れる有様だ。
「軍艦に対してこの扱いはひどすぎる！」と美夜は息巻いたが、３００メートルを超える“鈴谷（すずや）”の規格に適合した桟橋は、九州には佐世保以外では長崎港しかない。と高木副長に説得されてやっと納得したという。
……まぁ、どうでもいい話だが、とにかく都築達は日本の土を踏んだ。
踏めなかった不運な者はたった一人。
美奈代だった。

皆が上陸許可を受けたというのに、それを甲板の上から見送った美奈代は、情けなさと悔しさで本気で泣いた。

理由は一つ。

始末書だ。

宗像騎の損傷とフィアの出撃に関して、部隊長として始末書を提出したら、懲罰の規定数に達してしまい、上陸が取り消しになったのだ。

「あーあ。土が踏みたい」

美奈代はぼやきながらハンガーに向かった。

牧野中尉達も上陸しているため、ハンガー内のメサイア達は一騎たりとも動かない。

重力管制が切られているハンガー内は整備活動も止まっているため、普段の喧噪が信じられない位静かだ。

「よう、嬢ちゃん」

美奈代が振り返ると、坂城整備班長が立っていた。

服装は私服だ。

後ろに並ぶ、部下らしい若い整備兵達も同じような格好をしていた。

これから上陸するのだろうと、容易に想像がついた。

「上陸しないのか？」

「それが……」

「おいおい」

あきれ顔で坂城は肩をすくめた。

「まさか、上陸止めじゃねぇだろうな」

「……実は」

美奈代は消え入りそうな声でそう言うと、小さく頷いた。

「もったいねぇけど、どうせ外に出てもロクなもんはねぇからなぁ」

坂城も大凡の所は察したらしい。

「そうなんですか？」

「おうよ。この物資欠乏の折りだ。行楽地や食い物屋は軒並み閉店。

開いていても、高くて手が出ねえ。南米からのルートにメドが立ったらしいが、アメリカさんもあの有様だ。まだしばらくは物資欠乏が続くだろう。ああ、そうそう！」

「はい？」

「悪いが、紅葉が来るらしい。相手してやってくれ」

「あの子、いつ降りたんでしたっけ？」

「フィリピンあたりで迎えが来て、フェルミ博士と一緒に降りたんだ。何でも、予算にメドがたったとか何とか」

「……へえ？」

「もしかしたら、嬢ちゃんがテストパイロットかもしれないぜ？」

「まさか！」

「そこまでいかないわ」

数時間後。

紅葉は言った。

「“白雷（はくらい）”を改修するだけよ」

「改修？」

「稼働時間はもうC整備の規定に達しているの。2週間くらいかかるから、その間にそれぞれのパーソナルデータにあわせて、チューンするの」

「……はぁ」

美奈代は意味がわからず首を傾げた。

「お願いします」

「意味分かってないでしょう？」

「……悪くなるのではないのでしょう？」

「当たり前でしょ？今回、MC（メサイア・コントローラー）達からの要請もあって、いろいろやるけど……」

書類をめくっていた紅葉が、その手を止めた。

「泉大尉騎は、他と共通の関節パーツの変更から始まって……った

く、一番手間かかるんだから」
「私が？」
美奈代は思わず、自分を指さした。
「当たり前でしょ？」
ペンッ。
紅葉は背伸びして美奈代の頭をバインダーで軽く叩いた。
「ったく、戦果が派手な分、騎体にかかってる負担が一番ヒドいんだから」
「えっ！？」
「反応がお姫様並にするどいっていうか、アンタ、あのお姫様と一緒に、この騎でよくコンビ組めるわね。言っちゃ悪いけど」
「あ、あの？」
騎体の負担と風間袴子がどうつながるのか。
美奈代は全く理解が出来ない。
「それは――どういう？」
「ったく、アンタが“あの力”を持っていたら、Ｄ－ＳＥＥＤがもう一騎必要な所だわ」
「ですから」
「何？あんた、いつからそこにいたの？」
「会話が始まるずっと前からです」
「あれ、そうだっけ？」
「……大丈夫ですか？」
「すっとぼけるのは得意だから大丈夫よ」
「……とにかく、私の騎の何を変更するんですか？」
「フレーム以外、全部っていう位」
紅葉はうんざり。という顔になった。
「関節部は最上級グレード、冷却システム強化。幸い、フレームが頑丈だし拡張性もあるから出来るようなものの、これがアリアあたりだったら、あんたをデチューンするか、異動させて、もっと上の騎体に乗せるべき所よ」

「わ、私」
美奈代は泣きそうな顔で訊ねた。
「そんなに騎体の扱いが下手というか、無茶してるんですか？」
「無茶はさせている――――確かにね」
紅葉は真顔になって答えた。
「騎体がそろそろ、アンタに耐えられなくなりつつある。整備記録からもう明白」
「……そ、そんな」
「整備もよくやってると思うけど……物事には限界があるわ」
「……はい」
「……」
「……」
「ねぇ」
「……は？」
「あんた、何かとんでもない勘違いしてない？」
「え？」
「あんたまさか、自分の操縦が下手で、“白雷（はくらい）”が壊れそうになってるなんて、とんでもないこと考えてないでしょうね」
「ち、違うんですか？」
「……」
ハァッ。
紅葉は深くため息をついた。
「ここに誰もいなかったことを感謝しなさい――――ベクトルが逆向いてるわよ！このボケナスっ！」
「ぼ、ボケ？」
「何考えてるのよ！女性メサイア乗りトップエースでしょう？しっかりなさいっ！」
「えっ？」
「あんたの操縦はエッジが効き過ぎているの。他の騎士が包丁なら、あんたはカミソリ並なのよ！とにかく動きが細かすぎてるっていう

か、騎体性能を１００％以上に引き出しちゃうおかげで、従来型のＳＴＲシステムでは、あんたの動きのトレース処理が追いつかないのよ。

ログ調べたけど、見てた私がぞっとしたわ」

「……そんなに？」

「牧野中尉と“さくら”に死ぬほど感謝しなさい？二人がエラー無視する技術っていうか、気にしない神経の図太さ持ってるおかげよ？並のＭＣ（メサイア・コントローラー）と精霊体だったら、ＳＴＲシステムの動作エラーが原因で、１００回は死んでいるはずだから」

「な、何だか……それってつまり」

美奈代は“信じられない”という顔で訊ねた。

「あの二人、エラーをエラーとして認識しないまま、騎体をコントロールしていたと聞こえますけど」

「その通りよ。エラー補正の記録がないから、間違いないわ」

「それはそれで……スゴいと思いますけど」

「その図太さが、あんたの強さの秘密だった訳だけど」

「……」

「そんな偶然だけでこれから先も、生き残っていける自信、ある？」

「……」

美奈代は無言で首を横に振った。

「でしょう？だから、騎体をあんたに追いつかせるの」

「騎体を……私に？」

「そう！」

紅葉は頷いた。

「沼津での２５騎斬りみたいな時に備えて、関節部の冷却装置はＤ－ＳＥＥＤや皇龍用向けのを用意してきた。他、騎体パーツのかなりがＤ－ＳＥＥＤと共通になる」

「……はぁ」

「関節は、いろいろ言われてムカついたから放っておいたんだけど、さすがにそろそろ悪いから直してあげることにしたわ。――まぁ、

アンタの場合、操縦システムがメインだけど」
「他のみんなの騎も……その、Ｄ－ＳＥＥＤと部品の共有化を？」
「関節はね。他は必要ないわ。冷却装置までを共有化させるのはアンタの騎だけ」
「それほどの改修が許されるなんて、騎体と私の相性の問題以外に、何かあるんですか？」
「Ｄ－ＳＥＥＤとパートナーを組んで戦うケースがこれから増えるのは、あなたでしょうから、騎体性能があまりに開いたままで放置するのは危険なのよ。損はないことよ？」
「生き残るために必要なら、お願いするだけです」
「そう♪」
紅葉は満足げに頷いた。
「これ、改修騎の規格データ。明日からの部品組み付けの準備に入るから、これで失礼するけど、せめて書類にだけは目を通しておいてね？」
美奈代は受け取ったバインダーの一枚目を言われた通りに読んだ。
騎体名称：ＭＩＪβ－６０５ＩＺＳＰ白雷改ＩＺＵＭＩ－ＳＰ
「ああ、そうそう！」
紅葉はくるっときびすを返した。
「コクピットの後ろに、銃殺用の機関銃とか、拷問装置とか、聞くだけで物騒な代物をつけてくれって牧野中尉から頼まれているけど、どうする？」
「つけなくて結構ですっ！指導バーも外しておいてくださいね！？」
声をかけて紅葉を見送りつつ、美奈代は書類を何度も見た。
ＭＩＪβ－６０５ＩＺＳＰ
白雷改ＩＺＵＭＩ－ＳＰ

泉スペシャル。
自分向けにセッティングされた特別騎。

それが今、自分に与えられようとしている。
何だかよくわからないけど、スペシャルパーツ満載らしい。
今の“白雷（はくらい）”に不満はないが、それでも自分の専用騎となれば話は別だ。
美奈代は思わず書類を抱きしめたくなった。
今までの苦労がみんな救われたような気がする。
始末書も、上陸止めも、みんなどうでもいい。
自分専用騎が与えられるという名誉の前には、些末なことだ。

美奈代は満足げに、もう一度、書類を見た。

「……ん？」

そして気づいた。

書類の下に書かれていた“警告”の下に書かれた中の一番上の一文。

特別パーツ（詳細は別紙リスト参照のこと）は全て泉大尉への貸与扱いとする。
同パーツを破損するなど、修復及び交換が必要な場合、その費用の一部として泉大尉の給与から一定額を差し引くものとする。

「……え？」

美奈代は、何度も目をこすってその一文を読んだ。

つまり、これからは、騎体を壊したら給料が減る。
そういうことだ。

戦局は厳しくなるだろう。

その中で、騎体を無傷で済ませられる自信はない。

戦って傷つくのは騎体に体に心にお財布……。

あんまりだ。

冗談抜きであんまりすぎる。

「……私」

美奈代は本気で思った。

「転属願い……出そうかな」

魔界

魔界を統べる魔帝の居城。

関東が丸ごと入ってまだ余る程の巨大な城。

その謁見の間で、退出するガムロ達を送り出したのは、魔界の主要人物達。

毅然とした態度をとっているが、ガムロ達が内心で強く失望していることは、その身がまとう空気でわかる。

そのガムロ達に恭しく頭を垂れ、彼らの退出を確認した衛兵達によって通路に通じる巨大なドアがきしみながら閉められた。

送り出した方も、憔悴した顔をしている。

あちこちで小さなため息が漏れた。

それは、安堵であり失望であり、様々な感情が入り交じったため息だった。

「――宰相」

彼らより数段高い場所に据え置かれた玉座に座る女性――魔界女帝クイーン・グロリアが、腹臣の一人であるグゼイナウ宰相に言った。

声楽家のような、静かな威厳のある美しい声が謁見の間に響き渡る。

「もう――どうしようもないのでしょうか」

その声もまた、疲れ切っていた。

「あの弓状列島は、私と天帝エト陛下共通の、古き良き友たる王と、その妻が治める国です」

「それを知った途端、ヴォルトモード卿討伐軍の編成を命じられ、臣めは青くなりました」

グゼイナウは小太りの体を揺すらせ、トレードマークである大きな髭を揺すらせた。

「陛下も未だお若いというか、激情をお持ちというか」
「からかわないで下さい」
クイーン・グロリアは頬を染め、抗議した。
「それを認めると、ティアナを叱れなくなります」
ふと気づいたことがあったクイーン・グロリアは、イル王に訊ねた。
「あなた？ティアナは？」
「また人間界に行こうとしたから、地下迷宮に放り込んだよ」
イル王は肩をすくめて見せた。
二人が語るのは、娘である魔界の王女ティアナ・ロイズール・トランシヴェールのことだ。
「この城の地下迷宮。その一番奥だ。いくらあの子でも、出てくるには半年はかかるだろう」
「半年――十分ですね。こんな時に人間界で暴れられては、本気でお嫁のもらい手がなくなります。宰相、世論はどう見ています？」
「議会からまで突き上げられています」
宰相以下、閣僚達が顔をしかめた。
「世論はヴォルトモード卿支持でございます。何故、魔界は卿に公的に支援を行わないのかと……何しろ、魔界は先の戦いで天界に譲歩して――いえ」
グゼイナウは首を横に振った。
「天帝との会談において、相手の心証を損ねることで事態の悪化を怖れた先々帝の失言により、ヴォルトモード軍を見殺しにせざるを得なかった苦い過去があります」
「……魔界の民は」
その跡をとるクイーン・グロリアには、グゼイナウのその言葉が痛い。
ただ、間違ったことは言っていない。
「その件で帝室を許していないでしょうね」
「……人間ならいざ知らず、我ら魔族にとって三千年は長いようで

短いですからな。
肉親や子供があの戦いに駆り出され、死んでいったという話は、人間界の騒ぎ以降、連日の如く世論を騒がせております」
「……何のために死んでいったのか」
クイーン・グロリアの顔が憂鬱に染まる。
「左様。
自らの大切な存在が、一体、何のために死んでいったのか。
その意味を知りたい。
もしそれが、人類絶滅による人間界の自然回復だというなら、ヴォルトモード卿はまさにその“意味”を実現しようとしている正義の執行者になります」
「……」
「不幸中の幸いは」
グゼイナウは髭をしごきながら言った。
「未だヴォルトモード卿が発見に至っていないこと。さすがに天帝軍も、その情報は漏らさないですな」
「本当に、魔族軍にも情報はないのですか？」
「あるにはありましたよ？」
グゼイナウはこともなげに言った。
「……無論、ガムロ卿達にも教えていません」
「何故ですか」
「教える価値がないからです」
「？」
「ガムロ卿からの報告では、ヴォルトモード卿の封印を行ったのはイツミだと」
「……イツミ殿……ですか」
クイーン・グロリアの顔がしかめ面になる。
「お会いして、いい思い出がありません」
「そういう性格ですからな。しかも、この事態に至って本人の所在を天帝軍ですら把握していないそうで」

「確かなのですか？」
「外務司（がいむのつかさ）からの公式な問い合わせに対する返答です。天帝軍が、むこうの外務へ虚偽報告していない限りは信じられるソースです。むしろ相手がイツミなら」
「……」
思案げなクイーン・グロリアと、その夫イルの顔をちらりと見たグゼイナウは言った。
「――接触するルートは、陛下達の方がお持ちかと」
「……」
「話しを戻します。ガムロ卿の報告の限りでは、ヴォルトモード卿の封印にイツミが個人的細工を施し、身内さえも騙していずこかへヴォルトモード卿の身柄を転移。封印したものと」
「それは事実か？」
イルが訊ねた。
「あっさりバレているじゃないか」
「そこが難しいところなのです」
グゼイナウも唸りながら首を傾げた。
「それがイツミの意図的な所なのか、それとも不可避のことなのか」
「そう思わせてしまうのが、イツミ殿の恐ろしいところです」
クイーン・グロリアは言った。
「……グゼイナウ。せめてあの弓状列島からガムロ達を引き上げさせることは出来ないのですか？」
「連中を突き動かすものは、忠誠心でも大義でもありません。最早意地の問題でございますよ――陛下」
グセイナウ宰相は、まるで孫を諭すような口調で言った。
「あの敗将共が求めているのは、金でも地位でもなく、単なる意地でございます」
「――意地？」
「はい。意地でございます」
「どういう意味です？」

「自らの戦いの意味を失いたくない――失わぬようにするためには、意地を張り通さねばならない。自らの選択に間違いはないのだと」

「……男の意地、というものですか？」

クイーン・グロリアが脇に控えた夫、イル王の顔を盗み見た。

イル王は無言で頷いた。

「……グゼイナウ」

「はっ」

「政府としての方針は？」

「まず」

グゼイナウは、脇に控えていた外交大臣に視線を送った。

魔界外交大臣シェラス卿が恭しく頭を垂れ、言った。

「我々にとって最も懸念すべき天界についてです。

天界からは非公式ながら、魔族軍の地上への派遣を危惧する声明を受けています。

天界にも、昨今の地上における自然環境の破壊に心を痛め、ヴォルトモード卿達を英雄と見る向きが多いそうで……むしろヴォルトモード卿に対する支援を公然と叫ぶ勢力が力を増しつつあり、政府として対応に苦慮しているようです。

もし、魔族軍が動けば、神族軍も派遣すべしとなって」

「神族・魔族連合軍対人間？」

クイーン・グロリアは、笑おうとして出来なかった。

「何の冗談です？それは」

「全く、その通りでございます。陛下」

グゼイナウは頷いた。

「悪い冗談にもなりません。三千年前と全く逆なのでございます。こちらが公に支援すれば、天界も動く。共通する目的は人類絶滅。ヴォルトモード卿を止められません」

「……」

「さらにエスカレートすれば――もし、人類絶滅を実現としたと

しても、その後の問題があります」
「……人間界領有問題」
「はい」
外交大臣は顔を強ばらせ、頷いた。
「互いに人類という緩衝剤があったからこそ、公にしなかっただけで、人間界がどちらの領有に属するか、その決着は不可避でございます。もし、人類絶滅が実現したとして、次は三千年前を上回る全面戦争の覚悟が必要です」
外交大臣は、一息にそこまで言うと、まるで止めの如き口調で言葉をまとめた。
「――エト、フィアンナ両陛下と」
「私は！」
クイーン・グロリアは毅然と言い放った。
「私は――信仁（のぶひと）やエトと戦うつもりは毛頭ありません！」
顔を真っ赤にして立ち上がったクイーン・グロリアの体からは、息が止まりそうな程の怒気が放たれる。
かつて“死の舞手”の異名をとった剣術使いとしての気迫を失っていない証拠だ。
「彼らはかけがいのない私の友です！私達は――」
「諸事、心得てございます陛下」
グゼイナウは答えた。
「臣め等も、魔界の安寧を最優先と心得ております」
「……どうするのです」
「公的には支援を行いません。ただし」
「？」
「それはあくまで公的なもの。非公式なレベルとして、個人の支援までは止められません。個人の意志で義勇軍に加わるなり、経済支援をするなり、そこまでは天界側も止めることが出来ないことは、既に次官級会談で確認済みでございます」
「臣民各個人の判断に委ねると？」

「はい」
グゼイナウは少しだけ口元を歪め、頷いた。
「臣民の独断なれば、帝室はいかなる非難を浴びる言われもございません。そして、ヴォルトモード卿は魔界の支援を受ける」
「……イル？」
深いため息と共に、クイーン・グロリアは夫に言った――――というか、命じた。
「ティアナを絶対に迷宮から出してはいけません。いいですね？」
「はいはい――――ところで宰相」
イル王は軽い口調で、状況を楽しむように訊ねた。
「個人で誰か動いているのか？」
「……魔界の名士リストをお持ちしましょうか？」

鬼龍院寧々

東南アジアは欧州の草刈り場と化しつつあった。
あのアフリカでの戦いで“新領土”を得ることが出来なかった中小国が血眼になって軍を送り込み、占領地を自国の国土と言い張って譲らない。
愚かな戦いと言いたいが、美奈代達にはその発言権さえない。

“鈴谷（すずや）”は既に母港である葉月軍港へ戻りつつあった。
日本に戻って、海外へ戻され、人使いが荒いと、皆がグチをこぼす中、美奈代達は航海予定上、最後の朝食を食堂で取っていた。
葉月入港は午前１０時の予定。
皆の顔に、それでも安堵の色が浮かぶ午前７時３６分――

ズズンッ！！

突然、艦が激しく揺れたかと思うと、重い空気の塊のような音が艦を突き抜けていった。
テーブルにあったカップや調味料が一斉に吹き飛ばされ、椅子に座っていた乗組員は一斉に床に放り出された。
「な、何だ！？」
テーブルにしがみついて転倒だけは避けた美奈代は、席を立った。
「被弾か！？」
美奈代はすぐに壁に備え付けられた艦内通信の受話器をとった。
「艦橋？――泉大尉です。今の、何ですか！？」

「さっきの衝撃の件だけどね？」
ブリーフィングルームで、後藤は何でもない。という顔で言った。
「あれ、昨晩、魔族軍が遂にガストラフェテスを帝国めがけてぶっ放したらしいわ」
ガストラフェテス。
あの川中島で美奈代達が潰した移動砲というべき大型妖魔達だ。
「ど、どこにですか！？」
「佐渡島だよ」
「佐渡島？」
「すでにあの飛島が上に乗っかってるおかげで、被害の程はわからないが、無事ではないだろう」
「……」
「あの島を佐渡島に設置するための土木工事の一環てトコかな」
まぁ、どうでもいいさ。
後藤は書類を手にした。
佐渡島奪還は、俺達の仕事じゃないしね。
「後藤隊長。反攻作戦はないのですか？」
宗像の問いに、
「まだ早いね。ただでさえ少ない兵力を思い切って賭けるにゃ分が悪い。失敗すれば俺達ゃ終わりだ」
愚策ってヤツさ。と、後藤は楽しげに笑った。
「ま、今回は上層部（おかみ）もいろいろやってくれたよ。俺達独立駆逐小隊は中隊へ格上げ。人事異動があるから聞いておいて」
後藤は書類を読み上げた。
「〇月凸凹日日付変更をもって、独立駆逐小隊を独立駆逐中隊に改編する。
中隊長はオレな。

前線指揮官兼第一小隊長は泉、副官は宗像。あと風間。
第二小隊長に柏。柏の下に早瀬、柏、山崎、都築。
制圧兼狙撃担当に小清水と平野、それから新入りが一人」
「ちょっと待ってください」
美奈代が驚いた顔で席を立った。
「わ、私が前線指揮官!?」
「他に誰がいるの」
「そりゃ――痛ぁぁぁぁっっ！」
とっさに、横にいた宗像を指さそうとしたが、その指は宗像自身によって乱暴にねじ曲げられた。
「泉なら大丈夫だろう」
「自信満々で言うなっ！指っ！指がグキッっていった！」
「突き指でもしたのか？まったく、粗忽者が」
「やっておいて！」
「黙らないとチューするぞ」
「黙ります」
「……そんなに嫌か？傷つくぞ」
「だから！」
「目を閉じろ。黙ってないからチューしてやる」
「その前に医務室へ行かせてくれ！」

「……あの」
二人のやりとりを後目に、山崎が手をあげた。
「後藤隊長？さっきから何かメモをされているようですが」

「これ？」
後藤は手にしていたファイルをチラリと持ち上げて見せた。
「お前らのボーナス査定表」

「……」

「……」

「お前ら、人生初めてのボーナス、ゼロにされたくなかったら、ちょっとは俺の言うこと聞けや」

「はいっ！」

「それで？何だっけ？新入りの話か。やっと一人回してもらえたんだ。苦労したんだよ？――――何、うれしくない？」

「兵力が増えるのは心強いですけど」

「あのなぁ……泉」

後藤は諭すような、哀れむような口調で言った。

「ご主人様待ってるワンちゃんじゃないんだからさぁ」

「……はぁ」

「二宮さんはもどって来ない。第一、あの人にとっては、あっちの方が本当のご主人様なんだから」

「わかってますけど……」

「とにかく」

後藤はもうこれ以上、議論しない。という口調で言った。

「俺達はこれまでの戦果が評価されて、独立した行動権限を持つ中隊へ格上げになったわけだ」

「でも、数少なくありませんか？」

美晴が訊ねた。

「前衛が１０騎いませんよ？」

「これ以上増えたら泉が指揮出来ないでしょ？“白雷（はくらい）”っていう特殊騎運用している以上、新入り一人が限界だよ」

「……騎体、変えてもらっても」

「おいおい。勘弁してくれ。っていうか、今更、“征龍（せいりゅう）”に戻れるの？」

「……ううっ。そう言われると自信が」

「無理だろうねぇ……とりあえず、現状に甘んじろや。それに今晩は部隊編成とお前さん達の昇任式典もあるんだ。景気よくいけや」
後藤は言った。
「自分達が周囲からどういう眼で見られているか、少しは知っておくいい機会だぜ？」

その夜、美奈代達は戦闘服ではなく、きちんとした制服――第一種軍装に袖を通した。
スカートをはいたのが、ものすごく久しぶりに思えた。
高カロリーで知られるパイロット用のレーションに慣れたウェストが何より心配だったが、何とかなった。
それが一番嬉しかった。
……少しキツいけど。

そんな美奈代の前で――

「おめでとう」
「っていうか、あんた達もでしょ？」
皆が信じられないという顔で互いの胸を見合う。
そこに輝くのは十字章。
勲章だ。
「だけどさぁ」
美晴の胸のサイズに改めて気づき、女としての敗北感を痛いほど感じたさつきは、それでも気を取り直して言った。
「ま……みんな生きて勲章もらえたんだからいいんじゃない？」
十字章は、戦場において武功のあった者に授与される勲章だ。

「敵に対して際立った勇敢な行動をしたこと」

そんな曖昧な内容が授与の条件だが、メサイア乗りの場合、撃破数によって授与される、いわぱ撃破数に応じたご褒美、大人しく言えばスコア表の代わりのようなものであり、当然ながら上位レベルの勲章を持つことは、騎士としての格を証明する手段となる。

ちなみに、デザインそのものは極めてシンプルで、近衛のエンブレムである「血の十字架」をモチーフにしており、リボンはなく、直接左胸に着用することが出来る。

まず、最も下が、撃破数5騎で授与される青銅十字（ブロンズ・クロス）勲章。

別名、“エース・クロス”。

エースの名がつくのは、近衛でエース認定される5騎撃破を成し遂げると、自動的にこの勲章が授与されるからだ。

言い換えれば、近衛でエースを名乗るためには、この勲章が必要ということになる。

今回、涼と芳が授与されたのがこれだ。

この青銅十字の上が、鉄十字（アイアン・クロス）勲章。

十字章に漆黒のコーティングが施され、その淵が銀で飾られていることから別名を「黒十字」と呼ぶ。

撃破数２０騎以上が必要で、普通なら授与されることはない。

美奈代の父でさえ生前に授与はなく、近衛のメサイア部隊に勤務しても年に一度見るかどうかという稀少種だ。

相手が近衛の騎士なら、身につけていれば、それだけで相手の態度が違ってくること請け合える。

この鉄十字勲章から、スコアが１０騎増えるごとに、柏葉が一枚追加される。

俗に言う“柏葉付き”になるのだ。

今回、さつき（スコア３６）、美晴（同３４）、山崎（同３７）が柏葉１枚。都築がスコア４１騎により柏葉2枚付きをそれぞれ授与された。

柏葉付き授与者がほとんどを占める部隊なぞ、他には存在しない。

さらにこの上が、あることはある。

この上――――つまり、撃破数が５０騎を越えた騎士にのみ授与されるのが、剣付柏葉鉄十字勲章。

別名「柏葉３枚」だ。

史上、この勲章を授与されたのはわずか5名。

その内の一人が女性騎士トップエースの二宮だといえば、あの二宮でさえこの勲章の授与が限界だったと言えば、授与されるのがどれほど難しいかわかってもらえるだろう。

今回、スコア５８騎で宗像が授与された。

そして今、美奈代の胸で光っているのはさらにその上。

柏葉が5枚を越えた場合のみに授与されるダイヤモンド付き剣付柏葉鉄十字勲章。

さらに、ここにとんでもないオマケがつく。

功五級・金鵄勲章（きんしくんしょう）だ。

軍に属し、非凡なる軍功をなし得た者のみに授与されるこの勲章を授与されることは、軍人にとってまさに夢の勲章。

どんなに軍隊で地道に任務に就いても授与されず、むしろ周囲を

沈黙させるほどの戦果があった者のみが与えられる代物だ。
式典に参加した将校でさえ、授与された者はいない。
式典主催を主催したメサイア大隊司令官本田少将は、授与の理由を「各従軍戦線における非凡なる戦果に報いるには、十字勲章では不足という陛下の御意志による」と語ったが、美奈代自身はどうにもピンとこないらしい。しきりに「みんなの功績だろう？」とか、「なんでみんながもらえないんだ」と、首を傾げてばかりだ。

――総スコア数１０８騎。
初陣以来、ほぼ常に複数騎を撃破し続けた。東南アジアで１対１０の圧倒的劣勢に、静岡では１対２５の絶望的な戦況で勝利を勝ち取った。さらに、沖縄では３騎３秒で仕留めた女性騎士である。

本田少将から美奈代をそう紹介された時の将校達の顔は、さつきに言わせれば「見物」だった。

写真は集合写真と個人の撮影だった。
「家族に送る」と芳は喜んでいたが、送る相手のいない涼は「遺影にするわ」と強がっていた。
余談ではあるが、勲章は騎士と同時に自動的に同じものをＭＣ（メサイアコントローラー）ももらえるため、ホクホク顔なのが牧野中尉。そして、さらに言えば、なぜか精霊体も同様で、さくらは平べったい胸を精一杯反らせ、しきりに周囲に勲章を自慢している。
……本当に、どうでもいいことだか。

キィィィン――ズンッ！！

翌日。
“白雷（はくらい）”が一騎、“鈴谷（すずや）”の甲板に着艦した。
美奈代達は、ハンガーデッキの通路でその収容作業を見守った。
「“白雷（はくらい）”９号騎かぁ」
白州でカヤノに破壊された破損騎の再生エンジンで組み上げた８騎。
これが実戦配備されていた全騎だが、津島紅葉によって“白雷（はくらい）”の本格採用に向けた売り込み用に建造された騎が別に１騎存在する。
「津島中佐、本気で“白雷（はくらい）”を正規採用させるつもりだったんでしょう？」
「そう。その売り込み用に１騎追加建造したけど、結局は上層部の許可が下りなくて」
「まぁねぇ……コイツ１騎の建造コストで、アリア何騎組み上がるんだっけ？」
「まともにやったら３騎ではきかないと聞いている――何しろ、かなりのパーツを“白龍”と共有化しているから……まぁ、そのおかげで１騎、こっちに回してもらえるんだがな」
「騎士は？」
「鬼龍院中尉（きりゅういん）」
「……スゴい名前。何、貴族なの？」
「殿様か何かの末裔じゃないか？」
美奈代が顎でしゃくった先。“白雷（はくらい）”のハッチが開き、背の高い騎士が出てきた。
スラッとした華奢にも見える体つきに、色白の整った顔立ち。
年の頃は二十歳より少し上だろう。普通の生まれではないだろうことは、その外見が語っている。
艦内を珍しそうに眺める涼やかな目がさつきには気に入った。
「悪くないわね」
ＭＣＬから出たＭＣを気遣いながら整備兵の間をすり抜けるその

動きも、女性のエスコートに慣れていることを教えてくれている。
「元第四中隊所属。東北戦線で3騎撃破。得意な獲物は十字槍と狙撃銃。狙撃の腕前は近衛随一との評判だ」
「へぇ？」
さつきは感心した様子で美奈代に尋ねた。
「部隊では後衛？」
「後藤隊長の考えでは、中尉は狙撃部隊の殿に置く。第四種装備の小清水達だと、どうしても背後からの防衛が疎かになるから」
「それで、狙撃の腕前が確かで、しかも近接戦にも使えるヤツを選んだ」
「後藤隊長に言わせると、我々全員を引っ張ってくるより苦労したらしいぞ？」
「私達……何か、いらない子扱い？」

「申告します。鬼龍院中尉及び夏目中尉、本日付けを持ちまして独立駆逐中隊に着任致します」
“鈴谷”の艦橋に、やや高い声が響く。
俗に言う“いい男”の鬼龍院中尉は、女性オペレーター達の注目の的だ。
「はい、ご苦労さん」
オペレーター達が職場放棄してまで見守る中、後藤は答礼した。
「いやはや――組み上げが遅れたとはいえ、静岡でスコア稼げなくて残念だったね」
「はい」
ニコリと微笑むだけで絵になる男が言った。
「部隊にはついにスコアが百騎越えた方も出たとか」
「ああ」
後藤は頷いた。
「へっぽこ小隊長の泉だ。いろいろフォローしてあげて頂戴」

「いえ。自分の方こそ」
「ま、部隊の紹介は後だ。この後、艦長と艦司令部に挨拶終わったら」
後藤は時計を見た。
「……とりあえず昼だ。面通しは食堂でやろう。荷物、部屋に置いてこいや。おい都築“少尉”、挨拶終わったら、中尉の荷物持って部屋に案内してあげなさい」
「……へい」
艦長席の横に正座させられていた都築が立ち上がった。

それから食堂で開催された面通しを兼ねた食事会が終わり、美奈代は騎体調整のためハンガーに向かっていた。
通路の先方を移動する背の高い二人連れに気づいたのは、角を曲がった時だ。
一人は都築。
ケンカ沙汰と、もう一つ、致命的なドジの罰として――――正しくは全身永久脱毛の代わりとして――――、一階級降格されたばかりだ。
同行するのは、鬼龍院中尉だ。
都築が艦内を案内しているんだろうと美奈代は見当を付けた。
「鬼龍院中尉」
美奈代の声に、鬼龍院中尉が姿勢を正して敬礼する。
「いい」
美奈代は言った。
「戦場では一蓮托生だ。この部隊で上下関係は気にするな」
「ありがとうございます」
「都築元中尉には」
美奈代は楽しげに言った。
「一体、何をしたらここまで短期間に賞罰欄に書き込むネタを作り出せるか、よく聞いておけ」
「はいっ！」

美奈代はその声に、奇妙なモノを感じた。
何か――宗像を感じたのだ。
「？」
ありえない。
間近で見ればかなりの美男子だとは思う。
高い背に涼やかな中性的な顔立ち。
だが、間違いなく男性だ。
何故、私はこのオトコに宗像という同性愛者（レズビアン）を連想したんだろう。
謎だ。
「あ、あの？」
しげしげと自分を見つめる美奈代の視線に、思わず後ずさった鬼（きり）
龍院（ゆういん）中尉は、どうしたものかと、顔をひきつらせた。
「……いや」
美奈代は首を傾げながら答えた。
「気のせいだろう」
「は？」
「いや」
美奈代は首を横に振った。
「明日は出撃だ。狙撃銃が間に合わない関係上、一時的に突撃部隊に配属する。頑張ってくれ」
「はいっ！」

「こいつか」
“鈴谷（すずや）”のハンガーデッキ。
ウィンチに吊されて移動するのはＨＭＣ（ハイメガカノン）ではない。
「９５式狙撃銃改……か」
美奈代は感心したように黒光りする巨大な砲を見つめた。

パレットＭ８２に酷似したデザインをしたその砲は、鬼龍院中尉が扱うことになっている。
「普通の対戦車砲じゃねぇぞ？」
坂城にそう言われた。
そりゃそうだろう。程度にしか、美奈代には思えない。
「２００ミリ砲弾をセミオートで連射するなんて対戦車砲の域を超えています」
「そうじゃねぇよ」
坂城は楽しげだ。
「ぶっ放すのは、タダの砲弾じゃねぇ」
「じゃ、何です？」
「――あいつだ」
坂城が親指で指さした先では、火器担当整備兵達がコンテナから何かを取り出していた。
長い筒。
それが、美奈代の見た第一印象だ。

「あれ――何です？」
「……運動エネルギーミサイル。ロケット推進とライフリング加速で、砲塔内部で秒速２キロまで加速され、ミサイルそのものが持つ質量で敵の装甲をブチ抜く」
「……」
「嬢ちゃん」
坂城がポンッと美奈代の頭を軽く叩いた。
「もう少し知識広めろや」
「……はい」
「元は米軍のＬＯＳＡＴやＣＫＥＭ開発計画に陸軍が参加していた頃の名残だ。ＣＫＥＭはともかく、ＬＯＳＡＴなんてもう計画その

ものがねぇしな」
「……はぁ」
何のことだか美奈代にはさっぱりだ。
「覚えておけ。コイツは、全長３．５メートルのロケットを、マッハ７以上に加速して、敵にぶち当てることで、敵を倒す兵器だ」
「ああ」
美奈代は感心したように手を叩いた。
「そう言っていただければわかります」
「……」

美奈代が感心した兵器。
９５式狙撃銃改。
陸軍が予算不足で放棄した長砲身加速型運動エネルギーミサイル発射装置開発計画を近衛が引き継ぎ完成させ、メサイアが携帯出来る兵器に仕立てた代物だ。
発射する砲弾は口径２００ミリ。全長３．５メートルに達する大型のエネルギー型貫通弾頭（ＡＰＦＳＤＳ）で、射程は約３２キロを誇る。
装弾数は１０発。毎分３２発の速射が可能だ。

その装填作業を指をくわえながら見ている人物がいた。
美夜だ。
「ありゃ……」
物欲しそうな目でじっと狙撃銃を見ている美夜をみつけた坂城が肩をすくめた。
「艦長。まさかコイツまで備品扱いするつもりか？」
「だ……だめか？」
「勘弁してくれよ」
坂城が肩をすくめた。
「コイツは近衛でも１０丁ないんだぜ？予備バレルだって２本しか

来てねぇ」
「うぅ……」
美夜はなんだか割り切れない。という顔で言った。
「２００ミリ速射砲が手に入ると思ったんだけど……」
「前線でメサイア隊が使えなきゃ意味ねぇだろう」
「あの、坂城班長？」
美奈代は訊ねた。
「――――なんでそんなに数が少ないんですか？いくら何でも１０丁は」
「そりゃお前」
坂城は言った。
「こんな使い勝手の悪い兵器、いくら近衛が物好きでも、そうそう配備させるもんか」
「勝手が――――悪い？」
「専用ミサイルしか撃てないんだぜ？弾種が一種類しかない上に、弾丸一発のコストが恐ろしく高い代物だ。それに、メサイアや戦車の装甲なら普通の狙撃銃で十分だからな」
「……？」
「ようするにコイツは、試験用に造っただけで、コスト的に割に合わないからってお蔵入りしていた出来損ないを、メースの重装甲を割るために引っ張り出してきたってことだ」
「使えるんですか？」
「やってみるといいさ――――艦長。丁度、くみ上げが終わったところだ。どうせ照準調整が必要だぜ？」
「うむ」
美夜は頷いた。
「艦橋へ戻る通り道だ。声をかけていくとしよう」
「お供します。艦長」
「今、鬼龍院中尉は？」

「シフトでは休息中ですので、居住区にいるものと」
「そうか」
居住区に通じる通路の角を曲がったところで、都築に出会った。
「都築」
「俺は何もしてません」
美夜の問いかけに、都築は文字通りの即答した。
“都築”の“き”の発音が終わるかどうかの直前の即答に、さすがの美夜もあきれ顔だ。
「――今度は、何をしでかした？」
「何もしてません」
都築は答えた。
「俺だっていろいろ反省はしてるんです。もし、ここで何かしでかしたら」
「全身脱毛の刑だ」
「泉――勝手に決めるな」
「私じゃないですっ！」
美奈代は思わず後ろを振り向いて怒鳴った。
「平野少尉っ！」
「あはっ――バレました？」
美奈代の後ろに立っていた芳が、バツの悪そうな顔で笑っていた。
「でも艦長、次はそうなんですよね？」
「――そうだな」
美夜は楽しげに頷いた。
「股間までツルツルにして、女性乗組員全員の前にさらしてやろう」
「勘弁してくださいっ！」
「それよりツルツル三等兵……じゃない。都築」
「はい？」
「鬼龍院中尉を呼んできてくれ。部屋がどこか判らない」
「――ああ」
都築は言った。

「俺、案内しましたから、行きますよ」
都築はきびすを返した後、思い出したように訊ねた。
「それにしても艦長」
「何だ？」
「あいつが女性士官用の居住ブロックとの境界線に部屋を与えられたのは、オペレーター達へのサービスか何かですか？」
「は？」

都築が角を曲がった。
「ち、ちょっと待て都築！」
美夜が何故か染谷を止めようとしたが、遅かった。
「おい鬼龍院（きりゅういん）、入るぞ？」
通路の向こうから都築の声が聞こえ、
「きゃぁぁぁぁぁぁっっ！！」
凄まじい悲鳴が通路に響き渡る。
そして、連続して何かが砕けたり割れる音がした。
「なっ！？」
「あのバカっ！」

――――出ていってくださいっ！
――――何考えてるんですかっ！

通路の向こうからそんな罵り声が上がる。
それは鬼龍院（きりゅういん）中尉の声に似ているが、間違いなく女の声だ。
美奈代は最初、都築が部屋を間違え、女性士官の部屋に入ったと思った。
それにしても、この美夜の慌てぶりは一体？
「か、艦長！？」
美奈代は、美夜に続いて通路を曲がった。
何故か、都築が立ったままドアにもたれかかっていた。

無重力状態の艦内だからもたれかかっているように見えるだけだ。
鼻血を吹いて白目を剥いているから、間違いなく気絶している。
その目の前、半開きになっていたドアが凄まじい勢いで閉じられた。

「――ったく」
都築の顔を覗き込んだ美夜が心底情けない。という顔で言った。
「都築は、鬼龍院中尉を誰だと思っていたんだ」
「あ、あの？艦長？」
ガチャ。
「あ……あの」
ドアが開き、心配そうな顔をのぞかせたのは、鬼龍院中尉だった。
「と、突然のことでびっくりして……や、やりすぎたかなって……」
鬼龍院中尉は室内用に配給されているスウェット姿だ。
「問題ない」
美夜は即答した。
「このスケベにはいいクスリだ。中尉も、狂犬に襲われたと思って忘れろ」
「は……はい」
「あの？艦長？」
美奈代は言った。
「いくら何でも、これはやりすぎでは？」
目の前の都築は何か固い物を顔面にぶつけられたんだろう。
鼻血を流しながら目を回している。
「男性が男性の部屋に入ってこの仕打ちはいくらなんでも……」
美奈代の見た鬼龍院中尉は、その言葉に泣きそうな顔になった。
「泉大尉」
美夜は真顔で言った。
「断っておくが」
「はい？」

「鬼龍院中尉は」
美奈代は美夜と目の前で顔を赤くする鬼龍院中尉を交互に見比べた。
「――女性だぞ？」

結局――
鬼龍院中尉こと、本名、鬼龍院寧々（きりゅういん・ねね）が、女性であることを証明したのは、都築が復活してからだった。
「いや――すまない」
食堂で、美奈代は素直に謝った。
「本当に、男性かと思っていた」
「……いえ」
寧々は悲しげに言った。
「よく間違われるんです」
――本当に、何の冗談だろうと思うくらい、男っぽい顔立ちをしている。
美奈代は内心、いろいろと失礼な想像をしながら寧々の言葉を待つ。
その寧々が続けた。
「スカート履いていて――通報されたことありますし」
「……まぁ、そのタッパだしねぇ」
さつきはふと思いついた。という顔で宗像に尋ねた。
「あんた、いつ気づいていた？」
「データの性別欄見た時だ」
宗像はあきれ顔で美奈代に言った。
「――どうしてその程度、見ておかない」
「……ううっ」
「まぁ、それはそれで」
美晴が言った。

「鬼龍院中尉の歓迎会ですけど」
「――ああ」
美奈代は頷いた。
「幹事は都築だったな」
「ええ。都築君、鬼龍院中尉に食べられないものないか、聞きに行ったままでして」
「あいつもバカだとしか――お？言っている傍から」
鼻の上に絆創膏を貼った都築が食堂に入ってきた。
寧々の顔を見た途端。その顔が厳しくなる。
「ち、ちょっと都築？」
さつきが席を立った。
「い、いくら何でも、あれに非があるのはあんたの方で」
「中尉」
さつき達を無視するように寧々に近づいた都築は、じっ。と思い詰めた顔で寧々を見た。
「――俺は」
「は、はい？」
何を思い出したのかは知らないが、思わず胸元を押さえる仕草は女らしいな。と、美奈代は思った。
「俺は――何かとんでもないモノを見た気がするんだ」
その言葉に、寧々の顔が耳元まで真っ赤になった。
「だから――ちょっと確認させてくれ」
そう言うや否や、手を伸ばした都築は、あろうことか、寧々の胸をわしづかみにした。
――キャァァァッッ！！
――都築っ！
――貴様、私ですらまだだというのにっ！
――どこまで飢えてんだこのケダモノッ！

「――少しは反省しましたか？三等兵」
医務室のベッドの上で絶対安静を言い渡された都築に看護兵が声をかけた。
袋だたきにされた都築は力無く頷くだけだ。
痛みに耐えながら都築が思い出すのは、あの部屋の中。
――俺は
あの白い肌と、下半身の黒い茂み。
――生まれて初めて、女の全裸を見たんだ。
男として何か大きい成長を遂げたような、そんな気はしたが、
――もう少し、胸が大きければよかったな。
都築はそう思って人知れず口元をゆるめた。
「おいスケベ」
いつの間にか枕元に立っていた美奈代が都築の額に書類の束を置いた。
「今日中に始末書にサインしておけ」
「代わりにやってくれ」
「私は敵に情けはかけない」
美奈代はそう言うと医務室から出ようとした。
「敵って……誰だよ」
美奈代は黙って都築を指さした。
「――女の敵」
その指先には、自分がいた。

涙の雨か血の雨か

静岡で致命的敗北を喫した魔族軍は本栖湖周辺まで撤退を完了。
義勇軍の残存メース達が哨戒任務に就く。

「……」

メースのコクピット。その魔族は自分の口から出たため息の大きさに思わず驚いて辺りを見回した。
モニターの向こうにはどんよりとした灰色の世界が広がり、スピーカーからは、メースの機動音をのぞけば、雨音しか聞こえてこない。
コクピットの空調がよくないのか、空気が鬱陶しいほど湿気を含んでいる。
最後の撤退支援作戦が完了してから４日。
ふと見下ろした足下には、アスファルトの道が延びている。
４日前、この道を兵士達が静岡から山梨へと落ち延びていった。
ボロボロになった軍装で、折れた槍を杖代わりにした負傷兵。
担架に乗せられた片足のない兵士。
道ばたに倒れ、光泡となって消えた戦死者達。
メースの足下を徒歩で撤退していったそんな兵士達の有様は、一度見れば二度と忘れたくないほど惨めだった。

――この雨のせいだ。

魔族は思った。

軍を退役した後、魔界で仕事にあぶれ、路上生活寸前だった彼が道ばたで聞いた話。
義勇軍に入ればメシが食える。給料が出る。
出世は武功次第だ。

……。
メシ。
カネ。
出世。
食い扶持。
人類や人間界なんて関係ない。
義勇軍兵士募集窓口に立った彼にあったのは、そんなことばかりだった。

――人間界の雨は、人をイヤな気分にさせやがる。

彼が人類や人間界について考えることが出来るようになったのは、食事と軍装、そして寝床を与えられてからだ。
そんな彼が人間界で見たものは、
豊かな自然。
宝石のような青い空と海。
美声を誇る鳥達。
そして――それを破壊する人間達。
その図式は、義勇軍の宣伝活動に彼自身が染まっているせいかもしれない。
だが、彼は少なくとも、それが間違いだと思っていない。
給料がもらえて、メシが食えて、しかもこの美しい世界を守れるなら、これほどの仕事はない。
宣伝担当士官の言葉は、一応正しい。
彼もそうは思うのだ。

思ったからこそ、戦いに身を投じる覚悟は出来ていた。
戦えばその分、給料が上がる。
悪い話ではない。

しかし、

――初陣があれかよ。

彼の人間界での初陣は４日前の撤退作戦。
敵の姿は見なかった。
敗残兵達の惨状に恐怖を、いつ来るかわからない敵に胃袋に穴が開きそうなほどの緊張感を強いられただけ。
それは作戦とは名ばかりの、一方的な敗北でしかなかった。

――この戦い、勝てるのか？

あの光景を目の当たりにした以上、そんな消極的な考えにどうしてもなってしまう。
魔界の辺境で少数部族の反乱鎮圧。
戦歴はその程度の彼でさえ、そう思ってしまう。

雨が降り続く。

彼が戦場に来ているのは、生きるためだ。
食い扶持を稼ぎ、生き続けるためだ。
例え人間界がどうなろうと、生き続けなければ意味がない。

彼は、死ぬために義勇軍に参加したのではないのだ。

――せめて

彼は恨めしそうに視線を空に向けた。

灰色の雲が一面に広がる空からは無数の雨粒が降り注ぐ。

――この雨、はやく、やまないかな。

それが、彼の最後の思考となった。

画像処理されたスクリーンの中で、メースが横転した。

「命中っ！」

ＭＣ（メサイアコントローラー）の歓声に、

ホウッ。

寧々は小さく安堵のため息をついた。

狙撃距離は３０キロ。

メサイアとＭＣ（メサイアコントローラー）のサポートがあったとはいえ、実体弾をよく命中させることが出来た。

実体弾は、様々な要因に左右される意味で、ＭＣ（メサイアコントローラー）が勝手に命中させてくれるＭＬ（マジックレーザー）とは勝手が違うのだ。

――よく命中したものだ。

自分でもそう思ってしまう。

「次、第二射」

寧々はコクピットに設置された狙撃スコープを構えた。

敵は僚騎の突然の横転に驚いたらしい。

炎上する腹部からさかんに煙を上げるメースに同型騎が近づきつつある。

寧々はトリガーにかけた指に力を込めた。

「狙撃によって3騎を撃破」
後藤は書類にサインしながら言った。
「これでエースだな」
「はっ」
寧々は敬礼した。
「ありがとうございます」
「おかげで、魔族も県境にメースは置かないだろうから、大々的なセンサーを用いた哨戒は不可能になるはずだ」
「……それは」
寧々は後藤に訊ねた。
「敵メサイアは、我々の攻撃に対する早期警戒装置とて配置されていたと？」
「そう考えるのが妥当だよ」
後藤はメースの配置を示した地図を赤鉛筆で突きながら言った。
「連中のセンサーの性能は不明だが、少なくとも相互の死角をカバーするような配置。ただし、同時に実際の交戦においては不向きな配置だと、情報部は見ている」
「……」
「９５式狙撃銃改の性能テストも上々だ」
後藤は組んだ手に顎を乗せた。
「発砲炎を最小限度に抑えた消炎装置がモノを言っているんだって？」
「魔力を利用した電磁発射装置もでしょう」
「あっそ」
後藤は興味のない顔で言った。
「原理、理解出来てる？」
「まさか」
寧々は肩をすくめた。

「高卒の私に理解出来るものではありません」
「俺もだけどさ」
「我々は理屈で戦争するのではありません」
寧々はやや早口になって言った。
「銃は、祈りながら引き金を引くことが出来るなら、それでいいんです」
「……」
「……」
後藤は、チェシャ猫さながらの意地の悪い笑みを浮かべ、言った。
「じゃ、そういうことにしておくか」

――危なかった。

隊長室から出た寧々は、大きくため息をついた。

――仕様書、読んでないことを中隊長殿はご存じだ。

寧々はMC（メサイアコントローラー）と共に通路を移動しながら思った。

――寝る前で良いから、少しは読んでおこう。

寧々はそう心に誓いながら通路の角を曲がった。
「泉大尉達が、私達のエース認定記念の食事会をしてくださるそうですよ？」
MC（メサイアコントローラー）の福沢中尉が楽しそうに言った。
「何が出てくるかしら」
「ありがたいことですよね」
その無邪気なまでの笑顔に誘われるように、寧々の口元も緩む。
「皆さん、優しい方ばかりで」

「一人、とんでもないのがいますけどね」
福沢中尉は意地の悪い顔になった。
「全裸見られたって本当ですか？」
「――っ」
あの時のことを思い出し、寧々は耳まで赤くなった。
「あーあ」
その反応が全てを語る。
福沢中尉が肩をすくめた。
「処女なのに――あら？」
食堂の手前でばったり出会ったのは、あの時の相手。
都築だ。
「――よぉ」
都築はまるで何もなかったような顔で言った。
「鬼龍院（きりゅういん）」
「……どうも」
「喜べ鬼龍院（きりゅういん）、今日は」
「は？」
「お前の好きなおなべだ」

「――すみません」
担架で運ばれていく都築を見送った寧々が美奈代に頭を下げた。
「ついクセで」
「とりあえず」
やや呆れた顔で美奈代は言った。
「謝るのは都築にしてやれ」
「はっ」
「とにかく、エース認定おめでとう」
「ありがとうございます」
「うん。くだらない訓辞はしない。皆で美味いモノ食べて祝おうじ

やないか」
「はいっ！」

無垢なる龍、再び

――楽しかったな。

翌日、寧々はコクピットで何度も頷きながらそう思った。

――ただの水炊きだったけど、美味しかった。

軍隊で、しかも軍艦に乗っている以上、贅沢は出来ない。特に食事は最も制限を受けやすい。

国内の農業事情が壊滅的な被害を受けている中でもある。

日々、細くなる一方の食事メニューを考えれば、水炊きでもかなりの贅沢だ。

それを、自分達のために用意してもらったことに、寧々は深く感謝していた。

「食べた分は、功績でかえしましょう」

「そうですね」

頷く寧々が見つめるスクリーンには、ハイメガカノンを構える涼と芳騎の姿がある。

寧々の狙撃により、昨晩のうちに3騎のメースを失った魔族軍は、その攻撃を、静岡から山梨に対する人類側侵攻作戦の前準備と判断。

航空兵力と砲撃、そしてメサイアによる立体作戦を可能とする人類側に対して、航空戦力が圧倒的に不足し、山間部では小型妖魔とメースに頼るしかない魔族軍は、大型妖魔部隊の展開のため再び静岡の県境を越えた。

「後藤からよい子の皆へ」

後藤からの通信が入る。

「狩野粒子濃度増大に対応よろしく」

「了解」

狩野粒子の影響でセンサーが狂うと、主にそれに頼って火器管制を行うMC（メサイアコントローラー）による狙撃は命中率がかなり落ちる。

その穴埋めとして騎士の狙撃力が求められるのは、当然のことなのだ。

「現状、7時方向2キロ、第二小隊と共に陛下が展開されている。第一小隊は後方攪乱のために3時方向4キロ地点に伏せている」

寧々は戦況モニターを見た。

センサーがイカれているせいで、事前のデータしかわからない。

「ML（マジックレーザー）による騎体間通信を怠るな。リンクが切れたら終わりだぜ？」

「はい」

魔法処理された特殊なレーザーによる騎体間のレーザー通信技術。

それを騎体同志のデータリンクに応用したのが「騎体間通信（きたいかんデータリンク）」。

狩野粒子によって単なる「高級で意味のないオマケ」的扱いから「必須アイテム」に格上げされた代物だ。

騎体と騎体を、そして司令部をつなぐこれが切れると、最新情報が全く手に入らなくなるどころか、騎体間の通信さえ出来なくなる。

上空の狩野粒子がかなり高いことは、センサー警告でわかる。

司令部との通信に障害が発生していることは、戦況モニターのデータ更新が出来ないことから間違いない。

――――さっきの砲撃だ。

――――さっき、大量に敵側から撃ち込まれた砲撃に狩野粒子が詰まっていたんだ。

その寧々の判断は間違っていなかった。

間違っていなかったとしても、今、寧々に出来ることは一つだ。

寧々はスコープをセットした。

２０キロ先の敵影をスコープに捉える。

先日、撃破したメサイアと同タイプが１０騎以上展開している。

いや、前衛で１０騎だが、後方に並ぶ旗数からして、かなりの数が展開しているのは間違いない。

「準備はいいか？」

後藤は相変わらずの軽い口調で言った。
「魔族軍の突撃は大迫力だからね」
――――言ってくれる。
寧々は口元を歪めた。
――――敵は敵だ。
――――数でビビるはずがない。
東北戦線で初陣を迎えた寧々が相手にした敵は、多くても２０程度だ。
寧々にとって、魔族軍は、その程度の部隊を小出しにする連中だ。
２０程度の数で大迫力はないだろう。と、寧々はそう思っていたのだ。
それに――――
寧々にとって、人類側は大きなアドバンテージを持っている。
それが、砲だ。
寧々が体験し、見聞きした魔族軍のメサイアは砲撃用兵器を装備していない。
常に接近戦を挑む存在だ。
だから、狙撃に徹すれば怖いものなんてない。
怖くない。
その言葉が、寧々の何かを麻痺させてしまっていることに、寧々自身が気づいていない。

寧々はスコープを覗き込んで、狩る敵を選び始めた。
マッハ7以上で突撃する貫通魔法付与処理済み特殊砲弾をたたき込めば、昨日のメサイア達に続いてスコアは稼ぎ放題だ。
泉大尉は接近戦で百騎のスコアだなんていうけど、私はこの狙撃銃で3ケタ狙ってやる。
寧々はスコープから視線を外し、スクリーンに映される95式狙撃銃改を見た。

――――いい武器を貸してくれた。

寧々はそう思う。
涼達の持つハイメガカノンは、結局はML砲（マジックレーザー）に過ぎない。
メサイア相手なら速射性能でこっちが勝つ。
寧々はそんな優越感さえ覚えながら、再び狩りの物色に移ろうとした。

その瞬間。

「熱源接近っ！」
川崎少尉の悲鳴にも似た声。
「えっ！？」
芳の素っ頓狂な声。

次の瞬間――――

巨大な光の柱が部隊の間を走った。

ズズンッ！

芳が構えていたハイメガカノンが一瞬にして吹き飛び、芳騎は地

面に叩き付けられた。

「芳っ！」

涼の悲鳴が通信装置一杯に響き渡る。

「だっ、大丈夫っ！」

芳の声が聞こえた。

「カノンがやられたけど、生きてはいる！美由紀っち、大丈夫！？」

「こ、こっちも何とか！」

「こちら泉だ！被害を知らせろっ！」

「ハイメガカノン破損、騎体装甲に重度ダメージ」

「第四種装備でなきゃ死んでいた！」

「芳、後退しろ。カノンがなければ第四種は単なる重荷だ」

「パージの許可を下さい！」

芳はくってかかった。

「私にだって！」

「ダメだ」

美奈代は言った。

「第四種装備はお前達2騎分しかないんだ！それを軽々しく捨てるな！」

ズズンッ！

再び、光が走った。

「ぐうっ！？」

次に悲鳴をあげたのは涼だ。

「こっちもやられた！？」

「直前にカノンのエネルギーを切りました……あ、危なかったぁ」

「何だっ！？」

目の前で一方的に叩かれた寧々はたまらず怒鳴った。
「一体、何が！？」
「敵陣地からの狙撃っ！」
福沢中尉が怒鳴った。
「大規模なＭＬ（マジックレーザー）攻撃――ライブラリーにエネルギー照合有！」
「何です！」
「あのバケモノですっ！」

飛鼠

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「まぁ俺達は」
“鈴谷（すずや）”のブリーフィングルームで、後藤は言った。
「起こさなくて良い子を起こしちまったわけだ」

――――起こさなくて良い子。

魔族軍のことだ。

――――その通りかな。
後藤の目の前に並ぶ中隊構成員は内心で頷いた。

「“白雷（はくらい）”2騎の中破、1騎小破で済んだだけ、幸運でしょう」
後藤はファイルを閉じた。
「何しろ、相手はあのキングギドラだ」
後藤の斜め後ろに立つ美奈代は、皆の顔を見た。
ハイメガカノンを吹き飛ばされた涼と芳。
執拗な狙撃をかわし続けた寧々。

少し目をつむればその時のことはイヤでも思い出せる。

●美奈代の回想、数時間前、静岡戦線

大口径のＭＬ（マジックレーザー）が走った。

「敵は！？」

無駄だとわかっていても、それでも思わずシールドを構えてしまう。

「不明っ！」

牧野中尉が言った。

「ただし、ライブラリのＭＬ（マジックレーザー）データに照合有！」

「何ですっ！？」

「あのキングギドラですっ！」

キングギドラ。

全長５０メートル。銀色の装甲をした敵を何故そう呼ぶかわからないが、言い出しっぺは牧野中尉だと皆が言っている。

――多分、メカゴジラと言いたかったんだろう。

宗像はそう言うが――

「ええいっ！」

美奈代は強く首を左右に振った。

そういうことを考えている場合じゃないっ！

「相手がレッドキングだろうがアンギラスだろうが――！！」

美奈代は通信装置に怒鳴った。

「第一中隊、瀬音少佐！」

「被害は軽くはないが」

ノイズ混じりの声がレシーバーに響く。

「戦死は出ていない。ハイメガカノンは使いモノには――」

ズズンッ！

再び、巨大なＭＬ砲（マジックレーザー）が突き抜けた。
「追加だ！狙撃銃もやられた！」
「小清水達は！？」
「けが人は出てないが」
「泉」
宗像がせっぱ詰まった声で通信に割り込んできた。
「大変だ。友軍が後退する」
「何っ！？」

静岡解放戦の総仕上げ。

そう定義されたこの作戦は、戦闘開始からわずか１０分で勝敗が決した。

銀龍だ。

涼達を襲った大規模ＭＬ（マジックレーザー）攻撃は、他部隊陣地からもはっきりと確認出来た。

その攻撃が、先の戦闘で味方さえ巻き込んだ“あの一撃”を放った“死神”のそれであることを真っ先に知ったのは、メサイアに搭乗したＭＣ（メサイアコントローラー）達だ。

――あのバケモノが、この戦場にいる！

丁度、小さな穴が巨大なダムさえ決壊させるように、その情報は全軍に伝わった。

いや。

伝わった情報は、あくまで決定打にすぎないともいえるだろう。

あの巨大な光が走るだけで、敵が何者か多くの将兵は悟っていた

のだ。

――――あのバケモノが、この戦場にいる！

人類側を敗北させるには、それだけでたくさんだった。

「何をしているっ！」

トラックに我先に乗り込む兵士達に、駆け寄った将校が拳銃を向けた。

「誰の命令で持ち場を離れたか！」

将校は、トラックの荷台にしがみついていた兵士のサスペンダーを掴むと力任せに引き倒した。

「持ち場を勝手に離れていいと誰が！」

「あ、あんたは！」

兵士は目の前の拳銃を怖れることもなく、将校に怒鳴った。

「あの攻撃が何なのか、あの敵が何なのか、知っているのかよ！」

「敵は敵だ！」

将校は怒鳴りながら、拳銃を突きつけた。

「脱走で銃殺にされたいか！？」

「ならここで逃げさせてくれ！」

兵士は声の限り叫ぶ。

「ここで殺されなかったら、いくらでも言い逃れしてやる！」

彼等を恐慌状態に陥れたのは、先の戦闘に出現した魔族軍の大型メース――――銀龍だった。

●魔族軍　静岡戦線メース隊陣地

「また当たった！」

魔族軍陣地に立つ銀龍のコクピットに響く歓声は、未だに幼い。

「頑張って練習した成果です！」

楓（フィーリア）は自分の戦果に嬉しそうに頷くと、残りの敵の中から、一騎を選び出した。

「次は」

大きな銃を構えるのは残り1騎。

あれさえ叩けば、戦況は大分違うとカヤノはそう言っていた。

だから、あれは叩く。

「――――あなたです」

澱みのない操作でその騎をロックオンした楓（フィーリア）は、何のためらいもなくトリガーにかけた指に力を込めた。

●美奈代の回想　数時間前　“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ

もう、勝負にならなかった。

パニックに陥った人類側は総崩れ。
部隊どころか兵個人単位で逃げ出し、軍は全ての統率を失った。
通信は混乱し、美奈代自身、どうやって空中接触事故もなしに“鈴谷(すずや)”に戻れたかおぼえていない。
殿を務めた美奈代達、第三小隊が“鈴谷(すずや)”に収容された時にはすでに夜になっていた。

「８７の装甲板外せっ！」
「中の耐熱ジェルがあふれるぞ！ウェスはどうした！」
整備兵達が駆け寄るのは、先に収容された涼と芳の騎だ。
共にハイメガカノンを破壊され、肩と頭部の白い追加装甲が溶けて大きく歪んでいる。
「溶けた装甲が邪魔をして、肩と首が動かないそうです」
牧野中尉が教えてくれた。
「装甲が……」
戦車砲の直撃にも耐える防御魔法付与複合装甲を施された近衛軍メサイアの装甲だ。
騎体を降りた美奈代は、すぐに涼達の騎体へと向かった。

あの一撃が飛来してから、戦線が崩壊するまで１時間は不要だった。

味方を巻き込んだ一撃で、人類側に甚大な被害を与えた悪魔がこの戦場に戻ってきた。
人類側はそれだけで恐慌を来した。

――――目の前に爆発寸前の反応弾が置かれたようなもの。

さつきは、状況をそう表現したが、美奈代もあえて否定するつもりさえなかった。

通信は司令部に指示を求める悲鳴のような声と、撤退宣言、それを押しとどめようとする者との罵声のやりとりで埋め尽くされた。

敵に聞こえたらどう思われるか。

美奈代は今になって、身内の無様さが恥ずかしくなった。

●魔族軍　静岡戦線メース隊陣地

同じ頃。

一気に戦況を挽回し、沼津から静岡市に至るラインを再び奪還した魔族軍の主力メース部隊は、蒲原付近に展開していた。

時折、海側で重弓部隊が、駿河湾でしぶとく抵抗を続ける人類側艦艇に向けた射撃を繰り返している。

メース部隊の中心。

丁度、その中心を守るように組まれた円陣の中央で、片膝をついた姿勢を取るのは、銀龍だ。

照明に照らし出された銀色の装甲が鈍く光っている。

「お疲れさま。楓（フィーリア）ちゃん」

銀龍の足下。

銀龍から降りた楓（フィーリア）をカヤノが出迎えた。

「ありがとうございます」

楓（フィーリア）はペコンと頭を下げた。

「こっちの大勝利よ」と、カヤノは微笑みながら楓（フィーリア）の頭を撫でた。

「人類側の戦線は崩壊。こっちは再び静岡へ一気に攻勢をかけることが出来たというか」

カヤノはちょっと考えてから、笑った。

「人類の後についていったようなものだけどね」

“人類の後についていった”

おそらく、カヤノのこの言葉ほど、この戦いを表現する上で適切な言葉はないだろう。

後退する人類と絶妙な距離をとりながら前進。

魔族軍がやったことは、基本的にそれだけだ。

それだけで失われた地は再び魔族軍の手に落ちた。

大がかりな抵抗は、せいぜい駿河湾に展開する船舶からの攻撃程度だが、銀龍を元とする魔族軍メース部隊や弓兵達の攻撃の前に沈黙。

漆黒の闇の中でも、断末魔を迎えながら沈むことも出来ず、未だに篝火のように燃えさかる何隻かの船が、人類側の被害を物語っている。

「私は」

楓（フィーリア）は言った。

「お父様やカヤノさんや――みんなが無事なら、それでいいです」

「……」

カヤノは楓（フィーリア）の目を見た。

その目には嘘はない。

この子は、純粋に心の底からそう言っている。

――みんなが無事でよかった。

本当に、そう言っているのだ。

「――うん♪」

カヤノはそっと楓（フィーリア）を抱きしめると、目を閉じた。
女の子特有の柔らかい感触が心地よい。
こんな小さい体で、戦場で頑張る健気な娘に、何も出来ない自分がもどかしくさえある。
「じゃ、一緒にお風呂入ろうか」
「はいっ♪」

●数日後　“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

静岡山梨県県境での撤退戦から3日後。
戦況はすでに静岡方面からの山梨県攻略ではなく、静岡死守のレベルに陥っていた。

「魔族軍は、海上からの攻撃に備え、各地に砲撃陣地を形成しつつある」
後藤はプロジェクターの映像を前に言った。
高々度撮影された写真を引き伸ばしたらしいその映像には、いくつもの陣地を見ることが出来る。
たった3日で陣地を形成することが出来る魔族軍の建築技術の高さには目を見張るしかない。
「あと数日で、海岸線は要塞となるだろう。それが司令部の判断だ」
後藤はプロジェクターの映像を切り替えた。
「海岸に展開するのは推定１２個師団。装備も大分入れ替わっている」
そこに映し出されたのは、犬顔の兵士達の姿。
問題は、その手に持つ武器だ。

「――これって」美晴が目を見張った。
「ああ。わかるか？」
「中華帝国軍の汎用軽機関銃で……」
型式を思い出そうと顔をしかめる美晴の前で、後藤は当然という顔で言った。
「中華帝国製。それだけで十分でしょう」
「どういうことですっ！」
食って掛かったのは都築だ。
「何で魔族軍が人間の武器使って！」
「いろいろあるんじゃない？」
後藤は笑って肩をすくめた。
「武器はそれだけじゃないんだから」
後藤はプロジェクターの映像の画像を何枚か入れ替えた。
それぞれに違う武器が映し出されていた。

魔族軍の武器。

そう言われれば、昔ながらの弓やボウガン。剣や槍を連想するのが普通だった。
だが、今では違う。
映像の兵士達は銃を持っていた。

「魔族軍の正式品かどうかはわからないが」後藤は言う。
「ＭＬ（マジックレーザー）砲の一種で、対抗手段としての実体弾を必要とする敵に備え、中華帝国軍の兵器も導入したというのが、一応の見方だろう」
「――すげえよな」
都築は皮肉そうに言った。
「中国人っては、敵にまで武器を売るのかよ！」
部隊の中で失笑が湧いた。
「そのうち、魔族軍が中華帝国製のメサイアに乗って攻めてくるぜ」

「あたり」
後藤は言った。
「それ、当たるよ？」
「――は？」
唖然としたのは、都築だけではない。
「どういうことです？」
美奈代も思わず聞いてしまった。
「まるで――それって」
「これ、見てご覧？」
次の映像は、どこかの工場のようだ。
広い敷地に整然と並ぶのは甲冑。
違う。
メサイアだ。
「中華帝国、重慶のメサイア製造工場の映像。引き延ばしたのがこれ」
「見たことがないタイプですね」
「うん。今はね」
後藤は画像を入れ替えた。
「これ、昨日、撮影された長野県の映像――魔族軍陣地」
そこに映されていたのは、先程のメサイア達だ。
数は５０騎を越えている。
「……いっ、一体、奴らは何を考えてるんだ？」

伊豆攻略作戦

魔族軍は攻撃してこない。

人類側はそう見ていたし、実際、ズルドでさえ攻撃するつもりは全くなかった。

今は、兵力を集結させ、静岡の防衛網を充足させる時期なのだ。

この時点では、ズルド率いる第三軍は、その戦力の多くを沿岸防衛のために割いていた。

各地の鉄道から引きはがしたレールを切断して作り上げた海岸障害物を敷設し、直線の道はすべて段差の激しい造りに作り替え、人類側の航空機の離着陸を不可能にした。

人類から接収したコンクリートを多用したトーチカを各地に構築し、駿河湾一帯から遠州灘にかけての海岸を、上陸作戦が恐ろしく困難な場所へと作り替えた。

当然、工兵だけでこれだけの工事を短期間に行うことは出来ない。

ズルドは、第三軍の訓練をすべて中止、もしくは禁止し、兵力の大半をこの土木工事につぎ込んだ。

義勇軍を中心に批判は続出したが、この陣地構築の必要性を否定出来る者はいなかった。

あと2週間もあれば、遠州灘一帯を難攻不落の要塞に作り替えてやる。

莫大な兵員と資材を投じた長大な防衛線は、陣地構築の総指揮を任された工兵隊長トート大佐が豪語したのもうなずける出来映えとなりつつあったのは確かなのだ。

そんなところをマトモに攻略する意志は、人類側にはなかった。

「ようするに」

陸軍の指揮官、田中大佐を相手に、米軍司令官が言った。

「遠州灘に上陸するつもりは、米軍にはない」

当然だろう。と田中は思った。

すでに他に安全な上陸地点を多数持つ米軍が、一々危険を冒してまで遠州灘で上陸作戦を展開する必要なんてどこにもないのだ。

「我々はこの御殿場を突破し、敵陣地に対して強襲をかける」

「し、しかし」

田中は目を見張った。

神奈川に集結していた米軍が小田原に移動し、御殿場を目指していることは現実としてわかる。問題は――――

「自分達は何も聞かされていません」

そう。

田中達防衛線司令部は、米軍の作戦について何一つ聞かされていない。

突然、米軍司令部の訪問を受けたと思ったら、唐突に“明日、敵陣地に対する攻撃を開始する”といわれたのだ。

「君達はこの防衛線を維持してくれればいい」

米軍司令官はにべもなく言った。

「戦争は、我々米軍がやる」

だが、米軍による御殿場侵攻は、最初から躓いた。

夜間爆撃は悪天候のせいで中止。この悪天候は夜半過ぎまで続いたため、米軍は爆撃機の事前支援がない状態で、言い換えれば魔族

軍陣地に何の損害も与えることもなく攻撃を開始することになった。

ズンッ！

ズズンッ！

砲撃の炎が夜明け前の世界を紅蓮に染め上げる。

「そっちはどうだ！」

「命中していない！」

通信兵が各部の被害を急いでとりまとめ、観測兵が敵の動きを見張る。

濃霧の中だが、熱源を見ることの出来る魔族にはそんな気象条件は関係ない。

その中に、ズルドの姿もあった。

「成る程？」

敵襲来の報告を受けたズルドは、砲台を兼ねたトーチカの一つから迫り来る人類側兵力を眺めた。

御殿場への狭いルートを抜け、大きく広がりつつある。

「連中は」

ズルドは言った。

「どこまでも我々をナメているらしいな」

「全くです」

マーリンも頷くしかない。

「こちらの迎撃体勢は万全です」

そう。

彼等の後ろには、数万に上る弓の射手達が命令今や遅しと、弓に矢をつがえて待っているのだ。

「敵、湿地帯半ばに侵入」

「閣下」

マーリンの言葉に、ズルドは無言で頷いた。

それを見たマーリンが叫んだ。

「目標、敵機甲部隊。各個に撃ち方始めっ！」
ビンッ！
マーリンの傍に控えていた弓兵が一本の矢を放った。
照明弾だ。
周囲を照らし出したその灯りこそ、魔族軍側の反撃の烽火だ。
「放てぇっ！」
各地で指揮官達が同じ叫び声をあげた。

米兵達が移動するのは、泥の海というべき泥濘の中だ。
深いところに嵌り込むと生きては出られない。
まだ湿地帯の半ばまで達していないというのに、何台ものＭ６０やＭ１１３がキャタピラを泥に取られ擱座（かくざ）したり、横転した。
酷いモノになれば、兵士ごと泥濘の中に沈み込んで二度と浮かんではこなかった。

兵士達は、互いをロープで結び合い、近くで拾ってきた竹竿を持った先頭を進む兵士が“沈まないように”気を配って進んだ。
その兵士達が進む後を、戦車が進む。

兵士達が戦車の道を開くのだ。

一体何の冗談かと聞きたくなる事態だが、安易に戦車を前進させればどうなるか、兵士達はそこまで来る間に、イヤでも思い知らされていた。

あっ。という声だけを残して泥の中に沈んで二度と見つからなかった兵士。

戦車の上に乗っていて、横転する戦車に泥の中へと叩き込まれた兵士達。

同じ目に遭いたいか？

否。

戦車を捨てて魔族軍と戦うか？

否。

ならば、彼ら自身が道を開くしかない。

地雷原並に神経を使う移動を強いられた彼らが、それでも何とか浅い泥が続く地点にたどり着いたのは、支援砲撃が一段落した頃だ。

目の前は、鬱蒼と茂る草地だ。

泥濘を抜けた。

そう判断した兵士達は、それでも足場を泥にとられつつ、散開する。

それにつられる形で、戦車達が草地めがけてアクセルを開く。

兵士達を今までにない悲劇が襲ったのは、まさにそのときだった。

「なっ！？」

草地に足を踏み入れた。

先頭を進む兵士はそう思ったのだが、

「うわっ！？」

彼は顔から泥の中へと突っ込んだ。

草を踏んだはずの脚が泥の中へと沈みこんだ。

「大丈夫か！？」

戦友がサスペンダーをとっさに掴んでくれなかったら大変なことになっていた。

「す、すまない」

兵士は礼を言うと、自分の立っている場所を見回した。

鬱蒼と茂る緑の草原。

自分達はその淵に立っている。

――草原？

違う。

これは――泥の中に浮かぶ背の高い草に過ぎない！！

「くそっ！」

兵士は毒づくと戦車達に止まるように合図した。

草原の真実に気づいた兵士は彼だけではなかった。

各所で戦車が動きを止め、兵士達が再び道を探し始めた。

敵陣地方面で、突然、照明弾があがったのは、まさにその時だった。

敵の攻撃が開始されてから、何分が経過したかわからない。
もしかしたら数秒かもしれないし、数時間かもしれない。
ただ、時間の流れをいちいち気にしている余裕がないことだけは、誰もが認めるところだった。

「畜生っ！」
空からはひっきりなしに砲撃が降り注ぎ、あちこちに設置されていたトーチカからは狂ったように射撃が襲いかかってくる。
湿地帯に侵入する戦車を阻止するために敷設されたらしい、鉄道のレールを切断した障害物の下でB小隊を率いるクラーク少尉は悪態をついた。
泥水が下半身の体温を容赦なく奪う。
レールにぶつかった弾丸が奇妙な音を立ててはじけ飛ぶ。
冷たさと恐怖感に、腰を上げたい衝動に駆られるが、それをやったらどうなるかは、付近に浮かぶ死体をみればわかる。
「まるでトラップじゃないか！」
前方を進むD小隊の兵士達は、膝から下をすべて泥水に沈めている。
湿地帯に生える草がかなり背の高い種類だったため、まるで浅瀬のように見えたなんて、いまさら言い訳にもならない。

ズンッ！

D小隊の兵士の一人が、砲弾の爆発に巻き込まれ、手足をもぎ取られて宙を舞った。
「戦車はどうしたんだ！」
「すでにやられました！」

「司令部へ。こちら第８砲台キムイです。泥濘地点に歩兵。かなりの数です」
「容赦するな。敵はすべて排除しろ」
「了解――戦闘照準、目標、敵歩兵集団」
「撃てっ！」

「陸軍が叩かれているだと！？」
サイレンが鳴り響く中、グレイファントム達に騎士達が乗り込んでいた。
「その通りですよ。ウェーバー大尉」
レシーバーに部隊参謀の声が聞こえる。
「この時点でも、陸軍は我々に支援を求めてきていませんけどね」
「こんな所で縄張り根性か！クソ喰らえだ。全騎へ通達――メサイア、出撃体勢をとれ！」

御殿場市１５１号線より神奈川より一帯は湿地帯というより、泥の海となって米軍の脚をとめている。
この時点で、その米軍の前面に設置された魔族軍第一防衛線にた

どり着けた米兵はいなかった。

泥の海をはい回る米兵達を追い回すように魔族軍の射撃が走り、その度にアメリカ製の肉塊が泥の海に浮かぶ。

障害物の傍に浮かぶ首のない死体が、ついさっきまで小隊を率いていたクラーク少尉だと、今では関心を払う者さえいない。

歩兵戦力の約7割。

機甲部隊の8割がすでに壊滅した状態では、そんなものだ。

この時点で、戦況は極めて悲観的なもので、部隊を率いていたプラット司令官は、御殿場での戦闘を本気で考え始めていた。

後に判明した限り、戦闘開始からのたった1時間で、死傷者は4千を超えていた。

米軍にとって追い打ちとなったのは、0620頃から天候が回復し、上空から魔族軍の飛行部隊の空襲を受けたことだった。

この時点でメサイア隊が到着しなければ、米軍は一人残らず戦死していただろうことでは、後の歴史家の意見は一致している。

米兵にとっての救世主――メサイア“グレイファントム”。

しかし――

「馬鹿がっ！」

足柄峠に陣取る“白雷（はくらい）”の中で、美奈代は思わず怒鳴ってしまった。

米軍のグレイファントム達が米兵達の前に立ちはだかり、機銃を乱射し出した。

百歩引いてそこまでは認めてやっても良い。

だが、問題はその場所だ。

グレイファントム達は泥濘の中に脚を突っ込んでいる。
脚の沈み具合からしてそれは明白だ。
足を取られては――あれではメサイアの機動性は発揮出来ない！
「早く動けっ！」
我を忘れて思わず怒鳴った美奈代に、牧野中尉が言った。
「魔族軍、大型妖魔が！」
「――くっ！」
戦況モニター上に現れた新たな反応。
それは、大型妖魔特有のそれを放っている。
この時点で、突撃系統のタイプが出ることはないだろう。
出るとすれば――。
「大規模ＭＬ（マジックレーザー）反応っ！」
「……」
美奈代は目をつむって祈った。

ズズンッ！

振動を伴う音が、湿地帯の方から聞こえてきた。

「……」
気の利いた祈り文句の一つも思いつかない自分に嫌気がさす。
美奈代はそう思いながら目を開けた。
それまで魔族軍に立ちはだかっていたグレイファントム達は一騎もいない。
黒く焦げた湿地帯を、泥水が覆い尽くそうとしていた。
「……っ」
「大尉」
かなりいらついた声で涼が訊ねた。
「私達は――何をしているんですか」
「動くな――これは命令だ」

「しかしっ！」
食い下がる涼に、つい、カッとなった美奈代が怒鳴った。
「個人の感情で戦争をするつもりかっ！」

米軍司令部は派遣した全兵力約５千の全滅を確認。
作戦の失敗を認めた。
狭い山間を抜けた先にある数キロに渡る泥の海。
その存在を知った米軍は作戦を大きく変更することを余儀なくされた。

「作戦が変わった」
後藤は美奈代達に告げた。
「米軍は、狭い山間部を抜け、数キロの泥海を徒歩でわたるより効率的な方法をとることにした」
無理もないだろう。
美奈代はそう思った。
あの泥海で無惨に死んでいった兵士達のことを考えるだけで、気の毒を通り越した感情に支配されそうになる。
「もっと広い範囲で、大規模に、派手に、馬鹿みたいにやれる方法をとるそうだ」
「広い範囲と大規模はわかりますが……」
宗像が首を傾げた。
「何ですか？その派手と馬鹿みたいという表現は」

「聞けばそう思うって。この世界でこんな方法とろうなんて考える奴らは、米軍だけだよ」
後藤はそう言って笑った。
「俺なら泉じゃないけど、夜間のメサイア隊による斬り込みや空爆考えるよ」
美奈代は、一昨日の夜、後藤に出した作戦企画書を思い出した。
“見ておくね”としか返事をもらえなかったが、後藤はどうやら本当に読んでくれたらしい。
「――まぁ、アメさんらしいと言えば、そうも言えるけどさ」
「中隊長」
寧々（ねね）が挙手した。
「どういうことですか？」
「米軍は、先の失態を穴埋めすべく、この日本近海に配置している上陸可能舟艇すべてをかき集めた」
「――まさか」
美奈代は目を見張った。
「遠州灘がどういう状況にあるか、連中は現場が見えているんですか！？」
「わかった上だろうさ」
後藤は言った。
「連中は、それでもやるつもりだ」
「……く、狂ってる」
「その狂ったことするのが、誰のためか、考えた上での発言か？」
「……それは」
「そう」
後藤は真顔で頷いた。
「米兵に狂ったことをさせるのは、司令部じゃない。この日本、日本人である俺達だ。頼んだ訳じゃない。そんな言い逃れはいくらでもやればいい。だが、彼らに血を流させたことを、言い逃れることは出来ない」

「……」
後藤のまじめな顔に、美奈代達の視線が集まる。
ハアッ。
突然、驚くほど大きいため息をついた後藤は、さもだるそうに肩に手を回し、首を2、3回コキコキと鳴らせた。
「マジメな顔ってのは、疲れるねぇ」
「は？」
「トドのつまり、俺達ゃ連中の支援をやれって言われたんだよ」
「し、支援って？」
「まさか、遠州灘へ海から突っ込めと？」
「そっちの方がいい？」
「絶対にイヤです！」
さつきの言葉に皆が大きく頷く。
「あっそ」
後藤は頷いた。
「そう言うと思った。なら、他ならいいよね？」
「海からじゃなきゃ」
誰かの言葉に、皆が頷く。
何の反応も示さないのは、後藤とのつきあいが第二小隊より長い美奈代達だ。
「安心して良いよ？海は俺達は通らない」
ホッ！
一斉に安堵のため息をついた。
「――で」
席を立ったのは宗像だ。
「遠州灘陣地の後方からの攪乱攻撃は、どのタイミングで？」
「さすが理沙ちゃんは鋭い」
真っ青になる涼達の前で、後藤は言った。
「でも残念ながら違う」
「違う？」

「そ、そうですよね！」
泣きそうな顔をする涼と芳と、表情を変えない宗像に、
「そいつは愛知方面から内親王護衛隊（レイナガーズ）と天皇護衛隊（オールドガーズ）がやってくれる手はずになっている」と後藤は言った。
「ほう？」
宗像は感心したように言った。
「二宮中……大佐の指揮で？」
「ああ。砲撃陣地はともかく、メース部隊はかなりを引きつけられると思うよ？」
「……」
「それなら中隊長」
宗像が訊ねた。
「駿河湾方面の敵メサイア部隊を引きつけるために、我々はどこを攻めるんですか？」
「よく見抜いたねぇ。マジメに。理沙ちゃん」
「はい」
「俺がどこを攻めろというか、考えたか？」
宗像は答えた。
「――伊豆半島」
「理由を聞いて良いかな？」
「地形上、駿河湾にむけた上陸作戦が困難な反面、半島を押さえれば清水・静岡を砲撃の照準に収めることが出来ます」
「泉、どう思う？」
後藤は、駿河湾周辺の戦況モニターを前に、美奈代に尋ねた。
戦況モニター上では、伊勢湾に集結しつつある米英軍、そして相模湾に展開しつつある日独戦闘艦艇の反応が見て取れる。
「グスッ……すでに伊豆半島奪還作戦は立案されていて、対メース戦部隊としてのお鉢が私達に回ってきただけでしょう？」
「何でそう思う？」
「何でって……」

美奈代は首を傾げた。
「モニター上の布陣を見れば明白じゃないですか」
皆の視線が戦況モニターに集まるが、
「大尉」
寧々（ねね）が困惑気味に言った。
「わかるように説明してください」
「だから」
美奈代は言った。
「何で、砲撃による打撃部隊が相模湾に展開しているかよ」
「え？それって、魔族軍への砲撃支援のため」
「何で、米軍が全滅するまで何もしなかったの？」
「……」
皆が顔を見合わせた。
「米軍を見殺しにしてでも、その時点で部隊の存在を魔族軍に察知されたくなかった……違う」
美奈代は言った。
「魔族軍との戦闘で消耗するわけにはいかなかった」
「何のため？」
「伊豆半島を奪還して、駿河湾一帯の海上からの攻撃を容易にするため。打撃部隊はそのために集められていたから……メサイアによる伊豆半島侵攻時の艦砲支援が主な任務ではないですか？」
「――とにかく、泉の言い分は正解だ。修善寺周辺に陣地を構える大隊級メース部隊の存在が確認されているが、他は大した部隊は存在しない。相模湾から艦砲支援の元、熱海、伊東のラインで陸軍部隊が攻め込む。俺達はその先陣を切るってわけだ」
「また広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）ですか？」
「柏は嫌いか？」
「……あまり」
「それでいいよ。何しろ広いからな。部隊単位で動いてもらうことになる。まず第一目標となるのは、伊東だ。伊東からメース部隊が

確認されている修善寺方面へは」
「……」
「泉」
「やるだけやります」
「スコアは稼ぎ放題だ。存分にやれ」

作戦決行は深夜。

美奈代達が、伊東から敵メース集結が確認されている修善寺へと斬り込む。

夜明けを待って、瀬音達第一小隊と、染谷達第二小隊が下田方面へと向かって進撃を開始する手はずになっている。

作戦の成否決めるのは、美奈代達斬り込み隊の成果如何だ。

メースを斬り込み隊が押さえることが出来るかで、戦果は大きく違ってくるのだ。

「夜襲で斬り込めだなんて」
“白雷（はくらい）”のセッティングを続ける宗像が憮然とした顔で言った。
「気楽にいってくれる」
「全くだ」
美奈代は“白雷（はくらい）”のスクリーンを調整した。
複数の光学処理を施された映像は、真っ暗な闇を昼間のように見せてくれる。
牧野中尉の操縦で、山間の山裾をギリギリの高度で抜ける危険なフライトも恐怖感を感じずに済んでいた。

「風間」
「はい？」
「まず、動いている敵を切り伏せ、稼働前の敵を焼き払う。広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を搭載した我々２騎では機動性がどうしても落ちる」
「はい」
褄子は頷いた。
「可能な限り、私が引き受けます」
「――頼む」

ブースターの移動音を押さえるため、低速で移動を続ける３騎は、ついに山間部を抜けた。

「――いたっ！」
美奈代が整然と並ぶメース達を見つけた途端、メース達の周囲で光が走った。
サーチライトや照明が一斉に光り出した。
こちらを見つけたのは間違いない。
「宗像！」
「うむ」
「風間です――先行します」
美奈代と宗像の２騎の頭上を褄子の駆るＤ－ＳＥＥＤが抜けていった。
その手に握られているのはビームライフルだけだ。
Ｄ－ＳＥＥＤは、装甲形状の関係で、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を搭載出来ない。
その分、機動性を活かした攻撃を期待するのは当然のことだ。

褄子の目の前で、３騎のメース達が動き出した。
片膝をついた姿勢で待機していたそのメース達は、１騎も膝をまっすぐにすることは出来なかった。

立ち上がるより先にＤ－ＳＥＥＤから放たれたビーム攻撃がその騎体に突き刺さり、騎体が四散したのだ。

キィィィッ――――ズンッ！

音で美奈代達の着陸を知った祷子は、後ろを振り返ることなく敵を探して動いた。

ピーッ！

敵弾飛来警告が鳴り響くのと同時に、

「っ！！」

舌打ちする暇もなくＤ－ＳＥＥＤが機動をかけ、それまでＤ－ＳＥＥＤが立っていた場所をＭＬ（マジックレーザー）が突き抜けていく。

「１１時方向、距離３００。敵騎１４――――騎種不明」

「了解」

祷子はビームライフルを格納しつつ、Ｄ－ＳＥＥＤを前進させた。

敵騎がＤ－ＳＥＥＤめがけてＭＬ（マジックレーザー）を乱射する。

祷子はそれをホバー機動だけで難なくかわし、敵との距離を詰める。

突然、敵の射撃が止まったのは、ＭＬ（マジックレーザー）の攻撃では止められないと判断したのだろう。

構えていた魔法弾発射筒を放棄して、メース達は戦斧を次々と抜刀。

接近する祷子に斬りかかってきた。

１１時方向から襲ってきたメースが、祷子めがけて戦斧を振り下ろす直前、斬艦刀がメースの胴を薙ぎ払い、振り戻した直後にもう一騎の胴を叩き斬った。

撃破された２騎が大地に倒れるより早く、祷子は騎体を前進させ、

3時方向のメースの脳天めがけて斬艦刀を振り下ろした。

メース達は次々と倒される友軍騎に怖れることさえなく、祷子めがけて襲ってくる。

戦斧を持つ敵を袈裟斬りで倒し、そこに別な騎が振り下ろした戦斧を、斬艦刀で受け止めたことでしのぎを削る格好になった祷子は、Ｄ－ＳＥＥＤのパワーにモノを言わせてその騎を引き倒し、胴体に斬艦刀の切っ先を叩き込んだ。

そのがら空きの背中に新たな敵が襲ってくる。

敵騎の胴体から斬艦刀の切っ先を引き抜いた祷子は、振り返り様に敵の胴を切り裂き、立ち上がったところで間近の敵の脚めがけて斬艦刀を突き立てた。

祷子はそこで、斬艦刀を手放した。

今の祷子は丸腰だ。

そう判断した敵が襲いかかってくる。

剣をＤ－ＳＥＥＤの胴に突き立てようとした騎の一撃をかわした祷子は、その剣を掴む腕を左手で押さえると、腰部に装備していた“脇差し”を抜刀。

接近する敵騎の胴体――コクピットを突き刺し、引き抜くと今度は腕を押さえた敵騎のコクピットまでも突き刺した。

それだけではない。

再び抜いた脇差しを構えると、正面から接近しつつあったメースの喉めがけて投げつけたのだ。

突撃中のメースはそれを回避することも出来ず、喉に深々と命中した脇差しがメースの操縦系統を破壊した。

メースはそのまま倒れ、動かなくなった。

「……」

祷子は、斬艦刀を脚に突き刺され、動けないままのメースが、死に物狂いで振りかざす戦斧を腕ごと掴むと、その腕をねじ折った。

ギィン――ズギャ……ッ！！

まるで痛みを感じているかの如く腕を押さえるメースからゆっくりと斬艦刀を引き抜いた祷子は、その背後に再び斬艦刀を突き刺した。

残るは5騎。

祷子は容赦なく残る敵に襲いかかった。

義務と矜持

「俺ぁ、確かに」
ブリーフィングルームで後藤は言った。
「派手にやれとは言ったさ。だがな？」
後藤は居並ぶ部下を半ば睨み付けるように眺めた。
「――――ここまでやれとは言ってないわ」

部下からは一言もない。

「これで俺達は、二度と伊豆に行けなくなったわけだ」

後藤の背後に貼り付けられた写真が、後藤の言葉の正しさを証明している。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を用いた奇襲攻撃で、修善寺に展開していたメース部隊は確かに全滅した。
戦果は広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）による攻撃だけで５０騎を越える。
奇襲作戦の成功としては歴史的な代物だ。

それはいい。

問題は――――

「これが戦争じゃなかったら……」
朝一番で飛んだ偵察機が撮影した修善寺周辺の航空写真を前に、さつきが言った。
「私達……仲良く刑務所ね」
「刑務所に入る前に殺されると思います」

その涼の言葉に皆が頷いた。
無理もない。
作者が死んでも書けないだろう文豪達の歴史的名作の舞台となった伊豆修善寺温泉。
今、そこは一面の焼け野原となっていた。
「歴史的建造物からホテルに旅館……公共施設どころか民家まで」
後藤はあきれ顔で言った。
「泉に宗像」
「……はい」
「はっ」
「お前等ね。自分達の立場、言ってみな？」
「……えっと」
“自分達の立場”。
美奈代は眉を寄せ、天井を睨んだ後、言った。
「――軍人、ですか？」
「模範的解答だ」
後藤は皮肉たっぷりに頷いた。
「俺はてっきり、正義の味方とでもいうかと思ったよ」
「性技には自信が」
「宗像、字が違うっていうか、まぜっかえすな」
“帝国臣民の生命及び財産を守る”ことが我々の立場だと、そう答えればよかったのですか？」
宗像は言った。
“臣民の財産”たる施設をこうも灰燼に帰すとは、何を考えてい

るか。そういうお叱りですね？」
「――わかってるならさ」
後藤はため息まじりに肩を落とした。
「もう少し考えてよ」
「しかし――！」
抗議しようとした美奈代の肩を、宗像が押さえた。
後藤は続ける。
「戦場になった。戦場だからは、軍人としての言い逃れに過ぎない。いいか？戦場になったからといって、自分の財産を灰にされて納得出来る酔狂はそうはいない。戦場から非難した避難民だって、戦争が終われば、全てが元通りになると信じているんだ。――それはつまり」
「……」
「俺達に対する、臣民の信頼そのものなんだ」
「……」
美奈代は、戦場の光景を思いだし、唇をかみしめた。
「祖国が戦場になったことを怒りに変えて戦う――ご大層な言い分は、政府公報にでもやらせておけよ。そんなものは、勝手な物言いってもんさ。自分の大切な生活の場を潰しておいて、守ってやったと言われれば、むしろ怒るのが人情ってもんだ」
「……」
「つまり」
宗像は立ち上がった。
「被害をもっと押さえろと――そういうことですね？」
「その通り」
後藤は頷いた。
「修善寺から敵が撤退したまではいいが、修善寺周辺が灰燼になった。やったのは近衛だってマスコミが報道した途端、避難民達が暴動を起こした」
「暴動？」

「死人まで出ている――いいか？人の堪忍袋はいつ切れてもおかしくないんだ。下手な被害を出すと、とんでもないトバッチリを喰らうことになる」
「……しかし」
「しかし、も、でも、もないの」
後藤は美奈代に言った。
その声はかなりの怒りを込めているのは誰の耳にも明らかだ。
「これまで黙っていたが、市街地での戦闘は極力避けろ。でないと、今回みたいに、俺が上層部に呼びつけられて吊されて、落とし前は中隊みんなで仲良く減俸処分じゃ済まなくなるよ？」

ブリーフィングルームに中隊全員の悲鳴が轟き渡った。

「何という無様な！」
被害の程度の大きさにズルドが激怒したのは無理もないことだ。
「夜襲を喰らったとはいえ、６０騎を喪失とは何事だ！」
怒り狂ったズルドによって首を締め上げられる参謀達こそ良い迷惑だ。
「現状はどうなっている！」
「伊豆半島は、人類の手に落ちました」
マーリンは答えた。
「人類は、相模灘方面から侵攻を開始。伊豆半島防衛部隊は、各地で奇襲を受ける格好になり」
「……無様にも程がある」
「それが」
マーリンの顔が曇った。
「人類側が投入した主力部隊は、メースとは限りません」
「ん？」

「魔法騎士部隊が、かなりの数、投入された模様で……」

魔法騎士。

超人的身体能力を持つ“騎士”の体に、魔法使い、もしくは超能力者たる“魔導師”の力を持つ“究極の生体兵器”と呼ぶべき存在だ。

能力等に激しい個体差はあるものの、最もバランスがとれた高位レベル魔法騎士となれば、その戦闘能力はメサイアに匹敵する。

魔族の血と遺伝子情報をベースに作り上げられた戦闘種族が、騎士や魔法騎士という人類のカテゴリーの原型になっていることくらい、ズルドも知っている。

元来が、労働力として作られた生命体である人類だ。

その中でも、戦闘用、もしくはより力を求められる特殊労働用に、より自分達魔族や神族に近い能力をあえて与えたのが、現在、人類が呼ぶ“騎士”の原型だ。

その騎士達の中で最も戦闘兵器として、遺伝子情報をいじられ、最も神族や魔族の中でも“特別扱い”されるべき“部族”の特殊能力まで与えられた存在。

それが魔法騎士だ。

その戦闘能力は、最終的には原型となった純血の魔族や神族の“特別扱い”されるべき“部族”の能力を遙かに越える程にまで達し、数千年前の戦乱では凄まじいほどの惨禍を世界中に引き起こした。

それが通説だ。

だが、実際の所、通説上の騎士や魔法騎士は、その戦乱の中でほとんど失われ、ズルドの知る限り、終戦時、かつて１００万体を誇

ったヴォルトモード軍にも数体しか残っていなかったはずだ。
それが部隊を組む程の数が存在するとは？
答えは簡単だ。
新たに生まれたのだ。

人類との長くもない歴史の中で、神族や魔族と人間とが混ざった。
それが真実だろう。
神族や魔族が慰み者として犯した人間の女との間に生まれた子供。
かつては“新生種（ノウルサリート）”と呼ばれ、忌み嫌う風潮さえあった存在。
人類よりはマシな程度でしかない中途半端な生き物たち。
それが、混血児としての騎士や魔法騎士達――“新生種（ノウルサリート）”達だ。
その子孫が、“純血種（アルハイク）”と呼ぶべき、ズルド達が知る騎士や魔法騎士達の代わりに、その名が意味する所の座を占めているとはいえ、かつて神族側“純血種（アルハイク）”に辛酸を舐めさせられた経験のあるズルドが、魔法騎士という呼び名に青筋を立てたのも無理はない。
それが“純血種（アルハイク）”だろうと、“新生種（ノウルサリート）”だろうと、魔法を使って戦う存在ははっきり脅威であることに何ら代わりはないのだ。
獣のように呻いた後、ズルドは訊ねた。
「中央部族で構成される部隊は今どこだ？」
中央部族――
魔法騎士達の原型となった魔族側部族のことだ。
魔族達の中では、その力故に長く支配的地位を占めた部族でもある。
「下諏訪で部隊編成中です」
「静岡に回せ。最強には最強をもって当てる」
「はっ」
「とにかく、愛知を落とすことが最優先だ」

「はっ。それと閣下」
「ん？」
「面会です」
「誰だ」
「“天壇”からです」

「何をしに来た」
ズルドは席に着くなり、目の前の女性に開口一番、そう言った。
「まぁつれない」
女性はコロコロと楽しげに笑った。
黒いドレスに艶やかな黒髪。
ぞっとするほどの色気を持つ妙齢の女性。
“天壇”のダユーだ。
「レディの訪問を受けた殿方のお答えとも思えませんわ？」
「俺は元から成り上がりだ。殿方なんて呼ばれる育ちはしていない」
ソファーに腰を下ろしたズルドは、不快感をあらわにそう言った。
「生粋の貴族あがりの兄貴達とは違う」
「それは失礼」
ホホッ――。
何が楽しいのか、病的にさえ思える冷たい笑みが、ズルドの神経を逆なでにする。
生理的な嫌悪感を遙かに通り越した何か薄気味悪い感情が、背骨をはい回ってる錯覚さえ覚えさせる。
「男爵位の株は奥方のモノでしたね」
「……俺は自分から爵位を名乗ったことは一度もない」
「そういう一本気なところは嫌いではありませんわ」
「もう一度聞く」

ズルドは深呼吸と同時に言った。
「何をしに来た」
「随分、お困りとの話を聞きましたので」
「……」
「第四軍はユウラ司令官、第二軍はタイハ司令官の封印も解除のメドがたったそうですね」
「めでたい限りだ」
ズルドは頷いた。
「ただ、肝心要のヴォルトモード卿の所在が分からない。めでたいとは言ったが、ユウラもタイハも、閣下を捜索中に……連中には悪いが、“外れ”た結果にすぎない」
「……そうですね」
ダユーは、あまり興味がない。という顔で適当に頷いた。
「――両司令官が、閣下のこれまでの戦功をご覧になった時、何と申されるでしょうか？」
「……何？」
「随分と――」
ダユーは、チラとズルドの顔をのぞき見るような視線を送った。
「――惨憺たる結果にすぎるのでは？」
「……」
「総司令部内でも、ずいぶんとお立場を危うくしてはいませんか？」
「……」
ズルドはソファーにその巨体を寄りかからせた。
「更迭するならすればいいとは言ってある」
そう言った。
「俺をクビにしたければそうしてくれ。もっと戦上手なヤツがいれば、そいつに軍を任せていい。俺は一兵卒で戦っても良いし、田舎のブラン・ポートに戻ることにしてもいい」
「随分と投げやりですこと」
「唯でさえ、苦境に立たされているというのに、お前の面会を受け

たんだぞ」
「つれない御方」
「からかいに来たなら帰れ」
「人類側の魔法騎士が動いたと聞きましたが？」
「……」
ズルドは浮かせかけた腰を止めた。
「メース達も決して侮れない戦力だとか」
「……」
「いかがです？私が、魔法騎士を用意することも出来ますが？」
「用意？」
「はい」
ダユーはニコリと笑った。
愛嬌を振りまいたつもりだろうが、どうあがいても冷たい印象を拭うことが出来ない。
事あるごとに楓絡（フィーリア）みで突っかかってくる、あのカヤノ大尉の方が、まだ可愛げがあるなと、ズルドはカヤノの顔を思い出しながらふと思った。
“天壇”復活時に確保した人類の何割かを“改造”して、魔法騎士に仕立ててみました」
「……さらっというな。そういうことを」
ダユーの言う“改造”。
それはようするにどういうことか。
ズルドはそれがイヤという程わかっていた。
“改造”を受けた者の容姿は、一言で言えば、
――――とても楓（フィーリア）に見せられる代物ではない。
それだけは確かだ。
「お前のことだ。改造人間を作ってみたが、飽きたから引き取って

くれ――そういいたいんだろう？」
「はっきりとしすぎる物言いは嫌いです」
ダユーは、少しだけすねた顔になった。
「せっかく、お役に立てると思いましたのに……」
「それなら兄貴に言え」
ズルドは顔をしかめた。
「お前はむしろ兄貴と仲がよかったろう？」
「男と女です♪」
「――っ」
「魔法騎士の戦線投入数はこちらの方が多いはずだからズルド様に送れと、ガムロ様はそう仰せです」
「兄貴が？」
「はい。昨晩のベッドで」
「……」
「それとですね？」

ズーンッ！
ズーンッ！

遠くで戦闘音が風にのって聞こえてくる。
両軍合わせてもかなりの戦いとなったこの戦闘も、もう終わろうとしている。
戦場に倒れるのは、すべて人類側メース達。
その無惨に砕かれた騎体をサライマのコクピットから眺め、満足げに頬をゆるめたのは、アーコットだ。
「たいしたもんじゃないか」

――何もするな。
――突っ立って見ていればいい。

受けた命令は実に奇妙な代物だった。

スクリーンの端に映る濃緑色のメース達。
甲冑を纏った騎士然としたメースとは明らかに異なる、何となく工業製品を連想させる味も素っ気もない容姿。
生産工程の省略を徹底した簡易型であることは、それだけでわかる。
魔界の新型かと思ったが違う。
何と人類の製品だという。
少なくとも、アーコットはこのメースと交戦したことはなかった。

中華帝国製メサイア“飛鼠（ひそ）”。

つまり、人類の裏切り者達が作り上げた騎だ。

――気の毒に。

生まれた途端に裏切り者のレッテルが貼られるメースに、アーコットはふと、そんな感情を持った。
人類の裏切り者。
となれば――

「……」

アーコットは、命令文を読み直した。
その最後には、こう書かれていた。

――当該のメース達が暴走したと判断した場合、全てを破壊せよ。

人類の裏切り者が、即魔族軍の協力者と見なされていない証拠だ。
どっち付かずのコウモリ。それが目の前のメースだ。
コウモリの別名である“飛鼠（ひそ）”を冠するとは出来すぎだとアーコットは思う。
そのアーコットの前で、“飛鼠（ひそ）”達が動き出した。
通信装置は戦闘の終結と帰投の命令が入ってくる。
アーコットは、部隊に帰投命令を出した。

アーコットが、“飛鼠（ひそ）”の足下に立ったのは、それから2時間後のことである。
頭部にキャットウォークが据え付けられている。
パイロットの収容作業の最中らしい。
整備兵はともかく、見慣れない白衣を着た何人かが整備兵に混じっているのが気になる。
「間近で見ると」
アーコットは整備兵の間を抜けて“飛鼠（ひそ）”の脚部に近づいた。
まだ新型のはずなのに、装甲のあちこちのペンキが剥げかけている。被弾した弾痕がくっきりとあちこちに残っている。
「なんだいこりゃ」
アーコットは、冷却処理が終わっていることを確認し、そっと装甲に触れてみた。
ペコッ
変な音がして、装甲が凹んだ。
「はぁっ！？」
何度押しても、ペコペコと奇妙な音を立てて装甲が凹む。
装甲が、だ。
「これ……本当に装甲かい？」

「大尉」
近くを通りかかった顔見知りの整備兵がアーコットに気づいた。
「どうなさいました？」
「これ……なんだい」
アーコットは呆れと驚きをないまぜにした顔で訊ねた。
「人類はこんな奇妙な装甲、使ってるのかい？」
「まさか！」
整備兵は笑いながら首を横に振った。
「こいつには防弾の意味さえありませんよ」
「は？」

アーコットには、整備兵の言葉が信じられない。
アーコットの知るメースの装甲は、少なくとも人類側の戦車砲の直撃程度は余裕で耐える。
耐爆、耐熱、対魔法――様々な防御を命じられる装甲故に、魔族軍の装甲は概して分厚い。
しかし、そこまでやってこその装甲だと、アーコットは固く信じている。
それだけに、目の前のペラペラな装甲が、メースに採用されている以上、その基準に達していると錯覚したのだ。
「人類側の歩兵攻撃でさえ貫通します。構造が恐ろしく単純で、複雑な機器類は搭載していませんから、それだけで問題ないんですよ」
「……は？」
「センサー類は搭載しない、すべてはパイロットのカンのみ。武装は刀剣、槍、銃のみ――セッティングの切り替えが必要な装備は何も使えません」
「……」
眉に皺を寄せ、信じられないモノを見る目で、アーコットは目の前の騎体を見上げた。
「どういう代物だい……こいつぁ……」

「何しろ、パイロットがパイロットなんで」
「いや……義勇兵とはいえ」
「違いますよ。大尉」
整備兵は複雑そうに顔をしかめた。
「乗っているのは、魔族でさえありません」
「は？」
「ご覧になりますか？――――見るには、それなりの度胸と覚悟が要りますが」

メースのコクピットまで移動するリフト――――キャットウォークを使って、アーコット達はコクピットの前に立った。
「へぇ？頭部は固定式かい？」
「ええ――――まぁ、メース自体、モニターを可動式にすれば、頭部まで動かす必要はないんですけどね」
「美学ってもんさ――――で？」
頭部から背面に流れるように取り付けられた頭部装甲は、ヘルメットというより、頭の代わりに巨大な蛭（ひる）を乗せたようだ。
これでは頭部は動かない。
コクピットはその頭部装甲の横から入る構造らしい。
真っ平らな肩部装甲上部が皮肉にも乗降性を向上させているとはいえ、コクピットには入り込むというより、“這って入る”姿勢を求められる。
とてもではないが、入りやすくはない。
「本当の出入りは、頭部装甲を大きく開くんですけど、これは点検用ですから」
「点検用？」
「入ってみればわかりますよ」
整備兵は、まるでドアマンさながらな丁寧な仕草で、アーコットにコクピットの中を覗くように促す。

アーコットはそれに従って、薄暗いコクピットの中に入り込んだ。
そして――――

「きゃぁっ！」
ガンッ！

妙に色っぽい悲鳴と共に、鈍い音をあげたアーコットがコクピットの前でうずくまる。
コクピットハッチに頭をぶつけたのだ。

「大丈夫ですか？大尉」
まるで予想通りだといわんばかりの顔で、整備兵はアーコットを抱き起こした。
「痛たたっ……な、何よ……あれは！」
涙目で整備兵に食って掛かったアーコットに、整備兵は冷静に答えた。
「“あれ”が、このメースのパイロットです」
「……」
アーコットは天を仰ぎ見た。
「何の冗談よ……何よ……あれは」
「気の毒な連中ですよ」
整備兵はしゃがみ込むと、ハッチから中を覗き込んだ。
気丈な姐さんたるアーコットに愛らしい悲鳴を上げさせた相手は、その中にいた。
分厚い透明なカプセルに入った男が、青白い光に照らし出された横顔を見せている。
カプセルの中は透明な液体に満たされているらしく、時折、気泡が鼻や口のあたりからポコポコと湧いてくる。
その程度なら、アーコットが悲鳴を上げることさえないだろう。

問題は――

その“彼”につながれた無数のチューブだ。

元は男性だろう。

そり上げられた後頭部、目、耳、鼻、口――すべてにチューブが入り込んでいる。

手足はない。

内臓までない。

心臓の代わりに得体の知れない光を放つ魔晶石があるだけ。

まるで芋虫のようになった体を形作るのは、脊椎だけだ。

頭と背骨だけのチューブにつなげられたバケモノ――

それが、アーコットに悲鳴を上げさせた存在の正体だ。

「“こいつ”はね？大尉――人間なんですよ」

「……人間？」

「ええ。“天壇”はご存じですよね」

「あの獄族共の仕業かい？」

そう答えるアーコットの表情は硬い。

「ええ――近くの半島攻めた時に捕獲した人類のかなりを人体実験に使ったと聞きました。薬物と魔法処理で三種人間を無理矢理、二種や一種に。こいつはその改造例の一つにすぎません」

「“改造”ってヤツ……かい」

こみ上げてくる吐き気を押さえるために、何度も深い呼吸を繰り

返すアーコットは、やっとの思いでそう言った。
「そうです」
整備兵は頷いた。
「人間の生体コンピューター化したケースがこいつです。こいつは、このチューブを使って、人類製のメースと一体化されています。
メースを動かすためだけに、こいつらは存在する。
このメリットは、第一に、コクピット内部の擬似羊水がGを相殺する構造から、パイロットを無視した機動が可能なこと。しかも、パイロット自体が生体コンピューターですから、パイロットの感情云々によるエラーはない……」
説明する整備兵の声も決して楽しげではない。
「お偉いさん達にとっちゃ……“都合のいい兵隊”の理想像そのものんですよ。
だけど、こいつらはどうですかね……喜怒哀楽の全てを奪われ、機械や道具としてのみ生きることを許されるなんて」
整備兵は、ちらとアーコットを見た後、続けた。
「……俺、思うんですけどね？さっき、お偉いさんのこと口にしましたけど、もしかしたら、俺を含む我々魔族……神族でさえ、その望む人類の姿は、極端なこと言えば、こういうもんじゃないのかなって」

「ふざけんじゃないよ！！」
アーコットは整備兵の首を締め上げた。
「あんたね！戦場は命のやりとりする神聖な場所だ！そこにこんな汚らわしいモノを送り込むなんて――魔族軍はプライドってもんを失っちまったんか！」

神聖な場所。
アーコットにとって、戦場とはまさにそういう所だ。

正々堂々と戦うのが礼儀の世界。
世界で最も礼節が求められる、いかなる神殿よりも荘厳にして神聖な空間。
それが、戦場だ。
その戦場に立つことを誇りとするアーコットにとって、このような人とも何ともつかぬ代物が、兵士として振る舞うことは、死んでも認めたくない。

「……現状を理解してください。大尉」
激するアーコットに、整備兵は諭すように言った。
「兵力が足りないのです」
「兵力不足、物資不足って！いつもそれだ！」
アーコットは逆に腕に力を込めた。
「不足不足って――それが免罪符のつもりか！」

コクピットと呼ぶにはあまりに惨いカプセルを前に、アーコットは無意味だと知りながら、それでも怒りを爆発させることを止められなかった……。

「私達メース使いは、そんなに役立たずか！」

米沢にて

「これから話すことは」

後藤は部下を前にそう切り出した。

いつもの冗談めいた笑みも、どこか乾いていた。

「冗談じゃないよ？」

夜１１時すぎ。

ようやくベッドでうとうとしかけた所をたたき起こされた美奈代は、眠い目をしばたたかせながら、後藤の言葉を待つ。

「本日１５００時から１７００時にかけて、富岡に集結しつつあった国連軍メサイア部隊が魔族軍の奇襲攻撃を受けた」

勝ったんですよね？

美奈代はそう聞こうとして、口を閉じた。

後藤の顔が、それを暗に否定していたからだ。

「国連軍メサイア部隊は６０騎。国連軍メサイア部隊は、ＥＵから派遣されていたベルギー軍部隊だ。ＥＵ軍の中では、アグレッサーまで務めた腕っこき達だ。この部隊全滅により、国連軍は富岡から後退。富岡は魔族軍の手に陥落した。なお、投入された魔族軍側メースはわずか５騎だ」

「５騎！？」

声をあげたのはさつきだ。

「も、申し訳有りません……で、ですけど！」

「あの“銀色のバケモノ”相手じゃないよ？」
後藤は咎めるでもなく、続けた。
「メース……違うな」
後藤は慣れない手つきで室内照明を落とすと、プロジェクターの映像を映した。
「これが、ベルギー部隊が犠牲になることで、国連軍が手に入れることが出来た“メサイア”のデータだ」
ガンカメラのデータを、圧縮送信したせいだろう。かなり画像が荒いが、それでも画面に映し出されるメサイアの姿がくっきりと判別出来る。
得体の知れないバケモノじみた頭部が、緑色に塗られた無骨な体に乗っている。
美奈代にはそうとしか見え……否、表現が思いつかなかった。

「宗像、わかるか？」
「……中華帝国軍のメサイアの外見と酷似していますが」
「そうだ」
後藤は頷いた。
「敵は、中華帝国軍名称“飛鼠（ひそ）”――国連軍名称“シットバット”――糞蝙蝠と推定されている」
「そんな奴らにやられたんですか！？」
美晴が言った後にあわてて口を閉じた。
「外見や産地で戦争してるわけじゃないよ」
後藤は言った。
「外見はそんなんでも、性能は恐るべきモノがある――国連軍の専門家も太鼓判を押しているよ」
「頭部形状の違うモデルは、大陸の各地で確認されている」
後藤はプロジェクターに映像を映した。
胴体は同じだが、頭部か人間らしい形状のメサイアが映し出されていた。

「近衛が把握している限りでは、こいつは脳波コントロール操縦可能なメサイアだ」
「脳波コントロール？」
「ああ――――ＳＴＲシステムなしでも、パイロットの思考通りに動く仕組みだ。大したもんだよ」
後藤は、本当に感心した。という顔で言った。
「ＭＣ（メサイアコントローラー）さえ必要ない」
「はぁっ！？」
美奈代は思わずすっとんきょうな声をあげてしまった。
「え、ＭＣ（メサイアコントローラー）なしで、どうやってメサイアをコントロールしてるんですか！？」
ＭＣ（メサイアコントローラー）は、魔晶石エンジンの精霊をコントロールする、いわばメサイアの要だ。
ＭＣ（メサイアコントローラー）なしでメサイアに動けというのは、脳みそのない体に動けといっているのと変わらない。
美奈代の知っているメサイアとは、そういう代物なのだ。
「――――泉、お前さ」
後藤は言った。
「魔族軍のメースに、ＭＣ（メサイアコントローラー）がいるって、聞いたこと、ある？」
「い、いえ？」
美奈代は首を傾げた。
これは中華帝国のメサイアのはずだ。
なのに、どうしてここで魔族軍が出てくるんだ？
「このメサイアは、魔族軍の技術供与によって作られた、人類初のメースだ」
「！！」
「このクソ蝙蝠、実際大した代物さ」
後藤は続けた。
「固定武装はないし、装甲もペラペラ。構造も第一世代メサイアが精密機械に思えてくるほど、脳波コントロールシステム以外、恐ろ

しく単純だ。実際」
後藤は楽しそうに部下を見回した。
「一般人でも操縦出来る」
その気になれば、俺でも動かせるかな？
後藤はそう言うのだ。
「ま、待ってください」
美晴が手を挙げた。
「メサイアの機動をやれば、一般人なら」
「筋肉ズタズタ、肉体バラバラ？」
「……です」
「なら、最初からそんな機動しないとすれば？」
「は？」
“飛鼠（ひそ）”は、数種類が存在し、その中には騎士の機動をほとんど出来ない。メサイア操縦適格者でない一般騎士でも、脳波出せる脳みそがあれば操縦出来るタイプも確認されている。考えて見ろ。一般騎士だって、少し鍛えれば弾丸程度は避けるだろ？あとは、数で押し切ればいい。生産コストも整備性も戦車並み、稼働率は高い。使う方としちゃ、良いことづくめってわけだ」
「それでも、メサイアが出てくれれば的にしかならない」
都築が肩をすくめた。
「数で押し切るというより、犠牲を増やすだけにしか」
「一つのタイプと言ったろ？富岡を襲った連中は、お前達がチベットで散々苦労したあのタイプだ」
「あれが日本に！？」
「ああ。魔族軍が使用している。海外では、さっきのタイプも使われているそうだけど、その場合、対メサイア戦のために、別に“赤兎（せきと）”部隊が待機してるって寸法さ」
「脱走兵を殺すために？」
「その答えは……」
後藤は楽しげに口元を歪めた。

「俺からは言えないなぁ」
「……」
「どっちにしても、奴さん達ゃ、この騎を、その工業力にモノ言わせて大量生産している。東南アジアでは、狩野粒子被害の増大により、電子化された兵器が使用不能になりつつある。その中でコイツと、ご自慢のレトロ兵器が一挙に大量投入された結果、ほぼ全域で形勢が逆転、ベトナム国境線は今日の正午には突破された」
「……それで」
宗像が訊ねた。
「我々に、こいつの相手をしろと？」
「今のところ、それはない。安心して」
後藤はきっぱりと言い切った。
「単なる世間話だから」
「――はっ？」
「もっと別な任務がある。俺達、これから随分と忙しくなるよ？」

今でも十分、忙しいんですけど……。
皆の目がそう抗議している。

「俺達の目的は、日本のどこかに、あの銀色のバケモノが現れたら、すっとんで行って倒す。いい？倒されるのは任務じゃないからね？」

随分とイヤミを言う。
美奈代は眉をひそめた。

「普段は、俺達ゃ場所を変えて戦うことになる」
「場所？」
美奈代には意味がわからない。
「静岡はどうするんです」
「あれだけやっちまったんだ」

後藤は美奈代達にとって痛いところを突いてきた。
「司令部としても、住民感情ってのは軽視出来ないよ」
「……」
「当面、俺達は静岡方面の任務から外されて、東北に流される」
「東北へ？」
「こっちよりは涼しいだろうなんて、考えるなよ？」
後藤は楽しげに答えた。
「あっちの方が地獄に近いぞ？俺は、楽が出来るけど」

“白雷（はくらい）”で“鈴谷（すずや）”から発艦した美奈代達は、太平洋を移動する。
移動先は山形県だという。
美奈代は後でこっそり日本地図で場所を確認した。
山形県が日本海に面していること自体、美奈代は知らなかった。
「ようするに、私達ってさぁ」
さつきが投げやりな声で言った。
「“鈴谷（すずや）”から追い出されたんじゃないの？」
さつきの言葉に誰も反論出来ない。
無理もない。
美奈代もそう思う。
何しろ、““鈴谷（すずや）”建造以来、初の出来事”であるメサイアフル搭載状態に、ついに“鈴谷（すずや）”のオンボロ設備が耐えられず、電気系統がフルダウンした。
きっかけは、ほんのちょっとした電気系統のトラブルだったが、それがトリガーとなって、整備ハンガーの電装設備が一発で吹き飛んだのだ。
――今まで動いていたのが奇跡。
――メサイア整備不能。

そう判断した艦隊司令部は、“鈴谷（すずや）”にドック入りを命じた。

修復に必要な期間は3週間。

その間、美奈代達メサイア部隊は“鈴谷（すずや）”にいることは出来ない。

修理の邪魔だからというスゴイ理由で皆がフル装備の武装を与えられている。

「こんなに餞別までもらっちゃって」

美奈代には、さつきの皮肉に反論する気にもなれない。

「大尉。小清水ですけど」

涼が訊ねた。

「米沢ってどんな所ですか？」

「よく知らないが」

美奈代はうろ覚えの知識で答えた。

「上杉の領地だろ？」

「上杉ってことは……」

美晴が言った。

「歴史的遺産も多いってことですよね？」

「まぁ、そうなるか」

「そこでコイツ使ったら……」

さつきは“白雷（はくらい）”が背負う広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を見た。

「私達、ついに銃殺台かな」

「やめろ……考えたくない」

「ねぇ、涼、寧々ちゃん」

芳が言った。

「私達、ハイメガカノンでよかったね」

「……訳ないだろ」

米沢から少し行けば、新潟県境。
新潟はすでに魔族軍の支配下だ。
「……あそこか」
牧野中尉の誘導下、メサイアが並ぶ光景がようやく見えてきたのは昼過ぎだった。

――米沢牛のステーキ
――米沢牛のすき焼き

誰が言い出したかわからないが、やたらと会話の中に米沢牛という言葉が出てくる。
ブランド牛なんて何もわからないが、とにかくやたら美味いらしいことは、美奈代にもわかった。
どんな味か、想像するだけでお腹が鳴る。
単調で映えのしない“鈴谷（すずや）”のメニューからは想像も出来ないほど美味いんだろう。
食べてみたいなぁ。
美奈代がそう思った瞬間だ。
美奈代は産毛が逆立ったのを確かに感じた。
「――――っ！」
牧野中尉もさくらも、何も言ってこない。
いや、言うより先に、というべきだろう。
美奈代はとっさに“白雷（はくらい）”を捻った。

グンッ！

美奈代騎の真横を何か巨大な物体が突き抜けていったのは、その瞬間だった。

「敵っ！？」
美奈代はその敵を探した。
真下に一気に突き抜けたのは間違いなくメサイアだ。
美奈代騎を仕留め損なったとみるや、急上昇をかける。
その動きの機敏さに、美奈代は正直、舌を巻いた。
「……やる」
「大尉っ！」
美奈代は、その騎にばかり気を取られていた自分に、その声で気づかされた。

ピーッ！

背後からの警報。
美奈代は騎体を思い切りダイブさせる。
ブンッ！
丁度、美奈代騎の頭部があった辺りを、巨大な刀身が駆け抜けたのは、そのタイミングだった。

「くそっ！各騎無事か！？」
美奈代は敵からの2撃目を迎え撃つべく、実剣を抜いた。
静岡戦線で仕留めたサライマから分捕ったメース用の実剣。
指揮官かかなり身分のある者が駆っていたらしいそのサライマの実剣の柄は豪奢な飾りが施されており、美奈代のちょっとした自慢の種だった。
その刀身が陽光を受けてギラリと光る。

「ま、待ってくださいっ！」
突然、牧野中尉が止めに入った。
「あ、あれは友軍騎です！」

「見たことないですよ！」
「敵味方の識別を外見だけに頼るなって、何度言えばわかるんですっ！」
牧野中尉にそう一喝され、美奈代は首をすくめてしまった。
「随分、腕を上げたようだな――泉」
通信機に入ってきたその声は、美奈代にとって今や懐かしくさえあった。
「に――――」
嬉しさのあまり、声が震えてしまう。
目の前のメサイアが何より頼もしく思えてしまう。
やっと逢えた。
美奈代の頬を涙がつたわった。

「二宮教官っ！」

地上作業員の指示に従い、“白雷（はくらい）”を駐騎。騎体から降りた宗像と美晴は、目の前に居並ぶメサイアを前に足を止めた。
全体に灰色で、各所にオレンジが配色されている珍しい塗装が施されている。
背中には見慣れない巨大な翼付き（バインダー）の増設ブースターユニット。
左腕には、可動式のシールド。右腕に大型ビームライフルを装備した騎の形状から、おそらくはαタイプだと見当をつけることは出来る。
「見慣れない騎のはずなんだが……」
宗像は首を傾げた。
「……どこかで、見たような」
そう。

宗像はそれが疑問だった。
これと良く似た騎を見慣れているようにも思えるし、体が動かした時の感覚を覚えてさえいる気がする。
「内親王護衛隊向けの専用騎じゃないんですか？」
美晴はそう言ったが、
「ライブラリにあったか？」
「そういえば……」
「ライブラリのアップデートは一昨日だぞ？」
「……ヘンですね」
美晴も首を傾げた。
敵味方識別用に、友軍のメサイアは全て敵味方識別データとして、メサイアのライブラリに登録されている。
ごく希に、実験騎や特殊騎が入っていないケースもあるとされるが、少なくとも量産に入った騎でライブラリに登録がないことは、あり得ない。
数は１２騎。
背中に装着されたバインダーは、飛行時の機動性を向上させるためのもので、その性能は先程、美奈代が味わっている。
反面、バインダーの装備は、背部ウェポンラックを潰してしまい、広域火焔掃射装置の他、かなりの追加武装が搭載出来ないことになる。
つまり、運用上の用途を限定させてしまう。
それを装備している以上、はっきりと通常使用を目的とした騎ではないことがわかる。
いくら内親王殿下護衛を目的としているとはいえ、武装の幅を狭めてしまう理由が美晴にはわからない。
そんな美晴達をよそに、感激の中にいたのが美奈代だ。
頬を滝のような涙が流れているし、もし美奈代に尻尾があったら、それはそれは激しく振ってみせるだろうことは、放たれるオーラか

らわかる。
「はいご苦労さん」
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）から降りた後藤は、整列する二宮達を前に、相変わらずの態度で敬礼した。
「第八八独立駆逐中隊、後藤中佐以下、着任」
「内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）、二宮大佐。ご苦労様です」
「いや、すみませんね。昇進のお祝いも送らずに」
「いえ」
二宮の視線が、かつての教え子達に向けられる。
「多少は成長したようですね」
「悪ガキぶりは相変わらずさ」
後藤は引きつったような笑みを浮かべ、肩をすくめた。
「おかげで引率の俺はたまったもんじゃない」
「ぷっ。そうですか」
少しだけ嬉しそうな顔を浮かべた二宮に、後藤は言った。
「――まぁ、いろいろあるんで、打ち合わせの時間もらえるかな？」
「了解です――司令部へ。麗菜殿下もお待ちかねです」
「泉、メサイアの駐騎は終わってる？」
「はい」
「じゃ、この場で解散」
「神谷」二宮が脇に控えていた神谷中尉に言った。
「後の面倒は任せる」
「はっ」
「ああそうそう」
後藤は思いだしたように言った。
「風間」
「はい？」
「一緒においで」

「“鳳龍改”だ」
灰色のメサイアの足下に立つ神谷が美奈代達に言った。
「都築が潰した“鳳龍”の量産型になる」
「……ああ」
宗像はポンッと手を叩いた。
「それでか」
「宗像中尉、何かあるか？」
「いえ。どこかで見た騎だと思ったので」
「あれは先行量産型だからな。戦闘データを元に、大夫に手直しが加えられている」
神谷は誇らしげな顔で言った。
「αタイプとはいえ、パワーは十分だ。それに重駆逐型に分類される“白雷（はくらい）”より、軽量というか、かなり軽い」
「機動性重視なんですね」
「そうだ。装甲をシールドに頼る反面、反射スピードで穴埋めする考えだな」

「……」
美奈代はその会話を上の空で聞いていた。
二宮に再会出来たことが嬉しくて、話に集中出来ない。
夜、二宮とじっくり話が出来る。
そう思うだけで、舞い上がりそうなほど、その時間が待ち遠しい。
何度も時計を見ては、時間が過ぎる遅さがもどかしく感じてしまう。

「泉大尉」
背後から声をかけられたのは、二宮の騎がどれか探していた時だ。
振り返ると、背の高いレタスグリーンの髪をアップにまとめた女

性士官が立っていた。
階級は少佐。
美奈代は無言で敬礼した。
「内親王護衛隊副官の月城少佐だ」
答礼した士官はそう名乗った。
「第八八独立駆逐中隊第一小隊長、泉大尉です」
「噂は聞いているぞ？」
親しげに語りかける月城の周囲に立つ女性士官達が、興味深げな視線を自分に向けている。
「噂？」
「……そのことで、少し話がある」
美奈代がつれてこられたのは、士官達の休憩所を兼ねているらしい、タープの下に折り畳み式のテーブルと椅子代わりの弾薬箱が置かれた場所だ。
「コーヒーでいいか？」
ボコボコに歪んだテーブルの上に、車載用バッテリーが無造作に置かれ、そこから電源をとっている小型冷蔵庫から月城がコーヒーの缶を取り出した。
「あ、ありがとうございます」
月城の取り巻きだろうか。自分よりやや年上のはずなのに、妙に愛くるしい印象を受ける女性士官――正直、“少女”と呼んだ方がしっくり来るような女性達――が、興味津々で自分を見ている。
「目の前にいるのが誰か、知っているだろう？」
缶のプルタブを開けた月城が周りに言ったが、少女達は互いを見合って首を左右に振った。
「第一種軍装なら」
月城はその細い指で自分の胸を指さした。
「ここに金鵄勲章。ここにはダイヤモンド付き剣付柏葉鉄十字勲章がつく」
「……」

きょとん。とした少女達は、途端に笑い出した。
「きゃははっ！少佐ったら、冗談がすぎますよぉ！」
「こんな子が金鵄持ちだなんて！」
「……泉大尉」
「は、はい」
「スコアおしえてやれ」
「……あの」
「スコアはいくつだ？」
美奈代は答えた。
「１２８騎です」

「――――で」
ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）から、牧野中尉のあきれかえった声がした。
「スコアを信じてもらうために、模擬戦ですか？」
「多分」
美奈代は言った。
「月城少佐、私と勝負がしたくて仕組んだんですよ」
スクリーン前に立つのは、先程の少女達の中から志願し、月城に認められた3名。そして月城が搭乗する“鳳龍改”達だ。
「……成る程？」
牧野中尉も何となく事情が飲み込めた。
相手はエリート部隊。
そのエリートでさえ、誰も実現していない撃破数百騎越え。
それをこなしてのけたのがこの子だと言われれば、疑いたくなるし、腕前を試してみたくなる。
それは騎士として当然のことだ。
「疑われる原因を作ったその片棒を担ぐ身としては」
牧野中尉は笑って言った。
「疑われること自体、悪い気はしないです」

内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）から指定された演習区画は山間部。
谷間にわずかな平地があるみで、基本的にはすべて急な斜面ばかり。
足場を間違えるとかなり危険な場所だ。
「……それにしても」
牧野中尉は言う。
「連中がこんなところを指定した理由がありありとわかりますね」
「……はい」
“鳳龍改”はバインダー装備の高機動騎だ。
空中移動の素早さを活かし、空中からの強襲、おそらく一撃離脱を仕掛けてくるのは目に見えている。
格闘戦ではパワーに勝る“白雷（はくらい）”の方が圧倒的に優位に立つ。
対する“鳳龍改”は空中機動性に長けるなら、格闘戦を仕掛けられない地形で相手をすればいいのだ。
「とりあえず」
ポキポキ
牧野中尉は、指を鳴らす。
「恨み買わないレベルで痛めつけてやりましょう」
内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）側は、月城少佐の他、彼女の部下の剣持中尉、望月少尉、加藤少尉だ。

切り立った山の斜面を背にして、背後からの強襲に備える美奈代騎を前に、剣持が月城に言った。
「まず私がかかっていいですか？」
「――――好きにしろ」
「勝ったら、あの子“食べちゃって”いいですよね？」
「――――好きにしろと言った」
「了解♪」

――まだ処女だろうな。
女が女にするには、かなりなまめかしい想像を働かせた剣持は、軽く舌なめずりすると、ブースターを吹かせ、地上すれすれの高度で美奈代騎に斬りかかった。
「――えっ？」
演習用の長刀の握り具合を確かめていた美奈代は、突然襲いかかってきた“鳳龍改”への対応が、一瞬だけ遅れた。
凄まじい高速で接近する“鳳龍改”が腰の長刀を抜刀、自分めがけて振り上げた。
「くっ！」
美奈代は騎体を捻ってその一撃を回避した。
ブンッ！
長刀が空気を切断する音と衝撃が、騎体装甲に当たって振動を生じさせる。
“鳳龍改”は、全くスピードを緩めることなく斜面をそのまま上昇し、空中でとんぼ返りを決めると、再び襲いかかってきた。
「なんて機動力！」
美奈代は正直、舌を巻いた。
短距離で急加速をかけたまま、スピードを落とさずに急斜面を前に一気に駆け上がる性能と技術。
自分と“白雷（はくらい）”でマネが出来る自信はない。
騎体の性能もさることながら、騎士とＭＣ（メサイアコントローラー）の実力こそがなし得る技だ。
「――さすがは内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）！」
美奈代は再び襲いかかってきた剣持騎に向き直ると、剣とシールドを構えた。
「――へぇ？」
一方、剣持は少し、驚いていた。
バインダーと増設スラスターが可能にする短距離からの急加速。

それを活かした一撃離脱こそが“鳳龍改”の、そして自分の売りだというのに、完全に紙一重でかわされた。
「長刀の」
MC（メサイアコントローラー）が分析結果を告げる。
「リーチが完全にわかっているようです」
「ぐ……偶然よ！」
剣持は再び、目の前の“白雷（はくらい）”に斬りかかった。

――何か、間違えた。

剣持はそう思う。

――でなければ、私の立場がない！

――もう一度、同じ戦法で、今度こそ！

「いやぁぁぁぁぁっっっ！」
気合いのかけ声と共に、“鳳龍改”が剣を振り下ろす。
だが、
「――えっ！？」

目の前から、“白雷（はくらい）”が消えた。

「どこっ！？」
ガガンッ！
騎体にそんな音が響く。
剣持は、え？と思う間もなく、対応を迫られた。
ピーッ！
目の前の斜面が迫る。

今の推力でぶつかったら無事では済まない。
バインダーとスラスターを駆使して何本かの木々をなぎ倒した程度で空中に逃れた剣持に、月城が言った。
「剣持――終わりだ」
「まだやれます！」
剣持は食って掛かった。
――少佐は何を言ってるんだ！私はまだやられていない！
「……太田、何が起きたか教えてやれ」
月城の指示の後、MC（メサイアコントローラー）の太田少尉が言った。
「すれ違い様、両脚を切断されました。体を入れ替えた直後の突き技が背部を貫通、判定、騎士戦死です」
「――なっ！？」
「剣持、騎体を戻せ。望月、加藤」
「はっ」
「はい」
「――かまわん。一度に攻めろ」

望月と加藤がとった戦法は、2対1の勝負では至極自然な戦法だった。
一騎がオトリとなって、もう一騎が敵を背後から倒すという、美奈代達も何度かとった戦法だ。

ところが、相手が悪かったとしか言い様がない。

オトリ担当の望月騎は、美奈代騎と長刀同士で斬り結び、その間に、加藤騎が美奈代騎を倒す手はずだった。
望月騎が誘いを込めて正眼に構えた剣を美奈代騎に振り下ろす。
普通なら、美奈代騎はここで望月騎と剣で斬り結ぶはずだが、美奈代は剣を合わさなかった。

急加速をかけて望月騎の剣をかわすと、すれ違い様に腰部を切断、望月騎の背後に回ると、望月騎を突き飛ばした。
すでに美奈代騎を背後から倒すべく、突き技を繰り出していた加藤騎はつんのめるようにして、かろうじて同士討ちは避けたが、バランスを崩し、スピードを失うことまでは避けられない。
突き飛ばされたショックで地面に倒れる望月騎をかわした加藤騎は、それでもとっさに美奈代騎に斬りかかった。
上半身を狙った横なぎの一撃を、美奈代騎はその場に片膝をつくことで回避。
逆襲に転じた。

「加藤騎、両膝切断。判定、大破」
「……望月、加藤、戻れ」
「……はい」
「了解」

「……二宮さんも」
月城は呆れ顔で言った。
「とんでもない子を秘蔵していたわけね」
「少佐、どうします？」
「ん？」
「二宮大佐がカンカンですけど」
「……」

「ご苦労だったな。泉」
「い、いえ！」
二宮の声を聞けただけで、美奈代は天にも昇る気持ちだった。
「……まぁ、お前と戦ってみたいと思うのは、何も月城だけではな

い」
「じ、自分は別に」
「私だって」
二宮は楽しげに言った。
「お前とは一度、やってみたいと思っている」
「……」
「お前は嫌だろうが」
「あの……」
「ん？」
「月城少佐達は？」
「勝手に模擬戦やらかしたんだ」
二宮は楽しげに言った。
「一晩メシ抜きくらいは許されるだろう？」

鯖作戦

月城が二宮によって絞られた次の日。
制海権が安定しない日本海で連合軍が作戦行動に出た。

福井県奪還作戦。

正確には、福井県の原発施設奪還作戦だ。

福井県は、原発銀座と呼ばれるほど、原発が集中した地域。
魔族軍侵攻直前に、原発は全て停止しているものの、魔族軍によって原発が暴走するような事態が生じれば、近隣諸国、ひいては全人類にどのような被害が出るかわかったものではない。
静岡県方面に魔族軍が戦力を集中させている間に奇襲的に叩く。
最悪、原発の奪還は不可能でも、原発を爆発させるようなマネだけは回避しなくては、何のために戦っているかさえわからない状況が来てしまう。
だからこそ実施された作戦である。

国連軍呼称「福井奪還作戦」。
帝国軍呼称「鯖作戦」。
……帝国軍が本気だったのか疑わしい作戦名だが、とにかく、作戦は実行に移された。

帝国軍と米軍の空母がメサイアの発進基地として、日本海に展開。
海上から攻め込む。
これに呼応する形で、京都側から陸上経由で別部隊が福井へと攻め込むというシナリオ。

いわゆる二面同時攻略作戦。

国連軍の主力はＥＵ軍。

主力メサイアは英帝国軍“ロンゴミアント”と独帝国軍“ノイシア”。

従来の剣や槍といった装備ではなく、巨大な銃――大日本帝国軍の分類するところの、“機動速射野砲”や火炎放射装置が、彼らの主要武器となっていた。

アフリカでの経験からだ。

砲弾さえ避けてのけるのが身上のメサイアとの戦闘では無意味に近いが、無数の妖魔を叩くには、この装備が最もふさわしい。

魔族軍をいかに殺すか。

兵器の人道性云々より、有効性にこそ議論を傾けるべきであるという点では、人類はほぼ、一致していたのだ。

その世論の支持と黙認の元、火炎放射器と、巨大な銃を装備したメサイア達を主力とする部隊は、目標たる敦賀湾に向け移動、陸上部隊は野坂岳付近に陣取り、海上急襲部隊は日本海に展開。

そして作戦当日の夜明け――

朝日を浴びながら航行を続ける第一空母戦闘群（空母『蒼龍』『飛龍』『赤城』『天城』）。

彼女達の甲板上から、巨人達が舞い上がった。

灰色に塗られた甲冑を纏う英国のメサイア“ロンゴミアント”。

英国人らしい保守的なデザインのメサイア達は、編隊を組むと、一気に海面すれすれに高度を下げた。

「編隊指揮官（ラムロッド・リーダー）より各騎。クラウツ共（独逸軍）の突撃は、我々の海岸線到達あってこそだ！」

“ロンゴミアント”達を率いる指揮官の声が、騎士達の耳に届く。

海面を時速２００キロ近いスピードでホバリング移動し続ける“ロンゴミアント”は、何の抵抗も受けずに進み続ける。
「ヤンキーの空母からも、グレイ・ファントム部隊が上がっているはずだ。あんな奴らに手柄を奪われてたまるものか！原子力発電所の奪還が最優先任務。間違っても発電所への攻撃は行うな！」
「了解！」
「殺し放題だ！」
「応っ！」
“ロンゴミアント”の目が、海岸線を捉えた。
「目標視認（イン・サイト）っ！」
戦場を監視する戦域管制官から通信が入る。
「サビルローより編隊各騎。魔族の反応は低いが、油断するな」
編隊指揮官がそれに応じた。
「了解、艦砲はまだか？」
「貴官等を巻き添えにしていいのか？――海岸まであと５００」
「編隊各騎、楔形陣形維持、海岸線制圧攻撃の後、一気に原発に取りつくぞ！」
「了解っ！」
「制圧支援（ブラスト・ガード）、撃てっ！」
編隊の最も後方に位置する制圧支援（ブラスト・ガード）騎のミサイルラックから、無数のミサイルが放たれる。

――爆発。

連続した光と爆煙がそれまで静寂さを保っていた海岸線を揺るがした。

「第一小隊、突撃！第二、第三小隊、援護射撃しつつ、続けっ！」
魔力の半重力作用を応用したブースターを全開にした飛行により、第一小隊は、一気に海岸線を突破。

“ロンゴミアント”達は、原子力発電所を示すフェンスの内側の地面を抉りながら、派手に着地した。

「出てこいっ！」

「出てきやがれっ！」

“ロンゴミアント”の一部が威嚇発砲を試みるが、砲声が虚しくあたりに響き渡るだけ。

何の動きもない。

“ロンゴミアント”達は、気がつけば指示された原発を完全に制圧下においていた。

あまりのあっけなさは、そのまま警戒、いや、恐怖へとつながった。

敵は、どこかに潜んでいるはずだ。

「編隊指揮官より各騎、各建物内部をサーチ」

「ホワイト2、管制センターに生命反応なし」

「ホワイト4、第2棟周辺、反応なし」

「ホワイト・ワン了解――どういうことだ？」

激戦を覚悟していた騎士達は、むしろ拍子抜けした顔であたりを見回した。

「ホワイト・ワンよりサビルロー、敵の抵抗は……ない」

編隊指揮官は、自騎のMCに訊ねた。

「クリス。クラウツ共の動きは？」

「北東部10キロ地点で、分隊規模の散発的な交戦が行われている模様です」

編隊指揮官は、戦況モニターを見た。

独逸軍のメサイア達の反応があるだけ。

敵の反応が、ない。

その答えを、戦域管制官が教えてくれた。

「サビルローより編隊各騎――敵は現在、石川県方面へ撤退中の

模様。編隊各騎は、現状のまま、別命あるまで待機せよ。繰り返す」

「福井を奪還しただと！？」

操縦訓練を終えたところで知らせに接した美奈代は、すぐ、控え室に飛び込んだ。

「やったよ！」

さつきは満面の笑みを浮かべ、飛び跳ねて喜んでいる。

「国連軍が福井県制圧して、魔族軍は撤退したって！」

誰がどこから持ち込んだかは知らないが、控え室のテーブルの上に置かれたテレビには、福井県の様子が映し出されていた。

焦土と化していても、それでも人類の元に戻ったのだ。

「メサイアがやったんだって！」

「美浜、大飯、敦賀、高浜……全て奪還したそうです」

「や……やったな」

美奈代は、震えるような興奮を覚えた。

「これで……勝てる！」

だが――

「……だと、いいんだがな」

テレビから視線を外さず、そう言ったのは宗像だ。

その顔は、他の候補生達と違い、厳しい。

「宗像？」

美奈代には、宗像が何を心配しているのか、それがわからない。

「何が面白くない」

「嬉しい」

宗像は、厳しい顔のまま、ちらっと、視線を美奈代に向けた。

「福井には親戚がいる」

「なら！」
「私が問題としているのは、敵の動きだ」
「倒した……んだろう？」
美奈代は、戦況を何も知らないことに気づいた。
「違う。国連軍は、ロクな抵抗も受けていない。
戦闘開始からわずか数時間で、魔族軍は福井から撤退を完了した。
国連軍は損害軽微。
メサイアどころか、ほとんどの部隊が無傷で、だ。
おかしいと思わないか？」
「補給が……おいつかないとか？」
美奈代は、戦術論になぞって考えたことを口にした。
言われてみれば、確かに奇妙だ。
「単に、そういう事情が……」
「我々は軍人の卵だ」
宗像は、どこか苛立った顔で言った。
「楽観主義は厳に戒める所――そうだろう？」
「う……うむ」
「……敵は、すでに撤退を完了するところだったんだ。
だが、連中、何を考えている？
何故、撤退した？」
うーん。
宗像が腕組みしながら考え込んでいる所へ、遅れて入ってきたのは祷子だった。
「遅くなりました……あら？」
皆の様子が、普段と違うことに気づき、祷子は首を傾げた。
「どうなさったんです？」
「祷子……実は」
宗像は、自分の疑問とするところを、祷子にぶつけた。
敵の抵抗の散漫さ。
損害の軽さ。

全てがおかしい。
「うーん」
祷子はちょっと考えてから、あっさりと言った。
「もう、用がないんじゃないですか？」
「用が、ない？」
「はい」
祷子は微笑みながら頷いた。
「あ、お茶、いれますね？」
「いや、まて祷子」
ポットに向かった祷子の腕を掴み、宗像が言った。
「話の途中だ。連中が、福井に用がないとは？」
「敵は、何故、福井まで攻め入ったんですか？」
「それは――」
「カニ食べに？」
都築がまぜっかえす。
「あ、福井ですよね？私、らっきょうが」
「祷子！」
宗像と美奈代に怒鳴られ、しょげた祷子が渋々と言った。
「――原発ですよ」
「げ、原発？」
「はい」
祷子は、何でもないという顔で言った。
「魔族軍なら、人類側の力を弱めるために、原発を叩くって、魔族軍の新潟侵攻の理由を話して下さったのは理沙さんじゃないですか」
「……そ、それは」
宗像は言葉を失った。
確かに、雑談でそんなことを言った覚えがある。
だが、今回は――
「敵も勉強しているんですよ」
祷子は、お茶をいれながら言った。

「だから、人類側の力を弱めるために、原発を破壊した。放射能汚染は避けたいから、汚染が出ない方法で、二度と使えないように破壊する。今まで敵がいたのは、そのためで、用事が終わった頃に我々が攻め込んだだけだと思います」
「じゃあ！これで福井は平和だっ！」
「一週間もすれば、新潟と同じでしょうね」
祷子はお茶を配りながら平然と言ってのけた。
「私なら、そうします」

新潟と同じ。

“死者の樹”と呼ばれるようになったあのオゾンをまき散らす木が福井に？
今や新潟県は、仮に魔族軍から奪還しても、高濃度のオゾンのため、人の住める土地ではなくなっている。
あの二の舞となる可能性を、祷子は示唆していた。
それだけではない。
福井県の奪還。
それは、原発の奪還と同義語だというのに、祷子は、原発は破壊されているだろうとまで言う。
「私は――らっきょうと越前ガニが食べられ続けるなら、それでいいんですけど。うーん。難しいんでしょうか？」

「――まあ、知っておいてもいいだろう」
夜、通路で出会った宗像と美奈代を前に、二宮は頷いた。
「風間は、原発は使用不能にされているはずだと、言ったんだな？」
「はい」
「ふむ……宗像は、どう思う？」

「今は、自分も同意見です」
「泉」
「否定、出来ません」
「よろしい」
二宮は頷いた。
「楽観していない点だけは褒めてやる。風間の読みは――――当たりだ」
「！！」
「そ、それは！」
「福井の全原発が使用不能にされていた。内部の装置はズタズタ。放射能汚染と直接関係のないカ所は、総取り替えが必要なほどだという。それと、“死者の樹”は、種の散布が確認されている――――福井県は、遅くとも1ヶ月で人が住めない土地になるだろう」
「敵は……そこまで考えて」
「仮に、“死者の樹”がなくとも、発電所全部を復旧させるのに、早くても2年はかかると、専門家は見ているそうだ」
「火力発電所があったはずでは？」
「既に跡形もない」
「……」
「福井を奪還して、国内の電力供給不足を復旧させるという政府の目論見はものの見事に外れたわけだ」
「……私達、どうなるんですか？」
「国内の発電施設はまだあるし、電力を必要とする場所も減ってはいるが」
二宮は言った。
「全てを元に戻す。国内から魔族を駆逐する。それだけ考えろ。余計なことは考える必要さえない」
「――――はいっ！」

それぞれの事情

戦線の状況は、人類・魔族軍共に惨憺たるものがある。

“適宜”、兵力を投入すると公言しながら、今までグアムあたりの米国領に駐留させ、事態の日和見を決め込んでいた国まで加わり、かつてないほどの勢力を誇るようになった人類側国連軍だったが、魔族軍によって構築された防衛線に行く手を阻まれた。

アフリカで最後まで抵抗した“イシス”の幹部将校ユム中将が、この地に野戦司令部を設け、防衛線を構築していたのだ。

国連軍は、ユム中将指揮下の義勇軍メサイア部隊と正面からぶつかり合うことになった。

ヴォルトモード卿不在の現状、ガムロが率いるヴォルトモード軍、つまり、人類側から見れば魔族軍とは違う軍団。

志願兵から編成される義勇軍だ。

その運営を“委託”されているのが、中世協会の実行団体としての立場にいる民間軍事会社“イシス”。

ユギオ率いる中世協会と契約を結んでいる企業だが、彼等と契約したとことを筆頭とする中世協会のアフリカ・南米での失態全てを押しつけられた“イシス”の企業イメージは魔界でもがた落ちだ。

人間界で目覚ましい業績を造らねば会社が潰れる。

その焦りから、彼等は、膨大なメースの投入から始まって、かなりの“無理”をしていた。

限られた資源を、ヴォルトモード軍に回すのとは別に、膨張を続

ける自前の部隊のためにも遣わなければならない。
補給がどこかで止まれば、両軍が止まることになる。
そうなれば、司令部はかつての味方を相手に絶望的な戦いを強いられることになる。
その責任の全てが、指揮官に命じられた不幸な、一部では名誉とされる者の双肩に押しつけられる。

だからこそ、もし、しくじったらどうなる？

イシスの指揮官達がこぞって人間界での戦闘指揮を辞退したのは、そんな、現場指揮官がとるには重すぎる責任故だ。

そこで白羽の矢が立ったのは、かつてアフリカで部隊を指揮、失敗したことで左遷されていた敗将、ユム中将だった。

“現場指揮官の努力不足”によりアフリカの喪失を止められなかった。

つまり、彼に満足な部隊も物資も、一切を回さなかったイシス”上層部のとるべき責任を負わされた彼が、再び戦場に送り出された。

“もう一度、チャンスをやろう”
イシスはそう言うが、彼が会社組織である“イシス”の中でスケープゴートにされたのは、誰の目にも明らかだった。

名将と称えられた彼に任されている部隊は軍隊ですらなかった。

義勇軍。

名前こそ華々しいが、素人と軍隊にいられなくなった落伍者の集

まりに過ぎない。

兵隊が集まれば軍隊だ。

民間軍事会社の天下り共にとって、軍隊とはそういうものだ。

イスにふんぞり返っていれば、後は部下がやってくれる。

そんな世界にいた者達にとって、兵隊の質なんて、自分が考えることでさえなかった。

その結果を味わわされるのは、敵ではなく味方であり、そしてここでユムだった。

メース部隊の運用に関する長年の実績をかわれ、アフリカでの失態を不問に付す。

それがユム中将の飲まされた条件だ。

ユム中将には、左遷され、田舎で明日も知れぬ貧困の中で余生を送る以外、この条件を飲んで生き延びるしか選択肢はなかった。

ユムは、生きるために、軍隊と呼べない軍隊、義勇軍を指揮するという、屈辱を飲んだのだ。

この地のユムの任務は、いかなる魔族側将校と比較しても著しく苛烈だった。

相次ぐメース部隊向け増援が、現場の指揮系統を混乱させ続けるどころか、麻痺させていた。

志願兵となったメース使いは、給与の増額と、正規軍退役前の階級の復活を望み、自ら平気で階級を詐称する。

戦闘経験の詐称は当然で、メース操縦時間は2ケタ位水増ししている。

軍務時代の評価を示す書類を持ってくる者は千人に一人いれば多

い。

元大尉を自称していたが、実際には二等兵。しかも、問題行動で軍を懲戒解雇されていたことが後に発覚したなんて、一々取り上げる事件ではない。

義勇兵の大半は、魔界で喰うに困った失業者達。

望んでいることは、“イシス”からもらえる給与だけ。

そこにモラルなんてない。

指揮官に与えられる役職上乗せ目当てで、小隊指揮権を巡って部隊内で殺し合いになるなんて事態はザラだった。

志気はないに等しい。

メース1騎を撃破すればいくら。

そんな算段しかなかった。

そんな連中だけで戦力をまかなっているのだから、事態の混乱も、戦果の低さも全て無理もない。

そう思いたいが、思うだけで物事が進めば苦労はしない。

優秀さを称えられるユム中将の参謀達（スタッフ）でさえ、部下の戦闘能力を書類上のこととして処理するのが精一杯で、何処の部隊の誰が戦力として使えるかさえ、はっきりと把握出来ていない。

理由は簡単だ。

部隊指揮官が、部下に殺されることを恐れて本当のことを報告してこない。

メースで抜刀出来る程度でも、“刀剣操作能力には刮目すべき点がある”とでも書かなければ、部隊指揮官は命がいくつあっても足りない。

この状況は、“イシス”としても、重大な問題と認識はされていた。

しかし、何度も言うが、イシスの中心にいるのは天下りの元軍高

官達。

“現場の判断と責任の元に善処せよ”

これが彼等の基本姿勢だ。

だから、ユムは、これを逆手に取った。

戦況確認のための書類を細工して、そして上層部に送りつけたのだ。

“この報告書が承認された後、現場司令部の無謬性の元に自由指揮権が許可されたものと判断し、この決定は覆すことが出来ない”

現地の状況を数千ページに上る報告書に仕立て、その最後の最後に小さく“今後の指揮の責任について”という項目、しかも、一見すれば補足項目と間違える程、小さい文字でそう書かれていた。

自由指揮権――ようするにフリーハンドを寄こせ。

ユムはそう言ったのだ。

どうせロクに書類も精査せずにめくら判を押すだろうというユムの読みは当たっていた。

読むだけで一週間を要するだろう書類審査の結果は、“規定”通り3日で帰ってきた。

表紙には承諾の認め印が押されていた。

そうなると後は知ったことではない。

上層部から“ありがたく”自由指揮権を仰せつかったユム中将は、与えられている以上の強権を発動させた。

綱紀粛正を唱え、司令部に反抗的な態度をとる義勇兵数十名を、

酒場のど真ん中で公開処刑にかけた。
罪状は、
正当な理由なしの任務拒否。
勤務時間中の飲酒。
そして――無能。

出撃もせず、酒浸りになっていた一部の義勇兵達は、突然、目の前で行われた処刑に真っ青になった。
首を刎ねた血まみれの刀を振り上げた兵士が、大声で彼等に怒鳴った。

――次は誰だ!?

義勇兵の脱走と退役希望が大量発生したのは、その日の次のことだ。

ユムは第一次選抜をそれで終えた。
当初の戦力の3分の2が消えた。
その次に行ったことは、軍務経験に嘘偽りがないかを、“真実の口”という呪具を使って宣誓させること。
人間の顔を模した石の彫刻の口に右腕を突っ込んで、質問に答えるだけの呪具は、人間界でいえば、嘘発見器に近いものだ――違うと言えば、嘘をつけば最悪、腕が潰される程度だが。
これで残り半分が消えた。
ユムは、残った兵力を互いに模擬戦に当てることで初めて部下の実力をほぼ正確に把握させることに成功した。

イシスの上層部も負けていない。

このユムの功績を、自分達の英断故であり、“人間界浄化”とい

う崇高な“聖戦”を食い物にする俗物から聖戦の意義を守り抜いたと宣伝し、自分達の功績を美談として祭り上げることに躍起になった。

ユムはそんなことに頓着することなく、立場と能力がはっきりしているメース使いだけで編成された選抜部隊を編成させた。

そして、彼等に最前線で人類のメース達を食い止めさせ、まだ安全が確保出来る長野県内の第二戦線で新規兵士の受け入れと、部隊の編成を行うことにした。

部隊の勝手な後退は、自由指揮権を逸脱するものであり、権限を侵されたことに不快感は示したが、“イシス”の幹部達は事後になって承諾するしかなかった。

認められれば最前線へ。
使えないなら後方のまま。
共に喰うことだけは出来る。
金が欲しければ、最前線へ志願しろ。

今まで、魔界で使われていた宣伝文句だ。

ただ、メース使いについてのみ、一文が加えられた。

――ただし、まがい物なら、わかっているな？

魔界のメース使いは、これに納得した。
元来、メース使いは職人芸に近い。
自分達の技量が世界一と信じる彼等は、仲間にまがい物が入ることで、自分達の価値が低く見られることを忌み嫌った。
それはつまり、彼等のプライドを護ることでもあった。

それで、現場の混乱は一応の収束を見た。
問題は、この部隊の改編に、恐ろしく時間がかかったことと、選抜の結果として兵力が激減したことだった。

ユムは次の手を打った。
魔界正規軍と交渉するため、ユム自身が魔界に旅立ったのは、この頃のことだった。

同じ頃、軍に接収された阿南第二中学校の一室に置かれた作戦室で大まかに防衛計画を立てていた二宮は、２通の戦果報告を並べて顔をしかめていた。

敵の質ははっきり低い。
メースが投入された頃を知る身としては信じられないほどだ。

だが、その低い質の敵を相手にしていたとはいえ――

一通は、自分達の部下。内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）のそれ。
もう一通は、独立駆逐中隊のそれ。特に美奈代と祷子のそれだ。

「撃破３９と４４……か」
内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）と独立駆逐中隊の戦果は、３５対１０５。
丁度３倍だ。
前衛部隊の規模だけ考えれば、独立駆逐中隊の規模は３分の１。
それで３倍の戦果だ。
戦果に舞い上がる部下の声が窓越しに聞こえてくる。

一体、自分達より格下だと公言する部隊の戦果が自分達の3倍と知ったら、連中はどう反応するだろうか？
二宮は、ため息混じりに私物のメモ帳を開いた。
こっそりつけていた教え子達の戦果がそこに書かれていた。

「泉がこれで１６５騎……風間が２１３騎……か」
狙撃部隊に回された3騎を除いても、皆が超エース級の戦果を上げている。
「こういう時こそ」
メモ帳を眺めながら、二宮は愚痴をこぼすしかない。
「あいつらが欲しいんだが……」

「失礼します」
入出してきたのは月城（つきしろ・まな）真菜少佐だ。
「報告書です」
「ご苦労」
二宮に書類を手渡しながら、真菜は机に広げられた書類に視線を落とした。
「あの娘達の戦果ですか？」
「……」
二宮は独立駆逐中隊の戦果がまとめられた書類を月城に手渡しながら言った。
「くそっ、あいつらを後藤さんに譲ったのは失敗だった」
「一体、この戦果は本物ですか？」
「戦果を偽装する趣味は、あいつらにはない」
「……しかし」
「悔しいと思うなら、実績をあげてくれ。そういうしかないな。立場上」
「了解です」
月城は書類をデスクに置いた。

「愚痴ってないで、計画を急いで立ててください。私は由衣と由美連れて威力偵察に出ますから」
「ああ、すまんが頼む」
この不利な状況に部下を送り込まねばならない二宮は、心底すまなそうな顔で月城に詫びた。
月城は気にした風でもなく頭を横に振るだけだ。

この時、国連軍は、義勇軍の防衛線に対し、戦車部隊を防衛線に配置し、メサイア部隊は機動力を生かした遊撃戦力として戦線の後方に置いていた。

下手にメサイアを全面に出して、魔族軍を刺激したくないというのもある。

数では残念ながら対抗できないのだが、複雑な長野の山間部が、国連軍にそこそこ有利な条件を作り上げており、数度にわたって打って出てきた義勇軍にとって、想定外の苦戦を強いることになっていた。
そびえ立つ山が容易く視界を奪い、不安定な気候がセンサーさえ狂わせてしまう。
このような戦場では咄嗟遭遇戦の確立が劇的に上昇してしまい、国連軍の戦車やメサイアによる防衛戦で、本来の性能の不利を補う事が可能となってしまうのだ。
戦車砲一発程度ではどうにもならないメースでも、この頃には、5発以上の直撃を受けると、中のメース使いにかなりの生命的危険を引き起こさせることを、人類側も経験で理解していた。
実際、木曽方面ではかなりの数のメースが、撃破された後、回収されることもなく山中に転がったままになっていた。
幾ら魔族側メースが重装甲とはいえども、流石に至近距離から戦

車砲弾の直撃は洒落にならない。
また、メースが幾ら戦闘車両に較べて踏破能力に優れるとはいえ、入り組んだ山間部でその踏破能力を発揮することは容易ではない。
足場が不安定な場所が多く、その為に自然と通り易い進撃路を選ぶようになるのだが、すでに地理を熟知している人類側は、敵が通るだろうルートに空かに地雷を巻き、或いは崖の中に潜んで手動で爆発物を爆破させる。
放置された車両に爆弾を仕掛けるなど、ありとあらゆるトラップをしかける。
防衛線を展開した魔族側の怠慢というか、防衛線より前で人類が何をしても放置したツケを、打って出た時に支払わされた形だ。

防衛任務に満足せず、数騎、あるいは単独で遊撃部隊化して出撃する義勇軍の中には、通りかかった不運というか、間抜けなメースが、これに引っ掛かって撂座するという被害が相次いだ。

メースやメサイアは所詮、同じサイズの兵器相手に、近接戦闘で戦う時にこそ真価を発揮する兵器である。
弾丸を回避する騎士が乗っていなければ、メサイアは単なる３０メートル近い巨大なマトに過ぎず、ミサイルで容易く撃破されてしまう程度の存在だ。
すべてがそうだろうが、兵器にも兵器として性能を発揮できる戦場というものが必ずあるのだ。
何処でも圧倒的効果を誇る事の出来る万能な道具など、魔界にも存在はしない。
そういう意味では、地形の入り組んだ日本という地形は、メースとって、砂漠やジャングルとはまた違った意味で最悪の戦場であった。
砂漠は視界が開けている為に敵を視認し易かったが、地形のせいで、潜んでいる敵を発見することそのものが困難なのだ。

この地上路に対するトラップの多さに業を煮やした幾つかの義勇軍部隊は、道無き道を強行突破する道を選んだが、それはかえって立ち往生する結果を招いた。崖や荒れ地、そして大量の樹木の中に仕掛けられたワイヤートラップや地雷で動けなくなったメース達は、たちまち国連軍の偵察部隊や偵察衛星に発見されてしまい、砲撃や空爆を受ける事になる。

いわば、愛知県境から伊那に至る、あるいは木曽にいたるラインは共に人類と義勇軍の小競り合いの場になろうとしていた。

義勇軍は、組織として防衛線を出るという無茶はせず、人類を待ち受ける姿勢を崩していない。

その間に、国連軍は戦車部隊を繰り出し、撤退から漏れた妖魔達を撃ち殺しながら国連軍側の防衛線を用意する。

更にその後方に火消し役として急場に駆けつけられるメサイア部隊を幾つか編成してあったが、その中の実質上の切り札となっているのが、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）と美奈代達独立駆逐中隊だった。

しかし――

その部隊間の戦果は開きすぎている。

戦力3倍で戦果3分の1では、部隊指揮官として、他部隊に示しがつかないのは事実だ。

いっそ、罷免されて再び独立駆逐中隊に戻ろうかと二宮が良からぬ事を考えたのも事実だ。

それほど、美奈代達は（本人達に自覚はないが）、圧倒的に強力な存在であった。

他部隊と比較しても、一桁多い戦果を常に上げている。

おかげで、近衛の中でも期待される反面、かなり浮いた存在になりつつあった。

出る杭は打たれるのだ。

●長野県上田市　元ＪＡ信州うえだ中塩田支所。現魔族第一軍司令部

ＪＡ信州うえだ中塩田支所

そう書かれた看板が未だ残るこじんまりとした建物にズルドが入った。

それが看板だという自覚が魔族軍にはないのは確かだ。

「ったく、この忙しい時に――兄貴。せっかく日村に城が出来たんだ。そっちへ移ればいいだろう？」

「ふん……あっちは閣下の居城だろう」

「はっきり言っていいぞ？高いところが苦手だと」

「……この程度ならどうということはない。なにより」

ガムロは窓際に立った。

塩田平の山々の緑が目に鮮やかだ。

中塩田周辺の住宅街は破壊され、すぐ隣の小学校と中学校を除けば、別所方面を大きく埋める建物は、魔族軍の兵舎とメースの格納庫にすぎない。

それ以外の、すべての人類の建造物は、緑の中に消えていた。

「この地形から見る景色も悪くない」

「ふん……さすがに兄貴が言うとイヤミに聞こえないわ」

ドカッ！

音を立てて、ズルドがソファーに腰を下ろした。

その尊大なまでの態度が、何故かズルドという男にはよく似合った。

「ソルフィッシュガーデンで剪定鋏を使う姿は、いまでも覚えている」

「時折、あのフィーリアの枝が気になることもある」
フィーリア。
その言葉におや。となったガムロは訊ねた。
「フィーリアで思い出した。お前の娘はどうしている？」
「ああ。たいしたものだ」
ズルドは心底嬉しそうに頷いた。
「“銀龍”のメーカー、何と言ったかな」
「ジオニクスだろう」
「ああ！そうだそこだそこ！」
大声というより吠えているような声。
本人に悪気はないとはいえ、ガムロにはあの小さな女の子が、こんな吠えるような声を聞いて驚いたり、おそれを抱かないものなのだろうか。それが知りたかった。
「その連中が驚いていた。世辞抜きですごいと！」
「ほう？」
「フィーリアを、メーカーのテストパイロットで欲しいそうだ！」
「そんなにか」
「連中が持ってきた銀龍の後継騎を、技術者連中、自分達の想定以上に乗りこなしていると太鼓判だ！」
「……ふむ」
「いやぁ！俺の娘にしておくのはもったいない！」
娘を絶賛され、顔を崩して喜ぶズルドにガムロは言った。
「かなりの戦果は期待出来そうだな」
「……木曽方面のことか」
ズルドの顔が厳しくなる。
いつまでも家族を引きずらない。
あくまで仕事は仕事だ。
「ああ」
ガムロは頷いた。
「ここ数日で、義勇軍は２５０騎を喪失した」

「使い物にならん連中を集めるから！」
「さすがに今度の失態には、連中も懲りたらしい。採用基準をかなり跳ね上げるそうだ」
「兵力が確保出来るのか？」
「それと、私の申し出にも応じると、連絡が来た」
「義勇軍の俺達への編入？」
ズルドは顔をしかめた。
「俺は反対だぞ。烏合の衆を何人与えられても」
「戦争は数だ――お前の口癖だったな」
「……ちっ」
「義勇軍のことなんてどうでもいいことが起きた」
「ん？」
「魔界帝室より申し出があった」
「帝室？」
「……こっちも余程せっぱ詰まった事態でもあったらしいな」
ガムロは喉で笑った。
「一時的な停戦を帝室が求めてきた」
「――無理だ」
ズルドは言った。
「何考えている。人類側がそんなものに応じるはずがないだろう？」
「帝室と天界がルートを確保しているという」
「どっちが言い出したことだ？人間か？魔族か？」
「どちらでもいい。大切なのは」
「……」
「――わかっているな？」
「しかし」
ズルドは顔を悔しげにしかめた。
「中世協会でさえ、閣下の居場所を掴んでいない」
「だからこそよ」
ガムロは言った。

「我々は、常に要求してきたのだ。すべての決定権は、ヴォルトモード卿にこそある。全てを動かしたければ、ヴォルトモード卿を復活させることこそが肝要だと」
「……」
言葉に力を込めるガムロを、ズルドは黙って見つめるだけだ。
「このままでは、我々は閣下の名を借り、人間界で狼藉を働く連中に成り下がりかねない！それは私の耐えられることではない！」
「……本当にそうか？」
「……何？」
「兄貴は、誰かに使われることをよしとする器ではない。それが例え」
「……」
「ヴォルトモード卿といえど」
「……ズルドよ」
ガムロは苦笑しながら言った。
「かつて、私が閣下と争ったことは知っているだろう」
「……当たり前だ」
「そこで私は、完膚無きまでに閣下にたたきのめされた。戦略、戦術、弁論に体術……あらゆる面で、私は閣下に敗れたのだ」
その顔には自嘲気味な笑みが浮かんでいた。
「私は、閣下に勝てん。むしろ、それでいいと思っている」
カーテン越しの柔らかい光の中、ガムロは微笑んだ。
「……」
「私は、お前が思っている程の大器ではない。むしろ、閣下の下で器を大きくしてもらいたいと思っている――そう、修行者の立場なのだ」
「宗教に走った……か」
その目が本気であることを、ズルドも認めた。
「兄貴、それは危ないぞ」
「ああ……だからこそ、私は閣下を求める。閣下の犬となる」

「……」
「お前もそうだろう？大海賊と呼ばれ、その腕前故に閣下により助命されたお前なら」
「……ああ」
ズルドは頷いた。
「俺も、閣下に忠義を誓った。宣誓は自らの意志だ。ウソはない」
「なら、この要望がむしろ朗報だと認めるだろう」
「何なんだ」
「帝室が天界に認めさせたのだ。ヴォルトモード閣下の本当の封印場所の公開を。そして、天界は、ついさっき、閣議で公開を認めた」
「な、何だと！？」
ズルドは思わずソファーから転げ落ちるようにして立ち上がった。
「そ、それは本当か兄貴っ！」
「ああ」
ガムロは頷いた。
「停戦条件はいろいろあるが、閣下の封印解除に比べれば安い」
「そうだな！」
ズルドは頷いた。
「その通りだ！して！」
「イツミが来る。ただし」
「ただし？」
「天界は封印場所を公開するが、やることはそこまでだ」
「？」
「封印の解除は我々が実施する。連中の言い分によれば、そうしなければ、我々の閣下に対するメンツが立たないそうだ」
「ものは言いようだな」
ズルドは顔を怒りに真っ赤にさせた。
「喜ばせるだけ喜ばせておきながら！」
「案ずるなズルドよ」
「何がだ！」

ズルドは吠えた。
「兄貴!?天界が俺達をどういう方法で封印したかは知っているだろう?つまり、“鍵”が必要なんだ!」
「その“鍵”がどこにいるか、調べはついている」
「ど、どこだ?まだ生きているのか?」
「ああ」
ガムロは楽しげに頷いた。
「愛知方面の戦場にいる。人類側のメースの中から反応があったそうだ」
「何っ!?」
「封印と、封印地点の確保が最優先となる。お前の娘にも協力してもらうぞ?」
「応っ!」

グーク

「素直に喜びなさいって」
苦笑する牧野中尉の横では美奈代がむすっ。とした顔を崩そうとしない。
二人の前で駐騎作業を受けているのは、あの殲龍（せんりゅう）だ。
「お帰りなさい。くらい言ってあげてもいいじゃないですか」
「さようなら」
「本当にへそ曲がりなんですから」
「何とでも」
「内心じゃ、ほっとしているクセに」
「……」
「フィアちゃんがシロだって認められたからの復帰。抱きしめてあげたい位、嬉しいクセに」
「そんなことありません」
殲龍（せんりゅう）のハッチが開き、中から出てきたのは金髪の美少女。
あのフィアだ。

髪を掻き上げるだけで、映画のワンシーンのようだ。
リフトに飛び乗る仕草さえ、どうしてこの子だと優雅に見えるのかしら。

牧野中尉は内心、不思議でしょうがない。

下降を始めたリフトの上で、フィアはこちらを見つけた。
一瞬だけ、嬉しそうな顔をしたのは確かだ。
だが、次の瞬間にはそっぽを向くなり、こちらへ向けて中指を突き立ててきた。
「……やれやれ」

牧野中尉は苦笑いした。
「へそ曲がり同士。これが挨拶ってところですか。ねぇ、泉大尉？」

●長野県　魔族軍陣地
ズズズスンッ！
目の前で、飛鼠達が射撃訓練にいそしんでいる。
飛鼠。
その名の意味の分からない魔族達だったが、それでも彼等は飛鼠を使う。
人類から供給されたメースの出来損ない、飛鼠は、その操縦の簡易さから、メース使いを自称したにもかかわらず、全くメースの搭乗経験のない義勇兵に回された。

イシス上層部からユムが受けたさらなる命令が、“メース搭乗経験のない市民階級出身の義勇兵に活躍の場を与えろ”。

義勇兵志願者の中核となるのは、人間界浄化――つまり、人類絶滅により、疲弊した人間界をあるべき清浄な世界に戻すという中世協会のプロパガンダを鵜呑みにした魔界の市民階級だ。

メースの搭乗経験はない。
軍務の経験もない。
でも、戦いたい。
しかも、歩兵になるのはイヤだ。
派手に戦いたい。

採用側からすれば迷惑な話だが、これが彼等の主な要望だった。

魔法騎士としての能力を持つ中央部族を除けば、欲しいのは弓兵や槍兵という、歩兵でしかないのだが、それしか募集していませんとなれば、義勇兵の集まり具合が悪くなる。

大型の補助動力付き甲冑兵――“ブロブ・フーガ”兵という、前代未聞の兵種が生み出されたのはこの時期だ。

メース程の機動性はないが、巨大な甲冑を身につけて戦うことの出来る兵種。

そうとでも言おうか。

無論、

――義勇兵に使わせる程度が関の山

――気休めか数合わせには丁度良い。

性能評価に立ち会った正規部隊メース使い達の意見はこの二つ。

つまり、名前はともかく、メースとまともに勝負できる代物ではない。

メース使い達がこぞって自分達の部隊への導入を拒絶したのも当然の評価だ。

彼等からすれば、メサイアの基準から見ても低性能の飛鼠（ひそ）は使用どころか、自分達の身内に存在することさえ耐えられる代物ではない。

司令部でさえ、「これはメースではない。大型の補助動力付き甲冑だ」と異例の説明を余儀なくされた、そんな代物だ。

メリットといえば、その低コストだけ。

少なくとも、目新しさと外見の格好良さ、難しい訓練がほぼ無用という簡易さが魔界で大ブームを引き起こし、魔界の玩具屋の店先

には、この飛鼠の玩具が並んでいるし、少年達は年齢を偽ってまで飛鼠に乗るために義勇軍受付事務所に向かった。

ユムも、そして兵士達の多くが知っている。

飛鼠は、戦場で使えるかどうかが問題ではない。

所詮は客寄せパンダに過ぎない。

イシスは、兵力を確保するために、飛鼠を最大限に利用したにすぎないと。

実際、中華帝国と魔界で連日生産される低価格・低性能のこの飛鼠だが、実際には操縦しやすさという点では、メースもメサイアも遙に超えていた。

その主要武器は人類側の製造した火器や戦斧にすぎない。

目新しいものはないはずだ。

だが、実体弾系兵器の少ない魔界では、実体弾の着弾時の見た目の派手さもあり、それがどの程度の破壊力かさえ知らない実戦未経験者たる義勇兵には、その使用がかなり好まれている。

無論――それは義勇兵のレベルの話だ。

「ったく」

その光景を、アーコットは不機嫌さを隠さない表情で眺めていた。

「音だけは一人前なんだよねぇ」

「速射砲ですけど、標的にはある程度、当たっていますよ？」

部下の一人であるキケルが言った。

「当たっていて当たり前だろう？」

アーコットは言った。

「弾は有限なんだ。義勇兵風情に無駄弾撃たせる余裕は、ウチにはないよ」

「……はぁ」

キケルはがっかりした様子だが、それでもすぐに気を取り直した様子で言った。
「もうすぐ、攻勢が始まるんですよね？そうすればこいつらも初陣。我々にとっても数の面から心強いことに」
「マト増やしてるだけさ」
アーコットはにべもない。
「火器管制装置、もっとグレードの高いのを要求しておきな。それと、それなしでも命中率が7割下回ったヤツは容赦なくメシ抜きにしな」
「はい」
アーコット達のすぐ隣では、飛鼠（ひそ）達が白兵戦の訓練に勤しんでいる。
刃のない戦斧を振りかざし、相手に見立てた太いポールに叩き付ける。
その光景でさえ、アーコットは吐き捨てるようにつぶやいた。
「……下手くそ」

●山形・新潟県境付近
雨が止んだ。
ようやく泣きやんでくれた鈍色の空に冷たい風が吹く。
「どう思う？」
森の中に部隊を集結させた美奈代は、部隊内限定通信で宗像に訊ねた。
「音からして“ヴェルファー”がいるな」
ヴェルファーは、魔族軍が導入した多連装移動砲台のことだ。
宗像のパートナーであるMC（メサイア・コントローラー）の桜庭優が、指揮官騎仕様である自騎の情報収集能力をフル活用して戦線の情報を次々と宗像に伝えてくる。
「今、十一時方向、市民公園の駐車場に魔族軍の砲兵部隊を確認し

た。少なくとも、８８（アハト・アハト）が3基。大型反応は、護衛のメースだろう――どうする？」

「敵の兵力が前進しつつあるな。我々はいつも通りだ」

美奈代は答えた。

「風間、私と来い。左から回って囮になる。残りは右から回り込め。十分接近してから手榴弾を放り込んで広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で掃討。その間、小清水達は後方で援護射撃を。私達が目標にたどり着くまで、敵を牽制してくれ」

「了解」

涼は軽く騎体を揺らせた。

白雷（はくらい）第四種装備の背面ラックに装備された“箱”が軽く揺れた。

「“この子”の初陣ですから。派手に決めて見せます」

「頼むぞ」

美奈代は言った。

「よし行こう」

「ちょっと待って！」

フィアが通信に割り込んできた。

「私は！？」

「……私と一緒に来い」

「何よ今の舌打ち！だいたい、私の方が！」

「はいはい。中佐殿。ご面倒ですが、私と共に敵陣へ切り込んで下さいませ」

「一々ひっかかるモノいいしか出来ないの！？」

「そういう育ちですので」

「――っ！！」

「部隊全騎。作戦目的は、砲兵陣地を潰すことだ。攻撃開始は、私の合図を待て」

前衛部隊が動き出した。

「――さて」
涼は軽く指を鳴らした。
「ショコラ？準備どう？」
ツインテールにした涼のリボンを直していた精霊体“ショコラ”は自信満々に答えた。
「きれいに結べました！」
「あのね？ロケット弾の方なんだけど」
「ご、ごめんなさい」
「鬼龍院（きりゅういん）中尉。射撃準備は？」
「完了している」
寧々（ねね）が答えた。
「射撃に専念しちゃいますんで、適宜、指示下さい。後よろしく」
寧々（ねね）は狙撃手だ。
スコープの中に全てを専念する。
部隊単位でのことなんて神経を回している余裕はない。
それを知っている寧々（ねね）は、階級が下の涼に部隊の全てをゆだねて当然だと思っている。
「はい。高良中尉、ロケット弾の射撃は一任します」
「了解」
MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）の中で、高良中尉はやんわりと微笑んだ。
「さぁ――爆炎地獄が幕開け♪前奏曲（プレリュード）は」
ズンッ！
寧々（ねね）騎の持つ狙撃砲が火を噴き、前方に立っていたメースが後ろに倒れた。
「始まりですね♪」
高良中尉はコンソールパネルに指を乗せた。
「ロックンロール♪」

「……それ、違うんじゃ」
ペンッ！

ショコラのつっこみに、高良中尉は背後から取り出したスリッパを振り下ろすことで答えた。

ズズズンッ！

連続した発射音をとどろかせ、涼騎と芳(かおる)騎から打ち出されたのはロケット弾だ搭載型の集束(クラスター)爆弾。

弧を描いて敵陣の真上に殺到し、上空で炸裂。

弾頭に満載していた子爆弾をばらまいた。

突然、メースが爆発した。

何が起こったかわからず、あたりをキョロキョロと見て回る兵士達は、問答無用で挽肉にされていく。

だが、それが敵襲だとわかった途端、彼等は兵士として即座に反応を見せた。

美奈代達が切り込んだのは、そんな中だった。

ズズンッ！

敵陣地から鈍くて粘っこい爆発音が連続して響き始めた。

「大尉達、スコア増やしたね」

芳(かおる)の声が通信機に入る。

「私達も稼ぐわよ！」

涼は怒鳴った。

「2時方向に新たな敵！歩兵部隊、数多数！弓兵だったら大尉達が危ない！」

「涼！HMC(ハイメガカノン)じゃ対応出来ないよ！武装を速射砲に切り替える！」

「了解！」

答えながら、涼は騎体からハイメガカノンを外し、持ってきたウ

エポンコンテナを開いた。
中から引き出されたのは、１２０ミリ速射砲とベルトリンクにはまった砲弾だ。
「徹甲弾はないし、口径は小さいけど……」
涼騎は速射砲を構えた。
「小型妖魔相手なら！」
涼はトリガーを引いた。

脳天をかち割られたメースが大の字になって大地に転がっている。
その近くには放棄された魔族軍弓兵部隊の兵器が炎上している。
すでに陸軍の機甲部隊が前進を開始しており、白雷（はくらい）の足下を戦車や兵員輸送車が通り抜けていく。
トラックに乗った兵士達が、珍しそうに白雷（はくらい）を見上げているのが見えた。
あどけない顔立ちをした若い兵士達を見た美奈代が、
「……若いな」
そう思わず呟いてしまった。
「何言ってるんですか」
牧野中尉があきれ顔で言った。
「私から見れば大尉と同じくらいですよ？」
「そうですか？」
美奈代は返事をすることをやめた。
下手な事を口にすれば、後でどんな目にあわされるかわかったものではない。
「――――とはいえ」
牧野中尉が言う。
「その見方は正しいです」

「どういう意味ですか？」

現状での待機命令が発せられているため、動くことが出来ない美奈代達の前でドーザーが魔族軍の砲兵陣地を押しつぶし、兵員輸送車から降車した、先程の兵士達が土嚢を積み始めた。

すぐ近くでは、ＦＨ７０、１５５　ｍｍ　榴弾砲が展開作業を開始している。

だが、その動きはどこかだらしない。やる気というものが見えない。

皆、しぶしぶながら動いている。そんな気がした。

「ほとんど全員が、フリーターか学生あがりですから」

「えっ？」

「知りません？“負け組狩り”って」

牧野中尉は言った。

「１８歳から３０歳までの無職やフリーターの男女全員を呼び出して、心身に問題がないと判断した者に軍への入営を半ば強制しているんです。学校にも行かず働きもしない。この時局にそんな若者は敵に等しいとか言って」

「我が国は」

美奈代は驚いて目を見開いた。

「徴兵は廃止されたはず」

「高校で政経でもとってました？憲法上、国家防衛は国民の義務。戦時総動員法発令下では例外ですよ？」

「良心的徴兵免除は」

「最もそれを口にしそうな連中は与党に組み込まれています」

言うと思います？と牧野中尉は笑った。

「政府や財界の偉いさんの無見識というか、無能さのせいで学ぶことも働くことも出来なくなった子供達が戦いに送り出されているんです。それがあの子達」

「……」
「大尉？」
「はい」
「あなたが、彼等に申し訳なく思う必要はどこにもありませんよ？彼等とあなたの違いは、この戦争の前に徴兵されたか、後にされたかの違い。あとは――」
言いかけて、牧野中尉は美奈代の心の内を悟った。
「――思い上がらない方がいいですよ？」
「えっ？」
「騎士は戦争の全権代理人だなんて、あんなのは建前です」
牧野中尉の声は、何か吐き捨てるような口調になっていた。
「あなたは単なる兵隊。一介のメサイアパイロットに過ぎません。兵隊は目の前の敵を倒すことだけ責任を持てば良いのです。いくらあなたが操るのが世界最強のメサイアだとしても、それが単騎で暴れても、戦争全体から見れば些細なこと。たかがその程度のちっぽけな身で、戦術や戦略レベルで何が出来るんです？
騎士は戦争の全権代理人なんかじゃありません。ただの――道具です」
「我々は」
美奈代は、それを口にするのは少しつらかった。
「……モノですか」
「当然♪」
牧野中尉は笑った。
「上にとっては、いくらでも交換可能な存在に過ぎません。養成費はともかく」
通信モニター上の牧野中尉は笑っていた。
「あなた一人、司令部が徴兵するのにかかる費用はこれだけですよ？」
牧野中尉は、そう言って指を広げて見せた。

「たかが葉書一枚。５０円です」
「……５０円」
「そう。あなたが死ねば、５０円で代わりが来る」
開かれた牧野中尉の細い指が、外を指し示した。
「その意味では、下にいる歩兵達と騎士であるあなたには、何の区別もありません」
「……」
「司令部にとっては、あなたも彼等も、すべて下っ端は替えの効く消耗品です」
「……」
「少しは開き直りなさい」
その声は子供を諭す親のようだった。
「あなたは、世界を救う正義の主人公ってわけじゃないでしょう？」
「……そりゃそうです」
美奈代は無理に笑って見せた。
牧野中尉が何を言いたいのかわかるからだ。
これ以上、深刻そうな顔をしても何も変わらない。
吹っ切った方がいい。
それが、最低でも牧野中尉に対する礼儀だ。
心の奥底にひっかかる何かをもっていても、この場は笑うべきだ。
吹っ切ったフリをしておくべきだ。
そう思った。
「よろしい♪」
牧野中尉は笑って頷いた。
「前方で地雷散布が始まります。司令部、後藤隊長より通達。移動開始命令でました。この場所にはロケット砲部隊が展開します。移動ポイントはモニター上、ポイントＳ６」
「了解。各騎、ポイントＳ６へ移動を開始する。全騎、用意」

ポイントＳ６は丘陵の上になる。
ここに布陣させることで、メサイアのセンサーが早期監視を可能にするという読みがあるんだろうと美奈代は判断した。
見晴らしはいいが、反面、ここに３０メートルの物体が突っ立つことは“的にしてください”と言っているのと同じだ。
美奈代達は大地に寝そべる伏射（ふくしゃ）姿勢をとって、射撃系兵器で予想される事態に備える。
基本３騎でフォーメーションを組むことになった。
３騎が全周囲を三分割して警戒。６０分ごとに交代する仕組みだ。
その間に、騎体の冷却から休息に至るまで、すべてをこなす。
無論、戦闘になれば問答無用で全騎が参加する。
ペアを決めたのは後藤だ。

涼とさつき、そして祷子。
宗像と芳（かおる）、美晴。
都築と寧々（ねね）、山崎。
狙撃部隊を中心に2騎がカバーするフォーメーションが可能だ。
この辺はいいだろう。
だが、問題は――

「何であんたとなのよ！」
「お互い様だ！」
通信機で怒鳴り合ったのは美奈代とフィアだ。
「貴様のような問題児と一緒だと！？」
「はぁ？問題児って言葉の意味わかって言ってる！？」
ギャーギャーと通信装置越しに醜い女のいがみ合いが続く。
「ねぇ。ママ」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）に逃げ込んできた“さくら”が、牧野中尉の膝の上に乗った。
「なんでマスターとあの女の人、仲悪いの？」

「本当はものすごく仲がいいの」
牧野中尉は言った。
「オトコという生き物がいなければ、親友になれたでしょうに……もったいない」
「ふぅん？」
「色恋沙汰は、人を狂わせるのよ」
「じゃあ、マスターは狂ってるの？」
「まぁ、生まれながらにイカれてるとしか言いようのないところは……」
そうぼやく牧野中尉は騎体を操る。
台地の上はかなり見晴らしが良い。
モニターを少し操作すれば、遠くに放棄された市街地が見える。
「おっと」
騎体が地面めがけて動き出す。
牧野中尉は軽く舌を出した。
見とれている場合ではない。

「だからそこはダメだといってるだろうが！」
「うるさいわね！」
「そんなところで伏射したら、射界がとれないぞ！？」
「バカいわないでよ！敵の反応が多い市街地方面はここからバッチリ狙えるし！」
殲龍（せんりゅう）は、携帯してきた長口径の速射砲――95式狙撃銃改を構え、伏射姿勢に入った。
「そこの岩場が格好の二脚代わりになるでしょう？」
そう言って狙撃銃を構える殲龍（せんりゅう）の姿勢は、まるで教本から抜け出したように見事だった。
「よし。バッチリ狙い通り♪」
殲龍（せんりゅう）の動きに微塵の無駄も感じられない美奈代は、少しだけフィアをほめてやろうと思ってやめた。

「倍率調整よし――――だけど」
フィアは少し顔をしかめた。
立っていた時にはともかく、伏射姿勢になった途端、右斜め前方の岩場が気になってしょうがない。
右から来た敵の邪魔だ。
一瞬、射撃で吹き飛ばそうと考えたが、自分の持っている狙撃銃が、至近距離では加速不足で使い物にならないことを思い出し、やめた。
「泉大尉」
フィアは美奈代と通信を開いた。
「岩場が邪魔で、2時方向の射界がとれない。少し動く」
「――――了解した」
美奈代はビームライフルを調整しながら答えた。
「さっき入った情報だ。付近に、地雷散布中に墜落したヘリの残骸がある。注意してくれ」
「ありがとう」
フィアは、自分の口から出た言葉に驚いて怒鳴った。
「な、なんで私があんたにお礼なんて言わなきゃいけないワケ!?」
「勝手に言っておいて、そのセリフ!?」
「ふんっ!」
フィアは匍匐前進の要領で騎体を左斜め前に移動させると、ロクなチェックもしないままに銃を構えさせ、騎体を地面へと沈めた――――。

カチッ

フィアは、殲龍（せんりゅう）の集音センサーに、そんな音が混ったのを聞き逃さなかった。
「……」
フィアは、その音が何の音か知っていた。

「……」
無駄とは知っているが、フィアの全ての動きが止まった。
スー
ハー
スー
ハー
フィアは体を動かさないようにして、そっと通信機に囁いた。
「……ねぇ」

「バカか貴様っ！」
美奈代が怒鳴ったのも無理はないが、
「仕方ないでしょう！？」
言われた方だって好き好んでやったワケじゃない。
「誰よこんな所に地雷蒔いたヤツ！」
「泉より宗像」
美奈代がコクピットハッチを開きながら通信装置で宗像を呼び出す。
「こちら宗像。どうした？」
「殲龍（せんりゅう）が爆発する。撤退するぞ」
「薄情者ぉぉっっっ！」

「――――ったく」
結局、地雷解除のための部隊（メサイアの場合、回収騎）が回されることになった。
その間に、美奈代は指揮官として地雷のタイプの確認を命じられ、宗像と共に騎体を降り、殲龍（せんりゅう）の腹の下にいた。
「いいか！？動くなよ！？」
美奈代の声は震えていた。
「動きたくても動けないわよ、ばかぁ！」
答えるフィアも涙声だ。

「まいったな」
美奈代はすぐにはフィアの騎体の下には入らなかった。
まず確かめに動いたのは、近くに転がっていたヘリの残骸。
狩野粒子影響下でも飛行可能に電子装備を徹底的に外したＵＨ－１ＮＥＥの間近から発見されたのは、起爆前の対メサイア用地雷だった。
「対人用や対戦車なら無視出来たが」
美奈代は白兵戦用のＭ－１４を手にヘリから離れた。
「あの娘、騎体の音響センサーで気づいたんだな」
宗像は平気そうに言って、騎体の下に潜り込む。
「いい耳をしている。もしそうでなかったら」
殲龍（せんりゅう）の腰部装甲と胸部装甲の隙間に入り込んだ。
「この辺は無惨なことになったろうな」

メサイア用地雷というが、メサイアそのものを吹き飛ばすというより、メサイアの脚を吹き飛ばすことを目指す代物で、普通は正規軍が配備するレベルの兵器ではない。
踏みつぶされたら爆発する程度の、即席爆弾並に簡単な代物だ。
普段ならあまり意味のある兵器とは認められないが、地雷という概念がないらしい魔族軍メース達は、問答無用で踏みつけて爆発させるため、メサイア以上の対メース兵器として大量に戦線にばらまかれているのが現実だ。
メースに有効でメサイアに効かない兵器。
それは、敵味方を識別する兵器としても理想的であり、メサイアに乗っていてこれにひっかかるといえば、余程の間抜けとなる。

「回収部隊が救出に向かってくれている」
宗像は言った。
「部隊長としての始末書、覚悟しておけ？」

「何で私が！？」
「軍隊とはそういうものだ――――あった」
宗像は足下からコンバットナイフを取り出すと、慎重に地面を掘りだした。
「起爆装置の解除ボタン――――くそっ」
宗像は舌打ち一つ、作業を止めた。
「解除ボタンが壊れている。普通の作業では爆発してしまう――――専門部隊に任せよう」
「じゃあ、それまでは」
「ああ」
宗像は頷いた。
「敵が来ないことを祈るしか」
「泉騎、牧野より警告！」
美奈代と宗像の顔が引きつった。
「市街地方面より敵騎３０接近中！」
「フィア！騎体を一時放棄しろ！」
美奈代は騎体へ走りながら怒鳴った。
「騎体放棄の後、谷底へ飛び降りろ！」
「私に死ねというの！？」
「すまん。本音が出た――――安全な場所へ移動させる。白雷（はくらい）の手に乗れ。宗像、戦闘フォーメーション。編成は任せる。時間を稼いでくれ」
「了解した」
崖の陰に隠れていた宗像騎が台地に着陸した。
「ゆっくりやってよぉ！」
フィアが悲鳴をあげた。
「私、まだ逃げてないんだからぁ！」

モニター上に谷間を移動してくるメース達の姿が映し出される。
「見たことのないタイプです」
牧野中尉が首を傾げた。
「少なくとも、私達が交戦した中にはない……です」
「小清水騎、高良です」
涼騎から高良中尉が通信を送ってきた。
「フレーム反応が、北米戦線で投入されている中華帝国軍製簡易メサイア“グーク”と７５％で類似。魔族軍が“グーク”を運用している可能性は？」
「エンジン反応は類似７％よ？」
「宗像騎桜庭。関節部のデータとれましたが、“グーク”との素材的類似性は５０％。魔族軍では使用されていない金属反応有り。高良中尉の意見は賛同出来ます」
「では、あれが“グーク”と仮定して、武装や性能は“グーク”のデータベースと同じと判断可能？」
「腕の武装は中華帝国軍の８５式２３ミリ機関砲と類似性９８％」
「あのぉ！」
美奈代はＭＣ（メサイア・コントローラー）達の会話に割り込んだ。
「私達、攻撃してもいいんで――痛っ！」
ガンッ！
美奈代は、突然走った後頭部の激痛に言葉を失った。
「こ……これって！」
「懐かしいでしょ？指導バー」
牧野中尉は言った。
「この前つけてもらったんです。高尚な私達の議論を遮った罰です」
「ううっ……で、ですけど」
「しかたありません。後でみんなで泉大尉をイジって落とし前をつけさせます。大尉？敵の狙いは陸軍部隊と見て間違いないです。機種は中華帝国軍が開発した“グーク”。データ、見ておいてください」

「り……了解」

美奈代は、頭をさすりながらメースの動きにだけ神経を注ぐことにした。

中華帝国軍製簡易メサイア
米軍呼称“グーク”
頭高17メートル。
騎体はメサイアの標準高である25メートルからすればかなり小型だ。
武装も戦斧と23ミリ機関砲だけ。
武装もかなり貧弱だ。
「これで戦えるんですか？」
「数だけ――とは言いたいんですけど」
牧野中尉はたしなめるように言った。
「火炎放射装置でも装備されてごらんなさい。十分、機甲部隊には脅威なんですよ？」

敵の移動速度はかなりゆっくりしている。
しきりに単眼のモノアイが動き回っているのは、周囲を警戒しているからだろうし、ゆっくりとした速度は、移動音から接近を感知されたくないための配慮だろう。
対する美奈代達は、丘陵台地の上に布陣して、待ち伏せする。
状況としては悪くない。
「泉より各騎へ」
美奈代は訊ねた。
「敵の脚を止めることを最優先。第4射撃後、狙撃部隊以外はすべて斬り込むぞ」
「宗像だ。了解した」

「早瀬了解。派手にやりましょ？」
「小清水より泉大尉。ツヴォルフ中佐騎の地雷解除は？」
「後でいいし、こんな状況では無理だ」
「了解。小清水騎、射撃準備良好」
「よし」

ドンドンドンッ！

遠くで落雷のような音がして、美奈代は射撃命令を出し損ねた。
音はメース達にも届いたのだろう。
“グーク”達の動きが止まった。
「中隊司令部より中隊全騎へ」
通信装置に女の声が響いた。
後藤の部下、涼宮中尉だ。
「後方の陸軍砲兵部隊が砲撃開始」
「えっ？」
“グーク”達が一斉に動きを早めた。
「頼んでいない！」

シュンッ
シュンッ

空気を切り裂く音の後、散開した“グーク”達からかなり離れた場所に砲弾が降り注いだ。
「下手くそっ！」
「構わんっ！全騎、手当たり次第に仕留めろっ！」
都築の罵声と共に美奈代は通信装置に怒鳴り、トリガーを引いた。
ビームライフルの光弾が一騎の“グーク”の胴体に命中し、“グーク”は爆発した。

絶妙な射撃を見せたのは、ＨＭＣ（ハイメガカノン）を装備する涼と芳（かおる）だ。
２騎の初弾攻撃は３騎目をまとめて撃ち抜いた。
「美奈代、どうするの！？」
ビームライフルのトリガーを引いたさつきが怒鳴った。
「斬り込む！？」
「待て！」
丘の上から奇襲攻撃を受け、あからさまな混乱を示す敵。
ここで斬り込めばチャンスだが――

ズンッ！
ズズンッ！

降り注ぐ砲撃は、美奈代達と“グーク”の丁度真ん中に着弾した。
「司令部、泉です。陸軍の砲撃を止めてください。切り込めません！」
「司令部了解。陸軍に砲撃中止を要請します。しばらく待機してください」
「その前に敵が――――！」
砲撃が再び着弾する。
射撃間隔が短いことは感心に値するが、その命中精度の低さは非難されるべきだと美奈代は思った。
「牧野中尉、陸軍との間に通信可能ですか？」
「不可能。チャンネルがわかりません」
「くっ！」
目の前で“グーク”達が背中を見せて後退を開始しつつある。
ここで斬り込めば全滅させ可能だが、今の状態で出せる命令は――
「撃ち続けろっ！一騎でも多く！」
「大尉っ！」
伏射する美奈代の頭上をビームライフルの光が走った。

背面に装甲異常加熱警報が走ったからにはかなりギリギリの距離だ。
「なっ！？」
バンッ！
美奈代の真横で派手な爆発が走った。
思わず横を見た美奈代の視界一杯に、頭を吹き飛ばされ、崖から落ちる“グーク”の姿があった。
涼が左手でビームライフルを撃ったのだ。
「すまんっ！」
美奈代は素直にわびると、すぐに伏射姿勢から立ち上がり、シールドを構え、剣を抜いた。
「迂回したのか！？」
「そうらしいな」
宗像も斬艦刀を抜刀し、美奈代騎の横に立つ。
「敵は軽装甲だが、軽い分、機動性はかなり高いぞ？」
その宗像の警告が正しいことを、美奈代はすぐに思い知らされた。

一瞬にして崖の下から現れた黒い物体。
騎士の動体視力をもってしてもそう見えたのは、“グーク”だった。
「くっ！？」
“グーク”は２３ミリ機関砲を美奈代めがけて発砲。
美奈代騎はとっさにシールドで攻撃を防御し、反撃に転じた。
しかし――
「何っ！？」
美奈代が目を見開いた。
シールドのすぐ向こうで“グーク”が戦斧を構えていたのだ。
ほんの１秒にも満たない間に、“グーク”は距離を縮めたことになる。
「速すぎるっ！」

大降りに戦斧を振りかざす“グーク”に、美奈代はシールドを叩き付けた。
吹き飛ばされた“グーク”が崖の下に消えていく。
「１０時に２騎、２時方向３騎！」
「――くっ！」

単騎では兵器としての価値を問われかねない“グーク”。
それがこの戦争中、連合軍騎士をして“最も恐ろしい敵”と言わしめたのは何故か？
美奈代達は、この戦いで思い知らされた。

“グーク”の恐ろしさ。

それは――。

涼の意地

一騎を撃破したそのタイミングを狙っていたように、別な一騎が右から戦斧を袈裟斬りに振り下ろしてくる。
絶妙なタイミングで左から別な一騎が機関砲を発砲。
最悪なことに、この2騎を迂回するように別な騎が背後に着地、ワンアクションで背後から迫ってくる。
「くっ！？」
右からの一騎を槍で仕留めた所で、さつきはとっさに騎体を一回転させた。
いままで騎体が立っていた場所を砲弾が走り、砲弾と交差する格好で敵騎がさつき騎をかすめた。
それでもなお、砲撃と戦斧の攻撃が入れ替わったにすぎない。
しかも――――
「なっ！？」
敵騎は、さつきの得意とする槍のリーチギリギリまで接近すると、攻撃を戦斧ではなく機関砲射撃に切り替え、或いは機関砲を発砲後、すれ違いざまに戦斧を繰り出してくる。彼我の距離。そして相対速度を正確に把握していなければ出来る芸当ではない。
それを、敵は容易にやってのけている。
しかも、驚くほど素早い！

「なんて奴ら！？」
まるで１０倍速で映画を見ているような錯覚さえ覚えたさつきは、とっさに美晴達に怒鳴った。
「美晴、山崎君、フォーメーションをとらせて！」
「はいっ！」
「了解っ！」

フォーメーション。
この場合、互いの背中をカバーしあう三角陣形のことだ。前面からの攻撃だけで手一杯の敵にはこれしかない。
ちらと見れば、宗像と都築も互いの背中をカバーしながら敵を近づけないようにするのが精一杯な状況だ。

幾多の戦場で数多の敵を屠ってきた武器が、敵を近づけないためにむなしく空を斬る。

屈辱だった。

「美奈代！どうするの！？」
「教えてくれ！私が知りたい！」
美奈代は怒鳴った。
「狙撃部隊は最大推力で後退！離脱後に狙撃継続してくれ、ただし、離脱時にスモークは焚くな！こっちが困る！」
「了解っ！」
涼と芳（かおる）、そして寧々（ねね）の３騎がブースター最大噴射で丘から離れた。
敵が３騎を追撃しなかったのは幸いだ。

美奈代の剣が、敵騎の右腕を根本から切り落とした。切断された敵の腕が、戦斧を握ったまま宙を舞う。
「よしっ！」
美奈代は敵の撃破を確信した。

だが、腕を吹き飛ばされた敵は、そのまま加速をかけてきた。

「なっ！？」
軽く膝を曲げ、ブースターを全開にした敵は、驚愕する美奈代の

目前、モニター一杯に迫ってくる。

膝蹴りだ。

「くっ！」

騎体をわざと転ばす手前まで倒し、ブースターを点火してバランスを無理矢理確保する。

転倒だけは避けたが、反撃に切り替える余裕はなかった。

大質量同士がすれ違う衝撃に騎体がぶれる。

騎体制御のため、ブースターをふかしながら体勢を戻す美奈代の目の前で、敵騎は地面をほじくり返しながらの派手なスライディングをみせた。そして、丘から落下する一歩手前で停止。何事もなかったかのように立ち上がり、再び美奈代騎に向き直った。

「信じられません！」

牧野中尉が悲鳴に近い声を上げた。

「一体、どんなバランサーを？パイロットはどんなバランス感覚を？」

高速度で移動中に腕を切り落とされる。それは、突然、機体重量のバランスが大きく崩れることを意味している。メサイアは、普通に腕を吹き飛ばされるだけでも、平衡感覚を司るバランサーシステムの修正にしくじれば横転する代物だ。

高速移動中に腕を切り落とされても尚、一切の補正的動きをせず、高機動性を求められる膝蹴りまで見せた敵の動きは、メサイアを知る者にとっては信じられない。

次の瞬間、

ドンッ！

美奈代騎に向き直った敵の背面で爆発が生じ、敵騎の上半身と下半身が泣き別れした。

寧々（ねね）の狙撃が命中したのだ。

数が減ったと喜ぶヒマもなく、美奈代は死角から襲ってくる敵への対応を迫られる。
さっきより攻撃のタチが悪くなっている。
「こ、こいつら！？」
「敵はこっちの死角がわかっているんです」
牧野中尉は言った。
「索敵装置の反応をどこかでモニターしているのでしょう。私達ＭＣ（メサイア・コントローラー）でも出来ますけどね」
「気楽にそういうことを！」
敵が突き出してきたものは戦斧ではない。
手槍だ。
戦斧のリーチばかりを考えていた美奈代は、敵の突然の武器変更に反応が遅れた。
ギャンッ！
鈍い音がして、左背後からの一撃が美奈代騎のサイドスカートを大きく削った。
「くっ！？」
美奈代は左に振り返ろうとして、即座に急加速をかけて前進した。
真後ろから飛び込んできた敵が脳天めがけて振り下ろした戦斧がむなしく地面にめり込んだのはその時だ。
「速射砲を！」
美奈代は怒鳴るが、
「こんな乱戦の中でですか？」
目の前では祷子が別の敵を横薙ぎの一撃で仕留めている。そのすぐ近くでは、宗像と都築が頑張っていた。こんなところで３５ミリ多銃身機動速射野砲を乱射すれば味方の被害の方が大きい。
「くっ！」
躊躇する間に、敵が一列になって襲ってきた。
一騎が手槍を繰り出し、それをかわした所で、その背後から現れた別な騎の戦斧が美奈代を狙ってくる。かろうじてそれを回避して

なお、その背後から機関砲弾が襲いかかる。
一騎目を騎体をひねってかわし、戦斧を剣で弾いてそらした後、機関砲弾を楯でかろうじてかわすのが精一杯だった。
「三位一体ってこういうのですかね」
無理に冗談を言ってみたが笑えない。喉が痛いくらい乾いている。
「私は、あの攻撃を全部回避してのけたあなたを、どう表現するかに困っています」
「大尉っ！」
通信装置に悲鳴に近い声が入った。涼だ。
「こっちにも敵が接近中！数３」
「何っ！？」
「ＨＭＣじゃ、チャージに時間がかかりすぎます！第四種装備排除許可を！」
「ダメだって言ってるだろう！？」
美奈代は再び“三位一体”の攻撃を始めようとする敵を前に、これをどう凌ぐか、とっさの判断を迫られていた。
せいぜい考えついたのは、急速離脱でこの３騎から離れる――つまり、逃げ出すことだけ。
しかし、それでは話にならない。美奈代に求められているのはこの三騎の撃破であって逃げることではない。
「……」
戦況モニター上の反応も、敵がきれいに並んでいる。その前に立つのが自分の騎。そして――
「小清水！」美奈代は通信装置に怒鳴った。
「私が救援に向かう！」
「頼みますっ！」
「行ってやるから、ＨＭＣ（ハイメガカノン）の支援をくれ！」
「どこに――」
ハッ。という息をのむ涼の声がレシーバーに入った。

「大尉。いちにのさんで右へ。目視で仕留めます」
「頼む」
「いち――――にの――――」
敵の最前列にいた騎が手槍を引いた。
「さんっ！」
ドンッ！
美奈代はブースターを開いた。
ズンッ！
途端、あれだけ美奈代を苦しめていた三騎がまとめて光弾によって串刺しになった。
解放されたエネルギーの爆発が騎体を引きちぎり、破片をまき散らす。小清水騎からのＨＭＣ（ハイメガカノン）による狙撃が命中したのだ。いかに機動力が高かろうと、狙撃はそう簡単に回避出来る代物ではない。それが狙撃の恐ろしいところだ。
「よくやった！」美奈代は歓声に近い声を上げた。
「お礼はいいですから！」涼は半分泣きながら叫んだ。
「助けに来てください！」
美奈代が接触した時、小清水達は美奈代が展開していた丘が、何とか望める高台に陣取っていた。敵はその高台に登ろうとして、陸軍の砲兵部隊の攻撃に阻止されている。
ブースターを開いて宙を舞った美奈代が見た光景は、そんなものだ。
「今回、スコア振るいませんね」
「アレ相手にですか？」
「相手は誰でも、スコアが全て。騎士の価値はスコアです」
「むぅ」
言われてみればそうの通りだが、
「熱くなって死に急ぐ程、私はバカじゃありません。速射砲、ターゲット選定願います」
「よく出来ました♪」

美奈代は腰部にマウントしていた35ミリ多銃身機動速射野砲を右腕に装着、上空から敵めがけてトリガーを引いた。

「転属願い？」

接触した敵の掃討を終え、帰還した美奈代が後藤に呼び出されたのはその日の夕方のことだった。

「小清水が、ですか？」

「そう」

後藤は書類を手にして、興味がなさそうな顔で一瞥だけした。

「ほら。あいつもこれで出撃回数が規定に達している。転属も可能になるから、意向調査が行われたんだけど」

「それで……あいつ」

「小清水自身は、前衛に立ちたいそうだ。俺からすれば」

後藤はポイッと書類をデスクの上に落とした。

「“死にたい”って言っているようなもんだけどね」

「……」

「――泉」

「はい」

「部隊長として、小清水を前衛要員として認めるか？」

「――あ」

口を開きかけた美奈代を遮るように、後藤は早口で言った。

「独立駆逐中隊の前衛要員としての技量を聞いているんだ」

後藤の目は、相変わらずその内心を語ってくれない。

美奈代は覚悟を決めた口調で言った。

「――不要です」

「小清水じゃ、技量不足？」

「前衛での実戦経験はどのくらいあるんですか？」

「そりゃお前」後藤は肩をすくめた。

「回数関係ないよ。一回でも百回でも、俺が欲しいのは前衛要員としての能力だけ。場数は、能力を保証してくれないからねぇ」
「……はいつくばっていても一回。英雄になっても一回」
「いい言葉だ――誰の言葉？」
「父です。出世したいヤツは、ロクな仕事もしないうちに、出撃回数だけ稼いで後方勤務になるって」
いいかけて、美奈代はあっ。という顔になった。
「小清水、後方勤務はどうです？あいつ、パソコンとか使えそうですし」
「お前さんも覚えておくこった。だけどさ」
後藤はあきれ顔になった。
「後方勤務に回るっていうなら、一々お前さん呼び出したりしないでしょ？自分が何を聞かれているか、本当にわかっている？」
「で、ですけど……」
「どうにも小清水は」
後藤は、美奈代の弁明を聞こうとしない。
「狙撃部隊に配置されていることに不満をもっているんだよ。メサイアで狙撃任務だなんて、騎士として示しがつくもんじゃないし、経歴にも」
「それ、小清水が言ってるんですか？」
「んにゃ？俺の予測。でも、外れていないだろうさ。狙撃部隊からの配置転換は、平時に多いんだ。戦時中は逆に前衛部隊からの配置転換希望が増えるけどね」
「？」
「前衛で敵とマトモにぶつかり合うリスク考えたら、後方で一方的に撃ちまくる狙撃部隊の方がいいって」
「そんな！」美奈代は声を上げた。
「実戦はそんな甘くありませんっ！」
「――自分は前衛部隊にて交戦できる程の技量があるとは思えません。今回の狙撃訓練を受け、自分には狙撃要員としての才能があ

るのでは。と、自分自身の可能性に期待しています」
「は？」
美奈代は、突然、後藤が読み上げ始めた一文に、眉をひそめた。
「それ……どこかで」
「第七分隊、泉美奈代――お前さんも候補生時代にゃ“メサイア乗るなら狙撃部隊へ”って配属希望していたんだよな。それにしても何？お前さんのこの進路希望」
「……っ」
「第一志望が回収部隊、第二志望が狙撃部隊、第三志望が後方勤務？理由は、戦闘能力に自信がない。高校時代に秘書検定三級とったから……これじゃ、二宮さんの立場がないでしょう？」
「で……ですけど」
「戦闘能力に自信がないって、今のお前さんの口から出たなんて内親王護衛隊（イナ・ガーズ）にでも聞こえてごらんよ。“ふざけんな！”って、闇討ち喰らうよ？」
「どこから持ってきたんです。そんな資料」
「出所はいいさ。問題は」
後藤は腕組みをすると、椅子の背にもたれかかった。
「小清水が、泉みたいなヘタれた口実の正反対を理由にしていることさ」
「――へ？」
美奈代は目をぱちくりさせた。
突然、自分が何を言われたかわかっていないという顔だ。
「……お前さん」
後藤は眉を潜め、目の前の美奈代をむしろ哀れむような視線で見た。
「どういう記憶構造してるの？自分が何のためにここに呼ばれたか、もう忘れたの？」
「い……いえ」
美奈代は、ばつの悪い顔で室内に視線をさまよわせたあと、よう

やく思いついたという顔で言った。
「普通とは逆。小清水は――」
「隊長っ！」
突然、ドアが乱暴に開き、誰かが室内に飛び込んできた。
血相を変えた寧々（ねね）だ。
「お願いですから、止めてくださいっ！」
――涼と芳（かおる）が通路で乱闘になった。
美奈代が後藤と一緒に駆けつけた時には、二人は周囲によって羽交い締めにされてそれぞれ別な部屋に押し込められていた。
お互い髪は乱れ、つかみ合ったせいで服は破けている。顔にはあざが残っている。
しかも、美奈代が驚いたことに、殴りかかったのは芳（かおる）だという。
背の低く、小学生同然の体格しかない芳（かおる）が、誰かに殴りかかる事自体が、美奈代には想像さえ出来ないことだった。
だが――
「離して！」
「絶対、許さないんだからぁっ！」
いくら体格が小学生だといっても、芳（かおる）は騎士だ。
一般人の憲兵では荷が重すぎるとして、宮の命令により、芳（かおる）は、都築と山崎によって、無理矢理に騎士用の独房に叩き込まれた。
「出して！出してよ！」
ガタガタッ！
開かないことを分かった上で、それでも独房のドアを乱暴に揺する。
「涼――涼ぉぉっっ！！」
ドアはびくともしない。
「開けてよぉぉっっ！」

揺れるドアのロックを確認した都築と山崎が、ドアから離れた。
憲兵が小銃を手に、その後に続く。
右手に持つ小銃には実弾が装填されているし、左手のスイッチは、万一の際に備え、壁に設置された、対人用散弾散布装置の起爆装置。
鬼より怖い憲兵の握るカードは常にジョーカーだ。
それを知る二人共、会話を禁止されているので、無言のまま、独房のドアから離れた。

「痛ててっ」
独房の連なる一角の角まできて、憲兵によって格子戸が閉められた。
後の万人は、艦内の監視装置だ。
憲兵はそのまま無言で立ち去った。
それを見送った後、取り押さえた際に芳（かおる）にひっかかれた掌を都築が顔をしかめて見た。
「見ろよこのミミズ腫れ」
「芳（かおる）さん、琉球空手使えますからね」
「ひっかきは関係ないだろ？」
都築は泣きそうな顔で、恨めしげに山崎を見た。
「……にしても、あのガキ、何で山崎にゃ手を出さなかったんだよ」
「さ……さぁ」
「どういう差別だよ――ん？」
都築は、そこでようやく美奈代に気づいたらしい。
「どうした？」
「い、いや……」
美奈代は、自分の行動をどう説明して良いのか迷った。
「その……平野少尉が」

ウウッ……グスッ……グスッ……。

格子戸の奥から聞こえてきたのは芳（かおる）のすすり泣きだ。聞いているだけで美奈代は胸が痛んだが、
「放っておけよ」と、都築は言った。
「後藤隊長に任せておけ」
「そ、それはそう……かもしれないが」

「泉大尉」
寧々（ねね）が通路から現れた。無重力空間の中、移動するその動きの機敏さは、猫系の野生動物を連想させる。
「後藤隊長がお呼びです」

「平野少尉の取り調べは明日、朝一番でやるけど、どうやら、原因は」
タバコをくわえた後藤は、やる気のない様子で頭をポリポリと掻いた。
「小清水の転属希望らしいな」
「小清水少尉の？」
「そう。平野は、ずっと小清水とパートナー組んでいただろ？だから、小清水が平野に断りもなく転属希望出したことが平野の逆鱗に触れたって寸法さ」
よくある女のわがままさ。と、後藤は楽しげに笑った。
「二人は――どうなるんです？」
「どうされたい？泉隊長」
「そ、そりゃ――無罪放免で」
「そりゃ出来ないな」
後藤は肩をすくめた。
「とりあえず、小清水はぶん殴られたケガの様子を見るため一晩医務室だ――んで」
その顔はどこか楽しそうに美奈代には見えた。
「お前さん、小清水の代わりに一晩、独房に入ってこいや」

「――終わったかい」
「ええ」
肩を落として部屋を後にした美奈代を見送った後藤は、その脚で向かったのはハンガーデッキの一角。
すでに整備班長の坂城や平野艦長経達が集まっていた。
「明日にゃ、お客さん達が大勢来るから、こんなに店広げてる余裕はないけどなぁ」
皆が集まっている位置からは、ハンガーデッキの中が一望出来る。
ハンガーベッドには白雷達が並び、その奥には地雷から逃れた殲龍が置かれている。
整備兵達は、その間を動き回っているが、整備を受けている騎は今のところない。
「ウチの修理は、それほどじゃないんでしょう？」
「完了してはいるさ。相変わらず、嬢ちゃん達ゃ破損が少なくて助かる」
「――ならいいでしょう」
後藤の視線が、ハンガーデッキの床にむけられた。
ハンガーデッキの床には、ストレッチャーに乗せられた騎体の残骸が転がっている。

あの“グーク”だ。

「“あれ”を中華帝国が作り上げたとしたら」
坂城は言った。
「あいつらは人類の科学技術を2世紀は進歩させたことになるだろうな」
「買いかぶりでは？」
「違うわ」

通路から顔を出したのは、白衣を着た少女と老人――津島紅葉とフェルミ博士だった。
「2世紀でも、低く見過ぎているかもしれません」
フェルミ博士は言った。
「今日の衝撃は、かつて初めてメサイアに出会った時のそれと並ぶものがあります」
「グレイファントムの生みの親の言葉とも思えません」
美夜は眉をひそめた。
「いや、艦長」
フェルミ博士は首を横に振った。
「乗艦の挨拶もせずに失礼しました――が、それほどの価値があるのです」
「？」
美夜には言葉の意味がわからない。
「論より証拠――これをご覧になればわかりますよ」
フェルミ博士に誘われるように、皆が“グーク”の乗せられたストレッチャーの上に移動した。
「構造はわかりました。これは、米軍呼称“シットバット”――あの品のない呼び方をする“出来損ない”のさらに“出来損ない”です」
フェルミ博士の論調には容赦がない。
口元をハンカチで抑えるあたり、どうにも生理的にこの騎を嫌悪しているのは間違いない。
紅葉も何故か、表情が硬く、無言のままだ。
「――皆さん」
フェルミ博士は言った。
「この“グーク”は、フレーム構造やエンジンに見るところはありません。このフレームは、数年前に倒産したキャリング社が開発したパワードアーマー構想で試作されたそれをサイズアップさせただけですから」

「あの構想は確か」高木がぽつりと言った。
「全高2メートルほどで、操縦は一般兵にやらせる」
「然り」フェルミ博士は頷いた。
「市街地戦における対人掃討作戦に投入される兵器として開発されたものです。メサイアの操縦システムを応用して、2メートルほどの甲冑を作り上げた」
「それを大型化させただけ？」
「操縦システムは、そんなに甘くありません――今頃、他国の魔法科学者達は、操縦方法が分からず、首を傾げているでしょうな」
フェルミ博士が勝ち誇った様子で喉の奥で笑った。
「――失礼。回収された2騎は2騎共、別な地点で回収されたんでしたな？」
「そうです」
突然の質問に、後藤は頷いた。
「Aとスプレー塗装されたのが、最も最初に交戦、撃破した騎。Bはその後、Aの集団と入れ替えに襲ってきました」
「装甲形状の違いから、別タイプと判断した――現場で交戦した騎士達は何と？」
「最初の騎と次に交戦した騎は別物だと」
「――判断は正解ですな」
フェルミ博士は満足そうに頷いた。
「これがA――コクピットは頭部です」
残骸に“A”とスプレーで乱暴に書かれた騎の頭部は、整備兵によって装甲版が外され、中の機材が丸見えになっていた。
「MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）ですか？」
中をのぞいた美夜が訊ねた。
「STRシステムらしいものは何もない。しかし、この騎体のサイズでは胸部にコクピットを入れたら他の機材が入らない」
「さすがの慧眼ですな。その通り」
「……では一体？」

「私が、そして坂城整備班長が評価した技術の塊が、この操縦システムなのです」
「？」
美夜は怪訝そうな顔になった。
「一体？」
「――パイロットはここに座って」
フェルミ博士は手にしたステッキで、丁度戦闘機のコクピットと同じような構造のシートをさした。
３０度ほどの傾斜の効いた無骨なシートの両側と前面に計器類が並び、計器類の上はモニターになっている。
本物の戦闘機みたいだと、美夜は思った。
「その両脇にある操縦桿を握る。そして」
フェルミ博士のスティックが操縦桿を突いた。
「騎体の動作を念じれば良いんです」
「これって」
ようやく、フェルミ博士の言いたいことが分かった美夜は、目を見開いた。
「脳波コントロールシステム！？」
「左様。人類の間では、実戦導入可能な脳波コントロールシステムは未だ開発されていません。騎士ほどの動作を期待しなければ、一般人でもこの機械を動かすことは出来ます」
「……だから」
美夜はぽつりと言った。
「主要武装が火器なの？」
「恐らく。中華帝国が、これを自力で開発したとしたら、あの国の科学技術は信じられないレベルに達していると言わざるを得ません」
「しかし、現にこうして……」
高木は、目の前の存在を前にして、何と言っていいのか、表現出来ない様子で、何度も騎体とフェルミ博士を見比べた。
「ブラックボックスに相当する場所は、人類の工業規格とは異なり

ます。恐らく、いや、間違いなく、連中はこの部分だけは輸入に頼っていますね」
「ブラックボックス？」
「――その理屈を説明すると一晩でも足りません。今は、最も問題のＢに移りましょう」
装甲が外されているのは同じだが、Ｂとスプレーされた騎は、なぜか頭部システムが外されていない。
「――これを外すだけで大規模な検証が必要だ」
フェルミ博士はため息混じりに言った。
「幸い、撃破されたショックでハッチが飛んでいたからよかったようなものの」
そこまで言ったフェルミ博士は、おや。という顔で美夜を見た。
「艦長。女性に対する礼儀として聞きますが」
その表情からは何も読みとれない。
「――婦女子がご覧になるには厳しいものがありますよ？」
「ご心配なく」美夜は答えた。
「立場上、慣れていますから」
「なら良いでしょう。後藤隊長。このＢについて、騎士達の評価は？」
「今まで遭遇した敵の中でトップクラスの強敵――表現としてはそういうものでしょう」
後藤は付け加えた。
「そこのＡとは別物扱いです」
「このＢもまた、脳波コントロールシステムを採用しています。そのシステムが」
フェルミ博士の視線がちらりと横に立つ紅葉を見た。その表情は相変わらず硬い。
「科学者として考えた場合は効率的、かつ理想的なのですが」
「？」
「――まぁ、中をのぞいてください」

小さく開かれたハッチの横、フェルミ博士が道をあけた。
「見ればどういう代物かわかります。何が問題なのかも含めて」

「大丈夫ですか？艦長」
ハッチの中をのぞき込んだ途端、気絶した美夜がようやく意識を回復した。
衛生兵に支えられるようにして起きあがるなり、口元を抑えた美夜は、吐き気を抑えようと何度も深呼吸をした。
「ふ……フェルミ博士……」
「私が何が問題だと言いたいかは、これでわかったでしょう」
美夜を見下ろすフェルミ博士の視線に感情はない。
「人体を兵器として使用する発想は昔から存在します。“これ”は、恐らくその中でも最も理想的かつ効率的な方法の一つでしょう」
「これが……ですか？」美夜の横で水の入った紙コップを差し出す高木が、信じられないという顔でフェルミ博士を見た。
「こんなものが……理想？」
「左様」
フェルミ博士は頷いた。
「従来のコンピューターでは実現不能だった不測の事態にも即座に対応出来る人間の脳と、機械を接続する“ブレイン・マシン・インタフェース”――言い換えれば」
「……」
「人間の脳髄の機械部品化――人道の箍（たが）を外さなければ出来ない研究の昇華ですな」
「――好かねぇな」
それまでずっと腕組みをしながら聞いていた坂城が言った。
「そんなもの、俺は機械とは認めたくねぇ」
「まぁ、それが一般的には正常な判断でしょうな。私もまた、一人の一般市民ならば同感ではあります」

「――つまり」
衛生兵の手を借りて立ち上がる美夜をみながら、後藤は訊ねた。
「人間を機械の部品として“こいつ”の中に組み込んだというわけですね？」
「左様」とうなずき、フェルミ博士はニヤリと笑った。
「人体の生物兵器利用は、国際条約上、規制はありませんからね」
「……中の連中を普通の生活に戻すことは可能ですか？」
「無理でしょう」
高木の問いかけに、フェルミ博士は即座に首を横に振った。
「腕は肘関節から先がない。下半身は腰から下がない――羊水らしき特殊溶液の中に浮かぶ彼等に、一般人と同じ生活を望む方が酷です」
「で――」
後藤はハッチの中をのぞき込んだ。
持ち込まれたライトが、ハッチの中を、その奥にある物体を照らし出している。
「こいつら、生きているんですか？」
「生命維持装置の電源はそろそろ切れるでしょう。そうすれば」
「……なるほど？」
ポリポリと顎の下を掻きながら、後藤は呟くように言った。
「こりゃ、黄色人種だな。顎の張りからして」
「腕をみたまえ」
「腕？」
「ハングル文字が書かれているだろう？出所もそれでわかる」
「どれどれ？……ああ、本当だ」
ハッチの中に潜り込んだ後藤は、その文字を読み上げた。
「鬱陵島守備隊　朴――ああ」
「あの島で、全滅した韓国軍守備隊の兵士だろう。魔族軍によって捕獲され」
「残酷ですな」

「食べるためにと殺場に動物を引き出す人の身で、その言葉はどうかと思うが？」
「身勝手が人間の信条ですよ」
「私は君のそういう発想が好きだ」
「――――どうも」
ハッチから視線を外し、後藤は楽しげに言った。
「中華帝国製の兵器の中から、こんな“物”が出てきたとしたら、国際世論はどうなりますかね。何しろ、“ソロモンの鷹”の異名をとった平野艦長に、気絶なんていう女らしいことやらせた代物だ」
「発表するか、闇に葬るかまでは、私の知ったことではないよ」
フェルミ博士は、楽しげに後藤に問いかけた。
「君ならどうするね？後藤君」

翌日。
ヘックショーンッ！
涼のレシーバーに今日何度目かの、そんな音が響いた。
「大尉。大丈夫ですか？」
「大丈夫……」
ゴソゴソ
チーンッ
「ううっ……相変わらず、この季節の独房はキツい」
「経験あるんですか？」
「泉大尉は」
牧野中尉が楽しげに言った。
「訓練校時代、営倉独房送り３６回、外出止め６５回の不動の記録の持ち主ですから」
「中尉っ！」
「あら？開校記念式典に独房から出てきてそのまま女子生徒代表で

祝辞読んだ話は有名じゃないですか。“独房に入った生徒が代表とは何事か”って。他にもいろいろと武勇伝は」
「私にも立場というものが！」
「あらあら。それは失礼♪」
「……」
涼は、ちらりと通信モニターを見た。
普段ならこういう話に真っ先に食らいついてくるはずの芳（かおる）は、ずっとだまりこくったままだ。
「……」
昨日の騒ぎを思い出すたびに、傷と心が痛む。
「小清水少尉」
「うぇっ！？」
突然、美奈代に声をかけられ、涼は素っ頓狂な声を上げてしまった。
「どうした？」
「な、なんでもありませんっ！」
「ご希望の前衛としてのテストを兼ねた任務だ」
「は、はいっ！」
緊張した声を上げた涼は、騎体のステータスモニターを見た。
第四種装備が外され、剣とシールドが装備されている。
普段、何かあるたびに放棄したがったＨＭＣは存在しない。
横を広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を装備した美奈代騎が移動し、その背後を、第四種装備の芳（かおる）騎が続く。
「敵の出現する可能性は低いにしても、油断だけはするな。３騎程度なら、お前一人に任せるぞ」
「はいっ！」
「平野は私の指示で動け。小清水の支援に回る必要はない」
「……」
「返事っ！」
通信モニター上でそっぽを向く芳（かおる）に、美奈代は怒鳴り声を上げた。

「……はい」
芳（かおる）はそれに、短くそう答えた。

逃げ遅れた避難民を救出に向かえ。

それが、美奈代達に科せられた任務だった。
後藤はこれに対して、美奈代達３騎を派遣した。
美奈代達の背後には、避難民救援用に派遣されてきたヘリ部隊が編隊を組んで超低空飛行を続けている。
「この辺一帯に敵の存在は確認されていないが、警戒怠るな」
「了解」
「……」
山間部の平地を抜けるあたりで、ヘリ部隊から通信が入る。
“エコー１”より“ウィスキー１”。救難ポイントに接近中。脅威の存在は確認されているか？どうぞ？」
「こちら“ウィスキー１”牧野中尉。進路上に脅威なし。のんびり行きましょう」
「ハハッ。“エコー１”了解。あんたが美人なら任務が終わったら飲みに誘いたいね」
「あら、野暮なことを」
牧野中尉は嫣然とした笑みを口元に浮かべた。
「私が美人かなんて野暮の骨頂。私は当然、すこぶるつきよ？」
「うっひょぉ！お顔を拝見したいねぇ。こいつは意地でも生きて帰らなくちゃいけねぇ！」
「そういうことです――大尉。目標まで３０秒。“ウィスキー１”より“エコー１”。先行し、目標地点確保します。よろし？」

「“エコー1”了解。頼む」

美奈代達が到着したのは、山間の小さな村落だった。

古ぼけた建物がぽつりぽつりと建ち並び、あとは放棄された田畑が山の緑の間に見え隠れするだけだ。

人っ子一人いない。

「避難民はどこに？」

「――生体反応はありません」

「事前情報では、避難民は約２００名。アマチュア無線を保有しており、ここまで逃げてきた後、無線装置で救助を求めてきたと」

「その通りです。無線装置の出力が弱く、ここまで来てようやく軍の通信装置とコンタクトがとれた。最後の通信によれば、ここまで移動してきた後、大きい建物に入ると」

「どこでしょうか」

「大尉」

芳騎（かおる）が美奈代騎の横で何かを指さした。

見ると、トラックが2台、コンクリート製の建物の横に隠れるように止まっていた。

「微弱ですが、トラックのエンジン内部に熱が残っています。あの建物ではないですか？」

「牧野中尉。あの建物について、何か情報は？」

「――ありました。穀物用の低温保管倉庫ですね」

「穀物倉庫？」

「低温で長期間穀物を貯蔵するための倉庫――文字通りです」

「そこへ？」

「食べ物と、宿を求めたのでしょうね」

そんな美奈代達の後ろで、ヘリのローター音がした。

「マスター」
涼の前に、ひょこっと現れたのはショコラだ。
「……あの」
「大丈夫」
涼は何か言いたげなショコラの頭を軽くなでた。
「接近戦でも、私は絶対に上手くやってみせる」
「……」
「シミュレーションでも、私、かなりいい成績だったんだから」
言いながらも、涼の視線は外に注がれている。周辺警戒に立つ白雷達の下では、ヘリから降りた兵士達が倉庫に侵入するところだった。
彼等の会話を、白雷の耳は捉えることが出来る。

「隊長、だめです。中からカギがかけられています」
「鍵を破壊出来るか？」
「マスターキーでも無理ですよ」
「仕方ない。Ｃ４を使え」
「了解――設置完了。起爆します」
「やれ」
ドアの辺りで爆発音がした。
ドアの両側にいた兵士達が、銃を手にドアに近づく。
「……なんだ？」
兵士達はドアを開こうとして立ち止まった。
「隊長？」
「……ああ。こちら第一小隊の須藤だ。“ウィスキー１”応答されたし」
「こちら“ウィスキー１”。内部に妖魔とおぼしき反応はなし。ただし、生体反応もありません」
「了解。美人さん。通信終わり。それにしても……」

隊長とおぼしき人物に、一人の兵士が近づいた。
「隊長。他の換気口もです」
「……よし。俺が中に入る。そうすれば」
兵士がドアを開き始めた。
「このドアと通気口に詰め込まれた布きれの意味がわかるだろうよ」

兵士達が倉庫の中を移動する。
「……みんな倒れている」
「倉庫中央に来た。何か大きく燃えた跡がある」
「このバカ共っ！こんなところで！」
「落ち着け！これから地下倉庫へ移動する。生存者がいる可能性に賭ける」
「“ウィスキー1”より警告っ！」
通信装置に牧野中尉の声が響き渡った。
「地下から移動する者あり！」
「“ウィスキー1”。こちらでも確認した。生存者だな？」
「“ソレ”に生体反応はありません。それは――」
「た、隊長！？」
「あ、あれは、あれは、な、何ですかあれはっ！」
「う――撃てっ！」
集音装置を銃声が支配する。
「逃げろっ！逃げるんだ！」

「い、一体！？」
倉庫の中で何が起きているのか全くわからない涼は、MC（メサイア・コントローラー）の高良中尉に訊ねた。
「中尉！？」
「地下倉庫に突然反応が現れました。反応増大中」
「何の反応です？」
「機動速射野砲、用意してください」

「ですから」
「妖魔――推定は屍鬼（グール）です」
兵士達が転がるようにドアから飛び出してくる。
外で待機していた他の兵士達の何人かが、ドアの中に手榴弾を放り込み、ドアをしめた。
「ちょっ！？」
芳（かおる）の驚いた声が通信装置に入った。
「あ、あれじゃ中の人が！」
「中にもう生きた人はいない」
答えたのは美奈代だった。
「歩兵が下がり次第、この建物を焼却する。広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）使うぞ。外に出る者があれば容赦なく発砲して仕留めろ」
「り、了解」
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の炎の洗礼を受けた倉庫は一瞬でこの世から消滅した。
立ち上る黒煙。離陸後、遠ざかっていくヘリ部隊を眺めながら、
芳（かおる）が訊ねた。
「どういうことです？大尉」
「歩兵隊との話はついた」
通信装置の中の美奈代の声はどこか疲れていた。
「――お前達、狩野粒子の世間一般での認識って知っているか？」
「え？」
思わず、涼と芳（かおる）は通信モニター上で視線を合わせてしまった。
ハッと気づいた様子の芳（かおる）が、慌てて視線をそらした。
「――小清水少尉」
「あの……」
涼は、知っている限りのことを言った。
「電子機器を壊す？」
「平野少尉」

「……毒ガス」
「へ？」
涼は、芳（かおる）の口から出た意外な言葉に目を丸くした。
「か、芳（かおる）？それって」
「……」芳（かおる）は、不機嫌そうにそっぽをむいたままだ。
「残念ながら、平野少尉の言うとおりだ」
美奈代は言った。
「電子機器を破壊するほどの兵器。それがマスコミの無責任な報道で毒ガスとして認知されている。長期間吸い続けると死ぬと言われているそうだ」
「……」
涼は、ドアにねじ込まれていた布の意味がそれでわかった。
「あれって」
「そうだ」
通信モニター上で美奈代が頷いた。
「狩野粒子を倉庫の中に入れたくなかった。そして」
「……」
「密封された空間で、火を焚いたんだ」
「……一酸化炭素中毒」
「そうだ。暗闇の中。いつ襲われるか、いつ終わるか、何もかもわからない逃避行の中、光が救いになっていたんだろうが」
「……それが、致命傷になった」
「希望と絶望は紙一重だ」
美奈代は言った。
「任務は終わった。我々も帰還するぞ」
「――了解」
「はい」
「小清水少尉のテストはお預け」
言いかけた時だ。

ズンッ！

鈍い音がして、美奈代達の周囲で連続した爆発が発生したのは、その直後だった。

「１０時方向より敵騎接近中！数３！」
「小清水少尉」
「は、はいっ！」
「必要と思う手段をとれ。私はそれしか言わない」
「――――はい」

大丈夫。
涼は、何度もそう言い聞かせ、ＳＴＲシステムに力を込めた。

戦況モニター上。
これなら、ＨＭＣで仕留る。
一瞬、そんな事を考えて、自分の思い違いに気づいた。
私は今、前衛部隊として来てるんだ！
武器は斬艦刀！
これだけだ！

自分にそう強く言い聞かせる。

泉大尉みたいに、“格好良く”戦って、みんなを見返してやるんだ！

そして、

そして――――！！

泉大尉に認めてもらうんだ！！

格好良く。

派手に。

そんな美しく華々しい言葉が、胸の中からどす黒い闇と共に現れる。

その言葉達が涼を支配して――――

涼騎が、斬艦刀を抜いた。

かみんぐあうと

「１０時方向より接近するメース、数３」
涼騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）、高良中尉が続けざまに状況を告げてくる。
「サライマタイプ。武装は戦斧とシールドのみと思われます」
「め、メース！？」
「中華帝国軍騎ではありません。反応はメースの特性を示しています」
「一体、あの連中、どこまでワールドワイドなのよ」
「意味不明ですけど、とにかく、相手があの無人機なら」高良中尉は言った。
「私達はもう後方に下げられているでしょうね」
「っ！」
高良中尉に悪気があったわけではない。
戦況の適切な判断が求められるＭＣ（メサイア・コントローラー）として、高良中尉なりに冷静に現状を判断しただけだ。
しかし、その些細な言葉は、涼の神経を逆撫でした。
「わ、私だって！」
「ち、ちょっと少尉！？」
「泉大尉、こちら小清水！これより突撃しますっ！」

「ち、ちょっと、涼っ！？」
青くなったのは涼騎の後方に待機していた芳（かおる）だ。
涼の突撃につられるように、思わず騎体を前進しようとした。
ガッ！
その騎体が止まった。
見ると、泉騎が芳騎（かおる）の肩を掴んでいた。
「平野少尉。貴様の突撃命令は出ていない。ＨＭＣ（ハイメガカノン）に火を入れてお

け」
「――――了解」

「おい、一体なんだ？」
目を見張ったのは、実はサライマ部隊も同じだった。
人類製のメースの出来損ないが大量にやられた所から移動中の部隊が来た。
どんな敵が配置されているか調べてこい。
彼等はそういう任務で派遣されてきた偵察部隊に過ぎない。
偵察部隊とはいえ、戦う時には戦う。
彼等は撃たれただけで逃げ出す義勇軍ではない。
偵察隊隊長であるグースは、突然斬り込んできたデミ・メースにほんの一瞬だけ驚いたが、すぐにその厳つい顔をほころばせた。
「ニーク」
「はっ？」
「俺達はついているぞ」
「――――ですな」
ニークと呼ばれたグースの部下は、正しく上官の言葉を理解し、表向きは顔をほころばせた。彼にとって、会敵は歓迎することではない。さっさと無事に帰陣して、のんびりと酒を相手に戦いたいのが本音だ。
「ニーク、カスタ」
「とりあえず、俺からいかせてくださいや」
そう言ったのは、三番騎のカスタという男だ。
「この辺でスコア稼いでおかないと、給金にかかわるんでさぁ」
「いいだろう」
グースは小さく頷いた。彼我の配置からしても、迎撃するならカスタが最適だ。
「やれ。カスタ」

「了解っ！」

ガンッ！

ギィンッ！

敵は、撃ち合ってはすぐに離れる。

つばぜり合いを極端なまでに嫌っている。

「ほう？」

カスタは何度目かの打ち込みを長剣によって裁かれたことに、少しだけ目を見開いた。

「よく見てやがらぁ」

再び、互いに時計回りに回りながら接近。数回にわたって斬艦刀と戦斧の刃を交えた後、

「ぬわぁっ！」

カスタが撃ち込み、斬艦刀で受けた涼との間でつばぜり合いになる。

ギギィ……ッ！

剣と戦斧が不気味な音を立てる中、カスタはサライマを後退させ、敵の隙を狙った。

剣を押そうとする涼は、そのカスタの下がる動きにつられるようにして数歩前進する。

それは、まるで戦斧と剣がくっついているかのような錯覚さえ覚える光景だった。

カスタは四歩後退した所で一気に体を脇に引き、涼騎の剣を戦斧から引きはがすかのような動きを見せた途端、戦斧を涼騎めがけて振り下ろす。涼騎は、それがわかっていたかのように、とっさに構えた斬艦刀でその一撃を受け止めた。

「やるっ！」

それを見守っていた芳（かおる）が目を見開き、歓声をあげた。

「涼、ここまでやるなんて！」

「そうですか？」
何故か、川崎中尉の声は冷たい。
「えっ？」
芳（かおる）にはその意味がわからない。涼は敵と五分に渡り合っているではないか。
ここでは一緒に、涼の活躍をほめてくれたっていいはずだ。いや、そうするべきだ。
一体、川崎中尉は何が不満だというのだ？
「あの――」
「一体」
はぁっ。という失望のため息と共に、芳（かおる）の問いかけを潰すような口調で川崎中尉は言った。
「小清水少尉は、どこで、何してるつもりなんでしょうね」
「――え？」
目をぱちくりさせた後、芳（かおる）は救いを求めるように通信モニター上の美奈代を見たが、その顔もまた、冷たかった。
涼の戦い方に、皆が、何か芳（かおる）にはわからない不満を抱いている。
それが、本能的なレベルで芳（かおる）に不安を抱かせる。
「り、涼？」

ギィンッ！
ピーッ！
撃ち込む度に派手な金属音がして、アラームが鳴り響く。
「くっ！」
涼はその全てを無視するように、騎体操作にだけ神経を傾ける。
敵は右へ左へと騎体を裁き、こちらが撃ち込むと、後方に大きく下がって反撃を試みるパターンの繰り返しだ。
戦斧の一撃を片膝をついて受け止め、二撃目が来る前に斬艦刀を横薙ぎに払って間合いをとる。

ピーッ！
その度にレシーバーにアラームが響く。
「気が散るっ！」涼は怒鳴った。
「何の音よこれっ！」
「肘の操作に気をつけてください！」
今まで黙っていた高良中尉が怒鳴る。
「肘の使い方が乱暴だから、肘に熱がたまってるんです！」
「こんな程度で！？」
「これほどの間違いです！」
高良中尉の怒鳴り声に、涼は思わず肩をすくめた。
「白雷（はくらい）は肘が弱点なんです！仕様書読んでないんですか！？」
「へ？」
「――――もうっ！白雷（はくらい）は、津島中佐の完全な設計ミスで、肝心な関節を“征龍（せいりゅう）”のをそのまま使っているんです！
あのバカ、白雷（はくらい）のそれと設計図間違えたまま組み上げて、完成した後になって、納品書見て初めて気づいたんですよ！？
わかってます？言葉の意味！
組み込んだのがよりにもよって、関節駆動系に関しては、近衛史上最悪の失敗作と言われたあの！あの“征龍（せいりゅう）”のですよ！？」
高良中尉は“あの”にやたらと力を込めた。
「こんなパワーありまくりの騎に、あんなチャチな肘関節パーツ組み込んだら危ないに決まってるじゃないですか！」
「そんなの！」
敵騎からの打ち込みをかわし、反撃の隙を狙いながら、涼は怒鳴り返した。
「こんなところで言われても！どうしろっていうんですか！？」
「肘の使い方に気をつけろってそう言いたいんです！」
「絶対、そうは聞こえませんっ！」
「肘のアラームに注意して」
やっと普段の冷静さを取り戻したらしい高良中尉は言った。

「冷却システムが追いつきません。泉大尉だって、１０騎斬りが限界」
「泉大尉だって１０騎斬りやってのけたんです！きっと！」
美奈代の名が出た途端、カッとなった涼は、敵めがけて下からすくい上げる逆袈裟懸けでしかけた。
しかし、敵はあっさりとその一撃をかわすと、後方に下がって間合いをとる。
「この程度じゃ済まなかったはず！」
「大尉は、一騎仕留めるのに3撃を必要としません。涼？あなたは今の打ち込みで、何発目かご存じ？」
「――――くっ！」
「現在、加熱危険域５６％。今みたいな派手な打ち込みを後何発かやったら、右腕の肘関節は焼き付きますよ？」
「り……了解」

「泉大尉！」
「動くな」
こうして離れていれば、敵の狙いはすぐにわかる。
芳（かおる）でさえ、それに気づいている。
だが、美奈代は一切、芳（かおる）に手を出すどころか、口を出すことさえ許さなかった。
芳騎（かおる）の通信は、ＭＣ経由（メサイア・コントローラー）で美奈代騎にのみ限定されていた。
事態を涼に伝える方法が、芳（かおる）にはない。
「涼、あのままなら死んじゃいます！」
「なら、そうした方が、少尉のためだろうな」
「っ！」
グイッ！
芳騎（かおる）がとっさに動き、その肩に持ったＨＭＣ（ハイメガカノン）の筒先が、美奈代騎に向けられた。

――いや。

芳は、美奈代に向けた。と思った。

だが、

「……」

「平野少尉、今のは事故にしてやる」

ＨＭＣの筒先は美奈代騎につかまれ、無造作に明後日の方向を向いている。

弾かれた途端、地面に倒された芳騎のコクピット部分には、美奈代騎のコンバットダガーの切っ先が突きつけられている。

芳にとって最悪だったのは、この一切の美奈代の動きが、まるで読めなかったことだ。

そう。

芳は、ＨＭＣを美奈代騎に突きつけようとした所までは覚えている。

だが、その後、気がついた時にはこの有様だ。

勝てる相手じゃない。

それを、芳は一瞬で悟った。

いや、悟らされたというべきだろう。

「“おいた”をしているヒマがあったら、だまって見ていろ」

「――あなた」

勝てる相手ではない。

だが――

今、目の前で危険に曝されているのは一体誰だ？

芳の戦友。そして、泉大尉にとっては部下だ。

それが今、敵の罠にはまっている。

それなら、助けるのが道理じゃないか？

助けにいくのが、人として、指揮官としての義務じゃないのか？

――私は、こんなヤツの下にいるのか？

この体勢にいるだけで、芳（かおる）は言いようのない屈辱に心身を犯されていくような錯覚さえ覚える。

――私と涼は、こんなヤツにあこがれていたのか？

――こんな……こんな……。

「……泉大尉」

せめてもと美奈代騎を睨み付ける芳（かおる）の眼に涙が浮かぶ。

「……何だ？」

「あなたは……」

仰ぎ見てきたはずの騎が、かすんで見えた。

「……あなたは……それでも人間ですか」

「……」

不意に、美奈代騎による拘束が解けた。

「射撃ポジションを維持しろ」

美奈代は、何もなかったかのように、芳（かおる）に命じた。

「……平野少尉」

「……」

「小清水少尉が、私の命令を正しく理解していたら、すぐに事は終わるんだ」

その声は、それでも何だか、噛んで聞かせるような優しさを含んでいた。

「……？」

「さぁて！」

カスタは笑いながら敵の長剣を避けた。

「このバカ野郎め！」

軽くスライディングしつつ後退。サライマを停止させたカスタは、戦斧を構えなおした。
「こんなに律儀に罠にひっかかりにくるとはな！」
カスタの視線が、ちらちらと敵騎の後方を移動した。
敵は自分の騎を撃破しようとして、自分の騎だけに神経を傾けた。
その結果がこれだ。
敵騎の左右両背後には、グース騎とニークが騎いた。
敵は、サライマの三角包囲網のど真ん中に落ちたのだ。
「――スコアが稼げて、時間つぶしが出来て」
ジュルッ。カスタは舌なめずりをしながら言った。
「今日はいい日だぁ！なぁ！？七面鳥野郎！」

気づいた時には手遅れだった。
「敵、三方向に展開。脱出不能」
「しまっ！？」
三方向のどれか一騎を相手にしている間に、他の2騎に切り刻まれるのは明白だ。
――一騎と差し違えるか？
一瞬、そんなことも思ったが、ことはそう簡単にはいかない。
これがシミュレーションだったらそんなこともしたろう。
そう。
シミュレーションなら。
残念ながら、これはシミュレーションではない。
撃破されたらゲームオーバーの表示が出て、ハッチが開いたら教官のお説教で済む話ではないのだ。
撃破されたらあの世に行って、地獄の閻魔様にお説教されるのだ。
二度目は――ない。
「――くっ」
涼の手が、とっさに掴もうと動いたのは、緊急用の脱出装置だが

――――
「……へ？」
脱出レバーがそのままポロリととれた。
呆然とする涼は、手にしたそれを、まじまじと見た。黄色と黒のストライプに塗装されたレバーとガードがそのまま手の中にある。
しかも、そのガードには針金荷札がつけられており、荷札にはこう書かれていた。
“使用禁止　後で直しておけ”
ご丁寧に“泉”と書かれたシャチハタ印が押されていた。

ポイッ。
涼は無言で脱出装置のなれの果てをコクピット内部に放り出した。
そして、盛大なため息をつくと、
「高良中尉」
「コクピットハッチは、帰還して整備班に開いてもらわないと、開きませんよ？」
「……」
「どうしました？」
「……私」
「はい」
「転属願い出して、本当に正解だったんだって、今ならわかります」
「やですよ」
ほほっ。高良中尉は年齢が疑わしい笑い声を上げて言った。
「この程度の冗談につきあえなければ、近衛なんて、どこの部隊に行ってもやってけませんよ？」
「……除隊願いにしておけばよかったと後悔しています」
「――まぁ、冗談はともかく」
高良中尉は真顔になって言った。この切り替わりの早さは、正直スゴいと涼は思った。
「泉大尉から、なんて言われてここに来ているか。言ってください

な」
「敵を撃破しろ」
「本当に、泉大尉からそんな命令を受けています？」
「当たり前です！」
「小清水少尉は」
高良中尉の声は冷たく、低い口調で言った。
「お耳とお脳の病院へ行った方がいいみたいですね」
「どういう意味ですか！」
「泉大尉は――少尉に戦えとさえ言っていませんよ？」
「言いました！」
「では、何と命じられたか、言ってください――泉大尉の言葉で」
「……えっと」
涼はそこでハッとなった。
そう。美奈代から受けた言葉を思い出したからだ。
――必要と思う手段をとれ。
美奈代は、そうとしか言っていない。
高良中尉の言う通り、美奈代は“戦え”とは言っていない。
「ず……ずるい」
涼はそう思った。
この状況で必要と思う手段。
それは、戦うことじゃないのか？
……違う。
戦うことだと私が主張しても、泉大尉がそれを否定すれば終わりだ。
――私は、そんなこと命じていない。
――私は、別に必要なことがあったと思うが？

そう、言うに決まっている。
本当にズルい人だ。

「負け惜しみを口にするヒマがあったら」
「はい？」
「この状況で、何をするべきか考えてください」
「……うっ」
「敵の三角包囲網のど真ん中」
「……ど」
「どうしたら？ヒント教えてあげます。交換条件ありますけど」
「何です？」
「後でいいです」
「……で？」
「ヒント。ここにいるのは、私達だけですか？」
「……で、ですけど」
「泉大尉が」
くすすっ。楽しげに高良中尉は笑って言った。
「あなたをここに引っ張り出したのは、そのセリフを言わせるためですよ？」
「……っ！」
敵は戦斧を構え、ついに動き出した。
三方向から一気に自分をなぶり殺しにする動きだ。
「泉大尉っ！」
涼は通信装置に怒鳴った。
「た、助けてくださいっ！」

「よし」
通信装置に美奈代の声が入る。
敵との距離はすでに戦斧の間合いギリギリだ。

「――泉大尉。攻撃許可を」
「全騎、撃て」

その日の夜。
「……お前もずいぶん、意地が悪くなったな。泉」
「周りに感化されただけだ」
宗像の部屋で、美奈代はコーヒーをご馳走になっていた。
「小清水を囮にして、周辺に先に潜んでいた我々が敵を狙撃する。何も知らない小清水達は、いい面の皮だ……収容された時、大泣きしていたぞ？」
「特に私は説教していない。転属願いを破らせただけだ」
「……本当にお前は」
宗像は苦笑しながら言った。
「二宮教官に似てきたな」
「縁起が悪いこと言わないでくれ」
「説明より手段でわからせる。そのうち、小清水が似てくることになるかな」
「小清水が？」
「お前によく似ているんだ。あいつは」
「……そうか？」
「似ていると思うから、あいつを鍛えているのかと思ったぞ？」
「そんなことはない」美奈代は首を横に振った。
「あいつも平野も平等に扱っているつもりだ」
「一番手間がかかるのが小清水だと？」
「あいつは結構、自滅するタイプだというか……不器用なんだな」
「お前に言われたら、小清水も死にたくなるだろうな」
「どういう言い分だ？」

「前衛部隊は」
無視するように宗像は言った。
「一人で戦っている存在じゃない。常に周囲後方と連携をとりあって初めて戦果を上げられる存在だ――教本に書かれていることだろう？それを口ではなく、あんな方法で叩き込まれたら、転属なんて出来なくなるぞ？」
「小清水の射撃能力は魅力なんだ」
美奈代はコーヒーカップをテーブルに置いた。
「部隊指揮官として、それを失いたくない」
「なら、素直にそう言えばいいだろう？」
「理屈より体にわからせる方がいいに決まっている」
「それが二宮教官流だと、そう言っているんだ……で？小清水は？」
「平野少尉に土下座させた」
「お前が？」
「いや？高良中尉と何だか事の最中に取引があったらしい。土下座して、ごめんなさいして、今度転属希望出すときは、必ず平野少尉の許可をもらってからにするとか誓っていたぞ？」
「……ほう？さすがだな。高良中尉も」
「どうしてウチのMC（メサイア・コントローラー）は、ああいう恐ろしいのばかりなんだろうなぁ」
「牧野中尉が聞いたらどうなるか考えろ――それと、ウチのを一緒にするな」
「……むぅ」

ピピピッ

壁の時計がアラームを響かせた。
「もうこんな時間か？」
「すまん。明日は内親王（レイナ・ガーズ）護衛隊の受け入れもあって早いんだったな」

美奈代はそう言って、宗像の部屋を辞した。
といっても、宗像の部屋は隣だ。
「ん？」
部屋に戻ろうとした美奈代は、自分の部屋の前で足を止めた。
ドアの前で、誰かが待っていたのだ。
涼だった。
「どうした？」
「あ……あの」
なぜか、枕持参の涼は、顔を紅潮させ体をもじもじとさせる。
「？」
「は、入って……いいですか？」
「どうした？」
「今日のこと……お詫びしたくて」
「詫び？」
「わ、私」
涼はぺこんと頭を下げた。
「勝手なことばっかりで、大尉を恨んだりして済みませんでした！」
「……」
「自分の実力の程度も考えずに、前衛要員で戦えるなんて勝手に考えて、転属願いを勝手に出したり――」
「いい」
ぽんっ。と美奈代は涼の頭を軽くなでた。
「自分の居場所っていうか、自分のポジションは、そう簡単にはわからない。だから」
「……大尉」
涼は、優しげに微笑んだ美奈代につられるように、半泣きの顔に安堵の表情を浮かべた。

「迷っていいんだ」
「……はい」
「落ち着いたか？」
「はいっ！」
「なら、明日は早い。早く寝た方がいい」
「は……はい」
「まだ何か？」
「か……覚悟して来ました」
「は？」
「……その」
美奈代は、顔を紅くして体をもじもじとさせる涼の仕草に、何か本能的な危機を感じ取り、思わず後ずさりした。
「こ……小清水？」
「涼って……呼んでください」
「あ……あの」
「涼って、呼んでくださって結構ですから……ですから、私も」
涼がすっと美奈代との間合いを詰める。
美奈代は産毛までが恐怖に逆立ったのを確かに感じた。
「……」
言葉が出てこない。
涼が本気で何かを思い詰めているのはわかる。
何を思い詰めているのかも、理解出来る。
だが――理性が、理解を拒んでいる。
「……私も」
「……あ」
「大尉のこと、“お姉さま”って、呼んでいいですか？」
「ち……ちょっと待って！」
美奈代は堪らず悲鳴に近い声を上げた。
「あ……あの、あのね！？わ、私は！」
「宗像中尉や早瀬中尉も、みんな言ってます。泉大尉は手痛い失恋

の後、女に走ったって」
「……は？」
「で、ですから私も！私にも、憧れのお姉さまのモノになれるんですよね！？そうですよね！？一世一代の覚悟してきました！下着も新品です！お姉さまぁぁっっ！」
美奈代は、一体どうすればいいのか全くわからないまま、涼に抱きつかれた。
――一体、私は周囲からどういう目で見られているんだろう。
「小清水」
「涼、です。お姉さま」
美奈代の胸に顔を埋める涼は、甘えきった声でそう言った。
「頼みがある」
「はい？」
「転属願いの書類……余っていたら後でわけてくれ」
「？」

その時だ。
ガチャ。
不意にドアがノックもなしに開いた。
「うるさいぞ、泉。何時だと思っている」
宗像だった。
「……」
「……」
「……」

さて。
部屋の中で抱き合う女性二人を前に、宗像がどういうことを考えるだろうか？

「……すまん。邪魔したようだな」

宗像は、何事もなかったようにドアを閉めようとした。
「止めろ宗像！」
「宗像中尉！」
二人が二人、怒鳴り声を上げた。
「お前、この状況が見えているのか！？」
「お姉さまのファーストキスは諦めますが、ヴァージンは私のモノです！」
「小清水。安心しろ。私はそこまで野暮ではない。お前もかなりの覚悟をしてきたんだろう？女として」
宗像は、諭すような口調でそう言った。
「そ……それはそうですけど」
「なら、私は無粋なマネはしたくないんだ。だから泉。小清水の気持ちを踏みにじるようなマネをするな。いくら不安でも、私に混ざれとはどうかと」
「お前が人として破綻していることはよくわかった！だからちょっと待ってくれ、涼っ！」
「あの日は理由になりませんっ！お姉さまの安全日はしっかりと調べてきましたから！」
「……宗像」
美奈代は半泣きになって、宗像に懇願した。
「頼む……もう、どうしていいか、わからないんだ」

中華帝国、北米侵攻開始

「大尉」
涼の告白を受けたその翌日。
ロッカールームで戦闘服を脱いでいた美奈代は、芳(かおる)から声をかけられた。
芳(かおる)は戦闘服姿。これから待機に入るところだと、美奈代は思い出した。
「ご帰還ですか？」
「ああ」
芳(かおる)のあっけらかんとした笑顔に、美奈代は何も考えずに頷いた。
戦闘服は、生命維持装置など様々なユニットが取り付けられているため、着替えるのが恐ろしいほど面倒な代物だ。慣れた美奈代達でさえ、そう簡単に脱ぐことは出来ない。
「ポイント４でのメース出現の報告は誤報だった。ＥＵの斥候部隊を歩兵が勘違いしたらしい」
「見慣れないと、区別がつきませんからね」
「そうだな」頷きながら、美奈代は戦闘服の両袖を脱ごうとした。
その途端だ。
「ねぇ、大尉」
ゴリッ。
突然、近づいてきた芳(かおる)が美奈代の下腹部に何か固いモノを押しつけた。
笑顔を浮かべているが、その笑顔は、どこか正気ではない。
美奈代は、およそ自分の腹に何が押しつけられたかを、芳(かおる)の顔から判断した。
「……この手の冗談は嫌いだが」
美奈代は努めて平静な口調で言ったつもりだが、震えを抑えきることは出来なかった。

「試してみます？」
顔に笑みを浮かべたままの芳は、ぞっとするくらいの冷たい声で訊ねた。
「弾頭部分を十文字にヤスリで削ってありますけど」
「……何が望みだ？」
「昨晩」
ぐいっ。芳は“それ”を下腹部に押しつける力を強めた。
「涼とは？」
「何もしていない」
カチッ。
撃鉄の音が美奈代の腹のあたりから聞こえた。
「宗像にでも聞け。ヤツが証人だ」
「……わかりました」
芳は美奈代から離れた。そして、手にしたモノをポケットにしまった。
どこでも売っているような、安物の電子ライターだった。
「宗像中尉も同じ事言ってましたけど、やっぱり、本人から聞くのが一番だと思いまして」
「……そうか」
「失礼しました！」芳はにっこり微笑みながら敬礼すると、そのままロッカールームを出ていった。
「……」
「失礼します」
入れ違いに入ってきたのは、牧野中尉だ。
「“さくら”のお説教が長引きました……あら？」
牧野中尉がロッカールームの入り口で足を止めたのも無理はない。
美奈代はその場にへたり込んでいたのだ。
「どうなさいました？」
「あ……アイツ」
美奈代は涙目で震える声をあげた。

「あいつ、上官を何だと思ってるんだ！」
「……まぁ」
牧野中尉は、美奈代の口から出たその言葉に、楽しげに微笑んだ。
「貴女達が、二宮大佐に何度同じセリフを口にさせたか、ご存じの上で、そう言いますか？」

●それから数日後　ワシントンＤＣ
「だから、おたくとはもう取り引きしないと言っているだろう！？」
「海外部門はニューヨークだ！ウチにそんなこと言っても意味はない！」
その日、アメリカを代表する鉄鋼メーカー、“ウィンストンスチール”社のワシントンのオフィスは、朝から鳴り響く電話のラッシュに襲われ続けていた。
その相手は流ちょうなアメリカ英語から、かろうじて英語と分かる程度のものまで様々な、中国人からの電話だ。
内容もアフリカ産の鉄鉱石の売りつけから、内容不明なものまで、最初こそ面白がっていた社員達も、今や神経が切れかかっていた。

誰かが消し忘れたテレビからは、テロの可能性が高まったとして全米規模で航空機の離着陸が禁止されたニュースが繰り返し報道されている。
無論、誰も構っている余裕はない。
何しろ、ニューヨーク本社から、昨晩届いた重要命令の遂行に皆が追われる、忙しい中なのだ。
重要データを全てデータ転送しろ。
間に合わないものはすべてプリントアウトして、朝一番で送り込む業者にメディアを引き渡せ。

とどのつまり、ワシントン支社に重要なデータを残すなというのだ。

ついに倒産か！？

社員達は戦々恐々として、重要指定を受けている会計データや顧客データを会社のオンライン専用線に送り込み、或いは段ボール箱に詰めて業者に引き渡し、支社が通常営業を開始した直後には電話攻勢だ。

支社長や幹部達はニューヨークへ緊急集合がかけられて不在。

「一体全体、どうなってやがるんだ？」

受話器を乱暴に切ったウィルキンソンは、ポケットからタバコを取り出そうとして、空になったタバコの箱を握りつぶした。

窓の外は抜けるような青空が広がっている。

明日は息子のトニーと一緒にサイクリングだったな。

やれやれ。

徹夜明けの上に筋肉痛が心配だなんて最悪だ。

ウィルキンソンがそんなことを考えている間に、新たな電話が鳴り響いた。

●ワシントンＤＣ　ホワイトハウス

「私をナめているのか！」

偉大使は激怒して席を蹴った。

「一体、どういうことだ！」

偉大使が激怒するのもある意味では無理もないことだった。

ホワイトハウスはものけの空だ。

入り口には警備員すらいない。

ゲートは閉じられたままだ。
「この私が大統領に用があるんだぞ！」
車から降り、ゲートを乱暴に蹴りつける。
頑丈なゲートより脚に痛みが走り、偉大使は顔をしかめた。
「くそっ！俺が総督になったらここは更地、いや、便所にしてやるっ！」
偉大使はゲートを睨むと、天を仰いだ。
抜けるような青い空が頭上に広がっているのに、偉大使は初めて気づいた。
――――ふぅっ。
そのため息が功を奏したのか。
偉大使はようやく事態の異常さに気づいた。
昨晩、突然大使にかかってきた暗号電文。

明日、１１時丁度にホワイトハウスより、下記の番号へ電話をかけろ。

意味が分からない。
偉大使はそれでも携帯電話をポケットから取り出すと、メモしてきた番号に電話をかけた。
「偉大使だな」
しばらくの呼び出し音の後、突然、重々しい男の声がした。
偉大使は思わず驚い携帯電話を耳から離した。
「そ、そうだが？」
声がうわずってしまったが、偉大使は歴代大統領を縮み上がらせた精一杯の迫力を声に込めた。
「君は誰だ」
「――――偉大使」
「だから」
「君の犠牲と功績は、我が中華帝国史に燦然と輝くことになるだろ

う」
「なっ？」

●ＩＳＳ（国際宇宙ステーション）通信記録
ＩＳＳ司令塔よりラット１、応答せよ。こちらＩＳＳ管制塔。
ヒューストンが君の頭部カメラの映像を要求している。どうぞ。
そっちじゃない。北米大陸東海岸方面を向いてくれ。
ラット１、モジュールの修復はしばらくお預けだ。
……そうだ。その位置。
ヒューストン。映像は確認しているか？

●ヒューストン通信記録
こちらヒューストン。ラット１からの映像を確認している。
感度良好。
協力に感謝する。

●ＩＳＳ通信記録（宇宙飛行士コールサイン“ラット１”より）
ラット１よりＩＳＳ司令塔。
光が確認出来る。

●ＩＳＳ通信記録（ラット１宛）
こちらＩＳＳ司令塔。こちらでも確認した。
ヒューストン。こちらＩＳＳ司令塔。お望みはあの光か？

●ヒューストン通信記録
こちらヒューストン。ラット１、そのまま観測を継続してくれ。
こちらでも確認している。

●ＩＳＳ通信記録

ヒューストン。あれはロケットの光だぞ？
今日、どこかで打ち上げがあるなんて聞いていないぞ？
緊急事態か？

●ヒューストン通信記録
ＩＳＳ司令塔。そのまま待機せよ。

●ＩＳＳ通信記録
ヒューストン！あいつの軌道は打ち上げのそれじゃない！
あれは――――！

雑音

ノイズ

●ヒューストン通信記録
ＩＳＳコントロール応答せよ。
こちらヒューストン。
ＩＳＳコントロール応答せよ。
こちらヒューストン。

（通信終了）

●大陸横断鉄道特別列車内
「……通信がとぎれました」
「……」
大統領補佐官がモニターの映像を切った。

大統領は瞑目して胸の前で十字を切った。
「神よ……許したまえ」
「……現在のワシントン周辺の被害は不明」
補佐官はそれだけを言った。
「死者が出ているのか？」
「直接的な死者は、恐らくＩＳＳのクルーだけでしょう」
補佐官は答えた。
「中華帝国軍による、高々度核爆発によるＥＭＰ攻撃です。不幸中の幸いは、被害範囲がワシントン周辺に限定されており、北米大陸全域を想定していた事前予想よりはるかに小さかったこと。
被害内容は、ＥＭＰ　Ｈａｒｄｅｎｉｎｇ処理の施されていない電子機器全て……いえ」
補佐官は首を横に振った。
「アメリカは基幹インフラの半分以上を喪失しました」
「……復旧にはどれくらいかかる？」
「統計報告はお待ち下さい」
「君の主観的なものでいい」大統領は瞑目したまま言った。
「およそ、そう外れていまい」
「都市機能回復に半年。本来の姿に戻るには３年は必要でしょう」

ギギィィッッ！！

突然、列車が急停車した。
立っていた大統領補佐官達は、何とか踏ん張って転倒だけは避けた。
「特別室だ。どうした！？」
ＳＰがインターホンに怒鳴る。
「大統領補佐官。ペンタゴンからの緊急通信です」
ＳＰは大統領佐官に言った。
「この先、２００キロの地点に中華帝国軍出現したと」

●北京
「これは成功なのか？」
ノイズばかりが聞こえる受話器を戻し、周国家主席は訊ねた。
魔族と手を結んだ軍部が立案したプランは実行に移された。
もう後戻りは出来ない。
自分が沈むのか、浮かぶのか人である周には知るよしもない。
「成功です。閣下」
白衣を着た男が頷いた。
「ＥＭＰ発生時のノイズが電話機能を破壊します。通話がとぎれるということは、ＥＭＰが正常に作動したということです」
「……そうか」
「ただし」
軍服姿の男が言った。
「方術騎士隊からの観測結果によると、想定していた程の効果は得られていません」
「原因は？」
「魔族軍が破壊したデブリ――衛星の残骸に大陸間弾道弾が接触。軌道が本来想定されていたコースを外れ、異常な角度で大気圏に突入したところで爆発したためです。このため、全米規模で被害を与えることが出来ませんでした」
「第二砲兵隊の失態だな」
「針路の事前調査は方術騎士隊の責任です」
「我々の調査時点ではデブリなるものは確認されなかったわ！」
「ビス１本が弾丸より早く飛んでくるのが宇宙空間だ！」
「やめんか！」
周総書記は机を叩いた。
「とにかく！第一段階として連中の政府機能を麻痺させることには成功したんだな！？」

「その通りです。閣下」
白衣の男は咳払いの後、頷いた。
「ワシントン一帯の都市機能が壊滅していることは、上空からの観測でも」
「よろしい」
周総書記は頷いた。
「第二段階の進展状況を知らせろ」

●ノーラッド北米大陸防空司令部
北米大陸の空を守るノーラッド北米大陸防空司令部は、ＥＭＰ攻撃が、大陸間弾道弾を用いた攻撃によるものだと断定。
本土攻撃時のシナリオＡ－１０を即座に適用し、混乱からようやく立ち直ろうとしていた。
だが、その混乱からの立ち直りは、新たなる混乱のどん底へと彼等を叩き込む準備に他ならなかった。
新たな混乱の端緒を発見したのは、防空監視任務につく一人の司令部要員だった。

スクリーン上に時折発生する敵性反応。

「ブラボー３、７０の物体をそちらの区域で確認している。そちらでも確認出来ているか？」
彼は手順通り、現地の防空監視施設に問い合わせをかけた。
コールサイン“プラボー３”からの返答は簡単で、しかもくだけたものだった。
「７０？冗談はよしてくれ。異常はないぞ。どうぞ？」
「了解」
まるで自分のエラーのように言われたことに内心でムッとした彼は返答した。

「ブラボー3。注意してくれ。状況が状況だ。機器の故障をチェックする」

北米の防空を任された彼等にとって、運がよかったことは、たった一つだ。

大陸間弾道弾の爆発の際、爆発エネルギーが監視衛星を破壊せずにいてくれたこと。

何しろ、軌道上の監視衛星が魔族軍によって根こそぎ破壊され、ようやく代替機が動き出したばかりだ。

ここで代替機まで破壊されたら目も当てられない。

爆発の衝撃に巻き込まれた衛星の残骸をまともに喰らったＩＳＳの残骸が衛星に何か被害をもたらした可能性は捨てきれない。

「天気良好。機械は壊れるものさ――――どうぞ？」

ブラボー3は、からかっているのか哀れんでいるのか分からない。

そのシステムチェックは、彼にさらに大規模な反応があることを確認させるだけだった。

「ズールー6。そちらの区域では１００機以上の反応がある。所属を確認してくれ。今日は一体、どうなっているんだ？」

ズールー6の返答は、ブラボー3より真面目なものだった。

「こちらズールー6。こちらでは何も確認していない。何だろうな。太陽光の干渉か？今日は日差しが強いからな」

次はもっと大きい反応が現れた。

「シエラ9。衛星に障害が発生している可能性がある。そちらの視

界に何かあるか？」

シエラ９の返答は、悲鳴に近かった。

「そこら中、敵だらけだ！」

返答があまりに中部なまりが強く、しかも早口だったため、彼はその返答が聞き取れなかった。

わかったことは、何か大変なことがシエラ９に起きていることだけだ。

「シエラ９、繰り返せ！」

「Ｉ－８５上空で戦闘機を目視した！こいつらどこから現れたんだ！？」

交信内容は彼のいる管制センター全域に流れている。

スタッフ達がギョッとなって北米大陸全域を示す大型スクリーンに視線を向ける。

「待機しろ！」

彼は怒鳴った。

「手近な部隊に連絡を」

とる。

その言葉は、モニターに現れた反応に潰された。

北米大陸のほぼ中央。ミシシッピ川流域に、彼が訓練でもロクに見たことのない規模の反応が現れたのだ。

真っ赤な敵性反応でスクリーンの一部が埋め尽くされている。

「なっ……？」

「こちら陸軍第一師団、第一大隊フォーリー軍曹！ハンター２１の指揮をとっています！」

通信に入り込んできたのはすさまじいほどの銃声と、切迫した兵士の声だった。

「こりゃ一体、何事ですか！？」

「ノーラッドより全基地へ」
彼の上官。
このノーラッドの司令官が司令席から命じた。
「報告だ。衛星監視網が無効化されている。北米大陸すべての監視網が機能していない。こちらの指示があるまで、監視網からの情報を信じるな！」
「司令！」
他の職員が受話器を持ったまま怒鳴った。
「システムが北米大陸全域からのハッキングを受けています！」
「各システムに仕込まれたウィルスが一斉に動き始めました！感染したシステムを物理的に切断します！」
「警察、ＦＢＩ、州兵すべて駆り出せ！自由発砲を許可！ハッカー連中は皆殺しにしろっ！ハッキングを止めるんだ！」
「はいっ！」

●バージニア州北東部　アメリカ陸軍野戦司令部
「門（ゲート）だと？」
野戦司令部に指定されたビルの地下室で、陸軍機甲第３師団長のマックィーン中将は眉をひそめた。
「はい」
負傷した腕を吊った将校が頷いた。
将校偵察から戻った彼の副官だ。
「魔族軍が輸送用に用いているという、あの空間転移装置のことだな？」
「自分の部下はアフリカ大陸で実際に魔族軍が使用しているのを見ています」
「そんなものが、何故こんなところに？」

「師団長閣下」
衛兵が敬礼の後、言った。
「この管区の警察署長が報告に来ました」
「通せ」
第7警察署長を名乗る制服姿の小太りの男は、はげ上がった頭に汚れた制帽を乗せてマックィーンの前に立った。
「デーモンが出現した場所は、サントニオ商会の敷地でした」
「サントニオ商会？」
「はい」
署長は頷いた。
「閉鎖された農園を使った中国人のダミー会社です。平和十字軍ともつながりが深くて」
「監視していたのか？」
「まさか」
署長は肩をすくめた。
「ここにゃ、そんな会社がゴロゴロしている。一々監視なんてしていたら、署員を細切れにしても足りないですよ」

●アラバマ州南東部
機甲部隊が列を作って門（ゲート）から出てくる。
「ぼさっとするな！」
「とっとと走れ！」
何人かの兵士達が、自分がくぐってきた門（ゲート）とアメリカの大地に目を見張っている。
憲兵達はそんな兵士達を怒鳴り、あるいは小突いて走らせる。
別な門（ゲート）からは、メサイア部隊が出現しつつある。
ちらと見た高速道路横の大きな廃工場に隠れて設置された門（ゲート）から

は、爆音を響かせながら
戦闘機がハイウェイを滑走路代わりに離陸しようとしていた。
上空を赤い星が描かれた戦闘機達が編隊を組んで飛び去った。

第二段階は成功しつつある。

憲兵である彼は力強く頷いた。

アメリカ東海岸を電磁波攻撃により機能麻痺に追い込み、その隙をついてアメリカ中央部に密かに設置させていた門（ゲート）を経由して、大軍を送り込み、一気にアメリカを征服する。
東海岸への攻撃が第一段階。
門（ゲート）を用いたアメリカ揚陸が第二段階。
その第二段階は、彼の目の前で派手に成功しつつあった。

●大日本帝国　太平洋上空　“鈴谷（すずや）”艦内
「こりゃ、やられたわ」
風呂上がりの後藤は、ビール片手にテレビを見ていた。
テレビの向こうでは中華帝国軍とアメリカ軍が北米大陸各地で激戦を繰り広げていた。
「反応弾の使用はありますかね」
同じくビールを片手の、彼の副官である涼宮中尉がテーブルの上におかれたスルメに手を伸ばした。
「さすがにないでしょう」
後藤はちびりちびりとビールを飲みながら言った。
「あれは連中にとって、本土で実戦使用するためのものじゃないよ。他国に攻め込む口実だもん」

「なるほど？じゃあ、どうしますかね」
「門（ゲート）を破壊出来るか、守りきれるかが決め手になるだろうね」
後藤は平然と答えた。
「世界最大の工業力を誇る中華帝国相手に、かつての大国アメリカが、どれほど根性を見せるかによるさ」

後藤の言い分は正しかった。
最大にして唯一の魅力である低賃金、“この製品がこの価格！今なら犠牲になった中国人労働者の血肉がついてくる！”といわんばかりの労働者ら対する圧政の産物により生み出された世界最大の工業国家中華帝国。
生活必需品のほぼ一切を彼等に依存するアメリカ人達は、彼等の襲撃を受けた。
中国人達が、生活必需品だけを作っていたならよかったろう。
ところが、軍事分野に転用可能なハイテク製品や技術、いわゆる「デュアルユース・アイテム」の対中国輸出に対してあまりに杜撰な管理をしていた世界各国から手に入れた技術を、中国人達はどん欲を飛び越す勢いで次々と取り込んだ。
その最たるケースが、この戦いで初めて投入された歩兵携帯用対空ミサイルＦＮ－１９だ。
欧米でもコストがネックで導入されていない高性能誘導システムがふんだんに取り入れられている。
その人件費の低さからコストを無視した中華帝国軍は、無人機相手に、一度に１０発が襲いかかった記録が残るほどの、アメリカ軍があきれた程の規模で戦線に投入してきた。

制空権の奪い合いは、このＦＮ－１９の土壇場と言っても良かった。

制空権を確保した後、中華帝国軍が繰り出してきたのは、米軍が

見たことのないメサイア達だった。

●ケンタッキー州戦線州兵陣地司令部

「司令部！いったん下がるぞ！」

ケンタッキー州バーモンド基地所属のグレイファントム部隊から通信が入る。

「ふざけるな！」

州兵を率いるジャクソン大佐は通信装置に怒鳴った。

「相手はメサイアだぞ！？歩兵装備で相手になるか！」

「あいつはメサイアじゃねぇ！」

前線のグレイファントム部隊の騎士は奇妙なことを言った。

「全く別の代物だ！対戦車ミサイルで倒せる！恐れる必要はない！」

「州警察から非常事態発生の宣言が出ています。所属不明の軍隊が州の各地に出現、各地に対して武力攻撃を開始しています。住民の方は外出を控えてください」

警邏の途中。

大通りに面した場所に店を構える行きつけのドーナツ屋からパトカーに乗り込もうとしたクラーク巡査長は、ラジオから流れてきたニュースに一瞬、動きを止めた。

「今日はエイプリルフールか？」

運転席で待っていたキャッチャー巡査はハンドルに手を置いたまま軽く肩をすくめた。

「もう夏になるんですよ？」

「だよな」

クラーク巡査長は、キャッチャー巡査にドーナツの入った紙袋を

放り投げると、乱暴に席に座った。
遠くからヘリの爆音が響いてくる。
「戦争でも始まるってのか？」
「このアメリカで？」
「たとえば」
クラーク巡査長は、窓の向こうを指さした。
「あんな、軍用ヘリが襲ってくるとか」

ビルの向こうから出現したのは、どう見てもアメリカ軍のそれとは違う、見たこともないような軍用ヘリだった。

「おい」
「……はい？」
「俺達ゃ、ドライブシアターにでも来てるのか？」
「この駐車場がシアターだとは知りませんでした」
軍用ヘリは、目を凝らせばパイロットの顔かたちが分かるほど近くでゆっくりと飛んでいる。
「俺は戦争映画よりポルノが好きだ」
「……同感です」
現実に対処できない二人は、目の前に浮かぶヘリが、先頭にぶら下げた機銃をこちらに向けたことで、あり得ない現実に対処することを強制された。
キャッチャー巡査はギアを後退に叩き込むと、フォード・クラウンビクトリアを急発進させた。
その真横を、機銃弾の雨が走る。
「１１－９９！」
クラーク巡査長は、その射撃音に負けないように大声で通信機に怒鳴った。
「１１－９９だ！緊急事態！軍用ヘリが出現！軍用ヘリに撃たれた！」

パトカーが急激なターンをみせ、何かを避けた。
カップホルダーに入れたカップからコーヒーが派手にこぼれ、車内にコーヒーのにおいが充満する。
「何だ！？」
クラーク巡査長の座る助手席ギリギリをかするように通り過ぎたのは、アメリカ人の感覚では理解出来ない迷彩が施された装甲車だった。
「応援を要請する！すぐに応援を！くそったれが！軍は何していたんだ！」

クラーク巡査長達のパトカーが通り過ぎた後に続いて大通りに続々と現れたのは、装甲車と兵士の群れ。
しかも、装甲車に書かれた国籍マークは、米軍のそれではない。
中華帝国軍のそれだった。

「揚陸作戦は予定通り進んでいます」
市街地から少し離れた郊外。
地上に降り立った飛行艦からは戦車部隊が揚陸を開始している。
その一角。
戦車用のランプの上で整然と進む事態に満足げな表情を浮かべる偉大将に、参謀が報告する。
「予定の５５％がすでに終了」
「よろしい」
偉大将は頷いた。
「東南アジアの借りを返してやる。敵の本拠地、北米を叩くことで、世界中が再び、我が国の底力を思い知ることとなるだろう」
「はっ」
「とりあえず」
偉大将は、まっすぐ先の空を指さした。
「あの目障りなハエをたたき落とせ」

その空には、ＴＶ局の取材ヘリが飛んでいた。

北米へ到着したばかりの８８式３７ｍｍ自走機関砲が誘導員の誘導の元、射撃位置に展開。

地獄に似た火線を生み出した。

まさか撃たれるとは想像さえしていなかった取材ヘリは必死に逃げようとするが、３７ミリ砲弾の火線から逃れることは、民間ヘリである彼等には不可能だった。

取材ヘリは砲弾によって機体を引きちぎられ、その機内からのライブ映像は、攻撃を受ける者の恐怖を伝えることで幕を閉じた。

「あらら」

中華帝国軍の北米侵攻をテレビで知った後藤の第一声がこれだ。

しかも、風呂上がりのビール片手にだ。

「こんにちわぁ！」

副官の涼宮遙中尉がドアを開けて入ってきた。

生乾きの髪を見る限り、彼女も風呂上がりだ。

「ビールもらいにきましたぁ！」

遙は、後藤の返事も聞かずに冷蔵庫のドアを開けた。

「おいおい遙ちゃん」

後藤はビール缶のプルを開ける遙に言った。

「ここ、俺の私室で、しかもここ、女子立ち入り禁止区画」

「いいじゃないですかぁ」

ビールをラッパ飲みした遙が笑顔で答えた。

「艦内でお酒飲めることなら、私はどこでも行きますっ！」

「……ほんと、どうして俺の周りにゃ、ろくな女が寄らないのかねぇ」

「答え、聞きたいですか？」

遙はテーブルの上にのったスルメをかじりながら小首を傾げた。
「――やめておくよ」
「あれ？」
遙は、するめに伸ばした手を止め、テレビを見た。
「北米に中華帝国軍って――どこで上映するんですか？この映画」
「現実だよ」
「――へえ？」
遙は感心したような声で言った。
「そんな度胸があったんですねぇ。さすが中国人」
「俺もスゴいと思うよ。いろいろと」
遙の体から芳る、シャンプーのほのかな香りが後藤の鼻をくすぐる。
視線がどうしても、遙の体に向くが――
「よいしょっと」
デスクの上に座ってあぐらを掻きながらするめをかじるというのは、見るだけで何だか萎えてしまう。
「後藤さん？次、ウチの仕事先は北米ですか？」
「――そうなるかもね」
後藤はビールに口を付けた。
「堅牢なる要塞も、中から突き崩せば脆い――か」

世界最強の軍隊を擁するアメリカ合衆国。

それは、単なる看板に過ぎなかったことを、米国国民達は自らの対応で証明してのけた。
海外に向けられていた合衆国の軍事的な目は、国内となれば、まるで役に立たなかった。
国内で何が起きているのか。

敵が一体、誰なのか。
それさえ、まともに判断するには時間がかかりすぎた。
各地で行われた電波妨害、電子戦攻撃により、全米の通信網が混乱。
マスコミがメディアに情報を流せなくなったのはまだいいだろう。
致命的だったのは、マスコミの報道がなければ、判断することさえ出来ない国民の思考能力の低下だった。
垂れ流しにされる情報を無条件に受け止め、考えることをしなくなった国民によって形成される国家は、脆いものだった。
自分達の歩き慣れた市街地の大通りに砲弾が落ち始めても、彼等は目の前で起きていることがわからず、ただ呆然とするだけだった。
――とんでもないことが起きた。
彼等が理解できるのはその程度だ。
少し、この程度がわかった次に彼等がとった行動は？
テレビをつける。
インターネットを見る。
携帯電話をかける。

……全て、通じない。

彼等はどうしたか？

テレビの次にインターネット。
インターネットがダメならテレビ。

……そういうことだ。

目の前に起きていることが何か？
災害か？
それとも映画の撮影か？

それが戦争だとは、まっすぐには思い至らなかった。
戦争映画とは全く異質の世界。
それが、現実の戦争だ。
スター俳優が敵をなぎ払い、英雄たる騎兵隊の兵士が胸のすく活躍をする、そんな番組とは違うことが、現実に降りかかっていた。
崩壊した建物に砕かれた車、そして肉片になり果てた人々の姿。

海外で連戦連勝と伝えられる米軍を擁する米国民。
その国家の引いた国境線は鉄壁であると信じられていた。
無敵の兵士達が守る国境線を突破できる者は何者も存在しないと。
だが――現実は違った。
内部に侵入し、機会を待ち続けていた中国人達は、親密そうな顔をアメリカ人に向けながら、その裏では平時から静かに、ゆっくりと、国境線に穴を開けていたのだ。

彼等の方が、お人好しの、間抜けなアメリカ人達より一枚上手だった。

そういうことだ。

市街地は、中華帝国軍に追われ、逃げまどう市民と、兵士達が入り乱れた最悪の状況だった。
兵士達は土嚢を積み上げるヒマさえ与えられず、その辺に放置された車や家具を楯にして中華帝国軍のこれ以上の進撃を阻止しようと躍起になっていた。
しかも、よく見れば兵士達と共に拳銃を発砲しているのは警察官達だ。

自動小銃や機関銃で武装した中華帝国軍相手に拳銃だけで応戦する警官達の度胸には感服するしかない。
「許可を下さいっ！」
雑音混じりの通信機に怒鳴るのは、陸軍のパーカー中尉だ。
「こっちはもう弾薬もない！敵の数は道路を埋めている！」
パーカー中尉の目の前でＭ４を発砲していた兵士が頭を吹き飛ばされた。
その横にはすでに冷たくなった別な兵士の死体が転がっている。
砕けたザクロのように飛び散った得体の知れない肉片をまともに浴びたパーカー中尉は、乱暴に顔をぬぐうと、通信機に怒鳴った。
「俺達に全滅しろというのか！」
「司令部よりパーカー中尉。戦域よりの離脱を許可する。現在、ハイウエイの安全が確保されている。今なら間に合う。逃げ遅れた住民を可能な限り保護しつつ、ハイウエイから脱出しろ」
「了解っ！通信終わりだ！」
乱暴に通信装置を切ったパーカー中尉はあたりに怒鳴った。
「聞けっ！ここを撤退する！警官隊も続けっ！」
「敵に尻尾を見せるんですか！？」
パーカー中尉の後ろで身を低くしていた私服姿の男からそんな声が挙がった。
「貴様は誰だ！？」
「２等州兵のマイクです。こいつはアントン！」
私服姿の男達が敬礼した。
「死体からライフルをとれ！」
パーカー中尉は言った。
「俺に続け！ここで頑張っても犬死にが関の山だ！」
「しっかりしろっ！」

傷ついた部下を叱咤しながら、パーカー達はハイウェイを目指した。
ビル群の向こう側に、信じられない程巨大な黒煙があがった。
「な、何だ？」
パラパラと雨のように破片が降り注ぐ中、パーカー達に出来ることは、空を見上げるだけだ。
「……Ｍ２０１だ」
近くにいた誰かが呟いた。
「何だって？」
「あの」
州軍兵士と名乗った民間人が頷いた。
「自分は砲兵です。あれは２０３ｍｍ３７口径Ｍ２０１榴弾砲の着弾音です」
「ということは――あれは友軍か？」
「ですけど」
彼は何故か、苦い顔をした。
「着弾した辺りは、恐らくスタジアムの辺りです。スタジアムは緊急時の集合場所になっていますから」
上空をヘリが通り抜け、砲撃か何かを喰らったらしい。黒煙を上げながら錐もみして墜落していった。
「スタジアムが放棄されたということになります」
「……つまり」
「スタジアムに逃げていた連中は助からないってことです」
「……神よ」
「中尉」
兵士が言った。
「車を使いましょう。警官がいるんです。キップ切られる心配は」
「いいジョークだがな。軍曹」
パーカーは首を左右に振った。
「ここで車で走ることは、殺してくださいって言うのと同じだ」

パーカーはもう一度、空を見た。
「とにかく、メサイアさえ来てくれれば戦況は変わる」
「グレイファントムなら」
「ああ」
パーカーは力強く頷いた。
「チンク共なんて消し炭にしてこの世から消し去ってくれるだろうさ。聞けっ！ここからは建物の残骸に隠れながら行く！武器と食料は可能な限り集めろ！ハイウェイまであと少しだぞ！」

●ノーラッド　大統領執務室
昼食後の休憩時間、仮眠をとっていたベネットは電話の呼び出し音に叩き起こされた。
「――私だ」
少し眠たげな声が、相手に自分が何をしていたかを教えてしまう。
「大統領、モーガンです」
陸軍のモーガン大将からの連絡。
それはどう考えても、いい報告なはずはない。
「緊急事態です」
「緊急事態？」
「不確定な情報しかありませんが、中華帝国軍が国内に侵入しました」
「はっきりしてくれ将軍」
ベネットは訊ねた。
「中華帝国軍がアメリカに侵入したというのか？将軍、つまり、それは、アメリカが侵略されたと聞こえるが？」
「その通りです。閣下」
モーガン大将は電話口で頷いた。
「敵は圧倒的兵力。我が軍は少数の兵で頑強に抵抗していますが」

「……なんて事だ」
「……全ては時間の問題です」
「我々に与えられた選択肢は？」
「幾程もありません。各地に派遣した兵力を戻せば、その地域を失います。敵の思うつぼです」
「わかっている。本土を防衛する程度の兵力もないのか？」
「すでに戦域の拡大を防ぐために派遣済みです」
「わかった。情報分析室にスタッフを集めてくれ。３０分後に」
「了解」

すでに夕刻と呼ぶべき時間から、夜へと世界は変わりつつあった。
パーカー達は、東へと逃げていた。
歩き疲れた足を止め、振り返ると背後に迫る夕闇の中、市街地を赤く染め上げる紅蓮の炎がはっきりと見えた。
通り過ぎる時、これを組織的撤退だと力説した将校が居たが、パーカーは鼻で笑った。
単に逃げる方向が一緒だっただけだ。
あの街は、侵攻を受けた時点ですでに陥落していたのだ。
時計の針はもどらない。
あの街を再び取り戻すには、新たな戦いが必要だ。
パーカーは、逃げ遅れた人々のことは考えないことにした。
すでに、中華帝国軍の砲弾が近くまで飛んできている。

ハイウェイご自慢の大橋を渡った。
ここを渡りきれば、敵はこの大河を泳いで渡るしかない。
ほっと一息ついたパーカー達の目の前で、避難民をかき分け、ハイウェイを逆送する格好で戦車部隊が到着した。
その後方では装甲車から兵士達が続々と降り始めている。
どうやら俺達の戦いは――――

パーカーがそう思った途端、部隊を指揮する司令官の顔が視界に入った。
その顔を見た途端、パーカーは失望のあまりその場に立ちつくした。

「久しぶりだな。パーカー」
本人として親密なつもりだろうが、パーカーにとっては悪魔が目の前に現れたような絶望感を味わわせてくれる顔だ。
「ここを防衛線にする！部下に弾薬を配れ！」

●東京都　宮城

「……期待はしてなかったけど」

イツミは言った。

「議会は軍の派遣を認めなかった」

「……だろうね」

帝は、悲しげな笑みを浮かべて頷いた。

「契約は契約だから」

「それだけじゃないのよ」

イツミは疲れた。という顔で、テーブルに置かれていたチョコレートの包みをほどいた。

「天界の世論はヴォルトモード軍……正しくは、中世協会の主張に賛同している」

「……」

「６０億は多すぎる。

そのうち、約１０億を殺した彼等の功績は大きい。

人類は１億もいれば十分。

数を減らし、人類から余計な知恵を奪い、コントロール可能なレベルに置く」

イツミはそこで言葉を句切った。

「……続き、聞く？」

「イツミさんって」

帝は苦笑しながら言った。

「ヘンに配慮出来る人だよね。昔から」

「……あんた達バカップルに出会ってから３０年……か」

イツミは再びチョコレートの包みをほどいた。

アポロチョコが卓袱台の上で見事なピラミッドを作り上げている。

「成長してないわね。二人の親、一人の養父になったというのに」

「三人とも、僕達夫婦にとっては娘ですよ」
「……娘、か」
「ランティちゃんは？」
「あっちこっちで迷惑かけてるのよ。あのバカと同じで」
「……ああ。悠理君だっけ？」
「今、悠理なのか悠菜なのか、どっちなのかしらね」
イツミは、ピラミッドに乗せ損なったアポロチョコを弄びながら言った。
「陛下と魔帝グロリア陛下の非公式会談の結果、天帝軍は、非公式ながら戦線に一部部隊を投入を決定。
陛下達も、水面下での戦いを続けてらっしゃるわ」
「エトとグロリアには、こんな年になってまで迷惑をかける」
「悠理は、データ収集が終わった後、本格的な戦線投入の承認が軍司令部で降りてないのよ。ヨミエル様が大反対されていて。フィアンナ様が胃薬片手に説得されているけど、芳しい結果は……」
「クスッ。フィアンナは苦労性だって、詩織が言っていたけど」
言いかけて、ふと帝は言葉を止めた。
「ヨミエルって……あの？」
「そう」
イツミは頷いた。
「“狭間”へアンタ達を召還した張本人。ついでにアンタとは」
「それ、詩織に言わないでくださいね？」
「未だに尻に敷かれているワケね？」
「……何とでも」
「あのエターナル様は、何考えてるかわかんないけど、遺伝子上の息子が戦争に出るのに大反対してるのよ。手元から手放したのだけで我慢していたけど、戦争でしょ？ついに我慢の限界に達したみたいで」
「あの人、物静かだけど怒るとスゴいから」
「エターナルが子供作ったってだけで信じられない話なのに……そ

ういえば、あいつの遺伝子が胎内で安定したのと、ヨミエル様がエターナル化した時期を考えると父親って……」
「……」
「……」
「……こら」
真っ青になっている帝に、イツミは指で弾いたアポロチョコをぶつけた。
「父親不明なのは確かだけど、そこまで考えるのもどうかと思うわよ？」
「そ、そうですよね！ははっ」
「笑いが乾いてるわよ。とにかく、“男の子なんだから、少しは冒険させなさい”ってことで、限定的なデータ収集程度ならと、ヨミエル様も納得しそうな所なの。“人助けの魔法療法士”なら、ヨミエル様も承認はされているけど……」
「切り札は使えないってことだね」
「元から使い物にならないバカですからね」
「そんなこと言って」
クスッと噴き出しながら、帝はテーブルに転がったアポロチョコを口に放り込んだ。
「随分、可愛がっているんじゃないの？イツミさんのことだから」
「バカおっしゃい」
イツミは席を立った。
「鬼のイツミ様は容赦ないわよ。さて？お昼だけど――何かしらね」
「このご時世だから、満足なものはないよ？」
「白いご飯は大好きよ」
イツミは言った。
「私のバカ弟子が迷惑かけるけど、食べるものさえあてがっておけば、それなりに働くから。よろしくね？」

●下仁田絶対防衛線付近

「防衛線は、まだ機能しているんだな？」

「それはもう」

地上すれすれで飛行を続ける兵員輸送用の飛行艇――――ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）で、そんな会話が交わされる。

会話の主は、饗庭一輝（あえば・かずき）皇室近衛騎士団副長、相手は参謀長の守屋（もりや・）匠（たくみ）近衛軍大佐だ。

「魔法障壁のコーティングは生きていますから」

「頑丈そのものだな」

「魔法ですから」

「先鋒は？」

「現在、一般騎士で構成される長野連隊が防衛中」

「戦果は？」

「かなりです」

「戦時騎士動員法で徴兵動員（ひっぱられた）された連中だろう？それがか？」

「八ヶ岳の別ルートをたどり、後方攪乱に出たとおぼしき小型妖魔は連隊によりすでに５００体以上が撃破されています」

「かなりだな。損害も大きいだろう」

「それが、死傷はほとんど」

「……どういうことだ？」

「不明です。何しろ、戦果は全てまともに通じない電話一本に頼っています。今回、我々は、その調査も含めてこうして最前線を移動しています」

「そうだな……ん？」

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が移動するのは八ヶ岳に通じる山道。

その道ばたを歩く小柄な人間に一輝は気づいた。

小柄な細い体の線。

間違いなく女の子だ。
こちらに気づいたのだろう。
ちらとこちらに視線を向けると、道を降りた。
距離は約３００メートル。

「難民か？おい」
「はっ。艇長、収容するぞ」
守屋が操縦席にそう命じた時だ。

ギャァァァァッ！

鋭い叫びと共に、道ばたの藪から何かが飛び出してきた。
サイズは約５メートル。
四つ足が基本だが二本足で立つことも可能。
熊同然の外見をした中型妖魔。
ワーベガス。
重機関銃の弾丸でさえモノともしない皮膚装甲と、一撃で装甲車を吹き飛ばす腕力を前に、一輝達も幾度と無く苦戦した相手だ。

「まずいっ！」
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に同乗する騎士達がそう叫んで少女を助けようと剣を抜くが、距離がありすぎる。

助からない。

皆が少女の無惨な最後を覚悟した。

二本足で立ち、少女を前足で叩き殺そうとする妖魔。

殺されるのは、少女のはず。

ところが――

ザンッ！

心地よいほどの音が響き、妖魔の胴体が切断された。
妖魔は、叫び声をあげることも出来ず、光に変わる。
倒されたのだ。

「――なっ？」
突然のことが理解できず、呆然とする一輝達が気づいた時には、
少女の姿は消えていた。

八ヶ岳山麓。
川上村に設置された陣地に一輝達が着陣したのはそれから半時ほど後のことだ。
騎士達は、あの妖魔を一撃で倒した少女の話題で持ちきりだ。
「どうも。長野連隊長の甲田です」
一輝達を出迎えたのは、でっぷりと太った老人の域に入る男だった。
「遠路、はるばるご苦労様です」
「感謝します」
「いやはや、さすがに近衛の方ともなると、活気が違う」
「何、先程……奇妙な出来事がありましてね」
司令部の天幕に入った一輝達に椅子とコーヒーを勧める甲田が笑った。
「ははっ。ここはバケモノとの戦場ですから、そりゃ、おかしいことくらいあるでしょう」
「ええ――こんな話です」

席に座った一輝が語ったのは、先程の少女のことだ。
「……」
甲田はきょとん。とした顔で一輝を見た。
「夢物語だと思うかもしれませんが」
一輝はそう言うが、
「饗庭様、そりゃ、夢じゃありませんよ」
「はっ？」
「おい！水瀬のぼっちゃん、今どうしてる？――何？今、帰ってきた？こっちへ来るように伝えてくれ」
「水瀬とは……まさか」
饗庭の目が見開かれた。
「あの、水瀬家ですか？」
「あれ？そちらのご厚意でぼっちゃんを、お貸しいただいているのかと思ってましたよ。
水瀬家の跡取りですから、こりゃ、大事な戦力回してくれたもんだって、私ら、みんな感謝していたんですけど」
「まさか！？」
思わず立ち上がった饗庭の目の前。
「失礼します」
一礼の後、天幕に入ってきたのは、間違いない。
あの時の少女だ。
少女は、ぺこりと頭を下げた。
「水瀬ですが」

１０分後。
水瀬は広場に連れ出されていた。
「どれほど成長しているか、確かめさせてもらおうか？悠理君」
一輝は、厳しい中にも、どこか親しげな声で言った。
「水瀬家の跡取りだ。由忠が君をどこまで育てたか、とても興味が

ある」
「はぁ」
水瀬の手には木刀が握られている。
目の前に居並ぶ近衛騎士達を前に、どうしていいものか困っているのは明らかだ。
「万一の時は、怪我する程度だ。皆、その辺は心得ている」
「はい」
「まず、各務大尉！」
「応！」
かがみ。その名とはほど遠い、筋骨隆々とした騎士が腕まくりして水瀬の前に立つ。
「双方、礼！――構え！」
守屋の号令に従い、二人は剣を構えた。
「ぬんっ！」
各務の袈裟斬り。その神速の一撃は空を斬る。
勝負はそれでついた。
皆がそう思った。
ところが――
「なっ……？」
こんっ。
各務は額に軽い痛みを感じた。
「勝負あった！」
「何っ！？」
水瀬は、各務の一撃を簡単にかわし、軽く飛び上がると、その額を木刀で軽く叩いたのだ。
「――次っ！」

「ふぇぇっ。さすがだねぇ。ぼっちゃんは」
いつの間にか横に立っていた甲田が驚いた声をあげる。
目の前の水瀬は、並み居る近衛騎士相手に、剣を合わせることさえ許していないのだ。
その実力差は圧倒的どころの騒ぎではない。
近衛騎士を完全に翻弄していた。

「近衛の人が全然勝負になってないや」

「……甲田さん」
饗庭が苦々しい声で言った。
「長野連隊の今後の作戦は？」

「これから2回の攻略に出ます。何人死ぬかはわかりませんが、それさえしのげば、ここの任務からは外されます」

「その2回の攻略は、近衛で引き受けよう」

「本当ですか！？」

「ああ。ただ、条件がある」
「何なりと」

「あいつを」
饗庭は、乾ききった喉に無理矢理唾を送り込んだ。
「水瀬悠理を――近衛にくれ」

怒りと嫉妬

●東京千代田区　憲政党本部

「……停戦？」

憲政党に属する衆議院議員、都築源一郎は、同期の議員、土橋正三からその話を聞いた。

「魔族軍と停戦するだと？」

元警察官僚から政治家に転身した男だ。

眼光は警察官さながらに鋭く、厳しい。

スマートな外見から、選挙では主婦層にもてるのは確かだが、その眼光の鋭さは、男達でさえ背筋を寒くさせる。

１９０センチを超える日本人離れしたスマートで引き締まった体格と、シャープな顔立ち。そして銀髪をオールバックにした外見が、彼を嫌でも冷徹な人物と見せてしまう。

あいつの前世は悪魔だったに違いない。

だから、目玉と脳みそだけは悪魔のままだ。

土橋がかつて、マスコミの前で都築をそう酷評したことがある。

同期の親友と知られるから、公には冗談としてとられているし、何故か都築は気に入ったらしい。

自分に対する、彼なりに精一杯の冗談として、パーティの席上でよく引き合いに出すが、まさに外見はそんな人物だった。

「……成る程？」

都築は納得した顔で頷いた。

「こんな法案を通して尚、平然としていられるのは、そんな隠し球があるから……か」

「前線のことを考えたら、今はこんなモメごとをしている場合じゃないんだがな」

「兵隊が足りないのだ。戦後の人口政策に失敗したツケがこんな所に出てくるとはな」

「人口政策の失敗を批判されるべきは、我々憲政党だぞ」

「誰の失敗でも、ツケの支払いは日本だ」

「……増田幹事長は、この混乱に乗じて政権奪取に鼻息荒くしてるし、農村に支持基盤を持つ地方議員共は、その基盤の喪失を恐れている。
だからといって、ここで魔族と手を結ぶというのか？」

「敵は味方にもなる」

「……だから、難民に対するこんな法律を？」

「そういうことだ。
難民は、はっきり言えば受け入れる側からすれば迷惑な存在だと相場が決まっている。
こうも無節操に海外に工場移転を繰り返せば、雇用先もない。
ただでさえ、失業率が高い中だ。
これ以上は言う必要もあるまい」

「その中で、騎士という目に見えた存在を取り締まることで、世論の不満をそらそうと？」

「その通り。そのための人柱だ」

「……民州党さんも、とんでもない法案を出してくれたもんだ」

議員会館の一室に二人は入った。

広い室内。

革張りの椅子に座った土橋が、ネクタイを緩めながら言った。

「一省庁の利権だけを保護するからこういうことになる」

「そうだ。それは」

都築が答えた。

「わかっている」

「わかっていない！」

ドンッ！

土橋がマホガニー製のデスクを叩いた。

「１３歳だぞ！？１３歳の子供から６０過ぎた爺婆までかき集めて戦争に送るなんて、古今東西、聞いたことがないわ！」

「あの年なら戦力になる。調査結果済みだ」

「調査！？世論の反応は調べなかったのか！？

おい、世論の反応を見たか！？

世論は二分だ！

国際世論はもっと酷い！

騎士擁護に立つラムリアース帝國は激怒しているぞ！？

外務省が説明に汲々としているわ！」

土橋が払いのけたデスク上の書類が宙を舞う。

その一枚には、こう書かれていた。

戦時騎士総動員法改正案。

それは、先程の国会で与党民州党と、野党最大政党、憲政党の強行採決の元成立、即日施行された法律。

１３歳以上の騎士・魔法騎士は男女の差別なく戦力として動員出来るとする、前代未聞の悪法を改正する法案。

成立すれば、推定２５万人の騎士を動員できると政府は予測していた。

「民州党の原案に対して、世論の反論を回避するため、内容は書き改めた」

「対象者は避難民となった者のみとするってことか！？」

土橋は激怒した。

「だから俺は反対したぞ！
覚えておけ！？
俺はこんな悪法は認めない！
命からがら生き延びてきたら、今度は死にに逝けと戻されるなんて、通常の神経で耐えられるか！？
１３歳なんて中学生だぞ！？
そんな子供に剣を押しつけて妖魔に立ち向かえなんて、まっとうなことだと本気で思うのか！？」

「戦域指定地域以外に居住する者は志願制とした」

都築は冷たい声で答えた。

その声色に感情は読みとれない。

「明光学園の出武（いでたけ）や出雲学園の藤崎は即座に反対、他も連携して、学校法を楯に生徒の引き渡しの一切を拒む声明をあげ、世論はこっちを支援したからな」

むしろ当然だ！と、土橋は乱暴にソファーに腰を落とした。

「すでに難民となった騎士達が起こした凶悪犯罪は２００件以上、相当な数の警官・公安騎士が犠牲になっている」

「治安の維持を、人命より重んじるつもりか？都築」

「元々、私は警察官僚だ。

混乱する社会情勢の安寧を求める声が、私をこの地位に押し上げたんだ」

「ならもう少し、冷静な対処法が」

「私は対立する与党に手を貸し、この法案を成立させた。その意味で」

都築は、窓の外に光るビル群の灯りを見上げながら言った。

「確かに狂ってる――後世の歴史家にそう烙印を押されるだろう」

「わかってるなら、早く撤廃を！」

「確かに、法律の内容は最悪だ。こんな法律、帝國……いや、人類の歴史が開闢して以来、公布されたことはないだろう」

「……都築、貴様」

「私の息子も、騎士だ」

都築は、口元だけ微笑みながら言った。
「近衛にとられた。跡取りをな」

「その悲しみがわかるなら！もっとやり方というものがあるだろう！？親や子供、恋人を戦争にとられた連中が、我が党にまで反対票を投じかねない！」
土橋はソファーを蹴った。

「党を潰すつもりか！？」

「今の帝國に必要なのは、私利私欲に固執する政党より一人の騎士だ」

「それが国会議員のセリフか！」

「帝國が潰されてからでは遅いんだ――わからんか？土橋」

「ロシアの懲罰部隊同然だぞ？戦意が維持出来るのか？」

「世論が許さんよ。騎士――それは力。力を持つ者が戦いにも出ず、代わりに一般兵が死ぬ。この不条理を世論が気づけば、騎士は前線以外に居場所がなくなる」

「世論を……動かせるのか？」

「大手マスコミは岡山が押さえている。
戦意向上はどうしても必要だ。
あらゆる手段を用いて、世論を戦争へともっていく。
それに後押しされた騎士達は、失われた故郷、失われた家族達のためにも――自分の居場所を得るためにも、どうしても戦いに志

願せざるを得なくなる」

「しかし……この法律は」

「戦局を巻き返すためには危険な賭けではあるが、やる価値はある」

都築は笑った。

「土橋……私はこう思うんだ。

「帝國を守るも潰すも、すべては国民一人一人の中にある。

帝国を守り、そして変えるために何を為す？

制度の改革じゃない。

国民の価値観を変えるのだ。

価値観の変化こそが、この国の国民を変える。

かつてボストンの港を赤く染めた事件が、植民地経営で安閑としていた英国に、この世界がどういう所かを思い知らせたように、信越地方で流される血が、価値観の変化を生み出し、国民を変える。

２５万の犠牲とは、そのための人柱だ」

「すべては、世論を動かす為。犠牲は、国を変えるために？出来すぎた戯れ言だ」

それが妄想に過ぎないと言い切ることは出来る。

だが、もし、それが出来たら？

国際世論から軽蔑されるまで落ちぶれた国民を、かつて賞賛の的となった、明治政府時代の国民のレベルに戻せたら？

彼にとって密やかなその願望がかなうとしたら？

彼は、その欲望に逆らえない。

「……机上の空論だ」

「そうだな……土橋、貴様はいろいろ言ってくれたが、私はこうとだけ反論してやろう。

――――確かにやり方は最悪だ。

だが、他にどんな方法があったというんだ？
……返事はいい。
戦争が終わるまでとっておいてくれ。
生きて終戦の、勝利の日を迎えるために」

「その時に、俺からどんな罵詈雑言の限りを浴びせられるか、覚悟しておけ？」

「とりあえず、貴様が今日、丸腰で来てくれていることは感謝しているさ」

「俺はそれを、心底後悔していたところさ――――グラスを出してくれ。お前も飲むか？」

「もらおう」

「敵の戦闘能力が侮れないことは、嫌でもわかりました」
寧々は、シミュレーターの調整に忙しい都築に言った。
「まぁ、そういうこともあるさ」
シミュレーターに入り込み、マニュアル片手にパネルを操作する都築は、興味もないという顔だ。
「俺達だって、全戦全勝って訳にはいかねえ」
「それはそうですけど」
「だから、こうして、騎体のセッティング見直して、いざって時に備えているんだ」
「え……ええ」
「何だ？」

「都築少尉？あの」
寧々は、まっすぐに都築を見つめながら言った。
「私に、何か隠していませんか？」
「別に」
そう答える都築は、顔をパネルから外さない。
「なら、なぜそんな苛立っているんです？」
「……俺が？」
「みんな心配しています。最近、都築少尉の様子がおかしいって」
「心配してくれているのか？」
「当たり前です」
寧々は気色ばんで答えた。
「みんな仲間でしょう？」
「じゃあ、みんなに伝えてくれ。原因は」
「ん？何だ？」
「寧々が相手してくれないからだって」
「こうして相手を」
「ベッドの上じゃない」
ガンッ！
寧々の手が、手近にあったマニュアルを都築めがけて投げつけたのだ。
「いっ、痛ててっ……」
顔を押さえて蹲った都築の様子があまりに痛そうだった。
やりすぎたか。
心配になった寧々が、
「だ、大丈夫ですか？」
そう言って、そう広くはないシミュレーターに上半身を潜り込ませたときだ。
グイッ！
都築の手が、寧々の腕を掴み、強引にコクピットに引っ張り込んだ。

「きゃっ！？」
驚く寧々の背後で、ハッチが締まった。
そして――――
「……」
えっ？
寧々は、頭の中が真っ白になった。
狭いシミュレーターの中。
違う。
寧々は、都築の腕の中にいた。
都築の汗の匂いを感じながら、鼓動の高鳴りを押さえることが出来ない。
「つ、都築少尉？」
「あまり、人に話して欲しくないことだ」
「わ、私でいいなら」
人に話せないことを、自分には話してくれる。
それが、その優越感が、寧々には嬉しい。
「戦時騎士総動員法――――知っているな？」

「……酷い法律を作ったものです」

寧々は、そっと都築に体を預けた。
鍛え上げられた体の感触。
自分が、この体に抱かれたんだと思うだけで、寧々は体が芯から熱くなる。

「アレを作った野郎は、騎士を消耗品だと思ってやがる」

「……うん」

「知ってるか？動員の名の下に、難民になった騎士達が何人殺されたか」

「いえ？」

都築が極めて重要なことを言っていることはわかる。
だが、寧々にとって、この心地よさの前に、そんなことは微々たる問題だった。
頬をすり寄せる都築の感触こそが、全てだ。

「動員を拒んだって、それだけの理由で殺されたんだ。同意した奴らだって、たった2週間の軍事訓練を受けただけで最前線送りになる。わかるか？13歳、まだ中学生だっているんだぞ？」

「それを、何故、あなたが怒るんです？真」
都築の胸に頬ずりしながら、寧々は心地よさそうに目を閉じた。

「……あのクソを、イヤでも知っているからさ」
美奈代を抱きしめる都築の手が腰に回された。

「誰のことかは知らないですけど」
その感触を楽しむかのように力を込める都築に、寧々は言った。
「その人だけを恨むのは間違いだし、あの酷い法律だって、我々が早く戦争を終わらせればいい。それだけです。戦争が終われば、きっと」
「そうは思うさ」
ふうっ。
都築の口からため息がこぼれた。
「だけどなぁ……」
「あのね？真」
「ん？」
「前に、泉大尉が言っていた気がしますけど、私達は兵隊です。政治家や官僚ではない」
「……」
「私も、ああいう連中は嫌いですけと、これだけはわかります。奴らは奴らの方法で戦争をする。我々は我々の方法で戦争をする。それだけのこと。
みんな、出来る方法で戦っているんです。
皆、それしか出来ないんです。
出来ないことを一々思い悩んでも無駄なことです」

「しかし、アイツは」

「真がここで怒りをあらわにしても、何も変わりはしない。世界は個人の感情で変わるほど、単純じゃない」

「単純で悪かったな」

「あ、あの……そういうんじゃ」

「……とりあえずは」都築は言った。

「戦争に勝つ――それしかねえか」

「そうです」

寧々は頷いた。

「勝たなければ、戦争が意味するのは死か、死以上の代物です。考える価値さえない」

「――出来ないことを一々思い悩むのはやめろ。そう言うんだな？」

「はい」

「戦争に勝って、オヤジぶっ殺しに行けばいいのか」

「お、オヤジ？」

「はっきり言うけどな？寧々」

都築は腰に回した手に力を込めた。

「俺は、あいつの墓前にお前を紹介に行くつもりはあるが、生きたアイツに引き合わせるつもりはない」
「殺しましょう。すぐに。今すぐ、何なら手伝います」
「後にしてくれ」
「で、でも……」
「戦争に勝つ。それがまず第一歩だ」
「……」
「そうでなければ、俺のライフプランが狂う」
「えっ？」
「さあ！のセッティング仕上げて、戦争に勝つぞ！」
パシッ。
ハッチを開けようとした都築の手を、寧々の手が止めた。
「聞きたいことが」
「何だ？」
「つまり、真は、騎士動員法が気に入らなくて怒っていただけなんですね？」
「……そうだ」

「べ、別に、私が原因じゃないんですね？」

「何かしたのか？」

「い、いえ……その」

寧々は、恥ずかしそうに言った。

「いろいろと……その」

「？」

「大体、真が悪いんです」

「俺が？」

「や、やっと、こうやって二人きりになったのに……何ですか」

「……あっ」

「女一人も相手に出来なくて、戦争に勝てるのですか？」

「……後腐れがない分、戦争の方が気楽なんだが」

「――――何か？」

「いや」

くすっ。

剣呑な目をする寧々の顔を見て、都築は吹き出した。
寧々の言いたいことは、男としてわかる。
それが、何だかおかしくて仕方ない。

「何がそんなにおかしいんです」

「カワイイと思ったんだ」

「イヤミにしか――」

強引に抱きしめられた寧々の唇がさらに強引に塞がれた。

「んっ……」

その感触を確かめるように、寧々は瞳を閉じた。

暗闇の中。
都築の手が腰から動く。

「んっ……」

寧々の手は、都築の手を止めた。

「だから」

名残惜しくも唇を離し、寧々は言った。

「今日はダメ」

「……この前もダメだったような気が」

「ば、バカッ！」

美奈代が怒鳴った。

「い、いい加減、女というものを理解して下さいっ！」

「い、いや……はぁ？」

「首を傾げないで！こういうのはですね！」

「だから――――何なんだ？」

「し、真？……保健体育の授業、受けたことは？」

「授業は全部寝てた。バイトで忙しかったから」

「バイト？」

「ホストで」

ギロッ！

寧々から発せられるすさまじすぎる殺気に、都築は気絶しそうになった。

「……ホ・ス・ト？」

「いや！ホストって、ローヤルホストだ！ファミレスの！知ってるだろう！？そのローヤルホストで、厨房のバイトをだな！」

「中学生相手にナニをしていたんです！」

「違うって言ってるだろ！？」

狭いコクピットで修羅場を迎える二人は、ハッチが開かれ、あきれ顔の整備兵達が自分達を見物してるのさえ気づかない。

「ロリ!?ロリだったんですか!?」
「そうなら神城達でも相手にしている!」
「誰ですか!?それは!」
「隊長……」
「シゲ。レンチ貸せ」
「どうぞ」
「おう」
ガンッ!
ガンッ!
「シゲ。二人をコクピットから引きずり出せ」
「はっ」
直立不動で並ぶ二人を前に、美奈代は頭を抱え、後藤は苦虫を噛み潰した顔で二人を睨む。
「で?――コクピットで何をしていた?」
「はい……その」
都築は、横に立つ寧々をちらりと盗み見た。
赤面する寧々はもう泣きそうだった。
「……ナニしてました」
「都築ぃっ!」
顔を真っ赤にして美奈代が怒鳴った。
「歯ぁくいしばれぇっ!」
「やめろって!」

美奈代の平手をかわした都築だが、
「神聖なるメサイアのコクピットで子作りに励んでいただと！？」
美奈代のヒートアップは止まらない。
「今回は、キスまでだっ！」
「それでも十分悪いわっ！」
「――――まぁ、いいよ」
後藤が美奈代を止めた。
「両名の処罰は一時棚上げだ」
「しかし！」
「二人とも」
「はっ」
「はい」
「今、外で何が起きているか、言ってみろ」
「は？」
都築達はお互いの顔を見合ってしまう。
「隊長？」
「何か、あったのですか？」
「良い機会だ」
後藤は席を立った。
「ＣＤＣに行くからついて来なさい」

ＣＤＣ（戦闘情報センター）は、蜂の巣を突いたような大騒ぎになっていた。
「敵Ａ集団前衛、下仁田を通過！」
「第二線防衛隊との会敵予想時刻マイナス５５００秒！」

オペレーター達の報告を聞きながら、腕組みをしてモニターを見つめるのは紅葉達だ。
「紅葉ちゃん」
「後藤中佐……敵は思ったより派手にやるわ」
「状況は？」
「最悪よ」
「具体的に」
「敵の砲撃が日本どころか、世界各地の都市を襲った――ソウルは１００以上のクレーターになったって」
紅葉は、嬉しそうに肩をすくめた。
「いっそ、半島を沈めてくれたら、私、敵に感謝状上げたくなるわ」
「敵の首都なんてどうでもいいよ。帝国は」
「前橋、大宮、横浜、横須賀、川崎――軒並みやられたわ。メサイアの奇襲攻撃」
「襲われたのですか！？」
都築は目を見開いた。
「何で――こんな時に！」
「わからない。でも、まるでおかしいわ」
「おかしい？」
「なんだか、本気で攻めてない。まるで脅しているみたい」
「推測はいいよ。被害と戦果は？」
「太平洋側に待機していた部隊と航空部隊が徹底的に叩いてくれた。ここ2時間ほどの戦闘で、敵を後退させるまでは至った。損害は、民間人を含めた犠牲者は千人で収まることを祈るしかない」
「……」
「それで」
紅葉は顎でモニターを示した。
「それに呼応する形で大型妖魔主力、師団規模の部隊が長野群馬県境を越えた。今、群馬防衛線守備軍が交戦中。第一線を突破され、第二線で何とか喰い止めている有様。どっちにしても下仁田は焼け

野原よ……」
　しきりに指で腕を叩く紅葉の仕草から、美奈代は、彼女が相当、いらついていることを悟った。
「近衛からは？」
「麗菜殿下の部隊がすでに交戦開始。八八特務隊も後方攪乱のために動いている。我々は即時待機命令のまま」
「俺達の出来るこたぁ、お祈り程度ですか」
「そうなるわね。ここが攻められないことをお祈りして頂戴」
「おい、都築」
「はっ！」
　その問答無用の低い声に、都築は弾かれたように背筋を伸ばした。
「貴様等が仕事中にナニしてる間に、情勢はここまで悪化してた」
「……」
「返す言葉もございません」
「失態は功績をもって返しなさい。それ以外は認めんからね？俺は」

国土を妖魔達が蹂躙している。
家が燃え、大地が悲鳴を上げている。
それは、皇族の一員として、決して許すことの出来ない光景だった。

「状況は？」

「東京上空からの信濃以下、飛行艦隊艦砲攻撃により敵の３割が脱落。攻撃は現在も継続中」

「本当に、今日は忙しいわよ」

不愉快さを隠そうともせず、メサイアのコクピットで毒づくのは一人の美女。
気品のある顔立ちと切れ長の目が特徴的だ。

「東京でやりあったと思ったら、今度は群馬」

「文句は私じゃなくて、敵にでも言ってください」

「そうさせてもらうわ」

美女――国民の多くが知るその人物こそ、第一皇女麗菜内親王だ。
第一皇女。
近衛軍総司令官。
近衛軍元帥。
さらに、世界最強のメサイアパイロットとさえ言われるまさに傑物。
皇室の一員という肩書きが自動的に与えてくれる肩書きは、この中に一切存在しない。

その彼女が、自らの愛騎、ＭＤＩＪα－０１５Ｅ「Ｍｉｎａｇｉ」の剣を抜き放ち、メサイアコントローラー、美凪に訊ねた。

「ステータスに問題ない？美凪」

「システム・エンゲージ。やれます」

敵もこちらの存在に気づいたらしい。
麗菜達の面前を横切ろうとした大型妖魔達が進路を変えた。
地響きを立てながら進む巨大なトリケラトプス達の群れ。

いくつもの都市を灰燼に帰した憎むべき相手。
敵として不足はない。

「さぁ――――ペイバックタイムよ！」

麗菜騎の突撃を合図に、前衛担当騎達が一斉に敵めがけて突撃を開始。

「制圧担当、かかれっ！」

麗菜騎をガードするポジションをとりつつ突撃する二宮騎からの怒鳴り声を合図に、後方の制圧担当騎達が背負うラックから一斉にロケットが、その手に持つ１２０ミリ速射砲からは無数の弾丸がそれぞれ妖魔達めがけて放たれる。

ロケットと砲弾による攻撃で前衛を粉砕された大型妖魔達は、足並みを乱した。

麗菜達は、斬艦刀をひっさげ、その真っ直中へと斬り込んでいった。

しつけが肝心

ズンッ！
ズズゥゥゥム！

遠くから途切れ途切れに砲撃による重低音が響き渡る。

最前線。

少し前まで、静岡と愛知の県境だった場所が、人類と魔族の領土の境になっている。

車で山頂まで登れるほど緩やかな、小高い山の上。

そこに浅く掘られた塹壕から出た将校団が、双眼鏡片手に砲兵達の仕事ぶりを見守っている。

彼等の目の前には、魔族軍の塹壕が広がっている。

コンクリートの街をほじくり返し、縦横に掘られた塹壕の列。

その向こうには魔族軍の砦がある。

陸軍の砲兵隊が、この砦を潰そうと砲撃を続けているが、砦前面に展開された魔法防御壁が城壁として立ちはだかり、砲弾は空中でむなしく炸裂するだけだ。

魔族軍側が打って出てくれれば、あの防壁が崩され、そこに砲撃を叩き込みたいというのが、彼等の本音だ。

「敵もねばりますな」と、双眼鏡から目を離した参謀長が言った。

「これだけの砲撃を受けても、未だに出てこない」

「弾薬の無駄使いだ」

そう酷評するのは、背の高いひげ面の男。

堂々とした筋骨のしっかりとした体躯に、野生の獣を思わせる眼光は、一睨みするだけで相手を萎縮させるほど強く、そして鋭い。

何よりその体から後光のように放たれる覇気が、この人物がただ者ではないことを教えてくれる。

名を、織田忠信（おだ・ただのぶ）という。

貴族院議員。元尾張藩主、現在の織田伯爵家当主。
近衛兵団の西部方面軍総司令官、近衛兵団中将。及び、中部方面在郷騎士団長。

在郷騎士団。

国軍及び宮廷騎士団に属さない、地方在住の騎士達（在郷騎士）によって編成される、地方の騎士管理組織を指す。

帝国政府が騎士達の管理と戦時徴兵の効率化を目的に、明治時代、地域ごとに強制的に編成した歴史がある。
現在、織田の下にいる騎士達のほとんどが、この在郷騎士達だ。

長野県から難民と共に愛知県へ脱出、中部方面在郷騎士団の指揮下に入った南信濃方面在郷騎士団をはじめ、織田を慕って、或いは恐れてその支配下に入った在郷騎士団は、西日本の半分以上。
騎士の数からすれば、織田は西日本の支配者と、そう言ってもよい。
単なる中部方面の在郷騎士団の長に過ぎないはずの織田が、陸軍の鈴木大臣ですら口出しできない程の軍事力を持つのは、そういう背景があった。

「羽田」

織田は、背後に控えていた小男に命じた。
「騎士小隊を小出しにして敵を誘い出せ。そのうちに敵も尻尾を出すだろう」
「はっ」
羽田は小さく頷くと、その場から駆けだしていった。
「――して？」
それを一瞥した織田は、横に控えていた青年に声をかけた。
まだ２０代半ばだろう。
色白の女性を思わせる細面が、妙に艶っぽくさえ思える美男子だ。
甲冑を身につけていても、その線の細さが不思議と女性を連想させる。
織田の腹臣である本田拓真（ほんだ・たくま）である。
「何事だ？」
「……これを」
拓真は、無言で懐から書状を取り出し、織田に捧げた。
「これは？」
「……先程、敵側の使者が参り、殿にと」
「――何？」
居合わせた織田の幕僚達から疑問の声が挙がる。
「敵……とは、まさか？」
本田は無言で頷いた後、言った。
「……魔族軍よりの使者を名乗っておりました」
「見せろ」
織田は無造作に書状を開き、中身を読んだ途端――絶句した。

「こんな状況でか？」
魔界の帝都に設けられた会議の席上。
説明を終えた男に対して、そんな呆れ声があがった。
皆が同意見であることは、その態度から明らかだ。

「それは、ユギオの見解か？」
「ち、違います」
小太りの老年の域に達している銀髪の男は、ムッとなって首を横に振った。
「これは、ユギオの上司たる私の判断です」
「君よりユギオの方が優秀だな」
「なっ！？」
男は顔を真っ赤にして怒鳴るような口調になった。
「すでに戦線は膠着状態。補給その他、戦線を優位にするためにも、編成と補給線の建て直しは急務です！そのためには、ここで時間稼ぎを！」
「ユギオはどうしたんだ？」
「か、彼は」
自分の説明をまるで聞いていないことを思い知らされた彼は、それでも答えた。
何しろ、目の前に並ぶお歴々は、彼にとっては大切なスポンサーであり、上司達だ。
逆らえば首どころか命が危ない。
「別の仕事があるとかで、人間界へ」
「部下の行動目的も把握していないか？よくそれで上司が務まる」
「問題はだねぇ」
誰かの声があがった。
「――この戦況で人類が休戦協定に乗ると思うのか？ということだよ」
「そうそう。戦線はむしろ、こっちが手を出せない以上、人類側に有利だ」
「何をおっしゃいますか」
言った相手が誰かに気づき、ハッとなったがもう遅い。
彼は覚悟を決めた。
「中華帝国は我々の指示通り、北米大陸及びユーラシア大陸の東南

アジア各地に再度の攻勢を開始。世界の工場と呼ばれた彼等の生産能力は人間界随一にして、“中国では工場から戦場にベルトコンベアがつながっている”と呼ばれるほどの物量戦を展開しています！」

彼の決死の言葉に、

「魔族軍はどうなんだね？」

はぁっ。と、盛大なため息が各所で漏れた。

――――お前、何もわかっていないな。

そう、彼には聞こえたが、間違ってはいないだろう。

「私達は、その中国人とやらではない。魔族軍こそが我が軍なのだ」

「副次的な扱いの中華帝国軍の戦功をそこまでわめき立てるのはどうかと思うがね」

「……っ」

「君が人類側の支配者なら、こんな状況で交渉のテーブルにつくか？」

「アフリカは3週間で陥落させた。その勢いがまるでない。人類は恐らく、弓状列島の魔族軍より、大陸の同族を恐れているところだろうさ」

「我々から莫大な投資を預かっておきながら、この体たらく――――覚悟は出来ているんだろうね？」

覚悟

その言葉に、彼は本能的な命の危険を感じた。

「……す、すぐに」

男は思わず後ずさった。

「ヴォルトモード軍に対し、多大な戦果を上げ、人類との交渉を有利にすすめるよう計らいます」

「……当然だろう」

●伊那市第８防衛線司令部

塹壕内に作られた室内に潜り込んで、鼓膜が破れそうな激しい爆発音からようやく逃れることが出来た。

「状況は！？」

「第７防衛線と通信不能」

「方面隊司令部とも通信出来ません！強力なジャミングが発生している模様！」

「くそっ！各部隊に応戦――」

指揮官はそう言いかけて言葉をはき出すのを止めた。

今まで全くなかった程の砲撃の雨。

遠くから響くこの地割れのような音。

単なる攻撃？

――違う。

――これは。

「全部隊に伝えろ！」

指揮官は首を振って怒鳴った。

「防衛線を放棄する！各員、携帯出来る武器、弾薬等をもって、速やかに“トンネル”へ逃げろっ！」

「司令部からは戦線を放棄する許可を得ていません！」

「戦って勝てる相手じゃない！これは命令だ！責任は私が持つ！」

「戦線放棄！」

「“トンネル”へ急げ！」

「食料と医薬品は最優先だ！トラックに積め！」

カブに乗った伝令が必死になって叫びながら走り去った。

「第３班、とっととケツ上げて“トンネル”へ走れっ！」

兵士達は小銃と弾薬箱を担いで塹壕を走る。

“トンネル”とは、塹壕の縁から1キロ離れた場所にある建設途中で放棄された全長2キロほどのトンネルのこと。
魔族側に気づかれないように、トンネルに通じる２００メートルほどの道は土で覆われ、小さな山状に積み上げられた土砂が遮蔽物となって、真っ正面からではトンネルの存在にはそう簡単には気づかないようになっている。
トンネルの入り口にメースが立てないよう、火炎放射装置の炎が直接、トンネルに入り込まないよう、小山の配置は徹底して配慮されている。
陣地構築よりトンネルの偽装の方に力を込めたとさえ、生き残った兵士達が語る場所。

――――最後の逃げ場。

トンネルのその別名が教えるように、兵士達は、最後には、ここに逃げろといわれている。
「防衛線を放棄って、俺達、まだ戦っていないぜ？」
「――――バカかお前」
横を走っていた年輩の兵士が言った。
「魔族軍が派手にぶっ放してるのは、地雷を吹き飛ばすためだ。地雷吹っ飛ばした後、突っ込んでくるのは大型妖魔だぞ」

その兵士の言うとおりになった。

最後の兵士がトンネルに潜り込んだ直後、大型妖魔達の集団音速突撃が防衛線を襲った。
塹壕も何もかも、その大質量をもって行われる突撃の前には無意味でしかなかった。
たった数秒にも満たない突撃で、防衛線は見るも無惨な姿に破壊された。

「トホホッ……俺様達の数週間の苦労が一瞬でパァかよ」
大型妖魔に踏みつぶされて埋まった塹壕を前に、兵士の一人が泣きそうな声をあげた。
「バカ言うな。指揮官殿の判断が正しかったんだ」
別な兵士が言った。
「見ろ」
防衛線のあった場所にホバー移動してきた数十騎のメースが展開。
火炎放射装置による火炎掃討が始まった。一瞬にして炎の絨毯に包まれた防衛線。炎の熱風は、トンネルの入り口まで容易に届き、まるで目の前に松明でも近づけられたようだ。
「――熱ちちっ！さ、下がるぞ！」
軍曹の階級章をつけた男が部下に命じた。
「これ以上ここにいたら、センサーで見つけられる可能性が高い！」
「了解っ！」

「この陣地は放棄されたのか？」
停止したメースのうち、中隊指揮官騎が辺りを見回した。
大型妖魔の足跡が無数に残る大地には、人類側の塹壕の無惨な跡があるだけ。
抵抗も何もない。
「その様ですな。誰か、敵を見つけたか？」
「左、山裾に微弱な生体反応がありましたが、反応消えました」
「野生動物だろう――中隊全騎、前進するぞ！今日中に県境へ達するのだ！」
「応っ！」

●“鈴谷（すずや）”食堂

「だめだった」

妙に早く上陸から戻ってきたさつきが、なぜか肩を落としていた。

食堂へ向かう通路で一緒になった美奈代と並んで歩く。

「何もないんだもん」

「何も？」

「うん。いくら何でも、気楽に何か食べられるだろうって思っていたら、原料高騰がどうのって、軒並み売ってないんだもん。

ホントだよ？

もう１１時過ぎだってのに、休業してるお店ばっかり。

とにかく食べまくるって、そこらの食堂入った褌子みたいな真似したくないし。

お昼にラーメンって思ったけど、これも開いてる店は大行列」

「そうか」

上陸できただけでも羨ましいな。と思いつつ美奈代は話を合わせるために頷いた。

部隊の不始末を押しつけられる格好で上陸止めになった美奈代は、一体自分が何日間土を踏んでいないかを考え、惨めになった。

それに気付かないさつきはポケットからチョコレートを取り出すと続けた。

「これお土産ね？美晴は、山崎君とどこかにしけ込んじゃうし、フィアと涼は芳にアニメショップへ連れて行かれちゃうし」

「ああ、それでか」

美奈代は、それでさつきが早く戻ってきた理由を悟った。

「お相手がいないから、早く戻ってきたって訳だ」

「オトコが欲しいわ。お金もってる顔のイイ奴。あ、そうそう」

ポンッ。

さつきは不意に手を叩いた。

「都築の奴」

「ん？」
「寧々ちゃんがかなり意識してるみたいだよ？」
「鬼龍院中尉が？」
「そう！」
ニヤニヤと、さつきは楽しげに頷いた。
「寧々ちゃん、都築と二人っきりになりたがっていたし」
「へぇ？」
「へぇ？って、反応それだけ？」
「他に何を期待しているんだ？」
二人は食堂に入った。
時間はすでに1時近く。乗組員の半分がいないせいか、妙にガランとしていた。
「都築が気の毒だと思って」
「鬼龍院中尉はしっかりした女性だ」
美奈代達はトレイをとって列に並んだ。
「都築みたいなチャランポランには丁度良い相手だ」
「……あのさ」
「何だ？」
「いっちゃ悪いけど、美奈代が染谷にフラれた理由がわかった」
「？」

翌日、朝。
いつもより早く目が覚めた美奈代は、ハンガーデッキにむかった。
「オーライ、オーライ！」
ハンガーデッキの中、重低音とクレーン作動中の警告が鼓膜一杯に響き渡っている。
「早いな」
そう思いつつ、クレーンを見上げると、得体の知れない巨大な砲

が吊されていた。
線の細いデザインに迷彩塗装が施されている。
その砲を、美奈代は見たことはなかった。
「班長？これは？」
「最新型の狙撃砲だよ」
作業指揮を見守っていた坂城班長が教えてくれた。
「鬼龍院中尉の要請で紅葉が持ってきた」
「鬼龍院中尉の？」
「嬢ちゃんも書類にハンコ押してあったぞ？」
「……ああ！」
ポンッ。
美奈代はようやく思い出したらしい。
「鬼龍院中尉の言っていた“速射性の高い兵器”って、これですか」
「紅葉がテスト騎探していたヤツだ。鬼龍院も物好きだぜ」
坂城は口元だけ笑って見せた。
「普通、狙撃兵は信頼のおける武器しか使わないのが鉄則だ。量産許可も下りてないどころか、満足なテストも行われていない、こんな代物使うなんて」
「威力は、あるんでしょう？」
「カタログデータはな。まぁ、紅葉の場合は、カタログデータがあてになった試しがねえが」
「……試射には立ち会います。心配ですから」
「そうしてやんな」

「11式超電磁狙撃砲。魔力による電磁誘導技術を応用した兵器です。初速は毎秒12キロ。火薬を用いるライフルでもせいぜい毎秒1，8キロですから、その速さはわかっていただけると思います」
後から来た寧々が、美奈代に説明してくれた。
「……うん」

「それまでのＬＯＳＡＴ使用型――――こちらは秒速１，５キロ。これが来週には弾薬欠乏を理由に使用停止になることは、先にお知らせしたとおりです」
「うん」
美奈代は頷きながら、寧々の一点だけを見ていた。
「口径１７０ミリ。口径と砲弾の質量そのものはＬＯＳＡＴとほぼ同じですが、破壊力は初速が６倍な分、かなり違うはずです。射程も伸びますし」
「使えるということだな？」
「騎体整備が終了次第、試射に入ります……あの」
「ん？」
「何か？」
寧々は少し、緊張した顔で訊ねた。
「先程からずっと顔を見られている気がして」
「いや」
美奈代は慌てて視線を外した。
「リップ、変えたのかなと思って」
「……あっ」
寧々は驚いたように口元を抑えた。
「に、似合いませんか？」
「いや？ほら。鬼龍院中尉は、基礎化粧くらいで、あまり化粧っ気を感じさせないから」
「……ああ。そうですね」
寧々は小さくなりながら頷いた。
「たまには、いいかなと思いまして」
「似合ってると、見とれていたと思ってくれ」
美奈代は本気で言った。
「世辞抜きで、きれいだと思う」
「……」
ゆでたタコみたいに赤くなった寧々は、小さい声で言った。

「あの」
「ん？」
「折り入って、ご相談が」
「都築のことか？」
「……」
コクン。
「本当なら、やめておけと言いたい」
「そ、それは」
「訓練校時代から、あいつ一人のおかげで、分隊長や部隊長として、私がどれほどのとばっちりを受けたと思う？」
「……はぁ」
「私はまだいい」
美奈代はいろいろと過去の苦い思い出を思い出して顔をしかめた。
「もし、あいつとつきあってみろ。人生全部でとばっちりを受けるんだぞ？」
「……」
チラと見た寧々の顔が険悪になりつつあることに気づき、美奈代は無理矢理にも話を差逸らせた。
「鬼龍院中尉。部隊長として聞く」
「……どうぞ」
「都築のこと、好きなのか？」
「……はい」
「例の、着任の際のあの事件は関係」
「……都築少尉は」
さすがに思い出したらしい。
寧々は顔を赤くしてうつむきながら言った。
「私にとって、初めて肌を見られた男の人です」
「……そうなのか？」
「それに……優しくしてくれました」
「ふぇっ！？」

美奈代は、素っ頓狂な声を挙げて目を見開いた。
優しくしてくれた。
女の口から出たその言葉が、何を意味するか。
さすがに同じ女として分かる。
というか、わからない方がどうかしている。
「つ、つまり!?」
美奈代は裏返る声で訊ねた。
「き、昨日は!?」
「私から――お願いしました。好きですから。ずっと、見ていましたから」
「た、た」
たかが肌を見られた程度で、そこまでする!?
いいかけて、さすがにまずい事に気づいた。
美奈代はそれを口にすることを回避した。
もし、下手に口にしたら無事では済まないことは女としてわかる。
しかし、いつの間に?
私は全然気づかなかった。
一体、都築といい、寧々といい、男と女はこれだからわからない!

でも――

この人は、そこまでしたんだ。

それが、本当にスゴイと思う。

だから――

「そこまでするほど、本気なんだな?」
「……はい」
「なら」

美奈代は微笑みながら言った。
「がんばれ」
「は、はい？」
「あいつ、男としては一本、芯は通っている。上手くコントロールしてやればいい。ああいうタイプは、しつけが肝心だ」
「褒めてます？それ」
「そのつもりだ。何かあったら言ってこい。私達、周りの女達はどんな時でも、中尉の味方にしかならん」
「――ありがとうございます」
寧々は潤む瞳をしばたかせ、深く頭を下げた。
「あとは」
調子づいた美奈代は、何かいいアドバイスを送りたかった。
それだけだ。
だが――
出てきた言葉は、これだった。
「避妊だけは失敗しないように」

「バカバカバカァァッッ！」
ガンッ

美奈代はトイレの壁に頭をぶつけていた。
「私のバカぁぁぁっっっ！」
最後に引きつった顔で敬礼して逃げるように去っていった寧々の後ろ姿。
あれは生涯忘れることが出来そうにない。
「どうしてもっと、気の利いたことが言えないのよぉぉっっっ！！」
ワーンッ！
美奈代はとにかく泣いた。

「あ、こんな所にいた」
その声に振り向くと、さつきがいた。
「なにこんなところでいちびってるのよ。仕事よ仕事。後藤隊長が呼んでる」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム
「本来なら、別な騎でも与えてやりたい所だが」
後藤は言った。
「そんな余裕は近衛にはもうないわけだ」
「はぁ」
「葉月の生産ラインが２４時間フル稼働して“アリア”を生産し続けも、現場からの補充要請を満たせない現状じゃ、どうしようもないわな。
そんなんだけど、お前達に無駄飯喰わせてやる余裕もないわけだ」
「それで？」
「“白雷（はくらい）”は全騎、点検と改修のため、葉月のラボに送る。
お前達はその間、新型コクピットへの転換訓練と雑用の山にでも埋もれてもらうことになる。
せいぜいの救いは、戦闘には出ないことかな？」
「しかし」
山崎が訊ねた。
「この戦局で、大丈夫なんですか？」
「前々から、俺達と手を組むとか言ってた連中がしばらく俺達の代わりに“鈴谷（すずや）”に乗り込むことになる」
「まさか」
「よく覚えていたね。偉い」
後藤は満足そうに頷いた。
「内親王護衛隊（レイナガーズ）の選抜部隊ともう一隊。俺達の代わりが入ったほう

が、“鈴谷（すずや）”の連中も忙しいだろうなぁ。
内親王護衛隊（レイナガーズ）はお前達も一時期、共同作戦とったから知っているだろうし、あともう一隊は」
「？」
「――明日、１２００に俺達は“鈴谷（すずや）”を離れる。それまでに私物まとめておけ。都築と山崎？ベッドの下の本とＤＶＤ、いらないなら俺に寄こせや」

「誰が来るんだろうね」
さつきは私物を詰め込んだ巨大なバッグを部屋から引っ張り出した。
元から富士学校を焼き出され、その後は転戦を続けていたから、私物は官給品と、せいぜいが化粧品程度しか誰も持っていない。

ドスンバタンと、すごい音がしているのは、山崎の部屋だ。
二人が顔を見合わせた途端、山崎の巨体がベッドのマットレスごと部屋から飛び出してきた。
壁に顔を叩き付けられた山崎は、鼻を押さえながらはいつくばって部屋から逃れようとしたが、部屋から伸びた細い腕が、その襟首を掴むと、無造作に部屋の中に引っ張り込んだ。
美晴が部屋に入りこんでいるのだ。
「ＤＶＤの件、あれ、後藤隊長の冗談だと思うんだけど」
「柏、冗談とはとらなかったらしいな……あれ」

「失礼します」
バッグを持つ寧々が、二人の横を通り抜けようとした。
「お、おい？」
「ち、ちょっと？」
二人が引きつった顔をして寧々を止めた。

「何か？」
「……あ、あのさ」
さつきが震える手で寧々を指さした。
「その顔の返り血、何？」
「……ああ」
寧々は軽く頬を手の甲でぬぐって、
「なかなか落ちないんですよね。人の血って」
「まさか……」
その血が誰の血か想像がついた美奈代とさつきは、引きつった顔で違いを見合った。
「泉大尉」
寧々は平然と言ってのけた。
「しつけが肝心――なんですよね？」

涙も出ない再会

「移動しないフィアちゃん以外、荷物をラックに放り込んだら艦内待機だ。後から来る部隊とのブリーフィングもあるから、しばらく待ってろや。みんなにもそう言っておいて。予定だと１１００には始められる」

報告に来た美奈代達に、後藤は言った。

「フィアはいいんですか？」

「ツヴォルフ中佐」

「ツ……ツヴォルフ中佐は、どうして？」

「彼女は元々部隊は別だからね。このまま内親王護衛隊（レイナガーズ）と一緒に、データ収集に動いてもらう」

「いっそ、そのまま喰われれば」

「聞こえてるよ。フィアちゃん、ブリーフィングには出てもらうよ？」

「ブリーフィングって何のです？」

「ま、連中がどこでどう戦うか、それは知っておくべきだろ？」

後藤は意地の悪い顔で言った。

「連中の尻ぬぐいは俺達の仕事だ」

「そんな。あっちはエリート部隊なんですから」

美奈代は不服そうに言った。

「我々こそが尻ぬぐいを受けるべきだと思いますが？」

「……お前ねぇ」

後藤はあきれ顔だ。

「戦果と作戦参加数で考えてご覧？あんなトコとウチを比べたら、周りから怒られるよ？」

「は？」

「二宮さんも、いろいろ立場悪いと思うよ？これじゃ」

「……あの」

美奈代は“何を言ってるんだ？”といわんばかりに怪訝そうな顔で訊ねた。
「指揮官は、二宮大佐ですよ？」
「おいおい、指揮官だけで戦争が出来れば、俺は隊長なんてやってないよ」
「では？」
「面子（メンツ）の問題だよ」
「面子？」
「内親王殿下直属の親衛部隊となれば、そりゃ負けることは出来ない。それはわかるか？」
「は？それは……はい」
「だから、連中は“勝てる戦い”しか、経験がない。負け戦ってのをしたことがないんだ」
「それは我々も」
「……お前」
後藤は肩を落とした。
「本当にポジティブなのか、それとも何も考えていないのかどっちだ？」
「え？で、でも」
「部隊全滅も経験した。
参加した戦闘で、戦略的勝利は第一次反攻作戦の一回だけ。
基本的に、後はすべて負け戦と言って良い。
ボルネオやチベットみたいな撤退戦や奇襲作戦、包囲網突破戦、しかも戦う相手は、ほとんどが未知の新型騎やメース達」
「……」
「普通なら一回の全滅じゃ済まない戦いをお前達、そのうちの何割かは俺もだが、経験してきたんだ。勝ち負けがはっきりしている所の小競り合いで実績作ってきた内親王護衛隊（レイナガーズ）とお前達は、部隊としての格が違う」
「買いかぶりですよ」

美奈代は言った。
「我々は」
「我々じゃなくて、二宮大佐が、だろう？」
後藤は楽しげに言った。
「お前は、自分達が教官である二宮大佐率いる部隊に勝っていることを認めたくない。それだけだ」
「……そんな」
「ま、俺達は俺達で、不正規部隊（イレギュラーズ）だから、公に戦果が公表されることはないに等しい。そんなことは俺達の胸の中に収めておけよ。内親王護衛隊（レイナガーズ）の連中は対抗意識むき出しだけどな」
「不正規部隊（イレギュラーズ）って、私達が？」
「当然だろ？俺、言ってあるよね？」
「何をです？」
「……お前、自分の所属言ってみな」
「独立駆逐中隊」
「部隊ナンバーは？」
「……ありません」
部隊ナンバー。
たとえば、第〇〇メサイア中隊。
この〇〇にあたるナンバーのことだ。
「そう。部隊ナンバーもついていない部隊ってのは、そういう扱いだ。覚えておけ。
正規部隊を投入できない状況に優先して投入される。
……そう言われれば、心当たりがあるだろう？」
「……ありすぎるくらい」
「だろ？」
後藤は楽しげに頷いた。
「まぁ――公表できないのは部隊の性格故だが、戦果は上層部としてはいろいろ使いたいんだ。戦意高揚のネタとして」
「はあ」

美奈代は、勲章授与式典の際、部隊総合の撃破スコアを聞いた軍幹部達が、やたら驚いていたのを思い出した。
「特にお前はな」
「私ですか？」
「……天狗になってもらっちゃ困るからな。これ以上は言わないよ」
「――まぁ、それでいいです」
美奈代も頷いた。
「いろいろ、文句言われるネタにされても困りますから」
「お前も学習したねぇ」
「恐れ入ります」
「ご褒美に――っても、俺の小遣いじゃないけど、“白雷（はくらい）”を専用騎に改良することにハンコ押してあげたから」
「あっ！」
美奈代はハッ！となって気色ばんで言った。
「た、隊長！」
「――どうしたの？青くなったり赤くなったり、忙しいヤツだね」
「今度、騎体壊したら、修理費給料から天引きって書いてあったんですけど！」
「――ああ」
後藤は冷たい、恐ろしく底意地の悪い笑みを口元に浮かべた。
「壊さなきゃいいんだから」
「ううっ……」
滝のような涙を流す美奈代に、後藤は言った。
「ほらほら、みんなの所に知らせに行ってあげて」
「はっ、はい――１１００ブリーフィングルーム集合。それまでは各自自由待機でよろしいですか？」
「いいよ？ああ、それから」
「？」
「引き継ぐ部隊は二つ。一つは内親王護衛隊（レイナガーズ）、もう一つは」
「？」

「同窓会を楽しみな」

●“鈴谷（すずや）”第一フライトデッキ

ギィィンッ！

轟音と共に、次々とメサイア達が着艦してくる。

「内親王護衛隊（レイナガーズ）のお出ましか」

横に立つ坂城班長が腕組みしながら着艦収容作業を見守る。

白の特別色に塗装された“鳳龍改”達が全く無駄のない動きで着艦装置を捉え、艦内に入り込んでくる。

「……思ったより少ないですね」

「内親王護衛隊（レイナガーズ）の第３小隊“ニーベルング”だ」

「ニーベルング？」

「ワーグナーの作った、人類の歴史上で最も巨大な楽曲の一つだ。ライブラリーにあるはずだ。興味があるなら、調べてみな」

「はぁ」

美奈代は、ワーグナーが誰なのかすらわからない。

生返事するのが精一杯だ。

「部隊長はどなたです？」

「クソうるさいのが来るぞ？あれこそ女子校の女教師だ」

坂城は楽しげに口元をゆがめた。

「嬢ちゃん達。“鈴谷（すずや）”から退散して正解かもしれないぜ？説教説教で足腰立たなくされるかもな」

「――あんまりのお言葉ですね」

美奈代は、背後からの声に驚いて振り向いた。

そこに立っているのは、戦闘服に身を包んだレタス色の髪をした背の高い女性だった。

美奈代は、その女性に見覚えがあった。

「月城少佐？」

「――久しぶりだな。泉大尉」
カッ！
踵を鳴らせ、月城少佐は見事な敬礼を送ってきた。
美奈代と坂城は慌ててそれに答えた。
「それにしても坂城さん。人をいろいろと」
「お前もいい加減、いいオトコ見つけて所帯持てや。本当にオールドミスにするにゃ惜しい器量だ」
「褒め言葉と受け取ります」
「ああ。そうしてくんな」
坂城さんって、本当に顔広いんだなぁ。
美奈代は感心しながら二人のやりとりを聞く。
「月城隊長！」
米沢でみかけた覚えのある女性騎士が無重力空間を慣れない様子で近づいてきた。
後ろに続く騎士達の顔は皆一様に緊張に強ばっている。
「平野艦長からです！ブリーフィングルームへ集合しろとのことです！」
「わかった！」

●“鈴谷（すずや）”艦内　通路
「私の部隊は８騎」
ブリーフィングルームへ向かう通路で、月城少佐が美奈代に説明してくれた。
「一応、定数だ」
美奈代の前を進む月城少佐は、戦闘服の上からでも女性としての見事なラインが見て取れる。
ふくらんだ胸。
しまったウェスト。
女同士なのに、美奈代は何故か、月城少佐の体に視線が釘付けに

なった。
「8騎……ですか？」
視線はともかく、話だけは合わせておく。
自分の部隊より少ない。
そんなので大丈夫なのか？
「はっきり、泉大尉の部隊ほどの数はない。だから、戦果はあまり期待しないでくれ」
「精鋭部隊が何を」
「精鋭？」
月城少佐は、クックッと喉を鳴らせて笑った。
「それは外部からの買いかぶりだ」
「ご謙遜を」
「いいか？泉大尉」
振り返ったその顔は、穏やかに笑っていた。
たが、笑顔の底に深い覚悟のようなものが見て取れる。
「本当に強いのは、生き残った奴だ」
「お言葉ですが、少佐達だって」
「――笑ってくれ」
フウッ。
月城少佐は肩をすくめた。
「私はともかく、部隊としての実戦経験はほんどない。
後ろに突っ立っているだけ。
他の連中の尻馬に乗ったようなものだ。
気がついたら勝ってましたといわんばかりのな。
“ニーベルング”は内親王護衛隊（レイナガーズ）の中でも経験が浅くて実戦投入に不安のある連中だけで編成されている。
内親王護衛隊（レイナガーズ）の中でも最も後方にいる後詰めだ」
「それでも」
「今回の部隊投入は、そんな連中に戦闘経験を積ませるためでもある。見たろ？部下達のピリピリした動き」

「……」
「あいつら、どう見た？」
「……」
「……」
「……部隊をけなすつもりはありません」
「部隊長同士、はっきり忌憚のない意見を聞きたい」
「……」
美奈代は、はっきり言った。
「あれでは全滅します」
「……厳しい意見だ」
「素質はあるんです。あとは、少し肩の力を抜かせるべきです」
「……私にそれをやれと？」
「月城少佐なら出来ると思いますよ？」
美奈代は悪戯っぽく笑った。
「何となくですけど」

ウォーッ！

通路の向こうで野太い声があがった。

「ねえねえ！今フリー！？」
「ひょおおっ！たまんねぇぇっっ！」

きゃぁぁぁっっ！
いゃぁぁぁっっ！

オトコ共の歓声と、絹を裂くような女の子の悲鳴。

「な、何だ？」

美奈代達はその場に立ち止まって互いに顔を見合ってしまった。
「し、少佐ぁぁっっ！」
無重力空間に慣れないのだろう。
女の子達が必死に空中をジタバタしながらこちらに逃げてくる。
「た、助けてくださぁぁいっ！」

「逃げなくてもいいじゃん！」
本人は親しげなつもりだろう。
だが、女としては聞くだけで勘弁して欲しい。
そんな声が女の子達を追いかけてくる。
「せっかく、同じ屋根の下に――」

「お願いしますっ！」
「年の功で！」
女の子達は月城少佐の後ろにそそくさと隠れてしまった。
「おい――美穂？今、何て言った？」

ちょっと……。
美奈代は女の子達をあきれ顔で見るしかない。
何しろ、戦闘服に貼り付けられた部隊ワッペンは、間違いなく内レ親王護衛隊（イナガーズ）なのだ。
年は多分――いや、絶対に自分より上のはず。
それでも、こんな女の子達が、戦えるのか？

そんな美奈代の前。
通路の角を曲がってきたモノ達がいた。

「……おいおい」
美奈代が呆れたのも無理はない。
無重力空間に慣れていないという意味では、相手の方がひどかっ

た。

何しろ、空中を犬かきして進んでくる者もいれば、天井をはい回って歩いて来る者もいる。

下心丸出しの、本人としては笑顔のつもりだろうが、汚らしい笑顔を浮かべた集団が、そんな格好で移動して来る。、

その光景は、下手なホラー映画並だ。

「貴様らぁぁっっ！」

空気を震わす程の月城少佐の怒鳴り声が響くが、

「おおっ！年上の美人っ！」

「お姉さんっ！教えて下さいっ！」

「――――なっ？」

あっけにとられた月城少佐は、鼻血を噴き出さんばかりの勢いで迫ってきた男達にまともに抱きつかれた。

「きゃぁぁぁぁぁぁっっっ！」

さっきの気迫はどこへやら。月城少佐は妙に色っぽい悲鳴を上げた。

「た、たまんねぇぇっっ！」

月城少佐の胸に顔を埋めたオトコが歓声を上げたが――――

ガンッ！

月城少佐がその場にへたり込む前に、通路にそんな音が響き渡った。

美奈代の右足のつま先が、月城少佐の胸に顔を埋めたオトコの股間にめり込んでいた。

「知ってました？男性用の戦闘服って、“潰れない”ように、ガードが入ってるんですよ？」

にこやかな顔をして、美奈代はつま先を男の股間から離すと、その襟首を掴んで、唖然とている男共に押しやった。
「軍靴のつま先にセラミックが入ってるの、知っているのか？」
泡を吹いて流れていく男が、さすがに心配になった月城少佐だったが、
「この程度で潰れるならその程度です――よ！」
ガンッ！
美奈代は、その男の尻を思い切り蹴飛ばした。
「いい加減にしろ！上官侮辱罪で船底潜らされたいのか！？」

「やべっ！」
さすがに頭が冷えたのか、一人が慌てた声で言った。
「か、階級見ろ階級！」
「しかもあいつ、嫁き遅れの泉じゃねぇか！」
「あの男運のない！」
「染谷さんにものの見事に捨てられた！」

「……」
月城少佐がチラと見た美奈代は、完全に目が据わっていた。
「――おい」
美奈代は男達の前に仁王立ちになると、階級章を指で突くと、命じた。
「お前ら」
さすがに階級万能の軍隊だ。
男達はその場に何とか直立不動の姿勢をとった。
「――ちょっと、そこに土下座しろ」

「いきなり土下座！？」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「――――で」

並べられた椅子の前。

ボコボコにされた男達が顔の痣やひっかき傷も生々しく正座させられている。

「泉と内親王護衛隊（レイナガーズ）の女の子達に袋だたきにされたわけだ」

「去勢されないよりマシでしょう」

後藤を前に、美奈代はシレッと言ってのけた。

「セクハラに階級無視……死にたいんですかね？こいつ等」

「お前がそこまで怒る理由が、俺にはわからんがね」

まぁ、座れや。

後藤は皆に席へ座るように促した。

「月城少佐。こいつらの部隊長は、泉並のとばっちりくらって、今、艦長室で絞られている」

「こいつらの中にはいなかったんですか？」

「ああ――――気の毒な話だけど、わかってあげなよ。男としちゃあ、こんな美人美少女前だ。それにしても泉」

「はい？」

「同期と知った途端、この仕打ちか？」

「私達は４５期、こいつらは４４期です。期は違います」

「卒業年次は同じだろう？」

「……まぁ。積年の恨みはありますが」

「これから仲良くやるんだ。いがみ合ってたらどうしようもないぜ？」

「つーか、美奈代？」

席についた美奈代の両脇。

さつきと美晴が心配そうな顔で言った。

「このエロゴキ共が来たってことは」
「そうですよ――その、体調不良になって、医務室にでも行きませんか？」
「は？」
「「……はぁっ」」
「ち、ちょっと待て。何だ？」
「鈍いにも程があるって、そう言ったんですよ」
「そうそう」
「？」

さつき達が何を言いたかったか。
美奈代はすぐに思い知らされた。
平野艦長と共にブリーフィングルームに入ってきた士官の中に、彼はいた。
自分達にチラリと視線を向けてくれた。
でも、その視線の求めたのは自分ではない。
フィアだ。
自分ではない。
彼は、そのまま目の前を通り過ぎると、自分達と反対側の一番隅の席に無言で座った。

「――何よ。あいつ」
さつきが小さく、しかしささくれだった声で呟く。
美晴も無言で頷いている。
ただ、美奈代だけが自分のつま先を見つめていた。

「これより3部隊合同のミーティングを行う」
壇上で後藤が口を開いた。

今は、ミーティングに集中しよう。

美奈代は自分に言い聞かせた。

彼のことは、もう諦めたはずだ。

そう、言い聞かせた。

不意に、涙が出そうになったのを何とか堪えるのが、美奈代にとって出来ることの精一杯だった。

ミーティングは３０分程で終わった。

“鈴谷（すずや）”はこれから愛知防衛線に移動する。

目的は静岡との県境周辺の山間部に展開するメース部隊の侵攻阻止。

美奈代達のいない間に被害が拡大した戦域をこれ以上悪化させないため、少数でも阻止戦が出来る狭い山間部に部隊を配置する。

幸い、魔族軍も積極的な行動には出ておらず、戦線は膠着状態にあるので、恐れる必要はない。

その間、美奈代達は騎体整備と改修のため後方に下がり、整備等が終了次第、内親王護衛隊（レイナガーズ）と入れ替えになる。

そんな話だ。

後で聞かされても十分な話だ。

一々、部隊としてミーティングに参加する必要がわからない。

後藤隊長に聞けば、きっともっともらしい理由を聞かせてもらえるだろう。

興味はないが。

美奈代は解散を告げられると、すぐに席を立った。

「駆逐中隊、発艦準備。定刻通り、発艦する。後藤隊長。よろしいですね？」
「挨拶とかいい？」
「結構です。総員、かかれ」
美奈代はそう言うと、周りの反応も確かめずにブリーフィングルームを出た。

●“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ
「あ、あの――泉」
“白雷（はくらい）”に乗り込もうとした美奈代は、その声に足をとめた。
振り向こうとはしない。
「その」
「……」
美奈代は騎体に向けて床を蹴った。
「待ってって！」
グイッ。
美奈代は強引に腕を引かれた。

昔なら、こうはならなかったな。

美奈代はそう思うだけで、泣きそうになった。

昔なら、笑顔で振り返った。
触ってもらえるだけで幸せだった。
だけど――

「あ、あのっ！」
美奈代は通路に引き戻された後も、相手の顔を見なかった。
見ることが出来なかった。

ただ、床を見つめることが、出来る精一杯だった。
「どうしたの？あの、何か避けられているみたいで」
「……」
「久しぶりの再会だから、その、何か」
「……」
「ちょっと！」
美奈代の代わりに、相手を突き飛ばしたのはさつきだった。
「離れなさいよ！美奈代が嫌がってるのがわかんないの！？」
「えっ！？」
突き飛ばされ、壁に背中をぶつけたのは――染谷だ。
何が起きたか。信じられないという顔をしている。
「あ、あの――」

パンッ！

当たりに乾いた音が響き渡った。

さつきが染谷の頬をひっぱたいた音だ。

「ふざけないでよ！」
さつきは顔を真っ赤にして怒鳴った。
「あんた――どの面下げて美奈代の前に出てこれたのよ！」

●“白雷（はくらい）”コクピット

「あーっ。ムカつく」

発艦体勢に入ろうとする“白雷（はくらい）”のコクピットでさつきが額に青筋を立てていた。

「あの野郎。今度会ったら、絶対にぶっ殺す」

「気持ちは分かりますよ」

ＭＣＲの青山中尉（メサイア・コントローラー・ルーム）が言った。

「指揮官殴ったって、立場的にはかなりマズいんですけど」

「あの態度は絶対に許せませんよ。女として」

「私は軍人としてのことを言っています。後藤隊長が残ってもみ消してくれるそうですから。感謝した方がいいと思いますが」

「……私も軍人ですか」

「――ただ」

「はい？」

「女としての心境は、あなたと同じです。よく殴ってくれました」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「ったく」

発艦して遠ざかっていく“白雷（はくらい）”達を、美夜は苦々しい思いで見送った。

「中身は未熟なクセに、無闇やたらと色気づいて……！」

「まぁ……子供（ガキ）ってことですよ」

後藤は肩をすくめるにとどめた。

「俺達大人は、そんなことで一々神経尖らせたら、やってけません」

「ごもっとも」

軽く頭を左右に振って、美夜はハンガーデッキでのもめ事を頭から追い出した。
「申し訳ないですね。後藤さんも忙しいでしょうに。事態のもみ消しに動いてもらって」
「いやいや。元は俺の部下の不始末ですから。
それに、ここだろうと東京だろうと、どうせ書類に埋もれるだけですから」
「大変ですね」
「大人はね」

●魔族第二軍　沼津基地　メース部隊本陣
金属音を撒き散らしながら、メース達が移動を続ける。
部隊ごとに整列する、ツヴァイやサライマ部隊が太陽の光に照らし出され、誇らしげに装甲を輝かせている。
見ているだけで気分が高揚する。
なんだか、全てに勝ったような、誇らしげな気分になる。
「これで部隊の定数は揃ったんですよね」
「ああ。やっとのことだ」
ツヴァイ達の間近。ヤクトエッジのコクピットまで上げられたリフトの上。
カヤノが周りを見回しながら言った言葉に、コクピットに潜り込んでいた整備兵が答えた。
「長野からの反攻作戦が言うこと聞いたみたいだ。人類側との停戦協議も順調に進んでいるらしいぜ？」
「停戦協議？」
「まぁ……あれだ」
終わったぞ？
整備兵はコクピットから体を出すと、腰に下げていたタオルでオ

イルまみれの手をぬぐった。
「俺達ゃ、何だかんだ言っても、ヴォルトモード閣下あっての軍隊だ」
「……はぁ」
「その俺達が、大将欠いたままでは格好が付かないだろう？だから、大将探す間、戦争を止めたい。大将探しに全力を傾けたい。それが司令部の本音だよ」
「でも、今までそれでやってきたじゃないですか」
「そうもいかなんだよ。世の中はな」
「？」
「閣下という看板があって、魔界や天界から支援が来るんだ。それが看板だけとなれば、支援は減る。それはつまり、戦争継続に多大な影響を及ぼすってわけだ」
「私達も、困るって訳ですよね」
「おいカヤノよぉ」
整備兵はあきれ顔だ。
「せめて新聞読むなり、座学しっかり聞くなりしろや。こんなことぁ、末端の少年兵でも知ってることだぜ？仮にも大尉なんだからよぉ」
「……すいません」
「頼むぜホントに。とにかく、そんな状況を放置してるってことは、ガムロ卿やズルド卿が、ヴォルトモード卿をエサに、閣下の軍隊を私物化してるんじゃないかって、変な詮索にもつながっている」
「そんな！」
「俺は疑ってねぇよ。とにかく、そんなんだから、閣下達も身の潔白を証明するためにも、ヴォルトモード卿を見つける必要があるんだ」
「結構、切迫してるんですね」
「本来なら、こんな所でノコノコと、ドンパチやってる場合じゃねぇんだよ。俺達だって、ヴォルトモード卿を探すためにどんなこと

でもしねぇといけねぇ」
「……確かに」
「……とりあえず、だ！」
整備兵は大声で言った。
「俺達がそんなデカいこと言っててもしかたねぇ！俺達ゃ、俺達の仕事をする！閣下が戻ってきた時に、ロクな騎体もメース使いもいませんじゃ、それこそ面目立たねぇからな！」
「クスッ。そうですね」
カヤノと整備兵は互いに顔を見合って笑い出した。

その目の前。

カヤノ達から見て真っ正面に片膝をついて待機しているのは、輝く濃緑色の装甲に身を包んだ巨大なメース。
肩と背中に装備された巨大な翼のようなバインダーが目立つ。

あの銀龍の後継騎。

今、楓（フィーリア）がコクピットの調整のために乗ったり降りたりを繰り返している。
その足下では、ズルドが視察と称して心配そうに見守っている。

「かぁ～っ！スゲえよなぁ」
整備兵が感心したような声を上げた。
「近づくだけで大迫力だぜ！」
整備兵はリフトを降ろしながら言った。
「やっぱ、味方殺しって言っても、お嬢様となれば、ああいうのが与えられるのかねぇ」
ヤベッ！
整備兵は慌てて口を閉じると、恐る恐るカヤノを見た。

「……聞こえたか？」
「ばっちり」
「……すまねぇ」
整備兵はリフトから降りながら小さい声で詫びた。
「あの子に罪はねぇ。そう思いたいのは確かだけどな」
「あの戦いでの悲劇は、割り切れないものがあるのはわかってます」
カヤノも続いてリフトから降りた。
「知らずにトリガーを引いた。それじゃ、感情的に納得できない。それはわかるんです」
「……わかっても、どうしようもねぇなんだよ。俺も」
整備兵は言った。
「俺の弟は、あの爆風の中にいたんだ。その無念を、どこにやっていいかわかんねぇ」
「……残念です」
「本当だよ」

間近で見ると、銀龍に見慣れているはずなのに、恐ろしく巨大に感じてしまう。
銀龍より一回り小型だというが、絶対嘘だと思ってしまう。

「名前は確か――」
うーん。
どうしても思い出せないカヤノが唸っていると、

「イスラフィルですよ」
突然の声に振り向くと、白衣を着た若い技師が立っていた。
「失礼、大尉。ジオニクスのアルプ一等技師です。よろしく」
肥満体と白い肌で、まるで丸い雪だるまを連想させる男がぎこちない敬礼をして来た。
「メース第二大隊のカヤノです」

「お会いできて光栄です。お噂はかねがね」
アルプ技師は、カヤノ達の横に並びながら言った。
「イスラフィルは、我がジオニクス社が社運を賭けている騎です。おかげさまで次期魔帝親衛軍コンペでは、採用がほぼ決まろうとしているんですよ」
「へぇ？」
「僕のっていうか、我が社渾身の作の新型エンジンとジェネレーター、そして何より、先輩達が全員諦めた“死吐息（デス・ブレス）”の連続発射を可能にした冷却システム！」
アルプ技師は突然、ハァハァと息を荒くして、恍惚とした顔になった。
カヤノはその顔を見て思わずギョッとなった。
「大型戦艦並の出力を活かして、全身にこれでもかという位に粒子砲を装備。
全身４カ所に仕込んだ大型粒子砲は、発射エネルギーの収束・拡散も可能な上、その出力は、標準サイズの戦艦クラスの主砲なら破壊力の面で遥かに凌ぎます。
それに、尾てい骨から生えるテールバインダーは、それ自体が大容量のジェネレーターとなっており、これにより出力は、これを装備しない銀龍の3倍近くを確保！
これだけで、もう他のメースなんて近づくことさえ出来ませんよ！」
アハハッ！。
アルプ技師は二重顎を揺らせながら高笑いするが、
――――大丈夫かしら？
と、横に立つカヤノは心配になって整備兵を見る。
整備兵は無言で、指を頭の横でクルクル回した。

それに気づかないアルプ技師は続けた。

「目立つでしょう？
あの巨大な肩部バインダーは、“死吐息（デス・ブレス）”の拡散装置です。
でも、それだけじゃないんですよ？
あれ自体が巨大な魔力攻撃偏向器として機能しますから、一種のバリア、使い方によっては攻撃兵器としても使用可能」

「バリアまで搭載してるのかい！？」
整備兵が驚きの声を上げた。

「そうです！」
参ったか！と言わんばかりにアルプ技師は頷いた。
「イスラフィルは、僕の開発した動力系・冷却系システムのおかげで、攻撃・防御の両面において他機の追随を許さないのです！」

「でもよぉ」
整備兵は言った。
「これだけデカイんだ。機動性は落ちるだろう？」

「まさか！」
アルプ技師は楽しげに肩をすくめた。
「スラスターも、魔界で用意できる限り、最高峰を装備してますから、この種の巨大兵器としては機動力にも秀でています。
装甲も最新素材をふんだんに取り入れた極めて堅牢な代物で、戦艦の一斉掃射を受けても致命的な損壊は免れますよ」

「要するにバケモノってことかい」

「褒め言葉と受け取ります」
「……最悪」
カヤノは訊ねた。
「最悪の事態が起きた場合、パイロットは？」
「まず、その事態がありえないと思いますけどね？
コクピットブロックが脱出艇を兼ねています。
それでもダメな場合は、マジックエジェクトシステムが自動で作動します。
まぁ？装甲が最も厚くて、防御もしっかりしとたコクピットブロックは、メーカーとしてシミュレーションで考えられる限り、フレームが歪もうが爆発しようが、とにかく脱出は１００％可能と結論づけていますし、エジェクトシステムは、同型がすでに１万回近く使用されましたが、事故の記録はゼロの代物です。
使用はあり得ないと思いますけどね」
「絶対に安全？」
「戦場で一番安全な場所とも言えるでしょう」
「……ああ」
カヤノはその言葉で全てに合点がいった。
「ズルド閣下に、この騎の使用を承諾させた殺し文句は、そのパイロットの安全性ですね」
「よく知らないんですけどね？興味ないんで」
アルプ技師は頷いた。
「脱出システムについては、他の技師と営業が悲鳴上げたって位、しつこく確認されたそうですよ？それこそネジ一本にいたるまで」
「……親バカ」

カヤノは苦笑しながらイスラフィルを見た。
ズルドは仕事があるらしい。
参謀達といつの間にかいなくなっていた。
父親を見送っていたらしい楓（フィーリア）が、ズルドが去っていく方角めがけて元気に手を振っていた。
不意にカヤノ達に気づいたらしい。
「カヤノさぁん！」
張りのある声をあげ、カヤノに手を振ってくれた。
カヤノは笑顔で手を振りかえす。
整備兵や技師達に混じって、小さな戦闘服に身を包む楓（フィーリア）。

その笑顔には相変わらず、邪気はない。

見ているだけで、人を幸せにする力がある。

――安全なんて気にするなら。

カヤノは、内心で怒りを覚えていた。

――そんなに心配なら！

その怒りは、決して楓（フィーリア）に向けられたものではない。

楓（フィーリア）をメースに乗せる、全てに対しての怒りだ。

――どうして、この子をメースに乗せるんだ！

●“鈴谷（すずや）”　フライトデッキ

「遅くなって済まないね。艇長」

部隊異動に備えた事前協議のため、“鈴谷（すずや）”を訪れていた後藤達が待機していたＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に搭乗したのは、予定より３０分ほど遅れてのことだった。

「いえいえ！どっちにしても、こっちも時間かかってまして」

ハッチまで出迎えてくれた艇長が、後藤達の搭乗を促す。

「どうした？」

「機関がヘソ曲げちまいましてね。出力が上がらんのですよ」

「おいおい。墜落は勘弁してね？」

「スピードが出ないだけです。低巡航モードなら十分耐えられます。それより聞きましたよ？また痴話げんかですって？」

「ああ。若いっていいよねぇ」

後藤は肩の当たりをコキコキ鳴らしながら言った。

「俺ぁ、あの若さが欲しいわ」

「ハハッ。当機のルートですけど、種子島から八丈島経由のルートです。所要時間は４時間３０分。他に指定があれば聞きますが？」

「いや、それでいい。昔みたいに沿岸にそってなんて言えないからなぁ」

「そういうことです。発進、５分前です。着席願います」

●同じ頃　魔族第二軍　沼津基地　メース部隊本陣

「操縦は覚えた？」

「はい」

ヤクトエッジと比べても、格段に広いコクピット。

機械に詳しくないカヤノから見ても、中の機材が最新鋭だということは、イヤでもわかる。

そこに小柄な楓（フィーリア）が座るから、それこそコクピットが応接間のよう

に広く感じられる。

「もう、あんな失敗しないようにって、たくさん練習しました」

あんな失敗。

それは、あの整備兵が口にした、銀龍の“死吐息（デスブレス）”誤射事件のことだ。

友軍を巻き込んで戦線を崩壊させた大失態。

上層部ではメーカーのパーツ発注ミスで結論がついたことだが、誰も処罰されていない以上、下層の兵士達の間ではケリがついた問題ではない。

その矛先の一番にいるのは、トリガーを引いたこんな小さい女の子なのだ。

それが、カヤノには許せない。

こんな小さい体で、全てはよかれと思って必死に覚えたことで、味方殺しの汚名を着せられるなんて、どうして納得出来ようか。

それに、一番傷ついているのは、この娘なんだぞ。

「こら」

コツン。

カヤノは心を鬼にして、平然と接した。

楓（フィーリア）がほしがっているのは、同情ではない。

それを分かっているからだ。

「そういうセリフを言わないって約束でしょ？」

「――――あ、ごめんなさい」

「これから太平洋上空へ飛行訓練に出るけど、この子の飛行シミュ

レーションは、してあるわね？」

「はい。おかげで魔界の地形、かなり覚えたんですよ？」

「頑張ったわね。でも、人間界は魔界と違うし、これからの主戦場は山間部が多い。気流が乱れる所があるから、とっさの操縦が求められる――――わかる？」

「ううっ……気流が乱れるって、ガリューン山脈の飛行シミュレーションは、私の中で最難関だったんですよ？」

「私はシミュレーションなしで、あそこで初めての飛行訓練受けたのよ？」

「そうだったんですか？」

「あの雪山のあたりは、私の生まれ故郷だから」

「えっと……ガリュナス？」

楓（フィーリア）は、シミュレーションの時、目印にした、山脈の麓の街の名前を思い出した。

「そう」

カヤノは幸せそうに微笑んだ。

「いい所よ？戦争が終わったら、帰ってみようかなって思ってるの」

「……」

不意に、楓（フィーリア）の顔が曇った。

「どうしたの？」

「戦争が終わったら、カヤノさんと簡単に会えなくなるのかなぁって」

「ふふっ」

カヤノはそっと楓（フィーリア）を抱き寄せた。

楓（フィーリア）の髪から、シャンプーの甘い香りがする。

カヤノはそれを肺一杯に吸い込んだ。

「未来のことは、その時決めましょう。でもね？これだけは本当よ？」

カヤノは、楓（フィーリア）をそっと離すと、顔をのぞき込んだ。

「私も、あなたの側にいたい。これからも――ずっとね？」

「はいっ！」

楓（フィーリア）は、潤む瞳でカヤノに抱きついた。

●太平洋上空　ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）貨客ブロック

「本当に」

窓の外を眺め、後藤はぼやいた。

「こりゃ、国際線の眺めだよ」

「下手に本州沿岸なんて飛んだら、魔族軍と国連軍、どっちかに問答無用ですよ？」

横に座る涼宮遥少尉が笑いながら魔法瓶からコーヒーを出してくれた。

「はい。コーヒーも、そろそろ貴重品だそうですから」

「大事に飲むよ」

●同　操縦ブロック

「反応は間違いないのか？」

艇長がレーダー要員を兼ねる副長に訊ねた。
「間違いありません。反応が大きすぎる。識別反応なし。こちらからの呼びかけに応じません」
「くそっ。こいつは音速出せないオンボロなんだぞ？」
舌打ちすると、艇長は貨客ブロックに通じるインカムをとった。
「後藤隊長――操縦ブロックへ願います」
言いつつ、艇長はエンジン出力を上げた。
「お客さんです」

●太平洋上空
イスラフィルが錐もみのまま海面すれすれに降下。
バインダーが展開して、一瞬のうちに体勢を立て直して急上昇に入る。
「……へぇ？」
カヤノは訓練プログラムを完璧にこなしていく楓（フィーリア）の腕前に正直、感心していた。
イスラフィルとの相性は間違いなくいい。
指定高度まで上昇したイスラフィルは、ロール機動に入る。
その切れはベテラン並。
とにかく、機動の中でも空中での静止、機動の連続に騎体が余裕でついていく。
ブースターを開くことで生じるタイムラグを感じさせないのは、それだけ推進系に余裕があるということだ。
――違う。
カヤノの中の何かが、そう告げた。
そう。

違う。

ロールから回復する際に見せる、ヤクトエッジやサライマにはない装備。

尻尾だ。

ロールが終わるタイミングで尻尾が動き、ブースターとバインダー、そして尻尾の絶妙な作用でロール回復が行われている。

そして何より、推進系や各部の動作を絶妙にコントロールしてのけるパイロットの才能だ。

「……こりゃスゴイ」

カヤノはその動きを見守りながら、正直、舌を巻いていた。

自分があの子よりもっと年上でメースに乗った時でさえ、こんなに使いこなせた覚えはない。

初めての飛行訓練の時、コントロールを失って地面ギリギリまで落ちた。

あの時、操縦席で漏らしたんだっけ。

私とはレベルが違う。

この子は本当の天才だ。

この子がメース使いとして求められるのは、この才能があってこそだ。

それは褒めるべき才能か？

そう自問して、カヤノは答えられない。

「カヤノさん」

不意に、楓（フィーリア）から通信が入った。
「な、何？」
通信モニター上に映る楓（フィーリア）に異常はない。
さっき、整備兵につけてもらった監視モニターも異常は告げていない。
「どうしたの？」
そう、訊ねながら内心で首を横に振った。
ダメだな。
私、かなり親バカだ。
そう思うと、何だか噴き出しそうになった。
私が親？
父親がズルド閣下で？
冗談！
「――――どうしました？」
「う？ううん！？何でもないの！それこそ、楓ちゃん（フィーリア）こそ！」
「これから最高速テストと、急制動テストに入ります。いいですか？」
「了解。急制動は危険だから、無理しないでね？」
「はい！」
カヤノの前でイスラフィルのバインダーが開き、推進用魔力の光がブースターに集まり始めた。

本当にスゴい騎体だ。
カヤノがその光景に舌を巻いた時だ。
司令部から通信が入った。

「カヤノか？すぐに引き上げろ。付近を人類の航空機が飛行中。針路データ送る」

「こんな所で」
チッ。
舌打ちした後、カヤノはふと気づいた。
ちょっと待って。
イスラフィルに乗った楓（フィーリア）から、そんな話は聞いていない。
敵に接近したら警報が鳴るはずだ。
それが――――ない。
「司令部！」
カヤノは血相を変えた。
「ジオニクスの連中出して！イスラフィルのレーダーは使えているのかって！」

針路データが来た。

予想される敵の進路と、イスラフェルのテストコースは、偶然にも合致していた。

「まずいっ！」
カヤノは、ヤクトエッジのブースターを全開にした。

●太平洋上空

「とにかく、逃げるに勝る方法はない」
後藤は言った。
「艇長、まかせるよ。通信機貸してくれ。俺は救援を要請してみよう」
「頼みます」

●葉月湾沖合
「こちら独立駆逐中隊泉騎、ＭＣ牧野中尉。葉月ラボコントロール、聞こえますか？」
「感度良好。ただし、着陸なら許可出来ない」
「ネガティブ。理由を願います」
「緊急事態だ。お前さん達のボスが乗ったカーゴが太平洋上空で魔族軍と接触した。至急、救援に向かわれたし」
「後藤隊長のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が魔族軍と接触！？」
その通信に、血相を変えたのは美奈代だけではない。
「場所は！？」
「太平洋上空。座標は転送する」
「ったく！」
美奈代は顔をしかめた。
「護衛についていれば！どうして私は！」
「どうしますか？」
「全騎！」
美奈代は怒鳴った。
「引き返すぞ！」

●太平洋上空
グワァッツッ！
その音が早いか。

TACが一瞬にして数回転することを余儀なくされた。
「シートベルトがなかったら、死んでいたな」
後藤は艇長達の後ろの簡易シートに座ったまま、首を押さえた。
「こりゃ打ち身になったな」
「残念ながら、労災出ませんよ？」
「厄介な仕事だよ。本当に」
後藤は首の当たりを撫でた後、訊ねた。
「艇長、武装はないのか？」
「あるにゃありますよ？」
操縦桿から右手を離さない艇長が後ろも振り向かずに、引っ張り出したのは、自動小銃だ。
「こいつをフルオートでぶっ放すんです」
「やめておこう」
後藤は天井を仰ぎ見た。
「俺が撃っても当たるはずもないし」

「び、びっくりしたぁ！」
突然の遭遇に目を丸くしたのは、楓の方も同じだった。
「な、何で、こんな所に飛行機が飛んでいるの？」
楓は、戦況モニターを見た。
レーダー情報はすべてここに表示されるはずだ。
「……あれ？」
楓は、その時初めてモニターが何も表示していないことに気づいた。
コンコン。
軽く、モニターを指で叩いてみる。
ブラックアウトしている。
「……え？」
騎体がこの地球上のどこにいて、どっちを向いているか。

下手をすれば、騎体のステータスよりも大切な情報が、楓（フィーリア）の目の前から消えていた。

「……」

楓（フィーリア）は慌てて周りを見回した。

急制動をかけた時、方角を完全に見失った。

このままっすぐ飛べば、どこにいくのかわからない。

日本に戻れる保証はない。

「……」

どうしよう。

呆然とする楓（フィーリア）が思いついたことは一つだ。

自分では名案だと思った。

楓（フィーリア）はＦＣＳを操作して、目の前から遠ざかっていくＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に狙いをつけた。

発砲するつもりはない。

ＦＣＳがＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を追尾してくれる。

あのＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は、民間機じゃない。

ズームで確認したら、間違いない。

日の丸がついている。

軍隊のだ。

どっちにしても必ず日本のどこかに戻るはずだ。

だから、それについていけばいい。

逃げる方角に、日本があるはずだ。

楓（フィーリア）は、レーダーシステムに起きた障害の原因追求より、生き延びる方法をとった。

「くそっ！ついてきやがる！」

「艇長！レーダーロックされている！」

「馬鹿野郎っ！逃げ切るぞ！」

無論、全長４０メートル以上のモンスターに追尾される方はたまったものではない。

生きた心地がしない中、彼等を出迎えるかのように接近するのは美奈代達。

そして、楓（フィーリア）を助けるために接近するのはカヤノ。

共に因縁のある者達同士が、太平洋上空で再び剣を交えようとしていた。

イスラフェル　第二話

●“鈴谷（すずや）”艦橋

後藤達が魔族軍と接触したことは、すぐに“鈴谷（すずや）”にも通報された。

既に月城少佐率いる内親王護衛隊（レイナガーズ）第三小隊“ニーベルング”が発艦の準備に入っているが……

「遅いっ！」

美夜はその進捗に怒りをあらわにしていた。

「あいつら、何をとろとろやっているか！」

無理もないですよ。

副官の高木は、そう言いかけて言葉を止めた。

何に対して無理もないと言っているのか。

彼女達、“鈴谷（すずや）”に慣れていませんからね。無理もないですよ。

そう、言いたいのか。それとも、

どうせお飾り連中ですから、無理もないですよ。

そう、言いたいのか。

――どっちにしろ、あの連中の程度が知れる。

それだけははっきり言える。

副官としてつきあいが長いから、美夜が怒っている理由がそれともわかる。

「繰り返します。メサイア部隊全騎緊急発艦。各員事故防止に留意」

艦内放送が告げる通りだ。

緊急発艦。

つまり、スクランブルの指定を受けてるのに、メサイア部隊の動きは通常発艦と比較しても遅すぎるのだ。

最悪なのは、染谷達の率いる部隊。

艦載されていた部隊でないのがモロに裏目に出ている。

ついさっき、最後の一人がコクピットに収まったばかり。

状況が敵の襲撃なら、艦は沈んでいる。

――――あの連中だったら、こうはならないな。

高木は心底そう思った。

「副長」

美夜はいらだった口調で言った。

「月城少佐と染谷中尉、何かの間違いで生きて帰ってきたら艦長室に来るように伝えておけ」

「はい」

その目の前で、“鳳龍改”が発艦していった。

「八番機、戦列加わります！」

八番騎を駆る七瀬中尉の焦り気味の声が月城少佐のレシーバーに響く。

「すみません！手間取って！」

「全騎、ダイヤモンドを組め。空中戦になる。“鳳龍改”の機動力の見せ所だ」

「了解っ！」

「……とはいえ」

月城少佐は、部下に命じつつも暗然とした気分になった。

「帰ったら、これは絶対に説教モノだ」

そう呟くと、月城少佐は部下に命じた。
「全騎！ブースター最大出力にて目標に向かう。続け！」

●太平洋上空　ＴＡＣコクピット
「それにしても」
艇長は独り言のように言った。
「あのバケモノ。ピッタリ後ろについてやがる」
「現在の距離は？」
「陸地まで？それとも奴との？」
「奴とのさ」
「約１キロ。さっきから１０メートルと伸びもしなければ縮みもしません」
「たいした腕だな」
後藤は胸ポケットに手を伸ばした。
「タバコ、いいかい？」
「禁煙と言いたいですけど」
艇長は口元で笑って見せた。
「大目に見ますよ。俺にも一本下さい」

「ったく！」
ヤクトエッジのコクピットで、カヤノは正直、呆れていた。
「何て推進力だったのよ。まだ追いつかない」
ピピッ！
ヤクトエッジのレーダーに反応が出た。
反応は二つ。
一つは人類側の飛行艇。
もう一つは、サイズからしてイスラフィルだ。

「フィーリアちゃん？聞こえる？」
「――――はい」
通信の返事戻ってくるのが、妙に長く感じられた。
「無事っ！？」
「はい……その、日本に戻ろうと思って、目の前の飛行機を追いかけてました」
ほうっ。
カヤノの口から安堵のため息が出る。
「もうすぐ接触する。いい？下手なことして相手を刺激しないで！」
カヤノは念を押した。
「イスラフィルは今、武装していないんだからね？」

そう。
カヤノの駆るヤクトエッジのコクピットには、イスラフィルのステイタスモニターが設置されている。
イスラフィルの様々なデータをモニターに表示することが可能だが、武装の情報だけは、全てがゼロになっている。
近接戦闘用のＭＬ（マジックレーザー）でさえ、一発も撃てない設定になっている。
完全な丸腰だ。

――――くそっ！

カヤノはモニターから目を離して舌打ちした。

飛行テストだからそんなものいらない。
そう言ったのは確かに自分だ。
こんなことになるなら、全部の武装を搭載させておけばよかった。
敵が小型飛行艇一隻だからまだ……。

ピピッ

「あちゃぁ……」
カヤノが思わず天を仰いだのも無理はない。
モニター上に現れた、高速で接近する反応がよりによって２０近く。
それぞれ１０騎近い部隊に別れて、二手から接近しつつある。
反応は全部、敵を示していた。
交戦目的なら、狙いは間違いなく、イスラフィルだ。

「今日の星占い、どうだった……かな」
一々、グチを言ってもしかたない。
カヤノはヤクトエッジの武装にかかっていた安全装置を全て解除した。
すでにイスラフィルの巨体が小さな点として目視できるまで近づいている。
「フィーリアちゃん？聞こえてる？」
「はい」
返事はすぐに来た。
騎体を並行に飛行する。
間近で見ると、本当にイスラフィルの巨大さがわかる。
「誘導してあげるといいたいけど。そうもいかない」
「どうしたんです？」
「敵が団体様で来た。渡せる武装はこれだけ」
カヤノは、腰に下げていたビームサーベルの予備をイスラフィルに握らせた。
「最大スピードで、あっちに逃げて！」
カヤノはヤクトエッジの腕を伸ばし、日本の方角を指さした。
「イスラフィルの推進力なら逃げられる！救難部隊はすぐ来るはずだから！」
「カヤノさんは！？」

「ここで足止めする！」
カヤノはビームサーベルを抜刀した。
「ここでフィーリアちゃんを危険にさらすことは出来ない！」
「で、でもっ！」
「……ゴメンね？」
カヤノはニコリと微笑んだ。
「私、弱いから、こういう時、自分の身を守るのが精一杯なの。
それと、聞き分けの悪い子は嫌いになっちゃうの」
「……はい」
楓（フィーリア）は、カヤノが示した方角に騎体を向けた。
「後で！」
「うん……後で」

衝撃波を残して、イスラフィルが遠ざかっていく。

「……とはいえ」
カヤノはぽつりと呟いた。
「やっぱ……手助けは欲しいよねぇ……」
反応は２０以上。
さっきより間違いなく増えている。
飛行艇は遠ざかっているし、イスラフィルは撤退したから、敵は見逃してくれるかもしれない。
それに期待している自分に、カヤノは気づいた。
「……はぁ」
そんな自分に、失望のため息が出た。
「フィーリアちゃんを戦わせたくないとか言っておきながら」
片側から来た、約１０騎の反応が飛行艇を取り囲んだ。
「助けに欲しいって思うなんて」
あの１０騎が遠ざかるなら、敵は半分になる。
それに期待したい。

そう思う都合のよさが、大人の判断なのかと思う。
「……この偽善者」

美奈代達はビームライフルを装備して、飛行艇を包囲。
その筒先を周辺に向けた。
「後藤隊長、ご無事で！？」
「ああ。生きているよ」
「残念です。じゃなくて」
「……おいおい」
「大型メース1、遠ざかります。もう一騎がゆっくりと移動中。どうしますか？」
「放っておけ」
後藤は言った。
「お前さんだって――そう思ってるだろう？」
「わかりますか？」

「飛行艇、独立駆逐中隊と接触」
「ふぅ……」
MC（メサイア・コントローラー）からの報告に、月城少佐は安堵のため息を漏らした。
「無用な戦闘は避けられたようだな」
「少佐」
部下の一人から通信が入った。
「あの一騎との交戦を求めます」
「馬鹿な」
月城少佐は首を横に振った。
「無駄な戦闘は認めない」
「たった一騎でも戦果です」
部下は食い下がった。

「手ぶらで帰るよりマシです。あの騎の首をとって、“鈴谷(すずや)”の男共に見せつけてやりましょう！」
7人いる部下が口々に興奮気味なことを口にする。
「ダメだ。全騎、そのまま警戒態勢に移れ」
その申し出を、月城少佐は、わずらわしいといわんばかりに即座に却下した。
「里奈。“鈴谷(すずや)”と通信をつなげ。状況説明。指示を仰げ」

「……な、何よ」
2番騎の騎士、神坂ゆいは、月城少佐の命令に思わず口を尖らせた。
「ち、ちょっと位いいじゃない。せっかくスコアあげるチャンスなのに」
ピピッ。
騎体間限定通信が入った。
相手は隣を飛ぶ4番騎の騎士、柊未亜だった。
「何よ」
「あの敵、どうにかして仕留めたいと思わない？」
「何言ってるのよ」
ゆいは眉をひそめた。
「隊長は警戒を命じているわ？独断専行で当たったら大目玉よ？」
「だから」
未亜は悪戯っぽい顔で言った。
「向こうから撃たせるのよ」
「はぁっ？」
「いい？私達の場所は、広く見れば、静岡への敵の退路を塞ぐ位置にいる」
「この位置は、月城少佐の判断で決まったものよ？」
「そう。この場所をとっておきながら、交戦しないなんて、月城少

佐って意気地がないよ。私達がしっかり仕留めて、間違いに気づかせてあげなくちゃ」
「そ……そうかな」
「そうだよ！」
未亜は力んで言った。
「私が誘いで一発撃つから、しっかり当ててね？」
「それ、逆にして」
ゆいは言った。
「当てられる自信がない」
「――意気地なし。でも、協力はしてくれるってことね？」
「この前のお金の借り、これでチャラね」

「駆逐中隊は飛行艇の護衛体勢のまま、葉月まで後退する。月城少佐の部隊も下げさせろ」
「よろしいのですか？」
「大型騎が撤退した。あの1騎の目的は、牽制と囮と判断していいだろう」
ふうっ。
美夜は安堵のため息を漏らした。
「無駄な戦闘は避けるべきだ。敵もそう判断したからこそ、大型騎を撤退させてくれたと思いたい」
「そう……ですね」
高木副長は、不承不承頷いた。
まるで敵に期待するような発言は、軍人としてどうかと、そう思うからだ。
「通信、月城少佐に命じろ。交戦は厳禁――」
「ニーベルング小隊2番騎、発砲っ！」
「なっ！？」

「何故撃った！」
月城少佐の厳しい声が飛んだ。
「神坂、柊っ！」
フォーメーションを崩し、月城少佐が二人の間に割って入った。
「で、ですけど！」
ゆいはとっさに思いついた言い訳を口にした。
「敵が――――敵が動いたので！」
「バカがっ！」
激怒した月城少佐は、ゆいの騎を突き飛ばした。
生身だったら殴りつけていただろう。
「命令無視は軍法会議モノだぞ！」
「敵、動きます！」
MC（メサイア・コントローラー）からの鋭い声に、月城少佐はとっさに反応した。
「全騎、戦闘フォーメーション楔っ！」

「ったく！」
カヤノは騎体をかすったビーム攻撃に、顔を真っ赤にして怒鳴った。
「大目に見てくれたっていいでしょう！？」
どっちにしても、カヤノ自身、戦う気は全くなかった。
恐らく、ほとんどの魔族軍メース使いが同じ立場に立たされたらそうするだろう、はっきりとした事情があるのだ。
その事情。
義勇軍の暴走を抑えるため、魔族軍の軍規に追加された、以下の条項を読めばわかるだろう。

曰く、軍司令部からの命令によらない交戦において、敵を撃破し

た場合、戦功として認めない。

そう。

交戦命令が出ていないこんな所で戦っても、タダ働きなのだ。

こんな所で命を張っても意味はない。

お金も出ない。

幸い、敵も戦うつもりはないらしい。

遠くでこちらの出方を見張っている。

なら、こちらも逃げさせてもらえるだろう。

じゃあ、どうやって？

カヤノは、敵の真横を大きく迂回して、はっきり撤退中とわかるルートを通ることに決め、ブースターを開こうとした矢先、敵のビーム攻撃を喰らった。

人類のビーム兵器の破壊力は、魔族軍のそれと比較すれば半分程度だと知ってはいるが、それでもまともに喰らえば無事では済まない。

第一、動き出した所で撃つなんて最低だ。

情け容赦をかける必要のある相手じゃない。

――――なら。

カヤノは、ビームサーベルを掴み直すと、敵部隊めがけて斬り込んだ。

「敵、接近！」

「なっ！？」

MC（メサイア・コントローラー）からの警告と、ビーム攻撃が到達したのは、ほぼ同時。

驚いた拍子に、騎体がほんの少し、本当にわずかに動いた。

動かなかった、まさにそこを、ビームは突き抜けていった。

「――――っ！」

月城少佐は真っ青になって息を飲んだ。
自分に起きた事態を把握するだけで、精一杯だ。

部下達はもっと悲惨だ。

呆然として、指揮官に命令を乞うことさえ忘れている。
自分に、何が起きたのかわかっていない。

カヤノは、そんな月城達めがけてブースター全開で近づきつつある。

全騎が微動だに出来ない中、最も早く反応したのは、各騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）達だ。
「敵騎、接近中っ！距離１５００！」
「っ！」
ハッ。と我に返った月城少佐は、即座に怒鳴った。
「全騎、散開っ！」

「４番騎、かかりますっ！」
未亜がビームライフルを構えたまま、前進を開始した。
「なっ！？」
「柊っ！？」
「２号騎、続きますっ！」
「神坂までっ！」
「大丈夫ですっ！ここで仕留めれば――――！」
「無茶だ！」
「出来ますっ！」
未亜はビームライフルのトリガーを引いた。
火線がヤクトエッジめがけて飛んでいくが――――
まるでビームを柱に、螺旋状の機動を描いて攻撃を回避。

ヤクトエッジは未亜達めがけて迫り来る。
「やっちゃえ、未亜っ！」
いつの間にか未亜の横に並んだゆいが興奮気味に怒鳴る。
「あんなの倒したら勲章モノだよ！」
「て、手を貸しなさいっ！」
「うんっ！」

「バカッ！」
月城少佐が慌てて騎体を二人に向けた。
突き飛ばして、ぶん殴ってでも2騎を“鈴谷（すずや）”に戻す。

「お前達、何して――――っ！」

顔が腫れるまでぶん殴ってやる。
こんなこと、出来ないように！

月城少佐の目の前で、ヤクトエッジがすさまじい勢いで通過した。

「――――えっ？」

「――――えっ？」

2号騎の騎体が、あり得ない姿勢になった。
海老のように反り返ったのだ。
反り返った？
違う。
半ば切断された下半身が、移動する際に生じる合成風力に負け、
残された脊椎部の残骸をへし折りながら、後ろに跳ね上がっている

のだ。

「神……坂？」

呆然とする月城少佐の前で、

ズンッ！

鈍い音を立て、神坂騎が炎の球に変わった。

「神坂ぁぁぁっっ！」

「エジェクト、確認出来ませんっ！」

「くそっ！」

月城少佐は抜刀した。

ヤクトエッジは、鋭いターンをかけ、こちらに向かってくる。

「“鳳龍改（こいつ）”の機動力、なめるな！？」

剣を下に下げ、突撃してくるヤクトエッジを前に、月城少佐は、

斬艦刀で八相の構えをとる。

一撃を差し違えてでも当てる！

月城少佐は上唇を軽く舐めた。

彼女のジンクスのようなものだ。

ギリギリ一発勝負の時、これをやると大抵上手くいく。

そんな縁起担ぎ。

だが――

彼女は勝負の女神から見放されていた。

絶対勝利の信念を持つ彼女の前に現れた白い影。

それは――

「柊っ！？」

「ゆいの仇いいいいいっっっ！」

４号騎、未亜だ。

「何で！」

未亜は、ビームライフルを乱射しながら怒鳴った。

「誘ったの私だ！」

敵は信じられないほどの高機動でビームを次々と回避しつつ、次の獲物と認めた未亜に迫り来る。

「なのに！どうして！」

ビーッ！

ビームライフルの残弾が尽きた。

未亜はビームライフルを放り捨てると、斬艦刀を引き抜いた。

「どうして、私じゃなくて、ゆいを斬った！？」

「どけっ！柊っ！」

「どうして！」

未亜は滅茶苦茶に斬艦刀を振り回した。

高速で飛来する敵。

振り回していたら当たる程度の発想だ。

未亜が、怒りに我を忘れている証拠のようなものだ。

「どうして、ゆいを斬ったぁぁぁぁっっ！」

「どけっ！井吹っ！コントロールを柊から剥奪して戦域を離脱しろ！許可するっ！」

だが――

月城少佐の判断は、遅かった。
否、このタイミングで出すべき命令ではなかった。

絶対に命中する！
怒りに我を忘れようとも、未亜は内親王護衛隊（レイナガーズ）に抜擢される程の腕前はある。
その彼女が、これ以上ないというタイミングで斬艦刀を振り下ろそうとした。
ＭＣ（メサイア・コントローラー）からのコントロール剥奪は、まさにそのタイミングで行われたのだ。
ガンッ！
不意に、コクピットに金属の重い音が響き渡った。
「えっ！？」
愕然とする未亜の掴むＳＴＲシステムは動こうとしない。
攻撃が出来ない！
目の前には、漆黒のメースが剣を構えて迫ってくる。
回避は――――間に合わない！
「ひ――――っ！」

ヤクトエッジは、柊騎とのすれ違い様、下からすくい上げるようにしてその両腕を切断した。

ザンッ！

鈍い音がして、剣を握ったままの両腕が宙に舞った。

「あああああっっっっっ！」
ＳＴＲシステムから腕を引き抜いた未亜か、悲鳴を上げながら両

腕を抱きしめてコクピットをのたうち回る。
「イヤぁぁぁぁっっっ！」
戦闘服越しとはいえ、体がＳＴＲシステムや計器類にぶつかり、露出している肌が傷ついて未亜は血まみれになった。
それでもなお、未亜は悲鳴を上げて暴れるのを止めようとしない。
「腕、腕がぁぁぁっっっ！」

「４号騎ＭＣの井吹少尉です！柊中尉がシステムパニックに！」
ＳＴＲシステムを使っていると、騎体のダメージと自分の体のダメージを混同し、パニックに陥ることがある。
それをシステムパニックと呼ぶ。
騎体の両腕を、未亜が自分の腕が斬られたのと混同して精神的に錯乱したのは、まさにその典型例だ。
そんな柊騎のすぐ間近で、ヤクトエッジは騎体をとんぼ返りの要領でバンクさせ、再び柊騎を狙う動きを見せた。

「早く離脱しろっ！」
月城少佐は、柊騎を突き飛ばしながら怒鳴った。
「井吹っ！お前――死にたいのかっ！？」

「柊騎、りだ――」
井吹少尉は、月城少佐に答えることが出来なかった。
ヤクトエッジは割り込んできた月城少佐の騎をあっさりかわすと、ビームサーベルを深々と柊騎に突き入れたのだ。
胸部装甲の真下から上にむかって入ったサーベルは、未亜と井吹少尉を悲鳴を上げるヒマさえ与えることなく、この世から消し去った。
次の瞬間、“鳳龍改”が、炎の中に消えた。

「柊いいいっっ！」
「敵――来ますっ！」
「このぉおおっっっっ！」
「駆逐中隊、泉、風間両騎が接近中！」
「知るかぁぁっっ！」
月城少佐は、左手に構えたビームライフルを発砲しつつ、部下に怒鳴った。
「残存騎はすべて“鈴谷（すずや）”へ帰艦せよ！これは命令だ！」
「牽制くらい出来ますっ！」
三番騎を駆る熊谷中尉が叫びながら、月城少佐騎に迫るヤクトエッジに、牽制のビームライフルを乱射する。
「そうです！」
５番騎、鳴瀬少尉もそれに続く。
「私達の部隊章は、流行のアクセじゃないんですっ！」
「よく言ったと褒めてやりたいが！」

しかし――

ヤクトエッジは、降り注ぐビームの雨をものともせずに月城少佐騎に迫る。
月城少佐の見た限り、敵のエモノは、ビームライフルとビームサーベルを兼ねている。
武装で敵との間合いを計ることは出来ない。

「――ぐっ！」
騎体を斜めに横滑りさせた途端、足下をビームがかすめていった。
月城少佐が左手のビームライフルで応戦するが、ヤクトエッジの機動は、その攻撃を回避するのに十分過ぎた。
「こいつ！」

月城少佐は、騎体を前進させた。
間合いを開けば、機動性に勝る敵の思うつぼだ。
不意に、ヤクトエッジは、月城少佐の前で急上昇をかけた。
「間合いをとるつもりか！？」
とにかく間合いを詰めたい。
格闘戦に持ち込めば、出力差は埋められる。
だから――
「させるか！」
月城少佐は騎体のブースターを開き、ヤクトエッジを追った。

月城少佐が、照準にヤクトエッジを捉える前に、ヤクトエッジは、雲の中に飛び込んだ。
白い雲の中に、その漆黒の騎体が消える。
月城少佐の脳裏に、危険だ！という警告が何度も現れる。
敵の動きが見えない以上、下手な行動は自殺行為だと、理屈ではわかっている。
ただ、４人の部下と2騎のメサイアを失ったことが、月城少佐の判断を完全に狂わせていた。
彼女自身、そのことに気付いていない。

「こいつは――――！」
ビームライフルを雲の中に撃ち込む。
まるで、それから逃れるかのように、ヤクトエッジが雲の中から飛び出してきた。
「ああっ！？」
目を見開く月城少佐。
ヤクトエッジのスピードは、“鳳龍改”の機動性能をもってしても、回避出来る代物ではなかった。
脚からスライディングするかのように飛び込んできたヤクトエッ

ジの左足が、月城少佐騎のシールドをビームライフルや左腕部の装甲と共に吹き飛ばした。
ブースターの推進が止まり、騎体が後ろに下がった。
ヤクトエッジに二度目の蹴りが、その胸部装甲にまともに決まった。

「こんな一本調子で！」

「なっ！？」
驚愕する月城少佐の目の前で、さらにヤクトエッジのシールドが動いた。
シールドアタックは、月城少佐騎の横っ面をまともに捉えた。
ダメージのせいでコクピットの対Ｇ制御が全く効かない。
普段なら考えられないようなＧが体にかかり、体中の血と肉が骨から引きはがされたかのような苦しみが全身に走る。
「ぐぅぅぅっっっっ！」
気絶しそうな中、月城少佐は失いかけている騎体のバランスを取り戻し、騎体を後退させるのがやっとだ。
騎体のダメージを気にしている余裕はない。
目の前が真っ暗になる。
急激なＧのせいで脳に血が回らなくなるブラックアウト現象だ。
「く、くそっ！」
歯を食いしばって、意識を保つのがやっとだ。
「主よ！」
月城少佐は祈った。
祈るしか、出来ることはなかった。
「私に、部下の仇を……討たせて……下さいっ！」

「ここでまっすぐ飛ぶなんて」

まさか、パイロットにそんな事態が起きているとは想像も出来ないヤクトエッジは、容赦なく月城少佐騎を追撃する。

「はっ！？」

Gがゆるみ、ブラックアウトから何とか回復した月城少佐が次に見たのは、モニター一杯に迫るヤクトエッジの姿だった。

「死にたいのか！？このバカっ！」

「簡単に死ぬわけにいくかっ！」

ヤクトエッジのビームライフルから伸びる刀。

それを前に、月城少佐は、“鳳龍改”の肩にマウントされているビームサーベルを引き抜いた。

ビームの刀身同士がぶつかり合う。

「ぐっ！？」

「きゃっ！？」

ビーム同士の反発力が生じ、2騎はそのエネルギーに弾かれ、間合いを開いた。

この突発的出来事を着実にモノにしたのは、月城少佐の方だった。

攻撃姿勢を解いてしまったヤクトエッジに、月城少佐は襲いかかった。

「主よ！」

上段の構えから一気に斬艦刀を振り下ろそうとする。

勝った！

月城少佐は勝利の予感に歓喜しながら叫ぶ。

「私に――――力を！」

目の前に、剣を振り上げた敵が迫る。

「ああっ！？」

カヤノは照準もつけず、とっさにビームライフルを発砲した。

筒先から放たれるエネルギーの光は、月城少佐騎を至近距離から襲った。

「見えたっ！」

美奈代達が戦域に到達したのは、まさにそのタイミングだった。

月城少佐が、敵に襲いかかった。

勝った！

美奈代はズームした“白雷（はくらい）”の眼が捉えた映像を見て、そう思った。

敵は炎を上げて海に墜ちる！

そう、思ったのだ。

ところが――

「――えっ？」

次の瞬間。

火を噴いたのは月城少佐騎の方だった。

頭部から盛大な炎を噴き出し、両腕を万歳するように真上にのばし、そのまま、まっすぐに海へと墜ちていく。

ヤクトエッジが、その脇をすり抜け、遠ざかっていくのを、美奈代は呆然と見守るだけだった。

「月城少佐……が？」

「月城少佐騎、頭部に被弾！」
牧野中尉が怒鳴る。
「ＭＣＲ大破、ＭＣ戦死！」（メサイア・コントローラー・コントローラー）

「き、騎体の回収を！」
美奈代は“白雷（はくらい）”のブースターを開いた。
「こちら独立駆逐中隊泉大尉！内親王（レイナガーズ）護衛隊残存全騎に告げる！何をしているか！」
月城少佐騎が海面に叩き付けられた。
脚部が吹き飛んで、大きくバウンドする。

内親王（レイナガーズ）護衛隊の残存騎が、月城少佐騎の救援のため、海面を目指したのは、その直後だった。

ボタン　第一話

●東京都葉月市近衛軍開発局　紅葉専用ラボ

交戦位置から、東京の方が近いと判断された月城少佐騎を回収した内親王護衛隊（レイナガーズ）は、葉月市の軍開発局に収容された。

頭部を吹き飛ばされた衝撃で胸部構造物にも深刻なダメージを受けた“鳳龍改”は、フレームが歪んだせいで胸部コクピットハッチが飛ばず、整備兵によってバーナーで装甲を切断する必要があった。

半ば潰れたコクピットユニットが引き出され、月城少佐はそこから救出された。

バーナーで焼かれた素材の臭いが立ちこめる中、血まみれの少佐がコクピットから引き出された光景をまともに見た美奈代達は、その日の夕食に出されたハンバーグのトマト煮込みを食べることは出来なかった。

夕食後の定期ミーティングの席上、

「月城少佐は一命を取り留めた」

後藤からそう聞かされた面々は、ホウッと大きな安堵のため息を漏らした。

「明日、精密検査を受けて、明後日には現場に復帰するよ」

「……は？あの」

都築はあきれ顔で訊ねた。

「俺、収容作業手伝いましたけど、確か内蔵にまでかなりのダメージがあるとか」

「骨折9カ所。うち2カ所が複雑骨折……いやはや、お前達も気をつけろよ？若いんだからって、無茶すると、俺の年の頃にくるものあるんだから」

「あの、そうじゃなくて」

「丁度、腕のいい療法魔導師がいてくれてね？そいつがあっさり直

してくれた。便利なもんだね。ああいう連中は」
「……」
「内親王護衛隊（レイナガーズ）は隊長不在。副長の柊中尉は命令無視の挙げ句が戦死。エリート部隊ってのは、どうしてこうクセのある連中が揃ってるのかね」
「月城少佐も、処罰を？」
「当然でしょ？部下の暴走を止められず、挙げ句が最新鋭メサイア３騎喪失。騎士、ＭＣをあわせて４名戦死させたんだ。元総隊長といえど、処罰は免れない」
「……」
「覚えておけ？現場にいる限り、立場が身を守ってくれることはないんだ。保身はかりたかったら、将校になって後方勤務になるこった」

●夜

夕食後、美奈代は“白雷（はくらい）”の収まっているハンガーに入った。
明日から整備に入るというので、せめてコクピット周りの清掃くらいはしておこうと思ったのだ。
整備から借りた雑巾と消臭剤、洗剤の入ったバケツを手に、重力の効いた通路を歩く。
正直、美奈代は自騎のコクピットに誰かに入られるのを嫌う。
自分の体臭にまみれた所に入り込まれるのは、下着の中に顔を突っ込まれるのと同じようで、女としてどうにも気になるのだ。
だから、普段からコクピットから出る時は消臭剤を散布する。
皆やっている。
女性騎士にとっては最低限度のマナーだと、美奈代もそう思っている。
……女性騎士の乗るコクピットが、“女子トイレ”と陰口をたたかれる理由は、ここにある。どうでもいい余談だが。

「忘れ物はなかったかな」
掃除の前に、データをとっておきたかった美奈代は戦闘服のポケットに指を突っ込んだ。
「レーションのチョコでも残っていれば……」
指にひっかかった何かが、
カンッ
音を立てて床に落ちた。
「……ん？」
拾ってみると、それはボタンだった。
「あれ？」
美奈代は戦闘服のポケットに触れてみた。
皆、ボタンはついている。
「……？」
ボタンを眺めながら、これが何だったか、しばらく考えた後、
「あっ！」
やっと思い出した。
天裁システム攻防戦の時発見された、中華帝国軍高官達の死体の山。
あそこで見つけたんだ。
どうして、こんな所にあったのか、わからない。
戦闘準備だ何だで忙しくて、そのままになっていた。
あれからしばらく時間も経っている。
あの時、周りに聞くなりしていれば、話は違ったかも知れないが、今となってはどうなのだろう。
我ながら、自分の忘れっぽさにあきれるしかない。
「まぁ……いいか」
そうやって、厄介ごとを先送りする性格の問題だと、いい加減気付くべきだろうが、美奈代はそれをポケットに押し込んで愛騎に向かった。

美奈代にとって、大切なのはこんなボタン一つではない。
コクピットの体臭をどうやって抜くかの問題なのだ。

●翌日

「……それで」
美奈代は、おでこに湿布を貼ったまま、渋い顔をして朝食の席に座っていた。
「コクピットの下に落ちていたチョコレートを拾おうとして」
「……」
「ＳＴＲに頭をぶつけて、朝までノビていたというのか？」
「……これはその時のじゃない」
「ウソがらしくないのが泉らしい。それにしても」
宗像は苦笑しながら言った。
「涼もたいしたものだな。泉がいないとなったら、すぐに見つけだすとは」
「そりゃもう」
美奈代の横で、美奈代の体にすり寄るように座る涼が嬉しげに頷いた。
「お姉さまですから」
「……目が覚めた時、戦闘服が脱がされていたのはなぜだろう」
「ふふっ」
涼は嫣然とした笑みを浮かべたまま、美奈代の反応を楽しんでいる。
「ほう？」
宗像は、それで二人に起きたことを察した。
「美奈代を抱えたまま、どこかにフルダッシュで消えたと聞いたが」
「……それだけじゃない。ベッドに手錠で拘束されていたんだ。しかも手足で」
「セットで買っても、高くはなかったろう？」

宗像は自信満々で言った。
「手錠は役立つと、私が言ったとおりだったろう？」
「はい♪」
「宗像、お前の差し金か！？」
「人聞きの悪いことを言うな」
宗像は憮然としてコーヒーカップに口を付けた。
「私は、お前をモノにするために必要なノウハウを教えただけだ――で、涼」
「……っ」
何故か美奈代は、顔から火を噴き出す程、赤くなった。
「聞くまでもないと思うが……首尾は」
「宗像ぁっ！」
「食事中にそうわめくな。マナー違反だぞ」

「ふふっ」
なぜか涼は、うっとりとした顔で号泣する美奈代の腕にすり寄るだけだった。

“白雷（はくらい）”達の解体が始まっていた。
装甲が全て外され、あちこちから火花が上がっている。
これでしばらくは戦闘に駆り出されない。
そう思うだけで心は軽い。

だが――

「問題はね？」
紅葉は難しい顔をして言った。
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）なのよ」
「は？」

「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクと飛行ユニットの兼ね合いなのよ」
「……つまり」
美奈代は首を傾げながら、紅葉の説明で欠けている所を補足した。
「背中にマウントするスペースの問題で、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を搭載すると、飛行ユニットが搭載できない」
「それだけじゃないわよ」
紅葉は鼻の下と上唇の間にボールペンを挟んだまま唸る。
「増設する脚部ブースターと関節部のバランスもあるし」
「……いっそ、第四種装備はどうです？あれ、確か追加ブースターついてるって」
「次から次へとあんたの愛人達が部品ぶっ壊してくれたおかげで、交換パーツの製造だけで生産が精一杯よ。狙撃隊っていっても、周辺着弾とかで装甲板傷だらけ。いい？対レーザーコーティングって、傷つくとそれだけで意味なくすんだから」
「あの？あ、愛人って？」
「あれ？小清水少尉とはそういう関係なんでしょ？」
紅葉は意地の悪い顔で言った。
「どう？今朝の感想は」
「だ、誰から聞いたんですか！？」
「宗像中尉」
「――失礼します」
美奈代は半泣きになって席を立った。
「話は、宗像ぶってからに」
「待ちなさいって」
紅葉が止めた。
「膜一枚、同性に破られたからって」
「そこまでいってませんっ！」
「ああ……」
なぜか紅葉が赤くなる番だった。

「挿入（いれ）るタイプのプレイではなかった」
「やっぱり殴らせてくださいっ！」
「……冗談よ。ったく、そんなクソマジメな性格だから、みんなにイジられるんだって」
「……」
「座りなさい。とにかく話戻すわよ？」
美奈代は、胸部装甲が外され、フレームや機器類が丸見えになった愛騎を見上げながら、質素なパイプ椅子に座り直した。
「ご存じの通り、三次元上の任意の一点を二つの物質が占めることは実質不可能」
「……広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクと飛行ユニットを一体化することは？」
「タンクとユニットの可動部分が干渉しちゃって無理。かといって、タンクを小型化すれば戦闘に支障が出るからねぇ……」
どうしたもんか。
紅葉はカリカリとこめかみのあたりをボールペンの端で掻いた。
そうしていると、まるでテスト問題にとりかかる、年頃の女の子だな。と、美奈代は何だか微笑ましくさえ思えた。
「……何？」
「いえ」
美奈代はクスッと小さく笑った後、首を横に振った。
「結構、重要な問題なのよ？」
紅葉は抗議するような口調で言った。
「“白龍”の開発でもいろいろ議論にはなってるの。
次世代メサイアは、空中戦等能力が絶対必須になるとはいえ、最大の目玉の広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を無視出来ない。
作戦に応じて選択式にするかどうするかってね」
「それがベストとは思いますけど。一緒にすることに、何か問題が？」
「だから」

紅葉は呆れた。という顔になった。
「飛行ユニットはブースター以外にも翼の代わりとして機能するから、ある程度可動する必要があるのよ。戦闘機に例えたら可変翼。あれよりもっと大きく動く。“鳳龍改”のバインダーの動き、見たことない？」
「そりゃありますけど」
美奈代は、うーん。と首を傾げた。
「ＦＧＦ（フリー・グラビティ・フィールド）の反作用は？」
「――――あ？」
「つまり、普通にメサイアが搭載しているブースターって、ＦＧＦの反作用の応用ですよね？」
「魔法科学技術の物理学的応用について、講義を受けたければしてあげるわよ？」
「結構です。物理っての思いついたヤツは、絶対に地獄行きです」
「高校時代、理系で苦労した口ね」
「一年から卒業するまで何回追試って、何言わせるんですか！」
「そんなにヒドかった？軍隊入って活躍できる文系って珍しい子ね。あなたって」
「……とにかく」
「言いたいことはわかる。確かに、標準的なメサイアが搭載しているブースターは、ＦＧＦの反作用を任意の場所、多くは背中において発生させる。広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の場合は、リキッドタンクの下あたり」
「つまり。その反作用は、タンクに影響を与えない？」
「当たり前でしょう？単なる重力変化だもん」
「なら」
美奈代は、近くに置かれたままの飛行ユニットと広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクを交互に見ながら、ぽつりと言った。
「反作用だけで高機動を生み出すことは不可能？」
「……」

紅葉はしばらく沈黙した後、答えた。
「――不可能じゃない」
「可能？」
「ただし、それなりに大型のフィールド発生スペースを必要とする」
「どれくらい？」
「――メサイアの背中一杯分」
紅葉はそこまで言ってから、美奈代が言いたいことに気付いた。
「つまり」
テーブルに置かれていたメモ用紙にリキッドタンクらしき物体を描き、そこになにやら得体の知れないデザインのカバーみたいなものを書き加えた。
「発想の転換をしろと、そう言いたいんでしょう？
飛行ユニットは空力的な意味で翼を必要としている。
私達は、翼という空力的な概念に囚われているからダメなんだ。
翼を必要としない、ＦＧＦの反作用による高機動を導入すべきだって」
「いや、そこまでは」
「発想は正しいと思う」
美奈代の言い分に気付かないのか、紅葉は、筆記体でメモ用紙の絵に次々と書き込んでいく。
「盲点と言えば盲点よね。
リキッドタンクの上に飛行ユニットをマウントさせる。
成る程？
こうすれば、肩に両方をどうやってマウントさせるか考えていた事自体がバカの発想に思えてくる」
「……はぁ」
「反作用を応用すれば、ホースの可動にも干渉を避ける事が出来る――あ、ダメだ」
「えっ？」
「パワーが足りない」

「“白雷（はくらい）”で、ですか？」
「うん」
紅葉は、メモをくしゃくしゃと丸めて、ゴミ箱に放り捨てた。
ゴミ箱の入り口に弾かれて紙がコンクリの床に転がった。
「ちっ」
舌打ちすると、紅葉は席を立ってゴミを拾うと、“融解処分行き”と書かれたゴミ箱に紙くずを入れた。
その向こうでは、“白雷（はくらい）”の脚部が外され、ふくらはぎにあたる部分に入った巨大なダンパーが丸見えになっていた。
美奈代は、振る舞いが大雑把な紅葉が、ゴミの分別を気にすることより、自らの騎体の意外な構造の単純さに驚いていた。
「お待たせ――どうしたの？」
「いえ。出力って、そんなに不足なんですか？」
「予備エンジンをどこかに入れるしかない。出来れば、正規サイズのエンジンを増設したいけど」
「そんなことしたら、ＭＣさん達の処理がパンクしますよね」
「へ？やり方よ」
「やり方？」
「そう。大尉が言いたいのは、精霊体を二つ管理するのは大変ってことでしょ？」
「はい」
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒはバージョン４まで安全性のために独立した精霊体を入れてたけど、今度のバージョン５改修で精霊体を一つにした」
「それってまさか！」
「精霊体を“殺した”んじゃないわ？元々疑似人格だもの。融合させたのよ」
「融合？」
「精霊体同士を一つの人格にまとめ上げるの。最近、立花大尉が発明した、精霊体のリハビリ方法の一種の応用なんだけど」

「立花大尉って――あの」
「そう。あのペド野郎のこと。二宮大佐、未だに諦められないらしいけどね。立花大尉もいい加減、気付いているみたいだし」
「そ、そうなんですか？」
話題が二宮のことになった途端、美奈代は知らずにテーブルに身を乗り出していた。
「戦争が終わって、しばらくしたらゴールインかな？」
「本当ですか！？」
「私の希望よ」
紅葉は肩をすくめた。
「そうなって欲しいって」
「……」
「軍隊なんて、長居するもんじゃないわ」
「……そう、ですね」
美奈代は席に座り直した。
「それで？」
「魔晶石エンジンをバラした時に、精霊体の自我は眠りに入る。その時、二つの魔晶石に一つだけのジェネレーターを装着させると、片側の自我が二つの魔晶石をコントロールすることが出来るの。そのジェネレーターと相性が良い精霊体の自我が勝っちゃうのね。で、この方法だと、精霊体の自我をもう一つの魔晶石にコピーすることも出来るの。
トラウマとか傷物（クラック）の入った魔晶石を使い物にする、今のところ、一番ソフトな修復方法よ」
「……それが？」
「つまり」
紅葉は紙コップに入った紅茶に口をつけた。
「……プハッ。魔晶石エンジン出力を二倍にしたければ、そんな方法もあるってこと。
Ｍ６４みたいに、単なるジェネレーターの大型化でもいいけど、

それだと冷却系も二倍にする必要あるから、どっちにしても構造的に無理ね」
「どうしてです？」
「だから、魔晶石をもう一つ、入れる余裕がないんだって。スペース的に」
美奈代はエンジンの入っている胸部を見た。
様々な機械類が入っているそこは、自分まで部品として入っている場所。
その詰め込みぶりは、
「確かに」
そう言うしかない。
「でしょう？外に増設エンジンを置いてもなぁ……」
「……あのですね？」
美奈代は訊ねた。
「魔晶石エンジンを二つと、ジェネレーターって、離れて設置することは出来ないんですか？」
「不可能じゃないわよ？」
紅葉は答えた。
「魔晶石にサブジェネレーターつけて、バイパス通して、メインジェネレーターにつなげればいいんだから」
それが？紅葉はそんな顔をして美奈代を見る。
「なら、いいところがありますよ？」
「どこ？」
「そこ」
美奈代が指さしたのは、脚部だ。
「は？」
紅葉はあきれ顔で言った。
「脚？」
「そうです」
美奈代は頷いた。

「魔晶石とジェネレーターって、爆発防止を兼ねて頑丈にコーティングされているんですよね？」
「え？ええ。かなり頑丈な設計にはなってるけど」
「ダンパーの中にエンジン組み込むこと出来ませんか？」
「……」
紅葉はあんぐりと口を開けたまま、信じられない。という顔で美奈代に尋ねた。
「あんた……どういう才能の持ち主？」
「私ですか？」
美奈代は苦笑しながら言った。
「凡人です。凡人の、かなり下にいる」
「……」
「……どうしました？」
「後でいろいろ、調べさせてもらうけど」
「痛いのはイヤですよ？」
「我慢しろ。とにかく、脚部のふくらはぎなら冷却系の廃熱をそのまま外に排出出来るし……これは盲点だったな」
紅葉は真剣に脚部を見つめながら、ポツリと言った。
「素人は天才に勝る……か。私もまだまだ……ね」
「あの？」
「とにかく」
紅葉は席を立った。
「大尉との会話は極めて有意義だった。ありがとう」
「い、いえ？」
突然、会話を切り上げられたことに、美奈代はとまどうしかない。
「私……もしかして、何か？」
「うん？何も？」
「そ、そうですか」
「……ああ、大尉」
「は？」

「改修、長引くからね？」
設計、根本からやり直しね。
エンジン確保しなくちゃ。
紅葉はそう呟くと、小走りにどこかへ走り出した。

「……ということがあった」
夜。
宗像の部屋で、美奈代は昼間の出来事を語り終えた。
「いろいろ大変だな。お前も」
宗像は戦闘服の手入れをしていた。
コクピットにひっかけるなどして裂けた部分に補修剤を当てるまではよかったが、ボタンの縫いつけとなると、針に糸を通すレベルから、宗像は四苦八苦していた。
やっと糸が通ったと思ったら、何度も指に針を刺してそのたびに涙目になっている。
どうやら、宗像は裁縫は苦手らしい。
完璧系の麗人と思っていた宗像にも、それなりに苦手なものがあると知った美奈代は、ちょっとだけ嬉しくなった。
美奈代はコーヒーメーカーからカップにコーヒーを注ぎ、デスクの上に置くと、ベッドに座った。
「さっき、エンジンを脚部にマウントして、エンジン出力二倍に跳ね上げる改修が加わると後藤隊長から聞かされた」
「ほう？」
宗像の手が止まった。
「それは」
「そう」
美奈代は頷いた。
「ここだけの話と念を押されたが、宗像ならいいだろう。
成功すれば、“白雷（はくらい）”は、現行の“白龍”を出力の面でほぼ上回

ることになる」
「重畳だ――痛っ！」
「しかし、どうしたんだ？」
「気がついたら、ボタンがなくなっていたんだ」
「ボタン？」
ピクリ。
美奈代の眉が動いた。
「――いつ頃だ」
「さぁ？」
「チベットの頃じゃないのか？」
ピクリ。
宗像の手の動きが止まった。
「そんな頃かな」
妙な間合いの後、宗像は再び、針を動かした。
「よく覚えていない」
「……ボタンというのは」
美奈代はポケットから取り出したモノを、宗像の目の前に放り投げた。
戦闘服の上で転がったのは、ボタンだ。
「これか？」
「……似たものはあるだろう？どこに転がっていた？」
「チベットの天裁システムの中」
「……」
「近くには、中華帝国軍の高官達の死体が山になっていた」
「……見間違いだろう」
「ボタンに刻印されている近衛のエンブレムは中国で一般的だというのか？」
「……誰かに言ったのか？」
「ボタンを拾ったこと自体、誰にも言っていない」
美奈代は手にしたカップをサイドテーブルに置いた。

「部隊長として聞きたい。真面目に答えてくれ」
「……」
「私は、お前を信じている。だから、本当の所を教えてくれ」
「……」
宗像は、小さくため息をついた。
「……なんだ」
「あの時、擱座した騎体から脱出したお前は、逃げ回っていたというが」
「……」
「……お前」
「……」
美奈代は、どうしていいのか全くわからない。
何と返答されるのか。
返答がどうだろうと、それに答える用意が全くない。
それでも、美奈代は訊ねずにいられなかった。
「お前、どこにいたんだ?」

ボタン　第二話

「どこにいた？」
クックックッ。
宗像は喉を鳴らして低く笑った。
その喉の中で、お前は。と、美奈代を嘲るような声がしたのを、美奈代は聞き逃さなかった。
宗像は、まるで嬲るかのような口調で訊ねた。
「……どこにいたと思う？」
「それを私が聞いている」
美奈代はムッとして答えた。
「質問に答えてくれ」
「答える義務が？」
「私は個人として話をしていない」
「……カタブツが」
宗像はフウッとため息と共に答えた。
「一々、覚えているはずがないだろう？」
「それが、答えか？」
「お前が私の立場なら、どう答える？周りは敵だらけ。どこに逃げていいかもわからない。流れ弾がどこから飛んできて、どこから敵が来るか、下手したらメサイア戦に巻き込まれて終わりってこともある。そんな中で、一々、どこのどの通路を走って、どの部屋に入ってなんて、こんな後になって喋れと言われて答えられるはずがないだろう」
「……」
「……」
「……なんだ」
「見たんだろう？」
「……何を」

「あの部屋で、何があったか」
「何故、そう思う」
「何を見た」
「だから」
「……宗像」
美奈代は軽く息を吐くと、天井を仰ぎ見た。
「もう、何ヶ月だ」
「何が」
「富士学校に入学して、お前と出会ってから」
「……何が言いたい」
「つきあいは、決して短くないと言いたいんだ」
美奈代は、まるで慈しむかのような、優しい視線を宗像に向けた。
「お前が、外見とは違って、中身は素直で純真な乙女タイプだと、もう知っている」
「……何だ、それは」
「はっきり言うが、お前はお前で、ウソが下手すぎる」
「何？」
宗像はムッとして答えた。
「私は少なくとも、お前のような口べたには言われたくない。それに」
「そうそう」
美奈代は楽しげに頷いた。
「ウソをつく時は、妙にぶっきらぼうか、それとも多弁のどちらかになる。そして口調は必ず早口」
「……っ」
「外れた試しがない」
「……それで？」
「自覚はしていたらしいな」
「それで、どうした？そう聞いた」
「……あの部屋で、何があった」

「……」
宗像は、しばらくの沈黙の後、言った。
「……知るか」
「宗像」
「お前が言いたいのは、私が隠れた部屋の一つについてだろう。私は知らない。私が逃げ出した後で何があったかなんて、私はエスパーじゃない」
「……」
「……」
美奈代は、小さく頷いた。
「わかった。お前を信じる」
「そうしてくれ。中華帝国政府の要人が、大量に殺された事は、話として了承している。
お前まさか、私が殺したと疑っているんじゃないだろうな」
「……いや」
美奈代は首を横に振った。
「ただ、あそこでボタンが転がっていた。あの殺しと、物的証拠……接点が気になっただけだ」
「後藤隊長が乗り移ったか？」
「怖いことを言わないでくれ」
美奈代は自嘲気味に笑って見せた。
「慣れないことはするもんじゃない」
「そういうことだ――第一」
宗像は戦闘服をデスクの上に置くと、椅子から立ち上がった。
その手にはボタンが握られている。
「こんなもの、よく見つけたものだ」
ポイッ。
宗像はベッドの上に座る美奈代の手に、ボタンを落とした。
美奈代は、全く警戒もせずにそのボタンを両手で受け取った。

そして――

「えっ？」

気付いた時には遅かった。

美奈代は、両手を宗像に掴まれ、ベッドの上に押し倒されていた。

両腕を押さえられ、上からのしかかられている美奈代は身動きがとれない。

フワッと甘い香りが鼻腔をくすぐる。

宗像の香水だと気付く程、宗像の顔がすぐ近くにある。

それに気付いた時には、遅かった。

「む、宗像ぁっ！？」

「だが、嬉しいぞ？」

宗像は微笑みながら言った。

「お前が、それほど私を見てくれていたとはな」

「い、いや……あの」

美奈代は返答に窮しながらも、何か弁明じみたことを言おうとしたが、

「んっ！？」

その口を、宗像によって封じられた。

びっくりするほど近くにある宗像の顔。

トロリととろけそうなほど柔らかい唇の感触。

鼻腔一杯に感じる甘い香り。

とっさの事に凍結した脳が解凍を終えた時、美奈代は全身の力が抜けたのを、確かに感じた。

「……んっ」

――快楽は毒針と同じ。
――自分から抜こうとさえ思わなくなる。

いつだったか、宗像がそんなことを言ったのを、ふと思い出した。
その時は、嫌悪感しかなかった。
そんなバカな。
そう思った。
だが――今は？

「んっ？」
宗像の舌が、唇を押し分けて入り込んでくる。
その動きが恐ろしいほどもどかしい。
拒むべき口が、自ら望んで開かれていく。
嫌悪すべき同性の舌が、今は甘く、せつない。
「……んっ」
ただ、舌が口の中で動いているだけなのに、なるで体全体を嬲られてるような、不思議な感触が全身に走り、体を身悶えさせてしまう。
嫌な感触じゃない。
まるで逆だ。
体をとろけさせるような未知の快楽を、体が無意識に受け入れてしまう。
「……」
美奈代はそっと、宗像と舌を絡めた。

「涼に仕込まれたか？」
唇を離した宗像は、美奈代のうなじに舌を這わせながら訊ねた。
「……バカ」
スウェットの中に入り込んでくる手を払いのける手を、受け入れ

てしまう。
自分から、体を動かして誘ってさえしまう。

一体、私はどうしたんだ？

美奈代はあれほど嫌っていた宗像の性癖を喜んで受け入れようとする、自分の体に驚くしかない。

体が理性に訊ねるのだ。

この快楽を、お前はどうして拒むのか？
快楽を、何故嫌悪するのか？

その問いかけに、美奈代は答えられない。

理性が快楽の前には無力。

そのことを、美奈代は思い知らされた。

「素直な娘にはご褒美だ」
宗像の両手が、美奈代の腰に回された。
「……あっ」
知らずに、美奈代の腰が浮いた。
まるで誘っているかのような仕草。
それは、自ら意識したことではないはずだ。
そう思えば思うほど、浮いた腰が恥ずかしい。
「……いい娘だ」
耳元で囁かれる言葉が甘く、脳を痺れさせる。

宗像の手が、スウェットのシャツをたくしあげた。
宗像の目の前で、白い双丘があらわになった。
羞恥心よりも、
心臓が破れそうなほどの緊張感よりも、
何か不思議な期待が全てに勝ってしまう。
まるで自分から誘うようにのばされた腕が、誘うように宗像を引き寄せた。

宗像の舌が、優しく、もどかしく、乳首を刺激する。

「ん……んんっ♪」
未知の快楽の前に、歯を食いしばって声を立てまいとするのに、噛み締めた歯と歯の間から、自分でもびっくりするような甘い、女の歓喜がこぼれ落ちる。
「ハァッ……！」

「今夜は、随分と素直だな」
乳首から舌を離した宗像が、楽しげに言った。
「涼はたいした物じゃないか」

「……どうして」
美奈代は恨めしそうに言った。
「こんな時に小清水の名を出すんだ」

「今朝の今夜で別な相手を求めるとは」

カリッ。
「あっ！」
乳首に走った軽い痛みに、美奈代は体をのけぞらせた。
宗像は、楽しげに乳首を甘噛みしている。

美奈代は宗像を抱きしめるように腕を回すと、その手に力をこめた。
「ああんっ！」
思わず自分の口から漏れた声の大きさに美奈代は火が出るほど顔を赤くするしかない。
そんな、甘い女の声が、自分の口から出せると、美奈代は初めて知った。

「ふふっ……いい声だ」
宗像は美奈代を嬲りながら囁いた。
「最初から目をつけていた通り。いい女だよ」

「……っ」
女に褒められたというのに、何だかとても嬉しい。
美奈代は声をかみ殺しながら、さらに宗像を求めてしまう。

体の芯が熱くてたまらない。

胸ばかり攻められることに、体がどこかで不満を感じている。
体が、どん欲に快楽を求め始めている。
体が――熱い。

「む……宗像？」
まるでねだるような甘く、せつない声が出た。

「どうしてほしい？」

「意地悪なことを言わないで……だから」
潤んだ瞳が嘆願する所がわからない宗像ではない。
フフッ。と、意地の悪い笑みを浮かべ、宗像は美奈代と唇を重ね

た。
あまく、ぼんやりするほど長い口づけ。
密着する宗像の体の柔らかさが、何より心地よい。
「……泉」
唾液が糸を引くほど激しい口づけの後、宗像は、ジッと美奈代を見つめた。
そして、言った。
「……嬉しいぞ」
「……えっ？」
ポタッ
美奈代を我に返らせたのは、顔に落ちた水滴――宗像の涙だった。
笑みを浮かべ、自分を見つめているはずの宗像の瞳から、涙がこぼれ落ちている。
「むな……かた？」
「私を、わかってくれる人が、一人でもいてくれた――それが、嬉しい」
「……お前？」
美奈代は、宗像の突然の言葉に、眼をパチクリさせた。
「い、一体、どうしたんだ？」
「いや……」
宗像は涙をぬぐった。
「本音が出ただけだ」

「……あのな？」
美奈代は、そんな宗像が、妙に愛おしく感じられてならなかった。
そっとのばした手が、宗像の頬を優しく包む。
「私達は、戦友だ」
「……ああ」
「だから、何かあったら言え。聞く位なら、私にも出来る」
「……」
宗像は無言で頷いた。
ただ、その眼はうれしさに輝いていた。
「それとも」
クスッ。
その瞳に、美奈代はうれしさを噛み締めながら悪戯っぽく訊ねた。
「私では不満か？」
「美奈代だけに言えることもある」
宗像は首を軽く左右に振った。
「ただ――言いたいことは一つだ」
「何だ？」
「――ありがとう」
「……」
美奈代はきょとん。とした顔をした。
「何だ？それ」

「何だとは何だ」
宗像はムッとした顔をした。
「人の感謝の言葉を、無下にするつもりか？」

「いや、そうじゃない」
美奈代は困ったような顔で言った。
「その……こういう時だから」

「……ああ。私が愛の言葉でも囁くかと？」

「……悪いか」

「愛に飢えた女を演じたいのか？」

「それ、誰のことだ？」

「他に誰がいる」
そう、美奈代の耳元で何か囁くと、宗像は再び、唇を強く重ね合わせた。

二人が舌を絡め合い、美奈代の乳房を嬲る手が、段々と下がってくる。
手が触れているだけなのに、触れられるだけで電気のような快楽が全身を心地よく刺激してくれる。
その手がスウェットのズボンに達した。

いよいよだと、美奈代は年の割に不足気味の知識を元に、事態に備えた。

その時だ。

バンッ！
ドアのカギが吹き飛んだ。
「……へ？」
もう一度言う。
ドアのカギが吹き飛んだ。
「……」
「……」
バンッ！
バンッ！
破裂音の後、二つあるドアの蝶つがいが連続して砕け散った。
「……な？」
あまりのことに、ベッドで抱き合ったままの姿勢で凍り付いた二人の前でドアが音を立てて吹き飛んだ。
グシャンッ！
真ん中がベッコリと凹んだスチール製のドアが壁にぶつかり、派手な音を立てて床に転がった。
夜間照明をほとんど落とした薄暗い通路が、ドアを失った空間にポッカリと開けた。

ゆらり。

音を立ててその暗闇に現れたのは――

「ひっ！？」

思わず悲鳴を上げたのは、美奈代だけではない。

“それ”を見た宗像までだ。

パジャマを着て、脚に寝冷え防止用のレッグウォーマーをつけ、カエルのスリッパをはいて、白鉢巻をしていた。

そして、その鉢巻には点けっぱなしにしたL字型の懐中電灯を二本、角のように結びつけ、胸にはこれまた点けっぱなしにしたナショナル懐中電灯を、まるで丑の刻参りの鏡のようにぶらさげ、パジャマのうえから締めた襷（たすき）にはスタンブレードをぶちこみ、片手に軍用の大型散弾銃をかかえていた。

懐中電灯の灯りが、二つ目の妖怪を彷彿とさせる。

その灯りの下で、ニタリと神経がどうにかしたような笑みを浮かべるのは――

「お……お前……まさか、涼か？」

そう。

涼だ。

涼は、宗像の声に、すっかりイッたままの笑みを浮かべて、

ジャカッ

ポンプを作動させ、弾薬を散弾銃に叩き込んだ。

「……人の」
地獄の底からだってこうは聞こえないだろう位の恐ろしく低く、はっきりと聞こえる声で、涼は言った。
「人のお姉さまに――――何してるんですか。宗像中尉」
「まぁ、落ち着け。涼」
スチャッ
涼は、その返答を、散弾銃の銃口を突きつけることで表した。
「これを前に――――よくもそんな言葉が出ますね。死にたいのですか？」
「泉を巻き添えにしたいのか？」
「スラグショットですから――――中尉。お姉さまを寝取ろうとした罪は死であがなってください」
「泉の部屋にいないからといって、私の部屋に来た判断は正しかったわけだ」
「お姉さまのあんな可愛い声を聞いて良いのは私だけです。宗像中尉――――5秒あげます。お祈りを済ませてください」
「さて……どうかな」
「――――さようなら。地獄で会いましょう」
パァァァン！

室内に、金属の乾いた音が響き渡った。

●中隊長執務室

「……百歩譲って」

後藤の前で、美奈代は憮然とした声を上げた。

「部隊長としての責任としても、了承しかねます」

「だからさぁ」

後藤はフウッ。と、ため息をついた後、言った。

「俺達ゃ、ここを借りてるんだよ?」

後藤はそう言うと、デスクに置かれた書類を指さした。

書類には請求書と書かれている。

金額は、下手すれば美奈代の一ヶ月分の給与がまるまる消えてしまう額だ。

ドアがこんなに高い代物だと、美奈代は知らなかった。

「こっちは、事故で済ませたいんだ。そもそも、女同士の痴話げんかが原因でこうなりましたなんて、お前、事情説明で俺に言えっていうの?」

そんな殺生な。

後藤はそう呟いた。

「ですから」

美奈代も負けていない。

「白兵戦用の散弾銃をコクピットから無断で持ち出して、ドアめがけて発砲したのは小清水少尉です」

「後ろから鬼龍院中尉がフライパンでぶん殴って、今は独房入りだろうが」

「何故、平野少尉まで入っているのかは知りませんけど」
「安心しろ。あいつにゃ、手錠の他にもいろいろ貸してある」
「いずれにせよ、私に関係ないと、そう言いたいのです。散弾銃でドアを壊した小清水少尉が全責任を、つまり」
美奈代は請求書を指さした。
「この代金を支払うべきだと思うのですが！」
「お前、意外と金に細かいんだね」
「恐れ入ります」
「褒めてないけどさ……」
どうしたもんかね。
後藤はハァッと息を吐くと、椅子にだらしなくもたれかかり、後頭部のあたりで手を組んだ。
「公になると、俺達もいろいろ困るんだわ」
「責任問題ですか？」
「そう。俺も給料減るし、お前は降格もんだ」
「それなら別に」
美奈代は口を尖らせていった。
「書類仕事減るわけで、私は歓迎しますけど」
「あぁ」
後藤は、書類の束を引き出しから取り出すと、デスクに放り投げた。
「法務と経理と総務から、書類不備で帰ってきたヤツね――――やり直し」
「ええっ！？」
「……お前」
後藤はあきれ顔で言った。
「その肩書きで、書類仕事がこれほどむいてないってのは、珍しいよ」
「ううっ……」
「どうする？これから書類間違いでやり直し一件についていくらっ

て、罰金とってやろうか？」
「結構です」
「それくらいしなきゃ、お前、将来厳しいぞ？」
「……書類の不要な仕事に転職します」
「薄情だねぇ……まぁ、これは中隊長命令というか、判断だ。
小清水の暴走は、もともと恋人であるお前が宗像と不倫に走ろうとしたことが原因だ。
お前がそうならなかったら、小清水は独房入りは避けられた。
だから、お前が一番悪い」
「だ、誰が、誰と恋人ですか？」
「おろ？もう部隊公認ってことにしてあげているけど？周りで知らないヤツぁ、いないぜ？」
「はぁ？」
「お前が、染谷にふられたショックで女に走ったって。都築もそれで諦めたらしいな」
「――っ！？」
「おいおい、そんな怖い顔するな」
後藤は怪訝そうな顔をして、デスクに身を乗り出した。
「……違うの？」
「もう好きにしてくださいっ！」
美奈代はキレた声を上げた。
「ドアの請求書は、小清水少尉と折半を求めます！」
「――まぁ、それでいいでしょう」
後藤は意味ありげな、ニヤリとした笑みを浮かべた。
「お前が、それでいいならね」

まったく。

美奈代は憮然としたまま、独房のあるエリアにむかった。

私は一体、どういう眼で周囲に見られていたというんだ。

だいたい、そんな噂で――――

一瞬、美奈代の脳裏に浮かんだのは、都築の顔だった。

あれほど人にモーションをかけておいて、他人から何か言われたら、確かめることもなく他の女に乗り換えたというのか？

そう思うと、やり場のない怒りさえ覚えてしまう。

独房の前にある見張り部屋は、薄暗く、満足な照明もない空気のよどんだ通路に面した、小さな窓があるだけの部屋。

窓から中をのぞくと、デスクと壁にいくつものモニターが並んでいたが、皆、画面は真っ暗だ。

「面会って、小清水少尉に？」

やる気がなさそうな中年の女性が、パイプ椅子に座って安物のテレビを見ていた。

手にはせんべい。デスクには湯飲みが載っている。

だらしない姿勢に、びっくりするくらいの肥満体。

それでも、憲兵隊の腕章をしているし、軍服も着ているから、衛兵と見て間違いない。

「ダメダメ」

煩わしい。そう言わんばかりに、衛兵は脂肪のみなぎった太い手をパタパタと振った。

「は？」

美奈代はきょとん。として、差し出した面会申請書を見た。

「あの……失礼ですが、書類に不備が？」

「そうじゃないのよぉ。アンタ」
衛兵は、意味ありげなニヤリとした気味の悪い笑みを浮かべた。
「は？」
「ここのカメラが正常なら、見せてあげたいわぁ」
と、楽しげに言う衛兵の口調から、どうやら問題は自分にあるのではないと気付いた美奈代は、怪訝そうな顔で訊ねた。
「あ、あの？」
「女同士でも……いろいろ楽しめるのよ？」
「ま……まさか！」
「あの小っちゃい方が攻めでね？」
ウププッ。と、衛兵は口元を手で押さえ、脂ぎった口元を押さえた。
そのたびに襟元にはみ出た鏡餅のような贅肉が揺れる。
女として、こうはなりたくないな。
美奈代はそう思った。
「相手も最初こそ嫌がってたみたいだけど、今じゃ――――ね？」
「あの……面会は」
「ダメダメ！」
甲高い位の声で衛兵は怒鳴るように言った。
「いくら上官でも、お楽しみは邪魔しちゃだめ！」

「しかし」

「小さい方に、一日面会謝絶にしてくれって、結構な額もらってんだからさ！アンタも察してよ！」

「憲兵なんてそんなものよ」

紅葉はあっさりと答えた。

「それにしても、あんたの部隊ってもいろいろあって大変ね」

「……」

美奈代は涙ながらに頷いた。

「何泣いてるのよ」

「ひ、人の情けが身に染みて……グスッ」

「泣くな。……まぁ、私ゃそういう方面にゃ関わりたいとさえ思わないから、これ以上は何も言わないけどさ」

場所は紅葉専用の設計室。

巨大なＣＡＤのモニターや、なにやら意味不明な製図用具が設計用紙の海に浮かんでいた。

「あの……少しは掃除した方が」

「どれが何で、どう手をつけたらいいかわかんないのよ。下手触らないで。崩壊するから」

紅葉はＣＡＤを動かす手を止めて言った。

「それより、何だっけ？」

「あ、あの。改装の方は？」

「思ったより順調。さすが私ね。それにしても、あんた、どうせ休暇なんでしょう？」

「……はぁ」

「“鈴谷（すずや）”の連中とは違うんだから、ちょっとは休みなさいって」

「……は？」

「バカやった涼は、後藤隊長の許可もらった芳(かおる)が徹底的にお仕置きしてる。
……ああ。そうそう。データとりたいから協力して頂戴」
「何の、ですか？」
「エンジンをふくらはぎに入れた場合のバランスチューニング用のデータ。それと、関節部の負荷のテスト。シミュレーターで思い出した」
「そんなこと、必要なんですか？」
「――――怠けるな。どうせヒマなんでしょ？どう？お小遣い稼ぎに」
「やります」
「あんた、本当に金に細かいのね」
「……何とでも」

●夜　美奈代の私室
「ちょっと、生きてる？」
夕食後、室内でぐったりしている美奈代をみつけたのは、おみやげを持ってきたさつきだった。
青い顔をして、眼がとろんとしている。
「何かヤバいクスリでもキめているの！？」
「……何の話だ」
美奈代はようやくと言わんばかりの顔で答えた。
「疲れているだけだ」
「憑かれているの間違いよ！どうしたの！？医務室行く！？」
「いや……実は」

「……ま、美奈代が」
医務室で唸る美奈代を前に、さつきが呆れた顔をしたまま、リンゴを剥く。
「ここまでやるほど、金に細かいってことはわかった」

「――――金の亡者」

「宗像ぁ、それは真実突きすぎ」

「……お前ら」

「だまんなさいよ。ついでに湿布臭いんだから」

「ううっ……」
全身を湿布と包帯に巻かれ、ベッドに横たわる美奈代は、無言で頷こうとして、ただそれだけで苦痛に顔をしかめた。
まともに喋ることさえ出来ないらしい。

「――――で？何したらそんな体になるのよ」

「シャレにならないことをした。なぁ？」
宗像は意地の悪い笑みを浮かべた。
「メサイアの機動データ収集作業の異名を知らなかったんだろう」

「何それ？」
食べる？
さつきは切り分けたリンゴを皿に載せて、後ろに立っていた皆の

前に出した。

「いただこう――これは」

シャクシャクと爪楊枝の刺さったリンゴを口に放り込んだ。

「秋映(あきばえ)か」

「おしい！」

さつきはパチンと指を鳴らした。

「陽光(ようこう)だよ」

「むぅ……リンゴは自信があったのだが」

「リンゴ農家の娘に勝てるもんですか」

「梨なら」

山崎にリンゴを手渡しながら、美晴が残念そうに言った。

「私、自信があるんですよね。大ちゃんは？」

「僕は――樹やキノコなら自信が」

「頼もしい！」

ポンッと嬉しそうに肩を叩く美晴の横で、寧々が小さくなっていた。

「……すみません」

「何を気にしてるんだよ」

都築はリンゴをかじりながら寧々の頭を撫でた。

「わかる方がどうかしている」

「……はい」

「私もそう思いますよ？っていうか、涼！？」
芳（かおる）が怒鳴った。
「さっさと泉大尉のベッドから出なよ！」

看護兵につまみ出された宗像達は、ハンガーへ歩く。
「結局さ？メサイアの――なんだっけ？」
「機動データ収集作業」
「って、何？」
「一言で言えば、テストパイロットだ」
「美奈代、スゴいじゃん。テストパイロットって、めちゃエリートなんでしょ！？」
「きれいに言えばそうなるだろうが」宗像は小さく苦笑した。
「恐らく、津島中佐のことだ。“そのレベルからデータをとる”とかいって、満足な補正もなしで、それこそ考えられる限りの動きを美奈代に要求したんだろう」
「その程度で、あんなになるの？」
丁度、首を傾げるさつき達の横を牧野中尉がすれ違おうとした。
宗像達との間で、敬礼が交わされた。
宗像中尉の手には、洗面器とタオルがあった。
「これから泉の所へですか？」
「ええ。毎日、笑わせてくれたから、せめてものご褒美に、看病でもしてあげようかって。ほら？ここの施設、人手全然足りてないから、看護兵も手一杯なんですよ」
「え？笑わせてって？泉大尉が、ですか？」
「そう。重力管制システムがカットされた状態で、レベル7の戦闘機動なんて、ふつうなら即死なんですけどね。あのブラックアウトする時の表情ときたら」

クススッ。と楽しげに笑う牧野中尉。
「れ、レベル7ぁ!?」
都築が驚いたのも無理はない。
レベル7は、それだけでメサイアの騎体が分解しかねない、いわばメサイア使いにとって死ぬギリギリの機動レベルなのだ。
「それ30回近く連続で」
牧野中尉は、心底嬉しそうに指折り話し出した。
「途中から悲鳴も上げられませんでしたねぇ。
それから……ほら?今度、脚部にエンジンマウントするじゃないですか。
脚部の重量増とコントロールシステムの影響調べる関係で、脚部から股関節のパワーアシスト切られた状態で、フルマラソンやらされたり、逆にアシスト強すぎて、関節がぐっきりいったり」

「……あ、あいつ」
都築達は思わずお互いに顔を見合ってしまった。
「か、金のためにそこまで?」

「というか」
牧野中尉は言った。
「メサイアの機動データ収集作業が、別名“最悪の人体実験”って呼ばれること、知らなかったんでしょうね」

「じ、人体……実験……」

「拷問ともいいますけど、あら?早瀬中尉、知らなかったんですか?
初期型のスターリンやグレイファントムって、あんまりに不安があるからって、最初のパイロットに命じられた騎士は全員、死刑囚なんですよ?」

「はぁっ！？」

「ＳＴＲシステムの補正装置が組み込まれてなかったから、戦闘機動で首の骨折れたり、破損したコクピットの構造物に首飛ばされたり……。メサイアのコクピットが棺桶って呼ばれたのが肯けますねぇ」

「そ、そんな厄介ごとを？」

「小銭のために？」

「小銭稼ぎのつもりで引き受けて、あの性格ですからね？もう辞めたいって思っても、津島中佐に押しまくられて引くに引けなくなって、人体実験にされ続けたわけです。

津島中佐も、駆動系アシストとＳＴＲシステムの調整不具合が、騎士の関節に与える影響についての、またとないデータがとれたって喜んでたから、よかったんじゃないですか？」

「……ま、まさに人体実験」

美晴の言葉に、皆が頷いた。

「そ、それで。牧野中尉？」

「はい？」

「泉は、いくらもらったんですか？」

「え？ああ――――これだけ」

牧野中尉は、指を５本、広げて見せた。

「５０万？それとも５００！？」

「まさか」
牧野中尉はコロコロと楽しげな笑みを浮かべた。
「小銭を５００枚。私があげました」
「中尉が？」
「津島中佐からは個人的にって、５０万もらったんですけど」
「美奈代、ずるっ！」
「５０万のためにああなったのか！？」
「これはおごってもらわなくちゃ！」
「でも、もう、そのお金って」
息巻くさつき達を前に、牧野中尉はあっさりと言ってのけた。
「私達、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の飲み代に消えちゃいましたからねぇ」

「いざという時には――こういうのもありますし」
妖しい色をしたアンプルと注射器を見せた牧野中尉と別れ、さつき達はハンガーに入った。
整備兵達が派手な音を立てながら、さつき達の愛機に取り付いている。
装甲を外され、内部機器が取り外された状態では、整備兵が騎体を分解させているのか、それとも組み立てているのか、それさえわからない有様だ。

「なんか……小銭で喜ぶってさぁ」
「美奈代も罪がないというか、何というか」
「これからアイツのことをパタリロと呼んでやろう」
「マネリラ王国のあの？」
「そう。あの潰れ肉まん」
「お姉さまは！」
涼が怒鳴った。
「あんな不細工じゃありませんっ！せめて小銭の亡者と呼んであげてください！」
「……違いがわかんねぇよ。それにしても」
都築は脇に挟んでいたバインダーを開いた。
「基本（ベーシック）な部分は、泉のどうでもいい犠牲によって、俺達が関わらずに済んだわけだ」
「尊い犠牲でした」
美晴は両手を合わせた。
「殺さないでくださいよ――それにしても、都築少尉達にも、それ、渡されていたんですね」
涼は都築の開いたバインダーを指さした。
「ああ。それぞれにチューンされているからって」
都築はバインダーを閉じて表紙を見せた。
“都築用”と書かれていた。
「俺の場合、特にないみたいでさ」
バインダーの中身は一枚のコピー用紙だけ。
「関節に増加装甲に、オプション……共通部分の改装だけだな」
「そうなんですか？」
あれっ？という顔で、涼が自分のバインダーを開いた。
バインダーの中身は分厚い書類で埋まっていた。
「共通部分にＦＣＳに肩の増設ウェポンマウント、それから」

「私と同じだよ？」
涼はバインダーを開きながら頷いた。
「私達は、第四種装備の改良が中心の狙撃特化仕様への変更。増加するアクティブ・シールドがくせ者だけどねぇ」
「ＨＭＣは完全セミオート化でしょ？砲身冷却、サーマルジャケットで間に合うのかしら」
「強制冷却システム組み込んでいるから大丈夫だよ。寧々ちゃんは、この装備なかったよね？」

「はい。私は実体弾専門ですから」
寧々は頷いた。
「そのかわり、弾道計測装置は最上級グレードを組み込んでもらっていますし、白兵戦闘にも対応できる様に、肩部に大口径短身ＭＬ（マジッククレーザー）砲１門設置。
余剰エネルギーによる対ＭＬ（マジッククレーザー）拡散幕発生システムが」

「アクティブ・シールドは私達も同じだよね」
さつきは美晴に訊ねた。
「はい。私達の場合シールドを削除される反面、念願の第四種装備が追加されます」
「今度こそ、念願のフルアーマー化だよぉ！」
「シールドのデッドウェイトに泣かされる心配がなくなったのは、嬉しい限りです」
「そうそう！」
「大ちゃんは第四種装甲にシールド付きだよね」
「僕の場合」
山崎は照れたように笑った。
「シールドは小型のものに過ぎません。元々第四種装備のオプションです。僕の使う斧槍（ハルバード）は、穂先の重さが重さですからね。さつきさんの槍や美晴さんの薙刀のように素早い動きは期待できませんし」

「白兵戦特化仕様の中では、美奈代さんについで苦労したって、津島中佐が言ってたものね」
美晴は、山崎騎の改装を、まるで我が事の様に喜んでいる。
「戦果、期待してるからね？」
「――――はい」
山崎は、美晴に優しく頷いた後、
「あの？都築さん？」
苦虫を噛み潰したような都築に気付いた。
「どうしたんです？」
「……何で」
都築は、心底面白くない。という顔になった。
「何で、俺だけ普通なんだよ！」
「っていうか」
さつきはフォローするように言った。
「斬艦刀しか使わないし、必要ないでしょ？私達、第四種装備なのは、得物の関係あるし」
「そうですよ。
今まで私達だって、長モノ使う時の不満やリスクに我慢して戦ってきたんですから。
そろそろ」
「山崎は何なんだよぉ……」
「すねないでください都築少尉。
アックスなどの打撃系武器は、先端部分が重く作られているため、打撃時に手関節にかかる負担は、本来の重量の数倍になります。
山崎中尉の大型打撃武器を考えると、第四種装備による防御力と冷却装置はむしろ必須です。
斬艦刀のような刀剣類とはワケが違うんです。
今回の改装は、それぞれの武器と騎体操縦のクセに合わせたチューニングが目的です」
「さすが寧々ちゃん。詳しいねぇ」

「……少尉。お願いですから大人になって下さい」
「……お前がそこまで言うなら、俺も強くは言わねぇよ」
寧々の懇願するような視線に負けたのか、都築は頬をふくらませてそっぽを向いた。
「ありがとうございます」
寧々はニコリと微笑む。
都築と関係を持ったと聞いてから、寧々は変わったと思う。
何だかわからないけど、物腰が女らしく、優雅になった。
さつきの目には、寧々が物静かな貴婦人にさえ思える。
――――将来、寧々は、私なんかには、絶対太刀打ちできない女になる。
本当に、そう思えた。
「あーあ。お熱いことで」
「ごちそうさま♪」
さつきに出来ることは、そんな風に茶化すだけだ。
女として、何だかすごく惨めな気がしたが、顔には出さなかった。
「これで広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）に、シミュレーションで、美奈代さんがゲロ吐きまくったという、フライトシステムが組み込まれるわけですね？」
「あれ、やめてほしいよねぇ」
さつきはため息をついた。
「あの“カブトガニ”みたいなのは……ちょっとね」
「言い得て妙ですね。それ……」
美晴が頷いた横で、芳（かおる）が言った。
「あれは、かなりのデッドウェイトですよ？津島中佐によると、常時フローティングで浮いているから、騎体に重さがかかることはないっていいますけど。どうなんでしょうね。
私達はＨＭＣ使う時、絶対に邪魔でしょうし。早瀬中尉達は長モノ振り回すなら」
「そういう所、考えてくれてないっていうかさぁ……」

「補正はかけてあげるわよ」
背後からの声に、さつき達は驚いて後ろを振り返った。
そこには、憮然とした顔をして、白衣を羽織った紅葉がいた。
「どう振り回しても、接触する前にプログラムが動き止めちゃうわよ」
「ってそれって！」
「安心なさい」
紅葉はさつき達の間に割り込むようにして前に歩き出した。
「あんた達が、エモノをどう振り回してるか。データ徹底的に調べて、それぞれにシミュレーションして、微妙な感覚さえ感じないようにしてある。
ＳＴＲシステムの感度あげてあるけど、そこは上手く補正してあげているから、慣れれば不満はないはずよ？
止めるっていうより、“そこまで動かした”って感覚だもん」
「ど、とのくらい？」
「髪の毛一本」
紅葉は言った。
「鉄板の上において、防寒用グローブで触ってみて。それくらいだから」
「……はぁ」
今度やってみておこう。
そう思うさつきの前で、紅葉はくるりと振り返った。
そういう仕草は、本当に子供だと、そう思って、さつきは自分と紅葉の年齢が５歳と離れていないことに気付いた。
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）とフライトユニットは、これからの戦いでは必須なんだから」
「これからの……戦い？」

「駆逐中隊の任務に」
ベッドで横になる美奈代に、牧野中尉が言った。
「強襲攪乱任務が加わります」
「強襲……攪乱？」
「敵支配地域へ隠密侵入後、目的の敵施設を強襲し、破壊」
「……むちゃくちゃです」
美奈代は目を閉じた。
「この大盤振る舞い、絶対に何か裏があるって思ってましたけど」
「世の中、タダほど怖いものはありませんよ？」
「……中尉」
「はい？」
「どこへ、送られるんですか？私達」
「……よく見抜きましたね」
「天国と地獄以外、どこにでも行かされますからね。私達」
美奈代は口元だけ笑って見せた。
「非正規部隊。新兵だけの部隊」
「……」
「二宮教官も、長野教官の外されたのは何でだろうって、ずっと疑問だったんです。どうして、指揮官不在のまま、私達だけで？」
「……答えは？」
「その方が、エラい人達が、私達を使う上で都合がいいから」
美奈代は答えた。
「二人とも、教官をやる前は指揮官として、それなりの経歴をもっていました。そんな人が戦死すれば、まさか事故死とも言えない。どこかでボロが出て、作戦が明らかになる。それだと都合が悪い戦いに投入するには、経歴が浅くて、消耗で“事務処理”が出来る連中が都合がいい」
「それが？」
「私達だってことです」
「今回のことで」

牧野中尉は、布団を直しながら言った。
「被害者意識が、妄想にまで達しましたか？」
「私は本気です」
「……大尉は」
牧野中尉は、優しく諭すような口調で言った。
「犬を飼ったことありますか？」
「いえ？」
「棒を投げれば、犬は捕ってくる。食べられるわけでもない棒を。どうしてだと思います？」
「……訓練？」
「主が望むからです。
主が望んだことを、犬はやるだけです」
「我々軍人は、そういうものだと？」
「近衛兵士は、陛下の狗ですよ？」
「……最近」
美奈代は苦笑した。
「忘れかかっていました。いろいろありすぎて」
「驕慢は、命をなくしますよ？」
「はい。気をつけます」
「よろしい」
牧野中尉はニコリと笑った。
「ただ」
「ただ？」
「……あなた達が、いろいろ、エラい人には使い勝手がいいのは、事実でしょうね」
「……」
「騎体改修のメドは立ちました。週末には引き渡しです」
「慣熟訓練が」
「残念ながら訓練即実戦です」
「……え？」

「“鈴谷(すずや)”の部隊が随分と押されています」
「なっ？」
「部隊損耗が激しく、“鈴谷(すずや)”は戦域より後退。“鈴谷(すずや)”の担当戦域は放棄が決定」
「……」
「敗北の全責任が、月城少佐と染谷中尉、そして平野艦長に覆い被さることになります。戦闘データを見ましたが、魔族軍も、かなりの腕っこきを引っ張ってきたようですね。
ただ、あの敵は私達も交戦経験があると思います」
「私達が？」
「ええ。アフリカで戦った敵の中に、同じクセがある騎があります。他のMC(メサイア・コントローラー)達も、同一とみなしています」
「強い？」
「二宮大佐騎を撃破したと言っておきましょうか」
「こうしちゃ」
美奈代はベッドから起きあがろうとして、激痛に顔をしかめた。
「動かないでください。騎体はどっちにしても」

ズンッ！！

鈍い、粘り着くような爆発音がとどろき渡ったのは、その瞬間だった。

ガラスが砕け、爆風と破片が室内に飛び込んでくる。

とっさに牧野中尉が美奈代の上に覆い被さった。

「ち、中尉っ！？」
「だ、大丈夫です」
顔をしかめ、軽く頭を振った牧野中尉が起きあがった。

「防弾繊維に感謝しています」

フィーッ！
フィーッ！

ジリリリリッ！

いくつもの警告音と、サイレンが混沌としたコンサートを開いている。

「何だ！？」
「どこの爆発だ！？」
医務室の外を、兵達が銃を手に駆けていく。
「ハンガーだ！」
誰かが叫んだ。
「改装中のメサイアが吹っ飛んだぞ！」

その時、葉月市立第二中学校では、授業終了の鐘の音が鳴ったばかりだった。
生徒達は、三々五々、席を離れていた。
「ねぇ。美奈子ちゃん！」
未亜が、ノートを手に美奈子の席に駆け寄った。
「ダメッ！」
「……まだ、何も言ってない」
「宿題写させてっていうんでしょ？自分でやらなきゃ」
「そんなこと言ったってぇ……」

未亜は、美奈子に怨めしそうな視線を向けた。
「本編中断したままで、オマケのはずの作品ばっかり更新かかって、挙げ句にメイン作者は連絡つかないままだし、サブの方は宝くじでも当たらなければ人生なくなるって泣いてるし、もう状況が最強最悪過ぎて笑えないんだから」
「何の話よぉ」
美奈子は気色ばむ未亜をあきれ顔で見ながらほおづえをついた。
「数学の奈良先生、お葬式でお休みよ？次は基本自習なんだから」
「作者連中の死亡フラグ立ちまくってるのはともかく、宿題集めに来るのは、あの笹本先生なんだよ！？」
「あーあ。お気の毒。でも、自業自得」
「美奈子ちゃん冷たぁ～いっ！マックでおごるからぁ！」
「どうしようかなぁ」
「時間ないんだからぁ！！」
未亜はノートを美奈子に突きつけた。
「友達助ける意味で、宿題みせてっ！」
「だから――」

ドォォォンッ！

大きな花火が間近で炸裂したような音がした。

「？」
二人は、思わず互いの顔を見合った。
「……何？」
「さぁ？」
未亜が肩をすくめた、次の瞬間――。

バンッ！
ガシャンッ！

モノが壊れる音、ガラスが砕ける音。
そして――悲鳴。
そんな音が並のように退くのと入れ替わりに、様々な得体の知れない物体が降り注ぐ音が、世界を支配した。

中庭に落ちた金属の塊が、地面に大きく跳ねて校舎のガラスを割り、隣のクラスに飛び込んだ。
隣のクラスで女子生徒の悲鳴があがった。

「な、何っ!?何っ!?」
「く、空襲警報は鳴ってないよね!?ねっ!?」

爆発事故が発生して以降、美奈代達は自室にて待機が命じられた。トイレとシャワーは最初から部屋にあるし、食事は一日三回、届けてもらえた。
ただ、部屋から出ることは禁止された。
実質的な軟禁状態といってもいい。
テレビもラジオも新聞ですらない状態で2日、美奈代達は自室にて互いの連絡もとれずに過ごした。
美奈代達にわかったことは、飛行禁止警告を無視して、ラボ上空を飛び回っていた報道ヘリの爆音が消えたこと位だった。

軟禁が解かれたのは、3日目の昼食が終わった頃だった。
「――ラボ代表として」
ブリーフィングルームに集められた美奈代達の前で、紅葉が頭を下げた。
「今回の事態は、お詫びさせてもらうわ――申し訳ありませんで

した」

“白雷（はくらい）”の改修中に起きた爆発。

美奈代達は、それまで事故だと思っていた。

メサイアの改装中に、たとえば冷却オイルのような可燃物に工具の火花が引火して爆発。

2日間、何度もそう考えて、美奈代達は一人一人、首を傾げていた。

メサイアの構造上、爆発するものがわからない。

特に、改修作業を爆発事故の一時間前まで見学していた都築達には、美奈代騎がほとんどフレームだけの状態まで解体されていた光景を見ている。

あの状態で、何が爆発したというんだ？

皆が、紅葉からの状況説明を聞いた。

ハンガーは外壁が全て吹き飛び、中にいた作業員の大半は即死。

爆発したのは美奈代騎。

この爆発で、ラボもかなりの被害を被り、爆発によって空中に巻き上げられたメサイアの残骸と、作業機材。そして建材が半径2キロ近くに降り注ぎ、多数の市民が降り注ぐ残骸によって死傷した。

原因は――

「まぁ。紅葉ちゃんの責任じゃないし」

下げたままの紅葉の頭を軽くポンポンと優しく掌で叩きながら、

後藤が顎でしゃくると、脇に控えていた涼宮遙中尉がプロジェクターを作動させた。
若い、どこにでも居そうな、取り立てて特徴のない顔立ちの男の写真がスクリーンに映し出された。
「宮本裕太整備二等兵曹、２５歳――こいつの行方が、事件前日からわからなくなっている」
「――まさか」
「憲兵隊は、脱走及び破壊工作の重要参考人として、コイツを全国に指名手配した」
「破壊工作ってことは……テロですか？」
「政府と警察は、事故って方面で処理しようとしてるけど、近衛はこれに猛然と噛み付いている」
「……」
「使用された爆薬はコンポジション爆薬――それも、陸軍が特殊部隊向けに研究中の代物。搬入された経路は不明だが、陸軍が関与しているのは間違いないってね」
「……ちょっと待ってください」
美晴が右手を挙げた。
「陸軍で研究中の代物を？何かの間違いでは？どうして、近衛の整備兵が、そんな」
「間違いないわよ」
紅葉が言った。
「陸軍から提供されたデータと、爆発現場に残されていた残留反応が一致している」
津島紅葉は、この歳でメサイアの開発までこなす天才だ。
その人物から科学的な判断が下されたとなれば、反論さえ出来ない。
「そういうことだ」
後藤は楽しげに片頬を引きつらせた。
「盗難品？ありえないだろうな。このご時世とはいえ、そんなこと

になっていたら、大騒ぎになっている。入手ルートを知るためにも、容疑者には生きていて欲しいんだけど」
「まさか」
都築が驚いた声を上げた。
「本当に陸軍が絡んでいると？」
「鈴木陸軍大臣とその腰巾着は、近衛の活躍を快く思っていない。ただ」
「ただ？」
後藤は、楽しむかのように美奈代を見ながら、
「……泉？メサイアぶっ壊された、この中では最大の被害者であるお前の見解は？」
「……戦線に影響が出ない、しかもメディアに注目されるべき場所にいる部隊」
自分の騎体を吹き飛ばされた美奈代は、憮然としたまま答えた。
「それが私達だった。
それだけでしょう。
近衛のメサイアの安全管理に問題があったとして、近衛を批判して、活動に制限を加えたいと」
「ところが、相手はメサイアってものを知らなかった」
後藤は楽しげに頷いた。
「お偉いさん達は、メサイアの整備中爆発事故を演出しようとして、大失敗したと？」
「国内でテロだなんて公にしたら、政府と近衛と、どっちが困るんですか？」
「……まぁ、そういうことだな」
「勘弁してくださいよ」
さつきは顔をしかめた。
「敵に殺されるだけでも勘弁なのに、身内に殺されたらたまらないわ。
だいたい、何よその理由。

近衛にケチつけたいから、事故を演出したとでもいうの？」
「そう考えるのが妥当。近衛はその線で陸軍と対峙している」
紅葉は言った。
「メサイアの技師として言わせてもらうけど、改装中に爆発事故なんてあり得ないわ。
特に“白雷（はくらい）”は、騎体防衛用のＣＩＷＳだって搭載してないモデル。
エンジンまで外したスケルトン状態の騎体で、一体、何を爆発させろというのよ」
「……」

コンコン

ドアがノックされ、女性事務官がドアを開けた。
「後藤中佐」

「……」
ハァ。
後藤は小さくため息をつくと、肩をすくめた。
ドアの前で女性事務官と二言三言やりとりした後藤は、彼女から渡された書類を手に、壇上に戻った。
「……泉」

「はい？」

「何が起きたと思う？今までの発言から」

「……どんな死に方していたか、そんなことは興味ありません」
美奈代は答えた。

「口封じ、でしょう？」

「そうだろうな」

宮本裕太容疑者。
元近衛軍整備二等兵曹。

千葉県警水上警察隊所属の警備艇が発見、回収した水死体の身元は、着衣に残されていた遺留品から判明した。
死後３日前後。
目立った外傷はなく、胃の中に大量のアルコールが残されていたということから、どこかで足を滑らせて川に転落。溺死したのだろうというのが、警察の見解だった。

つまりは、事故死だ。

「そんな野郎の死に様より、俺達のメサイアの被害は？」
都築の質問に、紅葉は答えた。

「……泉騎と宗像騎を除く他の騎は損害軽微。現在、別ハンガーへ移送中。宮城の整備部隊から増援が送られてくるから、ロールアウトはプラン通り完了する予定。宗像騎は、それより２、３日遅れる」

「あの爆発で？ハンガー吹っ飛んだんだぜ？」

「死傷２５１名――私の整備中隊はほぼ全員が死亡。たった一人の身内の裏切りでね」

「……俺達のメサイアの被害は？」
都築は目をつむりながら訊ねた。

「回収されたのはいいけどさ？
不具合が起きた後になって、実はあのときの爆発が原因でしたなんて聞きたくもない」

「センサー類の簡易検査は進んでいる。被害報告はないし、何より、第四種装備の装着が終わっていたのが幸いしたっていうか」
チラリと、紅葉は美奈代と宗像を見た。
「第四種装備をつけていない、改装が遅れていたのが……その」

「仕掛けられた私の騎だったわけですね？」

「……被害どころじゃない。無事なのはエンジンだけ。そう言ってもいい。戦闘データはバックアップからリストア出来るけど」

「そんなにひどいんですか？」

「写真、見る？」
紅葉が頷くと、遙が再びプロジェクターを作動させた。
黒い炭で組み立てたような、得体の知れない建物が消化剤の泡の中に立っていた。
柱は不格好な飴細工のようにねじ曲がっていて、いつ倒壊しもおかしくはない。
「……現在のハンガーの状態」
「こ、これが？」
美奈代は目を疑った。
ハンガーは最新鋭の設備が整った、白亜の神殿とでもいわんばかりの巨大な、そして清楚な建物だったはずだ。
写真が切り替わった。
下半身だけがかろうじて残っているメサイア。
その装甲形状には見覚えがあった。

「……泉大尉騎は、こんな状態。横に立っていた宗像中尉騎は、爆発で吹き飛ばされた関係で、装甲とフレームを少し直せば済む。
だけど、泉騎は、内部フレームに仕込まれた爆薬が騎体をここまで吹き飛ばした。
陸軍の技術協力を経て、近衛でも採用が内定していたあの爆薬を、こういう風に使われることは、どういう皮肉よ……これは」

「……」
ふうっ。
腹の中の息を全て吐き出すと、美奈代は背もたれに頭を預けた。
「後藤隊長？私、除隊していいですか？
もう、騎体ないですし」

「おいおい。
そんな投げやりになりなさんな。
俺もさっさと年金暮らししたいんだからさぁ」
後藤は皮肉な笑顔を崩さずに答えた。
「紅葉ちゃんの下で、テストパイロットって口が残っているけど、どうする？」

「……代わりの騎体は？」

「意地でも用意する」
紅葉は答えた。
「ええ。意地でもね」
その目は、異様なほどの決意を秘めていた。

食堂のテレビでは、マスコミが近衛の事故として大々的に取り上

げていた。
市街地に降り注いだ破片による死傷者は１００人近くに達するという。
特に、学校へ飛び込んだ破片で中学生に死者が出た件に関心が強いらしい。
死者が出た学校で全校集会が開かれたことがトップで報道される反面、近衛が現場を公開したことに、対応が遅いと批判が集まっていた。
まるで近衛が殺したと言わんばかりの報道が続く。
現場の映像で大きく取り上げられたのは、原型を留めないほど破壊され、装甲がねじ曲がった泉騎だ。
ＴＮＴに換算して３０トン相当の爆発だったという。
もし、コクピットに乗っていたら。
そう考えると、美奈代は背筋が寒くなる思いがした。

「やってらんないわよ」
コマーシャルが始まった所で、さつきが天井を仰いだ。
「何よこれ。まるで私達、犯罪者じゃない」
「テロってのは、政治の話だからな」
宗像は、ちらりと都築を見た。
「――どう思う？」
「俺達にゃ関係ない話だ」
都築はそっぽを向いた。
「俺達は、俺達の敵を叩く。それだけだ」
「……随分と、躾られたらしいな」
宗像の意味ありげな視線が寧々に向けられる。
その視線に気付いた寧々は、都築の横で赤面してうつむいた。
「食事が終わり次第、我々は騎体のチェックに入るんだが」
一人、お茶を飲んでいる美奈代は宗像の言葉に反応しない。
「ご立腹のご様子で」

さつきが茶化したようにおどけてみせた。
「でもさ。美奈代？美奈代が壊したわけじゃないんだから、そんなに怒らなくても」
「……せっかく、自分の専用騎が出来ると思えばこそ、いろいろとシミュレーターにも耐えたんだ」
「ウソを言うな」
「な、何がウソだ！」
「小銭もらえるからって、理由はそっちだろうが。このパタリロ女」
「なっ！？」
「まぁ――さぁ」
さつきは痛いものを見る目で言った。
「小銭５００枚で医務室のお世話ってのも――女の子としてどうなのかなって」
「だ、だけど！」
「小銭５００枚に命かけた女の子……か」
「こ、ここで頑張れば」
美奈代は悔しそうに顔をしかめた。
「み、みんなに何か、おごってあげることだって出来るだろうし」
「……は？」
「だから、私……隊長って言っても、福利の面で何もしてあげていないし……かといって、お金ないし。だから、こういう時に頑張って、少しでもお金かせげば、みんなに何かの時に奢ってあげることくらいは」
「……」
「……」
「……へ、ヘン、かな？」
「気持ちだけ、ありがたくもらっておく」
あきれた。という顔のさつきは言った。
「でもさ。そんな隊長だなんて気張らなくていいと思うよ？」
「そうですよ」美晴も頷いた。

「美奈代さん、責任感強いから、頑張っているのはみんな知ってますし」
「……うっ」
「そうそう」都築は言った。
「お前が隊長だなんて、責任問題絡まなければ、誰も思ったりしてないし」

「……だからさぁ」
ボロボロ泣きながら隊長室に来た美奈代を前に、後藤はほとほと参った。という顔をした。
「ちょっとオチョくられた程度で、そこまでマジになりなさんな。いいトシして」
「で、ですけど！ですけど！」
「いいか？同期で隊長って言われても、実感沸くもんか。言うこと聞いてやるから、何かあったら責任とれっていうのが、普通だよ」
「……グスッ」
「泣くなって。
いいか？
自分がよかれと思っても、他人が同じ考えでいてくれるなんてことはないんだ。
励ましの言葉のつもりが、炎上するほど批判されることだってある。
余計なことは、しないに越したことはないんだよ。
わかるだろ？
さんざんな目にあった挙げ句、騎体まで失ったことは分かるけどさ」
責任で泣くなら、いつだって俺の方が泣きたいよ。
後藤はタバコに火をつけた。
紫煙が立ち上り、美奈代はタバコの臭いに顔をしかめた。

「……とにかく。お前さん、ある意味でよかったんじゃないのか？」
「はい？」
「騎体の喪失はさ」
「ち、ちょっと待ってください」
美奈代は後藤の言葉を止めた。
「ど、どういうことですか？私」
「第四種装備まで渡された他の連中は、明日には出撃だ。整備は“鈴谷（すずや）”でやってもらう」
「……え？」
「不正規部隊をマスコミの目に曝すわけにはいかないんだ。ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に乗せて、夜陰に紛れて移動してもらう」
「わ、私は？」
「爆弾抱えて、妖魔にでも突っ込む？志願、募集してるよ？」
「どこがですか！」
「――俺の知り合いのトコ。本気でどうだ？紹介料、かなりもらえて俺も助かるんだけど」
「結構です！」
「仕事は簡単なもんさ。導火線に火のついた爆薬背負って敵陣に全力疾走するだけ。簡単だろう？書類は遺書以外書かなくて済むし」
「……グスッ」
「ああ。わかったわかった！」
また泣き出した美奈代を前に、後藤は慌てた様子で手をバタバタと左右に激しく振った。
「全く。お前の前だと下手に冗談も言えない……本当に被害妄想がヒドくなってるな」
「ど、どういう連中のせいで」
「精神科のカウンセリング申請してあげようか？」
「お願いします……結果は多分、強制除隊でしょうけど」
「どうして？」
「精神に異常があるとか書いてもらえれば、きっと」

「お前ね」
後藤は言った。
「精神がどこかおかしくなかったら、ドンパチなんて出来るもんか」

美奈代が後藤に泣きついた翌日の深夜。
乗騎を大型ＴＡＣ４機に乗せた独立駆逐中隊はラボを発進し、“鈴谷（すずや）”へと向かった。
出撃が早まったのには、マスコミの監視下に置かれたに近いラボの事情がある。
近衛からの爆弾テロの発表を受け、警察が捜査に乗り出すことになったのは、当然といえば当然のことだが……。

テロという事情もあり、ラボで警察が捜査を開始することは近衛も認めたことだが、その日程が事前協議で決定した日付より前倒しで行われることになった。
マスコミも、その取材でラボに入る。
その間、ラボに非正規部隊の部隊が存在することは都合が悪すぎるのだ。

「今の察庁（さっちょう）の長官は、陸軍の鈴木大臣とは犬猿の仲だからねぇ」
出発前、後藤は捜査が早まった理由を察して言った。
「鈴木大臣が岡山首相に泣きつく前に、奴さんを出し抜く意味で、捜査を早める命令出したんだろうさ。
陸軍にはっきりとした疑惑を突きつけることで、鈴木の立場を悪くするってね」

「……そんなことで」

「政治の世界は政治屋さんどもに任せておきなさい。どうせ、俺達に出来るこたぁ、連中に選挙で票をやらないだけさ」
「……私、まだ選挙って行ったことが」

「あれ？お前、今年で２０？」
「はい」
「いいねぇ……俺の半分だもんなぁ」
「それはそれで」
美奈代は言った。
「私、本当に行かなくていいんですか？」
「お前さんの仕事は、紅葉ちゃんからしっかり別な騎体をもらってくることだ」
「“白雷（はくらい）”は予備騎がないですからね」
「牧野中尉や、“さくら”ちゃん以外と、仲良くできる自信が？」
「……」
「あとはまぁ、任せろや」
後藤は美奈代の肩に手を置いた。
「お前抜きでも、十分やれる連中だから」
「……それって」
美奈代は不満そうにいった。
「私が元から不要って聞こえるんですが」
「組織での要不要。自分の価値は」
後藤は美奈代の肩から手を離した。
「自分で作るもんさ」

結局。
皆の出撃を見送った美奈代は、ベッドに横になったが、いつ眠ったのかさえわからなかった。
普段通りの時間に目覚まし時計に起こされたが、眠ったという自覚さえなかった。
だるいのを無理に起きあがり、身支度を整えて美奈代は部屋を出た。
整備兵の大半がいなくなったせいで、がらんとした食堂では、配

膳係のおばさん達が手持ちぶさたを解消するためか、立ち話をしていた。
何故か、ほとんど誰もいない食堂を見ただけで食欲を失った美奈代は、踵を返して食堂を出た。
向かった先は、紅葉の部屋だ。
「朝食は食べなさい」
紅葉は巨大なモニターを前に、振り返りもせずに美奈代に言った。
「体調管理も任務のうち――よく言うでしょう？」
「……なんだか」
美奈代はコーヒーメーカーからコーヒーを紙コップに注ぎながらいった。
「人がたくさんいなくなった……そう実感するが嫌なんですよね」
「……」
「ところで、どうなんですか？」
「あいつらも、コキ使われてるわよ」
紅葉はモニターの電源を落とし、席を立った。
「ＣＤＣ（戦闘情報センター）へ行くからついてきて」
「ＣＤＣへ？」
「白雷改の初陣よ」

東南アジアで、魔族軍が多数出現していることは、美奈代達も経験で知っている。
その中でも、最大級の集団がいる場所に“鈴谷（すずや）”は派遣されたが、美奈代達の代わりに派遣された部隊は、完全にその場所を攻めあぐねていた。
攻略する魔族軍の陣地は、三層で構築された防衛ライン。
第三線に布陣するメース“アフィニティ”で編成されたメース部隊を率いるスクーデリア大尉は、ついさっきまで、通信装置に入る、第一線での友軍の活躍を心地よい音楽のように聞いていた。

第一線どころか、この戦線に配備されたメースの数は決して多くはないが、第一線首尾隊長のダニエラータ以下、腕は確かな連中だ。

対する敵は、その倍程度。

しかも、幾度となく挑んできては、返り討ちに合っている連中だ。

「暇つぶしの相手には丁度良いわ！」

戦闘開始前、そんなダニエラータの声に、どっと笑い声があがったのをはっきり聞いた。

敵は相変わらずの戦法をとっていた。

巨大な楯をかざし、その隙間から槍を繰り出してくる。

教本通りの動きが、集団戦闘に熟練したダニエラータ達に通じるはずもない。

「スクーデリア」

ダニエラータからの通信に、スクーデリアは気楽に答えた。

「はいよ？」

「退屈してるだろう？ライブ中継送ってあげるわ」

「それはそれは」

スクーデリアは部隊内通信を開いた。

「退屈中のよい子のみんな。ダニエラータお姉さんが面白い映像を送ってくれる。回線モード４５９だ」

自騎の目からの映像を映すメインモニターはさすがに危険だ。

「さて？今回のブービー君は、どんな活躍をしてくださるのやら」

スクーデリアは、サブモニターにライブ映像を映し、バカにした様子で、肩をすくめた。

「おやおや……」

「隊列を崩すなっ！」

せっぱ詰まった染谷の声がレシーバーに響く中。

アリアを駆る木村太一少尉は、必死にシールドを構え、敵の猛攻に耐えていた。
友軍部隊の騎数は１２騎。
前衛が８騎に後衛が４騎。
前衛８騎が半円の防衛ラインを構築し、その背後に後衛が控えている。
染谷率いる部隊のほぼ半分を繰り出してきた。
数としては十分だ。
対する敵はわずか６騎。
ただ、この６騎を相手に幾度となく挑んできたが、染谷達はこの６騎を抜くことが出来ない。
むしろ、そのパワーを前に返り討ちにあい続けている。
問題は、その戦斧の破壊力だ。
シールドが十分な役を果たさない。
前衛の構えるシールドは、敵の攻撃を受けるたびにへしゃげ、当たり方によっては簡単に穴が開く。
一体、素材はバルサ材か発泡スチロールかと聞きたくなること請け合いだ。

ガンッ！

まただ。

戦斧の一撃を食らったシールドが、ついに限界を迎えた。

鈍い音がして、シールドに新しい穴が開いた。

大きさはサッカーボールほどだが、自分の体に穴が開いたような恐怖感を抑える事が出来ない。
「くそっ！」

木村は毒づいた。
「シールドの予備、もうこれが最後だっていうのによ！」
「中尉、フィアちゃんは！？」
「こうも乱戦になったら、私達が巻き添えになるぞ！敵もそれがわかってるから接近したままで！」
「こ、後退は！？」
「ダメだ！後退をかけたらそのまま押し続けてくる！」
「どうしろっていうんですか！」
「東っ！」
染谷は後衛を束ねる東少尉に怒鳴った。
「――――やれっ！」

バンッ！

「うわっ！？」
モニター一杯に迫ってくる紅蓮の炎に、スクーデリアは思わず腕で顔を覆ってしまった。
それがモニターの向こう側の出来事だと気づき、赤面した所で後の祭りだ。
バツの悪い思いで、わざとらしい咳払いをする。
「ダニエラータ大尉！」
「司令部より前衛全騎へ！」
司令部からの通信が入った。
「第一線部隊全滅。敵は後退に入った！」
「全滅！バカ言うな、ダニエラータは！？」
「戦死っ！」
「バカなっ！」
「騎体ごと焼き払われたんだ！骨も残らねえだろうさ！ついでに俺に文句を言うな！俺は状況を報告しただけだ！」

「――っ！」
「第二線指揮官、セレッサだ！」
スクーデリアの前。
第二線で戦斧を掲げながら立ち上がったのは、深紅のサライマだ。
「これよりダニエラータ達の仇をとるっ！勇ある者は我に続けっ！」
ウオオッ！
レシーバー一杯に、メース使いの野太い雄叫びが響く。
第二線防衛のサライマ達がハルバード片手に前衛に飛び出していく。
「ったくさぁ」
スクーデリアはため息をついた。
「女ばっかりに目立ったことさせて」
スクーデリアは、“アフィニティ”の両肩に装備されたキャノンに仰角を与えた。
「俺っち男はお飾りってわけにもいかないでしょ？第三線指揮官、スクーデリアだ！第二線が前に出る！第三線は砲撃支援だ！敵の後退を阻止するぞ！」
“アフィニティ”は中距離砲撃支援を前提に作られた騎だ。
サライマのような斬込戦主体の騎とは違う。
ここは本来の目的に添って、砲撃支援に徹する方が利口というものだ。
「畜生」
スクーデリアは、敵をロックオンしながら小さく毒づいた。
「ダニエラータは――いい女だったんだぜ？」

ドンッ！
突然、地面が爆発し、空中に巻き上げられたアリアが、スピンしながら宙を舞う。
「こ、近藤ぉぉっ！」

ガシャンッ！
ドンッ！
近藤騎が頭から地面に叩き付けられ、そのまま動かなくなった。
「近藤騎大破！」
「っ！」
「騎士、ＭＣ（メサイア・コントローラー）共に反応途絶！」
「全騎、急速後退！後ろを省みるな！」
染谷の命令が飛ぶ。
「ブースターが吹き飛ぶまで――」

ズンッ！

鼓膜が破れそうな音と共に、染谷騎が衝撃に揺れた。
騎体バランスが失われ、騎体が後ろにひっくり返る衝撃に、染谷は呼吸を奪われた。
メインモニターが真っ白になって、コクピットを警報が支配する中、歯を食いしばって気絶しないでいるのが精一杯だ。
「ぐ……カハッ……」
無理矢理に肺へ空気を押し込む。
荒い呼吸を繰り返し、力の入らない手でＳＴＲシステムを動かす。
ステイタスモニター上に表示される騎体の状態は最悪だ。
表面装甲のほとんどに“融解”や“喪失”、そして“温度異常”警報が張り付いている。　四肢が喪失していないのが幸いだ。
「な……何が？」
「ち、中尉」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラーメカオペ）から、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の弱々しい声がした。
「生きてますか？」
いつもの気丈な声ではない。
しかも、その声はノイズがひどく、聞きづらい。
「……何とか」

染谷は、それでもMC（メサイア・コントローラー）の生存に心から安堵した。
「状況、わかりますか？」
「……ほぼ全滅です」
「詳細を」
聞きたくはない。
だが、自分の部隊だ。
自分が引き起こした結末だ。
染谷は、指揮官として、現実から逃れることは出来ないのだ。
MC（メサイア・コントローラー）は答えた。
「後衛隊全滅。全騎反応なし。前衛で生存反応があるのは、この騎を含めて」
「……3騎だけです」
「東達が……やられた……と？」
ズンッ
ズガンッ！
鈍い音が響いた。
「……訂正します。生存、この騎だけです」
「い、一体？」
「後衛の広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクに、先程の攻撃が直撃しました」
「……」
「答えは、それだけで十分のはずです」
「脱出、かけます」
「先程からやっていますが、リブートが間に合いません。脱出システムにも不具合発生。MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）から、私は出られません」
「……ハッチ爆破は？」
「不能」
MC（メサイア・コントローラー）は、恐ろしく澄んだ声で言った。
「中尉は脱出してください」
「出来ません」

「フィアちゃんに私が恨まれます」MC（メサイア・コントローラー）は言った。
「私、中尉を必ず生きて帰すと約束しているんです」
「相棒を見殺しにしたなんて」
染谷は苦笑しながら言った。
「フィアが知ったら、絶対に許してはくれないですよ」
染谷は、右足のブーツにくくりつけてあったナイフを抜くと、STRシステムの下に回した。
「MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）からの強制作動装置の配線は切断させてもらいましたよ？」
「……もっと私が若かったら」
MC（メサイア・コントローラー）は涙混じりに苦笑した声をあげた。
「フィアちゃんから横取りしていたでしょう」
「……」
「……お世話になりました」

「バカッ！」
飛び込んできたのは、フィアの声だった。
「何いい雰囲気だしてるのよ！」
「フィア！？」
「瞬っ！」
「えっ？」
「私の方が上官なんだから、私の許可なしに死ぬなっ！」

殲龍（せんりゅう）がサライマ達めがけて空中から斬り込む。

接近戦用の戦斧やハルバードを構え、倒れる染谷騎を包囲するサライマ達は、その急速な斬り込みに対応できない。
狼狽する彼等の前で、殲龍（せんりゅう）は攪乱幕発生装置を作動させた。
サライマ達の動きが一瞬、鈍った。

やれる！

フィアはそう思った。
すぐに内親王護衛隊（レイナガーズ）が増援として斬り込んでくれる。
自分は、とにかく染谷騎の周りの敵を排除すれば――――

ガガンッ！

「きゃぁっ！？」
フィアのそんな希望は、騎体に走った激震で、すぐにこの世から抹消された。
ステイタスモニター上の騎体情報に、左腕の喪失が宣言されていた。
「ま、また！？」

「フィア！下がりなさいっ！」
後方から接近する、内親王護衛隊（レイナガーズ）騎から厳しい声がレシーバー越しにフィアの耳を叩いた。
「まだやれますっ！」
その返事をうち消そうとするかのように、殲龍（せんりゅう）の真横を幾筋かのビームがかすめた。
「――――っ！」
「独立駆逐中隊が敵空中部隊を撃破した！接触まであと１１０秒！」
「いやよ！」
フィアは大声で怒鳴った。
「美奈代から恩を受けるなんて、死んだ方がマシよ！」
「いい加減にしろ！」
月城少佐が怒鳴った。
「私情で戦争するんじゃない！」
「私にあるのは最初から私情だけよ！」

ズガンッ！

今度は右足だ。

「う、うそっ！？」

黒煙を上げながらバランスを失った殲龍を立て直そうと足掻くが、バランサーがどこかでおかしくなったらしい。

自動消火システムが作動したが、黒煙を吐き出しながら空でモタモタやっている殲龍は、“アフィニティ”達の格好の的だ。

「きゃぁっ！」

騎体を幾本ものビームがかすめ、装甲が引きちぎられる。

空中での姿勢制御が出来ない。

「くぅぅぅぅっっっ！」

Gのおかげで、内蔵が右へ行ったり左に動いたり。

その度にフィアは苦しげに呻くしかない。

Gのせいで、コントロールが出来ない。

後は、地面に叩き付けられて終わる。

死を、待つしかない。

ガガンッ！

ビームの恐怖が過ぎた所で、フィアは、舌を噛みそうな振動の後、不意に騎体の錐もみが止まったのに気付いた。

「えっ？」

殲龍は、別なメサイアに抱きかかえられるようにして飛行を続けている。

“鳳龍改”だった。

「大丈夫か？」
月城少佐の声がレシーバーに響く。
彼女が、落下する殲龍（せんりゅう）を空中でキャッチすることに成功したのだ。
「つ、月城少佐？」
「騎体に大きな傷が付いた。貸しにしておく。私の貸しなら、泉大尉に」
ズンッ！
“鳳龍改”のほぼ真下で爆発した“アフィニティ”の一撃は、“鳳龍改”を“殲龍”共々、炒り豆のように空中にはじき飛ばしたのは、その時だ。
フィアも月城少佐も、どんな悲鳴をあげたのか。それとも、悲鳴をあげたのかさえ、はっきりとわからない。
殲龍（せんりゅう）を抱きかかえたまま、“鳳龍改”は、殲龍と共に、地面に強く叩き付けられた後、騎体のパーツを撒き散らしながら、ボールのように幾度もバウンドして停止した。
「う……ううっ……」
全身に激しい痛みを覚えながら、フィアは緊急脱出装置を作動させようとした。
コクピット内部の全ての電源がブラックアウトしている。
指先でさえ全く見ることが出来ない闇の中、フィアは思うように体が動かない。
何よ。
フィアは、そんな自分の状況がおかしくさえあった。
私、どうしちゃったの？
……私、一体……どう……

そう、思った所で、フィアの意識は途絶えた。

「砲撃は有効ってことさ！」
敵部隊を壊滅させた“アフィニティ”達を率いるスクーデリアは歓声に近い声を上げた。
「どうだ！？戦場を女共の好き勝手にゃさせねぇぜ！」

その時。
スクーデリアには明らかな油断があった。

自分が後方に存在しているという油断。
自分の騎体と、技量に対する奢りという油断。
何より、敵を全滅させたという、致命的な油断。

そんな油断の積み重ねが、彼を、戦場でしてはならない行為へと導いてしまった。

「かまわねぇ！第二線のセレッサ達の穴を埋めるぞ！」

「し、しかし隊長！」
部下のスハタ少尉が異議を唱えた。
「司令部からの命令はまだです。せめて、後詰め部隊が来るまで待機していた方が」

「いいんだよ、んなこたぁ！」
スクーデリアは煩わしいといわんばかりに顔をしかめた。
「二線まで出れば、もっとしっかりと狙い定めることだって出来るだろうが。おい、セレッサ！」

「――何よ」
スクーデリア達の砲撃によって大破した月城騎の始末に向かおうとしたセレッサが不機嫌そうな顔でモニターに出た。
「人のエモノ横取りして、今更、何のご用かしら？」
「腕試しだよ。第二線へ出る。線を借りるぞ」
「いざって時は、私達は第三線に下がるけど、それでもいい？」
「ふん。好きにしな。俺達が前に出て守ってやるよ」
「心強いことで。ところで、ちょっと待って――敵が高速で接近中。
セレッサ隊、念のためだ。
戦闘中止。
第一線防衛壕に下がれ。
そこらに転がっている敵は放っておけ。
どうせ後で始末する。
スクーデリア？
それでいいわね？」
「テメエまで臆病風に吹かれやがって」
スクーデリアは、第三線の塹壕から騎体を出した。
「好きにしろと言った！
おらぁっ！
スクーデリア隊、これは命令だ！
俺様に続けぇっ！」
スクーデリアの“アフィニティ”が塹壕を抜け出し、部下の“アフィニティ”がそれに続く。
彼等と入れ違うかのように、セレッサ達のサライマが第一線の塹

壕に下がる。

「ったくよぉ」

スクーデリアは、“アフィニティ”を前進させながら独り言のように毒づいた。

「何臆病風に吹かれてるんだよ。敵がなんだって？」

モニター上で確かに敵が急速に接近しつつある。

だが、それが何だ？

“アフィニティ”の砲撃がどれ程に強力だ？

それを見ただろう？

理解しただろう？

味わったろう？

――なら、何を恐れる必要が？

サライマ達の頭が、塹壕の中に隠れた。

いざという時、一瞬で飛び出せるように、膝を屈伸状態にしているのがわかる。

「――臆病者が」

ぺっ。

スクーデリアは、コクピットで唾を吐いた。

あいつは慎重すぎる。

そういう所は、所詮女だ。

女は、兵隊には向かない。

その証明みたいなものだ。

スクーデリアがそう思った、次の瞬間――

スクーデリア騎のコクピット部に、敵のビーム攻撃が命中した。

ズズンッ！

後方からの鈍く、連続した音に、セレッサは背筋が寒くなる思いがした。

「な、何！？」

“アフィニティ”隊、やられました！」

「やられたって！？」

部下からの報告に、セレッサは慌ててモニターを見た。

前方からは敵が接近中。

後方では、“アフィニティ”の反応が半分消えていた。

１０騎以上存在していた“アフィニティ”隊の半分が一瞬で？

そんなバカな！

「隊長！？」

「全騎、攪乱幕展開！後退戦用意っ！」

セレッサは、本能的に不利を悟った。

「いいか！？攪乱幕展開の後、各個に散開し、本陣へ後退する！敵は、今までの奴らじゃない！」

「まさか！」

イチマ少尉が驚嘆の声を上げた。

「噂の白い死神ですか！？」

「数もあれ位だと聞いている。全騎、これは厳命だ！功績を焦るな！死に急ぐような馬鹿なマネだけはするな！」

「り、了解っ！」

「――いい子よ。イチマ少尉」

クスッと、セレッサは笑ってみせた。

「攪乱幕散布――かかれっ！」

サライマ達から打ち出された攪乱幕は、一瞬のうちに真っ白な煙幕のカーテンを作り上げた。

電波、レーザー、魔力探知。すべてを狂わせる魔界の最新鋭の攪

乱幕だ。
敵の襲撃方向からみれば、セレッサ達がどう動こうと、絶対に“見る”ことは出来ない。

セレッサは、攪乱幕が開くのと同時に、部下達を後退させた。
第二線を通過して第三線へ。
もし、敵がイチマ少尉が警戒した“白い死神達”なら、自分達のような、魔界から来たばかりの経験未熟な部隊が相手出来るものではない。
なにより、死んだとはいえ、スクーデリアは自分達が第三線に下がることを認めた。
なら、文句は誰からも来ないし、受け付けない。

――少し、ずるいかな。

そう思いながら、セレッサは、サライマを後退させた。

塹壕から出た、次の瞬間――

バキンッ！
金属が折れる音がして、セレッサの駆るサライマは危うく横転する所だった。
「――なっ！？」
肩部シールドが根本から吹き飛ばされていた。
少し前を走っていたサライマの左足が吹き飛ばされ、もんどり打って大地に転がった。
「立てっ！」
サライマを助け起こすと、セレッサは肩を担ぎ、ブースターを開いた。
「全騎っ！絶対に下がれっ！敵は防衛ラインからさえ逃げれば、追

ってこないっ！」
口から出任せだった。
もしかしたら、それはセレッサの願望に過ぎないかもしれない。
だが、それでもセレッサには不思議な確信があった。
数本、強い光の塊が騎体の側をかすめていった。
「――――っ！」
“生まれて初めて”敵の攻撃を間近に感じ、口からこぼれ出そうになった悲鳴を、セレッサは歯でかみ殺した。
体がガタガタと震える。
――――情けないっ！
普段なら自分をそう叱咤したろう。
――――それでも、名門キャルスター家の跡取りか！
そう、叱かったろう。
だが、そんな余裕は、セレッサにはなかった。
部下を担いで第三線より後ろに下がる！
彼女の頭には、それしかなかった。
部下をここで全滅させる訳にいかない。
部下を守る！
彼女にあったのは、それだけだった。
「セレッサ隊、全騎へ！第三線後方のＦ窪地へ集結しろっ！」
「了解っ！」

「煙幕で視界が遮るのは正解っぽくみえるけどね」
芳（かおる）は次弾の狙いを定めながら、軽く舌で上唇を舐めた。
「“見え”なくても、“感じる”ことは出来るんだよね。私達って」
芳（かおる）は、直接目視モード。つまり、光学的、もしくは電波的な補助のない状態で、狙いをつけるモードで、煙幕の向こうに狙いをつけ、発砲を繰り返していた。
時折、外れとは違う大きな爆発音が煙幕の向こうから響いてくる。

何発かは確実に命中している。
寧々や涼と共に繰り返す発砲。
そして、自らの放った煙幕で、敵は下手に反撃出来ない。
攻勢のチャンスだ。
「狙撃隊へ」
宗像騎から通信が入った。
「これから前衛が斬り込む。ＭＬＲＳの支援をくれ」
「了解。美由紀さん」
「はい」
「ＭＬＲＳ着弾と同時に斬り込む。タイミング同調してくれ」
「狙撃隊小清水騎、了解」
「同じく鬼龍院騎、了解。タイミング、どうします？」
「涼。お願いね」
「発砲トリガー、こちらへ回してください……発砲……今っ！」
バシュュゥゥゥゥッッ！
蒼穹を切り裂いて飛翔したロケット弾が煙幕の向こうで死の白煙を噴き出した。
「行くぞっ！」
前衛部隊が煙幕の向こうへと一斉に斬り込んでいく。
動きに微塵の躊躇もない。
背後から見ても、その勇壮さには見とれてしまう。
「――ねぇ。涼」
芳（かおる）がポツリと言った。
「何よ」
「泉大尉がいないほうが、部隊がまとまってる気がするけど、気のせいかなぁ」
「なんて失礼な！」
「否定できる？」
ニヤニヤしながら、芳（かおる）は前方を指さした。
「……これ見て」

戦況モニター上では、敵が続々と潰されていく。
先程、前衛に出ていた敵は後退しているし、ものの数分とせずに、この陣地は制圧されるだろう。
前衛騎には、本当にケチのつけようがない。
それは涼にもわかる。
だけど――
「お姉さまぁ……」
涼は、コクピットに貼り付けた美奈代の隠し撮り写真に祈った。
「早く帰ってきてくださぁい」
「何でよぉ」
祈りを通信機越しに聞いた芳（かおる）が突っ込んだ。
「これだけ出来れば」
「この部隊のジンクスって知らないの？」
「ジンクス？」
「牧野中尉が言ってたもん。お姉さまがいない時って、かなりヤバいことになるって」
「はぁ？そんなの、大尉を売り込みたいMC（メサイア・コントローラー）さんの戯言でしょ？」
「そんなことないもん！」
涼はむきになって怒鳴った。
「絶対、絶対、このままじゃ済まないんだからぁ！」

悲しいかな。
涼の叫びは、現実のものとなった。

栄光の影

“白雷改”達の活躍は、目覚ましいどころではなかった。
出撃の度に敵を殲滅。
近接戦闘でも遠距離狙撃戦でも、負けるということを知らなかった。
１０倍近い敵を相手に一歩も引かず、むしろ相手を喰い殺す。
死神部隊。

非正規部隊であるはずの独立駆逐中隊が、一般兵の間でも噂になり始めたのはその頃であり、兵士達は中隊をそう呼ぶようになっていた。
常勝無敗。
帝国軍最精鋭部隊。

その称号こそ、噂が尾ひれをつけて一人歩きし始めているいい証拠だ。

「……まずいですよねぇ」
ラボの一角にある食堂で、美奈代は紅葉の前でそうぼやいた。
紅茶のティーカップの横にはクッキーと、ここ一週間の中隊の戦闘記録が記された書類。
美奈代はその書類を前に顔をしかめっぱなしだ。
「これは」

「あのさ」
紅葉はクッキーをかじりながら言った。

「何がそんなにまずいっていうのよ」
「こんなに勝ち続けていては、絶対にマズいです」
「勝って何が悪いのよ」
紅葉はそれがわからない。
勝つことは任務であり正義だ。
それをまずいとは何事だ?
「宗像中尉達が頑張っている証拠でしょ?」
「そうかも知れませんけどね」
ふうっ。
美奈代はため息混じりに紅茶に口を付けた。
「テロの関係で後藤隊長が引き抜かれたのが原因ですね。上で抑える人がいないんですから」
「平野艦長がいるわ?月城少佐も」
「平野艦長は、勝ち続けている間は何も言いませんよ。月城少佐も口は出さないでしょう」
「勝ちに驕って失敗するってこと?大尉はそれを心配している?」
「策略家の宗像がいます。戦術的には間違いはないでしょう。
問題は、他部隊との関係ですよ。
勝てば勝つ程、大人しくしてないと、敵が増えるんです」
「……?」
「津島中佐がもう少し、社会に出ていればわかったでしょうけど」

美奈代はクッキーを勧めながら言った。
「出る杭は打たれるんですよ。多分、宗像や涼はわかると思いますが」
「恋人と愛人には信頼置いてるんだ」
「――誰がですか」
――まずいよなぁ。
“鈴谷（すずや）”に戻ってから、涼は何度となくそう思うことがあった。
帰艦した後、ここの所慣例になりつつある打ち上げのことだ。
都築とさつきが、壁にスコアを貼りだして、数を競うことをやり始めたのは、彼等なりの士気向上の手段だったはずだ。
ところが、それがゲーム感覚になった挙げ句、他の部隊の騎士達の目にもあまる程騒ぎ出すのには時間は必要なかった。
回数が増えるにつれて、部隊の連携が狂っていった。
狙撃犯と前衛の絶妙な呼吸こそが強さの秘訣だというのに、前衛の中でも都築とさつきはともかく、二人と、美晴と山崎の呼吸は乱れがち。
しかも、最初こそ参加していた打ち上げに、二人ははっきりと参加しなくなっていた。
それが、連携の狂いに火をつけた。
今日だって、下手をすれば誰かが死んでいた。
都築少尉と早瀬中尉は、その恐怖感から逃れようとさえしているようだった。
――誰かが、止めなくちゃ。

そう思う。
その責任を負うべきなのが宗像中尉のはずなのに、彼女はまるで知らん顔だ。
「やりたければ個人でやればいい。あいつらだって子供じゃないんだ」
そう、突き放してしまう。
他の部隊の騎士達が自分達を見る目が変わってきているのに、涼も気付いている。
奇異の目ではない。
憎悪と嫌悪の目だ。
それまで親密にしてくれた内親王護衛隊（レイナガーズ）の騎士達も、目線すら合わせようとしない。
はれ物に触れるような、否、それ以上の態度だ。
通路ですれ違うたびに、向こうから道を変えてしまう。
涼はいたたまれないほどの嫌な思いを幾度となくしている。
芳（かおる）に相談しても、むしろそのゲーム感覚が、彼女には楽しいらしく、逆に否定的な考えを咎められてからは、彼女には何も言わなくなった。
美晴と山崎は“ああいう連中だから”と相手にさえしてもらえない。
幸いにして、寧々だけは同感だとはっきり言ってくれたが、都築相手に強くは出られない。
元々が染谷の彼女であるフィアはもう、部隊と接触しようとさえしない。
「だから言わないことじゃない」
涼の目の前で、あれほどの戦果を誇っていた部隊が内部から音を立てて崩れ落ちようとしていた。
それを感じるたびに、涼は泣きたくなる。

その原因は？
部隊を束ねる者がいない。
束ねるべき宗像が、個人主義者であり、組織に関与したがらないことがあまりに痛い。
不器用でも、組織の規律を維持していたのは、時に憎まれても、バカにされても、バッせられても、それでも部隊を束ねることに一生懸命だった美奈代の存在があってこそだ。
その懸命さにこそ、涼は惹かれたのだ。
「大尉ぃ」
涼は窓の外で光る星に願った。
「早く戻ってきてくださぁい……グスッ……このままじゃ、絶対ヒドイことが起きちゃいますよぉ……」

そして――騒ぎは起きた。

染谷隊の残存部隊が出撃から戻ってきた時、都築は“白雷改”の調整を終え、コクピットから出た所だった。
ハンガーの中が慌ただしいのは、メサイアの収容のせいだと都築は勝手に思っていた。
午前中の出撃でスコアを増やしたことに意気揚々となっていた都築は、衛生兵が担架を手に待機しているのに、全く気付かなかった。
そこにアリアが収容された。
傷だらけの騎体。
整備兵達が駆け寄って、コクピットが開放される。
騎体番号と、壁の黒板に書かれた出撃名簿から、その騎体を操っているのが富士学校時代の悪友の一人だと知った都築は、何も考えずに整備兵の間を割り込むようにしてコクピットに潜り込んだ。
「よう、小林クン？スコアは稼げたか？それとも尻尾巻いて帰って

きたか？」

しまった。

そう思った時には遅すぎた。

思わず周りを見回すと、整備兵だと思っていた兵士達は、腕に赤十字の腕章をつけた衛生兵達。皆が都築に非難の視線を向ける。

彼等の視線から逃れるように前を向く。

都築の前に広がるコクピット。

その中は――――血まみれだった。

「わ……悪ぃ」

都築は引きつった笑みを浮かべながら、変わり果てた友の死体に言った。

「そんなつもり、なかったんだよ」

「てめぇっ！」

都築は、後ろから乱暴にコクピットから引きはがされた。

振り向き様、頬に走った激痛に意識が遠のいた。

自分も血まみれになった騎士が、都築に馬乗りになったまま、ハンガーの床を流れていった。

「少尉っ！落ちついてくださいっ！」

衛生兵が必死になって止めようとするが、騎士は乱暴にその制止を振り切った。

「面白いか！？」

血まみれの騎士に、都築は見覚えがあった。

第一分隊の鹿島候補生。

かつてはそのがっちりした筋肉質の体格から、格闘術の方面に進むことが期待された人材だった。
戦争がなければ、オリンピック出場も夢ではなかったと、教官が残念がっていたのを、アフリカ出撃前に聞いた覚えがあった。
その男が、憎悪を丸出しにした鬼のような形相のまま、都築の首を絞めていた。
「面白いか！？」
幾度もそう聞きながら、都築の首をぐいぐいと締め上げる。
何が？
そう聞きたくても都築は喉から声を上げることが出来ない。
「面白いのかよ！」
ドンッ！
都築は背中から硬質樹脂で出来た床にたたきつけられた。
背中に走る痛みに、呼吸が止まる。
その都築に、鹿島は怒鳴りつけた。

「俺達が死んでいくのが――――そんなに面白いか！」

ガンッ！
首を絞めていた手が拳となり、都築は幾度となく殴りつけられた。
殴られる衝撃に意識が遠のき、痛みが現実に引き戻す。
その繰り返し。
口や鼻が血で一杯になり、視界がぼんやりと朧気になってくる。
他の騎士や衛生兵が鹿島の腕に縋り付いた。
だが、多くの騎士達は、むしろ周りを取り囲んで鹿島をはやし立てている。
周囲の騎士達の目から放たれるのが、自分に対する憎悪だと知った時、都築は初めて人が怖いと思った。
反撃すべきなのに、恐怖にすくんだ体が動かない。

人が怖いと震えながら――――都築は意識を失った。

「鹿島少尉は、つい先程、息を引き取った」

医務室で治療を受けた都築はベッドに横たわっていた。

軍医によると、脳への影響をみるため、一晩安静にしている必要があるという。

艦内の騒ぎを受け、美夜と高木副長が医務室を訪れていた。

高木が立ったまま、冷たく都築を見下ろしている。

美夜は、パイプ椅子に行儀良く座り、都築を見つめている。

「……」

都築は無言で天井を見つめている。

「鹿島少尉は、死ぬまで貴様を罵りながら、それでも」

「……」

「自分の負傷より、戦友の安否を気にしていた」

「……」

「都築少尉」

平野艦長の声は冷たく、都築の心をえぐり続ける。

ただ、何でもないはずの声が、地獄の獄卒さながらに、容赦なく都築の心をえぐる。

ぼんやりと見つめていた天井に、都築は死んだはずの小林候補生と鹿島候補生の姿を見た。

「――――っ！」

悲鳴さえ上がらないまま、都築は自分を睨み付けてくる二人から逃れようと強く目をつむった。

「聞こえているか？都築少尉」

「……」

「都築少尉」

「……はい」

闇魔からの判決を聞く亡者のような、力のない声で、都築は答えた。
それでも、目は開こうとしない。
「後藤さんとも話をした」
「……」
「貴様と早瀬中尉を独立駆逐中隊及び、“鈴谷（すずや）”から放り出す」
「……えっ？」
自分が聞いた言葉が信じられない。
思わず開いた目に映るのは、何の変哲もない天井だ。
「他部隊との信頼関係を軽視し、艦内に不和の種をまいたのは、スコア・ゲームを始めたお前達二人だ――横になっているんだ」
「ち、ちょっと待ってください！早瀬は」
高木副長が無言で都築の両肩を力任せに押さえつけた。
「大人しくしていろ」
「早瀬は、あいつは！」
「――これは二人に対する、特にお前に対する懲罰だ」
「っ！」
高木副長の力は、都築が思っていたより強い。
マットレスに押さえつけられたまま、都築は美夜の言葉を聞くしかなかった。
「前線部隊から外れてもらうことになる。偵察部隊に空きがあるから、そこで前非の数々を悔いることだ。鉄十字勲章持ちが偵察部隊に回されるってことがどういう意味か、祖のみを以て味わえ」
「だ、誰が“白雷（はくらい）”を！」
「お前の知ったことではない」
美夜は席を立った。
「明日の便が出るまで、私の艦にとどまることを特別に許してやる。それまでに私物をまとめておけ」
美夜は医務室のドアの前で立ち止まって、都築に振り向いた。
「私の艦から――出ていけ」

「これ？」

美奈代は、見慣れない騎体がハンガーから出ていくのを見送った。

頭部から背面に大きく張り出した円盤状のドームが特徴的で、背後には巨大なブースターを取り付けられている海洋迷彩が施された騎。

ベースは“征龍（せいりゅう）”シリーズだと、シルエットからわかるが、各部にセンサーらしきものがゴテゴテと取り付けられたその外見は、美奈代の目には、どうひいき目に見ても戦闘には適さない外見をしていた。

「ＥＷＡＣＳよ。試作型だから、そんな名前しかない」

「何ですか？それ」

「司令部から、とにかく作ってくれって要請されていたんだけどね？主に早期警戒を目的にした電子戦闘用兼偵察用メサイア。部材がやっとそろって完成したのよ」

「電子戦はともかく、メサイアに偵察任務ですか？」

「メサイアの機動性を考えれば、適切な判断よ？」

紅葉は言った。

「魔族軍の使う通信電波を傍受できるし、レーダーを攪乱する事も出来る。これからはこういう騎体も大切になってくるわよ？」

「……それは」

美奈代の目には意味不明な円盤にしか見えないロト・ドームと一体型となった巨大な頭部には、開放されたハッチが二つことあるから、どうやらＭＣ（メサイア・コントローラー）は２人以上が搭乗するらしい。

「電子戦闘用のＭＣ（メサイア・コントローラー）と、騎体操作用のＭＣ（メサイア・コントローラー）……」

「そう。増設したブースターは、“鳳龍改”にも搭載されている高機動型。空だろうが陸だろうがお構いなしに強行侵入できるわ」

「それを――――司令部が？」

「このまま北米へ送る」
「は？待ってください。魔族軍の通信やレーダーが傍受出来るって言ってましたよね？それなのにどうして北米へ？」
「中華帝国軍の一部の通信とレーダーがどうしても検出出来ないのよ」
紅葉は答えた。
「どうやら、そっち方面でもあの連中は、魔族軍の技術を手にしているらしいのね」
「……そんな」
「北米戦線は、目下、一番どうにかしなければならない」
ＥＷＡＣＳがＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に運びこまれていく。
「アメリカが安定してくれなければ、こっちに回ってくる兵力がなくなるからね」
「じゃあ」
美奈代としては冗談のつもりだった。
「私達も、そのうちに北米へ？」
紅葉はきょとん。とした顔でそれに答えた。
「当たり前でしょ？」

●東京　アメリカ大使館
「日本も苦戦していることはわかっている」
シェーファー大使は苦り切った顔で言った。
「だが、我が国も十分以上に苦しいのだ」
「……お察しします」
「我が国が求めているのは同情ではない！」
外務官僚の上辺だけの言葉を、大使は一喝して黙らせた。
「兵隊だ！」
「し、しかし」
「せめてメサイアを送ってくれ！内陸部の戦いに海軍力は不要だ！」

シェーファーが怒ったのも無理はない。
北米の内陸部に出現した中華帝国軍に対抗する兵力を、アメリカは各国に求めた。
岡山首相はそれを受け、兵力の派遣を宣言し、腰巾着の大臣達がそれを煽った。
その派手なパフォーマンスじみた言葉は一人歩きし、アメリカに散々感謝の言葉を吐き出させた。
それに気をよくした岡山首相は増長し、アメリカは支援の内容に期待した。
何個師団の兵力を送ってくれるのか？
爆撃機や戦闘機は何機？
メサイアだって師団クラスは来るだろう。
アメリカ軍は、日本の閣僚達が無責任に吐き出す言葉から、それこそ日本が北米大陸に総攻撃でもしかけてくれる程の、あり得ない規模の戦力を想定し、それに基づいて作戦を立案していた。

だが――

結果は？

戦域は、あの広大な北米大陸のど真ん中。

もう一度言う。

戦域は、あの広大な北米大陸のど真ん中

岡山政権が発表した対米支援は、海軍力だった。
しかも、駆逐艦６隻と補給艦２隻。

怒り狂った米軍司令部が、日本への反応弾使用を本気で進めよう

としたとしても、誰も文句は言えなかった。
戦場が分かっているのか？
そんなシェーファーの抗議に、岡山達は逆切れした。
せっかく支援してやってるのに、その言い分はなんだ！
兵力を送ってやるといったが、内容についてケチをつけられる覚えはない！
我々は善意で言ったんだぞ！
岡山首相は激怒してマスコミの前でそう言い切った。
その翌日。
アメリカは日本に対して反応弾の使用を宣告して来た。
冗談ではない。
反応弾を叩き込んで魔族軍を殲滅。
米軍は日本より撤退する。
期限は４８時間後。
すでに各地で展開中の米軍、そして巻き添えを恐れたＥＵ軍が戦線を放棄しようとしていた。
慌てた岡山政権は、メサイア部隊の投入をアメリカ大使館に伝えたのは、その宣告から１２時間後のことだった。

「それで」
シェーファー大使は額に青筋を立てて訊ねた。
「派遣してくれる戦力は？」
「一ヶ月後に、まずはメサイア１個大隊規模」
「一ヶ月！？」
シェーファーは怒鳴った。
「貴様等は状況が見えているのか！？北米で中華帝国軍相手に、我が軍がどれほどの苦戦を強いられてるのか！
「こちらも厳しいのです」
「言い訳はいい！やはり――」
シェーファーは冷たい目で官僚達を睨み付けた。

「この国を地図上から消し去りたい様子だな」

●夜　神楽坂　某料亭

「あの白デブが！」

岡山首相は酒臭い息を吐きながら、グラスを芸者に突きつけた。

「この俺様のお情けをなんだと思ってやがる！」

「全く、その通りですな」

鈴木陸軍大臣が、当然という顔で幾度も頷く。

「そうだろう？」

期限をよくしたらしい岡山首相がグラスをあおった。

「海軍の船を送り込むのに、我が国がどれ程の費用を支払うと思ってるんだ！」

「ごもっともです」

「……仕方ない」

岡山は言った。

「おい。あの魔族の……何と言ったかな」

「ユギオです」

「ああ。そいつだ。そいつとの約束を早めるぞ」

「……といいますと？」

「連中がほしがっている娘の確保だ」

「――ああ！」

鈴木は肥満体の体を揺すって、態とらしい程の態度でおどけてみせた。

「そんな話がありましたな！」

「思い出したか？」

「はい。先生のおかげです」

「うむ。こちらが希望を早くかなえてやれば、その分、恩義を売りつけることが出来るというものだ」

「はい！」
「今週中に何とかしてれるとありがたいな、鈴木君」
「はっ！」
「君の判断と責任に基づいて善処してくれたまえ」
「はいっ！先生には必ず朗報をお届けします！」

「あれ？これって……まさか」
紅葉が操るＣＡＤ。
そのモニターに映し出された画像をみて、シェイク片手の美奈代はストローから口を離した。
「ＤＥＳＥＥＤ？」
「今、私がやってるのは、正確にはその後継騎の設計よ」
「麗菜殿下が欲しがっているのよ。ラムリアースのナターシャ殿下、あの人がついに専用騎持ったでしょ？欲しくてしょうがないみたい」
「いろいろあるんですね」
「……まぁ、あいつも、いろいろ裏がある騎でね」
紅葉はあまり面白くない。という顔だ。
「第一、あの騎は私が設計したんじゃないのよ」
「違うんですか？」
「赤城博士が設計したんだけど――――正直、設計図見た時は、さ」
紅葉は美奈代からシェイクを奪うと、ズズッと音を立ててシェイクを吸った。
「……バニラ？チョコにしなさいよ」
「これしかないんですよ。２時間並んでやっと手に入れたんですから」
「物資欠乏……か」
「それで？設計図見た時？」

「……」
「……あの」
「負けたって――――そう思ったわよ」
紅葉は達観した顔で、そう呟いた。
「あれは全部が全部、私の鼻へし折ってくれた」
「それほどにすごかったんですか」
「――――まぁ、ね」
紅葉は、空になったシェイクを美奈代に返すと、引き出しからチョコレートを取り出した。
「自分の限界が、こんな近くにあるなんて思っても見なかったから、正直、泣いたわよ」
「津島中佐が……ねぇ」
「これは――――まぁ、その設計図を元に、私独自の工夫を加えた騎。それでもね？ＤーＳＥＥＤと比べても……どうなのか」
「それ程……」
うんっ。と美奈代は言葉を選びながら訊ねた。
「元が優れていた？」
「今になったら……いろいろ疑問がわいてくる設計なんだけどね」
「というと？」
「当時は革新的過ぎると思っていた関節部の形状なんだけど――――これがね？」
紅葉は別なパソコンを操作して、ＣＡＤ用のモニターの隣にある、別なモニターに画像を2つ、表示させた。
片方はＤーＳＥＥＤ。もう一つは……。
「――――似てない？」
「これって、確か」
美奈代はそれに見覚えがあった。
「そう。魔族軍のメースよ」
「……まさか」
「魔族軍のメースを赤城博士がどこかで見た。しかも、設計図をね」

「えっと……」
美奈代は、紅葉からチョコレートをもらうと、首を傾げた。
「以前、中佐は言ってましたよね？メサイアは、メースをベースにしているって」
「現在、私達が相手にしているメースは世代が違うのよ。わかる？数千年も前から、魔族達はずっと技術的進歩もなくメースを作り続けていますってわけないでしょ？私達人類だって、半世紀もしたら、同じジェット戦闘機といっても、別物クラスになるのと一緒」
「むぅ……じゃ、どうやって赤城博士は、メースの設計図を？」
「それは」
紅葉は答えた。
「赤城博士に聞くしかないわよ」

●“鈴谷（すずや）”艦内　艦長室
「――――却下だ」
美夜は染谷に言い切った。
「しかし」
染谷も負けてはいない。
「騎体不足の現状、２騎を浮かせておくことは」
「あの２騎は、お前達には任せられない。そう言ったのだ」
「――――は？」
「追放したとはいえ、あの騎は、未だに特別騎の指定を受けている。搭乗が許可された者以外には搭乗を許すことは出来ない」
「それは……誰が？」
美夜は無言で指で天井を指さした。
都築は、その意味を察した。
「雲の上じゃ、抗議は通じませんね」
「あの二人も、生きていればそのうち戻ってくることになるだろう」
「他の部隊配属経験を積ませることで、組織内での生き方を教える、

ですか？」
「……染谷中尉」
美夜は苦笑した。
「もう少し、肩の力を抜け。そして、少しは楽な生き方を考えるんだ」
「……？」
染谷は首を傾げた。
「真面目一片じゃ、生きていけないぞ？特に、組織ではな」
「融通は利かせているつもりですが」
「そういう受け答えが、出来ていない証拠なんだがな」
「――覚えてはおきます」
「無理はするなよ？ツヴォルフ中佐は、後家になるには若すぎる」
「はっ……それで、あの二人の騎は？」
「次のパイロットが来るまでは封印だ。司令部からそういう指示が来ている」
「次のパイロット？」
「私も知らない。司令部で人選が進んでいるはずだ――下がれ」
「はっ」
染谷は敬礼した後、艦長室を出た。

「どうだった？」
艦長室の前で待っていたフィアが、艦長室から出た染谷を捕まえ、心配そうに訊ねた。
「許可出たの？」
「……ダメだった」
染谷は優しく首を左右に振った。
「次の人選が決まるまでは封印だって」
「……そう」
フィアは、がっかりしたような、それでいて安心したような、複

雑な顔になった。
「難しいよね」
「……うん」
染谷は頷いた。
「出撃して、仲間の仇討ちはしたい。でも――これ以上、仲間が死んだり苦しむのを見ずに済むなら、それが一番だとも思うし……」
「難しいわね」
「生きるってのは――僕みたいな不器用には難しいよ。フィア」
いこう？
染谷はそっと、フィアの腰に手を回すと、通路を流れていった。

●東京都　某所　ホルモン焼き屋
ジュゥゥッ
網の乗った七輪の上でモツが旨そうな音を立てて焼かれていく。
箸でそのうちの一枚をひっくり返した後藤は、七輪を挟んで差し向かいに座る男の口から出た言葉に、箸をとめた。
場所は場末に近いホルモン焼き屋。こんな昼間から営業しているが、味のわりには普段から客足は決して多くない。
築数十年の、座るだけで軋む床にあぐらをかいて周りを見回すと、カウンターの奥で店番のおばちゃんがテレビを見ている音だけが聞こえてくる。
他に客はいないのを確かめ、後藤は怪訝そうに訊ねた。
「何ですか？その休戦協定ってのは」
「文字通りさ」
答えた老年の男は、あの陸軍の遠藤少佐だった。
「どことどこの？米中で？」
「あそこ同士の協定はもう無理だろう」
遠藤少佐は、ホルモンを口に放り込んだ。
「行き着くところまでいくさ」

「じゃあ？」
「帝国と魔族軍の」
「――まさか」
後藤は無言でホルモンを口に入れた。
焼けたタレの味が口の中一杯に広がり、無意識にビールのジョッキを手に掴ませた。
「どうやってチャンネルを？」
「岡山が何をしでかしたのかはわからない。だが、休戦協定に向けた協議が進んでいることは、各方面からの裏付けがとれている」
「それでも、タダってわけじゃないでしょう？何か条件があるはずだ」
「ある」
遠藤少佐は頷いた。
「しかし――その条件の破格さに、我々も疑問を持っている」
「というと？」
「協定は魔族側からの申し出によるらしい」
「そんな馬鹿な」
後藤はあきれ顔でジョッキから手を離した。
「向こうは勝っているんですよ」
「だからおかしいというのだ」
遠藤少佐もジョッキから喉にビールを流し込んだ。
「勝ち戦で、何故に休戦を申し出るか。しかも、あんな条件で」
「その条件ってのは？」
「休戦期間は1ヶ月。条件は」
遠藤少佐は、首を傾げながら続けた。
「タテマエ上は存在しない。だが、裏の条件として存在するのが、ある少女の引き渡しなのだ」
「――は？」
「詳細は、岡山と鈴木しか知らん。とにかく、その少女を引き渡しさえすれば、魔族軍は即座に1ヶ月の休戦に応じるというのだ」

「……少女」
後藤は視線を泳がせ、該当しそうな女性を連想してみたが、思いつかない。
魔族軍が軍の活動を止めてでもほしがるとは、一体、誰だ？
「岡山は、その条件を飲んでいる。一ヶ月とはいえ、休戦に同意させたとなれば、それなりの政治的戦果だからな」
「自殺行為ですよ。皆が苦しむ魔族軍との戦闘で、一人だけ抜けたってことですよ？そんなのぁ」
「後藤君は、一人と数億の命を天秤にかけるような愚か者にみえないがね」
「……他には何か、面白い話がありませんか？年間国内で行方不明者は万の単位だ。その統計に一人増えたところで、俺はどうでもいいんですよ。含まれるのが俺じゃなきゃ」
「賢明だな……ああ、そうそう」
遠藤少佐は、皿から肉を網に載せた。
「陸軍の特殊作戦群に動員命令が下った。本日０８００だ」
「特殊作戦群って」
「そうだ。鈴木大臣ご自慢の対テロユニットだ」
「そんな連中がどこへ？」
「まだはっきりしないが、国内で鈴木が何かしでかそうというなら、その少女と関係があると見るべきだろうな」
「もし、その少女の確保が確実なら、休戦は」
「かなり近い」
「そいつはめでたいのか、なんなのか……」
後藤は焼き上がったホルモンを口に放り込むと、空になった皿を手に声を上げた。
「おばちゃぁん！モツ追加ね！」

停戦の狭間で

ガムロが散々、口にしていた休戦は、中世教会の外交ルートを通じて人類側に伝えられるはずだった。
ガムロも中世協会からそう聞かされていた。
停戦案はすでにガムロ達と中世教会の担当者レベルでまとめ上げており、あとは交渉開始を待つだけだった。

だが――――。

「――――まぁ、やむを得まい」
厳しい顔をするズルドの前で茶をすするのは、ホーサーだ。
好々爺然とした顔で茶菓子に手を伸ばす。
「停戦というのは、そう簡単ではあるまい」
「俺が文句があるのは、そんなことではないわ！」
ガンッ！
ズルドが畳を殴った。
「何だ！あの戦果が足りないというのは！」
「それが、やむを得ないと言っているのじゃ」
バリバリとせんべいをかじる。
「年はとっても、歯だけは丈夫じゃから助かる」
「――――お前は」
すっかり毒気を抜かれた格好のズルドは、手にした巨大な湯飲みを掴んだ。
1リットルは入るだろう湯飲みの中身を一息で飲み干したズルドは乱暴に茶碗を置いた。
「お主の責任ではないわ。ズルドよ」
喰え。と、ホーサーは微笑みながらズルドにせんべいを勧めた。

「中世教会の上層部は、現在の戦線状況では、交渉上有利にならんと、そう言ってるのだろう？」
「……そうだ」
脇に置いてあった、アルマイト製の１０リットルやかんをズルドが手にすると、不思議と普通サイズのやかんに見えてくる。
「アフリカ制圧の直後だったら、世界征服でさえ可能だったろうと、そう言われたわ」
「さもありなん……それで？」
「一週間だ」
「ん？」
「一週間の後の戦況を見て、停戦の申し出が可能か否かを判断する。停戦を望むなら、さらなる戦果を……だそうだ」
「成る程？……それでズルドよ。策はあるのか？」
「本来ならば」ズルドは言った。
「“鍵”の奪還を主目的とした作戦が望ましいが……それは兄貴に止められた」
「当たり前だ。その“鍵”とやらの意味を敵に悟られるのがオチじゃ」
「補給の問題がある。そう大規模な作戦は出来ん。俺の第二軍を、本気で動かしたら補給が続かない。参謀達は大反対だ。次の次あたりの補給までは無理だとな」
「……またか」
「俺の見る限り、補給に関しての認識が、中世協会と俺達では決定的に違いすぎる。
俺達から言わせると、与えられる補給と備蓄があまりに低いために、大規模な攻勢に出られない。
反面、連中に言わせると、我々が勢力拡大に消極的過ぎるとなる。
……まぁ、今回は、天原商会への支払いに齟齬を来たし、先月分の支払いを未納にしたから、向こうの責任だ。連中、金に関しては恐ろしくシビアだからな」

「齟齬……か。表面的なものじゃろう。魔界、天界双方からの圧力が加わり始めたとみてもよいじゃろうな」
「……兄貴に言わせると、圧力をかけすぎれば爆死するのは連中となるがな」
「ん？」
「圧力をかけすぎ、我々が人間界で追いつめられた後、自暴自棄になる方が、天界と魔界にとっては困る事態だろう？」
「……自らを人質にするかの如き物言いは、お前の最も嫌う類ではなかったか？ズルドよ」
「ああ。そうだ」
ズルドは深く頷くと、湯飲みに茶を注いだ。
「……長野に入り込んだ敵を、再び駆逐する作戦が認可された」
「補給は」ホーサーは目を丸くした。
「たった今、補給が続かないといったのは、貴様じゃろうが」
「俺達が動くんじゃない」
ズルドは苦笑いした。
「俺達は、静岡の砦でふて寝だ」
「……ワシ等か」
「そうだ」と、ズルドは頷いた。
「義勇軍のメース隊と、重妖魔部隊による短期間の強襲作戦。谷間を一気に重妖魔部隊の集団突撃で突破し、県境までに配置されている人類側陣地を破壊する。メース隊は、その間の露払いだ」
「……ほう？」ホーサーは目を細めた。
「なら……ワシにも仕事が来るかの」
「当たり前だ。ホーサー」
ズルドは言った。
「お前に魔界から出陣して欲しくて呼んだのだ。人間界の温泉に浸からせるためではない」
「湯田中の湯はいいぞ？今度、娘と共に来るがいい」
「風呂……か」

何故か、ズンッ。とズルドの顔が暗くなった。
「どうした？」
「いや……楓（フィーリア）が」
「どうした」
「一緒に風呂に入ってくれんのだ」
「今、娘はいくつだ」
「そろそろ１１だ」
「なら当たり前だろう。そういうものだ」
「そういうものか？」
「それ以上は言うな。ズルドよ」
ホーサーはあきれ顔で言った。
「娘にでも聞かれたら、風呂どころか、近づいてさえもらえなくなるぞ？」

●葉月市　近衛軍ラボ
ズズンッ！
派手な音がして、それまで激しく揺れていたシミュレーターが停止した。
「あーあ」
紅葉は呆れた。という顔でため息を漏らす。
整備兵がシミュレーターに駆け寄り、ハッチが開かれ、美奈代が引っ張り出された。
余程ヒドイ目にあったのか。
美奈代は整備兵に手を借りなければシミュレーターから出ることさえ出来ない様子で、シミュレーターから出るなり、その場にへたり込んでしまった。

ぐったりとして、右腕で目の辺りを覆うのがやっとという有様だ。
「あんたねぇ」
紅葉は腰に手を当て、美奈代を見下ろす位置に立った。
「“白雷（はくらい）”の時もそうだけどさぁ」
「……」
「世界トップクラスの女性メサイア使いって称号、返納したら？」
「……か」
美奈代は口元を抑えながら訊ねた。
「風間は――こんなピーキーな騎体を、ああも扱っているのですか？」
「へ？」
紅葉は、きょとん。とした顔になった。
「ああ。違う違う」
紅葉は、目の前で手を左右に振った。
「ＤＥＥＤは、お姫様の他は――」
うんっと。そんな感じで、紅葉は少し考えた後、言った。
「乗れるのは、日本では陛下と麗菜殿下……は無理か。後は、日菜子殿下……かな？」
「何ですか」
美奈代は、出てきた名前に眉をひそめた。
「そのやたら高級な名前は」
「だって本当だもん――ヤバッ！」
紅葉はハッとなって、慌てた様子で口元を抑えた。
「な……何か、わ、私、言ったかしら？」
「……いえ」
美奈代は首を横に振った。
「こういう時、どうすればいいかは、二宮教官に叩き込まれてますから」
「そう――さすがね」
紅葉は、パックに入った水を美奈代に差し出した。

「そう言えば――あんたの部隊、ヒドいことになってるわよ」
「……え？」
美奈代は、とりあえずパックのキャップをひねり、水を喉に流し込んだ。
コクピットで吐かなかったとはいえ、口の中まで出た吐瀉物の言い様のない不快感をどうにかしたかった。
「どうせ、都築がバカやって平野艦長にドヤされたとか？少尉だから降格はないと思いますけど」
「――“鈴谷（すずや）”追放だって。早瀬中尉とね」
「はぁっ！？」
美奈代は唖然として、というか、バカのようにポカン。と口を開けて紅葉を見上げた。
「ど、どういうことですか？あの天然バカはともかく、早瀬までって」
「“鈴谷（すずや）”に配備されている他部隊の状況は知ってるわね？」
美奈代は無言で頷いた。
月城少佐がどんな目にあったかは、自分の目で見たことだ。
その部下だって、かなりが死んでいる。
染谷の部隊は壊滅的だとも聞いている。
「その一方で、驚異的戦果をあげている――当然、出る杭は打たれるのよ」
「……何があったんです」
美奈代は起きあがった。
その目は厳しい。
「帰艦の度に、記念のどんちゃん騒ぎしてたらしいわよ？あの二人」
「――っ！」
「他の連中、止めるというより距離とっちゃって――後藤さんもいなかったのが痛かったわね。あんたがいてくれれば、状況は違ったかもしれないけどね」
「……」

ギュッ
美奈代は拳を握りしめた。
「平野艦長と月城少佐の部隊点検報告、見せてもらったけどさ。独立駆逐中隊は、部隊としての機能を喪失していると」
「宗像は」
「まるで無関心。というか、あの人はああ見えて部隊を統率する能力まるっきりないから」
「そんなはずは！」
「あれば」
掴みかからんばかりの剣幕の美奈代を前に、紅葉は平然と答えた。
「あいつは別な道に進んでいたでしょうね。しってる？あいつ、陸軍の士官学校落第したの」
「……は？」
「2年次の生徒隊で、あんまりに指揮官としての素質に欠ける。これじゃ士官は無理だって烙印押されてね――学校、クビ」
「そんな馬鹿な」
紅葉の言葉を、美奈代は笑って否定した。
「宗像は私より指揮官向きです。私なんて」
「一匹狼は群れじゃ生きられないわ。あいつ、自分のそんな資質というか、欠点しってるけど、欠点をさらけ出すのが怖くて、部隊任されても何もしない……違う」
「何かすることで、人を動かすことが出来ない、そんな自分をさらけ出すのが怖くて、何も出来ない」
「……何の冗談ですか」
「こんな所にくる連中が、まともな過去もってると思った？」
「……」
「あんたも……いろいろあるんじゃない？過去」
「ありませんよ」
「そう？じゃ、光武機関のことは聞かないであげる」
「――っ！？」

突然、美奈代の顔が険悪なものになった。
対する紅葉は、平然とした顔に浮かべた笑みを崩さない。
「自分の作った子供を任せる以上、私もいろいろ調べさせてもらってはいるのよ？」
「その話は……しないでくださいね」
「ええ。そのつもり」
「されたら――」
「顔をザクロにされるくらいは覚悟した方がよさそうね」
「……はい」
「……」
「……」
「……まぁ、いいわ」
紅葉は白衣のポケットに両手を突っ込んで、肩をすくめた。
「ここでケンカしても意味ないし。お互い、仲良くやりましょうよ」
「そう願います」
「とにかく、あいつらは別部隊に送られる。多分……苦労して組織の中での生き方を学んでこいっていう、平野艦長辺りの老婆心でしょうけどね」
「せめて親心と」
「奢れる者久しからず。謙虚って美徳だからね」
「……」
美奈代はもう一回、水を口に含んだ。
「とにかく、私も私で、“こいつ”を使いこなさなければ次がないってことですね」
「そうよ」
紅葉は脇に挟んでいたバインダーを開いた。
「開発コード“ドクツルタケ”」
「つるたけ？……キノコですか？」
「そう。日本では有数の殺傷力を誇る毒キノコ。一本で人一人は殺せるわ」

「なんか……どういう決め方で開発コードが決まったか。そっちが心配なんですけど」
「開発コードは、開発者の気分と趣味」
紅葉はあっさりと言ってのけた。
「私、キノコ大好きだから。
皇龍は“マツタケ”でしょ？
ツブしのききそうな“幻龍（げんりゅう）”は“シイタケ”。
“幻龍改（げんりゅうかい）”は“エリンギ”。
“白雷（はくらい）”は」
「もういいです」
美奈代は挙手の姿勢で言葉を止めた。
「なんだか、キノコが固くて食べられなくなりそうで」
「――面白いこと言うわね」
「最近、多いんですよ。キノコ類が食事に登るケース」
「二十日ダイコンもね。ラボの地下で促成栽培してるから」
「ああ……そうなんですか？」
「食べ物が入荷しづらくてね……ラボの地下スペース全部が食料栽培プラントになってるわ。信じられない」
「……」
「今まで通りに、おいしいもの食べたかったら、勝つのよ」
「……はい」
「よろしい。あんたに与えられる騎の承認が降りたから、説明してあげる」
紅葉はバインダーの中身を美奈代の前に広げて見せた。

御名御璽

そう書かれた上に見たこともない、複雑な文字らしいものが書かれた、大きなハンコが押されていた。

これが、どこに送られて来た代物か、それでわかった。
近衛騎士としての血が、体にアドレナリンを撒き散らす。
「外見は――――こんなんね」
ペラッ。
めくられた二枚目のページには、メサイアの三面図が載っていた。
羽を背負ったような、優美なデザインは美奈代には見覚えがあった。
「Ｄ－ＳＥＥＤ？」
「そう見えるでしょ？よくよく見ると違う程度にデザイン上は抑えてある。
外見をＤ－ＳＥＥＤに酷似させろっていうのが、上層部の命令なの」
「何故？」
「これは、Ｄ－ＳＥＥＤ自体が魔族軍にもかなり認知されているらしいと、情報部が掴んだことによる、上層部の判断。目立ちすぎるのよね。ここまで優美だと」
「……確かにね」
「ホント……赤城博士はデザインについては天才たるこの私さえ負けるものをもってるからね……」
「本当に……きれいな宝石のような騎ですよね」
「そうでしょ？」
紅葉は嬉しそうに頷いた。
「ラインの優美さを極限まで追求しつつ、装甲を削らない……あの性格さえなければ、赤城博士は私の師匠の一人に数えていいんだけどなぁ……」
紅葉はしきりに惜しい惜しいと繰り返す。
「背中の翼のようなものは？」
「あんたに言われたブースターシステムの改良。あんたが死にかけ

るほどの機動は、この片側４枚、計８枚の可変ウィングによるものよ」
「外してください」
「黙れ。慣性制御は強化してあげるわよ。Ｄ－ＳＥＥＤもこれつけるから」
「嬉しくないんですけど……」
「あんたの性質なら慣れる。私はそう見込んでいる」
紅葉は美奈代にとっては意味不明なことを自信満々に言った。
「どういう」
「だから、黙れ。ただし、“白雷（はくらい）”に搭載できた広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）は搭載不可能。これはもうしょうがないわ」
「……」
「エンジンは両脚部にマウント。分類は、駆逐型から指揮官騎兼高速強襲型へと変換されている」
「高速強襲型？」
「そう。あんたとお姫様得意の斬り込みに適した仕様ってこと」
「……」
「“白雷（はくらい）”とのパーツ及びオプションの互換性は、Ｄ－ＳＥＥＤと比べても格段に上がってはいる。……個人的にはあんまりつけて欲しいとは思わないんだけどね」
「何故？」
「優美さが消えちゃうでしょ？ゴテゴテつけると」
「……外見で戦争するつもりもないんですけどね」
「しかたないでしょ？あんたが使えるメサイアって、本当に少ないんだから」
「……ううっ」
「装甲は機体の動きに合わせてスライドする機構を加えられたものを採用している。
関節部は“白雷（はくらい）”譲りの強化パーツを組み込む。
こんなことしてるのは、Ｄ－ＳＥＥＤだけなんだもん。

今更、一々“白雷（はくらい）”をもう一騎建造している余裕はないし、ＤＥＥＤと基本フレームが近いのはあるから、それを引っ張ってきたってわけ」

「基本フレームが近い？」

「フレームは、開発が停止している皇龍のそれを使用する許可が下りた」

「皇龍って」

「そう、天皇騎。」

天皇騎。

つまり、天皇が搭乗することだけを考えられ、建造される騎だ。

普通、見ることはあっても乗ることはありえないシロモノだ。

「まさか！」

「陛下から、貸してあげるから、現段階より絶対に強くして返してねって念を押されたわよ」

「わ、私……天皇騎へ？」

「天皇騎の予備騎用って保存してあったフレームよ。近衛騎士団総隊筆頭騎用メサイアに搭載するプランもある、ものすっごく貴重なヤツ！」

「け、結構です。そんな物騒なシロモノ……」

ガンッ！

紅葉の持ったバインダーの角が、美奈代の脳天に振り下ろされた。

「開発コードβＭＤＩＪβ－Ｘ６０３－Ｓ３“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”。Ｄ－ＳＥＥＤの姉妹騎にあたる騎にするから、気合い入れて準備していて」

スタスタ

遠ざかっていく紅葉の背後で、でっかいたんこぶを作った美奈代が目を回していた。

雲の上の事情

「貴様等の部隊は、八八特務隊と入れ替わり次第、消滅する」
染谷と月城を前に、美夜はそっけなく言った。
「昨日、メサイア第２０８小隊及び内親王護衛隊（レイナガーズ）第３小隊は、解散が決定した」
「……」
覚悟はしていたらしい。
染谷と月城は、眉一つ動かさず、美夜からの言葉を聞いていた。
美夜は続けた。
「貴様等には、部隊消耗の原因と責任をとってもらう。
共に部隊長資格剥奪の上、降格を命ずる。
異動先については、追って命じる。それまで自室にて待機しろ」

「……」
二人が去った艦長室のデスクで、美夜は無言で目をつむっていた。
書類が散乱したデスクの上には、二人が返納した小隊長徽章が照明の明かりを鈍く反射している。
「残念だったなと……言ってやりたいが」
美夜は、デスクに広げられた書類を片づけはじめた。
「上層（うえ）部に自決命令を撤回させるのが、私達、中間管理職（げんば）に出来る精一杯だったんだ」

命だけは助けてやった。
だからいいでしょう？
私はやることやったんだから、むしろ――

「……バカか、私は」

書類を片づける手を止め、自分の脳裏に浮かんだ言葉に、軽く失望した。

左遷されて、それでもクビにはしなかったんだ。

それが何だ？

そんなことを誰かに言われて、自分なら感謝するというのか？

……。

だけど……。

「何だって出来るわけじゃないんだぞ……私だって」

美夜は、胸につけた艦長徽章を、無意識に触れた。

冷たい金属の感触が指先に伝わってくる。

指揮官の証。

部下の生命を預かる者としての重責。

「私だって……いつ……同じ立場に立たされるか」

ふうっ。

自分の責任が不問だったことに、どこかで安堵している。

それが、自分にもわかる。

「……この偽善者」

そう思う。

愚痴が言いたい。

何より……。

美夜の視線が、壁のキャビネットに向いた。

ガラス戸の向こうには、酒瓶が所在なさそうに置かれていた。

異動前に、二宮が置き忘れていった酒達だ。

「愚痴を聞いてくれる相手が欲しいわね」

本当に、気分が乗らない。

酒でも飲んで眠ってしまうに限る。

美夜は椅子から立ち上がると、キャビネットのガラス戸を開いた。
「真理？もらうわよ？」
二宮と飲む時に使うために用意した二つあるグラス。
その一つを手にした時、美夜は自分が孤独だと、そう思った。

“鈴谷（すずや）”から、内親王護衛隊（レイナガーズ）と染谷達の部隊が離れることを知った時、涼は意外な感じを受けた。
追い出されるのは自分達だと、そう思っていたからだ。
「バカやった都築達が追い出されることで、手打ちになったということだ」
「そういうものですか？」
整備を待つ間、宗像は答えた。
「こっちはこっちで、この忙しいのに前衛2騎も喪失だ。泉と祷子が戻ってくれるのを待つしかない」
「お姉さまはいつ？」
「……さぁな」
宗像は肩をすくめた。
「あいつが一体、何に乗って戻ってくるのか、それすら検討もつかない」
「“白雷（はくらい）”が残ってるんですから、それに乗れば」
「……私が思うに」
「？」
「あの2騎というか、後釜についてては、いろいろ覚悟するべきだと思っている」
「？」
「……月城さんだよ。きっとな」
「げっ！？」

潰されたカエルのような声を上げたのは、横にいてやりとりを聞いていた芳(かおる)だ。
「な、なんであの人、ウチに来るんですか！？」
「部隊長やれて、人的に余っているのはあの人くらいだろう？」
「ウゲェ」
吐きそうだ。といわんばかりの顔で芳(かおる)が舌を出した。
「あの人、高校の担任みたいで好きになれないんですよね。遠くなれば万歳だったのに」
「苦手か？」
「絶対、あの人説教ババアですよ。
重箱の隅つついて喜ぶ、陰険なお局タイプ。
絶対、ぜぇったいに、現場じゃ部下に煙たく思われて、私生活じゃオトコよりつかなくて、定年まで仕事辞められず、結婚も出来ず、オトコに飢えてホストに走るタイプ！」
「……そうか」
「……あれ？」
芳(かおる)は、その声が宗像でも涼でもないことと、初めて気付いた。
見ると、二人は何故か、そっぽを向いていた。
「私はそういう風に見られていたか」
「……」
真っ青になった芳(かおる)が、恐る恐る後ろを振り向いた。
そこには、引きつった顔にいびつな笑みを浮かべる月城の顔があった。
「覚えておくぞ？平野少尉」
「一つ……お願いが」
慌てて視線を外し、思わず直立不動の姿勢になった芳(かおる)が裏返った声で言った。
「何だ？」
「て、転属か除隊に協力を」
「それは」

後ずさって逃げ出そうとした芳（かおる）の首根っこを、瞬きするより早く捕まえ、まるで猫の様に片手で芳（かおる）をつるし上げた月城が、トゲのある声で言った。
「お局様の私ではなく、二宮さんに言うんだな。許可してもらえるかは知らんが」

「クビ!?」
紅葉には、その声が“クペェッ!?”と聞こえた。
無理もない。
口に含んだ牛乳を噴き出しながら、美奈代が怒鳴るように大声を上げたからだ。
「……終いにゃ、ぶっ殺すわよ?あんた」
美奈代の口から噴き出した牛乳をまともに顔面に喰らった紅葉は苦々しい。という顔で言った。
「あたし、忍耐力のなさには、かなりの自信があるんだから」
「知っています!」
美奈代はテーブルに身を乗り出しながら言った。
「な、何ですか!?その部隊長三人解任って!」
「しょうがないじゃない」
紅葉が顔をぬぐうのは、ハンカチかと思ったら日本手ぬぐいだった。
「無敗のエリート部隊じゃないといけない部隊が壊滅的打撃を受けた。しかも、戦果は皆無に等しい」
「……」
「いい?ただ負けました。くやしいですなんて、組織じゃ通用しないの。内親王護衛隊（レイナガーズ）のようなエリート部隊は、“負ける”ってこと自体が許されない。自決命じられて当然なのよ?」
「そ、そんな」

「大げさ？わけないでしょ？」
いい加減、口の周りを拭きなさいよ。と、紅葉は続けた。
「一時は総隊長も務めた過去の実績を勘案して、死一等を減じるってね？言い方はいいけど、月城少佐は過去の栄光全部をフイにして命だけ助けてもらったようなもの。
あんたは怒るでしょうけど、月城少佐は長くないわ」
「長く……ない？」
「どこかで適当に殺されるだろうってこと」
「っ！？」
「月城少佐も、騎士や指揮官としての羞恥心があるなら、自らそうするでしょうね。
あんたも覚えておきなさい？
エリート部隊なんて、絶対に入るべきじゃないのよ。
馬鹿馬鹿しい、くだらないメンツが、親からもらった命より重いなんて真顔で言って、それがまかり通る、最低の魔窟よ。あんなトコ」
「染谷中尉も？」
「あれは政治力よ」
「？」
「親が政治家だから、下手に銃殺になんてしたらエラいことになるでしょ？
それに、騎士としての素質はあるんだから、名目上は再出発ってことね」
ほうっ。
美奈代は知らずに安堵のため息を漏らしていた。
だが、紅葉は言った。
「後は自己責任。適当に戦死してもらうつもりでしょうね。
そういう意味では、月城さんと同じよ」
「……」
「一番収まりつかないのは二宮さんでしょうけどね」

「二宮教官、じゃなくて、大佐が何故？」
「二宮さんは、子飼いの月城さんなら大丈夫だって太鼓判押して前線へ、しかも新入りを任せて送り込んだ。
ところがふたを開けたら部隊壊滅、新入りはかなりが戦死。
月城さんを勧めた二宮さんのメンツは丸つぶれ。
こういう場合、現場の月城さんだけで処罰は済まない」
「それで、責任を？」
「これで解任2回目だからね。二宮さんもこれでアウトね。前回は富士学校の教官なんて閑職に回されていたけど、今回はどうなるのかしら」
「……」
「――ま、私達が考える必要はないわ」
紅葉は言った。
「世界がどうなろうと、私達はコイツをどうにかすればいい」
紅葉につられるように、美奈代は視線をむけた。
その先には、メサイアのフレームがハンガーベッドに格納されている。
天皇専用騎用に設計された特殊フレームだ。
「元々が指揮官騎の中でも、特注に近い能力を求められる天皇騎用。予算ふんだんに使って文句が来なかった、あいつの開発してた頃が懐かしいわ」
紅葉は嬉しそうに言った。
「グレードが無制限に高くできた分、拡張性が高いのなんのって。
脚部は簡単な改装でエンジンマウント出来るし、補機類もＤ－ＳＥＥＤより組み付けやすいし。やっぱり、コイツに目をつけた私の判断は正しかった」
「Ｄ－ＳＥＥＤで思い出しましたけど」
「ん？」
「風間の騎は、改装しないのですか？」
「するわよ？」

「いつ？」
「八八特務隊って、元々は天皇護衛隊（オールドガーズ）の特別編成部隊だもん。そいつらが“鈴谷（すずや）”に入って踏ん張ってくれている間に、コイツと一緒にやる」
「改装工事は明日から一週間でしたよね？」
「ええ。１０日後には前線に入ってもらうから。通達だと、夜にはここに来るわ。騎体はね」
「騎体はって？風間は？」
「ちょっと別な所へ。私も知らないわよ」

その夜。

紅葉の言った通り、Ｄ－ＳＥＥＤがラボに搬入された時、祷子の姿はなかった。

●瀬戸内海上空

灯火管制が命じられているはずなのに、街は灯りで満ちあふれていた。
これでは、民間機が飛び回っていてもおかしいとさえ思えない。
そんな中、ローター音を響かせながら飛行を続ける一機のヘリがあった。
ＡＨ－６４ＩＪ。
米軍も採用する攻撃ヘリだ。
戦時下、軍用機の飛行にケチをつける者はいない。
「くそっ……これじゃ、こんなものぁいらん」
パイロットは暗視装置をバイザーから外し、直接目視に切り替えた。

街からの灯りだけでフライトには十分過ぎる程。
いくら灯火管制が自主的だとはいえ、危機意識が無さ過ぎる。
場末のネオンの文字を、パイロットは読みとることさえ出来た。
酔客が町中を我が物顔で歩いてるのに、俺達ゃ、一体、何をしているんだ？
それだけは考えないことにした。
それでも、
１００キロも行けば戦場だと、この国の国民には理解できているんだろうか？
パイロットは本気で心配になった。
ここから１００キロも行けば、このヘリが使い物にならない戦場だ。
そこにたどり着く前に、するべき事はしておこう。
「射撃手」
パイロットは後席に座る射撃手に言った。
「目標はロック出来ているのか？」
「完了です。陸上観測班からのデータリンク正常」
射撃手は答えた。
「こちら“マッチボックス”。パーティの企画は完了」
通信機に短い通信が入った。
「こちら“ゲームマスター”。招待状を届けろ」

●“鈴谷（すずや）”艦橋
八八特務隊が“鈴谷（すずや）”に到着。
明日には染谷隊と内親王護衛隊第三小隊（レイナガーズ）の解隊が決定する“鈴谷（すずや）”の乗組員の心境は、正直な話、複雑だった。
「本当に」
当直のため、自分の席に座る高木副長にコーヒーを出してくれたのは、通信オペレーターの相原鈴少尉だ。

「何だか、艦内の雰囲気が随分変わっちゃいましたね」
「どう？」
「どうって……なんて言いますか」
ツインテールにした髪を揺らしながら、鈴はちょっと考えた後、
「暗いんですよね」と答えた。
「無理もないさ」
高木はコーヒーに口を付けた。
「アフリカからこっち。“鈴谷（すずや）”はある意味では、勝ち戦しかしてなかったからね」
「勝ち戦ですか？」
「“鈴谷（すずや）”から出た騎で未帰還になった騎はないだろう？壊されても、パイロット達は生きていた」
「それは、駆逐中隊のことですね？」
「そう」
高木は頷いた。
「連中は、戦いには勝っていた。戦（いくさ）そのものは負け戦でも、彼等が勝利を求められた戦いで負けたことない」
「……」
「俺や乗組員（みんな）も、それに慣れていた。それだけに……こと、染谷隊の不手際には……」
そこまでいいかけて、高木は口ごもった。
「艦長も、同じお考えなんでしょうか？副長？」
「今まで艦長が艦隊司令部相手にデカい面が出来たのは、“鈴谷（すずや）”の擁するメサイア隊の活躍あってこそだ。
それがどうだ？
部隊が変わってから、勝ったという報告を、司令部に出来たことがあったか？」
「……」
「出来たのは被害報告ばかりだ。君が艦長の立場ならどう思う？」
「そう……ですね」

鈴少尉は悲しげな表情を浮かべたまま、小さく頷くしかなかった。
「そこに奴らが戻ってきた。ようやく何とかなるとは思ったが、あの素行不良だ。都築としては、今までの流儀をそのまま通したつもりだろうが、今の“鈴谷（すずや）”では通じなかった。
それが艦長や後藤隊長の逆鱗に触れちまった。
もう、こうなれば気の毒なのは誰か俺にはわからないよ」
「……」
「副長」
レーダー担当のオペレーターが声を上げたのは、その時だ。
「レーダーに反応あり。ヘリ一機、距離３０キロ。接近中」
「ヘリ？」
「それと、地上からレーダー波照射、本艦を狙っています！」
「発振場所の特定急げ！ＦＧＦ全周囲展開即時待機、それと少尉、艦長を起こしてくれ」
「了解！」
「ヘリより熱源接近中！」
「ＦＧＦ、間に合わせろっ！」

「使用されたのは、ペンギンです」
「ペンギン？」
「ミサイルペンギン属の１種で、学名はＡＧＭ－１１９と言います。艦船に乗る種と航空機に好んで乗る種の２亜種が確認されていますが、ペンギンとして唯一飛行能力及び破壊能力を持っており、約４０ｋｍの距離を最高速度マッハ１．２の速度で空を飛ぶことが出来る点、及び、水中の移動能力がない点では共通しています」
「……徹夜明けで疲れているか？」
「ノルウェー海軍の開発した短距離対艦ミサイルです」
高木は言った。

「帝国陸海軍でもライセンス生産品が」
「そういう報告を望みたいものだ」
美夜は、“ボーナス査定表”と書かれたファイルをデスクに戻した。
「あんな可愛い生き物の名前を兵器につけないで欲しいわ」
「あいつのビンタは強力ですよ？」
「まともに喰らったらほお骨折れるそうね――ところで」
「ヘリはチャフを散布し、通常レーダーから逃走したつもりでしょうが、こちらがマジックレーダーを装備する飛行艦だということは、忘れていたようです」
「艦の被害は」
「被弾1、他はＦＧＦにより阻止。死傷者なし。被弾カ所は艦中央部厨房ボイラー付近。“鈴谷（すずや）”は厨房の使用不能の深刻な被害を受けています」
「司令部からは何か？」
「至急、最寄りの港に寄港せよとの命令が入っています」
「最寄りの港と言っても」
美夜は地図を広げた。
「どこだ？」
「具体的には神戸港です」
「……神戸、か。丁度良い」
「お知り合いでも？」
「亭主の実家が神戸だ」
美夜は言った。
「どう育てたら、こんな時に安否の問い合わせもしてこない、薄情者の夫が育ったのか、向こうの母親に文句言わせてもらうとしよう――副長」
「はっ」
「手みやげの準備を」

「１１０４、当該ヘリは十津川村付近に着陸。１１２３、大型トラックに移乗の後、翌０３４０、和歌山県内の廃工場に入りました」
「廃工場？」
「そこでパーツ単位にヘリを解体し、証拠を隠滅する算段かと」
「……ちっ。陸軍の仕業だという決定的な証拠は掴めないか？或いは、現時点で強襲すれば、もしかすれば」
「問題はその横にある施設です」
「ん？」
「小学校なんですよ」
「小学校？」
「そんなところに強襲なんてかけた日にゃ、銃声一発でどんな事になるか」
「……陸上からレーダー波を当てた連中は」
「レーダー波は陸軍の移動式３次元レーダーと判明しているんですが、こいつらも都市部で行方をくらませています」
「“鈴谷（すずや）”は神戸へ向かっているのか？」
「はっ」
「……万一のことがある。まさか陸軍も本気で我々と事を構えるつもりは」
「ありますよ」
「……何？」
「連中の親玉――鈴木大臣とその飼い主は、皇室なんて恐れちゃいません。連中が恐れるのは支持率の低下だけです。料亭での会話で皇室がどういう風に語られているか、その盗聴テープの記録なんて、おっかなくて、お聞かせできませんよ」
「皇室を恐れず、か……何という非常識な」
「まぁ、永田町なんて掃きだめにいれば、人間そうなりますよ」
「元警官の貴様がいうと、重みが違うな」
「まぁ私ゃ、政治犯は専門外でしたがね」

「どっちにしても国賊だろう？」
「その辺の判断は、お任せしますよ。何しろ私ゃ雇われの身ですからね」
「上手く立ち回るものだ」
「どうも」
「では、結論と行こうか。貴様は、特殊戦術群をこのまま泳がせろというのだな？」
「――はい」
「この方法で、か」
「犠牲はまぁ――しかたないでしょう」
「貴様の部下だろう」
「階級一緒ですもん。部下っていうのは語弊があると思うんですがね」
「しかし――本当に、その“女”というのは、彼女のことなのか？」
「報告書にある通り、アフリカからこっち、魔族が興味を示しそうな女なんて、この娘以外にいませんよ」
「……」
「艦、乗組員の損害はまぁ……ね」
「恐ろしい漢だな――貴様は」
「で、どうするんです？」
「魔法騎士部隊を“鈴谷（すずや）”に送り込む手はずは済んでいる」
「陸軍が侵入したら、すぐ潰しちゃうんですか？」
「残念そうな顔をするな。
艦や乗組員に出た損害の穴埋めを、誰が支払うと思っているんだ」
「ははっ……それは確かに」
「派遣する部隊は、騎士で編成された対テロユニットと思ってくれて良い。私の子飼いだ」
「はぁ……」
「――不満か？」

「滅相もない。そう言いたいんですがねぇ」
「……麗菜の部隊が、どれ程無様な結果を残したかは知っている。だが、あれと一緒にするな。
麗菜は自分の周りを女で固めたいがためだけに、少しでも腕が立つと知れた女騎士を集めているに過ぎない」
「それは良いことですかねぇ」
「嘆かわしい限りだ――親の身になってほしい」
「はぁ……」
「私が送り込むのは、実戦経験だけで人選を決めた者達で編成された部隊だ。福井大尉や南雲中尉は知っているだろう」
「――ああ。なんだ、かなめちゃんの――失礼、福井大尉達ならば、ええ」
「元警官の部隊。
そう言えば貴様も少しは安心できるだろう」
「融通は利かせてもらえそうですな」
「そういうことだ。
これでも私は最大限、貴様に配慮しているつもりだ」
「泉大尉のフレームの件といい、いつも感謝していますよ」
「あの騎は麗菜も欲しがっている。
総隊筆頭騎用のフレームを回すと知られた日には、麗菜と何年ぶりかで親子喧嘩になったわ」
「申し訳ありませんね」
「何――親子で会話するきっかけが少なくて困っていた所だ。丁度よかった」
「そう言っていただけると、正直、救われます」
「それと……あの騎と同型のパイロットの」
「風間中尉なら、別な場所にて厳重に護衛監視下に置いています。とは言いたいんですが、何しろ、私が管理してるもんじゃないんで」
「……そうか」
「――ま、私ゃ狗（いぬ）の一匹として職務に励みたいんで、“鈴谷（すずや）”の

問題にアタマを限定させてくださいよ。
　元来、そんなにいいデキじゃないんですから」
「――よくも。カミソリと言われた頭でそう言うか」
「ははっ。恐れ入りますね――ある程度、ことが済んだ頃に、騎士部隊に動いてもらうほうがありがたいんですよ。私としては」
「よかろう――全権をゆだねる。好きにやれ」
「朗報をお届けしますよ」
「いや、その前に」
「――は？」
「ここの支払いを頼む」
「はいはい――」
「すまんな。忍びで外に出たことが陛下に知られると、色々と厄介なので、こんな所に呼び出して」
「いえ、しかし」
「――ん？」
「こんな話……あなたとこんなガード下の赤提灯でするとは」
「――驚いたろう？」
「ええ――呼び出し受けたんで、一張羅の礼服クリーニングから戻したばっかりだったんですがねぇ」
「私達も色々とあるのだ――オヤジさん？支払いはこの人で」
「――へい」
「福井大尉には、あなたの指揮下に入れと言っておくか？」
「いや――ここは、直接的な指揮に俺が関与しない方がいいでしょう」
「ん？」
「情報が漏れた場合、俺も“鈴谷（すずや）”で厄介な立場になります。後々響くんで」
「責任は福井大尉に？うまみは貴様か？」
「それが――まぁ、うまみってもんでしょう？」
「――人のことは言えないものね」

「お送りしますか？」
「何。昔取った杵柄だ――陛下をお守りしたこの身は鈍ってはいない」
「……」
「とにかく」
「――は」
「陸軍にこれ以上、デカい面をさせるな。私は民州等も陸軍も、政府という存在は全てが大嫌いだ」
「――はい」
「陛下に弓引く者は全て殺せ。よいな？後藤中佐」
「はい――詩織様、じゃなくて、皇后陛下」

鈴谷　艦内戦　第一話

「何もするな？」
神戸港の埠頭。
軍需物資を満載した大型船舶に混じって、飛行艦“鈴谷（すずや）”がその独特なデザインの容姿を曝している。
“鈴谷（すずや）”の丁度真ん中にあたる部分には、黒く焦げた大きな穴が開いていた。
“鈴谷（すずや）”。
それこそが目的地のはずなのに――。
「もう、目の前だぞ？」
「しかたないですよ」
訝る女性士官を前に、２メートルを超える巨漢が恐ろしく太い筋肉で出来た肩をすくめてみせた。
「どうも――裏に後藤さんがいるらしくて」
「後藤さんが？」
女性士官の端正な眉が、ピクリと動いた。
――あ、少しは化粧してるんだな。
巨漢はふと、その眉を見てそんなことを思った。
「……」
「どうします？」
「後藤さんの考えが知りたいな」
「どうせロクなことじゃないですよ」
「……南雲」
「はっ？」
「今回の作戦の目的は？」
「要人警護」
「……のはずだな」
「しかし」

「ん？」
「後藤さんは、少し考えを持っているようです」
「目的が、後藤さんと我々で違う？」
「はい――“鈴谷（すずや）”に侵入が予想される敵から、保護すべき対象を護るのが我々の想定する任務と考えるのが普通です。
しかし、後藤さんは――えっと」
巨漢は、頭の中が整理出来ない、という顔で唸った。
「ううっ……俺みたいなバカにゃよくわかんないんですけどね？要人警護より、敵を排除することを優先しろと言ってるんじゃないですか？」
「何故？まるで、見て見ぬフリをしろといってるのと同じだぞ？その理由は？目的は？」
「……」
「――まず、あのカミソリ殿が、何を考えているか、マトモな頭で判断しよう。まったく、必要な時に関与しない、あのひねくれた性格には閉口する」
「はい」
「要人をどうするべきと後藤さんが見ているか」
「見殺しにするつもりはないとすれば、保護すべきと」
「うむ。そして、陸軍をどうするつもりか」
「作戦に成功、つまり、要人確保に成功させたと思わせ、実は大失敗だったという、手痛いしっぺ返しを喰らわせる」
「……長年、あの人の下にいただけのことはあるな」
「煮え湯ばかり飲まされれば、俺でもこの程度の予想は出来ます」
「よし」
女性士官は頷くと、近くのドラム缶に置いてあった紙包みを巨漢に手渡した。
「加藤が手に入れてきてくれた。メシはまだだろう？」
「ありがとうございます」
包みの中身は、３人前はあるだろう、にぎり飯だった。

「――作戦は決まった。これはどうやら、私達の仕事ではないようだ」
「は？そりゃ、どういう？」
「私に任せておけ。悪いようにはしない」
女性士官――福井かなめ大尉は、南雲敬一中尉に不敵な笑みを浮かべて見せた。

「絶対、納得出来ない！」
“鈴谷（すずや）”の食堂で乱暴にテーブルを叩いたのはフィアだった。
顔を真っ赤にして激怒している。
「何で瞬が降格して、回収部隊（ベルゲ）に回されるの！？」
そう。
染谷の人事が決まったのだ。
他の騎士達、つまりは生き残った染谷隊の騎士達は、全員が各部隊の補充兵として送られることが決定。
たった一人、染谷だけは別な人事が下された。
戦場で擱座したメサイアを回収する回収騎――最近では戦闘工兵騎と日本語表記される――海外ではベルゲ騎とも呼ばれる、とにかく基本的には戦闘に参加しない騎のパイロットに命じられたのだ。
戦闘中はずっと“鈴谷（すずや）”のカタパルト付近に待機して、何かあれば危険を顧みずに戦場で擱座騎の回収任務にあたる、日の当たらない、感謝されることも希、注目を浴びることは基本的にない日陰仕事だ。
そんな部隊にいれば、出世もなければ未来もない。
“鈴谷（すずや）”のベルゲ騎に空きがあるから、そこに入れと、平野艦長から命じられたのだが、
「そんなの、あの美奈代にでも任せればいいのよ！」

――ああ。
染谷は内心、苦笑した。
実は、人事を告げられた時、美夜に言われたのだ。
フィアは激怒するだろう。
理由？
ダンナが左遷されて喜ぶ女はいない。
私なら射殺する。
きっと泉にでも押しつけろとでも怒鳴るに違いない。

だがな？染谷。

これはお前のためでもある。

父上が、非公式とはいえ、近衛に圧力をかけつつある。

――怒るな。

名門摂家たる染谷家の跡取りのお前が戦場でどうこうなるのは避けたいというのは、考えれば当然のことだ。

――跡取りは弟達がいる？
それが親心というものだ。
それと、ベルゲに乗っている間、お前は泉達のトリッキーなまでの戦いぶりを間近で見ることが出来る。

わかるか？

お前の部隊の連敗した理由の一つは、一つの戦法に固執する硬直したことにある。
その辺、一つの戦法に全く拘らない泉の指揮は、正直、見物だ。

以前、頭を柔軟にしろとか、そう言った覚えがあるが、お前はもう少し、頭じゃなくて感性で物事を発想する能力を身につけた方が良い。
“鈴谷（すずや）”のベルゲを勧めるのは、そうしたことに打ってつけだからだ。

――わかったか？
泉達の戦いを、自らの血肉にするんだ。
出来なければ、お前に未来はない。

――よし。
まず、怒り狂うフィアの説得に努めるんだ。
いいな？

成る程？
平野艦長は正しい判断をしている。
フィアは激怒しているし。
「あのね？フィア」
染谷は言った。
「これは罰ゲームだけど、僕はいいと思っている」
「何が！」
「フィアに万一、何かあっても、僕は堂々と君を助けに行けるから」
「……あっ」
「そういうことさ」
「そ……そっか」
赤くなってモジモジするフィアを前に、染谷は内心で、何とかなった！と喜んでいた。
「し、瞬は、私のことを考えて、そう言ってくれているんだよね？」
「そうだよ？」

染谷は、そっとフィアの手を握った。
「だから――わかってほしいんだ。フィア」

「――とはいえ」
その後、染谷はハンガーデッキにいた。
目の前ではかつて都築騎だった“白雷改”が整備を受けている。
肩に書かれたキルマークは、都築が、この騎であげた戦果が、染谷の数倍ではとても足りないことを物語っている。
「……」
キルマークが全てではない。
そう思いたい。
だが、騎士としての何かが、そんな考えを否定してしまう。
撃破数が騎士の価値だと、言い聞かされてきた身だ。
悔しい。

それが一番、本音に近い気がする。
無意識に、クセで握っていた拳に力が籠もる。

今、整備兵がキルマークとキャノピーのパイロット名をペンキで消そうとしている。
それが、何だか自分に対する当てつけにさえ思えてしまう。

――もし、こいつを与えられていたら。

脳裏に、死んでいった同級生達の顔が浮かんでは消えていく。
無様と笑われまでした、死に物狂いの戦いの光景が、浮かんでは消えていく。

――――こいつが配備されてたら、一体、何人死なずに済んだんだろう。

都築騎の横には、狙撃仕様に改装された小清水騎がある。

染谷にとって、腹立たしいのはそちらの方だった。

――――こんなハイパワー騎を、どうして狙撃兵になんて回すんだ。

――――どうしてこいつを、全部前衛に回してくれないんだ。

――――狙撃兵なんて、アリアどころか、“征龍（せいりゅう）”でも十分じゃないか。

染谷の握った拳には力が入り続ける。

「あれ？」

睨むように“白雷改”を見上げる染谷に気付いたのは、涼だった。

「染谷中尉？」

ハッ。となった染谷は、小首を傾げながらこちらを見る涼に気付き、気恥ずかしそうに、ぎこちない笑みを浮かべて敬礼した。

「どうしたんですか？」

涼は答礼した後、不思議そうな顔で訊ねた。

「何かあったんですか？中尉」

「いや、あのね？」

中尉。

その言葉に、悪意がないことは、涼の態度から明白だ。

染谷は苦笑しながら襟の階級章を指でつついた。

「降格されたから」

「し、失礼しました！」

ギョッとなった顔で、涼は慌てて敬礼した。

「し、知らなかったので！」

「いいよ。ごめんね？びっくりさせて」
「い、いえ……」
「――ああ、そうだ」
染谷は涼に訊ねた。
「どう？“白雷（はくらい）”の調子は」
「万全です」
涼は笑って言った。
「改装してからは楽ですよぉ？あのＨＭＣは、“白雷（はくらい）”の時は泣かされましたから。重いしパワーとるし」
「パワー？カートリッジからとるんじゃないの？」
「冷却システムは騎体からのパワーで動くんです。連射していると、冷却システムにパワーがとられて騎体の出力がものすごく落ちるんですよ？おっかないんですから」
「“白雷（はくらい）”……で？」
「お姉さま、じゃなくて、泉大尉が、私達、狙撃部隊をあまり動かさないのは、そのパワー不足に陥ることが分かっているからです」
「し、信じられない」
「何がですか？」
涼は、ムッとした顔で言った。
「お姉さまには、そんな考えも出来ないと？」
「いや、そうじゃなくて」
涼が変な方に勘違いをしていることを悟った染谷は、慌てて手を左右に振った。
「狙撃部隊にそんな制約があるってこと」
「――ああ」
涼は何度も頷いて言った。
「実体弾兵器ならそうでしょうね。でも、ＨＭＣはそうはいきません。
今回のエンジン増設だって、元をたどれば高機動型への改装と一緒にＨＭＣの冷却システムのパワー不足の解決を一挙に何とかしよ

うって所から始まったんですから」
「“幻龍改（げんりゅうかい）”あたりじゃダメ？」
「ダメですよぉ」
涼は笑って言った。
「ＨＭＣが今までお蔵入りしていた理由を考えてください。
アリアじゃ出力のほとんどを冷却システムに奪われるからですよ？
そんなことしたらアリアはメサイアじゃなくて、固定砲台になります」
「……」
染谷は、自分がどうやら勘違いしていたことを思い知らされた。
必要があるから、“白雷（はくらい）”に狙撃兵仕様が設置された。
そんな単純なことすら思いもつかなかった自分の限界を見た気がした。
「そう……か」
「“白雷改”を前衛に回して欲しいとか、そんなこと考えていましたか？」
「……図星だよ」
「……成る程？」
涼は苦笑して、通路の手すりによりかかった、次の瞬間。

ズンッ！！
ズズンッ！

艦のあちこちで、そんな音がして、艦が激しく揺れた。

鈴谷　艦内戦　第二話

ズンッ！

何度目かの爆発音を、美夜は艦長室で聞いた。

「何だ！？」

美夜は揺れる室内で、デスクにしがみつくと、デスクの上に置かれたインターフォンをとった。

「艦長だ。何が起きた！？」

相手は艦橋の高木副長だ。

「艦内に侵入者多数侵入！」

「侵入者？」

「武装した兵士多数。水中から侵入！」

「F層、E層各ブロックに侵入されています」

「目的は？その前に艦内の全気密扉と全隔壁を閉鎖しろ！艦内で白兵戦だ！武器コンテナ開放！私もすぐにそっちへ！」

「ダメです！」

高木は怒鳴った。

「艦長を危険に晒せません！艦長室を出ないでください。艦内通信線が生きているかぎり、そちらで指示を願います」

「了解した！くそっ！」

インターフォンを戻し、美夜は引き出しから拳銃を取り出した。

「一体、どこの誰だ？」

フィーッ。

フィーッ。

“鈴谷（すずや）”の艦内に警報が鳴り響き、気密扉が自動的に閉鎖されようとするが、

ギギッ！

気密扉は、撃ち込まれた楔で動くことが出来ない。

そのすぐ脇では、艦内の電気配線を調べている迷彩服姿の男達がいた。
壁のパネルを外して、中のケーブルから視線を外した男がほくそ笑んだ。
「頭が違うんだよ」
そう笑う男の真横で、天井から降ってきたのは隔壁だった。
ガンッ！
元が空の上で気密性を確保するためのシロモノだ。
万一に備え、天井と床から二重に展開される気密隔壁は気密扉を、つまり、その間近にいた男達を挟み込むように展開された。
「くそっ！？」
一瞬にして隔壁によって動きを封じられた男達は、顔をしかめた。
「こんなの聞いていないぞ！」

「Ｆ－３６ブロックで挟み込みました！」
「エアーを抜け！」
監視モニターで各ブロックを監視するのは、艦橋の高木副長だ。
「各隔壁の閉鎖確認次第、全ブロックのエアーを抜くんだ！ガスより効くぞ！」
「はいっ！」
オペレーター達が一斉にコンソールを操作し始める。
元々が高々度でも飛行することを前提に作られた飛行艦だ。
その空調は、操作次第では担当区画を空気で満たすことも、逆に抜くことも出来る。
高木が指示したのは、空気を抜く方だ。
ガスマスクが酸欠に通じるはずがない。
酸欠状態に長時間置くのは危険だが、武装した兵士達の前に、乗組員を下手に送り込むのに比べればマシだ。
「ＤとＦ層はそれで鎮圧できる！この時間にノコノコあのブロック

にいる間抜けは？」
「この時間帯、最下層ブロックには滞在は禁止されていますから」
「つまり、巻き添えになったら、そいつの責任だ」
「……そういうことですね」
「艦橋クルー全員に命じる！」
遠くからヘリのローター音が聞こえてきた。
高木は大声で命じた。
「現時点をもって艦橋を放棄！すぐに真下のサブ艦橋へ移れ！急げっ！」
オペレーター達が、書類と拳銃を小脇に挟むと、艦橋から駆けだしていく。
高木はメインモニターに映し出されている艦内状況を確かめた。
敵は喫水線のあるC層から侵入。
最下層のF層とその上、D層をほぼ制圧しかけている。
D層の弾火薬庫、そしてフィルードジェネレーターがあるF層を制圧を目的としているのは確かだ。

そちらはいい。

問題は、兵員居住区と全ブロックをぶち抜いているに近いメサイアブロック。
侵入者はメサイアブロックの入り口で隔壁相手に格闘している。
メサイアブロック内部では３０ミリ機関砲まで用意した整備兵達が待ちかまえている。
ＭＣ達（メサイア・コントローラー）はメサイアの中で待機中。

こちらも、何とかなるな。

頷くと、高木は最後に艦橋を出た。

艦橋にヘリからの機銃掃射が始まったのは、その次の瞬間だった。

「パパバードよりアルファチーム。索敵レーダーが作動している。危険回避のため、これより離脱する」

「アルファチームリーダー、了解。英田、池田は俺に続け。内田は後方警戒」

ヘリから艦橋に降り立った兵士達のレシーバーに部隊長からの命令が続々と伝えられてくる。

「非戦闘員への発砲も許可されている。ただし、目標への発砲は厳禁。繰り返す」

「司令部からの通信は!?」

「通信アンテナを破壊された模様――通信が飛びません!」

「ちっ!」

ズンッ!

「艦内、A居住区に侵入!」

「メサイア区画から敵が離れます!」

「何?」

戦闘司令塔を兼ね、重装甲に護られた司令艦橋に移った高木は、モニターを見た。

艦内の侵入者は艦内図上を赤い点で移動している。

数は30近い。

ヘリで強襲をかけてきた連中が艦内へ続々と侵入を続けているのに、連中はメサイアに目もくれない。

まるで、メサイアに感心がないといわんばかりだ。

おかしい。

この艦の目玉はメサイアのはずだ。

だというのに、それに関心を示さない？
そんな馬鹿な。

高木は、敵がどこを目指しているのか、敵の動きから探って、そして結論を得た。

「……居住区へ？」

メサイアの装甲板が乗せられたカートが入り口という入り口の前に置かれ、はちまきをした整備兵達が銃や棍棒、スパナといったありとあらゆる武器を手に、即席のバリゲートに隠れている。
メサイア達のコクピットでは、騎士とＭＣ（メサイア・コントローラー）が騎体を稼働状態のままに待機している。

ピーピーピー

電話線を延長してバリゲートの影まで引っ張ってきたインターフォンをとったのは榊整備班長だ。
「おう――高木さんか？」
年代物の歩兵銃を脇に置くと、坂城はインターフォンに言った。
「こっちはいつでもいけるぜ？」
「そちらから敵は離れています」
「おい――そいつぁ、どういうことだ？」
「不明。ただ、連中の目的はメサイアの確保じゃないってことです」
「……？」
坂城はしばらく考えた後、
「こいつぁヤバいぞ！」
血相を変えて怒鳴った。
「高木さんよ！敵の狙いは俺達でもメサイアでもねぇ！あのお嬢ち

やんだ！」

ドンッ！

突然の鈍い音と同時に、坂城達がバリゲートを張ったのとは全く別方向の壁に穴が開いた。

全くの壁だったところに開いた穴から兵士達が侵入。物陰に素早く隠れた。

銃弾が容赦なく自分達めがけて飛んでくる。

「わっち！」

銃弾を避けるため、坂城達は頭を上げることが出来ない。

「壁破壊（ウォールブリーチ）だ！」

坂城はインターフォンに怒鳴った。

整備兵達が一斉に銃弾を穴の周辺めがけて叩き込む。

カランッ

物陰から放り投げられた筒から白い煙が吹き出し始めた。

「スモーク！」

「大丈夫だ！毒ガスじゃねぇ！」

「宗像さんよ！」

インターフォンを操作した坂城は怒鳴った。

「やってくんな！」

メサイア達が一斉に動き、物陰から銃撃を続けていた兵士達が、一斉にギョッとなった時には遅かった。

最も小型だからという理由で装備されていた３０ミリ多銃身機関

砲が鋭い回転を開始。
その筒先は、彼等を向いてた。

グウォォォォォッッッ！！

ハンガー一杯に響いた射撃音。
床に跳ねる大口径機関砲の空薬莢。
整備兵達は物陰に隠れて脅威が終わるのを待つしかない。
その中には染谷もいた。
坂城は、近くで耳を押さえて小さくなっていた染谷の肩を力一杯引っ張った。
「染谷！」
「はいっ！？」
「あいつらは囮だ！」
「囮！？」
「あいつらの狙いは――――フィアだ！」
「……」
きょとん。とした顔をしていた染谷だったが、意味が分かったらしい。真っ青になった。
「意味が分かったらしいな！」
「な……なんで」
染谷は坂城に縋り付くように近づくと焦った口調で言った。
「何で、フィアが！？」
「連中の狙いはメサイアじゃねぇ！居住区だ！それで狙いはわかるだろうが！」
「……っ！」
「いいか！？ここを動くな！」
「しかしっ！」
バンッ！
坂城の平手が染谷の頬を張った。

「お前一人で何が出来る！思い上がるな！」
坂城は染谷の胸ぐらを掴みあげた。
「軍隊じゃ、正義のヒーローなんていらねぇんだ！お前が暴走して居住区に向かってみろ！周りがどれほど迷惑するかわかってんのか！」
「――――くっ！」
「俺の側離れるんじゃねぇぞ！離れやがったら、簀巻きにして海に叩き込むからな！」
「おやっさん！ハッチ開けますか！？」
「馬鹿野郎！ハッチに手をかけるな！外に爆薬でも仕掛けられてたらどうするんだ！」

ズンッ！
ズズンッ！

目の前を鼓膜がどうにかなったんじゃないか。と疑いたくなる爆発音がして、激しい爆風が駆け抜けていった。
物陰に隠れていた兵士達は、火薬のにおいで息が詰まりそうになるのを堪え、爆薬が開けた新たな通路を進む。
「ターゲットはＬ区画１０８号室だ」
兵士達は周辺に警戒しながらも、進む足を速めた。
「他には目もくれるな。出会った者は皆殺しにしろ」
「了解」
全てのドアが閉じられている。
ドアの向こうではどんな奴らが息を殺しているんだろう。
その気になれば、全員を殺すことさえ出来る。
兵力さえあれば。

グウォオオオオッッッ！！

すさまじい、獣のうなり声が聞こえてきた。

Ａ－１０の射撃音にそっくり――――つまり？

「司令部より緊急。メサイアが動き出した！時間を早めろ！」

「ハンガーハッチ前に爆薬はしかけてある。時間稼ぎにはなる！確実にやれ！」

くそっ。

そういうことだ。

歩兵上がりの彼には、Ａ－１０の射撃がどれ程の破壊力を持つか、肌身にしみてわかる。

ハンガーに侵入を試みた連中は、あいつの洗礼を喰らったんだ。

挽肉じゃ済まなかったろう。

くそっ。

ポーチから閃光弾を引き抜くと、兵士は舌打ちした。

一体、何だって言うんだ？

この作戦は？

１０８

それだけが書かれた古ぼけたドアの前。

兵士達のゴールはここだ。

壁に張り付いた兵士達は、互いに頷きあう。

一人の兵士がドアノブに手をかける。

ノブは回らない。

カギがかかっている。

もう一度、兵士達が頷くと、一人の兵士が、背中に背負っていたポンプ式のショットガンを引き抜き、弾薬を装填すると、ドアの前に立った。

バンッ！

破裂音がして、ショットガンから放たれた弾丸がドアのカギをブチ抜く。

ショットガンを持つ兵士は即座にドアの前から離れた。

脇に待機していた兵士がくるっと一回転すると、後ろ足でドアを蹴りつけた。

ドアがそのショックで、内側に開いた。

ドアの向こうからの抵抗はない。

閃光弾を持つ兵士が、ドアの隙間から、室内に閃光弾を放り込む。

ドアの向こうから激しい音と閃光が襲ってくる。

室内にいたらそれなりの目に遭うのは間違いない。

閃光が収まったのを確認する間もなく、兵士達は室内に飛び込む。

テーブルや椅子、食器類。そして年頃を感じさせるぬいぐるみなどが散乱する床。

兵士達は、ベッドのシーツの中に潜り込むような姿勢で横たわる人間の姿を確認した。

乱暴にシーツをはぎ取ると、そこから目も覚めるような金髪がこぼれ落ちた。

美しい金髪の美少女が、ぐったりとした様子でベッドに横たわっている。

フィアだ。

兵士の一人が、ポケットから写真を取り出し、フィアと何度も見比べると、頷いた。

兵士達は、フィアをシーツで乱暴に縛ると、一人がフィアを担ぎ上げ、そのまま部屋を飛び出した。
「こちらアルファ7、目標を確保！ランデブーポイントへ向けて移動中！」

「ヘリが接近中！」
「くそっ！？」
高木が舌打ちした。
「レーダーが囮だってわかったのか！？」
「本気で撃たせる気かもしれませんよ？」
「……ＣＩＣ、撃つな！？撃ったら、近衛の終わりだぞ！」

「副長！敵の無線を傍受！」
通信オペレーターの鈴少尉が報告する。
「ランデブーポイントへ向けて集結しろと繰り返しています」
「ランデブーポイント？」
「ヘリの着陸地点では？」
「……そのまま送り出せ！いいか！？撃墜は考えるな！」
「副長！艦長です！」
別な通信オペレーターが、インターフォンを高木に手渡した。
「高木です。現状は――――はい……は？し、しかし！……了解です」
高木は煮え切らない。という顔でインターフォンを戻し、艦内放送に切り替えた。
「司令部より全乗組へ命じる！武器を持つ者は速やかに甲板へ向かえ！発砲自由！侵入者を捕獲せよ！捕獲不能の場合」
高木はそこで言葉を句切り、そして、はっきりとした声で言った。
「捕獲不能の場合、射殺を許可する！」

「射殺！？」
メサイアの装甲から切り出した手製のシールドを手に、ハンガーからおっかなびっくり顔を出していた整備兵達は、ギョッ！？とした顔でお互いを見合ってしまった。
「今、射殺しろと聞こえたよな？」
「ああ。だが、勘違いするな。捕獲第一、射殺は二番だ」
「おやっさん！？どうします！？」
「防弾シールドもって追いかけろ！」
坂城は怒鳴った。
「――――染谷。お前は俺の側にいろ」
「何でですか！」
「回収部隊は俺の支配下だ。お前はもう、息するのも俺の許可がいる身だ」
「そんな理不尽な！」
「死に急ぐバカぁ、俺の部下にゃいらねぇ――――辞めたければ棺桶用意してこい」
「……っ！」
「シゲ！機関銃と一緒に狙撃砲持っていけ！場所が場所だ！下手にヘリに当てるんじゃねぇぞ！？」
坂城に言われ、シゲが整備服に日の丸の鉢巻き。ベルトリンクを体に巻いて、機関銃を片手に頷いた。
周囲にはシールドとＰ－９０を持つ整備兵達が立っている。
「へいっ！西っ！ご自慢のドラグノフもってこい！チベットで捕獲したヤツ！」
「押忍っ！」
「神原！ＲＰＧ－７だ！ゲームでヘリ撃ち落とした腕前、実戦で示せ！」
「むちゃくちゃだ！」
「うるせぇっ！須藤と飯田！シールド持って前に立て！」

「坂城班長……あの、自分も」
「耐えるのも任務だ――――ぼさっとしてねぇでハンガー片づけろ！
夜が明けたら爆発物の処理だ！」
「はっ」
「返事どうした！」
「はいっ！」
染谷は掃除道具を求めてロッカーへむけて駆けだした。
染谷には、それしか出来なかった。
恋人を助けにも行けない、何も出来ない自分に、染谷は涙が止まらなかった。

――――そして一方、

射殺許可。

一番、驚いたのは襲撃した方だった。
まさか！
本気で信じられない。
何しろ、ここは日本で、一応は友軍だ。
それなのに、射殺が許可された。
身内に殺されるなんて、そんな馬鹿な！
身勝手な言い分でしかない。
だが、兵士達は、脱出ポイントに向けて走りながら内心の焦燥感を抑えられなかった。
背後が気になって仕方ない。

「いたぞぉっ！」
後ろからそんな声がする。

最後尾にいた兵士がとっさに通路に向けて小銃をフルオートで発射する。
命中は期待しない。走っている間に、敵の発砲をくい止めるだけで良い。
ズガガガガガッ！
一体、近衛は何を装備しているんだ。
そう聞きたくなる、耳慣れない射撃音が連続して聞こえてくる。
ビュンッ！
走る兵士達の耳元を銃弾がかすめていく。
耳に激しい痛みが走るが、気にする余裕はない。
歯を食いしばって、そこの角を曲がるだけだ。
「ぐうぅっっ……っ！」
後ろの兵士が呻くような声を上げた。
何が起きたのか確かめる余裕なんてもっとない。
外に通じることを示すドアの表示。
外からは銃声に混じってヘリのローター音が響いている。
「第二小隊、江原、そっちはどうだ！？」
「甲板に到達。ヘリを待っています！」
「よし！すぐに行く！」

ゴールだ。

ガチャ――ガチャ
扉にはカギがかかっている。
「ブリーチ！」
ノブから手を離した指揮官の声に、兵士が背中に背負っていた板状の爆薬を扉に貼り付ける。
「完了！」
「起爆っ！」

ズンッ！

鈍い音を立てて、扉が吹き飛ばされた。
ドアを失った空間に、漆黒の世界が広がっている。
「手榴弾！」
言いつつ、兵士は歯で手榴弾の安全ピンを引き抜き、外へ向け、左右に放り込んだ。
ズンッ！
ドンッ！

手榴弾の爆発音に混じって、

ギャッ！？
ウワァァァッッッ！

人間の断末魔に近い苦悶の声が聞こえてくる。
しかし、兵士達は構っている余裕はない。
後ろからはすでに兵士達を殺すために敵が迫ってきている。

「走れっ！」
「ケツ上げろっ！」
兵士達は互いに怒鳴りながら外に飛び出した。
そして――見た。
甲板をのたうち回っている兵士達は――味方だった。
甲板の手すりにもたれかかるようにして死んでいる兵士は頭部がない。
左足を太股のあたりから吹き飛ばされ、必死に足を押さえている者。
腑を撒き散らし、虫のように足掻く者。
すべて、味方だった。

突然のブリーチの爆発で足止めを喰らった所に手榴弾を放り込まれたことは、すぐに想像がついた。
友軍誤射の中でも最悪のケース。
「いくぞ！」
指揮官が怒鳴る。
兵士達は、一瞬の躊躇を見せたが、外に飛び出した指揮官に続いた。
友軍の死体を、腑を、肉片を、すべてを踏みつけながら、脱出ポイントへ向かってひた走った。
友軍のヘリは、脱出ポイントに降りようとしていた。
「急げ！」
ヘリから通信が入る。
ヘリから放たれるサーチライトが敵には目つぶしになっているらしい。
そのサーチライトが照射された場所めがけて、ヘリのドアが開かれ、M２重機関銃が辺り構わず発砲を続けている。
「乗り遅れたらおいていくぞ！」
「待てよ！」
兵士は堪らず怒鳴った。
「負傷兵だっているんだ！」
「まず“荷物”を乗せろ！」
別な兵士が担いでいたシーツがヘリに放り込まれる。
「これか！？」
「そうだ！」
ガンッ！
途端に、ヘリの兵士が、乗り込もうとした兵士を手にした銃尻で殴り倒した。
甲板に叩き付けられ、信じられない。という顔をする兵士。
ヘリの中から銃尻で彼を殴った兵士は、その彼の前で、悠然とした態度で、M２重機関銃を操作していた兵士の肩を叩いた。

すると、その兵士はＭ２重機関銃をその兵士達に向けた。
味方に、だ。
「お……おい」
兵士が、何事か言おうとした。
しかし、それより早く、Ｍ２重機関銃から発射された１２．７ミリ銃弾が彼の頭を粉砕した。
逃げまどう兵士達が、背中から銃機関銃に体を砕かれて死んでいく。
正視に耐えられる光景ではなかった。

「馬鹿な！」
「あいつら、味方を撃ってやがる！」
１２．７ミリの機銃掃射を受け、外に出られない整備兵達は、逃げまどう兵士達がヘリからの射撃で殺されていくのを目の当たりにした。
「あいつら、狂ってるぞ、おいっ！」
整備兵の誰かが怒鳴る。
「あんな奴ら、死んじまった方がいい！」
「そうだ！神原！ＲＰＧ－７だ！」
「バカ言うな！」
神原と呼ばれた小柄な整備兵は言った。
「ここでやったら、“鈴谷（すずや）”の甲板にアイツが落ちるんだぞ！？艦が沈むぞ！」
「ならどうしろっていうんだ！」
「知るか！」

右往左往する整備兵達の前で、ヘリがゆっくりと艦から離れようとしていた。

“鈴谷（すずや）”の対空近接防御システムが作動したのは、それからすぐのことだった。
しかも、それはヘリに向かって射撃されたのではなかった。

遠ざかっていく“鈴谷（すずや）”。
それまで機関銃に取り付いていた兵士は、機関銃を収納してドアを閉めた。
乱気流のように入り込んでいた風が止まり、機内はローター音だけが響く。
それだけで何だか機内が恐ろしく静かに感じられる。
そんな中、兵士達はシーツを取り囲んで見下ろしている。
白かったシーツはあちこちが赤く染まっている。
誰の血か、一々訊ねる者はいない。
「これか？」
一人がシーツをブーツのつま先で軽く突いた。
「はい」
別な兵士が頷いた。
「これが、確保対象です」
「……シーツを剥げ。確認する」
「はっ」
兵士はナイフを取り出すと、シーツを切り裂いた。
そこから出てきたのは、フィアだ。
さすがに意識が回復していた。
シーツからのぞく兵士達を睨み付けている。
その目が気に入らないのか、兵士は、フィアの腕を掴むと、乱暴にシーツから引き出した。
シーツに縛られて手足の自由が利かないフィアは、床に転がった。
痛みに耐える口からは、悲鳴一つ上がらない。

「こんな子供一人のせいで、戦術群は1個中隊を失ったというのですか？」
「余計なことを言うな」
「しかし」
「戦術群に犠牲はない。奴らは戦術群には存在しない。そういうことになっている」
「き、切り捨てたのですか？」
「元来、特殊戦術群の任務とはそういうものだ。違うか？」
「……」

「せめて」
突然、この場にいないはずの女の声がした。
少女の声ではない。
ギョッ。となった兵士達は、声の主を捜す。
機内にいる女は、目の前の少女だけだ。
「名誉の面だけでも護ってやればよいものを」
兵士達が、とっさに拳銃を抜いた。
しかし、それより早く、フィアは動いた。
シーツの拘束はすでにほどけていた。
隠された自由の手足は、騎士の神速の動きで兵士達を粉砕した。

「――――おっと」
ドアに叩き付けられた兵士の一人を、フィアは殴り殺すのを止めた。

襟首を掴み、顔を近づけると、襟の階級章を確認した。
「大佐……か」
床に転がった兵士達は、首や手足が奇妙な方向に向いている。
「機長よりキャビン！何があった！」
大佐の階級章をつけた兵士が装着したレシーバーからそんな声が

する。
フィアは、その声を無視する格好で、自分の髪をむしった。
金髪の髪が頭から離れ、血まみれの床に落ちた。
金髪のウィッグ。
そして、今までフィアとして立っていた少女は――――別人だった。
黒くショートカットにされた髪。
顔立ちはよく似ているが、全くの別人。
女性が楽しそうな声で言った。

「さて？これからが楽しい世界が待っているぞ？大佐？」

ドアが開かれ、女性は大佐を片手で掴んだまま、漆黒の闇の中に躍り出た。
外は神戸の市街地上空。
宝石の様な美しい世界に飛び込むかのようなダイブ。

ズンッ！

ヘリが爆発。
空中で四散したのは、それからすぐのことだった。

「完全に用済みということですか」
「そうらしいな」
各所に整備兵達がＰ－９０を手に立つ中、手すきの者達が片づけに動き回っている。
甲板は死体だらけ。
血まみれの肉片を、整備兵達がバケツと火ばさみを手に回収に動いている。
「こんな市街地に隣接した港で、対艦ミサイルまで撃ち込んでくる

とはな」
「一般の艦艇なら今頃、私が逮捕されている所ですよ」
高木は肩をすくめた。
「ＭＬ（マジックレーザー）で弾頭を破壊し、海面に墜落させるなんて器用な真似が出来るのは、飛行艦だけです」
「ミサイルは？」
「すぐ間近に墜落したまま――」

「おいっ！」
死体を探っていた整備兵が声を上げた。
「こいつ、生きてるぞ！」
それは、中年のいかつい顔を血まみれにした男性兵士だった。
苦悶に歪んだ眉が、少しだけ動いた。
「水だ水！」
「軍医は！」

「死なせるな」
美夜は高木に言った。
「重要な情報をつかんでいるかもしれない」
「はい」

そんな二人の前で、水筒をもって兵士に駆け寄ったのは染谷だった。
「そうだ。ゆっくりやってくれ」
整備兵達が駆け寄って、染谷が水筒の口を兵士の口に近づけるのを見守る。
ううっ。
うめき声を上げた兵士が、それでも水を喉に送り込む。
「水を飲めるなら助かるぞ」
ホッ。とした声が整備兵の間であがる。

体がもぞもぞと動いているのさえ、ほっとする。
「軍医はどうしたんだ」
整備兵達が、軍医の居場所を探そうと左右を見回したまさにその瞬間だった。

バンッ！

突然の破裂音に、皆がその場に体勢を低く、身構えた。
「何だ！？」
「どこからだ！」
整備兵達が一斉に声をかけあう。
辺りに濃厚に立ちこめる火薬の臭い。
撃ったのは間近だ。

ゴトッ

床に何かが落ちた音がしたのに気付いたのは、染谷の間近に立った整備兵だった。

ゴロッ

それが、甲板に転がった水筒の音だと、整備兵はやっと気付いた。

「――おい、染谷？」
返事はない。
「お、おい？」
染谷に触れただけ。
それだけだ。
それなのに――

ドサッ

染谷は横に倒れた。

「染谷っ！？」

見ると、染谷の手は腹を押さえ、真っ赤に染まっていた。

「……」

信じられない。

そんな目で辺りを見回したその整備兵は、染谷に何が起きたかわかった。

水を与えていた兵士の手に握られていたのは、細く硝煙の煙をたなびかせる拳銃だった。

「ち、畜生っ！」

整備兵は、兵士の手から拳銃を奪うと、

「喰らえぇぇっっ！」

拳銃に残されていた全弾を、その兵士めがけて発砲した。

数発を喰らった顔面が粉々に砕かれ、顔を構成していた肉片があたりに、整備兵にも降り注いだ。

「バカッ！」

弾丸が終わってもトリガーを引き続ける整備兵を、別な整備兵達が押しとどめる。

「な、何やってやがる！」

「こいつのせいだ！」

死体となった兵士と染谷から引き離された整備兵は興奮した口調で怒鳴った。

「こいつのせいで染谷が！」

「――衛生兵っ！」

「軍医っ！軍医はどこにいるんだよ！？早くきてくれっ！」

テロリズムの背景

●“鈴谷（すずや）”司令艦橋

「腹部盲管射創」

軍医の口から出た、その耳慣れない言葉を理解するのに、美夜は少しだけ時間が必要だった。

「つまり、腹部に弾丸が？」

「神戸市内の病院にて摘出は完了していますが、内蔵のダメージがひどく、現状意識不明」

「助かるか？」

「明日まで持てば……おそらくは」

「……療法魔導師は」

「手配はしたのですが……」

軍医は首を横に振った。

「……そうか」

美夜は力無く瞑目した後、言った。

「ご苦労だった軍医。戻ってくれ」

「はっ」

敬礼して下がる軍医の脇で黙っている高木に、美夜は尋ねた。

「“鈴谷（すずや）”の状況はどうなっている？」

「捕虜１６。すべて憲兵隊に引き渡し済みです」

「そんなのはどうでもいい」

美夜はいらだった口調で言った。

「“鈴谷（すずや）”の被害は」

「戦死は……」

高木は、言葉を選んだ。

「確認、されていません」

「……」

今、一人増えるかどうかの瀬戸際だ。

自分でもマズい表現だとは思うが、聞く方も悪い。
美夜が黙っていることから、高木は少しだけ安堵して続けた。
「負傷は１０名程度。共に軽度の打撲や火傷程度。行方不明が１」
「行方不明？」
「ツヴォルフ中佐です」
「あのヘリの中に？」
「恐らくは……」
「……艦の被害は」
「重傷です。
正確な被害は調査中。
また、各所に仕掛けられた爆発物の発見には、専門部隊の到着を待つしかありません。　時間が必要です」
「……」
それと、先の厨房のボイラーは完全に破壊されました。
艦内に食料を供給することが出来ません。
外壁パネルで確認されている被弾カ所は１０００カ所以上。
艦のレーダー、通信装置にもダメージ……」
背もたれに後頭部を預けた美夜に、高木は訊ねた。

船窓の外では、民間の報道ヘリが爆音をとどろかせている。
神戸港内部で対艦ミサイルの撃墜までやったのだから、騒ぎにもなるだろう。
一体、この後、この艦がどうなるのか。

「ヘリで思い出しましたが」
高木は書類をめくった。
「本艦を強襲したヘリについてです」
「何かあったか？」
「本艦離脱から約３０分後。大阪市街地上空で空中爆発」
「爆発？」

「爆発原因は不明です。民間、軍用共に、レーダーにミサイルの類は確認されていません。空中で爆発したとしか言い様がない状況です」
「……何が起きたの」
「不明。ただ、空中爆発後、炎上した機体は阪神なんば線の車両の上に墜落」
「……」
美夜の目が見開かれた。
「丁度、大阪ドーム球場からの帰り客で混雑していたこともあり」
高木は目をつむった。
「一体、何人が巻き込まれたかさえわからない事態になっています」
「……」
美夜もまた、目をつむった。
「墜落時の本艦の行動は」
「左舷対空レーダーシステムがダウンしていました。大阪市街地方面へ向けての発砲そのものが不可能。また、射撃システムは、常時データリンクによって近衛飛行艦隊司令部によってログがとられています。
司令部へ照会しましたが、ログにも大阪市街地へ向けての発砲は一切記録なしとの返答が来ています」
「……助かる。まぁ、私にとって問題はこの艦だけだが」
「……修理は最優先の突貫工事でやっても1ヶ月は必要です」
「まぁ……そうなるか。司令部のアイツは何て言ってきた？」
「10日後には北米に向けて出航せよと命令が」
「現実が見えてるのかしらねぇ……」
「一度発せられた命令は、そう簡単には覆せない。そういうことでしょうか」
「覆して欲しいわよ……ったくね」
ピーピーピー

インターフォンが呼び出し音をあげた。
憲兵隊からだった。
「――艦長だ」

ふと、高木は窓の外を見た。
この上の艦橋はヘリからの機銃掃射で見るも無惨な姿になっている。
艦橋を直すだけでもかなりの時間と費用がかかるだろう。
いっそ、廃艦にした方がいいんじゃないか。
艦がなくなれば、後方勤務になることだって夢じゃないはずだ。
このまま、応急処置だけ受けて前線に送られるのだけは勘弁して欲しい。

「副長」
美夜は制帽を正すと、席を立った。
「居住区にいくぞ」
「は？」
「ツヴォルフ中佐が発見された」
「えっ？」

居住区の清掃用具入れの中に縛り上げられた状態で発見されたフィアは、憲兵達によって医務室に担ぎ込まれていた。

猿ぐつわに挟まれたガーゼに強力な催眠薬が浸されていた。
「クスリが効いているので、尋問は無理です」
ベッドで横たわって寝息を立てるフィアを前に、軍医は言った。
「外傷は特になし。薬物が抜けるまではしばらくかかります」
「どれくらいだ？」
「魔法薬ですからね。何とも」

「魔法薬？」
「ええ。魔導兵団が好んで使うヤツです。一般に入手出来る」
「まさか」
「これは私の個人的意見ですが」
軍医は言った。
「ここに、誘拐されたはずの中佐がいて、ヘリが空中爆発した。その裏に何がいるか、これではっきりしましたね」
「……副長」
しばらく考えた後、美夜は言った。
「艦内で、ツヴォルフ中佐が発見されたことを知っているのは誰だ？」
「居住区はあの騒ぎの後、閉鎖されていました。憲兵隊と軍医、そして我々程度でしょう」
「鬼塚軍曹」
「はっ」
憲兵隊長の鬼塚軍曹が踵を鳴らして背筋を伸ばした。
「艦内に箝口令を敷け。ツヴォルフ中佐は発見されていない」
「――は？」
「いいか？これは命令だ」
美夜は、きょとん。とする鬼塚軍曹を前に言った。
「ツヴォルフ中佐は、あのヘリの中にいた。そして、死んだ。そういうことにしてくれ」
「……命令ならば」
しばしの沈黙の後、鬼塚軍曹は答えた。
「それに従うのが、小官の任務ですから」
「頼む」
美夜は頷いた。
「ここで、ツヴォルフ中佐が発見されたと公にされることは、即ち、“鈴谷（すずや）”が再び襲われる可能性が高いことになる」
美夜はフィアの寝顔を見つめながら言った。

「一方、ヘリが墜落し、ツヴォルフ中佐が死亡したとなれば、作戦は失敗。保護対象も自らの失態で失ったことになる」
「……」
「言葉は悪すぎるが、鉄道の上に墜落したのは……僥倖だ」
「艦長っ！」
医務室に飛び込んできたのはオペレーターの女の子だ。
「大変ですっ！」
「……勘弁してほしいわ」
美夜は泣きそうな顔をした。
「今度は何よ」
「捕虜を乗せたトラックが爆破されました！」

●葉月市
「――ちょっとそこ座って」
紅葉の部屋に呼び出された美奈代は、部屋に入るなり紅葉にそう言われた。
紅葉はポンポンと、自分の目の前におかれた椅子の座面を叩いた。
「気付けに何か飲む？」
「――あの？」
椅子に座りながら美奈代は首を傾げた。
「一体？」
「エチルとメチル、どっちがいい？」
「いりませんよ」
「工業系と医療系は」
「だから」
「いらないなら――いいけど」
紅葉は美奈代の前に座った。
「深呼吸して」
「――“鈴谷（すずや）”で何があったんです」

「……本当に」
紅葉は呆れとも感心ともつかない表情をした。
「あんた、どうして、そういうのわかるのかしら」
「中佐」
「――“鈴谷（すずや）”が陸軍部隊によって強襲された」
「は？」
「中隊に被害はないけど、艦はズタズタ」
「……」
美奈代は目を見開いて紅葉を見た。
「現在、フィアちゃんが行方不明」
「なっ！？」美奈代は思わず椅子から立ち上がった。
「座りなさい。陸軍部隊が撤収する際、ヘリに何かを乗せたのは確認されている。それが多分」
「……」
美奈代は深呼吸すると、椅子に戻った。
「――フィアちゃんだった」
「一体、何故」
「敵に聞くしかないわよ。捕虜はいるし」
紅葉は膝の上で手を組んだ。
「だいたい、この程度なら一々、ここにあんたを呼びつけたりしない」
「……何があったんです」
「染谷少尉が撃たれた」
「……」
紅葉の目の前で、美奈代の顔が真っ青になった。
口をパクパク開くが、言葉が出てこない。
「腹部の銃創で、内臓にもかなりのダメージがある。今が峠ってヤツね」
「療法魔導師は？」
美奈代は、口から出た言葉に、ハッとなった後、一気呵成に言っ

た。
「そう！療法魔導師はいるんですよね！？月城少佐の時だって、あんな死にかけた少佐をあっさり直したんですから、今回だって、すぐに直してくれたんですよね！？」
「神戸の病院に緊急搬送の後、摘出手術は成功。ただし、出血と内臓へのダメージが高く、現在は危険な状態が続いている」
「療法魔導師は何やってるんですか！」
美奈代は顔を真っ赤にして紅葉にすがりついた。
「あの人助けなくて、誰を助けるっていうんですか！」
「付近の前線では小競り合いが続いている」
紅葉は、美奈代の手を払いのけながら言った。
「いい？前線じゃ、もっとヒドイ状況におかれた無数の兵士達がいるのよ」
「そ――――」
「そこで！」
紅葉は怒鳴り声を上げた。
「そんなの関係ないなんて言ったらぶん殴るわよ！？」
「――――っ！」
「……」
「……」
美奈代は紅葉から離れると、席に座った。
うなだれたまま、美奈代の視線は紅葉のつま先だけを見ていた。
「――――私も辛いのよ。こんなこと告げるのは」
「……」
「私の権限で手配できる魔導師を手配してはある。でも、いい？覚悟だけはしておいて」
「……」
美奈代に出来たことは、無言で頷くだけだった。

「いつから日本はこんな物騒な国になったんだろうねぇ」
一体、元がなんだったのか疑わしい程黒こげになった、かつてはトラックだった“モノ”の前で、後藤は頭を掻いた。
場所は神戸港から市街地へ通じる大通り。
付近は警察が規制をかけているが、所々では見物人が群れを為してこちらに奇異の視線とカメラを向けている。
「捕虜を分散して移動させなかったのは失態だったな」
消化剤まみれになったヘルメットらしい物体を、後藤は軽くつま先で突いた。
「一人残らず口止め……ですか」
後藤の脇に立つのは、長い髪を無造作にリボンで束ねた化粧気のない近衛の士官、福井かなめ大尉だった。
「どうしてこうなった？」
「あちらのビルの物陰から」
かなめは右手のビルを指さした。
「対戦車ロケットが発射されたのを目撃した者が多数」
「撃ったヤツは？」
「走り寄ってきたワゴン車に発射器ごと乗り込んで逃走。足取りは不明」
「ナンバー」
「それとおぼしき車は既に付近の駐車場で発見されていますが、この車は盗難車でした」
「……よくあるパターンなワケだ」
「世論は」
かなめは訊ねた。
「どう動くでしょうね。あなたの打った手で」
「さぁ……ねぇ」
「それにしても考えたものですよ」
二人の後ろを護るように立つ、南雲が二人の頭の上から言った。

「艦内の監視カメラの映像を、インターネットに配信するなんて」

“鈴谷（すずや）”強襲事件。

この一部始終を目にしたのは、現場に居合わせた美弥達乗組員ではない。

艦内の監視カメラの映像をライブ映像として見続けていた無数の国民達だ。

艦内のあちこちを走り回る兵士達。

艦内のカメラ達は、その顔さえはっきりと映し出した。

乗組員に対して容赦なく発砲する姿も。

ヘリの機銃が艦橋を吹き飛ばすのも。

共に脱出すべき友軍兵士を皆殺しにしたのも。

すべて、カメラがライブ映像として、インターネットに配信していた。

インターネットの前に座る人々は、“鈴谷（すずや）”で何が起きていたかを、その場で知っていたのだ。

「――世論は味方につけておくものさ」

後藤は何でもない。という顔でタバコをくわえた。

「政府に近衛の陰謀なんて言わせたら終わりだからね」

「政府はノーコメントを貫いています」

「言える立場じゃないでしょ？」

「じゃあ、今頃、なんて言ってるんでしょうか？」

「――さぁ、ね」

「失望したどころではありませんよ」

ユギオはこれ以上できない程、顔をしかめていた。
「私達は、彼女を引き渡せとは言いましたが、殺せと言った覚えはない」
「……」
居合わせた日本政府側代表の顔に浮かぶ表情もまた、暗い。
「――で」
ユギオはテーブルの上で手を組んだ。
「どう、落とし前をつけてくれるんです？」
「不可抗力であると主張したい」
「――面白い冗談ですね」
ユギオはニコリともせずに言った。
「魔族軍に首都侵攻を命じてあげましょうか？」
「困るっ！」
「私も困ってます」
ユギオはにべもない。
「彼女を手に入れることが出来なければ――困る」
「……」
「――まぁ、いいでしょう」
ユギオは席を立った。
「これ以上、交渉を継続する前に、要求します」
「な……何か」
「彼女の遺体を引き渡してください。期限は４８時間以内」
「む、無理です」
眼鏡をかけた政府高官が言った。
「事故現場は数百人の死体が転がっているんです。死体の回収作業でさえ完了していないというのに、その死体の中から、たった一人を特定するのに４８時間なんて」
「出来なければ」
すでにユギオの部下達も荷物をまとめた。
「さっき、私が飛ばした警告が、現実になるだけです」

神戸にて

「――とはいえ」

神戸のレストランで食事を終え、コーヒーカップを弄びながら、ユギオはため息をついた。

「どうしろというのですかね」

「私に聞かないで下さい」

礼儀正しく食事を終え、ナプキンで口元を抑えているのは、ガムロの副官、アイリーンだ。

最高の金を一本ずつ糸にしたような柔らかく、そして優しげな金髪。

形の良い知的な容姿は、外国人の多いこのレストランの中でも注目の的だ。

彼女のためにこのレストランを選択したのだが、正解だった。

それにしても、恐ろしく物腰が優雅だと、目の前の女性のちょっとした仕草にさえ、ガムロは本当に見とれてしまう。

「あくまで私は」

アイリーンは、ナプキンをテーブルに置いた。

「ガムロ閣下から、状況を確認してくるよう、命じられただけです」

ユギオは、目の前の女性がガムロの単なる副官ではなく、愛人でもあることを知っている。

そんな女性を、自分の元に送り込んでくるとは、ガムロが自分を信頼しているのか、それとも何にも考えていないのか、判断がつきづらいなと、ユギオは思う。

「それで」

アイリーンにはコーヒーは苦すぎるらしい。

一口、口をつけただけで顔をしかめ、ソーサーの上にカップを戻した。

「“鍵”を失ったというのは、本当ですか」

「本当です」

ユギオは頷いた。

「ここから少し離れた場所で、ヘリ――人間の飛行型輸送システムの墜落事故が発生。“鍵”はそこで火葬されました」

「――本当に？」

アイリーンは首を傾げた。

「何か、気になることが？」

「これなんですけど」

アイリーンがハンドバックから取りだしたのは、古ぼけた懐中時計。

アイリーンの小さく華奢な手には収まりきらず、アイリーンは両手で懐中時計を持つと、ユギオの前に置いた。

時計は、真っ暗で何も映し出していない。

時計の文字盤ですら、何もない。

「これは」

ユギオは受け取った懐中時計に見覚えがあった。

“鍵”の探索装置ですね」

「壊れてませんよね？」

「……」

竜頭のボタンを押す。

画面が点灯した。

「そう……ですね」
ユギオはちらりとアイリーンを見た。
「でも、これと同じものは、いくつかあなた方に預けてあるはずだ」
「“鍵”が急死したと聞いて」
アイリーンは、コーヒーの代わりに運ばれてきたアイスクリームにスプーンをいれた。
「我が軍でも緊急の調査が行われました。愛知方面に展開する飛行部隊が、危険を冒してこの神戸上空を調査」
口の中に広がるさわやかなバニラアイスの冷たい甘さに、アイリーンの頬がゆるむ。
ユギオは、抱きしめたい衝動を何とか殺した。
そんな目の前の男に、アイリーンは悪戯っぽく訊ねた。
「――何が出たと思います？」
「……まさか」
「“鍵”の体内に埋め込まれた発信装置は、“鍵”が死亡すれば機能を停止するのでしょう？」
ユギオは懐中時計――探索装置――を焦った様子で操作した。
サーチ範囲を拡大。
最大範囲に設定。
小さい点滅が――あった。
「――そんな」
「あのですね？」
アイリーンは呆れた。という顔で言った。
「人がよいのは、決して悪いことではないとは思いますが、いささ

か軽率では？」

「人類側の報告を、私は鵜呑みにしすぎたということですか」

確かに。

ユギオは深くため息をつくと、コーヒーを一息で飲み干した。

「――さて。あの人類共はどうしてやろうか」

「“鍵”は、確保するのですか？」

アイリーンのその言葉に、ユギオは相手の顔をじっと見つめ、

「――いえ」

首を左右に振った。

「今、彼女を奪取することは簡単でしょう。しかし」

「しかし？」

「明日、イツミと接触します」

「それが？」

「ここで私が動くこと、つまり、“鍵”を奪取したとすれば、下手をすれば彼女を刺激する可能性が高いです」

「？」

アイリーンはその端正な眉をひそめた。

「なら、どうして人類が“鍵”を奪取することを放置したのです？」

「知っていたはずです」

ユギオは力説した。

「知っていた。そして、いざという時は横取り出来るポジションに

イツミはいて、事態を監視し続けている」

「状況はすべてイツミ様の監視下にあり、私達もあなたも、彼女の掌で踊っているにすぎないと？」

「そう思います。天界軍がこうも動かない理由は、人間界にイツミが情報網という糸を張っているからです。

泳がせている理由？

簡単ですよ」

ユギオは不敵に笑った。

「“鍵”を私が手にしたとしましょう。

イツミはあの性格です。

“鍵”があるなら自分達で封印地点を探せ。

出来レースに参加出来るか。

そんな事を言って、交渉を拒絶するハラなんです。

あくまで我々は、１００％の状態で交渉に望むことを、イツミは許さないでしょう」

「“鍵”はない。ヴォルトモード閣下の居場所も不明。

その状況こそが、イツミ様が交渉に応じる前提。

イツミ様は、その前提の崩壊を狙って、虎視眈々と私達の動きを監視している」

アイリーンはプッ。と噴き出した。

「考えすぎです。第一、そんなのは」

「そんなのは？」

「あなたが“鍵”を確保出来ない言い逃れとしか、誰もとりません

よ」

「――でしょうね」

「本当ですか？」

「今、“鍵”の奪取を目的に、この神戸に軍勢を送り込んでご覧なさい」

ユギオは真顔で言った。

「待機中の天界軍が襲ってくる事に、私は責任を持つことが出来ますよ？」

「ガムロ閣下は」

アイリーンはつられるように、真剣な顔で返した。

「私の護衛にと、２０名の精鋭騎士を貸してくださいました」

「ほう？」

「歴戦の方々です。その方々ならば」

「あなたは」

ユギオは、ウェイターの持ってきたアイスクリームをアイリーンに勧めながら、楽しげに言った。

「イツミが丸腰で人間界（ここ）に来ている」

「……？」

「本気で、そう思っているんですか？」

「……え？」

アイリーンはきょとん。とした表情を浮かべた。
「……あの？」
「天界軍はすでに亜空間で艦隊を待機させています。イツミが、その総大将です」
艦隊。
その言葉に、アイリーンは顔色を変えた。
「……白色龍騎兵艦隊」
「そう」
ユギオは頷いた。
「天帝直属、天界最強の打撃艦隊が、あのイツミの下で動く事態を想定してください。
鉄壁の鎧に、全てを貫く牙を持つ、死の龍達に万能の耳と頭脳をくれてやるようなものです」
「天界軍が！」
自分の喉から出た声が、自分でも驚く程高く出た。
アイリーンは驚いて口基づいて抑え、赤面しながら小さくなった。
「……失礼いたしました。天界軍が、この人間界で軍事力を行使するなんて、戦争になりますよ？」
「どうして？」
「どうしてっ……て」
「魔族軍が黙っていない？」
「え」

ええ。
アイリーンは、そう頷こうとしたが、
「ここで“ええ”と答えたら、あなたは、今の世界を理解していない」
「……」
「――そう、なります」
「……どういうことか」
アイリーンは、内心でムッとしながらユギオに訊ねた。
「教えていただけます？」
「天界と魔界、双方の帝達は」
ユギオはコーヒーカップに口を付け、すっかり空になっていることに気づき、顔をしかめた。
「その伴侶と共に、かつて不朽の盟友としての誓いを立てた戦友同士なのです」
「……不朽の盟友」
「そう。血を分けた親子よりも深い絆を持つと宣言する、あの誓いです。
裏切りは死をもってのみ贖われることは、あなたでもご存じでしょう？
ガムロ閣下とズルド閣下がかわされた、あの誓いだ」
「……」

誓い。

その言葉は、今の人間界では空手形もいいところだが、魔界や天界ではそうはいかない。

たとえ、どんな小さな誓いだろうと、それを破ることは、社会的な一切全てを失い、世界から抹殺されることを意味する。

それほど、厳しいものなのだ。

――誓うなら強盗に金を払え。

金さえ払えば助けよう。

そう誓ったら、強盗は相手を殺す事が出来ない。

後になって、その一言を反故に出来ないのだ。

それが、天界と魔界双方の厳然としたルール。

むしろ、このルールを無視するからこそ、人間は双方の世界で嫌われる。

悪魔との誓いですら破り、破滅していく寓話の中の者達を、人間の誰もが愛さないように――。

「……どうして。天界と魔界で」

「いろいろあったんですよ」

ユギオは答えた。

「人間界の、このちっぽけな王とその妻を含めてね」

「資料を下さい」

アイリーンは首を小さく、左右に振った。

「にわかには信じられない話です」

「――でしょうね」

ユギオは頷いた。

「私も、本当には信じられない。決して相容れるはずのない三族の

隔たりを、彼等は乗り越えたのですから」

「……」

「――話を戻しましょう」

コーヒー。

ユギオはウェイターに命じた。

「あなた方は、魔界と天界の帝達を完全に敵に回しているのです。

そして、相手はあなた方を公然と潰す口実とタイミングを手ぐすねを引いて待っている。

世論の支持だけが頼りのあなた方を、公権力をもって潰す口実とタイミングをね。

いいですか？

ここで天帝軍が武力介入をしても、魔族軍が動くことは絶対にありません。

ありえないように、もう仕組まれているのです」

「我々は」

アイリーンは、ようやくにユギオが何を言いたいのかわかった。

「日の当たる世界からの支援は望めないどころか、敵になってる……と」

「その通り。

今、“鍵”を強奪することは簡単です。

しかし、それは自ら毒杯をあおるのと同じ。

天帝軍に武力介入の口実を与えかねません。

そうなれば、魔界は動きません。

あなた方は、今度という今度こそ」

「……」

「……潰されますよ？」

「……」

アイリーンの顔に浮かぶ逡巡。

その意味が、ユギオには痛いほどわかる。

「試してみてもいいですよ？たった２０名で、鬼のイツミと勝負がしたいというのなら」

アイリーンは、溶けていくアイスクリームの前で、何も言い返すことさえ出来なかった。

その日の夜。

“鈴谷（すずや）”は神戸港を出港。

広島県呉軍港へと向かった。

損傷の応急処置と、北米への出撃準備のために。

刃の上での会談

●東京都内　ファミリーレストラン「アオデニ」葉月駅前店

「お初にお目にかかります」
「名刺はないわよ？」

これが、ユギオとイツミの間で交わされた、最初のやりとりだった。

場所は東京都内のファミレス。

冗談ではない。

本当のことだ。

目の前におかれているコーヒーはお代わり自由。
近くでは子供連れの母親達がたわいもない雑談に熱中し、アイスを食べ終えた子供達は食後の気怠さに、うつらうつらとしている。
そんな中だ。

外見がまるっきり小学生なイツミは、どこから仕入れたのか、黒いワンピース姿。
スーツ姿のユギオと向かい合って座っていると、まるでユギオの娘。少なくともユギオの妹に見えなくもない。
でなければ、ユギオは通報されているだろう。

「――ひどい味ね」
イツミは、アイスコーヒーのグラスをテーブルに戻した。

「これからの内容も、これじゃ、たかが知れているわね」
「ホットコーヒーにすればよかったじゃないですか。アイスでも」
「パフェがいいわね。私、猫舌なのよ」
「……ちゃんとした席は用意していたんですよ？それに」
ユギオは何故か、天井を見上げた。
「上空の戦艦の主砲がこっちに筒先向けていることは知っています。刃の上に座っているようで、落ち着かないのはこちらですよ」
「ここで打ち切ってもいいのよ？」
「――――わかりましたよ」
ユギオは肩をすくめた。
「失礼しました。議事を進めてよろいしですか？」
「どうぞ？」
イツミは生あくび一つ、小さく頷いた。
「何？坊や」
「まず」
ムッとした表情を一瞬浮かべたが、すぐに普段のポーカーフェースに戻った。
「天界軍が人間界で軍事行動に出ないという確証をいただきたい」
「無理」
イツミはきっぱりと言い切った。
「私は天界政府全権大使ではない。天界軍の行動は政府が決定すること」

「……軍事行動に出る可能性は否定できないと？」

「その問いかけに答える権能を、私は誰からも与えられていない」
イツミは楽しげに、或いはユギオをからかうかのように、小さく笑った。
「いい？私の個人的見解を、政府の見解と混同されると迷惑なの」

イツミがそう答えるのも無理はない。
ヴォルトモード軍からの要請に応じる形で、天界政府は、ヴォルトモード卿の封印地点を公開することに同意した。
イツミは、その封印地点を伝達するためだけにここにいるのだ。
いわばアドバイザーであって、大使ではない。

「――成る程？」
ユギオはコーヒーを口に含んだ。
「私としては、そこに答えられる権能を持つ人物にお越しいただいたつもりだったのですが」

「降伏交渉がしたいなら天界政府に申請しなさい。お話は終わり？」

「なら、肝心な所だけ」
交渉するつもりはない。
イツミの態度はまさにそれだと、ユギオははっきり悟っていた。
「ヴォルトモード卿の封印地点と、その封印の解除方法を」

「忘れた。っていったらどうする？」

「私にも覚悟はあります」
ユギオは答えた。
「交渉を一方的にうち切ろうとする天界側の不誠実な対応に、どうやって報いるかは」

「……」

「行動、ただそれだけをもって答えます」

「脅しのつもり？坊や」

「私がヴォルトモード軍全権大使であることをお忘れ無く」
「……可愛くないわね」
「褒めてません」
「……天界政府は」
イツミはつまらない。という顔で言った。
「ヴォルトモード卿の封印解除に同意した。ただし条件がある」
「条件？」
「終戦協定における“契約”は履行すること」
イツミは小首を傾げた。
「わかる？ぼうや。言いたいことが」

●長野県上田市　魔族軍司令部
「相変わらずのへそ曲がりだな」
報告を聞いたガムロは、喉の奥で苦笑を漏らした。
「参りましたよ」
ユギオは苦り切った顔で首を左右に振った。
「そちらの手の内はすべてお見通し――そう言われた気がします」
「封印を、我々魔族が解除することは出来ない」
ガムロは頷いた。
「確かに、協定にはそう明記されていたな」
「だから、ギアナから始まって、日村の封印に至るまでを人間に解除させたんです。

それをイツミは逆手にとった。
まるで、目の前にエサをおかれた状態で、“待て”と言われた飼い犬の気分です」
「さて――どうする？」
「もう、やるしかないですよ」
ユギオは苦笑いを浮かべた。
「封印は、四段階にわたって、それぞれ別な地点に設置されています。その距離たるや、まるでこの地球一周ですよ？」
「ほう？」
ガムロは、興味を惹かれた顔になった。
「どこだ」
「まず」
ユギオはガムロの前に世界地図を広げ、一カ所を指さした。
「ここ、弓状列島の日村。ここが第一封印です」
「成る程？ヴォルトモード閣下がここに封印されている。その判断は完全には間違いではなかったのだな」
「はい。そして第二の封印があるのが」
ツイッと動いた指が示したのは、北米大陸だった。
「この大陸のど真ん中」
「……アメリカ、と読むのか？」
「はい。人間の国家の名称です。この国の一地方、ニューメキシコ州カールズバッド洞窟群に属する、ホワイト洞窟に第二の封印があります」
「……ふむ」
ガムロは了承したと小さく頷いた。
「では、どうする？人間を雇うか？」
「それが……ですね」
ユギオの顔がゆがんだ。
「現状、このアメリカは戦争中でして」
「戦争？……ああ。中華帝国とかいう漢民族の国と争っているんだ

ったな」
「その通りです。その最前線がテキサス州との境になります」
「ふむ？混乱に乗じてしまえば楽ではないか」
「そう思ったのですが」
ユギオの顔は何故かさえない。
「調べてみたのです。この洞窟への侵入の可能性を」
「……続けろ」
「この洞窟は、現地軍――――アメリカ軍の武器庫として使われています。しかも、第二の封印のあるホワイト洞窟は、その巨大さと複雑さから、一番厄介な武器の貯蔵に用いられています」
「厄介な……武器？」
「先のアフリカ戦線で、圧倒的優勢を誇っていた妖魔達を焼き殺した、あの爆発系兵器です」
「……ああ」
ガムロはその深い知識の中から、該当するものを呼び起こした。
「反応弾、といったな」
「その通り」
ユギオは頷いた。
「戦場になった地域から回収したものを、一カ所に集中管理しているのです。当然、その警戒は厳重」
「グリンゴッツから金を盗むのと同じ――――か」

グリンゴッツは魔界の銀行。
日本で言えば日本銀行と思ってくれればいい。
その非常識なまでの警戒体勢から、泥棒にとっては難攻不落の要塞として知られている。
創設以来１万年近くが過ぎるその歴史上、この銀行の金庫から金を盗み出した者を数えるのに１０本の指は必要としないのがその証左だろう。

「しかし」
ガムロは言った。
「何とかするしかあるまい」

「ええ」
ユギオは頷く。
「何とかしてもらいます」

「誰に」

「中華帝国軍の司令部に工作員を派遣しています。中華帝国軍は現在、アメリカの工業地帯の攻略を目指していますが、その矛先をこの洞窟に向けさせます」

●アメリカ合衆国テキサス州ヒューストン港

一時的な敗北はしたものの、数にものを言わせた中華帝国軍は戦況を挽回していた。
中央平原から大西洋岸平野に至るほとんどの州を制圧。
この動きの前に、バハマとキューバは中華帝国軍に対して従属の意思を表明、つまり、戦わずに降伏する意志を示した。
アメリカの州と化した南米方面の軍を警戒しつつも、中華帝国軍はアメリカの穀倉地帯を確保したことになる。

ヒューストン港。

この港の喪失が戦況に与えた影響はかなり大きい。

船で港の端から端まで移動するのに数時間を必要とする、４０ｋｍにわたる巨大な港湾は、中華帝国軍の侵攻を受けた時点で膨大な物資を抱えていた。

テッシュペーパーからメサイアまで。

中華帝国軍補給部門が作成した物資リストの中身は、膨大なものだ。

そのほとんどが、中華帝国軍の手に落ちた。

世界最大級の石油施設の備蓄から、タダ同然に利用できる燃料や、倉庫に大量にストックされていた食料といった、生活必需品は補給部隊によって適切に分配され、最前線へと送られているのだ。

「マルボロばかりだ」

ハンヴィーから降り立った士官がポケットからタバコを取りだした。

「紅塔山が懐かしいよ」

「禁煙なさったらどうです？張少佐」

「出来るならとうの昔にやってるさ」

二人の横を、大型のトラックが重そうにノロノロと走っていく。

トラックを運転する黒人ドライバーには生気がない。

横に座る兵士に銃を突きつけられては、神経も休まらないだろうと、彼は思った。

問題はその荷物だ。

幌はかけられているが、荷台に横たわっているものは一目瞭然。

メサイアだ。

「あれグレイファントムか？」

「ええ。Ｍ６４です。ヒューストン港陥落の際、保管施設に残ってました。ヤンキーご自慢のコイツを調べる上では、かっこうのサンプルでしょう。明日には本国の技師団に引き渡されます」

「明日……か」
張大佐は苦笑した。
「本国とこの国。昔は船で何日かかったろうなぁ」
「今では――――」
副官の呉大尉が海を向いた。
彼等の視線の先に存在するのは、海に浮かぶ漆黒の闇。
その中から、大型のタンカーが舳先を出していた。
「天津港の門(ゲート)からわずか1分足らずですからねぇ」
「……速くなったものだ」
中華帝国軍の手に落ちた後、港には船舶用の大型門(おおがたゲート)が設置された。
これを使って、兵士や物資を満載した大型タンカーやコンテナ船が本国との間をわずか数分で行き来している。
「おかげで、俺達ゃ大助かりだがね」
「まぁ、そういうことです」
彼等の目の前。接岸した客船からは、指揮官達の怒鳴り声に追い立てられるように、兵士達が船のラッタルを急いで駆け下りていく。
顔つきや動作から、新兵だとすぐにわかった。
その脇、コンテナ船から降ろされた飛鼠(ひそ)達が地響きを楯ながら移動していく。
「数だけは、一端だな」
「質も、といいたいですね」
「……そうだな」
兵士達が絶賛する移動システムは、世界の工場、中華帝国で生産された兵器を無尽蔵の勢いで戦線へと運び込んでくる。

そして、港の端に設置された門（ゲート）から最前線へとあらゆる必要物資を前線へと完璧に届けてのける。

今のヒューストン港は、中華帝国軍の一大中継拠点だ。

この港に設置された門（ゲート）が、必要な兵士と物資を最前線へと送り込む。

そして、最前線で破壊された兵器と負傷した兵士達を後方に下げ、修理と治療に専念させることが出来る。

戦闘可能になったものは、次々と最前線へ――――

相手をする方がたまったものではない。

だからこそかもしれない。

米軍なんて恐れる必要はない！

連戦連勝を重ねる兵士達にはそんな怠慢にも似た感情が蔓延していた。

奢れる感情が、司令部の判断を狂わせたとしか、後の世においてもみなされてしまう土壌は、確かにあったのだ。

「司令部が作戦方針を変更したというのは、本当か？」

「ええ」

呉大尉は頷いた。

「従来、五大湖の工業地帯を制圧することを緊急の課題とされてきました。

アメリカは工業地帯の生産能力をフルに使って、兵器を量産して

いますからね。
軍は五大湖制圧、もしくは完全破壊を目指して北進する方針に従い、戦線を広げてきました」
「……それが、どうして今になって西進に方針を変えた？」
「メキシコ経由での南米州からの攻撃に対する備え……ですか」
「今更になって、南米州軍が怖い？」
張大佐は鼻で笑った。
「南米の軍なんぞ、州軍の半分程度だぞ」
「はい」
呉も頷いた。
「地政学的に見て、南米はすでに領土問題を抱えていません。残存妖魔掃討任務につく程度の兵力がいれば、それで軍事的にはすべて解決出来ます」
「なら、そんな理由は通らないだろう？」
「……そうなんですけどね」
呉大尉は困った。という顔で首を左右に振った。
「カリフォルニア方面にはまだ強大な部隊が温存されています。とはいえ、大部隊によるロッキー山脈越えは厳しいでしょうし……」
「理由は不明だが、おいおいわかるってところか？」
「多分」
「そうだな」
張大佐は、軍靴でマルボロの吸い殻をねじ消した。
「それと、魔族軍が人類との一時的休戦に応じたというのは本当か？」

●大日本帝国　東京都千代田区

岡山内閣は、国会が開かれていたら潰されていたはずだ。

後によく語られることだ。
選挙を終え、次の選挙まで3年ある彼等に恐れるものはない。
野党が臨時国会の開催を要求しても、戦時中を口実に開催を拒否する。
全てが戦時中という口実でまかり通ってしまう。
岡山内閣は、それで全てを押し切ろうとした。
当然、世論の反発はすさまじく、与党民州党の議員が街頭演説を行おうとすれば、どこからともなく民衆から石が飛んでくる。
支持者をかき集めるだけことが出来ない。
バイト代を支払ってサクラをかき集めて“圧倒的な支持者が集まってくれました！”とでもホームページ上でキャプションをつけるしない。
その内閣の発表した、魔族軍との間で2ヶ月の期限付き休戦協定が成立したというニュースは、世界中を驚かせた。
人々は、この休戦協定成立をもって戦争が終わることに期待した。
だが、
この協定の立て役者たる、肝心な岡山首相が期待したことは、全く違っていた。
「支持率調査はどうなっている！？」
これだ。
「それにしても」
参議院のドンとされる石橋が言った。
「鈴木君には困ったものですな」
「全くだ」
岡山はグラスを煽ると、乱暴に頷いた。
「私に無断で軍を動かすとは、許せん！」

「――本当に」
石橋は話を合わせるために頷いた。
インターネットにライブ配信されつづけた鈴谷（すずや）襲撃事件は、先の近衛軍施設での爆弾テロとの関連を指摘され、世界中で物議を醸している。
世論は陸軍の犯罪として鈴木大臣の辞任だけではなく、岡山首相の退陣を要求している。
強い影響力を持つ岡山一族の支配下にあるマスコミがどれ程、提灯記事を書いても、それを額面通りに受け取る者は、そう多くはない。

民衆の政党として立ち上げた民州党。
国会を、政府与党の暴走を抑制するための白州（しらす）の場とすべき政党。
そうやって立ち上がったのが民州党だ。
その創設メンバーである石橋は、自らの保身のためにここは頷くしかなかった。

「だろう！？」
岡山は酒臭い息を吐いた。
震える手でグラスに酒を注ぐのを、石橋は黙ってみているしかない。
全ては、こういう、権力欲に取り付かれた挙げ句、与党内の賢慮闘争に負けた敗北者達を安易に受け入れたのが間違いだったのだ。
石橋は内心でそう思った。
「鈴木のバカは、私がバカなマネだけはしてくれるなと、何度も言ったのに、人の話を聞かないからこうなったのだ！」
そんなことは言っていない。
それは石橋も知っている。
鈴木にあんなマネをしろと命じたのが誰か、そんなことは国民の誰もが知っている。

馬鹿なマネをしろと、あのお人好しに命じたのは、あんただろう。

内心の言葉をかみ殺し、石橋は黙って頷いた。

「然り」

「おかげで、休戦協定を結んだ俺の名に泥を塗った！」

「しかし、さすがですな」

石橋は言った。

「魔族を相手に二ヶ月の休戦を勝ち取るとは」

「私の人徳だよ。君！」

気安く肩を叩かれた石橋は、その手を払いのけたい衝動をなんとか抑えた。

「――まぁ、鈴木君も残念なことをしたがね。こうなれば当然の報いだ」

「……は？」

「知らんのかね？鈴木君はホテルで自殺したんだよ」

「いつ……ですか」

「今朝、通行人が発見したそうだ。ホテルから飛び降りたんだな。最後までバカなヤツだった。

「……」

「ああ、そうだ。後任は誰がいいと思うかね？」

部屋から出た石橋は、控え室から出てきた秘書に尋ねた。

「鈴木大臣が自殺しただと？」

「――は？」

秘書は目を丸くした。

「何ですか？それは」

「……知らないのか？」

「新聞にも載っていません。インターネット上でも報じられていま

せんが……あの、鈴木大臣が？」
石橋は、周囲を見回すと、秘書の耳元で小声で囁いた。
「……まぁ、いい。それで、例の件はどうだった」
「首相の健康についてですか？」
「そうだ」
石橋は頷いた。
「議員会館のトイレで採取した尿から検査した結果」
太田も、そこまで言ってからもう一度、周りを見回した。
「重度のアルコール依存症であることは明らかです。脳や肝臓も危険ではないかとの所見が出ています」
「グラスを持つ手が震えていた。ろれつも随分と怪しいが、権力に縋り付くあたりはたいした者だ」
「……」
「すまないな。そんな汚れ仕事までさせて」
「いえ」
「……」
「……先生？」
「太田君」
「はい」
「憲政党の都築さんと連絡を取ってくれ。話がしたいと」

●大日本帝国　広島県呉軍港
「休戦協定……ねぇ」
「世論は支持しているそうですよ？」
ドックに入った“鈴谷（すずや）”は、あちこちで火花を散らしている。
“鈴谷（すずや）”に残っていても、することはない。
美夜達は呉司令部に出向いた後、久々に街に繰り出したのは、そういう理由が会ってこそだ。

近くの喫茶店で海軍コーヒーを飲む美夜は皮肉めいた笑みを口元に浮かべた。
「当たり前よ。戦争が一時的にでも止まるんだから、それでも続けろなんて、どうかしているわよ」
「それでも、我々には戦場だけは用意されている」
「そういうことよ」
美夜はついぼやいた。
「対艦ミサイル、1発喰らっておけばよかったかしら」
「勘弁してくださいよ」
対艦ミサイル撃墜命令を出した高木は、顔をしかめた。
「海底から回収されたのは、陸軍の88式地対艦誘導弾でした」
「陸軍――ね」
「一体、我々はどんな恨みを買うようなマネをしたのでしょうか？」
「知らないわよ。それで？艦の修理はどれくらい？」
「艦橋を含む各部は、モジュール交換で正味3日。
外装はパネル交換になるそうです。
兵装ブロックは被害がないので、早期の前線復帰は可能です」
「さすが光菱重工って褒めてあげたいわね」
「鵜来級の戦時増産前提の簡易設計がモノを言っただけです。各部が完全にブロック化されていますからね。艦よりも問題は」
「メサイア部隊の方」
高木は無言で頷いた。
「後藤中佐が戻るのはいつ頃なんでしょうか？」
「司令部には、真理をこっちに回せと要請しているんだけどね」
「二宮中佐を？」
「月城大尉共々、内親王護衛隊（レイナガーズ）の失態、こっちでも落とし前つけてもらうって」
「返答は？」
「月城大尉で勘弁してくれとか」
「それでは、前衛が一人足りません」

「内親王護衛隊（レイナガーズ）も、もう人手がいないのよ。自前の戦力を維持するだけで精一杯」
「どこも……そうですかねぇ」
「染谷に与えようかとも思ったけど」
美夜は浮かない顔で言った。
「療法魔導師の治癒の後も、容態は未だに思わしくないそうだし」
「壊疽が内臓に入ったそうですね」
「ああなると、ほとんど治癒魔法は効かない。根気よく薬で治療するしかないそうよ」
「……怖い話です。他人事じゃないですからね」
「防破チョッキの着用は忘れないで」
「はい」
「瀬音少佐も長野大尉もそれぞれに部隊を率いてる関係で回せない。かといって、下手なの回すと部隊連携がとれない」
美夜は天井を仰いだ。
「……どうしろっていうのよ」

伊豆大島　特別演習

ＭＤＩＪβ－Ｘ６０３－Ｓ３“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ Ａｎｇｅｌ）”。

開発コードがドクツルタケという曰くありげな名前が与えられているが――

美奈代は、目の前で最終調整を受ける騎体を見上げながら、

――綺麗だ。

そう思った。

全体的に女性を連想させる、細いラインで描かれたシルエットは、まさに芸術品の域に達している。

背後で展開されるブースターユニットが、まるで翼を持つ天使のような神々しさまで感じさせてくれる。

他国メサイアの持つ無骨さがどこにもない。

これがメサイアかと聞かれれば、自信がないほど優雅な造りは、見ていて飽きない。

全体に光沢のあるホワイト塗装が施され、各部には青が配色されている。

ワックスが効いた騎体は、近づけば鏡のように美奈代の顔を映し出す。

褄子の駆るＤ－ＳＥＥＤは同じホワイト塗装に紫だが、こちらの方も悪くないと思い、自然と美奈代は新しい愛騎を前に眦（まなじり）が下がるのを止められない。

生きてて良かった。

そうも思った。

確かに思った。

だが――

それは乗るまでの話だった。

「……だからさぁ」

機動訓練は数分であっさり中断され、“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”のコクピットから、美奈代はようやくはい出していた。

ほとんど死体同然の美奈代を前に、紅葉はもう泣きたい。という顔で言った。

「何やってんのよ、ホントにもう！」

「……」

美奈代は口をパクパクさせるが、言葉が出てこない。

額に張り付いた髪を直す力さえない。

「機動がシャープだなんて、シミュレーターで味わったことでしょう？」

「……あの」

「何よ！」

「……か、慣性制御装置、外してませんか？７Ｇちかく、モロにかかったんですけど」

「――あ？」

紅葉は、美奈代を踏んづけながらコクピットに潜り込んだ。

「吐いてないの？偉いじゃない――あれ？」

しばらく、何事かパネルを操作していた紅葉は、再び美奈代を踏んづけてコクピットから出ると、笑顔で手を合わせた。

「ごめぇん！点検モードのままだったぁ。エヘッ♪」

「……」

結局、ヘソを曲げた美奈代に好物の盛岡冷麺を食べさせ、なだめすかして“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ Ａｎｇｅｌ）”に乗せた紅葉達が向かったのは伊豆大島上空。

「いい？」

「もう辞めたい……グスッ」

「イジケモード入らない！」

紅葉は怒鳴った。

「海軍が協力してくれるんだから、ちっとは感謝しなさい！」

「何するんですか？何も聞いてないんですけど」

「海軍の防空艦の対空ピケットをくぐり抜けて大島に向かいなさい」

「ぼ、防空艦？」

「対空攻撃に特化した艦です」

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）から声がした。

いつもの牧野中尉ではない。

伊住さやか中尉。

ラボのテスト部隊に所属する、実験騎専門担当のＭＣ（メサイア・コントローラー）だ。
金髪に染めた髪を無造作にポニーテールにした顔立ちはかなり幼い。
年齢は自分より上だというが、どうにも美奈代には疑わしい。
「現状、帝都防空戦隊としての任務についています」
滑舌の良い、はっきり聞こえる声だが、どこか自分をバカにしているというか、からかっているような、そんな気がする。
「諸元データ、見ますか？」
「……お願いします」

新高級防空巡洋艦諸元
全長１７２メートル
全幅１６メートル
速力３４ノット
兵装６５口径１０センチ連装砲　１０基
　２０ミリＣＩＷＳ　２基
同型艦　２０

「かつては海軍の花形艦だったんです。
ミサイル全盛時代が来てからは、空母護衛任務からもほとんど外されていたんですが、魔族どの戦争では対空・対地任務、艦隊護衛まで様々な任務に従事した武勲艦です」

伊住中尉は、我が事のように説明してくれる。

「かなりの数が、戦没しましたけど。今でもこうして生き残った艦は、帝国を護るために戦っています」

「……お忙しいみたいですから」
美奈代は言った。

「余計な手間は省くということで……どうですか？」
「ああ、そうそう！」
ポンッ！と伊住中尉は嬉しそうに手を叩いた。
「指導バーの先っぽに銃剣用意しておいたの、忘れてました」
「は？」
「指導バーが飛び出すと、銃剣が頸骨グサッて。楽しいことになりますよ？」

●大日本帝国海軍　帝都防空戦隊旗艦「石狩」艦橋
１０基ある１０センチ連装砲がその鎌首をもたげるモーター音が響く中、艦橋見張りが怒鳴る。
「メサイア一騎、接近！高度２５００！」
「構わん。打ち落とせ」
石狩を指揮する小原艦長は、双眼鏡を構えながら答える。
「撃墜（おと）していいといわれている」

小原艦長は双眼鏡に白いメサイアを捉えた。

突き抜けるような紺碧の空。

白い雲を突き抜け、飛行機雲を引きながらこちらへと向かってくる。

倍率の関係でよくわからないが、遠目に見ても白いメサイアは目立つ。

対空砲のいいマトだ。
素人でも照準がつけられる。

空で戦うなら、あんな色を使うべきじゃない。
そう思うから、
「おいおい」
双眼鏡の倍率を操作しながら、小原艦長は思わずぼやいた。
「あんな目立つのに乗ってるのは、余程の酔狂か、それとも実戦を知らないバカか、どっちだ？」

どっちでもない。
何しろ、乗っているのは、実戦を知ったバカだから。

「敵メサイア、射程入ります！」
“あかつき”へ砲撃開始を通報しろ。砲術長、任せる」
「了解」
小原艦長は双眼鏡から顔を離した。
艦橋はすでに戦闘態勢に入ってる。
砲撃命令は出していない。
だが、乗組員達は既に自らの果たすべき仕事を察して、準備に怠りはない。

これが海軍だ。

小原艦長は部下の仕事ぶりに満足げに頷いた。
あとは――

●近衛軍葉月実験センター所属観測ＴＡＣ“あかつき”モニターに映る“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”の針路に黒雲が花開いた。
「さすが防空戦隊。相変わらず、いい腕してるわ」

紅葉は、心底感心した。という顔で、白石が持ってきたコーヒーに口を付けた。
「“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”、動きます！」
モニター上で、“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”の四枚の翼が開いた。
ノズルに集束されたエネルギー光が遠目に見ても美しい。
「飛行機雲を引かないように工夫しなくちゃね」
紅葉はぼやいた。
「本当、使ってみないとわかんないことも、たくさんあるのよね」

次の瞬間、“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”の姿がモニターから消えた。

「どこだ！？」
「探せっ！」
壁際に並ぶオペレーター達が驚いた様子でコントローラーを操作するが、
「いたっ！」
一人が歓声を上げた時には、“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”は驚くべき場所にいた。

●大日本帝国海軍　帝都防空戦隊旗艦「石狩」艦橋
「敵騎１、突っ込んでくる！」
「砲術、何をしているか！」

その機動は、小原艦長も目の当たりにしていた。

翼がピクリと動いた。

そして、瞬きした瞬間。

騎体はその場から消えた。

本当に、そうとしか見えなかった。

視界から、メサイアは消えた。

「どこだ！」

対空機関砲座から始まった小原艦長の軍務の中で、視界に捉えた敵を見失ったことなど、小原艦長はない。

常に敵を視界に捉え、全てに食らいついてきた。

ミサイルだろうが戦闘機だろうが、視界に捉えた敵を逃したことはない。

“ガラガラヘビの小原”の異名は伊達ではない。

その目が、敵を見失った。

「どこにいるっ！」

双眼鏡を顔に押しつけた。

「敵騎、５時方向！急速に接近する！」

「５時！？何だと！？」

５時は、海面だ。

それまで高度２５００メートルにいたんだぞ？

一瞬で、２５００メートルの距離を詰めたというのか？

そんな馬鹿な！

主砲が必死になって仰角を修正するが、修正が間に合わない。

ミサイルの奇襲攻撃ですら対処してきた歴戦の砲術長が対処出来ない。

他の艦も、それが友軍だということを完全に忘れているとしか思

えないほど、狂ったような射撃を繰り返す。
海面に連続した爆発が発生し、破片と海水が、白と黒のまだら模様の壁を生み出す。
相手が航空機なら撃墜。
艦なら沈没は避けられない。
狂気と破壊に満ちあふれた死の壁。
白いメサイアは、その壁に臆することはない。
全く速度を落とすことなく、砲撃の雨をくぐり抜けてくる。

「打ち落とせっ！」
顔を真っ赤にした小原艦長が怒鳴るが――

「敵騎、ピケット突破！」
「本艦真横を抜けますっ！」

ピーッ
不意にそんな音が響いた。

グワッ！

メサイアがもう目前だ。
打つ手はない。
「対衝撃防御！」
小原艦長はそう怒鳴ると、手近なものに掴まった。
途端、メサイアが真横を突き抜けた衝撃で、艦が激しく揺れた。
小原艦長は踏ん張って転倒を避けた。

「撃ち方やめっ！」
小原艦長は命じた。
「もういい！これで終わりだ！」

「判定！」
艦橋に待機していた通信兵が声を上げた。
「敵騎よりの攻撃命中！艦橋及び機関部直撃！本艦は轟沈！」

「くそっ！」
小原艦長は思わず壁を蹴飛ばした。
「これだからメサイアは嫌いなんだ！」

●近衛軍葉月実験センター所属観測ＴＡＣ“あかつき”
防空戦隊から遠ざかっていく“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ Ａｎｇｅｌ）”を、スタッフ達は興奮気味に見入っていた。
「すごい！」
白石は歓声をあげた。
「あれはスゴい！ブースターだけで地上と変わらない戦闘機動をしてのけた！」

白石が興奮するのも無理はないと紅葉は思う。
メサイアが世界最強の兵器と呼ばれる、その根拠は何か？
すべての敵を撃破するから？
それならミサイル砲台でも作ればいい。
ミサイルランチャーでハリネズミにすればいい。

では？

敵の攻撃が命中しないから。

これが本当の理由だ。

メサイアは、その超絶した騎士の戦闘能力をそのまま再現する。
弾丸を避ける事の出来る騎士の動きを再現するメサイアは、当然ながら、敵の攻撃を簡単に避けてしまう。
攻撃が命中しない以上、メサイアを止める手段がない。
メサイアに敵対した者は、その驚異的な機動の前に、気付いた時には、一方的に叩かれて殺される運命にある。

攻撃と被害のバランスを一方的に狂わせる、その機動性から生み出される回避力がメサイアの強さの根拠。
それが最も制限される事態が、飛行中だ。
飛行中のメサイアは、大型爆撃機並に機動性が落ちる。
史上、撃破されたメサイアのかなりが、飛行中に対空砲によって撃墜されたケースだといえば、わかってもらえるだろうか。

「……」
沸き立つスタッフの中。
ただ一人、浮かない顔をするのは、紅葉だ。
「……何だろう」
紅葉は、じっとモニターを見つめながら、首を傾げた。
「どうしたんです？」
「白石……」
「はい？」
「あんた、何か、泉大尉がヘンだと思わない？」
「え？」
白石は、きょとん。とした後に笑っていった。
「元々、あの人は変人だって、ずっと言っていたじゃないですか。紅葉様」
「後で泉大尉に言っておくわ。白石が口じゃ言えないようなこと言っていたって」

「ちょっ！？」
青くなる白石の前で紅葉は腕組みをしたまま、しばらく考えた後、
「各スタッフは、“白雷（はくらい）”とのデータ比較を急いで報告して。少しでもおかしい所。差が出ているところは漏らさず報告」
いいつつ、自分用の端末を開いた。
「何よ……“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ Ａｎｇｅｌ）”に、何が起きているの？」

●大島上空 “死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ Ａｎｇｅｌ）”
「ピケットは突破」
伊住中尉は何でもない。という顔で言った。
「本騎に損傷なし。それにしても」
「はい？」
美奈代はちょっとだけ涙目だった。
さすがに怖かった。
それが、美奈代にとっても本音だった。
「泉大尉は、本当にいい腕してますね。この子の秘めた性能を完璧に引き出しているというか……」
「接近した時」
美奈代は言った。
「相手がＣＩＷＳを作動させていたら、アウトでした」
「実戦なら」
伊住中尉は、あら？という顔になった。
「その前に沈めています。違いますか？」
「……そうでした」
「あの状態での強行突破は、余程の度胸がなければ出来ません。さすがですね」
「それについてこれる貴女も、私からすればスゴすぎるんですけど

ね」
「ははっ……私、神経おかしいですから」
「……」
「大島に上陸します」
メインスクリーンに大きな緑の塊が映し出された。
伊豆大島だ。
「三原山の裏砂漠に移動してください。針路は誘導します」
「砂漠？」
「過去の三原山の噴火の際に噴出した砂礫が堆積した、火山性の砂漠です」
「日本で砂漠なんて、鳥取砂丘くらいしか思いつかなかったです」
「クスッ。狭いようで、日本も広いですよ？」
「そうですね。それで？」
「砂漠に待機中のメサイアとの演習を願います。構いませんから、おもいっきりやっちゃってください」

演習だから。

美奈代はそれ程、相手について心配していなかった。
データを取る程度だろう。
負けても勝っても、どうでもいいことだ。
演習で、死ぬこともないわけだし。

そう、思っていた。

だが、実際はそうはいかなかった。

●？？？？
「新型、来ます」
「本当に……母上は頭にくるわ。あのフレームは私が欲しがっていること、知っていたはずなのに」
「殿下には、この子がいます」
「この子に不満はないわよ。あなたの名前を冠する騎に失礼だわ」
「では？」
「……“白雷（はくらい）”より上が欲しいって、思うのよ」
「泉大尉を内親王護衛隊（レイナガーズ）へ引き入れて、“白雷（はくらい）”ちゃっかり譲り受ける……でしたっけ？」
「ったく……あの子は絶対に素質があるのよ」
「みたいですよ？」
「えっ？」
「……」
「ほ、本当なの？」
「今、声が裏返りましたけど？」
「き、気のせいよ」
「理央が言ってました」
「ってことは、それなりのコトになったワケよね」
「多分」
「……理央のクセにナマイキよ。処女を相手にするなんて、自分の立場がわかってるのかしら」
「でも」
「え？」
「理央をどうして、あんな部隊にいれたままに？理央は」
「今はね？あの子のメサイア使いとしての素質が必要なの。本業はまだいいわ。相手が悪すぎるし」
「……はい」

「所で」
「はい？」
「今晩の宿は」
「浮気するなとは言いません。ただ、やるなら死を覚悟しろと、そう言わせていただきます」
「一緒に寝ましょうね？」
「はい♪新型、着陸態勢。こちらにはまだ気付いていません」
「ＭＬ（マジックレーザー）で狙撃出来る？」
「やりますか？」
「けん制でいい。すこしビビらせて」
「了解。水龍（ウォータードラゴン）、マスターフレーム・オン。各部、コンバットモードへレベル引き上げ」
「さて……陛下に黙って水龍（ウォータードラゴン）持ち出したんだから、楽しませて頂戴ね？」

「なっ、なんですか！？今のＭＬ（マジックレーザー）は！」
「え、ＭＬ（マジックレーザー）の使用は禁止されているはずなのに！」
「下に降ります！くそっ！遮蔽物がない！」
「魔晶石エンジンの反応！この高出力反応は――――！？」
「中尉、ウェポンセーフティ解除してください！」
いいつつ、美奈代は“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”のシールドを構え、新たな攻撃に備えた。
火山・三原山の噴火の堆積物のつもった足場はかなり悪い。
美奈代は新型操縦システムが足に伝えてくる疑似感覚に顔をしかめるしかない。
「これでは踏ん張りが効かない……」
「大尉、２時方向に魔晶石エンジン反応」
「まだ私にはエンジンは聞こえ」

聞こえません。
そう言ったつもりだったが、それより先に、美奈代の体が動いた。
“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”が横っ飛びに移動。
それまで立っていた所に数本のＭＬ（マジックレーザー）が突き抜けた。
「中尉！」
美奈代は怒鳴った。
「教えて下さい！相手は何ですか！？」
「ライブラリー照合確認！間違いありませんけど――」
伊住中尉は、困惑しきった声で言った。
「どうして、どうしてこの子が出ているの！？」

●近衛軍葉月実験センター所属観測ＴＡＣ“あかつき”
「こんな馬鹿な！」
紅葉は、モニターをひっぱたくと、白石に怒鳴った。
「あんたの人選ミスが原因！」
「はいっ！？」
「開発局権限で、演習を中止して！」
「も、紅葉様！？」
「“死天使（Ｄｅｓｔｒｏｙｉｎｇ　Ａｎｇｅｌ）”の性能は時間を経る事に落ちる！このままじゃ、騎体が壊れるどころか、泉大尉達の生命に危険が！」
「津島中佐！演習参加騎から通信！」
「風間中尉から？」
「違います！」
「はぁ？」
「それが、風間中尉とＤ－ＳＥＥＤじゃありません！」
「どういうことよ！？」
「代わりに参加しているのは――」

参加騎とその騎士の名を聞いた途端、紅葉は即座に演習中止を命じた。

伊豆大島三原山山麓

美奈代が初めて、人間のメサイア相手に恐怖することになる悪夢の演習が、始まろうとしていた。

「わっ！？」

バンッ！

突然、目の前に飛来した砲弾が、空中で炸裂。
白い煙があたりに充満し始めた。

「エンジン音はするのに！？」
急速前進をかけ、煙幕から美奈代は逃れた。
「後退しない所は、褒めてあげます」
伊住中尉は苦笑しながら戦闘態勢に“死天使”を持っていくが、
「……あれ？」
その手が、一瞬だけ止まった。
何か、大きな違和感を感じたからだ。
ただ、その違和感の理由が、わからない。
ＭＣ（メサイア・コントローラー）としては大切なはずなのに、どうしてだろう？
「……何？」

ピーッ！

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）に警報が鳴り響いたのは、その時だった。

慣性制御システムが殺しきれなかった衝撃が、伊住中尉を襲った。

ギインッ！

ＳＴＲシステム越しに伝わる感覚が、エモノを取り逃がしたことを教えてくれる。

「ちいっ！？」

「敵、距離１５０へ移動」

「やるじゃない。騎体の性能？それとも騎士の腕？」

「パワーはスゴいですね。“白雷（はくらい）”の倍ではききません。この子すら凌駕しています」

「やっぱ……あのフレームがあってこそか」

「改装のキャパシティはこの子にも残っています。不可能ではありません」

「旗騎が部下の騎より下ってのは許されたことじゃないわ」

「そうですね」

「というわけで」

「はい？」

「あいつ、ぶっ潰してフレームを奪取するわよ！？」

「了解っ！」

「中尉、データ下さい！一体、あいつは何者ですか！？」
斬艦刀を抜刀し、美奈代は相手からの攻撃に備える。
白い騎体。
国籍マークや部隊章らしいものは、全く見えない。
塗りつぶしているのは間違いない。
ただ、どこかで見たような気がする。
データを照合したい。
警戒しつつ、美奈代がそっとパネルを叩こうと首を前に伸ばした途端だ。

ブンッ！

美奈代は、後頭部のあたりを何か、固くて鋭いモノが飛び出してきたのを、確かに感じた。

恐る恐る後ろを見ると、後頭部のあったあたりに、銃剣が突き出されていた。
さっきの伊住中尉の言葉はウソではなかった。
美奈代の背筋を油汗が流れた。

「なに……考えてるんですか」
伊住中尉の冷たい声が、レシーバーに聞こえてきた。
「あれを見て、アイツとは何事ですか……！」
顔を見なくても分かる。
伊住中尉は完全に怒っている。
「え？あ、あの！？」
美奈代には、その理由がわからない。
自分達は襲撃された立場だ。
それなのに、相手に気をつけなければならないなんて、そんな馬鹿な話はないはずだ。

「指導バーにくくりつけた銃剣で脳天えぐり出して、おミソでも入れておきなさい。レシチン効果で少しはお利口になるでしょうから」
「あ、あの！？」
「天皇騎を見て、アイツとは何事ですか！」
天皇騎。
その言葉で、美奈代はさすがにハッとなった。
相手が何者か、やっはわかったのだ。
「あれは――」
わかったからこそ、目を見開いた。
「……そうです」
伊住中尉は憮然とした声で言った。
「天皇騎、水龍です」
ＭＤＩＪβ－６０４。「水龍」
近衛初のβ騎にして、天皇専用騎の扱いを受けている。
第一次反攻作戦では、戦線で日菜子殿下が天皇の名代として密かに座乗した、あの騎だ。
とどのつまり、美奈代達近衛騎士にとって、絶対に剣を向けることが許されない相手なのだ。
「で、でも！」
だからこそ、焦った口調で美奈代は言った。
「座乗しているのが陛下だと、そう言うのですか！？」
「だとしたら、あなた何やらかしたんです！」
「わ、私のせいですか！？津島中佐はどうしたんです！？」

「通信不能。周辺の結界がひどすぎます」
「か、帰りましょう！何か、悪い冗談ですよ！こんなの！」

「――あー、もう」
不意に、美奈代の耳に女性の声が聞こえた。
通信だ。
しかも、この声は、どこかで聞いた。
耳が覚えている。
その途端、なんだか、頭が痛くなったし、腕がやたら疲れた。
顔を真っ赤にして自分を見下ろす二宮教官。
そして、たんこぶを作って腕立て伏せする自分。
あれは、米沢のことだった。
あそこで現れたのは――

「まさか……」

「ほら。演習始まってるのよ？それとも、この場で死にたいの？」

「っていうか」
美奈代は、裏返りそうになる声と格闘しながら、もつれ気味の舌を必死にまわした。
「どうして、わざわざ？麗菜殿下」

「あら？やっとわかった？」
通信モニターが開いた。
映し出されたのは、袴子にそっくりな女性。
第一皇女、麗菜内親王殿下だった。
「気付くの遅いじゃない」

「模擬戦の前に、はっきり教えて下さい！」
美奈代は緊張感の糸が切れたように、涙目で抗議した。
「本当にびっくりしたんですから！」

「そう？」
麗菜は楽しげに微笑んだ。
「じゃ、演習の続きね？とっとと擱座して、フレーム返して」

「――――へ？」
美奈代は、目が点になった。
「フレームを、返せ？」

「そう」
麗菜は頷いた。
「天皇騎の予備フレームは、私がもらうはずだったの。それをあんたが横取りした」

「わ、私、そんな！」

「悔しいから、あんた騎体ごとボコボコにして、美凪の前では恐くて言えないようなことしてあげる」

「騎体、差し上げますから勘弁して下さい」

「……どっちを勘弁して欲しいの？」

「全部です」

「つまんない子ねぇ」

「何とでも……とにかく、天皇騎と皇女様に逆らったとなったら、私達、銃殺モノですから」

「とにかく、模擬戦につきあいなさい。こっちだって、あんたと“やる”ために水龍陛下に無断で持ち出してきたんだから」

「それマズいですって！」

「――あ、そうだ♪」

ぽんっと、麗菜は楽しげに手を叩いた。

「模擬戦にあんたが負けたら、そそのかしたのはあんたってことで申告してあげる」

「そんなことされたら、私、銃殺台送りですよ！？」

「おしい人材亡くしたわねぇ」

「しかも、決定事項ですか！」

「そういうことになりたくなければ」

抜き手も見せず、水龍の腕が動いた。

距離はかなりあるというのに、

ガンッ！

“死天使”のシールドに殴られたようなダメージが走った。

シールドの表面に、ざっくりと斬りつけられたような傷が走った。

「――なっ！？」

「“ソードスラッシュ”です！」

伊住中尉が言った。
「剣による真空波攻撃。ＦＬクラスのメサイア使いのみが使える、超高位メサイア戦闘技術！間合いは一切通じません、注意して下さい！」

「そんなもの注意しろだなんて！」
勝てる相手じゃない。
美奈代の本能が、そう告げていた。
この人は、絶対に敵に回してはいけないんだ！
そう、告げていた。

バンッ！

必死に間合いを取ろうとする“死天使”の真横をＭＬ（マジックレーザー）が突き抜けていった。

「戦場で、そんな態度で生き延びてきたの？」
麗菜の冷たい声に、美奈代は動きを止めた。
「随分――運がよかっただけみたいね」

その態度が気に入らなかった。
理由なんて、それだけだ。
「……お言葉ですが」
美奈代は覚悟を決めた。
「私の立場をご理解いただいた上での発言ですか？」

「戦場で相手の格なんて選べると思ってる？」
水龍の斬艦刀がゆっくりと構えられた。
「――例え、演習でも」

「なら」
美奈代は軽く上唇を舐めた。
「逆の事態も、お覚悟されていると判断しますが？」

「当然♪」

グンッ！
“死天使”が水龍に斬りかかった。
瞬きするより速い突撃。
麗菜は美奈代の一撃を、斬艦刀で受け止めた。
ＳＴＲシステム越しに、足が地面にめり込んだのがわかる。
「――――くっ！」
コクピット内部に、関節系の警報が鳴り響いた。
「力押しなら――――っ！」
スクリーン一杯に映る“死天使”。
その左腕が動いたのを見た麗菜は、即座に斬艦刀を手放し、騎体を急速後退させた。
“死天使”の左腕に仕込まれていたＭＬ砲（マジックレーザー）が、それまで水龍の胴体があった場所を突き抜けていった。
攻撃を外した。
しかし、それを予め分かっていたかのように、美奈代は間合いを詰めた。
接近する美奈代騎に対して、抜き打ちの居合いの一撃で応じようとした。
神速と称えられる麗菜の居合いは、数多くの実戦で幾多の敵を屠ってきた実績がある。
居合いの間合いに入って、逃したエモノはいないのが、麗菜の密かな自慢であり、プライドだった。
「そこっ！」
相手の胴体を真っ二つにする自信が、麗菜にははっきりとあった。

刀が抜刀され、剣そのものの重みが絶妙に乗せられた絶対必殺の一撃が解き放たれた。

しかし――――

「えっ？」

その時、麗菜は目を疑った。

“死天使”の姿が、目の前から消えたのだ。

バンッ！

何より、麗菜は、抜いた刀に一瞬だが、奇妙な重みを感じた。

何が何だかわからない。

「何が！？」

ピーッ！

不意に、後方警戒アラームがコクピットに鳴り響いた。

弾かれたように、麗菜は騎体を前進させた。

水龍の脇腹を、斬艦刀の切っ先がかすったのは、その時だった。

「美凪！」

MC（メサイア・コントローラー）に麗菜は怒鳴った。

「何が起きたの！？」

「信じられません！」

美凪は興奮気味に声を震わせながら言った。

「居合いの剣を踏み台にして、本騎後方に跳躍。着地と同時に剣を突きだしてきました！」

「ば、馬鹿な！？」

そう。

美奈代騎は、居合いの一撃を繰り出す麗菜騎の刃を踏みつけると、

とんぼをきって麗菜騎の後方に着地。逆手に持った斬艦刀を麗菜騎めがけて突き出したのだ。

「ほんの少し、こちらが動いたのが正解でした。切っ先が少しずれていなければ、コクピット直撃でした」

「……違う」

騎体の間合いを取りつつ、麗菜は背筋を走る冷たい汗の感覚に顔をしかめた。

「あの騎体に……何か起きている？」

「なっ！？」

攻撃の後、美奈代は愕然として周りを見回していた。

「何で！？」

「ど、どうしたんですか！？」

伊住中尉には、美奈代が驚いている理由が分からない。

いや。

むしろ美奈代は怒っている。

しかも、激しく。

「なんで、あそこで剣がぶれたの！？」

「――――えっ？」

「騎体の調整、どうなってるんですか！」

「き、騎体調整は万全……」

「どこがですか！」
美奈代は顔を真っ赤にして怒鳴った。
「セッティング、全部見直して下さい！こんなんじゃ、使い物になりませんっ！」

「え？え？」
テスト騎の専属に回される程の実力があるMC（メサイア・コントローラー）である伊住中尉には、どこが問題なのか、まるでわからない。
美奈代が問題としているのがどこなのか。開発スタッフを交えて、しっかりと聞く必要がある。
とはいえ、今、そんなことをしている余裕はない。

目の前には敵がいるのだ。

「ったく！“さくら”！？」
美奈代が精霊体を呼ぶ。
「“さくら”！」
精霊体は、出てこない。

やっとわかった。
伊住中尉は、騎体に何が起きているか、美奈代の呼びかけで、ようやくわかった。
さっき感じた違和感がなんなのか。
精霊体の不在だ。
今、この“死天使”は、精霊体が出てこない状態にある。

近衛のメサイアとしては致命的な問題だ。

近衛のメサイアは、他国のメサイアと違い、精霊体を生み出すこ

とで知られている。
精霊体と騎士、そしてMC（メサイア・コントローラー）の三者のバランスが戦力に大いに影響することは、近衛騎士なら常識として知っていることだ。

三者のバランスは、精霊体の不在によって完全に狂っているのだ。
このままでは、戦闘継続は不可能に近い。
それほど、バランスの喪失はそれ自体が騎体のダメージとなるのだ。

「何で？」
伊住中尉は、コンソールを緊急モードに切り替え、魔晶石エンジンの状態を確認しようとしたが、出来なかった。
麗菜騎が接近、袈裟斬の一撃を食らわせてきたからだ。
美奈代が騎体を急速後退させる。
その衝撃に、伊住中尉は歯を食いしばって耐えた。
「――――くっ！？」

「何が起きたかしらないけどね」
呼吸を整えながら、麗菜は言った。
“死天使”は、時間と共に動きを鈍らせている。
勝てる。
麗菜はそう判断した。
「この私を本気にさせたんだから」
麗菜は目前の勝利を掴みに行った。
「落とし前はつけなさいっ！」

袈裟斬の一撃が振り下ろされようとしていた。
操縦システムが恐ろしく重いのをねじ伏せるようにして、美奈代は騎体を操る。
紙一重で剣をかわすのがやっとだ。

「上手い！」
さすがだと、美奈代は正直、舌を巻くしかない。
何が？
麗菜の操縦テクニックだ。
無駄というものがまるでない。
流麗な太刀さばきの美しさは、美奈代が見た中でも一二を争うだろう。
だが――
美奈代ははっきり自覚していた。
見事すぎるからこそ、
芸術的なセンスがあるからこそ、
この人の太刀筋は見切りやすい。
相手が素人だったら、こんな状況におかれた美奈代は、もう死んでいるはずだ。
だが、そうならない理由は？
あまりに見事。
そう判断させるだけの太刀筋というのは、逆に予想しやすいものだ。
美奈代は、麗菜の太刀筋を読めるからこそ、ここまで無傷で済ませてきた。
ただ、もう限界だ。
次が勝負だ。

振り下ろした斬艦刀が途中で止まる。

「やっぱり！」

切っ先がこちらをむいたままの斬艦刀が、美奈代騎めがけて突き出された。

それこそが、美奈代が待っていた千載一遇のチャンスだった。

「――――そこっ！」

美奈代は、渾身の力を込めて、“死天使”を水龍の懐へと飛び込ませた。

あたりに、メサイア同士がぶつかり合う、鈍く重い音が響き渡った。

●伊豆大島上空　近衛巡航艦「最上」

「……」

憮然とした顔をした麗菜が、船窓から外を睨んでいる。

窓の外では、開発局の「あかつき」がランデブーしようとしていた。

麗菜の顔からして、機嫌が悪いのは明白だ。

「放っておいてください」

麗菜専属ＭＣ（メサイア・コントローラー）の遠野美凪少尉が、普段のポーカーフェースを崩すことなく、周囲を促して船室から皆を追い出した。

「負けず嫌いですから、例え演習でも、自分が負けたとなれば数日はああなんです」

「……あの」

「ああ」
美凪は、クスリと笑った。
「大尉は悪くありません。むしろ、あんな状態で水龍を駆る殿下によくぞ勝ったと敬意を表します」
「いえ……そんな」

麗菜は近衛どころか世界レベルで見ても、トップクラスに属するメサイア使いだ。
それを相手に、何をどうやったら不調に陥った騎で勝てたというのか？
麗菜は突き技を繰り出してきた。
それが、美奈代の付け入る隙を産んだ。
剣をかわし、水龍の懐に飛び込んだ美奈代騎は、水龍自体の動きを利用して柔道の巴投げの要領で水龍を投げ飛ばしたのだ。
バランスを失い、地面に背中から叩き付けられた水龍は擱座。
動力が一度、停止した。

一方、美奈代騎もまた、限界を迎えた。
緊急保護装置があちこちで作動し、魔晶石エンジンからのエネルギー供給がすべて停止。
こちらも擱座状態に陥った。

食堂に行きませんか？
美凪に誘われて、美奈代は通路を歩く。

外では整備によって2騎の復旧整備が続いている。

「でも」
美奈代は、こっそりと聞いてみた。
「横転した時、わざと電源切ったんじゃありませんか？」

「そういうのを」
美凪は楽しげに微笑んだ。
清楚にして可憐な笑みは、美奈代の心に春風のようなさわやかな印象を与えてくれた。
「上手くやるのが、MC（メサイア・コントローラー）の務めです」

「――成る程？」

「では、こちらからも質問させていただきますが」

「はい？」

「あれは整備不良ですか？」

「犯人は津島中佐です」
美奈代は憮然として言った。
「コクピットに入った時、精霊体管制システムのコネクターひっかけたんです。そのおかげで、システムがショートして、動作不良を引き起こした。真相はそんなところです」

「気付いていたんですか？」

「まさか」
美奈代は首を横に振った。
「気付いていたら、どうにかしています。全てが終わった後、コクピットから出ようとした時、まさかと思ってパネルの裏を見たら」

「壊れていた」

「そうです」
美奈代と美凪はプッと同時に噴き出した。
「何だか、津島中佐らしいですね。そういうの」
「そう思いますわよね？」
「――随分な言いぐさじゃない」
その声に驚いて背後を振り返ると、紅葉と伊住中尉が立っていた。
「悪かったわね。随分、危ない橋渡らせた」
「いえ」
美奈代は言った。
「でも、不可抗力ってことで、どうか……その」
「安心していいわよ」
紅葉は手をパタパタと左右に振った。
「弁償しろとはいわないから。むしろ、こっちは貴重なデータがとれたから感謝よ」
「はぁ」
「システムに異常がなくても、危険は危険だった。それは間違いない」
「え？」
「問題は」
紅葉の視線が、後ろに立っていた伊住中尉に向けられた。
なぜか、伊住中尉が悲しげにうつむいていた。
「中尉と“死天使”の相性の問題」

「えっ？」
きょとん。とした顔で美奈代は伊住中尉を見た。
「どういうことです？」

「“死天使”が、あんた専用って言うのは、語弊があったのよ」
見て。
紅葉が取りだしたのは、一枚のログデータ。
美奈代は、それに見覚えがあった。

「これって確か」

「そう。精霊体と騎士、そしてMC（メサイア・コントローラー）の相性を調べるあの機械のログデータ。あんたはさすがに相性いいけど……」
紅葉が指さした先。
そこにあるのは、MC（メサイア・コントローラー）と精霊体の相性だった。

「この数値は……」
美凪が顔をしかめた。
「まずいですね」

「でしょう？」

「はい。平均４５はちょっと……」

「普通は７５を超えている必要があるんだけど……私も、泉大尉とMC（メサイア・コントローラー）の相性に神経が行っていたから、MC（メサイア・コントローラー）と精霊体の相性を考えること、してなかつたのよね」

「めずらしいですよ」

美凪は言った。
「私達、MC（メサイア・コントローラー）で45なんて低い数値、聞いたことがありません。しかも、ベテランの伊住中尉で？」
「ごく希なケースっていうか、この“死天使”が、泉大尉と牧野中尉のコンビ専用騎だって、そういう結論にもなるのよね」
「……ああ」
ポンッと美凪が手を叩いた。
「精霊体が選んでいるんですね？」
「そう。“さくら”は本当にそういうのうるさいタイプだから厄介なのよね」
「あの……泉大尉」
伊住中尉はがっかりした。という顔で言った。
「申し訳ありません。牧野中尉に代わって“死天使”のMC（メサイア・コントローラー）になれるかと思ったのは、私の思い上がりでした」
「そんなことありませんよ！」
美奈代はムキになって言った。
「中尉はベテランです！むしろ中尉がいてくれたから、こうして生き延びたと信じます！」
「そう言っていただけると」
プッ。と、伊住中尉は安堵したのか、笑みを浮かべた。
「私も救われます。牧野中尉から引き継いでいたのですが」
「はい？」

「やっぱり私には無理ですね」

「何がですか？」

「泉大尉は、窮地に陥れば陥るほど、強みを発揮する。泉大尉の強さの原動力は“火事場のバカ力”だって」

「……は？」

「牧野中尉には言われていたのです。泉大尉を常にイジメて普段から窮地に追い込んでおけ。あの潜在的なドMは、それだけで歓喜するはずだって」

「……潜在的な、どM」

「でも、私、夫がいるノーマルですから、そういうのはちょっと……ねぇ」

「……」

「ああ」

呆然とする美奈代を後目に、紅葉は納得した。という顔で言った。

「あんた、マゾだったんだ」

「……」

「だから、あんなむちゃくちゃな実験にもつきあえたんだ。ねぇ？気持ちよかったの？」

「変態さんって、便利ですねぇ」

美凪は妙に感心した。という顔で美奈代を見た。

「そうね。ねぇ大尉？私ん所で専属のテストパイロットやらない？いろいろ実験したいことあるし」

「だめですよ。泉大尉は潜在的なエムの上に、レズなんですから、是非、わが内親王護衛隊（レイナガーズ）へ来なければ」

「参ったわね……ところで、水龍の件は大丈夫なの？」

「帰ったら、陛下に大目玉です。それと、風間中尉は、２４時間経営の食べ放題のお店に預けてあります」

「潰れるわよ？あのお姫様、胃袋に四次元ポケット飼ってるんだから！」

「アフリカ派遣の際、あの御方一人のために食料庫を増設したことは知っています。部隊早期撤退の真相も、食料備蓄が尽きたからだとも噂されているそうですが」

「それ、本当の話だよ？」

「本当ですか？」

「うん。あれ？泉大尉？どうしたの？こめかみに拳銃の銃口当てて」

謀

「解せんのは」

憲政党幹部の都築と民州党の石橋。

犬猿の仲と言うべき間柄だ。

政治的リアリストという点では一致するが、保守の都築と確信の石橋は水と油もいいところだ。

特に、学生時代から政治の世界にいた石橋は、官僚上がりは皆嫌いという人物で、当然、警察官僚上がりの都築を嫌悪どころか、むしろ憎悪していた。

石橋は、都築によって学生時代に何度か逮捕されたことがある。

少なくとも、同士が検挙されたのは間違いない。

政府筋ではまことしやかに語られているが、誰も確認したことはない。

――話を戻そう。

その石橋が、都築にコンタクトを求めてきた。

都築が同意した翌日。

二人はホテルの一室で顔をつきあわせていた。

「当初の一ヶ月をどうやって倍にしたか、だ」

ホテルのスイートルーム。

座り心地の良い革張りの椅子に座る都築の疑問に、石橋は答えた。

「大賀幹事長が確認したことだ。二倍での締結は魔族側からだという」

「何だと?」

「そちらの失態は許すことは出来ないが、こちらにもいろいろと都

合があるとか」

「都合とは？」

「あんたが魔族の立場で、人間にそこまで語ると思うか？」

「……岡山はそれを飲んだのか」

「だからこそ」

石橋は怪訝そうに眉をひそめた。

「休戦協定は成立したのではないのか？」

「……」

「……」

「……それで」

都築は訊ねた。

「話とは何だ？」

「協力が欲しい」

「協力？」

「岡山は、狂っている」

「クックッ……自分の親玉を相手によくも言う」

「……学生時代」

石橋は、テーブルに置かれたグラスに手を伸ばした。

「セクト間闘争に明け暮れたあの時代で学んだことがある。注意すべきは敵対するセクトじゃない。身内だということだ」

「……」

「力を与えると、人間は狂い出す。特に、力を求め続けて、それを手にした者は確実に狂う。押しつけられた者は、潰される」

「……何が言いたい」

「力の使い方を知らないということだ。岡山はその最悪のケースだ」

「――その相手を幹事長だ、首相だと祭り上げたのは誰だ」

「組織とは、得てして理不尽なものだ。あんたならわかるだろう」

「引きずり降ろすなら自分達でやってくれ」

都築は言った。

「岡山の退陣劇に、野党の力は不要のはずだ」

「保身のためなら、ここには来なかった」

席を立とうとした都築を止めるように、石橋は強く言った。

「そうじゃない。話を聞いてくれ、都築警部」

「……ふん。その呼び名は懐かしいな」

「２６年前の７月８日午前１０時２８分……覚えているか？」

「……ああ」

都築は椅子に座り直した。

「私の２６人目の逮捕者。四谷の狭いアパート――あの日は暑かった」

「あの茹だるような暑さは覚えている。世直し……今の立場からすれば、テロを企画していた俺の逮捕時刻だ」

「容疑は治安維持法違反容疑」

「あんたは、俺が手塩にかけたセクトを一網打尽にしてくれた、あの時くらった銃尻の一撃は、いまでも忘れられない」

「……私も若かった」

「全てが若かったんだ」

石橋は、手の中でグラスに入った氷を転がした。

その目は、転がる氷の向こうに、何かを見いだしている、そんな目だった。

「爆弾で官僚共を吹き飛ばし、デモ隊を国会に突入させれば、この国で革命が起きる。革命さえ起きれば、この日本は世界一の楽園になるんだと――本気で信じていた」

「……」

「官憲の狗は皆殺しにしてもいい。それが世のためだ」

「……」

「大学に入ったばかりの俺達に、そう叩き込んだ連中は結局、反政府系組織の宣伝係に過ぎなかった。“総括”は、俺の全てをうち砕いてくれた」

「――だが貴様は」

「……」

「政治を捨てなかった」

「……そうだ」

石橋は頷いた。

「油まみれになって昼間は工員やって、金を貯めて、普通より2年遅れて大学に入った。

すべて自分の金だ。

親の金で大学に入れてもらった連中とは違う。

俺の人生は、あの大学から始まったんだ。

そこで知った世界の現実。

飯場で渡された握り飯を包んでいた新聞が、きっかけだったよ。

ベトナム戦争だ。

米兵とベトコンの死体。

工員として俺をコキ使っていた酒臭い社長の、あの獣と見下したような、思い出すだけで反吐が出るような眼差しと、ベトナム人の死体を見下ろす米兵共の目に共通するものを見た。

俺は、奴らが大嫌いになった。

だから俺は、大学を目指した。

大学に入った以上、この世の中を良くしたい。大学で得る知識で、世直しをしたい。そう思った。

――あんたからすれば、思い上がったというだろうがね」

「……」

都築は無言で首を左右に振った。

「……よそう。こんな昔話に意味はない」
石橋は照れたようにグラスを呷った。

「そうじゃないだろう」
都築は言った。
「貴様はそれだけで生きている。その頃、信じたことを――ウソにしたくないと」

「……そうだ」
石橋は、ゆっくりとグラスをテーブルに戻すと、手を膝の上で握り、
「俺はな？都築さんよ」
言葉をかみ砕くように、ゆっくりと、しかし、はっきりとした口調で言った。
「あの時信じた――革命こそが、世界を正す……そう思う気持ちに変わりはない」

「……」

「でなければ、俺達がやったことは、俺の人生はすべてウソになっちまう……笑ってくれ。俺は、それが恐いんだ」

「……」

「……すまないな。話が脱線してばかりだ。
今回、あんたと接触を望んだのにはワケがある。
都築さんよ。
対等（サシ）の立場で、ハラぁ割った話がしたい。
そう思ったからだ」

「……」
都築は頷いた。
「……内容は？」
「岡山のことはどう思う？」
「どう……とは」
「あいつの体と精神のことだ」
「……見る限りは長くないだろう」
「具体的に」
「……アルコールの依存症がかなり酷いと聞いている。糖尿病に成人病も含めて」
「毎日毎日、料亭で浴びるほど酒を飲んでいたらそうなる」
「国会を開催しないのも、表に出てこないのも、全てはそのためだとか？」
「……事実といえるだろう」
石橋は、敵対政党の幹部に頷いた。
「その辺について、岡山は、身内も隠しているがね」
「……それが？」
「もう一度言う」
石橋は、グラスに手を伸ばし、その手を止めた。

「対等（サシ）の話だ」

「……ああ」

「……」

「心配するな。調べてある。盗聴器の類はない。私以外の誰も、ここにはいない。すべてはオフレコだ」

「……感謝する」

岡山は、数回、呼吸を整えた後、言った。

「岡山と、その腰巾着を、党から――――いや、日本の政界から追放したい。二度と立ち直れない程の規模と勢いで」

「身内でどうにかしろ」

都築はそっけなく言った。

「そんなことは、党内政治の問題だ。他の政党を巻き込むな」

「出来ると思うか！？」

石橋は席を蹴った。

「票と金を握ったアイツとその取り巻き相手に、異議の一つも言おうものなら袋だたきにされる！それがマトモな政党だと思うのか！？そんな政党に自浄作用なんてあるもんか！」

「いいか？」

都築は諭すように言った。

「身内の批判なら私に言うな」

「労働組合とマスコミを、票と金でいいように操り、この国をガタ

ガタにしようとしている！身内に甘く、正論だろうと気にくわない、都合の悪いことは全て聞かない！国民の信託の元、動くべき議員たる者が、票と金欲しさに――一人の男の覚えをよくするがために、腰巾着の狗と化し、議論もせずに異議を唱える者を寄ってたかってかみ殺す！

こんな非道が通るのが現実だ！

こんな連中に与党を任せていたら、苦しむのは国民だ！

知っているか！？この戦争状態ですら、アイツは他人事にしか思えていないんだ！」

「……」

「……魔族との休戦協定も」

石橋は、呼吸を整えると、席に座った。

「かなりの袖の下を、魔族側から受け取ったらしい」

「調べはついている――だが、物的証拠とはいかない」

「猪苗代の別荘を調べろ。あそこに金塊を隠しているはずだ」

「……何がしたい」

「――魔族軍との間に結ばれた休戦協定は二ヶ月」

「……」

「俺は、この時間を無駄にしたくない」

「……」

「都築さん」

「……なんだ」

「民州党は、野党であるべきだったんだ。
それを、あの岡山という汚物を抱き込んだがために狂ってしまった。
あの時、誤った決断をしたバカ者として、落とし前をつけたい。
汚れ仕事は俺がやる。
もう、野党与党言ってる場合じゃない。
……後を、引き受けてくれ」

「……そういうことか」

「あんたは官僚共ともつながりが深い。
軍部にもだろう？
だが、官僚の腐敗を容赦しない。
あんたは、悪たる者は撫で切りにする。
悪人は死ね。
そういう、一本筋の入った正義の持ち主だし、その容赦のなさで皆を震え上がらせることが出来る。
今必要なのは、そんなヤツだ。
強引にでも、日本を引っ張れるような……。
俺は、あんたになら任せられる」

「……」

「あんたになら、日本を変えられる。
そう、信じている」

「……貴様と俺は、行き着く所は一緒だぞ」

「官僚になって、極楽に行けると思っていたのかい？」

「……違いない」

都築は自嘲気味に笑った。

「――――ソフトにやるか？」

「マスコミを抑えられた現状、ネガティブキャンペーンや、スキャンダルは通じない。それが通るなら、あいつらは、百回は倒閣出来る」

「なら、ハードか」

「上手くコトを運ぶ必要がある。

無駄な流血は避け、しかし、確実にあの俗物共を政党政治の世界から駆除する必要が」

「罪のない者がこれ以上苦しむのは見ていられない」

「……そうだ。今、日本は滅びようとしている。魔族という外圧に加え、岡山のような俗物という内部のガンに」

「後世に、日本人の血と、清浄なる国土を残すのは、我々の義務だ」

都築は頷いた。

「海軍を中心に、岡山に不満を抱えている者は多い。皇室にまで弓を引いたあの思い上がりの田舎者を、弁護する者はおらんよ」

「手を貸してくれ。都築さん。もう、憲政党だ民州党だ言ってる場合じゃない。俺は、自分が作った党をぶっ潰す覚悟は出来ている。

このために死ぬこともだ」

「そうか」

都築は頷いた。

「……いずれ、地獄で会おう」

差し出された手を、都築は握った。

謎

●東京都千代田区　宮城　近衛軍総司令部

この世界における皇居――この世界では宮城と呼ぶ――は、我々の知るそれとは規模において比較にならない。

徳川幕府のシンボルたる江戸城をそのまま皇居として利用するなんて発想は、明治政府にはなかった。

江戸城総攻撃によって灰燼と帰した大名屋敷跡地を大々的に接収した後に皇居を建築した。

その規模たるや、我々の知る皇居の三倍以上。

広大な敷地内には、宮殿の他にも、近衛軍の重要施設が多数存在している。

メサイアから飛行艦まで、一つの軍事基地としての性格も、この世界の宮城は持ち合わせている。

戦時中のため、一般人の立ち入りは禁止され、上空の飛行は全て禁止されている。

宮城外苑には対空ＭＬ（マジックレーザー）が常に空を睨んでいる。

その中で、飛行艦隊司令部が管轄するＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）発着区画では、一機の小型ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が発進準備に入ろうとしていた。

この季節、東京都内では珍しい程、カラッと晴れた空の下、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のエンジン音がやたらと響く。

「休戦の成立は、向こうの都合だ」

乗員待機所と指定されたロビーからは、ゆっくりと滑走路に入ろうとするＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の姿を間近で見ることが出来る。

今日のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の発進は、この便が最後だ。

ロビーに人気はなく、見上げるほど高い天井に人声が響くことも

ない。
ただ、そんなロビーの一角。
ベンチに二人が並んで腰を下ろしていた。
一人は老人。
ごま塩頭をした男。
階級章は少将。
彼は、手に握ったコーヒーの缶を弄びながら言った。
「奴らは奴らで、裏でいろいろとたくらんでいる」

「何か――――とは？」
その横で、まっすぐにＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に視線を向け続ける少女がいた。
階級は少尉。
ボーイッシュなショートカットに小柄な体格、そしてその童顔は、軍服を着ていても尚、女子高生と見間違えとしまう。

「君が知るべきことではない」
少将は答えた。
「君は、言われた通りに動けばいい」

「前線に戻していただけることには」
少尉は答えた。
「素直に感謝しています」

「――――任務が分かっているのか？」

「例の艦に配属された後、艦の一員として行動。行動の推移を観察し、逐一報告する。ただし、決定的な行動はとらない」

「戦果を上げることは任務の範疇ではない。
そんなものはどうでもいい。

陸軍が何故、あの艦を狙ったのかを調べろ。
艦の一員として行動すれば、嫌でもその秘密に触れることになるだろう」
少将は、空き缶をポケットにねじ込んだ。
「近衛も一枚岩ではない。
君が属する派閥と、あの艦の本当の支配者は違う。
派閥が公に動けば、こちらは粛正されてしまう。
君を動かすのも一種のバクチだ」

「派閥？支配者？」

「もう一度言おう」
少将は立ち上がった。
「君はあの艦に行けばいい。ただ、あの艦の一員として生活すればいい。余計なことは知らなくても良いのだ。むしろ、その方が都合がいい」

「――――はい」
少尉は、立ち上がると敬礼した。

●“鈴谷（すずや）”艦内

「えっ？」
宗像は、月城の言葉に、食事の手を止めた。
「新入り――――ですか？」

「そうだ」
大尉の階級章をつけた月城は、平然とした顔でナプキンで口元を

拭った。
――――大人の美人だな。
宗像は、その唇を無意識に眺めていた。
「二宮中佐の内親王護衛隊総隊長解任は、一時保留された」
「泉が泣きます」
「とはいえ、直接的な原因を作ったのはアイツ自身だ」
「泉が？」
「そうだ」
従兵当番の涼から紅茶を受け取った月城は言った。
「麗菜殿下とメサイア戦をやらかした挙げ句、敗北させた」
「泉が、麗菜殿下とやりあった！？」
宗像達が知る麗菜殿下と言えば、世界最強レベルの女性メサイア使いだ。
それを美奈代が倒したというのか？
信じられない。
皆がそんな顔で、互いの顔を見合った。
「戦闘データは公開されていないが、後で教えてやる。殿下相手に完璧に勝った」
「あの……それは、泉大尉が勝ったと、喜んで良いんですか？」
さすがに相手は皇女であり、自分達は皇室の狗だ。
憧れの美奈代の勝利とはいえ、それを喜んで良いものか、涼は判断しかねた。

涼は、憮然としている月城の顔色をうかがいながら訊ねた。

「組織の中では、やってはならないことをしでかした――そういうべきだろうな」

「は？」

「接待ゴルフで上司や接待相手より高いスコアをとらない。それと同じだ」

「泉大尉は、麗菜殿下の面子を潰した――そういうことですか？」

「そういうことになる」

寧々の問いかけに、月城は頷いた。

「意気揚々と天皇騎を陛下に無断で持ち出した挙げ句、部下に負け、陛下に怒られたダブルパンチ。

陛下の命令により、殿下は1ヶ月の謹慎処分。

その間の内親王護衛隊（レイナガーズ）の人事権をも停止された以上、二宮さんの解任は保留となる。

少なくとも、泉が負けて話がもみ消されていたら、こうはならなかったろう。

二宮さんにとっては……難しいところだがな」

「我々の所へは、二宮教官の代わりとして新入りが？」

「そうだ」

月城大尉は頷いた。

「鵜来有珠（うくる・ありす）少尉――元第三中隊所属。戦闘経験は高くはない。“白雷（はくらい）”が使いこなせるか厳しいそうだ」

「でも、ウチに回される位だから、それなりのことはしているんですよね？」

「彼女の戦歴で目立ったことといえば」

眉間に皺を寄せて、月城は記憶から情報を引き出した。

「撃破された後、数日かけて敵の包囲網から逃げ出してきた位だ」

「何ですか、それ」

「これはこれでスゴい話なんだぞ？」

宗像の疑問に、月城は答えた。

「敵の勢力圏内で騎体を失うなどしたパイロットが生還した記録は、現在の所、ほんの数件にすぎない。魔族軍の包囲網と、その探索機能はハンパではない。

魔法騎士部隊の中でもかなり腕っこきでなければ、そうそう出来ることではない」

月城は、ティーカップをソーサーに戻すと、全員の顔を見た。

「少なくとも、メサイア使い程度の白兵戦闘能力では無理だ」

「それが――どうやって？」

「余程の幸運が重なったんだろうな」

「それだけですか？」

「何なら、本人に聞いてみるといい。

“鈴谷（すずや）”は予定通り、明後日０８３０時に港を出港。

約２週間かけて北米大陸への移動を開始する。

それから明日」

「？」

「必要な私物購入のために、緊急で半舷上陸が許可された。半日の間だ――小遣いくれてやるから艦から降りろ」

●翌日　“鈴谷（すずや）”艦橋

「子供達が降りたのは確認しました」

「ご苦労だった」

美夜は苦笑混じりに言った。

周囲では、交換された艦橋の細かい調整に艦橋要員達が追われている。

「どう？真理の娘達は」

「思ったよりまともです」

月城は答えた。

「それで？」

「……席を外そう」

美夜は艦長席から立ち上がった。

●広島市猿楽町　広島県産業奨励館

「ここのピラミッドケーキは絶対外せません」

そう言い張る美晴によって連れてこられた面々の両手には、必死になって買い集めた化粧品と生理用品がぎっちり詰まった袋が下げられていた。

気の毒なのは山崎だ。

ランドリーバックの中には、持ちきれない女性士官達の荷物が詰め込まれるだけ詰め込まれている。町中を、タダでさえびっくりするような巨体の山崎が歩くだけで目立つのに、その背中の荷物のせいで、山崎は何回職務質問を受けたか覚えていないほどだ。

さすがに近くの公園のベンチで山崎が荷物番として待機。警察官対策に、涼と芳(かおる)、そして宗像が山崎と同じベンチに座って、ピラミッドケーキなるシロモノを買いに行った美晴と寧々の帰りを待っている。

１９１５年完成という古い歴史を持つ建物は、その見るからにレトロな造り故に広島市の名所として知られている。

ただし、ここを訪れる観光客の多くは、奨励館館内にあるドイツ人のケーキ屋が目当てであり、美晴達もそこに向かっているのだ。

「それで」

宗像はベンチにもたれかかりながら、芳(かおる)に訊ねた。

「ピラミッドケーキって、何だ？」

「さぁ？」

芳(かおる)は買ってきたマンガに熱中して適当に答えた。

「三角形でもしているんじゃないですか？」

「おいしいなら、それでいいと思いますけどね」

その横では、涼が化粧品の仕分けに熱中している。

「宗像中尉。ファンデ、これ、似合うと思いますか？新製品なんですけど」

「お待たせしました！」

両手に袋を提げた美晴達が走ってきた。

「やっぱり人気店で！」

「よく手に入ったな。この物資欠乏の折りでもやっていけるのか」

包みの量からすれば、かなり買い込んだのは明白だ。

「今月で閉店だそうです」

美晴は包みを皆に配りながら言った。
「卵も小麦粉もだけど、何より砂糖が手に入らないそうで」
「……厳しいな」
宗像は、新聞紙の包みを受け取った。
「包装紙すら事欠く有様か……しかし」
宗像は、包みを解いてから怪訝そうな顔をした。
「おい。これってバームクーヘンじゃないのか？」
「そうですよ？」
美晴は山崎に恐ろしく分厚いバームクーヘンを手渡しながら頷いた。
「１９１９年に初めて売り出されたんですけど、その時の名前がピラミッドケーキだったんです。あのお店は、その名前をずっと使っているんです」
「日本最古のバームクーヘン……か」
成る程？
宗像は珍しそうに小さくちぎったバームクーヘンを口元へ運んだ。
「……悪くない」
「ですよね！広島県に来るたびに、どうしても食べたくなるんです！……あれ？」
美晴が喜んで頷いたが、
「宗像さん？どうしたんです？」
「……」
何故か宗像は、バームクーヘンを一口食べたまま、ぽかんとした顔で下を向いていた。
下。

そこには膝の上に載せられた新聞紙の包み紙があった。

「？」

美晴は、宗像が新聞紙の記事を読んでいることに初めて気付いた。

「何か面白い記事でもあったんですか？」

「……これ」

宗像が指さしたのは、ほんの小さな記事。

「えっと？」

美晴は宗像の後ろに回ると記事を読み上げた。

「近衛軍は、２５日に発生した同軍教育施設、富士学校におけるメサイア墜落事故で、墜落したメサイアのパイロット、風間祷子候補生と水城恵美子中尉双方の死亡を確認したと発表した」

……

今、自分が何を読み上げたのか、美晴は理解するのにしばらくの時間が必要だった。

「……えっ？」

●“鈴谷（すずや）”艦長室

今、月城の前に座っているのは、憔悴気味にうつむく金髪の少女。
フィアだ。
「敵の狙いはこの娘だと？」
「そうだ」
フィアの肩に軽く手をやった美夜が頷いた。
「この子を巡って――――陸軍がこの艦を襲った」
一瞬、怪訝そうに眉をひそめた月城の顔を見て、
「そうとしか考えられない」とだけ言った。
「根拠は？」
「戦闘経過報告は読んだな？」
「はい」
「連中が目指したのは、メサイアハンガーじゃない。艦橋でもない。居住区だ。しかも、この娘の部屋を襲撃した後、撤退を開始した」
「理由としては十分ですか」
「現状、中佐は撤退中に墜落したヘリの中にいたことになっている。つまり、死んでいるということだ」
ピクッ
“死”という言葉に、フィアが初めて反応らしきものを示した。
「安心しろ。染谷の容態は快方に向かっていると、病院の先生もおっしゃっていたろう？」
「……」
フィアは、コクリと頷いた。
既にフィアと染谷の関係、そして、あの晩、染谷に何が起きたかも知っている月城は、少しだけ哀れむような目になった。
「……この娘が、生きて艦内にいることを知っているのは、憲兵隊を含めて艦内のほんの一握りにすぎない。事実の公表は、日本から

離れるまで控える」
「そう……ですね」
じっとフィアを見つめた後、月城は訊ねた。
「ツヴォルフ中佐」
「……」
「一体、君は何者なんだ」
「……」
フィアは、無言で首を横に振った。
「それでは答えにならん」
「……」
「いいか？同じ艦や部隊の者達が、君のために命を危険にさらしたのだぞ？それを君は」
「頼んでないわよ！」
フィアはカッとなって怒鳴ると、椅子を蹴って立ち上がった。
顔を真っ赤にして、拳を怒りに震わせている。
完全なけんか腰だ。
「私が何したっていうの！？何もしてない！気がついたらアフリカにいて、命からがら逃げ回ってたことしか知らない！覚えていない！」
「……」
「あんただって、突然わけもわからず襲われて、私みたいな立場に立って、同じコト言われてご覧なさいよ！何て答えるのよ！」
「落ち着け。中佐」
美夜が二人の間に割って入った。
「一番、今回の騒ぎで傷ついているのは、中佐自身だと、私はわかっている」
「……」
美夜に押されるようにして、フィアは再び、椅子に座った。
「月城大尉。恋人を殺されかかった上に、その恋人は闘病中という、ツヴォルフ中佐の立場もわかってやってくれ。情緒が不安定なんだ。

不用意な発言は避けてくれ」
「……はっ」
「時間が経過すれば、やがて闇も晴れる」
美夜は制帽を正した。
「真実の光明の向こうに、全てが見えてくるはずだ。北米への航海の意味は、そういうことも含まれているんだろうと信じる。それまで、中佐はここにいてもらう。誰にも知られるわけにはいかない。意味はわかるな？大尉」
「……はい」

●夜　“鈴谷（すずや）”艦内。月城の私室
「お話があります」
消灯前の1時間は、自由時間に割り当てられている貴重な時間だ。そんな時に、月城の部屋に入ってきたのは、宗像と美晴、そしてさつきだ。
「どうした？」
既に寝間着に着替えているかと思ったら、月城は戦闘装備のインナーのままだった。
「――まさか、そのままで眠るんですか？」
「何かあったらどうする」
「……実は、折り入ってお伺いしたいことがありまして」
「何だ」
「実は」
宗像は、図書館でコピーしてきた新聞の切れ端を月城の前に広げた。
「――成る程？」
宗像の説明を聞きながら、月城は適当としか聞こえない返事をした。

「馬鹿馬鹿しい」
「お言葉ですが」
カチンときたらしい宗像の顔が凍り付いた。
「仲間が死亡したと新聞に載せられたのですよ？」
「――風間中尉の初めての赴任先はどこだった？」
「えっ？」
「特務隊と聞いている。違うのか？」
「……その通りです」
「そのために事件を利用したんだろう。ああいう部隊に所属する者は、公に存在が確認されていたり、顔を知られてると困るケースが多い」
「つまり？」
「特務隊の別名は非正規部隊、そして、非合法部隊だ」
「……非合法」
「何かあった時――たとえば、任務中に捕虜になった時など、敵国から氏名の照会を受けた場合、既に死亡と主張することで、堂々と責任を回避出来る。つまり、切り捨てることが出来る」
「そんな馬鹿な」
「表向きのことだから心配するな。実際、風間中尉は生きているのだろう？」
「……はぁ」
「なら、それでいいだろう。
貴様等が心配しても意味はない」
「つまり、大尉」
美晴が訊ねた。
「祷子、じゃない。風間中尉は、この時点で既に特務隊の配属が決定していた。部隊の性格上、どこかで戸籍を抹消した方が都合がいい。そのための戦死公報だと？」
「物事をまとめる能力は、私より高いようだな」
「恐れ入ります。なら、我々はそれを信じればいいわけですね？」

美晴は、ホッとした顔になった。
「そういうことだ。明日は鵜来少尉の着任に、北米への出航と忙しいぞ。早く寝ろ」
「はっ！」

パタン
敬礼の後、閉じられたドアに向かって、月城は呟いた。
「ったく。余計な知恵を付けてくるが、肝心な所がガキだ」
ウンッと、背伸びした後、書類の後ろに隠していた、酒の入ったグラスに手を伸ばした。
「――風間中尉が戦死扱いされた理由なんて、私が知るものか。バカ」
グラスを半分ほど飲み干した後で、月城はそんな本音を呟いた。

●翌日朝　“鈴谷（すずや）”　ハンガーデッキ
「ここんトコ」
もううんざり。という顔の美晴がぼやいた。
「何かあるたびに、気苦労と謎ばかり増えていくような気がします」
「そう嘆くな」
宗像は、チラリと前に立つ月城を見た後、小声で言った。
「大尉に聞かれると後が厄介だぞ」
「ですけど」
宗像に美晴は言い返した。
「都築君にさつきさんがいなくなったと思ったら、祷子が公には死んでいるなんて」
「今更ながら」
宗像は肩の辺りを軽く撫でた。
「部隊（ウチ）の特異性だな」

ビーッ！
ビーッ！

「着艦機あり！繰り返す！着艦機あり！各員、受け入れ態勢をなせ！」

FDC（フライトデッキ・コントロール）のスピーカーから警告が鳴り響く。

甲板要員や整備部隊が所定の配置に駆け出していく。

「やれやれ」

宗像は、開かれていくハッチを見つめながら小さくため息をついた。

「肝心な時にはご不在ばかり、薄情者のお戻りか」

“鈴谷（すずや）”に着艦。収容されたTAC（タクティカル・エア・カーゴ）のハッチが開き、中から乗員達が降りてきた。

「敬礼！」

月城の張りのある号令に合わせ、美晴達が敬礼の姿勢をとった。

「――や、ご苦労さん」

降りてきたのは後藤だ。

相変わらずのやる気の疑わしい猫背に眠そうな目をした後藤が、軽く答礼した。

「大変だったな」

TAC（タクティカル・エア・カーゴ）のラッタルを降りた後、思い出したように後藤は言った。

「――ああ、そうそう。月城大尉。過去のことはいろいろあるけど、よろしくね？」

「こちらこそ」

「うん。それと」

後藤は後ろに立っていた士官に振り向いた。

背が低くて童顔。

軍服が学校のブレザーにさえ見える。
女というより、女の子。
その表現がぴったり来る、少尉の階級章をつけた士官がハンガー内を興味深げに見回しながら、しかし、どこか緊張した顔で立っていた。
後藤と視線が合ったことに気付いた士官は、弾かれたように、ピシッと背筋を伸ばした。
「鵜来少尉だ」
「しんっ！」
ガチッ！
慌てて敬礼しようとして、士官は思い切り舌を噛んだらしい。
「――っっっっ！！」
ものすごく痛そうな顔をして、その場にうずくまってしまった。
「だ、大丈夫？」
「はっ……はい……」
涙目でなんとか立ち上がった士官は、泣きながら声を張り上げた。
「申告します！元第４５後方支援業務隊所属、鵜来有珠（うくる・ありす）少尉、独立駆逐中隊に着任いたしました！」
「――はい、ご苦労さん」
後藤の敬礼に、月城達が合わせた。
「着任を許可する。後のこたぁ、そこの月城大尉に聞いて頂戴。前衛部隊隊長の一人だ。恐いお姉さんだから逆らわないようにね。
隊長はあともう一人、へっぽこながいるけど、そっちはまぁ、おいおい」
「へっ……ぽこ？」
「気にするな。何でそう呼ばれるかはすぐにわかる」
「は……はぁ」
「とりあえず、荷物部屋に置いてこいや。
その後で艦長に挨拶だ。
月城大尉？

さっそくで悪いけど、女子校の先生をお願いするわ」
「……了解」

●翌日　太平洋上空　“鈴谷(すずや)”

ガンッ！
高い金属音を立て、“白雷(はくらい)”が“鈴谷(すずや)”に着艦した。
既に“鈴谷(すずや)”は太平洋上空を北米大陸へ向けて航海を開始している。
夕方を前に、月城と有珠(ありす)は、規定の慣熟訓練飛行から戻ってきた。
「申し分ないという所ですか？」
コクピットから降りた月城に、宗像が近づきながら訊ねた。
「これから夜間訓練に入り、視界のテストをやるが、とにかく、パワー、機動力共にバケモノ並だ。これなら」
月城は、コクピットから離れ、無重力環境の中を流れながら与えられた自らの騎を誇らしげに眺めた。
「――勝てる」
その顔は、本当に嬉しそうだ。
「精霊体の十六夜も相性は十分だと思っている。私の方に問題はない」
“白雷(はくらい)”を数時間で乗りこなすあたりは、正直、さすがだと思います」
「シミュレーターには泣かされたよ」と、月城は肩をすくめて見せた。
「――さて、問題は」
その視線が向かった先は、鵜来騎だ。コクピットハッチが開かれ、整備兵によって有珠(ありす)が引っ張り出されようとしていた。
気絶しているのか、有珠(ありす)は整備兵達に引き出されても反応がない。
「あの子が耐えられるか、だな」
「おたずねしますが、大尉は鵜来少尉のことは？」

「いくら内親王護衛隊（レイナガーズ）所属とはいえ、近衛全ての女性騎士を知っているわけではない」
「そりゃ……そうですね」
「スコアは大したことは無い。というか、ないに等しい。技量の面でも平凡。平野や小清水、そして鬼龍院のように、射撃能力がぬきんでて高いとか、別にそういう目立つ所がない。単なる欠員補充だろうが、それはそれでおかしな話だ」
「は？」
「――――いや」
月城は首を横に振った。
一方の有珠（ありす）はようやく復活したらしい。泣きながらＭＣ（メサイア・コントローラー）からチューブ入りの水を受け取っていた。
「どちらにしても、使えない人材とは思っていない。“白雷（はくらい）”との相性もそれほど悪くない」
「後は、慣れですか」
「ああ」月城は頷いた。
「二週間もあるんだ。慣れてもらうさ。意地でもな。でなければ」
「でなければ？」
「北米大陸に到着する前に戦争が終わってしまう」
「……鵜来少尉も気の毒に」
「何か言ったか？」
「いえ、別に」

●北米大陸
圧倒的優勢。
それは米軍のために存在するような言葉のはずだった。
だが、現状において米軍を語る言葉は違う。
圧倒的不利。

こちらだ。

砲撃によって月面のクレーターのようになった、かつてのトウモロコシ畑を蹂躙するのは、中華帝国軍の８８式戦車だ。

上空から見るとまるで蟻の群にさえ見える戦車の大軍が、世界有数の穀倉地帯を踏み荒らし続ける。

数両のＭ１エイブラムスが黒煙を上げて擱座している横を、中国製戦車達は我が物顔に走り抜ける。

戦車兵達の志気は高い。

北米大陸に到着して以来、負けることは一度たりともなかった。

雲霞の如きその数を止める者は誰もいない。

第４０４戦車小隊を率いる夏中尉は、ペリスコープ越しに周囲を見回し、一人で満足していた。

世界最強戦車と呼ばれたＭ１戦車とはいえ、８８式戦車の８３式５１口径１０５ｍｍライフル砲数十門の一斉射撃に耐えられはしなかった。

戦場では火力の数こそが正義だと、夏中尉は心底、そう思った。

乗車する戦車の目の前に、半分黒こげになった米戦車兵らしき死体が転がっているのに気付いた。

避けるか？

一瞬、そう考えたが無視した。キャタピラが戦車兵の死体を挽きつぶせば、いい肥料になるだろう。来年の春には、戦車兵が土から生えてくるかもしれないぜ。と、そんなくだらない冗談さえ、脳裏に浮かんでくる。

前方を進む４０２戦車小隊の先頭車両がモロコシ畑を抜けた。

モロコシ畑の終わりは、やや急傾斜の丘が前方に広がっている。

ディーゼル音を撒き散らしながら、８８戦車が丘の頂上に到達した時は、戦車の半分くらいが宙に浮いた。

少し急だな。

夏中尉は、それが気になった。あんな腹を見せることをやると―

――

ドンッ！

戦車砲とは明らかに違う爆発音がとどろき渡ったのは、その瞬間だった。

「いわんこっちゃない！」

夏中尉は手近なものを殴りつけた。鈍い痛みが手に走る。

米軍の対戦車ミサイルに第二世代に近い８８式戦車が耐えられるはずがない。雄姿を誇っていた砲塔は吹き飛ばされ、車両は得体の知れない残骸へと変貌を余儀なくされた。

乗っていた戦車兵達が無事なはずはない。

４０２小隊所属車両が一斉に丘の向こうへ向けて突撃、滅茶苦茶な砲声が丘の向こうから聞こえてきた。

自分達が遅れたとあっては、軍法会議では済まない。

夏中尉は、部隊に命じた。

「４０４小隊全車両、前進！４０２小隊に続け！」

「戦車部隊が敵部隊の掃討に入ります」

「機械化歩兵部隊、戦車部隊の後方に展開。移動開始」

中華帝国軍司令部は淡々と前線から伝えられて来る戦果を処理している。

「この調子なら」

参謀飾緒（さんぼうしょくちょ）をハンカチで磨いていた龍師団付参謀が言った。

「数日中にはセントルイスを陥落（おと）せますが」

「……」

曽師団長は、地図を前にして固い表情を崩さない。

「参謀」
「は？」
「これは一体、どういうことだ？」
「確かに」
龍はハンカチをポケットにしまいこんだ。
「ここにきて、突然の方向転換ですからな」
「このまま、五大湖方面を叩き、米国の重工業地帯を制圧するなり破壊するなりしなければ、ここまで攻めた意味がなくなるぞ」
「侵攻ではなく、敵部隊のけん制」
龍は首を左右に振った。
「軍司令部の考えが、私にも理解が出来ません。新攻撃目標には、反応弾の貯蔵庫があるとも聞きましたが」
「いくらヤンキー共でも」
曽師団長は、タバコを取りだし、ジッポで火をつけた。
「自らの祖国で使うほどバカじゃないだろう」
「反応弾そのものを人類相手に使えば、共倒れですからな」
「なら、無視すればいい。ハリボテ相手に何を恐れることがある」
「陥落（おと）してみればわかりますよ」
龍は言った。
「規模からして、明日にはわかります。それより、目の前で撤退中の米軍の動きが気になります。偵察の許可を」
「参謀自らが？」
「地形を確認しておきたいこともあります。地図ではどうも」
「わかった」
曽師団長はテーブルに置いてあった戦闘帽を被った。
「将校偵察なら、私も行こう」

一時間後。
ＢＪ－２０２２多用途車「勇士」に乗った二人は、戦闘が終わったばかりのトウモロコシ畑を抜けた。

同乗した通信兵によると、すでに後方では陸戦艇部隊も移動を開始しているという。
丘を下り、米兵達が塹壕代わりにしていた爆撃孔の間を通り過ぎる。戦車の容赦ない攻撃に曝された、無惨な米兵達の死体を一瞥した曽師団長は、窓から入る吐き気を誘う得体の知れない臭いに顔をしかめた。
「米軍の動きは？」
「上空の偵察機によると、徒歩で撤退中の歩兵部隊の長い列が確認出来るそうです。推定でも師団規模」
「ここからの距離は？」
「約３キロ」
「参謀。どうする？」
「戦車部隊を投入するのは簡単ですが」
龍は首を横に振った。
「無駄な消耗です。師団規模の突撃をそう何度も繰り返されると、いざという時に困ります。なにより、戦車砲は歩兵の掃討用には作られていません」
「そういうことだな」
曽師団長は頷くと、タバコに火をつけた。
「目の前のエモノは空軍にでも委ねよう。俺達だけで戦争をしたとあっては恨まれる」
「了解」
「ただ、その連中を拝んでおきたいな。どこかで見ることは出来るか？」
「そこの丘で」
参謀は、こんもりと盛り上がった小さな丘を指さした。
「よし。軍曹――やってくれ」
小さな丘だったが、その上に立つと、周囲を面白い位はっきりと

見回すことが出来る。
どこまでも通じる平原の向こうは地平線だ。
そこに一本の道が通っているだけの世界。
世界は本当に広いんだなと、急峻な山に囲まれた田舎で育った曽師団長は、こういう景色に出会うとつくづくと思ってしまう。
「――あれですな」
双眼鏡をのぞき込んでいた龍が指さしたのは、北へと延びる一本の道路上を、疲れ切った兵士達が重い足取りで歩いている光景だ。
米軍兵士達だ。
「セントルイスの前あたりで部隊を再編成。防御陣地を構築する。そんな所ですか」
「俺なら、そうするな」
曽師団長は、兵士達を双眼鏡で眺めた後、言った。
「敵が勝手に後退してくれたのはむしろ僥倖だ。この広大な米国の土地そのものが、敵の反撃に対する防壁となり、障害となってくれるだろう」
「師団長閣下」
通信兵が言った。
「この付近の座標に展開する部隊を探している者がいます」
「どこだ」
「それが」
通信兵は不思議そうな顔をした。
「砲兵部隊司令部です」
「砲兵？」
「どうなさいますか？」
「受話器を貸せ。第２３戦車師団、師団長の曽少将だ――そちらは？」
「第２特務砲兵隊だ。そちらから撤退中の米軍は確認できるか？」
「ああ。よく見える」
「砲撃を開始した。弾着の観測を頼みたい。師団長には失礼な申し

出かもしれないが」
「失礼か否かは問わないが」
曽師団長は思わず空を見回してしまった。
「――おい、君達は」
「弾着まで後２０秒」
「質問に答えろ。どこから、何を撃ったんだ。おい！」
「弾着まで１０秒」
「――伏せろっ！」
師団長は、そう怒鳴ると地面に伏せた。

鼓膜が破れた。

そうとしか思えない。
その瞬間、世界から音が消えた。

空気に殴られた。

そうとしか思えない。
その瞬間、空気が衝撃波となって襲いかかってきた。

空から降ってくるのは得体の知れない土砂だ。

「っ！」
強く頭を振ると、曽師団長は前を見た。そして、絶句した。
それまで、目の前には、一本の道が通る平原が広がっていたはずだ。
それが――
「師団長」

龍が匍匐前進の要領で曽師団長の横にきた。
耳が鳴っているが、声を聞き取ることは出来るのが幸いだ。
「あれは」
「君にも見えるなら、これは私の見た悪夢というわけでもなさそうだ」
「冗談が過ぎます」
「全くだ――砲兵よ、聞こえているか？」
「効果の程を教えてくれ」
「……移動中の隊列のど真ん中に命中した。命中地点は」
ゴクッ
曽師団長は生唾を飲み込んだ。
「クレーターになってる」
「それでいい。これより効力射に入る。済まないが、もう少しつきあって欲しい」
「デートならお断りだ」
「第二射、弾着まで２０秒」

道路の真ん中に突然現れたクレーター。
白い煙を上げるその周囲には、爆風で吹き飛ばされた米兵達の死体や、車両の残骸が転がっている。クレーターの周辺では、事態が飲み込めないらしい兵士達が右往左往している。
「師団長――あれは一体？」
「あの野郎共」
ギュッ。
師団長は拳を握りしめた。
「あんなモノまで北米に持ち込んだのか！」
「あの……？」
「ああ。龍参謀、君は韓国滞在経験はなかったな」
「ええ。私はニンニクは嫌いで」
「ふん――大韓帝国ご自慢の“対馬砲”だよ」

「あの列車砲を!?」
「どういう仕組みにしたかは知らないが」
再び、破壊が米兵達に襲いかかった。
爆風が兵士達を引きちぎり、玩具のように宙に放り上げる光景を、曽師団長達はまざまざと見せつけられた。
それは、友軍の一方的勝利のはず。
圧倒的な勝利のはず。
それなのに、何故か、曽師団長達は、歓声を上げる事さえ忘れ、その光景を見つめていた。
ただ、呆然と、米兵達の末路を眺めていた。
それだけが、彼等に出来たことだった。

元から本土急襲を受けた米軍がこうなることは、彼にとっても、そして中華帝国軍にとっても明白だったのは事実だ。

考えつかなかったのは、悲しいかな。米軍と米国政府、そして米国民だけだ。

アメリカ合衆国。

彼等の軍事的な目は、常に海外、つまり、外を向いている。

アメリカ本土が陸上兵力によって攻撃されることはまずあり得ない。

問題は空だ。

故に、本土防衛のためには適切な防空力があればいい。

空さえ安全ならば、米本土においては、海外に兵力を送り出すための兵站と、兵力の訓練だけ行う機能があれば十分だ。

アメリカの基本姿勢はこんなものだ。

それ故、言い過ぎかもしれないが、本土の米軍は、巨大な防空部隊と後方支援部隊、そして、訓練部隊ばかりで編成されていると言いきっても良い。

本土防衛を任務とする北方軍隷下の米北方陸軍第５軍の主任務は、予備役の召集訓練と運用等を統括することであり、その隷下の旅団の任務は“Ｔｒａｉｎｉｎｇ”と明記されている。

実戦部隊は東南アジアや、海上ルートがようやく復活した中東方面へ傾注している中、こんな体勢では、本土の守りはどうしても手薄になってしまう。敵の強襲を受けたらひとたまりもない。

中華帝国軍が戦況の挽回のため、米国本土を強襲した背景には、このアメリカの内部の脆さがあった。

鉄壁を誇る城壁を崩したければ内部から突き崩すのは、いつの時代でも常套手段だ。

誰にも、それはわかっていたはずなのに……。

●シカゴ　第２０５歩兵旅団司令部

「酷いものだな」

参謀から伝えられる報告に、第２０５歩兵旅団、通称バヨネットを率いるウィリー大佐は顔をしかめるしかなかった。

米軍は敗北を続けていた。

メンフィスを放棄して撤退するだけで、現地防衛部隊は陸軍・州兵問わずに壊滅的な打撃を被っている。

これが、世界最強と謳われた米軍の現実かと思うと、泣くより笑うしかない。

「１８８歩兵旅団は壊滅――――以上です」

旅団付き参謀、キャッチャー少佐は口元をへの字に曲げて報告を終えた。

「ロバート。ミサイルが使えなくなったとか言っていたな」

「狩野粒子の影響です、サー。チンク共が戦線において狩野粒子を使用。この影響により電子装備に致命的な影響が出ています」

「ハイウェイをかっ飛ばしたら車がオシャカになる時代の到来か」

「そうなりますな」

キャッチャー少佐は、地図上の何カ所かを指さした。

「チンク共のミサイルも、一応はまっすぐ飛んだようです。空軍及び州軍の航空基地は軒並み初戦で狩野粒子の洗礼を受け、航空基地としての機能は喪失。配備されていた航空機も大半が飛ばずにスクラップです。現状、東南アジア戦線向けのＮＥＥ規格で設計されたレシプロ部隊が上空からの支援に頑張ってくれていますが」

キャッチャー少佐は辛そうに首を左右に振った。

「……高性能ミサイルのようにはいきません。むしろ、数で押し切られてしまう分、下手な攻撃は焼け石に水です」

「……そうか」

「我々にとって幸いなのは、敵が五大湖方面への進撃を止め、矛先

をテキサスに変更したことです。その間に兵力の建て直しをはかれます。カナダ軍の増援も数日中には到着しますし、州兵達の訓練と編成も何とか間に合うでしょう」

「テキサスの状況は？」

「カリフォルニア基地のメサイア大隊が駆り出されています。魔族軍との停戦により日本に送られていた部隊も合流が決定しています」

「結局は」ウィリー大佐はテーブルに置かれていたコーヒーマグに手を伸ばした。

「騎士頼みか」

●テキサス　中華帝国軍側最前線

「……蓋を開けてみた結果がこれだ」

目の前に広がる光景を前に、顔をしかめたのは何も自分だけじゃないはずだ。

メサイア中隊を率いる劉少佐は、本気でそう思う。

「然り」

通信モニターの向こうで、ＭＣ（メサイア・コントローラー）が頷いた。

「自分達が駆るのは赤兎です」

ＭＣは言った。

「性能は可もなく不可もなく。その程度のシロモノですよ？あんなモノとぶつかったら、ひとたまりもない」

「もし、あっちに」劉は引きつった笑みを浮かべた。

「そんなものに乗ってここへ来た理由を聞かれたら、何て答える？」

「間違えました」

「同感だ」

劉達がここにいる理由。

それは、司令部から、この先に展開している敵機甲部隊の掃討を命じられたからだ。

「まさか、ここにあなた達、メサイア部隊がいるとは存じませんで

したので」
そこまで言ってMC（メサイア・コントローラー）は首を左右に振った。
「――そんな言い訳が、通じるわけないですね」
「それが通じたら、世界は平和だな」
「同感です。ただ、通じて欲しいです」
「それこそ同感だ」

二人がため息まじりに見るのは自分達の前方約2キロ。

巨人達が居並ぶ光景。
米軍主力メサイア、グレイファントム達だ。
ただのグレイファントムではないことは、その独特な塗装が教えてくれる。
その全部が左肩を赤く塗っている。
レッドショルダーの異名を持つ第２４戦略メサイア大隊“ソルティドック”であることは、その肩が証明している。

ソルティドック。

単なるカクテルの名ではない。
アメリカ陸軍メサイア部隊の中でも最も腕利きが集まる最精鋭部隊の一つであることは、劉達中華帝国軍の軍人でさえ知っている。

「米陸軍メサイア部隊のトップエース達がお出ましか」
「彼我の間に地雷原。推定、対メサイア用の重地雷（ヘビーマイン）」
「……準備のいいことだ」
「ここは連中の縄張りですからね」
「司令部には通報したのか？アメリカ軍最強部隊のお出ましだって」
「命令は来ています」

「撤退を許可か？それとも白旗？俺はそれ以外は聞きたくない」
「このまま対峙し続けろ。地雷散布部隊が来るそうです」
「何？」
「司令部は、ソルティドック達をここに釘付けにしたいのです」
「クックッ……成る程？」
劉はむしろ自嘲気味に、乾いた笑い声を上げた。
「ここから数百キロ。制空権は俺達にある。なら、塩漬けの犬を恐れる必要はないってことか」

●テキサス州　米軍側最前線
「おいおい」
司令部からの命令に、ソルティドック達を率いるターナー中佐は顔をしかめるしかなかった。
「何だ？その待機ってのは」
「しかたないですよ」
グレイファントム特別仕様騎が居並ぶその後ろ。野戦司令部のテントの中でコーヒーを受け取った彼に、肩をすくめる副官が言った。
「我が部隊の後方はガラガラなんです」
副官は指示棒で、デスクの上に広げた地図を突いた。
「全然、補給線も何も準備が整っていない。ルイジアナ州境から若干食い込まれたここで、チンク共をここでくい止めるのが精一杯。というか、我々メサイア隊が前面に陣取って敵をくい止めているから、敵はテキサスに侵攻出来ないわけで」
「ああ、そいつはいい」
ターナーはコーヒーマグをあおった。
「テキサス中の飲み屋で、俺達がチンク共の防波堤だと宣伝してくれ。俺はどこの飲み屋に行っても英雄扱いだ」
「ニューメキシコ、及びメキシコに集結中の陸軍の編成が遅れてい

ます。また、テキサスの制空権を喪失した現状」

「そこだ！」

ターナーは、副官にマグを突きつけた。コーヒーがマグからこぼれ、副官の服にコーヒーの染みが付いた。

「制空権はどうなっているんだ！陸軍は、空爆が恐くてテキサスに来れないんだろう！？」

「その通りです。チンク共のあの忌々しいＹａｋめが車列を攻撃しますからね。トラックだろうがスクールバスだろうが」

「チンクのパイロットが殺されたって？」

「当然です」

副官は頷いた。

エンジントラブルで不時着した中華帝国軍のパイロットは、決して生きては帰れない。

パラシュートを狙って地上から容赦のない発砲が繰り返される。運良く地上に生きて降りることが出来ても、銃を手にした市民の銃口から逃れることは出来ない。

同国人の手助けなんて期待出来るはずがない。中国人と知られた者は、市民からリンチを受けるか財産没収の上、ニューメキシコに作られた収容所に送られた後だ。

昨日も、Ｔｕ－４ＩＣが一機、ダラス上空で機体のトラブルにより放棄され、パイロットは全員脱出したものの、パラシュートめがけて市民が四方から発砲。対戦車ライフルから拳銃まで用いられた、容赦のない弾幕にされされたパイロット１０名は、州軍が現地に到着した時点で、人間の外見を維持していなかった。

市民によってパラシュートから引きはがされ、八つ裂きにされる一歩手前で回収された死体は、検屍の結果、地上に到達する前に７人が射殺され、３人は地上で殺されたことが判明している。

挽肉同然で回収された彼等の死体から摘出された弾丸は、１２．７ミリから２０口径まで、弾丸のメーカーの違いもあって、実に２

0種類以上に登ったという。

「このアメリカの空を汚した罪は、地獄行き以外の選択肢はありません」

「ふん」

ターナーはマグに残ったコーヒーを飲み干した。

「その地獄の間近で俺達の任務は、ここで彼奴等と睨み合いってことか」

「そうなります」

副官は頷いた。

「少なくとも、我々が地獄に堕ちることはないでしょう」

「チンクを殺せば天国に行けるって、あのテレビCMは俺も見たぞ？」

「あれこそ、神の真理です」

「神……か。まぁ、いい」

ターナーはマグをテーブルに戻した。

「現実の話をしよう。チンクの侵攻の目的は？まさか五大湖より西海岸重視に今頃になって視点を変えたわけじゃないだろうな」

「テキサスの工業地帯を狙わなかっただけで疑問なんです。テキサスの油田地帯を狙っているのかもしれません」

「油田地帯？」

「ええ。中東からの輸入を断たれた中華帝国は、国内の油田だけでは消費を賄いきれず、テキサスの油田に狙いをつけたんだろうと」

「馬鹿な」

顔をしかめながらも、ターナーは反論がとっさには思いつかない。

「それならアフリカにでも行くだろうさ」

「しかし」

「……とにかく、下っ端の俺達が知るべきことは、敵が目の前にいるってことだけだ」

「はい。陸軍と海兵隊のメサイア部隊と海軍の飛行艦隊が、カリフ

ォルニア方面から移動中。ただし」
「わかっている」
ターナーは首を横に振った。
「戦線が広すぎて、俺達の所まで補給が来るのがいつになるかわからないっていうんだろう？」
「整備大隊はヒューストン近郊の空軍基地で待機中。同基地は補給所に指定されています」
「そこまで下がりたいものだ。黄色いサルの面なんて拝みたくない」
「前方の地雷原さえ突破する無謀を、あのサル共がしないことを祈るだけです」
「神か？」
「悪魔にです」

●東京　皇居
「麗菜の」
ソーサーにティーカップを戻した帝は、妻である皇后に言った。
「あの子の欠点は」
その顔は、あの騒ぎ以来、常に不機嫌を隠そうともしない。
その態度に曝されれば、娘の不始末を自らの不始末のように皇后が感じるのも無理はなかった。
「――――堪え性のない所だ」

北米戦線では、五大湖方面の米軍が列車砲まで繰り出してきた中華帝国軍の砲撃により足止めを受け、新たな攻略方面に指定されたテキサス方面では、両軍のメサイア部隊がにらみ合いを続けている中だ。

「申し訳ありません」
皇后は頭を下げた。
「いや。君が悪いんじゃないよ。詩織」
「ですけど」
「僕の育て方も悪かったんだろうし……というか」
言葉を止めた帝の顔が曇った。
「父親の僕から見ていると、あの子は僕にとって、似て欲しくない所ばかり似てくれた気がする」
「……」
「……」
「……あの？」
「否定、してくれないの？」
「あっ！」
「――まぁいいよ。“皇龍”の予備フレームを使った騎の開発は順調なんだね？」
「騎士の腕もあるでしょうが、“皇龍”や“白龍”のベースデータは、あの騎から取ることになるでしょう」
「あの状況で、あの麗菜を倒す……か」
うーん。
帝は、無意識に顎に手をやった。
「許されるなら、一度は手合わせを……ん？」
帝は、じっと妻に見つめられていることに気付いた。
「どうしたの？」
「……いえ」
詩織は、何故か嬉しそうに微笑んだ。
「そうしていると」
詩織は、そっと帝の仕草を真似て見せた。
「日菜子があなたに似たなぁって、そう思うんです」
「……そう？」
「あの子は」

詩織が心配そうに訊ねた。
「――お嫌いですか？」
「いや？」帝は苦笑気味に首を左右に振った。
「僕は、あの三人を平等に接してきたつもりだよ？」
「……」
「疑っている？」
「……いえ。陛下の日菜子に対する接し方に疑いはありませんけど……でも、あの子は」
「その話はよそう」
「……」
「日菜子のことで思い出した」
「はい？」
「“彼女”の騎体は？」
「――ああ」
詩織はしばらく視線を泳がせた後、ポンッと手を叩いた。
「順調です。ただ」
「ただ？」
「ん？」
「あの騎は危険です。あんな“力”を、どうして無事に引き出すことが出来るというのでしょうか」
「僕もそう思う」
「なら！」
「だけど、ここで下手な動きを見せれば、逆に彼女を危険にさらすことになる」
「……」
「データ上は彼女に危険はないのだろう？」
「データ上は、です」
詩織は言った。
「後藤・津島両中佐からの定期報告は受けていますが、肝心の開発者からは何もデータは」

「……赤城中佐の背後関係は、考えてみる必要があるな」
「お許しいただければ、後藤中佐を使いますが」
「彼が使えれば、一番だろうが、しかし、反面において一番疑われる人物でもある。今、彼には別な任務もあることだ。おいおいで頼むよ。陸軍の動きもある。フィアとかいう、あの子が一体何者か、北米ではっきりさせて欲しい。それが後藤中佐の任務だ」
「はい」
「それと、彼女の扱いはくれぐれも注意して欲しい。何しろ、彼女は僕達にとっても」
帝は、そこで何故か口ごもった。
「……」
「その……」
「はっきり仰って下さって結構ですよ？」
詩織は口調こそ穏やかだが、目が笑っていない。
「騎体より、あの御方の存在そのもの……もっと言えば、あの御方の氏素性が公になることが危険だと」
「誰にとって？」
「……申し訳ありません」
詩織は言った。
“その事態”を、危険どころか幸運だと思うのがあなたでしたね。陛下」
「初めて知った時は、これで大学の研究室に帰れるって、喜んだんだけどねぇ」
「……そういう御方でした」
「呆れた？」
「いえ？慣れてますから」
「……」
「ただ、心配です。その素質は認めますけど、女としてはやっぱり……」
「メサイア使いの技量はさすがというか……あの子は、親の血と才

能をモロに受け継いだ……そんな所だね」
「陛下が心配されるべきは……いえ」
詩織は言った。
「“あの俗物共”があの御方を利用しようとたくらむのは、その氏素性と、何より」
「日菜子以上の“統べる力”の持ち主……か」
「データは全て隔離、厳重に管理しています」
「……済まないね」
「いえ。あんなもの、公にされたらそれこそ大変です。氏素性だけを明らかにするだけで、皇室の歴史に泥を塗ることになるというのに」
「忌み子……という言葉は使いたくないがね」
「なにより、私は母親として日菜子に与える影響を心配します。産みの父親の過去の所行を知るには、あの子はまだ子供ですし、何より感受性が強すぎます」
「……まだ、友達が出来ないんだっけ？」
「……あの子を失って以来、むしろ悪化しているようで」
「……そうか」
帝は辛そうにため息をついた。
「普通の父親っては、こういう時に、娘に何をしてやれるのだろうか」
「……」
「難しいね。子育てって」
「……はい」

●葉月市　近衛軍ラボ
美奈代が祷子と再会したのは、Ｄ－ＳＥＥＤの改装が工程上９割に達した日のことだった。
先行して“死天使”として完成した姉妹騎を駆る美奈代は、連日

の如くデータ収集にコキ使われ続け、そこから採取されたデータがＤ－ＳＥＥＤにフィードバックされる仕組みが取られている。
美奈代がへたばる原因が、褄子のためだと思うと、美奈代は怒りを通り越して、最早どうして良いかさえわからない。
「世の中ってのはね」
“死天使”とＤ－ＳＥＥＤが並んで整備を受ける前で、紅葉が言った。
「損をする者と得をする者と、二通りしかいないの」
「私は損する方ですか」
「それが固定相場ね」
「固定……ですか？」
「“死天使”のデータでフィードバック出来るものは全てＤ－ＳＥＥＤに反映している――ああ、それと」
「？」
「ゴメン。泉大尉の休暇申請、却下された」
「……」
美奈代は、泣きそうな、それでいて、どこか安堵したような、複雑な顔になった。
「そう……ですか」
「特殊騎でしょ？それに北米派遣決定しているのにって……」
「……仕方ないですよ」
美奈代は笑って見せた。強がっているのは、その強ばった笑みからはっきりわかる。
「神戸に行きたいなんて、このご時世で何考えてるんでしょうね！私って！」
「染谷候補生のことですか？」
横に座っていた褄子が、お茶を用意しながら言った。
「薄情ですよね。お上も。お見舞いくらい認めてあげても」
「上の連中なんて、個人の感情なんて考えてくれない。そのクセ、自分のだけは通ると本気で思っている。――まぁ」

祷子からお茶を受け取ると、紅葉は、美奈代の肩に手を置いた。
「容態は安定しているそうだから、北米から帰ったら、その時こそお見舞いに行かせてもらいなよ。今回は私の支援が通らなかったけど、“鈴谷（すずや）”の平野艦長にでも頼めばきっと通るから」
「……はい」

「泉大尉！」
“死天使”のコクピットに横付けされた整備用キャットウォークから整備兵が大声を上げた。
「システムの調整が完了しました！すんませんけど、見てもらえますか！？」

「わかりました！」
美奈代はお茶に一口、口をつけると席を立った。
「すみません。中佐、風間」
「しょうがないよ」
「お茶、まだありますから」

紅葉達、二人の前で、キャットウォークに登った美奈代が“死天使”のコクピットに消えた。

「仕事熱心ですね。美奈代さんって」
「何かしてないと、耐えられないのよ」と、紅葉は言った。
「口では諦めたとか言ってるけど――心のどこかじゃ、“もしかして”って、そう思っているのよ。あの子」
「……染谷候補生の容態、本当の所はどうなんですか？」
「傷口で発生した壊疽が、全身に回って、かなりひどい事になっていてね。療法魔導師よる緊急施術が数回行われたけど」
「……」
「……正直、いつ死んでもおかしくない」

「何とかならないのですか？」
「死にかけてるのは、彼だけじゃない」
「そういう建前は嫌いです」
口調はしっかりとしている。
おっとりとしているようで、その口調には不思議な威圧感があった。
「……そうね」
紅葉は茶碗に残ったお茶を一気に飲み干した。
「傷口の切除と魔法再生までは終わっている。抗生物質の投与も続いているし」
「後は？」
「染谷が“生きたい”ってどれ程頑張れるかだけど」
紅葉は、“死天使”を見上げてため息をついた。
「染谷の生きたいって理由……そこに、あの子は名前が挙がってくることは……多分、ない」
「フィアちゃんのことですか？」
「染谷の口から、泉大尉の名前が出たことはないって、看護婦が言っていた」
「……」祷子も、急須を持つ手を止め、“死天使”を見上げた。
「あれほど、惹かれ合っていたはずの二人なのに……恐いですね。男と女って」
「……うん」

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「膠着状態？」
「そう」
訝しそうにする後藤に、美夜は答えた。
「中華帝国の皇帝になった載賢が、ついにやらかしたのよ」
「やらかした？」

「弟の立て篭もる南京を攻略。民間人巻き添えにした市街戦の末、弟夫婦を仕留めた。その兵力確保のため、北米への一切の支援が数日に渡って一時的に停止。再開にはそれなりに時間がかかるわね」
「韓国軍まで駆り出したんでしょう？」
「植民地軍だもの。すでに１０万人近くが北米に送られている」
「成人男子がどれくらいでしたっけ？あの国」
「国家レベルでの負担はかなりでしょうね。まぁ、中華帝国軍が苦しむわけじゃないし」
「艦長は、一体、誰の味方ですか？」
「給料もらっているのは近衛。私の主君は陛下のみ。間違っても日本政府じゃないわ」
「――その答えが出るからこその近衛、ですね」
「そういうこと」

北米戦線編　第三話

中華帝国西王朝の皇帝家には、奇妙なジンクスがある。
世の人々は、そんなことをまことしやかに言い合う。
曰く――玉座に座れなかった男子は長生きできない。

意味は二つあるという。
玉座、つまり、皇位を巡って互いに殺し合うから。
もう一つが、玉座に座った男子が、他の男子を根絶やしにするから。

裏付けはある。
西王朝皇帝家の歴史は、確かに血なまぐさい。
１９５０年代の皇帝家の名簿には、実に８５人の成人男子が名を連ねていた。
１９６１年に皇帝が即位した時、名簿に残されていた男子の数は２３人。
１９７１年、皇帝即位１０周年を祝う式典に参加出来た男子は、たった３人だった。
それがどういう意味かはわかるだろう。

そんな血まみれの歴史が繰り返された。

瀋陽（しんようぐんく）軍区の載儀。
南京と広州の軍区を掌握する載陣。

共に末路は悲惨なものだった。
ロシアと日本、そしてアメリカを仮想敵とする瀋陽軍区は、中華帝国軍の中でも精鋭部隊を擁する軍区として知られているが、同時

に通信傍受活動の中心でもあることが載儀にとっては致命傷だった。
いくら兄達が何人、皇帝を名乗ろうとも、軍や行政内において彼より恐れられたのは、その弟で国家諜報局局長である載武の方。
つまり、瀋陽軍区は載武の支配地と呼んでもよいのだ。
紫禁城で皇帝即位を宣言した後、載賢に追われてそんな場所、瀋陽軍区に逃げ込んだ載儀とその妻は、極端に暗殺を恐れ、仮の宮殿に指定したホテルの最上階から外に出ることを拒み続けた。
毒殺を恐れて何人もの毒味役が食べた残りしか口にしなかった。
外出なんて論外。ホテルのカーテンですら、居場所を外部から知られることを恐れ、終日閉めっぱなし。
こんな生活にネをあげたのは、妻の方だった。
美貌を見込まれて載儀の妻となった彼女は、皇帝の妻というステータスと、その浪費癖を満たしてくれる財産故に載儀に体を許したのだ。
彼女の愛情は、夫ではなく、彼の財布であり権力にこそ注がれていた。
夫にあるのは単なる侮蔑でしかない。
好き勝手させてくれなければ、誰がこんな男と結婚なんてするものか。
内心でそう考えるのが、彼女だった。
載武は、そこにつけ込んだ。
彼女付きの女官を買収し、彼女に囁いたのだ。

――そんな所で一生を過ごすか。それとも?

彼女に覚悟を決めさせたのは、宮殿に指定されたホテルへのミサイル攻撃だった。
ホテルの二階を直撃し、“政府”要人多数を殺傷したこの攻撃に、彼女はパニックに陥った。
死人が間近で出たからではない。

三階にあった、彼女専用の宝石保管庫に甚大な損害が出たからだ。

殺されるのはイヤ！

宝石が奪われるのはもっとイヤ！

貴重なダイヤがミサイル攻撃による高温で炭になったことを知った彼女は、半狂乱になって夫に迫った。

降伏なりなんなりして！そして私にダイヤを返して！

返答は、夫・載儀の平手だった。

したたかに殴りつけられた彼女の目の前にいたのは、自分の我が儘を聞いてくれる従順な財布ではなかった。

皇帝に成り上がった男だった。

皇帝として、世界を導くべき男、載儀だった。

ミサイル一発程度で動じることが許されない立場の男だった。

それが、彼女にはどうしても理解できなかった。

あなたは夫だ。

夫なら、妻の言うことは全て聞くべきだ。

妻の言うことを聞くこと。それが夫の務めでしょう？

私が欲しいと言えば、全てを満たしてくれるのがあなたでしょう？

それを――――何故？

彼女はどうしてもわからない。

皇后となった彼女は、自らの地位とはつまり、全ての我が儘を世界が聞くことだと本気で思って疑っていないのだ。

顔の腫れを癒すべく別室に下がった、そんな彼女に、あの女官が再び囁いた。

――――これでも、ここにとどまるか？

載儀が寝室で死体となって発見されたのは、その翌日のことだった。

その妻と共に心中したと、一般には報じられた。

瀋陽軍区は、皇帝の“温情”により、咎め立てを受けることなく新たな皇帝へと忠誠を誓った。

載賢とその妻に一体、何があったのか。

それが明らかになるのは、半世紀以上後、載賢が皇帝として崩御した後の話だ。

中国国家図書館において、廃棄される資料の中から国家諜報局の報告書の写しが偶然、発見された。

問題は、報告書に添付されていた写真。

割れたワイングラスや瓶が散乱する床に横たわる載儀の死体は、吐瀉物にまみれ、喉をかきむしるような姿勢で、毒に苦しんだ顔は、すさまじい形相をしていた。

その横には、美貌を称えられた顔に銃撃を受けた妻の死体が転がっていた。右目が銃弾によってえぐられ、左目が飛び出した顔は、二目と見たいものではない。

決して、心中ではない。載儀は妻に毒殺され、妻は何者かによって始末されたことはこの写真で明らかだ。

報告書は語っている。

工作員Ａによる洗脳の結果、妻は裏切者載儀を毒殺。毒殺現場を確認したＡは、その場で妻を射殺した。そして、載儀が妻を射殺した後、毒杯を空けたと、駆けつけてきた憲兵隊に報告。すでに工作員Ａにより買収されていた憲兵隊は、この報告を受けて調査もせず

に上層部へ報告したに過ぎない。
なお、長らく行方不明だった二人の死体の在処もはっきりした。
憲兵隊の検屍の後、このホテル横にあるゴミ焼却施設に放り込まれ、生ゴミとして処理されたのだ。

瀋陽軍区に北京軍区の部隊が入ったのは、それから3日後のこと。
瀋陽軍区が無血で北京軍区の傘下に入ったことは、他の軍区に少なからず影響を及ぼした。
南京軍区と広州軍区を確保した載陣は、北京を恐れる軍区司令部の高官達によって暗殺された。
載陣の死体と引き替えに、身分の保障を求めた彼等は、その時だけは命の保証がされたものの、そのほとんどが“皇帝への忠誠を示せ”と命じられ、最前線に送られて戦死された。

共に軍閥の力が強いことを、載賢が嫌ったものと思われるが、結果として載賢は短期間のうちに中華帝国のほとんどを手中に収めることに成功した。
ただ、それは決してタダというわけではなかった。
代償はむしろ大きかった。
謀略だけで事態を収拾できると判断した載武は不要としたが、武闘派の載賢は全軍の国内戦準備を厳命したことが、全ての混乱の元だ。
この命令故に、補給部門は国内の部隊に回すために、北米や東南アジア向けの補給を停止するしかなかった。

この国内戦準備の命令が、国内外に多大な影響を及ぼしたのは事実だ。

東南アジアで中華帝国軍と対峙する欧米軍は、全軍待機命令を、中華帝国軍に再びの大規模作戦があると判断した。

よもや、自国国内での内戦なんてありえないというのが、欧米人の感覚だ。

敵の体勢が整う前に、現地司令部に言わせると、“殺される前に殺す”べく、欧米軍は乾坤一擲の一大反攻作戦に転じた。

“ドラゴンスレイヤー作戦”

作戦そのものは、独軍を率いるデラーズ中将によりわずか半日で立案された、付け焼き刃のようなシロモノだったが、その作戦は、後にデラーズ中将自らが語ったように、神に祝福されていた。

中華帝国軍の防衛線に向かう欧米軍の移動ルートは、ベトナムの気候からすれば信じられないほど曇り空の安定した気候が続いたのに対して、防衛線上空は激しい嵐が数日続き、塹壕はほとんどが水浸しの状態。防衛線同士をつなぐ道は、通信線と共に寸断されていた。

雨を嫌って、兵士達はロクに斥候にも出ずに陣地にこもり続け、嵐が去った頃には、命令によって道路の復旧に駆り出されていた。

そんな中、欧米軍の奇襲を受けた中華帝国軍兵士達は、塹壕の中で、ほとんど身動きがとれないほど水に浸かりながらの応戦を余儀なくされた。

無論、前線からの救援要請を応じる司令部が、自らの保身に賢明で前線に何も命じなかったことに比べれば、それはそれでマシなのかもしれないが……。

さて。

これを受けた広西軍区司令部がこの危機をどう利用したか？

北京に救援を求めた。

本当だ。

広州軍区は、北京の傘下に入る。その証として、軍区に増援を求めたい。

前線で死に物狂いの欧米軍相手に兵士達が四苦八苦しているのを後目に、軍区司令部同士は、会合と宴会を繰り返した。

兵士達が補給もなく、治療も受けられずに死んでいく中、彼等は

美食と美酒に酔いしれ、胸の勲章の数を競っていた。
前線の崩壊なんて、彼等の保身さえはかられればどうでもいいことだ。
欧米軍の反攻作戦開始からたった1週間でベトナム全域をほぼ完全に喪失した両軍区司令官は、激怒する皇帝の前でこう報告した。
載儀の謀略が原因でございます。陛下。
載儀めが、指揮系統を混乱させたために起きた敗北にございます。
皇帝が、こんな言い逃れを何故受け入れたかはわからないが、全てはそれで通ってしまった。
東南アジアより、重要な軍事製造拠点を擁する南京の利権を確保することに皇帝が執心だったことを考えれば、むしろ納得するしかないとはいえ、東南アジアを中華帝国が喪失したのは事実だ。
「くれてやればいいんですよ。陛下」
皇帝を前に、載武は平然と言ってのけたという。
「ベトナムは、あの攻撃で焼け野原。復興には金がかかりすぎる。自分の領土だ植民地だって、白豚共を喜ばせればいいんだ」
「いずれはいただく。そういうことか？」
「連中は、焼け野原に生活に必要な拠点を、それこそ大枚叩いて作ってくれるよ。でも、そこを利用するのは誰？連中だけ？それじゃあ、産業も生活も成り立たない。労働力は、僕達、中華帝国が提供することになる。数からして、いずれ必ずや、ベトナムは」
グラスに満たされた酒を飲み干そうとして、載武は言い間違えに気付いた。
「違う。ベトナムだけじゃない。東南アジアは僕達のものになる」
「国家百年の計……か？」
「そういうこと」載武は不敵に笑った。
「一億や二億が死んでも、まだ十億の上がいる。心配はない」

「それが出来るのが、わが帝国の強みだな」
「そう」
皇帝に愛想良く微笑んだ載武は、今度こそグラスを飲み干した。

一億二億死んでも、残り十億がいる。
中国の人海戦術的な手段を語る時、この世界ではよく引き合いに出される言葉だ。
これは現実か？
現実だ。
その現実を前に、暗澹たる気持ちにさせられるのは、中華帝国民生部だ。日本の厚生労働省に相当するこの役所の、今、最大の仕事は、戦死者の死亡手続きと、戦傷者の医療、補償業務だ。
戦時中を理由に、高齢者問題担当部門は予算を削られて連日大変な思いをしている。
おかげで、この部門に配属されて3年目の金は、日付が変わるまで帰宅できない日々が続いていた。
「おかえりなさい」
「ただいま」
玄関で出迎えてくれた妻に鞄を手渡すと、やっと重荷から解放された気がした。
「あの子は寝たかい？」
「もう夜中ですよ？お食事は？」
「役場でとってきた。鞄の中に特別配給が入ってる」
「ありがとうございます。最近は食料の価格が上がって困ってるの」
鞄を嬉しそうに抱きかかえた妻は言った。
「あの子の顔を見てあげて？今日、やっと少し歩けたのよ？」
「……そうか」
あてがわれた家族持ち用の官舎。金は、その中の一室を子供部屋

にしている。
　小さなベビーベッドの中で無垢な寝顔を見せているのは、金夫婦の宝物だ。
「……ただいま」
　小声でそっと語りかける。今にも起き出して泣き出さないか心配だが、それでも声をかけずにはいられない。顔を見るだけで、一日の疲れがどこかにいってしまう。
　それが、親だ。
「……」
　だが――
「あなた？」
　夫の顔が暗いのに、妻はすぐに気付いた。
「どうなさったのです？」
「いや……」金は軽く頭を左右に振った。
「今日、会議でね？今後の人口の見込みを聞いたんだ」
「政府発表、私もテレビで見ましたよ？労働力人口は十分にあるって」
「それは今の話だよ」金は、そっと子供に触れようとして手を止めた。
「この子が成人する頃には、僕達を含めて高齢者は４人に１人。２０５０年まで大丈夫だなんて言われていたけど、あと２０年足らずでそんな時代が来る」
「まさか！」
「本当さ」金は言った。
「ただでさえ、人口抑制政策で出生率が落ち込んでいた所に、この戦争で青年男子が激減している」
「それでも労働力は」
「その後がいないんだよ。戦争で男子が減る。子供を作る機会を減らす。それだけで出生率はかなり減る。特に、成人女子の多くが労働力として、都市部に移れば、農村の人口割合は」

ハッ。となって、金は言葉を止めた。
「――すまない。君に言っても仕方ないことだけど。この戦争で中国の人口政策は崩壊する。戦死者、戦傷者、未亡人……ただでさえ増加が見込まれる高齢者に加えて、そんな人達がこれからたくさん増える一方。
そんな人達に国が莫大なお金を支払うことを考えてご覧？
戦争で労働力人口が減るだけじゃない。
経済そのものが停滞する。海外との貿易はもう全滅に近い。
中国人は世界中で憎まれている。何しろ、戦争しているんだからね。
その中で徒に増えるのは戦費だけじゃない。国民のためのお金とはいえ、福利厚生の国庫に与える負担がどれ程になるか」
「……」
「……気が重いよ」
金は、そういうと、子供の顔をもう一度だけ眺め、そして呟いた。
「こんな負担ばかり……この子が大人になった時、負担ばかりを残した私達の世代を、どう思うんだろう。そう思うとねぇ……」

北米戦線編　第四話

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「東南アジア戦線はほぼ一段落ついた」

月城が涼達の前で世界情勢について説明していた。

「中華帝国軍はベトナム国境線まで後退。ベトナムは欧州軍のものとなった」

「質問」

手を挙げたのは寧々だ。

「これまで頑強に抵抗していた中華帝国軍が、どうして短期間のうちに崩壊したのですか？」

「良い質問だ」

月城は少し嬉しそうに頷いた。その笑顔を見て、涼はなんだか月城は保母さんに向いているんじゃないかなと、そんなことを思った。

「実際の所、理由は二つある。一つは記録的長雨と嵐という天災による防衛線の崩壊、それと、前線兵士の志気の問題だ」

「しかし」

寧々は首を傾げた。

「中華帝国軍兵士は幼少の頃から、皇帝に対する忠誠を叩き込まれ、その兵士となることを栄誉としていると聞き及んでいます。事実、これまでの戦闘における中華帝国軍兵士は勇猛果敢をもって連合軍より恐れられ、或いは戦闘報告において惜しみない賛辞を受けています」

「中華帝国軍のスポークスマンにでも転職するか？鬼龍院中尉」

「小敵たりとも侮らす大敵たりとも懼れす己か武職を尽さむこそ誠の大勇にはあれ」

寧々は即答し、徒っぽく小首を傾げて見せた。

その仕草が、

――違いますか？

そう、訊ねていた。

「……買いかぶっているところはあると思うがな。それにしても」

言葉の出所が出所なので、月城もそれ以上は大きく出なかった。

「その利発さは、あのバカの嫁にはもったいないぞ」

「……っ」

不意に、寧々の顔が赤くなった。

「違いますよ隊長」

からかうように、美晴が言った。

「そういうバカな夫をマトモにするのが、妻のツトメですよ。ツ・ト・メ」

その視線は、何故か横にいる山崎に向けられていた。

山崎が照れ笑いを浮かべた。

「……鬼龍院中尉は適任だと？」

「これ以上の適任者を、都築君が捕まえられると思いますか？」

「……いず……いや、アイツは無理か」

「お言葉ですが！」

涼が顔を真っ赤にして立ち上がった。

「泉大尉は私のモノです！」

「……そ、そうか」

「大尉？それは、気迫に負けたのですか？発言に引いたんですか？」

という宗像の問いかけに、

「それは……」

少し考えて、月城は言った。

「泉大尉の性癖だな。きっと」

月城は黒板に置かれていたチョークを握るなり、抜く手も見せずに投げつけた。

フギャァッ!?

尻尾を踏まれた猫のような悲鳴がブリーフィングルームに響き渡り、パイプ椅子が豪快にひっくり返った。

「――お目覚めか？鵜来」

「は、はいっ！」

額をチョークの粉で真っ白にした有珠（ありす）が立ち上がって直立不動の姿勢になった。

「おはようございますっ！」

「……まだ寝ているのか？」

「な、なんでそんなこと言うんですか！？」

「後ろだバカ者っ！」

「――へ？」

有珠（ありす）は、その声で初めて自分が月城に背を向けていることに気付いた。

「椅子に座れ。2時間後には再訓練だ。今晩は、私から一本とるまでは寝かさないぞ」

「ううっ……」

「あの……大尉？」

「平野少尉、どうした？」

「一本抜くまで寝かさないって……そういう意味ですか？」

「どういう意味だ。っていうか、一本抜くって何だ」

「さすが内親王護衛隊総隊長（レイナガーズ）とお見それしただけで」

「なんだかひっかかる物言いだが――話を戻す。中華帝国軍の件だ」

自分を見る視線が少し変わった違和感を感じつつ、月城は続けた。

「先程、鬼龍院中尉が言った通り、連中のプライドは、国軍としてのそれではない。

皇帝の兵としてのそれだ。
現状、皇帝を名乗っているのは載賢だが、それを額面通りに受け止める者は内外にほとんどいない」
再び、チョークが飛んだ。
「終いにゃ、空気椅子させるぞ!?わかってるのか!鵜来少尉!」
「……あ、あのぉ。月城大尉」山崎が言った。
「鵜来少尉、目を回してますけど」

結局、山崎が鵜来少尉を医務室に運ぶのを見送ってから、月城は続けた。

「ったく。
そんな連中が載賢とかいう、皇帝の息子のために死ねと言われても、志気があがるはずがない。
広州軍区・南京軍区はクーデターより先に戦力のほとんどが、西姫擁する成都軍区に向かって移動している。
理由はわかるか?宗像中尉」
「西姫を慕って、兵士が動いた?」
「その通りだ。西姫こそが次期皇帝だと国民ですら知っている。
つまり、皇帝を名乗る、皇帝の息子達に正統性がないことを。
東南アジア戦線崩壊の志気的な原因はここに求めることが出来る。
東南アジアに展開している部隊は、紫禁城にいる載賢の部隊ではない。南京軍区あたりの部隊だ。皇帝としての正統性も証明できない、ただ、皇帝の息子だけが皇位の根拠みたいなヤツに戦えと言われては、北米で戦う連中並みの頑強さを求めること自体が無理だ」
「お話が少し矛盾しているようにも思えるのですが」
芳(かおる)が訊ねた。
「それじゃ、北米で中華帝国軍があそこまで頑強に戦うのは、なんのためですか?載賢だって、皇帝って名乗っても正統性がないんでしょう?」

「中華帝国軍にとって、アメリカ軍は敵だ。徹底して憎むことを叩き込まれた挙げ句、その敵の本拠を叩く戦(いくさ)に赴く」
月城は、楽しげに芳(かおる)を見た。
「平野少尉？貴様ならどう思う？」
「――皇帝云々関係なし。本能的な行為に近いというわけですか」
「簡単に言えばそういうことだ。誰に命じられる必要はない。武器さえ与えられれば勝手にやる。そういう仕事だ」
「……それで我々は」
宗像は言った。
「正統性が疑わしいにしても、それなりの志気は維持している連中相手にするために、北米へ？」
「その通り。ようやく許可が下りた。明日夜明けと同時に、“鈴谷(すずや)”は機関重連駆動に入る。速度が６０ノットまで出るからな。現地到着予定はかなり早まるぞ」
「ち、ちょっと待ってください」
「ん？」
「何ですか、その重連駆動って」
「“鈴谷(すずや)”が、アフリカで失われた“伊吹”の機関をそのまま搭載しているのは知っているだろう」
「で、ですけど、あれって対空砲や主砲の補助動力源に回されているんじゃ……」
「使わなければいいだけだ。出力を機関搭載のＦＧＦジェネレーターに回す。普通なら理論的に無理に等しいマネも、これなら出来る」
「何ですか？それ」

●夜　“鈴谷(すずや)”艦内通路
「まぁ、黙って見ていろったって……」
自動販売機のある区画まで移動中、涼がぼやいた。
「見てるしかないじゃない」
「まぁまぁ」

芳が笑って言った。
「あの平野艦長のフネだもん。いろいろあるよ」
「……時速１０８キロ」
うーん。
涼は自販機の前に立つと考え込んでしまった。
「速いのか遅いのか」
「それにしてもさぁ」
芳はウププッと不気味な笑い声をあげた。
「月城大尉って、内親王護衛隊の中では珍しくノーマルって聞いていたけど、やっぱり例外じゃなかったんだねぇ」
「鵜来少尉は食べられたか」
「そう！一本抜かせるまで寝かさないって、そういう意味ですよね！？宗像中尉！」
ぶっ！？
自販機の周りは兵員達の休憩スペースになっており、夜勤シフトを前にした整備兵達があちこちでたむろしている。
芳の突然の言葉に、何人もの整備兵が飲み物を噴き出していた。
「こら、芳っ！」
「だってぇ！」
芳は普段、声が低いのに興奮するとやたらよく通る高い声になる。
艦内通路のかなり先まで、確実に芳の声は響いているに違いない。
「あんなマジメそうな人が、何も知らないって顔の鵜来少尉相手に毎晩でしょ！？そうじゃなかったら、鵜来少尉が、あんなくたばりそうになるはずないじゃん！」
「あんた、終いにゃ殴るわよ！？グーで！」
「やっぱさぁ！」
興奮したらしい芳がさらに大声で言った。
そこで初めて気付いた。
芳が手にしてるのは、ジュースではない。
缶チューハイだ。

“鈴谷（すずや）”をはじめ、近衛軍の飛行艦は週一回、決められた場所で飲酒が許可される。
部隊長級をのぞく乗組員の飲酒許可場所は、酒が手に入る自販機周辺と決まっている。
涼は腕時計の日付を見ると、飲酒許可の日だった。
普段は売り切れランプのついている酒類が全て販売可になっている。
新しいもの、珍しいもの大好きな芳だ。好奇心につられて飲んだんだろう。
「あ、あんた、あれほど買う時は注意書き見ろって！」
「あのロケットおっぱいは、そういう努力の賜かねぇ！？」
「あんた、酔っぱらってるでしょ！？知らないからね！？」
「アフロダイAみたいに、おっぱいミサイルバーンっていってさ！止められたら「そんなに好きならもう一つあげるわよ！！」とかいいながらもう一発発射！月城大尉、いい必殺技もってるなぁ！」
「ちょっ！？」
芳（かおる）が完全に酔っぱらっているのはわかる。
宗像達に助けを求めようとしたが、全員が気まずそうな顔をして、こちらから離れようとしている。
ここで声をかけても、“私達他人です”宣言されて終わりだとはっきりわかる。
しかも、ツカツカと軍靴の音も高らかに小走りにこちらへ近づきつつあるのは――
「ねぇ！？聞いてるの？涼ってば！」
「わ、私、他人だから」と、涼はそっぽをむいた。
「冷たいなぁ！」
芳（かおる）は缶チューハイを飲み干すと涼に絡んできた。
「ねぇ？あのロケットおっぱいは、絶対、揉んで揉んで揉みまくった結果だよね！オトコかなぁって思ってたけど、あんなカタブツがオトコ狂いなわけないし、まさかと思っていたけどやっぱり女とは

ねぇ！びっくりしたよね？ね！涼ってば！」
「ひ、人違いです」
「なんだよぉ！有珠(ありす)ちゃんが、あのロケットおっぱいに調教されてたのがそんなに悔しいのぉ！？」
「だからっ！」

ガンッ！

――遂に来たっ！
涼は、その鈍い音に思わず首をすくめてしまった。
次には罵声と悲鳴が上がるだろう。
立ち会いたい事態じゃない。
だが――

「きゃっ！？」
何故か、妙に色っぽい声があがった。
「へっ？」
驚いて後ろを振り向いて、
「――なっ！？」
涼は目が点になった。
「な、ななななっ！？」
見ると、芳(かおる)が月城の胸をわしづかみにしているところだった。
「離せ少尉っ！」
赤面した月城が、胸を押さえながら後ずさった。
「ちょっ！？」
カンッ
「？」
涼は足下に当たったのが潰れた缶チューハイの空き缶だと気付いた。
「琉球武術、子供の頃からやってた私相手に、格闘戦は無理ですよ

お大尉ぃ」
ヒック。
芳はしゃっくりすると、手をワキワキと、妙に淫靡に動かしながら言った。
「それにしても大尉ぃ。やっぱり大きいですねぇ。おっぱい！」
周りでは酒盛りしていたはずの整備兵達が凍り付いた様子でこちらをずっと見ていた。
「黙れっ！」
その整備兵の視線に我慢できなかったんだろう。
顔を真っ赤にした月城が怒鳴る。
「貴様、同性でもセクハラは成立するんだぞ！？」
「ホントのことですよぉ。いいなぁ……」
「このっ！」
月城の平手が飛ぶ瞬間。
涼にはどうなったかわからない。月城の平手が、芳の顔を捉えるより先に、芳の顔が月城の胸の中に埋もれていた。
つまり、抱きついたのだ。
「うわぁ……ふわっふわ。涼のとはやっぱり違うなぁ」
顔を胸に埋めたままほおずりする芳。その感触が我慢できないのか、
「や、やめろと言ったろう！？」
何とか芳を引きはがそうとするが、芳はまるで剥がれようとしない。
「どうやったらこんなに大きくなるんですかぁ！？教えてくださぁい！」
「知るか！」
月城は怒鳴った。
怒鳴るところまでは納得できる。
納得できないのは、その発言だ。
「私が、どれだけ寄せたり上げたり、苦労していると思ってるんだ

！パッドまで入れて！」
「それ、上げ底なんですか！？っていうか、大尉！？もしかして酔っぱらっているんですか！？」
「私はまだシラフだ！」
「鵜来少尉のワカメ酒とかぁ」
「あれは飲む方だ！って何言わせるかぁっ！」
「あの……大尉！」
あれ、上げ底だったのか。
パット入りだったか。
あげてるんだ。
寄せてるらしいぜ。
整備兵達のつぶやきが耳に入り、さすがにいたたまれなくなった涼は、後ろから羽交い締めにして離れない芳（かおる）を引きはがそうとした。
しかし、それより速く動いた者がいた。
芳騎（かおる）のＭＣ（メサイア・コントローラー）、川崎美由紀少尉だ。
どこにいたのか。不意に涼の横に立つと、片手で涼を制すると、抜く手も見せずに、芳（かおる）めがけて何かを突き出した。

ＺＵＮ！

そんな音がして、芳の体が数センチ宙に浮いた。
すると――
ズルズルズル……
芳（かおる）は、何故か力無く床に崩れ落ちていった。
「ひ、平野少尉？」
唖然とする月城の前で、少ししゃがんだ美由紀が、芳（かおる）の体の一部――丁度お尻――に突き刺さっていた何かを抜いた。
警棒だと、すぐにわかった。
「あまりおいたが過ぎると、痛い目見るって言っておきましたわね？平野少尉？」

フフッ。
その冷たい笑みは、周囲の温度を確実に低くした。
「――って、聞いてます？平野少尉」

●翌日　“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

夜明けと同時に、“鈴谷（すずや）”は前代未聞の機関重連駆動を開始した。
何が起きるかわからないから、領海内での実施禁止を言い渡されていたため、太平洋のかなりの海域まで到達した時点での実施となった。
通常、巡航２０ノット程度の“鈴谷（すずや）”が二倍の５０ノットを遙にこえ、飛行艦の理論値６０ノットまで超えたと聞かされた。
飛行機の巡航速度が５００ノット近くだから、それに比べればかなり遅いとはいえ、この船旅がかなり短くなりそうだと、皆が実感するのには十分すぎた。
そんな中、メサイア部隊の自主定例ミーティングが始まった。
何故か、月城の姿がなかった。
「自主訓練？」
「そうだ」
医務室から出てきた有珠（ありす）に、宗像は言った。
「月城大尉は、昨晩、ちょっとした騒ぎがあって本日から少しの間、休むとのことだ。今朝からは自主訓練に入る。プログラムはこれから決める」
「はぁ」
何が何だかわからない有珠（ありす）は、救いを求めるように周りを見回した。
何故か、皆が気の毒というか、触れたくない。という顔をしていた。
「いろいろ、整備兵が大尉のことを好き放題言うだろうが、無視し

ろ。お前も女で、しかもM系ならわかるだろうから」
「わ、私、そんなんじゃないんですけど」
「そうか？大尉のペットとでも呼ぶか？」
「違いますっ！」
「それから平野は」
「聞いて下さいって1」
「未成年飲酒及び上官侮辱、同性に対するセクハラ……とにかく、簡易軍事裁判の判決が出るまでの謹慎、それと二日酔いとケガの治療といろいろあるため、しばらく任務に出てこれない」
「あの子、ケガ、したんですか？」
「ああ」
それこそ気の毒。と言わんばかりに、宗像は遠い目をした。
「――――痔、だそうだ」
「はぁ」

北米戦線編　第五話

●北米大陸　アメリカ合衆国　ワシントンD．C

正義の為に戦い、
国威を示す尖兵として、
陸軍は勇敢に前進する。
成し遂げた全てを誇りとし、
勝利するまで戦い続ける。
そして陸軍は前進する。

近くのハイスクールのブラスバンドが演奏するのは　アメリカ陸軍の公式軍歌である『陸軍は進んでいく』だ。
演奏に送られ、隊列を組んで進むのは、地元ワシントンD．Cで集められた志願兵達。
男女の性別を問わず、軍服に身を包んだ若者達が市民に見送られ、ぎこちない笑みを浮かべながら胸を張って進んでいく。

祖国の危機を救え！
祖国には君たちが必要だ！

そう書かれたプラカードを掲げる人々が歓声をあげている。
家族が出征するのだろう。幼い娘を抱いた母親らしい女性が、何も分からない子供の手を握り、“こうやるのよ”と言わんばかりに振っている。その足下では、国旗を持った子供が一生懸命に旗を振っている。
街の中心ストリートは今や黒山の人だかり。ティッカーテープが宙を舞い、まるで戦勝パレードのような騒ぎだ。
「……バカだねぇ」

その様子を、ストリートの物陰から見ていたのは、ボロボロの服に身を包んだ黒人の老婆。見るからにホームレスとわかる。

「何が？」

パレードを一目見ようとストリートに向かったものの、人混みに邪魔された中学生のジョニーは、老婆のつぶやきを聞いてしまった。

振り返った先にいたのが汚らしいホームレスだと知ったが、何故かジョニーは老婆が気になった。

「……あいつらをここまでのさばらせたのは、自分達だろ？その後始末を、偉い連中は誰一人とろうとしない。あんな若い連中にばかりとらせようとする」

中学生に過ぎないジョニーには、老婆の言いたいことがわからない。

ただ、老婆は片足が義足だということは、すぐにわかった。

「難しいことはわかんないけどさ」

ジョニーはせいぜい大人びた仕草で、胸を張って見せた。

「せっかく、みんなが祖国の危機を救いに行くんだ。格好良く、戦争で勝利するんだぜ？勲章ぶら下げて帰ってくるんだ。そんなこと言ってると、敵性国民ってことになるぜ？」

「ははっ」

老婆は煤に汚れた顔をくしゃくしゃにして笑った。

「私をかい？」

「そうさ」

ジョニーは頷いた。

「ホームレスだって、誰も容赦しないぜ？」

「……ぼうや」

老婆は、ポケットを漁って、掌に何かを載せた。

「これが何だかわかるかい？」

ジョニーが見たそれは、星の形と、ハート形をした、共にくすんだ金色をした二つのメダルだった。

「何？これ」

「シルバースターとパープルハート章だよ」

シルバースターは、戦闘において勇敢な行為をした者に授与される勲章。

そしてパープルハートは戦傷軍人に与えられる勲章。

共に授与されることが大変な名誉であることは、子供であるジョニーですら知っている。

「どこで拾ったの！？」

「馬鹿な」

老婆はゴソゴソとポケットにそれを戻した。

「こりゃ、私んだ」

「あんたの？」

「そうさ」

老婆は頷いた。

「若気の至りさ。祖国の正義ってのを信じて、中東で地雷にやられたんだ。同期の仲間はみんな死んじまった。炎に焼かれ、狙撃に頭を砕かれ、苦しみながらみんな死んでいった」

「……」

戦争なんてマンガか、都合よく作られた戦争映画でしか知らないジョニーは、目の前にいるのが戦傷軍人のなれの果てだと、初めて知った。

「中東であんなもめ事を起こしたのは、石油欲しさのメジャーのせいだ。

政府はその落とし前を私達に押しつけ、メジャー連中にはお咎めなしだ。

……いいかい、坊や？

私達のいた戦場じゃ、あの辺で旗振ってる、あんな子供が懐に火のついたダイナマイト背負って私達に向かってきたもんだ。

私達ゃね？そんな子供ですら撃ったよ。

――――生き残るためにね」

「うそだ！」

ジョニーは叫んだが、その声はスピーカーから流れるブラスバンドの音と、街路を埋め尽くす市民の歓声とにかき消された。

「チンク共だって、あいつらがどんな卑劣な方法とって安く人をコキ使っているか知った上で、人件費が安いって建前振り回して、私達から仕事を奪った挙げ句、奴らから搾取しようって、そんな都合のいい発想で、奴らにいい顔した挙げ句が、大金と技術を奪われた。資源も奪われた！何もかも、全てが――――全てが奪われた！

そして、奪われたって発想すら、偉い連中にはない！

そこのストリートで英雄気取りしてるバカ共が何人死のうと、資本家の偉いさん達ゃ金勘定の方が大切だ。

覚えておきな？

アカデミーのセンセイ達ですら教えてくれない真実ってのがある。

今、ここにチンク共が攻め込めるほどの力を与えたのは、この国の、そんなお偉いさん達だってことさ！

本当の敵はチンクなんかじゃない！

この国の偉い金持ち連中だってことさ！

それがのうのうと生き延びて、若い連中がまた苦しめられる！

こんなバカな話があるかい？

国家は国民を護ってくれるなんてウソだよ。

よく見てな坊や。

この国はもう終わりだよ。
もう、この国にゃ、何もない。
あいつらに勝るものって、何がある？
今、この国にあってあいつらに勝るものがあったら言ってご覧？
偉いさんがバカだって事と、借金以外に私ゃ思いつかないけどね」

「この薄汚い敵性国民め！」
ジョニーは再び怒鳴った。
反戦を唱える者は敵性国民という。テレビでそう言っていた。
ジョニーは、薄汚い老婆をそう罵った。
「――――坊や」
老婆は、まるで孫をなだめるかのような、穏やかな目をしながら言った。
「私もね？これでも精一杯のおめかししてきたのさ。私が持っている服の中じゃ、こいつは一番上等な服でね」
パタパタと、老婆はジョニーの目から見ればボロ布にしか見えないスカートについた塵を払った。
「私が敵性国民だというなら、言っても良いさ。だがね？私を、私の身体を」
老婆はそう言ってスカートをめくって見せた。
ジョニーは、悲鳴が出てこなかった。
スカートの中。
そこにあるはずの、老婆の足ではなく、靴がついた二本のさび付いた鉄の棒だけだった。
「地雷に吹っ飛ばされて、子宮まで失ったよ。
挙げ句が退役を強要されて、路頭に放り出された。
人の身体がこんなメダル一個だなんて笑うしかないさね。
いいかい坊や。
事故なら数万ドルはする人の身体が、戦争なら数ドルのメダルに化けちまう。

未来を奪われた退役傷病兵が塗炭の苦しみを味わい続けても、政府は何もしてくれない。
資本家の顔色ばかりうかがって、海の向こうじゃ敵ばかり作り続ける。
英雄だなんて祭り上げた傷病兵のことなんておかまいなしさ。
連中が欲しいのは、金儲け出来る新しい兵隊だけ。
そして、戦争が始まりゃ、新しい兵隊が死んだ方がマシな、こんな身体になって帰ってくる」

老婆は器用そうに義足をギシギシと鳴らしてみせた。

人間の身体が、こんな風になること。
それが信じられないジョニーは、硬直したままで老婆の話を聞くしかない。

「ぼうや？これがね？名誉な勲章二個ももらった英雄の末路さ」
その時、初めて老婆はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。
「あんたも兵隊になりゃ、いずれはこんな身体になるんだよ？」
そう言って、ジョニーに突き出されたのはキャンベルの缶詰の空き缶。
缶のペイントはすでに色あせ、何のスープが入っていたのかわからない。
そして、その空き缶を掴んでいるはずの手は、金属製のフックだった。

「哀れな退役軍人にお恵みを――――」

老婆にそう言われ、ジョニーは一目散にその場から逃げ出した。
恐かった。
それは、老婆の哀れな姿を恐れたからではない。

ジョニーが恐れたのは、兵隊になったら、自分もあんな身体になるんだという、未来への恐怖だった。

「補充兵にもならん」

ジョニーが駆けだしていったブロックの一角にそびえる高層ビル。その最上階の一室で、軍服姿の男達が顔をしかめて座っていた。

窓の外の騒ぎも、この階にはほとんど聞こえてこない。

「状況が見えているのか？８週間の訓練なんてやってるヒマがあると思うのか？」

陸軍の軍服に身を包んだ男が、ソファーから立ち上がると、窓際からパレードをしているストリートをのぞき込み、すぐに窓から顔を遠ざけた。

高い所はどうにも好きになれない。

だから自分は陸軍に入ったんだ。

彼はそう思った。

「仕方ないだろう？」

ソファーにふんぞり返り、足を組む将校が言った。

「ライフルマンは一人でも欲しいんだ。えり好みしている余裕なんてない。俺達は、国家と国民に、この戦いに勝利する義務がある」

「義務――――か」

窓際に立った将校、アメリカ北方陸軍参謀長のオーウェル少将はアメリカ人らしいオーバーアクションで首を左右に振ると、肩をすくめた。

「チンク連中に資本を注入しすぎた挙げ句が、ここまでに育て上げた資本家の偉いさん達にゃ、どういう責任があるんだ？マーカス」

「スポンサーにケンカを売るな」
マーカス海軍大佐は顔をしかめ、オーウェルを睨み付けるような顔をした。
「第一、経済問題は俺達には関係のないことだ」
「経済と宗教問題以外でこの国が戦争に荷担するはめになった事態を、俺は３０年の在任期間中に知らんぞ」
「義務を果たすことだけ考えろ。オーウェル。同じジュニア・ハイ出のよしみで警告しているんだ」
「俺は貴様程の優等生じゃなかったよ」
「なら聞こう。お前の果たすべき義務とは何だ？」
「哲学の問題ならウェストポイントにでも行ってくれ。講堂の電球の数さえ知ってる神様みたいな脳みそした連中が明確に答えてくれるだろう。
あいにくだが、俺はそんなくだらない質問にゃ答えたくない」
「戦争に勝つこと。違うか？」
「名言だ。来年あたりに、どこかの出版社から出す名言集に掲載してもらうといい。
あいにくだが、そいつはな、マーカス。
義務以前の、生き物が空気を呼吸をするのと同じレベルの問題だ」
「そこまでわかっているなら」
「ただ、俺は納得していないだけだ」

「何に？」

「この戦いは、元を正せばあのチンク共をのさばらせた政府と経済界の失態が原因だ。

お前はそれを考えるなというが、その態度が次から次へとこの国に敵を作る元凶だ。

俺はその態度が気に入らん。

敵が生まれたら次から次へと殺せというだけじゃ、死んでいった連中の意味すらわからない」

「戦うこと。勝利することが軍人の義務だ」

「違う」

オーウェルは首を左右に強く振った。

「違うんだ。マーカス。お前は一つ、忘れている」

「忘れている？」

マーカスは、その細い眉をひそめた。

「何を？」

「死んでいった連中に果たすべき義務だ」

「勝利を」

マーカスは言った。

「死に値する栄光、勝利を勝ち取ること以外に、軍人が戦死者の英霊に果たすべき義務は他に何がある」

「トミー、ウィル、アーサー……ディブにラナ」

しばしの沈黙の後、オーウェルは言った。
「……覚えているか？」

「……いい奴らだった」
昔に比べて張り出した腹の上で、マーカスは手を組んだ。
「トミーとアーサーは、俺と一緒にバスケット。ディブにラナはお前と一緒にフットボール。ウィルは」

「あいつはホットドッグ食いと女の子に熱中していた」

「……ああ」
かつての友人達の顔を思い出し、マーカスは噴き出したように小さく笑ったが、すぐに深いため息をついた。
「今や、オリバーストーンでしか会うことの出来ない連中だがな」

「……貴様に聞こう」
オーウェルはマーカスに訊ねた。
「この事態が起きる前。あのチンク共が世界中でのさばりはじめた頃から、聞こうと思っていたことだ」

「……なんだ？」

「今の状況を、あいつらに何て説明する？」

「……」
マーカスの目が驚いたように見開かれた。

「あいつらが死んでいったベトナム戦争。俺達が地獄を見たあの戦いは、ベトコンと俺達の戦いじゃない。ベトコンの陰に隠れたチンク共と俺達の戦いだった。

よもや、あの地面から沸いてきたようなチンクの集団突撃を忘れたわけではないだろうな」

ベトナムはかねてよりわが中華帝国の領土である。

故に、中華帝国はベトナムにおける米国軍の横暴を許すことは出来ない。

ベトナムが負けたら次は自分達だという恐怖故に、中華帝国軍は建前上、志願兵の形をとってベトナムへ大軍を送り込み、単なる反政府ゲリラの掃討作戦に過ぎなかった“ベトナム紛争”を“ベトナム戦争”へとエスカレートさせた。

東南アジアでの友好国を作りたかったアメリカは、中華帝国によって組織され、援助を受けていた反政府民族ゲリラに手を焼いていたベトナムフエ王朝の要請に基づき、軍事顧問団を派遣。

アメリカの指導と支援の元、生まれ変わったベトナム正規軍は、瞬く間に反政府ゲリラの掃討を完了させようとしていた。

ベトナムは平和になるはずだった。

少なくとも、欧米の侵略を受けたことのないベトナム王朝は、メコンデルタの雄大にして美しい景色同様に、豊かな国として、アメリカの支援の元、発展するはずだった。

それを踏みにじったのは中華帝国だ。

あのメコンデルタを焼き尽くし、反応弾まで使用させたのは中華帝国軍であり、彼等にそそのかされ、尻馬に乗ったロシアだ。

ベトナムでパイロットとして戦ったマーカスが知らないはずはない。

ベトナムは中国人との戦いだった。

目の前の戦友は、そう言っているのだ。

「犠牲になったのは何のためだった？アーサー達に聞かれたら、俺は何て答えればいい？
北京を征服したわけじゃない。
いいか？
俺達は、奴らと和平すら結んでいない。
本質的には敵なんだぞ？
それが今やどうだ？
今や敵の作ったジーンズを履いて、連中の作ったテレビを見て、連中の作ったベッドで、連中の作った布団にくるまって眠る。
労働は奪われ、経済はあいつらに握られ、俺達ゃあいつらのお下がりにありつくのが精一杯だ。
殺された敵に依存して生きるとは、敵のお情けでしか生きられないとは、一体、何の冗談だ！？
今、連中が手にしている兵器は何だ？
あれはほとんどが俺達の技術だぞ？
それで俺達が殺されるなんて、どういう冗談だ！？
俺は、死んでいった連中に、国の今の状況を、どう説明したらいいんだ！」

「死んでいった意味」
マーカスは目をつむると首を左右に振った。
まるで、その言葉を頭から追い出そうとしているように見えた。
「そんなこと一々考えていたら、生きられないぞ？」

「こんな状況で、俺達ゃ生きていると言えるのか！？」
顔を真っ赤にしたオーウェルが、マーカスの胸ぐらを掴み上げ、乱暴にソファーから立たせた。
「豊かな国アメリカ！
世界に冠たる国アメリカ！

我が祖国アメリカ！
その国を護るために死んでいった連中に、お前達の死後、国民はこんな屈辱的な生活をしているなんて、お前は言うことが出来るのか！？」

「俺達は軍人だ！」
マーカスはオーウェルを突き飛ばし、その手を払いのけた。
「相手は合衆国が決める！個人の感情で戦争していいはずがないだろう！
現実を見ろスコット！軍人が問題として良いのは、生きている人間だけだ！死者に囚われるな！」
力強くオーウェルの肩を掴んだマーカスは、ジッとオーウェルの目を見ながら言った。
「お前が、何を言いたいのかはわかる。俺だっていずれは神の元に召され、あの連中と顔を合わせることになる。その時、俺は奴らに罵られる覚悟は出来ている。この裏切り者と殴られる覚悟も、地獄にさえ堕ちる覚悟さえ出来ている」

「……カイン」

「だがな？」
マーカスはオーウェルの肩を掴む手に力を込めた。
「頼む。せめて、そんな俺でも、軍人としての義務だけは果たし終えたと、そう言わせてくれ」

「……俺だって、チンクの作ったものなんて御免被る。世界の工場、世界のリーダー、世界の盟主。それは、あんな黄色いサルに名乗らせていい代物じゃない」
マーカスは、はっりとした決意を持った者の目で、オーウェルを見た。

「それは、俺達アメリカ人のものだ」

「……」

「かつて、俺がアナポリスで学んだ教官に叩き込まれたことがある」

「何だ？」

「戦争で負けることの何が悪いか？」

「……教官は、何と？」

「戦争に負けることそのものは悪くない」

「敗北主義者か？」

「黙って聞け。

教官は言っていた。

敗北が悪いことは一つ。

祖国の勝利を信じ、命と財産を投げ出した犠牲の意味を失わせるからだ。

国家は犠牲者とその遺族の補償をし、かつ、その犠牲が無意味でなかったことを証明する義務を負う。

その義務を果たすためには勝利が必要だ。

敗北の中に、その義務を果たす方法はない。

義務を果たすことが勝利だというのは、つまる所、そういう意味だと」

「……いい教官だったんだな」

「今はペルー沖で眠っているよ。“レディ・サラ”の艦長席に座って」

「……そうか」

「お前が、どういう組織に加わっているかは知っている。スコット・オーウェル」

オーウェルの肩から手を離したマーカスは、制服の襟を正した。

「その組織が、中華帝国軍相手に――いや」

マーカスは、じっとオーウェルの顔を見た。

「中華帝国に、何をしようとしているか」

「……ウチも意外とザルな組織だ」

「やりたいことはわかる。だが、俺は黙っている。関わりたくない」

「……そうか」

「俺は俺なりに死んでいった連中に、軍人として誇りを持った人生を捧げたい。少なくとも、大量虐殺の片棒を担いだとは思われたくない」

「……ブッ！」

突然、オーウェルは噴き出した。

アハハハハハハハッッッ！

口元を抑え、その場で腹を抱えて笑い出した。

ジッポライターの異名を取る程の気短で、人前で滅多に笑ったことのない男が、こうも笑い出した姿を見たのは、果たして何年前だったか、マーカスはとっさには思い出せなかった。

「違う！違うんだよ。カイン・マーカス」

「？」

「お前が言ってるのは、中華帝国に対するミサイル攻撃のことだろう？」

「――――そうだ」

「その弾頭は、反応弾だと？」

「通常弾頭に何の意味がある」

「問題はそこだ」

ビシッと、オーウェルはマーカスを指さした。

「我々が極秘にやろうとしているのは、反応弾による大量虐殺じゃない」

「では？」

「作戦は極秘だ。秘密に出来るか？」

「死んでいった連中に誓って」

「よし」

オーウェルは、マーカスの胸ぐらを掴むと、そっと顔を近づけた。

かつて、ブロンクスのビルの物陰で悪事を働く時にやった子供ながらの儀式の姿勢だ。

マーカスは不意に、あの時見た夕日が目に染みるほど赤かったことを思い出した。

「――ということだ」
マーカスが目を見開いたのは無理もないと、自分でも思う。
話し終えたオーウェルは、ガキ大将がイタズラの方法を手下に教えた後、反応を伺うような自信にあふれた、緊張を隠した顔でマーカスの顔をのぞき込んでいる。
「……成る程」
マーカスは、自分が呼ばれた意味がようやくわかった。
「同窓会には面子が少ないと思ったが」
「連中の監視衛星だって太平洋上空に多数確認されている」
「大型輸送機を使えば、グアムまで一日の行程だ。敵からすれば、定期便くらいにしか思えないだろう」
マーカスはハンカチを取り出すと、すっかりはげ上がった額を拭った。
「成る程？潜水艦隊の私を呼びだしたのはそういう意味があるのか？」
「我が薔薇十字（ローゼンクロイツ）は」
どうだ？と言わんばかりのオーウェルは言った。
「空想上の組織じゃない。組織は既に、叩かれすぎたアメリカに怒りすら覚えている」
「……オカルトに狂ったかと思ったよ」
「龍を殺し、その地わ正しく導き、浄化することを決定した。黒いサルをアフリカから吐き出し、黄色いサルを南米から放逐した功績ある我々だ。後に残された大陸は」

「……ＫＫＫにでも入信したのか？」

「白人こそが世界を導く唯一の人種であることに否定の余地はない。白人あってのアメリカ、そして世界だ。お前も白人なら否定するな」

「……具体的な作戦内容が知りたい」

秘密結社に人種差別。

一体、この男はどういう人生を歩んできたんだろう。

マーカスは少しながら気の毒にさえ思った。

「利害が一致する範囲でやらせてもらう」

「心配するな。大統領の承諾は取り付けてある。ただ、作戦決行まで全てが表に出ることは望ましくない」

「無駄死になく、龍を殺す……それが作戦か」

「作戦名“聖ゲオルク”……失敗は許されない」

「もう一度言う」

マーカスは深く息を吸い込んだ。

「作戦内容を教えてくれ」

北米戦線編　第六話

●太平洋上空

「模擬戦、空対空モード」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー）から、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の青木秋子少尉の報告が入ってくる。
「仮想敵、“白雷改”３号騎」

「あちゃぁ……宗像中尉かぁ」
ポリポリ。
有珠（ありす）はいつもの癖で頬を掻いた。
「高度１万で螺旋散開（スパイラルブレイク）。雲の中から出て、一番近い騎と交戦……」
そして、ＳＴＲシステムを掴んだ。
システム全体にパワーが入った振動が心地よく骨に響く。
「宗像中尉らしい発想だよ……ホント」

「“白雷（はくらい）”３号騎をマーク。呼称“ホテル３”へ変更」

「了解――武装はビームライフルじゃなくて」
有珠（ありす）は首を横に振った。
「散弾砲。散布界は最大。足を止める」

「了解」
“白雷改”は太股のウェポンホルダーから散弾砲を引き抜くと、ポンプを動かした。
シャカッ！
ポンプアクションで巨大なショットシェルが薬室に叩き込まれる音が聞こえた。
「くはぁ」
有珠（ありす）は心底嬉しいと言わんばかりに顔一杯に笑みを浮かべた。

「この音♪最っ高♪」

「“ホテル３”機動開始。距離７６００」

黒い、ポツンとした点に近い存在だった宗像騎が信じがたい程の速度で接近してくる。

瞬き一つで点どころじゃないサイズになった。

まるで巨大化しているような錯覚さええ覚えてしまう。

「速っ！？」

空中でトンボをきった所を宗像騎が突き抜けていった。

騎体を空中回転させて宗像騎の背後を狙うが、その時にはすでに宗像騎は急上昇をかけ、距離を稼いでいた。

しかも、急上昇をかける前に体勢を整え、こちらにシールドを向けている。

「さっすが！」

驚嘆する有珠（ありす）の目の前を、ビームライフルの光がかすめた。

「あの体勢で撃てるの！？」

「空中で止まるな！」

通信モニター上に宗像が映し出されたと思った途端、レシーバーに罵声が入った。

「死にたいのか！」

「――――くっ！」

罵声の鋭さに思わず首をすくめた有珠（ありす）は、それでも騎体を突撃させた。

上空の優位を確保した宗像騎が、下から攻める有珠（ありす）に容赦なくビ

ームライフルの雨を振らせる。
有珠（ありす）は、ホンモノなら一発で騎体が吹き飛ぶその光の雨をかいくぐりながら、反撃のチャンスを狙う。
「くそっ！」
有珠（ありす）は武器の選択を間違えたことを呪った。
「こうも距離が開いちゃぁ」
ズンッ！
間近をかすったビームライフルのエネルギーに、騎体が揺れた。
「散弾砲なんて意味ないじゃんっ！」
散布界は広いにしても、散弾でメサイアにどれ程のダメージが与えられるか？
それに今更になって気付いた有珠（ありす）は、武器変更の言い訳を、距離に求めた。
ウェポンホルダーに乱暴に散弾砲を突っ込むと、腰部にマウントしていたビームライフルを掴む。
きっと、散弾砲を抜いたことを宗像中尉や他の騎士達はバカにしているだろう。
そう思うと――――
「私……カッコ」
ピーッ！
背後への脅威接近警報が鳴る。
有珠（ありす）はとっさに騎体をひねると、ビームライフルのトリガーを引いた。
「悪くなんてないっ！」

「ほう？」
有珠（ありす）からの一撃を軽く騎体をひねって回避した宗像は、嬉しそうに顔を緩めた。

「そこそこの腕はしているな」

「回避を含む空戦能力は」
宗像騎のMC（メサイア・コントローラー）、桜庭優が言った。
“白雷改”の性能を差し引いても十分かと」

「……月城大尉の教育の賜かな？」
「多分」
「……なら」
接近する鵜来騎から逃れるように、宗像は積乱雲の中に飛び込んだ。
「ヒヨコを味わわせてもらおうか？」

「雲の中なんて！」
視界が悪いが、レーダーが敵騎の位置を――
「へ？」
レーダーに目をやった有珠（ありす）の目が点になった。
レーダーがノイズにやられて役目を果たしていないのだ。
雲の中にいるはずの宗像騎の位置が、まるで分からない。
「な、何これっ！？」

「敵騎からの妨害電波の影響です」
青木少尉は心底感心したという声で言った。
「さすが桜庭さん……この技術はマネ出来ません」

「くっそ！」
有珠（ありす）は一瞬、積乱雲の中に飛び込むか、それとも敵が積乱雲の中から飛び出してくるのを待つか、躊躇した。
「……あっ」
巨大な雲の壁を前に、ハッ！となった有珠（ありす）は舌打ちした。

「私のバカっ！」
有珠（ありす）はとっさに、索敵モードを熱源探知に切り替えた。
「電波探知はとにかく、熱源探知なんて騙せるシロモノじゃない！」
有珠（ありす）がパネルに目をやったのは、本当に一瞬だった。
その一瞬に――
グワァァッッ！
雲の中から飛び出してきたのは、宗像騎だった。
雲から飛び出してきた宗像騎の構えるビームライフル。
その銃口が、陽光に美しく反射した。
一瞬でも、その光景がカッコイイと思った自分に腹が立つ。
「ちいっ！」

空中で、武器を構えた敵に狙われている。

普通、こういう時は距離を取る。

それが常識のはずだ。

それが、有珠（ありす）は全く逆のことをした。
ブースターを開くと、宗像騎めがけて突撃したのだ。

「こいつ！」
ブースターの咆哮と共に突撃する白い敵。
宗像は顔をしかめながら怒鳴った。
「バカか！？それとも！」

有珠（ありす）騎は、何の躊躇いもなくビームライフルを放棄。斬艦刀を引き抜いた。
「パワーがある分っ！」
斬艦刀が唸りをあげて宗像騎に迫る。

居合いに近い、有珠（ありす）の渾身一滴の一撃。
「これで――――どうだぁっ！」
まともに喰らえば胴体真っ二つは避けられない。
最早、演習とはとてもいえない。
文字通りの実戦のレベルだ。
「えっ！？」
有珠（ありす）がきょとん。としたのも無理はない。
振り切った斬艦刀――――それを操作するＳＴＲシステムに手応えが全くない。
かわされたのだ。
シールドで止められたとか、そんなんじゃない。
ほんの少しだけ高度を変える。
そんな最低限の動きで、宗像騎に、有珠（ありす）自満の一撃は、あっさりと回避された。
それどころか、

ガンッ！
衝撃がコクピットをシェイクする。
宗像騎が、有珠（ありす）騎の胸部パーツを派手に蹴り飛ばしたのだ。

「ぐうっ！？」
騎体ダメージ警報が鳴り響く。
慣性制御システムが殺しきれなかった急激なＧに、意識が遠のく。
有珠（ありす）に出来ることは、それを歯を食いしばって耐えるだけ。
「いっ！」
止まった呼吸。
無理矢理、肺に空気を送り込むと、
「痛ぁぁぁぁっっっ！」
悲鳴は悲鳴だが、本当に痛いのか疑わしい奇妙な声をあげた。
「すっごく痛いけど……それでも」

騎体の体勢を整えると、シールドを構え、宗像騎との距離を再び詰めた。
「面白いから、どうでもいいっ！」

斬艦刀が空中で激突した。
エネルギー同士の反発が、周囲を白く染め上げる。

「捕まえたぁっ！」
有珠（ありす）はＳＴＲシステムに力を込めた。
「どうせ、ハイパワー自慢の新型ぁっ！」
パワーゲージがレッドゾーンに叩き込まれ、騎体がギシギシと悲鳴を上げる。
「こいつって、それしか売り物ないじゃん！？」

このまま力で押して隙を確保する。
その時がチャンスだ！！
有珠（ありす）はそう思っていたが、

スカッ

本当に、そんな感じだった。
フルパワーに近い力押しをかけていた有珠（ありす）に対して、半ば押される一方だった宗像は、体を捌くことであっさりと力押しから逃げた。

「わわわっ！？」

力押しからすっぽ抜けた格好の有珠（ありす）は、前に思い切りバランスを崩した。
斬艦刀を前に突き出す格好で、有珠（ありす）騎は空中をスピンしながら海

めがけて落ちていく。
「私はコマじゃないんだ！コイツはジェットコースターでもないし――――このぉぉおおっっ！」
ブースターの出力にモノを言わせて姿勢制御を確保。スピンから回復させる。
三半規管には自信があったが、慣性制御システムが殺しきれなかったスピンの影響は残る。
「ううっ……目が回るけど」
有珠（ありす）は数回、深呼吸した。
「どうあっても、あの人は！」
ビームライフルの光が再び騎体をかすめる。
「もぉ一度ぉぉっ！」
騎体を捌いてブースター全開。
同時に急制動用ブースター臨界作動準備。
慣性制御システムが殺せないほどのGが有珠（ありす）を襲う。
今回はGに襲われてばかりだ。
どうして対Gシステムも新型にしてくれなかったんだろうと、開発者に恨み言が言いたい。
「くぁぁぁっっっ！」
ビームライフルの攻撃をかいくぐった有珠（ありす）は、宗像騎のリーチギリギリでブースターをカット。
急制動用ブースターを臨界作動させた。
それまで、数百トンの騎体を高速飛行させてくれたエネルギーが居場所を失い、騎体に襲いかかった。
潰されたかと思う程のGが襲う。
歯を食いしばってなければ、舌を噛むどころじゃ済まない。
骨から全身の肉が引きはがされたかと思うほどのGに耐えた有珠（ありす）は、宗像騎の懐に飛び込んだ。
「どんぴしゃぁぁぁっっ！」

歓声と共に、有珠（ありす）は斬艦刀を振り下ろしたが――

「なぁっ！？」

宗像はギリギリで攻撃を回避。距離をとろうと後退する。

それが有珠（ありす）を――キレさせた。

「獲物が逃げんなぁっ！」

ここまで来るのにどれ程苦労したと思ってるんだ！

アンタは私に喰われればいいんだ！

あんたの存在価値は、それだけだ！

本気でそう思いながら、有珠（ありす）は怒りと共に宗像騎を追う。

「動きをトレースして！間合いさえ奪えばこっちのものだ！そうじゃきゃ」

とにかく間合いを詰める。

そうしなければ――

「私の努力がパァじゃん！」

……そういうことになる。

押される事に嫌気がさしたのか。

宗像騎が不意に左に急ターンをかけた。

「そこぉぉぉっ！」

ブースター出力を高め、有珠（ありす）は再び宗像騎に斬り込んだ。

モニターに収まりきらないほど間近に見える宗像騎。

その装甲の些細な汚れまで綺麗に映し出される。

「もう逃がさないっ！」

有珠（ありす）は斬艦刀を空中で軽く放り投げると、逆手に握り直し、一気に突き出した。

「これで――終わりよぉぉっっ！」

●鈴谷ハンガーデッキ
「――以上だ」
坂城の前で正座させられた宗像と有珠（ありす）は、安堵のため息を一緒に吐き、前のめりに倒れた。
「ったく」
坂城はその場を離れながら愚痴った。
「貴重なビームライフル海に捨てやがって。おうシゲ。予備のライフル組み上げておけ」
「了解っす」
「全く……ウチの騎士共ってのは揃いも揃ってバカばかりだ」
「それにしても」
シゲは“白雷改”を誇らしげに見上げながら言った。
「メサイアで空中戦、しかも格闘戦が出来る時代が来るとは……いや、感慨深いですねぇ」
「フン……鵜来の突き技を、騎体を沈めることで回避した宗像さんが逆に突き殺す……今までの理屈が通じねぇ戦いの始まりだが」
ハァッ。
坂城はため息をついた。
「……その分、余計にぶっ壊してくるバカが増えるってわけさ。整備にとっちゃたまんないぜ」

●鈴谷　食堂
「噂には聞いてましたけど」
足をさすりながら有珠（ありす）は言った。
「本当に説教長いんですね。坂城さんって」

「この程度ならまだ早い方だ」
苦々しげな顔をして、宗像がコーヒーに口を付けた。
「だいたい、お前がビームライフルを海に放り投げるようなバカやったことが説教の大半だったろうが」
「後で拾えばいいかなって思ったんですけど……」
「メサイアで海に潜るつもりだったのか？お前」
「実戦だって、一瞬、忘れたんですよぉ」
心底情けない。といわんばかりの有珠はコーラの缶を弄びながら言った。
「私だって始末書書くんですし」
「今日のデザート一つで手打ちだ」
「はぁい」
頷きながら、有珠は投げやりに言った。
「――――済みませんでした」
「それにしても鵜来少尉」
「有珠でいいですよ？」
有珠はイタズラっぽく笑った。
「私、ノーマルですけど」
「ふん……色々、聞いてみたいことはあったんだが、今はいいか？」
「はい？」
「騎体には随分慣れたようだな？」
「そりゃもう！」
有珠は笑って頷いた。
「あれだけ地獄みたんです。慣れるしかないですよ！」
「……前に乗っていたのは？」
「“幻龍”です。最後の任地は米沢の陣です」
「敵地で騎体を失い、数日後かけて敵陣突破。脱出に成功したと聞いたが？」
「……ああ」
ポンッ。有珠は手を叩いた。

「実は私、その記憶がないんです」
「記憶が――ない？」
「ヘンだとか、ウソついているように聞こえるでしょう？
でも、本当なんです。
騎体をどうやって失ったか。
同乗していたMC（メサイア・コントローラー）が誰で、騎体の番号が何番で、どこの部隊に所属していたかまで。
私が覚えているのは、戦争が始まった頃。
つまり、まだ前の所属、旭川の部隊にいた頃の記憶しかないんです。
本当に、ごっそり記憶が抜け落ちていることが分かった途端、私、本当に精神病院に送られたんですから」
「それでも」
「そうです。かなり検査受けたんですけどね？私、余程恐い思いしたらしくて、脳が防衛本能働かせてかなりの記憶を壊したんだろうって」
「無意識に近い、その――記憶喪失？」
「そうです。おかげでスパイ容疑までかけられて前線から離されて後方勤務。苦手な書類仕事がイヤだったから、補給倉庫で働いてました。定時には帰ることが出来ましたから、そこだけは助かりましたけどね」
有珠（ありす）はコーラをあおるように飲んだ。
「プハァ……染みるなぁ！」
本当に旨そうに口についたコーラを手の甲で拭った。
「まるで、ビール飲んだどこぞのオヤジみたいだな」
「むう……これでも私、中尉より年下なんですよ？」
「月城大尉」
「あんなオバさんと一緒にしないで下さい！」
ドンッ！有珠（ありす）は乱暴にコーラの缶をテーブルに置いた。
「あの小姑っていうか、お局様というか、とにかくそんなタイプの

人と私じゃ、赤ん坊と化石位、トシが違うんですから！」
「……」
何故か宗像は気まずそうにそっぽを向いた。
「あんなビックバン以前の生命体と私が一緒の扱いを受けるのは、はっきり不愉快ですっ！」
――こいつ、酔っぱらっているのか？
宗像はそう思ったが、言葉には出さなかった。
宗像がごくごく小声で言葉に出したのは、
後ろ後ろ
そんな言葉だ。
「――志村？」
「いくつだ、お前」
「後ろって？」
有珠（ありす）は、後ろを一度振り向くと、すぐに前に向き直って体を硬直させた。
テーブルにしがみつかんばかりに体を固まらせている。
額を冷や汗が滝のように流れていく。
その姿は蛇に睨まれた、哀れなカエル同然だ。
無論、心中はもっと悲惨だろうが……。
「――お楽しみの所、悪いがな。二人とも」
後々まで、どうやって声を出しているのかと、宗像が不思議がったという位のドスの利いた声。

それは、地獄の底から響いてくる悪魔や死神の声が、愛らしいアニメ声に聞こえること請け合いだ。
低く、黒い水のように心身に染み、そして全ての温度を奪う、まさに恐怖さえ通り越したこんな声なんて、誰だって聞きたくない。
宗像は本気で逃げようかと思ったが、“二人とも”というからには、自分も巻き込まれたことは間違いない。
――次の訓練で、事故に見せかけてコイツを殺そう。
宗像は、卒倒寸前で有珠を睨んだ。
「訓練中の事故でビームライフルを喪失したと聞いたから、仏心で艦長に弁護してやろうと思ったが」
ポンッ
月城大尉は、有珠の肩に手を置いた。
本当に、何気なくおいただけなのに、有珠の体がビクッと動いた。
「老婆心の間違いだったようだな」
有珠の肩のあたりで何がメキメキという、およそ人体から聞こえてはいけないような音がし出して、有珠が苦悶を通り越したような、表現が難しい顔になった。
「お、お気遣い感謝いたします。大尉」
自分ではそう言ったつもりだが、舌が上手く回った自信はない。
少なくとも、相手の顔を見ながら言うなんて無理だ。
「騎体の修理点検もすぐ終わる。模擬戦の相手を捜している」
ガッ！
肩におかれていた手が、有珠の首ねっこを掴み上げた。
指が首の血管を締め上げ、有珠の顔が真っ青を通り越して白くなり始めた。
「二人とも、かなり派手をやったそうじゃないか。私に是非、実力を示して欲しいものだな」
「わ、私もですか？」
勘弁してくれといわんばかりに宗像が月城を見るが、
「ビックバン以前の化石相手なら――楽だろう？」

月城は、不敵にそう笑った。

●深夜　鈴谷艦内

「痛たたっっ」

医務室で湿布をもらった有珠（ありす）は、痛む足を引きずりながら深夜の通路を歩く。

深夜、みんなが寝静まった艦内を歩いても、交代要員と何人かすれ違っただけ。

それが逆にありがたい。

こんな無様な歩き方してる所なんて見られたくない。

「さて……」

有珠（ありす）は壁に寄りかかりながら周りを見回した。

「どこでやるかな？」

手にあるのは小型の携帯電話。

「自室でやると、電波とか、いろいろ五月蝿そうだから――――あっ」

そうだ。

あそこがいい。

居住区の一角。採光用の窓が大きく取られた休憩スペース。

あそこなら。

有珠（ありす）は携帯電話をパタパタと閉じたり開いたりしながら、歩き出した。

「携帯小説アップしてました。で、言い訳できるもんねぇ♪うん」

有珠（ありす）は鼻歌交じりに呟いた。

「楽な仕事だ♪――――ん？」

有珠（ありす）は、不意に足を止め、耳に手をやった。

どこからか女の声がする。

会話じゃない。

歌だ。

Ｆｌｙ　ｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｍｏｏｎ
Ａｎｄ　ｌｅｔ　ｍｅ　ｐｌａｙ　ａｍｏｎｇ　ｔｈｅ　ｓｔａｒｓ
Ｌｅｔ　ｍｅ　ｓｅｅ　ｗｈａｔ　ｓｐｒｉｎｇ　ｉｓ　ｌｉｋｅ
Ｏｎ　Ｊｕｐｉｔｅｒ　ａｎｄ　Ｍａｒｓ

「これって？」

有珠（ありす）もどこかで聞いたような気がする歌だ。
曲名は知らないけど、ここは軍艦の中。
そんな所に響くべき声じゃない。
女性士官が眠れずに廊下に出ているのか？
そう思って、有珠（ありす）は通路の角に立った。
声は、その先からしている。

Ｉｎ　ｏｔｈｅｒ　ｗｏｒｄｓ
Ｐｌｅａｓｅ　ｂｅ　ｔｒｕｅ
Ｉｎ　ｏｔｈｅｒ　ｗｏｒｄｓ

透き通るような美声が耳に心地よい。
そっとのぞき見たその先。

通路に天使が立っている。

有珠（ありす）には、本気でそう見えた。
青い月光に照らし出され、金髪を輝かせる美しい少女の後ろ姿。
それは、有珠（ありす）が生涯の中で見たどんな光景よりも崇高で、そして荘厳な何かを秘めていた。
有珠（ありす）は携帯を掴んだまま、惚けたようにその光景に見入っていた。

歌が終わった。

辺りには、単調な艦の推進音だけが響く。

違う。

……ヒック。

……グスッ。

「？」

怪訝そうな顔で、有珠（ありす）は目の前の少女を凝視した。

うつむいた少女は、肩を振るわせていた。

泣いているのだ。

「……誰？」

自分では、小さな独り言だった。

だが、思ったより声が大きかったらしい。少女が、ハッ！となってこちらを振り向いた。

金髪の美少女が、驚いた顔でこちらを見ている。

どうしていいのかわからない。

そんな顔をしている。

でも、それは有珠（ありす）も一緒だ。

「こ……今晩は」

バカだ。

自分でもそう思うが、出た言葉は仕方ない。

有珠（ありす）は口から出た言葉通りに頭を下げた。

「綺麗な声だったんで」

「あ……あの」

艦内着に指定されているトレーナー姿の少女は、あたりを見回すと懇願するように言った。

「黙っていて！」

「は？」

「私、艦長室から出るなって言われているの！ここにいるのがバレたら怒られるのよ！だから、お願い！」

少女――つまり、フィアはそう言い残してその場を走り去った。

「……」

何が何だかわからない。

困惑する有珠（ありす）だったが、

「まぁいいか」

ため息一つ。携帯を開いた。

「報告するネタが出来たんだし」

深夜の通路。

有珠（ありす）は携帯電話のメールを書き込み始めた。

月夜が美しく辺りを照らし出すのさえ、有珠（ありす）は構うことはない。

「……ん？」

ただ、有珠（ありす）の、騎士としての何かが、船窓の外。遠くに浮かぶ雲に警告を発した。

「……何？」

メールを打つ手を止めて、窓の外をしげしげと眺める。

月夜に照らし出された雲の海の向こう。

そこに……何かがいた。
船のような……そんな気がした。
船。
飛行艦だ。
銀色の、優美なデザインの船。
有珠（ありす）には、そう見えた。
「あの……船」
有珠（ありす）は、自分がどこかで、あの船を見たことがある。
そう思った。
「どこだっけ？確か……」
あれは……。
有珠（ありす）が、その答えにたどり着こうとした途端だ――
ズキンッ！
「ぐっ！？」
有珠（ありす）は、突然、脳天に走った、そこをカチ割られたような激痛に顔をしかめ、その場にうずくまってしまった。
手から落ちた携帯が、床に落ちて転がった。
「……っ」
痛くて悲鳴すら上げられない。
自分の身に何が起きたかわからない。
ただ――
痛みのせいで、自分が何を思い出そうとしたのか、それさえ忘れた。
「……な」
忘れた。
本当にそうなのか？
それさえわからない程、頭の中で痛みが走り回る。
頭皮と肉を引きちぎられ、頭の中に無数の針をつき込まれたような痛み。
激痛が、鋭い刃の車輪となって脳みそを切り刻むような痛み。

こんなの、二度と味わいたくなかったのに！
――え？
二度と？
……私、そう思ったよね？
じゃ、私、こんなの、どこで味わってるの？
有珠（ありす）は、再び激しく暴れ出した痛みを脳から追い出すように、激しく頭を左右に振った。
「考えない。考えない。考えちゃいけない」
有珠（ありす）は、まるで呪文のようにそんな言葉を繰り返した。
「忘れる。忘れる。忘れろって、命じられている」
口から出る言葉の意味さえ、有珠（ありす）は気にしさえしない。
しゃべることが、痛みから逃げられる手段だと、そう思っているように、ひたすら言葉を呟き続ける。
「せっかくの命だ。もらった命だ。逆らうな。逆らうな」
頭を抑える手に力が籠もる。
「――あの方に、逆らうな」

一体、何分が過ぎたのか。
一分？
一時間？
長い時間だったようにも、短かったようにも思う。
時間の感覚が狂う。
ようやく痛みの引いた頭で、ふらつきながら有珠（ありす）は立ち上がった。
髪はボサボサになり、顔はすっかりやつれ、病人のようにさえ見える。
有珠（ありす）は床に転がっていた携帯を拾い上げた。
「……」
もう寝よう。
本気でそう思った。
何だか、もう、窓の外を見たくなかった。

ベッドに潜り込んで眠りたかった。
だけど――
「あの子のことは……」
書かなければならない。
誰かに報告しなくちゃいけない。
有珠（ありす）は、先程出会った謎の少女のことを、メールで報告することで、痛みから逃れられると、そう思った。
根拠はない。
ただの盲信のはずだ。
それでも――
有珠（ありす）は不思議な確信を、心の内に秘めながら、メールを打つ手を止めなかった。

北米戦線編　第六話（後書き）

なんか……描写の力が弱いんだなぁ。私って半泣きになりながら書きました。もっと上手くなりたいです……ぐすっ。

北米戦線編　第七話

その翌日。
鈴谷がカリフォルニアに上陸するまでの残り日数は４日。

この間――――実は北米大陸のほとんどの戦線で、戦闘は記録されていない。

戦争どころじゃない！

やってる余裕があるように見えるのか！？

最前線に送り込まれた米中双方のテレビ局のインタビューで、奇しくも両軍兵士の声として伝えられた声を要約するとこうなる。
戦争の行く末が気になる納税者としては納得出来ないだろうが、兵士達のおかれた立場を考えれば無理もないとわかるはずだ。

彼等に何が起きたのか？

超大型ハリケーンの襲来だ。

ハリケーンの分類上最大となるカテゴリー５を超えたとさえ囁かれる超大型ハリケーン“アリソン”は、普通の半分以下というゆっくりとした移動スピードと、異例とも言うべき大量の降雨をもたらした　。
各所で大洪水が発生し、メキシコ湾に面するいくつもの街が、ベネチアさながらの水の都と化し、交通網、通信網を寸断。
水死者達の亡骸と無数のゴミが街から流れていく水の流れをあち

こちで流れをせき止め、破壊されたライフラインが、被害をさらに深くした。
水没に近い損害を受けた都市を数えたければ、両手本の指で足りない。

ハリケーンが通り過ぎて尚、復旧作業は遅々として進まない。
人も足りなければ情報も満足に確保出来ない。
やりたくても出来ない。
これが本音だ。
世界に冠たるアメリカ合衆国でさえ、これは出来る話ではなかったのだ。

最優先で復旧されるべき送電線などの基幹インフラは、両軍の空爆の応酬により、各地で破壊されたまま放置されている。
おかげで、復旧に必要な電力を確保出来ない。
つまり、電力で動く機器を使うことが出来ない。
さらに追い打ちをかけたのは、ここ数十年のアメリカの事情だ。
移動手段――つまり、車だ。
“クリーンな車”として、多角経営の一環として、電力事業に手を出し始めた北米各自動車メーカーによって売り出され、燃料代の低さから普及し始めたものがある。
“シティ・コミューター”や“プラグイン・カー”と呼ばれる、家庭から電力をとるタイプ電気自動車だ。
この時点では、全自動車登録台数に占める普及率が、都市部では８０％近い。
つまり、移動手段まで電力頼み。
このアメリカの事情が混乱に追い打ちをかけた。
停電が車の動きさえ止めてしまう。
このため、被災者は避難するための移動手段を奪われた。
都市から移動したくても手段がない。

これが、多くの人々を都市部に釘付けにしていた。

ハリケーンは、その都市に襲いかかったのだ。

最悪なことに、被害が大きい地域ほど中華帝国軍支配地域及び最前線に近いことがトドメとなった。

救援したくても、州をまたいでの人員・機材・物資の輸送が出来ない。

現状、全く電力の供給が停止したままの場所は百を超える。

その中には人口数十万人以上という、大都市部も5つ以上、含まれる。

文明を誇るべき都市部でこの有様ならば、前線はもっと酷いことになっていた。

露出した土は泥となり、泥は海となり、兵士達はそこで生き延びることを求められた。

司令部に命じられるまま、最前線に向かおうとしよう。

冠水した道路を水をかき分けながら歩くか、泥に足を取られながら歩くしかない。

そんな道を、ちょっとでも外れれば、彼等の前には、元爆撃孔という、死の沼が待ちかまえている。

砲撃孔は、今や底なし沼だ。

この横を徒歩で移動する、数十キロの装備を持ったまま戦友が、少しバランスを崩しただけで砲撃孔に落ちて、そのまま浮かんでこなかったなんて話は、前線ではゴマンと転がっている。

それ程の被害をもたらしたハリケーン。

それが過ぎた後。

北米の空には、前代未聞とまで言われる、奇妙かつ、恐ろしく不安定な気象前線が広範囲に居座っている。

雨ばかりだ。
時折、晴れたかと思うと、熱帯のスコール並の雨を数時間に渡って降らせる。
しかも、雨音をかき消すかのように響く雷のすさまじさは、言語に尽くしがたい。

泥まみれになって行軍し、水浸しになった塹壕に潜むことを強制された兵士達に、自然は容赦がなかった。

戦場は、新たな局面を泥の中に潜ませながら、新たな戦いへと向け、静かに動き出していた。

●アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ　第２０５歩兵旅団司令部
「防疫部隊とメサイアをよこせと言ってるんだ！聞こえなかったのか！？」
激高したウィリー大佐がテーブルを蹴飛ばした。
テーブルに置かれた地図や駒が宙を舞った。
「こんな泥濘の中で這い蹲って戦えだと！？貴様、頭がどうかしたのか！？兵士達に安全な水さえ確保出来ていない！」
通信装置の受話器を持ったまま、ウィリー大佐がヅカヅカと音を立てて歩き回る。
無線の相手はうんざりしたという声だ。
「すでに戦車は送っているだろう」
「連中の対戦車装備を舐めているのか！？Ｍ６０どころかＭ１だって葬られるぞ！泥濘で敵は足が遅い！叩くならメサイアこそが適任だ！」
「勘違いするな。ウィリー。我々は貴様に進撃を命じているんじゃない。防戦を命じているのだ」

「まさか！」
「アラモに歩兵中心の敵部隊が接近中だ」
「この泥の中で！？連中は狂ったのか！？」
ウィリーが目を見張ったのも無理はない。
アラモ。
シャウニー森林公園に設定された防衛線のことだ。
シャウニー国立森林公園は、先のタイフーンでかなりの打撃を受けている。
塹壕は水浸し。
岸辺に埋葬した死体が反乱した水に掘り起こされ、川を流れている程だ。
現状、森林公園付近にウィリー等陸軍が展開し、五大湖方面の最前線を形成している。
予備役を再編成した歩兵2個師団と砲兵1個師団。そして戦車2個大隊。
これが駒の全てだ。
ここを突破されれば、もう満足な防衛戦は出来ない。
つまり、合衆国は終わる。
その生命線にも、自然は容赦がなかった。
池と化した塹壕で、兵士達はヘルメットまで使って泥水を吐き出している。
すぐに地面からしみ出してきた水が塹壕を埋めてしまっても、続けるしかない。
ブーツの中は水浸しになり、皮膚がふやける。
傷から雑菌が入り込み、兵士達の体を蝕んでいく。
汚染された水を飲んで、激しい下痢に襲われる。
しばらくすれば、脱水症状に陥り、そのまま動かなくなる。
ハリケーンが通り過ぎてから数日、野戦病院は負傷兵ではなく、病兵で溢れかえっている。
それを知る現場指揮官としては、対策を求めるのは当然のことだ。

このままでは戦線は、戦わずに崩壊する。
それでいいのか！？
「衛生部隊は伝染病の危険性すら警告してる！その最中に攻め込まれたらどうなる！？」
「カナダ軍のメサイア部隊が国境線を超えた」
「数は！」
「ロンゴミアントが１０騎」
「おお神様！」
ウィリーは叫んだ。
「そんな数で何が出来る！？相手は重武装のメサイアだぞ！？」
「それでやってもらうしかない。これでも死に物狂いで手配した。我々は果たすべき義務を果たしたと、最後の審判においても、神すら進んで認めてくれると信じるがね」

●ドイツ　ベルリン　宰相官邸
ヨーロッパの双璧と呼ばれる男達がいる。

二人の共通した肩書きは宰相。

ヒース首相が、左前だった英国を立て直した名宰相なら、ドイツを復興させた名宰相がシックルグルーバー帝国宰相だ。

ヴォルフ・シックルグルーバー。

ヒース同様、魔族との戦争を推進し、見返りとしてアフリカの少なくない土地を植民地とすることに成功した男だ。
かつての植民地時代の倍近い領土を手に入れただけではない。
莫大な兵力と戦費を犠牲にして、祖国に未開発の油田と炭坑をは

じめとして、多くの地下資源をもたらした。
ヒースが莫大な土地を手にしたなら、シックルグルーバーは莫大な地下資源を手にした。
二人をそう評価する者もいる。

「新大陸軍はそこまで追いつめられたか」
去年、建て替えられたばかりの真新しい官邸の一室に、低い笑い声が響く。
髭を生やした小柄な男が、楽しげに笑っていた。
「黄色いサル共め。なかなかやるではないか」

「はっ」
ドイツ軍参謀長のフォンテーン将軍がバインダーを脇に挟みながら頷いた。
「ハリケーンの影響もあります。サル共は雨を喜んでいるようです」

「泥まみれになることをか？」

「本能的に好きなのでしょう。そういうのが」

「そういうセリフを平然と言ってのける君が好きだ。フォンテーン」

「……どうも」
稀代の才能を持ちながら口が災いして左遷や罷免を幾度となく経験した彼を、ここまで重用してくれたのは、シックルグルーバーが初めてだった。
魔族軍との国家レベルでの戦闘を、初戦からずっと支え続けたのは彼の功績だが、フォンテーンからすれば、自分を拾ったシックルグルーバーの功績となる。自分から功績を誇ったことは一度もないのはそのためだ。

「我が軍の部隊の派遣状況は」
「五大湖方面の防衛にノイシアで編成された第６０１メサイア大隊を派遣」
「他国の派遣は？」
「フランスは静観の模様。本日０８００時点で、新たに派兵を公式宣言した国はありません」
「英国もか？」
「英国は連邦としてカナダ軍に対する支援は表明していますが……東南アジア方面で手一杯と見るべきでしょうな」
「まぁ、よい」
シックルグルーバーは執務椅子から立ち上がると、窓の外を見た。
２０メートルに達する高い天井を持つ広大な執務室。
それはかつて建築家を目指したシックルグルーバーの趣味丸出しの部屋であり、その窓からはベルリンの美しい町並みか見て取れる。
「北米大陸におけるいいデータがとれるだろう？」
「ノイシアは最新バージョン騎が送り込まれます。北米大陸での運用データをとるだけでなく、中華帝国軍のデータもとれればベストです」
「だが」
シックルグルーバーは意地悪く訊ねた。
「新大陸軍は歩兵達も要求してきたはずだが？」

「資金も資源も豊富な分際で、贅沢言うなと言っておきました」
フォンテーンは興味もないという顔で答えた。
「歩兵部隊を海上輸送して欲しかったら、安全な輸送ルート確保が前提です。数千の将兵を海の藻屑にされては、世論を抑えられません」
「騎士部隊に対メサイア戦の経験は？」
「メサイア戦、もしくは魔族軍メサイア、呼称メースとの交戦経験がある騎士は我が国どころか欧州でもそう多くはありません。少なくとも、部隊には皆無です」
「……素人判断に過ぎぬが……実戦を迎えるには厳しくないか？」
「最新鋭の斧型兵器“リジル”及び槍型兵器“グングニル”を配備しています。中華帝国軍の装備なら十分以上にやれます」
「怠りなし……そういうことか」
「然り」
「賢明だ」
シックルグルーバーは満足そうに頷いた。
「麗しの皇帝陛下への上奏の時間が近い。近頃、陛下は食事より戦争をお望みなようで困る」
「閣下」
フォンテーンは不意に訊ねた。
「ヴァチカンに不穏な動き有りと聞き及びましたが」
「……」
シックルグルーバーは一瞬、動きを止めた。
「あのイカレ連中のことは放っておけ」

主君が放っておけという命令を発している以上、彼の狗であるフォンテーンは動くことは許されない。
「了解です」
フォンテーンは頷くと敬礼した。
そして、ヴァチカンのことは忘れた。

●シャウニー国立森林公園　アメリカ軍呼称アラモ防衛線
「うわぁ」
メインモニターに映し出される光景に、コクピットに座る騎士が呆れとも歓声ともつかない声を上げた。
爆撃孔がボコボコ開いた後に泥水が貯まり、無数の池が出来ている。
木々が爆撃と嵐になぎ倒され、戦車や車両の残骸が泥の海に半ば沈んでいる。
まだ２０歳そこそこの若い騎士は、見慣れない光景が珍しくてしかたない。
金髪を大きなリボンで束ねた少女が、年頃の好奇心に目を輝かせ、パネルを操作してモニターに映る光景を記録しようとするが、
「……こら」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）からの声に、ハッとなって手を止めた。
「マジメにやりなさい。観光に来てるんじゃないのよ？エレナ」
「だけどぉ」
エレナと呼ばれた少女は、パネルを叩こうとした指でＳＴＲシステムの上で、のの字を書き始めた。
「ち、ちょっと位……わ、私、ベルリンから外出たことほとんど」

「作戦中って何度言わせる気？」

「はぁい」

エレナは口を尖らせながら言った。

「……ヘルガのケチ」

「何か？」

何でもないです！

エレナは、舌の一つも出して言い返してやろうかしら。と思った。

だが、それは出来なかった。

おかげで助かった。

ズンッ！

目の前で土砂が跳ね上げられ、濛々とした土煙が高々と立ち上る。

砲撃だ。

しかも、一発や二発じゃない。

「な、何っ！？」

騎体を襲った震動。

とっさにＳＴＲシステムを掴まなければ、シェイカーに変貌を遂げたコクピット内でとんでもないことになっていただろう。

少なくとも、舌を出していたら噛み切っていた所だ。

「砲撃飛来っ！」

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）からの声に、

「何で気付かなかったのよ！」

エレナは驚いて噛み付いた格好になった。

「砲撃地点に対する熱源反応及びレーダー反応なし」

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）では、ヘルガと呼ばれた妙齢のＭＣ（メサイア・コントローラー）が情報分析に必死だ。

「三次元レーダーの異常反応？これは」

「司令部よりエルフ小隊全騎」

不意に司令部の通信が入った。

「敵は強力なＥＣＭを展開している。こちらの電子戦部隊がカウンターをかけているが勝ち目がない」

「どうしろと！？」

「前方１０キロにメサイア部隊出現。数１２。増大中、騎種不明」

「カナダ軍のうそつき！」

エレナが怒鳴った。

「敵はしばらく出てこないから、代わりに行っても大丈夫って言ってたじゃない！」

「言わないの！司令部、こちらシュヴァルツ騎。そこまで入り込まれた理由は、レーダーの攪乱のせいですか？」

「バカ抜かせ！」

レシーバーの向こうで怒鳴り声が上がった。

「こっちのレーダーシステムだって組み立て中だ！体勢が整ってな

いんだ！」

「観測機は、衛星監視は！？」

「言ってる場合か！？全騎迎撃フォーメーション・ドライ。ツェーン小隊が狙撃支援を行う。備えろ！」

「――――こちらシュヴアルツ騎、了解」

エレナはＳＴＲシステムをコンバットモードに引き上げた。

甲高いエンジン音がコクピット一杯に響き渡った。

「ヘルガ、“グングニル”装備」

「戦斧じゃなくて？」

「この泥濘の中だから、間合いを取りたいの。足場が悪すぎる。力押しなんてやったらコケて終わりよ？」

「賢明な判断ね」

エレナ騎は、背中に折り畳んでマウントされていた槍を引き抜いた。

槍にパワーが入ると、自動的に伸展。３０メートル近い槍が形成された。

「“グングニル”パワー正常」

穂先に青白い光が走る。

「後方でツェーン小隊が狙撃準備をしてくれている」

「砲撃支援は？」

「米軍の砲兵部隊は準備すら終わってないわ。今頃コーヒーでも飲んでいるんじゃなくて？」

「だから新大陸の連中は嫌いなのよ。ルーズでいい加減で！」

ズンッ！

ズズンッ！

効力射がエレナ騎の間近で炸裂した。

騎体が激しく揺れ、空中に巻き上げられた泥濘が雨のように降ってくる。

「きゃっ！？」

「命中しても」

キーンとなる耳に、ヘルガの声が響く。

「この口径なら装甲で何とかなると……」

祈って。

その最後の言葉は聞こえなかったことにした。

「……最低」」

エレナは、唇を噛み締めながら前方を凝視した。

巨大な人が、近づきつつあった。

「負けたら、はいさようならなんて……」

メサイアだ。

「敵騎視認（エネミー・インサイト）！」

見えたからには仕方ない。

エレナは規定通りに、敵の目視を宣言した。

「騎種は……」

何だっけ？

「司令部。こちらシュヴァルツ騎。敵騎視認（エネミー・インサイト）を宣言。騎種、赤兎型、主要武装は戦斧。数１５。増大中！……大盤振る舞いじゃない」
心なしか。ヘルガの声は震えていた。
こちらは別小隊を足しても数１２。
数ではあっちの方が勝っている。

「こちらツェーン小隊。司令部、牽制の砲撃位出来ないのか！？」
「飛行艦の位置を晒せと言うのか？」

「ヤンキーはどうしたんだよ！」

「泥濘に動きを阻まれている。続報。メサイア部隊の後ろに歩兵戦闘車及びトラック多数。機械化歩兵部隊と思われる」

「サルの方が熱心じゃねぇか！ヤンキー共はやる気があるのか！？」

「連中もやることはやっている。砲撃可能になり次第、お前達を巻き込んでやらせよう」

「地獄に堕ちろ、ヴェルナー！エルフ小隊、突撃タイミングは一任する。それに会わせてこちらから牽制射撃を１０秒かける」

「こちらエルフ小隊パラスケ騎。突撃もやってくれたら感謝するわよ？」

「心底お断りだ。武運を祈る。通信終わり」

仕方ない。
ＳＴＲシステムが生み出す槍を掴む疑似感覚を掌に感じながら、

エレナは覚悟を決めた。
「こちらエレナ。エルフ小隊、突撃準備」
小隊所属６騎が槍とシールドを構えた。
各騎のエンジン音が甲高く響き渡る。
「敵、接近速度緩めず。距離、１５００」
これ以上、近づけたら戦域が混乱する。乱戦になればどさくさ紛れに防衛線に入り込まれる。
阻止できるか否かのライン上ギリギリの距離だ。
「エルフ小隊全騎、これより迎撃に出る。まだ終わってません、は聞かないわよ？」
槍を強く握りながら、エレナは怒鳴った。
「皇帝と神の加護を信じて！」
エレナは騎体を駆った。
「突撃っ！」
目の前の赤兎が、こちら側の突撃に狼狽しているのは間違いない。
ちょっとだけ後ろにのけぞったのがはっきりわかる！
リーチに入った！
「そこっ！」
エレナは槍を突きだした。
ラムリアース帝国からの技術供与でようやく完成した特殊貫通魔法付与済槍式兵器“グングニル”。
メースの頑強な装甲を貫くための穂先に、赤兎の薄い装甲が耐えれるはずもない。

ザクッ！

「えっ！？」

エレナは、自分に起きたことが信じられなかった。
目を疑った。
ＳＴＲシステムを操作する自分の感覚を疑った。

チーズにナイフを入れるような。

“グングニル”の貫通力を教官達がそう褒めていたのは確かだ。
だが、訓練で使った時だって、もっと――――

「こんなに手応えがないなんて！」

突き出した覚えはあるが、敵に突き刺さった槍に、重みがない。
空を突いたのと、たいして変わるところはない。

おかげで、

ピーッ！

「９時方向！距離４０！」

「チイッ！」

エレナは敵を貫通した槍を乱暴に引き抜くと、接近する新たな敵に突き出した。
最初に突き刺された赤兎はコクピットブロックを直撃されたらしい。動きを完全に止め、その場に倒れ伏した。
エレナの初スコアだというのに、エレナは歓声を上げるヒマさえ与えてもらえなかった。

あんまりだと抗議するヒマなんてなかった。
突き出した槍を、赤兎は乱暴に払いのけ、槍の間合いに飛び込んできた。
「しまっ！」
槍から手を離すと、エレナは騎体をスピン機動に入れた。
２回転目で戦斧抜刀。
３回転目で戦斧を振り上げた赤兎のがら空きの胴体にエレナ騎の戦斧がめり込んだ。

狙撃部隊の一撃が、計ったように、その赤兎の頭部を吹き飛ばした。
頭を失った赤兎は、爆発の衝撃に押されて、大の字になって後ろに倒れた。

「二騎目」
念願のスコアを手に入れたというのに、嬉しくも何ともない。
スコアを稼ぐということは、こういうものなのか。エレナは誰かに聞いてみたかった。
そんなエレナの頭上で、
「エースの誕生に立ち会えそうね」
ヘルガは荒い息の元、そんな事を言った。

●アメリカ合衆国　シャウニー国立森林公園　アメリカ軍呼称アラモ防衛線

赤兎達の残骸が泥の海に浮かび、兵士達が残骸を調べている。

戦闘を終え、ツェーン小隊との警戒任務の引継を終えたエレナ達は、思い思いに騎体から降りていた。

損傷した2騎を後方に移動させたので、エルフ小隊は現状、4騎しか存在しない。

2倍を超える敵を相手に善戦。敵を撃退したことは誇るべきだと思う。

ただ――――

「何で怒られなきゃいけないのよ」

エレナは憮然として、シートの上に座った。

泥の上はなるべくなら歩きたくない。コクピットに入った時に散々なことになるからだ。

赤兎のショルダーシールドや装甲を地面に転がして通路を造り、その上にいたのは、そんな理由だ。

この上なら泥は入らないし、狙撃兵から狙われる心配もない。泥濘の塹壕で泥まみれの米軍兵士達とは雲泥の差だ。

「歩兵部隊の増援阻止なんて、私達の仕事じゃないでしょう？」

「仕方ないでしょう？」

簡易コンロでお湯を沸かしたヘルガが、ドライフーズのコーヒーをマグに入れながら言った。

「欲は膨らむものよ」

「ったく」

コーヒーを受け取ると、エレナは戦闘用レーションの包みを開き、タバスコのパックを取りだすと、マグの中に何の躊躇いもなく一滴

残らず注ぎ込んだ。
「……」
怪訝を通り越した顔をするヘルガの前で、パックを捨てたエレナがポケットから取りだしたのは、“ＷＡＳＡＢＩ”と書かれたチューブ。鼻歌を歌いながらたっぷりと緑色のペーストをマグカップに入れたエレナは、スプーンで念入りにコーヒーをかき混ぜ、一気に飲み干した。
「おいしいけど、やっぱり物足りないわ。カイエンペッパーが切れちゃったのが残念ね。」
「……あのね？」
「何？」
「エレナって、確か、貴族の出……よね？」
「それが？」
「その……貴族様ってのは、そんなコーヒーの飲み方するの？」
「砂糖やミルク入れるほうがどうかしてるのよ。そうでしょう？」
「……」
ヘルガは、それが貴族としての意見なのか、エレナ個人の意見なのか、判断しかねた。
「みんながヘンなのよ。こっちの方が絶対、絶っ対においしいのに！これにリンゴ酢いれた、一番ベストな状態で飲んだら、“この一族の恥さらしめ！”なんて怒るんだから」
どうやら、エレナの個人的な意見だったらしい。
よかった。
安堵しつつ、ヘルガはほんのちょっと試してみようかしらと思って、やめた。
物資不足が続いている。
コーヒーだって貴重な飲み物だ。
変なことして浪費したくない。
恐る恐る、マグに口を付けた。
口の中に苦みと酸味が走る。

普通だ。
これでいいんだ。
ヘルガは、常識が口一杯に広がったのを楽しんだ後、コーヒーを胃袋に流し込んだ。
「……それで」
ヘルガは訊ねた。
「こっちの増援は？」
「大隊司令部から通達があった。新大陸軍は東海岸の防衛にやっきになってるから、期待薄だって」
「他の大隊はどうしたのよ。師団で来ているはずよ？」
「知らない。どうせ、フォイルナー少佐に全部やらせて、手柄だけは師団で受けるつもりでしょ？」
「少佐も気の毒に……新大陸軍の西海岸の部隊は」
「前線が広すぎて、そう簡単に回すだけの余裕はどこの部隊にもないって」
「司令部の受け売り？」
「当然。私にそんなことわかるもんですか」
パイロット用レーションをかじりながらエレナは、あっけらかんと答えた。
「それでも米軍の予備中隊が前衛に回されるって。それと裏情報だけど」
「何それ」

ヘルガはため息一つ、手の中でレーションを弄んだ。
パイロット用レーションは、味は確かにいいが、カロリー表示を見ただけで、女なら絶対に食べたくないこと請け合いだ。
女性騎士の間では“豚製造器（ポーク・メーカー）”と陰口を叩かれる原因、即ち、８０００カロリーを超えるという、恐ろしいほどの高カロリーを誇る。
しかも、このレーションで太った場合、何故か普通のダイエット

では痩せない。

やっとの思いでダイエットに成功したばかりのヘルガにとって、これを食べるのは、それこそ大嫌いなトマトを食べるより覚悟がいる。

食べても太らないと評判の新型レーションをどこかで手に入らないか。ヘルガは補給部隊と次に接触するスケジュールを思い出しながら、気のない返事をした。

「司令部との通信で、他に耳寄りな情報でもあった？」

「攪乱専門の部隊も、予備中隊と同じタイミングで入るって」

「攪乱専門？」

「強襲部隊って聞いた。司令部もよく知らないみたい」

「航空兵力のこと？」

「まさか。メサイアよ。それは確認した」

「無理よ」

ヘルガは私物のバッグにレーションの残りを放り込むと、通信販売で手に入れた日本軍のレトルトを鍋に放り込んだ。

カロリーは低めで、味もあっさりしているヘルガ好みだ。

ドイツを立つ前に在庫を買い占めておいて正解だったと、ヘルガはそう思っている。

「メサイアの飛行機動性の低さは知っているはずよ？」

「そんなこと、私に言われても知るものですか。でも、大隊司令部は後方攪乱作戦の存在は把握している。その中に日本軍が加わることもね」

「それ、どこで知ったのよ?」

「極秘よ。ご・く・ひ」

●鈴谷　甲板

「上陸中止だって」

「二週間も船に詰め込んでおいて、あんまりだよね」

折角、北米へ入港したというのに、憮然とした顔で外の景色を眺めるしかない。

港から出ればアメリカだというのに、上陸許可が下りないのだ。

「遊びに行きたかったなぁ……」

皆、それが本音だ。

「何をしているか」

振り向くと、月城大尉が苛立った顔で仁王立ちになっていた。

「戦争に来ているんだ。近衛はお前達を慰安旅行に連れてきたわけじゃないんだぞ?」

「そりゃそうですけど」

涼は不満たらたらで言った。

「大尉だって出航前に観光ガイドしこたま買い込んでいたじゃないですか」

「……情報収集だ」

グウォォォッッ
爆音と共に、上空を突き抜けていったは間違いない、メサイアだ。
見慣れないその姿が強い日差しの中に消えていく。

「米軍……ですか？」

「……私も生では初めて見た」
月城が驚いた。という顔で空を見上げた。
「ブラッティ・ファントムだ」
「米軍の新型という、あれですか？」
「ああ。強襲部隊向け可変メサイア。アラスカで開発が進んでいるとは聞いていたが」
「可変メサイア？あんなもの、何の役に立つのですか？」
「メーカーに問い合わせてみることだ。分厚い提案書が送付されてくるだろうさ。空中機動性能を向上させることで、空中ピケットを強行突破。そういう意味では、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒに近い発想で」
月城はおや。という顔になった。
「現行のラグエル隊はお前達と同期だったな。宗像中尉」
「はっ」宗像は頷いた。
「神城三姉妹とは同期でした」
「そして、平野と小清水の古巣……」
「はい」涼が頷いた。
なぜか、その横では芳と有珠が逃げだそうとしていた。
「柏崎防衛戦まででですけど」
「……そうか」
ガシッ！
目にも止まらぬ速さで芳と有珠の首根っこを掴み上げた。
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ隊も出動待機命令が下ったという」
「神城達が来るんですか！？」
「詳しい説明は、司令部からの命令が下り次第、後藤隊長からなさ

れるだろう。
　連中の性能を考えれば、本来なら本土防衛のためにこそ最適の部隊だが、やむを得ない。
　爆撃部隊、戦闘機部隊の掃討。飛行船の撃破……任務の広さは我々よりも厳しく、多岐に渡る。
　我々も可能な限りの支援は惜しまない。
　支援は主に狙撃部隊が担当することになるだろう」
「泉達は？」
「最終組み上げが完了したと、つい先程、通信が入った」
「あの」
　挙手をしたのは宗像だ。
「……何があるのですか？」
　宗像は訊ねた。
「まるで総力戦だ」
「総力戦だ」
　月城大尉は答えた。
「徹底的に短期で中華帝国軍を叩き、世界の目を日本へ固定させる。北米の平定で、この国の動きを止めるわけにはいかない。近衛は全力をもってこの北米で暴れまくる。アメリカ人が敵に対する憎悪の炎を自ら消してしまう前に、魔族への憎悪へとどうあってでもつなげるために」
「……結局、我々近衛もアメリカ頼みなのですか？」
「しかたない」
　月城は軽々と芳と有珠を持ち上げると言った。
「資金・資本共に今や世界は中華、米国、欧米の三本柱だ。日本はそのうちの一本を賄うことさえ出来ない。他国の支援なしには戦争なぞ、例えそれが、祖国の防衛だとしても、出来るものではない。それが現実だ――悲しいほど、情けないがな」
「……」
「ここで我々がどれ程の戦果を上げられるか。それが、後々の我が

国の未来を決める。無様な戦いをすれば、その対価は我が国の、そして人類の、無辜の人々の犠牲という形で支払わされることになる」

「……泉がここにいれば」

宗像は小さく苦笑した。

「何と言ったか。聞いてみたかったですね」

「懐疑的か？宗像中尉」

「お言葉は正しいと信じます。しかし」

「……」

「私は、アメリカ人をそれ程信じていません」

「賢明な判断だ」

月城は嬉しそうに頷いた。

「一般人や政治屋、そして経済人共がそれくらいの覚悟と愛国心があってくれれば、日本はここまで落ちぶれなかったろう」

「……」

宗像は、ハッとなって月城の言葉を聞いた。

「日本人の悪い癖の中でも最悪なのは、言葉に踊らされることだ。グローバル化。国際化……中国の経済発展にあって、日本になかったものの最たるモノは、自分がどこの国の国民か。その意思だったと思う」

「……」

「だが、アメリカ人もまた、日本人をそれほど信じていないだろう。とはいえ、私はここで貴官と政治思想について議論するつもりはない。私は、シミュレーターに定刻通り出てこなかったコイツ等を捕まえに来ただけだ」

ギリギリギリ

まるで万力で締め上げているような音が芳達の首のあたりから聞こえてくる。

「それと宗像中尉。一言言っておく」
「は？」
「そのロジックだと、アメリカ人は日本を助けに来ないぞ？」
「？」
「自分の国は自分で守れ――――それは、日本救援を拒む口実にもなる」
「あっ！」
「言葉は難しいぞ？中尉」

さぁ、来い。
徹底的にシゴき倒してやる。
敵より私の方が恐ろしかったと死ぬまで言わせてやろう。

悲鳴を上げる芳達を連れて行く月城の背中に、宗像はそっと敬礼した。

●東京都葉月市　近衛軍ラボ
「戦線はほぼ膠着状態」
美奈代達を前に、紅葉は言った。
「本来なら、私達が襲うべきは前衛でチマチマやってる連中じゃない。ヒューストンにある門（ゲート）を狙った強襲が最も相応しい」

「どうしてやらないのですか？精密誘導ミサイルでも十分」
祷子が首を傾げる。
なんでもない、そんな仕草でさえ、気品があふれている。
正直、美奈代は祷子の横にいて、いろいろ惨めだった。

「もし許されるなら」

紅葉は肩をすくめた。
「反応弾撃ち込んではい終わり……でも、それはマズいのよ」
「？」
「見る？」
紅葉は美奈代と祷子の前で端末を開いた。
「ハリケーン被害でもしかして、って、期待はしてたんだけど……無理だったのよね」
意味不明のことを呟いた紅葉がモニターに映し出したのは、港の写真だった。
「ヒューストン港ですね？ハリケーンの影響は……かなり」
「姫さん。その通り。高潮の影響で港湾施設に深刻な影響が出ている。でもね？米軍が本気で門（ゲート）を叩けない、最大の理由は――これ」
紅葉が指さしたのは、洋上、門（ゲート）の裏側に浮かぶ数隻のタンカー及びコンテナ船。まるで門（ゲート）を護るように、並んで浮かんでいるのが気になった。
「ハリケーンの時にどさくさ紛れにやっちゃうのが良かったのかもしれないけど」
「？」
「これ……そんな！」
美奈代は怪訝そうな顔をしたが、祷子はすぐに顔色を変えた。
「……ず、ずるい！」
「風間？」
説明を求める美奈代に気付くこともなく、祷子は絞り出すような

声で言った。

「人間の楯……ですか」

「そうよ」

紅葉は頷いた。

「コンテナ船に市民を……ＦＢＩの調査が正確なら、一隻当たり１００人前後。合計で１２００人が収容されている」

「そんな……」

「まぁ、コンテナ船って下手なビルより広いから、浮かぶ収容所としては使い勝手がいいでしょうけどね」

「収容されている人達の生活は」

「港から伸びるパイプは、電気と上下水道を引いている証拠」

「そんなに悪くないと？」

「どっちにしても下手な攻撃は出来ない」

「門（ゲート）だけを狙撃するとか」

「ＦＢＩが興味深い報告している。っていうか、中華帝国軍が警告がわりに情報をリークしたというのが正しいでしょうけど――見て」

紅葉は、門（ゲート）の写真を拡大した。

門（ゲート）のあちこちに設置されていてる箱状の物体。

「――センサーよ。これみよがしに取り付けている」
「門（ゲート）に対する攻撃を受けたら、自爆させるとか」
「そう」
驚愕する美奈代に、紅葉は頷いた。
「センサー一個一個が、収容所となったコンテナ船の独房コンテナに設置された爆発物の起爆装置。下手な攻撃一個で、どこかの独房が……ドン」
「……」
「攻撃を受けたら殺すんじゃない。攻撃した者が殺すことになる。しかも」
紅葉がため息混じりに指で突いたのは、タンカーだ。
「中に原油を満載している。この規模のタンカーが爆発して原油が流出したら、メキシコ湾の生態系は壊滅するわ」
「……」
美奈代は額に手を当てて、天井を仰ぎ見た。
「精密攻撃なんて意味はない。門（ゲート）の動力源切断も無理。動力が切れた時点で起爆装置は全部作動する可能性――うーん。確実に千人が吹き飛んで、メキシコ湾の魚介類が死滅して……」
ハァッ。
紅葉は肩を落とした。
「攻撃者は、中華帝国軍顔負けの悪役になるわ。折り紙付きのね」

「それが攻撃出来ない理由……ですか」

「そう。対空防衛部隊にミサイル護衛艦、そしてメサイア。十重二十重の鉄壁の防御を誇る中華帝国軍を突破して陸戦部隊をヒュートンに叩き込んで、港を制圧するしかない」

「開放したければ、確かに総力戦しかないですけど……」

祷子は訊ねた。

「そんな余力があるのですか？」

「ない」

紅葉は即答した。

「海外展開中の部隊を呼び戻しつつあるけど、まず無理ね。間に合わない」

「間に合わない？」

「姫さん。忘れないで、私達に残された時間はもう1ヶ月ないのよ。一ヶ月が終わるまでに、中華帝国軍を海に叩き込んで、余った兵力を日本へ向けてもらわなければ、意味が無くなる」

「私達に、どうしろと？」

「――ま、派手に日本を売り込んで頂戴」

「売り込む？」

「そうよ？」

紅葉は嫌な笑みを浮かべた。

「米軍はね？市ヶ谷のバカ共よりは現実的で、しかも有能なのよ。

同類の有能は大好きなの……わかるでしょう？そんな連中が今、腹の中で何考えているか。本土を奪還すれば終わり？アメリカ人は、そんなにお行儀よくないし、日本人の大好きな大人の対応ってヤツは大嫌いなタイプ。目には目を。殴られれば数倍返しが相場――私はそういうの、大好きだけどね」

「……本土奪還の後、ユーラシア大陸に攻め込むというのですか？」

美奈代は、脳裏に浮かんだ光景を、素直には受け入れられなかった。

「我々は、魔族という共通の敵がいるのです。それを」

「米軍にとっちゃ」

紅葉は美奈代の言葉を遮った。

「魔族だろうが誰だろうが、立ちふさがる敵なだけ。北京への道を邪魔するなら倒す。それだけよ。下手な人道話を軍人の身で語りなさんな」

「……っ」

「海外展開部隊のうち、日本や東南アジア派遣部隊の中核をほとんど動かしていないのがその証拠。彼奴等は、絶対に北京を石器時代に戻して」

紅葉の視線が、壁に貼り付けられていた世界地図に向かった。

「……南米の次の開拓地を手に入れるつもりよ」

「南米の二の舞になりますよ」

不意に、祷子が心配そうな顔になった。

「南米は、放射能汚染がひどくて……旧ブラジルなんて」

「南米の耕作可能地域の４５％が人体の生存すら適さない……耕作

可能地域でよ?アメリカ人にしてみたら、大損だったわけよ。開拓地だなんて言って、他人の土地横取りしてみたら、不毛の大地だったわけだし」

「それでも――戦後の経済発展では」

「地下資源を手に出来ただけ。工業生産力は、ご多分に漏れずにチンク共の計略にそって」

「……」

「土足で自分の家を踏みにじられた恨み晴らした挙げ句、分捕られたって怒りを晴らす絶好の機会――大尉?もし、あんたが今のアメリカ人だったら、どうする?牧師さんみたく、無意味な平和を解く?」

「……」

「アメリカは動く」

紅葉は力強く言った。

「仮は数倍返し――それが連中の相場だから」

●鈴谷艦内　ブリーフィングルーム

「現状、ヨーロッパ・中東方面担当の第4から第6までの全艦隊が大西洋に展開する。目的は、フロリダ半島の奪還及び、フロリダ海峡の確保。

……まぁ、黄海からヒューストンまでの航路は完全確保されているから?海峡の制海権を確保することにどの程度の意味があるんだ

ろうねぇ」
皆の前で後藤が言葉を続ける。
「……空軍は、敵主要陣地に対してＢ－３２による中華支配地域への大規模戦略爆撃を実施する予定。これに先だって、沿岸部は艦艇及びＰ－５１マスタングとＡ－１スカイレーダーにより構成される航空爆撃をかけるが……」
後藤はここで言葉を止めた。
「高度４千メートルから１万５千メートルはジェットが飛べない世界だ。こんな半世紀も前の武器で戦えるのは、せいぜいそこまで。後の主力はメサイアだ」
「……」
皆が、沈黙したまま話を聞く。
「米軍は狩野粒子影響下での戦闘を今までほとんど想定していなかった。
だからＭ１なんて電子装備満載の戦車を未だに作り続けていた。買い手もないのによくやるよ……まぁ、ぶっちゃけ言うとさ?戦車造るよりゃ、メサイアに金かけてたワケだ。ウチと同じでね。
とにかく、おかげで陸軍が使える兵器が全然足りない。
民間の中古業者から買いあさった大型トラックやＳＵＶ改造したテクニカルが米軍の主力兵器といってもいい。
どっちにしても、今さら血道を上げてライン構築しても間に合わないさ」
「それでも航空機は潤沢なんでしょう?」
「元は海外輸出用」
「……ああ」
芳（かおる）が納得した顔になった。
「そういうことですか」

「ちなみにＡ－１の買い手は日本だった。それを全部、メーカーが勝手に米軍に転売って寸法」
後藤は指示棒で肩を軽く叩いた。
「続けるよ？俺達近衛は派遣部隊が３つ。
主要任務は、後方の攪乱。
独立駆逐中隊とラグエル隊、そして電子戦小隊で編成される混成部隊として機能する。中核部隊はラグエル隊……だったんだけど」

後藤は少しだけ、顔をしかめた。

「ラグエル隊の北米派遣は中止。電子戦闘小隊は、機器補充が消耗に追いつかず、作戦参加不能……まぁ、本音で言えば、整備ミスが原因で動けない。ついでに、あのヘッポコの騎は、未だ届かない……」
どうしろってんだ。と、後藤がめずらしくぼやいた。

「都築達は、無事なんですか？」

「元より急造品だからねぇ……みんな元気だとさ」

「中佐。ラグエル隊の派遣中止とは？」

「一度にいろいろと聞くなよ。……月城さん。そいつぁ、俺にもわからん。他の作戦に参加させるというが、ラグエル隊が必要な作戦なんて、日本であるとは思えないしなぁ……どう思う？」

「それこそ、私に聞かれても困りますが」
月城も首を傾げるしかない。
「本国での戦闘は停止と聞いていますし……今、敵がいるとは」

「だよねぇ……おかげで、電子戦小隊による情報収集、弾着観測支援を受けながら、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ及び狙撃部隊の火力攻撃により敵部隊を叩くって作戦は全部水の泡。
それでも、ここで油売っててもしかたないワケだ。
送り込まれた以上、戦果は挙げにゃならん。
そんなワケで、明日、鈴谷はこの港を出港する。
目的地はミズーリ州だ」
「ミズーリ？テキサスやイリノイじゃ」
「最前線で他国軍と仲良く肩並べてってのは、俺達の仕事じゃないよ」
「いえ……そうじゃなくて」
宗像は言った。
「シャウニー国立森林公園辺りで、大きな前線が構築されつつあると聞いたので」
「そこまで知っていれは話は早い。だけど、もっと大きな視点に立ってごらん？別なものが見えてくる」
「……」
しばらく考えた宗像は、不意にギョッという顔になった。
「まさか！」
「そういうことさ」
後藤はニヤリと楽しげに微笑んだ。
「さすが泉のダンナと褒めるにゃ、少し遅いな。泉なら目的地聞いただけで悟っていたはずだ」
「……し、正気ですか？この頭数で！？」
「想定外の場所で甚大な損害を受けたとなれば、その対応に兵力をどうしても割かなければならない。俺達の仕事はそういう仕事だ」
「我々が」
ちらりと周囲を見回した後、

「我々5騎の前衛が、敵メサイアを引きつける間に、狙撃部隊が補給施設や他部隊を破壊……そんな所ですか？」
「そいつはケースバイケースだ。泉と風間を数えていなかった所は褒めてあげるけど」
「元々、風間は」
宗像はやや早口で言った。
「我々の中でも単独行動が目立つ存在です。勘定入れづらいですし、泉の新型ってのが、どんな性格のものかわかりませんからね」
「素直に忘れてたって言って良いよ？」
「……っ」
「あいつらは」
後藤は言った。
「勘定に入れなくて良い。あいつらは、こっちに来ても別部隊。斬り込み専門だ。敵地奥深くに強行侵入。敵を攪乱するのはあいつらの仕事。メサイア徹底的に引きつけてきた所にお前達が待ちかまえていて――始末するってのが、泉の基本方針らしい。つーかさ」
後藤は不敵に笑った。
「特に風間は集団戦には向いていない。その傾向は泉も強い。騎体の性格も違う。なら、あの二人組で行動させた方が分がいい」
「集団戦において、単独行動をとる者は邪魔だと？」
「そうとも言う。宗像ぁ。いろいろあるけど、そろそろ諦めて指揮官としての経験積めや。下手なプライド捨てて。生まれ変われ」
「……」
「簡単に言うなって顔してるけどな？宗像。お前にゃ、今回の作戦でいろいろ頑張ってもらうよ？」
「はっ？」
「まず、訓練兼ねて、お前に指揮権任せるからね」
「そんな！」
「言いたいことはわかったな？前衛指揮官はお前だ」
「月城大尉がいるじゃないですか！何で中尉の私が！？」

「大尉はお前のご意見番兼監視。お前の下で動いてもらうけど、基本的に口出し無用」
「そんな！無理です！出来ません！」
珍しく、宗像が青くなって席を蹴った。
「泣き言は聞かないよ。こりゃ、もう決定事項だ」
後藤は書類を小脇に挟んだ。
「――まぁ、やるだけやってみろや。お前なら何とかなるさ」
「……」
「恐い顔すんなよ――あの泉でもやれたんだ。お前なら余裕だよ」

●東京都葉月市　近衛軍ラボ

「長丁場ですねぇ」
「８時間ちょっとの旅ね」
ラボに付属する滑走路からＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が１機、離陸していった。
紅葉と開発局のスタッフが乗っている。
その離陸を見送った後、滑走路の脇に並ぶＤ－ＳＥＥＤと“死天使”が発進の許可を待つ。
コクピットの中でちらりと時計を見た袴子が言った。
「今頃、花のサンフランシスコでおいしいもの食べてるんでしょうね。みんな」
キュゥ
袴子はお腹を押さえながらぼやいた。
「お腹すきました……」
「あれだけ食べて……ね」
美奈代は、搭乗前に、食堂で袴子が積み上げたドンブリの数を思い出した。
「こちら飛行管制。Ｘ６０６及びＸ６３９」

管制塔から通信が入った。
「こちらＸ６３９」
「Ｘ６３９、離陸を許可する。規定プログラム通りの飛行を心がけよ。高度３６００にて飛行管制を東京統合管制、バンド３６１に変更――」
「Ｘ６３９了解」
美奈代は返事をしつつ、つくづく思った。
「……生きて帰ってこられるかしら。これって」

北米戦線編　第八話（後書き）

タイトル間違えてました。指摘してくださった方、感謝です。

北米戦線編　第九話

●アメリカ軍呼称“アラモ”防衛線　前縁2キロ地点

ドーン

ズーン

遠くでプレス機の動くような音がする。

メサイア同士の戦闘音だ。さっきより音の数は減っているが、まだ騎士達の戦いが続いていることは、その音が教えてくれる。

早く戦いが終わってくれればいい。

騎士達が戦うだけで十分じゃないか。

そう思う。

多分、陣地で俺達を待ちかまえる米兵だって、同じ気持ちだろう。

少なくとも、中華帝国軍の歩兵達は、口にこそださないにしても、内心ではそんな考えを共有していた。

今の最前線は、砲撃もなく、兵士達の叫びもない。

ただ、雨音と時折聞こえてくるメサイア同士の戦闘音だけが耳に届く静かな世界だ。

平地に開いたクレーターを塹壕として、その中で手持ち無沙汰に銃を点検していた歩兵の一人が空を見上げた。

長い雨が、ずっと降り続いている。

彼が覚えている限り、昨日の朝からずっとだ。

よく降りやがる。と、口の中で呟く。別に不満として呟いたわけでもないのだが、神がどういう判断を下したのか、不意に鉛色の空に薄日が差してきた。

「……まずいな」

雨は嫌いだが、この雨ばかりは止むと困る。
歩兵達の指揮官は、晴れたら攻撃を開始すると事前に宣告している。
この雨は、戦争を止めてくれている“恵みの雨”なのだ。
歩兵は、狙撃兵に気をつけながら周囲を見回した。
砲撃戦によって開いたクレーターに雨水が染みこんで無数の池だらけになった大地。
かつては観光向け写真にも使われた美しき平原だと聞かされていた場所。
どこから仕入れてきた情報かは知らないが、最後の打ち合わせの時、中隊指揮官から聞いた限りでは、乾燥した大地を道路が一本だけ通っている。身を隠すことも出来ないような真っ平らな世界が地平線の向こうまで広がっている。
偉大なる我が祖国のそれとは勝負にならないにしろ、一見の価値はある。
そんな所だったはずだ。
それが、今では忌々しい湿地帯、泥の地獄として彼等を出迎えていた。

「――――くそっ！」
塹壕と呼ぶにはあまりに酷い砲撃孔の中で、指揮官が伝令相手に毒づいた。
歩兵には、その毒づく意味がすぐにわかった。
――――ああ、神様。
北米大陸で、中華帝国の神様がどれ程役に立つのかわからないが、それでも歩兵は天を仰いだ。
「弾薬装填！」
彼が天を罵る前に、指揮官が号令を発した。
「砲撃が開始され次第、地獄に突っ込むぞ！」

「中華帝国軍歩兵部隊、前進を開始！」
「そんなこと言われたって！」
エレナは怒鳴った。
「こっちだって大忙しよ！」
エレナ達エルフ小隊は赤兎で編成される中華帝国軍メサイア部隊との交戦の真っ最中だ。
対メサイア戦装備のまま歩兵掃討任務に就くなんて、人が素手で毒アリの群れを殺せと言われたようなもので出来るはずがない。出来たとしても、無傷ではすまない。
ここ数日の戦闘で、エルフ小隊は戦力をほとんど失っていた。
配備されるはずだったゼックス小隊、ノイン小隊が指揮官騎の故障を理由に到着が大幅に遅れているせいだ。
ツェーン小隊と合わせても一個小隊の頭数を維持していない。

喪失したわけではなく、ほとんどの騎が自力移動できるし、死傷者も出ていない。
しかし、それぞれに損傷を理由に戦闘不能と判断され、後退させるしかない状況に追い込まれたのだ。

メサイアは戦車のように前線で整備や修理が出来る代物ではない。整備したければ後方に下げて行う必要がある。
敵は、そんなメサイアの事情を逆手に取った戦術、属に“半殺し”と呼ばれる手法をとってきた。
敵が狙うのは、メサイアの撃破ではない。敵の狙いはメサイアの右腕と股関節だ。
冗談みたいな話だが、構造が人間と同じである以上、ここを破壊されると、メサイアは全く使い物にならなくなる。

赤兎達はそれを狙っている。

それが、ヘルガの意見だが、エレナはその意見を認めていない。

そんなことをしなくても、敵は十分に厄介だ。

武器の性格からして、大破させることが困難で、擱座程度で済んでいるだけだ。

それがエレナの意見だ。

赤兎の武器とは何か？

エレナに言わせると、生身の人間なら死ぬ程度のダメージは与えられる系の武器。

六節棍。

柔軟に鞭のようにしなるが、必要な時には棒としても機能する。

棒系武器のため、どうしても打撃力は低いが、鞭のように曲がる特性によって、予想外の方向からの攻撃が可能で、遠心力を簡単に加えられる分、スピードも速い。攻守共に使える万能に近い武器だ。

赤兎が何回目かの横薙ぎの攻撃をしかけてきた。

後退した大半の騎が、この一撃を戦斧で受け止め、折れ曲がった複数の節を腕に喰らった。

「――――そこっ！」

エレナは騎体をひねってその一撃を回避。敵の脚めがけて“グングニル”を突き出した。

中華系武術が基本動作となる中華帝国軍メサイアの動きは恐ろしく速い。

そして、彼等と対峙した多くの騎士が、その動きに翻弄され、本質的なことを見落として、倒されていく。

エレナは、本能的なレベルで、その本質的なことを理解し、そしてそこを攻めた。

本質的なこと。

それは、如何に中華帝国軍が駆ろうとも、それがメサイアである以上、どうしても脚を軸に動くということだ。

中国人の演舞でよく見かけるあの回転運動や地面を転がる動作を、自重数百トンのメサイアにやれというのは、関節を自ら破壊しようとするのと同じだ。

また、騎士が駆る以上、メサイアの特性である加速は脚で産む。

そうである以上、メサイアの一切の動作は、脚が軸になる。

上半身がどれだけ派手に動こうとも、脚はそうは動かないのだ。

だからこそ、エレナは脚を狙った。

ガンッ！

“グングニル”が右足の付け根に命中し、右足が根本から切断された。

六節棍を振り下ろそうとした姿勢のまま、赤兎が後ろに倒れた。

ほんに一瞬、動きを止めた赤兎だったが、右足を失ったまま起きあがると、六節棍を振り回し始めた。

「大人しくしていればよかったのに！」

“グングニル”が赤兎の頭部を貫通した。

六節棍が赤兎の手から放れ、あさっての方角へ飛んでいった。

「MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）を狙ったのは」

ヘルガが冷たい声で言った。

「私に対する当てつけ？」

「そんなことないです！」

エレナは、新たな敵をみつけようと、周囲を見回した。

「マリア！ルナ！状況は！？」

「ルナよりエレナ騎！マリアがやられました！」

ルナ騎からせっぱ詰まった声で通信が入った。
「コクピット大破！危険な状態、後退を申請中！」
「場所は！？」
「エレナからみて４時方向、距離５００ちょい！敵１騎接近中！」
「そっちへ向かう！持たせて！」
エレナは騎体を４時方向に前進させつつ、苛立った声を上げた。
戦況モニターがブラックアウトして彼我の状況がまるでわからない。
司令部からのデータリンクが使い物になっていない証拠のようなものだ。
おかげで戦況どころか、味方がどこにいるかさえ判然としない。
戦況さえ把握出来れば、こんなことにはならなかったのに！
「ルナよりエレナ！司令部から許可が出ました！マリア騎、後退します！」
「ヘルガ、司令部に増援を要請して！戦況は最悪だって！」
「司令部に増援に回せる戦力があると思う？」
ヘルガは冷静に言った。
「修復に回された騎は３００キロの彼方よ？」
「ハァ……私達も、どっかで破損して後ろへ下がる？」
「そうしたいのは山々だけど」
ヘルガは言った。
「ここにいる歩兵部隊を見殺しにしたって言われそうで嫌ね」
「……同感」

●“アラモ”防衛線最前縁
「メサイアがまだ踏ん張ってくれているから」
「クラウツにしては根性のあるようで」
「ああ」

最も前縁にあたるAラインの塹壕で、C中隊を率いるロバート中佐は双眼鏡から目を離した。
「子供を連れてくれば喜んだろうがな」
「教育上問題です」と、副官のホーバーズ軍曹は言った。
「俺が親なら、あんなのは見せません」
「お前の子供達がこんなところでうずくまっているのは、その教育方針のせいか」
「……なんとでも」
建設途中でハリケーンに遭い、水浸しになったままの塹壕と、砲撃孔を利用したタコツボの中に潜む兵士達は、その多くが下半身を泥水につけたまま、穴の中でじっとしていた。
下手に動くだけで体温が奪われることを知っているからだ。
「中佐」
ロバート中佐の横にいた通信兵が言った。
「師団司令部より連絡。中華帝国軍歩兵部隊が前進を開始」
「中隊に戦闘準備命令。バルカンに電源入れろ。近接防御用の火炎放射器用意」
「了解」

キュイッ

背筋がヒヤリとする音がした。

「来るぞっ！」
誰が叫んだ途端、

ズンッ！

破裂音が炸裂して、小さな爆発が発生した。

それが始まりだった。

ズンッ！

ズンッ！

爆発は段々と近づいてくる。

塹壕だろうとタコツボだろうとお構いなしに降り注ぐ。

迫撃砲なのか砲撃なのかさえはっきりしないし、前線の兵士達にとってたいした問題ではない。

一発の破壊力が高かろうが低かろうが、それに襲われる兵士達にとって、それはどうでもいい問題なのだ。

タコツボから顔を出せば命はない。

それはわかっているが、穴の中で泥だけ見ているのは逆に不安になる。

兵士達は、恐る恐る縁から顔を出しては爆発音に首をすくめた。

銃を握る手が震えるが、どうしようもない。

緊張の余り胃液を吐き出す兵士が続出する。

砲撃に巻き上げられた泥と泥水が空から容赦なく兵士達に降り注ぐ。

砲撃がついに陣地全体を捉えた。

塹壕やタコツボに飛び込んだ砲撃の爆発が、兵士達を引きちぎり、出来の悪い玩具のように宙へ巻き上げた。

その間、兵士達に出来ることは、神様にお祈りするか、罵るか程度だった。

永遠とも感じるが、それでも実際の砲撃時間は3分程度。
地獄の嵐か終わった。

静寂が再びあたりを包み始めた。
せいぜい聞こえてくるのは、衛生兵を求める声か、うめき声だけだ。

「敵が来るぞ！」
メガホンがキーキー割れた音を立てる。
狩野粒子によって無線が使えない状況。兵士達は伝令がメガホンによる情報伝達か頼りだ。

「銃を構えろ！」
別なタコツボに陣取る小隊指揮官の命令に、兵士達は塹壕から顔を出して銃を敵が来るだろう方向へ向けた。
「こりゃ、地獄になるぞ」
「今だって十分な地獄だよ」
「違いない」
兵士達は震えながら銃を握る。
「……あ」
砲撃の煙の向こうに動くものを見た。
目を凝らして、それが人間であることを知った。
こちらに向かってくる人間。
つまり――敵だ。
「あ、あいつらを撃てばいいのか？」
「そういうことだと思うよ？多分」
間抜けな話に聞こえるかもしれない。
だが、彼等はつい先日まで町中でハンバーガーをかじってバカ騒

ぎに興じていた若者達、つまり、志願兵に過ぎない。
銃を握ったこと自体が、訓練を開始して初めてなのだ。
「俺……チビっちゃった」
「勘弁してくれ」
「はやくこのタコツボから出なくちゃ、ションベンまみれになる」
「少し黙れよ。トミー」
「ライアンはよく冷静でいられるね」
「冷静なら」
彼は何故か尻のあたりを撫でた。
「……クソもらしたりなんてするもんか」

中華帝国軍歩兵部隊の動きは鈍い。
足場が悪い上に、どこに地雷が埋められているか。不発弾があるかわからないのだ。

「クレイモア用意！」
小隊指揮官の怒鳴り声に、トミーは塹壕の縁においてあった対人地雷を設置した。
「訓練通り」
自分に言い聞かせるように、トミーは教えられた手順に従って起爆装置をセットする。
「訓練通りにやれば大丈夫なんだから」
「そうだ」
銃を構えながら、ライアンは言った。
「訓練通りにやって、生きて帰るんだ。勲章もらえば就職だって出来る」
「そう……だね」
起爆装置を握りしめながら、トミーは小隊指揮官の命令を待った。
すでに顔がはっきりわかる程、敵は近くにいる。黄色人種はサル

に似ていると言うが、サルよりゴリラに似ているな。と、ライアンは思った。
「まだだ！」
小隊指揮官は叫ぶ。
「よく引きつけろ！無駄弾は――」

ズンッ！

ギャァッ！？

小隊指揮官のタコツボからそんな音がした。
驚いたトミーがタコツボから半ば身を乗り出して見たものは、もうもうと煙を上げるタコツボと、そこからはみ出た格好で転がっている得体の知れない黒い物体――小隊指揮官の死体だった。

「グレネードが飛び込んだんだ」
ライアンにベルトを引っ張られ、タコツボに引き戻されたトミーにライアンは言った。
「やれ！」
トミーは何度も頷くと、手にした起爆装置を手順通り三回、握りしめた。

何が幸運で、何が不幸かわかったもんじゃない。
中華帝国軍歩兵部隊に所属する丁二等兵はその時、泥に足を取られて転んだ。
顔面を泥水に突っ込み。メガネが泥まみれになって何も見えない。
「何やってんだ！」
後ろを歩いていた若い兵士が怒鳴る。

「トロトロしてんな、クソオヤジ！」
中年の坂をかなり上ったところで軍隊から徴兵された彼は、若い兵士からすれば確かにオヤジと呼ばれる年頃だ。
高級指揮官達は丁とほとんど同じ年頃。そんな年頃で二等兵となれば、若い兵士でなくても軽蔑される。
やり場のない怒りを胸に秘めながら起きあがろうとした丁だったが、

ドンッ！

突然の爆発音に驚いて、身を伏せたまま固まったように動かなくなった。

「？」
爆発の音からしばらくの時間が過ぎた。
恐る恐る辺りを見回すと、目の前を歩いていたはずの兵士達の姿がない。
「……あ、あれ？」
味方は、どこへ行ったんだ？

「やったぜ！」
ライアンが歓声をあげた。
「敵はふっとんだ！」
まるでお気に入りの野球チームがリーグ優勝したかのようにガッツポーズまでとるライアン。
その横で、新しいクレイモアを用意しながら、トミーは言った。
「まだ……来るよ」

「第一波、全滅！」
「だからどうした！」
前を進む部隊がクレイモアに吹き飛ばされた光景に悲鳴をあげた兵士を、指揮官は怒鳴りつけた。
「数ではこっちが勝ってるんだ！ツベコベ言わずに前に出ろ！」

北米戦線編　第十話

●アメリカ合衆国　シカゴ　ドイツ軍宿舎

エレナ達の部隊は、ほぼ全滅に近い損害を出したことでようやく後退が認められた。

シカゴ付近に展開する飛行艦に収容されたエレナ達と入れ替えに、ゼックス小隊、ノイン小隊が前線に向かった。

騎体の整備が開始され、騎体を整備部隊に引き渡したエレナ達は、宿舎に指定されたホテルに入った。

数日ぶりのシャワーを浴びたエレナは、それだけでホクホク顔だ。

ヘルガの強い希望により、部屋で食事を済ませるように強く命じられたエレナは、鼻歌を歌いながら、注文したピザトーストにトッピングをしている。

薄くスライスされたトーストにトマトソースをかけてサラミやチーズをふりかけるまではいい。

問題はそこからだ。

「……ねぇ」

ヘルガは努めて平静さを維持しながら訊ねた。

「それ、何？」

「キムチ。白菜って野菜を漬けたものよ？」

「……へえ？」

「これに、マヨネーズをたっぷり塗って」

次にエレナがトーストに乗せたのは、ピンク色をした得体の知れない物体だった。

「それは？」

「塩辛。イカの漬け物。これにオイルサーディンをのせて蜂蜜かけて完璧よ」

ガタッ

不意にヘルガが席を立った。

「どうしたの？」
「ちょっと……トイレ」

「白兵戦は一段落ついたそうよ」
ヘルガが戻った時には、エレナは食事を終えていた。
ヘルガ用にも作ったというピザトーストをヘルガは固辞したのは当然だ。
ヘルガはホテル自慢のコーヒーを楽しみながら言った。
「凄まじいことになったそうよ？」
「白兵戦なんて、そんなものでしょう？」
「互いに銃がスコップに変わって殴り合いになって、スコップがナイフや石、そして拳に代わり……」
「……」
「お定まりの血まみれ地獄の出来上がり」
「……神様」
エレナは祈るように膝の上で手を組むと瞑目した。
「私達に阻止が出来たとはいわない。乱戦になれば、メサイアに出来ることはない。なにより、人海戦術に対抗できる装備は、あの時点では前線に配備されていなかったから」
「戦線の状況は？」
「前線は何とか維持している。でも、補給線が空爆で寸断されて、補充が思うようにいかないらしくて。飛行艦隊が危険を冒して物資の輸送を試みているそうよ」
「あの泥濘は悪夢よ。日差しも強いし」
「別部隊がＭ４０火炎放射装置を装備して前線で動いているから、少しは変わるわよ」
「敵の掃討に？」
「いえ」
コーヒーカップを握るヘルガの手が止まった。
「前線の焼却が必要なの」

「焼……却……？」
「疫病よ」
「まさか！」
「詳しくは知らないけど、病原菌を持った中華兵の死体から派生したらしい。媒体は蚊や蠅。そしてネズミ。感染した場合の致死率は３０％程。脳みそやられるって。前線ではすでに数百人が感染している。さらに後方に下げられた負傷兵が市民に対する媒介になったケースも」
「何で……そんなことに……」
「泥濘に半ば埋まったままの死体が腐敗を始めている。死体に蠅がたかって、ひどい所は息が出来ないほど異臭が立ちこめて息が出来ない程。
ところが、回収作業は、互いの狙撃兵を恐れて回収が思うように行っていない。
そこに病原菌が繁殖する仕組みね。
とどのつまり、この厄介者をまとめて始末したいから、衛生上の理由から、戦場を焼き払うって寸法よ。広大な前線全てに消毒液や殺虫剤ってわけにもいかないからね」
「護衛はゼックス小隊が？」
「ヴェラ中尉は無能ではないわ。フォイルナー少佐の下に無能はいない」
そこまで言って、気がついたようにヘルガは小さく言った。
「味音痴のバカ一人をのぞいて」
「何よ！」
エレナは言った。
「私はおいしい食べ方知ってるだけよ！」
「……前線でフォイルナー少佐にそれ出してご覧なさいよ。少佐からどんな評価受けるか知れたもんじゃない」
「ううっ……って？」
あれっ？という顔でエレナは訊ねた。

「少佐が来るの？だって、少佐は今」
「マラネリがデュミナスの引き渡しにようやく応じたのよ。少佐とクレッチマー中尉がテストに派遣されていたけど、騎体と共に、最終評価のために前線に入る」
「いつ？」
「明後日には来るはずよ？」
「ど、どうしよう！」
エレナが真っ青になって立ち上がった。
「何の準備もしてない！化粧品とか香水とか！」
「あんたって、変な所でマトモなのよねぇ」
ヘルガは呆れた様子で言った。
「落ち着きなさい。出会うのは前線。しかも、エレナが面と向かって二人きりになる機会は、ありえない」
「そんなことない！」エレナは力説した。
「何かの間違いってことだってあるでしょう！？」
「その言葉が出てくるあたりは、どうなのかしらねぇ……とりあえず、クレッチマー中尉とあんたじゃ、最初から勝負になってないことは確かね」

●大西洋上　マラネリ王国

大西洋上に存在するとある島に、ダイヤモンドを基幹産業に据える王国がある。
名をマラネリ王国という。
小国でありながらも高い経済力と科学力を持つこの国は、この混迷の状況において、世界の注目を集める国となっていた。
メサイアの開発と輸出において世界最大手の一つに数えられているためだ。

マラネリ王国軍基地。
そこには、2騎のメサイアが並んで立っていた。
漆黒の黒と、純白の二色に塗り分けられた2騎の肩は、テスト騎を示すオレンジに塗られ、国籍マークは、マラネリ王国軍となっている。
まるで西洋の塔を思わせる高いホーン・マストが特徴的なメサイア。
名をデュミナスという。
「貴国のご協力に感謝します。陛下」
その足下で、独軍の軍服を身にまとう男が敬礼した。
銀髪に褐色に日焼けした肌を持つ男。孤高に生きる野生の狼さながらの印象さえ受けるその男は、ヴォルフガング・フォン・フォイルナー少佐という。
独軍のアフリカ奪還作戦の最も初期から一貫して戦闘に参加。“黒狼”の異名を世界にとどろかせた男だ。
「陛下はやめて欲しい」
敬礼を受けたのは、彼の前に立つ少年。
いや、少年という言葉自体が不釣り合いなほど幼い、ほんの１０歳くらいの小太り気味の男の子。
「僕は殿下と呼ばれたいのでね」
「……失礼。殿下」
１０歳の子供とは思えないほど、しっかりとした物言いは、かなり堂に入っている。
それも当然だ。
フォイルナー少佐の目の前に立つのは、この国の少年王だ。
他国の一介の軍人に過ぎない少佐に非礼は許されない。
少佐は、戦場育ちの無粋さを感じさせない、軍人らしい動作で非礼を詫びた。
「いい。よく間違われるんだ。殿下という呼び名自体、僕のワガマ

マに近い」
「……」
「フランスもロンギヌスを改修させる所だし、この騎がドイツの役に立ってくれることを願うとしよう」
「フランスがロンギヌスを、ですか？」
「初耳か？」
「はい」
「そうか……フランスも日本戦線で魔族軍のメース相手に大敗を喫し続けている。戦線の状態は大変興味深い。僕も知り合いの“見通者（シーカー）”仲間を通じてデータを手に入れるため、近々、戦線に向かう予定だった」
殿下は、その時、おや？という顔になった。
「少佐達は日本には？」
「いえ」
「ということは、メース相手の戦闘はまだ、か」
「はい」
「魔族軍のメースについてはどう思う？」
「未知数……としか言い様がありません」
少佐はよどみなく答えた。
「かなりの性能とは聞きますが」
“見通者（シーカー）”仲間では、僕に次ぐ実力者が日本にいてね？彼女の分析ではロンギヌスやグレイファントム、スターリンといった平均的メサイア相手では、比較にもならないそうだ。興味深いだろう？」
ピクリ。と、少佐の眉が動いた。
「戦斧なんかで割れる装甲はどこにも装備していないバケモノ。それがメースだ」
「……」
「フランスはロンギヌスの改良版、アジュールで対メース用兵器の運用を可能にした。
後で見ておくといい。

フランスからは、他国に見せるなとは言われていない」
「……感謝します」
「うん。さて」
チラリと、目の前に立つメサイアを見上げ、殿下は言った。
「こいつの感想は？」
「語る言葉が思いつかない」
少佐は、はっきりと言葉を選ぶ様子で言った。
「それほど、優れた騎です」
少佐の横に立つ副官、ブリュンヒルデ・クレッチマー中尉は、彼が興奮していることをそれで知った。
「パワー、機動性、共に……その」
普段からは考えられないほど、少佐は興奮し、それだけに言葉を上手く舌に乗せられずにいるのがはっきりわかる。
「……君は」
フンッ。
殿下は悪戯っぽく言った。
「女の子を口説くのは苦手そうだな」
「……」
少佐が絶句した顔になった。
「気にしなくて言い。褒めているのだ。僕は多弁なヤツより、君のような木訥な方が好きだ」
「……はっ」
「カイザーには、この騎をノイシアの後継騎として正式に採用して欲しいという願いがあるし、僕にも僕で意地がある」
殿下は少佐を見た。
「僕は君が気に入っている。
君のような英雄には、平凡な騎に乗って欲しくない。
何より、この僕が、君達のような英雄の座乗騎を生み出したとなれば、それはそれで名誉なことだ」
「……面はゆいお言葉です」

「事実だよ。デュミナスは、僕達マラネリがドイツ軍に引き渡すことの出来る最高傑作と言って良い。その言葉に偽りはない。信じてくれ」
「……はっ」
フォイルナー少佐は、姿勢を正して敬礼した。
「皇帝陛下と独国民に代わり、デュミナスをいただけることを感謝いたします」

数時間後――
少佐達の乗ったTAC（タクティカル・エア・カーゴ）が基地を離陸した。
「行きましたね。殿下」
「うん」
遠ざかっていくTAC（タクティカル・エア・カーゴ）を見送りながら、殿下は小さく頷いた。
「僕は僕でやるべきことはやっているはずだ。後は、あの二人がどれ程派手に扱ってくれるかにかかっている」
「それにしても殿下」お付きの武官が不思議そうな顔をして訊ねた。
「今回は、随分と大盤振る舞いですね」
「何が」
「デュミナスですよ。少佐達は知らないでしょうけど、採用通知を受けるより量産を先行させているし、騎体価格も抑えている。既に第一ロット分、12騎がロールアウト寸前ですよ？」
「当然だ」
殿下は言った。
「この先、メサイアはどんどん足りなくなる。消耗に補充が追いつかなくなるのは目に見えている。ドイツが買わなくても、他が買ってくれるだろうさ」
「成る程？」
「少佐達の先行量産型と違い、無駄に近い可変収納装置をオミット

した分、生産単価も整備性も格段に改善されている。パワーはまぁ……僕の読みが正しければ、量産騎の方がエンジンがエンジンだから」

「絶対無敵、常勝無敗――そんなところですか？」

「莫迦な」

絶対無敵

常勝無敗

騎士達なら誰もが憧れる言葉を、殿下は鼻で笑った。

「そんなもの造ったら、商売あがったりだ。適当な所で倒れて、次の注文が来るようでなければならない。一回商えば次がない。それじゃ、投資が回収できるか。馬鹿者」

「目標は、量産数の確保ですか」

「当然だろう？僕達は、ビジネスでメサイアを建造しているんだぞ？」

●シャウニー国立森林公園付近　最前線

戦線の状況は一言で語れる。

最悪

もう、タコツボに潜んでいることさえ出来なかった。

米兵達が泥まみれになって掘ったタコツボのあった辺りは、中華帝国軍が占領していた。

この時点で、両軍の戦いは、それまでの米軍陣地を1メートル単位で奪い合う戦いに陥っている。

兵士達は、ちょっとした地形の起伏を塹壕の代わりにして、相変わらず泥にまみれて戦っていた。
その日は、夜のうちに増援を確保した中華帝国軍が、夜明けと同時に前進を開始。
対する米軍は、夜の内に空中投下された物資にまじっていた対空機関砲をやっと組み上げ、陣地に据え付け待ちかまえていた。
兵士達から“ファンファーレ”とバカにされる程、いい加減で散発的な砲撃戦が数回行われた後、何も知らずに前進を開始し、対空機関砲の洗礼を受けた中華帝国軍歩兵部隊は壊滅的打撃を受け、一時的に撃退されたのは事実だ。

中華帝国軍の逆襲は、夜の雨の中、開始された。

塹壕に据え付けられた機関銃になぎ倒されてなお、中華兵達は、友軍の死体を乗り越え米軍に肉薄。
機関銃と共に逃げることが出来なかった米兵達は、中華兵の銃剣にメッタ刺しにされて息絶えていく。
米軍は、死を恐れぬ中華兵を前に、散弾銃と火炎放射器を大量に投入。中華兵のそれ以上の浸透を食い止めようと躍起だ。
日付変更までに、陣地半ばまで浸透した中華兵は、迫撃砲と歩兵携帯型のグレネードランチャーを駆使して米軍陣地を攻略する。
互いの距離が手を伸ばせば届きそうな距離になった途端、それは銃撃戦から肉弾戦へと表現が変わった。
乱戦となり、銃が満足な意味を為さない戦いが始まったのだ。
マガジンが空になった銃を逆手にもって相手をぶん殴る。
倒れた所を馬乗りなって何度も殴りつけ、息の根を止める。
戦いというにはあまりに生々しい、残虐な、人間がむき出しの殺意だけを理由に互いを喰い合う、殺しあいの世界。

その戦いでライアンが知ったことは、戦場で一番役に立つ武器は

スコップだという真実だ。

国旗や部隊章のモチーフに剣や銃をあしらう話はよくあるがとんでもない。俺なら断然、スコップを押す。

ライアンは本気でそう思う。

泥まみれの自動小銃には、先が曲がった細い槍が取り付けられている。

正式な銃剣、Ｍ９バヨネットではない。

Ｍ９は腰のホルスターに差し込んで、いつでも抜けるようになっている。

では？

バーベキューの串だ。

空中投下された物資の中に何故か混じっていた４０センチ程の串の束。

イベント用の物資が何かの間違いで混じったのだろう。

指揮官は廃棄を命じたが、兵士達は、それをこっそり束から抜き取ると、夜通し石と水で先端を研ぎ、小銃に針金やテープなど、思い思いの方法で銃にくくりつけた。

兵士達が気にしたのは、その長さだ。

中華帝国軍兵士の持つ小銃は、米軍兵士達のほとんどが有するＭ４カービンと比較しても１０センチ以上長い。

銃剣戦闘で長さの違いが、実際の殺傷力云々に影響することは少ないとはいえ、長さが違う。その見た目が、兵士達に明白なまでの心理的不安を引き起こしたのは事実だ。

中華帝国軍兵士の死体の側に転がっている、彼らの銃や銃剣を後生大事にしている兵士も少なくないのはその為だ。

そんな銃を入手出来なかった者。もしくは、敵の銃を使用することを拒絶した者は、現状に従うが、或いは自らの発想で工夫することを余儀なくされた。

ライアン達がやったのは、そんな工夫だ。

幸い、米兵と違って中華帝国軍兵士はボディアーマーを着用していない。

相手の銃剣が突き刺さっても、最悪なことがなければ死ぬまではいかない米軍兵士達に対して、中華帝国軍歩兵はその一突きが致命傷となる。

バーベキューの串を2、3本束にして殺傷力を上げる工夫をしている者もいたが、ライアンはやっていない。

彼が手に出来た串が1本しかないからだ。

「クソがっ！」

「来いっ！来やがれグーク！俺様が相手だぁっ！」

耳障りなほど、甲高い雄叫びをあげて突撃してきた兵士へ向けてM4のトリガーを引く。

もんどり打って倒れた敵に意識をとられている余裕はない。ちらと横を向けば、そこに別な敵がいるのだ。

敵がどこから来るかわからない。

別な死角から襲ってきた中華兵達が、塹壕の中に躍り込んできた。

「おらぁっ！」

別な兵士の背中に銃剣を突き立てた中華帝国軍の兵士に背後から襲いかかり、スコップを振り下ろした。

頭があり得ない位にベッシャリと潰れ、兵士が米兵の死体の上に倒れた。

「ライアンッ！」

ガンッ

鈍い音がして、ライアンが背後を振り返ろうとした。何かが背中に覆い被さってきた。

中華帝国軍の兵士だった。
慌てて突き飛ばしたが、完全に死んでいた。しかも、目玉が飛び出している。
「だ、大丈夫？」
見ると、トミーが大きな石を両手で持ってこちらを心配そうに見つめていた。
「やったのか？」
「う、うん」
トミーは石をその場に落として、兵士の死体から銃を奪った。
「とっさにやったんだ」
「サンキュ」
ライアン達は近くに開いた穴に身を潜めた。
敵と味方が入り交じっている上に、皆が泥まみれだから敵味方の区別が付きづらい。
下手にウロチョロしていたら味方に殺されかねない。
トミーは、どこからか機関銃を取りだした。
「どうしたんだ？」
「チンクの死体から奪ったんだ。弾薬もあるよ」
トミーは、自慢げに弾薬箱からベルトリンクにはまった弾薬を取りだして見せた。
「よし」
ライアンは、トミーから銃を受け取った。
新たな敵がこちらにむかって殺到しつつあるのが見えた。
「機関銃は得意だったな」
「任せて！」
トミーは、そう叫ぶと機関銃のトリガーを引いた。

●米国　ヒューストン　中華帝国軍北米討伐軍総司令部第一作戦会

議室
「総攻撃の許可を下さい！」
参謀の一人が目を剥いた。
「北部攻略には機甲部隊もメサイア隊も、全然足りていないんです！」
その通りだと、他の参謀達も思う。
突然、本国から命じられたテキサス州攻略命令。
その本当の狙いがなんなのか、理解どころか聞いたことのある者は、ここにはいない。
意味の分からない作戦に戦力を奪われ、中華帝国軍は機能不全に陥っていた。
「ハリケーンの影響による進撃速度の低下に加え、テキサス方面での無意味な小競り合いのせいで、兵力の補充率はガタ落ちです！」
「――わかっている」
煩わしい。という顔でそっぽを向いたのは、北米討伐軍総司令の銭大将。
載賢の腰巾着の一人で、軍内部の政治力だけで出世したような男だ。
軍事的な知識は、その立場からすれば信じられないほど浅い。
「本国からの命令だ。貴様は私の命令にしたがっていればいい」
「しかし！」
「本国からの補充兵は手配したんだろう？なら来るはずだ」
「教えて下さい。閣下」
参謀は訊ねた。
「テキサス方面への侵攻の目的は？」
「テキサスを占領した後に明らかにされるだろう」
「そんな無責任な！」
「うるさいっ！」

銭大将は怒鳴った。
「四の五の言わずに戦果をあげろ！戦果を上げない者がこの場で発言するな！」

●同施設　喫煙室
「まぁ、気にするな。毛」
先程の参謀に、同僚が言った。
「お前が戦果を上げられないのも、機甲部隊をテキサスに根こそぎ運んだ司令の責任だ。まあ、実際の運用は俺達の仕事で、あのアホが口出しさえしなければ万事上手くいくんだがな」
「司令はなんだってテキサスに拘るんだ？」
「そりゃお前」
ホウッ。
同僚の江参謀は紫煙を吐き出しながら言った。
「中央のウケのためさ」
「ウケ？」
「ご命令の五大湖攻略のために兵力を集結中です！この一言を報告書に書き込むためさ」
「実際――あの馬鹿野郎がそんなことして、テキサスで戦果があがっているのか？」
「当たり前だ」
江参謀は笑って肩をすくめた。
「アメリカ軍はテキサスを放棄した。兵力をニューメキシコとの州境に移動中」
「やけにあっさりと手放したな」
「メサイア部隊の強襲作戦が功を奏した。テキサス州スウィートウォーター付近に陣取っていた米軍部隊は、ビックスプリングスを占領されたことで補給線を断たれ、昨日の包囲突破作戦を敢行しメキシコ州境にあるシエラブランカへ後退。この戦いで敵に与えた損害

はハンパではないぞ」
「ウチの受けた損害もハンパではない。の間違いだろう」
毛参謀は床に落ちたタバコの灰を軍靴でもみ消した。
「言え。どれくらいの損害を受けた」
「……北部から回した機甲部隊は全滅。歩兵は最低でも4割が使い物にならん。メサイア部隊は3割弱だ」
「そんなにか！」
「米軍のエース部隊“ソルティドッグ”達を相手に善戦したと褒めるべきさ。
実際、ソルティドッグ達の半数近くを撃破した。
エース部隊を失い、志気はがた落ち。米軍の防衛能力はかなりそぎ落としたはずだ」
「だと良いがな」
毛はポケットから新しいタバコを取りだした。
「本国からメサイアはいつ届くか知っているか？」
「あのばからしい騎士動員令が解除されてそろそろ1ヶ月。メサイアに騎士が戻って訓練して」
「ああ。あのアホな法令、解除になったのか？」
「当然だ。皇帝陛下は最初からあの動員令には反対の立場だ。騎士達をメサイアに戻させて、動員令作った部署は家族もろとも――」
江参謀は、楽しげに自らの首を絞めるフリをした。
「当然だな」
タバコにジッポの火が移り、ジッポ独特の匂いが微かに匂う。
「騎士不足に泣かされていたメサイア部隊は、戦力のかなりを復旧させた。そして一般騎士向けの飛鼠（ひそ）も大量増産が進んでいる」
「問題は、その大量増産の結果が、ウチにどれだけの恩恵を与えてくれるかだ」
「あのバカ司令」
江はテーブルに置いてあったコーラの缶に手を伸ばした。
「一つだけ評価出来ることがある」

「あるのか？」
「あるさ」江参謀は楽しげに頷いた。
「仕事を全部、部下に丸投げすることと、戦果さえ上げれば何も言わないってことだ」
「それ、いいことなのか？アイツは無能な上司の典型例だぞ」
「そのおかげで、俺達参謀は、勝てる作戦を立てることが出来る。皇帝陛下とのパイプが太いあのバカに配慮して、軍司令部も大きくは出てこないしな」
「……成る程。それで？」
「明日からの便でメサイア部隊が大量導入される」
「おいおい。本国は大丈夫なのか？」
「ロシアは動かない」
江参謀は言った。
「動けない。とも言う」
「何？」
「ラムリアースとカザフ周辺の国境問題が再燃した。アフガニスタンでは英国軍と睨み合い。日本海では、日本領内に展開した魔族軍のバケモノ城を警戒して、うかうか我が国に攻め込むようなことは出来ないのだ」
「ＥＵ軍だっているぞ？」
「あいつらはもっと動けない。東南アジアの所有権を巡って水面下で激しい外交合戦の真っ最中だ。軍事行動なんてとろうものなら、足並みが揃わなくて自滅することは、あいつら自身が理解していることだ」
「……はぁっ」
毛参謀は軍帽を脱ぐと、すっかり薄くなった頭を撫でた。
「難しい世界になったな……俺の頭はいつまで耐えられるんだ？」

北米戦線編　第十一話

●ペコス川防衛線C陣地

ニューメキシコ州内のサングレ・デ・クリスト山脈南部やサクラメント山脈に源を発し、同州の東部を南流してテキサス州に入り、リオ・グランデ川に合流する。本流の長さ約１０００キロメートルに達する河川がペコス川だ。

中華帝国軍の物量に負ける形でテキサス州放棄を余儀なくされた米軍は、ここに防衛線を構築していた。

ブロロッ

活気のないディーゼル音を残して橋を超えたのはスクールバス。

中には疲れ切った人々がすし詰め状態で乗せられている。

テキサス州から脱出できた避難民達だ。

難民達を乗せた最後のトラックが川を超えた。

テキサスがアメリカの支配から離れたことを、如実に証明してくれる光景だった。

まるで彼等を見送ったように、太陽が地平線の彼方に沈んでいった。

漆黒の闇の中。

遠ざかっていくトラックを後目に、工兵隊が橋に爆薬を仕掛けている。

「ひでえもんだ」

肩を赤く塗ったメサイア達が、その光景を見守っている。

あのソルティドッグ部隊の残存部隊。

かつての隊長であるターナー中佐はすでに戦死。副長であるサイモン大尉が部隊を率いていた。

３倍の敵を道連れに半身を失ったビッグスプリング包囲網突破戦

で、ターナー中佐は志願する部下と共に現地に喰いとどまり、市民の脱出を支援し続けた。
　鬼神の如き戦いで敵をなぎ払い、機甲部隊を含めて４回に渡る波状攻撃をわずか８騎でくい止めたターナー中佐以下、決死隊の犠牲がなければ、部隊どころかテキサスの避難民達は誰一人としてここにいることはなかったろう。
　その犠牲の元、不朽の栄誉を与えられた部隊を率いることは、サイモン大尉には少しばかり重荷だった。
「サイモン隊長」
　ＭＣ（メサイア・コントローラー）のサントス少尉が言った。
「定時データ入ります。空軍の爆撃部隊がビッグスプリング付近の爆撃開始――爆撃部隊護衛機より入電！〝我、メサイア部隊を発見せり！〟」
「場所は！」
「距離約５０キロ！」
「そいつに敵の詳細を教えてくれるよう頼んでくれ！」
「……無線、途切れました」

●中華帝国軍先遣部隊
　オレンジ色の炎を吐きながら戦闘機が墜落していく。
　暗視カメラが捉えた映像を見る限り、あのパイロットは助からない。
　ムスタングを含むプロペラ機は射出座席を装備していない。
　錐もみ状態に陥ったパイロットはコクピットに張り付けられたまま、最後を迎えるしかない。
「派手な花火だ」
　赤兎を駆る騎士の誰かが呟いた声が通信の中に入った。
「戦勝の前祝いさ」

「違いない！」
米軍最強と言われたソルティドッグを撃破したことで、メサイア部隊の志気は最高潮に達している。
「全騎へ」
第４５２メサイア隊を率いる高大尉は、浮き足立つ部下を叱るような口調で言った。
「気を引き締めろ。遊びに来ているわけじゃないぞ！」
全く。
高大尉にとって、昨日の戦いは悪夢だった。
作戦に参加した４４９、４５１の二つのメサイア隊は壊滅。たった８機のピケットを突破するのにメサイア２５騎、戦闘車両７５両を喪失したなんて、勝ち戦とは言わない。
あれで勝ったと浮かれる事の出来る部下の神経が、高大尉には理解さえ出来ない。

しかも、これからの戦いは渡河作戦だ。

半端な犠牲で済むとは全く思っていない。
北部戦線は泥濘に足を取られて惨憺たる損害を被り続けているというが、それと同じような事態を一時的とはいえ余儀なくされるのだ。
それが、部下にはわかっていない。
――――まぁ、いい。
高大尉は首を軽くふった。
恐慌状態に陥られるより余程ましだ。脱走なんてされたら最悪だ。

●ペコス川防衛線Ｃ陣地
「増援？」
「メキシコ経由で接近するＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）があります」

「所属は」
「ドイツ軍です」
「クラウツが何の用だ」
「ですから、増援ですって」
サントス少尉は通信モニター上で呆れた。という顔をした。
「ドイツ軍、第４４メサイア機甲大隊所属、ヴォルフガング・フォイルナー少佐です」
「……何？」
サイモン大尉は動きを止めた。
「ヴォルフガング・フォイルナーっていえば、あの“アレキサンドリアの７英雄”の一人じゃないか」
「同姓同名の軍人が他にいるとも思えないのですが」
「騎数はどれくらいで来た？」
「２騎です」
「２騎？たったか！？」
「はい」
「――よし」
サイモン大尉は言った。
「その数の少なさが逆に信じるに値する。伝えてくれ。英雄の到来に感謝すると」

●マリネラ軍ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）、ＺＣ－４５６ハンガー
「よろしいのですか！？少佐！」
「調整は終了しているのだろう？」
「無論です」
天井と床に設置されたメサイア用ラックに、搬送モードで固定された２騎のデュミナスだ。
１騎が黒に、別な１騎が白に塗り分けられていたが、ハンガー内

を照らし出すオレンジ色の照明のせいで色がはっきりとしない。
ただ、独軍を示す国家識別マークと、そして二人の所属する部隊章は規定の場所にくっきりと描かれている。
そのエンブレムを描き終えたばかりだという整備兵が、ムッとした顔で言った。
「今のままでも、妖魔の群れの中にだって飛び込めますよ！」
「なら、いいだろう」
フォイルナー少佐はコクピットに潜り込んだ。
「君たちはこのまま飛行を続けてシカゴへ向かい、我が軍へ荷物を届けてくれればいい」
「私もこの仕事、長いんですがねぇ！」
艦橋を出て、見送りに来た艇長が腰に手をやって言った。
銀髪に豊かな髭を蓄えた老年の紳士。
その外見と貫禄は、こんなちっぽけな艦の船長より、大型客船の船長が似合う海の男を彷彿とさせる。
存在するだけでベテランの船乗りと語る、そんな男だった。
「お客さんを空中で落としたなんて、初めてですよ！」
「飛び降りるお客を乗せたことが、ではありませんか？」
そりゃそうだろう。と、ブリュンヒルデが楽しげに言った。
「失礼。隊長はもう、実戦を前にすると“ああなる”んです」
元々ぶっきらぼうな人物だったが、今やそれに輪がかかっている。
「何を言っても無駄。隊長の頭には、敵を撃破することしかないのですから」
「――まぁ、お客様のワガママには慣れてますがねぇ」
戦いを前にした騎士達の邪魔をすることがどれ程の問題行動かを、艇長は軍人として知っている。
「後で文句言わないで下さいよ？」
「当然ですわ」
ブリュンヒルデは、開かれたハッチからしなやかな動きでコクピットに潜り込む。

「私がついてますから」

「ヨハンか？やるぞ！」

ハンガーの端に据えられた艦内通話を開くなり、艇長は怒鳴り声を上げた。

「後部ハッチ開け！」

「マジでやるんですか！？」

若いパイロットはギョッとした声を上げた。

「お、俺ぁ、知りませんよ！？」

「お客のご希望だ！お前の責任じゃない！」

「信じますよ！？」

「お客が無事に飛び降りるまでは別だがな！」

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の後部ハッチが開き、メサイアを固定していたメサイア用ラックの移動レールがハッチから外へと伸展する。

ハンガー内はメサイア２騎のエンジン起動音で鼓膜が破れそうな程の喧噪に包まれている。

「こちらＺＣ－４５６艦橋。フォイルナー少佐騎。聞こえますか？」

「こちらフォイルナー。感度良好だ」

「射出準備完了。現在、本機は米軍ペコス川防衛線Ｃ陣地に向け、毎時５５０キロで接近中。現在距離１０８キロ。敵航空勢力は周辺に確認されていません。気象データ、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）へ転送完了」

「……ヒルデ、そちらはどうだ？」

「準備完了。いつでもやれます」

「よし――やってくれ」

「了解。最終確認。ハンガーロック解除後は空中投下となります。フォイルナー騎射出から５秒後にクレッチマー騎射出。よろしいか？」

「頼む」

「了解。フォイルナー騎、ハンガーロック解除！」

バンッ！

フォイルナー騎が凄まじい勢いでハンガーの外へと消えていった。

「続いてクレッチマー騎！」

しっかり五秒後にブリュンヒルデ騎が闇の中へと消えていく。

「射出完了。ハンガーロックを回収し、ハッチ閉めます」

「やれやれ……」

待避スペースでコクピットからの報告を聞いた艇長は肩をすくめてみせた。

「友軍は千キロ近く遠くだっていうのに……一体、ドイツ人ってのは、何を考えてるんだか」

常春の国と呼ばれるマネリラ王国の国民は、その気候故か、おおらかだと言われる。

艇長も、船については細かいが、その民族性故か、リスクは回避する性質が身に染みついている。

何より、フォイルナー少佐のように、自ら火中に飛び込むようなマネは、普通の船乗りはしない。

物好きにも程がある。

やれやれ……。

ハッチが閉まったのを確認すると、艇長はもう一度、肩をすくめて艦橋に向かって歩き出した。

「厄介事に首を突っ込むのはバカだと思うがね……」

大西洋に存在するマネリラ王国からシカゴへ向かうなら、大西洋を北上して、カナダ経由で大きく迂回する方が利口だ。

だが、フォイルナー少佐は何故か、メキシコ湾経由で内陸部を通ることを求められた。

彼自身、その命令の意味を理解しかねていたが、今の事態を考えると、成る程と思う。

ジョージア方面は小競り合いが続いているものの、下手な軍事介入はむしろ政治的に厄介な事態が予想される。

ならば、苦境が伝えられる中西部方面の戦線を経由させる方が、介入の口実も得やすいし、文句を言われる筋合いもなくなる。

新型騎のテストなどというと、アメリカが素直に受け入れるとも思えない点も含めて、フォイルナー少佐には異存はない。

実際、またとないチャンスを与えられた。

「騎体、姿勢制御ブースター作動。速力低下中」

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）のイルフリーデ・シュヴァルツ中尉の声を耳に、フォイルナー少佐は五感を満たす満足感に浸りきっていた。

「……凄まじいな」

アイドリングに近い状態ですでにパワーはノイシアの戦闘出力と同等。

メサイアを馬に例えたら、ノイシアは農耕馬。デュミナスは戦闘馬（ウォーホース）だ。

新型のＳＴＲシステムは、ノイシアでは諦めていた微妙な動きを寸分無くトレースしてくれる。

スクリーンの解像度も一桁違う。

デジタル処理されたスクリーンは、漆黒の闇夜を昼間同然のクリ

アな世界に切り替えてくれる。
ノイシアでは絶対これは無理だ。
「技術では」
それが、フォイルナー少佐は嬉しくもあり、どこか悲しくもあった。
「我が国は世界に冠たる国と信じたいが……」
そう。
これはドイツ製ではない。
マネリラ王国製だ。
「戦争なんてやってるヒマがあれば、産業振興と教育にこそ、金を費やすべきと信じたいのだが……」
MC（メサイア・コントローラー）による飛行に身を任せながら、彼は呟いた。
「こいつの前では、口には出せんな」

●ペコス川防衛線C陣地
敵がペコス川を渡河して攻め込む動きを見せている。
その知らせをうけたソルティドッグは、敵を阻止するために川岸へ移動。戦闘態勢を整えていた。
TAC（タクティカル・エア・カーゴ）が上空を通過する少し前に、2騎のメサイアらしき物体が空中に投下されたのは、サイモン大尉達も確認している。

メサイアらしき物体。

何故、こんな表現をするか。

それには理由がある。

「今の、何だ？」

サイモン大尉がサントス少尉に尋ねた。
「俺には出来損ないの人形細工に見えたがな」
「私には……スクラップに見えました」
はっきり酷評だ。
関節がほとんどわからず、頭と首の区別がつかない。
カメムシに象脚をくっつけた所でここまで酷くない。
外見は、そんな感じだ。

そんな物体が、ペコス川の向こう側に降り立った。

「おいおい……」
サイモン大尉はあきれ顔で首を左右に振った。
「自殺志願者か？サントス少尉。連中と通信開けるか？」

「チャンネルは確認しています」

「よし。開け……あーっ。聞こえるか？独軍」
サイモン大尉は、帝国語で呼びかけた。

「……聞こえている」
男性の声が、すぐに返ってきた。通信モニターに映像は映らない。
伝説の英雄、フォイルナー少佐の顔を拝めないのが残念だと、そう思った。

「こちらは第２４戦略メサイア大隊。助太刀には素直に感謝する。
現在、敵メサイア部隊が接近中。
数は２０騎以上。
その後ろには機甲部隊が控えている。
その……失礼だが」

「こちらの岸については、我々が面倒を見させていただこう」
そっけない答えに、随分ぶっきらぼうな奴だな。と、サイモン大尉はそう思った。

「大丈夫か？無理をしない方がいい」

「……我がフォイルナー家の家訓は“火中に真実を求めよ”だ。この程度は問題にもならない。通信を終える」

「あっ！おい！」
モニター上に通信が切れた表示が出た。
「なんてヤツだ」
サイモン大尉は憮然として顔をしかめた。
態度が悪いにも程がある。
「英雄ってのは、どうしてこうも気むずかしいのかね！」

ペコス川の向こう側に降りた2騎のＭＣＲ（メサイア・コントローラー）では、ＭＣ（メサイア・コントローラー）達が規定された準備に取りかかっていた。
パワーゲージがようやくコンバットモードに引き上がった。
飛行艦を使わずに騎体のＡＰＵだけで騎体を動かそうとすれば、どうしても時間がかかる。
「パワー上昇確認」
イルフリーデはそのしなやかな指でパネルを叩く。
「輸送用アーマー固定装置解除！」

その瞬間――

「……へ？」

唖然とするサイモン大尉達の前で、２騎の騎体のあちこちがバラバラになり始めた。
各部のパーツが外れて留め金でやっと落下をくい止めたようにサイモン大尉には見えた。
「独製ってのは、あんな不良品の集まりか！？」
「というか」
サントス少尉は首を傾げた。
「ライブラリに該当する騎がありません。あの騎が一体、何なのか不明」
「類似するものは？」
「７５％の確率で類似性が確認出来る騎は一騎です」
「何だ？」
「デュミナスです」
「デュミナス？」
「マネリラ王国が去年、ヴァチカンへの売却交渉に失敗した騎です」
「あれはペーパープランだけのはずだが？」
「ドイツ皇帝の依頼で試験騎が建造中と噂が」
「目の前にあるのが……それか」
サイモン大尉は思わず唸った。
「あんなダサくてボロければ、買うヤツなんていると思ってるのかね」
ダサくてボロい。
そこまで言われた騎にまた動きがあった。
すでに敵は近くに来ている。
下手すれば、いや、間違いなく、この騎を確認しているだろう。

その中で、この騎は動いた。

「頭部引き込み固定完了。胸部ブロック固定位置へ」

胴体に半ばめり込んでいた頭部が引き上がり、胸部装甲がせり出す。

「脚部固定解除。伸展」

象の足が伸び、その平べったい脚から鋭いつま先とアイゼンが飛び出した。

「爪先、アイゼン部固定、装甲部、対魔法攻撃用バリア展開開始、各部武装に動力入ります」

「腕部伸展――――固定！」

短すぎると思えた腕からしなやかな手首が現れた。

「楯（ベイル）接続。全武装の起動と接続を確認」

しなやかな腕を護るかのように楯が広がり、

「肩部可動楯、及びエルプスハルバード、使用自由。頭部、顔面部全機能復帰を確認。スタビライザー展開」

「……おいおい」

サイモン大尉はわけがわからない。

「な、何が起きてるんだ？」

それは、中華帝国軍のメサイア部隊に属する騎士達も同様だった。

空から得体の知れないメサイアが降りてきたかと思ったら、見たこともないような奇妙な動きをしている。
「愛鈴、あれは一体？」
高大尉はＭＣ（メサイア・コントローラー）に訊ねた。
「不明」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）は答えた。
「エンジン出力はグレイファントムやノイシアと同程度。この騎でも対抗は可能と判断」
「よし……」
高大尉は部下に命じた。
「戦闘展開開始。まずあの出来損ないを潰して、向こう岸に強行渡河。橋頭堡を確保するぞ！」
「了解！」
「もし、戦場に来るなら」
部下の戦闘展開を見守りながら、高大尉は呟いた。
「もっとマシなメサイアで来い。バカが」

周り全てを呆れさせるメサイアは、頭部に巨大な角を立てた。
先程の無様なカメムシとは思えない、古き良き時代の芸術品の如き甲冑を思い起こさせる、優美にして繊細なメサイアが、そこには立っていた。

「メイン・ホーンロック確認。頭部ジェネレーター作動準備完了――ＰＡ８エンジシステムフルオープン、マスターフレーム作動開始！」

グウォォォォォォッッッ！！！

闇をつんざく魔晶石エンジンのジェネレーター音が辺りにこだました。

まるで狩りに赴く狼の遠吠えの如き音は、そのメサイアを取り囲む騎士達を、本能的な恐怖に叩き込んだ。

「う、うそっ！？」

MC（メサイア・コントローラー）達が悲鳴に近い声を上げたのは、その瞬間だ。

「不明騎のエンジン出力が跳ね上がりました！ゲージレベル８５！」

サントス少尉の報告に、サイモン大尉が驚きの声を上げた。

「馬鹿な！Ｍ６４でさえレベル７８だぞ！？」

「事実です！」サントス少尉は力説した。「ゲージレベル８５で安定！信じられませんっ！」

メサイアの力を計る上での目安として、パワーを測定してその出力から割り出す方法がある。

ベンチマーク・ゲージレベル測定法と言う。

初代メサイアスターリンをレベル５０としている。

通常、現行配備型のグレイファントムやノイシアは、レベル６５前後とされている。

レベル１０上がれば、騎体性能だけで対抗することが困難とされ、穴埋めには騎士の技量が相当に要求されることになる。

少なくとも、サイモン大尉の駆るグレイファントムで対抗出来る相手ではない。

それだけは確かだった。

漆黒のメサイアが２騎、ペコス川を超えようとする中華帝国軍メサイア部隊の前に立ちはだかっていることも含めて。

心強い味方の登場。

それは、インディアンから幌馬車を護ってくれる騎兵隊以上に心強い存在のはずなのに、

「黒狼様のご登場……か」

サイモン大尉はむしろ背筋が寒くなるのを抑えられなかった。

「ブリュンヒルデ」
フォイルナー少佐は短く問いかけた。
「やれるか？」

ブリュンヒルデ・クラッチマー中尉は楽しげに微笑んだ。
妖艶な笑みとも言えるが、それは血に飢えた女狼の微笑みだった。
「無論です」

「よし」
二匹の戦狼は、北米大陸という新たな狩り場での最初のエモノを前に楽しげに微笑んだ。
「大ドイツ帝国の新たな刃を――――」
新兵器“エルプスハルバード”の刃が不敵に光った。
デュミナスは、自らの牙の輝きを誇るかのように、しかし、決して自らの尊厳を傷つけることのない優雅にして威厳にあふれた動きで、
「とくと味わうがいいっ！」
哀れなエモノ達に、襲いかかった。

その手に掴むのは――――

新兵器、エルプス・ハルバード

ハルバードの柄に、斬艦刀と同じエルプス・ジェネレーターを組み込んだもの。
刀身にシステムを組み込むのではなく、騎体にジェネレーターを装着し、腕部バイパスを通じてパワーを生成する点では、斬艦刀の槍タイプと同じだ。

対防御魔法付与済み装甲を貫通するために作られた“グングニル”とは元から作られた性格も破壊力も比較にならない。

「バカなっ！」

高大尉が目を剥いたのも無理はない。

敵は、赤兎前衛に襲いかかった。

それは確かだ。

敵に対する露払いとしての前衛との距離は約５００。

敵は前衛２騎に光り輝く光の剣を振り下ろした。

高大尉は、そんな光る兵器なんて知らない。

はっきりとわかることは、その光る兵器が、襲われた赤兎を叩き割ったことだけだ。

金属の塊と言っても良いメサイアの胴体を真っ二つになぎ払った。

唖然とする高大尉達の前で、下半身と泣き別れた上半身が空中で２回転して地面に叩き付けられた。

漏れたオイルが引火して、激しい炎を吹き上げている。

「あれは斬ったなんてもんじゃねぇぞ！」

ドンッ！

ハッチが爆破開放され、騎士とＭＣ（メサイア・コントローラー）が飛び出した途端、腰部にマウントしていた手榴弾に引火。

赤兎は大爆発を引き起こした。

爆風に吹き上げられた破片の中に、騎士達の姿が巻き込まれたのを、高大尉は確かに見た。

その炎に照らし出されたデュミナスは、見るものを恐怖のどん底に叩き込むのに十分だ。

高大尉は悲鳴に近い声を上げた。

「あんなの反則だ！」

ズンッ！

炎の上がる中、デュミナスは、ゆっくりと前進を始めた。

「大尉！」

部下もパニックになっている。

「あ、ありゃ、何ですか！？米軍の新型ですか！？」

「知るか！」

高大尉は怒鳴った。

「弾幕張れっ！火砲をあの２騎へ向け集中砲火！愛鈴、敵不明騎の出現を司令部へ報告！指示を仰げ！」

「はいっ！」

赤兎達は武装を戦斧から７６ミリ機動砲に変更した。

海軍の艦載砲から転用した砲撃は、陸上では恐るべき破壊力をもって幾多の米軍戦車を屠ってきた。

だが、相手がメサイアなら、ほとんど意味がないことは、高大尉自身がわかりきっている。

それでも、撃たないよりマシだ。

敵の脚を止める間に、次の手を打たなければならないのだ。

「照準、あわせ次第、各個に撃てっ！」

機動砲が７６ミリ砲弾を容赦なく敵騎めがけて叩き込む。

敵騎周辺で派手な爆発が連続して発生するが……

「敵２、動きます」

「くそったれめっ！動いたのはあの２騎だけか！？」

「後方の米軍、戦闘布陣のまま動きません」

「……余程、あの２騎に自信があるのか」高大尉は一人ごちた。

「それとも……新型の実験か？」

冗談じゃない。

高大尉は首を左右に振った。

敵と渡りあって死ぬのが嫌なんじゃない。
でも、モルモット扱いされて死ぬのなんて御免真っ平だ。

もうもうと立ち上る砲撃煙の向こうから、敵騎がゆっくりと動き出した。
手にした赤兎の残骸には、砲弾の命中痕が生々しい。

「大尉！呉です！」
「どうした？」
「あの騎の肩！国籍マーク！」
「国籍？米軍じゃ……」
ズームしたカメラが映し出したのは、高大尉が敵の象徴と叩き込まれた白い星ではない。

黒十字だ。

「ふざけんな！」
高大尉は誰相手にでもなく怒鳴った。
相手は、米軍じゃない。
ドイツ帝国軍だ。
つまり、あれはドイツ帝国軍の新型メサイア。
しかも公表前の機密騎。
そんな新型が、名乗りもなく最前線に投入される理由は一つ。

実戦でのデータ収集。

米軍が動かないのは、２騎のデータ収集に協力しているからだ。
殺される方は、データ採取用のモルモット扱いだ。

高大尉が一番嫌う状況だ。

「司令部！通信つながっているか！？」
「こちら大隊司令部」
「状況最悪！ドイツ軍の新型が出現！２騎が撃破された！こちらの兵装で対抗できるとは思えない！」
「司令部より２０１２号騎、可能な限り、情報を収集しろ。データ収集を最優先！」
「俺達の命は！？」
「繰り返す。可能な限り、情報を収集しろ。データ収集を最優先」
「くそっ！」
高大尉は怒鳴った。
「ネズミはデータ収集のために死ねというか！？」
「大尉！敵、接近！」
ピーッ！
敵との距離は十分に開いていた。
突撃を喰らっても十分対処出来る距離にいた。
高大尉は絶対の自信を持ってそう答えることが出来る。
少なくとも――相手が、赤兎なら。

「速いっ！？」
汗が入った目を拭った途端、デュミナスが動いた。
高大尉が驚愕に目を見開くのと、デュミナスが２騎を血祭りに上げるのは、ほぼ同時だった。
高大尉より敵に近かった２騎は、機動砲を構えた姿勢のまま、騎体を真っ二つにされた。
「――――っ！」
体が震える。
どうしていいのかわからない。
逃げたら銃殺だ。
進めば斬り殺される。

どうしたらいい？
どうしたら？
どうしたら……。
頭に血が上って、感覚がおかしくなったことに気付きもしない。
混乱するはずの部隊内通信回線がまったく声を伝えなくなった。

つまり、恐怖で脳が凍り付いた。

それに――――気づけない。

デュミナスは、次の獲物めがけてエルプス・ハルバードを構えた。
その視線が、高大尉の眼をしっかりと捉えた――――そう、思った。
次の瞬間。

「！！！！！！」

大尉がどんな声を上げたのか。それが悲鳴だったのか、怒声だったのかまったくわからない。
ただ、意味不明の声が、喉から絞り出されたのは確かだ。
耳に入っているかさえはっきりしない声に弾かれたように、大尉は機動砲を放り捨て、戦斧を赤兎に握らせた。
目の前の漆黒のメサイアを殺す！
それだけのために。
大尉は、赤兎を駆った。
光る剣を構える敵騎が、大尉に向き直った時。
大尉の耳には、司令部からの通信が入っていたが、大尉の脳がその意味を理解することはなかった。
否。
大尉だけではない。
その場にいた中華帝国軍騎士達が認識していた存在とは、敵と自分達だけ。

そこに司令部はない。

敵と自分達。

殺すか殺されるか。

そのギリギリの一線の中で、強大な敵に遭遇した騎士達は、ほんの少し、ほんの少しだけ、その一線を踏み外した。

司令部の命令は届いていない。

「大隊司令部より第４５２メサイア隊。後退を許可する。速やかに戦線を離脱。陸軍部隊は後退を開始している。聞こえているか？第４５２メサイア隊、応答しろ！」

森林をなぎ倒し巨人達の死骸が大地を覆う。

無惨に装甲を割られ、所々から炎を上げる死骸。

ついさっきまで、中華帝国軍の力の象徴として北米の地を闊歩していた存在のなれの果て。

耳をつんざくエンジン音も、今はしない。

静寂に包まれたその間を、デュミナスの黒い騎体が歩く音だけが響く。

「前方、陸軍部隊が後退を開始」

ＭＣ（メサイア・コントローラー）からの報告に、フォイルナー少佐は勘定の欠落したような声で答えた。

「了解した――ブリュンヒルデ」

「はい」

「こちらのセンサーに感はないが、念のためだ。再確認」
「了解。こちらのセンサーにも感はなし。残敵の存在は皆無と判断。掃討完了を宣言します」
「……わかった」

ブンッ！

フォイルナー騎が掴んでいたエルプス・ハルバードが、まるで血振りをするように横に振り払われた。
アフリカで対妖魔戦に従軍していた頃から続く、彼なりの戦闘終了の儀式のようなものだ。
「新大陸軍に報告。我々はこれより戦線を移動すると」
「了解。こちらドイツ帝国軍第４４メサイア機甲大隊所属、クレッチマー大尉。第２４戦略メサイア大隊、聞こえますか？」
「こちら第２４戦略メサイア大隊、サイモン大尉だ」
返答はすぐに来た。
「助太刀に感謝する。というか、貴殿等に全て任せる格好になったな」
「構いません」
ブリュンヒルデは鈴を鳴らしたような小さい笑い声を混ぜながら、流ちょうな英語で答えた。
「せっかくの獲物、堪能させていただきましたもの」
「お口に合えば何よりですよ。ただ、次にお会いする時は、もう少しエレガントな場所でお願いしたいものだ」
「そうですね。いずれはエスコート願いたいものですわ？」
「申し訳ないが、大隊指揮官として“白狼”相手に口説こうなんて度胸のある奴に、俺は覚えがない」
「――――まぁ」
“白狼”。
それは、アフリカ戦線でフォイルナー少佐と共に勇猛を振るった

ブリュンヒルデ・クラッチマー中尉に対する称号だ。
彼女自身、そんな称号を面はゆく思ったりもするが、こういう使われ方なら、悪い気は決してしない。
「敵メサイア部隊掃討を宣言。我々はこれより戦域を離脱。友軍との合流を目指します。よろし？」
「了解した。労いのパーティもなく、申し訳ない。シカゴ方面の状況は不明。十分注意されたし」
「感謝します。少佐。これでよろしいですか？」
「……ああ」
フォイルナー少佐は、戦闘終了後、無愛想の上に粗暴が加わる自分の欠点を自覚していた。だからこそ、他部隊との交渉の一切はクレッチマー大尉に委ね、自分は一切口を出さないことにしていた。
それが、二人にとって暗黙の共通認識として、二人の関係と功績に貢献していた。

フォイルナー騎のブースターに光がともり始める。
シカゴまでの長旅の始まりだ。

チラリと見た米軍のメサイア達が、捧げ剣の姿勢をとり、コクピットから出た騎士達が見事な敬礼を送ってくれる中、2騎のデュミナス達は、シカゴへ向け空に舞った。

北米戦線編　第十一話（後書き）

ついに２００話超えました。これからもおつきあいくださいませ！
近況です。最近、日本語入力システムがバカで困っています。誤字修正で手一杯。書き込もうとしたネタをその作業で忘れて話が狂いまくることもしばしば……（涙）。君も私もロートルってことかしらねぇ……。

北米戦線編　第十二話

●東京　葉月市近衛軍開発局ラボ
その頃――
「何がどうなったか。教えてもらえますか？」
苦い顔をする美奈代達の前で、紅葉が憮然とした顔を崩さずにいた。
背後では、Ｄ－ＳＥＥＤと“死天使”が並んで整備を受けている。
すでに北米に到着して、作戦に従事していなければならないというのに、どうして未だに東京から出られないのか？

東京から出られない。

この表現は適切ではない。

美奈代達に言わせれば、この2騎が東京まで生きて戻れた事自体が、奇跡に近いのだ。

この2騎を、予期しないトラブルが襲ったのは、太平洋上の国際日付変更線を越えた直後だった。
月の光さえない真っ暗闇の中、ＭＣ（メサイア・コントローラー）が日付変更線を超えたことを宣言した途端、騎体に搭載されている複数のシステムが、同時に機能を停止した。
魔晶石のエネルギーパイパス管理システム、航行システムのすべてと、一部のデータリンクシステムが完全に沈黙。
ＧＰＳどころか高度や速度までわからない中、ＭＣ（メサイア・コントローラー）達はシステムの再起動を何度も試みたがムダだった。　せめてもの救いは、夜間でも周囲を昼間の如く画像処理する暗視光学システムが無事だったことだけ。

航行システムがダウンしたことを認めた美奈代は、普段禁止されている緊急宣言を告げる信号弾を打ち上げるよう、牧野中尉に命じた。

“我を助けよ”

国際法で認められている緊急信号が空中で炸裂した。

前方を飛行するＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に救難を要請したくても、通信が出来ない。

すぐ間近を飛行する2騎の間で通信することさえ出来ない中、信号弾だけが頼りだったのだが、夜間、先行するＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に、一発目は気付いてもらえなかった。

二発目を打ち上げる前に、美奈代がやったことは、ビームライフルをＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のぎりぎり間近に叩き込むこと。

ビームライフルの飛来に驚いたＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が一度、こちらへ機位を巡らせた所で美奈代は信号弾を打ち上げた。

通信が出来ないことをわかってもらうのに苦労したが、最後はメサイアの頭部ライトを使ったモールス変換通信が牧野中尉とＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の機長の間で行われ、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を盲導犬の代わりとして東京に戻ることに成功した。

もし、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）がもう少し離れていたら、あるいは天候が悪化していたら、美奈代達には　戻る術がなかった。

“九死に一生シリーズに出演できる”と祷子が言っていたが、まさにそんな所だ。

美奈代は、つくづく自分の不運と悪運を嘆くしかなかった。

「だから！」

紅葉は怒り心頭という顔で怒鳴った。

「プログラムコードのミス！白石のバカが担当した場所で、ほんの数行の書き込みミスがあっただけで、ああなっちゃったのよ！」

「そんな！」
美奈代はあきれ顔で言った。
「たった数行でしょう？数行で、あんな派手な事態が本当に起きるんですか？」
「米軍の最新鋭戦闘機６機が未だに行方不明って言われてる件、知ってる？」
「何ですか？それは」
「ハワイからフィリピンに向かっていた米軍のＦ－２２の編隊が日付変更線を超えたって報告を最後に消息を絶って、未だにどこに沈んでいるかさえわからない。
米空軍がはじき出した原因は今回のそれと同じ。
搭載していたプログラムのミス。
実験結果で航行システムがダウンして、燃料の供給が停止して墜落の一歩手前まで行った。この時は、救難機が待機していたから墜落まで行かなかったけど、とにかく、たった数行のミスが原因で米軍が被った被害は１０億ドルに達するわ」
「……」
「１０億ドルもあれば」
１０億ドルがどれ程の金額なのかわからない美奈代は返答さえ出来ないが、祷子はうーん。と腕組みしながら言った。
「駅で天玉そばが何杯食べられるかしら」
「少なくとも、姫さんが数年、好き勝手に食べられることは補償してあげる」
紅葉は言った。
「プログラムの再点検には最低１日かかる。それまで我慢して」
「何言ってるんです！」
美奈代は声を荒げた。
「待っていられると思いますか！？」
「他のプログラムにミスが戦闘中に顕在化したら死ぬわよ！？」
「っ！」

「私はね！」紅葉はずいっと前に出た。
「あんた達を死なせるためにメサイア作ってるんじゃない！機体なんて壊れてもいいから、生きて帰って欲しいから、完璧目指してんの！いい加減なもの作ってるつもりなんてないんだから！」

結局、かんかんになって自分の部屋へ引き上げた紅葉を見送った美奈代達だが、別に何か出来るわけではない。
北米での戦況がわかる訳でもない。
ただ、待機しろと命じられれば、それに従うしかないのだ。
美奈代にとって、それは結構辛いことだった。
「みんな……大丈夫かな」
「心配ないですよ」
祷子はおっとりとした声で言った。
その視線の先には、白と紫で塗装されたＤ－ＳＥＥＤと、白と濃紺で塗装された姉妹騎、“死天使”が並んで立っている。
照明に照らし出されたその光景は、ちょっとした見物だと、美奈代は思う。
「皆さん、強いんですから」
「……そうね」
手すりにもたれかかりながら、美奈代はぼやいた。
「後でみんなに何て言われるかしら」
「それは考えたくないですね」
祷子は苦笑しながら頷いた。
「でも」
「？」
「モノは考えようですよ？組み付けが間に合わないからって、北米戦線へ送られるのが見送られていた“例のアレ”を持っていけるんですから」

「ったく！」
ドアを乱暴に閉めた紅葉は、顔を怒りに歪めたまま、部屋の照明をつけた。
“おかえり！紅葉ちゃん！”
そう書かれた横断幕が張られて、部屋の照明と連動した玩具達が思い思いのファンファーレを演奏し始める。
北米から戻ってこれた時。どうせ誰からも褒めてももらえないし、出迎えてももらえないことを知っている紅葉が、自分でやったことだ。
考えてみれば、あまりに悲しいが、紅葉にとってはもうどうでもいいことだ。
プログラムの監修責任は紅葉にある。
わずかなプログラムのミスでさえ見逃さない自負がめちゃくちゃに壊されたことが、あまりに腹立たしい。
怒りの矛先は自分に向けられている。
その怒りを、どうしていいのかわからない。
とにかく、やり場のない怒りを抑えたいのに、晴らす先さえわからない。

とりあえず。

冷蔵庫に残っていた缶ジュースを一気に飲み干すと、紅葉は腹に決めた。
明日一日、泉大尉をイジメまくろう。
泣こうがわめこうが、最悪、洗脳すればいいことだ。
美奈代の泣き顔を想像しただけで少し、気分が落ち着いた。
「どうやら私って」
パソコンの電源を入れた。
「真性のSって奴かしら？」

ジャンクメールが１００件近く届いている。
本来、その特殊な立場と生い立ちから、紅葉はプライベートなメールのやりとりをする友達がいない。
こんな時に、親しい友人から励ましメールが来るなんて、あるはずがない。
自分と同じくらいの女の子が熱心にメールを打つ姿を町中で幾度となく見かけている。
その度に不思議に思う。
あの子達は、どんなメールを打ってるんだろう。
メサイアの機動データ？
装甲厚とジェネレータ出力の相関関係？
……多分、違うだろう。
きっと、自分にはわからないことが書かれているんだ。
そんなことを思うことを、紅葉は別に悲しいとさえ思わない。
「……あれ？」
メールが２通、届いていた。
送信者は一緒。

お元気ですか？
データ送ります！

そんなタイトルが並んでいる。
このアドレスを知っている者は大抵が同じ“見通者”仲間だけ。
アドレスに見覚えがあった。
マネリラ王国の少年王からだった。
紅葉にとって一番メールのやりとりがある相手。
結構、メル友といってもいいだろうと、紅葉は思っている。
「……まぁ」
クスッと紅葉は小さく笑った。
「コイツも友達と言えなくはないか……な？」

紅葉ちゃんへ
お元気ですか？
そろそろ、そうめんが恋しい季節になりましたがいかがお過ごしですか？
マネリラ王国製のダシ汁で食べるそうめんは絶品ですよ？
ぜひ、今度の夏休みに遊びに来てください。
交通費は良心的価格でマネリラ王立航空にお支払い下さい。

「誰があんな航空会社利用するか」
紅葉は、引き出しからチョコレートを取り出すと口に放り込んだ。
「航空燃料に魚油使うような危険な航空会社は御免ですよ～だ。ん？」

それとは別ですけど、新型メサイアを作りました。
データ添付しますから、見てください。
北米戦線へ送ります。

「また作ったの？フランスからアズールの開発頼まれたの知ってるけど、……もうかって仕方ないわね。この子はホントに」
紅葉はマウスを動かすと、添付されていたデータを開いた。
「……これ……デュミナス！？」
ギョッとなった紅葉は手にしていたチョコを床に落とした事にも気付かない。
視線が、データに釘付けになる。
「スペックが……前のと違う。エンジンを強化したのね？冷却系と一緒に……こんな仕組みがあったなんて……あの子、やっぱりホンモノだわ」
何より紅葉が気を取られたのは、その武装だ。
「エルプス・ハルバード・システム？」

そう。デュミナスが赤兎を真っ二つにしたあの兵器だ。
「エルプス原理の応用を兵器に転用することは教えてあげたけど…
…データ上では十分ね。冷却系や動力との兼ね合いも十分、配慮さ
れているし……さすが」

しばらく、データを見ていた紅葉は、ふとメール本文にまだ続き
があることに気付いた。

ドイツに売却する騎体ですけど、パイロットは誰だと思いますか？
ごめんなさい。
時間がありません。武官が呼び出しに来ました。メールが途絶え
るのはヤツの責任です。　銃殺刑にしておきます。
続きは明日。

「？」
新着メールが来た。

独軍のパイロット達がマネリラ王国から出発しました。
北米戦線での健闘を祈ります。
パイロットは添付されている通り、狼二人です。

「……狼？」

紅葉は、添付されている写真を開いた。

●鈴谷　食堂

米軍に大きな動きがなく、艦内待機を命じられている涼達は、夕食後の時間、食堂でたむろしていた。
別に目立つことをしているわけではない。ただ、女の子らしい雑談にふける程度。時間が来ればすぐに動く。
かつての都築達のバカ騒ぎが引き起こした一連の問題を、涼達も身に染みて反省しているのだ。
艦内は極めて平和。
そんな中。
コーヒーを飲みながら珍しく雑談に参加しているのは、美夜だ。
日本から持ってきた本を読み尽くして退屈している。
本か雑誌があれば貸してくれと頼みに来たのだという。
月城大尉が自室から持ってきたのは、経済学の本や雑誌。その他、大人向けの固い本が中心だが、数冊、普通の女性向け雑誌が混じっていた。
ゴシップ記事が並ぶ中、女性士官達の目を奪ったのは、ある特集記事だ。

「ウェディングドレスの特集……いいですねぇ」
美晴はうっとりとした声をあげた。

「やっぱり、女の子としては憧れますよねぇ……」
涼も小さく頷いた。
「柏中尉は胸ありますから、こういう大きく胸が開いたタイプが似合いそうですねぇ」

「ははっ……うち、実家がお寺だから打掛なんですよね」

「えーっ!?もったいない!いいじゃないですか!」

「仏様の前でドレスってちょっと……ねぇ」

「ち、ちょっと想像が……」

「平野艦長は、ご結婚された時は？ドレスですか？」

「両方着た」

美夜も記事から目を離さずに頷いた。

「艦長は似合ったでしょうね」

寧々が目を潤ませながら言った。

「ドレスはどんなタイプだったんですか？」

「プリンセスラインの……こういうタイプだな」

「似合いそう！」

美晴達が一斉に声を合わせた。

「これ着て式に臨んだけど……」

美夜は苦笑しながらコーヒーに口を付けた。

「真理……二宮中佐の殺気だった目には参ったわ」

「教官……そんなに？」

「結婚しますって葉書送ったら、ご出席のご字を二本線で消すのはともかく、大きく“裏切り者っ！”って書いてあったし、結婚式のお祝いの品だって送られてきたのは」

「送られてきたのは？」

「鏡に包丁に白いハンカチ。しかも偶数」

ちなみに、全て結婚式のお祝いとしてタブー扱いされている代物だ。

「結婚式には来てくれたけど、第一種礼装で来るし、結婚式の記念写真なんて顔は笑っていても、目が全然笑っていないの」

「艦長？写真、ないんですか？」

芳（かおる）が興味津々という顔で訊ねた。

「見てみたいです。艦長のドレス姿と一緒で」

言いかけて、芳（かおる）はふと、横に座る月城大尉の顔を見た。

「次は、大尉ですね」

「馬鹿な」

月城大尉はポーカーフェースを崩さずに言った。

「私は結婚なんてしない」

「でも、着たいですよね？こういうの」

「興味ない」

「絶対似合いそうですよぉ」

芳（かおる）は残念そうに言った。

「その器量なら、結婚相手なんて引く手数多なのに」

「馬鹿なことを」

月城はコーヒーカップに口をつけた。

「私は仕事に生きる」

「？」

涼は、芳（かおる）の意味ありげな視線に気付いた。

芳（かおる）の指が雑誌の端を突く。

あっ。
涼は、芳(かおる)が何を言いたいのかわかった。
ウェディングドレスの特集ページの端は小さく折られていた。
「私、見てみたいです」
涼は言った。
「月城大尉の花嫁衣装」
「打掛だろうとドレスだろうと、なんだって着こなしそうですよねえ」
芳(かおる)が合いの手を出す。
「新郎、絶対、幸せ者ですよね」
「いいなぁ……」

部下に好き放題言われた月城大尉は、頬の辺りを赤くしながら言った。
「馬鹿なことを。結婚なんて……」

「そう言ってる方が、意外と速いんですよね。経験的に」

「私にはわからん」
月城は、コーヒーを飲み干すと、席を立った。
「艦長。日報をまとめますので、これで失礼します」

「そうか……そんな時間か」
月城の後ろ姿を見送った美夜は、小さくぼやいた。
「本当に、月城大尉を見ていると、彼女を思い出す」

「彼女？」

「アレキサンドリアの七英雄の一人」

「アレキサンドリアの七英雄って」
寧々がはっとなって言った。
「たしか、二宮中佐も！」

「そう」
美夜は頷いた。
「ドイツから2人、英国から2人、フランスから1人、日本から二宮中佐と瀬音少佐がね」

「雲霞の如き妖魔達からアレキサンドリアを守り抜いた奇跡の戦い。戦死率９５％のあの戦いを最後まで生き残った英雄！」

「貴様達からすればそうなんだろうが……」
美夜は苦笑した。
「七人のうち、たった二人の女性。実はその二人が、男巡って殺し合う仲だったなんて、想像も出来ないだろうな」

「クシャンッ！」
コクピットから降りる所だったブリュンヒルデ・クラッチマー中尉は、突然のくしゃみに、リフトから落ちる一歩手前で踏みとどまった。
「びっくりしました……」

「グッシャンッ！」
「な、何！？何の音ですか！？」
ハンガーに響いた音に驚いた部下が数名、駆け寄ってきた。
「中佐！？」
「心配するな」

二宮は鼻をすすりながら言った。
「ちょっと、くしゃみが」
「あれ、くしゃみだったんですか！？」
「うるさい……テッシュ、持ってきてくれ」
「はいっ！」
「“鳳龍改”では不安だな……」
場所は内親王護衛隊（レイナガーズ）専用のハンガー。
見上げた先にあるのは、“鳳龍改”。
「高速強襲型はいいが……パワーが足りていない。装甲も不足している。こんなんで北米戦線に行きたいなんて殿下が言い出した日には、目も当てられないぞ？」
「中佐」
近づいてきたのは、麗菜殿下専属ＭＣ（メサイア・コントローラー）の遠野少尉だった。
「麗菜殿下がお召しです」
自室で謹慎処分になっている麗菜が、外部と接触する方法となれば、麗菜の同性の恋人と、周囲からほぼ公認されている遠野少尉に頼むしかない。
仕えてきた期間が長い分、二宮は、麗菜が何を言い出すのかすぐに知れた。
「わかった。美凪、殿下の謹慎はあと何日だ？」
「あと４日です」
「皇后陛下を通じて、あと１週間、何としても伸ばしていただくように進言しろ。理由は……“鳳龍改”で北米送りは不安が強いとしておけ。あの戦域に火炎放射装置が使えない騎を投入するのは自殺行為だ」
「了解って……北米送りですか？」
「ああ」
二宮は頷いた。
「殿下は絶対、北米に行きたいとダダこね始めるに違いない。それを未然に止めるのが、宮仕えの基本だ」

「はぁ……」
「最悪」
二宮は、きっ。と、厳しい目をして言った。
「明日から殿下の騎を緊急整備するよう、整備部へ通達しろ。理由は殿下の安全のため程度でいい」
「A点検ではないですね？」
「当然だ」二宮は頷いた。
「徹底的に、それこそビス1本までバラせ。組み立てに1ヶ月もかかれは御の字だ」
「はい」

●東京　天原骨董品店
「随分と」
神音は苦笑混じりに言った。
「混乱しているみたいですね。全てが」
「はい」
ユギオは頷いた。
「もうグッダグダです。どうしていいのか助けてほしい位ですよ」
「休戦協定が成立してこちらとしても、補給がやりやすくなっているのは事実ですけど？」
「魔族軍も再編成が急ピッチで進んでいます。義勇軍の正規軍編成も順調」
「本当に、順調なんですか？」
「兵士達の“選抜”がかなり効果を示しています」
「ものは言い様ですね。普通なら“無能は粛正する”程度の表現は使います」
「ははっ……私は、あなたのそのはっきりした所が気に入ってます」
「それで？北米におけるヴォルトモード卿封印の件、どうなってい

るのです？米軍は封印の洞窟を反応弾の貯蔵庫として使用しているとか？」
「はっきり、難攻不落と言いたいところですが」
ユギオは、紅茶に手を伸ばした。
「紅茶は……オレンジペコですね？これはいい」
「……どうも」
「中華帝国軍特殊部隊が担当します。封印は解けますよ」
「解けるのですか？」
「といっても現状、すぐには無理です。洞窟内部に設置された門（ゲート）の暗証番号を調査中。明日日中には入手可能と見込んでいます。それさえはっきりすれば、あとはどうとでもなります」
「……それならいいですけど？」
神音は訊ねた。
「折り入って、訊ねたいことがあると聞きましたが？」
「ええ」
ユギオは頷くと、膝をずいと進めた。
「イツミとコンタクトがとれませんか？」
「無理」
「そんなあっさりと」
「あなたに言われなくても、私もコンタクトがとりたいのに、連絡しても梨の礫なんですから……で？何があったのです？」
「実は、イツミとの交渉のデータをテープから起こした時、その時はすっかり聞き逃していた言葉が気になりましてね？真意を尋ねたいのです」
「？」
「北米大陸の封印についてです」
「イツミ殿は何と？」
「北米の封印は、簡単に解ける。でも、無事では済まない――と」
「何か、トラップが？」
「あのイツミのことです。無事では済まないが、単なる封印を解い

た者にだけ襲いかかるようなトラップを意味するとはとても思えないのですが……」
「……」
「どう、思います？」

●シカゴ　ドイツ軍宿舎
その日の朝。
ヘルガが目を覚ましたのは、どこからか聞こえてくる奇妙な音のせいだった。
「？」
ヘルガがまず目にしたのはホテルの天井。
軍隊の宿舎では考えられない、高級な壁紙が目に優しい。
カーテンから零れる朝日は光の柱となって、まるで宗教画のようだ。

ベッドの上で起きあがっても、奇妙な音はまだ続いていた。
まだ眠い目を擦ったヘルガが向かったのは、洗面所だ。

まさか物取りでもあるまいに。
ヘルガは、ベッドの下に隠していた拳銃を手にとると、ベッドから降りて、洗面所に向かった。
音は、確実にそこからしていた。
「？」
洗面所のドアを開けると、そこにいたのは――――

「……」
あきれ顔をしたヘルガの視線の先にいるのは、鏡の前に陣取るエ

レナだった。
鏡に映る自分相手に、口紅を塗っている。
そして、エレナの口から漏れてくる異音を耳にすることで、貴重な安眠の時間を破壊してくれた敵の正体を知った。
エレナの鼻歌だった。

「あ。おはよう」
エレナは、ニコリと微笑むと言った。
「どう？おニューのルージュ、下ろしてみたの」
自慢げに唇を見せるエレナに、
あ。いい色だな。
ヘルガは一瞬、そう思ったが、
「……何、しているの？」

「シカゴにフォイルナー少佐が入ったのよ？」
何よそれ。
エレナはそんな抗議を顔に浮かべていた。
「きちんと、念入りにメイクするのは当然でしょ！？」

……はぁ。
ため息をつくヘルガの前で、エレナからは再び鼻歌が聞こえてきた。
どうやら、本国で話題のヒットナンバーらしいと、無理矢理推測させることは出来る。
だが、あれは歌い手の美声こそが称えられる歌であり、こんな田舎の教会の割れた鐘の方がまだマシな音がするだろう程、狂った音程では決してない。
味覚といい、音程といい、この子は本当に残念な子だ。

つくづくそう思ったヘルガは言った。
「少佐にお尻振ったところで、あの人がすり寄るお尻はあなたのじゃないわよ？」

朝食を終え、むくれ顔のエレナを連れて、軍の用意したタクシーに乗り込んだヘルガは、ここ数日を経ても慣れることのない街の景色を前に、暗うつな気持ちになるしかない。

アメリカは荒廃の一途をたどっていた。
「黄色は出ていけ！」
「悪魔と中国人立ち入り禁止」
そんな紙があちこちに貼られている街の中。
あちこちで、力無く座り込んでいる人々がいた。
仕事をくれ。そんなプラカードを首から提げた、薄汚れた格好をした人々がいた。
足下に空き缶を置いて、呆然と座り込み、物乞いに明け暮れる人々がいた。
そんな人々の横を歩く人々の顔も一様に暗い。
アメリカらしい楽天的な、未来を信じる強さを、誰からも感じることが出来ない。

タクシーが角を曲がった時。
街角の騒ぎが見えた。
盗みを働いたのだろうか。
まだ１０歳にも満たないだろう黒人の子供が、大人達に袋だたきにされていた。
ボロボロの服が破れ、血にまみれた顔をくしゃくしゃに泣きはらしている。それでも、手にした何かを口に詰め込もうとするのをやめようとしない。

そんな子供めがけて、大人達は容赦なく暴力を振るい続ける。

「……生き残っても地獄……」

ヘルガは、タクシーの中からその光景を見ただけで済んだことを感謝した。

ここに居合わせたのは自分の責任じゃない。

助けもせずに遠ざかっていくのは、自分の罪じゃない。

自分は単に、タクシーに詰め込まれているだけなんだ。

そう、自分を騙せるから。

「生者が死者を羨む時代……か」

エレナは横でだらしない寝顔をしている。

ドイツ語で小さく呟いた言葉が、タクシーの運転手に聞こえたはずはないだろうし、黒人の疲れ切った顔をした彼にドイツ語がわかるとも思えない。

その言葉は、彼女だけのはずだった。

「ドイツの軍人さんにゃ」

若い黒人の男は、ステアリングを握りながら、英語で話しかけてきた。

車の横を、一目で難民とわかる人々が、警察官に追い立てられるように列を作って歩いていく。

「こんな光景は、見慣れないだろう?」

「最近まではこんなものよ」

ヘルガは英語で答えた。

「町中はアフリカからの難民だらけ。開拓地に送り返してやっと安定したのはほんの数年前のこと」

「そうなのかい？この地獄みたいな世界が、ヨーロッパでも？」

「私はベルリンのダウンタウンの出。首都だというのに、母親からは、危ないから昼でも外を出歩くなと言われていたわ」

「ドイツ人にしちゃ、迷惑だったろう？俺達黒人の難民なんて」

「元からのドイツ人じゃないわ」

ヘルガは言った。

「両親の生まれはベネズエラ。あの頃、両親がドイツを目指したのは、ドイツには戦争難民に対する国籍特別取得枠があったから。まぁ、当時まだ生まれていない私には知った事じゃないけど……両親は、南米からの脱出船団の最終便に何とか乗せてもらえて助かったと聞いている。でもね？」

ヘルガは、窓の景色を眺めながら言った。

「……物心ついてからの生活は、あの人達よりひどかった気がする。何度もアパートを追い出されて……橋の下が一番好きだった。雨交じりの雪の中で、寒さに震えた経験は今でも忘れられない。

そのうち、やっとのことで父親がトラック運転手の仕事を見つけて、母親が裁縫の仕事を不法移民の中国人と一緒にやるようになって、三人がやっと寝られるようなアパートに入ることが出来た」

「……」

「……私がクリスマスにシュトーレンを初めて食べることが出来たのは、１６で軍隊に入ってからよ」

「……俺はブラジルからの出稼ぎに来ていたオヤジに会いに来た所で、あの騒ぎさ」

運転手は言った。

その声には互いの苦労を労るような、悲しみを覆い隠した優しさがあった。
お互い、難民の血を引いていると知った事が、彼の心を解きほぐしたのだろう。
「オヤジがケンカ沙汰が原因でくたばった後、国に戻れずに、ストリートチルドレンになった。それからは、死に物狂いで生きてきた。口じゃ言えないようなことだってやってきたさ」

「難民上がりってのは、そういうものよ」
ヘルガは決して運転手を見ない。
「その辺は、お互い様ね」

「そういうことさ」

「そういうことよ」
チラリと横で眠るエレナを見たヘルガの視線は、ちょっと表現が出来ないほど険悪だった。
「毎日、おいしいものばかり食べていた貴族様や市民様と、私達は違うのよ」

ヘルガ達がタクシーから降り立ったのは、郊外に展開した独海軍に所属する飛行艦隊が着陸した場所。
飛行艦達に近づくための道は検問で封鎖されており、他の騎士達を運んだタクシー達が列を作っている。
ヘルガ達も、そこでタクシーを帰した。
検問に立つ州兵に敬礼し、徒歩で飛行艦に向かうこと数分。
大型輸送艦用飛行艦を中心に、積み上げられた物資と、整備を待つメサイアが並んでいた。

中華帝国軍との戦闘で傷ついたメサイア達の無惨な姿は、見ているだけで戦意が萎える。
整備が終わった騎が飛行艦からベルゲメサイアによって引き出され、代わりの騎が飛行艦に送り込まれていく。
メサイア相手に格闘する整備兵達も死に物狂いだと、ヘルガ達も思う。
飛行艦の大きく開いたハッチに、片足のないノイシアが収容されていく。
メサイアは精密機械にして、高さと重量のある兵器だ。
重力環境下において整備するには、クレーン他の大型重機が大量に必要になるなどの制約が大きく、しかも効率が悪い。
そこで、慣性制御魔法が普及した現在においては、飛行艦に収容して、その無重力環境での整備をする方が一般的。
メサイアと飛行艦は、ワンセットで運用するのがいわば先進国では常識となりつつあった。

ヘルガ達が最前線から数百キロも離れたシカゴにいるのも、そのせいだ。

「もう少し近くに展開すればいいのに」
エレナは不満げにいうが、
「しかたないでしょう?」ヘルガはたしなめるようにいった。
「補給物資の輸送。兵員の休養、何より、水資源の確保まで考えれば、大都市の方が楽なんだから。ドイツ軍といえど、万能ではないわ」
「わかるけど」
エレナは口元を尖らせた。
「飛行不能を理由に４騎が放棄されたのよ?前線間近の、少なくともベルゲの回収可能距離に展開していたら」
「気持ちはわかるけどね」

二人は歩みを止めると、同時に空を見上げた。
大隊司令部の入っているプレハブの簡易宿舎の前。
鉄十字と鷲をあしらったドイツ帝国軍旗と大隊旗が風に翻っている。
目の覚めるような赤地の中央を、白い物体で染め抜かれている大隊旗を初めて見た者は、大抵、その白い物体が何だかわからない。
ヘルガもエレナも、最初はそんな一人だった。

白い物体の正体。

豚

そう知った時、ヘルガは思考がフリーズしたのを覚えている。

金貨をくわえた豚。
「グリュックシュヴァイン」（Ｇｌ？ｃｋｓｃｈｗｅｉｎ、「幸福の豚」）だ。

ドイツの一部では大晦日に祝いの品として贈答する習慣があることを、祝いの席とは無関係の難民層で生きていたヘルガは知る術さえなかった。
どういう縁起があるかは知らないが、フォイルナー少佐が部隊を預かった時には、この大隊は、その戦果とその奇抜な大隊旗で世界的に知れ渡っていた。

ドイツ帝国軍第４４メサイア機甲大隊――部隊通称“グリュックシュヴァイン”。

その名の由来は、その軍旗による。

「遅いっ！」

その声にびっくりしてまわりを見回すと、大隊司令部の入っているプレハブの建物の前。

緑色の髪をショートカットにした女性士官が腰に手を回して怒った顔をしていた。

ルナテレジア少尉。

ルナの愛称で呼ばれる、エレナとは同期の同じ養成校上がりだ。

「フォイルナー少佐達はもう到着しているわよ！？」

「文句言わないでよ！」

戦友の気安さから、エレナは小走りに走りながら言った。

「タクシーをあの時間に回したのは司令部よ？それに、渋滞まで責任はとれないわ！？」

「そういうことね」ヘルガも横を急ぎながら頷いて見せた。

「ところで、フォイルナー少佐達がスゴい戦果あげたって？」

北米戦線編　第十三話

ブリーフィング・ルームには、すでに大隊のほとんどの騎士とMC（メサイア・コントローラー）が集まっていた。

皆が名優の登場を待ちかねる観客さながらに、久々の大隊長の登場を前に緊張した顔をしている。

エレナ達は指定されている席にそれぞれ腰を下ろした。

「とりあえず」

ヘルガは、横で浮かれきっているエレナに言った。

「これは命令よ？歓声を上げない。大人しくしている」

エレナが聞いているかは全く自信がないが、

「これ破った女性士官は、全員が例外なくフォイルナー少佐に嫌われている。それと、こんなので撮影始めたら間違いなく、大隊から追い出されるから。預からせてもらうわよ？」

ギクッ。となったエレナの軍服のポケットからヘルガが抜き取ったのは、小型カメラだった。

「戦線に変化はない」

ブリーフィング・ルームに入ったフォイルナー少佐は、固い表情のまま語り出した。

重い、渋い声は、女として聞いているとゾクッと来る官能的な何かがある。

チラリとヘルガが横を見ると、エレナがすっかりイッた顔になっていた。

病気が伝染しそうな恐怖を本能的に感じたヘルガは、彼女の存在を忘れることにした。

「中華帝国軍は、ペコス川防衛線に対する攻略を継続中。北部方面には、砲兵1個師団級の戦線投入が確実されている」

「え？」
ヘルガは思わず、きょとんとしてしまった。
「1週間前、韓国軍の運用する列車砲に陸戦艇部隊まで加わった重砲撃師団が再編成を完了したという情報も入っている。敵は火力で陣地を破壊するつもりだ」
「……」
フォイルナー少佐は、小さくため息をついた。
「現時点では、砲兵に対する新たな攻撃命令は来ていない」
……まぁ。そうだろう。
ヘルガはそう思った。
砲兵を叩くなんて、新大陸軍にやらせればいいと思う。
連中にだって、砲兵はいるはずだ。
「砲兵の護衛に、どの程度のメサイアが展開するかは不明。新大陸軍は、防衛陣地の再構築を優先しており、砲兵隊を事前に叩く余裕は――――ない」

「我々が……」
思わず口に出た言葉を、ヘルガは慌てて飲み込んだ。
貧乏くじを自分から引く必要なんて、どこにもない。

「新大陸軍からの命令はない上に」
フォイルナー少佐は無機質な口調で言った。
「砲兵部隊制圧後の後始末をしてくれる歩兵も……いない」

「陸軍はどうして」
ガング中尉という、大隊でも古参騎士が訊ねた。
「部隊を派遣しないのですか？俺達、メサイア部隊はこういう時、単独で動くべき性格を持っていない。占領は歩兵の仕事だ」

「歩兵隊が」

フォイルナー少佐は答えた。
「不祥事を引き起こすことは、新大陸国民の対独感情を悪化させかねない。そしてなにより、我が国が新大陸に対して領土的野心をもっていないことを示すためにも、ここに歩兵隊は投入できない」
「いっそ、そこら中にドイツ国旗でもおった建ててやれば？」
「敵のリストに新大陸軍が加わるだけだ。この大陸から生きて祖国に生還したくないのか？」
「考えたくないですな……」
「その通りだ。我々は、余計なマネはしない。新大陸軍の要請に基づき行動する。そして、その全ての責任は彼等のものだ」
「現状の要請は？」
「戦場の防疫任務が終わり次第、待機。中華帝国軍が後方で部隊の再編成中との情報も入っている。新大陸軍のメサイア隊は、現状では姿を見ることさえ期待できない。消耗に対して、補充が追いつかないとも聞く」
つまり、新大陸軍に期待するな。
自分の上官は、そう言っているのだ。
「対する中華帝国軍は、一日１０騎の割合でメサイアを製造していると聞く」
どうしろと？
ヘルガは誰かに聞いてみたかった。
１日１騎倒して５日でエース。

その割合で頑張っても、その頃には４５騎が待ちかまえている？
冗談じゃない。
そんなの、戦う意味があるのか？
「喜べ」
どうやって？
「獲物に事欠くことは、当面の間、ない」
……。
無理だ。
ヘルガは思う。
私は、隊長ほど人間が出来ていないから、敵が多いことを喜ぶことなんて出来はしない。
「北部方面、五大湖を目指す敵の動きは当面の間、極めて苛烈なものになるだろう。ベルリン及び師団司令部は、北米戦線に対するメサイア部隊の派遣は、我が大隊だけでは不足と判断。極東向けの部隊を臨時に北米へ向けることを決定した。
４０、４２両大隊が本日、カリフォルニアに到着する。
魔族軍との戦闘経験のある部隊だ。
合流を受け、我々は従来の新大陸軍支援任務から外れ、独自の遊撃戦闘へと任務を変える」

任務が……変わる？
遊撃戦闘って？

チラリと周りを見るが、皆、緊張した顔を崩そうともしない。
フォイルナー少佐の存在に、皆が押さえつけられている。
そんな感じだ。

「任務の中心は敵補給線の寸断と占領地域における補給施設の破壊だ」

「待って下さい！」
ザワッ！
初めて、騎士達の間からざわつきが生じた。
その中で、数人の騎士が椅子を蹴って立ち上がった。
中心は、部隊でも血の気の多さで知られるヴィットマン少尉だ。
「俺達、グリュックシュヴァインがそんな任務を！？」

「……不満か？」

「当然です！」
ヴィットマン少尉は気色ばんで頷いた。
「俺達ゃ、トリュフを掘り出しに来てるんじゃないです！」

「……」

「……そ、そりゃ」
フォイルナー少佐の眼光に押されたヴィットマン少尉は、バツが悪そうに肩をすくめた。
「任務なら、従いますけどね？」

「なら、そうしろ」
フォイルナー少佐は言った。
「前線に移動中のメサイア部隊を攻撃することも、我々にとっては大切な任務だ」

「そうですよね！？」
ヴィットマン少尉はハッとなって、笑い顔になった。
「そうか！それを早く言ってくださいよ！少佐ぁ！」

「あーあ」
状況説明が終了し、ブリーフィング・ルームから出たヘルガとエレナは、仲間達と共に、休憩所の近くで針路を変えた。
仲間の一人、エレナが、マネリラ王国製の新型を見たいと言い出したからだ。
「ヴィットマン少尉達が単純なバカだって、ホントにわかった」
整備が完了したメサイアを一時的に格納しておく専用ハンガーに向かいながら、ヘルガは言った。
「あの人バカよ」
「何が？」
ルナが首を傾げた。
「だって、補給施設叩くんでしょう？しかも、奇襲攻撃なら楽じゃない。それに、メサイア戦は二の次、三の次でしょう？」
「ここにもバカがいた」
ヘルガは、ムッとした顔のルナの斜め後ろを歩いていた少女に気付くと、声をかけた。
「……イリス？」
青い髪に触れるだけで折れそうな細い手足。
愛らしい幼い顔立ちは、およそ軍隊に似合わない。
どう見ても１５歳より下だと思う背の低い少女、イリス・タルバッハ少尉だ。
青く長い髪。あどけなさを残す愛らしい顔立ち。
軍服ですら可愛く見える、とびきりの美少女だ。
「えっ？」
突然、話しかけられてびっくりした顔のイリスがヘルガを見た。
「私ですか？」
「どう思う？」
「……えっと」
「１０秒以内に回答なき場合は、パンプキンの刑」
「つ、つまり！」

パンプキンの刑。
スカートをめくり上げて頭の上で縛ってしまう。当然、ショーツが丸見えになるという、よく女子校でやるタイプのイジメだ。
イリスが慌てた様子で答えた。
「少佐がおっしゃっていた攻撃対象は、元から対メサイア戦。補給線と補給施設の防衛を任務とするメサイアを撃破することだったのに、ヴィットマン少尉は、それを勝手に機甲部隊補給施設を一方的に破壊する……そう、勘違いした」
「……そう」
ヘルガは楽しそうに頷くと、イリスの頭を優しく撫でた。
「補給線と補給施設の攻撃なんて、当然、敵も阻止するために戦力回してくるに決まっている。そのリスクがわかっていない。ルナはわかってるわよね？」
「リスク？」
ルナはきょとん。とした顔になった。
「何？奇襲ならリスクなんて、あったら逃げるだけじゃない」
「イリス？」
「はい？」
「新型のマジック・エジェクト・システムはテレポート標準装備だから、早めに申請しておきなさい。あなたが申請すれば、整備部隊と補給部隊が死に物狂いで手配してくれるわよ？」
「は？」
「ダメよ！」
ルナが突然、イリスを抱きしめた。
「“これ”は私のモノなんだから！」
「……好きにしなさい。そのリスクこそがね？栄えあるグリュックシュヴァインに相応しい任務としての価値を与えてくれるんだから」
「どういうことよ？」
エレナが訊ねた。
「敵の支配地域に深く侵入して戦闘行為を行う。つまり」

ヘルガは、小さく息を吸い込んだ。
「周りは敵だらけ。場所によっては砲撃の雨が降る。反面、味方の支援は一切ない。救援も望めない。たとえば、そんな中で、一騎だけ行動が送れた場合……」
「……」
「……」
「……死ぬ以外に、選択肢はない」
「まさか！」
ルナはあっけらかんと笑った。
「ジュネーブ条約だってあるのよ？いくらなんでも！」
「東南アジア戦線の中華帝国軍の捕虜証言で」
ルナは言った。
「擱座したグレイファントムのＭＣ（メサイア・コントローラー）が、５０人以上の男に陵辱（レイプ）された挙げ句に殺されたって」
「……」
ルナはギョッとなった顔で、言葉が思いつかないままヘルガを凝視した。
「いい？私達は女。戦場で女の末路は男のそれよりヒドいわよ？私達ＭＣ（メサイア・コントローラー）は、国際法上は保護されるべき存在――表向きはそうだけど、現実には通じないんだから」

戦場の銃声はすでに遠くなっている。
歩兵部隊に蹂躙されたこの小さな村にとっての悪夢は終わろうとしていた。
この村の終わりという形で。

村の学校から盛大に煙が立ち上り始めた。
学校のには、男達や子供が集められていた。
彼の部隊がこの村を制圧したのは昨日のことだ。
退路を断たれ、孤立した小さな村。
戦略的にも価値はないような、そっとしておきたくなる古くからの村だ。

戦禍を受けた村を立ち直らせたい。
意見を聞きたいので、翌日の正午。
全ての男は学校に集まるように。

村長を通じて、彼等の指揮官はそう命じた。

子供達はお菓子を用意してあるので同じく学校へ集まるといい。

半ば強制的に集められた男と子供達。
燃えさかる学校の中で彼等の亡骸を見たら、きっと子供はお菓子を口に入れたままだろうし、何人かの男は、酒とたばこを口にしたままだろう。

甘言を流してだまし討ちするのは、彼等の常套手段だ。

イのヤツが、機関銃の弾が残り少ないと言っていたけど、大丈夫かな。

彼が考えたのは、そんなことだった。

パンッ
乾いた銃声が家の中から響いた。
「おい。ユン」

ドアが破られ、窓ガラスはほとんど割られている家の外でタバコを吸っていた兵士が、家の中に入った。
銃声に何も感じるところはないらしい。
手にはガソリンの詰まったジェリ缶が握られている。
「終わったか？」
「……ああ」
部屋の奥から、ベルトを戻しながら満足げな顔をした兵士が出てきた。
「白人の女も、若いウチならいいもんだぜ？」
「そうか？」
ちらりと部屋の奥が見えた。
白い脚が無造作に床に投げ出され、血だまりの中に浮かんでいた。
「ああ。小学生だといっていたな。俺の娘より年下だったが、胸はデカかったな。母親の前で処女奪ってやった。次は母親だ。やってみろよ。“親子丼”は最高だぜ？」
「俺にも回せよ」
兵士は肩をすくめた。
「俺が楽しむ前に殺しちまったら、意味がねぇ」
「悪く思うなよ」
兵士からジェリ缶を奪った彼は、部屋の奥に向かった。
バシャバシャという音と共に、辺りにガソリンの匂いが充満し始める。
「バレたら後々厄介なんだからさぁ」
「一蓮托生」
「――次の村で回す。約束する」
「頼むぜ？」
部屋から出た兵士は、ポケットからタバコを抜き取って火を付けた。
そして、一息、タバコを吸っただけで部屋の奥へと投げ捨てた。
「マルボロはまずい」

ボンッ！
ガソリンが燃える匂いをかき消すように、タンパク質が燃える嫌悪すべき異臭が立ち上る。
兵士達は、そんなことに構うこともなくタバコについて語り合う。
「ティスが懐かしいな」
「俺はタイムだ」

隣の家でも。
他の家々でも。
次々と炎が上がり始めていた。

道に転がっていた死体が、兵士達によってその炎の中へと投げ込まれる。
その“作業”が終わった兵士達は、ガレージの４輪駆動車に意気揚々と金目のモノを積み込む作業に没頭する。

ブロロッ

そこに近づいてきたのは、中華帝国軍の軍用車両の列。
車列が停止し、先頭の高機動車から士官が降りてきた。
「韓国兵か？」
「はい」
居合わせた兵士達が敬礼した。
「大韓帝国陸軍第１０１師団です」
「任務は何か？」
「この周辺に潜む残敵の掃討です」
燃え上がる家々を前に、中華帝国軍の士官は何か言いたげな顔をした。
その時だ。
金切り声が響き渡り、燃える家から何かが飛び出してきた。

全裸の白人女性だった。
髪に火が燃え移っている。のたうち回りながらその火を消そうとするが、
パンッ！
すぐ近くにいた兵士がその女性めがけて引き金を引いた。
燃えた頭が吹き飛ばされ、女性はその場で動かなくなった。
兵士はすぐに死体を燃える家に引きずっていくと、炎の中へと軍靴で乱暴に押し込んだ。
「あれは何だ？」
「ゲリラです」韓国軍兵士は即答した。
「気にしないでください……」
兵士は、意味ありげな笑みを浮かべると、ポケットから無造作にドル札の束を取りだした。
「これに免じて」
「……」
周りを見回した士官は、そっと札束を掴むと自分のポケットにねじ込んだ。
「……あまり、目立ってやるな」
兵士の耳元で、士官はそう言うと、その場を離れた。

遠ざかっていく車列を一瞥した兵士達は再び、略奪品の積み込みに勤しみ始めた。

ドイツ軍の一部が後方攪乱任務につくのには、十分な理由がある。
本来、後方攪乱任務は、日本軍の仕事とされていた。
ところが、米軍がメサイアの不足を理由に日本軍を防衛線の一部として勝手に配下に組み込んでしまい、手放そうとしないのだ。
おかげで、北部方面でこれから攻勢を受けるドイツ軍は、真っ正面から中華帝国軍メサイア部隊を、自分達だけで相手にするしかない状況に気付いたのだ。
日本軍を手放そうとしない米軍を恨みつつ、ドイツ軍に与えられた選択肢は二つ。
対メサイア戦で全く役立たないことで有名な英国軍と手を組むか。
それとも、自前の戦力を用意するか。
“ライミーと手を組むなら自滅した方がマシ”という意見が圧倒的多数を占めたベルリンの司令部命令により、増援部隊が送り込まれたのは、ドイツ軍にしては当然なのだ。

そして、英国軍がドイツ軍と手を組んで後方攪乱なんてリスクの高い任務に就こうとしないのも、彼等の戦訓からすれば、こちらも当然なのだ。

欧州が決して一枚岩になれない永遠のジレンマの中。戦争は確実に新たな局面へと向けて進んでいた。

「日本軍をどうしても動かさないのか？」
「ニューメキシコ防衛線もメサイアが全然不足しているのよ。米軍司令部は、目先の敵よりも、身内の頭数の少なさにおびえている様子ね」

ブリュンヒルデ・クラッチマー中尉は、フォイルナー少佐にコーヒーを出しながら言った。
「コーヒー。さすがに物量の国ね。本国では貴重品扱いなのに」
「南米からの輸送ルートが確保出来ない現状では厳しいな」
ブリュンヒルデを副官に迎えてから、フォイルナー少佐は幼なじみの煎れたコーヒーを飲むことを朝晩の日課としている。
少なくとも、大隊長に副官がコーヒーを煎れるなんて、ドイツ軍人にとってありえる話ではない。
フォイルナー少佐にコーヒーを煎れる行為が、果たして彼女の軍人としての忠誠心の現れなのか、それとも女としての思慕故か。二人の関係を知る周囲はあえて触れようともしなかった。
「マネリラ王国製のコーヒーに慣れていたせいか。味が変わったな」
「米軍配給ブレンドは味が悪くて困るのよ」
ブリュンヒルデは困ったように言った。
「ごめんなさい。マネリラ産は貨物の中でまだ」
「いい」
フォイルナー少佐はコーヒーを飲み干した。
「これはこれで気に入った。次は濃いめに煎れてくれ」
「はい」
「話を戻す。日本軍の動きが知りたい。情報は？」
「……」
普段のフォイルナー少佐なら、日本と聞いても興味すらないだろう。
彼にあるのは、軍人貴族らしく、戦いとメサイアだけだ。
ブリュンヒルデには、そんなフォイルナー少佐が日本に固執する理由が分かる。
マネリラの少年王が言っていた、最強のメサイア。
その存在が気になって仕方ないのだ。
「コロラド州にて待機中と確認しています」
反面、ある事情から日本大嫌いのブリュンヒルデは感心すらない。

日本とは関わりたいとさえ思わない。
反応は彼女の意図を遙に超えて冷たいものになる。
「日本軍の担当する地域はカンザス・オクラホマ地域。主要任務は、飛行艦護衛任務」
「随分と広大だな」
「現状、猿共は五大湖方面へ攻勢を強めている最中。カンザスやオクラホマ地域なんて、戦略的には価値はそれほどないけど、それでも護衛は欲しいのが米軍の本音でしょうね」
「チンク共の目的はあくまで東海岸か」
「五大湖方面の攻略の意味は、工業地帯を確保すること。東海岸は政治的な意味が強いです。
アラバマを突破、大西洋岸平野を制圧して、ワシントンに黄色い旗を立てるつもりでしょう。そうなれば、この国は息の根が止まります」
「西海岸に意味はない？」
「ロッキー山脈が邪魔をしているし、主要道は爆破されて物流が確保出来ません。
なにより、東海岸が陥落すれば、西海岸はオマケでついてくる。逆はない。それだけです」
「考えてみれば」
コーヒーカップをソーサーに戻したフォイルナー少佐は、デスクに広げた地図を見ながら言った。
「東海岸方面だけ見ると、この国は以外と小さいんだな」
「そう」
ブリュンヒルデも異存はない。
「あの日本の」
ピーピーピー
ヒルデガルドが言いかけた時、室内にアラームが鳴り響いた。
デスクの上におかれた電話が呼び出し音を上げていた。
フォイルナー少佐が受話器をとった。

メサイアや飛行艦同士の通信にも使われるテレビ電話のモニターが作動し、一人の男がモニターの向こうにあらわれた。
「フォイルナーか？」
相手はドイツ帝国軍第４０メサイア機甲大隊を率いるクルト中佐だった。
フォイルナー少佐とは古くからのつきあいのある古参。
フォイルナー少佐からすれば、父親と言えるほど歳が離れているベテランらしいいかつい顔立ちの持ち主で、すっかり薄くなり始めた頭は綺麗になでつけられているあたりが、年頃を教えてくれている。
とはいえ、胸には一級鉄十字勲章の他、いくつもの従軍記念章をぶら下げている彼の経歴は、フォイルナー少佐にとっても十分に敬意に値した。
そんな歴戦の彼が、珍しく興奮した声をあげていた。
「昨晩のことは知っているな？」
「昨晩？」
チラリと目の前に立つブリュンヒルデを見た。
「――何のことです？」
「お前がペゴスで派手な北米デビュー戦を飾ったことは知っている」
クルト中佐は苦笑しながら言った。
「寝不足か？クラッチマー中尉相手にベッドのお祝いが過ぎたようだな」
「……」
ブリュンヒルデが真っ赤になっているのに、フォイルナー少佐は顔色一つ変えない。
「……すまん。中尉は近くにおらんだろうな？」
「すぐ目の前にいます。代わりますか？」
「それを早く言え！ヴォルフ！」
クルト中佐はびっくりした顔で怒鳴った。
「フロイラインの俺への印象が悪くなるだろうが！」

「……で？」
「お前達の子供の名付け親は俺だと決めているんだ！そこん所を忘れないでほしいものだな！」
「中佐」
フォイルナー少佐は表面上は冷静に、しかし、やや言葉を滑らせ気味に言った。
「ご用件を」
「おお！」
クルト中佐はポンッと手を叩いた。
「お前達が北米デビュー戦を飾った数時間後だ。俺達の輸送艦の鼻面３００キロ先をすれ違ったのに気付かなかったか？」
「……途中、飛行艦隊を認識したのは認めます」
「そうだ。日本軍は米軍の指揮下で動かないなんてとんでもない。飛行艦部隊のエスコートに従事しているんだ。俺達も北極ルートからカナダ経由で西海岸に入ったが、護衛を受けたよ」
「……」
「ミズーリ上空は敵の勢力圏内だが、そこでメサイアを含む機甲部隊と接触した」
「それで？」
「俺達の騎は輸送艦の中で身動きも出来ない。やったのは日本軍だ」
クルト中佐は心底、感心した。という顔でうなった。
「見事なものだったぞ？」

中華帝国軍支配地域となったニューオリンズからシカゴまで伸びる州間高速道路５５号線とルート６０経由で州間高速道路５７号線が分岐する場所を挟む格好で立地するシャウニー国立森林公園とマーク・トゥエィン国立森林公園に挟まれた区域。

そこは現在、中華帝国軍と米軍が入り乱れて戦う北部方面の最前線だ。

西海岸で食料と水の補給を受けたドイツ軍輸送艦隊は、そこにメサイアを運ぶためロッキー山脈を越えたところで日本軍の飛行艦“鈴谷”のエスコートを受けた。

目的地はセントルイス。

フォイルナー少佐率いる４４大隊との合流が予定された場所。

任務そのものは、単なる移動だけに、さしたる問題もないはずだった。

ところが、スプリングフィールド郊外にさしかかった所で事態は動いた。

●鈴谷艦橋

「メサイア？」

「はい」

深夜、ＣＩＣからの報告の叩き起こされた美夜は、すぐに艦橋に入った。

「中華の支配地域になっているリトルロックから、米軍防衛網を迂回して後背を突こうという動きです」

先に艦橋に入っていた副長が答えた。

「通報は？」

「すでに行っています。米軍からの返信はありませんが」

「……そうか」

美夜が考えたことは一つ。

後方の輸送艦隊のことだ。

艦隊の安全を確保することがエスコートの務め。

ここでリスクは犯せないが――

「針路変更して逃げ切ることは可能か？」
「敵はすでにこちらを補足しています」
その言葉が、美夜に覚悟を決めさせた。
「メサイアの数は？」
「反応は２０を超えて増大中」
「かなりだな」
美夜は眠気がすっかり覚めた目で戦況モニターを見た。
「これは……中華帝国軍が大迂回中の所に我々が入り込んだという所か？」
「恐らく」
「……間が悪すぎる」
「然り」
「全艦、戦闘態勢。メサイア隊を全騎上げろ」
「……艦長」
高木はこっそりと訊ねた。
「彼女は、どうします？」
「まだ待て」
「しかし」
「あの子を止められる泉大尉はまだ到着していない」
「……はい」

●スプリングフィールド郊外
全騎の発艦を確認した月城は、
「運がないとはこのことだ」
ぽつりと呟いた。
「敵の迂回行動のまっただ中に飛び込むとは」
月城の判断によれば、事態はこうなる。
米軍の防衛網を突破出来ないことに業を煮やした中華帝国軍は、

正面突破を諦めて後背からの奇襲攻撃に切り替えた。
そのための大部隊の移動する先に、鈴谷と輸送艦隊が入り込んだ。
確かに、運がないといえばない。
敵の大部隊の目の前にのこのこ入り込むなんて、鴨ネギも良いところだ。

「隊長」
後方に展開する涼からの通信が入る。
「作戦を願います」
「……わかった」
すでに月城騎の周囲には、駆逐中隊騎が轡を並べている。
雲一つ無い夜。白い月明かりの下、“白雷改”達が居並ぶ姿はなかなかに壮観だった。
周りを見回すだけで血が沸く月城は、内心の興奮を抑えながら言った。
「本質的な目的は、輸送艦隊を安全に通過させることだ。敵はすでに輸送艦隊を補足。その撃破に向けて動いている」
月城は、戦況モニターに表示される敵予想ルートを見た。
「敵の数はこちらの４倍。数だけは十分だ」
「大尉。山崎です」
「うん？」
「後方には大規模な機甲部隊がいます。これについては」
「中尉の危惧はもっともだ」月城は頷いた。
「メサイアだけを相手にして、機甲部隊を無視したとあっては戦術上はともかく、戦略上においては大きな痛手だ。柏、山崎、それから狙撃部隊」
「はい？」
「濡れ仕事を押しつけてすまんが、やってくれるか？」
濡れ仕事。

その意味は、美晴にもわかった。
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の使用許可を」
「許可する」
「了解。山崎・柏騎は敵機甲部隊の掃討に動きます」
「こ、小清水ですが……」
「狙撃部隊は敵機甲部隊掃討の支援最優先。砲撃支援が必要な場合、すぐに呼ぶ」
「……了解」
涼は思った。
これがお姉さまなら、正面突破して火炎放射でメサイア焼き払って、ついでに後ろの部隊を叩くなんて派手なことするだろう。
戦力を分散させるリスクをお姉さまなら嫌う。
でも、月城大尉は違う。
リスクをリスクと考えていないんじゃないか？
その根拠は何？
「全騎」
月城は言った。
「与えられた“白雷改”の性能を信じろ。これなら数倍の敵なんてどうということはない」
――まずいな。
月城の一言に、涼は無意識に舌打ちしてしまった。
――この人は、危険だ。
大丈夫だという根拠は、己の発案した作戦にはない。
騎体に対する過度の信頼だ。
美奈代なら絶対に認めないことを根拠だとしている。
騎体の性能が必ずしも勝利につながらないことは、涼も実戦で骨

身に染みている。
“白雷（はくらい）”が赤兎に敗北したことだってあるのだ。
月城大尉なりの励ましだと思いたいが、それが本心なら、涼に残るのは絶望だけだ。

「月城隊長」
涼は少しだけ考えてから言った。
「地形的に遮蔽物を活かした狙撃は困難。ケースバイケースで移動の許可、願います」
「善処しろ」
「了解」
「ブースターでの移動は極めて危険。狙撃隊はホバー移動。柏中尉？」
「はい？」
「後方につきます。よろしいですか？」
「了解。なるべく早くね？」
「――――必ず」
頷いた後、小清水は狙撃隊内部に限定した通信を開いた。
「芳（かおる）、寧々ちゃん。聞いて」

月夜の下。
後方を飛行艦部隊が通過していく。
飛行艦の防空能力を測りかねているのだろうか。中華帝国軍のメサイア達はホバー移動で接近してくる。
「茜」
月城大尉は、ＭＣ（メサイア・コントローラー）に問いかけた。
「敵の機種はわかるか？」
「……判明」
１０秒ほど遅れてＭＣ（メサイア・コントローラー）の広沢茜少尉が答えた。

「帝剣です」
「大したことないな」
月城は、楽観的に答えた。
「……は？」
茜の目が点になったのも無理はない。
「あ、あの？」
「その程度なら、このレベルの騎でなくても大丈夫だ」
「……はぁ」
茜は、月城大尉の言葉をどう理解して良いのか、本気で迷った。
大尉には余程自信があるんだろうと勝手に思いこむのが精一杯だ。
何しろ。相手は内親王護衛隊（レイナガーズ）の総隊長まで経験した一端の騎士なのだから。
「……まさか」
茜は、自分の脳裏に浮かんだ疑問を振り払った。
そんな馬鹿な話はない。
そう、思ったからだ。
「大尉？どうなさいますか？」
「宗像」
「はい？」
「すまん。いつもの癖ですっかり忘れていた。指揮官はお前だったな」
「……そのままやって下さって結構ですよ？」
「いや？立場が立場だ。お前に全てを委ねる。済まなかった」
「……」
通信モニター上の宗像は、明らかに困った。という顔になった。
「この状況で……ですか」
「やれば出来る」
月城大尉は言った。
「お前の素質を信じるぞ？」
「……了解」

宗像は、覚悟を決めた。
どうせ、相手は何を言っても聞いてくれるはずもない。
エリート部隊の偉い奴なんて、みんなそんなものだ。
都合のいい時だけ指揮官面して、悪くなれば逃げ出す。
作戦を勝手に立案しておいて、これでしくじれば知らんぷりするに決まっている。
宗像は、そうタカをくくっているし、はっきり、この状況は宗像にそう思わせるのに十分すぎた。
「全騎。前方に帝剣部隊接近。斬艦刀装備――――狙撃部隊。聞こえるか？」
「こちら狙撃部隊」
「配置は？」
「帝剣部隊側面３キロ地点。３騎による十字砲火可能ポジションにつけています」
「了解した。戦況モニター上、マーカー設定するポイントはここだ」
宗像が指定したのは、狙撃部隊からすれば十字砲火の交差ポイント。
そして、宗像達が展開する目と鼻の先だ。
「涼？」
宗像は訊ねた。
「はい？」
「このポジションにつけたのはどういう意味だ？」
「美奈代お姉さまなら」涼は誇らしげに言った。
「ここに展開しろと、間違いなく言うからです」
「嫁の判断か？泉はいい嫁に巡り会えたものだ」
宗像は安堵のため息一つ。前衛部隊に命じた。
「前衛部隊はこのまま前進。敵展開予想地点２５０で停止。横一列に。数を多く見せたい」
宗像騎を中心に、月城、鵜来の三騎が横に並んだ。
本当なら、山崎がいて、美晴がいて、都築がいて、さつきがいて

くれた。
　祷子も美奈代もいた。
　それが、今やその誰もいない。
　寂しさより、むしろ悲しさの方が本音に近い。
「結構、燃えるシチュエーションですね」
　有珠（ありす）は興奮気味に言った。
「映画みたいで、ゾクゾクします！」
「そうだな」
　宗像はそっけなく答えた。
「お前みたいな楽天家は、どんなシチュエーションでも、楽しむことは出来る」
「褒めてます？」
「一応な」
　まるで有珠（ありす）をたきつけるように、宗像は怒鳴った。
「人生はゲームだ！負けたら終わる！それだけ、それが人生だ！」
「はいっ！」
「帝剣部隊接近中！数２５！」
「生き残ったら一晩でエース認定されるぞ？」
「頑張りますっ！」
「よしっ――――全騎、広域火焔掃射装置準備（スイーパーズフレイム）。涼？広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を使う。炎を合図に仕留めろ。なるたけ多く頼むぞ？」
「はい」
「帝剣、接近中」
「……ホントに次から次へと」
　涼はターゲットスコープを睨みながらぼやいた。
「よくもまぁ、あんな重メサイアを量産しつづけられるものですね」
「国家総動員法を楯に好き勝手出来ますからね」
　高良中尉が言った。
「大陸に進出した企業の機材は使い放題。資源も人も工具も……為政者の思い通りに」

「その具現化が……あれですか」
月明かりに照らし出された巨大な甲冑達が目の前に並ぶたった3騎を目指して殺到している。
お前らなんてひねり潰してやる！
その歪んだ覇気が、騎体からにじみ出している錯覚さえ覚えてしまう。
月明かりがあるおかげで白い三騎がぼんやりと浮かんで見える。
こう見ると、白いメサイアは夜間戦には全く向いていないことは確かだなと、涼はそんなことをふと思った。
“白雷改”達が、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを展開。
その筒先を帝剣達に向けている。

「ターゲット・ロック。マーカー4」
「同じく。マーカー6。このポジションにHMCがあるから、8と11を同時に狙撃可能」
寧々と芳（かおる）からの通信が入った次の瞬間――

ゴウッ！
ギュァァァァァッッッ！

この世のモノとは思えない背筋が寒くなるような音が響く中、地上に太陽が生じたのかと錯覚する程、激しく輝くプラズマ炎による地獄の宴が始まった。
「撃てっ！」
涼は、とっさにそう叫ぶと、HMCのトリガーを引いた。

前方で突撃機動に入った友軍の帝剣達。

勝利を確信して振り上げられた戦斧に白い月光が反射して輝く。
その勇壮な光景に、後続の騎士は勝利を確信した。

こりゃ、第一波だけであっさり終わるな。

後続第二波に配置された騎士は、自分が手柄を立てられないのを残念に思った。
本国でこの騎を引き渡された時には、これでバンバン手柄を立てて、大将まで出世してやると、本気でそう思ったのだが、現実はそう簡単ではない。
まぁ……。
小さくため息をついて、彼は自分を慰めた。
あんな得体の知れない三騎程度潰しても、司令部（うえ）がどれ程も評価してくれるものか。
しゃしゃり出ても、第一波の邪魔になったと因縁をつけられてもつまらない。
「第二波所属全騎」
隊長騎から命令が来た。
「第一波だけでことが足りる。全騎停止」
……まぁ。そうだろう。
勢いで第一波と一緒に突撃して、あわよくばと思っていた隊長。
今頃、臍を噛んでいるに違いない。

第一派は敵との交戦距離まで１００メートル程。

彼は隊長がどんな顔を浮かべているかを想像して、苦笑を漏らしながら帝剣の速度を落とした。

その次の瞬間だ。

「……ん？」
白いメサイア達が槍状の武器を突き出していたのは知っていた。
珍しいタイプの“槍”だと思っていた。
その“槍”から……

「！？」
ゴウッ！
ギュァァァァァッッッ！

銀紙を噛みながら黒板に爪を立てたらきっとこんな感じだろう。
その音は、彼の背筋を心底寒くさせた。

だが、その音よりも強く、彼を恐怖させたのは別にある。

帝剣の夜間暗視装置が一瞬で停止。画面が真っ白から真っ暗になった。
強烈な炎の光に、光学部のヒューズが耐えられなかったのだ。

モニターが完全にブラックアウトして、外の状況がまるでわからない。

これだ。

何も分からない。
戦場という極限状態の中、これに勝る恐怖はない。

コクピットの中は、暗闇の中を計器類の弱い明かりが照らし出す。
その中で一番強い、赤い光をともすのが、騎体状態を告げるステイタスモニター。

モニターは騎体装甲の異常加熱警報で真っ赤に点滅を繰り返している。
彼にとってわかるのは、自分の騎体にも何かが起きたらしい程度だ。
「な、何が起きた!?」

「全騎っ!伏せろっ!」
隊長機から突然の命令が飛ぶ。
命令には絶対に従うことを信条とする彼は、弾かれたように騎体をその場に伏せさせた。
だが、他の騎士達はそうはいかなかった。
わからない。
その恐怖が、彼等の反応を狂わせた。
「な、何!?誰だ!?何だ、伏せろってどこへ!?」
「隊長!?隊長っ!な、何が起きているんですか!?」
僚騎から聞き慣れた声が、指示と説明を求めて通信を混乱させている。
「こんな時にモタモタするな!張、龍、伏せたのか!?くそっ!何もわからん!誰でもいい!状況の分かる者は!?」

ズンッ!
ズズンッ!
ガシャンッ!

MC(メサイア・コントローラー)からの声に、さらに問いかけようとした彼の耳をつんざくような破壊音が連続して響き渡ったのは、その時だ。

「何が起きている!?」
目の前は真っ暗。
モニターは警報だらけ。

とにかく、周囲でとんでもない騒ぎが起きていることは確かだ。
何も分からないことが、彼に本能的なまでの恐怖感を引き起こした。
うわずる声で、彼は叫んだ。
「とにかく、モニターだけでも回復させろ！こんな状態で敵に襲われたら終わりだぞ！？」
「は、はいっ！」
MC（メサイア・コントローラー）はマニュアルに従って暗視装置故障時の回復手順を行った。
「先程の強い光で暗視装置が破損しました。光学補正が聞きませんので注意してください！」
「それと、さっきの音は何だ！？」
「友軍に対する砲撃及び着弾音。帝剣８０５、８５６、８２４、８３２号騎、反応消えました！」
「やりいっ！」
ターゲットスコープから目を離して、芳（かおる）が歓声を上げた。
「二騎同時キル達成っ！」
高出力を誇るＨＭＣのエネルギー弾を、２騎の胴体をえぐる弾道で発射。
エネルギー弾は、帝剣２騎の胴体を、芳（かおる）の狙い通りに派手にえぐり取った。
「芳（かおる）っ！」
コクピットで小躍りする芳（かおる）に、涼の怒鳴り声が響く。
「続きの射撃、どうしたのよ！」
「――――あっ、ごめんっていうか」
芳（かおる）は答えた。
「地形の影に隠れちゃって射撃不能だよ」
「そっちも！？寧々ちゃんは！？」
「こちらも同じ……このポジションで致命傷は無理です」

「……ったく」
涼は舌打ちした。
敵の指揮官はたいした奴だ。
プラズマ炎の強い光で夜間暗視装置が一瞬にしてオシャカになった。
視界が効かない中、部隊に伏せろと命じることは、そう簡単に出来ることじゃない。
地形の関係で射撃が出来ない。
想定外はあるものだ。
「……まぁ」
涼は肩をすくめた。
「宗像中尉？柏中尉達の支援に回りたいのですが、私達、まだお入り用ですか？」

「いや――――いい」
宗像は前衛２騎に進め。の合図を出しながら言った。
「ご苦労。掃討はこちらでやる。柏達には借りて悪かったと伝えてくれ」
「了解。狙撃隊はポイントＢへ移動開始。柏中尉？ＭＬＲＳの支援砲撃、入ります。後方のポイントＵへの侵攻は避けてください。敵の退路真上に落としますので」

「やれやれ」
遠ざかって行く狙撃隊の反応を見ながら、宗像は思った。
指揮官に限定した話をすれば、小清水はこのままなら、泉を超える。
それは確実だ。
泉に実務能力を与えたら涼になる。
そうすると……。
泉は無能ということになるか？

まぁ、いい。
涼は参謀という点では、まだまだ泉を超えられはしないだろう。
そう思ってやらなければ、泉が気の毒過ぎる。

焼けこげた大地を踏みしめながら、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を構えた“白雷改”が前進する。

前方に伏せていた帝剣が起きあがろうとしている。
ガードスパイクが凶悪な光の牙を作り上げ、光に照らされた帝剣の顔を醜悪に照らし出している。
普通の装備で出会ったら、絶対に逃げるべき。
特に集団戦では。
近衛でさえ認める強力無比なメサイア――帝剣。
戦斧や戦棍（せんこん）による攻撃をものともしない重武装に固められた堅固な“歩く要塞”が宗像達の前に立ちふさがろうとしていた。

――大人しく、寝ていればいいものを。

そう思いながら、宗像は声を張り上げた。

「掃討用意。目標、前方残存帝剣部隊！」

宗像の声に容赦はない。

あまりに一方的な戦いの展開は、むしろ楽しいと宗像は喉で笑ってさえいた。
圧倒的。
その響きが、何より楽しい。

晴れやかにさえ聞こえる宗像の命令が、通信装置に流れた。

「――撃てっ！」

ビーッ！
ビーッ！

「ち、ちょっと？」
「急いで！」
メサイア発進を告げるサイレンが鳴り響く中、エレナとヘルガは他の騎士やMC（メサイア・コントローラー）と共に乗騎に駆け出していた。
その目の前では、デュミナスがハンガーから引き出されようとしている。
発進が開始されたノイシア達もまた、移動や離陸を始めようとしていた。
蜂の巣を突いたような騒ぎの中、皆が与えられた仕事をするのが精一杯だ。
「何が起きたのよ！」
「部隊はセントルイスへ移動する」
ノイシアの足下までたどり着いた二人はコクピットまでのリフトを待つしかない。
騎士の能力を考えれば、コクピットまで飛び乗ることは出来るが、事故防止の建前から、普通は禁止されている。
「何かあったのかはわからないわ。でも」
リフトに乗った二人の前で、大隊長直属のアインツ小隊が離陸を開始しようとしていた。
「……さすがのエリートね。私達とは大違い」
「エルフ小隊、発進急げ！」

発艦誘導士官がリフトめがけて大声を上げた。
「大隊長の命令だぞ！」
「そんなこと言ったって！ちょっと待ってよ！」

エレナ率いるエルフ小隊がアインツ小隊と合流したのは、アインツ小隊発進後１０分以上の時間が経過してからだ。
はっきり遅すぎる。
準戦闘発進を宣言し、司令部の許可が下りる前にすべて手順を完全無視した乱暴な発進。戦闘速度展開までやって、それで１０分の穴が開いた。
ヘルガに言わせると、“針の穴にハムを突っ込んだような”乱暴なマネまでした追跡劇の意味はないに等しい。
むしろ、その振る舞いに対して、上官からいつ、どんな説教が飛んでくるかエレナは戦々恐々とするしかない。
敵の弾丸より上官の説教が恐い。
それが現場指揮官の切なる本音だ。
恐いよ。恐いよぉ……と、まるで呪文のように繰り返すエレナに、
「……まぁ」ヘルガは少し気の毒そうに言った。
「減俸の時はお金貸してあげるから」
「そう言って」エレナは怨めしそうに答えた。
「利子なしで貸してくれたことないでしょう？」
「たかが１割でしょう？」
「一日で一割の割り増しなんて信じられないわよ！」
「貴族様の割にはお金に細かいんだから……司令部の警告無視、部隊単位での離陸手順無視、巡航速度無視の戦闘速度展開……」
指折り数えてヘルガはあっさりと、
「軍法会議……ううん？クビにならない方がウソね」
号泣するエレナの声を聞きながら、ヘルガはモニターに映るデュミナス達に視線を釘付けにしていた。

ツノ付き

まるで頭から細くて長い直剣を生えさせたようなデザインから、整備兵や騎士達はデュミナスをそう呼んでいたのがこう見ると本当に正しいと思える。

漆黒と純白に塗装された、従来のドイツ騎とは一線を画すボディラインは極めて細くて繊細。

無骨な装甲を纏うノイシアとは設計思想から違うことを、その外見が証明していた。

「……こちらヘルガ。イリス？聞こえている？」

ヘルガはイリスに通信を開いた。

イリスの乗るルナ騎はエレナ騎の右斜め後方を飛行中だ。

「こちらルナテレジア騎、イリスです」

鈴を頃がしたような、耳にとろける声がすぐに聞こえた。

「イリスは隊長達の新型、どう思う？」

「……あんなの、扱ってみたいです」

イリスはその幼い顔をうっとりとしながら言った。

まるで人気のアイドルにでも出会ったかのように、その頬は紅潮して、目は潤んでいる。

「パワーゲージがノイシアなんて比較にならないほどスゴイです……いいなぁ」

そう。こっそり行った測定の結果、隊長騎はノイシアと比較にならないパワーを持っている。

「マラネリ王国製……よね」

「はい……でも」

コンソールを手早く叩きながら、イリスは答えた。

「かなり日本騎の影響を受けています。各部に日本のインペリアルガーズ配備騎を参考にした形跡が見て取れます」

「インペリアルガーズ？極東のあの国ね？」

「一部部隊が北米にも派遣されていますよ？」
「そうなの？」
「昨晩、スプリングスフィールド付近で敵メサイア１個中隊２５騎。機甲１個師団を殲滅しています」
「大勝利ね」
ヘルガは苦笑しながら言った。
「何？極東で魔族軍に攻められていると聞いていたけど、インペリアルガーズってそんなにヒマなの？」
「えっ？」
イリスがモニターの向こうできょとん。とした顔をした。
ちょっと小首を傾げるだけで抱きしめたくなるほど愛らしい。
同性愛者ではないはずなのに、この子は本気で愛してみたくなるから不思議だ。
「だから」
わき上がる欲情を表面的には抑えながらヘルガは訊ねた。
「何個大隊で来たの？日本軍は」
「昨晩の交戦は、第４０機甲大隊の輸送部隊護衛と、防衛線後方への迂回戦術阻止の二通りの意味がありました」と、イリスは一見見当違いのことを言った。
「だから」
「参加した日本軍は……たったの」
イリスは両手の指を使って８を作って見せた。
「これだけです」
「８個中隊もいれば」ヘルガは鼻で笑って言った。
「十分な戦果ね」
「違います」イリスは手をパタパタさせながら言った。
「たったの、８騎です」

小高い丘陵に立つデュミナス達。

その眼下に黒こげになった大地が広がる。
所々に転がる黒い塊が、昨日までメサイアや戦車だったとは俄には信じられない。
「……」
昨日の戦闘が行われた区域でデュミナスを降りたフォイルナー少佐の鼻に、風に乗って届くのは、未だにくすぶり続ける木々の燃え残りの匂いだ。
かつては一面、緑に覆われていたはずの草原や森林だったのが、今や目も当てられないほどの惨状を曝している。
アフリカ戦線で、広範囲をナパームで焼き払った痕跡を何度も見てきたが、それ以上の何かがある光景だった。
「日本軍の火炎攻撃です」
ブリュンヒルデは手元のＰＤＡを操作しながら言った。
「ベルリン級補給艦から発射された偵察ポッドがデータ収集に成功しています」
「……」
フォイルナー少佐は、双眼鏡をもったまま、ブリュンヒルデの報告に聞き入る。
沈黙をもって先を促す上官に、ブリュンヒルデは報告を続けた。
「日本軍の火炎放射攻撃は……我が軍をはじめ、各国で用いられているＧＦ２０のようなジェルタイプではありません」
「……だろうな」
フォイルナー少佐は小さく頷いた。
「痕跡も残さずに焼き払うようなマネは出来ない。大型妖魔達ですら、骨位は残ったものだ」
「ただ……観測データを元にすれば、日本軍の用いた攻撃は火炎放射攻撃と呼ぶのは不適切なものです」
「ん？」
「これは――――プラズマ攻撃です」
「プラズマ？」

「はい」
ブリュンヒルデは少し考えてから言った。
「太陽の中心温度ほどの高熱による攻撃……でしょうか」
「どれ程のモノかよくわからないが」
フォイルナー少佐はブリュンヒルデに向き直った。
「火炎放射だかプラズマだかの攻撃によって、一方的に中華帝国軍を殲滅した――そういうことだろう？」
「はい。効果範囲は２００メートルを余裕で上回っていました。メサイアの突撃密集隊形を考えれば、ほぼすっぽり入ります。撃ち漏らした騎は待機していた狙撃部隊による攻撃で対応」
「騎士と騎士の戦いではない」と、フォイルナー少佐は不快そうに言った。
「まるで対大型妖魔戦だ」
「……救援を求める中華帝国軍兵士の声が記録に残っていました」
ブリュンヒルデは顔色一つ変えずに言った。
「これは戦闘にあらず。これは虐殺なり」
「……上手い表現だ」
「１０騎にも満たない数で万を殺傷……しかもわずか展開から撤収までの所用時間３０分」
ブリュンヒルデはアメリカ人のように肩をすくめて見せた。
「余程の手練れと思いますが？」

「ご苦労だった」
報告を終えた月城は、すぐに艦橋を辞した。
深夜。
そして、新たな敵に備える必要もある。
宗像達はハンガーに設置された簡易休憩所で雑魚寝している。

無重力下だから、その辺にフックで体を固定すればどこでも眠ることは出来る。
壁に設置されたベッドに体を固定した宗像達はそこで仮初めの眠りに落ちている。
朝まで眠らせてやりたい。というのが、月城の本音だ。
時計は3時になろうとしていた。
子供でなくても眠る時間だ。
だが……
「ふぅっ……」
月城は、通路の角に来ると、壁にこつん。と額を当てた。
金属の冷たい感触が額にじんわりと伝わってくる。
「頭冷やした方がいいかな……私も」
そのまま目を閉じ、さっきまでの戦闘を思い出した。
「恥と後悔ばかりだ……」
口から、そんな言葉が零れる。
敵騎を帝刃と帝剣を勘違いして、危険な戦力の分散をはかった。
狙撃部隊を機甲部隊攻略に回してしまった。
宗像と、こと、小清水の機転が無ければいくら広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を装備していたとはいえ、危険だった。
低性能騎である帝刃なら、このハイパワー騎でいくらでも喰らうことが出来る。
その打算があったのに、実際は帝剣だった。
帝剣と帝刃を聞き間違えるという、とんでもない凡ミスが収集のつかない悲劇を生み出すところだった。
宗像達は、それを一切反論することもなくフォローしてのけた。
もしここに、内親王護衛隊（レイナガーズ）を連れてきていたら、自分達の全滅は保証できる。
「……」
死んでいった部下達の顔が、浮かんでは消えていった。
「……所詮」

無意識に、壁に押しつけた額に力を込める。
「私が……無能だということか」
そうだろう。
月城は思う。
凡ミスばかり繰り返して、大局で大切なものを掴み損なう。
挙げ句に大切な部下を死地に追いやってきた。

いつまでたっても半人前。

他の部隊長から陰口を叩かれ続けてきた。
部隊長位剥奪も、その結果だとわかっている。
すべては、自分のせいだと。
自分の無能さ故だと。

それでも――――

月城は、自分の可能性を、かつての栄光を己自らの手で再び勝ち取ることを、心のどこかで望んでいた。
つまらないプライドのせいだとわかっている。
それでも、月城は諦められなかった。
今回の戦いは、再生の第一歩とするべきものだった。
ここで指揮官として、或いは参謀として功績を挙げ、内親王護衛隊（レイナガーズ）へ戻る布石としなければならなかった。

それだけに、月城も期する所が大きかった。

指揮官ではないのに、無意識に指揮を飛ばしたのは、その力みがあったからだ。

階級があったとはいえ、下手すれば宗像あたりに殴られても文句

が言えない。

指揮官権限を侵すことは、それほど愚かな行為に他ならない。

それを、さも当然と言わんばかりに無視する格好になったのを、宗像が不問にしてくれたからよかったようなものの、自分がどれ程の問題行動をとったのかもわかる。

力みすぎたなど言い訳にもならない。

つくづく、自分の無能さがイヤになる。

こんな無能がどうして士官なんてやっていられるというのか？

いつだって、周囲のフォローがなければ死んでいたのだ。

他人に救われて、哀れまれて尚、私は何がしたいというのだ。

考えれば考える程、自分がイヤになってくる。

自分の無能さが例えようもなく情けなく、恥ずかしい。

こんな自分が指揮を執ったからこそ、無駄に死人まで出したのに、それがわかっていてなお、指揮官になろうとする自分がいる。

「……悔しいほど……情けない」

ぽつりと出た言葉が引き金となって、月城の頬を、熱い涙がこぼれていった。

「もう……イヤだ……私……」

「……東京を出たんですね？」

「はい。今度こそ到着してもらいます。でなければ」

「紅葉ちゃんの責任問題？」

「当然です。我々は彼女を遊ばせるために高い開発費を払っていません」
「……まぁ、予算分配は俺達の仕事じゃないですけど」
ちらと後藤は美夜を見た。
「来年の予算、もらえそうですか？」
「鈴谷が沈んでいなければ」
「それがありましたな」
もう一回、寝ます。という後藤に、“私もそうします”と、美夜は言った。
深夜のシフトに戻りつつある。艦橋は最小限度の人材しかいない。
「――宗像は頑張ったようですね」
「もとから才能はあるんですよ」
艦橋を出ようとした後藤は、足を止めた。
「指揮官として問題ってのは、単に男性恐怖症の裏返しですからね。あいつの場合」
「……」
「問題は月城大尉ですよ。正直」
「……」
「……よくあれで指揮官やってましたね」
「月城大尉のあだ名を知っていますか？」
「あだ名？」
「蔑称というべきでしょうが」
「……どうぞ？」
「――鉄板というのです」
「鉄板？」
「そう。固くて真っ平ら」
「どうにも」
後藤は笑って肩をすくめた。
「俺にゃあ、随分立派なデコボコに見えますけどねぇ」
「スタイルのことではありませんよ」

「羨ましいですか？」
「管理職になってスタイル維持するのがどれ程！」
「はいはい。こいつぁ失礼。それで？」
「……固くて融通が利かない。実績も能力も真っ平ら」
「それで鉄板？」
「そうです。真面目一辺の癖に指揮官としての実績が伴わないことを嘲られた結果ですね」
「運がないとは……聞いてますけどね」
「それは言えてますね。大尉は確かに、運がない。指揮官になる前は青狼とまで謳われた腕利きだったのに」
「……俺ぁ」
後藤は肩のあたりを掴むとコキコキ鳴らせた。
「戦争終わってまだ生きていたら、泉に寿除隊を勧めることにしますよ。あれもまだ若い。人生やり直し効くうちに、別な人生歩ませた方があいつのためです」
「しかし、泉大尉は」
「一パイロットとしてなら、泉と月城さんにそれ程の違いはないと思うんですよ」
後藤はポケットの中のタバコを取りだした。
「共に才能はある。月城大尉だって、そっちの才能があったから出世した。違いますか？」
「……」美夜は無言で頷いた。
「個人で動く才能と組織を動かす才能は全く違う。指揮官になって求められるモノを、月城大尉は持ち合わせていなかったのは気の毒ですが」
「だから」
美夜は、ハッとなった。
「後藤さんは――指揮官権限を月城大尉に与えなかった」
「……俺ぁね？昔、誰かから聞いた言葉を名言だと思ってるんですよ。艦長」

顔は笑っているが、そう言う後藤の目は、笑っていなかった。
後藤は言った。
「組織で一番不要なのは、真面目な無能だって」
「……」
真面目に物事に取り組むのは悪いことではないが、結果が出せなければ価値はない。
どんな組織でもそうだ。
結果が全てだ。
組織が求めるのは、結果だ。
結果が残せない者は組織を追われる。
無能とは、結果の出せない者のこと。
管理職である以上、美夜にもそれがわかる。
「月城大尉の指揮官としての実績を認めないと？」
「平時や学校の先生なら別ですよ？学校の先生ならあれはたいしたもんです。でも、ここは戦場。しかも、俺の部下はタマが少ない。簡単に消耗されちゃぁ困るんですよ。たった一人でもね」
「……」
「その点なら、月城大尉と肩を並べる、あの不幸の代名詞が成長しすぎたのは、俺も予想外でしたよ」
「泉大尉？」
「不幸の代名詞ってので、想像できました？」
「泉大尉には悪いのですが……」と、美夜は頷いた。
「その通りです」
「――残念ながら、その泉が騎士として成長しすぎたおかげで、他のヤツの成長が妨げられちまった。おかげで、あいつを別部隊に回すハメになった。あいつは本当に迷惑なヤツですよ」

「内心では成長が嬉しいのでは？」
「残念ですが……俺はヤツに参謀としての素質を求めてましてね。騎士としての才能はどうでもいいんです。あいつの才能は戦局を動かす事が出来る」
「後藤さんの女版ってところですか」
「泉が聞いたら死にたがるでしょうけどね。あいつは間違いなく、俺と同類の才能を持っています。東京に戻ったら検査させるつもりですけどね？
　とにかく、あいつの才能を発揮させるには、有能で、泉を使いこなせる前線指揮官が必要なんですよ。俺みたく、後方指揮官じゃなくて」
「月城大尉では役不足と？」
「役立つと思います？」
「泉大尉の参謀としての素質を開花させる力はない……ですか？」
「泉が彼女を潰しちまいますよ。月城さんはプライド高いタイプだから、あんなのの下につくのをよしとしないでしょう。少なくとも内心では」
「……そこまで言う理由は？」
　不意に、美夜は後藤に問いかけた。
「月城大尉を不要だと？」
「――いい加減、大人になりましょうよ。艦長」
　後藤は口元ににやりと笑みを浮かべた。
「月城大尉と鵜来少尉……トレードして欲しいんですわ」
「誰と？」
「……ここ追い出された、あの悪ガキ共と」

北米戦線編　第十四話（後書き）

夏休み。いかがお過ごしですか？暑さにやられて死にそうです。っーか、死んでも良いかな？こんな地獄が毎日続くなら……そんな気分です。いろいろ嫌なことが続くけど、作品書いている時は少し幸せなんで、これからもおつきあい下さい。

北米戦線編　第十五話

●ニューメキシコ州
　カールズバッド洞窟群国立公園内
“グレート・ケイブ”洞窟

米軍は、テキサス州を始め、敵の侵攻を受けた区域に配備されていた反応弾兵器を予め定められていた本土防衛戦計画“ケース・ゴールド”の想定に従って、この公園内にある巨大な鍾乳洞に隠した。
８３あるとされるカールズバッド洞窟群は、現在は米軍の厳重な監視下にあり、一般人は近づくことさえ出来ない。
その中でも最も厳重な監視におかれているのが、８４番目の洞窟。

“グレート・ケイブ”と呼ばれる洞窟。

発見されたのは赤色戦争時代のこと。
公表されているデータでは、カールズバッド洞窟群における最大の洞窟は、レチュギア・ケイブ（Ｌｅｃｈｕｇｕｉｌｌａ　Ｃａｖｅ）、全米で最深（４８９メートル）の深さと、世界第５位（２０３　ｋｍ）を誇るの石灰岩の洞窟とされる。

“グレート・ケイブ”は、その比ではない。

深さ最も深いところで１５００メートル。長さは２００キロに達することが判明している。
　世界最大、非常識な巨大洞窟だ。
この洞窟の何がそれ程、軍の目を引いたのか？
それは、この洞窟のサイズだ。
長さや深さだけではない。洞窟のサイズそのものも、メサイアが

空中戦を行えると誇張される程に巨大なのだ。
軍は、その巨大さを利用して、当初は本土戦闘時の軍司令部及び航空機ハンガーとしての利用を考えていたが、メサイアの普及によりメサイアの基地として、最終的には反応弾の貯蔵庫として利用されることになった。

最も奥部にある“女王の間”に保管されている反応弾は５００発近くに登る。
米軍としては、意地でも中華帝国軍に引き渡すわけにはいかない。
そのために、ここにはメサイア部隊をはじめとして、様々な防衛部隊が配置されている。
セキュリティは厳重に厳重を重ねられ、生半可な装備では反応弾貯蔵施設までたどり着くことは出来ない。
その性格故に、“グレート・ケイブ”は軍内部でも知る者が限られる、米軍の秘密の要塞でもある。

中華帝国軍がその存在を知ったのは、外部からの情報による。
北京の司令部によれば、“親愛なる情報協力者”となるが、何のことはない。
あのユギオ達だ。

５００発以上の反応弾を確保する施設。

それは、戦局においては致命的な意味をもたらすだろう。

中華帝国軍司令部は、その奪取に本気になったのはむしろ当然なのだ。

自らののど元に存在する反応弾というナイフを奪い、逆に西海岸の諸都市に突きつけることが出来れば、米軍の西海岸側からの攻撃

を躊躇わせるのには十分だ。

中華帝国軍が、そのために派遣したのが、方術騎士団。
一般に魔法騎士と呼ばれる騎士によって編成された騎士団。
その中でも、隠密行動に特化した特殊部隊が送り込まれた。

米軍高官を買収し、入手した暗号帳。
それは、各部に通じる扉のパスワード。隠し扉のありか等……“グレート・ケイブ”を丸裸にするのに足る情報。
売りつけたのは――――後に判明したことだが――――“グレート・ケイブ”司令官の妻だった。
ユギオ達がしかけたハニートラップにかかった彼女は、愛人の言うままに夫の書斎からデータを盗み出し、ユギオ達はそれを中華帝国軍に引き渡した。
それだけのことだが、とにかく彼等が攻撃を受けたのは、月城達が中華帝国軍機甲部隊を殲滅した翌日の深夜のことだった。

「ぐっ!?」
“グレート・ケイブ”第17層の通気口管理室に近い曲がり角で、そんな鈍い声がした。
背後に深々と短剣が突き刺さった米軍兵士が力無く床に転がる。
死体から短剣を抜いた黒ずくめの男が、背後に控えていた別の黒ずくめの男と視線をかわし、無言で頷いた。
死体を物陰に隠すと、通気ダクトの点検ハッチを開いた。
ダクトを通じてさらに下層へと入り込もうというのだ。
最上部の第一層からこれまで、全く問題なく繰り返されてきたダクトへの侵入工作。
今度も無条件で上手くいくはずだった。
彼等もそう思っていた。

その彼等の動きを阻止したのは、兵士達の活躍ではなかった。

ダクト建築業者の怠慢だった。

ダクトの点検ハッチを開いた途端、

ガランッ！

乾いた音を立てて床に転がったのは、ダクトの外壁の一部。

立て付けが悪い所に、ハッチを開いた衝撃が走ったせいで、外壁の一部が脱落。

床に音を立てて転がったのだ。

「何の音だ？」

部屋の外から軍靴の音が聞こえてくる。

しかも複数。

警備兵だ。

男達はダクトに潜り込もうとしたが――

「何をしている！？」

警備兵が、彼等を発見する方が早かった。

男達がナイフを抜くのと、警備兵が警報を作動させるのは、ほぼ同時だった。

「何をしているか！」

司令官が苛立った声を上げる。

「ダクトを閉鎖したんだろう！？」

「侵入者はダクトから出ました。阻止ゲートと警備部隊をなぎ払い

ながら地下へ向けて移動中！」
「目的は――――」
「そ、それが」副司令官が首を傾げながら言った。
「この侵入ルートでは、女王の間にはたどり着くことが出来ません」
「道を間違えた？」
「侵入者の動きのスムースさから、それはないと思います」
副司令官は答えた。
「女王の間を狙わないとしたら……このまま進むなら、敵の狙いは――――恐らく、反応弾ではありません」
「じゃあ何だ？――――ええい！一般兵では犠牲を増やすだけだ！火炎放射部隊を前に出せ！騎士はどうした！？相手は魔法騎士だろう！？魔法騎士小隊は何をしているか！」

「くそっ！」
覆面をとった男達の前に現れたのは火炎放射器を担いだ兵士達。
あんなものを喰らったら――――冗談じゃない！
近くに転がっていた米軍兵士の死体から手榴弾を奪うと、安全ピンを引き抜き、接近する米軍兵士達めがけて放り投げた。
バンッ！
手榴弾の爆発音。
火炎放射器のタンクが手榴弾の破片にやられた。
漏れたジェル状のリキッドが何かの炎に引火。一瞬にして兵士達が火だるまになる光景を見せつけられた。
「やったぞ！」
「急げっ！」
彼等は炎に追い立てられるように目的地を目指す。
地図に定められた通りの角を曲がり、警備兵を殺し、ゲートを破壊して下の層へと侵入。その繰り返しだ。

形勢不利と判断したのか。
それとも、別な理由があるのか。
警備兵の追撃が、ある層への侵入を境にぱったりと止まった。

「どういうことだ？」
彼等は時折、背後を確かめながら通路を急ぐ。
「知るか！」
一人が息を切らせながら怒鳴るように言った。
「とにかく――ここだ！」
そこは、通路が途絶えた行き止まり。
「地図によると、友軍兵士達からまで反応弾を隠すため、ここが壁として擬装されているという」
「よし……ブリーチをセットする。どいてくれ」
「頼む」
「設置完了――起爆する！」

硝煙の向こうに開いたのは、全く照明のない、しかも、舗装さえされていないむき出しの岩の上。
鍾乳洞だ。

「これは？」
「情報は疑うな。それが命令だろう」
一人が照明をつけると鍾乳洞に入り込んだ。
「最悪でも、何か情報が手に入るはずだ――行かないのか？」
「……うっ」
これはおかしい。
彼はそう思うが、何がおかしいと聞かれても答えようがない。

むき出しの鍾乳洞は、それこそ擬装かもしれない。

「怖じ気づいたか？」

仲間のバカにしたような声がかんに障った。

「バカを言うな」

彼等は、鍾乳洞を歩き続け、そして、目的地にたどり着いた。

「これは何だ？」

「この石柱を指示通りにセットすればいいらしい」

「……こうだな？」

「ああ――――うわっ！？」

「な……なんだ！？」

「――――ひっ！？逃げろ！逃げるんだ！」

「待て！待ってくれぇぇっっ！」

カールズバッド洞窟群国立公園内“グレート・ケイブ”洞窟は、米軍の秘密要塞という性格を持つ特殊な場所だ。

元来から、電波通信による位置把握を嫌う上層部命令で、外部との通信は極めて限定されていた上に、戦域全体が混乱していることが致命的となった。

洞窟司令部との通信が途絶したことを知ることを、外部が知ることが出来たのは、数日の後のこととなる。

北米戦線編　第十五話（後書き）

……さて。ストーリー上、かなり大切な伏線は張れました。
あとはゆっくりと料理します。
１００話近く、中華帝国軍を相手に美奈代達を戦わせたのは何のため？
単に私が中韓嫌いだから？
違います違います！
流れを作るためです！ホントですよ？信じてくださいって！

というわけで、感想と評価募集中です。
励みになります！
たくさんの感想いただけたらホント嬉しいです！
よろしくお願いします！！

北米戦線編　第十六話

●アメリカ合衆国　ネバタ州　ネリス空軍基地

「や、やっと着いた……」

美奈代は、コクピットハッチを開いた途端、コクピットに流れ込んできたムッとする空気に顔をしかめた。

「暑っ……」

アメリカ合衆国ネバタ州にあるネリス空軍基地。

その一角に設けられた簡易ハンガーに騎体を収容する作業が終了。

ハンガー周囲には、基地関係者が珍しそうに見物に集まっていた。

「ご苦労様」

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）から降りた紅葉が“死天使”の足下で待っていた。

「長旅で大変だったわね」

「いえ」美奈代は小さく笑って首を軽って敬礼した。

詳しくはあっちで。紅葉に案内されハンガーを出る。

ハンガー内部の“死天使”とＤ－ＳＥＥＤが見せ物にならないよう、ハンガーの閉鎖が始まった。

上空。

抜けるような青空に飛行機雲を引きながら戦闘機が飛行していく。

少し飛べば戦場だと、美奈代は改めてここがどこか思い出した。

「おい。ありゃ何だ？」

解散する米軍の士官達が呆れたような声で会話するのが耳に入る。

「あの派手な色だ。ありゃデモンストレーターか？」

「日本軍は、戦線にテスト騎まで持ち込むつもりか？」

「セールスだろう？あんな女の子が乗ってくるんだし」

「アメリカも舐められたもんだ」
その会話は散々だ。

「……」
「……ねぇ」
「はい？」
「金鵄勲章持ってきた？」
「やめておいた方が良いです」
牧野中尉や祷子達と合流した美奈代は苦笑しながら言った。
「勲章ぶら下げても、略綬でモザイク作っても、コスプレと間違われるのがオチです」
「階級章は――向こうもわかんないでしょうしね」
「そういうことです。ところで」
「部隊は大戦果。司令部からの評価は最高のものがあるわ」
「部隊は無事なんですね？」
「ええ。メサイア２４騎、機甲一個師団をわずか３０分で殲滅……」
「……」
「伝説作っちゃったんだもん。それで司令部に文句を言えと？」
美奈代は無言で首を左右に振った。
「私達、必要ないんじゃないですか？宗像達に任せておけば」
「そうもいかないわよ」
紅葉は、ちらりとハンガーの方を見た。
「仕事よ仕事。中華帝国軍なんてどうでもいいけど、せっかく、試し切り用のヤツがわんさといるんだから。斬らないともったいないでしょ？」
「どういう発想ですか」
「黙れ。今日一日は時差ボケ直すのに使って。基地司令に挨拶に行ってからは基本、あてがった部屋で待機して」
「……」
美奈代は、周囲を見回した。

さっきから気になっていたのは事実だ。
米軍兵士達から受ける視線だ。
奇異や下心の影に見え隠れするのは、憎悪や警戒心。
間違いなく、自分達は歓迎されていない。
それが、嫌でもわかる。
「わかりました」
美奈代は、そっと祷子達と目配せして互いに頷きあった。
「室内での休養と食事だけは認めてください」
「ええ。基地外部から食事を確保してあげるからしばらく待ちなさい。日本人のレストランが近くにあるの。そこから手配してあげる……まだお店があればの話だけど」
「別に、この基地でも」
「……あんた、度胸あるわね」
紅葉は苦笑しながら言った。
「米軍の飯っての食べたことないでしょ？」
「え？ええ」
美奈代は頷いた。
「自分は――そういう経歴ですから」
「幸せよ」ちらりと紅葉は牧野中尉や水城中尉を見た。
「一度食べたら」
牧野中尉が苦笑しながら言った。
「二度とは食べたいと思いませんよ」
「そういうものですか？」
「一言で言えば」
「一言で言えば？」
「――豚のえさです」

基地司令はウォーリスという退役間近の将校。
でっぷりと肥えた腹を抱えた、休日にはケンタッキーダービーの

会場で、ミントジュレップ片手にケンタッキーの我が家を大合唱していそうな、そんな感じの男だった。
「インペリアルガーズの来訪を歓迎する」
口ではそう言っているが、その目付きは決して歓迎なんてしていない。
何しに来た？
顔でそう語っていた。
「感謝します」
紅葉がわざとらしい敬礼をした。
「滞在期間中、なにとぞよしなに」
「こちらも色々と」
ウォーリス司令は、紅葉と視線すら合わせなかった。
「不足しておりましてね。人も、物資も」
「存じております。しかし、大統領（ホワイトハウス）の許可は」
「上が何と言おうと」
ねっとりとした視線が紅葉の嫌悪感に触れた。
「不足しているものはしているのです」
「早く出て行けと？」
「ストレートな物言いは嫌いなのだがね」
クックックッ……。
彼は喉の奥で笑った。
「その通り――そう、答えておこうか」
「……了解しました」
紅葉は胸に付けた飾りを見せつけるようにしながら言った。
「それが同盟国軍に対する合衆国軍人の礼儀ならば」

「――まぁ、正直」
夕食は、ハンガー横の宿舎でとることになった。
「脅しが利いたんでしょうね」

「脅し？」
「津島中佐は世界的に顔が利きますから」
牧野中尉は空になったノンアルコールビールの缶を弄びながら言った。
「軍高官あたりに文句が行けば、あの司令官、どんな末路をたどるか知れたもんじゃないですもの」
「あの子って」
幸い、紅葉と祷子は外出してここにはいない。
姫さんの胃袋満たしてくる。
そう言い残して、祷子達とハマーに乗って基地から出ていったばかりだ。
「そんなに有名なんですか？」
「世界最高峰の天才ですもの。世界中のアカデミーで引っ張りだこですよ？」
「……へぇ？」
「あの津島中佐の胸飾り」
「？」
美奈代は、紅葉の白衣につけられている何本かの線で構成された装飾を思い出した。
金色の鎖を横に通したような、奇妙な装飾だ。
「あれが？」
「あれが、スタンド・ラインというのです。主に“見通者（シーカー）”をはじめとした技能者が社会的身分をはっきりさせるためのもので、あれを付けている限り、国際法上の絶対的保護を受けられます」
「……へぇ？」
「最高位の“見通者（シーカー）”に与えられるのが5本線。これで“フル・スタンド”の称号を得られます。現在、これを持っているのは世界でも１００名いません。この上を行く6本線が“ハイパー・スタンド”と呼ばれ、世界では津島中佐を含めて3人だけ」
「……つまり」

美奈代は、あれ？となった。
「あの子と同じレベルでの能力を持つ人がいるってことですか？」
「あのフェルミ博士と、もう一人」
「誰です？聞いてもわかんないと思いますけど」
「マラネリ王国の少年王……世界的にはメサイア開発の世界第一人者の地位にいます」
「津島中佐じゃなくて？」
「津島中佐は」
牧野中尉は苦笑しながら言った。
「そういうのに興味がないんですよ。自分がやりたいことを勝手に出来ればいい。そういうタイプですから」
「なんだかそういうの」
美奈代は楽しげにペットボトルに入った緑茶に口を付けた。
「あの子らしくていいですね」

日本人レストランのシェフが腕を振るったという食事は、ＴＡＣ（タクティカル・エア・コーゴ）の乗組員や整備兵達に大歓迎で受け入れられた。
黄色人種への差別がひどく、近頃では日本の国旗を大きく掲げなければ経営どころか町中さえ歩くことが出来ないという。
“極東で中華帝国軍と戦う日本は仲間だ”という意識を地元の人々に持ってもらえなければ、アメリカから日本人は追い出されていただろうと、料理を持ってきたシェフ達は口々に言った。
北米戦線で勝利した暁には、是非、食べに来てくれ。
そう、言っていた。

思い思いに食事と談笑を楽しむ彼等の耳に、誰かが持ち込んだラジオからはクラシックジャズの心地よい曲が流れてくる。
質素なテーブルと殺風景な室内は、それだけで明るい雰囲気に満ちあふれている。
見ているだけで、何だか幸せだ。

バンッ。
乱暴にドアが開かれ、皆の視線がそちらに集中したのは、そんな騒ぎが一段落した頃。
一目で騎士だとわかる、メサイア用の戦闘服に身を包んだ男女が部屋に入ってきた。
体格はいいが、はっきりガラが悪い。
周囲を威嚇するような態度と視線に、皆が一斉に視線を外した。
「――――んだよ」
突然、一人の整備兵の襟首を掴むと乱暴に床に引き倒した。
そして、テーブルの上にあったローストビーフを一切れ口に放り込むと、すぐに皿の上に吐き出した。
「まずいぜコイツぁ！」
ガシャンッ！
騎士の力で蹴り上げられたテーブルがへしゃげ、料理が天井にまで吹き飛ばされ、整備兵達の頭から降り注いだ。
「かぁっ！イエローモンキーのエサはまずいなんてもんじゃねぇ！」
最も大柄な黒人兵が大げさな仕草でそうわめく。
その脇では、ドレッドヘアの黒人女性士官が腹を抱えて笑っている。

「……あ、あの」
美奈代が恐れたのは、彼等ではない。
「……」
飛んできた料理を頭から被った牧野中尉だ。
トマトケチャップまみれになった顔を丹念に拭き終えた中尉に、美奈代は泣きそうな顔で言った。
「お、抑えてくださいね？ね？」
「……」
牧野中尉は、ニヤリと背筋が寒くなるような笑みを浮かべる。

シャカッ
「な、何だか、テーブルの下で、何だか考えたくないような音がしましたけど……」
「大丈夫です」
牧野中尉は笑みを崩さずに言った。
「ちょっと……世界共通の仁義と礼儀ってヤツを教えてあげるだけですから」
そう言って、席を立った。
「ち、ちょっと!?」
美奈代もまた、慌てて席を立った。
「軍曹!憲兵隊に通報しろ!死人が出る前に!」

バカ騒ぎを続ける米兵達も、牧野中尉の姿に気付いたらしい。

「おやおや」
女性士官が、下からのぞき込むような仕草で牧野中尉を睨み付けた。
「島ザルのメスが、このアタシに何のご用だい?」
女性士官は、それ以上に何かを言おうとしたが、その言葉が出る前に、顎に感じた冷たく、固い感触に言葉を奪われた。
「――――なっ」

「中尉っ!」
駆け寄った美奈代が、とっさに銃を持つ牧野中尉の腕を叩いた。
ダンッ!
銃口がわずかにずれ、銃弾が天井に穴を開けた。
「銃を離してくださいっ!」
頬のすぐ間近を銃弾が走り、驚きのあまり腰を抜かした女性騎士の前で、美奈代が力ずくで牧野中尉から拳銃を奪い取った。
「な、何しているんですか!」

「見て分かりません？」
手をさすりながら牧野中尉は言った。
「国際親善です」
「見えませんよ！」

「テメェっ！」
居合わせた他の騎士達が身構えた。
こりゃマズい。
美奈代がどうしようか本気で迷う後ろでは、
「おらぁっ！？やるかコラ！？」
整備兵達がビール瓶やベルトで武装して席を蹴った。

一触即発。

北米到着と同時に軍法会議なんて冗談じゃない。
とにかく、憲兵隊が来る前に何とかしないと！

「何をしているか！」
鋭い声が通路から響き渡った。
武装した兵士達を率いた金髪の若い士官が仁王立ちになって入り口に立ちふさがっている。
短く刈り上げられた金髪。
白く整った顔立ち。
はっきり美形だと存在が語っていた。

「ラスタマン！ここに立ち入ることは禁止されていたはずだな！？」
「親善に来たんですよ」
最も大柄な黒人騎士がイヤイヤながらの態度で答えた。
「それを突然」

黒人騎士が指さしたのは天井だ。
「全く、日本人ってのは何考えてるんですかね。俺達文明国の人間様にゃ、わかりませんぜ」
「その文明国の人間様がテーブルをこんなにしたのか？」
「挨拶ですよ。パフォーマンスともいいますけどね？」

「ふざけたことを！」
激怒した士官が怒鳴る。
「貴様、今度もめ事起こしたら営倉入りだと教えていたな！？」

「ええ」
黒人騎士はあっけらかんといってのけた。
「いいですよ？営倉に入っている間は、少なくても前線で死ぬことはないですからね」

「くっ！」

「ああ。俺も頼みます」
「俺もね」
騎士達が次々と手を挙げる。
「前線に出たら死んじまうもんで！」

「この――――っ！」
若い士官が拳を握り、騎士達に殴りかかろうとした。
まさにその時だ。
ガッ！
いつの間に立っていたのか、士官より背の高い男が、士官の腕を掴んでいた。
脚を負傷しているのか。松葉杖をついていた。
「やめるんだ、チェスター」

「離せ、ジョエルっ！」
「ランドルフ」
チェスターと呼ばれた松葉杖の男は、背後に待機していた武装した兵士達――憲兵隊に向かって命じた。
「ラスタマン達を、例の場所に連れて行け」
「はっ」

「部下を失った無念は俺にも分かる。チェスター」
連行されていく騎士達を見送ったジョエルが、そっとチェスターと呼んだ士官の腕を放した。
「……だが、それでは誰も付いてこないぞ」
「……わかっている」
チェスターは、無念そうに顔をしかめながら腕をさすった。
「なら、いい」
その仕草を微笑みながら見つめながら、ジョエルは、そっと言った。
「仕事だ」
「チンクか！？」
「日本軍の方も同席願いたい。チンクに動きが見えた」

もっと食べられたのに。と、憮然とした顔で戻ってきた祷子が横に座っている。
米軍のブリーフィング・ルームは、革張りのしっかりとした椅子だ。
軍隊に入ってからというもの、パイプ椅子が基本の身には、ちょっと信じられない贅沢な話だ。
座面が少し大きいあたりに、アメリカ人と日本人の体格の違いを思い知らされる。
何度も座り直しながら周りを見回す。

あの部屋に乱入してきた男達はいない。
なにより、米軍側の騎士達の数が多くはない。
むしろ、美奈代が驚くほど少ない。
「……あの」
ブリーフィングが始まる前に、こっそりと牧野中尉に訊ねた。
「ここって、米軍のメサイア大隊がいる所……ですよね？」
「ええ」
何故か、うっとりとした顔の牧野中尉が答えた。
「第４１メサイア大隊――ヒストリアルカンパニーです」
「ヒストリアルっていうのが……部隊名なんですか？」
「二桁ナンバーの部隊を、そう呼ぶのです」
美奈代は、牧野中尉の視線の先に誰がいるのかやっとわかった。
先程の、チェスターとジョエルと呼ばれた男達だ。
席に座り、互いに書類の中身を確認している様子だ。
「……はぁ（はぁと）」
もうたまらない♪と、牧野中尉の背筋が寒くなるような独り言を、美奈代は聞かなかったことにした。
「そんなに歴史が古い部隊なのに？」
それにしては騎士の数が少なすぎる。
騎士から考えるに、どう見積もっても２０騎前後だ。
大隊というからには、４０騎前後が揃っていておかしくないのに……？

時計のチャイムが鳴り響いた。
「……時間だ」
立ち上がったのは、チェスターとジョエルだ。
「これよりブリーフィングを始める」
チェスターが、不意に美奈代に視線を送った。
「失礼した。今回の作戦には、インペリアルガーズから2騎が参加する」

一同の視線が、美奈代達に集まる。
美奈代はどうしていいのかわからず、小さく頭を下げるに留めた。

「昨日、スプリングフィールド郊外でチンク共のメサイアと機甲大隊を殲滅した部隊の別働隊。特にイズミ大尉は、元その部隊長だ」

ヒュウッ

品のない口笛が米軍騎士の間から上がった。

「紹介が遅れて申し訳ない。私はチェスター・ワイズマン中尉。隣が副官のジョエル・クラークマン中尉だ。イズミ大尉」

「はい」

美奈代は努めて冷静に答えた。

「作戦に協力を」

「最善は尽くしますが」

美奈代は答えた。

「私達の指揮権は現在、そこにいらっしゃる津島中佐のものです」

「失礼」

チェスターは、美奈代のすぐ隣に座る紅葉に言った。

「中佐――それとも、ドクター・ツシマと呼ぶべきですか？」

「中佐で結構」紅葉は冷たく答えた。

「我々を気にすることなく、作戦内容を」

「感謝します」

チェスターは、ちらりとジョエルに視線を送った。

「ここから２５０キロの地点にウォーターブリッジという小さな村

がある」
　ジョエルが言った。
「チンクの機甲部隊は、昨晩の敗北に懲りることもなく、支配地域拡大を目指して侵攻を再開。この村に迫りつつある」
　ジョエルはプロジェクターに地図を表示させた。
「村そのものに戦略的価値はない。問題は、この村に周辺から逃れてきた避難民を含め、多数の民間人が孤立していることだ」
　地図上に中華帝国軍の勢力図を重ね合わせると、その意味がよく分かった。
　村の周辺は、大きく中華帝国軍の支配地域に包まれている。
　つまり、完全に敵の包囲網の中に孤立しているのだ。
　避難民は、その支配地域から逃れてきたんだろうと、すぐに見当が付いた。
「避難民の数は千人を超える。彼等を見殺しにすることは許されない。敵包囲網に穴を開けてゆっくりと、被害を最小限度に抑えた状態で救出作戦を実施する予定だったが……」
　ジョエルの顔が曇った。
「敵は、この包囲網に開いた穴を潰しにかかっている。
　村に対してメサイア主力の戦闘部隊が接近中だ。
　確認されている限り、メサイア１２。軽装機械化歩兵１個中隊程度。
　奴らが避難民を人道的に扱うとは思えない。
　我が軍は、飛行艦隊から大型ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）２０機を動員した救出作戦を実施する」

孤立した村があって、
その村が攻撃を受けつつある。
故に、村人を救出に向かう。

美奈代は作戦を、そう理解した。

「前衛は第二小隊と第三小隊で受け持つ。残りの部隊は損傷が出た場合の穴埋めに入れ。残念ながら、俺は先日の負傷が原因で出撃出来ない。ピット、俺の代わりにチェスターのサポートに入れ」

「了解です」
ピット。と呼ばれた中年の男が頷いた。

「インペリアルガーズには申し訳ないが、連日の戦闘で我が大隊は戦力の大半を消耗しており、現状においては１個中隊の戦力を維持していない」

「……」
成る程？
美奈代はそれで、この異様なまでの騎士の少なさの意味を悟った。
消耗しているのだ。
騎士達の多くは病院か……それとも……。

「敵の数も決して多くはないが、連中は帝剣で武装している。
それに対して我が大隊の装備はグレイファントムＭ１６……荷が重すぎる。
今までの経験では、帝剣一騎撃破するのに３騎を大破させたことになる」

「……わかりました」

「大尉達は」
ジョエルが訊ねた。
「帝剣との交戦経験は？」

「過去なんて意味ありません」
美奈代は言った。
「前衛は我々が引き受けます」

「しかし」

「我々2騎で十分だと――――そう言ったのです」
美奈代はちらりと祷子を見た。
落ち着き払った相変わらずの穏和な表情で、祷子がニコリと微笑んだ。
「やれるな？風間」

「勿論です」
祷子は有無を言わせぬ笑みで答えた。
「そのための私達ですよ？」

「はぁっ♪」
MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）で、牧野中尉がうっとりとした声でため息をついた。
「ママぁ」
“さくら”があきれ顔で言った。
「何回、ため息をつくの？」

「最高の見物でした」
牧野中尉はどこか危険な顔で言った。
「あの二人」
出来れば関わりたくないが、今は発進準備中。
イヤでも牧野中尉の声が聞こえてくる。
「絶対、デキてます」

「……あの？中尉、それって誰のことです？」
“死天使”の起動を行う手が、一瞬だけ止まった。

「決まってるじゃないですか！」
牧野中尉が気色ばんで怒鳴った。
「あの二人！チェスター・ワイズマン中尉とジョエル・クラークマン中尉です！」

「……は？」

「あの二人、私はワイズマン中尉受けだと思うのですが、どう思います？」

「……意味がわかんないんですけど」

牧野中尉は、それを冗談だと思ったらしい。
ワイズマン中尉とクラークマン中尉の受け攻めについて熱く熱弁を振るい、

受け攻め
下克上

美奈代にとってわからない言葉を連発し始めた。
同意を求められ、困り抜いた美奈代がそっと知らないと、そう答えたのがまずかったのか。
牧野中尉は途端に不機嫌になった挙げ句、美奈代を“ノンケのフリした裏切り者”とか、散々にこき下ろし始めた。

「つまり」
美奈代はうんざりした顔で言った。
「あの二人、そういう関係なんですか？」

「当然です！」
牧野中尉の声はまだどこか刺々しい。
「私の目はごまかせません！」

「勘弁して下さいよ……」
美奈代は言った。
「とにかく――津島中佐？」

「巻き込まないで」
ブチッ
紅葉は一言、そう言い残して通信を切った。

「それこそ勘弁して下さい！」
美奈代は抗議した。
「ヒドい言いがかりです！牧野中尉のイカれた変態趣味と、私は無関係――」

ガンッ！

コクピットに、そんな音が響き渡った。

「風間より津島中佐」

「……何？」

「美奈代さんの生命反応が消えたんですけど……」

「ったく、手間かかる子ねぇ……“さくら”？さっさと魂戻してあげて」

「はぁい♪」

「とにかく、真面目に聞いて」

美奈代が復活した所で、紅葉は言った。

「救出作戦は、失敗に終わろうとしている」

「……え？」

「風間です。それは……どういう」

「メサイア部隊が村を襲撃中……それで十分でしょう？」

「避難民は！？」

「村の家々を破壊しつつ、避難民をいぶりだしている」

「……」

「……」

「後ろのグレイファントムの機動力なら無理だけど、あんた達なら出来る」
紅葉は言った。
「――先行して敵騎をなぎ倒して。避難民が逃げ込んでいる施設は判明次第、データを送る。今、彼等を助けられるのは、世界中であなた達だけ。自分の義務を果たして」

「了解っ！」
「はいっ！」

“死天使”とＤ－ＳＥＥＤの翼が開き、驚愕する米軍騎士達の前から、一瞬で消えるほどの超高加速をかけた。

グゥオオオオオオッツ！

鈍くて重い音が闇夜に響き渡る。

木々をなぎ倒し、前進するメサイアの駆動音が鼓膜を叩く。

「……畜生」
誰かがそう呟いた。

「こちら、メロンＴＶのレポーター、ブラックです。現在、ウォーターブリッジ村からチンク共の非道な攻撃をライブでお送りしています」

地方のローカルテレビ局に勤務していたマイク・ブラックは、他の多くの避難民と一緒に方々を逃げ回ってきた。

テレビ局から脱出する際、スタッフと逃走用に使ったテレビ中継車はまだ奇跡的に動かせる。

カメラからの映像は、この中継車を通じて全米の誰かに届いていると、そう信じている。

報道関係者として、避難民の苦しみを取材し、そして世界に伝えるという責務がある。

彼と仲間達は、そう信じている。

大都会のオフィスでクーラーの利いた部屋に籠もって、インターネットと政府や圧力団体の伝えてくる身勝手な情報を適当に組み合わせて記事を作る大マスコミと俺達は違う。

そんな自負が、彼等にはあった。

避難民の待避は完了している。

昔のビール醸造工場の地下に大きな地下倉庫がある。

そこの換気システムが生きている。

避難民達は、ほとんどがそこに逃げ込んでいた。

収容できない者や、病人は赤十字が大きく書かれた病院に収容されていたが、それこそ危険だという意見が出て、小学校の体育館に集められた。

案の定。

メサイアが侵攻してきた時、病院の赤十字はマトのような扱いを受けた。

炎上し、崩れ落ちる病院。

もし、あそこにいたらどんな目にあったかは誰の目にも明らかだ。

「……畜生」

ブラックはマイクを握りしめた。

「チンク共は――――いえ、この国に攻め込んだ悪魔達は、みなさん！どうか私にそう呼ばせてください！
奴らは――――無抵抗の村に対して、ご覧下さい！
このような非道な振る舞いです！
病院をダーツのターゲットのように打ち壊し、村民の建てたささやかな家々を踏みつぶしています！」

ダンッ！

巨大な火柱が上がった。

「村でたった一つのガソリンスタンドが破壊された模様です！」

ブラックがこの村に来た時。
村人達は避難民を受け入れてくれた。
残り少ない食料を惜しげもなく分配してくれた。
互いに助け合う開拓者時代からの、アメリカ人の良心がここにはあった。
豊かな自然に溶け込みながら暮らす生活が、ここにはあった。
神に感謝しつつ、日々を穏やかに暮らす人々の生活が、ここにはあった。

それが――――

「マイクっ！」
スタッフの一人が悲鳴を上げた。
カメラマンのトミーが燃える村を指さした。
「教会が！」

炎上する家々の炎に照らし出されるのは、ちっぽけな教会の尖塔。

この村で病院に次いで目立つ建物だ。
避難民を救うよう、指示を出した村長を兼ねた神父が護る教会だ。
神父の慈悲に満ちあふれた笑顔が、すぐに脳裏に浮かんだ。
あの神父は――
「教会には神父様が！」
トミーの言うとおりだった。
教会には、神父と何人かの避難民が残っていたはずだ。
「畜生っ！」
ブラックの叫びが届くより先に、尖塔に砲弾が命中。
教会は爆発の煙の中へと消えていった。
「悪魔め、地獄に堕ちろっ！」
ブラックは声の限りに叫んだ。
「クソ忌々しい黄色い悪魔共っ！俺達が何をした、神父様が何をした!?何のいわれがあって、俺達をこんなに苦しめるんだ！」
物陰からこっそり撮影していることを、彼等は完全に忘れていた。
ブラックの叫びは、スタッフ達の叫びでもあったのだ。
「ここは俺達の国だ！自由の国、アメリカだ！中国人の来るところじゃないっ！」
叫びに反するように、村が炎の中へと消えていく。
「畜生……畜生……」
幾度となく見てきた集落の最後。
またもやブラックは、その光景を目の当たりにすることになった。
罵り声を張り上げていた喉から出てくるのは、今や嗚咽だけだ。
畜生。その罵りが、もう出てこない。
「――ブラック！」
トミーが何かを見つけたのは、まさにその瞬間だった。

「教会を見ろっ！」

もうもうと立ち上る煙が晴れていく。

その中に立つのは、破壊された尖塔と――

「何だ、あれは……？」

ブラックの目の前。教会の代わりに現れたのは、白い壁だった。

白い壁？

違う。

メサイアのシールドだ。

シールドが、教会を護る壁となって帝剣達の前に立ちはだかっていた。

「い、一体！？」

帝剣達もそのシールドを見つけたらしい。

我が物顔で村を蹂躙していた帝剣達の動きが止まった。

帝剣達の何騎かが、互いに顔を見合ったのを、トミーのカメラが映し出した。

「……誰だ？」

白と紫の二色で塗装されたシールド。

それは見たことのないタイプのシールドだった。

帝剣達がシールドに接近を開始した直後――

ズンッ！

鈍い音を立てて帝剣の胸板が光の槍に貫かれた。

貫通の衝撃に、重装甲の帝剣の脚が宙に持ち上げられ、そして帝剣は後ろへひっくり返った。

撃たれたのは2騎だ。

帝剣達に狼狽が広がったのはわずかだ。

空からの攻撃。そう判断した帝剣達は密集隊形を作り上げると、ブースターを点火した。

魔晶石エンジンが生み出す重力力場の光が白く輝き出す。

帝剣達が密集陣形を作ったまま、空中に浮いた。

燃える村の建物を吹き飛ばしながら、浮かび上がった。

まだ加速に入れない帝剣達は、周囲を警戒しながら、ゆっくりと前進しようとしていた。

「何っ!?」

その光景の一部始終を撮影していたトミーのカメラに、白い二つの物体が浮かび上がったのは、その時だった。

浮かび上がった。

トミーには、そうとしか見えなかった。

一瞬。

ほんの一瞬にして、その二つの物質は、その場に出現したようにしか見えなかったのだ。

白い物体――メサイアだ。

目を見開くトミー達の目の前で、白いメサイア達は、青白く輝く光る剣を振りかざした。

帝剣達の反撃は間に合わない。

騎体を互いに半回転させるように、斬艦刀を横に振り払った。

ズズンッ！

空中で帝剣４騎が真っ二つにされた。

胴体と下半身が身勝手に宙を舞う中。帝剣達は騎体を地面に下ろそうと降下を開始した。

白いメサイア達は、そんな帝剣達に容赦なく襲いかかった。

帝剣の目玉武装であるガードスパイクが展開される。

「そんなもの！」

美奈代は斬艦刀を振りかぶって一気に振り下ろした。

帝剣が真っ二つに切り裂かれ、帝剣の残骸を“死天使”の膝ガードが蹴り飛ばした。

美奈代の狙いはその背後のもう一騎。

目の前の味方が真っ二つにされることも、味方をぶった切った間から攻め込まれることも予想出来なかった帝剣は、身じろぎする間も与えられずに頭部を吹き飛ばされた。

「――――っ！」

敵撃破の戦果を確かめることなく、美奈代はフットレバーを蹴飛ばして、騎体を空中で一回転させつつ、左手でビームライフルを抜いた。

天地がひっくり返った姿勢のまま、ビームライフルが光の矢を放った。

普通に考えれば“矢”というより“槍”というべき破壊力を持つ一撃が、Ｄ－ＳＥＥＤの背後に迫りつつあった帝剣の土手っ腹を貫通。背中に搭載していた実体弾兵器の弾薬を吹き飛ばした。

帝剣の背後で派手な爆発が連続して発生。

その帝剣は、爆発に弾かれるようにして地面に落下。

そのまま爆発した。

祷子が油断した？

違う。

Ｄ－ＳＥＥＤもまた、ビームライフルを構えていた。

そして、“死天使”の背後では、先程、Ｄ－ＳＥＥＤを襲った帝剣同様に、喉部を打ち抜かれた帝剣が地面へ向かって死の降下を始めていた。

祷子と美奈代。

二人は何事もなかったようにビームライフルを格納すると、残存する帝剣めがけて襲いかかった。

この間の戦闘時間――――実に１０秒。

圧倒的な敵。

中華帝国軍の切り札――帝剣。
魔族軍からの技術を反映したそれは、今やベースとなったロシア帝国製メサイア“ローマイヤ”よりも、その性能と量産数の双方で圧倒しているとさえ言われて久しい。
北米大陸戦線投入において、圧倒的な戦闘力で米軍側メサイア部隊を圧倒してきた恐怖の代名詞――帝剣。
それが、瞬きする間もない戦闘で12騎が葬られた。

最後に撃破された帝剣から斬艦刀を引き抜いたD－SEEDは、教会の庭に突き刺さっていたシールドを引き抜いて再び腕にマウント。
そのまま、何事もなかったかのように“死天使”と共に空に舞い上がった。

米軍のメサイア大隊が村に到着したのは、それから5分後のことである。

●ネリス空軍基地
「ジャップ共の圧勝……だと？」

ドスッ！
ドカッ！

倉庫の裏で、鈍い音が響く。

「面白くない話だな」
その音を背に受けながら、ウォーリスは顔をしかめた。

「ジョエルに活躍の場がなかったと……そう言うのだな？」
「残念ですが」
背の高いやせ気味の男が頷いた。
「その通りです。サー」
「そうか――軍曹」
「はっ」
背後で何かをしていた男が、動きを止めた。
「そいつらを始末しておけ。いつも通りだ」
「はっ」
軍曹。
そう呼ばれた男の足下には、先程の黒人騎士達が横たわっていた。
手錠で手足を拘束され、数倍に膨れあがった顔は赤黒い血に汚れている。
「――黄色猿（イエローモンキー）に、この基地で好き勝手された罪は、死んで償わせろ」
「当然です」
軍曹が顎でしゃくると、彼の部下が頑丈そうなロープを腰から抜いた。
「まぁ、同じ有色（カラー）同士のよしみもあったんでしょうがねぇ……」
軍曹が、女性騎士の首にロープを巻き付けた。

基地に帰投した美奈代達は、再びハンガーに騎体を格納。
整備兵達が帰還後の簡易検査を開始する。
機材がほとんどないため、整備兵に出来ることはかなり限られるせいか、美奈代達がコクピットを降りてから1時間足らずで終了。
ハンガーに残るのは警備兵だけとなった。
「明日、鈴谷と合流するまでの辛抱よ。それまでは眠っていて」
紅葉は満足そうに言った。

「たかが帝剣程度。私の騎にとってはどうということは――」

不意に、辺りに電子化された軽妙な音楽が流れ始めた。
ネズミの国のマーチだと美奈代が気付くのには少し時間が必要だった。

「やばっ！？」

慌てた様子の紅葉が白衣のポケットに手を突っ込んだ。

「ち、ちょっと御免っ！」
紅葉は携帯電話を取り出すと、物陰に向かって走り出した。
「は、はい。つ、津島ですけど！」
携帯電話一つ出るのに、何故か紅葉は緊張した声をあげた。
「……殿下！？」

殿下。
その呼び名に、どうやら、相手は皇室の人らしいと、美奈代は勝手に見当をつけた。
麗菜殿下あたりかな？
そう思った美奈代は、紅葉が電話を終えるまで、少し待つことにした。

「――お待たせ」
紅葉が憮然とした顔で戻ってきた。
「可愛い着信音ですね」
「……悪かったわね」
紅葉の頬が赤かくなったのは、美奈代の思い違いとも限るまい。

「殿下が来るわ」
「麗菜殿下が？」
「マネリラ王国の少年王……勘弁して欲しいわよ」
「？」

翌日。
やっと眠ったという充実感の中、目覚めた美奈代は、朝食の席に座った。
場所は昨日の会食の場。整備兵達によって綺麗に清掃されていた。
“この国における日本人の立場が、どれ程難しいか、わかってくれましたか？”
食器を回収に来た日本料理店のシェフは、明日の朝食までの面倒を約束しつつ、寂しげにそう呟くように言っていた。
日本人なら郷愁を誘われるみそ汁の香りが漂う中、日本料理店のシェフが作った握り飯とみそ汁だけの簡単な朝食の席。
普段はパンだけど、たまにはいいですね。と、牧野中尉もまんざらではないらしい。
周囲に聞くと、懇親会を兼ねたテレビ鑑賞会を開くという。
何だろう？
美奈代が首を傾げていると、紅葉が入ってきた。

「おはよう」
「起立――敬礼」
この中では美奈代が紅葉に次いで階級が高くなる。その号令に合わせて全員が起立し、紅葉に敬礼を送った。
「略式で結構よ。食べ始めなさい。せっかくのおみそ汁が冷めるわ」
「――始めろ」

美奈代の命令で、皆が思い思いに食事を始める。
「食べながら聞いて」
紅葉は言った。
「本日０９００にアメリカ軍との最終ミーティングを行うから、パイロットとＭＣ（メサイア・コントローラー）はこのまま残って。整備部隊は１０５０時のメサイア発進、及び１１３０時のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）離陸に備えて――さてと」
チラリと時計を見た紅葉は、テレビのモニターを動かした。
「ニュースが始まるわ。面白いから見ましょう」

丁度、ニュース番組のオープニングが終わったばかり。
美奈代が初めて見るアメリカの番組。
文字がくるくる回ったり、意味不明なＣＧが流れたりと、こういうのは、どこの国も同じなのかな。と思うオープニングはどうでもいい。

問題は、次に映し出された映像だ。
真っ暗な夜空。
炎上する建物。

火事にしては派手だ。

しかも、炎に照らし出されるのは帝剣達。

その帝剣に光の矢が突き刺さり――

「こ、これって、昨日の？」
驚いた美奈代が声を上げるが、
「しっ」
テレビに見入る牧野中尉が口元に指を当てて美奈代を黙らせる。
「……」

美奈代は黙って再びテレビを見る。
地面に叩き付けられた帝剣達がなぎ倒され、戦闘は一方的に終了した。
すべてはわずか１０秒足らず。
シールドを回収したＤ－ＳＥＥＤが離陸して遠ざかっていく。
映像は一旦、そこで途切れた。スタジオのアナウンサーが画面に出てくる。

「……見られていたのですか」
「もう一部始終」
紅葉はおにぎりをかじりながら頷いた。
「おかげで、功績を米軍に譲って恩を売りつけるって私の計画は全部オシャカ」
オカカが懐かしくなってきたわね。
紅葉はみそ汁を割り箸でかき回しながら言った。
「アメリカ軍に騎兵隊やらせたつもりだったのに……意外な伏兵がいたものよ」
「……」
「……ま、私達にお咎めはないから安心して」
「えっ？」
美奈代は驚いて紅葉の顔を見た。
「しかし、我々は機密騎を」
「んなこと言っても、バレちゃってるし」
紅葉はおいしそうにみそ汁の椀を両手で持っている。
そうしていると、何だか抱きしめたくなる程愛らしい。
「ダシ加減は最高ね……考えてみなさい。泉大尉」
「は？」
「機密騎を海外に出すってことの意味」
「……中身さえバレなければ、外見がどうでもいいと？」
「もし、さっきの映像を、分析装置付きで撮影していたら」

「……」
「私は撮影スタッフの殺害を命じたわよ？ためらいもなく」
「っ！？」
驚いた美奈代が周りを見回す。すると、牧野中尉達は、さも当然という顔で頷いていた。
「帝国にも、これだけの戦力があるって誇示することはね？今回のようなケースではむしろ歓迎することなのよ」
「……」
美奈代は、しばらく考えてから答えた。
「戦力が少なすぎると米国が抗議していた件を言っていますか？」
「そう。これでメサイア３６騎、機甲１個師団を殲滅。大尉？この戦果から考えて、派遣戦力が少ないなんて、アメ公の立場で文句言える？」
「……いえ」
「これでアメリカは黙るわ。よくやったと褒めてあげたいけど……」
はぁっ。
みそ汁の椀を戻した紅葉はため息をついた。
「余計なお客を引き寄せちゃったのよねぇ……」
「？」
「皆、聞いて」
紅葉は整備兵達に言った。
「１０時に師匠が……それと、夕方、マネリラ王国から殿下がいらっしゃるから、適当に相手してあげて」

対帝剣１２騎。
戦闘時間１０秒。
結果、帝剣１２騎全滅
日本軍の受けた損害――皆無。

一方的過ぎるワンサイドゲームが世界各国の騎士達に与えた影響は、紅葉に理解できるレベルを遙かに超えていた。
想定以上じゃない。
想定外だ。

エレナ達は、朝からテレビに釘付け。
テレビ局のやらせだとか、
日本軍の新兵器が使われたとか、
何が起きたかであちこちで議論がわき上がっている。

フォイルナー少佐もまた、部屋に籠もったまま、映像を何度も再生して見入っている。

「……ブリュンヒルデ」
画面から目を離さず、フォイルナー少佐はカップだけブリュンヒルデに突き出した。
「胃に悪いですよ？」
何杯目か忘れた程、コーヒーを飲み続けるフォイルナー少佐の体を心配しつつ、ブリュンヒルデは、コーヒーメーカーから煎れたばかりのコーヒーをカップにそそいだ。
「日本軍の新型……どう見た？」
「分析は彼女に頼んみました」
ブリュンヒルデは、部屋の隅におかれたソファーで居心地悪そうにしていた少女に声をかけた。
「――イリス？」
「は、はいっ！」

そう。
ルナとパートナーを組むMC（メサイア・コントローラー）、イリスだ。
「諜報部に所属していたと聞いたが？」
ジロリと上官に睨まれたイリスは半分泣きそうだ。
「もうっ！」
ブリュンヒルデが苛立った声を上げた。
「ヴォルフ！そんな恐い顔でイリスを見ないでください！」
「……私は元からこういう顔だ」
「うそおっしゃい！……イリス？怖がらなくていいのよ？ヴォルフ？質問は私にしてくださいな。あなたは存在だけで１００キロ彼方の子供に引きつけ起こさせるんですから」
「……その呼び名は、やめろというのに」
自分が小さい女の子には怖がられていることを、何となくは察していたらしい。
フォイルナー少佐はやや失望というか、傷心気味に言った。
「子供が絡むと……性格が変わるのは相変わらずか」
「何か？」
「……もう一度聞く。タルバッハ少尉は、かつて諜報部に所属していたんだな？」

「……はい」
イリスは小さく頷くと、心配そうにブリュンヒルデを見た。
大丈夫。
ブリュンヒルデの顔は、優しくそう語っていた。
「ＢＮＤの第三課です」
「……情報分析機関か」
「１０歳からずっと……諜報部員の持ち込んでくるメサイアのデータ分析を担当していました」
「キャリアは長い……な？」
「８年です」

「貴様からみて、この映像はどう判断する？」
「……」
「……忌憚のないところを聞きたい」
「……」
イリスは、覚悟を決めたように言った。
「あり得ません」
「？」
「あんな高レベル突撃に必要なエネルギー、仮にノイシアで発生させようとしたら、騎体もブースターも耐えられません」
「全てが並ではないと？」
「……」
イリスは無言で頷いたが、
「……でも」
おずおずと後ろに隠すようにしていたファイルを、フォイルナー少佐に見えるように、顔の半分を隠すようにして取りだした。
「……デュミナスでも……無理、ですよ？」
「……」
ギロッ！
それは、人間の眼光とは思えなかった。
まさに血に飢えた狼の尻尾を踏んだらきっとこんな目で睨まれるだろう。
そう本能的に思わせるほど、鋭すぎる眼光だった。
「ヴォルフ！」
ブリュンヒルデの後ろに逃げたイリスをかばいつつ、ブリュンヒルデは怒鳴った。
「ですから！」
「……つまり」
フォイルナー少佐はイリスから視線を外すと、わざとらしく目をつむった。
「日本軍のあの2騎は、デュミナスより」

「……推定、５倍以上の出力を誇ります。推定ですが、ブースターのパワー比は３５０％以上、そこから換算される対デュミナス戦でのキルレシオは、パイロットが同等レベルの場合」
「……」
「２０対１……ノイシアの場合、７５対１です」
「……」
「……」
唖然とした顔のブリュンヒルデが、助けを求めるようにフォイルナー少佐に視線を送るが、
「諜報部でメサイア解析において多大な貢献を為したことで知られている、“青の姫”がそうおっしゃるなら」
クックックッ……
フォイルナー少佐の喉から、そんな音が漏れる。
彼は怒っていなかった。
「……ヴォルフ？」
ブリュンヒルデが驚いたのも無理はない。
「……」
イリスに至っては、信じられないものを見た。という顔だ。
フォイルナー少佐は笑っていた。
穏やかに、
晴れやかに、
――――笑っていた。

笑いながら、彼は言った。
「東洋に、“井戸の中の蛙（かわず）”という比喩がある。見識が狭い、世間知らずの意味だが……成る程？」
席に戻ると、満足げな顔でコーヒーを飲んだ。
「ブリュンヒルデ……コーヒーがぬるい」
「……はい」
「ノイシアという井戸しか知らない私が、デュミナスで湖を知った。そして今、日本軍が海を持ってきた……成る程？」
何度も頷くと、不意にフォイルナー少佐は、席を立った。
そして、引き出しから何かを取り出すと、目の前で固くなっているイリスの前に立った。
「礼代わりだ」
ぐい。と突き出された手が握ったもの。
イリスは両手を広げてフォイルナー少佐の手の下に伸ばした。

パラッ

掌に落ちてきたのは、チョコレートの包みだった。

「私は甘いモノは苦手なのでとっておいた」

「……あ」
見上げたイリスの目に映ったフォイルナー少佐の顔は、とても優しかった。
狼と畏怖される恐怖はそこにはない。
まるで、優しい兄のような、本能に頼って良いと告げてくれる存在が、そこにはいた。
優しさに包まれるような幸福感の中、イリスは満面の笑みを浮かべていった。
「ありがとうございますっ！」

「……うむ」
頷いたフォイルナー少佐は、そっと手をイリスの頭に乗せた。
「少尉はデュミナスに乗ったことはあったか？」
「……いえ？」
「試乗してみるといい。ブリュンヒルデ」
「はい？」
「相手をしてくれ」
「……」
一瞬、あっけにとられたブリュンヒルデだったが、すぐに楽しげに微笑んだ。
「いいですよ？」

北米戦線編　第十七話（前書き）

何だか、戦争が遠くて話が進まないのですが……頑張ってます。見捨てないでくださいね？現在、伏線回収中です。多分。

北米戦線編　第十七話

北米大陸の強い日差しの下。
輸送艦部隊の見張りが双眼鏡を空に向ける。
中華帝国軍がばらまいた狩野粒子の影響下。
レーダーは使い物にならない世界。
そこでは、訓練された見張りの目や耳程、頼りになるものはない。
ステルス性を前提に設計されたはずなのに、レーダーを反射しまくる見張り艦橋を、この輸送艦が４基も取り付けているのは、そのせいだ。

「ノイシア１騎、急降下！」
見張りが双眼鏡を構えながら叫ぶ。
上空。
激しいエンジン音が大きくなりながら接近してくるのがわかる。
「――ふむ」
見張りの教育を担当する下士官が満足そうに頷いた。
これはいい。
訓練に使える。
ここで距離と方位を即座に報告しないのは問題だな……。
「ノイシア、加速するっ！」
「ん？」
下士官が、双眼鏡を手に握った。
まさにその時だ。

グワァァァッッッ！

満載排水量で３万トンを超える艦に激震が走り、下士官は床に放り出された。

固い床にイヤという程キスさせられた下士官は、痛む体をむち打って立ち上がると怒鳴った。

「な、何が起きた!?」

「ノイシアが急加速をかけながら接近、地表すれすれで急上昇をかけました!」

「どこの非常識だ!くそったれめっ!慰謝料請求してやるっ!」

ノイシアが加速しながら補給艦に突っ込んでいったかと思うと、補給艦に激突するギリギリで急制動を展開。

そのまま、体勢を利用して、殺しきれなかった加速を上昇に使用した。

大型爆撃機並の機動性しかないメサイアで、これだけの機動をやってのけること自体が、はっきり生半可な技術ではない。

「さっすがフォイルナー少佐!」

「あんな機動、よくもやれるっ!」

地上でノイシアを見守っていた騎士達の間から歓声が上がるが……。

「……さすがね」

ヘルガや、他のMC(メサイア・コントローラー)達は別な感心をしていた。

「さすがイリス……どういう技術よ……あれは」

「え?」

ヘルガの声を聞いたエレナが、きょとん。とした顔になった。

「何言ってるのよヘルガ。あれはフォイルナー少佐の技でしょう?」

「ブースター制御まで騎士が出来るもんですか。あのパワーと慣性

制御はMC（メサイア・コントローラー）の技術……私達の腕じゃ今頃、補給艦に激突しているわ」
「だからやっぱり」
「フォイルナー少佐は何もしていない……まぁ、あんなチキンレースじみたことにつきあえるんだから、やっぱり少佐は肝据わってると思うけど……」
「じゃあ？」
「今のノイシアはイリスが一人でフルコントロールしている」
「ヒェッ？」
奇妙な声を上げたのは、イリスとパートナーを組むルナだ。
「あの子、私と一緒の時は一度もあんなことしなかったのよ！？」
「……というか」
ヘルガが言った。
「あなた、空中起動は苦手だから、遠慮していたんじゃない？」
「あ、それありそうですね」
エルフ小隊の騎士、アレナ少尉が頷いた。
「訓練校の時、空中機動訓練ってだけで青い顔してましたし」
「そんなことないっ！」

「私が出来る限りでは」
水平飛行に戻ったノイシアのコクピット。
MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）から、イリスの遠慮がちの声が聞こえてくる。
「……これが精一杯です。これ以上の加速は騎体に危険が生じます」

「……まただ」
フォイルナー少佐は冷たく言った。
「加速をあと5%上げられるはずだ」

「ダメですっ！」
イリスはびっくりして言った。

「現在の外部温度ではこれが限界です。４．５％加速上昇させると、常温で既に想定平時温度を超えているセンサー類が摩擦熱による異常加熱により破損するおそれが」
言い終えて、イリスはハッとなった。
「す……すみません」
「……かまわない」
フォイルナー少佐は小さく微笑んだようにイリスには見えた。
「本国の環境と、北米大陸の環境を混同したのは私だ」

「い、いえ……あの」

「とにかく、今の機動で確認した。ノイシアでは、あの機動以前のことしか出来ない」

「……はい」
イリスは、そっとＭＣ（メサイア・コントローラー）用のコントロールユニットを撫でた。
「この子は、素直でいい子なんですけど……」

「――降りるぞ？デュミナスに乗り換える」

「……はい」

「今度はさすがに離れたか？」
見張り艦橋で、先程の下士官はちょっとだけ安堵の声を上げた。
見慣れないメサイアが、急降下と急上昇を繰り返している。
時折、空中で派手にブースターを吹かせて空中停止してみせたりしている。
そう思えば、急加速をかけてジグザグに飛行してみたりする。

そのエッジの利いた機動は、別次元のそれとしか言い様がない。
飛行の意味はわからなくても、メサイアについては素人の下士官にとっても、それははっきりわかる。
「だけど……」
北米の強い日差しの下、まぶしそうに空を見上げた下士官は首を傾げるしかない。
「なんで、あんなことやってるんだ？連中」

「……」
6回目の機動が終了した。
フォイルナー少佐からの通信はない。
通信モニター上の少佐の顔は無表情で、何か怒っているようにしかイリスには見えない。
「……あの」
イリスは恐る恐るという顔で言った。
「この騎で、あの空中急制動は、危険です。
あれは背中のバインダーや騎体各部に設置されたブースターの力があって初めて出来ることです。
この子で、あの高度で。あんな急制動をかけたら、騎体が耐えられないどころか、制動が利かずに地面に激突します」

「……無理……か」
フウッ
ドイツ製の感度の良いマイクが、少佐のため息を確実に拾って、イリスの耳に届けた。
近くにはブリュンヒルデ騎が接近しつつある。
「……でも」
イリスは、覚悟を決めたように言った。

「あんな瞬間移動じみたことは出来ませんけど」

「ん？」

「似たことなら出来ます」

「似たこと？」

「ブースター加速時を使った、ちょっした裏技ですけど……」

「？」

「ちょっとだけ……わがまま、聞いていただけますか？」

そこで動くな。

速度０で高度を維持していろ。

それが、ブリュンヒルデ騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）、アーデルハイト少尉が受けたイリスからの依頼だった。

あの子はファンが多いから、ここでケンカでも売ろうものなら、生命維持装置のコネクタ一本抜かれる程度じゃ済まないだろうから、文句は言わない。

あのレベルの美少女は、本人が非力であればあるほど、周囲が強くなる。

あの子をイジめたＭＣ（メサイア・コントローラー）が、事故死したなんて話はごまんと転がっている。

考えるに恐ろしい。

犠牲者になりたくないアーデルハイトは、ブリュンヒルデの許可を得て、高度２５０メートルに騎体を制止させた。

しかも、下で見物していたエルフ小隊から3騎が同じことを命じられている。
「この高度は……？」
「イリスに言わせると」
アーデルハイトもはっきりとしたことは言えないらしい。
首を傾げながら言った。
「昨晩、日本軍に撃破された帝剣のいた高度……なんだそうです」
「何？私達は生け贄？」
「勘弁してください」
アーデルハイトは苦笑しながら言った。
「ただでさえ、あの子は“曰く付き”なんですから」
「曰く？」
「ご存じありませんか？」
「マラネリ王国に出向中に配属された子でしょう？寿除隊した前任者の引継で」
「そうなんですけど」
ピーッ！
言いかけて、アーデルハイトは脅威接近の警報を出した。
「上方、高度２５００から接近！」

「あの子、何するつもり？」
幸いというか、フォイルナー少佐に“見物していろ”と命じられたヘルガは、エレナと共に、地上から一部始終を見守っていた。
「ねぇ」
エレナは空で起きていることより、サングラスの方が気になるらしい。
「レイバンよりポリスの方がいいと思わない？今度、シカゴで休暇もらった買ってこようかなぁ」
「こら」

ヘルガは殴る仕草で叱った。
「地上からどう見えたのか報告求められたらどうするのよ」
「早く言ってよ！」
サングラスをかけたエレナは、ハッとなって騒ぎ出した。
「やだ！日焼け止めクリーム塗り忘れてるじゃない！」
「もう黙ってろ！」

ピピピッ！
イリスの指がなめらかに、そして素早く動く。
コントローラーは、イリスの意志を読みとるように素早く反応してくれる。
ノイシアで泣かされていた入力エラーがまるで心配いらない。
「……スゴイ」
イリスは思わず呟く。
パワーゲージはレッドゾーンにすぐに飛び込んでくれる。
必要なパワーを発生させるまでのラグを、全く感じさせることさえない。

申し分ない。

「この子……すごいけど……」
ブースターの速度はすでに音速に達しつつある。
「何か……」
イリスは正直、とまどっていた。
性能は申し分ない。

そのはずだ。

コントロールシステムの使いやすさはノイシアなんてもんじゃな

い。

そのはずだ。

でも――

心の中で溢れかえる不満。

ぽっかりと開いた虚ろな思い。

イリスは思わず呟いた。

「何？この不足感……」

ブースターにラグがある。

反応が思ったより鈍い。

加速が早まるのが、こんなにかかっていたら、あんな加速はやっぱり無理。

だめだ。

ここで余計なこと考えちゃ。

私は、出来ることだけやる。

お父様と約束したじゃない。

出来ることをしっかりやるって！

イリスは自分を叱ると、騎体各部に回していたエネルギーを瞬間的にカットし、余剰エネルギーをバイパスに注入――

「……ここで」

イリスが狙っている瞬間は、すぐにやってきた。

それを、震動と音で感じ取ったイリスは叫んだ。

「少佐、耐ショック！」

「――え？」
ブリュンヒルデ達が、万一に備えてシールドを構えたのはいい。
問題は、突っ込んでくる方だ。
瞬きする前。
それはたった一騎の黒いメサイアだったはずだ。
それが……？
「……え？」
ブンッ！
ドップラー効果を伴いながら、４騎編隊の間をメサイアが突き抜けた。
「何？」
驚いて見た地表では、デュミナスが上昇に入っていた。
それはいい。
問題は――

「ち、ちょっとヘルガ！？」
パニックになったエレナがヘルガの裾を掴んだ。
「な、何？何が起きたの！？」
「……何が起きたと思う？」
「私には」
エレナは唾を無理矢理飲み込んだ。
「私には、少佐のメサイアが分裂したように見えたんだけど！」
「そう」
ヘルガは再び空を見上げた。
「――なら、脳みそはともかく、あなた、目だけは正常ね」

そうか。

イリスは、この機動でわかった。
この騎体に足りないものが。
この騎体をここで止めているものが何なのか。
間違いない。
これじゃ、無理だ。
今のこの子じゃ、無理だ。
何が？
何故？

“それ”は、望んでも手に入らない。

だから、無理。

――少なくても、欧州では。

「すみません。少佐」
イリスは、心底申し分ないという声で言った。
「私には、これ以上、この子の性能を引き出す自信がありません」
「……」
しばらくの沈黙の後、フォイルナー少佐は言った。
「……さて」
「……はい」
「騎士でもなく、まして地上でもなく、空中機動で四身分裂（フィア・パラレル）をやってのけたMC（メサイア・コントローラー）に、私は何と声をかけたらいい？」
「……この子のパワーとブースターで出来る精一杯です。ただ」
「？」
「今のでわかりました。私が、この子にどうして不満を持ったのか」
「不満？」
「――はい」
「搭乗したばかりだというのに、この騎に不満があるというのか？」

「はい」
その声は、はっきりと、しかし、しっかりとした口調でフォイルナー少佐の耳に届いた。
「この子が、どうしてこのレベルなのか……いえ」
イリスは一瞬、言い淀むと、覚悟を決めた声で言った。
「……どうして、マラネリ王国が、この子をこのレベルで止めたのか」
「このレベル？」
「この騎は――――」
通信モニター上のイリスは、冷たい程、真剣な顔をしていた。
その顔で、イリスは、フォイルナー少佐にとっては信じられないことを口にした。
「あの国の技術力からすれば――――この子は、完全なモンキーモデルです」

モンキーモデル。

自国の兵器を他国へ輸出する際に、輸出用に意図的に性能を低下させたコピー兵器のことだ。

「何？」
フォイルナー少佐の顔が、険悪になったのは、イリスにもわかる。
だが、言わずにはいられない。
「……今」
滅多なことでは動じないはずの歴戦の英雄、フォイルナー少佐の声が震えていた。
「この騎について、何と言った？少尉」

「何度でも言います。この子はモンキーモデルです」
「それは――情報部としての意見か？」
「10年以上、メサイアの分析に従事してきた経験が教えてくれます。マラネリの正規軍配備メサイアにあって――日本軍のインペリアルドラゴンシリーズにもあって、そしてこの子にはないもの。それが、モンキーモデルと私が評価する根拠です」
「何だ」
「精霊体です」
「精霊……体？」
「例えば――魔晶石から強い出力を得ようとすれば、魔法処理の関係で、魔晶石に自我が生まれます。それが精霊体なのはご存じですよね？」
「……」
「でも、精霊体はキリスト教やイスラム、ユダヤといった偶像崇拝をタブー視する世界では認められません。魔晶石に人間並みの自我を与えることに反対しています。ドイツもですけど」
「宗教……か」
フォイルナー少佐は苦い顔で言った。
「愚物共（ヴァチカン）めが」
「で、ですけど、私は、そんなことしなくても、あんな加速は無理でも、この子の出力でも、瞬間的な分身位（パラレル）は出来ると……そう理解していただきたくて」
「……」
「……」

「先程の操作データは、あとで本部に提出しろ」
少佐は相変わらずの無表情でイリスに命じた。
「それと――タルバッハ少尉」
「はい？」
「今後、この騎を任せたい」
「は？」
イリスの目が点になった。
「異動命令はすぐに発する」
「で、ですけど私は！」
「ここまでやってのけたのだ」
フォイルナー少佐は、ちょっとだけ楽しそうにイリスには見えた。
「デュミナスを任せる。文句は聞かないぞ。これは命令だ」
「……少佐って」
困り果てた顔で、イリスは言った。
「本当は、すごく強引なんですね」
「……昔はよく言われたものだ」
はぁっ。
ため息をついたイリスは、小さく呟いた。
「強引なのは……嫌いじゃ、ないですけど」

●鈴谷

鈴谷のデッキにTAC（タクティカル・エア・カーゴ）が着艦したのは、午後2時頃だった。
鈴谷と並行するように航行するのは、マラネリ王国国軍所属の高速飛行艦「黄金の暁号」だ。
「あの国からここまで何時間で来たのよ」
デッキに降り立った少年王に、紅葉は開口一番、文句に近い軽口を叩き付けた。
「2時間ちょっとだ」
「何ノット出して？」

「１６０ノット。常識の範疇だ」
「ジェット機並って……どういうジェネレーター搭載してるのよ」
「後で教えてあげよう。お師匠様は？」
「坂城さん……整備部隊の隊長と話し込んでる」
「ああ……」
少年王の足が止まった。
ハンガーの奥で、仕立てのいい背広を着込んだ老人が、背の高いサングラスをした銀髪の整備兵と何事か話し込んでいた。
整備兵の自信にあふれた顔と、相変わらずのポーカーフェースを浮かべる老人。
何だか懐かしささえ感じる光景とはいえ、それを見る彼の心中は複雑だった。
「……デュミナスで勝てたと思ったけど」
ハンガーデッキに並ぶ“白雷改”を眺めながら、軍服を着た小太りの少年王の口からため息が出た。
「……君には負けた」
「精霊体を使わずにあんなレベルの騎体を作っただけで褒めてあげるわよ」
紅葉は面白そうに少年王の頭を撫でた。
「ホント、あんた偉い」
「……やめてほしい」
グリグリと頭を撫でられた少年王は、頬を少しだけ赤くしながら答えた。
「詳しい者が見れば、あれがモンキーモデルだとすぐにわかるだろう。それに、僕はこれでも国王だぞ？」
「メサイア絡みの時は、対等の立場だって言ってきたのはあんたの方よ？」
「……っ」
「ほんと、あんたはかわいいよ？」
紅葉に微笑まれた少年王は、不意に視線を外し、ふてくされたよ

うに言った。
「男に可愛いはヘンだと思う」
「そう？とにかく」
紅葉は小さく首を傾げた。
「デュミナス、大活躍じゃない。おめでとう」
「……その初陣を前に、君は“死天使”を作り上げた」
「カイザーの反応は？」
「デビュー戦には大満足らしい。制式採用は前向きに検討すると言われたけど、いろいろモメもしたよ」
「黒狼様と白狼様の専用機。世界的なビックネームの愛機となれば、そりゃハクがつくもんね」
「……それで」
少年王は、ハンガーを見回しながら言った。
「“死天使”は？」
「ああ。一番奥のデッキ。後で案内してあげる。お師匠様にも報告したんでしょう？デュミナスの件。ついでにレクチャー受けておきなさい」
「しかし、普段は出不精がモットーのお師匠様が……何故？」
「あんたと同じ」紅葉は言った。
“死天使”の情報知りたいのよ」

「このエンジンマウント方法は」
紅葉の私室に入った少年王は、紅葉がコーヒーを出すのを待ちながら言った。
その目の前には、“死天使”の仕様書が広げられている。
「コロンブスの卵だ」
「でしょう？」
熱いわよ？そう言いながら、紅葉はコーヒーカップを少年王の目の前に置いた。

「私にもこの発想はなかったわ」
「君の発案ではないのか？」
少年王の目の前に座ったフェルミ博士が、おや？という顔になった。
「残念ですが」
全員の前にコーヒーを置いた紅葉は席に座った。
「私ではなく、泉大尉の発想です」
「技官か？」
“死天使”の騎士です。新開発の飛行ユニットの発想も、彼女のものです」
「確か、女性だったな」
「呼んできましょうか？」
「いや」フェルミ博士は首を横に振った。
「素人の突拍子もない発想は時に我らを超える。それだけのことだ。賞賛に値するとは思えん」
「……はい」
「無論、あの戦いぶり。目の当たりにした世界中の騎士達が熱くなっているだろう」
「世論の反応は凄まじいですよ」
少年王はコーヒーを飲みながら言った。
「紅葉さん。お茶菓子の心配は」
「してないわよ」
「……重武装重装甲、全てをなぎ倒す“破滅の嵐”とさえ呼ばれる帝剣を、わずか１０秒で１２騎喰ったのです」
「帝剣の駆動系、魔族軍の技術支援は明らかだろう？」
「サンプルは腐るほど回収していますから検証は自由気ままです。電磁筋肉は、従来、中華帝国軍の採用していたのとは全く別。世界的に見れば、近衛のメサイアに最も近いんですけど」
「技術漏洩？」
「違う。メースのそれに近いの。メースをどこからか入手したにし

ても、それを検証して実用化して、生産ラインに乗せるまでがあまりに早すぎる。最低でも１０年の上かかるはずよ」

「……」

「とりあえず、我々は目先のことを考えよう」

その師匠の声に、二人に異論はなかった。

「……今朝のウォールストリート・ジャーナル。朝刊トップの記事になっていたぞ？敗北主義に染まりかけていた世論も動くだろう」

「メサイアを熟知した武官達も騒いでいましたよ。あの帝剣を喰らうとは、インペリアル・ガーズのメサイアはバケモノか……と」

「伊達に修羅場はくぐっていないからね。あいつらも」

「あの２騎の戦いぶりはたった１０秒に過ぎないが、その１０秒が世界に与えた影響は決して少なくないはずだ。

あの戦いぶりに刺激を受けて、興奮した騎士がごまんといるだろうよ。

よい戦意高揚のネタとなってもらいたいモノだが、我らは我らの仕事がある――殿下」

「うむ」

少年王は頷くと、脇に控えていた武官に命じた。

「例の設計図を」

「……はっ」

武官がバインダーから大きな図面を引き出した。

「量産を前提としたデュミナスの後継騎の設計図です。意見をうかがいたい」

「黒狼専用騎？」

「いや。まずは我が国の軍向けの精霊体搭載型だ。海外には非搭載型のモンキーモデルを輸出する。だといえ、モンキーモデルでも、僕の考えでは、ドイツや欧州にくれてやれる最大限のスペックを想定している」

「私達三人が設計する最強の騎……」

「暇つぶしには、悪くないな」

「お姉さまぁっ♪」
鈴谷に戻った美奈代をまず出迎えたのは、涼のそんな声だった。
「り、涼っ？」
コクピットから出た所で、突然、誰かに抱きつかれた美奈代は、その声でやっと相手が涼だとわかった。
「お姉さまぁっ♪さみしかったですぅ♪」
「ち、ちょっと！？」
驚く美奈代は、涼に抱きつかれたまま、無重力のハンガーを流れていく。
「落ち着け涼っ！これから艦橋へ着任の挨拶に――」
「そんなの後でいいじゃないですかぁ！」
美奈代の胸に頬ずりする涼は甘えきった声で言った。
「私にそ、“ご挨拶”してください！」
ガチャッ！
「り、涼？何で手首をねじ上げるんだ？ついでに、今のガチャッて音は何っ！？」
「スタンガンも用意してあります」
「ちょっとぉっ！」

「泉大尉！」
遠ざかっていく“死天使”から、牧野中尉の声がした。
「艦長には、私が報告しておきますから！」

「止めてくださぁいっ！」

「シャワー浴びてくださいね！？」

「薄情者ぉぉぉっっ！」

2時間後。

「ううっ……」

美奈代は、涙ながらに通路を移動していた。

「も、もうお嫁にいけない……」

“私がもらってあげます！”

脳裏に浮かんだ、あっけらかんと答えた涼の笑顔を振り払うように、首を強く左右に振った。

「艦長にまた怒られる……」

――お楽しみだったようだな。

後藤はそう言ってお咎めはなし。

むしろ、艦橋のクルー達の痛いものを見る視線の方が、余程辛かった。

――艦長？今、休憩に入ったよ？ただ、泉はすぐ連れて来いとカンカンだったけどさぁ……ああ。心配しなさんな。小清水少尉とのお楽しみは、恋人同士のご褒美だと思って大目に見てやってくれるよう、俺からも頼んでおいたから。

後藤からそう言われた時には死にたくなった。

――それにしてもお前さん。男に立て続けにフられたって、女に走るってのはどうかと思うけどねぇ……俺は。

――とりあえず、今のうちに詫びだけは行ってこい。
――――減俸も今なら避けられるはずだ。

「私……一体、周りからどんな目で見られているんだろう……」
泣きながら艦橋を出た美奈代が最初に向かったのは、艦長室。
美奈代は何も考えずにドアを開けてしまった。

あ。しまった。

そう思った時には遅かった。
ドアを開いて、室内をのぞき込む格好になった美奈代の目の前に現れたのは、がらんとした艦長室の中。
何故か、鍵がかかっていなかった。

――――怒られる前にドアを閉めてここから逃げよう。

美奈代はそう思って、音を立てないようにドアを閉め始めた。
すると――――

「あれ？」

中から声がした。

ビクッ！となった美奈代は、ドアを閉めようとしたままで硬直した。

「――――どうしたんです？お姉さま」

え？
お姉さま？

……まさか。でも？

「り……涼？」

いや。そんな馬鹿な。

涼はベッドで失神しているはずだ。

簡単に復活されては、私が頑張って“宗像”した意味がない。

何より、この声は涼じゃない。

若い女の声。

私は、この声を聞いたことがある。

……誰だっけ？

「？あれ？どうしたんですか？」

声はドアの向こう側。

ドアを挟んで、向こうが見えないけど、ドアに手がかかった。

「お姉さま？」

グイッ

力が加わって、ドアが大きく開いた。

そして、その向こうにいた相手の顔が見えた。

「……」

「……」

今、自分がどんな顔をしているんだろう？

多分、相手と同じ顔をしていることだろう。

「……」

「……何してんのよ」

「こっちのセリフだ！」

美奈代はつい怒鳴ってしまった。

それが、この子を相手にした時の挨拶のようなものだったから。

「ここで何をしているんだ！フィアっ！」

「すっかり遅くなったな」

食堂でフィアの食事を受け取った後、人気女優の不倫問題について食堂のおばさん達と雑談にはまったのがまずかった。

すっかりお腹を減らしているだろう。

ここ1月近く、昼食が弁当ばかりではさすがに気の毒だ。

とはいえ、二人分の食事を下手に頼み続けるのもどうかと思うし……。

そんなことを考えながら、美夜は弁当箱を手に艦長室に通じる通路の角を折れた。

「？」

うるさいわねっ！

心配してやったのに、何だその言いぐさはっ！

誰が頼んだのよっ！

貴様ぁっ！

痛っ！やったわねぇっ！？

自分の部屋からドスンバタンとスゴイ音がしている。

「はぁっ」

美夜はちょっとだけ、安堵まじりのため息をついた。
どうやら、これ以上は心配しなくて済みそうだ。

「……」
「……」
正座させられた美奈代とフィアが、互いに真っ赤になってそっぽを向いている。
その顔はひっかき傷や手形が走り、髪や服はボロボロだ。
「……というわけだ」
とっくみあいのケンカを止めるのに散々苦労した美夜は、二人の前に仁王立ちになって、説教に痛めた喉をさすった。
「以後、気を付けろ」
「……はい」
「わかりました」
絶対に反省していないことは明白な二人の態度を前に、もうこれ以上、何か言っても無駄だと悟った美夜は言った。
「泉大尉」
「……はい」
「意見を聞きたい」
「意見？」
「後藤さんも知っていることだが、判断を保留していた。フィアの生存を公表したいが、いつのタイミングがいいと思う？」
「現場の混乱を考えれば」
美奈代は即答した。
「このまま、死なせてあげた方が」
ガンッ
脇腹にフィアの肘が入った。
「やったわね！？」

「何よ！この薄情者っ！」
ガンッ
ガンッ！
「……いい加減にしろ」
まっすぐ垂直に振り下ろされた美夜のげんこつが脳天に炸裂した
二人は、頭を抱えてその場にうずくまったまま、声が出てこない。
「フィア」
「……はい」
「今晩、後藤さんと高木副長を交えて面談する。そろそろ、生き返ってもらうから覚悟しておけ」
「……へ？」

「無理」
ハンガーデッキにいた紅葉は言った。
「“白雷改”と前衛でドンパチするなんて、殲龍には無理っていうか」
「……」
「……あんた、殲龍の本来の意味、わかってる？」
「電子戦闘騎でしたっけ？」
「精霊使い専用操縦システムと、ジャミングシステム双方の評価を任務とする試験騎。実戦配備なんて認められていないし、対メサイア戦なんて想定外。それでメースまで仕留めたフィアちゃんが、並じゃないってことなんだけど」
「……じゃあ」
「後方で大人しくしてもらうか……それにしても」
紅葉は首を傾げた。
「どうしたの？今頃になって殲龍なんて」
「……いえ」
美奈代はお茶を濁した。

「……浮いているから。どうするのかなって」
「あれは予備騎どころか……私にもわかんない。搭載する操縦システムがシステムだけに、ベルゲにするわけにもいかないし。正直、中途半端なのよね。殲龍（せんりゅう）の位置づけも……まぁ」
「は？」
「フィアちゃんが復活したら考えることとしている」
「えっ？」
「艦長がフィアちゃんの生存をいつ公表するかにかかっているわね」
「あいつが生きてるの、ご存じだったんですか？」
「……」
じっ。と美奈代を見つめた紅葉は言った。
「――カマかけただけ」
「なっ！？」
「ホント、あんたって単純よね」
そう、紅葉が苦笑した時だ。

ビーッ！
ビーッ！

警報が鳴り響いた。

「艦橋より全乗り組みに達する。全艦戦闘態勢。メサイア全騎、出撃体勢をなせ！」

「救援要請？」
その言葉に、ブリーフィング・ルームに集まった全員がぎょっとなった。
「ドイツ軍が、ですか！？」

「違う」
後藤は首を横に振った。
「中華帝国軍が、だ」
「いいことじゃないですか」
美奈代には、後藤が何を言いたいのか今ひとつわからない。
「ドイツ軍が頑張っているんでしょう？」
「北方戦線はドイツ軍とカナダ方面から合流した英国軍まで加えてようやく五分だ。ところが、この状態は中華にとっては面白くない」
「……」
「中華帝国軍は――――“例のヤツ”を本国から大量に動員して戦線の挽回をはかろうとしているのは間違いない」
「例のヤツって？」
「飛鼠（ひそ）だよ」
「勘弁して下さい！」
美奈代は悲鳴に近い声を上げた。
「まさか！あのタイプですか？艦長が気絶したっていう！」
「そう。いや……艦長の気絶した所、なかなか色っぽかったぞ？泉、お前も少しはだな」
「セクハラですか？それともパワハラ？タレコミ用のフリーダイヤル知ってますよ？」
「恐いこと言うなよ……冗談だ」
「飛鼠（ひそ）の件も？」
「……遙ちゃん」
後藤は横に待機していた涼宮遙中尉に言った。
「映像、出して」

スクリーンに映し出されたのは、港の映像だった。
「一昨日、ＳＳ０３による高々度強行偵察の結果だ」
「エス？」
「都築達だよ」

「都築が！？」
「ああ。偵察任務についている。各地の強行偵察や電子妨害とか…
…地味だけど、頑張ってると褒めておくよ」
「……」
美奈代は、ちらりと寧々を見た。
都築の生存を知って安堵したのか。寧々は胸元を押さえて深いため息をついていた。
「問題は、埠頭に並ぶこいつ等だ」
後藤は、ズームアップされた画像の一部を指示棒で突いた。
頭部にクセのあるメサイアの映像。
「あいつら……ですね」
「“素材”をどこで確保しているのかは聞かないさ」
“素材”
飛鼠（ひそ）をコントロールする有機体コンピューターの根幹。
つまり、人間だ。
美奈代は、写真で見せられたあの無惨な人体のなれの果てを想像して、思わず口元を抑えた。
「とにかく、あいつ等がここにいる。それだけを考えればいい」
「……」
その通りだ。
美奈代は無言で頷いた。
「俺達も、そうそうのんびりしている訳にもいかない。戦局がこうも悪化したままだと、米軍の力が減る。いいか？俺達がここにいるのは、米軍のお手伝いのためじゃない」
後藤はスクリーンに映る映像を切り替えるよう、指示を出すと厳しい顔で言った。
「米軍の、世界の軍事力を、日本に派遣してもらうためだ」
そう。
ここで無駄に米独英といった各国軍の戦力を消耗させることは、

それだけ日本に投入できる戦力が減ることを意味する。
それは巡り巡って、決定的な所で美奈代達に負担となって襲いかかってくるのだ。

「慈善事業やってるわけじゃない。割り切って良い。あらゆる慈悲を否定し、あらゆる正義、人道、とにかくきれい事を無視しろ。
そして、中華を徹底的に叩け。
それこそが究極にして、我々に与えられた絶対的な正義だ。
神とやらさえ認めるだろう大義のため、祖国のため、あらゆる武器を使い、この北米から叩き出せ。
一分一秒でも早く」

「……」

「……ま」
不意に砕けた様子で後藤は大げさに肩をすくめて見せた。
この切り替えの速さの前には、一体、この後藤という人物の裏表が分からなくなる。
「こういう精神論は大嫌いでね。俺ぁ」
パンッ
指示棒を掌で受け止めた後藤は言った。
「作戦を伝える」
美奈代達は、無言で膝の上に置いたクリップボードにペンを用意した。
「北部戦線にむけて飛鼠（ひそ）の大部隊が投入されるという情報がある。
北部戦線における米軍は現状、列車砲を含む大規模砲撃部隊の集中砲火を受けて壊滅状態。戦線は崩壊寸前。防衛部隊は完全撤退の手前にいる」
「ど、どうしてですか！？」
芳（かおる）が唖然とした顔で訊ねた。

「たかが砲撃部隊なんて！」
「これがさぁ……」
後藤は楽しそうに笑った。
「恐ろしく厄介な相手でね」
「こっちから反撃、バリアでくい止めてるんだわ」
「バリアで？」
「ああ。反撃は全部、そいつにくい止められちまう」
「メサイアは」
「まず、連中の砲撃陣地だ。
ほぼ全周囲に、開発した強力な対メサイア用地雷を大量に敷設した地雷原がある。
ホバー程度だったらひっかかってドンだ。
飛行して突破？
その前に狙撃隊が狙いをつけている。
狙撃隊まで、何の間違いで突破出来たとしよう。
次は数にモノ言わせたメサイア部隊の防衛線を突破する必要がある」

ここまで話してから、後藤は美奈代を見た。

「――泉？」

「はい？」

「お前の仕事だぜ？」

「……」

「どうする？」

「撤退の二文字がないなら」

「……」

「やってやれないことはないです」

「どうやる？」

「似たようなこと」

美奈代は楽しそうに笑った。

「川中島でやらされましたから」

「川中島？」

「ええ」

美奈代の後藤は、その笑みに二宮を思いだした。

そんなことを知らない美奈代は続けた。

「私達が、二宮教官の子供達だって――そういうことです」

北米戦線編　第十八話

「戦局は刻一刻と変化するものだ」
ドイツ北米派遣部隊司令官、第2メサイア師団のレンネンカンプ司令は、苦しい顔つきで言った。
「そうは思わないか？諸君」
居並ぶ大隊指揮官達の中にはフォイルナー少佐がいた。
「北部方面は優勢に転じつつあった。少なくとも2日前まではそうだった」
「……」
大隊指揮官達は、彼が何を言おうとしているのか知っている。
彼が、ここで同意さえ求めていないことを、知っている。
「諸君も知っての通り、チンク共が砲兵部隊を前進させるまでは」
「……閣下」
皮肉屋で知られるクロイツェル少佐が、口元に意地の悪い笑みを浮かべながら言った。
「“あれ”を砲兵と呼ぶのですか？」
「言い方ではないぞ？ルーカス」
「文句も言いたくなりますよ。司令」
「……違いない」

最前線で何があったか？

中華帝国軍の無差別砲撃だ。

しかも、単なる砲撃ではない。

問題は、その砲の破壊力だ。

３０センチ以上の戦艦から下ろした大口径砲を搭載する列車砲。

特に、人類最大口径を誇る８０センチ砲搭載型列車砲までも重量物移動用の特殊ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に搭載した機動列車砲部隊、もしくは陸上戦艦砲部隊と呼ばれる部隊が北部方面に投入されたのだ。

はっきり言う。

この部隊の打撃力を他と比較したければ、それは砲兵部隊と競うより、海軍の戦艦部隊と競う方が正しい。

砲の口径が３０センチを超え、最大８０センチという超大口径を擁する集団と、最大でも２０センチ程度の砲しか持たない砲兵部隊を比較するのはあまりに酷だ。

２日前の昼から始まった砲撃は、今でも続いている。

メサイアを砲兵の代わりに使用する、コスト無視の砲弾供給システムが物を言い、その砲撃速度は列車砲とは思えないほど早い。

容赦のない砲撃が繰り返され、戦線では砲撃によって巻き上げられた土砂や死体、もしくはその破片が雨のように降り注ぐ。

砲撃は地面をクレーターに変え、地形を一変させた。

８０センチ砲弾の直撃を受けた野戦司令部は、地下３０メートルに渡って、その土地ごと消滅させられた。

陣地は兵士ごと破壊され、とてもではないが戦線は全く維持できる状態ではない。

砲撃を恐れて前線の兵士達が塹壕から逃げ出す者が続出した。

或いは戦闘を放棄したとしても、指揮官達ですら文句が言える立場ではなかった。
何しろ、彼等の多くもまた、兵士達共に後方に逃げていたからだ。

しかし、米軍側も一方的に叩かれたわけではない。

そう、言いたいが――現実はその通りだった。

陣地防衛用に布陣していた米軍側砲兵陣地に配備された砲兵部隊に配備されていたのは、Ｍ７７７榴弾砲。
口径１５５ミリ、射程約３０キロの彼女達を熟練の陸軍砲兵部隊の兵士達が駆使したものの、その砲撃は中華帝国軍に髪の毛ほどの損害さえ与えることは出来なかった。
砲兵達の技量が未熟だった？
違う。
防衛用に彼等が投入した、ある新兵器の存在がここで大きく働いたのだ。

バリアシステムだ。

小型の無人戦術航空機（タクティカル・エア・カーゴ）ＴＡＣにＦＧＦ発生装置を搭載した簡単なシステムで、メサイアのセンサーが感知した敵の攻撃の飛来方向に対して、重力力場を展開させるだけ。
ただし、万物を原子の塵に変える重力力場の強力な作用と、ＭＣ（メサイア・コントローラー）による正確無比なコントロールにより、対攻撃阻止率は１００％に近い。
いくら米軍が中華帝国軍の砲兵陣地に砲弾を撃ち込んでも、上空

で完璧に阻止されてしまう。
対する中華帝国軍は、砲兵陣地から一方的に巨大な砲弾を思う存分、撃ち込む事が出来る。
この差は歴然としていた。

米軍の砲兵部隊は壊滅的打撃を被り、各陣地は容赦のない破壊にされられた。
中華帝国軍の砲兵陣地に列車砲部隊が投入されてから、ほんの短期間のうちに、シカゴにある米軍司令部は、最早北部の守りたる最前線を維持することが出来ないと判断。
全部隊の後退を正式に命じるまでに陥っていた。

「“ドーラ”の砲撃だろう?あいつを頭上にばらまかれて逃げるな。という方が無理だ」
「“ドーラ”だけじゃない。３０センチ砲から４０センチ砲まで艦砲も加わっている」
「おやおや?元はどこの国の製品だ?そりゃ」
「オリジナルを使っていれば、メイド　イン　ジャーマンの麗しい刻印を拝見できるだろうさ」
「海軍が艦砲をチンクに売却したのが悪いんだ」
「違うだろう?艦砲の生産施設まで売却したクルップの責任だ」

「……諸君」
勝手なことを言い出した部下を前に、レンネンカンプ司令は額に青筋を立てた。
「ワイツヴェルガーの野郎なら今頃、“演説”が始まっているような事態だぞ?」
メサイア師団の中でも有名なうるさ型であるワイツヴェルガー少

将は、会議の度に所要時間の８割を怒鳴り散らして浪費する事で知られ、部下はその迷惑な時間を“ワイツヴェルガーの演説”と呼んで嫌っている。

「今、忌々しくも、我々に筒先を向けているのが、我が国の産物であることははっきりとしている。それだけに砲そのものの狙いは極めて正確だ」

「喜ぶべき所ですか？第一、あれはキムチ野郎に売却したのでは？」

「ニンニク臭い野郎共に、チンク共が命じたのさ。よこせとな」

「それをＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の土台に乗せた」

「そうだ。艦砲も大型ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に搭載。山野を問わずにどこでも飛来できるようにした。ちなみにこの足場はフランス製がベースだ」

「……俺達、ヨーロッパ人は」

クロイツェル少佐は笑って言った。

「売り手を間違える点でだけ、差異がありませんな」

「商売下手という意味でなら同意する」

レンネンカンプ司令は苦笑しながら頷いた。

「その落とし前は、我々軍人の仕事だ」

「請求書はクルップにでも送りつける？」

「経理は俺達の仕事じゃない。それに、同国の愛すべき製品を破壊するようなマネが出来るか」

「――では？誰が行くんです？」

クロイツェル少佐は、その答えが気に入ったらしい。ニヤリと笑ってそう訊ねた。

「愛国心の現れとして、挽肉にされにでも？」

「日本軍がいるだろう」

「……あまり、面白くない話ですな」

「毒には毒をもって――猿には猿をもって」

レンネンカンプ司令はクロイツェル少佐に訊ねた。

「少佐？私は何か間違ったことを言っているのか？」

「――いえ？」
クロイツェル少佐は、新大陸国民のように大仰に肩をすくめた。
「来年あたり、名言集のトップに記載されるでしょうな。感服です」
「日本側との簡単な協議は終了している」
レンネンカンプ司令は言った。
「あの厄介なバリア破壊は、日本軍が責任を持つ。連中のバリア破壊を確認した後、我々が砲兵陣地に斬り込む。作戦としては簡単だろう？フォイルナー少佐」
「……」
突然、指名を受けたフォイルナー少佐は形通りに答えた。
「そう……ですね」
「ならいい」
レンネンカンプ司令は満足そうに頷いた。
「支援はしてやる。大隊の活躍には期待しているぞ？少佐」

「……つまる所」
大隊の作戦会議の席上、ヘルガは、フォイルナー少佐に訊ねた。
「日本軍を生贄にして、そのスキに叩く？」
「というか、私達が生け贄じゃないですか」
「モノの言い方を覚えろ――中尉」
フォイルナー少佐はムッとした顔で言った。
最近、少佐の顔に喜怒哀楽がはっきり浮かぶようになったなと、ヘルガは思った。
「日本軍がバリアシステムを破壊したのを確認後、飛行艦の艦砲射撃により砲兵陣地を攻略する」
「……ものは言い様ですね」
「日本軍側の作戦は、彼等に一任されている。我々が彼等に要求す

るのは結果だけだ」
「それで？肝心の我々の作戦は？」
「――――こうだ」
フォイルナー少佐は、黒板に張り出された戦域地図を指示棒で突いた。
「砲撃陣地の周辺。その最外縁は、半径５キロに渡って地雷原が構築されている。
地雷の種類は接触型と感応型、ワイヤータイプと、８種類。連中が保有している対メサイア用地雷のあらゆるタイプが確認されている。
踏めば爆発、ホバー移動の風圧でも起爆、地面に張り巡らされたワイヤーを切断して吹き飛ぶ可能性もある。
まさに、悪魔の園だ」

「……」
ウウッ。
居合わせた騎士達の間からうめき声があがる。

「この悪魔の園の主役は地雷だが、同時に監視たるメサイアが地雷原の内側から目を光らせている。
対メサイア用大型狙撃砲が、地雷原突破を試みる敵を狙撃してくる。
つまり、地雷を回避していると狙撃砲の一撃をかわしそこねるという寸法だ」

「工兵隊は？爆導索で、ドーンっと」
ツァーノ少尉がうんざりとした顔で訊ねた。

「工兵隊に、チンク共の餌食になれと？」

「貴い犠牲です」

「工兵隊に面と向かって言って見ろ。命の保証はせんぞ」

「……」

「新型の投擲型サーモバリック爆弾を使用して地雷原を強行突破する。ツァーノ少尉。突撃と爆弾の投擲、どちらに就きたいか」

「そりゃ……」

ツァーノ少尉は、顔をしかめて唸った。

「――――騎士ですから、突撃で」

「よろしい」

フォイルナー少佐は頷くと言った。

「現状、確認されているメサイアの数は約４０。２個大隊程度だ。配備されているのは、赤兎改と飛鼠（ひそ）タイプの新型。後者については、極東戦線で魔族軍にも配備されているという“未確認情報”が入っている」

「魔族軍が？何です？チンク共は悪魔とも取引を？」

「詳細は不明。無駄な想像をしているヒマはないと思え。本作戦で投入する小隊を発表する」

「……」

騎士達にとって、緊張の瞬間がやってきた。

大隊戦力の全てを投入することは、基本的にあり得ない。

万一、作戦に失敗した場合、大隊の全戦力を喪失する恐れさえある。

後方で待機して、最悪の事態に備える予備戦力を確保するのは当然なのだ。

「アインツ、ツヴァイ、フュンフの三小隊」
何人かの騎士が体をピクリと動かした。
「前衛担当。
各小隊、陣形は楔型をとり、三手に別れて侵入する。
全騎、火炎放射装置を装備。
地雷原通過の後、敵狙撃部隊の陣地を突破。メサイア部隊との交戦より砲兵陣地攻撃を優先させろ。
狙撃部隊との砲撃戦担当は、ドライ、ゼックス、エルフ小隊」
「何でですか！」
顔を真っ赤にして席を蹴ったのは、エレナだった。
「私達は十分戦えます！前線で実績を作りました！わ、私っ、小隊指揮官として前衛を志願します！是非、エルフ小隊を前衛に加えてくださいっ！」
「――――大型狙撃銃及びロケットランチャー装備で地雷原外縁に配置する」
「少佐っ！」
グイッ！
くってかかったエレナを、ヘルガが乱暴に椅子に座らせる。
顔を真っ赤にしたまま、フォイルナー少佐を睨み付けるエレナは、少佐に完全に無視された状態だ。
「他部隊は指定地点にて全騎待機。
必要に応じて補充に入ってもらう。
なお、今作戦は、我が大隊にとって日本軍との初の共同作戦となる。

日本側との指揮権の共通化は行われないが、誤認攻撃なきように、敵味方の識別は厳重にするように」

「エレナが気の毒です」

大隊長室に戻ったフォイルナー少佐にブリュンヒルデが言った。

「あの子、私達がいない間、戦線を支えていた自信があるんですよ」

「……彼女はもう少し」

フォイルナー少佐は席に座った。

「行動の前に、考えるという姿勢が欲しいものだ」

「教えてあげるのも指揮官の務めですよ？」

ブリュンヒルデは、コーヒーメーカーからコーヒーをカップに注ぐ手を止めない。

「あの子、前衛に抜擢されるって自信もっていたから、解散の時に泣いてましたよ？」

「……」

「……まぁ。狙撃の腕前があるからこそ、この大隊に抜擢したヴォルフの判断からすれば順当な配置なんでしょうけど」

黙るフォイルナー少佐に、ブリュンヒルデはコーヒーを出した。

「肝心のヴォルフは、戦果よりも日本軍の活動にこそ興味があるんじゃなくて？」

「……」

「大当たり♪」

はい。熱いから気を付けて。

ブリュンヒルデは、別なカップをイリスに手渡した。
甘い香りが、中身がココアだと教えてくれる。
イリスのほんわかしたほほえみが、いつもなら張りつめた空気に包まれるこの部屋を、少しだけ暖かくしてくれる。

「違うの？」
「……私が不満なのは」
「？」
「せめて日本騎を間近で見る機会が欲しい――それだけだ」
「見てどうするんです？」
「……それから決める」
「相変わらずの考え無しなんだから」
ブリュンヒルデは苦笑しながらイリスの目の前に座った。
「作戦が終わった後、ミーティングとでも何とでも言って、日本軍と接触すればいいではないですか」
「なかなか、そうもいかん」
「？」
「中華帝国軍の後方の動きがかなり慌ただしい」
「大きく撃って出る可能性が？」
「違う」
フォイルナー少佐は、引き出しから取りだした写真をデスクの上に広げた。
席を立ったブリュンヒルデは、デスクの上に並んだ写真を見た。
「……これは？」
「テキサス方面の旧米軍側防衛線。昨日の写真だ」
フォイルナー少佐が指さした一枚を手にする。
幾何学模様の線に見えるのは、全て塹壕だ。
大型の重機がいくつも塹壕の構築に駆り出されているのがはっきりとわかる。
「対空砲陣地に、対戦車塹壕ですよね？これ……防衛陣地を構築し

ているのですか？」
「正確には、防衛線だな。同様の工事が数十カ所で確認されている」
「何故？」
ブリュンヒルデには理由がわからない。
中華帝国軍は、攻勢に出ているのだ。それが、なぜこのような防衛設備を構築している？
「……ブリュンヒルデ」
フォイルナー少佐は、静かに、しかし、はっきりとした声で言った。
「狭く入り組んだ地形を利用し、前方に地雷原を敷設。対空砲を主力とした対空陣地が、相互カバー出来る用に配置されている。
お前も、この配置には覚えがあるはずだ。
この典型的な配置は……間違いようがない」

「……」
じっ。と考え込んだブリュンヒルデは、ハッとなった途端、顔色を変えた。
「まさか！」
ブリュンヒルデは、恐ろしいものを手放すかのように、写真をデスクに戻した。
「考えすぎです！きっとこれは、米軍の反撃を恐れて！」

「……悪い情報はもっとある」
フォイルナー少佐は、コーヒーを脇に置いた。

「……」

「諜報部からだ。中華帝国軍司令部は、北米大陸からの完全撤退を北京に進言している。　最前線の各部隊も撤退を開始し、奴らが優

勢だったはずの前線は、相次いで放棄されている。
米軍は、その隙をついて反撃に出ようとしているが、連中にとって不幸なことに、空爆によって寸断された補給線がつながっていない」

「……そんな」

「こんな状況を、君も見たことはあるはずだ。若い頃に」

「――――わか？」

「……どうした？今、凄まじい殺意を感じたが？」

「……いえ」

「まぁ、いい」

フォイルナー少佐は、何故かコーヒーカップを掴む自分の手が震えていることに気付いた。

「……」

背筋が寒いなんてものじゃない。

それが何なのか、彼自身がわかっている。

恐怖だ。

初陣の時よりも、部隊が全滅した時よりも、遙に強い恐怖を覚えた。

彼は、その恐怖から逃れるように話を続けた。

「再三に渡る米軍の攻撃要請にもかかわらず、中華帝国軍の砲兵部隊を師団司令部が攻撃しようとしないのは、その攻撃が無駄だからだ」

「……成る程？」

ブリュンヒルデは冷たい声で言った。
「可能性としては、我々がこの砲兵部隊に砲撃支援を求める可能性もある――――と？」

「簡単に言えばそうなる」
彼は無理矢理コーヒーを喉に流し込んだ。
味が、まるでわからない。
「だから、本来ならば潰すことなんて考えたくないのだ。
中華帝国軍は、間違いなく何かから逃げている中だ。
奴らは、それと対峙することが無駄だと、そうわかっているからこそ、逃げている。
下手すると、この砲兵陣地も時間を待たずに撤退する可能性が高い」

「なら、この先、どうなるんですか？作戦は継続？」

「司令部からは中止命令は来ていない。それに、人間同士の戦いはしばらくは続くだろう。だが、すぐに無駄だと、皆が気付く」
ふうっ。
小さくため息をついた彼は、窓の外を見た。
青い空に白い雲が浮かぶ、美しい世界が、そこには広がっていた。
「……気付いてからでは……遅いのだがな」

「――――わからないことが、二つあります」
ブリュンヒルデは、その背中に言った。
「まず一つ……どうして、こんなことに？」

「それが中華帝国軍の狙いだったのか。それは現在、諜報部が死に物狂いで調べている。判明するかそのものが不明だ」

「裏で魔族軍とつながっていると聞きますけど、あれは本当だと証明されたことになりますね」
ブリュンヒルデは、汚らわしい。と、吐き捨てる様に言った。
「許せません」

「同感だ。しかし、我々は任務に従えばいい。下手な正義感は寿命を短くするだけだ」

「わかりました。では、最後にもう一つ」

「……何だ？」

「――イリス？」

「はい？」

「部屋から出なさい。これ以上は子供は見てはいけません」

「は……はい。あの……失礼します」
ブリュンヒルデの気迫に押される形で、イリスは部屋から出ていった。

「ブリュンヒルデ？」

「最後の質問です」
ブリュンヒルデが、デスクを回り込むとフォイルナー少佐の前に仁王立ちになった。
その顔は、フォイルナー少佐にはとても人間の顔とは思えなかった。
「あの……どうした」

「ヴォルフ……」
「う……うむ」
「さっきの……」
「……何だ」
「――私が若かった頃というセリフについて、納得のいく説明をお願いします」

●鈴谷　ブリーフィング・ルーム
「目的はドイツ軍のメサイア様がお通りになる道を開いて差し上げること」

美奈代は黒板の前に立った。
後藤は壇上から降りて美奈代を見つめているだけ。
人の視線に慣れていない美奈代は、表面上は冷静さを保っている。
慣れてきたかな？
美奈代は一瞬だけ、そんなことを思ったが、実際はどうか、それは考えないことにした。

「ドイツ軍の戦力はメサイア２個中隊規模と聞いている。
残念だが、我々との連携はないので、彼等からの支援は期待するな。
彼等が陣地に侵入すれば、我々の任務は終わる。
ドイツ軍が陣地に入り込むのと同時に、我々は撤収する。
作戦そのものは、至ってシンプルだ。
単に、高々度からの降下強襲作戦――としか言い様がない」

美奈代は、黒板に張り付けられた地図を指さした。

「現在、我々はここ。中華帝国軍砲兵陣地はここ。距離は約１５０

キロ。
　メサイアのセンサーからすれば、我々がここに存在することも、まして発艦したことも、全て敵はお見通しのはず。
　敵に手の内全部読まれるような状況下で、マトモな手段で攻撃した所で、餌食になるのがオチだ。
　敵は絶対に警戒してしまう。なにより、ドイツ軍が目の前に展開しているんだ」

「それで」
　寧々が訊ねた。
「高々度の降下強襲なら大丈夫なのですか？」

「成功する保証なんてどこにもない」
　美奈代は、さも当然という顔で言った。
「確実なのは、失敗すれば全滅だってこと」

「――――そんな」
　目を見張る寧々の横で、有珠（ありす）がぼやいた。
「テキスト通りにやってたらラチ明かないってことですか？」

「明かなければ明かすだけだ」

「そういうの」
　有珠（ありす）は苦笑して頷いた。
「嫌いじゃないです」

「考えてみろ。鬼龍院中尉」

「？」

「モノが飛んで来るとして、周囲を警戒している。この状況で、一番気付かない場所は？」

「……背後？」

「周囲を警戒して。その条件付きだぞ？」

「……」

寧々は無言で頭の上を見た。

「頭上……対空レーダー相手にその考えが通じるとは思えませんが？」

「当然」

美奈代は頷いた。

「ただ、レーダーが発見しても、対応が間に合わないレベルで、事を為すとしたら？」

「全ては時間との勝負……ですね」

「話を戻すぞ？我々は鈴谷発艦後、高度2万まで上昇。弾道コースをたどって敵陣地へ一気に降下する。
なお、降下に際しての前衛は」

ハァッ

美奈代は、わざとらしい程大きなため息をつくと、

「フィア」

憮然とした顔で椅子に座っていたフィアに声をかけた。

「レーダーを黙らせるには、殲龍（せんりゅう）の電子戦システムが最も役立つことは間違いない。不本意だが、一番槍の名誉を譲る」

「……あんたさぁ」

フィアの額に青筋が走った。

「モノの頼み方って、誰かに教わらなかったの？」

「悪かったわね」

美奈代は態とらしく、ちいさく頭を下げた。

「やらせてやるから感謝しろ。その間違いだった」

「何ぃっ！？」

「ほざくな。死人が偉そうに」

「何よ！」

「やるの！？やらないの！？」

周りがびっくりする程の気迫のこもった怒鳴り声が美奈代の口から飛び出した。

「ここで負けたら、日本に帰るのがまた遅くなるのよ！？

それとも死体袋に入って無言のご帰還がお望み！？」

「っ！？」

すっかり面食らった格好のフィアは目を白黒させるしかない。

「あんたのご主人には私から挨拶してあげる。“お宅の奥様は残念ながら”なんて心にもないこと言って、心の中で舌出してやるわ！」

「こ、このっ！」

「先立たれた妻の遺影の前でってヤツか？泉」
後藤が楽しげに訊ねた。
「そいつぁ、豪快だ」

「別にいいですよ？フィア？遺影の撮影は終わってるわね？」

「表に出なさい、美奈代！この淫売がっ！」

「私が染谷候補生と、あんたの遺影の前で結ばれるのがイヤだったら！」
ビシッ！
美奈代はフィアを指さしながら怒鳴った。
「殲龍（せんりゅう）で、きっちり中華帝国軍の電子防衛網を沈黙せさなさい！」

「や……やってやろうじゃない」
フィアは、目を血走らせながら言った。
「こ……この腐れドロボウ猫……誰にケンカ売ったかわからせてやる」

「どっちがドロボウ猫よ……殲龍（せんりゅう）を先行させ、レーダーからの隠れ蓑を構成。敵陣地上空1万メートルまでとする。
ここまでを第一段階とする。
フィア？
いいわね？
この第一段階でしくじったら、みんなが対空砲の餌食よ？
部隊全員の命を、あんたに預ける。
言葉の意味を正しく理解して」

「……美奈代以外は、責任もってあげるわよ」

「一緒にいる牧野中尉を忘れないでね」

「人質とるなんてずるい。最低ね」

「後ろからの攻撃に覚悟なさい。この（自主規制）……敵陣地上空1万メートルで殲龍（せんりゅう）は部隊最後方に移動開始。

前衛に出るのは狙撃部隊。

バリアシステム破壊に作戦が移る。

これが第二段階だ。

狙撃部隊の指揮官は涼。

涼？高度1万メートルから地上までわずか20秒よ？バリアシステムの破壊は出来る？」

「はい。お姉さま」

涼は楽しげに微笑んで見せた。

「バリアシステムはMC（メサイア・コントローラー）による脳波コントロールです。コントールしているメサイアだけたたきつぶせは後は楽ですね」

「楽観しすぎるなよ？」

「はい♪」

涼は嬉しそうに頷いた。

「HMCは射撃速度と制限時間から、射撃は部隊全部で10発が限界です。

寧々、じゃない。鬼龍院中尉の実体弾はフルバーストモードで、上空から面で叩きます。

HMCは弾種榴弾、射撃はバーストとし、高度100メートルで空中炸裂設定。これでしたら被害範囲を広くとれますから、チンクを魔法エネルギーで塵にしてやりますし、実体弾はクラスター爆弾

並の破壊が期待出来るはずです」

「上等だ」

美奈代は満足げに頷いた。

「ただし、涼。勘違いするな？

バリアシステムの完全破壊に固執する必要はない。

バリアシステムを破壊する理由は、主力隊を敵陣地に斬り込ませる障害を排除すること。

後続が陣地に飛び込み次第、フィアと一緒に指定ポイントに移動していい」

「で……ですけど」

「狙撃装備で斬り込みの中に飛び込ませるわけにはいかない。

狙撃部隊と入れ替わりで、私達別働隊が斬り込んで囮となる。

敵の目が私達別働隊に注がれた所で主力部隊のお出ましとなる。

任務は砲撃部隊の破壊。弾薬集積所は、真っ先に狙え。

頼むぞ？宗像」

「……泉が」

ちらりと月城を見た宗像が、

「いや、月城大尉が指揮を執るべきだ」

「階級に固執するな。近衛の不文律では、戦場においては、スコアが指揮権に優先される」

美奈代は言った。

「それに私は既に小隊指揮官ではない。中隊前線指揮官だ。前衛小隊の指揮権は、スコアからしてお前になる」

「……詐欺だ」

「慣れろ。お前に必要なのは慣れだけだ」

「……」

「お前は私なんか比べモノにならない程、指揮官の素質があるんだ。間違っていたら」

「間違っていたら？」

「どうしてほしい？」

「……な？」

まるで誘うような微笑みに、逆に宗像は気圧されてしまう。

微笑む美奈代を前に、わき上がった感情がなんなのか、宗像自身がわからない。

「後で後悔するな？」

そんな強がりを言うのが精一杯だ。

「信じてるさ……涼？ホルスターに銃を戻せ」

「……」

「メサイアは基本的に私と風間の別働隊が喰らう。いいか宗像。近づくものは全て広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で焼き殺せ。どうにも厄介なヤツがいる」

「――――飛鼠（ひそ）が？」

「ああ。なるべく彼奴等は私達別働隊が引きつけるつもりだが、危

険だと判断したら撤退してもいい」

「そこまで臆病ではないが」

宗像は小さく笑って見せた。

「かといって卑怯でもない」

「ドイツ軍のお手並み拝見としゃれ込みたいのが本音だが、飛鼠(ひそ)相手にドイツ軍のノイシアがどの程度役に立つか知れたものじゃない。それと」

美奈代は言葉を止めると、じっ。と皆を見た。

「ドイツ軍から流れ弾が飛んでくる恐れは極めて高い。全騎に徹底することは一つ。

これは地上に脚を下ろして行う、従来の戦闘ではリスクを回避出来ない。

リスク回避のため、高機動戦闘モードで全て事に当たれ」

高機動戦闘モード

つまり、メサイアの脚による歩行、及び、ホバー移動ではなく、ブースターとバインダーによる飛行を前提とした、空中戦闘モードのことだ。

「よもや、出来ないなんて言わないな？芳(かおる)？有珠(ありす)？」

「大丈夫ですって」有珠(ありす)は自信満々に頷いた。

「涼の背中は任せてください」と、芳(かおる)も楽しそうに応じた。

「月城大尉には鍛えられましたから」

「――明日、日の出と同時に敵陣に斬り込む。日の出は０５０５。現地の天候は晴れ。視界は１００。崩れる恐れはない。最終ブリー

フィングは明日０３３０、ここで行う。何か質問は？」

「……」

「――――各員の武運を祈る。以上だ」

皆からの敬礼に答えた美奈代は、敬礼を解くと、

「後藤隊長？何かありますか？」

「いんにゃ？」

後藤は意地の悪い笑みを浮かべて、

「俺は何にも？」

「なら、ここで解散します。ご苦労だった」

「それにしても」

ブリーフィングが終わった後、皆が集まったのはフィアの所だ。

「どこにいたの？フィアちゃん」

「艦長の所。ごめんね？艦長、絶対に部屋から外に出るなって厳しくて」

「せめて一言言ってくれればいいのにねぇ！」

涼や寧々が一斉に頷くのを、美奈代は少し離れた場所で見ていた。

月城大尉や有珠（ありす）もその中に参加している。

皆がフィアを心配していたことは、その態度から明らかだ。

フィアも皆と久しぶりの会話が出来たことを喜んでいる。

軍艦の中とはちょっと考えられないほど、場が華やいでいる。

フィアの笑顔は、本当にそれだけで場所を明るくする輝きがある。

それはマネなんて出来る代物ではない。

「私では」
美奈代はふと思った。
「ああは出来ない……かな？」
同じ女の子なのに。
そう思うと、怒るより、惨めさより、何だかおかしさがこみ上げてくる。
私の何が変わったのかわからない。
でも、フィアと初めてあった頃、彼女に抱いていたような感情は無くなっていることはわかる。
不思議なものだ。
美奈代はそう思った。

「――おい」
ツンッ。
横から突かれた美奈代が振り向くと、そこには後藤が立っていた。
「ちょっとおいで」
「どこへ？」
「艦長室だ」
ちらり。と、後藤は輪の中にいる月城大尉を見たが、
「……まぁ、いいか」
そう言うと、美奈代だけを促して歩き出した。
「ちょっと……他には言いづらい話だ」

●北京　紫禁城
「――これは、本当か？」
載賢の軍人としての経歴はかなり長い。

彼の才能は、政治家としてより、むしろ軍人としての方がはっきり有能と言える。
ここ２０年ほど、中華帝国の軍事行動のほとんどに関与した彼の踏んだ場数の数はハンパではない。
その彼に驚愕の表情を浮かばせることは、そうそうあり得ないのだが、
彼の顔には、その色が明らかに浮かんでいた。

「北米討伐軍の司令部も混乱しています。陛下」
参謀総長の顔色も冴えない。
「元来、我々はこ奴らとの戦闘は想定していません」

「後退防衛は」

後退と防衛という言葉がまとめて出たことに、参謀総長は安堵しながら答えた。

「ニューメキシコより前衛部隊を撤退させ、テキサス州において防衛陣地を構築中。
北部方面を始め、各方面部隊も総司令部のあるヒューストン付近に戦力を集中させています。
相手が相手です。参謀本部は最悪の事態に備えています」

「……無断の撤退は不問にしてやる」
唸りながら載賢は写真をめくった。
「まさか……何が起きたというのだ」

「米軍が奴らを軍事兵器化した可能性が」
居合わせた将校の中からそんな言葉が出てきたが、

「馬鹿な」
載賢は一睨みで黙らせた。
「そんなマネが出来るなら、とっくの昔に俺達は北米から追い出されているわ。北米の銭大将は何と言っている？」
「銭大将は……」
「何だ」
「体調不良をもって、昨日より休暇をとっています」
「階級を剥奪し、家族もろともぶっ殺せ」
「はっ」
「無能の指揮官に用はない。後任は？」
「指揮権を代行する江少将でよろしいですか？ヤツからは既に進言が出ています。交戦は無意味。北米の滅亡に巻き込まれる前に、撤退を許可されたし。一時的な撤退という恥辱に耐え、北米滅亡の後、我らの植民地としてこの地を手に入れるが上策なりと」
「悪くない判断だ」
載賢はニヤリと笑った。
「だが――撤退以外にも策があると思い至らない辺りが、そいつの限界だな」
「は？」
「……」

載賢は、戦域の情報が書き込まれた地図を睨みながら、数分間、身じろぎ一つしなかった。
その気性の荒さから、こんな時に下手に声をかけるとどうなるか、皆がそれを知ってるだけに、息を殺すしかない。
素手で殴られただけで確実に相手を殺す人食い虎の尾を踏む程、彼等はバカではない。

「……参謀総長」
気の遠くなるような空気の中、載賢はやっと口を開いた。

「は、はい？」

「東部方面をのぞき、北部、西部攻略部隊のヒューストン付近までの完全撤退を認める。それと、諜報部及び情報機関を総動員し、本件に我が国が一切関与していないことを宣伝させろ。
この話は、後で口にした方が罪を被ることになるぞ――急げ」

「は、はいっ！」
参謀総長は立ち上がると頭を下げた。
「全ては偉大なる陛下の御為に！」

「……」
載賢は、そんなことは興味がない。そう言わんばかりに写真の束をめくり続けた。
中華帝国軍と魔族軍のつながり。
それは全人類が知る所であるにも関わらず、肝心の中華帝国国内で、そのつながりに関与する人物は全く知られていない。
載賢ですから、本当に知らないのだ。
そこを調べることで、この事態の裏が明らかになる。
否、調べなければ、大変なことになる。

全てが終わる前に、手を打つ必要がある。
載賢の全てが、激しい警告を出していた。

「……調べる必要がありそうだな」

●北米大陸　北部方面軍砲兵陣地

「撤退！？」

砲撃部隊に配属される金軍曹は、やっと眠ることが出来ると寝床に潜り込んだばかりの所を叩き起こされた。

周囲は右往左往としている。

隣に布陣していた４０センチ連装砲搭型載陸戦艇“上海２”が重苦しい重低音を響かせながら移動を開始している。

「どういうことですか！？布陣が完了したのは昨日ですよ！？」

「知るか」

上官の李准尉が苛立った声を挙げた。

「北部の部隊は全てヒューストン付近まで下がる。俺達は、その撤退を支援するために準備するよう命じられた。それだけだ」

「撤退って……だから何で！？」

金軍曹にはそれがわからない。

我々は今、勝っているんだぞ？

それが――――何故？

「余計なことを考えるな！」

パンッ！

李准尉の平手が金軍曹の頬を殴った。

「それが命令なら従うだけ。それが軍隊だろうが！」

そんな金軍曹達の横を、メサイア達が地響きを立てて移動していった。

●深夜　鈴谷艦内

「……」

「……ねぇ」

ぼうっ。と窓の外の夜景を眺める美奈代。

その後ろではフィアが苛立った声をかけていた。

「ねえったら」

「……」

「ねぇっ！」

乱暴に肩を掴んで後ろを振り向かせた。

「きゃっ！？」

まるで、美奈代はそれで初めてフィアに気付いたと言わんばかりに驚いた顔を浮かべた。

「な、何？い、いつからそこにいたの？」

「さっきからずっとよ」

眉間に皺を寄らせ、怪訝そうな顔をしたフィアが訊ねた。

「どうしたのよ。早く寝ないと」

「……い、いや」

美奈代は何故かフィアから視線を離すと、窓の外に向き直った。

「ちょっと考え事を」

「何よ」

フィアは笑って言った。

「魔族でも攻めてきた――って」

フィアの笑顔はすぐに硬い表情に変わった。

美奈代が驚いた顔をしているからだ。
「……ねぇ」
フィアは美奈代の横に立つと、美奈代と同じように窓の外に顔を向けた。
「艦長室で、何を聞かされたの？」
「――――別に」
「別に？」
「……何でもない」
「ホントのこと言いなさいよ」
フィアは静かに、しかし、はっきりとした声で言った。
「魔族軍が、この北米にも出現した……そんな所でしょう？」
「……だとしたら……どうする？」
美奈代にしては、軽口のつもりだった。
「北米に、魔族が出たとして、フィアならどうするんだ？」
「……別に？」
フィアはあっけらかんと言った。
「私がいる限り、魔族はどこにでも出てくるわ」
「？」
美奈代は、フィアの口から出た言葉に、目をぱちくりさせた。
「……正気か？」
「……勿論」
「買いかぶりすぎだろう？まるで、魔族がフィアを探して北米に来たような、そんな感じに聞こえたぞ？」
「その通りよ」

「はぁっ？」
美奈代はフィアの額に手を当てた。
「平熱のようだが……どこかで頭ぶつけたか……どうだ？首でも吊って、全ての熱を止めてみたら」

「何すんのよっ！」
乱暴に美奈代の手をふりほどいたフィアは怒鳴った。
「人が真面目な話しようとしてるのにっ！」

「……」
美奈代は、どうやって顔を真っ赤にしているフィアをあしらおうか考えたが……。
「……おい」
美奈代の脳裏に浮かんだのは、この少女との出会いだった。
人のいないアフリカに一人でいた。
あの時だって――魔族の追撃を受けた。
アフリカから撤退したのに、魔族は追いかけてきた。
そして――神戸では。

「……」
ふるふる。
美奈代は、強く首を左右に振って、疑問を頭から追い出そうとした。
あり得ない。
あってはならない。
そんな考えのはずだ。
だけど――

美奈代は、その疑問を、その結論を、脳裏から追い出すことが出来ない。

「お前の考えすぎだ。フィア」
やっとのことで、美奈代は言った。
「……悲劇のヒロインにでもなるつもりか？」

「……あんたなら」
フィアは、失望の色を隠さずに言った。
「あんたは――――あんたなら、私を信じてくれると思ったのに」

「……」
ふぅっ。
小さくため息をつくと、美奈代は答えた。
「私の理解を超えている。だいたい、お前の何を信じろと？」

「……」

「……まぁ、いい」
美奈代はぽんっ。とフィアの頭に手を置いた。
「私はバカだから、難しい話は聞かされてもわかんないし、聞きたくもない。深刻な話なんて大嫌いだ。手に負えない厄介事に巻き込まれるから」

「……私、お荷物？」
泣き出しそうなフィア。

「その……なんだ」
その視線に気圧されるように、美奈代は視線を彼女から外し、態とらしい咳払いをした。
「コホン……お前は、私達の――――戦友だ」

「せん……ゆう？」

「みんなが、お前が生きていたことを喜んでいる。それは、つまるところ、お前が友達だと、そう思われているからだ」

「……」

「つまり、お前が何者で、どんな過去があろうとも、私達にとってはどうでもいい。魔族が来るなら叩き潰すだけだ。みんな、そう思っているはずだ」

「……悪いわね」

フィアはぽつりと言った。

「私、迷惑で」

「バカ」

美奈代は苦笑しながら言った。

「友達が困っていれば助ける。それが人だ。同じ人間ならわかるだろう？」

「……」

フィアは、小さく、本当に小さく頷いた。

「……まぁ、私にとってお前は」

「？」

「大嫌いなケンカ相手にすぎないが」

「何よそれは！？」

その近く、物陰では、携帯電話片手の有珠（ありす）が息を潜めていることを、ここにいる二人とも、知るよしもなかった。

北米戦線編　第十八話（後書き）

色々考えて、内容変更しました。

北米戦線編　第十九話

●中華帝国軍陣地

砲兵部隊陣地はもぬけの空。

つい昨日まで、広大な地雷原の護られた巨砲達が絶対的な死の炎を吹き上げていた陣地に響くのは、低いメサイアのアイドリング音だけだ。

砲の手入れをする兵士達を照らし出すサーチライトはどこにあるかもわからない。

見上げた空には星々が弱い瞬きを続けている。

祖国で見上げた星とあまり変わらないその配列に、不思議な懐かしさを感じつつ、コクピットから出た男はタバコに火を付けた。

軍規では、夜間、こんな外でタバコは禁止されている。

狙撃兵や砲兵の的にしかならないから、そして、彼の部下が同じ事をしていたら、彼自身が怒鳴っていたろう。

それが、まっとうな戦場なら。

「……くそ」

深く紫煙を吸い込んだ彼の口から、煙と共に吐き出されたのは、そんな言葉だ。

――メサイア隊は砲兵部隊撤退まで砲兵陣地を死守せよ。

そんな命令を受けた時、彼は自分の耳を本気で疑った。

砲兵隊が派手にやったおかげで、業を煮やした米帝軍がメサイア部隊を集結させつつあることは、既にあんたも知っているはずだ。

耳鼻科に行ってきますから、その後、もう一度言って下さい。

憎き上官に、そう言いたかった。

上官が正気だとはとても信じられなかった。

――不満か？

通信モニターの向こう側にいる上官は、太りきった顔を歪めながら彼に言った。

その値踏みするような目の色が、彼の神経には耐え難い。

――命令違反は銃殺だと知ってるのだろうな。

そこから俺を銃殺出来るならやってみやがれ。と、内心で毒づきながら、表面上は不動の姿勢を彼は崩さない。

上官に何を言われても受け流せ、感情的になるな。

それが、軍隊内での兵隊の不文律だ。

しばらく無言で彼を眺めていた上官は、

――反逆となれば、対象が家族にまで拡大することも。当然、知っているだろうな。

面白いのかよ。

彼は思った。

俺達みたいな連中をいたぶって、面白いのかよ。

その答えを聞きたいとさえ思わない。
ろくな答えが返ってこないのはわかりきっている。

――撤退中の列車砲は大変貴重なものだ。敵にくれてやる訳にはいかん。

――メサイア隊は、砲兵達の撤退完了まで、その場にとどまり、撤退を支援しろ。

彼はそこで初めて口を開いた。

「我々は撤退の支援を任務とする。そう解釈すればよろしいのですね？」

――当たり前のことだ。

上官はこれ以上ない程、彼を見下げて言った。

――無駄な心配はするな。砲兵が撤退すればよい。わかったな？

「……無駄はどっちだよ」
砲兵部隊とメサイア隊。
頭数からすれば、砲兵の方が多いのは確かだ。
だが、建造コストや戦闘力を考えたらどうなんだ。
司令部として、どちらを死守すべきと考えるのが普通なんだ。
紫煙の向こう。
暗闇の中で見慣れないメサイア達がうごめいているのをぼんやりと眺めるしかない。
彼等のメサイアは、塹壕の中で筒先を地雷原にむけている。
敵がこない以上は、もう何もすることはない。

敵が攻めてさえ来なければ、彼等はつかの間の平和をいつまでの甘受出来るのだ。

「唐少佐」

隣の騎から装甲を蹴って移動してきたのは、副官の長中尉。

中華帝国軍では珍しい女性の前線士官だ。

中華帝国軍では、女性兵は前線に出ることはほとんどない。

あったとしても、それは司令部や医療、そんな所であり、交戦を任務とする前線部隊に配属されることはない。

万一、捕虜になった場合の処遇を考えるととてもではないが、配属は出来ないというのが、中華帝国軍の昔からの考えだ。

そんな中、女性で前線に出る者は、せいぜいが騎士やＭＣ（メサイア・コントローラー）程度にすぎない。

それも、その実力故に命じられた者か、志願するかのいずれか。

長中尉は前者。

軍中央学校から上り詰めたエリート。

短くまとめられた髪につぶらな瞳は、騎士というより女優のような印象を与える、かなりの美女だ。

たしか、まだ２４だったな。

彼はそんなことをふと思った。

「どうした？」

「質問が」

軽く敬礼した後、長はたずねた。

「増援で送られた飛鼠（ひそ）部隊ですが」

「……」

彼はふと、長の赤い唇に見とれ、彼女の言葉を聞き逃した。

「――あの？」

「あ？」

「聞いていて下さったのですか？」

「何を？」

「ですから！」
長は不服そうに顔をしかめるが、そんなしぐささえ、彼の男としての欲情を刺激する。
「あの部隊、到着から6時間近く、ずっとコクピットから出てこないんですけど」
そう訊ねると、地雷原の縁の塹壕に並ぶ愛騎の後方に並ぶ、赤兎より一回り以上小柄なメサイア達に視線をむけた。
首がないナマコのような不気味な頭部が特徴的なその騎体は、見る者に生理的な嫌悪感さえ感じさせる。
好きにはなれない。
「――ああ。そんなことか」
「？」
小首を傾げる仕草さえ可愛いと思うのは、女っけのない軍隊生活が長いせいか、それともこいつが本当に美人だからか。
彼は、そんな下心を心から追い出すようにわざとらしい咳払いをした。
「あいつは――飛鼠（ひそ）タイプDは、無人騎だ」
「無人？」
「ああ……全て有機コンピューターなる代物が騎士やMC（メサイア・コントローラー）の代わりを務めてくれる……そうだ」
「そうだ……って」
長はますます怪訝そうな顔をした。
「少佐もご存じないのですか？」
「あいつの中身を本当にご存じなのは」
彼は飛鼠（ひそ）達の後ろ、かつて砲兵部隊司令部の避難壕のあった場所に陣取るTAC（タクティカル・エア・カーゴ）のあるあたりに視線を向けた。
「あそこの連中だけさ」
「その……」
長は言いづらそうに訊ねた。
「どこまで……その」

「戦力としては未知数だ」
彼は長の質問を先取りするように答えた。
「はっきり、俺達にとっては敵か味方かさえ不明」
「識別信号を発振し続けろと命じられていますが、そんなことしたら敵に居場所を教えるようなものです」
「無人騎の攻撃ってのは――皆殺しが当然だ」
「みな……殺し？」
「そう。敵味方じゃない。周りはすべて敵。そう言えばわかりやすいかな？」
「では、私達が識別信号を発振出来なかったら？」
「その時は」
彼は意地悪そうに言った。
「俺達も敵だ」
「……」
「心配するな」
彼はそっと言った。
「俺達の任務は敵の撃滅じゃない」
「――は？」
「砲兵隊撤退までの時間稼ぎだ。敵が攻めてきたら、飛鼠（ひそ）達を囮にして俺達はとっとと逃げる」
「そんな！」
「俺は死守命令だけはあの司令から出させなかった」
彼は自信満々に言った。
「俺達の任務は、撤退支援だ」
「ここで敵をくい止めることが、任務です」
「そう。敵が来なくて、そして撤退が完了すれば、俺達はここからずらかる」
彼はニヤリと笑った。
「お前、こんな所で犬死にしたいのか？」

●鈴谷艦橋

甲板では美奈代達の発艦作業が続いている。
メサイアの半端ではない発艦音が響く中、
「……どうも」
後藤が、他の乗組員に聞こえないよう、小声で美夜に言った。
「まずいことになりましたな」
「……とても、現状で皆に伝えるのは気が引けますな……指揮官として」
「俺は人としても、気が引けますけどね」
「同感です」
「司令部からは？」
「あの司令部（むのうども）が」
ニヤリと冷たく笑った美夜が後藤に顔を向けた。
「こういう状況で即決即断なんて出来ると思ってます？」
「本当に、俺ぁ、上司ってのにだけは恵まれないんですよね。昔っから」
「いいじゃないですか」
「へ？」
「私なんて、上司に夫にまで恵まれていません。恵まれてるのは部下だけです」
「……上には上がいるってことですな」
「FDC（フライトデッキ・コントール）より後藤中佐」
通信モニターに、メサイアの発艦を指揮している飛行発令所指揮官、中村大尉のゴツい顔が映り、スピーカー越しに、恐ろしくドスの聞いた声が流れた。
軍人でなければヤクザにしか見えない極悪な顔から出る声に、美夜は本能レベルの恐怖を感じてしまう。
「中隊全騎発艦を確認。コントールをそちらへハンドオーバーする。

よろしく頼むぜ」

美奈代達が全騎発艦に成功して以降は、メサイア隊に対する命令権は中隊指揮官である後藤に、つまり、この艦橋に移る。

「了解した――敵陣地に動きは？」

「偵察隊よりのデータ入りました――ん？」

レーダー要員の笠間少尉が首を傾げた。

「どうした？」

「戦況モニター出します。敵陣地に大きな動きあり」

「動き？」

思わず互いに顔を見合った後藤と美夜が、同時に艦橋前面にある巨大な液晶モニターに映し出された戦況情報に視線を向けた。

「――これは？」

「中華が撤退している？」

美奈代は、後藤に言われた言葉の意味がわからなかった。

圧倒的な砲兵火力をもって、敵を圧倒する力を誇る彼等が戦場から離脱する理由が思いつかない。

強いて言えば……

「……つまり、砲兵陣地の移動、ですか？」

「いや」

後藤は首を左右に振った。

「完全な撤退だ」

「て、撤退って、まさか！？」

「事実だ。偵察隊が陣地から撤退する大規模な車列を確認している。

間違いなく弾薬運搬車両だ。ハイウェイに長い車列を作っている以上、完全な退却に入っていると判断できる」

「……昨晩のお話は」

しばしの沈黙の後、言った。

「本当のようですね」

「……ああ」

後藤は肩をすくめた。

「しかも、奴さん達も知っていると見える」

「そりゃ」

美奈代は苦笑気味に答えた。

「あの連中の方が、敵に近いでしょうし？それに」

「それに？」

「――絶対、何らかの被害、受けてます。殴られて、相手に気付いた」

「そう判断する方が妥当だろうね」

「で？世間話はともかく、我々にどうしろと？」

「砲兵陣地に陣取っているのはメサイア部隊。中華の砲兵隊は、メサイアの楯の後ろで逃げ出している。この状況の変化の下で、お前が何を求めるか」

「そんなの」

呆れた。と言う顔になった美奈代は、

「後藤隊長が決めることでしょう？あなた中隊長なんですから」
「お前も成長したねぇ。反抗期か？」
「左遷希望です。銃殺台はお断りですが」
「絞首台を準備してやるよ」
「……冗談ともかく」
「俺は本気だがね」
「土下座でもしましょうか？」
「命乞いは聞かないよ。欲しいのは戦果でね」
後藤は答えた。
「どっちにしても、主役は俺達じゃない。砲兵とメサイア、どっちを叩いても、戦功はドイツのもの。俺達ゃ、影だからね。お日様の脚光を浴びる立場にない」
「……全責任はとっていただけるというなら、案はありますけど」
「指揮官は」
チェシャ猫みたいな顔だなと、美奈代は後藤の顔を見て思った。
「責任とるためにいるからね」
「前線指揮官の肩書き、今すぐ返納させていただきます」
美奈代は首の辺りをわざとらしくさすった。
「痛いの嫌いなんで」

「――で？」

「……戦果は最大、リスクは最小に、そんなことさせてください」

「それ、聞かせてもらおうか？」

「あいつらしいというか」

宗像はあきれ顔のまま、戦闘速度を発揮する“白雷改”を駆る。

「何、考えてるんだというべきか……」

地上すれすれの超低空侵入を夜間にやれだなんて、考えるヤツの神経が知れない。

本気で美奈代の脳みそをえぐり出してみたくなった。

「高度2万メートルからのダイブとどっちがいい？なんて、選択肢になってないっていうのが、どうして理解できないのか」

どういう仕組みか本気で聞いてみたくなる光学補正装置が、明け切らぬ北米の夜を昼間さながらに描き出すとはいえ、喩え世界で一番安全と称えられるMC（メサイア・コントローラー）管制下のフライトとはいえ、ギリギリの大地が迫り来る錯覚から入る恐怖感は、ちょっと表現出来ない。

「言うだけ無駄か……部隊全騎」

宗像は隊内通信を開いた。

「泉の無謀のおさらいだ」

作戦という言葉を使わないのは、宗像なりの抗議の現れだ。

こんな命令を押しつける横暴ぶり。

これを作戦として立案する無謀ぶり。

なにより、発想内容の乱暴ぶり。

「横暴と無謀と乱暴。「ぼう」が3つで参謀だと誰から聞いたが……あいつは間違いなく、その典型例だ」

「そんなことありません！」

涼がむっとした声で抗議した。

「お姉さまの作戦は、成功率が高いから安心できます！失敗したことありませんから！」

「そりゃ……そうだがな」

宗像は、いくつかの作戦を思い出してみた。

確かに無謀と思う作戦は多かったが、どういうわけか部隊全体で危機に陥ったケースは覚えがない。

奇策だが堅実に結果だけ残してきた。

「全騎、無事生還は運だけじゃない……そういうことか」

「そうです！」

涼は胸を張って答えた。

「作戦がしっかりしてなければ、そうは行きませんから！」

「そう願おう。あの迷参謀殿の作戦についてだが」

宗像は話を戻した。

「敵は現在、ハイウェイ周辺を縦列で移動中。我々の任務は、可能な限り無傷で敵の列車砲を手に入れることだ」

「手に入れてどうするんです？」

有珠（ありす）が訊ねた。

「捕獲してから考えるといっていた」

「そんな無謀な。捕獲した後の管理は？」

「応援でも呼びつける気だろう。近衛だって陸軍だって、飛行艇付きの列車砲なんて、欲しくないのかと聞かれれば、喉から足どころか（自主規制）まで出すだろうさ。欲しいなら取りに来い。そう司令部に伝えれば、明日には日本から特別便が来るだろうよ」

「それは豪勢な」

芳（かおる）が笑っていった。

「私達、分け前はないですよね」

「下っ端の辛いところだ――――突入まで3分。敵にメサイアの護衛はない。

山崎と美晴、敵車列の頭を止めろ。月城大尉と有珠（ありす）は左。私は右から行く。狙撃隊は後方に展開。

フィアは狙撃隊と行動を共にしてくれ。

作戦第一段階は車列の停止。

第二段階で、車列の制圧に移る。

最重要目標は、兵員輸送艇。

列車砲は構造上、兵員を搭乗させるスペースはないから、兵員輸送艇がいるはずだ。そいつを確保しろ。たたき壊す必要はない。

最悪は破壊して構わんが」

宗像は言い淀んだ。

「列車砲運用要員は推定で千人を超える。意味を考えてくれ」

「……今更」

美晴はポツリと言った。

「機甲師団まるまる焼き殺した私達ですよ？今更何を遠慮する必要が？」

「殺しを好むな……危険だぞ？」

「殺させたのは誰です？私の意志ではないはずです」

「トリガーを引き、剣を振り下ろすのは我々、騎士や兵士の務めだ。だが、その殺意は国家のもの。それは詭弁だ。柏、やりたければやれ……それで気が晴れたとしても、お前を待っているのは軍法会議と銃殺台だ」

「……」

「自暴自棄になるな。自分の命に釣り合う殺しをしろ。千人殺しても死んだら意味がない」

「――了解」

美晴は憮然とした声で言った。

「私と大ちゃんは敵車列の停止に傾注します。そっちの方が望みです。台車の破壊は許可いただけますか？」

「その辺は任せる。適宜判断しろ」

「了解」

「お姉さま」

宗像騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）、桜庭優からの報告が入る。

「敵車列直前。接敵まで３０秒」

「フィア。電波妨害頼む」

「わかった。レーダージャミング開始する」

「効率よく行こう」
宗像は大きく息を吸い込んだ。
「全騎、戦闘展開――――かかれっ！」

●中華帝国軍　兵員輸送艇内　高級士官室
「どういうことだ」
砲兵部隊を率いる張少将には、総司令部から送られてきた撤退命令の意味がわからない。
砲兵師団司令部を兼ねる兵員輸送用２０１号艇の指揮官用に割り当てられた私室で、彼は睡眠不足の目を擦りながら副官に尋ねた。
「総司令部は何を考えているんだ？増援を送るわけでもなく、下がれとは……しかも、メサイアは全て前衛に残せだと？給弾用メサイアまでベルゲとして残せとはあんまりだと思わないか？」

「全くです」
当番兵の持ってきたコーヒーを勧めながら、副官は答えた。
「おかげで我々は丸腰で移動です。ここを叩かれたら終わりだということを、総司令部は理解しているのでしょうか」

「司令部が我々に要求しているのは、指定した時刻に所定の場所に布陣することだけだ」

「……まさかと思いますが」

「何だ？」

「前線で反応弾の使用が？」

「バカな」
コーヒーを受け取りながら、張は顔をしかめた。
「反応弾を使用したら、反撃の一撃は祖国に落ちるぞ。そんな状況を望んでいるのか？」
「……いえ」
「命令は本物なんだな？これで敵の欺瞞でしただと、我々の首では済まないぞ」
「通信コードまで確認しています。本物としか判断出来ません」
「なら、後方で何があった？」
「後方に下がればわかります」
「それもそうだな……」
張は苦笑しながらコーヒーに口を付けた。
ズンッ！
ギィィィィィィッッッ！
艇を揺るがす激震が走ったのはその瞬間だった。
数万トンもの規模を誇る艦が激しく揺れ、そして前につんのめった。
その衝撃で、

「熱いっ！」
コーヒーを胸元一杯にこぼした張が思わず悲鳴を挙げた。
「くそっ！？何だ！被弾したのか！？」

「張司令より艦橋！」
副官がデスクの上の艦内通話を掴んだ。
「何だ！？何が起きた！？」

艦橋からの返事は早かった。
ただ、その内容は、決して副官の聞きたい内容ではなかった。

「敵襲だと！？」

「隊列最前方、“対馬1号砲”前にメサイア2が出現！左右後方にも確認されています！」
艇長は通話装置の受話器に怒鳴った。
「“対馬1号砲”は動力を破壊され停止……最悪なことに」
艇長は艦橋の外を引きつった顔で睨み付けた。
船窓の外から自分達に突きつけられているモノが何か、イヤでもわかるからだ。
「我が艇真横に……敵メサイアが出現。銃口をこちらにむけています」

「……だそうです」
メサイアの攻撃能力の高さは、軍人としてイヤになる位知っている。
その火砲の命中精度は、砲兵として嫉妬に狂うほど正確にして、高い破壊力を誇る。
まともに目を付けられれば、逃げる事なんて出来る相手じゃない。
それを骨の髄まで知る副官は、受話器を握りしめたまま、張に現

実を言った。
「部隊の現状で、対メサイア戦は不可能です」
「逃げることもか」
「砲台の陸上速度は２０ノットが限界」
副官は苦笑いをした上で言った。
「メサイアから逃げる方法があれば命令してください。司令」
「……」
張は瞑目したまま、しばらく沈黙を続けた。
「……師団全将兵の安全の保証を交換条件として認めるよう、敵に要請してくれと、艇長に伝えてくれ」
「抗戦はしないと？」
「抗戦？ここでその言葉が出てくるとは……私は、君が王政党の政治将校だとは知らなかったよ」
張もまた、苦笑した。
「いい方法があるなら聞こう。君もご存じの通り、移動中の列車砲は薬室に一発の砲弾も搭載していない。自衛用の機関銃さえ搭載していない、完全な丸腰だ。体当たり？鈍重な艇の鈍い体当たりをまともに受けるメサイアが存在するものか。何をしろと言うのだ？」
「……」
「逃げることも出来ず、メサイアに対抗できる戦力もなく、ただ、存在するものは将兵の命だけだ。それに、白兵戦は砲兵のすることではない」
張は幾分、落胆した顔で言った。

「部下の無駄死には指揮官の恥じる所だ。砲撃戦の機会を奪われた時点で、砲兵たる我々の戦争は終わった――そういうことだ」

「……大変、残念です。我々は、いい仕事をしていたのですが」

「同感だ」

艇長に降伏を命じる副長の前。
張は引き出しの中から拳銃を取りだした。

●ドイツ軍最前線

第４４メサイア機甲大隊“グリュックシュヴァイン”は、敵陣地前に展開した所で動きを止めていた。

大型狙撃砲とロケットランチャーを装備したノイシア達がその筒先を敵陣地へ向けるその前で、斬り込みを担当する部隊の騎士達が車座に集まってフォイルナー少佐の話に聞き入っていた。

「作戦は大きく変更された」

部下達を前に、フォイルナー少佐は司令部からの通達を伝える。

「日付変更と同時に、猿共の砲兵隊は撤退を開始。これにより日本軍による砲兵陣地攻撃は全く無用となった」

フォイルナー少佐は、自分に向けられる部下の視線を何故か煩わしい。と言わんばかりに無視して続けた。

「従って、我々は日本軍との連携を考えることなく、敵メサイア陣地を攻撃。これを制圧する」

「あの」

座って聞いていたミューエ中尉が挙手した。

「それじゃ、日本軍は何もしないのですか？」

「総司令部は、後方から勝手に攻めろと伝えてある。連中が斬り込

んだ後のおこぼれを、我々がいただく手はずだったが、連中こそが、我々のおこぼれに預かる立場になった。そんな所だ」
「悪い話じゃないですね」
若いミューエ中尉は楽しげに笑った。
「そっちの方が正しいと思います。いろいろと」
「人種民族差別は好むところではないが」
ジロリとフォイルナー少佐は中尉を一瞥した。
「今は構わん。白人の優位を自慢したいなら、相応の戦果をあげろ」
「了解です。ところで隊長」
「？」
「敵のメサイアに関する情報は？」
「狙撃部隊は赤兎改だと断定されている。タルバッハ少尉の分析によれば、狙撃特化した仕様だというから、接近戦には向いていないだろう。ただし、彼女の判断が正しければ、狙撃能力は決して侮れないレベルに高められている」
「猿の製品で作られているのに？」
「その猿相手に、新大陸軍ですら苦戦している現状をどう説明つけるつもりだ？ヘルツ少尉」
「……っ」
「敵を侮るな」
「……はい」
“青の姫”が危険だと判断した以上、舐めてかかるな。なお、赤兎が使用する狙撃砲はセミオートタイプの１３０ミリ狙撃砲。有効範囲は５キロ。狙撃用ピットから地雷原の縁を全てカバーしている」
「……」
「作戦は予定通りに実施する。各部隊は所定の手段でルートを開け。突撃と同時に狙撃隊が敵狙撃部隊に対して制圧射撃を開始する。制圧射撃の時間は１２０秒。敵からの反撃の可能性は十分にある。十分に注意しろ」
「了解。ところで」

最年少のヴェルデ少尉が怪訝そうな顔で訊ねた。
「少佐？その顔のケガはどうなさったのですか？」
騎士達の興味の対象となっているのが、自分の顔に走る手形やひっかき傷だと、彼自身も自覚はしている。
自覚すればするほど、彼の中の男としてのプライドに触れる。
「……事情はいろいろあるんだ」
「イリスに手を出そうとして、クラッチマー中尉に殺されかかったって、噂があるんですけど」
「……」
チラリと見たブリュンヒルデは何故かそっぽを向いたままだ。
そのそっけない態度が、むしろ騎士達の疑惑の火に油を注ぐ。
「少佐」
騎士達がゆらりと立ち上がった。
「その辺、どうなんですか？」
歴戦の騎士達の背後に浮かぶのは、間違いなく殺気だ。
“青の姫”と呼ばれる知識と、その清廉な美貌から圧倒的な人気を誇り、軍広報を経て国民の間でもひっぱりだこに人気を誇るというイリス・タルバッハ少尉。
最前線送りが公になった途端、抗議の電話やメールが殺到し、軍の国内回線がパンクしたと言う噂は、フォイルナー少佐も聞いたことはあったが、その裏付けを目の当たりにした気分だった。
そんな彼に、騎士達は容赦がない。
「返答如何では、俺達にも覚悟というものが」
「――あるわけないだろう」
「……では？」
「今は作戦のことだけ考えろ。作戦開始は１０分後。各員の奮闘に期待する。以上だ」
「起立――敬礼」

「日本軍から大隊長宛に通信が入っていました」
下手すれば撃たれるな。
そんなことを考えながら、デュミナスのコクピットに入ったフォイルナー少佐に、イリスが告げた。
「内容は」
「攻撃のタイミングを聞かれました。少佐が留守だと伝えた所、敵陣地を強襲できる位置にいるので、そちらが戦闘行動に入り次第、適宜攻撃を開始すると伝えて欲しいと言われました」
「……なんだそれは」
戦闘準備をしながら、少佐は眉をひそめた。
「そんないい加減なことをしているのか？日本軍は」
「……はぁ」
「イリス、通信回線を全部隊宛に開け」
「は、はいっ！」
イリス。
少佐に初めてファーストネームで呼ばれたイリスは、頭に完全に血が上ってしまった。
心臓が破裂しそうなほどドキドキしている。
声が裏返ってしまう。
たくさんの女性騎士やMC（メサイア・コントローラー）がいる中で、彼がファーストネームで呼ぶのはブリュンヒルデ・クラッチマー中尉だけだというのが、彼を知る者の常識だというのに、今、自分も名前で呼んでもらえた！

ただし――
舞い上がるイリスにまったく気付くこともなく、フォイルナー少佐は部隊に命令を出すことだけに専念している。

潤んだ瞳でイリスが自分を見つめていることも、二人の会話を聞いたブリュンヒルデが殺意に近い視線を送っていることも、彼は全

く気付いていない。

●中華帝国軍陣地

「ドイツ軍、戦闘展開完了の模様、距離５１００！」

「敵は横数列に展開、数３０以上。大隊規模と推測されます」

各コクピットではＭＣ（メサイア・コントローラー）達の状況分析が進む。

ドイツ軍メサイア隊の来襲。

もうすぐ夜明けだというのに、彼等の前に現れたのは、麗しき朝日ではなく悪夢の方がまだマシという、最悪の敵の方だった。

「飛鼠（ひそ）隊が前に出る。それでいいんだな？」

「その通り」

飛鼠（ひそ）を管理しているという王中佐は、彼に頷いた。

「敵が攻め込んできたら、俺達は一目散に逃げる。いくら赤兎改でも、狙撃砲だけではどうしようもない」

「……敗北主義的だな」

「現実主義的と言って欲しい。貴隊に余計な手間をかけさせるわけにもいかない」

「まぁ、いいだろう」

痩せている割に自分の上官より質（たち）が悪いと態度で示している王中佐は鷹揚過ぎる態度で頷いた。

「こちらの戦いぶりをしっかりと目に焼き付けてくれ」

「――――そうさせてもらおう」

彼はそう答えた。

彼にとって戦果なんてどうでもいいことだ。

部下をここで失うわけにはいかない。

そのためには、ここは耐える所だと、彼はわかっているだけだ。

「我々は第二防衛ラインにて支援砲撃体勢に移動する。了解されたし」
「せいぜい、識別信号を発振し忘れないことだ」
「そうさていただこう。通信を終える」
くそっ。
彼が毒づいたのと同時に、
「少佐っ！」
長中尉が隊内通話で食ってかかってきた。
「少佐には、戦う姿勢がまるでみられませんっ！あの部隊から武器の貸与を受けるなりするのが、筋道というものではないのですか！？」
「バカ抜かせ。俺は交戦する意志はない――――部隊全騎、後方第二防衛ラインにて支援砲撃体勢に移る。移動各騎、個別に移動開始」
「少佐っ！」
「何度も言わせるな」
その苛立った声に、長中尉は思わず黙ってしまった。
「自分達の立ち位置を見間違えるな。俺達が立っているのは狙撃部隊だ。前衛で白刃を振るう立場じゃない。王中佐も、それがわかっているから俺達の後方移動を認めてくれたんだ」
「……」
通信モニター上の長中尉の顔は明らかに不服従を示している。
「狙撃砲逆手に持ってメサイアをぶっ潰すのがおてんば中尉殿の戦いだというなら、一人でやってくれ」
「いろいろひっかかる言い分ですが」
「命令不服従するヤツ、俺の部隊にはいらん。すぐにメサイアから降りてどこへでも行け」
「……命令には従います」
「よろしい。」
彼は自らの騎を移動させながら、ＭＣ（メサイア・コントローラー）に命じた。
「後方のベルゲ部隊と通信を開いてくれ」

「――時間だ」
ドイツ軍の中華帝国軍砲兵陣地への攻撃は、少佐の指示通りの時刻に正確に開始された。
「手榴弾用意っ！」
大型の柄付き手榴弾を持つノイシア達が一列に並ぶ中、指揮官騎が号令を下す。
突撃第一隊のグレーテル大尉の罵声が騎士達の耳を叩く。
「いいか、ドンピシャの所に投げつけろ！？下手に近場に落とすととんでもないことになるぞ！？――構えっ！」
メサイアが手榴弾の投擲姿勢に入る。
騎士達のコントールではなく、ＭＣ（メサイア・コントローラー）達の操作なんだから、騎士である俺達を脅すなよ。というのが、騎士達の本音だ。
無論、グレーテル大尉が求めているのは、そんな言い分ではない。
手榴弾のもたらす好ましい結果だけだ。
「――放てっ！」

ブンッ！

メサイア達の強力な腕力がものを言う。
トン単位の重量がある大型手榴弾が放物線を描いて飛んでいった先は数キロ先。
そして――

「きゃっ！？」
スクリーンに突然発生した爆発に、エレナは思わず小さな悲鳴を上げてしまった。
「な、何っ！？」
強い閃光と共に強い衝撃波が大地を走る様子がはっきりと見えた。
爆発の跡は、黒いキノコ雲が幾本も立ち上っている。
「な、何が起きたの！？」

「燃料気化爆弾」
ヘルガがなんでもないという声で答えた。

「あれが！？」

「そう。地雷がかなり誘爆したわね。近場はロケット攻撃で吹き飛ばすから」
ヘルガは、コントロールパネルを叩きながらエレナに告げた。
「斬込隊が突入する――狙撃隊は火力支援。ターゲット選定は終了済み」

「つーかさ」
エレナは口を尖らせて抗議した。
「火力支援なら、私達騎士の仕事ないじゃない」

「代わりにやりたければ、コントール渡すわよ？」

「――面倒くさいからいい」と、エレナはそっぽを向いた。
「何よ。道作りだなんて……私、いつから土方に転職したのよ」

「ぐちゃぐちゃ言わない。みっともないわよ」

ピーッ！

騎体に走る電子音は、指揮官騎からの射撃開始命令だ。
敵の狙撃を回避するため、電波妨害が施された挙げ句、擬装網まで被ったノイシア達のMC（メサイア・コントローラー）達は、一斉に愛騎めがけて射撃を命じた。
腰部にマウントされていたロケットランチャーから一斉に炎が噴き出し、斬込隊の前方に着弾。
海軍の爆雷――“ヘッジホッグ”を改良した地雷破壊専用の特殊弾頭が、地雷を道連れに連続した爆発を見せる。

「爆発でルートが開いた！」

「野郎共！地雷になんてひっかかるなよ！？――全騎、抜刀！」
グレーテル大尉騎が戦斧をラックから引き抜き、高々と、部下に見せつけるかのように頭上に掲げた。
それを合図に、ノイシア達が戦斧を抜刀、ドイツ騎士の牙を剥いた。
狙撃部隊から連続した火線が敵陣地めがけて叩き込まれる。
曳光弾の光が綺麗な放物線を描いている光景は、思わず見とれてしまうほど美しい。
「――おっと」
敵陣地に立ち上る土煙。
鼓膜をつんざく爆音。
破壊の芸術を前に、グレーテル大尉はちょっとだけ時間を忘れた。
すでにフォイルナー少佐率いる本隊は突撃を開始している。
「いかん！」
グレーテル大尉は怒鳴った。
「大隊長殿に続けっ！全騎――突撃ぃぃぃぃっっっ！！」

唐強国少佐率いる赤兎改部隊が砲兵達の待避壕を拡張した第二防衛ラインに後退。代わりに飛鼠（ひそ）部隊のかなりが塹壕に潜んだ。
狙撃部隊は地雷原を突破する敵ドイツ軍メサイアに対する有効な攻撃手段とはなり得ない。
下手すれば軍法会議ものの動きだ。
彼と王少佐がわざとそんな方法をとった裏にあるものを、ほとんどの者が知らない。
知らなくていい。
二人は思っている。
いざという時は逃げ出すことだけ考えればいいのだ。

塹壕で狙撃砲を構える彼の後方では、司令部が何のために残留を命じたのか、ベルゲ騎が必死になって開けた塹壕に籠もって小さくなっている。
列車砲に砲弾を込める専用騎。
メサイアがまるでわかっていない総司令部によって、戦力扱いされた気の毒な連中だ。
「給弾隊」
彼はそんなベルゲ達に呼びかけた。
「聞こえているな？」

「……はい」
震える声が返ってきたのは、少しの間の後だった。
かなりあどけない少女の声だった。
通信モニターに映る顔は、どう見ても１５、６歳がいいところだ。
煤に汚れた顔に、戦闘服らしい装備もつけていない。
作業用のつなぎでメサイアに乗っている。

はっきり、まともじゃない。
「朝鮮人の割には返事はしっかりしているな」
彼は態と砕けた声で言った。
「名前はソミンだったか？
「はい。ムン・ソミン大韓帝国軍軍属です」
ソミンと呼ばれた女性騎士が小さく頷いた。
「ベルゲに乗せられた挙げ句が、こんな所に置き去りとはな」
「……」
「何をやった？」
「……えっ？」
「軍属でメサイア乗りだ……囚人兵、懲罰隊だろ、お前」
「……」
「……まぁいいさ」
「お前みたいなガキがそんな所にいるってなりゃ、気にするなって方が無理だ。そう思っただけだ」
「……」
「忘れてくれ」
「……父が」
ソミンはポツリと言った。
「王政党の幹部の息子に、姉を嫁がせろと命じられて、それに反対して……」
「……」
「政治犯扱いされたんです。邪魔者が消えたって、息子に迫られた姉は、それを苦に自殺しました。私と兄は、父の代からの政治犯だって……ここへ」
「お兄さんは？」
「戦死しました。斬込隊に配属されて、地雷を踏んで」
「……」
「武器なんて握ったことのない人だったのに……」
ソミンの喉からおえつが漏れ始めた。

「MC（メサイア・コントローラー）のユンも、他の人達もみんな似たようなものです」
「その騎体にブースターはついているな」
「ブースター？」
「いくらなんでも」
「……いえ」
ソミンは意外なことを言った。
「ついていません」
「いくら何でも！」
彼は驚いて怒鳴った。
「何を考えてるんだ！グレイファントムがベースだろうが！」
「……」
「……まさか」
「……脱走防止のため、ブースターやホバー機能は全て取り外されています」
「おいっ！」
何てこった！
彼が頭を抱えたのも無理はない。
ソミン達のベルゲ騎は高速移動が出来ない。つまり、撤退となれば、自分達は歩行だけで移動するメサイアを護衛するしかない。
ドイツ軍の追撃を逃れる術はない。
だけど……
「……おい」
彼はふと脳裏をよぎった妙案を口にした。
「お前ら、今がチャンスじゃないのか？」
「ち……チャンス？」
モニターの向こうでソミンが愛らしい仕草で首を傾げた。
こういう所は、長中尉に見習わせてやりたいな。と、彼は本気で考えた。
「コクピットから出て、脱走しろ」
「……」

「米帝軍にでも投降すれば、悪いようにはされないはずだ」
「……」
悲しげにうつむいているソミン。
それを、彼は躊躇していると本気で思いこんだ。
「な？連中には……そう！ジュネーブ条約ってのがあってだな！」
くそったれ！
彼は自分の脳みそに鞭を振り下ろしたい気分で一杯になった。
若い時に居眠りなんてしてたから、こんな若い女の子一人説得できないバカになっちまったんだ！
「よくは知らないが、とにかく、捕虜を殺すことが出来ない仕組みが」
捕虜になって、事情を知った米帝軍は、きっと彼女達を殺すようなマネはしない。
それは、彼女たちにとって悪い話じゃないはずだ。
だが、
フルフル。
何故か、ソミンは首を横に振って、そして言った。
「ハッチが……開かないんです。内部から開くことが出来なくて」
「俺が開けてやる！」
「それで、無理矢理こじ開けようとすると、コクピット全部、爆発する仕組みになってるんです。前任者は、それで爆死したって聞かされています」
「……何てこった」
彼は思わず額に手を当てた。
「死ねと命じているのと変わらないぞ。いくら懲罰部隊とはいえ……それで軍隊か！？お前ら朝鮮人は、それでも人間か！？」
「……お気遣いは、感謝します」
ソミンは、うなだれていた顔をあげ、精一杯、無理矢理に笑って見せた。
笑った頬を、涙が一筋、零れた。

「でも！私達が捕虜になったことが知られれば、国の家族がみんな困るんです！国の裏切り者になれば――私にだって、弟がいるんです！みんな、家族に迷惑をかけたくないから、ここにいるんです！」

「……っ！」

「ドイツ軍が接近していることはわかっています。私達が逃げられないことも……でも」

ソミンはつらさに耐える者のみが浮かべることの出来る、言い様のない笑みを浮かべながら、震える手で何かを下の方から取りだした。

「私達には――これがありますから」

ソミンが取りだしたもの。

それは――手榴弾だった。

「安全ピンを……抜くこと位、私にだって出来ますから」

「ばっ！」

「ご迷惑は――おかけしません」

「大莫迦野郎っ！」

自分でも驚いた程の罵声が彼の喉から飛び出した。

「俺は軍隊でいろいろやってきたが、部下に最初から死ねとは命じた覚えはないっ！そもそも！」

彼は厳しい目で、ソミンを睨み付けた。

「お前もお前だ！おいっ！」

ソミンは恐くて彼と視線すら合わせることが出来ない。

「――お前、死にたいのか！？それとも生きたいのか！」

「……えっ？」

「死にたいなら、この狙撃砲で楽にしてやる！

世界も知らず、男も知らず、美味いものだって食べたことないだろう！？

どうなんだよ？！

お前、この美しい世界を見たくないのか！？

燃えるような恋してみたいと思わないのか！？
美味いもんシコタマ食べたいと思わないのか！？
弟に会いたいだろう！？違うのか！？」
「……」
「……まだ若いんだ。そんな意固地になるな。自分の身に起きた悲劇に酔いしれるなんて、莫迦なことだといい加減に気づけ。生きようと思うんだ」
「……」
両手で顔を覆い、泣きじゃくるソミンを後目に、彼はMC（メサイア・コントローラー）に命じた。
「兵器の規格はほとんど一緒のはずだ。外部アクセスを探せ。万一の射撃は、俺がやる。武装系のコントロールは俺に回せ」
「了解。やってみせます」
「全騎、聞いての通りだ。俺と……ハッキングが得意なヤツは名乗り出ろ。人命救助だぞ」
「……情報軍から回されてきました。電子戦闘には自信があります」
そう、告げたのは長中尉騎のMC（メサイア・コントローラー）だ。
他に、数名が同様の名乗りを上げた。
数は4。ベルゲ騎全てに当たれる数だ。
部隊戦力はその間激減するが、それでも飛鼠（ひそ）達が頑張っている限りは大丈夫だ。
「4騎、ベルゲの塹壕へ移るぞ。呉、その間、部隊の指揮を任せる」
「了解……成功を」
「当然だ。問題は……」
彼は、ちらりと地雷原を向いた。
「飛鼠（ひそ）共がどれ程、ドイツ軍をくい止めてくれるか……だな」

精密機器の塊でもあるメサイアには、予想さえ出来ない不具合に備え、外部から騎体の中枢情報へ介入する“アクセスコントロール

”と呼ばれる機能が標準でついている。
外部の機器をメサイアと接続し、内部のトラブルを判断、外部コントロールによってトラブルを解決するための機能だ。

「ありました――グレイファントムと同じだ」
MC（メサイア・コントローラー）の楊少尉が、グレイファントムの左脇腹にそのアクセス用のパネルを見つけ、安堵の声を挙げた。
「ケーブル、伸ばします」
赤兎改からアクセス用のケーブルが伸ばされ、パネルに接続される。
「外部アクセス……よし。こりゃ酷い」
楊は思わず唖然とした声を挙げた。
「訓練校で習ったグレードと一緒だ……勘弁してくれよ。あれは10年以上前だぞ」
「出来るか？」
「訓練生でも――よし。コクピットハッチ開放……パスワード解析……くそっ、時間がかかる」
「急げ」
「……了解」

ズズンッ！

爆発の炎が立ち上り、その遙か彼方から、ドイツ軍のメサイア達が一斉に突撃してきたのは、まさにそのタイミングだった。
「クソバカ共がっ！」
警報が鳴り響く赤兎改のコクピットで彼、唐強国少佐は思わず叫んだ。
北米大陸侵攻作戦から常に最前線で部隊と共に戦ってきた彼が、メサイア乗りとしてより、酒と女相手の武勇伝の方が少しばかり名高いのは、30の坂を少し登ったばかりの若い彼にとってはやむを

得えないだろうと弁護しておく。
「死にたければ、手前で首でもくくりやがれっ！」
その彼がドイツ軍突撃をその目で見た時に言い放った言葉がこれだ。
思わず握っていたコントロールユニットを殴ってしまう。
拳に走った鈍い痛みに顔をしかめ、そして本音を怒鳴った。

「こっちは戦う気なんてないのに！」

そう。
これが本音。
彼等に科せられた任務は――――砲兵部隊撤退完了までの時間稼ぎ。
それだけだ。
とっくの昔に逃げ出した部隊の人柱に部下もろともになるほど、彼は物好きではなかった。

陣地に籠もっての防衛線なんて意味はない。
砲兵部隊と共に後退するのが常道のはずだ。
それが、彼の考えだ。

しかも、目の前には死にかけた女の子達。
間に合うか？
この子達を放り出して、今すぐにでも敵に向き合いたい。
出来ることなら今すぐ放り出して、そして、逃げ出したい。

「……くそっ！」
彼は、強く頭を振ると、そんな考えを追い出した。
「少佐」
横で別なベルゲ騎のハッキングにかかっている長中尉から通信が入った。

「戦況は――――」
「ああ」
チラリと戦況モニターに視線を送る。
メサイア達が、光の点となって入り乱れている。
「飛鼠（ひそ）ってのは――――すごいものだな」

グレーテル大尉達が中華帝国軍の砲兵陣地跡にたどり着いた時、すでにフォイルナー少佐率いる部隊は交戦状態に突入していた。
「バカやっちまった！」
フォイルナー少佐率いる部隊を包囲するように敵メサイアが展開。
グレーテル大尉達は、少佐達の部隊のほぼ真後ろに着地した。
「戦況は！？」
「最悪！」
MC（メサイア・コントローラー）のエリカ中尉が悲鳴に近い声で答えた。
「部隊、一方的に押されています！勝負になりませんっ！！」
「何っ！？」

真横を、色彩感覚が疑わしい色に塗装された奇妙なメサイアが駆け抜けた。
機動の俊敏さは、相手が並の騎士でないことを教えてくれる。
グシャッ！
何かが潰れるような音が、コクピットに響き渡った。
「ツァーノ騎、大破」
イリスが、フォイルナー少佐に、何が起きたかを教えてくれる。
「行動不能……騎士、MC（メサイア・コントローラー）共に生体反応ロスト」
「チッ」
フォイルナー騎の持つハルバードが、大鎌を構えながら襲ってくる敵騎めがけて翻った。

「何っ！？」
彼が熟練の判断と、必殺の技術で繰り出した一撃を、敵騎はまるで予想していたかのように、全く無駄のない、敏捷な動作であっさりと回避してのけた。
大質量同士がすれ違う震動がコクピットを揺るがせる。
あまりのことに目を見張る彼の目の前を、メサイアが通過しようとしている。

バンッ！

その腹部で光が生じた。
何か判断するより先に、すれ違いきった途端、腹部に大穴を開けられたメサイアが、騎体を四散する大爆発を引き起こした。

「……？」
一瞬、歴戦の猛者であるフォイルナー少佐にも、何が起こったかわからなかった。
ステイタスモニターに映った武器使用ログ。
それが決め手となった。
「イリス？」

「この子のパワーなら」
イリスは答えた。
「戦闘起動中のＭＬ（マジックレーザー）の使用に問題は」

「……いや」
彼は答えた。
「感謝する」

「はい。ミューゼル騎戦闘不能。アイスラー騎大破」

「戦力の何割を喪失した」

「既に三割――――クラッチマー中尉騎より通信」

「回せ」

「ヴォルフ！」

せっぱ詰まったブリュンヒルデの声がコクピットに響く。

何だか、それだけで迫力というか、本能的な恐怖を感じた。

「こ、これは何！？あんな敵がいるなんて！」

「知っているなら教えてくれ」

彼等の後方では、飛鼠（ひそ）と対峙したノイシアが一騎、大鎌を首にまともに受け、その首が宙を舞っていた。

首を吹き飛ばされ、崩れ落ちる胴めがけて、別な飛鼠（ひそ）達の大鎌が容赦なく振り下ろされる。

１騎に対して数騎が完璧に連携して襲ってくる。

普通の騎士なら不可能なレベルの超絶機動は、一度の攻撃を回避するだけで精一杯だ。一度の攻撃をかろうじて回避した所を、別な騎の一撃が襲ってくる。それさえ回避する僥倖に巡り会えた者も、次の攻撃まで回避出来る保証までは手にすることが出来ない。

飛鼠（ひそ）達は、確実にフォイルナー少佐率いる歴戦の部隊を食らいつくそうとしていた。

戦況モニターに表示される戦況を、信じられない気持ちで眺めていたのは、何もエレナだけではない。

友軍と敵をそれぞれ表示する色が違っていると、本気で自分に言

い聞かせようとしたのは、何もエレナだけではない。
それでも友軍反応は次々と消えていく。
「……フッシャー騎の反応喪失」
ヘルガの、どこか感情を失ったような声がレシーバーに入る。
「バルバラも、生命反応消えました」
「残存……１０騎！？」
エレナはようやく、戦況モニター上の事態が現実だと受け入れる事が出来た時には、突撃した友軍の反応はほとんど残っていなかった。
少佐達が突撃した時の友軍の数は２７。
中華帝国軍メサイアは３０。
２７対３０のほとんど僅差での戦闘。
数の上では差は無かった。
それで戦闘が始まったのだ。
それが――――
エレナは、戦闘開始からの経過時間を見た。
経過時間は――――２５５秒。
５キロを戦闘速度で突撃した時点で１７０秒ちょっとだったのを覚えている。
つまり、敵陣地に乗り込んでから、まだ1分ちょっとしか経過していない。
そんな短時間のうちに、ドイツ軍の誇る精鋭部隊は音を立てて壊

滅しようとしていた。
それが、信じられない。

「エルフ小隊！」
呆然とするヘルガの耳をエレナの毅然とした声が打ったのは、その時だ。
「前進する！地雷原途中の爆撃孔に狙撃陣地を構築！そこから敵を狙う！機動、急げっ！」

「移動命令は来てないわ！？」

「少佐の命令を待って」
騎体に震動を感じつつ、ヘルガは怒鳴った。
「仲間が死んでいくのを黙ってみてるつもり！？」

「――っ！」

「責任は小隊長の私がとる！」
ブースターが火を噴き、エレナの駆るノイシアが空中を跳躍した。
「私達、貴族はね！」
朝焼けに照らされる世界が、えもいわれぬ美しい光景となってヘルガの目に焼き付いた。
「こんな時に！」
エレナは狙撃砲を構えながら叫ぶ。
「――誰かを見殺しにしていいなんて教わってないっ！」

エレナの騎は、跳躍しつつも狙撃砲を構えたままだった。
こんなところで狙撃砲を撃っても当たるはずもない。
第一、照準がつけられない。

「――そこぉっ！」
エレナのかけ声と共に、
ドンッ！
その叫びを具現化したかのように、落下機動に入ったノイシアの構える狙撃砲から砲弾が放たれた。
ドンッ！
ドンッ！
「ちょっと！？」
突然の発砲に驚くヘルガの声がまるで届いていないようだ。
「なによコイツっ！セミオートのくせにっ！なんて連射速度が遅いのよっ！」
一発ずつ薬莢が排出され、砲弾が敵めがけて吸い込まれていく。
エレナは規定通りのターゲットロック、つまり、メサイアの火器管制装置によるターゲットの選定から射撃にいたる手順を一切行っていない。
命中なんて、普通に考えたら期待するだけどうかしている程度の射撃。
敵に対する牽制でしかないとヘルガは勝手に思った。
高度が落ち続けているのに、エレナは射撃をやめようとしない。
発砲回数は、残弾からするに６発。
命中は――

「う、うそっ！？」

ヘルガが目を見開いたのも無理はない。
戦況モニター上の敵の反応が、一騎に６つ、減っていた。
自分の騎が放った砲弾の数は６。
冗談のような話だが――撃破したのは自分の騎、いや、エレナだと判断するのに十分だった。

「ば、ばか――――ぐっ！？」
着地の鈍い衝撃がＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）を貫き、ヘルガは危うく舌を噛みきる所だった。
脊椎を通して、脳みそが痺れた程のショックに、一瞬だが意識が遠のく。
その間にも、ノイシアには続々と戦況が伝わってくる。
「……整備の言葉なんて……金輪際、信じないからね」
痛みに顔をしかめながら、ヘルガはエレナに報告した。
「６騎撃破確実――――やるじゃない」
「つーか！」
周囲には、小隊のノイシア達が手榴弾の爆発で開いた孔に飛び込んでいく。
その中で一番大きな孔に飛び込んだエレナは、狙撃砲のマガジンを交換しながら怒鳴った。
「狙撃で十分相手になるなんて！あいつら本当にメサイアなの！？」

ギィィンッ！

デュミナスのハルバードが飛鼠（ひそ）を捉え、その胴体を真っ二つにしてのけた。

「動きが読めるようになれば――――」
横では、ブリュンヒルデ騎がハルバードを一閃。飛鼠（ひそ）の頭部を切断していた。
「恐れるには足らないが」
飛鼠（ひそ）相手に五分の戦いを繰り広げられるようになっているのは、果たして自分の技量なのか、それとも騎体の性能なのか判断が出来ない。
少なくとも、部下が五分で渡り合える相手ではないことは確かだ。

フォイルナー少佐は、そんな状況下で部下に戦えなどとは命じない。
部隊が敵と五分以上で渡り合えないことは、つまる所、そんな状況を作り出せない指揮官や上層部、そして国家の責任だ。
自らの失態のツケを、部下に命で支払わせるような愚作を、彼はとるつもりは毛頭無い。
「……部隊全騎、後退！」
後退命令。
つまり、部隊と、そして自らの敗北を素直に認めることになる。
栄光のドイツ帝国軍指揮官として出すことが許されない命令。
フォイルナー少佐は、その命令を躊躇うこともなく出した。
彼にとって、大切なのは面子ではない。
生き残ること。
勝者とは、生き残った者のことだ。
「後退し、一度戦力を立て直す！イリス、狙撃部隊は？」
「前進。距離２０００にて砲撃戦準備中。なお、先程の突撃時、シュヴァルツ騎が撃破６」
「……上々だ。ブリュンヒルデ。デュミナスで部隊の後退を支援する。希望するなら君も逃げていい」
「……ご冗談がお好きで」
ブリュンヒルデは苦笑いしながらフォイルナー少佐騎の横に移動した。
「こんな状況、いままで何回あったかしら？」
「――――そういうことか」

「そういうことです」

兵士達を満載した兵員輸送艇が遠ざかっていく。
列車砲の構造を全く知らない宗像に出来たことは、愛騎のセンサーを使って、捕獲した列車砲に爆発物が仕掛けられていないか調査するよう、部隊に命じる程度だった。
中華帝国軍の砲兵司令部は、司令官が自決。
自らの命と引き替えに、部下全員の助命を願ったと、宗像は聞かされた。
表面的な哀悼の意は捧げたが、宗像はその死に、特段の感慨を抱かなかった。
美奈代なら泣き出しているだろうな。
そんなことを考えるのが精一杯だ。
捕虜になることを拒み、部隊を失った責任を死んでとる。
それは指揮官として当然のことだ。
当然の帰結にすぎない司令官の死より、敵とかわした約束がどれ程信じられるか。
そっちの方が余程心配だった。

曰く、放棄する装備に爆発物の類は一切しかけない。
曰く、砲兵部隊は丸腰だ。

……どこまで信じていいのかがわからない。
胃が痛くて吐き出しそうだ。
もし、どこかで裏切られたら。
部隊に損害が出たら？

撤退まで狙撃部隊が狙いを定めていること。
こちらの電波妨害によって遠隔装置の起爆は実質無理だということ。
さらに保険として、兵員輸送艇通信アンテナは破壊させてもらったが、それさえ安心できる材料になっていない。

くそっ。
こんなのがイヤだから、指揮官なんてやりたくないんだ。

胃の辺りを抑えながら、宗像は苦々しく横に立つ月城騎を睨み付けた。

――あんたは大尉。私は中尉。軍歴にしたらあんたは私の何倍だ？
――あんたが指揮するべきだ。私は責任なんて取りたくない！

呼吸と一緒に、そんな毒があふれ出すような錯覚を、宗像は確かに覚えた。

「お姉さま」
MC（メサイア・コントローラー）から桜庭優の声がした。
「上空、距離８５００。高度１５００を移動する物体５。速度は時速５０キロ」

「５０？遅いな。航空機？ヘリか？」

「いえ……」
分析の名手である優にしては返答を躊躇している。
それが、宗像には気になった。

「どうした？」

「……すみません。お姉さま――――宗像騎桜庭より部隊全ＭＣ（メサイア・コントローラー）へ。分析の協力依頼を宣言します。これよりターゲットを“ホテル１”から“ホテル５”と呼称。この飛行物体についての意見を」

「？」

宗像は、モニターに映し出されたマジックレーダー反応にちらりと視線を向けた。

「……なんだ？」

得体の知れない。

それは、この物体のためにあるようなものだと、宗像はそう思った。

胴体から両脇に張り出した翼らしき物体は、空力というものをどう考えているのか、設計者を問いつめたくなる代物。

さらに、そこから前後に細い管状の物体が伸びている。

「レーダーノイズの誤検知にしては……ヘンですよね」

「何？これ」

「見たことないですよ？こんなの」

ＭＣ（メサイア・コントローラー）達が、次々に首を傾げる。

「ライブラリーに該当無し。こんなの、兵器、民間機、共に見たことありませんよ」

彼女たちの知識の中でも、該当するものがない。

それが、ＭＣ（メサイア・コントローラー）達を混乱させているのは確かだ。

攻撃すべきか否かさえ、相手がなんなのかわからなければ判断出来ない。

宗像達は、去っていく敵部隊を含め、周辺警戒に神経を使うしか、やることはない。

「ツヴォルフ騎より隊長騎ＭＣ（メサイア・コントローラー）へ」

しびれを切らせたようにフィアが通信に割り込んできたのは、その時だ。
「何してるのよ？」
「通過する不明機について、判断を議論していました」
「ドンパチの真っ最中に優雅なことで……で？」
フィアは訊ねた。
「どれ？殲龍（せんりゅう）にはデータは来ていないけど」
「こちら桜庭。中佐、転送しますので確認下さい」
「ありがと……どれどれ？」
フィアが転送されてきた不明機の映像を見た途端――
「バカぁっ！」
信じられないほどの大声で怒鳴った。
「何考えてるのよ！どうしてこいつらがここにいるのよ！？」
「ふ、フィア？」
驚いたのは宗像だけではない。
フィアは混乱しているだけじゃない。
明らかに、おびえていた。
「あいつらをどこかで見たことがあるのか？」
「知らないっ！」
フィアは叫ぶ。
「知らない知らないっ！知らないけど、“あいつら”は危険なのよっ！全騎っ！森の中へ隠れてっ！攻撃しないで！絶対にやり過ごして！」

その声の元、殲龍（せんりゅう）が近くの森の中へと移動を開始する。
「おいっ！フィアっ！？」
宗像が慌てて止めに入る。
「――――よく見て！」
伸ばされた“白雷改”の手をかわし、フィアはメサイアとほとんど変わらないほど高い木々の中へと殲龍（せんりゅう）を潜り込ませる。
「わかんない！？あの外見だけで、相手がなんなのか！」
「……えっ？」
「大型妖魔よ！しかも飛行型、龍種なんて、こんなメサイアで相手になるもんですか！」
「龍……？」
一瞬、ポカンとした宗像だったが、大型妖魔という言葉だけには正確に反応した。
「全騎っ！森の中へ隠れろ！識別灯を消せっ！狙撃隊は手近な所へ！」
「宗像中尉っ！」
涼が血相を変えて通信に割り込んできた。
「お姉さま達は！？あいつらの針路には、お姉さま達が向かった砲兵陣地が！」
「――――っ！」

北米戦線編　第二十話（後書き）

……ごめんなさい。今回、力つきました。
夏ばてでしょうか？
めまいがします。

北米戦線編　第二十一話

ドイツ軍が飛鼠（ひそ）相手に苦戦している。
その救援に日本として駆けつけるべきはず。
だが、肝心の美奈代達だが――
「……どうします？」
「と言われても」
美奈代は思わず頬を指で掻いた。
“死天使”とＤ－ＳＥＥＤは、共に付近の森の中へ降下。
戦局の推移を見守っていた。

端から見ていると、射程有効範囲に飛鼠（ひそ）達を引きずり出すことに成功したノイシア達が後退を開始。
それまでに前進してきた狙撃部隊による攻撃で、飛鼠（ひそ）を確実に仕留める方法へと、戦法を変化させたように見える。
つまり、前衛は囮だ。

好意的に判断すれば、戦局はそう見えなくもない。

無論――

そんな判断をする中に、美奈代はいなかった。

「ドイツ軍って……何考えてるんでしょうね」

美奈代も呆れるのも無理はない。

そもそもが問題なのだ。

「何考えて……こんな所に突撃するんです？」
「好きなんでしょう？」牧野中尉は素っ気なく答えた。
「風車めがけてランス突撃するみたいなの」
「あれはスペイン人じゃなかったですか？」
「オツムのレベルが一緒なんですよ。見敵必殺！我が剣に刃向かう者は容赦しないぞ！みたいなのが」
「……はぁ」
美奈代は戦況モニターを眺めながら呆れるしかない。

地雷原の陣地に籠もるメサイア部隊。

そんなものに何の意味がある？

そんな所に立て篭もって、いざ打って出るなら、敵を阻止するための地雷原が今度は邪魔になるのは明白だ。

せいぜい、砲兵部隊で袋だたきにでもしてやればいい。
高々度からナパームでもばらまけば効果的だろう。
一々、メサイアで攻め込むことに意味はない。

ドイツ軍の攻撃と、その損害は無駄の極みなのだ。

「……まぁ」
祷子から通信が入った。
「これで、あのタイプの飛鼠（ひそ）の攻撃方法がはっきりしたからいいんじゃないですか？」
「随分高い授業料だと思うけど……」
「授業料なんて」と、祷子は楽しげに笑った。
「元が取れるモノじゃないですよ。それとも、美奈代さんは今まで経験したこと全てに支払った授業料、元が取れてるんですか？」

「……多分、ない」
今まで生きてきた中、経験したことは多い。
学んだことは多い。
なら、そこで支払った授業料と、経験から受け取った実利。
天秤に乗せたら随分と傾ぐだろう。
美奈代はそう思って悲しげに首を横に振った。
「風間は？」
そう、意地悪く聞いてみるのが精一杯だ。
「借金は踏み倒す主義です」
「時々、あんたが空恐ろしくなる」
「どうも。美奈代さんでさえそうなら、ドイツ軍の方々も、元はとれませんよ。世の中、そうやって出来ているんです」
「世の中がイヤになる話よね。真理だと思うけど」
美奈代さんでさえそうなら。って、どういう意味だろう。と、ふと、そんなことを考えても見た。
「……ドイツ軍の授業料はともかく、突撃のタイミング外したのはまずかったわね」
「……すみません」
何故か謝ったのは祷子だ。
「出物腫れ物といいまして……」
「食べ過ぎよ」
「ハンバーガー１０個は標準です」
「２リットルのコーラ一気飲みの方っていうか……最近、風間の食事量が普通に思える自分が恐いわ」
美奈代は、げんなりした顔で通信装置に語りかけた。
「津嶋中佐。どうします？」
「ちょっと待ってて！」
「へっ？」
「いい！？そこ動かないで！」

「8号騎、行動停止っ！」
「6号、自爆します！」
飛鼠（ひそ）の行動を監視任務にあたる電子戦闘用TAC（タクティカル・エア・カーゴ）の中。
ついさっきまで歓声にわき上がっていたその中は、今や悲鳴に近い報告ばかりが上がる。
「くそっ」
王少佐は苛立った顔で、近くにあったゴミ箱を蹴飛ばした。
「飛鼠（ひそ）の索敵レーダーの狭さを知っているのか！？」
「こんなものじゃろうて」
面白くもない。
そんな顔で、艇内の壁に据え付けられた戦況モニターを眺め続けるのは一人の老人。
汚れた白衣に薄汚れたスタンド・ラインは5本。“見通者（シーカー）”としても、かなりの才能の持ち主だ。
孔白伝技術大校。
帝剣の生みの親。
そして、魔族から入手した技術で飛鼠（ひそ）を開発した者の一人だ。
「飛鼠（ひそ）は“眼”に頼って行動するよう作られている。遠距離からの狙撃は論外じゃて」
「それにしても、いい加減じゃないですか」
王少佐は、むっとして抗議した。
「あれ一騎組み上げるだけでも、国民の血税というか」
「ああ作れ。そう命じたのは、ワシじゃない」孔大校は、“何を言っているんだ？”という顔で王を睨み付けた。
「国がああ作れと命じたのだ。狙撃砲で吹き飛ばされることまで、ワシの責任にするつもりか？」
「……いえ」
「希望があれば、警戒装置くらいはつけてやるが」

モニターの中で、また一騎、反応が消えた。
「……元来、“あいつ等”は頭が悪いからのぉ」
「はっ？」
「お主が気にする必要はない！」孔大校は叱責するような口調で怒鳴った。
「お主は戦況に責任だけ持てばいい！」
「責任を取らされる身ですから！」
ギョッ！となった王は慌てて反論した。
「勘弁してくれと、そう言っているのです！」
「使えんヤツじゃ。昔はもっと気骨のある奴らがゴマンといたものじゃが」
「……それで？」
「飛鼠（ひそ）は元来、白兵戦専用設計である以上、狙撃には弱い」
「それを何とか！」
「それがわかっとるなら、さっさと飛鼠（ひそ）を後退させんか！お主は何のためにここにおるんじゃ、大隊指揮官じゃろうがっ！」
「はっ！おいっ！第三防衛線に隠している予備部隊を出せっ！」
「あるならとっとと使え――このボケナスがっ！」

ザンッ！
エルプスハルバードが襲いかかってきた飛鼠（ひそ）を真っ二つに切り裂いた。
飛び込んできたスピードが、飛鼠（ひそ）の無惨な骸をデュミナスの後ろへと吹き飛ばす。
――慣れてきた。
フォイルナー少佐は、確実にそう感じていた。
最初こそ驚いた敵のスピードだが、熟練騎士の目で見て、それに慣れさえすれば、それほど恐るべきとは感じなくなる。

なにより、デュミナスが彼の求めるスピードで、狙ったとおりに攻撃を命中させてくれる。彼が、デュミナスに慣れてきた証拠のようなものだ。

「少佐ぁっ！」

後退に成功した部下から、せっぱ詰まったような通信が入る。

「部隊後退完了っ！少佐達もどうぞっ！」

部隊の後退が完了した。

今、自分の僚騎はブリュンヒルデ騎のみ。

対する飛鼠（ひそ）は残り５騎。

やってやれない数ではないが――

「ここまでだな」

フォイルナー少佐は後退を決断した。

やってやれない数ではない。

だが、部下の前で派手に目立つために攻撃を命じたわけではない。

この戦いはデュミナスの売り込みのためのものではない。

なにより、敵の後方には狙撃部隊がいる。

今まで、沈黙を続けている彼等の存在があまりに気になる。

戦場で戦果を求めるが余り、深追いする者は常に愚か者だと、彼は長い軍歴の中でイヤという位、叩き込まれていた。

こういう時は、引くのだ。

「後方に新たな反応」

イリスの声が耳を打った。

「飛鼠（ひそ）とおぼしき反応、数１２。距離１８００。接近中」

「ブリュンヒルデ」

「はい？」

足払いをかけて横転させた飛鼠（ひそ）の頭部にエルプスハルバードがめり込んだ所だった。

「後退する。後は狙撃部隊に任せるぞ」

「――了解」

「起爆します――南無三っ！」

MC（メサイア・コントローラー）の祈るような声に、

バンッ！

グレイファントムのハッチが吹き飛ぶ音が重なった。

唐少佐は、その瞬間を見ていなかった。

恐ろしくて、思わず目をつむったままだった。

「……起爆成功」ホウッ。という安堵の声が、MC（メサイア・コントローラー）から漏れた。

「……よかった」

「他は無事か？」

「全騎、解除に成功した模様」

「よし。後でキスしてやるぞ。長」

「……どさくさ紛れに何言ってるんですか！」

「半分冗談だ――ソミン」

「……はい」

涙混じりの声が通信装置越しに聞こえてくる。

「あ、ありがとうございます。私、無事です」

ただ、その涙は絶望のそれではない。

希望を持つ者が流す涙だ。

今、その顔を見たら最高の笑顔が見られるだろう。

そう思うだけで、唐は口元がゆるむのを抑えられない。

「……生きたいと思うか？」

「はいっ！」

「よし。いい娘だ。状況が安定するまで、まだハッチから出るな。ドイツ軍が近すぎる。危険だ」

「は……はい」

「頃合いを見て、ここから逃げろ――おい。予備のサバイバルキットはあったな？」

「はい。射出はいつでも」
「よし。飯はまずいが、数日我慢しろ。地図も入っているから、近くの米軍陣地に投降して保護を受けろ。共通語は喋れるな？英語は」
「英語は自信があります」
「最高だ――」
唐が、何か気の利いた冗談を言おうとした時だ。
「後方より接近するメサイア有りっ！数１２！」
「な、何だと！？米軍か！？」
「違いますっ！――――飛鼠（ひそ）です！」
「何てこった……！」

暗闇の中から突然現れた異形の巨人達。
飛鼠（ひそ）達だ。
ゆっくりとした足取りで塹壕の中から次々と現れては近づいてくる。
手には黄色く輝くハルバードが握られている。
塹壕に入り込んだ赤兎達に、今、彼等と交戦状態に陥ったら勝てる術はない。
「くそったれ。どこにいやがった……っていうか」
唐は、それが一番面白くない。
「王め。伏兵がいることを、俺に何も言ってないとは何事だ？」
ズンッ
先頭の一騎が赤兎達の前で立ち止まった。
「……」
頭部から放たれる赤いレーザーが、塹壕の縁に横たわるグレイファントムの騎体を舐めるように動き回る。
「……おい」
唐は、自分の体から一斉に血が引けたのがわかった。
レーザーの意味がわかるからだ。

「冗談……だろ？……ソミン」
「はい？」
「グレイファントムに識別信号発振装置は？」
「何の識別信号ですか？」
ブンッ！
飛鼠（ひそ）の手に持つハルバードが不意に振り上げられた。
他の飛鼠（ひそ）達が一斉に包囲行動に移る。
それはつまり――
「やめろっ！」
塹壕から飛び出した唐騎が、グレイファントムに覆い被さった。
「こいつは味方だ！俺達と同じだ！敵と味方もわからんのか！？このポンコツ野郎っ！」
ハルバードを振り上げたまま、飛鼠（ひそ）の動きが止まった。
唐は怒鳴った。
「長、他の連中も、グレイファントムを守れっ！奴らは敵と味方を、発振される信号でしか区別していないっ！」
「馬鹿野郎がっ！」
グレイファントムのハッチ開放を担当した赤兎達が、唐の命令に弾かれるように塹壕から飛び出すと、グレイファントムの上に覆い被さった。
すべては、無意味な死を避けるため。

彼等は軍人であり騎士。

無抵抗の者は、護るべき存在だ。

戦争の主役たる役割を担う誇り高き彼等は、己の義務に従い、動いた。

だが――

「4号騎！胡っ！識別信号が出ていないぞ！何をやって――」

グシャッ！

闇夜の中に、そんな音が響き渡った。

唐が、ハッとなって音がした方を向いた。

グレイファントムに覆い被さった姿勢の赤兎。

その背中に、ハルバードの黄色い刃が突き刺さっていた。

「――なっ」

「4号騎……」

呆然とする唐に、MC（メサイア・コントローラー）が虚ろな声で言った。

「識別信号が発振させていませんでした……恐らく、装置が故障していたものと」

「そんなこと……」

怒りに声を震わせる唐の前で、飛鼠（ひそ）が、赤兎の背中からハルバードを引き抜いた。

背中から深々と貫通したそれは、コクピットブロックを貫通していることはすぐにわかった。

MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）のハッチが吹き飛び、MC（メサイア・コントローラー）が脱出を試みるが――

グゥオオオオオオオッツツツ！！

飛鼠（ひそ）の腕から放たれた火線が、MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）付近に集中。

かつてメサイアの重要装備を満載していたそこを、炎の煉獄へと変えてのけた。

「知るか、テメェェェッッッ！！」

速射砲を掴んだ唐騎が、４号騎に再びハルバードを振り下ろそうとした飛鼠に照準もロクに付けずに発砲した。

唐騎だけではない。

その光景を目の当たりにして、照準が付けられる狙撃砲を持つ騎士達すべてが、その飛鼠めがけてトリガーを引いた。

狙撃砲の集中砲火を浴びた飛鼠は全身を引きちぎられ、破片を撒き散らしながら、その場から吹き飛ばされ、数十メートル離れた地面に、何回もバウンドして動きを止めた。

「識別信号なんて――――」

唐の駆る赤兎が立ち上がると、狙撃砲の銃尻で飛鼠の横面を殴りつけた。

横転した飛鼠めがけて、唐は躊躇いもなく、トリガーを引いた。

「そんなものに頼らねぇと、味方まで殺すたぁ、どういう了見だぁっ！？」

バッ！

飛鼠達が一斉に後方へ跳躍し、ハルバードを構える。

こちらを敵とみなした。

そう、判断するのには十分だった。

「上等じゃねぇか……」

唐は、うわずった声で言った。

「味方殺しの反乱軍が！」

「……何ですって!?」
美奈代はヘッドギアのレシーバーを耳に押し当てた。
「何が来ているですって!?」

「だから!」
中華帝国軍とドイツ軍が戦場全体にＥＣＭをかけ始めているせいで通信にノイズがひどい。
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の無線出力では通信がおぼつかない。
「……ったく!電波戦で中華やライミーに負けるなんて、恥にも程があるっ!」
紅葉は顔をしかめながら怒鳴った。
「そこを動くな!」

「だからっ!?」
「大尉っ!」
牧野中尉が声を挙げた。
「接近する飛行物体多数!」
「せ、戦闘機ですか?それとも爆撃機?」
「違います――これは!」
マジックレーダーの反応を見た牧野中尉が悲鳴に近い声をあげた。
「――これって」
牧野中尉は、胸ポケットからキーカードを引き抜くと、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の角、手の届くギリギリの、目立たないところにひっそりとおかれていたカードリーダーに突っ込んだ。
そして、カードリーダー上のテンキーを操作して、パスワードを入力した。
他のＭＣ（メサイア・コントローラー）が見たら、首を傾げるだろう行為だ。

普通のＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）に、そんな設備は存在しない。
それを、牧野中尉はさも当然な顔で使用する。
「裏コード入力。ビハインド・データ、開放……」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）のメインモニターに、通常とは別の識別データが立ち上がった。
「まさか……まさか！」
神速のスピードでコントロールを操作して、データを閲覧する牧野中尉の指が止まった。
「……間違い、ない。そんな……神様」
その顔から血の気が引けた。
「……こいつが、出たというの？」
「Ｄ－ＳＥＥＤ、水城です」
“モードＸＹＺ　限定会話”。
アラームと同時に、そんな表示が出た。
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）にこの会話は限定されているという表示。
美奈代も祷子も、二人の会話を聞く術はない。
「――よろしいですか？」
彼女の目の前のモニターにも、牧野中尉と同じデータが表示されていた。

“ＭＣＲ機能停止中”
“操縦権限保留中”
「ち、ちょっとぉ……」
突然、そんな表示が出て、操縦システムが動かなくなった。
“死天使”の操縦権限の全てが停止しているのは間違いない。
「戦場で何してんのよ。あのクソ中尉……悪魔って地下にいるんでしょう？どうして私だけ、頭の上にいるのよぉ……ん？」

ザァァァッッ

木々を揺らして、何か巨大なモノが通り過ぎたのは、その時だった。
巨大な、本当に巨大な何か。
飛行物体なのに、エンジン音はしなかった。
風を切り、木々の枝を揺るがす音に、人工のそれは、一切無かった。
ジャンボジェット機並の巨大な体を、エンジン無しで、あのスピードで飛ばすことなんて出来るはずが……。
遠ざかっていくその姿を、美奈代は見送るしかない。
「今の……何？」
「赤兎隊、何をしているか！」
王少佐が真っ青になって怒鳴った。
通信モニターの向こうでは、唐少佐が怒り狂っていた。
「うるせぇっ！」
唐少佐が顔を真っ赤にして怒鳴り返した。
「友軍を問答無用で攻撃したのはそっちの部隊だ！データ取ってあるからな！あの状態で誤認もへったくれもあるもんか！俺のオヤジは軍法務局に顔が利く！銃殺台は覚悟しておけ！？」
「し、識別信号を発振しない場合――」
「知ったことか！無人騎の常時監視、管理監督責任はそっちにあるはずだ！」
そんな口論に勝ったのは、当然ながら唐少佐の方。
飛鼠（ひそ）達は、後ずさりながら赤兎達から離れていく。
ドイツ軍はすでに後退を開始。

下手すれば、砲兵隊の砲撃がいつ始まってもおかしくない。
バリアシステムは、砲兵隊と一緒に撤退している。
もう、あの破滅の雨から身を隠すすべはない。
「……参ったな」
口論に勝とうが負けようが、身内を失ったことに代わりはない。
苦楽を共にしてきた仲間を、こうもあっさり失った自分が許せない。
「潘、曽……胡の騎体を引き揚げる準備に入れ。グレイファントムの被害は」
「……コクピットブロックは外れていたのですが」
MC（メサイア・コントローラー）は、悲しそうな顔になった。
「機関砲弾が……」
「……どこまで手抜きだ」
可能なら、一緒に引き上げてやりたい。
だが、赤兎1騎を引き上げるのが、部隊の限界だ。
ソミン達には済まないが、わかってもらうしかない。
「ソミン達は」
「いいものを見つけました」
「何だ？」
「さっきから目を付けていたんです。あそこに転がっているヤツ」
「……ん？」
目を凝らすと、林の角に一台のハマーが止まっていた。
「米軍の鹵獲（ろかく）品を、砲兵達が乗り回していたんです。使えるはずです」
「よくやった。お前っ！生きて帰ったらキスしてやろう！」
「勘弁してください！酒がいいんですけど」
「破裂する程飲ませてやる！ソミンっ！」
「は、はいっ！」
「脱出手段が見つかった！胡騎のシールドの上に集まれ！地雷原の外までは、俺達が運んでやる！」

「ほ、本当ですか！？」
「しくじったら、俺が人生、責任持ってやる！」

ガンッ！

その途端、唐少佐の騎体が激しく揺れた。
装甲部に対する警報が鳴り響く。

「なっ！？」
「長中尉っ！？」
横にいた長中尉騎が、狙撃砲の銃尻でぶん殴った衝撃だ。
「どさくさ紛れに、わけわかんないこと言ってないで、さっさと動いてくださいっ！」

「嫉妬するならもう少し可愛く――――よしわかった。中尉、これまでは事故だ。いいな？」

「この距離で外しはしません」

「唐少佐」
MC（メサイア・コントローラー）が報告する。
「飛来する物体4……5？」
「何だ？」
戦況モニター上では、飛鼠（ひそ）達がゆっくりと後退を開始している。
ドイツ軍は地雷原の向こう側。
砲兵部隊の後退支援には十分な時間をここで費やした。
俺達はここから下がっても、誰からも文句はこないはずだ。

飛鼠（ひそ）達を迂回して、地雷原を飛び越えて……。

戦況モニターを見つめながら、唐はそんなことを考える。

ただ――――

ちらりとモニターに映るソミンの顔に、どうしても意識がいってしまう。

コクピットから這いだした韓国人達が、シールドの上に集まった。

ソミンは、その中にいた。

涙に濡れた長く美しい睫。

うなじに張り付いた長く黒い髪。

これからの未来に緊張と期待を混ぜ合わせた感情を浮かべ、紅潮する頬。

この子と離れるのは……ちょっと寂しいな。

本当に、そんなことを思ってしまう。

「……飛行物体、速度、あげました」

「こんな所を？友軍か？」

「識別無し……何だ？こいつら」

「どうでもいい。俺達はここからずらかるんだ。もう知ったことか。潘、曽。騎体回収は終わっているか？」

「曽です。完了しました」

「長、あそこの車両を回収しろ。壊すな」

「自分でおやりになればどうです？」

「命令だ。見苦しいぞ。おい、こいつは？」

「……っ」

長騎が塹壕から出た、その時だ。

バンッ！

長騎の真横を火線が走った。

「ひ、飛鼠隊が発砲っ！」
「やりやがったな！？」

「……考えてみれば」
王は楽しげに喉の奥で笑った。
「あいつらを始末すれば、それで終わるんじゃないか」
「し、しかし」
オペレーターの一人が、不安そうに言った。
「友軍ですよ？」
「軍法会議に立ちたいか？飛鼠の監視任務はオペレーターの責任だと、そうなるぞ」
「……っ」
「君にも家族はいたな？確か、生まれたばかりの子供も」
「……はい」
「父親として、次に出会うのは軍刑務所の格子戸を挟んで？そんなことを望むのか」
「御免被ります……絶対に」
「なら、協力しろ。他の者もだ――――何」
王は嬉しそうに言った。
「騎士に名誉ある最後を与えてやる。それだけさ」

「後退するっ！長！大丈夫か！？」
「は、はいっ！」
「車は！？」
「回収しますっ！」
「全騎、牽制射撃っ！脱出の時間を稼ぐっ！潘、曽。射撃と同時に動けっ！胡が命と引き替えに護ろうとした連中を、無事に送り届けろっ！」

「「はいっ！」」
「いい返事だっ！」
満足げに頷いた唐は、狙撃砲を構えた。
「人間様の恐ろしさ、たっぷり教えてやるぜっ！このポンコツ野郎おっ！」

「……間違いなく？」
「……ワイバーンタイプ。翼の形状に、“サラマンダー”と呼ばれる“炎息”攻撃種の特徴が見て取れます」
「これが……どこから？」
「他の人達は知らないでしょうけど……“機関”の情報に間違いはなかったにしても、ここに来る理由が」
「風に流されてきたのではないでしょうか？今、上空は強い風が流れていますから」
「……成る程？“機関”のお告げ通り、全ては動いている。そのまたとない証拠……それが、あれなのね？」
「恐らく、そうなるでしょう。“サラマンダー”動きました」
「……ああっ！」
ポンッと、牧野中尉は手を叩いた。
「そういうこと！」
「牧野中尉？」
「……データ収集に協力して頂戴」
「はい？」
「あいつの狙いは――」
牧野中尉は、忙しそうにコンソールを叩きながら言った。
「……えっ？」
その言葉が、水城中尉には俄には信じられない。
でも――

「何故、そうするか。その原因を探る……面白そうですね」
彼女もまた、コンソールを叩き始めた。
「微力ながら、協力いたします」

「3騎、脱出ルートに乗りました！」
「よっしゃ！」
「後方から飛鼠(ひそ)本隊、残存部隊接近中っ！」
「王の野郎っ！本気で俺達を潰すつもりか！」
「俺達も引きましょう！飛鼠(ひそ)のブースターなら、赤兎の推力にゃ勝てないっ！」
「全騎、最大推力で戦線を離脱許可！死ぬなよ！」
「りょう……し、少佐ぁっ！？」

歴戦のメサイア乗りが悲鳴を上げても無理はない。
その場に居合わせた誰しもが、そう思う。

それは――――信じられない光景だった。

一列に並び、立ちはだかる飛鼠(ひそ)達。
彼等の持つハルバードが黄色い光が、むしろ幻想的な力で辺りを照らし出す。

その背後に広がる漆黒の闇の中から、彼等はやって来た。

ガジィィッツ！

漆黒の闇の中から突如現れた牙が、居並ぶ飛鼠達の一騎に食らいついた。

自重、数十トンを遙かに超える飛鼠が、軽々と空中に持ち上げられた。

飛鼠に牙をめり込ませる長い首が、イヤイヤとするが如く激しく上下左右に動き、牙に食いつかれた飛鼠は、それにあわせて激しく揺すられた。

バギィィッツ！

ついに、牙が飛鼠をかみ砕き、哀れな飛鼠は、胴体を真っ二つに食いちぎられ、その騎体の残骸をそこら中に撒き散らした。

雨霰と降り注ぐ飛鼠の残骸を浴びながら、彼らが眼にした光景。

それは――

突然、目の前に現れた、巨大な翼を持つバケモノ達の存在だった。

トカゲのような体に、コウモリのような翼を取り付けたような、異形の存在。

ハルバードの灯りに照らし出された、数十メートルに達するだろう巨大な翼を広げた光景は、嫌悪感よりむしろ、荘厳ささえ浮かべている。

「……龍だ」
誰かのつぶやきが耳に入った。
もしかしたら、自分かもしれない。
でも、そんなことはどうでもいい。
龍。
しかも、西洋人が想像するトカゲとコウモリの掛け合わせのような、醜悪な方だ。
唐も、そんな想像図を、子供の頃、絵本で見たことがあった。
どっちにしても、空想の産物に過ぎないはずの存在。
そのはずなのに――。
今、その空想の存在が、現実となって、現実の恐怖となって、彼等の前に存在している。
「少佐ぁっ！」
部下が悲鳴を上げた。
「な、何ですか！？あれは！」
「――っ」
どうすればいいか？
唐はこんな時、一つしか方法を知らなかった。
「全騎っ！」
彼は部下に命じた。
「――逃げるぞっ！」
「ど、どこへっ！？」
「知るか！適当に逃げればいいんだよ！」
「ならついていきます！」

「勝手にしろっ！」

そんな彼等の目の前で、龍達の口から出た炎が、新たな敵に対処できないのだろうか。

立ちつくす飛鼠（ひそ）達を包み込んだ。

北米戦線編　第二十二話

すぐ目前に突如立ちふさがった炎の壁。

「――逃げろっ！」

唐は声の限り叫んだ。

「逃げるんだ！あんなの相手にしてられるかっ！」

「阻止戦闘の許可を！」

「逃げろっ！」

狙撃砲を構える部下に怒鳴った。

「距離を稼いでからにしろっ！赤兎（こいつ）で勝てる相手じゃないっ！」

「り、了解っ！」

「ブースター全開っ！壊れてもいいっ！整備は俺が一緒に土下座してやるっ！」

返事は聞かなかった。

唐騎のブースターに光が集まる。

一瞬、“龍”と眼が合った気がした。

――気のせいだ。

唐は心の底で思った。

だが、

“ヤツ”は、俺を見て笑いやがった！

冗談じゃねぇ！

――こんなの、悪い夢だ！

「ブースター臨界っ！リミッター解除！緊急機動、かかりますっ！」

メサイアの全出力をブースターに回す緊急脱出機動。

かつて、二宮がアフリカで使ったあれだ。

機動をかけたメサイアをわずか3秒後に高度1万メートルの高み

へと逃がす。
ただし、騎体と、パイロットとMC（メサイア・コントローラー）にかける負担はかなりを覚悟しなくてはならない。
普通のメサイアの機動の場合は慣性制御によりGの大半は相殺されるが、この機動の際は、Gを相殺させるのに必要なパワーまでを推力に回すため、下手をすると騎士でさえ気絶する程度では済まされない。
これを目の前でやられると、メサイアが本当に一瞬のうちに消失したように見える。この機動が“消失トリック”とも呼ばれる由縁であることは、以前に述べたとおりだ。

「全騎、大丈夫だろうなっ！？」
「多分っ！」
何だそれはっ！そう言いかけて――
ガチンッ！
唐は、上あごと下あごが激しく激突する音を聞いた後の事を、覚えていない。

「赤兎隊、反応消えましたっ！」
「やられてくれたのかっ！？」
「緊急機動をかけた模様っ！」
「――ちっ！」
ガンッ！
王は近くの椅子を蹴飛ばした。
床に固定されている椅子を蹴飛ばした足に、激しい痛みが走る。
「くそっ！飛鼠（ひそ）の状況は！？」
「あんなもの、攻撃するプログラムなんてあるか」
孔大校は呆れ顔で言った。

「何じゃ？あの空飛ぶトカゲは」
「一介の軍人である私より」
足をさすりながら、王は言った。
「科学者であるあなたのほうが、わかるんじゃないですか？」
「――科学が万能なワケあるまい」
孔大校はモニターを珍しそうに眺めた。
「ま、あれが妖魔というヤツじゃろうな」
「妖魔？あの、アフリカや南米を滅ぼしたという？」
「軍人にしては確認が不確定じゃな」
「自分達、中華帝国軍軍人は」
王は胸を張った。
「そのような、人類が認めない存在と戦うほど、愚かではありません」
「ワシとて中華帝国軍軍人じゃ」
孔大校は王を睨み付けた。
「そのワケのわからん屁理屈で、軍事的貢献から一方的に逃れた挙げ句、世界から拝金主義者呼ばわりされ、戦後の領土分割ではイの一番ではじき出された。あの日本ですら本土とほとんど変わらぬ土地を手にする一歩手前まで行ったというのに」
「我が国の反対で、水に流れたではありませんか」
「……で？今、そんな政治談義をしている状況か？大隊指揮官」

「イリス。状況がわかるか？」
目前で、立ち往生する飛鼠（ひそ）が次々と見たこともない龍達に攻撃を受け、炎の中に消えていった。
ドイツ軍は、それを前に反撃することも忘れ、ただ呆然と事態の推移を見守るしかなかった。
「わ、私にも」

イリスは各種センサーを駆使しながら、
「ライブラリーに該当する種なし。私には、大型妖魔、飛行系５が出現。飛鼠（ひそ）を攻撃中だと」
そこまで言った後、恥ずかしそうに続けた。
「……見た限りのことしか、わかりません」
「あのタイプは――アフリカでも見たこと無いぞ。ブリュンヒルデ」
「はい？」
「君はどうだ？」
「昔のこと――そう言わないだけで褒めて差し上げます」
ブリュンヒルデは答えた。
「私にもありません。というか、飛行系で、あんな大物は初めて見ました」
「同感だ。イリス、あの火炎攻撃のデータをくれ。わかる範囲でいい」
「有効範囲２５０～３５０。火炎放射というより、強い魔力反応から、一種の魔法攻撃と判断出来ます。温度は約数万度。センサーで正確な温度は拾い切れません――あんなの、メサイアでも耐えられません」
「あれで機動力が高ければ、シャレにもならんぞ」
「どうするんです？ヴォルフ」
ブリュンヒルデが訊ねた。
「直接攻撃？それとも狙撃？」
「……いや」
フォイルナー少佐は首を左右に振った。
「何もするな」
「えっ？」
「何もしなくていい」
「でもっ！」
「――丁度良い」

クックックッ。
レシーバーが、フォイルナー少佐の忍び笑いをしっかりと拾っていた。
ブリュンヒルデは、その声を聞いて思わず額に手を当てた。
彼が、こういう笑い方をした時。
それは、ろくでもないことを思いついた時に限るのだ。
「部隊全騎――このまま動くな。発砲の類は厳禁とする」
「隊長！？」
「な、何故ですかっ！？」
「イリス」
部下の文句に耳も貸さず、フォイルナー少佐はイリスに命じた。
「近在の日本軍と通信回線を開け」

「……何考えてるのよ」
美奈代が文句を言いたい相手は、二人だ。
頭上の悪魔。
そして、こんな時に支援要請をかけてきたドイツ軍の指揮官だ。

――大型妖魔出現。撃破されたし。

そんなこと言われたって、こっちは身動き出来ないんだ。
相変わらず、操縦権限が剥奪されたことを告げる表示が浮かぶモニターを睨むと、
――宗像達に頼もうかな？
ふと、そう思った。
うん。それがいい。
名案だと思った。
２騎で相手するより、数は多いし火力も強い。

あいつらの方が楽に相手を仕留めてくれるだろう。
ついでに、フィアが戦死してくれれば万々歳だ。
「よしっ」
美奈代はすぐに通信を開こうと、パネルに手を伸ばした。
すると――
「えっ？」

操縦権限回復。
操縦系データ、復帰中。

そんな表示が出た。

「ま、まさか」
美奈代の脳裏に、ものすごくイヤな予感が走った。
「お待たせしました」
牧野中尉の嬉しそうな声が、レシーバーに入った。
「待ってません」
美奈代は即答した。
「全然、待ってませんでしたから、どうぞ勝手に何でも押し進めてくださいっ！」
「まぁ――スネちゃって♪」
喉の奥で笑う牧野中尉に、
「わ、私、お腹痛いんです！」
「あらあら――大変ですわねぇ」
「そうなんですっ！生理痛と陣痛が一気に！」
「いつ、妊娠したんですか？」
「ついさっき！」
「あらぁ」
何が楽しいのか、牧野中尉は本当に楽しそうに言った。
「ストリキニーネってご存じですか？」

「……は？」
「騎士鎮圧用の注射器の中に、モルヒネの代わりに入ってます。今からブスッとやってあげましょう」
「……あの？」
「そりゃ、楽しいことになりますよ？」
「ど、どう？」
「試してみます？」
「……私、どうすれば？」
「私の命令に、“絶対服従”か“生涯忠誠”のどちらかで答えてください」
「……同じじゃないですか！」
「じゃ。楽しいお仕事と参りましょうか」
「っていうか、聞いてないし！」
「注射された後、地獄の苦しみが」
「……あいつらと、戦えと？」
「ノルマは2騎で5匹です」
「……弱点なんて、わかります？」
どこを攻撃すれば有効なのか。
どんな攻撃をしてくるのか。
それがわからないことは、つまり、勝ち目がそれだけ薄いということだ。
「そんなの」
それに対して、牧野中尉は本当の真理を答えた。
「戦ってみなければ、わかるもんですか」

「……ぐすっ。もうヤダ……除隊したい」
「戦死すれば出来ますよ」
「風間ぁ……それ、励ましてるつもりか？」

「本当のことですよ？」
あっけらかんとした祷子の顔が、美奈代には怨めしい。
「美奈代さん？作戦か何かありますか？」
「あるワケないでしょう？」
美奈代はスネた様な口調でそう答えたが、
「本当ですか？」
祷子はそれを信じていない。
「本当に――ないんですか？」
「……」

その声に、
――本当に不思議だ。
美奈代はそう思う。
祷子は、普通にしゃべっているはずだ。
別に威圧しているワケじゃない。
命令しているワケでもない。
それなのに、どうしてこの子の声は、こうも人を従わせる力があるんだろう。

「……ない、ワケじゃない」
何故か、不意に美奈代は視線を外した。
「やろうと思えば、それなりにあっさりいくはず」

「えっ？」
牧野中尉が通信モニター上で驚いた顔になった。
「ど、どうやってです！？相手はメサイアの装甲並みの皮膚を持ったバケモノですよ？」

「そんな情報」
美奈代は静かに答えた。

「どこで仕入れたかは聞きませんし、聞きたくありません」
「――――っ！」
ハッ！とした後、青くなった牧野中尉に、美奈代は続けた。
「斬艦刀が通じれば、それで何とかなる。風間」
「はい？」
「仕留めるのは――――」
戦闘準備を進めながら、美奈代はポツリと言った。
「私達じゃなくても出来る」
「あら」
祷子は少し、驚いた顔になった。
「私達――――ドラゴンスレイヤーにはなれませんか？」
「牧野中尉？」
美奈代は無視するかのように訊ねた。
「あれは、“龍”なんですか？」
「そ、そんなことより」
困惑気味の表情を浮かべた牧野中尉は、苦しそうに言った。
「ほら。さっさとやらないと！」
「風間――――どうやら、龍じゃないようだ」
「じゃ、竜？」
「トカゲ――――じゃないか？」

「失礼な！」
牧野中尉は怒って言った。
「あれは“サラマンダー”ですっ！」
「四大元素の？」
「あれは別です。むしろ火炎攻撃を加えることから、昔から“火龍（サラマンダー）”と呼ばれているようで……」
牧野中尉がハッとなった時は遅かった。
「――成る程？」
美奈代は意地の悪い顔で言った。
「褌子にはスラスラ答えるんですね。中尉って」
「あ、あのっ……」
「随分、ヒビ入りましたよ？私との関係」
「ご……ごめんなさい……その」
「――風間」
牧野中尉の弁明を無視するかのように、美奈代は言った。
「どうしても欲しいならともかく、ドラゴンスレイヤーのご高名は、ドイツ人にくれてやれ」
「どうするんです？」
「下手な深追いはリスクが高い。一撃離脱で行く」

「……へぇ？」
祷子は、今まで美奈代が見たことのない程、妖艶さを感じさせる程、楽しげな顔になった。
「具体的に、どうするんです？」

「……あっ」
ゾッとするほどの冷たく、しかし、官能を狂わされそうなその笑みに、美奈代は一瞬、我を忘れた。
自分を取り戻そうとするかのように、美奈代は強く首を左右に振った。
「簡単だ」
心臓が早鐘を打っている。
一体、何なんだ？
全てから逃れるように、美奈代は通信モニターから視線を外した。
何故か、祷子の声さえ聞きたくなかった。
この声を、ここで聞くのは――恐すぎる。
恐い？
何故？
同期の仲間。
同僚だぞ？
莫迦な。
ええいっ！
こんな所で手間取っていたら！
「――狙いはサラマンダーの翼だ」
口から出た言葉に、本当に感謝したい気分だった。
「片翼でいい。ヤツを飛べないようにして、地面に叩き付けろ」

「首は刎ねないのですか？」

「やれる自信があるならいい。だが、私の見る限り、ヤツの機動性はかなりだぞ」

「――――そう、ですね」

「名誉に拘るな。私達は、適当にやって楽をするのがモットーだ」

「クスッ。分隊の頃、思い出します」

「なら――――いくぞ」

「はいっ！」

“死天使”とＤ－ＳＥＥＤが同時に、宙に舞い上がった。

シャァァァァッッッ！

背筋の寒くなる様な音を立て、吐き出される紅蓮の炎。

遠く離れているはずなのに、頑丈な装甲が間にあるのに、まるでその熱が顔を焼くような錯覚さえ覚える熱風。

相手が敵なのか味方なのか。

攻撃対象か否か。

有機コンピューターと呼ぶには残酷すぎる脳は、思考とエラーを繰り返す。

その機動性をもって、あまたの騎士達を地獄に落とし込んだ死の

機動力を司るその騎体が動かない。
飛鼠達は、吹き上がる炎を前に逃げることさえ出来なかったのは、そのためだ。

嵐となって飛鼠に襲いかかった炎が通り過ぎた後。
そこには、この世に飛鼠が存在したことを証明するような、原型を残した部品さえ発見することは出来ない。
わずかに熔け残った得体の知れない、金属の塊が黒い大地に転がるだけだ。

「た、隊長」
地雷が爆発して開いた穴に潜む騎士の一人が、震える声で訊ねた。
「俺達ゃ、いつからファンタジーの住人になったんですか？」
黙っていることに耐えられないようすで、何度もつかえながら言った。
「あいつら、俺達の肩書きを、勘違いしちゃいませんかねぇ」

「あいつらへの説明を志願するなら許可するぞ。ザロモン。ただし、騎体は降りていけ」

「……やめておきますよ」
北米の大空を、我が物顔で飛遊する翼を持つ龍達を前に、彼は背筋に寒気さえ覚えた。
「両手をあげても、意味が通じるとは思えない」

「少佐」
エレナが通信に割り込んだ。
「狙撃許可を。今ならやれます」
エレナの駆るノイシアが、狙撃砲を空に向け、射撃ポジションを維持している。

撃て。そう命じられたら即座に発砲するだろう。
フォイルナー少佐には、それがどれほど危険な行為か。骨身に染みてわかっている。
「やめろ」
フォイルナー少佐は言下に否定した。
「下手に刺激するな」
「しかしっ！」
エレナは食ってかかった。
「あんな空飛ぶトカゲ、私が！」
「妖魔相手の戦いでは」
フォイルナー少佐は、突き放すような声で言った。
「相手の正体――どんな攻撃をするか。どこが弱点か。それも知らずに安易な攻撃を仕掛ける者の末路は決まっている」
エレナは、その時に見せたフォイルナー少佐の眼光の鋭さに、背骨が縮めらけたような錯覚さえ覚えた。
「――無惨な、死だ」
「……っ」
「我がグリュックシュヴァインには、その程度もわからぬ愚か者に居場所はない」
「……で、ですが」
「――全騎、妖魔に関する分析を最優先。許可あるまで一切の発砲を禁ずる。下手に刺激するな。日本軍が接近中だ。手並みを拝見と行こう」

「な……何よ」
悔しい。
エレナは唇を噛んだ。
狙撃で6騎を喰った。
すでにダブルエース認定の活躍はしたんだ。
私の狙撃の腕前なら、あんな奴ら、地面にたたき落としてやるん

だ！
少佐は一体、私の腕を信じてくれていないのか？
さっきの６騎撃破は、偶然だというのか？
何が日本軍だ！
私がいる！
それとも、私の攻撃には価値がないと？
私は価値を造ったんだ！
それなのに！
私は、少佐に認めてもらえれば、それでいいのに！

どうして、

どうして少佐は、

どうして少佐は、私を認めてくれないんだ！

「相手の特性をよく見なさい」
諭すような口調で、ヘルガが言った。
「相手は、こっちに気付いていない」
「……」
エレナは、拗ねたようにそっぽをむいた。
「多分、色盲なのね。地面と騎体の区別がつかないんじゃないかしら……レーダーは」
ヘルガは、索敵レーダーのピンを一発だけ撃った。
たった、一発だった。

ギロッ！

それまで、気持ちよさそうに空を舞っていた一匹のサラマンダー

が、空中で一回転して静止。こちらに視線を向けた。

「やばっ！」

ヘルガが己の犯したミスに気付いた時は遅かった。

「全騎っ！こちらシュヴァルツ騎ヘルガ！レーダーを使わないで！あいつ、電波をかなり敏感に感知している！」

ブワッ！

端から端まで、５０メートルに達するだろう巨大な翼を広げ、サラマンダーが部隊の上空を通過したのは、その声が終わる前だった。

「――――バケモノめっ！」

「イリス」

デュミナスのコクピットで、フォイルナー少佐が訊ねた。

「あいつのデータはとれたか？」

「はい」

イリスは頷いた。

「あの中華帝国軍騎から発振されていた独特な敵味方識別信号に過敏に反応したものと断定できます。信号が停止した途端、あの有様です」

「皮膚は」

「電波吸収材料に近い特性があります。レーダー波の反射率はステルス戦闘機並。マジックレーダーでなければ感知すら不能。以上の点を含め、スキュラ・タイプの鱗と類似性は８割。つまり、当該妖

魔の装甲はメサイアのそれと同等と判断可能」

「……アフリカ戦線で、アイツを仕留めるために配備されたのが」

フォイルナー少佐は、ちらりとエレナ騎の持つ狙撃砲を見た。

「――このタイプの狙撃砲だったな」

「はい。ただし、至近距離から、3発以上の直撃が必要です」

「命中可能性は？」

「シュヴァルツ騎なら可能でしょうが、1匹仕留める間に残りに襲われる危険性は」

そう。

問題はそこだ。

相手は、まだ、こっちに気付いていない。

仮に気付いていたら、もう、さっきの上空通過で終わっている。

我々の――全滅で。

頭上を舞う“死”に頭を押さえつけられた状態が、恐ろしい。

口元から、時折、こぼれる炎に、イリスは一瞬、言葉を詰まらせた。

「空中機動性は、デュミナスでようやく相手になるかどうかの瀬戸際です。相手の回避力が勝れば、死に急ぐだけです」

「ＭＬ（マジックレーザー）は」

「スキュラ・タイプと同じなら、中和フィールドを持っているはずです。スキュラは、芋虫型（クロウラータイプ）でしたから、陸戦で相手が出来ましたが」

「空を舞うスキュラ……それがあいつか」

「エルプスハルバードが有効ですが」

イリスは真顔で言った。

「投げつけるわけにもいきませんし」

「……日本軍は？」

「あっ！」

イリスは驚いた顔でモニターを見た。

「接触まで１５秒！」

「……あれか」

モニターの端に点となって現れたサラマンダーが、徐々に大きくなってくる。

「風間」

「はい？」

「牽制のビーム攻撃はしない。隙を一気に突く。ターゲット選定同調しているな？」

「はいっ」

「よし――斬艦刀抜刀。戦闘機動開始」

“死天使”とＤ－ＳＥＥＤのブースターに光が集まる。

騎体に痺れるような震動が走る。

脳天からあふれ出たアドレナリンが全身を走り回る錯覚さえ覚える、この突撃直前の興奮と心地よさは、味わった者でなければわからない。

ブルッと身震いする程の快楽。

いつしか美奈代は、自分が突撃の瞬間に恐怖ではなく、歓喜を覚えていることを、朧気ながら自覚していた。

戦場を駆ける身として、それは危険なのか。

騎士として、それは望ましいことなのか。

もう、そんな疑問を考えることさえしない。

投げられた棒。

それが食べられるか否かを、事前に考えてから追いかけ始める犬はいない。

それだけだ。

獲物を目の前にした猟犬。

あるいは――戦狼。

それが、戦いに接した騎士。

ただ、この場にいる美奈代は、一人の騎士にすぎなかった。

一人の騎士として、美奈代は斬艦刀を抜き放ち、大声で命じた。

「――かかれっ！」

「日本軍、突撃っ！」

イリスの声に弾かれたように、コクピットで身を乗り出したフォイルナー少佐は、スクリーンに全神経を注ぎ込んだ。

すべてを、ほんの些細なことでも見逃すまいとするどん欲ささえ、少佐は惜しむことなく見せる。

ブンッ！！

その機動の鋭さに、空気が悲鳴をあげた。

バキィッ！

ギャッ！？

サラマンダーの喉から叫びがあがった。
フォイルナー少佐騎の目の前で、サラマンダーの翼が、その体から引きはがされ、空中を舞った。
ギャァッ！
サラマンダーが悲鳴をあげながら地面にまっすぐ墜落していく。
落下するのは2匹。
残された片翼を必死に羽ばたかせるが、残された翼には、サラマンダーを空に舞いあげる力は残されていない。
虚しく空中を羽ばたくサラマンダーは、地面に落下を続ける。

ギャォォォォォッッッ！

悲しささえ感じさせる叫び声をあげ、地面に叩き付けられたサラマンダーが、一度、大きくバウンドする。

グボキッ！

背中から落下したサラマンダーの残された翼が、気味の悪い音を立てて砕けて折れた。

もはや、サラマンダーが空に帰ることが出来ないのは、その無惨な傷から明らかだ。

その一部始終を見る前に、フォイルナー少佐は日本軍騎を探した。

「どこだ!?」

その答えを知らせるように、もう2匹、翼を切断されたサラマンダーが落下を開始した。

チャンスはほんの一瞬。

下手をすれば、吐き出される炎が壁となって待っていることになる。

高速で突破すればたいした損害にはならない。

理屈ではそうなのだが、現実の魔法系の炎はそうはいかない。

それは、粘着性の液体と同じだ。

粘着性の液体の霧の中を、高速で突破しても液体に触れずにいられないのはわかるだろう。

魔法の炎も一緒だ。

高速で突破しようがなにしようが、バリアでも張らない限り、炎に触れることは避けられない。

そうすれば、触れた場所は炎の被害を避けられない。

つまり――騎体が耐えられない。

完全に、気付いていないうちに仕留める必要がある。

少なくとも、真っ正面から挑んではならない。

背中をとる必要がある。

美奈代と祷子は、騎体の直線針路と、サラマンダーの予想飛行ルートが合致する所めがけて神速の突撃で襲いかかり、相手を叩き斬

った。

接触する時間は、コンマ数秒。

絶無に等しい中で、敵の翼を切り落とす。

それは、弾丸に乗って敵に襲いかかり、命中する瞬間に斬りつけるようなものだ。

弾丸でさえ避けるという、騎士の動体視力と反射能力がなければ、とても出来る芸当ではない。

一匹ずつを仕留め、速度をほとんど殺すことなく空中でターン。

ブースターの推力に物を言わせた急制動で反転すると、再び新たな獲物に襲いかかった。

サラマンダー達は、それに対抗することが出来なかった。

仲間の身に何が起きたかを理解する前に、美奈代達が襲いかかったからだ。

仲間が墜落する姿を眼で捉えながらも、それが何なのか。

それさえ理解する前に、彼等のほとんどが、翼を失ったのだ。

そんな中――

たった1匹だけが、わずかに残されていた。

理由は簡単だ。

飛鼠（ひそ）達に襲いかかった4匹と別行動をとっていた。

答えはそんなものだ。

「あれっ？」

上空から、その姿を確かめた美奈代は、そのサラマンダーが、地

上めがけて炎を吹いたのを確かに見た。
森の中に、何かが潜んでいたのか？
執拗に炎で攻撃するサラマンダーの姿に、美奈代はポツリと言った。
「風間？手柄、譲ってあげようか？」
「面倒くさいからいいです」
「ビームライフルで仕留める？」
「そうしましょうか」
Ｄ－ＳＥＥＤと“死天使”が、それまでとは違うタイプのビームライフルを腰のウェポンラックから引き抜いた。
それは、美奈代達が使い慣れたビームライフルより、さらに長い銃身を持っていた。
「“９７式改”って、本当に使えるんですか？撃ったことないんですけど」
そう、褄子が心配そうに呟くと、
「……離れているいるから、代わりに撃って」
美奈代はそっとＤ－ＳＥＥＤから離れようとする。
「あっ！？薄情者っ！」
ドンッ！
横を向いた途端、ついトリガーを引いた褄子の目の前で、Ｄ－ＳＥＥＤの持つビームライフルの銃口から光の矢が放たれた。
光り輝く矢が、サラマンダーの背中に命中。
サラマンダーの背中に展開されていたバリアと空中で衝突し、そしてバリアを叩き砕いた。
バゴッ！
そんな音を立て、サラマンダーの背中に巨大な孔が開くと、その胴体を貫通したビームライフルのエネルギーが地上で爆発。
巨大な爆発煙を立ち上らせた。
「……」

「……」

美奈代が、声を挙げられたのは、時計の上では数秒だが、彼女の主観すらすればかなり後だった。

「撃てって命じておいて、おいてなんだけど」

「……はぁ」

「こういうの――――反則って言わない？」

祷子は頷いた。

「同感です……なんとなく」

騎体から降りたエレナは、そのままフォイルナー少佐の所へ向かって歩き出した。
文句を言うためだ。
地上に墜ちたサラマンダーを狙撃、撃破したことは、決して自慢になんてならない。
狼が残飯に食らいつくなんて、許されることじゃない。
エレナには、そうとしか思えない。
我々は騎士。
残飯の中に鼻を突っ込む豚ではない。
なにより、黒狼とまで称えられるあなたならば――
それに憧れ続ける私ならば――
あれは――許される事じゃない！

フォイルナー少佐は、ブリュンヒルデ達と共に、サラマンダーの死骸の前に立っていた。
左の翼が根本から切断され、右の翼が半ば断ち切られている。
鱗に覆われた、メサイア並の巨体を醜くくねらせている。
地面にくっきりと残るかきむしったような爪痕や尾の痕が、体に刻まれた狙撃砲命中時の苦悶をはっきりと伝えている。
「……し」
フォイルナー少佐の後ろで立ち止まり、敬礼しようとして、エレナはとっさに口元を抑えた。
喉から入り込んだ空気が、胃袋の中身を吐き出させようと体の中で暴れている。
そんな錯覚さえ覚えた。
「……妖魔の死骸は初めてか？」
よく見ると、声をかけてきたフォイルナー少佐達はしっかりとマ

スクをしていた。
エレナはすぐに頷いたが、声が出てこなかった。
「死骸に接する時は、防毒マスク類は必須だと、規定に明記されているぞ」
脇にいたイリスが、予備のマスクを貸してくれた。
「未知の病原菌を保有する種も存在する。死骸は早期に焼却するに限るが」
ガンッ！
フォイルナー少佐は、ブーツの爪先で軽くサラマンダーの死骸を蹴った。
その音は、とても生身の肉体を蹴った音とは思えないほど、硬質だった。
「……私が攻撃命令を下さなかったことが、相当に不満な様子だな。中尉」
「えっ？」
突然、そんな事を言われたエレナは、言葉に詰まった。
文句を言いに来たのだが、逆にそれを指摘されると、どう答えていいのかわからない。
「あ……あの」
「いいか？」
フォイルナー少佐は、妖魔の死骸から目を逸らさずに言った。
「我々は部隊で行動している。そのことを、絶対に忘れるな」

「――意味がわかんない」
サラマンダー達の死骸は、交戦規定に基づき火炎放射装置による焼却が始まった。
地雷原突入前の地点まで戻り、立ち上るその黒煙を眺めながら、エレナは憮然とした顔でヘルガに言った。
「私は、一人で戦うなんて言ってない」

「言ってるのよ」
「いつ」
「狙撃させてくれって、その時点で」
「言ってない」
「言ったって、そうとられているの」
「勝手なコトするなってこと？それこそ言いがかりよ。私に命じてくれれば、日本軍にあんな派手なことさせなかった！」
「ほら」
ヘルガは呆れた。という顔になった。
「私に。って言葉が出る辺りが驕ってる証拠よ」
「本当の話じゃない」
「なら聞くけど、MC（メサイア・コントローラー）の立場から言わせてもらうけど、あのトカゲの機動力は、並じゃない。戦闘移動中のメサイアを狙撃するのと同等以上のはずよ？そんなバケモノを、あんたが撃ち落とせるって判断した根拠は？」
「私の腕」
エレナは、ポンッと自分の腕を叩いたが、
「……やっぱり」
ヘルガは落胆した様子で、首を左右に振った。
「だから、あんな説教喰らったのよ。私の腕じゃダメなの。部隊の腕なのよ」
「……へ？」
エレナのキョトン。とした顔がヘルガの神経に触れたらしい。
「何……それ」
「わかんない？」
ヘルガが、信じられない。という顔になった。
そのヘルガに、
「うん」
エレナは生真面目に頷いた。
「ば、バッカじゃないの！？」

突然、ヘルガは顔を真っ赤にして立ち上がった。
「わかんないなら教えてあげる！
あの状況で、トカゲ一匹撃ち落としましたって報告する代償として、部隊全滅されたら割にあわないのよ！
大体、私達、戦争してるのよ！？
射撃競技してるんじゃない！
そんなセリフが吐きたかったら、自分だけじゃなくて、部隊の狙撃の腕上げろって、そう言われたのよ、わかる！？小隊長！あんた一人で戦争してるわけじゃない！少しは連携ってもの考えなさいっ！」

「それにしても」
“死天使”と“ＤＥＥＤ”が着艦する光景をぼんやりと眺めながら、後藤は興味もないという顔で言った。
「中華帝国軍叩き潰しに行って、妖魔を撃破してくるとは」
「ヒョウタンから駒とは言いますけどね」
美夜は苦笑しながら言った。
「妖魔の翼を叩き斬って地面に墜落させ、ドイツ軍の狙撃砲で仕留める……」
美夜が、従兵の持ってきた紅茶を飲みながら小さく頷いた。
「撃破の手柄はドイツにくれてやるが、同時に、我が軍はドイツ軍にその実力を骨の髄まで味わわせることになる。話としては、悪くないことですね」
「俺ぁ、そこまで命じていないんですけどねぇ」
後藤は、従兵から緑茶を受け取りながら、サンダル履きの足を痒そうに擦った。
「……で」
「で、とは？」

美夜は、アームレストに乗せられたソーサーに、カップを戻した。
見るからに高級そうなカップが、艦橋という殺風景な場所で奇妙に映える。
雲間のような、独特な濃紺の模様を描くティーカップ。
親類に子供が生まれた時のお祝いを買いに行ったデパートで同じものを見た覚えが後藤にはあった。
あれ確か――
フランスのセーブルとかいうヤツだ。
セットで買ったら、俺の給料吹っ飛ぶくらいの値段してたよなぁ。
“梅寿司”と書かれた湯飲みを手に、そんなことをぼんやり考える後藤に、美夜は続けた。
「この先について、司令部からは？」
「列車砲の確保が最優先……そんなところですか」
「相変わらず、現実が見えてるんですかねぇ。時間ないのに」
「列車砲が手に入る……そこだけは、見えているようです」
「俺達、近衛で運用できるんですか？」
「やろうと思えば出来ますよ」
美夜は答えた。
「安心して国鉄乗れなくなりますけど」
美夜は苦笑したが、
「つまり、獲物は見えても、肝心の俺達は見えていない？」
「明日には日本へのフェリーに必要な人員と機材が届くことになっています。明日までは現状待機。その後は、後送の支援命令が下る可能性も」
「そんなヒマがありますかねぇ」
「ないですよ」美夜は答えた。
「本当なら、中華帝国軍の司令部のあるヒューストンまで進撃して、北米から連中を叩き出していなければならない。ところが現実は」
「侵攻をくい止めるのが精一杯。しかも、くい止めているというより、連中が自発的に退いてくれているという方が正しい」

「……然り」
「……どうなるんですかね。俺達ゃ」
「どこかで誰かが、この流れを変えてくれるような大きなこと、しでかしてくれるのを祈るだけですが、見たこともない人の起こす奇跡を求めるより、やれることをやりましょう」
「ドイツ軍と接触は？」
「負傷兵の保護最優先。医療部隊を出します」
美夜の言葉を待つこともなく、側面に赤十字の描かれた一機のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が、鈴谷を発艦していった。

●鈴谷艦内
「また出るんですか！？」
「文句言わないの」
美奈代に、牧野中尉が言った。
二人の前で、整備兵達が“死天使”の補給作業にかかっている。
各部のハッチが開放され、冷却装置が騎体関節部の冷却作業にかかる。
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が出たんです。ここを狙われたらアウトですよ」
「赤十字を狙うバカが」
言いかけて、美奈代は首を左右に振った。
「私達の相手でしたね」
「その聡明さを」牧野中尉は嬉しそうに言った。
「もう少し、別な所で発揮出来れば、大尉は人生、もっと楽に生きられたでしょうね」
「過去形で言わないでください。それで？」
「簡単な哨戒任務です。ただ、次の発艦まで３０分あります。少し休みましょう？」
「そうしましょう――風間？」
「はい？」

美奈代は、“ＤＥＳＥＥＤ”から降りてきた祷子の手を掴んで床に下りるのを手伝うと、ハンガーの隅にある、三方を幕に覆われただけの、休憩施設を指さした。
「待機ブースで何か飲もう」
「おごってくれますか？」
「自腹」
「ケチ」
「……そうだ。牧野中尉、宗像達は？」
「宗像中尉と月城大尉が帰還します。残りは山崎夫婦と寧々ちゃんだけですが――周辺にメサイアの反応は皆無です。もう安心でしょう」
ブースの一角に置かれた飲み物を入れたクーラーボックスを開きながら、美奈代は訊ねた。
「でも、妖魔は」
「出てきたら撤退が艦長の方針です」
あら？アメリカ製仕入れたのね。と、牧野中尉がクーラーボックスからチューブ入りのドリンクを取る。
「賢明ですね」
「指揮官としては、あの人はマトモですよ」
「そう……ですね」
美奈代は、２リットルのペットボトルをラッパ飲みし始めた祷子を後目に、チューブ入りのドリンクを取り出し、一つを水城中尉に手渡した。
そして、三人で、ゴッキュンゴッキュン音を立てながら減っていくペットボトルの水を眺めた。
無重力環境でペットボトルをラッパ飲みするのは至難の業のはずなのだが、祷子の喉がどれ程の吸引力を持っているのか、本気で不思議になる。
「次も頑張りますか」
「了解――あれ？」

美奈代がチューブから口を離した。
その時、空になっているはずのハンガーベッドに固定された騎があるのに、初めて気付いたのだ。
騎数は2騎。
黒と灰色を基調とするカラーリングが施された騎体は、無骨でずんぐりとした、筋肉質というより、やや肥満体に近い。
肩に描かれた国籍マークは、丸にパと書かれている。
美奈代は、そんな国籍マークを見たことがなかった。
「……あれ、どこの国の？」
「マラネリですよ」
牧野中尉が言った。
「マラネリ？」
「随伴している向こうのお国の艦から移ってきたのでしょう。多分、国王殿下のお出迎えに」
「成る程？」
答えてから、美奈代は、もう一度、騎体を見た。
外見が、何か、ひっかかるのだ。
「魔族軍のメースに似てませんか？」
美奈代は、そのデザインに、かつて交戦したメース、“ツヴァイ”を連想した。
ひっかかる正体は、まさにそれだった。
「似て……ますね」
祷子も頷くからには、美奈代の思い違いではないらしい。
「装甲の厚さやスカート、足回りの形状なんか……それと」
祷子の視線が向かったのは頭部。
「単眼（モノアイ）なんて珍しいですね」
「デザインなんて、そんなものよ」
その声に、後ろを振り向くと、紅葉がいた。
「お帰り。無事でなにより」

「感謝します」美奈代達が一斉に敬礼した。
「やめなよ。無礼講でいい」
紅葉は手を軽く左右に振った。
「外見はゴツいけど、性能はかなりよ」
「へえ？」
「整備性の高さや、いろんな面で世界第一線の騎。メサイアなら何でも売る、あのマラネリが国外輸出禁止している程の隠れた名騎よ。ただ、もう退役が進んでるけどね」
「強いんですか？」
「騎士の腕にもよるけど、一応、これも精霊体搭載型だからね」
「へえ？」美奈代が感心したような声をあげた。
「精霊体搭載型なんて、採用している国が他にもあったんですね」
「整備の面からみれば、非効率だもん、嫌うのが普通よ。運用するにもかなりの技術がいるし……私でも、精霊体搭載型を運用できる国なんて、日本とマラネリの他なんて、すぐには思いつかないわ。
何より……」
紅葉の視線が、未だにハンガーベッドの最も奥に寝かされたままのメサイアに向かった。
そこにある白と青のツートンに塗り分けられた騎体の外見は、どこか美奈代達が見慣れたような、不思議な雰囲気を持つ。
「あれは？」
その存在に気付いたのは水城中尉が一番早かった。
「ベースフレームは“征龍（せいりゅう）”に類似しているようですが？」
「マラネリの最新型国王専用騎」
紅葉が答えた。

「ＲＳ－４“マデリーン”の名前が与えられている。ベースは“征龍（せいりゅう）”と共通だけど、まぁ、別進化したαタイプメサイアとも言えるから、似ていて当たり前」

「日本製なんですか？」

牧野中尉が驚いた様子で目を見張ったが、

「マラネリと日本は、αタイプメサイアに関してだけは技術交流があるから、類似性があってもおかしくないのよ。殿下がようやく組み上げて、お師匠様の酷評受けてる」

「酷評って……」

牧野中尉があきれ顔になったが、

「お師匠様は、褒め言葉さえ酷評にしか聞こえないの」

紅葉は楽しそうに言った。

「でも、言われた通りにしておけば、間違いはない。後で殿下慰めるのが大変だけどね」

「成る程？」

「これから先、運用テスト兼ねて、こいつも出るかもしれないから。泉大尉？仲良くしてあげてね」

「は？」

出たから代わってくれ。

美奈代は祷子に願い出たが、

牛丼特盛一年分。卵とみそ汁、サラダ付き。

その代価を支払うのを渋って結局断られた。

「祷子スペックで牛丼一年分なんて」

発艦した後、別れていく“Ｄ－ＳＥＥＤ”を見つめながらぼやいた。

「お店丸ごと買い取ったって足りませんよ」
「同感です」
牧野中尉も頷くしかない。
「モノには限度というものが……」
「何だか、バカにされた気もしますが」
「もしかしたら、相手は本気だったかもしれませんよ？」
「あいつ、食べ物には妙にシビアなんですよね……それでも」
「何です？」
牧野中尉に、美奈代は小声で言った。
「あいつ、私達同期の中で一番ウェスト細いんですよ？」
「本当に……」
牧野中尉が真顔で頷いた。
「あの細い腰のどこに消えてるんでしょうね。あの大量の食べ物……」
「鈴谷七不思議ってのがあったら、真っ先に掲載してもらいたいです」
「というか……私は、あの細さを維持する方法が知りたいです」
「本気で同意します……こら」
美奈代は、脇の辺りに潜り込んできた“さくら”に言った。
「何してるの？“さくら”」
「調べもの」
「こらっ！どこからメジャーなんて持ってきたの！やめなさいっ！」

●ドイツ軍陣地
「フォイルナー少佐」
携帯用の通信機に、デュミナスから通信が入った。
「日本軍騎、哨戒任務のため、上空を通過します」
「……わかった」

北米の青い空を、彼はまぶしそうに見上げた。

グンッ！

空気を切り裂く音だけを残して、白い騎体が大きく弧を描きながら遠ざかっていった。

「……」

フォイルナー少佐は、それをただ、無言で見送るだけ。

「ヴォルフ？」

横にいたブリュンヒルデが言った。

「別名あるまでは、本隊はここを動けないわ」

「補充があるまでは、大隊として機能出来ない。の間違いだ」

表情を変えずに、フォイルナー少佐はぶっきらぼうに答えた。

「長年かかって増やした４８騎だったが」

「これまでの戦いで、大隊戦力のほとんどを喪失したわ」

「グリックシュバインの名も地に墜ちたものだ……」

「無理もない――本気でそう言わせて」

ブリュンヒルデは片手に持ったＰＤＡを操作しながら言った。

「調べてみたら、東海岸戦線で、“あれ”相手に米軍もかなりの損害を」

「結果が全てだ。一方的なまでに叩かれた挙げ句、騎体大破以上２２騎。戦死２４名。重傷９名は、言い訳にはならん」

「……」

「ただ、指揮官として……いや、一人の騎士として言わせてもらえば」

フォイルナー少佐は、腰に手を当て、背筋をまっすぐ伸ばした。

「……“あの連中”、この先の戦いは、ノイシアでは勝てないということだ」

「それは、メサイアのこと？妖魔のこと？」

「両方だ」
「ですが」
ブリュンヒルデも頷くしかない。
「デュミナスを駆った私達ですら、あの体たらく。それを勘定に入れた上での発言かしら？」
「……悔しいか？」
「……」
「私は悔しい」
「……ヴォルフ」
「この無念を晴らさない事には、死んでも死にきれん」
「とはいえ、どうするの？騎体はない。騎士はいない。ないない尽くしの状況で」
「部下の前で弱音を吐くな」
「現実よ。私が言っているのは泣き言じゃない。
あなたと私はいつだって、こんな状況下で戦ってきた。
その都度、生きる道を見いだして来た。
今回はどうするの？
そう訊ねているだけ。それは間違っているの？」
ブリュンヒルデには、まっすぐに空を見つめる幼なじみが、何を考えているのかさえ、はっきりとはわからなかった。
何か、今までにないような、不安さえ感じてしまう。

今までとは違う。

それが、骨身に染みてわかってしまうのだ。

幼なじみと自分が、“狼”とまで呼ばれたかつてのアフリカ戦線。
そこでは、それでもノイシアで相手になる敵がいたのだ。
ところが――今度の戦場はどうだ？
この差は何だ？

彼等が進化したのか？
それとも――――

その答えを、ブリュンヒルデは知らされるのを恐れた。

ブリュンヒルデの言葉の中には、現実に対する恐れが含まれていた。

自分を、ノイシアを否定されるようで――――恐いのだ。

だからこそ、目の前の男に言って欲しい。

大丈夫だ。
その一言が欲しい。
昔のような、自信に満ちあふれた笑顔で、
心配するな。
そう、言ってくれさえすればいい。

ブリュンヒルデという“白狼”が求めるのは、伴侶たる“黒狼”によってのみもたらされる安堵なのだ。

ブリュンヒルデは、祈るように言葉を待った。

「……必要なら」
彼の口から、言葉が出てきたのが、恐ろしく長い時間を必要とした。
ブリュンヒルデには、そんな気がした。
「必要な力を、手に入れるだけだ」
「どうやって！？」
ブリュンヒルデが目を丸くしたのも無理はない。
騎士にとって、メサイアは国家から与えられるものであり、騎士

が造るものではない。
　ドイツ帝国軍でノイシア以外に配備しているのは、デュミナスだけ。
　祖国で最強を誇るはずの騎体。
　それでもデュミナスだというのに？
「魔法の鍋でも手に入れたの？ヴォルフ？」
「――イリス」
　フォイルナー少佐は、通信機でデュミナスに通信を開いた。
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の発進準備を進めろ。後の指揮は――よし。ヤツにやらせろ」
「あなた、一体？」
「日本軍の所に行く」
「はっ！？」
「マネリラの国王殿下が、あそこにいるんだ」
「それで……」
　歩き始めた幼なじみの背に書かれた思考を、ブリュンヒルデは読みとる事が出来た。
「まさか、あなた！」
「そう力をくれと、頼み込んでみるさ」
　口元に浮かんだ、その決意を、ブリュンヒルデは見逃さなかった。
“黒狼”の小さな、しかし、何者にも屈しない強い意志のあふれた笑み。
　ブリュンヒルデは、それを見ただけで、口元がゆるむのを抑えられない。
「――私も行くわ。あなたが行ったら、ハリボー一つもらえないで帰ることになるわ」
「よくも言う。昔はよく、小遣い握りしめて買いに行ったものだ。覚えているか？駅の隣の店」
「ヴォルフが悪さして、おばさんに店から叩き出されたのならね」
「……忘れていいぞ？」

「い・や」

●鈴谷艦橋

「今日は大入り満員ね」

“死天使”の着艦を見守りながら、美夜は苦く笑うしかない。

マネリラのメサイアが来たかと思えば、今度はドイツ軍だ。

「表敬訪問……だ、そうですが」

高木副長に軽く頷くと、艦長席のシートにもたれかかった。

ついさっき、艦橋へ乗り込んできたのは、フォイルナー少佐達。

理由は、医療部隊派遣に対する謝意となっているが、美夜はその本心を見抜いていた。

別に、断る理由もない。

責任者の津島中佐がダメとも行っていないし、何より、メサイア開発の世界的権威が集まった艦内だ。

今更、ドイツだけを拒む理由はない。

ただ、美夜個人としては……。

「フォイルナー少佐にクラッチマー中尉……懐かしい名前だわ」

「艦長は確か」

「アレキサンドリア防衛戦の時は、今は無き“鞍馬”のＣＩＣ長だった」

「……あれは名艦でしたな」

「オンボロで泣かされたわよ」

「自分が乗艦訓練に回された時、すでにベテランでしたからねぇ。懐かしい」

「あの二人と縁が深い真理達がここにいないことを、私は感謝すべきね」

「噂では聞いていますが……」
「ええ」
美夜は頷いた。
「“あの事件”は本当に起きたこと……気の毒に」
「二宮大佐が、ですか？」
「相手が、よ」

面白くない。
それが、エレナの正直な感想だった。
フォイルナー少佐に冷たくされ、ヘルガからは怒られ、それで面白いはずがない。
TAC（タクティカル・エア・カーゴ）に搭乗して、鈴谷に乗り込んだドイツ軍一行の中、小隊長の一人として参加を命じられても、嫌気しかなかった。
エレナにあるのは、ホテルのベッドでふて寝したい願望だけ。
布団を頭から被って眠ってしまいたい。
そう思う。
それに――
エレナは、ハンガーデッキに並ぶ見慣れない騎体を、その巨大な足下から見上げた。
「……何よ」
フォイルナー少佐達は、出迎えた日本軍の中佐に連れられて少し前を移動している。
エレナは周りを見回した。
はっきり、艦内はボロくて汚い。
ドイツ軍最新鋭艦の“ベルリン”級となんて、比較すること自体が失礼だとさえ思う。
「エレナ」
一行から遅れていたエレナに気付いたヘルガが、そっとエレナに近づくと、その腕をとった。
「ふてくされてないで。これも仕事よ？」
「別に！」
「日本軍の騎士達と挨拶がある。こんなところにいたら」
「別に少佐達の面子なんて知らない」
「ドイツ軍人、下手すればドイツ人の名折れよ？」

ヘルガが一息でそう言った言葉に、エレナは少しだけ、意外な顔をした。
「……随分、大きく出たわね」
「ここでいい顔しておきなさい。それより、エレナ」
何故か、ヘルガがそっとエレナに訊ねた。
「お金、持ってない？」
「は？」
「ドルでもいいと思うんだけど……」
「どうしたの？」
「どこかにＮＥＸがあると思うのよ」
艦内の売店、酒保のことだ。
「何？」
エレナが言いかけてハッとなった。
「始まっちゃった！？」
パカンッ！
「大声でとんでもないこと言うな！」

「――――何だ」
突然のことに、フォイルナー少佐達が一斉に立ち止まった。
「いえっ！」
頭を抱えてうずくまったエレナの前で、ヘルガが大声で答えた。
「シュヴァルツ中尉が、こんなメサイア、片手で潰してやると豪語したので！」
「言ってな――――っっっ！！」
ガンッ！
抗議しようとしたエレナの足を、ヘルガが力任せに踏んづけた。
顔面蒼白になったエレナの口からは言葉は出てこない。
「頼もしい限りだ。急げ。相手を待たせている」
「はっ」
敬礼しつつ、ヘルガは足を抱えて泣き出しているエレナに言った。

「足、ぶつけでもしたの？」

まだ子供。

ドイツ人のフォイルナー少佐でなくても、日本人、しかも、まだ未成年が中心の美奈代達は、そういう存在だった。

緊張気味に敬礼しているあたりは、訓練生がいいところだった。

しかも、ほぼ全員が女となれば尚更だ。

「まさか……ねぇ」

ブリュンヒルデも、端に整列して緊張気味にこっちを見ている美奈代達をチラリと見て、そっとフォイルナー少佐に言った。

「あんな子供達が」

「……年齢については言わないが」

フォイルナー少佐の視線は、目の前に立つ純白のメサイアに注がれている。

全く、美奈代達は眼中にない。

それは確かだ。

彼の中にあるのは、目の前のメサイアだけだ。

「これか……」

だめだ、こりゃ。

ハァッ。

すっかり、メサイアに心を奪われている幼なじみの態度に、失望のため息をついたブリュンヒルデは、肩をすくめた後、後藤に言った。

「少し、自由時間をいただけますか？部隊同士の交流というのもありますし」

「どうぞ？」

後藤は、なぜか視線を外して言った。

「もう既に、親睦深めている連中もいますし」
「えっ？」

「……驚いたな」
ハンガーのあちこちから、整備の手を休めた整備兵達が注目の視線を向けているのは、フォイルナー少佐と、そしてもう一人。イリスだ。
「“青の姫”のご来艦とは」
ハンガーのかなりが一望できる場所に立つ坂城もまた、その中の一人だったが、
「いやぁ」
感に堪えない。と言わんばかりの弟子の一人、加藤がカメラを構えながら滝のような涙を流していた。
ちなみに、口からはよだれが出ている。
どうでもいいことだが……事実だ。
「さっすがに、イリスたんはカワイイッ！」
モーターも壊れろとばかりにシャッターを切りまくるのは、何も加藤ばかりじゃない。
メサイアに張り付いている整備兵達も、作業をするフリをしつつ、こっそりと携帯電話やデジカメのシャッターチャンスを狙っている奴らばかりだ。
普段なら殴り倒している部下の振る舞いを看過してなお、坂城はじっと目の前の光景を見つめている。
「……見事としか言い様がないな」
目の前には、メサイアの爪先に座ったイリスの周囲には、メサイアから出てきた“さくら”達精霊体達が取り巻いている。
イリスは、そんな精霊体達を楽しげにあやし続けている。
「白雪姫と七人の小人――ってトコか？」
「または、精霊体達が、格好の遊び相手を見つけたか」と、シゲは

楽しげに笑ったが、
「バカ言え」と、坂城はニベもない。
「精霊体が、初対面の部外者相手にあそこまで親密な反応しめしたことがあるか？」
「ああ……そう言えば」
シゲはそこで首を傾げた。
「コクピット公開すると、精霊体が外出てこないとか」
「あいつらはネコや犬と同じだ。顔の知れた相手以外に、吠えたり逃げることはあっても、親密な顔することたぁねぇ。
ましてや、数分前に出会った相手なんて論外だ。
飼い主っていう、“絶対に安心できる存在”が近くにいてこそ、初めて見ず知らずの他人でも相手にしてやるって位、気位の高い連中だぞ？」
「……まさか、いくら“青の姫”なんて呼ばれる美少女だからって」
「見てくれで寄ってくるのは、そこらにいるバカ共だ。あの娘、精霊使いって噂、本当らしいな」
「つーことは」
シゲの視線が、ハンガーの奥に固定されている殲龍（せんりゅう）にむいた。
「あの子、殲龍（せんりゅう）使えるかもしれませんね」
「可能性だがな……精霊体調律師……の方じゃねぇか？なんとなく、立花に似てる気が」
「そいつぁ……」
シゲが苦々しいという顔で言った。
「周りで“イリスタンハァハァ”やってるバカどもの前じゃ、言わないことですぜ？親父っさん」
「そうか……」
「身のためです」
「……おい、シゲ」
「へい？」
「仕事中にそこらでカメラ構えてるバカ含めて、今晩は全員、メシ

抜きだ」
「そんなぁっ！」

「……失礼」
勝手に隊を離れたイリスを処罰することを忘れて尚、ブリュンヒルデが知りたいことは一つ。
目の前、つまり、イリスの周りの事だ。

「はい？」
ブリュンヒルデの横で、後藤がなんでもない。という顔で答えた。
「何か？」

「現在、鈴谷は難民を収容しているのですか？」

「いんや？」
後藤は首を横に振った。
「何です？難民って」

「いえ、ですから、そこにいる年端もいかない子供達。というか、こんな子供をハンガーデッキで遊ばせておくなんて！」

ブリュンヒルデが目を剥いたのも無理はない。
イリスの周囲では、（ブリュンヒルデの眼から見れば）、幼稚園児位の幼い女の子達が遊んでいる。
もし、ここがベルリンの公園というなら、これはブリュンヒルデは眼を細めた良い光景だろうが、ここは危険物に満ちあふれた軍艦のハンガーデッキだ。
メサイアという兵器が置かれ、工具や大小の機械がうなり声をあ

げている。
　床には油染みがあり、高電圧のケーブルが無造作に這わされている。
　とても、子供どころか、部外者がいて良い所ではない。

「日本軍の規律はどうなっているかって？」
「わかっていらっしゃるなら！」
　その声で、精霊体達も、ようやくブリュンヒルデ達に気付いたらしい。
　一斉にイリスの背後に隠れてしまった。
　子供に逃げられたことに、一瞬だけブリュンヒルデは心証を悪くした。
「でもね？中尉」
　ほらほら。恐くないって。
　後藤のおじさんだよ？
　この前、おじさんからお菓子もらったろう？
　そう、精霊体達をあやそうとしながら、後藤が楽しそうに笑った。
「こいつらは、特別なんですわ」
「子供に特別？何ですか？整備兵の子供だとでも？」
「いやいや」
　後藤はわざとらしく首を左右に振った。
「こいつらは――人間ですらありませんから」

　キャーッ！
　カワイイッッッ！！
　ドイツ軍ＭＣ（メサイア・コントローラー）や女性騎士達の黄色い声がハンガーデッキ一杯に広がる中、ブリュンヒルデはようやく納得が出来た。

精霊体。

ほとんど名前しか知らなかった存在が、こんな女の子達だと知らされたブリュンヒルデはすっかり毒気を抜かれていた。

「精霊なんて言うから」

その膝の上に“十六夜”がちょこん。と乗ってブリュンヒルデにあやされている。

「もっとこう、妖怪じみたの想像していたわ」

「可愛いですよねぇ」

イリスが“さくら”と遊びながらうっとりした顔で、ポツリと呟いた。

「こういう子達なら」

「こういう子達なら？」

ほんのりと頬を赤くしながら、イリスはブリュンヒルデが想像さえ出来なかったことを口走った。

「――産んでみたいなぁって」

「う！？」

ブリュンヒルデの眼が点になった。

「う……産む？」

「はい」

イリスは、何でもない。と言う顔で頷いた。

「やっぱり、赤ちゃんって欲しいじゃないですか。女として」

「……そ、そうね」

ブリュンヒルデは内心で愕然となった。

赤ん坊を産む。

女の幸せ。

一般の多くで、そう言われる行為。

それが――

ブリュンヒルデは、今まで、自分が子供を産む事なんて考えもしなかった。

子供なんて、他人事だとばかりそう思っていた。

しかも、他人が子供を産めば、お祝いだなんだので出費がかさんで迷惑だとさえ感じたことがある。

それで普通だと思っていたのに。

ところが、イリスのような子供でさえ、自分で子供を産むことを考えている。

それが、信じられない。

果たして、イリスと同い年の頃、自分は子供が欲しいなんて思っていただろうか？

自問すらしたくない。

とても自信がないから。

だから、

「クラッチマー中尉は、欲しくないんですか？」

そう聞かれると、とても困る。

「え？わ、私っ！？」

「はい。赤ちゃん。欲しくないんですか？」

「え、えっと……その……」

「バカね。イリス」

ブリュンヒルデ騎のMC（メサイア・コントローラー）、アーデルハイト少尉が精霊体の“紗々（しゃしゃ）”を抱っこしながら言った。

「産む気満々に決まってるでしょ？単に、中尉は少佐からの種つけ待ってるだけよ」
「種付けって？」
「もう……ネンネなんだからぁ。いい？赤ちゃん作る時は、男と」
「少尉っ！」
ブリュンヒルデの慌てた声がアーデルハイトの声を遮った。
「子供の前で！」
「はいはい……でも中尉？」
アーデルハイトは、ネコのように紗々（しゃしゃ）の喉を撫でながら言った。
「ホント、もうギリギリなんですから、そろそろ本気で考えた方がいいですよ？私みたいに遅くなってからの初産って、かなりキツいんですよ？」

「畏れ多くも戦友サマの御御足（おみあし）に何てことするのよっ！」
「悪かったわよ」
涙ながらに抗議するエレナに、ヘルガは鬱陶しいという顔で言った。
「それにしても、足が痛い程度で泣かないでよね」
「骨にヒビ入ったのよ！？」
「魔導師の先生からもう大丈夫って言われたでしょ？」
医務室からの帰り道。
ヘルガは、通路に張り付けられていた艦内案内をジッと眺めた後、言った。
「こっちか……エレナ。ちょっとつきあって」
「どこへ？」
「ＮＥＸ。カードが使えればいいけど。何よ、貴族サマなんだから、現ナマくらい束で持ち歩きなさいよ」

「何、横暴過ぎること言ってるのよ！」
ギャアギャアわめくエレナを無視してヘルガが入ったのは、鈴谷艦内の売店。
突然、ドイツ人が入ってきたことに、皆の視線が集まる中、ヘルガは売店のおばちゃんの前にツカツカと近寄ると、どこからか一枚のカードを執りだした。
「それ、私のカード！」
そのエレナの悲鳴は無視して、カードをちらつかせながら、日本語で訊ねた。
「カード、使えます？」

みんな薄情者だ。
本気で美奈代がそう思ったのも無理はない。
全員整列していたのに、紅葉から騎体の説明に“誰か”つきあいなさい。
そう言われた次の瞬間。
周りを振り向いてみたら、誰もいなくなっていた。
あの月城大尉でさえ、今どこにいるかわからない。

そんな状況で、仕方なしに紅葉につきあうハメになった美奈代の前には、フォイルナー少佐がいた。
ドイツ軍側の騎士達は、メサイアの間を散策したり、整備兵が用意した休憩スペースでコーヒーを飲んだりしている。
そういえば、砲兵陣地の方。
月城大尉達の交代は、寧々と山崎達だったな。
でも、何でドイツ軍が来る前に、風間を山崎達の所に向かわせたんだろう。

しかも、特別配給のどんぶり飯引換券なんていう、貴重品を惜しげもなく与えてまで。
大体、謎が多すぎるぞ。
あの娘は。
そんなことをぼんやりと考える美奈代には、フォイルナー少佐と紅葉がどんな事を話し合っているのか、全く耳に入ってこない。
途中で、少年王やフェルミ博士まで加わったが、美奈代にとってはどうでもいいことだ。
一介のパイロットに、こんな世界の重鎮ドノの会話が理解出来るはずもないし、理解したところで意味はない。
聞かれたら、適当に答えればいい。
私より軍事やメサイアに詳しい連中に、何を言えと？
そう思う。
本音を言えば、世界の趨勢より、お昼ご飯の中身の方が、美奈代にとっては重要なのだ。

「――成る程ね」
紅葉は苦笑いして頷いた。
「デュミナスではご不満ってことね。殿下？」

「今の申し出は納得出来ない」
少年王は、憮然とした顔で言った。
「デュミナスの交戦回数は、まだ数回だ。騎体に障害があったわけでもないのに、性能不足のような不満を表明されるのは困る」
その顔は、決してフォイルナー少佐に対して友好的ではない。
殿下の逆鱗に触れることは、フォイルナー少佐も覚悟の上だった。

曰く。
中華帝国軍の最新鋭メサイアに最初、性能的についていくことが出来なかった。

騎士としての力量がなければ、デュミナスでも圧倒されたはずだ。
性能不足を騎士の腕でフォローするにも限界がある。

「僕が正しく設計し、マラネリは完璧に騎体を組み上げた。そして君は満足したといって持っていったんだ。中華帝国軍の最新鋭メサイアは元来、仮想敵にさえなっていない。」

それが、開発者である殿下には面白くさえない。

「つまり、こちらに問題があるとは思えない。それを、騎体に不満があるかの如き物言いをされるのは、不愉快どころじゃない。こちらはドイツ政府とビジネスでやらせてもらってるんだ。黒狼として、騎体の不備を指摘してくれる段階はすでに終わっている。一介の騎士として、国王でもある僕の設計にケチをつけているのか？」

「――申し訳ありません」

フォイルナー少佐は、言葉を選びながら言った。

「しかし」

「殿下」

フェルミ博士が言った。

「少佐の言い分もわかる」

「はっ？」

ムッとした顔の少年王が、フェルミ博士を半ば睨むような顔になった。

「それは？」

「他人の芝は青く見えるものというではないか――紅葉」

「はい？」

突然、師匠から声をかけられた紅葉はびっくりした声で答えた。

「私ですか？」

「――――少佐を“死天使”に乗せてやるといい」

「し、“死天使”に！？」

「それと、“白雷（はくらい）”にも。望むなら、数名、同じ経験をさせてもいいだろう。精霊体搭載型メサイア、その中でも私さえ認める極上騎がどれ程の代物かを味わってみるといい」

フェルミ博士は、意味ありげに微笑んだ。

「メサイアの力の意味を、正しく理解しているなら、自ずから答えが出るだろう」

「そんな！」

目を見張ったのは、紅葉達だ。

「何」

フェルミ博士はニヤリと笑った。

それだけで二人は黙る。

この笑い方が、紅葉と少年王をいつもいつも、心底震え上がらせる。

この笑顔の元出される指示は、二人にとっては絶対的な命令なのだ。

逆らうことは――――ＤＮＡレベルで出来ることではない。

二人は、“神”の命令を待った。

「紅葉は、コクピットの調整を急ぐように。殿下も手伝いなさい――――少佐？」

「はっ」

「選択肢は二つだ」

フェルミ博士は、指を二本、Vの字に突き出した。

「一つは、精霊体付きエンジンの凶暴ぶりを前に逃げ出すか。それとも使いこなすかだ」

「……勝つか。負けるか……ですか」

「死ぬか生きるか。それくらいの気概を持ちたまえ」

フェルミ博士は不愉快そうに言った。

「メサイアは子供の玩具ではない。訓練生の心構えの初歩の初歩を、私に言わせるつもりか？」

「……失礼いたしました」

「……まぁ、よい」

クックックッ。

喉で笑いながら、ポンッとフェルミ博士は、フォイルナー少佐の肩を叩いた。

「未知の世界を歩む今、君もまだ新兵とみなされるべきだろう。いいか、少佐。世界はいつだって広く、そして残酷だ。人はそれを忘れるだけだ」

「イヤですっ！」

「うるさいっ！」

“死天使”のコクピットが引き出され、美奈代が泣きそうになりながら紅葉に縋り付く。

「私、コクピットに他人、しかもオトコに入られるなんて！」

「あれは陛下のモノ！アンタの所有物じゃないって言ってるでしょ！？」
「使ってるのは私ですっ！」
「もう黙れっ！」
ガンッ！
スパナが振り下ろされ、美奈代はついに動かなくなった。
「ったく……私がお師匠様に怒られたらどうしてくれるのよ……」
あ。曲がっちゃった。
これお気に入りだったのに……この石頭。
ぶつくさイイながら、スパナをポケットに戻した紅葉は、目の前であきれ顔を浮かべるフォイルナー少佐と後藤に言った。
「もう少し待っていて？コクピット調整するから」

「……失礼ですが」
困惑を浮かべながらフォイルナー少佐は後藤に訊ねた。
「はい？」
「やはり、迷惑でしたか？」
「そりゃ」後藤は肩をすくめた。
「泉も女ですからね。女騎士ってのは、異性にコクピットに入られることにゃ、存外と嫌悪感を持つそうで」
「……私は男性ですので」
「俺だってそうですよ。ま、壊さないでくださいね？修理代はベルリンの日本大使館経由ってことになりますから」
「……努力しましょう。ところで」
「はい？」
「あの泉大尉というのは？」
「――ああ」
後藤はポンッと手を叩いた。

「何。ウチのヘッポコの代表格で」
「……」
「そう……ですね」
ホント、冗談通じねぇオトコだな。
内心で舌打ちした後藤は、視線を泳がせてから言った。
「ちょっと、人類最強レベルのメサイア使いって程度のヤツです」
「人類……最強？」
「俺から言わせりゃ、最も狂ってるって書きますけどね」
「具体的に」
「一部諜報機関では、“白い悪魔”と魔族軍からも恐れられる女」
「……」
フォイルナー少佐の眼が見開かれたのを、後藤は確かに見た。
「この“死天使”は、あいつ専用騎です。こいつぁね？あんたにゃ失礼ですけど」
後藤は、ポリポリと頭を掻いた。
「かなり、騎士とMC（メサイア・コントローラー）を選ぶんですよ。何しろ、精霊体積んでますから」
「……」
「乗りこなす自信が？」
「やってみせましょう」
フォイルナー少佐は固い顔のまま頷いた。
しかし、その眼は子供のように輝いているのを、後藤は確かに見た。
「私が――――新たな世界を見るために」

それより少し前。
「ったく、ふざけんじゃないわよ」
憮然として売店を出て来たのはエレナだ。
ヘルガが何を買うかと思えば、レーションだ。

日本軍のレーションが余程気に入ったらしく、カードで買いあさりたいというのがヘルガの狙いだったのだ。
目当ての“カンメシ”という、缶詰を前にしてヘルガは歓声を上げていた程だ。
売店のおばちゃんがドイツ軍のと交換してあげると言われ、ヘルガはどこかへ消えていったが、もう知った事じゃない。
缶詰の入った箱を運べなんて言われる前に逃げるに限る。
「あれ？」
慣れない無重力環境下を移動している間に、エレナは角を間違えたらしい。
何度も迷いながら、やっとハンガーデッキに出た。
「……あっ」
ハンガーデッキの一角。
そこに並ぶのは、2騎のメサイア。
“白雷改”。
共に、分厚い装甲に肩部には巨大な砲を抱えている。
「……」
エレナの目を奪ったのは、騎体ではない。
その砲の巨大さだ。
「何よ……これ」
こんな大型砲、見たことがない。
エレナは唖然として砲を見上げるしかない。
こんな大口径の砲なんて、メサイアに装備して撃ったら反動でとんでもないことになる。
一体、日本軍は何を考えて？
ううん？
エレナは首を左右に振った。
違う。
ここで問題とするべきは、この砲の構造だ。
どうやって反動を軽減しているの？

ダンパー？
それより前に、口径は？

タンッ

エレナは、無意識のうちに床を蹴っていた。

「あれ？」
それを見つけたのは、芳（かおる）の方が早かった。
丁度、二人で照準調整をやることになっていた矢先のことだった。
「涼の騎に、ドイツ軍の人がいる」
「え？あ、本当だ……でも」
涼は首を傾げた。
ドイツ軍の女性騎士らしいが、気にしているのは騎体じゃない。
ＨＭＣの方だ。
「……何してるんだろう」
「行ってみる？」
「うん」
二人は床を蹴った。

「スゴい……口径何インチよ……これ」
エレナは巨大な砲を、熱心になで回した。
「砲弾は一発ごと……違う。ベルトリンクによる連装式ね？騎体背面にラックがあって……でも」
エレナは点検用ハッチを勝手に開いた。
「こんな大口径砲、ぶっ放したら肩吹っ飛ぶわ……無反動砲なの？でも、そんなバカな」

「あのぉ……」
「ひゃっ！？」
突然、背後から声をかけられて飛び上がったエレナが、したたかに後頭部をぶつけたのは、勝手に開けた点検ハッチの中に顔を突っ込んでいた時だ。

ゴンッ！

……清々しい程、いい音が響き渡った。

「だ、大丈夫ですか！？」
頭を抱えてハッチから顔を引き抜いたドイツ軍女性騎士に代わって、何故か涼がハッチに顔を突っ込んだ。
「涼……心配するのは騎士さんの方。ＨＭＣの方じゃないよ……」

ポカン。

もし、“死天使”のMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）のシートに座った感想をイリスに訊ねたら、そんな表現が一番お似合いだろう。

「大丈夫ですか？」

全く動かないイリスの顔を、牧野中尉が心配そうにのぞき込む。

「えっ？」

それで現実に引き戻されたのか。イリスはシートの上で小さく飛び跳ねた。

「す、すみません。あの……」

イリスは赤面しながら、ポツリと言った。

「こんなスゴいインターフェース、初めてなので……」

コントローラーシステムをそっとなでる指がはれ物に触れるように震えている。

スゴイ。

それが、イリスの本音だった。

ノイシアと比較すれば、あの子があまりに気の毒だ。

デュミナスでも、この子を経験した後では物足りないにも程がある。

インペリアル・ドラゴン・シリーズは、世界でも謎の多い騎とされるけど、これなら納得出来る。

世界的技術大国、大日本帝国。

その魔法科学技術の粋が一つに濃縮され、光り輝く場所。

それが、このMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）なのだと、MC（メサイア・コントローラー）なら、イリスでなくても、誰でもそう実感出来るだろう。

その実感たるや、皇帝の大聖堂。あの礼拝堂で神に祈るような荘

厳ささえ感じてしまい、イリスは背筋を振るえを抑えることが出来ない。
「基本は一緒です」
牧野中尉は、微笑みながら言った。
「難しく考える必要はありませんよ？万一の場合は」
牧野中尉は、自分の横で嬉しそうにイリスを眺めている“さくら”の襟首を掴んだ。
「“この子”もいます。ね？“さくら”？」
「……ママぁ」
襟首を掴まれ、猫のように宙ぶらりんになった“さくら”は、不服そうに頬を膨らませた。
「どうして、私をつまみ上げるの？」
「この前、私と再会したら心底イヤそうにしていた罪です。私とタルバッハ少尉に対する態度の違いは何ですか？タルバッハ少尉が来た時は、飛び出して行くわ、抱きつくわ」
「だって」
「だって？」
「おっかないママと違って、お姉ちゃんは優しいもん」
キョトン。とするイリスの前で、牧野中尉の笑みが凍り付いた。
「タルバッハ少尉」
「はい？」
「ちょっと――お待ちくださいね？」
牧野中尉は、“さくら”と共にＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の外に消えた。
その途端――

テメェ、言いやがったな！？
バッチン！
バッチン！
ニ〝ャアアアアッッッ！！

MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）の外から、そんな音達が響いた後、

「――お待たせいたしました」

“さくら”の細い首をわしづかみにした牧野中尉が、笑みを浮かべたままでMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）へ戻ってきた。

小さな頭と同じくらいのでっかいタンコブを作った“さくら”は目を回していた。

「……あ、あの」

つられるように、引きつった笑みを浮かべるイリスに、

「ああ、心配しないでください」

牧野中尉は“さくら”を揺すりながら言った。

「精霊体は子供やケモノと一緒。躾（しつけ）が肝心なんです」

「は……はぁ」

「私達、近衛のMC（メサイア・コントローラー）の一番大切な任務は、精霊体（このバカども）に、世界共通の掟と仁義を叩き込むことです。それこそ、子宮と腸の奥の奥まで」

「は……はぁ」

それ、どう考えても虐待じゃ……。

その言葉は、喉の中でスポイルした。

下手なとばっちりは、さすがのイリスでも御免被る。

“死天使”は、他の騎と比べてもパワーが段違いな分、コントロールには細心の注意が必要です。特に、騎士が慣れていない場合、無意識にもレッドゾーンまで平気で叩き込む恐れが」

牧野中尉から受ける事前注意を、膝上のメモに書き込みながら、それでもイリスの神経は、どこか興奮していた。

最新鋭騎を与えられて興奮するのは、騎士だけじゃない。

私達、MC（メサイア・コントローラー）もだ。

この子の限界を引き出してみたい。

世界を破壊する、この子の力を目の当たりにしてみたい！

ペンを走らせながらも、はやる心を抑えるのが精一杯だ。

同じ頃。

「……何よ。これ」

背丈が一緒だから、調整が楽。

そういう理由で涼騎のコクピットに入ったエレナは、あきれ顔で腕を突っ込んだSTRシステムを眺めるしかなかった。

エレナが驚くのも無理はない。

信じられないほど軽いのだ。

訓練生の頃、初めて操縦したノイシアの操縦システム。

その重さは今でも体が覚えている。

翌日から腕が動かない程の筋肉痛に襲われた身であり、そしてその重さと格闘する日々を送る身からすれば、この軽さは嘘のようだ。

あれと比較したら、何も着けていないのと同じ。

本当に、そんな感じだ。

「体のちょっとした動きでも、この軽さなら……」

「結構、敏感だから注意してくださいね？」

コクピットの入り口から顔をのぞかせる涼が言った。

「他国のシステムと違って恐ろしく軽い分、ちょっとした動きでも、ダイレクトに反映されますから」

「……了解」

エレナは、緊張気味に頷いた。

「砲は、さっきレクチャー受けた通りね？」

「はい。万一に備えて、芳（かおる）が立ち会いますので。何かあったら彼女に聞いて下さい」

「わかった。起動するから離れて」

「はい」

涼がコクピットから顔を引っ込めたのを確かめたエレナは、コクピットハッチを閉めた。

機動シークエンスそのものはノイシアとほとんど変わらない。

ロジックモードを共通語に切り替えてもらっているし、感覚で機動は出来る。
それにしても――
「……」
チラリとMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）の様子を見る。
カンメシをTAC（タクティカル・エア・カーゴ）に運び込んでいる所を、エレナに捕まえられた挙げ句、問答無用で叩き込まれたヘルガもまた、興奮した様子でMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）を眺めている。
目を輝かせると、ヘルガは本当にまだ少女を失っていないなと、そう思う。
恐ろしく解像度の高いスクリーンを眺め、外部通信装置がオフになっているのを確かめたエレナは、
ハアッ。
深いため息一つをつくと、愕然とした顔で周囲を見回した。
その顔は、興奮で真っ赤だ。
「スゴいよこれっ！」

「――あ、動いた。涼？」
さすがに慣れないのだろうか。
恐ろしくぎこちない動きをする涼騎を見守りながら、芳（かおる）が涼に訊ねた。
「何よ」
少し離れた場所で、ヘッドレシーバーを付けた涼が応じた。
その周囲では、ドイツ騎士達が面白そうに見物している。
通信モニター上のエレナとヘルガは、共にやや緊張気味だ。
「どうしたの？」
「……騎体、他人に任せて心配じゃないかなぁって」
「そりゃね」
涼は複雑そうな顔で頷いた。

「でも、後藤隊長の命令だし、点検にでも出したと思うことにする」
「現実主義的だねぇ」
「つーかさ。アンタが特Sサイズなんだから、お鉢が私に回ってきただけじゃない」
「……それは言わないでよ」
口を尖らせる芳（かおる）の前で涼騎がハンガーの外へ出る。
あまりに小さくて、普通のコクピットに入れない芳（かおる）用のコクピットユニットは、2メートル近い山崎の特Xサイズの正反対。
共通するのは共に特注規格だということだ。
「こちら川崎」
芳騎（かおる）のMC（メサイア・コントローラー）、川崎美由紀中尉が通信モニターに割り込んできた。
「小清水騎は安全のためカタパルト使用禁止。甲板から自律発艦します。本騎もその後に続きます。機動開始を宣言」
「了解。ハンガーデッキ・コントロール。こちら平野騎。ハンガーロック解除を申請――あら？」
美由紀の視界の端で、“死天使”が動き始めた。

ううっ。
頭に氷嚢を乗せながら、一連の眺めを見守るのは美奈代だ。
あんまりだ。
美奈代は動き出した愛騎を眺めながら、涙を堪えるのがやっとだ。
あれは――私のだ。
「心配しなさんな」
後藤がポンッと肩に手を置いた。
「相手は黒狼と言われた英雄。二宮さんと肩を並べた相手だ」
「それでも」
「何が不満なのよ。あんだけ毎日消臭剤ぶちまけておきながら」
「男性には分かりません」
「あ？もしかして、今」

「――セクハラですよ」
「ああ言えばこう言うんだから……やれやれ。反抗期の娘を持った父親は辛いよ」
美奈代が何か言い返そうとした時だ。
「失礼」
二人に近づいてきたのは、ブリュンヒルデだった。
「……あの」
「はい？」
「何騎か、お借りできますか？」
「……ああ」
後藤はポリポリと頭を掻くと、しげしげとブリュンヒルデを頭のてっぺんから、爪先ので舐めるように眺めると、
「オヤジさん」
近くで月城大尉と話こんでいた坂城に声をかけた。
「月城大尉の騎体、貸してあげてください。お相手は」
そろ～っ。
何故か逃げだそうとした美奈代の襟首を後藤の手ががっちりと掴んだ。
「こらこら」
「あとは宗像騎だけです！」
「十六夜ちゃんとブリュンヒルデ中尉の相性はよさげだったし、体格もほとんど変わらない。それなら調整も早いでしょ？」
「私と宗像じゃ――ムガッ！？」
ブチュゥゥッ！
そんな効果音が入りそうな勢いで、宗像が美奈代の唇を塞いだ。
無論――自らの唇で。
「……まぁ」
後藤が“やっちゃったよ、おい”と呟いたのは、唖然とするブリュンヒルデの耳にも届いた。

「自分を卑下するな。私はいつだってお前の味方。お口の、いや、三つの穴の恋人と表現してもいい」
「人の人格、ここまで破壊するようなマネしておいて、よくもそんな事言えるな！」
「なんだ――これ以上は公開プレイだぞ？私でもさすがに恥ずかしい」
「清々しく言わないでくれ……グスッ……涼っ！散弾銃をコクピットに戻せっ！」

「……随分と」
ブリュンヒルデは、本気で言葉を詰まらせた後、やっとのことで言った。
「フリーダムな部隊なのですね」

「まぁ、奇人と変人と病人で編成されるのが近衛の騎士部隊ですから」
後藤はため息まじりに目の前で繰り広げられる部下達のやりとりを眺めながらぼやく。
「親としちゃ、たまったもんじゃありませんよ」

「――心中、お察しいたします」

「どうも……ほらほら。やめないと、給料下がるよ？とにかく、お前がやるのが礼儀だ」
後藤は言った。
「ブリュンヒルデ・クラッチマー中尉といえば、アレキサンドリアの七英雄の一人。お前ね。こうやって面と向かって出会えるだけで名誉なのよ？それを何。同僚とキスはするわ、痴情の縺れのあげく、凶状の一歩手前を演じるわ」

「それって、わ、私のせいですか！？」
「部隊の不祥事は、前線指揮官のお前の責任」
「……あ、あんまり」
「泣きたいのは俺の方だよ。とにかく、お前は部隊の中で、一番にお相手するのが礼儀の立場だろうが」
「グスッ……意味がわかりません」
美奈代は滝のような涙を流しながら文句を言うのが精一杯だ。
「世界最高スコアの持ち主とか、そういう意味じゃない」
後藤は諭すように言った。
「お前が長女だろうが」
「は？」
「中尉？」
後藤はブリュンヒルデに言った。
「こいつはね？“あの人”の秘蔵娘。自慢の娘とも言いますな」
「……？」
ブリュンヒルデは端正な眉をひそめた。
「失礼。私は日本人に知り合いは」
「いるでしょう？」
後藤はニヤリと笑った。
“黒狼”誕生前から“白狼”の名を恣にしていたクラッチマー“少佐”殿に、決闘なんて前近代的なマネをさせた、とんでもないの

が」

「……」

「えっ？」

美奈代の前で、ブリュンヒルデの眼が見開かれた。

驚愕。

まさに今のブリュンヒルデに浮かぶ表情は、それで表現できる。

「――失礼」

コホン。

ブリュンヒルデは、数回、深呼吸して呼吸を整えてから、真顔で後藤に訊ねた。

“あの女”は、一体、いくつで出産を？」

「――ああ」

後藤は笑って首を左右に振った。

「失礼？教え子って意味ですよ。彼女は確か、同い年でしょう？」

「私の方が1つ年上です」

「単なる教え子。それは肩書きのこと。“彼女”にとって、こいつらは可愛い娘ですよ」

後藤は自信満々に言った。

「特に目の前の泉は、世界最高スコアの持ち主にまでなった娘ですからね」

「……」

ブリュンヒルデの顔が、真顔というか、何だか恐い色を持ち始めたことを、美奈代は強く察知した。

「――泉？」

「は、はい？」

逃げよう。

そう思った美奈代の腰。正確にはベルトを後藤は後ろから離そうとしない。

「母親のメンツ潰すな」

後藤はその耳元で言った。

「二宮さんの長女として、しっかりお相手なさいな。模擬戦のお相手は、泉でいいですね？中尉」

「ええ」

ブリュンヒルデは真剣な顔に、怒りさえ浮かべて頷いた。

「あの女の娘なら、申し分ありません」

「――失礼ですが」

あの女。

二宮をそう呼ばれた美奈代は、カチンと来た。

「自分は二宮教官と貴官の過去を知りません。ですが、他国の騎士に対して、もう少し表現というものが」

「――まぁ、失礼」

ブリュンヒルデは、優雅に微笑むと、軽く敬礼の仕草を見せた。

「私、これでも精一杯の敬意を表してるんですのよ？あの売女に対して」

ブリュンヒルデと美奈代が凶状の一歩手前を演じるかの瀬戸際の頃。

カタパルトから発艦した“死天使”のコクピットで、フォイルナー少佐は不思議な感覚を覚えていた。

何だ？

その問いかけに、自分自身が答えられない。

体を熱い何かが駆けめぐっている。

体が震えている。

歓喜以上の何かが、体からわき上がっている。

「……これは」

「ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）よりフォイルナー少佐」

イリスから、遠慮がちな通信が入った。

「大丈夫ですか？」

「ん？」

「バイタルが高い興奮値を示していますが」

「……」

「お加減が優れませんか？」

「……いや」

イリスがびっくりしたほど、その声は澄みきっていた。

そして――

クックックッ

「？」

通信装置に入った、奇妙な音の後、通信装置一杯に響いたのは、

「し、少佐？」

イリスも驚いたほどの、フォイルナー少佐自身の笑い声だった。

「成る程――そういうことか！」

通信モニターの向こう。

イリスの目の前のフォイルナー少佐は、楽しげに、本当に嬉しそうに何度も頷くと――

「きゃっ！？」

あまりのことに驚くイリスを後目に、“死天使”を急激な戦闘機動に移した。

そうだ。

“死天使”をコントロールするフォイルナー少佐は、どこまでも広がる大地に、抜けるような蒼天の大空に――――世界の全てに感激の雄叫びをあげたかった。

少佐に何が起きたか？

簡単だ。

昔を、思い出したのだ。

生まれて初めてメサイアを操縦し、そして、その強さに直に接することが出来た、若かかった、昔を。

メサイアのパワーを己のものとし、思うように空を舞い、大地を蹴る。

その興奮は、味わったものでなければ想像さえ難しい。

だが、味わえばすぐにわかる。

世界を手に掴んだような感覚。

それがメサイア使いの醍醐味だ。

「俺は世界の王者だ！」

それに初めて触れた時、興奮のあまり、通信装置一杯に叫んで、後で指導教官にしこたま殴られたが、あの頃は、その痛みさえ興奮が忘れさせてくれた――――。

メサイアに乗れば、全てが許された。
自分にも、そんな頃があったのだ。
あれから――何年だ？
ちょっと、ほろ苦さえ覚えさせてくれた思いに、フォイルナー少佐の口元がゆるむ。

“死天使”は、直進しながらロールをかけるエルロン・ロールから、４５度バンクし、そのまま斜めに上方宙返りし速度を高度に変えるシャンデルへ、縦横無尽に空を舞う。

大地に強行着陸し、斬艦刀を抜刀。
その辺にあった大木を、一瞬でなぎ払った。
その機動のキレの鋭さは、黒狼の異名を持つ者として相応しい。
「申し分ないが……イリス？」
「はい」
「データは」
「完全にロックされています」
イリスは、はっきりと答えた。
「日本軍も、ただでこんな最新鋭のデータは与えてくれません」
「――そうか」

北米戦線編　第二十五話（後書き）

さてさて……。ここから書き換えます。

「面白いじゃない」
顔を真っ赤にした美奈代が、宗像騎のコクピットに潜り込んだ。
「二宮教官を売女呼ばわりするなんて」

「泉」
月城大尉が美奈代の肩を掴んだ。
「落ち着け。相手はお前を挑発しているんだ。わからないのか」

「――わかっています」
美奈代は作業を止めることなくふてくされた顔で言った。
「わかった上で、私はあいつをぶちのめしてやりたいんです」

「だが……」
月城大尉もまた、二宮にとっては教え子だ。
尊敬する“親”である二宮を侮辱されて黙っていられないのは同じだ。
だが、相手は二宮と因縁の仲であることを知っているし、何より他国の軍人であり、世界的に知れた“英雄”であるブリュンヒルデ・クラッチマー中尉と、ここでもめ事を起こすことがどんな意味を持つか。月城は社会人の一人として考えたくさえない。

「ご心配なく」
美奈代は言った。
「騎体はそんなに壊しませんから。ハッチ、閉めますよ？」

「えっ？」
コクピットハッチが閉まる直前、美奈代にそう言われた月城大尉

は、美奈代が勘違いしていることにようやく気付いた。
自分は、ブリュンヒルデ・クラッチマー中尉とのケンカを止めたいだけだ。
それなのに、美奈代は自分が騎体を壊されたくないから、止めに来たと思っている。
これじゃ、美奈代が自分の言い分を聞くはずがない！
「お、おいっ！？」
閉じられたコクピットを前にする月城大尉に、整備兵が怒鳴り声をあげて警告する。
「大尉っ！危険ですから離れてくださいっ！」
「……ちっ」
舌打ち一つ、月城大尉は、騎体を蹴って“白雷改”から離れるしかない。
それでも、どうにかしないと。
「大尉」
安全区域に入るなり、その体を捕まえたのは宗像だ。
「大丈夫ですよ」
宗像は、床まで月城大尉をエスコートしながら耳元で囁いた。
「クラッチマー中尉も、バカはやりませんよ」
「何故分かる？」
「他国軍の善意で乗せてもらった騎を破壊した。もしくは負傷者が出るような騒ぎを起こした。しかも、相手は大尉で、その騒ぎの理由は過去の痴情の縺れ？あなたがクラッチマー中尉の立場で、こんなこと公にされたいですか？」
「……うっ」
「今頃」
クックックッ。
宗像は楽しそうに笑った。
「コクピットで後悔しているのは、中尉の方かもしれませんよ？」

はぁっ。

コクピットに何度目か、吐いた本人が忘れた程のため息が漏れた。

「……ちょっと、大人げなかったか……な」

そう思う。

操縦システムの軽さに感心しながら、ブリュンヒルデはそっと手を握ってみた。

あの時、この拳が捉えたあの女の頬の感触は、今でも忘れられない。

左のフックがみぞおちに当たって、死にそうな位痛かったことも。

――――でも

いくら娘と呼ばれても、その因果を他人にぶつけたのはまずかった。

久しぶりに聞いた名の懐かしさが、そのまま、かつての怒りとなって出てしまった。

素直に謝罪して、弁解しておけばよかった。

「……でも」

ブリュンヒルデは強く首を左右に振った。

否！

違う！

私はこれで良かったんだ！

あの娘を通じて、あの女に頭を下げるなんて、冗談じゃないっ！

あの女の秘蔵娘だか何だか知らないが、徹底的に叩きのめしてドイツ軍騎士の実力を味わわせてやればいいっ！

それだけだ！

ブリュンヒルデは強く頷くと、全てを振り切った顔で“白雷改”にハルバードを掴ませた。

一方――

「大人になりなさいと言いたいですけど」
牧野中尉は楽しげに笑う。
「聞く耳持たないでしょう？」

「当然です」
美奈代は顔をしかめた。
「私、絶対に許しませんから！」

「――まぁ、それならそれで」
牧野中尉は指をポキポキと鳴らした。
「狼狩りを楽しんでみましょうか」

鈴谷を発艦した“白雷改”２騎は、それぞれに模擬戦用のエモノを持って、距離３００を挟んで対峙する。
美奈代騎が長刀。
ブリュンヒルデがハルバード。
それぞれが、それぞれの最も得意とする構えで相手の出方を見守る。

「こいつぁ面白い」
ドイツ軍騎士達もまた、日本側の騎士や整備兵に混じって、モニターに映る光景を興味深そうに眺めている。
日本側として、同じように様子を見守るのは、月城大尉と宗像、そして涼だ。
「どう見ますか？」
その宗像の問いに、
「先に動くのはクラッチマー中尉だ」

月城大尉は答えた。
「ハルバードを使っている以上、先に打って出る」
「リーチが短いお姉さまの方が、先ではなくて？」
涼が首を傾げた。
「先に撃ち込んで、敵の焦りを誘う。無理にでも懐に飛び込ませようとな」
「……成る程？」

「おい嬢ちゃん」

そんなやりとりが耳に入ったのか、ドイツ人騎士の一人が、そんな三人に親しげに声をかけてきた。
「どっちが勝つと思う？」
「――――さぁ？」
宗像は肩をすくめた。
「“白狼”が、初めて搭乗した騎をどこまで扱いこなすか。問題はそこでしょうね」
「ハハッ。随分冷静だな」
そのドイツ軍騎士は笑って言った。
「使いこなすに決まってるさ。現に」

オオッ！
動いたのはブリュンヒルデの方が先だった。

一気に間合いを詰めたブリュンヒルデ騎のハルバード。
その斧が斜めに振り下ろされ、美奈代騎をかすめた。

「――――ほう？」
ブリュンヒルデの口からそんな言葉が漏れた。

何故か？

美奈代騎の動きだ。

目の前で斧が振り下ろされたというのに、全く動じていない。

慌てて飛び下がることもしなければ、誘いに乗って反撃に打って出もしない。

まるで、目の前で何も起きなかったかのように、悠然と立っている。

少なくとも、端から見れば、そう見えるのだが――

再び、間合いを開いたブリュンヒルデは、MC（メサイア・コントローラー）に訊ねた。

「下がった？」

「はい」

アーデルハイトは頷いた。

「ハルバードがインパクトする直前、ほんの数メートルですが――正直、見事です。まるでハルバードの生み出す風に押されたように見えました」

「へえ？」

ブリュンヒルデの前で、美奈代騎に動きがあった。

武装を変更したのだ。

腰にマウントしていた小型の戦斧。

対メサイア戦で装甲が割れるとも思えない小型の戦斧。

その意味がわからない。

ただ、先程の攻撃を回避してのけたことだけは、

「リーチが分かってるってことか」

そう、素直に感心した。

「あんな子供がね……」

「どうなさいます？」

「子供でも」

ブリュンヒルデは、再びハルバードを構えた。
「戦場で容赦はしない。それが礼儀のはずよ！？」
美奈代騎に襲いかかった。

「来ますっ！」
警告音が鳴り響くコクピットの中。
美奈代はじっと迫り来る“白雷改”を睨んだ。
身じろぎ一つせず、ただ、己に振り下ろされようとしている大降りの一撃を睨んでいる。
美奈代は、疑似感覚として伝わってくる戦斧の柄の握り具合を何度も確かめながら、チャンスを待つ。
狙いは――
「そこっ！」
騎体を狙ったハルバードの一撃をギリギリで回避した美奈代騎の持つ小型の戦斧が、ハルバードの柄に命中。
ハルバードが奇妙な形でひん曲がった。
「判定っ！」
ピーッ！
警告音が鳴り響く中、アーデルハイトは叫ぶ。
「武器破損っ！使用不能っ！」
それに答えるよりも早く、ブリュンヒルデ騎はハルバードを放棄。
腰に吊していた太刀を引き抜くなり、居合いの一撃を美奈代騎に放った。
「くっ！」
とっさにシールドを構え、シールドの曲線でその一撃をそらせた美奈代は、間合いを開きつつ、太刀を抜いた。
斬艦刀よりも小型で破壊力は落ちるが、その長さ故に使い回しのよさが取り柄の最新鋭兵器――“太刀”。

ブリュンヒルデが性能を知っていたとは思えないが、奇しくもその模擬刀が両騎によって構えられた。

「おおっ！」

ドイツ人騎士の間から歓声が上がった。

「スゴイぞあいつ！」

「中尉の動きに完全についてきてやがるっ！」

「おい嬢ちゃん」

興奮した男性騎士が、ポンポンと親しげに涼の頭を何度も撫でた。

「嬢ちゃんのお仲間は、大した腕だな！」

「当たり前ですっ！」

涼はそれに噛み付いた。

「相手を誰だと思ってるんですか！」

ドイツ軍の基本武装はハルバードなどの、斧系武器だ。

それだけに、ブリュンヒルデが太刀に慣れていないことは、その攻撃からはっきりわかる。

数回、太刀が虚しく空を斬る間に、美奈代騎が間合いをとる。

大きく振り下ろされた太刀を、騎体をスピンさせて回避した美奈代を、ブリュンヒルデが追う。

体勢を立て直した美奈代騎とブリュンヒルデ騎の太刀同士が激しくぶつかり合ったのは、次の瞬間だ。

ギインッ！

ガィィンッ！

鈍い音を立て、太刀同士が二回にわたって交わった。

そして、

「グウッ！？」

「クッ！」

互いに息をのむつばぜり合いになった。

「さすがに……」

ギギギッ……ッ！
騎体の関節が悲鳴をあげる嫌な音がレシーバーに入ってくる。
「パワーはスゴイ……わね。でも」
デュミナスでも難しい。ノイシアなら力に負けている。
それが不思議なくらい、はっきりとわかるブリュンヒルデは、歯を食いしばると、ＳＴＲシステムに渾身の力をこめた。
「この程度で！」

ブリュンヒルデ騎が力押しに入った。
美奈代騎は、ゆっくりと後退する。
一歩。
また一歩。
力押しに負けないように、しかし、着実に下がる。
ブリュンヒルデ騎が太刀に力を込めながら、その動きに誘われるように、まるで太刀同士が吸い付いているかの如く、ゆっくりと歩みを合わせる。
一体、どこまで下がるのか？
ブリュンヒルデがそう思った途端、
「くっ！？」
美奈代騎は一気に騎体を斜め後ろに下げると、太刀をひねった。
太刀同士が離れ、力のやり場を失ったブリュンヒルデ騎が思わず体勢を崩す。
体勢を崩したブリュンヒルデ騎の頭部めがけて、美奈代騎の一撃が袈裟斬に襲いかかる。
ブリュンヒルデは、騎体をとっさに沈めることで一撃を回避。
美奈代は、かわされた太刀を動かして唐竹割として再びブリュンヒルデ騎に振り下ろした。
運動エネルギーをそのまま太刀の破壊力として利用する技だが、ブリュンヒルデは、それを太刀でまっすぐに受け止めた。
ブリュンヒルデは、太刀をゆっくりと円運動させ、上から押さえ

つけているのが美奈代の太刀だった状況を逆転させた。
ブリュンヒルデの太刀が、美奈代の太刀を押さえつける。
すぐに美奈代騎が離れ、横薙ぎの一撃がブリュンヒルデ騎に襲いかかってきた。
ブリュンヒルデ騎は後退しつつ上段からの一撃で反撃に転じた。

「……」
それまで歓声を上げていた騎士達は、ただ黙って推移を見守っている。
激しくぶつかり合いながらも、互いの技量を駆使して一撃も攻撃を浴びることがない。
ハイレベル過ぎる戦いを前に、騎士達はただ、黙ってしまうしかないのだ。
「……おい」
涼の頭を撫でた騎士が訊ねた。
「ありゃ一体……何者だ？」
「お姉さまは」
涼が何て言ってやろうかと迷った瞬間。
勝負は、意外なほどあっさりとついた。

「――ま、これがベストでしょうね」
「時間もなかったですから」
牧野中尉に美奈代は答えたが、
「相打ちってのは、なかなか出来る事じゃありませんよ」
牧野中尉はご満悦な顔で頷いた。

そう。

判定は相打ち。

互いに振り下ろした太刀が、互いの肩部ギリギリで止まった。
実戦なら双方共に真っ二つにされていたろう。
どっちが先に命中させたかは関係ない。
共に死ぬ。
だから、相打ちだ。
そうなった。

模擬戦の終了を迎え、ブリュンヒルデ騎が近づいてくる。
太刀は鞘に収められている。

「わざとでしょう？」
「まさか」
美奈代は答えた。
「さすがですよ……まぁ」
「まぁ？」
「戦場で、一騎相手にあんなに太刀振ったの初めてですし。引き際がわかんなかったのは確かでした」
「実戦なら」
牧野中尉は自信満々に言った。
「あなたが勝っていました。それは保証します」
「嘘です」
「本当ですよ？普段のあなたなら仕留めていたな。そういう時が何度あったか」
「……」
「ほら。そっぽ向いてもダメですよ？メサイア搭乗中のあなたのこ

とを世界で一番分かっているのは私なんです。メサイア乗ってる限り、妻は私ですからね」
「……知りません」
「まぁ、相手が相手ですから、迷いがあったようですが」
牧野中尉は美奈代にそっと訊ねた。
「実戦で殺す自信はあるのでしょう？」
「肩書き相手に」
美奈代は言った。
「死んであげる義理はありませんから」
「よく出来ました♪」

不意に、ブリュンヒルデ騎が美奈代騎のほぼ正面で止まった。
通信モニターに映るブリュンヒルデは固い表情のままだ。
「……」
美奈代は無意識に、太刀を鞘ごと腰のマウントラックから外し、左手に持った。
「あの？」
牧野中尉には、その理由がわからない。
「……」
「……」
ブリュンヒルデと美奈代が、じっと互いの顔を見つめ合う。
まるで時間が止まっているかのように、互いを見つめ合った二人だったが……。
動いたのはブリュンヒルデの方だった。
不意に太刀に手をかけたかと思うと、一気に引き抜こうとした。
居合いの一撃を、美奈代騎にお見舞いしようとしたのは明白だ。
「なっ！？」
唖然とする牧野中尉の前で、その一撃は結果として放たれることはなかった。
抜刀する瞬間に間合いを詰めた美奈代騎の装甲に、太刀の柄頭が

ぶつかって太刀が抜けなかったのだ。
しかし、美奈代騎が引き抜いた太刀の刃だけは、確実にブリュンヒルデ騎の首筋に突きつけられていた。
「……」
「この間合いで」
顔を強ばらせるブリュンヒルデに、美奈代は言った。
「刀そんな風に抜いたらダメですよ」
「……そうね」
ブリュンヒルデがため息と共に、そんな返事を出せたのは、少しの時間が必要だった。
「ワザと相打ちを譲ってくれたみたいだったから、腹がたったけど、これで納得できたわ」
そう言って、ブリュンヒルデは小さく笑って見せた。
「……そうですか」
「でもね？」
「？」
「あの女に関しては、絶対に頭を下げることはない。いい？これは軍人としてどうこうじゃない」
「……」
「一人の女として、アイツは絶対に許せないの」
「……どうして」
「あの女に聞きなさい」
ブリュンヒルデは、太刀を戻しながら言った。
「聞いた後、どう判断するかはあなたの勝手。どう思われようと、私は絶対にあいつを許さない。それだけよ――少尉？鈴谷に帰投するわ」
「了解」
浮かび上がったブリュンヒルデ騎の背中を、美奈代は複雑な顔で見送るしかなかった。

北米戦線編　第二十六話

鈴谷に戻った“死天使”が収容作業に入った。
整備兵が駆け寄り、所定の騎体冷却、固定作業が始まる。
床を蹴って“死天使”に近づく美奈代を後目に、後藤は楽しそうに笑った。
「さてさて」
フォイルナー少佐がコクピットから出て来ると、すぐにブリュンヒルデ達が近づいていく。
フォイルナー少佐の顔は、満足しているのか、それとも不満なのか遠目には全く分からない。
ブリュンヒルデに何事か語りかけられたフォイルナー少佐は、小さく頷くと、そのままコクピットを離れた。
「戦闘機動は」
後藤の横にいたフェルミ博士が細身の葉巻を弄びながら言った。
「――さすがに耐えられたようですな」
「そうでなければ、英雄なんて看板さげてないでしょう？」
「それもそうか……殿下？」
「ん？」
紅葉から大福を渡されていた殿下が振り向いた。
「何です？」
「高血圧に糖尿病も抱えた身で、よくも甘味がとれる」
「――何か？」
「どうするんだね？」
「あの様子からすれば」
フォイルナー少佐は、まっすぐに殿下達に向かってやってくる。
「絶対に、精霊体付きをくれと、そう言うに決まっています」
殿下は、少し困った。という顔になった。
「しかも、ＡＩ３タイプ搭載型をドイツ軍に寄こせと」

「無理か」
「現状では無理です。しかも、仮に供給できたとしても、精霊体をメンテナンス出来ないドイツ軍での運用は自殺行為です」
「……皇帝には、何と売り込んだのだ？」
「はい？」
「機を見るに敏な君のことだ。何かしらの手は打ったのだろう？」
「……」
お前のことはお見通しだ。
フェルミ博士の顔は、そう語っていた。
「本当に」
殿下は心底負けた。といわんばかりに、憮然とした顔でため息をついた。
「あなたには負けますよ。師匠」
「物心ついてから君を育てたのは私だぞ？殿下」
「母上がよく言っていますよ。あなたは、私にとって父親や祖父以上の身だと」
「それで？」
「ドイツ大使館経由で、皇帝に揺さぶりをかけたことは認めます」
「何と」
「デュミナスの活躍に舞い上がった皇帝が、ドイツ駐留大使を呼び出して、まぁ、感謝を伝えてきたのですが、この馬鹿な大使が、あろうことか晩餐会でワインに酔っぱらって、陛下に面と向かって言い切ったのです。“あんなのは、ウチの国じゃ輸出用のモンキーモデルだ”と」
「……ほう？」
フェルミ博士はニヤリと笑った。
「あのプライドの高い皇帝のことだ。激怒しただろう」
「詐欺だなんだと、衛星通信経由で僕の方にまで文句が来ました。僕にとっては、ドイツ大使をどうぶっ殺してやろうかしか興味がないのですが」

「そこに、君は商機を見いだしたわけだ」
「――その通り」
殿下は頷いた。
「モンキーモデルを売りつけてくるとは何事だというから、我が国のレギュラーモデルをドイツどころか、ヨーロッパで整備できる国なんてありはしない。文句があるなら、整備できる環境を用意していただこうか」
「皇帝には、その意味がわからなかったろう？」
「メサイアの整備状況をどうのと、陸軍の偉いさんが青くなったり赤くなったり。必死にドイツ軍の技術を説明していましたがね」
「そこで、君は彼等の考えもしなかった精霊体搭載型を売り込んだ」
「しかり」
殿下は意地の悪い笑みを浮かべた。
「“求めよ。金払え。されば与えられん”でしたっけ？金払えば技術供与はしよう。ただし、精霊体搭載型の安全な運用には、莫大な費用と、１０年以上の歳月が必要だと釘もさしましたがね」
「――この戦いにおける精霊体搭載型メサイアの供与と整備の一切をマラネリが引き受ける。ドイツは金と人を出せというところか？」
「ご明察。すでにいろいろと細工はしてありますが」
そこまで語り終えた殿下達の前に、フォイルナー少佐が硬い表情のまま、降り立った。
「……殿下」
フォイルナー少佐の顔は、軍人としてのそれよりも、教会で神に祈る一人の男の方が正しい何かを秘めていた。
「……心底、覚悟を決めたという顔だな」
殿下は、胸を反らせながら言った。
その言葉からあふれるのは、悪戯を楽しむ少年のそれではない。

少年王としての威厳そのものだった。
「“死天使”はどうだった」
クックックッ……。
喉からの笑い声にも、フォイルナー少佐は動じず、硬い表情を崩そうとしない。
「――望んでも手に入らないものを、一瞬でも手にした感想は」
「……」
「こらっ！」
ぺんっ
不意に、そんな音が響いた。
殿下の後頭部をひっぱたいたのは、紅葉だ。
「何意地悪してんのよ。さっさと渡してあげればいいでしょう！？退役進んでいるとはいえ、“ディアス”とか！」
「無茶言うな！」
殿下は後頭部をさすりながら抗議した。
「精霊体搭載のＡＩ３エンジンは近衛が公開を許可してないだろう？」
「当たり前でしょう！？お師匠様はともかく、他国に属するからって、あんたにだって公開できないのよ？まだ開発段階だし、とにかく機密事項満載なんだから！」
「どうせ思いつきで作ったクセに！」
「言ったわねっ！？」
ガンッ！
ゴンッ！
鈍い音がハンガーデッキに響き渡った。
「……全く」
フェルミ博士が拳をさすりながら立っているその足下で、殿下と紅葉が頭を抑えて悶絶している。

「――失礼、少佐。教え子達が迷惑をかけた」
「いえ。それで……」
「君の望みを聞こうか？」
「……」
フォイルナー少佐は、数回、息を整える。
その横ではブリュンヒルデ達が心配そうに上官の行動を見守っている。
フォイルナー少佐は、言った。
「我が国への精霊体搭載型メサイアの供与を」
「現段階では無理だ」
「――っ！」
「理由は、政治的なものではないぞ？」
頭を何度か振った殿下が、涙目になりながら起きあがった。
「精霊体搭載型メサイアの整備技術は、非搭載型のそれとはかなり異なる。万全な整備が出来なければ、戦う前に死ぬぞ」
「……その技術を、ドイツは持っていないと」
「精霊体搭載型運用実績を、ドイツは持っているのか？」
「……いえ」
「そういうことだ。現状では、出したくても出すことは出来ない」
「……ですが」
「ですが？」
「このままでは――」
「非搭載型でもかなりの所までやれるよう、武装開発と供与は続ける。ノイシアを使い続けるなら、それで我慢してもらうしかない。無駄死にが出るだけだ」
「……」
「それでも」
フェルミ博士は言った。
「少佐が、それでもなお精霊体搭載型に拘るなら。政府を経由してもらうしかあるまい」

「……ま、そうですね」
殿下は頷いた。
「一介の軍人の希望だけで、物事が進むことはない」
「……」
フォイルナー少佐の顔には、怒りとも失望ともつかない色が浮かんでいた。
「少佐？」
「……はっ」
「そう怒るな。結果が出るのは早いと思うぞ？」
「意味がわかりません」
「……皇帝は老獪な割にプライドが高い。黒狼と白狼率いる部隊を大敗北させた理由が、己の与えたメサイアの性能故だと悟れば、自ずから見えてくるものもあるだろう」
「……まさか」
「もう時間だ。お遊戯の時間から、君が何を学んだかは知らんが、生き残ろうとするなら、それなりに有効に使ったはずだ」
「……っ」
「殿下？何かあるかね？」
「皇帝には伝えてありますから」
殿下は短くそう言った。
「――――またしばらくしたら会おう。少佐」

鈴谷から離れていくＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中。
ぼんやりとした顔をしているのは、ヘルガとエレナ、そしてイリスだった。
魂がどこかに消え去ったかのように、ただぽーっとしている。
特にその傾向が顕著なのがエレナだ。
「ちょっと」

周囲から肩を揺すられても、反応さえしない。
ただ、時折、不意に右手を握ったり離したりすると、楽しげな笑みを浮かべる。
はっきり、マトモじゃない。
クックック……と、突然笑い出した時には、あまりの異常さから、
「日本軍のメサイアは、精神に影響でも及ぼすのか？」と、周りがドン引きしたほどだ。

「ヴォルフ」
ブリュンヒルデが、横に座るフォイルナー少佐にそっと訊ねた。
「そんなにスゴかったの？」
「……ああ」
フォイルナー少佐は頷いた。
「このまま、世界の果てまで逃げてみようと、私でさえ思った」
「……それで」
「あれが量産化出来れば、少なくとも、あの半分程度の騎でもいい。量産配備出来れば」
ギュッ
フォイルナー少佐の拳が握りしめられた。
「――昨晩の戦いで、何人かは死なずに済んだはずだ」
「……ヴォルフ」
ブリュンヒルデは、そっと握られたフォイルナー少佐の拳に手を乗せた。
「何を信じていいのかわからないけど、でも、私達は、与えられたものを使いこなすだけ」
「そうだ」
フォイルナー少佐は頷くと、そっとブリュンヒルデの手を握った。
「だが、満足のいかないものを使えと部下に命じるのは、心が痛む。そうだろう？」
「……そうね」

●鈴谷艦橋

「小清水少尉達が出る？」

「はい」

高木副長が頷いた。

「ドイツ軍の騎士によるＨＭＣの試射がいい刺激になったようです。二人とも眼の色変えて出撃を要請しています」

「泉大尉は」

「彼女も同じ――――と言いたいのですが」

「違うのか？」

「ＳＴＲシステムに、ヘンなクセを付けられていないかが心配らしくて、独自の偵察任務を希望しています」

「……真面目なのか不真面目なのか判断に困るな」

美夜はため息一つ、頷いた。

「許可する。ところで、日本からの部隊は？」

「ヒドい連中です」

高木は憮然として言った。

「本艦には挨拶もなしです」

「特務隊配備の大型ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）だとか？」

「高速強襲型です。眼の色変えて飛んできた。そんな所でしょう。すでに飛行艇に接触。月城隊は並行して運んできた“幻龍（げんりゅう）”３騎に任務を引き継ぎ、撤退を完了しています」

「あの飛鼠（ひそ）相手に“幻龍（げんりゅう）”で何が出来る？中国軍に奪還の動きがまだ見えないのか？」

「それが――――謎なのです」

高木も首を傾げるしかない。

「一切、動きがありません。本戦線において、中華帝国軍はむしろ撤退の動きを強めています」

「……解せないな」
「しかも、中華帝国軍の一方的な戦線縮小は、ここだけはありません」
「米軍は」
「損害に補充が追いつかないのが本音でしょう。千載一遇のチャンスと言いたいのですが、動きは極めて鈍いです。むしろ、深追いして損害を増やしたくないという戦略的な警戒感も見え隠れしています」
「その気になれば、いつでもつぶせる相手――か」
「米軍にとってですか？」
「中華帝国軍にとってだ。もし、それが驕慢さの産物だというなら」
美夜は、従兵を呼ぶとミルクティーを頼んだ。
「――仇となるな」
「そこまで、連中も単純ではないでしょう」
「それで？」
「はい？」
「世界で一番単純な、ウチの司令部はどうしろと？」
「一言で言えば静観。そんなところですか」
「……無能が」

美夜に無能呼ばわりされた連中。
近衛軍司令部は、実はこの時点では北米に関わっているヒマは全くなかった。
美夜が聞いたら信じないだろうが、司令部はここ一週間、たった一つの作戦のために不眠不休の状態を悪化させ、しかも、それを他の軍や情報部に悟られることのないよう、厳重な情報管制下にて行ったものだから、いかに屈強な軍人とはいえ、、過労で倒れる者が続出する騒ぎになっていた。

この苦難を味わう司令部スタッフが、自分達を無能呼ばわりする者がいると聞けば、喩えそれが艦隊副司令の嫁と知っていても、無事では済まさないだろう。

その苦難の結実を迎えたのが、まさにこの日だった。

「……ったく、人使いが荒いよなぁ」

ぼやきながら“征龍改（せいりゅうかい）ＡＷＡＣＳ仕様”１号騎を駆るのは都築だ。

「北米でさんざんコキ使った挙げ句が、問答無用でグアムまでフライト、こっちは時差ボケの寝不足だってのに、すぐに飛べだって？」

「文句言わないの」

２号騎を駆るさつきから言った。

さつきも生あくびをかみ殺している。

「せっかく、同期の晴れ舞台なんだよ？手伝ってあげなくちゃ」

「けっ。あいつらはご出世なさって、金鵄勲章持ちだぜ？そんな連中相手によくも言う」

「愚痴るなって……ところで」

さつきは言った。

「私達の任務って、日本として何の意味あるの？」

「それこそ愚痴だぜ？」

「ＨＱより“タカメ１”」

「こちら“タカメ１”。感度良好。どうぞ」

都築が、司令部からの通信に答えた。

「お客様のご来店だ。電波妨害装置即時展開体勢のまま、高度を６万６千へあげろ」

「――はっ？」

高度６万６千フィート。

メートル換算で約2万メートル。
普通、爆撃機でも飛ぶ高度ではない。
「ちょっと待て！そんな高度で飛ぶ……」
都築は、言いかけて言葉を間違っていることに気付いた。
「そんな高度で、飛べるヤツがいるのか？」
「実用上昇高度としては普通だろ？」
「いや、そういうんじゃなくて……」
「とにかく、お客様は高度7万5千――少し高度を上げた。現在、7万5千で接近中。以降は、別名あるまでお客様のエスコートのみ専念せよ」

7万5千フィート。即ち2万2860メートル。

はっきり、マトモに飛行機で飛ぶ高度ではない。

「おいおい」

「急げ。カーテンコールに入ってからじゃクレームになる。カーテン前でファンファーレだ」

ファンファーレ。
ラグエル隊の作戦行動開始の暗号だ。
ラグエル隊――つまり、神城三姉妹は都築達にとっても同期だ。
同期の仕事にケチをつけるようなマネはしたくない。
「ええいっ！」
舌打ち一つ、都築は高度を上げた。

「まだ、人工衛星なんて生きていたんだねぇ」

実はこの時点で、神城三姉妹の駆るＦｌｙ　ｒｕｌｅｒ隊は、都築達のかなり上にいた。

その高度たるや、実に高度３６０キロメートル。

ほとんど人工衛星や宇宙船の高度。

高度と呼ぶこと自体に疑問がある高さを我が物顔で飛び回るＦｌｙ　ｒｕｌｅｒだが、普通のメサイアなら、この高度に達することさえ出来ない。

この高度に達すること自体が、超高々度迎撃戦に開発されたＦｌｙ　ｒｕｌｅｒならではの能力としか言い様がないとはいえ、飛んでいる方はたまったものじゃない。

何しろ、こんな高度で飛ぶにしても、宇宙服さえ与えられていない。

騎体全体を対物防御バリアで護られているとはいえ、外は完全な死の世界だ。

初めてナマで見た宇宙空間の、そして地球の美しさなんて、もう感じることさえない。

何故？

ギィンッ

バシュゥッ！

この音の原因――――対物バリアに接触して消滅する宇宙塵（スペースデブリ）だ。

ついさっき、グシャグシャに破壊された大型衛星の残骸とすれちがったばかり。

あんなのにぶつかったら――そう考えると背筋がぞっとする。
ぶつからないように気を付けなくちゃ。

なにしろ、障害物に対する一切の発砲を、例えそれが自衛行為であろうと、禁止されている。
事前調査では、予定針路には大きなデブリはないというが、どうも信じられない。

「先の魔族軍による人工衛星狩りの影響は深刻で、スペースデブリが生き残ったり、新規に打ち上げられた衛星を次々と破壊するなんて、スゴいことになりましたらねぇ」

1号騎に配属されたMC（メサイア・コントロール）、伊藤司（つかさ）少尉がポツリと言った。

「知ってます？１０センチのデブリ一個で宇宙船だってオシャカですよ？」

「そんな中で頑張ってるのを壊すのは」
それを聞いた神城三姉妹の長女、一葉はポリポリと頬を掻いた。
「なんだか、もったいない気がするけどね」

「バリア搭載衛星」
伊藤少尉は、クスリと笑った。
神城達からすれば、丁度一回り程年上の伊藤少尉からすれば、神城三姉妹は本当に子供のようなものだ。
本人としては意識しているつもりとはいえ、どうしても接し方が軍人のそれとは遠くなりがちになる。
「デブリも対衛星攻撃ミサイルにもびくともしない衛星が東シナ海から太平洋方面にかけて３基配備されて、中華帝国周辺の空を監視しています。さて問題です」

「？」

「そんな衛星、誰が作ったんでしょう」

「……まさか」

「バリアの特性は人類のそれじゃありません」

「……それで私達が？」

「“信濃”の艦砲攻撃で仕留めることも検討されましたけど、日本軍からの攻撃は、中華帝国にどんな反撃の口実を与えるかわからない」

「――だから、こんな超高々度でバリア展開して衛星を破壊できる私達に命令が来た。一撃で殺すにしても、それがデブリによる事故なのか。それとも故障なのか、少しでもいいから混乱させるような破壊が出来る――つまり」

一葉は最後のブリーフィングで言われたことを思い出した。

「バリアを貫く一撃を正確に命中させるピンホールショットを3騎同時に命中させなくちゃいけない」

「ご明察」

伊藤少尉は頷いた。

「相互防衛システム。つまり、衛星が破壊された場合、即座に衛星軌道上で攻撃を受けたと地上に司令が行きます。そうなれば、作戦は失敗。米軍の奇襲攻撃は、中華帝国軍の報復の口実となります」

「……厄介な話ですね」

一葉は顔をしかめた。
「グアムから出て、都築っち達の支援を受けながら、大きく針路を迂回したのも、米軍の攻撃だと理解させないため？」
「この針路なら」
伊藤少尉は戦況モニター上に映し出される米軍の予想針路を確認した。
「オセアニア方面からか、それともインドからか判断がつきません。とにかく、米軍の攻撃だとは、即断出来ないでしょう」
「……で」
一葉は、一番聞きたかったことを訊ねた。
「弾頭は？」
「不明」
伊藤少尉は即答した。
「それが、“弾頭”なのか。それとも単なる偵察なのか。私達が考える必要もないでしょう？そんなこと、私達の責任じゃありません」
「……双葉？光葉？」
「準備ＯＫだよ？お姉」
「さっさと終わりにしよう？」
「そうね。少尉。攻撃タイミングは？」
「米軍がオーストラリア方面から移動中。タイミングを同調します。米軍の準備が整い次第、あの衛星を狙撃・撃破します」
「ターゲット・ロックは」

「完了。向こうはまだ、こちらに気付いていません」
大気のブレがないだけ、光学補正が効きやすい。問題は、弾道が正確にまっすぐかだけだ。MC（メサイア・コントローラー・マジック・レーザー）の腕と、MLの性能とに賭けるしかない。
「本当は……」
一葉はぼやいた。
「私、一発勝負って嫌いなんだけどなぁ……」

ここからは、神城三姉妹が衛星に的を定める少し前に遡り、都築達視点で話を進めたい。
「見えた！」
高度をあげるだけあげる。
増設ブースターが悲鳴を上げる中、都築達は命じられた高度へと上がった。
「もう少し上に上がれば」
さつきがふと呟いた。
「川中島の時、思い出せたかもね」
「――懐かしいな。今となっちゃ」
「……会いたいな。みんなに」

ダメッ！
さつきは強く頭を左右に振って、俄に沸いた感傷を脳裏から追い出した。
感傷に浸っていいタイミングじゃない！
美奈代達に会いたければ、ここで実績を作るしかない。
しかも、今は作戦中。
しくじれば――二度と生きて会うことは出来なくなる！
さつきは強く言った。

「前方、距離４５００。あれ？」
「……なんだ、ありゃ」
太陽の光を受けて黒く尖った機体が視界に入った。
「ＳＲ－７１“ブラックバード”です」
水城中尉が言った。
「米軍の高々度偵察機」
「……違う」
さつきがその報告を否定した。
「機体の形状が若干違う。翼が張り出している」
「じゃあ？」
「Ｂ－７１」
さつきははっきりと言った。
「ＳＲ－７１の爆撃機バージョン。試作が１機だけ作られたって聞いてる」
「早瀬中尉は」
水城中尉が驚いた顔で言った。
「航空機に詳しいんですね」
「美晴……柏中尉が」
なぜかさつきは、苦笑いしながら言った。
「あの飛行機オタがそりゃ熱心に教えてくれましたから」
「まぁ♪」
「……ちょっと待てよ」
都築が会話に割って入った。
「そんな試作機が、こんな所で何してるんだ？俺達ゃあれだろ？コイツの飛ぶルートに沿って、電子妨害をかけながら飛行するって――そういうワケだろ？」
「……」
「……」
「……どうなんだ？爆撃機がたった１機で進んでいく。
しかも、針路からすれば、向かっているのは中国大陸だ。

俺はどう考えても、楽しい予感はしないがね」

「……考える必要はないです」

しばしの沈黙の後、水城中尉は言った。

「私達は、飛べばよいのです。私達は、命じられたままに動くだけですから」

命令のままに動け。

水城中尉はそう言っている。

都築は、無言でそれに従った。

命令には従う。

それが、都築が偵察隊に回されて以降、身につけた処世術だ。

正義。

その言葉が、都築は自分から遠ざかっていくのを、この時、確かに感じていた。

自分の責任じゃない。

何があろうと、知ったことか！

心の中で、そう叫ぶ力が強くなっていく。

心の中で、それを歓迎する何かが蠢く。

マッハ３に近いんだ。

増設ブースターでもついていくのがやっとだ。

そんな中で、何が出来る？

都築は、そんな言い訳を受け入れるしかない自分に――気付いていた。

「敵、衛星索敵圏内に入ります」

水城中尉が報告をあげたのは、それからほんの１０分ほどのことだ。

フィリピン諸島を左に見ながら、台湾の上空を突っ切るルートだ。

「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ隊、攻撃開始！」
「当たったんですか！？」
「――当然」
そう答える水城中尉の返答には、ラグがあった。
とはいえ、ホウッ。と、無意識に安堵のため息が零れた。
「衛星の脅威は消えましたが……」
「勘弁してくれ。俺は寧々とＨしたいだけなんだ」
都築が、そんなつぶやきを漏らした時。
すでにＢ－７１は東シナ海で高度をさらに高く取った。
「高度が実用限界を超えています」
水城中尉が緊張しきった声で報告してくる。
「現在、高度３万を超えました」
「い、一体？」
都築は機体の位置を確認した。
もうすぐ上海に入る。
Ｂ－７１はその間にも高度を上げ続けている。
「あいつの腹の中には……何が？」

「こちら“バード・アイ”」
帝国語で不意に通信が入ったのはその時だ。
重い、男の声だった。
「ここまでくれば任務は達成だ」

「ち、ちょっ！？」

「これでアメリカの勝ちだ。我々はこれより脱出する。これまでの貴軍の協力に感謝する」

「な。何を言って！？」

「衛星軌道上の部隊にもすぐに逃げるように伝えろ。これは私の」
相手は都築の声なんて聞いていない。
ただ、都築に伝えたいことだけを一方的に喋っている。
「一人の人間としての願いだ。３０秒だ。無事の生還を祈る」
プッ
通信は、そこで途切れた。
「な、何が？」
「あの機の針路は！？」
「このままですと、あと１分で徐州市街上空」
中国大陸、華北平原のど真ん中だ。
そこまで来たＢ－７１の機体が、不意に若干、ぐらついた。
「Ｂ－７１にて微弱な魔力反応――マジック・エジェクトシステムを使った模様」
「脱出？」
「機体に対人反応なし。オートパイロットが作動している模様」
「――まさか」
都築の顔から血の気が引けた。
「あいつら！」
都築はそれですべてがわかった。
「早瀬――逃げろぉぉっ！」
都築騎が鋭いバンクを見せる。
「ち、ちょっと！？」
早瀬騎が、それにつられるようにして針路を変えた。
その途端――

都築達は、白い世界に包まれた。

北米戦線編　第二十七話

ここで質問したい。

個人の自由は、結局の所、誰が保証する？

こう訊ねられたら、何と答えるか？

人権や法律？

“法律では禁止されてますよ？”

そう言えば、強盗に殺されないとでも言うのか？

詐欺師に騙されないのか？

事故に遭わないのか？

そんな紙の上に書かれたことが、言葉だけで全てを守ってくれるなら、この世界は天国だ。

もし、その通りだというなら、我々は“年収1千万。休暇は週七日を義務づける。法律でそう決まっています”なんて生活が送れる（随分、極論だが）。

ありえるはずがない。

では？

法律を保証してくれる存在、国家や集団だ。

個人の自由を主張する人権活動家なる者を考えて欲しい。

彼等が要求し、その保証を求めるのは個人か？

否。
その多くは行政機関。
つまり、政府、究極は国家だ。

国家を軽視するような彼等でさえ、その行動をもって結局の所、軽視する相手に、権利の保障をもめているのだ。

国家が個人の集団であり、個人を管理し、国家の主権の及ぶ範囲における地域社会を管理・運営していることを忘れてはならない。

話はそれでいいだろう。

とにかく。
国家なくして社会はない。
社会なくして自由はない

それが、この世界の考え方だ。

それを理解してもらった上で、次に記した、ある法律の要約を読んで欲しい。

この法律が発動された場合――
・対象者は国家防衛の義務履行の義務を負う。
・対象者は、年齢、性別を問わない全国民。
・国外居住者も対象となる。
・対象者は、動員・徴兵・工作等、全ての政府命令に忠実に従う義務を負う。
・個人や組織が持つ物資や生産設備は、本法発動と共に政府管理

下におかれる。

・交通、金融、マスコミ、医療機関は政府及び軍の管理下におかれる。

・国内に進出している外資系企業及び、滞在する外国人もその対象となる。

・国防の義務を履行せず、また拒否する者は、原則として死刑に問われる。

とどのつまり、“国内で問題があったら、国家は国民全てを動員させる。国民はそれに従え。さもなくば死刑だ”。

それで済む――そんな法律だ。

危険な全体主義？

違う。

世界は、既にアフリカと南米という、二つの大陸規模で数十ヶ国にわたる国家の滅亡と、その後の血まみれの混乱を目の当たりにしている。

国家が消えることは、つまり、自分達の存在が消えることだと、人類は現実に味わい、そして骨身に染みているのだ。

無論、例えこの世界において、国家が有事の際に国民を動員する法律が一般的とはいえ、上に書かれた法律は、その中でも随分と過激な方だ。

一体、どこの国の法律か？

中華帝国。

国防義務法という。

都築達が領空侵犯した、まさにその日――

中華帝国の経済基盤を支える大工業地帯。
そこでは、大小問わずに人が集まる所には、

「北米討伐は目前だ！」
「祖国の勝利に貢献しよう！」

そんな横断幕や看板がびっちりと据え付けられている。
小中学生を動員した音楽隊が、通りの角で軽快な音楽を何時間も演奏している。
通りを通る人々はせわしなく足を運び、工場にはひっきりなしにトラックが出入りする。

景気がいい？
通りを歩く人々の顔は、決して明るくない。
何故か？
労働者の賃金が国家管理されたことが大きい。

この国において１０時間労働を政府に命じられたとしよう。

労働の内訳は、
８時間が“国民の義務”。
残り６時間が“国家への奉仕”となる。

計算が合わない？

これで合っているというか、軽く見積もっている方だ。
何時間働こうが、賃金上は“国民の労働時間の上限”である１０時間労働分のみ。
それ以上に科せられた労働の結果は、国家と経営者のもの。
これに労働者が異議を唱えれば、国家は彼を公然と死刑に出来る。
これでは異議を唱えることが出来ない。
死を賭して４時間分の賃金を要求するか？
黙って生き延びるか？
だから、耐えて生きる。
この国の労働者の、今の現実は、そんなものだ。

「お腹すいたなぁ」
ある工場の一角。
朝早く、小学校から重いチェロを担ぎ、何キロもの道のりを、徒歩で来た“小学奉仕隊”の一人、呉少年は、演奏の合間の休憩時間、そっと自分の腹を撫でた。

父親の収入が激減したせいで、毎日のおやつどころか、食事まで減った。
肉を食べたのはいつのことだったか、すぐには思い出せない。
家のローンを巡って、母親と父親が口論になるのは毎日のことだ。
しかも、最近は母親の浮気で口論が激化している。
相手の男が、政府の役人だと知った父は、妻の不道徳をなじるどころか、浮気相手のコネを活かせないか本気で考えているからだ。

おかげで、家庭生活は滅茶苦茶だ。

そのとばっちりを一番喰らっているのが、一人息子の呉少年。
着ている制服も、最近はアイロンさえかけてもらえず、シワだらけ。
朝飯は、夕飯の残飯に白湯をかけたのを茶碗一般。
文句を言うと殴られるが、殴られようが何されようが、育ち盛りに茶碗一杯は厳しい。
チェロの音が、胃袋から出ているんじゃないかと錯覚することさえしばしばだ。
勉強しなくていいし、家で出るモノよりマシな食べ物が与えられるから、この仕事に文句はないとはいえ、やっぱり腹は減る。
先生にお願いしたら、朝ご飯も出してもらえないかな。
呉少年が、チェロにもたれかかるようにして、そんなことを考えた時だ。
「さぁ」
指揮をとる音楽教師が椅子から立ち上がった。
「工場長様のご厚意で、工場内を見学するぞ！」
指揮が繊細な割に、巌のような体格を誇る大男の先生の怒鳴り声が呉少年の耳に届いた。
“岩石先生”とあだ名されるゴツい顔の先生は、教え方は下手だが、生徒思いの優しさにあふれた人物で、生徒達からは好かれている。
直接、先生の授業を受けたことはないが、呉少年も、この先生が、最近赴任してきた女教師に一目惚れして、何とか会話だけでもと、生来の不器用さを上乗せしていることは、生徒達の話題として知っている。
“岩が鶴に惚れた”とか、呉少年は、引率する先生の体格の良い後ろ姿を眺めながら、この大男が、あの美人先生と夫婦になることを想像して、少し笑ってしまった。
だいたい、あんな先生のどこがいいんだろう。
呉少年は、ちらりと斜め前を歩く女子生徒を見た。

盗み見る。
そう言う方が正しいような見方だ。
でも、見るだけで、呉少年は満足だったし、頬が赤くなる。
長い髪が歩くたびに揺れるのを見るだけで、股間が大きくなりそうになる。
バレると恥ずかしいので、少年はそっと意識を脳裏の楽譜に移した。
先生は、おかしい。
世界で一番綺麗なのは、この子なのに――

呉少年が送り込まれたのは、大きな軍需工場。
ヘリコプターの組み立て工場だ。

濃緑色に塗られたヘリコプターが最終テストのため、激しい爆音を轟かせている。

「大きいな！」
最年長の男子達はさかんに興奮した声をあげるが、ヘリの音がそれを全てかき消してしまう。
音楽以外に興味のない呉少年にとっては、ヘリは爆音をあげる迷惑な存在でしかない。
現に、爆音が空きっ腹に響いて倒れそうだ。

――あーあ。

呉少年はヘリのローターから生じる激しい風を感じながら、呉少年は内心で呟いた。

――こんなことなら、食料工場にでも送ってくれればいいのに。

そう思う。
こんな音がする所で演奏しても、誰が聞いているんだろう。
誰も聞いてなくても、食料工場なら、食べ物だってたくさんもらえるだろうし、どうせ行くなら、そっちの方がいいなぁ。

ぼんやりとそんなことを考えていると、呉少年の前でヘリが次々と離陸を開始していく。
青い空に次々と舞い上がるヘリを前に、興奮した生徒達は必死に手を振る。
呉少年も、それにつられるようにして手を振った。
パイロットの一人が、それに答えてくれたのを、呉少年は確かに見た。
岩石先生は、これだけのヘリを次々と生産できる我が国は、やはり世界に誇る大国だと、大声で怒鳴るように言った。
その背後に、政治指導将校がいることはいつものことだし、この工場が、アメリカ資本の工場を動員法で接収したことなんて、呉少年は知ったことではない。

子供である呉少年にとって、目の前が全てだ。

青い空。
暖かな日差し。
舞い上がるヘリ。

あの子も喜んでいる。
それだけで、悪くない光景だな。と、呉少年が、そんなことを思った次の瞬間――――

「――――えっ？」
呉少年は確かに見た。
空が、大きな白い光の塊が生まれた。
「何！？今の！」
「何か光った！」
生徒達が次々と騒ぎ出す。
見たのは僕だけじゃなかったんだ。
呉少年が、そう思った時、
――――え？
呉少年は、目の前で起きたことが理解できなかった。
次々と空から何かが墜ちてきた。
さっき、空に舞い上がったヘリ達だ。
ローターを回しながら、手から落ちた玩具のように落下してくる
ヘリが、工場の屋根に突っ込んだ。
滑走路に落下したヘリが、爆発して炎上を始める。
ポカン。とした呉少年は、身動きさえ出来ない。
その目の前。

岩石先生が覆い被さるように迫ってくる。
その先生の後ろには、コクピット

岩石先生が自分を抱きしめた感触が、体全体に伝わってくる。

そして――

呉少年の体は、ヘリの航空燃料によって焼き尽くされた。

●ワシントンD・C
「成功か？」
「――ああ」
あるビルの最上階。
アメリカ北方陸軍参謀長のオーウェル少将は、空のグラスを手に窓から外の景色を眺めていた。
ようやく電気の灯りが復活し始めたばかりだ。
軍事系施設であるこのビルでさえ、灯りは昔ながらのカンテラだ。
電灯の明かりで育った目には、無いに等しい灯りだが、慣れればどうということはない。
「華北平原――徐州市街地高度3万メートルで“プレゼント”の信管は正常に作動」
「チンク共に与えた被害は？」
「東海岸の受けた被害を思えばわかるだろう？」
「――具体的に」
ソファーに座ったマーカス海軍大佐は、持ってきたバーボンの封を切りながら言った。
「あの国の設備は、我が国資本だろうとも、コスト削減で切りつめられた代物だ。電磁シールドなどないから、ＥＭＰに耐えられるは

ずはない」
「具体的にと言ったろう？抽象概念では祝杯は出せん」
「工場群は機能を停止。通信網のかなりは破壊されたはずだ。各地で航空機の墜落も確認されている。人的被害もかなりだ」
「それでいい」
ソファーから立ち上がったマーカスは、オーウェルのグラスにバーボンを注ぎ込んだ。
「新開発のＥＭＰ爆弾の試験としては、十分だったろう」
「ああ」
オーウェルは、グラスを目線の位置まで持ち上げると一息でグラスを開けた。
「軍は本格的な生産に入る。Ｘ－５１とセットで配備されることになる。一定数が整えば、次は北京だ」
「――そうか」
「無駄な犠牲を払うことなく、あのサル共をあるべきレベルにたたき落としてやれる」
「――ここまで来るのは、犠牲が大きすぎたな」
マーカスはグラスを呷った。
「この北米だけで、一体、何人が死んだんだ？」
「神のみぞ知る――それに、犠牲の支払いはまだ終わっていない」
「……」
無言でマーカスは頷いた。
「日本への増派は避けられない」
「世論が許すと思うか？」
「許すもなにもない。やるだけだ。地理的にも、あの大陸に星条旗を立てる橋頭堡として、あの列島は必要だ。何より、あのサル共に無駄知恵をつけてくれた魔族は、我が国にとっても、あの戦争以来の本当の敵だと言って文句はこないはずだ」
「真の敵を倒し、新たな領土を得る。白人による世界支配を維持するため。それは神より与えられた当然の秩序。薔薇十字（ローゼンクロイツ）はその秩序

維持のために動いている」
「都合のいい物言いにも聞こえるが」
マーカスは苦笑しながら、再びグラスにバーボンを注ぎ込んだ。
「祖国の永久の発展に必要なことだ」
「その通り」
「“聖ゲオルク”の成功と祖国に」
「――――乾杯」

●鈴谷
「アメさんは」
後藤はぼやくような口調で言った。
「致死性の被害を及ぼすことなく、中華帝国中央部の基盤を破壊した。そう言ってるけどね」
米軍が、中華帝国に対して、“何か”をした。
それは美奈代達も乗組員の話題として聞いてはいた。
後藤の口から語られるのは、その話だ。

米軍が極秘に開発していたＥＭＰ爆弾が投入され、中華帝国上空で爆発。
この影響で、中華帝国中央部の社会基盤は壊滅的な打撃を受けた。
米軍は、人一人殺すことなく、中華帝国に大打撃を与えたと喧伝している。

後藤は、それを半ばからかっているのだ。

「発電所や送電施設、通信等はのきなみ寸断された。
情報網が消滅したおかげで、外部から被害がどの程度か知る術がないのに、人殺してないってのはどうかと思うけどね。俺は」
こういう話をする時、後藤が何だか楽しそうだな。と思うのは自

分だけとは思えない。
美奈代はそう思った。
「それでもさ？レーダーが、次々に墜落していく航空機を捉えているんだわ。１機２百人も乗ってたとしてご覧？１０機も墜落したら２千人だ。しかも、大都市のど真ん中上空で消えた機体も１０機以上だ」
「あの」
美奈代が訊ねた。
「これから……どうなるんですか？」
「面白いこと教えてやろうか」
後藤は、本当に嬉しそうだな。と、美奈代は思った。
「中華帝国の情報網の一部が消えた。実はな？」
こういう笑いを浮かべる時、ロクなことはないことは間違いない。
「……」
美奈代は、何だか暗然とした気分で言葉を待った。
「国家の情報網の一部が消えるってことは、全体がマヒするのと同じなんだよ」
「へっ？」
「情報網の穴を埋めることに全力が費やされる。特に、中国のような力で民衆を抑えているような所で、中央の命令を届けることが出来ない事態は、民衆による国家に対する反乱を招きかねない危険事態だ」
「ですけど」
芳（かおる）が首を傾げながら訊ねた。
「北米でいろいろあるのに」
「北米の軍隊は勝手に何とかしろ。政府にとっちゃ、そんなこと構ってるヒマはない」
後藤は、黒板に張り付けた世界地図の一部、中国大陸を指示棒で突いた。
「ここにいるよい子の大半は、ここに来たことがあるだろう？」

そこは北京から大分離れた場所。
チベットだ。
「ここに頑張っている、あの西姫達がこの機会を逃すとは思えない。南京やあの辺は最前線に近い分、兵士も多いが、こういう最前線に送られる兵士達の中には、現在の簒奪政権に嫌われて、“死んでこい”ってわけで送られているヤツも多い。
噂だが、西姫達は、こういう連中の抱き込みにかなり成功しているそうだ。
何より、東南アジア戦線で政府の無能が原因で地獄を見た兵士達がごまんといるんだ」
「まさか――内乱が」
「起きる」
後藤は真顔で言った。
「欧米は、西姫を正統な皇帝と認めている。支援も約束している。この作戦が、その“支援”の一環だとしたら？お前が西姫達ならどう動く？泉」
「――っ！」
「まぁ、これで」
後藤は天井をぼんやりとながめるように、背筋を逸らせた。
「痛たっ……トシかな……中華帝国軍はしばらく考えなくていいよ。連中が相当バカでない限り」
「連中もヒマなしですか」
「そういうこった。北米に送り込まれた連中だって、新しい敵相手にするので精一杯だろうし」
「新しい敵？」
涼がえっ？という顔になった。
「ドイツ軍ですか？」
「もうお会いしたでしょ？」
後藤はちょっと呆れた。という顔で言った。
「ドイツ軍の間近。炎でブワァッ！って派手なことされたはずだ」

「――あっ」
「これは俺の推測だが」
後藤は、ちらりと美奈代を見た。
――言っちゃうよ？
その眼はそう語っていた。
美奈代は無言で頷いた。
「ニューメキシコ州のどこかに、日村のような仕組みがあったんだろう。つまり、妖魔達を封印していた――それを、誰かが開けちまった」
「それって、中華帝国軍ですよね」
「だと思うだろう？」
後藤はニヤリと笑った。
「ところが、連中は先に手を打った。昨日、中国のマスコミは、北米戦線で、米軍が妖魔を兵器として投入してきたと報道した」
「……は？」
「連中も、かなりの辛酸を舐めたらしいね。“人類の敵と手を結んだ米帝の卑劣な攻撃”と口汚く罵っていたそうさ」
「それで？」
宗像は訊ねた。
「まさか、私達がそいつらを始末に行け――なんて言いませんよね？」
「ご明察」
目を見張り、絶句する宗像に、後藤は続けた。
「俺達は、ドイツ軍とマラネリ軍と共に、こいつ等の始末に動く。作戦は追って知らせるけど、除隊も脱走も認めないからね？宗像？」

●東京　皇居
「これは一体」
苦い顔をした帝が、イツミに訊ねた。

「どういうこと？」

「どういうことだと言われたい？」

イツミは、楽しげに訊ねた。

「若気の至り？冗談？」

「真面目に答えて欲しいんだけど」

帝は、イツミの前に置かれたお菓子の入った皿を取り上げた。

伸ばされた手を止め、イツミが怨めしそうな顔をする。

「人間界でいろいろ動いているでしょ？タマには気楽な相手とお茶って思ったのに」

スネる顔を見ていると、まるで子供だと、帝は思った。

「これがお客に対する態度？」

「イツミさん」

「……ヴォルトモード卿の名前は知ってるわね？」

帝は皿をテーブルに戻すと頷いた。

「あそこは、彼が封印されている場所にたどり着く第一関門」

「第一関門？」

「そう」

イツミは、皿から和菓子をつまむと口に放り込んだ。

「もぐもぐ……さすがに和菓子はここに限るわ」

「どうも――――それで？」

「どこまで知ってるの？」

「……地下鍾乳洞から妖魔多数が出現した。その程度」

「あの地下鍾乳洞の最も奥に関門はある。関門の前にあるトラップにひっかかると、支門（サブゲート）に封じている妖魔達が一斉に動き出す仕組みだった」

抹茶を口に含んだイツミは、どの和菓子を食べようかと迷っている。

「これがいいか……」

桜の形を模した桃色の和菓子を口にする。

「ケーキもいいけど、お茶には和菓子よね。詩織は？」

「話題を逸らさない」

「情報料」

帝は無言で皿を指さした。

「和菓子代」

「いくら？」

「情報料と同額」

「ぼったくりじゃないっ！」

「またそういうことを！」

「――誰がやろうとしたかは明白だけど、流していた偽情報に上手くひっかかってくれたわね」

「偽情報？」

「トラップを第一関門だとワザとわかりやすく流布しておいたのよ」

「それでこの騒ぎ？」

「心配しなくていいわよ」

イツミは言った。

「妖魔の数は多くない」

「ちなみにどの程度だったか覚えてる？」

「――確か」

うんっ。と視線を泳がせて、指を一本立てた。

「百……千？」

「まぁ、その位ね。北米大陸に展開していた部隊の大半を封じたから」

「それで千？」

「単位は万よ？」

「それで心配するな？」

「トラップは全部で２０近いんだもん。引っかかったとしても、その１つに過ぎないわ」

「うんっと……」

帝は少し考えてから言った。

「その第一関門を突破すると、ヴォルトモード卿に近づくことが出来る。トラップは、その関門と似ているの？」

「うり二つ」

「それがあと１９はある？」

「そう。だから、正義の味方だかアホな勇者気取りで関門にたどり着いても、それが本物じゃなければ、トラップの中身がぶちまけられる」

「……どうしろと？」

「ここで全部が諦めてくれれば万々歳なんだし、私はそのつもりで作ったのよ」

「２０のトラップ全部吹っ飛ばしてでもヴォルトモード卿を取り戻したいって、魔族軍は考えてるはずだよ？」

「――――そうねぇ」

茶碗を弄びながら、頬杖をついたイツミは、わざとらしい顔で言った。

「でもまぁ、関門にたどり着けても、無意味なんだけどね」

「無意味？」

「“鍵”がなければ扉は開かない」
「扉を打ち破る」
「それやったら」
イツミは笑って言った。
「第二関門へは二度と近づけないわ」
「なら、どうしろと？」
「“鍵”をもって、関門に行く。そして、第二関門への道を開く」
「……」
「それだけよ」
「妖魔は？」
「あなたの目的は何？信仁？」
イツミは呆れた。という顔になった。
「ヴォルトモード卿をどうしたいの？」
「決まっている」
帝は固い表情で言った。
「封印のままで、二度と復活させたくはない」
「――本当に？」
「……？」

「殺したい――の間違いでしょ？」

「殺せ、の間違いでしょ？イツミさん」

帝は、急須からイツミの茶碗にお茶を注ぎながら言った。

「全ての元凶を、僕に始末させたい。そう思っている」

「まさか」

お茶を飲み干すと、イツミはジロリ。と帝を睨んだ。

「――本気で思ってる？」

「関門の話をしたことはつまり」

和菓子を口に運びながら、帝は言った。

「僕に何とかしろ。そういうことのはず。イツミさんの話はいつだって遠回しでわかりづらいんだよね。昔から、理解出来なくて何度死にかけたか」

「人の話をちゃんと聞けって親御さんから教えてもらわなかったの？」

「あのエトやフィアンナですら理解を誤ったのは一度や二度じゃない。グロリアやイルに至っては鵜呑みにしていたし。僕達は何が何だか、最初は理解さえ出来なかった」

「――懐かしき思い出になったでしょう？」

「今でも悪夢に見ることがあるよ。第一関門とトラップを見極める方法を教えて欲しい。部下を残り１９回も死なせることは出来ない」

「“鍵”ならすぐにわかる」

「だから、“鍵”って何？」

「生体鍵よ。説明したでしょう？あの娘のこと」

「……ああ」

かなり頭をひねった後、帝は手を叩いた。

「あの娘か！」

「そう。あの子を関門の前まで送り込みなさい。あの娘が、本来の“鍵”の役割を果たせば、第二関門への道が開く」

「投入戦力は、魔法騎士隊の方がいい……かな」

「あのバカ息子一人で十分なんだけどね」

何故か、イツミは憮然とした顔になった。

「ヨミエル様がとにかく頑固で、アイツを投入することを認めるのに、私やフィアンナ達が、どれ程苦労したと思う。

信仁が、息子はそろそろ初陣を飾らせる年頃だって、そう言ってるからって、それでやっと渋々認めたのよ――って、信仁？何、派手にお茶噴き出しているのよ」

「い……いや」

盛大にお茶を噴き出した帝は、激しく咳き込むしかない。

「な……息子？」

「やっぱり、そういうことなんじゃない？あの冒険の最後の夜。未だに詩織が疑っているあの晩、ヨミエル様と何があったかは聞かなくても分かるわ」

「……詩織には」

「わかってるわよ。あんたに対する最大のジョーカー。そうは手放すもんですか」

イツミは笑って言った。

「しかも、私の可愛い教え子、シルフィーネの息子兼娘、そして私の弟子兼奴隷で扱うことが私の義務でもあるんだから」

「随分と……気の毒というか、複雑な扱いだね。鍾乳洞の探索までやらせたの？」

「命令に文句一つ許さない。それで育てたからね。でも、交戦はヨミエル様の厳命で禁止。髪の毛一本でも戦闘でケガしたら、あの人が天界軍をどう動かすか。まるで想像さえ出来ないというか、したくない」

「……カッ。となると」

何故か帝は身震いした。

「あの人は――恐ろしいからね」

「その結果を教えてあげる」

イツミはため息と一緒に言葉を紡いだ。

「鍾乳洞内に妖魔の反応は微弱」

「――は？」

「というか。ほとんどない」

「あの……それってどういう？」

「中世協会が、実力行使に出たのよ。鍾乳洞内部。魔界・天界双方の介入が地理的にありえないだろう。そうタカをくくっていたみたいね」

「じゃあ」

帝は、ハッとなった顔で言った。

「妖魔はこれ以上」

「トラップはいつでも作動できる」

イツミは首を横に振った。

「むしろ、人類を近づけさせないための防衛手段として使用される」

「どうやって」

目を見張る帝に、

「トラップの目の前に、地上に通じるゲートを用意するだけで事足りるわ」

イツミはそっけなく言った。

「簡単な事よ」

「僕はどうすればいい？」

「中世協会は、メース部隊を大量に投入して鍾乳洞を掌握している。これはむしろ、あなたの部下が戦いやすい状況なんじゃない？」

北米戦線編　第二十七話（後書き）

やっぱり、日本編の方が書きやすいですけど、そろそろちょっと、悠理達を書きたいです。薄桜鬼のアニメ版見てからだと、幕末編もやりたいし……だからでっち。そろそろ転職決めろ！お前の住んでる所じゃ、求人自体が壊滅してるだろうけど、私はお前を応援しているぞ！

北米戦線編　第二十八話

●大ドイツ帝国首都ベルリン王宮

「……陛下にも困ったものだ」

帝国宰相、シックルグルーバーは帰りの車の中でため息をついた。

数日前。

陛下は突然、マラネリ大使を招いて祝宴を開いた。

シックルグルーバーはその日、フランスへ出向いていたため参加出来なかったが、その日の夜の内に参内を命じられた。

翌日の計画全てをキャンセルして、特別便で王宮に入るハメになった。

何が起きたかと青くなった宰相は、その内容を聞いて、思わず怒鳴りそうになった。

皇帝がマラネリからテスト騎2騎、購入したことは知っている。

それがモンキーモデルだから何だと言うんだ？

新領土の国境線を巡るフランスとの交渉が山場を迎えてる最中だというのに、そんなくだらないことでフランスから引き戻されるなんてあんまりだ。

散々、シックルグルーバーを怒鳴るだけでは物足りなかったらしい。

返答次第ではマラネリへの宣戦布告さえ辞さないと、マラネリ国王を衛星通信に呼び出して怒鳴りつけまでした。

マラネリは小国といえど、反応弾保有国だ。

皇帝は、その国の国王めがけてケンカを売ったのだ。

そろそろ夜明けになろうか。

そんな時間までそれにつきあわされたシックルグルーバーに、皇帝は言った。

「ご苦労だった。これからフランスに戻って予定通り仕事にかかっ

てくれ。交渉にしくじったら怒るぞ」
そう言われたシックルグルーバーは、本気で泣きたかった。

「まだお若いとはいえ……」
その時のやりとりを思い出し、シックルグルーバーは暗然とした気分になったとしても、文句を言われたくもない。
「あれでは将来が心配だ」
そう思うからだ。

そして今日だ。

「ノイシアの次期後継騎は欧州共同で開発する方針だと何故わからん」

「まぁ、そう言わず」
隣に座る国防大臣は年老いた顔を苦笑に歪める。
「陛下はまだお若い。それに、言い分はわかる」

「何がだ」

「精霊体搭載型運用は、先帝陛下がヴァチカンの言い分に乗せられて開発禁止を命じられた。これまでは、それでもよかったのですが……」

「問題は、この先だな。ドイツが独自規格をここで導入するのは困る」

「しかり」
国防大臣は頷いた。
「開発費の高騰と、軍事費の削減方針――メサイアを巡る環境の

悪化は世界的流れだとして、欧州統一規格を作るのを提唱されたのは宰相でしたな」

「統一した規格でなら、紛争もそうそう起こせない。そういう判断もあるのだが」

シックルグルーバーは、何度目かのため息を漏らした。

「お若い皇帝陛下にはわからないらしい」

「陛下は力を求めていらっしゃる」

国防大臣は頷いた。

「中華帝国軍は帝剣を制式化し、米軍はブラッテイファントムに、グレイファントムの後継騎開発も急ピッチで進めるでしょう。

そんな中、数十ヶ国の勝手な要望が盛り込まれ、ぐちゃぐちゃにして、無茶な規格で作り上げられたメサイアが、そんなものに対抗できるものか。それが皇帝陛下の持論でいらっしゃる。

デュミナスは、そんな皇帝陛下にとって、大変期待された騎だった。

フォイルナー少佐達は、その騎をもって皇帝陛下に多大な戦果とドイツ騎士の名声をもって答えた。

フォイルナー少佐によって飾られた戦果を耳にした時、陛下がどれ程喜ばれたか」

「そして、それがモンキーモデルと聞かされた時の落胆を――――そう言いたいのか？」

「然り。そして」

「……日本軍も余計なことをしてくれたものだ」

「陛下にとってもあれはインパクトがあった模様で、ことある事に、

あの時の映像を眺めていらっしゃるとか」

「そのうち、日本製を導入するとか言い出しそうだな」

シックルグルーバーにしてはそれは冗談だった。

だが、

「非公式ながら」

国防大臣は小声で言った。

「信仁に、供与を持ちかけて断られたそうで」

「当たり前だろう」

シックルグルーバーはあきれ顔で言った。

「メサイアをくれと言われて、はいそうですかが通用すると、本気で思ってるのか、陛下は？」

「そこがまぁ」

国防大臣の口から苦笑が漏れた。

「陛下もお若いですから」

「単に熱中するあまり、分別を失ったと思いたいな」

「お若いですからな――――して？」

「ん？」

「マラネリとの話は」

「――――悪い話ではあるまい」

シックルグルーバーは、シートに身を委ねると目をつむった。

「こちらは人件費だけ持てばよいのだ。予算の範囲内で何とかなる

だろう。それに」

「マラネリの国王は、精霊体搭載型を遠回しに陛下に売りつけることで、欧州統一メサイア開発計画を壊したいのが本音でしょうな。必死なご様子で――それで？」

「マラネリ製メサイアの欧州マーケットでのシェア拡大を狙っているんだろう。

統一規格が出来れば、そう簡単には崩せない。

皇帝陛下念願の精霊体搭載型を、ドイツ軍人が動かすのだ。文句もあるまい。

どちらにしても」

シックルグルーバーはぼやくように言った。

「苦労するのは、あの若造だがな」

●アメリカ合衆国　シカゴ付近　ドイツ北米派遣部隊司令部

「部隊は壊滅。それだけじゃない」

第2メサイア師団のレンネンカンプ司令を前に、フォイルナー少佐は相変わらずのポーカーフェースで立ちつくしていた。

「新種のメサイアと交戦した挙げ句、新種の妖魔まで呼び寄せたというのか？」

「……」

「一体、どういう手を使ったんだ？何だ？どんな魔法を使った？」

「……別に何も」

言われても困る。

普通、ああいうのは不運というものだ。

こっちが不運を呼び寄せたなんて言いがかりもいいところだ。

「そうか？」

レンネンカンプ司令は、歴戦の猛者上がりの顔に、意地の悪い笑みを浮かべ続けている。「おかげで、かなりの数のサンプルが手に入った。見たんだろう？」

「メサイアの方は――――まだですが」

「見ておけ。そして、その真実を知った世論が、中華帝国にどんな非難を浴びせているのかも含めてな」

「非難といいますと？」

「見ればわかる。ただ――――中尉」

レンネンカンプ司令は、何故かブリュンヒルデに言った。

「貴官は見なくていい。これは、俺の紳士としての薦めだ」

「はっ？」

突然、紳士などという、およそ想像できない言葉を聞いたブリュンヒルデは眼をパチクリさせた。

「それは？」

「フォイルナー少佐」

「はっ」

「ラボ送りになる前に見ておけ。まず、貴様が見て、中尉に見せてよいものか判断しろ。中尉？賭けてもいいが、少佐が中身を見て、それで見ていいと言い出したら、少佐の愛情を疑った方がいいだろうな」

「……はい」
「はっ」

「それと……だ」
レンネンカンプ司令は、デスクに置かれていた書類を手にした。
「今回の損害に関して、補充兵はない」

「しかし！」
ブリュンヒルデが青くなった。
「戦力の半数を喪失し、大隊は、大隊としての機能を喪失しています！」

「グリュックシュヴァイン大隊は、現有戦力のまま、特別任務についてもらう」

「特別任務？」
ブリュンヒルデは、その名に本能的なイヤなを否定できなかった。
特別。
その名を関する存在は、軍隊内においてロクなこととして受け入れられることはないのだ。

「そうだ」
レンネンカンプ司令は何度も頷いた。
「正直、俺はこの任務についてみたい。本当だぞ？」

「……？」
思わず、フォイルナー少佐とブリュンヒルデは顔を見合ってしまった。
一体、レンネンカンプ司令がここまで言うのが、イヤミなのか押

しつけているのか。一体、どっちなのか判断がつかないのだ。

「この任務についてもらうため、貴大隊は一時的に３６名まで減ってもらう。人選は任せる。精鋭を揃えろ」

「騎士だけで？」

「ＭＣ（メサイア・コントローラー）と予備含めてだ」

「待ってください」

さすがにフォイルナー少佐が異議を唱えた。

「４８騎、１０２名の大隊を中隊規模へ格下げですか？」

「しかたないだろう？」

レンネンカンプ司令は言った。

「配備されるメサイアの数が予備騎こみで１９騎。安心しろ。独立大隊として、大隊権限とその機能は付与する」

「司令」

ブリュンヒルデが訊ねた。

「一体？」

「皇帝陛下から命令である」

レンネンカンプ司令は姿勢を正すと言った。

「グリュックシュヴァイン大隊は、マラネリ軍よりメサイアを受領した後、マラネリ国王直属部隊との共同作戦に従事すべし」

「まさか」

フォイルナー少佐は、ハッとなった。

マラネリ国王と最後に会ったあの時のことを思い出したのだ。

あの少年王は言っていた。

「またしばらくしたら会おう。少佐」

……そうか。

フォイルナー少佐は、あまりのおかしさに噴き出しそうになった。

「我々の任務とやらは、つまり、マラネリ軍から供与される、精霊体搭載型メサイアの運用試験ですか？」

「何だと思ったんだ？」

レンネンカンプ司令は笑いながら言った。

「供与されるメサイアの数が２０騎足らずでは、百何十人で行っても意味はない。そうだろうが」

「――――はっ」

「当面は借家住まいだ。手当は期待するな？クラッチマー中尉との新居購入費は別で稼げ」

新居。

司令室を辞した後、ブリュンヒルデの頭に浮かぶのは、その言葉だけだ。

最近、そんな話題が妙に耳に響く。

子供

出産

そして、新居

通路を歩くブリュンヒルデは、自分がどこを歩いているのか、全く自覚がないまま足を進める。

脳裏に浮かぶのは、フリルのついたエプロンをしめてキッチンに向かう自分の姿。

ぴかぴかに磨き上げられたシンクに真新しいコンロ。

日当たりのいいキッチンに満足げな笑みを浮かべる自分の向こうには、夫がいて、子供がいて――

子供を抱きしめた所で、ブリュンヒルデは現実に引き戻された。

場所はハンガー区画。

司令室からはかなり離れている。

こんな所まで歩いていたのか。

そう思うと、どれだけ自分が妄想に浸っていたのかを思い知らされ、ブリュンヒルデは恥ずかしくてたまらない。

そんなブリュンヒルデの前。

技師と、彼と話をするフォイルナー少佐の目の前に転がされているのは、サラマンダーの火炎攻撃から逃れた飛鼠（ひそ）の残骸。その頭部ユニットだ。

ハッチがバーナーか何かで焼き切られた痕跡がはっきりと見える。

そのハッチから中をのぞき込んだフォイルナー少佐は、しばらくの後、外に出た。

再び、技師と何かを話す。

――これか？

ブリュンヒルデは、レンネンカンプ司令との会話を思い出した。

司令は、見るなと言っていた。

紳士という似合わない言葉まで使って、見るなと言っていた。

フォイルナー少佐が見ろと言ったら、愛情を疑えとまで。

一体、何？

見たい。
でも、見ない方がいい。と、心のどこかで声がする。
まるでパンドラの箱を目の前に置かれたような気分だ。

技師と会話が終わったフォイルナー少佐が、ブリュンヒルデに言った。

「中尉」

「はい？」

ブリュンヒルデは、彼が“見るな”と言うと思った。
だが、フォイルナー少佐は真顔で言った。
「見てみると良い。これは――酷すぎる」

その眼は、個人のこととして、物事を語っていない。
長いつきあいが、軍人として物を言っていることを嫌でも思い知らせてくれる。
そのことに、内心でわき上がった感情に始末をつけることが出来ないまま、ブリュンヒルデはハッチの中をのぞき込んだ。

「一体……」
フォイルナー少佐な目を覚ましたのは、翌日の昼過ぎのことだった。
軍医の説明だと、療法魔導師の治癒は終わっているが、モルヒネが投与されているから、しばらく動けないという。
言われなくても、全身が痛くて動きようがない。
特に、顔の周りが。

ベッドに横たわる彼の顔をのぞき込むように、診察に来た軍医長が言った。
「何度、中尉を怒らせたら気が済むんですか」
「……」
「軍隊じゃなかったら、中尉は殺人未遂ですよ？女性をそんな立場に追い込んで楽しいのですか？」
「……それが被害者に対する言葉か？」
「懲りないあなたが悪いんです！」
ちなみに、軍医長は女性。
フォイルナー少佐よりやや年上だ。
「そうは言うが、大佐。あれは軍人としてみ見ておくべきだ」
「中尉は女性です。あんなものを女性に見ろだなんて、私は少佐の男性としての良識を本気で疑います」
「大佐も見たのか？」
「当たり前です。“あれ”について医師としての意見を求められました。とにかく、今回の件で、大佐の男性としての株価は底値を割りましたね。保証します」
「……意味がわからん」

マラネリ軍の巡航母艦“エトランジュ”がシドニーに入ったのは、その翌日のことだった。
グリュックシュヴァインには辞令が発せられ、第二メサイア師団隷下から独立大隊としての権能が与えられた。
フォイルナー少佐が寝込んでいる間にブリュンヒルデによって行われた選別に残った騎士達が、“エトランジュ”のデッキに向かってラッタルを上がっている。
その列に並ぶエレナがふと、後ろを見た。
それまでの愛騎、ノイシアがセッティングのやり直しのため、母

艦に格納されるところだった。
「――さよなら」
エレナは小さく敬礼すると、列に向き直った。
「ヘルガは、お別れとかしないの？」
「一晩、たっぷりやってきた。MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）で眠ってね」
「……そう」
「さてと……次は新型なんて言うけど。どうせモンキーモデルでしょ？」
「そういう言い方は好きになれない」
私物が詰め込まれたランドリーバッグを重そうに持ちながら、エレナは早く無重力区画に入ることだけを祈った。
「ノイシアよりヒドいことはないでしょう？」
「多分ね」
「きっと、スゴいのが出迎えてくれるわよ」
ラッタルを登り、大きく開かれたデッキに入ったドイツ騎士達は、その場で整列した。
そして――
「確かに……」
ヘルガは、そこに並んでいたメサイアを見て、唖然として言った。
「こりゃ、びっくりね」
「……えっ？」
そこに並んでいるのは、あのデュミナスだった。
「モンキーモデルが何で？」
「こらっ」
ヘルガがエレナの脇を小突いた。
整列する大隊の前に立つのは、マラネリ軍側の将兵。
艦乗組員や整備兵の丁度真ん中。一番目立つ所にいるのは、小太りの少年。
そう、マラネリ国王だ。

「第３０３独立大隊グリュックシュヴァイン。ヴォルフガング・フォン・フォイルナー少佐以下、着任」
フォイルナー少佐の声に弾かれたように、エレナ達が一斉に敬礼した。
「“エトランジュ”艦長、キユヅキ大佐。着任を認めます」
中肉中背の、やや人の良さそうな士官が答礼した。
「本艦は最新鋭中の最新鋭だ。設備に不満はないはずだ」
殿下は自信満々に言った。
「それでも不満があるなら、船底にある意見収集箱に文句を入れてくれ。艦長、今後の予定は？」
「各員の部屋の割り当てが終了次第、艦内見学、それと各部隊との面通し……終われば夜ですな」
「よろしい。引き渡す騎については、夕食後のミーティングでやろう」
「……しかし」
フォイルナー少佐の顔には珍しく落胆の色が濃い。
「失礼ですが、これは」
「君のワガママにつきあえる機体がこれしかなかったんだ」
殿下は、少しだけムッとした顔になった。
「あれをモンキーモデルとまで言われたのは、僕にとっては心外なんだぞ？
元来、デュミナスは精霊体搭載型たる我が国正規軍向けのメサイアのフレームの発展型だ。精霊体を具現化出来ないレベルのエンジンは搭載していたが、心臓以外はしっかりしていたんだ」
「それだからモンキーモデルって言うんじゃないの？」
「……私もそう思う」
ヘルガが思わず小声でぼやいた声に、エレナは思わず頷いた。
「搭載されているＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）とエンジンは」

ゴホンッ。
それが聞こえたのか、殿下はわざとらしい咳払いをした。
「最新鋭のそれだ。いくつかの実験的要素は入っているが、決して日本軍のインペリアル・ドラゴン・シリーズに劣る代物ではない。何騎かは狙撃用に特化したタイプも用意してある。ミーティングで仕様は説明する。それまで楽しみにしておくといい。
それと、フォイルナー少佐。クラッチマー中尉」

「はっ」
「はい」

「荷物は従兵に任せておけ。君達には特別騎を用意した」

「特別騎？」

「僕が基本設計して、紅葉さんとお師匠様――六本線（ハイパー・スタンド）の意見を採り入れて再設計した自信作だ」

●鈴谷

同じ頃――

「狙撃隊の収容作業、急げっ！」
ハンガーデッキは、“自発的訓練”から帰還する涼達の受け入れ作業が始まっていた。
「熱心だねぇ」
その騒ぎを、壁際のキャットウォークの手すりにもたれかかりな

がら、後藤が言った。
「ちょっとは見習ったらどう？」
「そう思うんでしたら」
美奈代は恨めしそうに言った。
「書類仕事減らして下さいよぉ……」
「書類仕事は士官の義務」
「……はぁい」
「でもさ」
「はい？」
「あいつら、何、あんな熱心に訓練に勤しんでるワケ？」
「ドイツ軍の騎士ですよ」
「ん？」
「あれに試乗して、射撃テストやったんですけど、記録によると、ＨＭＣで６発ワンホールショット決めたらしくて」
「そりゃ」
後藤は笑って言った。
「ＭＣ（メサイア・コントローラー）の補正があればいくらでも出来るでしょ？」
「騎士の直接照準だけで――記録はそうなっています」
「神業見ちまったから」
後藤の目の前で、ＨＭＣを担いだ“白雷改”達がハンガーベッドに向かって移動を続けている。
「それに近づこうと？」
「いい傾向だと思いますけど」
「煮え切らないな」
「記録に拘っては欲しくないって……そう思うんです」
「お前、教官に向いてきたんじゃない？」
「勘弁して下さい」
美奈代は首を横に振った。
「私、他人のことまで責任とりたくないんです」
「誰だってそうだよ――俺だってお前等のとばっちりなんて御免

だ」
「そろそろ」
美奈代は無視するように言った。
「作戦が決まったんじゃないですか？」
「おいおい。デートのメニューみたいに言わんでくれよ」
「――決まってるんでしょう？」
「最近、厳しくなったね。可愛げが無くなってきたよ」
「こんな仕事ですから」
「――ドイツ軍と共同戦線を張る。連中は３０騎程。中隊規模だな」
「うちの倍で、何を不足みたいな物言いを」
「羨ましい？」
「規模だけなら」
美奈代は、慌てて付け加えた。
「指揮官として仕事が増えることは別問題です」
「俺ぁ……」
後藤はポケットから禁煙パイプを取り出しながら言った。
「娘っての育てる自信がまるっきりなくなったぜ。お前見ていると」
「私もあなたの娘をやれる自信はないです」
「ふん……マラネリ軍の最新鋭、恐らく精霊体搭載型を受領して天狗になった連中とおつきあいだ」
「そういう言い回ししてる方が」
美奈代は、本当に嬉しそうに言う。
「貴方らしいですよ。後藤隊長」
「……俺ぁ、真面目な話してんのよ？」
「ええ。存じてます」
眼を細める美奈代は、
「聞いてますから、続きをどうぞ」
「紅葉ちゃんの“作品”とお前らの活躍にすっかり熱を上げてるのは、ドイツの大将達じゃない」

「？」
「――あの殿下だよ」
「あの子がですか？」
「そう――国王相手に言い方はあると思うが」
「潰れ肉まん」
「笑っちまうな……それ」
「気に入ってるんですけどね」
「惚れた相手に認めて欲しい。負けたくない一心で、戦場まで顔突っ込むんだ。あの国大丈夫かねぇ」
「……惚れた、相手？」
「……何でもないよ。殿下が意地になって開発した兵器でドイツ人がどういう行動に出るかは知らないが、俺達は俺達でやるだけだ」
「まぁ、そうですね」
美奈代は適当な答えをしながら、後藤の真意を考えた。
「適当につきあっても、深入りして、下手に巻き込まれるなってところですか？」
「ご明察」
後藤は、あのチェシャ猫のような笑顔で頷いた。
「新しい玩具に天狗になった連中の暴走の尻ぬぐいなんて、俺ぁ、お前達に命じたくはないからね。部下にも距離を正しくとるように命じておいてくれや」
「了解です。それで」
「――ああ、作戦ね？どこだと思う？」
「事態の根元。つまり、妖魔が出現した場所」
「カールスバッド鍾乳洞」
後藤は言った。
「お前は本当に扱いやすくて気に入っているよ。メサイアで格闘戦が出来るほど、大規模な代物。その地下だ」
「単なる鍾乳洞？」
「いんにゃ？米軍の秘密基地があった所だ」

「……まさか」
美奈代は、眉をひそめた。
「アフリカで鍾乳洞に入ったことがあります。メサイアで」
「……ああ、記録は知ってる。その顔からして――成る程？お前はたいしたヤツだよ」
後藤は美奈代の頭を撫でた。
「言ってみな？何があるか」
「……反応弾貯蔵庫」
「テキサス周辺で、中華帝国軍の手に落ちなかった反応弾の８割以上が集積されているとさえ言われる。下手に爆発すれば、地形がかわる程度じゃすまない」
「どうして――どうして、この国はそんなに厄介なの！？」
「俺に言うな」
「す、すみません」
「時々、感情爆発させるのは、人間らしいとはいえ、社会人としては感心しないぜ？」
「く……クセなんです」
「スネるな。慣れろ。感情をコントロールするのも大切な仕事だ」
「……はい」
「妖魔だか魔族だかはドイツ軍にくれてやれ。男になりたがるコドモから、エクスカリバーをもらった、英雄志願の物好き共と同じマネしなくていい。わかるな？」
「回収した反応弾を、米国政府との交渉のカードに使うおつもりですか？」
「米国からの増派が、俺達がここにいる理由だ。アメリカから中華帝国軍を追い出すことじゃない」
「――はい」
「忘れてたろう？」
「……本当は」
美奈代は、バツの悪い顔になった。

「紅葉ちゃんが、マジックエジェクト・システムの応用として、回収用装置を作ってくれている」
「何です？それ」
「――――四次元ポケットさ」

北米戦線編　第二十九話

マラネリ軍巡航母艦“エトランジュ”から発艦したデュミナス達は、それぞれの部隊ごとに訓練に入っている。

訓練の様子は、偵察ポッド経由で“エトランジュ”の戦闘指揮所で把握することが出来る。

マラネリ軍最新鋭艦にして、自らの母親の名を冠した艦――国家にとっても旗艦となるこの艦の最重要区画で椅子に座った殿下は、偵察ポッドから送られてくる訓練の様子を、およそ満足げに眺めていた。

「悪くはないようだな」

「……はい」

エトランジュ艦長のキユヅキ大佐は軽く頷いた。

「操縦補完装置（コントロール・アシスト・システム）がなければ、ああは出来ないでしょうな。さすがに、殿下は慧眼ですな」

「よしてくれ」

殿下は従卒の持ってきた昆布茶を飲みながら言った。

「紅葉さんの手下共の苦労を知っただけだ」

「あの精鋭部隊のことですか？」

「そう。あの部隊でさえ、“白雷（はくらい）”、“白雷改”と更新する度に死にかけたという。ここでドイツ軍に不満を持たれると、後々のビジネスに響く」

操縦補完装置

操縦者の技量上の不備をコンピューターでサポートして、新兵をベテラン並に仕立て上げるメサイアの操縦補助機能だ。

基本データは、フォイルナー少佐とブリュンヒルデの二人のデュミナス操縦データ。

これを騎体操縦装置にフィードバックすることで、デュミナスに

搭乗した騎士達は、この二人並の戦闘が“理屈の上”では、可能になっている。
量産型デュミナスの目玉機能の一つだ。
とはいえ、熟練の騎士や軍人からすれば、そんなものは余計な機能であり、頼ること自体が自らの未熟さの証明になる。
この機能を知ったマラネリ軍ベテラン騎士達が、この装置を“ベビーウォーカー”と呼ぶのはそのためだ。

「――装置がなければ？」
そんな考えの一人、キユヅキ大佐は殿下に訊ねた。
殿下は、それにあっさりと答えた。
「今頃、何人か死んでいるだろう」
「実戦前に？」
「当然」
「……今更ながら」
ため息混じりに、キユヅキ大佐はぼやいた。
「我が軍騎士の精鋭ぶりがわかりますな」

ドンッ！
小隊を率いて狙撃訓練に入ったエレナが２０回目の発砲を終えた所だった。
「外れ。右１０メートル」
観測を続けるヘルガが、女の子を膝の上であやしながら観測結果を告げた。
黒い瞳に白い肌。黒髪のボブカット。クリーム色のワンピースを着た幼稚園児のような幼い娘が、ヘルガの膝の上で楽しげに微笑んでいる。
デュミナスの精霊体“エリカ”だ。
デュミナスを機動した途端に出現したエリカに歓喜して、エレナ

がどれほどコクピットに回せと言っても言うことを聞かない。
エリカも、ヘルガが気に入ったらしく、MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）から出ようとしない。
「どうしたのよ。あんたらしくもない」
「うーん」
口元をへの字に曲げたエレナが唸ると、首を傾げる。
「何よこれ」
「何って、何が？」
「……騎体がね？」
エレナは、考えがまとまらない。という顔で言った。
「何か――ヘンなクセ持ってるのよね」
「変な癖？」
「そう。発砲時に手首を少しひねるのよ。私はしっかり抑えているのに、どうしてか勝手にひねっちゃうの。それが誤差を産んでいる」
「……？」
ヘルガは、ちらりとエリカの顔を見た。
「わかる？」
「うん」
エリカは頷くと、幼い声で言った。
「お姉ちゃん」
「それ、私のこと？」
エレナは思わず自分を指さした。
「他に誰かいるの？」
「……何？」
「それはね？操縦補完装置（コントロール・アシスト・システム）の補正が原因。お姉ちゃんの操縦特性と装置の基本設定が合ってないの。優先権は装置にあるから、お姉ちゃんの癖は悪い結果にしかならない」
「私が悪いの？」
こんな小さい女の子が、小難しい言葉をバンバン使うことに面食らいながら、エレナはそう訊ねるのがやっとだ。

「ううん？お姉ちゃんも装置も悪くない」
「……装置を切ってから、第２１射入るわよ？ヘルガ」
「了解――エリカ？いいの？」
「うん」
エリカは言った。
「私、これ、嫌いなの」

●鈴谷　ブリーフィングルーム
「ドイツ軍はマラネリ軍と共同の部隊を編成することになった」
後藤が美奈代達の前で言う。
「目的はまぁ、精霊体搭載型メサイアを売り込みたい殿下の思惑と、欧州統一規格騎に懐疑的なカイザーの思惑が一致したってトコだろうね」
「つまる所、ドイツ軍に精霊体搭載型を売り込むための体験とでも？」
「そういうこと。精霊体搭載型が群を抜くような実績を示せば、それだけ売り込みやすくなるし、ドイツがダメでも、他国が感心をもってくれるかもしれないでしょ？」
「それなら」
宗像は苦笑しながら言った。
「我々は殿下の売り込みの邪魔にならないよう、後ろで小さくなっているべきでは？」
「俺もそう思うけどね」
後藤も苦笑いするしかない。
「主役が敵陣に乗り込む時にゃ、露払いってのがいるでしょ？」
「……黒子は辛いですね」
「そういうこった。作戦はかなり大規模だぞ」
そう告げた後藤の顔は真顔だった。
「西海岸方面にも大型妖魔の侵出が確認されている。

特にサラマンダーによる被害は甚大だ。
アメリカ軍は、最新鋭のブラッティファントム部隊の壊滅と引き替えに、やっと都市部防衛に成功したものの」
「……」
「防衛だけでは不足と判断。ついに妖魔達の根絶に動くことになった」
「――――質問」
挙手したのは美晴だった。
「まさかと思いますけど、反応弾の使用は」
「さすがに予定されていない」
後藤の返事に、皆が安堵のため息をついた。
反応弾が使用された後の戦場に出されるのは、肉体的にも心理的にも勘弁して欲しい。
「中華帝国軍もまた、妖魔達に追われてテキサスへ撤退中。この合間に勢力範囲を広げておきたいっていう下心も見え透いているけどね」
「可能なのですか？」
「中華帝国軍も現状では迂闊には手を出せない今がチャンスだ。妖魔達は米軍に任せる。我々の目的地は」
後藤が指示棒で突いたのは、ニューメキシコの一角。
「カールズバッド洞窟群国立公園。ここにある８４の洞窟のうち、最大規模の洞窟にして、米軍の秘密基地があった洞窟だ。確実な情報によれば、敵はここに潜んで何かをしている。詳細は伝わっていないが、司令部は、我々にこの洞窟の制圧が命じてきた」
「この頭数で？」
「この頭数で、だよ？山崎」
思わず口に出た言葉を咎められた山崎は赤面しながら口を閉じた。
「大体、洞窟っていう狭い戦場では数ばっかりいても意味ないでしょ？」
「心理的な安心感ですよぉ」

有珠(ありす)が口を尖らせた。
「連携がとれるかどうかわかんないドイツ軍なんて、どこまで頼っていいんですか？」
「元から頼るな」
「そんな！」
「お前達にゃ、洞窟の制圧も妖魔の掃討も仕事にしなくていいんだよ」
「はっ？」
美奈代達は目を点にした。
「な、なんですか？それ」
「洞窟の制圧も妖魔の掃討も、仕事にしなくていい」
「お言葉ですが」
月城が立ち上がった。
「司令部は、洞窟の制圧を命じてきたとおっしゃいましたよね？」
「んなこたぁ、ドイツ軍でもたきつけて、やらせりゃいいんだよ」
「命令違反ではありませんか？それは」
「そう？洞窟を制圧しろとは命じたとしても、俺達が単独で達成しろとは言ってない」
「屁理屈です」
「まぁ、俺達のお仕事はそんなことじゃない。もっと重要で、そしてちょっとワルいことだ」
「？」
「カールズバッドの鍾乳洞の地下。米軍がテキサス周辺から引き上げた反応弾の貯蔵庫がある。貯蔵庫にある反応弾を」
後藤は、そこで言葉を句切った。
皆、後藤が“妖魔達から護る”位のことは言うと思ったのだ。
だが、後藤はそんな期待を見事に裏切った。
「ちょろまかす」
「……は？」
「だから」

「それって、ドロボウってことですか？」
「そうだよ？フィアちゃん。大人になっても、こんなことしちゃダメだよ？」
「言ってることとやろうとしていることが、合致していません！」
「盗むのはお前達で、俺じゃないもん」
「何という屁理屈ですか。それは」
「……まぁ、それぁ冗談でさ」
ペシペシと、後藤は指示棒で肩を軽く叩いた。
「反応弾はウチが確保することで、後々の米国政府との協議の際の材料にしたいワケだ」
「協議？」
「日本への増派を頼み込む必要があるでしょうが。その時の脅迫材料に使いたいワケ」
「今、脅迫って言った！」
「泉、うるさいよ。話が全然進まない間に、魔族軍との休戦協定の期限は迫ろうとしているんだ」
「うっ」
「連中も勢力を増やそうとしている。一度の攻勢で戦線が瓦解することが明白な所を数えたかったら、5本の指じゃたりないんだぜ？」
「……」
「使えるモノは鍋の蓋でも、戦力になるなら猫の手でも使わなきゃいけない状況だ。綺麗汚いなんて言ってる場合じゃない」
後藤は真剣な口調で続けた。
「俺達ゃ戦争してるんだ。道理を争ってるんじゃない。きれい事はどっかに仕舞っておけ」
「……はい」
「よし。まず、洞窟の状況から伝える。現状、妖魔は洞窟内に確認されていない」
「え？」
「いるのはメースだ」

遙ちゃん。映像。
後藤に言われた涼宮中尉が画像をスクリーンに映し出す。
「これが3日程前に洞窟に忍び込んだ斥候兵が撮ってきた映像」
「忍び込んだ！？」
目を見張ったのは宗像だ。
「妖魔の巣窟にですか！？」
「腕のいいのがいるんだよ――――驚くところはそこじゃないね」
スクリーンに映し出されたのは、洞窟内部に立ち並ぶメース達だ。
「魔族軍呼称“サライマ”型。洞窟最深部までに４５騎が確認されている」
「……」
「洞窟の強度はかなりだが、下手な爆発系兵器の使用は落盤等の甚大な影響をもたらす恐れがある取り扱いには十分注意しろ」
後藤は、ちらりと涼達を見た。
「狙撃隊はＨＭＣを装備しない――――わかるだろう？」
「……」
複雑そうな顔をした涼達が無言で頷いた。
「洞窟内部で求められるのは、メース達との肉弾戦だ。広域火焔掃射装置（フレイム）（スイーパーズ）の類も使用は最低限度に留めろ」
「妖魔の集団攻撃があったらどうするんです？」
宗像が訊ねた。
「どこかに絶対に隠しているはずです」
「そん時ゃ、そん時だ。そうとしか言い様がない。妖魔はドイツ軍の手柄にくれてやればいいんだよ。俺達の目的は最深部に隠されている反応弾の確保だ」
「……最深部までメース達をなぎ払いながら進めと？」
「そうだ。手順もへったくれもない。
洞窟入り口にとりつき次第、内部へ突入。
最深部まで一気に突き進め。
あくまで最深部に到達することだけに主眼をおけ。

洞窟という特殊性故、通信を確保する必要がある。
途中、指定するポイントに通信中継装置を設置することを忘れるな。
また、この作戦において、技師を同行させる必要がある。
このため、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に搭乗した津島中佐達も一緒に潜る。
彼女達の護衛は言わずとも最優先。
中佐達に何かあれば、反応弾を確保しても、俺達の未来が狂う。
その辺を忘れるな？
反応弾は、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に搭載した簡易テレポートシステムで、鈴谷付近に転送する。
それから」
後藤は、そこで言葉を句切った。
「転送が完了次第、次の命令はその場で伝える。すぐには撤退しないように」
「次の命令？」
「俺も知らんが、上層部から厳命されているんだ」
後藤は言った。
「最深部到達の時点で開けとかいう、謎の添付ファイルが送られてきている。まぁ、どっちにしろ、ロクなもんじゃないだろうから、その辺は覚悟しておけ」
突如、北米大陸に出現した妖魔達の群れが大地を闊歩している。

その上空。
「ストラトフォートレスなら今頃終わってますよ」
Ｂ－２９の副操縦席でマイク・ショーン少尉がぼやく。
「たかが９トンの爆弾抱えてるだけなんて。クソッ！あのチンク共め！忌々しいクソったれの何とか粒子なんてバラ撒きやがって！」
「愚痴るなショーン」
機長席に座るテニスン中尉が酸素マスクを気にしながら言った。
「俺達は与えられた機で戦うしかないんだ」
「そりゃそうですけどね」
マイクは下を見た。
空中を飛来する妖魔がいないという情報を受け、マイクが所属する爆撃編隊は、高度を高くとっていない。
「爆撃誘導機からの通信は？」
「まだです」
答えつつ、マイクは、上空に黒い影を見た。
「爆撃コースは――機長、２時方向に敵！」
「違う……と思う」
テニスン中尉が上を見上げながら言った。
「あれは多分、友軍機だ……くそっ。レーダーがあれば」
「それこそ泣き言ですよ。護衛機が離れます」
「地獄のワルツの始まりだ。畜生……祖国の空で戦死なんてシャレにもならねぇ」
「爆撃誘導機から通信。爆撃航程開始地点まであと１５分」
「護衛機が撤退していく。こちら機長だ。まもなく管制ポイント。全員戦闘配置」

敵なんてどこにいるんだよ。
志願兵ばかりで、戦争経験がまるでない乗組員達に出来ることは訓練通りに兵隊を演じることだけだ。
実は、皆がこの爆撃任務が人生で初めての戦争だった。

対空砲は装備されているが、まともに敵めがけて撃った経験のある者は、この機には一人もいない。
実戦で爆弾を落としたことのある者もいない。
彼等全員にとって、戦場は未知の世界だ。
そこに踏み入った以上、出来ることは一つ。
訓練通りにやる。
それだけだ。

「敵機がいないことが幸いだぜ」
テニスン中尉が呟いたその時だ。

パッ

右斜め前を飛行していた機にいくつもの光が走った。
“バニー・メイ”という名が与えられた爆撃機。
機長はテニスンと同期だった。
彼が何か声をあげる前に、その機は炎に包まれた。
機体からオレンジ色の炎と煙を上げながら、“バニー・メイ”の機体が高度を落としていく。
「何だ!?」
「敵機、3時方向!」
その怒鳴り声に始まった乗組員達の報告が機内通信をパニックに陥らせる。
「5時方向に敵機!」
「落ち着け!」
テニスンは喉が破れるかと思うほどの声で怒鳴った。
「みんなで怒鳴るな!敵って何だ!?何が見えた!」
「恐らく中型妖魔!」
「あのドラゴンか!?」
「違う!」

乗組員の誰かが叫んだ。
「小さい！それにトカゲじゃねぇ！鳥だ！でも素早いっ！」
「クソッ！とにかく撃ち落とせ！」
「了解っ！」
「さぁきやがれ！俺様が相手だ！」
テニスンの耳に、乗組員達の極度に興奮した、殺気だった声が入る。

爆撃編隊を襲った敵は、レーダーに映らない。
狩野粒子影響下でレーダーが死んでいること。
そして、彼等がレーダーを反射しない肌を持つ生命体であること。
原因はこの二つだ。

その形状から“エイ”と呼ばれる飛行系妖魔。
主に肉食で口からＭＬ（マジックレーザー）を発射することが出来る。
群れで行動するが、縄張り意識が強く、縄張りを犯す“大型の飛行物体”の存在を極端に嫌う特性がある。
テニスン達は“エイ”達にとって、縄張りに入り込んだ“飛行物体”に過ぎない。

つまり――エサだ。

ＭＬ（マジックレーザー）がテニスン達の機の真横を飛行する2機に突き刺さった。
機内の爆弾が誘爆した2機は、空中でバラバラになって落下していく。
「編隊を詰めろ！密集隊形維持！」
編隊長機から殺気だった怒鳴り声が耳に届く。
テニスンは何度もシミュレーターで経験した場所に機体を動かした。

頭上の対空砲を操作するトミーが何かを見つけたらしい。12.7ミリ機銃が火を噴く音がコクピットに響き渡る。

この前の夏。

子供を連れて行った水族館で見た海洋生物のエイとそっくりな物体が機体の真横を突き抜けていった。

でも、あれは水の中の生き物のはずだ。

少なくとも、あんなジェット戦闘機並の突っ込み速度で空中を駆け回る生き物じゃなかった。

もし、そんな生き物なら俺は父親として子供達に見せはしなかった。

敬虔なカソリック教徒である自分が子供に見せるには、アレは教育上悪すぎる！

「畜生！」

クラウツは呻いた。

「狙いは、左を飛び続ける“メイ・ウェスト”と“スノー・ホワイト”だ」

機体から白い煙を上げる2機は、“エイ”達の格好のマトだ。

“メイ・ウェスト”の速度と高度が落ち始めた。

「機長、“メイ・ウェスト”が編隊離脱を宣言」

「了解した！」

チラリと足下のキャノピー越しに見た空。

数匹の“エイ”達が下を突き抜けていった。

狙いは“メイ・ウェスト”のはずだ。

あんなのに取り付かれたら――

「……あいつら、もう終わりだ」

そう、判断するしかない。

「機長、“スノー・ホワイト”が第一グループを誘導するそうです」

テニスンが気付いた時には、所属する爆撃編隊第一グループ隊長

機の姿が無くなっていた。
先頭をとる以上、敵に最も狙われやすい。
速度を上げた“スノー・ホワイト”はそこに付こうとしている。
それはつまり――
「やられるぞ。気の毒に……」
そんなポジションに付こうとしているのだ。

機銃が不意に火を噴くのを止めた。
エンジン音だけがごうごうと響き渡る。
初めての頃は五月蝿いと感じたものだが、今となっては静寂そのものだ。
「爆撃航程開始地点まであと7分」
「機長……あいつらがいなくなった」
「……縄張りを抜けたか？」
テニスンには、あの“エイ”達に縄張り意識があることなんてわからない。
ただ、そう思っただけだ。
もしかしたら、脱落した連中だけで満足したのかもしれない。
「機長！」
マイクが悲鳴に近い声で怒鳴った。
「前方、花火があがってる！」

マイクの指さした方角――真っ正面にいくつもの光と黒煙が上がっている。
すでに先行した爆撃部隊が魔族軍の対空砲の餌食になっている光景だ。
長く伸びる煙が、一体、何なのか説明を求める必要もない。

「畜生！」

テニスンは呻いた。
「敵機はいない！対空砲もない！そう言って司令部は俺達を騙しやがった！あの詐欺師野郎共め！」
歯ぎしりするほど呻いた後、テニスンは胸に下げた十字架を握りしめた。
「神よ。少なくとも本機だけでも守りたまえ――機長より全乗組員へ。本機はこれからあの炎の壁に突っ込むぞ！」

ぐんぐんと“壁”が近づいてくる。
否。
“壁”の方が近づいてくるのだ。
ポンポンと面白いように上がる黒い煙が、機体の間近で次々と花開く。

不意に、前方を飛行する“スノー・ホワイト”の速度が落ち始めた。
左の第一エンジンが半分吹き飛ばされていた。
速度の低下が急すぎて編隊を組むテニスンの眼から見れば、突っ込んでくるような錯覚さえ覚えさせる。
その“スノー・ホワイト”の土手っ腹に対空砲火が命中。
派手な爆発を見せた。
「“スノー・ホワイト”がやられた！ぶつかるっ！つかまれっ！」
機体を捻り、空中で一回転しようとしている“スノー・ホワイト”をギリギリでかわしたが、
「“ペニー・ジョイ”が！」
尾部銃座のクリスの叫び声があがった。
「畜生！“ペニー・ジョイ”が巻き込まれた！」

「機長だ、クリス、何が起きた！」

「“ペニー・ジョイ”が“スノー・ホワイト”をかわし損ねた！主翼を真っ二つにされて墜ちていった！」

「脱出したのを見たか！？」

「だめだ。2機ともコマみたいに回転しながら墜ちていった。あれじゃ、機体から脱出なんて出来ねぇ……遠心力で洗濯機の中みたいになってたはずだ」

“スノー・ホワイト”の喪失により、テニスンにとって、祈るべきは死んでいった連中ではなくなった。

自らになったのだ。

「通信。通信を第一グループ全機へつなげ」

通信手にテニスンは命じた。

「第一グループ全機へ。これより“スーパー・バニー”が先導する。幸運を祈ってくれ。以上だ――ハインツ！」

テニスンはすぐに爆撃手席に怒鳴った。

「俺達が先導だぞ！」

「り、了解……」

初陣の恐怖ですっかり萎縮している様子の爆撃手は、震える声で返答した。

「畜生……畜生……爆撃航程開始地点まであと2分」

「――頼むぞ」

そう言うと、テニスンはすべてを爆撃手に託した。

魔族軍が、一体、どんな対空砲を用いているのかは知らないが、とにかく対空砲をここまで命中させるなんて並の腕じゃない。

ただ、配置が甘いらしく、決して濃密でないのが唯一の救いだ。

テニスンは、いつの間にかそんなことをぼんやりと考えていた。
頭の中が、妙に沈着になってくる。
脳みそがアドレナリンを分泌出来なくなっているのかもしれないなと、そんなことを考えた。

「あと３０秒！」
ハインツの声に、テニスンは我に返った。
現実離れしたことを考えていたことが、奇妙に恥ずかしい。
「イニシャル・ポイント爆撃航程に入った！」

「よし。後は手順通りだ。さっさと終わらせて帰るぞ！」
テニスンはマイクに命じた。
「ハインツ。自動操縦に切り替える。目標までの時間、任せたぞ！」
テニスンは、ハインツを励ますように言った。
「神を信じろ。君の指令で、後続機が千トンの爆弾をばらまくことになる」

「り、了解……」
責任の重さのせいで、胃袋に穴が開きそうな錯覚を覚えたハインツは、酸素マスクの中でゲロを吐いた。

慌ててマスクを外す。与圧されたコクピットだから助かるようなものだが、それは彼の生命上の問題であり、社会的、もしくは精神的な救いにはなっていない。
爆撃手席一杯に酸っぱい匂いが立ちこめる。
ハインツは歯を食いしばると、血走った目で爆撃照準器にかじりついた。
「爆撃要点まで――――後３分！」
「爆弾倉開け！」
「了解、爆弾倉開く！」

空気抵抗が増えたことで、機体速度が落ちる。

「すげぇ」

下部対空砲担当のジェリーが、カメラ越しに下を見て叫んだ。

平原を埋め尽くさんばかりに移動している黒い点。

それが皆、妖魔だと気付いたのだ。

「一体、何匹いるってんだ！？」

「数十万匹だそうだ」

誰かの言葉に、ジェリーはうんざりとした声で言った。

「聞かなきゃよかったぜ……」

ジェリーが肩をすくめた時だ。

バンッ！

何かが破裂したような音がして、機体が激しく揺れた。

その瞬間、機体が、まるで弾かれたように動いたのが、操縦桿越しにわかった。

「何だ！？」

「やられたのか！？」

「神様っ！」

乗組員達が口々に勝手なことを叫ぶ。

「黙れっ！」

テニスンはそれを一喝で黙らせた。

「こちら機長だ！何があった！？点呼をとるぞ！」

次々と被害なしの報告が入るが――

「クリス」

尾部銃座からの応答がない。

テニスンは、背筋が寒くなるのを確かに感じた。

「クリス！」

何度呼んでも返事はない。
「機長！」
ハインツが叫ぶ。
「今ので目標がズレた。中止しますか？」
「もう一度だ！こちら“スーパー・バニー”。第一グループ全機、目標を見失った。再度爆撃航程を実施する。標準旋回で航程に入れ。以上！」
「機長、尾部銃座がそっくり消えてる！」
「クリスは！」
「死体も残っていない！与圧がやばい！隔壁を閉鎖するっ！」
「――了解した」
小さく部下の死を悼んだテニスンは、機体の旋回を終えた。
第一グループ所属機が次々と続くのを確認する。
その時、1機が真っ二つに機体を砕かれたのを確かに見た。
「――くそっ。ハインツ。どうだ！？」
「コース再び乗った。機長、いい腕です。あと1分」
「世辞はいい。くそっ。これだから先導機なんてイヤなんだ」
機体が激しく揺れはじめる。
「こちら側面銃手、火災が起きた！畜生！誰か消化器を貸せっ！」
さっきとは比較にならないほど、敵の攻撃が濃密になり始めている。
一体、何が起きているのか考えたくないが、とにかく、敵も慌てているのか、命中精度がかなり落ちている。
それだけが唯一の救いだ。
「見えたっ！」
ハインツが歓声をあげた。
「投下！投下っ！」
ハインツの指が、爆撃ボタンに触れた。
爆弾倉から次々と爆弾が産み落とされ、機体が軽くなる。
「キャッホォォォッッッ！くたばれモンスター共っ！」

操縦桿で機体を押さえつけながら、知らずにテニスンまでも歓声をあげていた。

下から粘っこい爆発音が次々と聞こえてくる。

命中だ！

空中炸裂型のサーモバリック爆弾とハイパーナパームのカクテル攻撃だ。

いくら妖魔といえど、広範囲で無事に済むはずがない。

忌々しい妖魔共が、どれ程苦しんで死んでいくのかじっくり見物してやりたいところだが、テニスンにはそんな余裕はない。

部隊を安全に基地まで帰還させなければならないのだ。

「こちら“スーパー・バニー”。左旋回１５度。再集結地点で編隊を組み直す」

テニスンは、そう命じると機長席を立った。

「マイク。あと頼む」

「どちらへ？」

「俺自身の爆撃を済ませたいのさ」

テニスンは、そう言うと自分の尻を叩いて見せた。

「妖魔達については考えなくて良い」
後藤は言った。
「連中は、おいしいエサを求めて移動中だ」
「エサ？」
「ああ。俺なら汚染が恐くて食えんがね」
「それってまさか」
美奈代は目を見開いた。
「ち、中国人のことですか？」
「他に誰がいる？奴らのお仲間は、ヒューストンへむけて移動中だ」
「で、ですけど！」
「考えなくていい――そう言ったんだ」
後藤の声は、反論を許さないほど鋭い。
「……はい」
「俺達は、カールズバッドの鍾乳洞へ侵入し、メースの群を突破。地下格納庫から反応弾をちょろまかした後、与えられた任務につけばいい――それ以外は、すべて“余計なこと”だ。いいな？」

「……」
美奈代達は、無言で頷いた。

「余計なことだが、不安だろ？
だから教えておく。
妖魔はいくつかの集団になって動いている。
小型と中型妖魔の群が３つ４つ一緒になった、最大級の集団――仮に本隊と呼ぼうか？
これが、飛行型の小型妖魔の群を追う格好で移動中。
この飛行型の小型妖魔の群は――吸血型だ」

「吸血？」

「そう。人間や家畜の血を吸う。中華帝国軍の歩兵部隊からの無線傍受によると、外見は、骨と皮ばかりに痩せた体と、目ばかりがぎょろりとした姿をしているから、一見人間だが、動きは機敏。こいつ等に抱きつかれたら最後。全身の血を吸い取られて死ぬ。中華帝国軍は、こいつらを“蚊”と呼んでいるよ」

「うへぇ……」

「……まぁ」

後藤はため息混じりに言った。

「これからのことは、あくまで俺の推測だがね？

こいつらが誘い水になって、妖魔の群は動いている。

蚊は、他の奴らにとってもエサなんだろう。

となれば、現在の状況は、エサがエサを呼んでいるってワケさ。

人間が蚊を呼んで、蚊が妖魔を呼ぶ」

「あながち、外れてないようですね」

美奈代は、妖魔達の移動する様子が映し出された戦況モニターを見ながら絞り出すような声で言った。

ヒューストンへ向けて、小さないくつもの反応――妖魔の群があって、それを追うように大型の反応が動いている。

小型の反応が、一体、何を狙っているのか――それを考えることは、あまり勧められることではない。

敵とはいえ、それはあまりに無惨だ。

「……中華帝国軍の反応は？」

「ヒューストン方面からメサイア部隊が前進しているが……あの飛鼠は確認されていない」

「あいつらが一番……」

言いかけて、美奈代はサラマンダー相手に満足な抵抗もせずに撃破されていった飛鼠達の姿を思い浮かべた。

「……成る程？」

「わかるか？」

「あいつらは、対妖魔戦には作られていない……あいつらは、対メース戦専用の兵器。それがわかっているから投入しない」

「多分ね……飛鼠を東海岸に送り込んで、その代わりに東海岸のメース部隊が引き抜かれる動きを見せている。理由としては、そのへンだろうね」

「……連中は、そうして集めたメサイアで防衛線を？」

「残念ながら、蚊の相手は歩兵達の仕事だ」

「まさか！」

「何しろ数が多い。チマチマとＭＬで狙撃しているってワケにもいかん。小銃弾で仕留められるのは――歩兵連中にとって幸いなのか、それとも不幸なのか……どう思う？」

「敵に同情したくないのですが……」

美奈代は答えた。

「これは例外です」

「同感だ。メサイア部隊――――赤兎だと思われる部隊がいくつか、妖魔本隊の前に布陣して、散発的に打って出て、頭数を減らす攻撃に出ているが、さすがに分が悪い。連中のメサイア部隊本陣と妖魔の本隊とのぶつかり合いの結果如何だろうか……」

「本隊同士の交戦はいつ頃？」

「まだ2、3日ある。うまくすれば、高みの見物としゃれ込めるさ。帰ってくる楽しみはあるだろう？」

「非人道的な楽しみもあったものですが……」

「まぁ、そう言うな。鍾乳洞方面の状況は、事前に説明した通り。本隊がすでに移動を済ませた後だから、かなり手薄ではあるが、それでも妖魔はかなり存在する。

このため、ドイツ軍が、本隊後方への妖魔の流れを止める意味も兼ねて、鍾乳洞周辺の制圧戦を開始する。

我々は、このどさくさまぎれに、鍾乳洞内部へ突入する。

ドイツ軍を助けない代わりに、我々自身、ドイツ軍に助けを求めることは出来ない。

意味を正しく理解しろ」

「……」

「例えドイツ軍でも、たかが２０騎たらずの部隊で出来ることなんて言えば、この程度さ。

とにかく、帰り道のことは考えるな。

お前達は、鍾乳洞の奥へ、前へ前へと進めばいい。それだけだ」

「……はい」
美奈代は、無言で、足下に駐機しているＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を見た。
中には津島中佐達が乗っている。
これを護衛しながら鍾乳洞を移動するというのは、ちょっとした至難な技だ。
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は簡単なバリアシステムが展開できるが、気休め程度だ。ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）がやられたら帰ることも出来ないぞ」
「……難しい注文を」
「給料分の仕事だ――――これより作戦を開始する。幸運を祈る」
「泉了解――――いいか？宗像。涼」
「……了解だ。前衛全騎、これより鍾乳洞へ向かう。途中の敵は基本無視。ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に脅威と判断した場合のみ迎撃しろ」
「狙撃部隊了解。洞窟突入まで、発砲は最小限に。残弾に注意して」
「風間、我々は前衛より前に出て、別ルート上にて陽動につく。なるべく多くを引きつけないと、宗像達の負担が大きすぎる。ルート間違えるなよ？」
「了解です」
「よし――――中隊、移動開始」

敵の本拠地はカールスパッド鍾乳洞。
我々は、その周辺部を制圧することにより、ヒューストン方面へ進行中の魔族軍部隊の後方を遮断する。
残存する妖魔達は、統率がとれていない“はぐれ妖魔”達。
我々は、それを“掃除”する。

エレナ達が受けた命令は、そんなものだ。

ヘルガ達が布陣したのは、中華帝国軍が放棄した陣地跡。
メサイアが入るだけの高さのある窪地を上手く使った天然の陣地だ。

その後方には、米軍の歩兵と砲兵が展開し、砲撃支援を約束してくれている。

「お掃除の準備はまぁ、万端ってワケよ」

「掃除って」
エレナは、デュミナスの持つ狙撃砲を一瞥した。
「いつから大砲でやるようになったのよ」

「文句言わないの――偵察部隊からの情報は入ってるわね？掃除機がまず出るから、私達は、このモップで、掃除機が始末に困る粗大ゴミを掃除する。いいわね？」

「掃除機扱いって……雷神様が泣くわね。その名前からすれば」

「――同感。“ミョルニル”が後方より接近。上空を通過する」

エレナは、モニターに映し出された大型ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を見た。
キャタピラのない戦車のようなデザインのそれは、機関砲やロケットランチャーを満載した武装ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）だ。

輸送ヘリＵＨ－１から武装ヘリＡＨ－１が生まれたように、元来、

輸送を目的として開発されたＴＡＣ－４をベースに、武装強襲、そして制圧を目的として開発されたのが、ＴＡＡ－４“ミョルニル”。
世界的には、“ガンシップ”と呼ばれる対地攻撃専用機だ。

トール神の槌の名を持つＴＡＡ－４の武装は以下の通りだ。
２０ミリバルカン砲２門
４０ミリ機関砲２門
ハイドラ７０ロケット弾ランチャー８門
１０５ミリ連装砲塔１門
この他にも爆弾やミサイルを搭載可能。

全長２７メートルという巨大なボディをものともせず、空では攻撃ヘリと同等以上の機動性をもって戦場を駆け回る。
そして、あらゆる敵に圧倒的な火砲を叩き付けるその存在は、“空飛ぶ砲兵”と呼ばれ、敵味方共に畏敬の存在となっている。
ドイツ軍をはじめ、世界各国で攻撃ヘリが普及しない最大の理由が、ＴＡＡ４のような“ガンシップ”にある。
歩兵からは“虐殺兵器”とまで罵られる濃緑色に塗られた機体が、音もなく前方に出ていく。
エレナは、この仕事が早く終わりそうだなと、そう思った。

ガンシップの群を率いるのは、ノルディン大尉。
死の翼を広げる仲間達が、陽光を受けて鈍い輝きを見せるのを満足げに眺めた彼は、無線機に喋った。
「“シュトルム２１”航空をご利用いただきましてありがとうございます。こちらは機長兼編隊長のノルディンです。本日のサービスは、前菜に２０ミリ機関砲弾。続いてメインコースは妖魔達の食べ

放題。お楽しみに」

「……大尉」

ヘルナンデスが笑いをかみ殺しながら言った。

「なんですかそれは」

「不満か？気合いが足りないぞ」

「気合いは十分ですよ。ガンナーはお任せしますか？」

「やらせてやる。お前の腕では不安だ――編隊長より全機通達、エサを前にヨダレたらしてる“黒狼”様からエサをブンどる！上品な陸軍様の意地を見せてやれっ！」

「「了解っ！」」

「照準合わせ次第、各個に撃てっ！」

グォォォッッ！！

この世のモノとは思えない銃砲の低いうなり声が辺りを支配する。

ガンシップから放たれる火線が、地上を逃げまどう妖魔達を血肉の塊に変える。

片足を１０５ミリ砲弾の破片に引きちぎられた妖魔が、足掻きながら逃げようとする。

その頭が４０ミリ機関砲弾の直撃を受けて四散した。

小型妖魔達の群が、叫び声をあげながら四方に逃げまどい、上空からの機関砲弾の雨が容赦なく彼等を叩き殺していく。

「好きになれないわ」
エレナは、吐き捨てるように言った。
「こんなの……戦争じゃないわ」

「強いて言えば」
ヘルガはため息と共に答えた。
「狩り、かしらね」

「イヤな趣味ね」

「狩りって、貴族様の道楽でしょ？」

「我が一族は」
エレナは狙撃砲の調整パネルを叩きながら言った。
「狩りなんてやらない。お父様もおじいさまもやってるの見たことない」

「ないの？」

「銃を握ってやるのは戦争だけ――それが一族の誇り」

「へぇ？」

「一方的な殺しが狩り。同等の立場で、対等に殺し合うのが戦争。貴族がやるのは戦争。対等に戦い、そして勝つべし。そんな家訓がある」

「貴族ってのは、私にはよくわかんないわ」
ズンッ
鈍い音をレシーバーが捉え、苦笑いするヘルガの目の前で、強い

光が走った。
「ガンシップ被弾っ！」
モニターの端。
ガンシップが一機、白い煙を上げ、よろめきながら待避行動に移った。
片側のエンジンに直撃でも受けたらしい。白煙を吐き出す元からは盛大な火花が出ている。
「だ、大丈夫なの？」
「航空燃料は搭載していないから誘爆はないはずだけど」
ヘルガがそこまで言った。
次の瞬間。

ドンッ！！

鼓膜に響く、粘っこい音を立てて、ガンシップが吹き飛んだ。

「……弾薬が誘爆したわね」
慣性が働いているのか、未だに上昇を続けるエンジン。
そこから落下する部品の中から、ヒューヒューと音を立てて、次々と四方八方へと飛び出すのは、ガンシップが搭載していた機関砲弾だ。

「パイロットは無事なの？」

「脱出は確認されていない」
ヘルガはデュミナスのＦＣＳを確認しながら言った。
「お祈りしてあげたら？」

「そうする――――ヘルガが地獄に堕ちますように」

「……ありがと。中隊司令部より入電。ガンシップが後退する。後方に対空攻撃能力を持つ妖魔の出現が確認された。中隊前衛が前進する。その前に、狙撃部隊が前進の障害となる大型妖魔を排除する。司令部よりマーカー転送。小隊へ射撃命令下った」
「了解――エルフ小隊全騎へ。司令部のマーカー指示通りに射撃。タイミングは任意。訓練の成果を見せろっ！」
「「了解っ！」」
「割り当てマーカーむけて射撃開始――選定は私でよろし？」
「任す」
「了解。マーカー３６８の順で」

「エルフ小隊全騎、交戦状態突入」
ドンッ！
ドンッ！
太鼓を叩いたような音が、各所で聞こえ始めた。
「接近する大型妖魔の群、足が止まりました。前縁の距離４０００」
「ブリュンヒルデ、私と来い。
ケルヒャー、私達が囮になり、進行中の別大型妖魔部隊を引きつける。
アインツと共に前衛の指揮を任せる。側面から」
「砲兵陣地司令部より緊急電！地下より小型妖魔多数出現、現在交戦中。至急、救援求む！」
イリスが、その動きを止めた。
「大隊司令部は、何をしているんだ！」
部隊内で困惑した声が挙がりだした。
「大隊は妖魔部隊本隊と交戦中のはずだ！」
「忙しいってか！？どうせ、バーのシートでも暖めるのが忙しいんだよ！」
「そうだ！何でもかんでも、俺達ばかりに仕事寄こしやがって！」

「俺達ばかり、仕事が多すぎるっ！」

「――――文句を言うな」

ドスの効いたフォイルナーの声が通信機に入った途端、全ての声が沈黙した。

「命令は命令だ。我々グリュックシュヴァインは、困難な局面にこそ投入される部隊。その自覚について一々、語らせるつもりか？」

「……エルフ小隊に射撃中止命令。砲兵陣地救援へ向かわせろ。補給所へ通達。対小型妖魔掃討用兵装準備。エルフ小隊は、補給所にて装備受領を」

「了解――――補給所、聞こえますか？」

「後は手はず通りだ。ブリュンヒルデ、ケルヒャー」

「少佐は私達に何か恨みでもあるのかしら」

エレナはすっかりむくれながらも、補給所で対小型妖魔戦用装備として、３０ミリチェーンガンと散弾砲を装備する手を止めることはない。

太股のウェポンラックに散弾砲を装着、狙撃砲は背面の左側ウェポンラックに固定。

予備弾倉を腰部スカートのラッチに次々と引っかけていく。

対メサイア戦を想定した戦斧は腰部。

すぐには対応出来ない位置にマウントしたのは、その戦闘が想定外だという証拠のようなものだ。

あくまで敵は中・小型妖魔。

その雲霞の如き攻めに対抗するために必要なものは、頭数と弾数だ。

シミュレーションで、そのことをイヤという位叩き込まれているエレナ達は、たった６騎で妖魔部隊の掃討を命じられ、表面的にはともかく、内心ではかなり鬱な気分だった。

「死ねって、ストレートに言ってくれた方が気楽なのに」

「仕方ないでしょう？」

戦闘モードを切り替えながら、エレナは言った。

「大型妖魔を掃除した後は、私達は後詰めに入る予定だった。その貴重な後詰めを他に回すってことは、少佐達も相当なリスクだもの」

「言われればわかるけどさぁ」

ハァッ

ヘルガはため息一つ、言った。

「個人的に心配しているって、そんな一言を言われれば、それでいいの？」

「――――そっ、それは」

エレナの頬が赤くなった。

「……その」

「つーかさ」

その意味が分からないほど、ヘルガは鈍感ではない。

「私も不思議なんだけどさぁ……あんた、かなり少佐のおメガネにかなっているっていうか、認められているんじゃない？」

「……私が？」

エレナは、バカみたいに自分を指さした。

「そう」

ヘルガは頷きかえした。

「少佐、何かっていうと、あんたコキ使うけど、あの人は無能は使

わない。いの一番であんたがご指名でしょ？」

「そ……」

しばらく考えたエレナは、晴れやかに、満面の笑顔を浮かべていった。

「そっかぁっ！わ、私って……そっかぁ！」

「……単純」

ヘルガのぼやきなんて聞こえていない。

「やだぁ……少佐ったらぁ。そんなに信じていただいているなら、私……ベッドの中でもぉ」

「体をくねらせるな。気味が悪い。装備の装着遅れてるわよ？」

「ご、ごめんっ！」

「歩兵隊はスコップと銃剣で妖魔相手に渡り合ってる。遅れたら妖魔の次に敵扱いされるのは、私達よ？」

大地は得体の知れない青や紫色に染まっていた。

妖魔の血の色だ。

機関砲や小銃弾に砕かれたその肉片が、視界一杯に広がっている光景は、一度見たら地獄の果てまで逝っても忘れられないだろう。

皆が、妖魔の死骸から臭う死臭に鼻がバカになっていた。

友軍の死体がその辺に転がっている。

屍鬼化することを恐れ、頭部か心臓に一発食らわせた後、死体袋へ放り込む作業が続いている。

嗅覚が完全にマヒしたことが影響したのか、死体とはいえ、仲間に弾を撃ち込むことさえ何とも思わない。

何か、大切なところで自分が鈍くなったと、そう思う兵士がここには無数にいた。

「前方１０００、小型タイプ２００以上、また来ました！」

Ｍ４２ダスター自走高射機関砲の、屋根のないオープントップの砲塔に乗った見張りが、双眼鏡を構えたままで怒鳴る。

６６口径４０ｍｍ連装対空機関砲Ｍ２Ａ１を装備する、対空レーダーもない“対空戦車”がこの戦線での守り神だ。

砲塔に陣取る照準手を兼ねる見張りと、射撃手、給弾手二名が血走った目で正面を睨んでいる。

“砲兵陣地の護衛”

任務はそんなものだった。

志願兵ばかりで編成された新編の歩兵部隊と、狩野粒子下でも“使い物になる”装備を与えられた機甲部隊が配置されたのも、理由としてはその任務の簡単さからだ。

だから、双方共に求められていたことは子供並のこと。

曰く――

歩兵達は、完全装備により行軍しきること。

機甲部隊は、“キャタピラを外さずに”移動が出来ること。

共に、防衛ラインまでは事故もなくやり通し、負傷により前線勤

務が不可能になった指揮官達を安堵させた。

へたばった兵士達を蹴飛ばしてテントを組み上げさせた歩兵大隊指揮官、マーベリック中佐は４５歳。中華帝国軍との戦闘で左腕を肘の根本から失ったし、Ｍ４１軽戦車の車掌席に陣取るクウォーツ少佐は右足が義足だ。

共に負傷を理由に勲章を胸に再就職を探すことも、あるいは軍に残留して後方任務につくことも出来るべき立場だが、戦況も世情も、彼等には残酷だった。

軍に残って、前線勤務が出来る。それだけで大抵の負傷兵の羨望を受けることが、どういうことかを考えてみればいい。

――もう一本、失いたくなかったら……。

彼等は自虐的なジョークを飛ばしつつ、次に飛ぶのがその“一本”では済まないだろう事を十分に自覚していた。

Ｍ４１とその車体をベースにした“ハンマー・ブルドック”対戦車自走砲が壕で砲の照準をつけている。

前方は川を挟んだ、やや急な丘陵。妖魔達がそこを乗り越えてくる限り、妖魔達はその長めの腹を彼等の前に曝すことになる。

砲兵が布陣できる適当な場所を選んだ意外な副産物だが、これが防衛線を展開する部隊にとっては神の恩寵ともいうべき効果をもたらしていた。

丘に陣取っていた観測班が死に物狂いで逃げてきたから何事かと思ったら、丘の向こうに孔が開いて、そこから妖魔が飛び出してきたと聞いた時は、皆が肝を冷やした。

そして、一時は陣地内まで侵入されて無惨な白兵戦が展開された。

その時こそ、撃退はしたものの、妖魔達は再び、彼等めがけて襲いかかってきた。

兵士達が塹壕に飛び込み、Ｍ２重機関銃に弾丸が装填され、兵士達は銃剣を装着したＭ－１４やＭ－１６を掴んだ。

妖魔達の動きは早い。

まるでトラックが集団で突撃してきたかのような錯覚さえ覚える。

「撃てぇっ！」

丘を越えれば、すべて小銃の有効射程だ。後方からは砲兵の支援が得られる。

勝てない戦いではない。

兵士達が死に物狂いでトリガーを引き続ける。

対空戦車や戦車達が、丘の斜面めがけて砲弾を容赦なく叩き込む。

“エサ”を目の前にした小型妖魔達が、“エサ”を捕食するための触手や腕を小銃弾や機関砲弾に砕かれ、塹壕の前に無惨な死体を転がす。

次から次へとやってくる妖魔達が、死体の山となっていく。

兵士達は、すでに経験から理解している。

この妖魔の死体。

その山こそが、自分達にとって最大の敵なのだ――と。

北米戦線編　第三十一話

死体の山が、歩兵達の射線を塞ぐ。
これが、妖魔達の狙いなのではないか？
兵士達は幾度となくそう思った。
塹壕前に積み上げられた妖魔の死体が邪魔で、兵士達は塹壕から出るしかない。
塹壕から出る以上、妖魔は“エサ”を見つけやすくなる。
“エサ”をみつけた妖魔達がさらに勇んで襲ってくる以上、兵士達の損害は上昇する。

砲兵部隊は、こうなる前にあらゆる砲弾を斜面に叩き込んで妖魔を阻止するべきでは？

そう考えるだろう。

だが――――砲の数より圧倒的に妖魔の数が多すぎるのだ。

戦車部隊が後退を開始した。
前進するより後退する方が、絶対に速い。
エンジンとギアはイタリア製だと囁かれるが、その後退速度の速さは、反論を許さないほど速い。
戦車という守護神に見放された歩兵達の指揮官は、各個の判断でそう叫ぶ。
「第一防衛線を放棄っ！」
陸軍から歩兵B小隊を預かったセイレーン少尉は、目の前に転がった白い肌を持つ妖魔の死体が、ついに自分達の射界を奪ったと判断して怒鳴った。
「第二防衛線へ下がれっ！」

横にいた兵士の肩を叩いた。
こんな状況で、塹壕に潜んでいても、妖魔に喰い殺されるだけだ。
この塹壕の後ろ。
１００メートルほど下がった所に第二線の塹壕がある。
あそこまで下がれば、まだ戦える。
セイレーンは、マガジンを交換すると、飛び出し始めた兵士達の尻を叩き、先を促した。
指揮官として、合衆国軍人としして、敵に背を向けて真っ先に下がることは、セイレーンには、発想すらない。
最後の一人が塹壕を出たのを確認したセイレーンもまた、塹壕から飛び出した。
「少尉っ！」
自分の後退を助けようというのか。
先を走っていた部下のマイクが、悲鳴をあげて急に立ち止まり、こちらに銃口を向けようとした。
セイレーンは、その意味がとっさにはわからなかった。
マイクが銃を構えてこちらめがけて発砲した。

ブンッ！

ヘルメットが吹き飛んだ程の激しい風圧を受け、セイレーンは横に吹き飛ばされた。
全身に走る痛みを、歯を食いしばって堪えたセイレーンは、横にころがった小銃を構えた。
その目の前には、六本足の小型妖魔がいた。
四つ足で歩いて、長い前足をムチのように振り回す。
その足をまともに喰らったら、人間なんて文字通り粉砕されるし、セイレーンは、部下の末路として、その破壊力を目の当たりにした一人だ。
「くそっ！」

照準もあわせずに発砲。関節部に集中した射撃が、小型妖魔の左腕を砕く。

５６ｍｍ　ＮＡＴＯ弾でも射撃を集中させればこのピックアップトラック並の巨体を相手でも対抗出来る。

妖魔がひるんだ隙をみて、マガジンを交換し、再びトリガーに指をかけた。

セイレーンは、その時、自分が二つの致命的過ちを犯したことを悟った。

一つは、こういう時は、全力で逃げること。

もう一つは、マガジンを交換したら、チャージングハンドルを引いてチャンバーに銃弾を装填しなくてはいけないこと。

マガジンを装填しただけで弾丸が撃てるはずがない。

そんな単純なことさえ、セイレーンは失念していた。

訓練ではない。

失念――

その対価は――――高すぎた。

弾が出ない！

思考が一瞬、凍り付いた直後、セイレーンは腰から腹にかけて鈍い痛みを覚えた。

体が宙を舞った。

セイレーンは確かに、この陣地を、鳥の視点から見ることが出来た。

数十メートルの高さに舞い上げられたその体は――――地面に叩き付けられた。

グシャッ

嫌な音が自分の体からしたのを聞いた。
意識だけははっきりしているが、指一本動かすことが出来ない。
口から血を噴き出して止まらない。
内蔵や体がどうなってるかなんて、考えたくさえない。
「ギ……ガハッ……っ」
妖魔の腕に吹き飛ばされたんだと、理解出来たのは、それから少し後だった。
彼女の部下は、誰も彼女を助けようとはしない。
すでに、先程の塹壕を突破し、後方の塹壕に迫り来る小型妖魔達相手に、彼女の部下達は自分自身を護ることに精一杯。
先程のマイクはすでに妖魔に踏みつぶされ、地面の肥やしになっている。
彼女の周辺では、四肢をもがれ、あるいは内蔵を引き出され、皆が最後を迎えようとしていた。

遠ざかっていく意識の中。

彼女は確かにつんざくような鋭い音を聞いた。

――――メサイアだ。

意識は遠のく一方だが、何か希望の光を、見た気がした。

「遅いのよ……バカ……」
口元に笑みを浮かべ、セイレーンは神の元へ召された。
その頬には、一筋の涙が、光っていた。

「状況最悪っ！」
ヘルガは怒鳴った。
「敵と味方が入り乱れて、掃射が出来ないっ！」
「第二防衛線の後ろへ布陣するっ！」
味方を踏みつぶしかねない危険なハードライディングをかけ、エレナは部隊をセイレーンが向かおうとしていた第二防衛線の後ろに着陸させた。
すでに妖魔達との交戦距離は５０メートルとない。
「撃って撃って撃ちまくれっ！」
エレナは怒鳴りながら、チェーンガンのトリガーを引いた。
「畜生っ！馬鹿野郎めっ！考えて撃ちやがれっ！」
そんな文句をわめかれようと、エレナには、歩兵の頭上に空薬莢が落ちることなんて気にしているヒマはない。
シールドを地面に突き刺して左手を開ける。
チェーンガンと、肩部にマウントされたロケットランチャーで、第一防衛線の死体に群がる妖魔達を文字通り吹き飛ばす。

それでも、だ。

妖魔はひるむという言葉を知らない。
目の前にエサがあれば、それに群がるだけ。
あるのは、食欲を満たしたい本能だけだ。

第二防衛線の兵士達は、彼等にとっては――エサでしかない。

「後方より妖魔が出現っ！」
コクピットに警報が鳴り響き、ヘルガが怒鳴る。

「前に出てるじゃないっ！」

「違うっ！」
ヘルガは悲鳴に近い声で言った。
「砲兵陣地の真横っ！」
「なっ！？」
“後ろ”
それを、エレナは前方の妖魔が出現した孔だと思った。
だが、実際には自分達の後方、砲兵陣地横に出現した孔だった。
「防衛線は！？」
「後詰めの１個中隊だけ。歩兵隊と機甲部隊が回るけど」
ヘルガは唸るように言った。
「……間に合わない」
「なんとかするしかないでしょう！？中隊へ支援要請出して！」
「通るワケが！」
「無視されようとなんだろうと！」
ドンッ！
第二防衛線の後ろへと後退しかかったＭ４中戦車の装甲に、中型妖魔のツメがめり込んだ。
弾薬が誘爆したのか、戦車は砲塔を宙に巻き上げ、中型妖魔もろとも吹き飛んだ。
「――――貴重な戦車を！」

ひとしきり唸った後、エレナは左手に散弾砲を掴んで発砲した。
「小隊全騎、機甲部隊の後退支援最優先っ！砲兵陣地へ機甲部隊を回すっ！」

「エレナっ！」
エレナ騎の横に立つルナ騎が手榴弾を投擲しながら言った。
「後方へ誰か回す！？」

「回している余裕がある！？４騎しかいないのに、半分になったら仲良く全滅するわよ！？」

「中隊から増援は！？」

「ダメっ！中隊も全力で戦闘中。予備部隊がないから――」

頭上を編隊が通過していったのは、その時だ。

白い騎体――日本軍だ。

「ラッキーっ！」
エレナは歓声をあげた。
「助けが来たっ！」

「違うっ！」

「ち……が？」

「そのまま通過する！あいつらは、私達の増援じゃないっ！」

「ど……どうして」

エレナは呆然として空を見上げた。
編隊を組んだまま、日本軍騎は遠ざかってく。
大地では自分達と米軍兵士が血まみれになって戦っているのに――どうしてその上を飛んでいくことが出来るの？
あなた達は一体――

「一体、何なのよっ！」

「エレナっ！」
一瞬、トリガーを引くことを忘れたエレナに鋭い叱責が飛ぶ。
「くそっ！」
舌打ち一つ、エレナはすぐに接近する妖魔達に再びトリガーを引いた。

「増援っ！」
その声が聞こえてきたのは、それから数分後のこと。
背部のラックに格納されたチェーンガンの残弾は限りなくゼロに近い。
メサイアが手に提げて移動する“オカモチ”と呼ばれるウェポンラックからベルトリンクにつながった弾薬を直接チェーンガンに装填して、やっと弾を確保している。
その残弾でさえ心許ない。
機甲部隊も歩兵部隊も、自分達に正面の防衛を任せて砲兵陣地への救援に向かっている。　砲兵陣地付近には弾薬集積所もある。
あそこを叩かれたら終わりだ。
機甲部隊も歩兵も、指揮官達は全体を理解している証拠だと、エレナは何となしにわかった。
その耳に、ヘルガの歓声が聞こえた。
「今度こそ増援が来たっ！」

「何が来たの！？」

「ガンシップ！それから米軍のスカイレーダー隊！弾薬の補給が終わって戦線復帰！この戦域全体へ投入されるっ！」

「遅いっ！」

「文句言わないの！」

「接触までは！？」

「１５分！」

「間に合うかっ！」
エレナは爆発した。
「残弾は３分持たないっ！」

「マラネリ部隊が２分で合流可能っ！」

「先に言えっ！」

「何だか……」
有珠（ありす）は、浮かない顔で言った。
「ものすっごく、悪いことしてる気がするんですけど」

「これも仕事だ」
月城が顔をしかめた。

「万人から称えられることなんてあり得るか」

「そりゃもう、そうですね」

はぁっ。

ため息一つ、有珠（ありす）は頷いた。

「恨まれても、これも仕事ですよね！」

「時々、お前の割り切りの良さが羨ましい」

「若いですから！」

「……」

「あれ？大尉？どうしたんですか？私、若いから、何か間違えました！？」

「……」

「ほら、大尉？私、とっても若いですから、すごく若いが故の……若さ故の過ちというものが」

「大尉っ！」

月城騎のMC（メサイア・コンダクター）、竜胆中尉が悲鳴をあげた。

「何してるんですか！こんな所で斬艦刀引っこ抜いて、何しようっていうんですか！」

「……おい、鵜来」

それまでのやりとりを聞いていた宗像が、呆れたような、それでいて感心したような声で言った。

「それ、地でやっていたら、褒めてやるぞ」

「……だそうですが？」
笑いをかみ殺す牧野中尉の声を前に、頭を抱えるのは美奈代だ。
「帰還後、後藤隊長のお説教は覚悟しておいた方がいいんじゃないかな……と」

「もう好きにしてください……何で私ばっかり」

「それが指揮官ですよ？」

「はぁっ……全騎へ」
美奈代はすべてを振り切った様子で、冷たく言った。
「やる気がやめてしまえ」

「うっ」

「鵜来？漫才がやりたかったら退役して芸人でも目指せ。月城大尉？お年が気になるから、寿除隊でもして下さい。今は戦争中です」

「……す、すみません」
「……わ、悪い」

「はぁっ。……私にこんなこと言わせないでください。宗像？前衛はこの二人に任せろ。バツゲームには相応しいと思うが？」

「悪くないな」
クックックッ……宗像は喉で笑った。
「前衛指揮官は私。中隊前線指揮官はお前……」

「そうだ。二人の生殺与奪は私達の胸先三部だ」

「いい参謀になれるよ。泉は――――前衛全騎。洞窟突入時点でのフォーメーションは楔。前衛は月城、鵜来の二騎、中衛は私とフィア。後衛に山崎と柏が入れ」

「前衛指揮官殿に質問」

有珠（ありす）だ。

「前方に飛び出した友軍を誤射した場合は、許していただけますか？」

「あ、それ大切」

何故か、フィアがすぐにその言葉に飛びついた。

「のこのこ射線に出てきたら、相手が悪いですよね？宗像大尉？」

「……後始末は責任持てよ？

「了解♪」

フィアは楽しそうに殲龍（せんりゅう）が持つ散弾砲を構えた。

「ショットシェルとスラグショット。どっちがいい？美奈代」

「上官反逆罪で殺されたいか」

「安心して？階級は私の方が上だから」

「ああ言えばこう言うしっ！」

「――――何だか、親子か姉妹喧嘩だねぇ。涼」

「……お、お姉さまの子供なら……私」

「全騎っ！」
美奈代はたまらずに怒鳴った。
「この通信は常にモニターされているっ！もうこれ以上、ことある事に“劇団イズミ”だか“イズミ劇場”なんてバカにされるのは御免被るっ！」

「美奈代さん達なら、芸人で食べていけますよ。ねぇ？大ちゃん」

「そうですね」

「……鍾乳洞まであと3分！全騎、突入準備怠るなっ！？」

「あ、また逃げた」

「“さくら”っ！」

カールズバッド洞窟の中は、メースがかなりの出力でブーストジャンプしてやっと天井に届くほど広く、天井は高い。
それなりに入り組んではいるが、慣れてしまえばどうということはない。
すでに制圧してから数日間をこの中で過ごした魔族軍のメース使いにとって、鍾乳洞内部は庭のようなものだ。
「……それで？」
米軍司令部が存在していた頃の、応接室兼、緊急時の大統領執務室に指定された、最も豪勢な装飾が施された部屋で、照明に照らし出された美しい金髪が輝いて揺れた。

あのダユーだ。

「門（ゲート）は開放出来ない――と？」

「はい」

ユギオは楽しそうに頷いた。

「あなたが、手持ちの部隊をつぎ込んで、妖魔達を制圧してくださったというのに、残念なことです」

「全てをご存じの上で、私にムダ足を踏ませたわけですね？」

ダユーは少しだけ顔をしかめた。

「……ずるい」

「ははっ……そうやって口元を尖らせても美しいですよ」

「お世辞をいただいても嬉しくないです」

「そうですか？」

「私のメース隊は、すでに母艦へ引き上げさせていただきましたよ？」

「ええ。私の部隊も撤収させる手順を進めています」

「あら？」

従兵の持ってきた紅茶に伸ばした手を止めた。

「人類を歓迎するのかと思っていましたわ？」

「歓迎式典はやりませんよ」

ユギオは苦笑した。
「本来なら、我々も今朝の時点で撤退。ここはもののけのからになるはずたったのです。それが、天界の斥候に入り込まれるわ、爆弾の設置に手間取るわで……」
「天界の斥候？」
「ええ」
ユギオは苦笑をやめ。苦虫をかみ殺したような顔になった。
「間違いなく、人類ではありません。天界の中でも相当、“特殊”な連中です」
「特殊？」
「天界王室に連なる程、高位存在……もしくはそれ以上」
「よくわかりましたね」
「――そういう連中相手に警戒していた。そういうことにしていただけませんか？」
「あなたの飼い犬の中には」
クスッ。
その笑い声だけで、ユギオは脳みそがとろけそうになる。
ダユーという女の恐ろしいほどの蠱惑さが、ユギオには少し恐い。
「とんでもないのがいるようですね」
「金の力は、主のそれさえ超えますよ」
「……罰当たり」

「あなたには言われたくないですが……」

「くすっ。それで？」

「すでに人類は地上で妖魔相手に戦闘中です。ここに来るのは時間の問題でしょう」

「どうするのですか？ここで応戦する？」

「それしかないようです」

ユギオは肩をすくめてみせた。

「貴重なメースが犠牲になるのは、残念ですが」

「貴重な部下が――――ではなく？」

「傭兵は」

ユギオは顔色一つ、変えることなく言った。

「消耗品の代名詞ですよ？」

「……お気の毒に」

「損金です」

「違いますよ」

ダユーは答えた。

「あなたの部下のことです。ホント、お気の毒」

「初仕事は――上手くいったと思うが」
カールスバッド鍾乳洞制圧任務に就いたユギオの言う傭兵。
その一人が、ティアリュート中尉だ。
「せっかく、与えられたメースだ。ムダに犠牲にすまいと思ったが」
ティアリュート中尉騎の横では、妖魔達との戦闘で中破した別部隊のサライマが修復を受けている。
妖魔の放った一撃をかわし損ねた、メース使いの技量的問題による損傷。
中のメース使いは、その衝撃で内蔵を破損してあの世行き。
ティアリュートにしても、然るべき相手が死んだ以上、それ以上に失態を追求するつもりもないし、権限もない。
ふうっ。
艶やかな長い金髪を軽く掻き上げた後、呼吸を整えたティアリュートは、胸に下げたアミュレットを握りしめた。
新兵の頃、所属していた部隊でやっていた戦死者に対する小さな儀式。
アミュレットを握ったまま、眼をつむって死んでいった者達の冥福を祈る。
それだけのことだ。
何人、何十人にこうして祈りを捧げたかわからない。
祈りの言葉は、そんな経験の中、自然と覚えた。
どんな宗教にも属さない彼女自身の祈り。
主に届くかどうかは知らない。

祈ること。

それは、生き残った者の礼儀にすぎないが、それをルーチンワークとして処理するつもりも、ティアリュートにはなかった。
コクピットの中で、ひっそりと執り行われる彼女だけの儀式。

かつては１００を超える大隊メース使いが行った儀式。
だが、今となっては、この儀式を知ってる者は、彼女だけとなっている。

祈りの言葉を終え、目を開いたティアリュートは、不思議と誰かの視線を感じた。
閉鎖されたコクピットの中。
その視線は、モニターの向こうからだ。
「ん……？」
前方、斜め前に駐騎しているサライマの頭部コクピットハッチが開き、メース使いがじっとこちらを見つめている。
副官のユースティアが、何事か話したげな顔で、じっとこちらを見つめている。
視線の主は彼女だ。
祈りの最中、通信装置をカットしていたことに気付いたティアリュートは、舌打ちと共にハッチを開いた。

「――――地上で？」
「は、はい」
まだあどけなさを残すユースティアは、おずおずと頷いた。
身長も子供並に小さく、背伸びしてもティアリュート中尉の胸までない。
非番の時に町中で迷子扱いされて、結局、彼女が警察に引き取りに行ったことがあることを、ふと思い出した。
メースに乗せれば鬼神の如き戦いぶりを示すというのに、コクピットから降りればいじめられるのは、この二重人格というべき気の弱さだ。

「地上の観測部隊の通信を傍受しています。すでに地上ではかなりの規模で戦闘が」
「ここを狙ってきているというのか？」
「それは――わかりませんけど」
「……ユースティア」
「はい」
「他の連中にこのことは言ったか？」
「いえ？」
ユースティアは首を横に振った。
「私の指揮官はテァイリュート様だけです」
「……そうか」
しばらく考え込んだ後、ティアリュートは、ユースティアの肩に手を置いた。
「この傭兵隊で、今や私達はたった二人の部隊にすぎない。」
「……はい」
深刻そうな顔で、ユースティアは頷いた。
「マーフェン少尉で5人目ですね」
「――言うな」
「……」
「少尉の件は、お前の責任じゃない」
「で、ですけど」
「傭兵は傭兵としての責任の取り方がある。少尉はそういう結果になっただけだ。自分を責めても意味はない」
「……はい」
ユースティアは、ちらりとティアリュートを見た。
「いつか、御主人様が軍に返り咲くために頑張ります」
「……」
何故か、ティアリュートはその言葉が聞こえなかったかのように訊ねた。
「……ユースティア」

「はい？」
「脱出ルートの選定をしておいてくれ。どうにも気になる」

北米戦線編　第三十二話

ユギオが部隊に防戦を命じたのは無理もない。
出口は一つ。
敵は、そこから来るのだ。
地の利はこちらにある以上、洞窟の中に誘い込んで戦った方が上策と言うものだ。

洞窟は深さ１５００メートル。
巨大なフロアが６層にわたって存在。
それぞれが、洞窟によって接続している。
この構造が米軍をして、この洞窟を軍事施設化させた大きな要因だ。

今、この洞窟の主はメース達。
各層に部隊が配属されている。
合計４５騎。

たった2騎で小隊を編成するティアリュートとユースティアは、最後衛、第６層の防衛に回された。
「そこまで行くことはないと思うが」
第５層に置かれたメース隊司令部。
その司令官、ユング少佐は、通信装置の向こうでティアリュートに言った。
「非戦闘員はすべて第六層に待避させている。待避ポッドの準備が完了次第」
ユング少佐騎とデータリンクしている戦況モニターで、カーソルが動いた。
「排気口に人類が設置した脱出孔で外へ打ち出す。いいか？ポッド

の予備は1つ。負傷兵や擱座した各部隊の兵を収容する。お前達の任務は、前に出る事じゃない。そのポッドを無事に外へと押し出すことだ」

「……了解」

ティアリュートは思った。

たった2騎じゃ、誰にも戦力として期待されないのも無理はない――と。

だが。

ティアリュートは、ユースティア騎のシールドに書かれた紋章を見た。

ユニコーンをあしらったその紋章は、ティアリュートとユースティア双方にとって、代々仕えてきた主家の紋章。

主家の再興こそが一族の使命。

ここで名を挙げ、主家の名を世界に轟かせる。

私達は、その先兵に過ぎない。

ティアリュートはそう考え、この戦いにはせ参じた。

傭兵という、落ちぶれた立場にも甘んじているのは、名を売るため。

主家の名を売るため。

ただ、そのためだけだ。

金目当ての俗物共と自分は違う。

私は、あの御方を支えたいだけだ。

その自負があった。

反面、その自負こそが、傭兵隊で孤立している理由だとも、十分に自覚していた。

金のために鎬を削る傭兵隊にとって、金こそ全て。

名誉。しかも、他人の名誉のために戦うなんて、酔狂か、さもなければ狂っているとしか思えない。

そんな傭兵隊をまとめるユング少佐は、かつてティアリューが軍に属していた時の戦術教官だった。

その縁があって、ティアリューは、周囲との決定的な事態を迎えずにいる。

無論、傭兵達にとって、ユングという“男”が、ティアリューという“女”を庇うことが、二人の関係に決定的な“誤解”となっているが……。

それでも、ティアリューは、ユング少佐に対して反論はしないし、命令には従っている。

彼女なりに彼に対して、恩義は感じている。

だからこそ、最後尾の防衛という、普通の傭兵なら“金にならない”と拒否するポジションにも文句は言わない。

「我々の“飼い主”達の脱出は別ルートで終了した。非戦闘員の脱出準備完了予定は０９５５。残り１５分。

ティア？第一層から第五層までの緊急脱出ルートは目にしておけよ？

下手すれば、騎体を降りて担ぎに言ってもらうこともあり得る。

そう言えばお前は例の懲罰は経験済みだったな？」

「過去の話です」

ティア。

候補生時代の懐かしい呼び名に、ティアリューは苦笑混じりに頷いた。

「二人を同時に担がされた覚えがあります」

ズズゥウン

遠雷のような響きが、小さく、ティアリュートの耳に入った。
爆発音。
まだ遠いが、胃が締め付けられるような感じがした。

それは――――敵の襲来を意味していた。

「第一層入り口にデミ・メース！数８……いや、１０だ！」
第一層防衛隊からの怒鳴り声に似た声がノイズと共に耳を打つ。
「奴さん、かなり素早いぞ！」

「部隊全騎、戦闘開始っ！」
ユング少佐の楽しげな声が全てをまとめた。
「主賓のお出ましだ！」

「わっ！？」
陽動のため、第一層フロアに飛び込んだのは美奈代と祷子だ。
フロア左に侵入し、敵を引きつける。
そんな手はずになっていたが、少なくとも美奈代にとって想定外のことが起きた。
洞窟の側面が、連続してはじけ飛んだ。
“死天使”と“ＤＥＳＥＥＤ”は、フロアを貫通する巨大な鍾乳石の背後に隠れた。
「実体弾っ！」
牧野中尉から警告が入る。
「敵メース４、大口径実体弾速射砲を装備っ！」

「な、何で！？」
「――予想外ですね」
祷子が言った。
「レーザーで来る。その連射性の低さを生かして白兵戦へ。そんな美奈代さんの読みが外れるなんて」
「どこから手に入れたんだ？」
「中華帝国軍の使用する１００ミリ速射砲との類似性９５％」
「っていうか、それ以外はなさそうですね」
「――どうします？」
「涼」
「はいっ！」
「私が囮になる。やれるか？」
「……こちらの指示通り動いてもらえますか？そのポイントから仰角６７度で天井までブーストジャンプ」
「やろう」
「一二の三で――芳（かおる）？寧々ちゃん？」
「ターゲットロック」
「やれます」

どうやら、この作戦の主役は、狙撃部隊になりそうだと思いながら、美奈代は指示を待った。

「いち……にの……」
汗で湿る手に何度も軽く力を入れながら、軽く上唇を舐める。
壁に隠れるメースは４騎。
こちらが動かないことでしびれを切らして動くのを待つ。
左右の壁に２騎ずつ隠れている。
手前側の両壁の２騎が何か合図した。
――動いた！
「さんっ！」

グウォォォッ！

派手なエンジンが響き、“死天使”の翼が開き、金色の光と共に宙に舞った。

敵は、その音と光に引かれたように壁から離れた。

「――――そこっ！」

涼はトリガーを引いた。

ビームライフルから放たれた一撃が、サライマの胸に吸い込まれる。

ドンッ！

ビームの直撃を受けたサライマが、そのエネルギーに壁に叩き付けられた。

破壊にえぐり取られた胸部から黒煙が上がり、サライマはそのまま崩れ落ちた。

サライマは４騎。

こちらは３騎。

こういう時に備えて、もう１騎、仲間が欲しいな。

涼はふと、そんなことを思ったが――――

「全騎撃破」

高良中尉の声がレシーバーに入った。

「フロア内、敵性反応なし。状況グリーン」

「残りは？」

「鬼龍院中尉が連続で２騎撃破。実体弾はこういう時に便利ですね」

「……さっすが」

「狙撃隊へ。助かった。感謝する」

フロアへ舞い降りた美奈代から通信が入る。

「騎体を降りる。連中が、何を使ったか見てみたい」
「了解。狙撃隊前進。フロア出口に橋頭堡構築。急いで」
狙撃隊がフロアの出口から第二層へ通じる洞窟へ筒先を向け、殿役を務める美晴と山崎が入り口を固める中。
「警戒は怠らないでくれ――こいつら、エンジンはまだ生きている」
「仕留めるか？」
美奈代騎の横に立つ宗像騎が、油断無くビームライフルをサライマへと向ける。
「……」
どうする？
内心で迷いながら、美奈代は、壁にもたれかかるように擱座したサライマの腕から砲を奪い取ろうと手を伸ばした。
その途端だ。
ガシッ！
「何っ！？」
サライマの左腕が突然、伸びたかと思うと、美奈代騎の腕を掴んだ。
「泉っ！」
とっさにトリガーを引いた宗像騎から放たれた一撃が、サライマの腕を吹き飛ばした。
「こいつっ！」
ビームライフルの銃尻を頭部めがけて振り下ろした宗像は怒鳴った。
「こいつらまだ生きている！動力停止が確認出来るまで破壊しろっ！」

「了解」
月城が斬艦刀を手に、床に転がった騎に狙いを定めた。
熱源反応から、動力部が生きているのは確かだ。
「もったいないな」
月城はふとそんなことを思ったが、どうこうしているヒマはない。
何より、無抵抗の騎にトドメを刺すというのが、どうにも好きになれない。
命令だ。
そう自分に言い訳するのが精一杯だ。
「悪く思うなよ」
頭部から真っ二つにするために、斬艦刀を振り上げた時だ。
「――ん？」
頭部の左側装甲板が吹き飛んだ。
装甲板が宙を舞い、頭部は盛大な白煙が立ち上った。
爆発？
違う。
“白雷改”の目は、そこから飛び出したものが、装甲板以外にも存在することを克明に捉えていた。

人だ。

「鵜来っ！」
月城はとっさに怒鳴った。
「頭部への攻撃は避けろっ！パイロットはまだ生存している！」

「え〝っ！？」
驚いた声と、ザンッ！という切断音がしたのはその直後だった。
「は、早く言ってくださぁい」
有珠（ありす）の泣きそうな声がした。
「や……やっちゃいましたよぉ……」

「……南無三」

斬艦刀で滅多切りにされたサライマの残骸から奪った砲がフロアの床に置かれる。

長い筒にマガジンを突っ込んだその姿は、歩兵用の小銃をそのまま大きくしたような、そんな印象だ。

「中華帝国軍の８１式１００ミリ速射砲ね。性能的には平凡なものよ」

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）から降りた紅葉が一瞥しただけで断定した。

「まぁ、鹵獲（ろかく）品というより……」

「――供与されたもの」

「そうね。飛鼠（ひそ）やビーム系の技術の見返りにと、メースでも運用できる兵器として、この手の武器を中華帝国から入手したと見るべきね」

「上手くできているものですね……世の中って」

「そういうものよ。持ちつ持たれつってヤツ？」

「……私達には、誰か技術とかくれないんですか？」

「向こうが魔界なら、こっちは天界なんだけど」

紅葉はなぜか、肩をすくめた。

「私達の言う魔法技術の面ではね？天界と魔界じゃ、５００年近い開きがあるんだって」

「天界が――」
言いかけて、美奈代は言葉を詰まらせた。
「遅れてるんですね？」

「平和な天界は、反乱ばっかりの魔界と違って、魔法科学なんて必要としなかったそうでね。気が付いた時には決定的な水を開けられていたそうよ？」

「つまり、中華帝国は最新鋭の技術が入手出来て、私達はカビの生えた技術しか入手できない？」

「ストレート過ぎるとは思うけど否定はしない」
紅葉は肩をすくめた。
「私達はいつだって、他人の助けは期待できないのよ」

「あなたの助けは？」

「それは信じていいわ」
紅葉は、ぽんっと美奈代の肩に手を置き、親しげに笑った。
「魔法科学の世界じゃ、紅葉（わたし）様程、信じられる教祖はいないわよ？」

「第一層防衛部隊全滅！」
「絶対数が少ないとはいえ……」
ユング少佐は顔をしかめた。
「人類相手に、5分と持たせることも出来んとは……」
「少佐」

部下から通信が入る。
「敵、動きました。第二層への移動を開始」
「第三層の部隊を第二層へ移動させろ。第一層からの生存者は？」
「２名の生存を確認。例のルートで移動していますが、負傷している模様。動きが鈍いです」
「地表へルートを変えさせろ。地表の観測隊に衛生兵はいるだろう？」
「――――多分」
「悪魔に祈ろう。第二層。武器使用自由。選択を誤らぬように厳命しておけ」
「……はっ」

第二層には、シールド並べたサライマ達が速射砲を構えて待ちかまえていた。
第三層からも応援を受け、その数は２０騎近い。
ここで敵を食い止める。
そのために集められた兵力だ。

彼等が正規軍なら、サライマの持つシールドと訓練された射撃技術で、襲い来る敵を撃破することは容易だろう。

しかし――――

彼等は金で動く傭兵だった。

「おい」
傭兵の一人が訊ねた。
「１騎あたり、いくらだ？」

「相場は下らんだろう？」
「いや――偉いさんは金額改めた」
相場を通信で確認していた一人が声を上げた。
「いくらだ！？」
「すげぇ！２５０だ！」
「２５０！？」
「金星並じゃないか！」
「ああっ！しかも、１騎についてだ！特に、“翼付き”は６００だぞ！」
「６００！？ライデンでか！？」
「ガメルなワケねぇだろ？」
「よしっ！俺がもらった！」
「馬鹿野郎っ！俺様の獲物だ！」

傭兵

彼等に正規軍以上の戦闘能力を求めても、彼等に規律を求めることは出来ない。
規律無き集団である傭兵は、戦果を上げれば、何をしても許される。
そんな存在。
仲間同士の信頼なんてない。
金のためなら、平気で仲間を裏切ることさえ辞さない。
メサイア一騎で3ライデン。
魔界の基本通貨であるガメルの上の通貨で、１０００ガメルを示す。
日本円に換算すれば、およそ３０万円程。
それが、彼等の契約上のメース撃破時の基本報酬だ。

そんな、金欲しさに傭兵になった彼等の目の前に、６００ライデン――――６億円がぶら下げられた。
たった１騎を仕留めることで、２００騎を撃破した報酬が手に入る事が出来る。

上層部としては、彼等の戦意を高揚させるために、こんなことを、このタイミングで告げたのだろう。

だが、それは――――はっきり言えば、逆効果でしかなかった。

勝てば金になる。

その言葉は、金のためなら何でもする、彼等のただでさえ少ない規律を破壊しただけだった。

彼等のとる選択肢は、この時点で決まったようなものだ。

皆が、どのタイミングで身内を出し抜くか。
それだけに神経を傾ける中。
目の前の洞窟の中から飛び出したのは、数本の筒。

「？」

それを見たことのある者は、ここにはいなかった。

バッ！

閃光手榴弾なんて、そんなものの存在を知る者さえいなかった。

「なっ！？」

ずっと、洞窟の暗闇を睨み付けていたせいで、暗闇になれていた目に、その筒から放たれた閃光が襲いかかった。

静粛に慣れた耳に、その連続した爆発音は耐えられない。

「――――っっっ！？」

自分の口が、何を言っているのかさえ聞き取れない。

モニターは閃光にブラックアウトしたまま。

何だか激しい震動が騎体を揺さぶる。

「くそっ！」

メインカメラが使い物にならないと判断した彼は、手動でサブカメラに切り替えた。

そこまではよかった。

モニターに映し出される“モノ”を見るまでは、それでよかった。

サブカメラが映し出したモノ。

それは、自分めがけて襲いかかってくる白いメサイアの姿だった。

マラネリ軍母艦“エトランジュ”と“鈴谷（すずや）”の艦砲射撃を受けたドイツ軍は、各方面で妖魔の群を押し返そうとしていた。

デュミナスと共にハルバードを振るうのは、マラネリ軍制式メサイア“シュツルム・グリプス”だ。

曲線を多用するメサイアのデザインには珍しく、直線を多用した装甲が与えられている。

その分、ズングリとした体型をしており、国民からファットマン（太っちょおじさん）の愛称で親しまれた騎。

「殿下」

国王専用機ＲＳ－４“マデリーン”に搭乗した殿下に、指揮官が報告した。

「戦域はほぼ制圧――新たに侵攻する妖魔は確認されません」

「……僕も妖魔を侮っていたようだな」

死屍累々。

その言葉が、こうもしっくり来る光景はそうそうないだろう。

妖魔と兵士の死骸が折り重なり、戦車や装甲車が燃えている。

地獄だってここまで雑然としていないだろう光景が、殿下の目前に広がっていた。

外気と完全に遮断されたコクピットにいても尚、視覚から入る情報だけで吐き気がする。

胃液がこみ上げそうになるのを、必死に堪え、

「……スゴいな」

殿下はぽつりとそう呟いた。

「……この光景は」

「殿下にこのような光景を」
指揮官が言った。
「お見せするのは、軍人として心苦しい限りですが」

「いい」
殿下は言った。
「僕が望んで来たのだ。僕の方こそ、お前達を生命の危険に曝してすまないと思っている」

「恐縮です」
指揮官は軽く会釈した。
「次のご指示を」

「妖魔達に動きは？」

「洞窟方面からの新たな動きは確認されていません。妖魔本隊は以前、ヒューストン方面へ向け移動中」

「よし……洞窟へ向かおう。紅葉さん達が心配だ」

「ドイツ軍は？」

「ここを任せていいだろう。弾薬の補給は母艦に任せればいい」

「――――はっ。部隊を集結させます」

斬艦刀がサライマの残骸を叩き斬った。
「第二層制圧」
MC（メサイア・コントローラー）からの報告に、月城はホウッと小さくため息をついた。
「狩り放題でしたねぇ！大尉っ！」
興奮気味に叫ぶ有珠（ありす）の神経が羨ましかった。
「最初の突撃で3騎ですよ！？3騎！」
「……私は4騎だがな」
「狙撃隊はなぎ倒しまくり！楽な戦いですねぇ！」
「――そうかな？」
有珠（ありす）騎の後ろで、美晴騎と山崎騎が同時に動いた。
ピーッ！
有珠（ありす）の耳に警告が届いたのは、その後だ。

ザンッ！
ズンッ！

「――えっ？」

後ろを振り向こうとした途端――

「何をしているっ！」
宗像の厳しい叱責が飛んだ。
「遊んでいるんじゃないんだぞ！」

「えっ？えぇっ？」
見ると、宗像騎と月城騎はビームライフルを自分へ――いや、自分の後ろへ向けて構えている。
自分の後ろ。
そこは、壁だったはずだ。

「……」
有珠（ありす）は、そっと後ろを向いた。
「えっ？」
山崎騎の持つハルバードの槍と、柏騎の薙刀が、それぞれ壁に突き刺さっている。
しかも、すぐ間近にはビームライフルのものらしい着弾の痕跡がくっきりと残っている。
「……あの」

ズッ
音を立てて、柏騎と山崎騎が壁から武器を引き抜いた。

それだけだ。

だというのに――

ズルッ

音を立てて、壁が動いた。

壁――岸壁が、まるで何かに引っ張られたように、動いたのだ。

その動きは、全身を布に覆ったまま倒れた。
まさにそのままの動きだった。

そして、その後ろから、新しい壁が出てきた。

「魔族軍の使う擬装布だ」
あまりのことに言葉が出ない有珠（ありす）に、月城が冷たく言った。

「レーダーに頼りきるな。何度も言っているだろう？」

「柏中尉、本気で教えて下さい。し、質問が」

鵜来は本気で訊ねた。

「何故、わかったんです？」

「魔法がどうだろうと」

美晴は楽しげに笑って答えた。

「殺気というものは――――隠せないものなのですよ？」

殺気。

そんな武芸者みたいなものを、中尉達は感じたというのか？

布が動いただけじゃないのか？

いや……。

有珠（ありす）の心の中で、何かがそれを否定した。

そんな簡単な話じゃないし、この人達が生き残ってきたのは、確かにそんなことでも出来なければ無理な話だ。

だから、有珠（ありす）は答えた。

「し、精進します……はい」

北米戦線編　第三十二話（後書き）

作者近況：

更新が相変わらず遅くてごめんなさいです。

うつ病にかかったようで、お医者様からクスリをもらって飲んでいます。

作品の続きが思い浮かびづらくなって困ります。

でも、うつ病のクスリを飲んで、どうして激しく死にたくなるのでしょうか？

でも、一緒にもらった睡眠導入のクスリは結構好きです。

眠っている間は、仕事（じごく）や上司（ごくそつ）や顧客（あくま）のことは考えなくていいですから……。

さて。北米戦線ももうすぐ終わりです。

書ききれなかった所は、ちょくちょく手入れしていきますので、ヒマがあれば何度か読み返してみてください。

感想なんかいただけると、とても励みにはなります。

評価共々、小説の展開やネタ、新規メサイアやメースのアイデアも募集中です。

特に名前！フォイルナー達の新型は何と！名前決まっていないので、いい名前あったら教えて下さい！よろしくです！

北米戦線編　第三十三話（前書き）

募集！
作者のネタ切れともいいますが、以下の設定を募集します。
感想とか使って応募してください。
いただけると本当にうれしいので、是非、お願いします。

募集その１　新型メース、メサイアの設定。
「●×国軍のメサイア」とか「私の考えたキャラの専用メサイア（メース）」とか、そんなのを募集します。
「このメースには、こんな武器があります」とかも大歓迎です。

募集その２　新キャラ
「●●国軍の騎士」とか、「魔族の××」とか……。細かい一緒に設定とかいただけると泣けるほど嬉しいです。

募集その３
フォイルナー達の新型騎の名前。
本気でネタ切れです。ドイツ語でいいのがあったら、是非……助けて。ドイツ語に詳しい御方。

北米戦線編　第三十三話

「存外と」
飛行艦に収容されたダユーは、デッキに降り立った途端に言った。
「不甲斐ないですわね」

「金で集まる傭兵なんて、あんなものです」
対するユギオは平然とした顔だ。
「人類のスコアを稼がせる程度しかできない」

「随分と」
ダユー達の目の前。
収容されたメース達が、次の出撃に備えた補給作業に入っている。
各部に接続されたエネルギーチューブを見上げながら、ダユーは器用に走り回る整備兵達を避けていく。
対する整備兵達は、間近にダユーがいることに驚いて、慌てて道を開くと直立不動の姿勢で見送る。
何しろ、ダユーは開かれた通路を完全に無視して、勝手気ままに歩き回っているようにしか見えないのた。
ユギオは、その横を歩きながら、その美しい横顔を楽しむ余裕さえない。
オイル缶に背広の裾が触れて思わず顔をしかめた。
「――いえ」
不意に、ダユーがそう、言葉を詰まらせたのはその時だ。

「言いかけて黙るのはマナー違反ですよ?」
こりゃだめだな。
ユギオは黒くなった裾を気にしながら訊ねた。
「何ですか?」

「怒りません？」

「黙っていれば気を悪くします」

「薄情――――そう思ったのですが、違うようですね」

「違う？」

「ええ」

ダユーは楽しげに笑った。

「あなたが、ご自身の母艦ではなく、この艦に乗り込んできた理由が、私、わかった気がします」

「どのように？」

「人類に門（ゲート）を開かせる」

ダユーは居住区に向かう廊下に入った。

既に衛兵がカートの運転席で待機していた。

ダユーとユギオがその後席に乗り込むと、カートは静かに走り出した。

「その後、あなたはどうなさいますの？」

「……」

「私はそれを考えただけです」

「結論は？」

ユギオは、ただ、無言で天井を見上げている。
「どう出たのです？」

「この艦は」
ダユーは答えた。
「世界中どこへでも、１時間とかからずに到達出来ます。隠密行動に特化したあなたの母艦より１０倍は速く、しかも、人類側のいかなる検知にも引っかからない。現に」

ダユーは、前席シートの背もたれに設置されたモニターを、その細い指で突いた。
画面に映し出されたのは、周辺の状況を示す地図。
中央部で白く輝いているのが、この艦だと、ユギオにもわかる。
問題は、そのすぐ間近の反応だ。

「人類側の飛行艦が、すぐ2キロ先を航行している。
５キロ先の上空に停泊している飛行艦とランデブーするつもりなのでしょう。
人類側は、こんな間近にいる私達に全く気付いていない。
ほとんど同じ高度にいるというのに」

どうです？
ダユーの目は、悪戯っぽいメッセージをユギオに送っていた。

「艦の設計者に深い敬意を」
ユギオは肩をすくめた。
「あなた達のオーバーテクノロジーじみた発明に、魔界が数千年たっても追いつかないのは認めましょう」

「……人類が門（ゲート）を開いたところで、貴方は人類から“お宝”を横取

りしたい。そう思っている。そのためには、門（ゲート）の開いた先が、この地球上のどこへだろうと、人類の監視を無視して行ける、この艦に、私や部下と共に乗っていた方が分がいいと踏んだ」

「失礼な」

苦笑して、ユギオは答えた。

“あれ”は、元来が人類のモノではありませんし、あまつさえ“モノ”でさえない」

「……失礼」

ダユーは口先だけ詫びた。

「閣下には黙っていてくださいませね？私、あの御方は苦手なのです」

「忘れましょう」

「……どうも」

「どちらにしても、人類にそう易々と勝ってもらっても面白くない。ついでに言えば」

キイッ

小さなブレーキ音を立てて、カートが止まった。

先に降りたユギオが、ダユーを手をとりながら言った。

「あの連中は、絶対にイツミの手の者です」

「イツミの？」

ピクリ。

ダユーの端正な眉が小さく動いた。
「人類が、イツミの犬になったと？」
「あのタイプのメースは、弓状列島で開発、配備されているタイプです。ヴォルトモード軍と共に煮え湯を飲まされた騎ですから、間違いようがありません」
「……へぇ？」
「弓状列島の王とその妻は、かつての“狭間の英雄”。イツミと昵懇の中と承知した方が正しいでしょう。弓状列島から来た部隊となれば、王を通じて、イツミが関与していると見て間違いないでしょう」
「彼等をここで捕獲して」
ダユーは、通路の角を曲がり、豪奢な飾りが施された木製ドアの前に立った。
その歩みは止まらない。
ドアの両脇に立つ衛兵が、会釈と共にドアを開き、ダユー達は話ながらその中へと入った。
「――“イジ”ってみたら、面白い情報が手に入るのでは？」
「あなたの、その発想が恐ろしい」
ダユーに進められるままに、ユギオはソファーに腰を下ろした。
「狂科学者の面目躍如とは思いますがね」
「お世辞なら、もう少し上手く仰ってくださいな」
ダユーが席につくと、メイド達が音もなく二人の前に紅茶や茶菓子を並べ始める。
「でも、あなたも情報を軽くお考えでは？

末端からでも、それなりの情報が得られるのでは？」

「挽肉にした所で、イツミのことを聞いても、知らないと言いますよ？」

本当に知らないんだから。

賭けてもいい」

ユギオはテーブルの上の茶菓子を目で追いながら言った。

「鍾乳洞にいる連中に、“万一”の場合があろうとも、イツミは委託も痒くもないでしょうし、鍾乳洞の内情はすでにイツミは把握している。

あの連中は、イツミにとっては門（ゲート）を開く以外に用なしです」

「内実？」

「つまり」

ユギオはチョコレートの包みを解いた。

「すでに妖魔は存在しない。メースが何騎存在するか……我々が門（ゲート）を開いていないことまで含めて」

まさか。

そう笑おうとしたダユーの動きが止まった。

「――思い出しましたか？」

してやったり。

そんな顔のユギオは、嬉しそうにチョコレートを口に放り込んだ。

「鍾乳洞で何が起きたか」

「天界の斥候が入ったと聞きましたが、あれは」

固い表情をしたダユーは、ティーカップに手を伸ばした。

「イツミの仕業だと、そうおっしゃるのですか？」

「天界の中でも相当、“特殊”な連中――そう言いましたよね？」

「……」

「今の人間界で、そんな連中を、斥候なんて仕事でコキ仕えるのは、イツミ以外には考えられません」

「しかし、天界情報軍が動いたとなれば、重大な契約違反ですわ？それこそ、天界の自滅を招きかねないのでは？」

「人類側が我々の捕虜になって、尋問というか、拷問にかけられても、その口からイツミの名は出てこない。イツミは絶対に尻尾を出さない。人類は常にトカゲの尻尾です。なら、殺すより、こちらも利用した方がよいに決まっています」

「……」

「まだ心配ですか？
納得出来ません？
いいですか？
ここに来たのが、イツミの意志だとして、人類を動かしているのもイツミだと見て間違いなくても、公には、それは認められないのです」

「何故？」

「連中は、弓状列島の王の兵隊ですよ？
つまり、ここに来たのは、王の命令だと言えばそれまでの連中。
連中についての全ては、王の意志とみなされる。

イツミが直接指揮している訳ではない以上、魔界も私達も文句も言えない。
卑怯なほど絶対的な立場を危うくするほど、イツミはバカではないですよ」

「……成る程？」
カチャ
ダユーはティーカップをソーサーに戻した。
「だったら、とっとと門（ゲート）までご案内してさしあげたら？」

「そうは行きません」
ユギオは笑いながら紅茶に口を付けた。
「この状況で、タダで逃げたとあっては、逆に警戒されます」

「あきれた！」
ダユーは目を丸くした。
「イツミの目を誤魔化すため。それだけのために？」

「賞金は増やしてあげましたよ？」

「支払う気はないクセに――ズルい」

「勝ってもらっちゃ困るんですけど、こっちも高いメースを貸し出しているんです。メンツが保てる程度には頑張ってもらわなくちゃ――ああ、そうだ」
ユギオはポケットから携帯電話を取りだした。
「――私だ。犬の動きは？
……鈍いか。
仕方ない、賞金を2倍に跳ね上げろ。
それと、勝利のためには全ての規律を無視して良いと伝達。

各個人の責任の元、好き勝手にやれと、そう付け加えろ」

パタンッ

携帯電話を閉じたユギオが、あきれ顔にダユーに首を傾げた。

「――――何か？」

「本当に、ズルい人ですわね。あなたって」

「はい？」

「各個人の責任の元だなんて、格好はいいとして、上層部としての全責任を部下に押しつけていることですわよ？

しかも、金に目のくらんだ連中に好き勝手やらせるなんて、規律を破壊するし……現場の指揮官がお気の毒ですわ？」

「連中が犬としての己をわきまえているなら」

ユギオは反論した。

「どうするべきかは、すぐにわかるはずです」

「わからなかったら？」

「犬にもなれずに死ぬだけです」

お気の毒。

ダユーの言葉を聞いたら、ユング少佐がどう思ったろうか。

余計なお世話だと怒鳴っていたかもしれない。
第二防衛線まで突破されたことを知った傭兵隊は、部隊の損害を知るなり、自分達が正規軍ではないことを、負の意味でさらけ出した。

仲間の死を悼むことはない。
仇を討つつもりは、さらさらない。

あるのは、自分達が分の悪い戦いをしているという、現実的な思考だけ。

彼等は金儲けのために戦場にいるのであって、仲間だの国だのという、大義名分のためにいるのではない。

彼等にあるのは、金だけ。

しかもそれは、命あっての物種だ。

死んでは元も子もない。

第四防衛線の傭兵達が勝手に第五防衛線に後退したのも、密集防御陣形をとっていた第五防衛線の守備隊が勝手に散開して、自らが適切と判断した場所に潜んだり、勝手に武装を変更したりしたのも、全てはそのためだ。

ユング少佐は、これに対して何も言わない。

元に戻れ。
持ち場に帰れ。

そんなことを言おうものなら、背後から忍び寄ってきた部下に殺される。
傭兵隊の指揮官とは、普段は肩書きで部下を束ねることが出来る。だが、いざ。という時に、肩書きが通用するとは思ってはいけない。
特に、部隊が危機に陥っている時と、金が絡んでいる時は――。
彼はベテランの傭兵指揮官として、それを知っているだけだ。

「賞金が2倍になったぞ！」
「俺がもらった！」
傭兵達は口々に叫ぶと、ウェポンラックから破壊力の高い武装を勝手に引き出していく。
対艦用ランチャーなんて、何に使うつもりなのか。
補助ユニットなしでそんなもの使ったら身動きがとれないじゃないか。
むしろ、ユングは苦笑しながら状況を楽しんでさえいた。
彼が部下に要求することは多くない。

勝利――それだけだ。

勝てば全てが許される。
その分かり易さ故に、ユングは軍を捨て、傭兵隊に身を投じたのだ。
勝利という“結果”に責任を負えばいい。
つまり、勝てばいいのだ。
勝つために何をすべきか？
指揮官にとやかく言われずとも、自分の判断で動く。
それこそが傭兵というプロの仕事だと、ユングは信じている。

広いフロアに走る無数の鍾乳石。
そのあちこちに火砲を持ったサライマが潜んでいる。
一部は擬装布を準備しているし、入り口には対メース用の爆発物も仕掛けている。
数騎は、魔族軍が開けた物資搬入用の縦穴を使って敵の後方に回り込む準備を進めている。
指揮官からの指示が無くてもここまでやる。
それが傭兵だ。

――――やれる。

そう確信したユングは、戦斧をラックから引き抜いた。

「どうします？」
「……第四層まで到達したのですが」
美奈代は、うーん。と腕組みをしながら鍾乳洞の構造図を前に頭をひねるしかない。
「第四層は無傷で放棄した――――第五層に部隊を集結しているだろうことは、音でわかる……」

「何、面倒くさいことやってるのよ」
フィアがイライラした顔で言った。
「敵が待ち伏せしていることなんて、もうわかってるでしょ？だったら美奈代を楯にして突き進めばいいじゃない」

「……お前、代わりにやってくれ」

「い・や――瞬が悲しむでしょ？私、あんたと違って、モてない女じゃないし♪」

「こ……殺す（怒）」

「宗像より泉――どうするんだ？手榴弾を放り込んで、潰していくか？」

「まて」

美奈代が頭をひねったのは、そこだ。

「第五層の奥、Dブロックは反応弾貯蔵庫がある。下手なことはしたくない。何より、第五層は構造的に脆いんだ」

「脆い？」

「ああ」

美奈代は、全騎の戦況モニターをリンクさせた。

宗像達の目の前に、鍾乳洞の構造図が浮かんだ。

「第一層から第四層までは、滑らかな階段状の作りだ。問題は、第四層から第五層。

それまでのように、坂の途中の家みたいな構造と違って、第五層は、ほとんどが、第四層の下に入っている。

ビルで言えば下の階。

螺旋階段状態の通路を通って下の階を制圧するのと同じ――」

「それこそ」

言いかけて、宗像は黙った。

「脆いというのは、どういうことだ？」

「第五層の天井よ――落盤の可能性が高いの」

「落盤？」

「ええ。手榴弾なんて、下手に使えば通路上で崩落して身動きが出来なくなる恐れがあるし――何より、TAC（タクティカル・エア・カーゴ）が巻き込まれたら終わりよ？」

「――クックッ。それで？」

宗像は、喉で笑った。

「ふんぎりがつかないのか？」

「……使用禁止なのよねぇ」

「無視しろ」

宗像は言った。

「状況は刻々変化しているんだ。第一、今更始末書書いてもどうということはあるまい」

「……まぁ、ね」

美奈代は肩をすくめた。

「今度で中隊前線指揮官の資格が剥奪されれば、後方勤務にでも回してもらうことにする」

「後藤隊長が手放すものか――とにかく、敵をお待たせしては失礼だぞ？」

「うん……」

美奈代は頷くと、言った。

「涼？芳（かおる）」

「い、いいんですか！？」
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のラック上に固定していたＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）を装備しながら、芳（かおる）は驚いた声をあげた。
「ここでの使用は、禁止じゃないですか？」

「いい」
美奈代はそっけなく答えた。
「後藤隊長には、私が怒られればいいんだから」

「……お姉さま」
涼が涙目で言った。
「お察しします」

「……ありがと」

「今晩、私がたっぷりベッドで慰めて差し上げますからね？」

「遠慮する――――芳（かおる）、ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）の筒先を私に向けるな」

「……で？何を撃つんですか？」

「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は第三層へ後退。撃つのはここだ」
美奈代騎が、第四層の床を指さした。
「小清水、平野騎以外の全騎も、ビームライフルを準備しろ。第四層と第五層を隔てる天井は薄い。この天井をブチ抜いて、落盤の混乱と共に第五層へ降下。一気に敵を殲滅する」

「手榴弾は？」

「穴が開き次第、手当たり次第に放り込め」

美奈代は鼻でため息をついた。
「……随分派手な土方仕事だわ」

「隊長」
戦闘音が聞こえなくなったことを訝しいと思ったティアリュートが、ユング少佐に通信を開いた。
「状況を教えて下さい」

「敵は第四層で停止している」
ユング少佐は答えた。
「センサーの反応から、数カ所に集結している。戦況をリンクしてやろう」

転送されたデータを見たティアリュートは、眉をひそめた。
「教官？」

「ん？」

「これって、第四層の床を突き破ろうとしていませんか？」

「……何？」

「第四層の、メース進入禁止区域と集結地点が合致しています。メースの重量が長時間加わると崩落の恐れがある所でしたね」

「まさか……そこを爆破して？」

「私やユースティアなら、そうします」
「非戦闘員の脱出は終わっているな？」
「はい」
「よし……褒美はくれてやろう。部隊全騎へ！」
ユングは怒鳴った。
「敵は天井から来るぞ！ポイントを転送する！そこめがけて火砲をたたき込めっ！」

美奈代は、後々まで“偶然の悪戯”という言葉を聞くと、この時のことを思い出すことになる。

人類と魔族軍の指揮官同士。

互いが狙ったことは、石灰岩の塊を破壊すること。

しかも、その攻撃タイミングは、完璧に一緒だった。

ズンッ！
ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）が２カ所で発砲。
穴が開き次第、手榴弾を放り込んで、穴に飛び込む。
そういう手はずだった。

だが――

ズズッ！

ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）の砲撃が着弾した途端、床が激しく揺れた。
砲撃の着弾だけで、こんな揺れはしないはず。
「なっ！？」
驚く美奈代に、牧野中尉が告げた。
「センサーが複数発砲音を確認！」
「発砲音？」
きょとん。とした後、美奈代は大声で叫んだ。
「全騎っ！床が崩れるぞ！天井まで飛べっ！」

「ど、どういうことですか！？」
発砲に失敗したのか？
それとも、場所を間違えたのか？
涼は、美奈代の答えを聞く前に理由を悟った。
ビシッ！
ビシッ！
“白雷改”の“耳”は、そんな耳障りな音を確実に拾っていた。
「……」
音の元を探した涼は、すぐに床に何が起きているのかを悟った。
亀裂。
床一面に、亀裂が走り始めている。
ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）で撃った場所以外でも、次々と亀裂が走っているのだ。

間違いない。

ビキッ
ビキキッ！

床は、氷のように割れて砕けようとしていた。

「じ、冗談っ！」

涼はとっさに“白雷改”のブースターを開いた。

“白雷改”の足下が崩れ落ちたのは、その時だった。

長い年月のうちに、水の浸食を受けずにいた場所が、太い格子状に残り、他の場所が薄くなっていた。というのが現実だ。

「……危なかったな」

落下してくる石灰岩を、柱の影でかわしたユングは、冷や汗を背筋に感じながら呟いた。

「敵が巻き込まれてくれれば、御の字なんだが……」

ちらと見たセンサーは、敵が上へ逃れたことを教えてくれている。

「……そこまで甘くはないか」

「全騎、大丈夫か！？」

崩落の影響で土煙が立ち上って視界の上では状況が把握できない。

美奈代は、とにかく部下の安否確認を優先しようとしたが、

「下、敵性反応っ！」

牧野中尉の警告と同時に、攻撃が飛んできた。

「宗像っ！」

美奈代はビームライフルを構えると鋭く怒鳴った。

「前衛全騎っ！」

美奈代が意図する所は、宗像も同じだったらしい。

宗像の声が、すぐに美奈代の耳に届いた。

「突撃っ！狙撃隊はマズルフラッシュを狙えっ！」

――さすがだ。

美奈代はそう思いながら、祷子に声をかけた。

「風間？いくぞ？」

「はい♪」

最も近くにいるサライマに美奈代は狙いをつけた。
ビームライフルをマシンガンモードで牽制射撃。
サライマを壁間近に追いつめたまま強行着陸。
突然の攻撃に驚くサライマの頭部めかげてシールドのエッジを叩き込んだ。
「――ちっ！」
シールドを構えつつ、ビームライフルを空中に放り投げた美奈代は、頭部を潰されて壁にもたれかかった状態で擱座したサライマの胸ぐらを掴むと、騎体左側へと突き飛ばした。

ドガガガッ！

連続した爆発が、サライマの背中を貫通して襲ってくる。
シールドに数発が命中して小さな爆発が起きる。
サライマが爆発の度に、まるで神経があるようにビクビクと動く。

上空に放り投げていたビームライフルを右手でキャッチした美奈代は、躊躇いもなく、そのサライマの腹めがけてビームライフルのトリガーを引いた。

ドンッ！

サライマの腹に風穴を開いた一撃。
そのエネルギーの残りは、別な柱から飛び出すなり、美奈代騎に攻撃をしかけた別なサライマの股間に命中。
両足を股間部で破壊されたサライマが顔面から地面に落下。
ハッチが飛んだ。
「……」
一瞬、頭部に照準をつけた美奈代は、サライマの右腕の付け根に照準をずらして発砲した。
「コクピットを狙ってみたり、外してみたり」
牧野中尉は可笑しそうに笑った。
「甘いのか残酷なのか」

「自分でもわかりません」

「泉大尉は複雑ですねぇ」

「そう思います」

「泉」
サライマの残骸から斬艦刀を引き抜いた宗像から通信が入った。
「先程の影響で、第六層への通路がふさがった」

「いや……僥倖だ」
美奈代は頷いた。
「幸いにして、反応弾貯蔵庫へ通じるルートは確保されている」
美奈代は言った。

「第六層に潜んでいる敵を阻止出来るんだ。部隊を集結させてくれ。移動する」

一方で――

「……なんてことだ」

目の前を塞ぐ巨大な岩盤を前に、ティアリュートは呆然となるしかなかった。

目の前には、先程の影響で崩壊して、通路を塞ぐ石灰岩の塊達。

どうひいき目に見ても、殴ってどうこうなるほど、ヤワには見えない。

これでは、第六層から第五層に増援に行きたくても出来ない。

いや……脱出さえ……。

「て、ティアリュート様」

ユースティアが通信モニター上で心配そうにこちらを見つめている。

いかん。

ティアリュートは軽く首を振った。

ここで動じては、ユースティアが不安がる。

それではダメだ。

「状況を調べに行く」

ハッチに手をかけながらティアリュートはユースティアに命じた。

「ユースティアはそこで待機してくれ」

「わ、私も行きますっ！」

ティアリュート騎のハッチが開くより先に、ユースティア騎のハッチが開いた。
「一人より、二人の方が」
一人でいると不安だ。
ユースティアは行動でそう言っていた。
縋り付くような目に気付いたティアリュートは、ため息一つ、ユースティアに言った。
「――――任せる」

カランッ
巨大な岩から時折聞こえるそんな音でさえ、ティアリュートの寿命を縮めさせてくれる。
下手なこと一つで崩落すれば、巻き添えになってしまう。
後ろをおずおずとついてくるユースティアの手前、毅然とした態度は崩せないものの、今の状況は、信管の生きている爆発物の上を歩いているのと、ティアリュートは心境的に変化はない。
サライマのサーチライトと、手にした懐中電灯の光に助けられ、岩石の山を見上げる。
どうしていいのかさっぱりわからない。
「……」
問題は――――。
ティアリュートは、振り返ってサライマの武装を見た。
手にしているのはレイピアと戦斧だけ。
戦斧でこの岩を破壊出来るのか？
メースの装甲さえ破壊出来る戦斧の力からすれば、不可能ではないだろう。
だが……。
「……無理、か」

ティアリュートがそう思ったのは無理もない。
第五層に通じる出入り口の真上の天井には、大きな亀裂がいくつも走っている。
下手な衝撃を与えれば、サライマの真上への落盤は避けられない。
天井をビームで破壊して、安全を確保してからやるか？
「ちまちまと……無駄な時間を」
部隊の状況がまるでわからない。
ユング騎とのデータリンクが途切れている。
他の騎との通信も通じない。

全滅した。

そんな言葉が、脳裏から離れない。
この障害を突破出来ても、敵の包囲網が待ちかまえているはずだ。

「……ユースティア」
「は、はいっ！？」
突然、声をかけられたユースティアが飛び上がって返事をした。
「な、なんですか！？」

「脱出ルートはあったか？」

「あったんですが……」
ユースティアは答えた。
「第五層の縦坑を使用して地上に出る必要が」
「他にあるとすれば……」
脱出ポッドか。
いや。
メース使いとして、戦わずにポッドを使ったなどあり得ない。
ティアリュートは、意識的に、その選択肢を除外した。

「……あの、ティアリュート様？」
おずおずとした声が耳に届いた。
「何だ？」
「……あれは？」
ユースティアが指さしたのは、岩と岩の間。
白い、いびつな何かが、そこには挟まっていた。
「……なんでしょうか、あれは」
「……人工物であることは間違いないな」
それをじっと見つめていたティアリュートは、ハッとなった途端、床を蹴っていた。
「て、ティアリュート様っ！？」

斬艦刀が、ドアをチーズの如く切断していく。
その光景を、美晴はあきれ顔でみつめていた。
「斬艦刀に、こんなトーチみたいな使い方があるなんて、思いつきませんでした」

「どこのバカよ。こんな金庫並の厚さの扉をこんな所に持ち込んだの！」
余計な手間だと怒る紅葉に、美奈代がぽつりと言った。
「それを、こんな壊し方してる私達は何なんですか？」
「余計なこと考えないでとっとと壊せ」
「知りませんよ？本当に」
「監視カメラは全部壊してあるから大丈夫！なにより、脚部の防震ゴムは、特別に中華帝国軍の帝刃と同じパターンにしてある。足跡から調べても、中華帝国軍と判断するから！」
「やってることがモロ犯罪者ですって！」
「うるさいって！アシがつく前に、さっさとやれ！」

ガンッ！

音を立てて、ドアが倒れたのは、その時だった。

北米戦線編　第三十三話（後書き）

●作者近況

もーだめだぁ……。うつがひどくて仕事になりません。何言われても頭に入ってこない。

ご飯食べられない。食欲ない。1日1食がやっとで外回り……死ぬ。死にたい。死んでしまいたい。

病院で気分転換進められたので、昨日、宝くじ買ってみました。

クリスマスプレゼントです。

自分への。

3億かぁ……。

当たったら仕事辞めて、小説書くのに専念したい。

引きこもってみたい。

うつ病の治療に専念したい。

ご飯食べたい。

会社行きたくない。

外回りしたくない。

……愚痴愚痴。

……延々、こんな愚痴が脳内を駆け回っている今日この頃です。

皆さん、健全な精神を大切にしてくださいね？

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第一話（前書き）

ティアリュートの過去についての番外編です。
コレ読まないと、ティアリュートが何考えてるかわかんない……かも。

ちなみに元ネタはくずしろ先生の「　姫のためなら死ねる」です。
メチャ面白いので、ついついネタにさせていただきました。

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第一話

番外編

魔界の中流貴族に生まれ、義務として短期現役兵として軍務に属した後に満期退役。
最終階級は中尉。
この時点でのティアリューは、そんな、貴族の子女としては平凡な女性だった。

ただし――肩書きだけ。
一日パジャマで過ごし、気が向かなければシャワーも浴びない。
美しい金髪の髪はボサボサ。
それでも何も気にしないのは、彼女がどういう性格の持ち主か言わずとも分かるだろう。

「お呼びですか？」
貴族故に、身の回りのことはメイド達がやってくれる。
お茶が欲しければベルを鳴らせばいい。
食事は黙っていても用意してくれる。
やることはない。
自分がこうなのは、この環境のせいだし、私はそんな環境を有効活用しているだけだ。
ティアリューは、本気で思っている。

その彼女が、このムダに怠惰な時間をどう過ごしていたか？
本を読んだり、思いついたことをただ、ノートに書き記してみるだけ。
他に何もしない。

ベッドと机を行って帰って一日が終わる。
例外はトイレくらいなもの。
現代社会に置き換えれば、ブログ更新するだけの、ただのヒキコモリだ。

そんな彼女にも、幸運なことに友人がいた。

この立場で友人もいなければ、人間としてある意味終わっている。
魔界でも同じだ。
ちなみに作者は終わりきっている。
べ、別にさみしくなんてないんだからねっ！？（ｂｙ作者）

「ちょっとぉ」
メイドに案内され、部屋に入るなり顔をしかめたのは、スーツ姿の妙齢の女性。
ショートにまとめられた髪。
鋭く知的な目。
尖った形の良い顎。
クールにして知的な外見は、彼女が社会的にも“出来る”女性であることを照明している。
「あんた……いい加減、外に出なさい」

「えーっ？」
メイドの持ってきたポッキーをポリポリかじりながらノートに何か書き込んでいるティアリュートは、面倒くさそうに生返事だけ返した。
「軍を退役した途端――」
始まった面倒な説教を聞き流しながら、ティアリュートはノートに新しいことを書き込み始めた。
「えっと……クローネンベルクが訊ねてきた。彼女は私の友人だ」

「……学はあるし、軍功もある身で、部屋に籠もって何してるのよ」
「年上のせいか、母上並に小言を言ってくるし、ときたまウザい……と」
ガンッ！
クローネンベルクと呼ばれた女性の拳が、ティアリュートの後頭部に炸裂した。
「声に出てるのよ！声にっ！」
「追伸――母上より手が先に出るから、結婚がまた遠のいたのは間違いない」
「悪かったわねっ！」
「――って」
後頭部をさすりながら、ティアリュートは訊ねた。
「また？」
「あんな男、こっちから御免被るわ」
「何回目の破談よ」
「さぁね？私は仕事が恋人なの。それよりちょっと――あんた、仕事なさい」
「い・や・よ」
「……即答したわね」

「ここにいれば三食昼寝つきでのんびり出来るのよ？一生分の苦労というか、労働に回せる気力は、軍で完全に使い果たしたわ」

「単なる家庭教師だから」

「家庭教師？」

ティアリュートは眉をひそめた。

「そんなもの、市民階級の連中の仕事でしょ？」

「そんな階級が許されない所からのお仕事よ」

「？」

「――ヴァルホイザー家は知ってるわね？」

「シュロスベルク公国の？」

「そう」

「伯爵家って言っても……」

ティアリュートが怪訝そうな顔をした。

「内戦で大変なことになってるはずよ？家庭教師なんて雇える状況なの？」

「オンディーヌ家とのもめ事がどうだろうと、教育は必要でしょ？しかもそれが総領娘となれば」

「無理」

ティアリュートは答えた。

「無理よ無理っ！つーか、やりたくないっ！」

「何でよ」

「そんな高級でまぶしい世界に出たら目が潰れる、酸欠で死ぬ！」

「あんた――――断った理由として、それをヴァルホイザー家に伝えたらどうなると思う？」

クローネンベルクは、バッグから一枚の書類を取り出すとティアリュートの前に突き出した。

「待遇、悪くないわよ？少なくとも三食昼寝つきは間違いないし」

「……求人票？」

「読みなさいよ。待遇は絶対に悪くないでしょう？」

「……まぁね」

ティアリュートは生返事だ。

「何が不満？」

「……面接」

「はぁ？」

「ここ数ヶ月、あんたと家族とメイド以外、誰とも会ってないから……グッダグタになりそうで……」

「このひきこもりがっ！」

「しかもさぁ」
求人票を指で弄びながら、
「このカティア姫って、どんな人なの？」
「あんた知らないの？」
「ヴァルホイザー家なんて、歴史位しか興味ないもの。今の家族構成なんて論外」
「社交界に顔出していれば、この求人票を見た途端に二つ返事なのにおかしいと思ったわよ――」
クローネンベルクは、わざとらしい咳払いをした。
「コホン……“宮廷の白華”と呼ばれるほど、素晴らしい御方よ？その美しさと人当たりの良さでは社交界随一と賞賛されている。しかも、勉強熱心で運動神経も抜群で、とにかく、あんた好みのタイプね」
「あのね？クローネンベルク」
ティアリュートは答えた。
「こんな所で妄想の話はいいから」
「現実の話してんのよ！！」
数日後――
「とっとと部屋から出る！」
「強制連行！？しかも、な、なんで身ぐるみ剥ぐの！？ち、ちょっ

と私、露出や羞恥プレイの趣味は！」

「私にもないっ！走ってシャワーへ行けっ！」

「そ、そんなこと言って、み、水じゃなくてガスが出るんでしょ！？」

「立ち止まったら殺す！走れっ！」

「ち、チクロンBはいやぁっ！」

約1時間後。

「終わりました」

メイドがクローネンベルクにうやうやしく頭を下げた。

「垢落としに30分って、どんだけ風呂入ってなかったのよ」

「痛たたっ……肌がまだヒリヒリする……」

「綺麗になってよかったわね」

スーツ姿のティアリュートを前に、クローネンベルクは満足そうに頷いた。

「さぁ、行くわよ？」

「どこへ？」

「面接会場」

「軍務での実績も申し分ないな」
連行にされたに等しいというか、実際に連行されたティアリュートは、面接会場で小柄な老人を相手に面接をしていた。
仕立ての良いスーツ姿の老人を、てっきり執事だと思ったティアリュートは、貴族相手に随分尊大なジジイだな。と思いつつ、表面には出さなかった。
「教養の面でも？」
「はい」
ティアリュートは頷いた。
「父はライヒス大学の文学部教授で、文学、歴史、音楽等、幼い頃より手ほどきを受けております」
「現在は？仕事は？」
「……あの」
ティアリュートは言いづらそうに答えた。
「今は……家にいることが多いので、外に出るとまぶしいくらいです」
「……は？」
「いえ……こちらの話で」
「……ちょっと失礼」
突然、席を立った老人は、背後にあったカーテンを小さくめくると、中に書類を差し出した。
「姫――――このような女性だが」
「え？」
ティアリュートは目を点にした。
「姫」と呼ぶからには、カーテンの向こうにいるのが誰かはわかる。
しかも、その口振りからすれば、この老人、執事ではない。

ヴァルホイザー家の当主と見て間違いない。
――危なかった。
ティアリューは本気で胸をなで下ろした。
――クローネンベルクめ。当主や家族の写真くらい見せておけ。
――後で帰ったら、どうしてやろうかしら。
ティアリューが、脳内でクローネンベルク相手に禁断の行為に及ぼうとした時、カーテンの向こうから声がした。

「――まぁ。綺麗な字ね」
鈴を転がしたって、こんな綺麗な音はしないだろう。
どんな楽器が音を立てたらんだろう。
ティアリューは、
――綺麗なのは、あなたの声です。
そう思った。
「書いた方も、きっと綺麗な御方なのでしょうね」

きゅんっ。

ティアリューの胸が高鳴った。
美しい声の持ち主が、自分を褒めてくれた。
それを、ティアリューはこう解釈したのだ。

も、もしかして、私――今、口説かれてる？

「お顔が見たいわ――カーテンの中へ」

声は、そう言った。

「えっ？ええっ！？」

勘違いしたままのティアリュートは、それにどう反応していいか戸惑った。

――ま、まだ、心の準備が。

――いや。待て？

はやる心を、何かが止めた。

――そうだ。

――声が美しくても、外見がヒドいに違いない。

――その手に騙されてたまるか！

「……はい」

ティアリュートは、カーテンの内側から伸ばされた小さな手を、そっと掴んでカーテンの中に入った。

――どんな卒倒しそうな程のブスが

そう思っていたティアリュートの目の前に現れたのは、卒倒しそうな程の美少女だった。

自分をみつめる澄んだ瞳。

あどけなさが残る顔立ち。

肌は淡雪の如き白さ。

絹糸の如く艶やかな髪。

指先にまでにじみ出た高貴な美しさ……

「だ……抱きしめたい」

ティアリュートの口から、本音が出た。

「はい？」

「……いえ」
視線を逸らそうとして、ティアリュートは出来なかった。
目の前の美少女を目がロックオンしたまま、自動追尾していた。
追尾を解除することが出来ない。
ただ、引きつり気味に笑うのがやっとだ。
「あなたも本を読まれますか？」
「は、はい」
ティアリュートは答えた。
「ただ、流行のものはあまり読みません。皆、同じに見えるので……」
「まぁ！私もそう思っているのです！」
目の前の美少女は、嬉しそうにニコリと微笑むと、その細い手でティアリュートの手を握った。
「私達、気が合うかもしれませんね」
そして、カーテンの向こうに告げた。
「お父様？私、この御方に決めましたわ」
ティアリュートも内心で思った。
「私も――――あなたに決めました（はぁと）」
何を？
聞かなくてもわかるだろう？
「そうか」
カーテンが開かれ、先程の老人――――ヴァルホイザー家が安堵した。という顔で微笑んだ。
「では、家庭教師の仕事は、ティアリュート殿に頼むとしよう」

「――ありがとうございます」
表面的には、冷静さを保ちつつ、内心でティアリュートはガッツポーズをとりながら、ダラッシャァァァッッッ！と叫んでいた。

「ティアリュート殿」
そんなティアリュートに、当主は心配そうに言った。
「カティア姫はまだ幼い――よろしくお頼みしますぞ？」
それは、父親として当然の頼みだ。
それを受けたティアリュートは、幸せそうに笑みを浮かべて答えた。
「はい！お義父様っ！！」

「失礼いたしました」
面接会場に通じる廊下。
そこで待っていたクローネンベルクが、雑誌から目を上げた。
「どうだった？」

「……はぁっ」
ティアリュートは、まるで全身の空気を抜かんばかりに深いため息をつくと、壁にもたれかかりながらポツリと言った。
「――堕ちた」

「ええっ！？」

「……恋に」

「誰がっ！？」

喫茶店に入った二人の前に、紅茶が運ばれてきた。
「とにかく、合格したんでしょ？」
「うん」
「よかったじゃない」
乾杯。と言わんばかりにクローネンベルクは小さくティーカップを持ち上げて微笑んだ。
「いただいたお仕事。しっかりお勤めしなさいよ？」
「当然」
ティアリュートは、不敵に微笑みを頬に浮かべた。
「二人切りで――おはようからおはようまでお世話するわ」
「……眠らせてあげなさいよ」
「……とにかく」
ティアリュートはどこからかノートとペンを引っ張り出した。
「お茶飲んでなさいよ。私、この事をきちんと記録しておきたいの」
「そ、そう……」
「そうよ。カティア様の美しさ……胸の内に秘めておくことなんて、出来るものですか。ううん？絶対に無理……あの私を引き寄せた細い指……あの愛らしさときたら……」
目の前でブツブツ言いながらメモに走る友人を見て、鳥肌を立て

たクローネンベルクは、自分が何か取り返しのつかない過ちを犯した気がしてならなかった。
そして、思った。
「姫……どうか、ご無事で」

その日の夜。
「……あなた？」
しきりに首を傾げる当主に、妻が尋ねた。
「何か心配事でも？」
「いや」
当主は答えた。
「おとうさま……ティアリュートはただ、そう答えただけなのに……何故、こうも心配なんだろう」

その杞憂は、ある意味ですぐに、翌日という短さで現実のものとなる。

翌日。

「……ねぇ」
これから伯爵家のある城に入るというのに、ティアリュートが手

にしているのは、若干の着替えの入った小さなバッグだけ。
「これから家庭教師に入るんだから、本とか持っていったら？」
「“古きエリダ”とか？」
「そうね……“葉の詩”とか」
「だって両方とも覚えているし」
「うそでしょ？」
「え？何が？」
「“葉の詩”六巻第一句は？」
「雪降りて冬に籠もれる――」
「七巻の十九句」
「浅茅が宿にて――」
「ほ、本当に覚えてるの？」
「当然でしょ？」
ティアリュートは平然と答えたが、魔界貴族の基本教養とされる詩集“葉の詩”は、短いとはいえ４５００以上の詩が掲載されている。
全てを暗記するなんて、普通出来る代物ではない。
クローネンベルクはつくづく思った。

――こいつ、本気になればスゴいんだけど、本気の使い方間違えてるのよね。

「……だけどさ」
不意に、ティアリュートが言った。
「カティア姫って家庭教師いるの？」

「何？身も蓋もないこと言い出したわね」

「だって、ああいうのは幼い頃からやっていらっしゃるはずでしょ

？今更、家庭教師雇って、何しろっていうの？」

「べ、別に考える必要もないと思うけど」

クローネンベルクは、何故か焦った様子で言った。

「べ、勉強好きってことでしょ？」

「うーむ」

それに納得できないのか、ティアリュートはしばらく腕組みして考えた後、ぽんっと手を叩いた。

「そうかっ！」

「そ、そうよっ！」

「主要科目は――保健体育っ！」

「――それ、ないから」

「でもさ」

「？」

「あんたも何でついてくるの？」

「心配だから」

「心配？」

「そう。私も別な仕事で城に入るし、アンタ見張ってないと」

クローネンベルクは深刻そうな顔で言った。

「何か、とんでもない罪を犯してくれそうで、恐いのよ」

「それはない」

「そう？」

「私、そこまで罪作りな女じゃないわ。それともクローネンベルクって、もしかして私のこと……」

「――――それ、違うから」

ヴァルホイザー家の入った城は、はっきり広大だ。

敷地面積だけで東京都が丸ごと入る。

冗談ではない。

魔界の貴族の城としては、これでも平凡なサイズではあるが、その広大さ故に、いろいろと予期しないことも出てくる。

「何浮かない顔してるのよ」

ヴァルホイザー家の家族が住む本殿に通じる廊下を歩きながら、クローネンベルクが顔をしかめた。

「だぁってさ？」

ティアリュートは答えた。

「挨拶回りでいろんな人と会うんでしょ？面倒くさくて」

くいっ。

ティアリュートは、不意に裾を引かれた。

「ん？」
振り向くと、そこには魔界中の華を集めても足りない美貌が満面の笑みを浮かべていた。
カティア姫は、零れるほどの笑みを浮かべ、ティアリュートに言った。
「いらっしゃい♪ティアリュート！」
「ひ、姫様っ！？」
「えへへっ。あなたに会えるのが楽しみで、ついここまで来てしまいました♪」
「そ、そうなんですか！？」
「……」
「……」
「……」
何故か、カティア姫の顔が曇った。
「……姫を傷つけた」
クローネンベルクがポツリと言った。
「死刑ね」
「何故っ！？」
「……お嫌、でしたか？」
「はぁっ？」

「私の家庭教師は、お嫌でしたか？」
ポロッ
不意に、カティア姫の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「ま、まさかっ！」
ティアリュートは、首がもげないのが不思議なほどの勢いで首を左右に振った。
「そ、それどころか、姫を泣かせた罪悪感と、愛らしい泣き顔にさわぐときめきで、心がどうにかなってしまいそうですっ！」

「――――もうどうにかなってるわよ」

「と、とにかく！」
カティア姫はまだ１３歳の幼さ。
自分がしっかりしなければ、不安になってしまう。
「私の如き身が、姫様お付きの家庭教師になるなど夢の様な話。どうして嫌がありましょうか」
ティアリュートは、本気でカティア姫の手を握って言った。
「むしろ好きですっ！やらせてくださいっ！」

「……」
真剣な言葉に心打たれたカティア姫と、

――――真面目なはずなのに、どうしてコイツが言うと変態じみて聞こえるんだろう。

そう、不思議に思うクローネンベルクがいた。

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第二話（前書き）

募集！

作者のネタ切れともいいますが、以下の設定を募集します。

感想とか使って応募してください。

いただけると本当にうれしいので、是非、お願いします。

募集その１　新型メース、メサイアの設定。

「●×国軍のメサイア」とか「私の考えたキャラの専用メサイア（メース）」とか、そんなのを募集します。

「このメースには、こんな武器があります」とかも大歓迎です。

募集その２　新キャラ

「●●国軍の騎士」とか、「魔族の××」とか……。細かい一緒に設定とかいただけると泣けるほど嬉しいです。

募集その３

フォイルナー達の新型騎の名前。

本気でネタ切れです。ドイツ語でいいのがあったら、是非……助けて。ドイツ語に詳しい御方。

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第二話

「この城については、だいたいこんな感じ」
クローネンベルクは、肩の辺りをコキコキ言わせながら言った。
「広いけど、カティア姫付きのあんたが知ってなきゃいけない所も多いから、説明も大変なのよね」
「緊急時の避難コースだけで３６ある……か」
「それ、とっても大切な秘密だからね？城から出る時には記憶にロックかけてもらうから」
「わかってるわよ……それにしても」
アイスティーのストローを口にくわえながら、ティアリュートはうっとりとした顔になった。
「カティア姫の間近にお仕えすることが出来るなんて……天国のよう」
「クビになったら地獄ね。お付きの者としての活躍に期待してるわ」
「ええ……手取り足取りナニ取りで、二人っきりで密室で――――あああっ♪」
ティアリュートは、たまらない（はぁと）という顔で自分自身を抱きしめた。
「もうここは天国極楽、そしてヘヴン……もう私……」
「……まだ死んでないから。残念だけど」
コーヒーカップをソーサーに戻したクローネンベルクが席を立った。
「ほら。他の連中の面通しがあるんだから、いくわよ？」
「……うっ」
「深刻そうな顔してもダメ。仕事のうちよ」
「……どうしても？」
「どうしても」
「……お腹痛い。生理痛と陣痛とお盆とお正月が一気に来た」

「痛いのはあんた自身よ。ほら、姫がいるんだから、恥かかせないの」
「……そ、そうね」
ティアリュートは席を立った。
「姫がいるんだから、恐くなんてないっ！」
「――その粋よ」

……とはいえ。

一度身に付いたヒキコモリ癖がそう簡単に消えるはずもなく……。

広間のドアの向こうに、ずらっと並んだメイドや執事達を見た途端、

「ごめん。ここ方角悪すぎ」

とっさに踵を返し、「逃げんな」と、クローネンベルクに肩を掴まれた。
「あれを見て、何も感じないの？」
「えっ？」
「――よくご覧なさい」
「……」
ティアリュートは、言われるままにカティア姫を見た。
居並ぶメイド達に優しい笑みを投げかけるカティア姫の姿は、華と呼ぶに相応しい。
「……そうね」
ポツリと、ティアリュートは言った。

「あんなたくさんのメイド達に囲まれて」

「……」

「姫が遠く感じるわ」

「……は？」

「あの連中は、姫にずっと前から仕えていて、私の知らない姫を知っている……」

「あ、あのね？」

「畜生……全員の目ん玉と脳みそえぐり出して、そのボンクラな脳裏に焼き付いた姫の素晴らしいお姿を、私だけが独り占めしてやりたい……はぁっ。それにしても、私の知らない姫……私の……知らない」

ティアリュートは、胸がキュンッとなった。

頬が赤くなるのがわかる。

「やだ。何この気持ち……これってもしかして！」

「とりあえず、みんな待ってるから、逝くか行くかどっちかにして」

結局、ティアリュートは、メイド達の列の最後尾にこっそりとついた。

目立たなければいいんだ。

どうせ、姫だって気付くはずはない。
そう踏んだのだが――――

「ティアリュートっ！」
姫の嬉しそうな声が広間に響く。
壇から降りた姫が、驚くティアリュートに小走りで駆け寄ってくる。
「どうしたの？そんな隅で、いいからこちらへ」

「は……はい」
手を引かれるまま、ティアリュートは歩き出した。
まるで歩いているという自覚はない。
それは、宙をふわふわと浮いているような奇妙な感覚だった。

こんなたくさんのメイド達の中から、私を見つけだしてくださった。
しかも一瞬で！

姫が自分を見つけだしてくださった。
たったそれだけが、うれしさを通り越して感動さえも通り越した至福としてティアリュートを包み込む。

「あんた、変態だから目立つのよねぇ」
ニコリと微笑むクローネンベルクに、満面の笑みでティアリュートは返した。
「あとでぶっ殺す♪」

「新しく家庭教師になったティアリュート様です」

カティア姫は、嬉しそうに皆にそう告げる。
「……ねぇ」
それを見守るクローネンベルクに、横にいたメイドが訊ねた。
「あんたが連れてきたんでしょ？どうなのよ実際」
「……まぁ、そうね」
クローネンベルクは答えた。
「ご自分の目で確かめてみる事ね――――そうとしか言い様がない」
「そんなにスゴ腕？」
「……」
クローネンベルクは、訝しがるメイドから視線を外し、そして内心でティアリューに詫びた。
――――ごめんね。ティアリュート。今の私だと、全否定してしまうから……

「ティアリュート？みなさまにご挨拶して下さいな」
「――――はい」
姫からボールを投げられた形のティアリュートは、まるで任地に赴いたばかりのベテラン軍人さながらに、表情のない顔で言った。
「カティア姫様の家庭教師をやらせていただくことになった、ティアリュートです。至らない点ばかりだと思いますが、よろしくお願いします」
そして、軽く頭を下げた。

「色白で綺麗な御方ね」
メイド達が小声で言い合う。
「それに冷静で大人の印象が……」
「素敵な御方ねぇ……」

正直な話。
皆がティアリュートの美貌に見とれていた――――というのが、正

しいのだが、肝心のティアリュートがどう思っていたかといえば――

――見んな。

――こっち見んな、マジで！

――ううっ……ちょっと無理したら、緊張のあまり吐きそう……。

まるで油を搾り取られるガマ同然の脂汗が、背中を滝のように流れている。

ティアリュートは、軍隊時代に培った無表情を維持するのが精一杯だった。

「ティアリュート様？」

面通しが終わった後、カティア姫付きのメイド達数名と、姫を交えて立ち話となった。

「お父上は詩歌の面でも大家とうかがっております。是非、何か」

「――失礼」

ティアリュートは冷たく答えた。

「私の未熟さで父の名は汚せません。どうかご容赦下さいませ」

「まぁ……」

メイド達がうっとりとした顔になった。

「親を気遣うお気持ち……謙虚ですわねぇ……」

「……」

――あ、危なぁっ！

ティアリュートは内心の引きつりを押さえるのがやっとだ。

――詩歌なんて何ヶ月の作ってないから！

――下手なの詠んで追い出されるとか、ありえないから！

「これから、私がティアリュートを部屋まで案内しますが、皆は下がったままでいいですよ？」
不意に、姫が言った。
「これから私達、二人きりでお勉強です♪」

「ひ……姫様」
感極まったという顔で、ティアリュートは言った。
「わ、私……まだ心の準備が……」

「――――まて」
クローネンベルクが、はやる心にとまどうティアリュートを押しとどめた。
「とりあえず姫様？これにて我々は下がりますが」

「はい？」

「……ドアは開いたままにして下さいね？」

「？はい」

「少しでも変だと思ったら大声上げて下さいませ！」
クローネンベルクは、姫の両肩を抱いて力説した。
「そして、全力で逃げるのですよ！？」

「？？？」

「あと――――本当にマズいと思ったら、この剣で」

「大概失礼よ――――クローネンベルク」

ティアリュートは、ぽつりとそう呟くだけにとどめた。
後で絶対に仕返ししてやる。
その決意だけは、変わらないが……。

ティアリュートの教える科目は、貴族の子女としての基本的教養である詩歌。
そして魔界の歴史や文学と幅は広い。
歴史というものは、それだけをもって、正しく教えることは出来ない。
その時代の背景、価値観、人物、文学に文化――多方面に渡る無数の知識を博識として、布を織り上げるようにまとめて初めて語ることが出来るほど、深い。
歴史上の出来事の裏にあることを理解しないと、単に偏見に満ちた評論に終わる。
それを真に受けたままでは、学ぶ者は、語る者よりさらに狭量となる。
それが、歴史を語る上で最も危険なことだ。

クローネンベルクがティアリュートを強く推挙し、伯爵が認めたものこそ、この歴史を語ることが出来るほどの、ティアリュートの博識だ。

親の影響もあって、幼い頃から教養を身につけてきたティアリュートは、人格的にはアレだが、一度聞いたことは忘れないというどん欲な知識吸収力がある。
耳にした楽曲を、初めて手渡された楽器でプロ並みに演奏してのけるなんて神業じみた伝説ばかりが、その経歴を埋めている。

教えることがない。と、半ば教師から放棄されていた義務教育を終える頃には、すでに3つ目の博士論文に取りかかっていた覚えがある。

そんなティアリュート自身、何故、軍隊に入ったか、今となっては定かではない。

とにかく、その眠れる才知からあふれる英知は、下手な大学教授なぞ太刀打ち出来る代物ではない。

並ではないティアリュート。

その教えを受ける姫もまた、並ではなかった。

砂漠に水を撒いたような。

そんな表現がしっくり来るほど、カティア姫は、ティアリュートからの教えを我が者とする。

一を聞いて十を知るような聡明な姫相手に、ティアリュートもまた、教えに熱が入る。

「お茶のお時間でございます」

メイドがティーセットを持って入ってきて、初めて二人は時間が過ぎていることに気付いたほどだった。

「こんなに時間が過ぎていたなんて」

姫は嬉しそうにお茶を待つ。

「疲れませんでしたか？ティアリュート」

「いえ。それより」

ティアリュートは心配そうに答えた。

「姫こそ」

「私は大丈夫です。ツェーマン王国の歴史には興味があったので、たくさん授業を受けましたが、ティアリュート程、わかりやすくて

納得のいく授業をしてくれた人はいませんでした！」
「――恐縮ですが」
ティアリュートは、思い切って訊ねてみた。
「実際の話、私が雇われた理由は？」
「えっ？」
雇った理由。
そんなことは、大したことではないはずだが、何故かカティア姫の表情が困った。という顔になった。
「あ、あの……仰りづらければよいのですが」
「……あのですね？」
お茶の準備を終えたメイド達が一礼して部屋を出たのを確かめた姫は、そっと席を立つと、ティアリュートの横に立った。
そして、その耳元で、そっと囁いた。
「皆には――内証ですよ？」

耳にかかる姫の吐息に思わず絶頂しそうになるのを、必死に堪えるティアリュートに、姫は言った。

昔から、父親の決めた者達に囲まれて、友人と呼べる人もいない。だから――だから、せめて私個人の、私的な人が欲しい。
それが、家庭教師だ。
たくさんの人の中から、私はあなたを選んだけど――

「ティアリュートは、私のこんなわがままに、つきあって下さいますか？」

姫は、ティアリュートが何と返事をしてくれるのか。
それをものすごく気にしていた。
緊張するその顔は、それだけで、とても愛らしい。

そんな姫を前に、
ヤバいっ！
ティアリュートは、血が沸き上がりそうになっていた。
何？
何っ！？
今日の姫ったら、ヤバいっ！本当にヤバいっ！

心臓が爆発寸前にオーバーヒートしている。

全身、特に鼻から血が噴き出しそうだ。

でも、そんなことしたら姫から――

……よしっ。

ティアリュートは、根性というか、姫への下心で自らをねじ伏せた。
そして、言った。
「――どこまでも、おつきあいいたしますよ？姫」

同じ頃。
「あーっ。心配でたまんないわ」
うんざり。という顔のクローネンベルクがドアをノックした。
「――失礼いたします。ショーン様」
レースのカーテン越しに木漏れ日が差し込む室内。
アンティークな時計のコチコチという音だけが、奇妙に響く。
「お呼びとうかがい――ましたが」
室内に入ったクローネンベルクが目にしたのは、ソファーの上に

押し倒され、肌もあらわになった美女と、その上にまたがる小柄なドレス姿の少女の姿だった。
「来たのね？」
「来ましたが」
クローネンベルクは答えた。
「もうそれどころじゃないご様子ですね。いろいろと」
「――いいのよ」
美女が起きあがった。
紫色のウェーブがかった髪。
鋭い眼差し。
女性としてフェロモンが漂う肉感的なその美しさは、クローネンベルクとは別な意味で、大人の女であることを示している。
「カティア姫様の所に、家庭教師が来たと聞きましたの」
「――はい」
「なんじゃ？気になるのか？シュヴァルツ」
「いいえ」
少女に問いかけられた、“シュヴァルツ”と呼ばれた女性は答えた。
「向こうが何だろうと、私はあなた付きの家庭教師です。私達は私達でやればよい。ただそれだけのことです」
「――そうじゃな」
少女は、そういうとどこからか人形を取りだした。
「その女が調子づく前に呪い殺してやろう」
「――行動と言動を一致させて下さいますか？それより」
シュヴァルツの視線は、クローネンベルクに向いた。
「はい？」
「本当に、使い物になるのですか？その女」

「……ヒストレリアも読まれたのですか？」
「はい。一通りは」
「弱りましたね……姫様に私がお教えすることなど……何が」
「あら。そんなこと」
姫は笑みを浮かべて言った。
「私はまず、あなたを教えていただきたいですわ？」

押し倒したい！
ああっ！
押し倒してぇぇぇぇっっっ！！

ティアリュートが必死に自分を押さえる様子を、具合が悪いと勘違いしたのだろう。
姫が心配そうにティアリュートの顔をのぞき込んだ。
「大丈夫ですか？」
「――――姫」
ティアリュートは、姫の小さな唇に視線を釘付けにした。
キスしたい。
ふれ合いたい。
ちょっと首を伸ばせばふれ合うことが出来る。
首を伸ばせば――――クビになる。最悪、首が飛ぶけど、キスは出来る。

ど、どうすれば――――ん？

ティアリュートはその時――――姫の背後に亡霊を見た。
黒い髪の少女の亡霊が、カティア姫の真後ろにぼんやりと立っていた。

「――っ！！」
ティアリュートが悲鳴にならない悲鳴を上げたのは、むしろ無理もないことだった。
「て、ティアリュート？」
「ひ、姫様っ！？」
引き下がりつつ、ティアリュートはカティア姫を抱きしめて自らの背中に押しやった。
「お、お化……」
「？」
姫は、ティアリュートの視線の先に誰がいるのかを知った。
「あら？ショーン」
「ショーン？」
「妹ですの」
よく見れば人間だ。
相当な根暗なのか。表情が暗い上に、黒いドレスに黒い髪が、嫌でも見る者に陰鬱な気持ちをもたらす。
「……貴様が」
ぽつりと、ショーンは呟くように言った。
「……姉様の家庭教師か」

「ティアリュートと申しますが……」
華やかな印象のあるカティア姫と陰鬱な印象しかないショーン。
姉妹でこうも違うのか。と、ティアリュートは驚くしかない。
「うむ」
ショーンは何故か、手にした人形の首を絞めながら頷いた。
「新しい家庭教師だというから、どんな輩かと思ってきたのだが……」
「……」
「……」
「……」

「……」
「……あの？」
ティアリューートは恐る恐る訊ねた。
「最後まで言ってもらえませんか？いろいろ心配なので」
「父上が色々と騒ぐから、どれほどかと思えば、何じゃ。ただの人ではないか」
「ただの人では――――何かご不満ですか？」
「当然じゃろう」
ショーンは、カティア姫を抱きしめた。
「見ろ。この姉様の美しさ……地獄の悪鬼や魔物でさえ魅入られずにはおられまい。どうじゃ？貴様に姉様を救えるのか？」
「……えっ？」
「姉様。これはハズれじゃ。軍経験者で知識の深い者は他にも」
「ショーン！」
カティア姫はキッと、ショーンを睨み付けた。
「お父様は関係ない！ティアリューートは私が決めた人なの！だから、私の選んだ女（ひと）にひどいこと言わないで！」
「……姉様」
「……ごめんなさい。ひどいこと言って。でもね？」
「……いや」
ショーンは何故か、ティアリューートを指さした。
「ひどいことになっているのは――――あの女の方ではないか？」
「えっ？」
そこには、鼻血の海に沈んで、断末魔に身悶えるティアリューートの姿があった。

「し、失礼しました」
「姉様の部屋を汚い血で汚すわ」
ショーンは冷たく言った。

「何を考えておるのじゃ？」
「……はい」
「使い物になるのか？お前は」
「失礼ですが」
ゆらりと立ち上がったティアリュートは答えた。
「私は確かに、姫にはふさわしくないかもしれません。しかし、私は！それを補って埋めるほどのモノをもっています！それは――姫様への愛であり、真心であり、忠誠心ですっ！」
「……あのな？」
「このまっすぐな心をくみ取っていただけませんか！？」
「鼻にティッシュを詰め込んだまま、演説ぶたれても感動もせんわ」
「人は外見ではありませんっ！」
「ところでショーン」
二人の間に割って入った姫が訊ねた。
「シュヴァルツには何と言ってきたの？」
「……シュヴァルツ？」
「あ、ティアリュート。ショーンの家庭教師です」
「成る程？」
ティアリュートは思った。
カティア姫に自分という家庭教師がいるのなら、ショーンにもいて当たり前だと。
そのショーンは何故か、自分を不機嫌そうに睨み付けている。
「……貴様」
「はっ？」
「よもや、シュヴァルツを知らぬとは言うまいな」
「えっ？で、ですけど」
ゆらり。
妖気をまといながら、どこから出したのか不明な剣を抜きはなったショーンが殺気だった声で言った。
「その罪は死に値する……百八に引き裂いて餓鬼のエサにしてやろ

うか」
「何故っ！？」
引きまくるティアリュートの首をショーンが片手で掴んだ。
驚いたことに、その外見から想像できないほど、ショーンの力は恐ろしく強い。
ティアリュートの首がぐいぐいと締め付けられ、息が詰まる。
その喉めがけて剣が迫ってくる。
「シュヴァルツは……シュヴァルツはな？妾だけの家庭教師じゃ……だから、だから」
ショーンの顔は、今にも泣き出しそうだ。
「だから貴様なぞ！」
――殺される！
ティアリュートが本気で死を覚悟する中、ショーンは言い放った。
「貴様なぞ、シュヴァルツを知らんでいいのじゃ！」
「いいんなら離して下さいっ！」
「ショーンっ！やめて！やめてったら！」
何とかショーンを止めようとカティア姫が必死にショーンにとりすがる。
「姫様！？」
部屋に飛び込んできたのは、先程の妙齢の女性。
シュヴァルツだった。
「全く、どこに行かれたのかと思えば！」
彼女の前には、ショーンとカティア。そして見知らぬ女がいて、その女の上にショーンが馬乗りになって、カティアがショーンに抱きついている。
そして――
「も……もう、逝っちゃ……う……」
女のあえぎながらの声。
一人の女として、勘違いするなという方が無理な光景だった。
「……」

シュヴァルツは思わず、見なかったことにして部屋を出ようとした。
それは――少なくともティアリュートにはキツすぎた。
「ちょっ！？た、助けて下さい、謎の人っ！」

「……姫が大変な失礼を」
「妾は失礼なぞ」
「失礼です」
「もしかして」
絞められた喉をさすりながら、ティアリュートはたずねた。
「あなたがショーン姫の」
「はい？」
「……」
ティアリュートの視線は、大きく開かれたシュヴァルツの胸元に釘付けになった。
「……乳？」
「……私が男に見えますの？」
「……まぁ、よいわ」
ショーンが言った。
「姉様が後悔しないことを祈るだけじゃ。妾達はこれで下がるが、ティアリュートとやら、言うておくぞ？もし貴様が今後、姉様に出過ぎたマネをするようならば――」
「……」
「……」
ショーンの口元が動いているのはわかる。
だが、言葉があまりに小さすぎて、何を言ってるのかわからない。
「――ではな」
言い終えた言葉だけはしっかりと聞こえた。
「ちょっと待って下さい！」

たまらずにティアリュートは叫んだ。
「言うならハッキリ言って下さい！恐いんですよ！余計っ！」

「失礼しました」
ショーン達が去った後、カティア姫が心底申し訳ない。と言う顔で言った。
「少し変わった子ですけど、根はいい娘なんですよ？感情表現が大げさなだけで……でも」
「でも？」
「わ、私も……あれくらい、ティアリュートに……」
ほんのりと頬を赤く染めた姫が、自分の言葉の意味を考え、慌てていった。
「わ、忘れて下さいっ！」

無理ですっ！
ティアリュートは内心で叫んだ。
あーっ！もうっ！姫があんな勢いで私を攻めて来る？
よ、良すぎてどうしたらいいのか、もうわかんないっ！

「……シュヴァルツ」
廊下を移動しながら、ショーンは訊ねた。
「例の件、どうなっている？」
「……申し訳ありません」
「しくじったか」
「……内通者がいた模様です。事態は露見……状況は我が方に不利」
「父上も不甲斐ない」
「……」
「城はそう簡単には落ちまいが、人という石垣は、存外と脆いもの

よ」
「……私は」
「ああ。妾はシュヴァルツを信じておる。妾にはお主と姉様しかおらぬ」
「……ありがとうございます」
「あの変人、メースは使えるのじゃろう？」
「……軍務経験上はメース使いとして、実戦経験もございます」
「騎体の整備を万全にしておけ。メースに攻め込まれたら、この城とてそうそうはもたん」
「――――はい」
「して？」
ショーンは足を止めると、まっすぐにシュヴァルツの顔を見た。
「オンディーヌ家の犬が城に入り込んだというのは、本当か？」

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第二話（後書き）

もうボロボロな一年でした。死にたいです。宝くじの奇跡を願って、クスリ飲んで寝ます。おやすみなさい。

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第三話（前書き）

何書いているか、作者もわかんなくなりつつある番外編です。

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第三話

家庭教師といえど、休日はあるし、三色添い寝――――もとい、三食昼寝付きの生活だ。

その日、ティアリュートは休日を私室で過ごしていた。

何をしていたかといえば、カティア姫に関する手記を読み返し、一人でハァハァしていたのだ。

「ちょっと。変態」

ノックも無しにドアが開き、クローネンベルクが入ってきたのは、まさにそんな時だった。

「――――何してんのよ。ズボンずれてるわよ？」

「べ、別に！」

「……まぁいいわ。ちょっとお願いがあって」

「何？」

「――――ユースティア」

クローネンベルクの後ろに隠れるように立っていたのは、小柄な少女だった。

短くまとめられた黒髪に、大きな目。

恥ずかしそうに小さくうつむく姿。

どれをとっても特級の美少女だとはっきり断言できる。

「……あれ？」

ティアリュートは思わず訊ねた。

「あんた、いつ子供産んだの？」

「バカ。ユースティアは私達とほとんど同い年よ。２つ３つ年下なだけ。

でも、メイドとして城でのキャリアは相当長い。

それで、いろいろ事情があって、今日からこの部屋をあんたとユースティアで相部屋にしてほしいの」

「あ、愛部屋？」
「あんた……わざとらしい聞き間違えを」
「ご、ごめんなさいクローネンベルク。私にはもう、カティア姫という心に決めた人が」
「うるせぇ。黙って聞け」
「つーか」
グイッ
ティアリュートは、クローネンベルクを壁近くに連れて行って小声で言った。
「無理よ。私の性格知ってるんでしょ？」
「大丈夫よ。ユースティア、あんたに惚れているっぽいし」
「その目は節穴？」
「城でのしきたりとか、あんた全然知らないでしょ？だから、その辺を知ってもらうためにも、相部屋は絶好のチャンスだと思うのよ」
「そ……そんなの、クローネンベルクでもいいじゃない」
「だめよ。私は本来、オーキ様。つまり、カティア姫の母上付きなのよ？」
「何よっ！」
ティアリュートは怒鳴った。
「他の女の所に行くつもりっ！？」
「……他に表現がないの？」
「ひ……ひどい……あ、あの日、私を誘ったのはクローネンベルクじゃない」
泣き出したティアリュートが、そっとクローネンベルクに縋り付いた。
「ちゃんと……責任とってよ！」

「ふ、二人とも！」
ユースティアが泣きながら駆けだした。
「不潔ですっ！」

「「ええっ！？」」

「そ、そんなに」

ボロボロ泣き出したユースティアは、声を詰まらせながら言った。

「そんなにご迷惑ならいいです……わ、私、そんなにご迷惑になるなんて……グスッ……考えも……グスッ」

――マズい。

ティアリュートが焦ったのも無理はない。

メイド、しかもこんな小さい子を泣かせたと城の中で噂になれば、立場が危うい。

「待ってください。非礼はお詫びしますが、わかってください」

ティアリュートは、ゆっくりとユースティアに言った。

「私は、あなたの実生活を壊すかもしれません。それが恐いのです」

「……別に」

ユースティアは答えた。

「私は、それでもいいんです」

「――はっ？」

「ティアリュート様に壊されるなら……全てを差し上げても……私……」

「よかったわね。ティアリュート……ほら。どん引きしないで。私、これから用事があるから、それじゃね」

「え？」
気付いた時には、クローネンベルクは部屋から出ていく所だった。
「――こ、この薄情者っ！」

「……あ、あの」
「ああ。ごめんなさい」
ティアリュートは顔をしかめながら答えた。
「いろいろハイテンションで進んじゃって、展開についていけないの」
「……はぁ？」
「それで？」
「……あの、ティアリュート様は、クローネンベルクさんとは」
「ああ。母同士が友人で、幼なじみというか……姉……いや、あの口うるささは母親以上というか……どうしたの？」
「……いえ」
何故か、ユースティアがほっとした顔になっていた。
「その程度の関係だってわかったので、安心しているのです」
「――は？」

「助かりましたわ。クローネンベルク様」
通路で一緒になったメイド長が、ほっとした顔で言った。
「あの子、あの通り見た目はいいんですが、とにかく物怖じしやすくて、裏の仕事しか回せない分、他のメイド達とも関係が」
「ヒキコモリ同士、仲良くやってもらうしかないでしょうね」
「軍隊を経験すると、引きこもるようになるのでしょうか？」
「天才肌と軍隊経験……あり得ない話ね」
「そう思いたいです。私の弟も士官学校に入ると言い張ってまして……ああなったら大変です」

「……ですわね。ところで」
「はい？」
「オンディーヌ家との戦況がかんばしくないと聞きましたが？」

オンディーヌ家は元々はヴァルホイザー家と流れを同じくしている。

2千年前。ヴァルホイザー家の当時の当主が急死。

家督相続について明言していなかったことが災いして、兄弟同士の争いとなった。

魔帝の裁定により、長兄が相続権を確保したが、その裁定に不満を持った弟が、オンディーヌ家を立ち上げた。

そして、シュロスベルク公国太守位の正統性を主張し、兄弟で互い大公を名乗りあう時代が始まった。

以降、政治と戦場において数代に渡り、両家は争いを続けたが、公国領を実質的に真っ二つにする大河ヴォール河を境に、オンディーヌ家の治める西シュロスベルク公国と、ヴァルホイザー家の治める東シュロスベルク公国として分断、それぞれに独立国として魔界で承認されている現在においては、相続権そのものの意味が問われる事態になっている。

にも関わらず、今になってオンディーヌ家が動き出したのは、ヴァルホイザー家当主、シュルツブルクが老境に至ったこと。

さらに、その後継者がまだ幼いカティア姫という、大公家の後継問題があった。

カティアが死ねば、東シュルツブルク公国大公家の正統な血筋は絶える。

彼女に子供が生まれない限り、今がヴァルホイザー家にとって一番危うい時期だ。

妾の子であるショーンでは、世論がどう反応するか分からない。

なら、今の現状を叩けばヴァルホイザー家はどうなる？

ヴァルホイザー家当主率いる軍勢が、千年以上にわたって先代達が超えることのなかったヴォール河を超えたのは、まさにそういう思惑があってのことだった。

ヴァルホイザー家率いる軍勢は、その奇襲攻撃により、わずか数日で東シュルツブルク公国の領土の半分を占領。

東シュルツブルク公国軍に壊滅的な打撃を与えた。

ただし、超えた方も無事では済まなかった。

千年以上に渡る共存関係を破壊し、武力侵攻する国を認めるほど、魔界はイかれていない。

西シュルツブルク公国に対しては、即座に近隣諸国が国境を封鎖。

両国間の安定に尽力してきたメンツを丸つぶれにされた魔界帝室、こと、魔帝グロリアの激怒を買い、魔族軍正規軍が東シュルツブルク公国に派遣される騒ぎとなっている。

オンディーヌ家は魔界帝室の敵のレッテルまで貼られたことで、少しは大人しくなるかといえば、全くそんなことはない。

正規軍の東シュルツブルク公国に対する派遣は、むしろ周辺のパワーバランスを崩す危険な行為に他ならないとして、即座に撤退を要求するという強硬な姿勢を打ち出している。

そして、むしろ逆に、東シュルツブルク公国軍残党と、正規軍による攻撃を引き出すために挑発的な攻撃を繰り返している。

昨晩の攻撃は、その中でもかなり大規模だったとクローネンベルクは聞いている。

「……ええ」

メイド長の表情が曇った。

「民間人の避難キャンプに砲撃ですって。非武装区画のど真ん中に撃ち込むなんて――占領した後のことを考えているのかしら」
「……」
クローネンベルクはため息と共に首を横に振った。
「西の兵士単独で町中に出たら、死体になるしかないわね」
「千年以上も、パスポートさえなしに移動できる環境だったんですよ？それを！」
「今回破壊された関係の修復には、何千年かかるのかしらね」
「……」
「とにかく」
クローネンベルクは、ポンッとメイド長の太股に軽く触れた。
エプロンドレスの中に隠されたそれが、固い感触となって伝わってくる。
「“いざ”という時のための覚悟だけはしておいて」
「……全ては御家の為に」

そんな頃――

実は城の中で絶体絶命のピンチに立っている者達が二人いた。

ティアリュートと、意外なことに、シュヴァルツだった。

「――本当ですか？」
「本当じゃ」
「……」
「本当に、私の書いたアレを、カティア姫様にお渡しした――と？」
「ああ。シュヴァルツは暇つぶしと副業を兼ねて片手間に小説まで書く才媛じゃと、あの馬鹿者に教えてやるまたとない機会じゃろう

？」
「……うっ」
「なかなか、読めたぞ？」
「あの……姫様？」
「なんじゃ？」
「“１８禁”って意味、わかりました？」
「知らん――アダルト・オンリーというは、大人専門という意味じゃろう？どうして子供が読んだらダメなんじゃ？」
「……そ、それは……さぁ？」

ま……まずい。
シュヴァルツは本気で焦った。
ショーン姫様に、原稿を読まれたのが運の尽きだったのだろうか？
あれはあくまで、私の趣味であって、趣味を同じくする者達の間で楽しむためのものだ。
小説といっても、文学ではない……と思う。
自分が趣味で書いたものを、立派な文学だと買いかぶるほど、私が愚かではないだけかもしれないが、とにかく、姫様は、“あれ”を何か、立派な文学作品のように勘違いされていらっしゃる。
それはつまり、自分を買いかぶっていることに他ならないわけで……。

……ああ、どうしよう。
あんな趣味丸出しの小説を他の人、しかもカティア姫様に読まれるなんて……。
だめよ。
取り乱しては。
今、私はここに家庭教師としているんだから……って？
……あれ？

「……姫様？」

「何じゃ？」
「つまり……姫様も、あれを読まれた、ということですか？」
「ダメか？」
「……いえ。あの……まだ、お早いかな、と思いまして……それで」
シュヴァルツはまじまじとショーンを見つめながら訊ねた。
「それで……読んで、意味がわかったのですか？」
「無論……と言いたいが」
ショーンは少しだけ残念そうに言うと、メモを取りだした。
「残念じゃが、解せぬ部分がいくつもあった。じゃから、作者であるお主に教えてほしいと思っての――まず」
「……」
「主に夜の場面じゃが」
「姫様――それは拷問ですか？」

「“パラダイスな銀河”……ですか？」
「そうです。それでわからないのが」
カティア姫は、本を開いたティアリュートの膝の上に乗らんばかりに近づいて言った。
どうやら、自分がどれ程はしたないことをしているか。カティア姫は自覚がないらしい。
本に熱中すると、周りが見えなくなるタイプだな。と、ティアリュートは一瞬だけそう思ったが、カティアの髪の香りを全力で肺に送り込む方が忙しくて、そんなことは、すぐにどうでもよくなった。
「この夜の場面で、リキとイアソンが―（自主規制）―して、―（都条例により削除）―するとは、一体？」
「――は？」
「ですから、―（くたばれ石原！）―して、―（都議会横暴！）―すると」
「あの……姫様？」

「何です？」
「それは……わざとですか？」
「どうしてですの？」
まるですがりつくように、カティア姫がティアリュートにもたれかかりながら訊ねた。
甘い香りが、どんな麻薬よりもティアリュートの脳をとろけさせる。
「ティアリュートは、私の家庭教師でしょう？でしたら、今、教えていただけませんか？」
「えっ……えっ……と」
「ここが……どうなっているのか……ティアリュートのお口で」
「カティア姫……私……ヒットポイントが限りなくゼロなんですけど」
「はい？」

「何じゃ！」
同じ頃、ショーンがついにかんしゃく玉を爆発させていた。
「作者のクセに、説明できぬというのか！？ここの―（拡大解釈）―とは！？」
――困ったわ。
経験からシュヴァルツにはわかっている。
こうなったショーンはもう言うことを聞かない。
頑固さは無き母親譲りだ。
納得するまで引き下がるということをしない。
しかも、ショーンはシュヴァルツを完璧だと信じている。
安易な答えは、ショーンを失望させるだけだ。
何とか、大人らしく解決しなくては――
「じゃあ」
そっ。

シュヴァルツは、ショーンを抱き寄せると、そっとソファーに押し倒した。
「経験で――学んでみますか？」
「い……いや」
「いや……で、ございますか？」
「も……もう、わかったから」
「それはよかったです♪」

……っていうか。
ティアリューは、ページをめくるたびに唖然とするしかなかった。
相手をペットにするわ喰いまくるわ……何か、この辺は純愛装ってるけど、どう考えても、ここは強姦じゃない……うわっ……主人公やりたい放題？

どうやら、読む限りではアダルト系の恋愛小説らしい。
ただ、何よりティアリューを混乱させているのは、その恋愛が男女間のそれではなく、男性同士のそれだということだ。
卑猥を通り過ぎて、どう評価していいのかさえわからない。

「ティアリュート？」
しびれをきらせたように、カティア姫に迫られたティアリューは、やむを得ず答えた。
「申し訳ございません――これは、私には説明しかねる内容です」
「そうなのですか？」
「はい。私の解釈が正しいとは限りません。やはり、姫様がご自身なりの解釈を持たれてから読まれるのが一番かと」
「そう……ですか、いずれにせよ、私にはまだ無理だということで

すね？」
　カティア姫はがっかりした様子で言った。
「私が……経験を積めば、わかるのでしょうか」
「出来れば、一生積まないで欲しいのですが……」
「それでは、この小説の意味が分かりません」
「……むぅ」
「そういえば、ティアリュート？以前、流行の小説はあまり読まないと言っていましたね」
「え？は、はい」
「では、どんな小説がお好きなのですか？」
「……そ、それは」
　ティアリュートは、興味津々のカティア姫の瞳を見つめながら、ふと思った。
　考えてみたら、そんなに熱中したという小説に覚えはない。
　読むのがつまらないから、ノートに徒然と書き物をして一日を過ごしていたんだ。
　別に……自分の人生が、特別だなんて思わない。
　……でも。

　ティアリュートは答えた。

「私がひねくれているだけかもしれませんが……
どんなに素敵な小説でも、所詮それは小説。
只の虚構です。
ですから、私にとっては、この身に起きる様々な出来事の方が、余程、奇跡的で、魅力的に感じるのです」

　そうだ。
　小説に熱中できない私が、あなたという特別な存在に出会えたことは、私にとって、何よりも素晴らしい奇跡であって、そして魅力

なんだ。

私は、小説なんかより、あなたが――

ティアリュートは、そんな想いをこめて、カティア姫に告げたのだが……

「ティアリュートって」

肝心のカティア姫は、笑って言った。

「面白い発想されるのですね？」

……面白いで片づけられちゃったよ。

……私の想い。

ティアリュートは、心の中で号泣するしかなかった。

同じ頃。

読んじゃった。

……これでパニックになっている人物が、もう一人いた。

ユースティアだ。

別に出来心だったわけではない。

悪いのは、机の上にノートを広げたままにしておいたティアリュートだ。

窓を開けたら、風でノートが床に落ちた。

ユースティアは、それを机に戻そうとして、読んでしまった。

……言い訳としては、そんな所だ。

「でも……どうしよう」

ユースティアは、困惑しながら室内をうろうろと歩き回る。

「これ……日記だなんて知らなくて」
「知らなくて読んじゃった？」
「う……うん」
「彼女のことが知れてよかったわね」
「べ……別に、ヘンな下心は」
……えっ？
自分は今、誰と話をしていた？
びっくりして周りを見ると、メイド仲間のプラチナとオパールが意地悪そうにこっちを見ていた。
「でも、知らなかったとはいえ、日記を勝手に読むのはまずいと思うよ？」
「うん……これから一緒に住むんだし」
「心配になって来てみたんだよ。そしたらまぁ」
「わ、悪いことしたと思ってます……」
「思うだけじゃだめじゃない？」
「……うっ」
「ユースティアは、これから、ティアリュートさんに何要求されても逆らえないわねぇ」
「要……求？」
――見たの？私の秘密を
――なら、その代わり、あなたの秘密を見せてくださいな。
――そうしたら……許してあげます。

「……ちょっと？ユースティア？」
「は……はい？」
「何、顔真っ赤にしているのよ」
「い、いえ……」
「ん？」
「私の身体でも満足していただけるのかなっ……て。でも、私、こんな幼児体型だし」
「どっちの想像してたのよ……あら？」
「失礼」
室内に入ってきたのは、クローネンベルクだった。
「何だか、変な胸騒ぎがしてね？様子を見に……」
クローネンベルクの顔に浮かんでいた微笑は、泣き顔のユースティアを見た途端に凍り付いた。
「クローネンベルクさん……わ、私……私っ」
「遅かった……のね」
「……あの」
「つまり……事後ってことなのね……ティアリュートは」
クローネンベルクの顔に表情はない。
「カティア姫様の所へ」
オパールが答えた。
「その間に訊ねてみたら、こんなことに」
「……二人とも、席を外して」
「へっ？」
「いいからっ！」

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第三話（後書き）

もうぐったぐだです。
書き始めたことをすでに後悔してます。

意味の無さでは作者の人生並みです。

もう死にたい。

うつ病ってこんなにつらいんですね。
突発的に死にたくなって、のたうち回りながら書きました。
アタマがおかしくなりそうです。
自殺したくてたまりません。
お正月あけたら、もっと強いクスリもらいに行きます。
たしか、お医者様も、次でダメならクスリ強くするって言っていたし。
それに期待ですって……次の予約、１０日過ぎじゃん！
精神が持たない！
もうイヤ！
宝くじ当たってプリーズ！
会社辞めたいよぉっ！

というわけで、まだ続きます。
あと2回くらいかな？
感想とかいただけると励みになりますので、ネタ同様によろしくです。

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第四話（前書き）

募集！
作者のネタ切れともいいますが、以下の設定を募集します。
感想とか使って応募してください。
いただけると本当にうれしいので、是非、お願いします。

募集その１　新型メース、メサイアの設定。
「●×国軍のメサイア」とか「私の考えたキャラの専用メサイア（メース）」とか、そんなのを募集します。
「このメースには、こんな武器があります」とかも大歓迎です。

募集その２　新キャラ
「●●国軍の騎士」とか、「魔族の××」とか……。細かい一緒に設定とかいただけると泣けるほど嬉しいです。

募集その３
フォイルナー達の新型騎の名前。
本気でネタ切れです。ドイツ語でいいのがあったら、是非……助けて。ドイツ語に詳しい御方。

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第四話

「……というわけで」
授業に熱中していたティアリュートは、時間が経っているのをすっかり失念していた。
晩餐の時間まであと少し。
お召し替えだの、姫にも時間が必要だろう。
ティアリュートは、椅子に座るカティア姫に、そっと声をかけた。
「姫？そろそろ」
「……」
「……姫？」
こくりこくりと始まったカティア姫の頭が、ティアリュートの肩に触れた。
つまり――眠っているのだ。
「……こ」
ティアリュートの心臓は高鳴った。
というか、心臓の鼓動そのものがゴングになった。
「ここに来て――更に、とは？……ふふっ。こんな熱い戦いは久しぶりよ」

「シュヴァルツ！今から本を取り返しに行こう！」
「だめです。もう晩餐の時間まで間がありません」
「大丈夫じゃ！昨日の騒ぎがある。しばらくは晩餐は取りやめ。我らも軍用食で我慢じゃ」
「……まぁ」
「難民に死者まで出したんじゃ、晩餐で贅沢なものを食べたなど、民に合わせる顔があるまい」

「――ごりっぱです」
「うむ。妾はカンパンとバターだけでも、一晩くらい我慢が出来る――どうじゃ？」
「本当に、姫様は聡明な御方ですよ」
「というわけで、行くぞ！」
「ですから、もう遅いですし。送っておいて取り返すというのもどうか……と」
「何を言うか。夜の往来は皆もやっておるんじゃろう!?シュヴァルツの小説にも書いてあった――確か、“夜ばい”とか言って！」
「なりませんっ！」

「と、とりあえず」
椅子の上で眠らせる訳にもいかす、ティアリュートはそっとカティア姫を抱きかかえ、ベッドへと運んだ。
折れそうな程、華奢な身体の、マシュマロよりもやわらかく、かつ、まだ固いという、青い果実特有の感触が、ティアリュートの理性をかき乱す。

細いうなじ
まだ幼い胸。
絹ごしの太股の感触。

――殺されてもいい。

ティアリュートは本気で思った。

――姫を手に入れるなら、殺されてもいい。

ベッドの上に、そっと姫を横たえたティアリュートは、じっとその

寝顔を見つめていた。

自分が、どれほどこの姫を愛しているのか。
寝顔を見るたびに強く感じる。
同性なんて関係ない。
問題なのは、自分が姫を愛していることだけ。
ただ……。
無垢な華を傷つける。
そのことを、
それだけを、
ティアリュートは恐れた。
目を開けた途端、あらぬことをしている自分を見た姫が、どう思うだろうか？
それを考えるだけで――――恐い。

「――――ん」

無垢な寝言が、そんな邪念を吹き飛ばしてくれたのは、むしろ幸いだった。
考えてみればいい。
カティア姫は、自分を信じてくださっている。
だから、安心して、このように寝顔まで見せてくださったのだ。
それを、自分は欲望で裏切ろうとした。

「……恥ずかしい」

そうだ。
何が恐い？
姫を傷つける？
違う。

姫を裏切るのが恐いんだ。

――なら、せめて。

ティアリュートは、そっと布団をカティア姫にかけてやった。

そして、自分に弁護した。

――寝顔を見てハァハァするくらいは、許されるだろう。

……わけねぇだろ。

「……ん？」

顔を間近によせて寝顔を楽しもうとしたティアリュートの背後。

ドアの方から男の声がしたのは、その時だった。

「ドアが開いているが――どうした？」

振り向くと、ドアの向こうから当主が顔をのぞかせていた。

「あ……いえ」

「ん？めずらしいこともあるものじゃし、不用心じゃの」

「……実は」

ティアリュートは、事務的に経緯を話した。

「――なんじゃ、カティアが授業中に眠ってしまった……と」

「はい」

「ふむ……近頃は、不穏な騒ぎが多く、姫の心配しておったからな」

「失礼ですが、それは西シュルツブルク公国の？」

「ああ。姫も、民の役に立ちたいと、従軍看護婦に志願しておって……さすがにたった一人の跡取り。それは危険じゃ。民をまとめ、立派な君主となるためには、今は勉学にいそしめと……それでお主をやとったのじゃが……」

「……姫」

「やはり、不安な思いで夜もロクに眠れずにいて……」

「……お疲れなのですね」

「それだけでもなかろう」
「というと？」
「カティアは人前で眠ったことなど、今までにないはずじゃ。それ程に気を許せる相手が、今、側におるというまたとない証拠のようなもの。なんだかんだ言って、ティアリュート。お主を招いたのは、正解だったようじゃ」
「ありがとうございます。御義父様」
「うむ……すまん。ティアリュート。このまま、カティアと眠ってくれんか？」
「い、いいんですか！？」
「……何か、勘違いしてはおらんか？」
「いえっ！そんなことは」
社交的な愛想を浮かべつつ、ティアリュートは内心で思った。
っーか、あんた、いつまでいるんだ。
二人の至福の拷問タイムがムダになんだろうが、とっとと……やだ。私、御義父様相手に何て事……。

「――――怒らないから」
クローネンベルクは怒りながら言った。
「あのバカと何があったか言いなさい」
「違いますっ！」
ユースティアは半べそをかきながらいった。
「ティアリュート様は悪くありませんっ！わ、わたしが……悪くて……あの」
「……それでどうして泣いて」
「……クローネンベルクさん」
ユースティアは、何故か頬を赤らめながら言った。
「ティアリュート様って――――すごいんですね」

「……」
ゆらり。
殺気を纏いながら、クローネンベルクはたちあがるなり、愛用のレイピアを引き抜いた。
「――失礼」
「は？」
「ちょっと、ティアリュートを殺ってくる」
「えっ！？や、やるって何をですかっ！？」

ではな？

そう言い残して部屋を出た当主を見送ったティアリュートは、椅子に座ってただぼんやりとカティア姫の寝顔を見守り続ける。
その顔は、すっかりとものののみごとに、イッていた。
どんなヤバいクスリをキめた所で、こうならないだろう位、顔はゆるみ、ヨダレが垂れ流しになっている。

布団から出た手が少し寒いかな？

そう思ったティアリュートが、手を伸ばした。
「――夜ばいか？」
その声が、新しい来訪者を告げた。

シュヴァルツに抱っこされたショーンだった。
「……こう見ると、親子ですね」
ティアリュートのつぶやきが聞こえなかったのか、床に降りたショーンが、びっくりする程、機敏な動きでティアリュートに襲いかかってきた。

「貴様ぁ……姉様になにをしようと……っ！」
グイグイとまたしてもショーンの手がティアリュートの首を締め上げる。
「してませんっ！まだ何もしてませんって！っていうか、あなた方こそ何を？」
「……決まっておろう」
ショーンは自信満々に答えた。
「よばいじゃ」
「だから違います――いい加減、しつこいですよ？姫」
シュヴァルツが即座にフォローしたが、
「夜這いって……そんな……四人でなんて！
二人でもまだだというのに？やだ、なにその新展開」
「……あなたも受け入れないでください。ティアリュートさん」

――とりあえず、ティアリュート様を探しに行こう。
二人の部屋を出たプラチナとオパールは、カティア姫の部屋の方へと歩いていた。
「ねぇ、プラチナぁ……ティアリュート様って」
「下手な詮索はするもんじゃないよ？」
「そうだよね。メイドはそんなことじゃだめだよね」
「そうそう」
そんなことを言い合う二人の耳に、
そんな……四人でなんて！
ティアリュートの、そんな声だけははっきりと聞こえた。

「……プラチナ」
「だめよ……詮索すべきよ」

「誤解なさらないでください」
ティアリューからショーンを引きはがしながら、シュヴァルツは言った。
「姫がカティア姫に贈ったという本をお返しいただきたくて」
「……ああ」
「……うかつだった」
ショーンが言った。
「本というのは、作者の心の内、普段秘めていることを元に書くということだろう？」
「は……はぃ」
「即ちっ！」
ショーンは力説した。
「貴様はシュヴァルツの秘部を目にしたということじゃ！妾はそれが許せんっ！それだけは許せんのじゃっ！」
ズリッ！
音を立てて取り出されたのは、絵本で鬼が持っていそうなトゲのついた金棒だった。
「――という訳で、今から貴様を殴って記憶を消し去る！」
「何でですかっ！」

――まずい。
ティアリューは考えた。
相手は姫。
力業で勝てない相手ではないが、かといって、ケガでもさせれば、それだけで色々と終わる。
つまり、抵抗して傷つくのは自分。

どうやって、相手を傷つけずに丸く収めるか？
――そうだ。
ティアリュートは思った。
相手が気にしているのは、小説について。
だけど、自分は？

「ま、待ってくださいっ！」
ティアリュートは叫んだ。
「確かに小説は読みました。しかし――心配には及びません。なぜなら」

「？」

「私、中身をほとんど覚えていませんっ！」

その途端、ショーンから金棒を奪い取ったのは、シュヴァルツだった。

「どうしろというんですか！」
ティアリュートの叫びに冷たく、シュヴァルツは答えた。
「それは何ですか」
その目は据わっているし、顔に表情はない。
下手な尋問より厳しい。
「私の作品は、記憶に残らない程度の代物だ――と？」
「……いえ」
ティアリュートは答えた。
「客観的には突出した作品であると思います。しかし、私は興味を持つことが出来なかった――それだけのことです」

カチンッ

私は興味を持つことが出来なかった。

その一言が、シュヴァルツの琴線に触れたのは確かだった。

――何よ、その屁理屈。

私の作品なんて――

私なんて、眼中にないということなの？

「……聞いてよろしいかしら？私の小説、どこが貴女に合わなかったの？」

「……ふうっ」

不意に、ティアリュートが視線を外すと、わざとらしい程のため息をついた。

「なっ！」

――何よ。私といるのがそんなに不満なの！？

「い、言いたいことがあるなら、はっきり言えばいいじゃないですか！」

「……別に」

ティアリュートがもし、はっきり言うことが出来れば言う事なんて一つだ。

――とっとと失せろ！

――お前達が邪魔で、カティア姫相手にニヤニヤ出来ねぇじゃねぇか！

本当にそう思う。

ショーン姫をつれてさっさとこの場を立ち去ってくれればいいの

に、何で一々絡んでくるんだ。
……っていうか。

「男と男の恋愛小説に、どうコメントしろと？」
「何を言うんですか！」
シュヴァルツは本気で怒鳴った。
「素敵な殿方がいれば、別のさらに素敵な殿方といちゃついて当然っ！あなたも女ならわかるでしょう！？」
「全然」
ティアリュートはきっぱりと答えた。
そして思った。
――――カティア姫の可愛さ以外に、女がわかることなんてあるものか。
「あなた、それでも女ですか！」
「生理はありますよ？」
「――――っ！」
ティアリュートは、不意に、大きく開かれたシュヴァルツの胸元に視線を落とした。
ホント……改めてこう見ると、ホントにデッカイわね。
こんだけデッカイと、逆に固そうなんだけど……。
実際、どうなんだろう？
「あっ！？」
答えるより先に、手が動いていた。
胸を直にわしづかみにされたシュヴァルツから、甘い声が漏れる。
途端――――

ガンッ！

シュヴァルツが持つ金棒がティアリュートに炸裂した。

「な、何考えてるんですか！何考えてるんですか！」

「だ、だって！」

ティアリュートは答えた。

「そこに乳があったからっ！」

同性の乳をわしづかみにするなんて、当事者同士でも問題だろう。

それを、誤解気味の第三者が見ればどうなるか――

こうなった。

ティアリュートと話をつけるために、カティア姫の部屋に向かっていたのは、クローネンベルクだ。

暗い部屋。

そこには、ティアリュートとカティア姫がいるはずだ。

暗い部屋。

それだけで、クローネンベルクの不安感は言い様もなく強くなる。

クローネンベルクは、足音を忍ばせて、ドアの中から室内をのぞいた。

そして――そこで見たのは、同性と乳をもみ合うティアリュートの姿だった。

「もうダメッ！」

いろいろと耐えられずクローネンベルクは駆けだした。

「私にはもう、どうにもならないっ！」

クローネンベルクの嘆きを余所に、ティアリュートとシュヴァル

ツが言い合いになっていた。
「姫様付きの家庭教師だというのに、こんな下品だと思いませんでした」

下品。
その言葉にカチンと来たティアリュートが言い返した。
「そんな品性のないカッコしている輩に言われたくないですわ？」
「その格好相手にあんなことして――欲求不満なのですか？」
「……多分」
「それ……認めるんですかっていうか！」
「「そもそもっ！」」

お互いを指さして大声を上げた途端、

「うーん」
愛らしい寝顔が室内に響いた。
見れば、いつの間にかショーン姫まで眠っていた。

カティア姫とショーン姫。
その無邪気な寝顔に、すっかり毒気を抜かれた二人は、わざとらしい程の咳払いをした。
「ま……まぁ」
ティアリュートはバツが悪そうに言った。
「いきなり掴んだのは悪かった……かなと」
「私も言いすぎまして……でも」
口火を開いたのはシュヴァルツだった。
「でも……少し、貴女と話せて嬉しかったです。私のことなんて、眼中に入ってないと思ってましたから」
「ええ。その通りですけど――って、何で泣きそうになるんですか！」

「知りませんっ！」

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第四話（後書き）

……宝くじ、外れました。

いろいろ年の瀬に不幸もありましたけど、地道に転職の道を探します。

みなさん今年こそ、いい年にしましょう！

というわけで、新年始めの感想とかいただければ嬉しいです。よろしくお願いします。

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第五話

結局、ごったごたの挙げ句、ティアリュートが部屋に戻れた頃には、夜が明けていた。
「……眠い」
当主命令で添い寝をする。
ティアリュートはそう主張したが、まさかショーンをベッドから追い出すことも出来ず、かといって、シュヴァルツと共に眠るなんて冗談じゃない状況を経て、結局は一睡も出来なかったわけだ。
目をこすり、生あくびばかり繰り返しながら部屋のドアを開く。
すると、ドアのすぐ向こうに立っていたのは、ユースティアだった。
「――――おかえりなさい」
何故か、思い詰めたような顔をしたユースティアが言った。
「遅かったのですね」
「……うん」
少し、背筋がゾクッとしたティアリュートは、その脇を通り抜け、ベッドに横たわった。
「夜中、ずっと取り込んでいて」
「――――まさか、オンディーヌ家がまた？」
「ううん？カティア姫のところにいたんだけど……」
「カティア姫の御身に何か？」
家に仕えるメイドとして、ユースティアが心配そうにティアリュートの言葉を待つ。
「その……思っていたより……」
シュヴァルツが。
そう、ティアリュートは言ったつもりだったが、言葉にならず、結局、ユースティアにはこう聞こえた。
「その……思っていたより……激しくて」

「死ねばいいのにっ！」
わーんっ！
ユースティアが泣きながら部屋から飛び出したのは、その直後だった。
「――――へっ？」

その日――――
ぐっすり眠っていたティアリュートは知らなかったが、オンディーヌ家のメース部隊がヴォール河を渡河。
対するヴァルホイザー家と魔界正規軍は、この事態を全く把握していなかった。
オンディーヌ家に対する世論の風当たりの強さに焦りを感じたオンディーヌ家当主が、短期間でヴァルホイザー家の治める東シュロスベルク公国首都を制圧し、併合を既成事実化しようと画策して動き出したのだ。
この日、ヴァルホイザー家当主と正規軍より派遣されて来た停戦監視部隊の司令官が極秘裏に会談を行ったが、その内容が「オンディーヌ家に対してヴォール河以西への撤退を要求する」であって、正規軍より部隊の増強派遣ではなかったことが、その事を物語っている。
とはいえ――――この会談が非公式にしてオンディーヌ家が把握していなかったことがまた、間接的には、最悪の事態の引き金となったことは、間違いない。

「――――あの」
ティアリュートが目を覚ましたのは、１０時近かった。
体調不良で欠勤としてくれたのは、ユースティアだと知ったティ

アリュートは素直に礼を言った。
対するユースティアは、何か言いたげにティアリュートの前でもじもじしている。
「どうしたの？」
「……実は」
ユースティアはただ、謝りたかったのだ。
――ごめんなさい。あなたの日記を読んでしまいました。
悪気はなかった。
単なる事故といえば事故だ。
謝罪を口にすれば済むようなことだが、元来口べたなユースティアは、緊張の余り舌をもつれさせてしまった。
つまり――事故が重なったようなものだ。
それで結局、ティアリュートの耳に届いたユースティアの謝罪は、謝罪になっていなかった。
それは、こう聞こえたのだ。
「……す……き……」
言った本人のユースティア。
聞いたティアリュート。
共に固まったのは言うまでもない。
「え？す……好き？」
驚くティアリュートを前に、パニックになったユースティアは頭を抱えた。

「ち、違！違わなくないけど！違うんですっ！」
「？？？？」
何とか説明したい。
ただ、自分は謝りたいだけなんだ。
それなのに――――どうしていつも、こう上手くいかないんだろう。
どうして――――どうして、私はいつも……。

ポロッ

ユースティアの瞳から熱い涙がこぼれ落ちた。
自分があまりに惨めで、そして、それが悔しくて、悲しくて涙が止まらない。

「え？えええっ！？」
ティアリュートが驚いているが、どんな顔をしているのかさえわからない。
ユースティアは、その場にしゃがみ込むと、顔を覆って泣き始めた。

もうイヤだ！
こんな自分はイヤだ！

心でそう叫ぶユースティアは、不意に自分が抱きしめられたことに気付いた。

そう。

ティアリュートに抱きしめられたのだ。

「ティアリュート……様？」

下心はない。
幼い頃、泣き虫だった自分。
何かと泣く度に、クローネンベルクはこうやって抱きしめてくれた。
泣きやむまで、ずっと、こうやって抱きしめてくれた。

……はぁっ。

思わずため息が出た。

あの優しかったクローネンベルクが、どうしてあんな凶暴になったのだろう。

同じ頃、クローネンベルクがティアリュートをぶん殴りたい衝動に駆られていたのとは関係ない――と思いたい。

トクンッ
トクンッ

抱きしめられたユースティアの耳に聞こえる鼓動。
それは、ティアリュートの心臓の音。
単調なはずのその音は、ユースティアを心の底から安心させてくれる。
「ティアリュート……様」
それまでの悲しみの涙は止まり、代わりに流れたのは――安堵の涙だった。
ユースティアは、ティアリュートに縋り付くと、その胸に顔を埋めた。

その頃、
「これは何の騒ぎですか？」
城の最も内側の守りである本丸付近に立つのは、数体の巨人。
周りを見回せば、他にも何騎もの姿が見える。
そのサイズ故に、巨大な城壁がミニチュアに見えてくるから不思議だ。
そんな光景を、城壁の上から眺めている者達がいた。
「――あら、どうしたの？」
「メースなんて、どうしたのでしょうか？今回の騒ぎがあってから、メースはハンガーに格納されていたはずですけど」
そう。
下手にオンディーヌ家を刺激したくないとする当主の判断で、メースは表に出ることはなかったはずだ。
それが、今は城に
「私もわかんないわ。とにかく、本丸付近の警護が厳しくなって私でも思うように近づけない」
「ええ――カティア姫様付きの私達でさえ、入るなって言われて、みんな、何が起きてるのか、いろいろ詮索してるんですよ？」
「何かわかった？」
「いいえ？お客様が来た様子もないですし」
「……演習かしらね」
「演習？」
「ええ。もう、いろいろきな臭いから、そろそろ準備しようとしているんじゃないの？」
「それは、つまり、戦局の打開のために、メースを投入することを言ってます？」
「……それもありかもね。まぁ、私が打開したいのは、あの変態の振るまいなんだけど」
「――成る程？」

「正直」
魔族正規軍より派遣されたエレシオン卿は、自慢の髭をいじりながら言った。
城の本丸。
その中でも、構造的に隠された秘密の会議室。
１０キロを超える地下通路を通らなければ、外から入ることは出来ない。
彼もまた、１０キロ以上離れた場所に極秘に着陸させた民間用飛行艦から地下通路に入って、ここまで来た。
小さな窓からは、外の景色が見えるが、魔法で細工された壁越しであり、ここに窓がある事自体、外からはそう簡単にわからない。
「その気になれば、オンディーヌ家を潰すことはたやすい。
しかし、問題は、オンディーヌ家亡き後――そうではありますまいか？」
「我が方が、オンディーヌ家を亡きものにせんがため、今回の騒ぎを画策した――そうおっしゃりたいのか？」
「私の発言ではありませんぞ？御当主」
苦い顔をする当主を諫めるように、エレシオン卿は言った。
「しかし――事が成れば、宮廷でそんな話も出てくる。いや、現に出ている」
「……迷惑な」
「左様。迷惑な話です。これでメースまで投入されれば、目も当てられない」
「投入の動きが？」
「御当主が、今までメースを城から――いや、ハンガーから出さ

なかったご判断が、オンディーヌ家に投入を躊躇わせてはいた。フェアでないとして」

「メース同士の戦いとなれば、被害は想像を絶する程、甚大となろう――それでは、罪無き民が苦しむ」

「……陛下も心配されておいでです。だからこそ、停戦の監視のため、我々がいるのですが」

「正規軍は、メースを投入してはくれんのか？」

「それこそ危険すぎる。この事態にかこつけて、帝室が自分達を潰しに来たのではないかと、危惧されてはこの周辺の安定が崩れる」

「……厄介な事態ですな」

「全くです。無用な刺激を、正規軍が生み出すことは出来ない。オンディーヌ家がメースを投入すれば、その後になってやっと動かすことが出来る――かもしれない。そう考えていただいて結構」

「どちらにせよ。それまでは――」

当主は窓の外を見た。

「ここにある騎がすべてですな」

「オンディーヌ家は、周辺から中古騎まで集めているそうで」

「――ちなみに、正規軍が把握しているオンディーヌ家のメースは、いか程に？」

「戦線に投入できる数だけで、この三倍は超えるでしょうな。軍事優先と、民優先の政策的な違いが生み出した結果です。本来なら、民の福利をめざした御当主は、賞賛されるべきでしょうが――こと、こうなると話が違ってくる」

「……っ」

「私の警護のために、そして、抗戦の意志を私に見せつけるためにメースをハンガーから出していただいたことには感謝しましょう。ですが――正規軍は、あまり頼りになさらないでください。我々の任務は、監視なのです」

「……了承した。じゃが、卿に頼みがある」

「それは、軍司令官として？」

「長年のよしみのある盟友として――――じゃ」
「……何なりと」
当主は言った。
「姫を二人、預かって欲しい」

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第六話

「もう、完全に噂になってるのよ」
そう言うクローネンベルクの目は座っていた。
「何が」
「――――あんたが、やりたい放題やってるって」
「何を？」
「何をって……自分の胸に聞いてご覧なさい……ところでユースティアは？」
「仕事に戻るって」
「……あんた、ユースティアとまで何か……」
「何かって……うーん。よくわかんないのよ。あの娘」
ティアリュートは困惑気味に言った。
「急に泣き出したりして……抱きしめてあげたら収まったんだけど」
「あ、あんたって人は！あんたって人はぁぁぁぁっっ！」
突然、クローネンベルクが掴みかかってきた。
「な、何よ急にっ！？」
「あの子にまで、何したのよ！？あんた、この城に来てからおかしいわよっ！？この間だって、シュヴァルツと！」
「あの女が何なのよ！第一っ！」
ティアリュートは、クローネンベルクの手を払いのけた。
「おかしいのはクローネンベルクの方じゃない！ずっと怒ってばかりで」
昔ならの慣れとでもいうのだろうか。
ティアリュート自身は、全く意識していないが、ティアリュートとクローネンベルクの顔は、息がかかるほど近い。
その近さの意味するところに気付いたクローネンベルクの顔が赤くなるが、ティアリュートは全くそのことにさえ気付いていない。
「私……なんかした？それって」

「っ……自分の胸に聞けって」
「クローネンベルクの怒ることなの？」
「……っ」

「……あのぉ」
ドアの方からした声に振り返ると、ユースティア達が立っていた。
ユースティアと、カティア姫付きメイドの一人、オーキッドだ。
「お楽しみ、もしくはお取り込み中すみませんが」
ユースティアは顔を両手で覆って、指のスキマからじっくりと二人を眺めているが、オーキッドは興味津々という顔で訊ねた。
「……とりあえず、修羅場ですか？それとも濡れ場ですか？」
「どっちでもないからっ！」
クローネンベルクが怒鳴る。
「な、何っ！？」
「探し人です」
「探し人？」
「オパールとプラチナの姿が見えないのですが……ご存じありません？」

――探してきなさい。

クローネンベルクに命じられたティアリュートは、城の中を探索に出た。
城の衛兵も、メイド二人が行方不明だという通報が行ってるのは、その動きから間違いないだろう。
城を取り巻く状況が状況なだけに、皆が殺気立っている。
衛兵達の殺気立った気配が、肌を貫きそうなほど鋭く、痛い。
――この感覚は久しぶりだな。
ティアリュートは、かつての軍隊時代を思い出し、心が引き締ま

る思いがした。
その横には、ユースティアがいた。
城の中は、裏方だったユースティアの方が詳しい。下手に歩き回ると逆に衛兵達とのもめ事になりかねない。
クローネンベルクの、そんな判断があってのことだった。
――最悪のことを考えて。
クローネンベルクと別れる時、クローネンベルクから二人が手渡されたのは、剣と、城内の武装許可証だった。

――こんなのいらない。

ティアリュートは、それを突き返そうとしたが、クローネンベルクは無理に押しつけた。
その顔は真顔だった。

――状況は、すでに戦争なのよ。遊びじゃないのよ。わかるでしょう？

久しぶりに剣帯をつけ、ぶらさげた剣の重みによろけそうになる。
ユースティアは背中に背負って平然としていた。
もしかしたら、この子、私より力があるんじゃないか。
そう思ったが、考えてみれば、引きこもっていた自分より、日頃からメイドの仕事をしているユースティアの方が力仕事に慣れていて当然だ。

――昔は軽々と持っていたんだけどな。

少し、鍛えた方がいいな。
ユースティアがそう思って、剣の鞘を軽く叩いた時だ。

「いたぞっ！」
「見つけたっ！」
衛兵達が声の元に駆けだしていく。
「ユースティア」
「はいっ！」

城の構造に詳しくないティアリュートにとって、そこが何かのかはわからない。
ただ、半分、地下に埋まったその建物は、その構造から地下倉庫か何かの入り口だと、そんな見当だけはつけることが出来た。
衛兵達が、腰に下げていたライトで室内を照らし出す中、ティアリュート達は、最後に入った衛兵の後に続いた。
「……ユースティア」
「はい？」
「ここは？」
「……あの」
「何？」
「抜け穴の一つです」
「抜け穴？」
「はい。この奥にある抜け穴から外堀まで一気に抜けられます。一番不用心ですけど、一番、緊急時、一番外へ楽に脱出出来る抜け穴でもあります。戦時中ですから、どうするか御当主様も処遇に困っていたと聞いています」
「……ねぇ」
「はい」
「この臭いには……気付いている？」
「……はい」
ユースティアは固い表情で頷いた。
「……血の臭いです」

「おい！」
衛兵の粗暴な声が奥の方から二人に飛んできた。
「メイドさんよ！ちょっと来てくれ！」
ひげ面の、衛兵隊長の腕章をつけた男が怒鳴った。
「女の人にとっちゃ気の毒なモノ、見てもらわにゃならんがね！」

ペンキかケチャップでも撒き散らしたような真っ赤な液体が、壁と床にぶちまけられている。
その上に転がっているのは、メイド服を来た人の身体。
だらりと投げ出された手足には、すでに生気はない。
血色を通り越して真っ白になった肌の色が、この人物がどういう状況にあるかを教えてくれる。

つまり、死んでいるのだ。

「……どっちだ？」
衛兵隊長は訊ねた。
「行方不明とされるのは、二人のはずだ。どっちか判断する決め手はないか？」
「……」
ティアリュートは、ユースティアが“それ”を見た途端、卒倒するんじゃないかと心配した。
こんな、線の細い娘が見るには、この光景はキツすぎる。
何しろ――
「アタマ潰されているんじゃ、顔から身元判断することが出来ねぇ」
そう――
何か、余程破壊力のあるだろう鈍器か何かで殴られたらしい。
死体は、下あごから上を完全に潰されている。

脳漿を撒き散らし、真っ赤になった、かつて頭部を支えていた一部だろう、下あごが、同じようにかつて頭部を構成していた肉や骨と共に、真っ赤に染まっている。

「……」

ティアリュートの心配を余所に、ユースティアは意外な行動に出た。

死体のエプロンドレスのポケットに平気で手を突っ込むと、手が血で汚れるのも構わず、ポケットの中をまさぐると、右腕のカフスを外して、腕を見た。

「……オパールさんです」

驚くティアリュートを後目に、腹の上で死体の手を組ませたユースティアが小さく胸元で十字を切って祈りを捧げた。

「ＩＤカードがありませんけど、手首の古傷は見覚えがあります」

ポケットから出したウェットティッシュで指をふき取りながら、ユースティアは答えた。

「身体的特徴は合致していますが」

「どっちにしろ――“消滅”が始まる。出来ることは祈ってやる程度か」

衛兵隊長がぽつりと呟いた。

人間界に住む人間と違い、魔族は死ぬとその肉体を残しておくことが出来ない。

肉体を構成する魔力が失われることで、その肉体の構成を維持できず、光の泡状になって“消滅”する。

皆がわかっている。

ここまで死体が残っていたこと自体が奇跡に近いのだ。

そのことを証明するかのように、皆が祈りを捧げる中、ユースティアによってオパールと確認されたその死体は、服を残して光の泡となって消えた。

「……問題は、この奥か」

衛兵隊長は、通路の奥を睨み付けた。

照明もない通路。
5メートル進んだ先が、T字路に曲がっている。
まっすぐすすめば、2メートルと行かずに行き止まりだ。
「隊長は、この地形に詳しくないのですか？」
ティアリュートが訊ねると、何でもない。といわんばかりに隊長は答えた。
「脱出ルートの確保は俺達の仕事じゃないんでね」
「――成る程？」
「ま、ここに入った以上は、仕事の権限で調べさせてもらうさ――――悪いことじゃないだろう？」
「お任せします」
「ついでといっしゃなんだが……」
「はい？」
「もう一人が――“もしも”のことがある。もうちょっとつきあってくれねぇか」
「……そう、ですね」
チラリとティアリュートがユースティアを見た。
いつの間にかオパールのメイド服を片づけていたユースティアは、無言で頷いた。
「了解しました」
「――上等だ」
ピクリ。
不敵に笑った隊長の視線が“それ”に気付いたのは、彼の経験によるものか、単なる偶然かはわからない。
「――何だ？」
「？」
最初、ティアリュートとユースティアは共に“それ”に気付かなかった。
もしかたら、この一行で気付いたのは隊長だけかもしれない。
隊長は、手で先に進もうとする部下を止めた。

「どうしました？」
「――あの光は何だ？」
「光？」
隊長が指さした先。
そこには、ポツン。と赤い光が壁に光っていた。
違う。
何かの光が、壁に当たっているのだ。
「……あれは？」
「――メイドさんよ」
隊長は言った。
「鏡――持ってないか？」

「人間の？」
「ええ」
ティアリュートは、憮然とした顔で言った。
「――人間の使う地雷って兵器。誰かが不用意に、その兵器の前に立つと、中の装置が作動して――ドンッ」
ティアリュートは、握った手をクローネンベルクの目の前でパッと離した。
「私の見る限り、あの光が、その兵器の“目”だったわけね」
「作動したの？」
「させるしかなかったわ」
ティアリュートは苦笑しながら、ユースティアが用意した紅茶に口を付けた。
「その後で――ご覧の騒ぎよ」
場所は、城の中が一望できるテラスの上。
メイドや執事達も利用できる憩いの場として人気のあるスポットだ。

そこから見る城の一角から、未だに黒い煙が立ち上っている。
「兵器に挽肉にされた後、そのまま進んでいたら地下通路に生き埋めにされるところだったわ」
「探知装置を探しに外に出たのが正解だったのね」
「でなければ、生きてあなたとこうしてはいないわ」
「――そうね」
くすっ。
クローネンベルクが嬉しそうに笑った。
「――何？」
「ううん？」
その目は、嬉しそうな、どこか、まぶしそうでさえあった。
「あんた――いい顔してるなって」
「……顔？」
「うん」
クローネンベルクは、掌の上に顎をのせ、歌うように言った。
「輝いている――軍隊時代に見せた精悍さが戻っている」
「自分じゃわかんないし、そんなことは大切じゃない」
「……そうね」
「脱出ルートが一本潰れた……だけじゃ済みそうにない」
「プラチナの行方は？」
「逃げたのか――それともあの下か」
「生存反応は？メースのセンサーで調べたんでしょう？」
「一介の家庭教師にそこまで教えると思う？」
いらだたしそうに、ティアリュートが破壊された地下通路の陥没した跡に立つメースを睨み付けた。
「ったく、センサーで調べるなら、そんな所じゃなくて、別に調べるところがあるでしょうが」
「そういうものなの？」
「あの頭部アンテナの形状からして、この城にあるのは、サライマの中でも指揮官級のS型――バラライカよ」

「それが？」
「指揮官が搭乗する以上、S型はノーマルよりセンサーや通信装置のグレードが高い。特にバラライカは正規軍でサラライマが使用されていた最後期のモデルで、中隊から大隊指揮官と、戦況分析官が搭乗することを前提にしているから、現役の――何よ」
「ううん？私、メースは全くの門外漢だからチンプンカンプンなのよ。とにかく、センサーはスゴいんでしょう？」
「ええ。私だったら、城壁まで向かっている。もし、プラチナが生きて徒歩で移動していれば、バラライカのセンサーなら追えるはずよ」
「衛兵に捕まえる気がないのか――それとも」
「泳がせているなら失礼しましただけど――あの兵器が仕掛けられてる中、追いかけるのが恐いっていうのが本音じゃない？バラライカで追跡――発見。その後、どうするかって、その辺」
「……この国が、戦争で負けている理由が分かった気がする」

結局――プラチナの行方は、ようとして知れず、時間ばかりが無駄に過ぎていった。

「大変な一日でしたね」
寝間着に着替えたユースティアが、メイド服をハンガーにかけながら言った。
すでに眠る時間だ。
照明はすっかり落とされて、枕元のランプの光しかない。
「……ねぇ。ユースティア」
「はい？」
「あなた――所属部隊はどこだったの？」

「所属部隊？」
「軍隊経験はあるんでしょう？」
「……昔の話です」
「過去は言えない――――そんな所だったんだ」
「……」
「……いいわ」
ティアリュートは、読みかけていた雑誌をサイドテーブルに置いた。
「随分、血に慣れているから、気になっただけ」
「……お嫌でしたか？」
「ううん？」
ティアリュートはあっけらかんと答えた。
「血が恐かったら女なんてやってられるもんですか。
昔ね？学校の女の先生のこと思い出した。
聞いてくれる？
男の子が転んで血が出たってワンワン泣き出した時があったの。
その先生、普段は物静かなんだけど、その子、本人も親も五月蝿くて迷惑なヤツでね？　先生が何言っても泣きやまなかった。
男なら黙れって、私でも思ったもの。
で、最後にアタマに来た先生が怒鳴ったの。
何よその程度！私が今日、女として、月一度といえ、どれだけの血をドバアって出したかわかった上で泣いてるの！？って」
「……そういう意味ですか」
「そうよ――――アレは大変だから」
「そうですね。私も痛み止めが必要です」
「ふふっ……こういうプライベートな話、ゆっくり出来るのは初めてね」
「……そういえば」
ユースティアは嬉しそうにベッドに腰を下ろした。
ちなみに、ティアリュートのベッドに、だ。

「カティア姫様にいつも取られてばかりでしたから」
「ふふっ。私は家庭教師だから――」
「……そうですね。今晩は？」
「あの騒ぎがあったせいかしら？未だに本丸への立ち入りは許可されてないし――あなたは？」
「私達、メイドもです」
ユースティアは視線を窓の外に向けた。
「今、本丸に入っているのは、衛兵の方と、メイド長に、本当に限られた方だけです。何しろ、本丸は現在、公国軍最高司令部ですから」
「――普段からそうなんじゃないの？」
「本来なら、城下町のビルにあるのですが、警戒が引き上げられたようです。夕食をもらいに行ったら、厨房の方から、機能がこちらに移ったと布告があったと聞きました」
「戦時下……か」
「……大変ですね」
「えっ、何が？」
「家庭教師として赴任してまだ1ヶ月も経っていないのに、こんな騒ぎに巻き込まれて」
「――ま、退屈なよりマシよ」
ユースティアは苦笑いして答えた。
「カティア姫にも出会えたし」
「……」
「……お疲れではありませんか？」
「そうね。いろいろ疲れているかも」
「……お慰め、しましょうか？」
「お願いできる？」
マッサージでもしてくれるのかな？
ティアリュートは、そんな軽い気持ちで、そう答えたのだ。
「――はい♪」

ユースティアは、嬉しそうに頷くと、ベッドから立ち上がった。
マッサージに備えて身体の力を抜き、目をつむったティアリュートの耳に、シュルッという布音が聞こえた。
「――あの」
「ん？」
ティアリュートは、目をつむったまま答えた。
「灯りを消していただけますか？……やっぱり、恥ずかしいので」
「恥ず？」
ティアリュートは、目を開いて、思わずギョッとしてしまった。
問題は、ユースティアの格好だ。
何故かユースティアは、寝間着を脱いで一糸まとわぬ姿でモジモジと、自分の前に立っている。
成熟していない幼い身体を、精一杯に隠そうと手で前を覆う姿は、むしろそれだけで官能的でさえある。
「……あの、ユースティア？」
「う、噂にはうかがっています」
「噂？」
「ティアリュート様が、カティア姫を性的に狙っていらっしゃる――ついでに、シュルッ様とはもう、身体を許し合った間柄だと」
「何それっ！」
ティアリュートは驚いてベッドから跳ね起きた。
「カティア姫の件は真実としても、ショーン様に知られたら殺されるような噂、誰が流したのよ！？」
「で、でも、いいんです！」
ユースティアは思い詰めた表情で言った。
「私、私っ！ティアリュート様が、他の女とどんな浮き名を流しても、私を愛してさえ下されば、それでいいんです！」
「どこの破滅希望の女のセリフなのよ――っーか、よく聞いてユースティア」
ティアリュートは、自分が、少しだけ後ずさっていることに気付

いていない。
「私は、カティア姫を本気で愛しているわけで――」
「弄ばれてもいいんです！私、慰み者と呼ばれてもいいっ！初めてお会いした時から、もう私、あなたに夢中なんです！ごめんなさいっ！もう我慢できませんっ！ティアリュート様ぁぁぁっっ！」
感極まった。そんな声を上げながらユースティアはティアリュートに抱きついた。
その力に半ば負ける形で、ティアリュートはベッドに押し倒された。

――ちょっと待って。

ティアリュートは、抱きついてくるユースティアの柔らかい感触を感じつつ、心の焦燥を押さえられなかった。

――私、女で、ユースティアも女。女が女を押し倒すって……これってどうなのよ。

カティア姫相手なら、泣いて喜ぶところだろう。
でも、姫も同じ女。
ユースティアと、何がどう違うと聞かれると、返事が出来ない。

「……ティアリュート様」
潤んだ瞳で、ユースティアが切望するが如く言った。
「――犬とでも、ペットとでも、好きにお呼び下さい」

「あ、あんたまさかMっ！？」

「エムでもエスでも、何とでも♪」
ユースティアは嬉しそうに頷いた。

「初めてお会いした時、あの瞳に直感したのです。この御方なら、私を滅茶苦茶にしてくださるって！ですからっ！」

「ちょっ！？」

ユースティアの唇が近づいてくる。

本能的にいろいろと危険を感じたティアリュートの顔が引きつったままだが――

ズンッ！

ズゥゥゥム――――ッ！

室内を、いや、城を根こそぎ揺るがすほどの粘っこい爆発音が連続して響きだしたのは、その時だった。

「なっ、何っ！？」

「――――チッ」

ティアリュートは、確かに、その舌打ちがユースティアの口から出たのを聞いた。

「どこのクソだ――――余計なマネしやがって」

地獄のそこからだって聞こえないだろう物騒なつぶやきが、確かにその愛らしい口から聞こえた。

「ゆ、ユースティア？」

「放っておいて、続きです♪」

「そういうわけにはいかないからっ！」

「そう……ですか？」

残念そうなユースティアはぽそっと言った。

「なら――――あのバカ共を挽肉にしてやる……クソ共、覚悟しやがれ？」

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第七話（前書き）

募集！

作者のネタ切れともいいますが、以下の設定を募集します。

感想とか使って応募してください。

いただけると本当にうれしいので、是非、お願いします。

募集その１　新型メース、メサイアの設定。

「●×国軍のメサイア」とか「私の考えたキャラの専用メサイア（メース）」とか、そんなのを募集します。

「このメースには、こんな武器があります」とかも大歓迎です。

募集その２　新キャラ

「●●国軍の騎士」とか、「魔族の××」とか……。細かい一緒に設定とかいただけると泣けるほど嬉しいです。

募集その３

フォイルナー達の新型騎の名前。

本気でネタ切れです。ドイツ語でいいのがあったら、是非……助けて。ドイツ語に詳しい御方。

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第七話

「女子供の待避を急がせろっ！」
「避難経路はどうなっている！」
非常事態を告げるサイレンが鳴り響き、メイドや執事達が持ち場に駆け出す中、ティアリュートは、メイド長達に何事かを指示していたクローネンベルクを見つけることが出来た。
「クローネンベルクっ！」
「ティアリュート。無事で残念だわ」
「お互いね――――このは一体、何の騒ぎ！？」
「城壁にメースが取り付いた。堀に張り巡らせた魔法障壁が頑張っているから、まだそう簡単には――――」
ズズゥゥン……
「堀が破られたぞぉっ！」
誰かの叫び声がしたのと、
シュシュシュ――――
ヤカンの中でお湯が沸騰するような音が聞こえだしたのは、ほぼ同時だった。
「な、何？」
メイド達やクローネンベルクは、その音の意味がわからない。
きょとん。として辺りを見回している。
「伏せてぇっ！」
その場に居合わせたメイド達に覆い被さるようにして、一気に床に押し倒したのは、ティアリュートとユースティアだ。
「テ、ティア――――きゃぁっ！？」
クローネンベルク達が床に倒れるか否か。その刹那に、突然襲いかかってきた衝撃波に吹き飛ばされた。

「外堀の魔法障壁が破壊されました！」
「内堀の魔法障壁発生装置に障害発生！」
爆発の震動が、天井の漆喰と埃を司令部要員の頭上に容赦なく降り注ぐ。
「メース達が侵攻開始！数８、第一メース小隊が現場急行中！」
「何だと！？」
当主が目を剥いた。
「障壁が破られたというのか！？」
「内部からの工作の可能性大――衝撃無効化と同時に、敵、城の全域に弓兵攻撃開始。城全域で甚大な被害発生！」
「二の丸大破――火災が発生しています！」
「三の丸応答しませんっ！」
「――三の丸通信管制室に直撃！通信回線を予備に切り替えますが、各施設との通信が障害を起こしています！内部からの攪乱工作ですっ！」
「……ハウゼン」
「はっ」
当主の斜め後ろに立っていた小太りの執事長が一歩前に出ると、当主の口元へ耳を近づけた。
当主は、そのハウゼンの耳に小声で言った。
「無事に？」
「はい――奥方とカティア姫、ショーン姫共に、２時間前に城外へ脱出」
「よし。北館の防御を固めろ。他はある程度、手薄になっても構わん」
「しかし」
「――よい」
炎上する城を苦々しく思いながら、当主はぽつりと言った。
「奴らの狙いは姫じゃ。その姫がこの城にいないことを気取られてはならん」

「……はっ」
「メースを出せ。ある程度の城の破壊は目をつむる。それと、正規軍に伝えろ。“目玉はついているのか？”とな」

「あ痛たたたっ……」
あまりの痛みに、体中が悲鳴をあげる。
クローネンベルクは、自分が床に寝かされているのに気付くことが出来たのは、その痛みのおかげだった。
「わ……私？」
起きあがったクローネンベルクは、目を疑った。
そこ、メイド達が毎日清掃に明け暮れる清浄な廊下だったはず。
それが今では――残骸の山だ。
所々目に付く、真っ赤に染まっているのが何なのかは考えたくない。
「目が覚めたようね」
ハッ。となって振り返ると、ティアリュート達が立っていた。
「今、水をもらってきたところ」
ティアリュートは、コップをクローネンベルクの前に突き出しながら訊ねた。
「飲む？」
「……いただくわ」
強く打ったのか、痛む肘に顔をしかめながらクローネンベルクは一息でコップの水を飲み干した。
こんなに美味いものがこの世にあったのか。
よく使われるたとえだが、水一杯が、世界最高の甘露にさえ思えた。
喉を経て、胃に水がしみいってくるような感覚。
それが、クローネンベルクに冷静さを取り戻させた。

「……何が起きたの？」
「弓兵の絨毯射撃よ」
ティアリュートは、厳しい視線を外に向けたまま、手元ではクロスボウの準備を休めることはない。
「一発でも食らえば、建物が吹き飛ぶ。魔法障壁がない以上、シェルターに逃げるしかない。シェルターに避難して、弓兵からの攻撃を逃れて、敵の城内侵攻と同時に乱戦に持ち込むか――障壁の復旧を急がせるか。どちらかね」
「応戦は？」
「バカ言わないで」
ティアリュートは、フンッと鼻で笑った後、手にしたクロスボウを軽く振って見せた。
「こんなのメース相手にゃ豆鉄砲。無駄死にしろっての？」
「シェルターに案内するわ――こっちよ！」
「それより姫様は！？」
「私達より安全な所にいる――そう信じて」
「本丸へは行けないの？」
「バカおっしゃい！」
シェルターに通じるドアを開いたクローネンベルクが怒鳴った。
「今、本丸へ近づけば、女子供でも殺されるわよ！？家庭教師だからって、理由になるもんですか！」
「……っ」

どうにかならないのか？
シェルターの中。
薄くぼんやりとした灯りの下で、ティアリュートはそれだけを考えていた。
心配しているのは、カティア姫のことだけ。
本丸周辺の防御障壁は生きているらしい。

本丸への直接的被害だけは避けられている。
つまり、カティア姫は今の所は無事――ということになる。
ただし、今の所は。という条件は消えることがない。
カティア姫を護りたい。
せめて、カティア姫の安全を、この目で確認したい。
床に座って膝を抱えてばかりいる自分が不甲斐なくて仕方ない。
だが――弓兵の絨毯射撃の前に。メースの前に、生身の自分に何が出来る？
そう自問するだけで、答えが知れてしまう。

否。
こうしているしかない。

「……ティアリュート様」
ユースティアが、心配そうにティアリュートを見つめている。
ティアリュートは、ユースティアに何と答えてよいかもわからず、ただ薄く笑みを浮かべるのが精一杯だった。

「武器が来たぞっ！」
シェルター同士をつなぐ地下通路のドアが開き、執事の乱暴な声がシェルター一杯に響き渡った。
「総員、白兵戦用意っ！武器をとれっ！」
執事達がハルバードやシールドを手にとり、メイド達はおっかなびっくりクロスボウを手にした。
魔法の矢を放つことの出来るクロスボウは、同じ魔法の矢を放つ兵器である長弓とは兄弟関係にある武器だ。
この城を襲っているのが、弓につがえた矢に魔力をチャージして発射する長弓。
破壊力は、発射時の魔力のチャージによって異なり、構えてすぐに打てば単なる矢程度だが、じっくり魔力を貯めてから発射すれば、

戦艦を撃沈する対艦ミサイルに匹敵する破壊力を得ることが出来る。
　対するクロスボウは、発射装置に魔力そのものを発生させて、連続して打ち出すことのみを目的に造られた、サブマシンガンのようなもので、対人、対装甲車両用に通用する程度の破壊力――5・56ミリのNATO弾から12・7ミリ弾程度と、破壊力の面では長弓の半分にも及ばない。
　反面、ある程度の技量を求められる長弓と違い、素人でもトリガーを引けば扱うことの出来るクロスボウは、魔界では一般的な兵器だ。
「ユースティア」
「はい？」
「訓練は受けているの？」
「メイドとしてお城にあがったら、すぐに基礎訓練は受けます」
「基礎――だけ？」
「軍隊ではありませんから。でも、配られているタイプは、最も操作が簡単で、射手の利き手を選びません。事故はないと思いますが」
「……まぁ、そうね」
　ティアリュートも、メイド達が持つクロスボウには覚えがあった。
「素人でも1時間のレクチャーで玄人ハダシで扱えますってコマーシャル、見た覚えがある」
「当然です」
　ユースティアは答えた。
「あれ、この国の兵器工廠で造られているんですから」
「一丁買えば、今ならオマケで銃剣まで」
　ティアリュートは、部屋に引きこもっていた時に聞いたコマーシャルの一節を口にした。
「それでお値段」
　ユースティアは、その続きを言いかけて噴き出した。
「――実戦で使えるかは、使い手次第です」
「……そうね」

そう。
どんな優秀な武器を持っていようと、使い手が使いこなせなければ、旧式の武器にだって勝てはしない。
それは、軍隊経験者なら嫌でもわかることだ。
「おいっ！」
「きゃぁっ！」
ドアの方で騒ぎが起きたのは、その時だ。
「しっかりしろっ！」
「医者は！療法杖、誰か持っていないか！」
ティアリュートとユースティアは、互いに顔を見合った後、床を立った。
床に寝かされていたのは、体格からどうやら男性だとわかる。
顔が血まみれな上に、全身が火傷によってひどく腫れ上がっている。
服はほとんど焼けこげ、肌と服の区別が付かない。
苦しそうなうめき声をあげる、半焼けの肉の塊というしかない惨状に、メイド達の何人かは、近づくことも出来ずに顔を背けてしまう。
メイドや執事達の中で医療の心得のある者が、必死の救命措置を講じているが、この有様では助かる見込みはほとんどないと、ティアリュートにもわかる。
「――――誰か！」
重傷者の口元に耳をそばだてた執事が怒鳴った。
「メースを使える者はいないか！？メース使いが攻撃でかなりやられた！誰かメース使いを知らないか！？」
「どういうことです！？」
ティアリュートが、その執事に近づいて訊ねた。
「何が起きたんですか？」
「近くにある第６ハンガーに直撃があったんだ。こいつはそこからの伝令だ。メース使いが不足。使える者はハンガーへ集合……と」

重傷者の身体が、ゆっくりと光の泡へと変わっていく。
――死んだのだ。
「……あんた」
その死を確かめた若い執事が訊ねた。
「たしか、軍隊あがりだったな」
「えっ？」
「話には聞いているんだ。使えるんだろう？メース」
「……ええ」
ティアリュートは、素直に頷いた。
「――行ってやってくれ」
執事は食い入るような目つきでティアリュートに言った。
「こいつが、命と引き替えにしてまで伝えたことだ。果たしてやってくれ」
「――やめた方がいい」
少し離れた所で黙って聞いていた老齢の執事が呟くように言った。
「ここのメース使いなんて、正規軍に徴兵されるのがイヤで、形ばっかり在籍しているような、金持ちのボンボンばっかりだ。高い騎体を与えられても、立たせているのがやっとな腕前だ。そんなこたぁ、お前だってわかってるんだろう？フィー」
「じいさんっ！」
若い執事は顔を真っ赤にして立ち上がった。
若い割には、立ち上がりと同時にバランスを失いかけ、力んで踏みとどまる動作が、ティアリュートには不思議と気になった。
「あんたは、こいつが何をしたのか見てなかったのか！？このままじゃ、こいつは無駄死にしたも同然だ！」
「だからといって、素人の中に組み込んでも、無駄死にする者が増えるだけだ。だいたい、お前だって、元はメース大隊にいたんだろう？」

「――ああ」
執事は悔しそうに自分の脚を睨んだ。
「石化病にさえならなければ、病気除隊なんかするものか。俺はあと少しで中尉まで行けたんだ」

石化病
魔界の風土病の一種で、傷口から細菌によって感染するケースが最も多い。
感染したカ所の四肢が石のように動かなくなることからこの名前が付いた。
一度感染すると、例え四肢を切断・再生施術を施しても、再生した同じ部位が石化を引き起こす謎の特性を持つため、回復の見込みはない。
メース使いの場合、操縦者とメースの四肢の神経を同調させて動かすという、その操縦特性の関係から、罹患すると操縦が出来なくなる。

「メースが使えるなら、自分で行けばいいじゃないか。他人なんて頼るんじゃない」
本人は真面目に諭しているつもりだろうが、この老執事が、石化病のことをまるで理解していないことは、その口振りからわかる。
「――くっ！」
「結局、死ぬのが恐くて、自分が生きたくないだけだろう？こんな女を身代わりとはな」
「……待ってください」
殴りかかろうとした若い執事の肩を掴んだティアリュートが言った。
「私、行きますから」
「――死にたいのか？」
「少なくとも」

ティアリューは、若い執事の肩から手を離した。
「あなたと同じ穴蔵で死ぬよりマシ――私の判断はそう告げています」
「――ふん」
老執事は言った。
「ワシとて、バアさん以外の女と同じ墓に入るつもりはない。覚悟は出来ているというのか？嬢ちゃん」
「カティア姫をお守りするためなら、何でもしますよ。ここで脅えていても、何にもならない」
そうだ。
答えてからティアリューは自分の言葉を認めた。
ここにいて、何が出来る？
今、カティア姫のために出来ることが祈ること？
祈ってカティア姫の無事が保証されるなら、死ぬまで祈ってやろう。

だが、本当にそうか？

祈りが通じて助かるなら、何故、この伝令は死んだ？
答えは一つ――祈るだけではダメだ。
そういうことだ。

「城を守って、最低でもメースを撤退に追い込まなければ、姫達にまともな未来はない。違いますか？」
「……じゃな」
パンパン。
立ち上がるなり、乱暴に尻を払った老執事が睨み付けるようにティアリューの顔を見た。
「この城が落ちれば、あの姫が、オンディーヌ家のバカ息子共の慰み者になる。ワシかとて、そんなことなら死んだ方がマシじゃ」

ガシッ！
ティアリュートの手が背後から老執事の首をワシづかみにした。
「ぬぉぉぉぉっっっ！？」
片手で高々と持ち上げられた老執事は、脚をジタバタさせるが、ティアリュートはそんなことを全く意に介さない。
「慰み……者？」
「て、ティアリュート様っ！？」
ユースティアが慌てて止めようとするが、ティアリュートは聞く耳を持たない。
「私の神聖なる姫様を――――その純潔を……汚すということ？」
「わ、ワシがやるのではないわ！」
「では誰が！？」
「人の話を聞いておったのか！オンディーヌ家のどら息子どもじゃ！ワシじゃないっ！」
「ああ」
ぱっ。
ティアリュートはすぐに手を離した。
「そんな粗末な上に萎びきったシロモノで何考えてやがる。まだ使えると思ってんのか。とか思いましたが、敵のことなんですね？」
「い、今、ワシの敵はアンタになったよ」
尻から床に落ちた老執事は、尾てい骨に走った痛みに歯を食いしばるしかない。
「――――何か？」
「何でもないわい……とにかく」
老執事は、よろよろと立ち上がった。
「いろいろ言ってくれた分は、仕事で返してもらおうか。古いルートを案内しよう。伝令の様子からすれば、ハンガーに通じるルートは、かなりやられているはず。行くだけで危険なはずじゃ」
「じいさん？」
若い執事が首を傾げた。

「第６ハンガーは、ここからだったら外を行くか、４６号線を通らないと」
「今の事じゃ」
老執事は答えた。
「閉鎖された3号線は、今でも通路としては生きておる。ワシの現役時代には、城に侵入した者共と死闘を演じた思い出の道じゃよ」
「俺も行くぜ。じいさん」
「来るな。その脚ではこっちが迷惑する」
「――ちっ」
「ランタンを貸してくれ――案内してやるから、転ぶなよ？嬢ちゃん達」

何年の月日が流れたらこうなるのか。
煉瓦積みの通路がぼんやりとしたランタンの明かりに照らし出される。
換気されていない空間特有のかびくさい空気がよどみ、息苦しい。
煉瓦積みの通路なんて、過去の歴史的建造物として子供の頃に見学して以来、見た覚えさえない。
まして、それが現役だなんて、信じられない。
「迷子になるなよ？」
老執事は、歩みを止めることなく、右へ左へとぽっかりと暗い口を開く別な通路への入り口を通りすぎていく。
「一度、迷子になれば生きて帰ることが出来る保証はない」
「これって、何千年掘ったんですか？」
「かつての旧本丸の地下通路が原型じゃ。城内のあらゆるカ所に必要な物資を届けるために、別施設にまで通じる無数のトンネルを掘った。
それがこれじゃ。
まぁ、掘りすぎたおかげで城の基盤が崩壊しそうになった。

危険だというので、今の本丸が建てられ、その旧本丸の施設を活かして造られたのが、今、ワシ等の住む施設となっておる――ためになったか？」

「……成る程？」

壁の煉瓦の上には蔦がからまったり、得体の知れない藻が繁殖したりと、正気なら絶対触りたくないこと請け合いの状況になっていた。

ランタンの灯りに驚いて、鼠が目の前を横切った。

ユースティアが口を押さえて悲鳴をかみ殺した。

「死体見ても平気なのに。鼠がダメなの？」

「これとゴキブリはメイドの敵です」

「……成る程？」

「ああ。本当にイマイマしい連中じゃわい。見るたびに殺意が沸いてくるわ」

「じいさんまで」

「誰がじいさんじゃ。ったく、近頃の若い女はこれだから困る。年寄りには敬意を持てと教わらなかったのか？ついでにワシは執事じゃから、メイドの気持ちはわかる。ここじゃ」

老執事は、不意に立ち止まると、カンテラで壁を照らし出した。

そこにあるのは、古く朽ちかけたドアだ。

「この向こうが、ハンガーの奥。今はゴミ捨て場になっている場所。昔はここが正門に近かったのじゃがな」

「ここが？」

「ああ。地下の待避所があって、そこにメース使い達が常時待機しておった。そこから、このドアを開いてハンガーへ飛び込む」

老執事は、ドアのノブを開きながら、昔を懐かしむような口調で言った。

「先代の時までは――この城もいろいろ活気があった。皆、お館様の為と、自らを磨いたものだ――あいつらも、もう少しこの城のことを知ろうとすれば、死なずに済んだろうになぁ……」

ギイッ
ドアがきしみを上げながら開いた。
「――――さぁ。後は頼んだぞ？」

半壊したハンガーに人はいなかった。
「皆さん、待避されたんでしょうか」
「……だと思いたいけど」
ティアリュートの視線の先にあるのは、半ば倒れかかった状態で放置されたサライマ達。
「騎体は２騎……」
「操縦者の方は……」
ユースティアは、その理由を悟った。
“待機所”と書かれた看板の下がる部屋の中は、崩れ落ちた鉄骨で埋まっていた。
もし、あの中に誰かがいたら？
その末路は考える必要さえない。そんな状況だった。
「ユースティア」
「はい？」
「ここまで付いてきたからには、聞くだけバカだと思うけど」
ティアリュートは訊ねた。
「サライマの搭乗時間は？」
「実戦で２，８００時間です」
「……上等」
正直、ティアリュートは内心で驚いていた。
相手がそれ程の戦闘を経験していることは想定外だった。
彼女自身、短期現役兵としてかなりの実戦に参加した結果として戦闘時間は３，２００時間に達している。
１，２００時間を超えて生き残ればベテランと呼ばれて十分だと

いうのが、一般的な常識の中で、この時間ははっきり多いと断言できる。
つまり、目の前の娘は、自分に匹敵する程の経験者だと――――そういうことだ。
「なら、一々、ここで余計なことは言わない」
そう、彼女は決めた。
「一端の経験者として扱うから、そのつもりでついて来て」
「よろしくお願いします」
ユースティアはぺこりと頭を下げた。
「私、ティアリュート様のお役に立てるなら、なんでもしますから」
「とりあえず、背筋が寒いけど、右の騎体に乗って。私、左に乗る」
「はいっ！」

コクピットハッチを手動開放したユースティアがコクピットに潜り込むのを確認したティアリュートは、ハッチが半ば開きっぱなしになっている理由を悟るしかなかった。
そこには、べっとりと真っ赤な液体がこびりついていた。
コクピットに入ろうとして、破片か何かに襲われたんだろうことは、その飛び散り方から容易に想像できる。
「チッ」
死人には悪いが、ティアリュートは思わず舌打ちをしてしまった。
「……右のにすればよかった」
ハッチの上にあるレバーを掴んだ腕を支点にして血の海を回避したティアリュートは、コクピットの中に潜り込んだ。
コクピットの中は幸いにして被害はない。
手が勝手に起動シークエンスを開始することに、
「……へぇ？」
ティアリュート自身が驚いていた。
「身体が覚えているものなのね」

――ここで忘れていたら、どうするつもりだったのよ！
クローネンベルクなら間違いなく、そう突っ込んでくるセリフだが、ティアリュート自身は全く気にしていない。
「懐かしき我が悪夢の日々よ……よしっ」
機動シークエンスを終えた指が、コンソールの右端にあるスイッチを押した。
サライマのイグニッションスイッチに信号が送られ、サライマの起動が完了した。
騎体にパワーが走るのが、同調した四肢を通じて伝わってくる。
その感覚は――久しぶりだった。
「起動完了――武装は……っと」
サライマが立ち上がり、ハンガーのウェポンラックの下に転がっていた戦斧を手にした。
「まだ新品……もったいないわね」
サライマのモニターに映し出される戦斧の刃が光を冷たく反射して、目には眩しいくらいだ。
「刃こぼれしても、交換どころか、直せなかった前線とは違う……か。ん？」
ピピッ
通信が入った。
通信モニターには、騎体番号が表示され、すぐにユースティアが映し出された。
「報告します。こちらの起動完了。武装は戦斧でよろしいですか？」
「選択は任せる。当面の任務は、敵勢力の排除。武装出来る兵器は全て装備して。それと、使用も自由とする」
「よろしいのですか？」
「いい」
「広域殲滅（ＳＦＤ）弾なんて、こんな所で使ったら、本丸ごと吹き飛びますけど」
「前言撤回――っていうか、なんで広域殲滅弾なんて、こんな所

に転がっているのよ！」
「さ、さぁ？」
「……まぁ、いい。自分で責任とれそうな範囲に押さえて」
「了解――敵、接近中」
「ついにここまで来たか？……いや」
戦況モニターの反応を見て、ティアリューは心底感心した。という顔になった。
「まだかなり先にいるのに、もう捉えているの？さっすが“バラライカ”」
敵の反応は6。
だが、それはまだ交戦可能距離からすれば、かなり遠い。
向こうのメースが何か。
そして、その針路や指揮官と思しき騎体がどれかまで、バラライカのセンサーとシステムは瞬時に割り出していた。
戦況分析官や高級指揮官向けの超高額騎の面目躍如たる仕事だと、ティアリューは開発者に敬意さえ抱いた。
――ただ。
「……これ、軍にいる時に欲しかったわ」
その本音だけは隠せなかった。

敵のメースは、バラライカの情報を鵜呑みにすれば“チャイカ”――サライマの一世代前の騎体。
発表当初、まだ無名に近かったメーカーが、金のない弱小国向けにと、社運を賭けて開発した騎体。
当初、その販売対象故にモンキーモデルと思われ、魔界でも評価は低かったが、それは単に、技術や特許の関係上、大国だといろいろと問題があるからメーカーが売り渋っただけのことであったことは、有名メーカーが開発した同世代の代表的メース“ツヴァイ”と真っ向から張り合って勝利を収めた戦績から明らかである。

つまり――舐めてかかれる相手では決してない。

「ユースティア？」
「はい？」
「狙撃砲に武装変更――やるわよ？」
「了解」

向こうはまだこちらを見つけていない。
センサーで勝てる内に一騎でも多く仕留めなければ――それにしても。
ティアリュートは戦況モニターを見て、首を傾げるしかなかった。
友軍は、一体、どこにいるんだ？

番外編　姫のために死ぬ身なれば　第八話

戦況モニター上の敵性反応で最も近いのは、城壁に取り付いたチャカ。
「……」
「ティアリュート様？」
共に狙撃砲を構えながら、発砲しようとしないティアリュートに、怪訝そうな顔をしたユースティアが訊ねた。
「どうなさいましたか？」
ユースティアには、ティアリュートが発砲しない理由がわからない。
城壁は狙撃砲の出力で十分貫通が狙える厚さしかない。
それに、チャカの装甲では壁をぶち抜いて減殺された攻撃でも十分撹座が狙えるというのに、何故、ティアリュートはここで攻撃しないのだ？
「……ユースティア」
「はい？」
「なんで連中」
「？」
「……城壁に隠れているの？」
「えっ？」
「城壁を超えてこない理由は何？」
「そ、それは」
「それに、後続の部隊の反応がない。堀を超えたのがチャカだけ？占領のための歩兵はどうしたの？」
「……えっと」
ユースティアは、ティアリュートが言いたいことがようやく理解出来かけてきた。

敵の狙いは何？
城の占領のはず。
それを目指すなら、歩兵は不可欠だ。
メースだけで占領なんて出来ることではない。
なら――
メースだけが前進している理由は？
目的はもしかしたら、城の完全破壊？
なら、それ相応の装備をしているだろうけど、城壁に隠れている理由はない。
ティアリュートではないが、敵の意図が読めない。
「……」
ユースティアは、そっと戦況モニターに目をやった。
城周辺で最も突出した敵性反応は、狙いかけたチャカの部隊。
その後ろに小隊規模のチャカの反応はあるにしても、動いていない。
そして、何よりわからないのは、友軍の本隊の反応がまるでないこと。
これは――？
「……まさか」
ユースティアは、一瞬だけ脳裏に浮かんだ答えを否定した。
あり得ない。
“そんなこと”が出来るのは、魔界正規軍の中でも――
「……“私達”でもなければ」

そう。
“あれ”をやってのけるのに必要な装備は、小国に過ぎないオンディーヌ家が持っていいシロモノじゃない。
「……ありえない」
でも。
ユースティアは脳裏にどうしてもひっかかる。
これしかない。
そう思う。
だから、ティアリュートに訊ねるしかなかった。
「ティアリュート様？」
「何？」
「敵が戦域情報支配を仕掛けている可能性は？」
「……」
ハッ。
その音が、通信装置越しにユースティアの耳にもはっきりと聞こえた。
「まさか」
「でも」
ユースティアは勢いづいて言った。
「オルタヴィア戦線で所属していた第９９９特務師団が使用した時と状況がそっくりです。あの時は、仕掛けた側ですけど」
「９９９？９ナンバーってことは親衛軍？あんた、スペシャルエリートだったんだね」
「……過去の話です」
「謙遜しなくていいわ。親衛軍、しかも“死神師団”は簡単に入れる部隊じゃない」
「“死の宣告”大隊に所属されていたティアリュート様程の活躍をしていたワケではありません」

ユースティアは、ほんのりと頬を赤く染め上げた。
「とにかく――どうですか？」
「……敵が動かないなら、こちらが動く方がいいわ」
ティアリュート騎が狙撃砲から手を離した。
「本丸へ行く……もし、あなたの意見が正しければ、もう」
「もう？」
「もう……手遅れでしょうけどね」

手遅れ。

その意味がわかったのは、本丸近くに来てからだ。

二人の前に現れたのは、照明に照らし出される本丸。
戦闘中に投光器を使って味方が重要防衛拠点を照らし出すはずがない。
そして何より――

「馬鹿なっ！」
ティアリュートが目を剥いたのも無理はない。
すでに本丸には１０を超える揚陸艇が取り付き、兵士達を中へと送り込んでいた。
それだけで問題なのに、さらにティアリュートを驚かせたのは、揚陸艇を護衛するメースの種類だった。
漆黒の騎体から伸びる翼。
図太い巨体から伸びる尻尾。
本能的に戦うことを躊躇わせる何かを纏う凶暴な騎は、普通のメースの倍はある巨大サイズだ。
あんな巨大な騎体、実戦で見たことはない。
でも、何かで自分は見ている。

見ているはずなんだ。
ティアリュートの中で、混乱する記憶がかけずり回る。
「あ……あれは？あの騎は？」
思わず騎体を止めたティアリュートの横で、
「ティアリュート様！」
ユースティアが困惑した顔を見せる。
「あ、あれは！？あんなの、いるんですか！？」
「見たことない？」
「ないです」
「そう。親衛軍にいたあんたも……って、思い出した！」
ティアリュートは、顔をしかめながら、呻くように言った。
「あれは……」
そう。
やっと思い出した。
クローネンベルクと一緒に入った喫茶店で偶然目にした雑誌の記事になっていた騎だ。
「……イスラフェル」
「イスラフェル？」
「次期魔帝親衛軍次期主力騎――でも、まだ配備されていないはず」
「まさか！帝室が！？」
「馬鹿な！」
ティアリュートは声を荒げた。
「帝室がヴァルホイザー家を潰す理由がない。それに潰すならオンディーヌ家のはずよ」
「で、ですけど――司令部からです！」
ユースティアが鋭い声をあげた。
「今、司令部が降伏！」
否。
それは悲鳴というべき声だった。

「残存兵力は、武装解除の後、投降しろと……」

明け方。

正規軍の停戦監視部隊が城に入った。

ティアリュート達は城内の倉庫に押し込められていて知らなかったが、停戦監視部隊が彼女たちを外に出した時、イスラフェルの姿はなかった。

「どういうこと？」

クローネンベルクとティアリュート達が再会出来たのは、その日の昼頃のことだった。

「どうやったら、城がこうも簡単に落ちるのよ！城って、こうも簡単に落ちていいものじないでしょう！？」

クローネンベルクは顔を真っ赤にしてティアリュートに掴みかかってきた。

「築城以来、数千年に渡って落ちたことのないこの城が、たった数時間の交戦で落ちたなんて、ありえないっ！あってはならないっ！」

「悔しいのはわかるけどさ――それより、姫は」

「事が起きる前に奥方様達と共に城外に脱出されていた。正規軍の保護を受けている。ご無事よ」

「正規軍が護っているってことは、帝室の保護が受けられる――――か」

ほうっ。と、ティアリュートの口から安堵のため息が漏れた。

「不幸中でも、至福はあるものね」

「何、ワケわかんないこと言ってるのよ！」

「――――落ち着きなさいよ」

ティアリュートは、鬱陶しいという顔で、伸ばされたクローネンベルクの腕を掴んだ。
「傭兵よ」
「傭兵？」
「そう。多分、業界最高峰の連中を頼んだわね――――馬鹿なヤツ等」
「まさか！」
びっくりした声を挙げたのはユースティアだったが、
「監禁されている間、ずっと考えていたんだけど」
ティアリュートは真顔で答えた。
「正規軍に配備される前のイスラフェルを前線に投入出来るだけの機材。この城を落とすにしても、入念な事前準備は必要だったはず。そして、いざとなれば、神速の動きで事を為し、正規軍が来る前に痕跡も残さずに撤収出来る程の人材。この二つを確保。維持出来るだけの資金力」
ティアリュートは、クローネンベルクの前に指を三本立てて見せた。
「こんなことが出来るのは、業界でも多くない――――ううん？業界でも、“辺境では正規軍扱い”される特権まで持っている程の奴らなんて、一つだけ」
「ど、どこよ」
「天原商会」
「あの複合軍産企業体の！？」
「そう。上は戦艦から下はナプキンまで何でも扱う、魔界最大の死の商人集団。オンディーヌ家は、奴らを雇ったに決まっている」
「……根拠は？」
「メースの肩に書かれていたマーキング。黒地に黄色の斜線が入っていた。あれは天原商会独特のマーキングよ。昔、連中と共同戦線張った時に見た覚えがある」
「……厄介なのが、敵になったってワケね」
クローネンベルクは、うなだれながら言った。

「もう……終わり？」
「まさか」
ティアリュートは苦笑いを浮かべながら言った。
「バカよね。天原はオンディーヌ家あたりなんて相手になる程、甘い組織じゃない」
「えっ？」
「――――高いのよ」
「高い？」
「あいつら、全てに置いて質が高い。それはつまり、営業力もあるってこと。詐欺師同然の営業の口車に、まんまと乗せられたらどうなると思う？」
「……」
想像が出来ないクローネンベルクは、きょとん。としたまま首を横に振った。
「事が済んだ後で、西シュロスベルク公国の国家予算並の、莫大な報酬を要求された挙げ句、容赦ない取り立てが待っている。オンディーヌ家の当主、身ぐるみ引っぺがされるわよ？」
「で、でも」
「天原商会と五分の取引したかったら、辺境のこんな小さい都市国家じゃだめ。同じ公国でも、ウェール公国位の規模にならなければ」
ウェール公国は、オンディーヌ家の治める西シュロスベルク公国の約２０倍以上の経済力を持つ、魔界の経済界においては、中堅上位に属する国だ。
経済力が２０倍も違ったら、普通なら勝負にならない。
「――――天原商会からの取り立てに耐えられるものじゃない」
「……」
「名前だけでコンタクトとったか、それとも誰かにそそのかされたか」
空を、正規軍の観測艇が飛び去るのを眩しそうに眺めながら、ティアリュートは言った。

「……天原商会の狙いは、西シュロスベルク公国の地下資源ね。最近、オリハルコンの有望鉱脈が見つかったばかりだし。借金のカタに採掘権を分捕るつもりね。相変わらず、スゴイことする」
「オンディーヌ家の動きは止まるというの？」
「停戦監視部隊とはいえ、正規軍のメンツ潰した以上、経済制裁程度は覚悟すべきでしょう？そうなれば、産業交易国家の西シュロスベルク公国の経済は持たない。下手すれば、反乱が起きてオンディーヌ家が潰されるわ」
「経済……か」
「その辺、上手く立ち回れば、この国にも希望の光があるでしょうね」
「……やって見せるわ」
「期待しているわ――――最後は、残念なことになったけど、結構、楽しかったわ」
「えっ？」
「だって」
ティアリュートは、寂しそうに笑った。
「姫様とはもう会えないでしょう？それなら、家庭教師の仕事は成立しない。私の仕事はこれでお終い」
「……あっ」
「生まれて初めて、ずっとやっていたい仕事に出会えた。そのことは感謝しているわ。クローネンベルク」
「……あのね？」
クローネンベルクは言った。
「何か、勘違いしていない？」
「そう？」
「そうよ！あなた、あれだけ姫様に愛情注いでいた割に、姫様のこと、何もわかっていないじゃない！」
「えっ？」
ティアリュートは驚いた顔で反論した。

「そ、そんなことないっ！姫様が何時何分に起床されて、何食べて、いつトイレに行って、どんな本読んだか、しっかり記録している」
「ほとんどストーカーじゃない」
「ほとんどじゃなくて、ストーカーそのものじゃないですか？」
「そうとも言うわね。ユースティア。
とにかく、姫様はヴァルホイザー家の後継者として、これから茨の道を歩まれるの！
領地を失い、城を落とされ、挙げ句が城に住むことも出来ず、正規軍に保護されているなんて、貴族のメンツからしても許されることじゃない！
社交界で笑い者にされても耐えるしかない！
姫様は、そんな中を生きていかなければならない！
それがあなたにはわかっていない！」
「っ！」
「……外向的な努力はする。だけど、世論の耳目をいい意味で集める必要がある」
「えっ？」
唐突な物言いの意味がわからず、ティアリュートはきょとん。とするしかなかった。
「ヴァルホイザー家を、どこかで売り込むこと――――世論の賞賛を受ける場所と方法でね」
「産業の振興でもやるの？」
「ここまで領地が荒れた以上、それをやってのける力はない。領地復興は、長い目で見なくちゃいけないことだから――――そうじゃなくて、もっと短期的な、そしてあなたが出来ることを考えなくちゃ」
クローネンベルクの目が、両手と両膝をついた、魔界では降伏を意味する状態で駐騎したバラライカに向けられた。
その視線に、ティアリュートは、彼女の言いたいことに察しをつけた。
「社交界で評価されるほど、家として武功を挙げろ――――そういう

のね？」
「……友達を危険に曝すのは、気が引けるどころじゃないんだけどね」
「辺境紛争じゃ駄目……となれば」
ふうっ。
ティアリュートは息を吐いた。
「――人間界に行って、義勇軍に参加。派手に暴れてこいと」
「あの2騎と装備は貸し出してもらえるように手配する。義勇軍に参加して、武功を元に復興するなんて没落貴族再生の典型例だけど――それが一番、確実なのよ。」
「……バラライカを貸してもらえるなら、何とかして見せる」
ティアリュートは頷いた。
「姫様が幸せな世界にいてもらえるなら、私は血にまみれる事なんて構うもんですか」
「……御免」
「あんたが謝る必要はないわよ。クローネンベルク。騎体と装備、それから義勇軍参加の手配も一緒に頼める？」
「――わかった」
「あ、あの」
おずおずとした声があがったのは、その時だった。
ユースティアだった。
「私も――お供します」
「ユースティア？」
「一人より、二人の方が目立ちますし」
「死ぬわよ？」
「私の命は、ヴァルホイザー家の御当主様に拾われた命です。御家のために役立つなら、命を捧げることに躊躇いはありませんし、何より」
ユースティアが潤む瞳でティアリュートを見つめる。
「――ティアリュート様のお側を離れたくありません」

「……だ、そうよ」
クローネンベルクが苦笑いしながら言った。
「よかったわね。お嫁さんも見つかったようだし」
「出来たら、嫁は姫様が……」
「同性でしょ？」
「こっちだって同じじゃない」
「つーかさ」
ぽん。
クローネンベルクが疲れ切った様子で、ティアリュートの両肩に手を置いた。
「お願いだから、もう少し、シリアスに行こうよ」
「……ごめん。で、何だっけ？」
「私も努力するから、死なない程度に人間界で暴れてこい。そう言いたかったのよ」

全ては姫のため。

姫を護るために

命を、姫に捧げるために

ティアリュートとユースティアが義勇軍に参加するために人間界へ向かう船に乗り込んだのは、それから1週間後のことだった。

金髪が散って　第一話（前書き）

遅くなってごめんなさい。
本編がやっと再開です。
記念に感想とか評価していただけると、とても嬉しいです。
よろしくお願いします。

金髪が散って　第一話

カールズバッド鍾乳洞に反応弾貯蔵施設があることは、米国民にも知らされていない。

今回の中華帝国軍本土侵攻戦において、彼等に占領地域から脱出させることの出来た反応弾のかなりがここに収容されていることなんて、知っているのは米軍上層部のほんの一握りだけだ。

「うわぁ……」

サーチライトに照らし出された格納庫の中。棚に整然と並べられた反応弾の弾頭が鈍い光を返す。

ただ、純粋な化学反応を引き起こすだけに作られた道具。

化学反応をもって無辜の人々を殺す死神の玩具。

美奈代は、たった一発でも使って欲しくない。

そう思うのが普通だと、そう思う。

「周辺サーチ。トラップの可能性は？」

「ありません。まさか、こんな所にブービートラップしかける程、米軍も酔狂じゃないでしょうし」

「そう願うわ――TAC（タクティカル・エア・カーゴ）、前進する。白石？転送システムを起動準備」

TAC（タクティカル・エア・カーゴ）が美奈代達の間をすり抜けて格納庫に入る。

「狙撃隊と宗像」

美奈代は涼達に命じた。

「第一層まで戻って退路を確保。月城大尉と鵜来、第三層。山崎と柏は第四層で警戒体勢にシフト。風間、格納庫入り口にて第六層に備えろ。魔族がどこに隠れているかわからないぞ」

「了解」

「特に宗像」

「ん？」

「米軍かドイツ軍が入り込もうとしたら、その時は、意地でも足止

めしろ。時間がほしい」
「――難しい仕事を」
「交渉事は、お前と柏が適任だが、ここはお前に任せる」
「了解した。狙撃隊、続け」
「――ちょっと」
不満げな声がレシーバーに入った。
「私は？」
「決まってるだろう？」
美奈代は答えた。
「私と一緒に力仕事だ」

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の貨物搭載室のカバーが開くと、中から四角くて黒い物体がロボットアームによってＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の上にせり上がってきた。
長方形の真っ黒い塊。
「まるで羊羹みたいですね」と、移動中にちらりと見た褄子が呟いた。
「とらやの羊羹が食べたいです」
「私、舟和の芋羊羹がいい……帰国したら食べたいわ」
「甘いもの、最近ご無沙汰ですからね」
「甘味のパイロット用配給止まったしね」
「あれはショックでした。私、悲しくて涙で枕を濡らしたんですよ？」
“Ｄ－ＳＥＥＤ”はシールドとビームライフルを準備しながら、美奈代達には背を向けている。
「ホント、そういう所は羨ましいわ。ところで津島中佐、これ、何ですか？」
「黙って見てろ」
紅葉がそう言った途端、長方形の塊が、美奈代の見ている前で左右に広がり始めた。
「……羊羹が薄く広がっていく」

「食い物から離れろ」
長方形を構成していたのは、黒いパネルだと、美奈代はようやく合点がいった。
「……これ、まさか」
問題は、その黒いパネルの上に白く書かれた得体の知れない模様。円と三角を複雑に組み合わせたそれは、およそ軍隊で見慣れるべきシロモノではない。
「……魔法陣？」
「そうよ」
紅葉が頷いた。
「簡易テレポートシステムは、魔法科学技術の範囲。結局ね？科学なんて言ってるけど、基本は昔ながらの魔法陣なのよ」
「……はぁ」
「グズグスしてないで、ラックから弾頭を確保しなさい」
「どれから行きます？」
「ああ。ちょっと待って――Ｍｋ１２Ａか……こんなの、まだあったんだ。大尉？リンク確認してからでいい。そいつの中のＷ７８は、爆発しやすいの。起爆に通常爆薬使用する関係で、ラックから落としたらドカンよ。ちょっと待って」
「り、了解」
「紅葉ぃ。こっちは？」
「ああ。そっちのＢ８３はいい。ラックごと積み重ねておいて……白石。リンク、つなげて」

ポウッ

魔法陣が青白く光り輝いたかと思うと、何だか得体の知れない白い靄が魔法陣を掻き消した。

「これは？」

「空間が歪んでいる証拠。今、ちょっと言えないところとつながっている。向こうから搬送用のローラーコンベアが伸びてくるところだから」
その言葉が終わる前に、靄の中から巨大なローラーコンベアが確かに伸びてきた。
「大型物資搬送用だから、問題ないはずよ。急いで。容赦なく、片端から運び出して。ただし、落とすことだけは禁止」
「……了解」
美奈代は手近の棚からコンテナを引き出し、コンベアに載せた。コンテナを押すと、コンベアの上を転がって靄の中へと消えていく。
「これでいいんですか？」
「――いいわね？上等。大尉？向こうで受け取ったって」
「……よかった。続けますよ」
「ねぇ。紅葉」
フィアが訊ねた。
「これ一発、いくらするの？」
「泉大尉千人分が、一生働いて帳尻が合うかギリギリの所ね」
「うわぁ……高いんだぁ」
「……私、褒められたの？」
「少なくとも、私は褒めてない」
フィアは、口も止めないが手も止めない。
「ほら。急ぎなさいよ。時間は待ってくれないわよ？」
「……了解」
「どうです？」

「……駄目ですね」
“Ｄ－ＳＥＥＤ”のコクピットで、祷子は水城中尉の返事を受けた。
「鍾乳洞にマジックレーダーを通さない物質が含まれているようです。第六層へのサーチが飛びません」
「……問題は」
祷子は、ポツリと言った。
「第六層に、一体、何体の敵がいるか――――ですね」
「しかし」
水城中尉は言った。
「この落盤で互いの行き来が出来なくなった。つまり、向こうも手が出せない状況であることは事実だと思います」
「思いたい。ですね」
「……はい。ところで」
「はい？」
「生体反応がありますけど、どうします？」
「ログ、消してください。私達は、見なかったことにしましょう」
「いいんですか？」
「殺したいんですか？」
「……ログ、消しておきますね？システムエラーで処理ってことで」

「ティアリュート様？」
「……待たせた」
サライマの脚部にあるコンテナに潜り込んだティアリュートが、何かを引っ張り出してきた。
それは、ユースティアの目には、四角い紙包みと金属の塊にしか見えなかった。
「それは？」
「ここへ移動する途中で、みんなが人間界の武器を面白がって回収

していたのは覚えてるだろう？」
「はい」
ユースティアは嫌悪感をあらわにして頷いた。
「面白がって、皆で人類を、あんな風になぶり殺しにするなんて……思い出したくもないです」
「同感だ。メース使いの風上にも置けないと、私も、ああいうのは嫌うが」
ティアリュートは、その四角い包みを、落盤に押しつぶされた白い塊と、落盤の間へと押し込んだ。
「多分、これでいいと思う」
「それは？」
「ユング教官が、何かの役に立つと確保していた、人類の作った爆薬……そしてこれは」
コンッ。
ティアリュートは、手の甲で軽く白い塊を叩いた。
「ユング教官に教わった。あの人は、人間界の武器にも精通しているからな」
「……はぁ」
「人間の作った爆発系兵器。誰かが、戦利品だって持ち込んだ代物だ」

Ｍｋ８３汎用爆弾という名称は知らなくても、ティアリュートの判断は正しかった。
落盤に半ば押しつぶされた格好でいるのは、米軍の１，０００ポンド（４５４キロ）爆弾だ。
誰かが面白がったのだろう。
弾頭の安全ピンはすでに抜かれていた。
落盤で爆発しなかったのが奇跡のようなものだ。
ティアリュートが叩いたところは、その真横ということも含めて、魔族軍が、人類側の兵器についていかに無知であるかを証明するよ

うな事態だ。

「万一に備えて、コクピットに入っていてくれ。ユング教官によれば、1分で爆発する――――そうだ」

ティアリュートは、ユースティアをせかした。

「急げ」

「はいっ！」

「さて……と」

ユースティアが自分の騎のコクピットに潜り込んだのを確かめたティアリュートは、ユングに教わっていた起爆方法を思い出しながら、ぽつりと言った。

「これでしくじったら――――もう終わりね」

ティアリュートは、信管に取り付けられていた安全ピンを抜いた。

「これで、あと4つ」

殲龍（せんりゅう）がコンベアにコンテナを載せた。

「美奈代？そっちは？」

「あと……3つだ」

「敵がそれまで大人しくしててくれるといいんだけど」

「願うしかないな」

「ねぇ。紅葉」

「何？」

「最悪、このシステムで私達も逃げていいの？」

「駄目に決まってるでしょ？私達、どうするのよ」

「TAC（タクティカル・エア・カーゴ）を放棄して逃げる」

「……ああ。って！そんなコトできるわけないでしょう！？」

「今、思い切り納得してなかった？」

「黙れっ！問題発言禁止っ！」

紅葉が続けて何かを言おうとした、まさにその瞬間――――

ドンッ！
ズズズンッ！
爆発の連鎖が鍾乳洞を揺るがした。
「な、何っ！？」
格納庫の天井からパラパラと埃が落ちてくる。
「美奈代さんっ！」
祷子から通信が入った。
「敵、落盤を爆破した模様！反応２！」
「って！」
美奈代は手にしたコンテナをコンベアに載せた。
「今から行く！フィア！？コンテナとＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を頼む！」
「わかった！」
「――――開いた！」
爆煙の向こうに、光が見えた。
第五層に通じる通路の落盤が吹き飛ばされたのだ。
「生存者との通信開く！？」
「やってみます！」
ユースティアの呼びかけを聞き流しながら、ティアリュートは第五層の敵の反応を探った。
敵も突然のことに、どう反応すべきか迷っているのか、それとも賢明というべきか、こちらへ向けて襲いかかってはこない。

――せめて

ティアリュートは思わずロザリオを握りしめた。

――生存者の回収だけでも。

「ユング隊長からです！」

ユースティアから明るい声があがった。

「第五層、生存者3。重傷1。脱出ポッドでの回収を求めています！」

「他は！」

「反応なし。地上へ脱出した可能性も」

「ユースティア」

「はい」

「脱出ポッドを持て。私が人類側を抑えるから、その間に教官達を頼む」

「はいっ！」

反応は2？

美奈代は、それにひっかかった。

「たった2騎……か」

「美奈代さん？」

祷子から通信が入った。

「どうします？」

「……格納庫入り口で待機」

美奈代は答えた。

「敵の目的は、ここからの脱出のはず。無駄な戦いは避けろ」

「いいんですか？」

「2騎程度、どうとでもなるだろうし」
美奈代は楽しげなまでに苦笑いを浮かべた。
「ゲームであるだろう？一番、地下にいるのがボスキャラって」
「定番ですね」
「つまり、一番厄介なヤツだ。それが勝手に出ていってくれるなんて、普通は考えられない話だろう？」
「ゲームでやったら詐欺ですね」
「この戦争そのものが詐欺みたいなもんだ。何が起きても、詐欺みたいなもんさ」
「私達も――――ですか？」
「戦争がなければ」
美奈代はビームライフルを準備しながら言った。
「私達は、戦場に駆り出されるなんて詐欺にあわずに済んだはずだ」
「被害者の会でも作ります？」
「戦死したら、あの世で作ってやるさ。もっとも」
「もっとも？」
「先に死んだ連中が似たようなの作っているだろうけどね」
「神様も」
祷子は本当に楽しげに笑った。
「そんなのあったら、あちこちで訴えられて大変でしょうね」
「まぁ、しょうがない」
美奈代は、何でもない。という顔で答えた。
「創造主（デミウルゴス）は不完全な故に、不完全に世界を作り上げた。
神の子、或いは創造物であるはずの人間が、かくも不完全なのは、作り上げた彼等が不完全だからだ」
「……それって」
祷子は答えた。
「魔族や神族によって作られた被造物である人類のことですか？」
「これを聞いた時は驚いたんだ」
美奈代は答えた。

「人間は、魔族や神族という異世界の生命体によって作り上げられた存在だとすれば、彼等こそが我々の創造主（デミウルゴス）として説明できる。この世が不完全なのは、彼等の失態だと、責任転嫁まで出来るんだから」

「責任転嫁ってのがひっかかりますけど」

祷子は笑ってしまった。

「人類の不完全さを認めているというのですね？」

「人類が万能なら、神なんて必要なものか。それに、真の神を自分の内に探せという言葉は、様々な宗教で説かれているところだ。仏教でも、神道でも似たようなこと言ってないかな」

「神道は知りませんが、真の仏は己の内に――ですね」

「まぁ、とりあえず」

煙の向こうから、サライマが現れた。

「向こうの出方を待とう。下手に刺激する必要もない――フィア？」

「あんた達のワケわかんないやりとりの間に終わったわ」

「そう――津島中佐？」

「もう少し待って。システムの収納作業、もう少しかかる」

「部隊全騎へ。敵の残存部隊が撤収する。見送ってくれ。無駄に戦う必要はない」

「宗像だ。どういう騎士道精神だ？」

「無駄弾は使うな――そんなところだ。たった2騎だ。見逃してやってもどうということもない」

「……了解した」

「……えっ？」

第五層で何が起きたのか全く知らないティアリュートは、シールドを構えながら第五層へと単身飛び込んだ。

こんな無茶をしたくないのが本音だが、やるしかなかった。

何騎もの敵が待ちかまえていると、ティアリュートは本気でそう覚悟していてたのだが――。

「て、敵は？」

そう。

敵の反応が、たった2騎。

しかも、2騎共、シールドは構えているが、武器を構えていない。

そのうちの1騎が、しきりに手をパタパタさせている。

――行け。

ティアリュートにはそう見えた。

理由はわからない。

ただ、人類に交戦の意志がないことだけはそれでわかった。

「い、行けってこと……よね？」

ティアリュートは、それまで持っていた覚悟が霧散して、むしろ拍子抜けした顔で周りを見回した。

「お言葉に甘えさせていただければ……ありがたいけど」

「ティアリュート様！」

ユースティアのせっぱ詰まった声が入る。

「負傷者の容態悪化！危険です！」

「回収急いで！」

シールドを構え、背後をホバー移動するユースティア騎の楯になるよう、慎重に騎体を滑らせながら、ティアリュートは目の前にいる人類側のデミ・メースに神経を集中させる。

第四層へと通じる通路の途中でユースティア騎が止まった。

片膝を付いたユースティアが、脱出ポッドを通路脇の部屋の前に置く。
ぐったりとしたメース使いの頭部と足を持った傭兵仲間が何事かわめきながら脱出ポッドへと駆け寄ってくる。
コクピットから飛び降りたユースティアが、脱出ポッドのハッチを開いた。
「腹をやられている！」
負傷者のサスペンダーを持っていたのは、ユングだった。
「療法杖を出せっ！」
「はいっ！」
療法杖は、治癒魔法が予め封印されている魔法の治療具だ。
脱出ポッドに収容されているのは、使用回数は多いが、止血や火傷の治療――死なさない程度の性能しかない。
それでも、何もしないよりマシ。
「この程度なら、数回、杖振るってやれば助かるっ！」
ユースティアはポッド内部の壁に設置されているベッドを準備する。
「下ろすぞ！」
「はいっ！」
負傷者がベッドに横たえられると、医療用品のコンテナから療法杖を取り出し、ユングに手渡した。
「よし――俺達の命はあずけた。頼むぞ？ユースティア」
「揺れますから、体を固定してくださいね！？」

「月城だ。本当に撃たないつもりか！？」
「駄目です！敵は負傷者を回収中！」
「相手は魔族だぞ！」
「国際騎士法を拡大解釈します！負傷者の収容が必要と判断される場合、戦闘停止が義務化されていますから！」

「魔族だというのにか！」
「魔族相手なら、何してもいいというのですか！？」
「法の適用範囲について言っている！いつからあいつらに国際騎士法が適用されるようになった！」
月城は顔を真っ赤にして怒鳴った。
「泉っ！相手が何だかわかっているのか！」
美奈代にはわかっている。
相手は魔族。
そして――月城にとっては部下の仇以外の何者でもない。
それを目の前でみすみす見逃せというのは、彼女に耐えられる判断ではない。
だけど――
「判断するのは前線指揮官の私ですっ！」
美奈代も負けていない。
「私の指揮に従って下さい！」
「――っ！」
「発砲は厳禁っ！各ＭＣ（メサイア・コントローラー）は、騎士の行動に責任を持て！命令違反は厳罰だぞ！――ったく！」
美奈代は舌打ち一つ、内心で毒づいた。
「月城大尉――厄介だな」

金髪が散って　第一話（後書き）

遅くなってごめんなさい。
本編がやっと再開です。
記念に感想とか評価していただけると、とても嬉しいです。
よろしくお願いします。

金髪が散って　第二話

「泉は何を！」
怒り狂いながらも、目の前を通過していくサライマ達を、月城は見送るしかない。
「――――くそっ」
その目に浮かぶのは、純粋な憎悪だけだ。
泉の奴も、
月城は本気で言いたかった。
部下を目の前で失ってみればいい。
その敵が、目の前でのうのうと移動していたら、どうしたくなるのか、それでわかるだろう。
魔族なんて、私にとって全て敵だ！

火器管制装置
操縦権非承認

「悪く思わないで下さいね？」
月城騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）、坂巻中尉は、命令を受けても、そうとしか言わなかった。
通信モニター上の彼女は、普段からポーカーフェイスというか、単に無表情というか、月城も扱いに困るほどの無表情を崩そうともしない。
こんな時だ、「大尉の命令ですから」とか、弁明じみたことでも言ってくれたっていいじゃないか！
無言のまま、操縦権を剥奪するとは何事だ！
「敵をみすみす、目の前を通過されるのを黙ってみていろというのか！」
「……あら」

坂巻中尉は、少し驚いた。という顔で訊ねた。
「敵って――何ですか？」
「魔族に決まっているでしょう！」
「……」
「……何ですか？」
「いえ？」
坂巻中尉は、眼をつむって小さくため息をついた。
「私、大尉とパートナーを組ませていただく前に、あなたの過去を調べさせていただきました」
「……」
「先に太平洋上空で、何があったのか。その戦闘詳細も目を通させていただいています。部下だけでなく、長年、苦楽を共にされた、専属パートナーのMC（メサイア・コントローラー）まで亡くされて、さぞご無念でしょうね」
「――それで？」
サライマ達は第四層を抜け、上層へ向かっているだろう。
今からでもいい。
叩き殺しに行ってやりたい！
月城大尉の衝動を抑えているのは、操縦権を失って言うことを聞かないSTRシステムだ。
頭に完全に血が上っている月城に、坂巻中尉は冷たく言い放った。
「先程の泉大尉との会話を聞いて、あなたに失望しました」
「なっ！？」
「内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）総隊長まで栄達された方の発言としては、あまりに幼稚です」
「なっ……に……っ」
顔を真っ赤にさせた月城に、坂巻中尉は冷たい態度を崩さない。
「泉大尉の方が、まだ指揮官としての素質に恵まれていますね」
「なっ」
もう、怒り心頭に発した月城は、言葉が出てこない。
「――太平洋上空で戦死した二人。神坂少尉と柊少尉が、どうし

て命令に背いたか、あなたを見ていてわかりました」
「……」
「――あなたが、内心では同じ事とを考えている。そう、部下に見透かされていたからです」
「っ！」
「否定します？あの時、自分はそんなこと考えていなかった――そう、否定します？出来ますか？今の態度で」
「……」
「泉大尉は、はっきりとMC（メサイア・コントローラー）にまで厳命し、同時に、共同責任まで取らせると、部下に発砲禁止を自らの態度で示しました。
これでは部下は撃ちません。
撃てないですよ。指揮官の意志がはっきりしてますからね。
部下の甘えが入る余地、ないですもの。
でも、こういう時に発砲を主張するあなたは？
あなたは一人だけ敵の撃破に動こうとした。
それが、内心でのあなた。
死んだあの二人は、それをわかっていた。
わかっていたからこそ、動いた。
もし、あの二人が生き残っていたら、きっとこんなことを言ったでしょうね。
“隊長だって、本当は同じ事したかったはずです”
――さて。
あなたは何て答えたでしょうね」
「……」
この問いに、
月城は、
答えることが出来なかった。

「魔族軍騎、外に出ますよ」
涼が顔をしかめながら、通路の端に騎体を移動させた。
戦闘の意志を示さないよう、ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）は筒先を下に向けたままだ。
「――――宗像中尉」

「駄目だ」
宗像は涼の言葉を遮るように言った。
「発砲なんてするな。下手に警戒させるな」

「……命令には従いますけど」
サライマが２騎、涼の前を通過していく。
鍾乳洞周辺には、既にスモークを焚いている。
そんなことを命じたのは宗像だ。

あなたの敵は、何ですか？
私達は、何と戦っているのですか？

涼は、本当に二人の考えが理解できない。
理解しようとしても、出来ないのだ。
魔族は敵だと、そう教えられてきた。
なら、殺して何が悪い？
私達は、殺すべき義務があるはずだ。

「窮鳥懐に入れば猟師も殺さずとも言う」
宗像は言った。
「たった２騎。しかも負傷兵の救出までやる連中だ。そんな奴を撃

破して、お前は誰に武勇を誇るんだ？私や泉は、そんな武勇を求める奴を部隊に置くわけにいかん」

「ですけど」

「――――何だ？」

「敵、ですよ？」

「敵なら皆殺しか？」

「それが――――その」

皆殺し。

その言葉の意味する所を思い、涼は言葉を詰まらせた。

「わ、私達は」

「涼」

そっと、諭すように言ったのは芳（かおる）だ。

「私、泉大尉の判断は正しいと思うんだ」

「えっ？」

「逃げる敵まで殺す必要なんてどこにもないじゃない。連中を逃がして、何か損するの？」

「損とか得とか」

「戦争は」

寧々が言った。

「ゲームじゃないんです。スコアに拘りすぎると、気が付いた時に

は、相手のスコアのうちに入りますよ？」

「……っ」

「わ、私」

涼は言った。

「お姉さまが、敵に甘いんじゃないかな……って、ちょっと心配になっただけよ」

「甘くなんてないよ」

芳（かおる）は言った。

「魔族軍だって、仲間、しかも負傷兵抱えての撤退、見逃してくれた相手に逆襲しかけることは、さすがにないよ」

「それが甘えだって言いたいの！」

「こっちの都合通りに振る舞いを解釈してくれる保証なんて、どこにあるのよ！」

「あるよ」

「どこに！」

「――あれ」

芳（かおる）が指さした先。

スモークの向こうの小さな丘にサライマ達が着陸していた。

「？」

サライマの1騎が楕円形のラグビーボールのようなものを地面に下ろすところだった。

「あれが？」

「私の判断が間違ってなければ、あの2騎が、こんな所に着陸する危険を侵している理由は一つだけ」

「何よ」

「見てればわかる――――多分ね」

「？」

妙に自信満々の芳（かおる）に、涼は不思議に思ってモニターをズームに切り替えた。

「……えっ」

丘の影からワラワラと出てきたのは、一団の人影。

魔族軍だろう。しかも、かなりの負傷者がいる。

「……あれって」

驚く涼の前で、何人かが立ち止まると、まるでこちらの視線に気付いたかのように、こちらを向いた。

「わっ」

目線があった様な錯覚を感じて、涼は思わず声を挙げた。

その涼に、

魔族は、

姿勢を正してまっすぐに手を斜め前に伸ばした。

敬礼だ。

そう、涼にはわかった。

敵に対して、敬礼を払ったのだ。

彼等は、敬礼を解いてから、下ろされたボール状の中に乗り込み、サライマ達と共に宙に舞った。

「――――ね？」

芳（かおる）は嬉しそうに言った。
「敵にはもう、戦闘の意志はない。撤退させてやればそれで終わるの。
それに、あんな義理堅い連中でしょ？
撤退させてあげれば、後ろから襲いかかってくるようなことはないよ」

「……お姉さまは」
涼は、何だか複雑な気持ちだった。
「それがわかっていた？」

「言葉は通じてなくてもね？仕草で通じるものはあるでしょ？“行け”って、それだけやってね？向こうが戦おうとしなければ、戦わなくても済むって、それがわかるでしょ？逃がしてやればいいんだよ。戦うなんて、本当は無駄なことだから」

「……」

「戦うばかりが指揮官じゃない。騎士じゃない。戦わずに済む方法があるなら、その手段を取ることを躊躇わない」
芳（かおる）は嬉しそうだった。
「それが出来る辺り、私達、良い指揮官の下にいるって、そういうことだよ。涼」

「……そう、思う、ことに、する」
答えながら、まだ、どこかで、わだかまりがとれていないことを、涼自身が自覚していた。
でも、そのわだかまりを、涼自身が説明できない。
割り切れない。
それが、涼の本音だった。

「小清水少尉？」
そんな涼に、寧々は言った。
「指揮官の命令は絶対です。いくらお姉さまだろうと、あなたはその命令に従う義務がある。ちょっと背いてもいいだろうなんてのは、あなたの甘えでしかありません」
「……っ」
「大尉から女房と頼られる身になりたかったら」
寧々は、そっと背を押すような口調で言った。
「まず、大尉の発想を理解する。そこから初めてあげなさい。どうして大尉は、ここで敵を逃がしたか。それを徹底的に分かろうとしなさい。まずそこからです」
「わ……私っ」
「牧野中尉にでも相談したらどう？」
「高くつきそうで恐いですけど……」
涼は頷いた。
「……やってみます」

“鈴谷（すずや）”との回線が開かれたのは、それからすぐのことだった。
「敵は全滅？」
「2騎を含め、残存勢力は撤退」
「その2騎は？」
「見逃しました」
「――あ。そう」
後藤は、皆の前で平然とした顔を崩さない。
後ろの美夜も、何でもないと言う顔で、小さく頷いただけだ。
「ご苦労さん」
部隊で散々揉めた2騎を見逃した話は、二人には理解できている

様子だ。
まるで問題とさえしていない。
それで当然。
そう、二人は態度で示していた。
少なくとも、月城にはそれが気に入らなかったし、涼には納得がいかない。

「さて」

後藤は大きく息を吸うと、姿勢を正した。

「これからが、大仕事だ」

その顔は、本当に真顔だった。
ほとんどの部下が、後藤のそんな顔を見たことがなかった。

「――総員、傾聴」

その言葉で、涼は思わず鯱張ってしまった。
後藤の言葉には、それ程、人を従わせる力があった。
強引というのではない。
脅迫的というべき、そんな力だ。

「これは、独立駆逐中隊に発せられた」

後藤は、通信モニターの見えない位置から白い包みを取りだした。

「――――勅命である」

勅命。

天皇からの命令。

皆が、目を見開いて、言葉さえない。

後藤が、包みをピラッと裏返した。

そこに描かれているのは、間違いない。

菊の御紋。

美奈代達、近衛騎士にとって神よりも絶対と見なければならない存在が、そこ描かれていた。

「魔族軍なんてどうでもいいんだ」

後藤は言った。

「1騎や2騎、人道的に扱ってやる程度の余裕があってこそ、俺達は精神のバランスがとれているってもんさ。

そんなことで一々、仲間割れするな。

馬鹿者共め」

馬鹿者

今まで、散々、後藤に怒られてきた美奈代達だが、後藤から罵声を浴びたのは、この時が初めてだった。

「的に対する礼節なんて、今更に軍人勅諭の精神を説くつもりはない。お前達に説くのは、この勅命だけだ」

「……っ」

通信が全てモニターされていることに、今更ながら気付いた涼は、顔から火が出るほど恥ずかしかった。

「い い年して、子供じみた口ケンカした罰だ。
俺の言葉で翻訳して命ずる。
お前達は、すぐに第六層に降下しろ。
そこに環状列石がある。
環状列石を確認した時点で俺に報告しろ。
いいか？
これは、お前達が考えている以上に重要なことだ。
これからの作業の中心は」
ジロリ。
後藤の視線の先。
そこにいたのは――――

「ツヴォルフ中佐」

「わ、私っ！？」

「何か――――感じているんだろう？」

「っ！？」

「お前さんが作業の中心だ。泉」

「はい」

「中佐を守れ。中佐が全ての“鍵”だ。部下全員ぶっ殺してでも、
中佐一人を守れ。これ以降のお前の任務はそれだけだ」

「……了解」
美奈代は頷いた。

「中隊は第五層にて集結。集結次第、第六層へは私と風間で先陣を切る。フロア確保の後、フィア」

「……っ」

「どうした？」

「な、何でもない」

「体調不良か？」

「ち、違うわよ」

「――恐いのか」

「う、五月蝿いわねっ！」

フィアは声を荒げた。

だが、その声は震えていたし、泣き出しそうにさえ見えた。

「いくら、どんなに恐くても、あんたに弱みなんて見せるもんですか！」

「……」

「何よっ！」

「――宗像」

「何だ？」

「第六層に降下の後、私は騎体を降り、フィアと行動を同じくする」

「おい？」

「余計なことするな！」

「恐いなら、同じ所にたってやる。私はお前にその程度しかしてやれない。だが、私はお前の指揮官だ。部下一人だけ、危険に曝すマネはしない」

「格好つけるな……バカぁ」

グスッ

フィアは乱暴に涙を拭った。

そして――――

「そんなことしなくていいっ！」

フィアは、突然に怒鳴り声をあげた。

「後藤中佐！」

「……」

「返事はない」

「聞こえてるんでしょう！？返事位してよ！」

「……聞こえているよ」

「あんたが――――ううん！？あんたの背後にいる“誰か”が、私に何をさせたいのかはわかっている！私にはわかるっ！だけど、そのせいで、誰一人だって、危険にさらしたくない！だから、これは交

換条件よ！」
通信モニターの中で、フィアの右腕が動いた。
ＳＴＲシステムから抜かれた右手が掴んでいたモノ。
それは――拳銃だった。
「フィアッ！？」
美奈代が目を見開いたのは無理もない。
フィアは、拳銃を自らのこめかみに押しつけていた。
「やめろっ！」
「五月蝿いっ！後藤中佐っ！」
「……はいよ」
「あ、あんた、警官だったんでしょう！？交渉しましょうよ。私に死なれたら、困るんでしょう？あんたも、後ろにいる人達も」
「……選択の余地は」
後藤は頷いた。
「……なさそうだな」
「美奈代達を、第一層まで移動するように命じなさい」
グイッ
フィアは、こめかみに銃口を突きつける力を強めた。
銃が震えているが、その力は強い。
「――あんた達が望むものは、私の判断が間違っていなければ、地上でわかるはずよ。
地上なら、美奈代達が危険に曝されることはない。

だから――――だからっ！」

「――――わかった」

後藤は頷いた。

「泉」

「命令を拒否します」

「……」

「フィア、何を考えている。私達は仲間だろう？お前一人が危険に曝されて」

パンッ！

耳をつんざくような銃声が、美奈代の説得を掻き消した。

照準をずらして、フィアが発砲したのだ。

フィアの美しい金髪が、幾本となく宙を舞った。

「……私が本気だって、これでわかった？」

「……中隊長より全ＭＣ（メサイア・コントローラー）に厳命。全騎士のコントロール剥奪を命じる。全ＭＣ（メサイア・コントローラー）は、騎体を地上へ移動させろ。それと、ツヴォルフ騎を刺激させるな。通信の発信は俺だけに限定する。発信を止めろ」

「そんなっ！」

ピーッ

警報が鳴り響き、

警告

操縦権剥奪

美奈代の前に、無情な警告が表示された。

「牧野中尉っ！」

ＳＴＲシステムを操作するが、“死天使”はびくとも動かない。

「だめですっ！」

ブースターが作動し、モニターの景色が動いていく。

「このまま、このままフィアのやりたいようにさせたら！」

理由はわからない。

虫の知らせ。

第六感。

そんなものだろうか？

フィアが、恐ろしく遠い所へと行ってしまう。

そんな、確信にも似た思いが、美奈代の中で沸き上がってくる。

「……美奈代？」

フィアの声が、美奈代の耳に届いたのは、その時だ。

「ありがとう。

ケンカばっかりだったけど、

あなたは私を友達だって認めてくれた。

最後まで、仲良くなれなかったけど、私はあなたにあえて嬉しかった。

瞬を――――お願いね？

上手く言えないけど……」

「フィア？何を……ねぇ……何を言ってるの？」

「……さようなら。私の友達」

「フィア！？」

死に物狂いで美奈代はＳＴＲシステムを動かそうとした。

「何言ってるのよ、フィア！？こらっ！私の許可なくてどこに行こうというのよ！」

行かなくちゃ。

フィアの元へ。

フィアの所へ行かなくちゃ！

動け！

動いてよ！

美奈代は、声をからして叫んだ。

無駄だと、理性は割り切っている。

行っても無駄だと、そう、語っているのに。

感情は抑えようがない。

フィアの名を何度も叫ぶ喉が痛い。

あふれ出る涙が、止まらない。

なのに、自分はフィアから遠ざかっていく。

その美奈代の耳に、フィアの歌声が聞こえてきた。

Ｌｅｔ　ｍｅ　ｓｉｎｇ　ｆｏｒ　ｅｖｅｒ　ｍｏｒｅ

You are all I long for
All I worship and adore
In other words, please be true
In other words,
I love you

フィアの歌声が途切れると同時に、
美奈代の騎体は、第一層を抜けた。

そこで待っていたものは――

残酷な現実だった。

金髪が散って　第二話（後書き）

ちょっと疲れました。
フィアはもっと活躍させてあげるべきキャラですか。

感想とかいただけると嬉しいです。
よろしくお願いします。

金髪が散って　第三話

「反応でました！」
監視を担当していたオペレーターの興奮した声が室内に響いた。
「出たか！」
興奮気味にソファーから立ち上がったユギオの目の前で、

ひょいっ。

将棋盤がダユーの手によって神速の速さで持ち上がった。

「――――そのようですわね」

「なら急いで」

「急いで、次の手をどうぞ」

ダユーの細い指が盤を指す。
盤上でのユギオ軍は壊滅状態。開戦まで対等の勢力を形成していた駒達の大半は今やダユーの掌の中で嬲られている。

「――――さっきの待ったは、駄目ですか？」

「だ・め」

懇願するユギオに、ダユーは子供じみた返事をする。
それだけで、並の男なら襲いかかりたくなって当然な程の興奮が沸き上がってくる。
文句を言っていた自分が間違っていたようにさえ思えてくる。

交渉の時、こういう美貌の持ち主は得だよな。と、ユギオはつくづくと思った。

「それにしても」
ダユーは駒を弄びながら言った。
「人類の発想は面白いですね」

「はい？」
これでどうですか？
ユギオは渾身の思いで一手を指すが、

「倒した相手を」

パチッ
ダユーが新しい手を指す。途端にユギオの顔が青くなった。

「こうやって使うって発想が面白い。そう言ったのです」

「弓状列島独特の発想ですね」
ユギオは天井を仰ぎ、ソファーの背もたれにひっくり返った。
「ここ、北米大陸や欧州大陸でさかんなチェスというボードゲームにはない発想です」

「弓状列島の人間は、消耗戦を嫌う発想が強いようですね」

「使えるなら死体でも使うという、さもしい発想にも見えますがね」

「貴男の番ですよ？」

「――――負けですよ」

ひっくり返ったまま、ユギオは手をパタパタと左右に振った。
「これは勝てない」

「あら」
ダユーはちょっとだけ残念。という顔で言った。
「あっさりと逃げるんですね」

「私は商人ですから」
ユギオは起きあがってから答えた。
「参入のタイミングも大切ですが、引き際はそれ以上に大切なんです」

「すべてそうですわ?」
ダユーは意外。といわんばかりに眉をピクリと動かした。
「戦争だって」

「同意します。ただ、引き際以上に大切なことを、私は忘れていましたよ」

「何です?」

「ケンカを売って良い相手かどうか。参入して元がとれる市場か。その見極めです」

「成る程?」
ダユーは、嬉しそうに頷いた。
「確かにありますわね。戦争とビジネスは共通点が多いですから」

「でしょう?あなたにボードゲームを挑んだ時点で負けていたんです」

「戦争もビジネスも」
ダユーはユギオの顔も見ずに、ユギオ側の駒を次々と動かしていく。
その動きによどみはない。
ダユー軍とユギオ軍は、ユギオの目の前で壮絶な戦いを繰り広げる。
ただ、あっけにとられるユギオの前でそれまで圧倒的不利だったはずのユギオ軍があっさりと形成を逆転させるのに、１０手を必要としなかった。
「ゲームであり、「スポーツ」でも「芸術」でも「科学」でもある点で同じです。ですから、勝つためには総合的なセンスが必要です」
「ほらね？」
ユギオは言った。
「私の言ったとおりだ」
「？」
「相手を選ばないと勝てない――そんなこと言いましたよね？」
「イヤなことをおっしゃいますわ」
ダユーは盤に視線を落としたまま頷いた。
「何か、とても暗示的に聞こえました。私達の将来を」
「それほど見事にプレイされる貴女なら、心配さえしませんよ。良いパートナーが得られたと感謝こそすれ」
「――“鍵”が仕事をした様子ですね」

「ですね」

「……浮かない顔ですね」

「また、身柄確保まではいかなかったもので」

「またワガママ言って」

ダユーは、駒を動かす手を止めた。

「バチがあたりますよ？」

「年中当たってますよ」

ユギオは苦笑した。

「文句が言いたくなる位」

「どうするんです？」

「自分のツメの甘さに反省しきりです」

ユギオは将棋盤の横に置かれていた茶菓子の包みを解いた。

「イツミと交渉した時、第二の封印で最後か否か。その程度のことも確認していなかった」

「……バカ」

「同意します。ただ、“鍵”がここで動いたということは」

ユギオは立ち上がった。

「次で最後でしょう」

「次？ここではないのですか？」

「あのへそ曲がりのイツミがこんな所に最後の封印を仕掛けるはず

がない。そう、疑問には思っていたのです。イツミはイツミで弓状列島には思い入れが深いですから」

「意味が分かりません」

ダユーは小首を傾げた。

「封印とあの列島と、どう？」

「あの弓状列島は、両軍最後の戦闘が行われた地。終戦協定が締結された地。魔族軍が封印された地。

出来すぎだと思いませんか？

あのちっぽけな土地にしては、肩書きが大きすぎると？」

「全てはイツミの仕業だと？」

「あの弓状列島。元はイツミの出身母体である高天原族の支配領でした。その領地が歴史に名を刻んでいるのは、先の戦で、常に重要な出来事が起きた土地だったから。そして、そうなるようにイツミは全てを仕組んだとしか思えないのです。

ユーラシア大陸担当の第一軍と欧州担当の第三軍の全戦力。

ヴォルトモード卿さえ本気だったら、情勢をひっくり返すことさえ出来た精鋭部隊です。それを現地で封印させず、あの僻地にわざわざ移動させた理由は？」

「アフリカや南米は？」

「アフリカ担当の第二軍や米大陸担当の第四軍は政治的に対立していたウォルス卿の発言力が強く、現地封印はイツミでさえ認めるしかなかったのは事実です」

「あのお爺様、まだお元気ですか？」

「戦後、しばらくした後、政治的失敗によって失脚ですよ」

「イツミは敵に容赦しない主義ですからねぇ」

「そのイツミからのメッセージですよ。あれは」

ユギオが視線を送った先。

そこには、偵察ポッドが送ってくる鍾乳洞周辺の映像が、立体画像となって映し出されている。

オレンジ色の光を浮かべた文字列が空にぼんやりと並んで浮かぶ。

その意味がユギオにはわかるような気がした。

「ただの暗号ではありません」

「周辺の時空が歪んでますわね」

チラリと映像を見たダユーが言った。

「封印地点までリンクと見ますが、いかがです？」

「……」

将棋盤の上に視線を戻し、しばらく考えていたダユーは言った。

「さっきの発言で、あなたは一つ、大切な要素を忘れていましたね」

「何です？資金？人脈？」

「金欠は持病。今や人脈も無しに落ちぶれた私達に言います？それ」

「失礼。それで？」

「最近、人間界のことわざを知りました。“虎穴に入らずんば　虎子を得ず”というのです」

「リスクを恐れない覚悟……そんな所ですか？」

「そうです」

ダユーはその一手を指すと立ち上がった。

「メース隊はすぐに出しましょう。人間達を牽制する必要があります」

「……そうですね」

本気で悔しそうな顔で将棋盤を一瞥したユギオは頷いた。

“賽は投げられた”わけですね」

「神様はサイコロを振りません。運命と戦うからこそ、サイコロさえ振らない主よりも強いんですよ。私達は」

「上手いことを仰る」

苦笑を漏らしたユギオは扉までダユーをエスコートする。

そして、ドアを閉める直前。将棋盤を睨み付けた。

将棋盤の上の戦いは、ユギオ軍がダユー軍に王手を指した所で止まっていた。

洞窟の暗闇に慣れた目が、強い陽光に襲われた。

だが、目が痛むのさえ、美奈代にはどうでもよかった。

「部隊の撤退を完了しました」

牧野中尉は言った。

「無事――とは言いませんけど」

「……部隊、集まれ。牧野中尉。後藤隊長と回線を開いてください。指示を仰ぎたい」

「了解」

「お姉さまっ！」

涼が怒鳴った。

「今からでも、フィアちゃんを！」

「そうです」

美晴が頷いた。

「あの子、放っておくのは危険ですよ！もし、自殺でもしたら」

「……隊長。部隊は鍾乳洞を出ました。指示を」

「お姉さま！」

「美奈代さんっ！」

「お、おい。泉？」

宗像が信じられない。という顔で訊ねた。

「お前、フィアを」

「現在、周辺に脅威は確認されていません。ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）も無事。任務は達成したと判断します」

「……はいよ」

後藤は頷いた。

「部隊撤収。“鈴谷（すずや）”への帰還を許可する」

「了解。全騎、聞いての通りだ。撤収するぞ」

「イヤです！」

芳（かおる）が噛み付いた。

「フィアちゃんはどうするんです！」

「撤収。そう命じた」

「命令を拒否します」

有珠（ありす）が真顔で言った。

「フィアは仲間です。救出命令を要求します」

「……あいつは」

美奈代は無表情のまま答えた。

「それを望んでいない。来るな。それがあいつの願いだ」

「友達が！」

涼が激昂した。

「飛び降りる手前で、来るなと言ったら、はいそうですか――そう言うんですか！？見殺しにするんですか！？」

「……涼」

「私、私は絶対に助けに行きます！助けて見せますっ！中尉っ！コントロールを返してくださいっ！フィアちゃんの命がかかっているんです！」

「命令を楯にするつもりはない」

「何冷たいこと言ってるんですか！お姉さまだって、本当は助けに

行きたいんでしょう！？」

「巻き込みたくない。それが奴の願いだ。友達の誰一人だって傷一つつけたくない。そう思うからこそ、フィアは――――あんなマネをしたんだ」

「……っ」

「何が起きても、“鈴谷（すずや）”に戻る。そうでなければ、フィアの全てがフイになる。私は友達として、それだけは拒む」

「……撤収しましょう」

突然、寧々が言った。

「私は泉大尉の指示に従います」

「寧々ちゃんっ！？」

「こんな時にいい子ちゃんになってどうするのよ！」

涼と芳（かおる）は、仲間の裏切りに猛然と噛み付いた。

「仲間が危険だってのに、見殺しにするんだよ！？恥ずかしくないの！？」

「良い子ぶって、自分がそんなに可愛いの！？出世が大切！？」

「――――フィアは」

寧々は優しげな顔でそっと言った。

「皆にとって仲間であって友達……なのよ」

だったという過去形だけは、寧々も使いたくない。

まだ、そしてこれからもフィアは友達だ。

その思いは、寧々も同じだ。

だからこそ、友からの罵声に寧々は耐えた。

「ここで危険を顧みずにノコノコ地下に戻ってくることなんて、あの子は望んでいない。それをして欲しくないから、あんなマネをしたら、逆に怒られるはず――――小清水少尉？……あなたにとってもフィアは友達。

だけど、わかりなさい。

今、一番辛いのは誰か。泉大尉でしょう？

一番の親友だというのに、こんな時に助けさえに行けない立場の大尉が、どれ程辛いか、察してあげなさい。あなたは大尉の妻なんですから。それ位は出来るでしょう？」

「……くっ」

涼は歯を食いしばって目を閉じた。

来るな。

そう言えば、どんな時にも受け入れるのか？

それは否だ。

その思いを改めるつもりはない。

だけど、寧々の言い分もわかる。

フィアにとって、美奈代がどれ程大切な存在だったか。

ケンカ友達。

それでも、いつもコンビを組むと生き生きしていた。

ケンカをしながらも互いを認め合っていた。

不器用な者同士、いがみ合いながらも助け合っていた。

不可解にして不思議な連携がとれた仲。

フィアと美奈代はそんな関係だったと、今更ながらに涼は思う。

そんな美奈代を心底愛する涼は、心の中ではわかっているのだ。

だれが一番辛い？

私だ。

そう、答える程、自分は思い上がっていない。
美奈代が一番辛いのだ。
それはわかっている。
ただ、
友達であり、部下であり――その彼女が今、遠くなろうとしている。
誰に言われるまでもなく、助けに行きたい。その考えは一緒のはずだ。
涼はそう思って、そう信じて、美奈代に噛み付いた。

あなただって、同じ考えなんでしょう？
フィアを助けたいのでしょう？
なら、どうして行くなというの？
そんなのおかしいじゃない！
間違ってるじゃない！

でも、今、美奈代は一人の存在として動くことは出来ない。

美奈代の受け手いる束縛がわからない程、涼は子供ではない。

否。

子供でもわかることだ。

美奈代は、個人としてここにいない。

彼女は指揮官だ。
部下全員の安否に責任を持つ義務がある。
たった一人のために、部下全員を危険にさらすことは許されていない。
涼達は、美奈代や寧々を個人として薄情だと思ったからこそ、人としてどうこうと、文句を言った。
対する美奈代達は、個人として動くことを拒んだ。
否、動けないことを知っているし、動かないだけだ。。
指揮官。

その立場が、見えない鎖となって美奈代の“個人的感情”を縛り上げ、その翼を広げることさえ許さない。

辛いのは、泉大尉だ。
寧々の言葉は正しい。
涼にも、それがわかる。

諭されて、それは認めるからこそ、謝罪が辛い。
間違っていない。
間違っていないからこそ、ここで上官に頭を下げるのがイヤだ。
謝らなくちゃ。
その思いとのせめぎ合いが涼の心をかき乱す。

「……狙撃隊」
涼は絞り出すような声で言った。
「“鈴谷（すずや）”へ撤収」

「涼っ！？」

「時間の勝負とは限らない」
涼は言った。
「何が起きているかわかんない。情報が欲しい。“鈴谷（すずや）”やマラネリやドイツもいる。六本線の“見通者（シーカー）”（ハイパースタンド）が三人もいる。みんなで力を合わせれば、何かが出来るはずよ」

「だけどっ！」

「闇雲に突っ込むのは狙撃手（スナイパー）や銃手（ガンナー）の仕事じゃない。待ったり、耐えたりするのは、私達（スナイパー）にとっては、いつものことでしょう？」

「お祈りしてれば、フィアちゃんが生きていてくれるっていうの！？」

「……そうね」
涼は頷いた。
「私に出来るのは、それ位でしょうね……津島中佐」

「……何？」

「フィアちゃん救出に協力は？」

「私にとっても、あいつは友達なのよ」
紅葉は胸元の飾りを指で軽く弾くと言った。
「こいつ――――六本線（ハイパースタンド）にかけて」

「紅葉ちゃんっ！」
白石大尉が血相を変えたのはその時だ。
「地下で大規模エネルギー反応っ！」

「紅葉様と呼べっ！――って、何ですって！？」
その時、紅葉は、データ中継システムがまだ生きていることに初めて気付いた。
撤退前に、せめて第六層に設置しておけば――
紅葉は、自分のうかつさを心底呪った。
その紅葉に、白石大尉が怒鳴る。
「これは――魔力反応弾と同じ反応っ！？」

金髪が散って　第三話（後書き）

……なんだか、話が進みませんね。

ところで、フィアは本当に死んだんでしょうか？

金髪が散って　第四話

無尽蔵のエネルギーを生み出す魔晶石を利用した爆弾――魔力反応弾（マジック・リアクター・ボンブ）。

それは、我々の世界における原子爆弾や水素爆弾より、汚染という意味で質（たち）が悪い兵器。

一度使用されたら最後、使用された地域周辺は、生態系が存在できない魔力異常地帯と化す。

その地域は立ち入るだけで生命の危険にさらされ、それは二度と元に戻ることはないとされる。

世界をそんな風に変えてしまう悪魔の兵器、人類最大の禁忌（タブー）とされる無差別殺戮兵器。

保有が国際法で禁止されているのは当然として、開発もしくは生産をもって、対象国は全人類に対して宣戦布告したものとみなすという、異常ともいうべき厳罰を定めている兵器は他にはない。

そのもたらす惨禍と同じ反応が出たということは？

「米軍の仕業!?」

普通ならそう考えるのが最も妥当だ。

鍾乳洞の地下に隠されていた自爆用の魔力反応弾（マジック・リアクター・ボンブ）が作動した。

そう、判断することも出来るのだが、何故か紅葉は断定する自信がなかった。

トラップとして魔力反応弾が仕掛けられた？

馬鹿な。

百発を超える反応弾をみすみす諦めるのか？

しかも、この鍾乳洞周辺は世界遺産に登録されているんだ。

そんな所で、例え自国の中とはいえ、魔力反応弾を使用するなん

て、あり得る話じゃない。
「不明――ただ」
白石は答えた。
「もし、そうだとしても、このタイミングはおかしい」
「……そう……ね。じゃなくて！」
紅葉は血相を変えて怒鳴った。
「ぼっとしている場合か！
艇長、全速出して！
全騎、ブースターが壊れるまで退却っ！
白石、モニター続けて！
本当に、魔力反応弾（マジック・リアクター・ボンブ）が使用されたなら、魔力崩壊から解放まではタイム・ラグがあるから、その気になれば逃げられる！」

グンッ。

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のエンジンが唸り、床が小刻みに揺れる。
電車が急停止したような、Ｇによる揺れの中、紅葉は器用にバランスを取って転倒を避ける。

「フィアちゃんは！？」
混乱する通信の中、誰かわからない声だけが不思議と紅葉の耳に飛び込んできた。
「考えるな！助ける身がここでどうにかなったら、誰があの子、助けに行くのよ！もっと自分を大切になさいっ！」
「――っ！」
「総員、シートベルト着用っ！ヘルメットを――」

ドンッ！

耳をつんざくような音がして、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）機内の照明が一斉にブラッ

クアウト。機材が次々と火花を噴き出した。警報とオペレーター達の悲鳴が交錯する。異様な感じで重力がかかる中。紅葉は激しい痛みを感じることもなく、意識を失った。

「何が起きたんだ!?」

衝撃波に襲われたのは、経験からわかる。

具体的にと言われれば、巨大なハリセンで、後ろから叩かれたらこうなる。

“死天使”に起きたことを語れと言われれば、とりあえず美奈代はそう答えることにした。

機体バランスをとって地面に激突する事態だけは回避したものの、状況はまるでわからない。

「後方で大規模爆発。周辺の重力に異常！魔力数値が狂っています！危険域！」

「魔力数値!?」

「自然界には」

牧野中尉が言った。

「四大元素に基づく魔力が存在します。自然の、例えば砂漠は地水火風の元素のうち、火の元素に属する魔力が強くて、逆に寒い所は弱いとか」

「いや、あの、そうじゃなくて。何でそんなことになったのか。そう聞いているんです」

「可能性が一番高いのは」

機体の状況を確認するのに忙しい牧野中尉は、脇目も振らずにコンソールを操作する。

「魔力反応爆弾の使用」

「セリフ・ギロチンと呼ばれたアレですか？」

美奈代は目を見開いた。

「でも、アレは国際法で保有どころか開発も禁止されていると」

「反応弾っていうのは」
牧野中尉は答えた。
「材料と知識さえあれば、作成は意外と簡単なんです。アメリカで、政府が材料を原子力に精通した学生チームに渡して、反応弾開発を命じたら、本当に完成したって冗談みたいな話もありますしね」
「それは魔力反応爆弾でも同じ？」
「当然」
「……全騎。被害はないか？各小隊長は部隊の状況報告」
「狙撃隊、小清水です。部隊被害なし」
「前衛、宗像だ。こちらも正常。ただし」
「ただし？」
「衝撃波でＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が一回転した。津島中佐達が負傷している。中佐は頭部を負傷した模様。意識がない。他にも骨折や打撲をした者が数名」
「さすがに」
美奈代は呻いた。
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）ではあの衝撃は」
「墜落しなかっただけでも、艇長と操舵手の腕を褒めるべきだ。“鈴谷（すずや）”に収容させよう」
「そうだな。“鈴谷（すずや）”に通報は？」
「私の方でしておいた。“見通者（シーカー）”をこんなコトで死なせるワケにはいかん」
「全騎。今度こそ問答無用で“鈴谷（すずや）”へ帰還するぞ？」
「……了解」
涼は、通信モニター上の芳（かおる）の顔をちらりと見た。
――仕方ない。
芳（かおる）は目でそう告げると、小さく頷いた。
こんな状況で何が出来る？
そう聞かれれば、芳（かおる）だって答えようがない。

状況の変化があまりに激しすぎる。
涼は、本気でそう思った。

「ここで待機？」
「はい」
ティアリュートとユースティアがサライマを隠したのは、鍾乳洞から離れた場所にある小高い丘の影。
先程の衝撃波は、地形で避けることが出来たが、さすがに生きた心地はしなかった。
脱出ポッドに収容された負傷兵の容態は安定しているが、すぐに軍医に見せたいというのが皆の本音だ。
母艦がすぐ間近にいるのに、その母艦は「指定ポイントで待機しろ」の一点張り。しまいには返答さえしなくなった。
「母艦の位置、わかる？」
そっちが返事しないなら、こっちから殴り込んでやる。
ティアリュートは本気でそう思って、ユースティアに訊ねたが、
「不明」
ユースティアは首を横に振った。
「かなり強度な結界を展開している模様。“バラライカ”仕様のセンサーにも引っかからないなんて、かなりですよ？」
「あっちこっちに石でも投げたら当たらないかしら」
「私、お返事が恐いです」
「……それだけは同感ね」
「人類のフネが近くを航行中。まさか、母艦は逃げているのでしょうか？」
「まさか。そんなことはないと思うけど」
戦況モニター上には、人類側の飛行艦の反応が2隻。こっちの攻

撃の射程範囲にいることは確かだが、ティアリュートには攻撃の意志はなかった。
むしろ、相手側に攻撃の意志がないか。
そちらが心配だった。
デミ・メース達は見逃してくれたが、飛行艦の方まで見逃してくれるかは、さすがに自信がない。
「一体、母艦はどこだ？」
飛行艦は、ティアリュート騎のモニターにも映し出されている。
あのデミ・メース達が収容作業に入っている。
母艦は一体、何をしているんだ？
この戦域からは撤退してもいいはずだろう？
まさか、ユースティアじゃないが、逃げているなんて、冗談じゃない。
私達はどうなるんだ？
「いつまでも敵の情けに甘えるってワケにもいかないし」
あのデミ・メース達は、あの時こそ見逃してくれたが、次も見逃してくれる保証はどこにもない。
他のデミ・メース達と遭遇したら、脱出ポッドを抱えたままで戦闘することは無理だ。
どうするのよ。
ティアリュートがそう呟いた時だ。
「ティアリュート様！」
ユースティアが声を挙げた。
「母艦の通信、回復しました！」
「よしっ！負傷兵の収容を！」
「はいっ。現在、母艦はビジュアル・コンシール中。ポイント座標が転送されます」
ビジュアル・コンシールとは、空間魔法技術を応用した光学迷彩魔法のこと。
この魔法が展開されると、外部から魔法で包まれた対象は見るこ

とが出来なくなる、魔法の隠れ蓑だ。
「ビジュアル・コンシール中の艦に脱出ポッドで？自殺行為だぞ？」
「母艦がコントロールしますから大丈夫です」
「……そういう手もあったか。それで？私達は？」
「５０キロ程先の戦域からデミ・メース１０程が接近中。これの阻止です」
「１０……か」
ティアリュートは少しだけ唸った。
１騎で５騎相手がノルマだ。
相手がメースだったらさすがに二の足を踏むしかない。
でも、今回は、人類側の作った出来損ないのデミ・メース達だ。
やれるんじゃないか？
それに、そろそろ、人類側とやり合っておかないと、出所不明の傭兵同士の噂にいつまでたっても振り回されることになる。
やるか？
じゃなくて、もう、やるしかない。
そういう時期に、自分がいることに、ティアリュートは気付いていた。
「出来るか？ユースティア」
「はい」
ユースティアは頷いた。
「脱出ポッドへのビーコン来ます」
「えっ？」
ユースティアの言葉にギョッとなった。
「ビーコンが来るってことは、母艦はそんなに近いの？」
ユースティアに聞く必要もない。
戦況モニター上にやっと表示された母艦の位置。
それは――

この時点で、美奈代達も“鈴谷（すずや）”に収容されていた。
皆がハンガーに騎体を収容する作業に入っていたし、外部からハンガーに入るためのハッチも閉鎖作業が開始されていた所だった。
戦闘が終了した時の普段通りの作業が淡々と続けられている。
ただ、それだけの光景が、
“鈴谷（すずや）”にとっては当たり前の“日常”が、
そこでは繰り広げられていた。

美奈代達もまた、規定作業を終えて、三々五々、騎体から降り始めていた。
騎体のハッチを開き、騎体から出た美奈代の前。
“Ｄ－ＳＥＥＤ”から袴子が騎体を降りる姿が見えた。
黒く艶やかな髪が照明を反射して美しく輝く。
少し、髪を伸ばしてみようかな。
そっと美奈代が自分の髪に手を伸ばしてみた。
似合わないか。
ちょっとそう思うと、不意にフィアの金髪が思い出され、胸が痛んだ。
通路では、先に降りていた宗像が待っていた。
いつも通り、手を挙げて挨拶をする。

そんな時だった。

「――――えっ？」

美奈代が目を見開いたのも無理はない。
閉じられようとしていた巨大なハッチの向こうからハンガーに飛び込んできたのは、数騎の見たことのないメサイア達。
１騎が左腕でハッチを押さえ、その間を縫って別なメサイア達がハンガーに乱入してきた。

一体、何が起きているんだ？
整備兵達も手を止めて、ポカンとしている。
皆、何が起きているのかわからない。

「敵だっ！」

誰かがそう叫んだ時には遅かった。
ハンガーに飛び込んできたのは、メサイアではない。
魔族軍のメースなのだと、居合わせたほとんどの者が、その時、やっと認識することが出来た。
そして、ハンガーベッドを制圧したメースの後ろ。
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）らしき見慣れない乗り物がハンガーベッドの最前列に固定されていた月城騎の前で急停止して、中から武装した甲冑姿の兵士達が飛び出してきた。
「くそっ！」
敵に蹂躙される“鈴谷（すずや）”。
そのことに、美奈代はとっさに“死天使”に飛び込もうとしたが、
「泉っ！」
美奈代は後ろから誰かに押し倒された。
床にキスしなかったのは奇跡のような話だった。
ガガッ！
爆竹が連続して破裂したような音がして、耳が痛んだ。
「大丈夫か？」
その声は聞こえなかったが、鼻が、その香水の匂いを覚えていた。
宗像だと、すぐにわかった。
「あ、ああ……」
美奈代は、自分が背後から抱きすくめられ、床に押し倒されたことをやっと理解できた。
「こんな時に、下手に動けば敵を刺激するだけだぞ！」
「す、すまない」

メサイア乗りとしての騎士は、一般の騎士と違って白兵戦の能力はかなり低い。
圧倒的戦闘能力を誇る戦闘人種のはずが、訓練された一般兵士の方が強いことだってあり得る。
つまり、いくら騎士だと言っても、美奈代達がどれだけ頑張っても、白兵戦で戦力扱い出来るかと聞かれれば、富士学校時代の成績評価を見るだけで済む。

使い物にならない。

しかも、相手は間違いなく魔族だ。

自分達がここで抵抗した所で勝てる訳がない。

「どうする？隊長」
「こういう時だけ……ずるいぞ」
「どうするか？そう聞いた」
「返答する必要あるのか？」
「……じゃあ」
「そういうことだ」

ボウガンの様な、見慣れない武器を構えたまま近づいてきた兵士に、美奈代達は両手をあげた。

突然、艦の目の前５００メートルの鼻先に出現した大型飛行艦と、メースに襲いかかられた“鈴谷（すずや）”は、衝突を回避するのが精一杯だった。
衝突回避運動から復旧する間に進められた武装解除。
それは、実は、“鈴谷（すずや）”だけでは終わらなかった。

マラネリ軍巡航母艦“エトランジュ”もまた、同じような目にあっていたのだ。
両艦は、艦内に兵士に乗り込まれ、各ブロックを制圧された。
神戸の時とは勝手が違う。
艦内で抵抗すれば、メースによって船体はずたずたにされるだろう。
勝算が全くない中で、意地になって抗戦する程、美夜もキユヅキ大佐も無謀ではなかった。
艦を護るため。
乗組員を護るため。
二人の艦長は共に乗組員に武装解除という一時の屈辱――つまり、降伏を認めた。
エトランジュより発せられた停戦命令により、戦闘寸前で停止したフォイルナー少佐達の収容が始まる艦内は、魔族軍の監視下に入った艦内のあちこちに魔族軍兵士が立っている。
“鈴谷（すずや）”では、乗組員の多くはハンガーに集められ、冷たい床に座らされていた。
どうなるか不安がる皆が驚いたことに、魔族軍は流ちょうな共通言語を使って、トイレの希望や体調不良がある場合は申し出る様にと乗組員に告げてきた。
ただ、艦内司令部は、艦橋から出ることを禁じられた。

その艦橋へと魔族軍のトップが入ったのは、艦内の武装解除が本当に行われているかを魔族軍が確認した後のこと。
時間にして30分程のことだった。

艦橋に入ってきたのは、黒いドレス姿の目の覚めるような美少女と、背広姿の男達。
ダユーとユギオ達だった。

「大日本帝国――」
強ばった顔の美夜は、敬礼しながら名乗りを上げようとしたが、
「ああ、いいですよ」
ユギオは軽く止めた。
魔族が人間同様の背広を着込んでいることに加え、あろうことか日本語で止められたことに、美夜は目を見開いて驚いた。
「弓状列島――日本は、開戦前から頻繁に顔を出していましてね？なじみが深いんですよ。ちなみに寿司は銀座に限ります」
「は……はぁ？」
美夜と高木は、互いに顔を見合ってしまった。
「……あの？」

「乱暴な振る舞いはお許し下さいませ？」
スカートの端をつまむと、ダユーは優雅に一礼した。
美夜は、同じ事をして、女として、ここまで相手を見とれさせることが出来る自信はなかった。
艦橋にいた全員の視線を独り占めしながら、ダユーはとろけそうな笑みを浮かべて言った。
「少し――ご協力いただきたいのです」

「協力？」

「はい」
ダユーはニコリと微笑んだ。
「お礼は、部下の命――それ程、お高くないですけど、安くもないお話でしょう？」

「つまり」
美夜は冷静に答えた。
「言うこと聞かなければ、部下の命はないものと思え――と？」

「はっきり過ぎる物言いは嫌いですが」
ダユーは悠然と微笑んだ。
ちらりと見た高木の鼻の下が伸びているのを、美夜は見逃さなかった。
「――こちらに非があるのは認めましょう。ですけど」
「拒否する権利は、私にはない。私も、それは認めましょう」
美夜は答えた。
「艦を預かる者として、乗員の安否は保証していただきたい」

「無論です」
ダユーはニコリと嬉しそうに頷いた。
人類のどんなモデル、女優でも演じることが出来ないだろう嫣然とした、あるいは蠱惑的な魅力はむしろ恐くさえある。
美しさに恐怖を覚えるなんてことは、美夜の人生の中でも初めての経験だった。
「私は協力をお願いに来ているのですから」

「――何をしろと？」

「簡単です」
ダユーは言った。

「こちらの指示通り、動いていただければ良いのです」
「具体的には？」
「私の艦と一緒に、ある所に行ってもらいます」
「ある……所？」
「そう」
ダユーは、船窓の向こうを指さした。
そこには、謎の文字列が浮かんでいた。
「推定、半日足らずで消えてしまいます。あれに入ります。どこに通じているかは運任せです」
「自殺がご希望でしたら」
美夜は覚悟を決めて言った。
「どうぞ、我々を巻き込まないでください」
「――――まぁ。面白い」
「選択肢はない。それを忘れていません」
美夜はダユーと視線を合わせ続けることが出来なかった。
美貌の後ろにある、何やら得体の知れないどす黒い何かを、美夜は一瞬だけかいま見た。
それだけで、美夜はダユー対して畏れを抱くことを止められない。
蛇に睨まれた蛙のようなものだ。
こいつはただ者ではない。
本能的に、そう思った背筋に嫌な汗が流れた。
今頃になって足が震え出した。
美夜は声を殺しながら訊ねた。
「まず、お名前位は教えていただきましょうか？」

“鈴谷（すずや）”が、ダユー率いる飛行艦“エーラスティア”の前方を進み、あの空中に浮かんだ謎の文字列に向かった。

「我々を殺すつもりですかね」
「馬鹿な」
高木に美夜は首を横に振って見せた。
「この艦を沈めたければ、もういつでもチャンスはあったはずだ。それをやらなかったのには、必ず理由があるはずだ。
それに」
「それに？」
「この艦に一体、何人の魔族が乗っていると思う？」
“エーラスティア”との通信を行うため、艦橋の後ろに臨時に与えられた席に座る魔族軍オペレーターと武装した兵士の顔はまだあどけなさが残っている。
その顔に、緊張が走っている。
無理もない。
そう思った美夜は、従兵に命じて紅茶を二人に届けてやった。
湯気を上げるそれが何なのかわからず、不安げに従兵の顔を見たオペレーターは、金髪碧眼の女の子。ヨーロッパの街角にでもいそうな感じの娘だが、従兵が別なコップに中身を少しだけ移して毒味代わりに飲んでやると、それで安心したのか。最初は恐る恐る、最後にはおいしそうに紅茶を飲んでいた。
ヘッドレシーバーをつけたままの女の子が声を挙げた。
「定時入電――針路、高度、速度そのまま」
よく通るいい声をしている。伝令に使いたいな。
美夜はそんなことを思った。
「――まぁ、逆にこっちにとっても人質といえば人質だな」
「都合がいいのか悪いのか」
「わかったら教えてくれ。どちらにしろ」
「……ここの所、いい仕事はしていたと思うのですがね」
二人は同時にため息をついた。
「責任問題は避けられませんね」
「責任なんて、こんなものだ」

「通信をすべて停止させられているため、本国からの指示を受けられないし、報告出来ないのは、不幸中の幸いですか？」
「乗組員が私と副長だけならともかく、人の口に戸板は立てられまい……」
「除隊して、田舎で農業でもやりましょうか」
「実家、どこだっけ？」
「鴨川です」
「……いいところだな」
「一度、来て下さい。すでに老後のこと考えて、土地用意してあるんです。一軒家の軒先から海を眺めて朝飯食べて、鍬をかついで畑に出る。ここで首になれば、そんな長年の憧れの生活が、近くなるだけです」
「羨ましい……私と亭主は、目先の仕事のことばかりで、自分の老後なんて考えてもいないから」
「とにかく、生きて帰りましょう」
「それが最優先だ」
「ところで艦長？」
「何だ？」
「こういっちゃ何ですけど、艦長。クビになったらどうします？」
「二つある」
「二つ？」
「不妊治療の病院通い」
高木は、かつて美夜が候補生時代に受けた傷が元で、女性としてかなりの苦労をしていると、軍医から聞いたのを思い出した。
「このトシになって、やっとメドがついたのよ」
「おめでとうございます」
「悩みと言えば、亭主が子供欲しがっていないことかしらね」
「副司令が？」
「他人の子供は可愛がるクセに、自分の子供となれば逃げ腰になるのよ。最低よ。そういう所」

「……立場上、コメントできませんが、もう一つは？」
「もっと簡単だ」
美夜は笑って言った。
「料理学校に通おうと思っている」

美夜率いる“鈴谷（すずや）”は、魔族軍の命令通り文字列にの下に生じた空間のゆがみの中へと艦を飛び込ませた。

ゆがみの向こう。

そこは――――広大な大地の広がる北米大陸ではなかった。

カナンの渦の向こうで　第一話（前書き）

つーか。ドイツ軍、どうしたんだろう？

カナンの渦の向こうで　第一話

ゆがみの先。
そこに広がっていたのは、北米大陸の地平線ではなかった。
「こ……ここは？」
ユギオは目を凝らして周りを見た。
そこには、地平線なんてどこにもない。
あるのはせいぜい、水平線だ。
「座標の確認急げ！」
「必要なら、人類側の艦艇にも問い合わせ――いや、人類にもやらせろ。そっちの方が近いっ！」
天壇所属艦“エーラスティア”の艦長達が矢継ぎ早に命令を出し続ける中、ダユーは面食らった様子で言った。
「なんだ……ここか」
「ご存じなのですか？」
「艦長？人類に指示を出すだけ無駄です」
「はっ？」
ダユーの突然の言葉に、艦長は面食らった顔で訊ねた。
「失礼ですが――姫？それは一体」
「人類は」
ダユーは嬉しそうに微笑みながら言った。
「この地には、足を踏み入れたことはないでしょうからね」

「ＧＰＳがダウンしただと？」
「ＧＰＳだけではありません。他の衛星とも一切通信不能」
「他の衛星ともか？」
「はい。現在、帝国の他の衛星との通信も試みていますが」
モニター上のＣＩＣ長は、背後に立つ魔族をちらりと盗み見た後、

「この状況では」と、小さく肩をすくめた。
「……しかたない」
美夜は顔をしかめて頷いた。
「ＣＩＣ長、何か動きがあったら伝えてくれ。副長、すまんが座標の割り出しを頼む」
「これを使うのは、本当に久しぶりですな」
高木が艦橋の端に置かれていたケースから取りだしてきたのは六分儀だ。
天体の高度や角度を測定する航海計器で、天体の高度を正確に測定すれば、例え大洋中の船であろうと、地球上における自己の位置が正しく割り出せるので、古くより遠洋航海の必需品とされてきた。
元々、航海術に長けていた高木にとって六分儀は得意技で、何故か美夜にとっては大の苦手な代物だ。
近衛飛行艦隊有数の技術者と言われる高木がこの場で観測を任されるのは、何も力関係ばかりではないのだ。
「山アテもしませんか？」
六分儀を準備しながら高木が言うと、
「……それもしたいんだが」
美夜はしきり首を傾げ続けた。
「この地形は……環礁だぞ？」
“山アテ”は、地形の特徴から現在位置を把握する方法だが、美夜はこんな奇妙な地形を見たことがなかった。
翼を丸めた鶴のように円状に広がる陸地の特徴は、日本海軍が根拠地に用いているトラック環礁のそれとそっくりだ。
トラック環礁と決定的に違うのは、鶴の本体にあたる部分に大きな島が存在することだ。
元来、環礁とは珊瑚礁が沈降して出来る存在。つまり、環礁に巨大な島が存在すること自体が希なはずだ。
だが、しっかりと高い山いただく島が、そこにはあった。
美夜は、こんな奇妙な地形を見たことはなかった。

「――失礼」
艦橋に入ってきたのは、フェルミ博士だった。
「津島中佐の容態は？」
「軽度の脳しんとうを起こしているだけです。それより、現在位置は？」
「ここが地球上であると仮定するならば」
美夜はフェルミ博士に予備シートを勧めながら、視線だけは船窓の外に向けていた。
「――不明。全く不明です。こんな環礁めいた地形は見たことがない。副長？割り出せたか？」
「もう少し、お待ち下さい」
高木は六分儀から顔を離すと、操舵士に声をかけた。
「小野少尉。代わってくれ」
「はっ。しかし、どうしたんですか？」
小野少尉は、艦の操舵席を離れて六分儀を高木から受け取った。
「３０年近く、六分儀訓練も百件以上指導してきたが、今度ばかりは自信がなくなった」
「まさか」
小野少尉は六分儀を準備すると測定にかかった。
「六分儀の鬼とまで言われた副長の測定が外れるはずないですよ」
ＧＰＳに依存しすぎることで、艦の居場所がわからなくなることは、あってはならないことだ。
それは何も海軍の艦艇に限ったことではない。
例えば、不運にも艦が沈没し、脱出ポッドで漂流する可能性がある飛行艦乗り達も同じなのだ。
つまり、飛行艦乗りである以上、六分儀はある程度扱えて当然のこと。
艦橋では高木に次いで六分儀に慣れているのが小野少尉なのだが……。
「……」

何故か、小野少尉もまた、高木と同じく測定を何度もやりなおしている。
「どうだ？」
「……」
小野は困惑した顔で首を横に振った。
「正直、自分の測定結果に自信が持てません」
「私の測定結果はこれだが？」
高木は、自分が測定した結果を書いたメモを小野少尉に手渡した。
それをチラリと見た小野少尉が、驚いた顔で高木に言った。
「副長もですか！？」
「ああ。小野少尉まで同じだというなら、この結果が真実なんだろう」
高木は頷くと、美夜に敬礼した。
「艦長。本艦の現在位置がわかりました」
「随分、時間がかかったな。どういうことだ」
「……本艦の現在位置は」

「カナンの大渦？」
ユギオは、その名前に聞き覚えがなかった。
「何ですか？そりゃ」

「ご存じありません？」
紅茶を勧めながら、ダユーは小さく笑った。
「少しは有名なところ何ですよ？」

「誰にとって有名なんですか？」

「この人間界」
ダユーは艦長席の隣に用意された席にゆったりとした仕草で腰を下ろした。
上質の絹が滑らかな音を立て、心地よい香りが艦橋乗組員の鼻腔をくすぐる。
「領有権を確保しているのは、何も魔族と神族だけではないのですよ？」
「は？」
「あまりに主張が弱いから、知らなかったでしょう？」
ダユーは悪戯っぽい仕草で口元を抑えた。
「ここは、“協定”の上では、神族の土地でも魔族の土地でもない。ここは、私達、獄族の土地です」

「しかし」
ユギオは“信じられない”という顔で反論した。
「先の休戦協定以来、魔族も神族も人間界の土地を放棄した。獄族が……」
何故か、ユギオはそこまで言って、“あっ！”といわんばかりに口を開いた。

「わかりましたか？」
してやったり。
そんな笑みを浮かべ、ダユーは頷いた。
「獄族は、先の休戦協定締結に参加していてません。というか、人間界での神族と魔族双方の張り合いに関わろうとしなかった」

「では」
ユギオは、興味深そうに船窓の外の景色を眺めた。
「ここはつまり」

「先の争い以前から、ずっと――――ずっと遙か昔ら、気象コントロールによって周辺から断絶して、純潔を保ちながら管理・支配し続けた島。それがここです」

「気象コントロール？」

「ええ。島周辺は人間の船舶が航行できない程、強い渦潮が取り巻いていますし、衛星軌道上より高くまで筒状に伸ばされた魔法防御が生み出す嵐――――気象上の嵐と、電子装備なんて一発でオシャカにする電磁嵐の双方がが、外部からの侵入者全てに立ち向かいます。ですから、今の人間の技術なら、フネは沈むし、飛行機は墜落するし、衛星で中をのぞこうとしたって無理というわけですね」

「完全な箱の中なんですね」

「そうですよ？」

ダユーは嬉しげに頬を赤くして答えた。

「だから、この島は昔から匣（アーク）と呼ばれていたのです」

「匣（アーク）」

ユギオは、少しだけ考えていたが、何を思ったか、突然苦笑を漏らした。

「成る程？」

「どうしました？」

「現在、この島の管理をしているのは？」

「当然、獄族ですけど」

ダユーは言いかけて言葉を止めた。

「――実情は、人間達の自治に委ねています」
「人間？」
「ええ」
ダユーは答えた。
「人間の規格を作る時、神族の規格“アダム”と、魔族の規格“エヴァ”が存在したのはご存じでしょう？」
「そりゃまぁ」
ユギオは曖昧に頷いた。
話があまりに飛躍しすぎている。
「……知識としては」
「計画は妥協点として、互いのプロトタイプ同士を遺伝操作で掛け合わせることになりましたけどね？
この人類製造プロジェクト自体に関して、獄族は獄族で独自の規格を用意していたのです」
「初耳です」
「でしょうね。“アダム”と“エヴァ”の規格ばかり話題になって、獄族の規格の“リリス”なんて開発当時、メディアでは取り上げられることさえ希だったと聞きますし。
肉体労働重視の両族に対して、自然界における一種族という立場をとる獄族の規格は都合が悪かったんでしょうね」
「つまり、ここにいるのは“リリス”の規格で作られた人間？
わからないなぁ。
自然界における一種族って、つまりは何です？

被創造物に対等の立場を与えるとでもいうのですか？」

「少しどころか、大分違うんですけどね？とにかく、“道具”としての生命体を作り上げることは、魂を管理する獄族のモラルに反します。それでけは確かでしょう――まぁ、見ればわかりますよ。彼等を見れば」

「……はぁ？」

ユギオは首を傾げた。

「僕の推論、かなり自信なくなりましたけど、とにかく、ここに？」

「考えたものですよ。イツミも」

ダユーは従兵に紅茶を求めた後、席を立った。

「確かにここなら、人類は絶対に入って来ることはない。神族も魔族も、まさかここことは思いもしないでしょうし」

「最後に教えて下さい」

ユギオは訊ねた。

「ここの地名は？」

「カナン島です」

「規模的には」

偵察機を出すことも出来ず、ただ、窓の外の景色を眺めるしかないフェルミ博士は、相変わらずのポーカーフェースで、呟くように言った。

「３０キロほどの火山性の島――か」

博士が注目しているのは、島が抱き込むようにして存在するその湾だ。
湾の内側から外へ向けて、岩石が波状に放射状に走っているのは、巨大な爆発があった証拠。
つまり、この島はクレーターの外縁だと判断できる。

「かなり大きな火山性の爆発のクレーター。その意味では葉月湾と構造が類似している」
うーむ。
博士は腕組みしてしばらく考えた後、
「艦長」
艦長席の美夜に訊ねた。
「下に降りることは出来ますか？」

「さぁ」
美夜の視線は、艦橋入り口にいる魔族達に向けられた。
「彼等がどういう命令を下すか。それ一つですね」

「……ふむ」

フェルミ博士は、しばらく考えた後、魔族めがけて何事かを話しかけた。
すると、魔族は驚いた顔をして、互いの顔を見合うと、恐る恐るという感じでフェルミ博士に返事をした。
驚く周囲を無視して、フェルミ博士と魔族のやりとりは数回続いた。
最後に短い挨拶らしい言葉を告げた博士は、それ以上は不要といわんばかりに船窓の外へ視線を固定してしまった。

「あの？博士？」

美夜が信じられない。という顔で訊ねた。
「今のは？」
「魔族と人類は会話が出来ないと思ったかね？」
「で、ですけど……博士が、魔族と会話できる言語を、どこで、いつ、習ったのか。それを知りたいのです」
「魔族と神族は共通言語を持っている。この共通言語は学ぶ気になればいくらでも学べる」
「どうやってです？」
「私が講座を開催しているよ。
気になるならラスベガスに来たまえ。
通信教育も良心的価格でやっている。魔族や神族は、この世界、様々な国家や組織に接触している。そういう連中に頼めば、簡単な会話程度は出来るようになる」
「それで。連中には何と訊ねたのです？」
「大したことではない」
フェルミ博士はポケットからシガーケースを取り出そうとして、手を止めた。
「あの島の名前。ここに来た目的――そんなところだ」
「で、どうなのです？」
「少佐。君の六分儀測定の結果は正しかったことが、魔族によっても証明された」

「嬉しいのか。悲しいのか」
高木は複雑な顔で答えた。
「つまり、我々は今」

「そう。人類の誰もが超える事の出来なかった“カナンの大渦”の内側に存在する“龍の巣”あるいは“死の積乱雲”と呼ばれる嵐の内側。
我々、“見通者（シーカー）”にも割り出せなかった地上最後にして最大の謎の答えの中にいる」

「……こ、ここが？」

「左様。衛星でも高々度航空機でも侵入できない、いわばあの“絶対領域”というべき内側には、こんな世界が広がっていたのだよ。
おめでとう艦長。
君と君の艦は、何人も超えることの出来なかった領域を乗り越える人類史上最初の偉業をなしたことになる」

「記念撮影でもしておきたいですが、下手なことすれば……」

「そこの魔族は“いい”と言っている」

「いいんですか？」

「自分達が命じられているのは、通信を繋ぐことだけ。不審な行動があれば通報する義務はあるが、航行や通常業務を停止する権限を与えられていないそうだ」

「副長。魔族を刺激しないように周辺のデータ収集を始めろ。指揮

は」

言いかけて、美夜はチラリとフェルミ博士を見た。

「――博士。お任せしてよろしいですか？」

「私が？」

「これは専門家の指揮に入った方がいい。私はそう判断します」

「成る程？ならば」

フェルミ博士はシートから立ち上がった。

「部下と機材をお借りしようか――医務室で居眠りしている紅葉を叩き起こしてくれたまえ」

「どうなっているのよ？」

外部と通信さえしなければ、何をしても自由。

魔族からそう伝えられたものの、メサイアは、メース達に銃を向けられたままで、動かすことなんて出来るはずもない。

別に作戦もなければ、書類仕事もない。

つまり、美奈代達に出来ることは何もない。

整備兵達は、むしろ“このメサイアは動きません！”と証明するかのように整備を始めている。

メサイアの足下で、ただぼんやりと整備の行方を眺めているのが、美奈代達に出来る精一杯だ。

ヒマをもてあました皆が思いついたのは、紅葉の見舞いだった。

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が一回転した際、シートから投げ出された紅葉は、頭を激しく打って意識不明に陥り、すぐに医務室に担ぎ込まれた。

皆はそう聞かされていた。

「メースは一体、どこにいたの？レーダーは居眠りでもしていたの？」
「メースだけじゃないよ。涼。あんなデッカイ飛行艦が“鈴谷（すずや）”の３００メートル手前に出現したんだよ？それまで、レーダーも見張りも、全っ然気づけなかったって言うし」
「……魔族の技術ってヤツか」
「ホントに」
有珠（ありす）は、うんっ。と伸びをしながら言った。
「私達、よく勝ってますよね。そんな連中相手に」
「勝ってるというのは、自覚？錯覚？」
「自覚っていいましょうよ。軍人なんですから。小清水少尉ぃ」
「……そうね」
何故か涼は、しきりに後ろを気にしていた。
「どうしたの？」
「宗像中尉は？」
あれっ？という顔になったのは芳（かおる）だ。
「そういえば、中尉どうしたんだろ。普通なら医務室なら行くのに」
「看護長のコーヒーは宗像中尉好みのブレンドだから……すぐ来ると思ったのに」
「用事があるって……部屋行っちゃったし」
「うーん」
腕組みして何事か考える芳（かおる）。
どうせこいつのことだから、ロクなこと考えないだろうなぁ。と、涼は諦めに似た感情でなま暖かく芳（かおる）を見た。
「そうかっ！」
「……何よ」
「さっきだよ、さっき！」
「はぁ？」
「ほらっ！魔族のお姫様、あれ見たでしょう？」

「あの美人さん？」
「そうっ！あの人形みたいにスッゴイ美人だった人！」
「あれ、スゴいですよねぇ！」と、有珠（ありす）も興奮気味に割り込んできた。
「人形なんてもんじゃありませんよ！あんなの三次元にいたんだって感じで！」
「わかるわかるっ！コスメ何使ってんの！？みたいな！」
「……で？“アレ”と宗像中尉が部屋に籠もっている理由は？」
「だ・か・らぁ」
ウププッ。
芳（かおる）は口元を抑えて奇妙に思わせぶりに笑った。
「あんな美人だよ？“あの”宗像中尉が欲情しない理由がないじゃない」
「こらっ！」
「だってぇ。こんな艦内に押し込められて、中尉も欲求不満の中、あんな三次元を無視したような美人目の当たりにして、ついつい我慢できずに、一人でこっそりと」
「宗像中尉にチクるよ？――失礼しまぁす」
医務室のドアを涼が開けたが、
「――あれ？」
ドアは半開きのままで止まった。
というか、涼がドアの所で立ち止まっているのだ。
「涼？どうした？」
涼より頭一つ背が高い美奈代は、涼の頭越しに中をのぞき込んだ。
そして――
そこに見たのは、
ベッドの上で半身を起こしている紅葉と、

紅葉へと爪楊枝に刺したリンゴを手にしたままの殿下。
共に凍り付いてこちらを見ている。

「し、失礼しました」
美奈代達は思わず敬礼して、すぐにドアを閉めた。

「医務室にも行けない……と」
結局、あまりに気まずくて医務室から離れた美奈代達は、ブリーフィングルームで屯するしかなかった。
「でも」
有珠（ありす）は興奮気味に言った。
「あの子、変わった趣味していたんですねぇ」
「というか、殿下、ここへどうやってきたんだろう」
「お見舞いってことでしょうね。殿下、意外と優しいじゃないですか」
「私もそう思うけどさぁ」
芳（かおる）は、居合わせた全員の顔を見回し、ぽつりと言った。
「柏中尉達除けば、この中で一番進んでいるのって、実はあの子だったんですねぇ」
「私とお姉さまの関係は」
「涼……とりあえず、男女の話だ」
「そうでした。女女なら、私達はぶっちぎりですから♪」
「ぶっちぎりで、何か間違えている気がしないか？」
「全っ然っ♪」
「……平野、次から拳銃は川崎中尉に預けておけ。常時携帯を禁止する」
「いいんですか？」

「反乱防止……そんな所だ。少なくとも、私に銃口を向けるな」
「それにしても」
寧々は顔をややしかめて言った。
「月城大尉――どうするんですか？」
「……」
今、彼女はここにいない。
帰還するなり、コクピットから降りて自室へ一直線だ。
誰とも会話すらしなかった。
職務放棄に近い態度に、反感を感じたのは何も寧々だけではない。
「私が決めることではない」
一番、彼女と対立するのは自分だ。
そう思う美奈代は、顔を苦痛に歪めて言った。
「人事権は後藤隊長にある。私にはない」
「――本音、やっていけますか？」芳（かおる）は訊ねた。
「私はちょっと……あんな態度とる人の側には」
「部下失って、地位を失って……」
美奈代は、涼からお茶を受け取った。
「転げ落ちていくと、人間、ああなるのかもしれないな」
「味わいたくないですけど、だからといって、私達がフォローしなくちゃいけないものなんですか？あの人、だって、元エリート部隊の幹部でしょう？私達がフォローされてしかるべきじゃないんですか？」
「世の中、そう簡単には行かないさ……。怒りを、あの人は必死に押さえようとしているんだ」
「お姉さま？」
涼は、そっと美奈代の手の上に自分の手を重ね合わせた。
「それは、お姉さまも同じでしょう？」
「……ああ」
「美奈代は手を握りしめた。

「だが、フィアを諦めたわけじゃない。津島中佐は、救出に力を貸してくれると約束してくれた」
「後藤隊長の所に行きませんか？」
有珠（ありす）が言った。
「ここがどこで、何が起きているのか。私達、何もわかりませんし、聞いていません」
「艦橋へは入れないぞ？魔族軍が艦橋を抑えている」
「報告とか何とか、理由があれば」
「……どうかな」
渋い顔で、美奈代が湯飲みに口をつけた。
食堂に配置されていた魔族軍の兵士が、所在なさげに美奈代達を見ていた。
お茶でもあげたらどうかな。
美奈代がそんなことを思った時だ。

ジリリリリッ！！

艦内に緊急事態を告げるベルが鳴り響いた。
艦内で火災が発生した場合最も使用されるベル――つまり、艦内では火災警報として任地されている音が鳴り響いたのだ。
「何だっ！？」
食堂に居合わせた乗組員達も、一斉を腰を上げた。
「艦長より全乗り組みへ達する。火災は発生していない」
ベルが響き終わった後、美夜からの艦内通信が入った。
火災警報ではないという。
なら、この時点で？
「機関・航行要員を除き、艦内全乗組員は１５分以内に第一ハンガ

ーへ集合せよ。くり返す。艦内全乗組員は、15分以内に第一ハンガーへ集合せよ」

「……魔族からのお呼びでしょうね」
有珠（ありす）が手を擦りながら言った。
「さてさて――何があるのやら」

美奈代達は全員、第一ハンガーへ集合した。
魔族軍の命令とはいえ、集合に一人でも遅れたなんて恥ずべき振る舞いを、魔族軍にさらしたいと考える者は、艦内に誰一人存在していない。
床に座る時、少し離れた場所に、月城大尉を見た。
大尉は、こちらに視線を向けようともしない。
整列の後、ひんやりとする床に座らされた美奈代達の前で、弾薬ケースの上に登った魔族軍の若い兵士がメガホンを手に怒鳴った。

――志願者を集める。
――希望者は名乗り出るように。

美奈代がびっくりする程流ちょうな日本語でしゃべり続けた。

――仕事と言っても、危険はない。
――我々の指示に従って、ある場所に行ってくれればいい。
――帰還と報償は保証する。
――たった一回、我々の手助けをするだけで、これほどの金になるぞ

魔族が腰のポケットから取りだしたのは、金の延べ棒だった。
ザワッ。

強制されるものと思っていた乗組員達の間からざわめきが起きる。

――これが2本だ。

――悪いことじゃないだろう？

魔族は楽しげに、本人としては親しげに笑った。

乗組員達は、互いに顔を見合わせている。

結局の所、乗組員達は軍人だ。金を積まれても、こんな時に動けば処罰される。

日本軍の中で最も規律違反が厳しいことで知られる近衛。

しかも、賞賛する時は徹底的に部下を褒め称える反面、その真逆の厳しさでも知られる美夜の艦の中だ。

ちょっと小遣い稼ぎで。

そんな理屈が通じるとは誰も思っていない。

金は欲しいが、罰は恐い。

皆を躊躇させているのは、まさにそんな感情だ。

――心配するな。

魔族は言った。

――このフネの艦長は、君達の協力を承認している。

そう言っても。

皆がどうしても、一線を越えられない。

下手に名乗り出たら、周りからどういう評価を受けるかわからないのだ。

後で、金に目のくらんだ裏切り者として報復されるかもしれない。

金と命を天秤にかけるのは、正直、皆が嫌がるところだった。

――男女二人――最悪は強制的に連れて行くことになるが？

「――私が」

ハンガーに響いた声。

皆が驚いて声の主を捜した。

皆が驚いたのも無理はない。

片手を挙げて、立ち上がっていたのは――月城大尉だった。

「私がやろう」

――女だな？

「……そうだ」

――報償は先払いだ。

魔族兵の一人が金塊を月城に押しつけた。

月城は礼も言わずに金塊を脇に挟んだ。

――あと一人。

どうする？

あの月城大尉が引き受けたんだ。

だったら――。

「失礼」

次に響いたのは、冷たい声だった。

「艦乗組員ではないが、私では駄目かね？」

片手を挙げているのは――フェルミ博士だった。

――問題ない。
魔族兵は答えた。
――必要なのは、人間だ。
金塊を手渡しながら、人選があっさり決まったことに魔族兵は満足そうに微笑んだ。
――連絡艇がすぐに来る。二人はそこに乗ってもらいたい。

「済まないが」
フェルミ博士は言った。
「こちらからも一隻、出してはだめか？」

――理由は？

「この地を調べたい。そちらの仕事に差し障らない限りで」

――上層部に申請してやろう。
――志願してくれたことへのせめてもの礼だと思ってくれ。

上層部。
つまり、ダユーからの返事はすぐに来た。

許可。

ただし、護衛のメサイアは人類側でつけるように。

「ったくさぁ」
“白雷（はくらい）”の発艦準備をしながら涼は毒づいた。
「魔族ってのは、バカなの？それとも私達をよっぽど信頼している

っての？」

「足下見られているんだよ」

コクピットに乗り込もうとして、美奈代は言った。

「もし、ここで魔族を相手にコトを起こしたら？下手すれば、私達はここから生きて出ることが出来ない。だから、私達がここで何かするなんて、魔族は考えていないし、出来るとさえ思われていない」

「……っ」

涼は顔をしかめた。

バカにされているにも程がある。

「感情的になるな。いつも通りだ。前衛は私と風間――――風間？」

何故か祷子は、“Ｄ－ＳＥＥＤ”のコクピットの前で、周囲をキョロキョロと見回していた。

「どうした？」

「……いえ」

祷子は首を横に振った。

「何か、視線を感じたので」

「視線？」

思わず、美奈代も周囲を見回すが、相変わらずの、見慣れた艦内の光景だけしか見えるものはない。

「何だ？」

「気のせいかも知れませんね」

そうやんわりと微笑んだ祷子。

その美貌を目の当たりにした同性の美奈代でさえ、その容姿は魅力的に見える。
だから、
「まぁ……風間なら」
そう。
誰か手すきな整備兵が、盗撮していたとしても、何もおかしいことはないのだ。
「無理もないか？」
「はい？」
「何でもない。気にするな」
「――ところで、大尉」
寧々の声は苛立っていた。
「月城大尉のことは、どう考えていいんでしょうか」
「自己犠牲だよ」
美奈代は答えた。
「自分が犠牲になることで、誰も罪を被らずに済む――そんな発想だよ」
「……本当にそうでしょうか。私、何だか、とてもイヤな予感がするんですが」
「鬼龍院中尉は」
美奈代は悲しげにため息をついた。
「カンが鋭すぎるな」
「……」

「あの人は、完全に自暴自棄になっている。ここで死ぬならそれでいい。好きにしろ。多分、あの人にあるのは、そういうことだと思う」

「もし、無事に帰ってきたら？」

「後藤隊長には頼んでみるよ」

ちらりと、美奈代は寧々をモニター越しに見た。

「中尉の切望に耳を貸してもらうように」

「私の？」

寧々は思わず自分を指さしてしまった。

「それは？」

「都築達とトレードしてもらえないか――そういうことだ」

「ちょっと待って下さい」

心配そうに割り込んできたのは有珠（ありす）だ。

「もう一人、追放された人、いませんでしたか？」

「騎士に余裕が欲しいのは本音だからな」

美奈代は何でもない。という顔で答えた。

「特に、私達は女ばかりだ――わかるだろう？」

「そういう時、代理してくれるなら」

芳（かおる）が言った。

「大の字つけて感謝です」

「そうですよね」涼も頷いた。

「私、結構キツいんで」

「そういうことだ――大尉に悪いが、人柱になってもらおう」

美奈代は、機動シークエンス中の手を止めた。
「いいか？これ、月城大尉には言うな？大尉を追いつめてしまうからな」
「了解」
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が発艦します」
「殿下と紅葉が乗ってるのか？」
「ああ。フェルミ博士だけじゃなくても、ここは徹底的に調べたいそうだ。魔族側もな」

カナンの渦の向こうで　第一話（後書き）

会話ばっかりで戦闘シーンがなくなっていますね。
もう少しで、派手な戦闘が書ける……と思います。
お楽しみにっていうか、見捨てないでくださいね？

感想とか評価、大募集中ですっ！

カナンの渦の向こうで　第二話

この世界で人類の英知が及ばないとされる場所に行きたければ、何も宇宙まで足を運ぶ必要はない。
飛行機か船さえあればいい。

そう呼ばれた所に行けばいい。

“大渦（おおうず）”

あってはならない所で生み出される激しい渦潮。
それは、海洋学者から始まって、多くの学者を悩ませ続けている不可思議な現象だ。

たかが渦潮と思うだろう。

だが、その最大直径が８００キロといえば、どうだろう。
しかも、場所によっては、巨大船舶を飲み込み、空を飛ぶ航空機を墜落させるすさまじさから、地獄へ引きずり込む“地獄門（ヘルゲート）”がその英名として与えられているとすれば？
その激しい海流と、航空機を墜落させる現象は、気候や海流の流れなどで説明できるはずもなく、とどのつまり、そのメカニズムは誰にも説明出来ない。
一応、重力をねじ曲げるほどの魔力兵器使用の名残とか、気象コントロール技術暴走の結果という二つがよく語られるところである。

日本周辺では、１９２８年１２月７日、横須賀奇襲を目指す合衆国艦隊が、針路状に発生した渦に巻き込まれ、艦隊ごと壊滅した千（ち）島（しま）沖（おき）大渦（おおうずぐん）

島沖大渦群や、大陸との交易上の障害となり、１３世紀の元による日本侵攻を阻止したとさえいわれる対馬大渦群（つしまおおうずぐん）が存在するし、世界的には他に６カ所ほど存在する。

共に渦潮の大きさは最大で１０キロ程度の上、航空機による上空の通過も可能だが、南太平洋に存在する、“カナンの大渦”と呼ばれる渦潮については話が全く異なる。

“カナンの大渦”

直径８００キロとされる巨大な流れに巻きこれれば、強い潮の流れに逆らえず、１０万トンを超える巨大船舶でさえ航行の自由を奪われ。二度と戻ってこない。

渦の中心へ近づけば近づく程、電波が妨害されるため、レーダーは使い物にならず、通信も出来なくなるため、脱出出来なくなる謎の現象も起きる。

１７世紀の大航海時代に発見されて以来、その存在故に南太平洋をして“青き墓場”とか、“エメラルドの地獄”と船乗り達に言わしめ、航空機が発明されるまで、人々は外縁に近づくのが精一杯だった悪夢の存在。

とはいえ、その航空機でさえ、渦の中央に達することは出来なかった。

数十機、いや、百を超える命知らずのパイロットの駆る航空機が、大渦の中心を目指し、そして、その多くが帰ってこなかった。

人類が、それでも中心部に何があるのか、朧気ながらにも想像できるようになったは、数少ない生還者であるパイロットが持ち帰った写真による。

パイロットは言う。

写真を取るのが精一杯だった。
計器類は全て狂い、ジャイロとワルツを踊り続けた。
引き返せたこと自体が、神の奇跡だと信じている。

そこまで言ったパイロットが持ち帰った写真に映し出されていたモノ。

それは、天にまで伸びる巨大な積乱雲の一部だった。

直径１５０キロに達する巨大すぎる雲の壁。
その巨大さ故に、壁の全体像を知るまで数十回の飛行と、数名のパイロットの犠牲の元、やっとわかったのはサイズだけだ。
何しろ、近づけば、特にジェット機は確実に墜落する。
プロペラ機でも、計器類を狂わされた状態で数百キロのフライトは自殺行為だ。
それ故に、２０世紀半ば以降、周辺は航行・飛行禁止区域に指定されて以降、その巨大さに畏敬をこめて“龍の巣”と呼ばれた積乱雲は、地上最後にして最大の“禁断の領域”とされ、現在に至っている。

美奈代達は、そんな人類未到の地にいた。

「外部温度摂氏２５度。空気に毒素なし……って、私、いつから」
涼は面白そうに言った。
「冒険家になったのよ」

「ジョーンズ博士でも連れてくれば喜んだんじゃない？」
芳（かおる）が苦笑気味に言った。
「彼より厄介な学者先生なら、そこのＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）にいるけどね」

涼はチラリと自分の斜め前方を飛行するＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を見た。
場所が場所だ。学者先生も探求心が抑えられないんだろう。
そう思うと、口元がゆるんでしまう。
帰ったら、センセイ達の講義を聴いてみるのも面白いだろうな。
ふと、そう思った涼の耳に、有珠（ありす）の驚いた声が届いた。
「泉大尉。１０時方向。丘の上！」

「何だ？」
「ヤギと思われる群がいます」
「ああ。本当だ。あれ、ヤギか？」
美奈代にとってヤギとは白くてメーと鳴く程度の知識しかない。
茶色の長い毛に覆われた曲がった角のある四つ足の獣たちが集まって草を食べている。
青い空に美しい緑の絨毯の敷かれた綺麗な丘陵。
まるで写真のようだな。
美奈代はそう思った。

「いや、それだけじゃなくて」
有珠（ありす）が言った。
「群の中心にいるの、あれ、人じゃないですか？」
「人？」
美奈代は、えっ？となって目を凝らした。
美奈代の瞳孔の動きに連動して、“死天使”のカメラがズームとなって丘の上に向けられた。
有珠（ありす）の言うヤギの群の中。

白っぽい何かが立っていた。

それは――人。しかも、年端もいかない女の子だ。
青白い髪に白い肌を装飾の施された白い服に包んでいる。
白い服は、穴に首を突っ込む、スモックに近い造りをしているのが不思議とわかった。

少女はヤギの群の中で、ポカン。とこっちを見つめていた。

「こんな所に、人がいるのか？」
美奈代が驚いたのも無理はない。
ここは人類未到の地のはずだ。
そこに人がいるなんて、信じられない。

「あれ、女の子ですよね」
芳も気付いたようだ。
「でも、あの子――ヘンですよ」
丘の下から駆け上がってきたのは、多分、女の子の関係者だろう。
年上のお姉さんという感じの女が、女の子を抱きしめると一目散に丘の下へ向かってかけだした。
そのせいで、美奈代は芳の言う“ヘン”の意味がわからなかった。
「どう、おかしかったんだ？平野少尉？」
「あの子」
通信モニター上で、芳は両手を耳に添えた。
「耳がこんなになってました」
「えっ？」
美奈代はきょとん。とした後、芳を真似て自分の耳に手をつけた。
「こう？」
「そうです。こう」
「……何の冗談？」

「大尉が、ゲームやマンガご存じなら楽なんですけど」
芳（かおる）は困った。という顔で言った。
「――エルフってご存じですか？耳の長いファンタジー世界の住人」
「エンジンオイル？」
「何ですか。それは――とにかく」
「耳がとんがって長いんです」
「それがエルフ？」
「……それにそっくりなんですけど」
「それだけじゃないですね」
寧々が言った。
「服の後ろから尻尾が生えてました」
「装飾品じゃなくて？」
「狐のそれに近い……あんな動きする装飾品があれば、私、見てみたいです」
「……人間と断定することは無理、か」

「本来なら」
美奈代達と共に、走り去っていく少女達を見守っていた殿下は、残念そうに言った。
「着陸して話を聞きたいところだが」
「そうねぇ」
おでこに冷却シートを張り付けた紅葉は小さく頷いた。
「……何よ」
ジッと見つめる視線に気付いた紅葉は、恨めしそうに殿下を睨んだ。
「そんなにおかしい？」
「可愛いですよ」
ニコリと笑って殿下は言った。

「写楽保介(しゃらくほうすけ)みたいで」
「後で殴らせて」
「褒めたのに」
「女に対する褒め言葉じゃない」
「あなたの傷は勲章ですよ……って、紅葉さん？その拳銃は何ですか？」

――――こうしていると、本当に年頃の子供達なんだよなぁ。

悪ガキ二人組と、鬼の老教師。
三人のやり取りは、まさにそんな感じだと、白石はそう思って笑いをかみ殺していた。
“鈴谷(すずや)”学級。
誰だっけ？
そんなこと言っていたの。

ピピッ
魔族軍から渡された通信装置から反応が入った。
普通の通信装置の横に据え付けられ、バンドで固定された得体の知れない装置。
白石の前に座る通信兵がその装置を使って通信を開く。
「通信、入りました」
「何だって？」
「魔族軍のＴＡＣ(タクティカル・エア・カーゴ)が着陸します。こちらは指定されたポイントに着陸しろとのことです」
「ポイントって、こっちの座標割と規格が一緒なのか？」
「マーカーを投下するから、その辺に着陸。その後は、こちらの指示があるまで好きにしろ――――とのことです」

「んなこと言ったって」
白石はちらりと紅葉達を見た後、
「紅葉様？あの――」
「選択肢があると思っているの？」
言葉を遮るように言われた白石は、肩をすくめた後、通信兵に言った。
「指示に従え。マーカーを見逃すな？」
「了解――新規通信入りました。魔族軍のメースが散開します。それまで、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の護衛にメサイアの半数を寄こせと」
「これも選択肢があるとは――ですか？」
「お師匠様にもしものことがあったらどうするのよ。……ったく、不愉快だけどね」

「不愉快と言えば、これ以上のことはないにしろ」
メース達が遠ざかっていくのを不愉快そうに見送った美奈代は、ポツリと言った。
「魔族軍の護衛をやったなんて、国で知られたらどうなるかしらね」
「クビになったら」
涼は嬉しそうに言った。
「私が面倒見てあげますからぁ♪」
「……そうしてくれ」
「はいっ♪幸せにしてあげますからね？お姉さまぁ（はぁと）」
「今、この瞬間に幸せが欲しい」
「ですけどぉ。さすがに公開プレイは……でも、お姉さまが望むなら……私ぃ」
「頼む涼。少しだけ現実に帰ってきてくれ――それより宗像」
「悪いとは思っている」
美奈代の言葉を遮るように、早口で宗像は言った。
「私にも思うところがある。今は、それしか言えない」

「あの、金髪の美人さんのことか？」
「……」
「……お前。まさか」
「――――なんだ」
「どこかで会ったことがあるとか言わないだろうな？」
「言わん」
「そう即答するのが怪しいが……」
美奈代は心に何かがひっかかった。
「……お前、あの時」
「周辺の警戒はどうなっているんだ。魔族の護衛も出来なかったなんて、ギャグにもならんぞ？」
宗像は、舌が回り切れていない程の早口でそう言うと、一方的に通信から外れた。

――――おかしい。

そう思わないはずがない。
宗像は前衛指揮官だ。
美奈代に次ぐ指揮権――――指揮官としての責任がある。
魔族とのトラブルを恐れた美奈代が、魔族のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を護衛することを引き受けたとなれば、後任の指揮者は宗像になって当然なのだ。
ところが、宗像は自分も行くと言い切った後、美奈代の命令を待たずに魔族軍のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）へとむかってしまった。
命令違反なのは明白だ。
とはいえ、月城達が心配とか、そんなセリフが聞こえてくるとは、その雰囲気から全く思えない。

美奈代は、不意に自分のポケットのボタンをつまんだ。

あの時――――

そう。

あの時しかない。

宗像は、チベットで――

「馬鹿なこと」

美奈代は、脳裏に浮かんだ推測を、頭から追い払った。

「そう……考える必要もない！」

数回、強く頭を左右に振った美奈代は、まるで逃げるように牧野中尉に語りかけた。

「中尉。この時点で、メースが動くということは」

「――そうです」

牧野中尉は、ケースからアンプルを取りだしながら頷いた。

「考えなくて良いですよ？少し、アタマ冷やしましょうか」

「はっ？」

「なんか、一人でいろいろやり出したから、お疲れだと思うんですよ。これ一発、プチュッと注射すれば、ぐっすり休めますから――“さくら”？」

「何考えてるんですか！」

「安心してください。精霊体は簡単な治療が出来ます。当然、注射なんてお手の物で」

「便利なんですねぇ……じゃなくて！」

「開発局のっていうか、津島中佐の特製です。結果は保証しないそうですけど」

「私、薬殺される程の問題行動はしていませんっ！」

「言い切れますか？」

「……た、多分」

「ほらそこが」

「中尉っ！」
「……わめけば済むって問題はありませんよ？メースが動いたのは、連中もまた、ここに何があるのか、どこにあるのか。決定的な情報を持っていない良い証拠のようなものです」
「連中……一体？」
「私達を泳がせて、そして今、それを手に入れようとしている」
牧野中尉は答えた。
「かなりのリスクをあえて受け入れる。つまりそれは、目指すモノが魔族軍にとって、それ程大切な代物――そういうことですね」
「――で」
「はい？」
「私、出撃前からすっごく気になっていることがあるんです。もし、知っていたら教えて下さい」
「……何です？」
「後藤隊長は、どうして何も言わないどころか、どこかに隠れたんです？」
「臆病な人ですから」
「卑怯――そうは思いますが」
美奈代は言った。
「あの人は臆病という言葉からは縁が遠いと思っています」
「まぁ」
牧野中尉は目を細めて微笑んだ。
「あの人が聞いたら喜ぶでしょうね。ところで。どうして私に聞くんです？」
「カンです」
「カン……ですか？」
「はい」
「……」
牧野中尉はしばらく考え込んだ後、言った。
「まぁいいでしょう。でも、聞く必要もないでしょう？」

「あの人は」
美奈代は天を仰いだ。
「そういう所が恐いんですよねぇ」
「でしょう？」
そう言った牧野中尉は、心底楽しそう。と言わんばかりに妖艶に微笑んだ。
「でも、あの人も言ってました」
「何てです？」
「“俺達は、彼奴等の掌で踊っている気がする”って」
「……でしょうね」
深くため息をついた美奈代は、ぽつりと言った。
「それでも――やる」
「人は」
牧野中尉は答えた。
「“それでも”やる。だからこそ、生き延びてきたんです」
「……了解」

「通信兵達には手はず通りにやらせなさい」
ダユーは通信装置を切った。
「反応は？」
「今、フェルト騎のセンサーが拾いました！」
オペレーターが歓声を上げた。
「反応、間違いありませんっ！」
艦橋に驚きの声があがる。
「おおっ！」
ユギオも興奮気味に席を立った。
「これで――全てが動き出す！これからが始まりだ！」
「……さてさて」

対するダユーはその端正な顔をしかめ、シートの背もたれに体を預けた。
「そう簡単に問屋さんが卸してくれるかしら」
「何を言ってるんです？」
ユギオが訊ねた。
「もう、あと一歩なんですよ？」
「場所はどこ？」
「集落の端――――えっと」
オペレーターは答えた。
「どうやら、その造りから祭祀施設のようです」
「成る程？」
ダユーは楽しそうに微笑んだ。
「祭祀施設を封印の蓋にした――――あの捻くれたチンチクリンが考えそうなことですこと」
「どうするんです？」
「艇長――――針路をとりなさい。あのチビちゃんのオイタにつきあってあげましょう」

クシャンッ
クチャンッ

室内にそんな可愛い音がした。
「ったく……連発？誰か噂してるわね」
「お師匠様」
「……何？」
「最後に聞きますけど」
「だから、何よ」
「僕達、本当にここにいていいんですか？」

「信仁はいいって言ったわよ――お茶」
「はぁい。後藤さんも、もう一杯、どうですか？」
「もらうとしよう――それにしても、こんな所があるなんて、艦長も知ってるのかね」
「この区画は、私達のためだけに修理のどさくさ紛れに作られた代物。知っているのは後藤さんだっけ？あんたと私達を除けば、信仁達だけよ」
「ははっ……あんた達にゃ、最大限の便宜を払うように詩織様から命じられていますけどね」
「詩織も、“ここ”で使い物になる狗を飼ってるなら、さっさと言えばいいものを」
「こいつはどうも……おやおや」
場所は6畳の和室というか、ほとんど安アパートの一室といった風情の部屋。
作りつけの台所があって、ユニットバスがあって、卓袱台が置かれている所に四人が座って、卓袱台に置かれたお菓子なんかをつまんでいる。
大学生あたりが下宿に使っている類のアパートを連想すれば、それで大凡間違いない。
電車やチャルメラが聞こえてくればお似合いだと、皆が思うだろう。

都内のアパートにいます。

事情を知らない人がそう言われれば、全員が納得するだろう。
そんな室内にいる四人の内の一人は、あろうことか、あの後藤だ。
「魔族が来た時にトイレに入り込んでいてよかった」
「悪運の強さは生き残る必須要件よ。それで？」
「いえね？俺がとやかく言わなくても、外に出ている連中が騒ぐだろうし」

「……いざという時は」
「いざという時は？」
「人間の一人として“コイツ”使うけどね？ほら、お茶が終わったら用意して」
「本当にいいんですか？」
「私に文句言わない」
「はぁい」

「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が移動します」
美奈代達の目の前で、魔族軍のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が浮上。針路を南にとった。
美奈代達に選択肢はない。
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の周囲を固める以外、何が出来るわけでもない。
海岸線に沿ってＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は高度をとる。
「連中、どこへ？」
「目的地は――」
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が高度を下げたことから、牧野中尉は見当をつけた。
「あそこじゃないですか？」
「あそこ？」
美奈代が目を凝らした先。
それは、さっきの丘の下。
よく見ると、そこには木と石で作られた質素な家が建ち並ぶ小さな集落があった。
「……あれは」
グンッ！
「きゃっ！？」
騎体が激しく揺れ、すぐ間近をメースが数騎、突き抜けていった。
「何てことすんのよ！」
「……一体」

牧野中尉が悔しそうに呟いた。
「接近するまで反応、まったくありませんでした……どういう技術をしているんでしょうか」
「反応がない？」
「レーダー、センサー、共に全く」
「……チベットの時も」
美奈代はポツリと言った。
「そうでしたよね？中尉」
「……はい」
牧野中尉は固い表情のまま頷いた。
「宗像中尉騎が撃破されるまで――――いえ」
中尉は、そこで言葉を句切った。
「戦闘中も、かなり接近するまで、一切の反応を感知出来ませんでした」
「……今回の接触で」
美奈代はポツリとこぼした。
「津島中佐達が、対策の見込みだけでも得てくれればいいんですが」
「……期待薄ですけど、願いたい所ですね」

メース達は、美奈代達と通信する装置を持っていないらしい。

手でしきりに“下がれ”という仕草を繰り返している。

こういうのは、意外と一緒なんだなぁ。と、美奈代は変に感慨深いモノを感じた後、皆にＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）から離れるように命じた。
メース達に護衛されたＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が着陸したのは集落から少し離れた場所。
林の入り口に当たる広場だった。
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）からは武装した兵士達が次々と飛び出し、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）周辺を固めていく。

美奈代達は少し離れた場所に着陸して、事態の推移を見守るしかない。

兵士達に護衛されるように、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）から降りてきたのは、あの金髪の女性と、月城大尉達だった。

毅然とした。

少なくとも月城大尉の態度は、そう評価出来るはずだが、美奈代はため息しか出てこなかった。

血走った目。

歩き方からまで苛立ちが伝わってくる態度。

暴れていいと言われれば、問答無用で暴れ出すだろう。

それほど、月城大尉は美奈代の目にも余った。

正直、ご意見番として期待していたが、今、意見を聞くどころか会話もしなくない。

まして、部下として使いこなせる自信は、美奈代にはなかった。

――ここで死んでくれれば。

ふと、そんなコトを考えて、美奈代は自分にため息をつくしかなかった。

月城大尉達が林の中へと消えていったのと、集落から住民達が飛び出してきたのは、同じタイミングだった。

耳の尖った、奇妙な姿をした住民達が集団でＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に詰め寄り、林の中へと向かおうとして、阻止する魔族軍兵士ともみ合いになっ

た。
「ちょっと……」
美奈代が呆れる目間の絵では、魔族軍の兵士の一人が、恰幅の良い男を突き飛ばし、或いは兵士達が男達に逆に押し倒されそうになっている。
兵士達は、何とか住民を林の方角へ行かせまいとスクラムを組んで阻止に賢明だ。
集音マイクが、男達の怒鳴りあいを拾ってくる。
「これ、何が起きているのよ」
「地元の人達」
牧野中尉は、住民達の背中でしきりに動く尻尾を見ながら、ぽつりと言った。
「あの人達が人でしたら……余計なことですね。とにかく、地元の人達にとって大切な施設か何かが林の中にあって、そこに行くのを止めたい――そんな所では？」
「林の中には何が？」
「センサーの反応では、石造りの施設があるようですね」
「……石造り……ですか」
「反応からすれば、重要な貯蓄施設か、あるいは祭祀施設かもしれませんね」
「成る程？」

パンッ！

破裂音がしたのはその時だった。

「――――えっ？」
何が起きたかわからない美奈代の前。
さっきまでもみ合いになっていた兵士達と住民達が、共に動きを止めていた。

ボウガンを構える兵士の前に、体格の良い住民が仰向けになって倒れている。
兵士は、何が起きたのかわからない。といわんばかりにしきりに周囲を見回している。

もみ合いの中、思わずトリガーを引いてしまった――いわば事故だ。

「バカが」
美奈代は舌打ちした。
「住民とのもめ事やってる時に銃に手をかけるバカがあるか」

何が起きたかを理解した住民達が、怒りの叫びをあげながら兵士達に襲いかかり、耐えられなくなった兵士達が次々と武器にを手をかける。

一瞬で、周囲は阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

逃げる住民達に兵士達は容赦なくトリガーを引いた。

住民達が血みどろになって地面に倒れていく。
それはまるで、強風になぎ倒される稲穂のようだった。

「バカがっ！」
住民達の中に巻き込まれていたんだろう。
年端もいかない女の子達が逃げ出そうとしていた。
一人が、何かに躓いて転んだ。
兵士達が、その少女に狙いをつけたのか、美奈代にはわかった。

――間に合うか！？

下手に住民と兵士達の間にメサイアで割り込めば、望まない犠牲を生み出しかねないことはわかっている。
だが、美奈代は体を、衝動を止めることが出来なかった。
「泉っ！？」
「お姉さまっ！」
宗像達が驚いている間に、美奈代と祷子が動いた。
「ったくっ！」
宗像が斬艦刀を抜刀し、涼騎がＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）を構えた。
対するメース達も一斉に抜刀。
メースとメサイアが武器を持って互いににらみ合う状況が生まれた。

だが、美奈代にとってそんなことはどうでもいい。
美奈代にあるのは、
女の子を救いたい。
ただ、それだけだ。

その美奈代の目の前で少女達めがけて魔族兵は容赦なくトリガーを引いた。
「くそっ！？」
集中砲火で少女達が挽肉になることを覚悟した美奈代だったが、
「――――えっ？」
唖然として、操縦の手を止めてしまった。

魔族兵達は、数十発の魔力攻撃を少女達めがけて放ったのは、美

奈代も見ていた。
それなのに、少女達は全く無事。
互いに抱き合って震えていた。
「な、何が起きたの？」
驚く美奈代が発見したのは、少女達の前。
そこには、小さな女の子が立っていた。

銀髪をポニーテールした、小柄な女の子。
ただ、その服装は、地元の住民のそれではない。
白いウィンドブレーカーにジーパン姿のラフな格好。
つまり、地元の住民ではない。
それでも、立ちふさがった以上は敵。
魔族兵は、どうやらそんな判断に立ったらしい。
雄叫びをあげながら、兵士達は狂ったように少女めがけてトリガーを引き続ける。

魔力の爆破の連鎖が、数十秒に渡って少女達を包み込む。
メサイアだって無事では済まないだろう、魔力攻撃に集中砲火。

美奈代は、何かの間違いで生き延びた少女達が無惨に死ぬ光景を連想して背筋が寒くなった。
なんとか割り込んで助けたかった。
しかし、あちこちに転がる住民達の死体、或いは重傷者を踏みつけかねない危険性を考えると、近づくことさえ出来ない。
メサイアの図体のデカさが恨めしかった。

「泉――――こりゃ、事態は最悪だぞ？」

「虐殺を黙って見殺しにしろだと!?」
「そうは言わんがなぁ……」
「お姉さま。指示を下さい!」
涼が怒鳴る。
「こいつら、皆殺しにしてやる!」

「――――やめなさい」
通信装置に、物静かな。しかし、絶対的なまでの力が籠もった声が聞こえたのはその時だ。
「単なる事故です。これ以上は望みません」

「……これで事故か?」
美奈代は、自分の騎の周囲に転がる住民達の死体を前に、言葉が出てこない。
「これで、事故だというのか?」

「その通り」

自分のつぶやきに答えられた美奈代は、コクピットの中で飛び上がって驚いた。

「き、聞こえているの?」

「通信は全てモニターされています。下手な発言は命取りですよ?いいですか?これは事故です」

「無抵抗に近い住民を殺しておいてよくも言う」
美奈代は言った。
「命取りだというならくれてやる。説得することだって出来たはず

だ！接触して、説得して、そうすれば無駄な犠牲は」

「私達は」

通信の主は冷たく言い放った。

「ここの住民達の創造主――つまり、この住民は、私達の道具に過ぎません」

「なっ！？」

「あなたも人ならば――そうですね。豚とか牛とか食べるでしょう？人間によって交配された両親から計画的に生み出された生命――それを屠る時に一々、交渉に望んだことが一度でもあるんですか？」

「それこそ詭弁じゃない」

言い返そうとして、美奈代は、この相手に自分風情では口で勝てる自信がないことをどこかで悟っていた。

「被造物って……何よ。この人達はモノだというの？」

「つくり主からすれば――そういうものです。いい機会ですから。住民を遠ざけてくださいな。翻訳装置はすぐに届けます。それに」

クスクス。

奇妙に艶っぽい笑みが、美奈代の神経を逆撫でする。

「よくご覧なさい――虐殺の被害者は、生きているじゃないですか」

「……えっ？」

美奈代は目を凝らした。

先程の攻撃によって生じた爆煙が立ちこめる中。

転んだ後、抱き合ったまま震えていた少女達。

その前に立つ、ウィンドブレーカー姿の少女まで含めて、誰一人

として、傷ついている者はいなかった。
「これは……一体？」
「天界軍が動いた……というのとは違うようですね」
「えっ？」
「心配なら、住民達の治療を許可します。治療方法は、そこに現れた正義の味方さんにでもお聞きなさい。ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中に待機している医療部隊も遣わせましょう」

「あ、あのっ！」
美奈代は思いきって訊ねた。
「さっきから、誰なんですか！？あなたは！」

少しの沈黙があった。
聞いてはいけなかったか？
そう思った美奈代が、何か言おうと口を開いた時、

「――ダユー」
ポツリと、そんな声が聞こえた。
「ダユーと言います。以後、お見知りおきを」

「……了解」
薬が通じるかわからない。
しかし、せめて止血くらいは出来るだろう。
美奈代が頭に浮かべるのは、ダユーとかいう得体の知れない通信相手ではない。
住民達をどれほど助けられるか。
美奈代はコクピットのハッチを開いた。

カナンの渦の向こうで　第三話

「部隊そのまま！各ＭＣ（メサイア・コントローラー）は、周辺警戒っ！」
地面に転がる住民達を冷たく見つめる魔族軍の視線。
美奈代は時折、威嚇するように彼等を睨みながら、住民達に近づこうとした。
「お姉さま、私も！」
「ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）に火を入れておけ。スモーク即時待機。いざという時は、“死乃天使”を回収して逃げろ」
「で、ですけど！」
「お前にしか頼めないことだ」
「は、はい」
ヘッドレシーバー越しに涼と会話しつつ、美奈代は手に持ったメディカルボックスをちらりと見た。
考えてみたら、医療知識がほとんどない自分が、こんなもの一つで、何が出来るというんだろう。
勢いだけで動いたことを心底後悔しつつ、美奈代はそっと、銀髪の女の子に近づいた。
銀髪の女の子は、美奈代の存在に気付かないのか。それとも完璧に無視しているのか、美奈代の方を向こうともしない。

銀髪の女の子は、武器を構える魔族軍の兵士達に何事かを語りかける。
すると、魔族軍の兵士の一人が、大声でそれに答え、持っている武器の筒先を下げた。
少女は頷くと、遠巻きに情勢をうかがっていた住民達に、よく通る透き通った声で何事かを語りかけた。
最初は恐る恐る、しかし、その数が集まると、住民達は一斉に負傷者を担ぎ上げ、或いは板に載せてその場を離れた。

美奈代は、その後に続いた。

「ね、ねぇ」

言葉が通じるかわからない。

しかし、その服装からして人間じゃないか。

そう思った美奈代は、住民達の間をぬって、銀髪の女の子の後ろから語りかけた。

「ねぇ、君。言葉、わかる？」

「――――何？」

間近で振り返った少女は、足を止めることもなく、ちらりと美奈代を見た。

背は低い。

多分、小学生だろうと見当をつけた美奈代に声をかけられた少女は、

「――――何？」とだけ答えた。

言葉が通じることに安堵した美奈代は訊ねた。

「君、人間だよね？どうしてこんな所にいるの？」

「――――仕事」

「仕事？」

「お姉さん、後藤さんの狗……じゃなくて」

少女は、うんっと。と、視線を泳がせてから言った。

「部下……でしょ？」

「後藤ってことは――――君、近衛の関係者？」

「似たようなもの」

「……いくつ？」

「十四」
「……そんな子供が」
ふと立ち止まった少女が、負傷者達が並べられた広場の入り口で立ち止まる。
鉄の臭いに近い、血特有のイヤな臭いが辺りに立ちこめ、うめき声やすすり泣きが耳をいたぶる。
頑丈そうな男達だけではない。
逃げ遅れたのだろう。老人から子供までが集められていた。

「おい」
背後から声をかけられた美奈代は、ハッ。となって後ろを見た。
魔族の兵士がそこにいた。
「翻訳装置を持ってきた。これを耳に付けろ」
美奈代が渡されたのは、マイク付きのヘッドレシーバーだった。
「人類の使っているものに合わせてある。使い方は感覚でわかるはずだ」
兵士が同じものをつけているのに気付いたのは、その時だった。
「ありがとう――で」
美奈代は礼を言うと、レシーバーを代え、部隊通信用のレシーバーを首に下げた。
音を耳が拾ってくれるのを祈るしかない。
「魔族軍は、どう動く?」
「教える義務はない」
そう答えたが、負傷者をバツの悪そうに一瞥した兵士は、ポツリと言った。
「事故だよ――俺の部下は、今回が初陣なヤツがほとんどなんだ。ビビっちまって」
「……」
「後でぶん殴っておく。民間人に誤射なんて誇り高き獄族軍にとっちゃ恥だ――俺達の動きは、今のところは待機だ。安心しろ。本

気でお前達とやり合うつもりはない」
「そう願おう」
「ああ……おい。それより」
辺りを気にしながら、兵士はそっと美奈代に訊ねた。
「何で、ここに天界軍がいるんだ？奴らは中立宣言を出したはずだ」
「天界軍？」
翻訳装置の凄まじい性能に感服しつつ、美奈代は耳慣れない言葉に首を傾げるしかない。
「知らなきゃ教えてやろう」
兵士が指さしたのは、少女の腕。
そこには腕章があった。
緑の生地に見慣れない金色の刺繍があった。
何だか得体の知れない模様は、何を意味するのか全く美奈代には想像さえ出来ない。
「あれは、天界軍、神族で編成される軍隊の中でも医療部隊に属していることを意味する国際標だ。俺達でも、あれをつけている者を攻撃することは出来ない」
「でもさっき」
「事故は例外さ」
兵士は肩をすくめた。
「反面、防御以外の自衛手段は医療部隊にも認められていないがね。とにかく、連中を攻撃したとなれば、重罪だ。だから、俺はさっきから事故だって言ってるんだ」
「……成る程」
「あいつにゃ、そう言っておいてくれ？それにしても、人間と行動を共にする神族ってのは珍しいな」
「そうなのか？所で」
「ん？」
「あなた、今、自分を何と言った？あなたは、魔族じゃないのか？」
「バカ言うな」

兵士はムッとした顔になった。
「俺達は獄族だ」

天界
神族
獄族

意味がわからない。
住民達からの報復を恐れているのだろう。
言うだけ言った兵士は、一目散に走り出して美奈代の元を去った。

「……何がどうなってるのよ」
銀髪の女の子は、負傷者の中でも特に容態が悪化している一人の男の前に跪いた。
腹部に数発、攻撃を受けた男の顔色はすでに白い。
周りには人々が集まって泣き出している。

このままなら助からない。

不思議と美奈代はそう思った。
女の子は、不安げに見守る住民達の前で、両手を合わせた。
住民達の顔からして、皆が少女に対して何か疑いを持っているのは事実だろうと、美奈代は見当をつけた。
実際、美奈代自身、この子が何でここにいるのかさえわからない。

少女の手を合わせた理由だって――

南無阿弥陀仏？

――まさか！

こんな世界の住民に仏教が通じるはずがない。

通じるなら、世界共通で僧侶はすべてハゲだ。

美奈代が、そんなくだらないことを思い抱いたその眼前で、

ポウッ

少女の掌が輝きだした。

――これ、まさか。

驚く美奈代や住民の前で、少女は掌に生じた光を、男の傷口に押しつけた。

光を押しけていた時間は、ほんの１０秒程度。

だが、その間に白かった男の血色は、元来そうだったのだろう健康そうな血色のよい肌にすぐに戻っていった。

２０秒とせず、半分死人だった男は、腹を押さえながらだがよろよろと起きあがり、自分に何が起きているのかわからない。といわんばかりの顔で回りに語り始めた。

とたんに、枕元にいた女が歓声を上げて男に縋り付き、泣き叫び始めた。

どうやら妻だと見当をつけた美奈代の前で、少女は言った。

「しばらく寝込むけど、傷口はふさがっているから」

翻訳装置が、少女の声を拾った。

「内臓が強い負担を受けている。一週間は、消化の良いものを食べさせて。間違っても、お肉やお酒は駄目だよ?次は?」

そうか。

美奈代は、それで合点がいった。

この子――――療法魔導師だ。

療法魔導師。

大抵のケガや病気ならすぐに直すことが出来る治癒魔法の使い手のこと。

腕がもげた程度なら、十数分の治癒魔法を受けたら翌日には退院できる。

傷跡さえ残すこともない。

俗説だが、首と心臓だけ残っていれば、いつでも五体満足に戻る事が出来るとさえ信じられている存在。

“医者殺し”とも言われ、忌み嫌われる医療界でも、（彼等医師としては不本意だろうが）万能選手と認知はされている。

その反面、そのあまりの数の少なさから、国際法上で厳重な保護を受けられる特権的存在でもある。

さっきの獄族という連中にとっても、その辺の事情は同じなんだろうと、美奈代は見当をつけた。

「ウチの息子を！」

「だめよ！娘の方が先っ！」

男の施術結果を見た住民達がこぞって少女の周りに集まる。

「とにかく、端からやっていく。諦めるなって励ましていて。お姉さん」

少女は、美奈代を見ることなく言った。

その手はすでに療法魔法を発動させている。

「そこの女の子。出血がひどいから、先に止血だけしておいて。それと、そこの男の人、火傷の薬を塗ってあげて。体の構造は同じだ

から、メディカルキットの薬には意味はある」
「き、効くの？」
「毒にはならないから安心して」
信じるしかない。
美奈代が跪いたのは、真っ赤に染まった腕を抑える少女の前。
その横ではその娘の母親だろう老いた女性が、縋るような顔で美奈代を見た。
「止血します。手をどけてください――涼、聞こえるか？」
美奈代はメディカルキットを開きながら通信装置に言った。
「“鈴谷（すずや）”から医療班を送ってくれ。負傷者多数。療法魔導師がすぐに必要だ」
いいつつ、少女が血に染まった手をどけ、そして現れた傷口に卒倒しそうになったのは美奈代の方だった。
血がドクドクと流れる傷口は、攻撃が腕を貫通した痕だった。
深くえぐれてどす黒い肉が盛り上がっている。
骨も神経も血管もかなりのダメージを受けているのは、素人の美奈代にもわかる。

――こんなの、直るの？

目を背けたいのを必死に堪え、少なくとも表面上は感情を殺した美奈代は、マニュアルにある通り、傷口に消毒済みのガーゼに魔法薬を当て、止血パッドで抑えた。

「痛いっ！」
少女が悲鳴を上げる。
「薬がすぐに効くから、我慢しなさい」
美奈代がとっさに言った。
「血が止まれば助かるわ」
美奈代は、傷口より上、心臓に近い方を付属のゴムバンドで縛り

ながら言った。
「傷口も、すぐ直してもらえるから。少しの辛抱よ」
すでに何人かの治療を終えた、あの少女の背中を一瞥した美奈代は、笑って見せた。
泣きべそをかきながら、それでも傷を負った少女も無理に笑い返した。
――助かる。
――あなた、助かるから。
美奈代は頷くと、その横で腕を押さえている、若い男の横に移った。

それにしても。
全員の施術が終わったのを見届けた美奈代は、今更ながら住民達を見て驚いた。

長く尖った耳。
人類なら尾てい骨のあるあたりから伸びる狐のような長い尻尾。

そんなものをつけた人間なんて見たことがない。
この人達は一体？
首を傾げつつ、美奈代は銀髪の女の子に近づいた。
この子なら、何か知っているかもしれない。
そう思うから。
美奈代が、少女の肩に手を触れたのと、村長（むらおさ）を名乗る老人が語りかけたのは、同時だった。

“鈴谷（すずや）”から発艦したTAC（タクティカル・エア・カーゴ）が上空に到着。療法魔導師と医療部隊による医療活動が始まったのは、それからすぐのことだった。

「レダ族といいます」
ダユーは、フェルミ博士に答えた。
「人類創造の話は、先程の件でお分かりいただけたかと？」

「第三の人類……」

「そう。第一の“アダム”と第二の“イヴ”は、互いの欠陥を補正するために掛け合わされて消滅しました。それがあなた方のご先祖のプロトタイプ。この辺もよろしいですね？」

「了承している。それ以外、つまり、第三の人類として試作された“リリス”の末裔が、この島の住民“レダ族”だと」

「そうです。独自の自然崇拝を持ち、自然と共に生きる。自然を壊すことを忌み嫌い、自然の中にこそ神を求める――自然の守り手としての人間の有り様を示した、獄族たる我らの提示したタイプです」
そう答えるダユーはどこか誇らしげだ。

「自然と共に……」

「消耗の効く労働力としての人を、我々は望まなかった。自らの代わりとなって、この美しい、緑あふれる自然を守り続けて欲しい。その願いを託すに足りる存在としての人を求めた」

ダユーは、そっとその白く細い指で緑の葉を茂らせる、名も知らない枝に触れた。

フェルミ博士は、顔色一つ代えずにその様子を眺めている。

「……少なくとも、人の有り様をどうするか。その点で神族や魔族と、我々獄族は違った」

クシャッ。

ダユーの手の中で緑の葉が潰れた。

「自らの欲望の対象とするか、この世界の管理者に相応しい身とするか。挙げ句が」

パラッ

潰された葉がダユーの手からこぼれ落ちた。

「……言わなくてもわかるでしょう？」

「……その“自らの代理”に対して、随分な仕打ちですな」

「自らの欲望を満たす労働力としての人だろうと、自らの代理人だろうと」

言っていることにしかフェルミ博士には聞こえないが、ダユーはそんな心がわかるように、悪戯っぽく言った。

「結局、私達にとって“被造物”に過ぎないのです」

「つまり、どう扱おうが他人からとやかく言われる覚えはない、と？」

「育てた野菜や花を摘み取ることを他人からとやかく言われたら、同じ事言いません？」

「……草木と人間を同格ですか」

「広く、巨大な、それこそ創造主の広い視点に立てば、そうなると思いません？」

「それ程の視点に立つ権利があなた方にはある」

「作り上げたのは私達ですもの。主ではありません」

「その創造主の慈悲すら得られぬ身ですか？我々は」

「――――我々こそがあなた方の創造主だということをお忘れなく。さて、着きましたよ？」

足を止めたダユー達の前に現れたのは、木立の中に隠れるようにして存在する石造りのドームだった。

「これが？」

「この地下です」

ダユーは興味もない。という顔で言った。

「ここは住民達独自の祭祀施設。私達の目指すものは、その地下にあります。といってもまぁ」

ドズゥゥゥム

鈍い音の後、空気の波が居合わせた者達に襲いかかった。

「壊しちゃった後ですけどね」

カナンの渦の向こうで　第四話

もうもうと土煙が立ち上り、周囲にガレキが散乱する中。
ポッカリと洞窟が黒い口を開けていた。

「住民達の祭祀施設だったというじゃないか」
ハンカチで口元を抑えながら、フェルミ博士は言った。
「いいのかね？宗教施設を破壊して、統治を長引かせることは難しいぞ？」
「本来なら」
ダユーは涼しい顔で答えた。
「崇拝されるべきは、創造主たる我々だということをお忘なく」
「……ふむ」
兵士達が照明を準備して洞窟の中へと入っていく。周辺警護に立つメース達の何体かが、チェーンを用意している音が耳障りだ。
「正論だな」
「その通り」
ダユーは頷くと、フェルミ博士達を促した。

機械によって強制的に送り込まれる空気を背中に感じながら、兵士達が一定間隔に壁に据え付けた照明に照らし出された洞窟の中。
フェルミ博士は、そっと後ろを歩く士官に声をかけた。
「月城大尉」
「――――はっ」
「君は、何を求めて志願した？」
「失礼ですが」
フェルミ博士の見る月城大尉の目は尋常ではない。
達観したというより、何かを諦めた。という顔だ。
「博士は？」

「少なくとも金ではない」
「なら、私も同じです」
「ほう？」
「知的好奇心、とでも言っておきましょうか」
「……」
「……」
「……世の中に」
少しの沈黙の後、フェルミ博士はポツリと言った。
「どうなるか、全く見当が付かないものが二つある。知っているかね？」
「さぁ？」
「男が最初の酒を飲む時。そして……」
フェルミ博士は意味ありげに月城大尉の顔を見た。
「女が最後の酒を飲む時」
「意味がわかりません」
月城大尉は答えた。
「私は少なくとも素面（しらふ）です」
「何に酔っているか……だな」
「発言は明瞭に願います」
じれたように月城大尉は言った。
「何を言われているのか、わかりません」
「わかろうとしなければ、何もわからんよ」
フェルミ博士は肩をすくめると、前方で立ち止まったダユーに訊ねた。
「さて？ここに何があるのだね？」
先を歩いてたダユー達が立っているのが、ホールになっているのに気付いたのは、その時だった。
「……これですわ」
ダユーがその細いアゴで示したのは、ホールの奥に据えられた、

白く輝く水晶の柱だった。
高さは約3メートル程。
複雑な模様が描かれた石造りの壇の上に据え付けられた水晶からは、不思議な白い光がぼんやりと放たれ続けている。
「……これは？」
「“封印柱”……やっぱりあのおチビちゃんは、こんなおイタしてたのね？」
「ん？」
「この柱が何かは知らなくて結構。あなた達の仕事は」
ダユーは、どこからから、紙を二枚、取りだした。
「ここに書かれている言葉を読み上げる。それだけのことです」

「終わったよ？」
銀髪の女の子が、後藤達の前に戻ってきたのは、丁度、その時だった。
「はい。ごくろうさん」
「後藤さん。ここにいていいの？」
「俺はもう少ししたら」
後藤はニヤリと楽しげに笑った。
「この艦内じゃお尋ね者さ」
「今でもそうじゃないの？」
少女は、急須を掴んでお茶の準備を始めた。
「艦内で呼び出しが続いているよ？」
「艦長に放っておいてくれって、そう伝えておいてよ」
「僕までお尋ね者だよ。お師匠様？これ、返しておきますね？」
少女は、腕から腕章を外した。
「人助けって、気分がいいでしょう？」
「よく――わかんないです」
「……そう」

受け取った相手が、腕章を畳ながら、小さく失望のため息をついたのを、後藤は見逃さなかった。
「で？奴さん達、ついに見つけたってワケですか？」
「そうね――濃いめでお茶にして」
「はい」
「人類が封印を解くわけだし。私にゃもう、何も出来ない」
「本当に？」
「どういう意味？」
「――カン、ですかね」
「……鋭いわね」

「ったく」
美奈代は毒づきながらコクピットに潜り込んだ。
「メサイア乗って、初めて人から感謝されたっていうのに」
「メサイア乗りなんて、嫌われてナンボの商売ですよ？」
「ヤクザじゃないんですから」
「あんな奴らよりよっぽど極道な仕事ですから」
「そうですか？」
「町を焼き払った経験がヤクザにあると？」
「……」
「ね？」
笑顔を見せた牧野中尉は、そこで真顔になった。
「――さて」
「連中に、どんな動きがあるか。ですね」

「この水晶柱には、封印がされています」

ダユーは言った。
「その封印を解くために、あなた方を呼んだ。本来なら、私達でも魔族でも、誰でも医院ですけど、一般に認知されている人間が行わなければならない。そういう決まりがあるんです」

「その封印を解く呪文でも？」
ダユーから紙を受け取りながら、フェルミ博士はそう訊ねた。

「その通り」
ダユーは微笑んで頷いた。
「封印を解除してさえくれれば、あとの命は保証しましょう」

「拒むなら？」

「あの艦の乗組員全員を順繰りに連れてくるだけです」

「……で？」
月城大尉は、興味がないといわんばかりの顔で言った。
「この紙に帝国語で書かれた文章を読み上げればいいのか？」

「そう」
ダユーは頷いた。
「上手くいったら」

「上手くいったら？」

「――――あなた、階級は？」

「……」
月城大尉は、一瞬だけ顔をしかめた。

少佐。
ほんの少し前だったら、胸を張ってそう言えた。
中佐。
そう呼ばれるゴール地点だってもう目の前だったはずだ。
それなのに――
「……大尉だ」

「――ご褒美に、私の元に来ることを許しましょう」

「……何？」

「中佐、位にはしてあげましょう」
ダユーはお前の価値は値踏みしきった。といわんばかりの顔で言った。
「あなたの望む力は――人類にはない」

「……」
中佐。
力。
目の前に突然現れた栄光の二文字。
死んでいった部下達の顔。
無様なまでに潰されたあの戦闘の記憶。
査問委員会の様子。
部隊指揮官章を返納した時の記憶。
様々な、ただ、共通することはどす黒い屈辱にまみれた記憶が、
月城の心の中で渦巻いた。

「……全ては、上手くいった後のことです」
ダユーは月城大尉から視線を外した。

“お前との会話は終わった”と、月城大尉は言われた気がした。
ギュッ。
無意識に紙を掴む手に力がこもる。
まるで、突然、全ての灯りを消されたような虚無感が月城大尉を掴んで離さない。

「読み上げなさい。読まなければ進まないわよ？」

その一言に、月城大尉は紙に縋り付いた。
まるで、漆黒の闇に包まれた地獄の中で、一筋の光明を見いだした罪人のように。

声がうわずっているのが自分でもわかる。
何を喋っているのかさえわからない。
ただ、月城大尉は、必死に舌を動かした。
自分の体で動くことが出来るのは舌だけだ。
そういわんばかりに、舌を動かし続けた。

我は美貌称えられし者

我は背の高き者

我は胸豊かな者

……読んでいる方も意味不明な言葉の羅列が洞窟内に響き渡った。
それを熱望していたはずのダユーの顔が呆れを。そしてユギオの

顔は、むしろ哀れみに近い色を浮かべていたことに気付く者は、今時点では、誰もいなかった。

「……何？」

視線を感じて、不愉快そうに相手を睨み付けた。

その先には、自分に視線を送る、先程の銀髪の女の子がいた。

気に入らないのは、その視線だ。

「その、気の毒な人を見ているような目つきは」

「背が高いとか、若いとか、おっぱいが大きいとか……誰のことです？」

「……」

「……誰、指さしてるんですか？――――痛い痛いっ！」

突然、口の中に指を突っ込まれ、力任せに引っ張られた少女は悲鳴を上げた。

「ううっ……お師匠様を知っている人が知ったら、どう思うんです？」

「知ったことですか！本当のコトじゃない――――こら、どうして突然、姿見なんて取りだしたのよ」

「鏡、見たことないのかなと思って」

グシャッ！

室内に、およそ人体から聞こえてはいけない音が響き渡ったのは、その瞬間だった。

「……さて」

朗読が終わり、沈黙が続く洞窟内で、最初に喋ったのはダユーだった。
「あのおチビちゃんの痛い痛い自己主張が終わったところで」
それまで、白い光を放っていた水晶柱に光はない。
持ち込まれた照明の光を鈍く反射するだけだ。
「封印は解除されたようですね」
ダユーは、控えていた兵士達に命じた。
「“これ”をすぐに艦に運びなさい。傷をつけないように厳重に梱包して」
「お任せ下さい」
兵士は頷いた。
「三界相手に安心輸送がモットーのシロネコ運輸出身のスタッフが担当します」
「……そう」
水晶柱にとりかかる部下を見守るダユーは、不意に自分に注がれる視線に気付いた。
視線の主に気付いたダユーは、ちょっと前に自分がどういう約束をしたのか思い出した。
「……採用面接は省いてあげましょう」
その視線の先にいるのは、月城大尉だった。
「そちらの……博士でしたね」
「ふむ？」
「ここからは女同士の話です。席を外していただきましょう。ユギオ殿？先に艦に戻って受け入れの指揮を執ってくださいな。それと、途中、博士を人類側に引き渡してくださいな」
「……わかりました。フェルミ博士？どうぞ」
「……月城大尉と話がしたいが」
「……」
「いいですよ？ただし、その場で」
「感謝する――月城大尉」

「……はい」
月城大尉は、フェルミ博士の顔を見なかった。
「相手が人間ではない。魔族でもない。だからか？」
「……」
「部下を失い、地位を失った。その埋め合わせを、人類以外に求めるとは」
フェルミ博士は、普段通りの感情の読みづらい発音を続けていたが、しかし、聞き慣れた者が聞けば、その発音には怒りが込められているのがわかったろう。
「どういう変節だ？何を考えてる。君には良心というものがなのか？それとも、それが」
フェルミ博士の視線が、月城大尉の襟元で鈍く光る階級章に注がれた。
「――近衛騎士の価値観か？」
「……」
月城大尉は、無言で階級章を掴むと、力任せに引きちぎり、そして、それをあらぬ方向に放り捨てた。
「――力が欲しい」
ポツリと、月城大尉は言った。
「二度と、部下を失わない力を、栄光を、近衛は保証してくれなかった。私は何も悪くない。何も失態はない。私のプライドを傷つけるのは、私以外の存在だ」
「……」
「私を傷つける者から、私自身を護るために、私には力が必要だ」
月城大尉は、背筋を伸ばし、そしてフェルミ博士にきっぱりと言い切った。
「私は力が欲しい！力を求める身なら！力を与えてくれる御方の元へと馳せ参じて何が悪い！」
「自決したまえ！」
フェルミ博士は怒鳴った。

「君に人間としてのプライドがあるのなら！」
「プライドを護るために！私は力を求めるっ！私の全てのプライドを踏みにじってくれた全てに復讐する力を与えてくるのは、この方だけだ！」
「得体の知れぬ力にすがって誰が評してくれるというのか！」
「誰の評価もいらぬ！」
月城大尉は真っ赤になって、力を込めてフェルミ博士を睨み付けた。
「私一人が！私が私を評価すれば、それでいいっ！
私のことは私にしかわからないっ！
栄光を潰され！
部下を失い！
積み上げてきた全てを失った者の思いなぞ！
あなたにわかってたまるものですか！」
「……」
「……私は、力を求める」
月城大尉はダユーの前に跪いた。
「あなたが求めるなら、私はあなたに忠義を誓おう。その代わり」
月城大尉は、まっすぐにダユーを見つめる。
対するダユーは、ただ冷たく、跪いた月城大尉を見下ろすだけ。
「――私に、私の全てを満たすだけの力を。あなたにしか与える事の出来ない、人にとって未踏の力を、私に下さい」

「――いいでしょう」
ダユーは、冷たい、本当に冷たい笑みを浮かべて言った。
「三界を圧する獄族。その中でも“永遠者（エターナル）”となった私に忠誠を誓うのか？語られる言葉の意味すらわからず、それでも尚、忠誠を誓うか？
――愚かな狗の如く」

「――御意」

「――これでもか？」

ガンッ！

ダユーの爪先が、月城大尉の顎を捉えた。

蹴り飛ばされた月城大尉が、洞窟の床を転がった。

「これで尚、私に振る尻尾を持つか？」

「……はい」

口から流れる血を、グローブの甲で拭った月城大尉は、再び跪いた。

「幾度、どのような扱いを受けようと、力を――求めます」

「……よかろう」

クックックッ

ダユーの喉から、心底楽しい。そう言わんばかりの笑い声が零れた。

「――同胞を全て敵に回すか？」

その声は、楽しい。とはいえ、聞きたい声色ではなかった。

「私に忠義を誓うとは、人類全てを裏切るのと同じだ。それでも尚、私に忠義を誓うとは……これまでの全ての名声を地に落としてなお、私に尻尾を振るとは……とんだ忠義者だ！」

ダユーは、笑いながら何度も頷いた。

「よかろう。私への忠義は信じよう。なら、私はお前に何を与える？何が欲しい？」

「――力を」

「よろしい。ならば、私は、見返りとして上げましょう。三界最高最強の装備と――――殺しの快楽を――――」

言いかけて、ダユーは自分のミスに気付いた。

「まず、名前を名乗りなさい」

「――――月城真菜」

「さぁ。博士」

ユギオに促されたフェルミ博士が最後に見た月城大尉の姿。

それは、這い蹲ってダユーの爪先に口づけする姿だった。

最後の酒とはな？

フェルミ博士は、ポツリと言った。

破滅――――そういう意味なんだよ、大尉。

自ら望んでいたのかは知らない。

望んで最後の酒を飲んだのか。

それとも、飲まされたのか。

フェルミ博士は知らない。

ただ、博士にわかることは、月城真菜が、人間として破滅したことだけだった。

カナンの渦の向こうで　第五話

「動きがありました！」
牧野中尉からの声に、美奈代が顔をしかめたのも無理はない。
この時点で美奈代達は、集落側に展開し、反面、メース達は集落から離れた場所にある祭祀施設を護る形で展開。
両勢力は真っ向から対峙している。
対峙して尚、決定的な事態が起きないのは、美奈代達が母艦を差し押さえられているからに他ならない。
ここで、美奈代が何かしでかしたら、その代償は“鈴谷（すずや）”乗組員数千人の命で支払うことになる。
美奈代も、皆がそれを知っている。

祭祀施設周辺に停止中のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が動き出そうとしていた。
「あれに、何が？」
「不明です。ただ、“お宝”があそこに運び込まれた。そう見て良いでしょうね」
「……リスクは覚悟の上ですか？」
「無論」
「“鈴谷（すずや）”の乗組員達に無駄な犠牲が出るかもしれませんよ？」
「……」
「そんなこと知ったことか、とか、思ってません？」
「思ってません」
「度胸がないんですね」
「常識はあります」
「嘘おっしゃい……あら？」
「どうしました？」
「津島中佐達が乗ったＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が動き出しました」

「どこへ」
「祭祀施設の方へ！」
「柏達はどうしたの！？」

「――成る程？」
洞窟から出たフェルミ博士は、離陸していく魔族軍のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）と入れ替わる形で着陸態勢に入った、見慣れたＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を見上げた。
「護衛のメサイアの姿が見えないのは？」
「連中には、動くな。そう命じてあります」
「リスク回避は徹底している。そういうワケか？」
「その通り」
ユギオは自信満々に答えた。
「まさかのことを考えると、我々だけでコトを運ぶことにはリスクが高すぎる」
「臆病者の戯言とも聞こえるが？」
「それこそ何とでも」
ユギオは肩をすくめた。
「何でしたら、チャーター料位は負担しますよ？」
「……大盤振る舞いで羨ましいな」

二人の前で、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）背後にあるコンテナハッチが開いた。

「お師匠様！」
ハッチから飛び出してきたのは、フェルミ博士の教え子達だ。
二人は何故か、真っ青になって博士の下に駆け寄ってきた。
「お気を確かに！」
「施設にすぐに収容しますからっ！」
二人は涙目になって声を張り上げるが、フェルミ博士には意味がわからない。

「何を言っているんだね？」
「博士が！」
紅葉は言った。
「急性の認知症にかかったって！」
「脳がイカれたから、すぐに引き取りに来てくれと！」
ガンッ！
ガガンッ！
フェルミ博士の両手の拳が、二人の脳天に炸裂した。
「――人を何だと思っている」
「で、ですけどぉ……」
脳天にでっかいタンコブを作った紅葉が泣きながら言った。
「もう、いいお年ですし……痛い……」
「それで認知症……だと？脳がイカれただと？」
「何で、僕の方がゲンコツが一発多いんですか？」
「理由を知りたければこっちへ来たまえ……」
痛い痛いっ！
子供達は、祖父に耳を引っ張られて近くの藪の中へと消えていった。
あきれ顔でそれを見送った背後では、梱包された水晶柱が、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のカーゴルームの中へと搬入する作業が始まっていた。

「……してやられたな」
苦虫を噛み潰したのは、何も美奈代だけではない。
あの後藤もだった。
「こっち側のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の発艦を許したのは、このためか」

「だから止めさせろと言ったのよ」

「その時にゃ、私ゃまだ、あんたと接触してないよ」
「このバカ息子に、止めさせろっていったのに」
「行ったのに？」
「何だか知らないけど、迷子になったとか行って、ノコノコ戻ってくるし」
「……成る程？」
後藤は面白そうに、目の前で唇を尖らせて何か言いたそうにしている女の子に語りかけた。
「おじさんの言うこと聞いてくれたら、あのハンガーデッキで見た、髪の長いお姉さんの名前、教えてあげようか？」
「えっ！？」
びっくりしたらしい少女の体がピョンッと飛び上がった。
「ほ、本当？」
「憲兵隊がね？ハンガーデッキに不審者。しかも子供がいるなんていうからびっくりしたけど――まぁいいや。写真もつけてあげようか？」
「き、きくっ！」
ガンッ！
少女が頷いたのと、その側頭部に湯飲みが命中したのは、同時だった。
「このバカ息子っ！仕事を忘れて女に見惚れていた！しかも人間に姿見られたと！？」
「いやぁ……でも、オンナを見る目はあると思うよ？俺は」
後藤は言った。
「まぁ、風間に惚れるってのは――ちょっと理想が高すぎる気がするけどねぇ」
「風間って言うの？」
少女は、それでも興味津々という顔で後藤に訊ねた。
ヒョイッ。
飛んでくる菓子皿を器用に避けた。

「風間――――何？」
「下の名前が知りたかったら、おじさんの言うこと聞いてくれる？」
「いいよ？何？」
「ちょっと――――悪さしてほしいのさ」
「どんなこと？」
「こらっ！」
「お師匠様は黙ってて。僕の人生に関わる大切なことなんだから」
「斬首してやるから刀貸しなさいっ！それで人生終わりにしてやるっ！」
「後藤さん？」
「人生とは大きく出たねぇ……いいかい？」
後藤は、少女の耳元で二言三言言うと、ポケットから取りだした何かを少女に手渡した。
「……えっ？」
少女は、きょとん。とした顔になった。
「そんなんでいいの？」
「ああ」
後藤は心底意地悪い顔になった。
「成功したら、ご褒美に名前どころかご縁を取り持ってあげよう」
「やるっ！」

「おや？」
藪から出てきた相手を見て、ユギオは意外という顔になった。
二人しかいない。
「肝心のフェルミ博士は？」
「そこら辺、散策してくるから好きにしろって」
紅葉は言った。
「お師匠様、気まぐれだし、ここは、人類未到の地だから、興味深

いんだと思う」と殿下も言った。
ただ、その顔に生気はない。
「……ふぅむ」
二人が嘘をついているのははっきりしている。
ユギオは判断に迷った。
ここでフェルミ博士を置いていくか？
それとも――。
「姫に一報は入れておくか」
ユギオは、ポツリとそう呟くと、二人を促してＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に乗り込んだ。
彼がダユーから受けたのは、博士を人類に引き渡すこと。
その約束は果たした。
後で博士が何をしようと、自分の感知することではない。
それが、ユギオの結論だった。
それに――

ユギオは、ワイヤーで固定される水晶柱を見上げながら嬉しそうに微笑んだ。
「こいつの前に、人間一匹、どうということもあるまい」

それが、彼にとってに正論なのだ。

「くそっ」
美奈代は、離陸するＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を苦々しく睨み付けるしかない。
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）ごと吹っ飛ばしてやろうか」
“見通者（シーカー）”３人、しかも世界最高レベル、ウチ一人は国家元首。

それを、ですか？」
「事故はあるものですが……」
美奈代は言葉を飲み込んだ。
「責任は取りたくありません」
「それが理性と言うものです。覚えておきなさい」
「……はい」
「それで？」
「ここから、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のカーゴだけ狙撃出来ますか？」
「理屈上は可能ですけど、敵メースがＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の上下を護衛しています。さらに、狙撃の報復として、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）乗組員達にどんな悲劇が待ち受けているかは考えたくないです」
「……ですよね」
ハァッ。
美奈代はため息と一緒に答えた。
「万事休す――これでチェックメイトです」
「残念ですね」
「人質取られていたのです。まだ言い訳は立ちますよ」
「後藤隊長はどう動くと見ていました？」
「何ですか？いきなり」
「質問に答えて下さいな」
「……艦内で武力放棄。各ブロックを完全確保の後、魔族を艦内から追い出す」
「それで？」
「その間に、私達が逆に魔族軍艦を制圧する」
「……本当に」
牧野中尉は驚いた。という顔になった。
「――ですねぇ」
「はい？何て言ったんです？声が小さくて聞き取れませんでした」
「いえ別に？今は気にする必要もないことです」
「……はぁ？」

「どうするのよ！」
ユギオの見えないところで、紅葉が殿下の袖を引っ張ると、耳元で囁いた。
「お師匠様、いくら何でも」
「しかたないだろう？僕達に止められるはずもないじゃないか」
「薄情よ！」
「だったら、どうして君は止めなかったんだ」
「そ、それは」
「自分に出来なかったことを、人のせいにしないでほしい」
「っ！」
「――僕だって辛いんだ」
殿下は吐き捨てるように言った。
「自分だけ、特別扱いだと思わないで欲しい！そんなのは卑怯だ！」
「……御免」
「……」
「だけど……だけど……」
……ヒック。
「……紅葉さん？」
殿下はびっくりした顔で紅葉の顔をのぞき込もうとしたが、
「……ちょっと、トイレ行ってくる」
紅葉は、殿下に顔をのぞきこませるまいとして、トイレに向かって駆けだした。
「……おい」
殿下は、呆然として、お付きの武官に訊ねた。
「僕は、何をしたんだ？」
「殿下達に何があったかは存じません」
武官は答えた。
「しかし、何か、思いの上でやり場のない出来事があったと拝察し

ます。紅葉さんは、その思いを、殿下に向けてしまった。年下である殿下を年齢的にも立場的にも護るべき紅葉さんは、それに気付いた時、思いが胸の中で爆発した。そんなところでしょう」

「つまり――僕は」

殿下は言葉が出てこない自分にじれったそうに、言葉を一つ一つ選びながら言った。

「僕は、何も、悪いことをしていない」

「いえ？」

武官は答えた。

「皇后様（エトランジュ）がこの場にいらっしゃったら、きっと殿下をお叱りになったでしょう」

「何故？」

「殿下は、年下とはいえ、男性です」

「それで」

「男性は、ああいう状況に立った時、女性を護るべきです」

「どうすればよかったというのか」

「それを知るのが、男の子が男になる一歩でしょうな」

「……そうか」

殿下はしばらく考えた後、訊ねた。

「トイレに行って、慰めてきた方がいいかな」

「やめておくべきです。感情が収まったら、普段通りに接してあげるのが優しさでしょう」

「そういうものか？」

「そういうものです」

「――なら」

コホン。

殿下は咳払いした。

「お前にも一つ、覚えて置いて欲しい。ただ、出来れば母上には内緒にして欲しいが」

「何ですか？」

「今日、この日、この時間、この瞬間を覚えていてくれ」
「それは何故？」
「――――今」
殿下は頬を赤らめて、そして言った。
「僕は生まれて初めて、女の子を泣かせたのだから」

カナンの渦の向こうで　第六話

カッコ悪い。
紅葉が普段、観測等に用いるＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は、研究員達も数多く搭乗することを前提に設計されたタイプのため、トイレや仮眠施設などの装備は充実している。
紅葉は、そっと赤く腫れた目を鏡で見た。
年下の男の子にあそこまで言われるなんて、自分が嫌になる。
でも、一番悪いのはお師匠様だ。

――私はこの島でやりたいことがある。
――後はお前達に任せよう。

あんな申し出は無茶苦茶だ。

――科学者は常にエゴイストだ。
――エゴの塊のようなお前達が言うか？

それでも、私達にとって貴方は親だ。
親として身勝手すぎる。

――それをエゴイストというのだ。

なら、私達も自分のエゴを貫く！
それが貴方の子供だという証拠のようなものだ！

――なら、課題を与えよう。
――この島を取り巻く、龍の巣を乗り越える方法を考え、そして突破してここに来い。

――その間に、私も研究成果をまとめておこう。
――お前達のご褒美は、私の命だ。

これほど身勝手すぎる人だと思わなかった！
どこの世界に、自分の命をご褒美扱いできる人がいるんだ！
しかも――

「っ！」
紅葉は手にしたハンカチを握りしめた。

あなたは、自分の体のことを知っているはずだ！
今度の航海が終わったら、最先端の医療施設が充実したマラネリの病院に入ると約束してくれたじゃないか！
子供と約束したんだ！
それを反故にするなんて、あんまりだ！

ヒック！
喉から声が漏れ、涙があふれてくる。
私達は、あなたが心配なんだと、どうしてわかってくれないんだ！

こぼれ落ちる涙をどうしようもない。
声を上げて泣き出したいのを堪えるのがやっとだ。
普通の娘なら、それでいいだろう。
でも、私は、泣き声を誰にも聞かれたくない。
六本線（ハイパースタンド）を持つ軍中佐として、そんなのはイヤだ！
自分でもつまらない理由だと思う。
簡単に泣ける泉大尉あたりが羨ましい。
誰かにすがりついて、子供みたいにワンワン声を上げて泣いてみたい。
でも――どうしても出来ない。

はぁっ。

殿下が大きくなったら、そんなこともさせてもらえるかな。

深く深呼吸した紅葉は、ふと、そんなコトを考えて、自分の考えに驚いた。

冗談！

あんな子供に！？

４つも年下だよ？

あり得ない！

そう！

あり得ないんだからっ！

パンパンッ！

紅葉は自分の頬を両手で叩いて気合いを入れた。

殿下なんて――――別に好きじゃない！

まだ、好きってレベルじゃない！

殿下が私を好きにさせる別だけど、今は、そんなこと考えている場合じゃない！

とにかく、魔族軍に制圧された中でしか出来ないことがあるはずだ！

「……そうだ」

紅葉はハッ。となった。

今、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は魔族軍の軍艦へと向かっている。
なら、軍艦の中にあるメースの情報が手に入る絶好のチャンスだ。
上手くいけば、部品をちょろまかすことも出来るかも知れない。
いや。
メースの部品なら、戦場でいくらでも回収できる。
問題は――
「……整備用品」
そう。
メースを分析する上で、各国の研究者達を悩ませているのは、その分解方法がわからないこと。
大抵は、大型のバーナーで何時間もかけて装甲を焼き切るしかない。しかもこの場合、中の機材が大体、バーナーの熱で使い物にならなくなるおまけ付きだ
電気を知っていても、ネジを知らない世界に、家電製品を持ち込んだようなもの。
どこかの科学者がマスコミに言っていたが、名言だと紅葉でさえ思う。
もし、艦内でメースが分解整備を受けていたら、その方法を知る絶好のチャンスだ。
こうしちゃいられない！
機材揃えて、必要なら翻訳装置を借りて！
紅葉はトイレから出ようとして、トイレの壁に一枚の張り紙があることに気付いた。
「１０分間でいいです。ここから出ないでください。静かにしていてください。お願いします」
そう、書かれていた。
トイレに入った時には気付かなかった。
達筆な割にどこか幼い感じのする文字は、マジックかなにかで太

く書かれていた。

「……何よこれ」

紅葉は張り紙を剥がしてノブに手を回した。

ガチャ

「……えっ？」

鍵はかかっていないのに、何故かトイレのドアが開かない。

「な、何よこれっ！？」

そのトイレの外。

正確にはカーゴブロックは現在、魔族軍兵士――――正確には獄族の兵士によって厳重な警備が敷かれていた。

兵士達も、積荷が何かは聞かされていない。

ただ、兵士である以上、“これを守れ”と言われれば忠実に守るだけだ。

「――――ん？」

カーゴブロックに入り込んできたのは、白い服装をした小さな女の子だった。

警備の関係上、乗り込み時に行った乗組員の面通しの時、ツシマ・モミジと名乗っていた女の子だと、兵士の一人は思った。

紅葉は、お盆に乗った容器を持って近づいてくると、笑顔で言った。

「お茶の時間ですよ？」

「……いや」

兵士は困った顔で言った。

「すまん。勤務中だ」

「せっかく、淹れてきたんですよぉ？」

兵士は、目の前で女の子に泣かれそうになって、思わず仲間に助けを求めた。

「みなさんのためにって」
「おいおい」
兵士の中でも乱暴なことで知られる大柄な兵士が、さっきの兵士を押しのけるようにして、紅葉の前に立つと、紅葉を値踏みするかのように睨み付けた。
「俺達ゃ仕事中だ。わかるか？」
「休憩は必要ですよね？」
紅葉は、お盆の上に置かれた小さなビンを視線で示した。
「お茶に淹れるとおいしいお酒もありますよ？」
「――――おい、これ」
兵士の目の色が変わった。
「グラスティアじゃないか？しかも、天界の最上級グレード！」
「何っ！？」
別な兵士達の間からも関心を持った声が挙がる。
「ぐ、グラスティアだと！？」
「本物か！？」
「待て待て！」
ヒョイッ
お盆からビンを掴んだ兵士がラベルをしげしげと眺めると、キャップを開き、匂いを嗅いだ挙げ句が、その中身を一舐めした。
「この味は間違いねぇ！本物のグラスティアだ！」
「お茶に合うって、もらったんです。よかったら」
「よしよし」
兵士はグラスティアのビンを手放すことなく頷いた。
「グラスティアはほんの一滴でもまがい物を混ぜれば味が変わる。俺にはわかる。コイツにゃ何も入れてねぇ。混ざりけがねぇから、お前が何か悪さしに来たワケじゃねぇってこともな」
「ありがとうございます」
紅葉はニコリと微笑んだが、
「だけどお嬢ちゃん？」

シュンッ。
突然、突き出された剣の切っ先が、紅葉の喉元に突きつけられた。
「細工が過ぎるってのは、考え物だぜ？」
「……えっ？」
自分の身に何が起きたか、初めてわかった。
剣を見る紅葉の目は、そんな感じだった。
「あ……あの？」
「一つ。お前、翻訳装置もなしでどうやって言葉を覚えた？二つ。人間がどうして天界でも入手困難なグラスティアを持っている？」
「……あの」
「何故だ？」
「信じてもらえないかも知れませんが」
「なら言うな」
「……ぷぅ」
「つまんねぇな。冗談だよ。言いな」
「……神族の人がいまして」
「死ぬか？」
「本当ですよぉ。本人、そう言っていたもん！」
「……それで」
「その人から、私達の言葉だって、教えてもらったんです。このお酒は、大きくなったら飲んでいいってもらったけど、私、お酒なんて飲む人嫌いだし。もったいないから、みなさんは、男の人達だし、だから飲んでもらえるかなって」
「……成る程？」
兵士は剣をひっこめた。
「俺も、神族や魔族に、個人として人間界に移り住んでいる物好きがいるって話は知っている。それに、お前さんの話は、作り話にしちゃ、出来すぎている」
「本当ですよぉ」
「まぁいい。すぐに任務は終わる。そしたら、グラスティア入りの

人間界の茶で乾杯だ」
「お茶、どこ置いておきます？冷めちゃいますよ？」
「ティーポットに淹れてあるな？よし。そこのテーブルの上に置いておけ」
「はぁい」
紅葉は、顎で示されたテーブルの上にお盆を置いた。
「……所で」
「ん？」
「これ、何ですか？」
「こら、触るな！」
「あ、危ないんですか？」
「梱包材の上だからいいだろうが、俺達も中身は知らん。厳重扱いを受けている」
「ふぅん？」
手を引っ込めた紅葉は、珍しいそうに目の前にワイヤーで固定されたモノを見上げた。
「危ないから、私、何もしないで引っ込みますけど、お茶、飲んでくださいね？おいししいんですから」
紅葉はペコリと頭を下げると、ブロックから出ていった。

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が魔族軍飛行艦“エーラスティア”のデッキに降り立ったのは、それからすぐのことだった。
人類側と魔族側で規格が異なるため、ビーコン誘導による着艦は出来ない。
“エーラスティア”による強制誘導ビームという、人類にとって得体の知れない技術によって無理矢理着艦をコントロールされたＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）側の操縦席では、乗組員達が生きた心地さえしなかった。
とにかく、全員がその場で一歩も動くなと命じられ、開かれたカ

ーゴブロックのハッチから搬出された梱包物が、“エーラスティア”の床に置かれた。
それを確認した途端、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の艇長は、

ハッチを閉めてさっさと艦から離れろ。

そう、命じられた。

――人使いの荒さは、ウチの艦隊司令部以上だぜ。

艇長は毒づきながも、“エーラスティア”側のデッキクルーの手旗信号に誘導され、艦を発進した。
紅葉がトイレから飛び出してくるなり、殿下を締め上げよう飛びかかったのは、そのタイミングだった。

「やっと……ですね」
「ええ」
紅葉達のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）と入れ替えになる形で、魔族軍側のＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が“エーラスティア”に着艦。
艦の応接室に移ったダユー達は、互いにグラスを掲げてみせた。
すでに、“鈴谷（すずや）”の監視に出ていた部隊の乗ったＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）やメースの回収も進んでいる。

全ては驚く程順調だ。

「これで、ヴォルトモード卿は復活する。我々の一分も成り立つ」
「そう願いますわ」

「本当に」
ユギオはグラスを一息で空けてみせた。
「後は――――」
「用済みを消すだけですね」
「命は保証すると言ったのに」
「用が済むまでですよ」
ダユーもまた、グラスを空けた。
「人間界のワインも悪くないですね」
「フランス製の最高級です」
「へぇ？」
「イツミのトラップのおかげで、今後数十年は飲めないでしょうね」
「――――残念」
ダユーは、グラスを軽く弄ぶとテーブルの上に置かれていた受話器をとった。
「私です。メース部隊に通達――――例の手順通りに。刃向かうなら始末なさい」

「敵、動きましたっ！」
「なっ！？」
反撃の体勢をとろうとした美奈代は、自分達がどこにいるかをとっさに思い出した。
後ろには集落がある。
こんなところで戦闘になったら、集落の住民はどうなる？
「全騎、後退っ！柏達と合流するっ！戦域から集落を外せっ！」
「はいっ！」
「了解」
「……」
何故か、宗像の返事がない。
美奈代は、それに構っているヒマはなかった。

聞き取れなかった。
勝手にそう判断した。
とにかく、全騎がブースターを開き、集落から離れ、柏美晴達のいるポイントまで一気に後退した。
機動性に勝るメース達は、美奈代達が着地したタイミングとほぼ同時に、戦斧を美奈代達めがけて振り下ろしていた。

ドンッ！

振り下ろされた戦斧を器用にシールドで捌いた美奈代の目の前で、メースの胴体に風穴が開いた。
「誰だ！？」
「平野騎！」
「平野、感謝だ！」
「いえいえ」
芳（かおる）は自信満々で言った。
「その代わりに助けてくださいね」
「善処しよう。全騎、単騎で渡り合うな！向こうの方がいろいろ上だ！フォーメーションを組めっ！」
「敵、増援多数接近中！――――“鈴谷（すずや）”にも何騎か！」
「こちら宗像。泉、“鈴谷（すずや）”の防御に回れ」
「しかし！」
「ここは私と美晴達で何とかする。機動性と狙撃性に優れたお前達しか“鈴谷（すずや）”は守れない」
「――――っ！」
今、目の前にいるメースは3騎。
3対3の勝負。
それならば――――
「頼むぞ」
「わ、わかった」

美奈代は頷いた。
「風間、狙撃隊全騎、“鈴谷（すずや）”の防衛に回る」
「はいっ！」
「宗像、無茶だけはするな？不利なら逃げろ。無駄な損害は」
「わかっている」
宗像騎がメースと激しく鎬を削る。
突然、宗像騎がメースに蹴りを食らわせた。
これなら大丈夫だ。
美奈代はそう思った。
「……なぁ。泉」
不意に、宗像が言った。
「私達は――どんな関係だ？」
「戦友だ」
美奈代は即答した。
「候補生時代から苦労を共にした、かけがえのない、大切な戦友だと思っている」
「――そうか」
「不満か？」
「いや？」
宗像は言った。
「私を共だと思ってくれている。それを聞いて安心した」
「ん？」
「――すまない。許してくれ」
「何を？」
「柏！山崎をフォーメーションを組めっ！私が囮になるっ！」
宗像のいつも通りの凛とした声が、美奈代の問いかけに対する答えとなった。
やっぱり、指揮官としての威厳は、宗像の方があるんだな。

美奈代はちょっとだけ悔しく思いながら、“鈴谷（すずや）”へと“死乃天使”の翼を広げた。

「ち、ちょっと理沙さんっ！？」
「宗像さん、何を！」
「お、お姉さまっ、止めてくださいっ！」

その耳に、美晴達の困惑した声が届いたのは、美奈代が“鈴谷（すずや）”へ向かうメース達に襲いかかった時だ。
何が起きたかわからない。
ただ、宗像がドジをしたとは思えない。
きっと、周りが何か驚くほどの活躍でもしたんだろう。
美奈代はそう思った。
いや、そう思うのがやっとだった。
目の前で剣火を交える直前だ。
余計な神経なんて回している余裕は美奈代にもなかった。

だが――――

「えっ？」
美奈代が驚いたのも無理はない。
敵騎は、こちらの攻撃に迎撃することもなく、すぐに騎体をバンクさせて進路を変更した。
まるで、攻撃を受けたら逃げろ。そう、予め命じられていた者の動きだった。
そんな馬鹿な。
美奈代には、敵の動きが理解できない。
“鈴谷（すずや）”を攻撃しに来たんじゃないのか？
それだけじゃない。

“鈴谷（すずや）”はどうして、敵艦を攻撃しないんだ？
本来なら、“鈴谷（すずや）”から対空砲火警報が発令されている状況だ。
それが、どうして？

美奈代は、何もわからず、ただ、呆然として、遠ざかっていくメースを見送るしかなかった。

「……」

その目が見開かれ、そして、メース達が戦闘を放棄した理由を悟った。

理由なんてたった一つ。

そう。

本当に簡単なことだった。

我々は、ここにどうやって来た？

答えは簡単。

あの空間のゆがみを通った。

確か、誰かが言っていた。

あのゆがみは、いずれ消える。

そう。

もし、その時間をあいつらが知っていたら？

その時間が、もうすぐそこに来ていたら？

「……チェックメイト」

美奈代は、呆然とするしかなかった。

人類の誰もが外から入ることが出来なかった異空間――龍の巣。

自分達は、そこに閉じこめられたことになる。

自分達がたどるのはどんな末路か。

そんなことは考えたくさえなかった。

とにかく、敵は撤退した。

なら、戦闘態勢をとる意味はない。

少なくとも、美奈代は指揮官という職責にすがりつくことで、自分の未来から目を背けようとした。

「中隊全騎へ通達。状況緑。戦闘態勢解除を宣言。“鈴谷（すずや）”に近い騎は順次、帰艦しろ――宗像、そっちの状況は？」

「……」

「宗像？」

美奈代は、レシーバーの不調を疑い、そして通信モニターに映し出された表示に絶句した。

「通信不能」

普通なら、モニターには騎士の顔が映し出される。

それが、文字だけとなっている。

さっきのこともある。

美奈代の背筋に嫌な汗が流れた。

「おい、宗像っ！？」

「……柏です」
宗像の代わりに回線を開いたのは、美晴だった。
「状況を報告します」
その声は、感情を完全に殺していた。
「一人の目撃者として」

「……参ったね」
収容される宗像騎を、美奈代は信じられない。という顔で見つめていた。
宗像騎のコクピットハッチは大きく開かれたまま。
MC（メサイア・コントローラー）によるコントロールでここまで戻ってきた。
ハッチの開閉システムは騎士側の権限に属することだ。
宗像が、自らハッチを開いたことは、それではっきりしている。
爆破ボルトを使用していない辺りが、宗像に生命の危機が生じたワケではないことを示していた。

つまり、宗像が、ハッチを自らの意志で開いた。

そういうことだ。

いつの間にか、後藤がその横に立っていた。
「帰ってこない月城大尉に加えて、あげくが宗像までか」
「……」
「フィアちゃんに、大尉に宗像……」
「……」
「俺は」
後藤は言った。

「一度に5人殉職させたことがあるよ」
シュボッ
ジッポの音がして、タバコの匂いが美奈代の鼻腔に届く。
「イヤなもんさ。だけど、指揮官ってのは、そんなものだ」
「……私に」
「お前に非はない」
後藤は厳しい口調で言った。
「いいか？フィアはともかく、あの二人は自分の馬鹿げた発想で、勝手なことをしたんだ。お前に止められたなんて、誰も思っていない」
「……」
「ほら」
“練馬農協”と染め抜かれたタオルが美奈代の頭に載せられた。
「トイレに行って顔洗ってこい。中隊長命令だ」
「……」
「泣くだけ泣いてこい。お前さんにゃ、今日は最悪の日だったな。ご苦労さん」

数時間後。
“鈴谷（すずや）”艦長平野美夜中佐権限で、下記の事態が認定された。

下記の者を敵前逃亡の容疑者と断定し、その階級及び軍籍を剥奪するものとする。

月城真菜
宗像理沙

カナンの渦の向こうで　第六話（後書き）

震災でみんなが困っているのに、何のうのうとアップしてるんでしょうか。

みんな頑張れ。マジ頑張れ。携帯やパソコン通じるかわかんないけど、そんなつもりで連続アップして見ました。

こんなことしか出来ない自分が嫌です。

職場で被災地応援が募集されたらすぐ行きます。

日本が破壊されるなんて、この作品の中だけで十分なのに……いろいろ言いたいけど、全てが落ち着くまでは、励ましの言葉だけに抑えます。うまく言えないですけど、こんな時にこそ、日本人の、人間の真価が問われるんだ！

そう思います。

呉越同舟。

全部を超えて、みんなで頑張ろう！

ホントは他人のことなんて言える資格もない、ちっぽけなヤツですけど……テレビで被災現場を見物してるより、こんな作品でも書いて、誰かの役に立てれば……そう願っています。

カナンの渦の向こうで　第七話

「ようするに」
涼はポツリと言った。
「私達、“鈴谷（すずや）”ごと捨てられたってわけ？」
「まぁ、そういうことね」
寧々が頷いた。

場所は、ハンガーの騎士待機ブース。

といっても、床に区分けテープが張られ、弾薬ケースが椅子やテーブルの代わりに置かれているだけ。
騎士配給用のペットボトルや簡易食料の箱が置かれた場所を、休憩スペースとして使っているだけ。
そこでは、皆が整備を受ける乗騎を見上げながら、所在なさげにぼんやりとしている。
高級ホテルのロビー顔負けとされるMC（メサイア・コントローラー）専用ブースとは雲泥の差だ。

「魔族（あいつら）が、私達をここに連れてきた理由はわからない。でも、ここが本当に、あの龍の巣の中だとしたら、私達が置かれた立場だけははっきりとわかる」
「外から入ることの出来ないってことは」
芳（かおる）も頷いた。
「つまり、外へ出られないってことでもあるしね」

「勘弁して欲しいですよね」
話し相手がほしい有珠（ありす）が話に割り込んできた。
「命は保証するみたいなこと言って、結局これじゃ、詐欺じゃない

ですか」

「今、死んでないじゃん。ってことじゃない？」

「平野少尉。そういうことじゃ」

「同じだよ」

うんっ。と、芳（かおる）は背伸びすると、大きくあくびをした。

「ふわぁぁっ。とにかく、もう敵はいないんだし、エライ人達が、解決策見つけてくれるまで、私達は待機でしょ？」

「うん……」

「じゃ」

芳（かおる）は椅子代わりに座っていた弾薬ケースから立ち上がった。

涼は、やたらと落ち着いている芳（かおる）に驚きつつも、どこかで羨ましいと思った。

「部屋にいるから――いいですよね？えっと……柏中尉？」

「いいですよ？」

すぐ近くで話を聞いていた美晴は答えた。

「美奈代さんには伝えておきます。私も仮眠が取りたいです――といっても」

美晴は、悲しげに苦笑した。

「本当は、そんな権限、私にはないんですけどね」

「階級と部隊の席次では」

ペットボトルから口を離した祷子が言った。

「ここにいる人達の中では、美晴さんが一番になりますよ」

「私からすれば、スコアの関係から見て、あなたが一番のはずよ？
祷子」
「私はイヤです」
祷子はペットボトルを弄びながら答えた。
「私は、人を使う資格なんてないですし、面倒くさいの嫌いですから」
「あなたなら、ちょっと言えば誰でも動かせると思うけど？」
「えっ？」
「祷子は、不思議と人を動かす素質があるんじゃないか。そう思っているのよ。前から」
「私に？」
「そう。威圧感にも似た、何だろう？別に偉ぶっているワケじゃないけど、有無言わさないみたいな」
「私、そんなに押しが強いですか？」
「いえ？全然、押してない。でも」
うーん。
美晴は言葉を選びながら言った。
「祷子の存在が――全てを押している？みたいな」
「……？」
祷子は首を傾げた。
「要するに、私はみなさんに、自分の意志を？」

「お願いされたら断れない。そう言ったらわかるかしら？美人って得よね。ホント」

「私より美晴さんの方が綺麗ですよ。ね？山崎さん？」

「ははっ……」

山崎は苦笑いして、優しい視線を美晴に向けた。

「個人的には――そうですね」

「ね？」

祷子は自信満々で、美晴に同意を求める。

「そう言うところが、押しが強いって言うのよ」

「――難しいですねぇ」

祷子は、眉をひそめた。

「自覚出来ません」

「まぁ、いいです。私もちょっと、部屋で仮眠を取らせてください。ここん所、ロクに寝た覚えがないんです」

美晴も弾薬ケースから立ち上がると、皆に一礼してその場を去った。

皆が、私室へ仮眠を取る理由で去っていく。

「……風間中尉」

その背中を見送ったのは祷子と寧々。

寧々がポツリと言った。

「今回のこと、どうお考えですか？」

「――鬼龍院中尉って」
祷子は苦笑気味に答えた。
「私になんて、そんな敬語使わなくていいのですよ？中尉は周囲に気を使いすぎです。
現に、階級からすれば指揮権はあなたにあるべきなのに、狙撃隊の指揮を小清水少尉に執らせているし」

「あの子の方が」
心外。といわんばかりに寧々は片方の眉をつりあげた。
「指揮官の素質があるってことです。泉大尉との意志疎通も、あの子はお手の物ですから」

「――まさか美奈代さんが」
ハアッ。
祷子は天井を仰ぎ見た。
「そっちの趣味がおありとは思いませんでした」

「両刀って言われているそうですね。艦内では……あら？そういえば、えっと、泉大尉と恋仲と言われていたのは」

「染谷少尉ですか？」

「ええ。あの方、どうなったんです？」

「詳しいのは津島中佐ですけど」
祷子は手にしていたペットボトルをダストボックスに放り投げた。
無重力下を移動したペットボトルが、ダストボックスの縁に当たってあらぬ方向へと流れていく。
「……もうっ」
祷子が顔をしかめて立ち上がった。

「容態が安定してきたそうです。かなり腕利きの療法魔導師が施療に当たったそうです」

「運がいいですね」

「親御さんでしょうね」

ペットボトルを掴んだ祷子は、平然と言った。

「貴族議員の親御さんが手を回したようで――津島中佐によれば、水瀬家まで動したとか。お金と権力は偉大ですね――私はお金の方が好きですけど」

「水瀬家って、あの？」

「さすが鬼龍院家の方。詳しいですね」

祷子は小さく笑いながら、ダストボックスめがけて、ペットボトルを慎重に押しやった。

「本家ではご同業ですものね」

「――ご存じでしたか？」

ペットボトルの行方を目で追いながら寧々は答えた。

「私の実家のこと」

「元は四国最大の任侠組織の家。明治ご一新以降は廃業して、神主になられたんでしたよね？表向きは」

「新撰組にケンカ売って潰されたんです。以降、表向きは神主で、裏は拝み屋でやってます。裏家業でしかしられてませんけど」

寧々は頷いた。

「同業とはいえ、あの超名門の水瀬家とは、格が違いすぎますから並んで語るのには抵抗があります。

とにかく、一族に流れる魔法騎士や魔導師の力……私は、騎士の素質は受け継ぎましたけど、他に何もないので、一族では肩身の狭い所です」

「次期当主は、お姉さまでしたっけ？」

「というか」

寧々は怪訝そうに訊ねた。

「中尉は、そんな事情まで、どうしてそんなに詳しいのですか？」

「さぁ？」

祷子は笑って肩をすくめた。

「あなたは赴任当時から話題性のある方でしたから。いろいろと耳に入ってきた――そんな所です」

「……信じましょう」

寧々は憮然として頷いた。

「話を戻して良いですか？」

「染谷少尉のことですか？」

「今回のこと、としておきましょう」

「もう滅茶苦茶です。こんなコト」

祷子は吐き出すようにそう言うと、ハンガーベッドに固定されている“白雷改”を見上げた。

「理沙さんはともかく、月城大尉が……」

「そう、ですね……ところで、“理沙さんはともかく”って、どういう意味です？」

「私、そんなこと言いました？」

「ええ」

「言葉のアヤですね。きっと」

「……月城大尉のことは？」

この人は、美人だけど、中身はかなり太々（ふてぶて）しいな。

と、寧々は内心で舌を巻き、話を合わせた。

柏中尉じゃないけど、この人は本当に威圧感がある。

「自殺したかったんでしょう。本当は」

祷子はさらっと、言った。

「でも、死ぬなら死ぬで口実が欲しかった。だから、死ねるんじゃないか。そう思って、魔族の要請に応じたけど、ここで心が変わった」

「……」

「死ぬのが恐くなった。それに、死ぬより他のことが、手に入るような気がした」

「他のこと？」

「月城大尉が」

お茶でも飲みにいきませんか？

そう言うと、祷子は寧々を通路へと促した。

「どうして死にたがったか。問題はそこです」

「死ぬ程の屈辱――――ですか」

「エリートの人って、一度転落すると、そうじゃない人達よりスピード速いですからね。転げ落ちる距離が長い分」

「たかが」

寧々は反論しかけて、言葉を飲み込んだ。

「……失礼」

「いいですよ」

祷子は笑って言った。

「プライベートでしょう？」

「――――はい」

祷子の笑顔に安堵を覚えながら頷いた。

「指揮官として、戦場で部下を失うことは避けて通れないはずです」

「そうですよ？現に、美奈代さんなんか、身内から脱走と寝返りまで出してます。しかも、一回に」

「……それでどうして」

「あの人は、プライドの塊です。実績と実力の裏付けがあるって――――そう思いこんでいた」

「あるのでしょう？だからこそ」

「周囲から、そう評価されていただけ――――実績も実力も、周りから評価を受けなければ、ないのと同じ。違いますか？」

「光を浴びなければ、どんな宝石も輝かない――ですからね」

「お上手ですね」

祷子に、やんわりと微笑まれた寧々は、少し鼓動が早まったのを感じた。

「過去の評価の分、部下の暴走と、その死。さらに仇も撃てずに敗北したこと……すべてがマイナスの功績として大尉を襲った」

寧々は、辛い。という顔で首を左右に振った。

「過去の栄光まで含めて」

「過去の栄光――高い評価の分、失態に対する叱責が厳しかった。部下の死と最新鋭メサイアの複数喪失は、麗菜殿下でもカバーしきれなかったのでしょう。

その叱責が、大尉のプライドをズタズタにした挙げ句、エリート街道から彼女を追放した……でも」

祷子は言った。

「後の選択を間違えたのは、大尉ご自身ですからね」

「えっ？」

「大尉は、命令ではなくて志願でこの部隊に来た。そのことです」

「月城大尉は志願だったのですか？初耳ですが」

「知りませんでした？他の部隊でも指揮官として頑張って、実績示せばよかったのに、一般兵として、この部隊に来た。選択肢を誤ったというのは、そのことです」

「意味がわかりません」

「牛丼が食べたいです」

「おごります――ただし、特盛まで」

「私仕様の？」

寧々は、褌子専用として、ハイパーハイメガ盛りとかいうのがメニューに載せられていたのを思い出した。

あれは確か、ご飯５合だっけ？

「普通の！」

「……ケチ」

褌子は口を尖らせた。

「大尉のプライドは、結局の所、騎士としての腕と同時に、指揮官としてのプライドでもあるんです。人の指揮に従うなんて、元から耐えられることじゃなかったんです。

大尉も自覚があったかどうか――内心で出撃の度にプライドにヒビが入った挙げ句、今度のことが決定打となったのでしょう」

「魔族軍の撤退を見逃せという、あれですか？」

「そうです。あの時の、美奈代さんの毅然とした対応は指揮官として当然のこと。でも、元指揮官としての大尉は、その命令に従うなんて、耐えられなかったのです」

「……」

「帰艦した後の態度からはっきりわかるでしょう？魔族が来なけれ

ば、月城大尉と美奈代さんが衝突していたでしょうね」

「そして」

食堂へと入りながら、寧々は言った。

「大尉は魔族の方へとなびいた。大尉の発想がわかりません。憎んでいたはずの魔族にどうして？」

「フェルミ博士も、伝言として津島中佐達に、“彼女は寝返った”としか伝えていません。肝心の博士まで行方知らずでは、詳細はわかりませんけどね」

祷子は、食堂のおばさんに“牛丼、卵とつゆダクダクで”と言った。

すかさず、寧々が、“おばさん。私達仕様で、特盛で！風間中尉仕様では困ります！”とフォローを入れた。

「……少ないですよぉ」

「出撃前は、胃の中に詰め込みすぎない方が良いんです」

絶対、それはドンブリじゃない！というサイズの器を準備しはじめたおばさんが、安堵した顔で普通の器を用意しはじめた。

「……で？」

「大尉も考えたのでしょう。大尉のプライドの裏付けは、あくまで彼女自身。つまり、組織にはない。長年の功績に対して罰をもって報いてくれたなら、私も私なりに報いてやろうって」

「それが寝返りにつながった？」

「普通の企業ならありえることですよ」

祷子は、牛丼を受け取りながら、ホクホク顔で笑った。
「会社が気に入らない。そんな時、ライバル会社が破格の値で自分を雇ってくれると知ったら？普通はどうします？それを寝返りといいますか？」

「……しかし。我々は軍人、しかも、騎士です」

「力に対する正当な報酬を求めるという点では、騎士は世界で最もシビアな部類の職業でしょうね。ＭＣ（メサイア・コントローラー）の方には負けますが」

「その辺は同意しますけど……」
寧々は、祷子の言いたいことはわかるが、割り切れないものを強く感じた。

「要するに、大尉は寝返ったというより、転職したんだ――と？」

「そうです」
祷子は、何でもない。という顔で言った。
「大尉は、陛下の狗になりきれなかった。
それは、彼女が、主人である陛下の求める芸をこなしきれずに怒られたのがイヤになったから。
または、ご飯の質を下げられたのがイヤになったから。
だから、彼女は別な御主人様に尻尾を振った」

「それが寝返りじゃないですか」

「彼女に、私達を見捨てたとか、そんな意識はないと思いますよ？」

祷子は椅子に座ると、唐辛子のビン掴んだ。
ピンッ

親指の辺りからそんな音がして、ビンのキャップが回転して宙を舞った。
そのあり得ないビンの開き方に唖然とする寧々の前で、祷子がキャップをキャッチしてテーブルに置く。
そして、牛丼の上が真っ赤になるほど唐辛子を注ぎ込む。

「むしろ、彼女にあるのは、自分の方が見捨てられたという、被害意識と、そこから来る自らの行為の正当化。そして、憐憫の念だけのはず」

「見捨てられた？」

「そうです。左遷されたことはつまり、自分は組織に見捨てられたってことになる。しかも、自分が悪くないことで」

慎重に醤油を注ぎ、卵をかき回す。
まるで爆発物の調合でもやってるようだと寧々は思った。

「それは違うでしょう？組織に人的にまで損害を出したのは大尉です」

「そこが違うんですよ。
部下の失態は部下の失態。
自分はとんだとばっちりを受けた。
そう。
自分の左遷は不当なものだ。
部下がみんな悪いんだ。
全ては自分の責任ではない。
大尉はそうやって、自分を正当化することで、精神のバランスを取っているのです。

大尉の日頃の態度からそれは察することは余裕です。
でなければ」

祷子は、卵を注ぎ込んだ牛丼に、箸を立てた。

「大尉は今頃、うつ病か何かで精神病院のお世話でしょうね」

「……自暴自棄になった挙げ句、不当な責任転嫁に陥った。挙げ句が中尉の言う“転職”。私の言う“寝返り”に通じた」

お茶を渡そうと、一瞬だけ寧々は祷子から視線を外した。

ほんの一瞬。

そのハズだった。

だが――

「……えっ？」

「どうしました？」

寧々が驚いたのも無理はない。

祷子の持っていた丼の中身はすっかりカラになっていた。

「……」

丼と祷子の顔を何度も見比べる寧々の前で、祷子は満足げに口元をナプキンで拭う。

「まぁ」

寧々からお茶を受け取った祷子は、冷たい笑みを浮かべた。

ゾクッ

自分でもわからない。
だが、寧々ははっきりと自覚した。
自分は今――この人に恐怖した。
それだけは、はっきりしている。

「寝返ろうとどうしようと――待ってるのは同じですけど」

「待っているもの？」

祷子は頷くと、そっと両手を合わせた。

ごちそうさま。

そうは言わなかった。

その態度が語る所を察し、寧々は顔をしかめるしかなかった。

そして思った。

あの人は――バカだ、と。

カナンの渦の向こうで　第八話

「脱走は出るわ、裏切りは出るわ」
艦橋。
艦長席の横で、後藤は肩をすくめた。
「挙げ句が行方不明一人。しかも六本線（ハイパースタンド）とはねぇ」

「というか」
美夜が額に青筋を立てながら言った。
「どこにいたんですか？後藤さん」
アームレストを掴む手に力が入って震えている。
放っておいたら、後藤の首根っこを締め上げかねないのは誰の目にも明らかだった。

「いやぁ。トイレで気張っていたら」
後藤はニヤリと笑った。
「この騒ぎでしょ？こりゃ、出ない方が利口だろうって計算が働きましてね？」

「……で？」
美夜は言った。
「この苦々しい状況を、どうやって解決したらいいか。考えていただけません？」

「ああ。そいつぁ」
ポリポリ。
後藤は頭を掻いた。
「いい案がありますよ？ちょっと損害大きいけど」

同じ頃、獄族軍の飛行艦の中では――
ガンッ！
室内にそんな音が響いた。
ダユーは、音のした方から視線を外した。
「何を考えて――」
ダユーの目の前で怒りに肩を振るわせているのは、宗像だ。
その視線の先には、宗像に殴られて床に転がった月城大尉がいた。
殴られて血が流れる口元をそのままに、彼女もまた、負けまいとして宗像を睨み付ける。
「何を考えている――貴様ぁっ！」
「人のことが――っ！」
宗像が、月城大尉に飛びかかる。
それを待っていたかのように、月城大尉の蹴りが宗像の脇腹を捉え、苦痛に動きを止めた宗像に、月城大尉が逆襲した。

互いにつかみ合って、もんどり打ちながら殴り合いになった二人を前に、ダユーは紅茶に手を伸ばした。

「……で？」
ダユーの隣に座ったユギオが、あきれ顔でダユーに訊ねた。
「これは一体？」
「まず一人が寝返ったのですが」
カチャ。
ダユーはソーサーにカップを戻した。
「もう一人が、その後に続いた。お互い、そんなことするはずない

と思っていたようで……」

「同じ部隊の仲間――ということですか？」

「ええ。面通ししてあげようと思ったのですが」

「ほとんど共食いの世界ですよ。これは」

「そうですね……いい加減にしなさい」

ダユーの一声に、宗像達は動きを止めた。

「主の許可なく、こんなところでじゃれ合わない」

「……はっ」

「はい」

互いににらみ合った後、二人は立ち上がった。

「とにかく、ケンカになるから、あなた達は部隊を別にしますけど、まずはお互いにメースに慣れてもらうことから始める――文句ないわね？」

「はい」

「ありません」

「よろしい」

チリンッ

ダユーはベルを軽くならした。

すると、音もなくドアが開き、入ってきたのは二人の士官だった。

一人は背の高い若い男。

もう一人は、あのティアリュートだった。

「お呼びですか？」

「紹介するわ。人間の協力者よ。あなた達に預けるから、うまく使いこなしなさい――――とりあえず」
ダユーは、宗像達の顔を見てから言った。
「――――医務室へ連れて行きなさい」

「どういうことです」
ユースティアに宗像を預けたティアリュートが、医務室へと部下の見舞いに向かう途中だというユング少佐に訊ねた。
「人間が我々の部隊に？」
「俺達は、ユギオ様から管轄がダユー様、つまりは獄族軍の方へと移る」
「契約違反では？」
「契約者はユギオ様達中世協会で、配属先の決定権もまた彼等にある。俺達に配属先を拒絶する権限はない」
「……ちっ」
「正確に言えば」
ユングは歩調を止めることなく答えた。
「お前の部隊にだ」
「私の？」
「俺達の中隊は損害が大きすぎた。部隊を再編成するから、その時にはお前にも一隊を預けることになる。５騎で部隊を編成する」
「そんな」
「武功を立てて名を売るためには、誰かの下にいては駄目だ。上を目指さねばならん。貴様、何のためにここに来た？」
「……」
「単なる兵士で戦場にいられた軍隊時代とはワケが違うんだ。自覚

しろ」
「はっ」
「明日、新入りと一緒に、バラライカの新しいのがベースに来る。アイツを乗せてみろ」
「使い物にならなかったら？」
ユングは不意に立ち止まった。
そして、言った。
「俺達は傭兵だぞ？」
「……了解」

「とにかく、のんびりしているヒマなんてないんだ」
後藤は言った。
「こんな所で冒険家やってる余裕は、俺達にはない」
「……」
美奈代は、後藤の言葉を待つ。
「すぐにでも、北米戦線へと戻ってマラネリ軍と合流しなければならない。そのために、何が必要かといえば」
場所はハンガーデッキ。
後藤の横では、紅葉が苦り切った顔をしている。
「……この龍の巣から出ていくことだ」
「どうやってです？」
「“鈴谷（すずや）”をテレポートさせる」
「はい？」
美奈代は、目が点になった。
「ど、どうやってです？テレポートに必要なシステムは、そう簡単には……」
言いかけて、美奈代は言葉を失った。

後藤が、何をしでかそうとしているのかがわかったからだ。
「……反応弾と飛行艦、しかも、人間様の乗った艦を同格扱いですか？」
「そういうことさ」
後藤は、嬉しそうに口元で笑った。
「俺達ゃ、そんなバクチでもやらなけりゃ生き残れないところまで来てるのさ。
作戦は簡単。
反応弾をいただいた時のシステムを地上で展開させ、そこに“鈴谷（すずや）”を突っ込ませる」
「口で言うと簡単ですけど」
山崎が心配そうに訊ねた。
「システムはそんなに拡張することが出来るのですか？」
「不可能じゃないわ」
紅葉が答えた。
「予備機材も使えば、“鈴谷（すずや）”がギリギリ通る事が出来るサイズまで拡張出来る」
「ですけど」
異議を唱えたのは、美晴だった。
「システムの管理は誰がやるんです？」
「……私」
紅葉が自分を指さした。
「私が残る」
「まさか！」
「安心して。事が終わったら脱出するから」
「ど、どうやってです？」
「“鈴谷（すずや）”を通す時には、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）側でのコントロールが必要だけど、それさえ通したら、プログラム作動で管理させる。その間に、私もテレポートで脱出する――さて」
紅葉は腰に手をやると、美奈代達の顔をジロリと一通り眺めた。

「一緒に死んでくれる物好き、志願で大募集中――――というわけで、泉大尉決定」
「はっ？」
バカのようにポカンと口を開け、美奈代は自分を指さした。
「わ、私ですか？」
「当然。厄介事はアンタの仕事でしょ？」
「いつ決まったんです？」
「私が今決めた」
「……」
「今、殿下が簡易テレポートシステムを使用して、“エトランジュ”へ向かっている。向こうの準備が整うのが3時間後。こっちの準備が整うのもそれくらい。準備が整い次第、我々はこの土地から脱出する」
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は？」
「放棄」
「……もったいない」
「でしょ？研究収集用の機材が満載しているのよ？おろせるモノを降ろしたいけど、やってる余裕もないし。軽く数十億円の損害よ？資材だけで」
「……うわっ」
「ノコノコと、どっかに行っちゃったお師匠様への餞別だと思って我慢するけどさ」
「あの」
「何？」
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）をフェルミ博士にコントロールしてもらったら？」
「絶対にイヤ」
紅葉は即答した。
「これはもう、私と殿下の意地の問題。絶対に、ここでお師匠様の手は借りない」
「どうして」

「私と殿下は、ここから出て、そしてもう一度、龍の巣を突破して堂々と乗り込むの。お師匠様とはその時まで再開しない。そう決めているのよ」
「……厄介ですね」
「本当にそう思う。我ながらね」
「……」
「地上の広い所を選んで、そこにＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）と部材を広げる。作業を手伝ってもらうわよ？」

「傷、直ったみたいね」
宗像が、ダユーによって呼び出されたのは、シャワーを浴びて身支度を整えた後だった。
場所はダユーの私室。
ランプの炎に照らし出されたダユーの顔は、普段のそれとは違う魅力となって宗像を捉えて離さない。
豪奢な家具が決してイヤミにならないように配置された室内に立つダユーは、微笑みながら近づくなり、そっと指で宗像の頬を撫でた。
「せっかくの肌が痛むわ？あんなことしたら」
「申し訳ありません。しかし」
「いいわよ」
ダユーは、数歩下がると、しげしげと宗像を眺めた。
「制服の着心地はどう？」
「……はっ」
宗像が身につけているのは、傭兵隊の制服だ。
「悪くはないです」
「うん」

ダユーは嬉しそうに微笑んだ。
「あなたのために傭兵達を雇ったのよ？」
「私のために？」
「そう――あなたに弱い仲間は必要ない。魔界でも有数の腕を持つ傭兵隊」
言いかけて、ダユーは声を上げて笑った。
「ははっ！そう言えば、その傭兵隊でさえ潰したのがあなただったわね！」
そう。
あの鍾乳洞で傭兵隊を全滅に追い込んだのは、誰でもない。
宗像達だ。
「報復が恐い？」
「……いえ」
面白そうに顔をのぞき込んでくるダユーから視線を逸らした宗像は答えた。
「その程度。降りかかった火の粉は払いのけてみせます」
「まぁ、連中もあなた達に見逃してもらったから生き延びたようなものだから、その恩義に反しないでしょう。でも、傭兵には黙っていてあげる。それも優しさだと思うから」
「……どうも」
宗像は小さく礼を言うと、訊ねた。
「それで、月城大尉のことですが」
「今は中佐よ」
「……月城中佐は」
「あれは諜報部門で活躍してもらう。それにしても、そんなに嫌い？」
「あれは、部隊を裏切りましたから」
「あなたもでしょう？それとも、あなたは何か考えがあってのこと？」
「……私はあなたに逢いたかった」

宗像は答えた。
「私は、そのためだけに来た。部隊を裏切ったわけではありません。私は部隊とあなたを天秤にかけ、そしてあなたを選んだ。それだけです」
「裏切ったのではなく、捨てたのだと？」
「関係をゼロにした。そう考えています」
「――成る程？」
ダユーは感心したように頷いた。
「関係がなくなれば、そもそも裏切ったことにならない」
「詭弁だと、自分でも思いますが」
「それでもいずれ――かつての仲間と殺し合うことになるとしても？」
「あなたの側にいられるのなら」
「そんなに私に惚れてくれた？」
「あなたはどうなのです？私を誘ってくださったのは、単なる気まぐれですか？」
「――どうかしら」
ダユーは、両手で宗像の頬に触れた。
「あの時、私の中に走った直感が正しかったのかどうか――これから試すことにするわ」
「直感？」
「今は知らなくていい」
ダユーは宗像に視線を送りながら言った。
「ただ、今の私は、あなたを感じたいだけ。それじゃいけない？」
「……それが、採用試験ですか？」
「そうね」
ダユーは苦笑すると、顔を宗像へと近づけた。
「私を夢中にさせてご覧なさい？そうすれば――」
その時、ランプに浮かぶ影が、重なった。

「よし」
上空からの映像を確認した紅葉が頷いた。
「これで準備は出来た」

場所は環礁の中。
つまり、海上だ。
海上に一つだけある、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）がようやく着陸出来る程度の規模しかない小島というより、岩の上に着陸したＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中には今、紅葉しかいない。
そのＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を中心に、魔法陣を構成するパネルを浮かべて互いを固定させた挙げ句、出来上がったのが、海に浮かぶ魔法陣。しかも――

「直径８０メートルの即席魔法陣……ですか」
環礁の沖合に着陸している“死乃天使”のコクピットで、美奈代が言った。
「世界最大級じゃないですか？」

「中型……ってトコね。もっと大きいのは結構あるわ」

「……はぁ」

「素材が軽いから、水に浮かんでくれる。凪いでいる今が絶好のチャンスよ」

「波が出てきたら？」

「パネルが浮力を失って沈む。そしたら終わり」
「……」
「“鈴谷（すずや）”？聞こえる？こっちの準備は完了。今、パワーを入れる」
「ったく」
美夜はぼやいた。
「飛行艦を垂直９０度でダイブさせろ？だなんて」
「竜骨（キール）が耐えますかね」
「駄目なら、海面に叩き付けられて終わりよ」
高木副長の言葉に、美夜は答えた。
その目の前のモニターには、海上で白い光を放ち始めた魔法陣が映し出されている。
「――――操舵。ビーコン照射は大丈夫か？」
「万全です」
小野操舵手は引きつった顔で頷いた。
「前部ＧＦを一時的に解除。船体を水平落下させ、そのまま魔法陣に突っ込む」
「その通り」
「そんなことする、俺が狂ってるんですか？それとも、やらせるあなたが狂ってるのですか？艦長」

「狂ってるのは」
美夜は答えた。
「やらなきゃいけない状況に追い込んだ奴だ」
「誰です？それは」
「死んだ後に、閻魔にでも聞けばいい」
「しばらくは勘弁して欲しいですね」
「同感だ。艦の位置を慎重に固定しろ。補正が効かない。一発勝負になるぞ。艦長より全責任者へ通達。物資及び兵員の固定状況知らせ」
海面に向けてまっすぐに艦を降ろす。
言葉にすれば簡単だが、実際にやれとなれば無理に等しいことだ。弾薬や燃料の満載した大型旅客機を垂直９０度でダイブさせるよりもリスクが高い。
美夜が要求したのは、パネルによる壁を作って、そこに艦を通すという常識的なこと。
しかし、建設経験のある士官を含め、作業に関与する者達から、“鈴谷（すずや）”を通すだけの高さの柱を立てたとしても、丸くパネルをはめ込むのがどれ程難しいかを説明され、さすがに美夜も断念するしかなかった。
なにより、そんなことをするだけの資材がどこにもない。
次に美夜が考えたのは、山の斜面を利用してパネルを設置するという案だ。
これも駄目になったのは、他でもない。
パネルを可能な限り、平らに設置する必要があるのだが、パネル

を設置可能なほど平らな山の斜面がどこにもない。
そういう理由だ。

結局、紅葉に言われて海面へと設置することとなったのだが、

「９０度のダイブなんて、普通なら沈没というのだが」
シートベルトで体を固定した美夜は顔をしかめるしかない。
「素人は、これだから恐い」

「やってのけるのがプロでしょう？」
艦長席のすぐ近く。
簡易座席に座った後藤が、シートベルトの具合を気にしながら言ったが、
「リスクを避けるのもプロの仕事です」

「――ごもっとも」

「座標位置、固定」

「よし――艦長より全乗組へ」
これが最後かしら。
そう思いながら、美夜は艦内にむけて通信を開始した。
「これより本艦は、垂直９０度となるダイブを敢行する。艦長として諸君等に命じることはただ一つ――祈れ！それだけだ！」
美夜は艦内通信を切った。
「機関――前部ＧＦを切れ……操舵、タイミングあわせ！」
「機関了解――前部ＧＦジェネレーター停止！」
ジリリリリリリッ！
艦橋――いや、艦内に警報が鳴り響き、モニターに警告が表示される。

飛行艦は不可視の海に浮かんでいるのと同じ。
その海を生み出すジェネレーターが止まれば、海に浮かんでいることは出来ない。
当然、沈没することとなる。
艦前部のジェネレーターが停止することで、艦そのものの前部の重量に引っ張られる形で、艦後部が、不可視の海と空の狭間を軸として垂直になる。
そして、艦は沈没する。
しかも、そのスピードは、本物の海に浮かぶ船とは比較にならない程、早い。

グンッ！

体が何かに引っ張られたような衝撃の中、美夜は自分の艦が垂直になったのを体で感じた。
艦隊に配属される前の士官候補生時代、操舵シミュレーター過程で、ジェネレーターの操作を間違え、艦を沈没させた苦い経験が脳裏をよぎった。

美夜の視界一杯に、魔法陣が迫ってきた。

封印柱争奪戦　第一話

「生きた心地がしなかったよ」
殿下がポツリと言った。
場所は飛行艦“エトランジュ”の艦内。
窓の外には、“鈴谷（すずや）”が並行して航行を続けている。
「……私だって同じよ」
緑茶の入った湯飲みをもらった紅葉が言った。
「テレポートシステムの中へ、メサイアで飛び込むのがどんだけ恐かったか」
「……はっきり言って良いよ？テレポートシステムが本当に通じているのか確かめる前に“鈴谷（すずや）”が飛び込んじゃったって」
「……後でこっそり聞いたんだけど」
心底参った。という顔の紅葉か頷いた。
「艦長――魔法陣が光ったら、それで準備ＯＫだと思っていた。私の指示なしで飛び込むなんて、思わなかったもの」
「うん。こっちも通信用ブイを投入する準備中に、まさか“鈴谷（すずや）”の鼻先が現れるとは思わなかったよ」

何が起きた？

簡単だ。

テレポートシステムの使用について、手順に齟齬があった。
原因は紅葉にある。
テレポートシステムへ、いつ“鈴谷（すずや）”を飛び込ませたらいいかについて、美夜に言ってなかったことに気付いたのは、よりにもよってタイミングは自分に一任されていると判断した美夜によって、“鈴谷（すずや）”がダイブを開始してから。

真っ青になった紅葉の前で、“鈴谷（すずや）”の姿が消えた時、紅葉は本当に腰を抜かした。
「今日……絶対、夢に見るわ」
息を吐きかけながら紅葉は紅茶に口をつけた。
「し、洒落にならなかった」
「黙っていてあげますけどね」
殿下は言った。
「……師匠は？」
「“死乃天使”が、それらしい人の反応を捉えていた。私達と別れた後、集落で、あの連中に接触していたんだと……そう思う」
「違うよ」
「違う？」
「お師匠様の――――薬とか」
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中にあるだけ運び込んではおいた……」
「どの位？」
「約一年分」
「一年……か」
「……」
「タイムリミットはそれくらいかな？」
「……うん」
紅葉は頷いた。
「だから、こんな戦争、さっさと終わらせて」
「……そう」
殿下は昆布茶の入った湯飲みを手に取った。
「僕達の力をすべて、龍の巣突破に傾けなければならない」
「北米の状況は？」
「それもあるけど」
「ん？」
「さっき、エトランジュの監視システムが面白い現象を確認した」
「どんな？」

「君達――まぁ、僕もだけど、龍の巣の中に置き去りにしてくれたあの艦」
「……うん」
「まず一つ。艦内から信号が出ている」
「ＧＰＳの？」
「そう。ほら、僕達マラネリ軍と、日本軍の識別に使うための共同信号を設定したでしょう？それの反応が」
「艦内にメサイアが？」
「多分」
殿下は湯飲みを傾け、ズズッとお茶をすするようにして飲んだ。
「発信装置を誰かが持ち込んだんだと思う。あれは腕時計サイズだから。その気になればどうとでもなる」
「まさか、あの二人が？」
「さぁ？ただ、艦の所在がそれでわかったことは確かだよ。違う？」
「まぁね」
「それともう一つ」
どうぞ？殿下は、菓子皿に乗せた大福を紅葉に勧めた。
「うん。どうしたの？」
大福を紅葉は受け取ると、すぐに口をつけた。
「その飛行艦」
殿下もまた、何でもないという顔で、大福を口に放り込んだ。
「空中爆発した」
「はいっ！？」

「艦の損害は重大です」
開かれた扉から煙が流れ込んでくる。
艦内では消火作業が継続しているはずだ。
「船倉は壊滅状態。第１フライトデッキまで爆風が突き抜けました」
「何が起きたというのですか？」

「船倉の中に、何かが仕掛けられたとしか言い様がありません」
「まどろっこしい物言いは嫌いです」
寝間着にガウンをかけただけのダユーは、艦橋で艦長の報告を受けていた。
「何が起きたか。それだけを報告なさい」
「調査をお待ち下さい。現段階で言えることは、船倉の中で、何らかの強力なエネルギー解放があったとしか」
「船倉の管理がいい加減だったのでは？」
さすがにダユーを護るべく、宗像と月城の双方が艦橋で並んで立っていた。
互いに殺意を抑えるのがやっとの様子だが、表面上はダユーの後ろに並んで立っていた。
「まさか！」
艦長はギョッ。として首を横に振った。
「あの区画は、“例のモノ”を収めるためのみに使用していました！つまり」
「封印柱に何かが……？」
ハッ！となったダユーは、月城達に振り返るなり言った。
「二人とも」

「はい」
「はっ」

「仕事です。状況が状況です。二人仲良くやりなさい」
「……ご命令とあれば」
「心配ですけど、すぐに被害のあった区画に向かい、何が起きたかを報告しなさい。いいですか？人間の視点で」

「……おい、最低女」
「……」
「売国奴」
「……」
「裏切り者」
「……鏡でも見ているのか？宗像」
「聞こえているなら、何故、返事をしない」
「……なんだ」
「何故、裏切った」
「……お前は」
「……さぁな」
「なら私も、さぁな。だ」
「……」
「……」
「ダユー様が狙いか？」
「私にとって魅力的な見返りを与えてくれる限り、あの方は主君だ。お前は？」
「金の切れ目が何とやらか？」
「お前はどうだ？そう聞いている」
「さぁな？」
「私とはまともに会話したくない。そんな所か？」
「殴り殺してやりたいのだけは確かだ」
「お互いにな……で？」
「原因なんて簡単だろう」
「そう思うか？」
「このきな臭さ。間違いなくＣ４系統の混合爆薬特有の臭いだ」
「陸軍と近衛が共同開発したとかいう、あれか？」
「泉の騎体を吹っ飛ばしてくれたヤツだ。この甘い臭気……東京の爆発現場で嗅いだ臭いとそっくり同じ」
「まさかお前」

「バカを言うな。あの騒ぎがあって以降、グラム単位で管理されていると聞く。一介の騎士風情に、どこで入手しろというんだ」
「……何故、そこまで詳しい」
「薬物や爆発物は、大好きなんだよ」
「そんな言葉、鵜呑みに出来るか――現場を調べよう」

科学系爆発物。

科学という概念のない獄族に、それを理解してもらうことに四苦八苦した月城達は、やっとのことでダユーに何が起きたかを理解してもらったのは、報告開始から実に3時間後のことだった。
理由は、ダユーがバカだからではない。
逆に、利口すぎて専門的知識を総動員しても足りない位、深く質問してくるからだ。
科学者でもない身で、化学反応が具体的にどのようにしてエネルギーに変換されるかなんて、どうやって説明していいのか、宗像と月城はさすがに顔を見合わせ、途方に暮れることもしばしばだった。

とにかく、ダユーはおよそ。言いたいことはわかった。と言わんばかりの顔で言った。
「サイズ的には、どの位なのですか?」
「卵一つ分もあれば十分です」
「……ふむ?そんなものが柱にどうして?」
「破壊工作員の可能性が」
「警備兵が眠っていたとでも?」
「お言葉ですが」
月城は言った。
「人間界の魔法騎士――特に、近衛の魔法騎士の中には、そういう方面に特化した者もいます」

「封印柱が、ここに運びこまれるのを知っていてた者が人類にいると？」
「ただし、我々のかつて乗艦だった“鈴谷（すずや）”には魔法騎士の類が乗艦していた記録はありませんし、我々も出会ったことはありません」
「……そう？」
「はい」
「……宗像」
「心当たりがあります」
「ん？」
「月城中佐が知らなかったのは当然です。“アイツ”は突然、現れましたから」
「……？」
ダユーはしばらく、その端正な眉をひそめていたが、
「……ああ！」
ポンッと軽く手を叩いた。
「あの療法魔導師！」
「攻撃を防御する力……あれは魔法騎士の部類でしょう」
「……ということは」
ダユーはポツリと言った。
「あのチビちゃんの部下ね」
「何か？」
「ううん？よくもやってれたって、あの艦沈めてやろうかと思ったけど、今はやめておく。無罪だってわかったらか」
「……はっ？」
「ううん？ところで」
ダユーは艦長に厳しい声で言った。
「封印柱が発見出来ないとは何事ですか！」

「落下物？」
「そうです」
ダユーの手元から突然消えた封印柱。
それを発見していたのは、何と人類だった。
「突然、空から降ってきました」
場所は何と、人類と妖魔がぶつかりあう最前線。
しかも、妖魔の侵攻を阻止すべく、五大湖方面から侵出した米軍と、テキサス州への侵攻を阻止したい中華帝国軍が対峙する丁度その真っ直中だ。
何故、そんな所へ？
理由は簡単と言えば簡単だ。
ダユー達は、そのまま日本に戻ることが出来なかった。
それは、あの空中に浮かんだ文字の分析がまだ終わっていなかったから。
もし、現地で何か不足しているものがあれば、すぐに入手する必要がある。
なければないで、そのまま戻ればいい。
その分析のため、ダユー達は現地に足止めされていた。
そして、艦は北米大陸上空を旋回しながら航行中だった。
爆発した時、そんな厄介な場所にいたのは、そんなせいだ。
「……輸送機がいたのか？」
「いえ」
中華帝国軍側陣地から双眼鏡で眺めているのは、あの唐強国少佐だった。

サラマンダーに襲われた後、部隊を率いて後退。今、ここにいた。
「それにしても、あれは一体？」
双眼鏡から目を離した長中尉が、首を傾げた。
「メサイアの部品でしょうか？」
「というか」
唐少佐は言った。
「もし、あれが米軍の落下物だったとしよう」
「はい」
「こんな厄介な場所を輸送ルートに選んだ？」
「……部品を空中投下するとか」
「精密部品をか？」
長中尉の言葉に、唐少佐は苦笑した。
「俺が整備部隊だったら、次に来たら撃ち落とすぞ」
「……では？」
「何が何だかわからない。司令部には報告したのか？」
「はい。何の返事もありませんが」

謎の落下物。

そういう意味では、米軍もまた、それが何なのか、まるでわかっていなかった。

米軍側陣地に陣取るのは、第４１メサイア大隊。
グレイファントムＭ１６が肩を並べる中。
唐少佐同じように、チェスター・ワイズマン中尉が双眼鏡から目を離した。
「中華帝国軍の物資か？」
「恐らく」
ジョエル・クラークマン中尉が、そっとワイズマン中尉の肩を押

した。
「頭が高い。狙撃兵に撃たれたいのか？」
「――――すまん。なら、どうして連中は回収に動かない？」
「この状態で？」
ジョエルは小さく笑った。
「正気か？」
「ちっ！」
「怒るな。放っておいても、チンクの方が動くはずだ」
「それでいいのか？」
「ん？」
「もしかしたら、連中の重要な物資、もしくは情報が手に入るかもしれないだろう？何しろ、こんな所へ輸送機使って飛ばしたんだろう？」
「本当にそうか？輸送機はどこだ？」
「何か、事故があったんだろう」
「そうじゃない。誰が輸送機を見た？」
「レーダーは狩野粒子の影響を受けている。それをいいことに、好き放題やってるのは、チンク共だ。状況がわかってるのか？」
「……しかし」
「ジョエル。とりあえず、部隊を戦闘態勢へ。回収に動くのはどうでもいいが、こっちに襲いかかられたら困る。それと、司令部に進言してくれ。俺は、アレをチンク共より先に確保すべきだと思う」
「……わかった」

「米軍陣地でエンジン音多数！」
長中尉騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）が声を上げた。
まさか、自分達を警戒してエンジンを起動させたなんて、彼女には想像さえ出来なかった。

彼女にとって大切なのは、グレイファントムが動き出したという目先の情報だけだ。
「グレイファントムが起動中！」
「やっぱり、連中のお荷物だったようだな――回収に動くか」
唐少佐は、部隊に命じた。
「部隊、即時出動態勢をなせ。米軍から、あの荷物を横取りするぞ」
「了解っ！」

「急いで回収を」
ダユーは毅然としていった。
「人類の損害なんて考える必要もない。封印柱さえ無事に回収することが出来れば、それだけで結構」
「――なら」
月城は言った。
「今はまだ、動くべきではありません」
「急いでいると言ったのです」
ダユーは厳しい声をあげた。
「あれを人類の手に落とすことは出来ません」
「すぐに人類同士の争奪戦が始まります。このままでは、我々は双方の勢力をまともに相手しなければなりません。それは得策ではありません」
「消耗を待て――と？」
「あの騒ぎに、妖魔達もどう動くかわかりません」
宗像も言った。
「下手に動くと、どんな火傷をするかわかりません」
「……わかった」
ダユーは、不承不承という顔で頷いた。
「少しだけ、様子を見ましょう」

先に動いたのは、米軍の方だった。
中華帝国軍に関する情報が少しでも欲しい。
それが司令部の本音だ。

中華帝国軍が、輸送機で空輸中に物資を落下させた模様。
調査の必要有りと認める。

ジョエルの報告はそんなものだったが、落下地点は最前線。
その上空を輸送機で何か空輸していた。
最前線を横切るという、高いリスクをものともせずに、彼等が何を運ぼうとしていたのか？
それだけで、司令部の関心を引くのに十分だった。

米軍司令部は、第４１メサイア大隊に対して、落下物の回収を下命。
ワイズマン中尉達は、グレイファントムを起動させた。

そしてそれが、中華帝国軍を動かすことなる。

封印柱争奪戦　第二話

「砲兵の火力なら、こっちの方が上だろうが！」
中華帝国軍側司令部で、陣地に属する部隊を統括管理する李大佐が怒鳴った。
「火力にモノ言わせて叩きまくれ！」

「ロケットなら腐るほどあるだろうが！」
同じ頃、米軍側司令部では、防衛線司令官キャッチャー少将が、通信装置相手に怒鳴っていた。
「補給線は復旧しているんだ！物量の国ってのはどっちの国を指すのか、あのサル共に教えてやれっ！」

互いに妖魔を警戒して、多量の火力を陣地に持ち込んでいた。
妖魔と対峙したら、徹底した火力攻撃で、妖魔を面の単位で叩く。
妖魔の飽和攻撃の恐ろしさが骨身にしみている両軍司令部としては、その措置は正しい。
問題は、その火力を、互いに、人類相手に使うつもりはあまりなかったことだ。
つまり、想定外のことが発生したことに代わりはないのだ。

互いに物量に物を言わせて相手を叩き潰すことを前提を戦術の根本とする米軍と中華帝国軍。
その両勢力が、補給線にものをいわせて、潤沢な物資を湯水のように使える状況でぶつかり合ったらどうなるか。
その疑問に答えるべき出来事が今、繰り広げられようとしていた。

互いの陣地は、５キロ離れて布陣している。
そのど真ん中に、封印柱はコンテナごと落下した。
互いに狙いは封印柱の入ったコンテナであり、そこに敵を近づけさせず、その間に友軍のメサイア部隊がコンテナを敵から奪取すればいい。
だから、互いの司令部はメサイア部隊に前進命令を出すのと同時に、砲兵部隊に対して敵メサイアの前進を阻止すべく、敵陣地及びその前面に対して火力を叩き込むことを命じたのだ。
司令部としてはそれで正しい。
本当に正しいのだ。
しかし、正しいからといって、互いにそれをやり出したらどうなるかを味わわされたのが、互いのメサイア部隊達だった。

「米軍の陣地なぞ潰してしまえ！」
「し、司令っ！」
李大佐に、参謀が悲鳴に近い声を上げた。
「メサイア隊が後退しています！」
「何だと！？」

「メサイア隊が後退しただと！？」
キャッチャー少将の顔を見た参謀は、彼の血管の頑丈さに驚くしかなかった。
それ程、顔を真っ赤にしたキャッチャー少将が大声で参謀に怒鳴りつけた。
「どういうことだ！？メサイア乗りは、前と後ろの区別もつかんのか！？」

「ふざけんじゃねぇっ！」
唐少佐は、通信をつなげてきた司令部に文句を言った。
「こんな派手な砲撃の中、突撃なんて出来るか！俺達ゃそこまで酔狂じゃねぇ！」

「砲撃を止めろっ！」
チェスターも同様に司令部に大声を上げていた。
目の前では連続した砲撃の着弾のおかげて、もうもうと煙が立ち上って視界がとれない。
砲弾の破片が凄まじい勢いで飛んでくる上に、砲撃だけで地震のような揺れに襲われている。
はっきり、まともな神経でいられる場所じゃない。
「砲撃が邪魔で前進どころじゃないぞ！挽肉になれというのか！」

――結局。

砲撃が、互いの陣地に対して行われるようになったのは、それからすぐのこと。
そして、陣地と陣地の間の5キロが、メサイア同士の殴り合いの場所へと変化した。

「相手は赤兎だ！」
戦斧を構えながらジョエルが部下を叱咤する。
「Ｍ１６でも十分相手になるっ！」
各戦線での相次ぐ損害に、光輝ある古参部隊（ヒストリカルカンパニー）であるはずの彼の部下達は、かなり萎縮している。
先に美奈代達を襲った騎士達も、問題行動を理由に後方に下げら

れたかったからこそ、あんなマネまでしたことははっきりしている。
結局は内部粛正のリスクを背負わされた格好だが、それでも、逃げるために、部下が無謀なリスクを踏んだことは、ジョエルにとって無視出来ることではない。
どれ程口で言っても、脅しても、部下の中にある志気の低さ。死への恐怖はぬぐい去ることは出来ないことは、わかりきっていた。
結局、ジョエルに出来ることは、死への恐怖を忘れさせる状況に彼等を追い込むことでしかなかった。

そのために、指揮官である彼自身が、率先して死地に赴くしかない。

指揮官として、背中を部下に見せることで、部下を率いる。

立場上、背中を護るしかない部下は死に物狂いで戦うしかない。
その中で、彼等は死への恐怖を己の戦意へと変換させるしかなくなる。
ジョエルの考えは、そんなものだ。
それが正しいことを証明するためにも、ジョエルは先陣切って戦うしかない。

突撃するジョエル騎に狙いをつけられた赤兎は、その戦斧の一撃をギリギリでかわすと、スパイクシールド（トゲ付き小型楯）を握った左腕のストーレートパンチをジョエル騎めがけて叩き付けてきた。
グシャッ！
「――――くっ！」
ジョエルが騎体をひねっるが、胸装甲の一部が派手にひん曲がった。
交通事故のような音と警報が不協和音を奏で、首の骨が折れそう

な程の衝撃がコクピットを襲う。
「……くっ！なめるなぁぁぁぁっっ！」
歯を食いしばって、意識が遠のくのを押しとどめたジョエルは、赤兎が振り下ろした戦斧をかろうじて受け止めた。
後は力押しだ。
赤兎もかなりのチューンナップを受けているのは、その出力からはっきりとわかる。
世界に冠たるグレイファントム。
世界最高のメサイア。
そして、それを生み出すアメリカ合衆国。

対するのは、第三世界でしか導入実績のない、低レベルメサイアのレッテルを貼られているはずの赤兎。
メサイア後進国であるはずの中華帝国。

グレイファントムが力押しで負けそうになる。
それはつまり、中華帝国に、合衆国が押されている。
とりもなおさず、そういう意味にもなる。

「あって……たまるかぁぁぁっっ！」
ジョエルは一喝すると、右足で赤兎の腹を蹴り飛ばした。
人間で言えば、みぞおちに膝蹴りをくらった赤兎の掴む戦斧からその瞬間、力が抜けた。
「――――っ！」
ジョエルは戦斧から手を離すと、膝にマウントしていた１２７ミリトレンチガンを引き抜き、照準もロクにつけずにトリガーを引いた。
戦斧を構え直して、振り下ろして、そんなことしているより、こんな時には射撃系武器を使用した方が良い。

それは、ジョエル達が訓練生の時に叩き込まれていた原則的な戦法だ。
艦載砲サイズアップされた散弾砲から放たれたのは、口径１２７ミリのスラッグ・ショット。
いわば、至近距離から艦載砲の直撃を受けたに等しい赤兎は、胴体前面を吹き飛ばされ、数回、派手にバウンドした後、地面に転がって動かなくなった。

「――――勝てるぞっ！」
敵の一撃を受けたこと。
そして、戦斧じゃなくてトレンチガンで仕留めたこと。
それを見た部下が、自分の勝利をどう評価するか。
いや。
勝利と認めてくれるかさえ、ジョエルには不安でさえあったが、とにかく、ジョエルに言わせれば勝ちは勝ちだ。
指揮官として、部下に勝利の手本を示した。
そう思ったジョエルは、新たな獲物を探した。
「チェスター、そっちはどうだ！？」

「なんとかなっ！」
数発、戦斧の攻撃を受けたが、相手もまだ未熟だ。攻撃が浅いために致命傷にだけはならずに済んでいる。
傷だけけの装甲を皆が見たらどんな評価を受けるだろうか。
チェスターには、そんな心配をしているヒマさえなかった。
肘をひねって戦斧の動きをねじ伏せる。
想定外から来た攻撃を、赤兎はかわし損ねた。
チェスターの戦斧が、赤兎の右腕を捉えた。
戦斧を掴んだまま、赤兎の右腕が宙を舞った。
「――――よしっ！」
トドメをさしてやる。

そう思ったチェスターの前で、赤兎の体から煙が吹き出した。
「何だ！？」
「煙幕（スモーク）！」
MC（メサイア・コントローラー）がすぐに報告して来た。
「敵、後退しますっ！」
「くそっ！」
チェスターは悔しそうに悪態をついた。
「俺の獲物がっ！」
「言ってないで！赤兎はかなりですよ！？」
「性能ではこっちの勝ちだ！」
「騎士の腕ですっ！」

「敵、部隊がわかりました！」
「どこだっ！？」
「第４１メサイア大隊！」
「どこだ、そりゃ！？」
唐少佐といえど、米軍のメサイア部隊全てを知っているわけではない。
「かなりの古参部隊です」
「それで――――？」
自分めがけて振り下ろされる戦斧。
唐少佐は、左腕でグレイファントムの腕ごと掴むと、右腕に持っていた槍を突きだした。

グシャッ！

貫通魔法付与処理された槍型兵器――――“グングニル”。
米軍がマラネリから購入。来年からライセンス生産される予定だったそれが、グレイファントムの胸部を貫通した。

「……すげぇ」

唐少佐は感心した様子で、目の前のグレイファントムのモノアイから光が消えるのをはっきりと見た。

魔法が発動しなければ、槍というより棒でしかないシロモノだ。

ヒューストンで鹵獲（ろかく）した後、“多分使える”。“単なる槍”として回されてきた時は、誰もその使い方もわからず、本当に現地権限で廃棄されるはずだった。

唐少佐が遊びで1本無駄に壊す手前で、魔法発動方法に気付いたのは、長中尉。

掌の魔法系伝達装置の規格を変更することで、騎体から伝わる魔法エネルギーを槍の穂先に集束して発動するなんて、唐少佐には想像さえ出来なかったのは確かだ。

長中尉のお説教は鬱陶しかったが、コレを手に入れるためなら安いものだ。

――とにかく。

唐少佐は原理はともかく、その性能には十分満足した。

あの国の少年王――潰れ肉まんなんて言われているけど、メサイア開発に関しては世界随一ってのは、本当だな。

そう思う。

――祖国に来たら勲章モノだぜ？

グレイファントムから乱暴に“グングニル”を引き抜いた。

そのすぐ近くでは、長中尉が“グングニル”を振り回していた。

中国武術の中でも、槍が最も得意という彼女の手の中で、槍が生き物のように踊っている。

目に止まらないスピードで輪舞していたと思うと、ビシッ！と腕の中で戦闘態勢を整え、そして神速の一撃でグレイファントムを貫き通す。

他のグレイファントムが、その騎を助けようと戦斧を振り上げて接近してくる。

ドンッ！

腹を貫かれた、先程のグレイファントムを、接近する騎めがけて突き飛ばした長中尉騎。

グレイファントムは、僚騎を回避した所で、彼女が突き出した槍を足に受けた。

膝をカバーしていた装甲が、膝部関節部と共に吹き飛び、オイルが引火する。

一度引いた槍を、長中尉はもう一度突き出した。

右肩付け根に命中した槍。

グレイファントムの腕から戦斧が落ちた。

関節を破壊されたグレイファントムは後退するしかない。

攪乱幕を展開する前に、後退を決意したグレイファントム。

その喉に、長中尉騎のトドメの一撃が命中したのは、その直前だった。

「中尉のスコアは」

「都合、6騎です」

「一度の戦闘でエースか」

「槍を与えられてからというもの」

唐少佐騎のMC（メサイア・コントローラー）は、感心した様子で言った。

「まるで水を得た魚みたいです」

「得意とは聞いていたが……なぁ」

「感心してるヒマはないですよ？」

「放っておけよ。彼女がすべて相手にしてくれる」

「グレイファントムが長中尉騎を半包囲状態。距離を取っています」
「槍のリーチが恐いんだろう？」
唐少佐は言った。
「他のヤツもくれてやれ。俺ぁ、少し楽がしたい」
「ですから」
「ん？」
「現在、対峙しているグレイファントムは２騎」
「それがどうした」
「一ジャンプで包囲網の後ろへ逃げられます」
「まどろっこしいな」
「２騎は囮です！この状況で、ショットガンの集中砲火受けたら、長中尉はどうなると思っているんですか！」
「早く言えっ！」
唐少佐は怒鳴った。
「長中尉っ！深追いしすぎだ！戦域全体を見ろっ！」

戦場で余り感心できない行為というものがある。
敵に背を向ける。
民間人を楯にする。
……いろいろだ。
こういうのは、後に軍法会議にかけられるからいいとしよう。
問題は、

リターンは大きいが、リスクはそれ以上に高い。

こういう行為だ。

具体的には、敵、特に敵の指揮官達の目を引くような、派手な戦

いぶりを指す。

戦場は決闘や試合の場所ではない。

乱戦ならあまり目立たないだろうが、それでも戦場で次々と敵を撃破し続ける行為は、どうあっても、敵の目を引くことであり、それだけ敵も、そいつを何とかしようと躍起になる。

それはつまり、接する敵が増えることでもあり、自らが疲弊して、生きて帰ることが出来なくなるリスクが高くなることを意味することになる。

長中尉は確かに、槍の名手ではあり、槍を手にして駆ける戦場で興奮するのも無理はない。

だが、――彼女はここが戦場だという、原則的なことを、その興奮の中でどこか見失っていた。

その結果が――これだ。

「バケモノめっ！」

ジョエルの指揮下、トレンチガンを構えるグレイファントムの半包囲網に陥っているのに、長中尉騎が気付いたのは、対峙する2騎が緊急後退した先に何がいるかを知った時だ。

グングニルのエネルギー調整かから始まって、騎体の管理に精一杯のMC（メサイア・コントローラー）は、唐少佐騎のMC（メサイア・コントローラー）ほど、戦場全体を見回す余裕がなかったのも、確かに言い逃れとしては正しい。

とにかく、彼女は自分が気付いた時には、すでに敵の照準が自分に向けられていたことに変わりはなかった。

「各個に照準――撃てっ！」

「長中尉っ！」
グレイファントム達の一斉射撃が始まった。
トレンチガンをぶっ放すだけでは満足できないのか、グレイファントム達の何騎かは、手榴弾まで投擲していた。
中尉騎の周囲でもうもうと土煙が立ち上り、３０メートル近い騎体が見えなくなる。
「くそっ！」
唐少佐は騎体を前進させつつ、腰にマウントしていた速射砲を引き抜いた。
「黄、王っ！中尉を救出する、続けっ！」
「了解」
「ったく、あのバカ女っ！」
唐少佐の周囲で互いの背中をカバーしつつ戦っていた2騎が舌打ちの後、唐少佐に続いた。
「長中尉の反応はっ！」
「ノイズがひどく、通信不能っ！」
「くそっ！聞こえていたら、いつも通りの厚かましさで返事でもしてみやがれ！ベッドで説教してやるぞ！」
「返事したくありませんっ！」
「生きてやがったか！？」
「ええっ！」
土煙の向こうから現れた長中尉騎を見て、唐少佐は絶句した。
問題は、長中尉騎の前だ。
二騎のグレイファントムの残骸が、長中尉騎の前に立ちふさがっている。
違う。
長中尉騎が、二騎の残骸を掴み上げて、楯にしているのだ。
「お前……スゴいことするな」
「――――間に合いました」

長中尉の声も少しだけ震えていた。
「一か八かだったんですけど」
「悪運の強い女だ」
「――助けていただけませんか？」
「もう少しそのままにしていろ。砲撃支援が入る」
「……腕が疲れました」
「うるせぇオンナだなぁ……ベッドで鳴かすぞ？」
「セクハラオヤジ」
「何か言ったか？」
「……何でもありません」

封印柱争奪戦　第三話

砲撃による弾幕が展開され、それまで長中尉を狙っていた米軍騎は、陣地まで後退して、その姿を消した。

「というか」

無事に後退を果たした長中尉は、礼を言う前に唐少佐に言った。

「何だか、私達もヤンキーも、目的を忘れてませんか？」

「目的？」

「何のために、私達は陣地を出たんです？」

「そりゃお前」

言い返そうとして、唐少佐は言葉に詰まった。

「――――そりゃ、お前が正しい」

「ですよね」

二人の視線は、既に混乱する戦場にはない。

あの落下物のあった地点に注がれていた。

落下物は、米中双方の陣地のど真ん中、少しだけ高くなった、丘と呼べと言われれば呼べなくもない。そんな場所に突き刺さっていた。

その周囲では、赤兎とグレイファントムが入り乱れて戦っている。

状況は既に収拾が困難なレベルの乱戦に陥っていた。

司令部は、必死に状況をコントロールしようと、ひっきりなしに通信を送り込んでくるが、現場としては、そんなもの一々聞いていられる余裕はない。

指揮官である唐少佐自身、こんなに敵味方が入り乱れて戦っている光景を見たことがない。

見たことさえない事態を収拾するなんて離れ業をやってのける自

信は、彼にはなかった。
だが――

「あの落下物さえ回収すれば」
女というのは、恐ろしいな。と、唐少佐は思う。
何しろ、頭に血が上って敵を倒すことにのみ必死になっている男達と違って、女である長中尉は、どこか冷めたような顔で、状況の本質を見抜いていたのだ。
「こんな騒ぎはさっさと収まります」
そう。
メサイア隊が前進した理由なんて、あの落下物を回収するため。
ただ、それだけだ。
なら、回収さえしてしまえば事態は収拾してしまう。
一種のゲームのようなものだ。
「――やるか？」
「そうしましょう」
「じゃ」
この時、長中尉は、唐少佐がこう言うと思っていた。

――俺が囮になるから、その隙に落下物を確保しろ。

いくら何でも、相手は男で、しかも自分の指揮官だ。
それくらいは言うだろう。
長中尉はそう信じていた。
ところが――

「俺が行くから、お前、囮になれ」

ガンッ！！
スゴイ音がして、唐少佐騎の後頭部を、長中尉騎の持つ槍の柄が

ぶん殴った。

「何をするっ！」

「何を言うかっ！この××××（自主規制）っ！」

長中尉としては、カッとなった時の罵りにすぎなかった。

だが、それを聞いた唐少佐の顔が、何故か真っ青になった。

「お、おまっ……ど、どうしてそれを知っている！」

「知るかっての！」

「ち、ちょっと落ち着けよ――お前にそんな趣味があるとは思わなかったぞ。この痴女め」

「はぁっ？」

「そうか……あの時か？あの時だな？――何でもない。真実は、後で聞かせてもらうとしよう」

「だから」

「上官反抗は重罪だぞ？お前の方が、槍使いのお前は遊撃に向いている。俺は戦斧だから、アレを回収した後、片手がふさがっても、どうにかなるが？」

「――あっ」

そう。

長中尉騎の主要武装は槍。

片手でも使えるが、両手での操作が基本となる。

そんな武装で、何かを回収する任務につけるか？

無理とは言わないが、困難だ。

頭に血が上っていた長中尉の顔に、それまでとは違う意味で赤みが差した。

「それでいいな？」

「――はい」

「あとで覚悟しておけ？このアバズレが！」

「っ！」

何か言い返そうとする長中尉の前で、唐少佐騎が動き出した。

「アメ公も、どうやら同じ考えらしい！3騎、向かっているぞ！」
「了解っ！」

●マラネリ軍飛行艦“エトランジュ”ブリーフィングルーム
「――――で」
戦況モニターに映し出される光景を前に、眠そうな目を擦るのはエレナだ。
モニター上では、“エトランジュ”に搭載されたセンサー類、いわば“エトランジュ”の“眼”が、米中の死に物狂いの乱戦を捉え、そのデータを映像として映し出している。
「ヤンキーとサルがケンカしてるのを、どうしろと？」
既に時間は深夜。
エレナは寝入りばなを叩き起こされて不満げだ。
「ケンカの原因は」
殿下がジロリとエレナを睨んだ。
「魔族軍の飛行艦から落下した物体を巡ってだ」
「そんなもの。飛行艦のパネルか何かかもしれないじゃないですか。ビール瓶に驚いたブッュマンでもあるまいに」
「コーラの瓶だ」
殿下は言った。
「中尉。君の言う通りかもしれない。魔族軍の飛行艦に特段の動きはない。地上で動いているのは、人類だけだ」
「なら」
ヘルガが言った。
「潰したいだけ潰し合いさせておけばどうです？」
「僕もそうしておこうと思ったんだけど」
殿下は一応、頷いた。
「そのつもりだったら、君達を叩き起こしたりするものか」
「まさか」

「懸念すべき要素がいくつかある」
後ろ手に組んだ殿下は、つかつかと壇上を行ったり来たりしだした。
「まず一つ」
カッ。
その手が持つ指示棒が戦況モニター上を突いた。
そこに表示されているものは、一つの反応。
ダユー達の乗る飛行艦だ。
「落下物が、中尉達の言う通り、単なるパネルだったとして、何故連中は航行を停止した？落下物が大切？なら、どうして、回収に動かない？」
「我々、人間との戦闘を避けたいから」
「何故」
「……それは」
「連中の戦闘能力は圧倒的だ。僕の知っている限り、あんなスペックを持つメースは見たことも聞いた覚えもない。まともに相手をすれば、米中両軍総掛かりでも相手になるとは思えん」
「……」
「二つ。僕としては、こっちの方が大切なんだけどな」
「何です？」
「……もしかしたら、魔族軍が動かないのは、動かないんじゃなくて、動けないのかもしれない。そう思える事態だ」
「だったら」
しびれを切らしたように、ドイツ軍の騎士の一人が言った。
「こっちから攻めてみたらどうですか？その魔族軍の飛行艦の場所はわかってるんだ」
「どんな防空装備があるか、メースが何騎配備されているのかもわからず？」
「そんなものを恐れていたら、戦争なんて出来ますか！」
「そんなものを恐れることさえ出来なければ、戦争指揮なんて出来

るモノか！」
「へっ？」
言葉尻をとられ、きょとんとした騎士の前で殿下は冷たく言った。
「君は、メサイアが1騎いくらして、その維持管理にいくら必要か知った上でモノを言っているのか？リスクとコストは天秤にかけることさえ出来ないなら、歩兵にでもなりたまえ。君にメサイアはすぎた玩具だ」
「マラネリがそんなに臆病だとしりませんでしたよ！」
その騎士は吐き捨てるように言った。
「石橋を叩いた挙げ句、人に渡らせて初めて渡るんですか？」
「ああ。どうとでも思ってくれたまえ。我々マラネリの人間は、地獄の釜へスキップしながら飛び込む程、バカではない」
「なら、俺達ゃ、勝手にやらせてもらいましょうか？」
「メサイアの運営権限がマラネリにあることを忘れるな？」
「……ちっ」
「君のせいで話がこんがらがったじゃないか。いいか？よく聞いておけ。アンクーに出会うのは、それからでも遅くないはずだ」
「……了解」
「中華帝国軍と米軍は共に作戦目的は一緒。ただ、同じ目的のために、この場所に展開しているんだ。わかるな？」
「互いを潰すために？」
「銃口を口にくわえて引き金を引け――さっきの……ああ、君だ」
殿下が指さしたのは、エレナだった。
「私ですか？」
突然の質問に、うつらうつらしていたエレナは飛び上がって驚いた。
「君もそこの素面ヅラした酔っぱらいと同じ答えか？」
「え？」
ヤバい。
この子、私に何を聞いているんだろう。

エレナの顔にはそう書いてあった。
「米中両軍が、ここに展開している理由を述べろ」
「ああ」
エレナは答えた。
「テキサス方面へ進行中の妖魔を食い止めるため……ですよね？」
「狙撃使仕様は気に入ってくれたかね？中尉」
「あのサポートシステムさえなければ」
「ほう？あれは気に入らなかったか」
「はっきり、邪魔です」
「わかった。次の整備で、君の騎のは、デフォルトでカットしておこう。さすがだ」
「……どうも」
エレナは軽く頭を下げつつ、何かイヤな予感がした。
「それで？」
「――その妖魔達が動いている」
「なっ？」
ザワッ。
ブリーフィングルームの中にざわめきが起きた。
「ど、どういうことです？」
椅子から立ち上がったヘルガが訊ねた。
「妖魔が動いているって」
ヘルガが見た戦況モニター上の、妖魔を示す反応は、地図上に集まったオレンジ色の塊に見える。
「……あらっ？」
ヘルガは、思わず目を擦って、その塊を見た。
さっき見た時と、何かが違う。
何が？
その答えに行き着いたヘルガは、真っ青になった。
「……まさか」
「そうだ」

殿下は頷いた。
「妖魔の数が、時間を追うごとに減っている」
「し、消滅しているとか？」
「そうそう都合良くいけばいいな。中尉」
「……っ」
「……ヴォルフ」
それまで、フォイルナー少佐の横で話を聞いていたブリュンヒルデが、そっと少佐の顔色をうかがった。
フォイルナー少佐は、瞑目したまま、無言で頷いた。
「……殿下」
「これだけでわかってくれると、とても助かるが？」
殿下の意地の悪い笑みに答えるかのように、フォイルナー少佐は言った。
「妖魔の作る地下通路の攻略はリスクが高すぎます」
「なぁに」
殿下はニヤリと笑った。
「どうせ、他人の土地だ。何を遠慮する必要があるんだ？」
「米中の両軍を撤退させることは」
「情報は渡すさ」
殿下は頷いた。
「戦場での戦闘地震のせいで、妖魔の移動震動は感知されていないはずだ。まるで、人類が戦闘状態に陥ることを知った上で、妖魔をコントロールしているようだ」
「実際、そうなのでは？」
ブリュンヒルデは言った。
「そうでなければ、タイミングが良すぎる気がします」
「僕も同感だが、だとしたら、ここで意図的に飛行艦を爆発させて、あの落下物を生み出した所までをタイミングの内に入れなければならなくなる」
「……」

ブリュンヒルデは、言われた意味がわかって目をパチクリさせた。
「偶然を、チャンスに変えた？」
「とも言えるだろう――部隊での、対妖魔戦闘経験者は？」
「私とブリュンヒルデ。他には」
「君と同等レベルの経験者を生身で求めるのは贅沢だろう。かといって、いかなる戦場でも、君と共に戦える戦力を、ここに抜擢してくれたと信じているが？」
「無論です」
フォイルナー少佐は答えた。
「わがグリュックシュヴァインは、そういう存在です」
「十分だ」
フォイルナー少佐の顔をじっと見つめていた殿下は不敵な笑顔と共に頷いた。
「僕は作戦の指揮に口を挟むつもりはない。日本軍と共同で、思う存分やってくれ」
「日本軍と我々の場合、指揮上位なのは？」
「――我々だ」

「地下を！？」
「そうよ」
同じ頃、“鈴谷（すずや）”でも、美奈代達が紅葉から情報を受けていた。
「妖魔達は、地下を移動中。さっすがに穴掘りやらせたら早いわ」
「よくわかりますね」
「地下の震動を捉えるセンサー情報は、米中でオープンにされているもの」
「……へっ？」
「両軍それぞれに、地下から来られたら困るってワケで、お互いが設置した震動センサー情報を、お互いに共有しているのよ。現地指揮官同士で話が通ったんじゃない？生き残るためには、正しい判断

よ」
「で、ですけど」
美奈代じゃなくても、そんなこと信じられる話じゃない。
米中は互いに戦争中だ。
戦争に必要な情報をお互いに共有しているなんて、美奈代の感覚ではあり得ない。
「何度も言うようだけど、生き残るために必要なことよ?基本は、人類対魔族だってことを、現地指揮官達がわかっている。それだけのこと。褒めることでも、驚くことでもないわ」
「……なら」
「どうして、それが伝わっていないか?簡単よ。こんなドンパチやってる時に、冷静に地下のことを気にしていられる余裕なんて、お互いに全くない。理由なんて、きっとそんなものよ」
「両軍共に、肝心な時に?」
「そう。肝心な時に、せっかくの取り決めは役に立たず、情報なんて見向きもされない」
紅葉は寂しげに笑った。
「魔族から見たら、人類はなんて愚かなんだろうって、笑われているわね。きっと」
「……」
「だから、人類の中にも」
紅葉は、張りのある声を張り上げた。
「少しはマトモなのがいるって、証明したいのよ!こんな時の人選としては、あんた達は絶対に間違っている気はするけど、人材がいないから、この際無視する!どんなものでも、鼻をつまめば飲み込めるし!」
「……どういう意味ですか」
「黙れ。共同作戦の場合、作戦指揮権はドイツ軍にあるから、連中の指示を待つ。それでいい?」
「そりゃ」

美奈代は答えた。
「私がとやかく言うべきことはありませんけど」
「そう」
紅葉は訊ねた。
「あんた、今、楽が出来るって喜んでるでしょう？」
「いえ」
美奈代は慌てて首を横に振った。
「それより」
「何よ」
「妖魔のいる地下って、どうやって入るんですか？」

実際、ここまで来れば、妖魔達を動かしているのは、ダユー達だと思うのが普通だろう。
しかし、実際には違った。
「妖魔達が動いている？」
「はい」
ダユーは、未だ爆発騒ぎの余韻が混乱として残る艦橋で情報を受けた。

――――妖魔達が地下通路を構築しつつ、移動している。

それは、月城のある立案が実施可能かを検証する段階で判明したことだった。
曰く、“妖魔を投入して、戦線を混乱させ、その隙に封印柱を奪取することは可能か”
その答えを知るべく、情報担当者が妖魔の状況を確認する段階で判明したのが、地下を進行中の妖魔達の姿だった。

「直径６０メートルトンネルを掘りながら移動している？」
月城にとって、その情報は逆に彼女の度肝を抜く結果になった。
直径６０メートルといえば、大型の飛行艦が通行できるサイズだ。
しかも、
「それを、毎分１００メートルのスピードで掘り続けているだと？」
「妖魔“シゲール”は、地下移動に特化したタイプの妖魔です」
「……品種改良したのか？」
「長い歴史の中で、妖魔を都合良く作り替えることはあるのですよ」
情報将校は、イヤミな顔で答えた。
「あなた達なら、わかるでしょう？」
「都合良く作り替えられた身、それが我々人間だろう？そういう意味か？」
「ケンカを売っているのではありません。客観的な事実を述べただけです」
「――いいだろう」
月城は頷いた。
「都合のいい品種らしく、都合のいい仕事をしてやろう。それで文句もあるまい？」
「――本当にケンカ越しだ。それで？私は求められた情報を渡しましたよ？」
「地下通路と地上までの高さは？」
「約５０メートル」
「……地下通路途中から地表へ向けて、妖魔を出す場合には？」
「……そうですね」
情報将校は、しばらく考えてから言った。
「地表へ向けて、通路内部から穴を開けるなら可能ですね」
「穴？」
「ええ。“グラン・バルスター”級のブラスターを使えば不可能ではありません」
「その“グラン・バルスター”というのは、５０メートル地下から

一瞬で地表に穴を開けることが出来る？」
宗像は、むしろ唖然とするしかない。
５０メートルもの長さになる物量を、一撃で消滅させるエネルギー体とは一体？
「ええ。随分と大きいシロモノですけど」
「どの位？」
「メースで運用は可能です」
つくづく。
宗像は内心で思った。
――――スゴイ奴らを相手にケンカしていたんだな。私達は。
一瞬、美奈代達の顔が脳裏によぎったが、宗像は顔には出さなかった。
「地下通路に強行侵入――――いや」
言いかけて、月城は言葉を飲み込んだ。
「“シゲール”の生態を知りたい。資料を」

「つまり」

“シゲール”の生態系に詳しいものとして白羽の矢が立ったのは、ティアリュートだった。

その深い知識故に、“博識”と傭兵仲間からも一目置かれていたティアリュートだ。

“シゲール”という妖魔についても知識はかなり高いと期待され、艦橋に呼び出された。

呼び出した月城を前に、ティアリュートは、冷たく答えた。

「“シゲール”が、何故、動いているのか……ですか？」

「そうだ」

月城は頷いた。

「奴らはこのタイミングで動いている。妖魔のたまり場だった旧中華……いい、とにかく、人類の作った防御陣地跡からの移動距離と速度から割り出した限り、奴らは人類同士の戦闘が開始されてから動いたことは明白だ。しかも、その針路は、その交戦地帯だ。何故だ？奴らは、何を狙っている？」

「……中佐や獄族の方は」

ティアリュートはあきれ顔で言った。

「“シゲール”の生態を、本当にご存じないようですね」

「当然だろう」

月城は、少しだけ救いを求めるように、名前も知らない情報将校の顔を見た。

そして、彼の名前さえ覚えていない自分に、何だか深く絶望した。

私はやっぱり、何をやってもダメなんだ。

そう思った。

そんな月城の前で、情報将校は首を横に振った。

つまり、彼もまた、“シゲール”の生態に詳しくないことを認め

たのだ。
情報将校のクセに！
一瞬、そう思ったが、自分もまた、彼を非難出来る立場にないことは、誰に聞かれなくとも自分自身が一番、わかっている。
「……少なくとも私が、そんな妖魔の存在を知ってから一時間と経っていない」
せめてもの威厳を示すように、月城は頷いた。
「中尉は詳しいのか？」
「……魔界では常識みたいなものです。あれは、魔界では地下通路構築に使われている妖魔ですから」
「それで？」
「……ノイズ？」
「“シゲール”の主なエサは、主に“タンタ”と呼ばれる、魔晶石を食べる小型妖魔――正確には、魔法生命体です。
これは、地下に生息する――中佐にもわかるように人間界で例えるなら、ミミズのようなもので、土に含まれる微量の魔晶石を食べ、そこから魔力を得て生息します。
“シゲール”は、この“タンタ”を巨大化させたような存在と思ってください」
「つまり――“シゲール”そのものがミミズ？」
「はい。ちなみに、食用には向きませんが……お嫌いですか？」
「私は蛇やミミズは大の苦手だ」
「好む女は異常でしょう。その点では同意します。
“タンタ”は魔法生命体であり、魔晶石から出るエネルギーを自らの生命活動に使用する際、一種のノイズを発します。
“シゲール”は、そのノイズを感知して、“タンタ”の居場所を知る。
つまり、この場合、人類の使うデミ・メースの搭載した魔晶石の

ノイズに、“シゲール”が反応。エサである“タンタ”と勘違いしているものと」
「じゃあ……奴等は」
「地上に出次第、エサとしてデミ・メースに襲いかかるでしょう。その混乱を利用して、目標物を奪取するというのですか？」
「――何故、人類を真っ正面から攻めないのか？顔がそう訊ねているが？」
「なら、その理由を教えて下さい」
「面と向かって、人類と敵対するのは、都合が悪い」
「――それが理由ですか？」
「それ以上の情報を求めるのは、傭兵としてか？それとも個人的にか？」
「私の中で、双方の利害が一致しました」
「……簡単な話だ。目標物がその理由だ」
「？」
「……そこは、私が話しましょう」
それまで黙っていたダユーが言った。
「目標物が何か。そこを訊ねない所に、月城中佐の限界が見え隠れしてますね」
「――っ」
言葉を詰まらせ、硬直した月城を後目に、ダユーは優しげな眼差しに笑みを浮かべていった。
「目標物は封印柱です」
「封印柱？」
しばらく視線を彷徨わせたティアリュートは、ギョッ。という顔になった。
「それはまさか！」
「――確証はありません。しかし、経過した状況から間違いはないと判断しています」
「……ヴォルトモード卿」

「かの御方を、魔族ではなく獄族が助け出したということは、今後の交渉の中では大変重要なカードになるでしょう。しかし、逆に、我々がそれを失うきっかけを作ったとなれば」
「……私は魔族ですが」
ティアリュートは強ばった顔で答えた。
「そんな失態に荷担することは御免被ります」
「私達もそうです」
ダユーはニコリと笑った。
「私達は、契約上も、そして今後の未来の上でも、利害は一致するようですね」
「……そのようです」
ティアリュートは深いため息を吐いた。
「奪還を強行すれば、封印を人類に解除させるという契約がフイになる。それは即ち、重大な契約違反となり、契約に反した犯罪人として貴女と、そして我々の名が記されることになる」
「ご明察。わざわざ、いろいろと面倒くさいマネまでした苦労は、その軽率な行動で、一瞬のうちに水泡に帰すことになる」
「……“シゲール”は、地上で交戦中のデミ・メースを狙っています。間違いなく、地上に出るでしょう」
「このまま放っておけと？」
「“シゲール”に目をつけた中佐の判断は正しいと思います」
チラリと月城を見たティアリュートが続けた。
「問題は人類です」
「え？」
「人類の飛行艦2隻が付近に存在します。連中が地下を移動中の妖魔に気付いていたとしたらどう動くか」
「……」
「……」
ティアリュートとダユーの視線が月城に注がれた。
「……突入可能な穴を見つけるか、あるいは開くことでトンネルに

侵入。火炎放射装置で妖魔を次々と焼き殺すでしょう」
「……歓迎できない事態ね」
「その前に、我々がやるべきコトはむしろ一つです」
「人類の阻止？」
「トンネルに侵入させる前に、地上で人類を阻止しなければ全てが終わります」
「……その方法は？」
「現在、発見できるトンネル侵入口は？」
「……メサイアが侵入可能なサイズは一つだけ」
月城は答えた。
「このポイントDの破孔だ」
「人類はそこめがけて来るでしょうか？」
ティアリュートの視線は月城に向けられていた。
――人類としてどう見る？
その眼は、そう語っていた。
「……恐らく」
月城はそうとだけ答えた。

「ティアリュート様」
ハンガーに入ったティアリュートに気付いたらしい。
ハンガーに駐騎していたバラライカから、ユースティアが降りてきた。
「いかがでしたか？」
「奇妙な話もあったものよ」
無重力状態を流れてきたユースティアの腕を掴んで床に立たせたティアリュートは肩をすくめた。
「人類の戦術教官になってくれと言われたわ」
「出世じゃないですか！」

「冗談。戦場で一々、他人の世話なんて焼いているヒマあるもんですか」
「ですけど……」
「とにかく、出撃よ？」
「ブリーフィングは受けました。ポイントDへ侵入する人類側デミ・メースの阻止」
「……そう」
「“ギリースーツ”の準備は終了しています」
「ありがとう――後は」
ティアリュートは、愛騎を見上げた。
「上手くいくことを祈るだけね」
「行きますよ」
ユースティアはニコリと微笑む。
そのほんわかした雰囲気だけで、ティアリュートは肩の力が抜けてしまう。
「そうね」
まるで伝染したかのように、ティアリュートの顔にも笑みが浮かぶ。
「ついでに、裏の裏を掻くようなひねくれ者が、人類にいないことを祈ることにするわ」

「魔族軍の動きは？」
「現状、確認出来ず」
ドイツ軍のフォイルナー少佐が立てた作戦は明快だ。
地下のトンネルに高性能爆薬を放り込み、その後でトンネルに侵入する。

そのための侵入可能な穴はたった一つ。
数十キロと続くトンネルなのにほころびが一つしかないことに、美奈代は舌を巻くしかない。
「作戦そのものは単純なんだけど」
それよりも、美奈代が驚いたのは、ドイツ軍の布陣だ。
ドイツ軍は、部隊が一丸となって穴に侵入することなんて考えていない。
穴を半円状に大きく取り囲むような陣形が組まれている。
つまり、穴に対する包囲網だ。
そして、その穴めがけて大型狙撃砲を装備したドイツ軍の狙撃部隊が照準を合わせている。
美奈代達は、ドイツ軍が動く中、布陣ポイントだけを指示された関係で、ドイツ軍が動きを完了しなければ、どこに身を置いて良いのかさえわからない有様。
他国軍の下に入ることは、時としてこういう制約を産むとわかっていても、他国に対して、行動が遅れていることは決して喜べることではない。
だが、“鈴谷（すずや）”からの発艦準備を進めながら美奈代は、
「まるで、穴から何か出てくるみたいな布陣が……」
うーん。
その布陣の一角を担いながら腕組みして考えてしまう。
敵は今のところ、発見されていない。
フォイルナー少佐は、その理由をブリーフィングで明らかにしていない。
美奈代には、どうにも少佐が何を考えているのか、今一歩理解で

きない。
「穴から……違う」
美奈代は首を横に振った。
「狙いは……別にある？」
「小清水よりお姉さま」
涼から通信が入った。
既に涼率いる狙撃隊は発艦を終了させている。
「これは一体？」
涼にも、穴に対する包囲網の意味がわからないらしい。
「私達、何に備えればいいんですか？敵は妖魔なんですか？」
「私にもわからん」
美奈代は素直に答えた。
「移動スピードを考えれば、布陣しているだけなんて、遅い位だというのに」
「いるかどうか分かんないモノに脅えているみたいで、まるで」
通信に割り込んできたのは芳（かおる）だ。
「お化けでも怖がってるみたいですね。私達」
「……お化け？」
「こんなところで“うらめしや”もないと思いますけど？大尉、このまま私達だけで突撃しては？」
「……いや」
美奈代は、モニター上に映し出される穴周辺の映像を食い入るようにして眺めた。
「……」
「大尉？」
「お姉さま？」
「……確か」
美奈代は何故か、ステイタスモニターを操作して、メサイア携帯用のウェポンコンテナに入っている武器一覧を眺めた。
「……ダメか？いや」

そして、“鈴谷（すずや）”に通信を開いた。
「坂城班長へ繋いで下さい」

「日本軍、武装変更のため行動に遅れ」
イリスからの報告に、フォイルナー少佐は顔色一つ変えることはない。
「どの位だ」
「イズミ大尉によれば、都合2分」
「許容範囲……か」
「大尉からです。こちらで“幽霊”をあぶり出す……そうですけど」
「ほう？」
不意に、フォイルナー少佐の顔に驚きが走った。
不快な驚きではない。
むしろ、素直に感心した。
そんな顔だなと、イリスは思った。
「面白い――日本軍のお手並み拝見といこうか」

「あの！」
エレナの苛立った声が入ったのは、その時だった。
「隊長っ！速射砲の弾種変更の許可を願いますっ！」
「――狙撃砲は、初弾から徹甲榴弾使用の許可を出しているぞ」
「私が問題にしているのは！」
エレナは、カッとなった挙げ句、少佐に食ってかかった。
「これは演習じゃないってことです！」
「……そうか」
フウッ。
フォイルナー少佐は、深いため息を吐いた。
「中尉の限界はその辺りか？」

「――は？」
「私は日本軍に、我が方の武装について説明していない。にもかかわらず、彼女たちはむしろ、自分達から、我々にあわせてきたぞ？」
「い、意味がわかりません！」
「――見ていればわかる。イリス、イズミ大尉に伝えろ。“タイミングは一任する”」
「了解」
「隊長っ！」
「黙ってみていろ。そう言ったぞ？中尉」
「……っ」

「ありがたいのか、何なのか」
苦笑しつつ、美奈代は部隊を穴が一望できる地点上空に移動させた。
フォイルナー少佐に命じられたポジションには狙撃隊のみが布陣している。
美奈代は、その位置に部隊を展開させる理由を、周囲にも伝えていない。
「美奈代さん？」
美奈代の横につけた美晴が訊ねた。
「ここで――“これ”。しかも、弾は“これ”って……どういう？」
「……正直」
美奈代は言った。
「大外れかもしれないし、もしかしたら、クリティカルヒットかもしれない」
「……は？」
「やっても恥かくだけだ。気楽に行こう。とにかく、全騎はかまわ

ないから、穴周辺に向けてフルオートで派手にぶっ放してくれ」
「ここで“これ”使い果たしたら」
有珠(ありす)が嬉しそうに笑った。
「しばらく、模擬演習はないでしょうね」
「嫌いか？」
「敵と殺し合っている方が楽ですもん。部隊(うち)の演習って」
「……よくも言う」
「鵜来少尉？なんでしたら、私が模擬演習、お相手しましょうか？」
「勘弁して下さいよ。柏中尉。中尉の薙刀は悪夢の存在です」
「褒め言葉ですね。真面目な話。美奈代さん？」
「武器の選択について議論しているヒマはないというか」
美奈代は言った。
「撃てば多分、わかると思う」
「……ですか」
「そういうこと――泉より“鈴谷(すずや)”へ。艦砲支援の準備は完了していますか？」

ギリースーツ
偽装服とでも訳せば良いのだろうか。
普通は狙撃兵などがカモフラージュの手段として着用することの多い装備ではある。

メースに採用されているそれは、スーツというよりマントに近い。
表面に展開される魔法効果によって、スーツに包み込まれたメースを、魔法・光学を問わずに隠してしまう“隠れ蓑”としての効果を持つ。
つまり、この装備を身につけている限り、メースのような巨大兵器でさえ、誰の目にも止まることはないはずなのだ。

ティアリュート達の部隊は現在、全騎がこのギリースーツを着用し、穴周辺に待機している。
「……しくじったかな」
ポツリ。と、ティアリュートが呟いた根拠は、人類側の布陣だ。
穴を半ば包囲するような陣形は、穴を警戒していることを如実に示している。
つまり、ティアリュートが期待したほど、人類は楽天的ではないということだ。
ティアリュートの策では、穴周辺にギリースーツを装備して布陣、ノコノコと穴にやってきたデミ・メースを、装備した槍や斧で撃破するというシナリオだ。

ところが、肝心の人類が期待したように動いてくれない。

「……さて。どうしたものかしら」
ティアリュートが、戦況モニター上で気になった変化はたった一つ。
普通のメースならわからない情報。
人類側の飛行艦の主砲が、その筒先をこちらに向けたことだ。

「……まさか」
ティアリュートは驚いた。
まるで、ここに自分達がいることを、人類がわかっているかのようだと、そんな風に思えたのだ。
「部隊全騎」
ティアリュートは言った。
「ゆっくりと後退しろ」
「ティアリュート様？」
「人類側の動きがおかしい。どこかで情報がリークしている可能性

もある。このままではリスクが高すぎる」
「はい――人類側、発砲！」
「艦砲か！？」
「いえ！」
ティアリュートの鋭い驚きの声に、ユースティアもまた鋭く反応した。
「上空のデミ・メースによる連続発砲――あの人達、何しているの？」
「どうしたの？」
「人類側、こちらに対して、乱射に近い発砲を繰り返しています。発射された対象物は、速度はともかく、質量的に、脅威になるものでは」
「……えっ？」
ティアリュートは、ポカンとして空を見上げた。
何か、赤いモノが雨のようになって降ってくる。
「……」
赤い雨が、自分に向かって降ってくる。
「……」
何故か、赤い雨の粒を見たティアリュートが叫んだ。
「しまった！」
ギリースーツに赤い雨が降り注ぐ。
それはつまり――
「そこにいたか！」
美奈代の目は、鋭く目標を見つけた。
「全騎、武装変更！目標は穴周辺のメース！小清水っ！」
“鈴谷（すずや）”と“エトランジュ”の艦砲が、穴の周辺に突然浮かび上がった赤いまだら模様の“幽霊”めがけて火を噴いたのは、美奈代の命令が全て終わらない前だった。

封印柱争奪戦　第五話

「こんなっ！」

バラライカを急速後退させながら、ティアリュートは毒づくしかなかった。

包囲戦は人類側の逆襲によりあっさりと失敗。

赤い染料がたっぷり付着したギリースーツをまとうメース達が、その後に続く。

それまで潜伏していた場所は、艦砲射撃のマトになっている。

腕の確かなメース使いでなかったら、今頃、何騎が挽肉にされたかわかったものではない。

「人類はどれほど悪知恵が働くんだ！？」

前もって万一の際に後退するポイントとして定めていた地点に着陸する際の衝撃を、歯を食いしばって耐えたティアリュートは、ギリースーツを排除して怒鳴った。

「ええいっ！わざわざ敵の針路を広げる役目を果たすとは！」

「ティアリュート様！」

ユースティアから連絡が入った。

「どうしますか！？」

「――――部隊を二手に分ける！ユースティア、飛行艦を叩く！私に続け！サリューン、残存部隊をもって、敵を可能な限りこの場に留めてください！」

「はいっ！」

「――――わかった」

サリューンは、あのユング隊長の中でも古参兵として知られるベテラン中のベテラン。

ユングがティアリュートの出撃に合わせ、部隊副指揮官として送り込んできた身だ。

指揮官としての経験が浅いティアリュートにとって、サリューン

のような古参兵の存在はどんな宝石よりも貴重だ。
サリューンの口から飛び出る指揮を耳で聞き流し、ティアリューはバラライカのエンジンを全開にして、人類側飛行艦めがけて飛び出した。

「敵騎2騎、“鈴谷（すずや）”へむけて移動開始！」
「やっぱり！」
散弾砲をマウントラックに収納、斬艦刀を抜刀した美奈代は、舌打ちすると通信装置に怒鳴った。
「風間、私に続け！小清水、敵の目的は、ここに我々を喰い留めることだ。連中を面で叩いて、逆に奴らをこの場に縛り付けろ。柏、隙を見てあの穴に飛び込め」
「了解、全騎、緊急降下開始！投擲爆弾の射程にまで――」
美晴は一瞥した地形から、大きな窪地を見つけ出すことに成功した。
「――あそこ。全騎、続け！」

「出撃許可？」
ダユーが怪訝そうな顔をした。
「あなたが？」
「はい」
頷いたのは、宗像だった。
「お話を聞く限り、私が出るのが、最も話を早くまとめられる気がしました」
「何？」
ダユーは笑った。
「月城中尉に嫉妬した？」

「まさか」
宗像は顔色一つ変えずに言った。
「昔の指揮官が、あまりにエキセントリックだった。そのせいでしょうか、奴の指揮は、あまりにも教本に乗っ取りすぎている。そんな気がします」
「出してもいいけど、護衛は？」
「単独で結構です。逃げ足が速い騎をお願いします」
「でも、あなたはまだメースは操縦出来ない」
「私が乗っていることに意味があるのです」
「――話しなさい」
「本題に入る前の確認です。あの落下物を回収するを、どうして躊躇なさるのですか？」
「理由は簡単」
ダユーは答えた。
「あれは元来、人類でなければ触れることさえ出来ない。そういう取り決めになっているもの。つまり、あれを公に奪還に動けば、それはつまり、取り決めに反することになる」
「ルールには背けない……ですか」
「律儀過ぎると思っているでしょう？でもね。契約を重視するが故に、我々三族は破滅への道を回避してきたのよ。人類のように、公然と契約事を踏みにじるような恥ずべきことはしないのが、三族の誇りのようなものよ」
「――なら、人類である私が回収すると？」
「……」
ダユーは目をパチクリさせたあと、あきれ顔で言った。
「そういう発想、ストレートを通り越して、何て言って良いかわからないわ」
「恐縮です」
「複座型が一騎あったはずね。あれを貸しましょう。ただし」
「ただし？」

「基本的に武装が出来ない。それでいい？」
「構いません」

「４時方向から接近する騎、２騎！」
「くそっ！」
ティアリュートが舌打ちしたのは、人類側の飛行艦をロックオンする一歩手前のことだった。
バラライカを急旋回にいれた所を、オレンジ色に輝くアイスキャンディーみたいな塊が通り抜けていった。
「あと一歩で！」

「ギリギリッ！」
左手にビームライフルを構えた美奈代が、針路を変化させた敵騎に追いすがろうとしていた。
「８時方向っ！」
「なっ！？」
ギャンッ！
子供の悲鳴のような音がして、とっさにひねった騎体の間近を、濃灰色の騎体が駆け抜けた。
「避けた！？ティアリュート様っ！」
ユースティア騎だ。
「ユースティアは艦の攻撃へ！ここは！」
高級指揮官向けの高性能慣性制御システムにモノを言わせて、普通なら考えられない程の高Ｇ機動を難なくこなしてみせたティアリュート騎が、美奈代騎を襲った。
「ぐっ！」
とっさに構えたシールドを蹴りつけたティアリュートの一撃。

逆襲したのは祷子だった。
「このぉっ！」
ガンッ！
鈍い音を立て、祷子の駆る“Ｄ－ＳＥＥＤ”とティアリュートのバラライカが剣を交えた。
“Ｄ－ＳＥＥＤ”の質量を剣のスピードに上乗せさせた一撃は、普通なら空中機動でまともに受け止められるシロモノではない。
受けようモノなら勢いに負けて、バランスを喪失し、二撃目を避けられない。
しかし、丁度、シールドの上に立っているに等しい姿勢のティアリュート騎は、シールドの上で踏ん張るという信じられない僥倖に恵まれた。
逆袈裟斬の一撃を、ティアリュートは難なく受け止めることが出来た。
「なっ！？」
驚愕に目を見開く祷子の前で、シールドを足蹴にしたティアリュート騎が宙に舞った。
「このぉっ！」
バラライカのブースターが点火したのと、“死乃天使”の近接防御システムが火を噴いたのは同時だった。
バラライカという獲物を逃した火線が虚しく宙を横切った。
「よくもっ！」
美奈代は顔を真っ赤にしてバラライカの追撃にかかった。
「よくも私を踏み台にしてくれた！」
「大尉っ！」
「マスターっ！」
美奈代が興奮して暴走する。
そのリスクというか恐ろしさを知る牧野中尉と“さくら”が慌てて止めに入った。
「落ち着いて！」

「一騎、“鈴谷（すずや）”に向かってるんだよ！？」
「――ちいっ！」
歯ぎしりして悔しがる美奈代だったが、母艦を沈められては話にならない。
「風間、地上からの対空砲に注意しつつ、そいつを追い回せ！」
「撃破しますっ！」
「されるなよ！？」
「何てことを！手伝ってください！」
「“鈴谷（すずや）”の防衛に回るっ！いいな！？時間を稼ぐだけで十分だ！トンネルに柏達が入り込めば、後は“鈴谷（すずや）”を防衛するだけで事が足りる！」
「――了解！」

「――やっぱり来た」
後ろから追いすがろうとする敵騎。
その殺気を感じながら、ユースティアは舌打ちした。
「――ダニの分際で」
目の前で盛大に対空砲を放つ敵艦なんてどうでもいい。
たった一発で粉砕できる自信は十分にある。
問題は、後ろから近づく敵だ。
さっきの機動からして、ただ者ではない。
私の一撃をかわしてのけたのは、ティアリュート様の他、ほとんど思いつかない。
かなり手練れ。
相手としては申し分ないはずだ。
ユースティアは、そんな打算を頭の中で組み上げていた。
背後から、敵騎が長い剣を振りかざしながら接近してくる。
……まだだ。
まだ、今、動くべきじゃない。

タイミングは――――
接近警報が鳴り響くコクピットの中。
ユースティアは、まるで他人事のように自分の危機を見つめていた。
仕掛けるタイミングは――――
ここだ！

「なっ！？」
それまでスクリーン一杯に映っていた敵騎の姿が消えたかと思うと、騎体に激しい衝撃が走った。
「何っ！？」
「シールドにダメージ！」
「――――っ！」
「よく止めました！」
牧野中尉が、感服した。という顔で言った。
その目の前では、戦斧を構えた敵騎が体勢を整えようとしていた。
「敵騎が、騎体を下に沈めて、こちらの腹部を狙ってくるなんて、よく見極めたモノです！」
「というか」
美奈代は、自分の身に起きたことが信じられない。という顔で答えた。
「体が……勝手に動いた……ような？」
「とにかく！」
「了解」
美奈代は顔を引き締めた。
「敵を撃破します！」

くっくっくっ……。

コクピットの中に、不思議な笑い声が響く。

ユースティアの喉から出るその声は、その可憐な外見から想像も出来ないほど、邪な何かに包まれていた。

「人間風情、どの程度もないと思っていたが」

ハハハッ！

ユースティアは、本当に狂ったような笑い声をあげた。

「嬉しい！嬉しいぞ！私を、この私を楽しませてくれる奴が、人類にいてくれたとはなぁっ！」

戦斧を構え、ユースティアは白いメサイアめがけて突撃した。

「さぁっ！濡れる程、欲情させてくれっ！」

ガンッ！

戦斧と斬艦刀がぶつかり合い、

ガガンッ！

二つの刃が離れるか否かのタイミングで、二騎の右足が、互いの足を蹴る。

左腕のシールド内部に仕込まれたビームランチャーと、左腕に持ったビームライフルのトリガーが引かれ、空中で衝突したエネルギー同士が、激しい爆発となって両騎を突き飛ばした。

「――くはぁっ♪」

その衝撃に耐えたユースティアは、陶酔したような声をあげ、首を左右に振った。

「下半身がたまんない♪」

「こいつはバケモノか！」

対する美奈代は驚愕を通り越していた。

1騎に対して、ここまで激しいぶつかり合いになったことはない。

まるで、こちら側の手の内を知り尽くしたかのように、同じ手を繰り出してくる。

そんなことがあってたまるか！

「このぉぉおっっ！」

剣と戦斧がぶつかり合う。

シールド同士がぶつかり合い、

足技の応酬が重なる。

横薙ぎの戦斧を、騎体高度を落として回避、膝を狙った斬艦刀の反撃を、膝を屈して回避する。

互いの技量と、騎体性能を限界まで引き出した中での力押しと鎬合いの連続が続く。

ラチがあかない。

時間は来ている。

戦場で、たった1騎に時間をかけているヒマなんてない。

そんな焦りが沸いてくるのを抑えられない。

「……一かバチか」

「捨て鉢はイヤですよ?」

「何とでも！」

美奈代は敵の攻撃を回避しつつ、パネルを叩いた。

「さぁっ！」
ユースティアが騎体を踊らせ、美奈代騎に襲いかかった。
パネルを叩いていた美奈代は、それに対する反応がほんの一瞬だけ遅れた。
「しまっ――――ぐうっ！？」
シールドに戦斧がめりこむ衝撃が左腕に疑似感覚として伝わってくる。
戦車砲の直撃さえ耐えるはずのシールドが紙細工のようにへしゃげる。
戦斧が引き抜かれる際、シールドを貫通した戦斧の刃がシールドの内側からまで見ることが出来た。
「なんて破壊力――――っ！」

ガンッ！

もう一度、シールドに衝撃が来た。
シールドへのめりこみは、さっきより深い。
「ここでっ！」
美奈代は、ここで左腕をひねった。
「“さくら”シールドパージっ！」
「はいっ！」
バンッ！
爆破ボルトが作動して、シールドが左腕から離れた。
「そんなものっ！」
戦斧越しの感覚で、敵がシールドを手放したことを察知したユースティアは怒鳴る。
「無駄ですっ！」

シールドを貫通するような攻撃が来ることは予想の範囲内だ。
ユースティアは即座に戦斧を手放し、シールドから離れた。
「……えっ？」
ユースティアが驚いたのは、シールドを手放した敵から、何の攻撃もなかったこと。
戦斧がめり込んだままのシールドが落下していくのが、まるでスロー再生しているようにゆっくりと感じられた。
「て、敵は？」
いた。
敵はすでに後方へ下がっている。
「えっ？」
すでにポツンとした点に近いサイズに過ぎない敵。
それはつまり――
「こ、これで終わりですか？」
違う。
そんな馬鹿な。
ピピッ。
探知機が、接近する物体を検知した。
「？」
サイズは1メートルに満たない小型で、しかも、接近速度も脅威とは限らない。
敵は、接近する物体を追うかのように、ブースターを点火。
再び、こちらに向かってくる。
「ユースティアっ！」
「え？」
ポカン。
悲鳴に近い声。
それがティアリュートの声だと、脳では理解している。
だが――

ビンッ！

ユースティアの目の前で、接近する物体が光の矢に貫かれた。

途端。

「っ！？」

激しい光と、耳が壊れたかと思う位、強烈な音がユースティアの視覚と聴覚を容赦なく奪った。

「く……っ！」

まずいっ！

戦場で目と耳がやられるなんて、殺されたのと同じだ。

しかし、敵は一体……？

涙で滲む目を酷使して、おぼろげながらにもユースティアはメインモニターを見ることが出来た。

だが、その肝心のモニターが、強い光から回復出来ていない。

ユースティアは、強い光に、自分の目がやられたことははっきりとわかった。

「サブカメラ……」

「ユースティア！そのままでいいっ！動くなっ！」

「て、ティアリュート様！？」

「私が守るっ！」

「で、ですがっ！」

「お前一人守れなくて、姫がどうのなんて言えるか！」

「作戦はしくじった！ここでユースティアまで失うわけにはいかんっ！」

「……っ！」

ガンッ！

騎体に震動が走る。

「私が誘導する！ジャミングを発信する、センサーが飛ぶぞ！」

「はいっ！」

封印柱争奪戦　第六話

「一体……？」
美奈代の目前に現れた別の敵。
それは、出現するなり美奈代の獲物を掴んで逃げ出した。
かなりの敵だったことは確かだ。
それが目の前から消えた。
それを素直に喜ぶべきか否か、美奈代は答えが出せない。
「か、風間？」
美奈代は、接近して来た敵が、さっきの騎だと気づいた。
「ごめんなさい」
接近してきた“Ｄ－ＳＥＥＤ”もシールドは傷だらけだ。
「手間取っているスキに逃げられました」
「風間が手玉に取られたか？」
「そういう……まぁ、そうですね」
祷子が通信モニター上で頬を膨らませはしたが、反論出来ず、しぶしぶながら頷いた。
「久しぶりに出会いましたね。あんな手応えのある敵」
「私は、二度と出会いたくない」
「……同感ですけど」
祷子の視線は、ほんの少し遠く、ドイツ軍と魔族軍が交戦状態に陥っている戦場に向けられた。
「この調子だったら、魔族軍は撤退するのでは？」
「もっと厄介な敵が出てこないことをお祈りさせて」
「……神様に？」
「悪魔によ」
「悪魔崇拝の御方だったんですか？やだ、私、元は巫女なんですけど」
「知らなかった？神様って、悪魔が片手間にやってるのよ？」

「……とっても御意地の悪い御方だと思ってましたけど」
「そういうこと――柏達と合流しよう」
「はい！」

「ユースティア負傷、ティアリュート騎が誘導中」
「強制ガイドビーコン、ユースティア騎に照射準備！」
「……無駄な損害かしらね」
艦橋で推移を眺めていたダユーが、脇に控えていた月城に言った。
「今、宗像が封印柱の奪取に動いた……成る程？確かに、あの子の言い分は分があるわ」
「……」
「ここまでメースを出しておいて、一騎たりとも未だに封印柱に近づくことさえ出来ていない現実を前にすれば」
ジロリ。
睨まれたに近い月城は、ダユーと視線を合わせることが出来なかった。
「――言いたいことは分かるわね？」
「……」
月城は、小さく頷くだけだ。
それしか、月城には出来なかった。
「組織で生き残れるのは、結果を出した者だけよ？」
「……」
「人間側の事情に精通した参謀として、あなたを雇っているの。私を失望させないで」
「……はっ」
絞り出すような月城の声に生気はない。
握りしめられた拳が震えるのを、ダユーは見なかったことにした。
「ティアリュート達に命じなさい。戦闘目的を変更します」

「おいおいおいっ！」
サリューンでなくても文句が言いたかったろう。
戦闘中に、その目的が変更されるなんてことは、普通はあってはいけないことだ。
命がけで戦っているのにも理由がある。
その理由を、簡単に変えられたらたまったものじゃない。
しかも、それまで戦っていた所を放棄して、たった一騎を守れとは何事だ？
「命令出すなら出すで、責任持ってくれよ！」
「サリューン！」
元来、サリューンは傭兵仲間での通り名に過ぎない。
本名はしっかりあるし、彼が軍曹だということも知っている。
“尉官で呼ばれるより、軍曹の方がカッコイイ”とかいう、彼の変わった性格と一緒に、ティアリュートは彼女なりに、自分の人生より長い軍歴を誇る彼に対して素直に敬意を持っていた。
「戦況は？」
「見てのとおりさ！」
すでに、人類側の一部部隊が妖魔のトンネルに侵入している。
作戦は完璧に失敗。
普通なら責任問題ものだが、作戦そのものが変更されたのだから、責任云々だけは取られずに済む。
その辺りだけは、サリューンは素直に感謝しながら怒鳴るように言った。
「楽しい状況だ！」
人類――ドイツ軍のメサイア達が包囲網を狭めつつある。
こちらも射撃系兵器で応戦し、包囲網がこれ以上狭まるのを必死になって防いでいるが、数が数だ。

戦力比にして２０対５程度。
４倍近い敵を前に、五分以上で渡り合ってなければこうはならない。
ここで敵を喰い留めている事自体が、彼等傭兵達の実力を物語っていると言っても過言ではあるまい。
「全くです」
深いため息と共に、ティアリュートはポツリと言った。
「……冗談みたいな話で」
「褒め言葉っていうか、お前もその一人だろうが」
「そうでした――攪乱幕を使います。一斉に逃げます」
「その前に質問だ」
サリューンは訊ねた。
「作戦変更の違約金がいくらか？んなことぁ聞かねぇ。だが、これだけははっきりしてもらいてぇんだよ」
「私に何を期待しているのですか？」
「なぁに。上から色々と情報、もらってるんだろ？どうなんだよ」
「……まぁ」
「教えろ。俺達、傭兵様相手に違約行為に等しいマネまでしてもなお、あの狂姫達ぁ、何を欲しがっているんだ？」
「先程の騒ぎで、艦から落下した物体があったのはご存じでしょう」
隠しても仕方ない。
そう思ってティアリュートは答えた。
「それです」
「俺相手に敬語はいらねぇよ。で？そいつの中身は何だ？宝玉か？ライデン金貨か？」
「……」
ティアリュートは、サリューンの腹の内が読めた気がした。
彼は金で動く傭兵。
金こそが至上の存在。
傭兵同士に通じる仁義なんて所詮は――

「金目のものとは思いません」
ティアリュートは答えた。
「あれは――――封印柱です」
「封印柱？」
「昔、処分に困った罪人を封印する刑罰が存在したことはご存じでしょう？」
「ああ……成る程？」
サリューンの口元に、嫌悪すべき笑みが浮かんだ。
「――――そういうことか」
「何……考えました？」
「いや？」
狂っているとしか思えない顔で、サリューンは言った。
「ある狂姫様の財産がいくらかなぁ。って、そう思ったのさ」
「まさか……！」
「ティア？黙ってろよ？ここぁ、俺達がやってやる。安心しろよ。ちっとは分け前、くれてやるからよ」
「なっ、ちょっ！？」
「いくぞ野郎共！大金は目の前だ！」
「おうっ！」
ティアリュートの返事を待つこともなく、サリューン達は一斉にその場から飛び去った。

「……スゴいな」
メースのコクピットの中で、宗像はポツリと本音を漏らした。
体感出来るパワーは、“白雷（はくらい）”のそれと比べても圧倒されそうだ。
「こんなバケモノ相手によく……」
考えるだけで、自分がこの場に生きている事自体が、何かの冗談のようにさえ思えてしまう。
「計器類に触らないでくださいね？」

複座型の前席に座るのは、“フレイ”という名の女性。
魔族だと聞いた。
赤い髪に白い肌。人間では珍しい赤い瞳が、その出自を物語っていた。
これで牙があればニンニクと十字架で武装したいな。
それが、フレイに対する宗像の正直な感想だった。
宗像にとって幸いなことに、彼女は人間の血は吸わないし、赤い、フレイに言わせれば桃色に近い瞳の色はフレイの部族特有のもので、吸血族のルビー色とは違うという。
艦側の発艦シークエンスが完了するまで、そんなことを語り続けたフレイの気さくさに、宗像は救われたような気がしたものだ。
「了解したが、こちらでも操縦が出来るのか？」
「神経接続は、人間でも可能ですが、長時間は無理です。人間の神経が持ちません」
「……難しいな」
「ダユー様の手にかかれば、調整は余裕です」
「このグリップ……これか？」
「はい。それで、コンソールがグリーンになれば接続が完了したことになりますが」
「……やめておこう」
「どうしました？」
「今、脳みそをかき回されたような嫌悪感が走った……長時間は確かに耐えられない」
「……ですか。そろそろ、人類同士の交戦空域です」
「……なぁ」
「はい？」
「率直に聞きたい」
「はい」
「魔族として、人類のこういう振る舞いはどう思う？」
「……私の意見ですか？」

「そうだ」
「まぁ、数万年も、辺境紛争繰り返している魔族も、とやかく言えませんけどね」
フレイは笑って言った。
「――愚かだとしか言い様がありません」
「……」
「私達、魔族は、辺境紛争を繰り返したとしても、それはあくまで“王達の遊戯”のようなもの。わかりやすく言えば、スポーツとでもいいましょうか？」
「スポーツ？」
「そう。ボール蹴ったりするあれ」
「戦争とは殺し合いでは？」
「魔界の戦場でメースが主な戦闘兵器となった背景には、その考え方があります。全てを破壊し、焦土と化すような人類の愚かな戦い方は魔界では、例え勝ったとしても高くは評価されません」
「紛争の意味合いは、土地の奪い合い」
宗像はポツリと言った。
「土地を痛めるような戦闘が忌避されている。メースで勝敗をつけることで、土地の被害を最小限度に収める。そんなルールが定着している」
「焦土戦までやったら、魔界正規軍の介入……そうでなくても」
フレイが真顔になった。
「魔界の兵器は進化しすぎたのです。一発の爆弾で、都市どころか小さな都市国家そのものをまるごと消し去るような破壊力を持つ兵器がたくさん存在します――まぁ、人類のよりは“清潔”ですけど」
「……一々、そんなもの使っていたら、戦争をする意味がなくなる」
「そうです。人類のように、都市を焼き払い、水源や農地を平気で汚染する戦争の仕方が、私達には理解できません」
「……」

「都市も人も最小限度の損害で戦争を終わらせる。そのためには、目に見える形で戦争をはっきりと白黒つける存在が必要。かつてのように、大型妖魔を使う戦法は、その死骸で汚染されます。兵士同士の殺し合いは都市を破壊するし、犠牲も大きすぎる」

「だから、メースが」

「そう。これだけ巨大な兵器が白黒つけるために投入される理由はそれです。メース同士の戦闘で白黒つける。勝てば勝者の言い分がまかり通る。負けても再起する力があれば、時期を見て逆襲する…そんなところです」

「清潔（クリーン）な戦争なんて、信じませんけどね」

「魔界での紛争が“清潔（クリーン）”だとは言いませんけどね。これ以上の話は戦闘が終わってからにしましょう」

「生きて帰る価値はありそうですね」

「祈っていてください。“ギリースーツ”を装備しているとはいえ、完全ではないのです」

「了解」

そう。

宗像が搭乗しているメースは丸腰だ。

こんな状態で、戦場のど真ん中で隠密行動をとるなんて、宗像自身、命じられたら拒絶するだろう。

それを行うというのだから、このフレイという女性、外見はか弱いが、中身はかなり、肝が据わってるなと、宗像は勝手に思った。

肉眼さながらに映し出す鮮明な画像として、戦場をモニターに眺めながら、宗像は一度だけ、大きく息を吸い込んだ。

その頃、米中の戦闘の中心は、封印柱のすぐ間近に移ろうとしていた。

「この野郎っ！」

「くたばれぇぇぇっっ！」

騎士達が駆るグレイファントムと赤兎達が戦斧で殺し合う。
グレイファントムのシールドに戦斧をめり込ませてしまった赤兎の頭部に、グレイファントムの戦斧がめり込む。
撃破の余韻に酔いしれるヒマもなく、グレイファントムの胸部装甲を、大型バズーカの砲弾が叩き割る。
バズーカを構える赤兎もまた、どこから飛来したか分からない砲弾に脚部を吹き飛ばされる。

死と破壊が封印柱の周りでダンスを繰り広げている。

血と鉄と油が燃えたぎる地獄の釜同然の光景。
その中であえぎ、苦しむのは騎士とMC（メサイア・コントローラー）達。

ただ、命令一つで地獄に叩き込まれた哀れな存在達だ。
歴史に名を残すわけでもない。
偶然にも、その国、その土地、その素質を持って生まれたが故に、国家に、あるいは組織に認められたが故に、人の身に生まれながら、ケモノ同然に死ぬことを運命づけられた存在達だ。

ドンッ！
ドドンッ！

足払いを受け、横転した赤兎にとどめの一撃を加えようと、高々と戦斧を振り上げたしたグレイファントムが、突然、背後に発生した爆発によって空中に吹き飛ばされた。
「なっ！？」
「こ、この音は！？」
死の顎から逃れた幸運なはずの赤兎だったが、その腹部を直撃した砲弾によって、騎士とMC（メサイア・コントローラー）達は、爆発によって生じた熱によって、生きたまま焼き殺されるという、まだ、グレイファントムに破壊さ

れた方が、生存出来る可能性があった分、数万倍マシという悲惨な死に方を強いられた。
あまつさえ、その騎体の残骸に降り注いだ砲弾は、その一発だけではなかった……。

「Ｗ－９０　！？」
「ふざけるな！この音は間違えねぇ！Ｍ１９８の着弾音だぞ！」
「司令部！司令部、どこへ撃っている！」
「やめろっ！俺達がいるんだ！」
「撃つなら、敵の陣地にやってくれっ！」

両軍の砲撃が容赦なく雨となって降り注ぐ中、騎士達は必死になって、司令部に砲撃を停止するように叫ぶ。
しかし、司令部は、敵さえ倒せればそれでいい。騎士なんだから、砲撃位は避けろという無理に近い理屈がまかり通っている。
何しろ、将校で編成される司令部の中に、騎士はほとんど存在しない。
騎士が騎士を使っていれば、もう少しまともな命令ももらえるだろうが、前線の消耗品にすぎない騎士達にとって、士官までは進めるとしても、将校へ進むまでの道を、生きて歩みきれる者はほんの一握りに過ぎないのが現実だ。
騎士に対する偏見と誤解を自覚しないまま、将校達は騎士達に無謀で乱暴な命令を下し、横暴に近い態度で彼等に接することを当然と思っている。
だからこそ、こんなことがまかり通るのだ。

戦車より貴重なメサイアが、戦車以下の存在を叩くための砲弾によって叩き潰される。
それが出来るのは、司令部の命令があってこそだ。
それなのに、潰された騎士の方が悪いというのが、戦場での常識

だ。

騎士達は、逃げることも出来ず、戦場を這いずり回って殺し合い、殺されることを避けられない。

騎士を効率的に運用する。

その概念が、未だに、米中という軍事的な大国においても未発達なのが、この時代の現実だ。

「全騎！砲撃が止むまで攻撃停止っ！」

「全騎、動ける奴は後退しろっ！」

唐少佐とチェスターが奇しくも同時に叫んだ。

しかし――

「司令部より全騎士に通達。後退は許可できない」

「後退の許可は出ていない！メサイア隊は現状のまま戦闘を継続せよ。繰り返す」

「砲撃は、敵メサイアを完全排除するため、いわば、メサイア隊のために行われている。それを迷惑がるとは何事か！」

「後退は命令違反で処刑の対象となる！」

「クソ司令部！」

唐少佐は毒づくしかなかった。

一介の前線指揮官でしかない彼に出来ることは、限られている。

指揮官としての権限の中で、部下を救うしかない。

それは、チェスターも同じだ。

だからこそ、少ない選択肢の中で、互いに気付けたことは自然と同じになった。

「全騎、武装を変更しろっ！」

唐少佐は、対峙したグレイファントムの存在を忘れたかのように、戦斧から手を離し、腰にマウントしていた速射砲を引き抜いた。

「近接戦闘ではラチが開かん！ラチを開けるために、後退して狙撃に徹しろ！」

「戦斧ではダメだ！狙撃砲を！司令部、聞こえているんだろう！？狙撃の邪魔だ！砲撃を止めろっ！」

それまで刃を交えていたグレイファントムと赤兎達が一斉に後退。封印柱を挟んだ戦場は、戦斧と槍の戦いから、速射砲を使った銃撃戦へと移行した。

「斧や槍から銃へ」

腰のウェポンラックからマガジンを引き抜く長中尉が苦笑気味に言った。

「こういうの、普通なら進歩っていうんでしょうけど」

速射砲に１２７ミリ砲弾を装填、長中尉は射撃体勢をとる。

「メサイアの場合はどうなんでしょうか？」

「さぁな」

唐少佐は首を横に振った。

「騎士はいつだって、肉弾戦が基本だよ」

「歩兵だってそうだと思います」

「俺は男として」

「？」

「肉弾戦はベッドの上限定だ」
「連隊長相手にそのセリフが吐けたら、お相手してあげますよ？」
「生きて帰れたら、やらせてくれ」
「はぁっ？」
「やらせてくれ――――そう言ったんだ」
「何をって……聞くだけヤボですね」
長中尉は、笑って言った。
「そういう生々しいセリフ吐けるって、どういう意味か知ってます？」
「何だ？」
「生きているって――――そういう意味です」
「そうだ」
生きている。
その言葉を数回、口の中で呟いた唐少佐は言った。
「俺は生きている。部下も、そしてお前も生きている！だからこそ、俺は誰も無駄死にはさせん！全騎！無駄弾を撃つな！発砲炎で狙い撃ちにされるぞ！敵が撃つまで撃つな！」
「――――お見事♪」

「全騎っ！」
チェスターもまた、速射砲を構えて怒鳴る。
「中国軍の速射砲に比べ、我が軍の速射砲は近接戦闘用だ！その分、この距離では一発撃破が困難だ！」
「しかしっ！」
「黙れっ！全騎へ、俺は中隊指揮官として、部隊は敵の火線を避けて肉薄する必要があると判断するっ！敵の火力の規模が判明するまで、この場を動くなっ！犬死にしたいのかっ！」
「り、了解……」
チェスターの部下の一人、マーガレット・キャッチャー中尉は、

悔しそうに敵陣を睨み付けた。
ボロボロの騎体は、彼女が戦い慣れていない証のようなものだ。
彼女にとって初陣のこの戦い。
それでも、あと一歩で敵を撃破出来る手前だった。
それが、あの理不尽な後退命令で下がるしかなかった。
倒せる敵を前にして下がって良いなんて、士官学校（ウェスト・ポイント）では習わなかった！
悔しさの余り、血走った目で睨むその視線の先。
地面に突き刺さっていた得体の知れないコンテナが、一瞬にしてその場から消えた。

「――――えっ？」

「宗像より通信っ！」
通信兵が歓声を上げた。
「封印柱を確保！現在、こちらへ向けて移動中！」
「……よろしい」
ダユーは、その場に立ち尽くす月城に言った。
月城の顔に生気はない。
「明日から、人類側の情報収集についてもらうことにしましょう」
まるで他人事のように語るダユーは、月城の顔を見ようともしない。
「前線での汚名を注ぐチャンスは、当分お預けね？」
「……はい」

「うまくいきましたね！」
「……ああ」

フレイの歓声をよそに、宗像はどこか浮かない顔をしていた。
「これで帰艦すれば、任務完了ですっ！」
「無事に……帰ることが出来ればな」
「えっ？」
きょとん。としたフレイが思わず後席を振り返った。
「何です？」
「前を向けばわかる」
「……前？」
バカのように振り返ったフレイの目の前に出現したのは、友軍であるはずのメース、サライマだ。
しかも、その塗装からして、自分の所属する傭兵隊。
つまり、完全な仲間だ。
「きゃあっ！」
思わず悲鳴を上げて、フレイは騎体を急停止させた。
「び、びっくりしたぁ！」
「へへっ、悪いな」
通信モニターに映ったのは、あのサリューンだ。
「驚きましたよぉ！ど、どうしたんですか？」
「いや、なぁに」
サリューンは楽しげに笑いながら言った。
「ちょっとした事故が起きるんだよ」
「じ、事故……ですか？」
「ああ」
「それって……」
「何。何てこたぁねぇ」
きょとん。とするフレイに、サリューンは言った。
「ちょっと、戦場でヘンな任務についていたメースが一騎、行方不明になるっていう事故だ」
「は？」
「悪く思うなよ？」

ポカンとするフレイの目の前で、サリューン騎が手にした戦斧を振り下ろそうとしていた。
「……えっ？」
ガンッ！
騎体に激しい衝撃が走る。
「きゃぁっ！？」
フレイが悲鳴を上げる。
「下がれっ！」
後席から鋭い声があがった。
「連中は味方じゃないぞ！」
「えっ！？」
ワケのわからないフレイは、ただオドオドとするだけ。
「ちいっ！」
ピーッ
警報が鳴り響き、フレイは自分から操縦権が後席に移ったことを知った。
一目散に逃げにかかったメース。
それは、サリューンが逃した獲物だ。
戦斧で脳天を叩き割ろうとしたら、まさか股間を蹴り上げられるとは予想もしなかった。
「これが生身だったらエラいことだぜ？」
反撃を受けた場所が場所だ。
男としての矜持を傷つけられたような錯覚を覚えたサリューンが殺気だった声を上げた。

「追えっ！腕に抱いた金づるを手にすれば、あの狂姫から、たんまり金がふんだくれるぞ！」
「応っ！」

「ど、どうして！？」
「決まっているだろう」
パニックから抜けられないフレイに、宗像は冷たく言った。
「連中は傭兵。少なくとも金目当てで人殺しする連中。それが答えだ」
「私だって傭兵です！」
「何のために傭兵になった。金と答えるなら、この獲物一つで、退役後も遊んで暮らせるはず。そう思って不思議はない」
「私はっ！」
反論しようとした途端、急激に動いたコクピットで、フレイは危うく舌を噛む所だった。
「グダグタ抜かしていないで、救援要請、それから回避運動に入れっ！」
「は、はいっ！」
フレイにとって、唯一の希望。
それは、接近してくる友軍反応だけだ。
バラライカ――ティアリュート騎。
これが敵だったら、全て終わりだ。

封印柱争奪戦　第七話

「待てコラぁっ！」
サリューンの罵声が通信装置越しに耳を叩く。
不快そのものとはいえ、激昂したサリューンの命令が筒抜けの状態はありがたい。
こんな時に、通信装置をカットすることは命取りになりかねない。
「クラッツ、上に回り込め！アラット、お前は下だ！ティアリュートに近づけさせるな！かまわねぇ、ブースターをやるぞ！」

「ブースターをやるってことは――おい。あのタイプの武装は？」
「戦斧の他、魔法弾速射装置１門」
「わかってるのか？」
「何がです？」
「飛び道具で狙われているんだ。こんなにまっすぐ飛ぶな。死にたいのか？」
「こ、これでもジグザグに！」
「これでか？」
フレイが反論しようと後部座席に振り返った瞬間。
グンッ！
音を立ててフレイの周囲がひっくり返り、モニターが真っ白に染め上げられた。
「く……首がぁ……きゃあっ！」
「今ので元に戻ったか？」
「お……折れたかも……」
「むち打ち程度、覚悟しておけ。お前……こんな腕じゃ、生き延びられないぞ」
「こ、これでも！」
痛む首を押さえながら、フレイは涙を浮かべて抗議した。

「軍隊での訓練は受けていますっ！」
「訓練だけ……か」
「し、しかたないじゃないですか！それ以外！」
まるでフレイの言葉を封じるように、コクピットが激しく回転した。
「今、そんなこと言ってる余裕があるのか？」
「――――っ！」
「大したものだな」
「あなた、人類側では教官だったんですか？」
「教官にシゴかれる方だったよ」
宗像は、喉で笑いながら言った。
「さっきので、味方かもしれない奴とはぐれた。どうしてくれる」
「どうして私のせいなんですか！？」
「お前が下手だからだ。他に理由はない。それで十分だ」
「――――ううっ！」
「さて。お荷物抱えたまま、どうしたものか」
宗像は、まるで他人事のように周囲を見回した。
上辺は冷酷だが、内心ではかなり焦っていた。
丸腰で戦場に出るなら、せめて信じられる護衛を要求するべきだった。
その程度は許されたはずだ。
どうしてこう、私はツメが甘いんだ？
「お前のせいだぞ……泉」
不意に脳裏に浮かんだ美奈代の顔に、宗像自身、どんな表情を返したかわからない。
わからないまま、宗像は美奈代に文句だけは言った。
お前のが移ったんだ。
どうしてくれる。
そう、文句を言った。
不思議と、それだけで心が軽くなる。

まるで、美奈代が側にいてくれるような安心感が、周りに満ちあふれてくるような錯覚さえ覚える。
自分にとって、美奈代という存在がどういうものだったか。
一々考える必要もないことだ。

どうする、泉？

耳は、その答えを受け取らない。
答えを受け取ったのは心だ。

――そうだな。
――こういうのはどうだ？

成る程？

それは、結局の所、宗像の意識の産物、つまり、宗像自身の判断のはずだ。
だが、宗像は？心の中の虚像？にすぎない美奈代は、宗像にアドバイスをくれた。
無意識に、目が動いた。
否。
美奈代が、宗像の目を動かしたのだ。

視線の先にあったのは戦況モニター。
モニター上の反応は、自分達と、追撃の手を休めない傭兵達。

おい、泉？
私に何をしろと？

……

……

……ん？

フレイの下手くそすぎる回避運動に揺すられながら、美奈代が見せたかったモノを、宗像は見つける事が出来た。

……これは。

それは、地上に這い蹲る連中。

きっと、敵がいなくなってどうしていいかわからなくなっているんだろう。

黒狼なんて言われても、こんなものか。

……よし。

利用は出来そうだな。

「宗像さんっ！」

フレイが悲鳴を上げた。

「どうするんですか！？」

「よく当たらないな」

「もう１０発近く撃たれてますっ！」

「あいつが下手なのか、それともお前の悪運が強いのか」

「私の操縦が上手いって選択肢がどうしてないんですか！？」

「ありえないことは選択出来ない。常識だろう？」

「ひどいっ！」

「いいから、これからは私の指示通りに動け」

「へっ？」

「死にたいなら、別だがな」

「――わ、わかりました」

突然の言葉に面食らいつつ、フレイは頷いた。
「それで？」

「敵メサイア接近中――――距離、８６００。速度３０５」
「何？」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）からの報告に眉をひそめたのはフォイルナー少佐だ。
「数は」
「６、ただし、先頭の１騎がジグザグ機動」
「ん？」
戦況モニター上で、反応が左右に振り子のように動いている。
「これは……回避運動か？」
フォイルナー少佐は、さすがに状況を判断しかねた。
彼からすれば近づく集団は全て敵。
敵の……はずだ。
まさか、その中の１騎が追われているなんて、想像さえ出来なかった。
「ヴォルフ」
通信モニターに、ブリュンヒルデが現れた。
「何、あの動き。敵は一体？」
「熱源反応。先頭騎、後方から攻撃を受けています。先頭騎、高度落としました」
「何だと？」

「ち、ちょっと！？」
フレイが悲鳴をあげたのも無理はない。

地上へ降り次第、ホバー移動開始。まっすぐ飛べ。
その辺はいいとしよう。
ホバー操作はちょっと自信がある。
だけど――
「め、目の前っ！？」

問題は、針路の先に屯している集団。
それは、濃灰色に彩られたメース達。
あれはたしか――

「あ、あれ、人類ですよ！？」
「かまわん」
逃げようとするフレイに、宗像は冷たく言った。
「つっこめ」
「死ねというんですか！？」
「お前が死ぬ時は、私も死ぬ。安心しろ。そうはやらせん」
「ううっ」
フレイは接近するメース達を睨みながら呻いた。

どうする？

そんな言葉が何度も脳裏で点滅を繰り返している。

どうする？

っていうか、さぁ……。

その結論は、意外と速かった。
というか、選択肢は元からたった一つしかないのだ！

どうしようもないじゃん！

そういうことだ。

フレイ自身がどう考えようと、ここまで連れてきたのも宗像なら、ここからどうするのかもすべて宗像任せにするしかないのだ。

自分には選択肢はない。

「どうするんです？降伏して助けてもらうんですか？」

「独逸野郎（クラウツ）に慈悲を請う程、私は酔狂じゃない」

「よくわかんないですけど、指示してください」

クラウツって何だろう。そんなに強いのかしら？と首をかしげながら、フレイは操縦に専念することにした。

「速度落とすな。左右から接近している。挟まれるぞ」

「くっ！」

上から撃ってこないと思ったら、律儀に下へ降りて追ってきていたとは。

サリューンって人は、変に律儀なのか、それとも、単なる自信家なのか。

フレイは、左右から接近してくるサライマをその視界の両端に捉えた。

挟まれた瞬間、シールドで殴られるか？戦斧で叩き斬られるか？

どっちにしても、無事ではない。

それまでに――宗像さんはどうしたいんだ？

「いいか？フレイ」

「はい？」

「あそこに立っているのは、メサイア……メースじゃない」

もうメース達は目の前だ。

ついでに、左右から挟撃しようとするサライマ達も。

そんな中、宗像はヘンな事をフレイに命じた。

「あれは森の中の木だ」

「木？」
「そうだ。木々の間を、ホバーで駆け回れ。木を利用して敵をまく」
「……木」
「丸腰でも出来る、数少ない反撃手段だ。出来るな？」
「……選択肢がないですね」
「そういうことだ」

「距離、５００切りました！速度変わらず！」
「少佐、攻撃命令を！」
「――待て」
「少佐！？」
「敵はすぐ間近ですよ！？」
「敵の意図を見る」
「すれ違い様にやられますよ！」
「――避けろ。騎体につけたグリックシュヴァインのエンブレムは伊達か？」
「……やって見せます」

「しゃらくせぇ！」
フレイの駆る騎は、あろうことか人類の軍勢の中へ飛び込んだ。
サリューンは激怒しながら怒鳴った。
フレイは傭兵隊の中でも新米中の新米。
メースの操縦経験よりシミュレーターの方が長いという、実戦未経験者だ。
訓練校時代のセクハラがイヤで、訓練校卒業と同時に軍を辞めたはずが、？ある種の貴族？特有の理由で傭兵隊に入ったという、サリューン達ベテランの傭兵にとっては迷惑な存在だ。
同じ理由でも、ティアリュートのようなベテランとはワケが違う。

実戦と訓練が同列にある奴なんて、傭兵にとっては邪魔なだけだ。
邪魔な存在。
無能な存在。

それこそが、サリューンにとってのフレイだ。

そのフレイが、ここまで自分達を翻弄してくれた。
ありえない！
あってはならないことだぞ！？
この俺が！
この俺様が！
あんなクズにここまで！

頭に血が上ったサリューンにとって、フレイ達が飛び込んだ人類側のメースなんて意味はない。
単なる障害物に過ぎない。

「探せっ！探し出して、お宝を手に入れるんだ！」
「応っ！」
「デミ・メースはどうるんだ！？」
「ぶっ潰せ！」
サリューンは怒鳴った。
「人類風情にデカい顔されるんじゃねぇぞ！」

目の前に立つメースをギリギリで右に回避、左2騎目の目の前で、今度は左へターン。
メースを木に例えた宗像の表現力は、ある意味、フレイにとっては暗示のようでさえあった。

フレイの故郷は、魔界有数の銘木の産地。樹齢数千年の木々が大切に育てられている森の世界。
材木の切り出しにメースが使われるなんて場所を、フレイは故郷以外には知らない。
フレイにとって、メースとは木こりの道具であって、戦争の道具ではない。
そう。
自分は木こりの道具であるメースに乗って、森の中を駆け回っている。
そう考えるから、恐怖はない。
あと少しで?森?を抜ける。
そうしたら?
「次は!?」
「とりあえず」
宗像は答えた。
「そこで停止。突っ立っていろ」
「はいっ!?」
フレイは、ぎょっとしながら騎体を急停止させた。
そこは、2騎のメースの背後。
白と黒。
2色に塗り分けられたメースが立っていた。
「東洋のことわざに」
フォイルナー少佐は言った。
「窮鳥懐に入れば猟師も殺さずとあるが……」

「あなたが格言を持ち出すなんて、明日は雨かしら？」
ブリュンヒルデは、突然、自分達の陣地に突っ込んでくるなり、その総大将である自分達の背後で止まった正体不明のメースを、どう判断して良いか迷っていた。
どうやら、状況からして、魔族軍のメースに追われてるのは間違いない。
しかし、それだけで味方と判断するのは愚かだと思う。
「とりあえず、どうするの？」
「関わりたいと思うか？」
「全然。でもね？」
ブリュンヒルデは答えた。
「光輝あるグリックシュヴァインの陣を荒らした者に例外があってはいけないと思うの」
「例外なき規則は存在しないが……」
「規則を守らせるのが、今のあなたの役目のはずよ？」
「……」
「……成る程？」
通信モニター上で見る限り、フォイルナー少佐は無表情だが、ある感情を浮かべているのを、彼女は見抜くことが出来た。
「せっかくもらった？この騎？の初陣を、こんな？ちゃち？なイベントで飾りたくないんでしょ？」
「……作戦に豪華もちゃちもない」
「うそおっしゃい。ねぇ？イリス」
すでに目の前では、魔族軍のメースがずらりと並んでいる。
狙いは自分達ではない。
あくまで後ろの、得体のしれない存在にすぎない。
「我が光輝あるグリックシュヴァインの陣を汚した罪深き魔族軍のメサイアが１０騎ほど」
ブリュンヒルデ騎がゆっくりとハルバードを構えた。
ハルバードの斧が金色に輝き、辺りを照らし始める。

「この？ヴィーグリーズ？の歯牙にかけるに値すると思わない？」
「……」
彼女の幼なじみからの返事は、彼の騎の持つハルバードの輝きだった。
クスッ。
その光に誘われるように、ブリュンヒルデの口元に笑みが浮かんだ。
「処刑（パーティ）は、楽しいことになりそうね」

「ち、ちょっとよぉ」
通信装置に入った声が、困惑に震えていた。
そりゃそうだろう。
今、自分達は、２０騎近い敵の陣地のど真ん中にいるのだ。
ここが魔界で、これが正規軍だったら、サリューンでなくても、ためらいもなく降伏しているような状況だ。
だが――――
「なにブルってんだよ！」
通信装置の向こうで、クラッツが怒鳴った。
褐色の肌に傷だらけの体が自慢の、サリューンの部下の中で最も血の気の多い男だ。
「相手はたかが人類だぞ！」
そう。
サリューンは自分に言い聞かせた。
ここまで勢いだけで来てしまったが、判断は正しかったのだ。
何騎、メースを持とうと、そんな意味はない存在に過ぎない。
こんな連中、ちょっと動く巨木程度だ！
「そうだ！」
アラットが勢いのある声をあげた。

部隊では鼠と呼ばれる小柄なお調子者で、クラッツの手下を自負している。
メース使いとしての戦いぶりは、姑息な所はあっても確かなものがある。
奴は、クラッツの合いの手をとるつもりなんだろう。
「人類なんて、俺達の敵じゃねぇ！なぁ！？クラッツのダンナ！」
「そういうことだ」
幇間（タイコモチ）の言葉が気に入ったのか、クラッツが鷹揚な声で言った。
「サリューンよ」
「ん？」
「俺とアラットが行くとしよう。分け前は、俺が7、残りはテメエ等で山分けだ」
「おいおい……」
文句を言おうとしたサリューンだったが、
「いいだろう。ただし」
そう答えた。
「ただし？」
「他の連中は、牽制のために周囲に斬り込む。斬り込みに参加しない奴ぁ、分け前無しだ。それでいいな？」
「あんたは、その見届け役ってワケか？」
「一人はやらなきゃならん仕事だ。違うか？」
「へっ。あんたらしいな――いいぜ？」
「シンテ、テキュー！文句を言わずに周囲のゴミを刈り取れ！」
「い、いや……」
「だ、だけど」
傭兵達に、躊躇する声が上がる。
無理もない。
傭兵というのは、金で動く。
戦争はあくまでビジネスなのだ。
だからこそ、勝てない戦はしない。

成算のないビジネスに関わるなんて、まっとうな神経を持っていれば、誰もやらないのと同じだ。
2倍もの敵を相手にすることは、その範疇に入らない。
「お前ら」
サリューンは怒鳴った。
「望みは金か？それとも死か！？」

通信装置を雄叫びが占領する。
傭兵達が、戦斧を掲げ、敵陣に斬り込んでいく。
圧倒的な勇猛さ。
芸術的な武器裁き。
敵を粉砕し、
敵の血を銀に換え、
敵の首を金に換える。
討ち取った敵将の頭蓋を杯とて、手を下した無数の兵士達の死骸を肴に、勝利の美酒を飲み干す。
それこそが、傭兵の美学。
そうだろう？

サリューンは思った。

彼等は、自らの美学のために戦いに及んだんだ。
俺は何もしていない。
そうだろう？
俺は指揮官として、奴らに敵を示しただけだぜ？

周囲で起きた、信じられない事態に直面しても、サリューンは自分をそうして正当化した。

精霊体エンジンを搭載した?デュミナス?は、サライマの戦斧の一撃を、難なく受け止めた。
ノイシアだったら、腕が衝撃に負けていただろう。
「ふざけんな!」
デュミナスのコクピットで、エレナは怒鳴った。
「こっちは狙撃仕様だっての!狙うなら、他を当たれって!」
「文句言わないの」
その膝の上に乗る精霊体?エリカ?をあやしながら、ヘルガは冷たく言い放った。
「狙撃仕様でも、十分相手になるわよ――この程度の敵なら」
「ちょっと前なら、悲鳴上げて逃げていたわ。保証できる」
「……極東前線じゃ、その?保証できる?状況で戦ってる仲間がいること、忘れないでね?」
「こんな所で教訓話なんて、ずいぶんな教育ママですこと!」
戦斧を走らせ、力で押し切ろうというサライマから騎体を逃がしたエレナは、すれ違い様にサライマの腹部に膝蹴りを食らわした。
重武装メサイア?ローマイヤ?の?ガード・スパイク?を参考にしたデュミナスの近接防御システム?ガード・ブレード?システムは、エンジンの余剰エネルギーを膝や肘に、?光刃?つまり、魔力エネルギーによる一種のビーム刃を生じさせるが、ビーム刃は、事前プログラムに従って敵へ命中次第、形状を変えることも可能だ。
普段が刃なのは、メサイアの高速移動時、すれ違い様のダメージを狙ってのことだが、例えば、膝蹴りや肘鉄といった場合は、瞬時に、敵に命中したカ所に、四肢に発生させている他のビーム刃のエネルギーを集中させ、スパイク形状を作り上げ、装甲貫通力を高くする便利な性能も組み込まれている。
膝蹴りという物理的ダメージを受けたサライマの腹部装甲を襲っ

たのは、そんな一撃だ。
単なる膝蹴りの一撃がサライマに強いたのは、背中にまで貫通するそんなダメージ。

「それで！」
くの字に曲がったサライマの背後に出たエレナは、腹部あたりから煙を吐き始めているサライマの脳天めがけ、容赦なく戦斧を振り下ろした。
「トドメっ！」

戦斧により、真っ二つにされたサライマ。
だが、その華々しい戦果は、決して高らかに語られるべきことではなかった。
何故なら――

「おいおい」
サリューンは肩をすくめた。
「まだ1騎も倒さずに全滅かよ」

「よかったな」
クラッツが言った。
「分け前が増えたんだ」
「勘弁してくれよ。つーか、お前、なんで行かないんだ？」
「俺が行くと言えば、他も動く。そうすれば、勝手に死んでくれると思ってな」
「かけ声倒れか？」
「ん？」
「本当は恐いんだろう？目の前の敵が」

「バカを言うな」
「なら、やって見せろ。豪腕の二つ名が泣くぜ？」
「……ちっ」
舌打ち一つ、クラッツは言った。
「こいつは傭兵同士の契約だ。いいか？サリューン」
「ああ」
「俺達が、目の前の２騎を牽制する。その間にお宝を奪え。後で合流しよう」
「……受けよう。契約、成立だ」
「よし。分け前はさっきの通りだ」
「その辺は、後の話だ。契約外だ」
「言ってろ……アラット！出来るな？」
「他の蛆虫どもと、俺を一緒にしないでくださいよ」
「よし――――かかるぞっ！」
「おうっ！」

「敵２に動き。距離３５０」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）からイリスの報告が入る。
「さらに後方の騎、エネルギー反応増大中」
「ブリュンヒルデ。やれるな？」
「ええ。勿論」
ブリュンヒルデは嫣然と微笑んだ。
「オードブルは部下達（デュミナス）に食べられちゃったけど」
そして、？ヴィーグリーズ？の出力を戦闘機動状態（コンバット・モード）に引き上げた。
「メインディッシュは私達のものよ！」

ザンッ！

サリューンは、その音を確かに聞いた。
鈍い、クラッツの呻くような断末魔の声も、確かに聞いた。
アラットは、悲鳴をあげる暇さえ与えてもらえずに、あの世に叩き送られた。
生き残ったのはたった一人。
サリューン自身。
そんな状況下で、彼は何をしていたのか。
サリューンがやろうとしたことは一つだ。
クラッツとアラットが、白と黒のメースを相手にしている間に、その頭上を飛び越え、フレイ騎に襲いかかろうとしたのだ。
後ろはともかく、前の2騎はフレイ騎に接触する上で最後にして最大の障害。
それを回避するまたとないチャンスを、サリューンは無駄にするつもりはなかった。
否。
サリューンこそが、この状況を作り上げた張本人だ。
彼は、自らの作り上げたチャンスを活かしただけだ。
ブースターを全開、一息で敵という障害を味方ごと突破しようとした。

二人の死は最初から織り込み済み。
その死さえも踏み台にしてお宝を頂戴する。

それは――彼にとって勝利と栄光への跳躍となるはずだった。
だが――

鼓膜が破れそうな激しい音。
シェイカーの中に放り込まれたような激震。
何が起きたか。
サリューンを襲ったことで、彼自身が理解できたことはそれだけ

だ。
　コクピットの電源がブラックアウト。すぐに非常電源が入るが、情報系モニターのほとんどが死んでいる。
　コクピットに煙が入り込んで呼吸さえ困難になりつつある。
　よくわからないが、とにかく、騎体に何かが起きたのは確かだ。
　よもや、エレナ騎によって、跳躍したタイミングを狙って狙撃されたなんて想像も出来ない彼は、全身に走る痛みに歯を食いしばって耐えつつ、自分の置かれた状況を、混乱しつつも把握しようとした。
「お……お宝は!?」
　騎体が倒れているのがやっと理解できた彼は、ハッとなってモニターを見た。
　丁度、フレイ騎が地面を離れ、離陸しようとしている所だった。
「畜生、お、お宝が!」
　サリューンは騎体を何とか動かそうとしたが、
　――――システム再起動中
　そんな無情な表示が、その努力が無駄だと告げていた。
「くそっ!」
　遠ざかっていくフレイ騎を睨み付けるしかないサリューンだったが、
「お、おいっ!」
　まるでフレイ騎を見送るように宙に浮かぶ騎を見つけた。
　バラライカ。
　間違いない。
「おい、ティアリュート!」
　返事はない。
「聞こえているんだろう!?そいつが持っているのはお宝だ!とっとと、そいつを止めろ
!封印柱の中身を考えろよ!狂姫は絶対に交渉に応じる!あの小娘

の財産を二人で山分けだ。悪い条件じゃねぇだろう？」
ティアリュートからの返事はない。
ただ、バラライカの手にした銃の筒先が自分に向けられたことだけはわかった。
「お……おい」
サリューンは、その意味がわかった。
わかるしかなかった。
「俺は――――仲間だぜ？」
そう。
バラライカは仲間。
俺達は仲間だ！
その言葉に一縷の光を見いだしたサリューンは叫んだ。
「俺は仲間だぞ！？仲間に武器を向けるのか！？」

「――――どうします？」
上半身を吹き飛ばされたサライマの残骸。
遠ざかっていく魔族軍のメース達。
「追撃は無用」
フォイルナー少佐は言った。
事情はわからないが、魔族軍の中で仲間割れがあったのか、或いは、もっと特別な理由で、？処刑？が行われた。そんな所だろうと彼は見当をつけていた。
なら、去る敵まで叩く必要はない。
周囲に敵は存在しない。
なら、新しい敵はどこで見つける。
――――決まっている
「イリス。新大陸軍の状況はどうなっている？」

ヒューストン解放作戦　第一話

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「いい加減」
戦況モニターを眺めながら、後藤は言った。
「そろそろ白黒つけないと、マズいんですよねぇ」
「それは？」
「時間ですよ」
「……」
美夜は時計を見た。
「すでにかなりの時間が経過している。魔族軍との停戦、あれが終了したら、“よーい、ドン”で俺達ゃ潰されますよ。潰されないためには防波堤がいる。だからこそ、俺達ゃ、ここにいる。アメリカ製の“素材”を確保するためにね」
「……そのことなんですけどね」
美夜はシートの脇に挟んでいたバインダーを取りだした。
「アメリカが動きました」
「ほう？」

●イギリス　ロンドン　ダウニング街１０番地
「……あの若造」
その報告に触れたヒース首相は、口元に皮肉な笑みを浮かべた。
「ギリシャ系の割に思い切ったマネをするものだ……いや、むしろその血のせいか？」
「今は現代です。ホメロスのいる時代ではない」
「……そうだな。それで？」
「すでにあの周辺でめぼしいものは、中華帝国に略奪されきった後

でしょう。ベネット大統領にとっても苦しい選択ですが、他にはもう」

「それにしても」

ヒースは喉の奥で笑いながら、デスクの上に置かれた革張りの本の表紙を撫でた。

彼が幼い頃から親しんできた聖書だ。

「そのベネットに手を貸したとは……彼奴等――どういう魂胆だ？」

「この辺で合衆国に貸しを作っておきたいのでしょう。

大事な金蔓の合衆国在住の信者達をこれ以上失いたくない。それが本音でしょう」

「貸しなら講和条約の座でも作ればよいだろう。中華もそろそろ手を引きたい頃だ。奴らにとって悪い条件での講話にはなるまい」

「それでも困るのですよ。奴らは」

「ん？」

「奴らの本当の望みは、合衆国の金蔓を確保して、なおかつ、中華全土における布教の自由を奪い取ることです」

「だから載賢だけではなく、ベネットにまで手を貸した？」

「その通り」

「金にまみれた俗物が。あの麗しき聖堂の裏を知ってなお、信仰を持ち続ける事が出来る者が何人いるやら」

「……ＭＩ６のつかんだ情報ですが、合衆国政府がこの作戦にゴーサインを出した翌日に、奴らの特使が北京に入りました。しかも、合衆国には極秘で」

「何だと？」

●中華帝国　北京　紫禁城

「ベネットもバカなマネをしたものだ。この俺を出し抜いてくれた、“あの一撃”で満足しておけばよかったものを」

「それでは――」
祭服（キャソック）に身を包んだ白人男性の態度は落ち着かない。
場所は紫禁城の一角に設けられた極秘の謁見場。
朱塗りの柱に黄金で装飾された室内は、巨大な玉座を包み隠すようにカーテンが設けられているが、今はそのカーテンは開かれている。
玉座に座るのは、あの載賢だ。
まるで野生の虎を連想させる殺気だった男を前に、彼に出来ることは気絶しないことが精一杯なのだろう。
何しろ、武装した兵士達が物陰から銃口を突きつけているはず。
下手なことでもしたと思われたら終わりだ。

しきりとハンカチで汗を拭くのが、一国の中でもどういう地位にいるのか。
それを考えるだけで載賢はおかしくて仕方ない。
「ヴァチカンからの情報提供には深く感謝している。法王にはそう伝えろ――ウルジー枢機卿」
「で、では」
ウルジー枢機卿。
そう呼ばれた男は、脅えながらも訊ねた。
「こ、こちらの要請には」
「ああ」
載賢は頷くと、虎のうなり声にも似た声で言った。
「布教がどうのだったな――心配するな。この戦争が終わったら認めてやる。
だが、今の時点で白人共が我が国土を歩き回ろうものなら、皇帝として、そいつらの命の保証は出来ない」
「そ、それは――！」
「心配するな。信者がいて初めて成立するのが宗教だ。それくらい

は俺にも分かっている。獲得できるかわからん信者の代わりに、俺が慈悲を示してやろう」

載賢がアゴでしゃくると、載賢から見て右のカーテンの影に隠れていた誰かが、カートを押しながら現れた。

枢機卿が目を見張ったのは無理もない。

カートを押してくるのは、妙齢の、しかも一糸まとわぬ白人の女。

抜群のプロポーションに豊満な胸を露わにした女が、枢機卿を誘うように腰を振りながら近づいてくる。

ゴクッ。

枢機卿は、自分が大きく唾を飲み込んだのを知った。

最後に女を味わったのはいつだったか。

彼はその忘れかけていた“味”を思いだし、生唾を飲み込んだのだ。

「ヴァチカンで神に仕えると言っても、お前も男だ。女にうつつを抜かすもよし。とりあえず、トランクの中身を確かめろ」

「トランク？」

載賢の声に我を取り戻した枢機卿は、慌てて十字を切る。

そして、女が押してきたカートの上に乗せられたのが、巨大なトランクであることを知った。

それを合図にしたかのように、女はトランクの蓋を開いて見せた。

「こ、これは！？」

枢機卿が目を見開いたのも無理はない。

人間がそっくり入ることが出来る、ほとんど棺桶に近いサイズのトランクの中身は、ぎっちりと詰め込まれた金と宝石だった。

室内灯を反射する黄金の輝きが枢機卿を照らし出す。

「法王への、俺からの手みやげだ」

載賢は言った。

「欲しいのは、信者ではなく、信者から“喜捨”される“これ”だろう？」

「そ、そんなことは」

否定の言葉を口が紡ごうとするが、目がトランクの中身から離れようとしない。

「お前にも、個人的な土産は用意してある。

欲しいだろう？

あんな老いぼれに、これだけの財宝が与えられるんだ。なら、俺個人にも。そう思ったろう？」

「な、なんということを！」

「俺は人間の」

載賢の目には、目の前の相手を全て知り尽くしたかのような暗い光が輝いていた。

「欲望というものを知り尽くした男だ」

すると、音もなく左側のカーテンに隠れていた黒髪の美女が、手にトランクを提げて枢機卿に歩み寄った。

「その二人の女、好きにして良い。お前の部屋には世界中の酒がある。望むなら、我が国が抱える最高峰の料理人達が腕を振るった料理を届けさせる」

金髪の女がスルリと枢機卿の膝の上に座ると、両の腕で枢機卿の顔を抱きしめた。

即座にはねのけようとした枢機卿だったが、その手は躊躇いに震え、そしていつしか、女の体のラインを愛おしげになで始めた。

「用事はそれだけだな？――女を連れて下がれ」

載賢は玉座から立ち上がった。

「布教とやらは戦後のことだ。無論、市民に殺されるのがお前達の言う所の布教だというのなら、即座に認めてやるが？」

枢機卿からは、反論さえなかった。

その謁見場からの帰り。
待っていたのは載賢を待っていたのは載武だった。
「お帰り。どうだった？」
「神に仕えるヴァチカンなんて、お題目はご立派だが、裏を返せば身内も裏切るようなド汚い連中だ。聞かなくてもわかるだろう。お前なら」
「見る？スゴいことになってるよ。あの爺さん」
「しっかり記録しておけ？交渉材料だ」
「了解――ところで」
「何だ？」
「北米で、何が起きるの？」
「電磁波攻撃だ」
「電磁波？」
「俺達が北米で使った“アレ”を小型化して、効果を限定させたものだ」
「それをヴァチカンが？」
「入手先を聞かれたら、“信者から”。使った理由を聞かれたら“神のご意志”とでも答えるだろうさ」
載賢は用意された酒をあおった。
「宗教なんてそんなものだ」
「――ま、いいけどね」
載武も酒に手を伸ばした。
「ヴァチカンへの賄賂だって、北米やアジアからの略奪品だったし。ああ、そうそう」
「ん？」
「あいつの賄賂の中に、アジアで捕まえた宣教師達が持っていた金や宝石がゴロゴロしてるんだよ？死体から抜き取った宝石や金歯と

か」
「ほう？」
「あいつが換金して市場に出た時が楽しみだよ」
「ふん……思わぬ余興だ」
「でしょう？それで、北米は？」
「すでに手はずは整えてある。連中の狙いは間違いなくヒューストンだ」
「陸上から……だよね？」
「湾外はすでに機雷封鎖してある。タンカーと人間の壁もある。やれるものならやってみろってんだ」
「……まぁ」
載武はグラスを弄びながら言った。
「東海岸と五大湖側からの攻撃だよね。一々、海に出る理由がない」
「そういうことだ。北米総軍司令部にはテキサス死守。油田を奪われることなく、絶対に敵を食い止めるように厳命してある」

ウェスト・テキサス・インターミディエイト。

テキサス州で算出される原油のことをこう呼ぶ。
アメリカ国内で産出される原油の６％・世界で産出される原油の１～２％ほどを占める原油で、その価格は世界の原油価格の中で最も有力な指標となる。
実際の産出量は、一日わずか１００万バレルと多くはない。
しかし先物の一日あたり取引量はその百倍の１億バレルを超え、価格の大きな変動、特にその値上がりは、世界経済に大きな影響を及ぼす程、発言力がある。

中華帝国軍が北米へ侵攻する際、東海岸や五大湖に橋頭堡を築く

ことはプランとして存在した。
しかし、そこに不足しているものが、何と言っても石油。
石油がなければ兵器を動かすことは出来ない。
生産拠点は自国のそれで十分。
むしろ、敵の生産拠点は容赦なく破壊してこそ意味がある。
何と言っても、石油を確保することが大切。
ヒューストンが狙われたのは、そんな理由からだ。

現在、中華帝国軍は原油と石油の生産施設のほとんどを手中に収めている。
本来なら、その石油資源をもって世界経済さえ牛耳りたいのが実情だろうが、彼等にとって、そこから産出される原油は自分達が消費してこそ価値がある。
アフリカや中東の資源をＥＵに押さえられている現状、世界最大級の生産拠点はあるにしても、底を動かす石油資源に事欠く中華帝国にとって、それは喉から手が出るほど欲しい存在。
下手をすれば、彼等が北米へと侵攻した最大の理由は、その石油資源の確保と言っても言いすぎではない側面がある。
原油確保のために血眼になっているＥＵの縄張りに侵攻しようものなら、戦後の権利を巡ってＥＵ各国は、血眼になって中華帝国軍と戦い、下手すれば老人や赤ん坊にまで武器を持たせるだろう。
中華帝国軍参謀達がこぞって中東への武力侵出に反対したのはそういう理由であり、実際にそうなっている。
痛い目にあったからこそ、中華帝国軍はアメリカに筒先を向けたとも言えるのだ。

だからこそ、載賢と中華帝国にとっては、テキサスの石油資源確保のため、北米に派遣した軍に対してテキサスの死守を命じたのは当然のことなのだ。

逆に言えば、アメリカにとっては意地でも奪還すべき必要がある。
ベネット大統領は、全軍に対してテキサス奪還を厳命し、米軍はその奪還作戦を実施すべく部隊を編成。
すでに米国の総力を投じ製造した兵器と、各地から動員された兵士達がテキサスへ向けて移動を開始している。
その規模は、待ちかまえる中華帝国軍をして、攻めから防御に転じるしかないと認めさせている程だ。
中華帝国軍が散布した狩野粒子の影響は、すでに地上にも効果を示しつつある。
だからこそ、米軍はご自慢のハイテク兵器はすでに使用出来ないと割り切った。

陸軍の主力兵器は、何と５０年近い前に退役したＭ４８パットン戦車。
Ｍ６０と同じ１０５ミリ砲や、エンジンやトランスミッションを搭載したＭ４８Ａ５というタイプ。
空を舞うのはムスタングやＡ－１スカイレーダーといえば、どれ程米軍が割り切ったか、およその想像が付くだろう。
歩兵に与えられる銃だって、それまでのＭ１６や、Ｍ１６から更新が進んでいるＭ４ではない。
簡易生産の最たる存在でもあるグリースガンだ。
米軍にとって、新兵が覚えるのに一苦労する最新型電子装備の教育にかけている時間も資源も全ては存在しない。
新兵募集所のドアをくぐったヤツはすべて銃を握らせて、即座に戦場に送り込みたいのが本音だ。

狂っているのか？
違う。
かつての戦争において、狩野粒子に苦汁を舐めさせられたＥＵ各

国軍がたどった道を、米軍もようやくたどり始めただけだ。
銃の不足に悩んだ挙げ句、全軍にスターリング・サブマシンガンを行き渡らせたイギリスだったが、それでも銃を補給し続けただけで賛美された程、苦難の連続だった、あの戦争を経験したいかなる国からも、米軍のこうした姿勢は非難さえされない。
皆が経験してきたことなのだ。

ただ、米軍が違ったこと。
それは、戦場がかつての他国ではなく、元からの国土だということ。
ヒューストンも占領されたとはいえ、そこには元からの米国民が多数存在している。
中には中華帝国軍相手に商売している者も、或いは彼等に尻尾を振るう者も存在するにしても、多くの米国民が、中華帝国軍という占領者を決して歓迎していないことは確かだ。
中華帝国軍の兵士が店に入っても、呼ばれるまで近づかない。
軍用車両が多く通る通りにはクギを撒く。
中華帝国軍に納入を命じられた製品の品質を落としておく。
そんなことはザラだとしても、無論、全ての市民が直接的にそんなことをしたのではない。
多くの市民がしたことは、中華帝国軍の存在を意識的に忘れること。
つまり、無視することで、その協力を拒む。
そんな市民達は、後に沈黙の抵抗者（サイレント・レジスタンス）と呼ばれるようになるにしても、無視が即ち抵抗であることに変わりはない。
こんな市民に対する中華帝国軍の仕打ちは日に日にエスカレートした。
最近では、タイヤのパンクを笑った市民に対して、見せしめと称して無抵抗の市民百人近くに車載機関銃を乱射した兵士の話なんて、まだ大人しい方だ。

そんな市民達が共通して黙っていたことがある。

ヒューストンのどこに米軍兵士達が隠れ住んでいるか。

これだ。

ヒューストン港へ通じる道は、そのほとんどが中華帝国軍による検問のため封鎖されている。

市民の多くはすでに港に用事はない。

あるとしたら、それは軍の用事がある者達だけ。

そんな連中の中にも、レジスタンスは紛れ込んでいた。

「よし――――通れ」

時間は夜。

中華帝国軍の検問所で、若い兵士が通行証を返してくれた。

「どうも」

小さく会釈したのは、ハンチング帽を被った老年の男。

口元を白い髭が隠している。

彼が運転するのは、オンボロの牛乳運搬トラック。

彼が経営する小さな牧場にとって大切な商売道具だ。

かつての港湾管理施設脇にあった職員休憩施設へ牛乳を納入する仕事についている。

「やったなオヤジ！」

助手席に座る息子が嬉しそうに顔を紅潮させた。

「こいつはスゲエ！」

「ジョン。黙れ」

彼はしかめ面したまま、息子を窘めた。
「一番恐いのはここからだ」
「大丈夫だよ！」
息子は自信満々に言った。
「牛乳の自販機、この前わざと故障を見逃しておいたんだ。このタイミングで壊れてくれたのは、俺の功績だぜ！？後は、あの施設の近くのマンホールの上、ドンピシャで車を止めればいいんだ！」
「配送歴はお前の歳より長いが……な」
興奮する息子を前に、彼は鼻を鳴らした。
「こんな曲芸じみた配送は初めてだ」

いつも通りの角を曲がり、目的地へと向かう。
ちょっと前まで、港湾関係者が盛んに行き交い、活気があふれていたというのに、今では厳めしい兵士達があちこちに立っているせいで、活気もなにもあったもんじゃない。

「あっ！」
息子が声を上げたのは、最後の角を曲がった時。
息子が驚いた理由は、彼にもすぐわかった。
港湾施設前に止められた軍用車に気付いたからだ。
しかも、兵士達がその前に銃を持って立っている。
「お、オヤジ」
息子が震える手で彼の袖を掴んだ。
「落ち着け」
彼は叱るように言った。
「こういう時は、脅えた方が負けだ」
彼は、極めて落ち着いて軍用車の前に車を止めた。
「――民間人が何の用だ？」
最悪なことに、軍用車には「憲兵」というプレートがついていた。
彼は漢字は読めないが、人の良い兵士がＭＰの意味だと教えてく

れて以来、このプレートのついた車には近づかないようにしていた。
彼がドアを開くより先に、隊長だろう随分と尊大な男が彼に尋ねた。
「いえ」
彼は通行証を提示しながら言った。
「牛乳の業者でさ。旦那」
「牛乳の業者がこんな時間に何の用だ」
「販売機が壊れたと苦情がありましてね？修理もですけど、痛んだ商品の回収と交換もやろうと」
「ふん。アメリカ製の牛乳を飲む物好きがいるのか？」
「おかげさまで、ご愛顧いただいております」
「俺も実家は酪農をやっている。俺の牧場で生み出される牛乳に比べれば、どうということはないだろうがな」
「……おっしゃる通りでしょう」
カチンと来たらしい息子を押しとどめ、彼は頷いた。
「そんな品で申し訳ありませんが、収めさせていただいて構いませんか？」
「ふん」
隊長は乱暴に通行証を突き返すと言った。
「さっさと済ませろ」

憲兵達が見守る中、カーゴのドアを開く。
カーゴの中には背丈より高く牛乳を入れるカゴが積まれている。
「配達の途中でズルしましてね」
男は、空のカゴをカーゴから取り出しながら釈明した。
「ジョン、俺が空のカゴを下ろしているから、お前、先に行って自販機の修理にかかれ」
「わかった」
息子は頷くと、工具箱を手に施設へと入っていく。
「はい、ごめんなさいよ」

男はそれを見送りながら、空のカゴをトラックの左右に積み始めた。
「瓶の入ったヤツを降ろす関係で、後ろにゃ置けませんもので」
「その前に」
カーゴの中を眺めた隊長が言った。
「この音は何だ？」
「こいつは保冷車でしてね。冷却装置の音です。止めるのは勘弁してください？一度止めると中の牛乳がダメになっちまう。酪農家にとって、納入前に牛乳をダメにされるなんて、そんな殺生な」
「……まぁ、いいだろう」
隊長は頷くと、彼が卸し始めた牛乳の入ったカゴから一本を引き抜き、踵を返した。
「さっさと済ませろ」

マズいだなんだのと罵声を喰らわせてくる隊長の捨てぜりふを背中で聞きながら、カーゴの中で作業を続ける男は、カゴに向かって独り言のように言った。
「行きましたぜ？幸運を」

●ヒューストン港湾施設　地下トンネル
「ううっ……寒かった」
スウェットスーツ姿の男が、震える仕草をした。
「保冷車の中って、要するに冷蔵庫の中だからなぁ」
「黙れ、スワル。それでも栄光あるシールズか」
「……へい」
「この作戦は、貴様は挽肉機に放り込むようなものだと言っていたが、訓練校に比べたらどうということはないぞ」
「そういうもんですか？」

「新兵たるお前をここに連れてきたのは間違いだったと、俺に言わせるな」
「……はっ」
「目標は海上の石油リグだ。ヴァチカン経由で入手した情報だと、中華帝国軍は港にあったリルシップ式石油リグを改造、門（ゲート）の管理施設として使っている。
先のハリケーンで地上施設がやられた経験から、海の方がいいと判断したらしい。リグを吹っ飛ばすのは簡単だといいたいが、そうもいかん。だから、俺達がリグの制圧に動く。わかってるな？」
「職員もすべて殺傷。ただし、事を荒立てるなと」
「そうだ。全てはリグの外に知られないようにする必要がある。それこそ、我々シールズの務めとして相応しいだろう」
「……はい」
スワルと言われた男は顔をくしゃくしゃにして喜んだ。
「腕が鳴ります」
「よし」

ヒューストン海上に浮かぶ巨大な門（ゲート）は、直径９０メートル近い巨大な円筒形の物体を半分海に沈めたような格好をしている。

魔族からの技術供与の一種の昇華とも言うべきシロモノだが、これがあるからこそ、中華帝国軍は上海からヒューストンまでをわずか数分で行き来することが出来るのだ。
その門（ゲート）を管理しているのが、少し離れた所に浮かぶリルシップ式、つまり、船の形状をした石油リグだ。
ヒューストン港陥落時、メキシコ湾の油田調査にむけて出港準備中だったこの不運なリグは、中華帝国軍に接収された後、別に使われるでもなく放置されていたのだが、先のハリケーンの影響で地上施設が破壊されて以降、ハリケーンを乗り切ったことから門（ゲート）管理施

設の基地として着目された。
今では上部構造物のほとんどを覆うドーム状施設のため、兵士達からは別名で“饅頭（マントウ）”と呼ばれているし、外見は水に浮かぶドームに近い。

とはいえ、改装を受けたのは上部構造だけ。
その元は変わるところはない。

米軍はそこに目をつけた。

スワル達は2チームに別れてテキサス州に空挺降下によって潜伏した後、レジスタンスに合流。
その一人である牛乳業者の協力の下、この施設へと侵入することに成功した。
下水施設であるトンネルを抜けて海へ出る。
まだ日の明け切らない薄暗い中の移動だが、夜明けを待っていたら的を呼び寄せてしまう。

全てが時間との勝負だ。

ひんやりとする海水の冷たさを感じながらスワル達は海に出た。
シールズの養成校を出たばかりのスワルにとっては日頃の訓練と何も変わるところはない。
暗い潮の流れを感じながら、魚の群をかき分けて石油リグの下に出た彼の先頭を行くマグダル隊長が上を指さした。
リグの下を構成する無骨な鉄骨の間を縫って、慎重に浮上を開始する。
ここで勢い余って音を立てようモノなら作戦は失敗。教官達より厳しい叱責が待っているどころではない。
音を立てずに海面に出た。

ビンゴだ。
すぐ間近に歩哨がいる。
数は二人。
中国語はわからないが、暇つぶしの雑談にふけっているらしい。
スワルは慎重に移動を続けた。
未だに歩哨達は自分達に気付いていない。

大丈夫。

スワルは自分に言い聞かせた。

大丈夫――――自分を信じろ。

「スワル。タイミングは任せるが、同時にやるぞ」
マグダル隊長から短い通信が入る。
スワルは音を立てず、左手で歩哨達の立つ床を掴むと、歩哨の腰に手を伸ばした。
視線の端で、別な歩哨が海へ引き込まれるのが見えた。
歩哨を掴んだまま、スワルは海へと戻った。
何が起きたか分からず、必死に足掻く歩哨ののど元へナイフを突き刺し、引き抜く。
パッと、烏賊が墨を吐いたように水中に黒い煙のように血煙が上がり、彼は歩哨から手を離した。
力を失った歩哨が暗い海の底へと消えていくのを見送ることもせず、彼は海面を目指した。
スワルが海面に出た時には、先に浮上していたチームメイトが彼に手を伸ばしてきた。
無言で手を伸ばした彼は、床へと引き上げられた。
「こちらホテル6。ポイント1にて敵2名を始末」
マグダル隊長の通信を聞きながら、スワルは銃を準備した。

「ポイント2に移動開始」
「了解した。ホテル6」
こういう時、シールズは無駄な号令は出さない。
マグダル隊長のハンドシグナルを確認したスワルは、音を立てずに隊長のフォローに回った。
鉄製の階段を警戒しながら登って行く。
発電機だろう重くのしかかるような音が耳に響いてくる。
上に上っているのに、まるで天国へ通じる気がしない。
13階段を上っているかの如き錯覚に、胃が痛くなる。
「タンクの影に敵」
誰かの声がした。
「交戦を許可。ただし、消音兵器を」

手すりから身を乗り出して下を見ている兵士がいた。
スワルはサプレッサーをつけた小銃の照準で彼を捉え、トリガーを引いた。
頭部に命中した一発が、彼を奈落の底へと突き落とした。
人が目の前で殺されたというのに、スワル達の仲間は何も頓着することさえせず、先を進む。
警戒する兵士達がほとんどいないことは事前の情報として知らされていたが、これ程の重要施設にもかかわらず、どうしてこうも手薄なのか、スワルはふと考えた。

――――下より上を警戒している。

それが、彼の答えだった。
つまり、上に行けばわんさと兵士達がいる。
冗談じゃない。

「第二関門だ」

マグダル隊長が指さしたのは、“休憩室”と書かれたプレートが張り付けられたドア。
隊長とスワルがドアの両脇に立った。
ノブはスワルの方にある。隊長と目配せしたスワルがノブに手を伸ばしたそのタイミングだ。

ガチャ。

音がしてドアが開いた。
ドアの向こうで、若い兵士がびっくりした顔でこちらを見ている。

声をかけるより早く、スワルは銃のトリガーを引いた。
呆然とした顔の兵士が被弾のエネルギーに吹き飛ばされ、ドアから遠のく。
スワルはドアを掴むとすぐに室内に飛び込んだ。

えっ？

居合わせた中華帝国軍兵士達の声をまとめれば、この言葉で足りるだろう。
唖然とした顔の兵士達が、次々とスワルやその仲間達によって射殺されていく。

「クリア」
「クリア」

室内に続いたチームメイト達が室内の制圧を宣言。
その時、スワルの肩を叩いたのは隊長だ。
「ここはチーム2が引き受ける。俺達は第二デッキへ移動だ」
「了解」

血と硝煙の匂いが立ちこめる室内を後に、彼は再び隊長のフォローとして階段へと飛び出した。

階段とステップを3つ回った時、隊長の足が止まった。

それまでと違って、設備が新しい。

「ここからだ」

隊長は言った。

そう。

お目当ての管制室だ。

ここを制圧すれば、門（ゲート）を制圧できる。

「――――下手な発砲はするな？設備に傷を付けたらそれこそ終わりだ」

スワルは無言で頷いた。

隊長が胸ポケットに仕舞っていたメモ書きに書かれていたパスワードを入力。

電磁ロックはそれで簡単に開いた。

警戒が手薄にも程がある。

普通の建物だってもう少し。

奇妙な憤りさえ感じながら、スワルは室内へ飛び込んだ。

そこは見慣れないパネルや計器類が並ぶ空港の管制室のような室内。

海軍ならＣＩＣを連想させるような造りだった。

ここで発砲したらどうなるか。

それは、彼にもわかった。

突然の乱入者が誰か分かったんだろう。
管制室にいたワイシャツ姿の男達が恐る恐る手を挙げた。
「カイト、外へ連れ出せ」
銃で威圧しながら隊長が言うと、カイトと呼ばれたチームメイトがスワルの脇をすり抜け、脅える男達を管制室から外へ連れ出した。
「さて。新米のお前をどうしてここに連れてきたかは、これでわかったろう？」
隊長は自信満々に言った。
「……ええ」
スワルはニコリと笑った。
「こいつは、コンピューターに強くないと勝てない」
「事前情報は読んでいるな？」
「ええ」
ポキリポキリとスワルは指を鳴らした。
「目を潰されたって、やってみせます」
「上等だ。何分で出来る？」
「３０――いや、２０分」
「よし。１０分でやれ。すでに“ゲスト”は移動中だ」
「……了解」
スワルが椅子に座り、キーボードに手を伸ばした時だ。
――俺達は戦闘員じゃない！
――降伏する！だからっ！
通路から聞こえてきた命乞いと悲鳴は、耳で聞き流すだけにした。

牛乳配達の業者を送り出した港湾施設職員は、海上に浮かぶ門(ゲート)を苦々しく睨み付けた。

チンク共に言い様にされているが、いつかは見てろよ！

門(ゲート)を見るたびに沸き上がってくる憎悪を心地よくさえ感じる彼の目の前で、門(ゲート)の筒の中の空間が真っ黒に歪んだ。

「何だ？」

彼は、眠そうにしている同僚の肩を叩いた。

「おい、見ろよ」

門(ゲート)の異変に気付いたのは何も彼だけではなかった。

窓の外から見ると、兵士達も気付いたらしい。門(ゲート)を指さしたり、走り回ったりしている。

「……なんだ？」

彼が見守る中。

門(ゲート)内部の空間が元通りになったのは約１０分後。

ホッとする彼の前で、門(ゲート)を潜ってきた船団の舳先が現れようとしていた。

舳先に掲げられた旗が、朝日に映えて輝いてさえ見えた。

それは、中華帝国船籍を示す、黄色の旗ではなかった。

ヒューストン解放作戦　第二話

北米討伐軍。

それが、この時点での北米大陸派遣部隊の中華帝国軍内での正式名称であり、ヒューストン制圧時点での勢力は以下の通りとなる。

投入兵力５５万
戦車１，５００両。
装甲車両２８，０００両
メサイア３５０騎
航空機２，２００機

問題は、これほどの勢力が、今、どこにいるかだ。
彼等はヒューストン見物に来ているワケではない。
あくまで戦争に来ているのだ。
当初こそ、電撃戦効果で北米大陸の各方面へと侵攻出来た彼等だったが、今では防戦一方となりつつあった。
破竹の勢いを見せた東海岸方面軍は、サウスカロライナ攻略戦の途中で、その伸びきった補給線をフロリダ方面からの横やりで寸断され、同州攻略を断念。
続くアラバマ・ジョージア両州境での攻防戦に敗北。
アラバマ川を超えた米軍に、逆にミシシッピー州にまで浸透を許した。
ミシシッピー川を渡河出来た時点で、方面軍は戦闘能力の８割を喪失。
司令官が自決した後、移動を続けた残存兵力はニューオリンズ防衛隊下に編入され、米軍の包囲網の中に孤立している。

一時はセントルイスを望めた五大湖方面軍は、地の利を活かした米軍に各個撃破される形で後退戦を続けている。

西海岸方面軍はテキサスの防衛で精一杯。

冗談ではない。

これが中華帝国軍北米討伐軍の現実だった。

その最大の原因は、騎士だ。

この作品を読んでいると、騎士はメサイアのパイロットだと誤認するだろうが、この世界において本当に騎士として称えられるのは、そんな存在ではない。

剣をもって戦う、従来の騎士の方だ。

音速で襲いかかり、数十メートルの防壁を飛び越え、素手で人を殴り殺すことなど朝飯前の彼等の前にあっては、精強を称えられる中華帝国軍兵士と言えど、単なる犠牲死者になるしかなかった。

対する中華帝国軍が、北米討伐軍に何故、ほとんど騎士を投入しなかったのかは謎のままだが、とにかく米軍は、大統領警護騎士団や各州軍騎士団を、敵陣地や後方支援施設に対する夜襲に騎士を大々的に投入した。

一個大隊が防衛する陣地が一晩で壊滅したり、補給所が丸ごと焼き払われたなんて報告が司令部を襲った時には遅すぎた。

中華帝国軍は、数に任せて劣勢を挽回しようと予備兵力までを最前線へ投入。

背後はすべて海軍力によって防御する方針を打ち出した。
それはつまり、ヒューストンの防衛力が手薄になること以外の何者でもなかった。

「何事だ！」
まどろみの中から現実に叩き戻された毛参謀は、ベッドから飛び起きるなり軍服を掴んだ。
「港湾に米軍が出現！」
「馬鹿な！」
毛参謀は思わず従兵を怒鳴った。
「寝ぼけたことを！」

そう。
毛参謀の知る限りでは、米軍はフロリダ半島沖の大西洋に海軍機動部隊を集結させつつあり、同時にノーフォーク周辺には輸送艦隊が集められている。
諜報部からは、米軍によるニューオリンズ上陸作戦計画を掴んだとの連絡が入っている。
となれば、大西洋に集められた艦隊は、フロリダ海峡の制海権を奪取するための存在と判断出来る。
現在、ヒューストン周辺に展開していた我が軍の空母機動部隊がフロリダ半島へ向け移動中だ。
しかし、それは昨日の朝のことだ。
たった一晩でメキシコ湾を米軍は突破したとでもいうのか？

「しかし！」
若い従兵は、緊張気味に大声を上げた。

「岸壁の船からは、続々と米兵が！」

ドガガガッ！

ズンッ！

銃声は爆発音が風に乗って部屋にまで届いた。

宿舎から港まで約3キロ。

銃声は、中華帝国軍の使うそれとは違う。

「……そうか」

毛参謀は、大きく深呼吸すると、従兵に言った。

「身支度を整える間に、コーヒーを一杯頼む」

まいったな。

毛参謀は、軍服を纏いながら焦る頭を励起して事態の把握を試みた。

米軍が何をやったのかはわからない。

ただ、状況はかなりマズいことだけは確かだ。

この北米大陸。

米軍は、陸から来ると考えるのが当然のはずだ。

実際、五大湖方面、東海岸方面からの侵攻の動きがあり、我が軍はメンフィスとアラバマ川で双方からの流れをやっと喰い留めているのが実情だ。

そんな状況で、このヒューストンに遊ばせておく兵力は存在しない。

部隊の再編成でさえ、前線に近い都市を指定してそこで行わせている。

兵力は、ヒューストン防衛隊というが、実際には2個大隊規模。

しかも実質、銭司令官の個人的護衛部隊に近い。

いわば、このヒューストンは、司令部と物資集積所ではあるが、無防備に近い。

海からは来ないだろう。

その判断が間違っていたことを、毛参謀は痛感していた。

「くそっ」

制帽を掴んだ彼は一人毒づいた。

「どこのどいつだ？何をやったんだ？」

カーテンを開いた窓の向こう。

爆音を轟かせながら横切った巨人。

それがグレイファントムと呼ばれるメサイアであることを理解した毛参謀は、自軍の敗北を悟るしかなかった。

北米討伐軍司令部の入っていた高級ホテル前に立っていた赤兎が、グレイファントムに真っ二つにされた。

ヘリから降下した兵士達が、ホテルの中へと消えていく。

上空は、さっきからヘリの爆音がひっきりなしに響き渡って煩わしい。

兵士の一人が、ホテルの屋上に掲げられていた中華帝国旗を引きずり降ろした。

「これで終わりですね。レミントン枢機卿」

「……そうだな」

ビルの屋上からその光景を眺めていたのは、黒服の一団。

しかも、そのうちの数名は尼僧の衣を纏っていた。

「栄光ある第１３課の仕事としては、認めたくない仕事だがな」

「法王猊下より賜った仕事ですよ？」

「実質、今の法王庁を仕切っているのは、ピスウ枢機卿ではないか？シスター・フォルテシア」
「……はい」
「門（ゲート）の座標設定プログラムを新大陸の大統領に売りつけ、同時に情報を皇帝に売りつけたあの商才は、どういう神に仕えている俗物かを教えてくれる」
「またそういうことを」
「聖杯などという、どうでもいいシロモノに欲を出したヤツのおかげで、私はシスター・イーリスに課を潰されたのだ」
「……」
「ヤツには必ず、天罰が下るものと信じよう」
「……天罰が下る前に、我々は？」
「我々は残存戦力をまとめ、北米を離れることになるだろう」
「しかし」
シスター・フォルテシアは奇妙な顔をした。
「妖魔達がまだ」
「魔法騎士達をこの時点で投入したくない……というより」
レミントン枢機卿は悔しそうに顔をしかめ、ロザリオを握りしめた。
「聖堂騎士団は、ピスウ枢機卿の直卒だ。私では動かせない」
「ヴァチカンから精鋭２５０名が派遣されているのですよ？」
「ふん。奴らの甲冑をみればいい。胸元に募金箱がついているぞ」
「……それは」
「不安に脅えるこの北米のカソリック信者を安心させるための客寄せパンダに過ぎん。ピスウ枢機卿は、この戦いで魔法騎士達を動かすことはない」
「そんな！」
「シスター・フォルテシア」
「はい？」
「私は一週間程、休暇をとる。君はどうするね」

「何を悠長なことを！」
「ニューヨークの教会で犠牲者追悼のミサがあるそうだ。顔を出してくるといい。あそこのシスター・マリンダは、君の親友だったのではないか？」
シスター・フォルテシアは、レミントン枢機卿の顔を見て思った。目の前にいるのは、私服で歩かせたらオヤジ狩りは避けられない程、冴えないオヤジだが、その腹の中は恐ろしいものを秘めている男。
その男が、何かをしようとしている。
――休暇中に何をするつもりですか？
そう、聞いてみたい。
だが、知るのが恐い。
「主の御心のままに」
シスター・フォルテシアが出来たことは、そう答えるだけだった。

ヒューストン解放作戦　第三話

「ヒューストンが墜ちた、だと？」
報告した若い女性将校は、ベッドから起きあがった載賢に殺されると思った。
載賢は、自らの私室には見目麗しい女性士官しか入室を許さない。
女だけ。
それが、どういう意味を持つかはあえて語る必要もないだろう。
「門（ゲート）のプログラムを書き換えられました」
女性士官は脅える声で答えた。
「ヒューストン、上海間をつなぐ門（ゲート）の座標が変更され、ヒューストンは、ノーフォークとつなげられた模様です」
「どこのどいつだ！」
唸るような声が空気を揺るがせた。
載賢の横にいた裸の女が、シーツの中に潜り込んだまま出てこようとしない。
フーッ！
フーッ！
載賢は荒い息の中、
「――――まぁ、いい」
そう、言った。
「奪えるモノは奪った。これはこれでいい」
それは、自分に言い聞かせるようにしか聞こえなかった。
「……紅」
「はい」
「支門（サブ・ゲート）は生きているな？」
「は？はい」
支門（サブ・ゲート）。
中華帝国軍が北米へ侵攻した際、用いた門（ゲート）のことだ。

船舶が通れるほど大型ではないが、メサイアまでなら何とか通ることが出来る。
「総司令部はともかく、生き残った部隊は、支門（サブ・ゲート）を使って本国への撤退を許可する」
「失礼ですが」
「――認めん」
載賢は紅の言葉を遮るように言った。
「支門（サブ・ゲート）にたどり着けない部隊に投降は認めろというのだろう？」
「は、はい」
「だめだ！」
載賢は怒鳴った。
「ここで投降を認めるなんて言おうものなら、全軍が瓦解するぞ！メサイア隊に支門（サブ・ゲート）死守命令を出せ！最後まで撤退は認めない！最後の一兵まで支門（サブ・ゲート）にたどり着かせろ！」

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「ヒューストンが陥落……ですか」
「早い、ですね」
「司令部が脅されたってところですかね」
後藤は戦況モニターを眺めながらぼんやりとした口調で言った。
米軍は攻勢のポジションにはいるが、動きがない。
中華帝国軍だけが、一方的に数を縮小している。
ほとんどが、都市へ向けて長い車列を作っている。
分析の結果、空間反応から、各地に設置された門（ゲート）に向かっているのは間違いないという。
「米軍は追跡の手を緩めてはいないが、あえて叩くマネもしない……か」

「逃げる敵に無駄弾を使いたくないのでしょう」
「まぁ、そう考える方が妥当でしょうな――――ところで」
後藤は通信兵に言った。
「ウチの悪ガキども、そろそろ戻して？」

「幕開けは派手だったのに」
“鈴谷（すずや）”に帰還した芳（かおる）が紙コップを弄びながら言った。
「終わる時はこんなにあっさり？」
「そんなものよ」
寧々は言った。
「血みどろの戦いの方がお望みだった？」
「ううん？」
芳（かおる）は答えた。
「楽出来て嬉しいけど、何だか……こう、もっと白黒はっきりしてから終わるものだと思っていたから」
「ところでお姉さま？」
その横で涼が訊ねた。
「私達は、これから？」
「“鈴谷（すずや）”は日本に戻る――――ドイツ軍も一緒だ」
「ドイツ軍も？」
「次の主戦場は、日本だからな」
「……」
「後藤さんが指定したブリーフィングがそろそろだ。いくか」
「はい」

「中華帝国政府がついさっき、北米からの撤退を正式に発表したよ」
ブリーフィングルームの壇上、後藤は言った。
「“転進”っていうそうだけど」

「転進？」
「日本で魔族軍が勢力を伸ばしている。我々は驕慢なるアメリカ人を懲らしめた後、この人類の敵に備えなければならない――――そうだ」
「アホですか？」
「バカげたセリフだと思うよ？さすがの俺もね」
後藤も苦笑しながら頷いた。
「完全撤退はあと3日だ。ただし、米軍はそれを待たない」
「……えっ？」
「いいか？ここで黙って見送ることは、次の戦いで敵の数を増やす行為でしかない。米軍は6時間後に本格反攻作戦に転じる」
「そんな！」
「俺達もそこに参加する。俺達メサイア隊の最重要目的は、敵メサイアの撃破だ。撤退する中華帝国軍は手ぶらで返す位の打撃を与えるんだ」
「……」
「中華と、日本で殴り合った経験を忘れたとは言わさないぞ。泉」
「……はい」
「連中も、死に物狂いで抵抗してくるだろう。この北米での戦い、最後にして最大の正念場だ。気合いを入れろ」

「そんなもの置いていけ！」
車両の手配がつかなかったのか、砲兵達は、何と人力で野戦砲を押していた。
あの戦いから撤退した後、部隊を立て直した唐少佐達は、第6支門（サブ・ゲート）の防衛に回されていた。
すでに兵力のほとんど喪失した彼等は、前線に出る力はない。

北米討伐軍総司令部が降伏した現在、残存兵力をまとめているのは、前線部隊の司令部なのだが、対等の立場の司令部同士が互いに上位指揮権を主張しあっていて、必ずしも指揮系統がまともとは言い難い。

唐少佐は、さっさと門（ゲート）の中に消えた司令部からメサイア大隊指揮権を引き継いだばかりだ。

周囲には、自分以上の指揮官はいない。

いわば、この支門（サブ・ゲート）は彼の縄張り。

だから、誰に対しても彼は文句を言える。

兵士を満載した車両が通過するたびに、彼は怒鳴る。

車両を置いていけ！

徒歩で門（ゲート）をくぐれ！

戦況を見る限り、車両を与えられていない歩兵達がかなり遅れている。

政府は3日で撤退を完了させるというが、最前線から徒歩でここまで3日は無理だ。

だから、車両がいるというのに、誰一人、一台たりとも、彼の声に従う者はいない。

自分達が生き延びるのだけで精一杯なのだ。

「少佐」

MC（メサイア・コントローラー）が言った。

「第２０３戦車大隊がそろそろ」

「大隊長を呼び出せ。防衛に回すんだ」

「その大隊長からです。歩兵の列をどかせと」

「馬鹿な！」

バンッ！

遠くで破裂音がした。
「敵弾飛来っ！」
「距離は！？」
「１５キロ！着弾地点は張隊集結地点！」
「奴ら、帝剣が１６騎だったな」
張隊は、門（ゲート）に通じるまでの防衛部隊の一つだ。
テキサスの石油精製施設の防衛が任務だった部隊の生き残りで、誰の指揮かもわからない命令で、ただ数の多さから前衛に回されている。
この張と黄、紅の３隊計４５騎が突破されれば、唐少佐達は全滅覚悟で戦うか、諸手をあげて降伏するしかない。
メサイアを捨てて逃げるという選択肢がないわけではないが、愛騎をあっさり捨てるのは、彼の美学に反した。
グレイファントムに世代が違う帝剣が相手になるとは思えないが、
「何とかしてくれよ？」
そう、祈らずにはいられなかった。

攻勢に転じた米軍騎士に、容赦という言葉はなかった。
グレイファントムの力任せの一撃が、帝刃の脳天をかち割る。
横薙ぎの戦斧が帝刃をくの字にへし折る。
それは戦いというより、虐殺に近い、一方的な状況だ。
「こいつぁ、七面鳥狩りだぜぇ！」
「何が撤退だ！生きて帰れるなんて思うんじゃねぇっ！」
息巻く騎士達はグレイファントムを駆り、自らの国土を荒らした対価を中華帝国軍騎士達に求める。

対する中華帝国軍騎士達も死に物狂いだ。

性能的に劣る帝刃でありながら、彼等は一歩も引かずに抵抗を試みる。

例え性能で勝てないにしても、時間を稼ぐことが彼等に出来る精一杯のことだ。

１分で３０人が門（ゲート）を渡れるなら、１０分で３００人が生きて祖国に戻れる。

それは、命がけで時間を稼ぐ十分な理由だった。

グレイファントムはたったの４騎。

対する彼等は、当初１６騎が、すでに８騎まで減らされている。

戦闘時間はすでに１０分。

３００人分の同胞を助けたという達成感は、彼等にはない。

もっと時間を！

あるのは、そんな焦燥感だけ。

時間を求める彼等は、グレイファントムとの間に間合いを設けた。

とにかく、時間さえ稼げばそれでいいんだ！

１時間でも、１年でも！

悲壮感さえ漂う彼等を前に、騎兵隊気取りのグレイファントム達が　立ちはだかる。

――――くやしい。

中華帝国軍騎士の一人は唇を噛み締めた。

この装備では、あの重装甲を割ることが出来ない。

せめて赤兎があれば、十分な装備があれば！

そう思うと、くやしくてしかたながない。

敵に一方的に殺されるなんて冗談じゃない！

せめて――――装備が！

悔しげに唇を噛み締める彼の目の前で、信じられないことが起きたのは、その時だった。

ヒューストン解放作戦　第四話

グガンッ！

鈍い音がして、グレイファントムが真っ二つに叩き斬られ、残骸が宙を舞った。

「――――えっ？」

唖然とする騎士は、いつの間にか、自分の前に立ちはだかっていた、巨大なメサイアに初めて気付いた。

漆黒の甲冑に包まれた騎体は、彼が知るどんなメサイアとも合致しなかった。

同型の騎体が、別なグレイファントムをたった一撃でなぎ倒したのを、彼は確かに見た。

「そこの騎士」

部隊の誰でもない、野太い声が通信装置に響いた。

「ここは引き受けた。生存者を確保して後退しろ」

「だ、誰だ！？所属は！？」

「所属は証せないが、少なくとも敵ではない」

「……っ！」

彼は息を飲むと、怒鳴るように言った。

「とにかく、生存者の回収と撤退協力に感謝する！」

「戦線は圧倒的に米軍有利です」

そりゃそうだろう。
美奈代は思った。
中華帝国軍は撤退中。つまり、戦闘より後退を優先している。これで米軍が不利といったら、一体、米軍は使い物になるんだろうか？

「それで？」
美奈代は訊ねた。
「ドイツ軍と合流して、アラベスシティの解放に参加するんですけど、アラベスシティって、ご存じですか？」

「ヒューストン郊外の閑静な農村です。古いヨーロッパ調の町並みに、広大な綿花畑が楽しめますよ？」

「そんな所に中華帝国軍が？」

「東海岸向けの大規模物資集積基地がありました。また、メサイア部隊がここを合流ポイントに指定している模様。ここを叩く意義は大きいですよ？」

「……成る程？」

「陥落したばかりとはいえ、ヒューストンを通過します。市内見物は楽しめますよ」

「……そういえば」
美奈代がポツリと呟いた。
「月城大尉が、楽しみにしてたんですよね。ヒューストン、行けたらいいなって」

「へぇ？」

「全国葬儀史博物館が見たかったらしくて」

「……は？」

「葬儀業界の博物館、だそうで……月城大尉曰く、“聖地”なんだそうですけど」

「よく分からない人ですね。あの人も」

「ホントに……ルート上でミニッツ・メイド・パーク上空を通過します。空からの見物くらいは許されますよ？」

「楽しみにしていいんですか？」

「ドイツ軍の新型と一緒にご堪能下さい♪」

ドイツ軍の新型。

それが、フォイルナー少佐達の乗騎だと知ったのは、ドイツ軍とヒューストン郊外でドイツ軍と合流してからだった。

すでに西海岸方面の部隊は撤退をほぼ完了しており、敵とみなす程の脅威はないというのが、ドイツ軍の判断だった。

“ヴィーグリーズ”

そう呼ばれる純白と漆黒の2騎は、デュミナス達に囲まれていると、まるで司祭に囲まれた王侯のような気品さえ感じてしまう。

「不思議な騎ですね」
ドイツ軍の後方5キロで編隊を組んだ美奈代は、合流時点で見たヴィーグリーズをそう評した。
「何だか、初めて“Ｄ－ＳＥＥＤ”を見た時を思い出します」
「元はマラネリの国王専用騎をベースにしたらしいですよ？」
「王侯専用騎ってことですか？それであの気品ですか」
「それにしても、ヴィーグリーズとは随分派手な名前を付けたものです」
「何ですか？それ」
「北欧神話で、神々　と巨人との最終決戦（ラグナロク）が行われる場所とされているのがヴィーグリーズです」
「日本で言ったら関ヶ原？」
「神様同士の戦いですから、そういう表現もちょっと……」
「うーん。そういうものではないのですか？」
「随分、違う気がしますけど……」
牧野中尉は言った。
「“死乃天使”や“白雷改”程じゃないにしても、ヨーロッパ初の精霊体搭載型、しかもデュアルエンジンが生み出すハイパワーは侮れませんよ？しかも、扱う騎士はあの二人ですし」
「戦場で敵にならないよう、気をつけましょう」

ヒューストン上空を飛行する美奈代達は、市街地が思ったより破壊されていないことに少なからず驚いていた。
敢行雑誌などで見た通りの、下手すれば東京なんてくらべ者にならない位、整然とした美しい町並みが目を楽しませてくれる。

「中華帝国軍に占領されていたっていうから」
涼はポツリと言った。
「どんだけ略奪されたんだろうと心配だったんですけど、安心しました」

「トヨタセンターからミニッツ・メイド・パーク上空に出ます。現在、高度３５０」

「低すぎませんか!?」

「これ位でいいんです。ドイツ軍なんて２００ですよ?」

「何でそんなに低く飛ぶんですか?」

「今、スタジアムはオールスターゲームの最中ですからね。観客へのサービスでしょう」

「……ピースサインでも出してあげましょうか?」

世界で3番目の開閉式屋根付き天然芝野球専用球場上空を通過した時、

信じられない。

それが美奈代の感想だった。

戦争の真っ直中で野球を見物している連中の神経がわからない。観客がこちらを眺めて大はしゃぎしている姿は、モニターで手に取るようにわかった。

つい昨日まで敵の占領下にあった反動とでも言うんだろうか？

別に、彼等が悪いとは言わない。

ただ、美奈代にとって戦場であるこの世界で、コーラ片手に、出撃していく自分達へ手を振ってくる観客に対して沸き上がった感情は、うれしさではなく、何かドス黒くて表現に困るようなものだった。

平和な都市を飛ぶより、郊外に抜けて敵を見つけた時、ほっとしている自分に、美奈代は未だに気付いていなかった。

ヒューストン解放作戦　第五話（前書き）

２０１１年G・W限定キャンペーン実施中です。
詳しくはあとがき見てください。

ヒューストン解放作戦　第五話

アラベスシティ解放戦において、ドイツ軍が右翼から。美奈代達が左翼から攻める手はずになっていた。
ドイツ軍が右翼を攻めることに、別に意味があったとは思えない。
フォイルナー少佐が、この事を知った上で、美奈代達に押しつけたとは考えたくない。

でも、こうなると、どうしてもそれを疑いたくなる。

「敵騎、３０以上！」
「どうしてこんなに！？しかもっ！」
祷子と共に上空から敵陣深くに斬り込んだ美奈代は“死天使”を急速後退させるしかなかった。
敵騎は群になって自分達を追いかけてくる。
膨れあがった蛭のような頭部は、一度対峙したら、二度と忘れられない相手であることを示していた。

中華帝国軍の無人メサイア――飛鼠（ひそ）だ。

「ドイツ軍の方は？」

「反応からして赤兎部隊――多分、こいつらのお守りをしていた部隊かと」

「こんなの詐欺だぁ！」

「言ってる場合ですか？」

ブースターを全開にして追いすがってきた飛鼠（ひそ）の胴体に風穴が開いた。
「お姉さまっ！」
「涼っ！？助かった！」
「お礼はベッドで！」
涼は怒鳴った。
「敵をそのまま誘ってください。こいつら、空中機動性が悪すぎ！」
「空中機動性？……わかった！」
美奈代はブースター推力を落として地上へと降りた。
飛鼠（ひそ）達は、上空から草刈鎌のような武器を振りかざしながら“死乃天使”めがけて襲いかかってくる。
「――――そこっ！」
一番最初の敵の鎌が振り下ろされる直前、美奈代は“死乃天使”のブースターを開き、再び空に舞い上がった。
爆発音が響き渡り、それまで死の天使がいた辺りは火の海と化した。
数騎の飛鼠（ひそ）が、海の中へ飛び込んで、そのまま消えていった。
「何っ！？」
下から襲ってきた熱風に驚いた美奈代が目を見開いた。
「何が！？」
「狙撃隊からの投擲爆弾攻撃です」
牧野中尉が答えた。
「ハイパーナパームのカクテル弾の爆発――――巻き込まれたらアウトでした」

「涼のヤツ、タイミングずれたらどうするつもりだったんだ？」
「本人に聞いて下さい。今晩、お楽しみでしょう？」
「っていうか！」
美奈代は、小型化した斬艦刀である“太刀”を抜刀。
居合い抜きの一撃で追いすがってきた飛鼠（ひそ）を真っ二つに切り裂いた。
ブースターによるジャンプが限界高度に達し、“死乃天使”が重力に捕まる。
自由落下のGを体に感じつつ、左手に構えたビームライフルで上空から襲い来る2騎を仕留めた。
その爆発を突き抜けるように、美奈代は“死乃天使”を着地寸前で再上昇に入れた。
「バッタじゃないんだから！」
急上昇と急降下を続ける“死乃天使”は、普通の戦場なら格好のマトだ。
こんなことをもうこれ以上続けるつもりは、美奈代にはなかった。
「涼、狙えるヤツは片っ端からつぶせ！風間、敵の後方に出るぞ！柏、山崎達と前に出られるか？」
「後方に出て引きつけてください。そのタイミングで前進、掃射します」
「……そうだな」
美奈代は顔をしかめるしかなかった。
宗像と月城大尉。
二人が抜けた穴が大きすぎる。
柏達の技量はあなどれないものがあるが、たった3騎では危険す

ぎる。
下手に前に出すと孤立して全滅する恐れさえある。
5騎でワンセットというべき白雷隊が機能不全に陥っていることは、こういう時に痛感するどころではない。
2騎分の負担が全員に通常の数倍の負担となってのしかかってくる。

斬り込み隊が敵陣を攪乱する間に、前衛が突撃。狙撃隊が撃ち漏らしを始末するという、部隊が得意としていた戦法が、もう使えなくなりつつあることを、美奈代は痛感していた。

美奈代は太刀を鞘に戻すと、太股にマウントしてあった散弾砲を引き抜いた。

狙撃隊や美晴達に狙いを定めた飛鼠(ひそ)達の背後に降り立った美奈代達は、散弾砲を容赦なく発砲。
元来、装甲が皆無に等しい飛鼠(ひそ)は、散弾に騎体を引きちぎられて宙を舞った。
12発のドラムマガジン一本を、背中を向けたままの飛鼠(ひそ)達めがけて発射し終えた2騎は、反撃が来る前にその場を離脱。
前の敵を始末するべきか、後ろに出現した敵に対処すべきか。
その判断に躊躇した飛鼠(ひそ)達を次に襲いかかってきたのは、前進してきた美晴達の広域火焔掃射装置(スイーパーズフレイム)から放たれた炎の嵐だった。

「一方的な戦い――――そう呼ぶべきだな」
中華帝国軍の補給基地に米陸軍の歩兵隊が入った時点で勝敗は決した。
損害皆無。

中華帝国軍メサイア隊は全滅。
フォイルナー少佐は、集結した日独の騎士達の前で言った。
「満足すべき戦果だ。特に泉大尉以下、日本側の協力には感謝する」

「恐縮です」
美奈代は極めて平静を保って敬礼した。

「――地元住民が歓迎の準備をしてくれているが、どうする？」

「……」
その唐突な申し出に、美奈代は一瞬だけ躊躇した。
そんなこと、後藤からは何も聞いていない。
チラリと部下を見る。
芳（かおる）や有珠（ありす）達は、目をランランとさせている。
出されるだろうご馳走に期待しているのだろうが、
「……やめておきましょう」
美奈代は答えた。

「……何故？」

「私達はアジア人です」
いぶかるフォイルナー少佐に、美奈代は自分の肌に触れて見せた。
「黄色い猿に助けられたなんて、地元住民の自尊心が許さないでしょう」

「……」

「この期に及んでもめ事は御免被ります。我々の分まで歓待をお楽しみ下さい」

●“鈴谷（すずや）”食堂

「ぶぅううっっ」

食堂の一角で、そんな声が響いた。

「泉大尉はやっぱり鬼だぁ」

頬を膨らませた有珠（ありす）と芳（かおる）だ。

「今頃、ドイツの人達、おいしいもの食べてるはずなのにぃ」

「文句言わないの」

美晴が窘めるように言った。

「あんたね。人種差別のマトにされて殺されたい？」

「私達、中国人じゃないですよぉ？」

「じゃ、あんた。ドイツ人とアメリカ人の区別がつく？」

「つきますよ」

「へえ？どうやって？」

「相手が黒人だったらアメリカ人」

「ドイツにも黒人はいるわよ」

「そうなんですか？じゃあ、ドイツ語喋れたら」

「アメリカにドイツ系が何千万いると思ってるの？あんた、すっごい問題発言してるって気付いてる？」

「さっすが、柏中尉は頭いいですねぇ」

「どんな理由でも、おいしいものが食べたかったですよぉ。ステーキとかぁ」

「アメリカ人の作った料理なんて、ロクなものないわよ？私、カリフォルニアに中学時代留学して、一週間で味覚壊れましたから」

「……そんなにヒドいんですか？」

「少なくとも、高カロリーで太るのは確かよ？」

●“鈴谷（すずや）”艦長室

「……報告は受けている」

美奈代を前に美夜は言った。

「地元住民からの歓迎を謝辞したそうだな」

「はい」

「人種差別を懸念したとも聞くが？」

「その通りです」

「よい判断だ」

美夜は、満足そうに頷いた。

「二宮大佐が聞いたら喜ぶだろうな。よく育った」

「恐縮です」

「……で？」

美奈代は、美夜の横に立つ後藤の顔をチラリと見た。
「後藤隊長から話は聞いているが、頼み事というのは、このことか？」
美夜がデスクに置いたのは、一枚の書類だった。
「騎士補充の要請……しかも、都築と早瀬を指名で？」
「この頭数では限界です」
「わかっている。しかし、何故、あいつらなんだ？」
「部隊のクセがわかっています」
「悪癖の間違いだろう」
「プラス・マイナスを問わずに分かっている方が、連携が取りやすいんです。今から一々、部隊のクセを分からせていたら、命がいくつあっても足りません」
「命とは、新入りのことか？」
「私達のです」
美奈代は言った。
「正直、鵜来少尉でさえもてあましているのが現実です。技量は悪くないんですが、いまいち、美晴……じゃない、柏中尉達と連携が取りづらくて」
「部下に関して泣き言が出るとは……成長したな」
クックッと、美夜は喉で笑った。
その眼が嬉しそうに見えたのは、勘違いだろうかと美奈代はふと思った。

「検討しておこう。今はそうとしか言えない」

「……前線指揮官として、現状戦力でのこれ以上の戦線投入は」

「その泣き言は聞かない」

美夜はぴしゃりと言い切った。

美奈代としては補足のつもりだったが、美夜には泣き言とみなされてしまったのが、美奈代には少し悔しかった。

「米中の戦闘の趨勢が決したことから、我々は明日の日付変更をもって北米から撤退を開始する。それは事実として認めよう」

「……」

戦場から撤退。

これは兵士からすれば嬉しいことだ。

何しろ、少なくとも戦わずに済むのだから。

だが、それを語る美夜の口調は決して楽しげではない。

美奈代は、そこが気になった。

「全ては……戻ってからが問題だ」

ふうっ。

美夜の口から漏れたため息の原因は、美奈代には容易に察しが付いた。

「月城大尉達のことですか？」

「戦場で騎士が脱走。しかも二名が同時に――――前代未聞の大失態だ。指揮官として処分は避けられないぞ？私も、後藤さんも、そしてお前も」

「私は……別に」

美奈代は言った。
「指揮官資格剥奪されても」
「他部隊への左遷の可能性だってあるんだぞ？」
「うっ」
「辞表が通じると思うな？部隊がバラバラになって、挙げ句がお気に入りの“死乃天使”専属騎士の地位まで追われる原因になるかもしれない。今更、“幻龍（げんりゅう）”に耐えられるか？それでいいのか？」
「それは――――困ります」
「だろうが……」
美夜は頷くと、席から立ち上がった。
「責任者は責任をとるために存在する。少なくとも、私達、中堅以下の責任者とはそういうものだ」
「で、では？」
「本来なら、現有戦力で目立つ戦果があと一押し欲しい所だ。戦争の趨勢を変えるくらいのな」
「そんな無茶な」
美奈代はあきれ顔で言った。
「戦争はすでに中華帝国軍の撤退が決しています。そこで何をしろと？」
「無茶で非常識だとわかってはいる」
美夜は、やや苛立った声で答えた。

「だが、二人が脱走した事の処理が難しい。二人が抜けた後の交戦はわずか二回……ドイツ軍と共同というのが痛い」

「……」

何を言っているんだ？この人は。

美奈代はそう思った。

私達は命がけで戦ったんだ。それを、そんな風に評価するなんて！

「二人が抜けて苦労していますという説得材料には十分だろうが……」

「……」

美奈代は、考え込む美夜の横顔を見つめているうちに、美夜が何を考えているのかを悟った。

「艦長は」

「ん？」

「脱走者を出した失態を、戦果で帳消しにしたいとお考えなのでは？」

「そうだ」

美夜はあくびれもせずに答えた。

「私は、仲間を見殺しにした裏切り者のために跳ねられる首なぞ持っていない」

「……っ！」

「いいか？ここは仲良し学級じゃない。官僚組織が前提の社会だ。軍法会議は、友達を庇って褒められる学級会とはワケが違う。宗像

を庇って、銃殺台に立ちたいか？ヤツが、それで喜ぶと思うか？」

「……そ、それは」

「もう少し、中華帝国軍には粘って欲しかったな」

美奈代の横に立った美夜は、まるで耳元に囁くように言った。

「ドイツ軍の精鋭部隊さえ出し抜いて、崩壊の危機を迎えた戦局をお前達だけ支えててくれた。そんな戦果が」

ポンッ

美夜は、美奈代の肩に手を置いた。

「実は、米軍の情報が入っている」

「はっ？」

美奈代は、心底イヤな予感がした。

背筋が寒くなったなんてものじゃない。

美夜に触れられただけで総毛立ったのだ。

「未だ、メサイア部隊が健在な所がいくつかある。米軍司令部に、手に余るところがあれば呼び出してくれ。そう伝えてある」

「……終わったんです」

美奈代は言った。

「北米での戦いは」

「まだ終わっていない。私が認めていない」

「……そんな」

ピピッ

美奈代の反論を遮るように、デスクの上のインターフォンが呼び出し音を立てた。

「……私だ」

美夜が受話器を取った。

「……そうか。わかった」

ハァッ。

美奈代は深いため息をついた。

「メサイア隊の発艦準備。メサイア搭乗要員はブリーフィングルームへ」

冷たくそう告げる美夜の顔が、何だか悪魔より悪魔らしくさえ、美奈代には見えて仕方なかった。

ヒューストン解放作戦　第五話（後書き）

問い：最近、１話ごとの文字数が少ないのは？
答え：作者の精神状態が普通じゃない証拠です。どうか勘弁してください。

●●　本　題　●●

というわけで、Ｇ・Ｗ限定のキャンペーンやります！
題して「アホな作者を助けてやろう一大キャンペーン！」

――お前、このタイトル、死にたくならない？
という意見もあるでしょうが、ネタに詰まりきって死にかけてます！本気でヘルプ希望です！

新キャラクターと新型メサイアの設定、大募集中ですっ！

日本人だけじゃなくて、魔族の他にも外国の騎士やＭＣ、特に中国人、韓国人は大歓迎です！
国籍、読み仮名、所属部隊や階級などの細かい設定もいただけると涙モノです！

メサイアやメースも同様にお願いします。細かい設定や武装なんかも大歓迎です！
斬艦刀が異様に強いこの世界設定をひっくり返すほどの設定を是非、お願いします！
応募方法は、感想なり評価なりでお願いします！

●ワシントンD．C

「大統領はご満悦とはいかん」

アメリカ北方陸軍参謀長のオーウェル少将は、疲れ切った顔で首を左右に振った。

「当然だ」

マーカス海軍大佐が、グラスに注いだバーボンを手渡した。

「あれだけの犠牲が出ているんだ。しかも、未だに一部が暴れているんだろう？」

「ああ。ごくほんの一部だ」

オーウェルは、グラスを受け取ると、手の中でグラスを弄びながら答えた。

「すでに陸軍は残存兵力の刈り取りに大わらわだ」

「景気が良くて何よりだ」

「ふざけるな、マーカス……陸軍がどれ程の損害を出したと思っている」

「メサイアはかなりの数がやられたのは知っている。しかし、国内体制を“これからの戦い”に備えさせることは出来たろう？」

「……そこだけはな」

オーウェルはグラスをあおった。

喉から胃にかけて、食道が焼けるような錯覚が心地よい。

「……狩野粒子による影響は、すでに世界中に出始めている。世界で電子装備が不要になる日もそう遠くはあるまい」

「ＥＭＰ攻撃の復旧は進んでいると政府は発表しているぞ？」

「確かに進んではいるさ……だが、もうしばらくすれば、ジェット気流の高さまで巻き上げられた狩野粒子による電磁波が世界規模で被害を及ぼすことになる」

「……何だ、それは」

「空中に巻き上げられた狩野粒子が宇宙線の効果によって……まぁ、いい。とにかく、世界規模で見れば、俺達が棺桶に入ったら、墓場まで連れて行ってくれるのは霊柩車じゃなくて馬車になるだろうという話だ」

「そんなバカな！」

「本当の話さ。科学者連中が報告を上げてきた。狩野粒子が大量散布された地域から――丁度、反応弾が使用された地域から放射能汚染が広がるように、ジワジワと、狩野粒子の影響も広がるはずだと」

「チンクめ！」

「Ｘ－５１によるＥＭＰ攻撃と、狩野粒子攻撃はこれからだ。彼奴等の国こそ、石器時代にまで戻してやるさ」

「狩野粒子を？」

「空中散布用のタンク入りが大量に拿捕されている。そいつを使う。奴らのド頭の上に」

「……」

「ただでさえ十億を超える人口。それを何のテクノロジーも使わずに統治することは不可能に近い。我々は人を殺さずに、国家を殺す。それは、非人道的と非難されることのない、最も非人道的な行為だ」

「夢物語は良い」

マーカスはグラスにバーボンを注ぎ込んだ。

「直近の問題は、今、この大陸にいるあの薄汚いサル共をどうするかだ」

「陸軍のライフルマンは働いている。各地で都市を開放し、美女のキスの嵐を受けている」

「未だに解放されない都市がいくつあって、どれ程の猿共が我が物顔で我が国土の道を使っていると思っているんだ？」

「掃討は順調だ――一部を除いてはな」

「聞いているぞ？肝心のテキサスでは石油プラントがかなりやられているとか？」

「ああ……ジャップを釣るエサが細ると……逆に困る」
「どうするんだ？」
「毒には毒を――――聞いたことはないか？」
「意味がわからん」
「猿には猿をあてる――――本当に兵と石油を送って欲しければ、もう少し戦果を示せとな」

●“鈴谷（すずや）”
「なんだかんだ言って」
後藤は言った。
「中華帝国軍は、タダで米国から出ていくつもりはなかったワケだ」
「勝手に攻めてきたり、勝手に出ていくと言ったり……」
「あいつらがどれ程身勝手で迷惑な存在かわかったろう？」
「はい」
「撤退宣言が出た途端、北米の８割の州で中華系住民に対する暴行、リンチ、略奪――――それから、市民による不法移民の狩りだしが始まって、中華系住民の家や中華系資本の企業が焼き討ちされて、死者が数千人に上ったことだって納得出来るよな？」
「そ……それは」
「それが米国国民の報復――――そんなところだ。こいつぁ、長くモメるぜぇ？」
「……」
「犠牲者の数はこれから増える。ヒューストンで中華帝国軍相手に商売してたような連中は片っ端だろうな」
「どうしてそう、嬉しそうに言うんですか？」
「嬉しそうか？」
「はい」
「そうか……そいつはいけないなぁ……」

後藤は自分の顔を撫でると言った。
「とりあず、本題ね？中華帝国の精鋭部隊が暴れている」
「帰ってもらえばいいじゃないですか」
「油田採掘基地を壊しているんだよ」
「えっ？」
「北米産出原油の４割を生み出すテキサス州の油田だ。その採掘基地をぶっ壊されたとなれば、アメリカにとってはある意味、占領されているよりタチが悪い。
既に採掘基地がいくつか破壊されて、グレイファントムにもかなりの損害が出ている。
このままだと、採掘基地が全部破壊されて、アメリカは石油の海外依存率が跳ね上がることになるだろう」
「ってことは……」
芳（かおる）がポツリと言った。
「北米経由で日本に石油が入ってこない？」
「あの飛城のおかげで、ロシア経由のパイプラインが止まっているからね。大打撃さ」
「……うわっ」
「わかったろう？俺達が何しなくちゃいけないか」
「兵隊派遣してもらうために来て、石油売ってもらうためにさらに働く……」
美奈代は苦笑気味に言った。
「次は鉄鉱資源か何かですか？」
「スネるなよ。とにかく、事前情報だ。俺達が展開するのは、東テキサス油田と呼ばれる地帯の一角、世界第三位の石油会社であるスタンダードオイルテキサス（ＳＯＴ）社最大の石油精製工場付近。敵は少数の部隊に分散して、近くの部隊やメサイアを破壊しながら移動している。そのルートからして、精製工場が狙いなのは明らかだ」
「なぜ、すぐに叩かないのですか？」

「奴ら、米軍を自分達に引きつけようとしているのさ」
「米軍を？」
「ああ。正直、グレイファントムじゃ相手にならん。すでに、たった5機相手に30騎が撃破されている」
「……帝剣じゃないんですか？」
「俺もそう思った。だが……どうも違う気がするんだ」
「……どう？」
「それを確かめるのも」
後藤はニヤリと笑った。
「……お前達の仕事のうちってワケさ」

●テキサス州　某所
「本国から到着したばかりだというのに」
漆黒の騎体の胸部装甲が開き、コクピットから騎士が出てきた。
「もう撤退だと？」
病的に白い肌に赤みがかった瞳がギョロリと周囲を睨み付ける。
妖艶。
その言葉が彼女の形容を語るのに最も適しているだろう。
しかし、この生理的な嫌悪感を抱かせる気配は、彼女を見る者に、彼女という女性を、妖艶な美女と見せるより、
むしろ――蛇。
それを連想させてしまう。
中華帝国軍の戦闘服の上に取り付けられた5本線が、彼女が普通の騎士でないことを教えてくれている。
既に景色は夜の帳の中へと消えようとしていた。
彼女は、メサイア部隊が制圧したままの、谷間の集落の景色を一瞥した。

夜だというのに、灯り一つ点っていない。
誰も住んでいないのだ。
破壊されたままのドアや窓が、何があったかを教えてくれる。
「……ここは、どこの縄張りだっけ？」
「韓国軍です」
「あいつらぁ、どこ行ったんだい」
「ここから５５キロ先の集落に集結中。明日、南南西１６キロにある第６門（ゲート）まで移動する予定です」
ペッ
彼女は唾を吐いた。
「どうりでニンニク臭い……」
クンッ
彼女の鼻腔は、敏感にその臭いをかぎ取った。
「……死体臭いワケだ」
僚騎が投げかけたサーチライトに驚いたらしい、カラスが羽音を立てて飛び去っていく。
サーチライトの向こうには、何故か一軒だけ焼き払われた家の跡があった。
「孟」
彼女は通信装置に語りかけた。
「――――どうだい？」
「ヒドいもんでさぁ」
サーチライトの中に、戦闘服姿の男が出てくるなり、その厳つい肩をすくめて見せた。
「人間の形をほとんどトドメちゃいねぇ。ただ、サイズ加減からして、女子供もかなりでしょうなぁ」
「近くにチョコやタバコが転がってなかったか？」
「ゴロゴロ転がってましたよ」
男は拾ったタバコを口にくわえようとして、放り捨てた。
「キムチ野郎は、民間人懐柔するために、チョコやタバコ使うって

のぁ、噂で聞いてはいたんですがねぇ……」
「戻ってきな。丁、適当な寝床になる所はみつかったかい？」
「ペンションと思しき建物がありました」
姿は見えないが、懐中電灯の動きが暗闇の中でチラホラと動いて見える。
「室内は綺麗です。バーには酒もあるし……ベッドもフカフカだ。電力は……よかった、自家発電がある」
「よし……そこに“司令部”を設けよう。」
女はちょっとだけ嬉しそうに言った。
「１０時過ぎだ……となりゃ、美女は寝る時間さ。明日にゃ、私達も手ぶらで帰るんだし――史、騎体を移動させな」
「はい」
「ったく……津島紅葉が新型を投入したと言うから、“コイツ”を持ってわざわざ来たというのに」
騎体の震動を感じながら、彼女はぼやいた。
「折角のお披露目がパーかい」
「陳大校」
MC（メサイア・コントローラー）からアラーム付きで報告が入った。
「メサイア部隊が接近中――反応は2……いえ、6。増大中」
「グレイファントムか？」
「いえ……スピード、出力反応ともにグレイファントムの比ではありません……これは？」
「総員っ！」
彼女は弾かれたように怒鳴った。
「結界展開っ！ライトを消せっ！」
「姉御っ！？」
先程、焼け跡から出てきた男がギョッ！？となった顔で怒鳴った。
「た、戦わないんですかい！？」
「――冗談」
女はコクピットに潜ろうともせず、ニヤリと笑った。

「あたしゃねぇ。眠いんだよ」

●翌日早朝　“鈴谷（すずや）”

「昨日、空間異常が生じた集落跡付近を中心に、もう一度、捜索する」

美奈代はコクピットの中で言った。

「集落から１０分でＳＯＴの製油工場だ。敵が動くとなれば、夜明けが勝負だ」

「はぁい」

「……ったく」

美奈代は眠たげにあくびした後にぼやいた。

「夜間捜索で深夜まで飛んだ後、夜明け前に再出撃って……どこまで人使い荒いンダ。ウチの艦長は」

「文句言わないで下さい。私だって眠いんです。ジャンケンに負けて一番騎になった責任は、大尉にあるんですよ？」

「……反省します」

「不幸中の幸いは、風間中尉とペアになった位ですよ」

「斬込隊、前衛隊、狙撃隊の順番で捜索……ですから、部下に睡眠時間を与えられるだけ満足……風間、起きてる！？」

「……ほえ？」

「ほえ？じゃなくて、発艦前なんだから起きなさいっ！」

「……ご飯」

「帰るまでお預けっ！」

「そんなぁ……」

「フライトデッキコントロールより泉大尉、デッキステータス・グリーン。発艦、どうぞ！」

「了解――泉・牧野組、“死乃天使”、出ますっ！」

ヒューストン解放作戦　第六話（後書き）

というわけで、G・W限定のキャンペーンやります！
題して「アホな作者を助けてやろう一大キャンペーン！」

――お前、このタイトル、死にたくならない？
という意見もあるでしょうが、ネタに詰まりきって死にかけてます！本気でヘルプ希望です！

新キャラクターと新型メサイアの設定、大募集中ですっ！

日本人だけじゃなくて、魔族の他にも外国の騎士やMC、特に中国人、韓国人は大歓迎です！
国籍、読み仮名、所属部隊や階級などの細かい設定もいただけると涙モノです！

メサイアやメースも同様にお願いします。細かい設定や武装なんかも大歓迎です！
斬艦刀が異様に強いこの世界設定をひっくり返すほどの設定を是非、お願いします！
応募方法は、感想なり評価なりでお願いします！

ヒューストン解放作戦　第七話

かつて人口５００人を超えた、その小さな集落にたった一軒だけ存在したペンションにも、朝が来た。
朝特有の冷たく、そして心地よい空気が辺りを包み込む。
「ん～っ♪」
ペンションのドアを開け、心地よさそうに背筋を伸ばしたのは、陳大校と呼ばれた女だ。
無邪気に伸びをするその無垢な笑顔に、昨晩見せた邪気はない。
「やっぱり、朝の心地よさはどこでも同じだねぇ」
ヒクッ。
しかし、深呼吸の途中で、彼女は動きを止めた。
「……忘れてたよ」
落胆したように、しかめっ面で睨み付けるのは、ペンションの向いを少し行った所にある焼けた建物。
昨晩は気付かなかったが、明るいところで見れば、焼け残った壁に弾痕がくっきりと残っている。
「死体の処理位、しっかりやんなよ……キムチ野郎が」
「姉御。おはようございます」
道を歩いていた男が、彼女に気付いたらしく、小走りに駆け寄ってきた。
「ああ……どうしたい？妙に早いじゃないか」
「周辺をいろいろ……金目のモノなんて残っちゃいねぇ。家の中にゃ、頭潰された赤ん坊や、半分裸のオンナのミイラがあったりで……もう朝から……やめときゃよかったと」
「墓場泥棒なんてやろうとするからだよ、バカだね。朝飯済ませたか？」
「へい」
「なら、まだ寝てるヤツ起こしな。そろそろ、敵さんも動くよ」

「へいっ！」

“鈴谷（すずや）”を発艦した美奈代達が、その村の上空にさしかかったのは、それから３０分してのことだった。

「電波妨害があったのは、この辺でしたよね」

「ええ……破壊された集落があって……もう目の前が石油精製施設……まだ、施設に影響ないようですねぇ」

牧野中尉も首を傾げる。

「やたらデッカイ樹木がたくさんあるから……まさかセンサーが林を誤認したなんてありえないし……」

「“結界”が展開された可能性は？」

結界

この場合、魔力による防御系電波妨害行為を指す。

つまり、魔力に基づく磁界に近いフィールドを展開し、その中に存在するものを、外部からの探知より隠す仕組みだ。

ただし――

「まさか」

牧野中尉はそれを否定した。

「この“死乃天使”や“Ｄ－ＳＥＥＤ”、さらに“白雷改”が搭載しているセンサーがどれ程高いグレードかはご存じでしょう？探知する側の力が強かったら、結界は意味が」

ピーッ！

コクピットに警報が鳴り響く。

「ミサイル！？」

白煙を派手に上げながら自分達めがけて接近してくるのは間違いなく――

「ちいっ！」

火器管制装置（ＦＣＳ）が、ミサイルをロックする前に美奈代はビームライフルのトリガーを２回引いた。

ビーム光がミサイルに吸い込まれるように命中し、派手な炎の光が４つ、生み出された。
「ＦＣＳのサポートなしでミサイル撃ち落とす！？」
牧野中尉は唖然とするしかない。
「どういう人達ですか！？あなた達って！」
「私は凡人で、あっちは病人ですっ！」
「いいましたねっ！？」
「病人、変人、もとい、風間っ！」
「今、いろいろ、ひっかかりましたけど！」
「敵だ！ご飯食べたかったら頑張れっ！」
「はいっ！」
「……いいコンビですね」

「ミサイル、撃破されました」
「――やるじゃない」
陳大校は、コクピットでへぇっ。という顔になった。
「ＭＣ（あんた）達のコントロールでしょう？」
「ランダムプログラムを３０近く組んでいたので、弾道を予測されたとは――思えないのですが……」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）は、困惑した声で言った。
「まさか、あれを反射神経と動体視力だけで撃ち落としたなんて……」
「ははっ。面白いじゃないか――全騎。獲物のご来場だ」
「姉御、あいつぁ、一体、どこの騎ですか？」
「さぁね――どこだろうと」
陳大校はＳＴＲシステムに力を込めた。
「楽しませてくれりゃ、それでいいじゃないか！」

「敵、出現！数５っ！」
「どこからっ！？」
「擬装網を使っていた模様っ！１１時方向の谷の影っ！」
美奈代は“死乃天使”の騎体をひねった。
今まで、谷影にチカッと光が走ったかと思うと、すぐに敵の一撃が飛んできた。
騎体を捻り損ねていたら、“死乃天使”は今頃、胴体に巨大な風穴が開いていただろう。
近くをかすっただけで、騎体表面に加熱警報が出た。
「何て出力――風間、後方に回り込むぞ！」
「はいっ！」
“死乃天使”と“ＤＥＳＥＥＤ”の翼が開き、青白い光に包まれる。
その途端――

「馬鹿なっ！？」
陳大校は目を見開いた。
視界に捉えていたはずのメサイア２騎が、一瞬でどこかに消えたのだ。
「どこだ！？」
「後ろです！」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）が狼狽しきった声を上げた。
「後方、６時方向――後方から射撃！」
「――っ！？」
ズンッ！
幾重にも防御されているはずなのに、聴覚を失わせる程の音。
生きたまま挽肉製造器に放り込まれたかの様な激しい揺れ。
陳大校は、何かを叫んだかもしれないが、耳で聞き取ることは出来なかった。

「――っ、ううっ」
きーんとする耳を励起して、強く頭を振った陳大校は、聴覚が戻るより先に騎体を緊急離脱モードに入れた。
騎体情報の上では、騎体に損害はない。
だが――至近弾としても、今の爆発は一体!?
ハッ!となった陳大校は、戦況モニターを見た。
友軍反応は、ほんの少し前には、5騎だった。
それが、今では3騎に減っている。
肩を並べていた騎体が2騎、無惨な姿をさらしている。
「ま……まさか」
呆然として、陳大校は首を左右に振った。
「じ、冗談じゃないよ……この私の自信作を……かくもあっさり?」
「姉御っ!」
「どうしやすっ!?」
生き残った2騎が陳大校騎の前に立ちはだかり、彼女を守ろうとする。
その影に入ったせいだろうか。
彼女は我に返るなり、舌打ちした。
「――ちいっ!」
高度を下げた白いメサイアが2騎。
陽光を浴びて光り輝く装甲のデザインはどうだ?
メサイア開発に携わる者として、目の前に現れた白い宝石を、何と評する?
「冗談っ!」
陳大校は、脳裏に浮かんだ疑問を振り解いた。
その美しさに、一瞬でも見とれた自分が許せない。
「メサイアはねぇっ、見た目じゃないんだよ!」
「姉御っ!」
「孟、丁っ!」
「へいっ!」

「はいっ！」
「私の作品を信じるかい！？」
「へいっ！」
「当然です！」
二人は答えた。
「帝剣を作り上げた姉御だ！その姉御の最新作、“猛龍（こいつ）”に恐いモノなんてねぇっ！」
「そ、そうだっ！僕は世界最強のメサイアに乗ってるんだ！」
ガチガチガチ……
通信機に混じって聞こえる、そのかみ合わない歯の根の様な音が何か、陳大校は訊ねなかった。
「――いい子達だ」
陳大校は口元に厭らしい笑みを浮かべながらパネルを操作した。

“データ収集モード　展開”

そう書かれた三次元モニターが彼女の前に開かれ、孟と丁、2騎のステータス・データが表示される。
それだけではない。
表示されているのは、5騎分のステイタス・データを表示する項目。
つまり――

「……こ、これは？」

ピピッ

表示されたステイタス・データを見た途端、陳大校は絶句した。
「こ、こいつぁ一体、何者だっ！？」

「敵は新型、規定通り、データ収集してください」
漆黒の装甲に身を包んだ巨大なメサイアは、３０メートルを超える大型騎。
しかも、その装甲の分厚さというか、無骨さは帝剣のそれとは性格が違う。
帝剣は、間違いなく打撃系武器攻撃を被弾した際、ダメージを受け流すために曲線を多用している。
それに対して、この得体の知れないメサイアは、不思議と直線を多用しているのだ。
言ってみたら、箱の塊を身に纏っているような、奇妙に不格好なデザインとでも言おうか？
しかし、美奈代はどこかで、このデザインの理由に思い当たるフシがあった。
問題は、それが何なのか、喉の辺りまで答えが出かかっているのに、それ以上上がってこないことだ。
しかし、見たことのない敵であることは間違いない。
敵を見るなり、美奈代は牧野中尉にデータ収集を命じたのは当然なのだ。
「“鈴谷（すずや）”とのデータリンクは？」
「モニター、リンクしています。レベルＡ」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）で、目にも止まらぬ速さでパネルを操作しながら牧野中尉は分析結果をデータ変換していくが……。
「帝剣よりもパワー、トルクバランス……圧倒的に安定しています。別物に近いですけど……これって？」
「これって？」
訝る美奈代に、牧野中尉は奇妙なことを言った。

「私……“この子”と“よく似た子”と出会った覚えが」
その顔には、明らかな困惑が見て取れる。
「はっ？」
「津島より泉騎！」
通信装置一杯に入った元気な声は、間違いようもない。
「津島中佐！？」
「このデータ、間違いないわね！？」
「わ、私は何もしてませんっ！」
美奈代は怒鳴った。
「データいじれる程、器用じゃないですし！」
「脳みそないの間違いでしょう！？」
「ひ、ヒドい！」
「悔しかったら分析に使われているＤＳＳ言語喋ってみろっ！泉、風間両騎へっ！いい？これは厳命！」
「やだっ！」
「殺すぞ黙れっ！生きたまま脳みそ引き出される前に、１騎でいいから、可能なかぎり無傷で手に入れて！」
「そんな無茶な！」
「その無茶をやるのがあんたの仕事っ！風間中尉？成功したら都内の食べ歩きプレゼントしてあげる、泉大尉のお金で！」
「美奈代さん、ごちそうさまですっ！」」
「転職してやるぅっ！」」

「姉御っ！」
孟が叫ぶのと、その無骨な装甲が吹き飛んだのは同時だった。
脚部に仕込まれた巨大なアイゼンが地面に突き刺さる。
装甲――そう見えたのは、実はパネルに覆われた箱と、その中にびっしりと埋め込まれた筒の塊――違う――ミサイルの塊（ランチャー）だ。

「至近というより、危険距離ですが、やってみせますっ！バイザー下げてください――――吹っ飛びますぜぇっ！？」

孟はトリガーを引いた。

その直後、騎体が爆発したのかと思う程、派手か光と煙が孟騎の全てを包み込む。

放たれたミサイルの集団が、白いメサイア達めがけて襲いかかる。

全ての音と色覚を無に染め上げる。

連続した爆発が白い光の塊となって、やがてはキノコ雲まで作り上げた。

「や、やったか！？」

その衝撃の強さから、モニターもセンサーもパニックから解放されていない。

本来、数キロから数十キロの広域殲滅用の攻撃システムを、わずか1キロ足らずに存在する相手に使用したのだ。

“そういう目的”用にセッティングされた機器類も、想定外の近さに耐えられなかった。

開発者に言わせれば、悲鳴を上げるなとう方が無茶な使い方だ。

あれ程、“派手”にやったんだ！

だから、敵だって“派手”に吹っ飛んだに違いない！

心の底から沸き上がるそんな自信が、孟にはあった。

どんなヤツだろうと――――この“派手”さの前には！

ノイズばかりのモニターが、やっと映像を浮かび上がらせようとしている。

「……へへっ」

モニターが映し出すのは、孟の思う、“派手”に吹き飛んだ敵の惨状でしかない。

孟は、そう思うと、愉快でしかない。

しかし――

回復しはじめた孟騎のモニターが映し出したのは、自らめがけて突き進んでくる何か――。

それを理解する前に、孟は、その“何か”に体を貫かれて絶命した。

「……まぁ、これで」

ズシャッ

コクピットブロックに突き刺した斬艦刀を孟騎から引き抜き、美奈代は言った。

「浅くコクピットブロック破壊しただけだし……いいわよね？」

「私も、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）だけですし」

孟騎の額から同じく斬艦刀を引き抜いた袴子が頷いた。

「文句言われたくないです……もっと被害が少ないのが必要なら」

「……そうね」

二人が同時に見たのは、丁騎だ。

「ば……バカな」
全てを見ていた丁は、泣きながら、目の前で起きた現実を受け入れることを拒んだ。
「そ……そんなこと……出来るはずが……」
あのミサイル攻撃の雨――――違う！
ミサイルの面攻撃をかいくぐるなんて、反則だ！
だけど――――
敵騎は2騎とも、孟騎から放たれたミサイルを、難なく回避しきって、孟騎を喰った。
そう。
敵騎は、あの面で敵を叩く攻撃を避けきったのだ！
そんな非常識な！
「あ、姐さんっ！」
丁は泣きながら叫んだ。
「ど、どうすれば！？」
「自分で考えな！」
陳大校は怒鳴った。
弱い男は嫌いではない。
ただし、ベッドの中で弄ぶ時だけだ。
こんな時に弱さを出す男に用はない。
そんなヤツが側にいると思うだけで反吐が出そうだ。

「奥の手使っちまうんだよ！男だろう！？こんな時ぁ、張るんだよ！」

「は、はいっ！」

ヒューストン解放作戦　第七話（後書き）

というわけで、G・W限定のキャンペーンやります！
題して「アホな作者を助けてやろう一大キャンペーン！」

――お前、このタイトル、死にたくならない？
という意見もあるでしょうが、ネタに詰まりきって死にかけてます！本気でヘルプ希望です！

新キャラクターと新型メサイアの設定、大募集中ですっ！

日本人だけじゃなくて、魔族の他にも外国の騎士やMC、特に中国人、韓国人は大歓迎です！
国籍、読み仮名、所属部隊や階級などの細かい設定もいただけると涙モノです！

メサイアやメースも同様にお願いします。細かい設定や武装なんかも大歓迎です！
斬艦刀が異様に強いこの世界設定をひっくり返すほどの設定を是非、お願いします！
応募方法は、感想なり評価なりでお願いします！

ヒューストン解放作戦　第八話

「敵、動きます」
牧野中尉の言う通り、狙いを定めた騎がホバー移動で美奈代達と間合いを取りはじめる。
先程撃破した別な1騎と共に守ろうとした騎は、大きく後方に跳躍した。
「どうします？」
祷子が訊ねた。
「どちらか1騎、私が引き受けますか？」
「どっちでもいいけど」
美奈代は言った。
「さっき見たいな玩具（おもちゃ）が側面から出たら困る。2騎で行く」
「はい」
祷子が頷いたタイミングと、ホバー移動を開始した敵騎に変化があったのは同時だった。
「？」
祷子が首を傾げたのも無理はない。
ホバー移動をかける敵騎の首がハリボテじみたボディーの中へめり込んだのだ。
それだけではない。
背面からせり出してきたヘルメットのような装甲が、それまで頭部のあった場所を覆い尽くしたのだ。
「……なんですか？あれ」
「段ボールにお釜乗っけたら、あんな感じかしらねぇ」
「ふふっ……美奈代さん、表現が上手いです」
「とどのつまり」
美奈代は言った。
「――――何考えてるのかしら」

「仕留めればわかりません？」
「多分ね」

二人の前で、装甲板が吹き飛んだ。

孟のとは違う。

あっちは遠距離制圧型だけど、こっちは――

丁は2騎をロックオンすると、すかさずにトリガーを引いた。

ミサイルが発射されるなり、その弾頭が砕け散り、無数の子爆弾が2騎めがけて飛びかかる。

そう。

こっちは近接防御用の集束弾（クラスター）タイプのミサイルだ。

孟の一撃より、回避は絶対に困難だ。

だから――やれる！

丁は、何度も自分にそう言い聞かせる。

やれる！

やれるんだ！

解放された子爆弾が爆発の連鎖を引き起こす。

やったか？

違う！

ここで気を抜いたらダメだ！

孟は、ここで気を抜いたから――死んだんだ！

僕は、同じ目には遭いたくない！！

だから――

だからっ！

丁はジグザクに後退を続け、あの集落の中まで飛び込んだ。

住宅が、あのペンションまでが、ホバーのエネルギーで跡形もなく吹き飛ばされる。

丁はそんなことお構いなしだ。

「て、敵はっ！？」

「バカっ！上だっ！」

「上っ！？」

陳大校の声に弾かれたように、丁は両方の腕を空に向けた。

まだ発射していなかった腕部ミサイルランチャーを発砲。

空中めがけて子爆弾の雨を降らせる。

「――っ！」

陳大校の怒鳴り声が、爆発音に掻き消された。

遅い！

丁の耳にはそう聞こえた。

だけど……何が？

ズンッ！

「っ！？」

ピーッ！

鋭い音と警報が走り、騎体に鈍い音が走った。

「腕部損傷っ！」

ＭＣ（メサイア・コントローラー）が警告する。

「両腕部切断！動力、油圧切断します！ＰＡＳＴシステム、パージッ！」

バンッ！

切断された腕部からあふれ出たオイルが、切断された電圧部から噴き出した火花が引火。

炎に包まれた腕部が、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の手によって上腕部の根本から爆破切断された。

グシャンッ

ガラッ！

奇妙な音がして、騎体の足下へ腕が落ちる。

その音が合図だったかのように、白い２騎が丁騎へと襲いかかった。

「！？」

丁は驚愕するしかなかった。

僕は騎士だ。

弾丸だって見切れる！

その訓練だって受けているんだ！

なのに！？

――メサイアの動きが……見えなかった。

「脚部っ！」

両脚が切断され、騎体が奇妙な感覚と共に落下。
地面にひっくり返った。
ドンッ！
「……くうっ！」
衝撃が騎体を通じて、背中に走った痛みに歯を食いしばった丁は、コクピットの脇にあったレバーを引いた。
「まだだぁっ！」

「っ！？」
騎体が爆発した。
美奈代達にはそう見えた。
とっさにシールドを構えるその向こうで、爆発の中から何かが飛び出してきた。
「前方――敵騎出現っ！」
「馬鹿な！？」
美奈代は叫んだ。
「今までのは何だったんですか！どこにいたんですか！？」
「こ、これ……私の推測ですけど……」
牧野中尉は言った。
「……強化骨格装甲」
「何です？それ」
「メサイアがすっぽりおさまるサイズの追加装甲です」
牧野中尉は答えた。
「あの戦争で、大型妖魔対策に開発されて、実用化される前にお蔵入りした計画の産物です。要するにメサイアに、一回り以上大きい着ぐるみを着せているような状態です。着ぐるみ部が破損したり、消耗したら、随時パージしてゆくことで身軽になっていく……」
「ダメージを回避する回数を増やして、その分、生存率を高めようと？」

「ええ。ただし、機動性が恐ろしく落ちてしまい、移動砲台としてしか役立たないことから、計画の段階で断念されて……」
「あのずんぐりむっくりは、その着ぐるみ部で、あいつはその中身だと？」
「……そう、なります」
「とにかく、仕留めるぞ！風間っ！」
「はいっ！」

「姐さんっ！」
「……」
「ぼ、僕、もうここまで頑張ったんです！もういいですよね！？」
「……ああ、いいさ」
陳大校はニヤリと笑った。
「よくやったよ。ご褒美だ。“例のレバー”を引いて、脱出用スラスターを作動させな――それで“楽”になれる」
「あ、ありがとうございますっ！」
「敵をよぉく引きつけて、ギリギリで使用するんだ。いいね？焦るんじゃないよ？」

正直、美奈代達に迷いがなかったわけではない。
――可能な限り無傷で。
その中に、この1騎を加えるべきか。
つまり、この敵を無傷で仕留めるべきか。
それを二人共、判断に躊躇したのだ。
外見は、単なる赤兎。
大した獲物じゃない。
だけど――

MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）の情報

それだけは確保しておきたかった。

MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）には、メサイアの全ての情報が入っている。

擱座した場合、半ば自動的に内部データが破壊されるように出来ているが、大抵はMC（メサイア・コントローラー）の手動破壊だ。

MC（メサイア・コントローラー）が破壊を実施する前にMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）の情報を手に入れられれば！

そんな、都合のいいことを思っていたのも事実だ。

ガンッ！

美奈代の斬艦刀が腕を切断。

ザンッ！

褄子が左足を切断した。

「ひっ！？」

悲鳴がでかかった丁は、指定されたレバー、黄色と黒のストライプに塗られたレバーを、すがる思いで引いた。

緊急時、メサイアの全出力を利用して、戦域から脱出する、俗称“消失トリック”をさらに強力にしたものだと聞かされている。

逃げることが大切。

逃げることさえ出来れば――死なずに済む！

丁は死にたくなかった。

祖国には恋人がいる。

家族がいる。

逢いたい人がたくさんいて、食べたいものがたくさんある。

死にたくなかった。

だから、丁は、自分を助けてくれるレバーを引いた。

ピッ

メインモニターが真っ暗になったかと思うと、真っ赤な文字の列が表示された。

『自爆装置作動中　自爆まで０３秒』

「……えっ」

文字を読み終わるのと、カウントが０秒をさしたのは同時だった。

ヒューストン解放作戦　第八話（後書き）

今回のメサイアの元ネタは、爆弾蛙様からいただいた拠点強襲型装備を参考にさせていただきました。改良型は、これから別な国の騎体で活躍させます。爆弾蛙様、ご希望の国や、他にもアイデアがありましたら是非、教えて下さいね？

みなさまのアイデア大募集中です。

よろしくお願いしますっ！！

功績の代償　第一話

●“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ

「……で」

正座した――というか、させられた美奈代と祷子の前で、苦い顔をしているのは紅葉だ。

「敵の自爆は許すわ、流れ弾で石油プラント吹っ飛ばすわ……」

「「……」」

美奈代と祷子は、互いに目配せした後、小さくなった。

「「ですけどぉ……」」

「あんた達、何考えてるのよ。プラントの損害賠償請求されたら、近衛の予算なんて吹っ飛ぶわよ？」

「ど、努力はしたんですよ？」

と、美奈代は言った。

「騎体の損害を最小限に収めようって……まさか」

祷子も無言で頷く。

そんな二人が、ちらりと横を向いた視線の先。

そこには、装甲のあちこちに穴が開いて焼けこげた“死乃天使”と“Ｄ－ＳＥＥＤ”のシールドがあった。

「ったくさぁ」

ポリポリと紅葉は頭を掻いた。

「スペシャルカラーなのよ？ボディの再塗装だけで普通の何倍かかると思ってるの」

「……あのタイミングで自爆するなんて、予想しろという方が無茶です」

「ったく」

腰に手をやった紅葉が睨み付ける中、シールドの交換作業が進んでいる。

「さっさと仕留めないから、こういう様になるのよ。撃破した４騎

の自爆を許した挙げ句、1騎はのうのうと逃げられるなんて……」
「それこそ」
祷子は言った。
「あの爆発の中ですよ？」

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「まぁ」
後藤は言った。
「あの二人だから逃げられた――――んな所でしょ？実際は」
「……否定はしない」
紅葉は、コーヒーにたっぷりクリープを入れながら頷いた。
「何故、あそこで自爆したのか。しかも、騎体のほとんどを焼却するハイパーナパームを騎体内部で爆発させるなんて、普通じゃない」
紅葉が苦い顔になったのは、別にコーヒーのせいだけじゃない。
あの時起きたことを思い出したのだ。

あの時――――
両腕と右足を切断された赤兎によく似たメサイアが地面に倒れた。
紅葉でさえ、これで終わったと思った。
コクピットから騎士が出てきて、国際騎士法に基づいた捕虜待遇を要求するか、それとも逃げ出すか。どちらかだと思った。
ところが、騎体は瞬時に紅蓮の炎に包まれ、数十キロ離れた“鈴谷（すずや）”の艦橋からも肉眼で確認できたという巨大な火柱が立ち上った。
普通の騎士だったら、あの爆発に巻き込まれて骨も残らなかったろうが、爆発とほとんと同時に脱出機動をやってのけた美奈代達の技量は、本気で敬意に値する。
それは紅葉も認める所だ。

「……んで？」
後藤は先を促した。
「敵に心当たり、あるんでしょう？」

「――――ある」
紅葉は頷いた。
「データはラボのライブラリーの中。探すの大変だからやらないけど、昔、アメリカのマーティン社が南米戦線向けに開発した追加武装計画に、強化骨格装甲って概念があったのよ」
「強化骨格装甲？」
「歩兵向けのパワードアーマーや、現場作業に使われているパワーローダーみたいなもの。しかも、三段構え」
「まさか、人間の代わりにメサイアが？」
美夜が、ちょっと呆れた。という顔になった。
「そんなもの、役に立つの？」
「さすがに装甲は重すぎるって理由でオミットされて、外装部はロケットランチャーのコンテナになったのよね。
一番外側にある第一装甲部が目標掃射用のクラスター弾コンテナブロック。
こいつの集中射撃で妖魔の集団突撃を阻止して、発射終了次第、外装をパージ。
第二外装部が、“白雷改”第四種装備並のフルアーマー。
装甲を消耗次第、各部を廃棄して、最後にどうしようもなくなったら、本体だけ脱出できる第三外装部の脱出用システムで戦域を脱出させるって」

「そいつぁ……」
後藤が感心したように言った。
「ゼータクな装備だなぁ」

「でしょう？」
紅葉も頷いた。
「重すぎてメサイアは戦闘機動が出来ないし、一々ランチャーから何から、高額なパーツを捨てることが前提でしょう？あんまりに無茶だって、費用対コストを理由に、ペーパープランの段階でお蔵入りしたんだけど……不幸な事に、あれを本気で作ろうとしたバカを一人知ってるのよ。私」
「へえ？」
「ロシア帝国のローマイヤ。あの対抗馬に、強化骨格装甲システムを取り込もうとしたお馬鹿さんをね」
「ロシアの対抗馬ってことは……中国かい？」
「そう。陳蒼碧技術大校……私には理解できない程のマッドサイエンティストよ」
「……」
「……」
「……何？その気の毒な人を見るような視線は」
「いや……自分を知った方が良いっていうか」
後藤はわざとらしく咳払いした後に言った。
「その気の毒な人ぁ、何でローマイヤ相手にそんなシステムつけようとしたんだい？」
「さぁ？」

紅葉は肩をすくめた。
「日本アニメや特撮ファンで、中国でイベントあると必ず参加していたオタだっていうから、合体モノの影響じゃない？」
「それでよく、軍に残れるんだねぇ」
「中国では最高峰の五本線だからね」
紅葉は胸につけた六本線を軽く指で弾いた。
「その上……帝剣、赤兎の実質的な生みの親だし」
「へえ？」
「確か……猛龍とかいうペットネームがついていたわね……まぁ、私は、強化骨格装甲システムよりその中身の方のデータが欲しかったんだけど」
「中身？」
「仮称コード“シュトゥーテ”。私は“馬刺”って呼んでやってたんだけど……」
紅葉は不機嫌そうにコーヒーを飲み干した。
「目の前で、手に入る直前で灰になっちゃった」
「あら？“シュトゥーテ”って……確か」
「艦長、多分その通り。次期ロシア帝国軍主力騎として配備が進んでいるヤツ」
「電子装備以外の面では、グレイファントムシリーズ全てを凌いでいると聞きますけど？」

「その通り。あれの基本設計は全て陳大校の作品。彼女がロシアのアカデミーに参考作品として売り飛ばしたのを、ロシアが改良の上で採用した――つまり、灰になっちゃったのは、私でもそうそうは関与出来ない最高機密なのよ」

「灰になってハイ、さようなら」

……つまらねぇな。我ながら。

後藤は苦笑いしながらコーヒーカップをデスクに戻した。

「そんなにすごいのかい？その“シュトゥーテ”ってのは」

「あのオタとチンク共が、“シュトゥーテ”の開発と発展だけに力注いでいたら、アメリカはこんな短期間で北米大陸を奪還できなかった。それは保証できる」

「……へぇ？」

「中華帝国が、次期主力騎コンペで、“シュトゥーテ”に失敗作の烙印を押して、帝剣を採用したのは褒めるべき出来事だし、何より、あの変人自身が、強化骨格装甲システムなんてアホなシステムのベースに限定してあいつの開発を止めてくれたことについては、ノーベル賞並の功績だと思っている」

「世界最高峰と呼ばれる津島紅葉にそこまで言わせるとはねぇ……」

「流出した映像は見たことあるのよ。私が見る限り、量産性と汎用性、双方をあのレベルで昇華させた騎体は、ちょっとない」

「じゃあ、もし」

美夜が訊ねた。

「その“シュトゥーテ”が中華帝国軍で大量量産されたら、戦況は？」

「グレイファントムの後継騎が“シュトゥーテ”と張り合えなければ、米軍に次はない」

「まさか！」

「ビームライフルや斬艦刀っていう武装が勝っているだけでね？艦長」

紅葉はニヤリと笑った。

「騎体性能だけなら、近衛（うち）だって、うかうかしてられないのよ？」

へーっくしょいっ！

ハンガーデッキに派手な音が響き渡った。

「大丈夫ですか？」

整備兵が心配そうな顔でコクピットブロックをのぞき込んだ。

「ああ……誰か、噂してんのかねぇ」

ズズッ

鼻をすすりながらコンソールパネルを叩き続けるのは、あの陳大校だ。

「こりゃ、いい噂じゃないねぇ」

「何時間もコクピットに籠もりっぱなしじゃ、体こわしますよ？」

整備兵が心配しているのは、陳大校が北米大陸から門（ゲート）経由でこの基地へ帰還してから、既にコクピットブロックに籠もることが１０時間近いことだ。

「仕方ないだろう？」
陳大校は言った。
「ＥＭＰのおかげで、研究所の装備が粗方、おじゃんなんだから」
「建物の改装工事中で、対ＥＭＰパネル外している最中だったと聞きましたけど」
「ああ……というかね」
手を止めることなく、陳大校は答えた。
「研究所の電源が壊れてるんだよ……あそこが使えないなら、データをため込んだこのメサイアの中だってどこだって代わりゃしないさ」
「……はぁ」
「それより、もってきてくれたかい？」
「はい。軍施設のスパコンとのデータ接続します。一度、システムを止めてください」
「――――あいよ」

強化骨格装甲システムが外された猛龍の各部パネルが外され、極太のケーブルが接続される。
この施設のスーパーコンピューターと猛龍のシステムをリンクさせるための措置だ。
騎体を一度降りた陳大校は、チューブ入りの栄養ドリンクを飲みながら、その光景を眺めている。
「陳大校」
その彼女の後ろから声をかけてきたのは、この基地の司令官、紅少将だ。
「……その、困るんだけどな」
はげ上がった頭に汗をかきながら、彼は恐る恐るという感じで言った。
「基地の資材を私用に使われては」

「……は？」
「だから、基地の資材をだね」
「私的……ですか？」
「い、いや……あの」
「党親衛隊専属顧問の私の行為が私的だと、そういうのですか？」
「いや、そうじゃないっ！」
王政党の名を出された彼は真っ青になって弁明し始めた。
「申請が、個人で使用となっているからだね！」
「私は個人で動いていません」
陳大校自身としては、冷静に。となるだろうが、言われた方は、まるで邪悪な蛇に巻き付かれたかのような錯覚さえ覚えてしまう。
体に言い様のない寒気を覚えながら、彼は言葉を待つしかない。
「私の動きは党の動き……私の意見は党の意見……」
「そ、そうだな！」
膝をがくがく言わせながら、彼は震える舌を動かした。
「いや、個人なんて申請書のミスがいけないんだ！いいから、好きなように使ってくれたまえ！」
「……お借りした部下を失ったことは残念に思いますわ」
「いや！名誉の戦死だ！党のため、国のために死ぬことは、彼等だって厭うことはないだろう！」
「――――では、そういうことで」

便利なものだな。
陳大校は思う。
王政党親衛軍専属顧問。
別に何をするわけでもない。
党の気に入るようなメサイアを作ってやれば、それだけで向こうから勝手にやってきた肩書きだ。

あんなローマイヤなんていう、ロシア人の作った出来損ないに、そこらの部品を組み込んでやっただけの、あんなやっつけ仕事が功績だなんて、笑ってしまう。

帝剣なんて、あの小娘の作品と比較する価値もない。

それにしても……。

あの騎と、自分も戦っておけばよかったかな？

そんなことを思ってしまう。

否。

データはとれたんだ。

無駄なリスクは冒すべきではない。

……だが、

「……日本軍は今頃」

そう。

母艦を含む日独の船団が北米大陸を離れたと聞いた。

そうすれば、次にあの2騎と出会うのはいつになるかわからない。

次に出会った時、再び相まみえる機会があるかわからない。

おしかったかな。

そう思う。

ケーブルの接続が終了したらしい。整備兵が騎体から降りてくる。

「……まぁ、いいか」

まだ、終わったわけではない。

機会がなければ作るまでだ。

陳大校は、空になったチューブをダストボックスに放り込むと、コクピットブロックに向かって歩き出した。

以降、少し話を戻す。

サリューンを始末した後、
「よく帰ってきた」
母艦に戻ったティアリュートを出迎えたのはユング少佐だった。
コクピットから出たティアリュートは、出撃前と艦内の空気が違っていることに敏感に気付いた。

周囲の視線だ。

金のために動くことを裏切りとはいわない。
それが傭兵だ。
しかも、サリューン達への攻撃命令は誰も出していない。
それなのに、何故、撃った？
お前は一体、何様だ？

傭兵達は、そんな言葉を視線に込めてくる。
そんな中、彼は部下である傭兵達を押しのけながらティアリュートへと近づくなり、その腕をとった。
「とにかくこっちへ」
その有無を言わさぬ態度に、ティアリュートは従うしかなかった。

「――――やったことが間違いだったとは言わん」

ハンガーデッキから居住ブロックに通じる通路で、彼は苦々しげに言った。
「サリューンの奴が、金に目がくらんで我々を裏切ったのは間違いない」
「……」
「ただ、命令もなしにやったのは拙かったな」
「そうでしょうか？」
「ん？」
「敵の包囲網の中です。あのままなら、命令を待たずに殺されていたはず。
人類にみすみすなぶり殺しにされる位なら、“同僚”として、“楽”にしてやる方が、余程慈悲深い行動だと思いますが？教官」
「助けることは出来たはずだ」
「２０騎近い敵の包囲網に単独、しかも損傷状態で残された騎を助けに？」
「……私は、お前の育て方を間違えたようだな」
ユングは苦笑しながら、ポケットに両手を突っ込んだ。
「それとも、お前が傭兵の色に染まったか？」
「職種不問の共通原則だと思います。自殺するために戦ってるわけではありません」
「それが答えか？」
「何とでも」
「まぁ、いい」
ユングは言った。
「この大陸での人類同士の戦争は、あと数日でケリがつく」
「……は？」
「現地政府軍が、侵略軍の本拠地に奇襲攻撃をかけた。陥落は目前だ」
「……」
「艦は城へ戻るし、我々もこの艦を離れる。ただし、お前とユース

ティア、それとフレイは別だ」
「別……とは」
「あの狂姫に預けることになった。この艦に残れ。以降、お前達の雇い主はユギオ様からダユー様に移る」
「えっ？」
「狂姫様が、専属のメース隊を編成する上でお前達をお望みだ。お前は、その隊長だ。それと、お前に預けるはずだった部下達も、おっつけ送ることになる」
「し、しかし」
「立場が上がったんだ。少しは喜べ」
ユングはポンッとティアリュートの肩に手を置いた。
「どんなご託並べても、戦友殺しのお前を、部隊に置いておくことは出来ん」
その声は、ティアリュートが候補生時代から今まで、彼の喉から出た声として聞いた、どんな言葉よりも重かった。
「味方を殺すのは――傭兵の間でも、そいつはタブーだ」
「で、ですから」
「介錯ってのはな？やったほうの自己弁護にしかとられない。そういうものだ」
「……」
ティアリュートは何とか反論を試みるが、言葉が思いつかない。
ただ、口をパクパクさせるのがやっとだ。
裏切り者としての殺意がなかったわけじゃない。

だが――
何故、撃った？
その理由が、今となっては自分にもわからない。

「……教え子が便所で背中を刺されて死んだなんて訃報は聞きたくない。サリューンは、傭兵仲間でも顔役だった。

奴を慕っている奴は、俺の部隊でもごまんといる。
今夜は、ユースティアと一緒に医務室にいろ。あそこならまだ安全だ。武装を忘れるな？」

そう言われて、ティアリュートは律儀に武装したまま、医務室で一晩を過ごした。
「経過は順調ですよ」
北米から美奈代達が撤退を開始した後になっても、ユースティアの目から包帯がとれることはなかった。
すでにティアリュート達は日本本土上空を通過。そろそろ飛城へ帰還する頃だ。
「少尉のようなカリュート族は、暗視能力がある分、強い光には弱いですからね」
ユースティアの目の具合を確かめた軍医は言った。
「視力が少し落ちるかもしれませんが、一時的なものです――ああ、明日までの我慢です。メースの運用に支障はないでしょう」
ほうっ。
ティアリュートの口から安堵のため息が漏れる。
「……申し訳ありません。ティアリュート様」
すっかりしょげたままのユースティアが伏し目がちに言った。
「私の失態で、ご迷惑を」
「……いいのよ」
ベッドの上に腰を下ろしたユースティアの前でしゃがみ込むと、ティアリュートはそっと膝の上に並べられた彼女の手に、自分の手を重ねた。
「いい？ユースティア。私達は、傭兵隊から離れる」
「……えっ？」
「傭兵隊から、この天壇の主、ダユー様のために働く護衛隊へ立場が移された」

「そ、それって……」
「心配しないで」
キュッ。
ティアリュートは、驚くユースティアの手を優しく握った。
「私達がクビになったんじゃない……抜擢されたのよ」
「抜……擢？」
「そう。ダユー様が、私達の活躍をみこんで、抜擢してくださったのよ」
「……」
抜擢。
それはティアリュートの思いこみかもしれない。
単なる思い上がりかもしれない。
しかし、ここでユースティアを安心させるために、何と言えばいいのだ？
「仲間も増えるし、この天壇の、しかもダユー様の護衛隊なら、名前も売れる。私達は部隊として動くから、あなたにも頑張ってもらうわよ？」
「――――はいっ」
きゅっ。
ティアリュートは、握り返してきたユースティアの手の温かさを感じつつ、力強く頷いた。

ただ――――

それしか出来ない自分に、ティアリュートは、沸き上がったやり場のないいらだたしさを押さえるのがやっとだった。

功績の代償　第一話（後書き）

というわけで、G・W限定のキャンペーンやります！
題して「アホな作者を助けてやろう一大キャンペーン！」

――お前、このタイトル、死にたくならない？
という意見もあるでしょうが、ネタに詰まりきって死にかけてます！本気でヘルプ希望です！

新キャラクターと新型メサイアの設定、大募集中ですっ！

日本人だけじゃなくて、魔族の他にも外国の騎士やMC、特に中国人、韓国人は大歓迎です！
国籍、読み仮名、所属部隊や階級などの細かい設定もいただけると涙モノです！

メサイアやメースも同様にお願いします。細かい設定や武装なんかも大歓迎です！
斬艦刀が異様に強いこの世界設定をひっくり返すほどの設定を是非、お願いします！

功績の代償　第二話（前書き）

G・W限定のキャンペーンやってます！
題して「アホな作者を助けてやろう一大キャンペーン！」

――お前、このタイトル、死にたくならない？
という意見もあるでしょうが、ネタに詰まりきって死にかけてます！本気でヘルプ希望なんですが……ほとんど応募内ですね……ははっ（号泣）
話がつまんなくてスルーされてるのかなぁ。

新キャラクターと新型メサイアの設定、大募集中ですっ！

日本人だけじゃなくて、魔族の他にも外国の騎士やＭＣ、特に中国人、韓国人は大歓迎です！
国籍、読み仮名、所属部隊や階級などの細かい設定もいただけると涙モノです！

メサイアやメースも同様にお願いします。細かい設定や武装なんかも大歓迎です！
斬艦刀が異様に強いこの世界設定をひっくり返すほどの設定をG・Wの記念に投稿下さい！
是非、お願いします！

功績の代償　第二話

●太平洋上空　“鈴谷（すずや）”

「中華帝国軍の北米からの撤退は」

演壇に立った後藤が言った。

「3日遅れで完了したが、撤退の理由は……極めて面白い」

後藤はコキコキと肩をならした。

「平和十字軍は知っているな？」

「あの反戦団体の？」

「そうだ……いろいろ中華帝国と癒着があるという“ウワサ”があったアイツ等だ」

「……それが？」

「戦争で被害を受けた各州政府に働きかけて、中華帝国軍との“仲介役”に成り上がった」

「はい？」

美奈代達は、きょとん。として互いの顔を見合ってしまった。

無理もない。

平和十字軍（ピース・クルセイダーズ）は、東南アジア戦線への米軍派兵に強く反対すると同時に、米国至上主義を掲げる団体でもある。

アメリカは、神に祝福された神聖なる国家である。

彼等の価値観の根底にあるのは、そんな発想だ。

神に祝福された。

神聖なる。

そのはずの国土が侵されたことを激怒して、団体構成員は、志願兵にでもなっているのかと、美奈代はてっきりそう思っていた。

ところが……。

「何ですか?その仲介役ってのは」
「中国出身者が、中華帝国軍上層部、あるいは中華帝国首脳部に州からの撤退してもらうよう、口を利いてやるってわけさ。何しろ、中華帝国軍が暴れていても、連中とコンタクト出来る窓口を合衆国政府ならともかく、それぞれの州単位の政府が持っているはずがない。だから、平和十字軍がコネ使って口利きやった」
「そ、そんなのが役に立つんですか?」
「ああ……中華帝国政府と州政府のメンツを立てた上で手打ちでシャンシャンだ」
「嘘っ!?」
芳(かおる)が思わず素っ頓狂な声を上げた。
「だ、だって、北米戦線で何万人死んでると思ってるんですか!?」
「死人の数なんてのぁ」
後藤は顔色一つ変えずに言った。
「書類の上じゃ、単なる数字だ」
「……人の命を、何だと思って」
「俺に怒るなよ。だけど、別にアメさん達だけじゃないぜ?俺もお前達でさえ、死んじまえば、どの国のお上にとってもだが、戦死者のリスト上の数でしかない」
「……」
「こんな仕事させておいて何だけど、退職金と恩給もらうまでは死なないこった」
「隊長、それで、その平和十字軍が州政府と中華帝国政府の間に立つことで、何故互いのメンツが立つのですか?」
質問したのは寧々だ。
「簡単さ」
後藤は答えた。
「中華帝国軍は撤退の口実が出来る。米国民から懇願された。我々は傲岸なる彼等を戒めるため、北米大陸へ討伐軍を送り、そして彼等の軍を蹴散らした。我が軍の毅然さ、勇猛さ、そしてその正義の

美しさの前に、かの国民は自らの過ちに気付き、自らの非を、そして愚かさを認め、泣いて縋って謝罪した。我々は寛大な心でそれを許し、軍を引くことになった」

「……やりすぎって気はしますけどね」

美晴はきょとん。とした顔で言った。

「そんなに芝居がかったアドリブが出来るなら、隊長、講談師か中華帝国政府のスポークスマンにでもなられたらいかがです？」

「イヤだなぁ……こいつぁ、俺じゃなくて、本物の中華帝国政府のスポークスマンのセリフ」

「はぁっ？」

「昨日ね？北米討伐戦争――中華帝国政府の、この北米戦線の呼び名なんだけど、その勝利宣言が出された。その宣言の要約さ」

「あれで勝ったというんですか！？」

「驚いたろう？俺もびっくりさ。でも、連中は勝利宣言出したし、はっきりとした反論は、米国政府からは出ていない」

「な……っ！？」

「意外だろう？でもな？アメリカは連邦国家だ。

州政府があって、合衆国がある。

そして、合衆国政府は、各州と州民を、国家の一部として守る義務がある。

言っていることは、わかるな？」

「そりゃ……まぁ」

美奈代は頷いた。

神奈川県が中華帝国軍に襲われたら、日本政府が県と県民を守るのは当然だと、そう思ったのだ。

「……何となく」

「だろ？ところが、今回については、合衆国軍の動きが遅すぎた上に、被害も大きすぎた。被害を受けた所の州知事や州政府にとってみりゃ、自分達は合衆国の一部という“メンツ”より、中華帝国軍っていう“災厄”にとっととお帰りいただくためにゃ、手段なんて

選んでいられないってのがホンネさ。
　撤退を保証してくれるヤツがいたら――よく言うだろう？ワラにも縋るって」
「だから、合衆国政府の決定を待つ前に？」
「州政府レベルで、戦闘停止を申し出て、中華帝国軍がそれを受け入れる。これで互いのメンツは成立さ。州政府は、軍事行動を止めた功績で、中華帝国軍は、州政府とはいえ、アメリカ人に跪かせたってことでね」
「……それで互いのメンツが成り立つと？」
「まぁ、一種の手打ちだよ。合衆国にとっても損じゃないからね」
「え？」
「だってそうだろう？合衆国が負けを認めたわけじゃない。州政府が勝手にやって、勝手に中華帝国軍が撤退したんだ。誰も白黒つけちゃいない以上、米国が負けたなんて認めなくてもいいんだから」
「……難しいですね」
「戦争や外交ってのはそんなものさ。おかげで、俺達も米国で頑張る必要もないってわけで、こうやって太平洋航路のど真ん中ってワケさ」
「そこ行けと言われてアフリカに送られ、東南アジアに回され、北米送り……」
　美奈代はぼやくように言った。
「次は北極ですか？それとも南極？」
「ぼやくなよ……日本だって戦場なんだから」
「……」
「現状、中東や東南アジアが落ち着いてきたおかげで、戦線の復旧は急ピッチで進んでいる。状況は決して悪いままではない」
「そう……ですよね！」
　涼が高く、やや早口で言った。
「私達が頑張っていた間、日本で何もしてませんでしたなんて、そんなヒドいことはないですよね！？」

「……ああ」
後藤は頷いた。
「北米戦線向けに大量生産された兵器類は、そのまま日本戦線で使用可能だ。合衆国政府は、その転用と大量投入を認める法案を議会にかけている。明日までには成立するだろう」
「よかったぁ……」
涼は、深い安堵のため息と共に背もたれに体を預けた。
「米軍が来てくれれば、何とかなる……」
「しかし？」
寧々は怪訝そうな顔で訊ねた。
「合衆国政府が、よくこんな時に大量派兵を認めましたね」
「……奴らにも思惑ってものぁあるのさ」
こういう時に浮かべる後藤のニヤリとした顔は、ホントに生き生きしているな。と、美奈代は思った。
「ここで殻に籠もって国土復旧なんて言ったら、対中戦を主張する国内世論を黙らせることが出来ないだろう？」
「……つまり」
美奈代は驚いた顔で言った。
「日本を、中華帝国侵攻時の橋頭堡にしようとしてません！？」
「ご明察」
後藤は、パチパチとわざとらしく手を叩いた。
「何しろ、奴らが中華帝国に叩き付けてやりたかった反応弾のかなりは、日本にあるんだし」
「……汚ない」
「オトナのやり口と言ってくれ。対中戦になれば、主戦場は日本じゃなくて大陸沿岸と朝鮮半島だ。米軍に武器や装備売りつけたり、兵器の修理を受け持ちゃ、大金が転がり込んでくる……近場でドンパチあるなら、そう考えるのがオトナなんだよ。うん」
「……」
「……スゴいジト目だな。みんなして」

「……それで」
コホン。と、美奈代は咳払いした。
これ以上、つきあっていられない。
その顔はそう語っている。
「コドモの私達は、どうなるんでしょうか？」
「ああ」
ポンッ。と手を叩いた後藤は楽しげに訊ねた。
「どうしてほしい？」

●“鈴谷（すずや）”艦長室
「子供達の様子は？」
「相変わらずですよ。何も進歩しちゃいない」
「国に帰ると浮かれてるかと思ったんですけど？」
「日本も戦場になっている――その事実が重しになってるようでしてね。これで日本が平和だったら、今頃、何人か……確実に泉が憲兵隊の世話になってるでしょうな」
「何故、泉大尉が？」
「俺が責任とらせますもん。俺の代わりに」
「……気の毒に」
「世間様に頭下げてるのは俺ですよ？」
「それが親の務めでしょう？」
「もう少し、聞き分けのいいコドモに変えてくださいよ」
「親子上司は変更効かないのが世の定めです――ところで」
「へ？」
「後藤さん。折り入って話があるんですが」
それまで砕けていた美夜の顔が引き締まった。
「俺……なんか、やらかしました？」
「茶化さないでください」

「……で？」
後藤は、室内に視線を彷徨わせた後、訊ねた。
「何事です？一体」
「……何か、本国とやりとりしていますか？」
「……いんにゃ？」
「して……ない」
美夜は、脇に置かれていた急須から緑茶を湯飲みに注いだ。
「……何か？」
「後藤さんのルートで当たって欲しいことがあるんです」
「ほう？」
後藤は、湯飲みを受け取った。
「こりゃ珍しい。艦隊司令部に通じる平野艦長からのご依頼とは」
皮肉の一つもいいかけて、そこで後藤は言葉を詰まらせた。
「……何があったんです」
「現在、“鈴谷（すずや）”の通信は」
美夜は湯飲みを手にしようともしない。
「――艦隊の通信に参加出来ません」
「……」
「ご存じと思いますが、飛行艦隊の艦艇は、全世界規模で張り巡らされたデータ通信網によって随時管理されています。
当然、“鈴谷（すずや）”もその中の一隻……ところが」
「他の艦と通信が出来ない？」
「はい」
「……こりゃ、まいったな」
ポリポリと頭を掻く後藤。
「飲み込みが早くて感謝します。だからこそ、後藤さんのルートで情報を求めたのです」
「無理ですよ艦長――ここからの通信は全て監視されているはずだ。例え、俺が個人で衛星通信網を使ったとしても、ログがとられでしょう？」

「……無理、ですか」
「無理というか、何というか……」
後藤は、ポツリと言った。
「不可能ではないですけど……こいつぁ、艦長やいろんな連中のログを抹消してもらう必要があるしなぁ」
「なんですか？」
「簡単なことです」
「？」
「この艦から追い出した悪ガキ共も、北米から戻ってる最中でしたね」
「……ええ」
他部隊のスケジュールを思い出し、美夜は首を傾げた。
「それが？」
「少し……俺に考える所があるんですよ」
「はい？」
「協力してくれます？」
「そりゃ……出来ることでしたら」
「なら」
「なら？」
美夜の目の前で、後藤はとんでもないことを言った。
「明日一日、泉を脱走させてください」

功績の代償　第二話（後書き）

G・W限定のキャンペーンやってます！
題して「アホな作者を助けてやろう一大キャンペーン！」

――お前、このタイトル、死にたくならない？
という意見もあるでしょうが、ネタに詰まりきって死にかけてます！本気でヘルプ希望なんですが……ほとんど応募内ですね……ははっ（号泣）
話がつまんなくてスルーされてるのかなぁ。

新キャラクターと新型メサイアの設定、大募集中ですっ！

日本人だけじゃなくて、魔族の他にも外国の騎士やＭＣ、特に中国人、韓国人は大歓迎です！
国籍、読み仮名、所属部隊や階級などの細かい設定もいただけると涙モノです！

メサイアやメースも同様にお願いします。細かい設定や武装なんかも大歓迎です！
斬艦刀が異様に強いこの世界設定をひっくり返すほどの設定をG・Wの記念に投稿下さい！
是非、お願いします！

功績の代償　第三話

●早朝　“鈴谷（すずや）”

「へっ？」

交代シフトのためハンガーデッキに入ったのは、坂城整備班長の一番弟子を自称する繁だ。

寝ぼけ眼を擦りながら、今朝から行われるメサイアの整備スケジュールを頭の中で反芻する。

「……さて」

んーっ。と大きく伸びをした繁の前で、

フィィィッッ

腹に響く重低音が響き渡った。

「へっ？」

聞き違えるはずがない。メサイア――しかもこの音は、“死乃天使”のエンジン始動音だ。

「……あれ？」

繁はポカンとして、ハンガーから移動を開始した“死乃天使”を眺めるしかない。

「今朝……発艦あったっけ？」

「繁さんっ！」

繁配下の整備兵が右往左往する中、一人が繁の姿を見つけて声をかけてきた。

「な、何事ですか！？こいつぁ！」

「俺が知るかっ！フライトデッキは！？その前に、危ねぇから全員、下がれっ！」

「本当に、艦橋に許可なしで発艦しちゃいましたけど……」
“鈴谷（すずや）”から発艦した“死乃天使”の中で、美奈代が半ばあきれ顔で訊ねた。
「本当にいいんですか？後藤隊長」
「ああ。いいのいいの」
なんと、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の予備シートに座った後藤が手をピラピラさせながら言った。
「今日の俺、休暇だし」
「いや。あの……休暇関係ない」
「何しろ、やったのお前だし」
「なっ！？」
「じゅあ、私も脅されたということで」
「レコーダー切ってあるよね？うん。泉ぃ、拳銃もってるよな？」
「あ、あのぉ……？」
「大尉は未だにコルトガバメントなんですよ？」
「へえ？あいつぁ、警察時代にゃ、射撃訓練でお世話になったよ……そういや泉は、白兵戦用にＭ１４装備していたな」
「装備だけならベトナム時代の海兵隊員ですよねぇ」
「使い慣れているだけですよぉ」
「使い慣れている？」
「Ｍ１４もガバも家にありましたもん。メンテナンスは軍隊に入った時必須だって、父に叩き込まれていたんですよぉ」
「射撃も？」
「週１回、近衛の射撃場の隅っこで練習してました。
高校受験の頃は熱中しましたよ？ウサ晴らしに丁度良かったから。
あっ、ご存じですか？富士学校に少しだけいた千代田教官。
定年で辞めちゃいましたけど、あの人、私のガバのお師匠様だったんですよ？」
「お前ん家って一体、どういう家だったのよ……しかも近衛ぐるみで中学生に銃撃たせるってよぉ」

「道理で……」
牧野中尉が納得出来た。という顔になった。
「訓練生時代、火器取り扱いが人並み外れて評価高かったわけです」
「銃剣術は柏達に負けますけどね」
「あっちは槍や長刀のプロですもん――“鈴谷（すずや）”から通信入ってますけど、どうします？後藤隊長」
「“鈴谷（すずや）”からの追っ手はかかってる？」
「現状、発艦は確認していません」
「なら、いいや。通信切っておいて」
「はい。お茶でも飲みます？」
「ああ。ありがと……コーヒーある？」
「はい……お砂糖は二つでしたね」
「うん。ミルクなしで」」
「……」
「……泉大尉、どうしました？」
「いえ」
美奈代は不思議そうな顔で言った。
「何だか、後藤隊長と牧野中尉って、仲いいなぁって」
「そ、そうですか？」
「はい。まるで夫婦みたいです」
「やだっ♪」
不意に、牧野中尉が満面の笑みを浮かべ、頬を押さえながらキャーキャー言い出した。
「夫婦だなんて、夫婦だなんて♪」
「……なんか、すごく嬉しそうですね」
「だってぇ♪」
「すみません。これ以上は、ちょっと突っ込んじゃいけないって、脳が警報あげてますんで勘弁してください」
「いつでもいいですよ？“お母さん”と呼んでくださって」
「全身全霊をもって拒絶します――後藤隊長」

「はいな？」
「真面目に答えてください」
「何？」
「私に何させようっていうのですか？」
「――ああ」
後藤は、ポケットから出したあめ玉を“さくら”に手渡しながら言った。
「簡単だよ」
「何です？」
「お前今、脱走中」
「……」
ぽかん。
美奈代は、通信モニターの前でバカのように口をあんぐりと開けたまま、マジマジと後藤を見つめた後、やっとの思いで言った。
「はいっ！？」
「だからぁ」
「な、何ですか！？脱走って！」
「安心しろよ。ここだけの話だ」
「戻ったら、私、銃殺ですか！？」
「絞首刑の方がいいか？」
「やだぁぁぁぁぁぁっっっ！」
「パニくるなよ――“さくら”？もう一個あげるから、お姉ちゃんに渡してきて」
「はぁい♪」
「まだ結婚もしてないのにぃっ！断頭台の露なんてあんまりだぁぁぁっっ！」
「……斬首がお望みだったのか？じゃなくて」
後藤は真顔になった。
「――落ち着きなさいって」
「……ぐすっ」

美奈代は涙ながらに頷いた。
本当に不思議だと、美奈代自身が思う。
後藤という人物は、実の親よりも言うことを聞かなければいけない。と、本能的に思わせてしまうのだ。
この説得力の強さは、例えようがない。
「いいかい？戻ったら、脱走っていうのは手続き上のミスが重なっただけの誤認だったと、シナリオは出来上がっている。お前は始末書一枚と減俸処分で済む」
「始末書、何とかしてくださいっ！」
「だまんなさいよ……ったく。二枚三枚に増やされたくなかったら、言うこと聞きなさい」
「だから……どうするんです？」
「操縦は牧野中尉に一任すればいい。お前はコクピットで大人しくしてなさい」
「……へ？」
「お前は、責任とらせるためだけに連れ出したんだから、それ以外に仕事ないの」
「それあんまりっ！」
「気の毒だけど、世の中、若い時に苦労したヤツが勝つんだよ。だから、頑張れ」
「いらない苦労だと思うんですけど！」
「――牧野中尉？」
「はい。ポチッとな」

ガンッ！

コクピットブロックにそんな音が響き渡って、後頭部にデッカイたんこぶを作った美奈代が目を回す。その後ろでは指導バーが定位置に戻ろうとしていた。

「便利だねぇ……これ」
「でしょう？ところで？」
「ああ……接触まで何分？」
「データ通信可能まであと２分」
「やれやれ」
後藤は、そっと牧野中尉の肩に手を伸ばした。
「ワガママな娘を預けて、迷惑かけてるね」
「――いいんです」
愛おしそうにその手を握りしめる牧野中尉は、はにかみながら言った。
「最初は、びっくりしたどころじゃなかったんですけど」
「俺とあんたの関係を知ったら、心臓止まるかもな」
「見てみたいですねぇ」
「はっ……俺もいずれは覚悟決めろってか？」
「女として当然ですけどね」
「男としちゃ、面倒くさい話さね」
「――恐い、の間違いじゃなくて？」
「さぁね――そろそろじゃないのか？」
「もうっ。あなたはいつだって、そっけないんですねぇ」
牧野中尉は、メインモニター上にごま粒程に表示された目標めがけて通信を開いた。

●太平洋上空
「あれか？」
「多分」
後方監視モニター映し出されたのは、白いメサイアだ。
“征龍改（せいりゅうかい）ＡＷＡＣＳ仕様”１号騎を駆る都築は、それを視認した後、２号騎を駆るさつきに訊ねた。

「“鈴谷（すずや）”から発艦したのは確認しているんだよな」
「うん……“鈴谷（すずや）”からの哨戒じゃない？」
「こんな太平洋のど真ん中でご苦労なこった……んで、騎士は誰だ？」
「識別から、美奈代みたいだよ？」
「ほう？あいつ、あんなの使ってるんだ」
「いいよねぇ……最新型だって」
「まぁ、コイツだって最新って言えば最新だけどな」
「破損騎改装したR型（偵察）仕様じゃない」
「まぁなぁ……にしてもよぉ」
「何？」
「このコクピットのあちこちに張られたお札は何なんだよ」
「……聞かない方が良いよ？あ、都築？日本戻ったら、みんなでお祓い行くんだけど、あんたも行く？」
「……科学の粋集めたマシン乗ってて、お札にお祓いって……俺達や、一体何なんだ？」
「気にしたら負けよ……白いの、近づいてくる」
「こちら“タカメ1”……接近中のメサイア、応答を」

「……久しぶりだな」
「げっ！？」
「おいおい……久しぶりの再開だろう？ゲッはないだろうが」
「お、お久しぶりです。後藤隊長！」
「はいよ。お久しぶり」
泡を食った顔で敬礼する都築達に、相変わらずの砕けた仕草で答礼した後藤は言った。
「ちょっと……通信システム貸してくれや」

●“鈴谷（すずや）”艦長室

「……覚悟しておいた方が良い。ですか？」

「ああ」

後藤は頷いた。

「こいつぁ、俺や“俺の飼い主”でもどうしようもないわ」

「……意味がわかりません」

「今朝のうちに、城を発進した部隊がいる。内容は、メサイア１２と飛行艇４」

「随分な装備ですね……でも、飛行艇？」

「飛行艦じゃ、脚が遅いからねぇ」

「それが、どこへ？」

「おいおい」

後藤は肩をすくめ、くわえたタバコに火をつけた。

「聡明な艦長殿から、その言葉が出てくるとは思わなかったわ」

「……まさか」

「飛行艇の中にいるのは、武装した憲兵隊。ついでにメサイア隊は、第９中隊所属だと言えば、想像もつくかい？」

「……」

美夜は愕然とした顔で目を見張った。

「第９中隊は、法務部独立執行部隊ですよ？」

「ああ……メサイア部隊の反乱鎮圧が主任務だなんて、冗談みたいだけど、あるんだねぇ。そんな部隊が」

「……それが、“鈴谷（すずや）”へ？」

「接触時間はそろそろだろう。都築達は、哨戒コース上のニアミスってことで、脱走容疑はそれこそ書類上のミスってことで処分済みだ。

今回の情報収集に関して言えば、憲兵（いぬ）が嗅ぎつけられる臭いは残しちゃいない」

「……し、しかし」

「無実を勝ち取るかどうか。そいつぁ」
後藤は席を立った。
「俺達の戦いになるだろうな」
「……」
「……」
「……私達」
美夜は、ぽつりと言った。
「私達は――――何と戦っているというのですか」
「敵が何か？そんなことは俺達、狗の考えることじゃない。給料くれる御主人様が敵といえば敵。味方と言えば味方だ――――違う？」
「……そこまで、私も割り切りたいです」
「割り切りすぎるのもどうかと思うけどさ」
後藤が何かを言いかけた時だ。
ピーッ
呼び出しを告げるインターフォンが鳴り響いた。
「――――艦長だ」
「……」
後藤は、会話の中身は聞かずとも想像が付いた。
「……わかった。すぐに行く」
カチャッ。
受話器を戻した美夜は、机にしがみつかんばかりの姿勢で、大きく息を吸った。
「――――後藤さん」
「……」
「あなたの言うとおりになったようです」
「……そう」
後藤は小さく頷いた。
「じゃ、覚悟はいい？これからが、俺達の戦争の始まりだよ？艦長」

●“鈴谷（すずや）”艦橋

「艦長！」

艦橋に入るなり、副長が慌てて駆け寄ってきた。

「……状況は」

敬礼も忘れ、美夜はまっすぐに窓の外を睨み付けながら訊ねた。

窓の向こうには、艦橋を塞ぐように浮かぶ飛行艇。

さかんに発光信号が繰り返されているのが、目に眩しい位だ。

「憲兵隊より、停船命令です」

副長は答えた。

「武装を解除し、停戦せよ――――その繰り返しです」

「照会は出来ているのか？」

「憲兵第3中隊所属であることは確認出来ています」

「……憲兵隊と通信は出来ているのか？」

「外線2番です」

美夜は艦長席のアームレストに設置された通信装置の受話器を外線に入れた。

「こちら“鈴谷（すずや）”艦長、平野中佐だ。停船命令の理由を聞かされたし！」

本艦は作戦任務を忠実に果たし続けた光輝ある艦である！

その艦を預かる身として、憲兵隊により停船の命令を受ける筋合いはないっ！」

副長は、そこで美夜と憲兵隊の間で、どんなやり取りがあったのか、はっきりと聞き取ることは出来なかった。

艦橋を覆うように接近してくるメサイア――――“幻龍改（げんりゅうかい）”。

久しぶりに見た味方が、まるで味方に見えない。

一体、何の冗談だ？

しかも、“幻龍改（げんりゅうかい）”の持つビームライフルは、銃口を艦橋に向けている！
そんな馬鹿な！
……。
カチャッ
うつむいたままの美夜が、無言で受話器を戻した。
「……」
「……艦長」
結果は聞かずとも察しは付く。
だが、副長はそれでも訊ねた。
「ご命令を」
「……機関停止。ＣＩＣへ、全武装運用停止。メサイア隊は全ハッチ開放」
「……」
その意味が分かる。
武装解除だ。
「本艦は、現時刻をもって一切の軍務を解かれ、憲兵隊の指揮下に入る」
「……せめて、教えて下さい！」
副長は怒鳴るように言った。
「我々に、一体、何の容疑がかかっているのですか！？」

「……士官脱走2件に関する、脱走幇助容疑」
美夜は、うつむいたまま、答えた。
「及び、敵に対して無断で降伏した反逆容疑。ならびに通謀、法的に言えば、我々にかかっているのは」
「……」
「……外患援助罪容疑だ」
外患援助罪は、刑法82条が定める所の、外国からの武力の行使において、外国の軍務に服すること又は軍事上の利益を与えることを内容とする規定であり、法定刑は死刑が前提だ。
美夜には、その意味がすぐにわかった。
魔族軍に降伏し、その指揮下に入ったことが問題視されていることは間違いない。
事情も調べず、ただ、行動を共にしたというだけで、敵に通謀したと思われているのだ。
「わ、我々は！」
副長は真っ青になって叫んだ。
「我々は正々堂々と戦ったのです！戦って、生きて帰ってきたのです！そ、それを！？」
「それを」
美夜は頷きながら答えた。
「功績と認めさせるか、罪と認めるかは、これからの戦いだぞ……副長」
「……」

「ただ、覚えておけ……これが」

甲板に強行着陸した飛行艇から、続々と武装した兵士達が艦内に入り込んでくる。

どうしろというのだ？

あの時だって、こんなことになって――部下を守るために降伏したのだ！

お前達だったら、どうしたというんだ！

美夜は、自分の頬を涙が流れていることも気付かず、握りしめた拳でアームレストを殴りつけた。

「これが！これが、死に物狂いで戦ってきた我々に対する、艦隊司令部からの報いだ！」

功績の代償　第三話（後書き）

というわけで、G・W限定のキャンペーンやってます！
題して「アホな作者を助けてやろう一大キャンペーン！」

――お前、このタイトル、死にたくならない？
という意見もあるでしょうが、ネタに詰まりきって死にかけてます！本気でヘルプ希望なんですが……ほとんど応募内ですね……ははっ（号泣）
話がつまんなくてスルーされてるのかなぁ。

新キャラクターと新型メサイアの設定、大募集中ですっ！

日本人だけじゃなくて、魔族の他にも外国の騎士やＭＣ、特に中国人、韓国人は大歓迎です！
国籍、読み仮名、所属部隊や階級などの細かい設定もいただけると涙モノです！

メサイアやメースも同様にお願いします。細かい設定や武装なんかも大歓迎です！
斬艦刀が異様に強いこの世界設定をひっくり返すほどの設定をG・Wの記念に投稿下さい！
是非、お願いします！

模擬演習　第一話

軍艦マーチもない。
出迎えもない。
歓迎式典もなければ花束一つない。

それが、日本に戻ってきた“鈴谷（すずや）”の待遇だった。

東京湾に入るなり検疫バースに係留され、乗組員の上陸も禁止された。
艦載する武装は全て弾薬とエネルギーが抜かれた。
美奈代達メサイア乗りは全て自室に押し込められ、実質的な軟禁状態にあった。
東京湾に入ってから既に3日。
その間、美奈代の日課は決まっていた。

「……別に文句ではないんですが」

朝食後。
美奈代は、居住区の空室で、背広姿の男と対面していた。
普段は使われていない部屋の中にはパイプ椅子が二つとアルミ製の折り畳みテーブルがあるだけ。
小さい船窓から入る朝日を背後に一人の男が座り、四方に武装した兵士が立っている。
普通の神経で入りたい所ではない。
生前の父からは散々、“事務方の人間は信じるな”と吹き込まれていたせいだろうか、それとも待遇故か、美奈代は少なくとも目の前の男に好意を持てそうになかった。

寸分の隙もなくビシッと着込まれた高級そうなスーツ。
冷たい銀縁眼鏡の奥で光る目。
“出来るサラリーマン”の典型例だが、それさえ、まるでコンピューターみたいな人だな。と、美奈代にとっての第一印象はそんなものだ。

「少なくとも」

美奈代は、アルミ製のテーブルの下から出した腕を目の前の男の前に出した。

ジャラッ
そんな音がして鎖が鳴った。

美奈代の腕には二重の手錠がされていた。

「女の身に、これはあんまりじゃないですか？」
「規則だよ」
男はしれっと言ってのけた。
「君、自分の立場がわかってる？」
「基本的に女だという立場はわかっています」
「――質問に答えてくれればいい。宗像理沙容疑者の脱走の際」
「昨日から、何回同じ質問をするんですか？」
「何度もやるよ。こちらが納得するまでね」
「……お断りしておきますが」
美奈代は言った。
「私、脳の病気や痴呆症を疑われる程、物忘れしやすいですし、何より精神的に安定していません」
「それは？」
「いらついて、間違ったこと言っちゃうかもしれません……そう言

っているんです」
「手錠はますます外せなくなったな」
「……で？」
「彼女は、近衛に対して何か発言していなかったか？」
「さぁ？」
美奈代はそっぽをむいた。
「会話のログはとってあるはずです。お聞きになったんでしょう？」
「していない？」
「戦闘中に私語をしてる余裕はありません」
「という、その割に」
男は余裕そうな顔で美奈代に微笑んだ。
「いろいろとバカ話は普段しているみたいじゃないか」
「いろいろあるんです」
「たとえば？」
「言える時と言えない時――違いについては、ケース・バイ・ケースですので厳密な違いを説明することは出来ません」
「手厳しいな」
「……」
「普段から、それ位手厳しく書類をまとめてくれれば、俺も大助かりなんだけどなぁ」
「？」
男は、美奈代の前に名刺を一枚、置いた。
「中野孝一？軍法務官、大尉で……近衛軍メサイア大隊補給部？」
「補給部に出向中だ。ちなみに、君の報告書を元に、補充部品の発注を担当しているのが俺だ」
「……え」
「驚くのはいいが、何で露骨にイヤな顔をする？」
「いつもいつも、書類不備とかいって突き返してくれる非道な奴って、あなたですか？」
「非道とは言いがかりだが、多分そうだろう」

「迷惑かけてるとか……そういう口実で、何か聞きだそうっていう、セコい魂胆じゃないでしょうね」
「セコいは余計だ」
男――中野は心証を悪くした様子で美奈代に言った。
「本来の取り調べを憲兵隊じゃなくて、俺達の方でやるっていう。この意味というか、俺達の親心がわからないのか？」
「そんなこといわれたって！私だって驚いているんです！何の前触れもなしに、帰艦したら、脱走してましたなんて報告受けるし！」
「恋人だと聞いている。君かMC（メサイア・コントローラー）の桜庭君に、自らの本心を告げていないはずはない。それとも」
中野の瞳が、銀縁眼鏡の中で光った。
「そんなことを相談されない程度の関係だったのか？」
「ピロートークまでは経験ありませんので」
「大切にされていたのか。それともあしらわれていたのか」
「……大尉って」
美奈代は殴られる覚悟で言った。
「恋人いないタイプですね」
「あいにくと」
「片思いはいる」
「……で？」
「心証損ねたのはお互い様です。とにかく、私は宗像の行動は、未だに理解さえ出来ません」
「政治的な背景はないと？」
「政治？」
「つまり、政治的理由で魔族に寝返ったとは考えられないか？」
「そんなの妄想です」
美奈代は言った。
「一介の軍人、しかも敵として対峙し続けた相手ですよ？殺されに行くようなものです。第一、魔族が政治問題で日本や世界とケンカしてるんですか？」

「……脱走に心当たりがないと？」
「あるはずが！」
「……わかった」
中野は、椅子の背もたれに体を預けるようにして、腹の上で手を組んだ。
「今日の取り調べはここまででいい――部屋でゆっくりしてくれ」

「――や、ご苦労さん」
「ご苦労さん。じゃありませんよ」
艦内の休憩ブースに入った中野は、タバコを吸っていた後藤の横に座った。
「脱走二人も部下から出すなんて、どうしちまったんです？」
「――俺もヤキが回ったってことさ」
どう？
そう言われて、後藤がタバコの箱を突き出した。
「結構です――やっと禁煙出来ているんで」
「相変わらずだねぇ……中野君は」
「今回の騒ぎを受けて、例の機関が勢いつけていますよ？元レイナガーズ総隊長の脱走はさすがにニュースですよ」
「マスコミには公表しているのか？」
「ええ。ここ一週間程の新聞、雑誌のスクラップ記事はこれに」
中野はＵＳＢメモリーを後藤の横に置いた。
「普通ならマスコミにリークするはずはない。ところが、今回は脱走の翌日にはニュースなっていた。法務部が把握する前に、マスコミに速報で流れた」
「へえ？」
「いいですか？」
中野の目には熱が籠もっている。

「“鈴谷（すずや）”から法務局へ第一報が入ってわずか3時間後には、インターネットに情報が流れていた。普通はあり得ない」
「意図的に、こっちの勢力に不利な情報と見てリークしたな？」
「そうでしょう」
「狙いはお姫様かな？会った？」
「彼女の取り調べは松崎がやってます」
「いい加減、松崎さんとゴールインしたら？もう若くないんだし」
「……機関のネズミが、この艦でチョロチョロしているんじゃないですか？」
「ああ。やっぱり？」
「目星はついているんですね？」
「――まぁ。ね」
「こちらで始末しますか？」
「いや？もう少し、動いてもらうとするさ」
「瀬音少佐のようになりますよ？」
「覚悟は出来てるはずさ――二階級昇進させてあげるんだ。感謝されても恨まれる筋じゃない」
「ったく……相変わらずですね」
「そういえば……」
「？」
「瀬音少佐は？」
「瀬音大佐ですよ」
「いつ」
「3日前、移動中に交通事故で」
「お気の毒にねぇ……」
「……」
「ん？」
灰皿で、タバコをねじって消した後藤は、不意に中野の視線に気付いた。
「どうした？」

「いえ」
　中野は視線を外した。
「このままなら、私も……どうなるのかと思いまして」
「我が身を大事にするんだ。軍法務官やってるんだ。大人しく仕事してりゃ、恩給もらって御の字だろうが」
「……そう願いたいですね」
「俺達の御主人様を敵に回すバカいないよ……それに、お前が俺の教え子だってこたぁ、ほとんど誰も知らないことだ」
「人生の師匠を間違えたかと心配しますよ。時々」
「よくも言うわ……」
「話、変えますけど、後藤さんの部隊ですが」
「どうなるって？」
「明日には発表があります。軍政部もトップエース部隊をこんなことで止めておくことは出来ないようですね」
「トップエース……ねぇ」
「北米戦線で師団単位で敵を潰した挙げ句が、たった１０秒で世界最強のメサイア……帝剣でしたっけ？そいつを１２騎あの世送り……。公式発表が米軍からあった時の日本の騒ぎをお見せしたかったですよ」
「何？そんなに騒ぎになったの？」
「騒ぎも何も」
　クスッと中野は小さく笑ったが、後藤にとって中野の笑顔は滅多に見られるシロモノではない。
「米軍司令官は、片言の日本語まで加えて、褒め言葉と感謝の言葉をアルファベット順に羅列してくるし、非公式ですけどメサイアの供与要求してくるし。
　新聞は近衛の活躍で一面埋め尽くしましたよ。
　広報は問い合わせへの対応でパンク状態。
　終いにゃ俺まで法務から応援で出ましたよ。
　ったく、後藤さんの部隊だけですよ？

この戦争始まって以来、新聞一面と社会面に部隊の活躍掲載させたなんて」

「目立ったなぁ」

「陸に降りたら、写真雑誌でも買ってみてください。部隊に対する詮索がどれほどのものか。ここん所、ハッカー中心に逮捕者続出ですよ？」

「そんなに目立っちゃったんだぁ……」

後藤はポリポリと頭を掻いた。

「参ったなぁ……俺達ゃ非正規部隊だってのに」

「だから困っているんですよ。我々も」

中野は真顔に戻って言った。

「はっきり、目立ちすぎなんですよ。非正規部隊ならもう少し大人しくしててくれないと！」

口調は興奮気味だが、声は殺している。

周りの盗聴を気にしているのだ。

「“死乃天使”はともかく、“ＤＥＳＥＥＤ”は極秘扱いなんです。“アレ”が表に出ることは、あの勢力にとっては望む所なんですよ？わかってるんですか！」

「……まぁ、わかっちゃいるけど」

後藤は新しいタバコに火をつけた。

「お姫様はどうあっても目立つんだよね」

プハァ。

後藤の口から紫煙が吐き出された。

「目立つからこそのお姫様なのかもしれないけど」

「勇猛に戦うお姫様は――」

ハッ！となった中野は、慌てて回りを見回した。

「あの御方を」

コホン。と、中野はわざとらしい咳払いをした。

「……輿に乗せて担ぎたがってる奴らに渡すわけにはいかないのです！そんなことをしたら」

「魔族待つまでもなく、日本が分断モノだなぁ」
カカッ。
後藤はくわえタバコのまま、楽しげに笑った。
「……少なくとも、そいつぁ、俺達の御主人様が望むこっちゃないわな」
後藤はソファーの背もたれに寄りかかって、天井を見上げた。
「……そういうことです」
「部隊の名簿は軍政部にもないんだろう？」
「当然です」
ハアッ。
中野は言った。
「いざって時、軍籍の照会されても困りますからね」
「そういうこった……んで？」
「法務局が軍政部に関わることは出来ませんけどね。仲間から聞き出しました」
チラリと中野は後藤を再び見た。
「――見返りは？」
「お前も変わったねぇ」
後藤はポケットからＵＳＢメモリを取りだし、脇に置いた。
「お前が目の敵にしている奴さんの情報さ」
「……どうも」
「全く、お前相手のジョーカーまで使うハメになるとはな……出来の悪い娘を持つと大変だよ」
「私もお仲間だということをお忘れなく」
「はいはい……んで？」
「開発部の一部が、暴走しています」
「ん？」
「赤城博士、ご存じですよね」
「あの“Ｄ－ＳＥＥＤ”の生みの親の？」
「そうです。あの博士率いるチームですけど、それの対抗馬として

新進気鋭のチームが一つ」
「へぇ？」
「軍政部長のお気に入りでしてね」
「あの部長ってことは、裏は光菱（こうびし）か」
「光菱には、軍ＯＢが顧問ってことでかなり入り込んでます。この戦争のどさくさ紛れに、狩野重工から近衛軍の武器シェアを奪いたいって所でしょうね。光菱のエンジニア達を中心にしたチームです」
「よく参入を許したな。メサイアのデータが光菱経由でどこに流れるかわからないぞ？」
「現状、参入を許しているのは、兵装のみ。アサルト・システムというそうです」
「何だ。そりゃ」
「私は専門外ですよ。そのシステムの開発チームが、テストに協力してくれる部隊をさがしていまして」
「白羽の矢が俺達に立った」
「近衛トップエース部隊を協力させることで作戦部長は光菱に恩を売れるし、光菱はシステムに箔をつける事が出来る……そんなところですね。狙いは」
「紅葉ちゃんが何て言うか……こいつぁ」
後藤はため息をついた。
「勘弁して欲しいなぁ……ホントに」

美奈代達に発艦命令が下ったのは夜中の2時頃だ。
スクランブルかと思ったら、移動命令が下ったと聞いた時の美奈代達の感情は、ちょっと表現がつけづらい。
「まぁ、単に移動だからね」という後藤に、
「……待ちなさいよ」と、くってかかったのは紅葉だ。
「移動先の十勝研究所って！」

「……やっぱ、バレた？」
「移動に光菱が関わってるの！？」
「……そうなる」
後藤は両手を合わせ、紅葉を拝むような仕草になった。
「頼む。この通り。大目に見て！」
「……っ！！」
ゆであがったように真っ赤になった紅葉の頭からは湯気が出ている。
「……あのぉ」
事情がわからない美奈代達はきょとん。とするしかない。
「よくわかんないんですけど、何か問題なんですか？」
「問題どころじゃないっての！」
紅葉が美奈代の首を締め上げた。
「私は近衛と狩野両方と契約してるの！私の製品は、近衛が設計して狩野が組み上げるって！」
グェェェッ
カエルが潰されたような声を上げる美奈代の前で、紅葉は怒鳴り続ける。
「そいつでノコノコ研究所に出向くなんて、近衛と狩野双方の技術の粋を集めた結晶を、光菱にくれてやるようなもんでしょうが！
大体、いつ、誰が光菱の参入を認めたのよ！
あんな奴ら、鉛筆でも作らせてりゃ良いのよ！
ついでに、光菱にメサイアのノウハウなんてないでしょう！？」
「ああ……要するに、光菱が開発した新型兵器の実験、手伝うだけだから」
「ハン……ノウハウない連中の作ったシロモノなんて、いつ爆発するかわかんないわ」
首が怪しい方向に曲がりつつある美奈代を放り出すと、紅葉がジロリと後藤を睨んだ。
「――中隊専属技師として、同行を要求します」

「拒否したら？」
「この仕事辞める」
「……拒否権ないじゃん。俺に」

美奈代達が、北海道音更町にある光菱十勝研究センターに着陸したのは、９時を少し回った頃だった。
「隣にサーキットがあってね。光菱自動車の研究センターが併設されているのよ」
「自動車開発の横で兵器開発ですか？」
「そっち側」
紅葉は真っ平らな平野を指さした。
「へぇ？」
美奈代は素直に感心した。
「日本でも地平線って見えたんですねぇ」
「この辺一帯、兵器実験場だから。光菱が社運かけて開発した八式戦車シリーズも、元はここの生まれよ」
「へぇ？」

「――おや、これは」
不意にかけられた声に、皆の視線が集まる。
「誰かと思えば、ドクター・ツシマのご来場とは」
そう言って近づいてきたのは、紫色のスーツの上に白衣を羽織った中年の女性だ。
厳しい目つきが、ただ者ではないことを教えてくれている。
「本社の許可はとったわよ？」
「狩野さんからずいぶん逆ねじを喰らったらしいですね。本社も気の毒に」

女性は、視線を紅葉から美奈代達、先頭に立つ後藤に目元だけ微笑んで手を差し出した。
「失礼――光菱重工十勝研究所第一課課長の神宮司です」
「近衛兵団メサイア大隊独立駆逐中隊、後藤以下着任」
後藤は、敬礼でその挨拶に答えた。
「――ご苦労様です」
神宮司は表情を変えずに手を引っ込めた。
「我が社の兵器開発にご協力を感謝します」
「仕事ですから」
「……どうぞこちらへ」

神宮司に案内された先は、巨大なハンガー。
ハンガー入り口には、無重力地帯を示すオレンジとグリーンの警告帯と、“危険！無重力地帯”の警告表示が張り付けられていた。
「説明は、現物をご覧になってから行わせていただければと思いまして。準備はしていました」
入り口の向こう。
つまり、ハンガーの中には、一騎の“幻龍改（げんりゅうかい）”が片膝をついた姿勢で待機していた。
「S3……違う」
紅葉は目を見張った。
「これ――まさか“ME”！？」
「一目で見破るとは、さすがですね」
神宮司が嬉しそうに微笑んだ。
――へえ？
微笑むと、冷たい女性と思える神宮司が、不思議と優しい普通の女性に見えてくる。
美奈代は不思議なものだな。と思った。
「予算不足でペーパープランで終わった“幻龍改（げんりゅうかい）”の最終強化バー

ジョン。我が社の“協力”によってご覧の通り、完成させました」
「……バカ」
紅葉は言った。
「こいつは……っ！」
「管轄は我が社です。他社の方はどうぞ、ご見学に留めて下さいな」
「……っ！」
紅葉の言葉に、神宮司は冷たく応えた。
「この騎の背中や装甲をご覧下さい」
指さされた美奈代達が見上げた先。
そこには、普通の“幻龍改（げんりゅうかい）”にはない翼があった。
太股や肩には、見たことのない増加パーツが取り付けられている。
「何アレ」
「アーマード・パックシステム……ＡＰＸ１９１８“パースエーダー”。それと……」
神宮司の指が、“幻龍改（げんりゅうかい）”の右腕に向けられた。
そこには、美奈代達が見たこともないようなデザイン……強いて言えば、斬艦刀を二本、付け根の辺りで一本にくっつけたような外観の巨大な刀とも楯ともつかない兵器が握られていた。
「アサルト・システムＡＳＸ１９１９“アナイアレーター”です。弊社では、双方を合わせて“スーパーパック”と呼んでいます」
「“説得者”に“絶滅者”とは……」
紅葉が見下したような口調で言った。
「随分、思い上がった表現ね」
「“言うことを聞かせる者”と“敵を打ち負かす者”とも言います……共に世界が必要としているはずですよ？」
「異論はないわ――――でも」
紅葉は肩をすくめた。
「私に設計図を見せるほどの自信はないでしょう？」
「――――それは、自信ではないと思いますよ？」
「……同感」

「とりあえずの説明です――その前に」
神宮司がポケットから携帯電話を取りだした。
「明貴少尉」
“幻龍改（げんりゅうかい）”のコクピットハッチが開いて、一人の女性が身を乗り出した。
「えっ？」
美奈代が驚いたのも無理はない。
ヘアバンドで留めた黒髪は、腰まで伸びて美しく光り輝いている。
女性。
というより、女の子。
あどけない中にも気品を感じさせるその顔立ちは、どう見ても外見は中学生だ。
芳（かおる）と並べて繁華街を歩かせたら補導されるのは確実だろう。
装甲を蹴って床に降り立った少女は、一回のジャンプで、美奈代達の前、正しくは神宮司の前に着地した。
無重力地帯にかなり慣れている証拠だ。
「紹介しますね？“スーパーパック”開発専属騎士の明貴ほむら少尉。少尉？独立駆逐中隊の後藤隊長です」
「――明貴です」
明貴ほむら少尉と呼ばれた少女は、美しい小鳥のような声で申告すると敬礼した。
メサイアなんか乗せておくより、アイドルユニットにでも入った方が似合うだろうな。と、美奈代は本気で思った。
「役者がそろった所で、“スーパーパック”の説明に入りたいと思います」
明貴は、部下が引っ張ってきたホワイトボードを背に指示棒を取りだした。
「先程説明しました通り、“スーパーパック”は、防御兼武装のアーマード・パックシステム、ＡＰＸ１９１８“パースエーダー”と、制圧兵器兼近接兵器であるアサルト・システムＡＳＸ１９１９“ア

ナイアレーター”の2つで構成されています」
「……質問」
手を挙げたのは美晴だ。
手を挙げた後、“しまった！”という顔で小さく首を引っ込め、後藤の顔をうかがう。
「はい？何ですか？」
嬉しそうな神宮司の口調は、生徒から待望の質問が来た時の教師さながらだ。
まるで学校だな。と、美奈代は内心で失笑した。
「防御兼武装とか、制圧兵器兼近接兵器って……その分類からしてわかんないんですけど」
「当然ですね」
神宮司は頷いた。
「この分類は、我が社が創設した、独自の分類であり、このシステムが採用された暁には、あなた方にとっては当然の分類となるものです」
「は……はぁ」
答えになってない上に、この自信はどこから来るのかしら。と、美晴はきょとん。としながら、生返事をした。
「まず、防御兼武装の意味ですが、ご覧の通り、現在、この騎に取り付けられている追加装甲が防御であり、この追加装甲の内外には、小口径ML（マジックレーザー）、多連装ショートミサイルポッドと、連装ロケットランチャー、旋回型ML（マジックレーザー）砲塔といった多彩な火器を装備しています」
「そんな物騒なものくっつけて、本当に装甲として役に立つの？」
「ご指摘は分かりますが、内部に耐熱、耐衝撃ジェルを充満させていますし、魔法処理されていますから、装甲としては十分役立ちます。そうですね？明貴少尉」

「……」
明貴少尉はこくり。と小さく頷いた。
「また、増設したブースター側面に大型ミサイルを片方2発ずつ懸架可能。
これらはMC（メサイア・コントローラー）を介さずとも、独立した高性能AIシステムで全自動制御されます。従って、敵味方が入り乱れる乱戦下でも敵機のみを正確に捕捉し、かつ最適なタイミングでの攻撃を行えるわけです」
「……アニメみたい」
「スゴイご都合主義なシステムですね」
芳（かおる）と涼が同時にポツリとそう言った。
「褒め言葉と受け取らせていただきますが、この装備によって、対空戦を含む、面制圧任務をほぼ単騎、もしくは少数の部隊で実行可能となります」
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で一発だけどねぇ……」
「野蛮な火炎放射装置なんて……第一、高機動で攻める敵には不向きでしょう？」
「成る程？」
芳（かおる）は、やっと理解できたという顔になった。
「ミサイルで“ハエ叩き”やるわけだ」
「は……ハエ？」
「面で航空機を叩く攻撃のこと。私達、学校ではそう教わった」

「そ……そうですか」
神宮司は顔をしかめた後、
「続けて、制圧兵器兼近接兵器ですが、これは斬艦刀兼ビームライフルと思っていただければ十分です。内蔵するエネルギーパックシステムより出力を取りますから、騎体出力を奪う斬艦刀より騎体負担が少なくて済む上に、破壊力は斬艦刀と比較して２５％程増加します」

「斬艦刀２本で？」
有珠（ありす）は不満そうだ。
「斬艦刀でほとんどの装甲ぶった斬れるのに、２５％出力増す意味あるんですか？
しかも、エネルギーパックシステムからって、パックが空になったらアウトじゃないですか」

「そ、それは、騎体負担を減らす為の措置で」

「うーん。それより私」
有珠（ありす）が興味を示したのは、その脇の兵器運送トレーラーに乗せられた奇妙なデザインの、巨大な銃だ。
「あれの方が使えるんじゃないかなぁって思うんですけど」
「ＥＲＳ－２５Ｂ　２５ｍｍ機関砲ですか？」
「カッコいい呼び名じゃない」
「あれは……歩兵支援車両用の機関砲をメサイア用に改装しただけのシロモノで」
「２５ミリあれば」
山崎が言った。
「破壊力は十分ですよ？」
「――いいでしょう」

スーハー
スーハー
数回、深呼吸した神宮司は、キッ。とした顔で言った。
「模擬戦、やってみれば分かります」
「模擬戦？」
「元来、性能評価のための仮想敵こそ、あなた方の仕事。ここまで来たからには承知ずくのことでしょうし」
全員の顔が後藤に向くが、肝心の後藤は知らん顔で明後日の方角を向いた。
「歴戦の猛者の皆様方相手に、“スーパーパック”がどれ程、役に立つか。たっぷりと味わっていただければ幸いです――よろしいですね？」
美奈代達に、有無はなかった。

模擬演習　第一話（後書き）

……結局。
G・Wイベントは3通の応募だけ……応募いただいた方、ありがとうございました！
ちょっと号泣したい気分ですけど、アイデアはこの連載が続く限り受け付けます！ちょっとしたことでも、作者は歓迎します！

明貴ほむら少尉と中野孝一大尉は、応募された方のアイデア採用させていただきました！
感謝ですっ！

感想や評価も励みになりますので、是非、今年のG・Wの記念に！
……まぁ、どんだけ頑張っても、評価いただけるのは年数回という、ただ長いだけが取り柄の、惨めな作品ですけど、寛大な方は是非、感想ください！
いろいろあってベッコリ凹み気味な作者に合いの手……じゃない、愛の手を！
よろしくお願いしますっ！！

模擬演習　第二話

「と言っても」
涼は言った。
「相手は1騎。こっちはどうするんです?全騎で攻めるんですか?」
「よく考えたら」
美晴もやる気が疑わしい。
「こんな仮想敵なら、1騎送り込めば終わったんじゃないですか?」
「……なんか、そんな気はするわね」
美奈代も頷くしかない。
MC(メサイア・コントローラー)達によって起動準備が進む愛騎の足下で、美奈代達は、どう行動するか決めかねていた。
相手はたった1騎。
何だか重武装らしいが、たった1騎を複数で攻めるというのが、どうにも好きになれないのだ。
「後藤隊長?どうするんです?」
「そんなこたぁ、やり合うお前達が決めて良いよ?」
後藤はあっさりと言った。
「向こうさんは数を指定していない。全騎で袋だたきにしてもいいし、単騎で決闘決め込んでもいいし」
「多数決で決めよう」
美奈代は言った。
「1騎と複数、どっちがいいか。よいと思った方に挙手」
皆が頷いた。
「1騎」
美奈代を除く全員が手を上げた。
「――誰が行く?」
美奈代を除く全員の指が指したのは――
「……お前ら」

美奈代だった。

「……まぁ、隊長だからってことで」

すっかりヘソを曲げた美奈代に牧野中尉が言った。

「納得されたらどうですか？」

「厄介ごとがある時だけ、隊長を持ち出すんだから。みんなもズルいです」

「責任者ってのは、そういうものです。責任から逃れようとしてたら、責任者は務まりませんよ？」

「別に」

「狙撃隊からの遠距離攻撃だけでつぶせる相手ですけどねぇ……興味深い相手ではあるんですよ。あの騎は」

「？」

「まさか――バージョンＭＥが組み上げられているとは思いませんでした」

「何ですか？ＭＥって」

“幻龍改（げんりゅうかい）”の管制システムです」

「……」

「……わかってないでしょう？」

「……はぁ」

「パソコンで言えばＯＳ。現在の最新版として使用されている“ＭＳＥ０９”より、少し前に開発されていたんです。

開発の時点では、“幻龍改（げんりゅうかい）”の戦闘能力を４０％引き上げるとか言われてたんですけど、何故か途中で開発禁止になったんですよねぇ」

「禁止？」

「そうです」

牧野中尉は頷いた。

「停止じゃなくて、禁止。だから私達の間でもいろいろ取り沙汰は

あったんですけど」
「中尉が知らないってことは、情報が流れなかったってことでしょう？」
「……まぁ、そうですね」
「大丈夫なんですか？」
「それを知りたいから、興味があるんですよ……どう攻めますか？」
相手は兵器実験場のど真ん中に鎮座している。
演習場の外縁部の上空を旋回飛行している自分は、それを撃破すればいい。
手に提げた模擬刀で一発ひっぱたくだけで全ては終わるのだが……。
「ビームライフルや飛び道具系全てが実弾許可ってのは……」
「よっぽど自信があるんでしょうね」
「……とりあえず、空から攻めますか」
美奈代は小さくため息をついた。
「ご自慢は、対空兵器のようですし」

「中隊から申請来ました」
明貴ほむら少尉とペアを組むのは、福沢中尉だ。
「相手は“死乃天使”１騎です」
「……“死乃天使”」
ほむらは、無表情のまま、ぽつりと言った。
「どんな奴ですか？」
「やって見ればわかります。相手は攻撃側で、我々は迎撃側。全武装使用自由」
「……了解」
「これより“死乃天使”を“Ｈ１”と呼称。敵騎を殲滅することが任務です」

「H1撃破……任務了解」

「……あれか」

爆撃試験の痕らしいクレーター状の穴が無数に存在する実験場にポツリと立つメサイアの姿を“死乃天使”の目が捉えた。

「……で？ご自慢の何とかいうシステムは、この距離じゃ役に立たないのかしら？」

「ミサイルの有効範囲は演習場一杯のはずですけどね」

「とりあえず」

美奈代は“死乃天使”の武装を変更した。

普段は腰部にマウントしているのは散弾砲だが、今回は違う。

ハンガーで、有珠（ありす）が興味を持っていたＥＲＳ－２５Ｂ　２５ｍｍ機関砲と呼ばれた装備だ。

銃の形をしているが、中身はチェーンガンだという。

装弾数は2千発程で、マガジン交換で戦闘中でも弾薬補給が出来るのが強み。

実弾系の砲を使う寧々も興味津々だったシロモノだ。

美奈代もそれを受けて、借り受けたのだが……。

「照準は調整してないです。いいんですか？」

「……いいんです」

しまった。という顔をして、美奈代は言った。

「テストをあの子がしていたというなら、照準はしっかりしていると思います」

「どうして？」

「照準一つ調整していない武器を使ってテストパイロットが勤まると思いません」

「素直に言っていいですよ？」

牧野中尉は笑って言った。

「申請しておくの忘れたって」
「……私、テストパイロットは向いてないようです」
「ちょっと違う気はしますけどねぇ」

「“Ｈ１”、接近中。距離１５００」
福沢中尉の報告がなくても、メインスクリーンに映し出される画像で、ほむらも“死乃天使”の姿を捉えていた。
ほむらの目に合わせて空中に表示される照準が激しく動き続ける。
ピンッ
コクピットに照準が定まったデジタル音が響いた。
照準が“死乃天使”を捉えたのだ。
「……ターゲット、ロック……フォックス・ツー」
ほむらはトリガーを引いた。
“幻龍改（げんりゅうかい）”に取り付けられていたアーマード・パックシステム、ＡＰＸ１９１８“パースエーダー”の装甲部が開き、内部に格納されていた多連装ショートミサイルポッドが見えた。
ポッドに詰め込まれたミサイルは対空・対地・対艦の全てに使えるマルチショートミサイル。飛行距離は短いが、命中精度は侮れるシロモノではない。
短距離を一気に疾走して、獲物を仕留める猟犬そのものだ。

ほむらという主によって解き放たれた猟犬達は、芸術的なまでに美しい白煙のラインを描きながら、“死乃天使”という獲物に食らい付こうと空を駆ける。

「ミサイル、数２０！」

「うそっ！？」
相手がミサイルポッドを装備している。
それは、理屈ではわかっていた。
だが、まさか２０発も同時に撃ってくるとは思いもしなかったのが美奈代の本音だ。
「ええいっ！」
舌打ち一つ。美奈代は“死乃天使”を空中戦闘機動モードに切り替え、機関砲のトリガーを引いた。
空中戦なみならず、飛び道具での攻撃は、本来ならＭＣ（メサイア・コントローラー）の仕事だ。
メサイアの火器管制システムと自在に同調出来る彼女達にかかれば、火器の命中精度はコンピューター単体と比較した場合、桁が違ってくる。
だが、それは騎士が普通だった場合のことだ。
はっきり、こういう所では美奈代は普通ではなかった。
機関砲から放たれる火線が、次々とミサイルという“猟犬”を火球に変える。
仲間が撃破されるのを厭うことなく、執拗に“死乃天使”を追い続けるミサイルを相手に、美奈代は何度も指でトリガーを調整しながら発砲を続けた。
仕事を奪われたことに怒ることもなく、牧野中尉はその光景を見守り続けていた。
美奈代が、ただ無駄弾をばらまいているのではないことは、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の彼女にはわかった。
トリガーを引き続けることで発生する弾幕を展開しているのなら、もう既に弾が底を尽きて、自分達はミサイルの餌食にされているはずだ。
だが、美奈代は違う。
ミサイル１発ごとに照準をきちんとつけて、数発で仕留めている。

大体、ミサイル1発に対して、機関砲弾2、3発目で当たりをつけている。5発以上は撃っていないな。というのが、彼女の判断だ。

「追加が来ます！数15っ！」

「しつこいっ！」

「どうするんです？」

「――こうしますっ！」

美奈代はブースターを全開にすると、“死乃天使”を“幻龍改（げんりゅうかい）”めがけて突撃させた。

「H1、突っ込んでくるっ！」

「……やっぱり」

ほむらは、それが分かっていたかのように手元を操作して武装を変更。福沢中尉に命じた。

「ML（マジックレーザー）で迎撃」

「了解――フォックス・スリー」

福沢中尉は、ML（マジックレーザー）砲を発砲した。

ミサイルをかいくぐって、こちらへむけて直線で突っ込んでくる敵。

照準は余裕だと、彼女はそう思った。

騎体から放たれたキャンディーのようなオレンジ色の光が白い騎体に襲いかかる。

命中した！

福沢中尉がそう確信した時だ。

「えっ？」

“死乃天使”が騎体をひねってML（マジックレーザー）を回避してこちらへ向けて接近を続けている。

「うそっ！？」

必中を狙った一発を回避されたことに福沢中尉は、一瞬だけ判断

が鈍った。
その一瞬をついて、“死乃天使”は機関砲から模擬刀へと武装を変更し、刀を振り上げた。
ドンッ！
鈍い音と閃光が走り、模造刀が吹き飛んだ。
「えっ！？」
「武装破損っ！」
2騎がすれ違った後、弧を描いて宙を舞った模擬刀の刀身が地面に突き刺さった。
「何っ！？」
「ＭＬ（マジックレーザー）で吹き飛ばされました！」
「あのタイミングで！？」
体勢を立て直し、反撃に出ようとする“死乃天使”の背後から、何本もの火線が襲いかかってくる。
「――――くっ！？」
騎体をジグザグに機動させ、回避に移る“死乃天使”をＭＬ（マジックレーザー）が執拗に追い詰める。
命中しないのか、それともわざと外しているのか。
ここまで連続してギリギリに撃ち込まれると、疑ってしまう。
私がその気なら、お前なんてもう仕留めているぞ。
そんなメッセージと見る事が出来るのだ。
それが美奈代を苛ただせた。
「私をっ！」
美奈代は模擬刀ではなく、斬艦刀を引き抜くと、空中で一回転して、急降下機動にいれた。
降下する先には、“幻龍改（げんりゅうかい）”がいた。
「怒らせるつもりか！」

美奈代の気迫に気付いたというのか、“幻龍改（げんりゅうかい）”が、アサルト・システムＡＳＸ１９１９“アナイアレーター”の切っ先を“白雷改”に向けた。

刃のついていない“棟”が、隙間を隔てて、向かい合わせに取り付けられているような作りの“アナイアレーター”。

その隙間に何が仕込まれているか、美奈代はその瞬間に理解した。

隙間に生まれた光が、自分めがけて襲いかかってくる。

「ビームライフルっ！」

そう。

美奈代を、“死乃天使”を襲ったのは、ビームライフルの光。

騎体を寸前でわずかに上昇させることで直撃こそ回避したものの、かすっただけで騎体の異常加熱警報が響き渡る。

もう回避も何もない。

騎体同士は撃ち合いではなく、斬り合いの間合いにいた。

「本気にさせたなぁっ！？」

騎体に傷をつけられた美奈代は、カッとなって斬艦刀を“幻龍改（げんりゅうかい）”めがけて振り下ろした。

騎体の重量と加速を斬艦刀の上に乗せた一撃を“アナイアレーター”の刃が受け止めた。

双方の刀身に生じるエネルギー同士がぶつかり合い、激しい魔法反作用が光となって視界を奪う。

「――――くうっ」

腕に走った激痛に近い衝撃に、ほむらは思わず呻いた。

受け止めるのがやっとだった。

というか――――受け止めることが出来ただけで奇跡に近い。

襲いかかった衝撃に耐えるため、ダンパーだけでは処理が足りずに、重量物運搬用のアイゼンが自動で下がった。

火山性の大地に、脚がめり込む。

脚を取られたら、動きが鈍る！

姿勢を戻そうとするのに、思うように脚か動かないことに、ほむらは気付いた。
「――――しまっ」
思わず下を見ようとした次の瞬間。
“アナイアレーター”にかかっていた斬艦刀の力が抜けた。
「えっ？」
突然のことに唖然とするほむらの目の前。
スクリーン一杯に襲いかかってきたのは、“死乃天使”の蹴りだった。

「ようするに」
回収される“幻龍改（げんりゅうかい）”を前に、芳（かおる）は合点がいった。という顔で言った。
「仕込み武器ってワケね」

「ビームライフルと斬艦刀を一緒にしたのが“アナイアレーター”ってことでしょう？」
「そうなりますね」
寧々が頷いた。
「突き技と一緒に、ビームライフル攻撃……考え方によっては恐ろしい武器ですね」
「でもさぁ」
芳達（かおる）の前で、“死乃天使”が収容を完了した。
慌てて騎体から降りた美奈代が、左足部の装甲板に付いた黒い焦げ跡を前に泣きそうになっている。

お金が！

これ、誰が弁償すんのよぉっ！

美奈代の号泣をよそに、芳（かおる）は続けた。

「使い物になるの？」

「……」

“幻龍改（げんりゅうかい）”のコクピットハッチが開いて、ほむらが顔を出した。

あまりに無表情に近いせいで、その顔から感情を読み取ることが出来ない。

「武器の性能を見る模擬戦で、蹴りを入れて勝利なんて、普通なら考えられないことですしねぇ」

寧々も思案気に首をかしげる。

「とにかく、実際に使えるかどうかは、あの子だけじゃなくて、私達も見ない限り、判断もつかないことですし」

「まさか、マトになれとは言わないよね」

「まさか」

「……よかったぁ」

芳（かおる）は、その平べったい胸をなで下ろした。

「遠回しな銃殺かと思っちゃったよ。ははっ」

「性能の半分も見せることが出来たとは思えません」

不機嫌そうに、神宮司は後藤達に言った。

すでに全騎のハンガーへの収容が終わり、後藤達は会議室へと集められていた。

「“パースエーダー”のミサイル攻撃をお見せしただけで、全てが終わったと思われては困りますし」

「いやいや」

後藤は言った。

「あの派手な花火は、見物でしたよ」

「……“パースエーダー”開発者としては、十分満足のいく運用がされたとは思いません」
「そうですか？」
「せめて、泉大尉が空中機動ではなく、通常機動で攻めていただければ、“パースエーダー”は、もっと本来の、あるべき姿を示すことが出来たでしょう」
ジロリと睨みつけるような視線の先には、ほむらがいた。
「……」
姿勢を正して、ずっとまっすぐ前を向くほむらは、その視線に眉一つ動かすことはない。
「――今回、皆様方の任務は、“スーパーパック”の性能評価であることをお忘れなく。そのためには、二つのシステムの性能をフルに引き出していただきます」
「――具体的には？」
「明日以降、こちらから指定したシチュエーションでの模擬戦、それから、皆様方が実際に“スーパーパック”を運用していただき」
「それ、無理」
言ったのは芳（かおる）だ。
「だって私、特Ｓサイズのコクピットユニット必要だもん」
「それが、“幻龍改（げんりゅうかい）”に乗れというなら、僕もです」
山崎が手を上げた。
「僕、このサイズですし」
「……使える方だけでも」
「多分、使えるとしたら」
美奈代が言った。
「逆に平野少尉くらいでしょうかね。“幻龍改（げんりゅうかい）”のコクピットユニットは、多分……特Ｓですよね。あの子の体格から考えて。平野少尉？やれるか？」
「やれと言われればやりますけど」
うーん。

「でもぉ。私達の戦争には意味ないんじゃありません？あんなの」
その横では、涼が頷いていた。
「それは？」
神宮司の問いかけに、芳（かおる）は平然と答えた。
「だって……狩野粒子の影響で、電子装備にスゴい影響出てるんですよ？自立したＡＩって言ったって、ミサイル弾頭部に搭載した方はどうなんですか？狩野粒子影響下でも通常と同じように自動追尾するっていうなら、戦争にメサイアなんて要りませんよ」
「……」
「どうなんです？」
「――確かに」
神宮司は頷いた。
「狩野粒子影響下でミサイルが使用不能になることは、私も認めるしかありません。そして、現在の科学技術では、有効な打つ手がないことも」
「じゃあ」
「でも、平野少尉？あなたの戦争が魔族との戦争を指すなら、世界にはそれ以外にも戦争があることをお忘れなくと言っておきましょう」
「……対機甲部隊戦、もしくは航空戦」
寧々が厳しい顔で言った。
「仰らんとしているのは、人類同士の戦争を想定したものだ。ということですね？」
「然り」
神宮司は頷いた。
「本来、光菱が目指しているのは、そういうものです」
「……」

「なぁにが」
芳(かおる)は憮然とした顔で、皿にのったポテトをフォークで突き刺した。
「よもや、職業軍人である皆さんが、それに抗議されるようなことはないですよね？だっての！」
「勘弁して欲しいですよねぇ」
食堂でポテトサラダを突く美晴が頷いた。
「要するに、満足の行く評価が欲しいから、私達をコキ使おうっていうんですよね」
「大体」
涼も顔をしかめながらご飯を食べている。
「魔族相手に戦争している時に、人間相手の兵器開発なんて、それ自体が信じられませんよ」
「私、あんなの使いたくないなぁ」
寧々がぼやく。
「カッコ悪いし、使い勝手悪そうだし」
「重さを破壊力に乗せるとしても、中途半端な重さだろうし、あれじゃ、ビームライフルの照準、つけづらそうですね」
と、山崎も頷く。
「山崎中尉達みたく、ポールウェポン使っている方でも、そう思います？」
「そうですねぇ」
山崎は、横に座る美晴からお茶を受け取った。
「どうも……使い道が思いつきづらい装備なんですよね。諸刃の剣は振り回す時危なそうですし」
「それは言える」
「ですねぇ」
美晴と有珠(ありす)が同時に頷いた。
「大体、刀同士で切り結んでいるというのに、エネルギーパック交換なんて出来ると思っているのかしら？」

評価は、もうボロクソだ。

「あんなものに予算つぎ込むなら、もっと別な兵器の開発にでもつぎ込んで欲しいわよ」

ガタッ

皆が勝手なことを言うテーブルから少し離れた所で椅子から立ち上がったのは、小柄な少女。

ほむらだった。

「すっかり遅くなったな」

報告やヒアリングなどで時間を取られた美奈代が食堂に入ろうとしたのは、その時だ。

何を食べようかなんて考え、壁に貼り付けられた張り紙に意識が行っていた美奈代は、

トンッ

食堂から出ようとしたほむらに気付くのが遅れた。

そして、互いの肩がぶつかった。

「あ、すまない」

無意識に謝ったのは美奈代の方だ。

「……」

ほむらは下を向いたまま、小さく頷いたかどうか。

そんな具合で、美奈代の横を小走りに通り過ぎていった。

「？」

痛かったのかな？

美奈代は、肩で感じたほむらの体の柔らかさを思い出しながら首

をかしげた。
「ケガ……してなきゃいいけど」
カウンターにトレイを持って立つ美奈代は、ほむらの背を見送るように、出口に視線を向けたままだ。
「はいよ？何にする？」
食堂のおばちゃんが美奈代に声をかけた。
「あ、何あります？」
「A定食は終わり。C定食ならすぐだよ」
美奈代の軍服姿に気付いたおばちゃんが、しげしげと美奈代を見た後、
「お嬢ちゃん、軍人さんかい？」
「え？ええ、近衛です」
「ああ。さっきの嬢ちゃん達と一緒かい」
小太りの６０の坂を越えているだろう老婆は、シワだらけの顔を綻ばせて笑顔を見せた。
「死んじまった爺さんもなぁ。海軍航空隊にいたんだよ。大尉まで行ったけどなぁ。酒癖が悪くて」
「私と一緒ですね」
「嬢ちゃん。そのトシで酒癖悪いと嫁のもらい手なくなるで？」
「いえ。階級の方」
「ああ」
老婆は、少し驚いた。と言う顔になった。
「あんた、大尉さんかい」
「ええ」
美奈代は小さく微笑んで見せた。
「そいつぁ……いかんなぁ」
「……は？」
意味がわからない。
「あの……それは？」
「だってお前さん」

老婆は笑って言った。
「若いうちに、あんまり階級あがり過ぎると、選べる相手の数が減るだろう？」
「……うっ」
「肩書きってのは、場合によっちゃ、ありがた迷惑なもんだよ？で、何食べる？」
「C定食って何です？」
「地元でとれるポテトコロッケだ。サラダはあっちで食べ放題だよ」
「ありがたいです――が」
いいかけて、美奈代は壁紙に気付いた。
「盛岡冷麺があるんですか？」
美奈代の顔は真顔だ。
盛岡冷麺は美奈代の大好物。
高校時代、冷麺食べたさだけで盛岡へ旅行を企画したことさえある。
シマダヤの冷凍冷麺を入れるためだけに冷凍庫を購入したこともある。
冷麺マニアというより、フリークと言っても良い。
冷麺が絡むと人格が変わると紅葉に呆れられても、美奈代はそれを変えるつもりなんてない。
「あるよ？ウチの冷麺は、盛岡の有名店仕込みさ。美味いよぉ？」
「大盛りで」
「はいよ――ちょっと待ってな」
老婆は調理の手を動かしながら言った。
「しばらくは、ここにいるんだろう？」
「そのつもりです」
美奈代は真剣そのもので老婆の調理を見守る。
「ああ。よかった」
老婆は、手慣れた手つきで麺をゆでながら頷いた。
「ほむらちゃん、普段から話相手もいないから、寂しい思いしてる

んだよ。仲良くしてやってくれや」
「あの子って、いくつなんですか？」
「確か、今年で１６と聞いたな」
「へぇ？高校、行ってないんですか？」
「通信制に通っているとかいってたよ。近衛の経営する孤児院にいたとか」
「……ああ」
美奈代は頷いた。
「雛鳳の出かな」
「知ってるのかい」
「――まぁ、ちょっと」
「まぁ、何にしても話し相手がいれば、あの子も笑うこともあるだろうさ。何せ、この戦争でいろいろ苦労しているからね。あの若さで」
「実戦経験が？」
「ああ……聞いた限りだけどねぇ」
老婆は麺をスープを入れた丼に移した。
「かわいそうに、あんな可愛い娘についたあだ名が“死神”ってんだからねぇ」
「は？」
「死神。そんなのにご縁が近いのは、俺みたいな年寄りだけで十分だ」
「何で、そんな名前が？」
「出撃する度に、仲間が死ぬ。ペアっていうのかい？メサイアってのは、２騎か３騎で動くのが相場なんだろう？」
「ええ」
「あの子は、何度も出撃したけど、そのたびに不思議とペアを組んだ相手が戦死するんだそうだ。軍人さん。あんたもそうかも知れないけど、縁起担ぐ連中からは忌み嫌われちまって、行くところがなくて、こんな所に送り込まれちまったってワケさ」

盛りつけが終わった冷麺がトレイにのせられた。
「ポテトサラダはサービスだからね。食べていいよ?」
「ありがとうございます」
美奈代は一礼すると、もう一度だけ食堂の入り口を見た。
電力制限で暗くなった照明。
廊下はほとんど闇に近い暗さ。
その中に消えたあの小さい背中。
「……」
美奈代は見間違いではなかったと思う。
あのぶつかった時。
そう。
間違いなく、

あの子は、

泣いていた。

模擬演習　第三話

「あーあ」
翌日。
光菱からの要望がまとまらないとの理由で、その日の朝からの演習は予定が止まったままだ。
焦げたままの“死乃天使”の装甲を目の前にした美奈代の顔は暗い。
「何やってんのよ」
紅葉が後ろから棒で美奈代の頭を小突いた。
「車傷つけられたみたいなへこみ方してない」
「これ……修理どうなるんですか？」
「あんたの減俸」
「ううっ……」
「滝のような涙流しなさんな。冗談よ――全部、光菱に請求するから」
「本当ですか？」
「あったり前でしょう？光菱が何考えてるか知らないけど、こいつ1騎を1時間動かすだけで、どんだけの費用がかかると思ってるのよ」
「考えたくないです。恐いですから」
「数字はいつだってリアルに恐いものよ。ところで？」
「明貴少尉について」
「……ああ。あの“死神”さんのこと？」
「そんなにひどかったんですか？」
「……私も聞いている限りよ？」
「……どうぞ」
「近衛はね」
紅葉は“死乃天使”の爪先にあるハンガーロック装置に腰を下ろ

した。
「有能とか、才能のある孤児を特別な孤児院に収容して育てる」
チラリ。と美奈代を見上げる姿勢になった。
「――これは、あんたの方が詳しいわよね」
「高校卒業までは、私もそこにいましたから」
「そう。その中でも特別なまでに高い才能を持つ、生粋の子供には徹底した英才教育を施す――この場合、メサイア使いとしての才能のことだけど」
「……」
「この辺も、あんたの方が詳しいだろうけど、私は聞かないことにしておく」
紅葉はニヤリと笑った。
「私も、まだ、あんたに殺されたいトシじゃないし」
「……ですか」
「明貴少尉は、あと数年早く生まれていたら、あんたのチームに配属されていたでしょうね――あんたと同じ意味で」
「……意味？」
「意味――その表現が正しいかは知らない。でも、そういうことじゃないの？」
「……言葉が不明瞭です」
「まぁ、いいわ。こういう仕事していると、いろいろと雑音が耳に入ってきてね。どれが真実で、どれが虚構なのか、区別が付きづらいところがあってね」
「……」
「まぁ、少尉のことに話を戻しましょう。彼女はＡＡＡマイナスのメサイア使いとしての才能の持ち主」
「……高いですね」
「対抗馬としては、ＡＡＡプラスと、あんたとほぼ同じレベル。近衛としては、その才能を“コドモ”を理由に寝かせておくことが出来なかった」

「才能があればコドモでも――――なら」
クスッ。美奈代は小さく笑った。
「あなたこそ、少尉と同じ意味ですね」
「……違いない」
紅葉も笑顔で返した。
「彼女が受けた英才教育ってのは、詰まるところ、幼少期からメサイアの操縦に慣らすこと」
「……」
「そういえば、あんたは小学校から中学の頃の記憶が抜けてるんだっけ？」
「ええ」
美奈代は頷いた。
「交通事故で」
「……ふぅん？」
「何ですか？」
「ううん？別に、彼女だけが特別だとは思っていてない。同じようなことをされている子供は、他にも何人もいるはずだって、私はそう思っている」
「何故？」
「……近衛の対応が手慣れ過ぎている。事前に戦争状態（こういうじたい）が起きたら、どういう手順で動員するかとか、予め、じっくり計画（プラン）が練られていたはず。でなければ、子供を動員するなんてそう簡単にできる事じゃない」
「あなたは？」
「私だって１０歳の頃に動員された時にはずいぶん揉めたのよ？国会でも取り上げられたくらいだし」
「よく国会が納得しましたね」
「人権派とかいう議員のババアを記者会見の現場でぶん殴ってやったのよ」
「誰が」

「私が」
「はぁっ！？」
「人を記者会見の場に引っ張り出した挙げ句、お涙と票下さい的な演説かましやがった。こっちは寝不足の上に開発詰まっててイライラしてる最中でね？
寝不足でうとうとしてたところを、くっさい香水と安化粧の汚臭プンプンする脂ぎったブヨ体で突然抱きしめやがったから、“人様を政治の道具に使うな！テメエんトコの不正経理は知ってるんだぞ、このクソババア！”ってね……翌日には抗議する奴が一人もいなくなった」
「よく殺されませんでしたね」
「まぁね……人徳よ」
「悪運の間違いでしょう」
「うっさい。黙れ――――で？少尉のことだけど」
「はい」
「特別な機関で訓練を受けた後、第二中隊に配属されて、初戦から活躍はしてるんだけどね」
「周囲が生きて帰ることがなかったとか」
「……というか」
紅葉は苦い顔になった。
「周りが弱すぎるってのが、私の見てる所だけどね」
「周りが？」
「あんたがさぁ？……こういっちゃなんだけど、染谷少尉達の部隊に送り込まれたら、同じ事になったと思うんだよね」
「えっ？それは」
「例えば、状況は乱戦。あんたはペアと一緒に突撃する。んで、あんた自身は、いつも通りに敵を撃破するでしょう。だけど、ペア組んだ奴まで、同じ事出来ると思う？」
「えっと」
言葉を躊躇する美奈代に、紅葉はたたみかけるように言った。

「あんたと同じレベル、もしくはそれに近いレベルじゃなきゃ、生き延びることが出来なかった戦闘は、一度や二度じゃなかったはずよ？私が言っているのはそういう状況」
「……どう、なんでしょうね」
美奈代は考えるのやめた。
「私本人の立場からは言いづらいです」
「……でしょうね。でもね？あの子の立場は、つまる所、そういう立場。勝って生き延びても、味方がそれについてこれない。
戦闘データからして、彼女がズル……味方を楯に逃げたとか、そういうことは一切していないことは確かだから、周りも回りで変な勘ぐりしちゃったのよ――その挙げ句が、あの子は死神だなんてことになって」
「……」
「怒りなさんな。私が言ったわけじゃない。だけど、あの子の才能は結局の所、味方にとっては守護天使の神通力とはみなされなかった。味方を死に追いやる厄介者のレッテルを貼られた挙げ句が、最前線から下げられた」
「……そんな」
「才能故の悲劇ってところかしらね――厄介者扱いされて、どうでもいいような研究兵器の開発を、よりにもよって、ＭＥなんて本物の厄介者の面倒見ながらやらされるなんて」
「あの……」
美奈代は訊ねた。
「ＭＥって、開発を禁止されたと聞きましたが？」
「そう。目玉にするはずだった自立戦闘プログラムの作成に失敗しちゃってね」
「自立戦闘プログラム？」
「自分より上位騎士の戦闘データ……例えば、二宮大佐とかね？それを元に、ＯＳ側で戦闘パターンを構築。騎士はそれに従って戦闘すればいいってシロモノ。最悪の場合、ＯＳ単体でもメサイアでの

戦闘が可能だってのが売り物だったんだけど」
「スゴいじゃないですか」
「理屈だけなのよ。あんただったら、一発でシステム停止を要求してくるでしょうね」
「？」
「要するにね？そんなシステムは、単なる横やり……お邪魔なのよ。わかるでしょう？例えば、背後にいる味方を守るためにここはシールドで敵の一撃を受け止める必要がある。そんな時に、プログラムが勝手に騎体回避を始めたら、元も子もない」
「……ああ」
美奈代は、ポンッ。と手を叩いた。
「成る程？そういう問題点があったんですね？」
「それだけじゃなくて、プログラムと騎士の操縦の境目が曖昧すぎて、下手すれば味方まで攻撃する無差別攻撃騎になっちゃうのよ……丁度、あの飛鼠（ひそ）のプログラムに近い」
「……うわ。それじゃ、開発停止になっても当然ですね」
「停止じゃなくて、禁止」
「……ですね」

美奈代が頷いた時だ。

ピーンポーン

チャイムが鳴り響き、美奈代達の会議室への集合を告げた。

「第一回目の演習は、正午から開始します」
神宮司は美奈代達に告げた。
「状況の想定は――」
一瞬だけ、美奈代の脳裏に昨晩の食堂でのことが浮かんだが、立

場的にここで聞き逃すことは出来ない。
美奈代は意識的に神宮司の言葉に神経を集中させた。
「“パースエーダー”の性能評価は、模擬戦闘をもって実施していただきます。攻撃担当は泉大尉、風間中尉。防御は明貴少尉。ミサイルは全て模擬弾。ビームも非破壊系のセンサー感知系とします。
泉大尉？昨日のような手荒なマネは避けてくださいね？」
「……了解」
「同時に、残りの方々で“アナイアレーター”の性能評価をお願いします」
「“アナイアレーター”はいくつを？」
「昨晩のうちに予備を組み上げましたので、計3基を準備しています」
「ということは」
美晴が言った。
「射撃性能評価にまず2基……刀身の性能は、大ちゃんと私が見ればいいから、1基かな？美奈代さん？どうです？」
「それでいいわ」
「了解。小清水少尉？ビーム系の性能評価はよろしく」
「頑張ります」
「――――では、そういうことで」

模擬演習　第四話

「シミュレーション結果は良好」
福沢中尉は、セッティングを続けながら言った。
「向こうにはズルしてると思われるかもしれませんけどね」
「……」
「……何かご不満なの？ほむらちゃん？」
「……何も」
「心拍数が興奮レベルよ？普段のあなたらしくもない」
「……」
「ふふっ。指摘されたから、下げようとして出来る程、人間の体は器用じゃないわ」
「……」
「いいですね？――――明貴少尉」
「……」
「これ以上、犠牲者を出したくなければ、この“システム”を戦場に送らねばなりません。一分一秒でも早く」
「……はい」
「よろしい」
福沢中尉は頷いた。
「こちらから先攻を」
「了解――――ターゲットロックオン」

“幻龍改（げんりゅうかい）”から上がった盛大な白煙に、美奈代が悲鳴に近い声を上げた。
「きたぁっ！」
「まぁ」
何故か、祷子は嬉しそうだ。

「――たぁまやぁ」
「……」
「……？」
通信に何も入らなくなったことに気付いた祷子が首をかしげた。
「……あの？皆さん、なんでズッコケてるんです？皆さん、かぎやさんがご贔屓だったのですか？」
「ここは隅田川じゃないっ！」
美奈代は怒鳴った。
「このバカっ！ミサイルと花火の区別もっ！」
ピーッ！
「言ってる場合じゃないでしょう！」
牧野中尉が怒鳴った。
「ミサイル、全部こっちへ来てますよ！？」
「嘘ぉぉっっ！」

「明貴少尉？」
ミサイルに追われて逃げ惑う“死乃天使”を眺めながら、福沢中尉が不思議そうな顔をした。
「何故、あの騎だけにミサイルをロックしたんですか？」
「……何でしょうか」
ほむらは、ちょっとだけ小首をかしげてから答えた。
「あのもう一騎は、絶対に敵対してはいけない……そんな気がしたからです」
「……はぁ」
「……不思議です」
「本当に――ちなみに、ミサイルで思いっきり狙った方は？」
「……なんでしょう」
「？」
「滅茶苦茶にしてやりたい……そんな殺意とも違う、ゾクゾクする

感情が」
「……ちょっと、大人の階段登りました？」
「教えて下さい。この感情は何ですか？」
「……うーん」
福沢中尉は、腕組みをして、しばらく唸ってから答えた。
「多分」
「多分？」
「……大人になればわかります」
「今、知ることはダメなのですか？」
「18歳まで待ちなさい――“死乃天使”、逃げ切りますよ？」
「……させない」

“死乃天使”の戦闘機動を経験して、熟々と牧野中尉は思う。
この娘を、津島紅葉が手放そうとしない理由は、こういう時にわかる。

光菱のマルチミサイルは、射程が短い反面、10G越えの人智を超える機動と、“世界最高の猟犬”と評価される程の強い追尾性を誇るミサイル。
つまり、
――速い。
――正確。

さらに、主力戦車を一発で吹き飛ばす
――破壊力

これが加わる恐怖の兵器だ。

狩野粒子さえなければ、マルチミサイルのキャリアを搭載した車両や航空機だけでアフリカだろうが南米だろうが、全ての戦場で人類は妖魔相手に圧勝しただろう。

だが、それが出来なかったからこそ、メサイアなんて厄介者がここまで戦場で幅を利かせている。

その恐怖の対象をかくもあっさりと回避、あるいは迎撃出来る騎士なんて、世界中にそう多くはないだろう。

自分だけで回避しろと言われても、数発喰らう覚悟は……いや、はっきり無理だ。

それをやってのけるこの娘の戦闘データは貴重すぎる。

全ての事象において、牧野中尉という人物はゼロという可能性の存在を信じないタイプだ。

ゼロでなくても、０．０００１とか、ゼロがどれほど羅列されても、それでも可能性というものは、決して皆無として存在することはない。

どんなに低くても、可能性そのものは厳然として存在する。

そういう持論をどうして持ち始めたかは、彼女自身もわからない。

ただ、普通なら不可能と判断するような、よく言って驚異的、。悪く言えば非常識な戦闘機動を見せてくれる、この泉美奈代という女性の存在に対する評価は、まさに牧野中尉の、そんな価値観が正しいことを証明してくれている。

「牧野中尉っ！」

美奈代が怒鳴った。

「ちょっとあの騎に通信繋いでもらえますか！？」
「どうしたんです？」
「文句があるんです！何で私だけ狙ってくるのかって！」
「そりゃぁ」
牧野中尉はニンマリと底意地の悪そうな笑みを浮かべた。
「イジメ甲斐がありそうなのが乗ってるんですから」
「ミサイルで攻撃するのって」
“さくら”がポツリと言った。
「イジメよりずっとスゴいことだと思う」

●夕方、ミーティング会場
「私どもの結論から申し上げますと」
夕方、ミーティングの席上、後藤は言った。
「両方とも……何ですな」
渋い顔をした出席者を一瞥した後藤は視線を彷徨わせ、
「……使い物にならん。となります」

「……それは」
額に青筋が立った神宮司が震える声で訊ねた。
「我が社の製品が、実戦では役に立たない……と？」

「“二兎追う者は一兎を得ず”という奴ですか？ビームライフルと斬艦刀の性能を一本化するってこと自体に、無茶がある……別に言えば、“帯に長し襷（たすき）に短し”とも言うか、運用上、どうしても、剣としても銃としても、中途半端は避けられない」
「そこを運用でカバーするのが！」

バンッ！
神宮司は机を叩いた。
「軍人（プロ）の仕事なんじゃないですか！」
「ビームライフル5発撃って」
山崎が言った。
「2分で斬艦刀としての機能を喪失するのは危険です。せめて本体から斬艦刀分だけのエネルギーを確保しないと、切り結んでいる途中でエネルギーダウンしたら、終わりです。運用上でのカバーには無理があります」
「早晩」
山崎の言葉に続けて、美晴が冷たい口調で言った。
「現場から欠陥品のレッテル貼られるか、使用拒否されるのがオチです。会社の名誉を守りたければ、開発を中止するか、エネルギーパックシステムに固執するのを止めるか、どちらかを選択するしかないでしょうね」
「……っ！」
「加えさせていただければ」
美晴の言葉に頷いた寧々も続けた。
「構造上、エネルギーパックの交換に手間がかかりすぎます。グリップから手を離して、左手でフォアグリップを掴んで、右手で交換なんて、白兵戦で出来るとは思えません。左手を故障した時点で使用不能どころか、命運が決まるなんて非常識です。
それに、剣を突き出した姿勢でしか発砲できないなんて、敵に“これから撃ちますよ”とわざわざ合図しているようなものです。とても使い物になるとは思えません」
「“アナイアレーター”だけじゃないけどぉ」
芳（かおる）も頬杖をつきながら言った。
「“パースエーダー”だって、実戦なら恐くて乗れないよ。装甲カバーが薄すぎて、破片でマルチミサイルに傷でもついたら、中から

推進剤漏れるじゃん。一発で火だるまか、こっちが“たまやぁ！”の世界になるよ？“白雷改”の四種装甲だって、あれより分厚いけど、その装甲貫通して、命中した破片が、本体装甲の内側でやっと止まってたなんて、以外とザラにある話なんだよ？」

芳（かおる）は、ちらりとほむらを見た。

ほむらはまっすぐ前を向いたまま、微動だにしない。

「いつ吹っ飛ぶかわかんないシステムくっつけて……ほむらちゃんだよね？あんなおっかない騎に乗ってるだけで私は偉いなぁと思うけど」

●食堂

「つーかさ」

盛岡冷麺をすする美奈代の前で、ソフトクリームをなめる紅葉が幸せそうな笑顔を浮かべている。

甘味類が貴重品となりつつある中、さらに富士学校から先、戦場ばかりを渡り歩いてきた美奈代は、最後にソフトクリームを食べたのがいつなのか、ちょっと思い出すことが出来なかった。

部隊の女の子達も、食後のデザートとしてソフトクリームを買いに列に並んでいる。

美奈代は、冷麺をもう一杯食べるか、それともソフトクリームを食べるか、支給された食券の使い道をちょっと考えてしまった。

「エルプスシステムと、エネルギーパックシステムは、特許的に狩野が公開しているから組み込めたようなもので、仰々しい名前つけても、あんなものに光菱らしいところは何もないのよ」

「そうなんですか？」

「公開なんて、斬艦刀の製造もそうだけど、エネルギーパックシステムの製造に必要な製造ラインを確保するための、狩野にしてみた

ら苦肉の策なんだけどさ……それで一儲けしようだなんて、光菱もセコいことするわよ」
「ふぅん？」
「それにしても、あんな程度のシロモノなら、心配する必要はなかったわね」
「……まさか」
美奈代も頷くしかない。
「柏達があんな厳しい評価を下すとは予想外でした」
「いざって時は命お預けします。それが武器でしょう？信頼性と使い道は絶対的な意味を持つのよ？斬艦刀だって、あんた等や、実戦部隊の意見を貪欲に取り入れているから、仕様変更や小さいバージョンアップを繰り返していることは言っておく」
「……“アナイアレーター”の改装は出来ないのですか？」
「どんな」
「刀身の部分だけ、パワーを本体から取り入れるとか……ほら、斬艦刀と同じで」
「本体と刀剣部を繋ぐ“ＦＰＴＳ（フレキシブル・パワー・トランス・システム）”は近衛の特許というか軍事機密扱いを受けている。いくら光菱でも、その部分を取り入れた兵器なんて、近衛や狩野に断りなく発表したら大事よ？」
「企業がどうの言ってる場合ですか？今は」
「企業にとって、戦争ってのは経済活動のことよ――ほら」
紅葉がソフトクリームのコーンで指した先には、トレイを持ったまま立ち尽くしているほむらがいた。
美奈代達の会話に聞き耳を立てていたのは間違いない。
ハッとなったほむらは、ちらっと美奈代達を見た後、そのまま歩き始めた。
「明貴少尉」
それを呼び止めたのは美奈代だ。
「泉大尉だ」
美奈代は、大尉。という言葉に力を込めた。

「食事がまだなら、こちらで食べろ」
「いろいろと聞きたいこともある――少しつきあってもらおうか？少尉」
「……はい」

軍隊における階級。
それは絶対的な意味を持つ。
美奈代は大尉であり、ほむらは少尉。
その違いは圧倒的なものであり、ほむらに拒否権はなかった。

「本当にカワイイよねぇ」
ソフトクリームを手に戻ってきた芳（かおる）が、ほむらの横顔を、興味津々という顔で眺めている。
「ほむらちゃん、歌とか歌えないの？」
「……別に」
「むぅ。アイドルユニットで十分活躍出来るよねぇ。ね？涼」
「うん……ほむらちゃん、戦争終わったらオーディション受けてみたら？」
「……興味、ないです」
トレイに置かれた漬け物を口に運びながら、それでも頬をほんのりと紅く染める辺り、年頃の女の子だなぁ。と、美奈代はそんなことを思った。
「少尉、“スーパーパック”についてだが」
美奈代は冷麺を食べながら訊ねた。
「少尉の目から見て、その売りは何だ？」
「――それは」
ほむらは、箸を止めると、美奈代の顔を見た。
「“スーパーパック”の特性は、その柔軟な武装オプションにあり」
さっきまでの寡黙さはどこへ行ったのか。
ほむらは蕩々と“スーパーパック”について熱っぽく語り出した。

ほむらに言わせると、本来の“スーパーパック”は、追加武装を搭載するフレームのことであり、本来はミサイルポッドを含む“アナイアレーター”なんて、そのオプションの一つに過ぎない。
ただ、対戦域攻撃性能が抜きん出て高いせいで、“アナイアレーター”のみが“スーパーパック”の目玉に据え付けられているだけとなる。

「……つまり」
ひょいっ。
パクッ。
横で聞いていた芳（かおる）が、トレイに残されていたコロッケを口に放り込んだ。
「あっ！」
ひどくびっくりした顔のぽむら。
その顔がだんだんと涙顔になっていく。
「――――へっ？」
もぐもぐ。
ごくんっ。
きょとん。とした顔の芳（かおる）は、やっと事情が飲み込めたらしい。
慌てた様子で、涙ぐむほむらの前で手をパタパタさせて弁明を始めた。
「ご、ごめんっ！ほむらちゃんって、好物は最後にとっておくタイプ！？わ、私、つい嫌いなのかと思って！」
「こら、芳（かおる）っ！」
「だって涼ぉ……私ん家なんて４人兄弟いるから、食卓のルールは“先手必殺”だよ！？」
「知るか、そんなことっ！ああっ。どうしよう！」
慌ててハンカチを取り出そうとする涼の横で、美奈代がテーブルに置かれた食券をほらむらの前に置いた。
「すまん。部隊長として責任とらせてもらおう。これをやるから、

後でソフトクリームでももらってこい――それで手を打って欲しい」
「い、いいんですか？」
「よかったねぇ。ほむらちゃん」
芳（かおる）がほむらの頭を撫でる。
「反省がないっ！」
「うるさいなぁ。涼……っていうかさ」
芳（かおる）は怪訝そうな顔で訊ねた。
「ほむらちゃん？支給は食券2枚でしょ？」
「……演習で負けたから」
ほむらは俯いた。
「神宮司主任から罰だって、一枚取り上げられて」
「何それっ！」
皆がぎょっ。という顔になった。
「パイロットの資本は体だよ？それを何！」
「虐待じゃないですか」
「自分達はロクな兵器も作れないのに、それでパイロットに責任とらせるってどういう神経してるの！？あのババァ！」
「“スーパーパック”は！」
皆の憤りを遮ったのは、なんとほむらだった。
「性能的に十分なんです！面で戦域を叩けるシステムがあれば、妖魔の集団突撃だって阻止出来ます！」
その真剣さに、毒気を抜かれた全員の視線が集まる中、ほむらは続けた。
「正面からの打撃や、メサイア搭載型のロケット弾攻撃だけじゃ、あの高速突撃は阻止出来ない！広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の炎が届く前に、メサイアが大型妖魔に潰されちゃう！」
「……」
「だからこそ、妖魔達との近接接触前（クローズド・エンゲージ）に、面で叩ける兵器がいるんです！“スーパーパック”はそのために、どんなことがあっても、

戦場に送り届ける必要があるんです！私は、“スーパーパック”を戦場に送り出して、一人でも多く助けたいんです！でなくちゃ！」

周囲の視線が自分に集まっていることにようやく気付いたほむらは、はっ！となった後、顔を真っ赤にして再び俯いてしまった。

「……ずいぶん、苦労したらしいな」

美奈代が優しく語りかけた。

「人は苦労した分、優しくなれるというが、少尉はその典型例というわけだ」

「偉いねぇ……」

芳（かおる）は感心したように、再びほむらの頭を撫でた。

「ちょっとは見習いなさいよ。芳（かおる）」

「涼だって人のこと言えないじゃん――ねぇ？」

「……悪かったわね」

「だけど」

寧々が、申し訳ない。という顔で言った。

「搭載しているミサイルシステムは、狩野粒子影響下では意味を成さない」

「今は性能評価のせいでマルチミサイルを搭載していますけど、みなさんの評価さえ高ければ、ミサイルじゃなくて、無誘導型のショートロケット弾の開発と評価へ移れるって。ですから、どうあっても、今回の性能評価は高得点を」

「……そう、口説かれたんだ」

遮るように、美晴が冷たく言った。

「神宮司っていう女の人に」

「……はい」

ほむらは頷くしかなかった。

「――馬っ鹿」

「柏っ！？」

「柏中尉！？」

突然の罵りに、皆が目を見張った。

「口車に乗せられているのよ。いい？神宮司って女の人、言っていたでしょう？“スーパーパック”は、“人類同士の戦争を想定したもの”だって。

つまり、魔族との交戦なんて考えていない。それに、ロケット攻撃で面で叩く。その発想は間違っていないよ？私達だって、幾度となくやってるし、それなりに有効だから。でもね？メサイアの騎体にくっつけたランチャーで、どうやって弾道調整するの？ちょっと考えればわかることよ？出来っこないって」

「――――っ」

“スーパーパック”は、少尉はいろいろ利点があるというけど、私が見る限り、あのミサイルランチャー抜きにしたら意味がない存在。追加装甲なら、“白雷（はくらい）”の第四種装備を参考にした方がよっぽど現実的だし、実戦でも結果を出している。

体中にロケット巻き付けた騎体に乗りたいなんて、私なら思わないわ。背中にランチャー搭載して近接戦闘するだけで心臓に悪いもの」

「……それは」

「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンク搭載しての戦闘にも慣れてきたからアレだけど、最初は装着したまま戦えっていう、上の連中の神経疑ったもの。ここにきて、もし“スーパーパック”が正式採用されたら広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の上にロケット巻き付けろって事ですよ？あんまりですよ。恐すぎます」

「白兵戦の前に、敵を殲滅することにこそ、“スーパーパック”は意味があります」

「偶発的な戦闘も可能性の視野にいれておくべき――――違う？」

「それは広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）でも同じはずです」

「リスクの上乗せは勘弁してほしいってことよ。別に“スーパーパック”の有効性は否定していないつもりです。ただ、普通の戦場に限定しての話」

「現在の日本では使い物にならない――――と」

「結果としてそうなるでしょう？津島中佐、せっかくここまで来ているんです。科学者として、あの“スーパーパック”を狩野粒子影響下では意味を持たせるとしたら、どう改装しますか？」
「改装すべき所を間違えてない？」
コーンをもぐもぐ食べながらやりとりを聞いていた紅葉は呆れた。という顔で言った。
「あのね？“スーパーパック”なんでご大層な名前つけてるけど、あんなのは単なる筒に過ぎない。問題はね？そこに収める中身でしょ？な・か・み」
「？」
「それつまり」
ほむらが答えた。
「ミサイルのことですか？」
「別にロケットでもいいけどね」
紅葉はニヤリと笑った。
「あんたも気付いているんでしょ？柏中尉の指摘が正しいこと。そして、それを実現しない限り、あれに意味はない。だからこそ、意味のあるロケット弾の開発に希望を託している」
「……」
「断っておくけど、光菱にそんな力はないわよ？」
「えっ？」
「あのね？」
紅葉は、白衣の六本線を指で弾いた。
「私や殿下、お師匠様という世界最高の頭脳が揃ってやったこと――狩野粒子影響下でのミサイルの誘導システムの開発」
「……それで？」
「失敗したのよ。狩野粒子から電子システムを守るためには、魔力によるバリアが必要。丁度、メサイアやＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のように、魔晶石自体が発する魔力フィールドに包む必要がある」
「そのフィールドの開発に失敗した？」

「山崎……その失礼な舌ひっこ抜いたげようか？」
「し、失礼しました。ですけど」
山崎は慌てて口元を押さえて弁明した。
「それがわかっただけでも褒めてほしいのよ。発見したのはお師匠様だけど、何でＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）やメサイアが狩野粒子の影響を受けないか、学術的に、やっと証明できたんだから」
「つまり、人類はその段階――つまり、何故そうなるか理解した段階で止まっている？」
「そういうこと。かといって、爆弾の誘導システムに魔晶石エンジン搭載するなんて、ダイヤモンドを燃やすようなものだし……」
「どうしようもないと？」
「――ま、凡人がどんだけ頑張ろうと、天才の立場からすれば、無理の一言でカタが付く。光菱にそれでもやれるっていう技術と知識があるっていうなら、来年あたりのノーベル賞はそいつが総ナメ出来るでしょうね」
「低コストで、弾頭を包み込むような仕組みさえあれば」
「それが出来ないから、苦労してるのよ。わかる？」
「……はぁ」
「明貴少尉？あんたの気持ちは理解できるし、敬意は持つ。だけど、科学者の一人として、現在の人類の科学技術であなたがやろうとしていることは、死人を生き返らせるのと同じくらい、無理としか」
「……そんな」
「狩野粒子の影響下ではジャイロまで狂う。現在のロケット弾の誤差が大体数十メートルって考えれば……あーっ、もうっ！そんな否定ばかりしていても、意味はないじゃないっ！いいっ！？天才がよってたかっても、解決できない問題ってのもあるものよ！」
「ですけど！」
ほむらはムキになって言い返した。
「神宮司主任は私に約束してくれたんです！必ず、戦場で使えるロケット弾を開発してくれるって！」

「あんたと私が老衰で死ぬまでに開発できたら、御の字でしょうね」
「――っ！」
「そんなことに期待するなら、クラスター爆弾を弾頭に詰めたロケット弾の搭載を検討すべきでしょうし、実際、そんな所に落ち着くんじゃない？」
「そんなことはないです！」
ほむらは怒鳴った。
その瞳には涙が浮かんでいた。
「私――――私はっ！」
タッ。
言葉を詰まらせたほむらは、そのまま駆けだして食堂から飛び出した。
「少尉っ！」
「ほむらちゃん！？」
「――――やめなさい」
止めたのは紅葉だ。
「結構、頑固な娘ね」
「中佐？本当に、ダメなんですか？」
浮かせた腰を椅子に戻し、美奈代が訊ねた。
「正確に、敵を面で叩く。それは我々にとっても有益です。あの娘が固執する価値はあるかと」
「だからぁ……」
「例えば」
美晴は言った。
「ＧＰＳ誘導型とか」
「衛星軌道上の人工衛星は片っ端から魔族軍によって撃ち落とされている。連中は衛星の有効性について知っているわ。自立誘導にせよ、他律誘導にしろ、どっちにしても誘導システムを狩野粒子から守りたかったら、弾頭部を三次元から切り取るくらいの劇的な工夫が要るわ」

「……お手上げってわけですか」
「そう。そんな現実を変えたいっていう、あの子の気持ちはともかく」
紅葉は、美奈代の手から湯飲みを受け取ると、一気にあおった。
「現実への対処は一つじゃない。押してダメなら引いてみる。それでダメなら蹴りつけて、それでもダメならこじ開ける。試験で入れてもらえないなら、コネを使う。正規で入れない大学なら、書類と面接だけの通信制に挑戦して肩書きだけもらうことを考えるとか、打つ手は徹底的に打つっていう、このフレキシブルな気持ちが大切なのよ」
「それ、しつこいって言いません？」
「問題解決に向けた執念と言いなさい。そのしつこい位の執念こそが、人類をここまで生き延びさせても来たし、発展もさせてきた。私はそう信じてる」
「その執念で、ミサイルの誘導は何とかなりません？」
「私は出来ないことはしないの。何が出来て、何が出来ないかを知ることから、天才の一歩は始まるのよ」
「うわぁ……詭弁」
「黙れ、“死乃天使”の修理代、給料からさっ引くぞ？」
美奈代は両手で口を押さえた。
「とりあえず、聞いておく――泉大尉」
「――しゃべって良いですか？」
「慈悲深い私に感謝なさい。返事する以外にも、呼吸のためにも口を開くこと許してあげるから」
美奈代は無言で頷いた。
「明貴少尉は、使い物になる？」
「……そりゃぁ」
美奈代は、昼間の模擬戦を思い出しながら答えた。
「狙撃、前衛、共に大したものですよ？」
そう。

美奈代は、自分を一度でも本気にさせた相手にほとんど覚えがない。
その中の一人に、確実にほむらは入っている。
美奈代は、それを素直に認めた。
「……そっか」
紅葉は嬉しそうに微笑んだ。
「ならいいよね」
「はっ？」
「明日の演習でいい」
紅葉は笑顔で言った。
「事故に見せかけて、あの“幻龍改（げんりゅうかい）”を、修復不能なまでに破壊して」
「はいっ！？」
「あの騎体がなければ、光菱のテストは止まる。もう魔族との停戦期間終了まで時間がない。これ以上の予備騎の手配はつかないはずよ？」
「とどのつまり」
美晴が楽しげに微笑んだ。
「ぶっ潰しちゃえば、こっちもさっさと引き上げられると」
「そういうこと」
「……ちょっ」
唖然とする美奈代の前で、
「まぁ、あんなシステムなんてどうでもいいから、あんた達は騎体の破壊と、明貴少尉のこっち側への引き込みに専念なさい。あの子に、うちの部隊への異動希望申請書にサインさせれば、もう後は私と後藤さんで上手くやるから」
「あの子を！？」
美奈代は自分の大声にハッとなって、周囲を慌てて見回した後、かがみ込んで小声で訊ねた。
「明貴少尉を中隊へ？」

「騎体はなんとかしてあげる」
紅葉はにんまりと意地の悪い笑みを浮かべた。
「ＡＡＡなんて素質のある騎士、放っておくのもったいないでしょ？」
「前衛に回していただければ、随分と楽になりますね――どう思う？柏」
「ポールウェポンが得意なら大歓迎ですけどね」
「あんなの振り回すんだから、得意じゃないはずはないでしょう？」
「そうですね……後は、さつきさんと都築君が戻るのを待つだけですねぇ」
「あと１騎あれば」
山崎の腕組みをしながら頷いた。
「美奈代さん達の斬り込み隊が２騎に、僕達前衛が６騎。狙撃隊が３騎」
「そういうこと。不満？泉隊長」
「いえ」
美奈代は首を横に振った。
「素質のある人材は歓迎します」
「そういうことよ。騎体潰して光菱のアホな計画潰して、あの子を引き抜く。騎体破壊にしくじったら、みんなで明日の晩、協力して頂戴」
「何するんですか？」
「決まってるじゃない」
ウププッ。
口元を押さえた紅葉がこのとき浮かべた笑みを、美奈代は表現する言葉を思いつくことが出来ない。
「楽しませてあげるわよ？泉大尉？」
「はっ？」
「お姉様はっ！」
きょとん。とする美奈代の横で、涼が真っ赤になって椅子を蹴っ

た。
「私のモノですっ！お姉様と（自主規制）していいのは、私だけですっ！」
「……それ、はっきり言わないでよ」
紅葉は真っ赤になって首をすくめた。
「私、まだ１５前なんだから」
「えーと」
美奈代はようやく意味がわかったらしい。
「つまり？」
「宗像仕込みのジゴロとしての才能、試す時が来たってわけよ。女同士だから、妊娠の心配ないし……ねぇ？」
「美奈代さん」
何故か祷子が親指を立てながら言った。
「――――リクルート活動、頑張って下さい」
「止めろっ！」

模擬演習　第四話（後書き）

うーっ。うつが悪化して死にそうになりながら書きました。

模擬演習　第五話

●光菱重工　モニター管制室

「これはこれは」

神宮司がわざとらしいほど、恭しく腰を曲げた。

「狩野重工のドクター津島の御親閲をいただけるとは」

「私の契約相手は宮内省よ」

紅葉は楽しくもない。という顔でスクリーンを見つめた。

スクリーンの向こう側では、ほむらの乗る“幻龍改（げんりゅうかい）”が出撃準備を整えようとしていた。

「武装はどうなっているの？」

「それは」

神宮司は楽しげに笑って――いや、見下したような邪悪なまでの笑みを浮かべて言った。

「交戦してからのお楽しみにしては」

「三本線（エキスパート）のクセに」

紅葉は自分の視線と同じ位置にある神宮司の白衣。その胸に取り付けられた三本のスタンド・ラインを指で指し示した。

「六本線（ハイパー・スタンド）の私にケンカ売るつもり？」

「――――まぁ」

神宮司は笑みを崩そうとしない。

「天下ご免の六本線様がそんなに短気だとは思いもよらなかったですわ？」

「丸い卵も切り様で四角になる。言葉使いに気をつけなさい――――身分の上では特に」

「心得ておきましょう」

スクリーンの中で、ほむらがコクピットに搭乗しようとしていた。

「あんな中途半端な騎体で」
紅葉はわざとらしい程、よく通る声で言った。
「私の傑作と張り合えるとはね」

「“スーパーパック”のおかげですよ」
褒められた。とでも思ったのだろうか？神宮司は胸を張って答えた。
「このシステムがあればこそ、どんな平凡な騎士でさえ、超一流の騎士として活躍することが出来るわけで」
「単なる追加武装じゃないの？」
紅葉としては、ほむらを褒めたはずだ。
ところが、神宮司は別な事を答えた。
「まさか」
「……どういうこと？」
「これは失礼しました」
「？」
「説明してませんでしたね。実は、“スーパーパック”の効率化を図る上で、そして、メサイアをより強力にするために」
まるで歌うように神宮司は喋る。それが紅葉の神経を逆撫でしていることに、神宮司は気づきもしない。
「ＯＳにも手を加えていますのよ？」
「はぁっ？」
紅葉は唖然とした顔で、神宮司を見つめた。
「あんた――誰の許可得て、メサイアのＯＳいじったの？」
「許可なんているんですか？単なるプログラムですよ？」
「バカっ！」
顔を真っ赤にした紅葉が大声を張り上げた。
「三本線の分際でメサイアのＯＳに手を出すとは何事だっ！」
居合わせた全員の視線が自分達に集中していることを、紅葉は気づきもしない。

「メサイアの、特に“インペリアル・ドラゴン”シリーズのＯＳは、“五本線（フルスタンド）”以上の監修の元じゃなきゃ、一言一句だろうと書き換えることが省令で禁止されてるの、知らなかったわけじゃないでしょうね！」

「そ、それは――」

神宮司は言葉に詰まった顔で、口をパクパクさせるしかない。

知らなかったのは確かだ。

「あんた達がやらかしたことは、光菱の重大な法令違反よ！？しかも、開発が禁止されたＭＥの出所を含めて――」

ガンッ！

鈍い音が響き、紅葉が床に倒れた。

「――どうします？」

スパナをポケットに戻しながら、背の低い男が神宮司に訊ねた。

「こ、殺したの？」

「まさか」

男は肩をすくめた。

「当て身を喰らわせて眠ってもらっただけです。医務室へでも運びますよ。興奮のあまり、気絶したとでもしておきますか？」

「そ、そうね」

神宮司はハンカチで額の汗を拭いながら頷いた。

「何が起きたかなんて、全員の口裏合わせればいいわ。しかも」

白衣を着た部下達によって担ぎ上げられる紅葉の小柄な体を眺めながら、神宮司は自分に言い聞かせるように呟いた。

「――私達には、“あの御方”がいらっしゃるんだから」

そう。

そうよ。

「工藤、うまくやっておいて」

神宮司はマイクを握りしめた。
「テスト1号騎、進捗を報告」

「気楽に潰せというけれど」
美奈代は５００メートル先に立つ“幻龍改（げんりゅうかい）”を前に、どうしても決心が付きかねていた。
「友軍のメサイア潰すなんて、冗談でしょ？」
「でも」
祷子が答えた。
「私達の人材不足を解消しないと、私達自体が危険です」
「二人の欠員補充……ううっ。艦長も薄情だよなぁ」
「平野艦長にもメンツがありますから。“出て行け”と言った相手に、“戻ってこい”なんて、普通は言えませんよ。例え、部下からの要請があったからって」
「要請を寛大な心で受け入れたってならないの？」
「無理でしょうねぇ」
「なんで？」
「艦長という立場上、一度放った命令を撤回するのに等しいですもの。そんなことしたら、悪しき前例となりかねません」
「じゃ、どうするの？」
「後藤隊長が手を回しているとは思いますよ？」
祷子はクスクスと笑った。
「いくら艦長でも、上から押しつけられた人事を無下にすることは出来ませんからねぇ」
「そういうことで、艦長としての体面を保って、二人を戻す？」
「そういうことですね。でも美奈代さん？」
「ん？」
「あの子、どのポジションに配置するつもりです？」

「騎体による」
「騎体？」
「そう。狙撃型なら当然、狙撃部隊だし、“白雷改”なら前衛」
「“Ｄ－ＳＥＥＤ”タイプなら斬り込みへ？」
「攪乱目当ての斬り込みにも、もう一騎欲しいのは確かなのよねぇ」
うーん。
美奈代は唸りながら答えた。
「二騎だけってのも――寂しいというか、一騎搦座した時の回収というか」
「それだけ？」
「何かあるの？」
「戦術管制役が欲しいなぁって、私は思うんですけどね」
「さつき達が使ってる奴ね」
「はい。あれがあると、いろいろ便利かなぁって」
「狩野粒子影響下での意味は検討する必要があるでしょうけど」
美奈代は、少し驚いた。そんな顔で言った。
「ＡＡＡを乗せるのは贅沢よ。それにしても、風間の口から、そんな言葉が出てくるとは思わなかった」
「意外でした？」
「うん。自分の代役を押しつけて楽したいとでもいうかと」
「まぁ、ひどい」
「すまん」
「本音をすぐに見破るんですから」
「――おい」
「くすっ。冗談ですよ」
「正面装備の拡充が先だ。あの娘の特性もまだ未知数だしな」
「前衛でも狙撃でも十分でしょう？昨日までの交戦を拝見した限り、あの子は美奈代さんをかなり追い詰めていました」
「――私も認める」
「……あの子の、何が気に入らないのです？」

「気に入る、いらないは問題じゃない」
「では？」
「部隊になじめるかな。それが心配で」
「……結構、心を閉ざしている所がありましたね。あの子」
「風間ほど、あっけらかんとしていたら、人生も楽なんだろうけど」
「まぁ、ひどい」
「とりあえず」
「はい？」
「――柏」
「はい」
「山崎、鵜来と一緒に模擬戦へ入れ。涼、狙撃隊の砲撃支援を許可」
「私達、前衛がですか？」
「前衛に配属する可能性もある。交戦して実力を把握しておくのもいいことだぞ？」
「……了解」

「交戦相手は、三騎です」
福沢中尉が戦況モニターを見つめながら報告する。
「“死乃天使”級2騎、後退します」
「今までと違う？」
「ご不満ですか？」
「……いえ」
ほむらは首を横に振った。
「……どうとでもなります」
「ですよね」
ほむらの答えに、福沢中尉が満足げに微笑んだ。
「――あなたなら」

美奈代達の横を柏達の駆る“白雷改”が前進する。
「柏騎より狙撃隊。ロケットランチャーの砲撃支援要請」
「小清水了解、タイミングの指示を」
「敵騎、発砲っ！」
「砲撃支援、今っ！」
騎体が爆発したんじゃないか。と錯覚する程、派手な白煙を上げながらミサイルが放たれたのは、そのタイミングだった。
既に交戦状態は宣言されているのに、こちらの対応手順は定まっていないことに、美晴は生理的レベルで怒りを感じた。
「迎撃を――――もうっ！」
散弾砲をウェポンラックから引き抜くと、ポンプを操作して薬室に砲弾を装填。
ＭＣ（メサイア・コントローラー）の照準で次々と散弾が放たれ、空中に派手な爆発の煙が立ち上る。
「美奈代さんったら、私達を送り込むなら送り込むで、先に言ってくれないからこういうことにっ！」
「中尉っ！」
切羽詰まった声が上がったのは、涼とＭＣ（メサイア・コントローラー）から同時だった。
「中尉っ！煙幕（スモーク）が邪魔で、射撃支援が出来ませんっ！」
「敵、弾頭に煙幕を仕込んでいた模様！視界が！」
真っ白な煙が雲のように空を覆い、そして自分達へめがけてゆっくりと降下を始めたことに美晴が気付いたのは、その時だった。
「――――えっ？み、ミサイルじゃないの？」
「何発か攪乱幕（ジャマー）が混じっていた模様！レーダー、効きませんっ！注意して下さい！」
「大ちゃん、有珠（ありす）っ！三角フォーメーション！」
しまった！

美晴は言った後に舌打ちした。
ダメだ！
固まってはダメだ！
私達はシールドを持っていない！
ここで砲火を受けたら！

「変更っ！」
すぐに美晴は怒鳴った。
「散開して、固まればマトにしか――――！」
「きゃあっ！」
ガンッ！
有珠（ありす）の悲鳴と、鈍い音が響いたのは、その直後だった。
「判定――――鵜来騎、撃破されました！」
「どこっ！？」
美晴は慌てて周囲を見回すが、煙幕が邪魔で周囲が理解出来ない。
「ソナー、熱源探知は！」
「右２時方向！距離８０にエンジン音――――っ！て、敵、音響ジャムを使用！ソナー、効きませんっ！」
「そっち！？」
方向感覚さえ狂わせる耳障りな甲高い音がスピーカーから響く。
もうもうと立ちこめる煙幕の中から、何かが飛び出してきた。
美晴はそれが何か判断する前に薙刀を突き出していた。
「――――っ！」
しかし、視界に入ったモノが何かを理解すると同時に、美晴は薙刀に込めた力を緩めるしかなかった。
「何っ！？」
煙幕から飛び出してきたもの。
それは、“白雷改”だった。
つんのめるようにしてこちらへ向かってくる“白雷改”のシール

ドをかすめるようにして、美晴騎の薙刀が宙を舞った。
でなければ、“白雷改”は薙刀に胴体を貫かれて大変なことになっていたはずだ。
「このっ！？」
相手が山崎ではなく、鵜来騎だと装備で判断した美晴は、鵜来騎との接触を回避するため騎体をひねった。
それまで美晴が立っていた所で、鵜来騎が転倒する格好で顔面から地面に倒れ伏した。
「有珠（ありす）っ！？」
鵜来騎に何が起きたか。
それよりも美晴がやらねばならないことは、自分を守ること、そして――。
「大ちゃん！？」
ピーッ
「山崎騎、やられました！」
「どこっ！？」
「熱源反応――近いっ！」
「どこよっ！」
「0時方向――頭上ですっ！」
「なっ！？」

「さすが……というべきか」
吹きだした強い北風に煙幕が流され始めた。
演習場の大地には、三騎の“白雷改”が倒れていた。
未だ、実戦の場で倒されたという屈辱をほとんど味わったことのない栄光の騎体が、三騎そろって撃破された事に、美奈代も心中では穏やかではいられない。
「煙幕を上手く使って敵を攪乱。混乱を誘って撃破するとは……」

ブンッ！

“アナイアレーター”が振られ、その切っ先が自分達に向けられた。

その意味はわかる。

「――風間」

「いえ」

袴子は答えた。

「ここは私が行きます」

「……何故」

「私だって騎士です」

クスクス笑いながら、袴子は答えた。

「私だって、熱くなる時くらいはありますよ？」

「……わかった」

「命令は何か？」

「――殺すな。それが絶対命令だ」

「任務了解♪」

袴子は斬艦刀を引き抜き、演習モードに入れた。

模擬演習　第六話

「３騎撃破――――“死乃天使”級１、前進開始」
「……了解」
通信装置の向こう、管制センターには興奮が沸き上がっている。
白衣を着た技師達の明るい声が、通信網を通じてほむらの耳にも届いている。
今まで聞いたことのない歓声が、ほむらの心を熱くさせた。

“スーパーパック”が近衛最精鋭部隊を撃破した！
彼等はそう叫んでいる。
ほむらもそう思いたい。
その歓声の輪に加わりたい。
だけど――――
ほむらの心の中で、何かが、それを否定し続ける。
心の中にひっかかったトゲのような“何か”が、ほむらを引き留める。
「……何？」
私は勝ったはずだ。
“スーパーパック”のおかげで勝ったんだ。
そのはずだ。
だというのに、何故、こんなに勝ったという実感がないの？
こういうの、勝ったといわないの？
「何？……この違和感は？」
「“死乃天使”級１、前進開始。距離９５０」
「――――っ！」
同じ手が二度も通じるはずはない。
なにより、今度は、こんな面白くない勝ち方はすまい。
徹底的に叩き潰して、今度こそ満足してやる！

ほむらは、“パースエーダー”のミサイルランチャーに命令を下した。

「ミサイル群、接近中。数１２」
「本当に……」
祷子はその数に呆れながら言った。
「こんなの反則ですよね」
「端から見ていると面白いんですけどねぇ」
弧を描いて襲い来るミサイルの雨を避け、“Ｄ－ＳＥＥＤ”は宙を舞った。
地面に着弾したミサイルが一斉に爆発して、地上を紅蓮の火炎地獄に変えた。
「うわぁ……炭火焼肉屋さん思い出すなぁ」
「せめてマグマとか言いません？」
「七輪なら……サンマですか？」
「その発想が理解出来ないんですけどねぇ……」
ピーッ
「次、来ます！地対空モードで発射した模様！」
さっきは弧を描いたミサイルが、空中を滑るようにこちらへ向かってくる。
獲物を見つけた、血に飢えた猟犬さながらのミサイル達を前に、祷子は動じることがない。
「よいしょ――っと」
空中で紅蓮の炎と黒煙が巻き上がる。
誰もが“Ｄ－ＳＥＥＤ”にミサイルが命中した。
そう判断するに十分だった。
だが――

ほむらは爆発には全くかまうことなく、ビームライフルを連射した。
空中で爆発したはずの“Ｄ－ＳＥＥＤ”が、地上ギリギリでビームライフルの弾幕を回避しつつ、ホバー移動を開始しようとしていた。
“Ｄ－ＳＥＥＤ”は、ミサイル同士の爆発をかいくぐって、地上まで急降下をかけた。
ほむらは、その動きを先読みして、ビームライフルを発砲した。
それだけだ。
褥子にしても、ほむらにしても、驚くべきことではない。
無論、信管が作動するギリギリのタイミングで騎体を急降下させ、ミサイルから回避するなんて芸当、普通なら出来る事ではない。
しかし、この二人にとっては――それは“当たり前”の事でしかない。

「こりゃスゴイ」
丁度、最も近くで見物することになった芳（かおる）が感心した。という声を上げるのも無理はない。
「これは好カードどころか」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）の川崎少尉は、記録を取りながら言った。
「歴史的勝負ですよ？」
「へっ？」
「ＡＡＡクラスの、しかも女性同士の勝負なんて、そうそうないことですからねぇ」

そう。
世界にも１００人といないだろう、メサイア使いとしてのレベルＡＡＡ。
レベル一つ違えば、戦力として大きな差が開くのがメサイア使いだけでなく、騎士そのもののレベルというものだ。

つまり、自分達とは格段にレベルの違う者達同士の戦いを、生で見ることが出来るチャンスなんて、そう簡単に転がり込んでくるものではない。

「たっぷりと」

モニターに具合を確かめた川崎少尉は言った。

「見物させていただきましょうか？」

その視線の向こう側で、ついに“幻龍改（げんりゅうかい）”が打って出た。

“アナイアレーター”を八相に構えた“幻龍改（げんりゅうかい）”――ほむら騎がホバーによる強襲をかける。

攻勢側にある“Ｄ－ＳＥＥＤ”が逆に防御に回った。

「そこっ！」

下からすくい上げるように振り回した“アナイアレーター”と斬艦刀がぶつかり合う。

ほむらはそう判断した。

それでいい。

ここで切り結んで――次は、

次々と頭の中で攻撃パターンを組み上げていく。

ところが、

「……えっ！？」

“アナイアレーター”は、空を斬るだけ。

“Ｄ－ＳＥＥＤ”側で、体勢を引いたのだ。

しかも、“アナイアレーター”の切っ先ギリギリに“Ｄ－ＳＥＥＤ”の装甲があった。

“アナイアレーター”のリーチが読まれているのは間違いない。

「――っ」

ほむらは、思わず歯ぎしりした。

攻撃が回避されたことに対してではない。

“Ｄ－ＳＥＥＤ”の今の武装に気付いたからだ。
目の前の敵は、抜刀すらしていない。
騎士同士が交戦状態にあるというのに、抜刀していない。
右手にはビームライフルが握られたままだ。

この状態で武装を変更しない。

抜刀していない！

それは、相手に交戦の意志がないか、或いは、相手として認められていないか、いずれか。
模擬戦である以上、そして、向こうから攻めてきた以上、交戦の意志がない。それは認められない。
残された選択肢――それは、相手がほむらを敵として認めていない。ということだ。

悔しい！
本気でそう思った。
バカにされている！
ほむらは、怒りがこみ上げてきて爆発しそうだった。
「このぉっ！」
ブンッ！
“アナイアレーター”が再び空を斬る。
“Ｄ－ＳＥＥＤ”はそれでさえ、武装変更しようとは考えない。
「落ち着いて！」
福沢中尉が怒鳴る。
「興奮している！脳波が異常値よ！？」
「――っ！」
歯を食いしばって自制を試みるが、一度熱くなった脳はそう簡単には冷めることはない。

「冷静に！普段のあなたにもどって！明貴少尉っ！」
「……ちっ」
ほむらは“幻龍改（げんりゅうかい）”を後退させようとした。
しかし――
ドンッ！
狙撃隊が弾幕を張ったのはそのタイミングだった。
“幻龍改（げんりゅうかい）”の後方に着弾したロケット弾が爆風をもって“幻龍改（げんりゅうかい）”の後退を止める。
「ぐっ！？」
ほむらは目を見開いた。
“Ｄ－ＳＥＥＤ”の攻撃じゃない。
「一体！？」
耳が痛む程の爆発音と、騎体を焼く熱風。
そして、弾丸のように空を切り裂いて飛んでくる礫と、雨のように降り注ぐ土砂の中、
どうして！？
そう考えて、ほむらは自分の考えの甘さに気付いた。
敵は“Ｄ－ＳＥＥＤ”一騎だなんて、誰も言っていない。
後方の部隊は、あくまで敵なのだ。
敵が敵である自分を狙った――それは当たり前のことでしかない。
自分の甘さに、ほむらの頬が紅く染まった。
「……下がるなということ？」
“Ｄ－ＳＥＥＤ”を睨み付ける。
ほむらには敵の狙いがわからない。
まるで試されている。
そうとしか考えられない。
――当ててご覧なさい？

そう、バカにされているとしか思えない。

――あなたに、当てることなんて、出来ものですか。

そう、見下されるとしか思えない！

「このぉっ！」

“幻龍改（げんりゅうかい）”が前進し、“アナイアレーター”が二回、三回と空を斬る。

なぎ払い、突き、引いては、押す。

“Ｄ－ＳＥＥＤ”は後退しつつ、舞うように右へ左へとその全てをかわしきってしまう。

傍目には“幻龍改（げんりゅうかい）”が押して、“Ｄ－ＳＥＥＤ”が一方的に押されているように見えるが、内実は逆だ。

“幻龍改（げんりゅうかい）”は、完全に翻弄されていた。

ほむらは、“アナイアレーター”の柄を脇まで引くと、“Ｄ－ＳＥＥＤ”めがけて切っ先を向けた。

ドンッ！

ビームライフルが発砲された。

狙いは“Ｄ－ＳＥＥＤ”の胸部。

命中、しかも直撃したら、中の騎士は無事では済まない。

しかし、それでもなお、ほむらは直撃を望んだ。

最早、ほむらにあるのは、目の前の“Ｄ－ＳＥＥＤ”を止めることだけだった。

――だが、

「何っ！？」

“Ｄ－ＳＥＥＤ”が急速後退をかけたのは、ビームライフルの発砲より若干前。

素人目にはほとんど同時だが、“Ｄ－ＳＥＥＤ”の方が若干速かった。
ビームが“Ｄ－ＳＥＥＤ”の装甲をかすめて飛び去った。
そして――
ほむらは、“Ｄ－ＳＥＥＤ”の騎士が何をしたかったか、初めてわかった。
何故、ビームライフルを放さなかったか、初めてわかった。
ビーッ！
ほむらは、コクピットに響き渡ったその音が何の音か、最初は理解出来なかった。
『危険
武器破損
強制放棄モード作動中
危険』
騎体情報を告げるステイタス・モニターに表示された警告。
騎体がコントロールを離れ、右腕に持つ“アナイアレーター”を投擲。
騎体そのものが勝手に急速後退をかける。
「あぐぅっ！？」
ほむらが、状況を理解するより速く、形容のし難い音と衝撃が、コクピットを襲った。
慣性制御システムをもっても殺せなかった衝撃が、ほむらの細い体を容赦なく襲う。
左腕の小型シールドがコクピットブロックを防御するが、ステイ

タス・データとして左腕や騎体右側の装甲に重度の障害が出たことが伝えられた。
ステイタスモニターに映し出される騎体の半分が、障害を持つことを示す黄色になっていた。

「な、何が？」
「“アナイアレーター”が」
福沢中尉がほむらの疑問に答えた。
「――破壊されました。大丈夫ですか？少尉」
「なっ！？」

何が起きたか？
簡単だ。
祷子の放った一撃は、正確に“アナイアレーター”の中心部、つまり、ビームライフルの銃口に飛び込んだ。
本来、ビーム・エネルギーを生成、発射するそこは、内部でエネルギーを集束し、撃ち出すことに耐えられても、その内部で、そのエネルギーが解放されることは想定していない。
“アナイアレーター”のビームライフル発射装置内部で解放されたエネルギーは、一瞬で“アナイアレーター”をズタズタに破壊してのけた。
ただでさえ危険な魔力エネルギーを扱う“アナイアレーター”は、その負担に耐えることが出来ず、破壊がエネルギーパックシステムに到達した時点で、物体としての存在さえ維持することが出来なくなっていた。

はぁっ。
はぁっ。

爆発という形でエネルギーパックから解放された魔力エネルギーがキノコ雲を作り上げる中、騎体にダメージを負いながら生き残った“幻龍改（げんりゅうかい）”のコクピットで、ほむらは呼吸を整えた。

こんな危険な立場に立ったのは久しぶりだ。

ただ、不思議と、

恐い。

そんな感情はなかった。

水が飲みたい。

そうは思ったが、敵は許してくれないだろう。

無理矢理、唾を飲み込んだほむらは、福沢中尉に武器の変更を要求した。

“幻龍改（げんりゅうかい）”が、背中にマウントしていた斬艦刀を引き抜いた。

「なかなか、しぶといですけど、もう終わりですね。これで」

「――――本気で殺す気だったんですか？」

「まさか」

袴子は心外。という顔になった。

「美奈代さんの恋人を殺すつもりはありません」

「えっ？」

「美奈代さんが狙っているんですよ。あの子」

「そ、そうだったんですか？てっきり、本妻が小清水少尉で、愛人（セ）関係（フレ）が宗像元中尉かと思ってました」

「……本妻と愛人が逆じゃないですか？」

「いえいえ。これでいいんですよ」

「そうだったんですか？私、てっきり小清水少尉が夜の玩具にされているのかと」

「いやぁ……少尉の発言からして、本妻は絶対、小清水少尉ですよ。私、これだけは譲れません」

「私もまだ未熟ですかねぇ……とにかく、あの子は今晩を境に、美

奈代さんを狙って、小清水少尉と血で血を洗う泥仕合になる身なのです。そんな楽しみ、私がわざわざ潰す理由はないでしょう？」
「同感ですけど、現時点で恋人と断定するのはどうでしょうか？」
「恋人になるかもしれない。なんて、長くて面倒くさいです」
「成る程ねぇ」

ゾクッ！
ほむらは背筋に恐ろしいほどの冷たい何かを感じ、思わず身震いした。
「な……何？今の」
「少尉。とにかく、敵の撃破最優先――いいですね？」
福沢中尉が、念を押すように言った。
「“同じ目”に会いたくなかったら、何をすべきかわかっていますよね？」

とにかく、目の前の敵を撃破しよう。
それに専念すれば良い。

ほむらは自分に言い聞かせた。

“アナイアレーター”を破損したんだ。
昨日までみたいに、ひっぱたかれたり、罵声を受けたり、ご飯減らされる程度じゃすむはずはない。
もう、殴られるのはイヤだ。

「“あれ”は大嫌いなんでしょう？」

ほむらの脳裏を、“あれ”を取り付けられ、悲鳴を上げてのたう

ち回る自分の姿が走馬燈のように浮かんでは消えていく。
体に、初めて恐怖が走った。
ガクガクと、膝が震える。

「嫌いなら、“あれ”を味わいたくないなら」
福沢中尉の声は、あくまで冷たい。
「――わかっていますね？」

「――はい」
ほむらは、呼吸を整えると、ＳＴＲシステムに力を込めた。

「――あら、まだやる気？」
祷子は、少しだけ、呆れた。という顔になった。
「“アナイアレーター”壊した所で、演習は終わりのはずなのに」
「……ですねぇ？」
水城中尉も首をかしげるしかない。
武器破壊の時点で演習停止命令が出るとばかり思っていた。
ところが、演習は継続している。
何故？
「敵、斬り込んできます」
「……無駄なことを」

「やぁぁぁぁぁっっ！」
ほむらの渾身の一撃が上段の構えから振り下ろされた。
祷子はその一撃をシールドの曲線でそらすと、振り向き様、横薙ぎの一撃で胴を狙った。
ほむらは、斬艦刀を翻し、しっかりとその一撃を受け止めた。

斬艦刀同士のエネルギーのぶつかり合いが、激しい火花を散らす。
「くっ」
「……このっ」
祷子とほむら。
体格差と騎体のパワーの違いは、ほむらの方がわかっていた。
力押しになったら負ける。
だから、ほむらは自ら手首をひねって、力押しから小技に転じた。
力押しから逃れたほむら騎の斬艦刀が、突然、力押しから逃げられてバランスを失いかけた“Ｄ－ＳＥＥＤ”の持つ斬艦刀の峰にそって、その首へと伸びる。
「なっ！？」
驚いた祷子は、転倒しないギリギリまで、体勢を大きく崩し、その脅威から逃れる。
“Ｄ－ＳＥＥＤ”の補助ブースターが点火され、“Ｄ－ＳＥＥＤ”の姿勢制御が働いた。
「――やる」
ぺろり。
祷子は上唇を舐めた。
「この娘、素質は美奈代さん並です」
その口元に、笑みが浮かんだ祷子は、斬艦刀を構え直すと、“Ｄ－ＳＥＥＤ”の目前でそれを掲げてみせた。
わざとらしい。
自分でもそう思うけど、こういうことをしたい位、ほむらという相手は祷子にとって敬意に値する存在だった。
ほむらからの返答が動作としてなかったとしても、祷子は腹も立たなければ、それでいいとさえ思った。
今の祷子にとって、ほむらという存在は、敵であれば十分なのだ。
これ以上を望むなら、狩られる存在という、“当然”の身であれば、それで良いのだ。

斬艦刀同士が鎬を削る。
ここでほむらという騎士の技を、祷子はまざまざと見せつけられた。
普通、剣同士がぶつかりあった場合、力押しになるのが相場だ。
ところが、ほむらは違う。
斬艦刀で、相手の斬艦刀を“叩く”という方が正しい剣の使い方をしてきたのだ。
無論、そんなことをする理由は、祷子にはすぐにわかった。
斬艦刀を弾いた力を利用して、小さく祷子の予想外のポジションで再度、斬艦刀を構え直すと、そこから一撃を見舞うのだ。
切り結んだと思った瞬間、突き技が襲ってきて、斬艦刀そのものを放棄しそうになったことは、一度だけではなかった。
騎体、特に頭部や首といった、メサイアの弱点をほむらは適切に突いてくる。
狙いは恐ろしく正確だ。
大技はないが、隙を狙った小技こそが、ほむらの剣の特徴だと、祷子は即座に抜いた。
見事だと、祷子も思う。
「だけど――――！」
ギインッ！
“Ｄ－ＳＥＥＤ”の斬艦刀が、ほむら騎の鍔ギリギリの位置に撃ち込まれた。
下段からの逆袈裟斬。
ほむら騎は、それを弾ききることが出来ず、斬艦刀の動きが止まった。
次の瞬間――――
「寛大すぎる私に感謝なさいっ！」
「っ！？」

目を見開いたのはほむらの方だった。
“Ｄ－ＳＥＥＤ”は、右手で斬艦刀を保持したまま、伸ばされた左手でほむら騎の斬艦刀を脇に挟む要領でねじ上げたのだ。
手首をひねられたに等しいほむら騎は、斬艦刀を持ち続けることが出来なかった。
「美奈代さんなら」
ズカァァァンッ！
袴子は叫びながら、ほむら騎の胸部装甲を蹴り上げた。
“エッジアタック”で殺してる所ですよ！？」
ほむら騎がくの字に曲がって後方を吹き飛ばされた。
数回、大きくバウンドしてやっと止まったほむら騎は、そのまま動かない。

「司令部、こちら水城中尉。明貴騎撃破を宣言。演習の停止を要求します。水城中尉より福沢中尉、大丈夫ですか？」
悠然と、大地に横たわるほむら騎へ近づく“Ｄ－ＳＥＥＤ”から、水城中尉が問いかけた。
「無事……とは言いがたいですけど」
痛たたっ。
福沢中尉が答えた。
「システムが緊急停止。騎士、反応無し」
「まさか」
「心拍は確認……気絶している模様」
「よかったぁ」
「よくありませんよぉ……こっちはタンコブ出来ちゃった」
「お気の毒に。回収、必要ですか？」
「お願いします。システムが止まって、リブートを試みているのですが、ダメです」
「モードは？」
「３０３。ショックによるフリーズですね。一度、システム全体を

止めなくちゃ」
「手間ですね……回収してハンガーで実施した方が」
「私もそう思います。フリーズしたまま……えっ？」
「どうしました？」
大地に転がったほむら騎を抱き上げようと腕を伸ばした“ＤーＳＥＥＤ”。
「緊急モード？何これ」
「フリーズしているんでしょう？」
「ええ……３０３が繰り返し表示されて……何？この“自己防衛モード”って」
“自己防衛”？」
何を――
水城中尉は、そう問いかけようとした。
ところが、
ズンッ！
鈍く、厭な音が震動を伴って“ＤーＳＥＥＤ”を襲った。
ビーッ！
騎体損傷を告げる警報が鳴り響く。
破損箇所は腹部。
「なっ！？」
スクリーンには、それまで横たわっていたほむら騎が再び起き上がって、そして手にした短剣を“ＤーＳＥＥＤ”の腹部めがけて突き刺す姿が映し出されていた。
「ふ、福沢中尉、一体、何を！？」
「何もしていないっ！」
その声は悲鳴に近い。
いや、悲鳴そのものだろう。
「騎体から離れて下さいっ！」
「騎士を止めなさいっ！」
ほむら騎は何度も“ＤーＳＥＥＤ”の腹部へ短剣を突き刺す。

“Ｄ－ＳＥＥＤ”の腹部を構成する機材がその度に、まるで内蔵のように撒き散らされる。
「騎士のコントロールは停止状態、こちらもシステムが――」
パニック同然の中、福沢中尉は宣言した。
「騎体暴走！システム制御不能！現時点をもって、騎体の暴走を宣言します！」

模擬演習　第六話（後書き）

……なんか、うつのせいでしょうか。元からかな?発想が貧弱になってきてます。あたま、働かない。ぼんやりして脳みそのなかで悲鳴が上がってる。こりゃ、医者から静養勧められるわけだなぁ。と実感しながら、それでももてあます時間つぶしに書きました。いろいろ大目に見て下さい。

模擬演習　第七話

騎体暴走――――。

本来、騎士やＭＣ（メサイア・コントローラー）によって厳重にコントロールされているはずのメサイアが、その制御から逸脱したことを示す言葉。

本来、あってはならない事態を指し示す言葉で、類似するような例を強いて挙げるとしたら、自家用自動車がドライバーのコントロールを離れて暴走し続けるようなものだ。

このような事態に陥ること自体が極めて希で、世界的に（公表されている限り、だが）、この事態に陥ったメサイアの記録はない。

記録がない以上、発生したことがなく、それはつまり、こういう事態に陥った場合への対処方法を誰も知らない。ということにもなる。

今、この管制センターに居合わせたのが、メサイア開発専門家集団である近衛開発局や狩野重工のスタッフなら、まだどうにかなったかも知れない。

しかし、この場に居合わせているのは、メサイアという兵器の内部については素人同然の、付属武器開発に初めて携わったばかりという、光菱重工のスタッフであったのが、ある意味で幸いし、そしてある意味で、不幸を生み出す元凶となった。

「主任、ど、どうすれば！？」

「本社、問い合わせますか！？」

「近衛への通報は！？」

右往左往するスタッフの中、一人冷静なのは神宮司主任ただ一人。

じっ。と、“ＤＥＥＤ”への攻撃を止めない“幻龍改（げんりゅうかい）”を睨むように見つめながら、思案していた神宮司は、真顔で小さく頷いた。

「――佐藤副主任」
「はっ!?はいっ!」
神宮司の後ろでオロオロしていた小太りの中年男が、はげ上がったバーコードのような頭だか額だかわからない辺りをハンカチで拭う手を止めた。
「“ケース13”を適用します」
「ケース……」
佐藤は、しばらくバカのようにポカン。とした後、そのポケットからメモ帳を取りだした。
「えーと……ケース13……あ、これだ」
会議の際、極秘と指定された内容をメモで残していたのか!と、神宮司は一瞬、怒鳴りつけようとして深呼吸したが、それはやめておいた。
佐藤は、自分でメモしていた内容を見て、真っ青になった。
「ま、まさか!?しゅ――」
「責任を取りたいというなら、止めないわよ?」
神宮司は佐藤の言葉を遮り、たたみかける様な早口で言った。
「家族のことを考えなさい。路頭に迷いたいの?」
「……しかし」
「何度も言わさないで」
「……私は」
佐藤は答えた。
「一光(いち)菱の社員に過ぎません」
「……上手く逃げたわね……通信を全てカットしなさい」
「了解――太田、主任からの命令だ。通信カット」
「はいっ!?」
通信装置でほむらを呼び続けていた若い技師がギョッ。とした顔で振り向いた。
「な、何言ってるんですか!?佐藤さん!?」
「状況を説明なさい。佐藤」

「は、はい……つまりだな。太田君。」
佐藤は答えた。
「訓練中にテスト騎との間で“何らかのトラブル”が発生。一切のデータリンクが停止。通信もつながらない中、現状の事態が発生した――つまり、“そういうこと”だよ」
「そんな！」
「――何か？」
椅子を蹴って立ち上がった太田を威嚇したのは佐藤ではない。
神宮司だ。
ジロリ。
その睨み付ける様な眼力は半端ではない。
男社会の中における苛烈な競争を生き延びてきたキャリアとしての自負が、強い力となって相手を射すくめるのに十分すぎる。
それは、大学院から研究畑だけを歩いてきた理系の純粋培養品に過ぎない太田という若い男に太刀打ち出来るシロモノではない。
ゴクッ。
下手なホラー映画よりずっと迫力のある場面に遭遇した太田は、自分の飲み込む唾の音が嫌に大きく聞こえた。
「この事態は、光菱として責任の負える範囲での出来事ではない――そういうことよ」
「ぐ、具体的な指示を下さい」
「自分で考えなさい。指示待ち族は出世出来ないわよ？この光菱の技師として生き延びたければ、自分が今、何をすべきか、自発的に考えなさい」
「……田村、水樹、通信ログを削除しろ」
太田は通信装置のログを開きながら言った。

「データリンク、交戦開始から全て消去だ。データを上書きするんだ」

「主任、パスワードを教えて下さい。改編したプログラムを消去します……いや」

佐藤は、ハッとなって首を横に振った。

「HD（ハードディスク）を物理的に破壊します。志村、ハンマー持ってこい」

「はいっ！」

――おかしなものだ。

神宮司は、内心で腹を抱えて笑いたかった。

誰一人、自分の研究成果に責任を持たない。

欲しいのは自分の保身だけ。

それが、企業社会における男だ。

なんて無責任で、有害な存在だろう。

ここで、身を挺してでも研究成果を守ろうという気骨のある漢はいないのか？

いるものか。

もし、そんな奴がいたら、私はこの場に、この立場では存在していないはずだ。

「……さて」

神宮司は、ポケットから一本のキーを取りだした。

「始末だけはしてあげるとしましょうか」

「風間っ！離れろっ！」

「お姉様、狙撃の許可を！」
「狙えるのか！？」
「ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）だと、“Ｄ－ＳＥＥＤ”を巻き込みます。でも、寧々ちゃんなら」
寧々騎の狙撃砲は実体弾。
大型ビーム砲であるＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）では“Ｄ－ＳＥＥＤ”を巻き添えにする恐れが高いが、狙撃砲なら“幻龍改（げんりゅうかい）”だけを狙うことも可能だ。
「鬼龍院中尉、頼む」
美奈代は斬艦刀を準備しつつ、寧々に言った。
「腕を狙えるか？」
「……左腕なら」
「やってくれ。命中と同時に私が飛び込む」
「はい」
「涼――攪乱のため、煙幕弾（スモーク）と攪乱膜弾（ジャマー）の支援をくれ」
「了解！芳（かおる）？」
「わかった！」

「どうするんです？」
「“Ｄ－ＳＥＥＤ”は搦座――下手をすれば」
美奈代が“死乃天使”を一歩歩かせたのはその時だ。
ギインッ！
“幻龍改（げんりゅうかい）”が搦座した“Ｄ－ＳＥＥＤ”を突き飛ばすと、その背後から抱きかかえ、“死乃天使”の前に立ちはだかった。
「ちょっとぉっ！？」
美奈代が素っ頓狂な声を上げたのは無理もない。
これではまるで刑事ドラマの人質と犯人だ。
背中からコクピットめがけて短剣を突き立てられれば、祷子は無事では済まない。
「あの子、何考えてるのよ！」

「ですから」牧野中尉が言った。
「あの子は気絶中。ちなみに騎体は暴走中」
「こりゃ……本当に厄介な話ですね……後藤隊長に説得してもらうように頼みますか？」
「いくらあの人でも、暴走する機械相手に説得が通じるとは思えません」
「……無理、か」
「無理、です」
「鬼龍院中尉。狙撃位置変更。膝を狙え」
「膝？しかし、下手すれば、“ＤＥＳＥＥＤ”へ当たります」
「損傷が一カ所位、増えても問題ないだろう？」
「――コクピット以外のダメージは不問に付す、そう判断します」
寧々は頷くと、射撃モードを精密射撃に切り替えた。
“幻龍改（げんりゅうかい）”の一部に不可視レーザーを照射したのは、寧々の判断だ。
目視だけの射撃だけでは不安。
それだけの理由だ。
他意はない。
しかし――
「“幻龍改（げんりゅうかい）”より発砲っ！」
「なっ！？」
“幻龍改（げんりゅうかい）”の背中から白煙が立ち上った。
「――ロケット攻撃？」
「弾数４、弾道、こちらへ向かってきますっ！」
「小清水少尉！」
「任せてっ！」
涼騎と芳騎（かおる）が、それぞれ左手に構えたビームライフルを発砲。
ほとんど水平弾道で襲い来るロケット弾が空中で破壊された。
「――またっ！？」
寧々達が驚愕したのは、そのロケット弾の爆発した空間での変化

だ。
白煙が濛々と周囲を包み込む。
弾頭が通常弾頭ではなく、煙幕だったという証拠だ。
「まずっ！」
煙幕が邪魔で、視界が奪われるのと同時に、レーザー照射が出来ない。
「一体、どういう！？」

「中尉、教えて下さい！」
狙撃不能の報告を受けるより前に、美奈代は“幻龍改（げんりゅうかい）”へめがけて襲いかかった。
はっきり、バクチに近い。
本当に“ＤＥＥＤ”を人質と判断しているなら、この突撃が、祷子を殺す。
しかし――単なる脅しや楯のつもりなら？
美奈代は、後者だと、自分に言い聞かせた。
単なる脅しだと、そう決めつけることにした。
でなければ――何も出来ない！
「あの騎は一体、誰が動かしているんですか！？」
「ＭＣ（メサイア・コントローラー）の発言が正しければ」
牧野中尉は狼狽しきった声で答えた。
「自立動作しているだけです」
「自立？」
「ＯＳが、ケース・バイ・ケースで適切と判断した戦闘記録を再現することで動いているんです」
「何ですか？こんな戦闘経験があの騎に？」
「他の騎、例えば、あなたの戦闘記録もデータとしてフィードバックされているかも」
「私、あんな卑怯なマネはした覚えが！」
「……静岡でメースを楯にした覚えが２、３件」

「……何の話ですか」
「都合の悪いことは忘れるって、よくないですよ？」
「と、とにかく、あいつを潰します！」
「そうですね！」

“幻龍改（げんりゅうかい）”から内蔵ＭＬ（マジックレーザー）が飛来。
美奈代は“死乃天使”のシールドで数発をまともに受けた。
強い衝撃が疑似感覚として腕に鈍い痛みを産む。
対ＭＬ（マジックレーザー）コーティングが限界を迎えないことを祈るだけだ。
「風間ぁっ！」
「……は……はっ！？」
突然のことに半ば気絶していた祷子は、その怒鳴り声でようやく目を覚ました。
目前には自分めがけて襲い来る“死乃天使”。
「脚上げろっ！」
「脚？」
祷子は、斬艦刀を八相に構える“死乃天使”の意図を即座に読んだ。
「はいっ！」

突撃した“死乃天使”は、“幻龍改（げんりゅうかい）”とまともに組み合うことはしなかった。
突撃速度を決して緩めることなく、ギリギリの位置を突き抜けた。
ザンッ！
すれ違い様、２騎の間でそんな音が生じた。
“幻龍改（げんりゅうかい）”に抱き上げられた格好の“Ｄ－ＳＥＥＤ”。
その脚が地面から水平に伸ばされている。
“死乃天使”の斬艦刀は、その下をくぐって“幻龍改（げんりゅうかい）”の左膝を切断した。
ズズンッ！

片脚を失った“幻龍改（げんりゅうかい）”は立っていることが出来ず、その場に“Ｄ－ＳＥＥＤ”と共に崩れ落ちた。

「仕留めたっ！」

“幻龍改（げんりゅうかい）”がひっくり返るようにして倒れたのを確認した美奈代は、空中でターンすると“幻龍改（げんりゅうかい）”に再び近づいた。

覆い被さるようにして倒れた“Ｄ－ＳＥＥＤ”が邪魔で反撃できない“幻龍改（げんりゅうかい）”が必死にもがいている姿は、ある意味で滑稽でさえある。

「このまま、風間と一緒に串刺しにでも」

「化けて出ますよ？あの人、絶対」

「……やめておきましょう。風間、生きてるか？」

「今、殺そうとしたでしょ」

「気にするな。選択肢の一番目に来ただけだ」

「それって、いいことなんですか？」

「ああ。生理と陣痛と痔が一緒に来た位な」

「……後ろ二つがわかんないんですけど、悪意は感じました」

「脳みそが人並みに戻ったか？」

「……後で殴って良いですか？」

「ダメだ。そのまま動くな。というか、動けないか」

「……です」

「泉騎より福沢中尉。脱出（エジェクト）は可能ですか？」

「こちら明貴騎福沢。だめです。脱出不能（エジェクト）」

「外部から強制脱出を試みます。風間、最悪の事態に備えて、脱出準備。復唱」

「福沢了解」

「風間了解」

「というわけで」

“死乃天使”に片膝をつかせた美奈代は、コクピットハッチを開きながら言った。

「牧野中尉、後、お願いします」
「動作中の騎です。危険ですよ？」
「誰かがやらなきゃいけないことですし」
美奈代は、通信モニターの向こうへむけて、小さく笑って見せた。
「……ご武運を」

火山灰を含む粘りけのある土に足をとられるながら、美奈代は“幻龍改（げんりゅうかい）”の腰に近づいた。
「ジタバタしないでよ」
２騎のメサイアが重なり合っている。
その高さだけで１０メートル近い。
重量に至っては数十トン単位だ。
これが少しのバランスを崩しただけで、自分に崩れ落ちてくると考えるだけで、正直、足がすくむ。
しかし、美奈代は部隊長であり、ここで、“これ”が出来るたった一人の存在だ。
美奈代は自分に立場を言い聞かせ、勇気をふるって“幻龍改（げんりゅうかい）”の腰部装甲に近づくなり、その装甲をよじ登った。
「……これだ」
よかった。
美奈代は、ホッ。と胸をなで下ろした。
“幻龍改（げんりゅうかい）”と“Ｄ－ＳＥＥＤ”。
それぞれの装甲の隙間は、実際には美奈代が入るギリギリの幅しかない。
しかも、両方の騎体は動いている。
動作中の工作機械の中に入り込むのとほとんど変わらない危険を冒しながら、美奈代は、その隙間に入り込み、“幻龍改（げんりゅうかい）”の手動脱出装置のカバーを開いた。
カバーが歪んでいたら、もうアウトだった。
しかし、カバーは生きている。

中の装置も無事だ。

――内部からの脱出が困難な場合がある。

主に、ハッチが歪んで内部の脱出装置を作動してもハッチが飛ばないケースがほとんどだ。

その場合、ここの脱出装置を使用すると、ハッチ周辺の装甲を爆破ボルトで吹き飛ばすことが出来る。

美奈代は、富士学校時代のこと。そして、アフリカでこれを使用したことを思い出した。

脳裏に浮かぶのは、脱出装置の操作方法を教えてくれた二宮教官の顔であり、染谷の顔だった。

しかし、その染谷の顔を忘れかかっている自分に気付いた時、美奈代は少しだけ自分の心境の変化に驚いた。

染谷。

脳裏に浮かんだその名前そのものが、ひどく昔のことにさえ思えてしまう。

――いけない。

そんな感傷に浸ってる場合じゃない。

美奈代は脳裏から染谷の顔を追い払った。

恋人。

そう呼ぶべき相手の顔を、そうもあっさりと忘れることが出来る自分の心境を顧みる余裕は、美奈代にはない。

暗証番号を入力――本来、一部高級幹部しか知らない共通番号を何故二宮が知っていたかは知りたくない。

とにかく、パスワードが変更されていたらもう終わりだ。

美奈代は祈るように決定キーを押した。

ピーッ。

心臓に悪すぎる音が響き、パスワードが通った。

「やった！」

思わず歓声を上げた美奈代は、その場でガッツポーズを取ろうとして後頭部を見事に装甲にぶつけてのたうち回った。
「痛ぁぁぁぁぁっっっ！！」
目からボロボロ涙が出る。
「痛いけど……」
美奈代は、その場から這うようにして逃げ出した。
「とにかく、潰されるよりマシよね」

胸部ハッチが吹き飛んでも尚、“幻龍改（げんりゅうかい）”は動きを止めない。
しぶといにも程がある。と、美奈代は呆れつつも、その暴れる“幻龍改（げんりゅうかい）”に飛び乗った自分も、結構しぶといな。と苦笑するしかない。
ハッチのあった部分は、機材、特に操縦に関するＳＴＲシステムがむき出しになっている。
「福沢中尉……聞こえますか？」
「はい。ハッチ、飛びました。すでに脱出しています」
「“死乃天使”へ移動して下さい。牧野中尉、回収を」
「了解。感謝します」
「了解――福沢中尉」
牧野中尉と福沢中尉の通信を聞き流しながら、美奈代はＳＴＲシステムの中でぐったりしたままのほむらを起こそうと、頬に手を伸ばした。
「……」
いや。
このまま、眠らせたまま、運んだ方が楽だ。
そう思ったのは何故かわからない。
とにかく、美奈代はほむらを抱きかかえると、“幻龍改（げんりゅうかい）”から離れた。

同じ頃。

「やめて下さいっ！」
管制センターでは一悶着起きていた。
「それだけは！」
佐藤と太田が押し問答になっていたのだ。
「何を恐れている」
異様に興奮した佐藤が血走った目で太田を睨み付ける。
「データは処分した！残るデータは、あの騎体の中だけだ！」
「二人、あそこにいるんですよ！？」
「知ったことか！」
佐藤はついに太田を突き飛ばした。
「私には娘が二人いるんだ！私にとって守るべきはあの二人だ！」
「佐藤さん、気が狂ったんですか！？」
縋り付く太田を止めたのは周囲だ。
「放せっ！佐藤、田村！？お前らっ！？」
「これは事故だよ――太田君」
「水樹、お前！？」
「副主任、さっさと終わらせて下さい。僕、夕方には見たいアニメがあるんです」
「言われんでもさっさと終わらせてやるさ」
半透明の黄色いカバーのついたボタンを、佐藤は何の躊躇いもなく押した。
その背後で、神宮司がせせら笑っているのを咎める――いや、気付いている者はいない。
保身のため。
家族のため。
皆のため。
そして――会社のために。
佐藤は、そのボタンを押した。

スクリーンの中で、“幻龍改（げんりゅうかい）”が大爆発を引き起こしたのは、その直後だった。

模擬演習　第八話

こんな危険に巻き込んでおいて、誰も見舞いにもこない！

と、ハンガーに収容された中隊の中で、息巻いているのは涼だ。

“幻龍改（げんりゅうかい）”の爆発に、本当にギリギリのタイミングで巻き込まれずに済んだ“死乃天使”の足下に寝かされているのは、“Ｄ－ＳＥＥＤ”。

腹部を短剣でめった刺しにされ、割れた装甲からはみ出たケーブル類が内蔵、漏れ出たオイルが血液を連想させる。

“死乃天使”が、“Ｄ－ＳＥＥＤ”を担ぎ上げ、脱出機動に入った途端に爆発した。

あと少し、タイミングが違っていたら、褌子達の命はなかったろう。

損害は“Ｄ－ＳＥＥＤ”だけではない。

ほむらによって搦座させられた騎も、その多くがそれなりの損害を被っている。

中でも深刻なのは、搦座した際に骨折して、今や病院の世話になっている有珠（ありす）だ。

コクピットブロック周辺の装甲が大きく変形しており、衝撃のすさまじさを物語っている。

美晴達は体は無傷とはいえ、搦座という屈辱が精神的に与えた影響は軽視できない。

乱暴にコクピットから降りた美晴は、無言のままトイレへと消えたまま。

山崎はそんな美晴を見送ると、ぼんやりと愛騎の足下に立ち尽くしたままだ。

「……」

肝心の部隊長である美奈代は、未だにコクピットブロックから出

ていない。
ほむらの存在だ。
ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の間近にわざと騎体を駐騎させたのも含めて、ほむらの処遇に迷っていたからだ。
未だに気絶したままのほむら。
その生存を、光菱に教えるべきか。
本来なら吉報のはずだ。
だが、美奈代は何故か迷った。
教えるべきではない。
脳裏で何かがそう告げている。
教えると――大変なことになる。
そう、告げているのだ。
こんな事態になっても、様子伺いにもこないどころか、未だに通信が復旧しない管制センターの様子も気になる。
「ここで」
ほむらの華奢な体つきを腕に感じながら、美奈代はポツリと呟いた。
「――下手は打てないな」

「大変な事態になりました」
神宮司がそう告げたのは、美奈代達がわざわざ管制センターに足を運んだ時のこと。
“幻龍改（げんりゅうかい）”が爆発してから、時間にしてすでに2時間近くが経過していた。
爆発の危険性が少なくなったという理由で、ようやく消防車が“幻龍改（げんりゅうかい）”に近づきつつある中だ。
神宮司の涼しげな顔に神経を逆撫でされる思いがする美奈代は、表向きは平然と答えた。
「何が起きたのですか？」

「“パースエーダー”に格納されていたロケットが暴発――――騎体が吹き飛びました」
「……メサイアが」
美奈代は、神宮司を睨み付けるように視線を外さずに訊ねた。
「暴走したようですが？」
「していません」
神宮司は、はっきりとした口調で答えた。
「強いて言えば、あれは騎士の暴走です」
「MC（メサイア・コントローラー）の福沢中尉は騎体暴走を宣言していましたが？」
「福沢中尉の誤認だと信じています。こちらでは確認出来ていませんので」
「確認させていただいて結構ですか？」
「……というか」
「？」
「通信装置の不具合がありましてね。未だに復旧していないのです」
「通信装置？」
「“幻龍改（げんりゅうかい）”とのデータリンクを含め、一切の通信が途中からダウンしていました」
“データなし”と表示されたままの真っ黒なスクリーンを神宮司は軽く指さした。
「……それを信じろと？」
「施設の電気系統の障害でしょう。我々の責任ではない」
「……明貴少尉達は？」
「……」
神宮司は、一瞬だけ戸惑ったような顔に見えた。
しかし、彼女は視線を美奈代から外して答えた。
「……残念です」
「残念？」
ピクリ。美奈代の眉が動いた。
「脱出していないのですか？」

「確認されていません。遺体回収は、消火活動終了を待つしかないでしょう」
「……騎体は？どう見ますか？」
「先程、私も目視で確認しましたが」
神宮司はジロッと睨むような目を美奈代に向けた。
――余計なことを聞くな。
そんな、強い非難がそこにはありありと込められていた。
「あの状況では“無理”でしょう」
「助からないと？随分薄情ですね」
「残念には思っています。通信手段が根元からダウンしていなければ、我々も脱出を推奨したでしょう」
「……」
美奈代はチラリと技師達を見回した。
皆、仕事にかかりっきりという姿勢だが、実際の所、美奈代達に関わりたくない。という内心がありありと読み取れる。
「我々との通信を確保しようとしなかった理由は？」
「こちらもパニックに近い状況でした。通信ダウンの原因の調査だけで手一杯。少しは察して下さい」
「……」
美奈代は、少しの間沈黙し、そして言った。
「以降、我々はどうすれば？」
「明日、近衛から事故調査委員が到着します。状況の説明に立ち会って下さい」
「それまでは、我々は自由行動でよろしいですか？損傷騎の後送手配をしたいのですが」
「それは構いません」
神宮司はようやく笑みを見せた。
「――ご苦労様でした」
「それと、後一つ」
「何か」

「津島中佐と後藤隊長の所在は？」

「事情はわかった」

紅葉や後藤達の移動のために派遣されてきたＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中。

美奈代と牧野中尉、そして後藤と紅葉が、そして後藤の副官である涼宮が、機内に集まっていた。

その中、うなだれているのは、ほむらと福沢中尉だ。

紅葉専用に改装されたこのＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）は、分類の中でも大型に属する。

機内には、下手な研究所並の電子設備だけでなく、長時間の飛行にも耐えられるように、トイレもあるし、研究員や乗員が仮眠がとれるベッドまである、下手な民間旅客機並みの設備を誇っている。

さすがに光菱もここまで入ってこないだろう。という美奈代の判断は間違っているとは思えない。

集まった理由を光菱に訊ねられても、「会議はいつもここでやっていたから」という、その一言でケリがつくのも強みだ。

「泉、お前の判断は正しいと思うぞ」

くわえタバコの後藤は楽しげに、ニヤリと口元で笑って見せた。

「……それはいいんですけど」

美奈代はジロリと冷たい視線を後藤と紅葉に向けた。

はっきり、非難している。

「今まで、どこにいたんですか？」

「うっさいわねぇ」

紅葉は首に氷嚢を当てながら美奈代を睨み付けた。

「誰かにぶん殴られてのびてたのよ」

「殴られた？」

「そう。首筋ね……管制センターの誰だろうが、後でぶっ殺してやるわ」

「ちょっと……それって」

「だから、んなことする連中が事故なんておしとやかなことしてるワケないの。これは全て、人災よ」
「……で？後藤隊長？」
「大人にゃ、大人の楽しみがあるもんさ」
「……お酒臭いんですけど」
「お前、今年成人式だったなぁ。今度、飲み行くか？」
「話をそらさないで下さい――まさか、すすきの行ってたなんて言わないでしょうね」
「おっしいなぁ！」
パチン。と後藤は指を鳴らした。
「近いけど、違うな」
「どこです？」
「――聞きたいかい？」
その不敵な笑みに、
「止めておきます」
美奈代は堪らずに視線をそらせた。
どうしても、この人には勝てないな。
そう、美奈代は内心で舌を巻いた。
「ロクでもないトラブルを背負い込みそうで」
「賢明だね」
後藤の横では頬をほんのり紅く染めた涼宮遥がおかしそうに笑っていた。
「神宮司さんは、この二人が死んだと断定しているんだな？」
「はい。先程、消火活動が終了。コクピット、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）共に原形を留めない程の被害を受けています。私と牧野中尉が、意見を求められて現場に立ち会いました」
「何て言っておいた？」
「骨が残っていたら奇跡――程度です」
「牧野中尉」
「はい？」

「普通の爆発事故――――こういうケースでさ?そこまでなるもんか?」
「……難しい所ですね」
牧野中尉は答えた。
「設計図を少しだけ拝見したのですが、騎体がある程度、改装されています。コクピット周辺とMCR(メサイア・コントローラー・ルーム)の近くに20ミリ実体弾発射機構がありますし」
「20ミリ?」
「ええ」
福沢中尉が答えた。
「近接防御用です」
「タマの種類は?」
「焼夷榴弾」
「爆発すればそれなり……か」
後藤はタバコをくゆらせながらシートにもたれた。
「それがおかしいんですよ」
牧野中尉は言った。
「MCR(メサイア・コントローラー・ルーム)やコクピットブロックの装甲を無視するようにドラムマガジンが配置されています。あんなの安全基準から考えると非常識です」
「というか」
紅葉は憮然としていった。
「いざって時に爆発させて、騎士とMC(メサイア・コントローラー)を用済みにするための仕組みでしょう?福沢中尉?本当に」
「はい?」
「CIWSの中に、弾薬が詰まっていた?」
「……ローディングは確認していますけど」
福沢中尉は首をかしげた。
「使用に際しては、管制センターの許可を得るように厳重な通達を受けていましたけど……?」

「試し打ちした事は？」
「……ありません」
「ＣＩＷＳはガドリング砲？」
「ええ。液体火薬を使用した、単発銃身タイプ」
「それが爆発したってことにすればいいだけよ。試射もさせていなかったのは、最初からいざって時に、こうするためでしょうね」
「そ、そんな！」
驚愕する福沢中尉の前で、紅葉は冷たく答えた。
「否定出来る？」
「……」
中尉は、残念そうに目を閉じると、首を左右に振った。
「……いえ」
「騎体はそんなところだが」
後藤が続けた。
「問題は、そんなこと知っちまったお二人さんをどうするかだな」
「今更、実は生きてましたなんて言ったら？」
「翌日あたりに死体だろうな。“貴重な騎体を壊した責任を死んでお詫びします”とかいう、ワープロ打ちの文章残して拳銃自殺とか」
「……」
美奈代は、二人を見た後、言った。
「二人とも、明日には騎体回収用の大型ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が来る。隊長。それに乗って、ここから離れる手はずをとれば」
「……だな」
後藤は頷いた。
「後は、俺の方でなんとかしてみよう。事態が一段落するまでは、ここから離れた方がいい」
「……でも」
福沢中尉は怪訝そうな顔をした。
「私達は、無事に脱出出来たのですよ？それを何故？」
「ここにいたら」

美奈代は中尉の言葉を遮るように言った。
「殺される。私達はそう言っているんですよ?中尉」
「えっ?」
中尉はきょとん。とした顔をした。
「それは?」
「神宮司さんははっきり言った。暴走は起きていない。確認していないと」
「まさか!」
「通信がダウンしていたと言っていたが、そんな都合のいい話があるものか。それに、どこをどうやったら、外部オプションの爆発で、コクピットやMCR(メサイア・コントローラー・ルーム)が吹っ飛ぶような爆発が出来る?その結論は出た。近接防御用機構と名付けられた自爆装置が作動したんですよ」
「……そんな」
「福沢中尉」
「……はい」
「もう一度聞きます。騎体が暴走したというのは、本当なのですか?」
「神に誓って」
福沢中尉は胸に下げていたロザリオを握りしめた。
「コントロール不能に陥ったのは事実です。緊急制御を試みましたが、システムは停止しませんでした」
「緊急制止レバーは引いたのね?」
「一番から三番まで、全て」
福沢中尉がポケットからとりだしたのは、3つの安全ピンだ。
「……でも、騎体は暴走を続けて。その間にシステムダウンと強制終了を試みたのですが」
「精霊体は?」
「システム停止と同時に姿が消えて、以降は……」
「……データログは」
言いかけて、牧野中尉は肩をすくめた。

「暴走したら、ログなんて残ってるのかしら？」
「エラーログが確認出来るだけでも貴重よ」
紅葉は答えた。
「中尉？データディスクは回収したんでしょうね」
「脱出は手順通りにやっています」
福沢中尉は、足下に置いていたバッグの中から分厚くて四角い金属の箱を取りだした。
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）側の戦闘記録ディスクだ。
航空機で言えばブラックボックスに該当する。
「預かるわよ？」
「……構いません」
中尉は頷いた。
「殺されるよりはマシですから」
「うん……で？」
「で、とは？」
「二人の処遇はこれで良いとして、ウチの損害は本当に光菱が保証してくれるんでしょうねぇ」
「そりゃ」
後藤は肩をすくめた。
「あっちの都合ってヤツさ」

「はい……その通りです」
通信装置が“回復”した管制センターで、神宮司は余裕たっぷりに頷いた。
相手は光菱重工本社の重役だ。
「つまり、君は」
時間は深夜に達そうとしている。
高級なブランドモノの背広をブヨブヨに醜く太った体を押し込め

ている男が、緊張を隠せない様子で、落ち着きのない動作を繰り返す。
回線は専用回線。盗聴の心配はないというのに……。
――全く、男という生物は。
神宮司は内心でせせら笑いながら言葉を待つ。
どうして、男はこういう時に腹を決められないのだろう。
こんな時にこそ、堂々として、意志を決めなければならないというのに。
「これは事故だというのだな？」
「結論はすでに申し上げたとおりです」
神宮司は頷いた。
「我が社に、少なくとも幹部級の関係者に、手落ちはございません」
「近衛はログデータの提出を求めてくるぞ？」
「データはすでに消去されています」
「消したことはすぐにバレる！」
バンッ
重役は机を叩いた。
「何ということをしてくれたんだ！データを改ざんした形跡とみなされれば、それだけで終わりだと、何故気付かなかった！」
「私は何もしていません」
神宮司は冷たく言い放った。
「やったのは佐藤副主任です」
「なっ！？」
神宮司の後ろに立っていた佐藤の顔が真っ青になった。
「私は、打ち合わせの内容を外部に漏らしたくないから、通信を切れと命じはしました。しかし、データの改ざんは命じた覚えがありません」
「……ふん？」
重役は鼻を鳴らした。
「つまり、佐藤君が暴走した結果、我が社は折角近衛から借り受け

ることの出来たメサイアを失ったと？」
「その通り」
「ち、ちょっと！」
佐藤は震える手を必死に伸ばしながら言った。
「な、何の話ですか！？私が何を！？」
伸ばされた手を乱暴に払いのけた神宮司は、そのまま佐藤を後ろへと突き飛ばした。
「ＨＤを破壊したのも佐藤ですし、データ消去命令を下したのも佐藤です」
「……成る程？佐藤君が越権行為の挙げ句、暴走した結果がこれと」
「データが消去している事情については、そうなりますね」
「……困ったものだ」
「全くです」
床に尻餅をついたまま、呆然とする佐藤の前で、重役と神宮司が会話を続ける。
「メサイアは演習中に爆発事故を引き起こした。関係するデータを我が社が確保出来なかったのは、佐藤君がデータを破壊したため……か」
「はい」
「……うーむ」
二重顎をしごいた重役は、なにか納得できない。という顔になった。
「説得力に欠けるな。佐藤君が“何故”、そんなことをしたか……だが」
「佐藤は、血縁者に狩野重工の関係者が」
「……ほう？」
「バカな！」
佐藤は神宮司の足にすがりつきながら叫んだ。
「叔母は狩野重工とは関係ない！彼女は単なるパート清掃員だ！」
「そういうルートからでも協力者を獲得しようというのが、あの会

社の狡猾な所ですわ」
「――そうだな」
「神宮司さん、あ、あんた、一体何考えてるんだ！」
ガンッ！
佐藤のアゴを捉えたのは、神宮司のパンプスの爪先だった。
「負け犬に用はないのよ――後始末はどのように？」
「佐藤君と共に札幌へ向かいたまえ……電話を入れよう」
「はい」
「不幸な事故はあるものだ」

不幸な事故。

それが何を意味するか。
佐藤は冷徹な企業倫理のまかり通る大企業――光菱の中で学んでいる。
俺はよかれと思ってやったんだ。
会社のためにやったんだ！
家族のために！
みんなのために！

「全く」
重役は深いため息と共に呟いた。
「我々は社会組織の一員として、精一杯、社会通念というか、崇高な倫理に従って邁進しているというのに、一人の社員の暴走によってそれが傷つけられることがあっては困るんだよ」
「本当に、その通りですね……専務」
「私達がどれ程、潔白な身であっても、それを部下にケガされてはたまったものではない」
「一滴の汚水が、ワインの樽に入り込んだらそれは汚水とみなされる」

「佐藤君にも困ったものだ」
「佐藤の裏切りを見抜けなかったのは私の不徳の致す所です」
「いやいや。神宮司君はよくやってくれている。“スーパーパック”計画は、佐藤君の裏切りがなければ、順調に推移していただろう。ところが、佐藤君があの会社から買収された挙げ句、破壊工作に至ってくれたわけだ。これは予測しろという方が無理だ」
「ご配慮に感謝いたします」
「では……記者会見の場で会おう」

――はい。

神宮司はそう答えたつもりだった。
だが――
彼女はそれを口にすることは出来なかった。
頷き、喉から言葉を出そうとした彼女。

雄叫びと共に佐藤が振り下ろしたハンマーが、その脳天を叩き潰した。

カシャッ

卵の殻が潰れたような音が室内に響いた。

「このっアマっ！」

グチャッ
グシャッ

倒れた神宮司の頭をハンマーで何度も殴りながら、鮮血に染まってなお、佐藤はハンマーを振り下ろす手を止めようとしない。

「女（メス）の分際で！男に刃向かうからこうなるんだ！」

神宮司の脳漿と血がスクリーンにまで飛び散った。

悲鳴を上げて逃げ惑う研究員達。

重役は慌てて通信を切れとスクリーンの向こう側で叫ぶ。

「畜生！畜生めがぁぁぁっっっ！！」

「……うまいか？」

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の中。既に福沢中尉は眠りに落ちている。

室内灯のぼんやりとした灯りの中、トレイの食事を口に運ぶのはほむらだ。

シートのない場所。ほむらと真向かいの床に置かれた段ボール箱に腰掛けた美奈代がほほえみかけた。

「……はい」

ほむらは小さく頷いた。

「うまいって、意味がわかるか？」

「……いえ」

「生きているって……そういうことだ」

「……」

「出撃時間はどのくらいだ？」

「実戦で９８時間です」

「かなりだな」

「泉大尉達は」
スプーンをトレイに置いた。
「もっとでしょう？」
「まぁ、そうなるな」
「……仲間を失ったことは？」
「あるさ」
「たくさん？」
「私にとって」
食べろ。
美奈代は続きを促すと少しだけ背筋を伸ばした。
「かけがえのない友達を、目の前で失った」
「……ごめんなさい」
「事実は変えられない。少尉も苦労したようだな」
「いえ」
「“死神”の異名をその歳で取るとはな」
「……」
「話は聞いている。噂としてだが」
「……」
「気の毒だとは思うが……まだ終わっていないぞ」
「えっ？」
「答えを言う前に聞いておきたい。少尉、君はこれで終わったと思うか？」
「何が、終わったんですか？」
「君の戦いだ」
「……終わってないです」
「終わっていない？」
「……はい」
ほむらははっきりと頷いた。
「何も始まっていませんし、終わってもいません」
「何故」

「“スーパーパック”は、何も完成していません」
「あれを実戦に送れば、君の戦いは終わるのか？」
「“スーパーパック”を全部のメサイアに搭載させて、全部のメースと妖魔を潰して、全てを焼き払って！」
ほむらはスプーンを握った手に力を込めた。
「勝って――勝って！
みんなの死が無駄じゃなかったって、証明しなくちゃ！」
「それが、君の選択か」
「他に選択肢なんてない！」
ガシャンッ
トレーが床に転がった。
「でも――でもっ！
他にやり方なんてわかんない！
みんな、みんな砲撃支援を求めて死んでいった、あの戦いで！
“スーパーパック”があれば、みんなが望んだ砲撃支援を必要なくなる！
あんな無残な死に方、誰もしなくなる！
それが望み！
私、私は、私の納得出来る方法をとるしかない！
与えられたのは、“スーパーパック”っていう選択肢だけ！
なら、その中で精一杯のことをしたい！
それしかないじゃないっ！」

ほむらの瞳を大粒の涙が零れた。

「既に騎体はない。“スーパーパック”の計画は大幅に遅延を余儀なくされるだろう」
美奈代はハンカチを取り出しながら立ち上がった。
「君がどう足掻こうと、どうにもなることじゃない」
「でもっ！」

「現に君は」
ハンカチでほむらの涙を拭いながら、美奈代は囁くように言った。
「その“スーパーパック”開発陣に切り捨てられた」
「嘘っ！そんなの嘘だっ！私が気絶している最中に、騎体を壊したクセにっ！」
「私が君を助け出した時には騎体はまだ暴れていた」
「騎体が暴走するなんて、そんなことは嘘よ！あの子は、“時乃”は優しい子なんだから！」
「“時乃”とは、精霊体のことか？」
「そう」
ほむらはしゃくりあげると、小さく頷いた。
「だから、そんな子が暴走なんて、理論的にもありえないことをしでかすなんて、あり得ない！」
「しかし、現に君の騎は“Ｄ－ＳＥＥＤ”を滅多差しにした。あれは君のせいか？それとも“時乃”のせいか？」
「そんなの知らない！私達のせいじゃない！」
「じゃぁ、誰が？」
「……違う……ヒック……私達じゃ……ない」
「……」
「どうして？どうして、みんなで私を邪魔するの？私、頑張ってやっている。なのに、どうしてみんな、私が“怠けている”っていうの？」
「……」
「私……どうすればいいの？」
「話をまとめよう。明貴少尉」
美奈代は、そっとほむらの肩に手をやった。
そして、まっすぐ、ほむらを見つめた。
美奈代は訊ねた。
「君は、本当は、何がしたいんだ？」
「……私？」

「そう。君は“スーパーパック”を完成させたいだけなのか？それとも、誰かを助けたいのか」
「……私は」
「“スーパーパック”が人助けとならないことは、君も知っていたはずだ。それでも君は頑張っていた。それが君の意志だとしたら、それは何故だ？」
「……」
「本音じゃ、君もわからなかったんじゃないか？」
「……違う。私は……」
「誰かに教えて欲しかった。どうして、自分が死神なんて言われて、皆から嫌われて、そしてこんな所に送り込まれたのか。そして、こんな意味のわからない装置の開発なんてやらされているのか――頑張っている意味が欲しかった。だから、君は自分を」
「違うっ！」
ほむらは怒鳴った。
「そうじゃなきゃ――痛いっ！」
ほむらは頭を抱え、その場にうずくまった。
「私は……もう、痛いの嫌……みんなを助けるのが、私の仕事……だから、みんなのために、システムを開発する手助けをするが……私の仕事……」
「お前……まさか！」
美奈代は驚愕しながらその場にしゃがみこんだ。
「洗脳管理（マインドコントロール）を受けているのか！？」
「私は……痛いの、イヤだから……」
次第にほむらの目の焦点がぼんやりとしてくる。
ピントの合わない目で、ほむらはゆっくりと立ち上がった。
「私は光菱重工、開発局所属……」
「許せ！」
ドンッ！
美奈代はほむらの鳩尾に拳を叩き込んだ。

一瞬、宙に浮いたほむら。
崩れ落ちるその体を、美奈代はすぐに抱き留めた。
「……」
気絶したのを確認した美奈代。
その肩は怒りに震えていた。
「……光菱」
血走った目が、そこにいるはずのない神宮司を睨み付けていた。
「こんな子供に――――何をする！」

模擬演習　第八話（後書き）

あーあ。

最後にやっぱりワケわかんなくなっちゃった（涙）

うつ病のせいでしょうか。文章書いては頭痛くなって、机にすわってられず、落ち着いたらまた書いてを続けてました。丸一日、こんなので終わっちゃいました。

人生、考えちゃいますねぇ……。

模擬演習　第九話

「洗脳管理（マインドコントロール）……ねぇ」

気絶したままのほむらの体をベタベタと触りながら、紅葉がぼやいた。

「気のせいじゃない？この子がちょっと珍しい反応示したからって」

「そうでしょうか？」

そう言われると自信がない。

冷静に考えれば、ほむらが単に頑なな態度を示しただけなのかもしれない。

それを自分は精神異常と勝手に判断しただけなのかもしれない。

だとしたら、とんでもないことしたんじゃないのか？

「……あの、どうですか？」

「うーん」

ほむらの体をペタペタ触り続けていた紅葉は首をかしげ続ける。

「Aカップない……バストサイズは私といい勝負……まな板鉄板……これなら、私だって数年後には絶対勝てる」

「何の話ですか」

「さわってご覧なさいよ。これ、どこに脂肪ついてるのよ」

「どれ……って」

思わず伸ばした手に気付き、美奈代は慌てて手を引っ込めた。

「何させるんですか！」

「それもいいけどさぁ。戦闘服脱がすから手伝って」

「はい」

「……さすがに手慣れているわね」

「いつも着ているんですよ？」

「脱がし慣れているって言ったの」

「どういう意味ですか」

「ところで」

ほむらの戦闘服を脱がせながら、紅葉が訊ねた。
「福沢中尉の方は？」
「本当によかったんですか？」
「大丈夫よ。ちょっと明日のお昼まで目が覚めないだけ」
「目が覚めたら？」
「後藤さんのお知り合いの所」
「……」
それがどんな状況を示しているのか、美奈代はさすがに想像がついた。
気の毒そうな顔で、幸せそうに眠り続ける福沢中尉を見る。
食事に、紅葉が調合したという睡眠薬を混ぜて福沢中尉に渡したのは、確かに自分だが、それがなんだか――。
「私、殺人の片棒担いでません？」
そんな不安を感じさせてならない。
「失敗したって、一生植物人間なだけ。誰も迷惑しないわよ」
「いや……それってもっとマズ……」
「慰謝料は億単位だけど、支払いよろしく」
「勘弁して下さい！」
「とにかく、MC（メサイア・コントローラー）である以上、絶対に何か知っているのは福沢中尉。光菱から買収されていたとか、何かがあると見ていいでしょうね」
「あの……まさか。後藤隊長達がさっきまで戻ってこなかったのって」
「ご明察。福沢中尉を始め、光菱の裏を取りによ。後藤さんのことだから、宮内省経由で公安や警察……銀行だの、いろいろと調べたでしょうね」
「あの人、一体何者なんですか？」
「アンタの上司」
紅葉はさらっと言ってのけた。
「アンタが知っていて良いのは、それだけよ」
「……了解」

「……さて」
紅葉は、戦闘服のインナーを脱がせた所で手を止めた。
「このブラ、どこで買ったんだろ。サイズは変わんないから、後で聞いておこう」
「あっ。カワイイ柄ですね」
「でしょう？」
「っていうか、まさかこの娘」
「？」
「戦闘服の下にブラつけてたんですか？」
「あんた、してないの？」
「インナーの下はボディスーツですよ。ブラなんてしてたら、Gの関係でワイヤーで体、傷だらけ。上を下にの大騒ぎになるんですから」
「経験者はかく語りき……か。経験あるんでしょう？」
「空中戦闘機動訓練の時、泣くほど痛かったんですからね。まさかみんなの前で全裸にもなれず……医務室のお世話になった時、ブラやインナー血まみれでしたよ。消毒液がしみたのなんのって」
「バカ。これはワイヤーなしタイプでしょ？こういうの便利なのよ？」
「スポーツブラって、無地のしか知らないんですけど、へぇ？今ってこういうのあるんだぁ」
「そうよ。私もいろいろと集めててね？って、んなこと言ってる場合じゃない」
ペンッ。
紅葉の手が軽く美奈代の頭を叩いた。
「ごめん。これは私の分野じゃないわ」
「えっ？」
「うーん。後藤さん呼んできて？もうお酒入って寝てるかもしれないけど」
「後藤隊長？」

「そう……たしか、こういう分野にもツテがあるはずなのよね。あの人のことだから」
「あの……何か？」
「これはね？」
紅葉は、ほむらの体をうつぶせにして、その背中を美奈代に見せた。
「――――重大犯罪なのよ」
「犯罪？」
染み一つない白い肌があらわになる。
ゴクリ。
思わず唾を飲み込んだ美奈代は、脳裏に浮かんだ、女として普通じゃない欲望を、激しく首を左右に振って頭から追い出した。
「欲望に負けると、ろくな大人にならないわよ？」
「そうですね……って、何言わせるんですか」
「問題は、あんたがこの娘相手にヘンタイじみた欲情を持つことじゃなくて」
紅葉が指さしたのは、丁度ブラに隠れるような場所。
丸くて青黒い痣。
最初、美奈代はそう思った。
じっくり見ると、何だか模様にも見えるが、それが何だと聞かれても、美奈代にはわからない。
「これが？」
「これが、犯罪なのよ」
「何かの宗教ですか？」
「はぁ？」
「肌に入れ墨したら死刑とか。でも、この子って日本人ですよね？日本で入れ墨したら」
「バカ。コイツは入れ墨じゃない。魔法処理よ」
「魔法？」
「そう……ベルリン魔法人権条約第１０１項指定禁止魔法――――』

絶対服従』。聞いたことない？」
「何ですか？それ」
「あのね？」
語り始めた紅葉は真顔だった。

『絶対服従（ぜったいふくじゅう）
別名「人形化の魔法」「家畜化の魔法」
・一種の強制魔法の総称。呪符魔術。国際法規定禁止魔法。
・これを受けた者から理性を奪い、施術者の絶対的な服従下に置く、忌み嫌われた魔法。
・ローマ法王や天皇など『君臨する者』の力を参考に開発され、施術者はその力に近い力を発揮できる。
・『君臨する者』の力との違いは、殺傷力を伴う強制力と、呪符や入れ墨という、施術にかかる手間の有無。
・歴史上、何人もの専制君主が民衆に強制的に施したことでも知られ、数多くの悲劇を生みだした、魔法に対する大衆の憎悪の根拠にもなっている。
・あまりに残酷なため、国際的には１８８５年のベルリン魔法人権条約により使用が禁止されている』
民命書房刊『これを使ったら犯罪者　よくわかる呪い　Ｑ＆Ａ集』（恨みの主婦連合編）
（※作者注　以上、『お嬢様達のナイトメア　その６』より一部引用しました。よかったら読んでね！）

「家畜化って……」
人間が人間を家畜として扱う。
そんなこと自体が信じられない美奈代は、紅葉と、目の前の印を何度も見比べても、納得が出来ない。
「あるんですか？」
「ある」紅葉は強く頷いた。

「一定のキーワードさえ唱えれば、絶対に逆らうことが出来なくなる。死ねと言われれば死ぬ。喜んでね。多分、この子はそうやって扱われてきた」
「それが人のやることですか？」
「私に怒るな。誰が、どういう目的で、この魔法を使ったのか、いろいろと知りたいのよね」
その紅葉の視線の先には、眠り続ける福沢中尉がいた。
「キーワードも、そして誰が仕掛けた魔法かも、いろいろと聞きたいことが増えたわね」

とりあえず、魔法を解除したい。
すぐに後藤さんを起こして事情を話して指示を仰げ。
美奈代はそう言われ、渋々ながら後藤の部屋を訪れた。
すっかり酒が入っていた後藤は、不機嫌そうに起きるなり、美奈代の説明半分で、わかったを連発し、詳しいのを手配するから。そう言うと乱暴にドアを閉めた。

大丈夫かな。

とにかく、報告に戻ったところで、紅葉はまだ起きていた。
美奈代が声をかけようとしても、機内のパソコン相手に作業中の手を止めることはない。
「後藤さんは？」
「詳しいのを手配すると」
「そう。なら、そっちは大丈夫ね」
「何してるんです？」
「“鈴谷（すずや）”の情報。白石からやっと入って来た」
「“鈴谷（すずや）”？」
「そう――平野艦長が大変なことになってるわ」

時間は、美奈代達が“鈴谷（すずや）”を発艦してから半日後のことだ。

まさか。

美夜は苦笑が出るだけでも、自分の神経が狂っていないと判断した。

階級章も徽章もない軍服。

そして、腕には手錠。

前後を武装した憲兵に立たれたまま、ここを歩くことになる日が来るとは……。

階級及び役務権限を一時的に剥奪の上、身柄を拘束する。

憲兵隊からそう告げられた時は、さすがに我が耳を疑った。

しかし、それが聞き違いでないことは、今の自分の姿が証明している。

廊下ですれ違う将官の中には何人も知った顔があった。

全員が、申し訳なさそうな、或いはあからさまに視線を外し、或いは針路を変えた。

自分に関わるのを拒んでいるのだ。

無理もない。

美夜はそれを非難するつもりはなかった。

自分だって、同じ立場に立てば、きっとそうしただろうから。

連行された場所は、憲兵隊詰め所の隣にある取調室。

無機質なスチール製のデスクと、パイプ椅子が二つあるだけの、殺風景を絵にしたような部屋。
普通の神経で入りたい場所ではない。

「ここに座って」
憲兵がパイプ椅子を一つ指さした。
「しばらくお待ち下さい」
元という言葉がつくとはいえ、美夜は中佐。千名に達する艦を指揮する艦長だ。
憲兵隊も無下には出来ない。
「……」
はぁっ。
美夜は、パイプ椅子の背もたれに体重を預け、そのまま天井を見上げた。
裸電球が一つだけぶら下がっている天井。
そこに何の感情を抱けというのか。
美夜は何も考えることさえ出来ず、天井だけを見続けていた。

ガチャッ。

ドアが開いた時も、美夜はそのままの姿勢でいた。
「――席を外してくれないか」
男の声がした。
「しかし」
「……高円寺大尉の許可は取り付けてある」
「……わかりました」
ガチャッ。
憲兵の気配が消えた。
「……」
「……」

しばらくの沈黙。
ガタン。ガタン。という、電車の音が遠くから聞こえてくる。
ああ、内地に戻ったんだな。
美夜は、そんなことを思った。
「――とんでもないことをしてくれたな。平野中佐」
渋い男の声が美夜の耳に届いた。
「……」
相手が誰かは分かる。
わかるだけに、その呼び方が、美夜には悲しかった。

美夜は、目をつむった。

「聞こえているのか？平野――」

「聞こえています」

「なら、何故、返事をしない」
「……」
美夜はようやく姿勢を正した。
「……」
目の前に立つ男を決して見まいとしているかのように、その目は閉じられたままだ。
「ったく」
ガタッ。
美夜の耳に、椅子が動く音がした。
相手が椅子に座った。
「いいか？ここにいる限り、少将と中佐。その関係は維持してもらわねば困る」
「……」
「……何が起きた」

「報告書は提出済みです」
「……魔族軍に艦を乗っ取られた挙げ句、脱走を二人も出した。挙げ句が双方共に魔族に寝返っただと？」
「報告書に書かれていることが真実です」
「……」
「……」
相手が怒っているのはわかる。
今、どんな顔をしているのかもわかる。
目なんて必要ない。
必要ない位、相手を私は見続けてきたのだから。
「……平野中佐」
「……」
「貴様の口から、何があったかを聞きたい」
「報告書をお読み下さい」
「お前は、どうしてそう頑ななんだ！」
バンッ！
デスクが叩かれた。
「考えてみろっ！敵に対する許可なき降伏、その下での共同戦線の構築、脱走！お前、私でもここまで来れば庇いきれんぞ！」
「庇ってくれと、頼むつもりもありません」
「美夜っ！」
「いい加減にして下さいっ！」
初めて美夜は目を開くと、椅子を蹴った。
「艦を乗っ取られた時点で、抗戦する術なんてなかった！非武装の乗組員達に、素手で抗って死ねと命ずる権限は、私にはなかった！」
「抗戦の方法はあったはずだ！」
「艦内にメースまで侵入され、完全武装の魔族兵数百名に押し込まれて、何をどうしろと！」
「陸軍の特殊部隊の、あれは何だった！」
「事情が違う！抵抗しようものなら、メースによって艦を沈められ

ていた！陸軍がメースを投入していたら、状況は――」
「推測は聞きたくない！」
「事実は報告書にまとめているはずです！それ以外に何を言えと！？」
「――っ！」
苦虫を噛み潰したように歯ぎしりするのは、４０の坂を越えているだろう中年の男。
筋肉質のがっちりとした体つき。顔は渋く、年相応の貫禄がある。
その男が、美夜を睨み付けていた。
握られた拳が震えている。
「部下２名の脱走は、私も、部隊長である後藤中隊長も把握していませんでした！よもや内親王護衛隊（レイナガーズ）総隊長が、あの場で寝返ることを予想すべきだったと、そう仰るのですか！？」
「ああ言えばこう言う！」
「聞かないくせに！」
「何だと！？」
振り上げた拳に気付き、ハッとなった男は気まずそうに拳を後ろ手に回し、咳払いを下。
「――スマン。手を上げたら、離婚だったな」
「……その前に、ここでは夫婦ですらない」
「……美夜」
「半年ぶりに出会ったのに」
美夜の瞳から涙がこぼれ落ちた。
「それが、こんな場所で……こんな言葉で始まるなんて……」
「帰ってきたら、ポートハーバーのレストランで食事する約束だったな」
「……ここまで来て、やっと思い出したくせに」
「……覚えてはいた。違うか？」
「……あなたの言うことは、どうしても、その場しのぎに聞こえてくる」

「信じろ」
「どうやって」
美夜は、手錠をはめられた手をかざして見せた。
「あなたを抱きしめることも出来ない、この腕で、どうやって信じろというのですか？」
「……憲兵隊の取り調べは形だけだ」
男は、視線を外した。
「すぐに前線に復帰するだろう」
「……」
「武勲艦である“鈴谷（すずや）”と、それを預かる君を、軍法会議にかけていられる程、我々も暇ではない。艦もメサイアも、何もかも不足している中だ」
「私も消耗品ですか？」
「バカを言うな……秋山提督の権限で、艦乗組員には上陸許可を降ろした。休養は十分に取らせている。それに、“鈴谷（すずや）”の修復、整備も進んでいる。それと、君の代理は高木副長の他にも応援を出しているんだ。心配はいらない」
「……飛べば鍋の蓋でもといいますが」
「何をスネている？メサイア部隊を北海道に逃がしてやるのが、私の出来る精一杯だった。私だって、精一杯、やれる限りはやっている。お前の暴走も大目に見てきたし、もみ消す所はもみ消してきた」
「その分、あなた方、司令部の失策のツケは前線の私達が負担してきた。違いますか」
「お前はどうしてそう手厳しい」
「そういう女ですから」
「……ったく。これでもお前が帰ってくるのを指折り待ち望んでいたんだぞ」
「信じられません」
「艦隊副司令の権限を乱用しろというのか？乗組員は家族と連絡だって満足にとれんというのに、上に立つ身が気楽に本土と通信して

いましたなぞ、まかり通って言い論理ではないぞ」
「士官教育をここでなさいますか?元教導隊教頭殿」
「ったく……口の悪さは相変わらずだな」
「どうも」
「……もう少し待て。悪いようにはしない」
「……」
「そこに座り直して、報告書にもう一度、目を通せ。内容に間違いがないなら、最後のページにサインしろ。脱線したが、これ以上、お前と世間話をしている余裕もないのだ。私は忙しい」
「なっ!」
「もう一度言う!」
男はきつい口調で言った。
「そこに座り直して、報告書にもう一度、目を通せ!」
「……」
気迫に負けた美夜は、無言で床に転がっていた椅子を戻すと、そこに座った。
バンッ!
乱暴にデスクに置かれたファイル。
美夜はその表紙を開き、中身に目を落とした。
「っ!?」
途端に、美夜目に驚愕が走る。
何度も書類と男を見比べるその表情には、困惑以外の何も読み取ることは出来ない。
「……そんな」
「何か、間違いがあったか?」
「……いえ」
美夜は無言でファイルに挟んであったボールペンを手に取った。
「派手に叩きのめしてやりたい。そう思っただけです」
「誰を」
「決まっているでしょう?」

「……お手柔らかに頼む」
男は、ファイルを脇に挟むと、立ち上がった。
踵を返し、美夜に向けられた背。
「……」
男は、しばらくそのまま、何かを躊躇したかのように立ち尽くし、そして意を決したように振り返るなり、美夜の階級章のない軍服の肩に手を置いた。
「……半年ぶりに再開して、抱きしめてやることも出来ん。許せ」
「……」
美夜は、無言で頷くと、目を閉じた。
肩から手が離れ、そして、男は部屋を出て行った。

平野源一郎
近衛飛行艦隊副司令、近衛軍少将。
そして、美夜の夫は、再び美夜の前から遠ざかっていったのだ。

美夜は、ポツリと言った。
「後藤さん……か」

「今晩はぁ」
美奈代が、その声に起こされたのは、もう明け方近かった。
いつの間に眠っていたのだろう。
美奈代は、シートに座ったまま眠っていた自分に初めて気付いた。
既にパソコンの電源は切られていて、紅葉の姿はない。
毛布が自分に掛けられているから、紅葉より先に眠ったのは間違いない。
辺りを見回すと、仮眠ベッドの上で毛布にくるまっているのが見

えた。
「あのぉ」
「へっ？」
美奈代が困惑したのは、その声だ。
自分をのぞき込むようにしげしげと眺めているのは、小さな女の子。
多分、紅葉より年下だろう。
でも、この子はどこかで出会っている。
あれ？
「……」
「……どうしたの？」
「君……どこかで」
“あの島”で会ったお姉さんでしょ？」
「……あの島？」
美奈代は寝ぼけ気味の脳みそを酷使してようやく情報に行き当たった。
「ああっ！」
驚いた美奈代が思わず指さした。
「君、あの島にいた療法魔導師！」
「あの島にいたは正しくないけど……」
女の子は、小首をかしげた。
「とりあえず、お久しぶり」
「そ、そうね」
「後藤さんに呼ばれたの。解呪して欲しいって」
「かいじゅ？」
「呪いを解いて欲しいって言われたんだけど？」
「……あっ。この子」
美奈代はシートに寝かされたままのほむらを指さした。
「今、睡眠薬嗅がせて眠らせている」
「……そう」

「何か手伝う？」
「別に要らない」
女の子は、背負っていたリュックを床に降ろすと、ほむらに近づいた。
「印はどこ？」
「背中――待って。今、津島中佐起こすから」
「うん」
女の子は、ほむらが眠っているのを確かめると、その体を仰向けにして、インナーを脱がせた。
「……ああ。これかぁ」
「何よ……うるさいわねぇ」
寝ぼけ眼をこすりながら、紅葉が起きてきた。
「……ああ。後藤さんの手配したのって、あんた？」
「うん」
「随分、ちみっちいのが来たわねぇ」
「お互い様」
「……とりあえず名前は？」
「名乗らなきゃだめ？」
「お墓に刻む名前だからね？本名をしっかり名乗りなさい」
「お墓？」
「中佐の冗談よ。本気にしちゃダメ。でも、嘘はだめよ？」
「うん」
女の子は首から提げていたパスケースを美奈代に手渡した。
「水瀬悠理――軍属です」

模擬演習　第十話

「解呪は終わった？」
「とっくの昔に」
朝の食堂。
梅干しをかじる後藤に、美奈代が報告した。
「いやぁ……柏のヤケ酒につきあってたら飲みすぎちまってなぁ」
「柏が？」
「ああ――――若いなぁ。限度ってモノ知らんで飲むから」
「それで、あいつは」
「今、医務室のお世話だよ。二日酔いで戻したとかいってたな。山崎はやっぱり強いなぁ」
「いや……僕もかなり来てるんですけどね」
山崎は濡れたタオルを額に当てて青い顔をしている。
「……さすがに昨日は荒れましたね。美晴さん」
「１６歳の娘相手に手玉に取られたってか？」
「申し訳ありません」
「報告は読んでいるけどなぁ……泉」
「はい？」
「明貴って娘、どうしている？」
「一応」
美奈代はポケットから一枚の書類を取りだした。
Ａ４サイズの白紙に、明貴ほむら。
そう書かれただけの、ただの紙切れだ。
「言われた通り、サインはもらってきましたけど」
「いい。この紙で書類偽造するから」
「今、偽造っていいませんでした？」
「造るって言ったんだよ。耳、遠くなったか？」
「意識が遠のきました」

「でもさすがだねぇ」
美奈代から紙を取り上げた後藤が感心した様子で言った。
「たった一晩で、１６歳の娘をモノにしちまうんだからなぁ」
「何ですか、それは」
「ヤったんだろ？」
「――――何をですか」
「だから、ナニをさ」
「してませんよ。単に、問答無用で、この線の上にサインしろって、そう言っただけです」
「謙遜しなくていいよ。お前、いいスカウトになれるよ」
「スカウト？」
「人事に回ったらどうだ？縁故や関係者を志願採用させると、賞与出るぞ。別名が“人さらい”っていうけど」
「泉大尉の場合」
横でお茶をすすっていた紅葉が言った。
「女衒の方が正しいかと」
「――――だな」
「だからぁ」
美奈代は堪らずに言った。
「何か、私、本当に同性愛者（レズ）だと思われてません？」
「小清水との修羅場になっても、責任もてよ？部隊じゃ、もうドアの修理代なんて負担しないからな」
「あれ……まだ分割ローンが残ってるんですよ？」
「ローンで破産する前に善処するこった……まぁ、片刃でも両刀（バイセクシャル）でも……親は泣くわなぁ」
はぁっ。
後藤は深いため息を吐くと、タバコに火をつけた。
「どこで育て方間違った？」
「私は！」
「お姉様ぁっ！」

トレイを持つ涼が明るい声を上げて近づいてくる。
「私は？」
血相を変えた美奈代に、後藤が楽しげに聞く。
「……何でもありません」
「嫁との修羅場ってのは、恐いもんだぜ？」
「……否定しません」
美奈代は席をゆずりながら言った。
「それで？明貴少尉なんですけど」
「解呪に成功してるんだろう？」
「はい……あっ、いけない」
美奈代はポケットから折りたたんだ紙を取りだした。
「後藤さんに渡しておけって、あの子から」
「ああ。悠理君ね」
「クン？」
「あれ、男だぞ？」
「えっ！？」
「名門伯爵家、水瀬家の総領息子だ」
「あの子……悠理って、女の子じゃないんですか？」
「誰ですか？お姉様」
「小清水、泉が狙っている女の子だ」
「どこの馬の骨ですか！その女っ！」
「涼、落ち着け！」
「お姉様もあんまりですっ！私という正妻がいながら、他の女に手を出すなんて！」
「だぁぁぁっ！」
「何が不満なんですか！？」
涼が美奈代に涙ながらにすがりついた。
「私、お姉様の望みに全て従ってきたつもりです！どんな恥ずかしいことも、お姉様が望むならって！」
「頼む！黙ってくれ！」

「私に飽きたんですか!?そんなぁっ!」
「そうじゃないって!」
食堂に居合わせた光菱の職員達が、食事の手を止めて、何事かとこちらを見ている。
その視線が痛すぎる!
「落ち着け涼……浮気するつもりはない」
「ぐすっ……必要なら、(自主規制っ!)や(伏せ字!)を使うプレイだって、覚悟は出来ています……」
「私にはお前だけだ……信じてくれ」
「……お姉様」
「信じろ……な?」
「はいっ!」
「……話、元に戻して良いですか?」
「お前も大変だね……これでもう、ここにいられないじゃん」
「あなたが!」
「冗談だっての……そもそも本妻をそこまで不安にさせるお前の浮気性が」
「誰が浮気性ですか!」
美奈代は深呼吸して心を落ち着けようとする。
「すぐにムキになるから、みんなの玩具にされるって、いい加減気付いたら?」
「……善処します。とにかく、あのポニーテールの子、男の子なんですか?」
「ああ……といっても、俺が直接確かめたワケじゃないけどさ……ところで泉」
「はい?」
「これ――立て替えといてくれ」
後藤は、紙切れを美奈代に戻した。
「何ですか?」
美奈代は紙切れを開いた。

「……請求書？」
「価格交渉するの忘れていたよ……前の時ぁともかく、普段は有料だって言われてたなぁ。そう言えば」
「……ゼロが7個って」
「相場だよ」
「私……破産しますけど」
「風呂に沈んでみるか？」
「大丈夫です！」
はっきりと言い切ったのは涼だ。
「隊長！私がお姉様をこの金額で買い取ります！それでいかがですか！？」
「俺は別にいいけどね」
「隊長っ！？」
「わかりましたぁ♪」
「ちょっと待て、涼っ！いくら何でも」
「お姉様、支払えますか？」
「っていうか！」
美奈代は後藤の前に請求書を叩き付けた。
「なんで私が支払うんですか！？」
「支払いは小清水だろうが。必要なら、後で明貴にでも請求しておけ」
「光菱の請求書の中に盛り込んで下さいよ！」
「……お前も知恵が回るようになったなぁ」
「……どうも」
「それでもいいか。紅葉ちゃん、どっかのパーツ代として、それとなく混ぜておいて」
「今回の調査費はいいの？」
「とりあえず、ゼロ８つで３って所だな」
「了解……分け前は２割ね」
「なら４だ」

「……何の話しですか？」
「大人の話だ――――さて、泉大尉」
後藤は真顔になった。
「いつまでも痴話してる場合じゃない。昨日の一件について、司令部が調査官を派遣してくる。機密騎1騎大破、3騎小破は冗談抜きで問題だ」
「……」
「いいか？事故調査官の取り調べの中で、いろいろ聞かれるだろうが、とにかく、明貴少尉達の事は、絶対に喋るな」
「TAC（タクティカル・エア・カーゴ）の中は調べられませんか？」
「それは大丈夫」
紅葉が頷いた。
「あのTAC（タクティカル・エア・カーゴ）は、開発局っていうより、ほとんど私の私物に近い扱いだから。事故調査官でもそう簡単に査察はさせない」
「……あの中に潜んでいる限りは大丈夫と？」
「というか、もうそろそろ、東京へのフライトに入る所よ」
「お二人、どうするんですか？」
「まだ暫くはここにいることになる。っーか、お前らもな」
“D－SEED”を搭載して、葉月まで戻る。どっちにしろ、あれじゃD整備だもん」
「D整備……バラバラですか？」
美奈代が露骨にイヤな顔をした。
「……つまり」
「坂城さんの説教。正座して聞く覚悟はしておきなさい？部隊長殿？」
「また土下座ですかぁ？」
「仕事のうちよ。それが終わり次第、鵜来少尉の騎のフェリーがあるし。山崎中尉達の2騎も修理のため葉月送り。どっちにしても、今回の演習で部隊が支払ったのは、1週間の機能喪失」
「……始末書」

「これぱっかりは勘弁してやるよ。報告書は書けよ？」
後藤は言った。
「山崎、後で医務室の柏にも伝えておけ。フライトの許可が下り次第、葉月へ戻ってもらう。お前達は修理が終わるまでは葉月で休んでいい」
「わ、わかりました」
「私達は？」
「狙撃隊も今のうちに整備だ。泉？お前は仕事がある。残れ」
「ううっ……あの……明貴少尉達は？」
「少なくとも、少尉は開発局で保護するけど」
紅葉は、ちらりと後藤を見た。
美奈代は、その意味を察した。
「中尉については――存在を忘れた方がよさそうですね」
「それが利口なヤツの生き方さ」
「……ですね」
「？」
涼達がきょとん。とした顔で互いの顔を見合うが、
「……そういえば」
「ん？」
「さっき、小耳に挟んだんですけど」
芳（かおる）が言った。
「神宮司主任さん、亡くなったって」
「――何？」
「あれ？後藤隊長もご存じなかったんですか？」
「……知らんぞ」
後藤は真顔で答えた。
「どういうことだ」
「いえ……私も」
ジロリ。と睨まれて、縮み上がった芳（かおる）が答えた。
「食堂のおばさん達がそう言ってるの聞いただけで」

「警察が来てましたよ？」
寧々が言った。
「事故死……みたいですけど」

「機材に頭を潰されて死亡？」
「……だ、そうです」
事情聴取を待つ美奈代は、廊下に置かれた長椅子に座って、横にいる牧野中尉に答えた。
「佐藤副主任と一緒に、研究室で作業していたそうです」
「何の」
「さぁ？とにかく、佐藤副主任が機械操作誤って、プレス機みたいなのに頭挟まれて亡くなったそうですよ？何でも、頭部が原形を留めていなかったとか」
「……おかしな話しですね」
「で、責任感じたんでしょうかね。佐藤副主任が」
「どうしました？」
「同じ部屋で、ネクタイで首を吊っているのが発見されたそうです」
「第一発見者は？」
「……警察みたいですね」
「知っているんでしょう？」
「ええ。後藤さんが食堂のおばちゃんと話しているのを聞きましたから。何でも、今朝出勤してきた同僚の人が、研究室の照明が灯ったままなので、おかしいって。それで発見したそうですよ？」
「ということは」
牧野中尉は、ポケットからポッキーをとりだし、美奈代に勧めた。
「殺人なのか事故死なのかは判然としない」
「いえ」
ポッキーをかじりながら美奈代は首を横に振った。
「パソコンに遺書があったそうです。事故で主任を殺したから責任

をとるとか何とか」
「……パソコンに？」
「はい」
「警察は？」
「最初から事故と自殺だって断定しているそうです」
「それを後藤さんは？」
「介入するな。勘ぐるな。だそうです」
「……光菱もいろいろあるのねぇ。あのカワイイ娘さんも苦労したでしょうに」
「涼宮中尉が上手く書類を作成してくださって。異動願を人事へ送っておきました。受理されれば、あの子は部隊の一員として」
「あなたの愛人として」
「――違います」
「ロリは守備範囲外？小清水少尉もどっちかというと」
「どうして、みんなしてソッチ側にいくんですか？」
「宗像中尉がいれば、話は違ったんでしょうけどねぇ」
「……」
「どうしてるのかしら？あの人」
「さぁ？」
「……薄情ですね」
「何かの間違いというか、理由があってと信じていますから」
「さすがに夫を信じているんですねぇ」
「……なんですか、その夫って」
「宗像中尉が夫で、小清水少尉が嫁じゃないんですか？」
「どういう組み合わせです。それは」
「そういうものだと思ってました」
牧野中尉は心外。という顔になった。
「夫に逃げられた寂しさを、若い愛人を持つことで忘れようと、それで明貴少尉に狙いをつけた……昨晩はいかがでした？まだ、処女だったでしょう？ばっちり処女（はじめて）貫通はいただいたと思いますけど」

「してません！」
「今朝一番で見た時、カナリアを食べた野良猫みたいな満足そうな顔だったから、てっきりそう思ったんですけど」
「どういう表現ですか……とにかく、あの呪いってのが解除出来たので安心しているんです。解除したのが男の子ってのは想像してませんでしたけど」
「愛人ってツバつけていたのに残念♪」
「茶化さないで下さい」
「あらあら。お冠？」
「ったく……私だってそこまで飢えてるように見えるんですか？」
「いえ？反応が面白いからからかっているだけですよ」
「……もうっ」
「無事に転属が決まれば良いですよねぇ」
「ですね」
「呪いをかけたのが誰かといえば、神宮司主任さんってことになるでしょうね。光菱もタイミングが良すぎる所で死人を出したものです」
「死人に口なし……ですね」
「私達は？」
「さぁ？全部の責任が死人に行くのは感心しませんけど、とにかく、そのためにここにいるんですよ？」

ガチャッ
取調室に指定された会議室のドアが開いた。

「さて」
美奈代は立ち上がった。
「地獄の釜へご案内♪」

「新型装甲への換装をこのタイミングで進めなければ、後々響くからねぇ」
起動体勢に入った鵜来騎を見上げながら、紅葉は言った。
「有珠(ありす)ちゃんも肋骨骨折だけで済んでよかったねぇ」
「……まぁね。騎体が直る頃には復帰してるでしょうし」
「部隊内で人員配置変える、絶好の機会じゃない」
「うん……あの子、ハッキングも得意だし。偵察型へ乗せてみようかなって」
「都築達を戻すメドがついたの？」
「うん。ただねぇ」
「ただ？」
「それより、紅葉ちゃんよ」
「何」
「明貴少尉。新入りで入れたいっていうのはいいけどさ？騎体はどうするの？泉に聞いたら、紅葉ちゃんが用意してくれるって」
「ああ」
紅葉は頷いた。
「皇龍用の予備素体が、ようやく使用可能段階に成長したから、“白雷(はくらい)”の予備パーツで、予備騎を造ってあげようと思っていたのよ。ほら、あの子達、予備騎が一騎もないでしょう？一騎予備があれば、整備の負担も減るし」
「迷惑かけるねぇ」
「いいのよ。研究データとしては又とない程、いただいているし」
「じゃ、“白雷改”の１１号騎かい？」
「ううん？」
「違う？」
「うん。実は、あの子にはちょっと別なことしてもらいたいのよ」
「別なこと？」
「もういい加減、司令部がしびれ切らしてね。最近、しつこいから」

「ん？」
「“白龍”のバージョン・β（ベータ）６を回す」
「ベータ６？……ベータなんてつくからには、試作騎かい？」
「魔族側からの情報供与があったことは……言ってたっけ？」
「二宮さんが飲み屋で教えてくれたよ」
「……あの人もいい加減なんだから。
“白龍”は次期ベータ級メサイア。
第五次改装、つまり、バージョン５で完成って方針が固まっていた。
テストベッドの１騎である“Ｄ－ＳＥＥＤ”のデータ収集も順調。
データをフィードバックさせた結果、次期バージョン６で仕様が完全決定ってところで魔族側から追加技術供与があった。
おかげで、全部仕様変更がキャンセル。これで二度目」
コキコキと紅葉は首を鳴らせた。
「いい迷惑よ。こっちの苦労を何だと思ってるのかしら」
「そんなにスゴかったんだ」
「もうね。別次元っていうか……間接は完璧メースと同じになる。
まぁね？それまでにもらった技術で人類に再現可能な分は、すべて“白雷改”に反映させているけど、司令部が求めているのは、あくまで“白龍”なのよ」
「上っ面だけ変えるつもり？」
「まさか」
紅葉は言った。
「そんなんじゃ司令部は納得しない。完璧に、“白龍”として純粋に設計したヤツが組み上がるから、それを明貴少尉に任せる。
本来なら、お姫様か泉大尉あたりが適任だろうけど……ね」
「まだいるんじゃない？」
「誰」
「二宮さん」
「内親王護衛隊（レイナガーズ）の火消しを誰がやるのよ」

「……成る程？設計やり直して、あまつさえ、すぐにでも実戦データが欲しいほどの技術が魔族から供与されたんだ」
「出所はわかんないけどね」
紅葉は頷いた。
「むしろ、魔族が人類にも生産可能な前提の元、設計してくれたとしか思えない」
「そりゃ……ずいぶんだねぇ」
「すっかり舞い上がった司令部が、生産のゴーサイン出した。試験騎としてね」
「おいおい」
後藤は肩をすくめた。
「今すぐ量産して、前線に出せって言ってよ」
「無駄。フレームから違うもん。
幸い、元来が“白龍”と規格が近い“白雷改”と“ＤＥＥＤ”シリーズとのフレーム互換性が７割だから、残りを変更させる大手術をする。
私達も大変なのよ？
とにかく、そこまでやってやるから、そっちにも仕様を反映させろって要求して、こっちもデータ収集の目的で許可が下りた。
表向きは、損傷騎の修復と整備。いいタイミングで壊してくれたものだわ」
「本当に俺達ゃ」
後藤は“白雷改”を見上げながら呟いた。
「人体実験の被験者ってことかい」
「愚痴らないでよ。こっちも、いろいろ後ろめたくなるじゃない」
「まぁ……ね」
悪かった。と、後藤は片手で謝罪の仕草を見せた。
「しっかし、遂に“白龍”まで投入かい。ウチの部隊は恵まれてるねぇ」
「実質的に“白龍”運用試験専門部隊。それが独立駆逐中隊の本当

の姿でしょう？」
「まぁ……百点は出せないね」
「……私も死にたい歳じゃないから、ヘンな詮索はしないけど」
「それでいいよ」
「こうも次から次へと仕様が変更されるのは勘弁して欲しいわ。本音だけははっきり言っておく」
「……それでいい」
「私が苦労する分、明日から狙撃隊と泉大尉は、私の指揮下にいれていいんでしょう？」
「ああ。いいよ？」
後藤はさらっと言ってのけた。
「俺はいろいろ忙しくなるからさ――潰れるまでコキつかってくれや」

美奈代が衛星通信を通じたテレビ会議システムの前に立たされたのは、取調室で絞られた後だ。
何時何分だったか。
その時の距離は。
そんなこと、一々覚えているか！と何度怒鳴りそうになったか。
美奈代は一生分の忍耐力を使い果たした気分で、その部屋に入った。
テレビの向こう側――液晶に映っているのは、苦虫を噛み潰したような顔の中野だった。
腕組みした指が、しきりに腕を叩いている。
額に青筋が立っているのがはっきりとわかる。
「――何か」
本能的に嫌な予感がしたのは、テーブルに置かれた書類に気付いたからだ。

ＦＡＸ送信状と、そこに書かれた筆跡は間違いなく自分のモノだ。
「……お前なぁ」
中野は完全に怒っている。
「その書類は何だ」
「え？あの……」
美奈代は書類を手に取った。
「明貴少尉の異動願いですけど」
「本人の署名と、異動希望の部隊名だけ書いて、それで書類が通ると思ってるのか？」
「ち、違うんですか？」
「誰に聞いた」
「……あの」
「勝手な判断するんじゃない！」
ドンッ！
中野がデスクを叩いた。
デスクに置かれていたコーヒーカップが一瞬、宙に浮いた。
「そんな書類が通ると思ってるんだろう！？ってことは、俺達がそんな中途半端な仕事していると思っているってことだな！」
「そ、そんなつもり！」
「うるさいっ！」
またデスクが叩かれた。
「士官教育を一やり直せっ！」
「受けてないもんっ！」
「やかましい！なら、俺が一から教えてやるっ！反省文の書き方からだ！紙とペンもってこいっ！」
「そんなぁっ！」
「つべこべ言うなぁっ！反省文の後、部隊日誌を出せ！全部の書類が書き上がるまで、メシもトイレも認めんからなぁっ！」

「災難といえば災難な話ですねぇ」
会議室の前の廊下で立ち話をするのは牧野中尉と紅葉だ。
「何してるのかと思ったら、こんなところで地獄みてるなんて」
「まぁ、書類ミスは泉大尉の責任だからねぇ」
紅葉も中をのぞいて肩をすくめた。
テレビモニター、正しくはテレビ会議システムのカメラに書類を捧げるように両手で突きだした美奈代に、中野の容赦ない罵声が飛んでいる。
「候補生の後、一切の士官教育なしにここまで来たんだから、そろそろ必要なことではあるんだけどねぇ」
「報告書類の作成なんて、実地で覚えるしかないですよ」
「それもそうか……あーあ。泣いちゃって」
「気の毒ですけど、誰しもが通ってもらう道ですから」

――――何度も同じミスするなっ！
――――同じ事で何回怒鳴られたら気が済むんだ！

――――ごめんなさい、ごめんなさぃっ！

「「ハァッ」」
互いに肩をすくめた牧野中尉と紅葉が、ため息をついた。
「このままじゃ、明日までは動けませんね。泉大尉」
「明日までに終わればいいけどねぇ」
「……同感」
「それで？」
「……ああ。ちょっとね。用事があったんだけど、こりゃぁ、明日まで待ってもらったほうがいいかしら」

「用事？」
「演習」
「演習？」
「そう。狩野が新規に納入する新型騎の空中機動実験。武装は光菱も絡んでいるから、演習場は借りられるんだけどね？津軽海峡の公海上空でやる」
「まだ、何の取り調べも終わっていないんですよ？事件ばかりが増えちゃって」
「神宮司が殺された件なんて、私達にゃ関係ないもん。警察に演習禁止というか、メサイアの差し押さえ権限なんてあるもんですか」
「そりゃまぁ……そうですけど」

――このバカっ！
――ふぇぇぇぇんっ！

「肝心の泉大尉があれじゃあ……ねぇ」
「ったく、中野大尉も大人げないわねぇ」
「え？」
「松崎大尉との噂は知ってるでしょう？」
「そりゃまぁ」
牧野中尉は頷いた。
「中野大尉と松崎大尉は共に同期で、中野大尉が訓練校の頃から松崎さんに片思いだったって」
「本人としてはプラトニックのつもりだったらしいけどさぁ」
紅葉は肩をすくめた。
「寝取られたら意味ないじゃん」
「相手、誰ですか？」
「同じ課の高沢君」
「あの子ですか！？」
牧野中尉が驚いた。という顔になった。

「あんなショタな男の子が！？」
「噂だけどさぁ……誰かの送迎会の後、グテングテンに酔っ払った挙げ句、気がついたらホテルで二人とも真っ青っていう、よくあるパターンよ」
「……あちゃ」
天井を仰いだ牧野中尉は、紅葉の言葉に隠れている意味に気付いた。
「ってことは？」
「昨日、東京戻った時点でおめでた発覚だって」
「それで、中野大尉が荒れているワケですね？」
「最悪のタイミングで、最悪のヤツ相手に、最悪の地雷踏んづけたってワケね。さすが泉大尉って褒めてあげたい気分よ。あーあ。“鬼の松崎”にふられたからって、“鬼の泉”に当たり散らす中野大尉……大人げないなぁ」
「“鬼”の代替わりですかねぇ」
「次の鬼も３０前に出来ちゃった結婚だったりして」
「泉大尉が？……可能性は高いと見ましたけどねぇ」
「ま、中野大尉にシゴかれるのは避けられない……と」
「“鬼の松崎”に“悪魔の中野”」
牧野中尉は楽しそうに肩をすくめた。
「さすが“不幸の代名詞”……悪魔に鬼まで呼び寄せるとは」
「だけどさ？」
紅葉の言葉の向こうでは、中野の怒鳴り声が未だに続いている。
「実戦部隊の間じゃ、“鬼の泉”って言われているんでしょ？違ったっけ？」
「合っています。ちなみに、“死神”とも」
「明貴少尉だけじゃないってワケだ……さて、そろそろ後藤さん辺りに助け船求めた方がいいかな。このままだと」
「鉄は熱いうちに打たないと」
牧野中尉はやんわりと、しかし、文句を言わせない口調で言った。

「泉大尉のためです」
「明日には模擬戦の相手もお願いしたいのよ……大丈夫かしら」
「憂さ晴らしのマトにされるでしょうね。相手がお気の毒ですが」

「……生きてます？」
テレビ会議システムが停止した会議室。
テーブルに突っ伏したままの美奈代はピクリとも動かない。
ボールペンを握ったまま、書類の間に埋もれている。
グーグー寝息を立ててるからには、死んではいないらしいが――
「大尉？」
その肩を揺すられ、美奈代はようやく目を覚ました。
「あ、あれ？」
ぼんやりとした顔で、美奈代は周りを見回した。
「やっと始末書の書き直しが終わって……」
テーブルを見ると、そこには半分よだれで文字が読めなくなった書類があった。
「ああっ！？せっかく、ここまで書いたのにぃっ！」
ブワッ！と滝のような涙が噴き出した。
「なによこれぇっ！半分も終わってないじゃない！」
「と、とりあえず」
声の主は牧野中尉だった。
中尉は、困惑した様子でハンカチを取りだし、美奈代の前に差し出した。
「顔についているインク、落としてきなさい。ね？」

「地獄を見ました」
食堂での夕食。

とてもではないが、食事が喉を通らない。
食堂のおばちゃんが、冷麺はいらないといったら、驚いた顔をされた。
美奈代はトレイに載せた食べ放題のポテトサラダをフォークで突くだけ。
「とりあえず、書類は全て片付けましたから、もう寝ます」
ピーンポーン
チャイムが鳴った。
「泉大尉――――至急、第一会議室へお越し下さい。繰り返します」
「――――ダメですよ」
とっさに逃げだそうとした美奈代のベルトを掴んだ牧野中尉が言った。
「敵前逃亡は銃殺です――――その前に、拳銃とベルト、ネクタイも預かっておきますよ?」
「何でですか!」
「自殺防止です」

複数枚ある書類にナンバーがふられていない。
その程度のことで怒るな!
美奈代がそう言いそうになったのを止めたのは、外部から聞こえてくる爆音だった。
TAC(タクティカル・エア・カーゴ)のそれによく似ているが、これがTAC(タクティカル・エア・カーゴ)だったらかなりの大編隊だな。と、美奈代は思った。
「……おい」
「はい?」
「今、俺が何て言ったか、一言一句、間違えずに言ってみろ」
「えっ?」
「人の話、聞いているのか!?」
「この爆音が聞こえないんですか!?」

ハンガーデッキに入って来たのは、はっきり異形の存在だった。
ベースは“幻龍（げんりゅう）”や“征龍（せいりゅう）”だと、詳しい者にはすぐわかる。
問題は、その下半身。
腰から下にあるべき脚部がない。
脚の代わりに取り付けられているのは、無骨なグレーに塗装された大型ブースター。
その背中も、巨大なブースターで埋め尽くされている。

ブースターの塊。

そんな言葉がしっくり来そうな、まさに異形の存在だった。
紅葉達が見守る中、その騎は、無重力管理されているハンガーまでホバーで移動した後、橇（ソリ）のようなランディング・ギアが出され、ゆっくりと床に着陸。
エンジン音がゆっくりと小さくなる中、整備兵達が収容準備に入る。
「スクラップの集まりがよく飛んでいるわ」
紅葉はメサイアと、修理機器と、そして整備兵達の喧噪に包まれるハンガーの中で、ポツリと呟いた。
「これは……？」
横にいた牧野中尉が怪訝そうな顔をした。
「なんですか、これは」
「見て分かんない？」
「わからないから聞いているつもりですが」
「こういうのを、きれいに言ってリサイクル。悪く言ったら寄せ集めっていうのよ」
「リサイクル？寄せ集め？」

牧野中尉が、端正な眉を片方つり上げた。
「再生騎（リビルド）なんですか？」
「そうよ。あなたなんて懐かしいでしょ？あの2号機の“征龍改（せいりゅうかい）”なんて」
「……え？」
「この部隊で運用されている騎体の半分は、あんた達が白州で潰してくれた騎体なんだから」
「素体がよく」
「1号騎は建造したての“鳳龍”……あれは脊椎内部の疑似神経がダメになって、3号騎の“幻龍改（げんりゅうかい）”は、腰から下をぶった斬られた長野大尉のヤツ……」
「確か、あの時、私達の騎も」
「そうよ。脊椎ダメになってオシャカ。スクラップ決定」
「……よく動きますね」
「だから、スクラップって言ったのよ。下半身部の神経伝達に重度の障害を負って、戦闘どころか普通の移動でさえ出来なくなった。そんな廃棄素体をかき集めて作り上げられた騎達だもん」
「ああ。それで」
牧野中尉はポンッと手を叩いた。
「下半身がブースターなんですか？」
「何だと思ったの？」
「下半身なんて飾りですとでも言うのかと」
「バカ言わないでよ。下半身こそがモノというのよ？メサイアって」
「ですよね」
「とはいえ、そんな寄せ集め、つまり、正式なメサイアじゃないから、制式番号さえない。
仮称“ＳＰ－０４”日本語に直せば、特４式とでもいうべきかしら？」
「スクラップのポンコツ４号じゃなくて？」
「……そっちの方が正しい気はするけどね。とにかく、徹底的に空

中戦闘に特化した騎。元々は、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの開発テストベッド騎なんだけどさ？

Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒが3騎しかない関係で、あの子達も航空支援で手一杯でしょ？

陸海軍から、航空隊が空中飛行型の妖魔に襲われて、損害がひどいから何とかしてくれって要望があってね？

司令部が、テスト終わって、倉庫の隅っこでホコリ被っていたのを引っ張り出して使ったら、それでも使えるからって。同じ境遇の素体ベースに頭数だけ揃えてるって所かな」

「……へえ？じゃあ、この子は、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒのお姉さん？」

「現行の2世代くらい前の存在ね。Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒとじゃ勝負にならない」

「けど、飛行型妖魔なら？」

「航空隊の直援には十分よ。肩部には追加のＦＣＳ入れてあるし。遠距離狙撃も十分可能なビームライフルも採用。

遠方から接近する飛行系妖魔達を追い散らして、その間に航空隊を侵入させることが主任務ね」

「対地攻撃支援は？」

「出来ないことはないけど、欠点があってね」

「欠点？」

「近接戦闘が出来ないのよ」

「何故？」

「武装の制限があってね。元来が、近接戦闘は想定外だしね」

「……成る程」

牧野中尉も頷くしかない。

巨大なブースターが邪魔をして、騎体とほとんど変わらないほど長い、斬艦刀もこれでは搭載出来ないだろう。

それに――

「あの張り出した胸部は？」

「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの操縦システムを簡素化したものを入れてい

る上に複座なのよ」
「複座？」
「ＭＣ（メサイア・コントローラー）が二人必要なのよ。一人、エンジン要員として」
「へえ？」
「システムの関係で、構造的にも“雛鎧（すうがい）”より胸が格段に張り出すのはどうしようない。しかも、張り出しがさらに激しくてね」
「太刀もブースターが邪魔で、抜刀は無理ですねぇ」
「そう。武器がないから、近接戦闘が出来ないの。飛行系妖魔に取り付かれたらアウトだし」
「だからこそ、遠距離からビームライフルぶっ放して、敵を蹴散らす？」
「そう。そのためのメサイアよ」
「それで、ここに部隊を連れてきたんですね？」
「……わかる？」
ばつが悪そうに紅葉は肩をすくめた。
「“アナイアレーター”を装備させたいと？」
「“パースエーダー”も流用したいの。光菱とは、もう話しはついているのよ。私の方で“アナイアレーター”を細工してあげるから言うこと聞けって」
「細工？」
「まぁ、別物にしたてて上げたって所かしら？試作型は光菱が総掛かりでやってくれている。明日の朝までに何とかするっていうから。信じてみましょ？天下の光菱の力ってヤツ」
「ライバル会社だっていうのに」
「余計なお節介だってわかってるけどさ？」
紅葉は笑って肩をすくめた。
「バカな兵器でみすみす兵士を無駄死にさせるなんて、開発者としては耐えられないじゃない？」
「……成る程？」
「私もお節介だってことかしらね」

「あなたは偉いんですよ♪」
牧野中尉は笑って紅葉の頭を撫でた。

書類に襲われた挙げ句、ボールペンに食べられるという奇妙な悪夢を見た美奈代は、ベッドから転げ落ちて目が覚めた。
全身が痛い。
特に右腕が固まったように言うことを聞かない。
湿布を苦心惨憺して右腕全部に張り付けた後、身支度を調えた美奈代は、食堂に向かった。
途中、思いついてハンガーによったのは、別に他意があるわけではなかった。
気が向いた。
その程度のことだった。

しかし、ハンガーの周りが騒がしい。

抵抗するな！
こっちへ来いっ！

鋭い男達の怒鳴り声がハンガーに入るなり、美奈代の耳に届いた。
「？」
出撃前の“鈴谷（すずや）”に乗っていると、男の殺気だった声なんて恐くも感じなくなる。
鈍くなるのだ。
まさにその鈍い美奈代にとっても、その声は異質だった。
その理由は、もめ事の相手を見てすぐに分かった。
憲兵だ。

整備兵のそれとははっきり違う、鋭く尖った声は恐ろしくドスが効いて威圧的だ。
「貴様、あの騎で何をしていた！」
「で、ですから……」
「貴様、スパイだな！？」
「勘弁して下さいよ！」
「間違いない、顔がスパイだ！」
白衣を着た男を、憲兵達が取り押さえていた。
坊主頭に貧相な顔をした冴えない男だった。
場所は“死乃天使”の足下となれば、美奈代も放っておくことは出来ない。
「泉大尉だ。何の騒ぎだ？」
「大尉」
憲兵が階級を聞いて動きを止めた。
「た、大尉なら！」
男がもがきながら言った。
「僕だって大尉です！」
「嘘を言うな！」
憲兵がスゴい剣幕で怒鳴った。
「お前みたいな貧相なヤツが大尉で、戦争に勝てるか！」
「ひ、ひどいっ！」
「……まぁ、いい」
美奈代は手で軽くいなすと、憲兵に言った。
「念のため、手錠はかけておけ」
「よろしいですか？」
「身元照会が終わるまでなら許されるだろう。何なら、腕の一本くらい引きちぎっておけ」
「嫌だぁぁっっ！」
「縫い付けたら動きそうな顔をしている。問題は無い」
おいおい泣き出した男に顔をしかめながら美奈代は、

「コイツ、何をしていたんだ？」
「大尉の騎に」
憲兵の一人が、視線で“死乃天使”を示した。
肘の関節部のメンテナンスハッチが開いたままになっていた。
「とりついて何か細工じみたことをしていると整備兵から通報があり、身柄を確保した所であります」
「取り調べろ」
即座に美奈代は答えた。
「この騎は最高機密騎だ。機密保護は全てに優先される。何なら、肉体的、精神的、薬物的、全ての使用が許可されるだろう。私の愛騎に汚れた手で触った罪は万死に値する」
「そいつは楽しみです」
「やめて人殺しぃぃぃっ！」
「勘違いするな」
ガチャ
後ろ手に手錠がかけられた男に、憲兵は言った。
「俺達が殺すんじゃない、お前が勝手に死ぬんだ」

「――――あのオタク」
食堂で額に手をやったのは、話を聞いた紅葉だ。
「あれ程、機密って言葉に気をつけろと言ったのに」
「お知り合いで？」
「あれでもね」
紅葉はため息混じりにオレンジジュースに手を伸ばした。
「技師なのよ。技術大尉」
「あんな貧相なのが！？」
「そう……ちなみに、ＳＰ４の開発主任の一人で、私の弟子でもある」

「……今、憲兵隊の取調室にいますけど」
「美川っていうの。美川大尉――――多分、美川少佐が引き取りに行ってるんじゃない？」
「美川？」
「従兄弟同士だっけ。まぁ、いいわ」
紅葉は席を立った。
「一応、バカな弟子の不始末つけに憲兵隊まで頭下げに行きますか」
「お供します」
美奈代も席を立った。

自白剤使用の一歩手前で止めたという憲兵隊取調室で正座させられているのは、先程の男。
パイプ椅子に座って足を組む紅葉の前に大の中年男が正座している光景。
一体、何の冗談だろうと思ってしまう。
「……ったくさぁ」
紅葉は苛立った声で言った。
「あんたの仕事熱心さは感心している。それ本当」
「……はぁ」
殴られた青あざが残り、口元から血が滲んでいる顔で、男はポツリと答えた。
ここまでされて、文句も言わない。
否、言うだけの意志がないのだ。
はっきり、影が薄くて、存在感がないだけじゃない。
気が弱すぎるのだ。
男として決定的に欠けているのはそんなところだろうか。
美奈代は、そんなことを考えながらやりとりを聞くしかない。
「“死乃天使”は知っていたんでしょうね」

「はい」
「あれが最高レベルの機密騎で、あんたには触れる権限が無いことも？」
「ですけど……」
男はしどろもどろに答えた。
「あれほどの武勲騎ですよ？帝剣をあっさり仕留めたモンスターです。中が知りたいと思うのは、技官として当然」
「当然なら、機密破って良いと？」
「いえ……これは」
「殺されなかっただけ、ここの憲兵隊は慈悲深いってことよ。頭床にこすりつけて、殺さずにいてくださってありがとうございましたって、土下座しておきなさい」
「……はい」
「美川少佐？」
紅葉は、男の後ろで青筋を立てている男に視線を向けた。
正座している自称大尉より若干年上。
背はそれ程高くないが、がっちりとした、筋肉質の鍛えられた体格と、苦みのある顔立ち。威圧感のある眼光。はっきり、士官としての貫禄にあふれた存在感のある男だった。
階級章は少佐。
美奈代が大人しくしている理由なんて、まさにその階級章を見たからに他ならない。
「コレで２６度目」
「……あとでよく言っておきます」
「そうして頂戴。このバカは無能じゃない。それは認めてあげる。でも、これじゃ無能だって自分で自分にレッテル貼ってるのと同じ」
「……ですな」
「私はこんなトラブル起こさせるために、前線からあなた達を呼び寄せた覚えはない」
「わかってます」

少佐は頷いた。
「我が隊の預かる騎体の改装を、津島中佐に手がけていただけることは、隊全員にとってはこの上ない幸運と、皆が感謝しております」
「お世辞はいい――仕様書は読んであるわね？」
「はい。“アナイアレーター改”ですな？」
「どう思った？」
「仕様書の数値を、実戦の数値と混同する愚は犯したくありませんな」
「不満？」
「……皆、技師やメーカーってのは」
ジロリ。
その視線を受けた男が縮こまった。
「都合の良い事ばかり並べ立てる困ったクセがありまして」
「私もその一人か」
「いや……これは失礼いたしました」
「ふん……不肖の弟子の不始末もあるから、チャラよ。それより少佐？」
「はっ」
“死乃天使”の専属パイロット、独立駆逐中隊前線指揮官、泉大尉よ」
慌てた美奈代の敬礼に、少佐は踵を鳴らせ、色っぽいほど見事な答礼を払った。
「第８０２航空戦隊第一小隊長の美川少佐だ」

新たなる敵　第二話

「ＳＰ４？」
「そう……その2号騎。見てご覧」
「あれぇ？」
ハンガーで、美奈代は奇妙な声を上げた。
「あれは……えええっ！？」
「わかるの？」
「わかりますよぉ！」
きゃーっ。
紅葉は、美奈代の黄色い声を初めて気付いた自分に気付いた。
「もう懐かしいって気がします！“さくら”の感想が聞きたい！」
「あれだけ派手にぶっ壊してくれれば、覚えてもいるものかしら？」
「それは言わないで下さい……気にしてはいるんです。一応」
「まぁ……どうでもいいけどね」
紅葉は肩をすくめた。
「私の説明が必要？美川少佐」
「いえ……」
美川少佐は、小さく首を横に振った。
「大尉。ＳＰ４は、わかると思うが、再生騎（リビルト）だ。主に、下半身に障害を持つ騎を空戦専用に改造した所に特徴がある」
そして、肩をすくめた。
「……まぁ、見ればわかると思うがな」
「これって……陸戦で役立つんですか？」
「陸戦は出来んよ。活躍出来る舞台は空だけだ」
「空って……」
美奈代は自分の疑問が愚問に属することに気付いた。
「剣を振るう戦いは想定外と？」
「今まではな。だが、そうも言っていられない。飛行系妖魔の機動

性はわかっているんだろう？」
「交戦経験は」
「聞いたところでは、サラマンダーとも交戦したというじゃないか」
「……」
「アメリカ軍は最新鋭の可変メサイア“ブラッテイ・ファントム”を全滅させてようやくに奴らの西海岸侵攻を阻止したという。そのバケモノ相手の経験は、是非、聞いておきたいものだな」
ポンッ。
美奈代の肩に親しげに美川少佐の手が置かれた。
その手の大きさと、美川自身の気さくさに、美奈代は何だかちょっとだけ、ほっとした。
「俺達はシボルディ級相手に汲々としているというのに、よくもまぁ、ドラゴン級を相手に勝てたものだ」
「シボルディ？」
「トンボのデッカイ奴さ」
「トンボ？トンボって……あの？」
「バカにはするな？」
美川少佐は真顔で言った。
「外見が近いだけだ。
全長約１０メートル。全幅約１６メートル。
機動性はＶＴＯＬより高い。
最高速度は約６６０キロ。
高度８０００まで上昇可能。
両目は３６０度オールレンジの魔力探知が可能。
推定サーチ範囲は約１５キロ。
口からビーム攻撃を発し、貫通力は５０ミリの複合装甲を貫通する。
ビームの有効半径は約2キロで、最悪なことに」
ギリッ。
美川少佐の拳が力強く握られた。

「コイツは、人間を捕食する」
「人間を？」
「そうだ。コイツの強靱なアゴに噛まれれば、ボディアーマーなんて一撃でかみ砕かれる。人間の臭いにつられて集団で襲いかかってくる上に、こいつらは同等のサイズの空飛ぶ存在に対して、恐ろしく敏感で、しかも敵対的だ」
「……」
「海軍の烈風改に陸軍のスカイレーダー隊は、共にコイツに辛酸を舐め尽くしている……俺達は、死んでいった連中の無念を晴らし、祖国に安寧を取り戻すためにも、奴らを空から駆逐しなければならない」
「……」
「ＳＰ４は、確かに寄せ集めにすぎないだろう。だが、それでも、俺のような半騎士でも扱うことが出来るコイツに、俺達は全てを託すしかないんだ」
「半騎士？」
「ああ……」
美川少佐は、皮肉げに口元を歪めた。
「俺は肉体的にはともかく、メサイアの適正は高くない。Ｂランクにも届かない」
「……あっ」
近衛のメサイア乗りを目指すなら、Ｂランクではとても足りない。
そこにも届かない。
それがどういうことかは、言わずとも知れる。
もしかしたら、美川が自分に対して高圧的に接しないのは、彼自身の性格もあるだろうが、それよりも騎士としての格を前に、引け目を感じているからかもしれない。
美奈代はそんなことを勘ぐってしまった。
「それと、俺は元々から近衛にいたワケじゃない」
「えっ？」

「俺は元々は海軍航空隊の教導隊にいたんだ。つまり、戦闘機パイロットだ」
「……騎士なのに？」
「おかしいだろう？」
「いえ」
美奈代は首を横に振った。
「私、南洋でＰＳ２でしたっけ？あの水上艇のパイロットになるのが夢なんですよ？」
「ほう？」
「……まぁ、夢、ですけどね」
「海軍のシゴキに耐えられるよう、俺が前もってシゴいてやろうか？」
「勘弁して下さい」
美奈代は苦笑して首を横に振った。
「書類仕事だけで泣かされているんです」
「民間に行くよりマシだ」
美川少佐は答えた。
「どうも、人の命を乗せているとなぁ。重くて翼が折れそうになるんだ。飛ぶなら一人でいい。一人がいい。死ぬときも一人で死ねるからな」
「……」
「おっと、ＭＣ（メサイア・コントローラー）連中には黙っていてくれよ？“私達の人権はどうなった”とか、いろいろ五月蝿いからな」
「くすっ。わかりました」
「とにかくだ」
ごほん。
美川は咳払いした。
「ＳＰ４は、戦闘機とほとんど同じ操縦システムを搭載している点で、普通のメサイアとは一線を画す。そのことから、近衛はパイロットを自前じゃなくて、陸海軍に募集をかけたんだ」

「……はぁ？」
美奈代は目が点になった。
「何ですか？それ」
「ＴＡＣのパイロットを転換する構想もあったらしいが、騎士の体をもっていて、戦闘機が操縦できるパイロットとなると、そう多くはないし、ＴＡＣ部隊の偉いさんに言わせると、“ワケのわからん騎体の人柱に部下を出せるか”ということだ」
「……それで、受けたんですか？」
「ああ」
美川少佐は真顔で答えた。
「呆れたろう？」
「ええ」
頷いてから、美奈代はハッとなって口元を押さえた。
「あ、あのっ！」
「……まぁ、俺は最初から空に惚れてパイロットになったクチだから、近衛に恨み辛みがあったわけじゃないし、騎士の体があるってことで、候補生の頃から逆に重宝がられた方だからな。耐Ｇ訓練で１０Ｇまで耐えた記録があるのは俺だけだ」
「……死にますよ？」
「生きてるさ」
ドンッと、美川少佐は軍靴で床を蹴った。
「ほら。脚はある……その頃、教導隊にいてな？仮想敵部隊か、ＦＸ－４７の開発計画のテストパイロットになるかって話はあったんだが」
「エリートじゃないですか！それをどうして！」
「メサイアに乗りたかった。それじゃ、ダメか？」
「……あっ」
「やはり、騎士としては、剣で戦うか、さもなければメサイアに乗るか。どっちかを経験したいって欲は俺の中にもあったんだよ。ウソ雲……じゃねぇ、朝雲新聞の募集広告読んだ１０秒後には近衛へ

電話していたなぁ」
「近衛って、そんな広告出していたんですね」
「広告費ケチって3行広告だぜ？メサイアのパイロット求む。戦闘機登場経験者のみ。後は近衛の電話番号だけだ」
「……それで応募したんですか？」
「呆れるだろうが、その時の俺がどれ程興奮していたか。多分、嫁にプロポーズして以来、あの興奮はなかったなぁ……いや、娘が生まれた時以来か」
「ご家族が？」
「ああ。妻と娘」
「奥さん、海軍でのエリートコースはずれて、文句言いませんでした？」
「いや？メサイアと戦闘機で、どっちが墜落する心配が高いか。それだけ聞かれた」
「で、戦闘機と？」
「当然だろう？メサイアがそう簡単に墜落するか」
「……シミュレーションはやったのでしょう？」
「３５回の墜落経験は妻には秘密だ。まぁ、全てはこの戦争が始まる前のことだ。俺も、ＳＰ４の実験終了と同時に、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）部隊への転向か、事務仕事かって話も来ていたんだ」
「よかったのか……悪かったのか」
「所詮、翼を持つと、空は離れられない……そういうことさ」
「……わかる気がします」
「うん」
美川は頷くと笑った。
「他の連中も、俺と似たようなものさ。だから、ＳＰ４が近接戦闘が出来ないってのは、もう一つ理由がある」
「？」
「俺達が、近接戦闘……つまり、剣での戦いになれていないってことさ」

「……あっ」
「俺達にとっては、銃の方が圧倒的に使いやすい。操縦桿を握って空を飛んで、トリガーを引いて敵を撃墜するしか、戦い方を知らない。……まぁ、操縦桿から手を放して空を飛ぶことが出来ない人種だと思ってくれて良い」
「それで、陸戦は無理だと？」
「構造的な問題だけじゃないんだよ。言ったろう？俺達は半騎士。もし、俺達が普通の騎士……少なくとも、メサイアを操縦するに足るランクにいたら、普通に“幻龍（げんりゅう）”にでも乗っていただろうよ。そうだろう？」
「……はぁ」
「だから、俺達にとって近接戦闘は初体験。ＭＣ（メサイア・コントローラー）に頼るか、メサイアの戦闘補助プログラムに頼るか……最悪」
美奈代は嫌な予感がした。
その答えは、聞きたくなかったが――。
「最悪――本能でやるしかない」
「ですけど」
「ああ……操縦桿の操作一つで、脳波コントロールが出来る。ＳＴＲシステムとはこの辺が違う……ですな？津島中佐」
「神城三姉妹が搭乗しているＦｌｙ　ｒｕｌｅｒと類似するシステム……まぁ、あれほど洗練されていないけどさ。腕部（マニピュレーター）の操作と武装選択が出来る程度よ」
「そんなんで大丈夫なんですか？」
「だから」
紅葉は言った。
「それを、あんたが仮想敵となって味わってみればいい。そういうことよ」
「どうです？津島博士！」

光菱重工と書かれたツナギを着た白髪頭の技師が、紅葉の前で胸を張った。
その背後では、コンテナから何やら長い物体が、フォークリフトで取り出されようとしていた。
「ウチだって、狩野さんトコには負けませんよ！“アナイアレーター改”試作型４基、確かに納めましたよ！？」
「はい。ご苦労さん」
紅葉は満足そうに言った。
「免許とったら、車買ってあげるわ」
「車で走って止まれるのは、光菱製だけですよ？よく覚えておいて下さい！？」
「はいはい――さて」
紅葉の前に置かれたのは、４振りの巨大な銃だった。
人間の目から見れば巨大とはいえ、人間のサイズに縮小したら、短機関銃に相当する長さしかないだろう。
「おまたせ。これが“アナイアレーター改”よ」
「……待って下さい」
美奈代は訊ねた。
“アナイアレーター”って、あの得体の知れないバケモノみたいな奴」
「……軍隊経験者に訊ねるけど」
紅葉は居並ぶ美川達に訊ねた。
「銃剣術は習っているんでしょうね」
「はい」
美川は頷いた。
「そこにいる竜野少尉は、海軍時代には銃剣道の全国大会で優勝した経験があります」
「竜野少尉？剣と銃剣。どっちで戦ったら生き残れると思う？」
「……」
竜野少尉と呼ばれた、目つきの悪い男は、暫く考えてから答えた。

「そりゃ、銃剣です」
「剣で襲いかかられて、銃剣で勝てる？」
「あります」
「――上等」
紅葉は頷いた。
「外見は、海軍でも使っているＭＰ５に似せてみた。ストックは折りたたみ式。理由は簡単。取り回しよ」
「どのヘンが“アナイアレーター改”なんですか？」
「光菱の失敗した理由は、剣と銃を一緒にしたなんて贅沢やらかした所にある」
紅葉は言った。
「銃しか使い慣れていない奴に、剣も装備したから戦えなんて言ったところで、十分な戦いが出来るはずがないでしょう？だから、剣の部分を大幅にオミットしたのよ」
「……あれ？」
美奈代が気付いたのは、その部分――銃口の辺りだ。
フラッシュハイダーの下についているのは？
「あれ？グレネードランチャーですか？」
「バカ。あの中に銃剣部が格納されているの」
「格納？」
「コイツはブースター横のマウントラックに格納するんだけどね？銃剣出しっ放しで格納作業やるとして、シミュレーションしたら、２割の確率で騎体が破損するのよ」
「銃剣がひっかかる？」
「そう。マウント手順はオートコントロールなんだけど……機動時にサイドスカートの動きまで完全にコントロールするとなると……問題が多くてね」
「事故防止のために格納式に？」
「そう。斬艦刀の最小バージョンとでも思って。テストでは９９％の確率で展開に問題は無いけど、最悪はマニュアルによる伸展・固

定も出来るようにしてある」
「ビームライフルは？」
「精度、破壊力共に十分のはずよ？戦車の装甲を貫通する出力は当然、確保してある。
まだ試作だけど、セミオートの中でも速射性能はかなり向上させているしね。
ちなみに、三点バーストまで可能にしてあるのは、このタイプだけよ」
「ビームライフルで？」
「すごいでしょ？今、マラネリの殿下達が、血眼になってフルオートタイプを開発中だけど、三点バーストにメドつけたのは、私の勝ち」
紅葉がVサインをしてみせた。
「それを――まさか」
「光菱に売りつけたのよ。大した技術じゃないし」
「どこがですか！」
「うっさいわねぇ。無駄弾バラ撒いても、当たらなきゃ意味ないでしょう？」
「……うっ」
「とりあえず、取り回し考えて小型化はしてあるけど、実体弾ぶっ放すワケでもなし。サイズについては、出力確保してありゃ問題ないはずよね？少佐」
「当然です」
美川少佐は頷いた。
「外見で戦争しているワケではありません」
「質実剛健……ちょっとは見習いなさい？泉大尉」
「なっ……わ、私達！」
「ハイパワー騎に乗っていると、こういうちょっとした工夫に鈍くなるものよ？」
「……はい」

「よろしい。とりあえず、午前中は試射と銃剣機能の体験テスト。午後からは洋上でも模擬戦よ？泉大尉。出てもらうから。それまでは別の仕事しておいてね？」
「別な仕事？」
「……中野大尉が激怒してるって連絡入ってるわよ？昨日の分の日報、まだ提出してないって」
「……忘れてた」

「ったく」
平身低頭の美奈代を前に、テレビ会議システムのモニターの向こうにいる中野はプリントアウトされた書類に目を通す。
「騒ぎがあろうとなかろうと、提出するものはきちんと出せ。社会人としての最低限度の常識だ。常識」
「……はぁ」
「……悩み事か？」
「……いえ」
美奈代はふと、視線をそらせた。
「言ってみろ」
「……別に」
「腹でも下したか？」
「違いますっ！」
「なら、言えるはずだ」
「どういう理屈ですか」
美奈代は口を尖らせて抗議したものの、心の中に沸き上がった疑問をそれでも中野に語った。
「……つまり」
グイッ。と中野は銀縁のメガネを直した。
「自分達が恵まれすぎているんじゃないかって……それが悩みだと？」

「別に悩んでるわけじゃありません」
美奈代は答えた。
「富士学校の時から選抜組にいて、私達は自覚なかったんですけど、周囲からやっかみを受けていました。それから後も、騎体を優先的に回してもらって、今では“白雷（はくらい）”や“死乃天使”なんていう、津島中佐じゃないけど、モンスターに乗っているのって、贅沢なのかなぁって……美川少佐達を見ていると思っただけで」
「安心しろ。それは贅沢じゃない」
中野は答えた。
「――美川少佐達への侮辱だ」
「えっ？」
「いいか？美川少佐達は、望んで騎体に乗っているんだ。胸を張って、自分の騎だって、戦いに望んでいるんだ。違うのか？」
「た……多分」
美奈代は頷くしか無かった。
美川少佐達の心なんて、考えたことはなかった。
ただ、戦闘機なのかメサイアなのかわからないような、寄せ集めの騎体で、半騎士が戦うことがどういうことなのか。美奈代はそれを理解したかっただけだ。
「美川少佐達にとっては――ＳＰ４だったか？
そいつは胸を張って戦いに望める、最高のパートナーだろうし、その護衛を受けるパイロット達からすれば、遠くのどこかでモンスターマシンでブイブイ言わせているお前達なんかより、ずっと頼りになる存在だろうよ」
「……」
「お前達は確かに恵まれているだろう。だからといって、他の部隊を哀れむ権限なんて、誰からも与えられていない。軍人勅諭にもあるだろう？大敵たりとも恐れず、小敵たりとも侮らず。お前は、美川少佐達を小敵とみなして、侮っているんだ」
「そんなつもりはないです！」

「つもりはなくても、美川少佐にしたら、そうなるぞ？」
「そう……ですか？」
「ああ」
中野は頷いた。
「誇るべき愛騎を“気の毒ですね”なんて言われたら殴って当たり前だ。大体だなぁ」
中野は、呆れた。という顔で美奈代の顔をしげしげと眺めてから言った。
「本当に、そいつが寄せ集めってだけで、低性能だと、どうして断言できるんだ？」
「えっ？」
「ブースター４発も増設していたら、俺ならかなりすごそうだと思うけどなぁ」
「そうですかぁ？」
美奈代は小首をかしげた。
「推力だけで戦争できませんよ？」
「パワーだけでも戦えないだろうが」
「ああ言えばこう言う」
「お互い様だ――せいぜい、堂々と戦って相手をするこった。お前が出来る詫びは、その程度だろうな」
「……はい」
美奈代はニコリと笑うと、中野に敬礼した。
「泉大尉、第８０２航空戦隊第一小隊との模擬戦に参加して参ります！」
「――よし」
それは、美奈代が初めて見た中野の笑顔だった。
「勝ってこい」
「はいっ♪」
敬礼を解き、部屋から出ようとした美奈代は、ふと思いついたことを口にした。

「ＳＰ４のペットネーム？」
「そうです。“幻龍（げんりゅう）”とか……いろいろあるんですけど」
「あれは龍は名乗れないだろうなぁ……」
「ただのＳＰ４なんて、騎体も可哀想ですよ。大尉？何かいい案はありませんか？」
「うーん」
しばらく腕組みした後、瞑目していた中野は、ハッとした顔で目を開いた。
「ひらめきました」
「ああ――龍はだめだが、こいつなら何とかなるだろう」
「どんな？」
「……こうだ」
中野は手元のメモ用紙に何かを書き付けると、カメラの前に突き出した。

「――“鳳翔”？」

「そうだ。鳳凰の飛翔からとった」
「悪くないですね！」
美奈代は、目を輝かせていった。
「こういうの、才能ですよ！中野大尉、さすがですっ！」
「いや……別に」
「さっそく、知らせてきますね？失礼しました！」
「おいっ！」
ドアの向こうに消えた美奈代に困惑しながらも、中野は頭を押さえるしか無かった。
「ったく……他部隊との模擬演習に関する報告書は、普通とは別だって、あいつ、気付いているのか？」

新たなる敵　第三話

地上に設置されたターゲットを、部下達の放つ“アナイアレーター改”のビームが正確に打ち抜いていく。
距離はターゲットから２１キロ離れた高度５千メートル。
「ビームというから」
美川少佐は、感心した。という顔で言った。
「空気抵抗でかなり出力を失うと思っていたが……」
「本来なら」
後席に座るＭＣ（メサイア・コントローラー）、石川澪少尉が、ブースターの監視モニターから目を外さずに言った。
「この騎からでもＭＬ（マジックレーザー）が発射出来ればいいんですけどね」
「その辺は、省略（オミット）されていると聞いていたが？」
「ええ……悪く言っても良く言っても、コスト削減……使える装備は通常騎の方へ中古部品として回すのが基本ですからね」
「つくづく、自分の立場を思い知らされるな……」
美川少佐の口元に浮かんだ笑みは、むしろほろ苦くさえ感じられる。
「元来が試験騎です」
澪は言った。
「試験に不要な装備は最初から取り付けません。それを実戦に引っ張り出す所で既に無理があるんですよ」
「……だな」
「それに、対空戦闘用なんて言っても、本来は私達誘導による翼下に吊した空対空ミサイルが主力で……」
「上層部もまさか、狩野粒子が本土で使われるとは想定していなかったってところか」
「……ですね」
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒのようなビーム兵器は、こいつの開発時点で

は出力不足で使い物にはならんかったしな。強化したレーダー、センサー、そしてブースターの冷却にエンジン出力をとられる関係で、内蔵ＭＬ（マジックレーザー）は元来から撃てん」

「よく戦ってきたと思います。３０ミリと１２０ミリだけで」

「運という言葉は嫌いだが、否定は出来ないな」

「運も実力の内です」

澪は言った。

「実力のない人に、運は付いてきません」

「良い言葉だ」

「――――どうも」

「本来なら、陸上のマトじゃなくて、空を飛ぶ妖魔でどの程度かを知りたいと頃ではあるが……」

「“死乃天使”、接近中です。１時方向、距離３５キロ」

「身内で勘弁してやろうか」

「では」

美川は、部隊の射撃訓練が一通り終わったのを確認した後、操縦桿を握る手に力を込めた。

「ＭＬ（マジックレーザー）もある。パワーもある。全てに恵まれた、贅沢な騎士殿に、俺達半騎士の底力って奴を見せつけてやろうじゃないか」

「２０キロでの狙撃……ですか？」

「飛行型妖魔の標準的な索敵範囲は１０キロから１５キロと言われています。敵より先に相手を発見し、先に殺すのは戦闘の基本中の基本です」

「……ですね。命中精度は？」

「ＭＣ（わたしたち）の管理下にあるんです。外れるはずがありません」

ＭＣ（メサイア・コントローラー）がターゲットを選定し、照準に収める。

騎士はただ、トリガーを引くだけの存在。

牧野中尉が言っていることは、騎士とＭＣ（メサイア・コントローラー）の関係を語る上では常識となることを言っているにすぎない。
「データは上々です。妖魔の群を追い散らすには十分な精度ですね」
「――――で」
美奈代は訊ねた。
「私に何しろと？」
「とりあえず、ビームライフルは非破壊型、つまりは演習用です」
「あれですか？色のついた光線が出るだけってヤツ」
「そうです。命中すればセンサーが反応します。１回ヒットで私達へのおごり確定」
「なんですかそれ」
「そういうルールです」
「いつ決まったんですか？」
「神様が世界を作った時に」
「……」

「小隊全騎へ」
美川少佐が張りのある声で部下に告げた。
「獲物は世界最強のモンスターだ。ヤツを仕留めたら箔がつくぞ！」
「「了解っ！」」
「３騎による機動予測攻撃。全騎、データリンク確認。ＦＣＳを俺の騎に合わせろ。秋山中尉、よろしく頼む」
「了解――――“アドヴァンスド・ラグエル・システム”起動」
美川騎の頭部――――ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）に陣取るＭＣ（メサイア・コントローラー）、秋山律中尉は楽しげに頷いた。
「全騎のＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）システムを同調――――ターゲットを設定します。全騎ＭＣ（メサイア・コントローラー）へ通達。弾種、テストモード。射撃サイクルは、三点バーストモードで設定を確認して下さい」

「ちょっ！？」
撃たれてここまでびっくりしたことは久しぶりだった。
本能レベルで騎体をひねった所へ正確にビームが飛んでくる。
シールドや装甲を数発がかすめた。
騎体をロール機動に入れて、騎体を急上昇にいれた所で、光の襲来は止むことは無い。
精度が高すぎる！
「これ、何を使ってるの！？」
騎体を急制動させ、反動で一回転するという予想外の機動をとった。
ターンする背中と翼を、ビームが掠める。
「冗談みたいに正確なんですけど！？」
「正直っ！」
牧野中尉は真顔で答えた。
「これで命中しないあなたの方が、冗談みたいです！」

「これでか！」
美川中尉が目を見張ったのも無理は無い。
彼の目から見ても、完全に命中するはずの攻撃を、相手は立て続けに、寸前で回避し続けてのけているのだ。
神業としか言い様が無い。
「どういう事だ！」
「信じられません！」
秋山中尉が困惑というより、悲鳴に近い声を上げた。
「命中可能性９９．８％を回避されたなんて！」
「――さすがということか！」
戦場で判断を止めたら死ぬ。

美川少佐は、歴戦のパイロットとして、現実を直視し、そして生き残るための策をすぐに脳内ではじき出した。
「全騎へ。システムは維持したままで散開。銃剣を着剣しろ」
「「了解」」
“アナイアレーター改”の銃剣が伸展し、光を放つ。
正直、使いたいとは思わない。
使うまでに敵を止めることこそが――否、止められなければ、部隊の存在意義が無い。
「相手が悪すぎる――そう言いたいが」
ピーッ
警報が鳴り響くなり、美川少佐は騎体を左へ急旋回させた。
白い光の塊が、騎体の浮いていた所を飛び去っていった。
「言い訳にもならんっ！」

「間合いを縮めて――トドメを刺したいのですが……」
美奈代はうーん。と唸った。
「それは……なんだか禁じ手のような感じがするんですよねぇ」
海面ギリギリまで高度を下げ、ビームの嵐を避ける。
反撃の一撃は、容易に回避された。
「手を抜くつもりなら、せめて一発でも当ててくださいな」
「ごもっとも！」
とはいえ――
騎体の動きが、メサイアのそれとははっきり違う。
美奈代が相手にしてきた、どのメサイアもこんな動きはしなかった。
というか、空を主戦場とする相手との交戦は、正直、美奈代もほとんど経験が無い。
普段、慣れた戦場とは全く勝手が違うし、何より――。
「……くっ」

美奈代は、あの時のことを思い出して、歯ぎしりした。
――あの時。
北米で相手にしたあのメース。
完璧に手玉にとられた挙げ句、シールドの上で斬り合いまで演じられた失態を、美奈代は忘れていない。
あの時、あのメースの空中での戦いぶりに、実は内心で見とれていた自分がいた。
敵に惚れるなんて、あってはならないことをした自分。
それを思い出す度、美奈代は悔しさと、敵の技量への嫉妬に苦しむ。
「――――っ！」
美奈代は、それから逃れるように、“死乃天使”のブースターを開いた。

「敵騎、突っ込んでくる！」
「ほう？思い切りが良いな！」
美川少佐は、破顔の笑みを浮かべ、部下に怒鳴った。
「俺が囮になる！仕留めろっ！」
「「了解っ！」」

ピピピッ
ターゲットに指定したＳＰ４との距離を示すゲージが一気に減っていく。
「斬艦刀を！」
「いえ！」
美奈代は首を横に振った。
「それこそ、敵の思うつぼ――――」
美奈代の脳裏に、ピンッと何かが走った。

「――――ここっ！」

美奈代は、“死乃天使”のブースターをほぼ完全に停止した。
失速寸前の騎体の中では、失速警報が鳴り響く。
その目の前を、光の柱が交差して走り抜けた。
グンッと来る騎体の失速の中、美奈代は2発。ビームライフルのトリガーを引いた。

「2騎撃墜。原因は」
ハンガーに収容された騎体から降りた美川少佐は、騎体を見上げながら言った。
「システムに頼りすぎた、俺の指揮ミスだな」
「あのぉ」
美奈代は、不思議そうに訊ねた。
「一体、どういう仕組みを使ったんですか？」
「戦ってみて、どうだった？」
まるで教え子に質問する教官というか、先生みたいだな。
そう感じた美奈代は、目の前の男性が、かつて教官だったことを思い出した。
「正直」
美奈代は真顔で答えた。
「二度と戦いたいとは思いません。実戦で、しかも部隊で攻めろというなら、撤退を考えます」
「逃げるって選択肢があるだけ、贅沢な話だな」
「指揮官として、部下を無駄死にさせたくないですから」
「……そうだな」
美川少佐は小さく頷いた。
「俺達は、生きて帰れるかどうかわからん航空隊の若造共を守らね

ばならん。そこに撤退という二文字はない」
「……っ！」
「叱っているわけではないぞ？」
美川少佐は小さく笑って見せた。
「時には逃げることも大切だ。見よや歩兵の操典を　前進前進また前進　肉弾とどく所まで――――んなことは、陸（おか）の歩兵（イノシシ）共にやらせておけばいい」
「さすが元海軍……」
「歩兵の本領は、俺も好きな歌だがな……部下を死なせたくないという心意気は、俺も大尉と同じだ――――さて。質問に答えるとしようか」
コホン。
わざとらしいまでの咳払いに、美奈代は何となく、とんでもない答えが返ってくると本能的に悟った。
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒは知っているな？」
「はい」
美奈代は頷いた。
「同期が乗ってます」
「そうか。それは知らなかった。なら、話は早いか？」
「失礼ですが」
美奈代は答えた。
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの詳細は、承知しておりません」
「……うむ。Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒには三次元上において、複数騎が有機的な連携戦闘がとれるよう、極めて厳重なデータリンクシステムが組まれている。Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒの強みは、まさにここにある。これを“ラグエル・システム”と言う。俺達のＳＰ４が搭載しているのは、その前身、“アドヴァンス・ラグエル・システム”だ」
「……もしかして、“ラグエル隊”っていう部隊名はそこから？」
「ああ……俺は仏の方だからよく知らんが、何でも天使の名前だそうだ」

「へえ？」
「天使で思い出した」
その顔は、本当に嬉しそうだった。
「大尉の機動はまさに神業だ。
大尉に駆られたあのメサイアが何故、天使を名乗るかは、その機動をみればわかる。
滑るような動きといい、まるで天女の舞を見ているようだった。
大尉は戦闘機パイロットになっても、エースになれるぞ」
「買いかぶりですよ」
美奈代はほんのりと頬を紅く染めて、首を横に振った。
「……その連係戦闘の機能が？」
「そう。ＭＣ（メサイア・コントローラー）達とメサイアの頭脳を、ほぼ統一する。つまり、部隊の中でデッカイ脳みそを作り上げるのと同じだ」
「えっと……」
ひー、ふー、みー、美奈代は屯しているＭＣ（メサイア・コントローラー）達の数を数えた。
「私、６人相手に勝負したんですか！？」
「１対６じゃないぞ？」
美川少佐は、まるで驚く娘に語りかける父親のようにさえ見える。
「ラグエル・システムの上では１対１２、いや、１対１８は保証できる」
「……はぁ」
一体、どんなシステムなんだろう。と、美奈代は想像しかけてやめた。
下手な想像は、これから、この部隊を相手にした時、絶対に無駄な障害にしかならない。
そう、思ったからだ。
「それはもう、人智を超えた予測を可能にする。敵の針路予想の凄まじさは体験したろう？」
「まさに、神様の技ってヤツですね」
「そうだ。天使が天使とぶつかったんだ。面白い勝負だったな」

「実戦ではゴメンです」
「……同感だ」
午後から、銃剣のテストに入るという美川少佐達に、美奈代はふと、思い出したことを告げた。
「あの」
「ん？」
「いつまでも、ＳＰ４っていう名前もさみしくないですか？」
「……」
きょとん。とした美川少佐が、目をパチクリさせた。
「……ふむ」
アゴに手をやって暫く考えた美川少佐は頷いた。
「確かに……龍は名乗れないが、ペットネーム位、あってもいいな」
「ですよね？」
「本来なら、開発者が決めることだが……おい、衛次はどこだ？」
「隊長に言われて、未だに便所掃除してるんじゃないですか？」
「いかん、忘れていた……まぁ、いい。便所コオロギに決めてもらうと縁起が悪い。むしろ、大尉に決めてもらった方が面白いな」
「私っていうか、知ってる人がいい名前、教えてくれたんです」
「ふむ……お？津島中佐」
「……何？」
美川少佐は、近づいてきた紅葉に声をかけた。
「泉大尉から素敵な提案があった」
「提案？」
「ＳＰ４にペットネームをつけたいそうだ」
「へぇ？いいじゃない。シャンパンを用意しましょうか？」
「ああ。午後の演習が終わり次第、命名式と行こうか」
「北海道産の特上を手配しておくわ。泉大尉？サラリーからさっぴくからね？」
「ええっ！？」
「――で？名前は？」

午後、美奈代は報告書をまとめて再びテレビ会議システムの前に立った。
腰の拳銃でこのシステムをたたき壊せば、どれだけ楽だろうなぁ。
そんなことを考える美奈代は、腰に回した右手を左手で必死に押さえるしかなかった。
「……まぁ、いいだろう」
モニターの向こうで、中野が頷いた。
「3回の書き直しで受領は、褒められたことではないが、今日の所はこれでいい」
「あ、ありがとうございます」
何かひっかかる言い方だな。と、思いつつ、美奈代は頭を下げた。
「明日には東京か？」
「はい。“死乃天使”の整備と改装がありますので」
「その間の予定は聞いているのか？」
「いえ？」
「……津島中佐には尋ねたな？」
「してません」
「……お前な」
しまった！と思った時には遅かった。
「自分のスケジュールも管理してないのか！？」
「すみませんっ！」
「ったく……で？せめて今日の予定くらいはわかってるんだろうな」
「はい。この後、夕方にお祝いがあって」
「お祝い？」
「あっ、大尉、ＳＰ４の名前、ありがとうございました。大尉の命名がそのまま通りました」
「……ああ。あれか」

「もしかして、忘れてました？」
「大したことじゃないし、お前の意見が通るとは全く考えていなかった」
「……っ！」
コホン。美奈代は沸き上がった殺意を抑えながら、表面上は作り笑顔を浮かべた。
「とにかく――いい名前ですね。風翔って」
「……」
「……」
「……」
「……あの」
「なんだ、それ」
「え？だっ、だって」
「風翔？」
「ち、違いましたか？」
「……明日な？」
「はい」
「東京へ戻り次第、一週間、本省へお前、出向な？」
「……へっ？」
「俺の下で、そのふざけた性格を徹底的に鍛えてやる。社会で使い物になる人材に育ててやるから、感謝しろ」
「ど、どういうことですか！？」
「俺が言ったのは、“鳳翔”だ！鳳の字と風を読み違うな！ばかっ！」

ＳＰ４――通称“風翔”は、こうして命名されたのである。

翌日午後。

うーっ。
美奈代は、痛む胃を押さえながらバスから降りた。
戦闘服とは違う軍服姿の自分が、窓に写る。
正直、戦闘服と室内着以外の服を着たのが、恐ろしく遠い昔に感じてしまう。
戦闘糧食に慣れた身で、スカートが入っただけで満足するべきだと自分に言い聞かせたが、多分、スカートが入った最大の理由は、中野とかいう、あの男にいびられたことによる精神的苦痛だろうと思うと、嬉しくも何ともない。
葉月市にある近衛のラボに騎体を収め、書類と手続きを終えた美奈代は、電車とバスを乗り継いでいる。
正直、バスという乗り物には縁の無い環境で育った美奈代は、実はバスの降り方がよくわからない。
財布の中にある小銭を正しく払えるか、そんな心配までし出したら、目眩までしてきた。
バスが停止し、目的地についた事を告げる。
美奈代は、おっかなびっくり、運転手が不思議そうな顔をする中、何とか無事にバスを降りることが出来た。
バス停から近衛の司令部のあるビルまでは徒歩5分程。
官公庁のビルが建ち並ぶ一角にあった。
宮城の中にあるのかと思っていたら、こんなオフィス街にあることに、美奈代は不思議な思いがしたが、官公庁同士の折衝には、この立地の方が楽だという紅葉のセリフに納得するしかなかった。
スーツ姿の、いかにも役人という感じの男女の間をすり抜ける美奈代は、軍服姿の自分が浮いているような錯覚を覚えて、早くも逃げ出したくなった。
「……あ、ここだ」
宮内省近衛府霞ヶ関支所と書かれた金属プレートを見つけた美奈代は、ため息一つ、ドアの向こうに入った。
「補給部？」

「はい」
ジロリ。と睨むように視線を向けてきたのは、年配の男。
同じ軍服姿からして、武官であることは間違いない。
階級は軍曹。
多分、美奈代の顔だけ見て、候補生か何かと勘違いしたのだろう。
まるで値踏みするように美奈代をジロジロ見て、
「ＩＤカード出して」
「は？」
「身分証明書だよ」
「……はぁ」
美奈代は、胸に下げていたＩＤカードを手渡した。
「ったく、どこの軍装屋で仕入れたの。その格好」
「はい？」
「その歳で大尉？あるかっての。しかも、何その略綬リボンの数」
「……あの」
美奈代は、自分が何か、服装規定に違反しているかのと本気に心配になった。
「コスプレしたら通るほど、近衛は甘くないよ？……ああ、補給部？」
「……」
信じられない。という顔の軍曹が、恐る恐る、美奈代に尋ねた。
「……あの」
「はい？」
「もしかして、その階級章、本物？」
「ええ……」
美奈代は頷いて、申告しようとして、一瞬、言葉を詰まらせた。
「どく……じゃない、葉月実験センター所属、泉大尉であります」
「ってことは」

美奈代を指す指が震えている。
「その金鵄勲章も――本物？」
「え？はい、そうですけど」

「ったく」
大企業のオフィスばりに広く、そして整然とした中は、スーツ姿の男女が忙しげに仕事に追われている。
その中で、手の空いた者は、中野に案内されて入って来た美奈代にチラチラと視線を送ってくる。
「源さんをビビさらせるとは、なかなかやるじゃないか」
「勘弁して下さいよ」
美奈代は半泣きだ。
「私、何したんだろうって、本気で恐かったんですから」
「怖がるのはこれからだ」
中野の席は窓際。
他のデスクが一望できるポジションに置かれている。
まさに管理職の地位にあることを、座席が教えている。
「お前の席はそこ」
中野は、自分の席の前に置かれたスチール製のデスクを指さした。
「一週間、お前の戦場はそこだ。部下への面通しは明日、朝礼でやる」
「あの……私、何するんですか？」
「とりあえず」
ドンッ
どこに隠していたのか、中野は膨大な書類の束を取り出した。
「会議用資料だ。これをコピーして、ホッチキスでとめておけ」

新たなる敵　第三話（後書き）

“風翔”と美川少佐達は、烏龍様のアイデアを元にさせていただきました。ありがとうございました。

さて、ネタバレですが、“鳳翔”と“風翔”を読み間違えていたのは美奈代ではなく、作者です。素で間違えてました。この場を借りてお詫びします。ごめんなさい。

近況ですが、うつのせいで頭痛くて死にそうです。現実逃避でこの作品書いてますが、感想なんかいただけるととっても励みになります。

また、アイデア。特にMC（メサイア・コントローラー）系の名前や、登場してもらいたい兵器のアイデア、大歓迎です。

よろしくお願いします。

新たなる敵　第四話

何で、こんなことやってんだろう。

仕事中、美奈代は、何度も自問を繰り返した。
ここで事務仕事なんてやらされているんだ？
自分の真横で書類に目を通している、このクソ憎い男と自分は何故巡り会った？
本来、自省的な人間なら、自分の事務能力の低さを謙虚に反省するところだろう。
しかし、すでにそんな段階を精神的に振り切っている美奈代は、その原因を他人になすりつけるところまで陥っていた。
周りの関係者の顔がグルグルと頭の中に浮かんでは消えていく。
しかし、どうもしっくこない。
責任があるというと、自分の顔しか思いつかないのだ。
それは違うと思う。
自分は、頑張って仕事してきた。
ここに至って、突然、こんなに怒られたり、こんな大量の書類に埋もれるのは間違いだ。
心の中で、そう弁護する何かが叫ぶ。
その心地よさに、反論する余地は無い。

……そうだ。

美奈代はやっと思いついた。
あいつだ！
あいつが悪い！

そう、思いついた人物が一人だけいた。

宗像だ。

敵に寝返ったとは思えない――否、思いたくない。

ただ、自分の元を去ったのは紛れもない事実。

自分に何の相談も無しに、姿を消したあの女。

自分の相棒であり、あんなことまでして、自分の夫の如く振る舞った相手。

何より、自分をこんな体にしたのは、紛れもなくあの女だ。

だから、あいつが悪い！

それなのに――それなのに！

「おい」

中野の声が耳に届く。

「手が止まっているぞ？会議まで15分だ。資料、準備できてるのか？」

「やってますっ！」

美奈代は、資料の数を一枚、数え間違えたことに気付いて舌打ちした。

こんな時に声をかけるな、バカっ！

同じ頃、天壇の中では、宗像がしきりに鼻を気にしていた。

「……むず痒いな」

誰かが噂しているのかもしれない。

このむず痒さからして、決していい噂ではあるまい。

だが、仕方ない。

宗像は、魔族軍の軍服に身を包む自分の姿を見て、そう思った。
自分は裏切り者だ。
恨まれようと、憎まれようと、文句が言える立場では無い。
自分は――――そういう身だ。

「騎体の方はいかがですか？」
紅茶の香りが鼻を心地よくくすぐる。
むず痒さがとれるようだった。
「……悪くないです」
宗像は目を開くと、テーブルに置かれた紅茶に手を伸ばした。
場所は、天壇のかなり下部層に属する所。
ダユーの紹介がなければ、多分、来なかったろう所だ。
口の中に芳醇な味わいが一杯に広がり、五臓六腑が幸福感に満たされる。
「この一杯には、かなわないですが」
それは、世辞ではなく、本心からの一言だった。
「――――まぁ」
言われた相手は、紅茶を乗せていたトレイを抱きしめるようにして、目を細めた。
魔族。
そう言われれば、かなり恐るべき外見の持ち主を連想するが、宗像はその考えをすでに改めていた。
むしろ、人間なんて及びも付かないほど、神々しくさえある存在だと、そう思うようになっていた。

――――少なくとも、目の前の女については。

「ありがとうございます」
耳に心地よい声に、心まで癒される。そんな至福の時を求めて、宗像はここ数日、時間があれば、ここに入り浸るようになっていた。

土器色に近い茶色の長い髪をした美女が、宗像に微笑んでいる。

名をプラツゥルという。

魔族軍正規部隊の兵士ではなく、本人曰く、ダユー様の友人、だという。

「それにしても……」

何度来ても驚くのは、彼女の美貌であり、このお茶のうまさであり、そして、この室内だ。

プラツゥルが、占領されたどこかの日本家屋を参考にしたという室内は、何と畳敷きで、民芸調の棚には茶器が整然と並び、心地よい程度の太陽光を模した照明の光を反射している。

どういう仕組みなのかわからないが、まるで森の中を抜けてきた風を連想させる風まで感じながら、宗像は虫の鳴き声まで聞いた気がした。

板葺きの廊下の外。

そこには確かに庭がある。

それが、疑似空間にすぎないとはいえ、巨大な岩の塊であるはずの天壇の中で、こんな空間があること自体が、宗像には信じられないが、始終、金属と岩の中で暮らしていると、こういう世界が恋しくなるのも当然だと、少なくとも宗像はそう思うし、緑あふれる空間を恋する気持ちは、人間も魔族も同じだと、そう考えるだけで、この室内を作ってくれたプラツゥルに感謝というか、親しみすら覚えてしまう。

「季節は夏に設定しているんです」

宗像の前に座ったプラツゥルは、あっ。という顔になった。

「麦茶の方がよかったですか？」

「……いや」

よく知っているな。と、宗像は感心しながら、相手の心遣いを謝辞した。

「紅茶が飲みたいと思っていたので、これで」
「――よかった」
ほう。というプラツゥルのため息に、心から癒される思いがする宗像に、プラツゥルが訊ねた。
「メースへの搭乗訓練も順調とか」
「ええ。ダユー様の調整のおかげで」
「メースに搭乗したご感想は？」
「……正直」
宗像は笑った。
「こんなバケモノ相手に生き延びてきたこと自体に、驚いています」
「……主のお導きですよ」
プラツゥルは微笑んで言った。
「生きろと――そう思し召したのでしょう」
「……成る程？」
宗像は、民芸調の茶箪笥の上に置かれた偶像をちらりと見た。
魔族が信奉する神の姿を模したものだという。
「プラツゥル殿は」
「はい？」
「仕事の方は……いかがですか？」
「順調です。数も来ていますし。ですけど」
プラツゥルの顔が少しだけ曇った。
「私の仕事が多いということは、それだけ傷ついた妖魔が多いということですし」
「妖魔のメース化……でしたっけ？」
「線引きはいまだに議論があるようですね」
プラツゥルはティーカップをソーサーに戻し、菓子皿に載った大福を宗像に勧めた。
「私が封印されていた数千年。その後にいたってまで、未だに公然と行われている辺り、魔族もまだまだ、倫理の面で人類を笑えないですね」

「……それをやり続ける貴女は？」
「欺瞞のように聞こえるでしょうが、ある意味で、慈悲だと思っています」
プラツゥルは答えた。
「戦場で傷ついて、使い捨てのゴミのように薬殺されるより、わずかでも生き延びさせることが慈悲だと……確かに、今は完全に直すことの出来る再生技術はあります。
しかし、戦場で傷ついた大型妖魔を後送して、それを施すことは、時間的にも人材的にも、そしてコスト的にも高すぎます。
一体を再生させるより、もう一体、別な妖魔を取り寄せた方が早い。
その言い分には、私も反論は出来ません」
「機械の体でも、与えてやるのもまた慈悲と？」
「……そうです。でも」
プラツゥルは目を閉じた。
「私も、妖魔は生命のある存在ではなく、モノだ……そう思いたいのですが」
「それをやるには、あなたは優しすぎる」
宗像は言った。
「それは、罪ではないと思います」
「……ありがとうございます」
プラツゥルは小さく微笑むと、言った。
「新しい子のロールアウトがもうすぐなんです。ご見学されますか？」
「是非」
宗像は席を立った。
小さなビルの如き巨大な培養槽が並ぶ空間。

そこがプラツゥルの職場だった。
「ヴォルトモード卿の軍から回された、負傷した妖魔達が運ばれてきます」
「ちょっとした動物病院って所ですか」
意味が通じるかわからないが、宗像はそう言うしか無かった。
培養槽の中には、得体の知れない巨大な妖魔が胎児のように丸くなって浮かんでいる。
しかも、一頭二頭ではない。
この無数の柱の一本一本に、妖魔が入っているのだ。
「私が、主に扱う妖魔は、たった一種だけです」
プラツゥルは言った。
「薬殺と判断されるまでのダメージを受けた大型妖魔。それだけ」
「現場としては……」
言いかけて、宗像は言葉に詰まったが、
「殺す以外に手はない……」
「人間なら」
プラツゥルは振り向くなり、椅子にかけていた白衣に袖を通した。
「死体袋に入れる――そういう状況ですね」
大人しい顔をして、それでもこういう大胆な発言を行う辺り、意志は強いタイプだな。と、宗像はプラツゥルについて、新しい何かを発見した気がして嬉しくさえなった。
「ダユー様が、戦力としての再利用をお考えです。またそれは、ダユー様と共に戦うヴォルトモード卿の軍司令部の方々とも利害が一致する話しでして」
「……それで？」
「薬殺される前に、こちらから妖魔を引き取りに行って……その」
プラツゥルは、少しだけ言い淀んだが、
「……前線へ行って、買うというか、交換するのです。お金や食料と」
「買う？」

「ええ……現地の方にお金やお酒、或いは食料と交換していただくのです。大型妖魔でしたら、お米１０キロか、お酒１升と」
「随分、安いんですね」
一升なんて単位が出てきたことに驚きながら、宗像は呆れるしかなかった。
「どうせ殺せば光の泡。なら、それを元にお金に換えた方が、自分達もありがたいと――タテマエでは皆様、そうおっしゃいますけど、苦楽を共にした妖魔を自らの手で殺すのは忍びないというのが、本音でしょう。私は少なくともそう信じています」
「……成る程？」
「今、量産に入っているのはこのタイプです」
ライトアップされた培養槽の中に浮かぶのは、翼を持つ大型妖魔だった。
宗像は、戦場でこのタイプは見たことが無かった。
龍そっくりなサラマンダーとも違う、文字通り、トゲの付いた鱗に覆われた、恐竜だかゴジラだかに翼をつけたような、奇妙な、しかし、生理的には好きになれそうも無い、そんな存在が、林立する培養槽の中に何匹も浮いている。
「ワイバーン――私は飛龍と呼んでいます」
「結構、日本趣味なんですね」
「平和な時代になったら」
プラツゥルは笑って言った。
「見学に回りたいなと思っています。ご案内いただけます？」
「京都は私の庭のようなものですから」
「京都？」
「日本で最も古い都……とでも言いましょうか。見ていただければ、お気に召すはずです」
「ふふっ。ありがとうございます」
プラツゥルは優雅に一礼すると、培養槽を見上げた。
「体の５０％から７５％に重度の障害を受け、命からがら巣（ネスト）まで戻

っては来たものの、半ば力尽きた子達です」
「これにメースのパーツを？」
「気の毒とお考えでしょうか」
プラツゥルは唇を噛み締め、言った。
「同一規格でメースのパーツを組み込んでいます」
「……自らの意志で、自立して動くメース」
「概念としては、それで正しいと思います」
プラツゥルは頷いた。
「炎息（ファイア・ブレス）を吐き出すことも出来ますし、この子達の神経でメース化した部位は、生身の体同然に動かすことが出来ます。また、主要部には、人類の実体弾に耐えるだけの簡易甲冑を装備しています」
「どうやってコントロールするんです？」
「基本的には、本能に頼って……同族だけで群として動かすことが出来ます。ただ、本来的にこの級は気性が荒いので」
プラツゥルが指さした先。
そこには、培養槽の中を通る幾本かのチューブの中でもひときわ太く、襟元に突き刺さるかの如く繋がっているチューブがあった。
「洗脳……そして、脳内に設置したチップで個別コントロールを使います」
「随分と念の入ったことをしますね」
こういうのは、好きになれそうもないな。と、宗像は確信した。
「残念ですが、元からそういうことしないと使いこなせないのです。魔族にさえ懐くのはごく少数です。とはいえ」
プラツゥルは答えた。
「本来なら、満足な四肢を復活させて、魔界に戻してあげたいのですが……」
「あくまで兵器……ですか」
「そう……です。
戦争が再開されれば、このタイプと、“アイバシュラ”タイプが妖魔部隊の主力を担うことになります」

「“アイバシュラ”？」
「ええ……正直、今、人間界で投入されている妖魔達の活動は、限界に近いのです」
意味が分からない。
自分達があれほど苦戦した妖魔達が限界？
何のことだ？
「それは？」
「本来、妖魔達は魔界に存在するもの。魔界の自然環境にこそ、適した生命体なのです」
「……でしょうね」
それはそうだ。と、宗像は思った。
寒い地域の生命は、寒い環境に適している。
暖かければその逆。
それが当たり前だろう。
「そのため、魔族は擬似的に、自らと妖魔が活躍しやすくするため、人間界に存在しない空間粒子を大量に散布しました」
「……狩野粒子」
宗像は目を見開いた。
やっとわかった。
魔族が狩野粒子を大量に投入する理由は、自らの生命維持のためだったのか！
宗像は、胸の中でつかえが取れた思いがした。
「そう呼ばれているのですか？なら、カノー……狩野粒子とこれからは呼びましょうか」
プラツゥルは頷いた。
「狩野粒子は、高濃度にならない限り、この世界の生命に影響は与えません。
むしろ、空間に侵入する紫外線をはじめとする有害な宇宙線を阻害することも出来、有益とさえ言われてるのですが」
「それで？」

宗像は、絵本の続きを促す子供のように、プラツゥルに続きを促した。
「それがどういう？」
「どれ程、環境をあわせても、妖魔そのものの持つライフサイクルまでは変えられません。問題は、その妖魔のライフサイクルです。大型妖魔の大半は、３年から２０年のサイクルで繁殖期を繰り返します。
その期間は大体１年から３年。
繁殖期を迎えた妖魔は性格が大人しくなり、自己防衛本能が強まることから、戦闘に参加することは希になります。
今回、その繁殖期が多数の級で重なる珍しい事態が発生しています。つまり」
「現在、魔族軍に投入されている大型妖魔が繁殖期を迎えたと？」
「そうです。ですから、大半が使い物にならなくなります。
戦力確保のため、ヴォルトモード軍としては、今回、繁殖期とは無縁に近い級の妖魔の確保と入れ替えに血眼になっています」
「入れ替え？」
「ええ……無論、そのサイクルから外れるワイバーン級の他にも、基本的に繁殖期を必要としない類の妖魔もいるのです」
「その妖魔とは？」
「……こちらです」
プラツゥルが脚を進め、数分、歩いた所で足を止め、別な培養槽を指さした。
全長３０メートルほどの大型の妖魔が、そこに浮かんでいた。
ワイバーンとは違う、昆虫然とした姿が、生理的な嫌悪感を嫌でも引き立てる。
「これは、停戦前に前線に投入され、損傷した一体です」
紅い外骨格を纏った昆虫のような生命体が、そこに浮かんでいた。
なんだか、伊勢エビとサソリを合体させたような存在だなと宗像は思った。

「アイバシュラB級……平均身長３０メートル。六本脚で歩行可能。また、空を飛ぶことも可能です」
「B級ということは、他にもタイプが？」
「A級はこの半分……攻撃力も半減します」
「高いのですか？」
「B級は脚を折りたたみ、背中に生えた４枚の翅を展開して飛行します。また、陸上でも後脚による２足歩行、または６足歩行形態をとることが出来、合わせて３形態に変形が可能です。
　中脚に連射可能なビーム発射能力を持ちます。前脚には、ビームソードと同じ機能も」
「生命体でビーム？」
「ええ……ライノサロスタイプも持っている、あの級類と理論的には同じですが？」
「先程、京都見学をご希望でしたが、むしろ私の方が、魔界に連れて行って欲しいと思いましたよ。是非、生態が知りたい」
「講義がご希望でしたら、してさしあげますよ？翻訳機能のあるメガネ、お貸ししましょうか？」
「是非」
　メガネをかけたプラツゥルの顔が見てみたいな。と、宗像はちょっとだけ胸がときめいた。
「話を戻しますね？背中の角状の大型突起物から大型ビームを発射可能で、この一撃は、メースを分解させることが出来る程の破壊力を持ちます」
「……A級でも、それ程の脅威に」
「いえ？A級はそれ程の強さは持ちません。
　頭部にビーム発射機能とビームソードがある程度で……同級同士での連携を考えれば、A級は情報索敵や偵察こそが本質だと思って下さい」
「偵察……ですか？」
「ええ。無論、人間の個体相手でしたら、十分以上の戦力になりま

すけどね。捕食機能も持っていますし」
「まさか、人間を？」
「ええ。結構、貪欲ですよ？私達、魔族でも気をつけないと危ないくらい」
「……っ」
「……サイズ的な制約もあります。これ以上の存在として、この城には存在しませんが、魔界には、全長５００メートルを超えるビショップ級……まぁ、巣を守るための特別な存在ですけどね。
他には……そうそう、これはもう生命体というより巣そのものですが、ネスタージュ級。これが約３キロ……さらには１０キロ近いクイーン級も」
「……どういう生命ですか？」
「蟻はご存じですか？」
「あの地面を這い回って砂糖に群がる？」
「ええ。働き蟻がＡ級、兵隊蟻がＢ級、その上にこれらをまとめるビショップ級、そして、繁殖を司るネスタージュ級……その上に属するクイーン級と」
「まるで一つの社会……」
言いかけて、宗像はプラツゥルの言葉の真意を理解した。
「社会全体の中で生み出される以上、繁殖期が存在しない」
「正解です♪」
プラツゥルはやんわりと微笑んだ。
「そして、数も確保出来る」
「……どれ程？」
「さぁ？」
プラツゥルは首を横に振った。
「全体の入れ替えとなれば、数万では効かないと思いますが……」
「……今」
宗像は肩をすくめた。
「私は魔族軍に属することに感謝していますよ」

爆音を轟かせ、着地したのは“征龍改ＥＷＡＣＳ仕様”だ。
誘導員の誘導に従い、ハンガーへと入った。
「ったく」
収容作業を終え、ハンガーベッドに固定された騎体から出てきたのは都築だ。
「福岡行けだの沖縄行けだの、戻ってきたら今度は北海道か。俺はいつから観光会社に就職したんだ」
無重力の中、その体が機敏に動く。
「文句言わないの」
さつきがポニーテールをなびかせながら都築に近づいてきた。
「騎体の引き継ぎが終わったら、私達も原隊復帰、あんたも最愛の寧々ちゃんとも再開出来るんだし」
「……まぁな」
都築は照れたように頬を指で掻いた。
「休暇、認めてもらえるっていうからな」
「――ちょっと」
ポンッ
さつきの肘が、鼻の下を伸ばした都築の脇腹を小突いた。
「今、何考えたのよ」
「何って、ナニに決まってるだろうが」
「――このスケベ」
「おお。スケベで十分だ！」
都築は胸を張って床に降り立った。
「今の俺の頭は、そういうことでいっぱいいっぱいだ！」
「三ヶ月後に寧々ちゃんが寿除隊しそうね」
「……なぁ」

「ん？」
「寧々って、あの胸で母乳が出ると思うか？」
「な、何言ってるのよ！？」
さつきは、自分が真っ赤になったことを自覚した。
「それセクハラっ！？最低だよアンタ！」
「いや……マジで聞いているんだ」
本当に都築は真顔だった。
「いや……小さいの気にして恥ずかしがる寧々の仕草があんまりにカワイイもんで、“貧乳もありだなぁ”って転向はしてみたものの、いざ母乳ってなると、どういうものか心配でな」
「……作ってみればいいんじゃない？そうすればわかるって」
さつきは、少しだけ都築と距離を取った。
「あんまり近づかないで、私まで心配になる」
「どういう意味だよ――おっと」
都築は立ち止まると、目の前に並ぶ士官達に敬礼した。
「第８０２航空戦隊の美川少佐でいらっしゃいますか？」
「ああ。独立強行偵察隊の都築少尉か？」
「はい。都築少尉及び早瀬少尉であります」
「神聖なハンガーでバカ話は感心せんが、まぁいいだろう」
美川は騎体を見上げながら言った。
「これがご自慢の“征龍改ＥＷＡＣＳ仕様”か？」
「そうであります」
相手は少佐。
二宮以上に貫禄のある佐官を前に、二人はかしこまるしかない。
「北米戦線では大分、活躍したようだな」
「恐縮です」
「我が隊に一騎、独立駆逐中隊に１騎、それぞれ配置されると聞いたが？」
「自分の乗る１号騎が、８０２戦隊へ、早瀬少尉の２号騎が、独立駆逐中隊へ配置されると聞きました」

「1号騎はこれか？」
「はい」
「機動性には問題ないな？」
「逃げ足には自信があります」
「……よろしい」
美川は楽しげに微笑んだ。
「ラグエル・システムは、3騎までしか連携が組めないのが欠点だ。それ以上の部隊、つまり、別なラグエル・システムとの連携を図る上で、このタイプの騎は必要不可欠となる――言っている意味はわかるな？少尉」
「レクチャーは受けております」
「よし……とりあえず、2号騎は俺の管轄ではないから別として、1号騎はラグエル・システムとの連携を調べたい。1時間後にテストを行うので、それまで休憩してくれ」
「了解であります」

美奈代が“こいつ殺してやる”と、その日百回目に思った時、中野は言った。
「おい、泉」
「――なんですか？」
知らずに声が険悪になっているのが自分でも分かる。
「早めに上がって良いぞ？」
「え？」
「その時間で、とりあえずお前、スーツ買ってこい」
「スーツ？」
「そうだ」
中野は言った。
「武官の軍服だと目立ちすぎる。何より、俺が怒りづらい」

「なら、このままにさせて下さい」
「だめだ。金鵄勲章にケンカ売っているとでも言われると、俺も立場がない」
「……結局、自分のためですか？」
「悪いか？」
「文句だけは言いません。スーツって、いくらするんですか？」
「女物の相場なんて、俺が知るか。とりあえず、２課の松崎が早退するというから、売っている場所位、聞いておけ」
「……文句は言いませんから」
美奈代は手を出した。
「お金下さい。私、持ち合わせが全くありませんので」
「……領収書、もらってこいよ？」
中野はため息混じりに、財布を取り出した。

美奈代が二課に松崎課長を訪ねたのは、午後４時前だった。
中野と年頃は同じくらいの女性が、入って来た美奈代を出迎えてくれた。
「あなたが泉大尉ね？」
スーツ姿がよく似合う人だな。というのが、美奈代の正直な感想だった。
「二課の松崎です」
「お世話になります」
美奈代は素直に頭を下げた。
「……まぁ、中野の言うことも最もね」
クスクスと、松崎は笑った。
口元を押さえた手に指輪が光っているのを、美奈代は見逃さなかった。
「金鵄勲章持ちに文句は言いづらいわ」

「……そう、ですか？」
「そういうものよ。第一、こんなに略綬リボン持ってるなんて、下手な後方勤務ばかりの将校共じゃ太刀打ち出来ないもの」
「……はぁ」
「私達だって、永年勤続章と善行章が1つか2つかしら？迫力が違うわねぇ」
松崎は、少しだけ羨ましい。という顔で、美奈代の胸元を見つめた。
美奈代の胸には、今までに従軍した記念章の略綬リボンがずらりと並んでいる。
「……女としては」
美奈代は、その視線に照れたように答えた。
「松崎大尉が羨ましいです。ご結婚とご懐妊、おめでとうございます」
「あっ……あははっ」
頬を紅くした松崎が、照れ笑いを浮かべた。
「いやぁねぇ……出来ちゃった結婚なんて、他人事だと嬉しいことなんだけど、いざ、自分となれば、これがまた恥ずかしいのよねぇ……」
「ははっ……でも、いいなぁって、思いますよ？本心から」
「――ありがとう」
松崎は照れ笑いを浮かべながら言った。
「スーツ、買いに行くんだっけ？」
「はい。すみません。スーツって、買うどころか着たことすらなくて」
「そうよね……就職活動経験ないでしょうからね。中野からお金もらってきた？」
「はい」
「とりあえず、2着は必要ね。中野に文句言われたら、私に言いなさい？口げんかで勝てるとは思えないけど、文句だけは言ってあげ

るから」
「た、助かります」
微笑む松崎大尉を見て、美奈代はふと思った。
あれ？
この人……。
それは、思い違いかもしれない。
でも、そう思うことまで止められなかった。
私に似てるかもしれない。

新たなる敵　第四話（後書き）

プラツゥルと、妖魔＋メースの組み合わせは、爆弾蛙様からのアイデアでした。この場を借りてお礼申し上げます。他にもいただいているアイデアも、これから活用させていただきます。おたのしみに。

新たなる敵　第五話

「陸軍や海軍の戦闘機部隊の仕上がり具合は？」
「順調です」
美川少佐の問いかけに答えたのは、副官の森中尉だ。
海軍時代から美川とは腐れ縁に近い間柄で、“美川のいない海軍なんて意味は無い”と、海軍を退役する一歩手前で、美川のツテによって近衛に引っ張られた人物だ。
「志願兵達の仕上がり具合も上々とか」
「機体の方は？」
「烈風改の製造は、東北と九州で、スカイレーダーも北米からフェリーされています。特にアメさんは、日本を対中戦の橋頭堡にしたいってワケで、製造には血眼になってくれていますよ」
「……ありがたいのか何なのか」
美川はコーヒーをすするように飲んだ。

烈風改
先の北米大陸を舞台とした、人類史上最大規模の“人類同士の戦争”――赤色戦争の際、日本軍が投入した戦闘機。
この戦争においても、日本海軍の初期主力戦闘機は零式艦上戦闘機だった。
初戦でこそ空戦で優位に立てた、この零式艦上戦闘機シリーズだったが、Ｆ４Ｕ“コルセア”、Ｆ６Ｆ“ヘルキャット”。そしてＦ８“ベアキャット”が投入されるに至って、全く歯が立たなくなる。
対Ｆ４戦のキルレシオ（撃墜“される”率が）１対１１、Ｆ８に至っては１対２０とまで言われるのは、機体性能と、何より搭乗員の相次ぐ戦死による影響が大きいが、それでもこの被害は大きすぎる。
低すぎる防弾性能の他、有り余る機体本来の問題に由来するあま

りの被害に、海軍パイロットから“空飛ぶ棺桶”とか“葬式戦闘機”とまで渾名されるに至り、“棺桶メーカー”と揶揄されたのは、開発元の光菱である。

ライバルの上島航空機（現富岳重工業）は、陸軍に配備した六式戦闘機で、Ｆ８を相手に互角の戦果を記録。次いで、ハワイから西海岸へ高度１万メートルで往復爆撃可能な爆撃機“富岳”の開発にも成功し、“日本の花形は上島だ”と世間に喧伝された。

挙げ句、海軍も次期戦闘機開発を上島に発注しようとしているという情報が上層部に入る。

致命的だったのが、未だ零式の延長上に属する概念から離脱できない光菱開発部が、莫大な予算をもって開発した零式６１型が海軍からダメだしを喰らった挙げ句、試験飛行中に空中分解。あろう事かラッシュで混雑する三島駅に墜落して死傷者数百名という、航空史上に残る大惨事を引き起こした事件を引き越したことだった。

世論の光菱に対する風当たりは最悪に近く、ここに至って開発陣に光菱自身が見切りをつけるには十分だった。

三島駅事件の責任の大義名分を得た光菱は航空部門を牛耳る堀越技師等、“無能”な開発陣を一掃する。

ただし、この代償として、光菱は主立った航空開発者を、新進の三河航空機（既に倒産）に奪われ、新たな開発陣として用意された人材は、堀越等とは別グループから抜擢され若手ばかりという境遇に陥る。

これに焦ったのが、堀越の息のかかった上層部の一部。

彼等は、再び頭を下げれば堀越等が復権するだろうと画策し、この技師達の更迭を目論見、海軍と組んで“仕様書を翌日９時までに提出しろ”と無理難題をふっかけた。

一方を受けた開発陣は、料亭に乗り出し団結式と称してどんちゃん騒ぎの真っ最中。

青くなった彼等は、その料亭で缶詰となって大まかな概念設計図を書き上げて上層部に提出。

新型機の開発に焦っていた海軍は、これをわずか2時間という異例のスピードで採用を決定する。

これに気をよくした当時の光菱総裁が“我が社なら、これを半年で完成させる”と豪語するなどの紆余曲折があったものの、従来のしがらみから全く解放された若い頭脳によって開発されたこの機は、単に高性能なだけでなく、給油や兵器搭載、整備の手間を５０％低減させるという驚くべき副産物を生み出した。

一号機の飛行成功は本当に半年後のこと。

海軍のベテランパイロットに操られた烈風試作型は、飛行初日に時速６９９キロの、当時の日本最速記録をマークし、模擬戦では零式部隊を相手に一方的勝利を収める。

この光景を目の当たりにした光菱総裁は、“国運と社運は最早一緒だ”という決断の元、社運を賭け、零式の全製造ラインを停止し、烈風用に改装するという、“日本企業史上最大のバクチ”に打って出た。

一国家の軍需産業の基幹を成す大企業が“破産寸前”とまで言われた程の巨費を投じたラインの改修と生産体制の構築こそが、日本を救ったと言われる由縁である。

２４時間の突貫工事で製造された初期型１２０機が、既に艦載機の大半を失い、ハワイまで後退していた空母“葛城”“信濃”に届けられたのは、ライン始動からわずか半月後のことだった。

海軍各部隊から抜擢されたベテランパイロット達によって編成された烈風戦闘機隊が初陣を飾ったのがサンフランシスコ沖航空戦。

米海軍のＦ８を相手にほぼ同等以上の活躍を示したこの海戦で、帝国海軍は合衆国海軍太平洋艦隊に致命的損害を与え、欧州軍によるパナマ上陸作戦に至るまで太平洋上での制海権を確保する上で貴重な勝利を得ることになる。

話が思いっきり逸れたが、美川の言っている烈風改とは、その現代版というか、アップグレードバージョンで、陸海軍によって運用

されている。
狩野粒子影響下では意味を成さないジェット機に代わる、陸海軍の主力戦闘機だ。

烈風改７２型・要目
乗員：１名
全長全幅：１０，５５×１４メートル
発動機：タ－４６空冷ターボチャージャー付き3，５００馬力×1
自重：3，８９５キロ
速力：時速７１５キロ
航続力：５５００キロ
武装：２５ミリ機関砲×４
または２５ミリ機関砲×２＋ロケット弾・爆弾パイロン×６

同時に、攻撃機としてはアメリカで開発され、ついに日本がこれを超える攻撃機の開発に失敗したと認めるＡ－１“スカイレーダー”もまた、美川達の護衛対象である。

Ａ－１　スカイレーダー・要目
全長全幅：１１．８４ｍ×１５．２５ｍ
発動機：ライト　Ｒ３３５０　レシプロエンジン（２８００馬力）×１
最大速度：５２０ｋｍ／ｈ
最大航続距離：４８００ｋｍ
乗員：１名
武装
固定武装：２０ｍｍ機銃ｘ４

胴体下部武装：魚雷または増槽
翼面下部武装：２０００ポンド爆弾×２またはプロペラントタンク×２、
ロケット弾・爆弾パイロン×１２

対地攻撃に限定して考えれば、ジェット戦闘機よりも確実に長く戦域を飛行し、高い攻撃性を発揮出来るレシプロ機による対地攻撃支援は、歩兵や機甲部隊にとって心強い。
美川少佐達にとっては命がけで守るに値する存在なのだ。

「俺達の任務も輸送船団の航空護衛か」
「停戦終結までです。ベーリング海と北極海経由の飛行艦による輸送ルートは、日本にとっては生命線です」
「……露助の動きは？」
「問題はそこです」
森は頷いた。
「石油の供給はともかく、未だに参戦するとも何とも声明を出さない……ただ」
「ただ？」
「あくまで噂ですが」
「構わない」
「……中華帝国との国境線付近に軍を集結させつつあるとか」
「そんな所へ？」
「すでにラムリアース帝国と秘密協定を取り付け、黒海機動部隊がスエズを超えたとも」
「……成る程？」
美川はニヤリと笑った。
「魔族との戦争より、自前の領土が大切ってワケだ」
「いざとなれば」
森はコーヒーカップを弄びながら言った。

「反応弾で列島ごと魔族軍を消滅させろというのが、元からヤツ等の主張ですからね」
「大陸の連中はうらやましいな」
美川はコーヒーカップをゴミ箱に捨てた。
「やることも言うことも派手で」
「勘弁して下さいよ。俺達の家族はこの国にいるんです」
「俺の家族もそうだ」
美川は立ち上がった。
「意地でもこの国を守る……そのための俺達だ」
「そうですね」
森は美川に続いて立ち上がった途端、警報が鳴り響いた。
「スクランブル・アラート？」
「森中尉だ。このアラートは何だ？――わかった。海軍からの要請だな？よし」
「どうした？」
「風翔のテストには絶好のチャンスです。ロシア軍と思しきメサイア３があと１０分で国境線に到達します」
「俺達に行けと？」
「一番近くにいるメサイア部隊は我々です」
「よし……総員搭乗っ！」

「新型？」
改装中の“白雷（はくらい）”達を見守る紅葉がその一報を受けたのは、美川達が離陸してから１時間ほどした後のことだった。
「はい」
頷いたのは、ほむらだった。
アルバイトと書かれた腕章をしたほむらは、プリントアウトした

数枚の写真を紅葉に手渡した。
「ウラジオストック近郊の基地からの離陸が確認されています」
「……これは」
紅葉が手にしているのは風翔が撮影した写真映像。
灰色に塗装されたメサイアが、細部までくっきりと映し出されている。
「……シュトゥーゼ」
「情報部は新型と判断しています」
ほむらは言った。
「津島中佐には、その照会の要請が来ています」
「そうね」
うーん。
紅葉はしばらく唸ってから答えた。
「コイツを日本海に配備する……？ほむ、この部隊はまさか、単なる東京急行や日本海で無駄なダンスしてたわけじゃないでしょうね？」
「ルート的には、ウラジオストック近郊の基地から、浮遊城を偵察する定期ルートを通っていますが？」
「……え？」
「何か？」
「偵察に回せる程、シュトゥーゼの配備が進んでいるということ？」
「あの……シュトゥーゼというのは、この騎のことですか？」
「そう。重武装でコストが高いローマイヤの後継騎。汎用騎としては、多分、世界最高峰のメサイアよ。パワー、操作性、汎用性、拡張性、どれをとっも、私が一番、恐れているメサイア。本当の所言えば、お手本にしたいんだけどねぇ……とうとう日本海へ進出かぁ」
「……これが？」
「中国人のイカレオタクが作った割にはしっかりした造りでね」
紅葉は“白雷（はくらい）”を見上げながら言った。
「こんなハイスペック騎も必要だけど、こういうのの頭数揃えない

ことには、次の戦いが終わる頃には、この東京にどんな旗が翻ってるやら」
「今の戦いは、魔族相手です」
「そうね」
紅葉は頷いた。
「前から魔族。後ろからロシアか中華なんて、考えたくないわ。私でもね」
「……」
ほむらは小さく頷いた。
「ところで、ほむ？“白龍”のシミュレーション結果は？」
「課題範囲はオールクリアしました」
「ほむの実力、甘く見ていたか……設定が緩すぎたかなぁ……後で設定いじっておくわ？退屈でしょう？」
「いえ」
「とりあえず、あんたの要望通り、あんたに預ける“白龍”は、“死乃天使”2号騎としての外見を与えるけど」
「……いいんです」
ほむらは頷いた。
「1騎だけ、外見違うと絶対に目立ちますから、似せていただかないと」
「結構、計算高いのね。まぁ、外見なんてどうとでもなるけど」
紅葉はニヤリと嫌な笑みを浮かべた。
「本音は？」
「……」
「“死乃天使”や“ＤＥＳＥＥＤ”に負けない騎が欲しいって所じゃないの？」
「……別に」
ほむらは視線をそらせた。
「“白雷（はくらい）”だろうと、“幻龍改（げんりゅうかい）”だろうと、どんな敵にも負ける気はしません」

「……なら、そうしてあげるわ」
紅葉は微笑みながら言った。
風間中尉に負けたのが相当悔しいんだろうことは、自ら“ＤＥＥＤ”の同型を希望してきたことから察することが出来る。
「ところで、ほむ？」
「はい？」
「ほむって言ってみて」
「……ほむ？」
「やっぱりかわいいわ。脳みそいじってあげようか？語尾にほむってつけるように」
「結構です」
「それでも……」
紅葉は、手元にあった書類を手に取った。
「中隊に入る条件として、三人、部隊に入れろってのは珍しい要望よね」
「どうでした？」
「まぁ、スムースといえばスムースに行ったわよ？もめたと言えばもめたけど」
「もめた？」
「内親王護衛隊（レイナガーズ）から騎士とＭＣ（メサイア・コントローラー）でしょう？人事権持ってる麗菜殿下と二宮大佐がねぇ」
「？」
「空きがあるなら自分達が行きたいとか、騎体回せとか……後で後藤さんにお礼言っておきなさい？飲み屋まで連れて行って、散々苦労したって聞かされているから」
「それで？」
「専属ＭＣ（メサイア・コントローラー）として鹿野少尉は転属ＯＫだし、川上麗央（かわかみ・れお）少尉と、沢口麻紀（さわぐち・まき）少尉のコンビも明日には、こっちにくる。
二人には、鵜来少尉が電子偵察騎に搭乗する関係で、空いた騎を任せることになるけどさぁ」

紅葉は、周りを見回した後、小声で訊ねた。
「この二人、もしかして百合？」
「百合って、何の暗号符丁ですか？」
「同性愛者の俗称」
「……仲はいいですよ？」
ほむらは答えた。
「前にいた部隊でいつもべったりくっついてましたし」
「……へぇ？」
「いつも、出撃前におまじないだとかいってキスしていたのが印象に残っています。
ただ、緊急出撃が発令された途端、二人が川上少尉の部屋から半分裸で飛び出してきたのを見た時には、まだ未熟だと思ったのですが」
「……あのさぁ」
「はい？」
「その二人が内親王護衛隊（レイナガーズ）にひっぱられた理由って、考えたことない？」
「二人の腕前ですか？」
「戦果はかなりよね。アンタほどじゃないけど」
「川上少尉は、ハルバードを使わせれば右に出る者はいないと思います」
「……わかった」
紅葉は頷いた。
「他の改修騎と、ほぼ同時に組み上がる“白龍”試作型を“死乃天使”の装甲使って外見を仕上げて、ほむほむに預ける。これでいいわね？ほむ」
「文句はありませんが」
ほむらは眉をひそめた。
「……その、ほむとか、ほむほむって、何とかなりませんか？」
「嫌よ」

「何故？」
「かわいいから」
「部隊どころか、整備兵にまでほむちゃんって言われるのは、何だか」
「可愛くて、嬉しくなる？」
「違います」
「照れなくて良いのよ？騎体にはほむほむ専用ってちゃんと書いてあげるから」
「結構です」
「ああ、そうそう」
「？」
「イメージカラーどうする？姫さんは紫。泉大尉は蒼だけど」
「……」
ほむらは、しばらく考えた後に訊ねた。
「お伺いしたいのですが」
「ん？」
「姫さんというのは、“Ｄ－ＳＥＥＤ”のパイロット、風間中尉のことですか？」
「他に誰がいるの？」
「……何故、中尉は禁色を使っているのですか？」
禁色――
実は、近衛のメサイア部隊には、基本的に使うことが出来ない色がある。
まず、白。
これは、天皇護衛隊（オールドガーズ）の専用色に近く、この色を採用された騎で敗北することは許されないため、白く塗装された騎は、別名“死に装束”とまで呼ばれ、敬遠の対象となる。
美奈代達、独立駆逐中隊がこの色に塗装されているのは、実は異例に近いのだ。

他には金や銀がある。
これはもう、目立ちすぎる上に、天皇専用騎が金色に輝く騎であることに由来する。

そして――紫だ。

元来が禁色の基本となる紫。
それは、皇族専用騎にのみ使用が許される色であり、騎士個人に許可されるパーソナルカラーとしても紫は、青紫を含めて絶対に認ないことになっている。

それが許されている。

ほむらでなくても疑問としていいことだ。

「……そうね」
紅葉は言った。
「正確には紫じゃないからね。あれ」
「……」
「あれ、群青色。ちなみに、泉大尉騎はコバルトブルー」
「……屁理屈です。青紫じゃないですか」
「それで通るのが、お役所よ？質問は終わり？」
「下手な質問は命取りになる。そういう警告と受け取ります」
「泉大尉より、ずっと出世するわよ？あなた」
「……どうも」
「で？何色？」
「その理屈でお願いします。ミッドナイトブルーで」
「……色の見本帳、塗装担当兵から借りてきて」

新たなる敵　第六話

「お呼びですか、殿下？」
「ちょっと、真理……ううっ。あーっ。飲み過ぎた……。美凪、梅干しとお茶……麗央と麻紀の異動辞令って、これ何よ」
「昨晩、承認のサインをされた件ですか？」
「誰がサインしたの？」
「殿下が」
「……いつ？」
「飲み屋で」
「私が？」
「後藤中佐相手に、“いいわいいわ。任せなさい”とか豪語された挙げ句、焼酎、ラッパ飲みしながらサインなさっていたじゃないですか。覚えていないんですか？」
「芋焼酎飲み始めた所までは覚えてるんだけど……そんな大切なこと、飲み屋で決めさせる前に止めなさいよ！――っていうか、あ……あ、頭……割れそう」
「だから素面で交渉しましょうって申し上げたのに、カワイイお姉ちゃんのいる飲み屋でどうですか？なんて言われて、ノコノコと中佐について行った殿下の責任でしょう？」
「しーっ！」
麗菜か真っ青になって口元で指を立てた。
「美凪に聞かれたら、私がどんな目に合うかわかんないの！？」
「想像は容易に」
二宮は頷いた。
「二日酔いだろうが、全身打撲だろうが、お休みは一切認めません」
「薄情ねぇ……」
「とにかく、書類には気をつけて下さい」
二宮は言い返した。

「お願いですから、めくら判を押すのは止めて下さいと何度も」
「んなこと言ったって」
口元を尖らせて、麗菜が文句を言った。
「私は事務仕事向いてないし、書類なんて大嫌いだから、仕事日菜子に押しつけたくて、皇位を継ぎたくないって言い切っている程なのよ？」
「それ、自慢じゃありませんから」
「大体、メサイア乗りで事務仕事に向いてるなんて、私から言わせれば、異常なのよ、い・じょ・う！」
「……私を一緒にしないで下さい」
二宮はため息混じりに肩をすくめた。
「とにかく、第一小隊から二人、独立駆逐中隊へ異動になります。決定事項です」
「あーあ。欠員補充……どうしよう」

「――――よ。ごくろうさん」
「ご苦労さんじゃありませんよぉ」
面会に来た後藤に、美奈代は半分泣きながら言った。
「こんなのあんまりです！」
「まぁ、士官教育の一環だと思えよ」
後藤は笑いながらタバコに火をつけようとして、手を止めた。
「全館禁煙だっけ？」
「……です」
「それにしても」
後藤は、しげしげと美奈代の爪先から頭のてっぺんまで眺め、言った。
「お前、スーツ着ると印象違ってくるな」
「そ、そうですか？」

美奈代は、自分の着用している黒いスーツをしげしげと眺めてみた。
「ヘン……じゃないですか？」
「いや？」
後藤は答えた。
「就職活動やってる学生みたいだな」
「……年の頃からすれば、似たようなものですからね」
自分でもわからない落胆を感じながら、美奈代は訊ねた。
「ところで？」
「ああ。近くに寄ったんだ。ついでにお前にも、新入りの話、一応しておこうと思ってな」
「新入り？」
「ああ。明貴少尉の照会でな」
「あの子、友達いたんですか？」
「友達……ってのかな？ああいうのは」
「えっ？」
「鵜来を電子偵察に回すって話はしていたよな？」
「ＥＷＡＣＳですよね？」
「そう。都築や早瀬でもいいんだけど……さすがになぁ」
「……ですね」
美奈代は頷いた。
「踏んだ場数が違いすぎますし。何より鵜来少尉は確か」
「ああ。電子戦にもあいつ自身が強いし、逃げ足もいい」
「ＥＷＡＣＳそのものは非武装に近いですけどね」
「高度１万５千から２万近くで戦線状況分析を主任務とするんだ。逃げる暇くらいあるでしょうよ。鵜来もそっちの方が良いといっているし」
「鵜来騎の後任が、新入りと？」
「二宮さんが来るって期待しただろ？」
「いえ？」

美奈代は首を横に振った。
「……おんや？」
意外そうな顔をしたのは後藤の方だった。
「何だ。もう乳離れが出来たのか？」
「というか……」
美奈代は肩をすくめた。
「内親王護衛隊（レイナガーズ）との共同作戦が恐いだけで」
「二宮さん絡みだと、あいつらと関わりが増える……」
そりゃ、意外な方から見ていたな。と、後藤はあごの無精髭をしごきながら頷いた。
「太平洋上空の騒ぎみたいなこと、二度とゴメンです」
「残念だが」
後藤はポケットから禁煙パイポを取り出し、口にくわえた。
「後任は、その内親王護衛隊（レイナガーズ）からだ」
「え？」
「そう、嫌そうな顔しなさんな。実力の程は、明貴の折り紙付きだ」
「友達づきあいとかで、移籍させたとか、そういうんじゃないんですね？」
「騎士とMC（メサイア・コントローラー）、コンビでの引き抜きだ。内親王護衛隊（レイナガーズ）に移籍する前、明貴と同じ部隊にいた経験がある」
「その評価を元に……ですね？」
「面談したけど、二人とも明貴の存在そのものを忘れていたよ」
「あの子も気の毒に……」
「何。もう、あの子は津島中佐の下で自分の居場所を見つけようとしているよ。部隊じゃ、柏や鬼龍院あたりが可愛がっている。平野には玩具にされているところがあるがな」
「……へぇ？」
「川上麗央（かわかみ・れお）少尉と、沢口麻紀（さわぐち・まき）少尉。共に１８歳だ」
「どっちが騎士ですか？」
「これが履歴書」

後藤は持っていたバッグから書類を取りだして美奈代に手渡した。
ウェーブのかかった、ふわふわした茶髪のロングヘアと整った顔立ちの、人形のような女の子が緊張気味の表情を浮かべている。
顔立ちからして、かなり背が低く、そして幼児体型だろうことは容易に想像が出来る。
名前の欄には、川上麗央（かわかみ・れお）と書かれていた。
「カワイイ娘ですね。宗像がいたら、反応が見てみたかったな」
美奈代はそう言いながら、履歴書をめくった。
ボブカットにされた黒髪に、意志の強そうな目が印象的な、すらりとした美少女。
川村少尉と同い年というより、彼女のお姉さんと説明されたら、全員が納得するだろうな。と美奈代は思った。
「……沢口麻紀（さわぐち・まき）少尉の方が騎士ですか？」
「んにゃ？逆だよ」
「逆？」
沢口の履歴書には、ＭＣ（メサイア・コントローラー）としっかり書かれていた。
「まさか！」
美奈代が目を見張ったのも無理はない。
何と、騎士は人形のような幼児体型の女の子の方だ。
「この娘が！？」
「そう――エースってワケにもいかんが、ハルバード使いとしてはかなりの腕だと、明貴は力説していたな」
「……あの子のお眼鏡にかなったことを信じろと？」
「レベルはＡＡ＋だ。内親王護衛隊（レイナガーズ）でも高い方だぞ？」
「……人材不足、ですか」
「無理を言うな。Ａレベルの人材なんてそうそういるもんじゃない。明貴のおかげで、眠っていた人材確保出来たと感謝すべきだぜ？」
「……麗菜殿下が黙ってるとは思えませんけど」
「ああ。殿下なら昨日、飲み屋で話しつけてきたよ」
「どこで！」

「六本木のいい所があってさぁ……行く？」
「行きません！」
「ったく、中野が憑りついたんじゃないか？カタブツになってるぞ？」
「そう思うなら、さっさと戻して下さいよぉ」
「ああ。泣くな。中野は悪い奴じゃない」
「私にとっては天敵です」
「――――だろうな。だけどよ？」
後藤は、禁煙パイポをくわえたまま言った。
「滅多に見ることの出来ない内部情報を知るまたとない機会だ。補給ルートってのがどうやって構築されているのか。部品発注から前線まで何日位かかるのか。途中で何％が失われるのか。こういう所にいなくちゃわからんことも多い。お前、書類を書かされているとばかり思っていると、損するだけだぞ？」
「そこに気付くほどの精神的余裕はありませんよ。もううつ病寸前ですよ」
「自分で言ってる内は、んな病気になりゃしないよ」
後藤は席を立った。
「状況をチャンスに変えるか絶望に浸ってるか。それだけで人生は違ってくるぜ？有意義に生きろ」

「ビームライフルの長径化……ねぇ」
「そうだ」
テレビ会議システムの向こう側で、殿下が頷いた。
「ビームライフルそのものの構造を頑丈化させ、最悪、逆手で殴れる程度まで硬度を確保する」
「戦鎚……違うな。戦棍の代わりにするの？」

「ストック部分の強度を強めればと思っているけど、僕だってそんな使い方はして欲しくない。本来は、ビームライフルの射撃姿勢のまま、接近戦が出来るためにどういう武器が使えるかってことだ」
「それで銃剣？考える所は一緒だったわけだ」
「紅葉さんも？」
「ええ。サブマシンガンサイズ――人間ならH&KのMP5位のサイズのビームライフルに銃剣を組み込んだのを配備中よ」
「短くない？」
「短いけどね……何？ロングライフルに？」
「そう。インペリアル・ドラゴンと違って、耐弾コーティングされたエネルギーチューブで、本体からパワーをとることで、斬艦刀に近い仕組みを実現させる。かつて、銃を槍の代わりに使っていた時代の再来だよ。
今、ドイツ軍に模擬戦をやらせているけど、評判はそこそこ。槍の間合いからビームの一発をお見舞いすることだって出来るから、新しい戦法が生み出せるってね」
「……デザインは？」
「エネルギーパックの小型化は僕の方が上だったね」
殿下はキーボードを操作して、テレビ会議システムのモニターに設計図を映した。
「かつてのM1ガーランドをベースにしている。全長で16メートル。フルオートは無理だけど、20発までのセミオート射撃が可能。銃剣部は6．5メートルで、刀身先端部にエルプス効果を発動させることで、斬艦刀に近い破壊力を持たせている。何より、先端部にエネルギー出力を限定することで、騎体負担を減らす相乗効果もある」
「……成る程ねぇ」
紅葉はティーカップに手を伸ばしながら、感心した様子で頷いた。
「こっちも、村田銃でも参考にしようかしら」
「リーチは長い方がいいよ？紅葉さん」

殿下は勝ち誇ったように言った。
「槍と銃剣はかなりの武器になるから」
「わかった。考えておく」
紅葉は頷くと、“お客を待たせているの”と、テレビ会議システムをカットした。
「――参考になった？」
「……特には」
首を横に振ったのは、愛くるしいウェーブのかかった茶髪の等身大人形。
違う。
だが、人形と間違える程の美少女だった。
川上麗央（かわかみ・れお）少尉
ＩＤカードにはそう書かれていた。
「私はハルバードの方がいいです。使い慣れた武器が一番ですし」
「あなたのルールで敵が戦ってくれるという保証にはならないわよ？」
「それは……わかってます」
麗央は、不服そうに頬を膨らませた。
「ですけど」
「――まぁ、いいわ」
紅葉は頷いた。
「シミュレーションの申請は受け取った。セッティングは申請書の通りにしておくから、明日の朝一番でシミュレーションに入れるように準備しておく。沢口少尉にもそう伝えておいて」
「了解しました」
「あ、終わった？」
通路に置かれたベンチで携帯電話をいじっている沢口麻紀（さわぐち・まき）少尉が、

麗央の存在に気付いて、手を止めた。
「うん」
「どうしたの？」
麻紀は立ち上がって怪訝そうな顔をした。
「随分、おかんむりじゃない」
「……だぁって」
麗央は怒ったと言うより、拗ねた口調で言った。
「麻紀のせいで寝不足になるし、遅刻して怒られるし」
「アッハハッ……ごめんごめん。でも、麗央があんまりに可愛すぎるのが悪いのよ？私にとって、麗央の“おやすみなさい”は、“襲って下さい”と同義語なんだから」
「麻紀はもう少し、理性を働かせた方がいいと思うわ」
「働いたら負けっていうじゃない」
「……最近、スケベすぎな少年漫画の主人公みたい」
「それ……なんか、地味に嫌ねぇ」
「……ところで」
麗央は、麻紀の携帯に目をやった。
「麻紀は、携帯電話とか、使っていたんだ」
「え？普通でしょ？」
「……」
「まぁ、軍施設じゃ、いろんな電波飛び交ってるから、使いづらいし、ほとんどメールばかりだけどね」
「……で、ま、麻紀は、だ、誰とメールしてるの？」
「へ？」
「誰と、どんなメールしてるの？た、例えば……内容とか」
「今は内親王護衛隊（レイナガーズ）や、他に異動した友達かなぁ。まだ生きてる？とか、大した用事じゃ無いのばっかりだけど」
「……そ、そう」
ほうっ。
麗央は少しだけ、安堵した表情になった。

「そ、そうなんだ」
「ふぅん？」
不意に、麻紀がニヤリと勝ち誇ったように言った。
「もしかして、麗央？それってヤキモチぃ？」
「ち、違うわよ！だ、誰がヤキモチなんか……」
「もうっ。麗央ったらカワイイんだからぁ」
「うるさいっ！もうっ、麻紀のバカっ！」
「もう、そんなに気になるなら、麗央も携帯買えばいいじゃない。二人でメールのやりとりしようよぉ」
「で、でも……麻紀とは部屋も同じだし、わざわざ携帯で話さなくてもいいじゃない」
「まぁ、他にもネットに繋いだり、アプリでいろいろ出来るしね。便利よ？」
「ネット？アプリ？……携帯って、電話じゃないの？」
「えっ？……えっと、まさかと思うけど、麗央？あなた、今まで携帯持ったことないの？」
「だ、だって！」
麗央はムキになって反論した。
「無線機なら使ったことはあるけど？野戦用携帯型通信装置って。でもあれ、緑色で、重くて、邪魔で、何だか可愛くないし、使いづらいし、あの時は、他の人にすぐ渡しちゃった」
「……まぁ、あれも携帯といえば……携帯だけどさぁ。どんだけ内輪話よ……それ」
「えーと。でも、野戦訓練最後にやったのは、半年くらい前だよ？」
「だけどさぁ。麗央？あんた、かなり時代に取り残されているよ？」
「そんなことない！め、メールってあれでしょ？電話番号入力して、番号の組み合わせてで、短い文章を送ることが出来るって」
「そ、それ違うって言うか……何、それ？」
「ち、違うの？」
「進んでいるとは思えないけど……とにかく、さっき言った様に、

最近の携帯は、インターネットも出来るし、アプリ、ダウンロードすればゲームも出来るし」
「い、意味分かんないけど、とにかくスゴいのね……」
「このままじゃ、世間様で恥かくわよ？」
「し、しかたないじゃない！私、ボタンたくさんある機械って苦手だし」
「……メサイア乗りの言葉じゃないわねぇ。それ」
「軍用は大丈夫なのよ！根性あるから、私が使っても壊れないし！」
「……ああ、民生品転用の野戦用調理具、爆発させたの、あれ、麗央だったわね」
「私、触っただけなのよ！？」
「さすが“クラッシャー麗央”……家電品店、下手に連れて行かれないなぁ」
「うぅっ――麻紀の意地悪っ！」
「それでも、自分の部屋のインターフォンの使い方もわかんないほど、麗央って機械音痴だもんねぇ」
「ふんだ！どうせ私は不器用ですよだ！」
「いやいやいや。それが麗央の魅力ですよぉ。“テレビがつかないぃぃっ！”って、泣きながら助けを求めに来た麗央――可愛かったなぁ。んでもって、単にコンセント外れてたって分かった時のあの顔♪」
「へ、ヘンなこと思い出さなくていいのっ！麻紀のばかっ！」
「怒った顔もカワイイわよ？」
「まぁぁきぃぃぃぃっ！」
「ハハッ。ごめんごめん。でも、携帯は持ってほしいなぁ。恋人同士って、やっぱり、一杯メールとかしたり、カメラで写真とったり」
「写真？」
「最近の携帯ってカメラもついてるのよ？んでもって、こんな感じで♪」
ピッ

「……何、これ」
「これ？私の大切なコレクション。題して、麗央の恥ずかしい写真コレクション♪」
「……」
「例えば」
「何よこれぇっ！」
「座学の時間、居眠りしている麗央」
「ヨダレ出てるじゃないっ！」
「お弁当、喉に詰まらせて死にかけている麗央とか」
「どこでこんなの撮ったのよぉっ！」
「最愛のは、この、私のシャツでハァハァしてる麗央♪」
「携帯渡しなさぁいっ！壊してやるうっ！」
「あははっ。でも、携帯は面白いよ？」
「私にとっては全然、面白くないっ！」
「ねぇ。麗央？もし、私と恋人だっていうなら、携帯買って？」
「えっ？」
「私、恋人同士でメールしたり、その日あったことを語り合ったりするの、憧れているの。だから、ね？」
「麻紀は、そういうの、したことないの？」
「えっ？だって、今まで、恋人なんていなかったもの」
「そ、そうか……なら、私が携帯をもって、メールとか始めれば、私が麻紀の初めてになれるんだ……」
「麗央ぉ」
感極まった。といわんばかりの麻紀が、麗央に飛びついた。
「なぁんて、カワイイこと言うのかしら？この娘はぁ！」
「ち、ちょっと麻紀っ！？」
「もう、今晩寝かさないからぁ！」
「ちょっ！？ひ、人目があるんだからぁ！」
「私は麗央に一目惚れ♪」

「……随分、お楽しみだったみたいね」
顔を真っ赤にした麗央が、いたたまれないという顔で、横に立つ麻紀を睨み付けたのは、それから１０分後のことだった。
場所はハンガー横の士官用ブリーフィングルーム。
美晴があきれ顔で二人に言った。
「一応、美奈代さんの留守預かってるから言うけど」
「……」
縮こまる麗央の横で、麻紀は平然とした顔だ。
「確かに、ウチの部隊はそういう所はフリーダムだと言われているし、第二の内親王護衛隊（レイナガーズ）とか言われているし、白百合予備軍の掃きだめとか、いろいろ言われているけど」
「……」
スゴイ言われようだな。と、麗央は内心で呆れた。
「新任の挨拶に遅れてくるってのは、フリーダム以前の問題。しかも、遅れた理由がいちゃついているってのは、感心できない」
「……はい」
「罰として、明日からみっちりシミュレーションをやってもらうから、覚悟しておいて？」
「……了解です」
「とはいえ」
美晴は笑って言った。
「ほむちゃんといい、あんた達といい、新人が入って来たのは頼もしい限りよ。それと、都築君達はお帰りなさい。かな？」
「――ああ」
都築は頷いた。
「迷惑かけたな」
「――こら」
さつきが脇で小突いた。
「もう少し、言い様が」
「照れくさいんだよ。これで勘弁してくれ」

「お互い様」
「……なぁ」
都築は、辺りをキョロキョロした後、訊ねた。
「フィアは？」
「……っ」
美晴の――――否、ほとんど全員の顔が強ばった。
「あ、そうそう」
事情がわかっていないのは都築だけではない。
さつきも言った。
「あの子、どうしたの？今、もしかして染谷候補生の所？」
「染谷候補生はまだ病院」
「え？」
「お腹を撃たれて、リハビリ中。それと……」
「フィアさんは」
ポンッと山崎が美晴の肩に手を置き、言った。
「……戦死されました」
「……」
都築とさつきの顔が真っ青になった。
「まさか」
「あんな、あんな元気な娘が！？」
「北米戦線で……皆を助けるために……こんな言葉、僕は嫌いですけど、でも、それしか言い様がないので言わせて下さい。フィアさんは……立派に戦って……最後まで立派に……」
「……そう……か」
悪かった。
都築はうなだれたまま、言った。
「部隊で初の戦死者……か」
「……すみません。僕達は」
「責任はないだろう」
都築は山崎に言った。

「戦争だ。誰だって死ぬんだ……事情はわからんけど、お前やみんながいて、止められなかったってなら、それは仕方ないことだって、俺はそう思うし、それ以外は知りたくない」

「……」

「――すまねぇな」

都築は、ほむら達に視線を向けた。

「お前達にゃ、関係ないような話だ。折角の着任祝いだ。泉のへそくり使って、派手に行こうぜ？」

嵐の前　第一話

「聞きたいことが二つある」
中野に言われ、美奈代はもう諦めた。
どうせ、ロクなことは言われないだろう。
もう疲れた。
美奈代は昼休みに買ってきた便せんに、インターネットで調べた辞表のサンプルを丸写ししていた手を止めて、彼の前に立っている。
何か怒られたら、続きを書いて、封筒に入れたら提出すればいい。
昨日の夜、コンビニで買ったバイト雑誌は熟読して、めぼしい所には赤丸もした。
即日採用してくれる所ばかり探したし。
だから、明日からは、バイトの口でもみつけて頑張ろう。
少なくても、アルバイトで死ぬ危険はないだろうし、コイツに怒られることもないだろうから。
「まず一つ」
中野は書類を手にとった。
“死乃天使”の外部パネルがそっくり1セット消耗している上に、追加が3セット発注されているが、お前、何やったんだ?」
「改装中ですよ?」
美奈代は答えた。
「改装担当の整備部隊に照会するのが筋でしょう?」
「確認して報告」
「……はい」
「それと、共済組合から確認依頼だ。小清水少尉のことだが」
「涼が?」
「少尉は、何をしたんだ?」
「というと?」
「二千万もの振り込みを一括でやっているんだ。相手は水瀬財団だ」

「そんな金額を？」
「水瀬財団は、水瀬伯爵家の絡みというか、ダミー会社だ。そこにこれだけの金額を振り込むというのは、普通じゃ無い。これは異常だということで、金銭管理を管轄する組合から、事情確認の依頼が来ている」
「……ああ」
美奈代はしばらく考えてから思い出した。
「療法魔導師を依頼した件ですね」
「療法魔導師？」
「ええ。これは後藤隊長から口止めされてますから詳細は言えません。何でしたら、後藤隊長に直接ご確認下さい」
「水瀬家絡みの療法魔導師を雇った代金がこれだと？」
「多分」
ったく。何やってるのよ、涼ったら。
内心で美奈代は舌打ちした。
あれは、光菱にメサイアの修理費用の中に入れておくって話しになっていたのに！
……でも、あの子が律儀に支払った理由って？
……あれ？
あの時……何か、言ってたなぁ……あれ？
……
美奈代はそこまで考えて、涼がそこまでやった理由にたどり着いた。
「……まずい」
「何が」
「……いえ」
「顔がまずいのはわかっている」
「じ、女性に対して、どういう言い間違いですか！」
「事情を話せ」
「……実は」

美奈代は、水瀬悠理と名乗った子供から受けた請求書の処理について、大まかなところはぼやかせて説明した。

「つまり――」

中野は話をまとめた。

「後藤さんが個人的に雇った療法魔導師の治療代を、部隊がらみだからと言って、お前に払えと、後藤さんはそう言って、渋ったら、部下である小清水少尉が代わりに支払うことを申し出たと」

「……です」

「……はぁっ」

中野は深くため息をついた。

「お前、どこまでバカなんだよ」

「はいっ!?」

「部下にカネの支払いを頼んだってことだろ?そんなことで部隊長としてやっていけるのか?」

「そ、そんなこと言ったって!二千万ですよ!?」

「後藤さんにきちんと頼め。あの人だったら何とかなるはずだ」

「頼んだ結果として、こうなったんです!」

「後藤さんにも考えあってのことか……それにしても……小清水少尉の狙いは何だ?二千万なんて、十代の娘がおいそれと支払うことが出来る額じゃないぞ?」

「私もまだ二十歳前なんですが!」

「お前の事なんて聞いてない」

「――っ!」

「かっかするな。シワになるぞ」

「免職覚悟しましたから、殴らせて下さいっ!」

「刑務所出ると就職困難だぞ?それで?」

「……多分、後藤隊長とのやりとりを本気にしたんだと思います」

「何だ、それは」

「代金肩代わりしたら、私を手に入れることが出来るって」
「……は？」
中野は怪訝そうに眉をひそめた。
「つまり、何か？借金のカタに、お前を好きに出来る権利を、小清水少尉は手に入れたと？」
「多分」
「同性を相手に二千万支払って？」
「……です」
「冗談なら、もっと信憑性を持たせろ」
ばっさりと中野は美奈代の言葉を冗談だと切り捨てた。
「そんな馬鹿げた話があるか」
「私も、まさかとは思いましたがね。これが現実です」
「……」
「私の部隊は、はっきりいろいろ異常な部隊なんですよ？」
「……後藤さんに、ちょっと確認しておく」
「とにかく、私に言われてもどうしようもないことですから！」
「……わかった」
何故か、中野が何かを思い詰めているように、美奈代には見えた。
「？」

「どう？“白雷（はくらい）”の感想は」
「いやぁ」
シミュレーションを終えたばかりの麻紀は、苦笑いを浮かべながら答えた。
「内親王護衛隊（レイナガーズ）でも話題にはなっていたんですけど、本当にバケモノですねぇ。パワーゲージが“鳳龍改”とは比較にならないっていうか。最初、感覚が全然違うから焦りましたよ。スロットル開き過ぎちゃって、オーバーブースト引き起こして、発進と同時にエンジ

ン吹っ飛ぶし」
「みんなそうよ。でも、ほむちゃんは、結構平気だったみたいね」
美晴は、皆にロールケーキを勧めながら言った。
「そんなことありません」
皆にコーヒーを入れるほむらは小さく首を横に振った。
「モードG以降は、そこそこ手こずりました」
「うわっ！もうそこまでいってるの！？私達、モードBやっと入ったところだよ！？ちょっと、麗央？こうしちゃ……って」
麻紀は、そこで初めてテーブルに潰れている麗央に気付いた。
「ち、ちょっと麗央っ！？」
「……死んだ。思いっきり死んだ」
麗央は突っ伏したまま、そうぼやいた。
「体がもたない……死ぬ」
「あらら」
涼が苦笑気味に言った。
「私達も経験あるから、わかるんだよねぇ。今が一番辛いときだもん。麗央ちゃん？今が辛抱する時だよ？」
「だよねぇ……私達、シミュレーションなしでいきなり実騎。騎体壊して、整備班長の前で何回土下座させられたっけ」
「お姉様も一緒になってね……辛かったけど、今になったら懐かしいわ」
「そうだねぇ……麗央ちゃん達も、あと6時間も乗ったら、体に免疫つくって」
「そうですかぁ？」
「はい。ココア」
ほむらが麗央の前に紙コップを置いた。
「砂糖、大目にしておいたから」
「ありがと……おいしい！」
麗央は目を見張った。
「小清水少尉騎の“しょこら”から教わった入れ方で作った」

「性能違うと、精霊体までいろいろ出来るようになるんだぁ」
ちらりと、麗央は視界に入ったほむらに言った。
「そういえば、ほむらは何乗るの？」
「私は……」
ほむらは考えてから答えた。
「一応、“死乃天使”の二号騎」
「一応？」
「名前、制式に決まってない。外見は“死乃天使”だから、そういう仮称で話しが進んでいるの」
「じ、じゃあ！“白雷改”には乗らないの！？」
「ベースはほとんど同じだと思うけど？」
「むうっ！？“死乃天使”って、ど、どんなヤツよ。まさか、と、特別騎とか！？」
麗央が血走った目でほむらを睨み付けるが、ほむらは平然としたものだ。
「解体中。でも」
眉ひとつ動かさない。
「外見や性能じゃないと思う。基本フレームは、今回の改装でほとんど一緒になるって聞いているし」
「きぃぃぃっ！」
突然、麗央が金切り声をあげた。
「ほ、ほむらちゃんの分際でナマイキっ！」
「？」
「わ、私にそっち回しなさいよ！いいでしょ！？」
「シミュレーションモード、ＡＡ＋のＺからだけど、いい？」
「えっ」
麗央の顔が青くなった。
モードがＡＡ＋のＺ、それはつまり、ＡＡレベルの騎士でも相当な腕利きであることが求められるシミュレーションのレベル。
正直、自分でやりこなせる自信はない。

「そ、操縦、そんなに難しいの？」
「クセがあるというか、かなりピーキーなマシンではある。“白雷改”をよりソリッドにチューンしたら、あんな感じかしら」
「そ、想像が出来ない」
「うーん」
美晴が助け船を出した。
「基本、“死乃天使”は、美奈代さん専用――ＡＡ以上の騎士対象で、設定組んでいるって、津島博士が言ってるのは聞いたことある」
「――そういうこと」
ほむらは言った。
「私が選んだというより、騎体が騎士を選ぶの。
でも、私は別に“死乃天使”をそれ程高く評価していない」
「な、なんでよ」
「汎用性が低すぎる。広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）も使えないし、背中にマウントする方面の武装はほとんど使えない。
ハルバードみたいな武器もね。
私の勝手な判断だけど、あのタイプは、ほぼ完全に空中機動戦を主眼としている。
だから、地面に脚を踏ん張らないと使い物にならないハルバードのような、ポール・ウェポン系武器は最初から想定外というか、不向きだと、はっきり言える」
「踏ん張りきかなくちゃ……脚部ブースターで踏ん張りをカバーするのは無理か」
麻紀はロールケーキをつまみながら頷いた。
「斬り込みの要である脚の微妙な捻りなんて、ブースターで再現できるもんじゃないし」
「そう。それに、“死乃天使”達はあくまで脇役。主役はどうあっても“白雷改”。これに変わりは無い」
「ど、どういうこと？」

麗央は、納得出来ない。という顔で訊ねた。
「性能からしたら、主役は――」
“死乃天使”は斬り込み部隊。その目的は、あくまで後方攪乱。つまり、大規模な部隊を相手に戦線を支えきれるようには設計されていない。
最強のメサイア。その定義が、敵を殲滅することを意味するなら、強いという評価に相応しいのは、むしろ“白雷改”。
武装に対する幅も広いし、装甲も厚いし、耐久力も高い。
これらが前線では戦力に直結することは言うまでも無いでしょう？
機動性重視で、武装拡張性を犠牲にした“死乃天使”では、そうはいかない。
“死乃天使”を改装しないで、“白雷改”を、次期ベータ級主力メサイアである“白龍”のテストベッドにする津島博士の方針は正しいと思う」
「む、難しい……」
「明貴少尉の言い分は正しいと思うわ？」
頷いたのは麻紀だ。
「敵陣へスピードだけを頼りに斬り込む。奇襲攻撃に特化した存在が、“死乃天使”だっていうんでしょう？」
「そう。広域戦闘から格闘戦まで、広い任務に耐えられる汎用性や拡張性を持ち合わせている“白雷改”には、評価の面で勝てはしない」
「ふぅん？」
芳（かおる）が、感心したように言った。
「派手な戦いしているから、“白雷（はくらい）”より“死乃天使”の方が性能高いと思っていたけど、評価ってそうなるのかぁ」
「今回の改装で、“白雷改”が“死乃天使”型へ改装する指示が出なかったのが証拠だと思う」
「――つまり、ほむちゃんは」
どうぞ？

涼は、ケーキを勧めながらほむらに言った。
「麻紀ちゃんに、“私よりいい騎体に乗ってるんだぞ？”って、そう言いたかったのね？」
「……正解」

かつて人間の使っていた病院の一室。
厳重な警備が敷かれた中、神音は看護兵に付き添われるようにして室内に入った。
カーテン越しに、午後の日差しが入る室内には、白衣を着た数名の医師が立っている。
そして、彼等に守られるように、ベッドが一つだけ、置かれていた。
「お初にお目にかかります」
ベッドの上に横たわる白髪の老人に、神音は静かに頭を下げた。
「神音商会総帥、天原神音でございます」
「……抹鯉商会の主の娘だったか？」
「はい」
「先代には随分と無理をさせた……その娘に今度は世話になるとはな」
「そのようなお気遣いは無用に願います」
神音はやんわりと笑った。
「ここまで来れば、最早、一蓮托生。今後共によしなに」
「……心得ておこう」
「……」

「ご容態は？」
「封印の影響が少し残っている程度だ。あと数日もすれば、ベッドから出ることも出来るだろうと軍医は言っている」

かつての待合室。
今は使う者とていない革張りの古ぼけた長椅子に座ったガムロは頷いた。
「魔界では大騒ぎですよ？ヴォルトモード卿、ついに復活と」
「でなければ困る」
ガムロは頷いた。
「軍資金に兵、そして物資の調達に支障が出る」
「実際、ここの所、滞っていた義援金の支払いは目に見えて潤沢になったとか」
神音は答えた。
「メース、妖魔共に納品は順調ですが――気になる話を聞いたのですが？」
「何だ」
「人間の軍と本格的に共闘態勢を構築すると」
「――ああ」
ガムロは、面白くない。という顔で頷いた。
「漢民族だろう？向こうから申し出があった。この弓状列島を我が物にしたいと」
「……それで？」
「この列島を支配下に置き次第、海を渡って漢民族と対立する国――ロシアというらしいが、そちらへ侵攻する。
メースもある。我々もいる。眠っていてた間ような不始末は起こさせはしない」
「つまり、漢民族は傭兵として？」
「保証とでも言おうか」
ガムロは小さく喉で笑った。
「最後に殺される人間の民族として、名を残してやるだけのことだ」
「……資金援助を？」
「ああ」
ガムロは頷いた。

「所詮は人間だ。どんなご託を並べても、金の輝きには弱い
「……成る程？買収したと」
「共に手を握っただけのこと――こちらから頼んだわけではない」
「としておきましょうか？飛鼠級の発注が減ったので気になっていたのです」
「一時的なものだ。漢民族が自分の所で生産したものを売り込みたくて仕方ないらしい」
「我が社製では信頼できないと？」
「むしろ、人間の作ったシロモノを、我々がどこまで信じているか。だな」
「信じているから、発注量を増やした」
「皮肉な物言いだな。漢民族の言う“義勇兵”を搭乗するだけの飛鼠を、こちらで用意しろというのが、厚顔無恥なあのバカ共の言い分だ」
「それを鵜呑みにしたのですか？」
「ああ――安心しろ。魔族軍の義勇兵向けは、貴殿の製品しか回さない。評判が悪すぎる」
「そりゃぁ」
神音は言った。
「こっちは魔族軍規格、向こうは人類規格ですからね。整備兵からすれば、評判悪いでしょうよ」
「……どちらにしろ、サライマ、ツヴァイにくわえ、ヤクトエッジも配備が進んでいると聞いているが？」
「ええ」
神音は頷いた。
「停戦前と比較して、消耗復旧率は９８％。兵員補充率は２５０％……ここに飛鼠は入っていません」
「飛鼠はどの程度、納入できる？」
「そうですね……あと1月で強化型が１００騎って所ですか。火力的には、ツヴァイと同等の戦力ですよ？それと――アイバシュラ」

「アイバシュラは、今後の我が軍の主力と言っても良いだろう」
ガムロは言った。
「あのタイプは補充が容易で、消耗を補充がカバーできるのが強みだ」
「捕獲と大規模繁殖に成功したのは、我が社の功績であることをお忘れ無く」
「覚えておこう」
「新潟、長野、それと岐阜にネスタージュ級3、護衛用のビショップ級５５。A、B級合わせて４０万を新潟の門（ゲート）から各所へ配備しています」
「従来の妖魔達は、長野と新潟、それと石川県に後退させ、一部は魔界へ戻しつつある」
「従来の妖魔は、物量というか、重突撃主眼の、いわば破城攻撃兵器の一種です。この日本という戦域では、むしろ機動性に長けたアイバシュラの方が有利でしょう」
「さもありなん――この程度の土地も総掛かりで確保出来ない現状では、閣下に顔向け出来ん」
「お察しします」
「日本海は天壇とその部隊が制海権と制空権を確保している。この壁があるから、日本海沿岸は我々の橋頭堡にして休息地として活用できる。問題は、太平洋側だ」
「すでにズルド卿が静岡を確保されていますが」
「ああ。ただし、人類も死に物狂いで抵抗している。停戦が終了すれば、主戦場になるのは静岡だ。ズルドの静岡要塞がどれ程、人類を相手に出来るかが、勝負の分かれ道だな。
その分、メースもアイバシュラも優先的に送ってやりたいところだ」
「何か、問題が？」
「長雨の影響で、静岡の物資搬送用の支門（サブ・ゲート）の建設と、メース部隊の再編成が目に見えて遅れている。

特に、メースの不足は深刻だ。
優秀なメース使いが完全に不足している中だ。兵の数はともかく、肝心のメース使いが足りない」
「義勇軍は使い物になりませんか？」
「偉そうなこと言う、口先だけの小物ばかりだ。歩兵としてやっと使える。メース使いに至っては、飛鼠（ひそ）にやっと乗せることが出来る者ばかりが集まっているのが現実だ。下手をすれば、漢民族の方が使えるかもしれんぞ？」
「まさか、ヤツ等をメースに？」
「メースでは、人類の神経が耐えられないだろう？我々とて、その辺は人類の好き勝手にさせないように人類を作ったことを忘れるな」
「……でしたね」
神音はほうっ。と安堵のため息をついた。
「あの猿共にメースの技術がそのまま渡るかと思うと、ぞっとしました」
「肩入れがすぎるぞ？」
「親とはそういうものです。ビジネスの話しに戻りますけど……魔界と天界、共にやはり、我々には協力しない方針ですね」
「何かあったか？」
「両政府が協定を書き換えました」
「ん？」
「ガストラフェテスをはじめとする、大型広域破壊危惧種妖魔の空間移動禁止に関する国際法が成立。これをもって、我々はガストラフェテス等、国際法が指定する妖魔の販売が出来なくなります」
「……リストは」
「オフィスに提出しましょうか？」
「頼む……だが、神音殿」
「はい？」
「その代わりとして、再び、あのシステムを手配してもらうことになりそうだな」

「販売条件に変更はありませんよ？」
「わかっている」
ガムロは笑って言った。
「この国にめがけて撃つな。というのだろう？」
「それが守っていただけるのでしたら」
「――――よかろう」
「なら、部材を送りましょう。八ヶ岳と霧ヶ峰高原に設置させます。よろしいですね？」
「任せる」

「メース部隊の補充が十分でないとは、どういうことだ！」
ズルドは怒鳴るしかなかった。
「ここは最前線だぞ！？」
「負傷兵の復帰は進んでいます」
マーリンは答えた。
「騎体の補充率も７５％を確保していますが」
「１２０％を確保しなければ、いざという時、補充も出来んぞ！」
「その分を飛鼠（ひそ）でカバーするというのが、ガムロ卿からの指示で」
「あんなもの使い者になるか！」
ガンッ！
殴られた木製のデスクが音を立てて真っ二つになった。
「使いモノになるメースとメース使いを送れと、兄貴に要請しろっ！戦争は数だぞ！」
「はいっ！」
「義勇兵で使いモノになる奴らを中心に部隊の再編成を急がせろ。飛鼠（ひそ）なんぞに乗って一端を気取るバカ共は、対機甲戦部隊に回せ。対デミ・メース戦は、これからが正念場だぞ！」
「案ずるな。ズルドよ」

部屋に入って来たのは、ホーサーだった。
「我々、義勇兵の中でも少しは“使いモノになる”連中もおる。その上、辺境から名の知れたメース使い共が、続々と門（ゲート）を超えようとしている。やはり、ヴォルトモード卿の復活の知らせは、皆を熱くさせているようじゃのぉ」
「……ふん！個人としての戦いではなく、集団戦に長けたメース使いなんだろうな。スッパード！」
「ワシの鍛えた若造達もかなりになる。奴らなら大丈夫じゃ」
「なら」
ズルドは答えた。
「選抜は年寄りに任せるぞ」
「やれやれ……しゃしゃり出るもんじゃないわい……ほれ」
ホーサーは、ズルドに小さな紙袋を手渡した。
「フィーリア姫からじゃ。クッキーを焼いたというてな？渡してくれと」
「そ、そうか」
「頑張って下さいと伝えてくれという」
「ああっ！」
ズルドは娘の励ましを耳にして、顔を紅くして頷いた。
「俺は頑張る！勝って、フィーリアに幸せなこの人間界を見せてやるのだ！」

嵐の前　第二話

「問題はですね？」

秋山紀子陸軍大尉は、支給されたてのブーツの爪先に泥がつくことを気にしながら、後ろを歩く男に言った。

「一般論としては、密集して突撃してくる小型妖魔達を、どうやって食い止めるか――だと言われていますが」

坂道を登り切った辺りで、紀子は足を止めた。

坂道の向こうは、広く開けた盆地が広がり、紀子にとっては教え子達に当たる戦車兵達が、竹刀や精神注入棒（バッター）を振りかざす下士官達にどやされながら、必死に戦車を操縦している。

「……どう思います？」

寸分の隙もなく着こなされた軍服の胸には、磨き抜かれた戦車兵と教官の徽章が輝いている。

スーツを着せれば、どこかの事務員の女性で通りそうな程、温和な顔立ちなのに、その首から下の厳めしさは、違和感を通り越して、彼女という存在を違うものとして形作っている。

――すっ裸を是非拝んでみたいもんだ。

くわえタバコの男は、紀子の形の良い尻を眺めながら、ぼんやりとそんなことを考えていたので、紀子の質問を見事に聞き逃した。

「えっ？」

「失礼――聞こえませんでしたか？」

「いやぁ……すみませんねぇ」

ポリポリと頭を掻いたのは後藤だ。

「いえ……小型の妖魔を喰い留めるために、一番大切なのは何だと思うか。そうお訊ねしたのです」

「さて……」

後藤は首をかしげた。

「何でしょうね」

「簡単です」
紀子はニコリと笑って答えた。
「兵士を逃がさないことです」
「……妖魔じゃなくて？」
「ええ。訓練されたベテランでさえ、妖魔の集団突撃の前には戦意を喪失しそうになります。新兵は恐慌を来し、武器を捨てて塹壕から逃げたそうとする始末」
「そいつぁ、無理もないでしょう。俺も兵隊の立場だったら、ケツまくって逃げますよ――秋山さんに後ろから撃ち殺されるでしょうけど」
「逃げることが出来ると思っているだけで、彼等は前線を知らないのです」
紀子は苦々しそうに言った。
「一人か二人、敵前逃亡の見せしめだって殺したところで、そう簡単に逃げ足が止まるものでもなし。塹壕を乗り越えた妖魔達の餌食になるのがオチです。塹壕に踏みとどまった戦友達――彼等が見捨てた仲間が命と引き替えに、彼等に与えたものは、死ぬ時間がほんの少しだけ遠くなるだけ――その場に踏みとどまれば、仲間と共に生還出来たかもしれないというのに」
「ご立派ですなぁ」
後藤はタバコをくわえたまま、ニヤリと笑った。
「俺も部下に死ねと命じることはあっても、そこまでやったことはない」
「理想論ですよ？」と、紀子は笑った。
「私は戦車兵ですもの。戦車兵の拳銃は、自衛じゃなくて自決用です」
「その若い頭を、自分で吹っ飛ばす？もったいないお話で」
「そうなりたくないから、そして、歩兵達を一人でも助けるために、陸軍戦車部隊も苦労はしているんです」
再び歩き始めた紀子は、整然と並ぶ戦車の前を、まるで閲兵する

将軍のように誇らしげに胸を反らせながら歩き続ける。
「陸軍の防衛方法は簡単です。妖魔の攻勢が開始され次第、航空隊による阻止空爆を開始。その次に、砲兵隊による阻止砲撃が入ります。
そこまでの阻止攻撃で停止しない場合、地雷原が待ち構えています」
「そこで止まりそうな気がするんですけどね。普通は」
「平均して、ここまでの敵の脱落率は3割止まりです。敵も知っているもので、最近では、地雷原に対する事前砲撃が頻発しています。
――さて、ここからが戦車部隊と歩兵の仕事なのですが」
メサイアを計算に入れていないことを、後藤は黙っていた。
「中型以上は１０５ミリ砲搭載型の八式戦車で、それ以下は、３０ミリガドリング砲搭載の八式対空戦車により基本的に十字砲火をもって敵に当たります。
無論、それだけでは阻止攻撃としては不足ですので、十字砲火ポイントを突破した敵に対しては、歩兵部隊による１２．７ミリ以下の重機関銃以下の攻撃が穴を埋めます」
「その時点での、敵さんの脱落率は？」
「約7割。この辺で撤退を決めてくれるケースも、以前は多かったんですが」
「敵さんも意地があるんでしょうかねぇ……残り3割は？」
「……神様にお祈りした方が早いでしょう。航空機によるナパーム、クラスター爆弾による、陣地ごとの“焼却処分”によって、第二防衛線、もしくは第三線への浸透を阻止します」
「味方の損耗率の方が高いでしょう？それ」
「……ええ」
紀子は頷いた。
「ですから、こちらも戦法を変更し、そして、武装も変えました」
「ほう？」
「……笑って下さって結構ですよ？」

紀子が指さしたのは、後藤が見たことのない戦車――――否、戦車らしき物体だった。
まず、１０５ミリ砲を搭載した八式戦車の横を走るそのサイズが問題だ。
びっくりする位小さい。
トラックの横を走る軽自動車を思い出したが、ほとんどそんなサイズだ。
そして、搭載している砲身も細い。
あれは――――砲と呼ぶには細すぎる。
「何ですか、あれ」
「ＴＫＳです」
「ＴＫＳ？」
「かつてポーランドが開発した、同名の戦車を参考にしたことからついた名前です。よくも悪くも豆戦車――――まあ、戦車とは名ばかりの、移動式トーチカですけどね。
我々は、マメタンの愛称で呼んでいます」
「役に立つんですか？」
「軽自動車にキャタピラと機関砲を搭載したようなものです。操縦はその辺のフォークリフトを参考にしている分、操縦は数時間もあれば誰でも出来ますし、武装もメンテナンスが簡単な機関砲１門だけ。照準合わせて引き金引くだけです。
……その反面、我々の定義するマトモな装甲はないですけどね」
「え？」
「というか、妖魔の攻撃をマトモに装甲で止めたければ、メサイア並の手の込んだ魔法防御を取り入れることでもしないと……残念ですが、最新鋭の１０式戦車の正面装甲でも下手すれば貫通されます」
「じゃ、ありゃ棺桶」
「口が悪いですねぇ」
紀子は睨むような目をしたが、すぐに苦笑を漏らした。
「戦場に棺桶持参で向かうのが戦車兵って皮肉は知ってますよ？そ

のために、本来のＴＫＳにはないシュルツェン――ドイツ語で“エプロン”が取り付けられています」

「単なる薄い装甲板でしょう？」

「そうです。相手が実体弾を用いてきたら、気休めにもなりませんですが」

紀子はニヤリと笑った。

「魔族軍の弓矢攻撃は、実際の所、戦車砲で言ったら成形炸薬弾とほとんど同じ――ですから、弾頭先端部――ようするに鏃（やじり）が装甲に命中すると、ほぼ直ちに成形炸薬弾の弾頭と同じように爆発現象が発生し、その際に投射されるメタルジェットに類似した魔法効果が襲いかかってきます。

この攻撃の焦点は２０から４０ｃｍ先で収束され、侵徹力が最大となるように調整されていることが、膨大な犠牲を調べた結果判明しました。

我が軍は、その原理を逆用して、シュルツェンを車体から５０ｃｍ程度離して装着しています。素人目には不安かも知れませんが、実はあれはあれで、下手な装甲より信頼性が置けるんですよ？」

「……見えませんなぁ」

「ですよね」

紀子は苦笑した。

「正面装甲は、ＦＲＰと鋼板を接着剤で幾重にも貼り付けた防弾装甲で、一応、自動小銃弾の直撃にも耐えられるようには出来ています。もし、何かの間違いで、鏃がシュルツェンを貫通しても、物理的には中の乗員達の生命は守ることが出来ます」

「本当に気休めですなぁ」

「メサイアや飛行艦に乗られている方にはそう見えるでしょうが、生身で塹壕に潜っているよりは気楽ですよ？」

「……成る程？」

「時速３５キロで移動可能な歩兵直協兵器です。２５ミリは歩兵にとっては大口径ですからね」

ＴＫＳ　二〇式軽戦車（別名：マメタン）
全長　３ｍ
全幅　１．８ｍ
全高　１．４ｍ
重量　２．５ｔ
速度　３５ｋｍ／ｈ
装甲　１０ｍｍ
武装　九九式九号　２５ｍｍ　機関砲１門
乗員　２名（車長兼砲手・操縦手兼装填手）

「２５ミリともなれば、歩兵が担いで移動するだけで一苦労です。遅いとはいえ、自走するに超したことはありません。
八式対空砲は、給弾トラックと連携しないととてもではないですけど、弾薬の消費に補給が追いつきませんからねぇ」
「歩兵の受けは？」
「いいですよ？２５ミリの弾幕は、端から見ていれば決してバカにはなりませんよ？数と戦い方さえ間違えなければ、このマメタンでも十分やれます。部隊によっては、２０ミリを降ろして、１２．７ミリ重機関銃を2門据え付ける現地改造している部隊もある位で」
「……へぇ？」
「小型で塹壕も簡単なもので済む上に、修理も簡単ですからね。
被弾して擱座したり、２５ミリ機関砲が使いモノにならなければ、１２．７ミリでも載せて、後は土嚢でも載せてやれば、即席トーチカの出来上がりですし」
「歩兵の本領ってヤツですか……」
後藤は肩をすくめた。
「ヤダヤダ……俺にゃ出来そうもないねぇ。何しろ、俺は戦争大嫌

いだから」
「私だってそうですよ？」
紀子は笑って言った。
「ですから、近衛のメサイアさん達には頑張っていただかないと」
「……ですな」
後藤は頷いた。
「で？問題はここから先だ」
その顔は真顔だった。
「休みボケした頭で、一番最初に、しかも、いままで以上に派手に殴り合うだろう場所が、この先だと聞いたもんでね」
「ええ……我々は“セダン・ライン”と呼んでいます」
「セダン？」
「フランスの地名です。昔、ドイツが侵攻した際、フランス軍機甲部隊が最大の阻止地点として指定した土地の名前をとりました」
「何でまた」
「簡単なことです」
紀子は軽く肩をすくめた。
「これまで、そこに陣取っていたのがフランス軍で、我々は彼等の勝手につけた呼び名を、そのまま引き継いだだけのことです」
「手抜きなんですかねぇ。何と言うべきなんですかねぇ」
「呼び名なんてどうでもいい。というのと、“カッコイイからいいんじゃね？”的なのと、私も判断が出来ません」
紀子は、戦車部隊の端に止まっていたウィルス・ジープの運転席に乗った。
「現地までご案内しますが？」
「――よろしく」
後藤は助手席に乗り込んだ。
「地形的には」
よく揺れやがるな。

後藤は、クッションのないシートに尻を叩かれる感じがして、顔をしかめた。
爆撃でガタガタになった道もだが、そこを容赦ないスピードで走りまくる紀子の運転の荒さもひどいものだ。
「二つの丘陵を抜けた平地部を主戦場と想定しています。地形はご存じですね？」
「地図は見てきましたがね」
風の音と、エンジン音で、耳元で大声でもあげなければ聞こえたものではない。
不意に止まったのは、トラックの車列にぶつかったからだ。
どうやら、路肩が崩れた所にトラックが巻き込まれたらしい。
横転したトラックから物資を運び出す兵士達の姿がみてとれた。
「工兵達がすぐに直すでしょう」
紀子は平然と答えた。
「こういうのは慣れている？」
「ええ――スポーツカーってのが、別世界の乗り物だと思えるくらい」
「……ですか」
「動き出す前に、おさらいしておきましょうか」
紀子は、図嚢から地図をとりだした。
「理屈は簡単です。敵は静岡側に布陣しています」
「問題は」
後藤は地図を火の付いていないタバコでなぞった。
「敵さんが、予想通りに丘と丘の間をくぐってくれる保証が無いことだ。ここを通ってくれなければ、大きく迂回された挙げ句、側面を叩かれる」
「そのための戦法も考えてあります」
「へぇ？」
「まず、丘と丘――我々は、“肉まん”と“豚まん”と呼ぶ二つの丘の前に、少数の兵を出します。そこに布陣しているものと、魔

族軍に思わせるためです」
「うん」
「魔族軍はセオリー通りの動きを基本としています。つまり、砲撃がやってくる。そこで我々は、砲撃により損害を被ったと擬装して、後退する。
魔族軍の先陣が陣地を攻めた時には、陣地はもぬけのカラ」
「……で？」
「魔族軍はそのまま追撃戦に入る。そこを双方の丘に潜めていた部隊によって待ち伏せによる挟撃をかける。
敵が混乱する間に、この部隊を後退させ、補給と整備を実施。
敵が混乱から復帰して、再び攻め込む前に、最初に戻って――その繰り返しにより、敵を消耗させると同時に、敵の主力を、イヤでも丘と丘の間。そして、その先の主戦場へと引きずり出す」
「敵もバカじゃない」
後藤は真顔で答えた。
「偵察くらいはするはずだ。事前に、丘を抜けた先に陣地があって、敵が待ち伏せしていることはわかるはずだ」
「わかってなお、意地でも魔族軍がこちらを通らせる方法も用意しています」
「……」
後藤は地図を見て、そしてなぜかタバコで地図上の距離を測るような仕草をした。
「……海軍か」
「海軍の戦艦部隊、そしてロケット船団が洋上に展開。迂回しようとすれば、一方的に叩かれるだけです」
「いっそ、陸軍も敵を誘い出すだけで済ませて、叩くのは海軍に任せたら？」
「そうはいきません」
紀子は驚いた様子で答えた。
「陸軍にもメンツというものがあります！」

「メンツ……ねぇ」
「というか」
紀子は肩をすくめた。
「地形的に海岸方面、つまり、迂回路は地形的な障害物が多くて」
「障害物？」
「崖とか」
「……ああ」
「大型妖魔の侵攻には不向きなのです。ですから、せいぜい迂回路に投入できるのが中型以下の妖魔になる。なら、罠は承知の上で、魔族軍はこっちに来るというのが、我々の読みではあります」
「そう都合良く、行って欲しいねぇ」
「でなければ困ります」
紀子は答えた。
「それに、これはすべて、敵が純粋に妖魔だけだった場合の話です。メースが主力だった場合……」
「問答無用で地雷原吹っ飛ばしながら来るかな？陸軍の役目はない……か」
「そのために、あなた方に協力を求めたのです。後藤中佐」
「まぁ……損害を抑えるって意味でも、俺達の投入が一番利口っちゃぁ、利口だなぁ」
「ですよね？」
この女、こうやって笑うとガキみたいだな。と、後藤は思った。
なんて無邪気に笑いやがる。
「メースを引っ張り出す危険性も高いですけど、ジープ程度でどの程度が動いてくれるかは、自信がありません。反面、メサイアなら、敵も本気になるでしょう」
ニヤリ。
紀子は口元に嫌な笑みを浮かべた。
「敵を本気にさせるためにも、敵にとって、本気になるしかない存在が囮になっていただけると、大変ありがたいのですが」

「ダミーでつくっておこうか？ウチの整備兵共は、そういうの、得意だぜ？」
「その辺の裁量はお任せします。我々としては、ここで敵を喰い留め、反抗のきっかけを作れれば、それでいいのです」
「……」
後藤は、頭をポリポリと掻いた後、答えた。
「見返りは？」
「諜報４課からリークされた情報です」
紀子が図嚢から引っ張り出した封筒を後藤に手渡した。
「……へえ？」
封を切って、中の書類を読んだ後藤は下品な口笛を吹いた。
「こいつぁ……面白いけど……」
最後のページで指が止まった。
「途中まで……かい」
「協力いただければ、全ての書類を、そして後藤中佐は」
その笑みは、冷たく、血の気が通っているとは思えない何かがあった。
「陸軍諜報部にも強いネットワークを持つことになる」
「俺がどう動くかは」
トラックの車列が動き出した。
「後々連絡しよう」
「期待してますよ？」
紀子は、そっと後藤の手をとると、自分の太ももに乗せた。
「ご褒美は個人的にもさしあげてよろしくてよ？」
「これはこれは♪」

「……えっ！？」
中野にどやされた後、デスクでへたばっていた美奈代を訪ねてき

た人物の顔を見た途端、美奈代は文字通り、飛び上がって驚いた。
「に、二宮教官っ！？」
「久しぶりだな……泉」
軽く敬礼した後、二宮はニコリと笑った。
「東北以来か」
「はいっ！」
尻尾があったら、ちぎれるほど振っているだろうな、と、そのやり取りを見ていた中野は思った。
「後で少し話しがある……中野大尉」
「はっ？」
「少し、いいか？」
「――どうぞ」
中野は席を立った。

そわそわ。
そわそわ。
まるで主人にはぐれた犬のように、美奈代はデスクで落ち着かない動きを繰り返す。
書類はまるで進んでいない。
中野の存在まで忘れたように、美奈代は二宮と中野が出て行ったドアを眺めてはため息をつくばかり。
二人が戻ってくるまで、１０分程度。
美奈代はその時間がとても長く感じられた。
「――終わったぞ？」
二宮は意味深げな笑みを浮かべると、美奈代の肩を軽く叩いた。
パンパン。
それはまるで美奈代を激励するかのように、少なくとも美奈代には感じられた。
「お前も成長したな」

「はい？」
「いや？」
ニヤニヤと奇妙な笑みを見せた二宮は、面白そうに中野に言った。
「しばらく預かるぞ？」
「――どうぞ」
何故か、中野は二宮と視線を合わせなかった。
「……あの？」
二人が会話を始めたのは、休憩室でのことだ。
仕事時間中なだけに、二人以外に利用者はいない。
「どうだ？仕事は」
「もう辞めたいです」
「事務仕事は嫌いか？」
「大嫌いです！」
美奈代は力説した。
「こんなの好きになるなんて、どこかおかしいです！」
「人間、得手不得手はあるが」
二宮は苦笑しながら言った。
「似たような人もいるものだ」
「はい？」
「こっちのことだ」
「それより教官？」
「近くに用事があってな？寄らせてもらった」
二宮は、ゴミ箱にあった空の紙コップを壁にあった火災検知器の上にかぶせたあと、ベンチに座った。
「……小清水に二千万で買われただと？」
「っ！」
美奈代は顔が真っ赤になったのがイヤでもわかった。
「お前と小清水の関係は知っているが……」
クスクス……。
二宮は笑いながら続けた。

「どういう地雷を踏んづけたら買い取りなんて話しになるんだ？」
「……あの」
美奈代は、ほむらの呪いについて話した。
「成る程……な」
二宮はタバコに火をつけると、深く吸い込んでから頷いた。
「それは後藤さんにとっては、重要な交渉材料だな……二千万程度、安いもの……か」
「支払ったのは小清水ですけどね」
「違う」
「はい？」
「中野大尉が、小清水の支払いを止めた」
「えっ？」
「代わりに、中野大尉自身が個人的に支払ったという」
「ど、どうして！？」
美奈代はワケがわからない。
何故、中野がそんなことをする？
あの中野（あくま）が！？
「どうにもお前は……」
二宮は、混乱する美奈代を楽しげに眺めながら言った。
「ああいうタイプの男を虜にする何かがあるんだろうなぁ」
「はい？」
「……知りたいか？」
「ええ」
美奈代は頷いた。
「あの人が、私を煮て食べるのか焼いて食べるのかは知りませんけど、意図を聞いてから考えます」
「拒絶したとして、二千万どうする？」
「……小清水と天秤にかけます」

「カネで愛する相手を選ぶってのが、お前の魔性だな」
少し、羨ましいぞ。と、二宮は笑った。
「松崎大尉のことは知っているな？」
「ええ」
美奈代は頷いた。
「一昨日、このスーツを買いに行く時、お世話になりました」
「……そうか」
二宮は、美奈代のスーツ姿を上から下まで眺めた後、言った。
「泉、仕事中にジャケットを脱ぐのは構わないが……」
「はい？」
「白いブラウスを着ているなら、ブラは白かベージュにすべきだな」
「っ！？」
「何のサービスかと思ったぞ？てっきり、誘われているのかと思った」
二宮は、思わず胸を抱えてうずくまった美奈代を眺めながら、意地の悪い顔をする。
「す、透けてますか！？」
「ばっちり」
二宮は、親指を立てた。
「青いブラが透けて見えている。男共が喜んでいただろうなぁ」
「――っ！じ、ジャケット、とってきます！」
「……まぁ、いい。今更、足掻いたところでどうにもなるまい」
「ううっ。せっかく買ったのに……そういう問題じゃ……」
「話を戻すぞ？松崎大尉と中野大尉の関係は知っているな？」
「同期……ですよね」
「それ以外は？」
「何かあるんですか？」
「……本気で言ってるか？」
「えっ？」
「お前ももう少し、人間関係というものに気を使っていいと思うぞ

？」
「はぁ……」
「お子ちゃまのお前にもわかるように話してやろう。つまり、中野大尉は松崎大尉に惚れていた。ところが、松崎大尉が別な男とゴールインしてしまった」
「ああ……そうなんですか？」
「……」
「ざまぁみろというか、あんなに性格が悪い人ですから、結婚なんてしたら松崎大尉が可哀想です」
「……お前」
「はい？」
「松崎大尉が、自分に似ていると思ったこと無いか？」
「ああ……そう言われれば」
美奈代は頷いた。
「ちょっとだけ」
「松崎大尉も驚いていたそうだ。昔の自分そっくりだって」
「……じゃあ、私もあのくらいの歳になったら、ああなるんでしょうか？」
「多分な」
「……それで？」
「中野大尉がどう思ったかは知れないが」
「……はぁ」
「二千万を中野個人で支払ったのは、そういう意味だ」
「どういう意味ですか？」
「……」
「……」
ぽかん。とする二宮の口から、タバコが墜ちた。
「お前……本気でニブいな」
「え？」
「つまり」

ポンッ。
二宮は美奈代の両肩に手を置いて、言葉を句切りながら言った。
「お前は、中野大尉に、惚れられているんだ」
「はぁっ！？」
思わず、美奈代の口から素っ頓狂な声が出た。
「私、絶対にいじめられてますよ！？」
「仕事的にはそうするしかあるまい……だが、個人的感情は別だ」
「ウソだぁ……」
「母親代わりとして、確かめてきたことだ。ただし、条件を私がつけた」
「？」
「二千万払ったところで、お前が美奈代を惚れさせなければ、交際は認めないとな」
「そうなったら？」
「中野大尉は、二千万をフイにしたことになる」
「お気の毒に」
美奈代は手を合わせた。
「天地がひっくり返っても、そんなことないですから」
「と言っておきながら、どう転ぶかわからないのが男と女だ」
「ははっ。大丈夫ですよ♪」
「……なら、そう信じよう」
二宮は真顔になった。
「ところで泉」
「はい？」
「……月城の件では迷惑をかけたな」
「……いえ。むしろ止められなかったことを申し訳なく」
「やむを得なかった……そう思いたいのは私も一緒だ。あいつに何か考えがあってとな」
「……はい」
「とにかく、ここの所、兵員の不足は深刻化している。そこでお前

に相談がある」
「はい？」
「お前――本気で内親王護衛隊（レイナガーズ）へ来ないか？いや、来て欲しい。私にはお前達が必要なんだ――どうだ？泉」

嵐の前　第三話

「新型銃火器に関する部材についての報告書です」
美奈代は、作成した書類を中野に提出して添削を受けていた。
――中野はお前に惚れている。
美奈代は、そのことは意識の外から外そう。そう思ったが、何故か視線が中野から離れようとしない。
富士学校や“鈴谷（すずや）”にいる粗雑な男達とは違う、清楚な印象を受けるのは、背広姿の男に見慣れていないせいだと、美奈代はそう勝手に自分に言い聞かせようとするが、どうもうまくいかない。
年収は多分……公務員だからそこそこだろうし、能力からすれば、絶対に出世するだろうし、後方勤務だから別に戦死することもないだろうから、生命保険は安全だし、忙しくて帰ってくるのが遅いのも、それって逆に、家事の手を抜いても文句こないって意味では便利だろうし……あ、退職後も恩給が出るのはありがたいよなぁ。
そこまで思考が働いて、ハッとなった美奈代は、自分の考えていたことに狼狽するしかなかった。
わ、私、今、何を考えていたの!?
「……いろいろと忙しいヤツだな」
気付くと、あきれ顔の中野が自分を見ていた。
「赤くなったり青くなったり、どうした?腹でもこわしたか?」
「……いえ」
美奈代は顔をしかめ面にして、目を閉じた。
「何でもありません」

「そうか？」
「それで」
美奈代は訊ねた。
「マガジンポーチを手配した新型歩兵銃というのは、三八式の改良型と判断してよいのですか？通常の５．５６ミリ用で」
「いや？」
中野は首を横に振った。
「三八式とは別。前線にはこれ以上、三八式は出さない」
「何故、ですか？」
「改良型がラインに乗るまでの暫定処置だ。妖魔相手に、５．５６ミリでは破壊力が低すぎる」

三八式――三八式突撃自動小銃のことだ。
陸軍での呼称は七八式。
５．５６ミリ弾薬を使用する狩野重工製の銃。
１９７８年（皇紀２６３８年）に近衛によって制式採用された後、１０年くらい後になって陸軍も採用する結果になった際、皇紀の使用を嫌った当時の社会党政権によって七八式と命名された曰く付きだ。
赤色戦争時代にロシア軍が開発・配備を開始した後、世界中で使用されるようになったＡＫ－４７を参考としている。
狩野重工が着目したのは、その頑丈さと整備性の高さ、過酷な環境下でも確実に作動する機械的信頼性であり、開発にあたっては、これを５．５６ミリ弾薬を使用を前提として完全に維持することを目指した。
想定される戦域は、ジャングルからシベリアまで。酷寒酷暑何でもござれ。
時に凍り、時に湿気と泥にまみれる過酷な環境でも安心。
整備もロクに出来ない未熟な兵士も短期間の講習で熟練兵並に扱える。

“狩野重工は、社会党政権打倒のために、作る端から市民に配ろうとしていたから、ああいう作りになったんだ”という噂は、あながち否定も出来ない程だ。

これが意味する所はつまり、近衛という名は借りているが、狩野重工がＡＫ－４７や、その後継であるＡＫ－７４を相手に、第三諸国における武器シェアの奪い合いにも勝てる性能を持つ銃の開発を目指していたことに他ならない。

実際、ほとんどメンテナンス無しで泥まみれの環境で用いられても暴発なんて考えられず、反動が少ない分、少年兵でも簡単に扱える上、７．７６ミリ弾を使用するＡＫ－４７より大量の弾薬を持ち運び出来る点で、価格面には負けるとしても、信頼性で真っ向から対抗できる銃として、狩野重工は一定の世界的シェアを、魔族軍侵攻まで確保し続けていたのは事実だ。

しかし、奇妙な所がこの銃の採用を拒絶した。

大日本帝国陸軍だ。

かつての三八式歩兵銃が“アリサカ・ライフル”と呼ばれたのと同様に、世界的に“カノー・ライフル”と呼ばれ、賞賛された銃の採用を生産国の陸軍が拒絶したのだ。

陸軍は火器メーカー大手である和豊工業との政治的関係から、銃の存在そのものを黙殺したというのが実情だ。

陸軍がそれでも採用したのは、近衛の制式化から約１０年後。

その陸軍が何故、この銃を採用したかといえば、“弾が出る鈍器”。制式名称“６８式７．６２ｍｍ小銃”の兵士達からのあまりの不評ぶり（部品数が多い、メンテが面倒くさい、運んだだけで部品が外れる、反動がデカイ等）にくわえ、その頃実施されたメーカー

の無茶な構造変更を原因とする、暴発事故による死傷事故の多発を、議会の攻撃材料に使われたからに他ならない。
陸軍はやむを得ず、その後継である88式5・56mm小銃（こちらもかなりの失敗作）の配備までの繋ぎとして限定採用したのだが、その後、この銃を配備した部隊は、新型であるはずの88式への更新を100%拒否し続けている程といえば、この銃の性能が知れるだろう。

この程度のことは、美奈代も座学で習ってはいる。

問題は、それ程の銃を前線に出さないという中野の意見だ。

「相手が人類なら、こうはならなかったろう」
中野は答えた。
「だが、相手は妖魔だ。5・56ミリ弾薬では、至近距離からでも小型妖魔を倒すことが出来ないことは、前の戦争でとっくに証明されているようなものだ」
「そうなんですか？」
「2、3発の小銃弾を叩き込まれた妖魔が、そのまま自分の方へ突っ込んできたなんて話しはザラだ。開戦前から、前線の兵士達からは、破壊力のある7・62ミリ以上を使用できる銃の配備要請が相次いでいる」
「それで、近衛でも」
「近衛だけじゃない。陸軍と海軍陸戦隊もな。B型の生産が間に合わない。その穴埋めとして、今度ばかりは三軍共同での導入となる」
「何、装備するんですか？」
「ベースは猟銃――基本構造は三八式歩兵銃とリー・エンフィールドの合いの子みたいな構造を採用している」
「はぁっ！？」
美奈代は目を点にした。

「猟銃!?しかもなんですか、そのレトロな名前は!?」
「……意外と詳しいな」
「私もＭ１４持ってますけど、エンフィールドって1世紀近く前の設計ですよ!?今頃、どうして」
「まず第一に」
中野は席を立った。
「話しが長くなる……三時（きゅうけい）の間に話をしてやるよ」

「はっきりさせておくべきは」
中野は休憩室でコーヒーを手渡すと言った。
「前線の兵士達が求めているのは、アサルトライフルじゃないってことだ」
「えっ？
アサルトライフルの定義は二つ。
一つ。アサルトライフルは、短機関銃と小銃の間の威力の弾薬を発射し、かつ、短く小型で単射と連射の切り替え射撃が可能な銃器である。
二つ。アサルトライフルは、軽い反動を持つ特徴があり、このため効果的な連発射撃を３００ｍまでの射程で行う能力がある。
この二つ。
これさえあれば上等じゃ無いのか？
……いや？
「そういえば、猟銃がベースって言ってましたよね」
「覚えていたか？」
中野は目を細めた。
「普段の報告も、それくらい丁寧にやって欲しいものだな」
「余計なお世話です」
美奈代はぷうっ。と頬を膨らませた。
「これでも頑張ってるんですよ？」

「結果が全てだ――で、今回、求められているのは、そんなチャチな銃じゃない。もっと強力な、狩猟用の大口径ライフルだ」
「……威力が小さい。射程が短い。そんな銃はいらない」
「そう。本来的には、お前は他人の意見から、状況を正しく見抜く特性がある。そこを活かすべきだな……参謀とかどうだ？」
「いやですよ」
美奈代は首を横に振った。
「メサイア１０騎、２０人の命を預かる、その責任だけで胃に穴が開きそうな位なんですよ？何十、何百の命を左右する参謀なんて、冗談じゃありません」
「向いていると思うがな……そのコミュニケーション能力と事務能力の致命的欠落さえ何とかすれば」
「……社会人として失格ってことじゃないですかぁ」
「泣くな。
とにかく、対人を目的とした弾薬では役に立たない。
妖魔に有効だとして最近注目されているのは、大型の狩猟用ライフル。一部の軍隊では既に１２．７ミリ対物ライフルの標準化を進めている所さえある。最低は８ミリだ」
「８ミリ超えるサイズが最低？」
「そうだ。人間相手にはオーバーキル。対物ライフル指定だ。だが、そんなものでもなければ、やってられんというのが現場の本音だ。無論、そんなもの自動小銃化してフルオートでぶっ放すとしたら、重機関銃を小銃化するようなもので、とてもじゃないが、射手も銃も耐えられない。セミオートも危険過ぎる」
「で、ですよね」
美奈代は、銃が暴発する光景を想像してぞっとした。
「だから、レミントンのバレルを強化して、機関部の大半を三八式歩兵銃の基本構造と合致させた。
理由は、三八式歩兵銃の部品点数の少なさだ。
耐久力を増すための追加パーツを取り付けても、部品数わずか８

点は、整備の上でも生産コストの上でも、そして耐久性を高める上でも全てにおいて強みになる。
ただし、三八式歩兵銃の悩みの種だったダスト・カバーは廃止する。
それと、他国との共用も前提で開発された関係で、速射性に優れたエンフィールドのボルトアクション方式が採用された」
「早いんですか？」
「マウザー方式とは違ったエンフィールドのボルトアクションは、ボルトの後退幅・回転角を小さくしている関係で、素早く排莢・装填でき、訓練を積んだ兵士であれば、１分間に２０～３０発撃つこともできたとも言われている」
「ほとんど自動小銃と変わんないじゃないですか」
「そう。セミオート化出来ない欠点は、兵士の肉体的鍛錬によってカバーしてもらうって寸法だ」
「その辺が、日本軍ですよね」
「褒めているとは聞こえないが、問題はその反動だが……」
「８．５ミリといったら反動は相当なはずですよ？」
「基本は塹壕に籠もっての防衛戦だ。二脚を使うなりしての射撃が基本。乱射しながら突撃するバカは想定外だ」
「……ああ」
ポンッと、美奈代は手を叩いた。
「それで大口径の銃が採用出来るんですね？」
「そうだ。アフリカや南米での経験が今頃になってようやく理解され始めたって所だ……まぁ、時代が変わって、人間の考え方が変わった。というべきだろうが」
「四式対妖魔歩兵銃……略して四式歩兵銃だ。すでに製造ラインには乗って配備が進んでいる。歩兵隊は、これと重機関銃が頼りの綱だ。メサイア隊にいれば、そんなことは関係ないか？」
「まさか」
美奈代は首を横に振った。

「阻止任務に失敗したら蜂の巣にされるのは私達でしょうね。きっと」
「……なぁ、泉」
「はい？」
「お前、本当に参謀課程に進む気はないか？教官には知り合いがいる。俺のコネがあるから、お前さえその気なら、後方に下がれるぞ」
「……ははっ」
美奈代は、突然噴き出すと笑い出した。
「――――何がおかしい」
「す、すみません……なんだか、今日はモテるなぁ。私って」
「？」
「二宮教官……大佐からは、内親王護衛隊（レイナガーズ）の小隊長任せたいっていわれるし、中野大尉からは参謀ですか？」
「……お前はまだ若いし、可能性がある」
「――――誰だってそうです」
美奈代は真顔で言った。
「誰だって未来はあるし、可能性もある。誰一人だって、戦争で死ぬために生まれてきたはずがないんです」
「……」
「私はもう既に1個中隊を預かっています。その責任を投げて逃げるつもりはないです。内親王護衛隊（レイナガーズ）にしろ、参謀養成課程にしろ、そんな私個人の軍人としての将来は、平和な時代でも私が軍人として必要とされるなら、その時ゆっくり考えます。
今、私は独立駆逐中隊前衛隊長としての自分以外の立場なんて、考えたくありません」
「その割に辞めてやるとか、いろいろと喚いているのは何故だ？」
「……意地悪」
「ふん……」
中野は席を立った。
「明日までだな。ここにいるのも」

「……早いものです」
美奈代もコーヒーカップをゴミ箱に捨てた。
「あっという間でしたね。騎体の改修もほぼ完了して、明後日にはロールアウトするそうです」
「……そうか」
中野は休憩室のドアを開きかけて、何かを躊躇ったように天井を見上げた。
「……泉」
「はい？」
「記念にメシでもおごってやろう。なにがいい？」
「……フ」
「フランス料理のフルコースってなら、テーブルマナーの講習込みだぞ？」
「フ……」
「フ？」
「……ふぐ」
「食べられるのか？」
美奈代は無言で首を左右に振ると、無言で考え込んだ。
ふ
麩？
麩料理ってあるの？
っていうか、麩って何？
ふ？
フ？
どうしても料理が思いつかない美奈代は、そのまま眼をつむって考え続けた。
うーん。
イタリア料理にしておけばよかったかな？
和食だったら、箸の使い方から怒られそうだし……。

「……？」

その瞬間、美奈代は、奇妙な感覚を肌の一部に感じた。

唇だった。

何かが、軽く、だが、少し荒く触れた。

「？」

驚いた美奈代が目を開くと、中野がドアから出ようとしていた。

「……あの？」

今の、何ですか？

そう訊ねようとした美奈代に、中野が言った。

「文句は飯の時に聞いてやる」

小走りにドアをくぐった中野。

唖然とする美奈代の前で、ドアが静かに閉まろうとしていた。

「……」

そう。

唇に感じたあの感触は……。

涼とは違う。

あんなに優しく、そして甘くない。

重ねるだけでくすぐったくなるほどの安堵感はない。

宗像も、あんな感じじゃなかった。

あんなに甘美じゃない。

脳天から狂わせる情熱さはない。

強いて言えば……。

誠実。

美奈代の脳裏に浮かんだのは、そんな言葉だった。

ウソも裏もない。

ただ、自分を思ってくれる誠実な思いだけが伝わってきた。

それは――ただの唇同士の接触に過ぎないはずなのに、いろいろと考えることがあるものだなぁ。

そんなことを思う自分がおかしくさえあって、苦笑が漏れた。

美奈代は、自分が初めて異性とキスしたことを、この時点では全く気付いていなかった。

嵐の前　第三話（後書き）

用語解説：四式対妖魔歩兵銃。
俗称、四式歩兵銃。
新規格である9ミリ対妖魔用の大型弾薬を使用するライフル。
アフリカ・南米戦線当時から、妖魔相手には5．56ミリや7．76ミリでは破壊力が不十分であることは広く知られており、前線からは大口径小銃弾の配備が求められ続けていたにもかかわらず、補給の混乱を嫌った各国政府の事情（正しくは、小銃弾の国際規格を定める上で、どの国も主導権を握ることが出来なかったという、外交上の失敗）から、歩兵用に配備された弾薬で最大口径は7．76ミリという時代が続く。
日本で発生した今回の戦闘に際しては、この経験から、アフリカ戦線を経験した古参兵を中心に、猟銃店から自腹で大口径猟銃を購入して、前線に持ち込むケースが続出。
部隊によっては、弾薬ケースに小銃がすべて押し込められ、兵士達は全員、猟銃を持っていたという冗談みたいな話しも存在する。
しかも、猟銃の配備率が高い部隊程、損耗率が低いことも、数値として証明されているのだ。
こうした前線では、とにかく大口径の弾丸が好まれ、特に、象どころかクジラまで殺せるという、トド駆除用の11．63mm弾、通称“．460ウェザビー・マグナム弾”は最も重宝され、一時は日本全国で弾薬の在庫が払底したとさえ言われる。

この種類の猟銃が挙げた戦果は、軍として軽視出来るレベルではなく、噂を聞いた兵士達は猟銃の所持免許の有無にかかわらず、こぞって大口径猟銃を買い求めたため、最終的には猟銃店が軍によって襲撃されるという事態まで発生した。
この事態を重んじた陸軍と近衛の上層部は、前線兵士達の士気向

上、生存率向上の二点を目的に、対妖魔戦闘用に新企画の大口径弾薬を用いた銃器の開発、配備を行う点で一致。

この際、新兵を含む、日本人の平均的成人男子が連射しても、体が耐えられ、かつ、反動を抑えることが出来るだろうと予測される最大口径として、新規設計された９．７ｍｍ専用弾（通称名“ヘルマーチ弾”）が選択された。

日本がこんな独自規格がとれた最大の理由は、弾薬の備蓄が普段から少なく、これまでの戦闘で、実は歩兵用の弾薬のほとんどが欠乏寸前。新規格の弾薬を作ろうが従来の規格で生産を継続しようが、生産する側からすれば大差ないという、日本独自の事情が皮肉にも功を奏したことが挙げられる。

また、その運用が想定される戦闘を塹壕に籠もっての迎撃戦闘に限定出来るという、防衛戦の概念も挙げられるだろう。

しかも、この際は、主に二脚を使用し、射撃距離も２００～３００メートル前後に固定。

その任務は、塹壕に歩兵部隊に随伴して配備される１２．７ミリ以上の重機関銃により行われる阻止射撃の撃ち漏らしを、少数の発射で確実に仕留めることとする。

そう規定された時点で、セミオート以上の機能は不要として省略された。

この背景には、この弾薬の破壊力に銃身や機関部が耐えられるか不安があったこと、フルオートで発射すれば、もう人間の腕力でコントロールすることが出来ないことは明白だったことと、まとめれば技術的にも運用的にも仕方ないことと割り切られたことが挙げられる。

口径　　９．７ミリ
銃身長　８９７ミリ
全長　１，３７６ミリ
装弾数　１０発

作動方式　ボルトアクション方式
重量　　３，９７キログラム
有効射程　２，１００メートル

……はっきり、長い。

一昔前どころか、二昔以上昔の銃、世界初の実用的ボルトアクション小銃とされるドライゼ銃とほとんど同じくらいの長さを持つ。

配備された四式銃剣（俗称ゴボウ剣・全長５１２ミリ・刀身４０センチ）を装着すれば１７０センチを超えるため、塹壕ではかなり扱いづらい。

だが、この位バレルを長くしないと、立って撃った際、ヘルマーチ弾の激しい反動を、十分に反動を殺せないという事情がある。

大口径弾薬を発射する際の反動軽減のために長銃身の上にマズルブレーキを採用しているため、反動は１０ミリ近い口径にもかかわらず、７．７６ミリを連射した程度と、驚くほど小さい。

「これで反動がデかいだと!?それでも貴様、帝国軍人か!根性注入してやるからケツを出せ!」とは、某陸軍の下士官の言……どうでもいいが。

量産性を重視した所、ほとんど三八式歩兵銃とほとんど同じ機関部構造で、固定式の１０発装填式マガジン部のパーツを含めても、部品数も8点と少ない作りとなっている。

また、ボルト操作方法をそのまま採用すると、連射性能が落ちるという理由で、英国軍のリー・エンフィールドと同じボルト作動方式が採用された。

外見はかなりアンティークな設計で、初めて見た者は、新兵達でなくても、弾薬のデカさとその古めかしい外見に“何の冗談だ?”と青くなったという逸話も存在する。

とはいえ、通常ならば１０発以上の命中弾でも仕留められなかった小型妖魔を、たった数発（オーク級なら、ヘッドショットでほぼ１発）で仕留められるその破壊力と、下手な狙撃ライフル顔負けの

命中精度の高さから、前線での兵士の評判は信頼を超えたレベルにある。

弾薬クリップを用いて一度に１０発を装填出来る。

銃床は合成樹脂製。

二脚が標準装備されている。

機関部と銃身は、耐久力のみを求めて設計されているため、頑丈の二文字でしか語ることは出来ないシロモノ。

逆手に持って相手を殴り殺す使い方をすれば、スコップと同等レベルの破壊力を保証できる。

部品数も少なく、また、悪環境下での使用も考慮して、部品の組み付けに余裕を持たせているため、新兵でも簡単に整備が出来、かつ、トラブル発生率を低く抑えることに成功している。

基本的に、これの狙撃バージョンは存在しない。

……まぁ、遠距離射撃戦での精度を求めた兵士達が勝手にスコープを自腹で購入し、好き勝手に取り付けた（スコープマウントは、東京〇イ製が玩具屋で買えたらしい）という現地改造で、スナイパー仕様化されたモノがかなりの数に上るため、あってもなくても同じようなものだが。

大戦中以降、対妖魔戦闘用、そしてスポーツハンティング用として長く生産され、トータルの生産数は約５０万丁以上とされる。

嵐吹き荒れて　第一話

「……メシの約束はしたが」
中野は時計を見て、ため息をついた。
「まさか、こんな時間になるとはな」
「……っ」
美奈代は、情けないやら悔しいやらで、マトモに返事さえ出来ない。
午前中に提出した書類に入力した数値の単位が間違っていたため、関係部署から凄まじい抗議が飛んできた挙げ句、書類の総点検が命じられたのだ。
１１時のチャイムが虚しく、二人きりの職場に流れた。
「終電も間に合わないな……これは」
「……」
カチャカチャカチャ
美奈代は必死にキーボードを叩き、書類と数字を確認する。
「……最後の最後でデカいドジ踏んでくれたもんだ」
「……」
「資材発注、トン単位で間違えたのがこの段階で見つかったからよかったようなものの、そのまま通っていたら、お前、始末書じゃ済まなかったぞ」
「……」
「あと、どれくらいかかりそうだ？」
「……１時間」
そう答えるのがやっとだ。
焦れば焦るほど、入力ミスを繰り返し、数値の見直しが出来なくなっていく。
焦るな。
そう念じれば念じるほど、深みにはまっていくジレンマ。

美奈代は悔しくて仕方ない。
「そうか」
中野は立ち上がった。
「官庁街の特例とはいえ、それでもコンビニの営業は日付変更までだ。今のうちに食料を仕入れに行ってくる。何がいい？」
「何でもいいです」
美奈代はやっと答えた。
「……すみません」
「……おごりだ」
中野が出て行って、ひとりぼっちになった職場で、美奈代はデスクに突っ伏した。
声にならない叫び声を上げて、美奈代は自分を呪うしかなかった。
どうして、私はいつもこうなんだろう！
どうして、ツメが甘いんだろう！
どうして、頑張っても最後にはマイナスの結果になるんだろう！
「……」
今度、お祓いにでも行ってやろうか。
それとも、占いでも見てもらおうか。
そんなことを美奈代が考え、それでも中野が帰ってくるまでに、書類を少しでも片付けよう。
こんな夜中までつきあわせたのは自分の責任だ。
迷惑は、これ以上かけたくない。
そう思った時だ。

バラバラバラバラ

「？」
美奈代は、官庁街では耳慣れない音に、思わず顔をしかめた。
時計は夜１１時を回っている。
しかし、これは間違いない。

子供でもわかる。
――――ヘリのローター音？
すぐ近くをヘリが飛んでいる。
しかも、かなり低くだ。
野外演習の時、耳にしたヘリの音だ。
でも――――何で？
何で、こんな時間、こんな場所で？
美奈代が立ち上がって窓に近づいた時だ。
「泉っ！」
ドアを開き、部屋に飛び込んできたのは中野だった。
中野は血相を変えて美奈代に怒鳴った。
「ブラインドを閉めろっ！」
「えっ？」
「いいからっ！」
中野は、窓に近づくなり、ブラインドの紐を引っ張った。
「急げっ！」
「はっ、はいっ！」
美奈代は、片っ端からブラインドの紐を引いた。
二人によって、フロアのブラインドが閉められていく。
美奈代は、下がってくブラインド越しに窓の外を見た。
その光景は、美奈代がこんな時間まで残っていたことはなかったが、それでもおかしいと思うには十分だった。
トラックの車列が道を片方向へ向けて列を連ねて走っている。
「？」
電力管制によって数少ないとはいえ、街路灯に照らし出されたそのトラックの列は、間違いない。軍用車両だ。
「こんな時間に？」
最後のブラインドが美奈代によって閉められた途端だ。
「こっちへ来い」
中野は、美奈代の腕を掴んだ。

「泉、軍服はどうした？」
「更衣室のロッカーです」
「……拳銃は」
「公務じゃないんですよ？」
「持ってるんだろう？後藤さんが、お前を丸腰で歩かせるとは思えない」
――どういう意味ですか？
美奈代は言い返そうとして、中野の真剣な顔に言葉を詰まらせた。
無駄口を聞く意志がないことは、彼の横顔がはっきりと語っていた。
「中野大尉は」
美奈代は逆に訊ねた。
「持ってないんですか？」
「俺が撃って」
中野はドアに美奈代を引っ張りながら答えた。
「当たると思うか？」
「……」
美奈代は首を横に振ると、
「それでも男ですか」
「言ってろ」
突然、美奈代は、自分のデスクの前で止まった。
「待って下さい」
美奈代は急いでデータを上書きすると、モニターを切ってデスクの引き出しを開いた。
「とにかく、これがあれば、いいんですよね？」
引き出しの中に入っていたのは、ホルスターに入った無骨な拳銃。
Ｍ１９１１コルトガバメント。
そして、
「当たるんじゃなくて、当てるんです」
中野の手に握らせたのは拳銃。

ワルサーＰＰＫだ。
「……成る程？」
中野はニヤリと笑った。
「面白い話だが――――返しておこう」
「えっ？」
「拳銃は隠しておけ。身体検査を受けた時にマズい」
「でも！」
「俺が拳銃の所在を聞いたのは、身につけていたらマズいからだ」
「まずいって？」
「とりあえず」
中野は、美奈代の手から拳銃を奪い取ると、ゴミ箱の中に放り込み、そして、その上に美奈代が書きかけていた書類をくしゃくしゃに丸めて放り込んだ。
「ああっ！？」
「うるさい！」
慌てて中野が美奈代の口を押さえた。
「騒ぐな！」
「だ、だって！だって！」
「いいから、こっちへ来いっ！」
中野は、強引に美奈代を抱きかかえると、ドアへ向かって走り出した。
「お前、重いぞっ！かなり痩せろっ！」
「降ろして下さいっ！」

美奈代が降ろされたのは、非常階段のドアの前。
「一気に降りる」
「その前に」
美奈代はキッと中野を睨み付けると、
パンッ！

抜く手も見せずにその頬を張った。
「お、女を重いだの痩せろだの！わ、私だって気にしてるんですよ！？」
「本当に重かったぞ！？」
「デスクワークで体がなまってるだけでしょう！？最低っ！」
「とにかく！」
中野は見事な手形の付いた頬をそのままに、美奈代を非常階段へと引っ張り込んだ。
「階段を下りて、町へ出るぞ！」
「ど、どうしてですか！？」
「そのうちわかる！ＩＤカードをどこかに隠せ！」

美奈代達が非常階段経由で道路に出た直後のことだ。

バンッ！

鈍い音が通路に響き渡った。

「な、何！？」
「ちっ、正面からか……こっちへ」
中野は、美奈代を隣のビルの非常口へと連れ込んだ。
「こっちは、民間のビルだ。いくら何でも」
中野は息を切らせながら、恐ろしく回りを気にしている。
ビルの廊下の角から回りを見回すと、
「……よし」
その場で息を整えた。
「さすがに訓練されているな」
「だから」
美奈代は冷たく言い放った。
「あなたがなまっているんです」

「あの平手を避けられなかった辺り、そうかもしれないな」
「……手を放して下さい」
「もう少し待て」
中野は、力強く美奈代の手を握りしめると、
「いいか？俺達は、このビルの3階にある“富士クレジットファイナンス”の営業二課の社員だ。俺が中山課長で、お前は平泉。これから先、誰かに何か聞かれても、それ以外は適当に答えておけ。ただし、俺達がこんな遅くまで一緒にいた理由は、お前は喋らなくていい。俺が答える」
「……えっ？」
「もう一度言う。」
中野はじっ。と美奈代を見つめながら言った。
「俺達は、このビルの3階にある“富士クレジットファイナンス”の営業二課の社員。
俺は中山課長。お前は平泉。
これから先、誰かに何か聞かれても、それ以外は適当に答えておけ。
俺達がこんな遅くまで一緒にいた理由は、俺が答える」
「な、中山」
美奈代が指を指して中野をそう呼ぶと、
「ひ、平泉」
今度は自分を指さした。
「このビルの三階の、“富士クレジットファイナンス”の社員」
「そうだ」
中野は頷いた。
「それだけでいい。いくぞ？」
中野は、美奈代を腕を引いて、ドアへ向かって歩き出した。

ドアを開いて道路に出た途端、美奈代は絶句した。

庁舎の前には、軍用のトラックが止まっていて、ドアの破片らしいガラスが散乱していた。
何事か、意味不明なことを喚く警備員が、数名の男に街路樹とガードレールの向こうへと引っ張られていこうとしていた。
「……」
美奈代は、思わず脚を止めてしまった。
無理も無い。
庁舎の前に止まっている軍用車両は、陸軍のトラック。
ナンバーからして市ヶ谷駐屯地の所属部隊。
そして、その周りには、小銃を持つ完全武装の兵士達が立っている。
「……なか」
言いかけて、美奈代は中野が何をしたかったのか察した。
自分達の存在に気付いたらしい兵士が二人、銃を腰に構えながら近づいてくる。
「止まれっ！」
その鋭い声に弾かれたように、美奈代は中野に抱きついた。
男に抱きつくなんて生まれて初めての経験に感慨を持つ暇もなかった。
８９式自動小銃で蜂の巣にされるなんて、美奈代でも御免被る。
「何をしている！」
「いや……あの」
狼狽した様子の中野が言った。
「な、何の騒ぎですか？」
「お前ら、何だ！？」
「いや……僕達」
中野は狼狽しきった声で言った。
「このビルにある会社の社員です」
「……こんな時間まで何をしていた！民間企業の営業は９時までだぞ！」

「そ……それが」
中野は、チラッ。と美奈代を見ると、美奈代に見えないように、左手の親指と人差し指で作った穴に、右手の指を突っ込む仕草を見せた。
「……です」
「……っ！」
兵士は不快そうに舌打ちすると、ペッと道路にツバを吐いた。
「こんなご時世にお盛んなこった。とっとと失せろ！」
「ど……どうも」
中野はペコリと頭を下げると、美奈代を連れて慌てた様子で道路を横切った。
美奈代は、中野にひっぱられながら、庁舎を見た。
ドアが破られた――恐らく、鍵を爆破された――1階。
2階、3階と次々と照明がつけられ、窓際を動く数名の兵士達の姿が見えた。
「……拳銃」
美奈代はポツリと言った。
「見つからなければ良いんですけど」
「ゴミ箱の中まで探すとは思えんがな」
中野は庁舎の反対側の歩道まで来ると、美奈代の手を放した。
「あの……これは一体？」
「まだだ」
中野は言った。
「車を駐車場に止めてある。ナンバーは民間だから、検問に引っかかるとも思えない。車のラジオで何かわかるかもしれない」
「……はい」
中野は、最初の角を曲がった。
徒歩数分。ビルとビルの間に隠れるように存在する駐車場にたどり着くまで、美奈代達は何人もの兵士達に誰何を受けた。
その度に、中野はさっきのジェスチャーを繰り返し、そして兵士

達の呆れや嘲りをうけながら誰何をくぐり抜けた。
意味がようやく分かったのは、最後に誰何をした若い兵士というより、少年兵だった。
ヘルメットの内側は丸坊主だと、顔が語っている。
子供の頃からそれ以外のヘアスタイルを知らなかったろう、多分野球部という、体育会系の典型例といった、ニキビ顔の少年兵だった。
彼が、中野のジェスチャーの意味がわからなかった。
「何だ？」
緊張する声が中野に飛んだ。
「それ、何だ？」
「いや……」
中野が一歩、歩こうとした時、
「動くなっ！」
少年兵の銃がカチャという音を立てた。
「っ！」
セフティが解除された音と本能的に聞き分けた美奈代は、慌てて中野の腕に縋り付いた。
「あ、あの、つまりね！？君っ！」
美奈代は、自分で言ってのけた。
「わ、私達、男と女の関係なの――――二人で夜にすることって――――わかるでしょう？」
作り笑みを浮かべた女に言われた言葉。
その意味を理解したらしい少年兵は、顔を真っ赤にして、困惑した表情を浮かべた。
「だ、だから……その……いかがわしいワケじゃないのよ！？」
「じ、十分、いかがわしいっ！」
少年兵は声を張り上げた。
「う、失せろっ！お前達みたいな不道徳なヤツなんて、顔も見たくないっ！」

「……助かった」
中野は、駐車場の一角に止めてあったプリウスの運転席に座ると、言った。
「お前、なかなかだったぞ」
「……教えて下さい」
「ん？」
「さっきから繰り返していたジェスチャーって、アレ、そういう意味ですか？」
「アレとは？」
「……セクハラですか？」
「まぁ」
中野はポケットからタバコを取り出すと言った。
「そういう意味だな」
「……」
助手席の、禁煙。と書かれたステッカーを剥がし、ライターに伸びた手を美奈代は掴んだ。
「つまり」
「ん？」
「私、中野大尉と不倫関係にあるとでも？」
「この時間にオフィスで歳の離れた男女となれば、そうなるだろうな」
「……大尉」
「どうした？」
「歯ぁ、食いしばって下さい」

数分後。
手形を二つ作った中野の運転するプリウスは検問の列にさしかか

った。
ほとんどがタクシーだが、中に誰も乗っていないとわかると、さっさと通している。
トランクの中までは調べていない。

「……どう見る？」
中野は少し歪んだメガネのツルを直しながら訊ねた。
「新兵ですね」
美奈代はむすっとしながらも答えた。
さっきからラジオをＦＭ、ＡＭと切り替え、バンドを変更しているが、雑音ばかりで何も聞こえてこない。
「年の頃からしても志願兵か、或いは被災地の強制募集兵。どっちにしても、若い兵士達ばかりで、銃の扱いにも慣れているとは言いがたいです」
「よくわかるな」
「銃口が震えてました」
「……」
「それでなくても、カンでわかります。これ、おかしいですよ」
「……だな」
美奈代は検問のためドアを開いた中野から視線を外した。
対向車線を、戦車を乗せたトレーラーが列を作って走っていく。
９０式戦車？
美奈代は方角を確かめた。
東京駅方面。
まさか？
美奈代が心配したのは宮城だ。
近衛の歩兵部隊とメサイア部隊を相手に一戦構えようとは考えないだろう。
美奈代は自分をそう言い聞かせたが、心臓は早鐘のように激しく波打っている。

検問を通過した車が静かに走り出す。
「どうするんです？」
「葉月へ向かう」
「葉月へ？」
「ああ。どうあってもお前を原隊へ送り届ける」
「ですけど！」
「携帯が通じればいいが……後藤さんと連絡がとれれば手っ取り早いんだがな」
「一体、何が起きているんですか？」
「知りたいか？」
「当然っ！」
「なら、教えてやろう」
中野は真顔で言った。
「こういうのをクーデターっていうんだ」

東京及び首都圏の皆様へ
これより、緊急放送をお送りします。
テレビ・ラジオの近くにいらっしゃる方は、出来るだけ多くの方に声をかけ、放送をお聞きになるよう、ご協力をお願いいたします。
本日未明、首都圏内において陸軍の一部部隊が武装決起を行いました。
部隊は首都圏の政府施設等、並びに報道各機関を制圧。
この際、かなりの数の政府要人を拘束したと発表。
赤坂プリンスホテルに本部を設置した決起部隊は、先程、同ホテルにて記者会見を開催。
武装決起の趣旨を宣言しました。
それによると、首謀者は赤心会を名乗り、その首謀者は石橋敬一、元民州党幹事長代行とその同士の政治家１０名を中心とするメンバーで構成され、この赤心会の下、陸軍第教導一師団、及び習志野第

一空挺師団、第三航空師団が武装決起に合流し、いずれも現在、東京近郊にて軍事行動を展開中です。
決起部隊による決起趣意説明によりますと、我々は、岡山内閣総理大臣等による相次ぐ失政により、この大日本帝国が亡国の危機を迎える状況を座視することは出来ず、不本意ながらも武装決起に及んだものであると説明。
各軍に対して決起への合流を呼びかけています。

これに対して、岡山内閣総理大臣他、政府首脳はすでに東京を脱出しており、茨城県庁に臨時の政府機関を設置しました。
大賀官房副長官は、茨城県庁で緊急の記者会見を行い、赤心会の武装決起をクーデターと断定。陸軍に対して、クーデターの鎮圧を命じると共に、首都圏全域に対して、明日の6時までの期限付きで戒厳令が発せられました。
繰り返します。
首都圏全域に、戒厳令が発せられました。
不要な外出は絶対に控えて下さい。
各所には警察官、及び軍による検問が実施されています。
検問に協力が無い場合、無警告で逮捕、または武力行使が行われる危険性があります。
無用の混乱を避けるため、皆様のご協力をお願いいたします。

「……こんな時に」
「こんな時だからさ」
中野はラジオを聞き流しながら言った。
「放送局は、占拠されたものとされていないものとに別れているな……ＮＨＫは決起部隊。日本放送は政府側だな。いつまで持つかは分からないが……」
「首都圏に戒厳令が出たとなれば」

「……ああ。かなりまずいことになるな」
「一体、近衛は」
「どっちにも与しない――決起部隊にも、政府にも」
「どうして？」
「どっちに与しても損するし、何より、双方のケンカの勝者を決めるのは陛下だ」
「……」
「安心しろ。メサイアで武力鎮圧に出ろなんて命令は出ないだろうさ。陛下が統帥権を行使しない限り」
「……しないですかね」
「しない……と思いたい」
中野は頷いた。
「やったら岡山の首だって吹っ飛ぶ。ヤツにとっても、それは避けたいだろうさ。天皇に弓引いたっていう賊軍の汚名は、決起部隊に背負わせたいだろうし」
「……政治はわかりません」
「俺もだ――誰か、仲間とコンタクトがとれないか？」

皇居外苑にまで展開するのは、内親王護衛隊（レイナガーズ）の“鳳龍改”達。
全騎が広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のリキッドタンクとノズルをそれぞれの手に持ち、筒先を市街へと向けている。
その向こうには、戦車部隊が並び、土嚢を積み上げた即席の銃座に入り込んだ兵士達がこちらを見つめている。
戦車も兵士達も、銃や砲の筒先をこちらへと向けてはいない。
相手が誰か、それは彼等もわかっているのだ。
その躊躇が、筒先を向けるという決定的な行為を留まらせているのだ。
「動きはないか？」

自らの愛騎の足下で、麗菜が二宮に訊ねた。
「現時点まで動き無し」
「……問題は」
麗菜は、双眼鏡に映し出された戦車を睨み付けた。
「何故、展開している部隊が政府側であって、決起側ではないか――だな」
「……面白い話をしてますよ？」
二宮は、左耳につけていたラジオのイヤホンを外した。
「決起部隊の中に、いつの間にか近衛全軍が指定されています」
「……何ですって？」

嵐吹き荒れて　第二話

「……してやられたな」
雑音しか告げない役立たずのラジオのつまみから手を放した中野は、軽く伸びをした。
場所は葉月市内のラブホテルの地下駐車場。
助手席では美奈代が無邪気なまでの寝顔を見せている。
こんな時に、よく眠っていられるものだ。
中野はしげしげとその寝顔を眺めながら半ば感心していた。
実戦部隊で“鬼の泉”とまで恐れられる女騎士ともなれば、こんな時にでも眠れる者なのだろうか？
緊張で眠ることさえ出来なかった自分が、考え方によっては恥ずかしい。
中野はシートを倒すと、目をつむってみた。
眠ろうと思えば思う程、意識が高ぶって眠れない。
薄目を開け、時計を見る。
時間はすでに5時近い。
このホテルに入ったのが2時前だったから――中野がそんなことを考えた時だ。
「少しでも、眠った方が良いですよ？」
美奈代の声に、中野はハッとなって体を起こした。
助手席を見ると、美奈代は目をつむったままだ。
「起きていたのか？」
「寝てましたよ」
「俺が起こしたとか言うな？」
「言いません」
「それにしても。男とラブホテルの駐車場にいて、よく寝ていられるな。俺が、何もしないと思ったのか？」
「ええ」

「一々、腹が立つ」
「どんな時でも、少しでも寝ていないと、後々、命取りになりますよ？」
「後でコーヒーでも飲んでおく。一杯のカフェインを睡眠代わりにすることは出来る」
「年寄りの冷や水」
「何だとっ！？」
「こんな時間帯にラジオなんて流しているはずないでしょう？夜は眠るものです」
「くそっ。次からは軍用無線装置を取り付けてもらうことにしよう」
「そんなもの使ったら、ここにいることが一発でバレますよ？死にたいんですか？」
「ああ言えばこう言う」
「言われる方が悪い」
「……ちっ」
「文官のあなたが、何を焦っているんです？」
美奈代は目を開いた。
「ただ、知らない振りして登庁して、追い返されたら文句も出ないでしょう？武官の私ですら、何とも思っていないのに」
「クーデターだぞ？」
「陸軍や海軍ならともかく、どこのバカが近衛にケンカふっかけるんですか？近衛の恐ろしさは子供でも知っていますよ」
「お前は政治を知らない」
中野は言った。
「子供でも知っていることを知らないバカが政治を執ると、どうなるか、それを知らないんだ」
「問題はですね」

陸軍省の会議室で、眠そうな声がした。
「陸軍は、今回の事態に対して、何も出来ないということです」
「何故だ！」
ドンッ！
殺気だった声を張り上げ、デスクを叩いたのは背広姿の男だった。
高級そうな背広を着込み、時代遅れのポマードできっちりと七三に分けられた髪。
胸には磨き上げられた議員バッチが光っている。
「この国家存亡の危機において、何もしないというのか！」
「何のための陸軍だ！」
「この帝都で身内に反旗を翻されて、よくも平然としていられるな！」
同様に議員バッチをつけた男達も声を張り上げる。
「陸軍の職務上、こんな事態は想定されていませんからね」
「想定が無ければ何もせんのか！？」
「帝都防衛のため、市ヶ谷師団が訓練の名目で動いているではないですか」
「首相は反乱軍鎮圧を命じたのだぞ！岡山先生のご命令が聞こえないのか！？」
「ですからぁ」
デスクに座った男は、肩をすくめて答えた。
「新任の陸軍大臣を早く決めて下さい。首相命令だけでは陸軍は訓練以上の行動に出ることが出来ない。そう政令で決めたのは民州党のあなた方でしょう？」
「陸軍大臣は、首相である岡山先生が兼務されているのだ！その命令だぞ！？」
「なら、書類で出して下さい。それから、私が宿直でいたからいいようなものの、陸軍はまだ時間的には閉庁されたままです。何でしたら、お越しの際は、開庁する午前９時以降に、関連部門長にアポを取った上でお願いします」

「大人しくしていただければ」
都築源一郎は、議員会館の部屋に乗り込んできた兵士に開口一番、そう言われた。
「何もしません」
銃を威圧的に向ける兵士を冷たく見つめた源一郎は、
「なら、部屋から出ろ。私はこの時間には寝ると決めているのだ」
本当に、そう言い放って兵士達の前で布団を被って寝息を立て始めた。
しばし呆然としたあと、あきれ顔で兵士達が部屋を出てから既に数時間が経過しようとしていた。
源一郎は、日々過ごしている通り、午前5時30分に起床。零れる光に誘われるかのように、カーテンを開いた。
「……」
議員会館から見た外の景色は、日々とあまり変わらない。
ただ、軍用車両があちこちに止まり、武装した兵士達が街角のあちこちに立っている。
その程度だ。
源一郎は、窓際のデスクに置かれていたタバコに手を伸ばし、しばらく考えた後、箱に入った一本を抜き取り、マッチで火をつけた。
コンコン。
午前5時35分丁度に、ドアがノックされた。
「入れ」
「……失礼します」
入って来たのは、スーツ姿の妙齢の美女。
水野冴子。
源一郎の公設秘書であり、同時に彼の愛人でもある女が、寝間着姿の源一郎の姿を見ても、何でも無いという顔で会釈した。
「お目覚めですか？」

「眠れたと思うか」
「……党が把握している限り」
冴子は手にしていたファイルを開くと事務的に話し出した。
「都内１４カ所で決起部隊と陸軍正規部隊が対峙していますが、午前5時時点では、戦闘には至っていません。
陸海軍共に、都外のほとんどの部隊は、決起部隊と正規軍残留部隊のいずれにつくか、未だに様子見を決め込んだまま」
「ライフラインはどっちが掌握した」
「ＮＨＫ等の放送施設は正規軍が。都内へ通じる送電施設、ＮＴＴなどの通信施設は、反乱軍がそれぞれ掌握しています。それ以外の水道やガス、国鉄といったライフラインは、両勢力共に手をつけたという情報はありません」
「……」
源一郎は、灰皿でたばこをねじ消した。
「マスコミは何と？」
「テレビ、ラジオ、インターネット。全てにおいて政府広報を流し続けています」
冴子は、視線をチラリとドアの外へと向けた。
「平常通りに――と」
「……党所属議員との連絡は取れるか？」
「この状況ですが、携帯電話は生きています。私達も、携帯電話で情報をやり取りしている所です」
「各国の反応は」
「今のところは何も――ただ」
「ただ？」
「近衛だけは大音量のスピーカーで、正規軍めがけて通告しています。誰が反乱軍だ。正午までに皇居周辺から部隊を引き上げろ。さもなければ、官公庁ごと焼き殺した挙げ句、岡山を殺しに茨城県庁へ侵攻するぞ――と」
「……聞こえていたよ。よく聞こえてきた」

源一郎は頷くと喉で笑った。
「指揮官は麗菜殿下だな。これが陛下だったら笑うしかない」
「笑う……ですか？」
「笑う以外」
源一郎はタバコをもう一本、箱から抜き出し、口にくわえた。
「今の私に、何が出来るというのだ？」

近衛軍の反乱軍指定は誤報だ。

この宣言がなされたのは、午前８時すぎのこと。
茨城県庁側にある高級ホテルに巨大な風穴が３つ程出来上がった後だった。

そのホテルにとって不運だったのは、岡山首相がホテルのスイートルームで宿泊中だったこと。
幸いだったのは、彼とその取り巻きが最上階に宿泊していた関係で、その日、他の階には誰も宿泊していなかった程度のことだ。
岡山首相達が泡を食って逃げ出した後、ホテルは音を立てて崩壊。
次の攻撃を恐れた岡山首相が県庁で緊急記者会見を開き、官房長官が陳謝するとだけ告げた。

近衛がここを狙ってくる。
茨城県は陛下の敵になった！
戦場になれば、皆殺しにされる！

果たして、それでいいのかと訊ねたくなる恐怖が県民の中に駆け回り、岡山出て行け！と皆が思う中、それでも岡山首相は酒臭い息を吐きながら県庁の知事室を臨時の首相執務室に指定。椅子にふん

ぞり返っていた。

「反乱軍の鎮圧はどうなった」

「それが」

官房長官は答えた。

「陸軍に書類が届きません」

「書類だぁ？」

「はい。反乱軍鎮圧が望みなら、書類で提出しろと」

「俺は総理大臣、陸軍大臣も兼ねているんだぞ！？その命令が聞こえないのか！？」

「それが……」

官房長官はすっかり薄くなった頭と額をしきりにハンカチで拭いながら答えた。

「各部門の稟議を通さないと、都内では兵を動かせない。そういう慣例と、それを強化した政令が効力を発している関係上……」

「どういうことだ！だれがそんな命令を下したんだ！」

「それは先生が……」

「俺がどうした！」

「先生が、政権をお執りになった就任当初にご自身でご命令になったことです。都内で軍隊なんて見たくないとおっしゃって」

「俺が悪いのか！」

「今は亡き、先の鈴木大臣の責任……です」

「そうだろう！」

バンッ！

岡山はデスクを叩いた。

「まったく、あの鈴木の若造にも困ったものだ！」

「は、はい」

「何でもいい！俺が都内に戻るためだ！反乱軍鎮圧を最優先にしろ！犠牲はどうでもいい……いや、待て」

「はっ？」

「反乱軍の首謀者は誰だ？」
「……ですから」
何を言ってるんだ？
官房長官はあきれ顔で答えた。
「石橋元幹事長ら、石橋派が中心のクーデターです」
「それじゃ、マズいだろう」
「はっ？」
「民州党からクーデターの首謀者が出ただと？世間体が悪いだろうが」
「し、しかし」
「情報は操作するためにあるんだ」
岡山は、まるで子供に言い含めるように言った。
「民州党が、クーデターに関与しているなんてのは誤報だ。首謀者は憲政党だと、そうマスコミに流せ。世論を憲政党批判へと向けるんだ。それと、全部の議員は軟禁状態に置け。全部の警察と公安を総動員しろ。特にマスコミとインターネットの監視と情報操作に全力を傾けろ。
絶好の機会だ！
今後一切、俺に都合の良い情報以外は流すんじゃない。わかったな！？」

「……まぁ、こんな時に」
天壇の一角で、真菜の報告に耳を傾けていたのは、ダユーだ。
「そんな“お暇”な事が出来るなんて、人類はとても暢気なのねぇ」
「岡山は元来」
魔族軍の軍服に身を包む真菜は顔色一つ変えずに答えた。
「恐るべき俗物というべき輩です。この危機を自らに都合良く操作して、政権基盤の安定へとつなげるでしょう。そういう生物です」

「元の飼い主によくも言うわね」
「私にとっての飼い主は――ダユー様だけです」
「それでいいわ」
ダユーは頷いた。
「あなたの飼い主は私だけ。舌の使い方を間違えなかったことは褒めてあげる」
「ありがとうございます」
「それで？」
「岡山は、陸軍正規部隊が機転を利かせ、放送機関を先手を打って確保したことを良いことに、あからさまな情報操作に走っています。クーデターは対立する憲政党が仕立てたものであり、民州党が関与しているなどは誤報だ。それと、岡山県庁側のホテルに対する近衛軍の攻撃は、あからさまなまでの越権行為だと」
「越権行為？」
「国内での武力行使には、内閣総理大臣の許可が必要であり、その許可を得ず、しかも、その総理大臣の宿泊するホテルへ向けて攻撃を行うなど言語道断。今後、しかるべき措置を講じると」
「変な話ねぇ」
ダユーはその美しい首をかしげて見せた。
「都内防衛部隊は、反乱軍の先手を打ったからこそ、放送機関だけでも反乱軍の手から守って見せた……とはいえ、都内で軍事行動が禁止されているなら、彼等も罰せられるんじゃなくて？」
「その通りです」
真菜は頷いた。
「先程、市ヶ谷師団司令部は、首相の許可無く師団を動かした容疑で、身柄を拘束されました」
「……呆れた。放送機関を守った功績に対して罰で報いたのね？」
「そう、なりますね」
「都内防衛部隊は？」
「この措置にはさすがに……正直、師団は部隊としての統率を失っ

ています。主力の機甲2個中隊は、既に近衛軍に対して帰順を表明。対して岡山首相達、政府に従う部隊もあり」

「岡山内閣か帝か、いずれかへ忠誠を示すことで立場を明らかにした？」

「そうなります。都内は現在、近衛軍が帯状に部隊を配置させています。近衛軍支配地域が正規軍と反乱軍の緩衝地帯を構築している有様で」

「……感想は？」

「……恥ずかしい限り、少し前ならそう答えたでしょうが」

「……」

「今は、チャンスだと答えます」

「模範解答ね」

「恐れ入ります。この混乱に乗じ工作は順調に進んでいます」

「ヴォルトモード卿には察知されていないわね？」

「知りようがないでしょう……それでよろしいのですね？」

真菜のその問いかけの先には、ダユーはいなかった。

「――結構」

答えたのは、ユギオだった。

チョコレート菓子の包みを解きながら、ユギオは満足そうに頷いた。

「人類にとって、約束は破るためにある。その法則に例外は認められない」

「面白いことですねぇ」

「悲しいことです……とでも答えておきましょうか」

「それこそ、模範解答ね」

「まぁ、そんなところにしておいて下さい。それより」

ユギオは、チョコレート菓子を口に放り込んだ。

「天壇の城壁が完成すると聞いたから、見物に来たんですよ？」

「あらあら」

ダユーは席を立った。

「ゲストをお待たせするなんて、失礼いたしました♪」
その声は、とても楽しそうに真菜には聞こえた。
「天壇の往時の姿を、とくとご覧あれ♪」

大韓帝国海軍第一艦隊旗艦“元山”艦橋
「何が起きているって？」
「観測機からの報告です」
キム提督の問いかけに、通信兵は答えた。
「浮遊城に対して、巨大な岩石の塊が群れをなして移動中。数、およそ３００」
「岩石の塊？」
「提督、観測機が戻ります」
耳障りなほどの爆音を響かせながら、一機の水上機が着水体勢に入ろうとしていた。
「写真を現像へ回せ……それと、今度こそ、着水にしくじらせるな。もう修理部品はないぞ？」

提督の心配通り、見事にひっくり返った水上機から回収されたのは、画面一杯に空を飛ぶ岩石の群達の写真。
提督でなくても、冗談だと思った代物だ。
「水上機１機オシャカにして」
クレーンで引き上げられた機体はもうバラバラに近い。修理より放棄した方が、スペースの問題上も有効だろう。ヘリ甲板は空いているとはいえ、あんなものは乗せておきたくない。
まったく、いつになったら、狩野粒子影響下でも飛べるヘリが配備されるんだ！？
「回収できたのは、こんな意味不明の写真だけか」

提督は写真をデスク上に投げ出した。
「一体、何が起きているんだ？」
駆逐艦２隻とコルベット艦４隻に過ぎない彼の艦隊では知る術もなかったが、この事態に青くなったのは、日本、ロシア、中国だ。

「岩石による障壁？」
中華帝国軍極東艦隊を率いる呉提督は、参謀が持ってきた、浮遊する岩石の状況を前に、あきれるしかなかった。
大小、様々な岩石の群が、帯状になって浮遊城を取り囲んでいるのだ。
「間違いありません」
参謀は答えた。
「大小様々な数の岩石の塊が、あの浮遊城周辺に帯状に配置されています。ほぼ３６０度。全周囲に配置された岩石の状況からして、浮遊城へ侵攻する勢力に対する防壁として機能していることに疑いの余地はありません。天文学的にいえば、アステロイドベルトのような……」
「……」
「簡単なシュミレーションしかしていませんが、この岩石達が、邪魔で浮遊城に近づくのは、さらに至難の業になりました」
「一体、どういう仕組みだ」
「不明……さすが魔族とでも言いましょうか」
「ロシアの動きは」
「メサイア部隊を偵察に出していますが、さすがに仕掛けるようなバカなマネはしていないようですな」
「当然だろう」
提督はしげしげと超高高度から撮影され、本国から運ばれてきた偵察写真を眺めながら唸った。
「俺が祖国全部の軍隊を持っていても、こんな所は攻めたくない」
「元来、揚陸部隊は飛行艦のみをもって揚陸可能。その頭数を揃え

るだけで精一杯でしょうに。この帯状の岩石群を突破するにしても、どうやればよいものか……」
「仕掛けなければ、わからないとしか、言い様がないな」
「同感です」

「――ほう？」
ユギオは目の前の光景に目を細めた。
「成る程？魔力による無重力帯効果を発揮させ、そこに岩石を浮かせた……」
「ええ。宇宙空間における鉱物資源確保技術の応用です」
「……さすがですな」
「どうも♪」
ダユーは優雅にスカートの裾を掴んだ。
「人類がここを攻めたければ、まずはあの城壁を突破するしかない。しかし」
「アイバシュラ達をあそこへ配置すると？」
「ええ。無重力地帯は、アイバシュラ達にとっては格好の住処ですもの。無事では通しません」
「これで日本海側の防壁はほぼ完璧」
ユギオは満足げに頷いた。
「中華帝国軍の部隊もそろそろ福井へ到達する頃ですから……資源と戦力の確保は十分……ですね」
「人類の関係をかくも引き裂くとは、あなたは本当にひどい人ですねぇ」
「何とでも」
ユギオは大仰に肩をすくめてみせた。
「誘いに乗るかどうかは、人類の判断ですよ？」
「自己責任……嫌いな言葉です。それで？」
「カネは出しました。人材は送ってもらう代わりに、ちょっと土地

は借りはします。でも、文句を言われる筋合いはないですよ？」
「物は言い様ですね。あの漢民族の皇帝とどういう話しになっているんです？」
「簡単ですよ。あなたを人類唯一の王とする。そのつもりがあるなら、日本に兵を送れ。資金とメサイアは我々が用意しよう……そんな所です」
「人類最後の王、の間違いでしょうに」
「現行型の人類最後の生き残り……にしようかと思っています」
「記念に剥製にでもします？」
「不死の呪いでもかけて、博物館に繋いでおくのも面白いかと――いかがです？」
「美少女でもない限り、遠慮しますよ。いくら希少でも、むごいほどの醜男ならなおさら」
「……なら、遠慮されるべきでしょうな。あの顔では」
「ダユー様」
真菜が、ダユーに告げた。
「部下からの報告です。“狼煙があがった”と」
「――――上等♪」

日本海で岩石が群れを成して浮かび始めたのと呼応するかのように、太平洋でも騒ぎが起きていた。
駿河湾に待機中の米海軍の駆逐艦“モホーク”の第一砲塔から出火。
火の手はすぐに弾薬庫に回り、“モホーク”は一瞬にして爆沈した。
随伴する僚艦が“モホーク”の第一砲塔から煙が上がっているのを確認して、艦が爆沈するまで1分と経っていない。

問題は、“モホーク”が爆沈しただけではない。
爆沈する直前まで、“モホーク”がとっていた行動だ。
第一砲塔は、射撃を続けていた。
その筒先には、魔族軍の陣地があった。
停戦期間中だというのに、“モホーク”の第一砲塔は容赦なく魔族軍の陣地へむけて７６ミリ砲弾を発砲し続けた。
発砲を確認した僚艦“シーガル”艦長は、即座に“モホーク”へ向け、事態を問い合わせると共に、発砲を止めるように全ての通信方法で試みたが、“モホーク”からの返答はなく、“シーガル”が把握している限り、４６発の発砲の後、“モホーク”は爆沈した。

艦長以下、“モホーク”確認された生存者は皆無。

この事態を受けた魔族軍は、翌日には人類に通達した。

停戦条約違反に伴い、停戦は効力を停止する――そう、告げた。

人類側のいかなる弁明も通じることなく、魔族軍は動きを示した。
その矛先が日本でなかったことは、幸か不幸かわからない。
魔族軍の第一陣が確認されたのは、ゴビ砂漠。
突然、本当に突然出現した空を覆う巨大な存在が地響きを立てながら大地へ落着。
落下物は、１５０キロの距離を隔て、三角形を形成するように大地に降り立った。
全長数キロに渡るこの落下物に人類が接触するのは数時間後。
モンゴル政府が派遣した観測機がそれだ。
だが、その機体は、上空に到達したという報告だけを残し、一瞬にして紅蓮の炎の中へと消えた。
落着物から出現したのは、無数の妖魔達。

ネスタージュ級アイバシュラが地上で確認された最初の瞬間だった。

嵐吹き荒れて　第三話

時間を少し戻す。
駆逐艦“モホーク”が発砲する前。
美奈代達がまだラブホテルの駐車場にいた頃だ。

「で？」
美奈代は訊ねた。
「どうするんです？」
「どうしたい？」
「……一つ、聞かせて下さい」
「何だ？」
「それをはっきりした上で、ここまで来たんでしょう？」
「……」
中野は無言で首を横に振った。
「まさか！」
美奈代は驚いた顔で中野を見た。
「勢いだけでここに来ちゃったなんていわないでしょうね！」
「……すまん」
中野は答えた。
「葉月までくれば何とかなるかと思ったんだが」
「……」
はあっ。
美奈代は盛大なため息をついた。
「どうして男って、こうもバカなのかしら」
「……言ってろ」
「同期にもいるんですよ。もめ事起こした挙げ句、艦から追放された大馬鹿が」
「……」

「よくもまぁ、あれで惚れてくれる女がいるもんだと私なんて、信じられない思いがするんですけどね」
「そんなにひどいやつか？」
「ええ」
美奈代は頷いた。
「丁度、あそこでコソコソやってるカップルの男みたいなヤツ……で」
そこまで言うと、美奈代は口をあんぐり開け、目を擦った。
「……どうした？」
「ち、ちょっとごめんなさい」
美奈代はドアをそっと開いた。
「あのバカ……こんな所で何してるんだ？」

「びびったのはこっちだ」
額に汗を流しているのは、都築だった。
その横では、寧々が小さくなっていた。
ラブホテルで知り合いにばったり出会うなんて、女として経験したいことじゃない。
それだけに、美奈代は努めて寧々の存在を忘れることにした。
ただ、収まらないのは都築だ。
「お前こそ、こんなところで何してるんだ！」
「わ、私は仕事だ」
美奈代は顔を赤くして口を尖らせた。
「仕事で……その」
「どういう仕事だよ！お前、本庁へ出向しているんじゃなかったのか！？いつからここが近衛府の本庁舎になったんだよ！」
「知るか！」
「俺達は、新入りの歓迎に外に飲みに行った後……柏が気を使って

くれて……お前のカネで……だな」
「お前っ！」
美奈代は都築の胸ぐらを掴んだ。
「人がみんなのためにって、コツコツ貯めた金で何をした！」
「何はナニだろうが！」
都築は乱暴に腕を振り払った。
「男と女がここでナニするか、一々教えてくれってか！？子供かてめぇは！」
「お前、本当に殴るぞ！」
「……あの」
消え入りそうな声で止めに入ったのは寧々だ。
「その……いろいろと申し訳なくは思いますが……」
「……」
美奈代は腕をさすると、
「鬼龍院中尉に預けておいた方が良いか」
腰のホルスターから拳銃をとりだした。
中野がゴミ箱に捨てたはずのワルサーＰＰＫだ。
「何があるかわからん。男はそれを恐れて武装さえ忘れてしまうが、女はそうはいかん」
「……はい」
寧々は無言で銃を受け取ると、ハンドバッグにしまい込んだ。

「まぁ、ここに入った後……だな」
都築は、中野を紹介された後、言った。
「その、テレビつけたら大騒ぎになっていて……だな」
「テレビは生きているのか？」
「知らね」
都築は首を横に振った。
「部屋を出るまでには消えていた」

「……おい」
美奈代は都築を脇で小突いた。
「相手は法務官、しかも大尉だぞ」
「知らねぇよ。それよりお前、階級と寝たのか？それとも肩書きか？」
「歯ぁ、食いしばれ」
「散々、同性愛者面しておいて、いざって時は器用なマネしてのけるもんだ――痛てぇっ！」
殴ろうとした美奈代の前で、都築が飛び上がって悲鳴を上げた。
寧々の指が都築の脇腹をつねりあげていた。
「真っ！」
「痛ててっ……くそっ。俺はな。階級がどうであれ、どうあっても背広組は大嫌いなんだ」
「変わったところに信念を持っているな……都築と言ったな」
「……何だよ」
「俺は階級や肩書きを楯にしはない」
「ああ、そうかい。男の魅力で泉をここに引っ張り込んだとでも言うのか？」
「冗談じゃない！」
怒鳴ったのは美奈代だ。
「こんなサディスティックで、血の代わりに機械油でも流れてそうな、そのクセ、頭に血が上ると前後の見境なくして、女に振られた腹いせに部下や立場の弱いヤツに平気で当たりちらかすような器量の狭いヤツ相手に、なんで私が相手をしなくちゃいけないんだ！？私はそこまで変態じゃないぞ！？」
「お前……いくら何でもそれは、このおっさんに失礼だろう」
「誰がおっさんだ……」
中野は額に青筋を立てながら言った。
「泉……後で覚えておけ？補給上の事務仕事は、まだ終わっていないぞ」

真っ青になった美奈代の前で、中野は都築に言った。
「とりあえず、俺の記憶が間違いなかったら、父親の心配をしたらどうだ？」
「クーデターだか何だか知らねぇが」
都築はあからさまに不愉快さを浮かべ、唾を床に吐いた。
「あいつを殺してくれるなら、悪魔だって大歓迎だ」
パンッ！
乾いた音が駐車場に響いた。
美奈代が都築の頬を張った音だ。
「なっ、何しやがる！」
「親に向かって、何だその言いぐさは！」
「あんなヤツ、親じゃねぇ！何も知らねぇクセに勝手に人の家庭の事情に首を突っ込むな！」
「誰がどうだろうと、親に向かってその言いぐさはないだろうが！」
美奈代は怒鳴り返した。
「私なんて、文句を言いたくても言える親はもういないんだぞ！親が一人いるだけでも感謝しろ！」
「知るかっ！」
都築は顔を真っ赤にしてそっぽをむいた。
「俺にそのことで文句を言えるのは、俺と寝た寧々だけだ！何の関係もないヤツに、そこまで言われる覚えはねぇ！」
「……っ！」
「……大尉」
二人の間に割って入るように、寧々が美奈代の前に立った。
「その……いろいろ、私も事情は聞いていますから……ここは」
「……わかった」
美奈代は頷いた。
「なら、嫁に躾けてもらえ。だが、覚えておけ？明日は我が身だぞ……都築」
「……」

「とりあえず」
美奈代は言った。
「ここを出よう。ここにいても始まらない」
「どうする？」
「携帯電話は通じているんだろう？誰かと連絡はつかないのか？」
「……確か」
寧々は携帯電話を取りだした。
「……よかった。電波は生きています」
「誰ととれる？」
「えっと……沢口少尉と」
「沢口？」
「新入りです。食事の際、携帯電話の話になって電話番号は聞いておいたので」
「……私用なら問題もないだろう。今まで連絡しなかったのか？」
「部屋から連絡しようとしたのですが、電波が全く届かなかったんです」
「こういう所では」
中野がフォローするように言った。
「建築物の素材の関係で電波が届きづらい所もある。部屋から出た関係で、通じるようになったんだろう」
「……成る程。中尉、沢口少尉と連絡をとってくれ。後藤隊長がいれば最高だ。どっちにしろ、我々はメサイアがなければ何の役にも立たない」
「はい」

「状況！？」
メサイアのハンガーの中で、麻紀は携帯にかかってきた寧々からの電話に安堵しつつ、怒鳴った。
「最悪ですよ！」

その手には銃、Ｐ９０が握られている。
ＭＣＲにサバイバルキットと共に入っている代物で、麻紀自身、身につけたサバイバルベストには実弾入りのマガジンを差し込んである。
ハンガーを出ようとしたジープの荷台に銃を放り上げると、自身もジープに乗り込んだ。
「施設へ？無理ですよ！」
運転席に座っているのは整備用ヘルメットを被った整備兵。助手席には、強ばった顔をした麗央が拳銃をしっかりと両手に抱きながら俯いている。
麻紀は対戦車ロケット弾のケースに腰を下ろすと、ジープの端を掴んだ。
耳障りな程、甲高い音を立てて、ジープが走り出した。
「ダメですダメっ！
入り口は陸軍の対空戦車が待ち構えてます！
下手したら殺されますよ！？連中、相当殺気立ってます！
……陸軍は近衛を相手にしないって？
ウソウソ！
あんなの上辺だけですよ！
陸軍の奴ら、機関銃は持ってくるわ、施設の正門前に土嚢積み上げて対戦車ロケットランチャーまで準備するわ……ノコノコ近づいたら蜂の巣！
私達も今、銃持って配置に――――そうですよ！施設はもう臨戦態勢です！
地下の下水道！？
もっとダメ！
あそこにはセンサー付きの対人地雷が複数設置されます！挽肉になりたくなかったら、施設に関わらないで下さい！
……えっ？誰！？」
麻紀は、停車したジープから降りると、小銃のスリングに首を通

し、空いた手にロケットランチャーのケースを掴んだ。
「……うえっ？い、泉大尉って、あの鬼の泉！？」
麻紀が降りた先は正面門前（ゲート）。
すでに対空戦車が３０ミリガドリング砲をこちらに向けている。
そのすぐ近くでは、１２．７ミリ重機関銃が土嚢の中からこちらへ銃口を向けている。

使い方、間違えているのよ！バカっ！

麻紀は自分とほとんど同い年位の若い兵士が向けてくる緊張した視線を感じながら、内心でそう怒鳴った。
「い、いえっ！新入りのＭＣ（メサイア・コントローラー）、沢口麻紀少尉でありますっ！うわぁっ！あの死神と私、話しちゃってるよぉ！麗央ぉっ、私って主役級！？

……あ、いえ。失礼しました！」
ロケットランチャーのケースを、対空戦車とは真向かいに置かれた、重量物運搬用台車に積まれたメサイアの装甲版を楯に、小銃を準備している憲兵に手渡した。
土嚢とメサイアの装甲、どっちが強いんだろうなんて、もう麻紀には考えている余裕はない。
狙撃兵がどこから狙っているかわからない。
麻紀は、野戦訓練で散々叩き込まれた教訓……というか、模擬弾を喰らった時の一晩中続く痛みを思い出し、そそくさと装甲版の影に隠れ、Ｐ９０を脇に置いた。
その横には、麗央が心配そうに拳銃をホルスターに収め、背中に背負っていたスタンブレードにバッテリーを装填している。
あと少しで、津島中佐が準備しているアンチマテリアルライフルを担いだ山崎中尉が駆けつけてくれる算段になっている。
それまでに、陸軍がバカをしなければ、私は麗央を守ってやれるんだ。

麻紀は、そっと麗央の掌に自分の手を重ねると、携帯電話に告げた。

「現在、後藤中隊長は所在不明。ただ、柏中尉に電話がありまして。現状は動くなと厳命があったとはうかがっています。柏中尉ですか？私は今、正門前です。中尉は今、地下の司令部で憲兵隊と協議中……メサイア？無理ですよ。最終組み上げはどう見積もっても明日までかかるって……え？文句なら補給部門に言って下さい！補給部門のバカが何考えてくれたのか、違う部品大量に送ってくれたおかげで、部品交換が昨日からストップしてるんです！……え？なんですか？そのごめんなさいって？」

ぬっと現れた巨大な影。

それは山崎の影だった。

山崎は2メートル近い巨体と同じほどもある長い銃身を持つ巨大なライフルをアスファルトの上に置くと、麻紀の手首ほどはあるかも知れない巨大な弾薬を薬室に装填した。

そして、ポケットから取りだしたのは耳栓だった。

麻紀は一礼すると、耳栓を受け取った。数はかなり余裕がある。ライフルの発砲時の音で耳をおかしくしたくなければつけろ。ということだ。耳栓の入った透明な包みから自分の分を取り出すと、麗央に手渡した。

「宮城からの救援？

無理ですよぉ。

私の権限ではどうしようもないですし、それでもと思って、内親（レイ）王護衛隊（ナガーズ）の身内に電話はしましたよ？

ですけど、もう東京全部に出るだけで、予備騎どころか総隊筆頭騎の“水龍”まで引っ張り出した挙げ句、それでも頭数足りないって、前線から部隊が次々に引き上げてる状況で……いえ、前線の崩壊なんて、私に言われても……騎体？この施設も予備騎はないって……うん？……ちょっと待って下さい？……あっ！」

不意に、麻紀の手から携帯をもぎ取ったのは山崎だ。

「すみません。……美奈代さん？山崎です。津島中佐からです。葉月港のＡバースに停泊中の“鈴谷（すずや）”へむかえと……津島中佐が坂城さんに預けていたメサイアが４騎そちらに隠してあると……いえ！自分達は無理です！自分達は研究所を死守します。

……いえ。陸軍がこの施設を狙うのは、岡山首相の指示です。狙いは、この研究施設にあるメサイアのデータです。

そいつを中国軍に引き渡して、外交上の得点にしたいというのが、連中の狙いだと、諜報部門から通報が。はい……我々には、司令部から厳命が下っています。どんなことがあっても、相手が誰だろうと、施設を死守……そうです」

山崎は、自分に言い聞かせるように頷いた。

「施設侵入者に対する無警告の殺傷命令が出ています。陸軍が施設へ侵入を試みた時点で、近衛と陸軍は前面戦闘状態に入ります」

「バカがっ！」

携帯電話をたたき壊さないために、美奈代は理性を総動員するハメになった。

肩で息をして、無理矢理酸素を肺に送り込む。

美奈代は無言で寧々に携帯を返した。

「……都築、鬼龍院中尉」

「……どうだった」

「大尉？」

「状況は最悪だ。陸軍の狙いは、近衛のメサイア技術の奪取」

「馬鹿な」

そう言ったのは中野だ。

「メサイアを持たない陸軍にそんなデータ、何の意味が？」

「山崎から聞きました。連中――――正確には岡山首相の狙いは、そのデータを中華帝国に引き渡して、自らの得点にすることだと」

「……っ」

驚愕に目を見開いたのは中野だけではない。
「何だそりゃ」
「……さすが」
寧々は言った。
「中華帝国政府の諜報部門や関連団体から、合法、非合法あわせて莫大な献金を受け取っている民州党内閣の親玉だけのことはありますね」
「感心してる場合かよ！」
都築が声を荒げた。
「このままじゃマズい！おい、泉！どこからメサイアは調達出来ないのか！？」
「……ある」
美奈代は頷いた。
「葉月湾の“鈴谷（すずや）”に向かうぞ」
「“鈴谷（すずや）”へ？」
「理由は知らんが、津島中佐がメサイアを隠しているという」
「本当にあのガキ」
都築は額に手を当てた。
「何、隠し持ってるかわかったもんじゃない！」
「今は感謝だ。中野大尉」
「俺に出来ることは」
中野は指で車のキーを回して見せた。
「この程度だろうな」
「――――頼みます」
「ところで泉」
「はい？」
「お前、なんで拳銃持ってるんだ？」
「あなたに素直に本物渡すと思いました？」
「……後で覚えていろよ？」

“鈴谷（すずや）”は葉月湾の埠頭に係留されたまま、完全なノーマーク状態だった。
メサイアが搭載されていない。
公にはそうなっている上に、艦としての機能を停止されている、そんな存在だ。
陸軍としても無視して良いとみなしたのか。
或いは、派遣する余裕がないのか。
美奈代は多分、後者だろうと判断した。
「こんなこともあろうかってな」
甲板で出迎えてくれたのは、坂城だった。
「紅葉はそう言うだろうが、なんのことぁねぇ」
ハンガーへ通じる通路を歩きながら、坂城は言った。
「あいつのラボに近々、査察が入るって噂耳にしたもんだから、副長にかけあって、隠していたメサイアを一時的に匿ってもらっていたってワケさ」
「副長、それで認めたんですか？」
「嫁さんにばれたら離婚モノのカードを紅葉に切られたって聞いたぜ？」
「あの人、マトモだと思ったんですけど」
「とりあえず、問題は」
坂城は立ち止まると中野を見た。
「法務官のあんたがどうするか――だな」
「ここまで来れば」
中野は肩をすくめた。
「もう目をつむるしかないでしょう？」
「そういうことか？」
「それで、過去の失点は帳消しですよ？坂城さん」
「ふん……後藤さんにゃ黙っていてやるよ」

本当にこの人、顔が広いなぁ。と美奈代は感心しながら、坂城の横顔を見た。
「MC達も“鈴谷（メサイア・コントローラすずや）”へ集まっている。連中の調整は進んでいるし、コクピットはお前達四人のパーソナルデータに合わせてある」
「四人？」
「お姫さんも、MC（メサイア・コントローラー）連中と一緒に合流している。昨晩、飲みに行った所で一緒に立ち往生したらしいぜ」
「それで？坂城さん」
都築は訊ねた。
「あの紅葉のガキが隠し通そうとした騎体って？」
「紅龍だ――紅い龍って書く」
「いや……坂城さん。ソイツは」
驚いた声を上げたのは、中野だった。
「昨年、予算が通らなくて廃案に」
「紅葉に予算なんて言葉が通じると思うな。アイツにあるのは、思いついたら作ってみるってその本能的欲望を満たすことだけだ」
「ちょっ……まさか！去年の不正経理の張本人って！」
「ああ。そいつは」
坂城は楽しげに肩をすくめた。
「聞かない方がいいぜ？なんで、調査が途中で止まったかを含めてな。あいつのバックを調べていくと、捲らなくて良いカーテンの内側まで覗くことになる」
「……」
「役人は、知らないことは知らないで通した方が身のためだぜ？中野候補生」
「……了解しましたよ。教官殿」
「教官？」
「中野はな。元は整備兵上がりだ。俺の指導の下で整備で軍務努めた後、大学へ入って、それから法務官になったんだ。補給部にはその経験買われての出向だ。これで結構な苦学生なんだぜ？少しは見

習っておけ」
「へえ？」
美奈代は驚いた。という顔になった。
「苦労って言葉とは縁遠い、人生の王道走ってきた人だとばっかり」
「……世の中、そんなに上手くいくものか」
中野はメガネのツルを指で直した。
「それでも、津島中佐はよく」
「紅龍は非公然部隊でつい最近まで活動していたというか……紅葉が貸し出していたんだよ」
「可変メサイアですよ？」
「可変といっても、ブラッティ・ファントムほど厄介な可変機能は積んでいない。問題は、そいつを紅葉がお披露目させちまうことなんだが……」
まぁ、研究データ、パーにされるよりゃ、マシって判断したかな？
ポリポリと頭を掻いた坂城があごでしゃくった先。
そこには、整備を受けるメサイア達の姿があった。
「調整に一晩くれ。明日の朝一番で出せるようにしてやる」

美奈代達が、久しぶりに“鈴谷（すずや）”の寝床に潜り込んだその夕方。
事件は起きた。

●大英帝国　ロンドン　ダウニング街１０番地
「随分と楽しいことになってきたな」
ヒースは、滅茶苦茶になった部屋の中に転がっていた椅子を手にして、その脚が折れていることに気付き、靴で、かつて椅子だった物体を蹴飛ばした。

「ベネットの――――あの若造からは？」
「新大陸も狼狽しています」
ボンド卿は冷たく答え、足下に散らばる写真を一瞥した。
ロシアから提出された、モンゴルの妖魔達の写真。
「海軍は一切の攻撃命令は下していないと。ホワイトハウスも同様の声明を出しています」
「ホットラインをつなげ。南米、アフリカの後にこのユーラシアを魔族にくれてやろうとはどういう魂胆か、はっきり訊ねておきたい」
「返答次第では？」
「我が国の武力は何のために存在している？」
「……魔族共の高笑いが聞こえてきそうですな」
ボンド卿は、床に転がったままのウィスキーのボトルを手に取った。
「それにしても、魔族側の反応が速すぎる……おっと、グラスをお借りできますか？素面では、とてもこれ以上は無理です」
「同感だ」
ヒースはガラスが割れたサイドボードを指さすと、どっかりとデスクの上に腰を下ろした。
「酒はこんな時にこそ飲むのに相応しい、神からの美禄だ。……新大陸が叩かれた腹いせにやりましたと答えたら、孫娘の婿に認めてやろう」
「どうも……そんな気はしないのですが」
「ジャップの小物は」
「オカヤマに、そこまでの脳みそがあるとは思えません」
「ノブヒトの方だ」
「……それこそ利点が見いだせません」
割れずに済んでいたグラスにウィスキーを注ぎ込むと、ボンド卿はヒースに手渡した。
「エンペラーとしては、自分の国が滅亡するかの瀬戸際です。こんな時にクーデターが起きたとなれば、むしろ殺してやりたいのは自

分の部下たるオカヤマの方でしょう」
「ジャップによる破壊工作の可能性は低いと？」
「むしろチンク共の方を疑った方が良い。チンクは魔族と手を結び、あの島国に攻め込む姿勢を表明している」
「漢民族の統治する中華帝国のみが、世界で唯一、存在を許された人類の国家である……か。素面でも酔えるとは、チンクも器用な連中の集まりだ」
ヒースはグラスをあおった。
「……氷は」
ドアが開いたまま、中身を散乱させて煙を上げているかつての冷蔵庫の残骸を、ヒースは視界に収めてから目を閉じた。
「どちらにしろ、人類は、魔族に停戦破棄の格好の口実を与えたわけだ」
「そうなります。全長3キロの巨大基地が3つ。ゴビ砂漠という厄介な場所に現れたわけです」
「モンゴル政府は」
「ウランバートルはすでに陥落。モンゴルという地名が世界地図から消えるのは時間の問題です。中華帝国政府とロシア帝国政府は非公式ながら、旧モンゴル国土の平和的分割について協議に入ったとも情報が入っています」
「随分とあっけない」
「モンゴルのような貧国に、妖魔の波状攻撃を阻止出来るはずはありません」
「妖魔は国境線を越えるか？」
「可能性はありますが」
ボンド卿は答えた。
「魔族と協定を結んだ中華帝国との関係を、さらにそれと協議に入ったロシア帝国の双方に挟まれた環境を考えると、両国国境線を魔族が越えさせるとは考えづらいですな」
「……逆に言えば」

ヒースはグラスを弄びながら言った。
「両国が邪魔で、我々は妖魔を叩くことが出来ない」
「そうです――魔族はまさに絶妙な所へ楔を打ち込んだのです」
「しかし」
「はっ？」
「何故、ゴビ砂漠なのだ？魔族は何が狙いだ？」

嵐吹き荒れて　第四話

「この状況については」
神音は、はっきりとその声色に不愉快さを示していた。
「我々は無関係どころか被害者だ。そう、はっきり申し上げておきましょう」
「アイバシュラは」
ガムロは不審さをあらわにした視線を神音に向けたまま、言った。
「貴殿配下の組織が量産化に成功したと聞いているが？」
「その通りです。ただし」
神音は、ガムロを睨むような視線をそらすことなく答えた。
「我が商会から、人間界への納入実績は、今回の取引以外に存在しません」
「……信用第一か？」
「当然のこと」
「なら？」
ガムロは壁一面を占めるスクリーンに映し出された世界地図に視線を移した。
「大陸に出現したアイバシュラの大群についてはどう説明してくれる？」
「他社が我が社の技術を利用したものと思われます」
「どこだ」
「さぁ？」
神音は肩をすくめた。
「量産そのものは、時間さえあれば存外と簡単なことですし……量産そのものは専売特許というわけでもありません。……まぁ、クィーン級となれば、これはもう、時限装置が仕掛けられていたと判断するには十分ですが」
「時限装置？」

「クィーン級は、その幼生の誕生から生育までに促成措置を施しても、人間界の時間で最低１０年が必要です。そして、一度生育を開始したクイーン級は、生育と同時に、周囲に根を張る関係で、移動させることが不可能になる――分かります？この意味」
「貴殿が別件で使用することを目的としていなかったら、無罪を主張するには十分か」
「そういうことです」
神音は世界地図を見た。
ゴビ砂漠の他、中央シベリア高原にいたる一帯に、数十に渡るアイバシュラの群体反応が見て取れる。
赤い反応一つ一つが、規模こそ違えども、アイバシュラの群だ。
反応が最も大きいのが、モンゴルのカラコルムを中心に、北はコリマ山脈と中央シベリア高原、西はタクラマカン砂漠の４つの反応。
この４つの反応を取り囲むように、小さい反応が十重二十重と光輝いている。

神音は、その反応それぞれが何か、言われずともわかっている。

４つの大きな反応は、アイバシュラ達にとって母なる巣――実質、アイバシュラの製造工場と言うべき、クィーン級の反応。
やや小さい反応が、小型のクィーン級というべきネスタージュ級。
そして、その護衛を任務とするビショップ級。
その周囲に最低でも数千の小型のアイバシュラがいる。
アイバシュラの住む大都市がクィーン級で、このクィーン級という大都市の周囲に存在する衛星都市がネスタージュ級。そして、外敵から都市を護る砦がビショップ級であり、個体のアイバシュラは、そこで生活する住民だ。

「目的は不明ですが――偶然にしては出来すぎている気がします。このタイミングでの出現は、ヴォルトモード卿の軍勢による仕業と

判断されても文句すら言えないでしょう」
「我々にとっては、人類の目を大陸へそらすことが出来る点では感謝すべき天恵ともいえるがな」
ガムロは喉の奥で笑った。
「貴殿の贈り物というのでなければ」
「……ですね」
神音は頷いた。
「あの男に聞いた方が早いでしょう」

「とりあえずは」
整備が進む“鈴谷（すずや）”のハンガーデッキを見下ろしながら、中野は言った。
「一安心というところか」
「陸軍が動かなければ……ですけどね」
美奈代は、中野の横で整備を見守りながら頷いた。
「葉月湾は近衛軍の本拠地の上に、海軍の軍施設もある」
そう言われて、美奈代は、港に浮かんでいた海軍の軍艦を思い出した。
「ここで下手を打てば、陸軍と海軍で最悪の関係になる恐れもあるからな」
「海軍の動きは？」
「海軍は元から反岡山だ」
「動かない？」
「ラジオで聞いた限りだが、海軍省は陸戦隊を繰り出し、今回の事態での静観を宣言している」
「よくも海軍大臣が黙っているものですね」
「それが、だ」
中野は頷いた。

「海軍大臣……どうも奇妙なことになっている」
「奇妙？」
「ああ……昨日から行方不明になっていた。発見された所が海軍省の中」
「何ですか？それは」
「海軍は元から保守……憲政党支持者が多い」
「それが？」
「海軍大臣の行方が不明になったのは、昨日の企業パーティの席から退出して以降だ」
「ＳＰだってついていたはずでしょう？」
「ＳＰごと、消えているといったらどうする？」
「はっ？」
「パーティ主催企業は、憲政党との関係が強い企業だ」
中野の視線が、整備兵と何かを議論していてる都築に注がれる。
「そして、憲政党議員のかなりは、横須賀で行われた“団体研修”で都内からは離れていた。そして、海軍大臣は行方不明」
「話がうますぎる」
「そうだ。後藤さん辺りも相当絡んでいるとみるべきだろうなぁ」
「なんでそんなに嬉しそうなんですか？」
「そういうものさ……わからないか？」
「わかりたくないです」
「……そうか」
「私にとって、心配なのは」
「ああ、わかっている」
中野は答えた。
「マスコミは岡山の情報管制下にあるといっていい。陸軍が近衛の施設に入り込んだとしても、それは陸軍による反乱部隊鎮圧の一環で済まされるだろう」
「鎮圧で済みますか？」
「そいつはどういう意味だ？」

「近衛が反乱軍についたという口実に使われる可能性は？そう聞いたんです」
「岡山は、近衛も天皇すら恐れていない。あいつは自分の権力に酔いしれている。正しい使い方もわからず、保有することにのみ価値を見いだす厄介者だ」
「――最低」
「それだけに、反乱軍に近衛が与することは、むしろ陸軍を使って、厄介な天皇ごと潰す千載一遇のチャンスだと、そう捉えるだろう」
「そんなこと！」
美奈代は目を見張った。
「そんなことしたら、近衛と陸軍が殺し合いになる！」
「だから、近衛を潰す力が必要な岡山は、中華帝国と手を結んだんだ。自分の使えるメサイアを手に入れるために」
「……っ！」
「すでに、帝国政府に協力することを条件に、中華帝国軍へ軍事行動の許可を与える旨を宣言しているのはそのためだ」
「だって、中華帝国は魔族軍と共同歩調をとるって宣言しているんでしょう？それを味方にしようだなんて、敵に大義名分与えているのと同じ！」
「だから滅茶苦茶なんだよ。岡山は」
中野は吐き捨てるように言った。
「アイツの感覚からすれば、自分が中国人を味方に取り込めば、中華帝国は人類に踏みとどまることになる。それはつまり、自分の決断があの国を過ちから救ったことになると、本気でそうなるんだ」
「……コメントのつけようがない」
「それでいいんだ」
中野は頷いた。
「それ以外に、マトモな人間は対処のしようがない」
「……近衛はどう動くと思います？」
「中立宣言を出すはずだ。下手に動けない」

「そんなこと言ったって、岡山は、近衛の施設接収を狙っているんですよ？」
「なら、恭順の意志を示せと？」
「……それは」
「正直な話」
中野は肩をすくめた。
「この先が、俺にも読めない。結論として一番納得出来る落としどころは」
「落としどころは？」
「……」
中野は無言で首の横で右手を水平に動かした。
「どうして、それをやらないんですか？」
「俺にもわからん……いくら政治的に正しく選ばれたとはいえ、ここまで暴政を行う者を陛下が放置している理由がわからない。俺の知る陛下は、それほど慈悲深くはない」
「なっ？」
「必要とあれば、焼け火箸を握ることさえ厭わない。敵に対しては片鱗も慈悲をかけない、そういう御方だ」
「なんか……言葉だけ聞くと、岡山より厄介そうな気がしますけど」
「その通りだ」
「ちょっ！？」
「冷静になれ。反乱軍宣言、ただ、あんたは敵だって宣言されただけで、仮にも民間の、しかも、中に非武装の民間人がいるはずのホテルめがけて無警告発砲するヤツ相手に、他に評価の下しようがないだろう？何かいい表現があるのか？」
「……」
美奈代は、無言で首を横に振るしかなかった。
「まぁ、俺達木っ端役人やペーペーの兵隊であるお前が政治を議論してもしかたない。俺達に出来ることは、命じられた仕事をこなすだけ。その分の俸給しかもらっていないしな」

「そういう所、後藤隊長そっくりですよ」
「褒められてないな」
「褒めてませんが、言いたいことには同意します」
「せいぜい、民間人ごと、岡山の首を獲るまで進軍しろくらいの宣言が出ないことを祈ろう。なにしろ、あの火炎放射装置を市街地で使われたら……」
おや？
中野は、整備を受けるメサイアをじーっと眺めた後、
「そういえば、コイツはその手の装備はつけられそうにないな」
そう、ポツリと言った。
「それは当然でしょう」
美奈代は答えた。
「コイツは可変メサイアです。あんな巨大なタンクを搭載する機能は素で持っていないはず」
「……なぁ、泉」
「はい？」
「お前の部隊のメサイアは基本で装備出来るんだよなぁ」
「当然」
「それが、整備完了は今日の予定だったよな。それでどうして動かない？」
ぎくうっ！
美奈代の後ろに、そんな効果音が出現した。
「そ、そうですね」
美奈代の額を汗が滝のように流れる。
必死に作り笑顔を浮かべる美奈代の顔はもう蒼白だ。
「……補給は順調だったんだよな」
「……は、た、多分」
「――泉？」
「……はい」
「お前、さっき、現地の部下と電話していたよなぁ」

「は……はい」
「部下はその辺、何て言っていた？」
「げ、現在、整備が止まっていると」
「この騒ぎで？」
「……えっと」
「この騒ぎが原因の整備ストップかと、そう聞いたんだが？」
中野の、一言一句を区切るような口調に、美奈代は体が震えだした。
「あ……あの」
「もう一つ――あの電話で、ごめんなさいと叫んでいたのは、あれは何だ？」
「あ……あれは」
「おい、泉っ！」
無重力空間を飛んできたのは、整備と話し込んでいた都築だった。
「お前、どういうことだ！？」
「なっ！？」
「なんで、“白雷（はくらい）”改装用のパーツが“鈴谷（すずや）”に来てるんだ！？あっちの改装はどうなってるんだ！？パーツの発注者、お前になってるぞ！？」
「黙れぇっ！」
「――泉？」
いぃぃずぅぅぅみぃぃぃぃ。
地獄の底から聞こえてきたような、そんな声に、美奈代の動きが全て止まった。
恐る恐る見た顔のの顔は、真っ赤になっていて、額には青筋が走っている。
「――説明」
「……あの」
必死に動かそうとしても、顔の筋肉がどうしても動かない。
「その前に――そこ、正座」

「……はい」

「我々が“ここ”に存在していることは」

茨城県庁。知事執務室の窓から外を眺めるスーツ姿の女が言った。

「近衛の諜報機関はとっくに把握しています」

窓の外からの眺めが満足出来ないのか、女は不快そうに背筋を伸ばした。

「把握しているからこそ、近衛は“ここ”に、そして“あなた”に手出しが出来ない」

「どういうことだ」

革張りの椅子に座った岡山首相が、執務机に置かれたグラスから手を放した。

「私の威光を恐れているからこそ、天皇は手出しできないのだぞ？」

「なら、それでもいいんですけどね」

クックッと、女は生理的嫌悪感を感じさせる低い笑い声をあげた。

「自分の領土、しかも、自分の家臣たる身が、“我々”を雇っていたとなれば、立場がないでしょうから」

「誰が誰の家臣だ！」

カッとなった岡山は、グラスを掴むと女めがけて容赦なく投げつけた。

中の高級ブランデーと共に女に襲いかかったグラスは、

ブンッ

そんな音を立てて、女の直前で消滅した。

消滅？

そう。

消滅だ。

グラスは、女の直前で完全に――――消えた。

「……」

ポカン。とする岡山と、その側近の前で、女の左右に立っていたスーツ姿の男達がとっさに動いた。
ある者はスーツの袖が開き、得体の知れないかぎ爪がその手を覆う。
或いは、背に隠していた青竜刀がその手に握られる。
共通していることは、その威圧的なまでの殺気は、岡山達、居合わせた者を凍り付かせるのに十分すぎたことだ。
「――よせ」
女は冷たく言い放った。
「我々は、“警護”を任務に派遣されている」
「……」
スーツ姿の男達は、何事もなかったかのように直立不動の姿勢に戻った。
「――“飼い犬”が失礼いたしました。先生」
「い……いや」
岡山は、その場に崩れるようにして椅子の背もたれに体を預けた。
声が震えている。
「天皇と先生の関係について、我々が語ることは避けましょう。とにかく、我々は先生の身辺を護るよう、皇帝陛下に命じられたからこそ、ここにいる。その事実に片鱗の変化もないのです」
「そ……そうだな」
岡山はネクタイを緩めながら、バカのように何度も頷いた。
「私は、皇帝陛下から、この国の統治者として認められたのだからな」
「――そうです」
女は冷たい笑みを浮かべ、頷いた。
「陛下は、先生をお守りするために、メサイア部隊も派遣して下さる。先生は、この国の王として、ただ、君臨されることをお考えになればよい」
「ああ。そのために、陛下のお望みのメサイアのデータを狩野と近

衛から取り寄せているところ――いや、提供を拒むあのバカ共に鉄槌を喰らわそうとしている所だ」
「そうですか」
「ところで、中華帝国軍のメサイア部隊は、いつ頃、ここに来るんだ？」
「もう間もなく……すでに元長野県付近に飛行艦が到達。先生？飛行艦の国内通行許可は？」
「国交大臣を通じて発布している。心配するな」
「重畳――なら、夕方までに先生の御身は、メサイア部隊と、我々中華帝国方術騎士団によってお守りすることになるでしょう」

反乱軍――自称、救国革命軍の本拠は、赤坂プリンスホテルに設置されている。
市ヶ谷駐屯地所属部隊が正規軍として、反乱軍に対応すべく、司令部が独断で防衛命令を発動した結果として、司令部が命令違反に問われた政府の処遇は、陸軍のほとんどの部隊司令官の腹を決めさせるのに十分だった。
少なくとも最前線の部隊はともかく、後方待機中の政治的に動く余裕のある部隊は、続々と反乱軍への同調を宣言している。
政府軍に固執する部隊は、大凡が事前から政治的に岡山シンパで司令部が固められているような部隊ばかりで、その数は決して多くない。
その気になれば、この時点で彼等が茨城県庁へ向けて侵攻を開始すれば、全てはそこで終了していたと言い切れる状況だった。
県庁に立て篭もる岡山達を逮捕、もしくは処刑。そして民州党政権の打倒。後は反乱軍を主導した政治家達による革命政権の樹立で終わりだ。
それで、彼等の世直しは終わるのだ。

――所が。
「……だめだ」
茨城への侵攻を求める陸軍司令部達を前に、反乱軍首脳である石橋は首を横に振るわなかった。
「茨城県民に被害が出れば、それだけで革命政権の樹立は困難になる」
「必要な損害です！」
「いかん！」
石橋は怒鳴った。
「この革命は武力闘争ではない！殺し合いになってはならんのだ！」
「何故です！」
陸軍司令部を代表する陸軍第教導一師団第三中隊長、生駒中佐が声を張り上げた。
「茨城県庁まで、立ちはだかる者は存在しない！あなたはここに至って、何を恐れているんですか！石橋先生！」
生駒にとって信じられないのは、岡山政権打倒を前にして、軍の行動を止めようという石橋の姿勢だった。
石橋は、無血による政権樹立を目指している。
つまり、自分達は単なる飾りだと、そう言ってるのにも等しい。
「師団長閣下と、どういう協議をしていたかは知りません！しかし！」
「それより先にやることがある」
「何ですか！？」
「議会だ」
「はあっ！？」
生駒は目を丸くした。
「何言ってるんですか！？この状況で議会！？招集するだけで何日かかるんですか！？」
「それでもやるんだ！」
どんっ！

石橋はデスクを叩いた。
「議会で内閣不信任決議を採決させ、天皇陛下の承諾を頂戴するのだ！議会の正当な手順を踏み、内閣を打倒することこそ、我々の望むところだ！それ以外の手段をとれば、諸外国に軍事介入の口実を与えかねない！」
「……」
生駒は絶句した。
目の前の政治家、いや、目の前の男の言うことが信じられなかった。

こいつはバカだ！

生駒は本気でそう思った。
この混乱した中で国会を開け？
国会の議論の結果として、内閣を打倒する？
ふざけるな！
与党は議会の過半数を超えている。
議会開催に必要な議員の数が何人か、俺にはわからないが、それでも、かなりの数の国会議員が政府側についた軍部隊によって拘束されていることは知っている。
国会議事堂を確保しても、定員不足で散会したらどうするつもりだ？
議員をどこから集めるつもりだ？
そんな状況で議会？
こいつは、何を言ってるんだ！
「――先生」
「議会を開くことを要求するため、飯田議員達が、陛下に議会開催を求めて参内中だ」
「もし、もしもですよ？」
石橋達と共にシナリオを描いた司令部はもう政府軍についた部隊

によって拘束されている。
石橋達のシナリオなんて、司令部の誰かから、政府軍に流れていると判断して、時間的には十分だ。
だからこそ、相手が手を打つ前に、先手を打たなければならないのに！
生駒は、腰のホルスターに手をそっと伸ばしながら訊ねた。
「議会が開けなければ？」
「そのときは」
石橋は、しきりに指でデスクを叩きながら答えた。
「そのときだ」
「……自分は」
生駒は言った。
「自分は、この日本を正しい道に戻したい。その一心で部隊と共に決起に参加したのです」
その手には拳銃が握られている。
目前の石橋は、信じられない。という顔で自分に視線をむけている。
「それを――――あなたは単に利用した、自分はそう判断します」
石橋の目が見開かれ、大きく開けられた口から、何か言葉が出た。
しかし、生駒はそれを聞くことはなかった。

石橋が見ていたのは、生駒ではない。

生駒の後ろ。

窓の向こうに、突然現れた、漆黒のメサイアの存在だった。

嵐吹き荒れて　第五話（前書き）

ご無沙汰してすみません。うつ病の上、いろいろと人生状の問題も多発した結果、更新が遅れています。作品も人生もいろいろ頑張りますから、今後共、応援お願いします！

今回、普段より尺が短いですけど……今後の流れが変わる転換点の一部です。読んでください！！

嵐吹き荒れて　第五話

可変強襲型メサイア――紅龍（こうりゅう）が最終整備を受けているのを、中野は無言で眺めているしかなかった。

「古巣が恋しくなったのか？」

「懐かしい、そうは思いましたけどね」

坂城が投げてよこしたドリンク入りのチューブを片手で受け取る。

さっきまで怒鳴り続けていた喉が痛む中野としては飲み物はありがたかった。

散々怒鳴られた美奈代は意気消沈して、しゃくりあげながら、引き出されたコクピットユニットの最終調整のため、ＳＴＲシステムに身を包み、整備兵達による四肢のフィッティング確認に協力していた。

「嬢ちゃん、いい加減な回答しなけりゃいいけどなぁ」

坂城が心配そうに言うのも無理はないと、中野は思った。

騎士の四肢の動きをメサイアに反映させるＳＴＲシステムは、ほんの少しのセッティングの違いが、ダイレクトにメサイアに動きの違いとして反映されてしまう。

ゼロコンマ数秒が生死を分けて当然な騎士とメサイアの世界で、それは時に致命的状況を生み出すことになる。

セッティングは常に騎士にとってベストでなければならない。

システムを分解しても、そのフィッティングを狂わすことは許されない。ベストな状況を維持し続けることが整備には求められる。

整備兵の中でも、特に訓練を受けた者以外がＳＴＲシステムに触ることさえ許されていないのは、そうした事情がある。

元整備兵として、中野はその段階まで達していない。

かつてはＳＴＲを整備できる特務整備兵の徽章が眩しく感じられたものだが、今となってはメサイアの存在自体が隔絶された感覚さえある中野は小さく頷く程度だ。

「それにしても」
坂城は喉の奥で笑った。
「嬢ちゃん、随分絞られていたな」
「こっちも疲れましたよ」
「上の仕事だ。昔の俺の苦労が分かったろうが」
「俺、あんなに無能でしたか？」
「お前ぇは、デキが良すぎる意味では問題児だったよ。怒り甲斐がねぇつーかな」
「……どうも。それにしても」
中野は言った。
「こんなのが、現実になったんですねぇ」
「変形するメサイアなんて、使い道があるとも思えなかったがなぁ」
「アメリカじゃ、“ブラッティ・ファントム”が実用化されている」
「はん。あんな程度で、なぁにが“戦域支配メサイア”だぁ？そんなものはＦｌｙ　ｒｕｌｅｒ見てから言えってんだ」
「敵支配地域の対空網を、メサイアの電子妨害を活用しつつ強行突破。機甲部隊を含むテロリストを抹殺し、その拠点制圧及び人質の奪還などの特殊任務をサポートする」
中野は、チューブの残りを飲み干し、手すりに体を預けた。
久しぶりの無重力の感覚が体に懐かしい。
「運用的に言いたいことはわかりますけど、意味がわからない」
「こんなもの理解したきゃ、開発者のノリと勢いがわかるだけで十分だ……まぁ、テメエは、真面目しか脳がないからついていけないだろうがな」
「……」
「ノってみろよ……まぁ、さすがに紅葉が開発しただけあって、紅龍の変形は見事なモノだぜ？変形する度に回転したり、余計なポーズとったりする余計な仕様がなきゃな」
「メサイアが見栄きってどうするんです。歌舞伎じゃあるまいし」
「そうはいうが、この派手な色のメサイアがスピン回転しつつ変形

してポーズ決めるシーンは見物だぜ」
「一体、何に使うつもりだったんです？」
「敵に、航空機と誤認させて、迎撃機があがった所でメサイアしたってわかったら面白いだろうなぁ」
「はぁ？」
「紅葉はそう言っていた。ようするに、敵は大型の航空機が攻めてきたと思って、迎撃機を上げる。これはまあ、当然だ。所が、実際に接触したらメサイアだったって寸法だ。紅葉は、慌てふためく敵の顔を拝みたい一心で、勢いでこれの設計初めて」
「初めて？」
「途中で飽きた挙げ句、別なメサイア組み上げ始めたもんだから、思い出した頃にようやく組み上がった……本人曰く、“天才は忘れた頃でも天才よねぇ”」
「……天災の間違いでは？」
「今は、魔族軍陣地の貴重な強行偵察他のいろんな任務に就く特殊部隊に貸し出していたが、何でも、その部隊が解散したから、もう用済みなんだとか」
「何です？そのいろんな任務って」
「いろんな――さ」
「……そう、しておきましょう」
「はっきり、浮いた騎体なんだが、紅葉や“奥”としちゃあ、いろいろ隠しておきたい存在だ。ソイツが表に出るってことぁ」
「コイツ以上の存在を生み出す自信があるのか、あるいは、そこまで追い詰められたのか」
「紅葉にしても、コイツのカードは切りたくなかったろうなぁ」
「それでも切った。その背景は？」
「フン。決まってるだろう？」
「？」
「テメエがドロ被ってでも、嬢ちゃん達を助けたいからさ」
「……成る程？」

「まぁ、俺達が“ウェーブライダー”と呼ぶ飛行形態と、メサイアの2モードの変形に必要な時間は3秒。
脚部に埋め込まれた飛行専用エンジンは、ＴＡＣからの流用とはいえ、ウェーブライダーモードの高度1万フィートでの最大スピードとしてマッハ2．5を叩き出す」
「脚部、耐えられるんですか？」
「そこが紅葉のクオリティってヤツよ」
「滅茶苦茶だ……俺には絶対、理解出来ない」
「ご都合主義的なほど、アイツはいざってなると発想がよく回る。推力全部を、背部と脚部増設ブースターに頼る“ブラッティ・ファントム”とじゃ、空戦だけなら良い勝負だろうよ」
「え？紅龍の圧勝でしょう？」
「バカいえ」
坂城は笑った。
「メサイアとしての心臓は単発だ。推力をメサイアとしての心臓に頼って尚、マッハ1．5を絞り出す“ブラッティ・ファントム”は、かなりの強心臓を持っていると思うぞ？」
「……成る程？」
「両方とも、武装はビーム系以外は搭載出来ない点では一緒だ。意味のなさって点でもドングリの背比べだな」
「そんな騎体で、何しようってんです？広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）も搭載出来ない、単発でビームライフルしか携行できない。斬艦刀も無理。ないない尽くしのメサイアで」
「そこだよ」
常にレイバンのサングラスを外さない坂城は、口元で楽しげに笑った。
「葉月にゃ、“エモノ”は山ほどあるだろうが」
「……まさか」
エモノ。
その言葉を、獲物――つまり、敵対する陸軍部隊と解釈した中

野は、坂城の邪悪な笑みから、自分が間違った判断をしていることを即座に悟った。
「現地で斬艦刀を振り回せるように、手は“幻龍改（げんりゅうかい）”のシステムを移築している。本来なら、脚部のエンジンをメサイア用に変更して、ＡＩＴシステムに増設ブースターユニットとしゃれ込む予定だったんだがなぁ」
「そのための莫大な予算」
中野は、坂城が言っていることを、事務官の立場で考えて目眩がした。
「誰が、どうやって確保するんですか？」
「戦時下だ」
坂城は中野の肩をポンと叩いた。
「お前ぇは、そのための存在だろうが。俸給分は働け」
「……無茶苦茶だ」

「トランスフォーム……ねぇ」
美奈代はコクピットのＳＴＲの具合を確かめながら珍しそうに言った。
「何？かけ声とか、ポーズとらないといけないとか？」
「戦隊モノやってんじゃないんですから」
ＳＴＲの管制システムと端末を接続して調整を続けていた整備兵が、モニターから目を離さずに言った
「騎士の方じゃ不要ですよ」
「……え？」
「騎体の方でやってくれます。スピンターンにシールド突き出してババーンってヤツ」
「……」
「特務隊の連中、ソイツが恥ずかしいから何とかしろって怒鳴るんですけどね？コイツがまた、システムの根幹部分でセッティングさ

れてるから、俺達にゃどうしようもない」
「イカつい特務隊連中が、そんなロボットアニメじみたコトしてるの見て、お腹抱えて笑っていたってのが本音じゃないの？」
「さっすが大尉だ。わかります？」
「私があなたたちの立場なら」
美奈代は肩をすくめた。
「同じ事してるわ。きっとね」
「どうも……んで、特務隊も、もう解散した結果、コイツはハンガーの奥で紅葉ちゃんが思い出して改装するまでホコリ被っているはずだったんだけど」
「ちょっと待って……特務隊が解散って……何？どうして？」
「さぁ？ただ、噂ですけどね」
整備兵はキーを叩く手を止めて美奈代を見た。
「何か、紅葉ちゃん達とは別なルートでメサイアの開発が進んでいるっていうし、そっちの回ってるんじゃないですか？」
「……よくお金があるわ」
「本当ですよ。俺達の俸給に少しは回して欲しいですよねぇ」
「同感」
美奈代は喉の奥で笑うしかなかった。
「……で？コイツの武装は？」
「何もないですよ」
「……へ？」
「固定式のＭＬ（マジックレーザー）が４門あるだけ。他の武装は今の所、ありません」
「私達に何しろっての？そんな丸腰で」
「紅龍なんて可変メサイアが採用されなかった理由は、そのヘンなんですよ」
青くなった美奈代が面白いのか、その整備兵は笑った。
意地の悪いその笑みに、美奈代はふと、中野を思い出し、ハンガーの壁を走るキャットウォーク上で坂城と共にこっちを見ている中野を見つけ出した。

悔しいというか、殺意さえ沸き上がらせるその顔、その視線に気付き、美奈代はふぃとそっぽをむいた。
「大尉？」
「……何でもない。それで、可変メサイアが配備されなかった理由って？」
「武装を搭載出来ないからですよ。変形の邪魔になるから」
「斬艦刀なんて……無理の代名詞みたいなものか」
「当然、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）もね……よかったですね。特務隊なんて、空力に支障が出ること承知の上で、脚部に魔族軍から分捕った小型戦斧を無理矢理マウントさせていましたからね」
「気休めでもいいから武器を頂戴」
「デフォで搭載出来るのは、ビームライフルだけですよ。ホントの所、あと少しで、ラムリアース帝国が開発に成功したビームサーベルが搭載されるはずだったんですけどね」
「ビームサーベル？」
「ロボットアニメで見たことありません？光の剣」
「……昔、何かで見たような」
「警棒を思い出して下さい。あの伸び縮み出来る……出力や機構の関係で、斬艦刀より破壊力は落ちますけどね？
斬艦刀の刀身フィールドを、警棒に開けられた無数の穴から噴出させて、警棒全体を刀身フィールドで覆うんです」
「エネルギーロスが多すぎて、出力で負ける？」
「その通り。大尉はさすがですね。刀身フィールドを固定された、狭い範囲へ集束する斬艦刀と違いますからね。どうしてもロスが出ます。反面、斬艦刀で悩みだった、そのサイズという問題からは解放されます」
「一長一短……かぁ」
「特務隊の連中に渡らなくてよかったですよ。斬艦刀との性能差をどうにかしろだの、俺たちゃ開発じゃないって、わかってくれないですからね。彼奴等」

「言いたい立場もわかるわよ……わかってあげて」
「……まぁ、ねぇ」
整備兵は肩をすくめた。
「まぁ、ほら。特務隊が任務から外されたにしても、彼奴等ももう交代時期でしたからね。後任がもう少しマトモだったら、俺達の態度も変わるでしょうよ」
「後任……って、人手がないんでしょう？」
「ええ。みんな、カネもなければ人手もないんですよ。俺達だって、猫の手どころかアリの手だって借りたい」
整備兵は意味ありげな顔をした。
「……いくら？」
「お気持ちで」
「1万」
「部隊長はともかく、この4騎のうち、1騎は大尉が知ってる騎士が乗るはずだったんですよ」
「誰？」
「……さぁ？」
「ったく、こっちだってお金ないっての。坂城さんに告げ口してあげようか？セクハラされたって」
「隊長怒らせるセクハラって、そう簡単じゃないからねぇ」
「1万払うから、やらせてくれって言われた」
「うわっ！ソイツは勘弁だ！」
「でしょう？」
「ちっ、5千でいいよ。故郷に疎開している娘に、少しでもカネを送りしたいんでね」
「言いなさいよ。後で追加で1万ね？」
「感謝……」
整備兵は、周りを見回した後、小声で言った。
「絶対、俺から聞いたなんて言わないで下さいよ？」
「言わないわよ――誰？」

「――染谷少尉ですよ」
「染谷……少尉が……？」
美奈代の脳裏に、懐かしい程、遠くなったその顔が浮かんだ。
かつて、恋い焦がれたはずなのに、どうしてこんなに遠く感じるんだろう。
「……」
その時、美奈代が何故、中野の顔を見たのかは、美奈代自身が説明出来なかった。
「退院した後、リハビリも進んでいたみたいですけどねぇ。いや、親が親なだけに、腕のいい療法魔導師を手配してもらったんじゃないですか？羨ましいこった」
「……」

ビーッ！
ビーッ！

緊急を伝える警報がハンガーに鳴り響いた。
「総員傾注！」
副長の声がスピーカー一杯に鳴り響く。
「……え？」
ポカン。としたのは、美奈代だけではなかった。
整備兵や、あの中野でさえ、その内容には、ただ、立ち尽くすしかなかった。
副長は告げた。

反乱軍司令部は――自決。

反乱軍全軍に対して、無条件原隊復帰が命じられた。

「簡単なことだ」
中野は言った。
「政府は、反乱軍司令部だけを潰したんだ」
そこまで言って、中野は自分を取り囲むように立つ美奈代以外の存在に気付いた。
「……って、おい。俺にこんな所での発言権はないぞ」
「構いません」
美奈代は言った。
「状況を理解しているのは、ここにいる中では大尉だけでしょうから」
「俺を買いかぶりすぎだ」
小さくため息を吐くと、中野は答えた。
「どっちの勢力としても、全面的な対決は避けたいというのが本音だ。海外からの勢力を巻き込んだなんてなれば、それこそ収拾の付かない泥沼状態になるからな」
「で、ですけど」
寧々が訊ねた。
「反乱軍司令部は自決した……公式発表では、そうなっていましたが」
「歴史はいつだって勝者のものだ。今、まかり通るのは敗者となった反乱軍の言い分じゃない。あくまで政府の言い分、都合のいいことだけだ」
「何かあったってことか？」
都築は怪訝そうに眉をひそめた。
「反乱軍は、戦局の面では優勢だった。自決なんて考えられないぜ？」
「反乱軍がしくじったことが一つだけある」

「何だよ」
「本陣がどこにあるか、はっきりしすぎたことだ」
「回りくどいな。はっきり言えよ」
「赤坂のプリンスホテルに司令部がある。ここを狙って叩けば良い。まだ東京周辺は狩野粒子の影響は低い。誘導ミサイル数発でケリがつく……理屈の上ではそうだ」
「それを――やったと？」
「多分……だ」
「はっきりしろよ。おっさん」じれたように都築が言った。
「ミサイルでケリをつけたってことだろう？」
「例えそうだとしても、本当に陸軍がやったのかわからん。何より、今の政府が本当のことを言うとは思えない」
中野は都築に答えた。
「――俺はそれを恐れている」
「……考えるに、どこの勢力だと思いますか？」
美奈代は訊ねた。
「大尉は、ミサイルじゃなくて、メサイアが使われた可能性を恐れているんでしょう」
「近衛じゃない……むしろ、近衛なら茨城県庁を襲うのが筋道だ」
「じゃあ」
「……とにかく、俺が言いたいのは、これは反乱軍の自滅じゃなくて、政府軍が潰したってこと……それだけだ」

一体、何だったのか。
この騒ぎは何だったのか。

唖然とする国民を尻目に、岡山首相が東京へ“凱旋”というニュースがトップを飾る。
反乱軍については一切の報道がされない。

プリンスホテルについては映像さえ流れない。
昨日まで激しい煙が立ち上るのが確認されたホテル周辺の道路は、軍と警察によって厳重に封鎖されたまま。テレビには映像さえ流れない。

反乱軍司令部は、敗色が濃くなったことから、自らの犯罪的行為に対して責任をとるため、ホテルの一室にて爆発物を使用し、爆死したものと見られる。

これが政府の公式見解だ。

しかし、人の口を黙らせるのには、あまりにも発信源の信頼性は低下しすぎていた。
反乱軍司令部の“自決”報道が喧伝される中、インターネットの掲示板には書き込みが殺到していた。

“目撃者”を名乗る書き込みの内容は、ほぼ一致していた。

黒いメサイアがホテルに襲いかかった。

これだ。

いかに政府が報道管制を敷いても無駄だった。
人が求めるものは真実ではない。
己の欲求、知的欲求。
政府が隠し通そうとする秘密を暴き立てたい、或いはのぞき見たいという、いわば好奇心だ。

政府がもみ消しに動いた頃には、掲示板大手サイトには“黒いメサイア”、“赤坂プリンスホテルの真実”などのスレッドが乱立、

誰にも手に負えない状況。
政府が情報の管制に動けば動くほど、それに反発するかのように、噂が噂を呼び、騒ぎが騒ぎを引き起こす悪循環。

近衛が武力行使した。
近衛のメサイアがやった。
天皇は反乱軍を鎮圧した。

それが定着しかけた頃、事件があった当時、ホテル付近にいたというユーザー達が騒ぎに参加するようになってから状況は一変した。
彼等のうちの何人かが携帯電話のカメラで撮影したという、黒いメサイアの姿が掲示板に次々とインターネット上にアップされるに至って、真実はすぐに世界中に発信された。

近衛の新型。
そんな書き込みがほとんどいなかったのは、そのメサイアを多くの者が知っていたからだ。
黒いメサイアは日本製ではない。
そこに描かれていたのは日の丸ではない。
近衛を示す血の楔でもない。
黄色地に龍の紋章――中華帝国軍所属騎を示したものだったからだ。

陸軍が撤収し、一応の安堵が広がるラボの片隅で、“白雷改”達の回収が全く進まないことに苛立ちを隠せない紅葉が、四苦八苦してようやく外部回線から黒いメサイアの画像を入手したというほむらの個人端末をのぞき込んでいた。
「……赤兎の新型ね」
画像を見た紅葉は言った。

「よくもまぁ、黄龍章をつけたまま、この神聖なる国土に土足で踏み込んでくれたものだわ」
「国籍を隠す、或いは国籍を擬装することは国際法で禁止されています」
ほむらはそう言って、紅葉に端末を渡した。
「日の丸つけてこなかっただけも褒めてやるべきね――こいつらの現在位置は？」
「不明」
「不明？」
「近衛にも照会しましたが、日本、少なくとも人類の支配地域において中華帝国軍の存在は確認されていません」
「じゃあ、こいつら一体、どこにいるのよ」
「だから、不明です」
「使えないわね」
「私が、ですか？」
「あんただけじゃなくて、近衛がよ」
「近衛も、それが知りたいから」
紅葉は大きく開かれたハンガーに搬入されてきた赤いメサイアに視線を向けた。
「さっさと“アレ”を動かせるようにしろと言ってきたんじゃないですか？」
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒがいるでしょうに」
「偵察機能なら、Ｅ－ＷＡＣＳが」
「アレはもうずっと昔に空にあがったままよ。追加建造しろとか指示が出そうな勢いでコキ使われている」
「……ああ」
ポンッ。とほむらは手を叩いた。
「鵜来少尉って人が部隊に戻ってこないのってそのせいですか？」
「そう。本当なら、いそうなあたりにアタリつけて」
紅葉は端末をほむらに返すと、苦々しげにハンガーベッドに寝か

されたままの“死乃天使”を見上げた。
「コイツに強行偵察させるってミッションもあるんだけどね」
「それって私が？」
「私達――ね。死にたきゃ単騎でやってもいいけどね」
「……」
「ったく！ほむっ！？外部回線が通じたら中野のどアホを呼び出して！」
「私、あなたの秘書じゃありません」
「うるさい、あんたは死ぬまで私の奴隷二号なの！私がそう決めたんだから、御主人様に逆らうな！わかった！？」

「――おい」
「……って、その声は」
「誰がどアホだと？」
紅葉が振り返ると、そこには顔を引きつらせた中野と、その横で小さくなっている美奈代がいた。
ほむらはとっさに敬礼するが、中佐待遇の紅葉はおかまいなしだ。
「役立たずのバカ補給部の、アホのクソ大将が何のご用？」
「……補給部門の一応のトップとしてワビをいれに来たんだが」
中野は整備中の“死乃天使”を一瞥して言った。
「こりゃ……ワビじゃ済みそうにないな」
「当然でしょ！？」
紅葉は怒鳴った。
「こっちだって、いざって時に備えて死ぬ気で設計してるのよ！？遊びでやってるんじゃないの……って」
紅葉は、そこまで言ってから、
「……ちょっと待って」
すーはー
すーはー
数回、深呼吸をした後、

「……ほむ？そこに転がっているビームサーベル、マニュアルでテストモードに入れて」
「何する気ですか？」
「中野の返答次第で、泉大尉をそいつで切り刻んでやる」
「これは人間が扱えるサイズじゃありません」
「私は常識から超越した女よ……中野大尉？質問したいんだけど」
「……その質問とやらは、多分、アタリだ」
「――泉大尉」
「は、はい」
名前を呼ばれた美奈代は引きつった顔で数歩、後ろに下がった。
「……なんでしょう……か」
「……補給部門が部品発注をミスしてくれたおかげで、私の大切なメサイア達は動かすことも出来ず、状況によっては部隊どころか私の身まで危険でした」
「た、大変でしたね」
美奈代は、自分の歯の根がガチガチ鳴っているのを確かに聞いた。
「ここでクイズです」
「お……お手柔らかに」
「補給部門で発注していたのは」

「ちょっと美奈代っ！？」
ハンガーに響き渡ったのは、さつきの怒鳴り声だ。
「何よ！？都築から聞いたわよ！？部品発注ミスってくれたのって、美奈代だっていうじゃない！なんでそうドジなのよ！私達、おかげで死ぬところだったのよ！？」

気まずいほどの沈黙が、一瞬、世界を支配した。

「……ちーん」
ほむらがそっと手を合わせた。

「あ……あの」
背筋を滝のように脂汗が流れるなか、美奈代は訊ねた。
「く、クイズの続きは？」
紅葉は、ニッコリと笑って言った。
「――――死刑と私刑、どっちがいい？」

“私はバカです”
そう書かれたプラカードを下げ、ハンガーの隅っこで正座させられた美奈代を尻目に、紅葉は中野に言った。
「とりあえず、部品はいつ届くのかはっきりして頂戴。いくら出向中のあのポンコツの不始末だからって、責任は補給部門にあるはずよ？」
「わかっている」
中野はメガネのツルに指をやると答えた。
「書類ミスを見抜けなかった俺のミスでもあるしな」
「……へぇ？」
紅葉は意味ありげに中野の真横に来ると、その顔をのぞき込んだ。
「……何だ？」
他人には完全なまでなポーカーフェイスにしか見えない中野だが、
「惚れた弱みってヤツ？」
紅葉はまるでチェシャ猫の様な笑みを浮かべ、そう訊ねた。
その顔に、かつての上司にして教師でもあった人物の顔を思い浮かべた中野は自然と視線を逸らせた。
「……俺は公私混同はしない主義だ」
「……キスしたのに？」
「……」

ピクッ。
ほんの少しの体の動き。というか、中野の眼がほんの少しだけ見開かれたのを、紅葉は見逃さなかった。
「……やっぱり本当なの！？」
逆に驚いたのは紅葉だ。
「クーデター騒ぎが起きる前まで、近衛の女性ネットがパンクする位の騒ぎになっていたけど、ねぇ、あれって本当にキスしたの！？」
「……誰から聞いた？それから、あれって何だ？」
「近衛の女性職員向けの掲示板があるんだけどさぁ」
「……噂では聞いている」
中野は顔をしかめた。
近衛に勤務する女性職員向けに一部有志が設置した掲示板。
巧妙に手がかかっており、傍目から見ればデータ検索しているのか、それとも掲示板を使っているのか全くわからないという厄介な代物で、たとえ噂だろうと掲示板に書き込まれたら最後、その日のうちに、数万人に達する近衛女性職員のほぼ全てが噂を知ることになるという、当然ながら男性管理職からはいろいろと恐れられている代物だ。
「別名、近衛の2ちゃんねるだっけ？お前、そのトシでそんなモノ見てるなっていうか、そんなヒマあるのか？」
「うるさい。そこのほむなんてはまってるんだから」
プルプルと首を横に振るほむらを尻目に紅葉は言った。
「そこにね？ハンドルネームは“中野しゃんの妻”って人がスレッド立てたのよ。“この泥棒猫は誰？”って」
「泥棒猫？」
「……キスしたのって、休憩所でしょ」
「……お前」
「物陰から撮った写真なんだけど、残念なことに肝心の顔のあたりがさぁ、ちょっと隠れてるのよ。おかげで、キスしてることだけはわかるんだけど、その肝心の部分が」

「――大尉」
ほむらがそっと中野の震える腕を止めた。
「上官への暴行罪は重罪です」
「……佐々木……あのノラ娘が……」
「んなの誰だか知らないけどさ。補給部門に出向中の武官でしかも女性で大尉なんて、泉大尉しかいないじゃん？」
「……それ、本当に知られているのか？この段階でお前がカマかけているってことは」
「それが最後の希望ならご愁傷様。本当にみんなが知っていることよ」

ガッシャーンッ！
「落ち着け、涼！？」
「あなたを殺して私は尼になるますっ！お姉様っ、お覚悟をっ！」
「ちょっとぉっ！？誰か、何が起きたか説明してぇぇっ！」

逃げ回る美奈代と、散弾銃を片手に追いかける涼が真横をすり抜けていった。

「――ね？」
「ね？の意味がわからんが……おい」
「――わかってるわよ」
紅葉は真顔で頷いた。
「おちゃらけしているばかりじゃ、仕事が始まらないもの。本当の話、補給パーツは？」
「ここに来るまでに、部門内で何とか話をつけておいた。埠頭の倉庫にまでは来ているから、急いで必要なら書類を整える。ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）を用意してくれ」

「さすが悪魔の中野。仕事が速い」
「そんなに急ぎか？」
「ええ」
紅葉は頷いた。
「反乱軍を叩いたってことは、間違いなく政府が雇った……よくて傭兵。悪かったら」
「一国の首相が自国の軍を鎮圧するために他国の軍を国内に招き入れたなんて、前代未聞だぞ」
「前代未聞どころか、あってはいけない話よ。議会が開催できないことをいいことに、やりたい放題。陛下もさすがにトサカに来てるみたいでね」
「……おい」
「かといって下手に動くことは出来ない。高高度偵察や衛星軌道上での軍事衛星なんて使えない状況下だから」
「……」
「だから」
ピラッ。
紅葉がデスクの上からつまみ上げ、そして中野に見せたのは一通のファックス用紙。
「陛下が独自に動かせて、しかも、どんな任務でも達成できる“有能な”部隊に動員命令が来た」
中野の目が見開かれたのは無理もない。
ただ一枚のファックス用紙。
違う。
そこに書かれているのは、命令文書。
しかも――
「……成る程？」
中野は、ハンカチを取り出すと額の汗をぬぐった。
“ソイツ”がウソで流れるはずもない。信じるしかないな」
「でしょう？」

紅葉はニコリと笑った。
「紅龍で編成される部隊の訓練はすでに終了。今日の夕方にはここに騎体引き渡しのため来ることになっている」
「慣れない騎体。部隊単位と言えない任務……」
対する中野は苦い顔だ。
「紅龍を危険に曝して実施される作戦……か」
「違うわ」
紅葉は言った。
「私の秘蔵っ娘を預ける以上、“この程度”の作戦はやってのけて当然」
「……」
「むしろ、その“リスク”の上でしか成立しない作戦をやってのける泉大尉達、独立駆逐中隊の方を褒めてあげて」
「褒める……か」
「そうよ」
紅葉は真顔で頷いた。
「開発部門の意地にかけて、今日中に最終調整にまで持って行く。近衛の第三眼（サードアイ）がそれらしい部隊の動きは捉えているから。
出撃は明日０３００。目的は、富山湾周辺の魔族軍陣地。目的は、現地に潜んでいると思われる中華帝国軍の存在を確認すること」
「紅龍部隊は囮……か」
「そう。各方面に強行偵察したフリをしてもらう。正直、危険じゃない作戦なんてね？私の周辺には存在しないわ。だからこそ、私が前線にいるのよ」
「“見通者（シーカー）”のお前がどうしてか、その意味をはっきり聞いたな」
「ね？私だって命がけなの。だから、補給には便宜はかってね？」
「……努力しよう。ただ」
「ただ？」
中野は、命乞いする美奈代と、彼女を射殺しようとして周囲に羽交い締めにされる涼を見て、ぽつりと言った。

「俺には、そんなリスクを任せるに足る精鋭だと、どうしても思えんがな……」
「……同感」

強攻偵察作戦　第二話

●神奈川県米軍陣地付近

その頃、日本に派遣された米兵達は日本という国の政治のいい加減さに呆れながらも、自らの義務に邁進していた。

昔の昔から言い続けていた小銃の更新がこの時点でようやく始まったのだ。

Ｍ－１６やＭ－４などの５．５６ミリ小銃弾が、中型妖魔相手には何ほどの役にも立たないと、軍司令部がやっと分かってくれた挙げ句、口径を大きくした銃が彼等の元に送られてきた。

日本軍が、９．７ミリという大口径弾を採用したことは既に米兵達の間でも話題になっていた。

兵士達が最も戦場で相まみえる相手は、“オーク”と呼ばれる犬面、もしくは豚面の人間型小型妖魔と、節足動物を大型化したような“スコーピオン”タイプ、そして“猛牛（ブル）”と呼ばれるサイのような中型妖魔が中心。

こいつらの共通事項は三つ。

完全に敵であること。

話が聞く相手ではないこと。

そして――自分達の持つ自動小銃なんかで相手になる存在ではないこと。

各地の陣地防衛戦において、突進してくるオーク兵を食い止めようと、兵士達は５．５６ミリ弾による弾雨を浴びせかけたが、直撃を受けたはずのオーク兵達は、その突撃速度をほとんど緩めずに陣地へ突入、米兵達はその手にした戦斧で挽肉にされた。

こんなケースは、魔族相手の戦争では枚挙に暇がないどころか、

むしろ当たり前のことだ。
前々から噂にこそなっていたことだが、実地で5．56ミリや7．62ミリ弾が妖魔相手には無力であることを知った米軍兵士達は、こぞって本国へ手紙やメールを送った。

軍補給部に対しては、倉庫で眠っているM－14の配備を。
家族に対しては、市販でいいから7．76ミリ口径以上の銃を送ってくれと。

本当に彼等が欲しがった銃は一つだ。
バレットM82A1。
12．7ミリ弾を使用する対物ライフル。
そんなものでもなければくたばる相手ではないのだ。

日本軍がそうであるように、米軍も兵士達の要望を無視することは出来なかった。

今まで5．56ミリ弾薬で凌いでこれたのだから問題ないという軍首脳部の意見は、経験者からすれば、狭隘を通り越して殺人的なものとして世論に酷評された。
国民は戦勝は求めるが、戦死者を求めてはいない。
そんな合衆国を尻目に、彼等にバレないと思う幸福な頭をした日本軍でさえ、密かに9．7ミリ口径の新型弾を使用する小銃を開発した。
一発必殺の兵器を配備しなければ、兵士達が反乱さえ起こしかねないと判断した米軍は、9．7ミリ口径を用いた小銃の開発を数社の世界的著名メーカーに発注した。
すると奇しくも、全メーカーが同じ回答をしてきた。
数万挺を前提とした場合を前提とした場合、フルオート、セミオート双方での射撃は不可能に近く、安全性を保証出来ないというの

だ。

そして、彼等が逆提案してきたのはボルトアクションライフルだった。

日本軍がフルオート化を諦めたのと同じ事情が働いたのだ。

この中で採用が決定したのは、ＸＭ－２０２と呼ばれた試作銃。

別口径のスポーツ射撃用に開発され、お蔵入りしていたのを、あるメーカーが引っ張り出してきたものだ。

参考とされたのは、イギリス軍のＬ１１５Ａ３軍用狙撃銃。

ボルトアクションライフルとしては珍しい、銃身と銃床が一直線上にある直銃床方式の銃で、大型のサムホールと共に、曲銃床に慣れない兵士でも直感的に扱える外見を持っており、しかも、他のメーカーが木製ストックを採用したのに対して、生産のコストも手間も圧縮できる強化プラスチック製によるパーツを多く採用する他、等倍のスコープを取り付けたり、参考となった狙撃銃に組み込まれていた命中精度向上のための機能を生産効率重視の観点からほぼ全てオミットし、市販されている狩猟用ライフルと同程度という簡単な機関部を装備することで量産性を向上した代物。

安くて撃ちやすくて、そして頑丈な機関部を持つだけが取り柄な銃。

オーナーが中国系アメリカ人であるというのがすごく納得出来るこの銃は、整備性と生産性の高さから即座に採用が決定した。

断っておくが、命中精度や耐久性とか、そういう問題で評価されてのことではない。

逆手に持って相手を殴り殺すと壊れる程度の銃だ。
それでも兵士達が大歓迎でこの銃を受け入れたのは、その発射される弾丸の破壊力の高さに他ならない。
Ｍ２００２と命名された小銃は、こうして兵士達に配布された。
多少の制約を受けるのは、死ぬよりマシ。
いつだってそれが兵士達の本音だ。

●東京都葉月市近衛開発局
Ｍ２００２を受領して喜ぶ米兵達のようには、正直、美奈代は改装された愛騎を受け取っても嬉しくなかった。
否、嬉しくなれなかった――そういうべきだろう。

今回の改装で、“ＤＥＥＤ”は“死乃天使”と規格を統合したという。
“白雷（はくらい）”達も“白龍”へとバージョンアップを完了。
合計三型に分類されるようになった。

美奈代達の“白龍”プランＡ、強襲型（アサルトタイプ）
美晴達の“白龍”プランＢ、駆逐型（ヤクトタイプ）。
涼達の“白龍”プランＳ、狙撃型（スナイプタイプ）。

プランＢは全騎が第四種装甲、プランＳはその上にＨＭＣ装備で全騎の規格が統一されるなど、各騎士やＭＣ（メサイア・コントローラー）にとっては覚悟していたこととはいえ、規格の大きな変更に騎体を慣れさせるのに大わらわだ。
騎体が引き渡された途端、美晴や涼達が模擬訓練に引っ張り出されたとしても文句も言えない。
否、今の美奈代にとってはそんなことはどうでもよかった。
「……」

美奈代はただ、何もかも忘れて、神戸から到着したTAC（タクティカル・エア・カーゴ）から降りた騎士達を――その中の、たった一人をぼんやりと眺めていた。

染谷だ。

正直、美奈代は“それ”が染谷だと、最初はわからなかった。
かつての染谷は、明朗快活とした優等生だった。
明るく清々しい男だった。
それが、どうだ？
今の染谷の顔に明るさはない。
無表情に近い顔に表情はほとんどない。
ギョロと睨むような鋭い眼光にかつての優しさはどこにもない。
あるのは恐ろしいほどの殺気だけだ。
空気だけで人を殺しかねないほどの強い殺気の塊――それが今の染谷だ。

変わり果てた。

そうとしか言い様がない。
人間とは思えない。
人間の皮を被った機械。
美奈代は直感的にそう思った。
だから、“それ”が染谷だとわかっても、何も言うことさえ出来なかった。

“自分に気付いて欲しくない”

美奈代は、そう思ったとしても誰からも文句さえ言われる覚えはなかった。
その場から――いや、染谷から逃げ出さなかっただけでも褒め

て欲しかった。

染谷がそうなった理由に心当たりがある。
フィアだ。
結局、フィアを失ったことで変わったんだ。
美奈代にはそれがわかる。
わかるからこそ、辛い。
フィアを失った責任は誰にある？
何故、あの時、彼女を止められなかった？
彼女を失った、その責任は誰にある？
その答えが、わかるのだ。

――――自分だと。

わかるからこそ、それを口に出されるのが辛かった。
かつて愛し、愛し合ったはずの男から、別な女を失ったことを咎め立てられるなんて、美奈代には耐えられなかった。
その場から逃げだそうとしなかったのは、ただ、部隊指揮官としての立場があったからに他ならない。
美奈代は初めて、女として、自分の立場を恨んだ。

「小隊指揮官の土浦涼奈（つちうら・りょうな）中尉以下、着任」
赤毛をロングヘアにした背の高い女が紅葉に敬礼した。
細長い目、尖ったあご、適度にウェーブがかけられた髪といい、大人の女性が求めるパーツを選択して組み合わせたような、そんな女だった。
染谷達も無言でそれに続く。

「……独立駆逐中隊中隊長代行、葉月開発局第二ラボ施設長津島中佐。着任を認めるわ」

「後藤中隊長は？」
やや高く、甘えるような声で涼奈は訊ねた。
「この騒ぎでどこにいるかもわかんないわ」
紅葉は小さく肩をすくめた。
「平野艦長どころか“鈴谷（すずや）”も動かせないってのに仕事だけは回ってくるわ」
「指揮権は中佐に？」
「一応ね？……まぁ、責任は後藤さんにとってもらうけどさ」
「……」
「心配しないで。私が下すのは、上からの命令をあんた達に伝える所まで。それから先は、あんた達に全部の権限を委ねるわ」
「……はぁ」
「信じてない？」
「というか」
涼奈は首をかしげた。
「いいのかなって」
「――勅命よ？」
紅葉は、中野に見せたあのファックス用紙を突きつけた。
「……陛下も」

それを受け取ろうともせず、背筋だけ伸ばした涼奈は苦笑まじりに呟いた。
「こういうのをファックスで流すってのが、スゴいところだと思います」
「どこかヌケてるのよ。あの人」
「……同感だと、聞かなかったことにして下さい」
「ええ――難しいことは言わない。あんた達は、敵の索敵網を混乱させてくれればそれでいいの――出来る？」
「ええ」
涼奈は頷いた。
「作戦については、ここに来るまでの艦内ミーティングでまとめた通りでしょう？」
「そう――あれが敵にバレていたら大変なことになるけど……まぁ、魔族が人間の言葉を理解出来ないと信じましょう」
「はい。わが小隊は2騎ずつの計2個分隊にて長野から新潟方面へのAルート、それと、太平洋上空を静岡方面へ移動するCルートを担当します。本命は」
美奈代は、涼奈の視線を感じて背筋を伸ばした。
「泉大尉のBルート？」
「反乱軍を潰してくれた中華帝国軍部隊なんだけど、第三眼（サードアイ）によれば福井の若狭湾にそれらしき艦隊が停泊中。部隊はそこを根城にしていると」

「第三眼部隊（サードアイ）にしては頑張ったようですね」

「さすがに陛下が激怒しているこの状況じゃあ……」

紅葉は面白そうに笑った。

「いつもみたく、“えーっ？面倒くさぁい”なんてワガママも言ってられないでしょ？いくらアイツらだって」

「そうですね……」

チラリ。と涼奈は後ろに控える染谷を一瞥した。

「あの水瀬家もいろいろと動いてるようですし」

「ああ。そっちの方にも？」

「ええ。医者からサジ投げられていた染谷少尉を助けたのも、あの子ですからねぇ……あらっ？あの子って確か後藤さんの絡みで」

「よく知ってるわね」

「後藤さんは飲み屋でよく一緒になるんですよ？」

涼奈は意味ありげな笑みを浮かべた。

「あの人、結構――スゴいんですよ？」

「何がスゴイか」紅葉は額に皺を寄せ、遮るように言った。

「言わなくて良い。ついでに私まだ未成年」

「クススッ……お子ちゃまだから？処女だから？」

「どっちでもいい。“紅龍”に自爆装置仕掛けられたい？」

「ムキになるところがカワイイですよ？」

チュッ。
涼奈は紅葉の前にかがみ込むと、その頬に口づけした。
「……」
キスマークの残る頬に困惑しきった顔を浮かべた紅葉は眼をつむって言った。
「“紅龍”のコクピットセッティングだけ急いで――泉大尉」
「はい」
美奈代は答えた。
「何か？」
「土浦隊のセッティングの間に作戦を伝えるから、こっち来て」
「どっかのバカの起こしたクーデターだの、それ以上のマヌケがやってくれた発注ミスなんかで……うんしょっと」
ミーティングルームで、紅葉は壇上に脚立を持ってくると四苦八苦しながら地図を黒板に貼り付けた。
それだけ見ていると、なんだか学芸会の準備みたいで微笑ましい光景ですらある。
「……出来た。今回はあんた達３騎の仕事よ」
「柏達は？」
「駆逐型の仕事じゃないでしょ？強行偵察なんて」
「……ですね」
「柏中尉達には、まだ駆逐型に慣れてもらわなくちゃ」

ドッシャーンッ！
派手な音が辺りに響き渡り、室内が揺れた。
すぐにサイレンが鳴り響く。
はぁっ。ため息をつき、肩を落とした紅葉が携帯電話を開いた。
「……私、誰がやったの？
……アホの都築？
ったく……パワーが違うから気をつけろってのに。
今度しくじったら去勢してやるって伝えておきなさい！
寧々ちゃんとセックスするキンタマ欲しかったら、メサイアの操縦に全身全霊を注げって！……ったく」
携帯電話を白衣のポケットに戻した紅葉は続けた。
「おまたせ。騎体のパワーに振り回されているバカがいる限り、駆逐隊は前線には出せない」
「狙撃隊は？」
「寧々ちゃんは寧々ちゃんで、断りもなくエモノが変わったって、かなりゴネちゃってるし、それより、さっきはさっきで、涼が中野大尉と喧嘩寸前になったし」
「涼が！？」
思わず美奈代はパイプ椅子から立ち上がった。
「ど、どういうことですか！？」
「お姉様は私のモノだとかなんとか。中野はまぁ……大人の対応してたけど、涼ははっきりアンタがレズだと言い切っていたからねぇ」
「れ、レズって」
美奈代は目の前が真っ暗になった気がした。

「で、中野大尉は!?」
「帰った」
「あっさりと!?」
「仕事あるんだもん。何?何か不満?別な呼び方ならいい?同性愛者とか、ヘンタイとか、人間のクズとか」
「そんな言い方しないで下さい!」
美奈代は言い返した。
「せめて百合と言って下さいよ!格調高く!」
「どっちにしてもヘンタイだって、あんたの今のセリフからわかった」
「どういう意味ですか!」
「うるさい。14のコドモの前で同性しか愛せないヘンタイが偉そうに口開くな。道徳教育上悪い」
「わ、私はそこまで!」
「私はレズ嫌いなのよ」
「あら?中佐、何かイヤな思い出でも?」
祷子が面白そうに訊ねた。
「うるさい、うるさい、うるさぁぁいっ!」
紅葉は途端に顔を真っ赤にして怒鳴った。

「私に、そのテの過去を聞くなぁっ！」

「……何かあったんですね？」

「うるさいったら、うるさいっ！」

手をバタバタ振り回し、我にかえった紅葉は、

ゴホンッ

わざとらしい咳払いの後に言った。

“Ｄ－ＳＥＥＤ”と“死乃天使”は、今回の改装で規格だけは統一された。

部隊の再編成は特に行わないけど、部隊と部隊内の騎体認識用の個別名称が与えられるから覚えておいて」

「何ですか、それ」

「中隊規模になって、何とか小隊とかって呼びづらいっていうか、まぁ、近衛の伝統みたいなものよ。内親王護衛隊（レイナガーズ）がヴァルキューレの名前から部隊名称を作っているのは知っているでしょう？」

「でも、普通はＨ小隊でホテルとか、Ｗ小隊でウィスキーとか」

「そう。他部隊との連携上、そういう呼び方が一般的。というか、第一、第二なんてどこの部隊か分かりづらいし、混乱の元だからね」

「……はぁ」

他部隊との連携の経験がほとんどんない美奈代には、そんな混乱はピンとこない。

「独立駆逐中隊は斬込、前衛、狙撃の三小隊編成なのは変わらない。

泉大尉達前衛はモイライ。

柏中尉達の前衛はヴェルザンディ。
涼達の狙撃隊はスクルド。
……まぁ、今まで通りの斬り込み、前衛、狙撃の方で部隊内で通してもいいけど、他部隊や司令部から、この呼称で呼ばれることもあるから覚えておいて」

「私達は……モグラですか？」

「モイライよ」

「何です？それ」

「ギリシア神話に出てくる「運命の三女神」です」
そう言ったのはほむらだ。
「ということは、風間中尉の“ＤＥＥＤ”が一号騎だから“ラケシス”、泉大尉が“クロートー”、私が“アトロポス”ですか？」

「そう。さすがほむ。ギリシア神話にも詳しいじゃない。ほめてあげる」
紅葉は嬉しそうに頷いた。
「人間一人一人の運命は、「運命の糸」として、モイライ――モイラ達が割り当て、紡ぎ、断ち切ることになっている。
この「運命の糸」の管理者というのが、運命の三女神」伝説の基本。
「運命の糸」を人間に「割り当てる者」がラケシス（Ｌａｋｈｅｓｉｓ）。
この糸を「紡ぐ者」がクロートー（Ｋｌｏｔｈｏ）。
糸を断ち切るのが三番目のアトロポス（Ａｔｒｏｐｏｓ）。
まぁ、あんた達が割り当て、紡いで、切るのは敵の運命だけどね」

「……面白いですけど」
美奈代は肩をすくめた。
「部隊内では名前ですからねぇ」

「そう」
紅葉は頷いた。
「ただ、開発サイドとしては、騎体個別認証にこの三女神の名前を使わせてもらう」

「規格は完全に一緒なんでしょう？」

「規格だけね。個別の騎士に合わせたセッティングは全然違う。整備や調整を規格だけで通されると混乱するしね。三騎の個別名称は私達開発や整備と、部隊名は他の部隊との連携上、絶対に覚えておいて」

「……了解」

「よし。作戦の概略を伝える。本作戦の目的は強行偵察により、中華帝国軍が展開していると思われる福井県若狭湾の状況を確認すること」

「ＥｒＷＡＣＳやＦｌｙ　ｒｕｌｅｒは？」

「他の戦況の把握や偵察に引っ張り出されて、帰ってこられないわ。忙しいのよ？有珠（ありす）も神城の三姉妹も」

「……」

「偵察すればいいんですか？」

「そう。ただし、さすがに福井まで行けば、敵の迎撃は不可避。その抵抗を全て排除した後、ここまで帰還して」

「侵入と帰還のルートは私達で決定していいんですか？」

「あまり良くない」

紅葉は黒板に張り付けられた地図に指示棒を突きつけた。

「ここから一気に富山湾を目指されると、他の囮が役に立たない。あんた達は神奈川、静岡から山梨、長野県を経由して富山湾に入って」

「質問」

ほむらが訊ねた。

「兵庫や京都から強行侵入した方がよいのでは？」

「石川県方面は」

紅葉が言った。

「防空網がしっかりしているし、かなり脚の速いメサイアの配備も確認されている。

いくら“死乃天使”でも、下手すれば生きて帰れない。

むしろ、支配地域である長野方面からの方がまだ防空陣地の布陣が手薄だと調べがついている」

「魔法騎士達を投入した方がよいのでは？」

「ほむの言い分ももっともだけど、大型の情報収集装置を担いでってワケにもいかないでしょう？結局、データ収集装置を搭載して、一度に大量のデータ収集となれば、メサイアの方が分があるのよ」

「……」
こくん。
ほむらは小さく頷いた。

「洋上にも油断しないで、水中型メースや魔族軍の飛行艦が若狭湾に展開しているのは確認されているのよ。おかげで舞鶴には海軍が艦艇を配置出来ないというか……舞鶴放棄は時間の問題なのよ」

「……待って下さい」
美奈代は手を上げた。
「つまり、舞鶴防衛のために必要なデータ収集ってことですか？」

「ご明察」
紅葉は笑った。
「舞鶴方面だって重要な基地なのよ。その防衛のためにはあんた達のデータは恐ろしく重要なのよ」

「でも、そんなことしたら」
祷子が異議を唱えた。
「敵に狙いを教えることになりませんか？」

「大丈夫」

「えっ？」

「そんな余裕を作らせない。というか、敵に狙いを教えないために、明日から数度に分けて、紅龍を駆る土浦隊と第８０２航空戦隊が総出で敵陣にちょっかいをかける。敵からすれば、あんた達はその中の一環に過ぎない」

「……犠牲が出ますよ」

「メサイア一騎失っても」

紅葉はきっぱりと言い切った。

「このデータの方が価値がある。今は、そういう状況よ？」

●数時間前　福島県会津若松市　福島医科大総合病院

出撃前、特別の許可を受けた美川少佐は花束を持ってその病室に入った。

病室のプレートには、“美川”と書かれていた。

「あら」

椅子に座って本を読んでいた女性が、入って来た美川の顔を見て驚いた様子で席を立った。

「あなた！」

美川の妻、信子だった。

「元気か？」

病室に入るなり、妻に花束を手渡した美川は、その大きな手で、ベッドに座っていた少女の頭をまるでいじくり回すように撫でた。

「お父さんだぞ？」

その声を探すかのように上を向いた少女は、うん。と、小さく、しかし嬉しそうに微笑んだ。

「今ね？お母さんにご本、読んでもらっていたのよ？」

「そうか」

ベッドの横に置かれていた小さな椅子に腰を下ろすと、美川は子供のように微笑んで、もう一度、愛おしそうに女の子の頭を撫でた。

「面白かったか？」

「うん！」

少女は力強く頷いた。

「クマさんがね？」
少女は熱っぽく本のあらすじを語って聞かせ、美川はそれをさも楽しそうに、時に大げさな仕草でおどけて答える。
口を開いた少女は、あふれ出したように様々な話しを語り出した。
女の子がお姫様になる話。
魔法使いの少年が悪い魔法使いを退治する話。
まるで目の前で物語が花開いているかのように語り続ける少女の横で、美川は頷きながら、そっと目に浮かんだ涙を拭った。

少女は、それに気付くことはない。

信子が花瓶に花を生けて戻ってきたのに気付いた美川は、鼻をすするフリをしてその涙を隠した。

「それでね？それでね！」
母親が入って来たのに、少女はまるでそれに気付かない様子で語り続けるのを止めない。
「もうっ！お父さんったら、聞いてくれているの！？」
プウッ。と愛らしく頬を膨らませた少女を、美川は抱きしめた。
「ああ。ここで聞いているぞ？それで？魔法使いはどうしたんだ？」
「うん！あのね！？」

1時間ほどした後。
看護婦から眠るように指示を受けた少女が小さく寝息を立てている。
手を握っていて。
そう言われた美川は、ずっと手を握ったままだ。
「……すまんな」
横に座った妻に、美川は小さく言った。
「俺が側にいてやれればいいんだが」

「いえ」
信子は口元に笑みを浮かべ、首を左右に振った。
「驚きました。突然、来るんですもの」
「……すまん。明日、出撃があるんでな。司令が特別外出を許可して下さったんだ」
「まぁ」
「とはいえ、この物資欠乏の折だ。みさきに玩具も買ってやれん」
「いいんですよ……というか」
信子はそう言ってうなだれた。
「この子に玩具をもらっても……」
「……そうだったな」
「療法魔導師の先生がいるとすぐなんでしょうけど……」
「……神経は連中にとってもリスクが高いと聞く」
「ええ……でも、魔導師の先生も、普通のお医者様でも、全部が戦争に動員されて、どこも人手不足だそうで」
「手術すれば、直るんだろう？」
「ええ」
信子は寝息を立てる娘の布団をそっと直した。
「8割以上は保証すると」
「……なら、大丈夫だろう」
「ですけど」
信子は、そこで言葉を詰まらせた。
「金は心配するな」
美川は言った。
「これでも近衛の騎士だ。金の方は……大丈夫だ」
「そう言って」
声が大きくなりそうになった信子は、はっとなって娘を見た。
目がつむったままになっている。
まだ眠っている証拠だ。
「危険な仕事はしないって約束、忘れていないわよね？どんな報酬

を提示されても、危険だったら引き受けないって、あなた、近衛に入るときに約束してくれたわよね？」
「……覚えている」
「そうよ。覚えておいて。あなたは、近衛の騎士の前に、私の夫で、みさきの父親なの！この子を路頭に迷わすようなマネしないで頂戴！」
「わかっている……」
わかっているんだ。
美川はそう呟くと、小さく首を左右に振った。
「ただ、このご時世だ。任務拒否というワケにも」
「だからといって、自分から危険な任務を引き受けないで。あなたは大切なものを見間違っている。最近、そう思うのよ」
「俺が？」
「そう。あなたにとって大切なのはみさきよ？あなたが危険な目にあうことをみさきは望まない。そうでしょう？」
「だがな」
美川はキッと厳しい視線を妻に向けた。
「この子には金がいるだろう！俺だって父親だ！」

コホン。

老人が一人、病室をヨタヨタ歩いて、隣のベッドの上に座ろうとしていた。
介助の看護婦と一瞬だから視線があった美川は、バツが悪そうに手元を見た。
「はい。おじいさん、横になりましょうね」
「ああ。看護婦さん、すいませんねぇ……」
「いえいえ」
「ところで」

「はい？」
「となりの娘さん。かわいいねぇ」
「みさきちゃんっていうんですよ？」
「へえ……あんな明るくて元気な子が、なんでまたこんな所へ」
「あの子……ですか？」
看護婦は、ちょっと考えた後、小声で言った。
「あの子、交通事故の影響で、目が見えないんです」

強攻偵察作戦　第二話（後書き）

◆作者近況◆

皆様、いかがお過ごしですか。作者はもう死にそうです。宝くじ1等あたってくれなきゃ死にます。そんな状況です。皆さん、人生設計は慎重に。

◆新キャラ照会◆

土浦涼奈（つちうら・りょうな）

２６歳。彼氏なし。彼女多数。

ちょっと気にしているので年齢の話はＮＧ。

元々は月城真菜の副官。

当然、クソ真面目の塊みたいな女だったのだが、いろいろあって人生ドロップアウト、結構な快楽主義者に変貌した（間接的に責任のある真菜は、未だにこの件を後悔しているという）。

メサイア使いとしてはそこそこの腕前。どちらかといえば空戦のようなバランス感覚が求められる分野での戦いが得意。

“ズルしようが何しようが勝ったもん勝ち”が信条のため、作戦はかなり卑怯なコトでも平気でやる。

◆用語◆

ＦＳＳのファンの方には、アトロ・ラキ・クロトの順番が違うことは意外かもしれません。私もびっくりですが、ウィキでの順番を採用しました。というか、この三女神って姉妹なんでしょうか？

それと、ウルズの入る所にモイライという別な神話――ウルズは北欧神話、モイライはギリシア神話です――を入れたのは、“ああ女神さま”の影響。私ウルド嫌いなんです。ヴェルダンディーは好きだけど。

強攻偵察作戦　第三話

●福島県　近衛軍陣地　中隊長室

「――戻りました」

この運動公園の自慢は、その広い陸上競技場所だった。

しかし、そこは今、メサイア達と整備機材が並び、選手を応援する歓声に代わり、機械のノイズが耳をつんざく。

そのすみに設置されたコンテナハウス。

その一つ。「中隊長室」と看板がかかったコンテナに入るなり、美川は一礼した。

スチール製のデスクが４つと、組み立て式のスチール戸棚が１つの殺風景な景色がそこにはあった。

戸棚にはヘルメットが並んでいる。

まるで土建屋の現場だなと、美川は入る度にそう思う。

「おう」

書類に目を通していた初老の男が眼鏡を外し、ドアに立つ美川を見た。

ごま塩混じりの頭髪を短く刈り込んだ髪に日焼けした顔立ち。軍服を着ていなければ農家のオヤジで通用するだろう程の好々爺とした人物。

倖田中佐――美川の所属する戦隊の戦隊長であり、美川にとっては公私の隔てなく世話になっている相手というか、ほとんど美川にとっては血の繋がらない父親同然の人物だ。

「娘さんの具合はどうだった」

「――いつも通りです」

「……そうか」

小さくため息をついた倖田は立ち上がった。

「茶でも飲むか？」

「いえ。出撃に備えておこうかと」

「まぁ、そう急ぐな」
倖田は、空いたデスクの上に雑然と置かれる野戦食の空き箱やミスプリントのゴミ山からポットを引き出し、山の中に手を突っ込んだ。
「コップはたしか……ああ、これだ」
紙コップと袋を山から引っ張り出した倖田は続けた。
「独立駆逐中隊の準備が整っていない。しかも、出撃は明日の０３００だ。今からコクピットで頑張ってどうする」
「……はぁ」
「――まぁ、飲め」
倖田は、粉末の紅茶を溶かした中へブランデーを入れたのを、美川の前に差し出した。
「しかし」
「酒飲んだ程度でどうこうなる体じゃあるまい」
言いつつ、倖田自身は空の紙コップにブランデーを注ぎ込んだ。
「今やブランデーは特級の貴重品だ。飲めるうちに飲んでおけ」
「……はぁ」
美川は、喉が焼けるのを感じながらコップの中身を胃袋へ流し込んだ。
「娘さんの手術、メドがついたのか」
「……いえ」
美川は近くのデスクに腰を下ろした。
「さすがに……簡単にはいきません。交通事故との因果関係もはっきりしないと、保険の適用も拒否されてますしね」
「――いくらだ」
「医者から言われているのは」
倖田は、その額を聞くと深いため息と一緒にコップをデスクに置いた。
「……いいか？美川」
「――はい」

「近衛は、任務の危険度にあわせて報奨金を設定している。とはいえ、支払いは成功した時だけだ。しくじったら」
「――わかっています」
美川は真顔で頷いた。
「ドジはしませんよ」
「俺の小隊を預けているんだ。死に急いでもらっては困る」
「……ええ」
美川は答えながら、掌の中で紙コップを弄ぶ。ブランデーの強い香りがコップから立ち上り、それだけで酔いそうになる。
「それに、半騎士の俺にゃ、騎士様程の仕事は出来そうにない」
「――ぬかせ」
苦笑混じりに倖田は椅子にどっかりと腰を下ろした。
「航空機の優位性はすでに過去の人類同士の戦闘で十分に証明されているところだ。この戦争においても変わるところはない――むしろ」
じろり。倖田は睨むように美川を見た。
「重要性は上がっている」
「……」
「風翔は戦闘護衛から哨戒、そして偵察まで幅広く使える点では、世界でも希有なメサイアだ。
空に戦域を限定すれば、地上を這い回るしか脳のないバカで目立ちたがりのおめでたい騎士共より、風翔使いのお前の方が戦果は挙げやすいだろう？
銃火器系兵器で狩りたい放題の一方的に近い戦闘だって、お前にとっては朝飯前。
現に飛行系妖魔の撃破で……お前にとってはそれなりの額の」
「……」
「――よく言ってスコア、悪く言えば、撃破報奨という名のカネを手に入れている。問題は」
はぁっ。

倖田はブランデーを一気にあおった。
「娘さんの目を治すにゃ、それでも足りないってことだな」
「……全然ですよ」
美川は寂しげに笑った。
「あいつが――――みさきがあの時事故にあったのだって、バカな理由で町中で口喧嘩なんておっぱじめたからだ。
そんなバカなことしている間に、あいつは道に飛び出して車にはねられた。
すぐ近くに小さな病院に連れて行って、打撲って診断だけ信じて、ロクな検査もさせなかったのも、そのまま示談書類にハンコ押したのも、みんな俺達夫婦が……いや、俺がバカだったからですよ」
「……」
「おかげでみさきはあの様です。俺みたいな親をもったばっかりに……」
うなだれる美川を前に、倖田は軋む椅子の背もたれに体を預けた。
「今更、過去を悔いてもどうにもなるまい。それでまかり通るなら、俺の目玉をくれやったっていい。俺だってそう思っている」
「……中佐」
「カワイイ部下の娘。しかも、俺はあの子の名付け親だぞ？俺だって一応は、親だ」
「……すいません」
「俺の退職金を上乗せしても……とても足りる額じゃない」
「……」
「かといって……死に急いでくれるな？“お父さんはどこ？”なんて、葬式の場で子供に聞かれるのはもうこりごりだ」
「……妻からも似たようなこと言われていますよ」
「当然だ……まぁ、風翔で地道にミッションをこなせ。そうしていれば、こういう突拍子もない特別ミッションが下ることもある」
「成功の報酬は？」
「通常出撃の３倍」

「十分です」
美川は頷いた。
「新潟県の沿岸部に対する強行偵察を擬装すればいいんですね？」
「ああ。敵陣地一つ見つけるごとに、別報酬が出る」
「額は」
「見つけた後の話さ――新潟県の状況は人類の誰も把握していない。ただ、あの浮遊城と魔族軍が関係しているなら、どこかにあの城と本州を結ぶ補給ルートがあるはずだ。当然、新潟県の港が怪しいとなる。それはつまり」
「魔族軍の補給、もしくは物資集積施設がある」
「破壊を焦るな？」
倖田は念を押すようにゆっくりと言った。
「現状では新潟侵攻なんて夢物語の域だ。そんな所で何を破壊しても評価は低い。施設の位置だけわかっていれば、それだけでいい。上層部はそれしか評価しないぞ」
「……やれやれ」
美川は腰を上げた。
「戦っても評価されないとはね」
「そういうものだ」

「さぁて……と」
ポキポキ
土浦涼奈（つちうら・りょうな）中尉は紅龍のコクピットで指を鳴らし、舌なめずりした。
「ＳＴＲのフィッティングは大凡ＯＫね」
「了解。関節部はこれで固定しますよ？」
「ええ。ただ」
「ただ？」

涼奈は意味ありげに腕を組んだ。戦闘服越しにもわかるその豊かな双丘が腕の中でたわわに揺れた。
「胸がきついのよ。なんとかならなぁい？」

「――ったく」
土浦隊の一人、矢崎綾（やざき・あや）は、ＳＴＲシステムフィッティング中の整備兵をからかう涼奈を見て顔をしかめた。
金髪に染め上げた髪を無造作に後ろで束ねた綾は涼奈より一つ年上。彼女よりずっと高い身長とスレンダーな体型、低い声で男性と間違えられることの多い彼女は、実際の所、あまり涼奈と一緒にいるのを好まない。
列騎としてメサイアを駆る上ではまたとないパートナーだと涼奈から頼られても、個人の感情は別だ。
「逆セクハラはやめろというのに……あーあ。“ぱふぱふ”されて喜ばない男の子はいないって言うけどさぁ……可哀想に、また一人、道を誤った男が出そうね」
「……」
「……つーかさぁ」
紅龍のコクピットハッチから中をのぞき込み、綾は言った。
「ちょっとは部隊内でのコミュニケーションとろうって気にはならないの？あんたさぁ」
「……必要なことはしているはずです」
そう答えたのはセッティングに余念のない染谷だ。
計器類から目を離さず、染谷は短く答えた。
「軍隊ですよ？」
「軍隊だから」
綾はコクピットに首を突っ込んだ。
「こう――腹割って信頼関係作らなきゃ！」
「……必要ないです」

「そのうち、後ろから撃たれるわよ？あんた」
「……」
「その時に、この私のお慈悲を聞いておけばよかったって後悔しても遅いんだからね？」
「……」
「……はぁっ」
綾は肩をすくめ、首を左右に振ると、その場に腰を下ろした。
「彼女を戦争で失ったなんて、人類史上、何件のケースがあるかわかってる？」
「……」
「あんた――かなり優等生だったんでしょう？部隊叩かれたり、いろいろ苦労もあったとしてもさぁ」
「……」
「あんた一人でドンパチやってんじゃないってことまで否定出来るの？」
「私は一人でも戦います」
「……思い上がんなっての。自分の殻に籠もった男なんて最低だって言われるわよ？私ゃさぁ……まだ、面倒見がいいから、こうして話ししてあげているけど。その態度じゃ、どこにも居場所ないでしょう？」
「……」
「あの泉大尉ってのも、昔の彼女だって聞いてるわよ？」
「……」
「フィアちゃんだっけ？いろいろ、聞かなくていいの？何があったのか……とか」
ジロリ。
染谷は無言で綾を睨み付けた。
どう猛な獣を連想させる鋭利な視線。
それでも綾はひるむことはない。
この程度の殺気でビビっていたら、世の中生きていけないという

のが、綾の持論だ。
「聞かずに殻に籠もっている辺りが、あんたがお子ちゃまだって証拠なんだけどねぇ」
「……聞かなくてもわかってますよ」
「……へぇ？」
「結果論だけで言えば」
「……」
「泉がフィアを殺したんです」
「……へえ？」
「……私が、部下を死なせたように」
「……はぁっ」
だめだこりゃ。
綾はもう一度、首を振ると、立ち上がった。
「あんたがどうしようもないバカなヒヨコだってわかった」
「……」
「面倒は見てあげるからさ？せいぜい、尾っぽに殻つけて私の後ついて来て頂戴。小隊指揮権は私にあるんだ――――何なら」
綾は悪戯っぽく笑った。
「ベッドの中でミーティング兼ねて模擬戦してみようか？タダで相手してあげるよ？」

「くっそ！なんだ、このパワーは！」
騎体装甲のあちこちを変形させた都築が苦々しげに“白龍”から降りてきた。
「“白龍”といい、コイツといい、どうして俺はこう厄介モノばっかり押しつけられるんだ！」
「おい都築ぃっ！」

整備兵の怒鳴り声が響き渡った。
どこかの応援団長のような押しの強い風貌と、何を考えているのか下駄を履いた大柄な男が、腕組みしながら都築の前に仁王立ちになった。
「……う、ウス」
都築は床に降りるなり首を縮ませた。
「な……なんすか？」
「何すかじゃねぇだろうがぁっ！」
都築の胸ぐらを掴み上げると、都築の脚が宙ぶらりんになった。
「騎体無様にぶっ壊しやがって！駆逐型（ヤクトタイプ）は装甲が頑丈な分、あんなひん曲げたら外すのが一苦労なんだよ！戦闘じゃねぇんだ！普通に動かすだけでここまで壊すなら、お前、赤ん坊から人生やり直してこいっ！」
「そんな無茶な！」
「うるせぇっ！坂城さんがお呼びだ！とっとと言って詫びいれてこいっ！――おい、柏ぁっ！」
都築を突き飛ばした整備兵は、リフトを使って騎体から降りようとしていた美晴を怒鳴りつけた。
「小隊指揮官だろうが！部下の不始末、どうとってくれんのか、坂城さんが聞きたいとよぉっ！」
「そ、そんなぁっ！」

「あー、よかった」
美奈代は美晴の悲鳴を聞き、心底安堵して胸をなで下ろした。
「こっちにとばっちりが来なくて」
「そのうち来ますよ？」
祷子は笑って言った。
「中隊前線指揮官ですもの。一番は美奈代さんです」
「勘弁してよ」
「坂城さん言ってましたもん。寝る前に一度は美奈代さん叱らない

と調子が悪いって」
「……出撃前に縁起の悪いこと言わないでよ。どっちにしても、今回の作戦は美晴達は無理ね」
「というか。向いてませんよ」
白龍、強襲型（アサルトタイプ）の二号騎となった美奈代騎――“クロートー”のコクピットブロックに腰を下ろした二人はチューブ入りのドリンクを手に、出撃準備の様子を見守っていた。
調整の続くＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）には無数のケーブルが外部から接続され、何が起きているのかは全くわからない。
「駆逐型を偵察に出すなんて、本末転倒です」
「……今まで、部隊単位で動いていたからね？数が減るってのに敏感なのよ」
「本来なら」
祷子は言った。
「もう、美奈代さんは参謀として後藤隊長の横で後方勤務。宗像さんあたりが前衛の全指揮を執っていたはずですものね」
「……ねぇ」
「はい？」
「宗像は……何を考えていたと思う？というか」
「……」
「……今、生きていると思う？」
「つまり、宗像さんがあの島で敵前逃亡したと？」
「敵前でも何でもいい」
美奈代は膝を抱えると、その中に顔を埋めた。
「……死んだとは考えたくない」
「そう……ですね」
祷子は頷いた。
「敵に寝返った……そんなことは、私でも信じたくないですけど」
「……」
「……可能性は否定出来ません」

「……そう」
美奈代は頷いた。
「死んだとは思いたくないけど、でも、敵に寝返る理由がわからない」
「おちゃらけはよしましょう」
祷子は真顔で言った。
「何か、絶対に考えるところがあったと思います。それが私情なのかはわかりませんが」
「……」
「敵に寝返ってもいいです」
「えっ？」
「私がかつての仲間として、願うことは」
「……」
「どんな状況でもいいから、生きていて欲しい。そして」
「……」
「――私達の前に現れないで欲しい。それだけです」

浮遊城のメース用門（ゲート）からデッキへと降り立ったのは、漆黒のメース。
カヤノが駆るのと同じ、ヤクトエッジ。
クルーの指示に従い、ハンガーベッドに騎体を収容し、ハッチから出てきたのは、あの宗像だった。
「操縦システムの方は、慣れたようですね」
ハンガーに降りようとする宗像を迎えたのはプラツゥルだ。
女神のような優雅な容姿をした彼女が、宗像にむかって声をかける。
機材が爆音を立てる喧噪の中、その澄んだ声はまるで汚水の中を貫く清水のように宗像の耳に心地よく届いた。

亜麻色の髪が無重力空間で優雅な舞いを見せるプラツゥルの腕を掴んで床に降り立った宗像は、ニコリと微笑んで見せた。
「――人間界ではそれなりに痛い目にあったコイツですけど、慣れれば心強い伴侶です」
「……よかった」
プラツゥルは、胸元を手で押さえると、ほうっと息を吐いた。
「この子の操縦システムは、私も関与しているんです」
「ええ。ダユー様からうかがっています。人間の私にも耐えられるように、操縦系統と神経をリンクする間のコンバートをしていただいたとか」
「正直、人間そのもののサンプルがないので、心配していたのです」
プラツゥルは心配そうな顔で宗像に訊ねた。
「具合は悪くないですか？何か、神経に異常は？」
「今のところ」
「そうですか……一応、義務ですから医務室で神経の検査を受けて下さいね？」
「……了解」
宗像の目の前で、彼女と共に訓練に出たバラライカ――ティアリュート達が収容作業を終えた所だった。
「……」
「どうなさいました？」
「このヤクトエッジと、あのバラライカという騎。性能はかなり違うんだろうなと思いまして」
「……メースとしては1世代は違います」
「世代が違う騎を相手にして」
宗像は複雑な顔をした。
「あそこまで手玉にとられる……か」
「無理もありません」
プラツゥルは慰めるように言った。
「宗像様はまだ、メースに慣れていないのです。あちらのティアリ

ユート様達は傭兵。そうでなくても、正規軍時代はエリート部隊で馳せた有名は、魔界でもある程度知られた方ですもの」
「……エリート……か」
「焦ってはいけませんよ？」
「焦る？」
「ええ……スタート位置を無視しては、勝負になりませんもの」
「……私は私と？」
「そうです」
プラツゥルは嬉しそうに微笑んだ。
それだけで宗像は心がとろけそうになる。
ダユーといい、この女性といい、魔界には不思議な存在がいるものだと、宗像は思った。
「戦争で一番強いのは生き残った方。それに人間も魔族も獄族も関係ないのです」
「……ですね」
宗像は、そこまで言って、プラツゥルの服装に気付いた。
普段のドレスや白衣ではない。
メース用の戦闘服だ。
「プラツゥル殿？その格好は」
「……似合いません？」
プラツゥルは心配そうに首を縮めた。
「いえ」
宗像は、意外な回答にちょっとだけ戸惑った。
「お似合いですけど……」
「……ああ」
ポンッ。と、プラツゥルは手を叩いた。
「機獣達のリハビリとデータ収集の準備があったので」
「機獣？」
「メース化した妖魔と言えば思い出して頂けます？」
「……ああ、あのワイバーン達」

「そうです。いつまでも培養槽では可哀想ですし」
「それで、プラツゥル殿もメースに？」
「ええ」
プラツゥルは恥ずかしそうに頷いた。
「これでも心得はあるんですよ？」
「それで……」
宗像は広大なデッキを見回した。
「どれに乗られるのですか？」
「……あれです」
「……」
プラツゥルが指さした先にあるのは、普通のメースの倍近いサイズの大型騎。
短くて太い脚部といい、背後に伸びた尻尾といい、まるで往年の銀幕に出てきたトカゲ怪獣に巨大な翼をつけたようなその騎体に、宗像はふと思い当たるフシがあった。
「……銀龍？」
そう。
静岡戦線で危うく消し炭にされるかと思った、あの銀色の騎体によく似ているのだ。
「何です？」
「……いえ」
宗像は首を左右に振った。
いくらなんでも、あの騎とは違う。
まして、味方を巻き添えにする程、目の前の美女が無慈悲だとは思えない。
「あれは？」
「……その」
プラツゥルは、申し訳ないような顔で答えた。
「言ってみれば、妖魔達の寄せ集めです」
「……えっ？」

「妖魔の中には、最新鋭のメース以上の筋力や装甲を誇る、そんな存在もいます。そんな妖魔から筋肉や外皮を、疑似骨格をベースに移植したのです」
「妖魔のメース化、その一環ですか？」
「そうです」
プラツゥルは頷いた。
「万一、機獣達がコントロールを失った場合の保険でもあります。そんなことになれば、可哀想ですが、脳と心臓部を破壊する信号を送りますが……」
「何かの拍子に、その信号を受け付けなくなり、暴走した場合、力尽くで仕留める必要がある」
「その通りです」
プラツゥルは頷いた。
「私は、そんなこと――好まないのですが」
「でしょうね……」
同感です。と、宗像も頷くしかない。
「そのためには、機獣達を……単独で“処理”出来る存在が必要なので」
「それで、“あれ”が」
「……獄族のメースは、妖魔のパーツを使うことが多いのです。ですから、獄族の目から見れば異質なことではありませんけど」
「メースの感覚でコントロール出来るのですか？」
「ええ。ただ、操縦できるのは獄族だけです」
「つまり、あなた方だけ」
「はい」
「……」
「……どうなさいました？」
「リハビリというのは、いつ頃？」
「明日の夜明けに」
プラツゥルは答えた。

「それまでにあの子の調整を終わらせなければなりません。ちょっと徹夜仕事です」
ペロッと舌を出したプラツゥルに宗像は言った。
「もし、差し支えなければ、同行させていただけませんか？」

強攻偵察作戦　第三話（後書き）

あーっ。もういろいろと話の伏線が回収出来なくなってきた気がします。
次回で久々の戦闘シーンが書ければいいなぁ……。
その前に、人生どうにかしようよ。自分……。
当たれ！宝くじ！

感想大募集中です。励みになります。
武器やキャラクターの設定も相変わらず受け付けています。
助けると思って、感想共々、気軽に提案ください。
よろしくお願いします！！

強攻偵察作戦　第四話

美川達が陣地を発進したのは夜明けの１時間も前のことだ。
福島県から日本海側に出て、沿岸部を偵察する。
形式的にはそうなっているが、その目的ははっきりしている。

日本海側の防空網、そして迎撃機の規模を調べる。

本当の目的はこれだ。

人類側でわかっていることなんて、地形程度だ。
どこにどの程度の魔族軍の陣地があって、どんな防空網と対空兵器が存在するか、侵入を開始した後、何分で何が迎撃機としてあがってくるのか？
何一つわかっていんない。
美川達のやろうとしていることは、未知の闇へ冒険飛行を試みようとしているのと何も変わらない。
飛行や作戦というより、
自殺行為。
その方が正しい。
美川もそのことはわかっている。
夜明けまでは夜間暗視装置と事前の地形データをだけが頼りだ。
３６５度、全世界のどこから弾が飛んできても文句すら言えない。
むしろ、撃ってきた場所に近づいて詳細を知ることが求められる。
正直、並の神経で耐えられることではない。
「やれやれ」
列騎を駆る森中尉が苦笑混じりにぼやいた。
「少佐と同じチームにいると、こういう仕事ばかりだ」
「ＴＡＣに機種転換したければ書類を出せ」

「まさか。俺は喜んでるんですよ？これでも」
森中尉は肩をすくめた。
その動きを風翔が正確にトレースする。
それをモニターの片隅で確認した美川は“下手なジェスチャーも出来ない”と、メサイアの案外と不便な所を見つけ出した気がした。
「古き良き時代の飛行機野郎に戻った気分です。何しろ、俺達の行く世界は誰も知らない、未知の世界。俺達が先鞭をつけると来る」
「元は新潟県ですよ？」
三番騎を駆る春日まどか少尉が言った。
編隊騎を駆る中では一番若くて童顔。海軍時代では数少ない、空母乗りの女性パイロットとしてならした腕前。森が上官をぶん殴って海軍を追い出された際、とばっちりを喰らう形で海軍を辞めさせられた気の毒な存在だ。
かなりの美形で、空母乗りの頃は新兵募集のモデルになったのを、美川は見たことがある。
無論、それからそれなりの年数が経っているのだが、本人曰く“実際の年齢”より5つは若く見られるが自慢だそうだ。
美川にとっては融通の利かない割に憎めない、妹のような存在だ。
「自分達にとっては祖国ですよ」
「かつての祖国、今や敵陣」
森は面白くもない。という声で答えた。
「ちっとは前向きにいこうや。まどかちゃんよ」
「春日少尉です」
毎度のやりとりとはいえ、この二人の陽気さには助けられるな。
と、美川は知らずに口元を緩めた。
「どっから弾が飛んでくるかわからない。それと、東京方面から3騎が別ルートで同じような任務に就く予定。誤認するな」
「「了解」」

「何騎あがっているって？」
浮遊城の管制センターは、日本どころか、全地球規模で飛行する航空機を把握出来る。
その日本周辺の警戒を担当する管制官が上官に報告したのは、美川達が離陸を開始してからすぐのこと。
日本本土の3カ所からデミ・メースらしき反応が離陸。
数個編隊が、別個のルートを通りながらも、日本海側へ向けて移動中というものだ。
「合計で20騎です。福島、青森からあがった計9騎が3騎編隊を編成。共に日本海沿岸部からこちらへ向けて移動中」
「侵攻……？まさかな」
管制長のギルマンディは、自慢の髭を指で撫でながら唸った。
「数が少なすぎる……」
「ダユー様にご報告は」
「この時間だ。一々、人類風情の小物が上がったなどど……」
ふん。ギルマンディは鼻でせせら笑うと言った。
「この程度なら、朝食後の定期報告にでも記載しておけばよい――念のためだ。防空部隊と付近を飛行中の部隊に警報だけだしておけ。我々の立場はそれで護られる」
「了解」

でかいな。
宗像は、プラツゥルの駆る騎を真下に見ながら思わずそう呟くしかなかった。
濃緑のボディから生える翼と尻尾がイヤでも目立つ騎体の手には、巨大な戦斧が握られている。
騎体から放たれる禍々しいまでの気迫というか、瘴気の如き殺気

が放たれる騎は、あの大人しそうなプラツゥルが中にいるとはとても思えない。
「宗像様？」
そのプラツゥルから不意の通信が入り、宗像は内心を見透かされたような錯覚を起こした。
「な、何か」
言葉がうわずったのだがどうしようもない。
「ワイバーンの中でもレベルＡは自由行動にさせます」
「レベルＡ？」
「あっ、申し訳ありません」
プラツゥルははっ。となった後、通信モニターの向こうで深々と頭を下げた。
「“完治”した子達のことです」
「よろしいのですか？」
「ええ」
プラツゥルは自信満々に答えた。
「とても物わかりのいい子達ばかりです。この浮遊城周辺の海上で遊ばせるだけです」
「……はぁ」
宗像は、自騎の、いや、正確にはプラツゥル騎のさらに下を飛行するオレンジ色の光を見た。
ワイバーンに取り付けられた航行灯の灯りだ。
「――――さぁ、“ポチ”？遊んでいらっしゃい」
「……」
ポチ。
それは多分、翻訳装置がそれらしき名前を選んだものに違いない。
と、宗像は自分に言い聞かせた。
そんな名前が似合うほど、灯りの下で見たワイバーンは愛くるしい外見はしていなかった。
そんな宗像の前で、ギュオオオッ！と、肝が冷えるような鋭い鳴

き声がスピーカーに届き、そして航行灯を点灯させた一匹のワイバーンが闇の中を遠ざかっていった。
「……」
「ポチは頭がよくてとっても大人しいんですよ？だから、大丈夫です」
唖然とする宗像に、プラツゥルは嬉しそうに言った。
「少し遊んだら自分から帰ってきます」
「人類側が日本海へ接近中と警報が出ていますが」
「ああ」
ポンッ。とプラツゥルは手を叩いた。
「“遊んで”いただけるかもしれませんねぇ」
「……ですか」
“遊ぶ”の意味は考えないことにした。
全く、世の中には不運なヤツもいたものだ。
泉、お前じゃないだろうな？
宗像はふと、そう思って、機種を管制センターに照会しておけばよかったと後悔した。
「それで、我々は？」
「レベルB――まだリハビリと調整が必要な子達の面倒を見ます。たった2匹ですから簡単な“お散歩”です」
「……はぁ」
こんなゴッついメースでお散歩も何もあったもんじゃないだろう。
と、それだけは内心で突っ込むしかない宗像だった。
「さぁ、タマにマル、良い子だからオイタしないでね？」
「……」

「接近する反応有」
美川騎の　美川騎の頭部に陣取るＭＣ、秋山律中尉からの警報が

入ったのは、美川が本当に久しぶりの日本海の夜明けを見た、丁度その時だった。
「機数１、距離１０キロ。速度１５０キロでこちらへ向けて移動中」
「種類わかるか？メサイアか、妖魔か？」
「反応……不明」
秋山中尉は悔しそうに言った。
「ただし、反応は大型。サイズからして、中型妖魔もしくはメサイアの可能性――速度上げました。現在時速２５０、尚も増速中！こちらへむけて一直線で突っ込んできます！」
「全騎、ラグエル起動！」
美川は脳みそを感傷から戦闘指揮官のそれへと切り替えた。
“アナイアレーター”は三点バーストで設定、秋山中尉、システムを同調しろ、出会い頭で仕留める！」
「了解！」

――来た！

黒い、ポツンとした点が見る間に大きくなってくる。
真っ正面か正対した状態での発砲なんて、海軍時代なら考えられないな。
美川はＭＣ（メサイア・コントローラー）によってコントロールされ、自分の意志とは関係なくターゲットを狙うＦＣＳ、その情報を表示するスクリーンを眺めて苦笑いをした。
戦闘機で真っ正面から撃ち合うなんて考えられない。
ここでトリガーを引くバカが教え子なら、容赦なくぶん殴っているところだ。
そこまで考えて、かつての教え子、春日候補生という女性パイロットを初めて預かって、困り抜いた挙げ句、女のどこをぶん殴っていいかを妻の信子に訊ねて散々叱られたのを思い出したのだ。
信子が待っている。

それは、その腹から生まれた娘も待っていることを意味する。
コンソールの端に張り付けた妻と娘の写真に視線を向けた美川は、発想を切り替えた。

考えていいのは、これをチャンスだと思うことだ。

そう。

これはチャンスだ。

中型妖魔でもいいが、もし、あれが魔族軍のメサイアなら金星だ。
俺達半騎士がメサイアを仕留めたとなれば、部隊の名に箔が付く。
何より――
美川は、部下である森達にはすまんと心で詫びつつも、メサイア1騎を撃破した際の報奨金の額を思い出した。
決して高くはないが、それでも無視出来ない額だ。

「……」

写真の中で微笑む妻と娘をもう一度見た後、美川は写真そのものの存在を忘れた。

「……頼むぞ」

美川は操縦システムに力を込めた。

スターマイン花火の如き連続した爆発の光が朝焼けの空に醜い煙を背景にはっきりと輝く。
音はまだ聞こえてこない。
距離がある証拠だ。

「仕留めたか!?」

「全弾命中!」

秋山中尉の歓声は、
「反応――有っ！」
すぐに悲鳴に近い声に変わった。
「ビームライフルの直撃で！？」
「出力が弱いからか！？」
美川は操縦システムを再開させると、
「全騎、ラグエル解除！銃剣備えろ！」
そう怒鳴った。
「春日、俺のケツにつけ！少佐っ！？しっ、しかしっ！」
森は回避行動に移りつつ、美川に答えた。
「俺達はラグエルシステムがなければ！」
「違うっ！」
美川は言い返した。
“スカンク”を準備しろ――そう言いたかったんだ！」

“アナイアレーター改”はサブマシンガンタイプ――発砲されるエネルギー弾の出力もライフルに比較すれば当然落ちる。
ライフルの出力が過剰となる相手――装甲の薄い飛行系妖魔相手なら、その出力で十分相手になるという、いわば妥協から生まれた産物であることは否めない。
普通の開発者なら、そう言い切るだろうし、武器が通じない時点で美川達の負けは決まったようなものだ。
美川達にとって幸か不幸かはわからないが、とにかくはっきり言えることは、“アナイアレーター改”の開発者は“普通”という言葉をどこかに忘れてきた相手だということだ。

開発者の紅葉曰く――“万一”に備えたとっておきの手段。
攻撃より防御のためというべき一発のこと。
公式には“ハイパー・バースト”モードと呼ばれ、紅葉の感覚からすれば、“イタチの最後っ屁”という名になるのだが……。

奇妙なことに、“見通者（シーカー）”のクセにイタチとスカンクの区別が全く付いていなかった紅葉は、それを技術の美川大尉に指摘され、大恥を掻いたことなどどうでもいい。証拠隠滅のためと、ロボトミー手術に送られそうになった大尉に比べればどうということはないのだ。

エネルギーパックシステムに残された全エネルギーを容赦なく、たった一発に収縮した一撃は、実は通常のビームライフルより圧倒的に高い破壊力を発揮することを保証する。

しかし、反面において、この強制的な高出力発生の代償として、発射システムは多大な負荷を強いられる。

このため、発射後は強制冷却装置が作動し、数分間、“アナイアレーター”は発射不能になる。

「俺が囮になる！その間に春日騎とラグエルを組め！精度は落ちるが、その分は俺がコイツを食い止めて穴を埋めるっ！」

「り、了解っ！相原少尉、超精密射撃モード！一発で仕留めろっ！」

「は、はいっ！」

……とはいえ。

本心を言えば、美川は相手を見た途端、囮なったことを心底後悔した。

メースだという勝手な思い込みがあったことを、美川自身、認めるしかない。

どこからそんな自信が生まれたのか、美川は自分を小一時間問い詰めてみたかった。

何しろ……。

「少佐」
回避運動から、敵に追いつくための戦闘機動に切り替えた途端、機関担当のＭＣ（メサイア・コントローラー）、石川澪少尉が言った。
「“あれ”を相手に囮になるって、“この子”で相手になると思ったからですか？」
「……さぁな」

美川は慣性制御システムが殺しきれなかったＧを歯を食いしばって耐えた。
いくらなんでも、慣性制御システムまでけちってないだろうな？
あのクソ開発部め！
追いすがった、その背中めがけて、秋山中尉が風翔の肩部にマウントした１２０ミリ砲を牽制のために撃った。
弾種は散弾。
パッと花開いた散弾の雨を、その背中はあっさりとかわしてのけた。
信じがたい機動。
その一言で事足りる。
一瞬で騎体が真横に横滑りしたのだ。
人間がやったら、いや、メサイアでも騎体が耐えられないだろう。
それをやってのけた相手……。

巨大な翼と長い尻尾を持つ――空飛ぶトカゲ。

ドラゴン種だ。

マンガだか絵本の世界でさえバケモノの王者として君臨する存在が、目の前を遊弋している。
自分の敵として。

「もしそうなら」
管制モニターから目を離さず、アームレストと一体化したコンタクトシステムを経由してエンジンの管理を続ける石川少尉が続けた。
「買いかぶりすぎだとは言っておきます。ついでに、私達二人の人命軽視だとも」
「……すまん」
「メサイアと間違えた。というのが本音みたいですね」
「……見たことがないからな」
美川は憮然として自分の非を認めた。
「敵のメサイアも、アイツもな」
「データからしてワイバーンです。日本本土での出現はこれが初めての確認ですね」
「……そうか。なら、俺が知らなくてもメンツは保てるな」
「私達相手にはどうでしょうね」
石川少尉はそっけなく言った。
「本心から敬意と軽蔑を」
「……悪かったと謝っておこう」
まるで遊んでいるかのように、秋山中尉が放つ牽制を無視してワイバーンは飛行を続ける。
各部に見える機械のパーツらしき部位がはっきり見える距離。
戦闘機時代ならバルカンで撃ち落とす距離だ。
MC（メサイア・コントローラー）としての秋山中尉の腕前がそれほど落ちるのか？
まさか！
彼女と戦闘機で撃ち合って、勝てるとは思えない。
MC（メサイア・コントローラー）が半騎士の俺より射撃が落ちることはないし、実際、マニュアル操縦で火器を使用して、一度だって彼女に勝てたことはない。
中尉がわざと外しているなんてバカな話もないことは、MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）から聞こえてくる中尉の罵声混じりの金切り声でわかる。
つまり――

「森っ！」
美川は通信装置に怒鳴った。
「どうだ！？」
「どうだと言われましてもねぇ！」
森は文句を言うしかない。
ワイバーンのランダムな機動に追いすがっているだけで、上官の操縦能力は賞賛すべき価値があることは認めよう。
だが、そのエモノを狙撃しろとなれば話は別だ。
ラグエルシステムをもってしても、狙いが定まらないのだ。
美川騎を誤射する確率が撃墜可能性を上回ったままでは、恐ろしくて撃てたものではない。
「右へ左へ、上へ下へで、よく騎体が持ちますね！」
「俺は１０Ｇまで耐えられる！」
「少佐の頑丈さは知ってますよ！ＭＣ（メサイア・コントローラー）や騎体は心配しないんですか！？」
「近衛ってのぁ、騎体もＭＣ（メサイア・コントローラー）も！」
尻尾を器用に使ってインメルマンターンなんて決めてのけたワイバーンを相手に、ブースターと尾翼、さらに腕まで使った機動で追いすがる美川は、騎体そのものが上げる悲鳴、警告に顔をしかめながら怒鳴った。
「頑丈さと非常識さが売りだろうが！」
「……」
言っちゃったよ……おい。
森のそんなつぶやきは美川の耳に入らない。
「直接しとめる！チャンスがあれば言ってくれ！」
「幸運を！」

「……さてっ！」

美川は歯を食いしばった。
「どうしてやろうか！？」
「いろいろと言いたい所ですけど」
秋山中尉は冷たく言った。
「お話は後で」
「……そうですね」
石川少尉も異論はないらしい。
「みさきちゃんを泣かせるワケにもいきませんし」
「そうね。父親がこんなヤツでも、あの子はカワイイし」
「……おいおい、何の話だ？」
「協力するから、金星挙げましょう。そういうことです」
石川少尉は言った。
「妖魔にメサイアの反応まである特異な存在です。コイツはお金になりますよ？」
「……ちっ。俺はカネの亡者扱いか？」
「私達は現実的なお金を話しているんです」
「……そう願おう」
美川はブースターを開いた。
騎体が短く震動し、すぐにＧが襲いかかった。
メサイアどころか、下手すれば戦闘機でさえ凌駕する加速力は、骨から肉や内蔵をそぎ落とされたような錯覚さえ覚えさせる。
「ちょこまかと――――っ！」
呻きながら美川はワイバーンを睨み付けた。
パターンは読めている。
右へ左へと数回、ターンした後、尻尾を上に振り上げた所がチャンスだ。
その後、コイツは上下どっちかへ、１８０度針路を変更してのける。
戦闘機なら騎体が分解するか、運が良くても失速する機動だ。
人間が乗っているなら、どうやって機動をかけたのか伝授して欲

しいと美川はそう思う。
というか、風翔に尻尾をつけて欲しいとさえ思う。
本音で言えば、羨ましい。
問題は、上と下、どっちに動くかわからなこと。
本当に直前になるまでわからない。
どっちだと指示して、森達がロックオンする前に、ワイバーンは美川の前から遠ざかっている。
森達が狙撃出来ないのは、そのランダムな動きのせいだ。
「……とはいえ」
美川は呟いた。
「俺は、もう一つ自慢できることがあるからなぁ……おい、秋山中尉」
「何です？」
「詫びとしてはなんだが」
「はい？」
“アイツ”は上と下、どっちへ動くと思う？」
「５０％の確率で上」
「残り５０は？」
「下」
「……役にたたんな」
「じゃあ、下」
「何故？」
「お天道様めがけて墜ちるバカがいるもんですか」
「……成る程？」
美川は奇妙に納得した後、“アナイアレーター”の銃剣装置を伸展させた。
「もう少し……長いといいんだが」
「贅沢」
「……だな」

尻尾が動き、ワイバーンの姿が一瞬にして視界から消えた。

「――――そこだっ！」

美川は、銃剣が光ったままの“アナイアレーター”を真上へ向けて投げつけた。

ギャァァァッッ！！

耳をつんざくような悲鳴があたりにこだましたのはその時だ。

「森っ！！」

“アナイアレーター”を腹に突き立てたワイバーンが遠ざかろうとしていた。

深々と突き刺さった銃剣が、暴れるワイバーンから噴き出す紫色の体液に汚される。

数回、大きく羽ばたいた所で、美川が森に怒鳴ったのと、銃の重さに負けた銃剣が腹から抜けたのは同じタイミングだった。

「――――そこっ！」

森中尉騎と春日少尉騎。

２騎の風翔から放たれたビームは、ワイバーンの胴体を貫通した。

ワイバーンが空中に停止し、棒立ち状態になった。

仕留めた！

そう思ったのは、空中で“アナイアレーター”をキャッチした何も美川だけではない。

皆、そう思った。

その判断が、まさかあらたな危険を呼び込むとは予想しろという方が酷だ。

「敵、動きますっ！」
「馬鹿なっ！」

そう。
腹を大きくえぐられたワイバーン。
その顔が、その目が、怒りに燃え、そして、美川を睨み付けた。

翼がふられ、

「――このバケモノめっ！」
美川は“アナイアレーター”を構えようとした。
ピーッ！
警報が鳴り響いた。
「何っ！？」
「少佐っ！」
秋山中尉が怒鳴った。
“アナイアレーター”がっ！」
「なっ！？」
スクリーンの中で構えた“アナイアレーター”から煙が上がっている。
それだけではない。
銃そのものが――溶け始めている。
「何だと！？」
「暴発しますっ！武器放棄っ！」
襲い来るワイバーンめがけて投げつけるように投棄された“アナイアレーター”はワイバーンの直前で爆発。
ワイバーンはそのまま突っ込んでくる。
「左右、マニピュレーター損傷！」
「ここに来て！」

「多分」
石川少尉が言った。
「敵の体液が強い酸性物質だったのでは……」
「……考えたくねぇ」
「同感」
「――敵、来ますっ！」
大きく開けられたワイバーンの顎が自分を狙ってくる。
スクリーン越しの映像だとしても、正視に耐えられる光景ではない。
悲鳴を上げなかっただけでも褒めて欲しいと、美川は本心で思った。
武器表示上、この距離で有効な武器はない。
「――このっ！」
とにかく、この顎だけは――
美川は操縦システムを操作した。
グオッ！
本当に、そんな音がしたかと思うと、視界が真っ白になった。
メサイアの眼が、強い光を受けた時、保護のために安全装置が働くことがあると、講座では聞いていたが、美川はそれを見るのは初めてだった。
激しい揺れと、機体表面の異常加熱を示す表示、そして――

ドンッ！

そんな鈍い音と小さな震動が、美川にわかる全てだった。

「モニター、回復します」
ホワイトの後はブラックにアウトしたスクリーンがゆっくりと青空を映し始めた。
荒い息を繰り返す秋山中尉は、震える声で言った。

「まさか……炎息（ファイア・ブレス）が来るなんて……」
「中尉？」
「……そっちは生きてますか？」
「おかげでな」
スクリーンの向こうから、森達が近づいてくるのが映る。
「何が起きたんだ？」
「ワイバーンが至近距離から火炎攻撃をしかけてきました。少佐がとっさに騎体を沈めてくれたおかげで……ギリギリの距離での回避に成功」
「……」
美川はステイタス・データを確認した。
騎体前面は、ほとんどが損傷を告げる赤に染まっていた。
「牽制というか、とっさに撃った１２０ミリ砲弾がどこかに当たったみたいです。ワイバーン、地上に墜ちました」
「……スコアは君のものだな」
「部隊スコアです」
秋山中尉は言った。
「偶然の産物です。こういう僥倖は放棄する主義なんです」
「何故？」
「一生分の運を使い果たしたような気がして、恐いんです」
「後でキスしてやろう」
「奥さんにいいつけますよ？」
「やめておこう」
「とにかく」
秋山中尉は言った。
「ただの妖魔とは思えません。あんなしぶとい……というか、一旦、死んだはずの妖魔がどうして動き出したか……知っておく必要があると思いますが」
「そうだな」
地面に墜落したワイバーンを眺めた美川は頷いた。

地面に流れた体液のせいだろう。草木から白い煙が上がっている。
秋山中尉の言うとおりだろう。
ワイバーンという妖魔とはいえ、生命体だ。
それが土手っ腹を2つも風穴を開けられて生きていられるはずがない。
何が、あるんだ?
それに、あの機械部品は何だ?
「回収する」
美川は作戦を終了する価値があると判断した。
「……金星云々以前に、こいつは戦局に響きかねない。司令部へ通信出来るか?我、敵ト交戦。戦果1、損傷大ヲモッテ帰還スル……送ってくれ」
「了解」

強攻偵察作戦　第五話

「プラツゥルのワイバーンが？」
ダユーが、ワイバーンと美川少佐達の戦闘を報告として受けたのは、朝食の席でのこと。
定期的連絡の補足事項としてだ。
報告を受けた所で、ダユーは優雅な仕草で紅茶に角砂糖を落とす手を止めない。
事態の重要性は茶飲み話で処理出来る範囲だと、彼女は無言で語っている。
「補足ですが、状況からして、人類はワイバーンの死骸を回収の上、撤退したものと思われます」
「……ふぅん？」
ダユーは、ティーカップに視線を落とし、しばらく考え込んだ後で言った。
「誰か、ユーキを連れてきなさい」
「は？あの子をで、ございますか？」
「そう。それと、プラツゥルに事情を説明の上、帰還を命じて。深追い禁止を厳に」
「了解」

後、数分で若狭湾。
空は夜明けを経て、青々とした心地よい色で世界を染め上げている。
メースの疑似モニター環境で飛行を続けていると、本当に自分が空を飛んでいるような錯覚を受ける。
それが宗像には心地よい。
大型のメース“クーストース”の前を、２匹のワイバーンがよた

よたと飛んでいる。
翼に重大な傷を負ったらしく、共に翼が機械化されている。
その翼に慣れないのか、ワイバーンの動きはあからさまにおかしい。

無理もないか。
その、あちこちがメース化されている体を見れば誰でもそう思うに違いない。

それがよいことなのか？
宗像はそれを禁忌として触れようとしないことにした。
魔界や魔族に、人間の価値観が通じるとは未だに思えない。

しかも、今は戦闘空域だ。

すでに3騎のメサイアがこっちへ接近している。
こんな敵陣深くに侵入するとは、余程の命知らずか単なるバカのどっちかだろう。
それだけに、宗像は“まさか”という嫌な予感に胃が絞め潰されそうだ。
「……宗像様」
プラツゥルが通信モニターに現れたのは、その時だ。
「ポチが」
感情がどこか抜けた声が、宗像の耳に届く。
「どうなさったのですか？」
「人間に殺されました」
「なっ？」
「私、ちょっと行ってきます。この子達、お願いします」
「ポチに何が起きたんですか？」
その問いかけに答えることなく、“クーストース”は騎体をひね

って宗像の視界から消えていった。
「って……」
宗像は唖然とするしかなかった。
目の前には未だ飛び続けているワイバーンが二匹。
これ……どうすればいいんだ？
ワイバーンの面倒なんて、知らないぞ？
あと1分足らずで交戦距離に到達するというのに、どうしろと？
天壇から通信が入ったのは、そのタイミングだ。
「宗像騎は、そのままプラツゥル騎のフォローに回れ。ワイバーンの保護は、別部隊が引き受ける」
「り、了解っ！」
助かった。
心からの安堵を感じながら、宗像はプラツゥルを追うために針路を変えたのと同じタイミングで、浮遊城の方角から、接近する三騎の反応がモニターに現れた。

一方、ワイバーンに接近する三騎の通信は元気な声にあふれていた。

「ちょっと、裕樹。わかってるの？」
「何が？」
「ダユー様からのご命令は、ワイバーンの保護だよ？」
「わかってるよ？だから曳き綱持ってきたし、プラツゥル様から捕獲と誘導の方法は実地で教わっているじゃない。ただの散歩でしょう？そんな緊張しなくても」
「ダユー様から頂いた初仕事だよ？緊張するなっていわれてもぉ！」
「ははっ。月菜（るな）は心配性だなぁ」
「うっさい！それよりあんた、何よ、その背中のデッカイ戦斧」
「これ？ダユー様が下さったんだよ、いいでしょう」

そんな会話が散々通信回路をやり取りされる。
その声は、驚くほど若い――――いや、幼い。
声変わりを経験していないだろうことは、誰の耳にもわかる。

よくて小学生。
悪くても中学生。
そんな子供達だ。

「とりあえず」
他の二人よりしっかりとした口調で、男の子が言った。
「俺と月菜でワイバーンを回収する」
「大地、それだと僕は？」
「接近する敵が3だ」
「えっ？」
「しっかりしろ。言われるまで気付かなかったのか？」
「――――っ！」
「ダユー様、ダユー様もいいけど、肝心な所で抜けたことするなよ」
「ご、御免っ！」
「殿（しんがり）につけ。プラツゥル様と違って、俺達は縄を引っ張ってワイバーンを誘導するしかない。俺と月菜が担当する。一応、真菜さんから聞いた方法をとって時間を稼ぐが、最悪のことがある。裕樹」
「うんっ！」
「俺と月菜はワイバーンの回収で動けない。真菜さんの言った通りになればいいが、通じなければ正直、お前が頼りだ。牽制に回れ」
「牽制？」
「敵を引っかき回すだけ引っかき回して、俺達が逃げる時間を稼げばいい。ヤバいと思ったら、俺達より後になら逃げていい。その頃には、兄貴達が来てくれるはずだ。悔しいけど、俺達じゃメサイアは相手出来ん」
「デミ・メースでしょ？大地」

「俺にとっちゃ、どっちでもいいことさ」
「まぁ、同感だけどね……」

三人が駆るのは、浮遊城から派遣されてきたメース“コルウス”。戦場での工兵作業を目的とした、人間界では回収騎と呼ばれる騎だ。

浮遊城では訓練騎としても使われており、当然ながら戦闘なんて出来る話ではない。

二騎が手順に従ってワイバーンの捕獲――ワイバーンの首の根元につけられた首輪に魔法処理されたチェーンを取り付ける――を開始し、最後の一騎が戦斧を構える。

「さて――やるか」
大地という少年は、コクピットの中でトリガーを引いた。
「ちったぁ、信じてやるんだからな？デカパイ姉ちゃん」

美奈代達がそんな三騎に接触したのはその時だ。

「接敵します」
「くそっ。こんな所でメースか！」
美奈代は内心で舌打ちした。
「他に通報されていると判断していいですね」
「あなたならどうします？」
「とっとと仕留めて――」
「敵――発砲！」
「全騎――」
「ち、違いますっ！」
牧野中尉は怒鳴った。

「信号弾！イエロー2！グリーンが1っ！」
「黄色が2の緑1って……」
美奈代は、その信号弾のパターンに心当たりがあった。
……はずだった。
「……何でしたっけ」
「……」
「思い出しましたっ！」
美奈代の後頭部をド突く指導バーのボタンに指が伸びた牧野中尉に、美奈代は慌てて叫んだ。
「っていうか！」
「大尉」
ほむらから通信が入った。
“あれ”は、我々と共通の意思表示と判断してよいのですか？」

ほむらのいう“あれ”
信号弾のパターン。
黄色が二発と緑一発の三連発信号弾は、戦場において国際法で規定された信号だ。

我、交戦の意志無し。

意味は文字通りだ。
戦場で擱座したメサイアが停戦を宣言するために打ち上げられ、この信号が打ち上げられると同時に、一応、騎士同士の戦闘は、国際法上は禁止される。
別名“幕間信号”。
ただし、これを欺瞞として使用した場合、基本的に死刑が免れない上、信号弾を使用したメサイア、もしくは騎士は降伏によって得られる一切の人権保護を剥奪されるという厳しい罰則が付く。
それを魔族軍が使用した。

美奈代は、それをどう判断して良いのか迷った。
同じパターンで、魔族軍では別な意味があるのかもしれない。
意味が分からない。
「い、一体？」
美奈代は部隊に指示を出すタイミングを完全に逸した。
接近しつつある中、美奈代達の前で“コルウス”２騎がワイバーンにチェーンを繋ぎ、美奈代達の前から遠ざかろうとしている。
それだけ見ると、意味はどうやら同じなのか？そう、美奈代も思うしかない。
「美奈代さん？どうしますか？」
「とりあえず」
祷子に答えた。
「行かせてくれるなら、そのまま通るとしよう」
「消さなくていいんですか？」
「何のために？」
「……そうですね」
祷子はそう答えるしかなかった。
通報するなら、もうとっくに済んでいるはずだ。
交戦の意志もない敵をここで始末して、何の意味がある？
「エネルギーの無駄です」
「そういうこと――明貴少尉」
「はい」
「――不満か？」
「いえ」
ほむらは相変わらずの無表情で首を横に振った。
「“白龍（このこ）”の大切な初陣です」
「私より分別があるな。少尉は」
「……どうも」

「敵、通過します」
「狙いはワイバーンじゃなかったってことか？」
大地は背筋を走る嫌な汗に顔をしかめながら、肺の中に貯まっていた空気を吐き出した。
体が緊張して強ばっているのがわかる。
二人より年上だという、そんな自覚だけが支えだ。
ここで格好悪い事は出来ない。
冷静で、格好良く、大人になろう。
大地は口の中で数回、そんな言葉を呟くと、
「裕樹、兄貴達も接近している。このままなら大――――」

ドンッ！

スクリーンを真っ白にする程の強い光が走り、大地の声が掻き消された。

「敵、発砲っ！」
強いエネルギーの一発が、美奈代達三騎を襲った。
ほとんど無意識のレベルで散開、致命的な一発を回避した美奈代は牧野中尉に怒鳴った。
「どこからっ！？」
「３時方向――――敵、針路方向からっ！」
「国際法違反だぞ！？」
「大尉っ！」
「全騎、ビームライフル装備。交戦準備しつつ、速度を上げろ！」
「交戦は！？」
「目先の三騎が撃ったわけじゃない」
美奈代はほむらに言った。
「あの三騎を潰しても、弾は飛んでくる。あれが誤射ならもう飛ん

でこないでしょうし」
「本気なら？」
「あの三騎から離れて考える。三騎から私達を引きはがすための牽制かもしれない」
「了解――武装、ビームライフルへ変更します」

「だ、大地っ！今のは何っ！？」
突然の攻撃に暴れるワイバーンを、チェーンで何とかコントロールしつつ、月菜は大地叫ぶように訊ねた。
「何で！？あっちは城の方角だよ！？」
「わか……」
しまった！
大地は真っ青になった。
「くそっ。俺のミスだ」
「大地、ちょっとどういう？」
「――“ラーヴァ・ワン”より“バット・リーダー”。現状、“ラーヴァ・チーム”は撤退中。敵からの攻撃はなし。繰り返す、敵からの攻撃はないっ！信号が通じた！信号は通じたっ！」
「遅いっ！」
大地の耳につけたレシーバーに鋭い男の声が響いた。
「牽制射撃をかけた以上、もう信号は無意味だ、馬鹿野郎っ！」
バカはどっちだ！
大地は怒鳴りたかった。
こっちに状況の確認もせずにぶっ放しやがって！
向こうがせっかく撃たずにいてくれたってのに、そんな時にこっちからわざわざぶっ壊すバカは何なんだっ！
「――っ！」
大地はそんな反論を歯を食いしばって堪えた。

「現状、“ラーヴァ・チーム”は撤退中！敵からの攻撃なし、敵は遠ざかりつつあり！」
「遠ざかってるんじゃねぇ、何言ってやがる！」
再び怒鳴られ、大地はもう理性どころか血管が切れそうだ。
「ありゃ、味方の陣地へ向かってるんだ！“バット・リーダー”よりチーム全騎――」
他の部隊がどう動こうが知ったことか。
大地は通信をあえて無視することに決めた。
俺達の仕事は、このワイバーンを城に連れ帰ることだ。
「月菜、裕樹」
「うん」
「何？」
「このまま戻るぞ」
「で、でも！」
「だけど、大地っ！？」
「うるさいっ！」
大地は全てを振り払うように怒鳴った。
「俺達ゃ丸腰だ、それでどうやって戦えってんだ！」

モニターの中で、城から接近する反応が、速度を速めた。
「……おい、まさか」

この時、青くなっていたのは何も大地だけではない。

「ちょっと……」

紅龍を駆る矢崎綾（やざき・あや）の方が、大地より確実に気の毒な立場にいた。
長野県境を縫うように突破して新潟県へと出た綾は、編隊を組む染谷と共に、空の上で突然立ちふさがった相手に青くなっていたのだ。
「な、何よあれぇ……」
濃緑の醜悪なボディから生える悪魔の如き巨大な翼。
手にした戦斧から放たれる陽炎は、瘴気としか考えられない。
そして、そのサイズだ。
全高だけで普通のメサイアの倍。
そんな巨大なサイズのメサイアが、魔族軍にいる。
それ自体は、さすがに綾も情報として知っていた。
あの悪夢の静岡戦線で、敵味方を問わずに立ちふさがる者を灼熱地獄に叩き送ったという銀色の巨大メサイア。
正確な姿は知らない。
ただ、噂とそのサイズ――否、“存在だけ”で敵となる者を畏怖させて当然な存在が、綾を震え上がらせていた。
「じ、冗談でしょう……？」
「――中尉」
通信装置を介した染谷の声。
それは、恐怖に沈んだ綾の意識を無理矢理、現実に引きずり戻す。
綾に吐き気を感じさせたのは、その感覚なのかはわからない。
とっさに口元を抑えた綾だったが、嘔吐感に襲われて吐いた。
吐瀉物は何も出てこない。
ただ、吐き気に襲われただけ。
吐く。
その感覚だけが胃と食道を襲い、言葉が出てこない。
戦場でなくても、こんな経験は初めてだった。
「中尉」
「……な、何？」
「指示を下さい」

「指示？」
「交戦か撤退か」
「司令部は……」
通信装置を見て、綾は顔をしかめた。
敵陣のど真ん中。
それでなくても、こうも遠距離では狩野粒子のせいで通信が出来ない。
司令部の判断を仰ぐなんて出来るはずはない。
今の世界で自分より上はいない。
判断するのも、責任をとるのも、すべてが自分にかかっている。
それに気付いた綾は、すぐに顔をしかめ、ちょっとだけ通信モニターに映る染谷を睨んだ。
――せかすな、馬鹿。
――指示を受けるだけなら、私が口を開くまで黙っていろ。
そう、言いたかった。
「――交戦は無意味と判断。少尉、撤退する」
「しかし」
「死にたければ、勝手に死んで」
綾は言った。
「私は勝てる戦しかしない主義なの」
「……」
「ただし！」
綾は通信装置の向こう側の染谷を指さした。
「ギリギリまで粘って！あれだけデカければ、機動力は落ちるはず。とれる限り、アイツのデータを収集する！今回の任務はそれでオツリが来るとみた！ケツをまくるのはそれからでもいいっ！」
「……了解」
「……あの方々でしょうか？」

プラツゥルの声は棒読みに近かった。
「タマを殺したというのは」
「……いや」
宗像はプラツゥル騎の後方で紅龍を確認し、それが“白雷（はくらい）”でなかったことに心底安堵していた。
もし、“白雷（はくらい）”だったら、どうとりなすか。
否、自分が何をしていたか、そのものを考えたくなかった。
「交戦相手はすでに撤退したと聞いています」
「……では、あの方々は無関係と？」
「人類、つまり」
宗像は言葉に詰まりながら、答えた。
「ポチを殺した者達の“仲間”であることは間違いない……と」
宗像にしては、それが精一杯、当たり障りがないと判断できる言葉だった。
事を荒立てたくない。
出来るなら、穏便に済ませたい。
今や敵であり、倒すべき相手とはいえ、かつては仲間とみなされる近衛のメサイアだ。
同じ訓練校を出たのかもしれない。
もしかしたら、同じ故郷の出身者かもしれない。
脳裏を様々な“かもしれない”が飛び交い、交戦を避けるべきと主張する。

しかし……。

「――仲間なら」
プラツゥル騎は、しっかりと戦斧を構えた。
「プラツゥル殿っ！？」
「お伝え頂くべきですね」
宗像が口を開く前に、プラツゥル騎は動いた。

「敵、発砲っ！」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）の警告に、綾は即座に反応。
飛行形態に変形したまま、紅龍を回避機動に入れた。
「……なっ！？」
綾が目を見張ったのは、その次だ。
一回目の小さな爆発。
その後、最初の爆発で撒き散らされた子爆弾が連鎖的に爆発、辺りに一瞬のうちに巨大な“雲”を作り上げた。
それも一発ではない。
相当な数だ。
真っ白になった世界で、綾は何が起きたのかすぐに察した。
「煙幕弾っ！？」
そう。
敵はこんな所で煙幕を使ったのだ。
強力な電波妨害がかけられているらしい。染谷騎との通信さえ思うように通じない。
「――――こんな所で！」
騎体の高度を上げ、煙幕の雲から逃れる。
下に逃げたら狙い撃ちだ。
高度を稼いで、上から状況を把握すべきだ。
ＴＡＣから改装された2基の魔晶石飛行エンジンが天へ向かって吠える。
雲を抜けた……その直後、

綾は、目の前でまち構えていた濃緑の巨大なメースを愕然としながら見続けることになった。
ガンッ！
騎体に鈍い音が走り、モニターもスクリーンもすべてがブラックアウト。

警報が鳴り響き、真っ暗になった世界のあちこちで火花のショートする光と、騎体が潰れる音、世界が落下する感覚が綾にとっての全ての感覚となった。
腹に感じた、ぬるりとした生暖かい感覚が何なのかまでは、感覚が及ばず、その意識は真っ暗闇の中へと消えていった。

雲を抜け、落下するメサイアを別なメサイアが空中で抱きかかえるようにして回収。
そのまま遠ざかっていくのを、プラツゥルは無言で見送った。
「……よいのですか？」
「ええ」
プラツゥルは頷いた。
「私の大切なタマを殺した相手に、伝えてもらわねばいけません。そんな“おいた”をすると、どんなケガをするか」
「……」
よくわからない発想だが……。
宗像は、飛行モードで機種周辺を、巨大な“ナックルガード”で派手に殴られた“紅龍”の騎士の安否に少しだけ心配になった。
あのダメージだ。

即死していてもおかしくない。

それに、自分は何も出来なかった。
敵として、立ち会ったのだ。

――それでいい。

宗像は自分に言い聞かせた。
私は、魔族軍の軍人。
あいつらは敵なんだ。

だから――

「プラツゥル殿」

「はい？」

「城に戻りませんか？そろそろタマ達が戻っているはずです」

「あらあら……そうですね」

強攻偵察作戦　第五話（後書き）

●新キャラ紹介

“ラーヴァ・チーム”

日本語に直すと“幼虫隊”。

若手三人で編成されたメース部隊だが、今の所は見習いの扱い。

●矢口大地（やぐち・だいち）

１６歳。男の子。

新潟避難民だったが、収容所を脱走した後、紆余曲折の末、ダユーに拾われ、彼女に忠誠を誓う。

収容所の扱いを経て、散々見聞した大人の身勝手さを軽蔑しているが、その大人に従わなければ何も出来ない自分に一番苛立っている。

三人組の中では一番の年上としてリーダー扱いされているため、周囲との摩擦も多い苦労性の存在。

特技は絵を描くこと。

●鏡月菜（かがみ・るな）

・中学二年生。

・矢口の収容所脱走に協力してからの関係。

・三人組では紅一点だが、周りの男達からはロクに女の子扱いされていない。

・血を見ると逆上するなど、血については、精神的な不安定さを欠く。

・趣味はお菓子作り。

●早乙女裕樹

・中学二年生の１４歳。外見は完全な女の子だが、一応は男の子。
・周囲か面白がって女性用軍服をあてがっているため、言われなければ男性だとほとんど気づけない。
・本人は口を閉ざして語らないが、過去になにかあったらしく、他人とのコミュニケーションは少し苦手。
・特技の料理。大地曰く、“月菜の菓子より数倍食える”という。

強攻偵察作戦　第六話

「……あのね？」
染谷達が緊急帰還してからすでに数時間が経過。
後藤がタバコを吸っているのは、ラボの一角の小さな部屋。
壁に据えられたおんぼろなハト時計が、調子外れの鳴き声で時間を告げる中、ドアを開けたのは、手術用の白衣を着た小柄な存在。
マスクを外すと、そこに現れたのは、白衣が全く似合わない年頃の女の子。
美奈代が見たら仰天しただろう。
あの、水瀬悠理と名乗ったあの子だった。
「ご苦労さん」
たばこをくわえながら、長椅子に座っていた後藤は視線を向けると言った。
「どうだい？」
ポニーテールにまとめた銀髪の下で、くりっとした大きい目が不愉快そうな色を放っている悠理は、
「僕も忙しいの」
そう言うと、部屋の隅にあったゴミ箱に、血まみれの手袋を放り捨てた。
「そうみたいだな。それで？」
「ほとんど死んでるっていう事前報告は確かだった」
部屋に置いてあったリュックから服を引っ張り出す。
「蘇生と治癒魔法かけておいたから、明日には復活できるよ」
「そりゃ助かるといいたいけどなぁ……」
後藤は天井を見上げた。
「騎体がああもぶっ壊れちまうとなぁ」
「そっちは紅葉さんに言って。僕は管轄外」
「……だな」

「潰れた腕を元に戻すの、苦労したんだから」
「動くのかい？」
「目を覚ませば、本人は潰れたことだって覚えてないと思う……んで」
悠理がズボンをリュックから引っ張り出し終えた時だ。
「金の話しかい？」
「うん」
悠理は頷いた。
「特急料金と迷惑料で、通常の治癒と蘇生出術まで加わるから……えっと」
「この仕事がなけりゃ、どこに行っていたんだい？」
「……？」
悠理が小首をかしげた。
その何でもない仕草だけでも愛らしくて、後藤は、密かにほむらと一緒に芸能界にでも売りつけてやろうかと、そんなことを考えた。
「いろいろやってんだろう？」
「うん」
悠理は頷いた。
「大陸で新型の妖魔がたくさん出た」
「ああ。話しにゃ聞いている……もう行っていたのかい？」
「……陛下の絡みがあるから教えてあげる。もうダメだよ」
「ダメ？」
「あの大陸」
「……へぇ？」
悠理は手術着を四苦八苦しながら脱ごうとしている。
背後で縛られたヒモがどうしてもほどけないらしい。
「おじさん、後ろ、解いて」
「はいよ……手伝ってあげて」
「はい」
その女の声に気付かなかったらしい悠理は、背中の作業を待ちな

がら続けた。
「アイバシュラは、アリやハチみたいなもんだからね。地下にあるデッカイ巣を根こそぎにしないと……どれだけ表面に出てきた奴らを潰しても、後から後から同じのが出てくるからタチが悪い」
「巣はどうやって潰すんだい？」
「巣の中に入って潰すしかないけど、女王が生きている限り、巣そのものが成長を続ける……中に入って、女王を殺さないと」
「それが人類では無理だと」
「人間と同じサイズのアリの巣やハチの巣に武器もって入って、生きて帰ってこれる自信があれば別だけど」
「……かぁっ。考えたくねぇなぁ」
「でしょ？巣だけで１０近いんだもん。その巣同士が連携を取り始めたら、都市も国家も彼等に食いつぶされる」
「何年位、もちそうだい？君の判断でいいぜ？悠理君」
「……うーん」
暫く考えた悠理は答えた。
「中華帝国が２年……ロシアが５年……ヨーロッパ全土が１０年かな？放置していたら、あの大陸はアイバシュラに制圧される。ヴォルトモード卿の軍勢でさえ出来なかったことを、一種類の妖魔がやってのけるってのもスゴイ話しだと思うよ」
「……ふぅん？恐いねぇ」
「どんな妖魔かは、そのうち知ることになるよ。日本にも出ているし、魔族軍の中型サイズの主力妖魔は、これからずっとあのタイプだから」
「名前はなんだっけ？」
「アイバシュラ……サソリみたいなヤツだよ……で」
手術着を脱ぎ、それを丸めた悠理は言った。
「お師匠様が、ここまでの情報は後藤さんにも流していいって言ったら、タダで教えてあげたけど」
「今回の手術は別だと？ケチだねぇ、君も」

「お父さんに報告しないといけないんだもん。僕はお金なんてどうでもいいんだけどね」
「なら、お父さんの水瀬少将にいっておいてよ。部下の助命に感謝しますって」
「感謝＝カネ。なんだって」
「……はぁっ。大人になってもそんな風になっちゃだめだよ？君も」
「そうするけど……」
「どうだい？悠理君、取引しないか？」
「取引？」
「君にとっては悪い話じゃない」
「そうなの？」
「うん……君もお年頃だからねぇ……」
後藤は短くなったタバコをもみ消し、
「本来なら、元とはいえ警官の俺が言って良いことじゃねぇだけど、こうなりゃ別だ」
「何？」
「お前さん……風間のこと気に入っていたよなぁ」
「風間って、あのお姉さんのこと？」
「そう……今度紹介してやるって言っておいた気がするんだけど」
「確かね。それが？」
「それで手を打てや」
「億だよ？単位」
「だからさ」
「……紹介状書いてもらうだけで億？」
「おいおい」
怪訝そうに眉間に皺を寄せる悠理に、後藤は意地悪く言った。
「紹介状で何をどうするってんだい」
「うーんと」
「そんな回りくどいことじゃなくてさぁ」
後藤は身を乗り出すように悠理に囁いた。

「もっとダイレクトに教えてやるっての」
「うーっ。おじさんの方が回りくどいよぉ」
「そうかい？じゃ――――祷子ちゃん」
「はい」
「……へ？」
後ろではっきりと聞こえた女の声に、悠理の動きが完全に停止した。
「そ、その声……」
振り向こうとした悠理の顔は真っ青。
その悠理の体を背中から抱きしめ――――否、抱き上げたのは、女の細い腕だった。
「隊長？命令通りにしてますけど、どうするんです？この子」
祷子だった。
「いやぁ」
後藤は意地悪く、悲鳴を上げる寸前の悠理をニヤニヤと眺めると、
「祷子ちゃん」
「はい？」
「この子が療法魔導師だってことは教えたよねぇ」
「はい♪」
祷子は微笑んだ。
「こんなに小さいのに、人助けだなんて立派だなぁって思います」
「それがさぁ」
後藤はわざとらしく皺を寄せた。
「今回については、カネ寄こせっていうんだよ。この子」
「まぁっ！」
「人助けなんだから頼むっていうのにさぁ」
「ぼ、僕が言ってるワケじゃ！」
「……コラ」
祷子が、それらしく真顔になって言った。
「そんな意地悪なことしちゃいけません。人の命を助けることは大

切なことでしょう？それをお金儲けに使おうなんて、していいことなの？」

「だ、だけどぉ」

「ダメなモノはダメ」

祷子は恐ろしく器用に悠理の体の体勢を入れ替えた。

それまで背中に当たっていた祷子の胸の狭間に悠理の顔が半ば埋まった。

「――っっっ！！！」

悲鳴なのか深呼吸でもしたのか、真っ赤にゆであがった悠理の喉から、そんな声があがった。

「もうっ……それにしてもあなた、どうして男の子のパンツなんて……ん？」

不意に、祷子がきょとん。とした顔になって、その手が悠理の腰のあたりでもぞもぞと動いた。

「あなた、お腹のあたりに何か持ってるの？危ないでしょう？お姉さんのお腹に何かあたって……」

悠理を腕のところに座らせる――まるで幼稚園児を扱うようにした祷子が、悠理を少しだけ体から離すと、

「……まぁ」

目を丸くした。

水瀬は顔どころか全身が噴火寸前（注意：特にどの部分かは察して下さい）。顔はもう泣きそうだ。

「……ご、ご立派……で」

顔が引きつったまま、悠理の一部に視線を注ぐ祷子の前で、

「っっっっ！！！」

悲鳴にならない声だけ残して、悠理の姿が一瞬で消えた。

「便利なもんだなぁ」

後藤は楽しげに喉の奥で笑った。

「ヤバけりゃ瞬間で逃げ出せるんだから」

「あ、あれが瞬間移動（テレポート）ですか？」

祷子は、突然軽くなった腕をさすりながら、
「でも、あの子は療法魔導師で、そんな子が瞬間移動なんて」
「違う違う」
パタパタと後藤は手を振った。
「あの子は魔法騎士兼療法魔導師――――俗に言う何でも屋だ」
「……へぇ？」
「おい、祷子ちゃん」
「はい？」
「純なコドモを色仕掛けでモノにしちゃだめだよ？」
「いくつ何ですか？あの子」
「まだ１４だったかな」
「やだ、私とそんなに離れてないじゃないですか」
「不思議なモンさ。二十歳の男が１４の女の子にちょっかい出したら犯罪なのにねぇ」
「くすっ。それにしても後藤隊長」
祷子は笑いながら言った。
「お金踏み倒すために私を利用したのですね？」
「いやぁ……何」
後藤は頭を掻きながら笑った。
「あの子を後々、利用したくてね？その時にゃ、お前さんに管理（コントロール）してもらいたくてさ」
「私に、ですか？」
「ああ。何しろ、あの総領息子は、お前さんにぞっこんだ。お前さんの言うことなら何でもするだろうさ。色でしかけようと何しようと、お前さんの勝手だけど、とにかくアレが俺達の言うことに従ってくれるようにしてくれや。お前さんがホレようがハラもうが、それはお前さんに任せる。とにかく頼むわ」
「でも、逃げましたよ？」
「今度の時は逃がさないようにしてくれ――――何なら、筆下ろししてやって」

後藤はニヤリと笑った。
「ご立派――なんだろう？」
「た、隊長ったら！」
「悪いことじゃないだろう？お前さんのことだ」
「ど、どういう意味ですか！」
「好きだろう？あの年頃の男の子」
「わ、私……」
何故か真っ赤になった袴子は、視線を室内に彷徨わせた。
「そんな……あの……」
「まぁ、いろいろこっちも知ってることはあるんだよ」
後藤は椅子から立ち上がった。
「とりあえず、繰り返しで悪いが、あの子のことは頼むわ」
「は、はぁ……」
「さて……当面の問題は」
後藤は自分の腰に手を回し、背筋を伸ばした。
「痛ててっ……ウチの折角の手駒潰してくれたバケモノについて……だな」

バキッ！
ハンガーの中でそんな音が響き、無重力地帯を、拳に吹っ飛ばされた大地が流れていった。
「……くっ！」
壁に叩き付けられた大地は口元を拳で拭うと、何とか立ち上がり、殴った相手を睨み付けた。
「何でっ！」
ガンッ！
怒鳴り越えは再びの拳に潰された。
さっきは右。今度は左の頬だ。

「や、やめて下さいっ！」
その胸ぐらを掴んだ士官の腕にすがりついたのは、裕樹だった。
「お願いですっ！もうやめて下さいっ！」
その後ろでは、月菜が口元を押さえてガタガタ震えていた。
「ったく」
大地の胸ぐらから手を放した士官は、その隻眼で大地を睨み付け、そして怒鳴った。
「戦闘停止の信号弾を勝手に打つわ、何の報告もしないわ、テメエはいつからそんなに偉くなったんだ！」
士官は裕樹を振り解くと、それでも声を荒げた。
「俺は命じておいたなぁ！敵が近づいたら、俺の指示に従えと！」
「――っ！」
「全部忘れてたんじゃねぇか！」
「す、すんません」
「すんませんで済むかっ！」
もう一発、拳が飛んだ。
「お前一人のドジで裕樹や月菜まで危険な目に合うんだ！俺の指示に従えないなら、次からメースに乗せないからなっ！」
「くっ！」

「……やりすぎですよ」
裕樹と月菜に付き添われて医務室に向かった大地を見送って、士官に近づいた宗像が言った。
「私達もそれなりの無茶はしましたが」
「ふん」
士官は鼻を鳴らした。
「ガキは獣と一緒だ。最初の躾けが肝心なのさ」
「だから、その躾けがやり過ぎなんですよ。あれじゃ、いつ背中を

撃たれてもおかしくない」
「なぁに」
士官は、口元で不敵に笑ってのけた。
「ガキは親を殺す勢いで丁度良いのさ」

「大丈夫？」
「ああ。口の中が切れているだけだってさ」
医務室からの帰り、痣が残る顔の大地に、裕樹が心配そうに声をかけた。
「失敗したねぇ」
「っていうか、手順無視したのは大地のせいだから、しかたないじゃない」
月菜は気丈にもそうやって大地を責める。
「でもぉ」
「……あのクソ兄貴、そんなに心配だったら通信一本、入れればいいじゃないか」
「わかってないわねぇ」月菜はあきれ顔だ。
「そこまで、あんたは信じられていた。結局、あんたがドジして、そのドロ顔に塗られたのは中佐の方じゃない」
「……っ」
大地はそっぽを向いた。
「次は、もっと上手くやってみせる！」
「そうだよ！」
裕樹が嬉しそうに言った。
「ご飯、僕、作ってあげるよ。おなかすいたでしょ？口に入れやすくしてあげる」
「……すまねぇ」
「何よ」月菜が口元を尖らせた。
「私には全然、すまんのすの字もないクセに」

「月菜の作ったモノなんて食えるか」
「な、なんですってぇっ!?」

「ったくさぁ」
コクピットブロックを大きく潰された紅龍を前に、紅葉はため息混じりに肩を落とした。
歪んで潰れたコクピットから綾を救助するため、装甲や機材のほとんどを破壊、もしくは切断したせいで、コクピットとはいえ、そう呼ばれなければその部分に何があったのかさえ分からない。
「何？私、そんな難しいこと要求していたのかしら？」
「何の話です？」
集まった騎士達の中で、美奈代が訊ねた。
「要するに、美川少佐達がワイバーンを撃破して、その後にやってきた正体不明の新型に、矢崎中尉がやられた。そういうことですよね」
「……そうよ」
紅葉は頷いた。
「だけどさぁ、たかが煙幕だけで、こうもぶっ壊されるレベルだったの？」
「……それは」
「こっちも奥の手貸しているんだからさぁ。それ相応の戦果は出して欲しいのよ。わかる？たかが偵察。たかが新型１騎。逃げたければ逃げられたはずよ？」
「……」
「いい？あんた達にもよく言っておく。何が目的で、何が任務なのか、それをはっきり見定めて。騎体は無限にはない。決して安くない。決して、消耗品じゃない。騎士はＭＣ（メサイア・コントローラー）の安全にも責任があるって」

「……はい」
「……偵察の方は成功した。分析に回しているけど、富山湾に入った中国海軍のメサイア輸送艦がはっきり確認出来ているそうよ」
「……つまり」
「魔族軍に手を貸した。あるいは、日本政府が入国を許可したか……両方でしょうね」
「魔族軍に中華帝国軍が加わって？」
「倒す敵が増えただけよ。日本から両方を追い出せばそれでいい」
「……」
「あっちもあっちで、魔族軍の脅威にさらされているっていうのに、何考えてるんだか」
「……ですね」
「それで？」
「はい？」
「停戦の信号弾が打ち上げられたって？」
「はい。黄色2、緑1の」
「間違いない？」
「ええ……」美奈代は頷いた。
「映像は確認しています」
「……そう」
「あの？」
「中野大尉が事情聞きたいそうよ？みんな、泉大尉を捕まえてっ！」
「大尉っ、逃げないで下さいっ！」
「た、大尉っ！？」

男の子は女の子

ポクポクポク……。

「……」

一体、どうしよう。

正座したまま、宗像は内心、困惑しきったまま、うっすらと目を開けてみた。

目の前には、こちらに背を向けてプラツゥルが座っている。

鼻腔に広がるのは、線香の香り。

……まさかな。

宗像は、母方の親戚の家を訪れた小学生の夏休みを思い出した。

あの暗く、重々しい町屋独特の空気。

老舗の線香専門店だという、そこに漂う独特の香りは、中庭から聞こえてくるひぐらしの鳴き声と共に新鮮なまでに思い出せる。

問題は、そんな純日本的なことを、どうして魔族の城の中で味わっているか――だ。

ポクポクポク……ちーん。

「なむなむなむ……」

正座したプラツゥルが、木魚から手を放し、数珠を手に何か念じている。

せめて数珠についた「京都ドライブイン」とか書かれた値札くらいは外して欲しいものだと、宗像は切実に願った。

「……」

プラツゥルの目の前には白いテーブルクロスをかけられた台が据えられ、その上には線香台と彼女の手作りらしい黒い木札が置かれていた。

「ポチのお墓」

そう、木札に書かれているから、恐らくは位牌と墓か何かをごっちゃにしているものと宗像は察するしかなかった。

――もし、騎士でなかったら。
――もし、今が戦争でなかったら。

この時代に生きる幾人もが自然にする夢想だが、宗像はこの時ばかりは強く思った。

――私は、この勘違い外人の誤解をたたき直してやる！

ちりーん。

宗像の背後で、風鈴が鳴った。
ラムネと書かれた、小さなのれんが、魔法で生成される風に揺れている。

――京都で外国人用のガイドにでも転職しようか。

東寺のあたりで金髪の外人に囲まれてバスガイドの制服に身を包みながらマイクを手にしている所まで想像した辺りで、不意にプラツゥルが振り向いた。

「ありがとうございました」
「は？」
「無事にポチのお葬式も出来ました……」
プラツゥルは、そっとハンカチを目元に押し当てると、宗像に深々と頭を下げた。
「ポチの魂は、４９日の法要までこの世界に留まり、そして遠くの星空の向こうにあるという、戦士の館で永遠の戦いと宴を繰り広げるべく、旅立つのですね……」

――何だそりゃ。

宗像は、冷や汗を感じながら、ただ頷くだけだ。
一体、魔族の宗教観がまるでわからない。
これで普通なのか？
それともプラツゥルが異常なのか？
答えは知りたいような、恐くて聞けないような……。
とりあえず、ワイバーンと戦うなにともかく、酒を酌み交わす趣味が自分にないことだけは確かだと、宗像は思った。

「と、とりあえず」
宗像はハンカチで汗を拭くと話題を変えた。
でなければ、こっちがもたない。
「残念です」
「……はい」
「ただ、プラツゥル殿の一撃が、ポチの無念を晴らしたならば、ポチの魂も浮かばれるでしょう」
「そうですか」
「……はい」
「残された者がその仇を果たせば、殺された者の魂は、ワンランク上がるのですか……。ランクアップした魂とは、どういう存在になるのでしょう。興味深いですねぇ……」
「……」
宗像は、遠くを眺めるプラツゥルに、「た、多分……」と言うしかなかった。

それから暫くの後――
「ワイバーン達とは別なタイプのリハビリも順調だと報告が」
麦茶を卓袱台に置き、プラツゥルは言った。

「ほう？」
宗像は一礼して麦茶に手を伸ばすと、船箪笥の上に置かれたアンティークな時計に目をやった。
外の環境はそろそろ夕方だが、時間は既に夜になろうとしていた。
「いかん」
麦茶を一口飲むと、宗像は腰を上げた。
「もう、こんな時間か」
「……あら」
プラツゥルは、ハッ。とした後、時計を見た。
「いけない。環境装置の時間設定が狂っていたのを直し忘れていました」
「いえ、長々と」
「まだいいじゃないですか」
プラツゥルは笑って言った。
「宗像様は、私がお預かりしていることになっているのですし」
「……しかし」
「ダユー様なら」
プラツゥルは、時計を流し目で見たあと、ポツリと言った。
「……今はお会いできませんよ」
「はっ？」
「……いえ」
プラツゥルは、話の腰を折るように微笑んだ。
「ご飯、ご一緒にいかがですか？お素麺ですよ？」

――――とはいえ。
夕食後、プラツゥルの元を辞した宗像は、その足でダユーの私室を目指した。
宗像は立場上、ダユーの私兵であり愛人という立場だ。

だからこそ、人類という、この城では虫けら程度の身でありながら、メースを含め、一定の自由が与えられている。

プラツゥルの所にいたのは、ペットを失ったプラツゥルを慰めるためという大義名分はあるにせよ、だからといって、主人であるダユーをないがしろにしたなどと噂でも立てられれば、立場が危ういのが宗像だ。

せめて、部屋を訪ねればメンツだけでも保てる。

そう思って、宗像は私室のドアまで近づいた。

そのノブに手をかけようとした時だ。

不意にドアが開き、中から小柄な女性士官が出てきた。

女性士官？

軍服は女性の、つまり宗像のそれと同じだ。

だが、宗像の中の“女”は、その違和感をすぐに見抜いた。

「――おい」

ひっく。

小さくしゃくり上げた女性――そう呼ぶにはあまりに幼い顔が、びっくりした表情を浮かべ、宗像を見た。

ショートカットの女の子。

普通なら、この女性士官に与える外見上の判断はそれで間違っていない。

かなり泣いたんだろう。目は真っ赤で、まぶたが腫れている。

「お前……？」

「あ、あの……」

身じろぐ少女が逃げ出さなかったのは、宗像の階級章を見たからだ。

「し、少佐……殿」

とっさに敬礼した少女に小さく答礼した宗像は言った。

「お前」

「……あっ！？」

近づくなり、宗像は何と、少女の履いたスカートの中に手を突っ

込んだ。
「――っ！？」
顔を真っ赤にした少女が、涙を浮かべながら声にならない悲鳴をあげ、宗像の手を止めようと掴む。
「……男が、何でそんな格好をしている」
スカートから引き抜いた手を、まるでそのものが汚物といわんばかりに睨む宗像が、あからさまな不快感を浮かべて訊ねた。
「しかも、ダユー様のお部屋から出てきた所とは」
「あ、あの……」
もじもじする姿は、完全に女の子だ。
普通の男――いや、女の多くでさえ見誤るだろうことは間違いない。
ただ、生粋のレズビアンで、1キロ先の女のスリーサイズを当てて見せると豪語する宗像はその中に入っていないだけだ。
「ぼ、僕……」
「まず……」
チャカッ。
宗像が腰のホルスターから引き抜いたのは、拳銃だ。
「っ！」
女の子はドアに張り付くように飛び下がり、青くなって身を強ばらせた。
「……ほう？」
宗像は楽しげに微笑む。
「“拳銃（これ）”を見て脅えるとは……」
「……あ」
「――お前、人間だな？」

安心しろ。
私も人間だ。

宗像は、自分の部屋へその外見上少女、中身男の子を連れ込んで、ベッドに座らせた。
「全く……男を自分の部屋に入れたなんて人生で初めてだ」
宗像は椅子に腰を下ろすと、デスクに銃を置いた。
ここに来るまでにすれ違ったほぼ全員が、宗像が手にした拳銃に違和感すら感じなかった。
つまり、ここの連中は銃の破壊力を知らない。
その中で、銃を見ただけで震えるのは、その意味を知る人間だけ。
それが、宗像の関心を引いた。
「――名乗れ」
「えっ？」
「男か、それとも女か、ダユー様の戯れで改造でもされたのか」
「ぼ、僕……」
「つくものが付いているから、男と判断したが……？」
「ぼ、僕は――男の子です」
「仕草だけ見ていると、間違いなく女で通るぞ……気味が悪い」
「……っ！」
「ムキになって怒るな。本当のことだろうが。人生で初めてだぞ？この手で男などという、世界で一番穢らわしい存在を掴ませてくれたのは」
「……僕の家の伝統です」
「とりあえず、名乗れ。でないとポチ二号と呼ぶぞ」
「……裕樹です。早乙女裕樹（さおとめ・ゆうき）」
「早乙女……まて？」
宗像は、少しだけ考えて……。
「歌舞伎の？」
「……はい」
「こいつは驚いたな……名門早乙女家の……それでか」
「小さい頃からのしきたりで、僕、ずっと女として育てられてきたから」

「私の記憶違いでなかったら、父親は人間国宝だろう？確か、その息子といえば、１０歳で関係者をして“伝説的”と言わしめた天才だと聞いていたが……」
「……」
裕樹。
そう名乗った少年は、胸元を押さえながら下を向く。
そんな仕草でさえ、下手な女より圧倒的に女らしいと、歴戦のレズである宗像でさえ唸るしかない。
「言え。どうせ、ここには私しかいない」
「……でも」
「京都千本騎家の縁者と言えば答える気になるか？」
「えっ！？」
「……」
「ほ、本当に、千本騎家の方なんですか？」
「ここでウソを言って何になる。悪いようにはしない」
「……友達と」
裕樹は重い口を開いた。

時間がどれだけ経ったかわからない。

ただ、宗像は裕樹の口から出た言葉を信じるしかなかった。

友達との旅行。
戦争。
逃亡生活。
収容所での性的虐待。
脱走。
饑餓。
そして……。

「君は、ダユー様に拾われた……」
「死ぬか、生きるか――そう聞かれた」
裕樹は頷いた。
「僕は死にたくなかった。大地も、月菜も助けてくれるなら、どんなことでもするからって」
「……だから、ダユー様の」
宗像は、次の言葉を選んだ。
「その……“狗”になった」
“狗”
ここで使うには、あまりにもショッキングというか、相手の歳には相応しくないことは承知している。
しかし、ダユーと裕樹の関係を、宗像としては、そうとしか言い様がなかった。
「大地は人間を憎んでいる。月菜もそう。収容所や逃亡生活で見た生の人間の醜さ……あれを見れば、どんな人間だって憎む事が出来るよ」
「お前もか？」
「……わかんない」
裕樹は小さく、悲しげに首を横に振り、そしてスカートを自分から捲ってみせた。
「……僕は、生きたいだけ。弱いから、恐いから、だから強くなりたい。それまでは、どんな目にあっても仕方ない。こんな目にあっても……僕は、弱いから、そう割り切っている」
裕樹がはいているのは、女性用下着。
ダユーの命令だろう。
彼女がサディスティックな趣味を持っていることは知っていたが、宗像は飼い主の意外な趣味をのぞき見た気がした。
「……それも生き方だろう。だが」
宗像は視線をそらせた。
「それで人を殺せるか？」

「生きるためなら殺しは許される。僕の会った大人はみんなそう言っていたよ?」
「……私もか?」
「きっと言うと思うよ?生き残るか、赤の他人のために死ぬか、二つに一つの時なら」
「ちっ。歳と外見の割に達観している」
「褒めていないよね」
「当たり前だ……ワイドショーの生番組でも見たような気分だ。泉や柏辺りなら親身になるだろうが、私まで一緒にするな」
「お姉さん、結構利己的にみえるけど」
裕樹は困惑気味の宗像に、くすっ。と笑いかけると言った。
「情には厚いタイプだよ?僕にはわかる」
「何故」
「そう思うから」
「大人をからかうな」
「……お姉さん、処女でしょ?」
「キ●玉潰してやろうか?」
「僕ね?不思議とそういうのわかるんだ。お姉さんはとっても寂しがり屋のいい人だって」
「……いい度胸だ」
宗像は拳銃を掴んだ。
「ここまでワザと連れてこられたとかのたまうつもりか?武蔵屋」
「僕の屋号知ってるの?」
「……いろいろとな」
「ありがとう。お姉さん」
裕樹は人なつっこい笑みを浮かべ、
「拳銃が恐いのは本当だよ?でも、お姉さんと話していたら、恐くなくなったよ」
「……今から恐怖のどん底にたたき落としてもいいんだぞ?」
「……勘弁して」

「い・や・だ」
「どうすればいいの？」
「さぁ？」
「……意地悪」
「可愛くすればいいというものではない。大体、話を聞く限りは何なんだ？お前、普段は何している」
「普段？」
裕樹は自分を指さすと、
「普段は大地や月菜達と一緒にメースの訓練を受けている」
「待て……お前、騎士なのか？」
「うん♪」
裕樹は頷いた。
「今は回収騎しか扱わせてもらえないけどね」
「……ああ」
宗像はやっと思い出した。
「いかんな。男の顔はすぐに忘れるのは、いい加減、悪い癖だと思っていたんだが」
「？」
「昼間、タマ達を回収して少佐にぶん殴られていたのはお前達だったな」
「少佐？」
「ああ……今は瀬音中佐か」
「兄貴を知っているの？」
「兄貴？」
「中佐、自分のことはそう呼べって。階級で呼ぶと怒るんだよ」
「……成る程」
「人類を憎め。殺せって……容赦ないんだ。メースに関しては」
「身内に殺されかかれば、人間そうなるさ」
「……」
「居場所を失った者の掃きだめが……この岩の城ってわけだ」

「お姉さんも、居場所がないの？」
「お前はどうだ？」
「僕はあるよ？」
裕樹は嬉々として頷いた。
「大地達にご飯を作ったり、タマやアルゴス達のエサの支度や、巣の掃除とか！」
「動物は好きか？」
「うんっ！本当はペットショップか獣医になりたいんだ。今度の旅行も、芸のためとか言って、本当は野生の動物を見るためだったんだもん！」
「……それが巡り巡って、一番穢らわしい所まで落ちた人間共（くず）の本性を目の当たりとはな……どういう因果だ」
「でも、ダユー様は、ひどいこともするけど、優しいんだよ？」
「……」
サディストの飴と鞭をこの子に教えるつもりは、宗像にはなかった。
というか、出来る自信がない。
「戦いがいいとか悪いとかみんな言うけど、それがダユー様やプラツゥル様のため、あの人達を、みんなを助けるためなら、正しいと思うんだ」
「ダユー様のご褒美がほしいから、じゃないのか？」
「……そ、それは」
「抵抗しないんじゃなくて、出来ない……お前も一端の“狗”というわけだ」
「そ、そういう言い方は……」
「そういうことだろうが」
「……」
「まぁ、これも何かの縁だ」
宗像は椅子から立ち上がった。
「いろいろ、聞きたいこともある。これからはよしなにしてもらお

う」
「ねぇ、お姉さん？」
「何だ？」
「肝心なこと聞いていないんだけど」
「……」
「お姉さん、名前は？」
「宗像だ」
「宗像……何？」
「下の名前は教えない」
「なんで？」
「私にも事情がある」
「もしかして男？」
ゴンッ！
宗像の拳が垂直に裕樹の脳天に振り下ろされた。
「――――っ！」
あまりの痛さに悲鳴を上げて床をのたうち回る裕樹に宗像は怒鳴った。
「き――――貴様ぁっ！」
「ひ、ひどいっ！」
「人生２１年、これほどの侮辱は受けたことはないっ！」
「泣くほど悔しいことなの！？」
「お前、後で覚えておけっ！」
宗像は裕樹の首根っこを掴むと、部屋から放り出し、ドアに鍵をかけた。
ドアの向こうで何か悲鳴が上がったが、知ったことではない。
「まったく！」
宗像は乱暴に椅子に腰を下ろした。
「女装癖の変態が！まったく、どうしてやろうか……早乙女家の変態め」
早乙女。

怒りを抑えながら、宗像はそれでも、懐かしい名前を聞いたな。
そう思った。
「……ったく」
早乙女。
宗像。
共に“ある縁（えにし）”によって結ばれた家柄。
そこに生まれた者同士の、ある意味では避けられない結末。
それを忌避したからこそ、私はもしかしたらこうなったかもしれないというのに――。
それを、あんなノホホンとした顔で性別を間違えてくれるとは！
「ああ……腹が立つ」
デスクの引き出しに隠してあった酒を取り出すと、宗像はポツリと呟いた。
「もしそうなら」
トクトクトク
心地よい音がして、ブランデーがグラスに注がれていく。
「……こうなった最大の原因が、お前だろうが跡取り息子め」

反抗　第一話（前書き）

●事前知識

・停戦破棄の後、魔族軍は太平洋側での作戦を行わず、日本海側で攻勢を強め、石川県は完全に制圧され、福井はほぼ制圧寸前という状況です。

・え？作品中でしっかり書け？ごもっともです……ごめんなさい。

「正直」
デスクに腰を下ろした中野は言った。
その手にしているのは、美奈代達が富山湾上空で撮影した偵察写真だ。
美奈代は中野のデスクの横に置かれたパイプ椅子に、不思議な居心地の悪さを感じながら座っていた。
「俺も困っている」
「……」
「はっきり、戦況分析（こういうの）は門外漢だ。しかも、後藤さんからは「お前が好きなようにやれ。責任は泉にとらせる」としか言われていない」
「なっ！？」
「……まぁ」
ポイッ。
中野はデスクに写真を放ると、サイドテーブルに置いてあったコーヒーメーカーを手にした。
「コーヒー、飲むか？」
「は、はぁ……」
「お前達が遊びで富山湾まで行ったとは、さすがに俺も思っていない」
「……」
「だが……」
美奈代の前にコーヒーを置いた中野は言った。
「参謀本部の連中にとって、この写真が成果だというなら、評価は“それ以下”となる」
「それ……以下？」
「悪く思うな？」
そう言って、中野は肩をすくめ、椅子に身を沈めた。

「……参謀本部にとって、この程度の航空写真に意味なんてない」
「で、ですけど！」
「メサイア1大破、1中破の代償として高高度爆撃機1機か2機を危険にさらしても同じ効果が望める程度の情報なんて、何の意味もないのさ」
「何が望みだったんですか？」
「わからんか？」
「考えたくないです」
「……わかっているようだな」
中野は天井を見上げながら、
「試しに言ってみろ」
「富山湾に駐留しているだろう中華帝国軍騎の首」
「何故わかっていてやらなかったか……そんな妄言は、俺の口からは言うつもりもない」
当然――そう言いかけた美奈代の言葉を遮るように、中野は言った。
「だが、上層部はそうは思っていない。連中は正直、焦っている」
「焦っている？」
「中華帝国と内通した内閣……否、独裁者に軍と政治を握られ、自分達の主人である天皇も我慢の限界に来ている。せめて岡山を逮捕するだけの口実が欲しい」
「なら、クーデターに荷担すればよかったんですよ」
「そういかんのが政治だよ」
「私、そういうのは嫌いです」
「俺も官僚になってからしばらく経つが……つくづく、官僚ってのは異様な世界だと思う」
「中華帝国軍騎は、その政治が大好きな方に喜ばれる格好のネタだと？」
美奈代は口元を歪めた。
「そんな……どこかの残骸に過ぎないとか、あるいは報道さえ握り

つぶしますよ。あの連中」
「それでも、何もないよりマシだろう」
「マシ程度を得るために」
美奈代は眉をつり上げた。
「私とその部下に命を賭けろというんですか？」
「実際、そのマシなモノを手にするレベルに達することなく、結果として近衛は数十億円の損害と戦死寸前の騎士一人を出した。上にとっては、これに見合うだけの結果が出ていないこと自体が問題なんだ。わかるか？」
「司令部と現場は認識というか、判断基準が異なること位、私だってわかります。ですけど」
「そんなことは現場のトップとして受け入れがたい。それも俺にも分かる」
「……」
「現場を信じてやりたいし、その苦労もわかる。だがな？」
「だが？」
「例えば、信じすぎた挙げ句が書類間違えて現場の修理止めてくれたりすれば、俺でも現場を怒鳴りたくなる」
「散々怒鳴ったクセにっ！」
「まだ足りん」
「もう結構ですっ！」
「……まぁ、今回の作戦はそういう意味では大失敗だ」
「そんな……」
「だから」
「だから？」
「お前達には、同じ事をもう一回やってもらう」
「はぁっ！？」
「後藤さん経由で、上からの命令が俺の所に来た」
中野は数枚の書類を美奈代に手渡した。
「独立駆逐中隊は、追って指示する日次をもって富山湾へ強攻を実

施。現地を占拠する中華帝国軍を撃破。その根拠地を奪還せよ」
「……」
目をパチクリしている美奈代に、中野は哀れむような顔で言った。
「言うだけなら、誰でも言えるよな……」
「……逃げていいですか？」
「お前一人？」
「……」
「誰かがやることさ」
「っていうか、もう一度同じ事って、難易度上がってません？偵察と強攻って、意味違ってませんか？」
「完っ璧に違うな」
「でしょう！？」
「一時的にでも現地を占領し、関係資料を押収しろってところだ。偵察写真より関係書類の方が事務方を説得しやすいと判断したか……な？」
「滅茶苦茶ですよぉ……」
「素人の俺もそう思う」
中野は、半泣きになった美奈代の頭を撫でながら頷くしかない。
「……まぁ、生きて帰ってこい」
「……ぐすっ」
「小清水少尉とはまだ話しがついていないしな……いろいろと」
「えっ？」
「お前がそういう趣味だってことは知ってはいたが……」
「――っ！」
別にレズと同性に言われても何とも思わないが、改めて異性に言われると顔から火が出るほど恥ずかしい。
「……まぁ、長い目で見ている」
「えっ？」
「気にするな。独り言だ」
「……はぁ」

「お前は、任務を達成して、部下を生還させることだけ考えればいい――違うか？」
「そ、そう、ですよね？」
「そうだ」
ふっと見せた中野の微笑みに、美奈代は心底救われた気がした。
「はいっ♪」
そう、心から笑ってみせることが出来たのは久しぶりだな。と、美奈代は思った。

●「鈴谷」ハンガーデッキ
紅葉のラボから“鈴谷（すずや）”に移動するよう命令が下ったのは、美奈代が中野の元から戻ってからだ。
平野艦長が復帰する。
“鈴谷（すずや）”は再び出撃する。
高木副長からの通達に、乗組員全員の志気は興奮を通り越して沸騰した。
「マスターフレームのセッティング、見直しておけ！」
「バランサーシステムの調整が甘い！」
鈴谷のハンガーデッキに移動し、メンテナンスを受ける“白龍”達。
その周囲を整備兵が飛び回り、乗組員は各部で出航の準備に追われている。
入念に次ぐ入念な整備の中、美奈代達でさえコクピットから離れることは正直容易なことではなかった。

コクピット周りの整備兵に一応の断りを入れてから、皆でハンガーの隅に集まって休息をとれたら日付が変わっていた。
「冗談じゃねぇ」
壁にもたれた都築がぼやいた。
「一体、何考えてるんだよ」
「知るもんですか」
美奈代は都築の横に座ったまま言った。
「敵陣地の中でも厳重に厳重な防衛がなされているから手が出されなかった。そこをたった一個中隊で陥落させろ？私が参謀の脳みそ疑っているの、わかるでしょう？」
「無謀で横暴で乱暴。三つで参謀――お前を参謀課程に送れたのにって、二宮教官が残念がっていた理由が分かるぜ」
「どういう意味だ」
「……あのぉ」
そんな美奈代に申し訳なさそうに声をかけたのは、新入りのMC（メサイア・コントローラー）、503（さわぐち・まき）沢口麻紀少尉だ。
「お伺いしたいことがあるんですが」
「何？」
沢口からすれば、例え元内親王（レイナガーズ）護衛隊所属とはいえ、噂のトップエースにして“鬼の泉”の異名を取る美奈代は格別な存在だ。
態度に表れているのは敬意というより脅えに近い。
「内親王（レイナガーズ）護衛隊の同僚からメールが来たんですけど」
「？」
「本当に、自分達は富山湾に送られるのですか？」
「どういうこと？」
「……実は」
麻紀は、周囲を見回した後にそっと言った。
「内親王（レイナガーズ）護衛隊の他、近衛全軍に戦闘命令が下ったと」
「……まぁ、戦時下だから」
そう言いつつ、美奈代は意味が違うことを悟った。

「内親王護衛隊（レイナガーズ）はどこへ配置されるの？」
「長野県の伊那方面……魔族軍が愛知へ侵攻の動きを見せていると」
「……」
「ですから、元の仲間の一人が近くなら情報をくれって」
「……何て答えた？」
「軍機だから教えられないって」
「正解だ」
美奈代は頷くと麻紀の頭を撫でた。
「それでいい……ウチの部隊は不正規部隊だから、正規軍に知られるとマズいことも多い」
「はい」
撫でられた頭を嬉しそうに触る麻紀が熱っぽい顔で頷いた。
「今回の作戦は、中隊配属後、初の実戦だ――生き残れよ？」
「命に代えても！」
「……ふっ。違うだろ？」
「はい？」
「軍人は生きてこそ脅威だ。生き残ってこそ戦える。どんなに格好悪くてもいい。生き残って戦果を上げろ。わかったな？」
「はいっ！」
「おおいっ！」
整備兵の怒鳴り越えが響いた。
「休みは終わったか！？」
「はいっ！」
美奈代が大声で返事をした。
「ありがとうございましたっ！」
「よしっ！ＦＣＳの最新バージョンが本国から転送される！インストールとセッティングのやり直し、最後にテストが終わったら寝ていいぞ！」

●「鈴谷」士官食堂

「寝た？」
「……寝てない」
中隊の面々が、眼の下にクマを作って集まるのは鈴谷の士官食堂。
深夜に及ぶメサイアの整備に駆り出された彼女たちは、皆、トレーに載せられた朝食を無理矢理口に運ぶのがやっとだ。
胃が受け付けない食事を何度も無理矢理飲み込んだ美奈代は、トドメとばかりにコーヒーを喉に流し込み、食事を終えた。
「平野艦長が早朝に乗艦したって」
「出迎え、行かなくてよかったのかなぁ」
「なんか……ほとんど極秘に近かったらしいよ？」
「……へえ？」
「っていうか」
生あくびをした都築が毒づくように言った。
「今、ここどこだよ」
「大阪湾だそうです」
山崎が美晴に紅茶を手渡しながら言った。
「大阪湾から兵庫経由で日本海へ」
「日本海に“鈴谷（すずや）”を展開させて、そこをベースに富山湾……か」
たまんねぇなぁ。
都築はぼやいた。
「一晩、寝かせてくれるくらいの余裕はあるんだろうなぁ」

「おいっ！」
食堂で誰かが怒鳴った。
――何だ？
――見ろっ！
そんな声があちこちでして、食堂にいた別の士官達が一斉に窓へ集まりだした。
士官達は軍艦では考えられないほど広く採られた船窓の外に釘付けになっている。

「？」
美奈代達も、士官達に誘われるように船窓へと向かって歩き出した。
そして、窓の外の光景に言葉を失った。
「……」
ぽかん。
本当に、その言葉が一番しっくり来るほど、美奈代は惚けながら外を見た。
窓の外に広がる抜けるような青い空。
そこは今、編隊を組んで飛ぶ飛行物体によって埋め尽くされようとしていた。
濃緑に塗装されたプロペラ戦闘機達が無数に空を飛ぶ。
さらにその大編隊に守られるように飛行する巨大な飛行艦達。
それは――
「第一巡航戦隊だ！」
美奈代達とそれほど歳が離れていないだろう、少尉の階級章をつけた士官が興奮気味に言った。
「最上に三隈、熊野！」
「それだけじゃねぇ！」
横の士官が叫ぶ。
「見ろ！あの雲の向こうだ！」
低くたれ込めた雲の切れ目。
そこから舳先を突き出したのは――
「信濃だ！」
おおっ！
士官達からどよめきがわき上がる。
近衛軍旗艦。

全長５００メートルを越える世界最大の飛行艦が、雲の中からその偉容を現そうとしていた。

信濃級武装強襲艦

全長　８６０m、
基準排水量３３０，０００t。
武装　４６００mm三連装ＭＭＲ砲塔４基。
２５０mm連装ＭＭＲ砲塔２４基
１２７mm単装ＭＭＲ４０門
５０mm単装ＭＭＲ４０門
３５mm単装対空（実体弾使用）ＣＩＷＳ１０門
２０mm単装ＭＭＲ８６門
マルチミサイルランチャー（１基につき２４発搭載）２０基
搭載メサイア　最大６０騎
連絡艇　２０隻搭載
通常輸送量　３００万t以上。
乗組員　２５００名

それは、美奈代が初めて見た世界最強の飛行艦の姿。

世界最大の偉容。

完全に雲を抜けた信濃を中心とした陣形を展開した近衛飛行艦隊が美奈代達の前に現れた。
悠然と航行する飛行艦と、その守護天使となった烈風の大編隊。
空を埋め尽くさんばかりの、まさに偉容と呼ぶにふさわしい光景

だった。
日本全部の兵力が集まったんじゃないかと錯覚すら覚える光景を前に、美奈代達の周りでは、
ククククッ
フフフッ
そんなかみ殺すような笑い声がわいていた。
この感動的光景を前に不謹慎だ。
一瞬、美奈代はそう思ったのは事実だ。
だが、自分の喉からわき上がってくる音を聞いて、すぐにそれを否定した。
クフフフッ
美奈代自身が笑っていたのだ。
おかしいのではない。
自分の眼前に、大日本帝国という国家の明白な意思が、圧倒的な偉容として姿を現したことに、感動と興奮を――体が震えるような興奮を、押さえることが出来ないのだ。
国家への忠誠心、愛国心、およそ「国」への思いが、目の前の光景によって一気に燃え上がったようなものだ。
それは、美奈代だけではない。
その光景を見た全ての将兵が、その感動を共有していた。美奈代の周囲で、艦橋で、あらゆる場所で、この光景を前に、ある者は歓声をあげ、ある者は手を振った。
皆が、泣きそうな程の興奮の中で、体からわき上がる興奮に、様

々に答えたのだ。

そして――

その信濃を護衛するように飛行するメサイア達にも、すぐに気づいた。

「あれは……まさか？」

純白に赤。

その二色塗装は、近衛でも一部隊にしか許されていない特別塗装。

近衛の誰もが知っているその塗装を施された騎が、信濃と共に飛行を続けている。

「やっぱりそうだ」

どこから持ってきたのか、双眼鏡を手にした大尉の階級章をつけた士官が唸るように言った。

「こりゃ……とんでもねえことになるぞ」

「総員傾聴！」

突如、艦内に平野艦長の声が響き渡った。

「左舷航行中の信濃マストに天皇旗！」

バッ！

全員が直立不動の姿勢になった。

意味がわかるからだ。

「総員、陛下御座乗艦に対し、敬礼！」

反抗　第一話（後書き）

信濃級武装強襲艦【しなのきゅうぶそうきょうしゅうかん】

・バブル華やかなりし頃、議会をいいように操って成立した「第七次近衛兵団整備計画」の目玉として建造された武装強襲艦。

・誰も強襲艦といわず、飛行戦艦とか空母と呼ぶ。

・輸送艦２隻を溶接・接合して主砲を設置するというある意味すごい方法で作られた艦。

・メサイアが展開する地点までの安全なメサイアの輸送の他、現地でのメサイアの回収、修復、後方支援、揚陸地点の単艦での制圧まで、１隻に対してかなり広い任務が課されており、ここに信濃の大型・重武装の理由がある。

・巨艦巨砲主義の再来という批判ははっきりいって正しい。

・実際の所、対外抑止力としてこれ以上のものは、核兵器か米軍の機動部隊しかないほどで、国際問題が発生後、日本海辺りで飛行訓練やると問題が収まる程。

・動力は、元来、飛行艦用に開発されたものを転用していた陸軍保有のメサイアのものを改造・強化した魔晶石エンジン。この艦１隻でメサイア４０機に相当するエンジン（規模的にはワシントン級４隻分）が組み込まれ、メサイアコントローラによって管理される。

同形艦１隻。

全長　８６０ｍ、

基準排水量３３０，０００ｔ。

武装　４６００ｍｍ三連装ＭＭＲ砲塔４基。

２５０ｍｍ連装ＭＭＲ砲塔２４基

１２７ｍｍ単装ＭＭＲ４０門

５０ｍｍ単装ＭＭＲ４０門

３５ｍｍ単装対空（実体弾使用）ＣＩＷＳ１０門

２０ｍｍ単装ＭＭＲ８６門
マルチミサイルランチャー（１基につき２４発搭載）２０基
搭載メサイア　最大５０騎
連絡艇　２０隻搭載
通常輸送量　３００万ｔ以上。
乗組員　２５００名

最上級重偵察巡航艦【もがみきゅうじゅうていさつじゅんこうかん】
同形艦２隻（最上・三隅）
全長　約２８０ｍ、
基準排水量５２８００ｔ。
武装　１５５ｍｍ連装ＭＭＲ砲塔８基
４０ｍｍ連装ＭＭＲ３６門
２５ｍｍ単装対空ＣＩＷＳ６門
搭　載　メサイア４騎の着艦可能
近衛兵団の保有する武装強襲型偵察飛行艦で、世界最速の高速艦。
旧日本海軍の軍艦「最上」を彷彿とさせるそのデザインから国内外にファンが多い。
武装はこのクラスとしては標準的なものしかないが、群を抜く高いステルス性能と情報収集能力から、敵陣深くまで強攻侵入、敵情報を収集・分析して高速で撤退する強襲偵察艦として活躍。
戦闘データを元にした「最上級改」後継艦の建造が決定している。

反抗　第二話

●富山県某所

「狂姫の軍勢、軍陣をそろそろ整えつつあるようですが」

「俺達の妖魔部隊は入れ替えが終わっていない」

ズルドは呻く様に言った。

「停戦終了後、石川県を完全制覇するのが精一杯とはどういうことだ……全てのタイミングが悪すぎる。狙い澄ましたような繁殖期の到来と、新種への更新……これでは部下が気の毒だわ」

「……ですな」

「それにしても、憎らしいのは狂姫だ。中世協会なる連中は、何故、あのようなバケモノを復活させたというのだ」

ズルドはうめいた。

「あんなヤツ、武人の恥さらしもいいところだ」

「まぁ、確かに……」

そう言われると、副官のマーリンも頷くしかない。

「あの戦い方、そしてその軍は……ああ」

かつての戦いでその軍勢を見たことのあるマーリンは青くなった。

「フィーリアには絶対に見せられなかったぞ」という、ズルドの言葉が当然のように思えてきた。

「獄族とは、ああいう連中なのでしょうか？その、“アレ”で“死者の軍団”などと嘯くような」

「言っていることだけは間違いないが……」

ズルドは何と返答して良いか、迷った。

「――ヤツが降伏前、自ら封印した飛城（とびしろ）と、その軍団は、純粋に戦力として見れば、かなりの代物だ」

「天帝軍の精鋭部隊をもってしても、最後まで陥落させることが出来ずに……」

「ああ。俺ははっきり、奴らは嫌いだが、戦力が増えることだけは

歓迎する」
「では、その戦力確保のために」
「そうだ。人類は城を叩くために日本海へ船を集めつつある。叩かれる前というか」
ズルドは少しだけ言葉を選んだ。
「下手にこれ以上、狂姫と人類を交戦させて、この戦いに関して奴目に発言権を与えたくない」
「しかり」
マーリンは頷く。
「ですから、我々は事前行動として岩国へと攻め込む。狂姫をおさえるためなら、本来の我々の任務である愛知方面の戦いを魔界からの義勇軍に預けても尚、おつりが来る」
「愛知などは知らん。とにかく俺達は――果たすべき義務を果たす。マーリン」
「はっ」
「人類側の車は、使えるんだろうな」
「既にオーク兵の８割を搭載可能です」
「よし……前衛部隊は小型妖魔達にやらせればいい。長弓兵達を車に乗せ、今庄へ集めろ」
「３０５号線経由、海岸線からでは？」
「人類側の水上戦力の的にされたいのか」
「しかし」
「そちらからは大型妖魔達を移動させろ。奴らが移動した後では道が穿り返されて、車の移動は出来まい」
「……な、成る程？」
言われてみればそうだ。自重数百トンの大型妖魔達が集団で走れば、それだけで地形が変わる。
「敵の防衛線は敦賀湾までと見て良い。そこまでは大型妖魔達の波動砲攻撃で殲滅する。大型妖魔達の攻撃力にモノをいわせ、全てを吹き飛ばせ」

「大型妖魔達の護衛は、メースをつけますか？」
「小松に配備中の飛行部隊もだ」
ズルドは自らの案をまとめた。
「プランはこうだ。部隊配置は東尋坊へ大型妖魔達を集結。長弓兵達で成る小型妖魔部隊は今庄へ。大型妖魔達の移動をもって人類側の目を奪う。そして、人類側の戦力を敦賀湾海岸線に集結させ、そこを大型妖魔達の攻撃で殲滅に移る。大型妖魔達はそのまま敦賀湾へ侵攻。これを焼き払う」
「焼き払う？」
「そうだ。先の侵攻作戦では補給が続かずに断念したが、今回は違う」
「はっ」
マーリンにはその意味がわからなかった。目的は岩国だ。敦賀湾ではない。
原子力発電所を失ったあの湾を焼き払うことに何の意味がある？
「敦賀湾一帯を盛大に火葬する間に、長弓兵達を美浜一帯に展開させる。目的は、美浜より遠距離攻撃によって舞鶴を叩くことだ」
「舞鶴を占領はしないのですな？」
「しろとは言われていない」
ズルドは即答した。
「水上兵力のない俺達にとって、舞鶴を占領することに意味はない。いいか？俺達の目的は、敵の目をそらすことだ」
「……長距離砲撃戦に持ち込み、舞鶴を攻略するように見せかけ、敵をこの地に釘付けにするというのですな？」
マーリンは情報部通達の中にあった人類側兵器の性能を思い出した。
人類側の兵器の主力は、魔族がいう所の“走る棺桶”――人類の言う“戦車”。
それと、同じく“走る筒”――“自走砲”。
それぞれ、基本的な有効射程は長弓兵の持つ長弓の５０キロに遠

く及ばない。せいぜいその半分程度だ。
その射程範囲を地図に当てはめてみると……？

「しかも！」
マーリンは改めて目の前の上官、いわば彼にとって主君を見返した。

「美浜で５０キロの射程距離を確保出来れば、長弓兵の数からして、人類側がいかなる方向から攻めてきても十分な余裕を持って対処出来る。そういうことですな！？」

「そうだ」
ズルドは顔色一つ変えずに言った。
「人類側の展開する敦賀防衛の第二線は敦賀市街。これは無視していい。第三線は小浜。この第三線をいかに有利な状況で叩けるかが、勝敗を分ける」
「……それで、車ですな？」
「敦賀を焼き討ちにすることで嫌でも最前線は第三線に移る。この第三線へどう対処するかが勝敗を決する」
「いかがなさいますか？」
「長弓兵達は、人類側から車を確保し、移動速度を跳ね上げる。部隊を細分化し、万一の際にも全部隊を危険に曝すことを避ける――あらかじめ、布陣場所さえ決めておけば、後は、布陣完了まで、敵による長弓兵達への攻撃を喰いとどめることが出来ればいい」
「メース使いますか？大型妖魔では道が」
「耳川と天王山が邪魔をするか……そうなるな。大型妖魔による敦賀侵攻時に２７号線へ被害が及ばないように注意しろ」
「はっ！それと、愛知侵攻部隊との連携はいかに！？」
「……」
はっきり、マーリンは自分が地雷を踏んだことを自覚した。

「……司令部へ報告する関係での質問です」
「……関係ない」
ズルドは感情のない声で言った。
「我々も目的は岩国だ。愛知は遠すぎる。司令部にはそう伝えろ」
「了解」
マーリンは地雷除去に成功したことに心底安堵しつつ、頷いた。
「いいか？マーリン」
ズルドは言った。
「連中は、戦争“ごっこ”がやりたいだけだ」
「……魔界からの義勇軍、となっておりますが？」
「ふん。戦闘経験がないモノばかりが徒党を組んで、一端の戦力を気取っているだけだ」
その声は不快感に満ちあふれ、聞くだけでマーリンは背筋に冷や汗が流れた。
「俺の第三軍は、一切手助けもせん。岩国を攻め、数日間を持ちこたえさせたら、一気に撤退だ」
「……敵の大型攻撃に備え、至急、“ラングリー”隊も動員しましょう。人類は大型魔法発射筒を装備した飛行艦をもっています」
「よし。やらせろ」
「はっ！本日中に作戦プランをまとめ、お持ちします」
「よし。俺はその間、フィーリアの面倒でも見ておくとしよう。ホテルにいるぞ？」
マーリン達の敬礼に送られ、その場を去るズルドの足取りは、妙に軽かった。

●「鈴谷」ハンガーデッキ。
美奈代と寧々、そして都築がハンガーに入ったのは、復帰した平野艦長から正式に作戦を伝えられた帰りのことだ。

現在、魔族軍は二つの動きを見せている。
富山県から福井にかけて移動する部隊と、諏訪方面から東海方面へ向けて侵攻中部隊。
前者の前衛部隊は東尋坊で停止。前進の動きを見せようとはしない。
対して、後者は移動を停止しない。
当面、人類側は後者の魔族軍を阻止することになる。
侵攻ルートからして、阻止ポイントは二つ。
一つは木曽福島付近。
もう一つは伊那付近。
魔族軍は、機動性に欠ける大型妖魔は伊那方面から豊橋方面へ侵攻させ、木曽方面へは、機動性に勝るメースや小型妖魔、または飛行部隊を投入してくるものと思われる。
軍はこの針路に展開して魔族軍を迎撃する。
そこに美奈代達は含まれていない。
それが、いいのか悪いのか。美夜は美奈代達に考えるなと言った。

「それにしても」
ハンガーへ歩きながら、都築がぼやいた。
「今回も、俺達にゃ何の支援もなし。どうせ挙げ句が犯罪人扱いか？」
「言い過ぎです」と寧々が咎めるが、
「言いたくもなるだろう」と言い換えされれば、寧々も言葉に詰まる。
「言いたいことはわかるが……」
美奈代もあきれ顔だ。
「それより、新型のビームライフルのエネルギーパックの予備、もう少し何とかならないかしら」と、寧々は話題を変えようとする。
「シールドの裏にマウントするよう、仕様変更を検討してくれるそ

うだ」
都築はそれに乗ってくれた。
それだけで、寧々は何だか嬉しい。
くすっ。と小さく微笑んだ寧々は、通路の出口――つまり、ハンガーの入り口を見て、不意に足を止めた。

「おい、寧々？」
都築の前で、珍しく寧々が凍り付いていた。
視線の先には、“白龍”の足下に立つ男女がいた。

一人はすでに４０半ば位だろう、背の高い男。
一見、やせ気味にも見える引き締まった体に、学者のような知的な顔立ち。涼しげな目元をしていた。
ただ、普通と違うのは、その威厳というか、理解不能な何かを纏っていることだ。
ただ者ではない。
それは、雰囲気でわかる。

もう一人は、２０代後半位の女。
ほんわかとした暖かみのある顔が愛らしい。

共に近衛軍の戦闘服を身につけていた。

「……」
その男の顔を見て、美奈代は何故寧々が凍り付いているか理由がわかった。
それが誰か。
さすがに美奈代にもすぐにわかった。
わかったからこそ、信じられなかった。
何故、ここにいるか？

それがわからなかったのだ。

もしかしたら、夢でも見ているんじゃないか？

美奈代は何度も目をこすってみたが、目の前の二人は消えることがなかった。

「どうしたんだよ？」

その場に立ちつくす美奈代達の後ろで、都築もその二人を見つけたらしい。

そして、言った。

「ん？おい、おっさん」

ガンッ！

ゴンッ！

美奈代と寧々。

二人の情け容赦のない一撃をモロに喰らった都築がその場に叩き伏せられた。

都築の声に気づいたらしい男が、美奈代達に振り返った。

「それは――――私のことかい？」

「い、いいえっ！」

美奈代が直立不動で怒鳴った。

「けっ、決して！」

「そうかな」

男は面白そうに言った。

「周りには人はいないが？」

「こ、この人は！」

寧々が続けた。

「目を開けたまま寝ぼける悪い癖が！」
「……ははっ。仲間をそこまで言わなくても、聞こえていたよ」
「申し訳ありませんっ！」
都築の襟首を掴み、拳銃を抜いた美奈代が怒鳴った。
「この男を処刑して、すぐにお詫びさせますっ！」
「いや、いいから」
「いえ！このような不敬、万死に値しますっ！」

「ふむ……」
男は少し困ったように言った。
「私が、いいと言っているのだが？」

言葉の意味は、さすがにわかったんだろう。
美奈代と寧々は、再び直立不動の姿勢になった。
「失礼いたしましたっ！」

「――うん」
男は穏やかにほほえむと頷いた。
「それにしても」
美奈代達に近づいた男は、苦笑しながら言った。
「これではしばらくは目を覚まさないだろう？」

「はっ」
コチコチに固まった状態で、美奈代は答えた。
「しばらくは目を覚ましません！」
まるで初めて上官の前に立たされた新兵のようになった美奈代は、自分が心底震えているのを自覚した。
戦場に立ってもならなかったのに。
膝がガクガクと震えていた。

もう泣きそうだと自分でわかる。

「そうか――」

男は少し、思案した後で美奈代達に訊ねた。

「君達、官姓名は？」

「はっ！独立駆逐中隊前線指揮官、泉美奈代大尉でありますっ！」

「同じく第三小隊所属、鬼龍院寧々中尉であります！」

美奈代の耳に届いた寧々の声でさえ、はっきりと震えているのがわかった。

「そこで寝ているというか、君たちにノされたのは？」

「第二小隊所属、都築真少尉でありますっ！」

「そうか――泉大尉だったね？」

「はっ！」

「都築少尉の騎はどれだね？」

「はっ！あちらでありますっ！」

「そうか……」

男は、ハンガーに並ぶ“白龍”の一騎を見上げると、思いついたように言った。

「隊長は後藤君だが……ああ、彼は詩織が借りていたな」

「はっ？」

「艦長には私から話を通そう。それと、都築少尉を医務室へ運んであげてくれ」

そう、やんわりとほほえむ男に、美奈代達は弾かれたように答えた。

「はいっ！陛下っ！」

「すまないね、中尉」

美奈代の耳に、レシーバー越しの男の声が聞こえてくる。

「いえ！」

美晴は緊張しきった声で答えた。

通信は、彼女の隣。

都築騎から聞こえてくる。

「お気遣いはご無用です――陛下の御身は我々が」

「ありがとう……それにしても」

男は、感心したようにコクピットを見回した。

「進歩するとなれば、進歩するもんだねぇ。角龍と比べても雲泥の差がある――ま、最後にモノを言うのは、騎士の腕前だけど」

「鈴谷メサイア・デッキ・コントロールより陛下」

「ん？」

「申し訳ありません！マジック・ディフェンス・シールド・システムは」

「ああ。あれか」

陛下と呼ばれた男は、平然と言った。

「いらないよ。今回は逆にアレは目立ちすぎる」

「り、了解！――ハンガーデッキハッチ、開放、カタパルトデッキとのレール・エンゲージ確認！」

両脚を固定されたハンガーロックの移動に沿って、騎体がハンガーからカタパルトデッキへと移動を開始する。

「柏中尉」
「はっ！」
「私から出ていいかな？」
「どうぞ！」
「うん。雛菊君？やれるかい？」
「問題ありません」
その膝の上には、精霊体である“十六夜（いざよい）”が乗っかっている。
ＭＣＬ（メサイア・コントローラー・ルーム）のパネルを操作する女性が答えた。
騎体はすでにカタパルトの発進シークエンスに入ろうとしていた。
「基本は全て同じです。それより、いいんですか？」
「なにがだい？」
「よりにもよって、陛下がメサイアで戦場に臨んだって、前線は大騒ぎになりますよ？侍従長がまた禿げます」
「ははっ。どうせ突っ立っているだけじゃ、僕がいちいち出る必要もないだろう？」
「だからって、いくら何でも」
「伊那（むこう）方面は麗菜もいる。ＭＣ（メサイアコントローラー）はマリア君だし」
「余計、心配なんですけど」
「いざという時の逃げ足は世界最速って言っていたのは君じゃなかったっけ？」
「むぅ……」
「何より」
コントロールユニットの具合を確認しつつ、陛下は言った。
「ここいらで一矢報いてやらないと、私の気がおさまらん」
「了解――全ては、陛下の御心のままに」

カタパルトの発進シークエンスが終わった。

「ありがとう。じゃ――――やってくれ」

●伊那戦線　人類側陣地

前線の兵士達が呆然としているのは、前に布陣する敵部隊の威容に押されたからではない。

ついさっきまで、確かに兵士達は、ほとんどが初めて見る魔族軍に恐れをなしていた。

それは事実だ。

だが――――

筒先を最大仰角で魔族軍に向ける戦車部隊の前衛に麗菜率いる内親王護衛隊（イナ・ガース）のアリア達が展開。

そして、そのやや後方の丘陵部に降りたのは、天皇護衛隊（オールドガーズ）達だ。

その数は決して多くない。

ただでさえ少ない戦力しかない近衛にとって、正直、よくいって虎の子、悪く言えばなけなしの戦力だ。

兵士達は、自分達の面前に立ったそんなメサイアだけが頼りなのだ。

その数が少ないことは、そのまま不安へ、そして、戦意の低下へとつながりかねない危険性がある。

それを吹き飛ばしたのは、たった1旒（りゅう）の旗。

天皇旗。

兵士達も、天皇の参戦は話として知っていた。
だが、てっきり後方で砲撃支援任務につく信濃の艦内にいるとばかり思っていた天皇の存在を示す天皇旗が目の前のメサイア達のど真ん中に出現したことに度肝を抜かれた。
戦車兵や歩兵達が、戦闘機のパイロット達が、信じられないという顔で、風になびく天皇旗を見つめる中。
天皇護衛隊（オールドガーズ）に囲まれて立つメサイア――“水龍”のコクピットに座っているのは、当然、天皇ではない。
「……何で私が？」
そう、首を傾げるのは、まだ１５にも達していない少女。

第二皇女日菜子内親王殿下。

その人だった。

「心配しないでくださいませ」
日菜子の耳に、ＭＣＬ（メサイア・コントローラーメサイアズコントローラー）に座るＭＣ、マリアからの通信が入る。
「何がですか」
日菜子は、すねたように口元をとがらせた。
「私、メサイアの操縦訓練って、ほとんど」
「ですから、私が呼ばれたんです」
「陛下と姉様からは、“ただ立っていればいい”とは言われています」
「“お願いだから何もするな”とも」
クスクスという、マリアの笑い声が日菜子には気に入らない。
「何もしません！」
日菜子は言った。
「どうせ、戦いは姉様と陛下がなさるんでしょう？」
「戦いたかったのですか？」
「そ、それは……」

「まだ殿下には早すぎますよ」
ピーピーピー
外部通信の呼び出しが入った。
相手は天皇護衛隊総隊長（オールドガーズ）の坂井大佐だった。
日菜子と妹の春菜が、影で“熊隊長”と呼ぶひげ面のごつい男が通信機の向こう側で言った。
「殿下、大丈夫ですかい？」
「はい？」
「いや、初めての戦場でビビってねえかと」
「くす。大丈夫です」
「そいつはよかった――そろそろ、魔族軍の威嚇が始まりますんで」
「威嚇？」
なんです？
その声は言葉にならなかった。

ズン！
ズンズン！

魔族軍から放たれた数発の攻撃が、日菜子達の近くに着弾する。

「殿下！」
「も、問題ありません」
日菜子は強がって頷いた。
初めて味わった至近距離への攻撃。
鼓膜が破れそうな音と振動。
お嬢様学校育ちの女の子に耐えられる代物ではない。
震える声で、日菜子は続ける。
「兵達に被害は？」
「後方への流れはなし！人的被害皆無！」

「ホッ……クマ、じゃなくて、坂井大佐。対応は任せます」
「へい！――――野郎共、備えろっ！」

ジャカッ！
日菜子の周囲でメサイアが一斉に抜刀する。

魔族側も、それに併せて体勢を整える。

一触即発。

まさにその通りの状況が今、整いつつあった。

「護衛に４騎、ここに残します！」
「心配いりません。これは“水龍”でしょう？」
「結局は中身なんでさ！」
「なら私だって！」

日菜子はコンロトールユニットを動かした。

なお、最初に断っておくが、メサイアは決して操縦が簡単な兵器ではない。
むしろこれほど難しい兵器は他にはそうないという代物だ。

たかが数時間の操縦訓練しか受けていない日菜子に扱えるしろものではない。

この時、日菜子が操作出来たのは、実は腕一本が精一杯。立ち上げ方も、歩かせ方でさえ、日菜子は知らなかったのだ。

その日菜子が強がってやってのけたこと。

それを外から見ると、こうなる。

『その時、陛下座乗のメサイア“水龍”の右腕が滑らかに動き、掌を上にしてまっすぐに敵魔族軍へ向け突き出されたかと思うと、中指が立ち、クッと曲がった。

それは、欧米人の好む野蛮な方法ではあったが、確実なる敵対意志の現れであった』

「ね？」

日菜子は自信満々でほほえむが、マリアは真っ青になって敵陣を見た。

間違いない。

敵は今の“水龍”の動きを、敵対的行動としてとらえてしまっている。

その証拠に――――

敵陣地からラッパや太鼓の音が響き渡り、陣地前衛に展開していた大型妖魔達が一斉にこちらへ向けて突撃してくる！

「え？え？」

状況が理解できない日菜子。

「ガーッハッハッハッ！」

大爆笑する坂井達、天皇護衛隊（オールドガーズ）の面々。

「殿下、最高ですぜ！」

坂井はバカのように笑いながら言った。

「こいつはいい！」

「殿下、俺はもう、一生ついてきますぜ！」

「最高っす！今のは最高ですっ！」

「坂井大佐っ！」
マリアが助けを求めるように坂井に怒鳴った。
「阻止を！」
「あいよ！」
坂井は部下に怒鳴った。
「天皇騎を後退させたとあっちゃ、俺達の名折れだ！全騎、ついてこい！」
「応っ！」

激しい爆発音が響き渡る中、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）が、坂井達、天皇護衛隊（オールドガーズ）の先陣を切る形で敵陣へ斬り込んでいく。

「おらぁっ！レズっ娘共にいいようにやられるなよ！？」
坂井の一撃が、サイを一刀両断の元、仕留めた。

「……あ、あの？」
“水龍”のコクピットで日菜子は恐る恐るマリアに訊ねた。
「一体、なんで、こんなことに？」
「……後で麗菜殿下にでも聞いてください」
マリアはアタマを抱えながら言った。
「どこの世界に、指一本ちょいで戦争始めることが出来る人がいるんですか！」
「わ、私のことですか？」

この瞬間から数分間、司令部は“水龍”と通信が出来なくなった。
理由は、通信機越しに聞こえてくるＭＣ（メサイアコントローラー）のすさまじい怒鳴り声というか、説教によるものだった。

“水龍”のコクピットで耳を塞ぐ日菜子の目の前。
そこは戦場だが、日菜子に言わせれば、このコクピットも今や凄惨な戦場だ。

後に、「伊那会戦」別名、「指ちょい会戦」と呼ばれる戦いは、こうして始まったことなぞ、知らなくてもいいのことだが――。

反抗　第二話（後書き）

日菜子内親王

皇位継承可能な皇族で唯一「統べる力」を持つとされる。

帝の三姉妹の次女で、愛らしい中にも女帝としての気品と威厳を放つ外見を持つ。

この歳で冷徹な策士として政治屋や官僚相手に国家のパワーゲームすらやってのける反面、堅実な内政と隙のない外交を展開する有能な政治家でもある。

あまり表に出てはこないが、非常に強いカリスマ性を持つ人物。

樟葉等近衛に対する態度など、非常に臣下に対する心遣いを持つなど並みの人物ではない。

現在の世界のあり方を脅威として捕らえるなど、優れた現実認識力を持ち、実行力も高いが、それだけに、自分が皇位にふさわしいとは考えていない。

本来は「美奈子ちゃんの憂鬱」シリーズのキーパーソン。別名「作者に最も愛されているキャラ」

悠理との熱愛がご覧になりたければどうぞそちらへ……ちょっとコマーシャルでした（笑）

反抗　第三話

大日本帝国・長野県伊那市近郊
帝国軍呼称「伊那防衛線」魔族軍側陣地

時間は日菜子の「指ちょい」より少しさかのぼる。
日菜子達と対峙する魔族軍東海方面攻略隊先遣隊を率いるのは、セルスパ大佐だ。
松本を出立、塩尻を経由してここまで来た。
新潟で成長した大型妖魔達の調教具合は申し分ない。オーク達の練度も低くはない。
部隊としてのコンディションはベストだ。
セルスパ大佐はそう思い、対峙する敵を見た。

白いメース達が前面に展開。その背後には鉄の箱達がいた。人間達の言葉に直せば、メサイアと戦車というらしい。歩兵達の姿はほとんど見えない。
それでいい。
セルスパ大佐は小さく頷いた。
体長３０メートルを越える大型妖魔達の突撃に歩兵なんて意味はない。無駄な兵を戦場におかないのは鉄則だ。
「大佐」彼の脇に控えていた参謀、ギョークが彼に声をかけた。
「突撃準備は完了。いつでもいけます」
「人類側についての情報は？」
「物見からの報告では、デミ・メースが約４０。後方には戦車、大砲が計２００門。飛行部隊も２００近くがさらに後方で待機中とか」
「……どう、出ると思う？」
「戦法は限られています」ギョークは肩をすくめた。「我々とて同じですが」

「具体的に」
「敵を砲撃、ある程度叩いたところでデミ・メース部隊が突撃、残敵を殲滅。そんなところでしょうか？」
「先に叩いた方がよさそうだな」
「どうでもいいんですよ」ギョークは手にした地図をセルスパ大佐の前に広げた。
「どっちにしても、敵はデミ・メース部隊を突撃させた時点で壊滅します」
「ん？」
「デミ・メースはあくまで白兵戦主体の兵器です。メースの欠点はそのまま適用可能です」
「……ああ」セルスパ大佐はそれで合点がいった。
「敵味方が入り乱れた時点で、砲撃は一切」
「そうです」ギョークは頷いた。
「友軍を殺すことになりますからね」
「なら。むしろこうしようではないか」
セルスパ大佐は地図上で表示される自軍の布陣状況を動かした。
「どうだ？参謀」
「……成る程？」
ギョークは唇を残酷に歪めた。
「それは妙案ですな」
「そうだろう？」セルスパ大佐は、はにかんだような、とても楽しげな表情で頷いた。
「部隊の布陣を変えます」
ギョークは一礼の後、姿を消した。
その後ろ姿を見送ったセルスパ大佐は白いメサイアを見た。
あいつらが突撃して来たら、俺達の勝ちだ。
ギョークの命令が飛んだんだろう。弓兵を中心とした部隊が移動を開始する音が聞こえてくる。
「ん？」

人類側に動きがあったのは、その時だ。
白いメサイアの一騎の腕が動き、中指を動かした。
セルスパ大佐には意味がわからない。わからないが、立ち位置からして大将が乗り込んでいると見るべき騎の動きだ。見逃すわけにはいかない。
もし、何か我々の知らない新兵器の使用を命じる指示だとしたら？
セルスパ大佐が恐れたのはそれだ。
メースまでが投入され、信じがたいほどの火力が自分達を幾度と無く苦しめてくれる。
地上に舞い戻るまで、予想さえしなかった事態が現実に起きているのだ。
先遣隊が丸ごと破壊される兵器。
いや。
それはないだろう。と、セルスパ大佐は判断した。根拠は、彼我の距離。そんな大規模攻撃をかけるには近すぎる。
しかし、用心にはこしたことはない。
「ピロッド」
セルスパ大佐は大型妖魔部隊を率いる指揮官に命じた。
「敵を誘い出す」
「はい。エディ部隊、前面に突撃します」
甲冑を着込んだピロッドは、緊張した面もちで上官にそう告げた。
「突撃はしなくていい」
「は？」
上官の命令に、ピロッドは目を見開いた。意味がわからない。大型妖魔は、その物量に物をいわせた突撃こそが最大の攻撃手段なのだ。
「そ、それでは？」
「敵の前面までエディ達を前進させろ。敵がこちらに打って出たら、エディは速やかに転進、弓兵達の後ろへ回らせろ」
「……は？」

「命令だ。それとも、出来ないか？」
「……やります」
「よろしい。やりたまえ」
ピロッドは、一礼の後、部下に命じた。
「エディを前進させろ！突撃じゃない！いいか！？突撃じゃないぞ！」

ドドドドドッ！

セルスパ大佐の目の前で、大地を揺さぶりながら、巨大なアルマジロそのままな大型妖魔、エディ達が敵へ向かって進んでいく。
単なる移動なのに、大地震が発生しているように地面が揺れる。
「敵を誘え！長弓兵、敵メース付近へ向け、威嚇射撃！」
セルスパ大佐の命令は速やかに弓兵達に伝達され、魔力の帯を引きながら魔矢がメース達めがけて飛んでいく。
鏃に魔力を含む魔矢は、目標に命中すれば爆発する仕組みだ。威嚇射撃だけに、メース達を直接狙っていない。魔矢は次々に地面に命中し、爆発を引き起こす。
その爆発に誘われたように、ついにメース達が動いた。
狙いはエディ達なのは明白だ。
「よしっ！」
セルスパ大佐は思わず甲冑を叩いた。
ギィィィィッ！
エディの一匹が断末魔の悲鳴を上げ、大地に倒れた。メースの攻撃で頭を割られたのだ。
それを合図にしたように、エディ達は進路を変え、一斉にこちらへ向かって駆け戻ってくる。
これから、人類側の砲撃が雨霰と飛んでくるだろう。
それを防御すればいい。
それさえ凌げば、後はどうとでもなる！
セルスパ大佐は迫り来るメース達に両手を広げて見せた。

「ようこそ！」

大日本帝国・長野県伊那市近郊
帝国軍呼称「伊那防衛線」帝国軍側陣地

メサイアが突撃する光景は、兵士達に少なからず興奮を巻き起こしていた。
「撃てぇっ！」
「撃ちまくれぇっ！」
「突撃を支援するんだ！」
指揮官達の怒声によって放たれるのは、帝国の誇る火砲達。
最寄りの沿線に運ばれた４００ミリと２８０ミリ列車砲の他、砲撃陣地からはＦＨ７０　１５５ｍｍ榴弾砲とＭ１１０　２０３ｍｍ自走榴弾砲を筆頭に様々な口径の砲弾が放たれる。
「メサイアが突撃！」
戦域を見渡すことが出来る山の上に設置された砲兵観測所で、双眼鏡を構えた観測兵が怒鳴る。
「砲撃修正！距離――」
それを受けた通信兵が有線電話めがけて怒鳴る。
怒鳴り声は通信線を通じて、即座に砲兵陣地の通信兵の怒鳴り声に変換されるだろう。
そして、怒鳴り声は砲撃へと変換され、敵を砕く。
それでいいのだ。
観測兵は、口元を楽しげに歪めた。
メサイア達の突撃に恐れをなしたのか、敵の大型妖魔達が逃げまどっている。
これで、勝てる。

観測兵は、そう考えた。

「バカがっ！」

一方、コマンドポストで戦況モニターを殴ったのは、総指揮をとる篁少将だ。

「砲撃中止！両護衛隊をすぐに下げさせろ！戦車隊の砲撃が出来ん！」

「了解！」

「陛下御出撃に泥を塗るか！あのバカモノ共！」

篁が激怒するのも無理はない。

篁が一切命令していないのに、メサイア隊が勝手に敵めがけて突撃したのだ。

おかげで、敵の突撃阻止のための砲撃が、敵陣地中央部より後ろへの攻撃へ、さらにはメサイア部隊が敵陣地へと斬り込むに連れて、メサイア隊を巻き込む恐れが高すぎ、完全に中止しなければならなくなったのだ。

篁にも、メサイア隊の突撃の理由はわかる。

皆の感情が高ぶりすぎているのだ。

天皇陛下御出陣。

それは確かに兵士達の志気を高める特効薬となった反面、効果が高すぎたのも事実だ。

特効薬が劇薬に変わった結果が、一部の暴走を引き起こす。

その結果が、これだ。

しかも、よりによって――――！

「あいつら、自分の立場がわかっているのか！？」

篁の拳が再び、戦況モニターに叩き付けられた。
「何故、天皇騎から離れる！」
「少将！」
オペレーターが叫んだ。
「砲兵隊が敵陣めがけて射撃を継続中！砲撃陣地は砲撃停止を拒否しています！」
「何っ！？」

大日本帝国・長野県伊那市近郊
帝国軍呼称「伊那防衛線」帝国軍砲兵陣地

「そんな命令、拒否するに決まってるだろうが！」
砲兵達を指揮する大垣大佐は、司令部からの砲撃停止命令を報告した通信兵に怒鳴った。
「陛下が突撃されているんだろう！？ここで支援しなくて何のための帝国軍人か！」
言われた通信兵こそいい迷惑だが、命令は命令なのだ。
「し、しかし！」
「観測所との連絡を密にとれ！砲撃をメサイアに当てなければいいんだろう！？」
「当たったらどうするんです！」
通信兵はギョッとした声をあげた。
「天皇騎に当てたら、我々は！」
「他にも的はいるだろうが！当たりそうもない所だけでも叩け！砲兵隊が陛下の支援をしなかったなんて批判を喰らうワケにはいかんのだ！」
大垣大佐は言った。

「これは、メンツの問題だ！」

大日本帝国・長野県伊那市近郊
帝国軍呼称「伊那防衛線」魔族軍側陣地付近

「司令部より通達。天皇護衛隊（オールドガーズ）及び内親王護衛隊は速やかに初期展開ポイントへ後退、繰り返す」
「ふさげんじゃねぇよ！」
突然の司令部命令に、坂井大佐は不機嫌そうに怒鳴った。
「司令部、砲撃やりたきゃ、後でたっぷりやらせてやらぁ！しばらく黙ってろ！」
「坂井大佐！」
内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）を預かる氷川菜織（ひかわなおり）少佐から通信が入る。
ちらと見た戦況モニター上の彼女たちは、すでに移動速度をかなり低下させていた。
「この突撃は、明らかなミスです！」
「何がミスだ！この生まれながらのオールドミス共が！」
「なっ！？」
「いいかよく聞けよ？姉ちゃん」
坂井は楽しげに舌なめずりした。
その間にも、部隊は逃げる敵大型妖魔達を喰らい続ける。
「このまま行けば、どうなるかって？それでビビってんだろ？あ？違うか？」
「前者についてのみ同意します」
「アホが」
坂井は、斬艦刀で大型妖魔を真っ二つにしてのけた。
「んなこたぁ、俺達ゃ突撃前からわかってんだよ！」
「なっ！？」
「内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）の移動速度落としたのは、お前の判断か？」

「は、はい！」
菜織は頷いた。
彼女にとっては気の毒なことだが、麗菜がここにいないことは、菜織でさえ知らされていない。

「だから、お前は半人前だって言われんだ。二宮の後釜だろうが、しっかりしろ」
「ど、どういうことですか！？」
菜織は坂井に食って掛かった。
「このままでは我々は包囲殲滅されます！」
「その殿下が出した突撃命令だろうが」坂井は冷たく言い放つ。
「お姉ちゃんよぉ……殿下は、この状況を予測出来ないほどのバカだって言いてぇのか？」
「……」
「お姉ちゃん。俺ぁな？お姉ちゃんがパパのタマ袋にいる前から戦争やってたんだ。黙って俺の言うとおりにしな」
「……」
菜織は返答に窮していた。
相手は大ベテラン。そのベテランにこの場の指揮を任せることには問題はない。あるとすれば、互いが誇り高きエリート部隊だということ。つまり、片方が片方の指揮下に入ることなぞ、あってはならないことなのだ。
部下は助けたい。だが、部隊のメンツは守りたい。
菜織は、どちらを放棄すべきか、本気で迷った。

「氷川大尉！」
菜織のＭＣ（メサイアコントローラー）がせっぱ詰まった声をあげた。
「敵、当方を完全に包囲！」
「なっ？」
慌てて見た戦況モニターは、自分達が敵の完全な包囲網にいるこ

とを、そして、スクリーンは、それが現実にはどういう光景かを教えてくれた。
前衛に小型妖魔達が群れ、その後ろに弓を構えた兵士達。彼らを取り囲むように大型妖魔達がこちらを睨んでいる。
小型妖魔達の飽和攻撃を喰らうか。
弓兵達に蜂の巣にされるか。
大型妖魔達に袋だたきにされるか。
楽に生き残るという選択肢を、菜織は即座には作り出すことが出来なかった。
「……ぐっ」
「お姉ちゃん」
坂井はそんな菜織に、諭すように言った。
「ベテランの言葉にゃ、耳を貸すもんだぜ？」
「……了解」
菜織は歯を食いしばった。
「内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）は、只今より、天皇護衛隊（オールドガーズ）の指揮下に入ります」
「いい子だ」坂井は頷いた。
「いい子のために、俺がいろいろ教えてやらぁ。手取り足取り腰振って」
「……それ、セクハラです」
「じゃ――――司令部！砲撃止めろって言ってんだろうが！」
坂井は吠えた。
「京子！砲撃陣地に言え！騎が砲弾の破片で傷つきまくってるってな！誰の騎か？んなこたぁ言わんでいい！それで止まるっ！――――全騎、シールド構えろ！対爆撃防御姿勢で方円（ほうえん）を組め」
バキバキ。
指を鳴らしながら、坂井は防御陣形の展開を部下に命じた。
「目にモノ見せてやろうぜ！」

「これで詰みだ」
セルスパ大佐は嬉しそうに言った。
目の前では、メース達が十重二十重の包囲網のまっただ中に孤立していた。
友軍誤射を恐れ、人類側陣地からの砲撃も止んだ。
長弓兵達の攻撃で蜂の巣にして、小型妖魔達のエサにすれば済む。
それが終わり次第、長弓兵は敵陣地へ向け射撃、大型妖魔達は好きなだけ敵を蹂躙させればいい。
それで先遣隊の任務は終わる。
目的地まで我々を止める者はいなくなる。
それでよいのだ。
「さらばだ――――長弓兵！」
セルスパ大佐は、部下達に命令を下そうとして――――出来なかった。

ズズンッ！
激震と閃光が菜織の感覚を狂わせた。
「なっ！？」
ビーッ！ビーッ！
外部温度の急激な上昇を告げるアラームがひっきりなしに鳴り響き、騎体を激しい空気の動きが揺さぶる。
並の爆発ではない。そして、これが魔族軍の攻撃なら、すでに自分は死んでいる。
菜織にわかったのはこの程度だ。
「な、何が！？」
「モニター回復します」
閃光から守るために一時的に機能を停止したメサイアの“眼”が機能を回復。外部の世界を表示する。
「……なっ」
菜織は絶句した。

それまでの世界とは全く異なる世界がそこには広がっていた。
緑あふれる谷間の景色が、黒く焼けこげている。
自分達を取り囲んでいた妖魔達は消し炭か、或いは深く傷つき、のたうち回っている。
一体、何が起きたというのか？
だめだ。
菜織は自分を叱った。
落ち着け。
混乱する頭を酷使して、それでも菜織はすぐ冷静さを取り戻した。
「鈴（りん）、状況を」
「はい……ＨＩＴの爆発により、敵陣地に壊滅的な被害が発生しています。すでに敵兵力の８割が壊滅」
「ＨＩＴ？」
「Ｈｉｇｈ－Ｉｍｐｕｌｓｅ　Ｔｈｅｒｍｏｂａｒｉｃ。　サーモバリックでわかりますか？」

サーモバリック。
燃料気化爆弾の一種。
成分はハロゲン酸化剤、ホウ素、アルミニウム粉末、ケイ素粉末、マグネシウム粉末などから構成されている。
トリニトロトルエンなどの固体爆薬と異なり、サーモバリック爆薬は固体の状態では爆薬ではない。厳密には言うなら、気体爆薬を瞬間的に合成する反応物質の塊と呼ぶべきである。燃料気化爆弾が酸化エチレンや酸化プロピレンなどの液体燃料を瞬間的に気化させて使用しているのに対して　サーモバリック爆薬は固体の化合物を気化させることで粉塵と強燃ガスの複合爆鳴気を作り出し、これを爆発させる爆薬である。ＴＮＴなどの固体爆薬だと一瞬でしかない爆風が「長い間」「連続して」「全方位から」襲ってくるところにその特徴があると言って良い。
この世界ではまだ開発されたての兵器で、帝国では陸軍と近衛が

採用している。

「それは知っている」菜織は憮然として言った。

「知りたいのは……誰が使ったかだ」

「空、見上げてみな。お姉ちゃん」

坂井の声に菜織は思わず上、つまり、空を見上げた。

何もない。ただ、青い空が広がるだけだ。

「空って……航空機からの投下ですか？」

「他にゃねぇだろが……航空機搭載型のヤツ。確か５００キロだな」

「航空隊が？」

「そうさ。スカイレーダー隊がやってくれた。敵の動きの鈍さから、俺達を陣地に誘い込むハラだってことはすぐにわかった。だから、俺達が囮になって、敵を引きつける。その間に待機中の航空隊が空からソイツをばらまくって、そういうことさ」

菜織はそれですべてが腑に落ちた。

圧倒的な敵のど真ん中に突っ込むことがどれだけリスクのあることか。精鋭中の精鋭である天皇護衛隊（オールドガーズ）にわからないはずがない。

まして、あの麗菜殿下ならなおのことだ。

それでもなお、彼らが突撃を命じた理由。

それは、これを狙っていたからだ。

「さぁ。のんびりしてるヒマねぇぜ？」

坂井騎が斬艦刀を構えた。

「残敵の掃討にかかる――航空隊ばっかりに戦争させたとあっちゃメンツに関わるんでな！」

「了解です――各騎、続けっ！」

反抗　第三話（後書き）

●新キャラ

氷川菜織（ひかわ・なおり）少佐

・内親王護衛隊（レイナガーズ）では月城真菜の幕僚。

・本当は、指揮官としてより参謀として活躍していたため、メサイアの操縦技量は今ひとつ。

・メガネをかけたショートカットの美人で、スーツを着せれば「出来る女」の典型例で通るが、本質は少年愛（やおい）に目覚めたトンデモナイ人。

・内親王護衛隊（レイナガーズ）ではめずらしくノーマルを自任しているが、周囲からは「男を好きだなんておかしい」とか「オトコノコを好きなんて変態の証拠」「警察に通報すべきよ」と結構色々言われている。

反抗　第四話

「斬込隊リーダーより前衛リーダー」
高度は海面ギリギリ。
朝霧の出た海の上をこんな高度で飛ぶなんて、自殺行為もいいところだ。
美晴はＭＣコントロールという世界で最も安全なフライトとされるメサイアの中にいても、その恐怖を抑えることが出来なかった。
こういうのを「富士ランドのコースターの方が恐い」とか言い切れる神城三姉妹達やさつきの神経が美晴にはわからない。
「こちら前衛リーダー」
「……どうする？」
通信モニターの向こうで美奈代が小声で訊ねてきた。
「呼びづらいのよ」
「そうですね」
相変わらずだな。と、美晴はくすっ。と笑った。
多分、帝の護衛なんて突然の大任を任された美晴の心をほぐすためにおどけてくれたんだと、美晴は美奈代のものぐさを心からありがたく思った。
「いつも通りでいいんじゃないですか？」
通信モニターをのぞき込むように見た帝の顔は平然としたものだ。
「感謝。じゃ、私達が後方を叩く――部隊は港に橋頭堡を確保。狙撃隊の揚陸を最優先」
「了解」
「前方に反応有――海岸線付近、魔族軍メース……違う、赤兎と類似性８５％のメサイア反応多数、現状数１５、距離２５００」
「飛行艦から索敵レーダー照射受けていますっ！」
ＭＣ達が矢継ぎ早の報告を続けてくる。
その中で、美晴は部隊に怒鳴った。

「前衛全騎、フォーメーション楔っ！陛下の御前に展開しろっ！」

速度を落とすことなく、まるで式典の際に見せるアクロバット同然の機動で、見事に自分の前に楔形陣形を構築した前衛隊の動きを前に帝は顎を撫でた。

「ふむ……見事なものだ」

美晴が聞いたら涙を流すだろうその言葉だが、帝はすぐに意識をモニターに集中した。

戦況モニターが、敵味方の布陣状況を教えてくれている。

艦艇４隻。

赤兎級メサイアは都合３０近く。

数だけなら、ほぼ向こうが3倍。

陣形はない。

向こうも突然の襲撃に狼狽していることは間違いないだろう。

「さて……どうしたものか」

周囲を見回すと、海岸線の奥で煙の柱が派手にあがった。

斬り込み隊が突撃に成功した証拠だ。

もう、こうなれば前衛隊と共に突撃するだけ。

この作戦だって自分が事前に承認したことだ。

今更、地位を利用して、司令部の作戦指導に介入するつもりはない。

そう、帝はすでに決めていた。

「自分で決めたルールだけどねぇ……」

「はい？」

「ううん？独り言」

「……ルールは全て、陛下がお決めになればよろしいのです」

雛菊は言った。

「この国はそういう国です」
「成る程？――じゃ、そうするか」
「御心のままに。海岸線、上陸します、ご随意に！」
「ありがとう。伊那は」
「戦闘は終結」
「ん？もうかい？早いな。いつ始まった？」
「日菜子殿下が何かやらかして戦闘開始、麗菜殿下が司令部無視して航空隊を動かしてＨＩＴ弾使用」
「そうか……」
ふうっ。と、帝はため息をついた。
「あの子達にも困ったもんだ。今、どうしている？」
「日菜子殿下はマリアから、麗菜殿下は篁（たかむら）少将からのお説教がすさまじく」
「ああ……いい薬だ」
帝は苦笑しながらコンソールを操作しながら言った。
「二人とも、先生に怒られてしょげているんだろう。全く、そそっかしい所は詩織（ははおや）譲りだなぁ。あれ？通信は……どうだっけ？」
ピッ
帝の指が、カバー付きのスイッチを押した途端、
バンッ！
帝騎のＭＬ（マジックレーザー）が火を噴き、美晴達の陣の中を突き進み、港野戦砲を準備していた敵騎の装甲をぶち抜き、その勢いで一騎がひっくり返って海に沈んだ。
「……」
「……」
「……」
帝、雛菊、そして十六夜が……いや、この場に居合わせた者達全員が、一瞬、固まった。
「あっちゃぁ……」
コクピットで帝が頭を掻いた。

「これは……ごめんじゃ済まないなぁ」
「な、何したんです？」
「司令部に回線を開こうとしたんだけど、何だ。これはＭＬ（マジックレーザー）の発射ボタンだったか。ハッハッハッ」
「ハッハッハッじゃありませんっ！」
雛菊は怒鳴った。
目の前ではメース達が動き始めている。
「そんなことは私に言ってくださいっ！敵、戦闘発砲っ！」
雛菊はキレかかりながらパネルを操作する。
「何が皇后陛下似よ……絶対、陛下似なんだから。特に日菜子殿下は」
「何か言ったかい？」
「客観的な状況把握に邁進しておりましたっ！」
「そう。んじゃ……向こうのことはともかく、僕も事前のことに集中しよう」
帝は、コントロールユニットに力を込め、斬艦刀を抜いた。
「雛菊君、いくよ？」

港に停泊していた車やコンテナ、そして倉庫を吹き飛ばしながら強行着陸した美晴達前衛隊。
その前に立ちはだかったのが中華帝国軍の赤兎達だ。
「シールド構えろっ！
美晴は即座に怒鳴った。

ガギィィィン！

シールドとなった金属同士がぶつかり合うすさまじい音が辺りにこだました。
メースとメサイアのシールド同士が激突する。

「押されるな！」
鳴り響く警報に負けないよう、美晴は怒鳴った。
「ここで押されたら崩れるぞ！」
コントロールユニットに力を込めながら、美晴は息を呑んだ。
目の前に一杯に広がる赤兎と眼があった。
装甲同士のパーティング・ラインが手に取るようにわかるほどメースが近い。
それを見ていると、恐怖とは違う、何か別な感情が美晴の中でわいてくる。
見惚れそうになるというのが、最も近いかもしれない。
ググッ！
力ではさすがにこちらが圧倒的に上だ。
ちょっと力を込めただけなのに、敵騎の脚が地面にめり込むのがわかる。
「くっ！」
力押しだけで勝てるか？
いや、勝つんだ！
陛下の御前だぞ！
「くそっ！」
舌打ち一つ、精一杯の力をコントロールユニットにかける。
何とか左腕だけでシールドを扱い、右手で太刀を抜くと、瞬時にシールド同士の隙間を見いだす。
「そこっ！」
ガンッ！
太刀の切っ先が赤兎の脇腹を貫通した。
自騎を押す敵の力が瞬時に弱まり、美奈代は思わず前につんのめりそうになりながら崩れ落ちる赤兎を踏みつけ、美晴は敵陣へと躍り込んだ。
「崩したっ！」

後続騎がすぐに穴を埋めようとするより早く、美晴は赤兎達の間に割り込み、太刀を振るった。
シールドを構える赤兎達は、その攻撃に十分に対応出来なかった。
右の一騎の胴を串刺しにし、左腕のシールドで赤兎の側面を叩く。
その突然の攻撃に赤兎2騎が力を失い、“白龍”達によって押し倒された。
「行けるっ！」
美晴の攻撃で前面に出ることが出来たのは、山崎とさつきだ。
「美晴、今のうちに武器換装して！」
「シールドを用意して正解でしたね！」
「そんなことより陛下は！？」
「今――――ぐっ！？」
赤兎の斧がさつき騎のシールドにめり込んだ。
「さつきさんっ！」
ザンッ！
山崎騎が、さつき騎に襲いかかった赤兎をなぎ払い、その背後を守る。
「フォーメーションを崩ずさないっ！」
美晴は怒鳴った。
「崩せば死ぬっ！」
「うんっ！」
「さつきさん、動けますね！？」
「もちっ！」
「よしっ！陛下はすでに敵を突破した！」
「うそっ！」

ズガンッ！
斬艦刀の一撃を胴に喰らった赤兎が真っ二つになって宙を舞った。

「ふぅっ」
コクピットで息を整えたのは帝だ。
「腕がなまってるんじゃないか心配だったんだけど」
「私の支援がありますから」雛菊はきっぱりと言ってのけた。
「心配いりません」
「そういうことにしておこうか。撃破何騎め？」
「都合、８騎めです」
「少ないな」
「贅沢です」
雛菊は戦況モニターを見た。
「戦況は我が方の圧倒的優位。敵は駆逐されつつあります。斬込隊が敵陣後方を完全破壊。接触します」
「ほう？ここまで来ていたか」
帝の顔が少しだけ複雑なものに変わった。
「“白龍”……というか、Ｄ－ＳＥＥＤか」
目の前に経つ純白のメサイア。
それはかつてＤ－ＳＥＥＤと呼ばれたメサイア。
その足下は、メサイア達の残骸によって足の踏み場もない。
一体、何騎と渡り合ったというのか……。
まさに死者累々たる墓場に立つ死神さながらだ。
「……凄いな」
帝が唾を飲み込んだ。
「これは」
「あら？」
ズシャッ……ズンッ
Ｄ－ＳＥＥＤが赤兎の残骸から斬艦刀を引き抜いた。
その残骸が、糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた。
「みなさん、お着きですか？」
「露払いありがとう」
「あら……これは失礼いたしました」

祷子は頭を軽く下げた。
「陛下でしたか」
瀬音も気づいたらしい。
「うん。戦況はどうだ」
「後方の敵は殲滅。“鈴谷（すずや）”から揚陸部隊が出撃……上陸まであと2分」
「よろしい」
帝は言った。
「泉大尉、ご苦労だが残敵の掃討と、終わり次第の機関冷却、武装の交換を」
「了解！」
その間、帝はずっと通信モニターに映る一人の女性を見つめていた。
「……」
言葉をかけるべきか。なら何と？……その言葉が見つからない。
そんな、複雑な目で、帝が見つめるのは――
「あら？陛下？」
祷子だった。
「何か？」
モニターの向こうで祷子が首を傾げた。
「あ、イヤ」
帝は苦笑を浮かべながら言った。
「似ているというか……ちょっとは目の保養をと思ってね」
「はぁ？」祷子はちょっとだけ考えて言った。
「それ、褒め言葉ですか？」
「そうとってくれ」
「はい。ありがとうございます」
「……雛菊君。日本海側の状況は？」
帝はわざと祷子から話題を逸らした。
今、声をかける必要はない。

急ぐべきじゃない。
そう、判断したのだ。
「絶対に、伝えるべきだとは思うんだが……」
――伝えて、どうなさるのです？
皇后からの問いかけではないが、それが思いつかない。

ハァッ。

思わず深いため息が出る。
「陛下？」
報告を続けていた雛菊が言葉を止めた。
「お疲れですか？」
「ん？いや……大丈夫だ」
「はあ……報告、続けます」
「うん」
帝は、雛菊に聞こえないレベルの小さいため息をつくとぼやいた。
「……兄上にも困ったものだ……逝くなら逝くで、後始末はしっかりしてほしいものだ」
死人に文句を言いたくない。
そうは思う。
だが、これは酷すぎる。
「こういうことは、父親の責任ですよ？……兄上」

反抗　第五話

遠くで連続した爆発音が続く。
「おやおや」
富山湾に面した高級ホテルの一室から、遠方に立ち上る煙を確認した女性は、ワイングラスを片手に立ち上がった。
「盛大な花火があがったねぇ」
かつては富山湾を一望できる眺望と、湾でとれた新鮮な魚介類を売り物にしていたレストラン。
経済的成長を続ける中国の大都市でもなかなかお目にかかることのない調度類。
テーブルに並べられた美食。
そして、日本産とはいえ吟味されたワイン。
本当に、ここは食事を楽しむには申し分ない世界であり、ここにいることこそ、自分には相応しい。
そう考える女の頬がほんのり赤いのは何もワインのせいだけではない。
自分に対する陶酔のほうだ。
しかし……。

ぐっちゃ
ぐっちゃ

ＢＧＭとして流れていたクラシックを台無しにするほどの露骨な咀嚼音が室内に響き、女は顔をしかめた。
「まぁ、何だな。こっちに来るとは」
「太平洋方面は囮か？」
「いや、こっちはこっち……そんな所だろう」
「東京に攻め込んだ報復か？」

「ああ……その可能性は高いな」

不愉快な音は、彼女の周囲から聞こえてくる。

はっきり、照明を落としているからこそ、まだここにいる。

今は朝だ。

酒を飲むのも、徹夜明けの仕事に対する自分へのご褒美、そして、気付け薬としてのカフェインの代わりのようなものだ。

食事だって、朝がゆをメインにした、シェフの配慮が感じられる、朝に食べるとしたら、女性にとって嬉しい。そんな料理が並んでいる。

高級ホテルのレストランで迎える朝食なら、こんなのが理想だ。

そんなメニューといえばある程度想像出来るだろうか。

彼女は、そんな素敵な食事を台無しにする周囲の存在に、表だって不快感を示すことだけはしなかった。

本当なら、同席することどころか、同じホテルにいること自体、心底遠慮したいのだが、立場上やむを得ない。

「陳大校」

自分の名を呼ばれた彼女は、作り笑顔を相手に向けた。

「何ですか？李少将閣下」

「そんなメニューでは腹が減るだろう」

そう言ったのは、彼女の真向かいに座る肉塊……いや、王政党親衛軍の軍服に身を包んだ肥満体の男だ。

「肉を食いたまえ」

皿に大盛りになった肉料理を、その脂ぎったフォークが突く。

「肉はいいぞ？動物の魂を食べるのと同じだ」

「はぁ……」

徹夜明けの身でこってりとした肉料理を、女に食べろというのか？

「天皇の狗が暴れているにしても……だ」

ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が数機、ホテルの間近を通り抜けていった。

「目的は、司令部の捕獲……だな」
「……なぁ」
「何だ？食べられないなら喰うぞ？」
他の士官――――これもまた、揃いも揃って風船のようにパンパンに膨れあがった肥満体が３人。
４人ものデブに囲まれて食事をすることが、若く通常の神経を持つ女性にとってどれ程苦痛かを、陳大校は声を大にして主張したかった。
「狗ってさぁ」
「うん」
「見ていると腹へらね？」
「同感だ。同士よ」
「……まだ、食べるんですか？」
「何を言うんですか、陳大校」
少佐の階級章をつけた、メガネをかけた士官が言った。
「ここに並べられているのは、朝食前の軽い前菜です……おい！料理長っ！料理に野菜を入れるとは、俺を痩せさせる気か！」
「……」
少しどころか、思いっきり痩せた方が良い。
陳大校は、気を取り直して、スープ用のスプーンに手を伸ばした。
「頼んでおいたカレーはどこだ？ああ、これか」
少佐は、カレーの入った容器を掴むと、陳大校の前で一気に飲み干した。
「……ふうっ。カレーはやっぱり最高のドリンクだな。どうした？陳大校、口元を抑えて」
「い、いや……」
陳大校は首を横に振った。
もう食べるというより、食べ物を見るのも嫌だ。
「“山猫（シャンマオ）”級の出撃準備だけ、整えておきましょうか」
そう言って、陳大校は席を立った。

「ああ、そうだな」
少佐は陳大校の席から次々と皿をとり、自分の皿の上に盛りつける。
サラダも肉も関係なしだ。
折角吟味されたドレッシングもグレービーソースも何も関係ない。
あれじゃ、味は台無しだろうに。
陳大校は、それだけは思った。
「我々は、まだ食事を続けていたいのでな」
「まだ食べるんですか？」
「食事はまだ始まったばかりだ。食べ物が待っているというのに、席を立つなぞ、デブの風上にもおけんことだ」
風下に立ちたくないなぁ……。
というか、風上に立ったら食べられるんじゃないかしら。
そんな不安が脳裏をよぎった。
「またお前は間違っている」
少将は窘めるように言った。
「食事は食べるんじゃない。飲み込むんだ」
陳大校はもう後ろも見ずにレストランを後にした。

ホテルの広い駐車場は巨大な擬装網で隠されているため、海から見ると森のように見えるが、その網の下にはメサイア達が収容されている。
陳大校が独自に開発を進めているメサイア――“山猫（シャンマオ）”達だ。
ロシア軍が正式採用を決定した“白馬”級の姉妹騎に当たる騎。
パワースペックは米軍のグレイファントムよりやや上なのに、パーツのユニット化する特殊設計により、量産性は比較にならないという、陳大校にとって完成した戦時急造型メサイアの傑作騎中の傑作騎だ。

その傑作騎達を見上げながら、陳大校の顔は苦り切っている。
「ったく……」
出撃に備え、整備兵によりセッティングが続いているが、
「何で私が、あんな猪共（チュ）に騎体をくれてやらにゃならんのさ」
「大校」
整備隊長が陳大校の姿をみつけ、駆け寄ってきた。
「港湾守備隊はほぼ壊滅状態。司令部とは通信途絶」
「……だろうね」
ホテルのエレベーターから見ていた限り、富山湾に配備されていたメサイア部隊は一方的に潰された。
あの白いメサイアには覚えがある。
装甲の形状は変えているが、エンジン音や関節部のモーター音のチューニングは、間違いなく、あの北米戦線で戦った騎――つまり、
「ドクター・ツシマの……あの小娘の設計した騎体に、またも食い物にされるか……」
それが、あのデブ共に騎体を使われるより悔しい。
「親衛隊の腕っこきと聞きましたが」
整備隊長は、自信なさげに周囲を見回し、陳大校の耳元で訊ねた。
「あの……本当ですか？」
「大食い大会と戦争を勘違いしているんじゃないかってなら、同意見だ」
「……ですか」
「何だい。日本のスモウ・レスラーみたいな体格の奴でも入るように、コクピットどころかMC（メサイア・コントローラー）まで専用設計ってのは」
「安全装甲（セフティ・アーマー）は外部増設装甲で代用するってのは、正直、大校の設計思想の懐が深いなと感服はしていますけど」
整備隊長が、重そうに体を動かす豚――――もとい、MC（メサイア・コントローラー）達を一瞥した。
「あれでも軍人ですか？」

「コントローラーってより、コレステローラーって方が正しいと思うけどねぇ」
大校は、そっと自分の体を撫でると、少しだけポーズを作って整備隊長に尋ねた。
「なぁ、隊長」
「心配ありませんよ」
整備隊長は苦笑気味に笑って言った。
「大校は見事なプロポーションをされておいでです。大校騎のコンディションと共に保証します」
「感謝……」
大校の口元に笑みが浮かぶ。
「司令部が吹っ飛ばされたとしても、私達の仕事は、この“山猫”をデブ共に引き渡す所で終わりだ。あんた達の撤収準備は？」
「ほぼ完了――ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）で一気に本国へ逃げて見せます」
「上等――牽制は私と杏（シン）でやる。大船に乗った気持ちでいな」
陳大校は、整備隊長の肩を叩くと言った。
「紅葉――あの六本線に勝ってみせるさ」

「やぁぁぁっ！」
ザンッ！
麗央騎のハルバードが振り下ろされ、赤兎を真っ二つに切り裂いた。
「次っ！」
「右、３５メートルっ！」
「了解っ！」
麗央はハルバードを構え直すと、戦斧を構えた赤兎に狙いを定めた。
「――せいっ！」
ハルバードの長い柄の先にある戦斧が襲いかかってくると思って

いた赤兎のパイロットは、その予想外の一撃を避けることが出来なかった。
麗央は、戦斧の方を掴んで、普通ならグリップとすべき石突の方を突き出してきたのだ。
腹に付きをモロに喰らった赤兎は、くの字に体を曲げてバランスを崩した。
それが、麗央の狙い。
「やっちゃえっ！」という麻紀の声援に応えるかのように、手の中で手品のように前後を入れ替えたハルバードが赤兎の脳天を確実に捉えた。
グシャッ
そんな嫌な音と共に、砕かれた脳天を構築していたパーツが吹き飛んだ。
MC（メサイア・コントローラー）という“脳”を潰された赤兎が膝を屈するようにその場に崩れ落ちた。
「最後（エンド）っ！」
「他、残敵なし――柏騎へ、こちら川上騎、沢口。エリア5から10までの制圧を完了。現状、抵抗勢力なし」
「こちら柏、了解――麗央、ゼロ・ポイントへ集結」
「了解――麗央、ゼロ・ポイントへ戻れって」
「うん……あーあ、折角、富山まで来たのになぁ。シャケだっけ？お腹いっぱい食べたいなぁ」
「ブリよブリ。つーか、ぜーたく言わない」
「うーっ。な、何よ、カニの方がいいの？」
「地図じゃなくて観光ガイドしか見てないから心配してたけど、あんた、ゼロ・ポイントわかってるわよね」
「……え？」
麗央の目が点になった。
「そ、そりゃ……」
「さーて。どっちだ？」

「あ……」
こほん。
麗央はわざとらしい咳払いをしてから、もったいぶった風で右を指さした。
「あ、あっち……」
「ぶーっ。あっちはエリア１１方面……何？地球一周してゼロ・ポイントへ戻るつもり？」
「じ、じゃあ、あっち」
「そっちもぶーっ。あーあ。陛下の御前で迷子かぁ」
「な、何よ麻紀の意地悪っ！」
「挙げ句がパートナーの責任とはねぇ……」
「麻紀ぃぃぃっ」
「はいはい。集結地点は……」
ピピッ
突然、戦況モニターに出現した反応。
それは――
「……」
「麻紀？」
「こちら川上騎、沢口っ！全騎へ警報！エリア１３に新規メサイアの反応っ！数は――４っ！修正っ！６っ！６騎っ！」
「こちら柏――斬込隊が急行している。接触まで持たせて！」
美晴からの通信が入る。
「伏兵が他にもいる可能性がある。陛下を危険にさらすことは出来ない！」
「了解っ！」
麗央は力強く頷いた。
自分１騎のために天皇座乗騎を動かしたなんて、近衛騎士として……ううん！人として恥ずかしいどころの話じゃない！
「ここで食い止めるよ！麻紀っ！」
「はいよっ！」

麻紀は頷くとコントロールユニットを操作した。
「陛下に麗央の戦いぶりを見てもらう絶好のチャンス到来っ！よかったね麗央っ！陛下の御前での活躍なんて、私達の子孫末代までの語りぐさに出来るよ！？」
「私達の？」
「そう！私と――――麗央の子供達っ！」
「ど、どうやって作るのよ！」
「愛があれば、性の壁なんて突破できる！」
「無茶苦茶――――っ！」

ドドンッ！

麗央騎の周囲に砲撃が着弾した。

「――――くっ！」
「命中弾なし――――損傷なし――――さっすがにこの装甲じゃ破片でさえ痛くも痒くもない」
「き、傷くらいはついたんでしょう？」
「まぁ……そうね」
「許さないっ！」
「同感――――斬込隊は――――嘘おっ！」
「ど、どうしたの？」
「いいっ！」
麻紀は怒鳴った。
「麗央は目の前の敵に集中して！斬込隊は期待出来ない――――それだけわかってればいいっ！」
「な、何よそれっ！」
「敵、出現っ、距離５６０っ！」

「こりゃ……どういうことかしらね」
美晴は顔を強ばらせながらぼやいた。
「何か……悪いことしたのかしら。私ったら」
「新潟方面より妖魔の反応多数、こちらに向かって移動中――」
「正確な数は」
「……サーチ限界で９０近く――飛行系？ライブラリに類似する妖魔の情報なし」
「新型？」
「――柏君」
帝からの通信に美晴は、ハッとなった。
「陛下っ！すぐに“鈴谷（すずや）”へお移り下さい！数が数ですっ！」
「いや……ここで食い止めた方がよさそうだな」
「し、しかしっ！」
「無理かい？」
「陛下のお望みでしたら……」
「私のことは気にしなくて良いよ。こんな所へしゃしゃり出ているのは、僕の方だからね」
「き、恐縮です」
美晴は頷くと、部隊に命じた。
「全騎、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）用意――陣形、円陣っ！小清水少尉！空から来るっ！どんな武器が通じるかわかんないけど、ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）なら大抵通じるはずよ！？狙撃ポイントは任意でいい！確保してっ！」
「こちら小清水、ポイントは既に確保――揚陸部隊はどうしますか！？」
「要請は来ている！？」
「まだ！」
「なら、当面無理っ！それと――ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）で逃げ出せるように準備するように伝えて！そっちを保護している余裕はないって！」
「はいっ！」

突然の妖魔出現に大した混乱もなく、着々と迎撃態勢を整える美晴達の様子を感心しながら眺める帝に、ＭＣ（メサイア・コントローラー）の雛菊が伝えた。
「妖魔群の中にメースと思しき反応数騎が含まれます」
「なんだって？」

近づきつつある存在。
それは、浮遊城から移動中の紅色の妖魔達。
アイバシュラだ。
まさか魔界から浮遊城経由で連れてこられた、納品途中のアイバシュラの群がこんなタイミングで自分達の上空を通過するなんて予測しろいう方が無理だ。
偶然というしかない事態だが、しかし、アイバシュラの納品をする側としても、こんな所に敵がいるとは考えもしなかったことで……。
「何が起きているって？」
「戦闘です」
アイバシュラ達の群を率いるのは、特殊な装置を取り付けられた“コルウス”部隊、つまり、裕樹達だ。
先日のこともある。
日本海が安全な遊び場でないことは、浮遊城の指導部にとってもわかりきっていたことだ。
万一があるということで、今度のフライトには、武装された騎――ヤクトエッジ３騎が護衛についていた。
「――――ちっ」
ヤクトエッジの先頭騎から舌打ちが聞こえた。
「今更、引き返すってワケにもいかんな」

「勘弁して下さいよ！」
大地が悲鳴に近い文句を言った。
「こいつら全部をまとめるのに、俺達三人がどんだけ苦労したか！」
「ああ。わかったわかった」
煩わしい。といわんばかりに手を振った、ヤクトエッジの騎士が答えた。
「突っ切ればいいことだ――納品途中に“商品”を台無しにされたら洒落にならん」
「で、ですよね。っていうか……つ、突っ切るんですか！？」
「迂回が出来るのか？」
「いや……」
大地は自信なさげに答えた。
全長が２０メートル前後のアイバシュラ達を約１００匹。
群に集めるだけで一苦労。
誘導電波で移動させるのでまた一苦労したばかりだ。
この先、右へ左へ迂回するようなことが出来るか。
そう聞かれれば、自信なんて全くない。
「それは……」
「ダメだろう？」
「はぁ……」
「司令部へ――針路上にお客様がお待ちかねだ。指示を」
――なんだよ。
大地は小さく舌打ちした。
偉そうなこと言っておいて、結局、上へおうかがいかよ、これだから大人は！
「こちら天壇司令部――交戦は許可する。ダユー様からだ。アイバシュラの投入も許可する。必要に応じて適宜投入せよ」
「いいんだな？」
「かまわん――ちょっと待て」
「ん？」

「こちら司令部。絶対に、敵勢力を撃破せよ。いいか？これは厳命だ。存在する全勢力を撃破しろ」
「何？」
「諜報部からの情報だ。こちらから増援が出撃体勢に入っている。合流まで15分。持たせろ」
「司令部、何がどうなっている？何がいるんだ？人類に」
「金星だ」
「金星？」
「ああ。極秘に出撃した大金星がそこの部隊に混じっている。アイバシュラ全部をフイにしても、その首を獲ればおつりが来る！お前達も三階級の特進は約束出来る。報奨金は望むままだ！」
「……」
「――――どうした？」
「……成る程？」
クックックッ……。
ヤクトエッジのコクピットに笑い声が満ちあふれた。
「コイツは面白い話だ――――」
「だろう？」
「こちら“バット・リーダー”。命令は受領した――――金星の刈り取りに入る。“バット・リーダー”より“ラーヴァ・チーム・リーダー”」
「はい」
「お前達はこのまま突っ込め。福井湾上空で誘導電波をカット。後は城へ戻って良い」
「えっ？」
「聞こえなかったのか？」
「いえっ！」
大地は驚いて答えた。
「“ラーヴァ・チーム”了解――――福井湾上空で誘導電波カット。後は戻ります」

「よし――後続部隊に撃たれるなよ？」
「は、はいっ！」
「“バット・チーム”全騎へ――これより先行する。戦闘モードは対メサイア戦。金星の意味はわかってるな！？」
「応っ！」

「……な、何だよ」
唇を尖らせた大地がぼやいた。
「俺達にゃ、何の説明もなくて盛り上がりやがって」
「ねぇ、大地」月菜が訊ねた。
「ど、どうするの？」
「どうするもこうするも」
大地は困り切った顔で言った。
「……やるしかねぇじゃん。裕樹」
「何？」
「福井湾まで……大丈夫か？」
「多分ね」
裕樹は答えた。
「アイバシュラが暴れた時用の妨害電波の装置もあるし……」
「……」
「福井湾までは針路わかっている。敵だってアイバシュラを狙うだろうし、何より、僕達より先に出た兄貴達が敵を抑えていると思う」
「……」
「どうしたの？」
「……いや」
大地はそっぽを向いた。
「何でもない」
そう答えながら、大地は内心で、こんな時に落ち着いていられる裕樹に対して、今、自分が嫉妬に近い感情を抱いていることをはっ

きりと自覚していた。
くそっ、裕樹のクセに！
大地は思った。
俺の方がリーダーなんだぞ！

反抗　第六話

「接近する妖魔部隊、先頭にメサイアの反応４っ！」
「美晴さん、川上少尉達は！？」
「残念だけど――――独自で凌がせて！」
「しかしっ！」
山崎が驚いた声を上げた。
「前衛隊は陣形維持っ！現状における最優先課題は、川上少尉の救出ではなく、陛下の護衛であると判断するっ！」
「美晴さんっ！」
「この部隊に入ったからには」
美晴は、自分に言い聞かせるように怒鳴った。
「４騎程度、自力でどうにかしてもらう――――陛下」
「……何だい？」
「少し、お願いが――――」

「さぁて……」
妖魔アイバシュラの群に先立って富山湾に侵入したバッド・チームのリーダーは、指を鳴らして言った。
「金星はどれだぁ？」
「いいじゃねぇですか」
編隊の一騎を駆るウォルツ少尉が言った。
「片っ端から殺せば」
「……まぁな」
「普通なら」
もう一人、ユーコン少尉が戦況モニターを撫でながら続けた。
「あの円陣のど真ん中でしょうけどね」
「俺もそう思いますぜ？中佐」

「……もし、そう思うなら、お前達だけで仕掛けてもいいぞ？」
「おやあ？それだと金星挙げた功績は、中佐もらえませんぜ？」
「――構わん」
「……中佐の命令に従いますよ」少尉は言った。
「すぐに金星位見つけられるって。ガキのお守りばっかりで、カンが鈍ってないならね」
「信じろ」
「信じますよ――中佐なら出来ます」

当たり前だ。
中佐と呼ばれたバッド・リーダーが小さく呟いた途端、

ピーッ！
「ちいっ！？」
砲撃警報がコクピットに鳴り響き、編隊は無言のまま散開した。

散開によって開いた隙間を、白い三騎のメサイアが密集陣形のまま突き抜けていった。

「速すぎるぞっ！？」
後方で散開、花開く飛行機雲を描ききった白い騎体達をモニターの端に捉えた途端、彼は目を見開いた。
「近衛とはいえ、あれがメサイアの突撃速度か！？」

「速ええっ！」
「な、何だあれっ！？」
通信装置に、ユーコン少尉達の狼狽した声が入る。
「メサイアにあんな機動性があってたまるか！」
「中佐っ！？ありゃ一体！？」
「俺が聞きたい！」

狼狽する部下に彼は怒鳴った。
「金星前にして――来るぞ！」
ビームライフルを発砲しつつ、三騎が突撃してくる。
「くっ！？」
間近をかすめた一発に、騎体装甲表面の異常加熱を伝える警報が鳴り響いた。
「紅葉め――出力上げたか？」
騎体を回転させ、とっさにバランスをたもつ彼のヤクトエッジの真横を白いメサイアが駆け抜けていった。
その騎体を見た彼の目が驚愕に見開かれた。
「“Ｄ－ＳＥＥＤ”が三騎っ！？」
「中佐っ！」
「ちぃっ！」
部下への指示に躊躇した彼は、一瞬だけ天を仰ぎ、
「かまわん、お前達は円陣の敵へ向けてかかれっ！」
「えっ！？」
「“こいつら”は、お前達では手に負えん！」
「なっ！？」
「無駄な損害は避けたい！こいつらは、俺が引き受ける！行けっ！」
「俺達が相手にならないのを三騎も引き受けて、あんたなら勝てるってのかよっ！」
「馬鹿言うな！」彼は怒鳴り返した。
「俺だって勝てるとは思えん！」

青空を数本の光線が走った。
「は、はじまった！」
「ほ、本物の戦争かよ！」
大地は自分の声が震えていることに気付いて、顔をしかめた。
「月菜、裕樹っ！」

「わかってる！」
「針路はこのままだね？」

「2騎、前衛隊へ！」
「何でっ！？」
祷子とほむらでそれぞれ1騎ずつ交戦することで話がまとまったばかりなのに、肝心の3騎のうち、2騎が美奈代達を無視するように前衛へ向けて直進をかけた。

後方からは妖魔の群が接近中。

「私達は戦う価値がないとでも！？」
「まさか！」
見事なまでに空中を駆けるヤクトエッジ相手に、ビームライフルを牽制射撃しつつ、牧野中尉は怒鳴った。
「接触時に動きを止めたんですよ！？まさか、陛下の元へ！？」
「それこそまさか！」
美奈代は首を横に振りそうになった。
「あり得ない――――とは言えないか」
「大尉っ！」
ほむらから通信が入った。
「このままでは！」
「風間、明貴っ！2騎を追撃っ！柏からの文句は私が聞くっ！」
「頼みますっ！」
「了解っ！」
祷子騎とほむら騎が即座に2騎のヤクトエッジの追撃に入る。
前方から時折走る太い光線は、狙撃隊のＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）攻撃と見ていい。
ヤクトエッジ達も、ほとんど寸前でようやく回避していることは、その機動と光線の軌道からして明らかだ。

一発を回避した所にもう一発。これがギリギリかわした所でもう一発。
普通ならもう撃破されていて当然な所だ。
ヤクトエッジの機動性と騎士の技量がなければ、とてもではないがここまでいかないだろう。
この貴重なほどの機動を前に、残念ながら、
――いい腕をしている。
などと、感心してる余裕は今の美奈代にはない。
涼達は、ヤクトエッジ達が前衛に近づくのを阻止する攻撃を継続している。
その手前でぼけっとしていることなど出来はしない。
「くっ！」
Gに耐えながら、美奈代は残ったヤクトエッジを追った。
綺麗な飛行機雲からビームの一撃が飛んでくる。
回避した途端、ヤクトエッジがズームアップしたように眼前に迫ってくる。
「このぉっ！」
完全に接触するまで、美奈代は三発のビームライフルを発砲した。
「なっ！？」
美奈代が目を見開いた。
敵は、その三発全てをあっさりと回避してのけた。
「馬鹿なっ！」
大質量同士がすれ違う激震に耐え、騎体のバランスを回復させようとＳＴＲシステムに力を込める美奈代が怒鳴るように叫んだ。
「軌道が読まれている！？」
「――お姫様じゃねぇ」
美奈代騎とすれ違ったヤクトエッジの中、彼は呟いた。
「……真理、か」
ライフルを格納し、サーベルを鞘から引き抜きつつ、騎体にとん

ぼをきらせた。
「指揮官なら、あいつかもしれんが……」
神経を同調した操縦システムにエラーが表示された。
それがどういう意味かわかる彼は、短く舌打ちした。
「恨むなよ？」

「そう来るか！」
敵が武装を変更したことを知った美奈代は、ビームライフルから斬艦刀へ武装を変えた。
「機動は速いし――」
下に構えられたサーベルだが、突撃するその体そのものを半回転させると、下からの一撃が、美奈代の頭上からの一撃へ容易に変化する。
斬艦刀とサーベルがぶつかり合い、火花が走る。
「芸も細かいけど！」
ヤクトエッジと“白龍”双方の制動ブースターが全開に開かれ、放出された魔力による激しい光のシャワーの中、白と黒の巨人達が宙でぶつかり合った。
「根は単純だ！」

「何だとっ！」

剣の押し合い。
出力で絶対に圧倒できるはずのメースに乗っていて、力業で互角に持ち込まれるとは思わなかった彼は、それだけに驚愕した。
「こりゃ、何者だ、真理っ！？」

思わず出た言葉。
それに気付くことは、すなわち、即座に隙を意味した。

ドンッ！

気付いた時には、脇腹めがけて鋭い蹴りの一撃が飛んできた。

“白雷（はくらい）”の尖った爪先がヤクトエッジの脇腹の装甲をへし曲げ、機器類を破壊する。

「ぐぅっ！」

悲鳴を上げたのは、操縦システムに拘束されている肉体だけではない。

モニターも計器類も、彼の五感が感じることの出来る三次元上の存在全てが悲鳴を上げた。

「う、腕を上げたな……真理……」

そうだ……。

彼は気付いた。

もし、本当にあいつなら――

あいつには、クセがある。

どんなに技量が上がっても、個人のクセというものは、そう簡単に変わるものではない。

こういう時、アイツなら――

彼は、その記憶に賭けることにした。

否、賭けるしかなかった。

それが外れたら――

「……ままよっ！」

下に構えられた斬艦刀からのすくい上げるような一撃。

回避した後の上からの袈裟斬――

パターン通りだ。

次は――
斬艦刀が引かれた。
突き技だ。

――勝った！
――真理、お前はやっぱり！

斬艦刀の切っ先がヤクトエッジの騎体にめり込む直前、彼はブースターに命じて騎体を沈めさせた。
装甲を浅く傷つけながら、斬艦刀が、かつて騎体が存在していた空間を掠めていく。
右手を伸ばしきった白いメサイアの腹ががら空きとなって彼の視界いっぱいに開けた。
「そこだぁぁっっ！」
千載一遇のチャンス。
彼はサーベルをその腹めがけて突き出すべく、ヤクトエッジの肘に動くように命じた。

しかし、それは――
白いメサイアが、斬艦刀を放り出し、右手をあり得ないスピードで上に上げたのは、それとほとんど同じタイミングだった。

計器類が吹き飛び、黒煙がコクピットに飛び込んでくる。
モニターの右半分はブラックアウト。
騎体右側の自動消火装置が一斉に作動。
それが、独楽のようにスピンする騎体の中で彼が理解出来た精一杯のことだった。
慣性制御システムが故障したらしい。
急激に生じた遠心力によって内蔵と血液一方へと押しつけられた

彼の肉体の中で、真っ先にネを上げたのは脳だ。
血液の正常な流れを阻害された脳は、その身を守るため、本体の意識を止めた。
彼は、理解出来る世界から唐突に放り出され、暗闇の中へ沈んでいった。
耳のどこかで、誰かの声を聞いた気がしたが、それが本当かさえわからなかった。

「ちょっとおっ！」
頭上を突き抜けていったと思ったら、戻っていく味方に気付いた麗央がコクピットで叫んだ。
「何なのよ、行ったり来たり！ちょっとは手伝ってくれたって！」
金髪の愛らしいブロンドにくりっとした愛らしい顔立ちの麗央が怒鳴る顔は、麻紀でなくても冷静さを失うほど愛らしい。
通信モニター越しにその顔を見た麻紀は、モニターの映像が録画出来ていることに満足すると、なだめるように言った。
「とりあえず、この四騎は私達だけで相手するしかないでしょう？」
「ううっ……こ、こうしてやるぅ」
ピッ
ピピッ
何を考えたのか、通信装置に手を伸ばした後、麗央は帝国語で怒鳴った。
「――ちょっと！前の中華帝国軍騎、聞こえてるんでしょう！？」
「な、れ、麗央っ！？」
「後ろから妖魔が迫ってんのよ！？あんた達にとって、あれも作戦のウチなの！？魔族って、人類の敵でしょう！？それと手を組むなんて、何考えてんのよ！ズルいっ、最低ねっ！」

別に返答を求めたわけではない。
全チャンネル解放で、世界共通言語である帝国語で怒鳴ってあげることが、麗央にとっては最低限の敵に対する抗議の表れだったのだ。
「――我が輩は関知していない」
通信装置に、そんなくぐもった声が入った。
「えっ？」
麗央が思わず通信モニターに映る麻紀を見る。
麻紀はモニターの向こうで肩をすくめて首を左右に振った。
「だ……誰？」
「呼びかけておいて、誰とはなかろう」
間違いなく、男の声だ。
「中華帝国軍の精鋭たる我が輩の声を聞けただけで、ありがたさに身が震えたか？ブッフッフッ」
「な、何なのよ……その、ブッフッフッ。って」
麗央は何だか、寒気がした。
戦闘服のせいで見えないが、多分、鳥肌が立っているだろう。
「ブッフッフッ。我が輩の深遠な知性の表れだよ……ブフフッ」
「ううっ……通信、切っていい？た、耐えられない。何よこれ、新手の精神攻撃？」
「……声聞かれただけで精神攻撃って、麗央？あんた、相当に失礼なこと言ってるわよ？」
「じ、じゃあ、麻紀……あ、あんた、相手しなさいよ」
「い、いやよ……呼びかけたの、麗央でしょ？最後まで責任とんなさいよ」
「ううっ……」
「ふふっ……我が輩の美声の前にひるむのは当然だな。小娘よ」
「誰が小娘よ！」
麗央は怒鳴った。
「ほむらの鉄板まな板より圧倒的に――きゃぁっ！」

ドンッ！
後方から大出力のＭＬ（マジックレーザー）が一発、麗央騎のギリギリの所を掠めて行った。
「だ、誰よっ！新手の敵っ！？」
「……誰か何てわかるでしょう？あの子のことだから、事故だって言い張るつもりよ？後で謝っておきなさいよ、麗央？」
「ぶふふっ。面白い。そんなまな板娘がいるのか。お前がそうでないというなら、これは男として確かめてやらねばなるまい」
「絶対嫌っ！」
麗央の即答が聞こえなかったのか、
「そんなに照れなくて良いぞ。通信モニターに映像を映してやろう。我が輩の美形ぶりに酔いしれると良い」

ぎゃぁぁぁっっ！
麗央騎のコクピットとＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）に悲鳴が轟いた。
「肉のお化けぇっ！」
麗央が悲鳴を上げ、
「に、人間がここまで醜くなれるなんて……ううっ、せ、洗面器……」
麻紀が真っ青になって口元を抑え、
「ま、マスタぁ……私、意識が」
映像を見た麗央騎の精霊体、“ひなた”が半泣きになって麻紀にすがりついた。
「せ、精霊体にまでビビられるなんて……なんて言う、スゴいワザ持ってるじゃない。あなた」
恐慌状態から何とか回復しつつあるのか、麗央はひきつけでも起こしたように荒い呼吸を繰り返しながらそう言った。
「……」
「……な、何よ」
「……おい、少佐」

“肉のお化け”と呼ばれたのは、先程、陳大校と共にレストランにいた李少将だ。
「はっ」
「……我が輩は今、褒められたのか？」
「信じがたい程、肉を持っていると、そう聞こえましたが」
「そうだな。なら、我が輩は褒められたのだな？」
「はい」
「よし……なんだ。お前もデブが好きなら好きと言えばよいではないか。ほほう？なかなかに美しい少女ではないか。望むなら、今晩、我が輩がたっぷりと」
「殺すっ！」
殺気をみなぎらせ、そう叫んだのは麻紀だ。
「私の麗央に欲情していいのは、この世界で私だけよ！」
麗央騎のパワーゲージが一気にレッドゾーンに叩き込まれた。
「さぁ、麗央っ！？そこのデブ共をとっとと始末するっ！
この地上でデブに生存権はないっ！
私が決めた！
今、決めたっ！
デブに吸わせるなんて酸素の無駄よ！
酸素の代わりにピザでも食ってろ、このデブ共めっ！」
「どこにあるんだ！？」
李少将はとっさに叫んだ。
「酸素の代わりに食えるピザとは、どこにあるっ！？」
「死ね、このラードの塊めっ！」
「一々、言いたいことを言いおって！我々は単に太っているのではないっ！食欲について限界が見えないだけだっ！」
「閣下の仰る通りだっ！」
先程、李少将に同意した少佐の頷いた。
「我々は全てを喰ってきた！未来も希望も、そして悲しみさえもっ！この腹の中には、そんな世界全てがあるっ！つまり、この腹は世

界――宇宙なのだ！」
「食欲の塊がぁっ！」
「生きるために食べているんじゃないっ！」
彼等は再び武装を整えた。
「食べるために生きて、何が悪いっ！？」
「デブは存在自体が害悪だっ！」
「ちょっと麻紀っ！？」
たまらずに麗央が割って入った。
「落ち着いてっ！そんなこと言ったら、相手に失礼っていうか、泣かれちゃうでしょ！？」
「泣くものか！男が泣いて良いのは、親が死んだ時と食い物を落とした時だけだ！」
「……前言撤回」
「我々はデブであることに誇りを持っているだけだ！外見だって、この通り、ちょっとぽっちりゃりして愛らしいだろう！？くっちゃべるばかりで、食い物を粗末にする能なし、口先だけの小娘にはわかるまいっ！満腹以外は全て空腹。夢はお肉の家に住むことという、この誇り高きデブの理想が！」
「聞くだけで太るからやめてよねっ！」
麻紀がそっとウェストに手をやった。
「そう言えば麻紀……最近」
「だまれっ！とっとと、そいつら仕留めろっ！出なければ、今晩のお仕置きがスゴいことになるからねっ！？」
「ええっ！？」
「二度とやらないって誓ったけど、“アレ”とか“あんな”こと、フルコースで行くわよ！？」
「と、とりあえず――デブで男っていうだけでアレでコレでイヤなんだけど、恨まないでねっ！？化けて出ないでねっ！？」
「安心しろ。お前は今晩、夢の中で我が輩と満漢全席を食べながら愛を語らうことになるだろう」

「いやぁぁぁぁっっ！」

麗央はついにハルバードを構えると、李少将達めがけて突撃した。

「もう消えろっ！とっとと消えろっ！私の視界からっ、この世からぁぁっ！」

「照れおって♪」

「♪はつけるなぁっ！」

ハルバードの一撃が横に並んでいた4騎のうち、前に出た2騎によって止められた。

ハルバードの斧ではない。

柄の部分に何かが当たって、攻撃が無効化されたのだ。

「えっ？」

目をパチクリした途端――――

「きゃっ！？」

麗央は本能レベルで騎体をひねった。

敵騎が棒状の武装――――棍を握っていることに麗央が気付いたのは、その時だ。

おちやらけが過ぎた！

麗央は真顔で舌打ちすると、体勢を整えるべく間合いを取った。

「すごいパワーだ！」

ハルバードの一撃を止めた“山猫”を駆る黄大尉は顔をしかめた。

「衝撃だけで腕が半分イカれた！武装も中でヒビいってる！」

「メサイアのパワーか？」

さすがに通信を切った李少将が、感心した様子で肉に埋もれた顎をさすった。

「それとも、あの娘の技量か？」

「一撃に全部の重量を乗せてるんですよ！」

黄大尉は武装を青龍刀に切り替えながら言った。
「まともに喰らっていたら、頭が潰れていた！日本（リーベン）にも、こんなマネが出来る奴がいるなんて！」
「気を抜くな」
李少将は真顔で言った。
「お前達、黄兄弟を連れてきたのは、こういう連中がいるかもしれない。そう思ったからだぞ？」
「大丈夫ですよ」
黄大尉とは別、蒼大尉騎から舌なめずりするような声がした。
「俺達ゃ、全国武術大会で優勝した腕前……なめてもらっちゃ困ります」
「この騎のデータ収集には、もってこいか？」
「そういうことにしてくださいや……黄、俺が行く」
「よ、よし……でもいいか？俺が先を譲ったのは、ブルったからじゃねぇぞ！？」
「ああ……残ったら喰わせてやるよ」
棍を構えた蒼騎が一歩を踏み込んだ。
ハルバードのような長い武器は間合いが勝負だ。
懐に飛び込まれたら、棍と違って即座には対応できない。
たった一撃の勝負。
自分の勝負強さを信じる蒼大尉は、実は李少将達が口撃を飛ばす中、ずっと戦い方を考えていた。
特に、得意技である突撃系攻撃で来る自分に対して、敵がハルバードをどう使うか、脳裏で徹底的にシミュレーションしていたのだ。
そして――
ハルバードが横凪の一撃を見せた。
右下の構えから、左へと一閃するその攻撃は――
ドンピシャ、予想通りっ！

彼にとっては、そういうものだった。

思わず口元を緩めた彼は、ほんの少し、わざと緩めていた突撃スピードを最大に叩き込み、ハルバードの内側に飛び込んだ。

バキィッ！

ハルバードの柄を肘で裁き、ハルバードそのものを上に弾く。

もう、後は懐へ向けて棍の突きを繰り出せば、一撃で仕留められる！

「仕留めたぁぁっ！」

ブンッ！

絶対の勝利を確信しつつ、彼は鍛え抜かれた神速の棍を突き出した。

だが――――

「なっ？」

棍は白いメサイアに命中することなく、空を斬った。

しまった！

そう思った彼の目の前――――

スクリーン一杯に映し出されたのは、ハルバードを放り出し、左手でビームライフルを構えた“白雷（はくらい）”の姿だった。

「兄貴っ！」

土手っ腹を打ち抜かれてた蒼騎が派手に吹き飛ばされて地面に転がった。

「よくも兄貴をっ！」

激怒した黄大尉が青竜刀を構えて麗央騎に斬り込んだ。

ハルバードは地面に突き刺さっている。

あれをとるべく手を伸ばせば、それだけで青竜刀の一撃を回避することが出来ない。

武装変更するヒマはない。

右手はガラ空きだ。

腰の刀を引き抜いても、構えるヒマを与えなければ――
「兄貴の仇ぃっ！」
上段に構えた青竜刀を黄大尉は一気に振り下ろした。

ザンッ！

耳に入ったのは、まるで白菜でも切った様な、爽快な程の切断音。
次の瞬間――
騎体が真っ二つになる衝撃の中で、黄大尉は自分が敗北したことを知った。

「よしっ！」
2騎撃破を確認した麻紀がガッツポーズをとった。
「仕留めたよ！ハルバード構えて！」
「うんっ！」
逆手で引き抜き、すれ違い様に刀身で黄大尉騎の腹を叩き斬るという芸当を見せた麗央は、太刀を地面に突き刺すと、すぐにハルバードを構えた。
収刀しているヒマを選ばなかったのは、まだ2騎生きているという現実を、麗央がしっかりと選んだからだ。
「さて――」
「こちら柏騎っ！」
麗央の耳に美晴の声が響いたのは、そのタイミングだった。
「タイムアップよ！」
「えっ？」
「妖魔の大群が富山湾に侵攻！くそっ！こ、こいつらっ！」
「どうしたんですか！？」
「二方向から進行中！退路をふさがれた！」
「強攻突破は？」

「メサイアだけならいいんだけど、陸戦隊が撤収できない！」
「ですけど！」
「個人の勝敗なんてクソ喰らえ！それが美奈代さんの、中隊の理論よ！」
「――っ！」
「一度、ポイントゼロへ戻って合流してっ！戦況が変わるっ！」
「り、了解っ」
麗央はハルバードを小脇に挟んで、太刀を握ると、
「麻紀っ、下がるよっ！？煙幕（スモーク）と攪乱（ジャマー）っ！」
「――了解っ！」

反抗　第六話（後書き）

台風が近づいているそうです。みなさん、大丈夫ですか？最近、私は小康状態だったのですが……世の中、大変ですね。〇Д〇↑もう他人事みたく……）

また、コメントとかもらえたらうれしいです。冗談抜きで励みになっています。っーか、書くより生きるって意味でも……そんなこんなで、これからもよろしくお願いします。

反抗　第七話

「くそったれがぁっ！」

人類製のメサイアでは耐えられないほどの機動を自騎に強いたウォルツ少尉は、その代償としての、騎体が処理できなかったGに顔をしかめながらも、全てを気迫で耐えてのけた。

敵には、砲撃のタイミングといい、精度といい、申し分のない部隊がいる。

かつて自分が乗っていた英国軍のテンペストでここにいたら、初弾から撃破されていただろうことは、はっきり断言できる。

魔弾の射手。

そんな異名をとる名狙撃手がいると噂は聞いたことがある。

だが、あれは確か、ドイツ軍のはずだ。

エレナ何とかいう、若い女だったはずだ。

今、自分めがけて攻撃を撃ち込んでくる連中は、まさにそんな称号が相応しい――いや、世界の全てが否定しても、俺自信から贈呈してやりたい、そんな腕前だ。

それが三人も？

分が悪すぎる！

中佐が自分でも勝てるとは思えないと言っていたのは、あながちさっきの白い連中だけじゃないな。

ウォルツ少尉は、これ以上の狙撃を避けるために地面に強行着陸。建て売り民家を１０軒程吹き飛ばした後、推進装置をブースター単体からホバーメインに切り替えた。

円陣を組む白いメース達は、長い筒を持っている。

騎体からして、近衛騎士団（インペリアル・ガーズ）のメサイアで、その手にした筒も事前講座で見た覚えがある。

確か、近衛（ガーズ）ご自慢の火炎放射装置だ。
このまま突っ込めば炎の地獄の中へ直行してしまう。
斬り込むスピードだけで一気にぶつかるか？
「ウォルツ、後ろだっ！」
ユーコン少尉からの鋭い警告に、ウォルツは騎体を横っ飛びにスライドさせた。
ホバー機能が急激な変針に耐えられずに失速、ブースターが自動的にパワーをあげた。
「このっ！？」
後ろを振り向くと、さっきの白いメサイアが2騎、自分を追撃しているのに初めて気付いた。
「単独（シングル）ってのぁ」
後方の警戒に全く意識が働いていなかったことを思い知った彼は舌打ち一つ、
「不便なもんだ！」
バンッ！
ヤクトエッジのブースターが全開に開かれ、騎体が宙を舞った。
「金星前にして、とんだドジだぜ！」
「ウォルツっ！？」
「ユーコン、こいつらは俺が仕留めるっ！火炎放射装置に気をつけろっ！」
「り、了解っ！」

狙撃を回避するため、地面すれすれのホバー移動に切り替えた2騎のうち、1騎が立ち向かってきた。
「ここまで無茶をするからには――」
武装をビームライフルから斬艦刀に切り替えたほむらは、ぽつりと言った。
「狙いは一つ……」
「……陛下の首」

通信モニターの向こうで祷子が頷いた。
「これは……さすがに」
「捕獲して、ソースを聞き出した方が」
「私もそう思います――――襲ってくる方は、お任せしていい？」
「はい」
「柏より祷子さんへ！」
美晴から通信が入った。
「１騎、止めてくれます？」
「そっちで、何とかなりません？」
「今、下手に奥の手見せたくないんです」
美晴は言った。
「妖魔をコントロールしている奴が絶対いますよ。この状況は」
「わかりました。うまく逃げて下さい」
「お願いね？皇居前広場でさらし首なんて、勘弁よ？」
「ですね♪」

そんな二人をせかすかのように、
ガンッ！
空にそんな音が響いた。
両足を切断されたヤクトエッジが黒煙を上げて逃げ出す所だった。
「あら」
祷子はあきれ顔で言った。
「ほむちゃんったら……速いのねぇ」
その祷子の目の前で、前衛隊に襲いかかろうとしていた。
「あらあら……」

かつてフランスの銃士隊に所属していたピエール・ユーコンにとって、日本の近衛騎士団なんて、噂ばかりの存在にすぎなかった。
噂ばかりが先走るハリボテの集団。

そんな感じだ。
アフリカや南米での戦争以降、世界の中心としての地位を復活させ、我が世の春を謳歌する欧州の若い騎士達にとって、東洋の島国の小さな騎士団への理解なんてその程度だ。
あの戦争に参加した年上の騎士達が、インペリアル・ガーズと聞くだけで背筋を伸ばすこと自体が、彼等にしては滑稽ですらあった。

白いメサイア達は、手を伸ばせばすぐにたたきのめせるだろう距離に迫りつつある。
だというのに、阻止攻撃は何も届いてこない。
あの狙撃部隊は、やっぱり、ドイツ軍でもいたんだろう。
日本製のメサイアなんて、このタイミングで動かなくなる程度の代物でしかない！

ユーコンは、自分という敵を前にして棒立ちになったままのメサイア達を口の中で罵った。

この状況で、火炎放射装置の無駄に長いノズルを下にしたまま、ただ突っ立っているなんて、恥とすべきことだ。
戦いの意志さえないのか？
騎士のくせに！

ユーコンはそんな怒りに似た感情の赴くまま、ヤクトエッジで斬り込んだ。
円陣を組む陣形はこういう時にはわかる。
だが、この状況でこちらに背を向けたメサイアまでいるとは何事だ！？
――まぁ、いい！
問題は、その円陣の中に立つ“金星”――指揮官騎だ！
「どけぇっ！」

ホバーモードから、ブースターを開いてジャンプ。前衛に立つ、ユーコンにとって名も知らない、知る価値もないメサイア達を飛び越え、金星の首を刈り取れば良い。
指揮官を失ったことで、近衛なんていう、ハリボテ騎士団は恐れを成して逃げ出すに違いない。
金星が誰だろうと、俺はそれでいいんだ！
ブースターが開き、騎体がジャンプした――――その途端、
背後から生じた灼熱の塊が、ユーコンを消滅させた。

ヤクトエッジに突き刺さったのは、その背中から突き刺さった斬艦刀。
ジャンプの途中で力を失ったヤクトエッジは、“白龍”達の前に墜落。
そのまま動かなくなった。

「ナイスショット♪」
ほとんど目と鼻の先に墜落したヤクトエッジを前に、美晴騎が祷子騎に敬礼した。
「ただ突っ立ってるだけってのは、正直、恐かったですけど――――いけない」
美晴は背後を振り返った。
「陛下、ありがとうございました！」
「いやいや」
最後列。つまり、美晴達に背を向けるポジションに立つ“白龍”のコクピットで、帝が楽しげに笑った。
「成る程？中心にいると、逆に目立ちすぎるとは……考えたね」
「恐縮です」
美晴が恐れたのは、円陣で防御することで、逆にその中心部に重

要人物――この場合、指揮官騎が存在することを敵に知られることだ。

だからこそ、美晴は、普通なら絶対に許されないバクチに出た。

「妖魔が来ます。ポジション変わりますね」

「……了解。ありがとう」

飛び道具を使われた場合、その一撃を自らが被弾することで帝が逃げる、もしくは部隊が敵を迎撃する時間的余裕を確保する。

敵と切り結んだら、抱きついて自爆してでも動きを止める。

そういう役目だ。

無論、その場合――死ぬのは覚悟の上となる。

美晴は、内心で自分がこんなに命を軽くする決断をあっさりと下したことに驚いていた。

しかし、その決断が吉と出た今、帝からの労いの言葉と共に、成功の喜びが、全身を陶酔に似た興奮が包む。

それが本当に心地よい。

――いけない。

美晴は首を横に振った。

ここでぼんやりしていたら、全部が帳消しだ。

「部隊は円陣ポジションの再確認。火炎放射は4回まで。ノズル拡散は最大で設定……小清水少尉、狙撃部隊の状況は？」

「こちら小清水、どっちをメインで叩きますか？それとも部隊を移動します？」

涼は、戦況モニターを前に美晴に訊ねた。

妖魔達は湾にそって移動する部隊と、海上から湾内へ向けて移動する部隊に別れている。

移動タイミングから想定すれば、この二つの部隊が合流するポイ

ントにいるのが前衛隊だ。ポジションが絶妙に良いのか、それとも、最悪に悪いのか、涼は判断しかねていた。
「現状のまま迎撃を前提とします」
美晴は言った。
「ただし――――例外はあります」
「例外？」
「……敵がＭＬ（マジックレーザー）の類を持っていた場合」
「あっ」
「柏より美奈代さん？」

「聞こえている」
美奈代は、騎体の高度を落とし、ゆっくりと美晴達と合流を目指し後退をかけていた。
「どうします？」
「陸戦隊の状況は？」
「中華帝国軍部隊の司令部を家捜ししています。現状、捕虜をＴＡ（タクティカル・エ）Ｃ（ア・カーゴ）へ移送中――――時間、かかります」
「どの位？」
「向こうは１時間と言ってきましたので５分以上は命の保証はしないと言っておきました」
「返答は？」
「犯すぞこのアマっ！」
「却下」
「ですよね」
美晴は頷いた。
「どう足掻いても３０分は必要です」
「……３０分」
「……」
「１００近い妖魔を前に３０分の時間稼ぎ……か」

「ビーム系の武装がなければ、円陣と広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の防御である程度は食い止めますが」
「だめだ」
美奈代は言った。
「多分、そっちの力はあると見たほうがいい」
「何故？」
「何となくといってやりたいが」
美奈代は、短く舌打ちした後、騎体についた黒い痕跡を見て顔をしかめた。
「先頭をからかって撃たれた。メサイア搭載型のＭＬ程度（マジックレーザー）の破壊力はあるぞ」
「なっ……」
「……やってみるか」
美奈代はそう呟くと、
「小清水」
「は、はいっ！？」
何故か、涼を呼んだ。
「狙撃隊の力を借りたい」

新潟方面から富山湾に入る辺りの上空に静止するのは2騎の“コルウス”。
「か、回収したよ！？」
そこに接近するのは、月菜騎。
騎体は大切そうにヤクトエッジの残骸を抱えていた。
「急げっ！」
大地はせかした。
「兄貴が死んじまうっ！」
「うんっ！」

月菜騎がブースターを吹かせて城へ戻っていく。
――畜生っ！
大地は歯を食いしばって悔しさに耐えた。
――俺だって、ちゃんとしたメースに乗っていたら、兄貴の仇を討ってやるってのに！
大地達が乗っているのは、武装されていない回収騎（ベルゲ）に過ぎない。
戦場にいるのに戦えない！
それが大地には悔しくてならない。
しかも……。
「ど、どうだ？」
「うん。アイバシュラ達は二手に分かれて攻撃させている。敵が一番集まっている所に二方向から襲いかかるようにコントロールしているけど……」
“コルウス”のコクピットで、アイバシュラのコントロールシステムから手を放した裕樹は訊ねた。
「大地、司令部は？」
「兄貴がやられたことは伝えた」
「いや……あの」
何故か裕樹は驚いた顔で、口をもごもごさせた。
「――何だよ」
「他の人達も全滅に近いんだけど……ウォルツさんも少し前に撤退しているし。本当に、何の命令も入ってない？僕、コントロールが忙しくて司令部と通信している余裕が」
「ない」
大地は言い切った。
「何の命令もない」
「そ、そう……？」
「そうだ！」
大地は力説した。
「俺達は、ここで兄貴達の仇を討てば良いんだ！」

「コントロールしているのは、あれですか？」
「多分ね」
空に上がった狙撃隊を前に、美奈代は頷いた。
「ここまで妖魔がタイミングよく動いているってことは、絶対にコントロールしている奴がいる。それがアレだと判断した」
「2騎いますけど」
「1騎から強い電波を確認しています」
涼の問いかけに、牧野中尉が答えた。
「コントロールしている騎は、それだと思います」
「……了解」
涼は頷いた。
「念のため、もう1騎も仕留めます。長距離射撃だから、寧々ちゃんがメイン」
「了解」
寧々は頷くとHMC（ハイ・メガ・カノン）の射撃モードを切り替えた。
「芳（かおる）、もう一騎を仕留めて」
「うん……涼は？」
「どっちかの撃ち漏らしを狙えるようにしてはおくけど」
小さく笑った。
「余計な一発になるわ」
「ところで」
モードを調整し、ズームしたスコープの中にメースを点として捉えた芳（かおる）が美奈代に訊ねた。
「コントロールを喪失したら、妖魔達はどうなるんです？」
「さぁ？」
「さぁ？って……」
「コントロール失って、同士討ちにでもなってくれれば嬉しいなぁって」

「そんないい加減な」
「他に方法はない。射撃タイミングは一任する。好きにやってくれ」
美奈代は言った。
「とにかく、混乱するだけでも時間が稼げる。陸戦隊を撤収させるだけの時間を確保するためには、何でもする必要があるの――わかって」
「……了解」
芳（かおる）は頷いた。
「南無八幡大菩薩、美奈代大明神様の仰る通り……と」
「何それ、新手のイヤミ？」
「いえ？」
スコープは万全。
――やれる。
いつものクセで、上唇を舌なめずりした後、芳（かおる）は答えた。
「私は私で、大尉の指揮は信じているんです。撃てますよ？」
「……頼む」
「了解、寧々ちゃんが撃ったら、次に撃ちます」
「……」
寧々は無言でトリガーを引いた。

反抗　第八話

……ち

誰かの声がする。
すごく、すごく遠くから。

だいち

あれ？
近づいたのかな？
真っ暗な世界。

だいち！

だいちって？
……ああ、俺の名前だっけ。

大地っ！

うるさいなぁ。
……なんだよ。

「大地っ！」
体から激しく揺すられ、大地は呻きながらうっすらと目を開いた。
全身に鋭い痛みが走り、思わず呻いた。
「……あ？」
視界を捉えると、そこには、自分をのぞき込んでいる月菜の顔があった。

瞳一杯に涙をためたその顔が、どうしてこんな間近にあるんだ？
「……俺？」
「よかったぁ！」
その首に縋り付いて大声で泣き出した月菜をよそに、大地は自分の身に何が起きたか、さっぱりわからなかった。
「――――やられたんだよ」
心配そうに顔を見せたのは、裕樹だった。
額に血の滲んだ包帯を巻いている。
「僕達、敵の攻撃で」
「騎体は」
「――――壊れたっていうか、壊されたよ。大地はコクピットに挟まれたから、胸のパーツをほとんど強制排除したから……」
周りにようやく神経が回るようになった。
照明から、場所がハンガーだとわかった。
自分は今、ハンガーの床に寝かされているんだ。
「そのまま墜落した僕達を傭兵隊の人達が回収してくれた」
首を動かすと、ちらっとだけ、少し離れた所に、長い金髪の女性が見えた。
ああ、あの人か。
大地はぼんやりした意識の中で、長い名前の人だったな。と思った。
「そう、か」
どけ。
移すぞ？
誰かが、自分の肩と足を掴んだ。
体が浮くと、横に移動する。
担架の上に寝かされたのをそれで大地は知った。
「医務室へ移すぞ。裕樹、お前も来い、簡易検査を受けてもらう」
「はいっ」
体が持ち上げられる感覚の後、大地は目を閉じた。

「金星は逃がした……か」
ダユーは目をつむったまま、報告を受けた。
「申し訳ありません」
真菜が素直に謝罪した。
「瀬音達が、傭兵隊との合流を待てば、状況は全く違っていたものと」
「瀬音達も傭兵でしょう？」
「……そうでしたね」
「人間風情が功を焦った挙げ句のこと……そういうことかしら？」
「万死に値する失態です」
「それを指揮するのがあなたの仕事よ？死ぬなら上からになさい」
「……っ」
「その後、金星達は？」
「統制を失ったアイバシュラ達を尻目に」
「のうのうと仕事終わらせた後、尻尾を巻いて逃げてくれた」
「……」
「アイバシュラの損害は？」
「共食いによる犠牲が２３」
「一体、いくらすると思ってる？」
「弁明はしません」
「覚悟がいいと褒めてあげたいところだけど」
ダユーは冷たい目で真菜を見た。
「覚悟の乱発は気に入らないわ」
「……」
「人間共による傭兵隊には、もっとちゃんとした功績をあげてもらわないとね――それで？」
ダユーは、テーブルに置かれた皿からチョコレートをつまみあげた。

「太平洋側での人類の攻勢は？」
「……はっ」

福井を離れ、日本海に浮かぶ“鈴谷（すずや）”に帰還した美奈代達の耳に飛び込んできたのは、長野県境における大戦果といっていい戦闘結果だった。
後退する一方の人類が魔族軍を押し返したことは、これまでほとんどない。
それだけに、数十キロに渡って敵を押し戻した今度の戦果は、美奈代達を興奮させて十分だった。
もし、美奈代達が一般市民ならそれでもいいだろう。
しかし、戦果に浮かれる美奈代達を待ち構えていたのは、現場の残酷さだった。
日本海から兵庫県経由で大阪湾へ入った辺りから、“鈴谷（すずや）”には損傷騎や負傷兵の輸送への協力要請がひっきりなしに入って来た。

「損傷騎が着艦する！緊急ネット用意っ！衛生班、消火班、準備はどうかっ！」
「またですか！？」
「小競り合いは続いているんだ！損傷騎を受け入れるぞ！」
鈴谷のハンガーデッキ。
コクピットから出た美奈代の耳に、坂城整備班長の怒鳴り声が響き渡る。
「損傷騎が着艦する！整備班は待機！」
「ダメージ・レベルはDが3騎だ！かなりやられているから注意しろっ！」
「DC（デッキ・コントロール）より各員傾注！損傷騎2騎、騎体より火災！消火班は消火準備かかれっ！」

「衛生兵へ！負傷者、バイタル低下している！」
「タンカはどうした！」
衛生兵が呼ばれる以上、パイロットかMC（メサイアコントローラー）のいずれかに負傷者がいることは間違いない。
――無事だといいが。
美奈代は内心でそう祈りながら、無重力下のハンガーデッキの宙を舞うと、ハンガーデッキ内に警報が鳴り響きわたる。
美奈代の目の前で、ベルゲ騎に支えられながら、右腕のない幻龍改がハンガーデッキに搬入されようとしていた。

「陛下は？」
「信濃へ移られた」
戦闘待機が命じられ、美奈代達はハンガーから出られない。
出撃が命じられたらすぐに発艦する。
その待機時間は貴重な休憩時間。
配給された食事をハンガーの隅で食べながら美奈代はさつきの問いかけに答えた。
戦闘の緊張感から解放された反動か、せっかくの食事なのに、まるで味がわからない。
「一体、私達のやったことって、意味があったんでしょうか」
「戦闘報告では最高の金星は柏としておく」
美奈代は言った。
「お前のおかげで陛下も無事だった。陛下も異はないだろう」
「……うれしくないんです」
美晴はぽつりと言った。
「なんだか、たった数騎、しかも、私の部隊は戦果ゼロ。愛知や長野での大戦果を考えると」
「贅沢ですよ」
麗央は言った。

「私、初戦果の時は歴史の教科書に自分の名前が載るってくらい浮かれたもんです」
「……まぁね」
「中尉もそうでした？」
「必死になってジタバタして、気がついたら吐いていたのは確かね」
「……ですか」
「中隊戦果としては、かなりでしょう？」
「小隊指揮官としては……ねぇ」
「戦果は中隊単位でこそ価値がある」
「そうですね」
「とにかく、柏のおかげで、中華帝国軍が日本に駐留したという事実だけは掴んだぞ？」
美奈代は、ハンガーの片隅に放り出された“山猫”の残骸をちらりと見た。
「中華帝国軍の新型――またとない物証だ」
「……ええ」
「後は確保した書類と捕虜の証言が頼りだな」
「やったことに意味はあったと」
「そうだ」
「ですよね」
美晴は小さく、しかし力強く頷いた。
「魔族軍も、福井への侵攻の足を弱めているともいう」
「それにしても」
麻紀がぽつりと言った。
「長野の戦線が大戦果だけど、福井に相当な部隊が動いていたとなれば、もしかしたら、長野ってオトリだったんじゃないですか？」
「あり得るわね」
涼が頷いた。
「えっ？」
麻紀としては冗談だったのに……。

「福井を攻めるために長野から主力部隊を移動させた。その後に攻め込んだから勝てたのかも」
「でも、連中だって、長野県と愛知県境の重要性はわかっていたはずよ？私達は、愛知以西の工業地帯を陥落されたら終わりだって、本気で思っている」
「……それがね？向こうさんと私達の考え方の違いってものかしら。でもさ」
さつきはスプーンを口にくわえながら訊ねた。
「何で、今更、魔族軍は福井に来るのさ」
「だから……その……近畿方面への橋頭堡としてじゃないのか？山間部が多くて大軍の通行に差し障りのある長野県経由のルートを避ける意味もあるだろうし、何より、愛知方面を攻めるにしても、そっちのルートの方が兵站の面でも」

「……港だよ」
突然、上から振ってきた声に皆が驚いた。
美夜が全員を見下ろしながら立っていたのだ。
「艦長っ！」
バッ！
全員が慌てて立ち上がり、敬礼する。
「いい。楽にしろ」
美夜は答礼した後、全員を座らせた。
「たまにはねぎらってやろうと思っていたのだが、丁度、いい具合に面白い話題が出ていたのでな」
「それで」
さつきは訊ねた。
「魔族の狙いが港だとおっしゃいますが？」
「ああ」
美夜は頷いた。
「連中の目的は日本海側の港湾施設の占領と破壊だ」

「意味が……わかりません」
美晴が首を傾げながらそう答えた。
「地図を思い浮かべろ。中尉」
「地図？」
そう、諭すように言われ、美晴は日本地図を思い浮かべた。
「……まだわからないか？」
「……すみません」
「若狭湾の隣は舞鶴湾だぞ？」
「あっ！」
美晴は目をむいた。
「港って、舞鶴のことですか！？」
「そうだ。日本海側の帝国海軍、そして人類の反攻拠点。そこだ。敵の狙いは若狭湾ではなく、舞鶴……そこを今になって叩く理由はわかるか？」
「海軍がいるから？」
「そうだ。航空艦隊を始め、海軍は日本海側に戦力を集中している。本来は、中華帝国軍向けなのだが、それが魔族軍を刺激しているんだ」
「つまり、人類側の戦力が集中している。フネだから、港ごと叩いてしまえって？」
「そういうことだ」
美夜は満足そうに頷いた。
「大陸からの物資輸送ルートを確保する上でも、舞鶴周辺の制海権は確保する必要がある。
そして、同時に、我々にとっても舞鶴を確保する意味は高い。
考えてみろ？
海上からの反攻上――――たとえば、新潟への逆上陸作戦とかがある場合」
「新潟に！？」
驚いた顔で立ち上がったのはさつきだ。

「い、いつですか!?」
さつきの手が美夜の肩を掴み、はげしく揺すった。
「いつ!?いつ、新潟へ攻め込むんですかっ!?」
「それは私が決めることではない」
「早瀬っ!」
美奈代は慌ててさつきの手を掴むと美夜から引きはがした。
「……あくまで想定。それだけの話だ」
美夜は制服を正すと、そうとだけ答えた。
「……」
美奈代に取り押さえられたさつきは、唇をかみしめながら俯いた。
その時、美奈代の手は、さつきの体が震えているのを確かに感じた。
「……わかりました。あくまで、もしも。の話なんですね?」
「――確か、貴様」
美夜は訊ねた。
「新潟に家族がいたな」
「――全員、殺されました」
「――そうか」
美夜は頷くと言った。
「家族の恨みを晴らすにしても、新潟を解放するにしても、それは今すぐの話ではない。現実の話にするためにも、遠い話だ。だが、遠い道のりでも歩き出さねば話にならん。歩き続けること。それは勝利だ。今、この場を勝つ。その積み重ねこそが大切だ――全てを一つ一つ積み上げていくしかない」
「……」
「わかるな?」
「はい」
「よろしい」
美夜は力強く頷くと、きびすを返した。
「もう少し、ゆっくりと話たい所だが、呼び出しが来た」

「はい。作戦が終わったら……ゆっくり」
さつきの言葉に美夜は頷いた。
「うむ。生きていたら食堂で」
「はい」
「ああ、そうそう。早瀬中尉」
「は？」
「地上に展開中の部隊に、新潟出身の志願兵で構成された部隊があると聞いた」
「新潟の？」
「新潟からの避難民の中で軍へ志願した者達で編成されている。後方任務が主体だと言うが……騎士動員法のこともある。陸軍と厚生省の言うことは信じられん」
「……」
「連中を守るためにも、気合いを入れろ」
「はいっ！」
カッ！
さつきは踵を鳴らして敬礼した。

愛知県上空「信濃」艦内

「状況は？」
その帝の問いかけに、参謀長が答えた。
「伊那方面、最前線では小競り合いが続いています。福井方面は、魔族軍先陣が敦賀湾にかかる所です」
その手に持つ指示棒が戦況モニター上の魔族軍を突く。
「対する人類側は、ＥＵ軍が展開中」
指示棒がツイッと動き、ＥＵ軍陣地を突いた。
「規模は？」

「魔族軍約1万。人類側、EU軍は機甲1個師団約1万5千」
「……魔族軍にしては規模が少ないな」
「魔族軍の動きが掴めません」
参謀長は肩をすくめた。
「現在、最上が偵察活動を継続していますが、未だ発見には至らず」
「第三眼（サードアイ）は？」
「動きを掴めていません――おそらくは」
参謀長が指示棒で新たな地点を突いた。
「旧福井市内から敦賀、賤ヶ岳方面へと通じる北陸自動車道を利用するものと思われます」
「そちらへの備えは？」
「木の芽峠……北陸トンネルはすでに爆破済みですが、EU軍戦車1個大隊が展開。不測の事態には備えています」
「……ふむ」
「問題は」
指示棒をしまいながら、参謀長は帝に告げた。
「どうやって敵がカモフラージュしているか、です」
「うん？」
「つまり」
参謀長は、言葉を選びながら言った。
「敵が北陸自動車道経由で来るとして……その仮定の上ですが」
「……」
「敵は数万単位で移動しているはず。それを発見出来ないとなれば、今後の戦いに多大な影響を及ぼしかねません」
「……いずれにせよ、魔族軍の出方を見たい。そういいたいんだね？」
「はい」
参謀長は、きっぱりと頷いた。
「この後の魔族側の出方は、後々、我々にとって重要な教訓を残す結果になるでしょう」

帝は、参謀長の言葉を簡単に受け入れるわけにはいかなかった。
出方を見守るだけでは済まない。
ＥＵ軍を見殺しにして出方を探れ。
参謀長はそう言っているのだ。
「……わが軍の展開は？」
「間に合いません」
参謀長は首を横に振った。
「現状の陸軍に最早余力なし。そして」
「メサイアだけでは戦争は出来ない……か」
「……陛下」
「……」
しばしの沈黙の後、帝は言った。
「この戦い、我々が危惧するほどのことなく、ひたすら相手指揮官が無能であることを願うばかりだが……我々はＥＵ軍には多大な借りを作ることになる」
それが帝の決断だ。
「諸君。忘れるな？この借りは必ず利子を付けて返すべき代物だと」
「はっ！」

大日本帝国領内越前岬付近
魔族軍第二軍本陣

指揮官の無能。
残念ながら、帝のその希望は聞き届けられることはなかった。
東尋坊を越え、越前岬に達していたのは、魔族第二軍、指揮官はあのズルドだったのだ。
「ふん」

海岸線のあらゆる人間の建造物を踏み散らかしながら進む大型妖魔「サイ」達を一瞥したズルドは、参謀からの報告を鼻で笑った。
「部隊壊滅だと？」
「はっ」
参謀のカーラは畏まりながら頷いた。
「魔界から合流されたアークイン大佐麾下の部隊ですが……」
「バカが！」
ズルドは視線を海へと向けた。
潮風がズルドの傷だらけの頬を撫でる。
「大佐ともあろう者が、なんたるザマだ！戦場に立てば、部下の規範となるべき戦果をあげるのが務めではないか！」
「はぁ……」
カーラは書類をめくった。
「部隊編成を見る限り、ほとんどの将兵が実戦経験皆無です。第一軍による再訓練と編成のし直しを受けることが拒否された挙げ句――その、魔界もここ数百年、戦といっても、辺境における小規模反乱程度と……」
「安逸の結果がこの醜態か」
ズルドは不機嫌さを隠さずにそう答えた。

伊那方面に展開した部隊は、ヴォルトモード軍に呼応する形で魔界から集結した義勇軍の一部。
その中でも自前のメースまで用意してきた、いわば道楽半分な連中だ。
そんな連中がメースに乗っていたとしてもどれほどのこともないことは、ズルドは最初から分かり切っていた。
だからこそ、ズルドは何の支援も出さなかったし、彼らからも何の要請もなかったのだ。
「考えてもわかることだ。人類側とて黙って殺されるいわれはないだろうが」

「戦闘開始から約1時間で勝敗は決しました。人類側の戦闘能力は圧倒的です」
「人類側が侮れない存在だと、最初からわかっていたはずだ！」
ズルドに怒鳴られ、カーラは飛び上がった。
「我々の出した損害は何だったと思っている！奴らが勝手に死んだとでも言うつもりか！？」
「い、いえっ！」
「近頃の魔界の連中はたるんどる！」
ガンッ！
ズルドは近くにあった一抱えもある岩を殴りつけると、岩は粉々に砕けた。
「俺が戦争というものを教えてやるわ！」

反抗　第九話

大日本帝国領内敦賀湾付近
ＥＵ軍陣地

「敵は二手に分かれています。主力は８号線経由、別働隊はタケフ方面からホクリク・ハイウェイを使い侵攻中」
「そうか」
砲兵隊を率いるクリストファー中佐は、部下の報告に頷いた。
敦賀半島の敦賀湾に面した道路には砲兵隊が砲列をつくり、敦賀湾の対岸へ砲撃する態勢を整えている。
狙いは対岸を横列で移動する敵。
海岸線の狭い土地を移動する以上、どうしても横列になるのは避けられない。
海岸の幅は約５キロ。
戦車砲や歩兵携帯の兵器では届かない距離だ。
だからこそ、対岸から敵を叩くこの布陣は絶対的な効果が望める。
当然、敵は対岸に入り込んだ時点で砲兵隊の集中砲火による大損害を回避出来ない。
ＥＵ軍の戦闘データからすれば、魔族軍の長弓兵達の有効射程は約４キロ程度。つまり、砲兵達は反撃を受けることなく戦えることになる。
そして、砲撃の雨をくぐり抜けても、海岸線にそって無数に埋設された地雷原と、その後ろに展開する戦車部隊、機関銃部隊の洗礼は避けることは出来ない。
それを知るクリストファー中佐の表情には、どこか余裕さえ感じられた。
「この辺一帯の“死者の樹”の駆除がようやく終わったばかりだと

いうのになぁ」
砲兵隊の展開する敦賀半島沿いの道路付近。ドライブインの高台に立つクリストファー中佐が双眼鏡から目を離した。
“死者の樹”の弱点は意外なものだった。
竹だ。
複雑にのびる竹の根が“死者の樹”の根を枯らし、また、竹酸を幹に注入するだけで“死者の樹”は数日以内に枯死することが判明。偶然とはいえ、それを発見した某農家の老人は一躍英雄扱いされた。
無論、クリストファー中佐にとって、そんな老農夫なんてどうでもいい。問題は、敵に勝つことだけだ。
ズドドドドッ！
突如、地面が揺れた。
「地震か！？」
「違いますっ！」
改造というか、料金装置を壊した観光用双眼鏡をのぞき込んでいた見張りの兵士が怒鳴った。
「魔族軍、海岸線に出現っ！凄い勢いで突撃してきますっ！」
「おいでなすったか」
クリストファー中佐は部下に怒鳴った。
「砲兵隊、歓迎パーティだ！」
「中佐っ！」
別な兵士が怒鳴る。
「何か！」
「敵の後方に動きっ！」
「動き！？何だ！」
クリストファー中佐が再び双眼鏡を構えた。

「光が！」
「光？」
兵士の報告を確認しようと、クリストファー中佐が双眼鏡を魔族軍の後方へと向ける。
例えようもない強い輝き。まるで鏡で光を反射しているような輝きだ。
「夕日か？」
いや。違う。まだ夕焼けに早い。それに、赤くない。真っ白い光だ。
「な、何だ？」
とにかく！
クリストファー中佐は、部下に命じようとした。
前進する敵を叩かなければ意味がない。
「砲兵隊、各個に照準――」
撃てっ！
クリストファー中佐の脳は、そう命じた。
だが、その命令は、喉の中で、クリストファー中佐ごと焼き尽くされた。

大日本帝国領内敦賀湾付近
魔族第二軍本陣

ズズズズズ――ズンッ！

観光道路が、敵ごと根こそぎ破壊される光景を見たズルドの口元がゆるんだ。
人類側が対岸からの攻撃を試みるのは当然、予想出来た。

だからこそ、ズルドはあえて少数の（人類側にとっては大部隊だが）サイをオトリとして突撃させ、人類側の目をそちらへ向けると、後方に集結させたサイ達の一斉射撃を敵めがけて放った。
効果は絶大。当然だ。サイの放つ一撃は、メースさえも消滅させるほどの大出力を誇る代物なのだ。
爆煙が風で流された後には、かつての道路にそって無惨に抉られた地肌だけが姿を現す。
「他愛もないわ――――フンッ」
ズルドは面白くないという顔だ。
人類側の攻撃のタイミングが遅すぎるわ、布陣位置はまずいわで、戦っているだけで腹が立ってくるのだ。
「マトモな指揮官がおらんのか？これではあまりに」
兵が気の毒だ。
その一言を、ズルドは口の中でかみつぶした。
「閣下」カーラが踵を鳴らして敬礼した。
「ん？」
「物見より通報。京都方面から飛行物体多数飛来中」
「……成る程？」
ズルドはニヤリと笑うと海を見た。
「この程度の敵を叩き潰しても、フィーリアへの土産にもならんと思っていたが」
クックックッ……ハーッハッハッハァ！！
ズルドは、周囲の喧噪を圧倒するほどの大声で笑った。
「敵もさるものよ！カーラ！」
「はっ！」
「全軍突撃！アースキュル隊にもかからせろ！――――若狭湾を再び我らが手に陥落させる！」
「はい！」

大日本帝国領内若狭湾
連合艦隊旗艦「大和」昼戦艦橋

「再び、日本海か」
小沢司令官は感慨深げに呟いた。
「あの戦いでの傷が、こうも早く癒されるとはな……」
大和は、柏崎原発事件の際に中破判定を受けた後、佐世保に回されて最低限度の修復作業を受け、何とかこうして戦線に戻っていた。
ただし、主砲戦のみで戦闘が可能という状況は、船乗りとして決して満足のいく状況ではない。
――仕方ない。
小沢は自分に言い聞かせた。
のうのうと修理を受けていたら、戦争が終わる。ドックの中で無惨な最後を迎えるより、海の上で戦って最後を向けた方が、こいつらだって本望だろう。

ズズズンッ！
突如、爆発音が響き渡った。
「何だ？」
敦賀半島の向こう側から爆煙が立ち上った。
「EU軍砲兵隊陣地のあたりですっ！」
双眼鏡を構えた参謀が怒鳴る。
「あの爆発では……」
艦橋の誰がうめくように口にした言葉を、誰も否定出来ない。
「……参謀長」
「はっ！」
「観測所は生きているか？」
「お待ちください。通信！」
通信兵の言葉を聞いた参謀長の顔が明るくなった。

「生きてますっ！通信可能！」
ホウッ。
艦橋に安堵のため息が響き渡った。
「観測所を呼び出して、砲撃ポイントの指示を受けろ」
「はいっ！」

大日本帝国領内福井県西方が岳
ＥＵ軍砲兵観測所

敦賀半島に存在する西方が岳に設置された砲兵観測所には、魔族軍の攻撃から逃れることが出来た観測小隊の３０名が岩肌に隠れるようにして敵の動きを監視していた。
双眼鏡と西方が岳から丹生の通信中継所へのばされた数本の通信ケーブル、そして通信兵が持つ無線通信装置こそが彼らの兵器だ。
だが、彼らが得られたデータを引き渡すべき相手は、今や国立戦没者霊園へと旅立ってしまっている。
「敵が突撃するっ！」
観測小隊小隊長は、双眼鏡を構えながら怒鳴るなり、地面を殴った。
「くそっ！肝心の砲が全滅じゃ！」
「小隊長！」
観測小隊に配属された若い衛生兵が近づくなり、彼に言った。
「まだ生き残っている兵がいるかもしれませんっ！自分を救護に行かせてくださいっ！」
「ダメだ！」
小隊長は怒鳴った。
「お前がノコノコ下に降りる所を見つかってみろ！ここに俺達がいることがバレる！」
「しかしっ！」

「俺はなぁ！お前一人の正義感と引き替えに、部下を全滅させるわけにはいかんのだ！」
「小隊長！」通信兵が叫んだ。
「ツルガに展開中の日本海軍からです！」
「何と言っている！？」
「わかりませんっ！」
「訳せっ！」
「自分は帝国語が喋れませんっ！まして日本語なんて！」
「ええいっ！誰か帝国語か日本語が喋れるものはおらんのか！？」
「……じ、自分は」
そう言って手を挙げたのは、先程の衛生兵だ。
「帝国語を喋れます」
「よしっ！」
小隊長はその太い腕で衛生兵の華奢な肩を掴んだ。
「ますますお前を手放すわけにはいかなくなった！」

大日本帝国領内若狭湾
連合艦隊旗艦「大和」昼戦艦橋

「EU軍より砲撃データ来ますっ！」
「よしっ！こちらの砲撃観測を頼め。それから」
有賀は空を見た。
「突撃する烈風隊にも情報を」
「司令！」
砲術長からの報告を受けた艦長が言った。
「全艦主砲連動完了。弾種榴弾。いつでも撃てますっ！」
「よろしい――撃ちたまえ」
「はっ！」

大日本帝国領内若狭湾上空
大日本帝国海軍第３０２飛行隊

ズダァァンッ！

凄まじいほどの震動が飛行中の烈風を揺るがした。
編隊の斜め下の海上に展開した戦艦達の主砲から火柱が上がっている。
艦砲射撃が開始された証拠だ。
３０２飛行隊長の井上少尉は、その力強い光景を嬉しそうに見た後、部下達に命じた。
「小隊各機、これより突撃する。艦砲射撃に巻き込まれるな？」
「了解！」
「全機全速！――――続けっ！」
プロペラの音が甲高いものに変わり、速度が増していく。
目的は胴体に抱いた５００キロサーモリック爆弾を敵の上空に落とすこと。
爆弾の性格からして、精密な爆撃は必要ない。
否。もし、そんな精密爆撃が必要なら、自分達のような学徒兵の操る飛行機の出る幕はない。

皮肉なものだ。

思い浮かんだ学徒兵という言葉に、つい、口元が緩む。
動員されてからわずか数ヶ月で戦場だ。
いまだ行進すら出来ない俺達が、戦闘機に乗って敵の上空を突っ切ろうとしている。

飛行時間はあれだけ連日飛び続けて１００時間足らず。
相手が戦闘機なら全滅しているだろう。
全滅？
否！
今、それは思い浮かべてはいけない言葉だ。
自分が考えていいのは、いかに敵に爆弾を投下して、部下を無事に基地に戻すかだ。

敦賀半島を越えた先。海を挟んだ対岸は戦艦の艦砲射撃を受け、大混乱に陥っていた。

――――やれる！

井上は操縦桿を握りしめると、機体を軽くバンクさせた。
混乱した敵上空まであとわずか。
敵からも盛大に攻撃が襲いかかってくる。
機体を幾本ものオレンジ色のキャンディーのような攻撃がかすっていく……。
バンッ！
「くそっ！」
左翼に感じた衝撃に井上は舌打ちした。左翼の翼端が攻撃によって吹き飛ばされていた。
機体が爆発するほどじゃない。この程度でビビッていたら死ななくていいところで死ぬ。
それは教官達から徹底的にたたき込まれたことだ。
「ビビルなよ？……ビビルなよ？」
自分に言い聞かせながら、井上は操縦桿とスロットルに神経を集中させる。
もう、僚機に回せる神経はない。他に回せる余裕は少なくとも今の自分にはない。

敵の上空に出た！

「よしっ！――――投下っ！」

叫びつつ、操縦桿につけられた爆弾投下スイッチを押す。

軽くなった機体が一瞬浮き上がるのを押さえつけながら、あとは逃げる。

背後で爆発が起きたけど、それが自分達の攻撃か、他の部隊によるものか、はたまた戦艦の艦砲なのか……結果は知らない。

後ろを見ているヒマなんてないんだから。

……

井上が、股間の盛大な湿り気に気づいたのは、基地に生還、機体から降りた時だった。

反抗　第十話

大日本帝国領内福井県内横浜海岸付近
ＥＵ軍機甲部隊陣地

ズドドドドッ！！
激しい振動と音が、大地の全てを揺るがす。
魔族軍の突撃が敢行されたのだ。
百数十トンのモンスターが群れとなって行われる集団音速突撃。
あらゆるものを踏みつぶし、なぎ倒す――――
それこそが、魔族軍の突撃だ。
真っ向から阻止出来る存在など、人間界には存在しない。

横浜海岸付近に展開したＥＵ軍機甲部隊でも、止められはしない。
「撃てぇっ！」
ズンッ！
戦車長達が怒鳴り、火砲が連続して火を放ち――――命中。
巨大妖魔達の姿が爆煙に隠される。
「や……やったか？」
戦車大隊長が戦車のハッチから上半身を乗り出し、前方を確認した時には、
「なぁっ！？」
大型妖魔の巨大な脚が、自分ごと戦車を踏みつぶすところだった。

大日本帝国領内福井県内
魔族軍本陣

「敵戦車部隊壊滅」
「当たり前だ」
ズルドはあっさりと言った。
「全く、何を考えてあんなところへ布陣するか」
ズルドは苛立たしそうに口元をへの字に曲げた。
敵――――つまり、俺達が二手に分かれて進撃中なのは知っているはずだ。
その合流地点で戦うなぞ、自ら挟撃してくださいと頼むような、自殺行為以外の何物でもないだろうが。
何故、道が合流する敦賀市内で迎え撃とうとしない。何故、地形を利用しない。
どうしてこうも、人類は戦争が下手なのだ！
「これでは――――俺達に皆越しにしてくださいと言ってるのと同じだ」
「閣下？」
「ん？」
「アースキュル隊がかかります」

大日本帝国領内福井県内
敦賀トンネル防衛線
イタリア陸軍第二戦車大隊陣地

敦賀トンネル方面からの敵を阻止する任務に当たるのは、イタリア軍第二戦車大隊の５４両。
とはいえ、退役寸前だったＭ４７が砲列を並べているにすぎない。
狩野粒子の影響下では、最新鋭戦車はムクに動かないのだから仕

方ないのだが――
「持ち場に戻れっ！」
戦車の上で涼む若い戦車兵達を怒鳴ったのは、戦車大隊長のマルコーニ大佐だ。
「すでに向こうじゃ戦闘が開始されているんだぞ！？」
命令に渋々従っているのは、その緩慢な動きで明白だ。
「全く！」
後継たるアリエテしか乗ったことのない新米戦車兵達は、狭い・暑い・ボロイと不平をこぼし通しだ。栄光あるイタリア王国の兵士がなんたるザマか！
少しは他国の兵士を見習え！
「大隊長！」
副官が書類を持って駆け寄ってくる。
「敵が突撃」
「――向こうにいるのはスペイン軍だったな」
「はい。ハンガリーの砲兵部隊は壊滅」
「壊滅？」
「敵の攻撃です」
「うぅむ……司令部は？撤退命令は？」
「出ていません。逆に、敵のトンネル突破阻止の絶対阻止命令が」
「むぅ……」
マルコーニ大佐は苦々しげに目の前で巨大な口を開けるトンネルを睨んだ。
「内部は数カ所に渡って爆破している。崩落は確認済みだ」
「はい……しかし」
ズズズズッ……
不意に足下が揺れた。
「地震か？」
「さぁ？司令部に確認しますか？」
「ああ。そうしてくれ――少佐」

マルコーニ大佐は思いだしたように言った。
「作戦中に酒を飲むな。それと、この揺れは、貴様が酔っぱらっているからじゃないからな？」
バツが悪そうな顔で敬礼した副官が駆け出すのを、マルコーニ大佐は苦笑しつつ見送った。
副官が数歩走った。
その途端――

ズズズズッ……ズンッ！

大地が――砕けた。
それまで地面を構成していた土砂と戦車と、兵士達――そして副官が、真っ暗な奈落の底へと墜ちていく悪夢のような光景が、マルコーニ大佐の目の前に起こった。

「なっ！？」
幸いにして奈落行きは避けられたマルコーニ大佐は、地面に転がったまま、もう一度、副官がいた場所を見た。
戦車部隊の集中していた所だ。
オンボロとはいえ、数十両の戦車が並んでいたのだ。

そこが、今、ぽっかりと巨大な穴になっていた。

何だ？
日本の土地は、重量制限でもあるのか？
規制値以上の重量が加わると陥没するとでもいうのか？
そんなバカな！

マルコーニ大佐は、恐る恐る、穴の淵へと近づいた。

漆黒の闇がそこには広がっている。

ズズズズッ……

そんな、音がする。

何かが移動するような、そんな音だ。

――何が？

キシャアアアアアッ！

ジャアアアアアアッ！

ザンッ！

さらにのぞき込もうとしたマルコーニ大佐の首が宙を舞い、無数の小型妖魔達がその穴から飛び出したのは、まさにその時だった。

「信濃」艦内

「……EU軍、全滅」

カラン

報告と同時にテーブルの上に投げ出されたティースプーンが、全てを物語っていた。

「……早すぎるな」

「魔族軍、敦賀市内になだれ込んでいます」
参謀長が帝に告げた。
「最早、これでは……」
「わかったかい？」
腕組みをして瞑目した帝の眉間には深い皺が走っている。
「敵は地下トンネルを掘っていました」
「その程度、何故、わからなかった？」
「地震計はすべて正常値でした」
参謀長は答えた。
「魔族軍は、ドリルなどを用いない、特殊な方法でトンネルを構築。さらに振動の低い小型妖魔にトンネルを利用させることで、我々の目をごまかしていたのです。そうとしか、考えられません」
「トンネルは、どこまで掘られていた？」
「敦賀市役所付近まで、敦賀市全域。トンネル出口は約１５」
「……今度、土木工事は全て魔族側に頼むとするかい？かなりのモノが出来そうだけど」
「お、お戯れを……」

大日本帝国領内滋賀県内賤ヶ岳
近衛軍メサイア部隊陣地

鈴谷から発進した美奈代達は、賤ヶ岳へと降りた。
福井との県境まで１０キロほどの距離にある標高４２２メートルの山の頂付近の斜面に、各騎が居並ぶ光景は、かなり目立つ。
「ふぇぇぇっ」
スクリーンに映し出された光景を前にして素っ頓狂な声をあげたのは、さつきだ。
「キレイだねぇ」

「奥琵琶湖随一の景勝地です」
さつきにそう告げたのは、麻紀だった。
「南西は奥琵琶湖と比良山系に竹生島、東は伊吹山、北は余呉湖が望めます」
「あんた、この辺出身？」
「私、滋賀の出身なんです」
「ふぅん？それで詳しいんだ」
「へへっ。琵琶湖は綺麗ですよ？」
「確か」
美晴がぽつりと言った。
「宗像さんも京都の出身でしたね」
「……」
「……」
部隊に流れたその沈黙は、あからさまなまでに気まずさを含んでいた。
「で、でもっ！」
話題を変えようと通信に割り込んできたのは、美晴だ。
「景色はすごくキレイだと思いますよ！？ね、山崎君！」
「ええ……」
山崎も頷いた。
「僕、山の中育ちですけど、この景色はいい」
「新婚旅行、ここにするか」
「ははっ……いいですね」
「おーっ。のろけて下さってどうも♪」
「都築さんっ！」
「都築君こそ、寧々ちゃんとの新婚旅行どうするの？」
「寧々のご希望通りさ。地獄以外ならどこへでも行くよ」
「どっちがノロけてるのよ。それ」
さつきは笑いながら言った。
「美奈代は、涼とどこへ？」

「それこそ、天国はいつも私が連れて行ってますから！」
涼は満面の笑みを浮かべていった。
「でも、ヨーロッパで同性結婚認めている国で式を挙げて」
「麗央、私達も♪」
「ちょっ……お前ら」
美奈代が困り切った声で言った。
「気をつけろ、二宮教官が近くにいるって坂城さんから聞いているんだ」
「早く言って下さいっ！」
一番早く悲鳴をあげたのは、実は麗央だった。
「お、お局様がいるんなら、もっと大人しくしなくちゃ！」
「お局様ぁ？」
「し、知らないんですか？内親王護衛隊（レイナガーズ）じゃ、大佐ってそう呼ばれてるんですけど」
「あ、あの人がねぇ……」
「私、早く結婚しよう」
さつきはぽつりと言った。
「少なくとも、マトモなヤツと」
「と、とにかく！」
咳払いの後、美奈代は言った。
「現在、この辺は陸軍の部隊も展開中だ。我々は、いわば間借りしている身だから、間違っても、移動中に車両や兵を踏みつぶしたなんて話はしてくれるなよ？」

キィィィン！
ズンッ！

美奈代と涼、そしてさつきが余呉湖付近の余呉湖ホテルの駐車場へとメサイアを着陸させたのは、それから３０分後のことだ。

余呉湖観光のホテルだったが、現在は陸軍により接収されている。
魔族軍による敦賀市再占拠の報を受けて以降、近隣の部隊は全て混乱している。
近衛に届く情報も各部隊ごとに全く異なる有様で、結局、各部隊の司令部に出向いて直接情報を入手するのが最も確かな方法となっていた。
結局、“鈴谷（すずや）”に入ってくる情報も曖昧なので、情報収集してこいという美夜の命令で、美奈代は余呉湖に展開する機械化歩兵大隊司令部に直接出向いて、状況を確認するよう、指示を受けていた。
さつきと涼はいわばオマケ。騎内待機が命じられていた。
ただ、さすがにホテルの駐車場の一角にメサイア3騎が並ぶ光景は、はっきり目立つ。
兵士達が興味深げにこちらに視線を向けてくるのが、さつきにはイヤでもわかる。
「あたしさぁ」
コクピットの中で浮かない顔をするさつきは言った。
「目立つのって――嫌いなんだよね」
「私もですけど」
涼は少し驚いたという顔になった。
「お祭り騒ぎは大好きだと思っていましたけど」
「“鈴谷（すずや）”での馬鹿騒ぎは反省してるんだって」
さつきはバツが悪いという顔で言った。
「その、何て言うのかなぁ」
「？」
「好奇心の目で見られるのが嫌い――なのかな」
「成る程？」
涼は苦笑しながら言った。
「なら、メサイアは目立ちすぎですね」
「うん……ん？」
さつきの目が、モニターの一角で止まった。

「すっげーよな！」
集音分析装置が、そんな声をとらえた。
「ああ！スッゲーッ！」
興奮気味な声は、まだ幼さなかった。
ズームされたモニターに表示されるのは、高機動車の影からこちらを見つめる、まだ１０代半ばの少年達だ。
軍服を着込んでいても、その顔立ちはあまりに幼かった。
それだけなら、微笑ましい光景とでも言えたろう。
だが、その中には、さつきにとって、“この場にいてはいけない存在”がいた。

「……」
「早瀬中尉？どうしました？」
その言葉がさつきには聞こえていない。
「――――て」
「早瀬中尉？」
「どう……して」
その声は震えていた。
「中尉？ちょっ！？」
早瀬騎が動き出したのは、その時だ。

――――おい！こっち来るぞ！
――――ヤベ！さぼってたのバレたか！？
――――軍曹、とんでもないので捕まえにきたぜ！
――――逃げろっ！

高機動車から蜘蛛の子を散らしたように駆け出す子供達。
早瀬騎は、その一人に狙いを定める。

――――あっ！

何かに足を取られ、少年は転倒する。

「動くなっ！」
騎体に内蔵されたスピーカーから、さつきの厳しい声が放たれた。
「動いたら」
ジャカッ！
右腕が握るビームライフルが少年の頭ギリギリに突きつけられた。
「吹っ飛ばすわよ！？」
這い蹲って逃げ出そうとするが、腰が抜けたのか、思うように動けない少年は、泣きながら何度も頷いた。

「早瀬中尉っ！」
仲間やMC（メサイアコントローラー）の警告がさつきには届いていない。
届かない。
「移動命令は出ていないです！それに！」
「何を考えているんですかっ！」

バンッ！

さつきは乱暴にハッチを開けると、コクピットから飛び出した。

“白雷（はくらい）”の各部を器用に足場にして騎体を駆け下りたさつきは、
少年兵の目の前に立った。

泣きながら震えていた少年兵にとって、パイロットはあこがれの存在であると同時に、“士官”という恐怖の存在だ。

――殴られる！

少年が、そう思っているのは誰の目にも明らかだった。

「智也っ！」

身を固くして震える少年は、突然、自分の名前を呼ばれたことに驚いて、目を開けた。

そこに立っているのは、パイロット・スーツに身を包む見知った存在だった。

「……姉ちゃん？」

呆然とするさつきを、智也と呼ばれた少年は、驚いた表情で見た。

「――やっぱり」

「姉ちゃんだ！」

少年は嬉しそうにさつきに駆け寄った。

「姉ちゃん！あ、あれに乗っていたのか！？」

「……」

「すげぇ！すげえよ！姉ちゃん！やっぱり騎士だったんだ！」

――ギリッ

さつきの奥歯が鳴った途端。

パンッ！

乾いた音が周囲に響き渡り、少年の体が宙に舞った。

ドサッ！

スローモーションのように少年の体が流れ、地面に転がる。

「ね……姉ちゃん？」
「この――――バカっ！」
パンッ！
さつきの手がもう一度少年の頬を叩いた。
「なんで！」
さつきは怒鳴りながら少年の胸ぐらを掴むと、乱暴に少年を持ち上げた。
「何であんたがこんな所にいるのよ！」
「――――し」
突然の一撃にショックを受けた少年が、それでも言い返した。
「しょうがないだろう！？俺達、みんな兵隊にとられたんだから！」
「なっ！？」
さつきが驚いて手を離し、少年はようやく自分の脚で地面に立てた。
「あんた、サッカー選手になるって」
「戦争だぜ！？」少年は、さつきに非難の視線を向ける。
「俺達、サッカーの遠征のおかげで、高森町の全滅には会わずに済んだけど、行くと来なくなって、そしたら少年兵だって、徴兵されたんだ！」
「……っ！」
「姉ちゃんも兵隊だろ！？だったら、俺が兵隊になって何がおかしいんだよ！俺達だって、今は立派な兵隊だ！」
「すぐにやめてどこかに行きなさいっ！」
さつきは怒鳴った。
「お金が必要ならあげるからっ！」
「ふさげんなっ！」
少年はさつきに負けじと怒鳴った。
「みんな、仲間が頑張ってんだ！俺だけ逃げるなんて出来るかよ！姉ちゃん騎士だろ！？騎士なら騎士らしく、俺達がグッてくる言葉

くらいかけてくれよな!?カッコ悪いぜ!」
「――っ!」
「それでも姉ちゃんかよ!」
さつきが再び少年に手を挙げずに済んだのは、
「早瀬っ!」
司令部から飛び出してきた美奈代に止められたからに他ならない。
「何をしているっ!」
「――っ!」
「戦闘命令だっ!」
「――っ!」
「メースが疋田付近に展開!迎撃するっ!聞こえているのか!?」
「――了解っ!」
怒鳴るように返答したさつきは、少年に告げた。
「私、騎士だから……近衛の士官だから……陸軍の兵隊風情に、死んでも、ごめんなさいなんて、いわないわよ?」
「……」
少年は非難するような視線をさつきに向け続ける。
「いい?次に戦場で見かけたら――タダじゃおかない」
「っ!!」
「後送して二度と前線に立たずに済む体にしてあげる」
「……」
「それが怖かったら、死ぬのがイヤなら、さっさと後方にさがりなさいっ!その方法を考えて!わかったわねっ!?」

「早瀬」
移動する“白龍”の中で、美奈代が訊ねた。
「自分が何をしたのかわかっているのか?」
「勿論」
自嘲気味に、さつきは答えた。

「軍法会議かなぁ」
「……大隊長のご厚意で痴話げんかってことで処理して頂けることになった。ただ、艦長には報告するぞ……早瀬。その、指揮官として聞くが」
美奈代は躊躇しながら、それでも訊ねた。
「あの少年は？」
「従兄弟」
「従兄弟？」
「そう。早瀬家の跡取り。今や早瀬家の最後の男……たった一人の身内」
「……成る程？」
美奈代はため息混じりに、
「死んだと思った身内がよりにもよって、兵隊になっていた。それで我を忘れたってわけか」
「……悪かったとは思ってる」
「報告はする」
「――私が戦死しても？」
「死なさない」
美奈代は言い切った。
「みんなの前で土下座させるまで許しはしない。身勝手な感傷で自殺を許すほど、近衛は甘くない。それに」
「それに？」
「みんな、仲間だって身内同然だと思っている」
「ははっ……」
さつきの頬を涙がこぼれた。
「ははっ……そうだよね……グスッ……私、どうして……こんなバカなんだろうなぁ。身内にどうしてもっと、優しくなれないんだろ……グスッ」
「……早瀬」

「“鈴谷（すずや）”より中隊各騎」
通信機に響く。
「メースに関する最新情報が入った。騎数は１２、行動目的は不明」

反攻　第十一話

●「信濃」艦内

――さすがに、無理させているってことか。
会議の合間を抜け出した二宮は、愛騎である鳳龍改の元まで来て、つくづくそう思った。

懐かしいクセのある艦内放送を聞くだけで、ここに帰ってきた。
そんな気分になれる。
「信濃ＦＤＣ（フライトデッキ・コントロール）より発艦する騎士に伝達。
現在、信濃のカタパルトはすべて使用不能。
騎士はメサイアを第一甲板より順次発進させよ。繰り返す」

本来４基あるカタパルトが全て使用不能。
そのおかげで、メサイアは全て最上甲板より自力発艦が求められる。

「改装中のため使用不能！」「予算よこせ！」「経理部殺す！」とか書かれた巨大な張り紙がベタベタと貼り付けられたカタパルトデッキ入り口を見た時の心境は、ちょっと言葉に表すことが出来そうもない。

何しろ、突然の開戦により、カタパルト周りの改装工事をストップされたままドックから引き出され、戦場にいるのだ。

世界最大最強の戦力誇る信濃とはいえ、現実はそんなもの。

二宮騎の精霊体“鈴（りん）”の話では、信濃の精霊体“呉葉（くれは）”が、おかげでずいぶんとヘソを曲げているという。

「大佐」
通路をサンダル履きでぶらぶらやってきたのは、あの後藤だ。
「いや……ご無沙汰で」
「本当に」
二宮は頷いた。
「いろいろと、調べたりなんなりで忙しくて」
「……それで？」
「代金は、お返ししておきますよ」
後藤は、二宮の横に立つと、禁煙タバコをくわえた。
「奴さんの件だけど」
「……」
「厄介なことになってる」
「というと？」
「交通事故で、炎上した車の中で焼死って話しなんたけどさぁ」
「……」
「死体が、見つかってないんだよ。しかもね？事故車両のタイヤから弾丸が発見されている……一緒にくたばった焼死体、生きていれば俺の元部下なんだけど、そいつの焼けた頭蓋骨の中からも2発程。しかもね？」
後藤がポケットから取りだしたのは、数枚の写真。
「国鉄がいい仕事してくれててさぁ」
「……」
二宮は、3枚目の写真で指を止めた。
「その外人共と一緒にいるの……奴さんだろう？」
「……」
写真を持つ二宮の体が震えだした。
「事故っていうか、事件から2時間後のある駅の防犯カメラの映像だ」
「あいつは一体……？」
「俺もそれを追っかけていたら、立場忘れちまって」

後藤はポリポリと頭を掻いた。
「部隊にもどったら、泉辺りに絞め殺されるかもしれん」
「……ご迷惑を」
「なぁに。詩織様も神経尖らせている最中さ。つーか、最近、こういうの多くてね」
「こういうの？」
「寝返りを要求される。買収される。脅迫される……特高も苦労してるらしいよ」
「まさか」
「上の事情は知らないけど、今度の奴っこさんのことは」
後藤は禁煙パイプを噛みながら言った。
「岡山や中華共の切り崩しってのとはちょっと違う」
「……」
「二宮さん、噂、聞いたことない？」
「何のです？」
「戦場で行方不明になった兵隊を町中で見かけた。なんて噂」
「都市伝説的な話しとして？」
「実話として」
「……よくあるドラマのようですね」
「俺も、そんなところだと思っていたんだけどね？」
後藤は、もう一枚、写真をポケットから取りだした。
「同じ防犯カメラが捉えた一枚だよ」
「？」
受け取った写真は、電車を待つ人の行列が映し出されていた。
「そこの黒いスーツ姿の女」
「……なっ」
二宮の目が驚愕に開かれた。
「ま……ま……」
「まぁ、俺にとっても部下だった女だ。しかもね？あれほどのナイスバディだ」

言葉を失って真っ青になっている二宮の顔を見た後藤は、
「間違いないと、そう見て良いね？」
「……」
二宮は、無言で頷いた。
「手引きが彼女だとしたら、こいつは話しが違ってくるんだよ。そうだろう？南の人類未到の島で行方不明、しかも、魔族軍に寝返ったとされるコイツと、事故死したはずの奴っこさんと同じ電車に乗った？そんなことはあり得ないでしょ？」
「……」
「まぁ、俺はそう判断している」
後藤は言った。
「瀬音元少佐は、月城真菜元大尉の手引きの元、部隊を脱走。敵に寝返ったとね」

美奈代達が小高い山頂に布陣して、向かいの山に陣取るメース達と対峙してから、すでに２４時間が経過しようとしていた。
小高い山々の頂を占拠したまま、メース達は動こうとさえしない。
メースから定期的に索敵と思われる魔法探知波が発振され、その度に神経が参る。
「攻撃命令はまだですか？」
そのセリフを吐かなかった者はいないほど、皆がその状況にしびれをきらせていた。
コントロールユニット、こと、トリガーを意味する人差し指の感覚が鈍くなる感触に顔をしかめながら、美奈代自身がそれを知りたくて脳がうずく。
「まだだ」

美奈代自身、何度口にしたか忘れた答えだが、そう答えるしかなかった。
目の前にいる厄介な敵とのにらみ合いは、歴戦のベテランでも神経を秒単位で削らずにはいられない。
指揮官というメンツにすがって尚、美奈代は表面上の平静さを保つのがやっとだ。
「下手に攻撃を仕掛けたらどうなるか考えろ」
麗央の問いかけに、戦況モニターを見つめながら言った。
「敵のジャミングが酷く、最上の情報収集能力をもっても山の向こうの詳細は一切不明。振動から、大規模な部隊が舞鶴方面へ向けて移動中だとわかる程度だ。だが、未だ敦賀市街にはかなりの規模の妖魔達がいるはずだ。それが一斉にこっちへ動いてみろ。目も当てられないぞ」
その警告を否定するつもりは誰にもない。
メース達が立つ山の向こう――敦賀市。
敦賀市街地の方面から立ちこめる煙は未だ止むことはなく、昨晩、夜通し燃えさかる炎で真っ赤に染め上がった空は、今でも白い煙に覆われている。
それだけの破壊をしてのけるのが、一匹や二匹の妖魔でないこと位、皆がわかっている。
ただ、それを止められないのが辛いのだ。
私が、一匹残らず叩き斬ってやる！
その一言を、自分に気合いを入れるための方便として口の中に出すことさえ出来ない。
口にしようものなら、美奈代に殴られるのは明白だ。
死にたければ拳銃口にくわえて勝手に死ねっ！

位はいわれかねない。むしろ、そうなるべきだと、皆が認めてしまっていた。

まるで持ち回りの順番でもあるように、攻撃命令の確認をしてくる以外、誰も口も開かない。

「……」

美奈代は、そっとコントロールユニットから腕を外し、目の前の計器類やモニターを指でなぞった。

今、自分が駆るのは世界最強と謳われるメサイア――その中でも最高峰に位置する皇室近衛兵団のメサイア。

それほどの存在と共にありながら、どうしようもないことだってある。

いかなる猛者でも、多勢に刃向かっては死ぬ。

それでは無駄死にだ。

死。

その言葉が頭に浮かんだとき、美奈代はブルッと背筋が寒くなった。

焦り。疲労。緊張――

様々な負担が自分を追いつめているのは確かだと思う。

否。

自分だけじゃない。

みんな、だ。

みんな、口にこそださないが、精神的に追いつめられているはずだ。

――耐えなければ。

美奈代は軽く自分の頬を叩いて自分に言い聞かせた。

――耐えろ。

――今こそ、耐えるときだ。

そう言いつつ、美奈代は、

――誰かに縋ってみたい。
そう思った。
だけど、誰に？
涼は部下。
宗像は行方不明。
……。
中野？
……まだ違う気がする。
あの人は、戦場からは遠くにあるべき人だ。
こんな時に縋るべき相手じゃない。
そう思う。
染谷？
……
「……」
美奈代は、その名前がものすごく遠くなったことを今更ながらに感じた。
そして、誰にも縋れない自分に気付き、我が身の孤独さを痛感させられた。

不意に、山の向こうから激しい爆発音が響き渡り、上空をプロペラ機が舞った。
山頂に布陣するメース達があからさまに狼狽しているのがわかる。
「何？」
戦況モニターを操作し、表示範囲を拡大させ、敦賀湾から日本海のかなりの範囲までを表示させ、美奈代は初めて状況を理解することができた。
敦賀湾沖合を進む反応は、大型水上艦艇――戦艦。
時折、編隊を組んで敦賀湾に突入するのは、烈風だろう。
「海軍か？」
「陸軍もいます」牧野中尉だ。

「後方から砲撃支援開始――――上空の機は砲撃観測機、“景雲”。陸軍の砲兵隊が間に合いました」
「それじゃぁ……敦賀は」

●敦賀湾付近
魔族軍陣地

中型妖魔達のど真ん中に落下した砲弾が、数匹の妖魔をまとめて吹き飛ばした。
砲撃が始まるまで整然と移動していたオーク兵達はどこにいるかすらわからない。
この時の魔族側の失態。
それは、海上からの攻撃を想定していなかった。
これだ。
魔族軍は、陸側からの攻撃には備えていたが、反対側の海からの攻撃に対する備えは全くしていなかったのだ。
理由はある。
海上からの攻撃は、地形防御がとれない以上、防御力において圧倒的に劣る人類側にとってリスクが高い。
しかも、人類同士の戦闘により、その海上兵力を対魔族軍戦闘に投入する余力はないだろうと、そう判断していたのだ。
だが、人類側は、魔族軍が考えるよりもある意味しぶとく、ある意味無謀だった。

「海上からの砲撃だと！？」
ズルドは後方で連続して発生する砲撃を見ながら唸った。
「ううっ……や、やるではないか！」

戦況は決して悪くない。

前衛は破壊力と機動性に長ける中小型妖魔達が敵兵と渡り合っている。
数は圧倒的にこちらが優勢。
その背後を移動中の長弓兵も、あと少しで舞鶴湾を有効射程に収めることが出来る。

「閣下」
副官が一歩前に出た。
「長弓兵達の一部を敦賀湾に戻しますか？」
「時間の無駄だ！」ズルドは怒鳴った。
「砲撃に曝されとる連中は速やかに移動させろ！新潟におる“マンタ”部隊を水上兵力攻撃に出せ！舞鶴砲撃を優先する！」
「はっ！」

●大日本帝国海軍　「大和」艦橋
「司令」
大和艦橋で参謀長が言った。
「敦賀湾への砲撃は順調」
「うむ」
頷きつつ、実は小沢は迷っていた。
砲撃は順調だが――順調すぎる。
恐ろしく、順調すぎる。
――何か、敵は次の手を備えているのではないか？
その疑念が、ぬぐえない。
「……」
「司令？」
「参謀長」
「はっ」
「最も間近で、航空戦力の援護が頼める所はどこだ？」

「……第三航空戦隊です」
参謀長は、海図を指さしながら言った。
「距離１２海里」
「……よろしい」
小沢は、ちらと海図に視線を落とした後、続けた。
「砲撃を継続しつつ、撤退する」
「はっ！？」
「敦賀方面の敵に対する艦砲射撃任務は十分に果たした」
「し、司令？」
「……ここで、戦艦部隊を全滅させるわけにはいかない」
「しかし！」
「責任は私が持つ――撤退だ」
「……はっ」
参謀長にも、小沢の考えはわかる。
これだけ叩かせてくれたんだから、今度は逆に自分達が叩かれる。
叩かれたくなかったら？
逃げるしかない。
敵の魔法攻撃。
そのすさまじさは、いまだ戦艦達に刻まれたままだ。
我々は、装甲以外にその攻撃から身を守る方法はない。
ここでもし、敵が航空兵力を投入してきたら？
守る術は――ない。
「第三航空戦隊に援護機発進の要請を出しますか？」
「そうしてくれ――新潟の悲劇はもう御免だ」
前衛の魔法騎士隊が舞鶴に迫る敵を完全に阻止。

敦賀湾への砲撃は順調。
目立った反撃は皆無。

「……」

目立った反撃は皆無。
美奈代はその情報に首を傾げ、自問を繰り返していた。
何故？
何故、敵は反撃しない？
美奈代は自問した。

――反撃することにより、進軍が滞ることを恐れている。

美奈代の脳内の、もう一人の美奈代はそう答えた。

何故？

――兵力を目的位置まで移動させることを優先している。

すでに前線では、魔族軍前衛部隊と、舞鶴方面に派遣された騎士隊とが交戦中のはずだ。

――進軍を優先しているのは、交戦中の兵力とは異質の部隊。

大型妖魔？

――可能性は低い。それならば、すでに最前衛として投入しているはず。

では？

――それは

その答えに、美奈代は青くなった。

これ、誰に訊ねれば良いんだろう。

考えに考えた挙げ句、美奈代は“鈴谷（すずや）”に回線を開いた。

「砲撃？」

美奈代の意見に、美夜は眉をひそめた。

「どういうことだ？」

「敵は前衛で我々を阻止。中衛または後衛に砲撃部隊を展開させ、舞鶴を砲撃するつもりではないかと」

「……」

「艦長。失礼ですが」

高木副長が通信に割り込んできた。

「大尉の言うことは、アタリのようです」

「何故？」

「信濃がこちらに回ります。攻撃目標は敦賀市街地――近衛は正式に敦賀市の奪還を放棄したことになります」

「……」

「ずてに敦賀市において、魔族軍の中衛部隊が展開を完了しつつあります。信濃が間に合うとよいのですが」

「艦長」

美奈代は、騎体の武装を確認しながら言った。

「提案があります」

反攻　第十二話

●魔族軍中衛　長弓兵陣地

「展開が遅れているぞ！」

長弓兵大隊を率いるシーラ大隊長が怒鳴る中、各部隊の長弓兵達が所定の場所に展開しつつあった。

「イシラと通信出来ているか！？」

イシラ――人類の軍事用語に直せば、砲撃観測機の任務を担う小型飛行艇のことだ。

「通信は安定しています」

その通信兵が報告にシーラは少しだけ口元をゆるめた。

「よし。敵からの攻撃に備えろ！シールドは！？」

「上空にラングリー隊展開済み！」

「よし！射撃用意！矢は“制圧型”としろ。目標――舞鶴！」

「射撃用意！目標は舞鶴！」

オーク達に命令を伝える銅鑼と太鼓が鳴り響くと、各隊から「準備よし！」の緑旗が揚がる。

旗手が緊張の面もちで、司令部の命令を伝える旗を高々と掲げる。

これが振り下ろされれば、長弓兵大隊４０００名の長弓兵が一斉に弓を放つ。

それだけで、人間の街など跡形もなく吹き飛ぶだろう。

彼らは、そのためにここにいるのだ。

シーラは一度だけ、舞鶴方面へと視線を向けると、右手を高々と振り上げた。

視線があった旗手が力強く頷く。

「――放てぇっ！」

ビィンッ！

空気が切り裂かれたような音が響き、長弓兵の弓から一斉に矢が放たれた。

だが――――

ズガァァァンッ！

横殴りの光の柱がその矢を消し去ったのは、矢が放たれる音が消えるより早かった。

「なっ！？」

敵の攻撃だ。

シーラは即座に判断すると、部下に命じた。

「ラングリー隊！備えろ！第二射、かかれっ！」

ラングリーと呼ばれる、丁度、蓮に似た飛行物体が中華帝国軍の海外進出移動し、砲撃があった方角へと蓮の花を向けた。

その直後――――

ズガァァァンッ！

ラングリー数機が光に包まれた。

●近衛兵団　飛行艦「信濃」艦橋

「砲撃、阻止されました！」

「馬鹿なっ！」

観測担当オペレーターからの報告に、艦長は目を剥いた。

「４６００ミリ９門の一斉射だぞ！？」

「敵、健在――――第二射、撃たれました！」

「阻止しろ！主砲――――撃てぇっ！」

●魔族軍中衛　長弓兵陣地

「ラングリー隊、交代！」

信濃の攻撃は、第二射を阻止するに至らなかった。

それを阻止するのが、ラングリー隊。

対光線系魔法防御兵器部隊。

人類最大口径を誇る信濃の主砲さえ、その前では無力。

彼等は、長弓兵達の守護天使としての機能を遺憾なく発揮してのけている。

「矢の補給を急がせろ！第三斉射――――放てぇっ！」

「敵弾、来ますっ！」

ラングリー隊が再び光を跳ね返す。

先程より射撃タイミングが早くなっていることはシーラにも明らかだ。

「くそっ！忌々しいっ！」

シーラは、ラングリー隊を睨みながら怒鳴った。

「終わったら、貴様等も仕留めてやるっ！観測結果知らせっ！」

「観測結果、良好っ！」

「よしっ！第四射より効力本射へ！」

「了解、第四射より効力本射！」

●近衛兵団　飛行艦「信濃」艦内

「舞鶴へ敵弾飛来！被害甚大！」

「ええいっ、騎士隊は何をしとるか！」

司令部のスタッフから苛立った声が漏れるが、

「これ以上は無茶だ！」と、他のスタッフに止められた。

「2個師団規模の敵をここまで喰いとどめている現状を見ろ！これ

だけで奇跡どころか、冗談みたいなものなんだぞ！？」
「だからといって！」
「黙れっ！――――通信、付近に待機中の海軍航空隊に航空支援を頼め！これ以上の砲撃を受けたら舞鶴は壊滅する！我々がここで踏ん張る意味はないぞ！？」
「了解！」
「陛下」
参謀長が席を立った。
「魔法騎士隊は敵の直接侵攻を阻止しています。問題は、いかにして敵の砲撃を阻止するか、それだけです」
参謀長は戦況モニターを指示棒で突く。
「信濃他飛行艦隊による砲撃は継続中。ただ、敵の防壁を突破出来ず、敵に対し、有効な打撃を与えるには至っていません。敵の防衛兵器は対ＭＬ（マジックレーザー）防御であることは明白。そこで」
「……航空隊でやれるのか？」
「メサイアを――――陛下が直に品定めした、例の部隊の投入を」
「……捨て駒にはしないように。というか――――借りたままになっていて悪いが、“白龍”の出撃準備を」
「陛下！？」
「ここで私が出なければ、いつ出ろというのだね？」
「しかし！」
「参謀長……わかってくれ」
帝は沈痛なまでの面もちで言った。
「私もまた、騎士なのだ」

●日本海上空
一方、肝心の烈風だが――――

「くそっ！なんだこいつら！？」
空母「赤城」から発艦した烈風隊は、突然上空から襲ってきた緑色の物体に翻弄されていた。
数は多くはない。だが――
「後ろをとられた！助けてくれっ！」
「小隊長はどこだ！？」
「２番機、応答しろ！編隊を崩すな！」
赤城戦闘第二小隊に所属する朝比奈中尉は、機体を急旋回しながら周囲を確認した。
朝比奈の目に、味方の背後に食らいついた敵の姿がくっきりと映った。
「エイが空を飛んでいる？」
まさに、そう見えた。
エイから放たれる機銃弾が烈風を砕いていく光景。
それは何か悪い冗談にしか見えなかった。
エイ？
機銃弾を放つその姿を凝視して、朝比奈はようやく思いついた。
違う。
こいつは全翼機だ。
しかも！！
「ホ、ホルテンだと！？」
朝比奈は、以前、航空雑誌でこの機を見たことがある。

Ｈｏｒｔｅｎ　Ｈｏ　２２９Ａ
乗員：１名
全長：７．４７　ｍ
翼長：１６．７６　ｍ
全高：２．８１　ｍ
自重：４，６００　ｋｇ
動力：ＢＭＷ　００３

最高速度：９７７　ｋｍ／ｈ
戦闘行動半径：１，００００ｋｍ
航続距離：１，３００ｋｍ
上昇限度：１６，０００　ｍ
固定武装：３０ｍｍ　Ｍｋ１０８機関砲×２
ロケット砲：５５ｍｍ　Ｒ４Ｍ
爆弾：５００　ｋｇ　×２

かつて、ドイツ空軍が突如制式化してあの赤色戦争に投入、世界の度肝を抜いたモンスターマシンだ。
当時、高々度爆撃機Ｂ－３２とＰ－５１マスタングをもって空の戦いで圧倒的優位にあったアメリカ軍を窮地に追い込んだ欧州軍最初にして当時最高レベルのジェット戦闘爆撃機。
それが、あろうことか、自分達に襲いかかっているのだ。

「ドイツ軍め！裏切ったか！？」
僚機が機銃に砕かれ、炎に包まれながら墜落していく。
次は自分だ。
「くそっ！」
背後に食らいついたホルテンから逃れるべく、烈風を急旋回させて勝機を求めた。
敵はジェット戦闘機。スピードではかなわない。
操縦桿を倒すと、濃紺の海面が視界一杯に広がり、血と内蔵が体の中を移動したような不快感に吐きそうになる。
ミラーで確認する限り、ホルテンは確実に食らいついている。
そして――
「うわっ！？」
オレンジ色の棒が何本も機体をかすめていった。
敵の攻撃だ。
「冗談じゃねえ！」

このままでは、海面に叩き付けられるか、敵に撃墜されるか、どちらかだ。
下手に引き上げることも出来ない。
「――やるかっ！」
朝比奈は、とっさに烈風のエアブレーキを開いた。
こちらの急減速に敵もかなり驚いたのか、すれ違い様の敵は、機体をひねろうとして失敗――そして。

何か、金属が引きちぎられるような音が響き、烈風が一気に安定を失う。
そして、濃緑の機体が一瞬にして烈風を追い抜いていった。
「くそっ！」
急減速した烈風を避けきれなかったホルテンが、烈風の翼端をひっかけたのだ。
ホルテンから煙が上がっている所を見ると、ホルテンの方が被害は大きいようだ。
「速ければいいってもんじゃねぇぞ！？」
形勢は一気に逆転した。
ＨＵＤにホルテンをとらえた朝比奈は、トリガーを引いた。
白い曳光弾が吸い寄せられるようにホルテンに命中。その機体を砕く。
そして――

ズンッ！

「よっしゃっ！」
ホルテンの爆発を確認した朝比奈は、傷ついた烈風を慎重に操作しつつ、海面ギリギリで機体を水平に移動させた。
左翼が、格納の際、折り畳まれるギリギリの位置で折れていた。
――よく飛べる。

朝比奈は冷や汗を流しながらも、飛行を続ける烈風の機体設計者に感謝したかった。

見上げた上空では、未だ戦闘が続いている。

空母が展開しているはずの方面からは、味方機の編隊が戦闘空域へと向かってくれている。

おそらく、地上攻撃準備中の部隊も空戦に駆り出されたのだろう。

空母搭載機数を思い出し、朝比奈はそう結論づけた。

つまり、海軍は、初期の目的である地上爆撃をやめたということになる。

それがどういう結果を招くか？

それは、一介のパイロットである自分の気にすることではない。

俺は、この傷ついた機体を生還させるだけでいいんだ。

今は、それでいい。

朝比奈は、自分を言い聞かせると、緊急信号を発信、通信機に帰艦を告げた。

近くの海面からは盛大に煙が上がっている。

あのホルテンが墜落したのはあそこだろうと、朝比奈は見当をつけた。

――それにしても。

今回の戦闘は、一体、何だったんだろう？

朝比奈は知らない。

その煙の上がる海面のすぐ近くに、海面を漂いながら飛び行く朝比奈の烈風を睨んでいる魔族軍パイロットがいたことを――。

浮き袋によって海面に漂う魔族のパイロットのすぐ近くの海面が盛り上がり、小型車ほどの大きさの塔が顔を出した。

塔の天辺のハッチが開き、魔族軍の軍服に身を包んだ士官が顔を出す。

「ご無事で？」
「――ええ。気分は最悪だけど」
野太い士官の声に答えたのは、まだ年端もいかないあどけない少女の声だった。
「それはよかった」
ハッチの側面を開きながら、士官が苦笑をこらえている。
少女は、海水に濡れて額に張り付く銀色の髪を気にしながら、それでも精一杯、士官を睨み付けた。
「所属は？」
「第３飛行戦闘大隊第２中隊第１小隊所属。シャルム軍曹」
「……はい。確認しましたよ。ようこそ、回収艇へ。泳いでハッチの中へ入ってください」
「……ありがと」
バシャバシャ。
足をばたつかせ、回収艇と呼ばれた塔に泳いで近づいた少女は、側面ハッチの中へと転がり込んだ。
ハッチが閉まり、水が外に押し出される。
何とか立ち上がった少女は、壁に張り出されている手順通りに装備を外し、辺りを見回した。
赤いランプが最低限度の明るさを確保する室内。
ハッチを開き、少女は回収艇の中へと入り込む。

――人間共は、回収艇を“潜水艦”と呼ぶらしい。
――人間共は、回収艇を武装させている。

少女は回収艇の通路を歩きながら、出撃前に上官から聞いた言葉を思い出していた。

――我々が使用する“ガーバー”は、すでに６０年近く前に人類によって製造されている。確か、ホルテンとか。

――おそらく、ヨーロッパ、旧ゲルマニア方面の偵察に出たまま行方不明になっていた機の残骸を回収、それを元に量産化したのだろう。

つまり、人類は“ガーバー”を知っている。

確かに、現在の魔族軍にしては、あまりに旧式な機であるのは事実。

下手すれば、民間機の方が性能は上という有様なのは事実だ。

現行機に比べれば、性能は圧倒的に劣るにしても、相手は人類。

“ガーバー”を見ることで、死ぬほど驚くだろうという少女のちょっとした悪戯心は、それで完膚無きまでに破壊された。

そして迎えた空戦。

――許さない。

少女は拳を握りしめ、力を込めた。

あの時、機体を接近させすぎたのは確かに自分のミスだ。

機体をぶつけたのは自分のミスだ。

だが、だからといって、撃墜されていいという言い訳にはならない。

――最低でも１００機は血祭りに上げてやる。

パイロットスーツを脱ぎながら、少女は復讐を誓う。

その少女を乗せた回収艇は、音もなく海中に姿を消した。

●滋賀県境

「さぁ。お仕事だよ」

美奈代は、どこから戻ってきたのか、殺意一杯の気分で、久しぶりの後藤の声を苦々しい思いで聞いた。

「美奈代ちゃんのご要望通りにやろう」

一瞬、美奈代は後藤を殺してやろうかと思った。

艦長席の美夜の目がつり上がっているのが印象的だった。

「航空機支援は無理。海軍は後退中。現状、敵を攻撃してるのは、近衛と陸軍だけ」

海軍航空隊は現在、敵航空機と交戦中。戦艦部隊はその敵から逃れるために撤退中。

陸軍が無理して移動してくれた砲兵隊だけが頼りだ。

その陸軍でさえ――

「弾薬の供給が追いつかない。やれるのは俺達だけ。

俺達だけが、敵に斬り込める」

――気楽に言ってくれる。

そう、思わずにはいられない。

「これまで待った甲斐があったろう？そこにいるメースはたかが２０騎。

斬込隊は一気に仕留めろ。

仕留め終わったら中隊は前進。

広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で敦賀市の全てを焼き払え。

今度ばかりは文句も出ない」

「敦賀の損害無視で、敵の砲撃部隊を叩けと」

「そうなる。よくわかってるねぇ」
「……他の部隊隊は？」
「飛行艦隊護衛に手一杯」
「んな！」
美奈代は目を剥いた。
「少しは！」
「しょうがないでしょ？旗艦が襲われたらどうすんの？」
「ちっ！」
「割ける余裕がないんだよ。つーか、俺が先行して飛んできたのもそのせいだ。陛下も出るぞ」
「えっ！？」
「護衛はつけるから、お前達は心配するな」
「よ、よかった……」
「魔族軍が大型妖魔を投入。国道２７号線を一気に舞鶴めがけて突進するため吉坂峠を吹き飛ばした」
「と、峠を吹き飛ばした！？」
「ああ。標高８６メートルって、かなり小さいけどね。高浜付近に展開中の魔族軍前衛を勤めていた小型妖魔達は後退。魔法騎士隊も舞鶴へ下がった。峠の跡地は真っ平らな道になっている。
陛下達は、俺達並の少数で、そんな大型妖魔相手に戦うことになる」
「……」
「この状況で、敦賀まで斬り込みやれるのは、俺達しかいない」
「了解」
美奈代は覚悟を決めた。
やるしかないんだ。
「艦砲支援は約束する。そのタイミングで突撃しろ。やれる？」
「――――もう、文句もいいません」
「あれぇ？その割に反抗的な目だねぇ」
「今まで、どこ行っていたんですか！？」

「ああ。そういうことね？まぁ、サービス残業がいろいろと」
「……サービス残業って、嫌いなんですけどね」
「中間管理職は辛いねぇ」
「……本当に」
ハアッ。
盛大なため息が通信機のゲージをレッドゾーンまで引き上げる。
「む。いかん。各騎、武装確認」
美奈代は、待機中に暇つぶしも兼ねて何度見たか忘れたステイタスモニターを見た。
斬艦刀×２（背部マウントラック格納）
３５ミリ機動速射野砲×１（右腕マウント中・弾薬５０００発・腰部弾薬ラック格納済み）
太刀×２（腰部鞘部格納）
光剣×４（サイドスカート専用ラック格納）
ビームライフル×１（脚部専用ラック格納）
「牧野中尉」
美奈代はＭＣ（メサイアコントローラー）に命じた。
「ビームライフルを腰に格納してください」
「……了解」
銃で仕留められる相手じゃない。
なら、右腕を振り回す邪魔になる砲は邪魔だ。
目の前の敵を仕留めるのに必要なのは、機動性。
牧野もそれをわかっている。
右腕が動き、専用ラックに固定される。
美奈代がチラと見ると、他の騎も同様。腕の動きを必要とする火砲はすべて格納された。
「問題は」
美奈代は唇を軽く舐めながら呟いた。
「この動きを、メースがどう判断するか……」
「わかってると思います」

祷子の声が耳に届く。
いつもどおりの飄々とした声色には緊張の色が加わっている。
「敵さんだって――バカじゃないです」
「そう……ですね」
――敵がみんな、あなたみたいなら、戦いやすいんですけど。
「聞こえましたよ？」
「本音だ」
美奈代は軽くかわすと、“鈴谷（すずや）”からの艦砲警告を受けて言った。
「斬込隊全騎。鈴谷艦砲が発射される。突入準備」
ズーム表示されるメース達もシールドを構え、剣を抜いた。
敵に自分達の動きが伝わったのは確実だ。
本格的にこちらに向けた動きをとる前に敵を仕留めねばならない。
機動性が、全てだ。
「気合い入れろ。しくじるなよ！？」

ピーッ！

ＭＬ（マジックレーザー）飛来警報が響く。

ズンッ！
――ギュイイイインッ！
スズズズズンッ！

ＭＬ（マジックレーザー）特有の爆発がメース達の間近で発生した。
鈴谷が搭載するＭＬ（マジックレーザー）砲２０門の集中射撃の引き起こす炎の壁。

それは、美奈代達が突撃するべき地獄の門だった。

「いくぞっ！」
美奈代は斬艦刀を抜刀。

“白龍”を突撃させた。

反攻　第十三話

鈴谷から放たれたＭＬ砲撃（マジックレーザー）は、メース達の間近に着弾。
炎の壁を作り上げた。

「かかれぇっ！」
美奈代の号令の元、“白龍”達はメースに狙いを定めた。
すれ違う時間はほんの数秒足らず。
ブースターを全開にした“白龍”強襲型の推力にモノをいわせた奇襲攻撃。
そのスピード故に、攻撃チャンスはたった一度だ。
攻撃をしくじって反転。再度攻撃にかかる場合、かなりの時間を浪費、つまり、敵に反撃の余裕を与えてしまう。
奇襲の意味が全くなくなるのだ。

一度の攻撃をかわされたら、戦いの主導権は敵に移る。

一瞬が勝負だ。

「――――くっ！」
どんな映像だろうと、ここまで急激にズームしても、絶対こうはならないだろう勢いで、炎の壁が近づいてくる。
その恐怖の光景を耐えるべく奥歯をかみしめながら、ほむらはコントロールユニットを操作。斬艦刀を上段に振りかぶったまま、炎の壁に躍り込んだ。
そして、シールドを構え、炎の壁から身を守ったままのメースを認めた。
「はあぁぁぁっ！」

気合いと同時に斬艦刀をメースめがけて振り下ろす。
ギィンッ！
コントロールユニット越しに伝わる、斬艦刀がメースの装甲にめり込む鈍い衝撃が疑似感覚として骨に伝わってくる。
その感覚に、一瞬だ、顔をしかめた。
斬艦刀がメースの頭部に命中。
頭部を構成するパーツをまき散らす。
――――が
「しまった！」
ほむらは舌打ちをする余裕もなかった。
メースのコクピットはどこだ？
胴体だ。
頭部を潰しても意味はない。
頭部にMC（メサイアコントローラー）を載せているメサイアとは勝手が違うのだ。
「しくじったか！？」
一瞬で遠ざかっていくメースの姿を再び捉えるべく、ほむらは、“白龍”を反転、急減速させた。
「ぐっ！」
騎体が悲鳴をあげ、慣性制御システムが処理しきれないほどのGが息を詰まらせる。
「て、敵は！？」
その目の前でメースに襲いかかっているのは、赤いメサイア達。
自分達の仲間ではない。
「なっ！？」
「こちら戦技教導隊！――――このヘタクソ共っ！」
鼓膜が破れたかと疑いたくなるほどの大音声が通信機に轟き渡った。
「貴様等、それでも近衛騎士かっ！」
頭をかち割られたメースの胴体に深々と斬艦刀を突き刺した赤いメサイアが、乱暴に動かなくなったメースを蹴りつけると、メース

は爆発することもなく、麓まで転がり落ちていく。
しくじったのが自分だけかどうかさえ、今の状況ではわからない。
「ガキのお遊戯じゃねぇんだぞ！」
恐ろしいほどドスの効いた声が自分にだけ向けられているようで、ほむらだけでなく、美奈代までが無意識に萎縮した。
「も、申し訳……」
「黙れっ！そんな高度で何浮いているんだ！狙撃されるぞ！」
はっとなった美奈代達は、慌てて騎体の高度を下げた。
「申し訳……ありません」
「誰に詫びている」
「は？」
「さっさと移動しろ！口を開くヒマがあれば動けっ！」
「はいっ！」

「戦技教導隊が動いた……か」
“鈴谷（すずや）”の艦橋で戦況を見守る後藤は、タバコに手を伸ばした。
「禁煙ですよ」
「大目に見て下さいよぉ」
「ダメです」
艦橋にいる皆の視線は、メースの代わりに山頂に立つ赤いメサイア達に注がれている。
真っ赤に塗装された重厚な装甲は、悪意さえ感じさせるほどの凶悪さに満ちあふれていた。
「あれは一体？」
美夜はアームレストのパネルを操作して情報を探した。
「――悪龍？」
モニターに表示される名称は、そうなっていた。
「アグレッサー騎ですね」
通信モニターに映し出される高木はさすがに情報に目を通してい

るらしい。
視線が下を向いていた。
「ベースは“角龍”。装甲形状をロシアの“ローマイア”同様の超重装甲タイプに換装。エンジン出力も圧倒的に飛躍させた――か」
すごいな。
しきりに感心する高木を尻目に、後藤が言った。
「悪龍なんて、あの連中にぴったりな名前だと思わない？」
「そ……それは」
美夜は、通信が“あの連中”に聞こえていないことを祈った。
「艦長は思わないですかねぇ？」
クスクス笑いながら、そう問いかけられると、返答に困る。
「よして下さい――今は、むしろ感謝すべきでしょうが」
「やれやれ。模範的な解答で」

「戦技教導隊より独立駆逐中隊騎へ」
突然の通信に、“白龍”の何騎かがビクッと動いた。
「コトが済んだら――テメエ等全員覚悟しておけ」
どういう意味がわかるだけに、顔を引きつらせたのは、美奈代だけではない。
「俺達は、ただの教導隊じゃねぇ。俺達にぴったりなお名前である“悪龍”を駆るアグレッサー部隊様だ」
「いや、あれ、私達じゃない……」
「うるせぇ。そのたるんだ性根は治療の必要がある――なぁに」
正直、逃げたかったのは美奈代だけではない。
「俺達のシゴキを受ければすぐに直る」
その自信満々の声が、自分達に何をしようとしているのか、美奈代に考えさせることさえ禁じてしまう。
ここで死のうか？

美奈代はホルスターに入った拳銃に手を伸ばした。
いや、待て。
美奈代は立場を思い出して踏みとどまった。
「中隊前線指揮官泉大尉より戦技教導隊隊加藤大尉」
美奈代の声がなければ、美奈代は生きていたかさえ、正直、自信がない。
ただ、それで、この声の主が誰かようやく思い出せた。
白州の一件で、都築と殴り合いになったあの加藤大尉だ。
「ほう？あの時の小娘か――出世したな」
「ま、まず、貴隊の行動目的を知らせてください。こちらは貴隊に関し、何の指示も受けていません」
「我々はこの地点を制圧。敵メース部隊の監視にあたる。同時に、貴隊に“もしも”の時は骨を拾うという大役も仰せつかっているがな」
クックックッ……。
加藤大尉の笑い声が美奈代の神経に触れた。
心底、嫌悪感ばかりが強まっていく。
通信を切ろう。
美奈代が通信装置に指を伸ばした時、
「だが……そんなことはどうでもいい」
加藤大尉の声色が変わった。
重く、真剣な、軍人の声だ。
「泉大尉」
「はい」
「すでに敦賀から舞鶴に至る地帯は壊滅状態。降り注ぐ敵の攻撃で一面の焦土と化した」
「……間に合いませんでした」
「だが、俺達ゃ、まだ目をつむっていなねぇ」
「……」
「俺達は、この借りを返す」

美奈代は、加藤大尉の目を見て、その声がウソでないことを理解した。
その真剣な眼差しには、一点の曇りもなかった。
まさに武人の目が、そこにあった。

加藤は言った。

「監視任務なんてのは、陸軍の観測部隊で十分だ。我々は独断で敵に対し――――突撃する」

「なっ？」
突然の言葉に、美奈代は耳を疑った。
戦技教導隊。
栄光のエリート部隊。
その部隊が命令違反を覚悟している？
そんな、馬鹿な。

「すでに前面では陛下と少数の部隊が魔族軍大型妖魔達と対峙。海軍は魔族軍の反撃を恐れ、撤退中――――奴らを戻すためには、魔族軍側の砲撃部隊を叩くのが最も有効な手だ。反撃の恐れさえ減らせば、海軍も重い腰をあげるだろう。そうでもしなければ――――！」

飛行艦隊とメサイアの攻撃だけでは数で勝る魔族軍に対抗するのは困難だ。
必要なのは、魔族軍を面で叩ける攻撃。
大型砲による砲撃だ。
今、それが出来るのは、海軍の戦艦部隊だけだというのに、彼女達は敵からの反撃を恐れて撤退しつつある。
彼女達を再び沿岸部に展開させるためには、魔族軍の砲撃の驚異

を少しでも減らす必要がある。
ならどうする？
敵に斬り込んで、少しでも敵を倒すか、敵を攪乱させ、組織だった砲撃を不可能、最悪でも困難に陥らせるのだ。
犠牲は覚悟。
その間に、海軍が再び砲撃を開始してくれれば、それで――

「――中衛の砲兵部隊は我々が引き受けます」
美奈代は言った。
「後衛に待機している残存部隊を頼みます」
「――心得た」
「では大尉」
少しだけ悪戯っぽい声で美奈代は言った。
「私達をしごくのは、ご遠慮下さいね？」
その声は、心底楽しそうだった。
「それが許されるのは、後にも先にも二宮教官と、長野教官という、私達の親の特権だと思ってますから♪」

「美奈代」
さつきが嬉しそうに言った。
「うまいこと言ってくれた♪」
「どうも」
「二宮教官が聞いたら喜んでくれるよ」
「……そうかな」
「まぁ、しごかれるのがお望みでしたら是非、お一人で」
祷子がそっと言った。
「私は少なくとも、そういう趣味はちょっと」
「あ、私も」
「私もMじゃないから」

「同感」
「貴様等っ！」
同時に出た呟きに、ついにたまりかねた美奈代が怒鳴った。
「そんなに不満なら、加藤大尉にシゴいてもらえ！身も心も徹底的なM奴隷というか、生徒から性奴隷になって、風俗に就職するしかない境遇になりたいのか！」
「ちょっと……あのぉ、泉大尉？」
牧野中尉が笑いながら止めた。
「通信、全部に流れてますよ？」
「……いろいろ言いたいことはありますが」
美奈代は赤面した後、咳払いした。
「言い過ぎました……中隊各騎、展開する敵に対し前進。火炎攻撃により掃射攻撃をかける」
美奈代騎からのデータが即座に戦術モニターに反映される。
魔族軍中衛は、弓攻撃に適したへの字型に展開している。
整然と並ぶ部隊配置は見事だと、美奈代は内心、舌を巻いた。
「柏、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の有効範囲を活かせ。砲撃部隊以外には目もくれるな」
「了解！」
美晴は、コントロールユニット越しに、“白龍”の持つ広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のトリガーの感触を確かめた。
「タンクへの被弾だけは絶対に避けろ。自分が火達磨になるぞ――涼、適宜ポイントを決めて砲撃支援に入れ。風間、明貴、斬込隊は敵の退路を断つ。出来るな？」
「はい」
祷子の泰然自若とした声色が答える。
「ご心配なく」
「……」

――――何だ。こいつは……。

美奈代は一瞬、本気で身震いした。

背筋が震えた。

その声だけで、本当に震えが来た。

美奈代が知る風間祷子とは、ぼんくらちゃんとまで呼ばれたボケキャラだ。

それが、ベテラン騎士顔負けの落ち着いた様子で、

「単独行動でかまいません」

ベテラン騎士でもひるむことを平気で言う。

美奈代は、そんな祷子を知らない。

通信モニターに映るその端正な顔立ちは、気品にあふれている。

いや。

気品以上の何かを放っている。

美奈代は、それが何か思いつかない。

ただ――――

――――怖い

心の底からそう思った。

なんだというんだ！

祷子はその寒気から逃れるように、声を大きくして言った。

「全騎、機動っ！」

反攻　第十四話

ラングリー
魔族軍の対魔法兵器迎撃兵器。
一種の楯とも言える。
敵の魔法攻撃が予想される方向へ向け、魔力攻撃を中和させる力場（フィールド）を展開。飛来する魔法攻撃を中和・無効化する機能を持つ。
あくまで、力場（フィールド）を展開する方角へ向けて、魔法攻撃に対してのみ有効な兵器。
そんな無敵の楯を展開するラングリーが突如爆発した光景に、魔族軍長弓兵達は一斉に動きを止めた。
それまで、敵の攻撃から完全に自分達を護ってくれていた城壁が爆発。
今、炎を上げ崩れ落ちようとしている。
兵達は、構えた弓を降ろし、その光景に魅入ってしまう。指揮官でさえ、振り上げた指揮剣を降ろしてしまう。
長閑だった時代の終幕、あの飛行船が炎に包まれる光景さながらにラングリーは炎に包まれ、地面に墜ちた。

ジャカッ！
散弾砲に次マガジンを装填し、褄子は次のラングリーに狙いをつけた。
ＭＬ（マジックレーザー）を無効化させる兵器にＭＬ（マジックレーザー）で挑むのは無意味――――ならば。
と、実弾、しかも破壊力は落ちるが、広範囲にダメージを与えられる散弾砲を持ってきたのは正解だった。

ドンドンドンッ！

残存するラングリー全てにめがけてマガジンに装填された砲弾を

たたき込む。
戦技教導隊がその横をすり抜けた。
「踏みつぶせぇぇっっ！」
加藤の怒鳴り声が響く中、悪龍達が一斉に敵陣へ強行突入。
長弓兵達をアリの如く踏みつぶしながらホバー機動に移る。
メサイアのつま先と、そのホバー圧力が、地面を逃げまどう長弓兵達を得も言われぬ肉片へと変えていく。
その光景を上空から見た祷子は、表情一つ変えることなく、散弾砲のマガジンを交換。シールドを構え直すと、通信装置に告げた。
「美奈代さん。信濃と海軍の艦砲射撃は？」
「まだだ」
「射撃を実施させてください。射撃警報が出れば、皆、撤退するでしょう。――最悪、欺瞞でも」
「了解した」
信濃へ呼びかける美奈代の声を聞きながら、祷子は周囲の様子を見る。
悪龍達は、すぐ間近に展開していた中型妖魔達に襲いかかっていた。
少し離れた所で、美晴達による広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の掃射が始まっている。
奇襲に対し、即座に対応出来ない魔族軍は総崩れに近い状態。
これなら問題ないだろう。
祷子はそう思うと、騎体の高度を落とした。

「いけっ！」
美晴達の任務は掃射。
敵も味方もない。
目の前の全てを焼き払う。
それだけの任務。
簡単に見えるが、街を焼き払い、逃げ惑う生命を生きたまま焼き

殺すことに何の変わりもない。
その精神的負担は、かなりのものだ。
「なんまんだぶ。なんまんだぶ」
さつきがそんなお題目を唱え、
「神様、どうかお許しを」
麗央が祈るのも、無理はない。
指揮する美晴自身、戦争が終わったら仏門に入ろうと本気で思ったことは一度や二度ではない。
照準もろくにしないまま、摂氏数千度の火焔地獄を作り出すことの出来る悪魔の兵器――広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のトリガーを引くことは、騎士にとってはそれほど忌避されるべきことなのだ。
「――グッ！？」
光学防御が施されたバイザーを下げているはずなのに、スクリーンが発射の度に真っ白になる。
発射するたびに、敵が消えていく。
スイーパー、つまり、掃除人の名が付けられているのは伊達ではない。
火炎で敵を掃除する。
そう言って何の問題もない。
それが、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）だ。

無差別殺戮兵器――こんなものを好きになれる奴にまっとうな神経の持ち主はいない。

ギィィィッ！
ギャォォォッ！

メサイアのメカニカルノイズと射撃音に混じって、遠くから凄まじい叫び声が届く。
怒り

苦しみ
悲しみ
様々な感情が入り乱れた、聞くだけで背筋が寒くなるような声だった。
美晴達は、その音から逃れるように、トリガーを引き続けた。

「何事だ！？」
付近に展開していた槍隊隊長が叫ぶ。長弓部隊の方角が大混乱に陥っていた。
長弓兵達が弓を捨てて逃げて来る。ついさっきまで、敵に圧倒的破壊をもたらしていた彼らが、無惨な光景を曝している。
「何が――――うわっ！？」
とっさに地面に伏せるが熱風が甲冑の背中を焼いた。
「ど、ドラゴンでも来たのか！？」
――――魔界でドラゴンと戦ったことはあるが、これはあの時放たれた炎息（ファイア・ブレス）と同じではないか！
彼は痛む背中を無視して顔を上げ、絶句した。
というか、理解出来なかった。
ついさっきまで逃げまどっていた長弓兵はどこだ？
あたりをキョロキョロして、ようやく彼が見つけたのは、こちらに駆け寄ってくる松明だ。
彼にはそう見えた。
走る松明。
――――違う。
それが何かわかった彼は、慌ててその松明に駆け寄った。

火炎に焼かれた長弓兵だ。

無惨な叫び声をあげながら、助けを求めて走り続ける戦友だ。

彼は、戦友を助けようとした。
助けようと、近づいた。
「しっかりしろっ！」
だが、混乱した戦友は、助かりたい一心で、救って欲しい一心で、
彼に抱きついた。
「う、うぉぉぉっ！？」
炎に包まれた戦友に抱きつかれた彼は、何とか逃れようとしたが、
それは出来る相談ではなかった。

自らの隊長が炎に包まれた長弓兵に抱きつかれ、地面を転がる光
景を前にした部下達は戦慄した。
体を焼かれ、炎に包まれた長弓兵達は、まだぞろぞろと自分達に
近づこうとしている。
「く、来るなっ！」
「川はあっちだ！」
「こっちに来るなっ！」
口々にそう叫ぶ。
隊長はついに動かなくなった。
そして、
「構えろっ！」
槍兵達は誰かのその声に、一斉に槍を構えた。
そして――
「かかれぇっ！」
ジャンッ！
グシャッ！
グシャッ！
槍を滅茶苦茶に振り下ろした。
相手は人類ではない。
それまでの戦友。
長弓兵達だ。

頭を砕かれ、よろめきながら手を伸ばした長弓兵の口が、
――――タスケテ
そう、動いたのを、槍兵達は確かに見た。

「そっちはやれる！？」
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を操るさつきが、横に立つ山崎騎に訊ねる。
「９時から１２時方向、掃討完了っ！」
「６時から９時、もう少しです」
麗央は舌打ちした。
「ちっ……どうして私の方から増援が来るのよぉ」
黒く焼けこげた大地をかけずり回り、こちらへの接近を試みる小型妖魔達の様子を、麗央騎の目が捉える。
４本脚で飛び跳ねながら移動する小型妖魔の薄緑色の滑りけのある肌が、麗央に生理的嫌悪を覚えさせる。
あの時のデブといい、敵には恵まれていないな。
そう思う。
「――――消えろっ！」
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を放ち、接近する妖魔達の前衛を焼き払うが、次発を放つ前に後続の妖魔達が近づいてくる。
「くそっ！」
「麗央っ、手伝う！」
さつきが麗央騎と同じ方向へ広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを向けようと、向きを変えた途端、
ズンッ！
激しい火柱が立ち上がった。
「きゃっ！？」
「さつきさんっ！？」
突然の爆発、凄まじい炎の嵐が二騎を襲う。
「さつきさんっ！麗央っ！」

さつき騎と、その横にいた麗央騎の姿が消えた炎の嵐の中で、複数の爆発音が連続して発生する。
麗央は血の気が引けた顔で叫んだ。
「だ……大丈夫！」
麗央の声が美晴の耳に届く。
「武装と装甲、かなりやられたけど、戦闘継続可能！」
「さつきさんっ！」
「こっちもかなりやられたが、何とかなる！」
さつきが答えた。
「助かった！」
「よかったぁ……って、さっきの攻撃はどこから！？」
「２時方向からの狙撃ですっ！」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）が答える。
「魔族軍のＭＬ（マジックレーザー）攻撃！」
「ってことは！」
「戦技教導隊より柏騎っ、信濃艦砲射撃が来る、後退しろ！」
加藤の怒鳴り声と、コクピットに「艦砲警告」が表示されたのはほとんど同時だった。
「４時方向へ――ちっ！」
そっちは信濃の射撃コースだ。流れ弾でも来た日には味方に殺される。
「６時っ！戦技教導隊を楯にっ！」
「おいっ！柏とか言ったなっ！」
「ヒヨコに実地で護衛任務の手本見せてくださいっ！」
「都合のいい所だけヒヨコになるつもりか！」
「何のためのアグレッサーですか！」
「ちっ！これだからオンナは！」
６時方向に移動を開始した美晴達の前に、戦技教導隊が展開、その前を護衛する形になった。
「背中は守れないぞ！」

「了解！」

「何事だっ！」

本陣で中衛が奇襲攻撃を受けたことを知ったズルドは怒鳴った。

「防衛隊は寝ていたのか！敵の数は！」

「敵の艦砲射撃です、それと陣地に斬り込んできたデミ・メースは２０騎程と！」

副官が真っ青になって叫ぶように報告した。

「中衛の長弓兵部隊、被害甚大ですっ！」

「たかが２０程度が！この戦域に何騎のメースがあると思っているか！」

「メース隊がデミ・メースの追撃にかかりますっ！」

「遅いわっ！」

目の前に、怒濤の如く漆黒やオレンジ色のメサイア達が迫ってくる。

その数は――――１００を越える。

わずか１０騎程度の戦技教導隊で止められる規模ではない。

その光景を前に、加藤は背中を嫌な汗が走ったことを感じていた。

「信濃司令部より通報っ！海軍が針路変更――――戻ってきますっ！」

「よしっ！」

加藤大尉は深く頷いた。

「目的は果たしたっ！全騎――――逃げるぞっ！」

「戦技教導隊、撤退開始っ！」

“鈴谷（すずや）”艦橋のスクリーン上に表示された戦技教導隊を示す光点が移動を開始、敵を示す光点が動きを止めた。

「……悪運、か」

敵が追撃の手を止めた理由はわからないが、もし、それを可能にしたモノが何なのかと聞かれれば、美夜は“戦技教導隊の悪運”としか答えようがなかった。

「よし――部隊の損害は？」

「早瀬騎、川上騎が共に中破」

「よし。損傷騎の修復、急がせろ」

美夜は、肘掛けのコンソールキーを叩き、手近のモニターに泉騎の損傷を表示させようと、スクリーンから視線を外した。

その直後――

「ＭＬ（マジックレーザー）反応――来ますっ！」

レーダー担当士官からの悲鳴に近い声があがった。

「なっ！？」

美夜に出来たことは、真っ正面――船窓越しに迫り来る巨大な光塊――ＭＬ（マジックレーザー）砲弾を見ることくらいだった。

命令一つ出来ず、呆然とする美夜達の目の前がホワイトアウト。

周囲を沈黙が包んだ。

「……」

「……」

正直、美夜は指一本動かせなかった。

体がまるで固まったように動かない。

その耳に、女の子達の声が聞こえてきたのは、まさにその時だった。

「ふぇぇぇっ。間に合ったぁ」

「ラッキー……」

「おっどろいたぁ」

「……え？」
恐る恐る開けた目の前。
そこには、自分達と鈴谷を護るように浮かぶ三騎の巨大な戦闘機がいた。

「こちらラグエル隊。鈴谷、聞こえますか？」
Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ……神城三姉妹だった。

「本国整備がやっと終わったと思ったら」
「久々の国内戦だねぇ」
「初の対メース戦♪」
光葉は楽しげだ。
「コクピット最新にしてもらったし。武装も防御も強化してるし♪」
「そう？じゃ」
「そういうことで」
「殺(や)りましょうか」

鈴谷を襲ったのは大型妖魔達からの一撃。
その支援の元、メース達が接近しつつあった。
その数は約１０。
メサイアでは考えられない空中機動性を披露しつつ接近するメース――ツヴァイ達は、大型妖魔隊からの支援砲撃が敵に襲いかかった光景を見て、全てが終わったと思った。
ところが、突然目の前に現れた得体の知れない三騎のデミ・メースが全てをひっくり返した。
一瞬、呆然としたメース達に、その三騎は猛然と牙を剥いた。
飛行艦から大型の物体が飛び出したと思った所で、ツヴァイ三騎

が同時に吹き飛ばされた。
「なっ！？」
炎を上げながら墜落していく僚騎を目の当たりにした魔族は目を見開いた。
「ばかなっ！」
「三騎、来るぞっ！」
「このぉっ！」
ツヴァイ達が一斉に速射砲を放つ。
敵はその弾幕をかいくぐって接近してくる。
「どういう機動だ！」
魔族が悲鳴を上げたのも無理はない。
猛スピードで接近する敵は、完全に攻撃を読み切ったかのように、弾幕すれすれをかいくぐって来るのだ。
「こ、こいつらバケモノか！」

「甘い甘い♪」
３６０度全てを表示する全周囲モニター上に設置されたリニアシート上に座る双葉は、楽しげにコントロールユニットを握る。
従来のメサイアと全く異なる操縦装置に囲まれた双葉の前で、弾丸の予測ルートと自騎の回避ルートがモニター上に表示される。
双葉は黙ってそれを見て、回避ルートに沿った飛行を念じるだけ。
それでメサイアは双葉の望んだルートを望んだ速度で、望んだ機動をもって実現する。

メサイアの最新コントロールユニット――ＭＳＣＳ（Ｍｅｓｓｉａｈ ｓｉｍｐｌｉｃｉｔｙ ｃｏｎｔｒｏｌ ｓｙｓｔｅｍ）――メサイア簡易操縦システム――の賜だ。

本来、メサイアの持つ飛行モード時の騎体姿勢補正システム（ＭＢＳＳ）――コントロールユニットでは四肢しか操作出来ない騎士が空中戦を行う際、希望する高度や騎体バランスを考えるだけで実現するためのシステム――をベースにしている。

ＭＳＣＳは、騎士の思考をメサイア側で読みとり、騎士の思考を騎体の機動にダイレクトに反映されるシステムとして、米軍が主体となって開発した代物で、米軍ではグレイファントムＭ６４の最新製造騎から順次搭載が進んでいる。

従来のコントロールユニットを用いた操縦システムでは、騎士が肉体を動作させ、それをシステムで反映させる必要があったため、どうしてもタイムラグが生じる欠点があった。

この欠点に対し、米軍が、騎士の脳波を読みとってコントロールに反映させる“脳波コントロール”をシステムに組み込むことで、このタイムラグをゼロにし、メサイア操縦において遺憾なく騎士本来の反射神経を発揮出来るよう開発したのが、このシステムだ。

欠点は肉体の動作とメサイアの動作が一致しないという、著しい違和感に騎士が襲われること。

この類似研究として、近衛の精霊体同調システムがある。

精霊体と騎士の思考を同調させ、機動に反映させることが出来るシステムで、これはβ級を中心に近衛の操縦システムの中核を為すシステムである。

ＭＳＣＳとは、騎士単独の思考を機械的に反映させるのではなく、精霊体と思考を同調させる点で決定的に異なる。

騎士が精霊体を従わせるか、精霊体と共にあるかの違い。

そうとも言える。

近衛がこのシステムを積極的に採用しない理由はもう一つ。

騎士達が、その違和感に耐えられないと猛反発するからだ。

脳と肉体の動作のギャップを埋めることが出来ない以上、いつかそのギャップが致命的エラーの引き金になる。攻撃の補正はＭＣ（メサイアコントローラー）と

精霊体に任せるという、従来のシステムでも十分対応可能であるというのが彼らの主張だ。
結局、唯一に近い採用がなされたのがこのＦｌｙ　ｒｕｌｅｒだけだ。
何しろ、Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒは性格からして従来のメサイアとは全く異なる。
メサイア用とはいえ、艦艇搭載用エンジンを流用したＦｌｙ　ｒｕｌｅｒは、動力・防御・機動推進用と、精霊体が３つも存在するのだ。
精霊体との同調・切り替えを一々やっていたらそれこそ何のためのシステムかわからない。
そこで、精霊体を従わせるシステムとしてＭＳＣＳを組み込んだのだ。

――騎体をこうやって動かして
――そこで避けて
――ここで撃つ

双葉は目の前に表示される情報を瞬時に判断し、その頭の中で対策を考える。
それはダイレクトにＦｌｙ　ｒｕｌｅｒの機動に反映される。
騎士の恐怖心を無駄な機動に反映させないため、弾丸や敵がずいぶんとデフォルメ表示されているのはご愛敬というべきだろう。
何しろ、飛んでくる弾丸はオレンジ色のアイスキャンディーだし、表示される敵は電気ネズミの出てくるアニメの敵キャラだ。
双葉自身、それでいいのかどうかわからない。
敵だって命のある存在だ。

それを奪う罪悪感を、アニメ化した程度でなくすことは出来ない。
双葉はそう思う。
ただ、
――――やらなければ殺される。
――――死にたくなかったら殺せ。
その戦場の鉄則を否定も出来ない。
双葉に出来ることは、目の前のデータを裁き、敵を仕留めるだけだ。

――――近接近戦のレーザーソード展開準備。
――――敵ギリギリをすり抜ける。
――――敵、距離２０
――――レーザーソード展開
――――レーザーソード、敵を切断。
――――敵、南無阿弥陀仏

メースの爆発を背後で感じながら、双葉は新たな敵を探した。
三騎のＦｌｙ　ｒｕｌｅｒはすでに６騎を――――いや、一葉姉がショットシェルで２騎仕留めたから８騎を撃破した勘定だ。
鈴谷を襲った敵はこれで消えた。

「お姉、どうする！？」
「心配だから、美奈代っち達の護衛につくよ！」
「うんっ！」
「了解っ！」

反攻　第十五話

突然の横からの攻撃。しかも、軍の行動を麻痺させるほどの大損害が生じたことに、歴戦の魔族軍第三軍司令部もパニックになることを避けられなかった。

「損害は！」

誰の声より響く――――否、とどろき渡るガムロの怒鳴り声にカーラが思わず大声で答えた。

「集計が！」

突然の声に喉を詰まらせ、カーラは咳払いをした。

「集計がまだですが…長弓兵2個大隊司令部と連絡がつきません。他にも連絡がつかない部隊が」

「メサイア隊はどうした！」

「現在、主力部隊がこちらへ急行中っ！先遣の部隊はすでに全滅」

「全滅っ！？」

「敵母艦へ攻撃をしかけ、敵艦直援部隊に返り討ちに」

「ふざけるな！なんだその体たらくは、メース使いは寝ているのか！？」

「彼等も消耗が激しく……」

「……ええいっ」

先の大戦でガムロと共に封印されたメース使い達のかなりが既に戦線を離脱している。

戦死、あるいは負傷――――理由はともかく、第三軍を支えていた熟練のメース使いがその数を減らしていること、そして、それが直接的に戦力の低下に繋がっていることをガムロも否定出来ない。

騎体はあるが、肝心のメース使いが質的な意味で足りないまま。

それは、兵站という面で考えれば、責任は司令官のガムロ自身にかかってくる。

彼は自らの責任から逃れるつもりはない。

ただ、そんなことで部下に敗北を味わわせることが嫌なのだ。
「ええいっ！」
悔しそうにテーブルを拳で殴ったガムロに、
「主力部隊はアーコット隊です」
カーラは言った。
「新入りよりは使えるはずです。敵部隊を追撃しますか？」
「――――やれ。それと、舞鶴への攻撃を停止してでも、対メース攻撃に使える部隊は、どんな手段でも構わん。横やりを入れてきた連中に戦力を投入するよう命じろ。生かして返すな！」
「はっ！」

ガムロの怒りの矛先。
そんな気の毒な場所にいたのは、火炎攻撃の後、とっとと逃げ出した美晴達でも悪龍を駆る加藤達でもない。
帝直卒のメサイア部隊と美晴達双方にとって有効となる囮として、後方部隊を叩いていた美奈代達だった。

「人類めっ！」
石川県の小松基地――――現在の魔族軍メース部隊東北方面第二駐屯地から飛んできたサライマ達を率いるのは、アーコットだ。

決闘の途中、横から飛び込んで来た刺客に突然、ナイフで脇腹を刺されたようなもの。

アーコットが見たガムロ達の状況はそんなものだ。
戦争に綺麗も汚いもない。
狩りという生存競争や、憎悪の応酬にこそ戦争の根本を求める種族、つまり、人間である我々からすれば、戦争とはそういうものだろう。

だが、アーコット達魔族はそんな考えは持たない。

戦争は、名誉を賭けた栄誉ある決闘の延長線上にある行為であり、真っ正面からガチに殴り合ってこそ意味のある行為だ。

戦っている最中、横腹をこうして攻撃は邪道であり、卑怯な行為でしかない。

魔族なら怒りを覚えて当然なことで、これは戦法ではなく、犯罪に近いとみなされる。

だからこそ、アーコットはガムロをマヌケとは見なかった。

人類が卑怯なだけだと、そう思った。

「私が来た以上、生きて帰れるなんて思うなよぉっ！？」

「姉御っ！」

部下が怒鳴り声を上げた。

「撤退中の敵部隊がサーチにひっかかりましたっ！」

「よくやった！どれだ！？」

「１０時方向。騎数は５」

「よしっ、容赦も礼儀もいらねぇ、袋だたきにしてやんなっ！」

「応っ！」

敵もこっちに気付いたんだろう、ビーム攻撃が数本、飛んできた。

「んなものぁ」

アーコットは舌なめずりすると、ブースターを開いた。

「恐くもないわっ！」

接近するのは、灰色に塗装されたデミ・メース達。

しきりにビーム攻撃を繰り替えすが、アーコット率いる部隊を止

めるには役不足だった。
「卑怯者は」
アーコットは、撤退の動きを見せた編隊の前に立ちはだかった1騎に狙いを定め、襲いかかった。
「卑怯者らしく、死ねぇっ！」

――ついてないにも程があるっ！
灰色のメサイア――“鳳龍改”でアーコット達の前に立ちはだかったのは、二宮だった。
麗菜殿下が、伊那戦線での、独断による暴走で帝の心証をかなり損ねている。
なんとか、戦線で支援することで、その辺を何とかしたい。
宮仕えの辛い理由で、部下と共に、対大型妖魔戦に参加した帝の支援を買って出た帰りだ。
もしかしたら、泉達の支援を得ることが出来て、そのスコアを帝に差し出すことで、麗菜殿下への帝の心証は逆によくなるのでは。
自分が、そんな甘い考えを持っていたことは認めよう。
だが、だからといって、その罰としてこの数のメースで襲いかかってくるのはないだろう。

しかも――
ギィンッ！
斬艦刀が敵の一撃をギリギリで止め、二宮は驚愕に目を見開いた。
「この動きっ！」
この敵を知っている。
鋭すぎるこの動きは、一度味わったら忘れることなんて出来はしない。
間違いない。これは――
「あの魔族かっ！」

「こいつぁっ！」
同じタイミングで、サライマの中ではアーコットが歓声を上げていた。
「間違いないっ！」
血走った肉食獣のような目を輝かせ、
「やっぱり貴様かぁっ！にのナントカぁぁっ！」
歓喜を叫びつつ、“サライマ”の光剣を振り回した。
目の前の白いデミ・メースは、最小限度のシールドの動きでそれを受け流し続ける。
その技量が、倒す価値のある敵――あの女である証拠だ。
全身にアドレナリンが駆け回る感覚に、アーコットは性行為にも似た興奮を感じてしまう。
「この前の仕切直しぃぃっ！」

「こんなことしてる場合じゃないのにっ！」
メース達の向こう側を魔族の大軍が通過していく。

アーコットの姉御のエモノに手を出したら殺される。
姉御が襲ってるから無視していい。

アーコットの部下達は、そう判断して、二宮の部下達を追跡しているのだ。
止めなければならない。
それを目の前に見ながらも、襲いかかるメースが手一杯だ。
褌子だけが敵を単独で切り倒しまくっている程度。
冗談じゃないっ！
「くそっ！」
剣の応酬を繰り広げながら、パートナーのMC（メサイア・コントローラー）、青山唯中尉に訊ねた。

「近くで使いモノになる部隊は！？」
「いい質問です」
視線もほとんどの神経も、コントロールパネルにかかりっきりの唯は答えた。
「泉大尉達がすぐ近くに」
「却下だ」
「えっ？」
即座に断言され、一瞬だけ、唯の指が止まった。
騎体が途端に、ガクンッ！と激しく揺れた。
「くっ……」
「す、すみませんっ！ですがっ！」
「教え子に下げる頭なんてないっ！」
「はっ？」
「ここで頭を下げて見ろ！絶対に、二度とあいつらの前で教官面出来なくなるぞ！私にはそれがわかるっ！」
「つ、つまらい意地を！」
唯は怒鳴った。
「他にはラグエル隊、これも教え子ですよね？」
「他は！」
「部下を呼び戻して下さい」
「無理だっ！」
「緊急脱出の許可を」
「薄情者っ！」
「艦砲は！信濃は！」
「落ち着いて下さい――巻き込まれたいんですか？頼めるワケないじゃないですか」
「くそっ！」
「この状況で生きていること自体が奇跡ですよ」
唯はそう言うが、二宮はそれを否定した。
「違う」

「どう違うんです？」
「生き残ったら――――それこそ奇跡だ！」
「死ぬのが前提ですか……あなたは」
「少しはっ！」
アーコットの突き技を“鳳龍改”の上半身をひねらせることでかわし、
「決めさせろっ！」
斬艦刀の突き技を逆に繰り出すが、アーコットもまた、紙一重でそれをかわしてのける。
「ちっ――――やるっ！」
「はぁっ……」
唯はため息をつくと、ポツリと言った。
「しょうがないなぁ……」

「いたっ！」
逃げ遅れた騎がある。
どうやら、二宮教官らしい。
その通信を真っ先に受けたのは、美奈代達支援のために急行中のラグエル隊だった。
パワーを全開にすれば衛星軌道まで飛び出すことの出来る、空の支配者（Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒ）は、主の母親を護るため、エンジンを咆哮させた。
「見えたっ！」
一葉が叫ぶ。
「あそこっ！」
二宮とオレンジ色の騎が死に物狂いで戦う光景が、手に取るようにわかる。
「お姉、どいて！狙撃する！」
「双葉姉っ、下手に撃てば危険だよ！教官を巻き込んじゃう！」

「じゃあどうすんの！？」
「――――任せてっ！」
ギィィンッ
光葉の声に反応したように、光葉騎の近接用衝角（ラム）が光り出した。
「ど、どうするの、っーか、光葉、何、その装備っ！」
「へっへーっ。いいでしょ」
光葉は自信満々の顔で言った。
「白石大尉に作ってもらったんだ♪斬艦刀の理屈を応用した衝角（ラム）」
光葉は楽しげだ。
「懐かしいなぁ……これ、ゲーセンで何回やったっけ？」
「ちょっ……何するのよ」
「もうっ！うるさいなぁ、お姉は。見てればわかるよっ！」
「ち、ちょっと、待ちなさいっ！」
双葉の制止を振り切るように、光葉はそのままパワーを全開にした。

ギィンッ！
「ちいっ！」
ついに二宮騎はアーコット騎と鍔迫り合いにまで追い込まれた。
「どうしたにのナントカぁっ！」
ギギッ
ギンッ
斬艦刀と光剣が悲鳴を上げ、嫌な汗が二宮の額を流れた。
「――――くっ！」
「隊長！助太刀しますかっ！」
「来るな馬鹿野郎っ！」
不思議とアーコット騎からの通信だけはやたらとクリアに入る。

目の前のメースに増援が加わろうとしている。
この敵からの攻撃をしのいでも、増援に切り刻まれる。
「これは私のエモノだ！手ぇ出したらぶっ殺すぞ！」
ちらっとメースの目が横を向いた。
そこが二宮のねらい目だ。
「このぉぉおっっ！」
脚払いをかけ、アーコットのバランスを崩そうとする。
だが――
「甘いっ！」
アーコットは二宮騎の脚を見事なまでに止めてのけた。
「まだっ！」
体勢をわざと崩し、ショルダーアタックをかける。
大した反撃ではないが、それでも間合いを開くには他に方法がない。
「やるっ！」
アーコットが後退し、再び襲いかかろうとしたその時だ。
「隊長っ！」
「何――ぐっ！」

「ひっさぁぁぁつっ！」
パワー全開で突撃してくるＦｌｙ　ｒｕｌｅｒ。
先端から、コーン状態で光輝く衝角（ラム）がアーコット騎をまともに捉えた。
「ひき逃げアタァァァックッ！」
ぐしゃっ
とても金属音とは思えない音がして、オレンジ色のメースが吹き飛ぶ光景を見た一葉は、たまらず叫んだ。
「こんなの反則っ！」
「勝てば正義だもんっ！」

「そういう理屈じゃなぁぁいっ！」

反攻　第十五話（後書き）

作者、ついに壊れました（（＾ｏ＾）ばんざーい）
お花畑がとても綺麗です。花占いなんてやって、幽香さんにぷちっ
てやられたいなぁってのが願いです♪三途の川で小町にあって、閻
魔庁で映姫様に叱られたいなぁっ！あははははっ！（号泣）
……別にヒ○ポンやってるんじゃないですけどね。そんなこんなで
書いてます。感想いただければうれしいです。よろしくお願いしま
す！！

インターミッション

“鈴谷（すずや）”に収容された二宮は、久しぶりの艦内の空気を深呼吸すると、ぽつりと言った。
「……美夜の匂いがする」
「教官っ！」
かつての教え子達が、血相を変えて飛んできた。
「お怪我は！？」
「ない」
二宮は、脚部を応急用固定装置にロックされた“鳳龍改”を見上げた。
背中にある二枚のバインダーのうち、左側が大きく破損していた。
「――敵の爆撃に巻き込まれた時の損傷だ。ブースターがまともだったら、あんな敵、遅れをとることはなかった」
「教ぁぁぁ官んっ！」
幼い声の三重奏がハンガーに響いた。
“鈴谷（すずや）”の甲板に無理矢理着艦したＦｌｙ　ｒｕｌｅｒから降りた神城達が文字通り飛んできた。
「生きてますかぁっ！？」
「大丈夫だ！」
二宮は右手を挙げて見せた。
「この通り、足もある！」
「ふぇぇぇっ、よかったぁっ！」
「泣くな。艦橋へ挨拶に行った後で、少し話しでもしよう。それでどうだ？」
「はいっ！」

「……まぁ、いろいろあって」

艦橋で世話になる挨拶を美夜と交わした後、食堂に移動した二宮は、教え子達を前にして、少し嬉しそうに見えた。
「内親王護衛隊（レイナガーズ）を代表して、陛下の支援に向かった帰りにあの騒ぎだ」
「救援要請を出して頂ければ」
すぐ間近を飛んでいたというのに、二宮の存在に全く気付くことが出来なかった美奈代は、悔しそうに神城三姉妹を見た。
まるで、初めて褒めてもらった子供のように目を輝かせて喜んでいる三姉妹が羨ましい。
「まぁ、色々……だ」
二宮はそう言うと、一葉に訊ねた。
「一葉。私と交戦していたアレをぶっ飛ばしたのは？」
「光葉です」
「ああ……光葉、あれは一体？体当たりしたように見えたが」
「見えたんじゃなくて」
光葉は自信満々に言った。
「体当たりしたんです！」
「騎体が壊れなかったか？向こうは、どうひいき目に見ても大破は避けられていないぞ」
「全然ですっ！この前の改修を受けた時、白石大尉が開発して津島中佐にボツ喰らっていたバリア転用の攻撃システムを積んでもらっていたんですよ」
「ん？」
「Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒは、対ＭＬ（マジックレーザー）用と対物用を兼ねたバリアを展開出来ます――飛行艦で言えば、ＡＲＦＧＦ、全周囲フリー・グラビティ・フィールドですけど……私達の騎って、これが基本的にはカプセル状態に展開されるんです」
「まぁ……ＦＧＦならカプセル状態に展開するのは普通だな」
「それを、円錐状に展開して、しかも、先端部の力場を強めると、攻撃兵器に転用できるって」

「それでなんでボツになったのよ」
一葉が訊ねた。
「かなり有効な兵器な気がするけど」
「それがね？貴重な騎体で体当たり攻撃なんて、安易にされてたまるかって」
「……成る程？」
双葉はお茶を飲みながら頷いた。
「センサーやエンジンやら……普通のメサイアの数倍、下手すりゃ飛行艦1隻以上するもんねぇ。私らの騎体って。そんな騎体で平気な顔して体当たりするなんて」
苦笑気味の顔をして、双葉は言った。
「そんなことするのは、光葉位だけどね」
「むうっ、何だよぉ！」
ぷうっ。と、光葉は頬を膨らませた。
「一人だけ、達観したような顔してぇ！」
「私やらないし、一葉お姉がやるとも思えない――ほらね？」
「……なんだよぉ」
ニヤニヤする双葉に、光葉は言った。
「オトコ出来たからって、一人だけそんなのズルいじゃん」
「ば、バカッ！」

「「「はぁっ！？」」」
真っ赤になった双葉が、慌てて光葉の口を押さえようとするが、後の祭りだ。
その場に居合わせた全員の視線が双葉に集中する。
「ち、ちょっと……双葉？」
さつきが、信じられない。という顔になって言った。
「あ、あんた……いつの間に？」
「あ、あはは…！」
双葉は笑って誤魔化そうと思ったが、そうはいかなかった。

皆の視線があまりに真剣すぎて、誤魔化せないと悟ったのだ。
「あ、あのね？」
双葉は小さくなって言った。
「爆撃隊にいる、志願兵の男の子なんだけど……」
「草笛君だよね？草笛光孝君、１７歳」
「光葉、うるさいっ！」
「ちなみに航空二等兵♪」
「お姉までっ！」
「へえ？で、どういう馴れ初めで」
「あ、あのね？」
「うんうんっ」
いつの間にか、居合わせた女達はテープレコーダーやメモ片手に真剣になっている。
「南シナ海方面に私達、出ていたでしょう？その時……光孝君……じゃなくて、草笛二等兵も陸軍の爆撃機に搭乗して、同じように派遣されていたんだ。
けど、偵察飛行中に中華帝国軍の戦闘機にやられて、洋上で墜落しちゃった。
漂流中のボートを哨戒任務に出ていた私が拾って、それで、基地まで送り届けてあげたら」
「一目惚れなんだよねぇ」
「どっちが！」
美奈代の問いかけに、
「馬鹿」
医務室から復活したばかりの都築が言った。
「光葉に決まってるだろう？逆なら警察沙汰だ」
「どういう意味だよ、都築っち！」
激昂する双葉を抑えながら一葉が言った。
「まぁまぁ……実は、その通りなんだよ」
「は？」

「つまり、光葉が惚れられたっていうか」
「ロリコンか？大丈夫か、そいつ」
「都築っち……私も殴るよ？姉として」
「……で？」
「ロクに挨拶もしないで、その時は別れたんだけど、二、三日したら、私達がその光孝君のいる航空隊所属の基地へ移動になってね」
「そこでじっくり再会したってワケだぁ」
さつきが感心した様子で言った。
「成る程ぉ――――それで？」
「で、ありがとうから始まって、昼飯の時に配給のジュースなんてもらっちゃったりして……んで、気がついたら、意気投合っていうか、お互い……その」
もじもじしながら、双葉はやっとのことでそこまで言った。
「キス以上はしてないって」
「本当に！？」
「うん。お前の部下が、メサイア隊の女の子にちょっかいだしているとか、憲兵隊から通報が入って、航空隊の隊長さんに締め上げられたんだよ。光孝君」
「幼女誘拐と間違えられたんじゃねぇのか？――――痛ぇっ！」
「真っ！」
「……ああっ。都築っち、嫁さん見つけたんだ」
「一葉、よくわかるな」
「まぁね♪それで、隊員全員の前で双葉が好きだとか、大声で言わされたり、告白した時も戦勝報告会とか言って」
「爆撃護衛任務、双葉姉、人が変わったみたいになったもんねぇ。それ以来」
「うん。対空陣地、一人で４０近く潰したんだよ？」
「あれはすごかった」
「愛の力の偉大さを、私は知ったよ。双葉」
「……っ！」

「恥ずかしがらなくてもいいじゃない。マニラでの初デートの時、衛門から爆撃隊全員の万歳三唱で送られたって」
「……で」
さつきは訊ねた。
「“した”の？」
「まだだよっ！」
双葉はたまらず叫んだ。
「まだ、手を握った程度だもんっ！」
「うわぁ……なに、その純愛」
「ううっ……なんでみんなして、恋って言うと、すぐ“ソッチ”に行くの？」
「……すまん。みんなして、なんで俺を見るんだ？」
「都築っちはビーストだからしかたないけどね？」
一葉が嬉しそうに言った。
「双葉は奥手な上に、光孝君もウブだから。隊長さんも、タコ艦長もお似合いだって認めてくれているんだよ？」
「ああ……いいカップルの誕生だな」
二宮は何度も頷きながら言った。
「私も、そういうのを聞くと嬉しい」
「あ、ありがとうございます」
「……あの」
美奈代が訊ねた。
「どうして、私を睨むんですか？」
「オトコをハシゴするよりマシだろう。何だ、男女問わず、何人と浮き名を流したんだ？」
「へ？」
光葉が目を丸くした。
「み、美奈代っち、まさか？」
「……いろいろあったんだ」
「……ねぇ、美奈代っち？」光葉は、周りをきょろきょろ見回した

後、訊ねた。
「あのね？さっきから気になってるんだけど」
「ん？」
「うんとね？」
光葉は、居合わせた全員の顔を見た後、
「理沙っちは？」

周囲に、気まずい沈黙が流れた。

「あれ？ああ、怪我したの？医務室？」
「……いや」
美奈代は、視線を外し、テーブルに置かれた手だけを見つめながら言った。
「あの」
「……？」
「美奈代っち？」
きょとん。とした双葉と一葉がお互いの顔を見合わせた。
「……もう、いないんだ」
美奈代は、やっとの思いでそう言った。
「……へ？」
言われた三姉妹は目を丸くした。
「まさか、辞めちゃったの？」
「……」
美奈代は、唇を噛み締めた。
部隊では、あの島から帰ってからというもの、宗像の話はほとんど禁句に近い空気があった。
皆が、美奈代を気遣って、あえて話題から外していたのだ。
それを、部外者となった三姉妹に察しろという方が無理だ。
ただ、美奈代としては、あっさりと、戦死したのか？とでも訊ね

られた方が気楽だった。
「あいつは行方不明だ」
「――まさか」一葉は言った。
「あの理沙っちが？」
「任務中に騎体を放棄――生死不明だ」
「……ＭＩＡしたなんて、広報にも」
そこまで言いかけた双葉は、その次を悟って思わず口元を抑えた。
「まさか」
「……そのまさかだ」
美奈代は頷いた。
「あいつには脱走容疑がかかっている。いいか？かつての同士とはいえ、今、あいつは近衛から正式に、容疑者として認定されている。階級、勲章、その他、近衛騎士としての地位は全て凍結。登録も抹消されている――わかるな？言っている意味は」
「……意味は」
長い沈黙の後、三姉妹を代表する様に、一葉は言った。
その細い肩が、震えていた。
「わかる――でも」
唇を噛み締め、
「信じたくない」
「皆、同じだよ」
美奈代は頷いた。
「何かの間違いであって欲しい。生きていて欲しいと、そう思っている」
「そんなの……」
「瀬音の兄貴が死んじゃったっていうのに……」
「……ああ」
美晴がハンカチで目元を抑えた後、
「南方で任務についた後、交通事故で亡くなったと聞いているけど、何？一葉ちゃん達もお世話になったの？」

「うん……優しくて豪快な人でね？“俺のことは兄貴と呼べ！”って……さっき言った光孝君にコンドームの使い方レクチャーして、光葉に殺されかかったのは、いい思い出だよ」
「お姉、ぶち切れたもんねぇ。針でこっそり穴を開けておけとか、一回使ったら、次は避妊しなくて済むとか、よりによって、お姉の前で言うもんねぇ。あの人」
「あれだけ言われて、なんで使わなかったんだろう。光孝君」
「優しいんだよ。兄貴は鬼畜だったけど」
「ハメ撮りしたら、高く買うってのは……さすがにね」
「あの馬鹿……」
今まで沈黙していた二宮は引きつった顔で言った。
「そんなことを？」
「こんなのは公開羞恥プレイだとか、ビデオ押しつけて、しっかり撮ってこいっ！爆撃隊の連中と上映会開いてやるからな！とか言ってたし」
「編集して裏ルートに流すとか、タコ艦長と交渉してたって聞いたよ？」
「死んで良かったね」
「うん。あのクソ兄貴」
「……」
「……何だ、この宗像と、瀬音少佐。二人が不幸になったというのに、こうも感じ方が違うってのは」
「それでいいんだ」
二宮は頷いた。
「自業自得だ……ん？」
二宮は、じっ。と自分を見る美奈代の視線に気付いた。
何かを迷っている。
そんな目だった。
「……どうした？」
「え？い、いえっ」

美奈代は視線をそらせた。
「？」
美奈代がトイレに席を外した後だ。
「泉」
トイレから出てきた所で、美奈代を呼び止めたのは二宮だった。
「――ちょっと話がある」
そう言って、美奈代の腕をとると、通路の影に美奈代を引っ張った。
「さっき、何を言おうとしていた？」
「えっ？」
「瀬音少佐の件だ」
「……あ、いえ」
美奈代は、また、二宮と視線を合わせなかった。
「恋人と聞いていたので」
「……それだけか？」
「……」
「私はお前の母親だぞ？」
二宮は美奈代の肩に手を置いた。
「親に隠し立て出来ると思うな」
「……」
「……言ってみろ」
「……」
美奈代は、決心した表情で、二宮と視線を合わせた。
「……本当に」
「ん？」
「本当に、瀬音少佐は亡くなったんですか？」
「――どういうことだ」
「教官は」
美奈代は答えた。

「――敵が騎体を変えてもわかるってことありませんか？つまり、全然別な戦場で交戦した相手なのに、動きのクセっていうか、そういうのから、相手の騎士に想像がつくとか」
「……」
何故か、二宮の顔が強ばった。
「……どこで、誰のことを言っている」
「この前、福井湾に侵攻して、魔族軍のメース1騎と交戦しました。動きにクセがあって、しかも、3騎編隊のうち、単騎で残るというか、状況的には2騎を前進させて、自分だけ残って私を喰い留めようとした。私はそう判断しました」
「……それが？」
「騎体の捻り方……右から左、左、右へのステップ。ブースターの開くタイミングまで、今まで交戦した魔族軍の騎体のクセではありません。あれはむしろ」
「むしろ？」
「……あの」
「かまわん」
「……近衛の」
美奈代は、覚悟した顔で言った。
「近衛の機動教本に、そっくりなんです」
「……」
「しかも、瀬音少佐って、剣を構える時、必ず下に構えるし、斬りからトドメは突きで仕留めるっていうのが、俺の信念だとか何とか、そういうパターンが体に染みついているって、前に本人から聞いたことが」
「その動きも？」
「データはとってあります。ご覧いただければ、私がどうして、何を疑っているかはわかっていただけると」
「……そうか」
ポンッ。

二宮は、美奈代の肩を叩くと、耳元で訊ねた。
「その話は、誰にした？」
「誰にも」
「……よし。戦闘データを見せてくれ」
「――――はい」

同じ頃、“鈴谷（すずや）”に着艦した部隊が2つあった。
かつての４４期生の生き残りで編成された第2大隊第6中隊。
指揮官は、九死に一生を得た、かつての染谷の副官、東中尉。

そして、土浦涼菜率いる紅龍隊、つまり、染谷だ。
かつての同級生、そして部下達である東達にとって、降格されたとはいえ、染谷は頼るに値した、そして、今でも頼る価値のある相手だ。
紅龍隊とすれ違う時に見せた敬礼は、単なる儀礼ではなかった。

「いいのかい？」
無重力地帯である通路を流れながら、涼菜は訊ねた。
「挨拶もなしで」
「後でやっておきますよ」
「ったく……」
涼菜は見事なまでにボリュームのある髪をかきあげた。
「やりづらいオトコだねぇ。今の若造っては、あんたみたいなヘンクツな野郎しかいないのかい」
「……何とでも」
「どんな面して、女たぶらかしたかはしらないけどさ。せめて上官に対する愛想ってものくらいは覚えて欲しいもんさ」
「……失礼」

「ああ。とんだ失礼なオトコさ。お前さんは」
涼菜はクスクス笑って言った。
「え？綾の件で、ちょっとは腹割って話す気になったかい？」
「……別に、関係ありません」
「ふん……着陸した途端、真っ青になってコクピットから飛び降りたそうじゃないか」
「……」
「あんたは、本当は情に厚い、良い奴なんだよ。さっきの連中は、それを知っている」
「……」
パンッ
涼菜の手にした戦闘服のグローブが、軽く染谷の頬を叩いた。
「殻に籠もってるのはやめな！」
涼菜は怒鳴った。
「あんたは、自分が気の毒だって酔っているだけさ！そんな面で恋人の仇でもとるつもりかい！？辛気くさい面したら、死んだ連中が帰ってくるとでもいうのかいっ！」
「……」
不意に、涼菜が染谷の頬を両手で掴むと、
「っ？」
染谷は、息が出来なくなった。
唇を、涼菜の唇が塞いでいる。
二人は、キスしたまま通路を流れていった。
「……さて？」
通路の壁にぶつかって、二人は初めて離れた。
「大人のキスの味はどうだった？坊や」
「……」
染谷は、無言で唇を拭った。
「――成る程？」
ニヤリと、涼菜は口元で笑った。

「自分は坊やではありません」
「言っているあたりが、すでに坊やなのさ」
「……っ」
「その恋人と、何回セックスした？」
「……してません」
答えてから、染谷はハッとなった。
「部下のプライベートです」
「ふん……私ゃ、女として来ているんだ。いいかい、ネンネの坊や？この世界に生まれ猛れば、キャベツ畑でコウノトリを待っていても仕方ないんだ。そのためにオトコとオンナってのがスるこたぁ一つだ――セックスだよ。知っているかい？童貞君？」
「……」
「知らなきゃ教えてやろう。セックスってのはだなぁ」
「知ってます」
「へえ？知っている？誰相手に？あの泉大尉とかいうのかい？」
「知識として知っているんです」
「だから、あんたは頭でっかちの坊やなのさ。大人の世界で、知ってるってのは、体が覚えているってこと、経験したことを言うのさ。知識で知っているなんて、知っているウチに入らない――つまり」
突然、涼菜は染谷の股間に手を伸ばし、染谷自身を力任せに掴んだ。
「ペニスガードに感謝しな」
クスクス笑いながら、涼菜は言った。
「“ここ”がオンナの中に入らない限り、あんたはセックスを知っているとは言えないのさ。それが大人のルールだ。わかったかい？坊や」
「それ、やめてください」
「手を放す？それとも、坊や呼ばわりかい」
「両方です」
「ちょっとは喜びなよ。何？一人も経験ないのかい？泉大尉って、

あの娘は？悪い娘じゃないと思うけどねぇ」
「関係ありません」
「へえ？あの娘、そんなにつまらなかったか？
にしても、あっさり他のオンナに乗り換えた挙げ句、そのオンナにもヤる前に死なれたってのか――あんたもマヌケだねぇ」
「中尉と自分では」
染谷は肩を振るわせながら言った。
「価値観が違うんです」
「結果は同じさ――スるこたぁ、一つだ。何かい？ケツ穴で子供作る気かい？それとも、コウノトリさんかい？」
「――中尉」
「ヤれる時にヤっておく。チャンスは生ものさ。いつまでも死人に操ささげてるんじゃない。そんな男は、女からすれば気持ち悪いだけだ」
「……教訓と受けておきます」
「ふん――なら、私のベッドへ来な」
涼菜は、もう一度、染谷にキスした。
「セックスは、一時の感情でも十分出来る事ってことを教えてやろう」

「隊長っ！」
染谷達が部屋に消えた後、通路を流れてきたのは、美奈代達だ。
戦闘データを見た後の二宮は、終始無言で、美奈代はその後をついて移動するだけだった。
その二宮に、若い女の声がした。
「ん？」

二宮は器用に空中で制止して、床に降り立った。
「奈美？」
「えっ？」
「部下の声がした」
美奈代が耳を澄ますと、確かに声がした。
「隊長ぉぉっ！」
「ふぇぇんっ！助けてくださぁぁぁいっ！」

「助けて？」
そんな声に、思わず顔を見合った二宮と美奈代。
その二人の前、丁度、通路の角を、ジタバタと犬かきで泳ぎながら、女性士官達が流れてきた。
「お前らっ！？」
二宮が一人一人を引っ張って床に降ろしてやる。
ワッペンは内親王護衛隊（レイナガーズ）のそれだ。
「この子達っ！」
美奈代はそれを見て驚くしかない。
外見は、少なくとも自分とそうは違わない若い女の子達ばかりだ。
「地上勤務が多いから」
二宮は言った。
「こういう飛行艦での移動は慣れていないんだ」
「ああ」
「……で、どうしたんだ」
「隊長が、この艦に降りたっていうから」
一人が涙を拭うと、別な士官が言った。
「様子見てこいって、殿下に命じられて！」
「そしたらぁ！」
「ん？」

「お姉ちゃぁぁぁん♪」

「来たぁぁぁっ！」
女性士官達は、一斉に二宮の背後に隠れた。
「た、助けてくださぁぁぁいっ！」
「何？」

角を曲がってきた“モノ”を見た途端、さすがに美奈代も呆れるしかなかった。

ゲヘヘッ！
「逃げなくてもいいじゃん！」
「仲良くしようよおっ！」
「ね、ねねっ！？メールアドレス教えてよ！」

そんな嫌らしい声を上げながら、壁や天井を這ってくるのは、若い男達――美奈代と二宮は、その顔に見覚えがあった。

「……貴様等」
二宮より前に立つ美奈代を見た途端、男達の動きが止まった。

ゲッ！
カエルを踏みつぶしたような声が本当にした後、全員の顔が青くなった。

い、泉だ。
鬼の泉だ。

そんな囁きが聞こえた。
美奈代の額に青筋が走る。

あの、染谷さんに振られた。
フィアちゃんに比べればブスだけどさぁ。
ああ。おれもそう思う。
気の毒っていうか、いろいろ残念な、あの泉だ。

いや、ここは愛想よくしておけ？相手は金鵄持ちだぞ？
ああ。殺されるな。
素手でメースを撃破するっていうしな。
女捨てると、人間、ここまで強くなるのか。
恐いなぁ。

「……おい」
地獄の底から聞こえるような声で、美奈代は言った。
額に青筋が走り、ニコリと笑った笑顔がさわやかなはずが、恐い。
腕組みに仁王立ちの姿勢で、美奈代は階級章を軽く指で突いて、
男達に命じた。
「とりあえず、お前ら、そこに正座しろ」

欲望と人道と

●永田町、首相官邸

「えーっ、今回の反攻作戦における軍の働きは、えーっ。大なるものがあります」

会議室の円卓に並ぶ民州党幹部達の中で、官房長官を務める嶋田が、すっかりはげ上がった頭を撫でながら書類を読み上げる。

「えーっ、今回、労いと慰労の声明を総理の御名前で発表しましたが、それだけでは不十分という指摘も在野からあり、そこで総理から特例として、この作戦従軍兵士に対して、特別に、従軍記念章を下賜されるのが、えーっ、適当かと存じます」

「よろしい」

最もデカイ椅子にふんぞり返る岡山首相が鷹揚に頷いた。

「私の名前で感謝声明を聞くだけでもありがたいというのに、記念章まで下賜されるとは望外の喜びだろうなぁ」

「はっ。まさにその通りで」

「原価はいくら程だね？大蔵大臣」

「はっ。大量生産しますので、一個当たり１０円ほどです」

「兵隊風情にくれてやるには、十分すぎる金額だな」

「ごもっともで」

「兵隊とその家族からの有り余る感謝の念を私一人で受けるのも悪いだろう」

岡山は笑いながら言った。

「陸海軍共に、何か特別な報償を与えておくと良い――お前達の首が繋がったのは、彼等のおかげだろう」

「……はい」

新任の陸軍大臣蓮川公夫は、落ち着かない様子でメガネを正した。

「全く、前任の鈴木君の時もそうだったが、君も前任者の失態を繰り返すようだったら、私も最終的には覚悟するところだったわ……

ところで、海軍大臣？今回の作戦で活躍した海軍の戦艦部隊だが……」

「はっ。敦賀湾に侵攻した魔族軍部隊に対し、大打撃を与え、実質、福井から撤退に成功したのは、海軍戦艦部隊の功績と言っても過言ではないでしょう」

「伊那の方ではどうだったのだ？航空部隊が随分と活躍したとか」

「はっ。今回、伊那方面で最も活躍したのは、開発中の制空戦闘機部隊“蒼電”であります。

“蒼電”は、対飛行系大型妖魔迎撃に特化した高高度戦闘機で、大威力の３５ミリ機関砲を装備。現行の烈風では撃破が困難だった重爆撃タイプの妖魔でも、ほぼ一撃で仕留めることが出来ます。

この事は、同機配備部隊が今回、陸軍陣地上空へ侵入する魔族軍高高度爆撃部隊を迎撃、完全撃破に成功したことで照明されたと判断しております」

「素晴らしい！」

岡山は、海軍大臣の報告に満足そうに頷いた。

「まさに帝国の空の守護神というワケだ！」

「はい」

「ところで、この戦闘機は、何機配備されているのだね？この帝都の守りは任せられるのかね？」

「いえ。残念ながら、今回、戦線に投入した試作騎の部隊配備分、２４機のみとなります。海軍としましては、早急にこれを量産化、拠点防衛中心に、大量に配備したいと考えております」

「大変結構。海軍は頼もしいな。ところで陸軍はどうなっている？帝国本土だぞ？防衛は誰の仕事だと思っている？」

「あ、はっ……えーと、陸軍としましても、同種類の大型妖魔には脅威を持っている点で海軍と共通しております。そこで、高高度向け戦闘機が現在、鋭意開発中でございまして……再来年、いや、来年……今年の年末までには完成するか……と」

「蓮川君……」

「は、はっ？」
「君は馬鹿かね」
「はっ？」
「海軍がこれほど素晴らしい戦闘機を開発しているというのに、一々、何故、戦闘機を開発する必要があるというのかね？この戦闘機を陸軍も導入すれば、カネも時間もムダを省くことが出来るだろうが。私はね？ムダは嫌いなんだよ。蓮川君、君はどうして、この国難に際して、血税をムダに使おうとしているのかね？」
「も、申し訳ございません。私の不徳とするところであります。陸軍は早速、新型戦闘機の開発を中止し、“蒼電”の制式採用に向けて前向きに取り組みたいと……」
「そうしてくれまたえ。全く……ムダばかりで非効率なことは排除すべきだと、私は新人の頃から主張してきたのだ。その辺を分かってくれないとねぇ」
「はっ、はい！」
「ムダを省くには規格を統一にすることだ。陸海軍共に、今度の対妖魔用大型歩兵銃の規格を統一した事例を、君はもう忘れたのかね？」
「はっ。あの」
「陸海軍は、もっと私の考えを理解して、ムダの削減に努めてもらいたいものだ」
「無駄の削減ですか……」
永野海軍大臣が、何度も頷きながら言った。
「ごもっともです」
「うむ……私が政権をとってからというもの、貴族院は無期限で機能を停止、議会を閉鎖することで議員歳費の４０％を削減した。議会が二つもあること自体が無駄なのだ。あれだけでも画期的だと思っていたが、もっと画期的な方法として、私は大なたを振るった」
岡山は、熱弁を振るいながら、両手を組んで頭上に掲げると、えいっ！という気迫と共に、何かを振り下ろす仕草をした。

「議会そのものを閉鎖し、議員歳費そのものをさらに削減した。
与党関係者以外の議員は、はっきり不要だとして、兵役で言えば予備役の立場に追い込み、これによってさらに議員歳費の大幅削減に成功したのだ！
選挙も不要！
選挙に必要なポスターも、インク代も、ウグイス嬢を雇う賃金も、一切不要！
どんな法案だろうと予算案だろうと、これまでない程効率的に審議し、必要なら1分で可決出来る！
素晴らしいっ！
これほどの無駄の削減をやってのけた日本の首相は、私だけだ！」
居合わせた大臣達から一斉に拍手が上がった。
「こうやって、無駄なものを廃止したり、似たようなものをまとめたりして、規格や制度を統一化していけば、無駄の削減に繋がり、お金も時間も浮くのだよ。無駄を削れば、財源なんていくらでも出てくる。そういうものだ」
「確かに」
嶋田官房長官が頷いた。
「先生のおっしゃることは常に正しいっ！」
「……所で、蓮川君？日本に軍隊が3つもあること自体が、間違いとは思わないか？」
「……は？」
唐突に訊ねられた蓮川大臣は、豆鉄砲を喰らった鳩のように目をキョトン。とさせた。
「軍隊なんて、一つにしてしまえば効率的だよな？」
「し、しかしっ！」
蓮川はやっと意味がわかり、真っ青になった。
「わ、わが陸軍は、先生のお役に立っているものと、信じておりま

す！本当ですっ！将兵は戦線で必死の功績を挙げ、憲兵隊は一部警察の代わりとして活躍、国民の生命財産の保護に全力を」
「……そうだな」
岡山は頷いた。
「陸軍のおかげで、我が国は魔族軍の侵攻に耐えているのだ」
「はいっ！」
「……クーデターまではな」
「……」
「反乱軍首脳部が未だ生死不明とはどういうことだ？しかも、近衛めが、中華帝国軍と政府の密約を公表して、私に退陣を迫っているぞ？」
「も、申し訳ございません。憲兵隊を増強して、反乱軍残党の狩りだしには全力を投じている所でありますが……反乱軍を手助けするテロ勢力が暗躍を重ねており、手を焼いておりまして」
蓮川は、すっかり汗を吸わなくなったハンカチで額を拭いながら言った。
「陸軍としましては……その……さらに軍を増強し、早急に治安回復をはかる所存で……」
「なら、君の全てを賭けて、全身全霊で対処したまえ」
岡山は冷たく言い放った。
「陸軍が反乱軍の主力だということを忘れるな？君のためだ」
「か……かしこまりました」
「大変結構だ。海軍大臣」
「――はっ」
「一体、帝国を爆撃する妖魔達は、どこから飛来しているのかね？一部報道では、国外と聞くぞ？」
「実は……その通りです」
海軍大臣は頷いた。
「モンゴル砂漠から飛来していることが、すでに判明しております」
「……成る程、それで？」

「海軍としては、日本海側に防空網を構築したいのは山々なのですが、福井、石川、新潟と、日本海側の主要な土地はすべて魔族軍に奪われ、しかも、浮遊城なる存在が日本海上空に存在している現状、これの事前襲来を察知し、満足に迎撃する方法はありません」
「何が問題だね」
「日本海側の土地です。防空監視網を構築するためには、どうしてももっと日本海側の土地が必要です。三沢や、岩国から離陸した爆撃機からの監視だけでは、防空の目としては機能が全く足りません」
「……ふむ」
岡山は満足そうに頷いた。
「よし……官房長官」
「はっ？」
「伊那での勝利もある……魔族軍の実体は、かなり弱っていると見てよいのではないか？」
「……それは」
官房長官は、しばらく考えた後、頷いた。
「アフリカでの後退の件もあります。今回、叩いただけで退いたことを考えても、否定する要素はありませんな」
「だろう？」
岡山は、ニヤリと頷いた。
「……というわけだが、蓮川君」
「は、はい」
「日本側の土地は必要だと思わないか？」
「は？そ、それは」
「まぁ、昔からの我が国固有の領土だ。必要と答える以外にはないだろうなぁ」
「はい」
「しかも、そこが領土だというなら、そこを守るのは、陸軍の役目。失えば陸軍の怠慢なワケだ」
「……」

蓮川は、何かとてつもなくイヤな事をいわれそうで、口をパクパクさせるのがやっとだ。
「陸軍として、この状況に速やかに対処して欲しい。無論、海軍と協力するもよし……独力でやるもよし……」
岡山は席を立ち上がった。
「君の判断と責任で、善処してくれたまえ」

「ずいぶんな不始末だな、ズルド」
「言ってくれるな……」
ドスッ。
窓際に立つガムロの前で、ズルドがその巨体をソファーに沈めた。
「閣下復活に浮かれすぎたわ」
「ふん……メース部隊を軽く見過ぎたようだな」
「ああ……」
ふんっ。
ズルドはは鼻で笑った。
「魔界の志願兵共がこれほど役に立たんとは思わなかったわ」
「言ってくれるな」
ガムロは、一度だけズルドを見た。
「錬成は続けている。数では勝っているのだ」
「前回もそうだった」
「……政治的にも、魔界、天界ともに既に我々を止めることは出来ん」
「頭の悪い俺には、政治の話はしてくれるな」
ガムロは言った。
「俺にとって必要なのは一人の政治家ではない。百人の優秀な兵士だ」

「アイバシュラの納品が遅れたのは、痛かったな」
「メースの代役として使えるとは、本当か？」
「気休めだろう」
「……おい」
「冗談だ」
「勘弁してくれ」と、ズルドは肩をすくめた。
「兄貴は、真顔で言うから、どこまでが冗談なのかわからん！」
「ふん……それで、弁明に来たというわけでもあるまい？」
「……ああ」
「失態をどうこうしろと、閣下は仰っていない」
「……そうか」
「ただ、このままでは済まんぞ」
「わかっている」
ズルドは、ガムロの副官、アイリーンが持ってきた、花瓶ほどもある湯飲みを掴んだ。
「このまま目をつむることは、俺だって出来ん」
「なら、何を求めに来た？」
「残存するガストラフェテスの投入許可をくれ」
「ガストラフェテスを？」
「……ああ」
「魔界の政治的状況は知っているな？」
「俺には関係ないと言ったはずだ」
「――我々は、人間によるこの世界の環境破壊を食い止めるために戦っている」
「……」
「ガストラフェテスは、無差別大量破壊兵器の指定を受けている。例え、人間相手でも使用することは、最早」
「あれだけ使っておいて、今更言うかっ！」
ズルドの怒鳴り越えが室内にとどろき渡った。
「都市のいくつを人間ごと吹き飛ばした！？」

「都市に巣くう人間共を抹殺しただけだ。自然環境への影響は限定的、もしくは数百年という長いスパンで見れば、小惑星群が地表に落着したとでも考えれば、許容範囲だと、そうみなされたのだ。あの時はな」
「それで何故、今度はっ！」
「わからんか……ズルドよ」
ガムロは振り返るなり、なだめるように言った。
「世論の流れが変わった。人間に対する制裁行為としての使用ですら、もはや公然とは許されなくなったのだ」
「何だ、それはっ！俺達は戦争をしているんだぞ！遊んでいるわけではないっ！」
「その通りだ。それは、その通りなんだ」
「ならっ！」
「……」
「――兄貴！」
ガムロに近づいたズルドは言った。
「人間共は絶対に動く！そこを叩けば、勝利はすぐだ！」
「……」
「……頼む」
「……だめだ」
ガムロは言った。
「……だが」
ふっ。
ズルドの失望した顔を眺めたガムロは、口元で笑った。
「他のものなら――何も文句は来まい」
「他の――モノ？」
「ああ」
ガムロは口ともを歪め、頷いた。
「世論も法律も、抜け穴というものは必ずある。ガストラフェテスの件もそうだ」

「……何だ？」
「十数キロ範囲を壊滅させるだけなら、お前の娘がやってのけたろうが」
「……なんだそれは」
きょとん。としたのはズルドだ。
「あの破壊を妖魔でやってのけるのがガストラフェテスだろうが！」
「そうだ。世論は、妖魔にやらせることがダメだというのだ」
「……？」
「人為的に、兵器によって類似した攻撃が行われることまでは禁止していない――人間界と魔界の面白い共通性だな。知っているか？人間界では、魔力反応を用いた無差別破壊攻撃は禁止されているが、鉱物を用いた類似の攻撃は禁止されるどころか、公然と使用されている」
魔力反応弾（セルフギロチン）と反応弾（げんばく）のことだ。
「世論はどうとでもしてやる」
ポンッ。
ガムロはズルドの肩に手をやった。
「――神音商会に手配してある。詳しいことは、奴らに聞け」

「イヤじゃっ！」
神音の目の前で、自分そっくりな従業員が怒鳴った。
「イヤじゃ！イヤじゃ！イヤじゃぁっっ！」
「……」
指を耳に突っ込んだ神音は、冷たい目を部下に向けた。
「あのね？かのん」
「御主人様も、何を考えておるのじゃぁっ！」
「別にいいじゃない」

神音は冷たく答えた。
「自然環境への影響はほとんどない。致命的なのは、人間と大型動物程度よ」
「――それが、人間を夫にした女の言うことか、じゃっ！」
「……かのん？」
だだっ子を叱るような口調で神音は言った。
「行くの？行かないの？」

「ううっ……つまり」
ズルドの前に現れたかのんは、頭一個分はあるだろう巨大なたんこぶを作っていた。

「これは、簡単に言えば、魔力散布装置じゃ。形状も理屈も人間共の言う“爆弾”に近いがな」

ズルドと、その幕僚達が居並ぶかつての海軍航空隊小松基地司令部、その会議室で、かのんは言った。

その後ろ、放棄されていたホワイトボードには、数枚の写真が貼り付けられている。

「一発のサイズは約3．6メートル。直径1．5メートル。不細工な玉のように見える、これじゃ」

かのんは、黒く塗られた鉄の玉が映し出された写真――人間界で作られた初期の頃の航空爆弾、具体的にはカボチャに翼をつけたような作りをした物体が写されている――を指示棒で指さした。

歴戦の軍人達相手に、小学生のような娘が講義するなど、滑稽で

すらあるが、今、ここでこの光景を笑う者はいない。
それが何か知っているからだ。

「開発コードは“パンプキン”。人間界で言う、カボチャという食用植物じゃ。命名の理由は外見上の類似による」
かのんは、外見に似ず、朗々と喋り続ける。
「中央部は、超高度に圧縮された魔法が封印されており、その周囲、拡散補助系の魔法が封印されている。
中央部の魔法が解放されると同時に拡散補助系魔法が中央の魔法を広範囲に散らばらせる。この仕組みにより、普通では有効範囲が十メートルもあれば良い魔法でさえ、効果範囲がその数百倍に跳ね上がる。ちなみに効果範囲は平地で１０キロじゃ」

「広がる魔法とは？」
幕僚の一人が問いかけた。

「お望み通りじゃ」と、かのんは答えた。

「火炎系なら有効範囲内を焼き払うことも出来るが」
かのんは、指示棒をしまった。
「この“パンプキン”は、そんな甘い魔法は入れていない。第一、火炎系では、ガストラフェテスと同じで、魔界の世論にどんな影響を与えるかわからん」

「なら？」

「――――“死（デス）”、じゃ」

「死（デス）？」

「禁呪（きんじゅ）のデス・スペルではないが、人間に限定すれば、それと同じ、いや、それ以上の効果がある。聞いた事はあろう？人間のＤＮＡに仕掛けた魔法系制御を。人間、一部大型動物は、飼育と管理を容易にすべく管理プログラムが遺伝子に組み込まれていた。数千、数万年の時を経ても、どれ程の交配が進もうとも、このプログラムが依然として生き残っていることは、既に確認されている」

「――結論を言ってくれ」

幕僚の一人がじれたように答えた。

「ここは学校じゃない。理論は不要だ」

「……なら、簡単に言おう」

かのんは、咳払いした後、背筋を伸ばした。

「“パンプキン”は、人間のＤＮＡに刻まれた、管理系ＤＮＡに対して、自死のプログラムを発動する特殊魔法が封印されている。この魔法にかかった人間は、魔力防御されていない場所にいた場合、外見上の一切の影響を見ることもなく、数時間以内に致死率１００％に達する。

絶対に、魔法が発する、この死の命令から逃れることは出来ない」

「魔族や妖魔は」

「人間のみに有効な魔法じゃ。虫けらさえ死にはしない。自然環境に対しては恐ろしくクリーンな殺戮兵器じゃ。お主等の頭上で“パンプキン”が発動した所で、お前さん達は、酒盛りしていても、心配するのは翌日の二日酔いの方じゃろう。無論、お前さん達の親が、人間と交配していなければ、じゃが」

「なぜ、そんな魔法があるというのに」

片目を眼帯で隠した老将が苦虫を噛み潰したような口調で言った。

「今まで、誰も使用さえしなかったのじゃ」

「準備が恐ろしく手間な上に、発動の手順が複雑すぎて、この魔法が発動出来ることが確認されたのは、魔法技術がお前さん達の時代から数千年も過ぎた去年のことじゃ。

しかも、発動用に開発された呪文は、詠唱自体が長すぎて無理。手書きの魔導書なら、魔導書を収容するだけで、大きな図書館２つ分ほどを必要とする、膨大な量じゃ」

「馬鹿じゃないのか？そんなもの作って！」

「妄（わらわ）もそう思う。使いモノにならんし、誰も使えるとさえ思いもしなかった。じゃから、長年、それこそ人間が作り出されてから今日まで、誰もこの魔法を使おうとさえしかなった。

理由はわかるな？

誰も使う手段がなかったからじゃ。

ところが、これを高度に圧縮して圧縮し、発動させる方法に、去年、我が社がやっと気付いたのじゃ」

「どうやって？」

「これじゃ」

ポケットからかのんが取りだしたのは、小さな金属の破片のようなもの。

人間界でいう、ＩＣチップだ。

「これが、“パンプキン”の心臓部じゃ」

ガタッ！

幕僚達の中で、何人かが椅子を驚愕に椅子を動かした。

「驚くな」
幕僚達にＩＣチップをみせながら、かのんは言った。
「このチップは、人間が電子機器用に開発したもので、中には膨大な図面が刻まれている。我が社はそこに目をつけたのじゃ。
膨大な魔導書を、このように微細に変換して、それをこのチップに書き込んだらどうなるか……とな」

「結果は？」

「使いモノにならんなら」
かのんはチップをポケットに戻した。
「誰がこんな所に売り込みに来るものか」

「……ちょっと待て」
幕僚の一人が、不思議そうな顔で訊ねた。
「そんな技術が、魔界にあるのか？」

「これは人間界の技術じゃ」
かのんは言った。
「魔界の魔法科学技術では、魔力発動を阻害する要素が強すぎる。その点、この人間界の技術なら、問題ない――つまり」

「……」

「この“パンプキン”は、完全に人間界の産物じゃ」

「……どこの国が作っている」

「シナ大陸の漢民族じゃ。無論、奴らはこれが何かは知らないし、

妾達も教えるつもりもない。カネを積めば、いくらでも作る事が出来る」

「人間のみ……なんだな？」

「ああ――人間は確実に生命体としては死ぬ」

「……何か、ひっかかる言い分だな」

「個人的には」

かのんは肩を落とした。

「これがあるから、妾（わらわ）は使用には反対なのじゃ」

「うん？」

「ＤＮＡを破壊された場合、人間はそのまま屍体となる」

「それが？」

「つまり、屍鬼（グール）化するのじゃ」

「……」

「屍鬼（グール）管理の方法は知っておるな？」

「……無論だ」

「なら、話は早い」

かのんは、気丈なまでにまっすぐ、ズルドを見つめて言った。

「御主人様は、今度のズルド殿の反攻作戦に限定した分のみを供給

する」

「まて……とどのつまり、これさえあれば、全人類を絶滅させることさえ出来るのだぞ?それを何故、供給しない」

「人類の完璧な絶滅を御主人様は望んでいない。望むのは、閣下の今度の勝利のみじゃ」

「無差別使用は、逆にまずいと?」

「戦線で、軍人相手にのみ使用されれば、世論は騙せる。じゃが、無差別に市民、女子供まで殺したとなれば、この“パンプキン”もガストラフェテスの二の舞じゃ。それだと、ここまで開発に投資した価値がなくなる。我々は慈善事業をしているわけじゃないのじゃ。我々は軍人ではない。商社じゃ。

……わかってくれ」

清と俗、そして、誓い

轟天号作戦

立案者だか命名者だかの歳が分かるような名前の作戦が、陸軍から立案されたのは、伊那戦線での勝利に未だ世論が沸き立っている最中だった。

都内を在郷軍人会が主催した提灯行列が歩くため、交通規制が敷かれた道沿いの建物。

料亭として有名な店の一室。

陸海軍は岡山首相へ提出するために、作戦の最後の会合を席をここで設けていた。

「海軍はこの作戦に反対する」

永野海軍大臣は、作戦指導書に触れることもなく、言い切った。

「この作戦は、絶対に失敗する」

「何をいうんですか、永野さん」

目の下にクマを作った蓮川が泣きそうな顔になった。

「先生がやれというんですよ?」

「あの人が何か言えば」

永野は、鼻で笑った。

「山が動くとでも?魚に空を飛ばせるとでも?」

「なっ……」

突然の言葉に、蓮川は言葉を失った。

「あ、あなたは先生を愚弄なさるのか?」

「私はそんなこと言っていません。そう言えば済むことです」
永野は、やんわりと笑った。
それだけで、年の割には絵になる。
「私と貴男、先生の信頼はどっちにあるのかしら？」
「あなたは未だ、憲政党に未練があるんじゃないのか！？元の夫に！」
「――まさか」
心外。という顔で、永野大臣は言い返した。
「何です？帝国の命運を決める一大決戦を、その責任を、先生に帰結させるつもりですか？」
「私はそんなこと言っていないっ！」
「先生がやれといったから。それは立派な先生への責任の押しつけですよ？それくらいはわかりません？」
「――っ！」
「まぁ、おちつきなさい。坊や」
永野は、お茶を勧めながら言った。
「先生に大任を任されたといって、そんな態度では任を果たすことは出来ませんよ？」
「ぼ、坊やだとっ！」
蓮川は席を蹴った。
目の前に置かれたお膳がひっくり返り、料理が畳の上に撒き散らされた。
「だれのことだ！」

「当選たった2回の坊やが」
ジロッ。
気迫のこもった目で永野は冷たく睨み付けた。
まるで、蛇に睨まれた蛙のように、蓮川は動けなくなった。
「当選5回以上の私相手に大人ぶるつもり？」

「……っ！」

「おいたはやめなさい」
永野はお膳に載せられた杯に手を伸ばした。
「これがやめられたら――私も都築のまま。アレと離婚しなかったんだけど」
実に美味そうに酒を飲み干した後、永野は言った。
「……食べ物が不足する中、もったいないでしょう？」

「うっ」

「――食べなさい。そうしたら許してあげる」

「なっ」

「食べろ――そう言ったのよ？坊や」

「……」
蓮川は、無言で畳の上に転がっていた肉をつまむと、口に運んだ。

「よろしい♪」
ニコリと笑った永野は徳利から酒を杯に注ぎながら、
「――で？伊那の作戦で、どうして人類が勝てたか、その主役が

誰だったか、分かっているの？」

「わかっていますよ」

「わかってない。わかっているなら、なぜ、近衛が作戦に参加しない？機甲部隊だけで魔族軍のメサイア――メースっていうんだけっけ？それを相手に出来るというの？」

「戦車砲の直撃があれば」

「本当に追い詰められているのねぇ」

永野は気の毒そうに、やれやれ。と呟いた。

「しょうがないわねぇ……こういう時はね？坊や、先輩に頭を下げるものなの。知恵を貸して下さいって」

「わ、私に頭を下げろ？」

「元総理大臣の一族の出自だろうが、帝国大学出ていようが、そんなものは、当選回数と実績の前には意味はないわ」

「……」

「私が与えられる選択肢は二つだけ。この場で頭を下げて、海軍に協力を仰ぐか。それとも、意地を張って、将兵の屍の上にお墓を作るか」

「何だ、その選択肢は！陸軍が最初から負けるようなことをいいやがって！」

「負けるでしょう？何？精神論で戦争指導するつもり？資格がない

って答えているのと同じよ？」

「僕は内閣総理大臣の孫だぞ！」

「……何、それ」

永野は呆れた顔で杯をあおった。

「そんなんで、今のお嫁さん口説いたの？」

「ぼ、僕が命じれば、どんな作戦でも勝てるっ！」

「あらあら――なら、海軍の協力はなしってことね？」

「海軍なんて！」

蓮川は言い切った。

「海の上に浮いていればいいっ！」

「なら、はっきり公表させてもらうわよ？海軍は、陸軍主導の作戦には、最初から反対。一切の協力を拒絶するって」

「好きにしろっ！この婆ぁっ！」

ピクッ

「……婆ぁ？」

「その通りだろうが！」

蓮川は、襖に手をやると、まるで捨て台詞のように、

「おじいちゃんに言いつけてやるっ！」

そう、言い残して去って行った。

「……やれやれ」
一人、残された永野は、疲れた。という顔で肩をコキコキとならした。
「この私に、警察相手に頭下げさせた馬鹿息子の方が、まだマトモだったか」

「先生」
蓮川とは別な襖を開き、秘書が入って来た。
「決裂ですか？」

「当然♪」
永野はニコリと笑うとVサインをして見せた。
「海軍にとってうまみはないわ。それより」

「秋篠宮閣下が――こちらでお待ちとのことです」
秘書は、メモを手渡した。

「秋篠宮も……ねぇ」
メモをハンドバッグにしまった後、永野はポツリと呟いた。
「騎士を息子に持つということは――辛いことよねぇ」

「ご長男は……ご遺体が……その」

「私も覚悟すべきなのよね。大切な息子を近衛に送りつけた、あの馬鹿な旦那が何考えてるのか知らないけど」
永野大臣は席を立った。
「車を回して。状況は、切迫している」
その顔に、酔いは見えなかった。

海軍は協力せず。
近衛は最初から計画の埒外。

これで陸軍参謀本部を納得させたのは、結局、蓮川の政治力でしかなかった。
無論、参謀本部全てが納得したわけではない。
現場に発言権の強い者達はこぞって反対。
近衛の支援を最低限度の条件とする、そのラインを譲らなかった。

先生のメンツを立ててくれ。
俺の顔を頼む。

上層部へと、軍内部の政治力だけで登ってきた軍首脳部達を作戦の決定へと動かしたのは、そんな言葉。

自分や関係者のメンツと将兵の命を天秤にかけたのだ。

動員された陸軍将兵は約１万５千。
これに、福井の防衛戦で敗退、報復を望むイタリア陸軍２万が加わり、イタリア軍のメサイア“テンペスタース”――ヨーロッパ標準の“ノイシア”のイタリア軍バージョン騎が２０騎加わった状態で実施された。

魔族軍が撤退した福井県から石川県へ侵攻、石川県の魔族軍防衛ラインを突破し、一気に富山までの反攻ルートを、わずかなメサイア――しかも、メースとどころか、実戦経験皆無という部隊――

―と、わずかな戦車と歩兵だけで確保するという無謀なものだった。

頭数が3万5千。

これだけいれば勝てる。

ただ、それだけが作戦の根拠だ。

近衛が急遽、メサイアの投入を、海軍が形だけ航空支援を決めたのはむしろ当然だ。

岡山内閣の中で海軍を担当する永野大臣の発言が話題を集めたのも、この頃の話だ。

海軍の航空支援が少ないという批判に対して、生放送のインタビューで、大臣は言い切ったのだ。

「これは、首相の権限を利用した蓮川大臣の暴走に他ならない。

首相も、蓮川大臣を信任すればこそ、この作戦を認めたが、これは明白な政治的背信行為にほかならない。

畏れ多くも陛下から軍の権限を預かる身なれば、作戦の決定には慎重に慎重を期すべきだ。

はっきり言おう。

私、永野文（ながの・ふみ）は、海軍大臣として。

そして海軍省、及び海軍の全将兵は、この作戦に反対している。

全臣民の方々は、それをはっきり覚えていて欲しい」

この発言に激怒した蓮川大臣が、作戦の前倒しの実行命令を下したのは、彼女としては予想外のことだったと思う。

前倒しの命令を下した際、蓮川大臣は、こう絶叫したという。

――僕の立場はどうなるっ！

……そう。

いわば、蓮川大臣という人物の政治的な立場を守るため。

陸軍将兵が死地へ赴かされた理由は、その程度のことだった。

「……これか」

魔族軍陣地に運び込まれた黒い塊を眺めるズルドの口元に浮かぶのは嫌悪感でしかない。

人類を抹殺することの出来る兵器。

それは、ズルドが望んでいた兵器のはずだ。

だというのに、この怒りにも似た感情は、何なのだ？

黒い兵器。

“パンプキン”

それは、植物の名だという。

しかも、食べられる。

一体、どんな植物なのだろう。

美味いのか？

なら、楓（フィーリア）は好きだろうか？

ふと、そんなことを思った。

「……」

次の瞬間、ズルドの脳裏をよぎったのは、娘が爆弾に引きちぎられ、その無残な屍体が、屍鬼（グール）となって焼けた野原を彷徨う。そんな光景だった。

「――っ！」

その鋼のような精神力で、ズルドは奥歯を噛み締めて声を殺した。

「……悪魔、め」

この手で壊してやろうか。

ズルドは、その手に大剣の柄を握った。

こんな兵器は……。

あれは――あれは、人間だ！

しかしっ！

次に浮かんだのは、あの戦争の時のこと。

魔界へ向かう亜空間で爆沈する輸送艦達。

その中で、炎に巻かれて死んだ妻と娘の姿――

「……コーシウス」

ズルドは、知らずに亡き妻の名を呼んでいた。

「俺は……どうするべきなのだ……教えてくれ」

「――御父様？」

ズルドは、自分が飛び上がったことなど知らないだろう。

だが、その声をかけた娘は、父の体が数センチ、飛び上がったのを確かに見た。

「あの……」

ズルドは、振り向くなり、地面を見た。

身長差が1メートル近い。ほとんど、自分の腰より下の所に頭がある少女が、心配そうに自分を見ている。

「……フィーリア」
「あの……ごめんなさい。忙しかった？」
「いや」
ズルドは、膝を折ると、娘の頭を彼にとっては優しく撫でた。
「どうした？」
「ううん？」
フィーリアは、そっと微笑むと言った。
「カヤノさんが、メースの訓練がうまくいったことを、御父様にご報告して来なさいって」
「……そうか」
「うん♪」
フィーリアは、嬉しそうに頷いた。
しかし、娘が出来たと報告したことは、つまりは戦場で戦うための方法を身につけた。そういうことだ。

――俺は

ズルドは娘の顔を見つめながら思った。
最近、仕事仕事で、この顔をじっくり眺めることはなかった。
その間に、この娘は、人殺しの方法を身につけていたのか。
……俺のために。

「……コーシウス」
ポツリと、その口から言葉が漏れた。
「……許せ」
娘を、人殺しの道具にする、俺を許せ。
娘に、人を殺させる、俺を許せ。
……無理か？
お前が、ここにいたら、何という？
教えてくれ。

コーシウス。

「……御父様？」

フィーリアが小首をかしげた。

「どうしたの？」

「……いや」

目頭が熱くなるのを感じたズルドは、立ち上がった。

これ以上、今の顔を娘に見られたくない。

「ちょっと……疲れたかな」

「……そう？」

不思議そうな顔をしたフィーリアは、目の前に置かれた黒い物体を見た。

「これ、なぁに？」

「……これは」

ズルドは、言葉に詰まった。

人を殺し、屍鬼化（グール）させる兵器。

言ってみれば、それだけの存在だ。

だが、それを娘の前で公然と言うのことは、ズルドには出来なかった。

「……まぁ、新しい“道具”だ」

「何の？」

「いろいろ……だ」

ズルドはそう答えた。

「ふぅん？」

それで満足しているとは思えない。

だが、娘はそれ以上、訊ねてはこなかった。

「ねぇ、御父様」

「うん？」

「今度は、いつ、戻ってこられるの？」

「……うん」

ズルドは答えられなかった。

この娘が、ここまで来たのも、恐らく寂しがっているフィーリアの心境を察したカヤノが、メースの訓練を題目にしてくれたからだろう。

よく気の利く女だ。

その点でコーシウスに似ているな。

まぁ……コーシウスは、あれほど向こう気が強くはなかったが……。

「この戦いが終わったら……だな」

「いつ？」

「……人類の動き次第だ」

「……いつ」

「……だから」

「いつ、戦争は終わるの？」

「……」

「いつ、みんなで仲良く暮らせるの？」

「……」

「いつ、御父様とずっと暮らせるの？
ねぇ、御父様。
戦争は、いつ終わるの？」

ズルドは、その娘の問いかけに、答えることさえ出来なかった。

遠ざかっていくイスラフェルを見送りながら、ズルドは内心で娘に詫びた。
平和を、与えることが出来ない不出来な父親を詫びた。
平和が来たら、あいつには綺麗なドレスを着せてやろう。
望むなら、世界の果てまでみせてやろう。
美しい花々で、家を飾ってやろう。
静かで、美しくて、そして豊かな自然を、見せてやろう。

望む平和を、与えてやろう。

そう、誓った。

ズルドが守る石川県の防衛ラインに、人類が到達したのは、それから2時間後のことだった。

清と俗、そして、誓い（後書き）

あーあ。悪い政治が知りたければ新聞を見ろって状況はいつまで続くんでしょう。まぁ、私が心配してどうこうなる状況じゃないんですけどね（苦笑）

ズルドは無論、ガンダムのあの人がモデルです。パクリとも言います。

モデルも当然ですが、魔族キャラではカヤノの次に気に入っているキャラですので、いろいろ葛藤させてみました。

感想とかいただけると嬉しいです。

よろしくお願いします。

死の輪舞曲　第一話

「ようするに」
美奈代は、“鈴谷（すずや）”の甲板に“白龍”を上げた状態で、眉間に皺を寄せた。
「これって脅迫じゃないですか」
「というと？」牧野中尉が訊ねる。
「陸軍があんな軽装備で魔族軍に攻め込んだら、海軍も近衛も、放っておくことは出来ないじゃないですか」
「海軍は作戦に反対だと、大臣からはっきり言い切りましたけどね」
「そんなの関係ないですよ。世論が絶対、陸軍を見殺しにしたって」
「言いますか？」
「そういう風に誘導しますよ。今の政権なら」
「……成る程？」
「私、次の選挙でやっと選挙権もらえますけど、絶対、民州党議員には投票しません」
「まぁ……政治はそんなに白黒はっきりつけることが出来る程、単純ではないのですがね」
「だから嫌いなんです……発艦命令は？」
「まだです」
牧野中尉は戦況モニターを確認した。
「陸軍は進軍を停止しています」
「えっ？」
「進軍先に障害があり、そこで先頭が停止。後続も加わって、障害物の除去に当たっているとのことです」
「障害物って何です？」
「ガレキのようですね」
「たかがガレキで？」
「建築物のガレキが高さ数メートル。幅１０メートルに渡って、狭

い谷間一杯に積み上げられています。歩兵と工兵が発破をかけて、機甲部隊の針路を確保しようとしていますが、時間がかかりそうですね」

「たかがそれだけ」

「そんなガレキの山脈が、幾重にも存在します。一つを爆破しても、少し進めばまた同じものが出る。その繰り返しのようで、進軍スピードはゼロに近いです」

「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で焼き払った方が早いんじゃないですか？」

「近衛には出動要請は来てませんよ。工兵さん達の仕事ですから」

陸軍とイタリア軍で編成された部隊の足を止めているのは、敦賀から越前岬に抜けるルート上に存在する障害物だ。

敦賀から今庄方面へ抜けるルートは、先の戦いでルート上のほとんどトンネルが爆破され、ふさがっているため、使いモノにならない。

魔族軍も撤退に使った、海岸線上のルートを用いて大きく迂回しないと、石川県どころか、福井市へと入ることも出来ない。

通行を邪魔する障害物にダイナマイトを仕掛け、吹き飛ばすことが数度にわたり、その度に爆発音が魔族軍を呼び寄せる可能性に、兵士達は臨戦態勢を余儀なくされる。

精神がすり減るような思いを感じながら、それでも？機動車を配備する陸軍の先遣隊は国道３０５号線を進み、県道３号線との合流点まで移動していた。

「間違いないんだな？」

？機動車から降りた指揮官が、偵察に出て戻ってきた部隊から報告を受けていた。

「はい」

車から降りた兵士は答えた。
「3号線から県道19号経由で、都辺、黒川、小町、広瀬ときて、越前市市役所まで入りましたが、敵の姿はありません」
「越前市内に、敵がいない？それは確かか？」
「少なくとも、自分達は、姿を見ていません」
「……」
指揮官は判断に苦しんだ。
市街地を放棄しているとでもいうのか？
もしかしたら、本当に、魔族軍は、戦力に苦しんでいるのか？
まさか……。
「小隊長？」
「いや、格好のチャンスだ」
彼は自分の中から疑問を振り払った。
「3号線が生きているなら、そのまま越前市に、鯖江、そして福井まで奪還することが出来る。おい、2号車、このまま後方へ伝令走れ。実際に、越前市内まで入ったお前達が報告すれば、司令部も信じるだろう。俺達は、予定通り305号線を越前岬方面へと移動する」
「はいっ！」

越前市、鯖江市、そして福井市に至るまでが陸軍によって奪還された。
そう、政府が発表したのは、その日の午後9時のことだった。
福井県を無血で奪還した功績に、世論は歓喜した。

美奈代達は、“鈴谷（すずや）”の食堂でこの政府発表を聞いた。
「信じられません」
涼は言った。

「魔族軍が、こうもあっさりと引き下がるとは」
「……うん」
美奈代も頷くしかない。
おかしい。
頭の中で、全てがそう警告している。
「めでたいこと……とは思いたいが」
首をかしげるしかない。
陸軍は、既に福井県庁周辺を奪還。明日の夜明けを待って、市街地の捜索を実施し、問題がなければ、明日正午をもって加賀市方面へと移動を開始するという。
離れているため、何を言っているかわからないが、テレビでは蓮川陸軍大臣が笑顔でインタビューに答えている。
「福井が完全に奪還となれば」
さつきは言った。
「次は石川県？」
「順番的にはそうだが」
うーん。
美奈代は腕組みをしたまま、考え込んでしまった。
「何、悩んでるのさ」
さつきは、ぽんっと、美奈代の背を叩いた。
「石川の次は、富山で、富山の次は新潟だよ！」
「……うん」
そう。
その通りだ――
都合良く、事が運べば。
「運が良ければ、小松までは行けますね」
どこからか、地図を持ってきた美晴が、地図をなぞりながら言っ

た。
「加賀市から小松市へ１０キロちょっと……」
「美晴さんは確か」
山崎が訊ねた。
「ご実家が小松でしたね」
「うん。帰ることが出来れば、里帰りになるけどね」
美晴は、寂しそうに言った。
「もう、小松海軍航空隊は三重へ移動したし、その時、家族も疎開している。だから、里帰りなんて言っても、空き屋なんだけどね」
「……」
山崎は、何と言葉をかけていいかわからず、ただ、黙るしかなかった。
「本気で新潟を陥落（おと）すなら」
美晴の横で地図を眺めていたほむらが、ポツリと言った。
「何故、福島から攻めないのでしょうか」
「新潟は死者の樹による高濃度オゾン地帯に」
携帯電話のマニュアルを読んでいた麗央が言った。
「魔族軍の補給物資集積所、妖魔のコロニー、そしてそれを守る大軍が駐留している。
ほむらが言ってるのは、阿賀野川を遡るルートでしょう？」
「……そう」
「阿賀野川は魔族軍が地形を変えて、流域はいくつもの城壁のように崖が作られている。あの辺りは、私と麻紀も何度か攻略戦に参加しているけどさ……とてもじゃないけど、攻めて落とせる所じゃないし。何より」
「何より？」
「落としても意味がないのよ」
「えっ？」
「道という道が寸断されていて、メサイアやＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）ならともかく、戦車や歩兵が入れない。道を作るところからやらないと」

「魔族軍は、どうやって福島を？」
「攻めるつもりがないのか」
麗央はマニュアルの端を折ると、ほむらを見た。
「地下から来るんじゃないかって、そんな話しもある」
「地下？」
「そう。長野県の松本市を、上田市方面から攻める時、地形が邪魔で大型妖魔が通れないから大丈夫だってタカくくっていたら、地下にトンネル掘られていて、気がついたら予想外のポイントから大型妖魔が出現。逃げるのがやっとだった――その再現になるんじゃないかって」
「……可能性の話？」
「まだね。――ただ」
「ただ？」
「私達がいた時点で」
麻紀が言った。
「既に普通じゃない地震が連日確認されていた」
「地震？」
「地下を掘ってる音じゃないかって……」
「そういえば、北米でも」
芳（かおる）がポンッと手を叩いた。
「地下をスゴイスピードで掘った妖魔がいましたね」
「ああ……考えたくないが。多分、そいつが穴を掘り終わったら」
「ここが終わったら、福島か？それとも山形か？」
都築が手の中でコーヒーカップを弄びながら言った。
「……勘弁してくれよ。どこに現れるかわからないってのは、一番厄介だぞ」
「……そう、ですね」
寧々も頷くしかない。
「ところで、大尉」
「ん？」

「さっき、この戦勝報道の前に、艦長に呼ばれていませんでした？」
「……ああ」
美奈代は頷いた。
「どうせ、後藤さんから言われるけど、今のうちに知っていてもいいだろう」
「何です？」
「明日、我々は何があっても動かない」
「えっ？」
「陸軍は調子づいて、滋賀県と京都の部隊を福井へ前進させる動員令を発したらしい。だが、海軍も近衛もこの動きには同調していない」
「どうしてですか？」
「話がうますぎるんだ。海軍は、先の宣言が本音だが、舞鶴の復旧と戦艦部隊の再編成、及び弾薬補給に手間取っていることをタテマエにしてるし……」
「近衛は？」
「中華帝国との密約問題を議会で処理する、つまり、国会の開催と岡山内閣の総辞職を求めているから、政治主導の作戦には一切協力しないことになっている」
「海軍も近衛も、何だかやせ我慢してるように聞こえますけど」
「そうだよ」
寧々の言葉に、さつきが賛意を示した。
「新潟を、いつになったら取り戻すのさ！政治がどうの、なんて言っていたら、何も出来ないじゃないのさ！」
「……まぁ」
美奈代は頷いた。
「とりあえず、明日で全てが分かる」
「明日？」
「そう――魔族軍が仕掛けるなら、明日だ」
「なら、どうして近衛は、それを知る貴女が」ほむらは訊ねた。

「何もしないのですか？」
「私は、正義の味方じゃない」
美奈代は肩をすくめた。
「命令なしで動けはしない。近衛は、ここで宣言を翻せば、後々の陸軍との関係に致命的な影響を残すことになる。どっちにしても、動けないのさ」
「……」
「不満か？」
「……不満というか」
ほむらは答えた。
「それでいいのかなって」
「いいんだよ」
美奈代は言った。
「私達のあずかり知らない所で、すべては動いているんだ。上の勝手な判断まで責任とれるか」

夜明けと同時に、滋賀県と京都に布陣していた防衛部隊は移動を命じられた。
福井市街地へ入る前に、敦賀市に集結。
そこで部隊の再編成を行うという命令だ。
戦車や装甲車部隊が優先して敦賀市に集結する中、魔族軍は動いた。

「安全装置の解除鍵じゃ」
かのんはそう言うと、ズルドの巨大な手に、小さな鍵を落とした。
「安全装置は二つ。離陸前の分を解除するのがその鍵じゃ」
「もう一つは」
「“マンタ”と結びつけるヒモがそれじゃ。

それが引かれると、内部の最終案全装置が作動、後は設定された高度で炸裂するだけ。
誰にも止められない」
「設定高度は」
「高度１０００メートル。効果範囲は２０キロに設定してある」
「直接的な……」
ズルドは言葉を選んだ。
「魔法攻撃による被害とは違うのだな？」
「ああ」
かのんはうなずいた。
「コイツは散布装置だと言ったろう？」
「……」
「呪文は雲となって空中に発生。その雲から降る雨の一粒一粒が、“死（デス）”の魔法攻撃。攻撃は、何かに触れることで発動。発動した魔法の有効範囲は、雨一つ部分で１００メートル。魔法処理されていない遮蔽物質は全て通過する」
「……」
「５発もあれば、加賀市から今庄まで、ほぼ福井平野全域をカバー出来る。十分すぎるが……おい」
かのんは訊ねた。
「本当に使う気か？」
「戦は」
ズルドは鍵を握りしめると答えた。
「勝たなければ意味がない。勝つためには、ある程度のこと許される」
「……」
「人間は、似たような方法で同類まで殺しているのだろう？」
「……人間を業が深いという身で、同じ事をしてどうする」
「それが軍人だ。商社の出番ではあるまい」
「そう……じゃが」

「武人として、恥ずべき行為であることは認めよう。しかし」
「しかし？」
「戦を早く終わらせるためでもある。やむを得ぬことなのだ」
「……」

投下時間は午後２時。
正午までに、福井市街地へ入った部隊は加賀市まで前進を完了。
午前１１時までに滋賀県から移動した第８戦車大隊が福井県庁付近に到達。
同じ時刻には、第４対空戦車大隊が福井空港周辺を固める中、福井空港へ大型輸送機に乗せられた第３師団の２個歩兵中隊が展開するなどして、当時、福井市街地周辺に展開する部隊はイタリア軍を含めて４万人近くに膨れあがっていた。

後に回収された第８戦車大隊司令部の記録によれば、彼等が接触した妖魔は、午前１１時３５分に同師団上空で確認された大型妖魔１匹のみ。
大型妖魔１、種別不明。高度１万メートルで飛行。とのみ記録には記されていた。

魔族軍の第５０９混成部隊の観測用機材を搭載した飛行系妖魔“マンタ”のことだ。
このマンタが福井平野上空を飛び、帰還した後、人類の部隊展開状況を司令部に報告。
これを元に、司令部による状況判断が進む中、石川県小松基地では、ブリーフィングで爆撃部隊を指揮するベッツ大佐が“マンタ”の搭乗員に出撃命令を伝えていた。
「我々の作戦は歴史的なものになるぞ」

ベッツ大佐は、胸を張って部下達にそう告げた。
午後０時３０分、兵器担当官らが“マンタ”の投下倉に入り、“パンプキン”の全ての一次安全装置を解除した。
作業を終えた兵器担当官は、「全機、一次安全装置完了」と報告し、編隊長は「了解」と答えた。
機長は出撃前の最終打ち合わせで、部下に「諸君、我々が運ぶのは、史上初の人類抹殺兵器だ」と、その正体を初めて搭乗員全員に明かした。
厳重な防空体制がとられた小松基地上空を旋回した編隊は、高度を確保するため、数度の、普段より大きめの旋回を繰り返し実施した後、高度２，０００ｍ前後の低空飛行から急上昇し、１３時３５分に８，７００ｍまで高度を上げた。
１３時３８分、編隊はそれぞれに分離。指定された爆撃ポイントへ向け、移動を開始した。
最初に目標ポイントに到達したのは、加賀市爆撃を任務としたカーク大尉機だった。
カーク大尉は、爆撃指定時刻の１４時まで加賀市上空を旋回し、敵部隊の展開情報を収集。副官のイルー中尉と協議の上、戦車部隊が集結している地点を爆撃目標とすることを決めた。
編隊から別れた機は、それぞれに目標ポイントへ到達。
最後に目標ポイントへ到達したのは、今庄爆撃任務を担当するフィアビー少佐機で、１３時４９分のことだった。
各機の爆撃ポイントは、兵器の性格上、投下時の誤差は緩くて十分なため、各爆撃手の任意とされており、各爆撃手は照準装置で視認出来る範囲で、最も目立つ建物やあるいは建造物を目標として固定。
１４時００分０５秒から００分４０秒の間に、全ての“パンプキン”は投下された。
機体から分離したことで“パンプキン”を繋ぐ最終案全装置のヒモが“パンプキン”から引き抜かれ、“パンプキン”は重力に従っ

て自由落下を開始した。
“パンプキン”は機体を離れるや、横向きにスピンし、ふらふらと落下した。
間もなく尾部の安定翼が空気を掴み、放物線を描いて約４３秒間落下した後、それぞれの目標地点の高度約６００メートルの上空で、本来求められた能力を発揮した。

対空兵器も迎撃機もない、簡単な任務だったと、魔族軍飛行隊長は、後にそう語っているが、爆撃に参加した魔族にとっては、まさに拍子抜けする程簡単であり、同時に、これほど実感の沸かない攻撃もそうはなかった。

中央殻（コア）に封印されていた“死”の呪文を封じ込めていたのは、人間が作り上げたコンピューター。
何の変哲もない、市販のノートパソコンを数台、連動できるように改造された程度のものだ。
最終案全装置のヒモが外れた途端、呪文の詠唱を開始し、それが完了する直前――呪文解放臨界点に達するゼロコンマ数秒のタイミングで、魔力の有効範囲を数十倍に引き上げる拡散補助系魔法が発動、補助系魔法の助けを借りた“死”の呪文が“パンプキン”の外へと解放された。
本来の目的をこうして果たした“パンプキン”本体は、この魔力解放の影響をまともに受け、解放から２秒以内に消滅したと考えられている。
もし、この“パンプキン”投下を地上から見つめていても、何もわからなかったろう。
爆発も、衝撃も、閃光も、何もないまま、ただ、不可視のまま解放された魔力だけがその効果を発揮するのだ。
自分達が“パンプキン”とやらを投下した結果として、何が見えるかと爆撃目標地点をずっと照準装置で確認していた爆撃手は、何

の変化も目視できなかったことから、作戦失敗と判断し、機長にそう報告した。そんなケースは、実は爆撃手全員に該当することだ。
ただ、突然、爆撃地点周辺が曇りだしたことに気付いた者が、数名いたのは確かだが、自然現象としか考えることは出来なかった。
一方、司令部から、投下した後は速やかに帰還せよとの厳命を受けていた機長達は、それに対して爆撃手や他の乗組員達が納得する答えを何一つ口にすることも出来ずに、機体を帰還のコースに向けるだけだった。

雲が眼下を覆いだし、その下は雨だな。
そう思ったある爆撃手は、自らの手記にこう記している。

俺が真実を知ったのは、帰還した後のことだ。
今になって考えたら、本当に分厚くて、そして、異様な雲だったが、その時はどうとも思わなかった。
本当に知らなかった。
俺達はもしかして、雨を降らせに来たのか？
そう思うと、呆れるより悔しくてしかたなかったんだ。

まさか、その雨こそ、人類を滅ぼす兵器だとは知らなかったんだ。

魔族軍が、その効果を確認したのは、諜報部隊が、人類側の緊急通信を傍受したからだ。

曰く、

緊急事態発生。
歩兵部隊全滅。

日本軍及び友軍の装備を持つ屍鬼（グール）に囲まれている。
至急、救援を要請する。

死の輪舞曲　第二話

福井攻略部隊で、最初にその事態を目撃したのは、越前市の笠倉トンネル付近にまで進んでいた歩兵部隊の兵士達だった。
峠を越えるまで、真っ青に晴れ渡っていたというのに、越前の市街地辺りだけ、激しい雨が降っていた。
突然、青空の中から雲が生まれて、そして、雨が降り出した。
そうとしか思えなかった。

この歩兵隊、正しくは第３０３歩兵大隊を指揮する菅沼大佐は、トンネル付近を通る峠からその光景を見ていてた。
トンネルが内部で爆破され、崩壊しているため、峠道を進む大隊の前で起きたその異様な光景に、大佐も驚くしかなかった。
大学まで山岳部に所属していた彼は、山の気候変化の激しさを肌身で知っていたが、こんなに即座に雨雲が発生したのを見たのは初めてだった。
「大隊長閣下」
大隊付参謀が双眼鏡でその景色を眺めていたが、
「どうなさいますか？」
「どうもこうもあるか」
菅沼大佐は言った。
「部隊に小休止をとらせろ。雨の中、一々濡れていく必要もないだろう」
「しかし」
「かまうものか。敵がいるわけでもない」
菅沼大佐は、その場に座り込んだ。
「風はどっちに流れている？」
「海側へ」
「なら、雨雲がこっちへ来ることないだろう。

朝から歩きづめの兵達に雨の中まで歩かせるのは忍びない。
どうせ通り雨だろう。
止むまでは俺達も休みだ。
おい、参謀。タバコはないか？」

その菅沼大佐が、後ろから走ってきたジープに乗った師団付き参謀に声をかけられたのは、そろそろ雨が上がるか。という頃だった。

大隊は武生まで後退。
市街地には一切、入るな。

それが、師団から派遣されてきた参謀の伝えた師団長命令だった。

「どういうことです」
菅沼が大隊を休止させたのは、深い意味があってのことではない。
やっと奪還した福井の市街地を隊列を組ませ、胸を張って歩かせてやりたい。
その程度のことは、菅沼だって思いとしてはもっている。
それを、何故？
「師団長命令とはなっているが、……実は」
菅沼より若干年上の、白髪交じりの髪を短く刈り込んだ背の低い男は、鈴木参謀は顔をしかめながら峠から見る雨雲を眺めた。
「これは、陛下の勅命なのだ」
「……はっ？」
師団長命令までならわかるが、ここでどうして陛下まで出てくる？
話しが大きすぎないか？
「近衛経由で、付近に展開している陸海軍全部隊に命令が下った。

許可あるまで、福井市街地へ近づくな……と」
「馬鹿な」
菅沼はあきれ果てた。という顔を左右に振った。
「何ですかそれは。すでに数万の将兵が福井市街地にいるのですよ？」
「……」
ぐっ。と歯を食いしばった鈴木参謀の、その何か言いたげな顔が、菅沼にはひっかかった。
「何があるんですか」
「福井市街地に到達した部隊は」
鈴木参謀は、視線を地面に落とした。
「……全滅は避けられない」
「何の話です」
菅沼は、鈴木参謀の視線に割り込むように近づいた。それでも鈴木参謀は、菅沼の顔を見ようともしない。
「魔族軍は、一体、何をしたんです！反応弾でも使ったんですか！」
「陛下のご命令は……」
鈴木参謀は、鉛でも吐き出しているかのように重い口調で言った。
「まさに……その通りなんだ」
「なっ！？」
「福井市街地への反応弾が使用されたものと仮定し、その仮定にそって行動せよというものだ」
「……」
唖然、とした菅沼を前に、鈴木参謀はジープに向かって歩き始めた。
「もう、そういうことなんだ……武生まで、大隊を後退させろ。魔族軍も、今日明日で攻めては来ないと思うが」

「……どこから仕入れたかは」
宮中。
窓の側から一歩も動こうとしない帝を前に、ソファーに座った少女、イツミが言った。
「聞く必要もないわね」
「……そんなことは、使われた後なら関係ないよ」
「……そうね」
イツミは、冷めていくお茶を前にして目を閉じた。
「天界から学術調査団が派遣される。明日一番で現地入りする。これは魔界にも通達してある」
「こういう行動についてだけは」
口元だけ笑って、目が決していない帝は、振り向いた後、イツミに答えた。
「連携が早いんだね」
「……戦争協定違反にならない攻撃だもの」
脇に手を回したイツミは、どこからか書類の束を取り出した。
「人間のＤＮＡにのみ影響する“死（デス）”の魔法……こんなもの伝説だか雑学の範疇だと思っていた。まさか、使える奴がいることも、兵器に転用できることさえ、想定外だった」
「そんなにスゴイ集団がいるんだ」
「何考えて、こんなモノ作ったのかは知らないけどさ」
ポイッ。
イツミはテーブルに書類の束を放り出した。
「とにかく、調査団の結果が出るまで待って。今、福井方面で人間が動くのは、殺せといってるのと同じ」
「どの位かかる？」
「“死”の呪文そのものは、数分で効果が消滅するけど、補助系魔法もあるし、一日か、それとも一ヶ月か……はたまた、人間界で言う放射能汚染と同じで、数千年かかるか……」

「……」
「誰も研究さえしていない魔法だから、解除方法でさえわかっていない。せいぜい、調査団が入っても、魔力の残存値を調べて、人間にとって安全か否かを判断する程度だと思う」
「何の役に立つの？それ」
「苛立つ気持ちはわかる。でも、落ち着きなさい。悠理が仕入れた情報が正しければ、“死（デス）”の呪文は、魔力防御していない一切の遮蔽物を通り越して、内部の人間に致命的影響を与えることは間違いない。
そして、人間には、この魔法が効果を発しているか否かを安全に知る方法がない」
「……」
「調査団の名目で、被害を調べることだって、エトやフィアンナにとっては精一杯のこと。それから、イルやグロリアが製造元に圧力をかけるのだって」
「わかっているさ」
帝は手でそれ以上の発言を遮った。
「わかっているけど……」
「被害は？」
「万の単位だよ……万」
「……人口が1億の国で」
イツミはソファーに沈み込んだ。
「万はきついわ……」
「……」
「これから、天界はどう動く？」
「ガストラフェテスをはじめとした無差別系攻撃が出来る妖魔の輸送に制限をかける法案を通したばかり。下手に動けば、ヴォルトモード軍に対するあからさまな妨害工作だと、世論を敵に回すことになる」
「期待はするな、ということね」

「他に何をしろというのよ。話がこじれて、本気で魔族軍と天界軍の殺し合いになったら、この弓状列島なんて消滅するわよ?それでいいの?」
「この怒りのやり場だけもらえれば、今はいいんだよ」
「……少し、寝た方がいいわよ?」
イツミは言った。
「明日は、大変だろうから」
「明日も、だよ」
「……そうね」

「福井方面での人類の動きは完全に止まったな」
「ああ」
ズルドはワイングラスを弄びながら頷いた。
「数万を屠ったというのに、勝ったという気が全くせんわ」
「無理もない……」
ガムロは頷いた。
「屍鬼(グール)共は?」
「宵のうちから他からまで借りだした専門部隊によって集結を完了している」
「よかったではないか。人間の装備をそのまま使える軍勢が数万も手に入ったのだろう?しかも、屍鬼(グール)である以上、そう簡単には死なない連中だ」
「心臓か脳を潰されない限り、動きを止めることはない……そんなことは知っている」
「何が不満だ」
「……勝ちにも勝ち方というものがある。俺はそう思うんだ」
「成る程?魔法兵器数発では、勝ち方として不満か」
「静岡でフィーリアがやった過ちが、脳裏に浮かんでな」

「あれは事故で、これは故意。それだけの違いだ。共に、人類に打撃を与えた点では同じだろう」
「……うむ」
「割り切れ。ズルドよ」
「割り切る？」
「戦争は、綺麗なモノではないのだよ。戦争は、政治外交の延長線上にあるもの。元が、お前が嫌うほど汚いものだ。汚いものから、きれいなものは生まれないよ」
「……俺も」
ズルドはワインを飲み干した。
「それくらい、割り切れればな……」

福井市街地から生還出来たのは、たった3騎のメサイアに乗ったイタリア人達だけだった。
生還出来た理由は簡単だ。
万一に備えた警戒を担当していたのが、6騎で編成された第二小隊だった。

生き残った一人の騎士は、その様子を大凡、次のように語った。

晴れた空の下、高度1万で飛行する妖魔をメサイアのレーダーが捉えた。
司令部に報告して、返事を待っていた。
メサイアの前を、歩兵部隊が隊列を組んで歩いていた。
すると、さっきまであれほど晴れていたというのに、突然、雲が空を覆い、そして、雨が降り出した。
何事かと思って、様子を見ていたが、異変にすぐに気付いたのは、MC（メサイア・コントローラー）のカリーノだった。

「あれを見て！」
彼女が示す先は、さっきの歩兵達だった。
雨の中、隊列を組んだまま、彼等は倒れていた。
「何が起きたんだ？」俺は訊ねた。
「生命反応がない」
センサーを見たカリーノは、悲鳴に近い声でそう怒鳴った。
まさか。
そう思う俺の目の前を、一台のトラックがフラフラと走ってきて、電柱にぶつかった。
なんだ一体？
俺は、僚騎の騎士、オーロ中尉に通信を開いた。
オーロは、気持ちが優しくて勇敢な良い奴だった。
「俺が見てくる。お前達は待機していてくれ」
オーロはそう言って、雨の中、ハッチを開いて道に降り立った。
奴とパートナーを組むMC（メサイア・コントローラー）のエリザベッタも、メディカルキットを手に騎体を降りる所だった。
「オーロだけじゃ不安だ。俺も降りる」
次に、そう言ったのはカルロ隊長だった。
隊長は、MC（メサイア・コントローラー）のアンナと一緒に雨の中に降り立った。
するとどうだ？
数歩も歩かないうちに、みんなバタバタと倒れていく。
「何が起きた！？」
驚く俺に、カリーノは言った。
「死んだ」とね。
俺は信じられなくて、赤外線センサーにモニターを切り替えて、外を見た。
カルロ隊長達の体温は、人間のそれをもっていなかった。
つまり、死んでいたのさ。
雨にあたると死ぬ。

いや、違う！

何故か、俺は直感的にそう思った。

メサイアから出たら死ぬ！

俺はそう信じた。

だってそうだろう？

外を歩いていた歩兵も、車の中の奴も死んだ。

メサイアから出ただけで、カルロ隊長達も死んだ。

こんな馬鹿げたことがあってたまるか。

次に何をしたかって？

簡単だよ。

何をどうしていいのかわからないまま、俺達は、司令部へ指示を求めて通信装置にしがみついたのさ。

だけど、どうしても司令部へと通信を復旧させることは出来なかった。

３０分くらいで雨が止んで、それから1時間もしないうちに、雲は晴れた。

その後は、綺麗な夕焼けが俺達を待っていた。

新たな異変は、その夕焼け空の下で起きた。

信じられるかい？

モニターの映像はとってあるけどさ。

見たのか？

そうかい。
なら、わかるだろう？

何が起きたかは……。

びびった？
そうだろうな。
だけどな？
“あれ”を生で見た俺達に比べたら、大したこたぁねぇよ。

そう。
屍体が動き出したのさ。

屍鬼（グール）

テキストで聞いてはいたけど、そんなものが目の前に現れた。
しかも、それが元とはいえ、ちょっと前まで戦友で、上官だったんだぜ？
あんたなら、俺の立場に耐えられるか？

屍鬼（グール）の反応が増大している。

そのカリーノの報告を受けた俺がやったこと？
イタリア軍人らしいって笑うか？
笑えるか？
逃げたとして、お前はそれを笑えるのか？

勘弁してくれよ。

逃げ出す時、俺達はあの福井平野を突っ切ったんだ。
屍鬼（グール）の反応は至る所にあった。

そうさ。

間違いなく、あそこにいた兵隊はみんな死んだ。

そして、屍鬼（グール）になったか、やつらに喰われたんだ。

そんな所に、もう一度行けっていうのか？

頼むよ。
刑務所でも独房でもどこでもいい。
俺を、あそこから遠ざけてくれ。
この極東から追い出してくれ。
俺は、ママンの所にもどれればそれでいい。
俺を、国に帰してくれ！
なぁ、おい、頼むよ！

「まぁ、ぶっちゃけ」
久しぶりだな。ここに立つのも。
そう嘯く後藤が、部下達を前に言った。
「陸軍がしでかしたことは、数万の将兵を屍体にした挙げ句、敵にしたってことだ」
「……えっ？」
きょとん。とする美奈代の横で、
「それについて陸軍の偉いさん達の反応は？」
「んなものぁ」
都築の皮肉に後藤は笑って肩をすくめた。
「決まってるでしょ？事態を収拾することが責任の取り方だとかなんとか」
「……けっ」
「対して、かーちゃんは立派だったなぁ。都築。海軍は損害ゼロだ」
「……あんなの、親じゃないっすよ」
「喧嘩沙汰で警察にお前を引き取りに行った後、警察署の窓からお前を放り出そうとしたあの一件、未だに根に持ってるのか？」
「ありゃ、放り出そうなんて、大人しいもんじゃなかったですよ！」
都築は席を立って声を上げた。
「俺は殺されると本気で思ったんだ！あいつ、俺の首に縄つけて、“こうしてやるのがアンタのためだ！”とかいいやがった挙げ句、止めに入った警官に怒鳴ったんだ！“トドメさしてやるから拳銃よこせ”って！――って、何でそんなこと知ってるんです！？あれ、もう何年前だ！？」
「……つまり」
話を聞いていた美奈代がまとめた。
「悪さしたお前を縛り首にした挙げ句、射殺しようとした――と

？」
「……そうだよ」
「いくつの時」
「……小学校5年」
「お前、そんな頃から」
「うるせぇなぁ――――放っておけよ。今、問題なのは、そんなことじゃないだろう？」
「ああ。それで、隊長、コイツの母親っていう、気の毒な人って誰なんです？」
「永野文（ながの・ふみ）。
民州党の国会議員で、ついでに海軍大臣だ。
俺達の若い頃ぁ、憲政党のマドンナとまで言われたもんだ。
美人だったが、いかんせん酒癖悪さでも有名で、そこが理由だったな？ダンナと離婚したの」
「……自分から離婚してくれと言ったんですよ。
家族のことは何も考えずに。
頭にあるのは、自分自身の正義だけ。
親父もお袋も、そういう意味じゃ、自分のことしかないっすよ」
「そんないいトコに生まれて何やってんだ？っていうか、お前、海軍の士官学校にでも入った方がよかったんじゃないのか？」
「……士官学校の試験」
都築はどうでもいい。そんな口調で言った。
「当日にフケた」
「はぁっ！？」
「後でバレてお袋から半殺しにされたし、親父と殴り合いの喧嘩になって」
「……」
「ここに入る時、両方から絶縁された」
「普通、勘当されたら母親が取りなすもんだが、その母親からまで絶縁されたってのか？」

「おかげで清々したがな」
「強がるな」
美奈代はそう言い放つ。
「何がだ」
「こんな時、清々した、なんていう男に限って女々しいもんだ。鬼龍院に逃げられた挙げ句、同じセリフを吐いたら笑ってやる」
「おいおい」
「冗談だ。せいぜい逃げられないように、今のうちに頭低くしておけ。で、隊長？こいつを産んだって経歴だけで、女として同情するしかない海軍大臣殿のことはともかく」
「ああ」
後藤は頷いた。
「問題は福井市街地の方だ。今、現地に調査団が入って、人間が立ち入れるのかどうか調べている」
「……へ？何ですか？その、人間が入れるかどうかって」
「近衛が入手した情報によると……っていうか、どこから手に入れたんだろうなぁ。この情報ソース」
「近衛は」
ほむらが言った。
「魔導軍がいます。そちらからでは？」
「……魔法処理していない場合、いかなる遮蔽物に隠れていても致死率１００％。この環境下に人間が入って調べているってなら、俺は魔道軍ってのが人間かどうか。そこから疑うがね」
「どういうことです？」
「使用されたのは、特殊な魔法系兵器で……」
後藤はポンッと書類を演壇の上に置いた。
「いってみれば、中性子を放出する兵器に類似したものらしいわ」
「……中性子爆弾？」
牧野中尉が思いついたのは、そんな兵器だ。
「ああ。そうなれば、遮蔽物を貫通するのは肯ける。ところがな？」

うーん。
うなる後藤が言ったのは、
「他の生命体……例えば、イヌとかネコとか。こいつらの生存は確認されているんだ」
「中性子が、生命体を選り分けたとでも？そんな馬鹿な」
「そう思うだろう？中性子の類なら、無残な屍体があっちこっちに転がっていても納得出来る。しかし、そうじゃない。特に、コイツが信じられないんだ」
後藤が取りだしたのは、数枚の写真。
そこには、市街地をバラバラに歩く兵士達の姿が映し出されていた。
「今から4時間前に、現地に入った連中が撮影したものだ」
「装備からして……イタリア軍ですか？」
「元イタリア軍とでもいうべきかな？」
「何です？その、元って」
「いや、元っていえば、元人間なんだ」
「……えっ？」
皆が互いの顔を見合った。
「こいつらは、この兵器の犠牲者。歩いてはいるが、生きてはいない」
「……隊長」
ほむらが冷たく言った。
「明確にお願いします」
「こいつらは、屍鬼（グール）だ」
「屍鬼（グール）？」
「講座で習わなかったか？一定の魔法や魔力の影響下に置かれた屍体が妖魔化する現象、もしくは現象にさらされた屍体のことだ」
「じゃあ……この人達って」
「だから、この連中は屍鬼（グール）なんだって」
「……」

「言ったろう？陸軍がしでかしたことは、数万の将兵を屍体にした挙げ句、敵にしたってことだって」
「……生きたまま、屍鬼化（グール）したのですか？」
「2時間前、この情報開示が許可された時点でわかっていることは、当時、福井平野にいた全将兵がこの兵器の影響にさらされたこと。そして、この兵器が、ほむちゃんが言った通りの効果を示したこと。
かつ、未だにその効果を維持している可能性が高いってことだけだ」
「福井は、どうなるんですか？」
「……調査団の調べた結果次第だな」
後藤は答えた。
「兵器の魔法効果が消えていたら、まだどうにでもしようがあるだろう。だけど」
「……」
「もし、効果が持続しているなら、福井は効果が続く限り、人間の住める所じゃなくなるだろう」

福井の市街地に着陸したのは、天界軍所属の飛行艦だ。
厳重に魔法防御が施された防護服を着た専門の技官達が、飛行艦から外に出て市街地の調査をしている。
「どうなの？」
飛行艦内にテレポートしてきたのは、あのイツミだ。
「……魔力反応は」
計器類に半ば埋もれていたオペレーターは、メーターから目を離さずに答えた。
「かなり微弱になっています。恐らく拡散魔法の影響でしょうか」
「どういうこと？」
「……魔力の一般測定数値は、人間界のそれと比較しても、それ程

高い数値を示していません。これをどう判断するかは、かなりの検証が必要かと」
「どれくらい？」
「さぁ」
オペレーターは肩をすくめた。
「王立アカデミーの一人として、魔法系兵器の専門家として、共に答えは一つ。1年かかるか2年かかるか、それは主のみ知ることだと」
「悪いわね」
イツミは言った。
「軍としては、そんな時間は認められない」
「でしょうね。ですけど、それを認めていただけないと、人間、そして我々も、どんな影響が出るかは保証できませんよ？それとも、情報軍が責任を？」
「調べることについては」
イツミは、床に転がっていたロープを力任せに引っ張った。
「ニギャァァッ！」
ネコのような悲鳴が艦内に響き、宙を舞った何かが、ズッデーンと音を立てて、イツミの足下に落ちた。
「軍は軍の方法でやらせていただくわ」
「……自白剤、調合しましょうか？」
床に転がった時、顔を打ったらしい。しきりに痛い痛いと泣き叫ぶのは、髪の長い、まるで人形のような美少女。なぜかエプロン姿の上、ロープでぐるぐる巻きにされている。
「結構よ――さて」
イツミは、床に転がった少女を見下ろすと言った。
「忙しい所、悪いわね。棚卸しの最中だったんでしょう？」
「ううっ……妾が何をしたというのじゃぁ」
何と、泣いているのは、あの“かのん”だった。
「ここで使われた商品について教えて頂戴」

「いやじゃ！」
かのんはそっぽをむいた。
「商品については企業秘密じゃ！」
「それじゃ、悠理にあんたをあの商店から拉致させた意味がないのよ」
「やっぱり悠理か！妾を後ろからぶん殴った挙げ句、袋に放り込んでくれたのは！」
「だとしたら？」
「ううっ！」
「“疑似人形”の分際でこれ以上、わめくな」
イツミは、かのんの後頭部、髪の中へ手を突っ込んだ。
「ここを開いて、中のおつむに直接聞いてあげても良いのよ？」
「や、やめるのじゃ！」
かのんは真っ青になって、震えだした。
「わ、妾は御主人様が大金積んで作られた超特級の中でも最高特別（スペシャリティ）型（モデル）じゃ！そこを開くだけで壊れかねん意味では、人間風情より圧倒的に高級でよっぽど精密なんじゃぞ！」
「わかってるわよ――神音にこれ以上、恨み買いたくないの。兵器の出所については天界からの調査はさせないことを条件にしてあげるから」
「ううっ……」
「あんたを拉致ったのは、悠理の仕業ってことで、私が認めたことにしなさい」
「い、いいのか？」
「ええ……あの馬鹿の責任で済ませて」
「わ、わかった……」
かのんは頷いた。
「その前に、縄を解いてくれ」

「影響はない？」
「そうじゃ」
縄を解かれたかのんは答えた。
「死の魔法は、詠唱によって作用する。とどのつまり、詠唱が終わったら、その時点で魔法は効力を失うのじゃ」
「何？その弱い魔法」
「そう――弱いのじゃ」
かのんは真顔で答えた。
「延々と続く呪文の詠唱は、最後の数個のキーワードを発動させるためだけに行われるもの。このキーワードが、影響下の人間が持つＤＮＡに作用する。当然、キーワードによって解放された魔法は、そんなに長持ちするもんじゃない。というより、実際、実験の結果も、詠唱の最後の一言から、ほんの１．２６４秒で効果が消えた」
「１秒って……何それ、短すぎるじゃない」
「短くて良いのじゃ。ＤＮＡめがけて、“お前死ね”と言えば、“わかりました”となる。そこに余計な説明はいらん。それで通じるのじゃ」
「……」
「ところが、これだと影響を受けるのはたった一人がいいところじゃ。兵器としては使いモノにならん。じゃから、これを特別に開発した拡散魔法によって長く、そして広範囲に影響を及ぼすようにした」
「肝心なのは、拡散魔法の方だってこと？」
「そう……イツミ殿は」
かのんは唐突に、イツミに訊ねた。
「この魔法、どういう手段をもってＤＮＡに“死ね”と命じると思う？」
「……えっ？」
「――音じゃ」
「音？」

「そう。“死ね”という短い信号を、魔法の音として伝える。DNAは、その音の波長を受けて作動する」
「でも、遮蔽物が……」
「魔法の音は、空気を波として伝わるのではない。空間そのものを波として伝わるのじゃ。じゃから、遮蔽物なんて関係ない。ただ、他の魔力が作動している場合、その魔力が邪魔をして空間を伝わることが出来ない。じゃから、こんな飛行艦のような中にいれば、その命令から逃れることが出来る」
「メースの中の人間達が助かった理由は……」
「そういうことじゃ。外に出れば死ぬがな」
「でも、待って？そんな音なら、人間達がもっと広範囲に聞いているはずでは」
「……うーん」
かのんは、ぽつりと言った。
「意外と、頭悪いのぉ」
「――何ですって？」
「何でもない。何でもないっ！あーっ。プライドの高いところも御主人様そっくりじゃ」
「……死にたくなかったら、明確かつ簡単に話なさい」
「うむ……拡散魔法の事を忘れて折るじゃろう？それは」
「だから、拡散魔法は、音を広範囲に広げるのじゃなくて？」
「うむ……その方法だと、狙ったほど広範囲に拡散しない」
「なら？」
「拡散魔法の正体は、音を水に封じ込める技術じゃ」
「……」
「つまり、発動した“死”の命令を水の中に封じ込めて、雲を作り、雨として降らせる。この場合、衝撃波の要素を使用した場合より、効果範囲が数倍に広がる」
「衝撃波（ソニックブーム）としてのダメージではなく、フォールアウト（死の灰）として、“死”の魔法を降らせる……」

「そうじゃ。衝撃波の場合、よくても1キロか2キロが限界。ところが、この方法なら――ごらんの通りじゃ」
「……ここで生成される魔法を封じた水を、妾達は“封印の雨水”と呼ぶ。この雨水に閉じ込められた魔法は、雨水が絶対に避けて通れない、あることによって解放される」
「何？」
「何かに命中する――雨として降る以上、地面か何かに命中することは避けられまい？雨水が何か任意の物体に命中し、そして弾ける時、中の魔法は解放される。一粒一粒の効果範囲だけでもあまく見るな？一粒が及ぼす魔力影響範囲は１０メートル前後じゃ。一粒でも間近に落ちれば、確実に空間を伝播した魔力の影響にさらされ、そして死ぬ」
「……よく考えたわね」
「こういうのが大好きなひねくれ者も、世の中にはいるもんじゃ」
「……解放された魔法は」
「音として一度解放されれば、もうあとは拡散するだけじゃ。音は世界に永遠に存在することは出来ん」
「……大丈夫ってことか」
「たった一つの例外を除いてはな」
「例外？」
「ああ」
かのんはうなずいた。
「屍鬼化（グール）した屍体じゃ。あれはもう、中でＤＮＡのレベルで変質している以上、どうしようもない」
「……処分は」
イツミは苦々しげに頷いた。
「信仁に頼むとする……か」

死の輪舞曲　第三話（後書き）

理屈ばっかりでつまんないですか？心配です。

鎮魂曲　第一話

銃声が静まった後は、コツコツと軽い靴音だけが室内に響くだけ。
照明は銃撃に叩き割られ、蛍光管の破片が床に散乱している。
ぼんやりとした、パソコンのモニターの灯りだけが、暗い室内に光を与えてくれている。

カチャンッ
ガシャッ

空になった小銃のマガジンを交換し、新しいマガジンを装填。
床に放り捨てたマガジンが、リノリウムの床に跳ねて、血まみれの白衣の上に転がった。

ブーッ
ブーッ

ポケットの中で、携帯電話が呼び出し音を立てた。

「――――あ、お父さん？……うん。終わる所」

片手で携帯電話を使いながら、残った手が小銃を構える。
銃口の先にあるのは、何の変哲もないロッカーの列。
トリガーが引かれ、５．４ミリ弾がスチール製のロッカーに穴を開けていく。

ギイッ

鈍い音がして、ロッカーが内側から開いた。

腹を押さえた白衣の女性が、目を見開いたまま、開かれたロッカーの中から現れ、そして床に転がった。

小銃を掴んだまま、まだ、ピクピクと動く女性の頭の所まで近づくと、一回だけトリガーを引いた。

「うん。始末は終わったけどね？」

その声は、銃を使うにしても、こんな凄惨な現場にいるにしても、あまりに幼い。

銀髪をポニーテールにしたその容姿もまた、見る者に違和感を感じさせて十分だった。

「どうして、銃なんて？……証拠隠滅？」

小銃をデスクの上に置くと、背負っていたリュックサックから取りだした塊についたレバーを押し、そのまま女の死体の上に無造作に放り捨てる。

「工場の方はもう終わっている……うん。警備会社への通報システムは切断しているから、そっちは問題ない。警備員？始末したよ？うん……ナイフで喉掻いた」

室内に並ぶパソコンを片手で乱暴に掴むと、床に放り投げていく。しかも、さっきの女性の死体の上にだ。

最初こそ、女の肉が防音の効果を示していたが、ガンガンと金属物がぶつかり合う音が室内に響くようになる。

「でも……いいの？」

パソコンはすべて含めて１５台。

ケーブルを力任せに引きちぎる力は、その存在が、外見通りの非

力な存在ではないことを如実に証明していた。

「おばあちゃんが聞いたら……えっ？」

部屋の入り口まで来た所で、カートに乗せてあったポリタンクを掴み、足で床の上を滑らせた。

入り口の近くに転がっていた、まだ若い男の死体。その襟首を掴むと、先程のパソコンと同じように、部屋の奥へと放り投げる。

宙を舞った死体は、床に落ちるときに、グチャッという嫌な音を立てた。

「これ、おばあちゃんの命令なの？」

それを、もう一回、もう一回と繰り返し、最後の死体を放り投げたところで、もう一度、ポリタンクを掴むと、死体の山とパソコンの山の上に、その中身をぶちまけた。

「証拠隠滅って……僕の動き、おばあちゃんわかっていたの？」

空になったポリタンクを放り捨て、もう一度、リュックの中から新しい塊を取り出すと、室内の隣にあるサーバールームへの入り口のドアを乱暴に蹴り開けた。

鍵がドアごと吹き飛び、数千万はするだろう高価なサーバー類が格納されたサーバーラックに命中する。

「僕がかのんを拉致した所で、逆に状況を使おうって考えた？……成る程？軍の情報局にデータを握られる前に……かぁ」

サーバーからＨＤＤを片っ端から引き抜き、床に放り捨てる。

空になったサーバーの中に、その塊を突っ込み、ポケットから信

管を取りだし、中に埋め込む。

「都合良く利用されている気はする。でも、この情報って、お父さんも欲しいんじゃないの？」

隣の部屋からガソリンが入ってくる。

最後のＨＤＤを引き抜き、床のＨＤＤを袋に入れてサーバールームを出た。

「そっか、おばあちゃんの所にはデータはあるんだ。それをコピーさせてもらえばいい……成る程ね……うん。こっちは工場ごとデータ吹き飛ばすから、もうダメだよ？……えっ？」

ＨＤＤの入った袋を、先程の死体の山に足で詰め込むと、ガソリンのついた足が滑らないように、そっと窓へ近づいた。

窓の外に蒼いパトライトの点灯した車が数台、施設入り口に止まっているのが見えた。

「うわぁ……公安って書いてある」

そっと窓から離れると、その場にしゃがみ込んだ。

「魔界か天界か、さすがに調査が早いねぇ。どっちかが尻尾掴んだみたいだよ？」

部屋の入り口にもう一度戻ると、カートに残っていたポリタンクを掴み、もう一度、サーバールームに戻り、サーバーにガソリンをかけると、残りを慎重に床に散きながら入り口まで戻る。

カンカンカンという、甲高い靴音が聞こえ、懐中電灯の強い灯りが階段で上下に動いている。

「誰か来た……うん。これで撤収するね？」

ドンッ！

階段の方からそんな音がして、その後に男の断末魔に近い悲鳴が響く。

「証拠隠滅は、これでいいと思うから……えっ？京都の輪違屋にいるから来い？ここ、中国の大連なんだけど……お酒飲ませてくれるの？なら、行く」

携帯電話をポケットに戻すと、ズボンのポケットに入っていた“日の本酒店”と書かれたマッチ箱を取り出し、マッチをする。

ポイッ。

床に撒かれたガソリンにマッチの火が引火し、室内は一斉に炎に包まれた。

死体とパソコンの残骸がキャンプファイアーのように燃え上がるのに、システムを破壊された火災通報装置もスプリンクラーも働くことはない。

「おじゃましましたぁ」

そんな声に答える者が誰もいない室内で、炎が爆薬に到達した。

夜間の大惨劇！
１３４名死亡か？。
工場、爆破される。

翌日の中華帝国国内で発行される新聞のトップを飾ったのは、そんな見出しだった。

大連のＩＣチップ製造工場が何者かによって襲撃され、夜勤の工員が次々と銃によって殺された。
襲撃を受けた際、社員の一人から携帯電話で通報を受けた警察が到着した直後に工場と事務所で大規模な爆発が発生。
全ては炎に包まれた。
これにより、夜勤の工員１０３名と社員１７名、警察官１４名の行方が確認出来ずにいて、警察当局は全員が爆発に巻き込まれたものと見て、昨晩から現場検証に入っている。

その翌日の朝刊記事より抜粋

警察発表によると、この工場では一週間前までロシアの企業から依頼を受けた特殊なチップを製造していたが、契約が終了することからラインの交換を行い、３日前までにその作業を終え、事件前日からは、国内向け民間用の電動髭剃り機の制御用チップの製造に取り組んでいた。
製造中のチップは、国内で一般的な規格の製品にすぎず、事件との関連性は低いと見られるが、警察はさらに因果関係を調べている。

その日の夕刊の記事より抜粋

一週間前までこの企業にチップの製造を委託していたのは、ロシアの架空名義の会社であることがロシア政府の調べで分かった。ただし、中華帝国政府は、この会社と同じ名義の会社が、ロシア軍関連のダミー会社と一致することから、ロシア政府もしくは、ロシア軍が関与している可能性があるとみてさらに調査を進める方針だ。

一方、爆発事件のあった工場跡地では、犠牲者を悼む集会が行われた。

翌日の朝刊記事より抜粋

警察当局は、爆発事故現場から回収された遺体の中に、数体、射殺された痕跡があると発表。

現場からはロシア軍の使用する5．4ミリ自動小銃弾の薬莢が発見されている。

また、科学調査部門は、爆発は爆薬によるものであり、使用された爆薬は、現場から回収したサンプルの調査結果から、ロシア軍が多用し、国内では使用されることのないHコンポジット爆薬と呼ばれる特殊な爆薬であると発表。

これを受け、中華帝国政府は外務省を通じてロシア側に事情説明を要求した。

数日後の朝刊記事より抜粋

中華帝国政府は、大連工場爆破事件は、ロシア政府主導によるテロであり、その目的は、中華帝国の高い技術力に着目したロシア政府が、製造に高度な技術が要求される特殊な軍事用チップを国内で極秘に製造していたことを隠すためであったと断定。

政府は、帝国国民を無慈悲に殺傷したロシア政府に対して、決定的な報復行動に出ることを宣言した。

「……よくやるわ」

新聞を畳ながら、後藤は訊ねた。

「そうは思わない？」

「……ですね」

美奈代は紅茶を飲みながら、新聞を受け取った。

「本当の犯人、わかってないんでしょう？」

「つーか、ロシア政府は未だに無関係を主張しているし、証拠ってのが、ロシア軍のどこにでもある爆薬と薬莢じゃなぁ……」

「世論を動かすにはそれで十分じゃないですか」

「まぁな」

後藤はタバコに手を伸ばした。

「……日本の元警察官としては信じられないことだよ」

「元警察官としては、黒幕をだれだと思います？」

「さぁなぁ」

タバコに火をつけ、椅子によりかかると、くわえタバコのまま、天井を眺めた。

「何しろ、証拠は何も残っていないどころか、何のチップだったのか、パソコンからサーバーから書類まで、ものの見事に灰になっている上に、技師は全員あの世行きだからなぁ」

「手がこんでますよね」
美奈代は、新聞を開くと、該当する記事に目を落とした。
「プロの犯行ってのは、間違いないんですよね？」
「ああ……警備員が喉切られてるし、警備システムと防火システムは切断されていた。工場の通路はほとんどが外から接着剤で開けないように細工され、逃げ惑ったはずの工員達は皆殺し。その後、事務所が襲われた……これがしめて１０分以内で行われた」
「余程の手練れ……ですか」
「あまり、関心ない？」
「どうせ敵国ですから」
美奈代は新聞を戻した。
「……そういうもんかね」
「少なくとも私は」美奈代は答えた。
「中華帝国とロシアの国境に出現している妖魔の群の方がよっぽど興味深いです」
「お前らしいけど……むしろ、あの存在がなければ、今回の事件だって、ロシアの仕業に見せた国内の反政府組織のテロになったかもしれないんだよなぁ」
「えっ？どういうことです？」
「だからさ」
後藤はタバコの灰を灰皿に落としながら言った。
「妖魔がどうしてあんな所に出現したのか。もしかしたら、お互いがお互い、相手が仕掛けた罠か何かじゃないかって、疑心暗鬼になってるんだよ」
「そんな」
美奈代はぷっ。と小さく笑った。
「まさか」
「そのまさかさ」
後藤はタバコをもみ消した。
「互いに、妖魔の兵器化を狙った実験の結果が、ああなったんじゃ

ないかと思っている。だから」
「だから？」
「あの妖魔の群だって、敵の軍隊の一部だと思っているわけだ」
「……妖魔、何体いると思ってるんですか？」
「俺に聞くなよ。とにかく、このタイミングでよくやってくれたもんだよ。犯人が、ホントにロシアでも中華でもなかったら、余程災厄を起こす天才なんだろうなぁ」

クシャンッ！

そんな音がしたのは、越前岬を走る軍用トラックの荷台の上のこと。

ズズッ
「誰か、噂してるのかなぁ」
鼻をすすったのは、あの水瀬悠理だ。
「風邪かい？」
そう、悠理に声をかけたのは、悠理の真向かいに座った、顔の濃い、背の高い男だった。
まだ若いが、しっかり鍛えられていることは体格の良さでわかる。
「ううん？」
悠理は微笑んでから言った。
「大丈夫だよ」
「そうか」
男は、手にしたポケットテッシュを懐に戻した。
「気にしてくれてありがとう」
「……いや」
その後、男はズボンやベルトを何度も心配そうに触ったりひっぱったりした。
「軍服、慣れていないの？」

「ああ」
男は、突然の問いかけに驚いた様子だが、それでも頷いた。
目の前にいる、ジーパンにウィンドブレーカーというラフな格好の子供と、こんなものに身を固める自分が何だか奇妙にさえ思える。
「というか、着たのは今日が初めてだ。まさかこの歳で戦場に行くなんて思いもしなくて」
「……いくつだっけ？」
「１４だ」
「へぇ？」
悠理は少し、驚いた顔になった。
「１８位かと思った」
「老けて見えるだろう？」
男は、そう言って自嘲気味に笑った。
「ううん？そう意味じゃないよ」
悠理は首を横に振った。
「僕は子供に間違えられるから羨ましい」
「いくつだ？」
「同い年だよ。僕も１４」
「まさか！」
「驚いたでしょ」
「あ、ああ」
男は素直に頷くしかなかった。
そして、
「……名前、何だっけ」
トラックに一緒に乗ってからすでに１時間近く。
目の前に座ったのに、相手に話しかけられるまで、名前も聞いていなかったことに気付いた。
「水瀬悠理」
「秋篠博雅（あきしのひろまさ）だ」
「うん。よろしく」

「ああ……それで、君は何のために？」
「君の護衛」
悠理は言った。
「護衛？」
「うん。ほら、博雅君、これから戦場に出るでしょ？鉄砲玉に当たったり、砲弾で吹っ飛ばされたりしないように」
「……待ってくれ」
博雅は、眉のあたりに皺を寄せると、脇に置いていたリュックを開いた。
太い眉に皺を寄せるだけで二十歳くらいに見えるなぁと、悠理は口に出さずに思った。
「俺は」
博雅は錦の包みをリュックから取りだした。
「ただ、こいつを吹いて欲しいと頼まれただけだが……？」
「うん」
悠理は頷いた。
「笛でしょ？」
「そ、そうだ」
博雅が包みを開くと、漆塗りの木箱の中から取りだしたのは、一管の横笛だった。
「うん」
悠理はニコリと微笑む。
「それでいいんだよ」
「何がいいんだ！」
博雅は立ち上がろうとしてバランスを崩し、尻をイヤという位、トラックの荷台にぶつけた。
「痛ててっ……近衛の依頼で、俺に笛を吹いて欲しいとしか、俺は何も聞いていない」
「知らなくて良いよ。そんなこと」
「いや、そうはっきり言われると……」

博雅は笛が無事だったことを確認すると、困惑げに口を尖らせた。
「返答に困る」
「博雅君には笛の才能がある――――そういうことなんだよ」
「わからん」
「それでいいんだって」

トラックが止まったのは、人類が到達出来る最前線とされる武生付近の陸軍陣地。

「ついたよ」
悠理が先に降りて、その後に博雅が降りた。
リュックをしっかりと背負う博雅の前を、彼より数十センチも低い身長の悠理（作者注：当時、悠理の身長は１４７．５センチ。博雅は１８２センチ）が何でもない。という顔で、自分達より圧倒的に年上で、しかもいかつい兵士達の間を歩いて行く。
テントまである。
そう、事前に説明されて渡されたリュックだが、博雅はこれを元に戻せる自信さえない。
なんだか、とんでもない話しに巻き込まれたな。
そんな気分で一杯だった。

「ここだよ？」
悠理が止まったのは、「大隊司令部」と書かれた札が下がるテントの前。
「失礼します」
博雅の反応も待たず、悠理はテントの中に顔を突っ込んだ。
「近衛ですけど」

「……成る程？」
菅沼大隊長は、目の前でカチコチになっている少年を眺めると、数回、頷いた。
「無駄かどうかはともかく、事情はこの書類でわかった」
手にした書類を折りたたみの出来るアルミ製のテーブルに置いた。
「しかし」
その視線は、悠理に向いた。
「本当に護衛は出来ないぞ？」
「大丈夫です」
悠理は答えた。
「僕がいますから」
「むしろ心配なんだがな……」
「むぅ」
「秋篠宮の三男殿か」
「は、はいっ！」
博雅は精一杯背筋をのばした。
「ご長男が戦死され、二男も陸軍の戦車部隊に志願されたと聞いている」
「はい」
「歴史ある秋篠宮家の最後の男となるかもしれない状況を、一国民として大変憂慮している」
「ありがとうございますっ！」
「近衛から貴重な魔法騎士が護衛につくからという条件で、この先に進むことを許可するが、陸軍からは一切の護衛をつけることは出来ない。わかってほしい」
「は、はいっ！」
魔法騎士？
何のことだ？
そう思いながら、博雅は精一杯、体を強ばらせるしか出来ない。
「無事に帰ってきたら、酒でもおごってやろう……峠の先にいるの

は、我々にとっては戦友だ。よろしく頼む」
テントを辞した博雅は、先を歩く悠理に後ろから声をかけた。
「何のことだ？俺は、何をするんだ」
「簡単」
悠理は答えた。
「車、運転できる？」
「免許もってるワケないだろう？俺は１４だぞ」
「アクセル踏めるでしょ？」
「いや……仕組みすらわからん」
「じゃ、僕が運転してもいいか……博雅君、鉄兜（ヘルメット）、顎紐とシートベルト、しっかりしめておいてね？」
「ちょっ……質問に答えてくれ」
歩き続ける悠理の肩を、博雅が掴んだ。
「俺は、何をするんだ？」
「これから」
悠理は立ち止まると、振り返って答えた。
「僕と一緒に福井市街地まで行って、笛を吹いてもらう」
「何っ？」
博雅が驚いたのも無理はない。
福井の市街地。
そこはつまり、今や屍鬼（グール）の巣窟だ。
そこへ行け？
俺は軍人じゃないぞ！
「大丈夫だって」
悠理はポンッと博雅の手を叩いた。
「僕がいるし、博雅君だって騎士でしょう？」

「って……丸腰だ」
「はいこれ」
悠理がどこから取りだしたのか、博雅に押しつけたのは、銃剣のついた、悠理の身長より長い小銃だった。
「気休めくらいにはなるよ」
「……」
「なんてね？何度も言っているけど、博雅君は笛を吹いてくれるだけでいい。その間は僕が守る」
「……なぁ」
「何？」
「君も騎士なのか？」
「うん」
悠理は頷くと腰に下げていた６０センチほどの長い棒のようなモノを掴んで博雅に見せた。
「これでわかる？」
「これ……まさか」
「そう、霊刃（れいは）――サイコブレードとも言う」
博雅は、それでわかった。
生で見たのは初めてだったが、魔力で刃を作り、あらゆるモノを切断するという魔法騎士専用の刀剣――それが霊刃（れいは）だ。
これを持っている以上、目の前の少女（博雅視点）は、魔法騎士だと言うことになる。
「君が……魔法騎士？」
「外見で人を判断するのはよくないよ？」
水瀬はそう言うと、さっき乗ってきたトラックの運転席へとよじ登った。
「足……届くね。よかった」
「……」
「乗って？これからしばらく、このトラックが僕達の家になる」

鎮魂曲　第一話（後書き）

●人物紹介

秋篠博雅（あきしの・ひろまさ）

名門貴族秋篠宮家の三男坊。騎士。当時まだ１４歳。

常識人だが、雅楽に強い関心をもち、その才能は特筆すべきものがある。

「美奈子ちゃんの憂鬱」シリーズではレギュラーで、悠理の数少ない親友であり、同時に、後に登場する（予定）の世界最強魔法騎士、ルシフェル・ナナリの恋人となるラッキー野郎。

「俺は二度と……」
鼻血が止まらない鼻を押さえ、博雅がトラックの助手席から降りた。
「お前の横には乗らんぞ……」
「あの……ごめんね？」
悠理は、運転席から降りると、博雅に駆け寄った。
「シートベルトが壊れているって知らなくて」
軍用トラックで不整地を走ってみればいい。シートベルトのありがたみをイヤという位、体に教えてもらえるだろう。
博雅は、まさにそんな感じだった。
一旦、荒れ地に入った途端、はめたはずのシートベルトが外れてフロントガラスに顔を叩き付けられ、鉄兜を被っているとはいえ、天井に頭をぶつけ……。
シェイカーの中にでも放り込まれたような錯覚さえ覚えた博雅はもうフラフラだ。
「動かないで」
悠理の手がポウッと明るく光った。
その光が博雅の顔を包む。
「……大丈夫かな」
悠理は、手を戻すと、博雅が腰にぶら下げていた水筒を取り上げ、キャップを開いた。
「顔、洗ってあげるから」
「あ……ああ」
「よかった。骨は折れてないよ」
博雅は、自分の顔をそっと触って、さっきまでの出血が嘘のように感じた。
「はい」

博雅は、顔を拭いてもらいながら言った。
「……で、ここはどこだ？」
博雅はあたりを見回した。
木々の生えた林のような中、古びた建物がいくつか見える。
「越前市の大虫神社」
「神社？」
よく見たら、鳥居があった。
「うん……境内までこんなので乗り付けたなんて、神様に怒られるかもね」
悠理は血の付いたハンカチをポケットにしまうと、
「ここで待っていて。結界張ってくる」
そう言い残して、どこかに消えてしまった。

国開闢の神として丹生嶽（鬼ケ岳５３３ｍ）に鎮座せしを崇神天皇七年に社地を定め、大蒸大神と称えた。
垂仁天皇二十六年、国中に蝗（イナゴ）が蔓延したため、この神に祈願したところ、悉く退滅し五穀豊作した。
その神徳を尊み、今の宮地に遷して虫除守護の神として大虫神社と称えた。

「……成る程？」
悠理がいない間、博雅はすることもなく、神社の脇にあった由来書きを読んでいた。

「お待たせ」
博雅が、三回目に由来書きを最初から読もうとした時、後ろから悠理の声がした。
「何していたんだ？」
「屍鬼（グール）がね？」
悠理は、長い荒縄をまとめながら言った。

「この神社に侵入しないように、結界を張ってきた。だから、この神社にいる限り、屍鬼（グール）に食べられることはない」
「それって安心なのか？」
「うーん」
悠理は、しばらく考えた後、
「わっ！？」
不意に、博雅の胸ぐらを掴むと乱暴に地面に引き倒した。
ターンッ！
そんな音と、
チュインッ！
耳元を何かが掠めたのは、ほとんど同じタイミングだった。
「……なっ」
「ごめん」
悠理は言った。
「屍鬼（グール）が武器持ってるの、忘れてた」
「……おい」
博雅は地面に伏せながら訊ねた。
「つまり、俺は今、撃たれたってことか」
「そう。新型の９ミリ超えの弾丸だからね。命中したら即死は避けられないよ」
「……」
ゴクッ。
唾を飲み込む。
撃たれた。
その言葉だけで、背筋が寒くなる。

ここは――戦場だ。

「ど、どうすればいい」
「このまま死んだふりしていて」

悠理は平然と言った。
その落ち居着いた態度と、自分の無様な姿の違いを考えて、博雅は恥ずかしくなった。
「結界を広げてくるから」

時折、銃声がする中、博雅は神社の社殿の中に押し込められた。
ここが一番安全だから。
悠理はそう言うが、いつ、屍鬼（グール）が来るか分からない中、ただジッとしてるのは、本当に神経が疲れることだ。
博雅は、リュックから笛を取りだして、口をつけた。
笛から浪々と音が見えない螺旋を組み上げ、世界を包み込んでいく。

恐い。
その感情さえ、

そんな感情を持つ自分自身という存在さえ、
その螺旋の中で無へと浄化されていく。

一体、どれ程の時間、笛を吹いていたか、それさえ忘れた博雅が笛から口を離すと、社殿の外はすでに夕暮れを迎えていた。
「……いかん」

博雅は、社殿の中から立ち上がると、外を見た。
社殿の真ん前に堂々と止まった軍用トラック。
その中から降ろされた荷物の近くで、悠理が簡易コンロの前に座って何かを調理していた。
何だかそれが普通に思えて、博雅はため息と共に肩をすくめ、そして社殿から降りた。

「そろそろ」
夕飯が終わった後、博雅は訊ねた。
「何をするのか教えてくれないか？」

「さっきの続き」
悠理は食器を片付けながらそう答えた。
「続き？」
「うん」
コンッ。
悠理が叩いたのは、さっきから椅子の代わりにしていた四角い箱のようなもの。
「これは？」
「スピーカー」
「スピーカー？」
「うん」
悠理は、薄暗くなった中、トラックから伸ばされたケーブルをフォークで示した。
「マイクがそこにあるから、そこの前で笛を吹いてくれればいいよ？スピーカーからの音で、半径1キロ位は何とかなるから」
「……本当か？」
「多分ね」
「おい」

「とにかく」
悠理はスピーカーから立ち上がった。
「準備してね？結界の外では、お客さん達がお待ちかねだから」
「お客？」
「屍鬼（グール）になった人達」
「ち、ちょっ！？」
「万はいるから」
青くなる博雅に、悠理はあっさりと言ってのけた。
「すごいねぇ。博雅君。その歳でファーストコンサートで万を動員したなんて、そうはいないと思うよ？」
「冗談はよせっ！」
博雅は立ち上がって怒鳴った。
「な、なんで俺が屍鬼（グール）相手に！」
「差別はよくないよ？数日前まで、泣くことも笑うこともあったのが、今は出来なくなっただけで」
「……なっ」
「……ごめん」
悠理は突然、頭を下げた。
「君を呼んだの、確かに僕」
「……」
「でもね？君ならわかってくれると思ったんだ」
「……」
博雅は、じっ。と悠理を見つめると、地面にどっかりと腰を下ろした。
「とりあえず」
深呼吸して、自分を落ち着かせた博雅は、悠理に言った。
「俺にわかるように、話しをしてくれ」
屍鬼（グール）は、魂を肉体に封じ込められた存在。
いわば、呪われている。

その呪いを解除するには、3つの方法しかない。
一つが、肉体の基幹たる心臓か脳を破壊し、肉体の機能を停止させる。
二つが、魔法、或いは法力といわれる手順を踏んで、魂を解放させる。
三つ――

「魂自身を、肉体に囚われた状態で、浄化するんだよ」
「浄化？」
「うん……法力とかが、魂を肉体から引きずり出して浄化するのと違う。魂に自身を浄化させるともいう」
「そんなこと……俺に出来るわけないだろう？俺は確かに騎士の認定は受けている。だが、魔法騎士じゃない。魔導師でもない。拝み屋でも、坊主でもない」
「ただの中学生……だね」
「わかってるなら」
あっさりとしたその答えに唖然としながら、博雅は言った。
「何で俺を連れてきた」
「……君には、君の知らない才能がある」
「俺に？」
「……力っていうのは」
悠理はどこからかガラス入りの容器を取り出すと、その上を覆っていたタブを外した。
「持っていると知ることが、その力を発揮させないこともある」
「何？」
「科学だか化学の世界では、調査のための“見る”という必然的なはずの行為が入っただけで、その結果が違ってくることがあるという――知らない？」
「どこかで聞いた気はする」
「僕が言いたいのは、それと同じで、ここで博雅君にこれこれこう

いう力があなたにありますよって、それが君の力に影響を及ぼしてもらいたくない」
「そんなことがあるのか？」
「あるかもしれない――――だね。リスクは排除しておきたい」
「よくわからんが」
博雅は顔をしかめ、
「何をしろというんだ？念仏でも唱えろと？ここは神社だぞ」
「ははっ……今の時代、屍鬼（グール）を念仏で昇天させられる法力がある人って、何人いるのかな」
「――――おい」
「博雅君は」
悠理は、博雅が大切そうに脇に置いた包みを指さした。
「それがあるでしょう？まぁ、一杯どうぞ」
そう言って、悠理が杯にいれて手渡した得体の知れない飲み物を、博雅は進められるままに口に含んだ。
喉が一瞬、焼けるような気がした。
だが、臓腑にその飲み物が入り込むなり、体の中で、まるで眠っていた龍が動き出したような不思議な感覚が走った。
体が熱い。
「お前、何を飲ませた？」
「気付け薬だよ」
悠理はそう言って、無邪気なまでに笑い、そして、博雅の前にマイクを置いた。
「演奏は、座ってやる？」
「……ああ」
「じゃ、座布団もどうぞ」
「……今、どこから取りだした」
「禁則事項です」

――もう知るか

博雅は、悠理の用意した座布団の上に座り直すと、包みを解いた。
俺にどんな力があるかは知らない。
知りたくもない。
俺はただの中学生で、笛が好きなだけだ。
ただ、そんな程度の存在だ。
それを、こんな所に連れてきたって、何の力にもならない。
なるはずがない。

「博雅君」
「……なんだ？」
「屍鬼（グール）って、バケモノみたいにいうけど」
「バケモノだろう」
「泣いてくれる家族がいるんだよ」
「……何？」
「みんな、こんな所で屍鬼（グール）になりたくて、ここまで来たわけじゃない。くやしかったと思う。無念だと思う」
「……」
「家族の所に、帰りたいと思っているはず」
「だから……どうしろと？」
「音楽が」
悠理は、まるで楽しむかのように、博雅の顔を見た。
ぼんやりとした灯りの下、自分をのぞき込むように微笑む銀髪の少女は、不思議と蠱惑的にさえ目に映る。
「人を幸せにすると、思ったことない？」
「ある」
博雅は頷いた。
「人を慰めることが出来るとは？」

笛を吹けば十分、俺は幸せだ。
笛を吹けば、悩みは消える。
なら、それを聞く相手は――――？

幸せで、心を癒す力がある。
音楽には、そんな力がある。
俺は、そう信じられる。

「思う」
博雅ははっきりと答えた。
「音には、力がある」
「なら、大丈夫だよ。聞く相手は、今は屍鬼（グール）の中に入った兵隊さん達の魂」
「……何？」
「兵隊さん達の慰問――――悔しくて悲しくて、そんなことがあった兵隊さん達を慰めるために、笛を吹いて欲しい。そう、頼まれたら、博雅君は断る？」
「……」
「兵隊さん達に、君の笛は届くよ」
「……」
博雅は、じっと笛を見つめた。
「何を吹いてくれる？」
「……なら」
その姿勢を正し、笛に口をつけた。
「こういうのは――――どうだ」

博雅の息が、笛という道具の中で音となる。

笛の原理なんて、そんなものだろう。

それ以外、何の意味もない。

音に、意味はない。

ただの空気の震動に過ぎない。

本当に？

それは嘘だ。

博雅の笛から放たれた空気の振動は、空間をゆらぎとなって四方に解放され、その音色に空間を染め上げる。

静寂の空気が、時に静かに、時に熱く、時にもの悲しく、時に怒りをもって、千にも万にも変化する。

それは波。

空間を伝わる色の――――浄化の、解放の波だ。

音が色となり、波となって、すべてを洗い流す。

それは世界を清める浄化の波であり、世界を再構築するうねりでもある。

世界を染め上げるどす黒い汚れがひび割れ、あるいは剥がれ落ち、消えてゆく。

崩れ、失われたか所を、清らかな、新たな何かが埋めていく。

全てが、清く美しく、変化していく。

「……」

悠理は、満足げに目を閉じ、耳を澄ます。

マイクからスピーカーを経由して、延長ケーブルを通って、数百メートルも延長したスピーカー達が、この言葉に出来ない出来事を、電気信号として伝え、そして震動として世界に伝える。
それを聞く者は、すべからく変化に曝される。

それこそ、悠理が博雅を連れてきた理由だった。
博雅は、それを知らない。
知らせるつもりは、悠理にはない。
あることを知った博雅がもし変わってしまえば、この世界から、この美は消える。
それは、罪だと、悠理はそう思う。
だから、言わない。

――――予想外な程だな。

悠理は、コップに入った液体――――つまり、カップ酒をちびりちびりとあおりながら、博雅の演奏をじっと聞き入る。

月が昇り、雲が影をさす。
何でもない光景にすぎないはずが、今だけはまるで天女の舞にさえ、悠理には思えてしまう。
「……あっ」
悠理は口の中で、そう呟いた。

結界の向こう側で、金色の光の柱が、一本、また一本と立ち始めた。
屍鬼（グール）から、魂が解放された証。
それが、数千、数万、重なり合って、まるで金色の滝のように、悠理には映った。

――おめでとう。

悠理は、カップ酒を目元まで掲げて、天に昇っていく魂達に、彼なりの礼儀を払うと、再び、博雅の演奏の世界へと、意識を沈めていった。

鎮魂曲　第二話（後書き）

つくづく、表現っていうか、描写が弱いなぁって悩みながら書きました。下手くそでごめんなさい。もっと精進します。でもね?今、書いていてとても楽しいです。それが幸せです!まだまだ続きますし、だらだら書いてくので、おつきあい下さい。ついでに感想よろしくです!

鎮魂曲　第三話

●福井県越前市、大虫神社付近

「ああ」

部隊に命令を出し終えた菅沼大佐は、鳥居の側で機材の片付けをしている女の子を見かけた。

「近衛の」

「あっ」

ケーブルをまとめる作業を止め、悠理がペコリと頭を下げた。

「どうも」

「ご苦労だったな」

ポンッ。と、菅沼大佐は、悠理の頭を撫でた。

「それで？あの秋篠宮家の三男坊は？」

「東京に戻しました」

「……早いな」

「さすがに」

悠理は、神社の外で作業にかかる兵隊達を見た。

「“アレ”でトラウマにでもなってもらうと困るんで」

「……成る程」

あたりから集められた小銃が、縄で縛られ、束になって、木の柱を格子に組んだ上に乗せられて兵隊達に運ばれてきた。

その後ろに続くリアカーには、手榴弾や拳銃が山のように無造作に積み上げられている。

戦死し、屍鬼化（グール）した将兵から回収した武器だ。

神社の外を、キャタピラの甲高い音を立て、戦車がゆっくりと通り過ぎていく。

「戦車、下げるんですか？」

「ここにいるのは、俺の師団だけだ」

悠理は、彼が歩兵師団の師団長だと思い出した。

「戦車は不要だ。本来なら、欲しいところだが、誰にも使いこなせない」
「いざって時は」
「ないことを祈っていてくれ。その“いざ”って時が」
「……」
「正直」
菅沼大佐は、鉄兜を脱ぎ、額の汗を拭った。
「死体の数が多すぎる。重機を使って穴を掘って、そこに埋めるしかない」
「後送しないんですか？」
「２万近い死体を連続で処理できる焼却施設はない。処理を待つ間に腐敗が進んで疫病が発生する恐れもある。何より」
「……」
「一度、屍鬼（グール）化した死体だ。民間では引き受けてもらえん」
「そう……ですか」
「近くの土地を、強制的に接収して、そこに埋葬することになるだろう。彼がいてくれれば、念仏代わりに一つ、演奏を頼みたかったのだが」
「すみません、返すの、早すぎました」
「いや……むしろ遅かったというべきだろう」
「？」
「屍鬼（グール）化した将兵を、昨晩まで解放してやれなかった……時間がかかってすまなかったと、俺はそう思っているんだ」
「……」

所属部隊、官、姓名、全て確認が終了した者から、鉄兜、ボディアーマー、武装、軍靴の他の装備品、遺品となりそうなものが外された。
死体は部隊ごとに集められ、装備に残されていた毛布にくるまれ

る。
最低限度の軍服と名前が記されたドッグタグのみ身につけた亡骸が、重機や兵士達によって掘られた横に長い穴に並んで横たえられる。
名簿を確認し、漏れがないと判断された部隊から、土が被され、その跡に「〇〇大隊第〇中隊第〇小隊英霊ノ墓」と墨で書かれた木の柱が墓標として建てられる。
敬礼が払われ、土を埋め終わった兵士達は、スコップを持って次の墓の埋葬にかかる。
兵士達は、延々とそんな作業を続けていく。
また、別な部隊は、放棄された市街地から残存の屍鬼（グール）が存在しないか、一部屋ずつ潰しながら調べていく。

この日の陸軍の進軍スピードは、まったくゼロそのものだった。

「遅いっ！」
それを、怒る者がいた。
蓮川大臣だ。
「いつになったら、私は岡山先生に北陸奪還の報告が出来るんだ！格好悪くてしかたないじゃないか！」
陸軍参謀本部で、蓮川大臣は机に拳を叩き付けた。
「し、しかし……」
参謀本部のスタッフは、何と言って良いのかわからず、口をパクパクさせるのが精一杯だ。
「混成師団が壊滅し、その死体処理すら終わっていない状況で」
「それがどうした！ゴミの処理は業者にでもやらせておけ！」
「ゴミとは何ですか！」
参謀の一人が血相を変えて怒鳴った。
「将兵の亡骸を、ゴミとは！」

――ヒッ！

ビクッと脅えた様子で身構えた蓮川大臣は、歯をガチガチ言わせながら、それでも怒鳴り返した。

「ぼ、僕は総理大臣の孫で、陸軍大臣だぞ！」

「大臣なら、将兵はゴミですか！」

「うるさいっ名前を言え！更迭してやるっ！」

「構いませんっ！ただし、今の発言は撤回して頂きたいっ！」

「誰がするか！お前は首だ！お前らも、こんな所にいないで、さっさと軍を進めろ！明日までに石川県に侵攻しなければ、全員更迭だぞ！」

「無茶だ」

師団長の野村少将は、参謀本部からの命令を一言で断ろうとした。

死体の埋葬は終わっていない。

行方不明の将兵がまだ百八名いて、イタリア軍2万については、どこにいるかさえわからない。

しかも、今はもう夜の１０時。

死体の処理と塹壕掘りで兵士達は疲弊の極みにある。

辺りは真っ暗。

敵の状況もわからない。

この状況ですぐに進軍し、明日の昼までに、最低でも小松まで奪還しろだなんて、参謀本部は何を考えているんだ！

「前進しろというなら、機甲師団、最低でも戦車を寄こせと伝えろ！」

「自分もそう考えます」

鈴木師団付参謀は、従兵からコーヒーを受け取りながら頷いた。

「民州党政権になってから、何もかも狂っている」

「軍人は、政治に口を出すべきじゃない」

「どういう政治的事情から自分が動かされているのか。それは知っておくべきです」
「知った上で変えられるわけでもあるまいに」
「……そうですがね。戦車の要請は、行っておきましょう。そういえば、海軍は何か？」
「ああ。海軍がやっと重い腰を上げてくれた。越前岬方面から小松方面へ移動をかけてくれる」
「肝心の近衛は？メサイアがなければ、どうしようも――」

バァァァンッ

遠くで、そんな音がした。
「雷か？」
「まさか」
膝の上に置いていた鉄兜をかぶり、鈴木参謀は答えた。
「砲撃ですね。迫撃砲」
「どこから、誰が？迫撃砲なんて、ウチの部隊は保有していない。ここには俺の師団しかないはずだ」
「いましたよ。いたでしょう？今、行方不明になっている連中が」
鉄兜の顎紐を締め、鈴木参謀は言った。
「何だ！」
「屍鬼（グール）化した、イタリア軍ですよ！」

塹壕掘りが終わったあと、土嚢運びをやらされ、その後、スコップを川で洗って、ここにいろと言われた。
福井市街地のフェニックス通りとか言う道路沿いの建物の上。
土嚢で囲まれた“陣地”と軍曹は言っていた。
一日、スコップを持ち続けた腕がパンパンに張って痛い。

部活の時なら、エアーサロンパスを吹きかける。なんだか、あの匂いが懐かしい。
部室に充満したサロンパスと、それに隠れたタバコの匂い。
みんなが懐かしい。
「早瀬」
揺り起こされて、早瀬智也軍属は自分が寝ていたことに気付いた。
「ずるいぞ。俺だって眠いのに」
真っ暗で、相手の顔もロクに見えない。
声からして……いや、この二人だけの“陣地”に、自分と一緒に押し込まれているのは、川井太一、クラスメートだ。
「ごめん」
智也は、鉄兜の庇を直すと、陣地の外を見た。

絶対に立ち上がるな。

ここに押し込めてくれた軍曹は、そう自分達に命じた。
馬鹿みたいに突っ立ってると、マトにされるぞ。
そう、警告していた。
違うだろ？
少なくとも智也はそう思う。
馬鹿みたいに突っ立っていたら、俺が殴る。
その間違いだと。

「くそっ。腕が痛ぇ」
太一は、腕をさすりながら小声でぼやいた。
「スコップの手入れが悪いって、それだけで殴るなよなぁ」
「同感」
智也は、頬を撫でた。
「連帯責任で僕達まで殴られたんだから」
「悪かったよ……なぁ」

「何だよ」
「俺、見たぞ？」
「何を」
「ほら、師団司令部付きの通信兵に、女の人達いたろ？」
「ああ……確か、通信兵だっけ？」
「そりゃ、しらねぇけどさ」
太一は、周りを見回すと、智也の耳元で囁いた。
「俺、着替え……覗いちまった」
「まじ！？」
智也も男の子だ。女の話に興味がないわけではない。人並みの性欲はある。
こっそり、先輩からエロ本を譲ってもらい、友達から聞いたままに自分を弄んで、射精の快感を味わう方法も知っている。
黒く塗りつぶされた“女”の形を想像するだけで興奮するような、そんな年頃だ。
「すごかったぜ？みんな、おっぱいこんなの！」
胸元で逆Ｕの字を書いて見せた太一は、興奮気味に言った。
「ああ……んでさぁ。パンツ脱いで、あそこが丸見え！」
「う……うん……」
「見たぜぇ、俺は！」
「ど、どんなんだった！？」
「いやぁ……」
「もったいぶるなよ！友達だろう！？」
「明日、また、覗きいかないか？」
「い、いいの？」
「ああ。一蓮托生だ」
「う、うん……」
「こんな重たい」
太一は、土嚢の上に置かれた金属の塊――軽機関銃を拳で叩いた。

「こんな厄介モノばっかりみていたら、チンポまで錆びちまう」
無邪気にそう笑う太一の顔を見て、智也は明日が楽しみになった。
覗きが悪いことだとは思う。だけど、それで自分が大人になるような、そんな期待の方が先だ。
何を見ても、エロ本で見た女の胸に見えてくる。
あの、塗りつぶされた所は、どうなっているんだろう。
そう思うだけで心臓がバクバクいってくる。
股間がムズムズしてくる。
そういえば――智也は思った。
僕、どれくらい、“して”ないんだろう。
“あれ”を覚えてから、毎日していたけど……。
「だけどさぁ」
太一が訊ねた。
「お前、あんな美人の姉ちゃんいたんだなぁ」
「……ああ」
智也は、太一が誰のことを言っているのか察しをつけた。
「さつき姉ちゃんのこと？」
「メサイア乗りだろう？すごいぜ」
「……うん」
「何だよ。殴られたの、まだ根に持っているのか？」
「当たり前だろう？」
智也は言った。
「いきなり、ガンッだぜ！？」
「まぁなぁ……」
太一は土嚢によりかかった。
「でも、弟が戦争に行くってなれば、そうかもな」
「……」
「俺、弟の次郎か満夫が戦争に行くって言い出したら、多分、止めたと思うもん」
「……そう？」

「なぁ」
太一は、もう一度、身を乗り出した。
「本当に姉ちゃんなのか？年上の彼女とかじゃねぇのか？」
「な、何言ってんだよ」
「知ってんだよ。お前んところが再婚だって」
「……」
「年上の姉ちゃんって、あんな美人だろ？なぁ……パンツとかブラとか、おかずにしてたんだろう？どんな匂いしたんだよ」
「してないよ！」
「嘘つけ。俺なら、絶対、やってたぞ？」
「何考えてんだよ」
「……マジかよ。本当にしてないのか！？」
「……去年、“して”る最中に部屋に入られた事があってさ」
智也はうんざりって顔で言った。
「姉ちゃん、普段からラフな格好しているからさぁ」
「な、なら、おっぱいとか、みたことあるんだろう？」
「……」
智也は、無言で頷いた。
「ぱ、パンツみたとか！」
「う……うん」
「やっぱり、おかずにしてたんじゃないか！」
ペンッ！
太一の手が、智也の鉄兜を叩いた。
「いいよなぁ。あんな綺麗な姉ちゃんの生おっぱい。どんな色してた？やっぱ、ピンクか？」
「期待するなよ……本に出てくるみたいな、あんなおっきくないんだから」
「生乳様にケチをつけるなよ……そういや、さっき言いかけたのって、何だ？」
「だから、“して”る最中に、ノックもなしでドアあけてさ？マン

ガ貸してって」
「どうした？」
「慌てて毛布被ったけど……姉ちゃん、僕が何していたか察したらしくて、ニヤニヤしたあと――“何してた？”とか言って」
「……で？」
「ふとん、ひっぺがされた。力任せだもん。騎士じゃない僕に勝てるわけないよ」
「モロ見られた？」
「翌日から火星チャンって言われた」
「お前、仮性なの？」
「む、剥けるよ……多分」
「俺もそうだけどさぁ……あれ、恐くねぇ？」
「うん……まだ、恐いって言うか、そろそろやっておかないと、マズイのかなぁって」
「ああ……にしても、姉ちゃんに見られるわ、仮性呼ばわりされるわ」
太一は笑って言った。
「お前も大変だな。俺んとこなんて、男ばっかりだから、エロ本隠してもすぐバレて、お袋に没収さ」
「それも大変だ」
「ああ。“する”のだって、家じゃできねぇから、図書館のトイレとかな」
「あそこ、結構、やってる奴多いんでしょ？」
「ああ。別名精液の巣……キャプテンも出てきたの見たことあるぜ」
「……ん？」
「……太一？」
「しっ」
太一は、口元に指を立て、耳を澄ませた。
「……」
「？」

智也も、誘われるように耳を澄ませた。

ザワザワザワ

風を受けた竹林のような音がする。
そっと土嚢の向こうをみた。
前は川が流れている。
足羽川とか言っていたはずだ。
この音かな？

僕達の任務は、この橋を守ること。
橋には爆薬がしかけてあって、もし、守りきれないと判断されたら、すぐに橋は爆破される。
最悪でも、この爆破を見届けるまでは後退してはいけない。
それが命令だ。

とても大きくて、太くて立派な橋だ。
これを映画のように爆破するなんて、出来るとは思えないけど……。

怒られるのを覚悟で、智也は土嚢から身を乗り出した。
橋の前に横を向いた状態で置かれた車。そこに土嚢を積み上げた、少なくとも智也の陣地より立派な“陣地”が道路沿いにいくつか見える。
一番前から三番目のところが、工兵隊の陣地で、ここから爆破の命令を出すという。
智也達にとって鬼の軍曹がいるのが2番目の“陣地”。智也は、そこにいる軍曹が、まっすぐ前を向いているのを見て、すぐに頭を引っ込めた。
智也達のいる建物の前、別な建物の上やその中に頑張っている仲間は、何か気付いたんだろうか？

「何？」
「わかんねぇ。でも、川の音じゃないぞ」
太一は頬をポリポリ掻いた後、塹壕の前に置かれた軽機関銃の安全装置を解除した。
「どんな音した？」
「キュラキュラって……」

ピーッ！

不意に、そんな甲高い音がした。

「来たぞっ！」
太一は、そう言うと、軽機関銃の薬室を開いた。
「智也、弾薬くれっ！」
「う、うんっ！」

甲高いホイッスル。
それは、敵が来た証。
智也達の近くで、ボール以外に唯一残ったサッカーチームの名残だ。

試合開始――そういうことだ。

先生から譲り受けた軍曹は、笑ってそういった。

恐いけど、時間があればサッカーを許してくれる軍曹を智也は嫌いじゃなかった。
兄のいない智也にとって、軍曹はある意味、その代役として存在していたのだ。

――良いところ、見せなくちゃ！

智也は、弾薬箱から弾帯を取りだし、太一に手渡した。
それを受けた太一は、すぐに薬室に挟み込んで、弾薬を装填した。
これがみんな、すぐに出来なくて、何回、軍曹にぶん殴られたろうか。
下手くそすぎる。
弾薬を手渡すポジションについた連中は、そんなレッテルの貼られた、チームにとっては落ちこぼれだった。
智也は、そのレッテルをどうにかして挽回したかった。
“軍隊は家族、そしてチームだ”
軍曹は言った。
“このチームで、レギュラーは銃手だ！”
そう。
太一はレギュラーで、僕は補欠。
サッカーでもないのに、それが何だか悔しかった。
「太一っ！」
誰かが階段を上ってきた。
振り返ると、ゴールキーパーをやっていた松本達だ。
「どうしたの？」
「軍曹が、これ持って行けって」
松本が背中から降ろしたのは、松本の肩幅よりも長い筒だ。
「何？」
「対戦車バズーカ。ロシアのＲＰＧなんとかいうんだって」
「な、何に使うの？」
「来てるんだってよ」
「何が？」
「決まってるだろう？」
松本ともう一人、相川という後輩が二人がかりで、何か太い物体を筒先に装填した。

「戦車が来ているんだよ」

ピピーッ！
ピピーッ！

ピが二回。
戦闘開始、合図があり次第、個別に撃ての命令だ。

松本は、バズーカと名乗ったそれ――――RPG－7対戦車ロケットランチャーを屋上の床に置くと、伏せの姿勢のまま、相川が背中にぶら下げていた2丁の小銃のうち一丁を受け取った。

「だけど」
この中で一番年下の相川が、松本の裾を引っ張った。
声が泣きそうだ。
「ほ、本当に、こんなんで倒せるの？」
「知るかよ」
松本はその手を乱暴に払いのけた。
「とにかく、橋に来た敵はみんな殺せばいい。軍曹から聞いたけど、屍鬼（グール）ってのは、流れる水、つまり、川は越えることが出来ないそうだ」
「じゃあ！」
「そうだ」
松本は頷いた。
「とにかく、最悪は橋を爆破すればいい」
「すぐやれって言ってよぉ！」
「相川、殴るぞ。そんなことしてみろ。明日から、どうやってみんなで、向こうへ行くんだ？戦車が通れなかったら、俺達、死ぬぞ」
「そんなぁ……」

「恐かったら」
松本は、相川の頭を強く上から押した。
「頭下げていろ。ただし」
相川から、松本は銃を奪った。
「お前、後で軍曹に殴られるぞ？」

キュラキュラ……

川向こうから、そんな音がしてくる。
目をこらすと、橋の向こう側を移動してるぼんやりとした灯りが見えた。
車のライト？
智也はそう思った。
ライトをつけて、車が走ってくる。
「戦車だ」
太一が言った。
「中村――出番だぜ」
「お、おうっ！」
中村は、おっかなびっくりの姿勢でＲＰＧ－７を構えると、
「安全解除――よし、狙い――よしっ」
訓練を再現しているように、声をあげる。
「発射っ！」
ドンッ！
破裂音と一緒に、もうもうと煙が上がった。
途端に、橋の向こうの建物の壁が爆発した。
唖然として、中村を見た智也は、呆然とした顔で筒を掴んでひっくりかえっている中村を見た。
「は、早いよ！」
そう。

準備しろとは言ったけど、撃てとは誰も言ってない！
「馬鹿野郎っ！」
下から、軍曹の怒鳴り越えが聞こえた。
戦車が停止して、砲塔がこっちをむいた。
「畜生っ！中村ぁっ！もう一発！」
太一が機関銃のトリガーを引きながら怒鳴る。
「わ、わかった！」
「今度は外すなよ！」

一番前の塹壕にいた兵士が、何かを戦車の前に放り投げた。
カンッという音と一緒に、戦車の前にもうもうと煙があがった。

煙幕弾だ。

「見えないっ！」
「カンで当てろっ！ＰＫ戦だと思えっ！」
智也の怒鳴り越えに、中村は立ち上がって、もう一発を発射した。
ドンッ！
そんな音が、煙の中でした。
そして、
ズンッ！
もう一発。
前の建物にいるチームの仲間も撃った。

ズズンッ！

煙幕越しにもわかる。
オレンジ色の光と炎が上がり、煙幕の向こうから飛びだしてきた
モノが橋の入り口を塞ぐ。
戦車の砲塔だ。

「智也っ！」
太一が怒鳴った。
「相川と一緒に下へ行って、弾薬を持ってきてくれっ！」
「まだあるっ！」
「今のうちしか、とりにいけないぞ！相川、こいつの予備銃身を！あるたけもってこいっ！」
「わ、わかった！」
「はいっ！」

鎮魂曲　第四話

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「緊急発進？」

「そうだ」

後藤は、頷きながら、美奈代達の格好を一瞥した。

「何だ。準備していたのか？」

「……まぁ」

美奈代達は戦闘服のまま椅子に座っている。

他の部隊は、室内着のままが良いところ。

土浦隊は偵察から帰艦した2騎が任務から解除されている上に、次にフライトが予定されていた涼菜と染谷は戦闘服なのは当たり前だ。

ただ、室内でくつろぎきっていた東達はその格好の違いに小さくなるしかない。

「福井市街地――福井県庁付近に行方不明だったイタリア軍部隊が出現。現在、歩兵師団が相手しているが、いかんせん、装備が違う」

「陸軍は？」

「ご自慢のＡＣ－１３０は間に合いそうにない。今、ここで騎兵隊をやれるのは、俺達だけだ」

「市街地で対歩兵戦闘となれば」

ほむらが訊ねた。

「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を使用するのですか？」

「当然」

「福井県庁付近です。焼け野原になりますよ？」

「だから？」

「……犠牲は無視と」

「焼け野原から再出発するところが一つ増えるだけさ。その程度の

発想で良い。どうせ、魔族軍相手にドンパチする予定だったんだ。綺麗さっぱり焼き払っても、文句もこないだろうさ」

「……了解」

「問題は、この足羽川にかかる橋だ」

後藤は、地図を指示棒で突いた。

「屍鬼（グール）は、川を渡ることが出来ない。渡るなら、橋が必要だ」

「爆破して」

「それをやると、今度は俺達が困る。橋が落ちると、戦車部隊や車両が通れなくなる。補給線に影響が大きい。なるべく、橋は落としたくない」

「架橋戦車いるんでしょう？」

「そう、都合良くいくかよ。

陸軍は、この足羽川から南側には存在するが、北側にはいない。つまり、北側にいるのは全て屍鬼（グール）と断定して良い。

お前達は、北側に侵攻、屍鬼（グール）の焼却を任務とする。

なお、屍鬼（グール）はイタリア軍の機甲部隊装備を保有している」

「機甲部隊？」

「ああ」

後藤は頭を突いた。

「ここはいいみたいだぜ？ただし、これは前衛隊のみ。焼却は任せるぞ？柏」

「了解」

美晴は短く頷いた。

「斬込隊は、福井から加賀市方面へ哨戒。メース及び妖魔を警戒、発見次第叩け。前衛隊に接触させるな。

それと、狙撃隊は足羽川南側に展開。

陸軍と協力し、歩兵隊の支援に入れ」

「「了解」」

美奈代と涼が頷く。

「土浦隊は日本海へ。小松方面からの飛行系妖魔の警戒に当たれ。

会敵の危険性があれば斬込隊に通報。
泉、敵の撃破を担当しろ。
その間に、土浦隊は撤退を任意に行っていい」
後藤は指示棒をしまった。
「何か質問は？」
美奈代達は無言で答えた。
「よろしい。時間との勝負だ」
「起立――――敬礼」
「……さて」
答礼した後藤は、東達に言った。
「訓練校からやり直すか？」

美奈代達が夜の空を福井市街地へと向かう。
「陸軍も馬鹿ですよね」
美奈代は言った。
「後方には機甲部隊が待機しているってのに、それをまだ前に出していなかったなんて！」
「しかたないというか……」
牧野中尉は眠そうに目を擦り、言った。
「あの障害物、まだ撤去が終わってないんです」
「時間かけすぎ……軍隊らしくない」
「らしくないのは、稚拙な命令を連発する参謀本部の方ですよ。戦車が間に合わないのに、前進命令出したなんて、信じられません。よっぽど、身内を殺したいんですかね」
「……さて」
美奈代はため息まじりに言った。
「柏」
「はい？」

「いつも厄介な仕事をまかせてすまんな」
「……いえ。メースや妖魔は頼みますよ？」
「任せろ、涼」
「はい」
「陸軍の馬鹿の面倒、頼むぞ」
「了解です。お姉様」
“鈴谷（すずや）”の前方で３つの編隊を組んだ美奈代達は、それぞれの任務へ向けて前進を開始した。

「お待たせっ！」
弾薬を体に巻いた智也が陣地へ転がり込んだ。
「持ってきたよ！」
「よしっ！」
太一の横で弾薬手になっていた中村が智也に場所を譲った。
「相川、銃身は！？」
「これっ！」
相川が、智也の横に銃身の入ったケースを置いた。
「これで準備完了だ」
「敵は？」
「向こうの建物を占拠して、前の建物にいる連中と撃ち合いになっている」
「ビル、倒せないかな」
「無茶言うな。とにかく、橋さえ通さなきゃいいんだから――」

ドンッ！

耳がキーンという悲鳴を上げた。

何が起きたかわからないけど、頭上から煙が降り注いでくる。
世界が本当に真っ暗になって、息が出来ない。
智也は鉄兜を抱えてその場にうずくまった。
訓練通りの動作。
それ以外、何も出来なかった。

「な、何が起きたの？」
「やられた……」
太一が、泣きそうな顔で指さしたのは、自分達の前の建物。
川を挟んで、向かいの建物にいる敵と撃ち合っていた仲間がいたビルだ。
「戦車の大砲が……」
「中村君っ！」
智也は怒鳴った。
「あのロケットは！？」
「ま、まだあるぞ！！」
智也は、周りを見回すと、中村に怒鳴った。
「貸して！」

その後も、戦車砲数発の直撃を受けた建物は、音を立てて川縁へとむけて崩壊を始めた。
「くそっ！」
軍曹は、道路に設置した陣地からその光景を苦々しげに見ていた。
「子供達を下げておいて、正解でしたね！」
後ろにいた上等兵が怒鳴る。
その通りだと、彼も思う。
あの小隊には、気の毒なコトしたけどな。
「戦車がまた出てきましたね」
「対戦車戦ってのは」

軍曹は、ＲＰＧ－７を準備しながら言った。
「歩兵の本領だろうが」
「いつからです」
上等兵が、同じようにランチャーを担ぐ。
それがいかつい体によく似合う。
「今からさ。俺が決めた」
「そりゃ……お、おいっ！？」
上等兵がすっとんきょうな声を上げたのも無理はない。
建物の屋上にいろと言っていた子供達が二人、真横を突っ走って川にむかったのだ。
「何しているっ！」
軍曹と上等兵は、慌てて彼等の後を追った。
「――見えるか？」
「見えた」
川縁に隠れて、未だに炎上を続ける戦車の影になった、新たな一台が、智也にははっきりと見えた。
「これで……」
智也は訓練を思い出して、ランチャーを構えた。
「いくよ！？」
「応っ！」
トリガーを引く。すごい反動があって、煙と一緒に弾頭が飛んでいく。これじゃ、中村が吹っ飛ぶのも無理はないや。と、智也は思った。

ドンッ！

戦車のキャタピラのあたりで、そんな音がした。
「やった！」
智也が歓声をあげるが、戦車は砲塔を動かした。
「……え？」

僕は、戦車を倒したんだ。
なのに、なんで動いているの？

「馬鹿野郎っ！」
グンッ！
首根っこを掴まれ、天地がグルグルと回った。
背中からアスファルトに叩き付けられ、呼吸が止まった。
頭が痛い。
世界がグルグルして、耳が音を拾わない。
誰かが、胸ぐらを掴んで揺すった後、頬を殴った。
まぶたの裏に星が飛んだくらい強い、その痛みで、智也は現実に呼び戻された。
「死にたかったのか！」
自分の顔をのぞき込んで、顔を真っ赤にしているのは、軍曹だった。
「誰がこんな事しろと！」
「で、でも」
智也は、答えた。
「戦車、倒さないと」
「わかってる」
軍曹は智也を突き放した。
どうやら、崩壊した建物の中に逃げたらしい。
「キャタピラ潰しても、弾は撃てるんだよ」
「無駄だって、ことですか？」
「度胸だけは買ってやる」
軍曹は答えた。
「だがな？これは度胸とはいわん」
「……」
「無謀っていうんだ。チームの和を乱せば、死人が出る。このゲームの最低限度のルールだ。覚えておけ」

「……はい」

まだ、太一達が屋上で頑張っている。

戦車の影から、人らしい姿が見え始めた。

「屍鬼（グール）だ！」

それは、銃を構えた白人達だった。

屍鬼（グール）というのは、白人の格好をしているのか。

智也はそう思って、その勘違いに気付いた。

白人が、屍鬼（グール）になっただけじゃないか。

馬鹿か、僕は。

グウォッ！

土嚢の隙間から炎が吹き出し、橋を通りかかった兵士達が紅蓮に包まれた。

炎の柱となった屍鬼（グール）達の何体かが、炎から逃れようと、まるで踊るかのようにクルクルと回り、川の中へと落ちていく。

「下がるぞ！」

軍曹が怒鳴った。

「持ち場に戻れっ！」

火炎放射装置が頑張っている。

屍鬼（グール）達は、数度にわたって橋を越えようとするが、そのたびに火炎放射装置によって撃退、文字通り焼き払われていく。

勝てるかな。

階段を駆け上りながら、智也は考えた。

勝てなかったら――

そんなこと、考えるな！

「見てたぞ！」

屋上に戻ると、太一が怒鳴った。

「やるじゃねぇか！」

「まぁね！」

智也は、銃手に戻った途端、青くなった。

「太一っ！」

指を指したのは、戦車の残骸の影。

何かを抱えている。

戦車2両分の残骸を超えた場所にほとんど並んで迫ってくる屍鬼（グール）

相手に射撃を続けていた太一が、ハッ！となって筒先をそこへ向けたが――

ドンッ！

一番前の陣地の中で爆発が生じた。

兵士が一人、吹き飛ばされた。

その体に、下半身がついていなかったのは、見間違いじゃない。

でも、まだ、三人、陣地に頑張っている。

まだ、戦える！

智也が、そう思った瞬間――

グギャウァァァッ！

背筋が寒くなるような音が響き渡った。

唖然とする智也の前で、陣地の中から、炎の柱がまっすぐに立ち上った。

「……み、見ちまった」

柱が収まった後の陣地は、真っ黒に焦げて、土嚢や何かにチロチロとオレンジ色の炎が残っているだけ。
呻く様な声で太一は言った。
「俺……火に焼かれて死んだ兵隊、見ちまった……」
「僕もだよ」
「俺……今、はじめてチビった」
「僕はセーフっていうか……」
ゴクリ。
やっと、唾を飲み込むことが出来た。
「……漏らすことさえ忘れていたよ」

ズズズンッ！

腹に響く、恐ろしく重い音が連続して橋の辺りで生じた。
橋が、渡ろうとする屍鬼（グール）を巻き込みながら崩れ落ちた。
「根性無しっ！」
突然、太一がどなった。
「何だよ！火炎放射装置がなくなったら、それで終わりかよ！」
太一は、対岸めがけて無差別なまでに乱射を始めた。
建物や車、アスファルト。
あちこちに弾丸が命中し、時折、屍鬼（グール）がのけぞる。
その攻撃に意味がないことなんて、太一自身がわかっていることだ。
「畜生っ！こっちがチビってまで、頑張ったってのにっ！」
不意に、東の方角に花火が上がった。
照明弾というのを、智也が見たのは、それが初めてだった。

「……何？」

ピーッ！

ホイッスルが鳴った。

長く、とても長いその音の示す意味は――

「太一っ！」

智也は、太一の肩を叩き、銃撃をやめさせた。

「撤退命令だ！」

「何でっ！？」

「知らないよ！」

智也は、弾丸の残りをまとめると、両手に持った。

ずしりと来る重さ。

こんなの、逃げられるの？

「下がるよ！？」

「どこへ！？」

「この大通りをどこまでも！」

智也は立ち上がった。

「軍曹達もさがるはずだよ！橋も崩れた！ここで頑張る意味はないよ！軍曹と合流しよう！」

「わ、わかった！」

太一は機関銃を掴むと、智也の後に続いて駆けだした。

「軍曹っ！」

建物から出た時、走っていく仲間達の後ろ姿に気付いた智也は、

軍曹に駆け寄った。

「どうすれば！？」

「置いていけ！」
軍曹は、智也の首に巻いた弾丸をむしりとった。
「装備は、食い物以外は全部置いていっていい！」塹壕の中に放り込んでいけ！
「でも、銃は！」
「こうなりゃ、足手まといだ！」
そういって、太一の手から機関銃を奪うと、その場に置いた。
「誰も無くしたとか言って、後で文句はいわん！丸腰でもいいっ、お前らが最後だ、走るぞ！」
「はいっ！」

走り出した智也達の頭上を、爆音を立てながら白い物体が通り抜けていった。

「――――遅せぇっ！」
殺気だった軍曹の罵り声。
それはまさに、智也の心の叫びでもあった。

巣　目覚める　第一話

「ここでばらけるよ！」
福井上空にさしかかる。そんな所で、美晴が部隊に命じた。
「橋を塞いで！間に合わない橋は破壊して良い！橋さえ守れば、陸軍に引き継げる！」
「はいっ！」

そう怒鳴った美晴達の目の前で、橋が次々と爆破されていった。
陸軍が橋の防衛に失敗した。

そういうことだった。

事の発端は国道８号線、福井バイパスでのことだ。
魔族軍が、屍鬼（グール）部隊を投入する際、戦車他の機甲部隊が最も侵攻しやすいとして、その主力部隊が投入されたのがこのルートだった。
守備隊はほとんど全滅寸前まで頑張って、幾度となく屍鬼（グール）達を退けたのだが、最後の最後という時に、爆薬が不発という不運に恵まれ、撤退を余儀なくされた。
足羽川を超えた元イタリア軍機甲部隊に蹂躙される前に、陸軍は戦線瓦解を避けるために、足羽川に関する全防衛戦の放棄を決定。
照明弾は、橋の防衛に失敗したことを宣言するために打ち上げられたもの。
これが発端となり、背後から叩かれることを恐れ、国道８号線以外の全ての防衛部隊が、橋を爆破して後退を開始した。

美晴達が到達したのは、そのタイミング。
陸軍からすれば、あと１０分でも早く来てくれれば、ここまで被害は広がらなかったと、地団駄を踏んで悔しがる、そんな状況だっ

た。

後に、美晴やさつき達が、この戦争で一番“気まずい思い”をした時は?という、奇妙な質問を受けた時に揃ってあげたのが、この時の出来事だった。

自分達が守るとした橋の橋桁が、半ばで爆破され、陸軍が撤収を開始している。

状況をそう判断した美晴達の気まずさは、たった1騎を除いて、共通したモノだった。

その1騎――麗央だ。

「ちょっとぉっ!」

麗央は、容赦なく飛んでくる砲弾を回避しつつ、広域火焔掃射装置(イーム)で八号線を迫ってくるイタリア軍の機甲部隊を焼き払った。

「何よ!こんなにいたの!?」

「っていうか」

麻紀が言った。

「機甲部隊が8号線に集中してるみたい」

「じゃ、他は?」

「むぅ……適当に焼き払えばいいんじゃない?」

ピーッ!

グンッ!

騎体が急機動をかけた。

「周辺、ちゃんとチェックして!」

麗央が叫ぶ。

「メサイアっていっても、歩兵は苦手なんだから!」

「ご、ごめんっ!」

麗央が機動をかけたのは、麗央自身の天才的なまでのカンがあっ

たからだ。
それまで、麗央騎が立っていたのは、８号線の岸辺。
麻紀の注意は、８号線経由で橋に殺到する機甲部隊と、周辺に展開する友軍の情報に向けられていた。
すぐ間近の戦車の残骸に隠れていた、たった１体の屍鬼（グール）は、その注意の埒外にいた。
その屍鬼（グール）が対戦車ロケットランチャーを持っていたことなんて、関係は無かった。

メサイアのような重装甲の機動兵器にロケットランチャーがいかほどの意味があるか。
それは、戦車に小銃を向けることに意味があるか？という問いに近いと思うだろう。
実際は違う。

メサイアでも当たり所によってはロケットランチャー一発で撃破されることもある。
特に多いのが、今の麗央騎の主要装備――広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のような、火炎放射装置を積んでいる時だ。
タンクには危険物である可燃性液体を大量に搭載している。
それだけではない。
意外と危険――言ってみれば、この装備をしていて最も弱点となるのは、タンクとノズルを繋ぐホースだ。
ホースそのものは、伸縮など、様々な要因で、物理的な装甲を付与することは出来ない。
下手すれば、対物ライフルでも、ここに命中させることが出来れば、メサイアを火だるまにすることさえ出来る。
火炎放射装置を騎士達が好まないのは、その非人道性と共に、こ

の弱点を恐れればこそだ。
　対物防御魔法コーティングがかけてあるだの、余剰エネルギーを使って、擬似的なＦＧＦを展開しているだの、幾重にもわたる安全装置が準備されている。と、紅葉は力説するが、その危険性は、言葉で説明されただけでぬぐえるものではない。
　少なくとも麗央は、騎士として、本来ならこんなもの騎体に搭載さえしたくない。
　それが広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）だ。

「川を渡る！」
「向こうに渡った敵は！？」
「そんなに多い？」
「うんっと……少し、かな？」
「橋の向こうの敵は？」
「かなり」
「じゃ、そっちを叩く」
「……ってなるね」
　麻紀は変な納得の仕方をしたな。と思った。
「ノズル最大にして。前の工場を全部焼き払う」
「了解」
　広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルが伸ばされ、出力が最大に調整される。
　これで攻撃の有効範囲は５００メートルを余裕で超える。
　川岸から攻撃すれば、美濃街道や城の橋通りを越えた先までが数万度の高熱で一瞬にして消滅することになる。
「好きじゃないんだけど……」
　麗央は、ポツリとそう言うと、トリガーを引いた。
「――――ごめんね？」

「前衛隊全騎、足羽川を超えました。残敵の掃討にかかります」

「狙撃隊は？」
「陸軍を支援しつつ、足羽川を超えた敵を叩いています」
「問題ない……かな？」
加賀市上空まで来た美奈代は、ちょっと考えた。
「橋はどうなりました？」
「陸軍がほとんど爆破しちゃいました」
「……あらら」
「本当にあららです」
牧野中尉は言った。
「指揮官がタイミングの悪い人ですから」
「……すみませんね。それにしても」
「はい？」
「妖魔もメースも、ここで反応が見えないというのは……一体？」
「……確かに」
牧野中尉は頷くしかない。
「屍鬼（グール）だけ先発させて……何の意味が？」
「……中尉？」
「はい？」
「本当に、魔族軍の反応、ないですか？」
「……というと？」
「……なんか、ヘンな気がしません？」
「風間より泉大尉」
牧野中尉が答えるより先に、祷子から通信が入った。
「これは……異常ではありませんか？」

「屍鬼（グール）を捨て駒にしていいというのは」
不意の来客を前にズルドは訊ねた。

「加賀市街地に人類を近づけさせないため……か？」
「そうです」
ランプの灯りの下、黒髪が美しく輝く。
人形のよう。
その評価、あながち間違いでも無いな。
ズルドはそう思いつつ、その巨体をソファーに沈めた。
「はっきりと言い切るとはな――舐めているのか？」
「まさか」
目の前の人形――神音は首を横に振った。
「提供させていただいた、“パンプキン”についてご不満があると、社員から報告がありましたので」
「たった5発はないだろう」
「5発で3万の屍鬼（グール）をオマケにつけましたが？」
「……口は使いようか」
「それがご不満ですか？」
「最低でもあと千発欲しい。千発あれば、この弓状列島の勝敗を決することが出来る」
「ご冗談を」
コロコロと、神音は笑った。
「“パンプキンを”千発も調達しろだなんて」
「この顔が」
ズルドは真顔で答えた。
「冗談を言っている顔に見えるか？」
「……はい」
神音は笑顔で答え、
「そう、言われたいのですか？」
そう、訊ねた。
「……それこそまさか。だ」
「お詫びの品を、すでに加賀市には準備しておりました」
「俺のあずかり知らない所で、よくもやってくれたな」

「そちらの書類上のミスと聞いています。まぁ、最も」
神音は、手土産に持ってきたチョコレートの包みをズルドの前に置いた。
「“巣”の“種”を移送中に、輸送機を整備不良で墜落させたのは、私どもの責任ではないですが」
「本来は敦賀湾に植えるはずだったと聞いたが？」
「そうです」
神音は答えた。
「ガムロ殿からのご依頼で」
「輸送機の墜落の後、勝手に活動を開始した“巣”が加賀市に根付いていることを、どうして今まで黙っていた」
「それは」
神音は、心外。という顔で言った。
「私達の責任ではありません」
「……話しが堂々巡りになるな」
ズルドはこめかみの辺りを揉みながら言った。
「すまん。輸送機の事故だったな。これは、兄貴の方か」
「何とも言うべき立場にないので」
「……だな」
「まぁ、数十キロの違いとはいえ」
従兵が持ってきたワインを受け取ると、神音は続けた。
「“巣”の兵隊にとっては、少し移動時間がかかるだけで、大した変化とはなりませんよ」
「……ものは言い様だ。“巣”はネスタージュ級というのか？」
「ええ。大陸に誰かが埋め込んでくれたクイーン級の次。巣がまだ成長していないので、残念ですが、地下２００メートルに半径５キロほどまで成長が確認されています」
「腹の中には？」
「アイバシュラが５００匹ほどは」
「そんなものを」

ズルドが最も懸念するのは、そこだ。
「簡単にコントロール出来るものなのか？」
「我が社の培養した“巣”は」
悪くないですね。このワイン。
そう呟いた神音は、脇に置かれたボトルを確かめながら言った。
「コントロール出来るように、品種改良がなされています」
「大陸の方は？」
「あんなもの」
ボトルの銘柄を確かめた神音は、それをメモにとりながら言った。
「コントロール出来るものですか」
「……まて」
「はい？」
「コントロール出来ないということは」
「ええ。あのアイバシュラ達は、誰が何のために設置したのかは知りませんけど、完全に野生です。コントロールもへったくれもない。巣は増殖し、個体はエサを求めて暴走する」
「……」
ズルドは、しばらく沈黙した後、重い口調で言った。
「本当に……」
「私達は無関係です」
「……ということか」
「はい」
「アイバシュラのコントロール方法を聞こう」
「簡単です♪」
神音は笑って脇に控えていたカノンに命じた。
「子供でも出来るんですよ？」

「祷子もそう思うか？」

「……はい」
祷子は腕をさすった。
「寒気……じゃないです。これは？」
「明貴騎より泉大尉」
突然、空中に静止した2騎の脇に止まったほむらが訊ねた。
「何か？」
「明貴は」
美奈代はしきりに辺りを気にしながら言った。
「感じないか？」
「何をです？」
「この……圧力というか……息苦しさというか……」
「圧力？」
「そうです」
通信モニターに現れた祷子の顔色は蒼い。
「やっとお料理が来た途端、お通じがよくなったような」
「理解出来ません。風間中尉」
「私もだ……たとえて言えば、隠していたことがバレて、上司にとっちめられることが確定した時のような」
「私、そんなミスしません」
「……真面目で優秀なんだな」
「どうも」
ほむらは言った。
「その……殺気のようなものですか？」
「殺気？」
「さつきさんが、何ですか？」
「あの、ボケはいいですから」
「ボケてなんてないです！」祷子はプウッと頬を膨らませた。
「私、そんなに歳いってませんっ！まだお肌だってほむちゃんと勝負出来ますっ！」
「ボケってそういう意味じゃなくてな」

美奈代は呆れて言った。
「殺す気配の方だ」
「……はぁ？」
「水城中尉に教えてもらえ……牧野中尉」
「はい？」
「土浦隊と通信出来ますか？」

日本海に展開していた土浦隊。
つまり、涼菜は、美奈代に対して意外なことを言ってきた。
「逃げろ？」
「そうっ！」
涼菜は通信装置の向こうで怒鳴った。
何故か、ノイズがひどく、通信モニターに映る涼菜の顔は幾度となくブレる。
「こっちは、加賀市全域での魔力の異常と、地殻レベルでの変化を確認している！」
「こっちでは」
モニターに映る牧野中尉の他、全員が首を横に振った。
「何も」
「そんな馬鹿な！」
涼菜は言った。
「とっとと、そこから――」

通信が、切れた。

「何が？」
「あの……美奈代さん」
事態が理解出来ず、困惑する美奈代に、祷子は言った。
「撤退しませんか？」

「何故？」
「……土浦中尉の警告は気になります。それに」
「……」
一呼吸した美奈代は言った。
「土浦隊と合流する」
「そっちへ？」
「何を観測したのかを知るには、そっちの方が良いだろう？」
「……ですか」

美奈代は、騎体の針路を海へと向けた。

状況の変化は、加賀市の上空をそろそろ抜ける。
そんな頃に起きた。

グラッ！

突然、騎体のパワーがストール状態に陥り、騎体が数百メートルに渡って墜落寸前の落下を見せた。
コクピット全部のモニターがブラックアウトして、コクピットが真っ暗になった。

「なっ！？」

落下する際のあの異様な感覚に顔をしかめた美奈代の前で、モニターに映像が戻る。
パワーが全て戻り、騎体が復帰する。

「な、何だ！？今の！」

「大尉っ！」

牧野中尉が怒鳴った。
「後ろっ！」

巣　目覚める　第二話

「まぁ、無事で帰ってきて何よりだ」
後藤は、美奈代達に、平然とそう言ってのけた。
「屍鬼（グール）相手の後退戦は成功。橋はほとんど落ちたけど、俺達が参戦する前に陸軍がやったってなれば、文句は俺達ん所にはこないわなぁ」
「陸軍の損害は？」
「死傷、行方不明含めて６３と聞いている。大した数じゃない」
「……」
「問題は」
後藤は、写真を黒板に貼り付けた。
その顔は、真剣そのものだ。
「――――コイツだ」
写真は、美奈代騎から撮られた加賀市の様子。
巨大な筒のような建造物らしき存在がしっかりと映し出されている。
「上空では気付かなかったのか？」
「私達が」
美奈代は答えた。
「加賀市から出て、後方を確認し始めた時、これが地面から生え始めたんです」
太い根元から尖った先端まで、綺麗なまでの曲線が描かれている。
「これは、発見から約４０分後の映像です。我々は撤収するまでの合計５０分間、この物体が成長するのを確認していました」
後藤は、１分。５分、１０分と、マジックで書かれた写真を次々と張り付けていく。
物体が、時間の経過と共に巨大化していくのが、はっきりとわかる。

「成長……ねぇ」
「本当に」
祷子は頷いた。
「地面から生えているような、そんな錯覚を覚えました」
「……ふむ」
「後藤中佐」
涼菜が挙手した。
「自分達、土浦隊は日本海上空から加賀市を観測していました。しかし、泉大尉達が日本海に出るまで、このような物体は確認出来ませんでした。泉大尉達は本当のことを言っています」
「……」
「まるで、タケノコですね」
山崎がポツリと言った。
「形といい、出方といい、本当にタケノコそっくりだ」
「……俺もそう思う」
後藤はあごをしごきながら頷いた。
「こりゃ……地下に何かいるなぁ」
「地下に？」
「そりゃお前」
きょとん。とした麗央に、後藤は言った。
「タケノコってのは、地下茎から出るもんだ。当然、こりゃ、地下に地下茎があるぞ」
「……まさか」
「……諜報部に問い合わせるしかねぇな」
「どうするんです？」
「……」
しばらく、じっと考えていた後藤は、
「しかたねぇか」
そう言うと、脇に待機していた副官、涼宮遥（すずみや・はるか）中尉に言った。
「遥ちゃん」

「いやです」
遥は即答した。
「恐いです。危険です。だからイヤです」
「そう言わないで」
後藤はいきなり遥を拝みだした。
「助けるとおもってさぁ、こいつらコキつかってくれていいから」

「強攻偵察!?」
「そう」
拝むだけ拝んだ後藤は、渋々ながらも何事かを引き受けた遥を横に立たせ、その肩に触れた。
途端、遥の指が後藤の手の甲をつまみ上げ、後藤は顔をしかめて手をどけた。
冴えないスケベな上司と、その部下のＯＬってところかな。
そう考えると、この二人がお似合いにさえ見えてくるから不思議だ。
「地下に何がいるかを知りたい。諜報部に情報の哨戒は行うが、それまでにも、俺達は俺達でわかる所は知っておきたい」
「しかし」
「メサイアが墜落しかかったって?」
「はい」
「……それが気になるんだよな。でも、墜落は免れたんだろう?」
「そうです」
美奈代は頷いた。
「私の“さくら”、風間の“弥生”、明貴の“さやか”。精霊体三体が共通して、何かにエネルギーを吸い取られた。そう主張しています」
「……ふむ」
後藤は思案の末、答えた。

「こいつの仕業かもしれんが、それはそれで、報告の対象になる。まぁ、そこまでいかなくても」
後藤は遥を見た。
「遥ちゃんなら、地下を把握することは出来るかもしれない」
「……というと？」
「涼宮中尉は、近衛での最高レベルの“第三眼（サードアイ）”の持ち主だ」
「“第三眼（サードアイ）”？」
「聞いたことない？」
「俗に千里眼と呼ばれる、あの能力ですか？」
訊ねたのは祷子だ。
「そう。魔法の眼は、地下だろうがなんだろうが全てを見通す。こんな時にはぴったりだと思わないか？」
「……ですか」
成る程？
そう思い、美奈代は訊ねた。
「で？誰の騎体に乗っていくんです？」

「結局、私か」
戦闘服に身を包んだ遥が、重い重い言って悲鳴に近い声をあげるのを、無重力を良いことに無理して引っ張っていく美奈代は、ついぼやいてしまった。
「私の騎体は乗り合いバスじゃないんですけどね」
「いいじゃないですか」
牧野中尉は笑って言った。
「中尉が入るは、私の方、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）ですから」
「まぁ……そうですね」
「それに、今回は囮というか、殿方の護衛もつきますし」
「護衛……ねぇ」
ハンガーに入った美奈代は、そこに並んでいる騎体を前に、あき

れ顔を抑えられなかった。
「これは……メサイアじゃないでしょう？」
「ですねぇ」
牧野中尉は頷くと、戦闘服の重さに慣れない涼宮中尉を伴って、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）へ向かった。
「シートの設定があるから、先に搭乗準備にかかりますよ？」
「了解です！」
美奈代は、そう返事すると、もう一度、それを見た。

「――悪かったな」
後ろからの声に、美奈代は振り返った。
「こんなので」
東達だ。
「何と言って良いのかわからない」
美奈代は答えた。
「部隊は全滅したけど、生き残ってくれてありがとうとでもいうべきかなって」
「それでいいだろう？」
東は答えた。
「それとも、俺達が生き残ってくれて、そんなに嬉しいか？」
「そう見えるか？」
「見えて欲しいけど」
東達は、横を移動していくほむらと祷子に、ニヤニヤとしたいやらしい視線を向けた。
「鼻の下が伸びてるぞ？」
「なあ、泉」
「……なんだ」
「あの二人、まだフリーなのか？」
「……？」
祷子とほむらのことだと判断した美奈代は、少し考えてから頷い

た。
「恋愛でなら、そうだろうな」
「あ、それと、あの川上少尉達は」
「元内親王護衛隊（レイナガーズ）だぞ？それで十分だろう」
「ちっ……あれは御姫様以来の美少女だとおもったんだがなぁ」
しきりに残念がる男達に、美奈代は苛立った顔で言った。
「お前ら、何しにここに来たんだ」
「おいおい、そう言うなよ」
やれやれ。そんな態度で、東は笑った。
「九死に一生を得て、仲間大量に死んで、騎体だってあんなのだ」
「……あっ」
「少しは、いろいろ楽しんでおきたいって思っても、悪くないだろう？」
「……」
そう。
ここにいるのは、一度は死んだとまで判定された連中。
敗北の中から苦労を知った存在だ。
自分の狭い了見だけで判断することが正しいのか？
そう思う。
「……すまん」
「へっ。喧嘩売るつもりはないんだ」
東は親しげに笑った。
「俺達の中でも、“幻龍（げんりゅう）”を与えられている奴もいるし、“アレ”は“アレ”で、空では使いモノになるぞ」
「……そうか」
美奈代は頷いた。
「なら、頼むぞ？」
「ああ……所で」
美奈代は訊ねた。
「これ……なんだ？」

「新開発のアサルト・フライング・アーマー（ＡＦＡ）だ。聞いたことさえないだろう？」
「正直……ない」
「あのチンクどもが投入した飛鼠（ひそ）が、メサイアではなくてアサルト・アーマー（ＡＡ）という分類になった。こいつは、その飛行機版だ」
「ふぅん？」
美奈代が見上げた先。
そこにあるのは、丸っこい頭部から直接に近い状態でせり出す両手。後ろにはブースターらしい筒が見える、一体、メサイアなのか飛行機なのか、それとも冗談なのかわからない物体があった。
「かわいいだろう？」
東は笑って言った。
頭部には赤い眼が二つと口らしいラインがある。
丸っこい形状と共に、かわいいといわれれば、確かにそうかもしれない。
「……多分」
「お前、本当にカタブツだよなぁ」
「っていうか」
「どんだけ可愛くても、中身がお前達みたいなむさ苦しい連中なら、それだけで萎える」
「言ってくれた！」
東はあきれ顔で言った後、
「いけね！失礼しました、大尉ドノ」
と、わざとらしく敬礼した。
「その気もないのに無理するな」
美奈代は苦笑した。
「無礼講でいい。戦場じゃ、一蓮托生だろう？」
「ああ……おかしいなぁ。こいつ見た女の子達は、全員が全員、かわいいって言ってくれるんだけどなぁ」
「……おい」

「ん？」
「コイツをナンパのネタにでも使っていたのか？」
「ああ……」
ニヤリと笑った東が答えた。
「そいつぁ、アタリだ」
「ったく……染谷候補生から離れた途端、本性を現して」
「いいじゃねぇか。アサルト・フライング・アーマー、“クィーンズ・ビー”だ。略してQB。飲み屋で女の子がな？こいつを“キュゥべェ”っていうんだよ。面白いだろう？」
「なんだ？」
「“キュゥべェ”――なまりきった英語発音でQとB」
「どこの発音だ？」
「フィリピン人の娘さ。片言の日本語と怪しげな英語を喋る。これが気に入って、俺達も“きゅうべぇ”って呼んでいる。QBの呼び名の別名。俺達を呼ぶ時は、それで頼むわ」
「きゅうべぇ……ねぇ」
「カワイイ外見とは違って、ML（マジックレーザー）も搭載しているし、クロー攻撃は戦車でも貫通する。まぁ、メサイアとじゃ真っ向相手出来ないが、空の妖魔相手ならかなりのところまで行けると思うぜ？」
「そうか」
美奈代は、頷くと東達に言い放った。
「とりあえず」
「ん？」
「盗撮用のカメラ片付けて、戦闘服を着てこい、この馬鹿共めっ！」
「かわいい……ですねぇ」
祷子が喜んでいるという“きゅうべぇ”の発艦が続くその光景を見て、牧野中尉も嬉しそうな程だ。

「やっぱり、ああいう愛らしさってのもデザインにいれてくれると嬉しいですね」
「そういうものですか？」
「そういうものです――さて、涼宮中尉？」
「はい？」
「発艦しますので、我慢してくださいね？」
「こわいですね」
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の発艦と同じですよ。もし恐かったら」
牧野中尉は、どこからかポケットウィスキーの瓶をとりだした。
「これを一気すれば恐くなくなりますよ？」
「多分……無駄ですけど」
涼宮中尉は瓶を受け取って答えた。
「この程度、私にとっては食前酒です」

「……あの」
発艦した斬込隊の頭上を東達が飛んでいく。
そんな中、ほむらは言った。
「私、とても不思議な気分なんですけど」
「何だ？」
「僚騎を撃ち落としたい衝動に、スゴく駆られています」
「カワイイものを見ると壊したくなるのか？」
「そんなことないですけど……」
「そうですよ」
祷子は言った。
「ほむちゃんは、ぬいぐるみの“ぽす君”がいないと眠れない位なんですから」
「中尉っ」
ほむらが珍しく声を上げた。
「ぷ、プライバシーの侵害ですっ！」

「本当のことなのに」
「……とにかく、泉大尉。その、ＡＦＡって、要するに戦闘機部隊ですよね？そんな部隊より、私達だけでも十分じゃないんですか？」
「多分」
美奈代は、編隊を組んで自分達の頭上を飛ぶ“ＱＢ”達をちらっと眺めると、
「お互いの実力知るのに丁度良いって判断されたんじゃないか？」
「連携する戦いも出てくる……と」
「それだけじゃない」
美奈代は答えた。
「あいつらに私達の戦いを見せて、あんな機体に乗せられていることへの不満を解消させようって、そういう意図があるのかもしれない」
「とりあえず」
牧野中尉は言った。
「その考えが正解かどうかはわかりませんけど」
「どうしました？」
「前方に敵性反応。――――飛行系妖魔と思われます」
「全騎、戦闘準備」
美奈代は騎体のモードを戦闘へと引き上げ、東達に訊ねた。
「きゅうべぇ隊へ。どうする？女の前でいいところ見せる、絶好のチャンスだが？」
「言ってろ！」
東は答えた。
「牽制はする。その間に突っ切れ！」

巣　目覚める　第二話（後書き）

ごめんなさい。
暑いし腕が痛いしでこれ以上書けません。

さて、今回の新型騎はメサイア世界初のモビルアーマータイプ、クイーンズ・ビーです。
略してQBです。

キュゥベエと読むと外観のイメージがわきやすいです。

元ネタはMがんぢーさんの「まどか☆マギカ：MAキュゥべえ」（ｈｔｔｐ：／／ｓｅｉｇａ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｓｅｉｇａ／ｉｍ９３１７３３）です。
画像見て頂ければ、そのスゴさがわかります。スゴいです。

●コンセプト
日独マラネリの三カ国が共同開発した、一言で言えば、モビルアーマー。
ここまで来たらもうメサイアではない。
飛行系妖魔相手の空中戦闘で苦戦を強いられ続けていることから、格闘戦闘飛行も可能な兵器を開発し、その開発コストを徹底的に浮かせるため、三カ国での共同開発となった。
開発における主眼は、
・メサイアほど複雑ではなく、量産が安易。
・ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）よりは機動性が高く（その機動性能は結局、どう足掻いても戦闘機を超えることは出来ない）、

この二つ。

これをクリア出来る新兵器の開発は結局、マラネリの少年王がマンガで見たキャラクターに着想を得て、そのベースデザインを津島紅葉が修正、ドイツのメッサーシュミット社が量産ラインを構築するという分担で行われ、ドイツ帝国のミュンヘンにある同社の製造ラインで製造が行われている。

●概要

メサイア用の魔晶石エンジンを搭載しておらず、分類もＡＴＳ（アーマード・タクティカル・システム）という独特なもの。

というか、この分類に属する騎体なんて、これしかない。

頭部兼胴体に腕と尾ひれがついただけの外観は、本騎をメサイアと分類すること自体をためらわせるのに十分である。

●操縦システム

飛鼠（ひそ）の残骸から回収した生体同調システムを再生、あるいはコピー生産して搭載しているので、ＭＣ（メサイア・コントローラー）は不要。

戦闘機に乗っている感覚で操縦が出来る。

コクピットは胴体中央部。胴体中央から乗り込む仕組みが採用されている。

慣性制御システムを搭載していないため、Ｇがモロにかかる関係で、騎士の登場が求められる。

設計段階で同装置を搭載することを忘れていたという凡ミスの結果。

●腕部

関節というものを持たない疑似腕は、巨大な爪――クロー・システム（爪は3本）を拳部に採用している。

通常では困難な、腕をしならせて殴るなどの、これまでにない運用を可能にする。

●拳部
　爪は、斬艦刀と同じエルプス・システムを採用しているので、ぶん殴れば、メサイアを始め、大抵のものは貫通できる。

●肩部
　２５ミリ機関砲を両肩計２門を搭載。
　下半身部が弾薬倉になっている。

●口部
　胴体真っ正面に開閉口があり、この形状から口といわれている。
　内部に大型ＭＬ（マジックレーザー）を１門搭載している。

●尾鰭部
　小型魔晶石エンジンを搭載している、いわば本騎の心臓部がここ。
　エンジンの冷却方法が空冷式（一部液冷式）のため、こんなところに搭載された。
　本体との接続部が可動式となっているので、ここを動かすことで鋭い機動をすることは出来るが、間違っても、ここで相手をぶん殴ってはいけない。

●本体背面部
　ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）用の小型飛行エンジン２基を搭載。

●着陸装置（脚部・下半身）
　着陸足にはタイヤがついている。
　歩行はしたくても出来ない。

巣　目覚める　第三話

「こいつら、新型だ！」
ＨＵＤ越しに敵を確認した東が怒鳴る。
「泉達の針路を開け！それでいいっ！」
「応っ！」

ターゲットをロック。
いくらこいつが“安物”だからって、そいつぁメサイアと比較するから。
戦闘機と比較したら、かなりの高額機なんだぜ？
東は、しっかりとロックされた赤い妖魔めがけてトリガーを引いた。

ＱＢの“口”が開き、ＭＬ（マジックレーザー）が発射された。
白い光の柱となって飛び出した一撃は、赤い妖魔に命中、解放されたＭＬ（マジックレーザー）のエネルギーが妖魔を爆散させた。

「よしっ！」
東はコクピットでガッツポーズをとった。
「第一波撃破！」
「東っ！」
僚機の山本が言った。
「やべぇ！第二波が来る！！」
「来るか！？」
「さっきの一撃が第二波を呼んだみたいだ！」
「何匹でも来いってんだ」
「５０匹近いぞ！」
「……撤退だ」

「馬鹿ぬかせ！泉達を見殺しにする気か！？」
「……ちっ」

「東、意外と薄情だったんだな」
「普通なら戦力比5倍は撤退して当然かと」
「そうですか？」
「この部隊がおかしいんですよ――――どうします？」
「こいつは、涼宮中尉を乗せている限り、戦えないし……」
「……」
「美奈代さん」祷子が言った。
「編隊を離れます。私だけでも」
「いや。あいつら、お前に助けられたら舞い上がるかどうか……」
美奈代は、あっ。という顔をして、ほむらに言った。
「明貴」

「このぉっ！」
後ろにとりつかれた。
後方を攻撃する手段はない。
ジグザクに動いく回避行動に出るが、敵はまるで自分に引っ張られているようだ。
ちっとも離れようとしない。
「しつこいっ！」

「おい、東っ！」
美奈代から通信が入った。
「今、忙しい！」
スタビライザーを派手に操作して、大きくロールすると同時にエアブレーキ展開。

妖魔が前に出た。
２５ミリ機関砲のトリガーを引く。
赤い妖魔の外殻が吹き飛び、体液だろうか液体が噴き出す。
妖魔がもんどり打って落ちていく。
しかし、それを待っていたかのように、後ろからレーザーが。
キリがないっ！

「声援でもくれてやろうか？」
美奈代の声は、まるでそんな東を笑っているかのようだ。
「お前のはいらんっ！」
東は怒鳴った。
「縁起が悪すぎるっ！」
「ウチの新人、カワイイだろう？」
「何だぁ？」
「耳だけは使えるだろう？応援してやるよ」

忙しくて通信モニターを見るヒマなんてない。

あの祷子ちゃんだったら、少しは浮かれるかもしれないけどな！

操縦桿とフットレバーを激しく操作しながら、東は口元だけ笑って見せた。

そんな東達の耳に入って来たのは、意外な声だった。

「お兄ちゃん」

ピタッ

冗談ではない。
この時、本当に全てのQBの動きが、一瞬だけ止まった。

「お、お兄ちゃん？」
脳内アドレナリンが耳からあふれ出したのが、東にはわかった。
「俺のことか」

「お兄ちゃん」
潤む声は、そう言った。
あの、ほむらとかいう涛子ちゃん似の娘だ。
あんな美少女が、俺をお兄ちゃんだって！？
「――頑張って！」
その祈るような声。
そう、それは、俺に向かっているんだ！

「うぉおおおおおおおおおっっっっ！！」
通信装置一杯に、漢達（おとこ）の雄叫びが響き渡った。
「うらぁぁぁっ！お兄ちゃんにまかせろぉぉぉっ！」
「死にたい奴から前にでろぉっ！」
「お兄ちゃんに出来ないことなぞ、この世にはないわぁぁっ！」
「QB隊、前進っ！立ちふさがる者は抹殺しろぉっ！俺達の針路にあるのは、妹との禁断にして、乗り越える試練の道！だが、俺達には、妹への愛があるっ！ラブさえあれば、世界の全てを乗り越えられるぅぅぅっ！」
「おおおおおおっっっっ！」

「……」
「……明貴少尉」
「……」

「ビームライフルをこっちに向けるのはやめてほしい」
「……なんてことしてくれたんです」
「いや……」

上空では、QB隊が鬼神さながらの戦いを見せている。
5倍の妖魔を相手に、ほぼ一方的な戦いを示している。

「人間、一番強いのは、欲望だってことだ」

「そのはけ口が、私に来ることを知ってのことでしたね？」

「いや……あれだけ男がいれば、少しはマトモなのも」

「私、男に興味ありませんから」
ほむらは、本当にそうきっぱりと言い切った。

「……えっ？」

「私が興味があるのは」
ほむらの視線が向いた先は、通信モニター上のほむら騎のMC（メサイア・コントローラー）、せのおまどか少尉だった。
外見はほむら同様、ほとんど中学生並み。
ピンクの髪をリボンでツインテールに結んだ髪型を見てると、ほむらより幼くさえ思えてしまう。
そんな少女がほむらの熱い視線の向こうにいた。
「いえ、私が大切なのは」
ほむらは言った。
本当に。
「まどかだけですから」

「……お前」
「大尉？」
唖然とする美奈代に、牧野中尉がそっと囁いた。
「元・内親王護衛隊（レイナガーズ）ですよ？」
「……」
はぁっ。
美奈代は頭を抱えた。
「どうしてウチは、こういうのばっかり……」
「答えが聞きたいですか？類は友を呼ぶって」
「誰が」
「そりゃもちろん♪」

「あ、あの？ほむらちゃん？」
まどかが、ぱかんとした顔で訊ねた。
「な、何の話し？」

「私とまどかが恋人同士だって宣言したの」

「ち、ちょっ！？」
驚いたその反応から、どうやら碧はノーマルだな。と、美奈代は判断した。
「な、何言ってるの？わ、私っ！」

「大丈夫。痛いの最初だけっていうから」

「私達、女同士だし、まだ子供だしっ！」

「えっ？結婚するまで純潔は守る主義だったの？」

「わけわかんないよ！」

「わかった。初夜まで貞操は守ってあげる――まどか、来月で16だし」

「だから、私達、女同士っ！」

「――記念にオランダへ行く。あそこ、同性婚認めてるから」

「話しを聞いてぇっ！っていうか、ヘンなことしたら、私、絶対抵抗するからねっ！」

「えっ？まどかは抵抗しながらされるのが好きだったの？」

「わけあるかぁぁっ！」

「わかった。魂に刻んでおく」

「やめてぇぇぇっ！」

「……随分と」

何故か、嬉しそうに祷子は言った。

「楽しいカップルですね」

「……グスッ」

「あら？何を泣いてるんです？」

「なんか、本当にどうしていいんだろうって」

「現実を受け入れるだけですよ♪」

「風間」

「はい？」

「お前、この混乱、楽しんでいるだろう」

「当然です♪」
満面の笑みを浮かべた後、
「そろそろ、加賀市ですよ？」

前方に見えるのは、巨大な建造物。
地面を押し分けながら立ちはだかるその光景は、決して美しいものではない。
「高さ……３００メートルまで成長……か」
「高さ５００メートル。直径８０メートル。山崎中尉じゃないですけど、本当に」
「……ですね」
美奈代も頷くしかない。
「ありゃ、本当にタケノコだ」

地面から生える巨大すぎるタケノコ。

あれが何かを調べる。
それが、今回の美奈代達の任務だ。

「……さて」
美奈代は訊ねた。
「泉より涼宮中尉」
「はいはい」
ウィスキーをちびりちびりと舐めていた涼宮中尉は、ボトルのキャップを閉めた。
「じゃ、これからは私のお仕事です」
「どうします？高度や速度は」
「今のまま、適当に飛んでいて下さい」
ボトルをポケットにしまうと、背後からパソコンとケーブルを引

き出し、そのケーブルを慣れた手つきで、戦闘服の首元を覆う機材に差し込んだ。

「パソコンとのデータリンクは正常……」

流れるようにキーを撃った彼女は、牧野中尉の横で、突然、両手を合わせて目を閉じた。

まるで祈るような仕草だが、これが彼女の能力を開眼するためには必要なプロセスだと、牧野中尉は知っている。

突然、涼宮中尉の合掌した手から緑色の光があふれ出す。

指先から放たれる強い光の束が天井へ向けてまっすぐに走る。

手首を動かすと、その光の束が涼宮中尉の額に当たった。

彼女の体に変化があったのは、それからだ。

光の当たった額が、まるで光を全て吸い込んだようにさえ牧野中尉には見えた。

額が輝き出すと、手から放たれる光は逆に消え去り、合掌が解かれた手が、残光を伴って優雅な仕草で開かれる。

額から光が放たれる所には、何と光輝く“眼”があった。

第三眼呼ばれる、魔法の眼だ。

「サーチ開始」

眼から放たれる光が、レーザーのように開かれた左右の掌に照射され、そして、何かを受け止めるかのように軽く上を向いて開かれた手の間には、光で描かれた立体図面が出現した。

「……これは」

牧野中尉が目を見張ったのも無理はない。

その立体画像は、今、飛んでいる自分達の目の前にある、あのタケノコと、その地下の様子なのだ。

「これが……あのタケノコの正体……？」

「螺旋状に走る地下茎と、その地下に向かって走るトンネル……」
涼宮中尉の両手が下がった。
すると、立体画像に下がった手の分だけ、新しい画像が出現する。

第三眼――千里眼と呼ばれる者も持つ特殊能力。
全てを見通し、全てを知るとさえ言われるその能力とは、このような、いわば魔法のレーダーと、映像解析能力を指す。
どれほど複雑な迷宮を作ろうと、どれほど地下深く逃れようと、千里眼の前には無力だ。

「地下茎は直径7キロ……」
その手が、まるで何かを撫でるように動き続ける。
その動きは淫靡にして優雅。見とれてしまうほど、美しい。
「……泉大尉」

「はっ、はい！？」
突然、名前を呼ばれた美奈代が、裏返った声を上げた。
しかし、涼宮中尉は目を閉じたまま、美奈代を見ていない。
「地上に降りて下さい。高度が地下の探索の邪魔になっています」

「りょ、了解。このままでいいですか？」

「ええ。ただし、新手のお客様が１０体。着陸地点の地下に隠れていますから、お気をつけて」

巣　目覚める　第四話

美奈代騎が加賀市近郊へと降り立った。
祷子達の2騎は上空待機。
美奈代の命令だ。
美奈代達の駆る“白龍強襲型”はいわば機動性に特化した空戦タイプと言っても良い。
地上に踏ん張って無数の敵とぶつかり合う、そんな状況は想定していない。
2騎は空中待機させ、いざという時には機動性を活かした戦闘をさせた方が理にかなっているというのが美奈代の判断だ。

正直、今、美奈代騎は一切の戦闘が出来ない。

もし、戦闘機動に入ったら、肉体は一般人と同じ涼宮中尉が機動に耐えられず死んでしまう。
それは困る。
あの後藤との関係を見ても、下手に死なせたら化けて出るくらいのことはするだろう。
お化けは恐くないが、夢見が悪いのはイヤだ。

「……それにしても」
美奈代は呆れた。と言わんばかりの顔で“タケノコ”を見た。
よく見ると、構造がらせん状になっているところから、てっぺんから出た角状の物体まで、本当のタケノコそっくりだ。
「……」
時折、赤い妖魔達がタケノコの上空を行ったり来たりしている。
美奈代達を敵と思っていないのか、ここまで近づいたというのに、接近する妖魔はいない。

離れた上空では、未だ東達が戦闘を続けていた。
「……涼宮中尉」
「はい？」
「情報の収集は、どれくらいかかりますか？」
「もう、恐くなったんですか？」
「まさか。東達を撤収させるかどうか、その判断をしたくて」
「成る程？」
涼宮中尉は答えた。
「あと5分ほど下さい。今、地下の構造を調べています」
「了解――風間」
「はい？」
「東達を下げるぞ」
「いいんですか？」
「いざって時は、私達だけで一気に逃げる。その時、東達が追いつけない」
「足手まとい。の間違いじゃなくて？」
「そうともいうが」
美奈代は少し考えてから言った。
「いざという時、あっちの方こそバケて出てこられても困る」
「枕元にむさ苦しい男の人達の亡霊……ある意味、寝苦しくてイヤですね」
「お前に言われたら、連中死にたくなるだろうなぁ」
「えっ？」
「いや……明貴、これは命令だ」
「……拒否する前に命令を楯にしましたね？」
「従わない場合、今晩、妹尾少尉を裸にひん剥いてあいつらに差し出すぞ？」
「犬とお呼び下さい」
「即答でそこまでへりくだるな……恐いぞ、お前」
「命令を」

「あの変態共を、うまくこの戦域から追い出してくれ」

「うぉらぁぁぁっ！」

内蔵と血液が右へ偏るのに耐え、東は騎体を水平に戻し、後方を追尾していた赤い妖魔の斜め後方に出た。

トリガーを引く。

２５ミリ砲弾が連射され、曳光弾が赤い外殻に吸い込まれていく。

騎体情報は見ていないが、感覚で分かる。

残弾が心許ない。

ＭＬ（マジックレーザー）に頼っていたら、弾の数が足りない。

弾薬か機銃の搭載量を増やして欲しいが、今はそんなこと言っている場合じゃない。

部隊の損害は出ていない、今のうちが潮時だ。

「――お兄ちゃん」

東達の耳に、そんな甘い声が届いたのは、そんな時だ。

ピタッ

またもや、東達の動きが止まった。

「ありがとう♪お兄ちゃん」

全機の動きが止まったままになる。

「私はもう大丈夫だから、お兄ちゃん、お願いだから逃げて」

「何を言うっ！」

東は血走った目を見開いて怒鳴った、というか叫んだ。

「お兄ちゃんは、妹のためなら、どこへでも行くぞ！」

「うぉぉぉっ、そ、そうだっ！」

誰かが雄叫びを上げる。

「俺は、妹を守るぞぉぉっっ！」

「お、お願いっ！」
切羽詰まった甘い声が言った。
「“鈴谷（すずや）”まで戻って。ほむらのお願い、聞いて！大好きなお兄ちゃんっ！」

おおおおおっっっっっっ！！

通信装置が壊れたかどころか、空間が鳴動した程の叫びが東達の喉から吹きだした。

「俺は“鈴谷（すずや）”に戻るっ！野郎共っ！続けぇぇぇっっ！！」

ぇぇぇぇぇ……

その雄叫びが長く残る中、呆然とする妖魔達を残して、東達は一瞬にして戦域から消えた。
冗談ではない。
本当に、一瞬で――――消え去った。

「あの駿足は」
牧野中尉が唖然として言った。
「““白龍（このこ）強襲型”以上ですね……」
「男の欲望の深さを垣間見た気がしますけど」
美奈代は、背筋にイヤな汗を感じたる
「……ここまで来ると」
「何です？」

「あいつらが、恐ろしく非常識な存在に見えてくるんですけど」
「私の経験からすれば」
牧野中尉は、美奈代の言葉に苦笑しながら、
「それ以上の存在に心当たりが」
「風間ですか」
「どうして、自分については鈍いんです？あなたは」
「は？」
「……明貴より泉大尉へ」
「なかなかの名演技だったぞ？」
美奈代はほむらに言った。
「お前、本当に芸能界へデビューしてみたらどうだ？近衛の広報あたりが喜ぶだろうが……」
美奈代は、そこまで言って、“白龍”の両手を挙げた。
「ビームライフルの照準は完全に定まっているな」
「フルバーストで一気に仕留めて見せます」
「要望は？」
「……“鈴谷（すずや）”に帰ったら私、どうなるんですか？」
「別に」
美奈代は答えた。
「ああいうタイプは、いざって時には生身の女の子には触れることさえ出来ない。帰ったら、七瀬少尉と一緒に、笑顔で“ありがとう。お兄ちゃん♪”とでも言ってやれ。鼻血でも噴き出しながら感謝してくれるだろうさ」
「……本当、ですか？」
「ああ。とにかく、お前みたいな美少女にちょっかいだせる程、彼奴等に度胸はない」
「根拠を知りたいです」
「あいつらと同時に卒業した褄子達を見ろ。美晴以外、触られた者はいない」
「それは私が貧乳だから、安全だということですか？」

「いや……それなら私だって」
「まな板鉄板は心配ないと」
その眼はすっかり座りきっている。
「お前、そんなに気にしているのか？」
正直、あまり胸というものを気にしたことのない美奈代にとって、ほむらが何を怒っているのかよくわからない。
「心配するな。私もお前と同じ頃は……」
「……」
美奈代は、気迫に押されていることを確かに感じた。
これはマズい。
「あの……ほむらちゃん？」
おずおずという感じで通信に割り込んできたのは、七瀬碧少尉だ。
「き、気にしなくていいことだよ。大尉は、ほむらちゃんが、あの人達に変なことされないって、そう約束してくれただけなんだから」
「……」
「そ、そうですよね？大尉？」
「ああ、そうだ」
美奈代は答えた。
「他意はなかった。信じてくれ」
「――ならいいです」
ほむらは頷いた。
「失礼しました」

あーっ。恐かった。
美奈代はそっと胸をなで下ろした。
「あの年頃は」
騎内通信モードで、牧野中尉が囁くように言った。
「微妙なんですよ」
「年頃の娘を持つ父親の気持ちがわかった気がしました」

「まぁ、あれだけ真っ平らだと、気にもするでしょうけど」
牧野中尉はクスクス笑って、そう言った後、
「涼宮中尉？どうですか？」
「そうですね……」
手を動かす度に、立体画像が動く。
その手を止めた涼宮中尉は答えた。
「十分……とは言いがたいですが、大凡のところは掴めました」
「そうですか。この子がブラックダウン現象を引き起こした原因、わかりました？」
「この妖魔が張っている空間結界です」
「空間結界？」
「そう……つまり、自分の体全体をドームの様に覆う、不可視の殻で、この妖魔は外敵から身を守っています。その不可視の殻として使われているのが、空間そのものを魔法的に封鎖する空間結界という手段です」
「そんなこと出来るんですか？」
「不可視の海を作って、その上に飛行船を浮かべるのとレベルは同じです」
「でも、私達はその空間結界の中に入ることが出来ました。ただ、入る際には、ブラックアウト現象が起きなかったことは説明出来ませんが」
「これは――確率９８．７７７％の推論ですけど」
目を閉じたまま、涼宮中尉は答えた。
「結界は同時に、蜘蛛の巣のような、エサをとる網としても機能している模様。つまり、この結界の中に入った、その時のあなた達は」
「？」
「この妖魔にとっては、エサだと思われていた可能性が大です」
「……エサ？」
「そうです。この妖魔には物理的に栄養を摂取していると思われるカ所が確認出来ません。太陽光をエネルギー変換して魔力を生成す

る一種の魔法系生物なら、それは解決します」
「あのタケノコって、ソーラーパネルのようなものなのですか？」
「確率は９３％。太陽光が確保出来ない時点では、付近の魔法系エネルギーを吸い取って成長しているものと」
「ところで」
牧野中尉は訊ねた。
「さっきから不思議なんですが」
「何か？」
「この妖魔って、どの妖魔ですか？」
「この」

黄色い電気トカゲが、涼宮中尉の出現させた立体画像に出現し、“ここに注目っ！”と書かれた吹き出しと一緒に、らせん状の建築物らしき全体を赤丸でかこってみせた。

「……」
牧野中尉は、一瞬、その意味がわからなかった。
「……はい？」

「ですから」

「この立体画像で映し出されているのは、あのタケノコの地下茎ですよね？」

「そうです」

「それはつまり……」
牧野中尉は、“それ”を言いかけて、口に出すことを拒否した。
それは――あまりに恐すぎる。

そんな牧野中尉に、無情にも涼宮中尉は答えた。

「タケノコと地下茎。これは全て、一体の超大型妖魔、植物ではなく動物系です」

「ま、まさか……」

「先程から上空に出現している妖魔の巣にもなっています」

「妖魔の……巣？」

「推論８５％で、蜂目の巣と女王蜂……いえ、むしろアリが一体化したものを推測していただければ、大凡蓋然性は保たれます」

「巣と体が一体になった女王アリが、働きアリとしての妖魔を産み、育てている。それがここだと？」

「然り」

「……内部にどれくらい？」

「内部には、育児室と思しき施設が２３０確認されています。概算で体内の妖魔は約」

一瞬の沈黙の後、涼宮中尉は答えたる

「五千六百」

「それは、幼虫だかサナギを入れて？」

「否――移動する存在を全てまとめて。それ以下については、サーチ限界範囲以上」

「……えっと」

牧野中尉は昨晩、寝る前にビールをのみながら見ていた、ドキュメンタリー系の艦内放送を思い出した。

アリの生態についてだ。

あまり昆虫が特異ではない彼女にとっては気味の悪い話ではあったが、たしか、あの番組によれば、アリは場合によっては、別の巣の働きアリ同士が相互に行き来する社会的融合性を持っており、融合した複数の巣の集まりをスーパーコロニーと呼ぶ。

そんな内容だった。

たしか……。

そう。

世界最大クラスが、北海道のスーパーコロニー。

あの小さなアリのサイズで、コロニーはなんと約2．7平方キロ。

そこに地下通路で連結された４５，０００の巣があり、３億を超える働きアリと百万もの女王アリが生息している。そう考えられている。

そんな話だったな……。

だけど、あれはアリという小さい存在で、あんな一体が、下手すればこのメサイアに匹敵する位の巨大な存在ではない。

むしろ、そんな非常識な存在が、アリと同じような巣を……この地下に作り上げている？

何の冗談！？

牧野中尉は、本気で地面が踏みたくなくなった。

地面を踏んだが最後、妖魔に足をかみ切られる、そんな錯覚を覚えた。

「い、泉大尉？」
救いを求めるように、彼女は美奈代に訊ねた。
「どうします？」

「どうしてほしいですか？」
美奈代は真顔で答えた。
「私が知りたいです」

「で、ですけど」

「涼宮中尉？」

「はい？」

「内部に、これといった異常な動きは」

「そう……ですね」
涼宮中尉はあっさりと答えた。
「巣の運営。そんな側面から見れば、納得のいく動きばかりで」

「例えば？」

「外部に通じる一番太い通路――メインシャフトを大量の妖魔が移動中。数は５百を超えます」

「……は？」
美奈代はイヤな予感がした。
「それってまさか」

「７９％の確率で、これは蜂や蟻が、外部からの攻撃に対して防衛行動を起こしたものと類似します」

「敵がいる……と」

美奈代は、周りを見回した。

「それって……」

「当然」

涼宮中尉は頷いた。

「ここにいるのは、私達だけです」

「全騎っ！」

美奈代は怒鳴った。

「逃げるぞっ！」

美奈代騎が離陸した途端、タケノコの根元の辺りから、真っ赤な柱のようなものが立ち上がった。

巣　目覚める　第五話

「データはもらった。ごくろうさん」
“鈴谷（すずや）”に命からがら逃げ帰った美奈代達に、後藤は言った。
「安心しろ。今度ばっかりは、お前さん達だけでどうにかしろとは言わないから」
当然だ。
美奈代は内心で思った。
“あれ”を制圧しろというなら、他を当たって欲しい。
やれというなら、今度という今度こそ、逃げるぞ？
「お前達が、普段の任務に就てる間に、この情報の解析が行われる。結果がそのまま、今後の戦略に反映されることになるだろう。そん時のことまで、俺ぁ知らないけどね」

「……質問」
訊ねたのは祷子だ。
「それは、どれくらいまでに？」

「さぁ？一週間か二週間か。まぁ、どっちにしても、俺達にとっちゃ、関係のない話さ」

「というと？」

「あの赤い妖魔の群が出現したのは、福井だけじゃないからね」

「まさか」
祷子が驚いた。という顔になった。
「……そんな」

「お姫さんの予想は大当たりさ。大当たりならパチンコかウマでお願いしたいところだけどさぁ」

「どういうことです？」

美奈代が割って入った。

「予想、知りたい？」

「いえ、ウマの方じゃなくて」

「お前もカンがいいねぇ。どう？今度、ホントに予想やってみない？」

「結構です」

「とまぁ、冗談はさておき……長野、新潟、群馬の三カ所で同じような――遥ちゃんにいわせれば、“巣”――が、それの出現が確認されている……しかもだ」

「えっ？」

「観測の結果、こいつらは、一日数十センチから数メートルの幅で、確実に成長している」

「せ、成長？」

「加賀市の地下に全長5キロを超えるような妖魔の巣が昔から存在したと思えるか？泉」

「……いえ、さすがに」

「だろう？俺が言っているのはそういうことだ……紅葉ちゃん。何かある？」

「……あるとしたら」

壁によりかかるようにして、その話を聞いていたのは、紅葉だった。

「いえ、私の予想が正しければ、これはこれで大変なことになるわよ？」

「どんなことです？」

都築が言った。

「こんなバケモノが地下にいるってわかっただけで十分、洒落にならないんだ。俺はもう、何があっても“大変だ”なんて思いたくもない」

「この妖魔が巣を作る社会性のある存在だとして」

都築を無視するように、紅葉は言った。

「現在、この世界で通じる動植物の常識が通用する生殖活動を行っているなら」

「なら？」

「この“巣”は、拡大を続けた挙げ句、相互に連結し、後には融合する可能性がある」

ぽかん。

美奈代達の顔は、そんな感じだった。

言われたことが理解出来ていない。

紅葉が何を言わんとしているか、把握さえ出来ていない。
そんな、顔をしていた。

「巣は単独で成長、つまり、規模を拡大している。複数の巣がこういう行動をとれば、巣同士がいつかは接触することになる。ハチやアリの場合、この現象が発生した場合、“巣”は互いに連結して“コロニー”となる」

「……あの、それだと、ハチでも蟻でも」
山崎は言った。
「巣が違えば、殺し合いになりますけど」

「そうだといい。私もそう思う」
紅葉は苦笑しながら肩をすくめた。
「けどね？魔族がこの妖魔を、兵器として投入したとしたら、むしろ“コロニー”を形成すると考えた方が正解なのよ。だってそうでしょう？敵とじゃなくて身内で殺し合う存在を、戦線に兵器として投入してどうするのよ」

「……成る程」

「――――なら、どうします？」
都築はふんぞり返るように椅子の背もたれに体を預け、訊ねた。
「殺虫剤でも撒きますか？」

「キンチョールが効くとは思えないサイズよね。あんた、試しにやってきて？結果は教えてくれなくてもいい」

「――――広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）で焼き払えってんでしょう？」

「情報機関の調査如何では、それはない。つーか」
驚く美奈代達に、紅葉は答えた。
「巣全体が生命体という、その酔っ払い（涼宮中尉のこと）の分析もある。焼けるもんかどうか。どうやったら始末をつけられるか。何もわかっていない」

「……」

「情報機関の報告を待つ以外、手のうちようがない」

「……その」
山崎は、その巨大な手を挙げた。
「情報機関というのは、どこから、どうやって、情報を得るのですか？」

「ああ」
紅葉は頷いた。
「蛇の道はヘビって言ってね」
その顔は苦虫を噛み潰したような、「うんざりっ！」といわんばかりの何かを表していた。
「いっとくけど、近衛の情報部門がＭＩ６とかＣＩＡ、それからＦＢＩみたいな存在だと思ったら大きな間違いだからね？」

「じゃあ、何なんです？」

その都築の声に、紅葉は真顔で応えた。

「闇魔様のお知り合いよ」

「闇魔様？……闇魔様って、あのシタ引っこ抜くっていう？」

「そうね……アンタの場合、どこのシタかは聞かないけど。せいぜい、生きたまま引っこ抜かれないように気をつけなさい」

「は？」

「気の利かないヤツは無視して――今度の分析担当は、魔導兵団所属特務情報処理部門、別名“四季機関”が絡むことになるでしょうね……後藤さんは知ってるわよね？四季機関」

「おいおい」

後藤は肩をすくめた。

「そのヘンまで、こいつらに教えるのはどうかと思うぜ？」

「いいのよ――その名前だって本当なのかさえ定かでない。私ですら、諜報や情報に関する、そんな特別機関があるってことしか知らない。それでかなり知っていることになるんだから。違う？」

「……まぁ、ねぇ」

後藤は気の乗らない顔で答えた。

「とにかく、俺達が関わっても寿命を縮めるだけだ。まだ若いんだ。死にたくなかったら、変な所に関わるな。ガキの頃、先生に言われたろう？ヘンな人についていくなって。あれさ」

「……はぁ」

美奈代は頷いた。

「で、その……何とか言うどこかで、分析だかが行われている間、私達は何を？」

「とりあえず、福井方面でのこれ以上の攻勢はないものと判断して

いる。西日本と東日本を分ける“西部戦線”は膠着状態だが」

「休暇ですか！？」

芳（かおる）が嬉しそうに訊ねたが、

「残念ながら――――取り上げだ」

「えーっ？」

「そんながっかりすんなよ。俺もなんだからさぁ」

「次、どこですかぁ？」

「本来なら、静岡に送りたい所だけど、ここも膠着状態……意外と落ち着いているんだよね。今の状況」

「だったらぁ」

「うんうん……俺も休暇が欲しいところだけどねぇ……そうもいかんのだ。これが」

「東北ですか？」

「確かに、どうも奴さん達ぁ、関東より東北に攻め込もうとしているらしいけどなぁ」

「東北？」

「ああ。東北方面に軍を集めつつある」

「何故？」

「近衛（こっち）の司令部としては、冬を警戒していると、そう睨んでいる」

「冬……ですか？」

「はっきり言って」

後藤は答えた。

「アフリカ、南米と、人類が対決した妖魔達は、冬を経験していない。だから連中、冬が来る前に東北戦線を一段落つけるつもりじゃないか――そう睨んでいるんだ」

「……福島と米沢と、どっちです？」

「それがなぁ」

後藤は、指示棒を襟首に突っ込むとポリポリと背中を掻いた。

その中年男の無精ぶりに美奈代は眉間に皺を寄せた。

「……お前ら、当面は京都だ」

「京都？」

「ああ。東達を受け入れた関係で、物資の補給も必要になったし」

「……あの」

美奈代は、周りを見回した。

今、ブリーフィングルームにいるのは、美奈代達だけ。

東も土浦達もいない。

「他の部隊は？」

「土浦達は俺の指揮下だけど、所属は偵察隊だ」

「東達は？」

「あのどうでもいい連中なら、本来は、他の基地（ベース）所属になるはずだったが、いかんせん、全部が不足する状況だ。設備も人材も整っていない。

仕方ないから、“鈴谷（すずや）”の空いている整備区画を奴らの仮の根城として貸してやることになった。
ああ、当然、俺達とは所属は別。何しろ、俺達ゃ不正規部隊だから、指揮系統もな」
「……明貴、残念だったな」
顔をわずかに歪ませて怒りを堪えているほむらに、美奈代は同情した顔で言った。
「ああ、そういや、なんだ？ハンガーデッキが血であふれたって？」
「あいつらの鼻血ですよ」
「都築、なんだそりゃ」
「あの馬鹿共、明貴と七瀬に、“お兄ちゃん”って言われて、鼻血ブー」
「……明貴、その歳でどういうプレイだ？その“お兄ちゃん”って」
「隊長っ！」
ガタッ！
顔を真っ赤にして席を立ったのは美奈代だ。
「こんな子相手に何を！」
「お前が怒るなよ……いや、失血寸前になった彼奴等が医務室へ担ぎ込まれたって聞いたからさぁ」
「生身の女にモテることのない、悲しい男達が、少しだけ幸せになった。そんなところですよ」
「……まぁ、苦労するのは俺じゃなくて、白鳥沢少佐だからいいけどさぁ」
「白鳥沢？」
「ああ。東達、６４１中隊の隊長。後で挨拶しておけ？」
「……６ナンバーは珍しいですね。聞いたことがない」
「そもそも、アサルト・アーマー自体、近衛でもメサイア認定されていない。あんなものメサイアじゃないって意見が多数でな。本来ならＴＡＣ部隊用のナンバーが振られたってわけだ」
「それで、私達が京都というのは？」

「観光じゃないぞ？舞鶴だ」
「……砲撃でかなりやられたと聞きましたが」
「ああ。市街地が相当やられているが、港湾施設への影響は限定的だ」
「そこで、何をしろと？」
「陸軍のお守りだよ」
「お守り？」
「陸軍の奴ら、福井どころか石川県の奪還まで未だに諦めていない」
「そんな」
「近衛は陸軍と作戦の中止を求めて協議に入った。何しろ、蓮川大臣ってのが言うこと聞かなくてなぁ……」
「蓮川って……」
都築がぽつりと言った。
「あの蓮川一弘総理の孫でしたっけ」
「そうだ。経済改革だのなんだので一時代を築いた大物だけど、子孫の育成には失敗したらしいな」
「知ってるのか？」
「ああ。中３の時、町中でナンパしてた貧弱なリーマン絞めたら、“僕は総理大臣の孫だぞ！”なんて抜かしやがるから、なめんじゃねぇって、袋だたきにしてやったんだ」
「あれ、お前だったのか？アイツの頭、逆モヒカンにしたのって」
「そうですよ。隊長。薬つかって永久脱毛してやったんです」
「永久……脱毛？」
美奈代のその質問に、
「あいつのカネで脱毛剤買って、頭に振りかけてやった。見せてやりたいもんだ。あの逆モヒカンは、我ながら芸術の域だった」
「な、なんてマネを」
「んで、その後、残ったのをパンツの中に放り込んでやったから、アイツ、下半身もツルツルのはずだ」
「……」

一瞬、想像しかけた美奈代は、頭を強く振って、その妄想を頭から追い出した。
「……それだけだな？そうだな！？」
「落ち着け」
都築は言った。
「まだある」
「……何をした」
「泣き叫ぶアイツを、“好きにしていい”って、繁華街にあるハッテン場に放り込んで逃げた。後は、あいつから巻き上げた金で豪遊して……いやぁ、楽しかったなぁ」
「……鬼龍院中尉」
頭痛を覚えた美奈代が寧々に言った。
「はい？」
「子供の躾けには気をつけろ」
「……はい」
自信満々という顔の都築を、“もうっ”と呟きつつ睨んだ寧々は素直に頷いた。
「隊長？それで、陸軍が、ようするに暴走していると」
「そうだ。蓮川大臣の命令で、未だに今月中に石川県を奪還すると」
「無茶です」
寧々が驚いたのも無理はない。
あと十日と立たずに月が変わる。
それまでにあの得体の知れない妖魔の巣を突破して、その後ろにいるだろう無数の妖魔やメースを撃破しろというのか？
「そんな……横暴な」
「だから」
後藤は言った。
「近衛ははっきり言ってるのさ。やめろってな」
「応じる気配は？」
「さぁ？」

「さぁ？って……」
「聞かなきゃ、最後の手段ってのもある」
「……考えたくないですね。聞かなかったことにします」
「子供はそうした方が良い。俺は俺で、しばらくいないから、泉、またよろしく」
「あの……やる気あるんですか？」
「きっびしぃ意見だねぇ……やる気あるから、これから行くんだよ？」
「どこの飲み屋へ？」
「北米だよ」
「北米？」
「ああ……ちょっとびっくりさせてやろうと思ったんだけどな。言っておくわ」
「？」
「あの鍾乳洞の件、覚えているな？」
「……はい」
美奈代達は頷くしかない。
親友にして喧嘩友達だった、あのフィアの最後を迎えた地だ。
フィアの顔と共に、永久に忘れることはないだろう。
「それが」
「米軍が、あそこを奪還した後、鍾乳洞をほじくり返したんだ」
「鍾乳洞を？」
何で――そう聞き返そうとして、美奈代は言葉を止めた。
“あれ”……まだ、交渉材料にしてなかったんですか？」
「するまでもなく、米軍は魔族軍への報復だって、日本へ派兵してくれたからねぇ」
「中華帝国侵攻の足がかり。それだけのクセに」
「まぁ、世の中、タテマエと本音ってものがあってだな……話、戻していい？」
「――どうぞ」

「米軍から問い合わせがあったんだよ。俺達が侵攻したのは、米軍も知っている。だからね？貯蔵していたブツ……反応弾はどこだって」
「何て答えたんです？」
「知るかって」
「……で？それだけで呼び出された？」
「それもあるけどさぁ……ほら、アフリカで魔族軍が使ってるでしょ？使い方、知らないわけじゃないから、米軍も必死なワケだ。何とか探そうって躍起になっているウチに、意外なモノが見つかったんだよ」
「意外なモノ？」
「――殲龍だよ」
「……」
美奈代の眼が見開かれた。
殲龍。
それは、あのフィアの乗騎だったメサイアだ。
世界でたった1騎のメサイアが発見された。
それは――
「地下の落盤の間から、ほぼ無傷で発見され、地上に搬出された」
「――ふ」
「それが、だ」
美奈代の声を遮るように、後藤は強く言った。
「一昨日、何者かの襲撃を受け、現地捜索部隊は壊滅。殲龍は行方不明になった。しかも、この際、西海岸方面で西へむかって超高速で移動する飛行艦が確認されている」
「……」
「米軍は、これを近衛か魔族軍、いずれの仕業か知りたいってワケ。だから、部隊指揮官である俺が行くわけだ。泉？これでも俺のやる

気を疑うか？」
「……失礼しました」
美奈代は、奇妙な胸騒ぎを覚えつつ、はっきりと思った。
――――染谷に知らせよう。
――――フィアが、生きているかもしれない。
何故？
根拠は？
そんなことは大切ではない！
殲龍（せんりゅう）が見つかったなら。
それで十分だ。
美奈代は、ミーティングが早く終わらないか。それだけを祈りつつ、後藤の指示を受けた。

「近衛の言い分こそ正しい」
「しかし」
「大臣一人のメンツのために、どうして俺達が将兵を失わなければならない」
陸軍参謀本部の一室で、そんな議論が交わされていた。
全員が軍服姿。
つまり、現役の軍人だ。
明治時代から続くアンティークな室内にいるのは3人だけ。
かつては、様々な帝国の命運を決する作戦を議論した場が、今では控え室扱いだ。
「お茶を飲め――――秋葉原よ」
老齢の域に達した、恰幅の良い背の低い男が、魔法瓶から急須へとお湯を注ぎながら言った。
ネームプレートには「御茶ノ水」とかかれている、ニコニコとした眼の細い好々爺ともいえるが、でっぷりとした体型と、その顔立ちから、どこかカエルを連想させる彼が急須からお茶を湯飲みに注

いだ。
「こんな所で焦ってもしかたないぞ」
「そうだ」
バリバリと煎餅をかじりながら頷いたのは、モジャモジャ頭に貧相な顔立ち、そしてメガネという、痩せて冴えない中年男だった。軍服を着てさえ、威厳はないし、部下には舐められるだろうと思わせる。
ネームプレートには“四谷”と書かれている。
「俺達のやれることは、皆無に等しい」
「そんなことはないわさ！」
どんっ！
テーブルを叩いたのは、はっきり異相の人物だった。
顔が異様にデカイ。
態度や表情ではない。
顔そのものがデカイのだ。
ネコの喧嘩は顔がデカイほど有利だというが、彼を前にすると本能的にかみ殺されるかと心配になるほどデカイ顔は、一度見たら一生忘れることは出来ないだろう。
ネームプレートには“秋葉原”と書かれている。
「我々が立ち上がれば、あんなボンクラの息子など！」
「政治は」
ずずっ。
お茶をすすった御茶ノ水は言った。
「お前が考えているほど、甘くはないぞ？」
「戦術と政治を同レベルで語るのが、お前の悪い癖だ」
俺にもくれ。
四谷は煎餅片手に御茶ノ水から湯飲みを受け取った。
「貴様等、やる気があるのか！？」
「あるにはある」
御茶ノ水は答えた。

「じゃが、今は時期ではない」
「時期はいつ来る！」
「もうすぐじゃ」
御茶ノ水は、窓の外の景色を眺めた。
それだけで老人ホームを連想させるからすごい。
「もうすぐ来る」
「お前のお迎えの話ではないわさ！」
「失礼な……近衛がもう黙ってはおらん。蓮川ん所の爺さんはもうボケて人事不省」
「あれだって、近衛の仕業って噂もあるくらいだぞ？御茶ノ水のじいさん」
「四谷……下手なことは言うもんじゃない」
「ええいっ！」
秋葉原は怒鳴った。
「俺が邪魔者は――」

コンコン。

不意に、ドアがノックされた。
「やれやれ」
どっこらしょ。と呟きながら、御茶ノ水がドアを開けた。
「ああ……お前さんかい……うん。わかった、大将にはすぐ行くと伝えてくれ」

「どうした？」

「秋葉原よ。強く願ってみるもんじゃのぉ」

「なんじゃ」

「立花大将が、儂等をお呼びじゃ」

巣　目覚める　第六話

●長野県上田市　魔族軍総司令部

「ヴォルトモード卿のご容態が優れないとは聞いています」

浮遊城からヴォルトモード卿を訊ね、面会を終えたダユーはガムロに訊ねた。

「しかし、これは一体？」

「封印の解除が完璧ではなかったと、そう聞いている」

「封印が？」

「連日、倦怠感と微熱が続き、満足に歩くことも出来ないでおいでだ。医師団によると魔力的に問題があるという」

「解放は不完全であると」

「最終封印が完璧では無かったようだ。イツミめ、どこまで細工をしたのか」

「それで……」

ダユーは面白がって言った。

「それで、私の所に、あんなことをご依頼されたのですね？」

「――首尾は」

「完璧です♪ご覧になります？」

「見よう」

二人が向かったのは、司令部から少し離れた、飛行艦の発着施設。
そこに着陸しているの飛行艦の中に、白く輝く優美な一隻の巡航艦があった。
ダユーが個人で保有しているクルーザーだ。
二人は艦内に入り、そこで足を止めた。

薄暗い照明に照らし出されているのは、ワイヤーで拘束された、赤い装甲を纏った見慣れないメースだった。

殲龍（せんりゅう）だ。

「これが？」

「はい。あの鍾乳洞で人類によって発見された、“鍵”の乗騎です」

「“鍵”そのものは発見されているんだろうな」

「もちろん」

「今、どこにいる？」

「医務室です」

●“鈴谷（すずや）”艦内

昔なら。

美奈代はそう思いかけて、時の残酷さというものを知った。

昔――ほんの数ヶ月前まで、富士学校にいた頃なら、こうはならなかった。

コクピットで、この人は私を抱きしめてくれたんだ。

私を、好きになってよかったと、言ってくれたんだ。

それなのに――

「……」

今、私とこの人の間に、心は通じていない。

二人の間にあるのは、ただの空気だけ。

手を伸ばせば触れられるこの距離が、恐ろしいほど、遠い。

「ほらぁ」

コンッ

横を向いたままの染谷の脇を小突いたのは、涼菜だった。

「何よ。元カノがこうして、別な女のことで話に来てくれているんだからさぁ」

そう言う顔は楽しげにさえ見える。

「少しは愛想よくしなさいよ。みっともない、もう……泉大尉？」

「はい」

「話の途中で何だけど、ここからは、どうだい？」

「どう……とは」

「ははっ。あんたもカタブツだねぇ。この坊やとは、類友の間柄ってやつかい？」

「はっ？」

「ここからは、階級章無しの、男と女、それから指南役のお姉さん

で会話してもいいかい？私はそう聞きたかったのさ」
「わ、私は」
美奈代は、困惑した顔で染谷の顔を盗み見た。
「染谷少尉さえよければ」
「瞬はどうなんだい」
階級でも、姓でもなく、名前であっさりと呼ぶ涼菜の態度に驚きながらも、美奈代は推移を見守った。
「もう子供じゃないって教えたろ？殻に籠もってないで、出ておいで」
「……別に」
「真実は、フィアちゃんから聞けばいいって、ただそれだけじゃないか。本当なんだろう？その情報」
「後藤隊長が、こういう件で嘘をつくとは思えません」
「……」
「ぼうや」
こんっ。と、涼菜が染谷の後頭部を小突いた。
「本当に、これ見たら振られるわよ？あんた」
「あの」
美奈代が何かを言おうとしたが、
「しかたないわね」
遮るように涼菜は言った。
「情報はありがとう。後は、私がこの馬鹿、“教育”しておくから」
「あの……お二人は」
「……ああ」
突然、涼菜は染谷の胸ぐらを掴むと、唖然とする美奈代の前で染谷と唇を重ねて見せた。
そして、唖然とする美奈代に、涼菜はこう答えた。
「こういう関係よ」

その晩のことだ。
「お姉様？」
ベッドの上で、ぼんやりとした美奈代の顔をのぞき込んだ涼が訊ねた。
「大丈夫ですか？」
「……ん？」
「心、ここにあらずって顔してますけど」
「……そうか？」
「私、飽きちゃいました？」
「そういうことじゃない」
美奈代は苦笑しながら、そっと涼の髪を撫でた。
シャンプーの香りが心地よく鼻をくすぐる。
美奈代は、そっと涼を抱きしめると、肺一杯にその心地よさを楽しむ。
「人は変わるとなれば、変わるものだな……そう思って」
「変わるから、生きていけるんですよ？」
涼は笑って言った。
「私だって、お姉様に憧れて、反発して、それで今は――――」
「そう……だな」

美奈代は、涼をもう一度だけ抱きしめた。
涼の細い身体。女性特有の柔らかい素肌の感触が腕をとろけさせる。
「私も変わった」
「そうです」
涼は、美奈代の胸に顔を埋めると、拗ねたように言った。
「初めての時は、泣いて嫌がられたんですから。あれは一生忘れません」
「……悪かった」
「いいんです」
涼は笑いながら顔を上げ、美奈代に言った。
「今は、こうして幸せなんですから」
「そうか？」
「人は幸せになりたいと思うから、変わるんです。不幸になりたくて変わるのは、変わるとは言いません」
「じゃあ、何て言うんだ？」
「――――堕ちる。っていうんです」
涼はもう一度、美奈代の胸に顔を埋めた。
乳房に走るくすぐったさと、不思議な安堵感が美奈代を包み込む。
ただの快楽なのか。
それとも、女としての本能なのか。
そんなことはどうでもいい。

ただ、満足だった。
涼とこうしているだけで、今の美奈代は満足だった。
その満足をさらに求めるように、美奈代は涼の頭を両腕でそっと抱きしめた。

「堕ちる？」

「そうです」

チロッ

乳首に走った電気のような刺激に、美奈代の背筋がそった。
甘い声が、喉から漏れる。

「堕落ともいいます」

「宗教みたいな言葉だな」

「私は神様も仏様も信じてませんけどね」
まるで赤ん坊のように、美奈代の乳首を甘噛みしながら吸い、指先でもみしだく涼は言った。
「祈っても無駄でしたから」

「それで？……んっ」

「ふふっ。言いたいは、染谷少尉のことでしょう？」

「ああ」

「あの人、何も出来なかったって、自分の殻に籠もっちゃったんで

すよ」

「それが堕落だと？」

「飛べと与えられた翼を持ちながら、卵の殻を自分にかぶせて“僕は卵だ”って言ってるのと同じ。そんなのは、飛んで落ちるより惨めです。だから、堕落っていったんです」

「……染谷候補生は」

美奈代は、涼の頭を撫でながら、天井をぼんやりとみあげた。

「本当に立派な人だった」

「立派を演じていたんでしょう。立派じゃなきゃいけない。立派であれ、立派で居続けろ。他人からそう言われつづけて、そんな立場を演じ続けていただけ」

「わかるのか？」

「わかりますよ。お姉様が好きになった相手ですから」

涼の息が、唾液にまみれた乳首にかかってくすぐったい。

「あの人のことは、お姉様が一番わかっていた。だから、近い人だって、惹かれたんでしょう？」

「私が？」

「そう。お姉様も、分隊長として模範的であれって、そう頑張ってきた。その目標や手本は、あの人だった。そうでしょう？」

「……よくわかる」

「人を好きになって、本気でその人のことしか考えなくなると、全部がわかってくるんです。そういうものですよ？そうでしょう？」
涼ははにかんだように笑った。
「私はもう、お姉様のためだけに生きていますから」

「……そうか」
美奈代はもう一度、頭を撫でた。
「そんな人だから、ただ演じているから脆いんですよ……私も昔はそうでしたから」

「涼が？」

「いろいろあったんです。私も」

「そうか」

美奈代は何故か、それを知ろうと思わなかった。
今、この瞬間、涼のぬくもりがあれば、過去なんて知らない。
そう、思ったのだ。

「フィアさんを守りたい。守らなければいけない。自分にそう言い聞かせて、その役を演じ続けようとした。ところが、それがうまくいかなくなった。フィアさんは、手に届かない所で――――消えた」
“死んだ”と言わないのが、涼の出来る精一杯の配慮。
それが美奈代にもわかる。
「……ああ」
フィアの最後の言葉が、脳裏に何度もよぎった。

瞬を頼む。
その言葉を、

親友と認めた相手の遺言を、
美奈代は果たせていない。
それは、わかっている自分が、わかる。

「だからあの人は、役を変えたんですよ。自分は悪くない。悪いのは、お姉様だと思い込む役に」

その言葉には、侮蔑というより憎悪が込められていた。

「あの人にあるのは、結局は自分の都合だけです。
フィアさんを失って辛いのは、お姉様だってそう、私達だってそうなのに、世界で自分だけが可哀想だって、そんな殻に籠もっている人。

そんなの男のやることじゃないです。

そうでしょう？
どうして、お姉様に一言、せめてフィアさんの最後位、聞きに来ないんですか？
フィアさんがどれだけ頑張って、最後まで頑張ったか、どうして知ろうとさえしないんですか？
卑怯です。
フィアさんがいない、この現実から逃げているだけ。
結局、あの人は自分が可愛いだけ。
フィアさんを守れなかった、無力な自分から目を背けたい。
ただ、それだけの人に落ちぶれたんです。
私、だから言ったんです。
――――あの人は、堕落したって」

「……」

美奈代は、しばらく沈黙した後、
「人は、そんなものかな」
そう、呟くように言った。

「そう思います」
涼は答えた。
「天国に行くより、地獄に行く人が多いのは、人が一番可愛いのが自分だから。神様の教えより、自分の快楽を求めるから――でも」

「でも？」

「矛盾しているようですけどね？自分を可愛いと思える。人はそこから始まるんです。自分を愛せるから、他人を愛せる」

「染谷候補生も、――フィアを愛していた」

「いいえ？」
涼は言った。
「あの人が愛していたのは、フィアさんを愛しているという、自分自身の満足感です。本当に愛していたら、仇をとろうとします。共に戦ってくれた仲間に感謝します。それがない――だから、あの人は許せません」
そこまで言って、涼は訊ねた。
「お姉様は」

「ん？」

「あの人を、今でも愛してるんですか？」

「……見下してくれていい」

美奈代は言った。
「アフリカで別れたときは、心で泣いた。戦いの中でも、いつか会えると、それが支えだった。だけど、そのうち」
「そのうち？」
「思い出しもしなくなった。涼……私も堕落したんだよ。私も、染谷候補生を愛するっていう演技に酔いしれていたんだろう……でなければ、本気で愛していたなら、染谷候補生に失礼どころの話じゃない」
「……お姉様」
「結ばれることもないってことは、縁が無いって証拠。私は所詮、演技の中でしか、彼を愛することが出来なかった――だから」
「きゃっ！？」
不意に、美奈代が涼を抱きしめ、再びその髪の中に顔を埋めた。
美奈代は不安だった。
今、こうして身体を任せている涼との関係まで涼に対する想いまで、もしかしたら、自分は演じているだけなんじゃないか？
そう、思ってしまうから。
この心地よさすら、仮初めの演技に過ぎないなら、私は何を信じたらいい？
違う！

心の中で、誰かが叫ぶ。

これは演技じゃない！

これは、本心だ！

私は、心から涼を――――！

そう、さけぶ。

だけど――――

だけど？

だけど！

だけど！

……ああ。そうか。

涼の体温を感じながら、美奈代は、やっと理解出来た。

染谷候補生も、きっと、こうやって苦しんだ挙げ句、ああなったんだな。

もし、涼を失ったら私はどうなる。

あんなふうになるのか？

私は……。

その先を考えた美奈代は、子供のように涼の身体を抱きしめ、そして、その中へと溺れていった。

“鈴谷（すずや）”が舞鶴港に入ったのは、午前7時のことだった。

京都府舞鶴市は、海軍舞鶴鎮守府が存在する日本海方面きっての軍港だ。

今度の戦いでは、京都市街地を模して碁盤の目のように整備された美しい市街地は、魔族軍の無差別砲撃によって灰燼と帰す被害を被っていた。

「皮肉なものだって……海軍の人が言ってた」

上陸を許された美奈代達の中で、さつきがポツリと言った。

「多分、魔族軍は、市街地と基地の区別がつかなかったんだろうって。攻撃が着弾した所に海軍の施設はほとんどなくて」

東舞鶴駅を中心点とするわずか1キロ足らずの中心市街地は、魔族軍から放たれた数千発にわたる集中砲火の的となった。

容赦なく降り注ぐ攻撃に、市民は逃げることさえ出来ず、戦禍の犠牲となった。

美奈代達は、その焼け野原となった市街地にホームだけが残る駅で、ぼんやりと列車を待っていた。

焼け残った、半ば崩れかかった鉄筋コンクリート製のビルの残骸

が並ぶ市街地なんて見ても仕方ないから、せめてという都築の立案で、無事だった西舞鶴駅の方に行こうと、美奈代達は電車を待っている最中だ。

「犠牲になったのは、市民ばっかりだって」

「一度に吹っ飛ばされたんだろう?逃げるヒマもなかったろうに」

「うん。海軍鎮守府も、まさかここに砲撃が届くとは予想さえしてなかったって」

「それで普通だよ」

都築は言った。

「どこの世界に３０キロ以上も届く弓があるもんか。それにしても遅いな」

「無理言わないで下さい」

時刻表を見ていた寧々が言った。

「山手線の感覚だと遅いかもしれませんけど、地方鉄道ならこの程度はかかります」

「まぁ、鉄道が通っているだけで感謝すべきだと思うよ?」

「……かもな」

都築が肩をすくめた時だ。

駅員がメガホンを持って現れ、送電線の故障のため、鉄道の運休を告げた。

「ったく」

ホームでキップの払い戻しを受けた美奈代達は、焼け野原の中を

放り出された。
せっかくの上陸なのに、これでは何の意味も無い。
砲撃で崩壊したビルや建物。
熱で歪んだ送電線が垂れ下がる電柱。
力なく歩く人々。
道ばたに止まったまま、焼けた車。
所々に転がる炭の元が何だったのか。
何かを見て、何かを考えるだけで気が滅入る。

「どうする？」
家族を探しに来たのか、手にバケツを持った若い女が目の前を通り過ぎるのを眼で送ったさつきが訊ねた。
「何もすることないよ」
「しかたない」
美奈代は言った。
「水もこれじゃ、手に入らないだろう。艦に戻らないか？少なくとも、水だけは手に入るだろうから」
「……焼け野原をまた歩くのかよ」
「ぼやくな、都築」
「艦長、これ見せたくて、私達を歩かせたのかな」
「どうでもいいですけど、海軍に車を借りられませんか？」
麗央が訊ねた。
「もう歩きたくないです」
「……同感」
美晴も答えた。
「もう疲れました」

「……だな」
せめてバスでも残っていてくれれば。
そう思うが、どうしようもない。

「腹も減ったし。これから数キロ歩いて海軍と交渉か」
「レンタカーやってますかね」
そんな山崎の巨体の後ろ。
きょろきょろと辺りを見回していた少女が、その巨体にぶつかった。

「おっと」

「あ、ごめんなさい！」
ポニーテールにした黒髪の少女は、びっくりした様子で、勢いよくぺこんと頭を下げた。
その途端、リュックから荷物が一斉に飛び出した。
「わわっ！？」
少女は慌てて荷物をかき集め、そして再び詫びを入れると、すぐにロータリーを越えて、向こうにいた二人連れの、同い年くらいの男の子の元へと駆けだした。

「元気な子ですね」

「……」
美晴が苦笑した横で、何故か美奈代はじっ。と真顔になって走り去った少女を見ていた――いや、睨み付けていた。
「……柏」

「はい？」

「あと、頼む。時間には戻る」
美奈代は、そう言うと、何故か少女を追い始めた。

「わ、私も行きます！」

「私も」
「追います」
そう言って、後を追ったのは涼と芳（かおる）、そしてほむらだった。

「何で追いかけてきたんだ？」
街角の石造りの建物の影で、涼達は美奈代に追いついた。
少女達は、周りを警戒しながら、時折、カメラを使って何かを撮っていた。

「気になったからです。何故、あの子達を追ってるんですか？」と涼が訊ねた。

「……うん」
美奈代は、自信がなさそうに頷いた。
「見間違いかもしれないけど」

「――大尉も、“アレ”を見たんですか？」
ほむらがそっと訊ねた。

「明貴も？」

「えっ？私、何だか面白そうだから付いてきたんだけど、ね？ほむちゃん、何見たの？」
それを聞いた芳（かおる）がびっくりした顔でほむらに訊ねる。

「さっきの子の荷物の中に」

ほむらは、ハンドバッグの留め金を外した。
「拳銃があった」
「け、拳銃っ！？」
「ばかっ！声が高いっ！」
とっさに涼が芳（かおる）の口元を抑えた。
「気付かれたらどうするのよ！」
「ご……ごめん。でも、ほむちゃん？拳銃って」
「……」
こくん。
ほむらは頷くと、ハンドバッグの中に隠してあった大型拳銃を取りだした。
「あっちの用語でチャカ。こっちの用語でハジキっていう、アレ」
「ほむちゃん……何でそんなこと知ってるの？」
「私のバイブルは“仁義なき戦い”……」
シャカッ
拳銃のスライドを動かしたほむらは相変わらずのポーカーフェイスでそう言った。
「おみそれしました……」と、ビビる芳（かおる）は、深深と頭を下げた。
「警察へ？」
その涼の問いかけに、
「……気になっているのは」

胸ポケットに手をやった美奈代は答えた。
「あんな子供だってことと、どう考えても、警察より軍が絡みそうな状況だということだ」

「それは？」

「拳銃と一緒にあったのは、どう考えても通信装置……しかも、あれに私は見覚えがある」

「見覚え？」

「ああ。あの独特のデザインは間違いない」
美奈代は頷いた。
「あれは、魔族軍の通信装置だ」

匂い　第一話

●浮遊城内　医務室

両壁を埋めるように並ぶのは、円筒状のガラスケース。

その中には、男女を問わず、数多くの人間が浮かんでいた。

片腕が根元から欠けた者、両足がない者、その状態は人の数だけ違う。

その間を通り抜け、真菜はその奥にあるリハビリエリアと書かれた区画に入った。

先程の筒の中から出された後、四肢のリハビリに取り組んでいる者達がベッドに寝かされている。

ある者は足を、ある者は腕を、機具に乗せてリハビリに取り組んでいる。

その一番隅のベッドに横になって、本を読んでいた男に、真菜は声をかけた。

「再生槽の中はいかがでした？」

「――――最悪だったよ」

本から目を離した男は、やれやれ。という顔で肩だけかるくすくめてみせた。

「騎体は失う、部隊は全滅、挙げ句が身体までやられたとあってはな」

「今、よろしいですか？」

「どうぞ？」

そう言って、ベッドの脇に置かれた椅子を真菜の前に置いた男こそ、誰でも無い、あの瀬音少佐だった。

真菜は、無言で会釈すると、背もたれもないパイプ椅子に腰を下ろした。

ベッドの上で姿勢を変えたせいで、彼が読んでいた本がベッドから落ちた。

真菜が拾うと、それは金髪女性の裸のグラビアが満載されたヌード雑誌だった。
「こういう方面はお元気そうで」
「なぁに」
不敵に笑うと、瀬音は本を受け取った。
「男子たるもの、この方面はいつでも戦えないとな」
「……呆れた」
真菜は言った。
「少しは、私の立場も考えて下さい」
「人間部隊の立場が弱いのは知っているさ」
瀬音は真顔で言った。
「だからこそ、実績が求められる。俺も功を焦ったのは認めるが――」
「白いメサイア達と交戦したと」
「……ああ」
瀬音は頷いた。
「真理だった」
「二宮大佐が？まさか、あの中隊に復帰したと？」
「あの独立愚連隊だ。復帰なのか左遷なのかは知らないが」
瀬音は苦笑した。
「あの腕前は、ヒヨコの嬢ちゃん達のレベルじゃない」
「……あなたの腕が鈍ったとは思いたくありません」
「厳しいな」
「あなた方、主要士官だけで編成された部隊が全滅した結果、人間部隊の編成に齟齬が発生しています」
「……すまん」
「騎体は魔族軍から回してもらっていますが」
「騎士の数に不足が？」
「不足しているのは、指揮官です。各戦線での投降兵を使った“転向品”や、金で雇った“傭兵”共に技量の面では問題ないのですが、

それはあくまで個人のこと。指揮官としては使い者になる騎士が少ないのが現実です」
「指揮官だけ、魔族から回してもらうことになるか？」
「正直、魔族の方も、指揮官レベルはかなり貴重だそうで」
「……無理もない」
「魔族軍は、今度の作戦をきっかけに人類相手に大規模なリクルート作戦を実施するそうです」
「リクルート？なんだそれ」
「さぁ？」
「さぁって……知ってるんだろう？」
「いえ。ダユー様からうかがったのは、そこまでです」
「お前、本当は信じられていないんじゃないのか？」
「私の努力を水泡に帰して下さったのは、どなた？」
「……悪かったよ。そういや」
「はい？」
「俺の子供達は？」
「……ああ」
真菜は頷いた。
「宗像が、人手を欲しがっていましたので貸し出しました」

「ふへぇ……」
焼け跡を珍しそうに眺め、所々を写真に収める子供達三人組。
普段着にリュックサックのその出で立ちは、不審者というより被災者にしか見えない。
警察や軍人も、焼け跡の整理や被災者の対応に追われ、昼間から通りを歩く彼等に誰何する者はいない。

パトカーが、公園で炊き出しが行われると放送しながら、彼等の横を通り抜けた。
裕樹が周りを見回し、
「こんなになっちゃんだぁ」と感嘆の声を上げる。
「新潟よりヒデえな」
砲撃の直撃を受けたんだろう。吹き飛ばされたビルを写真に収めた大地が頷いた。
「……残酷ってヤツか」
「何よ」
月菜は、しきりにペットボトルのキャップをいじりながら言った。
「私達は今、“そっち”にいるんだからね？下手な同情なんて」
そっち――つまり、加害者たる魔族軍に属している。
そういう意味だ。
私達だって、散々苦労した。
収容所で地獄を見た。
その間、ここにいる人達は、何をしてくれた？
何もしていない。
なら、その分は――
月菜はそう言いたかった。
そう、主張するだけの権利が自分達にはあると、そう思いたかった。
だが――
月菜達は、その時すれ違った避難民の列から少し離れて歩く、一人の女性を確かに見た。
焦点の合わない虚ろな眼をした女性。
ボサボサの頭に、どす黒く汚れたシャツに何かを抱きかかえている。
黒い塊。
違う。

月菜達は、はっきり見た。
血にまみれ、半ば炭化した赤ん坊の焼死体だった。
「……」
天を仰ぐようにぼんやりと歩く女性が真横を通り抜ける時、月菜達は、その女性に背を向けたまま、息を殺すしか、何も出来なかった。

自分達は間違っていない。

月菜達は、そう信じている。
信じたいと思っている。
だが、その信念の代償が、今の女性と、その腕に抱えられた子供の末路なら？

「――――行こう」
月菜の腕を大地が握った。
「行くんだ」
その問いかけから逃げるように、月菜達は一斉に駆けだした。

背中を振り返りたくなかった。

振り返ったら、あの赤ん坊と母親がいる。

それだけなのに、

それが、三人は何より恐ろしかった。
だから、振り返りたいとは思わなかった。

惨めだと思うくらい、逃げに逃げて、そして走りに走った。
通りにそってだが、どれだけ走ったのか全く覚えていない。

偶然、みかけた広場に飛び込むと、月菜達は目立たない木陰にへたり込んだ。
全力で走った後だ。
呼吸が続かない。
「くそっ。暑ちぃ……っ」
汗を拭った後、大地は胃袋に押し込まん勢いで水を飲んだ。
頭から水を浴びたくて水道を探した大地は、そこの建物の壁一面に貼られた、クレヨンで書かれた絵から、ここが保育園だと知った。
……そうか。
大地は思った。
小さい子達が、ここで毎日遊んでいたんだ。
だけど――あの黒焦げになった子は……。
「……くそっ！」
大地は、地面に転がっていた石を蹴飛ばした。
「なんか……可哀想だね」
裕樹がポツリと言った。
「あんなの……ないよ」
「俺達だって、死ななかっただけで十分、気の毒な方だと思うぜ？いや、そう思いたい」
「……でも」
「やめなよっ！」
月菜は裕樹の言葉を遮るように怒鳴った。
「何をどうしたって、あの子供は助からない、私達は元に戻れない、それだけじゃないっ！」
「……月菜」
「少し休んだら、行こう？公園で合流でしょう？」
「……ああ」
大地はペットボトルをポケットにねじ込んだ。
「それにしても、あの姉ちゃん、俺達に何させたかったんだ？」
「わかんない」

「まさか、私達に被災地を見てこいなんて……ねぇ」
「うん」
裕樹もリュックからペットボトルを取りだして頷いた。
「こんな写真とって、どうしろっていうんだろう」
「それより不思議なのは」
月菜がリュックから取りだしたのは、拳銃だ。
布製のホルスターに収められたそれを取り出すと、月菜は保育園の広場に転がっていた空き缶に狙いを定めた。
ポンッ
そんな音がして、空き缶が跳ね、すぐ横にプラスチック製の小さな玉が転がった。
「はぁっ」
月菜はホルスターに戻すと、リュックに押し込んだ。
「こんなオモチャを、誰でも良いから軍人や警察官の前で見せて、逃げまくれなんて」
「……おかしな話だよなぁ」
「ホント。ところで、ここ、どこ?」
「まって」
裕樹は地図を広げた。
どこでも売っていそうな1万分の1程度の舞鶴市の市街地図。
「今、ここだから、ここを左に曲がってまっすぐ行けば川に出る。川沿いを右に曲がれば、公園が見えるはずだよ」
「……どうする?」
「……ああ」
月菜と大地が顔を見合わせた。
「?」

裕樹は二人の考えがわからない。
二人は、意味ありげに視線を建物の影にむけた。
「月菜」
「何？」
「トイレ行ってこいよ」
「……そうする」
月菜はリュックを背負うと、不意に大地に抱きついた。
びっくりする裕樹の前で、大地の首を抱きしめた月菜は、そのまま無言になる。
「あ……あの？」
裕樹に声をかけられた月菜は、大地からそっと離れ、“トイレはどこかしら？”と言いながら歩き出した。
「……さて」
パッパッとズボンの尻を叩きながら立ち上がった大地は、戸惑う裕樹の肩を叩いた。
「俺達もいくぞ？」
「へっ？」
「走れっ！」
大地はポケットから何かを取り出すと、裕樹の首根っこを掴んで走り出した。

「くそっ！？」
建物の影から飛び出したのは、美奈代達だった。
「気付かれていたか！？」
走って逃げようとする子供達の後ろ姿を見た美奈代が涼達に怒鳴った。

「二手に分かれる。涼と芳（かおる）はさっきの女の子を追え！明貴は私と」
そこまで言った時だ。
ヒクッ。
美奈代の鼻が、何かを嗅いだ。
火薬の匂いだ。
「……」
美奈代は足下を見た。
シーッ
そんな音をしながら、何かが焼けていた。
それを見た美奈代は、
「離れろっ！」
とっさに涼達を突き飛ばした。

ババババババッッッ！！

広場に破裂音が響き渡ったのは、その直後だった。

その音は、大地達にも聞こえた。
「よっしゃ」
大地は小さくガッツポーズをとった。
「ただの爆竹だけど、こういう時はモノいうんだ！」
「爆竹？」
驚いた裕樹に、大地は自信満々に答えた。
「ああ。少し細工したのをな！」

「あのガキどもぉっ！」
間近で爆竹の破裂に曝された美奈代は、キーンと悲鳴を上げる耳で、顔を真っ赤にして怒鳴った。
火薬の匂いが立ちこめる美奈代の周りでは、涼達が皆、耳を押さえている。
「とっ捕まえてお尻ペンペンやるぅっ！」
そうさけんだ美奈代は、腰の辺りに震動を感じ、ポケットに入れていた携帯電話を取りだした。
メールが届いていた。
「……緊急帰艦命令？」

●中華帝国北京　紫禁城
「これは、どういうことだ？」
「正直」
額に青筋を立てる皇帝――――載賢を前にユギオは涼しい顔で答えた。
「私達、魔族側としても、この状況は理解出来ていません」
「なぁにぃ？」
普通の人間だったら失禁していても可笑しくない、野獣ですら脅えさせる殺気を放つ皇帝を前に、ユギオは煩わしいといわんばかりの態度だ。
「俺の帝国を、妖魔が我が物顔で闊歩しているのだぞ！」
「妖魔は妖魔ですが、我々が仕掛けたものではありませんから」
ゴビ砂漠から万里の長城付近まで、あのアイバシュラ達が群になって襲いかかってくる。

人類史上、恐らく、万里の長城が防壁として役立っている数少ないケースが、今、この状況で発生している。
「なら、誰の仕業だ！」
「まぁ、ちょっと考えてみて下さい」
ユギオは言った。
「あの妖魔、アイバシュラという種族ですが、あれは成長するのに数年を要します。つまり、ゴビ砂漠やモンゴルに最低でも数年前にアイバシュラの巣を仕込んだ者達がいた。
そして、その巣の一部は今、日本にも存在する」
「それがどうした。お前達の仲間が、モンゴルやロシア、そして日本にしかけただけではないか！」
「ですから、私達ではない。そして、巣の設置については人間でも出来る」
「……何ぃ？」
「つまり、我々の仕業にみせかけ、この国やロシアを妖魔で滅ぼそうと画策することは、何も魔族でなくても出来る。そう言いたいのです」
「……誰の仕業だ」
「さて？ここで問題です」
ユギオはまるで歌うように言った。
「アイバシュラをモンゴル方面にしかけるだけでなく、身内でも育てようとした者がいたとしたら？何が言いたいかといえば、アイバシュラを持つ国こそが、巣を仕掛けた国であると――そういいたいのです」
「……」
「何しろ？アイバシュラを育てる技術がなければ、当然、巣は作れませんよね？巣があってこそ、アイバシュラは育つ。なら、巣から作れる技術がある国が、砂漠に、そして、自分の国に巣を準備したと見て問題がありますか？」
「……日本の仕業だと、そう言いたいのか？」

「さて？」
ユギオはわざとらしく、肩をすくめた。
「この国で、善悪を決めるのは、私の仕事ではありません」
「……いいだろう」
皇帝はニヤリと笑った。
「どうせ、お前達と協調戦線をとると表明しているのだ。アイバシュラとかいう妖魔に、これ以上、俺の領土でデカい顔をされるのは不愉快だ」
「それはそうでしょうねぇ」
ユギオは口元に笑みを浮かべた。
「ロシア極東軍は、アイバシュラ相手に大敗を喫して退却中。このタイミングこそ、ロシアとの国境線引き直しの千載一遇のチャンスですものね」
「貴様等が関与していないと知っていたら、ロシアに宣戦布告などせんかったわ」
「なら、今からでも」
「既に軍は送っている。ロシア方面でいくら暴れてくれてもかまわん。だが、その反対はいかん。その程度のこと――子供でもわかることだ。いいな？」
「そちらからの兵力派遣を増やして下さったら、考えましょう」
「俺の命令に条件をつける気か？」
「軍の情報機関を動かすはタダではありません」
ユギオは肩をすくめて見せた。
「こと、あの妖魔達は私達と無関係となれば尚更」
「……よかろう。日本も俺の領土となるべき土地だ。そう考えれば安いものだ。何が欲しい？」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム
「情報部からよ」
紅葉は言った。
「妖魔の詳細の一部が判明したから伝えておく」
「よくわかりましたね」
「だから言ったでしょ？あそこは“闇魔”だって」
「それで？」
「妖魔の名前はアイバシュラ。
分類は中型。
全長は標準で１８メートルから３６メートル。
飛行可能で、飛行時のスピードは最高時速９００キロ近くで機動性はＶＴＯＬ戦闘機並。
装甲は２０ミリ機関砲の徹甲弾以上が有効。
武装は、まずかぎ爪。メサイアの装甲を貫くことも可能。
尾の先端部にある針と口部からビーム攻撃が可能。
特に尾部の針の一撃は、１５５ミリのＭＬ（マジックレーザー）艦載砲並の破壊力がある」
「こんな茹でガニだかサソリみたいなのがねぇ……」
都築がぼやく。
「ビームまでぶっぱなすのか？どういう生命体だよ」
「“白龍”の装甲でも、かすっただけでえぐられたようになる」
美奈代は言った。
「カニだかサソリなんて甘くみると、痛いめにあうぞ」
「甘く見た経験が？」
その都築の皮肉に、
「……わるかったな」
美奈代は口元を尖らせた。
「でも、２０ミリがいけるなら」
麗央がほっとした声で言った。
「戦闘機や戦車部隊でもかなり！」

「麗央の言うとおり、だから安心してって言いたいけど」
紅葉は鼻で深く息を吐いた。
「機動性が高く、陸軍も、かなりの損害を強いられたのが現実」
「どこですか」
美奈代は思わず立ち上がった。
「それってつまり、こいつらがどこかに攻め込んだってことですか!?どこに!」

「山形」
紅葉は答えた。

「本日未明、山形県境防衛線が、アイバシュラ達による飽和攻撃を受け崩壊。そのまま飽秋田県境まで魔族軍の侵攻を許した。近衛部隊を含む全軍が秋田、福島方面へ向けて退却中に対して、敵メース部隊、及び飛行系妖魔部隊が宮城県方面へ侵攻中。歯止めがきかない」
「そんな……!」
「日本海側はともかく、太平洋側は大した防衛線はない。山形と新潟の防衛線を突破されたらもうダメ。そういうことよ」
「我々に、東北に行けという命令は出ないのですか!」
「現状、近衛には兵力を動かす余裕はどこにもない。陸軍も海軍も、動かせるものなら鍋ぶたでも投入してるけど、どうしようもない。弱いところ、弱いところって、まるで人類の布陣がわかりきったように攻めている」
「……米軍や他の国の支援は得られないのですか?」
山崎もさすがに顔色が悪い。
その袖を、美晴がそっと握っている。
「アラスカ経由のアメリカ軍が仙台湾に上陸。これに北海道で訓練中だったドイツ軍というか、マラネリ軍部隊が増援に加わってくれているけど」

「……」
「焼け石に水。宮城県放棄は時間の問題よ」
「なんでそんなあっさりと！」
「怒らないでよ涼。千の単位で中型妖魔に押し込まれたら、要塞だってもたないわよ」
「あの……巣から出たアイバシュラ達ですか」
「寧々の言うとおり。海軍の潜水艦が、洋上から石川県上空を群になって移動するアイバシュラと思しき妖魔の群を確認している。宮城県が陥落すれば、帝国は秋田、岩手、青森の三県を防衛する手段をほぼ明白に失うことになる。普通の戦争だったら降伏ものね」
「……」
「さらに悪い状況」
「まだですか」
「大陸では、同じアイバシュラ達がゴビ砂漠やモンゴル高原あたりで大繁殖。シベリア方面のロシア軍部隊は壊滅状態。ハバロフスク辺りに残存部隊が撤退を開始して、その間に中華帝国軍が侵攻している」
「あいつらっ！」
「でね？中華帝国軍が面白いこと主張しだしている」
「面白いこと？」
「あのアイバシュラは、魔族軍の生み出した妖魔ではなく、大日本帝国(チ)が開発、繁殖させた妖魔だって」
「……あいつら、正気ですか？」
「日本にある“巣”は、日本が培養し、アイバシュラを兵器化するためのもので、日本は、モンゴルの開発をタテマエに侵攻用の巣をいつの間にか準備していた……って」
「……外務省は」
「ノーコメント。無言程強い肯定はないって、いい加減、役人共は覚えて欲しいわね」
「くそっ！」

「私に怒らないでよ。都築。これでもう完璧にロシアからの支援は期待できない。向こうはアイバシュラへの対応で手一杯のはずよ」
「その間を縫って、中華帝国は」
「……タテマエはロシア軍の支援。だけど、実質的には領土のぶんどりに動いている。それから、この主張は、日本への派兵についての大義名分となっている。信じている奴らは中華帝国の一部だけにすぎないけどね」
「……それで」
ほむらは、そんなこと興味が無い。といわんばかりのポーカーフェイスで訊ねた。
「肝心の私達はどうしろと？」
「教導隊と私達、それから東達と、これだけが、福井と京都・岐阜にいるすべてのメサイア部隊」
「……」
「これで、魔族軍の眼を宮城方面からできる限り、北陸へと向けるようにしろってさ」
「……私達」
芳（かおる）はぼやいた。
「いつから神様になったんです？」
「神様にしたいんでしょ」と、涼も横で天井を仰ぎ見た。
「靖国神社って居心地良いのかなぁ」
「……私は九段下かな。どうせ彷徨うなら、池袋か秋葉原がいいんだけど」
「縁起でもないこといわないの！」
紅葉はパンッと手で書類を叩いた。
「とにかく、あのアイバシュラの巣に飛び込めっていう自殺命令じみた命令が出なかっただけでも感謝なさい！それとも、真っ正面からこの頭数で、ガチで対メースの集団戦に混ざりたい？」
「うっ」
「後方の攪乱、補給施設の破壊、輸送ルートの寸断と、仕事だけは

山ほどあるからね？」
「ほ……ホントですか。それ」
「うん……ところで」
「はい？」
「……とりあえずでいいけど、山崎」
「は？」
「泉大尉を押さえつけて」
「は？」
「逃げるな。あんたのダンナから連絡入ってる」

「……何をやったんだ」
手を後ろに回され、三重に手錠をかけられ、足首の所をロープで巻かれた美奈代の格好にあきれ顔になったのは、テレビ回線の向こうにいる中野だ。
「なんか」
美奈代は言った。
「大尉の名前が出ると、私が逃げるって思われているようで」
「勘違いか？」
「事実です」
「そうきっぱり言うな……腹が立つ」
「それで？」
「スパイを見ただと？」
「……どういう耳してるんですか？」
「俺の後ろには、地獄耳がいるんだよ。後藤さんとか」
「そのうち、私が何回トイレ言ったかまで耳に入ってるんじゃありません？」

「それが近衛の利益になるならな」
「……東北のことは聞きましたよ」
「ああ。軍用回線もかなり混乱している。東京から“鈴谷（そっち）”に回線を繋いでもらうにしても、情報局の権限が必要だ。それで？」
「少年二人。少女一人。拳銃と魔族軍の通信装置を所有。追跡しましたが、途中で妨害工作に逢った上、緊急通信で帰艦を余儀なくされました」
「警察へは」
「混乱する中でスパイなんて言ったら、どうなると思います？」
「それを判断するのはお前ではない」
「私が見間違いだった場合は？警察に何て説明します？」
「確証が欲しかったということか？」
「そういうことにしてください」
「……分かった」
中野は頷いた。
「お前の判断ミスと報告しておこう。それ以外の何物でもない」
「……ご随意に」
「……」
「……なんです？」
「本当のことを言え」
「本当のこと？」
「お前、何か心当たりがあったんだろう？だからむしろ、そいつらを通報するなんてマネが出来なかった」
「……」
「せめて俺の前では本当のことを言え」
「そして」
美奈代はきっぱりと言った。
「上層部に筒抜けになると」
「……」
「あなたはそれを言うには、あまりにも立場が高すぎる」

「信頼が無いと」
「……です」
「一度、試してみろ」
「試す？」
「ああ」
「この通信だって傍受されている恐れがあります」
「とことん、頼られていないな」
「……」
美奈代は口元だけ笑って、そしてすぐ真顔になった。
「――匂いがしたんです」
「匂い？」
「ええ。あの娘から」
「何の？」
「あいつは、自分で香水を調合していた。だから、匂いが少し、独特なんです」
「はっきりしろ……いや」
中野は、ハッとなった。
「……まさか」
「認めたくないことですが、あの匂いはそう簡単に、そして偶然で子供から匂うものできない」
「誰を指しているのか、推測はつくが」
中野も、狼狽気味の顔になり、ハンカチで汗を拭った。
「それが事実だと、それはそれで大変なことだぞ」
「わかっています。ですけど、これでヤツがどこにいるか、大凡の推測はつきました」
「何？」
「あいつは、この北日本のどこかにいる。そういうことです」

「終わったの？」
「ああ」
月菜の声に頷いたのは、７０代の老婆。曲がった腰には背負いカゴ、もんぺをはいた脚にはゴム長靴、頭には手拭いを巻いている。
農家のありふれた老人といえば、誰しもが納得するだろうその横を歩くのは、月菜と大地、そして裕樹だ。
すれ違う者は皆、関心が無いか、あるいは老婆とその孫程度にしか思わない。
しかし、その会話は別だ。
「私の仕事は終わりだ」
「何してたんだよ」
老婆に歩調を合わせ、ブラブラと歩く大地が、口笛を吹きながら訊ねた。
「なぁに」
老婆はしわくちゃの顔を歪め、笑顔を作った。
「ダユー様のお仲間を増やしただけさ」
「お仲間？」
「子供は知らなくて良いことさ」
「なんだよそれ。あんただって、大した違いはねぇだろう？」
「ガキがナマ言うんじゃないよ」
「けっ！」
「それで」
裕樹が老婆を労る素振りを見せながら、
「僕達は何だったんですか？」
「私の仕事は、普通の人間にはわからないことだ。むしろ、お前達が誰かに追われて、ここにスパイが紛れているとなった方が、人間にはわかりやすい」
「ちょっと待って」
月菜が言葉を止めた。

「それじゃ……えっと、おばあさん、でいいんだよね？その仕事が」
「いいんだよ。私の仕事なんて気付かなくて」
「わけわかんない」
「私の仕事じゃなくて、あんた達の存在に気付いてくれれば、人間の目はそっちに向く。そのほうが都合がいいのさ」
「小さいけど、でも、効果がある仕事を、おばあさんはしたってことだね？」
裕樹が訊ねた。
「そうさ。裕樹」
老婆はにこっと笑った。
「あんたは賢いねぇ」
「おばあさん。演技スゴすぎ」
「ホントはいくつなんだよ」
「よけいなお世話だよ。この悪ガキ共め――――そんなに知りたければ教えてやるよ。月菜？携帯の短縮、六番を押しな」
「六番？」
月菜は携帯電話を開くと、短縮モードの六番を押した。
プルルッ
プルルッ
呼び出し音が続く。
「おばあさん？」
月菜が携帯から耳を離し、老婆に問いかけたその途端――――

ズズゥゥゥム
ズズゥゥゥン

遠くで、粘っこい、遠雷のような爆発音が連続して響き、通行人がぎょっとして足を止め、そして辺りを見回す。

「な、何っ！？」

思わず大地に縋り付いた月菜に、老婆は笑って言った。
「な?これで、私なんて存在はみんな忘れる。海軍基地の横でへたばっていた老婆なんて、誰が思い出すものかい」
「……じゃ」
「別働隊が、艦船に爆発物を仕掛けておいた。それを起爆させただけだ」
「港、すごいことに」
「ああ。私ご自慢の一発だ。万トン単位のフネでも沈むだろうな」
その言葉を証明するように、港の方で黒い煙が立ち上った。
「あんた……スゴいよ」
「なぁに」
老婆は大地に言った。
「あれは、スパイの、つまりはあんた達の仕業ってことになる」
「俺達の?」
「ああ。人間に捕まったら自慢していいぞ?」
「勘弁してくれよ!」
「まぁ、いいさ」
老婆は笑って言った。
「さぁ、そこのトイレに連れて行ってくれ」
老婆は公園の中にある人気のないトイレに、月菜と一緒に入っていった。

裕樹と大地は、トイレの近くにあるベンチに並んで座って二人を待つ。
「ったく……何がどうなってるんだよ」
「この騒ぎで」
パトカーや消防車のサイレンか凄まじいほどに鳴り響くのを耳にしながら、裕樹は答えた。

「離れた海軍基地付近より、港に近い市街地で見かけた不審者、つまり、僕達の方に爆破の嫌疑がかかる」
「それが？」
「基地の側で一人の不審者を見つけたとしても、それは今の段階では不審者でも、結局は焼け出された被災者と区別がつかないでしょ？それに比べて、僕達は拳銃まで持っていた。老婆一人と拳銃を持つ子供達と、どっちが怪しいと思う？」
「そう言ってくれるとわかりやすい」
大地は、トイレを見た。
「ったく、月菜のヤツ、香水もらったからって有頂天になりやがって」
「あの香水は、ちょっと独特だよね」
「へんっ。あんなのぁ、臭いだけだ」
そう嘯いた大地は、不意に、
「……なぁ、裕樹」
「何？」
「ここは――京都だぞ」
「それが？」
裕樹には、大地の言いたいことがわからない。
「鈍いな」
「ごめん」
「つまり――ここはお前の故郷だろう？」
「う、うん」
「逃げていいんだぜ？金、電車賃くらいはあるだろう？なきゃ」
大地は財布を取り出し、裕樹の太ももの上に放り出した。
「使えよ」
「……」
裕樹は、無言で首を横に振り、財布を大地に返した。
「いらないよ。僕は逃げない」
「ふざけんな」

大地は裕樹の肩を掴んで激しく振った。
「家族がいるんだろう？兄弟から親類から友達から、全部をなくした俺達とは違う！お前には――――っ！」
「僕には」
大地の手を掴んだ裕樹が、はっきりとした口調で言った。
「大地と月菜がいる」
「……お前」
「約束したでしょ？いつまでも一緒だって。ここで僕だけ逃げてどうするの？僕は、最後まで大地達と一緒だよ？」
「……」
「大地こそ、どうして三人で行動を命じられても逃げようとしなかったの？」
「……わかんねぇ」
大地は頭を抱えた。
「どうやって命令をこなすかしか頭になかったっていうか、今、ここから逃げるって選択肢が俺にもねぇ……」
「多分、月菜もないよ……僕達は、この世界を知りすぎた。そんな気がする」
「わけわかんねぇよ」
「ははっ……あっ」
トイレから出てきたのは、月菜とサングラスをかけた妙齢の女性。ジーパンにシャツというラフな姿だが、そこからにじみ出るモデル顔負けの見事なボディラインは、まだ女としては幼さの色濃く残る月菜を、それはそれは惨めな存在に貶めてなお有り余っている。
「待たせたな」
「待ってねぇよ」
大地はそっぽをむいたまま言った。
「西舞鶴の根城へ戻るんだろう？ババア」
「任務達成のお祝いに、そのピーマン潰してやろうか？小僧」
「まぁまぁ」

二人の間に割って入った裕樹が言った。
「――どうしたの？いらいらしている」
「そう見えるか？」
「更年期障害か？」
ブンッ
女性の一撃を、大地はかろうじてかわした。
「アブねぇな！」
「うるさい。このクソガキめ。後で覚えてろ」
「だから……どうしたの？」
「いや」
女性は空を見上げた。
その視線は、サングラス越しでも寂しそうだった。
「匂いがした」
「匂い？」
「ああ……懐かしい匂いだった」
「ふぅん？」

裕樹は、そっと周囲の匂いを嗅いでみた。
女の香水が鼻をくすぐった。
でも、女のいう匂いではないだろう。
この人は――何を嗅いだのか。

「車、どこにあるの？」
月菜の問いかけに、女は答えた。
「他の者が手配してくれている。いくぞ、武蔵屋」
「うん」
裕樹は答えた。
「お疲れ様――宗像さん」

匂い　第一話（後書き）

また暑くなってきました。もうイヤです。こんな時は皆様からの感想なんかが励みになります。どうか感想を恵んで下さい。よろしくお願いしますっ！

匂い　第二話

「ヴィクター・ワンよりＨＱ」
「こちらＨＱ」
「現在位置、１－Ｂ－４。“見込客”を見つけた。４人、グレードは３は保証できそうだ」
「ＨＱ了解――出前を届ける。そのままセールスを続行してくれ」
「ヴィクター・ワン、了解。セールスを続行する。通信終わり」

――さて。

紅龍を駆り、富山県に入り込んだ涼菜は、“鈴谷（すずや）”との通信を切ると、眼下に広がる惨状の痕跡に、ちょっとだけ頭を下げた。

緑の大地の所々が黒く焦げ、所々に巨人達が倒れている。

かつて、富山県から脱出する市民を守るために、追撃する魔族軍を近衛のメサイア部隊が最後に迎撃したのがこの地点とされている。

圧倒的な数を誇る魔族軍の前に、なすすべも無く無残に死んでいった仲間達。

それを思うだけで、胸が痛む。

「ヴィクター・ツーよりヴィクター・ワン」
「おや」

翼を並べる紅龍三番騎、染谷からの通信に、涼菜はちょっとだけ、眉を動かした。

「なんだい？ちょっとは私の調教が功を奏したかい？」
「ここは……一体」
「第２０６小隊、同２０８小隊のなれの果てさ」
「……中尉も確か」

「私は２０４。魚津の阻止戦でやられて、騎体を捨てた挙げ句、綾に助けられた。あのとき、綾がいなければ、あたしゃ今頃、妖魔の糞になってたろうね」
「……」
「綾の容態は？」
「騎体の修復が終わり次第、復帰するそうです。精神的なダメージは」
染谷は一瞬、黙った。
「……洗脳処理が行われたそうです」
「やれやれ……私達ゃ、考える権利まで奪われているのかい」
「……中尉」
「まぁ、いいさ」
涼菜は微笑みながら言った。
「あんたも、ちょっとは殻から出てきたじゃないか」
「……」
「嬉しいねぇ。抱かれてやった価値があるってもんさ」
「……」
「私の前だけでもいいから、もう少し出てきな。そうしたら、もう少しサービスしてやるさ」
「……作戦の概要は聞きましたが」
「何かあるのかい？」
「自分は、こういうことは……」
「他に方法はない」
その口調はきっぱりとしていて、異論は受け付けようとしない。
「“こんなこと”でも、やらないよりマシなのさ」
「……了解」
「白州が陥落した以上、最低でも日本は手持ちの魔晶石しか手にすることが出来ない。ここで“これ”をやるのは、その一番、効率的な穴埋めなんだ。そう考えな」
「……はい」

「良い子だねぇ」
艶のある含み笑いが通信に流れる。
「たっぷりかわいがってやろうじゃないか。今晩は楽しみしておきな？」

「アルファ・リーダーよりブラヴォー・リーダー」
「こちらブラヴォー・リーダー」
「アルファ・チームは現場上空到達。現状、クリーン」
「ブラヴォー・リーダー了解。ブラヴォー・リーダーよりシャーリー・リーダー」
「シャーリー・リーダーです」
「シャーリー・チームはヴラヴォー・チームのバックアップについて。現場後方にて待機を」
「シャーリー・リーダー了解。全シャーリー・チーム所属騎へ――」

やれやれ。

美奈代は通信を聞きながら肩をすくめた。
フォネティックコードを使用するなんて、富士学校以来だ。
作戦運用上のコード名使用の徹底なんてワケのわかんない通達が東京から発せられたおかげで、美奈代はちゃんと部隊がコードを使っているか一々監督して報告する必要まで出来た。
意味の無い仕事を増やして欲しくない。
それが本音だというのに……。

斬込隊がアルファ・チーム

前衛隊がブラヴォー・チーム
狙撃隊がシャーリー・チーム

私達は米軍じゃないぞ！だいたい、今まで部隊間の呼称に齟齬があったわけでもなし、どうしてこんなことするのか、美奈代には理解さえ出来ない。

いざって時は、元々の斬込、前衛、狙撃の呼称を復活させ、報告の時だけ帳尻を合わせることで中隊全員と美夜の許可は得ていることだ。

ヘンにコードなんて使うから、通信が普段通りの自然さを失っている。

こんなので、トラブルにならなければいいけど。

そう、心配する美奈代の耳に、

「シエラ、じゃなくてシャーリー・ツーよりアルファ・リーダー」

芳（かおる）から通信が入った。

「こちらアルファ・リーダー」

「あ、間違えました！えっと、シャーリー・ツーよりブラヴォー・リーダーへ」

間違えたな。

そう思うけど、叱るつもりはない。

もう、慣れてもらうしかない。

今は、部隊内でつーかーの関係でやっているが、いずれは異動で他の部隊に移ることもある。その際、コードを使いこなせないと、困るのは本人だ。

それが、徹底を命じた美夜の意見であり、美奈代もそれを否定出来ない。

指揮官たる者、時には心を鬼にしろ。

自分にそう言い聞かせるしかない。

「アルファ・ツーよりアルファ・リーダー」

祷子から通信が入った。

「何だ？」
「これ、やめませんか？」
「私もそう思う」
「どうして偉い人って、現場の苦労を考えて下さらないのかしら」
「文句は東京にいってくれ」
「せめてチーム内だけは今まで通りの名前のコールを許可して下さい」
「……いいぞ」
「感謝します。私達は？」
「ヴィクター・チーム……ああ、面倒くさいっ！土浦隊が発見したもう2騎の残骸の回収につく。搬送用のＴＡＣを先導する」
「了解」

「宮城県方面の戦況は良好」
アイリーンはガムロに事務的に報告した。
「前線司令部からの定期連絡によれば、明後日までに仙台市の陥落は保証できると」
「上々だ」
ガムロは頷いた。
「……して？」
ガムロの真向かいのソファーに座っているのは、ダユーだ。
「義勇軍の枠組みに人類を加えろだと？」
「ええ」
ダユーは緑茶を飲みながら答えた。
「現在、私の城にも百を超える人間の兵が集っています。金さえ積めば、熟練した者を集めることは、思うがままです」

「金で操れというのか？」
「契約ですよ」
「――その契約が」
ガムロはつまらない。という顔で言った。
「守れないからこそ、我々は人類を滅ぼせ――そう主張しているのだ」
「でしたねぇ」
ダユーはコロコロと笑いながら言った。
「ですけど、利用できる者を利用しないのも、これはこれで、愚かだと思いませんか？」
「どうしろと」
“制約（ギアス）”をかければいいだけのこと。違います？」
「……その言葉が簡単に出るあたりが」
ガムロは答えた。
「お前の出自を語っているな」
「何か？」
「契約を強要することは、我々魔族が嫌うところだ。人間に“制約（ギアス）”の魔法を強いたとすれば、世論の反発は避けられない」
「まぁ！」
ダユーは口元を抑えた。
「私が、“制約（ギアス）”を人類に強いていると？」
「……同意の上でというだろうが、立場を考えろ。実質、強いていると考えるのが普通だ」
「そこを上手くやるのが、契約というもので」
「――好かん」
「もうっ！」
プウッと頬を膨らませたダユーは恨めしそうに言った。
「どうして殿方はそう意地ばっかり」
「意地を張れんで男が勤まるか」
「……そういう所は、嫌いではないのですよ？」

「人類風情に頼らずとも、我々は独力で十分にやっていける。それが答えだ」
「元から頭数が少ない私達なら」
ダユーはそれでも粘った。
「やっても構いませんよね？」
「好きにしろ。それで？今日の用件はそれだけか？」
「まだあります」
ダユーは、テーブルに置かれた茶菓子に手を伸ばした。
「松露？古風なものがお好きなのですね」
「……それで」
「占領地域の人類の金庫にある現金、それから貴金属類を漁る権利をお認め下さい」
「それは却下だ」
「……即答しましたね」
「天原商会に独占権を与えてある。あそことトラブルになることは避けたい」
「たかが魔界の商社風情」
「今を知ることだな。獄族よ」
「何を勝ち誇ったように……」
「天原商会は、魔界最大級の死の商人だ。必要なら戦争まで自分達で用意できる相手。怒らせたら、我々は確実に魔界と天界を敵に回すことになる」
「ガムロ様らしくもないですわ？そんな覇気の無いお言葉は」
「現実を見て言っているのだ。我々は、刃の上で踊る程、酔狂ではない」
「……むぅ」
「何だ？そんなに軍資金に困っているのか？」
「実は……」
ダユーはもじもじと恥じらいながら頷いた。
「その通りです」

「……珍しい」
「城そのものは自立的な存在ですから、食料その他ともかく、いろいろと出費が重なっておりまして……兵達に払う現金にも事欠く有様で」
「ほう？」
ガムロは勝ち誇ったように言った。
「それはお困りだろう？」
「ええ！とっても！」
「残念だが、事情は我々も同じだ。頼ってもらっても困る」
しばしの沈黙のあと、すっかり“拗ねた”という顔のダユーは言った。
「なら、次のプランですわ」
「次のプラン？」
「ええ……大陸へ出ます」
「大陸へ……？」
「ええ。大陸方面に展開しているアイバシュラの群生は、ガムロ様達は無関係だとうかがいました」
「そうだが？」
ガムロは、少し考えてから、興味深そうに頷いた。
「……成る程？」
「わかります？」
「アイバシュラによって人類が駆逐された地帯の鉱山資源が欲しいというのか」
「ウフフッ。さすがにガムロ様には勝てませんわ」
「世辞を言うな。我々が大陸へ進出するのはそう遠くないことだと思っている。それまで大陸の方面で何をしようと関与はしない」
「人類の勧誘も？」
「占領地域の人類に対してなら、文句はいわんが」
ガムロは、緑茶に一口、口をつけ、顔をしかめてテーブルに湯飲みを戻した。

ギロッ！と脇に控えるアイリーンを睨むが、アイリーンは知らん顔と、そっぽを向いた。
「何か？」
不思議そうな顔をするダユーに、
「いや」
ガムロは、少しだけ口元を抑え、ポーカーフェイスを保ちながら言った。
「獅子が、腹の虫に殺される。そんな例えもある……せいぜい、注意することだ」
「覚えておきましょう。天原商会にコンタクトをとれませんか？」

美奈代達が命じられたのは、市街戦で破壊されたメサイアの回収だった。
「“幻龍（げんりゅう）”……違う、“幻龍改（げんりゅうかい）”の方ですね」
民家をなぎ倒して、うつぶせに倒れているその残骸を前に、牧野中尉は言った。
「よかった。“幻龍改（げんりゅうかい）”は装甲パーツが不足しているんです。これで素体も無事だったら」
「騎士とMC（メサイア・コントローラー）の脱出は」
確認出来ていますか？
そう、言いかけた美奈代に、
「考えなくて良いです」
温和だが、強い口調で中尉は言った。
「騎体の回収。それだけを考えなさい」
「……了解」
ここで戦闘が行われてからすでに数ヶ月が経過している。

スクリーンで見る限りでは、脱出が行われたかはわからない。
無事を祈る以外、何も出来はしない。
「明貴、手を貸してくれ。中尉、ＴＡＣを回収ポイントへ」
「了……」
中尉が、そう言いかけて、言葉を止めた。
「中尉？」
通信モニターの向こうで、牧野中尉は、ポカン。とした後、目をごしごしと擦っていた。
「どうしました？」
「マスター」
精霊体の“さくら”がびっくりした。という顔で言った。
「人がいる」
「人？」
「あそこ」
“さくら”が指さした所、そこは、２階建てほどの小さな建物の屋上だった。
「……へっ？」
白いワンピース姿の少女が、こっちを困った。という顔で見つめていた。
「生存者が！？」
「まさか」
牧野中尉が否定した。
「ここは妖魔と魔族軍に蹂躙されたはずです。数ヶ月も外部と連絡とらずに生存していたとは思えません」
「大尉」
祷子が訊ねた。
「どうしました？」
「生存者だ」
「――まさか」
「そう思う……私が接触する。中尉、“鈴谷（すずや）”へ通報を。それから、

風間は明貴と一緒に積み込みをやってくれ」
「しかし」
「いざって時は」
コルトガバメントのスライドを確認し、ホルスターにねじ込んだ美奈代は言った。
「一騎位は回収しないと、美晴達に顔向け出来ない」
「お化けじゃないことを祈っています」
「了解」
M14をシートの下から引き抜いた美奈代は、コクピットのハッチを開けた。

「おい」
“白龍”から降りた美奈代は、装甲と建物を上手く使って、白いワンピースの少女の元へ近づいた。
近づくにつれて、その容姿がはっきりしてくる。

――――これは。

ある意味、美奈代の何が刺激された。
緑の艶のある黒髪は腰を超えるほど長く、肌は淡雪を連想させるほど白い。
目尻が下がり気味の柔らかな作りと相まって、どこか儚げな雰囲気を漂わせている顔立ち。
俗に言う美少女。
自分なんて、遠く及ばない。
そう、はっきり思わせる美少女が、目の前に立っていた。
「……なんだかなぁ」

美奈代は、Ｍ１４小銃を肩に背負うと、小さくため息をついた。
袴子といい、フィアといい、その他大勢といい、富士学校に入ってからというもの、どうして自分は、女として自信を失うような相手とばかり出会うんだろう。

「どうしました？」
軽やかだが、どこか舌足らずで幼い印象を受ける声が、美奈代の耳をくすぐる。
まるで、甘いストロベリームースでも耳に流されたような、そんな感覚さえ感じるほど、脳までとろけそうな声に、美奈代は力が抜けるのを感じた。
「いえ」
とりあえず、日本語が通じたことに安心した美奈代は、
「あの……一人ですか？」
ヘッドセットを確認した後、そう問いかけた。
少なくとも、牧野中尉が監視してくれている。
メサイアの集音マイクで少女の声は拾えているだろう。
そして、たとえそれが無理でも、最低でも自分の声を伝えられれば、後々のためになる。
「いえ」
少女は答えた。
「連れが何人かいますけど」
「数人ですか？」
美奈代は、建物の屋根を蹴って、少女の横に飛び移った。
北新銀行
壁にそう書かれたのを、その時見た。
「ええ」
少女は、おずおずとした声で、美奈代に言った。
「あの……申し上げづらいんですけど」
「何か？いえ、その前に教えて下さい」

「何ですか？」
「地元の方ですか？それとも他の地域からの避難民の方ですか？」
「どっちも違います」
「違う？」
「ええ。お仕事でここに来ただけです」
「……はぁ」
もしかしたら、戦争の影響でおかしくなったのかな。
狂った人の相手なんて、自信はない。
メディカルキットの中に、モルヒネがあったけど、アレでも投与してみようかな。
「とりあえず、御名前とご住所を」
「名前だけでいいですか？」
「……どうぞ」
「芹沢瀬菜（せりざわ・せな）です。本籍は東京都千代田区」
「せりざわ……せな、さんですか？東京の方」
「ええ。それであの……いつ頃まで、かかりますか？」
「えっ？」
「あの作業」
少女が指さしたのは、“幻龍改（げんりゅうかい）”を騎体回収用のＴＡＣに乗せる作業中の“白龍”達だ。
「何か？」
美奈代は首をかしげた。
「あの、問題でも？」
「……実は、連絡がありまして」
「連絡？」
「あそこで作業されると、近づけないと」
「あの？」
「……あ、ご説明しますね？どうぞこちらへ」
少女は、手で案内すると、屋内へ入る、開かれたままのドアをくぐった。

後頭部がやたら痛い。
電気のように走った痛みに、美奈代は顔をしかめ、目を開けた。
「……えっ？」
ドアを潜ったところまでは覚えている。
だけど――――？
身動きがとれない。
複雑にロープで縛られて床に転がされている自分に気付いた時には遅すぎた。
「こ、これは――――っ！？」

「ごめんなさい」
その声の主を求めて、周囲を見回すと、先程の少女と、他に数名、屈強な男達が自分を見ていた。
先程の少女が、手を合わせて言った。
「傷つけるつもりはなかったんです。ただ、あのメサイアをどかして欲しくて」

「あなた、一体？」

「殺しますか？」
ここは銀行だ。
そこの行員と言われたら納得出来る銀縁眼鏡の背広姿の、痩せた中年男が、手にした銃の銃口を美奈代に向けた。
「我々の活動を知られるのはマズイ」

「いいじゃないですか」

少女は答えた。
「知ったところで、何が出来るわけでもなし」
「しかし。お嬢様」
「私達は、いただくモノをいただくだけ。殺しはしないのが最初の誓いでしょう？」
「……まぁ」
男は、困惑した顔で銃を胸元に戻した。
「お嬢様のご希望でしたら」
「お嬢」
姿が見えないが、別な所で男のガラガラ声がした。
「通信ですぜ。こっちまでお願いしまさぁ！」
「ありがとう。なら、後はお願いしますね？えっと、大尉さん？ごきげんよう」
少女は、そう言い残して、姿を消した。
「あ……あの」
美奈代は背広姿の中年男に訊ねた。
「あなたたちは？」
「知らなくて良いことはあるぞ。大尉」
男は答えた。
「今の所、我々は敵でもなければ味方でもない」
「な、何を言ってるんです？」
足掻けば足掻くほど、縄が身体、しかもヘンな所に食い込んでく

る。
「と、とりあえず、これを外して下さい！な、何か、変な所に！」
「もう少し、きつくした方がいいか？」
「外して下さいっ！何で縛るんですかっ！？」
「私の趣味だ。どうだ？この芸術的な亀甲縛の美しさ」
「き……っ？」
「お嬢様はやめるようおっしゃったが、何があるかわかりません。それに、久しぶりの楽しみですからと申し上げたら、承諾くださった」
「……あ、あの」
「何。お嬢様が戻られるまでにコトを済ませたら、“楽”にしてやる。もっとも」
男の手が、美奈代の膝にかかった。
「コトを楽しめば、もっと早く“楽”になれるがな」
「何するつもりですかっ！」
「鞭と蝋燭は快楽の“鍵”だ。決まっているだろう？――女は必ず大好きな、ナニだ」
男はきっぱりと言い切った。
「そのために、股から下は縛らなかったのだ」
「わ、私、民間人の保護に来たんです！こういうことじゃなくて！」

「安心しろ。ここに民間人は数ヶ月前からいない」
「じ、じゃあっ！あなたたちは！？」
「答える義務はない。ただ、我々は一応、人間で、国籍は日本だ」
「なら、どうしてこういうことを！」
「だから言ったろう？趣味だと」
「わけわかんないっていうか！」
美奈代はとっさに足払いをかけ、男の姿勢を崩すと、縛られたままの上半身でバランスを取りながら立ち上がった。
「な、何、考えてるんですか！」
立ち上がってみた銀行の中。
カウンターの向こう側で、大きく開かれ、中から何かが運び出され続けているのは――。
「あ、あなた達っ！」
「……わかったか？」
運び出される多額の現金が入ったカートを見送りながら、中年男は答えた。
「どうせ、このままなら永遠に使われないだろうモノを、我々が有効に使ってやる。そのために必要な行動だ」
「泥棒のどこが！」

ズズンッ！

突然の激しい揺れが、美奈代の足下をすくった。
天井からパラパラと埃が降り注ぐ。
何とか、受け身だけはとることが出来たが、戦闘服のパッドがカバー出来なかった痛みが、骨を通じて全身に走り、すぐには言葉でさえ出てこない。

地震か？

ドンッ！
ギィィンッ！

違うっ！
この鋭い音は、メサイアの戦闘音だ！

「くそっ」
もがこうとするが、縄が――――！

「お、おいっ！」
美奈代は、辺りを見回すと、いつの間にか、あの男達は全員消えていた。
「せめて縄をといてから逃げんかぁぁっっ！」

「まったくもうっ！」
結局、助け出されたのは“白龍”から降りた牧野中尉によってだ

った。
　亀甲縛りに縛られたまま、床に転がってもがいていた美奈代を散々被写体にして、ビデオカメラとデジカメを駆使した後、ロープを“手慣れた様子で”解いた。
「こんな所で、あの女の子相手になんていうプレイをしていたんです！」
「ワケないでしょう！？」
「いい女なら、片っ端から手を出す悪癖は、誰のが遺伝ったんでしょうね！」
「何の話ですか――じゃなくて！」
　美奈代は屋上に出た。
　既にメース数体と“白龍”達が交戦状態に陥っていた。
「行きますよ！？」
「はいっ！」

前哨戦

●“鈴谷（すずや）”　艦長室

「泥棒に逢った。そういうのか」

美奈代達があの銀行での騒ぎから帰還してから、すでに半日が経過。

美奈代は既に風呂に入って眠ろうとしていた所を、美夜に呼び出された。

祷子とほむらは、芹沢瀬菜を名乗る謎の女の一味と思しき連中が駆る所属不明のメースと交戦。五分五分の所まで持ち込んだが、そこで敵の一方的に撤退された。

美奈代にいたっては、騎体のハッチが閉まったら戦闘が終わっていたという有様だった。

かなりの腕利き。

祷子とほむらという、部隊きっての実力者が揃って認めたメース達は、少なくとも美奈代達、近衛が把握している全てのメースと外見的に合致するところはなかった。

「はい」

帰還した美奈代は、報告書を読む美夜の前で頷いた。

「メース2騎にＴＡＣ1機を使って魔族軍の支配地域で泥棒している奴らがいる……しかも、その中に日本人が少なくとも3人いる……か」

「……」

「特に、一人が芹沢瀬菜と名乗っていた。これは間違いないな？」

「はい」

「……」

美夜は、少し考えた後、
「実は、その名前については、2週間前に全軍に対して、特高から照会が来ている」
「特高って……あの？」
「近衛の治安維持部門とでも言おうか？以前、後藤さんがいた……下手したら、今もいるかもしれない所だ」
「そんな所が、なんで」
「さぁな」
美夜は報告書の挟まれたファイルをデスクに置いた。
「特高は、末端の質問に一々詳しく説明してくれる程、心優しい部門ではない。ただ、こいつらが動いたとなれば、この芹沢瀬菜という女、ロクでもない女だということだ」
「……」
美奈代には、あの美少女と、美夜のいうロクでもない女という言葉が、どうしても一致しない。
ただ、後頭部をぶん殴ってくれた仲間まで、それでフォローする事が出来るかと聞かれれば、黙るしかない。
複雑な思いを持つ美奈代に、美夜が言った。
「特高の横やりが入ったおかげで、福井、石川方面における後方攪乱等、全ての任務が、我々の手から離れる」
「えっ？」
「芹沢瀬菜発見の通報を送った所、そんなことになった。
どうやら、近衛は何としても、その芹沢瀬菜とやらを捕縛、もしくは処刑したいらしいな。我々と東北方面に配置した部隊を入れ替えるそうだ」
「何か、運用が安易過ぎるというか」
美奈代は、言葉が適切か迷ったが、思い切って言った。
「代わりはいくらでもいる……そう、言われたような」

「まぁ――――似たようなものだ」
美夜はあっさりと答えた。
「兵隊稼業にオンリーワンは存在しない。我々は交換の効く歯車でしかない。仮にお前が戦死しても、辞令一枚で代わりが来る。私が死んでも同じだ」
「……はい」
「明日、飛行艦“大淀（おおよど）”に乗艦した――――」
ピーッ
美夜の言葉を遮るように、デスクに置かれたインターフォンが鳴った。
「――――私だ」

ギィィィンッ
ズンッ

メサイアの飛行音と、着艦する震動が走った。
今、この時間に発艦した騎はない。
誰だ？
そう訝る美奈代に、美夜が告げた。
その手が、デスクに置かれた制帽を掴むと、椅子から立ち上がって両手でしっかりと過被る。
「どうやらあの連中も相当にしびれをきらせているらしいな」
「はっ？」
「第９中隊――――特高の手先がご来艦だ」

「第９中隊の大月中尉です」
艦内の一室、正しくは憲兵隊控え室で美奈代を待っていたのは、まだ若い士官だった。
神経質そうな目や尖った顎。白い肌。長いザンバラな髪。

体格も決して恵まれた方ではなく、背丈は多分、美奈代の方が高いだろう。
総じて、あまり軍隊という組織には似合わない、大学の図書館で、文庫本でも読んでいる方が似合いそうな男だった。
正直、それだけで美奈代は相手に対してあまり良い印象は抱かなかった。
何故か？
あの天敵、中野を連想するからだ。

――――どうやら私は

この相手を好きになれない。
美奈代は、そう思った美奈代は、心底痛感した。

――――男相手に、マトモな恋愛は出来ないな。

「何か」
失望感が顔に出たのか、大月中尉が、そう訊ねた。
「いえ」
戦闘服を着ているから、さっき着艦した騎を駆るのは彼だろう。
しかし、泣く子も黙る憲兵隊取調室でデカイ顔をしている以上、ここで下手な対応をしたら、腕の一本へし折られて済めば感謝すべき事態になる。
憲兵には絶対に関わるな。
それは、亡き父と、そして二宮に散々、耳にタコが出来る程聞かされたことだった。
その憲兵の親玉の一人を前に、美奈代に出来ることは何もない。

「――――座って下さい。大尉」

手で促され、美奈代はパイプ椅子に座った。
座らせてくれるなら、そこでゴミに埋もれているソファーにでもしてくれればいいのに。
美奈代は思う。
これじゃ、私が容疑者だ。

「報告書のコピーを読みました」

美奈代が座った途端、大月中尉は何故か、椅子を少し後ろに下げた。
何だ？
私がそんなに嫌いか？
怪訝そうな顔になる美奈代に――いや、その時、美奈代は初めて気付いた。
大月中尉は何故か、自分を見ていない。
視線を合わせているフリをして、別な所を見ている。
――なんて失礼なヤツだ。
そう思う美奈代に、大月中尉は事務的な口調を崩さず、続けた。

「銀行で接触した女性は、芹沢瀬菜とそう名乗ったのですか？」
「ええ」
美奈代は頷いた。
「騎体が捉えた画像があるはずですが？」
「確認しました」
「……」
「本人は、何か言っていましたか？」
「何か……とは」
「近衛について、政府について、何でも結構です」
「いえ？頂くものを頂くだけ……とかいうのは覚えていますけどね」
「……頂くものを？」

「殺しはしないと」
「……ふむ」
顎に手をやって、しばらく考えていた大月中尉は
「わかりました」
そう言って立ち上がった。
「ご苦労様でした。この方面での任務は、我々と後任の部隊が引き受けることになるでしょう。今日は、これでお休み下さい」
有無を言わせないほど、きっぱりと、美奈代は退席を促され、無言で敬礼した後、憲兵隊控え室から出た。

あの事は知らない。
翌日の朝には飛行艦“大淀”と“鈴谷（すずや）”がランデブー。
士官同士の情報の引き継ぎが行われ、そして“鈴谷（すずや）”は美奈代達を乗せて東北へと向かった。

美奈代達が東北――――少なくとも太平洋福島県沖に到達した時の状況は、決して推移楽観出来るものではなかった。

山形県を制圧した魔族軍が奥羽本線のルートを使って宮城県への侵攻ルートを確保、仙台平野に侵出したことを人類が知った日から時間を追って、人類と魔族双方の動きを見ていこう。

●魔族軍が山形県から侵攻を開始した初日。

陸軍の高高度偵察機が鳴子方面から移動する大規模な妖魔部隊を

発見したのは午前7時のこと。
司令部へ通報が届いた直後、古川から一関にかけての地域、魔族軍は２００騎を超えるメース及び飛鼠（ひそ）で編成される打撃部隊を投入。
その大半は中国製のアサルト・アーマー、飛鼠（ひそ）だ。
魔族軍はこの侵攻作戦で初めて、それまで忌避していた火炎放射装置の使用に踏み切った。
火炎放射装置を搭載した飛鼠（ひそ）部隊は、仙台平野の市街地を、逃げ惑う市民ごと焼き払いながら侵攻。
その後方をメース部隊が追随するという異様な状況ではあるが、その後方では長弓兵及び砲撃系大型妖魔で編成される砲撃部隊が仙台平野全域を射程に収めるべく移動を続けていた。
正午丁度に、この砲撃部隊のうち、鳴子付近に布陣を完了した先遣隊が、前進する打撃部隊を支援すべく、魔族軍の記録で４千発を超える砲撃支援を実施。
この際、後退するかなりの部隊が打撃を受け、こと、幹線道路に対する集中砲撃は、交通を麻痺させることに成功。
人類の逃げ足を狂わせた。
一方、人類側だが、この時、宮城県防衛を担当していたのは陸軍第４軍だ。
軍司令官は、秋葉原哲也（あきはばら・てつや）中将。
参謀総長、御茶ノ水博士（おちゃのみず・ひろし）大佐
参謀副長は四谷裕也（よつや・ひろや）大佐
俗に陸軍参謀本部の“三馬鹿トリオ”と呼ばれたトリオが充てられた。
指揮下には機甲師団を含め、計４個師団８万名が参加していた。

第４軍司令部は、この攻撃をもって魔族軍が本格的に宮城県へ侵攻を開始したものと断定、隷下の全部隊に戦闘命令を下した。

ただし、その方針は前進及び現状での会戦の如き戦闘を避け、後退しつつなるべく後方で持久的に戦うこと。

山形方面から撤退に成功した部隊を徒に消耗することなく、有効に使うことを最優先に位置づけたものである。

海軍も秋葉原の戦闘命令に同調するように仙台湾に戦艦を中核に据えた打撃艦隊を展開。艦砲支援で敵の攻撃を砕く「伊一号作戦」の発動を命じた。

しかし、静岡方面に展開していた海軍戦力の移動には時間がかかるのは明白。

むしろ数日の間、仙台湾で人類の主力となったのは、米海軍の輸送艦隊を護衛する任務についていた第９任務部隊が保有していた巡洋艦“アラバマ”以下で編成される５隻に満たない艦艇が搭載する１２７ミリを最大とする速射砲１０門というのが実情だった。

艦砲射撃による砲撃支援は、焼け石に水でしかなかった。

海軍なんぞ、使いモノにならんわ！

戦艦部隊の到達予定日時を聞かされた秋葉原が司令部で怒鳴ったと伝えられるが、まさにその通りだった。

申し訳程度に福島県に展開した海軍航空隊の戦闘機部隊が、本来なら不向きな対地戦闘に参加するだけ。

これも、急降下爆撃任務を得意とする陸軍の保有するスカイレーダー攻撃機部隊に比較して、損害に対してあまりに惨めな戦果を上げるに留まった。

戦闘は、初日から陸軍のみ、しかも、負け戦から始まった。

●侵攻開始２日目。

魔族軍は秋葉原の予測を裏切る行動に出る。

秋葉原達が予測した仙台方面への侵攻ではなく、なんと気仙沼方面へと軍を進めたのだ。

気仙沼には海軍の偵察部隊がいるだけで、地上兵力は皆無。海軍は気仙沼から釜石方面へ撤退。気仙沼方面はこの一日で魔族軍の手中に堕ちる。

岩手方面から挟撃されることを嫌った魔族軍が、先手を打った格好になったこの攻撃の後、魔族軍の大型妖魔部隊がついに仙台平野に投入され、同時に、アイバシュラ部隊が一関市を襲撃。

岩手方面からの第４軍への支援の脚を完全に止め、砲撃部隊を前進させ、ついに仙台市を射程に収める。

弓兵による攪乱射撃により第四軍は指揮系統に混乱を来し、その行動は妨害された。

魔族軍は、ほぼ無傷で仙台平野で悠々と布陣、砲撃陣地を構築した。

●侵攻開始３日目

魔族軍主力部隊が仙台平野に到達。

メース１００騎が仙台平野に展開を終えた。

仙台平野のほとんどを焼き払った飛鼠（ひそ）部隊がメース部隊と任務を引き継ぎ、第二線へ後退。

これに対して、機動性に劣る飛鼠（ひそ）相手ならばと前進を開始した機甲部隊は一斉に脚を止め、後方へ退却を開始。

独断で機甲部隊の進撃を命じた機甲師団司令部が秋葉原の命令によって拘束された。

第４軍司令部はこの時点で魔族軍の目標は仙台市で、その侵攻ルートは東北自動車道沿いに南下するものと予測していた。

それを裏付けるように、魔族軍には自動車道を活用しようとする動きがある。

だが、ここでも魔族軍は秋葉原の予測を裏切った。

魔族軍の砲撃の的にされたのは、なんと石巻市だった。

魔族軍の記録で３万発の砲撃が加えられ、市街地は瞬時に炎上。付近に展開していた歩兵部隊に大損害が発生した。

ここから、魔族軍の狙いは仙台市のみならず、石巻市方面も含まれると秋葉原も認めざるをえなくなる。

これは、仙台市防衛のための軍を石巻防衛のために引き裂くことを意味した。

仙台市からの一部部隊移動を求める四谷達に対し、それでも秋葉原と御茶ノ水は強攻に仙台防衛、石巻放棄を主張。

その混乱を嘲るように、魔族軍は仙台平野の幹線道路を自軍兵力で埋め尽くそうとしていた。

部隊の移動によって生じた長い列。

大部隊でさえ、無防備を余儀なくされる状況。

秋葉原が狙っていたのは、まさにその瞬間だった。

これを確認した第６師団の将校斥候、山中少尉は師団司令部に報告した。

「敵移動開始。砲撃を要す」

その返答は、上空を舞う魔族軍側飛行艦から発せられる妨害電波に潰された。

●侵攻開始４日目

山間部の移動に難儀していた大型部隊の展開を終えた魔族軍砲撃部隊が擁する、戦艦級大型妖魔１２匹を筆頭とする大型妖魔１１７匹による砲撃が石巻市に降り注いだのは、午前五時半。

４０センチ砲に相当する戦艦級大型妖魔の砲撃にさらされた石巻市は一発も反撃することもなく灰燼に帰した。

石巻市の市街を５００メートル単位で区切り、１区画に対して艦砲２５発が弾着するように厳密な砲撃計画が練られていた。

午前７時４０分には、飛鼠（ひそ）部隊が前進。市街地の“焼却”を開始、後続のオーク主力の歩兵部隊が揚陸艇に分乗して、まだ熱を持つ市街地に降り立った。

魔族軍第３軍歩兵３個大隊計１万５千の第一波が石巻市への展開を終え、牡鹿半島から志津川湾へ至る攻略ルートを確保した。

魔族軍偵察部隊が午前１０時に上空を飛行した際、女川湾海上に確認したのは、兵士を満載し、湾から離れようとしている人類の船団だった。

●侵攻開始５日目

午前６時、石巻まで確保した魔族軍は、ついに仙台市街へ向け移動を開始。

市街地攻略を命じられたのは、魔族軍第三軍９６歩兵師団。

飛鼠（ひそ）が投入されなかった理由は、仙台方面にデミ・メース達が確認されたからに他ならない。

飛鼠（ひそ）は市街地焼却を任務としており、対デミ・メース戦は想定外と規定されている。

デミ・メースの存在が確認されなければ、危険すぎて前進させることが出来ないのだ。

それに代わってオーク主力の歩兵部隊が投入されたという事情がある。

幹線道路を、隊列を組んで移動する彼等を出迎えたのは、人類からの砲火ではなく、美しい田園地帯の風景だった。

穏やかな天候の下、美しい山河が彼等の目を楽しませる。

うららかな陽気と安心感、そして相次ぐ戦勝による気分的高揚から、彼等のかなりの数が、ほとんどピクニック気分で移動を続けていたという。

しかし、彼等の行く先には、人類が虎視眈々と待ち構えていた。

最初に彼等を迎撃したのは、魔族軍の先遣隊と前衛を通過させ、中衛が脇腹を見せた、松島市街地でのこと。

主力は、山形県から撤退した歩兵第１９師団の残存兵力のうち、須賀谷支隊１２００名だ。

帝国陸軍では珍しく、精神論に偏ることを嫌った須賀谷支隊長が発案し、秋葉原が全面的に取り入れたのは、徹底的なまでの都市型ゲリラ戦だった。

あえて敵の隊列を通過させ、列めがけて側面から叩く。

正面からではなく、スキを狙う。

それが基本だ。

魔族軍の得意な面的砲撃を避け、効率的に打撃を与えるための、苦肉に近い策ともいえるが、仙台平野は、元から平地が多く、地形を活かした待ち伏せ攻撃には不適格であり、地形は人類に味方して

くれない以上、どうしようもない。
ここ数日間、兵士達は東北各所からかき集めたコンクリートを使い、幹線道路を挟んで並び立つ住宅地の残骸の中にトーチカを必死ににって作っていたのも、実は秋葉原と御茶ノ水が、石巻市を放棄して兵力を温存していたのも、すべてがこの都市型ゲリラ戦を実現するためだった。

魔族軍の移動が想定される幹線道路には、すべて爆薬がしかけられ、メースが通るだろう所には、航空爆弾を改造した“地雷”が仕掛けられた。
ビルは、土嚢と鉄筋、そしてコンクリートで防御された砲台に改装され、潰れて放棄された民家の内部はコンクリートで固められた機関銃座と火炎放射座となり、地下を走る共同溝（きょうどうこう）と、そこから掘られた地下トンネルは貴重な連絡網として整備された。
マンホールの蓋には悉く爆薬が仕掛けられ、最悪の場合はマンホールから通じる下水道を地上の魔族軍ごと吹き飛ばすことも準備されていた。

ゲリラ戦のために準備された爆薬は合計１００トン近い。

人類に全く気付くことなく、魔族軍先遣隊と前衛部隊が通過。
さらに中衛までが通過した時点で、須賀谷支隊長は攻撃開始を命じる信号弾を打ち上げた。
魔族軍が列を作る直線道路の両脇に仕掛けられた爆薬が炸裂し、何百何千というオーク兵を肉片に変えた。
脇道から逃れようとするオーク兵の前には、いつの間に用意されていたのか、水の入ったドラム缶の山が針路を塞ぎ、立ち止まるオーク兵を道の両側面から９．９６ミリ弾が襲いかかる。
反撃しようにも、敵がどこにいるのか、まるでわからない。
しかし、敵は一方的に自分達がどこにいるのかわかっている。

四方八方から飛んでくる、今まで以上の破壊力のある鉛の塊が、仲間達を打ち倒していく。

この戦争において、魔族軍が人類に圧倒的に後れを取った理由はいくつかあるが、その中で、兵器に関して言えば、確実なものは、この火薬の存在があった。

魔法によって成立する魔族及び神族の知識の中には、この火薬を含む、人類の扱う化学的発想は、ほとんどない。

特に、数千年の間封印されていた魔族軍将兵にとって、魔法によらずに、強力な破壊を実現する火薬という存在が、理解どころか想像さえ出来なかったのが現実だ。

この時点で、人類は、鉛の塊を魔法によって撃ち出す兵器を使っていると本気で信じている将兵は、決して少なくない。

しかも、会戦によって勝敗が決せられる戦闘が前提の魔族軍にとって、このようなゲリラ的な戦闘は想定外だ。

魔族軍は各所で混乱状態に陥り、指揮系統を無視した状態で、個別に生存のために戦うことを余儀なくされた。

一方、入念に配置された機関銃と火炎放射装置が死角無しに兵士達を襲うよう、準備された人類側にとって、これほど楽な相手も珍しい。

敵である人類がどこにいるかもわからず、狼狽するところを１２．

7ミリ重機関銃の射撃によって頭を吹き飛ばされ、後退しようと走り出したら紅蓮の炎に全身を焼かれ、応戦のため、弓を乱射し始めたら、予想外の方角からの集中砲火で身体を蜂の巣にされた。

オーク兵の凡その末路は、そんな所だ。

須賀谷支隊長が“刈り取り”と報告書に記載した通りの、戦闘と呼ぶには一方的な行為の後、万の単位で仙台市街地へ移動していたオーク兵で、生きて戻れた者はほんの一握りにすぎない。

事態を把握した魔族軍は、即座に接近戦から砲撃戦へ切り替えた。個で対応出来ないなら面で叩く。

報復のための狂ったような射撃は、人類がようやく完成させた防衛陣地を吹き飛ばし、残っていた貴重な建造物を灰燼に帰し、それでも飽き足らずに破壊の嵐が吹き荒れた。

歩兵では攻略は困難と判断した司令部は、メース部隊が先導し、飛鼠（ひそ）がその後に続く打撃部隊を前進させた。

緒戦　第一話

●福島県境　近衛軍メサイア部隊陣地上空　“鈴谷（すずや）”艦内

すでに仙台市近郊ではメサイアとメースが激突している。

戦況は戦場上空の偵察ポッドからの映像で、美奈代達にも届く。

いけっ！

やっちまえっ！

モニターに映し出される巨人同士の殺し合いに、撃破した、撃破されたで一喜一憂する整備兵や騎士達を尻目に、美奈代はただ、コクピット横の胸部装甲に腰を下ろしたまま、ただぼんやりとしている。

無期限出撃待機命令。

いつ出撃するか分からない以上、騎体の側をほとんど離れられない。

トイレ一つにしても全力疾走で駆け込んで、自分でもびっくりするほどのスピードで戦闘服を脱いで用を足し、ハンガーに駆け戻る。

女を捨てている。

美奈代が自分について痛感するのはこういう時だ。

「大尉」

騎体に戻ると、ほむらが宙を浮いて近づいてきた。

「配給です」

ほむらが美奈代にチューブ入りのドリンクを手渡した。

「ありがとう」

「戦況をご覧にならないのですか？」

器用に装甲を捕まえたほむらが空中に制止して美奈代に訊ねた。

「後で書類で読まされる」

苦笑気味に、美奈代はチューブに口をつけた。
「その時で十分」
「しかし」
「勝ってくれればよし。五分でもよし。それ以外は聞きたくない」
「“鬼の泉”とまで言われた方のお言葉とも思えません」
表情に乏しいほむらの顔に感情は浮かんでいないが、しかし、その目ははっきりと美奈代を非難していた。
「自分も出るとでもおっしゃるかと」
「その方がいいのか？」
「……いえ」
「自分一人で戦況が変えられるとまで思い上がっていない」
美奈代はほむらの顔を見た。
「例え、自分の率いる部隊でもだ」
「……」
ほむらは、無言で頷いた。
「現場の連中だって死に物狂いだ。敵もな」
「……今」
ほむらは、手の中でまだ飲んでいないチューブを弄びながら訊ねた。
「こうしていることは、いいんでしょうか」
「……我々がここにいることを知っているか？となれば、ほとんど誰も知らない。私達は非正規部隊であり、騎士が最も目立つ、こういう場面には出られない存在だ」
「……」
「せいぜい、後詰めの部隊がいる程度の認識しかないだろう。それでもし、現場が安心するなら、我々がここにいる意味はあるだろうな」
「戦局に影響する意味では？」
「だから」
美奈代は、噛んで砕いたような口調で言った。

「メサイアを搭載した飛行艦が、この上空に浮いているということは、敵への牽制にもなるし、近衛前衛部隊にとっては精神的な不安を少しでも取り除く意味がある」
「……」
「誰かを助けているのか？そう聞きたいのか？」
「……はい」
「安心感が人助けになっている。そう信じられるならそう信じればいい」
「信じろ。とはおっしゃらないんですね」
「そう命じられて、“はい。わかりました”はよっぽどのバカか脳みそがないかのどっちかだ。
私がお前の立場なら、答えても信じることは出来ない。
個人の意志は、誰にも支配されない最後の砦だ。
それを放棄することは、人としての尊厳を放棄したに等しい。
何かを、誰かを崇拝することが出来るという意味で見れば真面目。
そう言うべきなのかもしれないが、私から言わせれば、無能な証拠だ」
「……」
「無駄話だったな」
美奈代は喉で笑うと、ほむらに言った。
「お前は、誰かを助けたい。そういう正義感が私より余程ある」
「……そんな」
「だけどな？死に急ぐのとそれは違うからな？」
「……はい」
ほむらは頷いた。
「待つことも任務。そういうことですか？」
「そういうことだ」
小さく微笑んだほむらに、美奈代も思わず微笑み返した。
ほんわりとした、暖かい笑みは、ちょっとマネ出来た自信は無い。
「私達が出るのは、多分、正規部隊ではちょっとやれないような汚

れ仕事か、立案者をぶん殴りたくなるような無謀な仕事かのどっちか。下手を打ったら、あとで化けて出てやりたくなることだけは共通しているがな」

「この状況で……ですか？」

「戦況が孤立すれば、撤退にしくじって孤立した部隊や、脱出した生存者の救難も考えられる。通常の戦闘ならヘリやＴＡＣの任務だが、妖魔がこう跋扈していたら、メサイア部隊の仕事になる」

「……はい」

ほむらは顔を引き締め頷いた。

「“白龍”強襲型の性格を考えれば、適任ではないかと」

「……うん」

「何か、お悩みですか？」

「突撃の性能はいいだんが……」

美奈代は、愛騎の爪先に座って、山崎とお茶を飲んでいる美晴を見た。

「斬込隊と前衛隊、それと狙撃隊……三隊が連携出来る作戦が、ここん所、入ってこないなぁって」

「そういえば」

「だいたい、前衛隊の広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）ばかりがモノを言う作戦ばかりだ。特に仕事が少ない狙撃隊も不満がなければいいが」

「それは大丈夫でしょう」

ほむらはあっさりと言い切った。

「小清水少尉も鬼龍院中尉も、無駄な戦いは嫌いだときっぱり」

「平野は何か言っているか？」

「マンガ読むヒマが出来たって」

「……まったく」

「怒らないんですか？」

「涼の権限だ」

「私が何ですか？」

不意に、耳元に聞こえた涼の声に、びっくりして美奈代が振り向

くと、引きつった笑みを浮かべた涼が、いつの間にか背後に立っていた。
「明貴少尉」
「……お邪魔しました」
ほむらがそそくさと離れていく。
「ちょっ？」
腰を浮かせた美奈代の肩を、涼ががっちりと掴んで動けない。
「……お姉様。地上で打ち合わせがあるそうです。ＴＡＣに乗船ください。風間中尉はすでに乗艦されています」
ギリギリギリ……
パッドの入った戦闘服の肩を掴む涼の手に力が入り、美奈代はその激痛に言葉を失った。
「私が見ていないと思って……やっぱり、あの子を狙っていたんですね？」
「な、何の話……」
「こんな非常時に、何を楽しげに――――っ！」
「なぁぁぁぁぁっ！？」

●“鈴谷（すずや）”の真下。近衛軍陣地

美奈代がある意味、修羅場を迎えている同じ頃。
そのすぐ真下では、東達が地獄を迎えていた。
「おどれらぁぁっ！」
ドスが聞きまくった重低音がテントを本当に揺さぶった。

とても人間の声とは思えない、その恐るべき声に直接さらされたのは、顔に手形やひっかき傷を作った東達だ。
鼻から鼻血を流した跡がくっきりと残る東は、左目に青あざまで作っている。

「ここをどこだと思ってるんじゃぁぁっ！」

東達を怒鳴りつけているのは、グラサンにスキンヘッド。
筋骨隆々としたボディビルダー顔負けの巨体は、元映画俳優の某国知事さながらの人物を彷彿とさせる。
戦闘服に身を包んでいるからには、はっきり騎士だとわかるとはいえ、その常識外れの筋肉とスキンヘッドとグラサンの組み合わせは、町中で絶対に出会いたくないタイプの人物であることを如実に語っていた。
その後ろでは、二宮が腕組みをして東達を睨み付けているとなれば、いろいろと恐怖感の倍増される。

「ここは戦場じゃ！」
バンッ！
テーブルを掌で叩いただけだというのに、テーブルは手の形にへしゃげた。
「神聖な戦場様で、エリート部隊の女の子、しかも上官様をナンパするとは何事じゃぁっ！？」

「す、すんません」

「すんませんで済むかこらぁっ！」
胸ぐらを掴み上げられた東は、それだけで脚が宙ぶらりんになる。
万力ででも締め上げられたのかと思う程の力が胸ぐらにかかり、息が出来ない。

「ああっ！？どう落とし前とるんじゃ！？指詰（エンコ）めてみるか！？」

「か、勘弁して下さい」

「勘弁なるなら、こんなことしとるかぁっ！」

フルスイングで放り投げられた東がテントの向こうへ消えていった。

「……はぁっ」

二宮がため息と一緒に額を抑えた。

「白鳥沢少佐」

「おう」

名前を呼ばれたのは、東を投げ飛ばした大男。

振り返り、二宮に答えた。

「何じゃい。これは、ワレの子分に迷惑かけたウチの馬鹿たれ共の不始末じゃ。子分の不始末は、俺の不始末。口出しせんでもらおうか」

「東一人ブチのめして下されば結構です」

「……そうかい」

「ええ」

二宮は意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「この後、“母親”からの説教も待っていることですし」

緒戦　第二話

●“鈴谷（すずや）”の真下。近衛軍陣地の別な場所

上空をＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が行き来する中。

「……気持ちはわかる」

うなだれる東達が次に向かったのは、白鳥沢大尉騎であるど派手な虎模様にペイントされた“幻龍改（げんりゅうかい）”の足下だ。

白鳥沢一家

そう書かれたシールドがイヤでも目立つその足下で、東達は全員正座させられていた。

「……話は、真理ちゃんから聞いたよ」

腕組みに仁王立ちのポーズで、全員を睨み付けたのは、年相応に太った中年の女性だった。

東達からすれば十分、母親の年頃であり、実際そうだった。

その年齢と階級、そして母親として接する態度に、東達は頭が上がらない。

少し離れた所に“鳳龍改”が建ち並び、その周囲には、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）の見目麗しき少女達が忙しそうに立ち働いている。

風に乗って聞こえてくるのは、張りのある若い女の声。

「確かに、歳はそれほど違わないだろうし、あれほどの美人揃いだけどねぇ」

大尉の階級章を襟につけ、飯島と書かれたネームプレートを、でんと張り出した胸につけた女性は、何度か小さく頷いた。

「だけど、相手が名にし負うエリート部隊だということを、どうして忘れたんだい」

「す……すんません」

東は言った。

「つ、つい……あんまりに可愛くて……その……」

QBを地上に降ろした所で、内親王護衛隊（レイナガーズ）との連携作戦を告げられた東達は、形ばかりの挨拶をかわした後、自由時間になった途端、“男”としての理性が限界を迎えた。

目の前の美少女達というか弱き羊たちを前に、飢え死に寸前の狼に“待て”が通じるはずもない。

東達は死に物狂いで狼狽する内親王護衛隊（レイナガーズ）の美少女達に、次々にナンパをしかけ、あるいはセクハラを働こうとして、激昂した彼女達の一部にぶん殴られた挙げ句、悲鳴にかけつけた二宮によって“根性直し”の腕立て伏せまでやらされた。

男としてのメンツは丸つぶれだ。

まぁ、やられた方が反省しているかといえば、そんなことはない。絶対に懲りていないことは、飯島が見ても明らかだった。

現に、東達はうなだれているフリをして、スキを見ては宮川の背後、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）の少女達を盗み見ている。

――スケベ根性もそこまで行けばたいしたものだ。

その言葉を口の中で抑えつつ、呆れるしかない。

確かに、内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）の面々は、同じ女である飯島の目から見ても美女・美少女の部類に入る。
アイドル集団と言われても、違和感は全くない。
自分があと２０年、いや、あと１０年若かったら負けはしないんだが……。
そんなぼやきが出てしまうほどだ。
でも、さすがにわかる。

東達の部隊は、はっきり言って、女気がない。
上はヤクザの親分のような筋骨隆々とした大男。
他を見回しても、母親ほどの歳の自分だけ。
男ばかりの環境。
内親王護衛隊（レイナガーズ）とは、いわば性別から見れば対極の存在だ。
向こうが白百合の園なら……肥だめでも褒めすぎだろう。
東達は、若い男として、女に飢えている。
しかも、常時だ。

ＱＢはアサルト・アーマーの一種であるため、ＭＣ（メサイア・コントローラー）は配属されていないことも原因かもしれない。

飯島は、まるで東達を弁護するかのように理由を考えてしまう。

メサイアに搭乗していた頃から、セクハラとナンパを何とかしろとＭＣ（メサイア・コントローラー）達から散々抗議を受けていたことは有名な話だ。
その部隊も壊滅した現状、女性ＭＣ（メサイアコントローラー）は、白鳥沢とパートナーを組んでいる飯島舞（いいじま・まい）大尉、つまり、彼女のみになっている。

大尉は東達からすれば息子扱いすべき年頃で、しかも、暴力以外で東達を指導する方法をとりたがらない白鳥沢にかわって面倒を見るのは、彼女の仕事となれば、東達が頭が上がらないのは、何も階

級だけとは限らなくなる。。

ぶん殴る以外、息子への接し方を知らない頑固親父に変わって息子の面倒を見る肝っ玉母さん。

それが飯島大尉であり、その出来の悪い息子である東達は、とにかく全員、“おふくろ”からの説教は避けられないのだ。

自分の小隊のそんな実情は知っている。

皆が若いだけに女に飢えている。

幸い、これまで憲兵隊が動くような事態にはなっていないが、風紀査察が入ったら、自分の隊長罷免は避けられないと、“ダンナ”である白鳥沢本人が覚悟していることもだ。

部隊内では金のかわりに、雑誌から切り抜かれた女の子の写真（ちなみに、１００円が顔写真、５００円がグラビア、１０００円がビキニ、５０００円でヌード、１万で無修正）が通用し、エロ本を持っていて一人前、ＡＶ（メディア問わず）を所持していれば英雄。無修正ものなら軍神扱いするなんて異様なまでの世界。

“息子”達が本気でそんなバカをやってることも承知の上だ。

まったく……。

文句が言いたい相手が多すぎる。

飯島は頭痛がする思いだ。

こんな“女の子とＨしたい！”という願望にどっぷり染まった危険な連中が、あんな可憐な花園を思わせる少女達の群れに接したらどうなるか。

それを考えておかなかったのは、司令部の失態であり、私達の責

任じゃない。
私達は被害者だと、そう言いたいが……。
「間違いを犯せば、白鳥沢少佐（とうちゃん）に迷惑がかかるんだよ！それだけじゃないっ！すぐに最高司令官たる麗菜殿下のお耳に入るとなれば、世間様に顔向け出来ないじゃないか！母ちゃん、恥ずかしくて町中歩けないよ！そんなことして楽しいかいっ！」

「す、すんません……」

「ったく、このエロガキ共が……以後、気をつけんだよ！？」
正直、つける薬がない。
飯島自身、そう言うのが精一杯だ。

「へい」
東は深々と頭を下げた。

「それで？」

「へっ？」

「東、あんたは、どの娘がタイプなんだい？」

「いや、そりゃぁ。母ちゃん」
東は、乾いた血で汚れた鼻をこすった。
顔が赤くなるあたり、色恋沙汰になれていない純粋さを感じる。
息子を産むことは出来なかったけど、こういう子供がいたら、人生もっと面白かったかなと、そう思う。
何より、東の笑顔は、人なつっこさが強くて、母性本能をくすぐる何かを持っている。
まるで、息子の惚れた相手を心配するように、飯島は訊ねた。

「俺は……」
東は、照れたまま、答えた。
「だ、誰でも無いよ。良い子、いなかった」

「いやいや」
周囲が東の肩に腕を回した。
「嘘いうなよ！母ちゃんに報告しろよ！」
「だ、黙れっ！宮本、杉野までっ！」
「あの子だろ？」
イガ栗頭の宮本が、ニタニタしたイヤらしい笑みを浮かべ、内親王護衛隊（ナガーズ）の少女達を指さした。
「そうそう」
スポーツ刈りの杉野が深く頷く。
「清純で大人しそうなタイプの女の子。東、必死にナンパしたら逃げられて、んで、脇にいた――あのブロンドの子にバインダーぶん殴られたんだよ。母ちゃん」

“鳳龍改（ほうりゅうかい）”の足下に駐車したシステム調整車の横に立つ、長い髪を後ろで束ねた女性士官が、ブロンドの目つきのキツい女性士官と楽しげに会話していた。
あどけないほどつぶらな瞳に戦闘装備からもわかるグラマラスな体つき。
談笑する相手も、スレンダーだが整った顔立ちをしている。
はっきり、華がある。
まるで、ここが戦場であることを忘れさせるほど、場の空気を和ませる光景だった。
「――悪くない趣味だねぇ」
それが飯島の正直な感想だった。
何だか、ちょっとだけ、ほっとした。」
「でしょう！？」

東が、我が意を得た！といわんばかりに、力強く頷いた。
「ああいう清純派はいいっスよね！いやぁ、泉ん所の女共と来たらまぁ、女捨てたとしか思えねぇロクでもねぇ奴らばっかりで！」
「……高望みもいいかげんにしな」
「――ほう？」
――ピシッ。
その冷たい声に、染谷と中村が速攻で凍り付いた。
二人が無理矢理、後ろを向くと、いつの間にか宮本達の姿はなく、大尉の階級章をつけた女性士官が自分達を睨んでいた。
美奈代だ。
にっこりと笑っているが、額に青筋が立っている。
その美奈代が笑顔で言った。
「風間が殿下に呼ばれた後、せめて挨拶くらいしてやろうと思ったが……女を捨てたような連中で悪かったなぁ」
●夜　“鈴谷（すずや）”艦橋
ズガンッ！
ガィィィンッ！！
暗闇の向こうから、そんな音が響いてくる。
「……はらら」
美夜は、その音を聞きながらコーヒーカップに口をつけた。

「夜間訓練なんて言うから、何事かと思ったけど……」
通信装置からメサイア同士の通話が聞こえてくる。
「性能差を考えろっ！」
通信の中で、東が悲鳴をあげる。
「平等平等♪」
さつきの楽しげな声が聞こえてくる。
「こっちはメサイアじゃないんだぞっ！？耐えられるかっ！」
「何しろ私達――」
「ひぇぇっ！」
「女捨ててるからねぇ！」
「悪かったぁぁっ！」
ガィィィンッ！
ズダァァァンッ！

「……はぁっ」
美夜は深いため息を吐くと、脇に立つ二宮に行った。
「私も、子供の引率してんじゃないのよ」
「もう少し、人間として成長しているかと思ったんだけど」
「そう簡単に人間成長したら苦労しないわよ。ウチのバカ亭主とか」
「……そうみたいね」
二宮は肩をすくめたあと、フォローするように言った。
「とりあえず、ダンナの方以外の話ね？」
「……殿下が、風間中尉を呼び出したと聞いたけど？」
「ええ」
二宮は頷いた。
「彼女のこと、私より知ってるんでしょう？」
「この艦を使う以上、私に隠し立てはしないっていうのが、後藤さんとの約束。
まぁ、どこまでが真実かは聞かなかったけどね。
お互い、立場があるし」
「……そう」
「後藤さんから、一応は聞いている。ただし、私は根っから信じていない。関係ないし、関係あるべきとも思ってない」
「私は未だに信じられない」
「でしょうね。私達はともかく、殿下は」
「……そう……難しいものね。いろいろお考えだったご様子だったけど、いざとなると……」
「そりゃそうでしょう？」
美夜は肩をすくめた。
「あんなこと、そのままはいそうです。って公に認めたら、それだけで大騒ぎよ。だからといってこのまま野に下すと、さらに厄介」

「……というか」
「というか？」
「……」
一瞬、黙った後、二宮ははっきりと美夜に言った。
「あの子と“ＤｰＳＥＥＤ”の関係は知ってるんでしょう？」
「ええ。“あの力”のこと。だからさっきからそのことを言ってるのに」
「後藤さんもやったけど、ＤＮＡ鑑定は全部が合致――しかも」
「……」
「“あの子”が並の騎士じゃない。“あの力”を持っているからこそ、Ｄ－ＳＥＥＤの騎士に選ばれた」
「全ては承知の上で、あの子を育てたんでしょう？真理」
「……ええ」
「――ま、幸い」
美夜は言った。
「殿下が、腕試しなんていわなかっただけでも感謝しましょうか」
「ええ。さすがにそれだけは避けられたわ」
「そうよねぇ――部下の目の前で、泉大尉に継いで負けたらメンツ丸つぶれだし？」
「美夜っ！」
二宮は厳しい口調で言った。
「言葉が過ぎる！」
「殿下が勝てると思う？」
「“裏”を知った上で言ってるの？」
「深くは知らない」
美夜は楽しげに微笑んだ。
「とにかく、模擬戦なんて事態にならずに済んで良かった」
「そうね。明日の午後には、作戦だもの。――その前に誰かに死なれちゃ困るからね」

●翌日

バチィンッ！

美奈代達が朝食をとっていると、端の方からそんな音がした。
東達が懲りずにナンパに勤しんで、ついにたまりかねた女性士官にひっぱたかれた音だ。
「あーあ」
たくわんをポリポリかじっていたさつきが、ため息混じりに言った。
「あいつら、懲りるって言葉しらないのかしら」
「考えてみろ。早瀬」
さつきの隣でどんぶり飯を食べていた都築が言った。
「あいつらの、あのツラで相手をしてくれるのは女じゃねぇ――メスだ」

●福島防衛線Aライン

この戦線に配属され、美奈代達に初めて科せられた任務は、阿賀野川沿いに繋がる新潟県と福島県の哨戒任務。

敵の攻撃があれば、応戦する。

夜間に実施された魔法騎士隊による強行偵察によると、敵は阿賀野川下流、新潟県側に部隊を多数展開しているという。

現状、前衛を美奈代達が哨戒を行い、敵を発見次第、美晴達が対応、砲撃支援のため、小清水達が、それぞれに射撃がしやすい山を選んで散開している。

さらに、美奈代達の頭上をQB達がカバーする万全の体制だ。

斜面を利用した伏射体勢を取り終えた頃、ある情報が指揮官代理となった紅葉から告げられた。

「内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）は出ない！？」

部隊配置が終了した時点でわかったことはそういうことだった。

「あたりまえでしょう？」

激した声の東に、紅葉は言った。

「連中は、私達とは違うの。あっちの任務は麗菜殿下の護衛なんだから」

「なんだよ！俺達にゃ散々エラそうなこと言っておきながら――」

東は平手の後が残る頬を撫でた。

「いざとなれば“私女の子だから”ってか！？」

「なぁにがエリート部隊だ。ハリボテ共っ！」

「かわいい女の子並べた新兵勧誘（リクルート）部隊が真相ってトコじゃないんですか？」

エリート部隊を鼻にかける内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）に、私的な意味で煮え湯を飲まされた東達からは、次々と内親王護衛隊（レイナ・ガーズ）に対する批判が噴出する。

「新規隊員募集ってポスター、誰か見たか？」
「希望者にだけ見せてんだよ。スカートの中に貼り付けてな」
「けーっ！新兵さんが羨ましいぜ！」

ゴホンッ！

野太い程の咳払いが通信に入ったかと思うと、東達が一斉に黙った。
飯島大尉の咳払いだ。
「……黙って聞いてりゃ、祐一っ！」
で、始まった説教が通信装置を占領する。
「女の子にフラれた腹いせに、こんな所で愚痴るとは情けないっ！母ちゃんそんな育て方した覚えはないよ！？」
「そ……育てられた覚えも」
「何だって！？」
「すんませんっ！」
「ったく、幸司に孝弘、あんた達もだ！」
美奈代はその説教のすさまじさに、正直、気圧された。
飯島大尉の説教は、階級を楯にした二宮とは、全く別の迫力がある。
階級以外の“絶対に逆らえない”何かを持ってる。
“母親”の存在だ。
それに聞き慣れていない美奈代はもう、圧倒されるしかない。
物心つく前に母親を失った美奈代は、母親に怒られたという経験がない。
その美奈代には、東達共に反論を許さない“母親”の説教は、恐ろしい程のインパクトと共に鼓膜に響く。
「一々ナンパなんて姑息な手使って！こういう方面でも、瞬君とか、同期の男共、ちょっとは見習ったらどうだい！」
「へ？」

瞬、つまり染谷のことだ。
「ちゃんと、涼菜ちゃんっていう年上のしっかりした嫁を手に入れたし、都築君は寧々ちゃんって相手がいるし！山崎君は美晴ちゃんも、それと宗像君だって！」
「いや……宗像、女だし」
「あいつが一番、女捨ててないか？じゃなくて！お袋、それはヒデえ！」
東が一斉に抗議した。
「あいつら、女が傍にいたんだ！
「俺達ゃずっと女がいねぇ！」
「俺達だって出会いが欲しいんだ！」
「だったらもっとまともな方法とりな！ったくあんた達、死んでいった仲間に、こんな無様な姿、報告出来るんか！」
「――っ！」
東達の抗議が、その一言で消えた。
「あんた達、わかってんだろうね！これからの戦（いくさ）は、あんた達の同期や先輩にとっては弔い合戦だってこと！」
「……」
「祐一、幸司、孝弘っ！返事はどうしたんだいっ！」
「押忍っ！」
「はいっ！」
「わかってますっ！」
「なら女にうつつ抜かすヒマないよ！ここで功績あげて、あたしん所にいい嫁連れてくるんだ！わかってたね！？」
「応っ！」

――上手いなぁ。
美奈代は素直に感心した。
口べたな自分に、ここまで人を説教して、まとめることは出来な

い。
飯島大尉はあっさりとやってのけた。
それが、正直、とても羨ましい。
――一体、何が違うんだろう。
美奈代は、そっと手鏡を取り出すと、自分の舌を見た。
別段、変な形はしていない。
小さいかなと思うけど、でも、きっと平均的なはずだ。
舌が同じなら、どうしてああも上手い説得が出来ないんだろう。
――このままじゃ、ダメだろうな。
美奈代は、コミュニケーション能力の不足が、自分の将来に暗い影を落とすことを予想して、暗鬱な気分になった。
「――何してるの？」
かなりの呆れを含んだ声に、美奈代は通信モニターを見た。
紅葉が見下げた。といわんばかりの表情で自分を見ていた。
「い、いえ」
美奈代は慌てて手鏡を戻した。
「どうした？」
「エロ共が気合い入ったところで」
「うん」
「……」
「……どうした？」
「……あんた、戦況モニターどうなってるかわかってるよね？」
「……へ？」
美奈代は戦況モニターを見た。
赤い点が接近しつつあった。
赤い反応――即ち、敵だ。
「亜音速？移動速度が速すぎる！」
美奈代が驚いたのも無理はない。

反応は、山間部をギリギリの高度で飛行しているとしか思えない。
正直、まともな神経で出来る飛行ではない。
「うちのMC（メサイアコントローラー）が乗ってるのか？」
「どういう意味ですっ！」
「全騎、戦闘許可。いいか？ここで食い止めろ」
「了解、各員合戦用意っ！東っ、QB隊は散開、斬込隊は」
言いかけて、美奈代は言い直した。
「散弾砲を装備、散弾は可能な限り拡散させろ！涼、バックアップを！」
「はいっ！」
「反応は多くない。撃ち方まかせる――意地でも撃墜（おと）せ」
「はいっ！HMC（ハイメガカノン）射撃体勢完了してますっ！」
「狙撃砲、実包装填っ！」
「野郎共っ、後方の狙撃隊の防衛を第一に」
東達を率いる白鳥沢少佐も指示を飛ばす。
「ML（マジックレーザー）狙撃可能と判断すれば撃て。ただし、友軍誤射は厳禁だ」
「了解っ！」

グォォォッ！
山の方から音がする。
「しょこら」
涼騎の装備する巨大なビーム砲、HMC（ハイメガカノン）の発砲は、その発射タイミング確保の難しさから、騎士ではなくMC（メサイアコントローラー）と精霊体のコンビによって行われる。
騎士の役目は、射撃中に襲われた場合に備えて待機する以外、ない。
周囲を警戒しつつ、涼は愛騎の精霊体“しょこら”に言った。
「高良中尉とあんたに任せたからね」
「はいっ！」

「何がくるかなぁ？」
涼はそっとハイメガカノンを装備する右腕ではなく、左腕にビームライフルを握らせた。ハイメガカノンは一発撃つと二発目が射撃可能になるまでに１０秒近く必要とする。
そういう意味では効率の悪い兵器だ。
一発目を命中させても、二発目を敵にぶつける余裕があるか？
芳が心配するのはそこだ。
美奈代がビームライフルではなく、散弾砲を前衛に装備させたのは、同じ心配があるからだと、芳は見抜いていた。
芳の見る限り、美奈代は、ビームライフルの一撃撃破を狙うより、散弾の散布界を広げた連続射撃で、敵に少しでもダメージを与えることを選んだのだ。
これなら、前衛を突破されても（敵の装甲如何にもよるが）、敵が中衛にたどり着く前にかなりのダメージを与えることが出来る。
心配なのは天気だ。

芳は祈るような気持ちで空を見上げた。
雨が降り出すと、データの入れ直しが必要になる。
そうなれば、しばらく狙撃は出来ない。

――降らないで
――せめて戦いが終わるまで

芳はそう祈ったが

ボツ

スクリーン上に雨粒が落ちた。
降り出したのだ。

チッ！

芳が舌打ちしたまさにその瞬間――――

ズンッ！！

芳騎と涼騎のＨＭＣ（ハイメガカノン）が火を噴いた。

緒戦　第四話

ピピピッ
ピーッ、ピッピッピッ

一つ一つが、恐ろしく幅の広いデータ値の変化を意味する電子音が複雑なコンサートを繰り広げる。
敵は二手に分かれている。
前衛部隊が真っ正面から相手にする集団と、それを側面から叩こうという集団の二つ。
狙撃隊は、その側面から来る部隊を叩こうとしていた。
コクピットの中、芳（かおる）は、緊張の中で目前のターゲットスコープ上が定まるのをじっと待つ。
狙撃手としての忍耐力が試される最たる時間が過ぎる。

ピピピヒッ

ピンッ！

ターゲットロック――芳達（かおる）近衛の狙撃担当騎士が、“死の鐘”と呼ぶ音が耳に届くと、脳より先に指が動いた。
「行けっ！」
複雑に入り組んだ山々をくぐり抜けるようにして接近する敵メサイアめがけてトリガーを引く。
騎体サイズほどもある巨大な砲の砲口が光り、一撃必殺のエネルギー弾が撃ち出される。
肩に疑似感覚として与えられる砲の反動が、心地よくさえ感じられる。
ズズンッ！！

山腹に命中した一撃が派手な爆発を見せる。
敵に命中すべき一撃が、そこで爆発したということは、つまり……
「はずした！？」
すぐに次発を装填しながら、敵機の機動コースを見た。
「ちいっ！」
敵が行った機動は信じられないものだった。
騎体を真横への横滑り移動。

そう。

まっすぐ飛んでいた騎体が、垂直９０度横滑りしてのけたのだ。

いくらメサイアでも、こんな機動をすれば、Ｇを消化しきれず、中のパイロットに致命的な被害が出かねない。
普通ならパイロット保護用のリミッターが作動して機動そのものが出来ない。
それを可能にする敵に芳達（かおる）は心当たりがある。
スクリーンに映し出された、独特の頭部を持ったその騎影は、その疑問に答える存在。　間違いなく“例の騎体”――“飛鼠（ひそ）”だ。

狙撃に気付いたのだろう。
飛鼠（ひそ）達は一斉に山の裾野へと強行着陸した。
木々がなぎ倒されたが、飛鼠（ひそ）達がそれを気にする様子はない。
無人騎――それは、元人間を使用した人間兵器といっても良い。
重要部分と聞かされたその頭部の中身。
溶液に浮かぶ四肢のない元人間のなれの果て。
あれは、一度見たら二度と忘れることは出来ないだろう。

その敵が、今、斜面を登って接近してくる。

「涼、これから斬り込むから――」
「砲撃はこのまま続行しますっ！」
通信機からは中隊の動きがひっきりなしに入ってくる。
正直、うるさいけど、聞き落としたら死ぬ。
狙撃手は、“眼”がいいだけでは生き残れない。
戦場では前線の兵士よりもずっと五感を研ぎ澄まさなければいけない。
芳（かおる）の狙撃手としての教官はそう言っていたし、少なくとも芳（かおる）は、石垣島の自然の中で育った野生児として、その素質が指導を受ける時点で十分にあった。
8割努力で2割が天性。
テキストにはそう書かれていたが、教官はいう。
1割が努力で、6割は天性。残りは運だ。
アニメオタクの自分が、狙撃手という特殊なポジションでやっていけるのは、天性と運だと、芳（かおる）は割り切っている。
天性のセンスとそれをサポートする運が自分にはある。
だからこそ、涼という生粋の狙撃の素質の持ち主とパートナーになれたわけだし、それ以上の天才である寧々ともトリオの一人としてやっていけるのだ。
戦況を感じ取る肌。

殺気を感じ取る髪。
そして、必要な音を聞き分ける耳。

テキストは狙撃手に必要なモノをそうまとめていた。
しかし、教官はもっと大切なものがあると常々言っていた。
それは、必要なことだけを拾う事の出来る都合のいい脳みそを持つことであり、その有無が戦場で狙撃手の命運を左右するのだと。

その教官に言わせると、芳（かおる）は狙撃手になるために生まれてきたような存在だという。
肌が接近してくる敵の反応を、その腰まで伸ばした髪が敵の殺気を感じ取る。
耳は通信の中から必要なことだけを聞き分け、脳に送り込む。
そう。それこそが、芳（かおる）という存在なのだ。

ポツ
ポツ

外部マイクが、そんな音を拾った。
装甲を軽く叩く音は、

サーッ

そんな音に変化した。

雨だ。

外部音を拾うマイクが、雨が騎体の装甲に跳ねる音を拾い始める。

ズンッ！
隣に陣取る寧々のＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）が火を噴いた。
飛鼠（ひそ）”の頭部にエネルギーの塊である一撃が命中。
解放されたエネルギーによって頭部が消し飛び、残された胴体が奇妙なダンスを踊りながら斜面を転がり落ちていく。
「やった！」
芳（かおる）が歓声をあげたのもつかの間のこと。
爆発した飛鼠（ひそ）から立ち上る煙をかいくぐるようにして、別の“飛鼠（ひそ）”達が斜面を登り、近づいてくる。
数が多すぎる。
一撃必殺の反面、装填に時間のかかるＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）じゃ、数に対応出来ない！
だめだ！
「涼っ！」
芳（かおる）はＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）と騎体のパワーアクセスをカットした。
ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）に回されていた砲弾加速用と砲身冷却用のジェネレーターを動かすエネルギーが余剰パワーとしてゲージに刻まれる。
これは、短時間のバリア発生エネルギーとして転用出来る。
寧々が実体弾に拘っていたのは、このバリアを欲しがっていたからだと、芳（かおる）は寧々自身から、そっと教えてもらったことがある。
このバリア――はっきり言って、使える。
「武装変更するっ！このままじゃ！」
「……わかった」
涼騎もＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）を外し、騎体の脇に置いた。
「狙撃隊全騎、武装変更――散弾砲へ」

芳（かおる）は、左太股のウェポンラックに差し込んでいた散弾砲を引き抜き、ポンプアクションで戦艦の主砲並という大口径というか、非常識なサイズのシェルを本体に叩き込み、腰にマウントしていたマガジンを本体の脇に置いた。

「弾種は任意で任せる。必要ならビームライフルを」

「うん」

芳（かおる）は、対人海戦術用を改造した　キャニスター弾の入ったマガジンを選択している。

飛鼠（ひそ）は機動性は高いが、反面において装甲はないに等しく、その外装を覆うのは、“装甲”というより“パネル”といって良い程度でしかない。

整備部隊から譲ってもらった残骸相手に試し打ちした経験からすれば、飛鼠（ひそ）の外装は、７．７６ミリの小銃弾どころか、９ミリ拳銃弾ですら止めることは出来ない。

だから、軽装甲車両向けのこのキャニスター弾をまともに浴びれば、飛鼠（ひそ）はかなりの確率で大ダメージを受けることになる。

しかし、それは同時に――

「問題は……」

芳（かおる）は、前に展開する前衛隊との距離を確認した。

散弾砲は、全弾が敵に命中してくれるわけじゃない。

ベースが散弾銃なだけに、ライフル砲や滑空砲を流用した他の速射砲に比べれば有効射程は短いとはいえ、優に５００メートルは飛ぶのだ。

下手をすれば友軍誤射という事故になる。

「前衛、柏中尉へ警告！」

涼の通信が耳に入る。

「側面からの飛鼠（ひそ）へ散弾砲を使用します！」

「了解――前衛全騎へ」

こういう所はで抜けがない分、涼という娘は、大雑把（アバウト）な泉大尉より出世出来るだろうなぁ。と思う。

それが、芳としてはちょっと誇らしい。
「集中砲火――前方の飛鼠部隊」
山頂部分に陣取る芳達を狙い、飛鼠達は斜面を登ってくる。
ブースターを使用すれば狙い撃ちにされることがわかっているんだろう。
先頭を歩く騎の震動が音として聞こえてくる。
自重１００トン近い大質量が１０騎も歩いているのだから、きっと辺りは地震のように揺れるだろう。
ビリビリとした空気の中、芳は舌で上唇を舐めた。
ひりついていた唇が湿って心地良い。
――やれる。

「撃てっ！」
涼の号令の元、トリガーを引いた。
散弾砲が面となって“飛鼠”を襲う。
ドンドンドン
まるで太鼓の演奏に近い音が、付近の全ての音を制圧する。
大口径の、しかも連続射撃だ。
突然、真っ正面から降り注いだ破壊の雨を、“飛鼠”達は回避することが出来ず、まともに突っ込んだ。
散弾によって装甲を穴だらけにして、飛鼠の体内に突入した散弾達は、内部の重要なパーツ類を容赦なく突き破り、中華帝国人達の血税をもって建造され、魔族軍に供与された飛鼠に致命的なダメージを与えた。
“飛鼠”達は山の斜面に叩き付けられ、爆発する。

「やった！？」
斜面の下で大破、炎上する“飛鼠”達を前に、涼が歓声に近い声をあげるが――
「熱源反応っ！」

MC（メサイアコントローラー）からの鋭い警告に、とっさに騎体を伏せた。
向かいの山の稜線から、速射砲を乱射しつつ、“飛鼠（ひそ）”達が飛び出して来たのはその時だった。
「くっ！」
装甲に無数の砲弾が命中し、嫌な音を立てる。
「――――やるっ！」

涼は芳達（かおる）と同様にバリアを展開し、砲弾の雨をしのぐことにした。
前衛は前衛で、メース達を相手にしている。
飛鼠達は、どうやら自分達狙撃隊を叩くべき敵と判断しているようだ。

「どうやら」
涼騎のMC（メサイア・コントローラー）、高良中尉が言った。
「敵の中に“機銃騎（ガンナー）”タイプがいるようですね」
「“機銃騎（ガンナー）”？」
「大量の速射砲で武装した重武装タイプです」
この激しい砲撃は、その賜か？
涼は顔をしかめ、次の手を考えた。
山の斜面という地形を活かすしかない。
「これは……狙撃隊全騎へ」
騎体を操作しつつ、涼は命じた。
「投擲手榴弾を、目標は斜面中央。いち、にの、さん、で」
「了解」
スクリーンの横で、寧々騎が腰のサイドスカートに装着していた棒付の手榴弾を握った。

「いち」
敵の先頭は既に斜面の半分を超えている。
「にの」
ガンナーからの攻撃は相変わらずだ。
流れ弾が手榴弾や、投擲する腕に命中しないことを祈るしかない。
「さんっ！」

３騎から投擲された手榴弾が放物線を描いて、斜面の半ばに落ちた。
内部の時限信管が作動し、弾頭部の炸薬を破裂させた。

ドンッ！
ドドンッ！

鼓膜がどうにかなりそうな、３つの炸裂音が大地を揺るがせた。
爆発に巻き上げられた土砂が容赦なく降り注いでくる。

ギシャッ！

本当に、そんな音がして、騎体に警報が鳴り響いたのは、芳（かおる）だった。
言葉に出来ないほどのダメージが、疑似感覚として首と背中に走った。
メサイアの外部感覚を中の騎士に感じさせる、例えば、手が何かを掴めば、掴んだ感覚が騎士にも伝わる。そのシステムは当然ながら肝心の騎士をショック死させないために、一定以上の感覚は伝達するクラッチをカットする仕組みになっている。
そのハズなのに、首にきたダメージは、痛いどころではない。
模擬訓練で首筋にもろに模擬刀を喰らった、あの時そっくりだ。
むち打ちになったあの時は治療だけで１ヶ月近く首にギプスをつ

けた。

ああ……再発するな……これ。

「芳(かおる)っ！？」

「少尉っ！」

痛くて目も開けられない。

「……何が起きたの？」

「飛鼠(ひそ)の残骸が飛んできた！」

ガギッ

ギィィッ！

金属同士が動くイヤな音がした。

「い、痛い……」

「芳(かおる)の頭部にモロ命中っ！川崎中尉！？生きてますかっ！？」

ＳＴＲシステムから手を外し、首を掴んだ芳(かおる)は思った。

怪我の功名って……こういうことじゃないと思う。

「負傷！？」

芳(かおる)とＭＣ(メサイア・コントローラー)川崎中尉が負傷した。

その第一報を聞き、美奈代は自分の身体から血の気が引けたのを確かに感じた。

「落下した敵騎を騎体の首にうけて！」

涼は一気に言った。

「首をねんざしたと――――ショックで川崎中尉は意識不明、気絶したものと」

「下がれっ！」

美奈代は即座に命じた。

「狙撃隊が下がる！前衛は後方警戒、空いた穴を斬込が埋めるっ！フォーメーション組めっ！バラけるな！？複数で襲われたらアウトだぞ！」

敗戦　第一話

「仙台方面と思いきや」
収容される狙撃隊の“白龍”達を見守りながら、高木は言った。
「本命は福島だったと？」
「まだわからん」
美夜はそっけない。
「しかし」
平野少尉騎、着艦します！
ズンッ
甲板に数百トンの重量物が着艦し、艦が軽く揺れた。
脚を踏ん張ってバランスをとりながらも、高木は不服そうだ。
「単なる哨戒部隊にしては、規模が大きすぎる上に、主力が飛鼠（ひそ）となれば」
「……難しい所だな。飛鼠（ひそ）を、数騎の部隊であちこちにバラ撒いているとも聞いている。その途中だったとも考えられる。何しろ、飛鼠（ひそ）はともかく、肝心の妖魔部隊がいない」
「成る程……ですが、喜多方経由で猪苗代、郡山へ抜けるルート上の橋頭堡を得るための部隊では」
「……怖いな」
美夜は頷いた。
新潟から西会津経由で会津若松。
会津若松からからは、細くても阿賀野川経由で栃木県へ抜けるルートがある。
そこを防衛できなければ……いや、大型妖魔の移動には不利だ。
美夜は地図を見直した。
猪苗代湖を経由して郡山。
今、郡山を確保すれば、仙台防衛線上の人類側部隊は完全に孤立し、包囲殲滅を待つだけになる。

そして、魔族軍は仙台防衛線を東西双方から挟撃出来る上、白川から栃木へと侵攻する足がかりを同時に得ることになる。

「まったく」

そんなことになったら、郡山奪還に敵の掃討、仙台方面の残存部隊の救出と、仕事ばかりが増えるじゃないか！

「あのバカ亭主……戦略はともかく、戦術はからっきしだから」

美夜は毒づくと、戦況モニター上に表示された、付近の友軍情報を確認した。

戦場はあくまで仙台方面。

それが陸海軍、そして近衛のほぼ共通したスタンスだ。

戦力も資源も何もかもが制限されている中、“もしも”を言ったらキリがない。

否、誰もが精一杯の中で、誰しもが、その“もしも”に備えるという、余計な重荷を背負い込みたくないのが本音だ。

美夜にもそれはわかる。

わかった上で……この現実は、備えを怠った美夜達人類の怠慢を嘲り笑っている。

「私、本当によくあんなのと結婚したものよ……」

「何か？」

「何でもない……下でのんびりしている二宮大佐を呼び出して」

●福島県　近衛軍陣地　内親王護衛隊（レイナガーズ）司令所

「言いたいことはわかった」

あちこちが潰れたり歪んでいるパイプ椅子にどっかりと腰を下ろした黒髪の美女が、コーヒーの入ったマグカップを片手に答えた。

「教え子が心配って、ただそれだけじゃないんでしょう？」

「当然です」

麗菜内親王と、二宮だった。

「敵が地下を侵攻している恐れがあることは、測候所から伝えられる地震観測からも明らかです」

「微弱な揺れが２４時間……か」

うーん。

麗菜内親王は、腰まで伸ばした髪を掻き上げ、椅子の背もたれに身体を預けた。

「どの辺まで来ていると思う？」

「猪苗代湖は越えないと思います」

「さすがに湖をぶち抜くほど、愚かじゃない……か」

麗菜は椅子から立ち上がると、テーブルに置かれた地図を指でなぞった。

「……」

「……どうしたの？」

「……いえ」

じっ。とその仕草を眺めていた二宮は、我にかえった様子で視線を床に落とした。

「へんなの」

「……今更」

二宮は複雑そうな表情で、口の中でモゴモゴと何事かを呟いた。

――――似すぎてるんですもの。

そんな風に聞こえたが、麗菜は無視した。

「近隣で、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を運用出来る部隊は」

「いません」
「何でよ」
「第１０３中隊を我々の代わりに後退させたばかりです」
「……誰よ。そんなことしたの。現状、わかってんの？これから広域火焔掃射装置（イーパーズフレイム）が必要になるって時に、何考えてんのよ。これだから現場のことがわかっていない」
「殿下ですっ！」
たたみかけるように、二宮は半ば怒鳴った。
「前線に出たいから、あの中隊にポジションを代われと命じられたのは殿下ですっ！」
「……日菜子、ね」
「麗菜殿下」
「全く、あの子にも困ったものだわ」
「……あなたには負けます」
「ありがと。それで、あんたの優秀な教え子達は？」
「西会津町ですから、新潟県と福島県の本当に境に展開、越境をもくろむ敵と交戦中です」
「成る程？阿賀野川と国道４９と４５９、さらに県道３８４号線が通る交通の要衝……魔族軍としては確保して起きたいルートね」
「はい。磐越自動車道はトンネルを爆破処理してあります。道を利用するなら、こちらでしょう」
「妖魔部隊はその地下を通して、メースは上でお膳立て……か」
麗菜はマグカップをデスクに置いた。
「真理？子供達には現状死守を命じて、その間にあなたは部下と一緒に猪苗代湖に向けて移動しなさい。必要なモノは全て持って行っていい」
「よろしいのですか？」
「いいわ」
「では」
二宮は突然、麗菜の腕を掴んだ。

「来て下さい。必要ですから」
「……最近、ヒネくれてきたわね」

「はいはい」
通信モニターに表示された命令文を見た美奈代が剣呑な顔で頷いた。
「上層部（おかみ）にとっちゃ、私達なんざ消耗品なんでしょうけどねぇ」

撤退不許可。
現状死守。

命令はそれだけだ。
気楽に言ってくれる。
いっそ、お菓子は三百円まで。とか、家に帰るまでが戦争ですよ。とでも言ってくれたって、全然違和感ないぞ？
飛鼠（ひそ）達を相手に四回も押し返しただけで十分じゃないか。
補給もしたいし、関節部もそろそろ冷却しなくちゃマズい。
根性だけで戦争に勝てたら苦労なんて誰がするものか。
命令下せばそれで済むほど、世の中は甘くないんだぞ？
「ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）で補給物資を空中投下してくださるそうです。今、“鈴谷（すずや）”を発艦。到着は１０分後」
「増援もついでに投下してもらえないでしょうか」
「無理でしょうね……新たな反応、騎数１０以上……反応は、メースです。このままですと、接触まで後１０分」
「補給とタイミングが一緒か……飛鼠（ひそ）じゃダメだからって、メースがご登場ですか」
「最近、随分ヒネくれはじめましたね」

「何とでも。柏、前衛隊の状況知らせて」
「各騎ステータスはグリーン……」
言いかけて、美晴は最後の言葉に追加した。
「限りなくイエローに近い、グリーンです」
「了解……後方2キロ後退。そこで補給物資を受け取って。後退中に関節部の冷却だけでもやっておいて。上から、ここの死守命令が出たけど、2キロの後退なら許容してもらえると思う」
「死守……って、気楽に言ってくれますね」
美晴の声も不機嫌そうだ。
「私達の命を何だと思ってるんでしょうか」
「消耗品だろ？ところで、上空にいたはずのQB隊は？」
「蔵王山上空付近で飛行系妖魔が出現。そちらの迎撃に回されました」
「あいつら、使えない……」
「元から使えないでしょうに」
「……ごもっとも。斬込隊全騎、前衛隊からポジションを引き継ぐぞ」
美奈代の目の前で、ゆっくりと美晴達が近づいてくる。
いつもの見慣れた光景だ。

パッ

強い光が美晴騎と都築騎の所で炸裂する。
「えっ？」

ドンッ！

2騎に生じた強い光が、エネルギーに変換され、そして、2騎を引きちぎった。

「柏ぁぁっ！」

まるで狙い澄ましたように2騎の右腕を付け根から破壊してのけた爆発。

腕が宙を舞い、騎体がくるくると、まるでダンスするかのようにスピンした後、地面に倒れる。

美奈代の目には、それが映画のスローモーションでも見ているかのように、恐ろしくゆっくりと感じられた。

「斬込隊、散開っ！」

シールドを構えた美奈代が降下を中止し、空を駆け上がった。

「――――どこからっ！？」

「柏中尉っ！」

「美晴さんっ！」

隊長騎を潰された前衛隊が混乱している。

「山崎っ、柏達を下げろっ！戦況は不利っだっ！」

「しかし、死守命令が出たばかり」

「責任は持つ！」美奈代は怒鳴った。

「指揮官はこういう時に責任をとるための存在だ！さつき、麗央、バックアップしろっ！擱座した2騎を――――っ！」

騎体を空中で思い切りのけぞらせた所を、ビームが走り抜けた。

装甲が焼かれ、騎体表面温度の異常を示す警報がコクピットに鳴り響く。

「下がれっ！」

しゃべり過ぎた。

美奈代は舌打ちした後、体勢を整えた。

「前線指揮官命令だ！」

「了解っ！」

山崎は野太い声で怒鳴った。

「すぐに戻りますっ！それまでっ！」

「大尉っ！」

MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）から、牧野中尉がさけぶように告げた。

「前方のメースの中に、大型騎！」

「それが！？」

斬艦刀を引き抜き、ほむらや祷子達とのフォーメーションを確認する。

すぐにやれる！

「月城大尉達をやった、あの“緑の悪魔”ですっ！」

「ほぉ……」

“緑の悪魔”と呼ばれたのは、楓の駆るイスラフェル（フィーリア）だ。

護衛部隊に配備されたメースと並ぶと、大人と幼稚園児ほども違う巨大な騎が行った狙撃を見た老人は、しきりに感心した様子で薄い顎髭を撫でた。

「この距離で、2発をほぼ同時に当てるか」

長距離狙撃モードに合わせたメース、“エクスデーヤ”のコクピットの眼が、敵騎が2騎、ほぼ同時に腕を吹き飛ばされる光景をしっかりと捕らえていた。

エネルギー解放による爆発が、敵騎を吹き飛ばした。

「成る程？ズルド奴……たいした娘を持ったものだ。のう？ラドラーよ」

「ふん」

鼻で笑った声がモニター越しに耳に入った。
「魔界の最新鋭中の最新鋭だろう？この程度、出来んでどうする」
「カッカッ……ワシは、腕と見たが」
老人は笑い声を上げた。
「ラドラー、お主は騎体の性能とみたか」
「当然だ」
モニターの向こうで、役者のような男が不機嫌そうに答えた。
「いくら爺の旧知の娘とはいえ、小娘に出来る技ではないぞ」
「……ふん」
ズンッ！
一発が、空を舞う別な騎を襲う。
敵騎はギリギリで回避したが――
「ほら、見ろ」
「……フム」
「それにしても……フン……あれがデミ・メースか」
モニターの向こうにいる相手は、背の高い、ニヒルな顔立ちは俳優顔負けの魅力に満ちあふれている。
「まぁ、よいわさ。シルビ。データとっておけよ？」
彼の横に立つメースを操る人物から部下に対する命令に、彼は噛みついた。
「ホーサー爺。お主は考えすぎだ」
「ラドラー。お主はむしろ楽観的ずきるぞ。人間界についたばかりじゃ――ことは慎重に」
「フン――丁度良い門出祝よ」
「違いない」
二騎は剣を抜いた。
「むこうは3騎。こちらはどうする？」
「ワシだけでよいじゃろう。気の毒な程じゃ」
「なら、俺は後退する先にあるだろう母艦をいただこう」
「好きにせい」

「そっちこそ、俺一人でたくさんだ――――全騎、手出し無用だ！」
「はっ！」
隣に並ぶメース達が動き出した。
“ホーサー爺”は、老獪という文字を具現化したような顔を楽しげに歪め、騎の腕を軽く上げた。
ジャカッ！！
その途端、ホーサー爺の部下達がシールドを構える音が響き渡った。
久々に聞く戦場での音は、背筋がしびれるほど麗しい。
「――――では、ワシも戦(や)るとするか」

敗戦　第二話（前書き）

今週の一言“ご冥福をお祈りします”

盛者必滅、生者必死（？）会者定離。
南無阿弥陀仏――ちーん。

へ？

まぁ、読んでみてください。

敗戦　第二話

強いっ！

数度にわたる斬撃を回避するだけで精一杯だ。

「な、何だコイツは！？」

首を狙った戦斧の横薙ぎの一撃を、首を引っ込めるようにして回避。

そこを左からの蹴りが襲ってくる。

肘のガードスパイクで阻止したと思った途端、真っ正面からビームの一撃が騎体を掠める。

「バケモノっ！」

「……あなたには」

牧野中尉がしみじみとした声で言った。

「言われたくないでしょうねぇ」

「……ほう？」

ホーサー爺は、細い眼を小さく見開いて、スクリーンに映し出される敵をしげしげと見つめた。

「成る程？これは……」

自分の攻撃をここまで止めた相手は久しぶりだ。

「ズルドが手こずるわけじゃわい」

背筋が寒くなるほどの興奮が、心地良い。

「長生きは、するもんじゃなぁ……」

白いデミ・メースが、若干の間合いを開いた。

長剣の間合いをとろうというのが、痛いほどわかる。

「ふむ……まだ未熟」

少し後退した途端、長剣の突き技が飛んできた。

斬撃と見せかけた突き技。
並の者ならば仕留められているところだろう。
だが――
「甘いわっ！」

「なっ！？」
驚愕するしかなかった。
敵は易々と斬艦刀を回避した。
そう理解するより早く、斬艦刀の嶺を掴んだ敵騎は、戦斧で斬艦刀を真っ二つに叩き斬った。
振り下ろされた戦斧が下からの逆袈裟斬となって美奈代にめがけて襲ってくる。
「こ――――こんなっ！？」
とっさにガードした左腕がシールドごと吹き飛び、宙を舞う。
「大尉っ！」
「美奈代さんっ！」
ビームの光線が2騎に割り込むように走り、敵騎が離れる。
ほむらと祷子だ。

助かった。

そう、思ったのは一瞬だ。
眼下を、敵騎が編隊を組んで通り過ぎていく。

……だめだ。

「下がれっ！」
美奈代はさけんだ。
「敵は“鈴谷（すずや）”を――――」

「きゃぁっ！」
その叫びを止めたのは、祷子の悲鳴だった。
「風間ぁっ！」
“エクスデーヤ”の肩から張り出した“槍”が、“白龍”の右胸に深々と突き刺さった。
コクピットハッチが吹き飛び、中から吐き出された黒煙が“白龍”の顔を覆う。
「き、貴様ぁぁぁっ！」
風間騎を突き刺したまま、“槍”が“エクスデーヤ”の肩から外れ、風間騎が空中をゆっくりとした速度で落下を開始する。
腰から引き抜いた太刀を振りかざし、美奈代は敵に肉薄した。
殺す
殺す！
それだけが、美奈代の意識の全てを支配した。
今まで、こんなことはなかった。
相手への憎悪だけに支配されたことはなかった。
だが――目の前で戦友を斃されたことで、頭に完全に血が上った美奈代は、意識を、心のすべてを憎悪に委ねた。
心を浸食した憎しみのどす黒い何かが、一瞬で美奈代の心を染め抜いた。
「ふんっ」
襲い来る隻腕の敵を相手に、ホーサー爺は鼻で笑った。
「感情だけで戦場に出たらどうなるか」

ガンッ！
渾身の一撃を回避した敵騎は、すれ違い様の膝蹴りで美奈代騎の右腕の肘をへし折った。
右腕が奇妙な方向に曲がり、太刀がもげた。

「教えてやるわっ！」
ホーサー騎の戦斧が、美奈代騎の右の翼を根元から断ち切った。
バランスを喪失した騎体がスピンを始めた。
それでもホーサーは追撃を辞めなかった。
「ほらほら」
まるで、よちよち歩きの幼子を後ろから囃し立てるように、ホーサーの口元には笑みすら浮かんでいた。

バンッ！
鈍い音がして、敵の左の翼が放棄された。
敵の騎体から、脱落したパーツがいくつも空中を飛んでくる。
相手が投げつけているわけでもないのに、ホーサーはそう捉えた。
「ワシ相手にモノを投げつける」
バンッ！
横に払った戦斧が、その中の一つを断ち切った。
その途端――――

ズズンッ！

鼓膜をたたき壊そうというのか。
突然の凄まじいほどの破裂音と、閃光がホーサーの感覚を襲った。

「ぬぅっ！？」

メースの“眼”と“耳（センサー）”が奪われた。

「ぬかったか！？」
ホーサーは即座に騎体を前進させた。
後方を、光の柱が突き抜けていった。
後退すれば直撃は避けられなかった。
並の者なら今の一撃で斃されていた。
つまり、敵は並の相手ではないということだ。
「――――やるわっ！」
そうでなくては！
ぼやけながらも回復を始めたスクリーンを頼りに、ホーサーは敵を見つけた。
手袋の中に汗を感じた。
じっとりとした、この感覚は本当に久しい。
むしろ嬉しいとさえ言える。
「ほんに、よくやった！」
翼も装甲も両腕さえ失って尚戦意を失わない敵に、ホーサーは戦斧を構え、そして斬り込んでいった。
「褒美を受け取るがいいっ！」

「損害知らせ」
聞かなくてもわかるが。
口に出しかけた言葉を美夜は飲み込んだ。
喉が痛い。
従兵に水を求めたい所だが、肝心の従兵は破片を腕に受けて医務室送りだ。

船体の状況を示すステイタス・モニターはほとんど真っ赤。
沈まなかったのが、少なくともこうして浮いていているのが奇跡というべきかもしれない。
右膝を破壊されて横たわる“白龍”が甲板の隙間から立ち上る煙の向こうに見える。
窓はほとんど割れている。
まともな窓は残っていない。
対空砲も即席の主砲もほとんど破壊され、まともに外見を残している2番砲塔は明後日の方向を向いたまま動かない。
「大破」
高木副長は答えた。
額から出血したのを無理に包帯がわりに巻いた手拭いで止めている。
「左軸足止まりました。右軸足出力低下。現在、傾斜3度。航行5ノット」
「戦闘速度でそれか」
「はい」
「乗組員他の損害は」
「集計はまだですが」
ゴホッ、ゴホッ！
割れた窓から入り込んでくる煙に咽いだ副長は、数回咳払いした。
「失礼……最低でも戦死５０。負傷は１００を超えています。現在、付近に救難信号を発信中」
「……敵は引いたか」
「第二波が来る可能性は捨てきれません」
「御真影と艦旗を負傷者と共にランチへ移設しろ。救護所はランチ用デッキへ移動。搬送準備を始めろ。第二波が来たら総員最上甲板。艦は放棄する」
「……残念です」
「メース３０騎相手にここまでやれたんだ」

美夜は楽しげに笑った。
「“白龍”の戦闘能力も実証できた。満足すべきだろう……副長」
「艦長こそ、ランチへお移り下さい」
高木は真顔で答えた。
「ここは自分が引き受けます」
「馬鹿な」
ドスッ！
鈍い音がして、美夜の身体が崩れ落ちた。
「すまんな。操舵手」
「いえ」
拳銃を逆手に持った芥川中尉がホルスターに銃を収めた。
「艦隊副司令に恨みを買いたくないのでね」
「そういうことだ……憲兵」
艦橋入り口に立っていた警備担当の憲兵が、目の前で起きたことが信じられずに唖然としていたが、突然、自分を呼ばれたことで我にかえったのか、一歩、前に出た。
「艦長が負傷された。ランチ用デッキにある救護所へお移ししろ。お前は、そのままそこにいてよい」
「し、しかしっ！」
憲兵は怒鳴った。
「自分は、艦橋警備を命じられていますっ！持ち場は離れませんっ！」
「……なら」
高木と芥川は顔を見合わすと苦笑いして言った。
「艦長の護衛についてくれ。憲兵で手近にいるのは君だけだ」
「すみません……」

甲板に横倒しになった“白龍”のハッチが整備兵によって開放され、中から這い出てきたのは寧々だ。
「しくじりました」
「なぁに」
坂城が悔しそうに顔を歪める寧々の肩を叩いた。
「直してやるさ。それが俺達の仕事さ。歩けるかい？」
「ええ」
顔をしかめにながらも、寧々は気丈に立ってみせた。
「よし……救護所は満員御礼だ。今、軽い怪我でいこうものなら後悔するぜ？……おお、ダンナもお戻りだ」
二人が見上げる上空を、装甲をボロボロにした“白龍”達が通過していった。
「狙撃隊、小清水より“鈴谷（すずや）”」
「こちら“鈴谷（すずや）”。甲板のデッキステータスはレッド。甲板への着艦は許可出来ない」
「了解――ビームライフルの予備エネルギーパックを下さい」
「整備班が手配する。甲板に出すが、いいか？着艦するな？下手すれば甲板が沈む！」
「り、了解――や、山崎中尉は！？」
「こちら山崎」
「そちらの状況は？」
「こちらも左腕大破。右腕でビームライフルを操作するのが精一杯です……川上少尉が大破。“鈴谷（すずや）”にすでに収容されています」
「都築少尉と私達だけ……ですか」
「よくご無事で」
「第四種装備は」
涼は血がこびりついた顔を歪めて笑って見せた。
「ボロボロ。コクピットの中を数回、破片が駆け回りましたけどね」
「……僕も、都築さんも似た様なものです。けど、女の子となれば事情は違いますから」

「お気遣いは感謝します……斬込隊ですけど」
「……わかりません」
山崎は答えた。
「通信途絶のまま。少なくとも、この状況ですから」
ピーッ！
警報が鳴り響いた。
「所属不明騎接近中！」
高良中尉が乾ききった喉を絞って、声を上げた。
可憐だった声はしわがれて聞くも無残な状況。
サバイバルキットから取りだした水筒をもったショコラが半分泣きながらおろおろとしていた。
「はぁ……はぁ……識別装置発信無し」
「――――行きます」
涼は、自分に言い聞かせるように頷いた。
「続きます」
「いえ。艦を守ってください。最悪、私が時間を稼ぎます」
返事を聞かずに、涼は所属不明騎めがけて騎体を進めた。

“鈴谷”は郡山市郊外に着陸した。
そういえば綺麗に聞こえるだろうが、実際は違う。
力尽きて不時着したのだ。
その後方には、艦がえぐり取った百メートル近い着陸の後が残っている。
最低限度の乗組員、高木副長と操舵手、そしてSC、そして志願して残った通信兵一人を除き、負傷兵と動ける乗組員の大半を強制退艦させた“鈴谷”が、半ば最後の意地を見せつけるかのように、

艦を大地に横たえている。

しかし、その命運は誰の目にも明らかだ。

近隣の消防車が必死になって注水しているのは、弾薬庫。

水浸しにしてでも、ここさえ延焼を食い止めることが出来れば、

艦とその爆発によって近隣の民家が吹き飛ぶことは避けられる。

中には――いろいろと厄介な爆発物が詰まっていることは、皆が知っているのだ。

その一方で――

「――ごめん」

“鈴谷（すずや）”から少し離れた場所。

飛行可能な、“鈴谷（すずや）”所属のメサイア隊が着陸ポイントとした、

耕作放棄された農地で、涼は、うなだれるほむらを前に頭を下げた。

「よく帰ってきたね。そういうべきなんだろうけど、そう、言わなきゃいけないんだろうけど」

「……」

瞳に涙を一杯にためたほむらの顔を、涼はまともに見ることが出来ない。

「とても言える心境じゃない……わかって」

負傷兵を搬送するＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）が発艦と着艦を繰り返す轟音が辺りに響く。

ほむらの口元が、何事か動いたが、涼にはそれが届くことは無かった。

芳（かおる）は首をねんざして“鈴谷（すずや）”に収容され、美晴とさつきは爆発によって肋骨などを骨折、及び打撲して、艦では処置できないとして、福島市の病院にＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）で搬送された。

寧々と麗央は艦防衛のために必死になって戦ったが、多勢に無勢は避けることが出来なかった。
共に大破。
寧々は膝を打ち抜かれて擱座した所を集中砲火を受け、それを助けようとした麗央もまた、まるで射的の的のように袋だたきにされた。

そこに飛来したのが所属不明騎――識別装置を破壊されたほむら騎だった。
ホーサー騎に槍で串刺しにされた風間騎を助けて後退しようとした所を“鈴谷（すずや）”攻撃から戻ろうとしたメース達によって、半ば弄ばれるように破壊された。
ハッチは吹き飛び、各所で漏れたオイルが白い騎体を血のように汚している。
“白龍”強襲型の特徴であるはずの翼は跡形もない。
翼の根元は、戦斧で断ち切られた時に出来た無数にして無残な切り口をさらしている。
装甲は戦斧によって溶かされた斬痕が無数に残っている。
動くだけで奇跡に近い。
そんな状況で友軍騎を回収し、生きて帰ってきたほむらは賞賛されるべきだと、涼も思う。
思いたい。
だけど、状況が、涼の感情が、涼にとっての全てがそれを許さない。

戦死ゼロ

めでたい限りだ。

母艦は大破。

空を海とする飛行艦は、今の“鈴谷（すずや）”の状態を不時着とは言わない。

沈んだ。というのだ。

それだけではない。

勇猛を持って聞こえた部隊も今は壊滅状態。

まともな騎体は残っていない。

他部隊から栄光と羨望をもって輝いた騎体達は無残な姿を衆目にさらしている。

最悪は――

「お姉様が……」

ひくっ。

涼の眼から涙が零れ、軍靴に当たって弾けた。

「行方不明だなんて……」

生死不明1。

部隊で三人目の戦場での行方不明者（ＭＩＡ）は、泉美奈代中隊前線指揮官。

涼にとっては、掛け替えのない最愛の存在だった。

「……ごめ」
耐えられなくなったのだろう。
ほむらが、しゃくり上げながら、やっとのことで声を絞り出した。
「ごめん……なさい」
ほむらの頬を涙が零れては落ちる。
「私だけ……生きて帰って……ごめんなさい」
「風間中尉は」
涼は、ほむらの肩をしっかりと掴んで、その場に崩れ落ちることをやっとのことで堪えていた。
「……生きている。気絶しているけど、生きているよ」
「中尉を戻して、大尉に加勢すべきだった。それを私はしなかった。罪は、私にある」
「やめてよ！」
涼は鬼のような形相でほむらを睨み付けた。
「だった。しなかった。だから罪！？何よそれっ！」
「……」
「自分だけ、悲劇のヒロインにでもなったつもり！？芳（かおる）を戻した後、すぐに戦線復帰しなかった私に対する当てつけ！？やめてよねっ！」
「……少尉」
「……ごめん」
涼は、歯を食いしばって頭を下げた。
「言い過ぎた……でも、わかってよ……私だって……辛いんだよぉ……」
ううっ！
うわぁぁぁぁぁっっ！
声を上げて泣き崩れた涼を抱きしめたほむらもまた、泣いた。
声は出なかったが、ほむらは生まれて初めて、人のために泣いた。

泉騎、発見。

猪苗代へ向かった内親王護衛隊（レイナガーズ）の一騎が、哨戒任務中に山麓の斜面に転がっていた“白龍”の残骸を発見した。

発見の第一報を受けて緊急発進した二宮大佐騎によって回収された“白龍”は、無残な姿を駆けつけた涼達に曝けだした。

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の生命維持装置は作動しており、破壊された内部システムに挟まれた状態で生存していた牧野中尉が、内親王護衛隊（レイナガーズ）所属の整備部隊によって、３時間がかりで騎体から引き出された。

しかし――

「これ……何ですか」

涼は、目の前に横たわっている巨人が何だかわからなかった。

否、巨人の一部がわからなかった。

見たことはない。

こんなの、見たことはない。

「……わからない」

呆然と立ち尽くす涼の横で、二宮は首を横に振った。

「戦闘データが回収出来ない現状、何があったかは、牧野中尉の復活を待つしかない。敵が、何をどうしたのか。これは意図的なものか、それとも偶然か」

「だって……」

震える涼の細い指が示した先。

そこは、“白龍”の胸部。

コクピットブロックがあるはずの場所。

今、そこは――

「だって、だってぇっ！」
二宮に羽交い締めにされても尚、暴れることをやめない涼の前にある“白龍”のそこは完全にえぐり取られ、騎体を構成するパーツが肉片の切り口のような無残な姿をさらしていた。
「いやだ！やだやだやだぁぁっ！いやぁっ！こんなのいやあぁぁぁっっっ！」

衛生兵っ！モルヒネ持ってこいっ！
二宮の怒鳴り声は聞こえていない。
涼は喉を絞り、さけぶ。
その絶望の声は、誰にも届いていない。

この戦いの結果、そして、近衛軍の記録上、泉美奈代は生死不明者のリスト上に記入された。

敗戦　第二話（後書き）

……五年間、主役張ってくれた泉美奈代への声援……考えたらなかったなぁ。
まぁいいや。

殺した所で、読んでくれる人から文句が来るわけでもなし。多分。
誰も褒めてくれないだろうけど、作者だけはさすがによく頑張ってくれたって褒めてあげる。出ないと化けて出てくるだろうしなぁ……。

偉いぞ、偉かったぞ！美奈代っ！

というわけで、コイツのことはさっさと忘れて、次からの主役は、本当の初期設定通り、褄子でいいかな?それとも、他のキャラにしようかな。
ほむがいいかなぁ。
新キャラも作りたいし……。
あ、新キャラとか設定のアイディア大歓迎です。
よろしくお願いしますっ♪

敗戦　第三話

漆黒のメース達が整列し、パイロットを降ろすため、膝を屈する。

風に乗って、ヴォルトモード軍の旗がひるがえる中、魔族達が対面していた。

「ウォルネシア辺境伯、ハウル・ゲーブル・ラドラー以下、義勇軍メサイア第２４大隊、着任」

「同じく、スワルト・ニューマン・ホーサー以下、義勇軍メサイア第２５大隊、着任」

「……ご苦労」

答礼したのはズルドだ。

場所は新潟。

魔族軍が新設した門（ゲート）の近く。

ホーサー達の近くでは、イスラフェルが膝を屈している。

「本当に」

ハッチから出てきた娘をちらりと見たズルドは、ホーサーの顔を見ると、不意に複雑な顔になった。

シワばかりが目立つその顔は、老人のそれだが……。

「着任前に、娘の世話を頼んですまなんだな。それにしても、三千年も見ないうちに、いい面構えになったな――スッパード」

ズルドの大きな手が、ホーサーの老いた手を握りしめた。

「カッカッカッ……その愛称で呼ばれたのは、女房が死んで以来、初めてじゃな」

顔を崩して笑う。

「あの金髪の美人か？」

「結婚したのは黒髪じゃった。最後はいいバアさんだったよ」

「女遊びが過ぎたから、こんなに老けたんだ」

「ふん……まぁ」

ホーサーは薄くなった髪を掻いた。
「奥方と、“本当の”ご息女は……残念なことをした」
「……この世界では、三千年も前のことだ」
「お前さんの感覚なら、2年と経っておるまい」
ズルドが顔を背け、ホーサーは遠い目になった。
「あれはワシが重傷を負って後送された便の次に出たフネじゃった……」

三千年前……先の戦争末期、魔族軍は家族や負傷兵を魔界へと後送した。

ズルドとは戦友であり、その下でメース使いとして縦横無尽に活躍していた若き日のホーサーは、神族軍のメースとの交戦で重傷を負い、一命は取り留めたものの、後送が決定。
満足な医療設備がある艦の手配がつかなかったことを知ったズルドの妻、コーシウスが自らと娘とホーサーとの乗船を変えたのだ。
コーシウスとその娘、フィーリアと別れたのは、その艦のタラップを担架に乗せられ、運ばれている時だった。
ホーサーは、その時のコーシウスの顔を忘れていない。
かつて、ズルドと彼女を巡って殴り合いになったこともある。
彼女がズルドと結ばれたと知って泣き叫んだこともある。
冷静沈着にして剛胆、「不死身の鬼」と天界までその名を轟かせた彼を、そこまで狂わせた女性――コーシウス。
彼が彼女を見たのは、その時が最後だった。

閉鎖空間を利用した魔界に通じる門（ゲート）の中で併走していた艦と接触。
艦は沈んだ。
艦内の1万近い乗客乗員諸共――。

その中に、コーシウスとフィーリアがいた。

「奥方が、ワシに譲ってくださったばかりに……」

「……主の御意志によるものだ」

うなだれるホーサーの肩に、ズルドが手を置いた。

「ホーサー。久々の人間界――アフリカでは相応に活躍したそうだな」

「……大したことはしていない」

ホーサーは、ちらりと横に立つラドラー卿を見た。

「こやつとその部下の功績よ」

「こちらが常に手こずった艦とデミ・メース部隊を仕留めてくれたというではないか。正規軍なら、勲章も二階級特進も望みのままだぞ」

「大した手応えはなかったがな……褒美をくれるなら、後で頼みがある」

「何でもいえ。答えられる範囲は融通を利かせよう。物資も人員も厳しい中だからあまり贅沢を言われても困るがな……現状、戦える戦力があることは有り難い。昔の活躍が復活するものと、期待しているぞ？」

「年寄りの冷や水は禁物じゃぞ」

「フン……戦いたくて来たんだろう？」

ズルドはホーサーの背を軽く叩く。

それだけでホーサーは吹き飛ばされそうだ。

ズルドはそんな彼に自信満々に言った。

「お前は根っからの戦士だ――俺にはわかる。戦場から離れられない、そんなヤツだよ、お前は」

●旧山形市郊外　魔族第三軍本陣。

ズルドの目の前に広がるのは、市街地だろうが農地だろうが、すべてが穿り返され、縦横に掘られた塹壕陣地が広がる戦場だ。
「スッパード達を動かす程でもなかったか……な」
ズルドは、マーリンから布陣終了の報告を聞き終え、満足そうに頷いた。
「彼なら安心です」
マーリンも頷いた。
「あの戦上手なら、上手くやってくれるでしょう」
「引退したスッパードを、無理に引っ張り出したのだが、楓のことがあるとはいえ、俺もヤキが回ったか？」
「まさか。あの白い悪魔を仕留めてくれたんです。むしろ英断でしょう」
「それにしても……だ」
ズルドの額に青筋が浮かんだ。
「何故だ？我々は人類絶滅という魔族全体の方針を実現するために戦っているのだぞ？
だというのに、何故、魔界は我々に支援を回さない？義勇軍を黙認する程度？……俺にはわからん。今の、魔界連中の考えがわからん！」

「それでも」
マーリンはなだめるように言った。
「義勇軍と義捐金は戦争継続には十分な額だと聞いています。帝国議会や企業、臣民に至るまでが、何らかの形で支援してくれていると」

マーリンの言葉は本当だ。

“人類を根絶やしにして人間界の生態系に安息を！”
“青き清浄な世界を再び人間界に！”

魔界は魔族軍を支援する声に満ちあふれている。

魔界だけではない。

天界でさえ、“かつての敵、魔族たるヴォルトモード卿を支援せよ”という意見が公然と語られ、肖像画屋にはヴォルトモード卿の肖像画を求める客が引きも切らない。

家に皇帝家の肖像と共にヴォルトモード卿の肖像を飾るのがステータスとされている。

「家に肖像画を飾っていない」というだけで、社会的に排除する動きさえある中、企業や政治家、そして貴族は、ヴォルトモード軍にどれほどの寄付、寄贈を行ったかで両界での価値が計られる。

その動き自体、本当にヴォルトモード卿とその軍に対する理解と支援の意志があるかは疑わしいが、少なくとも、おかげでメースや飛行艦を生産する企業は、ヴォルトモード卿へ寄贈するためのデッドストックになっていた中古騎や中古艦の再生に大童だ。

連日、飛行艦やメースが前線に送られ、魔族が義勇兵として人間界に向かう。

自らが人間界に赴けない者は、代理人を義勇兵として送るか、妖魔を送り込む。

このため、人間界に通じる門（ゲート）は連日大にぎわい。

それに触発された若者達がこぞって義勇軍として人間界にはせ参じる有様だ。

義勇軍参加希望者で溢れかえっている。

ただし――

恒常的に物資・軍資金不足に悩む魔族軍にとって、兵力の著しい増加は、決して歓迎すべき事態ではなかった。

兵力とは、何もしなくても物資を消費する存在であり、それが急激に増えるとは、即ち、物資の消費が増えること以外の何者でもない。

問題は、物資だ。

兵力は増えるが、肝心の、彼等を養う物資と資金が足りないのだ。

門（ゲート）から前線に送られていた物資は、連日の人類側の反攻作戦に対応しつつ、増大する一方の義勇軍を養うという二重の負担によりたちまち底を突き、占領地の捕獲物資物資を何とか工面、流用して凌ぐ有様だ。

ズルドでさえ、最近は人間の作った米の飯が主食だ。

補給部門は、物資を確保する前に市街地を焦土化する作戦に反対を表明している。

中でも申告なのが医療物資の不足だ。

治療専門魔法が発達し、脳みそから身体完全再生できる技術を持つ魔界とはいえ、包帯を使えば消毒薬も使う。点滴や薬も必要だ。

人間界には、魔族に合う薬は存在しない。

今の魔族軍は、絶海にして未知の孤島に上陸した海兵隊のような存在。

その母艦こそ、魔界という存在、つまり、最低限の生きる術でさえ、全ては魔界頼みだ。

天原商会が保有する全長3キロ級の病院船2隻を借り受ける契約が成立したとはいえ、魔界と天界共通の病院船及び医療活動専門部隊を示す“赤緑の二色ストライプ”で彩られた輸送艦1隻が週2回、

魔界と人間界をピストン輸送するだけでは、数十万の単位を超える手前の兵士達の医療を保証するにはまだ足りない。
この補給艦を含む、新潟県にある１２の超大型門（ゲート）を経由して飛来する輸送船団が到着しなければ、魔族軍は自然に瓦解するだろうことを、ズルドは保証できる。

戦争は、前面で戦う兵器より、後方で支援する補給、医療、その他の“戦わない部隊”がどこまで頑張れるかで勝敗が決するものだ。
いかに魔族といえども、その例外ではない。

今回の東北方面侵攻作戦も、苦しい中を遣り繰りして確保した物資を湯水のように消費させたからこそ、出来た行動であり、言い変えれば、この時点の魔族軍は貯金を取り崩しながら生きている失業者同然の立場だ。
物資を送ってくる門（ゲート）付近は物資を消耗する義勇軍ばかりで、彼等を養うために、本来は最前線に送るべき物資が消耗されていく。
前線に補給物資が届かない。
後方待機の義勇兵達を養うのに、前線向けの補給物資を回すしか方法がないのだ。

――お荷物。
――無駄飯喰らい。

義勇軍は、前線兵士から怨嗟を込めてそう呼ばれる存在にすぎなかった。
それなのに、事情を知らない義勇軍はとにかく前線に出たがる。
前線であるのに、日常生活と同じレベルの待遇を要求する。
義勇兵としての熱意だけなら諫めようもあるが、ここに貴族や家柄が絡むと手に負えない。
戦闘経験より家柄を前面に押し立て、下手をすれば自ら前線を作

り上げてしまう。
その火消しに正規軍が導入されることもしばしばで、兵力、物資共に浪費に近い消耗を強いられる。
後方部隊はこうした義勇軍絡みの対応に連日に曝され、結果として魔族軍は、人類ではなく身内によって完全な麻痺状態に陥りかけていた。

せめて――
ズルドは痛感する。
ホーサーのような熟練の兵士達だけが義勇軍なら、どれ程心強いだろうと。

「閣下」
幕僚の一人、カーラが踵を鳴らし、ズルドの前で敬礼した。
「ウェストフェリア公国義勇軍、モートラック卿が面会を希望されています」

ホーサーより先に、誰に頼まれたわけでもなく、山形へ乗り込んできた義勇軍部隊だ。
メース３００騎を超える頭数はあるが、肝心の補給物資も補給ルートも考えず、乗り込めば現地軍が面倒見てくれるとでも思い込んでいる幸せな輩だ。
人間界に来れば栄光と連日のパーティが待っているとでも思ったか？
ズルドは答えた。
「厄介な話だが……待たせておけ。すぐに行く」

「まったく！」
ホーサーの前で、ズルドはあぐらをかいてドカリと座った。
「義勇軍の連中には困るっ！」
「――――まぁ、そう怒るなズルドよ」
ズズッ。
茶をすすりながらホーサーは冷静に答えた。
「奴らとて、遊びに来ているつもりもあるまい」
「それ以上、もしくはそれ以下だ！」
ドンッ！
ズルドは、出された巨大な湯飲みを掴んで畳に叩き付けた。
「戦うという苦労を考えていない！自分達が攻め込めば、敵は勝手に自爆するとでも勘違いしている！俺達が今の今まで遊んでいたとでも思っているのか！？」
「ワシも、お主に頼まれて魔界で準備して、こうして手勢を連れてきた」
「スッパード達は別だ」
ズルドは湯飲みをあおった。
「貴様等並に使えれば、それはそれで助かるのだ。ところが、魔界でぬくぬくと暮らしてきた貴族のバカ息子共は違う」
「フン……だからこそ、ここに来たのよ」
「……」
「爵位を継ぐことも出来ず、飼い殺しにされた次男、三男、そして没落貴族達が巧妙を上げて、魔界で返り咲くことを望んでな」
「死ぬのは誰だと思っている」
「そんなこと」
フンッ。
ホーサーは冷たく答えた。
「ボンボン共に理解しろという方が無理じゃ。腹が減れば、誰かが

食事を用意してくれる。その茶一杯にしろ、茶を誰が栽培し、湯水をどう用意するか。そんなことを知ることさえない連中じゃ」
「どうしろというんだ」
「なぁに」
ホーサーは笑って言った。
「勝手にやらせておけ。好きに暴れて良いが、ヴォルトモード軍は一切の責任はとらんし、補給もせん。必要な物資も人員も、自前で用意しろと、そうはっきり伝えておけば良い。支援が必要なら、他の義勇軍同士で予め連携させておけばよかろう」
「……そこまではっきり言いづらいのが」
ズルドはため息と共に肩を落とした。
「身分階級の辛いところだ」
「地方公国の男爵と同じく伯爵……それが中央の爵位を持つ貴族相手では気後れするか」
「階級の縛りを、軍や非常時を楯に拒絶出来るなら、俺もここまで苦労していない」
「自己責任という言葉を教えてやるよい機会じゃろうに」
ホーサーは顎を撫で、ポツリと言った。
「義勇軍を受け付けている抜け作共に、その辺を徹底させるべきじゃろうな」
「俺の仕事か？」
「いや？あの中世協会とか言う連中の仕事、いわば、ガムロ殿の方に頼むべきことじゃろう」
「スッパード、お前、言ってくれんか」
「お主が行け。義兄弟じゃろうが」
「今や中央でも顔の知れた上に、老獪な交渉が出来るお前の方が、兄貴を説得しやすい」
「……まぁ、よかろう。ところで、ちと頼みがある」
「何だ」
「同時に、天壇の狂姫に渡りをつけて欲しい。この爺が欲しいモノ

があると」

悲しみのやり場　第一話

宗像が真菜に呼び出されたのは、夜、かなり遅くなってからだ。
「話とは？」
はっきり、宗像は真菜が好きではない。
何があろうが、敵に寝返った相手を好きになろうとは思わない。
それが身勝手だというなら好きにしろ。
私は、こいつとは違うんだ。
宗像はそう思っている。
真菜が宗像を呼び出したのは、ハンガーデッキのある城の一角。
普段は使用されていない部屋で、宗像と月菜が更衣室代わりに使用している。
室内には、かつての使用者のモノらしい瀟洒なデザインの応接セット、そして宗像達がロッカー代わりにしているクローゼットがあるだけ。
壁紙も古ぼけていて、よどんだ空気が着替えの時に使う香水の匂いに混じっている。
「……来たか」
真菜は先に来ていて、応接セットのテーブルの上に酒を用意していた。
否、先に飲んでいた。
「飲めるんだろう？」
「酒の席で詫びでも入れる気になったか？」
宗像は、向かいの席に座った。
「３時間前まで東京にいた。ビールにウィスキー、日本酒に缶チューハイまで、いろいろ仕入れてきた。つまみもあるぞ？久しぶりだろう？スルメなんて」
「……どういう心境の変化だ？」
「子供達の仕上がり具合はどうだ」

「瀬音さんにさっさと退院しろと伝えろ。看護婦の尻ばかり追いかけてるんじゃないか？あの人のことだ」
「ああ……看護婦口説きだして、士官用個室から追い出された」
「さもありなん」
宗像は、テーブルに並べられた酒の中からウィスキーを取り上げ、空いていた紙コップに注いだ。
「グラスがこれでは味気ないがやむを得まい。氷をくれ」
「裕樹とか言ったか？ダユー様が随分とお気に入りと聞いた」
真菜は氷の入ったケースを宗像の前に置いた。
「三人の中では一番筋がいい。思い切りが良いし、攻撃パターンをしっかり考えてから行動できる。三人の中では、唯一前衛で使える」
「他は」
「月菜は狙撃だ。フィアを思い出した」
「……」
「……フィアのことか？」
「それもある」
真菜はグイッ。と紙コップを開けた。
ビーフィーターをロックで飲んでいることに瓶で気付いた。
「今となっては、朗報といえる立場ではないがな」
「綺麗な娘だった。染谷が残念がっているだろうに……どうした？あの子が死んだことは、あの場にいた者として知っていることだろうに」
「彼女は」
言いかけて、真菜は宙に視線を彷徨わせた。
はっきりと言葉に迷っている。
「はっきりしろ。らしくないぞ」
「……生きている」
「何？」
宗像は掴んだ紙コップを落としかけた。
「……何を？」

「生きている。そう言ったんだ」
「まさか」
宗像は苦笑しながら紙コップに口をつけた。
ウィスキーの焼けるような感覚が、喉に心地よい。
「酔ったか？」
「彼女は現在、ヴォルトモード卿の元にいる」
「眠れ」
「酔っている。そう言いたいのか？私がこの場で冗談を言って、お前を笑わせようとしていると？」
宗像は真菜に頷いて見せた。
「ふざけるな」
「ふざけているのはどっちだ」
「もう、今晩は飲むと決めたんだ」
「……祝杯というにしては、飲み方が乱暴だな」
「私は酒は強い。そう簡単には酔わん」
「……筋を通して話せ」
「ヴォルトモード卿が神族によって封印されていたことは知っているな？」
「ああ。座学で聞いた」
「その封印の“鍵”が、彼女だ。彼女は人間ではない」
「……人間では、ない？」
「一種のクローン、魔法で創造された特殊な疑似人間とでも言おうか」
真菜は紙コップを弄びながら続けた。
「私も、軍機で塗りつぶされた情報から知り得たのはここまでだ。ある存在を封印する力を持つ存在として製造され、ヴォルトモード卿を封印していた存在、それが彼女だという、奇想天外な話しか出来ない」
「信じられるか」
「信じるしかないだろう？お前なら」

ついっ。と、真菜はコップを持つ手で宗像を指した。
「何故、あの娘がアフリカにいたか。
何故、魔族軍所属の飛行艦内で唯一の生存者たりえたのか。
何故、魔族軍が必死になってお前等の乗る“鈴谷（すずや）”を追い回したのか。
何故、あの子が消えてからヴォルトモード卿が復活したか。
全てが説明出来る。
あの子が“そういう存在”だから――そう言えばな」
「……」
「奇想天外な話だろう？」
「ああ」
宗像は頷いた。
「もう私は宇宙からエイリアンが攻めてきても信じることが出来るだろう」
何度か、小さく頷いた後、ぽつりと言った。
「泉が喜ぶだろう。随分、気にしていたからな」
「……問題は」
グイッ。
真菜は再び乱暴に酒を飲んだ。
「そこだ」
「……」
黙る真菜の様子を見た宗像は、
「何があった」
「……気付けに飲んでおけ」
「いらん。なるべく素面で聞いておきたい」
「現地時間、昨日１３２１時。“鈴谷（すずや）”が沈んだ」
「……なっ」
宗像の顔が真っ青になった。
「“鈴谷（すずや）”が……沈んだ、だと？」
ガタッ

ソファーから立ち上がった宗像の手から紙コップが落ち、テーブルを酒で汚した。
「バカな……」
「事実だ。近衛から情報を仕入れてきた。“鈴谷（すずや）”は大破、航行不能を持って戦没と判定された。現在、エンジンの切り離し作業と現地での解体の準備が進んでいる」
「泉達は、何をしていたっ！」
宗像が怒鳴った。
「あいつがいて、艦が沈むとは、どういう失態だっ！」
「部隊は壊滅。柏達は病院送り……部隊で死人が出たというはっきりした情報は無い」
「ちっ。泉のバカめ。くたばって責任をとれ」
宗像が怒っているのは、愛着のある“鈴谷（すずや）”という母なる艦が沈んだことより、艦を沈められたメサイア部隊の不手際を怒っているのだと、真菜にはすぐに察しが付いた。
自分もそうだ。
最初は、そう思ったんだ。
「私がいれば、こんな不始末を“鈴谷（すずや）”に味わわせはしなかった――と？」
「当たり前だ！」
宗像は乱暴にソファーに座り直した。
「元はあの艦所属部隊のナンバー2だぞ！？泉は何やってたんだ！」
「……多分」
真菜はソファーに沈むように身体を預け、天井をぼんやりと眺めた。
そして、怒る宗像に言った。
「――死んだよ」
部屋を沈黙が包んだ。

「……は？」
その言葉が出てくるまで、恐ろしく時間が必要だった。
「今……なんて言った？」
脳が、その言葉の意味を理解するのを拒んでいる。

「死んだ。そう言ったんだ」
真菜は冷たく、しかし、はっきりとした口調でそう答えた。

「誰が」

「泉だよ」

「……まさか」
プッ。
不意に噴き出すと、宗像は笑った。
「あいつが！？殺されても死ぬってことを知らないような奴が！？」

「……」

「1対20超えの非常識な状況で生き残ってきたあのバケモノに、死ぬって言葉が理解出来るものか！」

「……宗像」

「冗談も大概にしろっ！」
ガシャンッ！
宗像はソファーから立ち上がるなり、テーブルにあった酒瓶達を左手でなぎ払った。
瓶が宙を舞い、床に転がる。
蓋が開いていた瓶から零れた酒の匂いが、室内に立ちこめる中、

真菜と宗像はじっとにらみ合うように互いに黙った。
「ふざけた冗談を聞くために、こんな夜中に呼び出したのか！？」
「何と言われたい？」
「何？」
「そうです、か？それで気が済むなら言ってやろう。だが、事実は変わらんぞ」
「……」
「あいつはＭＩＡ、戦闘時行方不明者のリストに載った。騎体はすでに発見されているが、コクピットブロックの損傷がひどく、生死不明。不確かな情報では、牧野中尉は助かったそうだがな」
「誰っ！どこの誰だっ！」
「？」
「一体、何騎で袋だたきにされたんだ！百騎か、それとも二百騎か！？あいつが単独でやられるはずがないっ！一体、どこの部隊だ！あいつを――あいつを！」
「魔界から来た傭兵部隊……魔族軍第三軍司令官の旧知で、魔界ではかなりの腕として知られるそうだ」
「……」

「戦闘データの提供をダユー様経由で手配してやる」
真菜の声には、どこか宗像を労るようでさえあった。
「戦友を失うというより、お前にとっては恋人だったな……辛いのは察する」

「……」

「否定のしようのない事実だ。それは受け入れろ」
軍服の胸ポケットから取りだしたのは、小さく折りたたまれた印刷物。

近衛軍広報

そう書かれており、真菜の手で広げられたその紙面の下、赤丸がされたカ所には、

生死不明

そう書かれたリストに、

泉美奈代　大尉

そう、はっきりと書かれていた。

「……私が酒を飲め。そう言った理由がわかったか？」

「配慮に感謝する」
うなだれたまま、宗像は言った。
「非礼は詫びる。済まなかった」

「かまわん」

「最後に教えてくれ。アイツは、どこでやられたんだ」

悲しみのやり場　第二話

●1時間後　福島県西会津町郊外

ザッ
ザッ

草を踏み分ける音だけが小さく聞こえる。
空には満天の星。
月明かりがあるため、照明は必要ない。

ヤクトエッジを付近に着陸させた宗像は、徒歩で山裾を歩いていた。
すでに騎体を降りてから10分近く。
途中に咲いていた名前も知らない黄色い花を束ねたものと、酒の瓶を持った宗像は、ただ無言で歩き続けた。
前方に見えた山の斜面の一角が、黒く汚れている。
「……あれか」
宗像は、その黒く汚れた場所に近づいた。
「……」
ジャリッ
軍靴が、黒い炭状の物質を踏みつけた。
辺りを見回し、宗像は唇を噛み締めた。
「……こんな所で」
その場にしゃがみ込むと、宗像は、そっと花を置いて、ポケットから取りだしたハンカチに、指が汚れることに構うことなく、炭を包み込んだ。
「死ぬタマじゃないだろう?……泉」

ポタッ

ハンカチに、何かが落ちた。

自分の涙だと、そう思うと、宗像は耐えられなくなった。

何かの冗談だと、そう信じたい。

騎体を回収した近衛の情報操作だと。

何かの間違いだと。

そう、信じたかった。

だが……焼け焦げた落下地点にこうして立てば、何もかも受け入れるしかない。

そう――泉美奈代は、死んだ。

かつての仲間は、唇を重ね合わせた、私を友として、本気で心配してくれた、世界でたった一人の存在が――死んだ。

その現実が、宗像を押しつぶそうとしている。

後悔しても遅い。

すまない？

本当にそう思っているか？

ふざけるな！

裏切った身で、あいつを見捨てた身で、何を都合の良い事を言っている！

お前が殺したようなものだろうが！

そう思う。

泉美奈代の死の全ては自分に責任があると、そう思う。
思いたい。
でなければ、心が耐えられない。

「……」
宗像は、ハンカチをしまうと、不思議なことに気付いた。
悲しい。
悲しいんだ。
それなのに――
手の甲で涙を拭ったというのに、
もう、涙が乾いていた。
涙が止まっていた。
否、出てこない。
「悲しすぎると……」
ペタン。
宗像は、その場に跪いた。
「涙が出てこないというが……本当だったんだな」
唇を噛み締めながら、宗像は手にしていたウィスキーの蓋をあけた。
「一度、お前と飲んでみたかったな……泉」
トクトクトク
甘美な音がして、瓶から流れ出た酒が地面に染みこんでいく。
「線香は用意できなかった……許せよ」
宗像は、そっと手を合わせると、立ち上がり、そして、言葉を失った。

「終わったか？」

冷たく、本当に冷たく、そして威圧的な声が、宗像に投げかけられた。

ギリッ。

宗像は、奥歯を噛み締め、その威圧感に負けまいとするかのように、相手を睨み付けた。

「ここで、何をしているんです」

「ここにいれば、お前か月城のどっちかがくるんじゃないか。そう思って張っていた」

月明かりが届かず、相手の顔ははっきりと見えない。

どういう表情をしているのか。

それは見なくてもわかる。

こいつは――――怒っている。

考えれば、こいつも泉と同じ位の付き合いだ。

「慰めてくれるとでも？」

宗像の手が腰のホルスターめがけてゆっくりと動く。

「あなたが？」

「狙撃兵が狙っている」

相手は告げた。

「私を殺せば、ここから生きては帰れないぞ」

「望みは」

「とりあえず」

ジャリッ

相手は脚を進めた。

「生きていたことは、不詳、育ての母親として喜んでやろう。だが、何を考えて、どこに行ったか。それを聞こうか。死んだ泉も知りたがっているはずだ」

「その前に」

宗像は早撃ちの姿勢のまま答えた。

「ここに、何故、あなたがいるか。その返答次第と答えましょうか」

「内親王護衛隊（レイナガーズ）を率いて猪苗代湖防衛を命じられ、移動中だった。あいつは、ここの死守命令を下されていた」

「……やっぱり」

「やっぱり？」

「あなたが殺したんだ」

「……言いがかりはよせ」

「いいがかり？」

フンッ

宗像は鼻でせせら笑った。

「命令を楯に、泉達を見殺しにした。内親王護衛隊（レイナガーズ）だろうが、“鈴谷（すずや）”が沈むような状況は知っていたはず。なのに、あなたは支援に動かなかった」

「軍隊における」

「命令を楯にするな！」

言葉を遮って怒鳴った。

「命令に逃げた、味方殺しが！」

「口を慎めっ！」

相手も脚を止めて、殺気だった声を張り上げた。

「誰が何と言った！」

「何度でも言ってやる！この味方殺しっ！命令を楯に危険から逃れたんだ！牽制の一つもせず、泉達が全滅するまで、敵が撤退するまで放っておいた！猪苗代なんて、目と鼻の先、そこから動かなかった理由は、あなたの怠慢じゃない、軍の命令じゃないっ！あなたの怯懦だ！この子殺しめっ！」

「貴様っ！」

大股で近づいた相手の右手がひらめいた。

バンッ！

乾いた音が、辺りに響き渡った。

「誰が、何だと！」

歯を食いしばって、その一撃で吹っ飛ばされないように脚を踏ん張った宗像の胸ぐらを相手が激しく掴んだ。

軍服のボタンが飛んだ。

「誰が、誰が泉を殺したと言ったぁ！貴様ぁぁぁっ！」

「何度でも言ってやる！あんたが泉を殺し、“鈴谷（すずや）”を沈めたんだ！立場や命令を逃げ口上にするな！それが卑怯だと言ってるんだ！」

「違うっ！」

「何が違うか！強襲型メサイア部隊を指揮して、猪苗代であいつが

死ぬのをのうのうと見ていなかったら、どうしてあいつが単独で死ぬようなことがあるか！知っていたんだろうが！」

「知ったのは」

ガンッ！

宗像の頬に、もう一発、今度は拳がめり込んだ。

たまらず、宗像の身体が焼け跡に転がる。

「――手遅れになってからだ！」

相手は、その上に馬乗りになって宗像の顔を数回殴った。

「一人だけ、しかも裏切り者が、一人だけ気の毒な存在は私だけだとそう言うつもりか！」

「何を――っ！」

白兵戦の要領で相手を突き飛ばし、宗像は立ち上がった。

この方法を教えてくれたのが誰かを考えるのはやめた。

「私が悪いと、どの口が言うかっ！」

「貴様が支えてやるべきだったはずだ！」

「あいつは子供じゃない！」

宗像の右が相手の腹を捉えた。

小さなうめき。

くの字に曲がる身体に、肘の一撃を加える。

鈍い感覚と共に、相手が崩れ落ちた。

しかし――

「ぐっ！？」

足払いをうけ、体勢を再び崩された。

たたらを踏む宗像の横を転がるようにして、相手は間合いを取った。

「支えてほしいのは、私の方だ！」

「半人前が偉そうに！」
「半人前にしか育てられなかったのは、あなただろうが！」
二人が、再び殴り合いになりそうになった、その瞬間。
バッ！
二人は強い光の中に捉えられた。
サーチライトの強い光が、二人を照らし出していた。
「っ！？」
「何っ！？」
「――――そこまでです。二宮大佐」
スピーカー越しの声が、耳に届く。
強い光に眼を潰され、相手がわからない。
向こうからは丸見えだろうが、こちらは見ることさえ出来ない。
だが、その声が誰かはすぐにわかる。
「……月城」
腕で眼をカバーしながら、宗像と共にサーチライトに照らし出されるのは、二宮だった。
髪も戦闘服もすでに黒く汚れている。
それをメースの肩に立って見つめているのは、真菜だ。

「こんな形でお会いするのは残念です」
マイクを掴んで、泣きそうな顔をしている真菜が、それでも声だけは無機質に言った。
「すでに周辺は我々によって包囲されています。降伏しろとは言いません。宗像――下がれ」
「……」
「急げ。泉の墓前でこれ以上の失態を曝すな」
「……次は殺す」
宗像は、そう吐き捨てるように呟くと、暗闇の中を月城騎へ向けて駆けだした。
「……どっちが」
全くの無音の中、一方的に撤退する魔族軍を目で追いながら、二宮は痛めた拳をそっと撫でた。
「……泉」
誰もいなくなった空の上では、星が瞬いていた。
「この……親不孝の……バカ娘が」
二宮には、星が突然、ぼやけて見えた。
「お帰りなさい」
陣地に戻った二宮は、宿泊施設と割り当てられた民宿の部屋の中に座っていた麗菜の姿を見て、ぎょっとして飛び上がって驚いた。
「で、殿下!?」
「お墓参りに行って殴られたの？」
「……いえ」
二宮は、視線をそらせた。

「事故です」
「ふぅん？」
「殿下こそ、何を」
「ああ？私？」
麗菜は意地悪く笑うと、
「ちょっと、利用させてもらったから」
「？」
訝る二宮の腰の辺りを数回叩くと、突然、二宮に正面から抱きついた。
「で、殿下？」
「……」
胸の中で、麗菜が、“あった”と呟いた気がした。
「……寂しかったわよ？」
徒っぽい笑みを浮かべ、麗菜はそう言う。
「心にも無いことを」
「あら？いつだって、私はあなた達を心配しているのよ？」
「……お心遣いは感謝します」
「そういうことにしておいて」
ポンッ。
二宮の肩を叩くと、麗菜は部屋のドアに手をかけた。
「痕が残ると大変だから、今のうちに手当してもらいなさい。加藤魔導師、まだ起きているはずよ？お酒に潰される前に診てもらいなさい。それと、あんたの教え子は、私のところでは引き取れない。騎体予備がないから」
「そう……ですか」
「さすがに“白龍”の修理が完了するまで、他部隊へのバラバラの転属はやむを得ない。元内親王護衛隊（レイナガーズ）も含めてね。トレードも不可よ」
「……残念です」
「さすがね。元独立駆逐中隊って言った途端、オファーが全部隊レ

ベルで来たわ。柏中尉達前衛隊の古参獲得に教導隊まで名乗り上げた。教官として引き取りたいそうよ?」

「……」

「悔しい?」

麗菜は、二宮の顔をのぞき込むようにして訊ねた。

「はっ?」

「即戦力のベテランを手に入れられなくて」

「……はい」

二宮は頷いた。

「とても、残念です」

「素直なお返事は大好きよ」

麗菜は笑って言った。

「じゃ、おやすみ」

ドアは二宮の前で閉じられた。

悲しみのやり場　第二話（後書き）

これが、この時点での現実です。
まぁ、美奈代……ゆっくり休めや。お疲れ様。

調停

●旧山形市街地　魔族義勇軍メース隊陣地

役立たずの代名詞とさえ言われる義勇軍の中でも異彩を放つのが、第２４大隊と第２５大隊で編成される第８メサイア連隊。

魔界の辺境鎮圧など、様々な戦いの中でメースを駆り、その魅力と魔性に魅せられた挙げ句、メースなしでは生きることが出来なくなったような、いわば“戦争狂”が集まったような集団だ。

ただ立っているだけなのに、放たれる獣じみた殺気が空気をピンと張りつめさせる。

そんな連中を前に、用意された壇上で声を張り上げるのは、８メサイア連隊指揮官のラドラーだ。

オールバックにした黒髪。色白の長身痩躯に口髭を蓄えた甘いマスクは、魔界各地で女を泣かせてきた歴戦の猛者にふさわしい。

「人間界に到達後、長く無聊を囲っていた我々に戦闘準備が命じられた。この意味がわかるな？同士よ」

壇上を、やや芝居がかった仕草で歩き回りながら、自分に視線を向けてくる部下達に語りかけた。

「ようやく、我々にお鉢が回ってきたということか？

否！

それだけではない。

いいか？

連隊全戦力の動員だ。それはつまり」

ラドラーは突然、壇の中央で歩みを止めた。

「此度の戦は、我々にとっての総力戦になるということだ！この東北から敵を駆逐し、残る北海道を手に入れる！ヴォルトモード卿の軍が手こずる敵を、我々が屠るのだ！」

そう。

中世教会は、膠着した戦線の状況を打破し、本格的に攻勢に出たことを人類にアピールするために、東北以北に対する、本格的攻勢に転じようとしていたのだ。

すると、ラドラーは不意に額に手をやった。

「何？同士よ。東北を手にした所で、我らに何の意味があるか？……そうだな。

我らは義勇軍として給金をもらうだけの、雇われの身。

土地を手にすることは出来ない。

特別割り当てがある程度。土地を手にするうまみは何もない？

ああ。わかっておる。同士の気持ちは、ようっくわかる」

パッと姿勢を正したラドラーは、片手を突き上げ、居合わせた将兵めがけて怒鳴った。

「案ずるな同士よ！その対価は高い！その対価は何か！？我らの鬱積のはけ口だ！敵地を進む我らには、略奪に殺戮、虐殺に陵辱――全てが許される！」

ウォォォォッッ！！

獣の群のごとき吠え声が辺りの空気を支配した。

部下のやる気に火をつけたラドラーは続ける。

「もとより我らが創造物に過ぎぬ人類の所有物は、例えその命とい

えども、我らにある！本来の主の元に返すことこそが常道！大義！それをなしえるのは我らのみだ！」

ウォォォォッツ！！

興奮する将兵達の声に送られ、壇上を去ったラドラーは、待機していた部下に命じた。

「新潟の部隊に伝えよ。明日夜明けをもって我らは出兵すると。万一の際は、連中に配備した攻城砲の支援を求めることになる。長砲隊にも、支援を願っておけ。連中に十字砲火を展開させるのに丁度良い場所を探し出せ」

「はっ！」

「……ラドラー様」

部下達の陰から現れたのは、ベールを被った妙齢の女性だ。グラマラスなボディラインのわかるタイトなドレスを身にまとい、女としての色香をまき散らしている。

「おお。オハラか」

ラドラーはオハラを抱き寄せると、慈しむようにその顎のあたりを撫でた。

「すごい大声でしたわね。お腹の底まで響いていました」

「野獣共を口説くには咆哮しかない。俺は閨（ねや）の囁きの方が好きだがね……」

求めるように瞳を閉じたオハラの頬にラドラーは軽く口づけした。

「すまんな。出陣に備えねばならん――で！？」

オハラから体を離した時、すでにそこには、閨とは違うラドラーという漢がいた。

「ホーサーが敵の総大将に会いに行ったとは本当か！？」

●東京都千代田区　皇居外苑

――警備の関係上、立ち入り禁止！

皇居外苑に通じる道には、そんな看板が立ち、近衛兵団の兵士達が土嚢とバリゲートで道を封鎖している。

その中を、まるで兵士達も看板も見えないと言わんばかりに外苑めがけて歩き続ける男達がいた。

先頭には、フードを被った老人がいた。

「ち、ちょっと！」

若い兵士が二人、土嚢から出ると、男達の前に立ちふさがった。

男達の先頭にいた小柄な老人が足を止め、のんびりとした仕草で二人の兵士の顔を眺めた。

「悪いね。おじいさん。ここから先は通行止めだよ」

「……この国の宮城は、こっちでいいのだろう？」

老人は、ゆっくりとした口調で訊ねる。

目の前の老人の質問が、彼等にとって突拍子もないことだったので、兵士達は思わず互いの顔を見合ってしまった。

「おいおい、じいさん」兵士の一人が苦笑混じりに言った。

「ボケちまってるんなら、ここはお門違いだ。病院行きな」

「ホッホッホッ……」

老人は笑いながらフードを頭からとった。

その顔は――あのホーサーだった。

「魔族義勇軍第８メース連隊副長、スワルト・ニューマン・ホーサーと申す。皇帝に拝謁を願いたい」

その背後に、いつの間にか壁のように出現したのは、メース達だった。

「叩き殺せっ！」
皇居内に罵声がとどろいた。
顔を真っ赤にした麗菜が怒鳴る。
――――外苑にて、魔族が陛下の拝謁を望んでいる。
そう報告を受けた麗菜は、場所も何も関係なく報告した士官を怒鳴りつけた。
「何をしているか！」
「ご……ご乱心を……」震える声で、士官は答えた。
「すでに外苑には５０騎近い敵メサイアが出現しています。ここで反撃などしたら、帝都は焼け野原です。それに見たところ、その者は何の変哲もない老人にして」
「だからどうした！？老人なら殺さないというのか！？たいした老人愛護精神ね！」
「……麗菜」
その背後からの声に、麗菜はビクッと反応した後、黙った。
麗菜の父、帝だ。
「その者に伝えよ。了承した。しばし待たれよと」
「陛下！？」
麗菜はギョッとして父の顔を見た。その横には、見たことのない少女がいた。
クリッとした子猫のような愛らしい少女が見慣れない服装に身を包んでいる。
「信仁？」
その少女は、まるで対等な関係だといわんばかりに、父の名を口にした。
「私もついていくわ。いいでしょう？」

「そりゃ、構わないけど、いいのかい？」
帝は、驚く周囲を無視するように、その少女に尋ね返した。
「さすがに君だと、向こうが恐縮するんじゃないか？」
「過去数千年を近く戦い続け、満足にかすり傷一つ負ったことのない“不死身のスッパード”。生きている間にお目にかかっておきたかったのよ」
「生きてって……どっちがだい？イツミさん」
「……向こうに決まっているでしょう？安心なさい信仁。私はすでに天界側のオブザーバーとして、人間界での自由行動が認められているって、何度も言ってるでしょ？第一、私が近くにいれば、連中はヘタなマネが出来ない」
「成る程？」
信仁は、ポケットからコインを取り出すと、軽く指で弾いた。
ピーンといういい音を立て、宙を舞ったコインを掴む。
「……昔からのクセね。それは」
「覚えていてくれてうれしいよ」
ニコリと信仁は微笑んだ後、少女に言った。
「賭けようか――天界最怖（てんかいさいきょう）、“鬼のイツミ”に」
「……負ける方に賭けておきなさい。バカップルの片割れ」

皇居外苑には、明治２１年の「皇居御造営」完成以降、営々と植樹作業が続いてきた。
東京湾に浮かぶ小島に見立て、それぞれに黒松が植えられており、皇居内の深い森と対照的なまでに、開放的でしかも荘厳な雰囲気を形成している。
そこは、既にメース達が並び、何本かの黒松が踏みつぶされていた。広場の玉砂利や芝生が敷き詰められた広場はほじくり返されたも同然だ。

「あーあ」
その光景に、帝はため息をついた。
「これは……直してもらえるんだろうか？」
「バカ……黙りなさい」
帝は、そんな不毛な会話をイツミと小声でした後、一本の黒松の根本であぐらを掻いたままうつらうつらとしているホーサーを見た。
「あの人？」
「写真でみた限りでは――間違いないわね」イツミは言った。
「数千年戦い続けた歴戦の名将よ。さすがね」
イツミと帝の視線は、その黒松の手前に置かれた岩に向けられた。
そこには、黒い鞘に収められた剣が置いてあった。
つまり――
「丸腰ってことか」
「陛下」
脇に控えていた麗菜が小声で言った。
「何故、警戒態勢を解いたのです。せめて狙撃部隊だけでも」
「麗菜」
帝は腰に下げていた刀を外し、麗菜に押しつけた。
「持っていなさい」
「陛下！？」
「お待たせしたね。腹を割って話そうじゃないか」
帝はそう言うと、剣の置かれた岩を挟んでホーサーの真向かいにあぐらをかいて座った。
「さすがね」
思わず駆け出そうとした麗菜の裾を掴んだイツミが言った。
「いざという時は――腹を据える」
「――やはり」
ジロリ。と帝を見たホーサーはしばしの間をあけてから言った。

「？」
「我ら魔族は困ったことに、人の器を見るための最善の方法として、戦をしかける悪癖がある。そのおかげで、天界と無用とも言うべき戦は幾度に渡っているか誰も知らん程だ」
「本題を」
「フフッ」
ホーサーはニヤリと笑った。
「かつて天帝エト、魔界女帝グロリア、その伴侶達と共に試練をくぐり抜けた歴戦の君にチャンスを与えに来た。信仁陛下」
「チャンス？」
「魔界・天界双方で君の評価は高い。殺すには惜しいだよ信仁……先の天帝、あの賢帝クラディウスをしてその器、大器なりと賞賛せしめた君だ」
「調略（ちょうりゃく）ならお断りだ」
「……我が属する組織は、アフリカに侵攻して１０年。何をしていたと思う？人類に悪戯に叩き殺されるため？……違う。莫大な犠牲を払い、内部の不和まで引き起こして尚、一方的な攻勢に身を曝した理由は一つ。人類の技術、戦力、戦い方を知るためじゃ」
「……な」
「そう。人類の手の内は、全て我々に知れておる。世界の首脳達の多くも、我らの配下同じと心得よ」
「元から」
信仁は答えた。
「国に親友はいない」
「わかっておる。周りは全て敵。敵同士が、時に友好の仮面を被り腹の中を探り合うのが外交じゃからな……じゃが」
ホーサーはギロリと信仁を睨んだ。
「国が滅んでは遅いぞ？信仁陛下」
「……」
「このままなら、世界はこの国を切り捨てるだろう。我らがこの国

のみを望めば」
「……」
「いずれにせよ、この人間界を手にするためには、足がかりとしてこの国をすべて手中に収める必要がある。そのためには敵対する者は全て叩き潰さねばならぬ。しかし」
ホーサーの細く枯れた指が信仁に向けられた。
「……しかし、貴殿を殺すのはあまりに惜しい。そして、危険だ。貴殿と天帝、魔帝の絆は儂の見る限り、親子のそれより深い」
「なら、僕は君に殺された方がいいかな？僕が死ねば」
「……そう。儂がこの場で殺したなどと、後ろにいるイツミ殿が天界でわめけば、天界と魔界双方から双方の帝達がやってきて、儂等には未来はない。じゃが」
ホーサーはニヤリと笑った。
「それは、この国の民も同じ事じゃ。違うか？」
信仁は無言のままうなずきもしなかった。
「そこでじゃ。取引せぬか？」
「……取引？」
「左様。我らが軍門に下れ。さすればこの国と民の生命は保証しよう。どうじゃ？」
「……」
信仁は、息を吐き出す様にして答えた。
「――断るよ」
「……わかっておるさ。公には、そう答えるしかないだろう。人類の存亡を賭けた戦いじゃ。ここで是とすれば。世界を裏切るのと同じじゃからな」
「……じゃあ、何故」
麗菜は独り言のように呟いた。
「軍門に下れなど」
「我々は人類を絶滅させるとは考えておらぬのじゃ、小娘」
ホーサーの言葉に、麗菜は思わずハッとなって口元を抑えた。

「我らの望みは、増えすぎた人類の数を減らし、進みすぎた文明の針を戻すこと。
――――わかるだろう？
人類の進めた文明という時計の針は、すでに人類自身が歯止めを利かせることの出来る段階を超えているのじゃ。
このままでは、それにつきあわされる自然が耐えられぬ。
自然を休ませねばならぬ。
人類がいなくなったアフリカが、あれほど痛めつけられていた大陸が、たった１０年でどれ程回復したかを考えよ」
「……そ、それは」
「信仁陛下よ」
ホーサーは言った。
「我らは、人類の数を一億程度まで減らすつもりじゃ。わかるか？総人口で一億じゃ」
「……」
「絵が見えたかね？」
ホーサーはニヤリと口元を緩めた。
「人間界で生き残るのは、ほとんど、この国の民だけになる。この国の民が人類のすべてとなり、ひいては、人類の王が、君となる。
魔界と天界という世界の王とその后となった仲間と肩を並べることが出来るぞ？このままなら、疲弊した貧乏国の一国王で終わる……違うかね？」
「戯れ言にしか聞こえない」
「無理をするな……信仁陛下。他国がこの状況下で何をしてくれている？アフリカでさんざん苦しめられたにもかかわらず、国際間の世間体を気にする程度の派遣のみ。互いに殺し合うことに汲々としている。そんな世界が、君と君の民に何をしてくれているのだ？」
はぁっ。
帝は、深いため息をはき出すと、言った。
「もし、エトやグロリアが、僕の立場でいたら、あの二人も同じ事

を言うだろう」
「……」
「なめるな。とね」
「僕とこの国の民にとって問題は世界を信じられるかどうかじゃない。自分と祖国に賭けることが出来るかだよ。僕達日本人が信じるのは、最初から自分達のみだ」

その毅然とした態度。
何の迷いもない眼光。

ホーサーは、自らの調略（ちょうりゃく）が失敗に終わったことを悟った。
――若い。
そう思う。
熟慮ではなく、短慮とも言うべきほど短い決断。
自らを信じられる若さがなければ出来ない決断は、ホーサーのように老獪の域に達した人物には出来るものではない。
愚答とは言わぬ。
ホーサーはむしろ嬉しかった。
敵とはいえ、これほど強い意志を持つ者達と戦えるのは――

「……しかたない」
ホーサーは笑いながら立ち上がった。
そして、まるで帝を誘うかのような爽快ささえ称えながら言った。

「……では、戦（や）るか」

その後、中世教会に提出された報告書で、ホーサーはこう語っている。

「弓状列島を信仁に任せ、身内とすることが出来れば、我らは数年以内に地上全てを征服出来たでしょう」

帝の決断は、すなわち日本での戦争回避の唯一の方法を破局させた。

この破局こそが、歴史を動かすことになるのだが……。

アップルソース・ダイアリー　第一話

「訪ねる身になってほしいものだ」

一升瓶を下げたラドラーは、舗装がはげ、石だらけになった道を歩く。

宿舎に指定されているビジネスホテルからここまで、徒歩で１０分以上だ。

いくら緊急事態への対応が免除されているからとはいえ、

「爺の趣味にもこまったものだ」

ラドラーはそうぼやくと、魔族軍の攻撃で焼け残った一軒の古ぼけた家の門をくぐった。

「上がるぞ」

ホーサーの靴が置かれた玄関。

日本家屋の知識がないラドラーでも、主の靴がここに置かれている以上、土足で家に上がり込むことしなかった。

「おう」

板葺きの玄関からみてまっすぐに狭い廊下になっており、ラドラーの歩幅なら数歩もいかずに曲がり角だ。

その廊下に面した格子に紙を貼った奇妙な建具の向こうから、ホーサーの声がした。

「いたか」

ラドラーは、取っ手のない建具を前にしばらく考えて、それが引き戸だと気づき、建具――障子を開けた。
植物を編んだものらしい草色の敷物の上に、四角い小さな布団を敷いたホーサーが、あぐらをかいてラドラーに背を向けていた。

「何をしている」

「見てわからんか？」

ホーサーの前に座る人物に一礼すると、ラドラーはホーサーが何に熱中しているかを知った。
四角い板の上に格子が描かれ、その上に幾つかの木片が載せてある。

「何だ、チャトランガか」

チャトランガは魔界では一般的なチェスに似たゲームだ。
ルールもチェスに準じていると思えば良い。
ホーサーは、それに熱中しているのだ。

「ああ。無聊がてら、ちとルールを教えてやったんじゃが……」

「負けてるな」

「そう見えるか」

「あと……」

ラドラーは顎をしごき、

「俺なら2手で王手がかけられる」

「そうか」

言うなり、ホーサーはチャトランガの盤をひっくり返した。
対戦役を務めていた相手から悲鳴が上がるが、それを無視したホーサーは、さも気分が良いと言わんばかりに背筋を伸ばした。

「さて？おお、酒を持ってきてくれたか」

「ああ――――飲もうと思ってな」

「すまんのぉ。肴を用意させよう――――おい、何かあるか？」

「……全く」

涙をのんで恨めしそうに頷いた相手が、部屋の奥へ消えていくのを見送ったラドラーは、ホーサーが差し出した小さな布団――――座布団に腰を下ろし、卓袱台に置かれた湯飲みを2つ掴むと、そこに酒を注ぎ込んだ。

「爺、物好きにもほどがあるぞ」

「何の件についてじゃ」

「全部だ、全部」

湯飲みをホーサーに手渡しながら、ラドラーは答えた。

「敵の総大将に降伏勧告しに行くわ、あんなの囲うわ」

「降伏なぞ求めてはおらん。調略じゃ」

「綺麗に言えばよいというものではない」

「おお。よいつまみがあったな……お前は下がっていなさい」

「……爺」

「信仁はよい君主じゃ。少なくとも、ここに来ている、親の七光り共とはワケが違う。ワシは、あれが気に入った。あれは“狭間の英雄”と呼ばれるに相応しい男じゃて」

「あれは敵だぞ!?」

「そう怒るな……乾物じゃが、酒には合うぞ？喰え」

ホーサーは、さきいかの載った皿をラドラーに勧めた。

「ワシにとっては、この戦の趨勢などどうでも良いのじゃ」

「戦は勝たねば意味はない」

「当然じゃ……」

ホーサーは、さきいか片手に、湯飲みの酒をちびりちびりと舐めるように飲む。

「ただ、この戦はあまりに政治色が強すぎる。何が勝ちなのか、今一歩読めん」

「人類を皆殺しにして」

「それを望んでいるのか？」

「俺はな」

ラドラーはぐいっ。と湯飲みを空けると、一升瓶から酒を注ぎ込んだ。

「魔界だって、同じだろう」

「そうとも限るまい」

「何？」

「中世協会ですら、公には人類絶滅を叫びながら、同時に、一部の人類の生存を保証し、あるいは、人類を奴隷として領土分割後の人間界で仲介販売する動きを示している」

「全てを死に絶えさせるわけではない。適度な数を管理飼育する。そういうことではないか」

「うむ……ワシもそう思ったのじゃがなぁ」

「何だ？」

「中世協会自体、何を考えてるのか、この人間界をどうしたいのか、まるで読めないのじゃ」

さきいかを口に放り込んだホーサーは唸るように言った。

「人間を絶滅させたとしよう。
それを、人類擁護をタテマエとする天界にどう報告するつもりじゃ？
既成事実をつきつければよいと？
まさか。
すでに、天界の一部では、今度の戦さは、類絶滅をタテマエにした、魔族による人間界を領有化目的の行動だと危惧を見せる動きもある。何より」

「何より、何だ」

「ワシが信仁に接触したのはそこじゃ。それが知りたかったからじゃ」

「ん？」

「天界、魔界双方の帝とその妻――わかるか？二つの世界の支配者とその配偶者じゃ。この四人を友とする夫婦が統治する、人間界のちっぽけな国。
ここを攻め落とすことの危険を、どうして誰も考慮しない？
ワシならこんなリスクを冒せんぞ。
ワシは、信仁の周囲からそれを探ろうとした」

「リスク？」

ラドラーは眉間に皺を寄せ、口に運びかけた湯飲みを止めた。

「何のことだ。たかが人間の、こんなちっぽけな領土しかない王に、

何故、そこまで気兼ねする必要がある」

「わかっておらんのぉ……お主が天帝エト陛下としてもよいし、あるいは、我が魔界の女帝グロリア陛下だとしてもよい」

「……」

ラドラーは無言で頷いた。

「無二とも言うべき友が統治する国が侵略されたとして、お主はそれを黙っているか？援軍も出さずに見殺しにするか？」

「……それは」

うーむ。

ラドラーはしばらく唸った後、

「俺なら、黙ってはおるまいな」

そう、答えた。

「俺は律儀だからな」

「そうじゃろう？」

ホーサーは酒を口に含んだ。

「ふう……もし、信仁が殺されるようなことになってみろ。天帝と魔帝双方を敵に回してまだ足りない状況に追い込まれる。

三界において、身の置き場が無くなるぞ。

そのリスクをとってなお、人類を今の時代、絶滅に追い込む理由がわからん。

何故、今なのか。

何故、あと数十年という短い時間を堪えなかった？

あと、数十年、たった数十年で、あの信仁は老いて死ぬ。

それを待ってからならば、エト陛下もグロリア陛下も、大きくは

出られなかったはず。
　にもかかわらず、未だ信仁達が壮健な状況で、何故動いた?何故、熟す前に樹から果実をもぐようなマネをする」

「余程」
　ラドラーは苦笑しながら言った。
「気が短いのがいるのか、それとも焦ったか」
　飲め。
　ラドラーは一升瓶を掴んだ。
「あるいは、単なる爺の考えすぎか」

「そうとも限るまい」
　ホーサーは湯飲みを突き出し、酒を受け取った。
「ワシが信仁に接触したのは正解じゃった。信仁の側に、あのイツミがいたよ」

「何っ!?」
　ラドラーの顔色が変わった。
　あと少しで、一升瓶を落とすところだった。
「イツミとは、あのイツミか!?」

「ああ。ワシが来たということで、側に控えておった。意味が分かるか?」

「姿だけで天界の圧力を示したか……」

「そうじゃ。エト陛下が、イツミを信仁の側に置いていることを知らしめることで、儂等が“決定的”な行動に出られないようにしている」

「魔界がよく黙っていないな。協定違反ギリギリだぞ」

「協定違反なんぞになるものかい」

呆れた。といわんばかりの口ぶりで、ホーサーは言った。

「調べてみたが、今のイツミは予備役編入――軍務から表向き離れている。何があっても、天界はあくまで個人として動いていたと、そう主張するに決まっておろう？」

「上手いことを言って」

ラドラーは酒をあおった。

「どうせ、どこぞに天界軍を忍ばせているんだろうな」

「当然」

ホーサーは楽しげに答えた。

「亜空間には天界軍の最新鋭にして最強の艦隊が潜んでいることは公然の秘密。

下手に刺激したら、この弓状列島なぞ、人間界からわしらごと蒸発するじゃろうて」

「勘弁してくれ。俺は無駄死にしたくてここにまで来たんじゃない」

「ワシとて同じじゃ。それに」

「まだあるか？」

「ああ。表向きは訓練中となっておるが、イル殿下直卒の第一打撃艦隊がここ1月、姿を消しておる。天界への刺激は、魔界への刺激ともなるだろう」

「天界と魔界の直接戦闘……おいおい」

「何を言っておる？天界と魔界の連合軍対ワシら。じゃ」

「ぞっとしないな」

「ああ。歴史上初の出来事が起こる一歩手前。こんなリスクを冒して尚、何故、中世協会は動いたか……興味はわかんか？」

「すまんが俺は」

ラドラーは首を横に振った。

「一地方貴族にすぎん。中央の高度なお遊びにおつきあいするつもりはない」

「お主らしいわ」

「そもそもだぞ？爺」

ラドラーは湯飲みでホーサーを指した。

「そんなこと、我らの間で考えて、何がある」

「ワシの好奇心が満たされる」

「身勝手なことを堂々言うな」

「老い先短いのじゃ、それくらいはよかろう」

「老い先短くて、何故、あんなのを囲う」

「ふん。ワシの“主砲”なら、ばあさんの生きてる時分で、すでに使いモノにならなくなっておったわ」

「最後を看取ってもらうつもりでもあるまいに……もしかして」

「ん？」

「ズルド卿の娘をみて、今更ながら家族が恋しくなったか？」

「子が出来んかったことは」

ホーサーは笑って答えた。

「死んだばあさんも、最後まで悔いておったわ」

「そらみろ！」

ラドラーは勝ち誇ったように言った。

「爺、似合わぬぞ？」

「ふん……色々、ワシも後世に伝えたいこともある。“あれ”に伝えるのも面白いかと思ってな」

「おい、まさか。そのために、あの狂姫からメースを調達したのか！？」

「悪いか？」

「……呆れてモノも言えんわ」

「何とでもいえ――――今更、初めて弟子をとろうという気になったんじゃ」

「家族兼弟子……気の毒な奴が出たものだ。下手な虫の知らせでないことを祈るぞ。爺」

「じゃから」
ホーサーは言った。
「手は出すな？」

「爺こそ、さび付いたモノを間違って復活させるなよ？」

●天壇内部
「戻りました」
ティアリュートが踵を鳴らせてダユーに報告した。
その横では、ユースティアと、なぜか裕樹が鯱張って敬礼している。

「どう？第三軍の様子は」
ゆったりとした態度で、ダユーが訊ねた。

「戦闘の推移は順調と」

「そう……武者震いでもした？」

「そうですね」
ティアリュートは頷いた。
「勝ち戦は、いつ見ても気分が良いものです」

「そうね……」

座りなさい。

ダユーはソファーを勧めた。
ティアリュート達が座るなり、控えていたメイド達が音もなくティーセットをティアリュート達の前に置いていく。
「人間界のチョコレートっていうお菓子だけど、知ってる？」
「はい」
ティアリュートは、ちらりと裕樹を見た。
「ここを発つ前、彼から頂戴しました」
「……そう」
ダユーは、小さくなる裕樹を前に、目を細めた。
「独り占めしなかったのは褒めてあげるわ。裕樹」
「あ、ありがとう……ございます」
「ふふっ。かなり有力な部隊が魔界から届いたと聞いたけど？」
「通称、“黒備（くろぞなえ）”といいます。団長ははホーサー殿」
ティアリュートは答えた。
「規模的には地方国家のメース師団に過ぎませんが、各地の辺境紛争に出陣して、最低でもここ数百年、常勝無敗の栄光を轟かせています」
「人類側相手にも一方的に叩きのめしたんだっけ？」
「そう聞いております。各地でヴォルトモード卿や中世協会の部隊が苦汁をなめた人類側部隊を仕留めたとか」
「それで志気があがってるのかしら」

「かもしれません」

ティアリュートは、臆することなくダユーが勧めたゴディバのチョコレートを口に含んだ。

甘い感覚が口いっぱいに広がり、思わず口元が緩みそうになる。

こういう時に至福感を感じる辺り、私は女なんだなぁ。と、ティアリュートはしみじみそう思う。

横ではユースティアがうっとりとした顔で口をもぐもぐさせている。

「補給も順調で、しかも、東北方面の攻勢も成功しているとなれば当然かと」

「そうねぇ」

ダユーは頷いた。

「こっちも、大陸方面での資源採掘にメドがついたから、やっと寝首を部下にかかれずに済みそうだし」

「お戯れを」

「なかなか、これがお戯れってワケでもないのよ……契約遂行って、口で言うのと本当にやるのとは大違いなんだから」

「そうですね。それで」

「ん？」

「この後の我々の仕事は」

「うん」
ダユーは答えた。
「裕樹を任せたいの」

「この子を?」
ティアリューは、思わずびっくりして、横にいた裕樹を見た。
裕樹も、何も聞いていなかったと見て、きょとん。としていた。

「しかし、彼は」

「黒備だっけ?あそこのお爺さんに、あなたも指導を求めているんでしょう?」

「はい……それは、ダユー様も」

「ええ。許したわ」
ダユーは臆面もなく答えた。
「でも、そこで得たものを独り占めしていいとは言っていないつもり。人類で編成される部隊を今、真菜を総大将に編成している。その中に裕樹も入れるの」

「それで?この子を戦技教官にしたいとでも?」

「面白い冗談ね」
ダユーは口元で笑って見せた。
「私、その子が気に入っている。だから、死んで欲しくない。ならどうする?その答えが、あなたに預けるってこと」

「技を磨かせ、戦場で生き残らせろと?」

「運についてまで責任は求めないけど――実力ないと運もついてこない。これが持論なのよ」

●天壇　廊下

「あ、あのっ！」

ダユーの部屋を辞したティアリュートの後ろで、裕樹が声をあげた。

緊張で声が震えていた。

「よ、よろしいでしょうか？」

「何だ？」

ティアリュートは、その美しい金髪をなびかせながら振り返った。

「ぼ、僕、本当に、メースの操縦を教えて頂けるんでしょうか？」

「私では不満か？」

「い、いえっ！」

裕樹は慌てて首を横に振った。

「た、ただ」

「ただ？」

「僕、仲間がいるんです。その仲間も一緒に、後2人なんですけど。出来れば一緒に」

「聞いていないな」

ティアリュートはあっさりすぎるほど明確に答えた。

「私の受けた命令は、お前一人を鍛えろ。というものだ。その二人は契約外だ」

「そんな！」

「私は傭兵だ」

食ってかかる裕樹にティアリュートは冷たかった。

「もし、その二人とやらを対象にして欲しいなら、ダユー様に命じていただくか、それとも相応の対価を支払うか、いずれかにしてもらおう」

「……っ」

「サライマをフェリーさせたのを見た限り、お前は筋は良い」

ポンッ。

不意に、ティアリュートは裕樹の頭に手を置いた。

ふわっとした柑橘系のくすぐったい様な香りが裕樹の鼻腔を刺激した。

「教え甲斐はありそうだと期待している。それに」

「それに？」

「悪く思うな。私は三人も同時に指導が出来る程、指導者としての腕は良くないんだ」

アップルソース・ダイアリー　第二話（前書き）

今回、銃のお話だけです。知識のない素人の妄想ですから、興味ない人はスルーして下さって問題ありません。あしからず。

アップルソース・ダイアリー　第二話

●仙台市郊外　帝国陸軍防衛線

人類側が、魔族軍相手に未だに耐えられている理由の一つに、銃の更新が上げられる。

四式対妖魔歩兵銃。

通称、“よんましき”もしくは“四式”。

それまでの5．56ミリや7．62ミリ弾という、人類の都合によって量産された弾薬がほとんど効果を示さない妖魔に業を煮やした日本陸軍が独自に開発、配備した特殊口径である9，7ミリという破格のサイズの弾丸を発射するために開発された銃だ。

犬や豚顔のオーク兵相手に、5．56ミリ弾を命中させても、ショックでのけぞるのが関の山。甲冑に命中しても、甲冑が凹む程度で貫通は望めない。7．62ミリ弾で甲冑を貫けても、そこでエネルギーの大半を失い、甲冑の下にある頑丈な皮膚と筋肉が邪魔して致命傷に至ることは希。

彼等を確実に仕留めたければ、甲冑以外の皮膚が露出したところ、特に顔面に銃弾を近距離から叩き込むことが求められる。

多くは12．7ミリ重機関銃弾を喰らって、やっと倒れてくれる。

そんな存在だ。

これまで、7．62ミリ弾が歩兵が持つことの出来る最大口径だった理由は、意外と簡単だ。

大口径の口径を国際標準化しようとして、各国が勝手に議論と開

発を進め、主導権争いに失敗したせいだ。

大口径化したとして、何ミリが適切か。

そして、何ミリなら妖魔相手に勝負になるか。

妖魔や魔族という未知の存在相手に、口径のサイズの有効性を巡っては自称専門家や銃器メーカー、軍が入り乱れて百家争鳴状態。

さらに、前線での銃火器、弾薬不足をカバーする量産体制強化の必要性がこの状況に拍車をかけた。

口径のサイズが決まらない上に、従来の弾薬を量産し続けなければならない状態で、人類は戦っていたのだ。

生き残ったのが、ある意味では奇跡だ。

無論、この状況にあぐらをかいているほど、人類は酔狂ばかりではない。

アフリカ、南米で莫大な犠牲を強いられた帝国陸軍がこの状況に危機を覚えたのはむしろ当然のことで、アメリカに関知されることを嫌った参謀本部が近衛を隠れ蓑にして、狩野重工に“最低でもオーク兵を1撃で倒せる”弾丸の開発を依頼。

狩野重工と近衛がどうやって調査したのかは知らないが、陸軍に提示されたのは、最低8．6ミリ以上、10ミリ前後が望ましいという結果だけ。

これを受け、陸軍にて新型弾薬開発の中心的人物となったのが、四谷中佐だ。

彼は確実さを重視し、望ましいとして提示された9，7ミリのサイズを選択したのは、様々なテストの結果、単発で平均的な日本軍将兵が反動を抑えられる限界サイズがそれだとされたからだ。

この弾丸の別名を“ヘルマーチ弾”と呼ぶのは、この時の過酷なテストに参加させられたスタッフの当てつけだとまことしやかに語

られているが、このサイズが、意外な制約を銃と歩兵達にもたらすことになる。
大口径故に、自動小銃の強みであるはずの銃のフルオート化が出来なくなったのだ。

次の文章を読んで、よく考えて欲しい。

7，62mmNATO弾は、フルオートで射撃すると反動の制御が非常に難しい。

どうだろうか？
7，62ミリ弾の段階で制御が難しいとされる。
しかも、制御するのは日本人より圧倒的に体格的に恵まれているアメリカ兵だ。
彼等をして制御困難と言わしめる7，62ミリ弾より大口径の弾丸を使用する銃を、フルオートにして発砲したらどうなるだろうか？

フルオート可能な銃の試作はされた。
どうなったか？
発砲どころの騒ぎではなくなった。

結論だけ述べておこう。

・フルオート制御するためには、歩兵はプロレスラー並の体格が必要。
・二脚を使用する必要有。
・銃本体はどれ程軽量化しても、約7キロと重く、野戦での運用は困難。
・部品点数が多く、製造にもメンテナンスにも時間がかかる。
・コスト的にも12，7ミリ口径の機関銃を生産するのと変わらな

い。
・フルオート射撃を続けていると、銃身が過熱して暴発することがある。
・部品が破損しやすい。

試作された９，７ミリ試作自動小銃は散々な代物だったことになる。

実際、この銃の試射を行い、反動で跳ね返ってきた銃に顔面を殴られた四谷がフルオート機能を省略（オミット）することを決断して、一番に安堵したのは、当の開発スタッフだった。

「フルオートなんて、無駄弾バラ撒くだけだもんね」という、元軍事オタクの無駄知識を総動員して省略化を正当化し、セミオート開発を求めた四谷に返ってきた開発チームからの返答は、

・セミオートしてもいいけど、それでも暴発するよ。
・構造は機関銃とほとんど同じで、メンテナンスは歩兵一人じゃ大変だよ。

四谷を怒らせるのに十分なものだった。

詳しく言うと、セミオートで毎分４０発以上のレートで発射していると、発射ガスの影響で、銃身や機関部が過熱して暴発する可能性があるというのだ。

さらに、大口径故に、ガス圧を利用した発射機構に強い負担がかかって部品が破損し、故障の原因となるというのだ。

開発の結果を要約すれば、「９，７ミリ弾薬を使用したければ、従来のような自動小銃としての使用は諦めろ」ということになる。

これでは１２，７ミリ機関銃を歩兵にバラ撒く方がマシと四谷がサジを投げかけたのも無理はない。

だからといって機関銃を配備するというのはあまりに無謀な発想で、同時に出来る相談ではなかった。

先行していた9，7ミリの生産ラインもほぼ完成しつつある中、ついに四谷は覚悟を決めた。

銃のボルトアクション化だ。

部品を徹底的に単純化させ、部品一点一点の強度を最高に高めると同時に、ある程度部品同士の接触に余裕を確保することで耐久性と耐候性を持たせた。

繊維素材性のストックの他、日本の製造業が得意とする自動車などの部品加工技術を注ぎ込んだ結果、一発一発、トリガーを引くごとに手動で遊底（ボルト：薬室に弾を送り込み、薬室後部を閉鎖する部品）を操作弾薬を装填する必要があるが、最も確実にして、歩兵達にも短期間で慣れさせることが出来る構造は、日本という高温多湿、寒冷酷暑激しい環境に優れた適応性を見せた。

なにより、狙撃部隊に配備された試作銃は、各所で一発で遠距離のオーク兵を一方的に射殺し、好成績と高評価を得た。

「ご先祖様達は、三八式でＭ１カービン相手に勝ったんだ！帝国軍人としての根性見せろ！」という四谷の無茶苦茶な意見（否定論者にブチ切れた時の暴言とも言われている）がなぜか通ったのは、そんな運用結果があったからだ。

この結果、大口径弾丸特有の反動を殺すために、特殊なマズルブレーキと共に採用された反動抑制のための長銃身を持つ、１３７，６センチ（平均１７０センチの陸軍歩兵の場合、だいたい銃口が胸に来る）という、現代ライフルでは考えられない長さの銃は、陸軍歩兵に押しつけられた。

ボルトの操作に慣れれば、毎分２０～３０発のレートでの射撃が可能という操作しやすさ、そして部品点数の少なさ（わずか８点のパーツのみ！）から来るメンテナンスの容易さと、スコープさえつければ狙撃銃並みの命中精度の高さで、自動小銃から切り替えがなされた配備当初はともかく、配備が進むにつれて歩兵達からはかなりの好評をもって受け入れられた。

目の前でオーク兵がぶっ倒される姿を目の当たりにすれば、誰でもそうなるだろう。

前線からは配備を望む声が殺到し、軍による組み上げ調整が間に合わず、結局、前線に製造メーカーからパーツ単位で送られて来て、現地で兵士が組み上げられたものが配られたなんて信じられないような逸話があるが、その銃が兵士達にとって、頼れる相棒であることは変わらない。

実際、この銃の威力を知っているのは歩兵ではなく、相手のオーク兵達だ。

それまで、人間を恐れること無く突撃してきたオーク兵達が、近づいてこないのは、こっちにそれほどの武器があると、やっと理解したからだ。

数度にわたる攻撃も、人類側の攻撃力の高さに恐れをなしたオーク兵の戦意が低いせいでほとんど人類側の散発的な反撃だけで事が済んでいる。

これ幸いに、人類側は仙台市街地からの撤退を開始しつつあった。

その支援に当たるのが、半ば捨て身に近い、四式を持つ歩兵達と、そして、マラネリ・ドイツ連合軍のメサイア部隊だった。

四式歩兵銃と１２，７ミリ機関銃が頼りの兵士達を見守るように、

白と黒のメサイアが並んで仙台市街地から、彼等を狙う魔族軍ににらみを利かせていた。

アップルソース・ダイアリー　第二話（後書き）

四式の外見は伝統的な曲銃床を採用したライフルです。
サムホールを使用した米軍のＭ２（８．５８弾）や英国軍のＬ９６のようにしなかった理由は、逆手に持って相手を殴り殺す時に銃を掴みづらいから。だそうです。この世界の公式文書に書かれていました。豆設定でした。どうでもいいことですけどね。
次回、やっとフォイルナー少佐やイリスを出せます！
長かったなぁ……。
次回、仙台方面でのメサイア対メース戦になる予定です。
よかったら感想とか下さい。
故人となった美奈代に対するお悔やみとか大歓迎です。
作者への抗議は……ご勘弁ください（笑）

アップルソース・ダイアリー　第三話

「仙台平野を陥落させる理由が」

ズルドは額に青筋を立て、煎餅をかじった。

バリバリという、まるで野獣が哀れな草食動物の骨でもかじっているような、そんな音を立てながら、それをかみ砕いたズルドは、湯飲みを掴んだ。

「次男坊共は分かっていない」

次男坊――義勇軍に参加している貴族達のことだ。

爵位は長子単独相続が原則の貴族社会で、男子の次男三男と生まれれば、正直な話、これほど惨めな存在はそうはいない。

ある程度の食扶持（くいぶち）は爵位を持つ親や兄、時に姉からもらうことが出来るが、貴族は名ばかりで、爵位も名乗れない、実質飼い殺しの日々に苦しむのだ。

それでも彼等は、貴族であることを誇りとし、貴族としてのみ振る舞う。

一方、彼等を支える平民達にとっては、爵位こそが貴族の価値であり、平民の前で爵位を名乗れない彼等は、家柄をどれほどひけらかそうが、所詮は飼い殺しの犬でしかない。

“公爵家の次男より、ウチの飼い犬の方がマシ”という平民達は公然と侮蔑する。

そんな現実から逃れようという気力のある者の多くは、軍功をあげて幾ばくかの爵位を得ようとして軍人となるか、早々に爵位継承

を諦めて平民に身分を落とし、いずれも自活の道を進む。
だが、人間界に来る多くの貴族の次男、三男は、こういう道を選ばず、安楽な生活に浸りきっていた連中だ。
どのみち、ロクな連中ではない。

まともに戦いを望む者の多くは、プロが集まる傭兵として戦闘に参加している。
しかし、彼等は規則に縛られることを嫌い、傭兵を身分的に忌み嫌う。

思うがままに生きられる。
周囲は自分に従うべきだ。

それが彼等貴族のルールだ。
ズルドは、このような連中が嫌いだが、個人的な感情だけで配慮してくれる相手ではない。
この日も、中央の何とか言う伯爵家の三男坊がメース部隊を引き連れて先陣を切らせろと言ってきたばかりだ。
しかも、敵本陣へたった5騎で！

「仙台平野を陥落させることに急いだのは、新潟で賄いきれなくなった門（ゲート）を増やすためだと、何故言ってもわからん」

「戦争したくてしかたないのだよ。オモチャを前にしたワガママな子供に“待て”が通じないのと同じだ。それで？門（ゲート）の件だが」

「ああ」
ズルドは目の前に地図を広げた。
「今、俺達が必要なのは直径２０キロクラスの大型の門（ゲート）だ。地形上、平坦な土地が望ましい。この弓状列島の地形は入り組んでいるせい

で、このサイズの門（ゲート）を設置出来る場所は限定されている。だからやってるんであって、合戦ごっこするためではない」
「設置は北陸では無理か」
「ああ。新潟でも2．5キロクラスが頑張ってるが、もう設置する余裕はどこにもない。
　自然環境への影響を無視して、“反重力弾（グラビトロン）”を使用して、平地を作るべきなんて強硬論も、補給部門を中心に出始めている」
「無謀な。空間が歪んで、門（ゲート）の設置なぞ出来まいに」
「それだけ、焦っているのさ。連中も」
「そこで、なけなしの物資を叩いて仙台を攻めた……」
「大型輸送船団を受け入れるには、どうあっても10キロを超える門（ゲート）が必要だ。つまり、この仙台平野を確保出来るか否かが、これからの戦略に致命的な影響を与えるというのに――っ！」
「歌劇や詩歌の中でしか戦を知らぬ愚か者に、口で何を言っても無駄じゃて」
　ホーサーは苦笑を漏らす。
「今日来た若造には何と？」
「やりたければ勝手にやれ。そう告げた」
「思い切ったな」
「ああ。必要だと思うならどうぞ勝手にやってくれ。ただし、俺達ヴォルトモード軍は、残念ながら物資も兵員も不足しており、一切の支援、救援は出来ないことを予め了承して欲しいと……誓約書まで書かせた」
「連中は？」
「明日までに全ての陣容を整えて、明後日、仙台市へ仕掛けるというわ。バカが……」
「仙台市からは、すでに敵は撤退を開始しとるんだろう？」
「ああ。俺が人類でも、ここで意地になって仙台市を防衛することなどしない。そんなことしたら、戦火が与えるダメージが高すぎて、市街地の復興に支障を来す。

ここで一度、防衛を放棄して再起を期すほうが利口だ」
「……じゃな。市街を破壊するつもりは？」
「今はその余裕がない」
「ふむ……いっそ、その貴族共にやらせたほうが」
「バカを言え」
ズルドは、その巨大な手で、蠅でも追い払うように手を振った。
「土木作業じみたことをやらされたなどと、魔界で吹聴されてみろ。それこそ何が起きるか、考えたくもない――ところで」
ジロリ。
ズルドは、ホーサーの顔を食い入るように見つめた
「……何じゃ」
「スッパード、お前、弟子をとったと言っていたな」
「ああ。筋が良さそうなのを選んだ。それが？」
「うむ……興味があってな」
「ふん……ワシが個人でやることじゃ、放っておいてくれ」
「お前がそう言うなら……」
「興味があるのか」
「ラドラー卿があちこちで話のネタにしているんでな」
「……あやつめ」
「フォルツ家の娘だとか」
「一人はな」
「何と言ったか……」
「ティアリュート」
「ああ。そんな名前だ。今はあの狂姫のところで傭兵をやっているが、正規軍時代はかなり腕前で鳴らしたと聞いたぞ？」
「手合わせはした。筋は良い」
「どうだった」
「ボッコボコしてやったわ。最後には涙目よ」
ホーサーは楽しげに声を上げて笑った。
「元々、ワシが正規軍時代に立ち上げた“死の宣告”大隊にいた女

というから、興味をもったようなものじゃ」
「美人か」
「そうじゃな」
「そう……か」
「なんじゃい」
「お主……その」
「何を考えておるか。ワシがあの小娘相手に腹上死するとでも」
「……使えるのか」
「もうションベン以外に使い道があるもんかい」
「……そうか」
「しつこいのぉ」
「なら、その顔の手形は何なんだ」
「ああ。これか」
ホーサーは両方の頬についた真っ赤な手形を軽く指で掻いた。
右の鼻には丸めたテッシュが詰められている。
「なぁに。朝、挨拶代わりに尻を撫でてやったらこの有様よ」
あまりにあっけらかんとしたその態度に、ズルドはため息混じりに呟いた。
「……心配はいらぬか」

●仙台沖　マラネリ軍飛行艦“エトランジュ”艦内
「戦線は膠着状態とはいえ」
仙台湾に浮かぶマラネリ軍飛行艦“エトランジュ”艦内で、殿下は言った。
国王控え室となれば、さぞ豪華なインテリアがと思いきや、なんと畳敷き、テーブルは卓袱台だ。

そこに靴を脱いだ殿下とフォイルナー少佐達が座布団に座って話し込んでいた。

「歩兵対オーク兵のレベルでの話だ。メサイアとなれば話が違う。数は圧倒的に向こうの方が有利。日を追うどこに数が増えている。今朝の時点で、彼我の戦力比は1対10。一騎で10騎潰せば勝てないことはないが」

「私達だけで？」

「当然」

「……風車めがけて突撃するくらいの神経が求められますね」

「覚醒剤が必要なら処方してあげようか？」

「結構です。正気の沙汰とも思えませんが」

「それでいい……まぁ、僕にとって最悪に近い問題は」

殿下は、ちらりと横に座るフォイルナー少佐に目配せを送った。

「……明日、第一皇帝師団第一大隊は、予定通り仙台へ入ります」

その顔は無表情で、何の感情を読みとる事も出来ない。

「皇帝陛下直卒の部隊で、我々には、その部隊の前衛を任されています。

敵が攻勢に転じた場合、我々はその全てを食い止めることが任務。ドイツ軍人である以上、陛下の御前で無様な姿はさらせはしない」

「僕は」

殿下は言った。

「あの皇帝ほどの無茶は出来ない」

「……」

「あの子はワガママ過ぎる。この状況で動くことは軽率に過ぎる」

「まだ幼いですから……その、分別というか」

「……皇帝は僕と同い年だぞ？クラッチマー中尉」

「――失礼しました」

ブリュンヒルデが、小さく頭を下げた。

「信仁陛下がついに出陣されたというのが、余程刺激になったんだ

ろうな……まぁ、英国や仏も王子を出すというし。この動きはしばらく止まらないだろうな。一体、どれだけの王朝の血が絶えるのか」

「陛下は」

フォイルナー少佐は言った。

「その流れに乗っているだけと？」

「はっきり、軽率だ」

殿下は雷おこしをかじりながら答えた。

「ドイツ皇帝家の血筋は細すぎる。あの娘一人に何かあれば絶えてしまうんだ。あの娘はもう少し、自分の身体に流れている血というか、立場を考えるべきだ」

「是非、殿下」

ブリュンヒルデは、フォイルナー少佐のコーヒーに気を使いながら言った。

「それを、陛下に申し上げてください。そうすれば」

「勘弁してくれ」

煩わしい。といわんばかりに殿下は手をパタパタと振った。

「僕だって、いろいろと、あの娘の気の強さには苦労しているんだ。デュミナスの一件だけで、僕とあの子がどれだけケンカしたか、知らないわけじゃないだろう？」

「面と向かっていたら学校の先生が必要だったとか」

クスクスという軽やかな笑い声に、

「否定はしない」

殿下は憮然として答え、ココアを空けた。

そのタイミングだ。

艦内に警報が鳴り響いた。

「殿下」

お付きの武官が一礼の後、報告した。

「定刻です。日本及び独艦隊による艦砲射撃が開始されます」

「よし――艦橋へ行く。君達も見に来るか？」
「……お供します」

ドイツ皇帝が直卒するメサイア部隊展開を前日に控え、ドイツ海軍は仙台市郊外の魔族軍陣地への事前砲撃支援を決定、日本海軍に協力を依頼した。
大洋艦隊（ホーホゼーフロッテ）がこの時点で保有する戦艦は6隻。その全てが投入された。

バイエルン級（38センチ3連装砲3基門）2隻
シャルンホルスト級（30センチ3連装砲3基9門）4隻

【参考】バイエルン級対地砲撃戦闘支援艦
基準排水量：41，212t
全長　252．4m
速力　33ノット
乗員　1，863名
兵装　38．3cm（55口径）連装砲4基
　　15cm（55口径）連装砲4基
　　10．5cm（65口径）単装砲4基
　　30mmCIWS4基

別名D型戦艦。
アフリカ、タンザニア戦線におけるドイツ軍第一次上陸作戦失敗の原因を、上陸時の火力支援の弱さと断定した陸軍からの強硬な要求により実現した“D計画”に基づき建造された。
装甲は対20センチ榴弾砲の直撃に耐える程度の性能しかないが、速力は艦隊随伴が十分可能な30ノットを超える良好なスピードと長距離航行を可能にしている。
艦の設計は、計画だけで終了した赤色戦争前の“ビスマルク級戦

艦”の建造計画時の設計図をそのまま利用し、航続距離を稼ぐため、装甲部分のみ軽量化した。
本来はガスタービンエンジンを搭載する予定だったが、狩野粒子がタービン内部に侵入すると爆発する可能性が高いことが判明し、ディーゼル機関に切り替えた。
独海軍最大の３８センチ砲を搭載しているが、対艦攻撃能力は皆無。
１５センチ副砲も対地攻撃専門で、対空戦闘可能なのは１０．５センチ砲以下の両用砲に限られる。しかし、これも対艦攻撃能力は低く、艦隊戦は想定外という対地砲撃支援戦闘艦の宿命からは逃れられていない。
アフリカ戦線終了後、砲撃距離を伸ばすために、砲身の寿命が減ることを覚悟の上で口径を５５口径まで延長している。
同型艦は、バイエルン、ヴュルテンブルク。バーデン（この時点で建造中）

【参考】シャルンホルスト級対地砲撃戦闘支援艦
基準排水量：３０，５１２ｔ
全長　２３５．４ｍ
速力　３５ノット
乗員　１，４６３名
兵装　３０．３ｃｍ（５５口径）３連装砲３基
　　１５ｃｍ（５５口径）連装砲４基
　　１０．５ｃｍ（６５口径）単装砲４基
　　３０ｍｍＣＩＷＳ４基

別名Ｏ型戦艦。

バイエルン級建造計画「D計画」とは別の「O」計画により建造された、別名“世界で最も美しい戦艦”。

設計の基本となったのは、スウェーデンの依頼で開発した巡洋戦艦「スヴァリイェ」級の設計図。

皇帝が要望したのは４０センチ砲搭載艦だったが、シックルグルーバーが数値を勝手に書き換え、皇帝には旧ビスマルク級戦艦の設計図を見せ、議会には巡洋戦艦「スヴァリイェ」級の設計図を提示して許可を得た挙げ句、巡洋戦艦「スヴァリイェ」級の現代版として建造を命じた。

皇帝の寿命を縮めた曰く付きの艦とも言われる本級は、戦艦としては小型な３０センチ砲を搭載しているが、主砲以外の武装はバイエルン級に準じ、決して侮ることは出来ない。

さらに砲門の数がバイエルン級より3門多くて口径も小型な分、発射スピードが速いので効率的な弾幕が張れる利点がある。

しかし、船体の設計に欠陥があり、凌波性が低く、高い波を被ると主砲塔装備の測距儀が使用不能となることが判明した時には手遅れだったのが悔やまれる、ちょっと残念な艦。

独海軍が凌波性の低くさをスウェーデン海軍がどうやって回避していたかを、それとなく調べたら、スウェーデン海軍は最初から凌波性が低いことをさすがに認識しており、それについて、「戦艦とはこういうものだと思っていたから、放っておいた」ということが判明。

小手先ではどうしようもないことから、４隻建造した時点でこの艦が欠陥品であることを海軍も認めており、この艦を改良した改シャルンホルスト級（P級）の計画も持ち上がっているが、議会の許可が降りていない。

同型艦はシャルンホルスト、グナイゼナウ、ローン、ヨルク。

世界に冠たるドイツ帝国が保有する戦艦はこれで全部の６隻。
帝国海軍がこの時点で４０センチ砲以上の搭載艦を１２隻を保有するのに対して、数的には半分しか保有していない。

理由はちゃんとある。
ドイツ海軍そのものが、戦艦の保有に消極的なのだ。
その素地は陸軍大国としての認識にある。
歴代の皇帝でさえ、陸軍国家ドイツ帝国のトップとして、常に陸軍を重視し、その分、海軍は軽視しする傾向にあった。
軍艦に使う金と鉄は海に捨てるようなもの。という発想は、１９２０年代の日英を中心に繰り広げられた世界的な建艦競争を「無駄金を水に浮かべて喜んでいる」と酷評したウィルヘルム二世の言葉に端緒にうかがい知る事が出来る。

海軍の艦艇は、通商保護と、その破壊にこそ価値があれば良い。

皇帝のそんな意向を受けた海軍は、実際の所、通称保護用の海防艦と潜水艦ばかりで編成されており、代表する大型艦は１万トン以下の巡洋艦が務めるのが伝統だ。
意地を張っているように思うだろうが、それで海軍は満足している。
普通の意味での「戦艦」を独海軍は一度たりとも保有したことがない。
水上艦で保有するのは船団護衛用の駆逐艦ばかり、攻撃の主力は水底に潜むＵボート部隊の仕事だ。

海軍の任務は陸軍と商船隊を護衛することであり、艦隊同士で殴り合うことは問題外。

対地砲撃戦闘支援艦――――略して戦艦を保有するに至った経緯は、

アフリカでの領土獲得戦において、上陸部隊の支援には駆逐艦の火砲では弱すぎると、陸軍からその配備を要求され、当時の皇帝が建造を命じたからに他ならない。

陸軍から要求されたのは、陸上からの２００ミリ砲程度の榴弾の直撃に耐えられるだけの装甲を持ち、沿岸部からの砲撃で敵陣地を叩くことの出来る艦というもの。

海軍は、この建艦計画に協力したか？と聞かれれば、そんなことはない。

元来、潜水艦を主力とする独海軍は、戦艦などの大型水上艦の運用は実は大の苦手で、船団護衛用の駆逐艦以上の保有を本音で言えば断りたかった。

大型艦は整備も人員も補給も潜水艦より圧倒的に負担となる。

水上艦の面では弱小海軍である独海軍には、その負担が相当な重荷になるだろうと、誰の目にも明らかだったのだ。

「予算を増やされてもイヤだ」と時の洋艦隊司令官（ホーホゼーフロッテ）はきっぱりと言い切っている。

押し切ったのは、陸軍重視の皇帝だ。

いささかに戦争や大きな兵器にロマン主義的な憧憬を持っていたらしいこの皇帝にとって、海軍は陸軍をアフリカに上陸させる手助けが出来ねば、存在する意味がない。

Ｕボートでは妖魔に勝てない。

火力で陸を叩ける戦艦が必要だ。

そう、考えていたらしい。

皇帝は勅命をもって、アフリカに戦闘機部隊を送り届けていた空軍（ルフトバッフェ）が中継基地として計画されていた空母４隻の建造計画を含め、陸

軍の増強計画もかなりをフイにした。

その分の予算と資材で、４０センチ砲８門搭載艦６隻、３８センチ砲搭載艦８隻を要求する行動に出る。

これに対して、徹頭徹尾、配備に消極的な態度を貫いた海軍がようやく妥協したのは、３８センチ砲８門をもつバイエルン級と３０センチ９門という、戦艦としては火力が弱い小型戦艦だけ。

この計画スタートを待たずに皇帝が早世したのは、持病の心臓病でなく、この小規模な建造決定を知らされたことによる、ショック死だとされる。

それ程、皇帝の要望にほど遠い艦隊ではあるが、これは、やる気のない海軍に無茶な兵器を押しつけるより、浮いた予算と資材でメサイアを組み上げて前線に送った方がマシという、当時海軍大臣だったウォルフ・シックルグルーバーの現実的意向があってのことだ。

ちなみに、今の皇帝は、現実主義的なシックルグルーバーを重用していることから、別に皇帝憎しで彼が戦艦配備計画を縮小したのではないことは確かだ。

一方、アフリカ、南米双方に軍を派遣した大日本帝国は事情がドイツとは真逆だった。

その狭い国土と、政府発足時点での交易立国を目指す明治政府は、陸軍国家としての軍のあり方を最初から否定。陸軍の基本となったのは、当時から世界最強とされた独陸軍ではなく、英国海兵隊だ。

つまり、海洋国、海軍国としての国家と軍の有り様を決めたのだ。

明治政府発足から間もなく、時のドイツ独海軍の護衛の元、生糸を満載した商船団（日本初の、日本人のみで編成された海外輸出船

団）が上海経由でシンガポールまで向かう途中、当時の清帝国の海軍によって船団ごと拿捕された事件（ノルマントン号事件）がこの意志決定に強く影響しているとされる。

日本船団が清国側の要求する賄賂の支払いを断ったことが原因ともされるが、とにかく、ドイツ海軍は高額な保証料金を政府から受け取りながら、たった1隻の中古装甲艦しか船団の護衛にまわさず、しかも、清海軍のジャンク船団相手に戦いもせずに船団を見捨てて逃走、日本人船員数百名が命を失い、明治政府のメンツを丸つぶれにさせたことは確かだ。

世論は海軍重視を主張し、大砲1門を陸軍に配備するなら、海軍の軍艦に乗せるべきとさけんだ。

この声に押されたのが、明治大帝だ。

宮中経費の一部を海軍に回す決断は、国を動かし、海軍は小型ながら一定の数の艦艇を配備させ、後も続く清国海軍の海賊行為に対して武力をもって反撃出来る力を手に入れた。

後に言われる“黄海紛争”の始まりだ。

西王朝発足後まで続いた海賊行為取り締まりの結果、日本軍の重点は船団の護衛となり、その国力の多くは海軍へと向けられた。

海軍に護衛された船団は世界中に広がり、海洋国家、貿易国家日本を支え続けた。

その長年の積み重ねの結果、陸軍の規模こそドイツ軍の半分程だが、海軍は戦艦、空母、駆逐艦、潜水艦全ての面において、総トン数からすればドイツ海軍の数倍の規模を誇るまでに成長した。

大洋艦隊の後ろを航行するのは、その中から割り当てられた大日本帝国海軍第五艦隊、改金剛級（３８センチ連装砲５基１０門）４隻を主力とする打撃部隊だ。

【参考】改金剛級対地砲撃戦闘支援艦
基準排水量　３７，０００ｔ
長さ　２３７ｍ
速力　３４ノット
兵装　３８センチ連装砲５基
　２０ミリＣＩＷＳ４門
日本で最初に建造された対地砲撃戦闘支援艦。
主砲以外は防空に必要な最低限度の装備のみが与えられた恐ろしいほど割り切りの良い艦。
一番艦金剛と二番艦比叡は建造と同時に南米戦線へ試験導入のため派遣された。
対地砲撃戦闘支援艦の運用に懐疑的な議会と米軍の疑念を晴らすべく活躍が見込まれた両艦はパナマ防衛線における対地砲撃支援で絶対的な力を見せつけ、その功績をもって米海軍に戦艦建造計画を立案させた。
米軍は、自前の戦艦が配備されるまの穴埋めとして、非公式ながら金剛級の供与要請を日本政府に打診したという逸話がある。
その後も、三番艦白根（春菜内親王殿下に配慮し、榛名の命名は避けられた）、四番艦霧島と順調に同型艦が建造され、いずれもが南米、アフリカで活躍した。
だが、ラプラタ沖で金剛が妖魔部隊の集中砲火を受け戦没。
これは帝国海軍で唯一、航空機と潜水艦によらない１万トン級以上の戦没艦の記録となったのは皮肉なものである。

「さてさて……」
アフリカ沿岸部で魔族軍と殴り合った歴戦の艦達が筒先を並べている。
砲撃は、“エトランジュ”の艦橋から殿下達が見守る中、開始さ

れた。
仙台湾奥まで侵攻し、横一列に並んだバイエルン級ネームシップ“バイエルン”を旗艦とするドイツ艦隊が横一列に展開。
その後ろに、艦隊旗艦“比叡”を先頭に横腹を見せる、改金剛級戦艦達が筒を仙台郊外へむけ展開する。
その戦艦達が一斉に砲火を開いた。

魔族軍陣地に向けた対地砲撃は、世界の海軍が血眼になって戦艦というカテゴリーを復活させた理由を、その力を持って説明してくれる。
ミサイルの通用しない世界で、戦艦ほど破壊力のある攻撃手段は重爆撃機だけだ。
しかし、それさえ、ジェットエンジンが使いものになればの話で、エンジンの中に入り込めば爆発するという得体の知れない効果を持つ狩野粒子影響下の世界では通用しない。
３８センチ砲弾が時間信管を作動させ、対地攻撃用の時雨弾を降り注ぐ。
鉄の雨が容赦なく頭上から魔族軍に降り注ぎ、或いは榴弾が妖魔達を肉片に変え、陣地の土砂ごと宙に舞い上げ、再び雨として地上に叩き付ける。
逃げ惑う妖魔達が、舞い上がる噴煙の中に消えていく。
それは、非常に一方的な光景だった。

「好きになれないな」
殿下はポツリとそう呟いた。
「僕はやっぱり、こういうのは嫌いだ」
「……ですか」
「君は好きか？」
フォイルナー少佐は無言で首を横に振った。

「そうだろうな。“朝のナパームは最高の香り”だなんて、イカれたアメリカ人に言わせておけば良い。まともな文明人の感想じゃないだろうから」
殿下はそう言うと、座っていた椅子から降りた。
「どちらへ？」
「出撃の準備だ」
「出撃？」
「ああ。戦艦部隊への反撃は、このエトランジュである程度は出来るが、メースが出てきたらそうもいくまい――ボレット、“ディアス”隊に出撃命令。仙台湾沿岸に展開して、メースの出現に備えるぞ！」
「はいっ！」
「殿下――我々も」
「ああ、出てくれるか」
「当然です」
「よし――明日は、メース焼ける匂いで目が覚めるだろう」
殿下はニコリとして言った。
「あの匂いは最高だぞ」

アップルソース・ダイアリー　第四話

“エトランジュ”が、ドイツ皇帝親衛軍所属の飛行艦“ヴィッテルスバッハ”以下で編成される飛行艦隊とランデブーしたのは、朝の7時のことだった。

至急、接触の後、軍務に入りたいというドイツ側の要求に対して、

「待たせておけ」

朝食の席で殿下は平然と答えた。

スクランブルエッグや焼き海苔、味噌汁と、まるで旅館の朝食のようだが、殿下はそれを旨そうに食べている。

「今は朝食の時間だ。ドイツ人は人の朝食をそんなに邪魔したいのか？」

ランデブーから1時間も待たされたドイツ側がＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）に乗って“エトランジュ”へ乗艦した。

“エトランジュ”側で急遽編成した儀仗部隊が並ぶ中、殿下は爪楊枝を使って歯の手入れに忙しい。

「殿下」

それをお付きの武官が諫めるが、

「うるさい」

殿下は平然と答えた。

「どうせ、あのうるさいのが来るんだ。迷惑料を請求しないだけ僕は慈悲深いというものだ」

「……はぁ」

「あれも、せめて紅葉さんほど、大人しければなぁ」

「ドクター津島が、ですか」

「ああ。かっとなると手も出るが、あれほど慎ましやかならば……」

「恋は盲目といいますが……」

「何か言ったか？」
「いえ……“鈴谷（すずや）”から救助されたドクター津島は壮健とのことで」
「……そうか」
殿下は頷いた。
「花束を用意しておけ。この作戦が終わり次第、見舞に行こう」
「はっ」
「花は、そうだな……菊の花がいいかな。おひたしにも出来て得だ」

「ハッチ開放。総員、捧げ――剣っ！」
赤い絨毯が敷かれた上にＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のハッチが開き、儀仗部隊が剣を捧げる。
ラッタルを兼ねたハッチをゆっくりと……いや、悠然とした態度で降りてきた一団。その先端を歩くのは、まだ年端もいかない金髪をツインテールにした少女。
つり目気味だが、大きな瞳が愛らしいあどけない顔と、触れるだけで折れそうな幼い身体は、フリルがたっぷり飾られたドレスこそ似合うだろう、まるで人形のようだ。
今、その身体をメサイア用の戦闘服に包んだ少女は、タラップから降りて、“エトランジュ”の甲板に降り立った。
弱々しき外見とはまるで違う、威厳さえ感じる態度と身に纏うオーラは、彼女がただ者ではない証拠のようなものだ。
「――久しぶりだな。まだ死なずにいたとは」
「体験教室の帰りか？」
ふふん。と鼻で笑った少女の言葉に、殿下はそっけなく返した。
「そんなツナギ姿とは。とうとう喰っていけなくなったか」
「意味がわからん。成人病で死んだという知らせがこなかったから、てっきり暗殺されたかと思っていたぞ」
「僕の国で国王に刃向かうバカがいるものか――元気そうで何よりだ、“打ち上げ花火”」

「ふん……潰れ肉まん」
「僕の艦に乗り込んで来るなり、ご挨拶だな」
「真実はいつだって受け入れがたいものだ――何だ。“シュツルム・グリプス”がついに実戦投入かバージョン、また上げたようだな」
「現状バージョン8だ。僕のRS－4“マデリーン”もデビュー済みだ……それで？何を持ってきた？」
「私が前線に出してもらえると思っているのか？」
「チャンスを見て派手に暴れようと思ってるんだろう？」
「皇帝専用騎“ノイシアK”だ……つまらんヤツだ」
少女は、拗ねたような口調で言った。
「あんなのはつまらん。飽きた」
「何が」
「出力が弱すぎる。日本騎が欲しい。おい、殿下。どこかに攫座した奴はないか？独帝国で引き取るぞ」
「ドイツで精霊体搭載型なんて整備すら出来まいよ――レルヒェ」
レルヒェ。
そう呼ばれた少女は、フンッと鼻で息をすると、腰に手をやった。
「我がドイツ帝国の科学力を侮るなと、何度言えば分かる！」
その声は幼いが故に迫力というものは全くないが、ハンガー一杯に高く、良く通る。
「精霊体搭載型エンジンなんぞ、サンプルを与えられたらすぐに実用化してみせるわ！」
「そのために、僕にフォイルナー少佐達を預けたんだろう？」
「あ……そうだ」
「なら」
「ああ。そうか」
ポンッ。
レルヒェは思い出したように殿下の脇に控えていたフォイルナー少佐に近づくなり言った。

「おい、少佐。？ヴィーグリーズ？を貸してくれ」
「こら」
あっけらかんとしたレルヒェに、殿下は咎めるように言った。
「騎体の所有権はマラネリにあるんだ。私物のように言うな」
「何だ。少佐は私の股肱だ。何の問題がある」
「だから、少佐の身柄はともかく、乗っているのはマラネリからのレンタル品だって」
「ケチだな」
レルヒェは口を尖らせて言った。
「そんなんだから、太るんだ」
「背が低いのは育ちのせいか？」
「何だとぉっ！？」
「本当のことだろうが」
殿下はレルヒェの頭を撫でた。
「お前は、本当に子猫（ケッツヒェン）みたいだな。ミャーミャーと……」
その手は優しく、慈しむかのようですらあった。
「ふん」
パッ
軽く殿下の手を払いのけたレルヒェは、ＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）のハッチ脇で待機していた武官達の中にいる少女を指さした。
「舐めてくれるな、身長も胸のサイズも、アイネとは良い勝負だ！」
「……あの子は、君より年上だろうが」
「３つも年上で、それで私と良い勝負だぞ？ある意味スゴイだろう！」
「あとで知らないぞ……？」
武官達の間に立つ、ドイツ軍ＭＣ（メサイア・コントローラー）用の戦闘服を身につけた銀髪の少女。その瞳はメガネに隠れて見えないが、殿下は、騎士として彼女の小さいから放たれる殺気を感じる。
冷や汗をかく殿下を前に、レルヒェは調子づく一方だ。
「頭も性格も堅くて融通なんて辞書に載っていないような女だが、

メサイアのコントロールだけは帝国でも有数――――“銀の姫”の二つ名は伊達では無い」
「ああ。そこにいる“青の姫”こと、イリスさんと並ぶほどとも聞いているが」
はぁっ。
「宝の持ち腐れもいいところだ」
「何だよぉ！」
「MC（メサイア・コントローラー）は、ワインじゃないんだ。寝かせておけば良いというものでは」
「寝かせて育つなら、とっくに！」
「そうじゃなくて……」
「何だ？１０歳の娘に何を言わせようとした？」
「僕だって同い年、誕生日だって3日と違わないんだぞ？」
「ちなみに、それで言えば、私の方がお姉さんだ。わかったか？弟。態度を改めろと何度も言っているだろう？姉に対してだな、あ・ね・に！」
「お前みたいな姉をもったら人生終わりだ」
「ぶうっ！それで！？」
レルヒェは、パッ。と明るい顔で訊ねた。
「あるんだろう！？もう1騎位、まわせるのが！」
「……」
はぁっ。
殿下はため息をついた後、肩を落とした。
「何があっても責任はとらないぞ？」

「うわぁっ！」
ハンガーの奥。

ベッドに拘束された純白の騎体を前に、レルヒェが黄色い声をあげた。
翼を持った白い騎体は、精悍にしてまるで工芸品のような流麗な線でまとめられていた。
「これはっ！？」
“ナハトガル”――僕が設計した模倣品（コピー）だ」
「コピー？」
レルヒェは、目の前の騎体をじっと見て、
「あれ？」
その華奢な首をかしげた。
「これ……どこかで」
「見たことあると思う」
殿下がバツが悪そうに言った。
「紅葉さんの“死乃天使”を、僕なりに設計してみたんだ」
「ああ」
レルヒェは、ぽんっと手を叩いた。
「それで……じゃ、これ、ＡＩ３エンジン搭載しているのか？」
「試作のが搭載されている。ただし、冷却システムや関節に問題があって、リミッターをかけている。最高でも“死乃天使”で発生するだろう出力の７２％が限界だ」
「……７２％」
「しかも、こいつを量産化なんて無理だ。コストが高すぎる」
「ノイシアの何倍だ？」
「５倍は超える。世代が２つか３つ違うと思ってくれればわかるか？」
「戦艦全盛時代の感覚でイージス艦を建造するようなものか」
レルヒェは、じっ。とメサイアを眺めながら悔しそうに言った。
「……くそっ。議会が納得しないな」
レルヒェが唸った。
「３倍までなら……黙らせる自信があるが」

「マラネリだって量産は困難だ。紅葉さんだって戦時中で押し切らなければ建造なんて出来ないと言い切っていたよ。だから、こいつは技術獲得目的の試作型でしかない」
「実戦には出られないのか？」
「バカにするな。標準タイプのメースなら五分以上で渡り合える。ヴィークリーズより格上の、僕が用意できるメサイアの中では上位騎だぞ」
「……我が国で、こいつを量産すれば」
「ダメだ」
「ダメ？」
「生産も整備もコストがバカのように高い。こいつを量産して、しかも維持するには、高い精霊体搭載型の量産、運用ノウハウと、何より紅葉さんがいる」
「ドクトル・ツシマが？」
「“死乃天使”の関節部の組み上げとセッティングは、彼女独特なものだ。とてもマネ出来ないというか、ここばかりはわからなかった」
「……ふむ」
しばらく、じっと考えたレルヒェは、思いついたように言った。
「とりあえずは、試運転させてくれ」
「……イヤだといえば？」
「コクピットハッチをこじ開けてやる」
「……整備兵を呼ぼう。ＳＴＲシステムのセッティングが必要だ」
「頼むっ♪」

満面の笑みを浮かべて目の前の騎体を眺めるレルヒェの口から鼻歌が零れる。
しかし、
「痛たたたぁぁぁっ！！」
鼻声はすぐに悲鳴に変わった。

レルヒェの耳を引っ張る者がいたのだ。
先程の銀髪の少女、アイネだ。
「陛下」
氷のような冷たい口調でアイネは言った。
「常にお立場をお忘れ無きようにという、私達臣下の願いは、何故、聞き入れて頂けないのでしょうか？」
「ち、ちょっとした親密な関係だから――――あの殿下とはっ！」
「学校でお友達とお遊戯をしているつもりだったと？」
「そ、そうですっ！」
「どうしてそういう――――っ！」
アイネの指に力が籠もる。
「痛い痛いっ！ごめんなさい、ごめんなさいっ！」
「もうっ」
ぱっ。
アイネの指が耳から離れた。
「殿下？明日からゲーム取り上げですからね？」
「私に死ねというのかっ！」

ゲームを取り上げられた独帝国皇帝レルヒェ・ヴィクトリア・キルシェ・アルベルト・フォン・プロイセン。若干１０歳は、臣下に涙目で抗議するのが精一杯だった。

アップルソース・ダイアリー　第四話（後書き）

……いろいろあって、もう力尽きました。
続きは明日以降で。

●人物紹介　レルヒェ
・ドイツ皇帝を8歳で継承した少女。
・“統べる者”の力を持つ騎士。
・メサイア使いとしては天才のレベル（操縦レベルS）だが、その実力のほとんどをゲームに注ぎ込んでいるゲームオタク。
・漫画・アニメ・ゲームが大好きで、非常に影響されやすく、様々なアニメグッズを持っている。一説には、最近、在日ドイツ大使館が秋葉原に移設したのは、彼女の命令によるとも。
・幼い頃から権謀術数の中にいたせいで、人見知りが激しく、あまり人と関わりたがらないため、人付き合いは下手。
・宮廷でも、人の多い場所を嫌う。
・友達は多くはないが本人はあまり気にしていない。
・立場的には知人自体は多いが、対人関係で深入りはしない。
・現在仲のいい付き合いをしているのはマラネリの殿下を除けばほとんどいない。
・殿下とはケンカ友達。
・根は心優しい女の子だが、よき皇帝であろうとする心構えはしっかりもっている。
・この戦いには、もう宮廷に籠もっているだけでは誰も魔族と戦わない。自らが率先して軍を率いねば、皇帝の義務は果たせないという強い思いから出陣している。
・モデルは「ハヤテ」の三千院ナギ。

●人物紹介　アイネ・アハート・ズィルバー
・銀髪小柄なメガネ娘。
・実はイリスの元同僚というか後輩。
・高いＭＣとしての才能から、皇帝専属ＭＣを拝命というか押しつけられた気の毒な少女。
・ドイツ軍大尉。
・「銀の姫」、もしくは「氷の女王」と呼ばれる程クールな性格。
・この時点で１３歳と、実はイリスより幼いが、性格は非常に大人びている。レルヒェが影で「性格ババァ」と呼ぶのはそのため。
・外見は身長１３８センチ。
・胸は真っ平なため、レルヒェには散々に論われているが、やられたらしっかり反撃する。
・彼女が怒れば、レルヒェでさえ文句が言えないという、ある意味で怖いもの知らずのレルヒェの抑え役。
・ＭＣとしては、イリスに匹敵する才能の持ち主。
・趣味は読書。児童文学が好き。
・マンガもゲームも嫌いというその割にゲームは強く、レルヒェは一度も彼女相手に対戦ゲームが勝てたことがない。
・視力が弱く、メガネを外されると何も見えなくなる。
・メガネに愛着があり、コンタクトを毛嫌いしている。
・モデルは大月悠祐子先生の「妄想少年観測少女」の山田愛音。

●メサイア紹介「ナハトガル」
・マラネリ軍試作メサイア。
・国王が“死乃天使”に触発される形で、“死乃天使”を参考に設計、建造したもの。
・国王が間近で見た“死乃天使”のイメージから推測し、設計されたパーツが組み込まれているため、“死乃天使”に近くても全く別系統のメサイアとなっている。
・これからレルヒェがパイロットとなって活躍してもらう騎です。

・名前は「逆襲のシャア」に出てきた「ナイチンゲール」の永野版「ナハトガル」からいただきました。
・「ナハトガル」のデザインそのものは、これから魔族軍側で使用させていただきます。
・では、この騎のデザインは?といえば、実はニュー・ガンダムです。
・“死乃天使”は、ＦＳＳの“エンゲージ”に、ガンダムＳＥＥＤに出てきたディスティニーガンダムの翼をくっつけたようなデザインで。
・レルヒェが似ていると思ったのは、実は翼のデザインが似ているからなんですね……（油汗）

アップルソース・ダイアリー　第五話

ズンッ

“ナハトガル”が大地を踏みしめる。

スプレーで描かれたドイツ国旗が肩で光る純白の騎体を守るように、皇帝親衛隊を示す黒色のノイシア達が周囲に降り立つ。

「まったく」

“ナハトガル”のコクピットでＳＴＲシステムの具合を確かめつつ、レルヒェは呟いた。

「私に合う子供用のＳＴＲシステムが組み込んであるってことは、最初から私にくれるって、そういう意味だろう？」

調整は完璧だ。

外国製のＳＴＲシステムが初めてというレルヒェにとってでさえ、そのしっくりとくる感覚は心地よくさえあった。

頑丈さが売りのゲトラグ社製ＳＴＲシステムに比べれば頼りないが、まさか壊れることもあるまい。

「単に」

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）では、アイネが精霊体“ラピス”を膝に乗せていた。

「殿下の体型に合わせていただけでは？」

「失礼なことをいうな！」

レルヒェは顔を真っ赤にしてアイネに噛み付いた。

「私とあいつと、どこが体型が似てるんだ」
「体型じゃ無くて身長です」
皇帝を怒らせて尚、アイネは冷静だった。
「陛下も殿下も身長差は１０センチないんですから」
「……むぅ」
「パワーがノイシアとは段違いです。ノイシアの感覚でこの子を振り回したら、騎体が吹っ飛びます。注意してください」
「……わかった」
言われなくても。
その言葉はレルヒェの口の中でかみ殺した。
ＳＴＲごしに伝わってくるパワーの凄まじさ。
これは騎士でなければわかるまい。
――とてつもない。
視線が、前方に展開するグリュックシュヴァイン隊、そこに並ぶ2騎に注がれる。
あの歴戦の猛者フォイルナー少佐をして熱望させたのが、この騎に搭載されているＡＩ３エンジン。
そこから生み出されるパワーが、ＳＴＲシステム越しにまるで自分の身体を浸食しようとしているかのようだ。
ブルッ。と身体が震えた。
これがあれば、世界中のどんな敵と渡り合っても勝てる！
レルヒェの血が騒ぐ。
「敵は？」
「落ち着いてください」

対するアイネは冷静だ。
「皇帝自らが先陣を切ったとなれば国内問題に」
「うるさいっ！」
レルヒェは怒鳴った。
「国内問題なんて知るかっ！」
「今度新聞沙汰になったら、おやつ抜き一週間ですよ」
「何だ、それは」
「ここにそれを認める陛下のサイン入りの書類があります」
通信モニター越しに、アイネは一通の書面を見せた。
「書類の中身はよく吟味してくださいとあれほど」
「わかったっ！」
アイネの説教から逃れるように、レルヒェはさけんだ。
「ここに大人しくしている！ただ、敵が接近してきたら！」
「――――ええ」
アイネの口元に笑みが走る。
そこに、恐ろしく好戦的な、そして邪悪な笑みをレルヒェは見た気がした。
「戦場で私の前に立って、生きて帰れる者などおりません。命乞いは無視。白旗は無視。悪魔の出迎えは歓迎しても、神の制止は聞きません。敵の頭蓋をグラスに血肉の晩餐を満喫する……私は死の司祭、破壊の具現者……責任は全部陛下のもの。私は無垢にして無罪」
「……今すぐドイツへ帰りたい」

「だめです」

「ＳＴＲシステムの調整費が……これで、“ナハトガル”のレンタル料が一秒あたり……この辺かな？」

“ナハトガル”とドイツ皇帝親衛隊の斜め後ろに布陣したマラネリ国王親衛隊。その真ん中に立つ“マデリーン”のコクピットでそろばんを弾いているのは殿下だ。

「相手は大金持ちだから」

「――――こら」

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）からの声に、そろばんを弾く手が止まった。

「殿下」

国王専属ＭＣ（メサイア・コントローラー）として、殿下の母、皇后エトランジュが直々に任命したのが、コードネーム「おクマさん」と呼ばれるマラネリ軍特殊部隊の腕利きのエージェントにして元傭兵という冗談みたいな経歴を持つクマナーニャだ。

金髪をポニーテールにまとめ、白い肌のうなじから控えめの香水が薫る、筋骨隆々とした巨体を戦闘服に包み込んだ自称“美女”だ。

性別は女と書かれているが、殿下は、恐ろしくて性別を直に確認したことはない。

「お友達からお金を取ろうだなんて、どういうことですか」

はっきり、カマの口調だが、殿下はすでに慣れているのでビビることはない。

ただ、マラネリ軍女性兵士向けのドレスの着用だけは勘弁して欲しいのが、殿下の彼女に対する真摯な思いだ。

「ふん」

殿下はそろばんを片付けながら言った。

「あんなのは友達じゃない」

「なら、妹ですか？」
「違う」
「うそおっしゃい。来る前から絨毯敷かせたり、この後のオヤツまで気配りしているのは誰ですか？」
「……まったく」
殿下は降参。といわんばかりに肩をすくめた。
「おクマさんには勝てない」
「そりゃそうでしょう？」
おクマさんは勝ち誇った顔で言った。
「私は皇后エトランジュ様直々のご命令でここにいるんですよ？殿下のお目付役として。そして、スイスのサナトリウムはレルヒェ様がよく遊びにいかれる場所ですし」
「あの子が折に触れて母上の所へ遊びに行っていることは知っている。その辺は感謝している」
「素直に教えてあげたらどうです？“ナハトガル”はレルヒェ陛下のために設計した騎体だって」
「くれたわけではない」
殿下はむっとした顔になった。
「母上から、レルヒェちゃんに相応しい騎体を作ってあげなさいとはいわれたが、軍事機密である試作型ＡＩ３システムまでドイツにタダでくれてやるわけには」
「“ナハトガル”はあくまで我がマラネリのものだ――と」
「国王としてそれだけは譲歩出来ん。いくらレルヒェが“デュミナス”がモンキーモデルだからって、母上に泣きついたところで」
「それで、母上に叱られた挙げ句、？ヴィーグリーズ？を組み上げたのは殿下」
「み、認めない」
「照れなくていいんですよ？」
おクマさんは真顔になった。
「前方、５キロにメースの反応。騎数２５。サライマ級と推定され

ます」
「25？」
「砲撃支援部隊と思しき反応がさらに8キロ後方に存在します」
「……さて」
殿下は楽しげに笑った。
「レルヒェ？」

「母艦に帰れとはどういうことだっ！」
“ナハトガル”のコクピットでレルヒェが顔を真っ赤にして怒鳴った。
「危険なのはわかっている！わかった上でここにいるんだぞ！」
「うるさいなぁ……“ナハトガル”を傷つけられたら困るんだよ。整備、大変なんだし、誰がその費用面倒見るんだ」
「金なら払うっ！」
「君の葬式代まで請求することになるのは御免だ。君はまだ子供だし、女の子だ。戦場にいるべき存在ではない」
「うるさいっ！ちょっと生まれてくる時に性別を間違えただけだ！」
「……納得した」
「そ、それは褒めているのか！？」
「さぁね？それでは、どうするんだい？」
「ここにいるのは」

“ナハトガル”がハルバードを構えた。
「遊ぶためではないっ！」

「なっ！？」
殿下が真っ青になったのも無理はない。
“ナハトガル”のブースターが火を放ち、敵陣めがけて突っ込んでいったのだ。
「バカッ！」
殿下は怒鳴った。
「マデリーンのブースターでも間に合うか！？おクマさんっ！」
「了解――ブースター全開と同時に全武装解除、“ナハトガル”を追います！」
「親衛隊、前へっ！“ナハトガル”を守れっ！」

「親衛第一中隊、前進っ！」
突然の皇帝の突撃に青くなったのは、皇帝を守る立場を仰せつかった皇帝親衛隊所属騎士達も同様だった。
「は、速いっ！何だありゃ！？」
「あのスピードについていけるのか！？」
「知るかっ！騎士、前へっ！ブースターが壊れてもいいっ！出力を全部ブースターに叩き込めっ！」

ノイシア達がハルバードや槍を手に“ナハトガル”を追いかけ始める。

それより速く動いたのが、フォイルナー少佐率いるグリュックシュヴァイン隊だった。

「ほう？」
“ナハトガル”のコクピットで、両脇を固める2騎に気付いたレ

ルヒェは小さく口元で笑った。
「さすがだな。少佐」

「実戦は」
普段は無口なフォイルナー少佐の口調に非難が込められている。
「シミュレーション通りというわけにはいきませんぞ？陛下」

「構うものか」
レルヒェは言った。
「大切なのは、私が前に出ることだ」

「……？」

「実際」
ははっ。
レルヒェは戦況モニターに映し出される彼我の反応を見て満足げに頷く。
「今まで布陣してから何分経った？敵がいることを知ってから今まで」

「……陛下」
困惑した。
そんな口調なのは、ブリュンヒルデだ。
「あの……実は」

「何だ」

「陛下の今、御座乗の騎体、相当なセンサーを積んでいるようですね」

「はっきりいえ」

「先程まで、敵メース部隊が5キロ先に布陣していることを、我々は誰も関知していませんでした」

「――――え？」

レルヒェの眼が点になった。

「……つまり」

「そうです」

フォイルナー少佐ははっきりと言い切った。

「記録には、陛下の暴走と記載されるべき事態です」

もう遅い。

全部が遅い。

「早く言えぇぇっ！」

本気でリセットボタンを探したレルヒェは、悲鳴と一緒に敵陣に斬り込むしかなかった。

まさか、相手が突っ込んでくると思わなかったのは、別に彼が無能だったからというわけでもない。

愚かなだけだ。

バルディシュア辺境地帯の貴族、ロンバルト・ディス・ジャスダフは、貴族を示す“ディス”を持っている貴族の三男坊。

彼にとって軍隊というか、社会に出ることは、平民に頭を下げるのと同じで、平民と同じ食事は、豚のえさを食べるのと同じ。

とどのつまり、家の外で生きることは、彼にとって耐えられることではなかった。

爵位を継いだ長男の家に居候同然の生活を続ける彼がそれでもここに来たのは、長男である男爵から“武功を立て、家名をあげてこい”という脅迫に近い命令を受けたからだ。

やる気なんてあるはずがない。

しかし、男として、このメースいう“おもちゃ”を与えられた以上、それなりに目立ちたいという心理は、ロンバルトの中にもあった。

こんな前線に出てきたのも、功名心というより、そんな子供じみた、「目立ちたい」という自己顕示欲があったからだ。

しかし、彼が持ってきたのはサライマ１騎。

男爵家として持っているサライマは３０騎近いのに、そのうちの１騎しか兄から与えられることなかった。

お付きの者でさえ、「金がもったいない」という理由で与えられることの無かった彼は、新潟に貴族達が勝手に作ったサロンに寝泊まりしながら、それでもしばらくは貴族として生活していた。

そんな彼の元へ届く家族からの便りは、戦場での活躍を催促するような内容ばかり。

自ずから、彼のような境遇の貴族の師弟達はサロンで屯するようになった。

「退屈だ」

そんな中で知り合った、似たような境遇の男達の中で、そんな声が上がるようになったのは、すぐのことだった。

人間の捕虜をなぶり殺しにする、その発想と手段の残虐さを競うという、彼らにとっては“遊び”にも彼等は飽き始めていた。

その中で、最も資金があり、多数の配下まで連れてきた男、エストヴァニア伯爵の次男、バートレットという男がポツリと言った。

役者のような仕草を好むが、肉体は役者の中では肥満の豚くらいしか果たせないだろう、そんな小男。

彼の一言が始まりだった。

サロンのふかふかのソファーに座り、酒浸りになった男達は、口々に同意をさけび、バートレットという男はそれに満足した。

我々は戦うために来ているんだ。

ここで無聊を囲うより、いざ戦いの場へ！

ロンバルトは、そんなバートレットの誘いに応じた一人だ。

ヴォルトモード卿の軍勢の事情など知らない。

彼等は、自分達という増援に対して感謝すべきではあるが、口を出すことが許される立場ではない。

せいぜいが地方の男爵が司令官をやっている、平民ばかりの軍に、何故、高貴なる出自の私達が制約を受けるというのか。

否、我々は制約を受けることはない！

そんな発想に忠実なバートレットは、配下に命じてヴォルトモード卿軍の前衛より前に勝手に陣地を作り上げていた。

ロンバルト達は、そこに誘われ、のうのうとやってきたのだ。

残念なことに、彼等が出陣の前祝いで飲み明かした昨晩のうちに、戦艦の艦砲射撃によって肝心の陣地はあらかた破壊されていたが、そんなクレーターだらけの景色でさえ、彼等にとっては物珍しい興奮すべき存在でしか無かった。

そこで死んでいった配下のことなど、知る必要さえ彼等は感じて

いないない。

豪華なキャビンを持つ飛行艦を引き連れた彼等は、前線は奇しくも魔界では一般的なメース、サライマばかりで編成された一端の部隊気取り。

正規軍から一斉に退役が始まったサライマシリーズを、貴族達は下取して領地の警護に使っている。

彼等の多くはそんな事情で入手されたサライマを家族から押しつけられた身だ。

そんなサライマでも、横一列に並ぶとさすがに壮観だ。

これを前に祝杯でもあげよう。

誰が言い出したか忘れたが、少なくともロンバルトはそれを拒むことを知らなかった。

絵にして家に送れば、仕送りが少しは増えるかもしれない。

そんな腹づもりもあった。

ハッチを開いた所で、コクピットにピーピーという“得体の知れない”音が鳴り響いた。

「何だ」

ハッチから出ようとして、ロンバルトはコクピットの中を見回した。

神経を接続すれば基本的に動くメースの操縦方法を一々学ぶバカがいるか。という貴族特有の暴論を信奉するロンバルトに、その意味がわかるわけがない。

戦況モニターを見ればすぐわかることだが、ロンバルトは、戦況モニターの意味すらわらない。

メースの“眼”が見た光景を映し出すスクリーン。

そこに、ポツンと映し出された点が、メースの形となって迫ってくる光景が、彼に理解出来る精一杯だった。

「……なっ？」

激しい震動が、彼を襲った。

アップルソース・ダイアリー　第六話

「負けた？」
泥だらけのロンバルトを目の前にしたズルドは、ギョロリとまるで見得を張る歌舞伎役者のような顔と仕草で彼を睨んだ。
「だからどうした」

「……っ」

そんな事を言われることさえ予想できなかったのだろう。
ロンバルトは金魚のように口をパクパクさせ、やっとのことで言葉を喉から絞り出した。

「私が殺されかかったんだぞ！この私がっ！」

泥水をかぶり変色したレースのついた胸のスカーフを叩き、ロンバルトは顔を真っ赤にして叫ぶ。

「男爵家の一族であるこの私が、騎体を破壊された！殺されかかったのだ！これを大事と言わず、何を大事というか！」

「……」

ズルドは瞑目して、その太い腕を組んだままになった。
食いしばった歯と額の青筋にロンバルトは全く気付くことはない。

「正規軍は何をしていた！私がこんな危険な芽にあったというのに、救難さえなかったとは、正規軍の怠慢では無いか！貴君は軍司令官として何をしていた！」

「……」

「……失礼」

ズルドの横から口を挟んだのは、彼の副官であるマーリンだ。

「貴殿は出撃の前に、前線において独自行動を我が軍が認める代わりに、何があろうと、我が軍を頼らない趣旨の宣誓書にサインをされておいでのはずで――」

「黙れぇっ！」

ロンバルトが一喝した。

「平民の分際で、男爵家、貴族に文句をつけるとは何事だ！」

「し、しかし……」

確かにマーリンは平民だ。

魔界の社会では貴族に反攻できる立場ではない。

貴族であるロンバルトからすれば、例え軍人であろうと、身分は一介の平民に過ぎないマーリンから意見を受けるいわれはない。

否、それどころか貴族としてのメンツに傷をつけられたのと同じだ。

「身分をわきまえろ、平民風情がっ！」

たじろぐマーリンにロンバルトは反駁した。

「高貴なる生まれである、この私に意見するとは、ズルド卿、貴君は一体、部下にどういう教育を！」

ドンッ！

ズルドの拳がデスクにめり込んだかと思った次の瞬間、その太い足がデスクを蹴り上げた。
スチール製の巨大なデスクが宙を舞い、天井に叩き付けられた後、ロンバルトの頭上めがけて落下を開始した。
悲鳴を上げて逃げたロンバルトの目の前で床に落下したデスクは、派手にバウンドすると金属の残骸として彼の前に無残な姿をさらした。

すっかり腰を抜かしたロンバルトは、自分が失禁していることに未だ気付いていない。
先程までの威勢の良さを失った喉からは、ヒィィィという笛のような音しかしない。
その目の前に仁王立ちになったズルドは、ロンバルトを見下ろしながら言った。

「無様に敗北しておきながら、貴族や氏素性が聞いて呆れるわ」

「なっ……」

「２０を超える氏素性良き者、かつては武辺を持って帝国に名の知れた一族の出自を謳った者の名も、一つや二つではなかったと覚えている」

武辺を持って帝国に名の知れた一族。

ズルドのその一言が、ロンバルトを正気に戻した。

ハッとなったロンバルトは踏ん張るようにして立ち上がり、胸を張った。

「そ、そうだ！我が一族の祖先、ナースンホルトは、五千年前、先の王朝動乱において、第一次チシイ会戦、第四次ウダ合戦と、数々の戦いで武勲を立て、男爵に上り詰めたのだ！その後に続く祖父、イートリッヒは敵将の首を自らあげ、帝国中にその名その名を――！」

「なら」

ズルドの野太い声が、ロンバルトの声を遮った。

「祖先、祖父に詫びるがいい」

「……はっ？」

ロンバルトは、言われた意味がわからなかった。

「貴様等はな」

ズルドの顔には一辺の哀れみもなかった。

「たった１０歳の人間の小娘率いる相手に負けたのだ」

「……」

ぽかん。とした顔のロンバルトが、何を言われたのかわかっていないのは明白だった。

「見るがいい」

おい。

ズルドが顎で示した先には、壁に取り付けられたテレビがあった。

魔界や天界で一般的な三次元立体映像ではない。

人間界のテレビだと、さすがにすぐに想像がついた。

人間界の言葉はわからないが、アナウンサーが興奮気味に喋った後、切り替わった映像の中では、メースのコクピットらしき場所から出てきた金髪の幼い少女が、コクピットに近づいた騎士らしき男

に無言で小さく頷いていた。

「……まさか」

「そうだ。少なくとも人類の最初の一太刀はこの小娘による」

「わ、私のではないっ！」

ロンバルトは色をなして否定した。

「あ、ああっ！断じて私ではないぞ！そ、そんな無様な、あんな子供に一太刀で倒されたなんて、貴族としてあるまじき失態を、この私がするはずがないだろうが！」

「……」

「わ、わかるだろう！？ズルド卿、わ、わわ、私は、武門の出だ！栄光あるジャスダフ家の出だ！その――――」

ロンバルトの腹にズルドの蹴りがめり込んだ。

どちらかといえば肥満体のロンバルトの身体が吹っ飛び、壁に叩き付けられた。

「ひっ……ひぃぃぃっ！痛い、痛いよぉぉぉっっ！」

腹を押さえ、のたうち回るロンバルトにズルドは冷たく言い放った。

「名誉あるジャスダフ家の一族とやらよ」

声は冷たく、そして力強かった。

それだけに、ロンバルトはその声に恐怖した。

どんな敵より、この場に送り込んだ兄より、怖かった。

「事破れ、恥辱を受けたなら、潔く自決するのが一族の名誉のためであり、貴様の値打ちを守る唯一の方法だ。
戦場へわずか単身で乗り込んで、先陣に出た不敵さは、貴族の面汚しにしてはよくやったと褒めてやろう。
遺族には武門の一族らしき名誉の戦死を果たしたと報告してもやろう。
昨日、誓約書にサインした一夕のよしみもある。
腹を切るなり、首をくくるなり、好きにしろ。
俺も貴族の端くれ、準備の時間位は与えてやろう。
貴様が平民と馬鹿にした、そのマーリンの前で、貴族はこうだという意気込みを見せてやれい」

貴族の名誉を守り、死ね。
ズルドはそう言っているのだ。
１０歳という小娘に敗北した恥辱は不問のまま闇の中で処理して、貴族の名誉のうちに死んだことにしてやろうという意志がズルドにはあったらしい。

だが、ロンバルトはその意志どころか言葉の意味さえわからなかった。

「な、何故、貴族の私が死なねばならんのだ！私がここに来た意味がわかっているのか！？私は、正規軍に動けと命じに来たのだ！私を守らなかった怠慢を帳消しにしてやるための命令を下しに！」

ズルドは、無言のまま、小さくマーリンに頷いた。
マーリンは“仕方ない”という顔で頷くと、片手を上げた。
すると、部屋の四方に待機していた士官達がロンバルトに近づく

なり、取り押さえた。

「な、何をするっ！は、放せっ、この下郎共め、私を誰だと思っているか！」

士官達は答えない。

ただ無言でロンバルトの四肢をねじ上げ、床に組み伏せた。

「どちらで？」

床に頭を押さえつけられる恥辱の中、ロンバルトの耳には声しか聞こえない。

「名誉の自決を拒んだのだ」

ズルドは答えた。

「戦死の方だろう。武器は人類のを使え」

「銃でよろしいですか？」

「……そこに転がっているスコップでたくさんだ。ぶん殴って処理しろ……ロンバルト、家族へは遺書は送ってあるな？」

「な、ないっ！」

ロンバルトは助かった！そう思って声の限り叫んだ。

「私は遺言を書き忘れた！そう、私の遺言を一族の者は待っている！」

「そうか」

ズルドは答えた。

「遺言を残さず死ぬか――――マヌケめ」

何を――――！

そう叫ぼうとした名誉ある貴族、武門の一族のロンバルトの喉は、名も知らぬ平民、マーリンが振り下ろしたスコップによって切断された。

その夜。

憮然とした顔のズルドの姿が、ホーサーの家にあった。

あぐらをかいたズルドの巨体が手にすると湯飲みが小さな猪口に見える。

電気が来ていないホーサーの家の照明は、あちこちに置かれた行燈型の簡易魔法照明だけだ。

ほんのりと小さな灯りが、ズルドと面と向かって座るホーサーの鶴の様に細いホーサーの老いたからだを照らし出す。

「戦場が遊びの場でないことは、子供でもわかって当然なことだろうが」

「ふん……子供以下なのさ」

「違いない」

ズルドは湯飲みの酒を飲み干すと、つまみを口に放り込んだ。

「貴族だからといって甘やかすからああいうロクでもないのが育つ」

「お主の娘はどうした」

「ああ、いい娘さ！」

ズルドは満足げに微笑んだ。

「ワガママひとつ言わず、貴族だろうが平民だろうが礼儀正しく接していると聞いている。イスラフェルのメーカーの野郎が世辞だとわかっていても、ああいう娘が欲しいなんて言ってくれると、親として鼻が高いわ！」

がはは！と、酒臭い息と共に吐き出されるズルドの高笑いが室内を揺らす。

「そうか」

「家族はいいものさ」

ちびりちびりと酒を飲むホーサーに、ズルドは気付いたように言った。

「それで？お主も独り身が寂しくなったと聞いたが」

「ああ」

ホーサーは小さく頷いた。

「ちとな？ワシも老い先短い身じゃて。この辺で弟子でもとってみようかと思ってな」

「珍しい」

「おおい！」

玄関で不意に男の声がした。

「爺っ、いるか！？」

「おや」

ホーサーが腰を上げた。

「この時間に、あやつが女の所に行っておらんとはな」

「いや、そのことだがな？」

訊ねてきたのはラドラーだった。

ラドラーの亡き父はホーサーの盟友であり、実はズルドの亡き妻、コーシウスの縁者に当たる。

ズルドにとっては、

この時代で初めて出会った身内。

そう呼んで差し支えない。

当初、ズルドが来ていることを知り、遠慮したラドラーを強いて座らせ、湯飲みを握らせたのはズルド自身だった。

「いや、実は」

ラドラーが言いづらそうにズルドの顔を見た。

「ホーサー爺に相談があってだな」

「俺は席を外した方が良いか？」

「いや、実は、肝心なのはズルド殿でな」

「俺が？」

「ああ。今日、ジャスダフ家の三男坊が“戦死”したと」

「ああ」

「あれは……強いたのか？」

「だとしたら」

「貴族共が、息巻いている。地方貴族の男爵に、名門貴族の三男が死を強いられた。これでは貴族のメンツが立たんとな」

「知るか」

ズルドは吐き捨てるように言った。

「俺が邪魔ならいつだって辞めてやる」

「まぁ、そういうな」

ラドラーは言った。

「一般兵から始まって、まともな連中は、ズルド殿が強いたとしても当然だと思っている。何だと？敵はたった１０歳の小娘だと？すでに、魔界では笑いものだ」

「メンツが潰れたのではなく、自ら潰したのだろうが」

ホーサーは不快そうに言った。

「愚か者が」

「愚かだからさ。面と向かって文句の言えるところに責任を負わせたい。それがズルド殿って寸法さ。これはマズいと思ってな」

「ふむ……」

「馬鹿馬鹿しい」

ズルドは酒をあおり、言った。

「俺に文句があるなら、いつでも決闘でも何でもやってやるわ！」

「正々堂々という言葉を知らんような奴ら相手に、それは危険過ぎる」

ホーサーはなだめるように言った。

「ワシに任せろ。思うところがある」

「そうか」
ラドラーの顔に安堵が走った。
「さすが爺だ」

その後、ホーサーの弟子のことに話が戻った。

「爺の腕前を知って、魔界では年間何十、何百という者が弟子入りを求めて城を訪れているというのに、爺と来たら、相手が誰だろうが、とにかく一切の弟子はとらん。
各国からの剣術指南役の要請でさえ断り続けているという変わり者よ。
その爺が人間界に来た途端、弟子をとると来た！
しかも、家族同然にしたいと！」

いかに酒が入っているとはいえ、ラドラーの口調そのものが、ホーサーの心境の変化に驚く周囲の感情を代弁していた。

「生涯でこれほど驚くことは、そうはあるまい！」
ラドラーは湯飲みの酒を一口であおった。
「人間界の酒も、こうして飲めば美味いものだ」
満足げに息を吐いたラドラーは、ズルドに訊ねた。
「魔界の酒が恋しいか？」

「いや？」
ズルドは答えた。
「人間界の酒は気に入っている。特に、娘が酌をしてくれるのでな」

「羨ましいな」

ラドラーは深いため息と共に頷いた。
「俺の所はもう息子も成長して、やれ家庭教師だ、やれ学校だ……親子で会話も出来ん」
「跡取り息子がいるだけ幸せじゃろうが」
「何の。うつけで困る。あんなのなら、おらん方がマシだ」
「よくも言う……」
苦笑しながらホーサーは酒を飲む。
「歩き始めた息子が転んだだけで大騒ぎしていたあの親バカが」
「言うな。爺。俺にも体面というものがある」
「気にする相手か、のう、ズルドよ」
「ああ」
ズルドは頷いた。
「俺も似たようなものだ。へたすれば、そこのスッパードが次の番かもしれんが」
「おお！そうだ爺っ！まだ使えるじゃろうが！」
「試す気にもならん」
「そういえば、あの娘共はどこへ？」
「ちと、所用で出している。これも弟子の務めとしてな」
「ほう？爺のことだ。また無茶なことを命じたのではないだろうな」

「あれはどうにも若すぎる」
ホーサーの口調はしみじみとさえしていた。
「若い故に、どうにもならんこともある。それを超えてもらわんと、次に進めん」

「それが無茶だというんだ」
ラドラーは一升瓶から酒を自分の湯飲みに注ぎ込んだ。
同性、もしくは同じ身分同士に酌をする行為は、魔族の間ではタブーである。
酌をする行為は、する側がされる側に対して降伏、もしくは服従に近い意志を示したのと同じ。
妻が夫に対して、或いは娘が父に対して行うことは微笑ましいとされても、男同士のこういう席において行われるべき行為とはされていない。
「……あの娘共に何と言ったんだ」

「なぁに」
ホーサーは壁に立てかけてある剣を湯飲みで示した。
「あれじゃ」

「剣か？人間界のものか」

「おうよ。この家にあったのを見つけた」

「む？それが？」
ズルドも訊ねた。
「スッパード……貴様、まさか」

「わかるか？ズルドよ」

カッカッカッ
ホーサーは臆面もなく笑った。
「あれで殺してみよ。そう言ったのだ」

夜道を歩きながら、女は思った。
どこかの講談か昔話でもあるまいに！
今となってこそ笑い話だが……。

いかん。

女は足を止め、強く頭を振った。
感情に押し流されている限り、あの爺さんと関わり続けることが出来ないだろう。
それが、場数を踏んだ身として、直感でわかる。

見上げると、星が瞬く夜空に、昨晩のことが浮かんでくる。

殺してみよ。

あの憎たらしい爺は、散々、人の料理にケチをつけた挙げ句、爪楊枝で抜けかけた歯の手入れをしながら、無造作に剣を床に置いてそう言った。

殺せたら、本物の弟子として認めてやろう。

エモノなんていらない。

殴り殺してやろうか？
それとも絞め殺してやろうか？

本気でそう思ったが、女はそれでも、ホーサーという爺の言い分に興味を持った。

一撃で殺してやる。

女は剣を掴んだ。

抜いた剣は、錆びていた。

これを知った上で、ホーサーは唖然とする女の顔を見て笑った。
その笑いが、
その無垢な笑みが、
女をして、
この爺を殺せるか？
そんな恐怖となるのに時間はかからなかった。

爺は縁側でチャトランガに熱中している。
昼間、あと一歩で勝てたのに、また盤をひっくり返してくれたあの憎い爺。
死に損ないが。
口の中でそう罵りつつ、時折、背後にホーサーの気配、否、錯覚を感じては振り返りながら、それでも女は台所で砥石を使って錆びを落とし続ける。

縁側から声がした。
床を敷け、腰を揉め、ときた。
その晩、女はホーサーが悲鳴をあげるまで腰を揉んでやった。

女が研ぎ上げたばかりの剣を下げ、そっと襖を開けた時には、すでに日付が変わっていた。
行燈のほのかな灯りの下、ホーサーは静かに眠っていた。

このまま放っておいたってあんた、死ぬだろう？
なんで、私に殺してみろなんて言うんだ？

女は意地の悪いことを思い、それが間違っていることに気付いた。

自分がここにいる理由は？
それは、この爺に、

殺してみろ。

そう試されたからだ。

剣は玩具じゃない。
それをわかった上で自分に渡したのは、この爺だ。

なら、“これ”で殺されたとしても、悪いのは自分じゃない。
この爺だ。

その爺は、目の前で寝息を立てている。

……さて。

女はここまで来て、躊躇している自分に気付いた。
抜刀さえしていない、鞘に収まったままの剣に気付いた。
殺すつもりで敵の前に来て、剣を抜いていないことに、女は何故か、顔が赤くなった。

それで？

焦る女の中の、何かが問いかける。

ここから、どうするんだ？

その答えが、出てこない。

爺は寝ている。
その寝顔は、ただの老人。
武装もなにもない。
ここはメースのコクピットではない。
第一に……。

そう。

女は、まるで何かを弁護するように思った。

ここは、戦場ですらない。

本当に？

何かが、異議を唱えた。

ここは、本当に戦場ではないのか？
常在戦場――それは、お前がヒヨコの頃に徹底的に教官から叩き込まれたことではなかったか？
娑婆っ気を抜けと、ことあるごとに殴られたのは、無駄だったのか？

いいか？

ここは戦場だ。
そして、“これ”は、斬るべき相手だ。

それは、正しい。
正しいはずだ。

目の前で目を閉じる老人の無垢な姿を前に、女の心はさざ波のように揺れ動く。

戦場に立った時、自分を突き動かすあの衝動が生まれてこない。

衝動？

そう――相手への憎悪。

殺す。

その確固たる意志。

この爺がどれ程のものか？

メースを駆ればどれほどの敵かは、身体が覚えている。
たった一回でも、模擬でいい、剣を合わせれば遺伝子レベルで身体が覚えてしまう。
それ程の使い手だ。

だが、だからといって、メースが使えるなら、剣も使えるというのか？
そんなバカな話はない。
剣は剣。
メースはメースだ。

どれほど強いメース使いだろうが、とにかく、相手は寝ている、ただの老いぼれだ。
スラリ。
女は剣を抜いた。
ザッ
行燈の灯りを反射した剣の切っ先に反応したかのように、ホーサーの腰の辺りで何かが動いた。
ハッ。となった女は、とっさにホーサーの布団を剥いだ。
薄い布団の中、女が見たのは、孫の手で股間を掻くホーサーの手だった。

殴り殺してやる！

あっけにとられた後、女は、

バカにされている！

本気でそう思い、怒りに震えた。

剣なんていらん、この爺を――

女はこの時、確実に、

この爺を――――殺せる。

そう思った。

えっ？

剣の柄を握る手に力を込めた刹那、女は驚愕に目を開いた。
股間を掻いていたはずのホーサーの孫の手。
その“手”が、いつのまにか、女の剣の切っ先を抑えていたのだ。

クイッ。

孫の手が、剣の切っ先を軽く押し返した。
そう。
その力は軽かった。
軽かった――――はずだ。
だというのに、女はたたらを踏んで、後ろに転ぶのを防ぐのがやっとだった。

その間に、孫の手が股間にもどった。

な、何？
い、今の……何？

驚く女の耳に、早鐘を打つ自分の心臓の鼓動と、乱れた自分の息だけが聞こえてくる。
脚がガクガクと悲鳴を上げている。

ぐ、偶然だ。

偶然よ。

でも……

でも……

女は震えた。

怖い！

その恐怖に押しつぶされそうになっている自分に気付き、女は自分に言い聞かせた。

そうよ！

こんなの偶然よ！

だいたい、この爺、いつまで股間を掻いているのよ！

恐怖を怒りに変えることは、女にとっては戦場での常識。

恐怖に負けたら敵より自分に負けたことになる。

自分に負けたら、死ぬ。

死にたくなかったら、恐怖に負けるな。

それが、どんな敵を前にしても生き残るための基本だ。

この爺が憎い！

この爺を殺す！

ウソでも良いから、とにかく自分にそう言い聞かせ、女は柄を掴む手に力を込めた。

ピクッ

音がすればそんな所だろう。
ホーサーの孫の手が、再び女の切っ先を捉えた。

間違いない。
女は思った。
腕の微妙な動きに反応したんじゃない。
この爺が反応したのは――

ゴクッ。

女は唾を飲み込んだ。

この爺が反応したのは――

私の――殺気だ。

じっ。とホーサーの寝顔を見ているだけしか出来ない。
それが怖い。
寝ている場合か？
それとも、寝たふりを続けているのか？

女の手が、剣を振りかざした。

私がこの剣を振り下ろしたら、あなたは死ぬのよ?爺さん。

空気を切り裂き、女の剣がホーサーを狙う。
それでいいのか。
何も分からない。
ただ、殺してやる。
そんなつもりだけはあった。
目の前の老人を斬ろうとしているのか、それとも、目の前の恐怖を殺そうとしているのか、女にもわからなかった。

信じられないことが起きたのは、その時だ。

女の剣を真っ正面から受け止める、別な剣が出現した。
何かを理解する前に、剣と剣がぶつかり合い、鎬を削る。
女はとっさに柄を掴む手に力を込め、相手を押した。
下から剣を受け止める安定さを欠いた相手は、力押しに負け、もんどり打って畳の上を転がった。
とっさに剣を構え、女は行燈の明かりの下、照らし出された相手の顔を見た。
見たのだ。
それは、見間違えようのない顔だった。

私?

そう、畳の上で片膝をついてこちらを睨みつけているのは、間違いない。
自分の顔を持つ女だった。

馬鹿な！？

驚く女に、同じ女の顔を持つ相手は剣を振るう。
とっさに剣をたたき落とし、その身体に蹴りを入れた。
だが、その脚は相手の身体を通り抜けた。

がっ！

悲鳴を上げることも出来ずにいる女の首を、相手は両の手で締め上げに来た。
自分の顔が間近で見える。
殺気だった眼が、野獣のようにギラギラと輝いている。

こ、これは……本当に私！？

こんな顔を、
こんな眼を

自分が知らない。

二本の親指が、女ののど仏を圧迫する。
息が詰まり、身動きが出来ない。

その中で、女は確かに感じた。

視線だ。

誰かが、私“達”を見ている。

イヤな視線じゃない。

澄み渡った、どこまでも澄み渡った湖のような、澄み切った視線が、自分“達”……違う、自分“のみ”を捉えている。

視線の主を求め、眼を動かした女は、ホーサーの目が開いているのに気付いた。

無限の世界がその中に潜んでいるかのような、深い眼の中に、気付くと女は沈んでいくことを拒めなかった。

澄んだ水面の如き眼を抜けた女は、見たことのない森の中に立っていた。

空を飛んでいた。

涼やかな清流の中に身を委ねていた。

蝶のように野を舞っていた。

竹林の中をすり抜ける一陣の風となっていた。

世界に身体が溶けていった。

身体が、世界の一部、宇宙の一部となったのを感じた。

幻覚だ。

こんなの、幻覚だ！

女は、身体を取り戻そうと足掻こうとした。

指一本、まぶた一つ動かせない中、

惑わされるな！

そう、叫んだ。

でも、それが本当に自分なのかさえ、おぼつかない。

これは幻覚だ。

さっきの、自分と同じ顔をした女が現れ、言った。

これは幻覚。

お前は、あの爺を殺すんだ！

女は、訊ねた。

殺して――――どうするんだ？

爺を殺して、どうしたいんだ？

スウッ

息を吸う。

現実に、身体と意識が戻ってきた。

目の前には、布団に横たわるホーサーがいた。

「爺さん」

女は、剣を片手で構え、声に出して問いかけた。

「――――あんた、私に何をさせたいの？」

虫の音色だけが響く部屋の中、女は問いかけるのを止めることが出来なかった。

「殺すって、何？
殺されるって、何なの？
勝って戦って、それで何なのよ。
あんただって、ここでぐさってやられたら助からない。
私、刺した後、助けなんて呼ばないもん。
あんたは刺されて死んで、私はどうなるんだろう。
ねぇ、メースを使うあんたが、なんで剣で私に殺させるの？
メースで殺せっていうのが筋道でしょう？
おかしいじゃない」

堰を切ったように女の口から言葉が紡ぎ出される。
ホーサーは目を閉じたまま、ピクリともしない。

「何故、寝ているの？
ねぇ、戦いって、何？
剣もメースも同じってこと？
勝ってなんぼ？
殺すか殺されるか？
そう言いたいの？」

答えるはずはない。
そのはずだ。
なのに、女は剣を構えたまま、答えを待った。

行燈に照らし出されたホーサーの顔は、まるで崇拝すべき偶像のように輝いて見える。
その顔の輪郭が、女の目の前で徐徐に大きくなり、ついには部屋を飛び抜け、そして、女の視界いっぱいに広がった。

単なるイメージだとわかっている。

わかった上で、女はそれを受け入れた。
眼前に広がるのは、、どこまでも青く澄み切った青空の下、緑豊かな父性をたたえる山。

この時、女の前に立つホーサーは、山となった。
自然を産み、慈しむ山――それが、目の前の爺、ホーサーだった。

深い。

女は構えを解いた。
この深さは何だ？
懐か？

なら、こんな深い懐を持つ存在を斬れるのか？
無理だ。
こんな深い人を斬れるのは、自然を、主を斬れる者のみだ。
私は――そこまで、

深くない。

その声を、女の何かが打ち消した。

否！

断じて否！

ここで、逃げるような訓練を受けてきたか！？
ここで、逃げろと教わってきたのか？
ここで、殺せないと諦めて良いと？

そんなことで、今まで生き延びてきたのか？

否！

否だ！

女は、剣を逆手に持って力を込めた。

「殺す！」

絞り出すような声だった。

「喉に突き立てれば！いつまで寝てるの？この一撃、どうやって防ぐつもり！？」

気迫と共に、剣を振り下ろせ！

身体にはそう命じた。

にも関わらず――

はっ！

女は気付いた。

ホーサーの手にあったはずの孫の手がない。

とっさに身構え、ホーサーの身体を隅々まで見回す。

ない。

ない！

どこに！？

コンッ

痛くはなかった。

ただ、その音で、女は孫の手のありかを知った。

脳天に当たり、目の前を落ちていったのは、その孫の手だったのだ。

驚きに見上げた天井。

そこに見たのは、澄み渡ったどこまでも広がる青い世界――――空だった。

ガランッ

女の手から、剣が落ちた。

身体から力が抜け、女はその場に這い蹲るのがやっとだった。

負けた。

生まれてから今まで、これほど、この瞬間ほど、負けを意識したことはなかった。

自分は一体、何をしてきたんだろう。

そう思わせるのに十分すぎる程の敗北。

女の中で、何かが折れた。

女を支えていたはずの何かが、音を立ててへし折れた。

どれ程の時が経ったのか、その場にへたばったままの女は、上半身をやっとのことで起こして、そして呆然と目の前で眠り続けるホ

ーサーをぼんやりと眺め続けていた。

不思議だった。

ただ、眠っているだけの老人だというのに、押しつぶされそうで逃げたい。

そんな思いがあって、

同時に、

この老人の側にいたい。

この爺さん、気に入った。

そんな思いがあった。

「……おい」

ホーサーは不意に口を開いた。

寝言か？

女はそう思ったが、

「悪ふざけが過ぎるぞ？」

ホーサーの声は、間違いなく現実の声として女の耳に届いた。

あっけに取られる女の前で、ホーサーの手が、女の手から落ちた剣を掴んだ。

「……こちらから行くぞ」

ホーサーの手の中で、剣の唾が鳴った。

あ……あ……。

混乱する女に向けて、ホーサーの手が動いた。

動いたはず……だった。

女は悲鳴を上げて、後ろに飛びさった。

仰向けに倒れたまま、荒い呼吸を続けた女は、いつしか子供のように泣きじゃくり始めた。

格好が悪くても、情けなくても、止まらなかった。

斬られた。

女は泣きながら叫んだ。

斬られた！

痛みはないのに、斬られた！という感覚だけが、女の身体に刻みつけられた。

女の眼の前で、ホーサーは、ただ、眠り続けていた。

その手に、剣は握られていなかった。

それが、昨晩のことだった。

思い出すだけでも情けない。
なのに、女は不思議と、斬られた痛みを感じていなかった。
真っ二つにされたあの感覚の中で覚えたのは、痛みではなく、優しさだった。
自分の未熟さ、強さだけを求める自分を戒めるような、語りかけるような優しさが、女の心を打ち砕いた。

斬られたのは肉体ではなく、心だ。

女はそう思う。

勝つ。
殺す。
斬る。

そんなことは、今になってはどうでもいいことだ。
あの剣は、女のそんなことに拘る心を切り裂いた。
斬られたと女の口を借りて泣き叫んだのは、そんな心達だったのだ。

いいか？
勝っても、負けても、殺しても、殺されても、そんなことは言葉の上のこと。
その意味を求める限り、答えを見ようとする限り、見えないこと。

わからなければ、目を閉じて心を解き放て。

そうすればわかる。

――全ては無限だと。

ホーサーは、この日の朝食に散々ケチをつけ、チャトランガの盤をひっくり返した。

いつもの事だが、女はたまりかねてついてに激怒した。

もう二度と料理は作らないし、盤の相手もしない！

そう怒鳴り返した女をなだめすかした後、女にそんなことを言った。

無限。

女の耳にしみいったのは、その一言。

ホーサーの瞳の中に、女が見たのは、まさにそれだった。

ホーサーの中には、無限が潜んでいる。

否、ホーサーはそのものが、無限の存在なのだ。

限りある身でしかない、

限りある身に気付かない限り、

勝てるはずがない。

そういう存在だと、女は理解した。

理解して尚、納得がいかないのは、ホーサーのメシに対するこだ

わりだった。
昼と晩、暖めた魔族軍のレーションを突き出して、そっぽを向き続けることで、ホーサーに頭を下げさせた女は、少しだけ溜飲を下げ、そしてホーサーの命じるままに夜道を歩いていた。

向かう先は、メース部隊のハンガー。

剣を使え。

そう言った理由が、メースを前にした女にはわかる。

剣もメースも道具。

すべては、使い手の意志なのだ。

考えてみれば笑ってしまう。

殺せ。

ホーサーは、そこに「自分」という言葉を使っていない。

殺させたのは、私自身の中にある、驕慢な、そして、何かに拘る心そのもの。

あの時、幻覚に見た自分だ。

あれは、私の心の中にある悪しき心だったのだろう。

ホーサーは、それを殺せ。と言ったのだ。

にも関わらず、女はホーサー自身を殺しに行った。

勘違いも甚だしい。

恥ずかしくもあるし、それだけに笑うしかない。

だいたい、あのホーサーという爺さん、思ったよりお節介な人だ。

私に殺せと命じておきながら、結局、殺したのは当の本人だ。

こんな馬鹿な話があるか。

まるで、師匠としての偉大さを私に思い知らせるためにふっかけた難題だったと、自分で認めたようなものじゃないか！

「……さて」

女は上機嫌でハンガーに入った。

整備兵に案内させ、歩く女の前に並ぶのは、普通のメース達より一回り大型の5騎のメース達。

それぞれ、色が違う。

「これは？」

「天壇の」

整備兵の一人が答えた。

「人間共の部隊が使うそうです。こっちでテストが明後日からあるそうで」

「人間の？」

「ええ。あ、ホーサー卿からご依頼のメースはこっちです。調整、しておきましたよ？」

「わかった」

女は、もう一度だけ、色違いのメース達を見た後、整備兵に続い

た。

アップルソース・ダイアリー　第六話（後書き）

バガボンドを読んだ影響がモロ出てますねぇ……ま、どうでもいいですけど。

アップルソース・ダイアリー　第七話

「このぉっ！」

必死に発砲を続けているというのに、敵騎に指定されたサライマは、弾幕を右へ左へと、まるで蝶の如くかわし、こちらへ接近する速度は落ちる気配さえない。

裕樹は、トリガーに不必要に力を込めてしまう。

「撃墜（おち）ろぉっ！」

サライマに装備されたスタビライザーが動き、サライマが制動をかけた。

一瞬の隙。

それはチャンス。

だというのに――

カチンッ！

「えっ？」

騎体が両肩にマウントしている魔法弾発射筒からの発砲が止まった。

残弾がゼロになっているのに、それで初めて気付いた。

「うそだぁ……」

裕樹はとっさに騎体を降下させ、敵との距離を開こうとする。

だが、敵はどこまでも食いついてくる。

地面がどんどんと近くなってくる。

怖くなってエアブレーキをかけたら、動きを奪われて狙い撃ちにされる。

逃げ出した方の負けという意味では、ほとんどチキンレースの世界だ。

「――――っ！」

歯を食いしばって恐怖に耐えようとする裕樹は、スクリーン一杯に迫ってくる地面を睨み付け、エアブレーキを開くタイミングを計る。

「……この大馬鹿野郎」

ポツリとした、女の細い声が裕樹の耳に届いた。

「こんな所で、何で下に逃げやがる」

自分を通り越して地面に突き刺さるオレンジ色の光が二本。

後方で追尾する敵が、しっかり自分を捉えている証拠だ。

「テメエは頭までチキンか？この（自主規制）っ！」

ガンッ！

ガンッ！

ガンッ！

裕樹がエアブレーキを開いた瞬間、騎体に震動が走り、警報が鳴り響いた。

速度が落ちない。

「なっ！？」

騎体情報を示すステイタス・モニターは、エアブレーキを兼ねた装甲が三つ破壊されたことを報告していた。

「ウソっ！？」

ハッとなった裕樹は、空気抵抗を生じさせるため、両腕を大きく開き、エアブレーキの代わりにし、騎体を１８０度回転、背中を地面に向けると、ブースターを全開に開いた。

グンッ！

とっさに後方を追尾していたサライマが頭の方へと離れていく。

「ちっ！」

ブースターの制御上の制約から、足下に逃げてくれればまだ撃ち様もあったというのに、裕樹は舌打ち一つ、騎体を立て直し、サラ

イマの追撃に入ろうとした。
騎体をひねって地面に対して垂直に騎体を戻す。
「えっ！？」
そうすれば、前方に敵が見えるはずだ。
裕樹はそう思ったのに、
「ど、どこっ！？」
視界のどこにも敵がいない。
荒れた平原と青い空。ちぎれ雲が強い日差しによってギラギラとした白さを照らし出されている。
裕樹が敵の存在を知ったのは、真後ろから突然襲ってきた衝撃によってだ。
メースが疑似感覚として伝えるダメージはかなり痛い。

ショックで骨が折れたり、内臓が破裂することもあるから気をつけろ。

座学では習っているし、似たような感覚は演習で味わっているけど、これは格別だ。
本当に息が止まって、目の前がぼやけた。
気絶しかかったのを、裕樹自身、身体で理解するしかなかった。

「――――っ！」
無理矢理歯を食いしばって意識を押しとどめ、肺に空気を叩き込んで筋肉を動かす。
「メースに乗ったら！」
その鼓膜を、女の罵声が容赦なく叩く。
「全周囲に神経張れって教わらなかったのか！？」

ガンッ！
バンッ！

ドカッ！

背中に連続して走ったのは、拳かナックルガードで背中の装甲を殴ったからだと推測はついた。

だけど、脇腹に走ったのは、間違いなく蹴りだ。

呻きながら脇腹を押さえる裕樹騎のメインスクリーン一杯にサライマの顔が映し出される。

「遊びじゃないんだ！殺しにきなっ！」

「い、いつまでもっ！」

裕樹は騎体に戦斧を構えさせ、サライマに襲いかかった。

女のクセに！

その言葉は口の中だけに抑えておいた。

スカッ

振り下ろされた戦斧は、ちょっとだけサライマが動いただけであっさり回避され、代わりにナックルガードの一撃が裕樹騎の顔面を捉えた。

ほとんどアッパーカットに近い一撃だ。

顔面部の装甲が吹っ飛び、警報が鳴り響く。

カメラがサブに切り替わる。

「頭部にコクピットがあるタイプだったら！」

ノイズ混じりのスクリーンにサライマの横蹴りが飛んできた。

「即死もんだよ！」

もう、悲鳴も上がることなく、裕樹は騎体ごとスピンの渦に巻き込まれた。

鳴り響く警報。
接近するサライマ。

「さぁ、立て直すんだよ！さっさと！」
女の声に追い立てられるように、裕樹は各部のブースターと四肢をばたつかせ、騎体をスピン状態から回復させた。
遠心力によって生み出されたGが体中の血と肉を右へ左へ、気まぐれなダンスへと叩き込んでくれたおかげで吐き気を抑えるのがやっとだ。
これで敵を倒せだなんて――――
裕樹は、二度とシューティングゲームを“リアルだ”なんて褒める事は出来ない。それだけははっきりと悟った。
本当にリアルなら、こんな状況まで再現してみせれば良い。
ご家庭のお茶の間がゲロや血でまみれて、年寄りや子供に必要なのは解説書じゃなくて、救急車と坊さんになるだろう。
こんなもの、市販できるものか！
自分で自分に結論をつけた所で、サライマが斬り込んできた。
「普通ならねぇ」
戦斧同士がぶつかり合った。
「ここまで、あんたを深く追い詰めることはない。何故かわかるかい？」

「わかりませんっ！」そう、裕樹は即答した。

「素直な子だねぇ」
舐めるような口調。女の舌なめずりする、妙に淫靡な音が耳に届く。
「ご褒美にお姉さんが教えてやろう」

ドンッ！

「この人っ！」

裕樹は腹に喰らった膝蹴りを、歯を食いしばって耐えた。

腹部装甲、つまり、裕樹の１メートルと離れていない場所を守っていた装甲の破片が画面の中で遠ざかっていく。

何て、脚癖が悪いんだ！

そんな罵声は言葉にもならない。

「ここまで追い詰めることに意味はないのさ。普通なら」

「えっ？」

「百回は殺しているからさっ！」

大きく振りかざされた戦斧が、裕樹の頭上めがけて振り下ろされた。

「わっ！？わわっ！」

裕樹が、自分の身に何が起きたかを理解する前に、後一歩で舌をかみ切る寸前までコクピットが激しく揺れ、メインスクリーンを含む全部のモニターがブラックアウトした。

プシュー

震動を伝えていたアブソーバーが正常位置に戻り始め、モニター

にも灯りが灯り始める。

「痛たたっ」

さっきの激しい揺れの際、肘をコクピットにぶつけた裕樹が痛みに顔をしかめる。

その目の前に、

戦死！

無様に死んだ！

ざまぁみろ！

負け犬！

故郷（クニ）へ帰れ！

たくさんの警報表示に書き込まれた意地の悪い言葉が飛び交う。

「ユーキ、終わりだ。降りてこい」

管制官の声に、裕樹は肩を落としてハッチを開放した。

コクピットから出た途端に、全身に電気のように走った痛みによって、裕樹はその場で崩れ落ちた。

指一本、本当に動かない。

身体が麻痺したように痺れて、言うことを聞かない。

「大丈夫ですか？」

頭の近くで靴の音がして、そっと裕樹のまぶたに冷たい感触が走る。

とても優しい声と共に、ふわっ。とした甘い匂いが鼻をくすぐった。

裕樹の眼には、小さな革靴と白いストッキング。そして、黒いスカートだけが目に映る。

「神経接続を急にカットしましたね？」

少しだけ、とがめるような口調。

腕に誰かが触っている。

そこだけ、ほんわりとした暖かさが戻ってくる。

「接続を安全モードに入る前にカットすると、疑似神経が持っていたダメージが一気に身体に入り込んでくるんです。座学で学んでいないのですか？」

「ご、ごめんなさい……」

そういえば、そうだっけ……。

裕樹はちょっと情けなくなった。

メサイアと違い、メースは人間とメースの神経を接続する方式をとっている。

安全のため、操縦を終了する場合、神経接続が安全レベルに戻ったかどうかを確認してから騎体を止めろと、何度も言われていたっけ……。

右腕がやっと動くようになった。

女の人のマッサージによるものだ。

さすがにお礼を言わなきゃ。

裕樹がそう思った時、女の手は裕樹の脇腹から太股へと降りてきた。

「にゃっ！？」

マッサージしている所に、裕樹の敏感な所が含まれていた。

「どうしましたか？」

女はまるで気付いていないらしい。手の動きが止まっていない。

「い、いえ……その」
裕樹は恥ずかしさに顔を真っ赤にして、目をつむった。
裕樹だって、ダユーに（あーん♪）なことや（うっふーん）なことを、それはもうたっぷりと……官能小説が五、六冊書けるほどされたのは確かだ。
おかげで、この歳としては、公になれば府教育委員会が介入しても不思議ではないわけだが、それでも身体は正直すぎる程、正直だ。
方程式を一生懸命考えてみたりするのだが、柔らかい手が、絶妙な感覚で多感な年頃の少年をもみほぐすことに、裕樹はさすがに耐えられない。
というか、こういう方面では、ダユーにＤＮＡのレベルで調教されているのに、反応するなと言う方が無理なのだ。

「あら？」
女の手が止まった。
自分が固くなったのを掴まれたことで、ついに観念した裕樹だったが……

ゴチンッ！！

顔面と後頭部に走った激痛に、内心で感謝するしかなかった。

「おい」
目の前にはっきりとパンプスの裏が映っていた。
声は宗像だ。

「……このバカ者」
グリグリと容赦なく靴底が顔面に押しつけられる。
「無様に負けた挙げ句が、こんな所でユースティア殿相手に公開プ

レイを要求するとは良い度胸だな」

「痛い痛い痛いっ！」

動く手で何とか逃げようとする裕樹はたまらず叫んだ。

「お姉さん、ショーツ見えてる、ショーツ！意外と可愛いヤツ！」

「――――っ！」

その時、上半身が動いてくれなかったら、裕樹は側頭部を狙ったパンプスの一撃で銃弾の的にされたスイカの如く無残に砕かれていただろう。

「うぇぇっ。お姉さぁん……僕を殺す気なの？」

「殺して欲しいと求めてくるからな」

立てるか？

裕樹の脇に手を伸ばした宗像の手に、医療キットが握られていたのが、裕樹は何だか微笑ましいというか、言い様もなく嬉しくて、顔が緩んだ。

「大丈夫だよ。ユースティアさんのマッサージもあったし」

裕樹は、何故かメイド服を来たままのユースティアに一礼したあと、立ち上がろうとした。

「あ、あれっ？」

何とか半ばまで立ち上がったが、最後に腰に力が入らない。

半ばズルッ。と前屈みに体勢が崩れ落ちる。

「お、おいっ！」

宗像に抱き留めてもらうが、しかし、その顔は宗像の腰よりやや下。ほとんど太股の間に突っ込む形となった。

「宗像様？少しの間、神経を休ませる必要があります」
裕樹をマッサージしていたユースティアが言った。
「そうだな」
宗像から見ても、裕樹は身体に力が入っていない。
外部にダメージは見えないから、医務室へでも……
「……ん？」
スーハー
スーハー
宗像は、軍服とストッキング越しに裕樹の深呼吸を感じた。
「……お前、何している？」

「お姉さん」
しばらくして、裕樹は言った。
「あの日？」

「もう説教する気にもなれん」
気がついたら裕樹は医務室のベッドの上にパンツ一枚で大の字…
…いや、Xの字にされて寝かされており、宗像が相当に険悪な顔で
見下ろしていた。
「お前、その歳でそんなにエロでどうするんだ」

「……あのぉ」

「返答次第では」

宗像が取りだしたのは巨大なハサミだ。
「麻酔なしでちょん切ってやる」
「わぁぁっ！」
ジタバタ暴れるが、手足が縛られ、万歳状態になっているため、ベッドの上でもがく以外に何も出来ない。
「ごめんなさい！ごめんなさいっ！」
「シミュレーションによる模擬戦とはいえ、ユースティア殿相手にあそこまでボロ負けして」
「だって！」
裕樹は言い返した。
「あんなに強いんだよ！？聞いてないよ！」
「知るか」
宗像は頷くとテーブルにハサミを置いて、何かのチューブを取りだした。
「ダユー様が人間用に調合してくださった湿布薬だ」
宗像はベッドの上に腰を下ろすと、チューブの中の液体を自分の掌で伸ばすと、裕樹の肌に塗りつけた。
「ユースティア殿は、外見こそ可憐の一言だが、実際の所は傭兵だ。メースの世界では我々人類の先を行く魔族……その中でも相応の腕利きだ」
「それ相手に生きて帰ってきたんだから」
「弄ばれたの間違いだ……まぁ」
宗像は湿布薬を細やかな手つきで裕樹の身体にすり込みながら言った。

「あの方が、あれほどの二重人格だとは思わなかったがな」

「びっくりしたよ」

裕樹は宗像の掌の感触の心地よさに目を閉じた。

「あんなお淑やかな人が、演習始まった途端、宗像さんみたいなおっかない――痛ぁぁぁっっ！」

「ああ。すまん。つねったようだな」

「ううっ……脇腹がじんじんする……」

「だが、いくら傭兵相手でも、ああも無様だとなぁ。お前、実戦で生きて帰れないぞ」

「うん……ごめんなさい」

「謝ってどうする」

宗像は、湿布を肌にすり込ませながら、裕樹が意外と筋肉質だということに気付いた。

「お前、トレーニングか何かしているのか？」

「筋トレは毎日やってるよ？昔から」

「昔から？」

「うん。芸の時、全身の筋肉が使えるようにしなければいけないって、御父様に叩き込まれているんだ。だから、全身の筋肉を鍛えるのって、習慣になっていて」

「それで……」

言いかけて、宗像はやめた。
「神経接続と筋肉は関係ないか」

「そうだよ」
裕樹は答えた。
「お姉さんもやってごらん？本当に身体が動かなくなるから」

「御免被る。薬の塗布は終わった。どれ、マッサージしてやろう。回復が早いぞ？」

「ありがとう、もし、お姉さんがこうなったら、僕がマッサージしてあげるね？」

「下手に触るな。私は男に触られるとじんま疹が出来るんだ」

「僕、男だよ？」

「……り、リハビリの一環だ」

「ふぅん？」
不思議そうな顔をする裕樹に、宗像はたたみかけるように言った。
「べ、別に、下心があってのことではない！」

「下心って何？」

「勉強が足りない……明日には“ナイチンゲール”が納入されるんだ。お前も一騎、任されるんだぞ？」

「う……うん」
裕樹にとって、大切なのは、そんなことではない。

宗像の手の心地よさだ。
だけど……なんでだろう。
裕樹は、身体に感じる心地よさに身を委ねた。
ユースティアさんは恥ずかしかったのに、お姉さんだと平気なんだよなぁ……。
これって、僕が、お姉さんを異性だと思ってないから？
うーん。
僕、お姉さんは好きなんだけど……どう違うんだろう。
不思議だなぁ。と裕樹は思って目を閉じた。

「せっかく、ダユー様がプラツゥル様と一緒に、人類である我々のために設計してくださった特別騎（スペシャル・メイド）なんだから……」

ピタッ

マッサージする宗像の手が止まった。

「？」

少し、首を動かして見ると、宗像の顔が真っ赤になっていた。
呆然。
そんな表現がぴったりくる、そんな顔だ。
怒っていないのは、裕樹にはすぐわかった。
むしろ、驚いている。
へえ？
裕樹は思った。
こんな顔すると、お姉さん、可愛いなぁ。
……。
……。

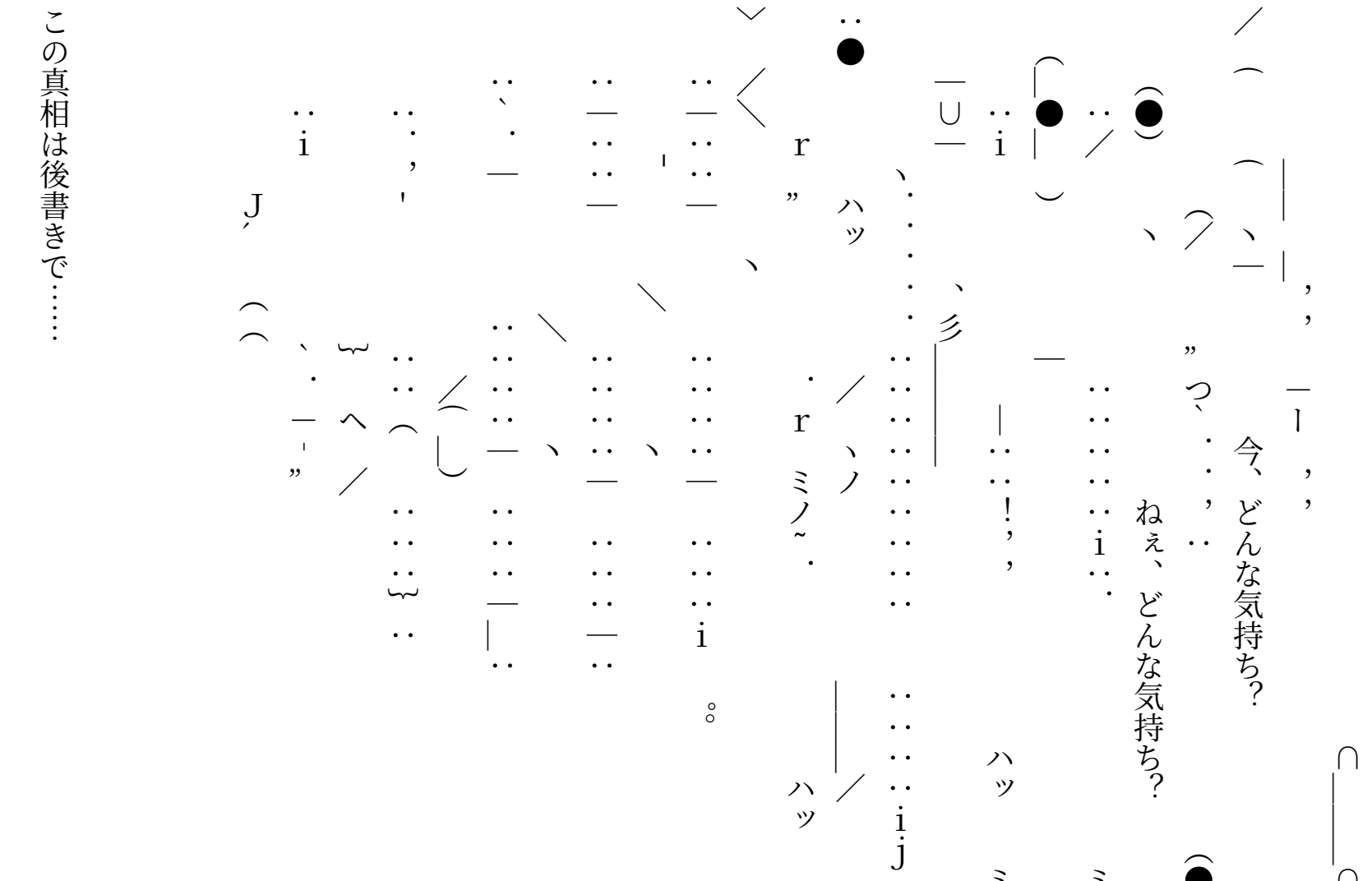
そして、気付いた。

その視線の先にあるのは、

パンツの中から現れた、元気な……（自主規制、というか、裕樹の名誉のために削除）……。

医務室から宗像の悲鳴が上がり、枕で徹底的に殴られた裕樹が療法魔導師の世話になったのは、それからすぐのことだった。

アップルソース・ダイアリー　第八話（前書き）



この真相は後書きで……

アップルソース・ダイアリー　第八話

ハンガーへの搬入作業が開始され、にわかに騒ぎ出した周囲の片隅で、裕樹は目を丸くして、そこに梱包を解かれ始めた“物体”を食い入るように眺めていた。

今まで裕樹が見てきたどのメースよりも分厚い重厚な装甲。

角が突き出た小さな頭部。

愛想のかけらもない単眼（モノアイ）。

異様な雰囲気を一言で言えば、楯を全身に纏った魔物。

それは、裕樹の感覚からすれば、神に反した悪魔の強さを持つ魔神だった。

ナイチンゲールなんて可愛い名前だから、どんな貧弱なメースが来るんだろうと思っていたら、こんなバケモノが出てくるなんて！

裕樹は不思議な興奮に身体を震わせながら、整備員達の作業を見守る。

僕が、こんなスゴイ騎体を操れるのかぁ！

身体の奥から沸き上がってくる興奮に、握られた拳が熱く震える。

裕樹の中にある騎士の血が沸き上がってくるのだ。

ああ――早くコクピットにだけでも入れてもらえないかなぁ。

「こら」

コンッ

後頭部に固いモノが押しつけられた。

振り向くと、宗像がバインダーの角で裕樹の頭を小突いていた。

「受取書類、書き方を間違っているぞ。エロガキ」

「えっ？」

「……すごい」

「ここと、ここのチェックが入っていないぞ？」
「ごめんなさい。お姉さん」
裕樹は書類を受け取り、言われた場所にチェックを入れた。
「ねぇ」
「何だ？」
「ナイチンゲールなんて、どうして看護婦さんの名前にしたの？」
「看護婦？」
「え？あの……」
「バカ」
クスッ。宗像は小さく笑った。
「言うと思った」
「むぅ……？」
「“夜鳴きうぐいす”――知らないか」
「夜泣き蕎麦？」
「落語やってるんじゃない」
「それ、時蕎麦」
「うるさい、覚えておけ。

芸の種になるはずだ。
ストラヴィンスキーの歌劇と、そこで演奏された交響詩が、“ナイチンゲールの歌”だ」

「ああ、ナイチンゲールって名前、歌からとったんだ」

「それも違うだろう」
宗像は、誰かの視線を感じ、辺りを見回してみるが、誰もいない。
「ナイチンゲールは、西洋ウグイスとも呼ばれている鳥だ」

「ウグイスって、あのホーホケキョの？」

「そうだが」
宗像は不快そうに言った。
「とりあえず、話の腰を折るモノの言い方はやめろ」

「あ、ごめんなさい。お姉さん」

裕樹が頭を下げたところで、ハンガーの入り口からユースティアが入って来た。
メイド服に手にはバスケットを持っている。
この世界と服装が合わないことは甚だしい。
梱包の解除が始まったメース達を一瞥すると、ユースティアは宗像と裕樹の前で立ち止まり、優雅なまでの一礼を行った。

「ご機嫌よう」

「ご機嫌よう……外出ですか？」

「はい――――ティアリュート様のお着替えと、何でも、私をいれて

5人分の食事を準備して来るようにと」

「ほう？」

「……ちなみに、これは？」

「ナイチンゲールと言います」

裕樹がニコニコと微笑みながら言った。

「ナイチン……？」

「人間界の鳥の名前です」

「へえ？」

ユースティアはちょっと首をかしげた。

「普通、メースや武具の名付けに鳥は避けるんですけどねぇ……」

「そうなんですか？何故？」

「さぁ？……縁起が悪いとか……クスッ。魔界の風習です。人間界では、何か良い名前なのですか？」

「あまり」

宗像は苦笑いを浮かべて言った。

「有名な従軍看護婦の名前にありますが、基本は小鳥です。よい声で鳴くことで知られていますが、夜行性のために、死を告げる鳥、夜鳴鶯とか、墓場鳥とも言われています」

「まぁ、恐ろしい」

ユースティアもびっくりした顔になった。

「どなたが名前を決めたのかしら？」

「余程、人類の文化に興味がおありのようですけどね」
宗像は、ナイチンゲール用に準備されたんだろう、ウェポンラックに並ぶ武装の一つに目を留めた。
「大型ビームバルカン……人類のデータがフィードバックされた武装がまた増えたか」

「数千年の時の中で」
ユースティアが答えた。
「人類が最も進化させたのは人殺しの道具ですから……」
ユースティアは、ハッ。となって頭を下げた。
目の前にいるのが、その人類だと思い出したからだ。
「失礼いたしました。あの……」

「わかってます」
宗像は頷いた。
「その通りですから」

「で、でも」
裕樹が話題をそらそうと、二人の間に割って入った。
「死を告げる鳥なんて、怖いね」

「ああ、ジョン・キーツの詩“ナイチンゲールに寄す”は素晴らしいぞ？」

「何？それ」

「暗闇に私は何度も聞く。
私は安らかな死に憧れた。
死を詩的な言葉で呼び、安らかに息を引き取りたいと。
いつにもまして死は豊かなものに思われる。

真夜中に苦痛なく死んでいきたい。
それなのにお前は声をはりあげ、恍惚のうちに叫ぶ。
お前の歌を聞くための耳を、私はもう持たない。
お前の高らかな鎮魂歌に送られ　わたしは土に帰る」

裕樹の問いかけに、朗々とした声で、そんな詩を暗唱してみせたのは宗像だ。
男性のように低い、アルトに近い声が、ハンガーの中を軽やかな風のように駆けた。
一瞬、聞き惚れている自分に気付いて驚いている裕樹に、宗像はバツが悪そうに言った。

「ナイチンゲールに関する文学的知識と言えば、私にとってこの詩くらいなものさ。
高らかな鎮魂曲って一説が好きだったにしても、中学時代の文化祭で謳わされた詩を、意外と覚えているものだ」

「お姉さん……詩、上手だねぇ」
裕樹の口から本音が出た。
「台詞回しさせたらスゴそう」

「世辞が過ぎるぞ、武蔵屋」

「宗像様、それは？」

「人間の詩です。死者を導く夜泣き鳥の声を求める男の気持ち……そんなところですか」

「ロマンチックなお話なのですね」
うっとりとした声でユースティアは言った。

「そんなロマンチックな夜を、私もティアリュート様と過ごしたいです。大人の女同士、ガチで」

「お前は決して死ぬことはない　不滅の鳥よ。
お前は足蹴にされたこともなかった。
今宵わたしが聞く声は古代の帝王たちも聞いた声だ。
その同じ声はルツの悲しい心にも響き、故郷を思う余り異郷の地に涙したのだ。
そして時に魔法の扉を開かせ、寂寥とした妖精の土地に危険な海の泡を見せたのだ」

別室の一角、流れるな流ちょうな詩を口ずさみ、居合わせたスタッフ達の耳を心地よく刺激するのは、ダユーだった。

宗像の口から編み出された詩の続きだとは、誰も気付かない。
宗像達の動きを別室から眺めている場所は、騎体の最終調整を行う司令管制室。
ダユーの見る限り、搬入作業は順調だ。
「そういえば、あの騎体。人間の騎体を参考にしたのですよね？」
ダユーの前で騎体のチューニングバランスを確かめていた技官が訊ねた。
「ええ。装甲は人類側のデータや鹵獲（ろかく）騎をかなり参考にさせてもらった。
そこから生まれてきた“この子”も、コスト削減の意味から、ほとんどのパーツをサライマやヤクトエッジ辺りから流用させてもらってもいるけれど」
「寄せ集めってヤツですか？」

「まぁ、そうね。人類の言う重装甲型っていうのは、前から興味のあるコンセプトではあったし」
「成る程？メースへの技術転用出来そうな所はありましたか？」
「まさか」
ダユーは笑って否定した。
「ロートル過ぎて理解に苦しむような所ばかり。せいぜい参考になったとすれば、運用戦術くらいかしらね」
「成る程？使い方だけは、そう変わりませんからね」
「そう……これからの戦術転換によっては、部隊もシールドに頼る現状から、重装甲重視タイプへと変更することも考えないと。いつまでもシールドに頼っていると、デッドウェイトな上に左腕のバランスやモーメントが崩れちゃうし」
「基本フレームは、我が城でも普及騎扱いされるヤクトエッジです。強襲型に分類されるヤクトエッジを重装甲タイプに転用した場合のフレーム・テストベッドが、あのナイチ……なんでしたっけ？」
「ナイチンゲール」
「ナイチ……ンゲール。人間の発音は難しいな。とにかく、そういうことですか？」
「まぁ、そういうことね」
「ちなみに、ナイチンなんとかって、どういう意味なんですか？」
「知らない方がいいわよ？」
「そんなおっかない意味が？」
「ううん？単なる鳥の名前」
「まさか、食用ですか？」
「観賞用ね……多分」
「へぇ？」
ダユーは内心で笑った。
ナイチンゲール。
その名を与えたのは、自分だ。
気付いたのは偶然。

プラツゥルの部屋の疑似環境世界に流れた鳴き声がきっかけ。
宗像が好きな鳥の鳴き声だというから、ちょっと驚かせてやろうと鳥の情報を調べて、“それ”を知った時はちょっと笑ってしまった。
あの宗像のいきつけの場所で、あの宗像が好きな鳴き声を上げる私の“籠の鳥”。

「――籠の鳥なる梅川に焦がれて通ふ廓雀（さとすずめ）」

ポツリと、ダユーの口から零れた言葉に、技官は覚えがなかった。
「はい？」
何かの暗号か、或いは指示か？
思わず訊ねた技官に、ダユーは苦笑いと一緒に詫びた。
「独り言よ」

まさか宗像も、“ナイチンゲール”に込められた“本当の意味”までは知るまい。
そんな確信に近い思いが、ダユーにはあった。

でも？

そんな悪戯心が鎌首をもたげる。
“本当の意味”を知った上で、それでも乗るとしたら？
宗像という女は余程神経が太いのかしら。
それとも覚悟の出来た女？
無知なら……私はあの女を“愛し”はしない。

そうだ。
ダユーは決めた。
テスト運用の結果を、今晩のベッドで聞いてみよう。

その時の反応から探れば良い。

人間なんて、簡単だ。

そう、ほくそ笑むダユーの前で、ユースティア騎が城から発進していった。

「ティアリュートの所へ？」

「そう……ですね」

「ホーサーなんて、あんな短気な“花火野郎（ファイアー・ワーク）”に何を教えてもらうつもりなのかしら」

「なかなか」

技官は苦笑混じりに魔界のネットから調べた資料をダユーに手渡した。

「あの御仁も成長されているんですよ？」

「ゲームのレベル的に？」

「人格的に……そうしておいてください。伊達に数千年の時を過ごしてはいませんよ」

「そう願うとしましょう。昔のよしみでヤクトエッジのHタイプを回してあげたんだから……」

ダユーは、しばらく考えて、やっと自分の言った言葉の意味に気付いた。

「Hタイプって、人間がいるの？」

「恐らく」

技官は首をかしげながら言った。

「その……ホーサー卿は」

その口調は、意見に全く自信がないことを示していた。

「第三軍司令官のズルド卿とは昵懇の仲です。その……噂ですが」

「何？」

「ズルド卿が、人間の娘を養女に迎えたとか」

「人間の？」

「はい。しかも、かなりのメース使いだとか」

「ふぅん？その子向けってワケ？」
「あくまで私の推測です」
「近いか外れているかは知らないけど、面白いことになりそうね。その件について、資料はある？」
「第三軍に派遣されている技官に知り合いがいます。用意しましょう。明日の今頃までに」
「お願い。ナイチンゲール、搭乗員への騎体説明は終わっているのね？」
「はい。コクピットセッティングに予定であと1時間かかります」

「駆逐メサイア……かぁ」
瀬音に従う月菜や大地も含めた打ち合わせが終わった裕樹は、ぼんやりとハンガーの隅に立つ宗像に気付いた。
「お姉さん」
裕樹が心配そうになって、その顔をのぞき込むまで、宗像は裕樹の存在に気付いていなかった。
「……なんだ？」
裕樹が自分の顔をのぞき込んでいることにやっと気付いた宗像は、少し驚いた様子で裕樹に答えた。
それが、裕樹にはむしろ心配に近かった。
「何か不安なの？それとも不満？」
「何の話だ」
「ナイチンゲールって名前が出てるあたりで、せっかく騎体がもらえるっていうのに、嬉しくないって顔してる」
「そうか？」
「フレームは、魔族軍でもやっと配備が始まったばかりのヤクトエッジ。宗像さんがもらって喜んでいたヤツでしょう？」
裕樹には、この時点で宗像がぼんやりと考え事をする理由がわからない。

「ダユー様がヤクトエッジの重装甲版っていうより、対艦強襲攻撃を前提に開発した駆逐型。スゴいと思うけど？」
「強襲攻撃とか、駆逐型とか」
宗像は苦笑を漏らしながら言った。
「私も、人間側で乗っていたがな」
「そうなの？」
そういえば。
裕樹は、この期に及んで初めて気付いた。
「お姉さんって、近衛だよね」
「元……な」
触れるな。
顔がそう語っていたので、裕樹は話題を間違えたと口ごもった。
「近接戦闘用の武装を持つ前衛と、狙撃砲撃支援用の後衛……か」
「それが不満？」
「いや？お前の仲間達が後衛の素質を持っていたことには感謝している」
宗像は裕樹の頭を撫でた。
「……ねぇ」
それを不満そうに、裕樹は口を尖らせた。
「本当のこと言ってよ」
「本当のこと？」
「何が不満なの？」
「……何でもない」
「僕には」
そっ。
裕樹は宗像の腕を掴んだ。
「本当のことを言って」
「……」
「ナイチンゲールっていうのは」
宗像は、周りを見回した後、バツが悪いという顔で言った。

「美しい泣き声の鳥の名から、美しい声で歌う人。命名の理由としては、そこまではいい」
「うん」
「――お前、誰にも言うな？」
「う、うん」
バカの様に頷いた裕樹に、宗像はそっと言った。

「夜鳴く鳥、小夜鳴き鳥の名を持つが……これは転じて密告者、裏切り者の俗語も持っているんだ」

「ナイチンゲールが、密告や裏切り？」
「中学時代、学級委員の陰口がサヨナキドリ、つまり、ナイチンゲールだった」
「考えすぎだよ。お姉さん。僕達は頑張って戦果を示せば良いだけだもん」
呆れた。
裕樹の顔ははっきりそう語っていた。
「僕、もっと深刻な理由かと思ったよ！」
「お前のその割り切りが、ある意味怖い」
「そうかなぁ……えっと5騎が全部色分けされていいて、桜色、紅色、黒色、緑色、黄色」
裕樹は笑いながら指折り数えた。
「兄貴が黒で、宗像さんは紅。僕が桜で、緑は月菜に黄色が大地。紅と黒は目立つ色だから敵を引きつける立場も担当するんだよね」
「ああ。」
「でも？」
「ホントに、僕達が乗って良いの？」
「いい。ことになっている」
宗像は答えた。
「人類同士相手に派手に戦った功績は、いろいろと政治的に利用し

たいそうだ」
「難しいんだね。戦争って」
「楽な戦争なんて、この世にあるもんか」
――見透かされているなんて、バカな話があるものか。
宗像は、自分をそう言い聞かせた。

アップルソース・ダイアリー　第八話（後書き）

ＢｉＧ一等五口……六億が……五口……ううっ（号泣）
買わない時に限ってこれだよ！
そりゃさぁ、当たった保証はないし、買ってた方がショックデカイかもしれないけど。
ちなみに私の誕生日が今日。
それでこれだよ！
私の心境になってみれば言葉にならないこの心境っ！
連続して当選なかったから、絶対に当選確率下げたんだ！
でなけりゃ、こんなことに――――くそぉぉぉっ！いままで突っ込んだ金返せぇぇぇっ！
もう、全部がぐちゃぐちゃ。
考えていたストーリーが全部ふっとんだので、今回はここまでです。
ごめんなさい。
うわぁぁぁぁぁんっっ！！

アップルソース・ダイアリー　第九話（前書き）

カタカタカタ……（“書院”のキーボードを打つ音）

作者「さて、ＤＯＳモードで保存して……と。
あーあ、美奈代もぶっ殺しちゃったし、次は誰殺そうかなぁ」

作者、伸びをした。
突然、ドアを蹴破って宗像がｉｎして来る。

宗像「おい作者ぁっ！」

作者「おお。ダユーのダッチワイフが何の用件って……お前、ドアの開け方も知らないのか？」

宗像「ムシロはドアではない！こんな段ボールにいつまで住んでいるつもりだ、さっさと人並みの生活になろうとは思わないのか！？」

作者「うるさいっ！こっちだって事情ってもんがあるんだよ！」

宗像「ダメ人間負け犬コースまっしぐらの分際で、偉そうにほざくな。かつての仲間達は家庭や社会でだな」

作者「ううっ……ぐ、グスッ」

宗像「そんなことはどうでもいいっ！」

作者「だから何だよぉ……。一人にしてよぉ。……そっとしておいてよぉ……」

宗像「文句があって来た！」

作者「何。一夜妻が死んだからって、私に言わないでよ」

宗像「泉のことじゃないっ！」

作者「やっぱり身体目当てだったか……じゃあ、何？」

宗像「そっちも違うけど、何であいつを、裕樹を出した！」

作者「面白そうだったから（きっぱり）」

宗像「き、きさっ――――っ！」

作者「いいじゃん？お前にとっては、家の取り決めとはいえ、未来の大事な大事な何とやらだろうが。この裏設定、裕樹は知らないけどね」

宗像「殺すっ！」

宗像、拳銃を腰のホルスターから引き抜く。

作者「わっ、本当に冗談が通じないっていうか、人をからかうのは好きでも、からかわれるのは大嫌いって、お前、本当に自己中なヤツだなぁ」

宗像「うるさいっ！何で私があんなセクハラをされなければならん！し、しかもあんな男だか女だかわかんないようなヤツに！」

作者「うれしいくせに（ボソッ）」

宗像「何ぃ！？」

作者「裕樹の趣味っていうか本能っていうか。あいつはそういうキャラだから。好きでしょ？そういうタイプ」

宗像「――――っ！」

作者「先天的なHキャラだけど、文句なら調教（しつけ）したダユーに言って。あ、でもね？テクニシャンなのは保証してあげる。スゴいよ？後で出てくる、祷子に仕込まれた悠理並」

宗像「い、いらんっ！」

作者「またまたぁ（笑）お前が男性恐怖症になったのも、唯一、裕樹が男性で触れることが出来るのも全部――ひっ！？」

銃声が九発。

宗像「まだ喰らいたいか？」

作者「もう結構です。ごちそうさまでした。つーか、今、どうやって撃った？１マガジン全弾を１トリガーでどうやって」

宗像「企業秘密だ。今すぐ、アイツが登場したカ所から削除しろ！ご都合主義的に話書き換えるのは、お前の専売特許だろうが！」

作者「無理です。こればっかりは。っていうか、何だよぉ。

生理中に下着見られたり、匂い嗅がれた程度で怒るな。お返

しに、あいつのご立派なの見たろ？」

宗像「お、お前……あれ、わざとだろう」

作者「いやぁ。この世界の天子（てんこ）と言われている、お前さんが喜んでくれるなら、いくらでもこんなネタ」

宗像「だ、誰が何だと？」

作者「お前のＳスタイルはＭの裏返しだってことは、先刻お見通しだ！」

宗像、蒼白。

作者「宗像と裕樹は当面、ラブコメ担当ね？生理中の下半身スーハーされるより、スゴいプレイが目白押しの予定♪次は野外でよろしく。あ、本番やるなよ？これはＲ－１８指定じゃないからな」

宗像「……」

作者「年下を自分好みに仕立てる逆光源氏計画スタートってことで。楽しみなさいよ。裕樹は調教されている分、少しＳ入ってるし」

宗像「……」

作者「お前が未経験（バージン）ってのは意外だけど、裕樹は童貞じゃない分、可愛い年下にリードしてもらえるようにしてあげたし。私って優しいなぁ」

宗像「……」

シャカッ
宗像、どこからか小銃を取り出し、
弾丸クリップを装填する。

作者「（嫌な予感）……ＯＫ宗像。時に落ち着こう。
　１０ミリ近い弾丸を至近距離からなんて、わかってるよね？
私、弾けてミンチになっちゃう。つーか、裕樹も梨園の息子だぞ？
と、とりあえず、裕樹にだけ、そっと本名教えてあげたら？裕樹の
接する態度が随分変わると思うけど、ねぇ？聞いてる？裕樹はこれ
から、あんたのナイチンゲールなお仕事にも――ち、ちょっと！
？」

宗像「ぬがぁぁぁぁっっ！」

宗像、銃を乱射。
作者、蜂の巣グロになる。

舞台、暗転

アップルソース・ダイアリー　第九話

シーラ。

黒髪の女性メース使いを、ホーサーはティアリュートにそう紹介した。

ティアリュートが知っているのは、くりっとした猫のような愛くるしい目つきの、彼女自身とそんなに外見年齢が違わない女性が、そんな名前で呼ばれていること。

そして、ホーサーにとって最初で最後になる弟子だということだけ。

まぁ、いいか。

ティアリュートはメースを操作しながら思う。

確かに、彼女は希望したホーサーの弟子という立場にはなれなかった。

しかし、ホーサーの説明を聞いて溜飲が下がる思いがした。

かつてティアリュートが所属していた正規軍部隊“死の宣告”大隊を創設し、初代大隊長に名を刻んでいるのはホーサー自身。

ホーサーからすれば、その大隊に所属した経験者という時点で、弟子にする必要はないレベルに達していることになる。

つまり（かなりの謙遜があるだろうが）、ティアリュートは過去の経験から、ホーサーに一人前と認められていることになる。

その上、ホーサーが躾ける前の弟子の相手を頼まれた。

客分扱い。

ティアリュートがホーサーの元へ教えを求めに来る立場を、ホーサーはそうみなしている。

ティアリューにしても悪い立場ではない。
任期満了時点で前線部隊に残るか、教導隊に回らないかと口説かれたことは確かだ。
その実績を正しく理解してくれ、かつ、ホーサーの初めての弟子の指導を一部任されたことが、彼女の内心深くに隠された、メース使いとしてのプライドをくすぐっているのは事実なのだ。

スクリーンの中で、シーラ騎が真っ正面から突っ込んでくるなり、かなり上空に上がった。
騎体に急制動がかけられ、ダイビングの選手のように空中で見事なターンが決められた。

頭をとって、頭上からの制圧射撃でケリをつける。
しかも、位置的に太陽を背にするポジション。
向こうはともかく、こっちは視覚と熱源で位置を把握することが出来ない、まさに絶妙な、そんな位置をシーラという女性は自然と確保した。
そんな所だろうと、ティアリューは考えるより早く結論を出していた。

他人はどう思うか知らないけど、別に褒めるべきことではない。
戦場で一対一(サシ)なんてありえないし、もし、あったとしても、ああ動くのは当然のこと。
当然のことを褒める物好きなど、戦場には存在しない。

ティアリューは、騎体を右へスピンターンさせた。
直進コース上をビーム砲弾が2発、時間差をおいて突き抜けていった。
騎体に無理をさせた急旋回がなければ、一発ずつが確実に命中す

る位置に叩き込まれた攻撃。
並のメース使いなら、これだけで終わっている所だ。

「射撃の腕も悪くない……」

ティアリュートはポツリとそう呟くと、愛騎であるバラライカにビームライフルを構えさせた。
太陽が眩しくて見えない。
そんなことは言い逃れだ。
逆に言えば、太陽めがけてぶち込めば命中する。
モードは速射モード。
一発ずつの破壊力はノーマルモードに比べて格段に落ちるが、面に対する制圧射撃が出来る。
ティアリュートの神経は、言葉よりも指の動きよりも速く、ビームライフルに射撃命令を信号として発していた。
２０発近い連続した短い射撃が太陽めがけて撃ち込まれる。

「っ！？」

ティアリュートが驚かされたのは、下からの反応だった。

接近警報。

荒涼とした地表すれすれから一気に急上昇をかけてくるのは、さっきまで太陽の中にいたはずのシーラ騎だった。

「下っ！？」

横に薙ぎ払うような戦斧の一撃を紙一重で回避したティアリュー

トは、ビームライフルを収納。
武装を槍に切り替えた。
すでに敵は上に突き抜けて、第二波攻撃を準備している。
太陽に入ったと見せかけて、こっちの意識が太陽に向かっている、刹那の瞬間にブースター全開で降下。地表ギリギリまで下がって、一気に急上昇をかけることで、予想外の下からの攻撃に転じる。
あの高度からの急降下はエアブレーキがほとんど利かない可能性が高く、あんな動きをすれば、メース使いは、一歩、いや、ほんのちょっとした操作ミスだけで地面に激突するという、チキンレースに近い恐怖に襲われることになる。
それつまり――

「……度胸も並じゃないってことか」

さすが。

そう思うと、ティアリュートは興奮するよりむしろ嬉しくなった。
身体がブルッと震え、脳内をアドレナリンが駆け回るこの快感は、何度味わっても楽しい。

「――殺し甲斐がある」

ティアリュートは、呟くように言うなり、槍を回転させ、その具合を確かめると、正眼の位置にしっかりと構え、高度を落とした。

ズンッ！
2騎が地表に降り、互いに間合いをはかる。
斬り込んだのはシーラ騎だった。
騎体全部の疑似筋肉をバネのように活用したその動きは、騎体を一挙動で飛び跳ねさせ、上段に構えた戦斧がティアリュート騎に襲

いかかる。
並の一撃ではない。
ティアリューはしっかりとそう断じた。
戦斧の上に、振り下ろすスピードだけでなく、騎体そのものの重量をしっかりと上乗せしている。
まともに槍で受けたら、真っ二つにされているところだった。
「……」
もう、何をか言わんや――だ。
あの伝説的なメース使い、ホーサーをして弟子にしたいと思ったのも、これは当然だと、彼女自身が今、身を以て思い知らされた。
狙い、動き、間合い、斬り込み、全ての面において、否定すべきことのない素質の持ち主だ。
ただ、ティアリューの身体は、彼女自身に告げていた。
この動きは――知っているぞ。

●シミュレーション管制室
スクリーンの向こう側で、ティアリュート騎がシーラ騎を近づけまいと、牽制のため、槍を円運動させている。
「動きはいいな」
ラドラーが顎髭をしごきながら呟いた。
「思い切りがある上に、計算もしっかりされている。こりゃ、かなりのベテランだな」
「シミュレーションの中の戯れ事じゃ」

「……爺？」

「やはり、ケチらずにメース同士にすればよかったか」

「待て待て」

ラドラーが思わずホーサーの言葉を遮った。

「模擬戦でも、ここまでのレベルとなれば、無事では済まんぞ？正規軍や支度金の潤沢に出る魔界での仕事とは違うんだ。あの2騎を壊したら、弁償するのは爺自身だぞ？」

「……むぅ」

「不満なのは、わからんでもない」

ホーサーは頷いた。

「二人とも、天分の持ち主。そう断じて何の問題があろうか」

「なら、わかるじゃろう」

「ああ」

スクリーンをじっと見つめながら、ラドラーは頷いた。

「所詮、機械を通じた疑似空間でのこと。メース使いの発する殺気まではさすがに伝えられておらんわ。

それにしても爺」

「何じゃ」

「何だ。あのシーラって名前は」

「悪いか」

「いや……名前にケチはつけんが」
ラドラーはあきれ顔だ。
「弟子に死に別れた女房の名前をつけるってのはどうかと思うぞ？」

ガンッ！
槍の柄が、戦斧の一撃を止めた。
「ふんっ！」
ティアリュートは、戦斧を軸にして槍を操作し、突き出された槍の柄がシーラ騎の右腕に叩き付けられた。
そのダメージはわずか。
時間にしてはほんの一瞬。
だというのに――

ドンッ！

突き出された槍の穂先がシーラ騎を真っ正面から襲う。
右膝を折って騎体を沈め、戦斧で受け流したシーラ騎は、そのまま下から上へとすくい上げるような軌道で戦斧を操り、ガラ空きのティアリュート騎の腹を狙う。
「っ！！」
とっさに槍から手を放し、空中に半ば飛び上がったティアリュート騎がバランスを復活させることが出来ず、地面に背中から落下した。

ズズンッ！

地面が揺れ、土煙が立ち上る。
シーラ騎は、そこに容赦なく襲いかかった。
戦斧がティアリュート騎の頭部めがけて振り下ろされる。
とっさに騎体を回転させることで回避したティアリュートが騎体を立ち直らせ、足の甲で槍を軽く持ち上げると、ちょっと力を込める。それだけでティアリュート騎は再び槍を手にすることが出来た。
そこに上段からの一撃が襲う。
「っ！？」
ティアリュートはしっかりと両手で槍を構え、戦斧を再び受け止めた。
その後は、
「そこっ！」
今度は、槍の柄がシーラ騎の右脇腹にかなりの勢いで命中した。
騎体が若干、くの字に曲がり、足下が縺れる。

「……少し、生ぬるいか？」
ティアリュートは独りごちてから、通信モニターの向こうに見えるシーラという女性に語りかけた。
「試合中に失礼する」

「――――何か」
息一つ乱していない、落ち着き払った声がスピーカーによって耳に届く。

「ものをお訊ねしたいのですが」

「私相手に」
シーラは言った。

「そんな固いお言葉は不要です。ティアリュート様」
「ティアリュートで結構。流儀は？」
「……我流です」
「でしょうね。おかしいと思った」
槍を構えながら、慎重に間合いを計る。
「あなたは……型がない」
「……」
「気迫が全て。まるで野獣でも相手にしているようだ」
「私が野獣なら」
シーラは容赦なくティアリュートに斬りかかった。
ガンッ！
疑似神経が伝えるショックが骨に響き、ティアリュートはさすがに顔をしかめた。
一撃の重さが、さっきより増している！
「この顎に噛み殺されてください」
「私を殺す？」
「あなたは強い」
シーラは顔色一つ変えず、言った。
「だから――敬意を持って噛み殺すことが出来る」
「面白い」

ティアリュートの口元に残虐な笑みが浮かんだ。
「あなた、私を殺したら強いって胸を張れるわよ？」
「……」
しばらくの沈黙の後、シーラは訊ねた。
「あなたを殺せば、私は強いと言えるのですか？」
「ええ」
ティアリュートは自信満々に答えた。
「今のあなたも十分以上に強い。正規軍のどの部隊にいたのか、じっくり聞きたいわ。これほどの腕前で、私の耳に入ってこないなんて、余程特殊な任務についていたようね」
「……正直」
シーラは答えた。
「自分が強いのかどうかなんてわかりません。でも」
シーラ騎の足下が少しだけ動き、斬り込みの体勢に入った。
「そんなこと」
ドンッ！
シーラ騎の袈裟斬が、ティアリュート騎に襲いかかった。
「さすがに強いな」
ラドラーが感心した様子で言った。
「あのティアリュートとかいう女。エリート街道を切って引退した変わり者と聞いたが。おい、爺が興味を持ったのも、その辺りか？」
「知らぬよ。向こうから弟子にしてくれと言ってきたんだ」

「類は友を呼ぶと言うが」

「何じゃ？」

「いや？」

「共に天賦の才はある。ティアリュートも、シーラもそんな類の存在じゃ。

二人と対峙した敵は、それがどんなものかを身を以て味わわされ、そして後悔した頃には手遅れになる……戦場で己の才能のなさを嘆いても遅いのじゃ」

「……だな」

「下手すれば、爺より強いんじゃないか？あの二人」

「ワシは別格！」

「……で？」

ラドラーは、自分は別格だと臆面もなく堂々と言い切ったホーサーにあきれ顔だ。

「あのシーラという女、本当に弟子にするつもりか？」

「ああ」

ホーサーは頷いた。

「魔界正規軍最強部隊の異名を持つワシの“死の宣告”大隊。その一番槍を任された女と五分……いや、このワシと一分でも渡り合ったあの娘……ただ者ではない」

「しかし」
ラドラーは、ホーサーの顔に、何かラドラー自身が心配しているのとは違う、気配を見た。
ホーサーは、何かに迷っている。
それが、長い付き合いのラドラーにはわかる。
「……何か、問題があるのか？というか、何に興味を持ったのだ？爺」
ラドラーは一気に訊ねた。
「あの大隊の一番槍なら、俺だって一度は担当した。
だが、俺は爺の手ほどきは受けても弟子入りを許されなかった。
何故だ？
何が俺になくて、あの女にはあるというんだ？
教えてくれ、でなければ、俺は死んでも死にきれぬ」
「……対戦してのみわかることじゃ。それではわからぬか？」
ホーサーは呻く様に言った。
「それは」
ラドラーは困ったようにホーサーから視線を外し、鼻の頭を掻いた。
「……剣を交えたのは爺のみだからな」
「だからよ」
ホーサーはニヤリと笑った。
「その剣で、このワシ自身が認めたのじゃよ」
「なら」
ラドラーは不服そうに言った。
「何故、この期に及んで躊躇する必要がある」

「……あの娘」

「ん？」

「あの、騎体から……いや、あの娘自身の身体から放たれる殺気。あの強い眼光……相応の場数は踏んできたはず……どれ程、敵を屠ればああなるのか……」

「あれは余程の場数を踏み、命のやり取りをしてきた者の証のようなものじゃ。ティアリュートもお主も、相応に場数は踏んでいるが……じゃが……違うんじゃ」

「何が違う！」

「俺はそこらにいる平凡なメース使いの一人か！？」

「お主は強い。凡百のメース使いが相手というなら、頭一つや二つはぬきんでておるわ」

「あの女は――――」

ラドラーの目の前で、シーラが動いた。

上段からの唐竹割。
袈裟斬。
横薙。

ティアリュートが確実に押されている。
防戦一方のティアリュートに対して、シーラは容赦なく押す。
槍の間合いがわかっているだけだ。
ラドラーは自分に冷静さを求めた。
ティアリュートが押されているのは、槍の間合いがとれないから。
シーラが押しているのは、戦斧の間合いにいるから。
それだけだ。
何も目立つ所は――――ないはずだ。

ガンッ！

数度目の戦斧と槍のぶつかり合いの後、両騎が押し合いになる。

「……すごいな」
ティアリュートは素直なまでの口調で言った。
「これはすごい」

「……」

「一振り、一振りが、まるで」

「……」

「あなたの魂をぶつけられているような――――」

「魂？」
ティアリュートの言葉を聞いたラドラーが眉間に皺を寄せた。
「何だと？」

「……そうじゃ」
ホーサーは静かに頷いた。
「若さ、とも言う。驚くほど純粋なんじゃ」

「何がだ」

「あの娘の戦いぶりよ」
ホーサーの顔には静かなまでの笑みが浮かんでいた。
「鬼神とはかくや。そう言わんばかりの力に潜んでいるのは、あの娘のむき出しの魂が持つ力そのもの」
そして、はっきりと言った。
「――怒りと不安、そして恐怖がまぜこぜになった魂の咆哮」

「それで」
ラドラーは訊ねた。
「勝てるのか？」

「……」
ホーサーは静かに首を横に振った。
「野獣は人に勝つことは出来んよ」

アップルソース・ダイアリー　第九話（後書き）

●●緊急のお知らせ（大ウソ）●●

前書きの情事、もとい、事情によりまして発生した作者死亡により、本シリーズは打ち切りとなりました。

長い間のおつきあいと、若干（おい）のコメント、評価に対して深く御礼申し上げます。

葬儀につきましては、故人の懐具合という深刻な事情により中止されました。

その後、遺骸は、生ゴミとして区役所委託の清掃会社により正常に処分されましたので併せてご報告申し上げます。

以上、鷹嶺綺羅葬儀委員会代表、水瀬悠理よりお知らせでした。

補足：

天子（てんこ）は東方キャラの比那名居天子（ひなないてんし）のこと。

作者にとって彼女のスタンダード装備は「どM」であること。

つーか、二次しか知らない作者は、彼女を二次でしか知らん。

東方詳しくない方は、とりあえずニコニコ大百科で当該項目調べてください。

アップルソース・ダイアリー　第十話

達人同士の勝負は一瞬で決まる。

よく語られることだが、それ程、ティアリューとシーラの勝負はあっさりとついた。

ティアリュート騎から放たれた槍がシーラ騎のコクピットを直撃。
パイロット戦死の判定が下された。
それで、全てが終わった。
シーラは負けた。
実戦なら死んでいた。
それで終わった。

「――おい、爺」
停止モードに入ってブラックアウトしたスクリーンを前に、ラドラーは納得出来ない。という顔で言った。
「これは何だ！」

「こういうものじゃて」
ホーサーはニコリともせず、そう答えた。
そのあっさりした答えの示す所が何なのか、彼には理解すら出来ない。

「こんなあっさり負けるなら俺だって弟子入り出来たはずだ！」

「……」
ジロリ。

ホーサーがラドラーの目を見た。
「……わかっておらんのぉ」

「何がだ？」

「今はこれで良いのだ」

「なっ？」

「ここからじゃよ……二人とも、ご苦労じゃった。荷物をまとめろ。家に戻るぞ」

ホーサーはそう言うなり、管制室から出て行った。

「なかなかじゃな」
シミュレーション装置から出たティアリュートを待っていたのは、ホーサーだった。

「……恐れ入ります」
ティアリュートにしもホーサーのような大ベテランに労(ねぎら)いを受ければ悪い気はしないが、
「ワシが健在なら、とても一番槍は任せられんが」

「……はっ？」

「今の所はよしとしよう」

「――お待ちください」

ティアリュートはホーサーの背に訊ねた。
「先程のお言葉は、私はまだ未熟――――そういう意味ですか？」
「ほかにどう聞こえた？」
振り返るなり、ホーサーはニコリと笑った。
「うっ」
そうもあっさり訊ね返されると、ティアリュートも返事に詰まる。
聞こえた。
そう答えれば、同時に自分は未熟者だと自身で認めることになる。
聞こえない。
それでは、ホーサーの思うつぼだろう。
ホーサーに一手の指南は得られるだろうが、それで終わるリスクが高すぎる。
「……」
ティアリュートは、じっ。とホーサーの顔を見つめてから、無言で頷いた。
「それでよい」
ホーサーは頷いた。
「お主の槍、あれはあれで、お主の手加減じゃろう？」
「……それは」
見抜かれていたか。
そう思うと、少し自分が恥ずかしい。
相手が女だというから、誰に言われたわけでもなく、あまり得意でもない槍を武器に選択したのは、確かに相手に対するハンデといえばハンデだが……。
「むしろ」
ティアリュートははっきりと言った。

「私の慢心です」
「慢心？」
「はい。剣を交えもせず、相手が自分より弱いという勝手な判断をしました。お詫びします」
「別に構わんわ」
ホーサーはあっさりと答えた。
「実際、あいつは負けたんじゃから」
「……救われます」
ほうっ。ティアリュートの口から安堵のため息が出た。
「次は剣をしっかり用意してくることじゃ」
「……あの」
隣に設置されたシミュレーション装置から降りるシーラを横目に、
「あの、シーラという女性についてですが」
「何かあったか？」
「……いえ」
ティアリュートは首をかしげた。
「正規軍時代はどこに？」
「知らぬ」
「――しかし」
「知らぬよ。気になるのか？」

「ならない方がどうかしています」
ティアリューは驚いた様子で答えた。
「相手が王侯貴族だろうが国家だろうが、大金を積まれようが何されようが、とにかく弟子をとらないことで知られたあなたが、どういう心境の変化ですか？あの女性だけが何故？」

「……あの小娘が一人前になったら教えてやろう」

「それが交換条件ですか？」

「交換？」

「私に手ほどきしていただける」

「――そうだとしたら？」

「それでもいいですが……あの娘は」

「ん？」

「私とどこかで交えているはずです。それは、身体が覚えています――私が、あの娘の素性に拘る理由は、これでご理解いただけましたか？」

「……覚えておこう」
ホーサーは頷いた。
「明日、午前中はワシがあ奴の指導を行う。午後はお主の手ほどきでどうじゃ？」

「光栄です」

「……うむ。明日の午後の結果を見て、お主に弟子をどれ程任せるかを考えるとしよう」

「……まだ信頼を置かれる立場にはないと？」

「指導者としてはな。それに、お主も指導を任されている者がおるじゃろう？ダユー殿からの書状に書いてあったぞ？」

「……ああ」

ティアリュートはしばらく視線を彷徨わせ、やっと思い出した。という顔になった。

「忘れていました。ユースティアに任せっぱなしでしたね」

ティアリュートの手作りだという夕食を食べた後、ティアリュートは城に戻った。

ホーサーの家にいるのは、ホーサーとシーラだけとなった。

「何をしている？」

障子を開けたホーサーは、シーラが縁側に腰を下ろしているのに気付いた。

青白い月明かりの下、手に木刀を持ったまま、身じろぎ一つせず、ただぼんやりと月を見上げていたシーラは、声をかけられて初めて

ホーサーの存在に気付いたらしい、はっ。という顔をした後、立ち上がって一礼した。

「眠れないのか？」

どっこいしょ。

ホーサーは縁側に腰を下ろした。

「そう……ですね」

シーラは苦笑すると、再度縁側に腰を下ろした。

「今日のこと、いろいろと……」

「――――負けたな」

「負けです」

「次は勝てるか？」

シーラは無言で首を横に振った。

「わかりません」

「わからぬ？」

「シミュレーションだ、何をしようと死ぬことはないと、心のどこかで慢心していた。それだけでは負けの説明は出来ない……何が自分に足りなかったか……それを知りたくて、考えていました」

「それがわからぬと？」

「わかりません」

「ふむ……」
腕組みをしたホーサーは言った。
「勝ちたいという欲はあるか？」
「あります」
「違うだろう？」
ホーサーは首を横に振った。
「お主が囚われているのは、勝ちたいという欲ではない。負けないという欲の方じゃ」
「……負け？」
「そう。負けに囚われている限り、次も負けるぞ。実際」
ホーサーは縁側の踏み石に置かれていたサンダルに脚を突っ込み、庭に出た。
「今のお前なら、ワシは片手で一撃の下に殺せる」
「いくらなんでも」
「なぁに」
ホーサーの家の庭は、かなり広く、様々な樹木が植えられている。
月夜を頼りにその庭を横切ったホーサーは、手頃な太さの枝を２本もって来るなり、１本をシーラに放り投げた。
「立ち会ってみればわかる」
「……」
シーラはその棒きれを受け取ると、無言で立ち上がって一礼した。
「……本気、ですか？」

「メースがなければ不安か？」

「そうじゃなくて」

シーラは言いづらそうに顔をしかめた。

「……その、私じゃなくて」

「ワシに勝てると思っているのか？その気になれば、この棒きれ一本でお主を殺すことなど造作もないわ」

「それは私のセリフです」

「……」

フンッ。小さいホーサーのため息が、シーラの耳にも聞こえた。

互いの立ち位置は、シーラにもわかる。

リーチの中だ。

たかが棒きれといえど、振り回せば、確実に命中する。

命中すれば、それだけでタダでは済まないことになる。

「明日のメシのことなんじゃが」

「はい？」

朝食が何だ？

シーラが思わずきょとん。とした途端、

パンッ！

シーラの額に鈍い痛みが走った。

ホーサーの持つ棒きれが粉々に砕け、シーラの周囲を破片になって舞う。

「……えっ？」

正直、シーラは凍り付いた。

「――ほらな？」

鳩が豆鉄砲を食ったよう。

その表現そのままのシーラを前に、ホーサーは満足そうにニヤリと笑った。

「真剣なら即死は避けられなかったろうなぁ？」

「し、しかし」

シーラは言いかけて言葉に詰まった。

ずるい。

これは単なる棒きれです。

それは、シーラにとって都合の良い方便でしかない。

ホーサーの言うとおり、これが真剣だったら死んでいる。

真剣でなくても、木が腐っていなければ大けがしていたところだ。

「私……未熟で」

シーラは足下に視線を落とし、呟くように言った。

「甘えています。とっさの声に飲まれて……そんなちゃちな事にまんまとはまって」

「……」

「何回戦場に出ようと、何騎を倒しても――棒きれ一本で殺されていては始末に負えません。未熟です」

「自分を責めるだけか？」

「……責めるというか」

シーラは苦笑いを浮かべつつ、はっきりとした声で言った。

「自分に欠けている破片を認識しました」

「破片？」

「私の心に欠けているもの……とでもいいましょうか？

心を鏡に例えれば、割れた鏡は全てを映せない。欠けた場所に何があるかを考えず、そこに映っていないもの、或いは、映るべきはずのないものを、自分で想像して……本当の姿が見えていない」

「……難しいことを言うのぉ」

「すみません」

シーラは頭を下げた。

「私も、口が上手くないですし……心の中がやっと見ることが出来るだけで」

「……ふむ」

ホーサーは再び縁側に腰を下ろし、そして、そこに置かれた木刀を軽く振った。

「囚われることを恐れるなら、やはり見所はある」

「はっ？」

「人の心とは面白いものでな？見るな。といわれれば見たくなる。

想像するなと命じられれば、想像する。

やってみようか？――――おい、ワシが風呂に入っている姿を想像するな」

「しません！」

「そう言われても、想像したろう？どうじゃった？」

「考えたくない光景でしたが……」

シーラは頷くしかなかった。

「……しました」

「ならばどうするか？」

木刀の切っ先がシーラに向けられた。

「見るな。と思えば心は逆に“それ”に囚われる。囚われている限りは――――手が出ないぞ」

「……」

「考えることと、動くこと。人は二つもことを同時にやることは出来ない。心を捉える思考の籠は、死神の持つ籠じゃ。囚われれば死ぬ」

「……死」

「そう。さっきのことが証拠だ。お前は反撃どころか回避さえ出来なかった」

「……ほれ」

つんっ。

木刀の切っ先が、シーラのヘソに当たった。

「これで終わりじゃ。これでワシに今日、2回殺された」

「……」

「よく見よ」

ホーサーは言った。

「心が葉の一枚に囚われている限り、木を見ることは出来ぬ。

じゃが、木を見ている限りは、今度は森が見えぬ。

心をどこにも置かず、どこも見ず、全てを見る」

「……はぁ？」

「それが“見る”ということだ」

「……意味がわかりません」

「お主はまるで何も見えていないのじゃ。一つ以外は」

「私は眼が二つ、ついています」

「阿呆。何を聞いておった。ワシが言っているのは心の眼のことじゃ」

「心の――眼？」

「そうじゃ。そのヒドい顔に二つくっついている役立たずではなく、

それ以上に役に立っていない心の眼のことじゃよ」

「ひ、ヒドい言われ方です！」

「この意味がわからねば――――いやさ、心の眼で全てを見るところまでいかねば、お主は人ではない……お主は一言で言えば」

「……」

「単なる野獣じゃ」

「野獣？」

「そう。出撃の号令が下れば檻から出され、相手を食い殺し、腹が満たされれば檻に戻って眠る。その程度の存在じゃ」

「……出撃して、命令の下に戦い、それで満足している」

「それ以下じゃな」

「……っ！」

「お主。この前の夜のことは覚えておろうな？“ワシ”に斬れ。そう言われた話」

「私は心から作り直さなければならない――――と？」

「そう」

ホーサーは頷いた。

「お主は気付いておらぬだろうが、あまりに殺気が強すぎる。どんなに外見を飾ろうが、その野獣の如きむき出しの殺気が全てを台無しにするだけじゃ。熊にドレスを着せた方がまだ愛らしいだろうな」

「……あの晩」
シーラは身体をブルッと震わせた後、
「私はあなたに殺された。あなたが本気で怖かった」

「ふん」
ホーサーは木刀を脇に置いた。
「ワシが怖かった？」

「……」
シーラは無言で頷いた。

「ワシの中に何を見た？」

「……」
しばらくの沈黙の後、シーラは答えた。
「……世界」

「世界？」

「はい。山、海、空……この世界を見た。私は確かに見た！あれは世界だった！」

「他に何を見た」

「……私自身」

「お主自身？」

「殺意に酔いしれたような顔をした私を見ました。殺されるかと思

った」

「見たか」

「見ました」

「……ふむ」

ホーサーは何度も頷いた後、言った。

「やはり、見所はあるな」

「はい？」

「……お主が見た自身の姿。その正体は簡単なことだ。知りたいか？」

「……ええ」

「お主自身の殺気だ」

「私の……殺気？」

「そう。抜き身の剣のような切りつけられるような殺気。お主が常に放っている不細工な波動。それがお主の姿を借りて、お主自身に斬りかかってきた。それだけじゃ」

「そんなこと……あるんですか？」

「全ての修行で一番大切なものは全て自分の心にある。そう心得よ」

「……はぁ」

「不承不承。そんな顔じゃな」

「当然です。いきなり心だなんて言われても」

「人は己の鏡という。さっき、お主は自分の心をそう表現もした。なら、ワシがお主の姿を映し出す鏡となって、何がおかしい」

「……鏡」

「今まで何人殺してきたか、かなりの場数を踏んだことじゃろうな……だが、それは、お主自身の心が決めた結果に過ぎぬ」

「私の……心が？」

「思えばこそ、全ては動く。心が動かねばこの世では何も動かないのだ。全ては心の結果。お主の心が生み出す殺気が、お主の前に敵を呼び寄せる」

「……そんな、私」

「口で否定しようが、結果は変わらぬ。このまま、戦陣の中で野獣として死ぬ運命は避けられまいて……おい、後、何人殺すつもりだ？」

「一人も殺したくありません」

「一人も？」

「ええ。ただの一人も」

「それこそ無理じゃ」

「無理ではありませんっ！」

「お主の心が、戦いを求めている。野獣としての心を持つ限り……それはあり得ぬ」

「……っ！」

「それに、いくら戦陣で武功を立てようが、それは野獣の牙をもってのこと。そういうのは強いとは言わぬ。良くも悪くも、不細工というのじゃ――――今のお主の顔のようにな」

「一言余計です！私は女ですよ！？」

「ほら」

「はっ？」

「そうやって、何かにすぐ心を囚われるのは、悪い癖じゃ」

「私に……宗教的な修行でもしろというのですか？」

「坊主はお布施のために人を殺し、戦士はそのお布施を払うために戦う」

「何てイヤな格言ですか？それは」

「戦士として戦っても、最後には坊主にもっていかれるもんじゃ。

それが現実」

「……わかりません」

「なら、聞こう。お主は、自分が強いと思っているか？」

「……」

シーラは視線をそらせた。

ホーサーの眼が、何故か怖くなったのだ。

見据えられると、全てが、それこそ自分が気付いていない心の奥底まで見透かされているような錯覚を覚える眼だ。

――――不思議な人だ。

シーラはそう思った後、

「それも……わかりません」

そう、答えた。

「訓練は軍で受けましたが、結果からすれば我流になりました。戦場では、訓練で受けた型なんて気にすることも出来きません。敵がこう来るから、ならこうしてやろう。そうやってきました。だから、自分がどれほど強いかと聞かれてもわかりません。強い。すごく強い。そう思うこともありますけど、私なんて相手にならない程、強い相手もゴマンといるはずだ。そうとも思えるのです」

シーラは、自分がホーサーの眼の中に囚われていることを知った。

「……ふむ」
しばらくの沈黙の後、ホーサーは小さく頷いた。
「本当に強いとはどういうことか？それを知るには、本当に強くなるしかない」
「……ですよね」
「海にいる限り、海の広さはわからん」
「まぁ、別に」
シーラは苦笑した。
「今の私が強くないならそれでもいいんです。後は、私より強い人を相手に、強さの階段を登っていけばいいんですもの。そうでしょう？」
「それがわかるまで」
ホーサーは答えた。
「生き延びることが出来ればな」

アップルソース・ダイアリー　第十一話（前書き）

最近、更新が遅れてごめんなさい。
風邪ひいて死にかけてました。
皆さんも身体を大切にして下さい。

アップルソース・ダイアリー　第十一話

●エトランジュ艦内シミュレータールーム

バシュッ

空気が抜けた音がして、シミュレーターのハッチが開いた。

「ここにいたか」

殿下が、中から出てきた金髪の少女に話しかけた。

メサイアの操縦は大変な体力と精神力を必要とする。

そのシミュレーションを終えた少女の額には玉のような汗が浮かんでいた。

「てっきり、天狗になってるかと思ったが」

「馬鹿なことを」

少女――レルヒェはアイネからタオルを受け取ると、汗を拭った。

「たった一度の実戦で勝てたからといって、次が勝てるという保証にはならないだろう？」

「よくわかっている」

殿下は、レルヒェの意外な反応に、少しだけ驚いた。と言う顔になった。

「誰かに言われたのか？」

「ゲームやマンガの世界ではよくあることだ」

レルヒェは真顔で答えた。

「一面をいくらクリア出来といっても、次の面でクリア出来る保証

にはならん。年中ゲームをやっていれば、骨身に染みる」

「君らしいというか……」

「それに」

レルヒェは言った。

「例え一度でも皇帝が負けたとなれば、とんでもないことになるからな」

「わかってるなら」

「下がれと言うならお断りだ」

レルヒェはきっぱりと言い切った。

「私は単なる遊戯（ゲーム）をしに来ているんじゃない。一人の皇帝としてここにいるんだ」

コツコツ。

レルヒェのブーツが床を叩く。

「連邦議会には、すでに戦力派遣に消極的な発言が出始めている。このままでは、帝国は日本戦線（ここ）へ戦力を派遣出来なくなる」

「……」

「短い視点――つまり、魔族軍が日本征服だけを考えているというなら、別にどうということはない。世論の示すままにしてもいい」

「……おい」

「だってそうだろう？」

レルヒェは殿下の前で腰に手を当てた。

「私達君主の最も大切なことは何だ？自国を守ることだ。

極東の島国なんてお互い地球の反対側って位、遠い所で国が滅んだからって何だ？
それでドイツやマラネリにどの程度の犠牲が出る？」

「それはそうだが」

「モノの言い方は悪い。確かに悪い。
だが、本質は突いているはずだ。
我が国にとって、日本を守る意味があるのか？
極東の島国のために、何故、ドイツ人が膨大な戦費を支払い、貴重な人命を犠牲にしなくてはならない？
それが、派遣反対派の言い分であり、私はそれだけなら否定することさえ出来ない。
殿下なら出来るか？」

「……」
不服そうではあるが、殿下は首を左右に振った。

「そうだ。我々君主は神ではない。
ただ、かつての先祖が、君主となるべき時代に君主に上り詰めた、単なる成り上がりの子孫でしかない。
つまり、我々個人は単なる凡人だ」

「凡人は世論に従っていれば良い――と？」

「違う」
レルヒェはアイネにタオルを戻した。
「世論を作るんだ。長い視点で問題とすべきは、この戦線に跋扈している魔族軍ではない。大陸で増殖を続けている妖魔達だ。
このまま、極東での問題として妖魔の存在を放置すれば、将来に

おいて絶対的な禍根として残るに違いない。
何故？
増殖した妖魔達が西進を始めたら、モスクワ、東欧、そして我が国が喰われないという保証はどこにもないのだ。
この時代の君主として、我々の子孫達に、君主としての義務を放棄したなどと、私は言われたくない。
だから――」

レルヒェの眼に浮かぶ覚悟を殿下は確かに感じた。

「私はドイツ皇帝として、この日本戦線を早期に平定し、大陸への橋頭堡をこの列島に確保、しかる後に大陸へと軍を進め、いかなる犠牲を支払っても、ドイツへの妖魔侵攻を阻止しなければならんのだ！」

「……正論だ」
殿下は頷いた。
「どんなゲームの受け売りが出てくるかと思ったが、マトモな言葉が聞けて安心した」

「ふん。二次元と三次元の区別はつけている」

「それでいい。ドイツ世論の反応はどうだ？」

「……思ったより良くない」
レルヒェは肩を落とした。
「もっと、戦力増派へ好意的な反応を示してくれると思ったけど……」

「どう出た？」

「正直、芳しくない。皇帝が“遊んでいる”程度の反応さ」
「遊んでいる？」
「ああ……」
グッ。
レルヒェの戦闘服のグローブが力強く握りしめられた。
「私が、戦場へ遊びに行った。１０歳の小娘に過ぎない私が、敵を撃破出来たのは、周囲のバックアップのおかげであって、私の功績ではない――そう言うことだ！」
「……それが、一般的な見方だろうなぁ」
「何だと！？」
「君の熱意は、口にしてもらえればわかる。
だが、それを知らない一般国民の立場からすれば、君という皇帝が、天皇参戦に刺激され、熱に浮かされて周囲を伴って参戦したとしか見なすことは出来ないだろう。
いいか？熱意だけで国民は動かない。
レルヒェの参戦なんて、君がゲームで遊んでいるのと同じ、いや、出撃に必要とした膨大な費用を考えれば、大人しく宮廷でゲームでもやっていてくれればよかったと、非難するだろう」
「私はっ！」
「世論を動かす美談にしようとしても」
殿下は冷たく言い放った。
「世論はそう採らない」

「何故っ！」

「……君が幼いからだ」

殿下は言った。

「僕だって、新型メサイアのデータ収集という大義名分と、職権を委任出来る政策集団が存在するからこの場にいられるようなものだ」

「私は皇帝だ！」

「そう」

殿下は頷いた。

「正確には、皇帝を名乗る“少女”――だ。シックルグルーバーはどうした？あの狐は？」

「……宰相も反対しているだろう。何も相談もせずに出てきた」

「あいつを味方につけなかったのか！？」

「無理を言うな。あの頑固者を説得することなど、私に出来るものか」

「……」

ハァッ。

殿下は肩を落とした。

「……いいかい？レルヒェ」

その声は、身内を諭すような優しい声だ。

「戦争は、何も敵と殺し合うことだけを定義しない。補給、内政、外交、その範囲は政治の全方面に及ぶことは、むしろ君の方がわかっているはずだ」

「わかっている！」
俯いたレルヒェは怒鳴った。
「わかった上で、ここに来ている！
だが、このまま宮廷で私に何をしろというのだ！
宮廷で大人しくしていれば、状況が変わるのか！？
わからない！
シックルグルーバーは、私に何をしろというのだ！」

「……難しい所だな」
殿下は、ハンカチをポケットから取り出しながらため息をついた。
「あの宰相が“鍵”だ。
君の派遣を暗黙の内に認めたことを、君への応援ととるか、それとも、君に一度痛い目にあって、尻尾を巻いて逃げ帰って欲しいと思っているか……」
殿下は振り返って、後ろに待機していた武官に言った。
「おい、ドイツ大使館に緊急電を打て。宰相の腹の内を調べるのだ。それと」

「それと？」

「……スイス大使に、母上に動いてもらうよう上奏させろ。レルヒェちゃんは母上にとって実の娘同然の存在だ。母上経由でドイツ帝室へ圧力をかけてもらうのだ。
……もっとも、母上ほどの分別がある御方なら、もう既に動いていらっしゃるかもしれないがな」

●同じ頃　ドイツ帝国　ベルリン

「お体の方は、もう大丈夫なのですか？」
「近頃は安定しておりまして。医師からも外出の許可を頂いております」
「……重畳」

ベルリンで最高級の格式を誇るカフェの一角。
開店当初から使われているという、歴史が刻み込まれたテーブルを挟んで妙齢の男女が二人、向かい合いで座っている。
二人の前には紅茶の入った白い白磁が置かれ、心地よい香りのする湯気が立ち上っている。
金髪碧眼の女性は、スラリとした知的な容姿を、白いスーツに包んでいる。
顔色は冴えないが、その影が女の色気として見る者を魅了する。
男は金髪黒眼。短い口ひげを生やし、背は高く、しっかりとした体格を持つ。
マラネリ王国皇后、つまり、殿下の母であるエトランジュ陛下と、ドイツ帝国を動かすシックルグルーバー宰相の二人だ。

「今回、私をお招きいただいた件につきましては」

「……陛下のことでご相談が」
男は頷いた。
「本来ならば、私がサナトリウムに出向くべきでしたが、何しろ多忙の身。ここに場所を設けるのが精一杯のことで」

「存じております」
女性は頷いた。
「……医師団までご準備頂いて」

エトランジュは、優雅な仕草で首を窓の外へと向けた。
通りの目立たないところに止まっていた白いバン2台がその視界に入っている。
中にはシックルグルーバーが手配した医師達が待機している。
ただ、それを彼はマラネリ側には伝えていない。

「慧眼、恐れ入りますな」
シックルグルーバーは、この女性がただ者ではないことを何年も前から知っていた。
知っていながら尚、こうして、その才能の一辺でも露わにされると驚くしかない。
「まずは貴国からのメサイアの貸与に感謝を」

「息子の判断ですのよ？」

「いや。先だってのデュミナスの件もあります。こうも簡単に最新鋭騎を貸与いただけたとなれば……」

「まぁ」
エトランジュは口元を軽く手で覆って笑った。
ただ、そんな仕草だけでも色気を感じる程、エトランジュは優美な存在にシックルグルーバーには見えた。
「私は何もしていませんよ？」

「……ですか？」

「ええ。子供達のことです。あの子達はあの子達なりに考えているのです」

「しかし」

「心配ですか？」

「当然です！」

シックルグルーバーは頷いた。

「陛下はお立場がわかっていない！

殿下のような男子でしたら、戦場に立つことはむしろ武勲とされるでしょう。

しかし、陛下はか弱き女の子です！

ああ、そう言えば、北米戦線でご子息はかなり戦果を上げられたと」

「お褒めにあずかり、恐縮ですわ」

「ええ。陛下が男子で、先の陛下が、他に殿下や皇女に恵まれていたなら、私も胸を張って殿下と共に轡（くつわ）を並べることをよしとしたでしょう。

しかし、陛下は我が国ではたったお一人の存在で――」

「君主はいつでも天上天下お一人の存在です」

「しかし……っ！」

「跡がいない。それは確かでしょう。ですが、それは息子も同じです。男子なら戦場で死んでもよいと？」

「いえ、さすがに」

「レルヒェちゃんは聡明な子です」

エトランジュは言った。
「いろいろと考えて、あの子なりに判断した結果でしょう」
「……どうも」
ハァッ。
しばらくの沈黙の後、シックルグルーバーは肩を落とした。
「ご生誕の頃から存じ上げているせいか、私も情が移ったのでしょうなぁ」
「……」
「あの子――そう呼ばせてください。私にとっても娘のような存在で……いや、手のかかる分、子供は可愛いものでして」
「それはそうですよ♪私も腹を痛めて産んだからわかります」
「……だから、あの子には姫として大人しくしてほしいのです。騎士ならば戦場に出なければいけないというルールはないはずだ。政治は我々、技術者集団（テクノクラート）が身命を賭して行っている。政治も外交も経済も安定している。かつてのような、衣食住を求めたデモも暴動も遠い過去のことになった。
ドイツは安定しているのです！
だというのに、あの子は何が不満で戦場になんて出るのですか！」
「安定しているからこそ――ですよ」
エトランジュの言葉の意味が、シックルグルーバーには理解出来ない。
「政（まつりごと）が安定していなければ、あの子は絶対にドイツ国外に出ようとはしなかったでしょうね。あの子が外に出たということは、いわば

あなた達への信任の証のようなものでは？」

「背中を我々に任せてくれている――――と？」

「です♪」

「……だからといって」

シックルグルーバーは天を仰いだ。

「いくら何でも」

「国の現在（いま）は、あなた達に任せ、あの子はほんの少し先を見ているだけ。

ドイツ国内の反応は、皆、宰相閣下のような反対を？」

「いえ？」

シックルグルーバーは首を左右に振った。

「派遣戦力が足りないんじゃないか。民間で応援団を出させろだとか……総じて言えば、アフリカで人類同士で争っている場合じゃない――――世論はそんな方向に傾きつつあるのは事実でしょうな」

「レルヒェちゃんの狙ったところに？」

「そう。私の望む正反対の方向へ」

「……ふふっ」

「笑い事ではありません！」

「――――失礼」

エトランジュは口元に零れる笑みを浮かべて言った。

「もし、私にも娘がいたら、或いは、殿下が娘だったらどうしたかな……そう思いましてね？」

「……恐らく」

シックルグルーバーは憮然として言った。

「その方が、陛下も私めの心情をよくご理解頂けるのでは？」

「亡き陛下のご意志をうかがってみたいものですわ」

「……私のように反対したと思います。娘を持つ父親とはそういうものです」

「でも、あの子が下した決断は、尊重すべきではありませんか？父親代わりとして、そして、宰相として」

「……」

「あの子は悪い子ではありません。本当に聡明な子です。聖書にもありますよ？

健やかなる木に悪の実はならず。

正しき実のなる歪んだ木もなし。

あらゆる木の本性はその身が示す。

……あの子という実が示す、この国という木は良き木となる。

それが、信じられませんか？」

「……いえ」

シックルグルーバーは首を左右に振った。

「その通りですが……」

「……国境問題を抱えているフランス王室には、私が仲介に立ちま

しょう」

「……感謝いたします。陛下」

「いえ？」

ニコリと笑うと、エトランジュは立ち上がった。

「フランスのマリアンジュ王妃から、息子の出陣についてグチを聞いてくれと誘われていますの」

●極東戦線　大日本帝国　山形県内　第三軍施設

ズズンッ！

「また負けたか」

「ふぅむ……」

「爺よ。悪いが、あれは跡取りにするには器が……」

「いや」

ホーサーは言った。

「問題はティアリュートの方じゃ」

「は？」

ラドラーはあきれ顔で言った。

「勝ったのはあの娘の方だぞ？」

「本当にそう思うか？」

「……というと？」

「被弾４発に対して、敵への命中は３０発近い」

「よいことではないか」

「……」

「な、何が悪い」

「１騎仕留めるのに３０発も命中させるバカがおるか」

「――――あっ」

「じゃろうが。じゃが、シーラは確実にティアリュートを追い詰め始めている。それから逃れるように、戦闘時間は延び、仕留めるまでにティアリュートは手間取っている」

「……爺、シーラという娘に、何を指導している」

「何も」

「何も？」

「ああ。普段通りのことさ」

二人の目の前でシミュレーターのハッチが開いた。

靴の音を派手に鳴らせて先にシミュレーターから降りたのはティアリュートの方だった。

一瞬、遅れて降りようとしていたシーラを凄まじい形相で睨み付けると、ホーサー達の前に近づくなり、
「訓練、終わりました」と、敬礼した。
「申し訳ありません。本日は、多忙に付き、これにて失礼させていただきます！」
そう言うだけ言うと、返事も待たずにシミュレーター施設を後にした。

●夕刻、ホーサー宅
「私、何かしたんでしょうか」

「なぁに」
心配するシーラに、卓袱台に乗った皿から魚の煮付けをつまむホーサーは言った。
「あやつもお主と同じで、まだまだ修行が足りんということじゃ」

「……はぁ」
正座して食べていたシーラは、不意に箸を止めた。
「私が失礼なことをした。というわけではないのですね？」

「ああ。むしろ礼節を欠いたのは向こう。心配は要らぬ」

「……あ、あのっ！」

「なんじゃ？」

「お願いがあります」

「願い？」

「はいっ！」

「何じゃ」

「私に、稽古をつけてください！」

アップルソース・ダイアリー　第十一話（後書き）

今回、少しも話が進みませんでしたね。
そういえば、パ●リロの方のエトランジュって、今、どうしてるのかなぁ。

アップルソース・ダイアリー　第十二話

●天壇　ティアリュートの私室

「くそっ！」

ティアリュートはジャケットを乱暴に脱ぐと、床にたたきつけた。

部屋の隅で待機しているユースティアは真っ青になっている。

肩で荒い息をしたティアリュートは、ベッドの上へ飛び込むように横になる。

クッションのおかげで数回バウンドした後、枕に顔を突っ込んだまま、ティアリュートはピクリとも動こうとしない。

「あ……あの」

「……ごめん」

ユースティアに、ティアリュートはそのままの姿勢で言った。

「少し、そっとしておいて」

●ホーサー邸　付近

「ワシの稽古はキツいぞ？」

ホーサーは前もってシーラにはっきりとそう言い切っていた。

望むところだ。

シーラもそう覚悟はしていた。

それはまぁ、修行を積む身として当然の心構えではあったが……。

最初の覚悟というものが最後まで一貫しているはずもなく……。

「いろいろ、後悔している頃じゃろう？」

「ま……まさか」

ホーサーのニヤニヤとした笑みから逃れるように、シーラはまっすぐ前を向いた。

「私は、ティアリュート殿に勝ってみたいのです」

「勝ってどうする？」

「勝ってから考えます」

「……まぁ、それもよかろう。じゃが」

ホーサーはニコリと笑った。

「お主の何をどうしたらティアリュートに勝てるというのじゃ？」

「ですから！」

シーラは痺れを切らせたように言った。

「それを知りたいのは私の方です！」

「わからぬか」

「わかりません」

「……無理もないか」

「？」

「お主にゃわかりゃせんよ。何故負けたか。それを知りたければ、全ての負けを受け入れて、それを一つ一つ見つめ直さにゃならん」

「……」

「負けたことは認めるな？」

「模擬戦で――――でなら」

「ふん……子供じみた強がりが出るまでにはなったか」

ホーサーは模擬刀を抜いた。

「安心しろ。模擬戦用の模擬刀じゃから、当たっても死にはしない」

「で、ですけど」

シーラは言った。

「私はメースを」

「メースは肉体の延長線上に過ぎん」

ホーサーは言った。

「そこがわからぬと、誰と戦っても勝てんぞ？」

「……っ」

シーラは答えるように剣を構えた。

「……で？何をどうすれば、あ奴に勝てる？」

ホーサーも剣を構えた。

その構えを見た途端、シーラはハッとした。

構えの中に見た者は、あのティアリュートだった。

ホーサーとティアリュートが重なって見える。

否、目の前に立っているのがホーサーなのかティアリュートなのか。それさえわからなくなる。
さらに、ティアリュートの姿がぼやけ、その姿はメースへと変化していく。

「ふんっ！」
気合いの声と共にシーラめがけて斬り込んできたのは、ホーサーでもティアリュートでもなく、メース“バラライカ”だった。

数十分後。

シーラは大の字になって横たわっていた。

「死ぬところじゃったのぉ」
ホーサーは顎髭を撫でながら他人事のように言った。
「……どうした」

「……弱くなった……そう思いまして」
シーラは言った。
「私、何が怖いのかさえわからなくなりました」

「ほう？」

「剣を構えたホーサー様が、ティアリュート様に変わって、それがシミュレーションで見たバラライカに変わった……私はそれを見ました。“それ”を見た途端、私、身体がすくみました」

「……」

「一体、私は何に脅えたんでしょう？ホーサー様？ティアリュート様？それともバラライカ？」

「……よい疑問じゃ」

ホーサーは言った。

「お主は、その中に倒さねばならぬ敵を抱えている」

「……」

「さて……日の落ちぬうちに帰ろう。もう夕暮れ時じゃ」

「ち、ちょっと待って下さいっ！」

「何じゃ？」

「け、稽古は！？」

「んなものぁ、明日でもどうにでもなる。日々の仕事も修行の内。今晩の献立は考えてあるんだろうな？」

それからというもの、朝、朝食を作って掃除洗濯の後、ホーサーに茶を出して、軍施設のシュミレーションで、ティアリュートにぶちのめされ、昼飯をホーサーに出してから洗濯と掃除の続きをして、夕飯の買い出し、さらに夕食の後、ホーサーに模擬刀で叩きのめされ、朝までノびる。というのが、シーラの日課となった。

そんな生活がそろそろ一週間になろうとしていた。
「……」
大の字にひっくり返ったシーラは、ぼんやりと空を見上げていた。
星空に雲が少し。
でも、満月だ。
「……」
何でだろう。
シーラはそれを考えていた。
何で、ホーサー様――じゃない、お師匠様に勝てないんだろう。
遠慮している？
まさか！
本気は出している？
本気どころか死に物狂いだ。
それで、何故、一太刀も返すことが出来ない？
私が未熟だから？
それはそうだろうけど……。
違う！
未熟ってことに逃げるな！
逃げちゃいけない！
逃げちゃいけないんだ！
「……」
シーラは目を閉じ、自分に言い聞かせた。
よく考えろ。
お師匠様は、どうやって動く？

あれだけ相手にしていれば、それ位は――

……あれ？

シーラは、そこで固まった。
この時点で固まってしまった。

「……」

バカだ！
シーラは自分の無能さを骨身に染みて感じ取った。
私は――大馬鹿だ！
シーラの顔が赤らんだのは、悔しいからじゃない。
恥ずかしい！
その一心からだ。

何も見えていなかった。

何も理解していなかった。

何も見ようとせず、理解しようとせず、ただ、がむしゃらに突っかかる自分しかいなかった！

それに気付いた時、シーラは死ぬほど恥ずかしかった。

野獣

不細工

師匠がそう自分を評価したとしても、まだ“褒めすぎ”だ！

何も知らずに、
何も見ずに、

全てを知ったつもりで、
全てを見ているつもりで、
全てに勝ったつもりで、

――思い上がったままで、剣を振るっていた。

こんな恥ずかしいことはない。

勝てるはずがない！

勝ってはいけない！

「……」

それを思い知ったシーラの瞳には、涙すら出てこない。

「……くそっ！」

シーラは立ち上がると、脇に転がっていた模擬刀を振るった。

単なる素振りだが、シーラはとにかく闇雲に振った。

例えば、ティアリュート様でいい。
私は、彼女の何を知っている？
何も知らずにいていい。
戦場に立つ敵を一々知ってる必要がどこにある？
本当にそうか？
それでいいのか？
否。
絶対に否！

私は、あれほどティアリュート様と立ち会って頂きながらも、あの御方の事は何も知らず、姿を見たことすらないに等しい！

ただ盲目的に向かっていっただけ。

エサにつられた獣同然に！

戦法も何もない。

力のみを信奉して、戦えば何とかなると思っていた。

子供だ。

子供以下だ――――

何て、

何て幼く、野蛮だったのだろう。

そんな醜さの中で戦っていたのか――この私は！

「くそっ！」

思い出せ！
せめて、詫びるなら、恥じるなら思い出せ！
お師匠様の、ティアリュート様の剣を！
どう動いた！？
その太刀筋は！？

……

……

……ダメだ。

見えない。

素振りをする腕を止め、シーラはその場にへたり込んだ。
そっと顔に触れてみる。
眼はついている。
手を見れば、はっきりと指紋まで見える。
なのに――太刀筋が思い出せない。

見えない。

剣が――見えない。

「――っ！」

声にならない叫びを上げて、シーラは模擬刀を地面に叩き付けた。
ガシャンッ
鈍い音を立て、剣が地面に跳ね返る。

しるかっ！

シーラは癇癪を起こして、その場に大の字にひっくり返った。
小石が背中のあちこちに突き刺さるように痛む。
それさえ、自分をバカにしているようで腹が立つ。

見えないものは見えないっ！
何故、見えないものを見ようとするんだ！
勝って、それでどうしろというんだ！？
私は、何がしたいというのだ！

内心に沸き上がる自分に対する怒りの炎にあぶられているかのような居心地の悪さに、シーラは顔をしかめ、満月を睨み付けた。
こうこうと照らし出す青白い光が、シーラの中に沸き上がる怒りの炎を嘲っているかのようで、睨むしかなかったのだ。

見る。

見る。

それは――――？

そういえば……。

怒りの炎が身体を突き抜け、身体の緊張が緩んだ時、シーラの脳

裏に一つの言葉が走り抜けた。

お主は、一言で言えば単なる野獣じゃ。

お師匠様は、そう言った。
何故？
何故、私は野獣だと言ったんだ？

「よく見よ」

あの時、お師匠様は言っていた。

「心が葉の一枚に囚われている限り、木を見ることは出来ぬ。
木を見ている限りは、今度は森が見えぬ」

なら……？

「私は」
むくり。
シーラは起き上がると、自分に問いかけた。
「私は――――敵が“見えていた”の？」

シーラは、しばらく考えた後、模擬刀を手に掴んだ。
模擬刀を正眼に構え、目を閉じる。

私は、敵に立ち向かうとき、何を見ていた？
否、ティアリュート様達と対峙した時でいい。
見ていた？
違う。

……そう、違うんだ。

あれは――――見ていたとは言わない。

シーラは、その感覚を表現する適切な言葉を知らない。
強いて言えば――――とらわれていた？というのか？
違う。

相手に飲まれていた。

相手の存在に

相手の強さに

相手の全てに

自分は飲まれていた。

それだけ？

……違う。

それだけじゃない。

私が飲み込まれていたのはそれだけじゃない。

自分は強いという思い込みに、私は飲まれていたんだ。

それに飲まれている限り、敵が見えるはずがない。

私は一体……、何をやってきたんだろう。

満月はまだ自分を笑っている。

でも、もう腹は立たない。

笑うなら笑え！

どうせ私はちっぽけな存在だ！

シーラは心で叫ぶと、模擬刀を一心に振り始めた。

アップルソース・ダイアリー　第十三話（前書き）

前回はちょっと“すぎ”ましたので反省しつつ進めます。
おしかりのコメいただいた方、ごめんなさい。お詫び書いていたら、何勘違いしたかコメごと消しちゃいました。お詫びします。ごめんなさいでした。

アップルソース・ダイアリー　第十三話

●魔族第三軍　シミュレーション施設

ぶっ倒されても　あなただけについて行く
ご飯作って、戦って、伸びて、そして怒られる
洗濯して、またご飯作って、ノされまくり
でも私はあなたに従い尽くします
そろそろ一服もろうかな
そっとトリカブトどうかなーんて

シミュレーション施設の隅っこに、力のない歌声が小さく、かすかに流れている。

朝飯(あさめし)作って　怒られて
お昼作って　文句を言われ
都合いいわね　そうよ　そんなの知ってる
命じられて　どつかれて
片付けて　またどつかれて
あなたの一撃腰砕け　しかたないです
もうどうにでもして

アァ　あの世の彼方へ　楽を求めて
旅でもしましょうか
アァ　布団に抱かれて　まくら抱えて
私は涙も出ない
もうどうにでもして

もうどうにでもして

戦闘服を整えるシーラの口から零れる、下手くそで元歌がなんなのかわからない、テンポの狂った歌。
シーラとしては、これで本人の心情というから世話がない。

だが……。

もうどうにでもして。

このフレーズ程、シーラの心境を正しく形作る表現はない。
はっきり言う。
もう、何がどうなろうが、シーラはもう知ったことではなかった。
同じ振るうなら、剣より包丁や鍬の方がマシ。

それが偽りのない、シーラの本音だ。

ここ数日の間、何度、ティアリュートにどつかれようと、ホーサーにぶちのめされようと、もうシーラは悔しいとさえ思わなくなっていた。
戦いに意味があるか？
そう聞かれれば、シーラははっきりと言い切ったろう。

否

そう、はっきりと断言しただろう。

何故、私は戦うのだ？

自分は強くない。
自分に価値なんてない。

それなのに、何故、戦うのだ？

戦闘服の準備が終わったシーラは、ふと思った。

……そうだ。

シーラにしては名案だと思った。

――――負けてみよう。

それは冗談ではなく、本気だった。
自分はいつでも勝とう、勝とうとしてティアリュート様やお師匠様に剣を向けてきた。
なら、負けようと思ったらどうだろう？
どうせ、戦っても勝てないなら、逆に自分から負けてみたら？
……面白い。
結果は一緒なら、動機を変えてみよう。
シーラは鼻歌交じりにシミュレーションへと乗り込んだ。

ティアリュートの駆るバラライカの装備は剣。
シーラの駆るヤクトエッジの装備も、同じく剣。
互いの切っ先が触れる位置から模擬戦は始まる。
普段、互いに押されまいとして押し合いから鍔の削り合いとなって、力に負けるシーラが下がって、そこから本格的な斬り合いとな

る。
　まるでプログラムされているかのように、少なくともここ２０本近い勝負はそうやって動いてきた。

今回も同じ。
シーラは疑似感覚として伝わる切っ先を押す力を感じ、そのままずっと押され続けた。
バラライカがすっと一歩、前に出る。
シーラにとって、心配なことはたった一つ。

わざと負けたことが、どうやったら相手にばれないか。

押されて、
次の一手で切られてみるか？

シーラは切っ先からふと眼を外した。
もう、勝つことなんて考えていない。
この勝負自体、どうでもいいのだから当然だ。

「……あれ？」

そのせいか？
シーラの眼には、対峙するバラライカが妙にはっきりと映った。
装甲パーツのパーティングラインや、汚れまで。
相手が合成された架空の存在だと改めて思い直すと、魔族の技術力の高さには感心するしかない。

バラライカがもう一歩、前に出た。
シーラはそれにあわせる格好で後ろに下がる。
その間、剣同士は触れることもなく、紙一重の所を動く。

「……えっ？」
シーラは、思わず自分の目をこすった。
「あれ？」
驚いたのは、自分の動きだ。
今、バラライカの動きが見えた気がした。
バラライカが、いつ動くか、それが眼に見えた。
なんだろう……バラライカが動く時、騎体に靄がかかって見えた。
その靄が、次に動く形を作り出した。
身体が無意識にそれを避けたら、次の瞬間、靄ではなく、バラライカの動きを避けた。
「……」
偶然だ。
そんな都合良く。
シーラは自嘲気味に口元に笑みを浮かべた。
そうそう、都合良く動けるものか。
たかが一週間程度の修練で達人になれたら誰だって苦労はしない。
ほら、あんな靄みたいなのだって、目の錯覚だ。
剣が上段に構えられるけど、振り下ろされない。

バラライカの剣が動き、上段に構えられた。

ほら――ね？
納得したシーラの眼が、自分の言葉を理解して点になった。
……えっ？

「こりゃ、またか」

ラドラーはコーヒー片手にあくびをした。
「ああ……眠い」

「どこの女と夜更かししておった」
ホーサーはモニターをじっと見つめたまま言った。
「閨（ねや）で武勲を立てても褒められもせんぞ」

「ふん……爺、こんな負け戦ばかり見ていたら飽きるわ」

「ああ」

「わかっているなら、何故、あんな負けてばかりの娘を弟子になぞ！」

「――ワシの目は間違ってはおらんよ」

「どこがだ。これで通算何回目の敗北だ？」

「まだわからんか？」

「何を」
訝るラドラーの前で、シーラが信じられない動きに出たのは、その時だった。

「……」
シーラの眼は、手にした剣を見た。
「……いらない」

そう言うなり、その手は、静かに剣を鞘に戻し、さらに、
バンッ！
左腕の電磁ロックが解除され、鈍い音と共に、シールドが大地に落ちた。
ヤクトエッジは、身軽になった左右の腕を軽く振ると、小さく頷いた。
「……これでいい」

これに顔を真っ赤にして反応したのは、対峙するティアリュートだった。
戦意を失って降伏するつもりか？
一瞬、そう思ったが、シミュレーションで丸腰になった所で、模擬戦では、降伏そのものに意味はないのだ。
それがわからない相手ではない。
なら？
丸腰に――――何の意味がある？

バカにしている？
私を、丸腰で倒せる相手だと？

それとも、私の知らない、何か特別な秘策でも？
戦法がわからない以上、下手に動けば負ける。
相手にどうあっても、先に動いてもらいたい。
否、こちらが先に動けば、どう動いても負ける。
「……これは？」
ティアリュートは剣を上段に構えたまま、相手を睨み付けた。
動けない。

額を嫌な汗が流れていく。
どうしても動けない。
それにしても……。
瞬きをすれば斬り殺されるような錯覚さえ感じつつ、ティアリュートは思った。
相手は――いつからこんなに大きくなったんだ？

「……困ったな」
シーラは呟いた。
丸腰になれば斬り殺しに来てくれるかと思ったんだが、逆に敵が動いてくれない。
こちらから出てもいいが、わざとらしく思われても困る。
……それにしても。
シーラは首をかしげた。
何で、シールドまで放棄したんだろう、私？

「捨て身で何かするつもりなのか？」

「……お主ならどう動く」

「シーラとしてか？それともティアリュートとしてか？」

「どちらでもいいわい」

「そうさなぁ……」

うーん。
腕組みしてしばらく考えたラドラーは、顎をシゴキながら言った。
「俺がティアリュートならもう斬り込むしかない。下がることに意味はない」
「いつ斬り込むと思う？」
「しびれを切らしたら……すぐだな」
「上から斬り殺すか」
「ああ――ただ、そいつは乾坤一擲の賭けになる」
ラドラーははっきりと言った。
「その一太刀を外せば最後だ。丸腰の相手にも殺される。タイミングはしっかりと――」
ドンッ！
何かが爆発したような音を立て、ティアリュート騎が大地を蹴った。
「あの娘」
ちっ。
ラドラーが舌打ち一つ、呟いた。
「堪え性がないな……」
そして、次に来るだろう衝撃音に対して、身構えた。
シーラ騎に命中しようが、外して大地を切り裂こうが、上段から一気に行ったのだ。
凄まじい音が生じるだろうことだけは確か――そのはずだった。

「なっ？」

その場にいた者で、即座に状況が理解出来たのは、おそらくホーサーただ一人だ。

ラドラーでさえ、何が起きたかわからなかった。

仁王立ちするティアリュート騎。

その手には何も握られていない。

シーラ騎は？

素手。

二騎の間に、

ガンッ！

音を立てて落下した剣が、深々と地面に突き刺さった。

「……」

「……」

呆然とするのは、ラドラーだけではない。

ティアリュートも、何が自分に起きたのかわからない。という顔で、じっと手を見つめている。

そして――

「……あ」
まずい。
そんな顔をしたのはシーラだった。
「あちゃぁ……」
ポリポリ
頬を掻いたシーラはバツが悪そうに訊ねた。
「あのぉ……この勝負は」

「まだだっ！」
ティアリュートは地面に突き刺さった剣を引き抜いた。
「こんなの、システムのプログラムエラーか何かだ！で、でけなれば、こんなことが現実に起きてたまるか！」
ティアリュート騎の剣が横薙ぎにシーラ騎の腹を狙う。
ふわりと後退し、切っ先をかわすシーラ騎を、ティアリュート騎は執拗に追い詰めようとする。
その度に剣が空を斬り、ティアリュートの焦りは深まっていく。

……ああ。

シーラは思った。

この人って――――。

その先のこと。
それが本当に正しいかはわからない。

でも、この時点でのシーラとしては正しいと思った。
この人は――――ただ、上手いだけだ。
剣の動き。
騎体の裁き方。
無駄がない、まるで教本見たいな動きをする。
ほら。
ここから、ああやって、こうして――――こんな所、教本通りだ。
「さすがじゃ……どうやら」
ホーサーは満足そうに頷いた。
「ついにティアリュートめ、化けの皮を剥がされたな」
「ば、化けの皮？」
「そうよ」
「な、何を言ってるんだ？……じ、爺？て、ティアリュートの化けの皮って、何だ？」
「これだけ見て、まだわからぬか」
ジロッ。
その眼光の鋭さに、ラドラーは思わず後ずさった。
「な……？」

「ティアリュートにあるのは、単なる小手先の技だけじゃ。
細々した技を組み合わせて敵を追い詰めるだけ。
あの小娘にあるのは、そんな誤魔化しの手管のみ。
そんなものとは“技”とは言わぬ――――とても、言えぬわ」

「じ、じゃあ」
ラドラーはごくっ。と唾を飲み込んだ。
「あ、あのシーラという娘にあるのは？」

「……それがわからぬのか？」

「わ、わからぬ」

「……」
ホーサーはふうっ。と息を吐いた。
「……先の先じゃ」

「このぉぉぉっ！」
突き
斬り
袈裟斬
逆袈裟斬

もう剣技のオンパレード状態。
剣を振り回すだけ振り回している。
そう断言できるほど、ティアリュートの剣は派手に、そして、雑になっていく。

何も考えなくても、相手の動きは手に取るように分かる。
拍子抜けしたのはシーラの方だ。
相手に勝ってもらおうと思ったのに、何故かは知らないが、相手は怒りにまかせて自分を殺しに来ているようにしか思えない。
こんなはずじゃなかった。

一体、自分が何か間違ったことをしたのか？
どう考えてもわからない。
ここで勝ってもらって、自分に才能がないとホーサーの下を放逐してもらおうという下心がまずかったのだろうか？
うーん。
そんなハズもないと思うんだけどなぁ……。

「……とにかく」
しかたない。
シーラは、袈裟斬のその一撃をしっかりと見切った。
とにかく、剣の軌道を描く靄だけはしっかりと見える。
「――――そこっ！」

シーラ騎が初めて反撃に出た。
左手の甲でティアリュート騎の右手を殴ると同時に、その懐に飛び込み、そしてシーラ騎の右の掌底（しょうてい）がティアリュート騎の右頬を捉えた。

ティアリュート騎が吹っ飛び、剣が地面に落ちる。

たたらを打って転倒を回避したティアリュート騎は、右頬を抑えたまま動かない。
通信モニター上では、疑似感覚が伝えたのだろう、頬の痛みに呆

然としているティアリュートの顔が映っている。

「……た」

惚けたようなティアリュートの口から、ぽつりと言葉が零れた。

「……った」

不意に、わなわなと、その身体が震えだした。

「よ……よくも……この……私の顔を……」

きっ！

恐ろしいほど鋭い光が眼に宿ったティアリュートがシーラに襲いかかったのは、その次の瞬間だった。

「よくも、よくもこの私の、私の顔を殴ったなぁぁぁっっっ！？」

剣も何もない。

素手でシーラ騎に飛びかかる。

ジャンプの体勢から、シーラ騎の両肩を掴んで、そのまま膝蹴りが顔面を捉える。

シーラ騎がふっとび、地面をバウンドした。

それでもティアリュートの追撃は止まらない。

「ブスの分際で、私の面に傷つけて、無事で済むと思うなぁっ！？」

シーラ騎の腹部に深々とめり込んだ爪先。

腹から持ち上げられたシーラ騎の背にティアリュート騎の肘の一撃がめり込む。

事態は、それだけでは終わらなかった。

……以下、シーラとティアリュートの怒鳴り合いの記録となる。
ちなみに、双方の騎が素手で殴り合いながらの会話であることを特に記しておく。

「や、やったわねぇっ！？」
「このぉぉおっっ！」
「何よ！ちょっと顔がいいからって、いい気になってんじゃないわよ！」
「うっさい、このブスっ！オカメ！」
「誰が何ですってぇっ！？」
「ブスをブスと呼んで何が悪い！このドブスっ！」
「人のことが……くそぉぉっ！」
「男に言い寄られる面かどうか、海底のダボハゼにでも聞いてこい！この顔面ゾウリムシ！」
「こ、この金髪ワカメ！ちょっと髪にキューティクルかかってるからって、いい気になるな！」
「三日間洗髪しないで平気な奇跡のキューティクルだ！うらやましいなら、素直に羨ましいといえっ！このくせっ毛！猫毛！」
「きぃぃぃっっ！黙れ、このあばずれ、ミルクタンクのおっぱいお化け！」
「幼児体型、真っ平らのぺちゃぱいがぁ！」
「平らで悪いか！匍匐前進は早いんだぞ！ついでにBカップはあるんだ！Cじゃなくてショックだけど、立派にBは！」
「誇りたかったらDの上になれ！Bは胸のうちに入らん！」
「がぁぁぁっっ！歳とったら垂れるクセにぃぃっ！」
「黙れっ！肩こってしかたないんだ！」
「巨乳の分際で、胸について悩みをもっていいと思っているのかぁっ！」
「貧乳以上に悩みは多いっ！」

「だから私はBはあるといっている！」
「どうみても見えない！」
「なら、触らせてやる！シミュレーターを降りろ！」
「望むところだ！」

二人は、ほぼ同時にシミュレーターから降りた。

「拳でこいっ！」
「望むところよ！――痛っ！ほ、本気で来たわね！？」
「うっさいっ！こんなに大きくて！」
「きゃっ。や、やだっ……さわり方がイヤらし……うん♪」
「うりうりうぃぃっ！いろいろ経験した熟練の乳裁きをなめるな！」
「こ、このままなめられたら――あっ♪」
「本当に……何よこのサイズといい柔らかさといい、あんた、胸に何詰め込んでるのよ。すこし譲りなさい！きぃぃぃっ！」
「っていうか、あんた、何か発想がヘンな方行ってない！？こ、このままでは負ける（負けてもいいけど）……癖になっちゃいそう♪
……あ、や、だ、だめ。
このままではユースティアの夜這いを毎晩のように撃退していた意味が……」
「ほらほら、こんなに余裕があるんでしょ？私にちょっと譲りなさいよ。
感謝して、お墓にお線香立てるくらいのコトしてあげるから！」
「や、やっぱり、あ、あんた――まさか！」

「貧乳の何が悪いの？仰向け苦しくないし、マラソン速いし、水泳抵抗生まれないし、痴漢に遭いづらいし、年取っても垂れる心配ないし！」
「わ、私、そういうの、興味がない……」
「寄せてあげて谷間を作る、この苦労と悔しさが、あなたにわかるようにしてあげる！さぁ――」

ガンッ！
ゴンッ！

一時間後。

「嫁入り前の娘がいつまでも、女同士で乳繰りあってるんじゃない！」

でっかいタンコブを頭に作り上げたシーラとティアリュートが、散々ホーサーに説教を受け、泣きながらシミュレーションルームでモップがけをする光景が見て取れたという。

――さて。
シーラとティアリュートが地を出した所で、本題に戻るとする。

「おい、爺よ」
「何じゃい」
「なかなか、刺激的な光景がみてとれたなぁ。眼福だった」
「……お主は」

「まさか、あれが狙いだったのか？」
「阿呆……まぁ、仕方ないだろう」
「ん？」
「ティアリュートの小娘じゃ」
「ああ。どうする？小手先だけ――――それでは」
「この先、シーラはワシが磨くとはいえ」
「おい、爺！」
「なんじゃ」
「それは、女としてか！」
「……そこから離れんか。もうワシは男としては使いモノにならん」
「ちっ。せめてティアリュートを女として磨くなら、俺に任せろと言いたかったんだが」
「そこは本人の自由意志じゃ。ワシが関知することか」
「なら、早速今晩から」
「――――待てい」
「何だ？」
「話がややこしくなる。ワシがいっとるのは、メース使いとしての技のことじゃ」
「ああ……わかっておったが、爺も乗るから悪い」
「……シーラは、ワシが見込んだ通りに成長しておる。シーラを開眼させたティアリュートにも褒美はとらせておかねばな」
「それが、手ほどきだとでも？」
「むぅ……そうなるか」
ホーサーは声を上げて笑った。
「明日から忙しくなるぞ？」

アップルソース・ダイアリー　第十三話（後書き）

何か……最後にヘンな方向に行った挙げ句、グダグダに……これが私流ですか？そうですか……。

アップルソース・ダイアリー　第十四話

この頃、人類に代わってこの地域の支配者となったのは、妖魔アイバシュラだ。

これは、蟻や蜂に近い組織的な社会を構成して生殖する妖魔で、主に働き蟻としてのA型と、兵隊蟻としてのB型に別れている。

アイバシュラA型
平均体長：5～10メートル
武装：6ミリ～10センチ相当ML（マジックレーザー）発射能力×1
融解液発射能力×1
概説：アイバシュラの世界における働き蟻。
外見はサソリとムカデの合いの子。外皮の色は黒。
地面を這い回ることを主な移動手段としているため、羽がない。
口頭の奥にML（マジックレーザー）発射機能がある。
手の代わりに長く伸びる触手は平均10本で感覚器を兼ねる。
これ使って巣の管理や幼虫の保育を行う。
外敵に対しては敏感だが、捕食の性格は強くない。
興奮すると口から強酸を発射する。
命中した場合、魔法防御していない一切の金属は融解を避けられない。
強酸を浴びると、人間なら数秒で溶け、アイバシュラにとって有益な養分に変化する。

アイバシュラB型

平均体長：１０～４５メートル
武装：２０～５０ミリ相当ＭＬ（マジックレーザー）発射能力×２
３００ミリ相当ＭＬ（マジックレーザー）発射能力×１
強靱な顎と脚部先端の爪でメサイアの装甲を粉砕可能。
概説：
【説明】
アイバシュラの世界における兵隊蟻。
以降においてアイバシュラは基本的にこのＢ型を指すものとする。
Ａ型よりかなり大型で、メサイアをサイズで上回る個体も多数存在。
【外見】
外見はサソリと蜂の合いの子でかなり強靱な肉体を持つ。
色は赤や小豆色が基本。
【特殊能力　飛行】
平均６対の羽で空を飛ぶ。
超音速も発揮可能で、しかも空中ではＶＴＯＬ戦闘機顔負けの機動能力を持つ。
【特殊能力　捕食】
捕食の性格が強く、人間だろうが動物だろうがお構いなしに襲う。
【特殊能力　攻撃】
頭部に2対のＭＬ（マジックレーザー）発射能力があり、機関砲として機能する。
尻部の蜂で言えば針の部分から大型ＭＬを発射するが連射が出来ない（毎分最大１０発程度）
顎及び爪は戦車の装甲を貫通可能。

【特殊能力　体液】
体液は猛毒の上に空気に触れると強酸性の融解液。数ミリグラムを浴びただけで致死率１００％。
体液を浴びた場合、人間は原形を維持できない。

【特殊能力　外皮】
黒部で１２．７ミリ機関砲弾、赤い外皮部分は２０ミリ機銃以上の攻撃に耐えられる。
倒したければ４０ミリ以上の兵器が必要。

はっきり、これまで相手にしてきた、同サイズのほとんどの妖魔より、個体の段階で比較にならない。
幸いなことは、縄張りに侵入しなければ基本的に襲ってくることがない。
その程度だ。
だが、知らずに彼等の縄張りに侵入しようモノなら、よくて数体、最悪で数百体の歓迎を受けることになり、生きては帰れない。

すでにロシア極東軍は、このアイバシュラ相手に壊滅的な打撃を被っており、その国境防衛線は完全に崩壊し、中華帝国とロシア帝国の国境線は極東においては文字通りの地図の上での存在となった。
精鋭たるロシア極東軍が国境線防衛の義務を放棄するという、軍設立以来なかった異例の事態は、中華帝国を増長させているのは事実だ。
しかし、彼等には中華帝国軍を相手にしている戦力はもう残されていなかった。
残存する戦力を立て直し、シベリアをはじめとした大半の戦線から軍を引き上げ、ウラジオストクなどの主要市街地に立て篭もるの

が精一杯。

それは、アイバシュラ達とまともに闘ったら勝ち目がないことが骨身に染みていることと、何より、こちらから刺激しなければアイバシュラ達から襲われることがないことを、膨大な犠牲の対価として知り得たからだ。

中華帝国は、ここにつけ込んだ。

どこから情報を仕入れたのか、彼等はアイバシュラ達の縄張りと縄張りの空白地点を巧みに利用しつつ、ロシア軍が放棄した集落や都市に軍を進め、好き放題の略奪を開始した。

市街地に立て篭もっていた逃げ遅れた市民達は、彼等を当初こそ援軍と思い、諸手を挙げて歓迎した。

その市民達を次に待っていたのは、援軍であるはずの中華帝国軍による虐殺。

中華帝国軍は、死体に貴金属を隠されていないか裸にして、それから尻の穴まで調べた挙げ句、金歯から下着、酷いケースではカツラにするためと、女性の髪まで奪ったという。

その挙げ句、死体をトラックに乗せて、市街地からかなり離れた地点に投棄した。

アイバシュラのエサにして、市街地に彼等を呼び寄せないためだ。

シーラとティアリュートがシミュレーションでの戦闘を繰り広げる間、ナイチンゲールを与えられた宗像と裕樹達が派遣されたのは、そんなことが繰り広げられる大陸。

日本ではなかった。

拠点として指定されたのは、中国との国境線から少しロシア側へ入った所にある金鉱脈採掘施設であり、同時にアイバシュラの縄張りギリギリという危険地帯でもある。

しかし、資金源に不自由するダユー達にとって、こうした人間から解放された地下資源採掘施設は、喉から手が出る程貴重な存在。
そこから産出される金の確保は、これからのダユー達の命運さえ左右しかねない。
火事場泥棒と言われれば、確かにその通りであり、たちの悪さという意味では、どちらが上か、正直わからない。

市民を殺すか否かが判断基準というなら間違っている。

実際、アイバシュラ達が近づかないように専門の結界を採掘施設周辺に展開した後、ダユーから命じられた部隊がやったことは、金鉱に立て篭もっていた鉱夫やその家族達の虐殺だ。
天壇から派遣された陸戦部隊からの報告では、鉱山制圧時点での死体数（ボディカウント）で約８６２。
この中には母親にしっかりと抱かれてカウントに漏れそうになった赤子も含まれている。
宗像は、裕樹達にこのことをはっきりと伝えている。
後にオーク兵達のエサとなる人間の死体がトロッコ列車に乗せられて鉱山から運び出される光景は、鉱山防衛を命じられた裕樹達にとって、ナイチンゲールの眼が捉えた映像として、イヤでもそれを見るしかない光景だった。

「何度見ても……」
砂塵が立ち上り、視界が悪い鉱山施設の近くに並ぶナイチンゲール達。
その一騎、黄色――――薄いレモン色に近い、を与えられた大地が歯を食いしばって、頭を強く振った。
「……好きにはなれねぇ」

「あ……当たり前だよ」

口元を抑えた月菜がガチガチ鳴る歯をなんとかしようと震えながら言った。
血と肉のプールと化したトロッコ列車は、一度見たら二度と忘れられないだろう。
「こ、こんなの……好きになったら……これが普通になったら……おかしいよ……こんなの……ダメだよ……」

「……宗像さん」
瞑目して死者への祈りを捧げただけの裕樹は、宗像に訊ねた。
「敵の反応は？」

「――このまま、大人しくしている方が望みかと思ったが」

「少なくても……」

ギャアッ
ギャアッ

血の臭いを嗅ぎつけたのか、カラス達がナイチンゲールの近くをゆっくりと旋回する。

「僕はこの地獄は好きになれない」

「地獄がお望みとはな……」
知らなかった。
通信装置に、宗像の喉で笑う声が低く伝わる。

「どうせなら」
裕樹はあっさりとした口調で、。
「宗像さんと天国へ」

そんな事を言った。

「あいにくと」

宗像はピシャリとこれに答えた。

「私のモットーは、楽しみは個人的に――――だ」

「一人で慰めるのは辛くて寂しくないの？その歳で」

「このエロガキっ！」

トーンが落ちた宗像の声が冷たく裕樹に襲いかかる。

「コクピットから出ろっ！」

「相手してくれる？」

「何のだ！」

「（自主規制）」

「――――おい」

そのあっけらかんとした答えに宗像が暴発する前に、低い男の声が通信に響いた。

「宗像よ。お前がレズからショタに鞍替えしたことはよくわかった」

「ちがっ！」

「だが、年下口説くならベッドでやれ。今は昼間だ。それから裕樹、年上の生真面目で不器用な女に甘えるなら、だな？」

「文句なら裕樹に言って下さい、中佐！私はセクハラされてるんです！」

「年上だろうが。上手くあしらえ」

「そんな無茶な……」

「お前、泉と一緒にいて不運が移ったんじゃないか？」

「……否定しません。っていうか、出来ません」

「ったく……さぁ、良い子のみんな。優しくて頼りになる兄貴から通信だ」

どこがだよ。

あの石川県付近での敗北を知る大地は、内心で舌打ちした。

俺達が命がけで助けなかったら、今頃死んでいたクセに。

あれ以来、感謝の一言もなかったじゃねぇか。

あんだけボロクソに負けてといて、頼りになる？

あんだけ俺をぶん殴っておいて、優しい？

ふざけんな。

次は絶対、助けないぞ！

「俺達の頼りになるお仲間、上空警戒隊の情報によると、今、俺達の前方４５キロの所に中華帝国軍の部隊が接近中。内訳は、陸戦艇１と帝刃と思しきメサイア１個中隊規模」

来たっ！

大地の身体がビクリと動いた。

ナイチンゲールが手にした狙撃砲が発射しなかったのが奇跡だと

思った。

初陣だ！

震える大地の耳に、兄貴――瀬音中佐の命令が続く。

「通信の内容等からして、狙いはこの鉱山だ。警戒隊がジャミングをかけて通信を潰す。その隙に前衛がメサイアと交戦。部隊を叩く。狙撃隊――大地と月菜は陸戦艇を狙撃砲で叩け」

「り、了解」

「わ、わわ、わかりました！」

月菜が舌を噛みつつ答えた。

うわずった返事をしたのが自分だけでなかったのが、大地にとっては救いだった。

「宗像、裕樹を頼む。初陣だ。ティアリュートに代わってお前が母親代わりだ。裕樹、宗像のケツにつけ」

「はい」

「おいっ！」

宗像が妙に焦って怒鳴った。

「意味、わかってるな！？」

「……へ？」

「つくって意味！」

「……後ろについて動け」

「よ……よし」
ほうっ。
宗像の口から安堵のため息が出る。
「お姉さん？何だと思ったの？」
「ボケと天然を区別するのはやめろ！卑怯だぞ！」
「そんなことしてないよ？」
「うそつけ、ちって舌打ち、聞こえたぞ！？」
「空耳」
「おいおい、夫婦漫才はその程度でだな」
「中佐っ！」
「……敵、速度を上げた。陸戦……マズイ」
今度は瀬音が舌打ちする番だった。
「くそっ。上空偵察隊め……ジープを見逃していやがる。１キロ先に中華帝国軍の斥候部隊……くそっ。こっちでも確認しておけばよかった」
「今までですと、ＭＣ（メサイア・コントローラー）に頼り切りでしたからね」
宗像も戦域モニターで初めてその反応に気付いた。
ごく小さな反応。
妖魔が活動しているために散布されている狩野粒子のせいでいままで気付かなかったのは、確かに大きな失点だ。

「自分がいかに怠けていたか、思い知らされる……だろ？」

「同感です」

「大地、月菜、狙撃ポイントを探して、そこから殺れ！」

「ど、どこですか！？」

「馬鹿野郎っ！んなモノぁ、自分で探せっ！」

「は、はいっ！」

大地は自分のあまりの間抜けな質問に思わず赤面してしまった。

自分は子供じゃない。

そう思いながら、出てきた質問はまるっきり子供のそれだった。

「る、月菜っ！」

「前方、出ます」

むしろ、月菜の方が落ち落ち着いていた。

「斥候のジープ。潰しますか？」

「やってくれ。たかがジープでも容赦はするな」

「はいっ！」

そのしっかりとした受け答えを聞くだけで、大地は男としてのプライドを傷つけられる。

子供じみた質問しか出来なかった自分に対して、月菜のしっかりとした判断はどうだ？

情けないっ！

「大地、月菜っ！」
裕樹からの通信が入った。
「後で！」

「お、おうっ！」
大地は震える声で怒鳴った。
「後でな！」

「無茶しないで！」
月菜も声を上げる。
「焦っちゃダメよ！？」

「ありがとうっ！」
桜色に塗装された裕樹騎が軽く薙刀をかざした。
その外装は、なよなよした感じの裕樹の印象には妙にマッチしているが、掲げられた薙刀は、妙に心強い。
片刃が薙刀で、ヘビが巻き付いた意匠が施された大きな槍を挟んだ反対側には、必要に応じてビームの草刈鎌（サイズ）が出るという凝った兵器だ。
本当は瀬音の兄貴が使うはずだったが、兄貴より裕樹の方が上手く使うからって、ダユー様によって裕樹に与えられたあの時は、内心でスカッとしたなぁ。

そんなことを思いつつ、月菜が着地した横に騎体をつけた。
そこが正しいかなんて、大地にはわからない。
ただ、月菜が横にいる。
それだけがポジションとしてその場を選んだ理由だ。

チラリと横を見た途端、月菜騎の一部が光った。

ズンッ！

砂塵の向こうで鈍い爆発音がしたのは、それからすぐだ。

「月菜？」

何が起きたか、信じられなかった。

「斥候、潰しました。生体反応無し」

「……」

月菜の宣言が、大地には信じられなかった。

人を殺した。

それを、月菜は平然と宣言したのだ。

ジープに何人、乗っていた？

何歳だった？

性別は？

階級は？

家族は？

そんなことを一切構わずに、自分より年下の女の子が人を殺した。

さっきまで、死体の列車を見て震えていた素振りさえみせない。

声は平然としていた。

それが、信じられなかった。

ちょっと前まで、死体どころか血を見ただけで貧血を起こしていた、あの月菜が？

「大地」

「……」

「大地っ！」

「は、はいっ！」

瀬音の鋭い怒鳴り越えで、大地は我に返った。

「な、何ですか！？」

「そこから陸戦艇が狙えるか？」

「へっ？」

一瞬、自分が何のためにここにいるか、全く失念していたことに気付いた大地は、慌て手順通りに敵を探した。

陸戦艇――――陸戦艇っ！

――――み、見えたっ！

砂塵に隠れるようにして進んでくる大型の艦っ！

「み、見えますっ！」

よかった。これで見えないなんて言ったら、後で何発殴られるかわかったもんじゃない！

「よし――――メサイアは俺達がやる。火線に注意、間違っても誤射するな？」

「は、はいっ！」

「やったら、次こそメースから降ろすぞ！？」

「はいっ！」

くそっ！

大地はターゲットスコープにモードを切り替え、悔しさに歯を食

いしばった。
月菜でさえ状況になれている。
裕樹はプロ並みの扱い。
なのに――、一番の年上で、男の俺は！
心臓がバクバク言って、血圧が上がっているのがわかる。
こんな時に、月菜に声をかけられたくない。
俺は一人でやれることを証明したい！

俺が、三人の中で、頼れる兄貴であり続けるために！

「月菜」
瀬音は言った。
「成績はお前が上だ。狙撃の指揮権はお前が取れ。大地――ターゲットを月菜騎に同調」

なんでだよ！
思わず出かかった声を喉で止めた。
瀬音の命令は絶対だ。
反攻して、殴られてもつまらないというか、殴られても、意見は通らない。

「……了解」
モードを同調へ切り替える。
月菜騎が狙撃して、それに従う形で、半ばオートで発砲が行われる。
「……くそっ」
月菜から何も言ってこないのが、幸いだ。

中華帝国陸軍陸上戦闘艇“玄武”級を後ろに従えて、意気揚々と前進するのは、赤兎部隊だ。

本来なら、アサルト・アーマーという新分類に属する飛鼠（ひそ）が行うべき掃討任務に駆り出されたのが彼等の不運というべきだろうが、それでも彼等は東南アジアから引き揚げて来た、中華帝国軍内部では一端の実戦経験部隊を自負している。

とはいえ、グレイファントム1騎を撃破した経験のある騎士が部隊長をやっていることで、部隊の経験の程度は知れる。

その彼等の前に、所属不明のメサイアが3騎、突然に襲いかかってきた。

それが、メースだと、彼等が気付く余裕があるかは、別問題だった。

アップルソース・ダイアリー　第十四話（後書き）

久々にネタ大募集です！

●●ネタ大募集！●●

・今回募集するネタは、何と人類、魔族双方のメサイア以外の兵器です！

・簡単な設定上の縛りさえ守ってくだされればＯＫです。

縛りは以下の通りです。

設定の縛り

その１：電子装備搭載不可！

ミサイルやレーザーは積めません。ロケットＯＫ

ＮＧ例：レーザー誘導砲弾搭載型の戦車。

その２：ジェットエンジン類不可！

狩野粒子影響下でジェットエンジンは爆発します。

その３：対歩兵用に有効な口径は８．５ミリ以上！

オーク兵の甲冑は８．５ミリ以上のライフル弾でないと“貫通”出来ません。

ＮＧ例：ＡＫ－７４の発展型。５．４ミリ弾でオーク兵をなぎ倒す。

その４：衛星誘導不可！

総じて、ＷＷ２あたりまでの技術レベルを考えてください。

電子装備が使えない世界で使いモノになる爆撃機から戦闘機、戦車、装甲車から歩兵用の小銃まで。場合によってはガンダムの“ビックトレー”のような大物まで、ジャンルは広いです。

・対象国家はドイツ軍、イギリス軍、フランス軍、その他どこでも結構です。

・架空の国ではラムリアース帝国なんかもありますから、必要なら国家から作ってくださってもＯＫです。

・また、その兵器を使う部隊、兵士などの設定も大歓迎です！

・登場人物の設定は常時募集中ですっ！

・どうせなら自衛隊現役の方、名前載せてみませんか？（笑）

・ロシア軍と中国軍は目下急募状態ですので、両軍マニアの方、特によろしくお願いします！

アップルソース・ダイアリー　第十五話（前書き）

お酒は怖いものです。未成年の方はよく覚えておいて下さいね？

今回、ちょっと前々回とは別な意味で「すぎ」たかもしれません。
まぁ、私の作品にHは憑きものですから……イヤな方はスルーして下さいね？

アップルソース・ダイアリー　第十五話

「所属不明のメサイア？」

赤兎で編成された中隊を率いるのは、黄大尉。

三十代半ばでメースの教官を務めたこともある、軍内部ではベテランだ。

その彼に、母艦から、目標とする鉱山付近で先行した斥候部隊がメサイアらしき存在を確認したという情報が届いた。

「ロシア軍の放棄したメサイアを誤認したんじゃないのか？」

黄大尉がそう考えるのも無理はない。

中華帝国軍が把握している限り、半径数百キロの圏内にロシア軍は存在しない。

“大赤蜂”と呼ばれる新型妖魔の群に駆逐されてすでに数週間が経過しているし、何より、目標とする鉱山から、人が生きている一番近い市街まで、地図を単純に見ても３００キロは離れている。

そんな場所にメサイアを展開させる物好きはいない。

自分が軍司令官なら、ここで数騎のメサイアを踏ん張さらせるより、後退させて市街の防衛に充てるだろう。

ロシア軍の偉いさん達も、俺達のと同様に賄賂と酒には弱いとは聞いているが、それでもメサイアの運用に関してはさすがにメサイアの母国、格段にノウハウを持っている。

何より、ウチの偉いさんと違って現実的な分、ワケのわからないメンツとやらで部隊を犠牲にするほど愚かではない。

だからこそ、黄大尉は密かにロシアに憧憬を持っているのだ。

そのロシア軍が黄大尉でさえ愚策と思える鉱山の防衛にメサイアを配置するとはとても思えない。

「斥候隊は」

「前方に熱源反応」
MC（メサイア・コントローラー）が短く答えた。
「反応低下……爆発によるものと思われます」

「場所は？」

「斥候部隊展開付近――――斥候部隊の反応、消えました」

「“大赤蜂”か？」

「否（ネガティブ）、不明メサイア、前進開始。騎数５」

「騎種分かるか？――――部隊全騎、戦闘態勢！武器使用自由っ！」
ＳＴＲシステムを握り、黄大尉は部下に怒鳴った。
敵がロシア軍か否かはもう関係ない。
相手が殺（や）る気なら、それなりに答えるだけだ。
サイドスカートの固定ロックが解除され、赤兎の右腕が戦斧を握りしめる。

次の瞬間、

「敵、妨害開始！」

その声がきっかけのように、メインスクリーンに激しいノイズが走った。

「何っ？」

モニターの半分が白黒の点滅を繰り返し、外が見えない。
「な、何だ、こりゃっ！？」
こんな状況で戦闘速度でのホバー移動なんて自殺行為だ。

「不明っ！ただ、恐ろしく強力なジャミングを受けています！センサー、通信、共に使用不能！カメラもジャミングの影響で――」

「全騎、速度落とせっ！」
狼狽しきったMC（メサイア・コントローラー）の声を受け、黄大尉はとっさにホバー速度を落とした。

ガンッ！

鼓膜が破れそうな音がして、身体が激しく後ろから突き飛ばされた。
意識が、一瞬だけ途絶えたのを、黄大尉ははっきりと感じた。
三半規管がおかしくなったんじゃない。
身体がコクピットごと激しく回転したのは確かだ。

「――ま、間抜けがっ！」

激痛を堪えながら、黄大尉はエラーと警告で真っ赤になった騎体情報を確かめた。
後続の騎体が、大尉騎のホバー速度低下に対処しきれず、激突したのだ。
「ロシア軍が見たら、笑いものだぞ！」
目の前で装甲がへしゃげた赤兎が立ち上がろうとしていた。
肩のナンバーからわかる。
毛少尉騎だ。

あの野郎、生きて帰ったら顔の形が変わるまで殴ってやる！
黄大尉は通信装置越しに、とりあえず毛少尉を怒鳴りつけようとした。
編隊を構成していた別騎も、事態に気付いたらしい。大尉達の騎体を取り巻くように停止していた。
まったく、メンツもへったくれもあったものじゃない。
編隊長が真っ先にコケてどうするんだ！
痛む身体に鞭打って、彼は騎体を引き起こした。
スクリーンのノイズは相変わらず酷い。

「通信戻ったか？それと、敵の位置は」

「通信戻りません」
MC（メサイア・コントローラー）は答えた。
「敵の位置も不明」

「くそっ」
舌打ちした黄大尉が、付近に転がっていた戦斧を掴んで、前進を身振りで示そうとした、まさにその瞬間――――

それは一発勝負だった。

ナイチンゲールを駆る宗像が狙いをつけたのは赤兎三騎。
荷が重いとは思えない。
“白雷（はくらい）”で十分対処出来た相手だ。
同じ状況は、何度となく味わっている。
これで戦果が上げられなかったら、洒落にもならない。

剣を構え、敵に斬り込むだけ。
一騎を倒し、返す手で二騎を相手にする。
こんな時は、乱戦に持ち込む方が楽だ。

裕樹は後ろをぴったり追随してくる。
あいつには、戦場の感覚を覚えてもらうだけでいい。
私があいつのお守りをしなくちゃいけない。
こんな状況で、もし、あいつに助けを求めるような状況が起きたら、私は自殺でもすることにしよう。

幸い、敵部隊が、とっさの通信妨害に泡を食ったのは確かだ。
一騎が速度を落とそうとして後続に追突を喰らい、部隊は緊急停止した状況に自分達は襲いかかろうとしている。
まるで間抜けなところはどっかの誰かさんだな――泉。
くすっ。
口から出た名前に、宗像は吹きだした。
こんな時に――間抜けは
「――私かっ！」
剣の切っ先が、赤兎の胴体にめり込む。
熱したナイフでバターの塊を切断しているような感触が手に伝わってくる。
剣を振り切った所で、赤兎は遂に胴体を真っ二つにされて上半身が宙を舞った。
鈍い戦闘音が鼓膜を殴る。
瀬音もかかったらしい。
ここで後れを取るわけにはいかない。
「次ッ！」
騎体を急スピンさせ、剣を2騎目に振るう。
「なっ！？」
宗像が驚いたのも無理はない。

宗像が狙いをつけていた二騎目。
その胸に深々と突き立てられているのは、桜色のナイチンゲールが掴む槍。
突きの一撃の凄まじさに両足が浮いた赤兎。
槍は胴体真っ正面から喉に向けて深々と突き刺さっている。
コクピットを貫通しているのは間違いない。
ズ……ズッ
ナイチンゲールが槍を引き抜き、血振りをする。
胸を貫かれた赤兎が大の字になって地面に倒れるのを、宗像は唖然として眺めるしかなかった。
いかんっ！
我に返った宗像がすぐに探したのは、もう一騎。
狙いをつけたのは三騎。
既に一騎ずつ自分と裕樹で始末した。
あと一騎は？
「……」
思わず、裕樹に訊ねそうになって、宗像は言葉を失った。
裕樹の駆るナイチンゲールの横に立つ赤兎の下半身。
その意味に気付いたからだ。

不満かと言われれば、確かに不満。
満足かと聞かれれば、確かに満足。

ティアリュートが今の自分の心境を語れと言われれば、そう答えただろう。

弟子にはしない。
そうはっきりと言い切ったはずのホーサーが気持ちを変えてくれたおかげで果たせた弟子入り。
魔界でその名を知られたホーサーの弟子となったことは、メース使いとして大変な名誉であり、傭兵となった彼女にとって、主家に顔向け出来ることでもある。
それに、姉弟子となったシーラという得体の知れない女（ブス）も、近頃ではめっきり実力をつけてくれて、下手すれば追い詰められることもザラではない。

追い詰められる。

それはあくまでティアリュートの“謙った”言い分だ。
実際はかなりの敗北を喫している。
十のうち六は黒星が現実。
しかも、黒星は日に日に増えている。
それをティアリュートは、相手が姉弟子だから“勝ちを譲った”と強がってしまう。
負けを認められないのだ。
無様だと本人も思うが、かつて精鋭部隊である“死の宣告”大隊で一番槍をとっていたという自負が、いかなる意味でも“敗北”という屈辱に甘んじること許さないことに、本人が気づけない。

姉弟子の反応もまた、火を油を注いでいる。

勝てば勝ったで喜べばよし。負けたら負けたで悔しがればいいのだ。
ところが、肝心の姉弟子は、勝っても負けても他人事のようだ。
勝ち負けよりホーサーへの食事の方を心配されてはティアリュートの立場がない。

肝心のホーサーでさえ別段指導するわけでもなく、ただ黙っているだけ。
勝ち負けに拘っている限り、充実感というものが全くない。
むしろ拘っている自分がバカのようにさえ思えてくる。

念願の立場のはずなのに、やり場のない苛立ちばかりが募ってくる。

毎晩の酒量が増えたと、ユースティアが心配するのも無理はなかった。

その夕飯の席。

「どうした？」

「いえ」

急な連絡が入ったため、席を外したホーサーは、二人に先に食べていろと命じて、席を少し離れていた。
すると、台所の前の廊下で、シーラと思わずぶつかりそうになった。

「ご飯のおかわりを」

「ほう？」

見ると、エプロン姿のシーラはご飯を入れるお櫃を持っていた。

「お櫃に飯を入れておかなかったのか？」

「三人分と思って入れておきましたが、もう空っぽです」

「二人でそんなに食べたのか」

「私は食べてませんよ」

シーラはあきれ顔で言った。

「ティアリュート様の胃袋は底なしです」

夕食を食べていけ。

ホーサーにそう命じられたティアリュートは、ホーサーが茶の間に入ると、正座して夕食の席に座っていた。

メニューはご飯と味噌汁、焼き魚に漬け物という、ホーサーの命じた内容となっている。

人類によく似た食事だが、実際、魔族の食事は人類のそれによく似ている。

「はい」

正座してお櫃から飯をよそったシーラから茶碗を受け取ったティアリュートは、さわらの西京漬けをおかずに美味そうに飯にかぶりつく。

ご満悦。という顔にはなるが、二人の視線に気付いたティアリュートは、さすがに食べ過ぎたと思って、小声で言った。

「……く、訓練は、お腹がすくものです」

「それでよい」

味噌汁をすすったホーサーが笑顔で頷いた。

「飯が美味いのは、健康な証拠じゃ……シーラ」

「はい？」

「味噌汁が薄いぞ」

「今朝のを温め直したんですよ？朝はこれでいいと言ったじゃないですか！」

「だめじゃ！もっと濃くしてくれ！ついでにダシも足しなさい！」

「もうっ、注文がうるさいんだからっ！」

ホーサーから汁椀を受け取ったシーラが台所に消えた。

「全く……いい加減、年寄りの好みが分からぬか……ん？」

愚痴るホーサーは、飯を食べながらじっとこちらを見るティアリュートの視線に気付いた。

「どうした？」

「い、いえ」

ティアリュートは驚いた。という顔で言った。

「シーラ殿は、あんなに師匠に言い返すのかと思って、びっくりして」

「ああ」

ホーサーは笑った。

「ただ従うだけでは面白みがないじゃろう？むしろ無言になられると、ワシの方が心配になる」

「そういうものですか？」

「少なくともワシはそうじゃ。あれは弟子というより孫のようなものじゃからな」

そう語るホーサーの眼が細く、心なしか嬉しそうに見える。

「孫？」

「ああ」

「あの……」

「ワシの孫――――それでは不満か？」

聞くな。

ホーサーはそう言っているのだ。

ティアリュートは無言で首を横に振った。

「これでいいですか？」

台所から戻ったシーラは、憮然としてはいるが、眼が緊張していた。

「……ちと熱い」

「どうあってもケチつけなければ気が済まないんですか！？」

「本当のことじゃろうが――――あと心持ち、少しじゃな」

「もうっ！食べ物にケチつけるとバチが当たりますからねっ！」

「ホッホッ……。そういえば、ユースティア殿も後で来る手はずじゃったな」

「はい。城でメサイアの調整があって遅れているそうですが」

「よい。後で伝えておいてくれ」

「何ですか？」

「詳しいことは食後に話すが」

ホーサーは味噌汁の椀を卓袱台に置いた。

「明日、ワシの代わりに仕事に出て欲しい」

「誰がですか？」

「お主達じゃ」

弟子入りして上手くなったのは、味噌汁の作り方だけだ。

風呂上がり、ティアリュートが訊ねたら、シーラは憮然としてそう言い切った。

弟子入りしたからといって、特に心構えとか、メース使いの師匠として何か特別な教示を受けた覚えはないという。

それで、どうしてシーラが短期間であれほど強くなったのかがティアリュートには理解出来ない。

「強くなる方法位、自分で探せ――そういうことじゃないんですか？」

寝床の準備をしつつ、シーラは言った。

すでに互いにパジャマ姿だ。

「教示が必要な所まで自力でたどり着け。そう言われているような

気がします」

「教示が必要な所？」

「そう。多分、ティアリュート様がおっしゃりたいのは、剣の握り方からどうして教えてくれないのか。ってことじゃないですか？じゃなくて、お師匠様は、もっと高い技術を要求される段階……とでもいいましょうか、そこまで来たら、必要なことを教えてあげようっていうスタンスなんだと思うんです」

「それは……どのレベル？」

「さぁ？」

シーラは肩をすくめた。

「少なくとも、明日の“仕事”程度では達し得ない所でしょうねぇ」

敷き布団の上にシーツを敷き、その上に正座したシーラが訊ねた。

「あの……私、よく知らないんですけど」

「敬語やめてください。私の姉弟子なんです。もっとフランクで結構ですよ」

「……ありがとう。ティアリュート……さん」

「ティアリュートで結構」

部屋の脇に置かれた小さなテーブルの近くでバッグの口を開きながら、ティアリュートは答えた。

「明日からは一蓮托生です」

「あり……がとう」

「それで、質問の内容は？」

「あの……魔族軍って、そんなにお金に困っているの？」

「……天壇は」

ティアリュートは、バッグの中から数本の瓶を取り出すと、テーブルに置いた。

「正規軍ではありませんからね」

「えっ？」

「魔界から資金援助を受けられるのは、ヴォルトモード卿の軍勢、つまり、魔界の支援団体から正規軍と認定された部隊のみ。その中に天壇は含まれていません」

「天壇っていうのは、あの浮遊した城のことね？」

「……そう、です。ですから、独立採算でその主であるダユー様も動かなくてはならない」

「日本の占領地にもお金はありそうなんだけど？」

「それに手が出せれば、天壇はすでにこの弓状列島の上空に移動しています」

「それをしないってことは……」

「そう。天壇には、ヴォルトモード卿の軍の占領地での活動権限を与えられていないのです」

「でも、あなたは確か、天壇の」

「そう。ダユー様直属の傭兵隊の一人」

「それがどうして、ここにいるの？」

「私の希望……同時に、ダユー様が改良したヤクトエッジのテストの担当も兼ねています」

「テスト？」

「そう。“不死身”と呼ばれたお師匠様と、そのパートナーというべきラドラー様それぞれにテスト騎体を提供して運用結果をデータとして回収し、次の騎体の開発にフィードバックさせる。
私は私で、お師匠様との模擬戦でデータを回収する。
それをタテマエに、私は弟子入りを認めてもらったのです」

「……ふぅん？」

「わからない。という顔ですね」

「あのね？私、詳しくないから、こんなことといったら笑われるかもしれないけど」

「どうぞ？」

「メースって、人間の駆るメサイアと比べても圧倒的に性能があるんじゃないの？」

「それは当然です。ですが、この人間界での運用データを元に、さ

らに発展させようと動いているのは、ダユー様だけではありません。軍事メーカー、正規軍、そんな大規模な組織から、一攫千金を夢見る個人の開発者まで。苛烈な開発競争の中、天壇が部隊として、或いは組織として発言権を維持、拡大させるためには、力が必要です。メースの開発とそのデータも、その力と見ればわかりませんか？」

「……成る程、ね」

「ですから、お師匠様達が戦線で動かない限り、データが回収出来ない。となれば、私達が動くのは至極当然のこと」

「肝心のお師匠様が動かないのは納得出来ないけど」

「その間、魔界に行かれるなら、文句は言えませんけどね」

「政治的な理由って、何だろう」

「……第三軍のズルド卿の件かしら。お師匠様はズルド卿とは盟友の関係だと聞くし」

「何かあるの？」

「貴族同士でいろいろと……まぁ、私達には関係のないことですけどね。とにかく、明後日からは私達は大陸へ行く」

「何？そのアイバシュラ狩りって」

「聞けば逃げたくなりますよ。保証します」

「……それで、お師匠様、あなたに泊まっていけと言ったのかしら」

「かもしれませんね」
ティアリュートはそう言って、小さく笑った。
障子の向こう側で、バイクの音がした。
「ユースティアも来たようね」
トンッ。
ティアリュートがバッグの中から取りだしたのは、小さなグラスだった。
「おつまみ、用意してくれたかしら」

「お酒？」
メイド服から愛らしいネグリジェに着替えたユースティアを交えて、三人がテーブルの周りに座った。
「飲めるんでしょう？」

「……飲んだことない」

「強くないから。ちょっと飲んでみなさいよ」

「あ、あの……」
珍しそうにグラスを見つめるシーラを尻目に、ユースティアは心配そうに言った。
「ティアリュート様……あの」

「大丈夫よ。ちょっとした寝酒だから」

「そんなに眠れないなら、このユースティアが全身全霊をもってお姉様をＧｏ　ｔｏ　天国させてさしあげますのに……どうして」

「私はそういう趣味ないって、何度言わせるのよ」

「そんなの、私の趣味にちょっと併せていただければ！」

「私の趣味に合わせなさい」

ティアリュートはユースティアのグラスに青色の酒を注ぎながら言った。

「本当に……これさえなければマトモなのに」

クスクス笑いながら二人のやり取りを聞いていたシーラは言った。

「仲がいいのね」

「愛し合ってますから！」

ユースティアは自信満々に答えた。

「ティアリュート様は私のものです！」

「放っておいて……飲んで」

「これ……何のお酒？」

「イケムの実を発酵させたお酒……人間界で言えば日本酒に近い」

「……甘い」

ちょっと舐めたシーラが驚いた顔をした。

「これなら、飲めるかも」

全くどうなるかわからないもの。
これに二つの定義を下した作家がいる。

男が初めての酒を飲む時。

女が最後の酒を飲む時。

前者は経験した読者も多いだろうから語ることもしないが、問題は後者だ。

後者の結末に待っているのは、某成人（Ｓｃｈｏｏｌ　Ｄａｙｓ）ゲーム顔負けのバットエンドが大半であり、血や金が無残に飛び散り、赤ん坊やら、社会的責任やら、いろいろと永遠に続く不幸というより、文字通りの地獄。

その一歩手前で酒をあおるのは、地獄へ飛び込むために必要な通過儀礼のようなものだ。

結婚を覚悟をする時、人が酒を求める理由は、ソ●兵が突撃前にウォッカの瓶を求める理由とよく似ている。

曰く――『イッキすれば怖くないよ』

話を戻そう。

共通していることは、男女ともに“絶対後悔する”ということだ。

この場合、シーラがその典型例だった。
酒は飲むものであって、飲まれるものではない。
だが、シーラはそんなことさえ知らない。
生まれて初めての酒にものの見事に飲まれたシーラは、大変なことになっていた。

しゃっくりを繰り返しながら、その場にひっくり返ったシーラを抱き起こして寝かせようとしたのは、酒に強いティアリュートだ。
「あれぇ？」
抱き上げられようとした所で、シーラはティアリュートに言った。
「夜這いに来たのぉ？」

まさか。

その言葉を発する口は、シーラの唇によってふさがれた。
んっ！？
ん～っ！？
両腕でしっかりと頭を抱きしめられたティアリュートは、シーラにキスされたまま身動きがとれない。

「なっ、なっ！？」
それを驚いた顔で見つめているのがユースティアだ。
青かった顔は、すぐに怒りによって真っ赤に変わる。
「シーラ様っ！」
無理矢理シーラの腕を引っぺがしたユースティアが怒鳴った。
「な、何てことを！ティアリュート様のファーストキスは、私のものなのにっ！」

「へ？あはは……ごめぇん」
ニコリと笑ったシーラは、神速のスピードでユースティアを抱き

しめるなり、その唇を塞いだ。
「ほらぁ。これでいいでしょ？」

「い、いいわけが……っ！」
逃げようとするユースティアだったが、どこをどうきめられているのか、身体が拘束されて逃げることが出来ない。
そろそろとイヤらしく肌の上を這い回るシーラの腕の動きに、ユースティアの肌が泡立つ。
「やっ……」

「ふふっ……こんなHなネグリジェ……お姉様を誘ってるのね？」

「ま、まさか、あなたっ！？」
ユースティアが逃げようとした時には遅かった。
あっさりと布団に押し倒されたユースティアに、シーラが覆い被さる。

「大丈夫……経験は豊富だから……ふふっ」

耳元を這い回るシーラの舌が、ユースティアの全身に淫靡な刺激を生み出す。
ネグリジェの薄い生地越しに、掌がピンと固くなった、ユースティアの敏感な部分を撫でまわし、ユースティアの身体から力を奪う。

「ひっ……ひゃんっ！」
声を上げまいと歯を食いしばるが、歯の隙間から、ティアリュート以外の誰にも聞かれたくない声が漏れる。

「ふふっ……可愛いわね……子猫ちゃん？……ほらぁ」
ユースティアの小ぶりな乳房をなで回していた手が腹を通過して、

ユースティアの太股に達した。
その“途中”で止まることを期待していたユースティアの“身体”が、ピクリと残念そうに反応してしまう。
「あら……」
耳たぶを口に含んだシーラが艶めかしい声で囁く。
「ふふっ、何を期待していたのかしら？」

「……っ」
口で言えることではない。
すぐ近くにはティアリュートがいるのだ。
涙目で耐えるしかない。
「それとも……私じゃイヤ？」

コクッ

ユースティアは頷いた。

「どうして？身体は」

「ひゃんっ！」
這わされた指が、ユースティアが女であることを宣言するかのように、淫靡な水音を立てる。
背筋が弓ぞりになったユースティアが声も立てられずに身体をビクビクさせる。

「――――こんなに正直なのにぃ」

「や……た……助け……て……ティアリュート……さ……ま」

「……ああ」

シーラは、上気してほんのりピンク色に染まるユースティアの肢体を後ろから抱きかかえ、呆然としているティアリュートへ見せつけるかのように、その太股を無造作に開かせた。
「このHな身体は……ティアリュート様のためのものなんだぁ……」

コクッ
コクッ

ユースティアが涙ながらに頷く。
「ちょっと嫉妬(やけ)ちゃうなぁ……」

「ひゃんっ！」
背筋に這わされたシーラの舌に、ユースティアが敏感に反応する。
「お姉様は、私じゃないなんてぇ……」
ユースティアを責める指は決して休まることはない。
「なら……ほら」
とん。
シーラが体勢を入れ替え、膝立ちになったユースティアの背を押した。
力の入らないその身体は、勢いに負けて前につんのめる。

「ユ――――っ！」
はっとなったティアリュートが、慌てて前に出て抱き留めた。
「だ、だい――――」
大丈夫？
その言葉は、声にならなかった。
うるんだ瞳のユースティアが、ティアリュートの唇を塞いだのだ。

頬を伝わるユースティアの涙が、ティアリュートにとっても熱い。

「ごめ……ごめ……」

「ユースティア……」

「わ、私……私」

泣きじゃくりながら、それでもユースティアは言った。

「嫌われてもいいです。でも、でもっ！」

ごめんなさい！

泣きながら、ユースティアはティアリュートを押し倒した。

震える唇が重ねられ、涙がポロポロと頬に落ちる。

パジャマのボタンが外される手がもどかしい。

「――――ね？」

まるでユースティアを挟むかのように、その背中に覆い被さったシーラが、ティアリュートにすがりつくユースティアの小さな背中を撫でながら言った。

「この娘……ガチね」

「な、何がガチなんだ！」

ティアリュートはたまらず怒鳴った。

「お、お前っ！ユースティアに何をした！？」

「そんなに大声出すと、お師匠様が起きちゃうじゃない」

クスクス。

笑いながら、シーラはテーブルに残されていた酒をあおった。

「本音を出してあげただけ♪あなたも楽しみなさいよ……ほら。ユ

ースティア？」
シーラは、ユースティアの耳元に囁いた。
「ティアリュート様が悦ぶ場所は――――そこじゃないでしょう？」
ティアリュートの胸に縋り付いていたユースティアは、それに気付いた様子で、パジャマのズボンに顔を埋めた。
その手がズボンにかかる。
「ち、ちょっと!?」
慌てて止めようとするより先に、ズボンが膝より下へと一気にずりさげられた。
「ま、まって、わ、私っ！」
「大丈夫♪」
シーラがティアリュートの唇を奪うと、舌を絡ませながら言った。
「最初は誰でも初めてよ♪」
「そ……そんなぁ……」
「それに……」
クスクス。
シーラは嬉しそうに言った。
「よかったわね？ユースティア」
「？」
「ティアリュート様、ズボン下げる時に腰を浮かして下さったわ」
「……はい♪」
ユースティアはその言葉に、ニコリと微笑んだ。

その無垢な微笑みは、見ているだけで癒される……。
「じゃなくてぇっ！」

「ユースティア？頑張って連れて行きましょう」
ティアリュートのパジャマの上着を器用に脱がしつつ、シーラは言った。
「女同士の天国へごあんなぁい♪」

翌朝。

きゃぁぁぁぁぁぁっっっ！

ホーサー邸の朝は、そんな悲鳴から始まった。
悲鳴の主は、シーラだった。
三人の女があらぬ格好で布団に横たわっている。
何があったかは、さすがにわかる。

だけど……肝心の記憶がない。

どうやっても、酒を飲んだところから思い出すことが出来ないシーラは、自分が二人に押し倒されたと勘違いして、大騒ぎを始めた。
二人の話を聞き、シーラは納得はしたものの、

「はい、お姉様ぁ、あーん♪」
べったりとくっついて離れないユースティアと、それを恥ずかしがりながらも受け入れているティアリュートを見ていると、自分が

二人に言いくるめられた。と、疑いたくなるのがシーラの本音だった。

味噌汁を飲みながら、シーラは思った。

そうだ。

今晩、もう一回、飲んでみよう。

そうすれば――――

「絶対、いやっ！」

「はぁいっ！」

今晩も飲みませんか？

シーラの誘いに、

二人は正反対の返事を返した。

合掌。

アップルソース・ダイアリー　第十五話（後書き）

よくよく読み直したら、ちっともＨっぽくねぇし……反省します。

久々にネタ大募集です！

●●ネタ大募集！●●

・今回募集するネタは、何と人類、魔族双方のメサイア以外の兵器です！

・簡単な設定上の縛りさえ守ってくだされればＯＫです。
縛りは以下の通りです。

設定の縛り
その１：電子装備搭載不可！
ミサイルやレーザーは積めません。ロケットＯＫ
ＮＧ例：レーザー誘導砲弾搭載型の戦車。

その２：ジェットエンジン類不可！
狩野粒子影響下でジェットエンジンは爆発します。

その３：対歩兵用に有効な口径は８．５ミリ以上！
オーク兵の甲冑は８．５ミリ以上のライフル弾でないと“貫通”出来ません。
ＮＧ例：ＡＫ－７４の発展型。５．４ミリ弾でオーク兵をなぎ倒す。

その４：衛星誘導不可！

総じて、ＷＷ２あたりまでの技術レベルを考えてください。
電子装備が使えない世界で使いモノになる爆撃機から戦闘機、戦車、装甲車から歩兵用の小銃まで。場合によってはガンダムの“ビックトレー”のような大物まで、ジャンルは広いです。
・対象国家はドイツ軍、イギリス軍、フランス軍、その他どこでも結構です。
・架空の国ではラムリアース帝国なんかもありますから、必要なら国家から作ってくださってもＯＫです。
・また、その兵器を使う部隊、兵士などの設定も大歓迎です！

・登場人物の設定は常時募集中ですっ！
・どうせなら自衛隊現役の方、名前載せてみませんか？（笑）
・ロシア軍と中国軍は目下急募状態ですので、両軍マニアの方、特によろしくお願いします！

アップルソース・ダイアリー　第十六話

「いろいろと」
ヤクトエッジのコクピットの中、シーラは言った。
「言いたいことはあるけど」
眼下には見渡す限り広大な山々の雄大な光景が広がっている。
訓練で飛ぶ日本とはさすがに違う。と言い切れるが、何が違うと訊ねられれば、シーラ自身、何と答えるべきかわからない。
訓練飛行で飛ぶなら、目標にも困らない分、よい場所だとも思うが、残念ながら、シーラとその横を飛ぶティアリュート、そして、後方を飛行する小型飛行艇がここを飛んでいる理由は訓練とは全く違う。

実戦だ。
問題は、その目標なのだが……。

「……たった2騎で巣を潰せるほど弱いの？そのアイバシュラって」

「……んなわけないでしょう」
ティアリュートがうんざり。という声で言った。
昨晩まで見せていた堅苦しさがどこかとれている。率直（フランク）な物言いがシーラには気に入った。
「アイバシュラは攻撃能力だけ考えれば、驚異的な存在よ？巣って言った所で」

「この画像を見る限り、赤い蜂みたいね……」
シーラはモニターに映ったアイバシュラの画像を眺めながら言った。
「殺虫剤でも持ってくればよかったかしら。普通の巣ならメースな

んて持ってくる意味ないじゃない」

「おバカ。一匹どれくらいすると思ってるのよ」

「……高いの？」

「大きいの。サイズを見なさいよ」

「サイズ？……げ。何、こいつ。体長３０メートルって、３０ミリの間違いじゃなくて！？３０メートルって、ほとんどメースじゃない！」

「ようやく気付いた？これが群れている所へ行けって、お師匠様はそう仰せなのよ」

「１匹３０メートルってことは……巣って」

想像を働かせたシーラの声が固い。

「直径３キロってところね。巣としては平均的よ。どんな殺虫剤が効くのかしら？」

「どこの世界に巣だけで３キロもある生き物がいるのよ！」

「人間界の蟻だって、巣同士が繋がりあって数キロのコロニーを作るケースも存在する。珍しいことじゃない。だいたい、そう言う人間や魔族だって」

「……ティアリュートって、うんちく系だったんだ」

「は？」

「ううん？何でもない。学がある方だって褒めたの」

「……ありがと。とにかく、今回、私達が目標とする巣は、ネスタージュ級。巣としては小型に属するし、構造も単純だから」

「何？入り口から奥までまっすぐハイウェイが通っているとか？」

「ははっ……そんな簡単なら、私は今頃甘いもの食べて寝ているわ」

「太るわよ？」

「うっさい。中央にいる“巣主（ロード）”の所から巣の出口まで、放射線状に通路が通っている。だから、入り口さえ突破出来れば短距離で“巣主”に到達することが出来る。あとは、狙いのモノをいただけばいいのよ」

「……それなんだけど」

シーラは顔をしかめて訊ねた。

「本当に……食べるの？」

シーラは、ホーサーに命じられたことをもう一度思い出した。

野生のアイバシュラの幼虫を確保してこい。

茹でて食べたい。

信じられない。

妖魔を食べる？

そんなバカな。

「おいしいのよ？」
そんな心中を察したのか、ティアリュートは答えた。
「養殖用に改良されたタイプの幼虫は、魔界ではこのシーズンの目玉みたいな食材よ？塩茹でにしたり、グラタンにしたり……私はクリームコロッケが好きだけど。
主な産地のグランポートあたりは、アイバシュラを食べに魔界中からツアーが来るくらいで、私も行ったことあるし」

「……もういい」
シーラは口元を抑えた。
「とりあえず、カニかエビだと思うことにする」

「……ねぇ」

「何？」

「アイバシュラ、食べたことないって……貴女……もしかして、人間？」

「……さぁ」

「さぁ……って」

「私も、肝心な所がわからないのよ」

「はぁっ？」

「お師匠様がね？」
シーラはポリポリと頬を掻いた。
「……肝心な所の記憶をロックしているのよ」

「えっ？」
ティアリュートはぽかん。とした顔で通信モニター上のシーラの顔を見た。
「……何、言っているの？あなた」
「しかたないでしょう？気がついたら、自分の名前とか、どこに住んでいたかとか、そういう記憶だけごっそり抜けてるんだもん。シーラって名前だって、お師匠様が教えてくれたし、正直、お師匠様だって、そう言われなければ、多分、今だって自分が誰だかさえわかっていないでしょうね」
「……いいの？それで」
「だから」
シーラは苦笑して、
「仕方ない。そう言ったでしょう？記憶がなくても、こうやって生きては行けるし」
「楽天家なのか、何も考えていないのか……」
「どっちだと思う？」
「単なるバカよ」
ティアリュートはきっぱりと言い切った。
「問題は、外に出たアイバシュラ。空中を自由自在に動き回るから、敵に回したら相当厄介よ」
「交戦経験が？」

「士官学校の空戦教習課程で最後に出てくるのがアイバシュラの群――説明としては十分じゃない？」

「……難しい相手ってことね？」

「そう、それと、お師匠様の狙いは、アイバシュラの幼虫じゃないわね」

「えっ？」

「一見すれば、アイバシュラ達のコロニーの外縁を構成する一つの巣。だけど」

ティアリュートは地図を見ながら言った。

「位置は元ダイヤモンド鉱山の真上……大陸での元人類の財産は天壇のものとなるから、お師匠様は、鉱山を制圧してダユー様に引き渡すことで恩を売っておきたいってお考えなのよ」

「……ねぇ。それって」

「なに？」

「幼虫盗み出して逃げれば終わりにはならないわよね」

「当然」

「鉱山を奪うってことは、巣が邪魔になる。つまり、巣にいるアイバシュラを皆殺しにしてこいって……そういうこと？」

「そう言う……ことね」

シーラの言いたいことがわかったらしいティアリュートは、

「……私、お腹痛くなった」
「――――逃げるな」

目標とする巣から数キロ手前の渓谷に飛行艇を着陸させた。
アイバシュラ避けの結界を展開した後、飛行艇に乗船しているユースティアが景色の良い場所だからといって、船外にパラソル付きのテーブルを出して、そこに食事を用意してくれた。
谷間を清流が流れ、赤く染まった広葉樹の葉が辺りを赤く染め始めている。
日本より確実に季節の流れが早いが、清流の音が耳をくすぐり、眼を赤く染まった自然の絨毯が癒してくれる世界に身を置いていると、自分が戦いに来ていることさえ忘れてしまう。

「おいしい！」
シーラはグラタンを一口食べるなり、目を丸くした。
「味は濃厚だけど、食べた後のこのさっぱり感……何？白身魚というより、鶏肉に近い感じはするけど……油っぽくないし」

「それが」
クスクス笑ったティアリュートが、嬉しそうに微笑むユースティアと目配せした後、言った。
「アイバシュラよ」

「これが！？」

「はい」

ユースティアが言った。
「グランポート産の缶詰ですが」

「へえ？」
さっきまでの嫌悪感はどこへやら、パクパクとアイバシュラの肉の入ったグラタンを食べ続けるシーラを前に、ティアリュートは笑いながらグラスに入ったワインを傾けた。
「食べず嫌いって奴？どう？攻め込む意味が増えたでしょう？」

「そうね……」
皿まで舐めかねない勢いのシーラは、名残惜しそうにスプーンを置いた。
「食べるって意味で欲が沸いたわ」

「上等」
ティアリュートは頷いた。
「アイバシュラは昼間動くことが多い。夕方になれば巣に戻るわ。狙いは夜」

「何だか、狩りっていうより漁って気がしてきた」

「食べ物から離れなさいよ。成虫は食べるどころか、体液は強酸よ？まともに浴びたら、人間なんて原形留めないから注意して」

「メースの装甲でも？」

「安い装甲だと危険どころじゃないけど……ヤクトエッジの装甲なら大丈夫でしょう」

「何か、いい案があるの？」

「……まぁね」
ティアリュートはニコリと笑うと、ワイングラスを空けた。

飛行艇のコンテナに詰め込んでいた射撃系武装とウェポンコンテナを持てる限り持ったヤクトエッジ達が移動を開始したのは渓谷の早い日没を経て1時間した後だ。

格好つけてワインに酔っ払ったティアリュートが仮眠を口実に爆睡して、ユースティアに襲われた挙げ句、復活するのが遅れた。
そんな理由だ。

事前情報では、川に沿って数分の位置に人間の集落があって、そのすぐ間近に巣の一番大きな地下トンネル入り口があるという。
夜間は巣に戻るというティアリュートの言い分が正しければ、そこに陣取しさえすれば巣の内部から出てくるアイバシュラを一網打尽に出来る。
他の出口から出てきたらどうしようもないが、そんなことを考えていたら何も出来ない。

巣の上空を静音モードで一周する間に、センサーを一定間隔で投下した。
「――――来た」
センサーが巣の中の状況を分析し、伝えてくれる。
モニターに映る、円を描くように放射状に伸びる木の根のような影が、トンネルで、そこのあちこちに赤く映し出される動く反応がアイバシュラだ。
数は一目見ただけでも百の単位はきかないだろう。

「こりゃ……スゴいなぁ」
ぼやくシーラの横では、ティアリュートが実体弾兵器――――５０ミリ機関砲を伏射姿勢をとり、ウェポンコンテナからベルトリンクに装填する準備中だ。
シーラ自身は、自動小銃にそっくりな５０ミリ機関砲で対応する手はずになっている。
ティアリュートがかかり切りになっている機関砲が、ドイツ軍のメサイア用機関速射砲ＭＭＧ－３０にそっくりだなぁと思って、よくよく見たら、銃身にＭＭＧ－３０と刻印がはっきりと書かれていた。

「これって……まさか」

「人類からの鹵獲品よ」
ティアリュートは何でもないという声で、片手に持ったマニュアルと実物を見比べながら言った。
「戦線ではこういうモノも使うの。わかるでしょう？」

「メースが使えるの？」

「デミ・メースに出来てメースに出来ないはずがあるものですか。それに、コイツがアイバシュラ相手に有効かどうか――――そこも調査のウチ。
えっと、ベルトリンクをここにいれて――――レバーを引く」
ガシュッ
レバーがそんな音を立てて後退、バネの反発で元の位置に戻る。
「……これでよし……心配だけど、テスト射撃するわけにもいかないし」

「大丈夫」
ベルトの余裕を確認したシーラが興味もない。という顔で、Ｇ３６そっくりな機関砲にマガジンを装填し、巣穴の中へと銃口を向け、すぐに地面に置いた。
「セフティは解除されているし。……でも、ＦＣＳはないのに、直接照準なんて出来るの？予備マガジンもこれだけかぁ」
「……」
ぽかん。としたティアリューートの視線にシーラは気付かない。
「記憶が間違いなかったら……あった。ティアリューート？予備銃身はここに置いておく。熱源センサーで確認してね？１５００発で交換しないと暴発する可能性もある」
「り、了解……」
「それで？」
シーラは訊ねた。
「どうやって、寝た子を起こすのかしら？」
「考えた……というか」
ティアリューート騎が巣入り口に入る前に行ったサーチの結果を見ても、巣の地下通路はそれほど発達していない。
トンネル入り口からかなり奥にいくまで、アイバシュラの反応もない。
地下にはアイバシュラの成体が通過できる直径４０メートルほどのトンネルが数本存在する。
放射状に伸びたトンネルを横切るまっすぐかつ、ごく細い反応は、人間の掘った坑道だろう。

とにかく、メースのサイズで外部とアクセス出来るのは、今、ティアリュート達がいる目の前のトンネルを除けば、他には中心を通って反対側に出る1本だけだ。
ティアリュートは、このトンネルの中へ特殊爆弾を放り込んで、その一撃で巣の中の大半のアイバシュラを焼き殺し、熱に追われた生き残りをここで射殺するという。

「成る程？」
それを聞いたシーラはわざとらしく頷いた。
「面白いわね」

「……ねぇ」

「何？」

「納得してないでしょう」

「そう……ね」
シーラは他人事のように冷たく答えた。
「私なら、二手に分かれて……別ルートにも一騎置くけどね」

「無駄よ。熱に追われたら、大きい通路を通るはず。もう一本はこっちより細い」

「……まぁ、いいけどね」
シーラは通常、ヤクトエッジが装備するビームカノン砲の予備マガジンをラックにありたけ装填しながら頷いた。
「熟練兵（ベテラン）のお手並み拝見と参りましょうか」

「舐めないで！」
ティアリュートのそんな叫びと共に、

ブンッ！

闇を切り裂いて、アイバシュラの巣の奥へとトンネルの中を飛んでいくのは、ティアリュート騎が投擲した大型手榴弾だ。

ティアリュートによれば、この手榴弾の爆発によって、数万度の熱が長時間発生するため、トンネルの中は灼熱地獄となるという。

「さぁて……と」
まだ爆発の効果も確認出来ない中、シーラ騎が不意に立ち上がり、ウェポンコンテナを抱えた。
その姿勢には、全く交戦する意思が見えない。

「ち、ちょっと」
手榴弾投擲の後、すぐに機関砲に取り付いたティアリュートは驚いてシーラ騎を見上げた。
「――――どうして」

「どうしてって」

ドシュゥゥゥゥッッ！
トンネルの中を花火の様な音と、火花を伴う強い光があふれ出した。
この光景を赤外線センサーで見ていたら、トンネルの中から熱の嵐が吹き出して来たように見えただろう。

「――――来るわっ！」

「ばっか」
シーラは言った。
「来ないわよ」

「えっ？」
きょとん。とするティアリュートを前に、シーラ騎はトンネルへ向けて歩き出した。
武装を構えているわけではない。手にはウェポンコンテナがあるだけ。
Ｇ３６に似た機関砲は、コンテナの中に放り込んである。
それでシーラは、雲霞の様な数の敵が待つトンネルの中へと入ろうというのだ。
「ま、待ちなさいっ！」
ティアリュート騎が慌てて止めようと手を伸ばすが、その手はシーラ騎の足を掴むことが出来ない。
「何考えてるのよ！」

「――よく見なさい」
シーラは言った。
「アイバシュラがどう動いているか」

「……えっ？」
シーラに言われてティアリュートが見たのは、センサーが送ってくるアイバシュラの反応だ。
まっすぐ伸びたトンネルが約８００メートル。
そこら巣の中央部近くで飛んで炸裂した手榴弾。
爆発位置から巣中央部までは約５０メートルという所だろう。
投擲位置としては悪くないはずだ。
ティアリュートは、アイバシュラ達が熱に追われて逃げ惑ってい

ると、そう勝手に思っていた。
だが――――
アイバシュラ達は逃げていない。
炎が噴き出す通路めがけて殺到している。

「……なっ？」

数十、
数百のアイバシュラ達の反応が消えていく。
それは勝利か？
否……
ティアリューートの本能が、これを勝ちと認めない。
何故？
その答えを、ティアリューート自身が語ることが出来ない。

「……」

そして、ティアリューートはアイバシュラ達が何をしたかったのかを悟った。
地下トンネルの様相が変わったのだ。

トンネルが――――埋まっていく。

「こ、これは」

「妖魔達が」
唖然とする彼女に、シーラは言った。
「自分達の死骸を壁にしてトンネルを塞いでいるのよ」
その声は、さも当然。といわんばかりの声だった。
「知らない？ミツバチっていう種類の蜂が人間界にはいてね？巣に

別種の蜂が入ると、自分の犠牲を無視して立ち向かっていく。集団でその蜂を包み込んでね？集団で発生させる熱で殺すの。当然、自分達も死ぬ。それでいいのよ。彼等にとってはね。何故？自分の犠牲で巣という社会が守られる。社会を守るのが自分達の存在意義だから。

たかがちっぽけな巣一つと笑うかもしれないけど、彼等にとっては、それが全てなのよ。

アイバシュラだって、巣を持つ以上、蜂と同じなだけでしょうね」

「……巣を守るために」

「そう……かなりの数は確かに、あなたの狙い通りに焼き殺しはしたけどねぇ」

クスクス。

シーラは喉で笑った。

「投擲する通路にアイバシュラが一匹もいないことを、どうして何とも思わなかったのかしら」

「……あっ」

小さくティアリュートが息をのんだ。

そう。

陣取っているトンネル入り口から奥まで、一匹のアイバシュラの反応もなかったのに、何故、自分は平気だったんだ？

熱でトンネルを遮られ、こっちに来るアイバシュラが存在しないじゃないか！

「威嚇で2．3発ぶち込んで、このトンネルに敵を殺到させた後、手榴弾を放り込むが正解だったのにね」

「私……バカ」

「そうね。おバカさん」
シーラはくっくっ。と小さく笑った。
「私にバカ呼ばわりされたんだから、あなた本物よ」

「褒められた気がしないっ！」

「褒めてるのに……」
ティアリュートがそれ以上言えなかったのは無理もないことだ。
トンネルを埋めるアイバシュラ達の動きが一段落した。
トンネルに対する防壁が完成したことの証だ。
中央部で右往左往していたアイバシュラ達の動きが変わった。
反対側の細いトンネルへと殺到している。
「……まさか」

「だ・か・ら」
シーラは、ティアリュート騎から機関砲を奪い取ると言った。
「反対側にも一騎って、言ったでしょ？」

「ど、どうしよう！」

「簡単よ――立ちなさい」

「えっ？」

「トンネルに入りなさい。後方はアイバシュラ達が塞いでくれた。
いくらアイバシュラが大群でも、入り口を入れる数には限りがある。
トンネルの奥に布陣して、入ってくる奴らを迎撃するわよ？」

アップルソース・ダイアリー　第十六話（後書き）

久々にネタ大募集です！

●●ネタ大募集！●●

・今回募集するネタは、何と人類、魔族双方のメサイア以外の兵器です！

・簡単な設定上の縛りさえ守ってくだされればＯＫです。

縛りは以下の通りです。

設定の縛り

その１：電子装備搭載不可！

ミサイルやレーザーは積めません。ロケットＯＫ

ＮＧ例：レーザー誘導砲弾搭載型の戦車。

その２：ジェットエンジン類不可！

狩野粒子影響下でジェットエンジンは爆発します。

その３：対歩兵用に有効な口径は８．５ミリ以上！

オーク兵の甲冑は８．５ミリ以上のライフル弾でないと“貫通”出来ません。

ＮＧ例：ＡＫ－７４の発展型。５．４ミリ弾でオーク兵をなぎ倒す。

その４：衛星誘導不可！

総じて、ＷＷ２あたりまでの技術レベルを考えてください。
電子装備が使えない世界で使いモノになる爆撃機から戦闘機、戦車、装甲車から歩兵用の小銃まで。場合によってはガンダムの“ビックトレー”のような大物まで、ジャンルは広いです。
・対象国家はドイツ軍、イギリス軍、フランス軍、その他どこでも結構です。
・架空の国ではラムリアース帝国なんかもありますから、必要なら国家から作ってくださってもＯＫです。
・また、その兵器を使う部隊、兵士などの設定も大歓迎です！

・登場人物の設定は常時募集中ですっ！
・どうせなら自衛隊現役の方、名前載せてみませんか？（笑）
・ロシア軍と中国軍は目下急募状態ですので、両軍マニアの方、特によろしくお願いします！

ｓｅｌｌ　ｏｕｔ　第一話（前書き）

今回の話を書いて痛感したこと。
私は人情モノは苦手です。
さつきとみさきは間違いやすいです、以上。

sell out 第一話

●福島県　福島医科大総合病院
「こんにちわ」
病室のドアを小さく空け、こっそり中をのぞき込んだのは、パジャマ姿の美晴だった。
その後ろには、松葉杖をついたさつきがいた。
「みさきちゃん……起きてます？」

「いらっしゃい！」
ベッドの上で絵本を並べるのは、美川みさき。
美川大尉の娘だ。
「美晴お姉ちゃんとさつきお姉ちゃん！」

「えっ……？」
びっくりした。という顔の美晴とさつきがドアの所でお互いの顔を見合ってしまった。
何で分かったんだろう。
互いの顔がそう言っていた。

「足音でわかるんですよ」
みさきの母、信子が椅子を準備しながら言った。
「この子、目が見えない分、音に敏感で」

「ははっ……私が絵本なんて読んだら、雑音かな」
さつきが松葉杖に身体を預けながら苦笑いした。

「そんなことないよ」
みさきは、掌で本を撫でながら言った。

「お姉ちゃんのお話は面白いから大好き！」

「昨日読んだの……ごんぎつねだったけどね」

たははっと、さつきが苦笑いを浮かべながら頬を掻いた。

「途中で号泣しながら読んでいた声は、私も笑っちゃいましたけどね」

「あれはキツいわよ。ホント、あれで泣けない奴なんていない！」

「……ですか。みさきちゃん。こんにちわ。どう？お元気？」

「うんっ！」

みさきは嬉々として本を一冊、美晴達の前に出した。

「私、これがいいっ！お姫様のお話！」

負傷して病院に担ぎ込まれた“鈴谷（すずや）”の乗組員の中にいた美晴達が、みさきと知り合ったきっかけはふとしたことだった。

肋骨を骨折した美晴と、右足を折ったさつき。

共に災難ではあったが、久しぶりに軍務から離れる事が出来たのは、正直、嬉しかった。

嫁入り前の身体に一生残るような傷がついたこと、そして、その中で知らされた“鈴谷”の戦没、部隊の壊滅、そして指揮官である美奈代のＭＩＡ認定という、まるで今まで貯まっていた分が一気に決壊したように襲ってきた悲劇に押しつぶされないよう、そう考えて自分を守るしかなかった。

ここ一週間、美晴はヒマさえあれば病室を抜け出し、同じようにヒマを抱えているさつきを捕まえてみさきの病室を訪れている。

みさきが遊び相手として歓迎してくれているのが救いといえば救いのようなものだ。

さつきは信子の用意してくれた椅子に腰を下ろして、みさきに誘われるままにベッドに腰を下ろし、絵本を開く美晴の姿を見つめながら、軍から送られてきた書類の中身を思い出した。

封筒の中にあったのはたった一通の通知のみ。

部隊異動辞令。

退院次第の旭川教導大隊への異動内定を記した、挨拶もない殺風景な文面だけが書かれていた。

仲間や母艦を失った感傷さえ軍隊は許しはしない。

組織という歯車の中で働くことだけを求めてくる。

さつき達も例外ではなかった。

美晴は、大阪の陣地へ退院後出頭するように命じられている。

山崎と都築は、静岡の現地部隊の補充兵として送られた。

ほむらは、天皇護衛隊（オールドガーズ）から招集された。

寧々と芳は、葉月の実験センターへ転属が決まった。

麗央は、内親王護衛隊（レイナガーズ）へ戻った。

皆が皆、福島を離れる前に告げていったこと。

人がいなくなり、母艦もなくなり、独立駆逐中隊は完全に消滅した。

考えてみれば、不思議なものだ。

さつきは胸ポケットの中にいれた箱に手をやりながらぼんやり考えた。

美奈代という指揮官か、それとも、“鈴谷”という母艦か、どっちを失ったことが、部隊消滅のきっかけとなったんだろう。

あれほどの結束と戦果をあげた近衛最強の部隊が、こうもあっさりと消滅することは驚くしかないことだ。

紅葉は“白龍”を「意地でも修理してやる！」と意気込んでいたが、さつきは報告書の中で、搭乗する騎体を記す項目が塗りつぶされていたのをはっきり見ている。

風の噂では、機密保持のため、近衛は“白龍”を配備したこと自体を隠そうとしており、もし、紅葉の要望通り“白龍”の修理の許可が下りたとしても、それは“白雷（はくらい）”の修理として扱われるという。

自分達が駆った“白龍”というメサイアは存在しない。

“白龍”は、近衛の恥だ。

そういう扱いになったのだ。

自分達が――負けたせいで。

次期主力騎がテスト段階で全滅したことは、確かに恥だ。

その恥を近衛は隠そうとしている。

操縦経験者を各部隊に分散させるのは、その一環だ。

機密を胸に死ねばいい。

そう言われてるようで、さつきは腹が立つとはいえ、口に出すことさえ出来ない。

正直――。

そこまで考えて、さつきは暗然とした気持ちになった。

涼のことだ。

美奈代を失ったショックで酒に走り、急性アルコール中毒で死にかけた挙げ句、数回、自殺未遂をはかって今では精神病院だ。

正直、美奈代亡き後、近衛が一番欲しがっていた人材は涼だったろう。

それは確かに女同士という、“異常”な愛情関係だったが、少なくとも涼は本気だった。

その喪失感に、涼は潰された。

周囲から渇望された将来を自分の意思で潰してしまった。

鉄格子のはまった病室からいつ出られるか、それは誰にも、涼自身にもわかるまい。

ああはなりたくない。

それが、さつきの人としての本音だ。

さつきは、無意識にポケットから取りだしたタバコの箱から一本を抜き取ろうとして、ギリギリで場所を思い出し、顔をしかめてポケットに戻した。

涼が酒に逃げたように、自分もまた、タバコに逃げた。

涼をとやかく言える資格はない。

ただ――

ぎゅっ。

さつきは拳を握りしめた。

美奈代騎の残骸、跡形もなく破壊されたコクピットの写真は見た。
それでも、なぜかさつきは美奈代が死んだ気がしない。
むしろ、何故、涼が愛しているはずの美奈代を、ああもあっさりと死んだと思えたのかがわからない。
カンは鋭い方だと思う。
実際、新潟の家族が死者の樹で壊滅した時だって、家族の誰かが生きているという、不思議な確信があった。
結果として、智也が生きていた。
なら――美奈代は？

口に出すと、楽観的な言い逃れと思われるのがイヤで、誰にも言っていないが、さつきは不思議と、美奈代が生きているような気がしてならない。
だからこそ、さつきは拳を握るのだ。
これほど、人様に迷惑をかけたんだ。
私だって、一発くらい、殴る権利はあるだろう――と。

「お姉ちゃん」
不意に、みさきがさつきに言った。
ハッとしてみさきを見ると、絵本の朗読が終わった後らしい。
みさきがジッとこちらを見つめていた。
目が見えないのに、何故、この子は私の場所がわかるんだろう。

「よくわかるねぇ」
さつきは褒めたつもりで言った。

「うん」

みさきは笑って言った。
「お父さんと同じで、タバコ臭いから」

●福島県　福島内　某パーラー
ジャラジャラと金属製の玉が転がる音と、耳を狂わせるようなBGMが流れるパチンコ屋の店内で、
クシャンッ。
台の前に座った男が、身震いすると鼻をすすった。

「風邪ですか？」
横からそんな声がした。

「え？ええ」
不思議とこの世界でその声を耳に出来た男は、パチンコ台から眼を外さず、ぎこちなく頷き、タバコを口にくわえると、尻のポケットからマッチを取り出し、火をつけた後、再びポケットに戻した。

「失礼」
横から見えるようにタバコが突き出された。
「火をもらえませんか？」

「……」
男は無言でポケットからマッチを取り出すと、相手の台に置いた。

「どうも」
それが同性であるとは声で分かるが、男はその相手を見ようとさえしなかった。

しばらく打ち続けた後、最後の玉が消えた所で、男は立ち上がり、身体を丸めて通路を店外へと向かって消えた。

さっきのマッチをもらった方は、火をつけることもなくポケットにマッチをしまうと、くわえタバコのまま、パチンコを打ち続けた。

病室にいる美晴達は知るよしもないことだが、この3日後、福島と宮城を結ぶ防衛線が魔族軍の奇襲攻撃を受けて崩壊し、福島からの市民の疎開が始まった。

さらに翌日、会津盆地における戦線でも人類は奇襲を受けて敗北。猪苗代湖すら維持出来なくなった人類は郡山市郊外まで後退。政府は、福島から郡山まで下がっていた避難民を栃木県まで後退させるための受け入れ準備を余儀なくされた。

各地に準備されていた防衛部隊は各地で孤立し、対妖魔用の地雷原は完全に回避され、福島放棄までが本気で議論の俎上に上がるのに、県境での敗北から一週間を必要としなかった。

道路は避難民であふれ、車のない者達は徒歩で住み慣れた土地を離れていく。

彼等を守るべき軍用車両が列を作って、その彼等を追い抜いていく。

疲れ切った顔の兵士達がトラックの中で俯いている。

迷子になったのか、道ばたで泣き叫ぶ子供に声をかける者さえいない中、まるで葬列のように人々は移動を続ける。

誰もが、自分達の住み慣れた土地を、誰かが守ってくれるとは思っていない。

それを信じさせてくれるべき軍隊は、彼等より先に下がっているのだ。

安全な地域に知人がいれば疎開も出来る。
金があれば救われる。
何もなければどうなる？
地獄とまで言われる収容所に自分の意思で行くだけだ。
足取りが軽いわけがない。

「９０２号室の木村さんは？」
「次のトラックで運ぶから、その時、一緒に乗って！」
「外科の黒岩先生は？患者さんが！」
「２時間前の便で病院は離れているわ！緊急患者はもうシャットアウトして！先生も薬もないのよ！玄関に閉院のチラシ張り付けて！」
重病人から各地への転院が進む病院は、日々の静寂から喧噪へと様相を一変させていた。
普段は冷静な看護婦達がヒステリックに怒鳴り合い、新入りの看護婦がオロオロしながら先輩達に命じられるままに動く。
ストレッチャーに乗せられた老人や普通なら絶対移動さえ出来ないような患者達が乱暴に通路を押されて行っても、咎める者さえいない
点滴の瓶が揺れようが、病人が呻こうが、もう考慮している余裕は彼女達自身にもない。
彼等を送り出し、そして、次は自分達が逃げなければいけないのだ。

この場にいること自体が、看護婦の責務を全うしていることになる。

そう思わない者はいない。

さわぎの中、
「……あの」
恐る恐る。
そんな顔でみさきの病室をのぞき込んだのは美晴達だ。
すでにパジャマではなく、軍で支給されたスウェットに着替えていた。

「あ、いらっしゃい」
ベッドで眠るみさきを見つめていた信子が席を立った。
「今、丁度お昼寝していた所」

「あの……ごめんなさい」
美晴が目を伏せた。
「……私達」

「いいのよ」
信子が笑った。
「兵隊さん達は、早く治って、戦ってもらわなくちゃ」

「……みさきちゃんは」

「こういう時、精密な手術が必要ってことはね？」
あきらめの色を浮かべた信子がぽつりと言った。
「後回しにされる……って、そういう意味よ」

「そ、そんな」

「実際にそうなってるわ」

「でも……」

さつきと美晴が顔を見合った。
「疎開の予定は教えてもらっているんでしょう?」
「ええ。この病院最後のグループ」
「こんな小さい子が!?」
「この子だけじゃないわ。病院はどこも一杯。転院したくても、受け入れ先をみつけることが出来ない患者だっているのよ」
「でも、旦那さん確か」
「ええ。あなた達と同じ、近衛だけど……ウチの人は立場低いから」
その寂しげな顔を、美晴達はしばらく忘れられそうになかった。
30分後、軍用トラックの荷台に載せられた美晴達は、病院を離れた。
幌を張られただけで、空調もない、ロクに風呂にも入っていない患者達のむっとした体臭が荷台に充満するのに時間は必要なかった。詰め込まれたと言うべき程、ぎっちりと左右に並んで座らされた皆が肩をぶつけ合う。
何かのショックで車が揺れる度に、外科の患者達が痛みを訴えるが、誰もそれに答える余裕はない。
ここには医者も看護婦もいない。
生きているだけでも幸せだよねぇ。
足にギプスをつけた老婆が、周囲にそう言うが、周囲は苦虫を噛み潰したような顔で頷くのが精一杯だ。

明日の入院費用もどうなるのかわかったものじゃない。
退院できても、どうやって生活していけばよいのか。
皆が、暗然とした気持ちをぬぐい去れないのだ。

「……ねぇ」
そんな中、さつきが横に座った美晴に訊ねた。

「何？」

「タバコ吸っていい？」

「ダメ」

さつきは無言でポケットに突っ込んだ手を抜いた。

「……心の中」
そんなさつきに、美晴が言った。
「何考えてるか、当ててあげようか？」

「やってみて」

「くやしい」

「５０点」

「……辛口ね」

「無念って言葉の方が正しいけど」
さつきはぽつりと言った。
「ここじゃ、いろいろ黙っていた方がいいよ？」

何故？
そう聞こうとした時、トラックが激しくバウンドした。
痛いっ！
何人もが悲鳴を上げた。

「ちょっと！もっと丁寧に運転してよ！」
金髪に髪を染めた女が怒鳴った。
それがきっかけになったのか、
「そうだ！」
「軍隊は何してるんだ！」
「俺達は税金払ってるんだぞ！」
患者達の怒りが爆発した。
怒りの矛先は、自分達の故郷を守れなかった軍隊だ。
税金泥棒。
役立たず。
その罵声は、一つの辞書が出来るだろうと美晴が本気で思うほどレパートリー富んでいた。

「――ね？」
さつきが言った。
「ここで私達の立場を明かしてご覧？トラックから放り出されるよ？」
「……」
美晴は小さく頷いた。
「軍人なんて言ったら、とっととここから出て戦え――それくらいは言われるからね」

「ま、丸腰なのに」

「そんなの関係ないよ。軍人――それだけが大切なんだから」

「……」

美晴達を見送った後、信子はみさきが寝ていることを確かめて、手洗いに行って戻ってきた所だった。

みさきのベッドの横に、誰かが立っている。

背のがっちりとした男だ。

カーテンがかかっているが、午後の日差しの下、その男はじっとみさきを見つめていた。

「――あなた」

驚いたのも無理はない。

軍に参加している夫が、そこに立っていたのだ。

「どうして」

「心配するな」

美川は妻の前で軍靴で軽く床を踏み鳴らした。

「足はある」

「ホウッ……いつだって、突然来るんだから」

「すまん」

美川は小さく妻に詫びた。

「転院の件だが」

「まだよ」
掛け布団を直しながら信子は答えた。
「全然、決まりもしない。脳神経外科の先生はみんなひっぱりだこだもの。戦争が終わって一段落するまでは無理よ」
「それじゃ、みさきは――」
「しかたないじゃないっ！」
信子は怒鳴った。
「私だって必死にやってる！出来ることやってるのよ！この子を受け入れてくれるところがないんだもの！私にどうしろっていうの！？私に何をしろと！？」
夫を睨み付けた途端、ハッとなった信子はうなだれて詫びた。
「――ごめんなさい」
「……いい」
美川は妻の両肩に手をやった。
「お前はよくやってくれている」
「……」
「……朗報だ」
美川は軍服の胸ポケットから封筒を取りだした。
「大学病院の紹介状だ」
「……」
信子は、目の前の封筒を、信じられない。という顔で凝視した。
「……あなた」

封筒から視線を外さず、信子は訊ねた。
「これ……どうやって」

「……聞くな」
美川は妻の言葉を遮った。
「みさきの眼が見えるようになれば――」

「どうやって手に入れたか――そう聞いてるのよ！」

「いるのか、いらんのか！」
信子は、その絶叫するかの如き夫の怒鳴り声に身を縮めた。
「出所より、みさきの眼だろうが！」

まるで互いに睨み付けるようになった。
視線を先に外したのは、信子の方だった。

「みんな、おかしいって言ってるわ」
床に視線を落とした信子は言った。
「こうも連続で負けた原因は、こっちの情報が敵に流れたからだって」

「……」

「敵は、防衛線の弱い所、弱い所って、まるで狙ったように攻めてきた。せっかく敷設した地雷原だってわかったように回避して、補給部隊も時間ぴったりに空爆にさらされて――おかしいでしょ？偶然が重なったなんてありえない」

「それを」
妻を睨むようにして美川は拳を握りしめた。

「俺がやったというのか。これを手に入れるために、俺が軍を売ったと!?」

信子は無言で首を左右に振った。

「……信じたくない。でも」

「でも?でも、なんだ!みさきが大切じゃないのか!?」

「みさきは大切よ!?でも、あまりにタイミングが良すぎるじゃない!」

「それこそ偶然だ」

美川は信子に封筒を押しつけた。

「大学の連絡先は封筒に書いてある。そこへ行け」

「あ、あなたは?」

「俺は軍人だ」

美川は、もう一度だけ、眠っているみさきを見た。

「軍はまだ、ここを放棄していない」

「……」

「これが――見納めかもしれんが」

パンッ!

美川の頬を、信子の平手が叩いた。

「ふざけないで！」
信子が怒鳴る番だった。
「私もいる！みさきもいる！それなのに、どうしてそんなに命を軽んじるのよ！あなたはみさきの父親で、私の夫よ！？」
信子はそう言うと、美川の手を取ってブラウス越しに自分の胸を掴ませた。
「これはあなたのものよ！？それがわからないの！？」

信子の涙に誘われるように、美川は妻を抱きしめた。

ｓｅｌｌ　ｏｕｔ　第一話（後書き）

久々にネタ大募集です！
……ここ数日、誰からもいただけず、涙しています。
おかしいなぁ……ドイツ系の武器なんて、みんな仮想戦記とかでネタあると思うんですけど……もしかして、作品がつまんないから、読んでもらってさえいないとか（↑真実に気付きつつある作者）
……ああ。神様、私、何かしましたか？

●●ネタ大募集！●●
・今回募集するネタは、何と人類、魔族双方のメサイア以外の兵器です！

・簡単な設定上の縛りさえ守ってくだされればＯＫです。
縛りは以下の通りです。

設定の縛り
その１：電子装備搭載不可！
ミサイルやレーザーは積めません。ロケットＯＫ
ＮＧ例：レーザー誘導砲弾搭載型の戦車。

その２：ジェットエンジン類不可！
狩野粒子影響下でジェットエンジンは爆発します。

その３：対歩兵用に有効な口径は８．５ミリ以上！
オーク兵の甲冑は８．５ミリ以上のライフル弾でないと“貫通”出来ません。
ＮＧ例：ＡＫ－７４の発展型。５．４ミリ弾でオーク

兵をなぎ倒す。

その４：衛星誘導不可！

総じて、ＷＷ２あたりまでの技術レベルを考えてください。
電子装備が使えない世界で使いモノになる爆撃機から戦闘機、戦車、装甲車から歩兵用の小銃まで。場合によってはガンダムの“ビックトレー”のような大物まで、ジャンルは広いです。
・対象国家はドイツ軍、イギリス軍、フランス軍、その他どこでも結構です。
・架空の国ではラムリアース帝国なんかもありますから、必要なら国家から作ってくださってもＯＫです。
・また、その兵器を使う部隊、兵士などの設定も大歓迎です！

・登場人物の設定は常時募集中ですっ！
・どうせなら自衛隊現役の方、名前載せてみませんか？（笑）
・ロシア軍と中国軍は目下急募状態ですので、両軍マニアの方、特によろしくお願いします！

ｓｅｌｌ　ｏｕｔ　第二話（前書き）

何だか、ティアリュートのキャラが崩れてきたなぁ……初期設定は冷静沈着な指揮官型なんだけど……シーラとキャラ被っているせいかなぁ……暴走している。どうしよう（汗）

ｓｅｌｌ　ｏｕｔ　第二話

「しっつこいわねぇっ！」

ラインメタル社がドイツ陸軍のために開発した7．９２ミリ弾を使用するＭＧ２汎用機関銃を１６倍に巨大化させたようなＭＧ－３０型速射野砲が５０ミリ砲弾を吐き出し続ける。

トンネル――彼等にとっては本巣への侵入を試みたアイバシュラ達がその直撃を受け、よくて四散、悪くても身体を引き裂かれて体液を撒き散らし、金属をひっかいたような悲鳴を上げながら地面をのたうち回る。

ティアリュートは大凡の残弾を頭の中で計算しながら、指切りによる三点バーストの要領でトリガーを調整、敵を仕留めてはいるが、内心の苛立ちを隠すことは出来ない。

トンネル入り口の黒い岩盤はアイバシュラ達の赤い外殻によって真っ赤に染まっている。

人類にとってはトップクラスの性能と信頼性を誇るＭＭＧ－３０とはいえ、魔族であるティアリュートにとっては、所詮は慣れない上にどう足掻いても信じるに足りない人類製の得体の知れない代物でしかない。

接続した弾薬箱が空になったら次にどうすればいいか、正しく対処出来る自信がティアリュートには全くない。

弾が終わる前にアイバシュラ達が下がってくれることを祈るしかないのだが……。

「きゃっ！？」

光の柱が数本、騎体を掠めた。

伏射の姿勢をとっているため、回避機動が出来ない。

あと少し、弾道が低かったら死んでいた。

――忘れてた。

その一撃に、ティアリュートは焦りを募らせた。

アイバシュラはレーザー発射能力を持っている。

一方的にこんな武器だけで退治出来る相手じゃない。

アイバシュラの恐ろしいところは、数だけじゃないんだ。

個体でも、接近戦に持ち込まれたら危険だ。

多勢に無勢。

しかも、その“多勢”や“無勢”が、腕の立つ奴らだったら最悪だ。

アイバシュラ達の進撃をここで食い止めなければ、確実に死ぬ！

「くっ！」

指が痛くなるほど、トリガーに力を込めるティアリュートの耳に、

ガチン！

甲高い金属音がして、ＭＭＧ－３０が発砲を止めたのは、ティアリュートが次の手を考えるより早かった。

「……えっ？」

トリガーを引いても弾が出てこない。

「ちょっ！？」

何度もトリガーを引くが、一向に弾が出てこない！

「だから人類製なんて！」

ガンッ！

ティアリュート騎が怒りにまかせてＭＭＧ－３０をぶん殴った。

「バカッ！」

怒鳴ったのはシーラだ。

「ただジャムっただけじゃないっ！強制排出させれば――」

通信モニターの向こうできょとん。としているティアリュートの顔と、機関部がグシャグシャに潰れたＭＭＧ－３０の残骸を見比べた後、シーラは諦めた。という顔で首を横に振った。

無論、ティアリュートには、強制排出なんて言葉の意味さえわからない。

「私が使っていればよかった……」

シーラの後悔を嘲るように、アイバシュラ達のビーム攻撃が騎体を掠める。

「くっ！」

とっさにコンテナをティアリュート騎の前に放り出し、即席の楯にしたシーラが機関砲を乱射してアイバシュラ達の侵攻を食い止めつつ、怒鳴った。

「武器をとりなさいっ！」

「人類製の武器なんて！」

「もうっ！」

シーラは腰にマウントしていたビームカノン砲をティアリュート騎に放り投げた。

「そんなに人類の武器がイヤだったら、自前の武器をなんで持ってこなかったのよ！」

「仕方ないでしょう！？」

ティアリュートは顔を真っ赤にして怒鳴った。

しかし、その手はしっかりとビームカノン砲を構え、確実に一体ずつアイバシュラ達を仕留めていく。

「お師匠様は、人間の武器を持っていけと！」

「それ以外は持っていくななんて、一言も言ってない！」

「そんなのズルい！」

「ズルもへったくれもあるもんですか！」

機関砲のマガジンを交換しつつ、シーラは固定武装の小型ビームランチャーを発砲した。

弾幕の切れ目は、こういう時に命取りになる。弾幕を途切れさせるわけにはいかない。

「融通ってものを効かせなさいよ、この頭でっかちの優等生！」

「言ったわね！？この（削除）」

「（自粛）っ！」

「そ、それを言うっ！？この（検閲削除）」

「い、言っちゃいけない！それは――――グスッ」

「あ……あなただって……ううっ」

互いに泣く位だったら言うなと思うが、二人は涙を拭うと、その間に接近を試みるアイバシュラ達を弾幕でなぎ倒した。

「くそぉぉっ！後で殴るっ！」

「それはこっちのセリフよっ！」

ビームを発砲しようとした一体のアイバシュラの口の中に砲弾が飛び込み、ビームのエネルギーがアイバシュラの体内で解放された。

アイバシュラの身体を引き裂いたそのエネルギーの解放による爆発が、周囲にいた仲間達を巻き込む。

「さっきの爆弾！」

とっさに腕で顔を覆ったシーラ騎の周囲を、爆発で吹き飛んだアイバシュラ達の肉片が掠めていく。

「えっ！？」

「予備は！？」

「コンテナの中！」

ティアリュートは怒鳴り返した。

「黒い塊っ！」

「これ、か……って、これ、どうやって扱うのよ」

シーラが片手でトンネルの床に開かれたままのコンテナの中から四角い塊を取りだした。

「き、起爆装置は……？」

「先端の出っ張り！」

ティアリュートはそれを一瞥した後は、それ以上四角い塊――――魔力封印装置を見ようともしなかった。

「それを床で叩いて！出っ張りが中に入れば、５秒で魔力が解放される！」

「感謝（サンクス）っ！」

ガンッ！

片膝をついたシーラ騎が左手の中で魔力封印装置を回転させ、装置から伸びる信管を床に叩き付け、トンネルの出口へと投擲した。

「伏せてっ！」

ドンッ！

凄まじい衝撃を伴った熱風が騎体を炙る。

装甲表面温度の異常を告げる警報がひっきりなしにコクピットを襲う。

「ど、どうするのよ！」

ティアリュートが焦ったのも無理はない。

トンネルの後ろはふさがれている。

だからこそ、ここで外から襲ってくるアイバシュラを迎え撃つと言ったのはシーラの方だ。

唯一の敵の攻撃ルートにして、同じく唯一の退路でもあるトンネル出口で長時間の燃焼を行う手榴弾を爆発させたら、その熱がトンネルをそのまま巨大なオーブンにさせてしまう！

トンネル半ばまで接近していた数匹のアイバシュラが、熱に耐えられず動かなくなる。

炎に襲われ、身体の半ばを失ったアイバシュラが燃えている。

顔を背けたくなる光景を前に、シーラ騎は伏せた姿勢から起き上がるなり、出口とは反対側に機関砲を向けた。

「撃って！」

「えっ！？」

「壁を崩すっ！」

後ろの壁。

それは――――アイバシュラ達の死骸だ。

死骸ってことは――。

そこまで考えが至ったティアリュートは、シーラ騎の発砲に応じるようにトリガーを引いた。

アイバシュラの死骸を貫いた機銃弾が、死骸達によって作り出された壁に無数の穴を開けた。

ビームランチャーが機関砲の弾痕よりはっきり大きな穴を生み出す。

それでも、アイバシュラ達の頑丈な肉体をもって形作られる壁を崩すまでには至らない。

「ど、どうするのよ！」

トンネル内部の温度はメースが耐えられる限界に近づきつつある。

ビームの残弾も心許ない。

「どうたらいいと思う？」

間抜けだと思うが、シーラもその答えを知りたかった。

死骸が積み重なっただけのはずなのに、なんでこんなに頑丈なんだ？

アイバシュラが融解した時に、外皮を覆う油分が熱で変質して、強力な接着剤として互いの死骸同士をくっつけていることなんて、知れという方が無理だ。

コクピットにいても熱い。

――マズい。

このままでは、残された砲弾が誘爆してもおかしくない。

トンネル入り口では盛大に炎があがっているおかげで、アイバシュラ達の攻撃も止まっている。

かといって、このままでは生きたままの火葬は避けられない。

「予想外のことって、あるものよねぇ……」

「何、達観してるのよ！」

ティアリューは怒鳴った。

「あんたの責任でしょ！？どうにかしなさいよ！」

「もう少し冷静になりなさいよ。そんなにカッカして、よく生き残ってこれたわね」

「っ……っていうかさぁ……何だか、あなたといるとペースが狂わされてばっかりなのよ。自分でもびっくりするくらい」

「ああ……そういうこと」

「何よ」

「類友なんだ。私達」

「類友？」

「似たような考え方持つから」

シーラは速射砲を放り捨てると、光剣を引き抜いた。

それを見たティアリューもビームカノン砲から同じく光剣へと武装を変更した。

互いに左右から壁に光剣を突き立てた。

ビーム兵器の一種である光剣が、鉄に対するトーチのように壁を切り裂いていく。

「お師匠様――そこまで見ていたんじゃない？」

「よく、こんな時にそんな冷静な判断が出来る」
疑似感覚として伝わってくる、チーズを力任せにナイフで切り分けるような感覚。
光剣がアイバシュラ達の死骸を断ち切っていく。
あと少しだ――

バシュッ！

アイバシュラ達の死骸に背後からのビーム攻撃が突き刺さった。

「なっ!?」

「ちっ……急いで！」
シーラはせき立てるように声を上げた。
「奴ら、私達がまだ生きていることを知っている！」

なんで――
言いかけて、ティアリュートはすぐにその答えを悟った。
この壁の向こうにいるのが何か？

アイバシュラ達の主（あるじ）だ。

「壁に体当たりして崩すっ！」
シーラ騎がショルダーアタックの体勢をとった。
「奴ら、下手すれば熱を無視して突っ込んで来かねないっ！」

「熱はビームを食い止めない……か」
ティアリュートの額をイヤな汗が流れた。

「こりゃ……賭けね」
「バクチ、強い？」
「はっきり、弱い」
「お互い様、か……」
「あんたも弱いの？」
「特に男運は最悪よ」
「ははっ……」
ティアリュートは小さく笑うと、光剣を鞘に戻した。
「やって。ビームカノンで援護する」
「さっきの爆弾は――――もうない？」
「今、気付いたんだけど」
ティアリュートはビームカノンに新しいエネルギーパックを装填しつつ言った。
「あの状況で、一騎が砲撃支援しつつ、もう一騎が壁に穴を開ける」
「……それで？」
ドンッ！
疑似感覚として伝わる肩の痛みに耐えながら、シーラ騎が二度、三度と壁への体当たりを繰り返す。
ミシッ。
ミシッ。
そのたびに左右から入れられた切り込みから壁が変形していく。

「そこにこそ、あの手榴弾を投擲すべきだったのでは――――そう考えたこと、ない？」

「……今、考えた」

「ここに入る時、私をバカ呼ばわりしていたわよね」

「忘れた」

「思い出しなさい！今度は言わせてもらうからっ！」

「バカッ！」

「それ、私のセリフっ！」

「言われる前にいってやっただけ――――よっ！」

バンッ！

金属の板が倒れるような音がして、ついにアイバシュラ達の壁にメースが通れるほどの隙間が生まれた。

「行けるっ！斬り込むから、支援してっ！」

「射撃系兵器はっ！？」

「今持ってるのは誰の武装だと思ってるの！」

「他の――――」

「人類のヤツなら、熱にやられて、そろそろ誘爆するわよっ！」

「――――っ！？」

返答を待つ前に、シーラ騎が隙間から中へと飛び込んだ。

人類の武装に内蔵された炸薬が外気の熱に耐えられず、誘爆を開始したのは、その直後だった。

爆風に後ろからはじき出されるようにして隙間を通ったティアリュートの眼前にそびえ立つ巨大なモニュメント。

１００メートルはあるだろう地下のドームの主の“顔”に光るのは、緑色の光。

不気味なトーテムポールの出来損ないのような存在こそが、この巣の主。

アイバシュラ達の母。

“巣主（ロード）”だ。

自分達にとっては、倒すべき相手の親玉にすぎないが、身体のあちこちを覆う青白い燐光を光らせるその偉容は一目の価値はあるなと、そう思った。

ただ、彼女は決して自分達を歓迎していない。

不思議とそれがわかる。

自分達の周囲にいるアイバシュラ達もまた、同じだろう事も。

「お出迎え痛み入りますわ」

ティアリュートは無意識に口から出た言葉の意味に気付いて苦笑いを浮かべ、

優雅に膝を折って挨拶してやろうか。

そんな思いが一瞬、脳裏をかすめた。
随分と、私も意地が悪いものだ。
「……退路はあっち」
“巣主（ロード）”の背後にぽっかりと口をあけるトンネルがはっきりと見える。
「シーラ？退路までジャンプして、そこから支援する。その間に“巣主（ロード）”を叩いて」

「やってみる」

「一気に行くわよ？」

「了解」

グンッ！
急激なGが身体を押さえつける感覚と共に、シーラ達の騎体が宙を舞った。

ｓｅｌｌ　ｏｕｔ　第二話（後書き）

●ＭＧ２汎用機関銃～ドイツ帝国ラインメタル社製の機関銃。
・赤色戦争で「カイザーの電気ノコギリ」と恐れられたＭＧ４２の後継モデル。
・ドイツ軍の独自規格である７．９２ｍｍ弾を使用する。
・ちなみに輸出用の７．６２ミリ弾使用型がＭＧ３。

→って、こんな感じでいいんです！

●●ネタ大募集中ですっ！●●
・今回募集するネタは、何と人類、魔族双方の兵器です！
・評価欄にお気軽に記入してください！
・その際は評価は必要ありません。していただけると嬉しいですが、あくまで任意とします。強制はしません。
・あと、以下に記す設定上の縛りさえ守ってくだされればＯＫです。

縛りは以下の通りです。

設定の縛り

その１：電子装備搭載不可！

ミサイルやレーザーは積めません。ロケットＯＫ

ＮＧ例：レーザー誘導砲弾搭載型の戦車。

その２：ジェットエンジン類不可！

狩野粒子影響下でジェットエンジンは爆発します。

その３：対歩兵用に有効な口径は８．５ミリ以上！

オーク兵の甲冑は８．５ミリ以上のライフル弾でないと“貫通”出来ません。

ＮＧ例：ＡＫ－７４の発展型。５．４ミリ弾でオーク兵をなぎ倒す。

その４：衛星誘導不可！

総じて、ＷＷ２あたりまでの技術レベルを考えてください。
電子装備が使えない世界で使いモノになる爆撃機から戦闘機、戦車、装甲車から歩兵用の小銃まで。場合によってはガンダムの“ビックトレー”のような大物まで、ジャンルは広いです。
・対象国家はドイツ軍、イギリス軍、フランス軍、その他どこでも結構です。
・架空の国ではラムリアース帝国なんかもありますから、必要なら国家から作ってくださってもＯＫです。
・また、その兵器を使う部隊、兵士などの設定も大歓迎です！

・登場人物の設定は常時募集中ですっ！
・どうせなら自衛隊現役の方、名前載せてみませんか？（笑）
・ロシア軍と中国軍は目下急募状態ですので、両軍マニアの方、特によろしくお願いします！

sell out 第三話

「喰った。喰った」
腹を撫でながら満足そうに笑うのは、ホーサーだ。
アイバシュラの幼生の殻が皿に山積みになっている。
「野生種はやはり美味い」
「……はぁ」
怪訝そうな顔をして、横にいるシーラを盗み見るように視線を送るのはティアリュートだ。
巣の中に突撃して、巣主を殺して逃げる途中に存在した飼育室から奪えるだけ奪った幼生達が今、ユースティアの手によって食卓に消えた。
だが、久々に緊張するに値する戦闘を経て疲れが身体にたまっているティアリュートにとっては、食事をしたい心境ではないし、胃が受け付けない。
ユースティアが用意してくれたスープを飲むのがやっとだ。
その横で、共に戦ったシーラは、美味い美味いを繰り返して幼生の殻から肉をひっぺがして食べるのにいまだに忙しい。

アイバシュラは食べ過ぎると下痢になることを教えてやろうか。

一瞬、そう思ったがティアリュートはとりあえずやめておいた。
はっきり、今回の作戦成功の功績は自分とシーラとどっちにあるかと聞かれれば、ためらいもなくシーラだと、彼女自身が認めるしかない。
自分とユースティアがあそこへ行って、自分の指揮だけでユースティアが動いていたら、ここに生きて帰ることは出来なかったろうから。
「……」

ホーサーがシーラを弟子として認めた理由の一端を味わった気はした。
ただ、それでシーラに信服しろとか、全幅の信頼を置けというのは、逆に無理な話だ。
おかしい。
つくづくそう思う。
アイバシュラが食べられることを知らなかった。
人間界の武器にやたらと詳しい。
魔界のことを知らなすぎる。
これを、どう判断すればいい？
そう考えると、ティアリュートは何も出来なかった。

夜。
泊まっていけ。
ホーサーのその命令に近い言葉に従ったティアリュートはユースティアと共にホーサー宅に泊まり込むことになった。
さも当然。という顔で布団に入り込んできたユースティアをなだめすかし、寝付けないからという理由で部屋から逃げたティアリュートは、縁側にぽつんと座って月を眺めていた。
トイレの方で未だにゴソゴソ音がするから、シーラの腹が大変なことになっているのは間違いない。
ざまみろ。
そう思うと、少しだけ気分が良い。

「寝付けないのか？」
背後からの声にぎょっとして振り向くと寝間着姿のホーサーが立っていた。
「……いえ」
一礼して立ち上がろうとするティアリュートを制して、ホーサーがその場にあぐらになって座った。
「――よい月じゃな」
「ええ」
「魔界が恋しいか？」
「……」
ティアリュートは無言で首を横にふった。
「そうか」
「……アイバシュラはいかがでしたか？」
「美味かったわい」
ホーサーは笑った。
「奴らの巣が潰れたおかげで、金鉱をダユー殿に引き渡すことも出来る」
「金鉱を？」
「そうじゃ。魔族軍もそうじゃが、ダユー殿達も資金繰りで相当に苦労しておる。下手すれば、来月あたりのお主への給与の支払いは、金かもしれぬぞ」
「――まさか」
「そのまさかじゃ」
ホーサーはため息をつくと月を見やった。
「魔族軍は、人間に倒される前に財政によって倒される」
「……」
「お主は金で雇われた傭兵。支払いに滞りがあっては困るじゃろう？今からでも逃げて良いのではないか？」
「逃げません」

ティアリュートは言った。
「私は、金を目的としてここに来ているわけでは」
「……ふむ」
ホーサーは腕組みをすると顎髭を撫でた。
「意地を通すか」
「通すべき意地があります」
「その意地がない者は、これから抜けるぞ。次々と」
「意味がわかりません。ダユー様達の、そして魔族軍の資金に何か問題があるというのですか？」
「ありすぎじゃ」
「そんな！魔族軍は魔界、そして天界から圧倒的な支持を受けているのです。資金も人員も資材も潤沢だと、マスメディアではそう聞いています！」
「公(おおやけ)が都合の悪いことを言うものか」
「そ、それはそうですが」
「先の戦いで圧倒的優位だった魔族軍が何故、神族軍に和議を申し込んだ？」
「それは」
突然の問いかけに驚きつつも、ティアリュートは答えた。
「先々代の魔帝、ホルスバーム帝の命により」
「それだけか」
「政治的、外交的事情はいろいろありますけど……他には」
「魔界からの補給を止められたことじゃ」
「あっ」
ティアリュートは、あまりにグローバルに視野を広げすぎ、足下が疎かになっていた自分の発想を恥じた。
「……今回も同じじゃ。グロリア陛下達、帝室は魔界の名士達に公然と圧力をかけ始めている」
「まさか。ヴォルトモード卿への援助を止めろと？そんなことしたら」

「先走るな。卿への援助を止めろと言い出したら、ワシも帝室に怒鳴り込んでるところじゃ」
「……というと？」
「ヴォルトモード卿を復活させた組織――――中世協会への関与をやめろと、そういうことじゃ」
「中世協会……」
「まぁ、難しい所じゃがな」
ホーサーは唸るようにして言った。
「奴らの母体は東の辺境にある反帝室連合。それに圧力をかけたところで、どの程度か」
「東の反帝室連合といえば……ヒナタ連邦ですか？」
「そう。帝室を目の敵にする連中じゃ。
じゃが、圧力は確実に生きようとしている。
門（ゲート）を通じた物資輸送拠点へ通じるルートに税関を設けただの、反帝室への資金浄化を防止するという名目で送金ルートを閉鎖しただの。
こざかしいが、確実に効果を発する方法がとられている」
「ですけど」
信じられない。という顔でティアリュートは訊ねた。
「それじゃ……ヴォルトモード卿は」
「負けるわ」
「……なっ！？」
「この戦は負ける戦じゃ。負けて良いのじゃ」
「……えっ？」
「ある意味では、連中にとって、卿を復活させること自体、本当はどうでもよかったのかもしれぬ」
「どうでも……いい？」
「ああ。アフリカと南米という二つの大陸からほぼ人類を抹殺し、６０億近い総人口を半分まで減らした。そしてこの弓状列島」
「……」

「ところがどうじゃ？この時期になって、ヴォルトモード卿とは全く関係のない、アイバシュラのコロニーがユーラシア大陸に出現した。しかも、一つや二つではない。群体で――じゃ」
「話が、出来すぎている？」
「そう。まるで誰かが仕組んだとしか言いようのない事態が起きておる――ティアリュートよ。どう見る？」
「……」
ティアリュートは首を横に振った。
「情報が少なすぎます」
「……だな」
ホーサーもその答えには頷くしかなかった。
「ヴォルトモード卿を助けるとは思えぬ。まるでそれを無視するかのような動きを、ワシは、あの組織が卿切り捨てたと見た」
「切り捨て……た？」
「そう。いつまでたってもラチがあかぬ。アフリカと南米をわずか3週間で占領した前回に比べ、その数十分の一にすぎない、こんなちっぽけ列島を陥落させることも出来ずにおる。犠牲と戦費はうなぎ登りのはず。採算が合わぬ。ならどうする？」
「……それで」
ごくり。
ティアリュートは思わず唾を飲み込んだ。
「不採算部門として、ヴォルトモード卿の軍勢は、切り捨てられて、その代わりにアイバシュラ達が投入された」
「そう……もうヴォルトモード卿の軍勢にあの連中が与えた意義は大きくない。
人間界においては、せいぜいが弓状列島に人類の眼を固定させる目隠しの役目がいいところじゃろうし、魔界では……ヴォルトモード卿を祭り上げ、その支援に消極的な帝室に対する悪感情を高める役目……主にはそんなところじゃろう。
むしろ、中世協会より、帝室がどう動くかが、今後のキーを握る

ことになるな」
「資金を凍結する動きは――まずいです」
ティアリュートは言った。
「市民にとっては善意です。それをいくらなんでも」
「……そう。いつまでも凍結は出来ぬ。財務大臣の失態として処理されるにしても、限界はある。それまでにヴォルトモード卿が軍を引くつもりもないじゃろうが」
「ありませんか」
「二度も金の問題で負けたなど、ワシでも耐えられぬわ。暴れるだけ暴れて、むしろ大陸へ出て、アイバシュラ共をどうにかさせる方向に卿が動いてくれればな」
「大陸へ？」
「そう。卿の軍勢が大陸へ浸出して、その針路をアイバシュラ達が邪魔をしたとなれば、誰がアイバシュラの群体を大陸に生み出したかが、明らかになって、そして責任問題になる。魔界正規軍がアイバシュラ退治に動いてくれれば、それを口実に魔界へ卿も撤退する口実も出来て重畳なのじゃが……そこまでは動くまい」
「先に」
はっ。となってティアリュートは言った。
「天壇を大陸へ」
「それが出来るならな」
「……えっ？」
「お主は、ホンにまっすぐな性格をしておる」
ホッホッと、ホーサーは笑った。
「それは悪いことではないのだがな」
「……ば、バカにされているのか、叱られているのか」
「どちらでもないわ――で？何か悩みか？この爺でよければ聞いてやるが」
「……少し、躊躇ますが、聞かない方が逆に失礼かと」
「シーラのことか」

「はい」
「――何じゃ」
「彼女は……」
「……」
「……何者ですか？」
「何と見た」
「……人、です」
「なら、それでよかろう」
「し、しかしっ！」
「人で何が悪い？何か都合の悪いことがあるのか？」
「……」
そう、面と向かって聞かれると、何と言って良いかわからない。
尊敬する師匠を納得させる言葉を、とっさには思いつけない。
「逆に」
だからこそ、訊ねた。
「何故、彼女を弟子にしたのですか？そのきっかけは」
「気まぐれじゃ」
「なっ？き、気まぐれ？」
「悪いか？」
「い……いえ」
ティアリュートは答えた。
「決めるのは、お師匠様ですから」
「だろう？」
ホーサーは勝ち誇ったように頷き、しばらく黙った。
「――のぉ、ティアリュートよ」
「はい」
「剣を何と見る」
「……剣を？」
「そう。剣を、何と見る」
「――人を殺す道具、ですか？」

「それに意味はあるか？」
「あります」
ティアリューは頷いた。
「悪を殺し、正義を守る。そのために必要な道具です」
「……」
「……」
ホーサーの無言が、答えたティアリューには怖かった。
「……無駄」
「はっ？」
ホーサーの口から出た言葉に、ティアリューは自分の身体が、ビクッと跳ねたのを確かに感じた。
「無駄だと、言った者がおる」
「シーラですか？」
「そうじゃ」
頷くホーサーの顔は、心なしか嬉しそうに見える。
それが、ちくりとティアリューの心に針のように刺さった。
「剣など無駄なもの。包丁や鍬の方が余程尊いとな」
「何を」
「剣で木が切れるか。剣で魚がさばけるか。剣で畑が耕せるか」
「侮辱です！」
ティアリューは思わず高い声をあげた。
「それは、剣を持って生きる我々に対する侮辱です！」
「……侮辱、か」
「お師匠様は悔しくないのですか！？剣など意味はないと、そう言われて！」
「……」
ホーサーは無言で立ち上がると、縁側に置かれたサンダルに足を通した。
きょとん。とするティアリューの横を過ぎると、庭の木に立てかけられている木を掴んだ。

鍬の柄だった。
「――ホレ」
それをホーサーはティアリュートに見せた。
「これで土を掘って見よ」
「土を？」
「そうじゃ。剣を振るう力があるなら、土くらい、簡単じゃろう？」
「……」
サンダルを履くと、ティアリュートは庭に出て、ホーサーから鍬を受け取った。
そして、力任せに土へ鍬を振り下ろした。
ガンッ！
鈍い感触がして、鍬が弾き返った。
「力だけでは土に鍬が入らんぞ」
「――っ」
ホーサーに失敗を見られた気がして顔を赤くした後、再び振るった。
さくっ。
音と共に鍬が土にめり込んだ。
「――まだじゃ」
それに答えるように、ティアリュートは鍬を数回振るった。
土がほじくり返され、夜露に濡れた草が無残な姿をさらす。
「……ふむ」
ホーサーは、その場にしゃがみ込むと、言った。
「……シーラの言うとおりじゃと、こういう時に思う」
「はっ？」
「いかに剣を振るおうと、鍬では勝手が違う」
「……どういう、ことですか」
「まるで振るえていない。鍬が入るのが浅すぎる。これでは作物が育たぬ」
「……」

驚愕に目を剥くティアリュートにホーサーは続けた。
「剣の技に長けたお主をもってしても、その剣の力をもってしても、草一本、これでは育てることは出来ぬ」
「……」
「剣に熟練した所で、草一本育てられぬで、それで何が活かせるものか。シーラの言いたいことはそういうことじゃ」
「そんな――っ！」
「……不満じゃろう」
「……」
「くやしいじゃろう？」
「……」
「……ほれ」
どこに持っていたのか、ホーサーはティアリュートに棒きれを一本、放り投げた。
「それで、ワシを殴り殺してみろ」
「はっ？」
「怒りにまかせてで良い。ワシを殺せ――そう言ったのじゃ。出来ぬか」
「……」
棒きれとホーサーの顔を交互に見たティアリュートは、やがて覚悟を決めた顔になった。
ホーサーは丸腰だ。
「お恨みは」
「せぬよ」
その言葉が終わるか否かのうちに、ティアリュートはホーサーめがけて斬り込んだ。
「――なっ！？」
その違和感は、ティアリュートを驚かせたなんてものじゃない。

しっかり掴んでいたはずの両手から、剣の感覚が一瞬で消えた。
突然の虚脱感に似た感覚に襲われたからだがたたらを踏んでその場に崩れ落ちた。

「……」
ぼうぜんとするティアリューは、何も持たない手を、ただ、呆然と眺めるしかなかった。
この感覚は知っている。
あの模擬戦で、シーラにやられた手だ。
だけど、あれは今でもどうやられたかわからない。
それを、お師匠様にもやられた。
何？あの女は、お師匠様にこれを――――。

「どうした？」
両膝をついた姿勢のまま、寝間着が汚れるのも構わず、覚悟を決めた様子のティアリューは、ホーサーに向き直って両手を突いた。
「お願いしますっ！」
「ん？」
ティアリューの掴んでいたはずの棒きれを持つホーサーが眉間に皺を寄せた。
「その技を、私に教えて下さいっ！」
「……技、か」
不意に、ホーサーの肩から力が抜けた。
「はいっ！」
「……」
「……」
「出来ぬ」
「な、何故です！」
一瞬、呆然とした後、ティアリューは頭に血が上るのを確かに

感じ取った。
かーっという熱が体中を駆け回る。
「あの女に、あの人間風情に教えることが出来て、どうして私には教えて頂けないのですか！」
「……」
「お師匠様っ！それでは、私がここに何のためにいるのですか！」
「……」
「お師匠様っ！」
「……技」
「は……はっ？」
「これを技と答えた時点で、お主には無理じゃ」
「そ、そんな！」
「確かに」
ホーサーはその場にしゃがみこむと、ティアリュートと視線を合わせた。
「お主は剣の技には長けておる。それは認める。じゃが」
「……」
「それまでじゃ」
「……」
ティアリュートの瞳に絶望の色が走る。
呆然とするティアリュートにホーサーは諭すように言った。
「アイバシュラの幼生をもろうた礼として教えてやろう。よいか？剣は、技ではない」
「技……では……ない？」
意味がわからない。
剣は技術の粋を凝らしてこそ、力を発揮するものだ。
「所詮、道具じゃ。その使い方も、どう足掻いても三三が九に突きので十。これだけの存在――剣とは、それだけじゃ」
「そんなことを！」
「怒るな……という方が無理か」

ホーサーは目を細めて笑った。
「お主は、ほんに昔のワシにそっくりじゃのぉ……あのシーラも」
「……」
「お主は、技の研鑽は素晴らしい。じゃが、あまりに“我”が強すぎる」
「我……？」
「強い、正しい、勝ちたい――“我”という存在をひけらかすための道具。それが剣だと、お主の剣はそう叫び続けておったわ」

道具。

ティアリュートは確かに剣をそう答えた。
人を殺す道具だと。

そんな彼女にホーサーは問う。

「お主の剣は、“我”をひけらかすための道具、即ち、人を殺す理由として剣を存在させておる。人を殺すための方便扱いされて、剣は活きるのかな？」
「……剣を――活かす？」
「人を斬ってこそ剣は価値がある。そう言いたいのか？」
「……」
無言で頷くしかなかった。
「やれやれ」
ホーサーは立ち上がった。
「意外と頭が悪いのぉ」
「も、申し訳ありません」
「さっき、何のために鍬を持たせたと思う？」
「えっ？」
「鍬は土を耕す道具じゃ。しかし、最初、お主ははそれを使えなか

った。何故かわかるか？」
「……いえ」
「鍬の意味を理解しておらんかったからじゃ」
「意味？」
「そう。鍬には鍬の、この棒きれにだって、お主にもワシにも意味はある」
「……」
「鍬は土を耕すもの。そのための存在。それを理解せずに使えば、鍬が鍬として活きるはずがない――違うか？」
「そ、そう……ですね」
不承不承、頷くしかなかった。
鍬が何だと言うんだ。
私が求めているのは剣だ。
だけど――
出来る事ならティアリュートは、自分の頭を絞りたかった。絞って知恵が出てくるから徹底的に搾り取りたかった。
焦る。
心のどこかでこの言葉がとても大切だと、ひっきりなしに繰り返しているのだ。
それでも、何が大切なのかがわからない。
「言葉から己を解き放て」
「……言葉？」
「技も剣も鍬も、すべては単なる言葉じゃ。言葉だけで剣を理解出来たつもりになっているかぎり、お主は前に進めぬ」
「あ――っ」
とっさに出かかった言葉をティアリュートは慌てて噛み殺した。
あの女は――。
そんなことは関係ない！
シーラはどうなのか？
それが私と何の関係がある！

「先程の技を、口や文書で伝授されても、お主はそれを体得出来ぬ。お主が今後、磨くべきは」

とんっ。

ホーサーの掴んだ棒きれのきっさきが、ティアリュートの豊かな胸に触れた。

「ここじゃ」

「……」

「剣の使い手として、人としての“器”じゃ」

「器？」

「そう――のぉ。ティアリュートよ」

「……はい」

「自分をひけらかすために、お主は剣を握っておるのか？」

「……」

はい。

本来なら、そう答えるべきだろう。

私は傭兵だ。

主家の名を高めるためには剣で名を上げる必要がある。

つまり、自分を売るためにこそ、剣はあるのだ。

だが――

ティアリュートは、はっきりと自覚した。

“それ”ではだめなんだ。

もし、私が“それ”を乗り越えたければ、もっと上に登りたければ――それさえ違う。

私が――本当の剣を握るためには。

そうだ。

己の強さ

己の名

己

あくまで己。

そこに留まって、以下に武名を轟かせようと、それでよいのか？

そんな武名にいつまでもこだわっていてよいのか？

違う。

私は、こんな剣をいつまでも握っていてはダメなんだ！

「……いえ」

ティアリュートは詰まりながら吐き出すように言った。

「いえ！ちが、違いますっ！私は、こんな剣を握りたくない――――

私が握るべき剣は――――もっと！」

「そうじゃろう？」

にやり。とホーサーは笑った。

「剣を握る者にとって、命とも例える剣――――それを単な“我”のみを満たす小さな器として何とする」

「……お師匠様」

「よい月夜じゃ」

ホーサーは踵を返した。

「世界を見ろ。ティアリュート。お主なりの方法で、世界を見るのじゃ」

「……」

「この天地の広さを。その意味を悟るがいい――――天地と一つになれば」

ぽいっ。

ホーサーは棒きれを放り捨てた。

「剣などいらぬわ」

ｓｅｌｌ　ｏｕｔ　第三話（後書き）

……なんだか、剣豪小説みたくなりましたけど、ご安心下さい。
これは御伽噺的戦記モノです。

軍事系のネタ、大募集中です。
よろしくお願いします。
大きく書いても投稿がないので、ちいさく言ってみました（号泣）

ｓｅｌｌ　ｏｕｔ　第四話（前書き）

作者「秋風がしみる季節だなぁ……こたつ欲しいなぁ。ストーブもいいなぁ」
祷子「あのぉ……」
水瀬「こんばんわぁ」
作者「おや、珍しい。夫婦でどうしたの？」
祷子「お訊ねしたいことがあって」
作者「へっ？」
祷子「悠理君？」
水瀬「はぁい」
　悠理、当然刀を抜く。
作者「み、水瀬っ！？ち、血迷ったか！？」
祷子「質問です」
作者「はいっ！？」
祷子「私は今、どこにいるんでしょう」
作者「へ？お前……そういえば生きてたっけ」
祷子「……」
作者「えっと……“鈴谷”が沈んだ時に“Ｄ－ＳＥＥＤ”の中で燻製にしてやったんだよな。いや、あのとき酒飲みながら書いてたからツマミ欲しくてさぁ……んで？助かったの？」
祷子「……」
作者「ねぇ、祷子？なまじ美人が怒ると怖いんだけど」
祷子「悠理君――腕、一本切り落として良いよ？」
作者「よくないっ！悠理っ、テメエ、女の色香に迷うな！」
水瀬「だって、僕のお嫁さんのいうことだよ？祷祝だっているし……あっ、祷子さん。そろそろ帰らないと祷祝がおねむの時間」
　祷子、腕時計を見る。
祷子「……そうね」

作者「い、いつの間にパティック・フィリップなんて……」
祷子「悠理君に買ってもらったんです。いいでしょ」
作者「……で、お前の登場と、バケの皮が剥がれるのはこれからだ！悠理っ！お前がこの女に、どれほど遊ばれたというか、利用されたアホな存在かは――」
パンッ（銃声）

祷子、拳銃をしまいつつ
祷子「悠理君？帰りましょう？証拠隠滅はお願いね？」
悠理「はぁい♪」

sell out 第四話

●大日本帝国　衣川防衛線　ドイツ軍本陣

「どうなってるんだ！」

作戦報告を聞いたレルヒェが甲高い声で怒鳴った。

「ここの所、作戦が魔族に流れているとしか思えないぞ！」

こちらがどれほど隠密を心がけて行動しようと、魔族軍は確実に人類側の弱い所を狙い澄ましたように攻めてくる。

鉄壁の守りを備えたメサイア部隊を嘲るかのように、大きく迂回した飛行部隊が無防備な補給所、輸送部隊や橋を空から襲撃する。

さらに、空爆に曝された後に無人騎である飛鼠（ひそ）達が大型輸送艇から上空投下され、施設を破壊し、逃げ惑う兵士達を殺していく。

後方への飛鼠（ひそ）出現に驚き、かつ、補給路を遮断される事を恐れるだけでなく、後方の部隊そのものを救わねばならないメサイア部隊は防衛線を構築し続けることが出来ず、魔族軍が何もしなくても線を放棄するしかない。

メサイア部隊が飛鼠を狙って動き出したことを知った魔族軍は、迂回して人類との交戦を極力回避して逃げてしまう。

そして人類は必死になって構築した防衛線が、今度は魔族軍の防衛線として稼働していることに気付く。

策としては完璧に近いが、この完璧をモノにするためには十分な情報がいる。

補給所の所在は絶対に機密扱いされており、輸送部隊でさえ基本的には当日に地図で教えてもらって初めて所在を知らされる程、管理は徹底している。

また、輸送ルートと、輸送時間は日によってランダムに変更されており、魔族軍が輸送ルートを掴むのは相当に困難としているのだ。

ところが、魔族軍は正確に補給所だけを空爆し、輸送ルート上の

部隊が橋などの重要拠点にさしかかったタイミングで襲撃する。
橋が落とされた時、人的被害が必ず存在しているのが、その証拠のような話だ。
ここまでやるためには、絶対に事前情報が必要だ。
なら、魔族軍はどこからその情報を手に入れているのだ？
レルヒェが疑うのも当然なのだ。
「……まぁ」
殿下が言った。
「穴を作るなという方が無理だろう」
「まさか」
「我々じゃないさ――――そこは疑う必要もない」
「と、当然だ！」
部下を一瞬でも疑ったことに、ばつの悪さを感じたレルヒェの頬がほんのり赤くなる。
「我がドイツ軍に情報漏洩など」
「マラネリもそうだ」
殿下は楽しそうに微笑んで言った。
「情報漏洩、即、家族四親等を巻き添えにした死だ。やるバカはおらん」
「……やりすぎだ。参謀長」
「最も」
銀髪をしっかりとなでつけた、寸分の隙も感じさせない軍服の着こなしを見せるクルッペンフェラー参謀長が、ドイツ人らしい背の高い鋭利な身体の後ろに手を回し、頷いた。
「各国が疑っているのは、この日本です」
「……」
「この国という腹の中には、どうやら内通者（ネズミ）がいるものと」
「どこにでもいるものさ……」
「早く処置しないと、腹を食い破られるぞ。我々まで喰われたからかなわんぞ。殿下」

「……だな。いい案はあるのか？参謀長」
「しかり。我が軍はマラネリ軍と協議の結果、最早、日本帝国とは共同歩調を取るべきでありません。我が軍は――」
クルッペンフェラーは、ちらりと殿下を見た後、
「失礼、我が“連合軍”は、独立した作戦行動をとるべきです」
「独立した？この兵力で？」
「この兵力で、です。兵の少なさは運用でカバーします。また、皇帝直卒部隊という権限も最大限活用すれば、補給とて優先的に受けられます」
「ある意味楽観的な発想だな」
「最悪を想定して楽観的に考えるのが本官の性分でして」
「よかろう。頼む」
「……まずは、そのための準備が必要です」
背後に回していたクルッペンフェラーの手が、その手に握っていた指揮棒が、卓上の地図を突いた。
「安全にして、本国からスムースに補給物資が届く所」
指揮棒は、東北から北へむけて走り、北海道を突いた。
「残念なことに、東北方面は山間部が多く、大量の物資輸送には向いていません。ですから我々は、平地の多い北海道に展開します」
「日本政府との話し合いはついているのか？」
「まさか」
クルッペンフェラーは肩をすくめた。
「我々は独立部隊。話し合いの必要がおありと？」
「抗議が来たら対応しろ。我々はこの帝国領を分捕るつもりはない。ただ、勝つためには協力してもらうだけだ。――必要ならメサイアでも持って行け。見せしめに二、三人殺しても私は許すぞ」
「ありがとうございます」
追認を求めるように、クルッペンフェラーの視線が殿下に向けられた。
「――止められるわけはあるまい」

殿下は諦めた。という顔で頷いた。
「ただ、物資輸送ルートについては、マラネリと通じるルートの確保も要求してよさそうだな。いつ頃出来る？」
「本国とは明後日までに。マラネリは座標指定があり次第、一週間以内に」
「早いな」
「既に現地には飛行艦を向かわせています。本国では補給物資と補充部隊が待機中です。独立部隊として動くには十分です」
「その件も含めて、信仁陛下には私から一言挨拶に行く必要もあるだろうな」
レルヒェは言った。
「ドイツ民族が礼儀知らずだと陛下に思われては、私が困る」
「いえ」
何故か、クルッペンフェラーはレルヒェの言葉を遮った。
「それは早くても明後日以降に、ご遠慮ください」
「何故だ、私に礼儀を欠けというのか」
「結果としてそうなりますな」
「――ワケを聞こうか？」
「明日、日本軍との共同作戦がございます」
「知っている。私も出るぞ」
「はい……日本軍との申し合わせの上では、我が軍はこの陣を出て、ここより１０キロ前面の日本軍機甲部隊、その前面の守りにつくことになっております。
そして、それ以降、今我々が存在するこの陣の場所は、人類側が前に出た場合の重要な補給ポイントとして機能することに」
「前に出られたらな……いてっ」
そう呟いた殿下の脇腹を、レルヒェが小突いた。
「――後ろに下がるにしても、救護所の他」
クルッペンフェラーは、視線を少し彷徨わせた。
「日本兵の死体の埋葬地としても役立つでしょうな。ドイツからは

クレーンとブルドーザーを用意しています。手助けとしては十分かと」

「そういう冗談は好かん」

「失礼。とにかく、それ程、この陣は大切なのです。ここを妖魔の巣にしてやるわけには参りません」

「それでどうするのだ」

「発想を変えて下さい。陛下」

「発想？」

「そう。我々は、ここを動く。そして、ここは補給所になる。それが我々の――――いや、人類側の発想ですが、それを魔族が知っているとしたら？」

しばらく考えたレルヒェが真顔で言った。

「……話せ」

「連中は、補給所を叩き、そして後方への退路を遮断する戦法を好みます。退路をふさがれ袋の鼠となった相手を前後、ともすれば左右からまで挟撃することで損害を減らす。効率的な戦い方ですな」

「……ここを囮にすると？」

レルヒェは訊ねた。

「ここを敵が狙ってくるものとして、取り決め通りには前進せずに、ここで敵を待ち構える……か？」

「左様でございます」

クルッペンフェラーは、腰を折って優雅なまでに頭を下げた。

「敵を欺くにはまず味方から……」

「機甲部隊の前面はどうする」

「……仕方ない」

殿下はため息まじりに言った。

「万一のことがある。機甲部隊を挟んで対峙したなんて洒落にもならないからな。マラネリが単独で前面に出よう」

「いいのか？」

「敵の出鼻をくじく名誉は君に譲るよ」

殿下は言った。
「イギリスとフランス、両国の王子も近々来るんだ。武勲をさらに増やしておいた方が、いろいろとやりやすいだろう」
「ふん」
レルヒェは不快そうに鼻を鳴らした。
「あんなマザコン共に何故気を使わねばならん。せめて労ってやるさ。いろいろと残念な奴らだからな」
「……まぁ、ね」

●翌日　宮城県境日本軍機甲部隊防衛線
１０５ミリ砲を搭載した八式戦車と３０ミリガドリング砲を搭載した八式対空戦車が魔族達が侵攻してくるだろう方角へ向けて筒先を向けている。
兵士達は鉄の塊の中で自分達に襲いかかるだろう最悪の事態に対して備えている。
アイドリングを続けるディーゼルエンジンの咳き込むような排気煙が辺りに充満している。
戦車の上から見える、あちこちに積み上げられた土嚢は歩兵達のタコツボだ。
重機関銃や火炎放射器で接近する魔族軍に備えているのだが――。
俺は戦車兵でよかった。
八式戦車、２３号車の中で若い戦車兵は心底そう思った。
狭いし息苦しいし、この時代の車のクセにエアコンがないなんて信じられないけど、とにかく、最低でも移動が出来る。
それだけでもいろいろと違う。
歩兵達はタコツボの中に入ったらもう出てこられない。

死ぬか戦いが一段落するか、どっちかにならなければ出られない。
もし、それがイヤで飛び出しでもしたら即あの世行きだ。
戦車兵は、開かれた運転手用ハッチからそっと顔を覗かせた。

戦車の車体は地面に掘られた戦車壕に車体の大半を隠している。
壕から自由に動けるのは砲塔だけだ。
まっすぐ伸びた鉄のパイプが砲塔。
こんな所から大砲の弾が出るなんて、未だに信じられない。
全てが、昔のドイツ軍が使っていたティーガー戦車そっくりというけど、何でタイガー戦車と呼んではいけないのか、民間の大学生から徴兵されたこの戦車兵は、年配の指揮官達が妙に発音にこだわる、その理由がわからない。
というか、軍隊なんて何も分からない。
マンガとカップラーメンと、コンパとコミケに熱を入れていたら、ある日、政府から封筒が送られてきて、『期日以内に返送しないと刑法により罰せられます』なんて封筒に宛名よりデカデカと赤字で書いてあったから、何も知らずに入っていた書類に名前と住所と電話番号だけ書いて、同封されていた封筒に入れて返送したら、数日後にアパートに兵隊が来て、トラックに乗らせられて区の体育館に連れて行かれた。
何だと思ったら身体検査だという。
これが徴兵検査だと、その時知った。
パンツまで脱ぐよう命じられた後、素っ裸の同じ年配の男の列へ並ばされた。
便所や銭湯でもない所で、他人のペニスを見たのは初めてだった。
身長、体重、その他もろもろの検査があって、身長が足りないという男が、「まぁ、いいだろう」と書類上５センチ身長が伸ばされていたり、１００キロを超えるデブがマイナス３０キロくらい痩せていると書かれたり、いろいろある会場をたらい回しにされた後、性病検査が待っていた。

年配の医者が、自分の身体をしげしげと眺めた後、股間を見た途端、「もう一枚脱いで」と言われたが、あれは一生忘れることの出来ない屈辱だ。

早めに何とかクリニックで手術しておけば良かったと思ったが、横からのやりとり。

「臭せぇな！チンカスくらいとっておけ！」

「剥けない！？それでも男か！おい、メスもってこいっ！俺が開いてやる！」という怒鳴り声と悲鳴が聞こえた時は、正直、笑ってしまったものだ。

「仮性でよかったね。君」

医者のその言葉に頷くしかなかったのだから。

そして最後に面接だ。

ヤクザの親玉みたいな強面のおじさんの前に座らされ、後ろを屈強な男、二か三人に立たれた。

まるで噂に聞く組事務所へ連れ込まれた気分だった。

何だよ。この体重と脂肪は……どういう生活してんだよ。

資格は自動車免許だけ？

おいおい……ＡＴ限定って、キンタマついてんのかよ。

職業、大学生？

あーっ。どうせロクに行ってないだろ？

ウソいうなよ。

出席記録はここにあるんだよ。

何だよ。こりゃ。

学費、親が出してるんだろ？

こんなの見たら泣くぜ？送ってやろうか？

おい、これで学士様になろうなんてふざけてるにも程があるんだよ。

だからよ――大学に出ていなくても卒業資格は与えてやるよ。
今なら、どこの兵科に行きたいか選ぶことが出来るぜ？
悪い話じゃないだろう？
どこの兵科に行きたい？

へいか？天皇陛下が何ですか？
そう訊ねて、目の前の男がどれほどのパンチ力があるかを生で味わわされた。
隣のブースからは怒鳴り越えとモノが壊れる音と悲鳴、さらにセロリか何かをへし折ったような音が連続して聞こえた。

あーあ。
やりすぎんなってあれほど言ったのに、あのアホが……。
なぁ。

床に転がった彼の胸ぐらを掴んだ男は、多分、彼としては優しく言った。

死にたくねぇだろ？

それから2ヶ月。
彼は住み慣れた東京から、こんな田舎に来ている。
歩くのが苦手だと言ったら、ＡＴ限定でも砲手くらいにはなれると言われて戦車兵にさせられた。
訓練校で戦車の操縦を試されたら意外と才能があると言われ、気がついたらこんな戦車の運転をやらされている。
戦車長も砲手、そして装填手も社会人からの徴兵で、あまり詳しいことはわからないという。

――――命令されたら撃って、命令されたら逃げる。

――命令されていることだけやってれば、少なくとも責任問題にはならない。

５０過ぎ――実の親父と同い年だという戦車長はいつもそう言っている。

この戦車長が、背が低くてひょろひょろして頼りないことこの上ない。

戦争が始まって真っ先にリストラされて家族にも逃げられたというが、その冴えない風貌と、何より命令待ちの消極的すぎる態度から見て、それが当然だとさえ思える。

志願した理由を聞いたら、職安で兵隊を薦められたからというから、余程だ。

砲手と装填手も自分より年上だが、過去を語りたがらない。

二人とも「殺す」が口癖みたいなもので、操縦にミスして砲の射撃を邪魔すると容赦なくケリが飛んでくるし、普段から無口で、何か話しかければ睨み付けてくるから怖い。

この戦車部隊で歴とした戦車兵としての訓練を受けているのは、多分中隊長だけだろうというのが、部隊内でのもっぱらの噂だ。

よくこれで軍隊やっていられると思う。

ティーガー戦車のあちこちには、昨日、みんなでくっつけたシュルツェンという追加装甲が施されている。

薄い鉄板を、装甲よりかなり浮かせてたケージと呼ばれる鉄格子みたいなパーツと一緒にくっつけた。薄いとはいえ、かなり重くて腕の筋肉痛が未だに抜けない。

シュルツェンはドイツ語でスカートの意味で、魔族の攻撃に対する有効な防御手段だと、作業中にぽつりぽつりと教えてくれたのは石井と名乗った装填手だ。

過去は何をしていたのかは教えてくれなかったが、目つきが怖すぎるし、「俺は手が命なんだ。操縦ミスして俺が手を失ったら殺した挙げ句、化けて出るぞ」と脅されてもいる。

この腕で大丈夫かな……。
ちょっと心配だ。

そんな彼の前に広がるのは建物がほとんど吹き飛ばされた県境の景色。
あちこちに地雷が埋められた地雷原だ。
対戦車用だから余程のデブでもなければ踏んでも大丈夫だというが、戦車で踏んだら命はない。
そこに妖魔やメースが入り込んでくれたら、奴らめがけて自分達は戦車砲や３０ミリガドリング砲で十字砲火を浴びせる手はずになっている。

うまくいってくれない場合は……考えたくない。

そのために……。

「おいおい」
戦車の前を歩く将校達のだみ声が聞こえ、彼は車内に首をちぢこませた。
待機中はハッチを開いていて良いというが、どんなことで、どんな因縁をつけてくるかわからないのが偉い人なんだと、戦車長は言っていたし、実際、そういうものだと思う。
「メサイアが予定の半分も来ていないじゃないか！」

戦車兵は、そっと前を見た。
小豆色に塗装されたメサイアが数騎、並んでいる。
前から並んでいるが、戦車兵にとっては、それが敵を呼び寄せる広告塔になっていないか心配で仕方ない。
「文句言ってやる。おい、あれはどこの国だ！」
「はっ！マラネリでありますっ！」

「ドイツはどうしたんだ！ドイツ軍が来ているはずだろう！」
「わかりませんっ！」
「俺の質問にわかりませんとはどういうことだ！俺の顔にドロを塗るつもりか！」

うわぁ……。
戦車兵は内心で舌を出した。
俺、もしかしてラッキー？
あんな理不尽言うのが上官だったら、俺、耐えられねぇ。
くわばらくわばら。
戦車兵はそう呟くと、車内に完全に閉じこもった。

そんな彼の前に居並ぶのは、ドイツ軍と別れたマラネリ軍のシュツルム・ディアス隊だ。
殿下も山吹色に塗装されたマデリーンで出撃している。
何故山吹色かと訊ねられたら、「金の色」と殿下は真顔で答えるだろう。
少なくとも、金色に塗装された天皇専用騎を準備している日本人に言われたくないだろうが……。
「敵に動きなし」
おクマさんがＭＣＲから教えてくれた。
「……おかしいわね」
「おかしい？」
「そう。もし動くならそろそろじゃないと」
「何かあるのか？」
「補給所へ補給チームが入るまで後５分……航空攻撃にしても、制圧射撃にしても、動きがまるでないのはおかしいわ」
「今回は、魔族軍も情報を手に入れていないんじゃないか？」
「そうかしら……」

おクマさんは、その筋肉豊かな腕を組んで唸った。
「なにかこう、すっきりしないのよ」
「どれくらい？」
「便秘の後に開通してね？ウンコがたっぷり出ておめでたいはずなのに、腸の奥にカスが詰まっているような……」
「……複雑だね」
「でしょう？ちょっと哲学的すぎたかしら」
「どう回答して良いかは数学的すぎて難しかった」
「ほほっ」
笑ったおクマさんの耳に、通信アラームが響いた。
「あら？レルヒェ陛下達から……通信よ」
「何て？」
「……」
「おクマさん？」
「一体？」
「どうしたの？」
「敵が上空に出現。現在交戦中」
「えっ！？」
「……どうやって、ここを突破したの？」

「撃ち落とせっ！」
雲の中から次々と降下してくるのは飛鼠（ひそ）達だ。
雲から出て自由降下で地上を目指す彼等を地上から狙うのはドイツ軍のデュミナス達。
狙撃を主な任務とする部下達めがけて怒鳴りながら、エレナはたまらずに叫んだ。
「連中、どこから沸いてでたの！？」
「不明」

ヘルガが鋭く答えた。
「雲の中に反応は何もない、まるで雲の中から生み出されているみたい！」
「馬鹿なっ！そんなの反則じゃないっ！」

同じ頃、
「相当強力な」
？ヴィーグリーズ？のＭＣＲで、状況を分析していたイリスは言った。
「結界を展開出来る飛行艦を投入している模様……です」
「上空に上げれば叩けるか？」
「否定（ナイン）。こちらのセンサーを完全に沈黙させています。そんな強力な結界を展開している敵に安易に近づくのは危険です」
「……ここから叩くしかないか」
「ヴォルフ？」
ブリュンヒルデから通信が入った。
「ネズミ共を叩くだけにする？」
「それしかあるまい。吐き出すモノを吐き出せば、敵は退くだろう」
「……そうね。そうお願いしたいわ」
ブリュンヒルデは頷いた。
「敵も、まさかここに私達がいたなんて、想定外でしょうからね」

その日、魔族軍の降下部隊に配置された飛鼠達で地上に降下出来た部隊は皆無。
前衛の殿下達は魔族軍と交戦することなく日没を迎えた。

その夜のこと。

カタカタカタ

暗い室内にパソコンのキーを打つ音だけが響く。

「……」

パソコンの前に置かれたパイプ椅子に座っているのは美川だ。

無言でキーを叩き続けた美川は、深いため息をつくと、最後のキーを押した。

ダウンロード中

その表示が出て、すぐに消えた。

USBメモリを素早く抜き取り、パソコンを閉じた美川が、席を立とうとした途端。

パッ！

入り口から向けられた鋭いライトが、美川を照らし出した。

「っ！！」

「――――それを」

強い光に照らし出されて実を固くした美川の耳に女の声が届いた。

「何におつかいなのかしら？美川大尉」

「さぁね」

美川は、椅子を蹴って部屋から飛び出そうとした。

半騎士とはいえ、憲兵風情が相手なら十分に相手になれる自信が美川にはあった。

すでに念入りに逃走用ルートも車も基地の外にまで用意してある。

逃げられる。

彼には、その自信があったが――

「第９中隊です」

ただ、その名前の前に、彼の自信は無残にも打ち砕かれてしまった。

第９中隊。

近衛メサイア部隊の内部監査、そして粛正を担当する部隊。

憲兵よりも上位にいる――執行機関だ。

「周囲は騎士部隊によって包囲されています。抵抗は無駄と思って」

そこまで言った女は、言葉を止めた。

「……みさきさんでしたっけ？可愛いですね」

そう、話題を変えた。

「……」

美川は椅子に腰を戻して両手を挙げた。

「――結構」

ドカドカと床を踏みならす音がして、乱暴に腕がねじ上げられた。

腕に、冷たい金属の感触と共に、三回、ガチャという音がした。

その光景は、見たくなかった。

「美川優司」

その声と共に、目の前に一枚の紙が突きつけられた。

「あなたを情報漏洩罪の容疑で逮捕します」

「……一つ、教えてくれ」

体中を憲兵達が叩いてボディチェックが始まる。

タバコや財布といった一切が没収され、袋に入れられる中、

「何か？」

美川は立ち上がると相手の女の顔を初めて見た。
まだ30前の緑がかった髪をショートにした気の強そうな女がそこにいた。
美川は不思議と目元の優しいさが印象に残った女に訊ねた。
「何故、わかった」
「さぁ？」
女は肩をすくめた。
「死刑になる時に訊ねたら？私にそんなことを答える義務はないわ」
「……そうしよう」
「――――連れて行け」

美川は部屋から連れ出されると、すぐに建物の外に出された。
それまで苦楽を共にしてきた仲間の姿はない。
しん。と静まりかえった建物の中は、恐ろしく冷たかった。
通路という通路に武装した騎士と思しき兵士達が立ち、こちらを睨み付けている。
本業がここまで御出陣じゃ……。
美川は心の中で笑った。
半端物の俺が逃げられたワケもないか。

後ろから無言で小突かれて、バンの荷台へと乗り込むよう命じられた。
薄暗いバンは護送車だった。
中には二人の憲兵が座っていて、美川は警棒で示された椅子に無言で腰を下ろした。
そして、扉が閉められた。

どこへ行くんだ？
何時間くらいかかる？
今、何時だ？
トイレに行きたいんだが。

憲兵達は、何を話しかけても反応さえしない。
まるで美川がそこにはいない。といわんばかりだ。
ただ、車が走り続けている音だけがする。
時間の感覚が狂って、一体、何分車に乗っているのかさえわからない。

「――――なぁ」
美川はそれでも懲りずに話しかけた。
「せめてタバコくらい、くれないか？末期のタバコになるかもしれないだろう？」

憲兵は互いに顔を見合った後、頷いた。
二人のうち、年配の方がポケットからタバコの箱を取りだした。
「お前とはしゃべるなといわれているんだ」
そういうと、美川の口にタバコをくわえさせた。
「どうせ銃殺。家族がどんなメに合うんだろうなぁ……下手すりゃ娘が風呂に沈むってのに何考えてんだ。このバカ」
ボッ。
ライターに火がつけられ、美川は息を大きく吸った。
「家族のことを考えたのか？」
「家族のためさ」
「ふん」
憲兵はライターをしまうと、席に戻った。

――――さて。

美川は軽く床を踵で叩いてみた。
とてもではないが、蹴ったり殴ったりしてどうこうなる程、ヤワではない。
どうしたものか。
このままなら、取調室と噂に聞く拷問室の間を行ったり来たりだろう。
もし、全部喋っても無事では済まない。
死を免れたとしても、刑期を終えて出所した所で、死ぬのが早くなるか遅くなるかの違いだ。
考えてみれば、憲兵のいう通り、何考えてんだ。このバカ。
自嘲気味に美川が手錠のかかった手にやっとタバコを掴んだ瞬間――。

美川の世界が一転。
文字通り、一回転した。

「――おい」
はげしく揺り起こされる感覚に、美川は暗黒の世界から引き戻された。
「生きてるな？」
自分の顔をのぞき込んでいるのは、さっきの女とは別の、もう少しだけ若い女だった。
レタスグリーンの長髪を結い上げたスーツ姿の女。
美川は頷くと、よろける足で立ち上がった。
目の前では、横転した護送車とパトカーが炎上している。
開かれたドアの下に横たわっている男が何故動かないのかは考えたくさえない。
「動くな」
女は乱暴に美川の腕を掴むと、その場に座れと命じた。

「チェーンを切断する。それとも腕ごと切り落とされたいか？」
女は短剣を引き抜いた。
「頼む」
美川は女との身長差を考えてひざまずいて手錠のかかった腕を差し出した。
ブンッ
女は前置きもなく短剣を振り下ろした。
それだけで、手錠の頑丈なチェーンがあっさりと切断された。
「さすが……というべきか」
美川は腕の具合を確かめながら立ち上がった。
「誰に捕まった？」
女は美川に拳銃を手渡しながら訊ねた。
「憲兵なら逃げればよかったものを。間に合ってよかった」
「第９中隊だよ」
「――――何？」
「どこから嗅ぎつけたか知らないが、第９中隊だと名乗っていた」
「……」
「俺が厄介モノになったか？」
「元から」
そう答えかけた女めがけて、美川は拳銃を構えると何も言わずに二発、発砲した。
「っ！？」
驚く女は、自分が撃たれていないことに初めて気付いた様子で後ろを振り返った。
膝で立っていた、憲兵が胸を押さえて倒れる所だった。
先程、美川にタバコをくれたあの憲兵だった。
「……悪く思うなよ？」
美川は小さく敬礼じみたことをした。
「これも家族のためだ」
「……行こう」

女は美川をせかした。
「これで戻れないぞ」
「家族は保護してくれているんだろう？」
「約束通りだ。少なくとも、お前の罪と娘の治療は別だ」
「本当だな？」
「ここまでされて、それで疑うか？」
「だとしたら？」
「なら選べ――死ぬか家族と生き延びるか」
「答えは聞かずともわかるだろう」
「これでお前も、完全にこっちの人間というわけだ」
「……ああ」

道ばたに止まっていた軽急便を擬装したトラックの荷台の中は、二人が隠れるには十分なスペースが確保されるように擬装されていた。
軽自動車を利用した輸送便は、燃料が不足気味のこの時局の中では重宝される存在だ。
数代が列を作った所で怪しまれるものではない。
「よし。通って良いぞ」
「ふぅ……っ」
検問を過ぎ、車が走り出した所で、美川は安堵のため息をついた。
「タバコ、あるか？」
「吸わない」
「そうか」
「……何か、寝返りの代金を持ってきてくれると嬉しいが？」
「先日のは」
「裏をかかれた。こっちは大損害だ」
「……だろうな。攻撃手段がワンパターンすぎるんだ」
「そう思う……で？」

「パソコン、あるか？」
美川は右の靴を脱がすと、メモリーカードを取りだし、女に手渡した。
「自分で価値を計ってくれ――月城少佐」
「ふん」
カードを受け取り、脇においてあったノートパソコンを開いたのは、何と月城真菜だった。
「……大神軍港で建造中の新型艦の情報」
「お前達……っていうか、もう俺達にとっては、こんなものに価値はないか？」
「さてな……他には？軍の移籍データに、新型の斬艦刀のデータ？これは使えるな」
「命一つ位の価値はあると嬉しいがね」
「まぁ、そうだろうな……ん？」
「ああ。そのデータな」
キーを操作する真菜の手が止まった。
「偶然、発見したんだ。軍の過去の研究データかもしれない」
「……光武計画？」
カタカタ
封印されていたデータが解凍され、出現したのはＰＤＦファイルだった。
形式は随分古く、枚数は膨大な数にのぼる。
「……遺伝子操作に関する技術情報？」
怪訝そうにページをめくり続けた真菜は、あるページにたどり着いた。
「……統べる力を持つ人造人間（クローン）培養計画と、それに基づく優良人種たる日本人による世界統治計画？」
フンッ。
真菜は鼻で笑った。
「どうやら、価値はなさそうだ」

「そうか」
美川少佐は頷いた。
「残念だ」
「ああ……ご大層なタイトルがついているから、どんな内容かと思ったが」
真菜は数ページごとに飛ばし読みするようにキーを叩いた。
中身なんて読んでいない。
ただ、ページだけが飛んでいく。
「どこかのヒマ人が書いた妄想だ」
カタカタ
途中で書類から数式の塊になり、そしてさらにページが残り少なくなった所で、中身は履歴書のようなものに切り替わった。
「……ん？」
名前の欄にはナンバーが振られている。
顔写真はまだあどけない子供だ。
「……」
カタカタ
一枚ごとにめくると、まず、子供の顔写真入りの、恐らくフォームが決まっているんだろう書類があって、二枚目と三枚目に何かの記録が書かれている。
場合によっては顔写真がなく、ナンバーと数行の記述があるだけのものも少なくない。
「こ、これは……？」
真菜が驚いたのは、顔写真のついているケースの最後のページに貼り付けられている写真だ。
それは、一目では何の写真だかわからない。
当然だ。
理解した途端、真菜は胃液を吐き出さなかったのが奇跡だと思った。
子供の生体解剖の写真だ。

真菜は口元を抑えると、丁寧にキーを叩いた。

被験者ナンバー　０３８
性別　男
〇〇年１１月１８日培養成功を確認
〇×年０３月２５日実験供与のため処分
年数から、この子は９歳まで育てられて、そこで何かの実験のために殺された。
その詳細な記録が書類に書き込まれている。
それが何百枚、つまり、何百人と続いているのだ。

「一体……これは……？」

真菜は最後のページに飛んだ。
最後のナンバーは３７５号。
そこには、あどけなく笑う3歳くらいの女の子の写真が映し出されていた。
被験者ナンバー　３７５号
性別　女
凸凹年１２月０８日培養成功を確認。
凸×年０３月０１日計画中止に伴い、放棄処分。（　　）へ養女として譲渡。機関長命令により記録の全てを廃棄処分にする。

最後は殺処分だけは避けられたか。
黒塗りの部分があるせいで、誰に渡されたかわからないが、養子になったなら、まだ生きているだけマシだろう。
生年月日と思しき記録からすれば、多分今頃は中学生か……。
それなら、その前は？

被験者ナンバー３７４号

性別　女

「……ん？」

真菜が驚いたのは無理もない。

そこには、被験者ナンバーと性別だけが書かれているだけ。

写真でさえ、黒いマジックか何かで塗りつぶされている。

今までほとんどの記録が綺麗に残っていたのに、この一人だけ、まるで全てを掻き消すように記録が残されていない。

「３７４……号？」

生年月日と思しき記録もない。ただ、真っ白に近い用紙を前に真菜はしばらく考えた。

「さん……な……」

そして行き当たった思いつきに笑った。

「まさかな」

そう。それが正しければあまりに安易過ぎるし、発想が貧困だ。

この書類は読んでおく必要があるだろう。

横を見たら美川少佐は口を開けて寝ていた。

「中佐」

壁の向こうから声がした。

「そろそろ到着です」

真菜は返事の代わりにノートパソコンを閉じた。

ｓｅｌｌ　ｏｕｔ　第四話（後書き）

ううっ……戦闘シーンが書けなかったよぉっ！
というワケで、ストーリーの裏設定のほんの少しだけ公開です。後悔しています。公開処刑されたい気分です。
３７５号とは？３７４号とは？人としてこんなことは考えてはいけないのです。人は考えなくても生きていけます。みなさん、忘れましょう。

mess up 第一話

「逃げられた？」
「はい」
「ネズミをとっ捕まえて逃げられたというのか」
「本官は命令通り、そして、軍規則に則って憲兵隊に引き渡しました。最後まで適切な行動をとったと信じます」
「その結果がそのザマか？」
「本官の任務はネズミの捕縛であって、護送は含まれておりません」
「憲兵隊に身柄を引き渡した時点で自分の任務は終了していたと？」
「はい」
「言い訳なら、もう少し真実味を持たせてもらいたいものだな」
「言い訳？」
「議論は無駄だ。後のことは追って伝える。報告は受けたよ」
ガチャ。
電話を切ったのは、近衛軍メサイア大隊第９中隊中隊長の辻将元（つじ・まさもと）中佐だ。
でっぷりとした三段腹をワイシャツの下に抱えた中年男。
眼が細いのと色白なせいか、顔立ちが少し子供っぽい。
偉そうに机にふんぞり返っているより、出先で頭を下げているか、公園で昼寝でもしているか、あるいはせいぜいが飲み屋街に必ず一人はいるだろう酔っ払いが似合う、そんなどこにでもいそうなタイプの男。
だが、その所属する部課の任務と彼の権限は、その外見に全く似合わない。
それだけは確かだ。
「待たせたな」
電話を切った後、辻はデスクの向こう、ソファーにひっくり返ってスポーツ新聞を読んでいた男に声をかけた。

「せっかく顔を出してくれたのにわるかったね。後藤さん」
新聞から顔を覗かせたのは、あの後藤だった。
「いや――忙しそうで何より」
「イヤミだねぇ」
辻は立ち上がると、壁のフックにひっかけていたジャケットの袖に腕を通した。
「俺の仕事を知っていてそう言うんだから」
「ははっ」
「聞いたよ。母艦が沈んだ所に巻き込まれたって？」
「ああ。さすがに死ぬなと思ったよ」
「よく言うさ。あんたは世界の最後まで生き残るくせに」
「大きくでたねぇ」
「少なくとも、貸した飲み代返してもらうまで死んでもらっちゃ困るよ」
「いや……それは忘れてくれると嬉しかったんだけどねぇ」
「金の貸し借りはあの世までついて回るらしいぜ？せいぜい覚えておくこった」
「いいのかい？なにか騒ぎが起きたようだけど？」
「ああ。放っておいていいさ。あんなカタブツの不始末につきあっていられるか」
「カタブツ……ねぇ」
「後藤さんの所こそ、部隊が潰されたって聞いたけど、大丈夫なのかい」
「大丈夫も何も」
後藤は肩をすくめた。
「メサイアは全滅、部隊にいた騎士達はちりぢりにされて、何しろってのか」
「補充は」
「さぁね……戻してくれっていっても、人事はヒトゴトだしね」
「そうか」

辻は少し考えて、顎を撫でた。
「……頼むとするか」
「何？」
「飲み屋で話すけどさぁ。引き取って欲しいヤツが二人いるんだよ」
辻はドアを開け、後藤を促した。
「そのうちの一人がさぁ。面白いヤツ、追いかけていてね？こいつが後藤さんなら興味持ってもらえそうなワルで」
「俺が？へえ？どんなヤツよ」
「連続銀行泥棒」
「ドロ？強盗じゃなくて？」
「そうなんだよ。うちの大月っていう、これまた使えないのを回してるんだけどさぁ」
「おいおい、その仕事まで俺に？」
「頼むよぉ。どうせヒマになるんでしょ？」
「しょうがねぇなぁ……」

●宮城県　某所
「乗用車2台、それから」
制服姿の警察官がちらりと目の前の女に視線を向けた。
「――あんたの言う“護送車”が1台」
そろそろ定年も近いんじゃないか。
それほどの歳を顔に刻んでいる彼は、バインダーに挟んだ書類に書き込みながら続けた。
「近衛さんにケチつけるつもりはないけどさぁ」
彼の後ろでは、さっきまで車が燃えていた。
横転したせいで燃料に引火したのだ。
「消防車の放水を受けてやっと鎮火したものの、夜中に車両火災なんて、とんだ迷惑だ。今、俺達だって避難民だなんだので忙しいん

だよ。事故なら余所でやってくれ」
「事故？」
ジロリ。
そう睨み付けたショートカットの女性の眼光は鋭い。
あの美川を逮捕した女だった。
「これが、事故だと？」
「そう処理しろと、上から命令が来ているんだよ」
その眼光に警官はひるむことさえない。
この程度でひるんでいたら現役で制服警察官はやっていられないのだ。
「末端の警官にその辺は聞かないでくれ――書類にサインしてくれ。それで世の中、丸く収まるんだ」
「……」
「よし……事故車両はレッカーで移動するから、明日にでも警察署に取りに来てくれ」
書類を受け取り、言うだけ言うと、警官はパトカーに向かって歩き出した。

無理もない。

残された女はそう思う。
誰だって近衛、しかも泣く子も黙る憲兵隊に関わろうとは思わないだろう。
「夏川大尉」
警官とのやり取りが終わるのを待っていたのだろう。
若い男が夏川に近づくなり敬礼した。
「――これを」
男は、白いハンカチに包まれた、鈍い金色に輝く小さな金属の塊を夏川、そう呼んだ女に見せた。
「近くの藪で見つけました」

「憲兵隊の人的損害は」
「軽傷です。死人は出ていません」
「出ていない？憲兵達には被弾していないのか？」
「いえ。４人のうち３人に撃たれた痕跡があります。ただ、全員の着用していた防弾チョッキを調べたところ、弾丸は全てチョッキ内で止まっていました。ほじくり出した所、弾種は全てゴム弾と判明」
「ゴム弾？」
「この薬莢はライフル用です。車両に弾痕がないことから、全てタイヤを狙って発砲したものと思われます」
「移動中の車両のタイヤを狙って、３台を止めたというのか？」
「そう……としか」
「憲兵を撃ったのは？」
「薬莢がないことからリボルバーが使われたと判断できます」
「……むぅ」
「あの……中隊長は何か指示を」
「さぁな」
彼女は肩をすくめた。
「この事件には、興味がないご様子だ――牧村、車を出せ。宿舎に戻る前に食事にしよう」
「で、でも、まずくないですか？」
「何が」
「逮捕者に逃げられたんですよ？」
「逃げられたのは私達ではない。憲兵隊の失態だ。何しろ、私達の任務は逮捕までだ。護送は憲兵隊の担当。
牧村、貴様の任務には、いつから護送までが書き加えられたのか」
「そ……それは」
「余計なところまで責任を感じる必要はない」
女――第９中隊所属、夏川千晶大尉はそう言うと、部下である

牧村少尉に車を出すように再び命じた。

●大分県大神軍港　狩野重工造船ドック

造船所の中は建造、或いは修理される艦で一杯だ。

上は金剛級戦艦から下はタグボートまで艦の種類は事欠かない。

その一角、というか最も巨大なドックを占領しているのは、金剛級戦艦をはるかに上回る大型艦だ。

全長も横幅も、存在するだけで、普通の軍艦よりも相当な大型艦であることを教えてくれている。

「本当にいいんですすか？」

「仕方ないだろう？」

造船技師を従えた近衛の将官がドック脇にある作業台に登るラッタルを登り終えた。

若く鍛えられた精悍なその顔立ちには汗一つ浮かんでいない。

１５メートルの高さを持つその作業台に登って尚、艦橋を横に見ることが出来ない。

まるで立ちはだかる壁を前にした気分だった。

「艦はいくつあっても足りないんだ」

「それを言うなら、我々造船技師だって命がいくつもあるわけではありません」

「言ってくれるな……悪いとは思ってるんだ。少なくとも、俺達現場はな」

「司令部に言って下さいよ。命令すれば艦がケツの穴から出てくるワケはない。人間様だって十月十日が必要だって」

「十月十日を待っていたら戦争は負けるよ。物量だろうが兵力だろうが、勝っているのは」

将校は、少し考えてから続けた。

「……いかんな。犠牲者の数より他に思いつかん」
「負けの数ですよ」
「ああ。それもあったな」
苦笑して頷いた。
「納税者の方には申し訳ないとでも言っておくか」
「まぁ、俺達ゃそのアガリでメシ食わせてもらってる身分ですからね」
技師は脇に丸めて抱えていた図面を広げた。
「６６番艦。艤装の進捗は約８割です。本当に９割で止めていいんですか」
「メサイアの運用に支障が出なければそれでいい。残りはどこだ」
「下面装甲と……乗組員用の福利施設ですね。電気系統を少し変えたんで」
「乗組員には寝床とトイレだけ与えておけばいい。それにしても今更に電気系統の見直しだと？」
「図面を引いたのは俺達じゃないですよ。誰ですか？コイツに大口径の重ＨＭＣ（ハイ・メガ・カノン）を搭載してくれたのは。おかげで電力不足がひどすぎる。あと１基、専用のエンジンが欲しいんです。何とかなりませんか」
「戦後まで生き残ってスクラップになってなかったら考えるさ」
「エンジンが予定より８割程度と小さいから、出力確保するためにいろいろと工夫してるんですよ。俺達も」
「新設計の中型補給艦の両脇にコンテナ４つくっつけて、機関部を２つ並べて、さらにそこに艦橋をおったてるなんてバカやらかしたのは、確かに俺達だ――ただな」
ふうっ。彼はため息混じりに言った。
「まさか、そんないい加減な設計が採用されるとは、誰も思ってなかった。それは確かだ」
「勘弁して下さいよ」
技師はあきれ顔で頷いた。

「この設計じゃ水に浮かぶことはないし、主砲は水ん中に沈んじまう」
「エアロックの方は完璧なはずだ。あれの担当は俺だ」
「ええ。気密検査は合格してますよ。機関部以外、各ブロック気密は完璧なんですけどねぇ」
「――ああ」
一昨日スクラップになった“鈴谷（すずや）”から分離した機関部の組み込みが終了したばかりだ。
ご丁寧に、あの艦隊副司令の嫁殿は“伊吹”の機関部まで連結して使っていてくれていた。
白州を失ったおかげで魔晶石推進機関用の魔晶石が入手出来ず建造が停止していたこの艦に必要数の魔晶石エンジンシステムを組み込むことが出来るのは、確かにあの嫁殿の功績だろう。
「サイズが合わないから無理矢理組み込んだ。それは確かだな」
「そうです。出力はまぁ……合格ですし、でも安全面から見て……ちょっとねぇ」
「浮かんでメサイアを運用出来ればいい」
将官は言った。
「要は、こいつを一日も早く前線に送り込めればそれでいいんだ」
「運用上で出てきた問題点は？」
「乗組員は文句を言わせるために乗せるわけじゃない」
「軍艦なんて、不自由なモノですからねぇ……慣れますか」
「慣れなきゃ諦めてもらうまでさ」

●山形県　魔族軍陣地
ティアリュートがホーサーに教えを叩き込まれる一時間ほど前に話を戻す。
「……女を預かって欲しい？」

「ああ」
魔界では一般的な三次元通信をかけてきたのはズルドだった。
「“例の娘”だ」
「ヴォルトモード卿の“鍵”だったという？」
「正直、俺達も扱いに困っていてな。お前の身の回りの世話でもどうかと、そう思いついたんだ」
「メイドなら必要ない。シーラ達がおる」
「あの女だってこれから出陣もあるだろう。ティアリュートにしてもそうだ」
「むぅ」
「弟子にしろとはいわぬ。なんでも、メースには乗せられないそうだ。扱うことが出来ないそうで」
「作りの問題か」
「らしいな……かといって歩兵にすることも出来ず、情報に触らせたり、雑用を命じるには厄介だ」
「メイドとしてガムロ殿なり、お前の所で使えばよかろう」
「俺の所は男所帯だ。下手に女を入れたくない」
「娘に下手な勘ぐりをされたくない――と？」
「年頃の娘はいろいろとうるさいんだ。部下の手前もある。女はいろいろと厄介だ」
「だな。ガムロ殿は」
「女を預けてみろ。即座にアイリーン殿に殺されるわ」
「女は怖いな」
ホーサーは苦笑を漏らした。
「かといって、下手な所に回すことも出来ぬ」
「そうだ。その点、お前の所なら女も多いし、間違いはないと思ってな」
「ヴォルトモード卿の“鍵”だった女となれば、扱いには困るな」
「そう……解放後に石にでもなってくれれば助かるのだが、そうもいかぬ。しかも、人類側にいた時の記憶を持っているのだ。逃げら

れでもしたら大変だ」
「さもありなん」
ホーサーは頷いた。
「わかった。シーラ達には話をしておこう」
「頼む」
「それで？あのシーラといかいうのは」
「昨晩から腹を壊して寝込んでいる。アイバシュラを食べ過ぎてな」
「――しまった」
ズルドが突然立ち上がった。
「どうした？」
「フィーリアにアイバシュラ肉の缶詰を送ったんだ。そういえば、あいつも身体が心配だ」
「カヤノとかいう女教師もいるだろうに」
「カヤノは北方部族だ。アイバシュラなんて食べたことはないだろう。万一、俺の説明不足でフィーリアが腹を壊したとなれば、俺があの女に喰らわされる」
「心配なのは、娘の身体か、それとも、そのカヤノに逆ねじ喰らわされる事か」
「す、少なくとも、俺はカヤノなぞ怖くないわっ！」
「――ほう？」
ホーサーは目を細めた。
「……相変わらずじゃのぉ」
「何がだ」
「いや？」
「とにかく、明日にでも訪問させるよう手はずをとっておくので頼む」
「ああ。シーラの面倒でも見させるとしよう」

翌日。
「ううっ……」
げっそりと痩せたシーラがもぞもぞと布団から起き上がり、腹をさすった。
「や、やっと収まった……」
はぁっ。
地獄を見た気がした。
脱水症状の三歩先を見たあとで、やっと止まってくれた。
もう出るものはない。
少し痩せることが出来たかな……。
シーラは力尽きたように布団にひっくりかえった途端、
ガンッ！
枕元に置かれた目覚まし時計に後頭部をぶつけて悶絶した。
「……っ！な、ん、て……」
もう寝よう。
こんな時はふて寝するに限る。
そう思って掛け布団に手を伸ばした時だ。

とてとてとて……
廊下を誰かが歩いてくる。
「痛たたっ……何よ」
声からして女だ。
しかも若い。
「ボケかけた年寄りが孤独死しそうになってるから、面倒見てやってくれって言われたから来ましたって、本当のこと言ったら、なんで叩かれるのよぉ」
鈴を鳴らしたような綺麗な声。
歌手にさせたら売れるんじゃないかな。
そう思った。
だが――

シーラは不思議な感覚に、布団を掴んだ手を止めた。
この声は――――どこかで聞いた気がする。
でも、それがどこだかわからない。
どこ……だっけ？

「おはようございまぁす」
ガラッ。
不意に障子から開かれ、金色の妖精が朝日に照らし出された。
「お加減、いかがですか？」
黒いメイド服にエプロンドレスを身に纏う、眩しいほど金色に輝く髪を持つ美少女が、きちんと正座してこちらの返事を待っていた。
ただ座っているだけなのに、どうしてこんなに気品を感じるのだろう。
金髪だから？
そういえば、あのティアリュートも、普通にしていたらお姫様だもんなぁ。
ふと、そんな事を考えて相手を見ていたら、何故か相手がギョッ！とした表情を浮かべた。
何だろう？
そう訝るシーラの前で、驚きから呆然とした顔へと表情を変えた金髪の少女の肩が、そしてその細い身体が震えだした。
「……なっ」
「えっ？」
何か失礼なことしてるの？
シーラは自分がちゃんとパジャマを着ていることを確かめた。
何もおかしいところはない。
「……あの」
作り笑顔を浮かべてみたが、逆効果だったのか、少女の顔が真っ赤になった。

何故か――怒っている。
しかも、相当、かなり、恐ろしい程、。
「な……なんで」
「へ？」
「何で――」
障子の桟を掴んだ少女の手に力が籠もる。
メキメキと桟から変な音が聞こえだした。
「ち、ちょっと！？」
「うるさいっ！」
少女は怒鳴るなり、シーラに飛びかかってきた。
「なんで、アンタがこんなところにいるのよぉっ！」
「えっ、ええっ！？」

ｍｅｓｓ　ｕｐ　第二話

「――成る程」
とっくみあいの大げんかの末、障子を壊して庭にまで転がり出た二人を止め、地面に正座させたホーサーが少女の話を聞き終え、頷いた。
ホーサーは縁側に座って腕を組んでいる。
「まず、ワシがきちんとシーラに伝えておけばよかったな」
「あのね、おじいさん」
「――待て」
少女の言葉を遮ると、何故かホーサーは少女の腕を取って立たせ、シーラの前から消えた。
家の陰で二人が話し込んでいる小さな話し声だけは聞こえてくるが、肝心の話の中身は聞こえない。
しばらくした後、二人が連れ立ってシーラの前に現れた。
少女の顔からは、さっきまでのむき出しの殺気が消えていた。
自分の前に立つ少女の顔を見ると、むしろ哀れんでいるというか、自分を見下しているんじゃないかとさえ思えてくる。
どっちにしても、
むかつく。
それは確かだった。
「シーラ」
ホーサーは縁側に座ると言った。
「今日からワシ等の面倒を見ることになったフィア・ツヴォルフじゃ」
そう。
あの北米戦線の鍾乳洞で最後を遂げたはずのフィアその人だった。
美しい金髪も、その白肌も何も欠けていない。
北米戦線までと、何も変わっていない。

メイド服に身を包んだままで、何の変哲もなく立っていた。
「フィア？」
シーラはちょっと首をかしげて、そして呟いた。
「何だろう……その」
「……」
「すっごくムカつく名前」
途端にケリが飛んできた。
「何すんのよっ！」
「うっさいっ！記憶喪失だっていうから、気の毒だって、ほんの塵ほどでも思ってやった私の寛大さを裏切ったクセに！」
「それ寛大って言わないからっ！」
コツン。
ゴンッ！
二人にホーサーの鉄拳が下った。
「あ……あの……」
確実に一瞬、気絶したシーラはでっかいタンコブを抑えながら訊ねた。
「今の、なんで、私だけゴンッ！で、フィアはコツンなんですか？」
「力加減を間違えた」
「本当ですか？」
「気にするな」
ホーサーはちらっとフィアに目配せした。
「偏るものじゃ」
「……はぁ」
「さて。シーラよ」
「はい」
「朝飯がまだじゃ。味噌汁の味加減、よく教えておけ」
「は……はい」

「とにかく、お師匠様は味にはうるさい。細かい爺は長生きできないというのに、アレは最悪だ」
「意味わかんない」
「……ねぇ」
台所の入り口で、フィアを連れたシーラは立ち止まった。
「その突っ慳貪な態度、どうにかならない？」
「……」
はぁっ。
フィアの口から出たのは失望のため息だった。
「アンタさぁ」
「……何？」
フィアは、指で自分の頭を突いた。
「本当に、ここが可哀想な人だと思っていたけど、未だにそうなんだ」
「……」
「顔といい、性格といい……ほんっとにお気の毒」
「……」
怒鳴りそうになったが、シーラは冷静に対処した。
「あなた、私の何を知ってるの？」
「……私の勘違いだって、おじいさんは言うんだけどね」
「……」
「女の勘は、外れないのよ。わかるでしょう？好きな男がどれだけ顔を変えようと、出会えばわかる」
「……」
シーラは、少し考えて、愛想笑いを浮かべた。
「わ、私……それ、自信ない」
「……だから残念だって言ったのよ。バカ」
「だ、だけど……」
「……もうっ！」
いらついた顔でフィアは腰に手を当て、右手の人差し指を突き出

した。
「人違いって事で大目に見てくれって、それがおじいさんのお願いだから聞くけど、あんたは私の知っている人に間違いないっ！私の子宮がそう語っている！」
「どこでモノみてるのよ！っていうか、だ、誰なのよ！私、自分のことでさえわかんないことだらけで――」
「いいのよ。それで。知らないことだらけでも、生きていけるわ。私みたいにね」
「そ、そんな」
「……そうね。そんなに知りたい？」
「も、勿論」
「なら、教えてあげる」
フィアは自信満々に言った。
「あなたはここに来る前、私の召使い兼奴隷だった。これは間違いない」
「それ」
何故か、シーラはそれだけははっきりと言うことが出来た。
「ありえないから」

●東京都葉月市　飛行艦隊司令部
「クビ、ですか？」
艦隊司令部、しかも直接艦隊司令の部屋に通された美夜は、直立不動のまま、艦隊司令のデスクの前で、そう訊ねた。
艦隊司令である児玉健太郎中将は、愛用のゴルフクラブを磨きながら答えた。
低い背に意地の悪そうというか、頑固そうな顔が乗っている。
「私がそんなに寛大に見えるか？」

「寛大？」
「平野少将に妻の手料理が待っているからと定時帰宅を心がけさせるほど」
何故か、児玉はクラブを磨く手を止め、ちらりと美夜を見た。
「……」
「……」
「――私は部下思いではない」
「……あの」
「何だ」
「さっきの沈黙は何ですか？」
「……怒るから言わん」
「黙っていたら奥様に泣きつきます」
「……」
「……」
「……平野クンは、君との恋人時代、君の手料理を食べて救急車で運ばれて、三日三晩生死の境を彷徨った。それを思い出しただけだ」
「――休暇の延長を願います。料理学校に通います」
「料理するなら、敵を料理したまえ」
児玉はクラブを、デスクの脇においてあったゴルフバッグに戻した。
「君は台所で包丁を握るより、地獄で釜の番人をしている方が似合っている」
「はい？」
「何でも無い。仕事に戻ってくれと言うんだ。喜んでくれ」
「……」
「仕事で忙しい夫の無事を祈りつつ、独り寝の寂しさに涙するなんて、似合わないマネをこれ以上せずに済むぞ？」
「……」
「メシもコンビニやスーパーの出来合弁当じゃなくて、軍で用意する。夫の世話なんてしなくていい。良いことずくめじゃないか。な

あ？」
「……」
「……とにかく、だ」
美夜が顔を真っ赤にして、額に青筋を立てる迫力に負けた児玉は、わざとらしい咳払いの後、視線をそらせた。
「手配はしておく。後で君のデスクに必要書類は届けさせるが、これは内示だ」
児玉は引き出しから一通の書類を取りだした。
「君を艦長職に復帰させ、６６号艦を預ける。明後日の便で大分へ飛んでくれ」
「大分？大神ですか？」
「そうだ。現在、艤装が進んでいる６６号艦を君に預けよう」
「６６号艦は……」
「そうだ。本来なら、海外派遣艦隊旗艦として設計された特別艦だ。艦橋は信濃並に広く設計されているから見晴らしはいいぞぉ？」
児玉は“どうだ”と言わんばかりに自身満々に頷いたが、
「艦政本部の一部が、勢いだけで設計図を引いて、何の事故があったか、上層部がデザインと適当に書かれた仕様書をうのみにしたという？」
「いや……過去は……いろいろあったんだが」
「建造したら、あっちこっちに設計ミスが発覚して、継ぎ接ぎだらけになった挙げ句、一部ではダメコンが効かないという？」
「……おい」
「シミュレーションしたら、あまりの扱いづらさから、人間には操艦不能とレッテルを貼られ、艦長や操舵手を公募しても誰一人応募しなかったという？」
「……貴様」
「機関開発部門から、エンジンを供与したら組織の歴史に傷が付くと言われ、機関組み上げを拒否された挙げ句、設計が設計なだけにドックから引き出せもせず、“鈴谷（すずや）”の魔晶石エンジンシステムが

なかったら解体されていたという？」
「……いい加減に」
「建造そのものが艦政本部の責任問題になっているという？」
「このっ！」
児玉は顔を真っ赤にしてデスクを殴った。
「引き受けるのか、どうなのかっ！」
「……」
しばらく、美夜は視線を彷徨わせて、ようやく言った。
「いやです」
「何ぃ？」
「い・や・だ。そう言ったんです」
「――きっ！」
思わず腰の軍刀に手が言った児玉に、美夜はしれっと言った。
「建造してから設計図書き直すような代物、誰が扱えると思いますか」
「……無断改造連発の挙げ句」
児玉は茹で蛸のようになったまま、続けた。
「設計図すら書けなくなった艦を指揮しつづけた張本人は誰だ？」
「よく運用したと思います。我ながら」
「ああ――そうだ。その才能で、こいつを動かしてもらおう」
「私は超能力者ではありませんので」
「飛行艦が艦長のナントカで動くとは初耳だな」
「とにかく、辞退させて頂きます。何でしたら、辞表書きましょうか？」
「なら、平野少将にやらせてもいいんだぞ？」
「別に」
美夜は冷たく言い放った。
「妻が自宅にいるというのに、接待だの残業だのでろくに家に寄りつかない夫がどうなろうが――」
美夜の握りしめた拳がワナワナと震えた。

今度は逆に児玉の方の怒りが、まるで美夜に吸収されたかのように失われた。

怒りにまかせ、斬り殺さんばかりに握りしめていた軍刀だが、児玉はいつの間にか、恐怖から逃れるためにこそ、それを振るいたくなっていた。

「……あんな薄情者、戦死しようが何しようが」

「お、落ち着きたまえ。葛城クン、いやさ、平野中佐っ！」

「ええ。いいんです。もう、いつ旧姓の葛城に戻っても」

「いやいやっ！ほ、ほらっ、離婚したら、遺族年金もらえないぞ」

「……お金欲しさに妻をやっているわけでは」

ポロリ。

美夜の瞳から涙がこぼれ落ちた。

「わ、わかった！泣くなっ！だが、頼むっ！６６号艦を動かしてくれっ！この通りだっ！」

何故か、命じるべきはずの児玉がデスクに両手をついた。

「聞いてくださいよっ、司令っ！あの人、酷いんですよぉぉぉっ！」

「俺に人生相談するなっ！」

「聞いてくださるだけで結構ですからぁっ！」

「俺はみのもんたじゃねぇぇっ！」

●東京都　宮城　近衛兵団司令部　メサイア大隊第９中隊中隊長室

「……また逃げられたのか」

「申し訳ありません」

辻の前で頭を下げたのは、大月中尉、かつてまだ“鈴谷（すずや）”が浮いていた頃、北陸戦線で美奈代を取り調べしたあの若い中尉だ。

北陸戦線に送られていた大月が、中隊長室を訪れたのは、上官である辻に進退伺いを提出するためだった。

「芹沢瀬菜をまたも取り逃がしたのは、私の責任です」
「少なくとも」
辻は進退伺いをデスクに放り出した。
「そうやって自分のミスを認めるだけでも、褒めてやるよ。なぁ、夏川大尉？」
「……」
大月の斜め後ろに立っているのは、美川大尉を逮捕したあの夏川大尉だった。
「私は」
夏川大尉は冷たく答えた。
「責任を問われるような失態を犯した覚えはありませんので」
「ミスを認める態度をどう思うか。そう訊ねたんだ。誰が貴様がミスをしたと言った？」
「……質問の内容からして、そうとれましたので」
「その態度を改めないと、人生幸福にはなれないぞ？」
「公私の区別はつけているつもりです」
「……」
口の中でもごもごと、何事か呟いた辻が言った。
「大月君」
「……はっ」
「正直、君には少し、荷が重すぎたようだな」
「……申し訳ありません」
「叱責しているわけではない」
その口調はねぎらうようですらあった。
「君一人に捕縛の任務を与えたのは、私の判断ミスかもしれないな。そう思ったのさ」
「……中隊長」
「芹沢瀬菜による被害は、すでに推定数百億に上る。戦争が終わった後、銀行が二つ三つ倒産して、破産して一家離散や自殺、そして心中するヤツが何人出るかは考えたくない」

「……はい」
「そこでだ。一日も早く、あの女とその一味を逮捕し、銀行の金庫から盗み出した金を回収しなければならない。わかるな？」
「はい」
「そこで、お前が取り逃がした理由をいろいろ考えた。俺は、一つ二つの偶然なら大目に見るが、三つも重なると必然だと思う」
「はっ？」
「お前、何度か“これで”って所まで芹沢瀬菜を追い詰めたことが数度あったな」
「……はい」
「それで取り逃がした理由は？」
「その都度、メースの襲撃を受け」
「そうだ。
いざとなると、必ずメースが芹沢瀬菜の救助に現れた。
お前の騎がそれをサーチできていなかった。
かといって、お前は周到に現場周辺を調べ、メースが存在しないことを確認して行動に及んでいたにもかかわらずだ。
それはログを分析する限り、お前が現場で出来る限りのことをしていた証明のようなものだ。
にも関わらず、メースは必ず現れた。
どこに隠れていた？
そして、人間である芹沢瀬菜を、何故メースが助ける？
その裏に何がいる？
俺は、そこまで読んでいなかった。
メースの襲撃を受けた二度目までは偶然だと思っていた。
……だが」
辻はデスクの上で手を組んで、真顔で言った。
「もう三回目だ。これではっきりした。メースはお前を偶然に発見したんじゃない。芹沢瀬菜は、メースという偶然に助けられて逃げたんじゃない」

「……まさか」
「これは必然だ。芹沢瀬菜は、魔族軍と繋がっている。奴さんは、リスクを冒して魔族軍の支配地域をうろつくネズミじゃない。堂々と占領地を闊歩しているんだ」
「魔族軍と、繋がっている――と？」
「ああ。例の件で俺達第９中隊にお鉢が回ってきた時は、俺もそう思っていたさ。だが、こうなればもう話は違う。俺達の任務の範囲を、芹沢瀬菜の件は超えてしまっているのさ」
「諦めろ……と？」
「そう言われたいか？」
「いえっ！」
大月は背筋を伸ばして答えた。
「自分は、狙った敵は最後まで追い詰めますっ！」
「そう。俺達第９中隊の別名は「猟犬（ハウンド）」――狗の中でも狙いをつけたら最後まで噛み付くよう訓練されている」
「はい」
「芹沢瀬菜を逮捕出来るか？」
「逮捕します」
「狙いは未だに諦めていないか？」
「諦めていません」
「荷は重いぞ？覚悟はあるか？」
「牙と、追い詰める仲間を与えていただければ」
「よし」
辻は大月の前に書類を置いた。
「大月――お前を一階級昇進の上で、ある部隊に回す」
「ある……部隊？」
「ああ。お前にとっては負担が増えるが、覚悟の上と言ったな？」
「はい」
「お前が芹沢瀬菜を追い詰めるのに必要な人員と装備を手にするために、司令部は部隊編成を認めた。中隊長は別にいるが、お前は大

尉として前線指揮官に任命される。
つまり、これでお前は一人ではなく、手下を率いて奴さんを追いかけ続けることが出来るんだ」
「はっ！」
「予定では部隊編成は二週間後だ。それまでは現場で生き延びろ」
「はいっ！」
「夏川大尉」
「――はい」
「どう思う？」
「何が、ですか？」
「何を聞いていた」
「芹沢瀬菜の件ですか？」
「そうだ。貴様ならどうする」
「私なら」
チラリ。と、夏川は大月を一瞥し、自信ありげに言った。
「ここまで失態はしません。今頃、取調室か死刑台であの女をお目にかけているでしょう」
「大した自信だ」
「当然です」
「なら、貴様も行ってもらおう」
「はっ？」
「大月は大尉に上がったばかりでいろいろ不慣れなところも多い。上手く支えてやってくれ」
「……どういう、意味ですか」
「夏川、貴様に大月の副官を命じる。以降、大月の失態は全て副官の貴様もかぶることになるのでそう心得ろ」
「……なっ」
「部下の人選は人事部と中隊長に任せてある。期待していることだ。何しろ、あの独立駆逐中隊を率いた後藤さんだからな」
「ご、後藤って！」

真っ青になったのは夏川だった。
「あのカミソリ後藤ですか!?」
「ほう?あの人の警察時代の渾名をよく知っているな」
辻の顔に意地の悪い笑みが浮かんだ。
「何か不満か?」
「い……いえ」
「もう人事は内定している。貴様に拒否権はない」
「……」
「終わり次第、戻ってこい。部隊の皆で歓迎してやる。もっとも」
辻はそこまで言って笑った。
「それまで俺と第9中隊が生き延びていたらな」

「……とはいえ」
近衛兵団司令部の入った別なビルの一室で履歴書をペラペラめくっているのは後藤だった。
「ロクなのいねぇなぁ」
「そりゃ当然ですよぉ」
後藤の横のデスクに座った涼宮中尉がモニターに映る掲示板から視線を外さずに言った。
「腕の立つのなんて、みんな手放すはずないんですから」
「俺は手放したよ?」
「後藤さん、後悔しているでしょう?次の手を打つためとはいえ、みんなを手放したの」
「……まぁね」
「簡単に戻せると思ってませんでした?もしかして」
「……」
後藤は肩をすくめて、椅子の背もたれに体重をかけた。

サンダル履きの脚がデスクに放り出された。
室内には二人の他に誰もいない。
「くすっ。図星」
「あーっ。はいはい。近衛の人事を舐めてましたよ」
「ふふっ。鬼の独立駆逐中隊出身ですよ？みんな部隊長だの何だとの」
「あの早瀬ですら教官だもんなぁ」
「そういうものです。他の中隊へ動いた以上、皆、もう戻せませんよ？」
「だからって」
後藤は履歴書の束を団扇代わりにした。
「消耗品ばっかりってのもなぁ」
「辻ちゃんのところから二人、来るんでしょう？」
「あれこそ消耗品っていうか、足手まといというか……」
「……ヒドイ言い方」
「四角四面の官僚なんて、戦場じゃ殺されるために息しているようなものだよ？わかるでしょ？」
「ええ。実験センター送りの寧々ちゃんと芳ちゃんは何とかなるかもしれませんね。後は祷子ちゃんか」
「……ったく。図体ばっかり立派になっても、肝心の俺の役に立たなきゃ意味ないじゃん。ねぇ？」
「……美奈代ちゃん、今更ながら大きい存在でしたね」
「別に」
「またそういうこと言って」
「本当だもん」
「あの騒ぎから、お酒とタバコ、増えてますよ？」
「……」
後藤はくわえかけたタバコを箱に戻した。
「紅葉ちゃんとか、陛下の所に相談に行ったらどうです？」
「紅葉ちゃんの所へ？」

「そう。陛下なら天皇護衛隊に回したほむらちゃんとか、内親王護衛隊の麗央ちゃん、回してもらえるかもしれないし……紅葉ちゃんは自分の作った傑作騎を簡単に潰してくれる下手っぴになんて触らせたくさえないでしょうから、どこかでコネ作ってでもいい人回してくれるんじゃないですか？」

「……やれやれ」

後藤は立ち上がった。

「んじゃ、ちょっと行ってみるか」

「お供します」

涼宮中尉もそれに続いた。

「お昼、おごってくださいね？」

「……はいはい」

ｍｅｓｓ　ｕｐ　第二話（後書き）

ついにフィア再登場！
美少女は意地でも出したいという作者のエゴ故のご都合的決定あってのことです！めでたいかめでたくないかは……作者がめでたければいいんです。多分、文句も来ないだろうし。

ｍｅｓｓ　ｕｐ　第三話

部下を手放したくない。
一人残らず、部下は俺の宝だ。

本当に？

本当に、そう言い切れますか？

こう訊ねられたら、胸を張って諾と言い切れる上司はそう多くない。
どんな世界、業界でも。
絶対、一人くらいは不要のレッテルを貼った部下を抱えているものだ。

世界中の褒め言葉を総動員してやっと“奇人変人病人の掃きだめ”が最高の賛辞となる近衛騎士団左翼大隊ほどイカれてはいないが、メサイア大隊も相当にくせ者揃いだ。
ここで普通に誰かの指揮官をやっていたら、空気を吸うだけで胃に穴が開く。
だから、指揮官やってる大抵のヤツはこう思う。
こいつら全員を放り出して、俺は楽になりたい！
つまり、どれ程人手不足でも“こいつをどうにかしたい！”と思う者は絶対にいるわけで――。

結局、後藤が狙いをつけたのは、腕はある反面、問題行動が多い厄介者だ。
うわさ話に精通した涼宮中尉はわずか1時間でメサイア大隊の問題児を詳細なデータ付きでリストアップしてのけた。

その中から後藤が人選して紅葉が納得した人物に白羽の矢を立てることにしたのだが――。

「佐野姉妹、戻りましたぁ」
「ただいまですぅ」
アイスを片手に中隊指揮官の部屋に入ったのは、双子の姉妹とおぼしき外見がそっくりな二人組だった。
栗色の髪を背中まで伸ばし、額の所で真横に切りそろえた外見は、まるで等身大の日本人形が歩いているようでさえある。
それが二人だ。
不思議と、“愛らしさ”より“恐怖”――まるで“シャイニング”の双子の亡霊を彷彿とさせるのは何故だろう。

「出撃から戻ってきた報告に」
その二人を出迎えたのは、デスクに座ったごま塩頭の中隊指揮官。
彼は二人の態度にぶん殴ってやりたいのを拳を握りしめて堪えた。
どういう親に育てられたら、こんな双子が生まれるのか、産みの親だか育ての親だかを問い詰めてみたいものだと常々彼は思っていた。
何しろ、出撃から帰ってきてからすでに1時間以上たってから、やっと帰還の報告に来た上に、さらに、その口には――。
「アイスをくわえたままで来るとは、何事だ」
「食べたいの？」
「食堂で売ってるよ？」
「それとも」
「なぁに？亜夜ちゃん」
「このおっさん、女の子の食べかけが好きなのかなぁ。お姉ちゃん」
「やだぁ。そんなギドギドの変態さんなの？このフニャチン」

「終わってるよね。人として」
「うん。終わりきってる」
「だぁぁぁぁっ！」
中隊指揮官はデスクをひっくり返した。
「黙れっ！ハァッ……ハァッ……敵を鱠のように切り刻むわ、コクピットから逃げた敵兵をマジックレーザーの精密射撃で手足バラバラにするわ、逃げ惑う歩兵達を踏み殺すわ」
「プチプチ足裏に感じる感触は気持ちいいよ？」
「でも、魔族も妖魔もつまんない」
「うん。死体がすぐ消えちゃうから、耳とか鼻とか、戦利品がとれないんだもん」
「せめて直に切り刻みたいよねぇ。助けて助けてっていうの聞きながら滅茶苦茶に顔を潰してあげたい♪」
「せっかく、生きたまま腸を引きずり出すのにピッタリと思って、グルカナイフの新しいの仕入れたのにねぇ」
「無駄になっちゃったぁ」
「そこらの野良犬や野良猫じゃつまんないしねぇ」
「そうねぇ。やっぱり人間がいいわ」
「……」
中隊指揮官は、互いにナイフを取りだして、同時にため息をついた双子を前にクスリの瓶のキャップを開けると、クスリを喉に流し込んだ。
“精神安定剤”と書かれた瓶が乱暴にポケットに戻された。
「――おい」
「なぁに？」
「アイス、欲しいの？」
「お前等に異動を命じる」
「異動？」
「何それ、おいしいの？」
「……しばらくしたら、部隊を移ってもらうからな」

「なんで？」
「もうお前等みたいなキチガイは、俺の部隊にはいらんっ！とっとと出て行けっ！」

「朝倉大尉、戻りました」
指揮官室に入って来たのは、出撃から戻ってきたばかりのロングヘアの女性騎士だった。
年の頃なら二十代半ば。
長く艶やかな黒髪をポニーテールにまとめた容姿は人目を引く魅力がある。
だが、それを出迎えた指揮官は、少なくともその外観に対して何も感じるところがないのか、或いはそんなものには慣れているのか、特段の男性としての下心じみた反応はみせなかった。
「……ご苦労」
「どうしました？」
「また派手にやってくれたなぁ」
指揮官の手には整備部隊からの報告書があった。
「ははっ……」
「騎体の腕、何本ぶっ壊してくれたら気が済むんだ？」
「す、すみません」
「“ぶちかましの美柚姫”とか外じゃ言われているが、お前、整備の間で何て言われているかは知ってるな？」
「……は、はい」
「言ってみろ。聞いてやる」
「ぶ……」
「ぶ？」
「ぶっ壊しの美柚姫……です」
「そうだ……出撃する度に敵は撃破するものの、必ず腕関節のパー

ツを要交換までぶっ壊してくれる。お前、あのパーツが一個いくらすると思ってるんだ？うん？」

「……ううっ」

「お前の給料ゼロにしたってローンの頭金にもならないんだぞ？そもそもだな……」

2時間後。

「ううっ……まだ耳の中に言葉が残ってるよ」

説教が終わって食堂でへたばったのは、先程の黒髪の女性。

名を朝倉美柚姫（あさくら・みゆき）という。

「お疲れ様。お姉ちゃん」

突っ伏した女性の前にコーヒーの入ったカップを置いたのは、二十歳頃の女性。

黒髪をツインテールにしているせいか、あどけなさが強調されている。

美柚姫の妹で、彼女のMC（メサイア・コントローラー）を担当する朝倉瑞穂少尉だ。

「……うん。ありがとう、瑞穂」

「また怒られたの？仕方ないじゃない。“幻龍”の関節は欠陥品なんだから、戦棍（せんこん）でぶん殴ったらものの数発で壊れちゃうのは分かっているはずなのに」

「そこを何とかするのが、騎士の務めなんだよ」

「ついでにMC（わたし）達のね？」

「……クビ、だって」

「えっ！？」

「他の部隊に移ってくれって……もう、私達に回せる腕関節はないからって」

「そんなっ！ヒドイよお姉ちゃんっ！そんなの文句言うべきだよ！」

「関節のパーツ交換しすぎて、負荷が腕全体にかかっているから、C整備で肩から下、全部分解するから、しばらく私達、地上勤務」

「騎体（あのこ）まで取り上げるの！？」
「中隊長に言わせると、騎体をこれ以上壊されたら俺の責任問題になるって……毎回毎回、関節パーツ壊すから、補給部門から問い合わせが来てるんだって……いろいろ大変なんだよ。上って」
「……」
「次は、根性のある騎体に乗せて欲しいなぁ……」

●東京都　葉月市　近衛兵団葉月実験センター
「人選は進んでいるの？」
「助かったよ」
後藤は紅葉を軽く拝んだ。
「頭数は揃いそうだ。紅葉ちゃんの狙ったとおりだ」
「でしょう？」
紅葉は勝ち誇った顔で、テーブルに置かれたチョコレートケーキにフォークを突き立てた。
「どこだって、持て余し者はいるものよ。その中から実力者を選べば良いわけで」
「俺の苦労は考慮の外かい」
「使いこなすために給料もらってるんでしょ？」
「……はっく情だなぁ」
「何言ってるのよ。私だって、後藤さんと一緒にいらん子連中相手にするのよ？」
「いらん子……ねぇ」
「そう」
紅葉は修復が進むメサイア達を見上げた。
「“白龍”の存在は完全に抹消された。これに伴って“鈴谷（すずや）”戦没の責任も不問にされて……誰が浮かばれて、誰が沈んだのか」
「平野さんは浮かんだよな」

「６６号艦の艦長だもんなぁ……下手したら石抱いて沈められたもんねぇ」
「そんなに欠陥品かい？その６６号艦って」
「設計者が全員、薬でもキメてたか、さもなきゃよっぽどの素人か。っていうか、あんな妄想じみたものを具体化するのに支払った大金を思うと、空想のすばらしさをしみじみ感じるわ」
「……やれやれ」
「ま、私の知ったことじゃないけどね。私の子達にとっては、“鈴谷（すずや）”の代わりとして与えられた母艦だもん。文句言う筋じゃない」
「メサイアの修復の方は？」
「順調――１騎を除いてフレームは無事だったからね。白雷改のパーツ組み付けている」
「……問題は、その１騎か」
「ほむとお姫様連れてきたら、“２号騎”と“Ｄ－ＳＥＥＤ”で復活させるけど」
紅葉はチョコレートケーキを口に放り込むと言った。
「――他なら引き渡さないわよ？」
「へっ？」
「最高機密騎を消耗品に使わせるワケにいかないでしょ？私と陛下、両方のメンツに関わるわ」
「泉や明貴達ならよかったと？」
「あったりまえでしょ？泉大尉なんて、あの麗菜殿下ぶっ飛ばしたヤツよ？あの歩く非常識だからこそ、あそこまで使いこなせたようなもんなんだから。アタシから“死乃天使”もらいたければ、最低でも、ほむ程度の使い手連れてきて」
「いるのかい？」
「いない」
紅葉はきっぱりと言い切った。
「ほむは眠っていたとはいえ、私から見てもトップグレード。天皇護衛隊が横やりださなかったら、泉大尉二号って名付けて、

私が秘書兼奴隷としてコキ使うつもりだったハイスペックよ？性格はアレだけど」
「ほむちゃんはマトモだよ……泉と比べたら可哀想だ」
「同感。そこがちょっと面白みに欠けるんだけどね」
紅葉の顔に陰が浮かんだ。
「……で、どうなの？」
「何が」
「娘を失った気分って」
「よくはないさ」
後藤は胸ポケットからタバコを出した。
「いい？」
「特別よ？お弔いの線香も立ててあげられないから」
「……ありがとよ」
タバコから立ち上る紫煙をぼんやりと眺め、紅葉は言った。
「せめて、宗像がいてくれたらね」
「あいつは寝返ったよ」
「二宮さんが出会ったそうね。月城さんも」
「ああ。完璧に敵だ」
「……そういえば、姫さんは？」
「ちゃんとした所にいるよ」
「お腹すかせてなければいいけど」
「ははっ……小清水ほどじゃないよ」
「……」
「……」
「あの子の件は、泉大尉に責任とってもらわないとね」
「……どういうことだ？」
「どうしても、死体が見つからないのよ。っていうか、死んだと思えない」
「ん？」
“死乃天使”の残骸を調べたの。周辺に散らばった破片まで全部

かき集めて。みんな頑張ってくれたおかげで、ほとんどパーツが回収出来た。でも、一つだけ、どこ探しても出てこない」
「何だ」
「胸部パーツ、正しく言えば、コクピットブロックよ」
「潰されたんじゃないのか？」
「跡形も無く？」
紅葉は鼻で笑った。
「ふん。もし敵が泉大尉超えの変態（フリークス）でも、私達、技師の目はごまかせない。――マティア・マザクは知ってる？」
「誰？それ」
「民間の事故調査屋。メサイア系に強くてね。原因不明の事故調査なんてお手の物の人。この人にも協力を依頼したの」
「おいおい。“死乃天使”は機密騎だぜ？」
「口は固いから大丈夫。責任っていうか、あの管理権限は私のもの。どうしようと陛下だって文句言わせないわ」
「……怖いねぇ」
「でしょ？で、その人も言ってるのよ。コクピットブロックは潰されたんじゃなくて、えぐり取られたんだろうって。何しろ、残骸に残っているべきパーツがなさすぎるの」
「えぐり取った？」
「そう。騎士を確保するためにそんなことしたんじゃないか。コクピットブロックごと、騎士を奪い去った。マザクはそうシナリオを言っているし、私もそう思う。何しろ」
紅葉が顎で示したのは、片隅に置かれた、奇妙にへし曲がった機械部品の塊だった。
「あれ、コクピットブロックの生命維持装置。発信装置もついている」
「……」
「３５キロ離れた地点で回収された“死乃天使”のよ」
「……３５キロ」

「海軍の航空隊の偵察機が敵地へ侵入した時に救難信号を受信したの。いろいろ苦労したけど、まさかと思って回収に向かわせたら、地面に転がっていたのはそれだけ。多分だけど、信号を発信しているのに感づいた敵が、コクピットブロックからそぎ落としたのね」
「泉に」
後藤は灰が落ちるのも気にせず、真顔で訊ねた。
「何の価値がある」
「敵が何を考えたかはわからない。でも、これだけは言える」
紅葉はフォークで後藤を指した。
「泉大尉は、敵に生け捕りにされた可能性が高いってこと」
「生きている……と？」
「データ収集が目的なら、そろそろ殺されているでしょうね。後藤さんならどうする？魔族軍が捕虜をとったって、聞いたことある？」
「……」
後藤はすっかり短くなったタバコをもみ消した。
「人を捕まえろだの、行方不明者を捜せだの」
後藤はもう一本、タバコを取りだした。
「警察時代に戻った気分だぜ。本当に」

●東京都某所　天原骨董品店
「戻りました」
「おお。帰ったか」
素人が見たらがらくたにしか見えないが、その多くが扱いが厄介な呪具という商品を扱う店内は足の踏み場もない程、様々なモノが積み上げられている。
素人なら迷うかもしれないし、もし本当に迷い込んだら家族の元へ生還出来る保証は誰にも出来ない店内の奥にあるレジに腰を下ろしてお茶を飲んでいたのはかのんだ。

「しばらくお店、開けていたからごめんなさいね？かのん」
「なんの。客など――」
ちょっと考えてから、かのんは言った。
「ほんの数人じゃ」
「売上は？」
「ない」
「……」
「お茶、いれようか？」
「お願いします」
かのんの横にあった椅子――かつて死刑囚が告解のために座らされたという曰く付きの椅子に腰を下ろしたのは、あの芹沢瀬菜だった。
「どうじゃ？銀行の方は」
「順調です。神音様にご報告に上がりました」
「ああ、御主人様なら執務室におられるぞ？」
「通っていいかしら？」
「うむ――せっかくじゃ、茶を飲んでからでもよかろう」
どん。と出されたのは抹茶の入った青磁の茶碗。
青磁松本という銘がつけられている、かのんのお気に入りだ。
茶碗だけでも相当な価値があるものが、平気で使われていた。
「ありがとうございます」
瀬菜はそれを受け取るとさも美味そうに中身を飲み干した。
「相変わらず、いれかたが上手ですね」
「妾はそのためにおるようなものじゃからな」
かのんはそう笑って立ち上がった。
「行くか？」
「はい」

神音の執務室へは“無限回廊”と呼ばれる亜空間を通る必要があ

る。
この回廊を生きて通れるのは、神音本人か、それともかのんに案内された者に限られる。
二人の案内無くして回廊に入り込んだ愚か者は無限に続く回廊の中を永遠に彷徨い続けることになる。
かのんに案内された瀬菜は、豪奢な装飾が施された赤いカーペットの続く廊下を右に折れ左に曲がりして、やがて一つのドアの前にたどり着いた。
そこが、神音の執務室だ。

「見込み通りかしらね」
瀬菜の報告を受けた神音は、そう答えた。
「銀行や貴金属店で泥棒じみたことさせて悪いわね」
「――いえ」
瀬菜は笑って首を振った。
「神音様のお役に立つことが出来れば――」
「御主人様」
瀬菜の言葉を遮るように、ドアの近くに立っていたかのんが言った。
「由忠じゃ」

「お話をおうかがいしたくて」
「なら、手土産くらい持ってきなさい」
神音の前に座ったのは、神音の息子、由忠だ。
近衛左翼大隊少将の地位にいて、そしてあの悠理の父親だ。
かのんが紅茶を出す合間に、神音は脚を組み直した。
まるで父親の前で精一杯ふんぞり返ってみせようとする娘のよう

にしか見えない光景だが、立場はまるで逆だ。
「それで？」
「いろいろと伺いたいことが多すぎて」
「ビジネスのことかしら？」
「魔族軍の占領地で銀行泥棒を働いている不届き者がいるとか」
「それが？」
「ご存知ないかと」
「ないと言ったら？」
「信じません」
由忠は答えた。
「接触した者の報告では、芹沢瀬菜と名乗る娘とその一味とのことです」
「で？」
「で……って」
「私に何の用？」
「情報が欲しいんです。潜伏場所とか」
「そうねぇ……」
神音は、ちらりと瀬菜が隠れている窓際のカーテンを見た後、
「タダで？」
「……いくらですか」
「お心次第で、スタート金額は１０億の上」
「ちょ……っ！」
「ちなみに通貨単位はドルね」
「母さんっ！」
「ビジネスは非情だと、常に教えているでしょう？甘えないの。由忠」
「非常識っていうんですよ！あんまりに堂々とやってるおかげで、水瀬家が雇ってるんじゃないかって、疑われているんです！家名に傷がついているんですよ！」
「どこのバカよ。それ」

神音は憮然として答えた。
「水瀬家がそんなチマチマしたことするもんですか。銀行のお金が必要なら堂々と金庫からかっぱらうわよ。被災地に残された人様のお金に手を出すなんて甘っちょろいマネ、家としてするもんですか。由忠、もしそんなこと言われたら、水瀬家はそんな姑息なマネはしないと堂々と言い切りなさい。ついでぶった切っていいわ。いい見せしめになるでしょうから」
「……それが親の言葉ですか」
「何か変なこと言ったかしら？」
「とにかく、母さんは関係ないと？」
「さぁ？」
神音は肩をすくめた。
「その先を知りたかったら、お金を払いなさい」
「そういう態度が、疑いを招くんじゃないかって、考えたことないですか？」
「ちっとも」
「……」
「で？その芹沢瀬菜ってのは、銀行でお金盗んでいるの？」
「……」
「親の質問に答えなさい」
「……理不尽だ」
「由忠」
「……そうです」
「いくら」
「被害額は想定で千数百億円。看過できる状況ではありません」
「それを横取りしたいと？」
「誰がですか。とにかく、近衛はこの芹沢瀬菜の捕縛を決定していますし、捕縛専門の部隊も動かしています。彼女が捕縛された後、その口から黒幕として母さんの名前があがることだけは避けてください。水瀬家の家名をこれ以上――」

「もしそうなったら、上手く誤魔化しなさい」
「母さんっ！」
「親を犯罪者にしてどうするの」
「親なら親らしく、犯罪とは無関係だときっぱり言ってみて下さいっ！」
「無関係」
「……」
「――――言ったわよ？」

怒りながら帰って行った息子を送り出した神音は、少し考えてから言った。
「瀬菜？」
「はい」
カーテンの陰から瀬菜が顔を出した。
「ご迷惑を」
「バカを言いなさい。私が命じた事よ……ったく、由忠もお訊ね者がこんな近くにいて、気配で気づけないものかしら」
「……あの」
「恐れる必要はないわ」
神音は笑って言った。
「近衛も警察も、軍にだって網を張ってある。バカ息子は私の掌で踊っているようなもの。あの子もまだまだ……」
その眼はとても優しく微笑んでいた。
「甘いのよねぇ」

●ユーラシア大陸

ユーラシア大陸内部は、昼間こそ過ごしやすいが、夜となれば冷え込む。

補給艇の中は整備の音がうるさくてたまらない。

まさかオーク兵達と一緒に雑魚寝は勘弁して欲しい。

しかたなく、裕樹達はテントを張って雑魚寝だ。

寒さを凌ぐためにどうやっても火を焚く必要がある。

そんな中――

「生きるために戦うのとお金のために戦うのと」

パチパチと弾ける薪(たきぎ)を前に、ぽつりと言ったのは裕樹だ。

「どっちがいいことなんだろう」

「知るか」

大地は毛布にくるまったまま、言った。

「少なくとも、俺は同じだと思う。生きるためには食い物がいる。食い物買うためには金がいる。なら、生きるためってことは金を稼ぐってことだ」

「……成る程ね」

「どうしたんだよ。そんな難しそうなこと言い出して」

「ううん？」

燃えさかる火を眺めながら裕樹は言った。

「思いついただけ」

「何をおセンチなことを」

「そういう気分よね……」

月菜は頷いた。

「こんな星空の下。火を囲んでいるなんて、なんだかロマンチックだし」

「熱でもあるのか――ぐおっ！？」

ドカッ！

月菜の右フックが大地の顔面を見事に捉えた。

「痛ててっ……何すんだよ！」

「女の子にとって大切な雰囲気ってものをぶっ壊したヤツは死ねっ！」
「誰が――――」
大地は真顔で頷いた。
「すまん」
「何よ」
「月菜が女の子だってこと、忘れてた」
ボカッ！
ドカッ！
薪を容赦なく大地に振り下ろす月菜を尻目に、裕樹は宗像に訊ねた。
「ねぇ、宗像さん」
「何だ？」
「怖くないの？」
「何が」
「……」
裕樹の視線の先にあるのは、オーク兵達だ。
同じように焚き火を囲みながら飲めや歌えやの大騒ぎ。
その手にはジョッキと――――
「あいつら、人間を食べているんだよ？」
「だからどうした」
宗像は火をじっと見つめながら答えた。
「人はなんでも食べる。それに比べて、あいつらは人ぐらいしか食べない。質素なものさ」
「そういうもの？」
「多分な――――食べられたいのか？」
「まさか」
「なら休め。明日もどうせ、チンク共が攻めてくる」
「……あのさ」
裕樹は、宗像が棒きれで地面に何か書いているのに気付いた。

「何してるの？」
「うん……」
宗像は答えた。
「アイバシュラの縄張りを考えていた」
「縄張り？」
「ああ。あいつらは縄張り根性が強い。縄張りに侵入した敵に容赦はしないが、縄張りの外なら何がどうしようと関係ない――そう聞いたものでな」
「それが？」
「次の鉱山を確保するのに必要な情報だろう？下手な鉱山を攻めようものなら、チンクでも露助でもなく、あいつらを敵に回すことになる」
「……ねぇ」
「何だ」
「中華帝国軍は、どうやってここまで来たの？」
「ん？」
「ほら。アイバシュラに別に殺されるわけでもないってことは、アイバシュラの巣と縄張りがどこなのか、知っている必要があるんじゃないの？」
「……」
「僕の言ってること、……わかんない？」
「続けろ」
「うん……中華帝国との国境からここまでどの位かは知らないけど、近くはないよね？その間にはきっと、街もあって村もあって――鉱山だってあると思うんだ。あいつら、それを全部制圧したのかな」
「……」
「もし、そうじゃなくて、ここまで何も知らずに来たっていうなら、どうしてアイバシュラ達の縄張りにひっかからなかったの？そんなにアイバシュラの縄張りって間隔が空いているの？」
「……いや」

宗像は思案げに首をかしげた。
「そんなはずはないはず……だ。この先、国境線付近にもアイバシユラの巣はあった」
「ね？」裕樹は頷いた。
「それで、どうしてここまでこれたの？」
「……やつら」
地面を見つめながら、宗像はぽつりと言った。
「どこまでが縄張りかを知っている……」
「そう。でなければ、ここまで軍隊進めるなんて危険だよ」
「……」
ポキッ。
宗像は棒きれをへし折った。
「中華帝国軍に話を聞くとするか」
「正気？」
「狂ってる」
「病院行く？」
「阿呆」
コツン。と宗像は裕樹の頭を掌で叩くフリをした。
「この前、吹っ飛ばした陸戦艇があったろう」
「あっ」
「あの残骸を調べるんだ。資料が出てくるかもしれない」
「明日やる？」
「今からでいい」
宗像は立ち上がった。
「鉄は熱いうちに、女は若いうちに喰えというからな」
「誰の言葉？」
「私だ。何か文句あるか？」
「ううん？らしいなって」
「そうだろう」
「じゃ、僕は神様にお祈りしておく」

「やめておけ。少なくとも、私達みたいな貧乏人を相手にしてくれる神様はいない」
「いないの？」
「この世界に神様はいる。ただし、奴らは権力と金持ちの味方だ」
「……僕達みたいな、貧乏人や弱いのに味方してくれる神様はいない？」
「八百万の日本を舐めるな」
「いるんじゃん」
「貧乏神と死神がいる」
「……まともなのがほしい」
「だな……案外、助けてもらいたいのは神様のほうかもしれん」
「鬱病にでもかかってたり」
宗像の後に続いて、裕樹は笑った。
「その代わりを悪魔がアルバイトでやっていたら最悪だね」
「ありえない話じゃない。偉大なる神のしろしめすこのくそったれな世界は、ロクでもないこと避けることは出来んように出来ている。多分、神様でもな」
「お気の毒」
「お気の毒なのは私達だろう？」

ｍｅｓｓ　ｕｐ　第四話

陸戦艇は、大地と月菜の狙撃によって動力部を撃ち抜かれ、岩山に突っ込むような格好で放棄されていた。
ナイチンゲールのコクピットから見る限り、無人のその艦の被害は、狙撃による機関部破損のみのようだ。
搭載された砲身がそれぞれ別個の方角を向いているが、機銃座の機銃達も含めて爆破処分された形跡はない。
後で回収するつもりなのは明らかだ。
「こんな所で……」
アイバシュラ達が間近で縄張りを張っているというのに、数千トンはあるだろうこの鉄の塊をどうやって回収するつもりなんだろうか。
それとも、この場で修理出来るものなのか？
……やめよう。
考えるだけ無駄だ。
宗像はライトを取り出すとコクピットのハッチを開けた。

「ほ、本当に」
ナイチンゲールの手から降り立ったのは、陸戦艇の甲板。
ライトに照らし出されたそこを歩きながら、後ろをついてくる裕樹が訊ねた。
「僕達だけでよかったの？」
今、甲板にいるのは宗像と裕樹だけだ。
瀬音達は万一に備えて残ってもらった。
堂々とライトを使い、辺りを照らして回す宗像に対して、裕樹はまるでおっかなびっくりだ。
「数を連れてくればいいというものではない」

「で、でも」
裕樹の手が宗像の戦闘服の裾を掴んだ。
「怒られない……かなぁ」
「アホか――放棄された無人艦だぞ？」
「……お、お化けとか」
「よかったな。怪談物を演じる時の又とない参考になるな」
「そういうものじゃ！」
「――怖かったら、コクピットに戻っても良いぞ？そこで震えていろ。怖い怖いって」
「……むぅ」
裕樹は頬を膨らませて宗像に答えた。
「ぼ、僕だって男なんだから！」
裕樹の精一杯の虚勢だったが、
「忘れていた」
宗像の反応は冷たすぎた。
「むっ……せめて武器を」
裕樹は、コクピットから持ってきたボウガンを差し出した。
外見はボウガンだが、中身は魔法の矢を連射するサブマシンガンだ。
ライトを持つ宗像は実は丸腰だ。
「いらん」
「もしものことがあったら」
「艦内は無人だ」
宗像が照らし出したのは、舷側で揺れている艦載艇（かんさいてい）固定装置のロープだ。
固定されているはずの艦載艇（かんさいてい）が残されていない。
皆、逃げた証拠だ。
「艦内に生命反応はない」
「……屍鬼（グール）とか」
「そっちもない。艦橋へ上がるぞ」

歩き出した宗像に続いて、裕樹は暗闇の中にぼんやりと浮かぶ鉄の塔を見上げ、駆けだした。

「意外と」

狭くて急な階段を上って、はじめて軍艦の艦橋に入った裕樹はその中を見回した。

「狭いんだね」

「ああ。そんなものだ」

宗像は、艦橋の中に散乱する書類を調べながら適当に返事をした。

「裕樹、中国語は読めるか？」

「語り石は使っているけど」

裕樹は床に散らばる書類を拾い集め始めた。

「何が大切かはわかんない」

「……だな」

散乱していたのは、鉱山を狙った作戦の計画書の残骸だった。

撤退時の混乱でファイルから外れて散乱したか、あるいは重要なページだけ引きちぎりでもしたか、持ち帰って精査でもしない限り宗像にも重要性がわからない。

「特にこれというものはないな」

ざっとページをめくった後、宗像はそれを肩から提げていたバッグに入れた。

「欲しいのは地図なんだが……」

艦橋の後部にある海図台の上は空だ。

「脱出の時に持って行ったな……？」

「どうするの？」

「艦内の施設はここだけじゃない」

少し考えて、宗像は裕樹に言った。

「爆発物、持ってるか？」
「あるわけないじゃん」
「使えないヤツ」
「むうっ！理不尽だよ！」
「理不尽が大人の世界で、ついでに軍隊だ。わかった、小僧」
「わかったよ……おばさん」

艦内に、ゴチンッ！という鈍い音が響いた。

「うぇぇぇっ」
「うるさい、泣くな」
でっかいタンコブを作って滝のような涙を流す裕樹を従え、宗像が次に探したのは戦闘情報指揮室――CICだ。
コンピューターの中のデータを削除していなければ、何か掴めるはずだというのが、宗像の読みだ。
艦を放棄する時、艦橋に書類を残していく程混乱していた原因は、廊下の様子で大体の想像が付いた。
通路に引き出されたまま放置された消火用ホース。
閉鎖された防火扉。
陸戦艇は水に沈む海軍の軍艦と違い、水密扉というものを持たない。
陸の上で水に備える必要はないし、何よりそんな装備を取り付けるだけコスト面でも資材面でも無駄なのだ。
通路の扉は火災が発生した時にのみ閉鎖されるのが一般的だと、宗像は座学で聞いた覚えがあった。
それが閉まっている意味は一つしかない。

火災だ。

被弾したショックで艦内で火災が発生し、弾薬庫が誘爆する可能

性が出た。
爆沈を恐れた艦長は、乗組員に脱出命令を下し、自らも艦を降りた。
そんな所だろう。
北米戦線で見た、あの砲兵隊の司令官のように、自決する程、潔すぎないことを宗像は願っていた。
最悪、艦長室も調べなければならないが、この暗闇の中、死体を見たら裕樹がチビる位は覚悟が必要だ。

「ねぇ、お姉さん」
「――――なんだ」
「お、おばさんとは言ってないからね？」
「ほう？もう一発喰らいたいか」
「言ってないって、そう言ったの！」
「……なんだ」
「今晩、一緒に寝よう？」
「臆病なことを言うな。男だろうが」
「ううっ」
「寝床に潜り込んできたら殺すぞ？……ん？」
宗像は、艦橋から降りてすぐの部屋に鍵がかかっているのに気付いた。
「――――ビンゴ、か。それとも」
「お姉さん？」
「裕樹。ボウガンを貸せ」
「う、うん」
「確か」
宗像はボウガンの横にあるレバーを操作した。
「これでフルパワーとか言っていたな」
宗像は、ドアノブに狙いを定めて、トリガーを引いた。

「すごい破壊力……」
ぐしゃりと曲がったドアが吹き飛んだ後に開かれた真っ暗な口を、驚いた顔で見る裕樹がそう呟いた。
「こんなの反則だよねぇ」
「同感だ」
ボウガンを裕樹に渡してライトを手にした宗像は室内を照らした。
簡素だが、室内に並ぶ椅子。モニターの群。
どうやら狙ったところはここだ。
「裕樹、電源が生きていないか調べろ」
「どうやって？」
「適当にあっちこっち押して見ろ。感電死しない程度でいい」
「もうちょっと、励みになること行って欲しいなぁ」

数分後。

「どうだ？」
「だめ。どのキーボードを押しても反応しない。電気が来ていないんじゃない？」
「熱源を調べたとき、魔晶石エンジンシステムは生きているし、発電システムも停止していないのは確認しているぞ？」
「じゃあ、この部屋だけ来ていないのかなぁ……」
裕樹は、通路に出ると壁にあったスイッチを押してみた。
「あっ」
薄くぼんやりとした真っ赤な照明が通路を照らし出した。
電源は生きている。
「お姉さん、電気は生きてるよ！」
「……の、ようだな」
得意満面の裕樹を尻目に、辺りをキョロキョロと見回した宗像は、何故かある椅子の前でかがみ込んだ。

「どうしたの？」
「ここのパネルが外れている」
宗像がライトで照らしだしたのは、デスク状になったコンピューターの下のパネルだ。
パネルが何故か、普段はめられているはずの場所から外れて、椅子に倒れかかっていた。
「何で？」
「一度外して」
宗像はパネルをどけると、本来パネルがかかっているはずの中をのぞき込んだ。
「慌ててはめたせいで、うまくはまっていなかったのに気付かなかったんだろう」
「ふぅん？」
「裕樹」
宗像はライトを裕樹に手渡した。
「ライトを持って照らしてくれ」
「う……うん。お姉さん……わかるの？」
「何とかな」
パネルの中には黒いケーブルが幾本も走っている。細いのもあれば太いのものある。裕樹にはそれが何のケーブルなのかまるでわからない。
「電気技師の資格は持っている。ついでボイラーも」
「軍隊入ると教えてくれるの？」
「自力でとった……やっぱりな」
宗像が引っ張り出したのは、二本の同じようなケーブル。太さは数センチはあるかなり太いケーブルだ。
「主電源だな。こいつを外したんだ」
「直せるの？」
「コネクターを外しているだけだ。万一、ロシア兵にでの先に乗り込まれた時のことを考えたんだろうな」

宗像は両手に持ったケーブルを接続した。
途端に、壁を埋め尽くしていたモニターに光が灯り、計器類が一斉にイルミネーションを点灯させた。
「す、すごいや、お姉さんっ！」
「――仕事柄だ」
「へっ？」
「何でもない――データを探す。裕樹」
「何？」
「入り口で見張っていてくれ」
「なんで？」
「さっき、艦内に屍鬼（グール）はいないと言ったが」
「ま、まさか」
「あれ、ウソだ」

ほぼ三十分が経過しようとしていた。
「お、お姉さん？」
左右を見回し続けたせいで首が痛くなった裕樹は宗像に問いかけた。
「何かあった？」
「……ああ」
「大切な情報？」
「ああ」
「びっくりするくらい？」
「ああ」
「僕のこと好き？」
「嫌いだ」
「聞こえてたんだ。でもね？そこまで即答しないでよ。傷つくよ」
「……」
「お姉さん？」

「こっちへ来ていいぞ」
「うん」
裕樹はもう一度、通路を見回すと宗像に近寄った。
宗像が見上げていたのは、家にあるテレビほどもある巨大なモニター。
真っ暗な画面に白い線で映し出されているのはどうやら地図だと裕樹にも推測がついた。
「これ……どこの地図？」
「この周辺だ」
モニターから視線を外さない宗像は、手元のパネルを操作しながら答えた。
「これが、普通の――――いわば、アイバシュラが現れる前の地図で」
パッ。
宗像が何かを操作した途端、画面の大半が赤く染まった。
モニターから大きくはみ出るほどの巨大な円がいくつも描かれ、円同士が接触していない黒い部分はほとんど残されていない。
「これは？」
「この赤く塗りつぶされた所が――――アイバシュラの縄張りだ」
「僕達……どこにいるの？」
「このモニターのど真ん中」
そこは幸い、まだ黒い部分に入っていた。
「ほとんど縄張りばっかりじゃない」
「だが――――よく見ろ」
「？」
「ごく、ごくわずかだが、道がある」
「道？」
「そう。縄張りと縄張りの接触していない、幅にして1キロに満たない道がある」
宗像は、モニターの画面をズームした。
すると、それまで赤い円と円が重なっていると思っていた場所が、

ほんの少しだけ、接触していないことに気付いた。
「恐らく、これは私の推測だが――アイバシュラ同士が設けた安全地帯なんだろう」
「安全地帯？」
「これほど入り組んでいれば、アイバシュラ同士で縄張り争いが起きてもおかしくない。それを防ぐためには互いに接触しない場所が必要だ――そう思わないか？」
「つまり……この安全地帯を通っていけばどこまでもいける……と？」
「そう。そして、この安全地帯上にある鉱山は、すべて狙うことが出来る」
「あるの？」
「ああ。アイバシュラとの関係がわからなくて手が出せなかった鉱山が４つほどな」
「スゴい！」
裕樹は歓声をあげた。
「ダユー様も喜んで下さるよ！」
「……ああ」
「……」
アイバシュラ達の縄張りがわかって、安全な通路もわかって、そして鉱山の情報まで手に入ったのに、何故、宗像は浮かない顔をしているんだろう？
「お姉さん……どうしたの？何が気に入らないの？」
「……」
宗像は何故か頭を掻くと、肩をすくめた。
「さぁな？」
「お姉さん。隠し事は禁止」
「……情報の中にこの艦の行動予定があった」
「それが？」
「この艦は、鉱山制圧任務の後――予定では来月」

「……」
「――日本へ侵攻する部隊に組み込まれることになっていた」
「日本へ？」
裕樹も驚いた。という顔になった。
「で、でも、福岡や沖縄で中華帝国軍は負けて――」
「一度負けたから二度目まで負けるという保証があるか？」
「……」
「日本軍はもう、魔族軍相手に戦力を減らし続けている。各国の軍といっても所詮は烏合の衆だ。中華帝国を相手に戦争をしに来たわけではない。そう言われたら終わりだ」
「そんな！」
「――まぁ、私達が知ったことではないがな」
「どうしてだよ！」
裕樹は顔を真っ赤にして怒鳴った。
「僕達、日本人でしょう！？」
「ここに」
宗像は冷たい視線を裕樹に投げつけた。
「瀬音さん達がいないことを感謝しておけ」
「えっ？」
「もし、そのセリフをあの人達が聞いたら殴られていたぞ？」
「ど――」
どうして。
そう聞きかけて、裕樹は自分の過ちに気付いた。
自分は今、魔族軍にいるんだ。
日本と、すべての人類と戦っている敵なんだ。
その敵が、別な敵と戦うからといって、怒る理由はどこにもない。
でも――なんだろう。
この悔しさというか、苛立たしさは。
裕樹は胸がかき乱されるような思いがして、自分の戦闘服の胸ぐらのあたりを掴んだ。

「……ごめんなさい」
「……」
宗像は、無言で裕樹の頭を撫でた。
「それでいい。そんなものだ。だが、考えろ。人間と魔族の尊厳をかけた戦いが繰り広げられている戦場。それが日本だ。そこにチンクという雑魚が加わるだけだぞ？」
「いわゆる一つの『日本シリーズ』かな」
「……ビールと枝豆がほしいな」
宗像はそこまで言ってから、もう一度裕樹の頭を撫でた。
「そんなセリフをひねり出せるバカな発想の方が必要……か」

●日本　東京都葉月市　近衛府葉月実験センター
「第９中隊の夏川大尉です」
「元、でしょ？本ラボ施設長の津島中佐よ」
「お噂はかねがね」
「世辞はいい。どうせ私にロクな噂はないでしょうに」
「ご謙遜を」
そう言った後、夏川千晶（なつかわ・ちあき）大尉は修復が続く“白雷改”達を見上げた。
「既に北米戦線を始め、世界中に知れ渡った近衛の武勲騎を設計された頭脳は、どんな評価でも足りませんよ」
「ふん……もう夜よ？」
「失礼。辞令が発せられましたので、そこの大月大尉とご挨拶にと」
千晶の横に立っていた大月智久大尉が、やっと自己申告が出来る。といわんばかりの顔で敬礼した。
「特別任務隊隊長を拝命した大月大尉でありますっ！」
「……は？」

「いえ、あの」
「……ちょっと」
「はい？」
大月には紅葉が何故、じとっ。とした顔になったかわからない。
相手が子供に見えても、中身は天才だ。
しかも世界最高レベルの。
自分の思い至らないところで、何か粗相でもしたのだろうか？
まるで教官の前に立たされた新兵並みに緊張した顔で大月は言葉を待った。
「夏川とか言ったわね。あんた、何？」
「私は副隊長です」
「へぇ？」
紅葉が顔をしかめながら言った。
「隊長とより先に副隊長が上官に挨拶するって、それ正しい礼儀？」
「しっ！」
「――失礼」
大月の声を遮って、千晶は答えた。
「大月中――大尉は、昇進したばかりの上、部隊指揮官としての経験はありません」
「経験を積ませる意味でも、そして上官に対する礼儀の上でも、先に挨拶させるべきだったわね」
「粗相があっては事と判断しました。私は大月隊長のサポートを命じられております。隊長のメンツに関わるような粗相が予想される場合、それを事前に防止することも、任務の一つと心得ておりますので」
「ならのっけからコケたわね。私の機嫌は最悪よ。こんな時間にアポ無しでくるわ、部隊内での上下関係のなさをひけらかすわ」
「アポにつきましては、連絡を何度入れてもお応え頂かなかったと申し上げましょう」
「――上官には媚び売るものよ？」

「覚えておきましょう」
千晶は小さく笑った。
「――修復の程度はいかがです？」
「騎体の損傷は思ったよりひどくない」
紅葉も“白雷改”を見上げながら答えた。
「乗っていた連中が、近衛最高レベルの腕利き共だったからね。普通だったら、こんなの全部スクラップ捨て場行きね」
「――ほう？」
「だから」
目を細め、何事か言おうとした千晶の言葉を遮って紅葉は声を高めた。
「あんた達には乗せられないわよ？」
「……」
はじめて面食らった。という顔の千晶が眉間に皺を寄せて訊ねた。
「それは？」
「あんた達みたいな下手くそに預けられる騎体じゃない――そう言ったの」
「……我々は第９中隊に抜擢された者達ですが」
「政治将校が偉そうにほざくな。メサイア乗りとしての技量より政治官僚能力で引き抜かれた狗が、猟犬を気取るな。これは猟犬の中でも最悪最強のケルベロスが乗るべき騎体達よ。噛まれた程度で主人の股ぐらに逃げ込むような奴らが触れて良い存在ですらない」
「……我々の」
口調こそ静かだが、雰囲気が怒っていた。
「我々の技量をお疑いと？」
「疑ってない――判断は終了しているわ。“預けられない”って」
「……中隊指揮官、及び副長として」
千晶も負けていないというべきだろう。
「相応の騎体を頂きたい。それが訪問の目的、となれば」
「帰って教導隊からやりなおしたら？大体、政治将校様に騎体なん

ているの？デスクと騎体を一緒にされたら困るんだけど」
「“博士”は」
千晶は口元に笑みを浮かべた。
「我々が政治将校あがりだということがお気に召さないようですね」
「あがり、じゃなくて、そのものでしょうが」
紅葉は逆に笑った。
「最初（ハナ）っから第９中隊を名乗っておいて、政治将校じゃない？そんなこと通用すると思う？」
「正式な異動がまだです。従いまして、現在の所属を申し上げた所です」
「へぇ？なら、普通の騎体でも十分じゃない？指揮官騎としての能力に特化した騎体なんて、ここにはないわよ？」
「“死乃天使”を」
「はぁっ？」
「指揮官、副指揮官騎として使用させて頂きたいのですが、よろしいですね？」
「よろしくあるか、ばかっ！」
紅葉は手にしていたバインダーを床にたたきつけた。
「お前等みたいな下手くそが耐えられるような代物じゃないっ！味噌汁で顔洗って出直してこいっ！このへぼっ！」
「ご挨拶ですねぇ」
「ご挨拶でこれで終わりよ！」
紅葉はバインダーを拾い、千晶を睨み付けた。
「“あれ”は全部封印するって決めているの！使いたかったら、陛下の勅命を受けておいで！」
「おやおや。我々は元独立駆逐中隊の後身にあたる部隊。なら、前の部隊の備品は全て引き継いで当然のこと――なのに、どういう権限で、引き継ぐべき備品をえり好みされるのですか？」
「アホ――あのシリーズは、私が貸し出していたの。しかも、部隊へ、じゃなくて、騎士に対してね」

「部隊備品として」
千晶は書類から一枚の用紙を取りだした。
“死乃天使”２騎は明記されていますが？」
「……これだから」
紅葉は顔をしかめた。
「中野は無能だっていうのよ！」
「ほほっ。よく頑張られたと、褒めておきましょうか？」
「わかった」
紅葉は言った。
「明日、シミュレーションしましょう」
「騎体を預けていただければ結構ですが？」
「調整がいるでしょう？」
その顔は意地悪く笑っていた。
「遺書書いてきなさい？シミュレーションだって、あのレベルだったら、死ぬことがあるんだから」
「まさか」
「じゃ、こうしましょう？明日、Ａレベルで機動テストをやる。全部で１０面。ノーミスでクリアしたら、あんた達二人に“死乃天使”を預けてあげる」
「Ａレベル？」
「そう。実戦レベルよ。騎体をすぐ預けろって言うからには、実戦ですぐに使いこなせる自信があるんでしょう？」
「勿論。我々は――選ばれた者達ですから」
「ふんぞり返るな。左遷されたクセに。ついでにレベルいくつ？」
「ＡＡ＋」
千晶は自信ありげにちらりと大月を見た。
「えっと……ＡＡ－です」
「何よ――その消耗品並みのレベルの低さ」
「なっ！？」
「言っておくけどね？“死乃天使”を使いこなせるのは、ほぼＳク

ラス以上の騎士のみ。というか、そのレベル専用に設計した騎でも不満を覚えるような、エリート中のエリートにしか扱えないように設計されている特別騎中の特別騎よ」

「――まさか」

「信じないなら信じないままでいい」

クスクス。

紅葉は笑っていた。

楽しくて仕方ない。

そんな顔をしていた。

「――自分の甘さを理解した時には遅すぎたってこともだってあるんだから」

mess up 第五話

●日本　東京　葉月市　近衛兵団葉月実験センター

「よぉ」

シミュレーション室に入って来たのは後藤と涼宮だ。

「来たよ？」

「お疲れ様」

出迎えた紅葉の向こう側では、激しい機械の作動音が続いている。

「何？面白い見物があるっていうから来たけど？」

「うん」

何故か紅葉は後藤を見ようともしないで、分厚い防弾ガラスの向こうに視線を向けたままだ。

「あんたの部下になろうっていう命知らず――違った、身の程知らずに世の中を教えてあげている所よ」

「へえ？」

後藤が紅葉の横に立つと動き続けているシミュレーションシステムを眺めた。

「第９中隊の厄介ごと、なんで引き受けたのよ」

「飲み屋のツケ、タダにしてくれるっていうからさ」

「こんな無能、引き受けるだけの余裕があるって？」

「そんなにヒドイ？」

「小学校からやり直せって言おうと思ったけど」

ズズンッ！

合成音がスピーカーから響く。

「パパの玉袋からやり直せって、今思った――こらっ、シミュレーション止めないで、まだ１面のクリアしてないでしょ！」

「あの……夏川大尉、気絶してますけど……？」

「電気ショック与えて起こしなさいっ！メース４騎、出して！」

「その女、メサイア使えるんでしょう？」

心なしか、後藤の顔も不安そうだ。
「使えるんでしょう？なんて私が聞きたいことよ、それ」
「……はらぁ」
「目が覚めた――ダメっ！？システムから引っ張り出して水をぶっかけなさい！
それで目が覚めたら、もう一回システムに放り込め！
この程度の分際で、私の“死乃天使”を扱えると豪語したんだから、デカイ口きいた分は落とし前つけてもらうわよ！」
「おいおい、紅葉ちゃんよぉ」
「何？」
「ここで殺しちまうと……ちょっとマズ」
「大丈夫よ。心臓はモニターしているし、この私がいるのよ？」
紅葉は胸につけた六本線を指で軽く弾いた。
「緊急時には、いくらでもどうとでも」
「……だったね」

ついに胆汁まで吐き出したこと。
脳波と心拍数が危険域に達したこと。

この二つでシミュレーションの安全装置が作動、夏川は三途の川を渡らずに済んだ。
「臨死体験はどうだった？」
シミュレーションシステムから引きずり出され、床に転がされた千晶は、混濁する意識の下、紅葉の問いかけにぼそぼそと答えた。
「とっても広い河……美人で……巨乳で」
「はっ？」
「威勢の良い死神さんがおいでおいでって……」
「あともう少し放っておいた方がよかったか」

「……ううっ」
「ああ――――そういえば、大月大尉、生きてる？」
「ひ、ヒドイじゃないですか」
同じように倒れているのは大月だ。
「気絶したまま、システムの中で放っておくなんて！」
「ははっ……ごめんごめん。でも、わかったでしょう？これがどんなもんか」
「ええ……わっ」
大月は頭を振ると立ち上がった。
足下がふらついて、その場に尻餅をつく。
「……これは扱いこなせない」
「当然」
紅葉は胸を張った。
「こいつを扱えたのは、鬼の泉とフォイルナー少佐だけよ」
「……でしょうね」
大月は悔しそうに頷いた。
「こんなピーキーなマシンは、こっちから願い下げだ」
「まぁ、あんたはそこそこ耐えたわよ？問題は」
紅葉が険悪な目つきで千晶を睨んだ。
「こいつよ、こいつ！」
「……」
「ねぇ、この女、メサイアの搭乗経験、どれくらいあるのよ！」
「さ、さぁ……」
大月は蒼い顔のまま、首をかしげた。
「僕も第９中隊に配属されてそろそろ３年ですから、そこそこ古参なんですけど……そういえば、夏川大尉がメサイアで出撃したって話、聞いたことないなぁ」
「おいっ！」
ゲシッ！
紅葉のケリが大月に飛んだ。

「そんなペーパー野郎、もとい、ナプキンがこの紅葉様の騎体を乗りこなせると!?」
「な、なんで僕を蹴るんですか！」
「うるさいっ！この私に蹴られたことは三途の川の向こう側にいる子孫末代まで誇って良し！」
「僕の子孫はどっちにいるんですか!?」
「――そこまで文句が言えるなら、復活しはじめているわね」
「……まだ1回気絶しただけですからね。夏川大尉は」
「もう止めて、お願い死んじゃう――んなセリフ、ベッドの上でも経験ないレベルで泣き叫ばせてやったわ」
「酷いなぁ……女性に対して」
「同じ女だから容赦がないのよ――後藤さん?」
「はいよ?」
紅葉が後ろからついてきた後藤に振り向いた。
「お願いだから、この二人には幻龍改でも与えておいて」
「ああ……大尉が悲鳴上げている間に話はつけた。第9中隊から2騎、回してもらうことになった」
「へえ?随分と大盤振る舞いじゃない。何?景気良いの、連中」
「夏川大尉の悲鳴を聞かせてやったよ。手切れ金だってさ」
「ふん……一部始終は全部記録してあるからね。またバカ言い出したら、全部ネットで公開してやろうかしら」
「勘弁してあげなよ……これでも嫁入り前だ」
「……大月大尉?」
「は、はい?」
「立てるようになったら、夏川大尉を医務室へ運んであげて」
「は、はいっ！」
「まぁ、これで“死乃天使”の封印は認めてもらえるかしら?後藤さん」
「仕方ねぇな……使えるヤツがいないんじゃ」
「だから。“D－SEED”はもうお姫さんしか使えないし、せめ

てほむだけでいいから、天皇護衛隊から取り返せない？下手すれば、夏川のバカが何言い出すか」
「今、アイツ、静岡だか神奈川の方に回されてさぁ。部隊が作戦中じゃぁ、戻せないんだよねぇ」
「墓場から泉大尉を復活させて来て」
「無茶いうなよ」
「シミュレーターの結果みても、夏川大尉がお荷物になることは確かよ？“幻龍改”ですらまともに扱えるか――後方に下げておけというべき技術しか持っていない。腕じゃなくて、舌で出世したヤツって、こういうのですぐボロが出るからイヤなのよ」
「別に、最後まで生かせておけとは言われていないし」
「……粛正するなら部隊編成前にやって頂戴。それとも、ここで事故死させるつもりだったの？」
「どっちだと思う？」
「危うく謀略の片棒担ぐ所だったわけね。この私が」
「おいおい……やってることはいつだって謀略だろ？お前さんの場合」
「人聞きの悪いこと言わないで。他の連中が午後に来るから、それに期待しましょう」
「“死乃天使”はともかく、俺が生き残るだけの才覚があればいいけどなぁ」
「祈ったら？無駄な気がするけど」

「生きてますか？夏川大尉」
「ううっ……」
医務室のベッドに寝かされ、額に濡れたタオルを当てられた千晶が、布団の端を握りながらうめいた。
「目が回る……くらくらする」

「三半規管が参っているんですよ。しばらくすれば落ち着きます」
「何がどうなったかわかんないけど」
「考えなくて良いですよ。今は」
「……そうね。きっとそう」
千晶は深く息を吐いた。
「私が分かるのは、……自分が、ひどく惨めな立場に立っていることだけよ」
「それだけで十分ですよ」
椅子に腰を下ろしていた大月は笑った。
「生きていればこそです」
「……惨めなの、嫌いだから頑張ってきたのよ？この私は」
「得手不得手はありますよ。人生、一度は惨めな思いするもんで――ご存じですか？有名な推理小説作家のアガサ・クリスティによると、そんな場所の一つに歯医者の診察台があるそうです」
「ああ」
タオルで顔の半分を覆った千晶はわざとらしく口を大きく開けた。
「……そうね。わかるわ」
「でしょう？彼女に言わせると、あの診察台は、「どんな人間でも自分がひどくみじめに見える場所」なんだそうです」
「そのバアさん……肛門科には通ったことはないみたいね」
「えっ？」
「……呆れた？」
「驚いてはいます」
「でしょうね……」
千晶は苦笑を漏らした。
「大尉にまでなって、メサイアの扱いが“これ”じゃあね」
「僕が驚いた。といったのは」
大月は肩をすくめた。
「あなたが、僕の思っていたよりずっとフランクで、話しやすい人だってことです」

「そうかしら？」
「“氷の執行者”と言われたあなたですからね。もっと酷薄かと脅えていたのですが」
「酷薄というのは正しいわ。私の他人に対するモットーだもの」
「マジですか」
「でもまぁ、任せて、私は博打には強いんだから」
「賭け事に強いとは知りませんでした。任せろとは勝負師の勘にですか？」
「勝負師？賭け事なんかやらないわよ。私が言っているのは、メサイアの操縦に関してよ」
「メサイアと博打の関係がよくわからないのですが」
「バカね。眠っていたビギナーズ・ラックに決まってるじゃないの」
「まさか」
「そうよ。私は実際に出撃した経験がない。だから、ビギナーズ・ラックが眠っているのよ」
「賭けていいですか？というか、隊長としては賭けるしかないんですけど、不本意ながら」
「不本意は余計よ」
千晶はタオルをとって起き上がろうとしたが体が言うことを聞かない。
体を起こそうとしてベッドに倒れ込んだ。
「無理ですよ」
大月が止めたが、それはあくまで声だけだ。
「僕、努力が結果だと思う方なんです。運試しは嫌いじゃないけど、運まかせは主義に反するんです。だから」
「努力しろと？」
「せめて“幻龍改（げんりゅうかい）”は扱いこなして下さい。それに不安があるなら、後方で指揮のサポートをして下さっても結構です」
「お荷物にはなるな……か」
「僕達は、給料もらっている立場ですから」

「そうね。こういう時、何とかするのがプロって言うか、オトナなのよね」
「そうですよ」
大月は立ち上がった。
「少し、休んでいて下さい。別な連中が“白雷改”のシミュレーションやるっていうんで、隊長として確認して来ます」
「頼むわね……でも」
「はい？」
「女嫌いって聞いていたけど、結構、紳士なのね」
「苦手ですよ？実際、触られるとじんま疹が出ます」
「むぅ……惜しい」
「はい？」
「ううん。何でもない」
千晶は答えた。
「私の歳になれば、何となくでもわかるわよ。とりあえず、これは元同僚として」
「ここでの会話はあくまでプライベートと？」
「そう。オフィシャルはいつも通りよ。でなければ、私の立場がない」
「苦労かけます」
「本当よ」

●大分県大神軍港　狩野重工造船ドック入り口。
「ったくさぁ」
同僚とぼやく技師とすれ違った。
すれ違った美夜は、重機の作動音の中から、その会話を聞き分けた。

「あんなの冗談だって位、わかってないのかねぇ」
「ったくだ。あんなモノ、使えるワケねぇじゃん」

やれやれ。

美夜は小さく肩をすくめた。
相手は民間企業の技師だ。
冗談をやらかしたのは、どうやら艦政本部だけではないらしい。
造船技官達がよってたかってエイプリルフールとやらにでも感染したのだろうか。
それとも、日頃のフラストレーションが何か大宇宙の大いなる意思とやらによって発動したんだろうか。
とりあえず、迷惑を被るのが自分だと思うと、誰か殴りたくなってくる。
一体、どんな代物が出てくるというのだろう。
児玉は“行けばわかる”としか言わないし、肝心の亭主は亭主で、酔っ払って帰ってきた途端、荷造りしていた妻を見て家を出て行かれると勘違いの挙げ句、土下座し始めて……。
はぁっ。
「大丈夫ですか？」
前を歩く造船技官が脚を止めた。
どうやら、口から出たため息を聞かれたらしい。
いい耳をしているなと思いながらも、美夜は少しだけバツの悪い思いをした。
「いえ」
「日本が分断された状況で、東京くんだりからここまでは大変でしたでしょう？」
夫と同じ位の年かさの技官は、わざわざ空港まで美夜を迎えに来てくれたし、何くれとなく世話を焼いてくれる。
男の優しさに、ふと涙が出そうになる。

「ＴＡＣでわずか2時間ですから」
「太平洋上空も、かなりきな臭くなってきたと聞きましたがね」
どうぞ。
技官は手で促しながらドックへの入り口へと美夜を招いた。
一礼の後、美夜は上を見上げた。
軍艦色に塗られた鉄の壁が、美夜の前に立ちふさがっている。
ドックから突き出る艦橋のサイズは、あの大型艦“信濃”級と張り合えるほど大きい。
一目で艦隊級の司令部機能を持つと分かるその大型艦橋は、まるで自分を歓迎しているように美夜は感じた。
「６６号艦です」
「これ……ですか」
「技師達や艦政本部がいろいろ言ってるのは知っていますが」
技官は美夜と共に６６号艦を見上げた。
「こいつはすべてに挑戦するために生まれたような艦です」
「挑戦？随分と持ち上げるんですね」
「当然です。私達が汗水たらして造った艦です。自信を持たなくてどうするんです」
「失礼」
「確かに面白い作りをしています。丁度、私達は“スフィンクス”と読んでいますがね？わかります？あのエジプトの」
「ええ」
美夜は図面を見て、成る程。と思った。
確かに猫科の獣が座っているかの如き状態を軍艦で表したら、きっとこんな感じだろう。６６号官は、そんな外見をしている。
「前に出された両足――我々は左右メサイアデッキと呼んでいますが、それぞれがメサイアの整備デッキとカタパルトデッキを一つにしたもので、艦内に設置された整備デッキからエレベーターで露天となっているカタパルトデッキへ運び上げ、そこから射出します。
カタパルト上には最大で片側2騎が発艦待機可能です。

左右の発艦タイミングの違いを上手く活かせば、緊急出撃でも柔軟な対応が期待できるはずです」
「不足に感じる所は工夫で凌げ、と？」
「その通りです。左右デッキと本体全部使えば、大凡１個大隊が収容可能ですから、収容数は従来艦、鵜来級改と比較してもほぼ同数ですな」
「どうして左右に」
言いかけて、美夜はそれが愚問だと気付いた。
左右メサイアデッキの真ん中には、左右のメサイア用より長いカタパルトデッキがあって、さらにその下には巨大な砲が突き出ているのだ。
「これは？」
「こいつがある意味、この艦の目玉です」
技官は胸を張った。
「信濃の搭載する４６００ミリ相当砲よりさらに巨大な８０００ミリ相当砲――開発コードは“攻城砲”です」
「攻城砲……？」
「ええ。城を破壊する破城槌とでもいいましょうか……全部をぶっ倒すための砲です」
「しかし……」
「そう。艦長が驚くのも無理はない。規格外の試作品を組み込んでいるんですよ」
「でしょうね……」
美夜も頷くしかない。
８０００ミリの砲なんて聞いたことすらない。
しかも、何だこの巨大さは！
「運用方法に想像がつきますか？」
「……いえ」
「まともにぶっ放したら、機関全エネルギーを一瞬で消費して、エネルギー不足が発生します。航行にモロに影響が出ますから注意し

て下さいね？」
「航行に？」
「当然です。エネルギーが一瞬でもゼロになるんですよ？第一、本来求められる機関を搭載していないんです。普段から予定された出力の８割しかないことを頭にいれておいてくださいね？」
「……ですか」
「しかも、一発撃った後の冷却に凄まじい時間がかかります。安全の意味で、一日一回が限度でしょうな」
「一日一回……」
美夜は天を仰いだ。
「健康的ですね」
「嫌みなことを言いますねぇ」
「使い道、ないんじゃないですか？これ」
「ええ。信濃ですら搭載を見送ったのは、こんな一日一発しか撃てない砲に何の意味もないからです」
「はっきり言わないで下さい」
「まぁまぁ……それでも、エネルギー出力を１０％以下に絞れば、一日１０発までなら冷却が追いつくはすです。それでも８００ミリですよ？何かに使えますって」
「どういう時にですか」
「それは考えて下さい。私は造艦技官であって運用を考える方面の専門家じゃない」
都合が悪くなると上手く逃げる。
これだから男は。
美夜は内心で舌打ちした。
「対空砲、その他の武装も十分です……まぁ」
こほん。
技師はわざとらしい咳払いの後、
「“鈴谷（すずや）”ほどではないですけどね」
「あれはやり過ぎました」

「ははっ……まぁ、完璧というにはほど遠いのも事実です」
「……」
「はっきり申し上げておきます。
予定されていた副砲をはじめ、かなりの施設が出力不足と資材不足、時間不足、人手不足……後、何が不足していたっけ？
とにかく、全てが不足しているおかげで搭載が見送られました。
具体的には、乗組員達の娯楽施設、メサイアのシミュレーターシステムといった主立った物から、兵員居住区の壁紙まで、削れるところはほとんど削られています。
航行と戦闘に支障が出ないと判断されたギリギリの所で運用していただくのは、さすがに心苦しいですが」
「我々は船乗りです」
美夜は答えた。
「寝床（ハンモック）があれば眠れますし、必要なら床で食事も出来ます」
「――お心遣い、感謝します」
技官は頭を下げた。
「とりあえず、艦橋へご案内しましょう。
“人類に操艦は無理”なんて噂されていますがとんでもない。
あれは単なる仕様書の問題で、こちらとしては、きちんと設計をやり直しましたよ？
その気というか、ＳＣさえちゃん（シップ・コントローラー）といてくれれば、一人で余裕の、しかも最高の操艦を保証しますよ？」
「ほう？」
「艦の操作説明書、お読みになっておいて下さいね？」
「勘弁して下さい」
美夜は肩をすくめた。
「あんな分厚いもの。ＧＵＩで感覚的に操作できないのですか？」
「出来ますよ？ただ、立場的には読まれた方が」
「そこを上手く処理してくれるのが技術屋ではないのですか？」
「そうですかねぇ」

「それで普通です。
例え人工臓器を取り付けたからって、分厚い取説を読む患者がいると思います？
心臓が停止した後で取説読んでみたら、リセットボタンを押して再起動して下さいなんて書いてあったらどうしろと？」
「心臓が止まった後、どうやって取説を読むつもりですか。あなたは」
「楽をしたいだけです」
「艦長たる者、艦には精通していた方がいいと思いますがねぇ」
「因果な立場だと思いますよ」
「ご愁傷様です。ま、慰めになるかはしりませんがね？基本的に艦橋で全てがこなせる設計です。艦長席のパネルで艦のステイタスはほとんど把握出来ますし、まぁ、論より証拠ですよ？中を見て判断して下さい」
「楽しみです」

●翌日　日本　東京　葉月市　近衛兵団葉月実験センター
ズズンッ！
ドンッ！
シミュレーションルームに入った大月の耳を襲ったのは、そんな音だった。
誰が撃破された？
ふと、そう思ったが、
「大月大尉、出頭しました」
「……時間通りね」
白衣のポケットに手を突っ込んだまま、紅葉は答えた。
「あの女は？」

「医師の精密検査を受けています。胃の調子が悪いと」
「連れてきなさいよ」
「朝食を全て戻してしまったそうで」
「情けないわね……加藤先生は良い腕しているから、いっそのこと、頭も診てもらうことね」
「今の音は？」
「さすがに慣れたみたいね」
「まさか」
「“死乃天使”じゃないわよ？“白雷改”。それでも」

ザンッ！
ズンッ！
バンッ！

連続した破壊音がスピーカーから響く。
シミュレーションシステムが合成した擬似的な音であるとはいえ、そのリアルな音は心臓に悪い。

「――あんた達には任せられないわね」
「……汚名を雪ぐ場は与えられないと？」
「バカ。“死乃天使”のレベル下げれば“白雷”のシミュレーションになるの。あんた達は、それすら使いこなせなかったのよ」
「……今、乗っているのは」
「勿論、使いこなしているわ？基礎動作こなすだけで１３時間かかっているけど」
「し、死にますよ」
「クリアしないと、生きてシミュレーションから出さないって言ったら？」
「まさか！」
「冗談よ――あんた、ホント真面目な方なんだ」

紅葉がポンッと叩こうとしたが、大月はそれをさっと避けた。
「……」
「――失礼」
「騎士のプライドってわけじゃなさそうね」
「……はい」
「女は苦手？」
「――女性恐怖症と思って頂いて結構です」
「ホモ？」
「……ノーマル、だと思います」
「よかった。近づくんじゃねぇって、蹴り飛ばすところだった」
「どうも――それで？」
「昨日、みっちり乗せたから慣れているだけよ。でも、ようやく任せるに足る奴らになりつつあるかなって、言える」
「博士の目から見て、彼等は何人前程度ですか？」
「彼女達、よ。ついでに8分の5人前。しってる？8分の5チップスって昔あったんだけど」
「知りません」
「新しいわね」
「褒め言葉ですか？それ」
「一応ね。あんた達は“幻龍改”で指揮を執って、前衛を彼女達に任せることになるんじゃないかしら、それとも」
「それとも？」
「女に前衛を張られるのは、お嫌いかしら？」
「いえ」
大月は首を横に振った。
「そういう意味での差別はしない主義です」
「ふん……兵隊に意思も性別も不要？」
「意思は必要でしょう」
「どんな」
「個人としての人格というか……」

「“白雷改”を任せて、一つ部隊任せて、ついでに、前の前衛隊長がＭＩＡ喰らった後釜に据えようとしていたヤツは、今、精神病院よ」
「えっ？」
「前衛隊長張っていたヤツが、そいつの恋人でね。その喪失感に、個人の人格ってヤツを潰されたのよ」
「……そんなことが」
「無情になれとは言わないけど、過度の介入も避けた方がいい。これは鉄則でしょう？特に、あんたの元所属においては」
「“組織化された暴力”を使うなら、兵隊に意思を持たせるな。とはよく聞かされました」
「３０点って所ね」
「随分と厳しい点数ですね」
「殺意以外の意思は。とすれば５０点あげたけどね」
「残りは？」
「現場で何とかしろ。後藤さんが大好きな言葉だから覚えておいて」
「……成る程？」
「とりあえず、シミュレーションが終わったみたいだから、面通しする？」
「お願いします」

mess up 第六話

●日本　静岡県　最前線

“幻龍改”が振った斬艦刀がサライマの首を刎ねた。

オレンジ色に塗装されたその首が宙を舞う間に、“幻龍改”が軽々と振り回す斬艦刀は、新たな餌食に喰らいついた。

素早い突き技がツヴァイの胸に深々と突き刺さった。

「ちっ」

「左、３５っ！」

ガンッ！

ＭＣＲからの声に弾かれたように、シールドを持つ左腕が動き、新たなサライマの戦斧を受け止めた。

腕に鈍い痛みが走り、思わず顔をしかめた。

二撃目を狙い、大きく戦斧を振り上げたサライマ。そのガラ空きの胴体めがけてシールドのエッジを叩き込んだ。

グシャッと嫌な音を立て、サライマの胴体が切断され、上半身だけが後ろへ倒れる。

奇妙に突っ立ったままの下半身。その切断面からオイルが噴水のように吹きだしたかと思った刹那、火花に引火したオイルが、無残な下半身を盛大に火葬にしてのけた。

松明のように燃え上がるメースの下半身を尻目に、ＭＣＲから、コクピットの騎士に報告が入った。

「状況緑。周辺に敵性反応なし」

「了解」

コクピットで頷いたのは、あのほむらだった。

「まどか？司令部へ通報して。敵は始末したって」

「了解――お昼前に終わってよかったね」

「そうね――戻ってご飯にしましょう」

「うん」

「はい、お疲れさん」
整備ハンガーに騎体を固定し、騎体停止手順を一通り終えたほむらは、ハッチを開いてコクピットから出た。
ハッチ周辺には既に整備兵が待ち構えていた。
コクピット周辺を担当する班を指揮する、整備第三班の班長、羽田野軍曹が出迎えてくれた。
オイルにまみれ、危険が付きもののメサイア整備だというのに、羽田野軍曹は女性だ。
最近はこの分野での女性進出も目覚ましく、そのうち女性だけの整備班が出来るのも時間の問題だと、羽田野軍曹は胸を張ったのをほむらは覚えている。
それについては、同じ女性としては嬉しいような、危険だからやめろと言いたいような、複雑な気持ちがほむらにはある。
「破損もなしで敵3騎撃破――記録更新、おめでとう。感想は？」
「左腕がちょっと」
「まだ調整足りない？」
「バリが引っかかっているような、違和感を感じます」
「あちゃ……調整不足かな。田中さんが心配していたけど、その通りみたいね」
羽田野軍曹は、軍手を脱ぐとほむらの頭を撫でた。
「セッティングが微妙になればなるほど、騎士は腕が良いっていうからね。さすがよ」
「……どうも」
「お腹すいたでしょう？ご飯、食べてきなさいよ。今日は鶏の唐揚げ。缶詰じゃないの。しかも、生キャベツの千切りもついている。茹でもやしじゃないの！おいしかったわぁ」
「豪華ですね」
うっとりする羽田野の顔に苦笑が出た。

普段なら唐揚げにキャベツなんてどうということはないメニューだが、戦場、しかも国土がここまで荒廃した状況下では、肉も野菜も、食べ物は全て貴重品だ。

最前線の兵士ともなれば、例え騎士といえども、メニューがお茶漬けなんてことは珍しくもない。それが現実だ。

「3騎撃破のご褒美だと思って――本当なら、お酒でもプレゼントしたいところだけど」

羽田野軍曹がツナギのポケットから取りだしたのはチョコレートだった。

「甘味も貴重でしょ？」

「ありがとうございます」

ほむらはチョコレートを受け取ると笑って見せた。

最近、上手く笑えるようになったかな。と、笑顔に自信が持てるようになった。

「うん――各部装甲解除、コネクタ接続準備、かかれっ！」

食堂は昼時とあって、混んでいた。

MC（メサイア・コンセプトオフィサー）の妹尾まどかと一緒に配給を待つ列に並ぶ。

妹尾まどかは、ほむらが独立駆逐中隊に配属される前にパートナーを組んでいた相手。

同い年という心やすさもあって、ほむらにとってはたった一人の“友達”と言っても良い。

独立駆逐中隊に異動する際、無理を言って一緒に移籍させてもらった相手。

ピンク色の髪をツインテールにした童顔の少女で、ほむらと並ぶと、どれほどひいき目に見ても中学生のコンビにしか見えない。

だから、他の兵士達と混ざると、頭二つか三つ小さい分、こういう行列では見逃されやすい。

何度も苦労した二人は、なるべく自分達に体格の近い兵士の後ろに付いて、自分を目立たせる必要があるから、列に加わるにも一苦労だ。

１０分以上列に並んで、唐揚げとキャベツの千切り、元が何だかわからない物体の入った味噌汁、そしてご飯を受け取った。

「おいしそうだねぇ」

トレーを持ったまどかは嬉しそうだ。

空いている席に二人で向かい合いに座った。

「お肉なんて久しぶり♪」

「そうね」

ほむらも口元に笑みが浮かぶ。

不意に視線を感じたほむらが前を見ると、まどかが自分をじっと見つめていた。

「……何？」

「ううん？」

まどかはニコリと笑って言った。

「ほむらちゃん、最近、笑うようになったなぁって」

「……そう？」

「うん。前の中隊のみんなと一緒にいた頃から、変わったよ？」

「いいことかしら」

「当然。女の子は笑顔が一番だよ」

「私……笑った方がいい？」

「うん。私、ほむらちゃんの笑顔、大好きだよ」

「す、好き？」

「うん。好き」

「そ……そう」

何故か、ほむらの頬が赤くなった。

「それ、魂に刻んでおく」

「へっ？」

「何でもない」

ほむらは箸をとった。
「食べよう？午後も出撃だから」
「うん」

「明貴」
不意に、男に声をかけられたほむらは、唐揚げをつまんだ箸を止めた。
「久しぶりだなぁ」
トレーを持って、ほむらの隣の席に座ったのは、頬に傷のある若い男だった。
「覚えてるか？」
「……月海中尉」
ほむらとまどかは、びっくりした顔をして、慌てて立ち上がると敬礼した。
「お久しぶりです！」
「ご無沙汰でありますっ！」
「ああ――いい」

月海中尉。

そう呼ばれた男は、苦笑いを浮かべて手で二人を制した。
「命の恩人二人組に、そんな畏まってもらうと、俺の立場がない」
「き、恐縮です」
「とりあえず、座れよ……っていうか」
月海中尉は、苦笑を浮かべ、頬の傷をポリポリと掻いた。
「俺が言って良いセリフじゃないか」
「いえ」
ほむら達は再び座り直した。
「退院されたのですね。よかった」

「お前達が助けてくれなかったら、死んでいたさ」

ほむらとまどかが、第一中隊でコンビを組んでいた頃、ほむら達が僚騎を担当したのが、この月海中尉騎だった。

中隊において、ほむらと中尉達の2騎による出撃は数度に渡った。

出撃の度に、必ずと断言して良いほど、戦果を挙げ続けたのはほむらの方だった。

月海中尉と共に出撃しても、技量の差が激しく出てしまい、戦果のバランスがほむらの方にどうしても傾く。

ほむらが敵を血祭りに上げる一方、月海中尉が戦果ゼロで戻ることも幾度となくあった。

当時から“死神”の異名を（本人として不本意ながら）、ほしいままにしていた、ほむらの僚騎故の“不遇”――周囲はそう見なしてくれていたが、それでも彼は、出撃の度に内心で焦りを募らせることを抑えられなかった。

戦功への焦燥感は時として命取りになる。

その禁忌を犯した罰を彼が支払わされるのに、それほどの時間は不要だった。

丁度、１０回目の出撃がその時だった。

戦果に焦った彼は、対峙したサライマの動きをチャンスと見誤った。

彼とて近衛のメサイア乗りだ。

普段の冷静さを彼が維持していたら、それがフェイクだと悟ることも出来たかもしれない。

しかし、不幸なことに、彼はそれを果たせなかった。

戦果に食らい付こうと襲いかかった彼に待ち構えていたのは、敵からの予想外の反撃。

サライマの戦斧をまともに首筋に受けた月海中尉騎は、コクピッ

トブロックにまで達した一撃により大破。
コクピットは即座に血の海と化した。
僚騎であるほむら騎が即座に駆けつけて、サライマの両腕を切断しなければ、今頃、月海中尉は靖国神社か、よくても九段下に戸籍を変えていた。
ほむらはこの時、現状待機命令を無視した上で、月海騎を担ぎ上げて後退。
月海中尉は一命を取り留めたが、代償として命令違反に問われたほむらは中隊を追われた。
そんな過去を因縁と呼ぶなら、因縁のある二人が、こうして再び戦場で出会ったのだ。

「いずれは礼を――――そう思っていたんだが、すまなかった」
「……いえ」
ほむらは何と言って良いのかわからず、口ごもってしまった。
「……その」
「俺がもう少し、しっかりしていればなぁ」

「そんなことありません」
きっぱりとそう言い切ったのは、月海中尉の横にいた金髪をツインテールにした女の子だ。
くりっとした目が愛らしい、年の頃はほとんど変わらない少女がムキになって言った。
「お兄様は、ちょっと運がなかっただけです！むしろお気の毒なんです！第一、あの時は二騎でカバーしあいながらの戦闘展開が要求されたのに」
「沙緒（すなお）」
月海中尉が静かに少女の言葉を制した。
「判定は出ているだろう？その戦闘展開を無視したのは、むしろ俺の方だって。それに、命令違反を犯してまで助けてくれた、俺達に

とっては命の恩人だぞ？」
「で、ですけど……」
「それに」
月海中尉は眩しそうにほむらの戦闘服の腕を見た。
そこに張り付けられているのは、今のほむらの所属――天皇護衛隊のエンブレムだった。
「相手は天皇護衛隊の騎士だぞ？」
「ううっ……」
金髪の少女は、悔しそうに小さくなった。
「お兄様にこそ、相応しいポジションですのにぃ……」
「相変わらずだね」
何故か、苦笑したのはまどかだった。
「その負けず嫌い」
「これは負けず嫌いじゃありませんっ！これは当然の怒りというのですっ！そうでしょう？妹尾候補生っ！」
「もうね？私達、候補生じゃないよ？」
まどかは襟の階級章を指さした。
「これでも少尉なんだから」
「わ、私だって同じですわ？」
「なら、おあいこだね？」
「……」
笑うまどかと、そっぽを向く沙緒。
ほむらと月海中尉の視線に気付いたまどかが言った。
「あのね？まどかちゃん。私と沙緒ちゃん……じゃない、月海少尉は、訓練校でルームメイトだったの」
「……へぇ？」
「な、なんですの？」
何故か、沙緒がびくっとなって胸元を押さえた。
まるで猛獣に狙われた小動物さながらの動きだった。
「今、凄まじい殺気を感じたんですけど」

「……感度はいいみたい」
「へっ？」
「……何でもない。というか」
じっ。と、まどかを見つめたほむらが訊ねた。
“何”もなかったのよね？まどか」
「な、何って――なに？」
「だから、ナニ」
「ナニ？」
「もし、何かあったら言いなさい？まどか」
ぎゅっ。
不意に、まどかの手をほむらが掴んだ。
「辛かったでしょうけど、私が聞いてあげる。その後、しかるべき処置をとるから」
「あの……わけがわからないよ」
「いいの。心配しなくて。手を汚すのは私だから。この病原菌を原子単位で切り刻んでドブの中に流し込むなんて、そんなのまどかに似合わない」
「誰になら――似合うのかなぁ」
「……とりあえず」
泣き出しそうになっている沙緒をなだめながら、月海中尉が言った。
「現実に戻ってきてくれないか？それから、人の妹を危険な趣味の人物扱いしないでほしいな」
「――失礼しました」
ほむらは咳払いして、名残惜しそうにまどかから手を放した。
「いろいろと気が立ってしまって」
「ああ、そうだろうな。午前中で3騎撃破。戦線赴任から一週間で戦果記録（レコード）更新だもんな。さすがだ」
「恐れ入ります」
「本当なら、もう一度、僚騎を組んで俺の実力も見直してほしかっ

たけど、残念だ」
「えっ？」
「午後の便で俺達は異動なんだ」
「異動？」
「ああ――縁があったらまた会おう。その時は」
「その時は？」
「俺の本当の実力に酔いしれてもらうぜ？」

●翌日　日本　東京　葉月市　近衛兵団葉月実験センター
「鬼龍院中尉を戻したいのは確かよ」
「何とかなんない？」
「新型の狙撃システムのテストには不可欠なのよ。あれ、開発急げって催促がスゴくて」
「そこを何とか」
「無理よ無理！鬼龍院中尉のデータをベースにしているから、どうしようもない！」
「なんでそんなことしたの」
「仕方ないじゃない。スナイパーとしては、シモ・ヘイヘやデューク東郷とガチで張り合える逸材よ？銃のオリンピックでも開催したら、メダルでオセロが出来るわよ。あの女（ひと）」
「考えるに……俺ぁ、随分と人材的に贅沢してたんだなぁ」
「当然でしょ？あんたが色々動けたのは、あいつらあってこそなんだから」
「カァッ……参ったね。どうも」
「平野少尉は回してあげるわよ。あと一人、鬼龍院中尉ほどじゃないけど、補充を手配してある。“白雷改”の最後は、そいつに預けるわ」
「使えるかい？」

「使えなければ銃殺。中隊の補充は狙撃砲開発完了まで待ってもらうことに」
「勘弁してよ。こっちは上の事情で動いているわけじゃない」
「お上の政治の事情が戦争でしょうが。科学なんて所詮、政治の道具でしかないの。わかるでしょう？」
「スポンサー様が誰かはわかってるさ……グチ位、言わせてよ」
「グチりたいのは私の方よ。あいつら手放した責任はあんたにあるんだからね？後藤中佐？」
「反省するのに忙しくて後悔が出来ないよ」
「……まぁ、後悔してもしかたないわ。あっちこっちの部隊で爪弾きにされた連中で編成された“いらん子”中隊が、今の所、人類の命運を決める“鍵”ってワケよ」
「使いたくねぇっていうか、頼りたくもねぇなぁ」
「……あのぉ」
大月中尉が言った。
「自分達、随分言われた気がしたんですけど」
「真実じゃない」
「真実、ですか」
「まぁ、問題じゃないけどね」
「問題ですよ。僕達の立場はどうなるんです？」
「知るか。あんたに立場がないって真実が問題じゃなくて、あんたが使えないって現実が問題なの」
「うっ……」
「で？このいらん子中隊の中隊長が、この後藤中佐――挨拶」
「敬礼」
大月の号令で、居並ぶ面々が敬礼した。
「はい、ご苦労さん。面通しするか――端っこから名前と階級、後は元の所属を申告して頂戴」
「大月智久大尉。元第九中隊所属」
「野郎は省略だ――次」

「朝倉美柚姫（あさくら・みゆき）大尉、元第一中隊所属です」
大月の横にいたポニーテールの女性士官が敬礼した。
背は大月より少し高い。優しそうな顔を精一杯真面目にしていると、何だか小学校の先生あたりが似合いそうな、そんな印象を受ける。
「スコアはかなりだな」
後藤が手元の資料を見ながら言った。
「――ぶちかましの美柚姫？何、これ」
「あ、あの……」
美柚姫は真っ赤になって答えた。
「自分は、戦棍（せんこん）を使いまして……」
「ああ。ぶん殴るってところから“ぶちかまし”か」
「……はい」
美柚姫は頷くと小さくなった。
「ぶっこわしの美柚姫の方が有名なんだけどね」
紅葉が意地悪そうにニヤリと口元で笑った。
「は、反省はしているんですっ！出撃の度に関節壊したことは、確かに！」
「“白雷改”じゃ、“幻龍改”みたいな問題は起きないわ。開発者として保証してあげる」
「あ、ありがとうございますっ！」
「――次」
「はぁいっ！」
笑顔で手を挙げたのは、双子の姉妹だった。
二人揃って動作は一緒、外見も一緒で背は低い。
「佐野亜紀少尉（さの・あき）でぇすっ！」
「佐野亜夜少尉（さの・あや）ですうっ！」
「第二中隊所属……か」
「ああ――あんた達なんだ」
「知ってるのかい？」

「“殺戮の人形コンビ”って」
「うんっ！」
「そうだよ？」
「おいおい……なんだよ。その物騒な名前」
「いろいろあるのよ……殺しは楽しい？」
「うん」
「ぐちゃぐちゃにしてやるの。血や肉を見るの、大好きよ？」
「……警察官としては、絶対に出会いたくねぇタイプってことね」
「快楽殺人者か、精神異常者、外(しゃば)なら、どっちにしても精神病院送りね」
「ここがどこか、こういう時にわかる」
「ま、ここじゃ、これが普通、でしょ？」
「違いない。殺して殺して、殺しまくってくれていいけど、おじさんの言うことは絶対に従ってね？」
「それがルール？」
「それ、やったら殺していいの？」
「殺した分だけ褒めてあげよう」
「わぁいっ！」
「やるぅっ！」
「……薄ら寒いものがあるわね」
「だな……次」
「霧島はるか……少尉。元、第二中隊所属」
物静かというか、無機質に近い声でそう申告したのは、等身大の人形のような美少女だった。
姫君とか、そういった生身の人間とは到底思えないほど、愛らしいというより人間離れした美貌の持ち主だ。
ただ、この美貌という言葉が、いかに個人の感覚的によって異なるかを、この女ほど理解させる存在も珍しい。
この女を前にした時、多くの人は、彼女を美しいと褒めるか、それとも気味が悪いと嫌悪するか、判断は分かれてしまうことだろう

から。
「……」
無言でまっすぐな姿勢を崩すこともしない態度は、褒めるべきなのかどうなのか、後藤も何とも言えない。
精神がどうにかなった人にも見えるから厄介だ。
「朝倉大尉と並ぶ戦果って所か」
後藤は資料から彼女のデータを確かめた。
「千人切りのはるか……怖い異名だね」
「……」
「そう思わない？」
「……別に」
はるかは視線を動かすこともせず、短く答えた。
「騎士は……祈りながら刃を振るえば……それ以外は必要ない」
佐野姉妹とは違った意味で厄介そうだな。
後藤は内心でそう思ったが、口には出さなかった。
「はい。ご苦労さん。大月大尉以外は全員、“白雷改”に搭乗してもらう。あと何人か、合流が遅れているけど、必ず何とかするから心配しないでね？」

ｍｅｓｓ　ｕｐ　第六話（後書き）

ごめんなさい。もう力尽きました。今日はここまでです。

いらん子中隊奮戦す　第一話

●大分県大神軍港　狩野重工造船ドック

初の出航だというのに、くす玉割りもなければ、命名式もない。

軍楽隊もなければ歓声もない。

万歳もなければ見送りもない。

ドック両側に立つ造船所の職員達が迷惑そうに浮かんでいく６６号艦を眺めている。

「高度３６、３７、３８」

操舵手席に座る芥川中尉が目の前に用意されたモニターに表示された高度計を読み上げる。

操舵席に座った途端、鵜来級より圧倒的に進んだ計器類と操縦システムに歓声を上げた中尉の声は明るい。

「出力上昇開始。全システム、オールグリーン。現在出力４８００」

機関部のコントロールも一人で出来る操縦システムのおかげで、この艦は艦長の命令がなくても、芥川の判断一つで動かすことが出来る。

「高度１００で高度固定。機関前進、第二巡航速度へ」

副長の高木が、艦長席の横に仁王立ちになって命じた。

「高度１００にて固定了解。現在８９」

「――どういう皮肉でしょうかね」

視線をまっすぐに広がる海へ向けたまま、高木は言った。

「私はもう、前線勤務から外れるものだと思っていましたが」

「私もよ」

艦長席に座った美夜も答えた。

「辞表提出したんだけど」

「私もです」

「どうなった？」

「破られました。鴨川への引っ越し準備までしていたのですが」

「残念ね」
「全くです。しかも輸送艦に缶詰にされて、こんな得体の知れない艦で出会った顔は見知った顔ばかり」
「艦長席に座りたかった？」
「まさか――私は根っから副長あたりが適任だと思っています。ただ、何か、とんでもないやり直しを命じられたような気がしましてね」
「そうね」
美夜も笑いもせずに頷いた。
「厄介モノってことでしょうね」
美夜はモニターを眺めながら言った。
「見なさい。ドックの関係者」
「はっ？」
「何をやっているんだろうと思ったら、私達が去った後のドックめがけて塩を撒いているわ」
「どこまで厄介モノなんですか、我々は」
「さぁ？」
上昇を続けていた艦が止まった。
その停止の、あまりの静けさは、ビルのエレベーターの停止のほうが余程乱暴にさえ思えてしまうほどだ。
「ＳＣ（シップコントローラー）は？」
「前回同様、榊少尉です」
「さすがの腕前――か」
「ちょっとは自分のことも褒めて下さいよ」
芥川中尉が口を挟んだ。
「ピッタリの高度に止めたのは自分です」
「手動でやったのか？」
「当然です」
高木副長の言葉に、芥川中尉は胸を張った。
「１ミリだって狂ってませんよ？レカロの高級シートに牛革張りの

ステアリング。下手な高級車顔負けの装備をもらったとあっては、この位の腕前は見せないと」
「さすがだ」
美夜は満足そうに頷き、インターフォンをとった。
「艦長より全乗り組みへ達する。本艦は現時点をもって無事に出航した。これより太平洋上空に出て公試に入る。各員、光輝ある近衛飛行艦隊の新参たる本艦の性能を完璧に引きずり出すよう、鋭意努力しろ。以上だ」
「――ところで、艦長？」
「何？」
「本艦はいつまで６６号艦のままなのですか？」
「名前？エンタープライズ号とでもする？それともヤマト？」
「この艦は宇宙船ではありません。ついでに私はスポックでもない」
「ホワイトベースがいいかしら。それともナデシコ？」
「……もしかして」高木は怪訝そうに訊ねた。
「本艦の名前、まだ未定のままとか？」
「笑っちゃうでしょう？」
美夜は肩をすくめてみせた。
「書類の上でも６６号艦のままなのよ。何かいい案あったら教えて頂戴」
「いいんじゃないですか？あなたが指揮するんです。“鈴谷（すずや）”のままで」
「沈んだ船の名前を引き継ぐなんて、縁起が悪くないかしら」
「そんなこと言っていたら、あと何代か後にはネタを全て使い果たしているでしょうな」
「前向きに……か」
「そういうことです。いかがです？」
「そうね。私達が戦う艦は一つ。私達の戦場もまた一つ。その名を汚した罪を償う十字架もまた一つ……司令部にはそう報告するわ」
美夜は笑った。

「公試終了と同時に、６６号艦を“鈴谷”と呼称する――――とね」

●東京都　葉月市　近衛兵団葉月実験センター

「編成については」

後藤は言った。

「大月、前線指揮官のお前のご都合通りでいいさ」

「しかし」

「俺は後方にいるだけ。

前線でドンパチやって命張るのはお前達だから？

お前達がやりやすいようにやってくれていい。

それが俺のスタンスさ。

俺の都合で死んだなんていわれちゃ、俺の命がいくつあっても足りないからね」

「フリーハンド……でありますか？」

「喜びなさいよ。やりたいようにやらせてあげるんだから」

「何か……こう、責任というものがどこにあるのか」

「指揮官の責任は、指揮官の型にあるのさ。現場指揮官の責任を、上層部がとってくれるなんて、そんな都合のいいこと、あるはずないでしょ？」

「ないんですか？」

「お前、指揮官になったの初めてか？」

「はい」

「なら、慣れるこった。前任者は結構早く成長したぞ？泣いて叫んで、無様に足掻いて……」

「……」

火の付いていないタバコをくわえ、ニヤリと笑った後藤だったが、大月にはその笑みに隠された中身は、単なるイヤミではなく、何か後藤の中にある、恐ろしく虚ろな感情ではないか思った。

それほど、後藤の笑いは湿っていた。
「夏川もいるこった。わかんないこたぁ、俺よか夏川に聞いた方がいいぜ？」
「……了解」
「当面、欠員の補充はない。っーか、遅れる」
「予定されていた狙撃部隊は」
「二人なんだけどさぁ、一人じゃ使えないし、もう一人は“白雷改”の転換訓練中だ。狙撃部隊は、他の連中と違って、そう簡単には連携組めないからねぇ」
「二人の腕前は？」
「一人は前の部隊からの生き残りだ。腕は確かだ。俺が保証してやろう」
「問題は」
夏川が二人の会話に割り込むように言った。
「――新入りの方ですか？」
「第一中隊の生き残りだ。まぁ、こいつよか」
履歴書類をデスクに放り出し、後藤はポケットからライターを取りだした。
「こいつとコンビ組んでいるMC（メサイア・コントローラー）がほしいんだよね」
「MC（メサイア・コントローラー）？」
「ああ。騎士の妹でね。俗に言うブラコンだ」
「ブラ？」
「お兄ちゃん大好きってヤツ？お兄ちゃん追っかけて軍へ入ったって位のヤツで、かなりアブなそうだけど、射撃補正能力は、そこらのMC（メサイア・コントローラー）と比べても段違いに高い」
「騎士本人の実力は、高くないと？」
夏川は書類をデスクからとりあげた。
「いや？腐っても第一中隊所属だ。腕前ははっきりいい――お前達よりもね」
「……っ」

“白雷改”を与えられる。
その意味を、狙撃能力に見いだしていた夏川は、顔をしかめた。
「前の部隊にいたナンバー3の娘と僚騎組んだこともあるって経歴の持ち主だ。もっとも、そのおかげで死にかけたようだけど。詳しくは本人にでも聞くこった」
「ご関心はない――と？」
「臨死体験したご感想はいかがですか？ってか？俺ぁ、死んだ先のことを心配するトシじゃないからねぇ」
「と、とにかく」
大月はやっと割って入った。
夏川は大月より年上で、しかも、大月にとっては長年恐れていた程のエリート。
それが自分の副官と言われても、お目付役の間違いだろうと思ってしまう。
そして、上司は、彼にとって恐怖の対象でしかなかった、あの辻中佐が気をつけろと警告した程の厄介モノだ。
下手に機嫌を損ねたくない。
組織の中で生きる大月の本能はそう告げていた。
「戦場で助け合えれば、その……我々が生き残る可能性も……」
「甘いわね。大月」
ジロッ。と夏川は大月を睨み付けた。
思わず大月の背筋が伸びる。
「個人の素質がすべてよ。素質に欠けた奴が部隊に入れば、それだけで部隊は死ぬ。わかる？腐ったミカンを箱にいれておけば、他のミカンはすべて腐るのよ」
「そ、そんな。まだ」
「まだ会っていない？会う前から素質を知るための経歴書類でしょう？あなたも指揮官なんだから、こういうのに精通しなさい。名前、経歴、交友関係、特にいい男なら女関係は欠かせない！」
「あ、あの……？」

「そういうところから、人間ボロが出るのよ！」
途端に、夏川は力説した。
「いい男に限って、フリーだっていうから信じたのに、軍の外に女囲ってる奴ばっかりで……！」
「た、大尉？」
「……明日には演習でしたね」
「お前さんも話題の変更が強引だねぇ」
「大切なのは、大月の隊長としての能力の開眼と、そして部隊の運営にあります」
「ま、言ってるこたぁ、正論だわな――大月」
「はっ」
「明日、予定通り、静岡県へ部隊を移動。現地の敵性メースを相手に戦闘を命じる」
「あ、あの」
焦った顔の大月が訊ねた。
「ぐ、具体的な作戦は」
「あるか、んなもの」
「そんな無茶な！」
「敵が出てきたら殺すだけ。引くのも進むのも、お前さんの胸先三分だ。泣く子も黙らせてきた“白雷改”を装備する部隊は他部隊も見ているぞ？恥ずかしくないだけの戦いをしてこい――ただ、戦果は期待しない。俺はそれしか言わん」
「……」
大月は真っ青な顔になって、バカの様に頷いた。

「――大月」
隊長室を辞した大月を呼び止めたのは夏川だ。
ところが、大月は全くそれに気付いていない様子でフラフラと歩

きながら何事かブツブツと言い続けている。
「大月っ！」
パンッ！
肩を掴んだ夏川の平手が大月の頬を張った。
「何をしているかっ！」
突然の頬の痛みと叱責に、大月はやっと我に返った様子だった。
ポカンとしたまま、夏川の顔を見ている。
「しっかりしろ！隊長がそれでは、勝てる戦でさえ、どうしようもないぞ！」
「あ……あっ」
「……作戦は私が考える」
夏川は舌打ちした後、吐き捨てる様に言った。
「作戦書類は後で見せる。お前は便所掃除でもしていろ。そっちの方がお似合いだ」
反論を許さない。
夏川は態度でそう語ると、靴音高く廊下を去って行った。

「――“白雷改”が？」
朝、部屋に飛び込んできたのは、息を切らせて走ってきたまどかだった。
「うんっ！」
荒い息の下、まどかは興奮した様子で頷いた。
「“死乃天使”は来てないけど、間違いないよ！“白雷改”！」
「まさか」
ほむらは手にしていた布を床に落とした。
「中隊は解散したはずよ？」
「で、でもっ！駐騎場に並び始めているよ！？」
「今、行く」

「うんっ！」
まどかは頷き、“先に行っているから！”と言いかけて言葉を止めた。
「――あの、ほむらちゃん？」
「何？」
「あの、何してたの？」
「いろいろ」
「ここね？私の部屋なんだけど」
「気にしなくていい」
「かぎ、かかっていたはずだけど」
「まどかが心の鍵を開けてくれたから、ここの鍵なんてすぐに開いた」
「い、意味が分かんないけど……」
「練習した。この程度、ヘアピン一つで開けられる」
「明日からサムターン用意するね？それと、なんで私の下着入れを漁っていたの？」
「……趣味」
ほむらはそっと、床に落ちていたまどかのショーツを畳むと下着入れにもどした。
「……部屋に対人用地雷用意しておくね？センサー反応の」
「大丈夫」
ほむらは答えた。
「努力してクリアする」
「お願い、やめて」

宿舎の館内放送が呼び出し音を鳴らしたのはその時だ。
呼び出されたのは、ほむらだった。

「明貴少尉、参りました」

かつてのホテルで、今は軍に接収されている建物のロビーで、ほむらは一礼した。
「東京から電話だ」
総務部門の事務所となったロビーで、ほむらは父親より年上の兵士から電話の受話器を渡された。
「東京から？……もしもし？……隊長？」
電話の相手は、天皇護衛隊中隊長の坂城大佐だった。
「生きてるか！？ほむら！」
野太い声がスピーカーから耳に襲いかかってくる。
相手のひげ面を思い出し、まるで耳元で彼が囁いたような錯覚を感じたほむらは、自然と受話器を耳から離し気味にした。
「おかげさまで」
「ははっ！相変わらず辛気くさい態度だな、そんなに暗いと、嫁のもらい手なくなるぞ！？」
「――――どうも」
「がははっ！そっちにいいオトコはいないだろう？もし、“これは”ってヤツがいたら、構わず俺に紹介しろ！俺が直々に丸焼きにでもしてやろう。人間の丸焼きの作り方は知ってるか？まず、工事用のコーンをケツ穴に根元まで突っ込んでだなぁ」
「……あの」
思わずお尻を抑え気味になったほむらは、上官の言葉を止めた。
「何のご用件でしょうか？」
「俺の声が聞けなくて寂しくなった頃だろう？そう思ってな」
「……あの」
「冗談だ――――付近に誰もいないな？」
「気をつけて下さい」
さっきの兵士が席を離れたこと。そして、周りに人気が少ないことを確かめると、ほむらはその場にしゃがみ込んだ。
「これ、一般回線です」
「知ってる。どうせ秘匿回線を使った方がバレやすい」

「えっ？」
「“白雷改”がそっちへ動いたな？」
「は、はい」
ほむらは頷いた。
「ただ、まだ、自分はこの目で確認していませんが」
「おかしいな。確かめるには十分な時間があったはずだが」
「今、妹尾少尉に言われて向かっている途中でした」
嘘は言っていない。
「何だ？相変わらず、まどかの下着でハァハァしていたのか？」
「なっ！」
「図星か？それとも未遂で止められたか？」
「――どうとでも」
「声が険悪だぞ？反抗期の娘を持った気の毒な俺はどうしたらいい？」
「何もしないでください」
「なんだ。せっかく電話して、俺の声が聞けて嬉しいクセに素直じゃない」
「大佐」
「――“ＤＥＳＴＩＮＹ－ＳＥＥＤ”は？」
「いない。と妹尾少尉は言っていました」
「……間に合ったな」
坂城大佐の声が本気になった。
ぎゅっ。と受話器を掴んで、ほむらは言葉を待った。
「……」
「明貴」
「……はい」
「――死ねるか？」
「……死にます」
「よし。天皇護衛隊のメンツにかけて、やってもらいたい仕事がある」

「……何なりと」
「番人を頼む」
「えっ？」
意味がわからない。
番人って――何の秘匿名称だっけ？
心当たりがない。
そんなほむらの動揺を全く関知しない様子で、坂城大佐は続けた。
「俺達にとって大切な“眠り姫”が動く」
「……それ、詳しく教えて頂けますか？」
「この回線では無理だ。だが、この“眠り姫”はお前にとっては元同僚だ」
「……姫？」
視線を彷徨わせ、はっ。となったほむらは、その名にふさわしい女性に心当たりをつけた。
「……それ、か」
「名を出すな」
ピシャリとした口調に、ほむらは言葉を飲み込んだ。
「名を出す必要はない。流れに身を任せていれば、対象が誰で、どうすればいいかは自ずから見えてくる」
「で、ですけど、私」
「こちらで手を回す。俺の手駒で番人を任せられるのは、お前だけだ」
「……」
「お前と妹尾を、現時点を以て天皇護衛隊の全ての任務から外す。騎体はその場に置いていっていい。午後の便で葉月ラボへ行って、お前の愛騎を受け取ってこい」
「よろしいのですか？」
「構わん。今のお前の任務なら、正直、俺達でどうとでもなる。だが、その“番人”の役目はお前じゃなきゃ、“死乃天使”を使いこなせるお前でなければ勤まらん」

「……」
「最初からはっきり言っておこう。この回線を聞いているヤツがいてもかまわん。聞きたければ聞け。お前の任務は、“眠り姫”を目覚めさせようとする不心得者、或いは傷つけ、亡き者にせんとする愚か者から、“姫”を守る番人だ。そう心得ろ」
「部隊は、どこへ」
「今、そっちで“白雷改”を扱っている奴らと同じだ。“姫”はいずれ、そこへ入る」
「……一体？」
「眠り姫をジャンヌ・ダルクにしたがるバカがいるのさ」
坂城大佐はフンッと皮肉めいた口調で言った。
「あれは、目覚めさせちゃいけないパンドラの箱だ。
姫の中にゃ、希望なんて都合の良いモノぁない。
それを開けたら、姫は終末のラッパを吹き始めちまう。
そしたら、俺達と世界に待っているのは――破滅だけだ」
「……大役、ですね」
「なぁに。お前なら出来る。お前を玉袋にいた頃から知っている俺にはわかる！」
「ウソっていうか、気色の悪いこと言わないで下さい」

「整列っ！」
居並ぶ“白雷改”と“幻龍改”の足下で、夏川の鋭い声が飛んだ。
「これから、当面の間、ここが我々のホームベースとなる！」
「ええっ？」
佐野姉妹の姉、亜紀が驚いた声を上げた。
「なんで？」
「何でって」
「飛行艦じゃないの？」

「我々の本来の母艦となる６６号艦は、まだ試験段階だ」
「ゴーカンだって」
亜紀は興奮気味に、横にいた妹、亜夜に笑いかけた。
「ねぇねぇ、どうする？ゴーカンだって、ゴーカン！」
「やだ。お姉ちゃんったら」
「興奮しない？」
「レイプモノは嫌いだもん」
「どうせなら、スナッフだよねぇ」
「そうそう♪このグルカで斬り刻んであげるのにねぇ」
幼い顔立ちから想像も出来ないほど、危険な、むしろ淫靡な笑みを浮かべながら、亜紀は腰から下げていたグルカナイフを引き抜き、愛おしそうにその刃を舌でなめ回した。
「内蔵、引き出していい？」
「うん♪末期症状でビクビクするの見るとコーフンするよねぇ」
「本当♪下手なポルノ見るより気持ちいいよねぇ」
「な――――きっ」
あまりの会話に真っ青になった夏川を横目に、大月が諭すように言った。
「二人とも？それはあくまで、敵相手にしてくれ」
優しい口調に、ニコリと笑った二人がナイフをしまった。
「「はぁいっ！」」
「……よし。頼みにしているぞ？二人とも」
微笑むと、大月は二人の頭を撫でた。
「……」
一瞬、呆然としてその様子を眺めていた夏川は、我に返って声を張り上げた。
「最強の騎体と装備を与えられた栄誉ある部隊に属する我ら、よもや命を惜しいと思うな！帝国と陛下の御為に、笑って死ね！」
その力説に反応する者はいなかった。
はいっ！

その一言を期待していた、或いは、そう反応があると信じ切っていた夏川は、顔を引きつらせた。
「どんなクスリをキメてるのよ。このくそばばぁ」
小さく、亜紀が亜夜に耳打ちしたのがはっきり聞こえた。
「くわばらくわばら」
このヘンでバリア。と手刀を切った亜夜が答えた。
「憑かれてるんだねぇ……きっと」
美柚姫が可哀想な人を見る眼差しで顔を引きつらせたままの夏川を見る。
「お姉ちゃん、字が違うって……」
瑞穂が突っ込む。
さらのその横では、
「……歩く不発弾」
はるかがぽつりと、そう言った。
顔を真っ赤にした夏川がついに爆発した。
「何よっ！私がみんなの士気向上のために一生懸命考えて、準備したセリフなのに！」
「……だって」
しばらくの沈黙の後、亜紀は言った。
「私ね？殺すために生きてるけど、殺されるためにここにいるわけじゃない」
「そうそう」亜夜が頷いた。
「死にたくないもん」
「そう、だね」
美柚姫も頷いた。
「死んだらご飯、食べられないし、やりたいことたくさんあるし」
「……同感」
「……っ！」
「まぁまぁ」
拳を握りしめ、今にも亜紀達に殴りかかりそうな夏川と、志気が

揚がらない亜紀達の間に割って入ったのは大月だった。
「確かに、死にたくないよな」
「大月っ！」
「――だから」
夏川の罵声を無視して、大月は続けた。
「死なないためにも、誰も死なせないためにも、俺達が頑張らなきゃいけない。
頑張るってのは、死んじゃいけないってことだ。
死んだら、何にもならない。何も出来ない。
俺達は、いらん子と呼ばれても、ただ使い捨ての弾丸になるつもりはない。
なっちゃいけないんだ。
俺達は人間だ。
この世にたった一人しかいない、人間だ。
陛下の狗と呼ばれても、醜の御楯と言われても、俺達は人間であることに変わりはない。
俺達の価値は、俺達にしかわからない。
俺達をいらんと言った連中に、俺達の存在価値を教えてやるためにも、俺達は死んじゃいけない。
どんなことにも希望をもっていこう。
絶望だけはしちゃいけない。
俺達は、戦い抜くために、ここにいるんだ。わかるか？
俺、喋るの苦手だから、上手く伝わらないと思うけど……」
「――うん？」
そう答えたのは亜夜だ。
「わかるよ？言葉はすっごく下手だけど、でも、言葉が伝えたい心はすっごくわかった」
「うん」
亜紀も頷いた。
「私、お兄ちゃんのいう通り、死にたくないもん。バカにされてい

るなら、見返してやりたいもん」
「……そうだね」美柚姫も頷いた。
「自分の価値を世の中に教えてやるって、面白いよ。私、やる気出てきたな」
「……絶望は嫌い」
「だねっ♪」
悪戯っぽい顔で頷いたのは、亜紀だ。
「前に誰かが言ってたよ？絶望はファッションじゃないって」
「お姉ちゃん、何なの？」
「自己満足っていうから、きっと自慰行為（マスターベーション）のことだよ」
「こっ、こらっ！」
美柚姫が真っ赤になって止めに入った。
「お、女の子がそんな事、大声で言っちゃダメだよっ！」
「だめぇ？」
「ダメッ！」
「なら、せんずり。どっちで表現されたい？」
「どっちもイヤ！」
「ならマスカキ？自家発電？」
「……ソロ活動」
「霧島中尉まで、なんでそう眼をらんらんとさせて言うんですか！」
「……大丈夫」
はるかは言った。
「……するのが一人なら、妊娠しない」
「ま、まぁ」
これ以上はいろいろとマズいと思った大月が慌てて止めた。
「とにかく、俺達はこれから一蓮托生だ！よろしく頼む！」
「「はいっ！」」

いらん子中隊奮戦す　第二話

汚名挽回。
この日本語は正しいか？
否。
汚名は不名誉のこと。
そして挽回は取り戻すこと。
この二つを足せば“汚名挽回”＝“不名誉を取り戻すこと”になり、日本語としては正しくない。

各部隊の持て余し者で編成された“いらん子中隊”。
そんな立場は確かに不名誉であり、どうにかしたいと思うのは。
むしろ人情だろう。
皆で協力して、苦楽を共にして、血と汗と涙と、場合によってはその他体液を流し、或いは分泌し、夕日に向かって駆け出したりなんかして、甲子園か花園の決勝戦で奇跡の逆転劇を演じてみせ、優勝旗を手に栄光と名誉を挽回すれば万々歳だが、何か違う。
残念だが――この作品は、そういうことはしない。
彼等が所属するのは、清く正しく部室でタバコを吸ってみたり、後輩に対して暴力振るってみたりとか、飲酒で補導されたりとか、修学旅行で集団万引きに挑むとか、そういう可愛らしい不祥事で彩られた高校の部活動ではない。
諦めたら試合終了になったり、主将が高校生のクセに小学生の女の子に手を出して1年間も休部に追い込まれるバスケ部でもない。
当然、休部を理由に小学校6年生のバスケ部を指導するなんていう、おいしい――否、犯罪の上乗せもしないし、させない。
彼等はあくまで変人と奇人と（精神的）病人の集合体である近衛兵団の兵隊達。
最も狂っていながら、最も従順という意味では精緻であることを

求められる兵隊稼業。
そんな組織の中で爪弾きにされた者達が何をしでかそうと、何に取り組もうと、それが一筋縄でいくはずもなく――

“汚名返上”。

それが目的で参加した作戦。
結果は先に言っておこう。

“恥の上乗せ”

これ以外にはなかった。

はるかの駆る霧島騎が薙刀を振り回す。
「きゃっ！？」
横に展開していた美柚姫が、危うく大きく振り回された薙刀に頭を吹っ飛ばされそうになって首をすくめた。
「あ、危なぁっ！」
「お姉ちゃんっ！」
MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）に陣取る妹の瑞穂が警告する。
「フォーメーションが近すぎる！長モノ使う僚騎との間合いを正しくとって！」
「そ、そんなこと言われてもっ！」
美柚姫は対峙するツヴァイを睨みながら答えた。
「作戦上のフォーメーションは、密集隊形だよ！？」
「そんなこといったって！」

ガンッ！
薙刀の峰が遂に騎体に接触した。
「……ごめん」
通信モニター上のはるかは短くそう言うだけ。
もし、刃が命中していたら肩が吹っ飛んでいるところだった。
「間合いをとるよ！？こちら朝倉、フォーメーションを変更しますっ！」
「こちら夏川、許可出来ない！現状のフォーメーションのまま、敵を押せっ、勝てる！」
「無茶だよぉっ！霧島中尉っ！薙刀を使うならもうちょっと周りに神経を！」
「……無理」
はるかの薙刀が敵の胴に深々と突き刺さり、直後に引き抜かれた。
素早く下げられる薙刀の柄が再び美柚姫達を襲う。
「わざとやってない！？」
「……誤解」

「えいっ！」
「それそれ♪」
その近くでは、二騎の“白雷改”がたった1騎のサライマを袋だたきにしていた。
サライマの左足は膝関節で切断され、右足には戦斧が深々とめり込んでいる。
近くには切断された右腕がオイルまみれで転がっている。
残された左腕が、騎体がダメージを受ける度にビクビクと動く。
ドン！
ドン！

亜紀が駆る“白雷改”が装備するのは短機関銃型の速射砲。
正確には、魔力の反発を利用して、超高速で弾丸の代わりに針を撃ち出すニードルガンだ。
対妖魔戦用に開発されたが、針が２０ミリと細く、さらに発射に際して騎体から少なからぬパワーを奪うこと、トドメとして、従来の“幻龍”型で運用すると十分な出力が確保出来ないなどの欠点ばかりが目立ち、ろくすっぽ使われもせずに１０年以上前に近衛でも配備が取りやめになった代物だ。
何故、亜紀がそんなものを使っているかといえば、このニードルガンの特質にある。
発射した針が射出された魔力の影響で強い電気を帯びているのだ。
超至近距離でメースやメサイアの装甲が施されていない弱い所に撃ち込むと、騎体内部に喰らいこんだ針から電気が流れ、これが騎体を通じた疑似感覚として、或いは最悪、直接的なダメージとして操縦者に襲いかかるのだ。
メサイアやメースは、騎体の受けた感覚を疑似感覚として操縦者に伝える機能がついている。
このおかげで操縦者は例えばモノを握ったとしても握りつぶすのを防ぐことが出来るし、歩くことも出来る。障害物を避けることも出来る。
人間が体中に感覚を伝える神経を持っているのと同じ効果をもたらすのだ。
確かに便利は便利だが、反面において、これが操縦者にとっては敵（あだ）になることがある。
騎体が受けたダメージを痛みとして操縦者に伝えてしまうのだ。
この痛みは半端ではなく、下手をすれば操縦者をショック死させてしまう程だ。
だから、メサイアとメース共に感覚については一定のレベルを超える（多くは激痛に分類される）ショックと判断された場合、瞬時に安全装置が働き、感覚の伝達を遮断する機能がつけられている。

ただ、これが上手く働かない種類のダメージが一つある。
電撃だ。
原因はわかっていないが、この感覚だけは何故かセフティが働かずダイレクトに操縦者に伝わってしまう。
神経を伝わるのが一種の電気であることから、安全装置が電気ショックを痛みとして捉えることが出来ないのではないかという仮説は存在するもの、実証は出来ていない。

ニードルガンから発射された、帯電した針は装甲の施されていない弱い箇所に命中すると、鋭い痛みと共に電気ショックで操縦者を襲う兵器だと気付いたのは、実は亜夜だった。
亜夜は、妖魔をなぶり殺しにするために常にニードルガンを騎体に搭載していたが、ある作戦中に、それを誤って味方のメサイアの首筋に命中させる事故を起こし、騎士をショックで心肺停止状態に陥らせた。
事故そのものは乱戦中によくある事故として処理されたが、この経験から亜夜はニードルガンがメサイアに有効だと気付いた。
装甲は貫通出来ないが、非装甲部に命中させれば面白いことが見えるんだ。
じゃあ、メサイアに有効ならメースには？
亜夜は次の出撃でそれを試した。
効果は反応から察するしかなかったが、刺さった途端、魚が跳ねるように体をのけぞらせたことから、亜夜は有効と判断した。
何発撃ってもいい。
その都度、ビクビクとのけぞる反応を示す。
面白いと、亜夜は素直に思った。
それ以降、ニードルガンとその的であるメースは、亜夜にとって、そして姉の亜紀にとって格好の玩具となった。
現にこうして楽しんでいる。

メースのコクピットハッチがどこにあるかは、たくさんのメースをなぶり殺しにした経験から知っている。
脱出出来ないようにハッチに粘着性のトリモチ弾を命中させておくと、ハッチが開かないから長く“楽しめ”ることもだ。

「ほらほら」
ニードルガンを乱射され、一部がまるでハリネズミかサボテンのようになったサライマを前に、亜紀と亜夜はいたぶる手を止めない。
「まだ死んじゃダメだよ？」
メキメキメキ……グシャッ。
“白雷改”の脚が残された左腕の肘を踏みつぶした。
「あーっ、亜夜ちゃんヒドぉい！」
「何が？」
「私がやろうと思ったのにぃ」
「あはは っ。ごめぇん」
「もうっ」
亜紀は口を尖らせると、
「せぇの」
ガシャンッ！
“白雷改”の右足で思い切りサライマの残骸を蹴り飛ばした。
サライマが変な所でくの字に曲がって宙を舞った。
「シュート、決まったぁ！」
「ナイスシュート♪」

「こちら夏川！」

「あれぇ？オバさんからだぁ」

「誰がおばさんだ、たった1騎に何をしているか！」

「えーっ？楽しんでいるのにぃ」
「人の楽しみ邪魔するなんて、イケないんだぁ」
「えーっ？亜夜ちゃん、イケないのぉ？」
「私じゃないよぉ。あの夏川ってオバちゃんだよぉ」
「ああ」
地面に転がってなお、動こうと、或いは逃げようと足掻くサライマの背中を踏みつけた亜紀が言った。
「あのアマ、不感症なんだ」
「お気の毒にねぇ――――あのトシだもん」
「こうねんきしょーがいってヤツかもね」
「いゃあねぇ。トシとるって」
「ホント。私達、若くてよかった」
「「ねーっ」」

「上官侮辱罪で殺されたいのかっ！」
夏川の凄まじいほどの罵声が響いた。
「さっさと他の敵を片付けろ！営倉にブチこむぞ！？」

「ブチこむだって」
クスクスと亜紀はどこか壊れた調子で笑った。
夏川を挑発しているんじゃない。
純粋に言葉尻を捉えて遊ぶ小学生のような反応だった。
「ブチこまれたいのよ。さみしいから」
「ぶっといのがいいのかな？」
「売れ残りだから、アソコ乾いてるんじゃない？」
「ガビガビだったりして」
「あははっ♪」

「こ、このキチガイ共……っ！」

「――まぁ、いいか」
亜紀は、踏みつけているサライマの反応が弱くなっていることを脚の感覚で知ると、言った。
「“これ”、飽きちゃった。他のもっと“活き”がいいので遊ぼ？」
「そうだね。お姉ちゃん」
「じゃ、まずはお片付け」
「“ゴミ”は焼却♪」
横倒しになった騎体を爪先で少し持ち上げると、その腹の下へ四角い塊を放り投げ、爪先を外した。
数秒後、サライマの腹の下から激しい光を伴った炎が立ち上り、サライマがその紅蓮の嵐の中へと消えていく。
ハイパーナパーム弾と呼ばれる超高燃焼爆弾をサライマの腹の下に放り込んだのだ。
あの広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）に匹敵するとまで言われるその爆発によって、サライマは一瞬のうちにメース使いと共に焼き殺された。
「お片付け終了！」
わざとらしい敬礼をする亜紀と、
「ゴミは焼却に限りますなぁ」
そうおどけてみせる亜夜。
二人はニードルガンのカートリッジを交換すると、新たなエモノへと狙いを定めた。

「夏川大尉っ！」
そのかなり後方で、状況を確認していた大月がじれたように言った。
「前進を！フォーメーションも何もあったもんじゃない！」

「何をやってるのよ！」
夏川は顔を真っ赤にしてコクピットでわめいた。
「４騎で連携して押せば勝てる、教本に書いてある通りに動けば勝てるのに！」
「我々で穴を埋めましょう！我々は指揮官です！」
「指揮官だから」
夏川は答えた。
前に出ようとする大月騎に対して、夏川騎は静観の構えを解こうとしない。
「ここでいいのよ」
「なっ！？」
「テキストに書いてあったでしょう？指揮官は全体を把握し、適切に指揮することが求められるって」
「それは、指揮官が後方にいるべきことを指していないです！」
「相手はたった６騎でしょう？」
「それは残りです！現実が見えているんですか！？部隊の連携がとれていないのは自分にもわかります！ここんなのマズ過ぎる！霧島騎に邪魔されて朝倉騎は実力を発揮出来ない。佐野姉妹は一騎相手に遊んでいる！」
「作戦予定上では勝てる展開よ」
「現実を見て下さい！戦争は計画上でやることじゃない！戦争は戦場で起こるものです！」
「私達が立案した作戦でしょう？そして、その下で動くことをあいつらは認めた。なら、作戦通りに動かないのはあいつらの失態。リカバリーするのは、あいつらの当然の義務であって、我々はここで結果を求めて当然。我々は指揮官なんだから」
「き、詭弁を――」
「詭弁？」
はんっ。
夏川は見下したような顔で、通信モニター上の大月を睨んだ。

「兵隊の失態を一々指揮官が補っていたら、指揮官ばっかりが戦場で死ぬことになるわ。そんなの理不尽でしょう？私達は命令する立場であって、あいつらはその命令に従う義務がある。義務の履行を求めたら詭弁とは、それこそどういう理論かしら？」

「――死人が出たら、誰が責任とるんですか」

「当の本人。遺族への遺書の書き方は手本があるから参考にしなさい」

「あんた……人間じゃない」

「あら？私はこれでも温情あふれる人間よ？だって、現に部下を信頼してすべてを任せているじゃない？責任まで含めて」

「……このっ」

大月は通信モニターから顔を背けた。

戦況も、部下も、そして副官ですら正視に耐えられる存在が彼の周りにはどこにもなかった。

はやく、一瞬でもはやく、この悪夢が終わってくれることを祈るしかなかった。

「おい」

MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）に陣取る筋肉質な男が通信モニターに現れた。

筋肉質の体に戦闘服をまとうが、何故か胸元が大きく開かれ、分厚く鍛えられた胸板が丸出しになっている。

それがなぜか、この男にはよく似合う。

大月のパートナー、阿部大尉だ。

「敵が動いた。増援だ」

「くそっ。現状は？」

「霧島と、やっと間合いがわかった朝倉が頑張っているが、佐野のガキ共はラリったままだし、いかんせん多勢に無勢だ。むしろよくやってると思うよ。雌のわりにな」

阿部は手早くパネルを操作しながら答えた。

「残存は5だ。今、朝倉が1騎喰った。増援は――12騎」

「夏川大尉」

「指揮官はあなたでしょう？副官の私に何を求めているの？」
「ここまで――っ！」
大月は夏川をぶん殴りたい衝動を死に物狂いで抑えながら言った。
「阿部大尉、発光弾を撃ってください」
「種類は？」
「撤退」
「いいんだな？」
「いいんです。僕が指揮官なんですから！
「大月大尉っ！？」
大月は夏川騎との通信を切った。
「おいおい。副官との通信を切っていいのかい？あのバカ、あとでぶん殴りに来るぞ？」
「僕が指揮官です。それに従えないなら、部隊から出て行ってもらいましょう」
「そう一筋縄でいく相手とも思えないが」
阿部は苦笑しながら頷いた。
「そういう所、愛してるぜ？」

作戦を台無しにした！
軍法会議ものだ！

殺気だった金切り声をあげるのは、当然ながら夏川だ。
大月はそれを完全に無視した形で整列した部下達に言った。
「ご苦労さんだったね」
「……いえ」
美柚姫は、大月の横でギャーギャーわめき続ける夏川を顔を引きつらせて眺めつつ、答えた。
「すみません……まだ、騎体というか、部隊の連携に慣れなくて」

「いいよ。今回は、部隊の連携を知ることが目的のようなものだから。霧島中尉」
「……はい」
「最高スコアをあげた感想は？」
「……スコアは」
一言一言、はっきりとしたイントネーションで発音された言葉が耳に届く。
「……部隊のもの。個人は関係ない」
「……そうだね」
大月は頷いた。
「どうだろう？個人のスコアはどうせ上層部がまとめているだろうけど、僕達は僕達で、スコアはあくまで部隊のモノっていうことで」
「どういうこと？」
亜夜が首をかしげた。
「戦果は一人のモノじゃなくて、みんなのモノだってこと」
「じゃあ、私が百人殺して、お姉ちゃんが百一人殺したら？」
「部隊で二百一人殺しましたって答えるんだ」
「うーん」
亜夜は少し考えてから頷いた。
「いいよ？たくさん殺したって胸を張れるもん！」
戦闘服からも、いやでもわかる幼すぎる胸を反らせた亜夜に、大月は苦笑しながら頷いた。
「亜紀ちゃんは？」
「亜夜ちゃんがいいならね？私もいいよ？何しろね？私はお姉ちゃんだから」
「偉いね」
「でしょう？」
ふふん。と、亜紀は鼻で笑ってみせた。
「何しろ、私はお姉ちゃんだから」
「朝倉大尉は？」

「まぁ、それで当然だよね」
美柚姫は満足そうに頷いた。
「私達は一蓮托生だもんね」

「何を言ってるか！」
たまらず大月を突き飛ばして、朝倉の胸ぐらを掴んだのは夏川だった。
「作戦は大失敗、戦線を確保することも出来ず、おめおめと後退する失態を犯しておきながら、なんだその態度は！」
「へっ？」
きょとん。とする美柚姫に、
「反省の色がないっ！」
血走った目で睨む夏川。
その拳が握りしめられ、まさに美柚姫に振り下ろされようとした直後――――
「ちょっと待てよ」
その腕を止めた筋肉質の手。
阿部大尉だった。
「作戦は本当に失敗したというのか？」
「な、何を！」
「考えろよ」
掴んでいた腕から手を放し、阿部は優しい声で夏川に諭すような口調で言った。
「後藤隊長が、俺達をどうして“ここ”に送り込んだのか」
「そ、それは」
じっ。と阿部に見つめられ、何故か頬を赤くした夏川が視線をそらせた。
「メースの撃破であって……」
「違う。部隊を戦闘に慣れさせるためだ。他部隊の縄張りに割り込んで功績を立てることなんて、そんな後で面倒くさいことになる事

態を、あの後藤隊長が望んで命じるはずはないだろう？」
「で……ですけど」
「朝倉と霧島に互いの背中を守らせるフォーメーションを取らせたのは正解だったと思う。後は、佐野の――お嬢ちゃん達には、もっと多数を仕留める戦い方を学んでもらえばいい」
「たくさん殺す？」
「ああ」
亜夜に答えた阿部の口調は、どこかそっけない。
答えるのがむしろ煩わしいといわんばかりだ。
「なぶり殺しじゃなくて、殺しまくりのほうがいいの？」
「当然」
「そっかぁ」
「そうなんだ」
佐野姉妹は、今更何を。そう思わせることで驚いた顔で違いを見合った。
「じゃ、お姉ちゃん。次はどっちが高い屍山を作れるか競争しよう？」
「どっちが太い血河を作れるかもね♪」
「負けないからぁ」
「私もぉ！」
「……ちっ、ガキが面倒クセぇ」
「――えっ？」
「何でもない」
とってつけたような笑みを浮かべた阿部が夏川へと続けた。
「どっちにしろ、戦果より大切な部隊の連携ってものぉ、確かに手に入った。だから、俺達は退いたことを恥じる必要はない。むしろ、長い目で見れば勝ったようなもんだ」
「勝った？」
「そうさ――連携を勝ち取ったんだ。そうは思わないか？」
「そ……そう、ですね」

ごくっ。
生唾を飲み込んだ夏川は頷いた。
「私、そう思いますわ。阿部大尉」
「いい女だ」
「えっ？」
「褒め言葉さ。額面通り受け取ってくれ」
「……はい」
潤む瞳で頷く夏川に、
「――というわけで」
くるっ。
阿部は何故か、即座に背を向け、
「今回の作戦は――」
ぽんっ。
大月の肩をそのしっかりとした手で掴んだ。
「無事に終了ってことさ」
「あ、ありがとうございます」
「なぁに」
阿部はニヤリと不敵に笑った。
「パートナーだろう？俺達は」

●福島県二本松付近　近衛　内親王護衛隊（レイナガーズ）本陣

「これ……何？」
「……」
デスクに座った麗菜は、冷たい視線を、目の前に立つ二宮に投げつけた。
「私のお目々がイカれてるか、日本語読み間違ってなければ、これは異動願いって読めるんだけど」

「……はい」
二宮は頷いた。
「……やつれたわね。ここん所、病人みたいじゃない」
「……」
「だから休みたいというお願いなら、考えてあげるけど？」
「……」
「――ま、静養を求めているようにも見えないけどね」
麗菜は『異動願』と書かれた封筒を指の間で弄んだ。
「これでも心配してるのよ？私は私なりに」
「……ありがとうございます」
「心優しいでしょ？私って」
「……はい」
「その心のお優しい私の慈悲に縋りたいってあんたのお願いが、他の実戦部隊への異動を願うってなら」
ジロリ。
麗菜が二宮を睨み付けた。
「――許さないわよ？」
「申し訳ありません」
「何が申し訳ないのかしら？願いそのものを出したこと？それとも、私が危惧するその通りだから？」
「……」
「――はぁっ。あのねぇ」
ビリッ
麗菜は封筒を真っ二つに破るとくしゃくしゃと両手で丸め、後ろにあるゴミ箱に放り込んだ。
「自慢の娘一人死んだからって、アンタ尼にするほど世界は寛大じゃないし、近衛も人手が余っているわけじゃない」
「……ですが」
「私だって、何人の“妹”を亡くしたと思ってるのよ」
ふくれっ面で麗菜は視線をそらせた。

「……殿下」
「私だってね。一人残らず、死んでいった連中の仇はとってやりたい。でもね？そんなことは出来ない。あんた達が止めるから。私が出ようとしても、あんた達が先に出ちゃう。そして、私の仇はどこか遠くへ行っちゃう……。あんたが考えているより、私は惨めな立場なのよ？」
「……」
「その私を差し置いて、娘の仇討ちさせてくれ？私も人生、いろいろ経験してきたけど、これほどコケにされたのは初めてだわ」
「……お許しを」
「許さない。お許しはしない」
「……殿下。どうか、お慈悲を」
「私に慈悲を？この私に？」
「……」
「ふざけんな。今のあなたにくれてやる慈悲なんて、私にはない」
「……ですが」
「独立駆逐中隊は解散した。部隊は、あんたの教え子はちりじり。戻すことは出来ない。“情報”と引き替えに復隊を認めた麗央達みたく、都合良くはいかないわ。あんたの娘と息子はデキがよろしすぎて、異動先が手放そうとしないわ。そんな状況であんた一人で何するつもり？あんたは私の下を離れれば、単なる兵隊でしかない。あんたは私じゃない。私だって、単なる私個人ではどうしようも出来ないことを、あんたはやろうとしている。ねぇ、はっきり聞かせて。あんた、何様のつもり？」
「……」
「何様か――そう聞いたのよ」
「殿下の……」
二宮は俯いたまま、乾いた、絞り出すような声で答えた。
「殿下の……狗です」
「狗？狗って言った？」

「……はい」
「狗が主人に代わって、棒を投げられると？」
「……」
「今更、言い過ぎましたは通じないわよ？私、聞かないから」
「どうか……私に、敵を」
「ふん。あんた、これまで何人の仲間と部下と教え子を殺してきたの？」
「……っ」
「五本？ううん？十本の指でも足りないでしょう？何人のお葬式に参列したの？何人の最後を看取ってきたの？何人を楽にさせてきたの？」
「殿下っ！」
「――泉大尉だけ、特別扱いにするほど、あんたはあの子にどういう情を通じさせていたのかしら？」
「……」
「わかんない？単に教え子じゃなくて、あんた、自分の後継者みたいに思っていたんでしょう？だから、手塩にかけて育ててやりたかった。そうね。泉大尉は、あんたにとって」
麗菜はデスクの上で手を組んで、そこに顎を乗せた。
その顔は、まるで二宮の腹の底まで見透かしているかのように楽しげだった。
「あの子は――あんたの分身みたいなものだって、そう思ってない？」
「そう……そこまでご承知でしたら……どうか」
「内親王護衛隊（レイナガーズ）総隊長の地位と将来を棒に振って、私怨を晴らさせてくれ？私の側近という立場は、私怨と天秤にかけられる位、簡単なモノだったんだぁ」
「そ、そんなことは――」
「――あるの」
麗菜はつまらなそうに椅子の背もたれに背中を預け、椅子を動か

し、体ごと二宮の前で横を向いた。
「女々しいこと言わないでよ。あんたは、そんなこと言える立場じゃないの。数十人を率いる部隊長なのよ？あいつらは生きている。あの子達の命と将来は、死んだ泉大尉一人と天秤にかけられるほど、価値がないの？」
「……散々考えました。でも、どうしようもないのです」
「どうしようもないほど、私はアホでしたと」
「そう……何と言われても、結構です」
「バカ、アホ、マヌケ。役立たず」
「……」
「……悔しくないの？」
「……」
二宮は無言で首を横に振った。
「こりゃ、重症ね」
麗菜は肩をすくめた。
「――後藤中佐から手配が来ていた欠員補充なら、もう満席よ？」
「えっ？」
「麗央を送った」
「……なっ」
「あのねぇ」
ギイッ
麗菜は再び椅子を動かすと、デスクに身を乗り出すようにして言った。
「敵を討つにしても、何するにしても、直接剣を交える以外にも方法はあるって、あんたの立場ならそういうべきよ？大体、誰が泉大尉の敵なのか、どうやって知るつもりだったの？まさか、魔族軍一人残らす撫で切りにでもするつもりだった？」
「……」
「感情にまかせて戦場に出ることは禁忌。わかっているはずよ？そう教えていたんでしょう？二宮教官？」

「……」
「……知っているはずよ」
「えっ？」
「あの部隊の正体、そして、後藤中佐を通じて、陛下達が何をさせようとしているか」
「……殿下」
「あんたは知っているはずだ。あんたは、知りすぎた」
「……」
「本来なら、粛正するべき程、あんたは深入りしすぎた。もう、戻れないわよ？」
「……私」
「後藤中佐が、母上の狗であるように、あんたはあんたで、私の狗として動いてもらう。あんたは息をするのにも私の許可がいる。何故？あんた、さっき言ったわよね？私にとって何だって――もう一回、言ってご覧なさい。あんたは、私の何？」
「……」
「言いなさい。二宮真理」
「……い」
二宮は言った。
その頬を流れる一筋の涙と共に。
「狗……です」
「その通り」
睨むような視線を突きつけながら、麗菜は頷いた。
「狗は主人の命令にのみ従えばいい。前線で他人の投げた棒きれを追いかけることなんて、いくらでも補充の効く麗央あたりにやらせておけばいい」
「彼女に……何を」
「天皇護衛隊でさえ、護衛を出したわ」
「……意味が分かりません」
“ＤｒＳＥＥＤ”は、戦果不十分と判断されて、再び赤城博士の

下に戻された」
「……」
二宮の目が見開かれた。
「赤城博士の名前で反応するあたりが、あんたの危険性なのよ。あの騎に眠っている“眠り姫”を、どうあっても起こしたがってる愚者の群を、私達は本当なら第一の敵としなければならないのにね」
「……」
「でなければ、私はともかく、陛下……下手すれば確実に皇統とこの帝国を、我々日本人の自らの手で滅ぼすことになりかねない。こんなに危険だというのに、私は“彼女”を殺すどころか、接触することさえ出来ない。“ＤＥＥＤ”を手中に収めることも、破壊することさえ出来ない。何も出来ずに私はこうして、前線にいるしかない」
ぎゅっ。
麗菜の拳が握りしめられた。
力が込められ、血の気を失う拳を二宮は見つめていた。
「……はぁっ。そんなお気の毒な御主人様を慰めるでもなく、尻尾を振るでもない薄情者の飼い犬は、何をしているのかしら？」
「……何をされたいのですか？私に、何をお命じになるのですか？」
「“敵”の出方を見たい」
麗菜は言った。
「私個人の依頼の形をとって、“鳳龍改”の私バージョンの開発を赤城博士に命じてある。博士に接触して、可能な限りのデータ集めて」
「……博士は」
「責任がとれるなら」
きゅっ。
麗菜は手刀で自分の首を切るマネをした。
「――でもいいけど。とりあえず、そこまでする時は別命を下すから」

「？」
「接触した後の報告次第ですべては動く。必要なら応援を送る」
「応援？」
「そういう“仕事”が得意な連中だって近衛にはいるのよ？」

いらん子中隊奮戦す　第三話

●天壇

「……成る程？」

ダユーは宗像からの報告に興味深そうに頷いた。

「アイバシュラ達の縄張りは人為的に調整されていて、その抜け道を人類が知っていた……か」

「はい」

「どこの誰がアイバシュラをあんなところに仕掛けてくれたか知らないけど」

ダユーはモニターに映されるアイバシュラ達の縄張りを示した地図を眺め、頬杖をついた。

「調べる必要はありそうね」

「お心当たりがないのですか？」

「まぁ……ね。知っていそうな心当たりはある。でも、こういう時思うわ。現実ってのは、自分で支配しないとどうにもならないものなんだって」

「……はっ？」

「私が関与しないと、現実はいつだって不都合になる。そう言いたかったの」

「……あなたらしい表現です」

宗像は嬉しそうに目を細めた。

「そういう所が好きです」

「愛しているとは言ってくれないの？」

「……狗は、主人を愛しているのでしょうか？それとも好きなのでしょうか」

「狗次第じゃない？」

ダユーは席を立った。

「ご飯をくれるからだけ、飼い主が好きな狗もいるだろうし」

そして、宗像の前に立つと、そっとそのうなじに指を這わせた。
「主人に欲情する狗もいるんじゃない？」
「欲情をもって愛すると？」
「所詮獣の愛なんて、本能的なものでしょう？その程度じゃなくて？」
「……軍服を纏うかぎりは、狗らしい意味で好きでいましょう」
宗像は答えた。
「それを脱いだら？」
「あなたは私を“女”として扱ってくださいますか？それとも……」
「今まで、私に愛されてどう思っていたのかしら？」
「……失礼」
「本当だわ。今晩は覚悟しておくことね」
ダユーはゆるんだ目元のまま、そう告げた。
「でも、いい情報を確保してくれた。ありがとう」
「恐縮です」
「丁度のポイントよ。金鉱だけじゃなくて、人類がまだ見つけていない別の地下鉱脈もこれで手に入る。アイバシュラは地下に巣を作るクセに、地下についてはあんまり関心がないの。地上からのルートを確保出来れば、資金源の苦労が減る」
「よかった」
「ええ」
ダユーは笑みを浮かべて頷いた。
「ヴォルトモード卿に義理を立てて、飢え死にするわけにもいかないからね」
「さすがに借金は出来ませんか……」
「バカね。喧嘩するのにお金貸してくれるバカがどこにいるもんですか」
「……ですね」
「でしょう？私達は私達の資金源がいる。安心して？今月の支払いはしっかり確保出来ているから」

「いえ……私は別に」
「食費は給与から天引き。滞納すると来月はメシ抜きよ？」
「……助かりました」
「大陸の方は、これでしばらくは大丈夫でしょう」
ダユーは宗像の前から歩き出し、窓へとむかった。
薄いレースのカーテンを開くと、窓の向こうには日本海の絶景が広がっている。
海からの日差しに、ダユーは目を軽く手で覆った。
「資金のルートは確保。この天壇がいる限り、大陸側からの人類の侵攻はない」
「……問題は」
「ん？」
「その人類の侵攻なのですが」
「……まさか」
「いえ、我々に対する反攻ではなく」
宗像は、脇に挟んでいたファイルをデスクに置いた。
「同時に回収したデータから収集できる限り集めたものを翻訳させました。来月、大陸の――人間側呼称、中華帝国の軍が、この弓状列島に再度侵攻を開始します」
「ちゅうか？前回は、この国にコテンパンにされたんじゃなかった？」
「ええ。どうにも懲りないのか、それとも何か策があるのか」
「連中は……確か北米大陸でも負けて逃げ帰ったのよね。ユーラシア大陸でも国境線を確保するのが精一杯のはず」
「その通りです」
「それで、何故？」
「北米大陸からの反攻ルート上において、この弓状列島は重要な橋頭堡です。そこを確保するか、ここで北米からの侵攻軍を食い止めることで、本国上の損害を軽くする緩衝材としたいか――いずれかでしょう」

「私達には直接的な被害はなさそうね」
「なければよいのですが」
宗像は言った。
「連中がヴォルトモード軍と共同戦線を張って動くとなれば……どうなるか」
「……理沙？」
「はい」
「真菜を呼びなさい。仕事頼みたいの――――それと、理沙？」
「はっ？」
「あなたもあなたで、仕事をお願い」
「何か？」
「簡単なこと」
「というと？」
「この前、内通者を人間共から助けて以来、真菜が何か隠しているのよ」
「……それを調べろと？」
「その通り♪」

●日本　静岡戦線　近衛兵団　メサイア陣地
「こういうの、何て言うか知ってる？」
夜、陣地に入ってから戦況報告を読み終えた後藤が、隊長室として割り当てられたプレハブの部屋で涼宮中尉に訊ねた。
「さぁ？」
缶ビール片手にノイズが強いテレビで野球中継を見ている涼宮は、スルメをかじりながら答えた。
「何て言うんです？」
「恥の上塗りっていうのさ」
「何でです？」

「“白雷改”なんて、他から見たら喉から手が出そうな高性能騎使ってるクセに、増援が来たら尻尾まいて逃げちゃった。しかも部隊の連携がまるでとれていない。命令、斬込、前衛、全部バラバラ」
「前の連中、そういう所は完璧でしたからねぇ……あちゃ、捕られた」
涼宮中尉は、テーブルにビールの缶を置いて報告書に手を伸ばした。
「斬込が敵中衛を混乱させ、その隙に前衛が侵攻。撃ち漏らしを狙撃が始末する。その間のユニット単位の連携、指揮命令系統も文句のつけようがなかった。ところが、今度の部隊は褒めるところがなかった」
「そういうことさ。紅葉ちゃん、今頃カンカンだろうなぁ……あーあ！ここで三振かよ！」

●日本　東京都葉月市　近衛兵団葉月実験センター
「私、何したのかしらね」
報告書をゴミ箱に放り込んだ紅葉は、コキコキと首を鳴らした。
「これから、こんな無能共の相手させられるなんて」
「そんなにヒドイ結果だったのですか？」
キーボードを叩く手を止めたのはほむらだ。
「見る必要もないわ。っていうか、見るな。脱走したくなるから」
紅葉は保温庫に手を伸ばすと、中から缶入りのココアを取りだし、プルタブを開けた。
「そんな無茶な」
部屋の隅に置かれた長椅子に座ってドラマを見ていた麗央が立ち上がると、ゴミ箱から報告書を拾い上げた。
「これから私達の仲間になるんですよ？」
「こんな連中が仲間だなんて、言いたくなくなるわ。麗菜殿下に何

言われて来たかしらないけど、絶対、今度の異動は栄転じゃなくて左遷だわ」
「……うわっ。納得！」
麗央が悲鳴に近い声をあげた。
「でしょ？」
「これ……どこの訓練生の練習結果ですか？ってか、こんな結果出したら訓練校でも無事じゃすみませんよ？」
「それがさぁ、実戦部隊。しかも、“白雷改”運用部隊でこのザマよ？」
「現地で何て言われているか……」
「考えたくもない。私が連中をまとめて“いらん子”中隊って、そう呼んでいる理由がわかったかしら？」
「不本意ですが」
頷くと、麗央はほむらに書類を渡した。
「その名前の意味が、私がここに送られる時に麗菜殿下に、“あんたで十分すぎ”って言われた理由と一緒にわかりました」
「訓練校出たばかりの新兵の方がまだ立派に動くわよ」
「……個人プレーに頼っていると」
書類をペラペラと捲ったほむらが言った。
「部隊はこういう結果になる」
「そうじゃないわ」
紅葉はココアを飲みながら言った。
「指揮官が無能過ぎるのよ」
「えっ？」
「戦闘履歴の中で、指揮官命令は前進と後退の命令以外、目立つものがなにもない。隊長、副隊長共に、別に支援するでもなく、無駄に後方に突っ立っているだけ。見る奴が見たら、今回の責任の全部は指揮官二人にあるわ」
「そりゃ……戦闘の責任は」
麗央とパートナーを組む沢口少尉が訊ねた。

「指揮官がとるものでは？」
「そうなんだけどさぁ」
紅葉は苦笑した。
「指揮をしてないんだもん。見る人が見たら、職務放棄したって――そう思われても文句言えないのよ。この状況は」
「……」
「第９中隊あがりって言っても所詮は狗。棒をくわえる芸は出来ても、棒をくわえさせる知恵はなかったみたいね」
「そんな奴らに、私達、使われるんですか？」
うぇっ。と、沢口が顔をしかめた。
「戦死しろって言われたみたい」
「そのものね」
「勘弁してくださいよぉ！」
「勘弁してほしいのは私も同じよ。連携しくじって騎体壊されたのよ？」
「……あの」
ほむらの横にいたまどかがそっと手を挙げた。
「指揮官の人だけ、入れ替えてもらう……とか」
「それが出来たら」
はあっ。
「苦労はしないわ。後藤さんも何考えてるんだか」
「というか」
ほむらが報告書から目を離した。
「何故、あんな人がメサイア部隊を率いているか――それが不思議なのですが」
「それは聞かない方がいいわ。心身と人生、将来、いろいろとね……いっそ、粛正してもらおうかなぁ。そうしたら、二宮さんあたりが来てくれるかもしれないし……次の整備の時、コクピット周りのコネクタ、２、３本抜いておくわ」
「私達には、絶対やらないでくださいね」

●大島沖合　太平洋上空　“鈴谷（すずや）”

「とどのつまり」

報告書を読んで憤慨する中には、いらん子中隊の母艦の艦長も含まれていた。

美夜だ。

「こんな無能共のお守りをするために私達は命をかけろというわけだ」

「――――まぁ、そういうことですな」

「私達は自殺願望があるとでも見られているのか？」

「処女航海と同時に」

高木がコツコツと軍靴の爪先で床を叩いた。

「罰ゲームがスタートとは。この艦も浮かばれない」

「飛行艦なのに浮かばれないとはこれ如何に……」

はぁっ。

艦長席で美夜は額を抑えた。

「笑えないわ」

「もう笑うしかありません――――ここまで来ると」

「何か世の中、狂ってるとは思ったことない？」

「先程、阪神がコールド勝ちしたとか」

「それよそれ。それが原因だわ。私達がこんな目にあうのも、新入りが使い物にならないのも、艦の主砲が一日一回しか使えないのも、その試射の許可が未だに出てこないのも」

「少なくとも、最後は違うような」

「なら、他は同意したわね」

「……あなたには勝てない。まぁ」

高木はため息をついた。

「我々のように、千葉ロッテのファンというのも珍しいのでしょうが」
「……そうね」
「ところで艦長？」
「何？」
「忘れているのか、それとも無視したいのかは存じませんが」
「……」
「先程から横を併走しているのは、イギリス艦隊ではありませんか？」
「忘れたいのよ」
「何故です――相手はウォースパイト。王立艦隊（ロイヤル・フリート）の旗艦ではありませんか。他にも同タイプの飛行艦が2隻、それと輸送艦が4とは……」
「無視」
「はっ？」
「私にとって」
美夜は眉間に皺を寄せた。
「あの艦は“疫病神”なのよ」

●大島沖合　太平洋上空　英国海軍所属　飛行艦“ウォースパイト”艦橋

「日本の新型艦だな。艦尾に国籍マークを確認」
英国海軍の飛行艦で編成された艦隊。
その旗艦の艦橋に立って双眼鏡を目から離した副長が答えた。
「ほう？」
艦長席に座るのは、恐ろしく背の高い男だ。
オールバックになでつけられた髪。
中身を誇るように目立つ額。

鋭い目。
すべてが知的俳優のような男が、からかうような口調で副長に言った。
「本国が侵略されているというのに、新型艦を飛ばす余裕があるとはな。羨ましい経済環境だ。日本人は本当に、我々の救援を必要としているのか？」
「全てを我々に押しつけられても困るだろう」
と、やや小太りで、口ひげを蓄えた愛嬌のある副長、ジョン・ハードウィック少佐が振り向きもせずに答えた。
「それもそうか」
英国では、飛行艦は浮かぼうが沈もうが、とにかくフネである以上、扱いは軍艦。当然、管轄は海軍であるとして、全ての飛行艦の所属は海軍となる。
その中でも飛行艦だけで編成される“王立艦隊”の旗艦がこの“ウォースパイト”。その艦長を務めるのは、ピーター・ハギンズ大佐。
華奢で知的なその外見と異なり、かつてはアフリカ戦線で暴れ回り、立ち寄った港全てに愛人がいると囁かれるなど、軍人としても男としても武勇伝には事欠かない男だ。
「こちらの挨拶に対しては？」
「タカギという副長から、無事の航海を祈ると」
「ほう？こちらの“積荷”については言っていないのか」
「試験航海中の艦にそこまで語る必要が？」
「ふむ……まぁ、そうだな」
ハギンズ艦長は短く頷いた。
「別に親善の挨拶に来いというのも」
艦長は腕時計を見た後、
「時間的には失礼か」
「その通り……我々もそろそろ、一杯やりたいところだな」
「艦長」

ハギンズが頷こうとしたそのタイミングで、通信士官が踵を鳴らし、敬礼した。
「ドイツ帝国“ヴィッテルスバッハ”より通信です」
「“ヴィッテルスバッハ”だと？」
ハギンズとハードウィックは互いに顔を見合った。
「ハードウィック、確かその名はドイツ皇帝親衛軍所属の艦名だったな」
「ああ。今はドイツ皇帝の座乗艦だぞ。確か、艦長は」
「エデュアルト・バイ大佐……“ハンブルクの種馬”だ……で？ポール、我が親愛なるジャガイモ野郎は何と言ってきた？」
「はい。貴艦の艦長はピーター・ハギンズのクソ野郎かと」
「……ポール、返信しておけ。その通りだこの野郎。それで」
いい。
そう言葉を切ろうとして、ハギンズは思い出したように言った。
「……特上のワインを一本用意しておけ。そう付け加えておけ」
「そ、それでよろしいのですか？」
「あいつにはそれで通じる」
「は、はぁ……」
「ハードウィック。“積荷”に入港までの残り時間を伝えておけ。奴の朝飯までに目的地にはたどり着くとな」
「ああ」
ハードウィックは頷いた。
「もう少し、お上品な言葉に翻訳してな」

●釜石湾上空　ドイツ皇帝親衛軍　飛行艦“ヴィッテルスバッハ”艦内
「予定通りですか」
「はい」
メイド服を着た女官から報告を受けたアイネがレルヒェの元に近

づくと言った。
「陛下。英国艦隊は予定通り、明日にはこの湾に入港いたします」
「そうか」
カリカリとペンを走らせながら、レルヒェは言った。
「アイネ」
「はい？」
「トイレに行きたい」
「あと１００枚サインしたらいかせてあげます」
「漏れたらどうする！皇帝であるこの私に、この場で漏らせというのか！？」
「椅子を変えましょう。誰か、簡易便器を」
「アイネ、冗談だろうっ！？」
「私が冗談を言っているように思いますか？」
「……」
レルヒェは無言で首を横に振った。
「まったく、昼間、私が留守の間にサインしておくとお約束いただいたというのに、何ですか。ずっとゲームを続けているとは！」
「し、しかたないだろ！？あのゲームは日本先行発売なんだ！ファンとして発売当日にプレイするのは、むしろ義務というべき――」
「殿下？椅子を変えますので、どうぞお気の済むまで、漏らすなりなんなりなさってくださいませ」
「わ、悪かったとは思っているのだ！だが、アイネっ、私も私で、お前にも配慮というものをだな――！」
「まぁ、嬉しい」
アイネは恐ろしく冷たい声で言った。
顔も目も全然笑っていない。
どこが嬉しいのか全然分からないまま、メガネだけがきらりと光った。
「最後まで我慢していただけるなんて」
「違うっ！そうじゃなくて！」

かなり我慢しているらしい。
レルヒェが脚をジタバタさせながら叫んだ。
「お前が気に入るような本も仕入れてくるように命じてある！それで手を打て！」
「――――えっ」
レルヒェはピクリと反応した。
「もしかして――――私が知らない村上春樹の新作……とか？」
「よく知らないが」
「ま……まぁ、この混乱の時期ですから」
コホン。
アイネはわざとらしい咳払いの後、言った。
「さすがにお手洗いくらいは――――本を出していただければすぐにでも」
「トイレが先」
「本が先です」
レルヒェはカバーのついた本をデスクから引き出すと、無言で置いた。
「中は見ていない！というか、も、もぉ、私が大変なことに！」
「どうぞご自由に」
全力疾走でトイレへ走るレルヒェを無視するように本に手を伸ばした。
「今度のは随分、薄いんですね……エッセイかしら？」
半ばでページを開いた。
「えっと……“さぁ、受け入れろ。余のエクスカリバー”……」

「あーっ。すっきりした……って」
数分後、トイレから戻ってきたレルヒェは部屋の入り口で思わず立ち止まった。
「あ、アイネ？」
「間に合いましたか？」

「う……うん」
「それは結構」
「あ、あの」
「何か？」
「私の椅子のあった所にある……“それ”なんだけど」
「ああ」
何故か冷たい目のアイネが、爪先で軽く蹴ったのは、どう考えても椅子ではなかった。
椅子の形をした、別なものだった。
「――お気に召していただけたようで」
「誰がどうやったらお気に召すのか知らないが」
レルヒェは震えながら言った。
「わ、私に、それに座れと？」
「ここは陛下の執務室でございますから」
「ち、ちょっと待て！それは椅子じゃない！絶対、椅子じゃないっ！」
「――まぁ。何を妙なことを。立派な木製の椅子でございますよ？ご覧下さいませ。この高い背もたれ。がっちりとした造り。申し分のない椅子でございます」
「普通の椅子が！」
レルヒェはそれを指さして怒鳴った。
「そんな針だらけなワケないだろう！？」
「東洋では針が健康のために用いられるとか」
「私は健康そのものだ！というか、それ、絶対、拷問用だろうが！」
そう。
木製のがっちりとした椅子には、座面といい背もたれといい、座る者が接するだろう全ての面に五寸釘ほどの太い釘がびっちりと植え付けられていた。
アイネが椅子と言い張っても当然、これは拷問椅子という。
「とも言いますわね」

「としか言わないっ！」
「仕方ありません」
アイネが残念そうに女官に命じて拷問椅子を下げさせた。
「電気ショック付きの方がお望みだったとは」
「それ……死刑台」
「一体、陛下は、読書に関して、私の嗜好をどのようにお考えだったのか、たっぷりと本音を伺いたかったのですが……」
「あ……あの」
「何です？」
「ただ、人気の本を買ってこいと言っただけなんだが……」
「それで？」
「絶対、女の子が喜びそうな奴という注文がマズかったのか。それとも秋葉原という地理が拙かったのか……なんだろう。アイネ、せめて私にも見せてくれ。私は中身を読んでいない」
「ダメです」
「何でだ！皇帝の私に見せられないというのか！」
「当然、これは陛下が読んで良いものではございませんっ！」
アイネは慌てて本を抱きかかえると、
「こ、こんないかがわしいものは、ダメですっ！」
そう怒鳴った。
「いかがわしいとは何だ！この私が、お前のためにと思って買いに行かせたというのに、その努力をいかがわしいというのか！」

いらん子中隊奮戦す　第四話

●翌日　マラネリ王国軍所属　飛行艦エトランジュ　飛行デッキ

くわぁぁぁっ。

レルヒェの口から大きなあくびが出た。

「不作法だぞ」

横に立つ殿下が窘める。

「仕方ないだろう？寝不足なんだ」

「ゲームのやり過ぎか？」

「ケンカした」

「ケンカ？」

ぶすっ。とした顔のレルヒェが頷いた。

目のあたりが腫れぼったい。

「誰と」

「アイネ以外にいるか」

「……珍しい」

殿下は天上を見上げた。

「アイネが、私の買いに行かせた本をいかがわしい本呼ばわりするから悪いんだ！」

「……で、中身は？」

「知るか」

「知るかって……中身も読まずにいかがわしいか、そうじゃないかなんて、わかるわけないだろう？」

「そう思うだろう！？」

レルヒェは興奮した口調で言った。

「そうだよな！？私もそう思う！でも、アイネは頑としてみせないんだ！」

「ふぅん？あのアイネがねぇ……」

殿下は少し考えたが、

「本当にいかがわしかったんじゃないのか？」
「そ、そんなこと――私が買いに行かせたんだぞ？」
「どこへ」
「秋葉原だ。私のゲームと一緒に買ってこいと命じた」
「買いに行かせたのは日本通か？」
「さぁ？ただ、私用とはいえ、皇帝の依頼に対して、大使館が使うとしたら、それなりだろう」
「……レシートか何かないのか？」
「……あっ」
レルヒェは何故か、ポケットに手を突っ込んだ。
「ゲームの取説に挟んでおいた」
「なんで」
「後で大使館から宮殿に請求が来るんだ。お小遣い帳にはレシートがないとアイネから不正経理だと指摘されて、次のお小遣いから同額が引かれてしまう」
「いい部下を持っているなぁ」
「皇帝に本の一冊も見せない奴のどこがだ――ああ、これだ。Ｂｏｏｋと書いてあるから間違いない」
「どれどれ？……おい」
「ん？」
「アイネに謝っておけ」
何故か殿下はレシートを握りつぶした。
「何でだ！」
「これは……見せられない」
「なんでだ」
「いや……だってお前」
「ん？」
「……これ」
「はっきりしろっ！国際問題にされたいのか！？」
「……耳を貸せ」

殿下は、皇帝と国王が何事か言い合いになっていることに驚く周囲を見回し、レルヒェの小さな耳元で囁くように、何かを言った。
「……何だと？１８禁？
男と男が愛し合う？
そんなコトできるわけないだろう。
第一、男がどうやって男相手に生殖行為を？
……女の妄想？
……美少年を女性に見立てて……ああ、そう言ってくれればわかる。
成る程？
生殖行為が記述に含まれているから、アイネはそれを私の年齢から閲覧を不適切だと判断したんだな？
そうか、アイネもアイネだ。
素直にそう教えてくれればよいものを」
「……君が、そっち側の面では年頃で助かったよ」
「何だ！人を子供扱いして！」
「とにかく……あれ？」
「どうした？キョロキョロして」
「肝心のアイネは？」
「朝から口を利いていない。多分、ナハトガルの中だろう」
「泣いていなければいいけどな……」
「誰が」
「とにかく、悪いのは君だ。アイネに謝れ」
「イヤだ」
「……不器用」
「何だと？」
「不器用だ――そう言ったんだ」
「私は皇帝だぞ！？」
「アイネとは皇帝とＭＣじゃなくて、頼れる姉のように接したいと、いつか言っていたじゃないか」

「うっ」
「よくある姉妹喧嘩。あるいは友達同士の喧嘩かな？」
「ど、どっちにしても」
「謝らないんじゃなくて、謝り方がわからない――その間違いだろう」
「……」
「……」
「……ど」
レルヒェは赤面して、そっぽを向いたまま訊ねた。
「どうしたら、いいと思う？」
「素直に、やり過ぎました。ごめんなさいと、そう言うことだ。怖かったら、眼をつむって言えばいい。言えばそれで終わる。アイネは、レルヒェの気持ちがわからないほど無能でも子供でもない」
「ど、どうせ私が子供だと言いたいんだろう？」
「謝ることもしなかったら、幼稚というより愚者というべきだろうがな」
「そこまで堕とすな」
「言われたなければ――というか、この程度で勇気が奮えないとなれば、皇帝を名乗る資格もないし、何より」
「な、何より？」
「アイネを傷つけたままになる。それでいいのか？レルヒェ」
「……あ」
「あ？」
「謝る……ちゃんと、謝る」
「約束だぞ？」
「……」
無言でレルヒェはコクリと頷いた。
「よし」
勝ち誇ったような顔で頷いた殿下の前で、ハッチが開かれ始めた。
気流が乱れ、ごうごうとした風の流れがデッキに乱入してくる。

「殿下！」
武官が風の音に負けないように大声で耳打ちした。
「ＴＡＣ、着艦します！」
「わかった！」
頷き、怒鳴り返す。
開放されたハッチに現れたのは、一隻のＴＡＣ。
ＨＡＳ．６“スーパーリンクス”と呼ばれる英仏軍が採用しているタイプだ。
灰色に塗装された機体には、英国の識別マークが描かれている。
「捧げ――剣っ！」
通信装置、そしてスピーカー一杯の号令と同時に、デッキに居並ぶシュツルム・ディアス達が一斉に戦斧を掲げた。
一瞬の無駄もないその統率された動きは見事としか言い様がない。
シュツルム・ディアス達の歓迎を受けた“スーパーリンクス”は、その操縦者の意地を示すかのように、静かに、そして正確に着艦した。
“どうだ！”と言わんばかりに操縦者の口元が笑ったのを殿下は見た。
「……褒めてやろう。給料分の仕事はしているとな」
殿下がそう呟いた。
「お、おい！」
その殿下の脇を小突いたのは、驚いた顔のレルヒェだ。
無理もない。
“スーパーリンクス”のドアが開かれ、キャビンから飛び降りたのは、殿下達が予想していた背の高い年上の男ではなかった。
「よっと！」
甲板に降りた途端、両手を羽のように広げ、「１０点満点！」と言ってのけたのは、レルヒェ達とほとんど年の変わらない女の子だった。
二人よりやや年上、それでも１２か１３という所だろう。

くりっ。とした優しい目と、茶色のウェーブのかかった長い髪を持つその子は、満足そうに頷き、戦闘服姿で殿下達相手に優雅に膝を折って見せた。
「え、エマ王女っ！？」
「――お久しぶりです。殿下、それに陛下」
「ち、ちょっと！」
ハッチが閉じられ、風の流入音が止んだ。
驚く殿下とレルヒェの声がデッキによく響く。
「ジェームズなら」
エマ王女。
そう呼ばれた少女は髪を手で梳くと、意味ありげに微笑んだ。
“戦争が怖い怖い”言ってベッドで震えていたから、シーツごとリネン室に放り込んできた」
「……」
「……」
唖然とする殿下とレルヒェが互いの顔を見合う前で、エマは続けた。
「レルヒェちゃんが皇帝としてメサイアをぶった切ったのは、英国でも話題になったわ。すごいわね。レルヒェちゃん」
「あ、ありがとう……」
レルヒェは突然の賞賛に戸惑い、赤面しつつも頷いてみせた。
「ジェームズったら、陛下から“お前も騎士で、しかも王室の一員なんだから、当然出来るな？”とか聞かれてガタガタ震えだして……」
「あの“モヤシ”らしい……」
「でしょ？お漏らしてたんじゃないかしら？」
ウププッ。
エマは悪戯っぽく笑った。
「女の子の前では、騎士だとかメサイアがどうのって、いつもカッコいいこと言ってるクセに、ホント、男ってダメね……あ、殿下、

ごめんなさいね？殿下は例外」
「……喋ると」
はあっ。
殿下はあきれ顔で言った。
「君が一体、誰の娘かよくわかる」
「ふふっ。女官長にはよく怒られるわ。ジェームズも口に機関銃が仕掛けられているって、それで私のこと、“マシンガン”って呼ぶの」
「……さもありなん」
「それにしても」
エマはシュツルム・ディアス達を見回すと、不意に、きっ。とした顔になり、腰に手を回した。
そしてきょとん。とするレルヒェの顔をのぞき込むようにして言った。
「レルヒェ！？あんた、アイネとケンカしたんですって！？」
「な、なんで知ってる！」
「やっぱり！私の情報網を舐めないの！」
「アイネが告げ口したのか！？」
「まさか」
エマは肩をすくめた。
「あの子がそんなマネするはずないでしょう？グラナトよ」
「レルヒェ？誰だ？」
「グラナトはアイネの年の離れたお姉さんだ。英国に留学中の……そうか。アイネが」
「そうよ。グラナトがびっくりしていたわ。アイネが泣いたの見たの久しぶりだって」
「……っ」
「随分、ヒドいケンカしたみたいじゃない。アイネはアイネで悪いことしたと思ってるみたいだけど」
「大丈夫だ」

詰問気味になつてきたエマを遮るように殿下が言った。
「レルヒェは、自分から謝ると、そう約束した」
「――本当？レルヒェ」
「……」
レルヒェは無言で頷いた。
「――そう」
その顔をじっと見つめたあと、エマは満足そうに答えた。
「なら、私も立ち会わせてもらうわよ？その場に」
「そ、そんな！」
「言わないの？」
「……は、恥ずかしい」
「ふふっ。レルヒェったら可愛いっ♪」
「こ、こらっ！抱きつくなっ！」
「だってぇ。やっぱり、女の子って可愛い♪」
「お前、危険過ぎるっ！」
「あらぁ？年頃の女の子はいつだって、どんな爆発物より危険な存在なのよ？そうでしょう？」
「艦内に置けないような発現するな……で？」
「で、って？」
「何しにきたんだ？」
「そりゃ当然」
エマは胸を張った。
年頃からすればかなり発達している胸をこれ見よがしに反らされ、レルヒェは少し悔しそうな顔になった。
「王族の義務を果たしに」
「それ、王子の仕事だろう？」
「あんなのが果たせる王子の義務なんて、種馬の代わりだけよ」
「で、王室随一のおてんば……じゃなくて、アクティブな君が来たと？」
「もうじれったくって仕方なかったんだもの。ディアっていうガー

ルフレンドには“戦場であげた武勲は君に捧げる”とかたらし込んでキスしてたクセに、戻ってきた途端にベッドに潜り込んで、“いやだ！死にたくない！”じゃ……妹の気持ちわかるでしょう？」
「……まぁ」
「陛下が激怒して、ロンドン塔に幽閉するって言い出しているもんだからね？私が代わりに来てあげたのよ」
「でも、君は」
「メサイアの操縦のシミュレーションは受けているわ。結構、自信あるのよ？」
「そうか？」
「……まぁ」
エマは少し、寂しそうに笑った。
「私が死んでも、ジェームズが死ぬわけじゃないし、それに妹達もいるし」
「そういうのは」
レルヒェが咎めるような口調で言った。
「好かん言い方だぞ？」
「ごめんなさい」
「……で？」
殿下が訊ねた。
「で。って？」
「騎体は？」
「テンペストを持ってきたけど」
「あんなので？」
「し、仕方ないでしょう？」
エマはぷうっ。と頬を膨らませた。
「ウチの国、お金ないんだから！」
「……わかった」
渋々。という顔で殿下は頷いた。
「細かいことはその都度、考えよう」

「お、おいっ！」
「仕方ないだろう？レルヒェ。対機甲部隊戦闘用メサイアを対メース戦に投入するなんて、騎兵戦闘車で戦車部隊相手にするようなものだ。結論は先に出ている」
「な、何よ！英国製をバカにするつもり！？」
「テンペストのベースとなったロンギヌス開発には、僕の父上も参加している。僕も設計図を見たことがあるからわかるんだ」
殿下は、胸につけられた六本線を指で弾いた。
「僕は騎士と同時に“見通者（シーカー）”だぞ」
「あ、そ、そうか……」
はぁっ。
エマは悔しそうに肩を落とした。
「やっぱ、無理かなぁ」
「英国軍がかなり苦戦しているのは知っているだろう？」
「……うん。ラムリアースからパーツ都合してもらって。
……ほら、テンペストは、ラムリアース帝国の配備しているロンギヌスの改良版でしょ？
だから、パーツの互換性がかなりあるんだって。
それを組み付けた改良型になるんだけど……」
「テンペスト自体が、先のアフリカ戦線での教訓を活かしたロンゴミアント……ロンギヌスの英国版の改良版だから、それは可能だな」
「でしょ？……まぁ、パワーや装甲はともかく、武装だけは一端のモノ用意しているのよ？」
「それでも、君は初陣だぞ？エマ王女」
「なによ。レルヒェだって――殿下だってつい最近でしょう？私だけのけ者にするつもり？」
「……むぅ」
「第一、それ言ったらノイシア使っているはずのレルヒェが、あんなスゴそうなメサイア、どこから手に入れたのよ。ウチの情報部だって、ドイツ軍があんなの開発していたなんて聞いてないわよ？」

「……あれは」
レルヒェがちらりと殿下を見た。
「――――ああ」
すると、エマは意味ありげに頷いた。
「成る程？」
「な、何か誤解してないか？」
「彼氏に頼んだんだぁ」
「な、なっ！？」
レルヒェの顔が一瞬にして真っ赤になった。
「だ、誰が！？」
「え？違うの？だから、殿下に“お願い、ダーリン♪”ってしたんじゃないの？」
「ま、まさかっ！」
レルヒェは慌てて手をパタパタ振って否定した。
「こんな潰れ肉まんを好きになる奇特な女なんて、ドクター・ツシマ位なものだ！」
「ああ……そう言えば」
「な、何だ？」
「聞きたい？ドクター・ツシマが殿下のこと、何て言っていたか」
「……何が望みだ」
「ちょっとでいいから、持ってきたテンペスト改良してほしいなぁって」
「何だ、安いな。そんなのでいいのか？」
「……おい」
あきれ顔のレルヒェが殿下の袖を引っ張った。
「ドクター・ツシマに逃げられるなよ？殿下は、女で人生狂いそうだから」
「男なんて、誰も同じよ。お願いね？殿下」
「報酬の支払いは？」
「まぁ、先払いでもいいわ？――――“理想の君主”だって」

「そ、そうか」
ぽわん。とした、上気しきった顔で、殿下は何度も頷いた。
「も、紅葉さんが、僕のことを……」
「あらら」
脚が数十センチ甲板から浮いた殿下の様子を見て、エマはぽつりと言った。
「後払いのほうがよかったわね……こりゃ」
「理想の……僕が……理想……」
「現実に戻ってきなさい、殿下。ドクター・ツシマに嫌われるわよ？」
「そ、そうか！」
「うん……」
「……なぁ、エマ」
レルヒェは、エマに訊ねた。
「戦争は、本当に危険なことだぞ？」
「ええ。私も何度も考えた。危ないし、顔に傷でもついたら、お婿さんの来てもなくなるし、パーティでドレスも着ることが出来なくなるし、それはつまり、私が女の子として、女として恋愛も出来ないってことなのね？それって怖いじゃない？」
「だったら」
「だけど！」
エマははっきりと言った。
「私しか、いないんだもん。世界のどこでも、帝国中のどこさがしても、王室の一人として、戦争に出られるのが！」
「ジェームズ王子は」
「あれこそ、死んだら困るのよ。あんな口先だけのヘタレでも、子作りは出来るからね！あーあ。男に生まれてくればよかった」
「だったら、ジェームズ王子のケツを蹴飛ばしてでも」
「世界中に英国王室の恥をさらせと？」
「……」

「ロクな兄を持つこと出来なかったのは、私の不運なんだけどさ」
エマは自嘲気味に、しかし明るく肩をすくめた。
「嘆いてもしかたないじゃない？だからね？狂ってるって、そう思うかもしれないけど、私はこう考えた」
「……」
「人生はゲーム。どうあってもね？人は自分って駒に全財産を賭けるしかない存在だって」
殿下の見たその顔は、自信に満ちあふれていた。
自分を信じている者の顔をしていた。
世界中で一番、自分を頼りにしている。
その顔は、はっきりとそう語っていた。
「そして、この世界は、この戦場は大きなチェスの盤」
エマは手で空に大きな四角を描いた。
「そうよ！
今、世界は戦争っていう、偉大なチェスをやっているの！
世界中総がかりよ！？
それっておもしろいじゃない！
今、時代が、世界が、そして歴史が大きく雄叫びを上げて動いているのよ！？
そんなの、悲劇じゃない！
これは素晴らしいチャンスなの！
プレイヤーとして、歴史に名を刻む事の出来る、古今東西、たった一度のチャンスなの！
なら、わたしも仲間入りしたいわ！
仲間入りさえできたら、歩だってかまわない！
もちろん、いちばんなりたいのは女王だけどね！？」

いらん子中隊奮戦す　第五話

●太平洋上空　“鈴谷（すずや）”艦橋

「第８８任務部隊、後藤中佐以下着任」

後藤の敬礼をきっかけとして、居並ぶ面々が敬礼する。

「ご苦労」

艦長席から立ち上がった美夜が答礼した。

「また、お世話になりますよ。艦長」

「――――不本意だがな」

ため息一つ、美夜は後藤の後ろに居並ぶ面々を一瞥した。

「前のを最初に受け入れた時より、圧倒的に不安が増しているが」

「そりゃ、どうも」

「使い物にならなければ出て行ってもらうぞ？今度こそ、そう簡単に艦を沈めてもらっては困る」

「……ですな」

「自信はあるのか？」

「……まぁ」後藤はニヤリと笑った。

「クセのある連中ですけど、古参も後で合流することですし」

「……」

美夜は、無言で肩をすくめた。

●釜石湾上空　ドイツ皇帝親衛軍　飛行艦“ヴィッテルスバッハ”

ハンガーデッキ

「……あっ」

ヴィッテルスバッハのハンガーデッキはメサイアを固定するハンガーベッドがコの字型に配置されている。

その一番奥に収容されているのがナハトガル。

レルヒェは、その前で立ち止まった。
見上げたナハトガルのコクピットハッチは開いている。
しかし、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）のハッチが閉まっている。
無人の場合、ハッチは必ず開放される規定になっている。
それが閉じているということは、つまりは中に人がいる証拠だ。
ドイツ皇帝座乗騎であるナハトガルのＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）に入れるのは、世界でたった一人だ。
「へえ？」
無重力空間を流れてきて、レルヒェに捕まることで止まったのは、後ろを付いてきたエマだ。
「これかぁ――綺麗な騎体」
ナハトガルを見上げるその目には、羨望の色がまざまざと浮かんでいる。
「線が細くて、まるで工芸品みたいっていうか……車に例えたら、イタリアのフェラーリかマクラーレンみたい……でも、装甲は薄そう。テンペストよりは軽いっていうか、耐久力は低そうね」
「そんなことはない」
二人よりやや後ろに立った殿下が頷いた。
「装甲に付与した防御系魔法は最新バージョンだ。
テンペストに施してある欧州系のＤＭＥＵ規格と比較して単純計算で倍の耐久力があるし、装甲素材そのものも新開発の魔法金属を使った。僕の自信作だ」
「へぇ？」
エマがポケットからカメラを取り出そうとして、ストラップに裾をひっかけてしまった。
「わ、わわっ！？」
エマがカメラをお手玉するように捕まえようと足掻くが、カメラはその動きに反するように宙をピンボールの玉のように動き回る。
「ち、ちょっ！？」
「――無重力空間には慣れていないのか？」

レルヒェは横から手を伸ばして、カメラを捕まえた。
「当然でしょ？こっちは宮殿暮らしが長いんだから。っていうか、境遇は同じなのに、何で二人とも、泳ぐみたいにスイスイと進めるのよ」
カメラを受け取ったエマがバツが悪そうに頷いた。
「慣れだ慣れ」
「じゃ、私が上手く進めないのは当然よね」
「……なら、しばらく」
レルヒェはエマの体をしげしげと眺めながら言った。
「艦内ではスカートをはくなよ？」
「なんで？」
「ひっくり返ったまま、パンツ丸見えで皆の前を流れていくことになるかも」
「……やめておくことにする。というか」
「というか？」
「戦闘服の方が圧倒的に多いと思うわ？部下の手前、ドレスなんて着ている余裕もないでしょうし。レルヒェちゃんだってそうでしょう？」
幼い体に騎士用の戦闘服を纏ったレルヒェに、エマは楽しげに微笑んだ。
「今、軍服や私服を着ていないのは、そういうアピールもあるんじゃなくて？皇帝として」
「部下は長旅に慣れない戦地で苦労しているんだ。皇帝たる者が享楽にふけっていて、誰が付いて来ようか」
「そうよ？」
エマは頷いた。
「だから、私も当分はこの格好。ほしい服はたくさんあるから、祖国に生きて帰ったら、ジェームズに買ってもらうことにするわ」
「ジェームズ王子も気の毒に……」
「何よ。あんなボンクラに代わってこんな所に来ている私は気の毒

じゃないの？」
「私だっているさ」
「……むぅ。それでも、こんないいメサイアがあるんだからいいじゃない。部下だって恵まれているし。何よ、フォイルナー少佐にクラッチマー中尉も……えっと、何だっけ？何だっけ？二人専用の」
「ヴィーグリーズのことか？そこに並んでいるぞ？」
「えっ？うそっ！？」
エマはびっくりした顔で周囲を見回した。
「よ、よく見たら、このデッキにあるのって、ノイシアじゃない！な、なにこれっ！？」
「ナハトガルの両脇に立っているのがヴィークリーズ。その他がデュミナスだ」
「ヴィークリーズに……デュミナス？」
「すべて精霊体搭載型。悪いが、いや、もうここまで来ると悪いのは僕達じゃないけど、とにかく、エンジンやフレームのレベルで既にテンペストでは勝負にならないというか、一緒に作戦行動をとること自体が無理に近い騎体達だ」
「な、なんでよ？」
「性能差が大きすぎて、テンペストではデュミナスをフォロー出来ない。対等の数で――――１０対１０でコンビを組んで魔族軍のメース２０騎と交戦したら、生き残っているのはデュミナスだけだろうな」
「そんな無茶苦茶な！」
「中華帝国軍の飛鼠相手に英国軍のテンペストが惨敗したことは知っているだろう？」
「そ、それ！」
エマは目を見張った。
「どこで聞いたのよ！あの一件は情報管制が敷かれているってのに！」
「そんなもの、各国の諜報機関には筒抜けだ」

「まぁ、怒るな」
レルヒェがそっけない顔で答えた。
「あの飛鼠（ひそ）に負けたところで、むしろ当然だ。あのフォイルナー少佐達率いるグリュックシュヴァインですら冗談抜きで大損害を被ったのだからな」
「……救いになってない気がするけど。それなら、私達にどうしろと？殿下、何かいい策があるの？」
「はっきり言って無いに等しい」
「なっ！？」
「射撃系としてエルプスシステムを採用したビームライフルシステム、それから、白兵戦用に同じくエルプスシステムを使った槍と戦斧のより強力なものを供与するのが精一杯だな……」
「むぅ……それって」
エマが疑わしそうに頬を膨らませた。
「使えるの？」
「メースに対抗できる武装を与えるんだ。当たればメースでも倒せる。使える武器であることは、すでに証明済みだよ。ただ、命中させることが出来るか否かは、騎士の腕だ」
「……ウチの連中に出来るのかしら」
「王立騎士団（ロイヤル・ナイツ）はアフリカ戦線で武名を誇った精鋭だろう？」
「腕の立つのはすでに戦線に送り込んでいるわ。私のお守りにつく連中に大したのはいない。どうせ、私がどんなに頑張っても、司令部ではまともに戦うことなんて想定されていないもん」
「……おいおい」
「だって！」
「だってもへったくれもあるか。どうせテンペストで十分メース戦で相手になると、そう判断していたんだろう？」
「と、当然でしょ？ヨーロッパでメースってのがそんなに厄介だなんて、知ってる方が少ないんだから」
「まぁなぁ」

殿下はため息をついた。
「アフリカや南米で妖魔は撃破出来たから、今度の戦いも、“多少の損害”は出してもいずれは勝てるというのが、ヨーロッパ諸国の大勢の見方だ。メースもメサイアとほとんど同じか、それ以下っていう理屈は確かにまかり通っているというし」
「ああ」
レルヒェは真顔で頷いた。
「アイバシュラ達の存在は、ほとんどヨーロッパでは報道されていない。
ドイツを始め、ヨーロッパ諸国は国民に楽観論を求めているからな。
自分達が相手にしているのは、勝てる相手だと思わせなければ、アフリカで支払った損害にトラウマを持っている国民がどんな反応を示すか、考えたくもない。
どうあっても、国民は楽観論者でいてもらわねばならん。
そうでなければ、ヨーロッパからわざわざ極東まで軍を派遣して犠牲を支払うことに誰が同意しようものか」
「真実をヨーロッパの一般の人達が知ったら」
ゴクリ。
それを想像したエマは唾を飲み込んだ。
「……大パニックよ？」
「そうだ。誰も極東で戦う事なんて求めなくなる。すぐに軍を引き揚げて、ヨーロッパに防衛線を張るべきだと――――そうなる」
「それじゃ、どうしようもないんだけどね。災いの鍋に蓋をしなくちゃ、いつまでたっても何も変わらない」
「それがわかるから、ここに来たんだろう？エマ」
「……チェスの相手はね？ちょっと手強いくらいが丁度良いのよ」
「ふん……英国にメサイアを供与出来る力がマラネリにないのが残念だ」
「武器の供与を約束してくれただけでも感謝するわ。ありがとう、

殿下」
「何。運用でカバーしてくれ――――さて、閉じこもりのお姫様を起こしに行くか」

ナハトガルのＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）は、左側頭部にある装甲ハッチから出入りする設計になっている。
別にナハトガルの限ったことではなく、メサイア全体に言えることだが、頭部に重大な損傷を受けた場合に備え、ＭＣＲのハッチは爆破開放も出来るし、或いは頭部を解体して開くことも出来るようになっている。
また、騎体の損傷がなくても、ＭＣ（メサイア・コントローラー）が人事不省に陥った場合など、人為的な理由でハッチの開閉が出来ないこともあり得るので、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の装甲ハッチは外部から強制開放する仕組みがきちんと設計段階で組み込まれている。
当然、その中にはナハトガルも含まれている。
ナハトガルの場合、後頭部よりの首の付け根付近の装甲に隠れてハッチ開放用のパネルが設置されており、殿下はそのパネルを操作して、最後のボタンを押す前にハッチ前にいるレルヒェ達に言った。
「開くぞ！？」
「了解っ！」
「わかったわ！」
二人がハッチの開放に巻き込まれないようにナハトガルの左肩の装甲の上へと移動する。
無重力空間の移動に慣れないエマは、まるで這うような情けない姿だが、怪我をしたくなければ、そんな格好もやむを得ない。
ピーッ！
甲高い電子音が辺りに響く。
「ＭＣＲハッチ強制開放モード作動、ハッチ周辺各員、注意！

ＭＣＲハッチ強制開放モード作動、ハッチ周辺各員、注意！
ＭＣＲハッチ強制開放モード作動、ハッチ周辺各員、注意！」
電子合成された声が警告を三回唱えると、
バシュッ！
空気が抜けたような音がして、分厚いハッチが上下に開いた。
「アイネっ！」
その隙間に飛び込むようにして、レルヒェがＭＣＲの中へと飛び込んでいき、肩装甲にしがみつきながらエマがその後を追う。
「アイネっ！？」
セーブモードで作動する室内の機器類が薄ぼんやりとした光を灯す中に、やや寝かせ気味にリクライニングされたシートに座った小柄な人影があった。
アイネだ。
ハッチが大きく開くにつれ、ハンガーを照らす照明の光が室内に入り込んでくると、人影ははっきりとしたアイネの姿となった。
なぜか、アイネはびっくりした顔をしてレルヒェを見ている。
というか、何かを読んでいる姿勢のまま、凍り付いていた。
「へ……へいか？」
発音に感情が込められておらず、ほぼ棒読みだ。
「……あっ」
とっさに、何を言うべきか迷ったレルヒェが息を止めた。
「……あの」
次に吐き出された呼吸と共に、そんな言葉にならないモノは出てくるが、肝心の謝罪が出てこない。
もどかしい気持ちがレルヒェの心を駆け回る。
しかし――――
バッ！
アイネは慌てて手にして、そして読んでいた何かを背中に隠した。
「な……なっ！？」
顔は真っ赤になったり真っ青になったり、まるで故障した信号の

ように変化が忙しい。
「な、何ですかっ！？」
その声は怒っていない。
むしろ、泣きそうな程慌てている。
「な、なんでここに殿下が！？っていうか、どうしたんですか！？」
「い、いや」
その剣幕に押されたレルヒェがどもりながら答えた。
「さ、昨晩の件、あ、謝ろうと……そう思って……」
「い、いいんですっ！」
「よ、よくはないだろう！？お前は――」
ＭＣＲの中に入ろうと、レルヒェが一歩を踏み出すのと、まるでエモノに襲いかかる猫の様な敏捷さで、アイネが室内から飛び出してきたのは、ほぼ同時だった。
「い、いえっ！」
アイネはＭＣＲに入ろうとするレルヒェを押しとどめるかのように、その両肩を押さえつけた。
「臣下として、あのような穢らわしい本を殿下に触れさせたのは、家庭教師を任じられた私の落ち度です！陛下がご心配されることなんてございませんっ！ええっ！これっぽっちも！」
あまりの気迫に、一瞬、完全に押されたレルヒェだったが、
「――お、おい？アイネ！？」
アイネの変化に気付かないワケにはいかなかった。
むしろ仰天した顔で怒鳴った。
「お前、その鼻はどうした！？」
レルヒェが驚くのも無理はない。
アイネの両方の鼻には、小さく丸められたティッシュペーパーが押し込まれているのだ。
しかも、少し赤い。
「け、怪我をしたのか！？」
「ち、違いますっ！」

ハッとなったアイネが鼻を両手で覆い、レルヒェの前で顔を背ける。
「違うも何も！」
レルヒェは真っ青になってアイネに縋り付く。
「お前に何かあったら、私はどうしたらいい！？で、殿下っ！」
「――見せろ。“見通者（シーカー）”の僕ならすぐに」
「け、結構ですっ！」
「結構も結婚もあるか！出血してるんだろう！？」
「ち、ちょっと――のぼせた、そうっ！のぼせただけですっ！」
「それはそれで大変だ！殿下、アイネを安静に」
「お願いですから、私を一人にさせて下さいませっ！」
「アイネっ！」
「お慈悲を！」
「何がおジヒだ！お前、ワケのわからんこと言うな！殿下、どうにかしてくれ！アイネが壊れた！」
ジタバタ暴れ出したアイネを二人がかりで止めようとするレルヒェと殿下。そしてアイネがハッチの前で三つどもえになって宙に浮いている。
「――彼はすばらしいテクニシャンだった。僕は襲い来る快感の波に身を震わせもだえ」
そんな三人組を無視するかのようにＭＣＲから顔を出したエマが、本を手に朗読を始めた。レルヒェは、その本のカバーに見覚えがあった。
「彼は、その逞しい尻を僕の前に突き出した」
エマが朗読しているのは、間違いなく、騒ぎの原因となった本だ。
「だ、ダメぇっ！」

アイネが身も蓋もないかのような声を上げるが、エマは朗読をやめようとしない。

「いいぞ。よくしまって吸い付いてきやがる。そうだ、俺のをしっかりと味わってくれ……ああ。お、俺はもう……」

「やぁぁぁぁっ！」

「愛してるぞ忍。おれもだ……光流……中に、出すぞ。ああ。俺の中でいってくれ」

「やめてぇぇぇっ！」

「ちょっと、アイネ？」

絶叫するアイネに、エマはあきれ顔で言った。

「この手の本をアンタの歳で手にすること自体が問題だってのに、何よ。ＭＣＲの戦略統合システムをインターネットに繋いでア●ゾンにこの手の本発注するのって、あんた何考えてるのよ」

「み、見たんですか！？」

「メインモニターにばっちり映ってるんだもん。見るなって方が無理でしょう？」

「――――おい、アイネ」

うわぁぁぁぁんっ！

ついに泣き出したアイネ。

まだ幼いとはいえ、レルヒェもさすがにエマの朗読の意味はわかったらしい。

心底呆れかえった。という顔で言った。

「お前――――私が心配している間に、何してたんだ」

●太平洋上空

曇りがちの空の元では、高速で移動する、わずか1メートル足らずのターゲットを見つけること自体が困難きわまりない作業なのが普通だ。

３６０度、自分の周囲全ての世界に神経を使い、わずか1メートル足らずのターゲットを見つけること自体が困難きわまりない作業なのが普通だ。

３６０度、自分の周囲全ての世界に神経を使い、わずかな変化をも見逃さない集中力と、一瞬の異常に気付く鋭い勘の双方が備わっている者なんてそうザラにはいない。

さらに言えば、電波式のレーダーが満足に使えない、或いは、使えてさえその発見が困難なターゲットを一々追い回すのは、余程のヒマ人でなければ、物好きでしかない。

そう思うのは、何も夏川だけではない。

もし、自分が戦闘機パイロットで、これが実戦だったら、自分は躊躇わずにターゲットをロストしたと断定して母艦に帰投しているだろう。

夏川はそう思った。

しかし、残念ながら操っているのは単なる戦闘機ではない。世界最高水準の感覚器を備えた悪夢の巨人だ。

自分が見つけなくても、この巨人の感覚器と、それを操作するＭ（メサイア・コントローラー）Ｃ達から逃れることは出来ない。

まったく。

夏川はターゲットの動きに合わせ、騎体を上昇に入れた。

慣性制御システムがほとんどのＧを殺してくれるおかげで、Ｇは感じない。

それがむしろ、移動する世界で自分だけが取り残されているような不思議な錯覚を夏川に与えてくれる。

厄介な仕事だ。

夏川は、小さな雲に隠れていたターゲットをついにモニター上に捉えた。

ピピピッ！

“幻龍改（げんりゅうかい）”のＦＣＳがターゲットを固定、ビームライフルの筒先に光が集まり、その光はすぐに圧倒的な破壊となって放たれた。

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「――みんな、それの射撃能力はあるみたいね」

帰艦した夏川に冷たくそう言い放ったのは紅葉だ。

本来、固定されているはずの椅子も、壁に取り付けられているのはずのホワイトボードもこの部屋にはない。

無機質な合成樹脂の壁には壁紙も貼られておらず、配線をカバーするモールが申し訳程度に壁を張っているのがわかる。

床にガムテープで固定されたパイプ椅子に座る夏川達は、ガムテープを剥がして椅子をひっくり返さないように大人しく座っているしかない。

同じようにガムテープでベタベタと壁と床に固定されたホワイトボードを前に立つ紅葉は手にしたバインダーに挟んだ書類を捲った。

「まぁ、私から言わせれば、ＦＣＳとＭＣの補正能力のおかげってのが、ほとんどだけど」

「そうなの？」
椅子の上で足をプラプラさせていた亜夜が訊ねた。
「上手く当たったと思ったんだけど」
「当てさせてくれたのよ。ＭＣに感謝しておきなさい？」
「えーっ？私達の腕じゃないの？」
亜紀が不満げに言った。
「私、夜店の射的は上手いんだよ？」
「そうそう」
亜夜が姉をフォローするように頷くが、
「メサイアのビームライフルと夜店の射的を一緒にするな！」
紅葉を怒らせただけだった。
「あんな５発で１００円の屁みたいなコルク弾と、一発何百万のエネルギーの塊を一緒にすんな！このキチガイ共っ！」
「むぅ……ヒドぉ」
「なんだよぉ……ナマイキ」
「私の方が上官だっての！とにかく、これであんた達が狙撃部隊としては使い物にならないことだけははっきりした！本来なら、“白雷改”を与えるのに値する射撃能力を持っているのは、この中に一人もいない！」
「そ、そんな！」
隊長である大月が驚きと焦りを隠せない顔で抗議した。
「み、みんな、懸命になって――」
「懸命だろうが何だろうが、数値は全てを物語っている」
紅葉はパンッと書類を綴じたバインダーを叩いた。
「あんただって、この数値は、“幻龍改（げんりゅうかい）”を駆る上では下から数えた方が早い成績よ！？訓練、ちゃんとやってたの！？」
「――っ！」
「前任の前線隊長は、襲ってくるミサイル１０発を、ＦＣＳなしでたたき落としたバケモノよ！？文句言うなら、同じ程度のことはやってから言って！」

「そんな無茶な！」
「この中隊に配属されて、“白雷改（わたしのこ）”を任せる以上、そんなことは普通にやってのけて当然！」
「私の子だってぇ……」
クスクスと亜紀が含み笑いをする。
「やだぁ。この子、誰と子作りしたんだろ」
「どんな体位で孕んだんだろうね？正常位かなぁ」
「バックかなぁ」
「松葉崩しだったりしてぇ」
「やだぁ」
クスクス
「私は子供なんて産んだことはないわよっ！ついでに私が妊娠したとしても、体位がどう関係あるのよ！」
「うーん」
亜夜は少し考えてから答えた。
「大月大尉がパパなんだ」
「はぁ？」
「だって、たいいが関係してるんでしょ？」
「関係ないって言ったの！」
「わかってるわよ――すぐマジになるから面白いね。あんた」
「後で“遊ぼう”ね？」
「そうそう♪私達のテクの前じゃ、どんなカタブツでも、どんな不感症でもイチコロよ？」
「私達、自信あるんだぁ♪」
「寄るなっ！寄ったら殺すっ！」
「脅えちゃってかわいいねぇ。この子」
「うん。お姉ちゃん」
「大月大尉っ！」
襲う気満々の佐野姉妹を前に脅えきった紅葉は怒鳴った。
「この二人を私の３８万キロ以内に近づけるな！近づけたら、貴様、

銃殺だ！」
「あ、あのぉ……」
「何っ！？」
「３８万キロって、確か、月と地球の距離だったかと」
「だからどうした！？上官命令が聞けないのか！？」
「４８手だったら、知ってるよ？」
「うん♪」
「わ、私はまだ子供だっ！」
「私達もだけどね」
「――っ！と、とにかくっ！着座したままでいろっ！そうしたら、少なくとも話は続けられるっ！」
「座位がいいのね？覚えておこうね？亜夜ちゃん」
「うん。お姉ちゃん」
「と、とにかく、完全無視……完全無視。この変態は、私の目の前にはいない。私の目の前にはいない……」
「――津島中佐」
夏川がじれた様子で手を挙げ、発言を求めた。
「お話の続きを」
「な、何よ」
胸元を押さえ、鼓動を沈めながら紅葉が抗議した。
「あんた達の部下への教育がなってないから、私がこんな目に」
「続きを」
「……ビームライフルは基本的に全部隊へ配備されているから、今更においてレクチャーすることはないけど、ＦＣＳの性能は“白雷改”において格段に上がってる。それを使って、この程度ってのは情けないと思って。悔しいと思えばさらによし。私が求めるのは、使用者として相応しいだけの実績を数値と戦果で示してほしい。そういう事よ」
「しかし」
「何？」

「このビームライフルには、根本的な欠陥があります」
「はっ？」
夏川の突然の発言に、紅葉は眉間に皺を寄せた。
「ビームライフルに欠陥？」
「はい」
「……今までの運用上、騎士がビームライフルの欠陥について指摘してきたのは初めてだわ。そこまで自信満々に言うなら聞くわ。何？」
「光線がまっすぐ走ります」
「……は？」
「ですから、光線がまっすぐに走るのです」
「……」
「あれでは、遠距離からの射撃では弾道を先読みされかねません。やはり、テレビドラマなどであるように、光線はジグザクに走るべきではないかと」
「……」
「――何か」
「……」
「……」
夏川は、自分に注がれている視線が、決して紅葉のそれだけでないことに気付いた。
居合わせたほぼ全員の視線が、自分に語りかけていることは一つだと、夏川は悟った。
「な、何よ」
あまりの居心地の悪さから、夏川は周囲に抗議した。
「何よ、その私の年を疑ってるような冷たい視線は！」

いらん子中隊奮戦す　第六話

●葉月湾　“鈴谷（すずや）”

葉月湾内の一角に広大な更地が広がっている。

かつては海だったここを埋め立てて、工場を誘致しようというプランが葉月市で持ち上がってのは１０年ほど前のことだ。

計画から完成まで８年近くかかって一応の工事は完成したものの、計画時より悪化した景気のあおりを受け、埋め立て地に進出する企業もなく、紆余曲折の末、計画を推進した市長が辞任することで一応、その責任問題は終息を見たわけだが、とにかく時折、市から委託を受けた業者が除草のために訪れるのが関の山という無駄に広いこの土地に、自重数万トンの物体が着陸したのは、ちょっとした騒ぎになった。

“鈴谷（すずや）”が補給のために着陸したのだ。

船舶、艦艇、呼び名はどうであろうと、フネが動く以上、そこには大量の物資が積み込まれるのが相場だ。

公試を終え、実戦配備の準備が進む“鈴谷（すずや）”もまた例外ではない。

なら普通のフネと同じく、海上から補給を受ければよいのではと思うだろうが、そうはいかない。

“鈴谷（すずや）”は構造上、水に浮かばせる事が出来ないのだ。

このため、戦時を楯にこの埋め立て地に無理矢理着陸した後、“鈴谷（すずや）”とその乗組員は、トラックに満載した物資を艦内へと運び込む作業に追われていた。

人一人乗せるだけでも、食料、身の回りの道具、ベッド、布団――トイレットペーパーやティッシュといった細々としたものまで全てを積み込むのだ。一々例を挙げていたらきりがない。

それを数百人分の規模で行うのだ。

一つの街がまとめて引っ越すような騒ぎになったとしても当然のこと。

たった一種類でも積み忘れると大変なことになる。

積み忘れがあればあったで、後々後悔するのは乗組員達と、それを管理する司令部だ。

責任は司令部にあっても苦労するのは乗組員達となれば、皆が冗談抜きで物品チェックに大わらわだ。

「それにしても」

その作業を眺めながら、暗然とした気持ちになるのは美夜だ。

「港湾で補給が受けられなのがこれほどキツいとはな」

美夜が見上げるのは、“鈴谷（すずや）”の上空に浮かぶ補給艦“間宮”。

ＦＧＦの影響を受けないように艦から大きくせり出された補給用クレーンから垂れ下がり、“鈴谷（すずや）”と接続されている。

真水用の補給管だ。

航海には絶対に水が必要だ。

航海がなくても、乗組員の生活用水だけでも数百リットルの水が一日に必要となる。

十分な水をタンクに確保しておかないと乗組員は戦う前に餓死してしまう。

“鈴谷（すずや）”の真水タンクが１万トン近いとしても文句を言われる筋合いはどこにもない。

この後、燃料補給艦“摩周”が待機している。

そらにそれが終われば、特殊補給艦“十和田”による広域火焔掃射装置（スイーパーズ）（フレイム）用のリキッドの補充が待っている。

すべて、艦と作戦のためなのだが、普通ならこんな補給はすべて港湾に接続された補給管を接続すれば簡単に終わる補給であって、

本国の陸上で補給艦を何隻も使って行われる種類の行為ではない。
補給一つでここまで大がかりになると、先が思いやられるのが艦長という立場だ。

「まぁ、艦を使えるだけありがたいというべきでしょうか」
高木も複雑な顔で答えるしかない。
艦橋から見下ろした甲板上では、乗組員達がバケツリレー形式で食料の入った箱を艦内に送り込んでいる。
「それとも、物資があることに感謝すべきでしょうか？」
「両方だろう」
美夜は答えた。
「喰わねば勝てないというが、食い物を確保するだけで一苦労だ」
「……ですな」
「それで？」
「はっ？」
「ウチの無駄飯喰らいの穀潰し共は今、何をしているんだ？」
「全員、便所掃除です」
「……適職だな」

●翌日
再開発地域を管理する葉月市からの抗議を受け、葉月警察署が近衛兵団に“鈴谷（すずや）”の速やかな退去を命じた頃には、“鈴谷（すずや）”は補給を終えていた。
その“鈴谷（すずや）”の甲板で離着艦訓練を続けるのは、“白雷改”達だ。
その数はたった４騎。
独立駆逐中隊時代の半分もいない。
「騎体に文句が来ないのは幸いだな」
「はい」

それを艦長席が眺める美夜の横で、夏川が答えた。
前線副指揮官でありながら、艦橋で指揮を執ることに違和感を覚えていない夏川と、彼女に従っている前線指揮官の大月大尉の顔を一瞥した美夜はため息をついた。
「……演習は順調か？」
「想定６まで、４騎共に終了しています。本日２１００までに想定９までを予定しています」
「……“幻龍改（げんりゅうかい）”では不満か？」
「いえ」
大月は答えた。
「騎体が貴重な今の時点では、満足に動かせる騎体が与えて頂けるだけでも――」
「津島博士の」
それを遮るように、夏川は言った。
「悪意のある妨害行為がなければ、我々も同様の、あるいはそれ以上の騎を駆ることが出来たでしょう」
「津島中佐の悪意……か」
美夜は喉で笑った。
「シミュレーションでは散々な目にあわされたそうだな」
「人間が操縦不可能なプログラムに立ち会わされたのです。あれが悪意でなければ何なのですか」
「……世界は広いんだがなぁ」
「は？」
「井の中の蛙は海を知らぬというだろう？」
「私は、それほど狭量だと？」
「そうは言わないが」
ムッとした顔になった美夜が答えた。
「……人間、謙虚な態度は必要だとは思わないか？」
少なくとも、目上の人間の前で。
その言葉だけは飲み込んだ。

そんな美夜に、夏川は鼻で笑って見下したような顔で答えた。
「人間に必要なのは、全てを乗り越えていく力だけです」
「シミュレーションを乗り越えることが出来なかったようだが？」
「いえ？」
夏川は断言した。
「私はある意味で勝ちました」
「なっ？勝った……だと？」
「ええ」
その頷きには力が籠もっていた。
「私は悪意のある洗礼に耐えたのです。耐えきることで、私は津島博士の悪意に打ち勝つことが出来たのです」
「……退役して」
頭の横で指をクルクルさせた美夜は、肩をすくめた。
「そのテの本でも書いたら売れるんじゃないのか？そのポジティブ・シンキング」
「前向きでなければ、世の中渡っていけませんから」
「……だな」
「残念なのは、配属される新入りとの連携訓練が延期されたことです」
「狙撃隊は狙撃隊で津島中佐の元、独自に訓練を続けている」
「独自――それが問題なのです」
何を言っているんだ。という態度で夏川は眉間に皺を寄せた。
「指揮権は私にあります。それを」
「おい」
ぎょっとした顔の美夜が言葉を遮った。
「指揮権はあくまで後藤中隊長であって」
「前線での指揮官は私です」
「大月大尉だろうが」
「副隊長である以上、私も指揮官として扱われて当然でしょう？そのことを言ってるんです」

「……っ」
「何がご不満が？」
「……」
はぁっ。
美夜はシートに深く腰を下ろすと制帽の唾を沈めた。
もう知るか。
態度がそう語っていた。
「――指揮権の問題ならば、一般的に考えても私の意見が正しいと判断します」
「……」
美夜は無視を続けている。
「部隊全体としての指揮の統一が出来ない限り、我々に勝利はありません。一日も早く、狙撃隊を私の指揮下に与えて頂きたい」

「艦長」
夏川を無視するように高木が割り込んだ。
美夜は目だけ高木にむけた。
「総司令部から、通信です」
「――メインスクリーンに回せ」
美夜は背筋を伸ばすと、制帽を正した。
少なくとも、目の前のバカ相手にするよりマシだ。
美夜の態度はそう語っていた。

アイバシュラ。

少なくとも、美夜はその名前に聞き覚えはなかった。
新たに確認された妖魔。
そう呼ばれてはじめて合点がいった。

「大陸で大繁殖していたことは知っていたが」
モニターの向こうで作戦参謀が苦虫を噛み潰したような顔で唸った。
「まさか、貴様から報告のあった“正体不明の塔”の存在が、その巣だったとはなぁ」
「……塔？」
美夜は少し考えた後、
「あの、福井で独立駆逐中隊が遭遇した？」
「そうだ」
画面が切り替わった。
「数日前、陸軍の偵察機が正体不明の妖魔に遭遇した。その際の写真映像がこれだ」
そこに映されていたのは、伊勢エビとサソリをハーフにさせたらきっとこんな感な、空飛ぶバケモノだった。
「空を飛ぶだけでは飽き足らず、ご丁寧なことにＭＬ砲まで用意していやがる」
「たった一匹が」
「冗談じゃない！」
「？……まさか」
「蜂の巣を突いたというが、まさにあの現象だ。
観測した奴らがウソを言っていないことは、撮影された写真から明らかだ。
この爆撃機、たった1機に数十匹が襲いかかってきた。
爆撃機がエンジン全部ぶっ壊したとはいえ、逃げ帰ってこれたのが奇跡というか、冗談みたいなものさ」
「本当に、よく……」
「ロートルとはいえ、頑丈さが売りの爆撃機でなかったらアウトだったろう」
「……次の偵察はメサイアが引き受けるべきですね」
“鈴谷（すずや）”に前に所属していたろう？紅龍隊とＱＢ隊が交代でやっ

ている。数度の交戦もあって、相手の大凡のところはわかりつつある」
「……」
「半殺しにした妖魔を捕獲して――――まぁ、それ以上は言う必要もないことだが」
「動物愛誤が文句を言いそうな話ですね」
「あれが愛玩動物や希少動物と認められるならな。俺も妖魔を動物と認定しろといった精神的にマトモな団体は知らん」
「幸いにして私もですが……」
美夜は訊ねた。
「詳しいところの情報ソースは？」
「……魔導兵団だ」
「信頼性は高そうですね」
「赤城博士のラボで実際に確認された事実情報を含め、すぐに情報は転送する」
「……我々に、何をしろと？」
「せっかくの最新鋭艦で、しかも補給も終わったばかり」
作戦参謀はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。
「活躍したくて、武者震いしていたころだろう？」

「何匹ですって？」
美夜から話を聞いた大月は目を見開いた。
「メサイアとほぼ同サイズの中型妖魔が、群でって」
「話は聞いていただろうが」
美夜はそっけなかった。
というか、二人の顔を見ようともしなかった。
「アイバシュラの巣を潰してこい。そういう作戦だ。フリーハンドは与えてやる。好きにやれ」
「ご、後藤中隊長の意見は！？」

「さっき降りた所さ。補充の手配の他にも、いろいろあるんだろう。不在の際は、お前等の管理は私の権限になっている。煮て喰おうが焼いて喰おうが、お前等に文句を言う権限はない」
「たった４騎ですよ！？」
大月はくってかかった。
「たった４騎で、妖魔の群相手に何をしろと！？」
「６騎だろうが」
美夜は大月を睨み付けた。
「朱に交われば赤というが、染まる相手が悪すぎるぞ」
「い、いや、しかしっ！」
「やれと言われればやれ。それが軍隊だろうが」
「……ご協力、いただければ」
「送り届ける所まではやってやろう」
「どんな妖魔で、弱点が何で、何が有効なのか、何もわかってないに等しいんでしょう？」
「だから、それがどうした？いつだって、魔族や妖魔はそういう存在だ」
「そんな無責任な！」
「それ以上の発言は処罰の対象とするぞ？」
「――――っ！」
「夏川、貴様はさっきから指揮官だ何だと言っていたが、どうした？」
「……大隊規模の増援を要請します」
「そんな戦力、どこにあると思っている」
「……作戦は」
「遂行しろ。さもなければ」
「……」
「……それ以上を言わせるな、政治将校」
「……私は前線では役立たずな政治将校に過ぎないと？」
「否定するか肯定するかは、実績で語ってもらうとしよう」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム

「作戦は簡単だ」

夏川は居並ぶ美柚姫達の前で言った。

「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）をもって、妖魔の巣を焼却する。それだけだ」

「それだけって……」

美柚姫達がぎょっとした表情で互いの顔を見合った。

「あの……簡単におっしゃいますけど」

「朝倉大尉、何か不満か？」

「ちょっと待ってください」

この中では最も階級が高い美柚姫が立ち上がった。

「今度の作戦は、掃討が目的なんですか？それとも進撃が目的なんですか？」

「殲滅だ。妖魔を皆殺しにして、巣を焼き払えばそれでいい」

「たった6騎で？」

「不満か？」

「だ、だって……」

美柚姫が口をパクパクとさせた後、やっとのことで言った。

「相手が百体以上の中型妖魔、しかも、新種なのこと、そしてそれが航空機を追い回すほどの機動力とML（マジックレーザー）を持っていることもわかった上で、たった4騎で巣ごそぎ殲滅しろと言うんですか？」

「……無茶」

はるかのぽつりとした声は、誰の耳にも聞こえた。

「ねぇねぇ」と亜紀。

「私達、勝てないケンカするの？」

はるかはコクリと頷いた。

「……絶対、生きて帰れない」

「何それぇ」と、亜夜は口を尖らせた。

「死なないために頑張ろうって言ってたくせにぃ」
「“白雷改”があれば、絶対に勝てる！」
「――――なら、代わってあげるよ」
亜紀は言った。
「私、死にたくないもん」
「あ、私でもいいよ？」
「……立候補」
「ガ●ダムじゃないんですよ？私達の乗っているのはぁ」
「……●ク？」
「うーん。赤く塗っておけば、途中までは何とかなるかもね」
「貴様らっ！」
夏川は怒鳴った。
「畏れ多くも陛下から騎体をお預かりしておきながら、何だその敗北主義者的な発言は！」
「壊さなきゃいいんでしょ？」
「預かってるんだから、壊しちゃいけないもん」
「……」
こくこく。とはるかも頷く。
「夏川大尉」
美柚姫がたまりかねたという顔で言った。
「騎体の性能が戦術や戦略の決定打となるはずが」
「これは命令だ！」
バンッ！
夏川は手にしていたバインダーを床にたたきつけた。
プラスチック製のバインダーが合成樹脂の床にぶつかって割れた。
「私が下した命令を、かくも消極的に受け取るとは、それは指揮官としての私の素質を否定すると、そういうことか！」
「誰もそんなこと！」
「ここは軍隊だ！指揮官がクソを喰えといったら喰うのが兵隊の務めだろうが！」

「む……無茶苦茶」
「何だと！？」
「――――むぅ」
夏川が抗議する美柚姫に掴みかかる前に、亜紀が口を開いた。
「やればいいんでしょ？やれば」
「当然だ！」
「お、お姉ちゃん！？」
びっくりする亜夜の横で、亜紀は言った。
「６騎でいくなら、あんたも行くんだよね？」
「“幻龍改（げんりゅうかい）”で“白雷（はくらい）”に作戦行動上、追随出来ると思うか？」
「“幻龍改（げんりゅうかい）”は“幻龍改（げんりゅうかい）”で動くってこと？」
「そうだ」
「……後しろで指揮するってこと？」
「そうなるな」
「ずっるーいっ！」
亜夜が顔を真っ赤にして抗議する。
「自分達だけ、安全なところで何するんだよぉっ！」
「指揮官が潰れたら、お前達の指揮は誰が執るんだっ！？バカかお前っ！」
「誰かに命令されなかったら人殺しも出来ないほど、私はバカじゃないもんっ！」
「何だとっ！？」
「だからぁ！」
亜紀が割って入った。
「“白雷改”を駆る私達は私達で何とかしろってことでしょう？」
「そうなるな」
「ならね？少しはフリーハンド認めてほしいな。この前みたいだと、４騎の連携が難しい」
「……」
「いいでしょ？戦果は指揮官のアンタのもんでいいからさ。取引と

しては悪くないと思うけど？」
「……いいだろう」
夏川は頷いた。
「“ある程度”の自由は認めてやろう」

●福井県市郊外
「で、どうするの？」
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を装備した“白雷改”のコクピットで、美柚姫が部隊内回線を開いた。
出撃前に、４騎の間だけで通じる極秘回線を用意するように整備兵に頼んでいたのは亜紀だ。
夏川達の“幻龍改（げんりゅうかい）”２騎はかなり後方。肉眼で見たら３０メートルの巨体が小さなオモチャに見える程、距離をとった所にいる。
自分達が何かあっても安全に逃げることも出来るほど、距離を取っている。
それはつまり、こっちに何かあっても助けないという態度だと、そうとるしかない。
――言うだけ言っておいて！
美柚姫は夏川達の方が敵として相応しいとさえ思えてならない。
「亜紀ちゃん？」
「ふふん？」
亜紀は自信満々な顔をほころばせた。
「とぉっても、いい案があるから任せて」
「う、うん」
「お姉ちゃん？」
「……興味ある」
「アイバシュラって、要するに蜂みたく巣や縄張りに近づく奴らに攻撃するんでしょ？」

「う、うん」
美柚姫は自信なさげに答えた。
「そう、みたいだって――話だよ？」
「昔ね？蜂の巣ひっぱたいていたい目にあったことあるんだよねぇ」
「あっ、それ小学校の時だよね？あの遠足で」
「そうそう。スズメバチの巣が道沿いにあってね？トイレだってわざと遅れたフリして、先回りしてパチンコで巣に石ぶつけたんだよ」
「懐かしいっ！あの時、確か４０人くらい、病院に運ばれたんだよねぇ！？」
「そうそう♪アナフィラキシーで意識不明までいったのが何人いたっけ？」
「私の方が勝ったんだよ？あの賭け」
「何人か忘れちゃったぁ」
「懐かしいねぇ」
「あ、あの……それが？」
「つまり、逃げる方が勝ちで、しかも、逃げる時に別なターゲットを用意してあげると相手が喜ぶってこと」
「へっ？」
「……ああ」
きょとん。とする美柚姫と、無表情に頷くはるか。
「……それで、あの二人があんな所にいても文句言わなかった」
「そう」
ケホン。ケホン。
不意に、はるかが咳き込んだ。
「大丈夫？」
「うん……。長いセリフ喋ったから、辛い」
「あのね……って？」
ピーッ！
コクピットに警報が響く。
「反応が出た！」

各ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）で警戒を続けていたＭＣ（メサイア・コントローラー）達が一斉に報告した。
「かなりの数！現状、４０以上、増大中！」
「こっち見つけている？」
「まだ――この動きからして、まだ気付いていないのでは？」
「よしよし――エリちゃん？後ろのブタ共は、敵に気付いている？」
「“白雷（はくらい）”とはセンサーが違いますから」
亜紀騎のＭＣ（メサイア・コントローラー）、加藤エリ少尉が答えた。
「あと、３０秒はラグが」
「最高っ！」
亜紀は言った。
「全騎、この通信が終わったら、通常回線に戻して。いい？今から敵を引き寄せる。
敵と本気で交戦する必要はないから。
接触する直前で後方へブーストジャンプで後退。
後退ポイントは、あの２騎のいる所。
着地次第、さらにもう一度、ブーストジャンプして、３キロ後退する。
あいつらは無視」
「そ、それじゃ――」
「以上、通信終わり！」

「何をしているかっ！」
夏川の怒鳴り声がスピーカー一杯に響くのと、亜紀騎がビームライフルを発砲するのは、ほぼ同時だった。
「貴様等っ！戦闘行動中に指揮官と通信を切るなっ！今の発砲は何だ！？」

それに答える者は誰もいない。
広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを皆が格納して、武装をビームライフ

ルや散弾砲へと切り替える方が忙しい。

「どう？当たった？」

「さすがに当てずっぽうですから」

エリはポリポリと頬を掻きながら答えた。

「でも、敵はこっちに気付きましたよ？接触まであと１５秒」

「各ＭＣ（メサイア・コントローラー）は予想針路へ向けて阻止砲撃開始。発砲は任意。全騎――用意」

亜紀のテキパキとした号令と同時に、シールドを構えた“白雷改”達が、思い思いにターゲットとしたアイバシュラ達めがけて空にビームライフルを放つ。

ポツリとした点にすぎなかったアイバシュラ達は、その針路めがけて放たれた光の弾丸を避けることが出来ずに粉砕されていく。

しかし、数が違いすぎる。

砕かれたアイバシュラの数より、現れる数の方が圧倒的に多い。

妖魔との戦いで何が一番怖いかといえば、この数にモノを言わせた集団攻撃だ。

一匹や二匹を倒しても、十匹で穴を埋めて襲いかかってくる。

襲い来る水を相手に戦っているようなものだ。

ビームライフルが如何に一発の破壊力が高かろうと、それで足を止めるほど、妖魔は甘くない。

アイバシュラにあるのは縄張りを侵した、あるいは自分達に危害を加えたという本能的な怒りのみだ。

本能故に、その意思は強い。

命令で動く人間に、その意思をくじく力は無い。

三匹を仕留めたところで、残骸を突き抜けて飛び込んできた一体のアイバシュラの頭を左手に持った散弾砲で吹き飛ばした亜紀が叫んだ。

「全騎――――っ！」

グンッ！

舌を噛みそうなGが体をシートに押しつける。
アイバシュラの爪が迫り来るのがはっきりとわかる。
だが、その爪がどうなったかを知る前に、亜紀達は空中の住人となっていた。

「なっ！？」
驚いたのは夏川だ。
これから白兵戦になる。
近接戦でとにかく片端から倒していけば、妖魔もその犠牲に恐れをなして引くだろう。
それが夏川の読みだった。

どんな兵隊でも、周りに多くの犠牲が出れば逃げることを考える。
敵より先に、恐怖に負ける。
理性ある限り、恐怖は絶対に強い。
その強さは、時に死ですら勝る。
なら、その恐怖に打ち勝てば、真の強者と呼んでいいだろうか？
そうだろう。
しかし、そんな者は極めて希であり、恐怖へ勝利を宣言するその多くは、恐怖にその感覚を麻痺させた単なる狂者でしかない。
強者と名乗る狂者。
それが戦場で強いとされる存在の正体だと、夏川は思っている。
少なくとも、味方はそれでいいし、その狂者に恐れをなして逃げるのは敵でいい。
ここで痛い目にあって、巣に逃げ帰った所で、巣ごと焼き払えばそれでいいのだ。

ほんの少しの恐怖に耐えれば、そこに勝機があると、どうしてわ

からないのだろう。
正気を失わないと勝機がこないのに――。
うん。
上手いことを言ったな、私。
これは記録しておこう。
何かに使える。

夏川はポケットからメモを取り出した所で、突然出現したアイバシュラ隊と“白雷改”達が交戦を開始――したかと思ったところで、いきなり後退した。
しかも、もうスピードでこっちに逃げてくる。
「ばっ、ばかなっ!?」
どうしていいか、一瞬判断が出来ず、辺りを見回した夏川だったが、メモを取るべくSTRシステムから手を離していたのが運の尽きだった。
“白雷改”達の巨体が周囲に派手に着地した、そのショックは縦揺れの地震となってコクピットを襲い、夏川を即席のシェーカーに放り込んだのと同じ状態に追い込んだ。
「ぐっ!?」
舌を噛まなかっただけでも奇跡に近い状態の中、夏川はショックに耐えるべく、目を閉じて全身の筋肉を強ばらせた。
掴むものを、何かを掴めば安心できる。
手がそう叫び、掴むものを探して空をうろつく。
STRシステムの存在に気付いた手が、勝手にシステムを掴む。
夏川の神経がようやくマトモに戻ったのはそれからだった。

はっきり――遅すぎた。

既に“白雷改”達は、再度の跳躍でさらに後ろに下がっている。

そして――目の前には……。

●“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ

「貴様等ぁぁぁっ！」

顔を真っ赤にした夏川がコクピットから飛び出してくるなり、亜紀達に殴りかかった。

その剣幕の凄まじさは、整備兵まで出て暴れる夏川を羽交い締めにして止めるしかなかった程だ。

「よ、よくも――よくもこの私に恥をかかせた！」

どれ程怒ろうとも多勢に無勢か、周囲に押さえつけられた夏川は体をよじらせるのがやっとだ。

それでも夏川は怒りを静めようとなどしない。

「恥って何？」

冷たい顔で亜紀は訊ねた――というか、言った。

「誰が許可なく後退していいと言った！後退の許可を誰から取った！？」

「……後退？あんたに許可求めたけど、泣いてウルサくて、アンタはそれどころの騒ぎじゃなかったんだもん。“鈴谷（すずや）”の艦長からは許可もらったよ？」

「それは撤収の許可だろう！私が言っているのは、一番最初の後退だ！」

「あれ、後退じゃないもん」

亜紀は堂々と答えた。

「あれは――戦闘機動。間合いをとるのまで禁止されていないでしょ？間合いを取る間にあんた達がいただけ。それの何が問題なの？」

「――っ！！」
「撤収までに、私達は接触したアイバシュラの3分の1を撃破したよ？戦果として足りなかった？」
「十分だよね？」亜夜がニコニコしながら姉の肩を撫でた。
「……大戦果」
「戦果に問題があると思えませんがね……大尉？」
「大問題だ！」
「戦果が？」
「命令違反だ！」
「誰が？」
わかんない。と言う顔で亜紀が訊ねた。
「誰か、命令受けた？後退するなって」
「ううん？」
亜夜が首を横に振った。
「戦闘機動禁止なんて命令は？」
「……知らない」
はるかも言った。
「ログ……調べたら？」
「ということは、私達は誰も後退するなとも、戦闘機動を禁止するとかいう命令も受けていない。命令違反はない！」
「――っ！！」
何事かわからない叫び声を上げた夏川が周囲を振り解き、亜紀に襲いかかった。
ガッ！
その足をすくったのが亜夜。
勢いに負けてバランスを失った夏川は、何とか踏ん張って踏みとどまったと思った。
だが、その時には遅すぎた。
「っ！？」
悲鳴が上がらなかったのではない。

悲鳴すら、上げられなかったのだ。
いつの間にか背後に回り、腕をねじ上げる亜紀が夏川の首に突きつけているのは、グルカナイフ。
そして、側頭部には亜夜の持つ拳銃の銃口が側頭部に押しつけられている。
「……」
助けを求めて周囲を見回したが、額に拳銃を突きつけているのははるかだし、ホルスターから銃を抜こうとしているのは美柚姫。
大月はどうしているか知らないが、役に立つとは思えない。
「どうしようかな」
耳元で、亜紀が囁くように言った。
「知ってる？一度抜いたグルカナイフってね？血を吸わせてからでなければ、鞘に戻しちゃいけないって掟があるんだけど」
「……上官殺しは死刑だぞ」
「被害者として証言台に立てると思ってないわけだぁ」
クスクス。
生理的レベルで恐怖を感じる笑いが夏川の神経を逆撫でする。
「――それだけでも褒めてあげる」
「……離せ。私は大尉で、前線副指揮官だぞ」
「誰がそんなこと認めているのかなぁ」
クイッ。
喉に突きつけられた冷たい感触に力が加わった。
「それに、肩書きが、命守ってくれるとでも？」
「……くっ」
「好き勝手言ってくれているけど、ここではっきり言っておく」
亜紀はナイフを鞘にしまった。
亜夜とはるかも、拳銃を夏川から離した。
「あんた、殺す価値もないし」
「……」
「覚えておいて？私みたいな変態（フリークス）にとっても正しい事は正しい事な

んだよ？」
「……ふん」
喉をさすりながら夏川は訊ねた。
「少尉の分際で、私にご意見するとはな」
「“白雷改”を誰が動かすのかな？私達がいなくなった後」
「……」
「責任問題になるのは、あんたの方だよ。部下に反乱寸前の行為までさせて、経歴に傷つかないはずないし。あの後藤って人も黙っているとは思えない」
亜紀の目は冷たい。
「あんただって――所詮は狗なんだってこと、いい加減気付いたら？」
「……」
「これ以上、あんたの無能につきあうつもりは私にはないよ？今度、ふざけた命令下したら、相応の態度はとるからね。命令したければ、命をかけてよね」
「相応の態度？」
「弾は前からだけじゃなくて、後ろからも飛ぶのよ？それくらいのことも察することが出来ない？あんた、バカじゃないの？」

いらん子中隊奮戦す　第七話

例えどんな正義を振りかざそうと、隊員が副隊長に武器を向けた行為は反逆行為として扱われてしまう。
どんな軍隊でもそれは避けられない。
それを否定すれば、軍は組織として機能しなくなる。
秩序ある組織を維持するためには、こんな隊員達には処罰が必要となるのだが――。

「ちぇっ」
亜紀は営倉のベッドの上でひっくり返った。
営倉は、基本的に一人一部屋だ。
ところが、トイレ以外の設備がまるで準備出来ていないことを理由に、４人全員が一つの部屋に押し込められた。
男性がいなくてよかったと、床に座った美由紀は思った。
トイレの時、どうしろというんだ？
気の毒だけど、もし男がいたら……。
その先は考えたくなかった。
「あのババア、チクったな？」
「ま、そういうことだね」
亜紀の横に腰を下ろした亜夜が壁にもたれかかった。
「私達の経歴、ガッタガタってヤツ？」
「心配する経歴なんて最初からないよ。亜夜ちゃん」
「そっか――ならよかった」
「私にとっては、決してよいことじゃないけどねぇ……」
苦笑しながら美柚姫は突っ込みを入れた。
「何で？」
「何でって……」
亜夜の質問に、美柚姫は戸惑った。

今回のことは、一生残る汚点だろう。
一生？
この組織の中で、一生を過ごすの？
「……さてどうなんだろうね」
「でしょう？」
亜紀は我が意を得たりという顔をしてベッドから起き上がった。
「どうせ私達、一生、近衛に飼い殺しにされるわけないもん。私達ほどカワイかったら、寿退職は絶対出来る！」
「そうそう。美柚姫っちも。そんなにおっぱい大きければ大丈夫！」
「ははっ……私、おっぱいに価値があるのかなぁ」
「はるかちんも結構、でっかいよね」
「……８９のＣ」
「うわっ。何食べたら、そんなにでっかくなるの？」
「というわけで、美柚姫っちは？」
「い、言わないよ！」
「言えっ！夏川のババアが聞いていたら悔しさで悶え死ぬ、そのでっかいおっぱいのサイズは！？」
「やだぁぁっ！」

「――肩書きは」
直立不動で立つ夏川と大月に、美夜は冷たく言い放った。
「部下を従わせるための道具ではない」
「……お言葉ですが」
「なら黙れ。貴様の意見なぞ」
「服務規程違反を犯したのは明白であります。厳正な処罰を」
「――貴様に対してか？」
「自分は指揮官として何の手落ちもありません。命令違反を咎め、部隊の規律を維持しようとしただけと、軍法会議でも証明できます」

「無能な奴に限って、そんなセリフを吐くものだ……」
美夜は何かを吐き出すようか顔で言った。
「部下が抗議に来るわけでもない。まぁ、肝心の部下は一人残らず営倉行き……私も軍隊生活は短くないが」
その視線ははっきり鋭い。
「貴様のように部下全員から銃を向けられたなんて指揮官は初めてだ」
「私も」
夏川は顔色一つ変えずに頷いた。
「あれほど反抗的な、問題児だらけの部隊を見たのは初めてです」
「――救いようがないな」
「全くです」
「……」
少しの間、夏川の顔を眺めていた美夜は、不意に興味が失せた。という顔で視線をそらせた。
「――下がれ。もう貴様に用はない」

ガチャ
不意に営倉のドアが開かれたのは、そろそろ寝るか。という頃だった。
「――出ろ」
銃を手にした憲兵がドアの前に立っていた。
「艦長命令……って」
憲兵があきれ顔になったのも無理はない。
後ろから亜夜に羽交い締めにされた美柚姫のブラウスはほぼ全てのボタンが外され、その豊かな胸が露わになっている。
そして、さっきまで美柚姫の胸を覆っていたブラジャーを、亜紀が頭巾の様に頭に被っている。

「――――何してるんだ」

ふぇぇぇぇん！

「もう泣き止みなよぉ」

「悪かったってぇ」

営倉から出された後、ブリーフィングルームに集められた面々の中、ブラジャーを外されて露出した胸を、憲兵にモロに見られ号泣する美柚姫の横で、亜紀と亜夜がバツが悪そうな顔をしていた。

まさか泣き出すとは思っていなかった。

二人とも、そんな顔だ。

「こんなところで泣いていたら、オトナの世界は渡っていけないよ？」

「そうそう」

「……こら」

はるかの突っ込みを入れる。

「……反省が足りない」

「アメあげるから、機嫌直して？」

「っていうか、もう艦長来るよぉ？」

「ぐすっ……セクハラされたって、艦長に訴えてやるぅ……」

「そんなことしたら、友情が崩壊するからね！？」

「そうだよ！そんなことしたら、私達がどんな目にあわせてやるか考えろ！」

「――――何の話だ？」

ブリーフィングルームに入って来た美夜に、全員が立ち上がって

敬礼した。

「ご苦労――夏川から上がっている反逆罪については、私の権限で不問とするから心配するな」

「えっ？」

思わず全員が互いの顔を見合ってしまった。

「そ、それは？」

「あんなバカの言うことに一々従っていたら、死ななくて良い奴まで死ぬことになる。貴様等に殺されなかっただけでも奇跡というものだ」

「い、いいんですか？」

「かまわん」

美夜は断言した。

「上官侮辱罪、反抗罪の適用ならアイツこそが避けられないし、職権乱用だって加わる」

「……はぁ」

不承不承、頷く美由紀達が立ったままなのに気付いた美夜は手で着席を促した。

「下らないことに無駄な時間を割くつもりはないし、私達には、そんな悠長なことをしているヒマはない。後藤中佐から許可はとった。貴様等は現刻をもって私の直轄とする」

「……」

「残念なことに今、この“鈴谷（すずや）”にお前達以外に使える戦力は」

はあっ。

美夜はため息をついた。

「――ない」

「あの……勘違いだといいんですけど……艦長？それ、ものすごい不本意ってお顔に見えるんですけど」

「……不本意そのものだ」

「えっ」
「この人手不足だ。たった1騎でも、使えるなら鍋の蓋どころか取っ手まで武器にしたいところなのに、2騎も使い物にならんと来た」
「……それ」
はるかが無表情なまま言った。
「……夏川大尉達？」
「他に誰がいる」
「……」
フルフルとはるかは首を横に振った。
「ったく、泉大尉がいた頃なら、私はたった2騎でも枕を高くして寝ていられたんだぞ……ったく、後藤さんも何を考えてあんなのを……」
「あの？」
「ああ、すまん」
部下の前でグチが出たことを恥じた美夜はわざとらしい咳払いの後、言った。
「状況を説明する」
美夜は壇上の端末にカードを差し込んでデータをロードした。
美夜の背後、ホワイトボードにプロジェクターの映像が映し出された。
「二週間程前に、陸軍が福井奪還を目指して反攻作戦を実施したのは知っているな？」
「でも、あれって」
美柚姫が答えた。
「作戦としては失敗したと」
「そうだ。魔族軍の抵抗が強固であること、さらに派遣した部隊が一度全滅したことで当初の作戦は失敗した」
美夜は頷いた。
「しかし、やられっぱなしが許されるほど、軍隊は甘くない」
「またやるのぉ！？」

亜夜がびっくりした顔で言った。
「あんだけ死んで!?」
「万だよ!?万で死んだんだよ!?」
「それでもやらなければ、福井も富山も奪還出来ない」
「いいじゃん。カニ嫌いだし」
「私、サカナ嫌い」
「そう言うな」
美夜は口を尖らせる亜紀達に苦笑を漏らしながら言った。
「富山や福井から逃げてきた連中に、住処を取り戻してやらなければならん。あそこは人類の、そして日本人の土地だぞ?お前達よりずっと小さい子供達が家に帰りたいと泣いているんだ」
「……うん」
「そ、そうだね」
亜紀と亜夜は、互いの顔を見合わせると頷いた。
「が、頑張んなきゃ」
「……うん」

――――へぇ?
美柚姫は不思議なものを見る目で亜紀達を見た。
殺戮の人形と呼ばれた二人が、まるで借りてきた猫のように大人しい。
夏川には銃やナイフを向けたというのに、艦長が相手だと、どうしてこんなに素直なんだろう。
階級?
違うだろう。
人徳?
……それを知るには、まだ早い気がするんだけど。

「……政治的事情」
ぽつりと、そう言ったのははるかだ。

「……作戦が長引くと、大臣の責任、問われる」

「……実情はそんな所だろう」

美夜は答えた。

「北陸奪還も、蓮川大臣の思いつきに近いと聞いている。思いつきだけで何万の将兵を殺すつもりなのかは知らないが」

「殺すなら」

グルカナイフを弄びながら、亜紀が言った。

「その大臣さん殺しちゃったほうがよくない？」

「同感」

「私も出来るならそうしてやりたい。皇居前広場に吊したらさぞ気分が良いだろうと。だが、そういかんのが、世の中のイヤな所でな」

「……だね」

亜紀はナイフをしまった。

「陸軍の露払いがお仕事なの？」

「そうだ。話が早くて助かる」

「えへへっ」

「あーっ。ズルイ。お姉ちゃんだけ褒めてもらったぁ！」

「作戦に成功したら二人とも、もっと褒めてやる」

「ホント！？」

「ああ」

「よおっし！頑張るっ！」

「――よし」

美夜は笑顔で頷いたが、その肝心の笑顔は、すぐに曇った。

「それを――ここにいるたった４人に任せるのは、正直、心苦しい」

「……」

美柚姫は何かを言おうと思ったが、言葉が出てこない。

艦長は、私達に何をさせようとしているのか？

それがわからない。

露払いなら、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を使って、前進する機甲部隊の前に立つ？

そんな簡単なことで、こうはなるとは思えないけど――？

「……アイバシュラの」

その答えを言ったのははるかだ。

「……巣を叩けと？」

「――そうだ」

美夜は頷いた。

「こんな戦力で、そこまでの戦果を上げろと言うことは、不可能を可能にしろと命じるに等しい。しかし、やらなければ、さらに何万の陸軍将兵が無駄に死ぬかわからん」

「……どんな、案があるんですか？」

美柚姫は訊ねた。

「ここにこうして集めて下さった以上、何か案があると思いますけど？」

「後藤さんからの情報を元にした作戦……いや、作戦とは言えぬな」
美夜は一瞬だけ自嘲気味に笑うと、すぐに真顔になった。
「――これはバクチだ」

「バクチ？」

「そうだ。伸るか反るか。勝つか負けるかを遥かに通り越したロシアン・ルーレット並みの危険なバクチだ」

「――説明して」
亜夜は言った。
「私達、やるだけやるよ」
その横では亜紀が無言で頷いた。

「アイバシュラには、奇妙な、しかし、考えてみれば納得のいく習性がある」
美夜は端末を操作しながら言った。
「蜂と一緒だ。やつらは基本が昼行性（ちゅうこうせい）だ」

「ちゅーこーせー？」

「昼間に動くという意味だ」
美夜は不思議がる亜紀に教えた。
「奴らは、夜が苦手らしい」

「じゃあっ！」
はっとなったのは亜夜だ。
「夜に攻め込めば！」

「そういうことだ。夜間なら、少なくとも奴らの縄張りに飛び込ん

でも奴らは大人しい。そこを叩けばかなりのところまで行けるだろう」

「それなら、私達だけでも何とかなるかも！」

「そう。だからこそ、念入りな事前調査が必要になる」

「事前調査？」

「そうだ。相手が寝ているからといって、悪戯に近づいても殺されにいくようなものだ」

「事前の偵察を指していますか？」

「そうだ。陸軍の爆撃機による高高度偵察ではさすがにわからん。メサイアのセンサー以上の存在が必要だ」

「そんな仕事」

亜紀が足をぷらぷらさせながら言った。

「あのババアと口先オトコにさせておけばいいんだよ」

「口先オトコ？」

「大月大尉。部下より保身を選んだヘタレ野郎のことだよ」

「最低だよ。口先であんなカッコイイこといっておいて、後になったら政治ショーコー殿の後ろに金魚のフンみたいにくっついてるだけじゃん！あんなのないよ！」

「まぁ……なぁ」

そう言われてみれば、大月がどうしてああも夏川に遠慮している

のか、それは知っておく必要があるな。と、美夜は思った。
「最初から信望がないのより、信望を失ったのとは、違うからな」

「……あの二人は無視」
はるかは言った。
「……何しても、背中、任せられない」

「そう……か。4騎でやってもらうことになるが、いいのか？霧島中尉」

こくり。
はるかは頷いた。

「よし。“鈴谷（すずや）”はこれより北陸方面へむけて移動を開始する。明日の日没をもって、貴様等には巣の偵察に向かってもらう。目的は、巣の位置の把握と、巣の構造を調査すること――それともう一つ」

「？」

「以前、あの巣については一度、偵察は行われている」

「へ？」

「しかし、その時よりも約1．5倍に巣は拡大している。あの頃は、我々はあの巣をタケノコと呼んでいた」

「巣が……成長している？」

「後藤中佐の副官である涼宮中尉、第三眼（サード・アイ）の持ち主である彼女によると、巣は単なる施設ではなく、生命体だという。しかも、動物系

の」

「……へ？」

「つまり、何が言いたいかといえば、巣の構造をもう一度調べるのに協力してくれと、そう言いたいんだ。そのために現在、涼宮中尉をもう一度調査に借り受けたいと要請を出している。本人は相当渋ったが、何とか引き受けてもらった。明日の夕方には“鈴谷（すずや）”に入るから、誰か彼女を乗せて飛んでくれ」

「えっと……」

少し考えてから、美柚姫が訊ねた。

「その人乗せている限り、その騎は戦闘が」

「出来ない」

「……」

「前任者は出来たんだ。何とかやってくれ」

美夜はそう言って、少しだけ笑って見せた。

いらん子中隊奮戦す　第八話

必要なモノを積み込み忘れると大変なことになる。

先に“鈴谷（すずや）”の補給に関してそう言った。

確かに言ったし、皆も神経を使っていた――皆、少なくとも自分の部署だけは。

問題が発覚したのは、艦内で初めてけが人が出てからだった。

移動中にラッタルを踏み外しして足を痛めた乗組員が医務室を訊ねたが、普段なら常時誰かがいるはずの医務室に誰もいない。

ミーティングでもやっているのかと待ち続けたが誰も来ない。

疑問に思った乗組員が艦橋に問い合わせ、初めて医療要員が最初から手配されていないことが判明した。

まぬけな話だが、これは事実だ。

けが人や死人が出て当然の軍艦に医者がいない。

これは大問題なのだ。

「司令部から、何と言ってきた」

失態は失態なだけに、譴責程度は覚悟した美夜は、司令部に送った報告の返事を手にした高木の顔を見ようともしなかった。

「無茶苦茶です」

高木は答えた。

「今までこれほど無茶な命令を聞いたことはありません」

「……読んでくれ。私が出来ることならしよう」

「なら――医療要員を派遣するには、今から人材の選抜、本人の同意確認、書類上の手続き云々が必要で、全ての手続きが終わるまでに二週間は必要だそうです」

「二週間！？」

美夜はぎょっ。として高木に振り返った。

「二週間も、どうしろというんだ！？」
「二週間の間、医者が必要なけが人、病人を出すな。死人が出た場合は、艦長が死亡診断書を書くようにと」
「それは本気で言ってるのか！？」
「さすがに問題だと思われたんでしょうな、ご主――失礼」
高木は表情を変えず、儀礼的なまでにわざとらしい咳払いをした。
「平野副司令あたりも」
「送ってくれるんだな？」
「魔導施療局と折衝して、療法魔導師を一人送るよう手配するそうです」
「療法魔導師を？」
療法魔導師は、治癒系の魔法である療法魔法を使える魔導師だ。
この世界において魔法を使えるは生まれつきの才能によるものであって、後天的にその力を得ることは出来ないとされている。
生まれながらにして人を癒す力を持つ特殊能力者。それが療法魔導師であり、その希少性故、療法魔導師への攻撃は原則死刑が適用されるなど、国際的に完全な保護を受けられる。
出産から赤チンを塗るまで、怪我だろうが病気だろうが、とにかくほとんどすべての患者を治すことが出来るので、人体に関して下手な医者より余程頼りになる。
かつて死にかけたあげく、医師からさじを投げられた経験のある美夜が今、こうして生きているのは、この療法魔導師の存在があってこそだ。
だからこそ、軍医より療法魔導師を手配してくれたのはありがたいのだが……。
「魔導施療局の野々宮大佐に手配を依頼して下さったとか」
「……野々宮大佐か」
女として何か引っかかるものを感じながらも、美夜は頷いた。
「なら、大丈夫か――いつ来ると？」
「けが人がいるなら、今日中には」

コンコン

不意に、窓の辺りからそんな音がした。

「？」

コンコン

誰かが船窓を叩いている。

「何だ？」

美夜と高木が思わず顔を見合わせた。

コンコン

まだ音が続いている。

周りも音に気付いたらしい。

操舵手の芥川中尉が右舷側の窓を向いた途端――

「わっ！？」

悲鳴に近い声を上げた。

「何だ！？」

「あ……あ……あれ、あれっ！」

思わず艦長席から身を乗り出した美夜の前で、芥川は右舷を震える指で指さしたまま、顔を恐怖に引きつらせている。

「何？」

美夜が艦長席から右舷の窓を見る。高木がその前に立ち、不測の事態に備える。

もう既に日は落ちている。

辺りは漆黒の闇の中で、遠く離れた陸地の灯りがぼんやりと浮か

んでいるのがイヤに目立つ。
窓の外で、間近に見えるものは航行灯程度で、窓から外に手を出したら手が真っ黒になるんじゃないかと錯覚する程、辺りは暗い。
そんな窓の外から、じっとこっちを見ているのは、銀髪の少女だった。
窓の外から中をじっと覗いている。
ここが学校だったらまだよかったろう。
だが、ここは作戦行動中の軍艦の中だ。
オペレーターの女の子数名が悲鳴を上げて艦長席の後ろに逃げ込んだ。
「か、艦長ぉっ！お、お化けっ！」
「た、助けてくださぁい！」
「ち、ちょっと待て」
自分より圧倒的に若い（美夜にとっては不本意だが）オペレーター達に頼られては、立場的に喉まで出かかった悲鳴を噛み殺すしかなかった。
「貴様等、私に何を期待してそういう行動に出る！？」
「お化けより怖い人が、何言ってるんですか！」
「そうですっ！怒鳴って下されば、きっとお化けだって逃げちゃいますよ！」
「艦長、お願いしますっ！」
「それはどういう意味だ貴様等っ！」
「いや、艦長」
艦長席から立ち上がった美夜を止めたのは高木だった。
「――どうやら、お捜しの人材が向こうから来たようですよ？」
「……何？」
高木が指で何事かを示した後、言った。
「緊急用ハッチを開きます」
「副長？」
「野々村大佐に問い合わせてみます」

高木は艦橋の壁にある緊急用ハンドルに手をかけた。
そのハンドルをひねると、艦橋の外に出ることが出来るのはさすがに皆知っていた。
「療法魔導師ってのが、こんな子供でいいのかと」
分厚いドアが開かれ、激しい風が艦橋に流れ込んだ。

「だってぇ」
ぷうっ。とふくれた女の子は、美夜に言った。
「野々村のお姉さんから電話かかってきて、ヒマか？っていうから、もう寝るって、そう言ったんだよ？」
「それで？」
美夜は手渡された書類と目の前の相手を交互に眺めた。
艦橋に現れた珍客は、艦橋要員達の格好の注目の的だ。
ジーパンにジャケット、そしいぶかぶかのウィンドブレーカーを羽織った小柄な女の子。年の頃は１５より下だろう。
銀髪をポニーテールにした、かなり可愛らしい顔をしてこちらを見ている。
少なくとも、軍隊には似合わない存在だと百人いたら百人が認めるはずだ。
「寝るところ紹介してやるから、しばらくそこにいろ。お父さんの許可はとったって」
「お父さん？」
美夜は、書類を少女に返した。
「この空白だらけの書類は何なんだ？野々村大佐のサインと君の名前しか書いていないじゃないか。こんなもの」
「それは僕に聞かないで」
書類を受け取って、背負っていたリュックサックにしまった少女は答えた。
「都内のお店見つけて、野々村さんにサインもらうだけで大変だっ

たんだよ？むしろ褒めてほしい」
「何を言ってるんだ？書類は不備だし、君の身分は療法魔導師だというが、それを証明する腕章だって」
美夜は疑わしいという顔で少女の細い腕につけられた腕章を眺め、頬杖をついた。
「どこの玩具屋で買ったんだ？」
「むぅ……そんなことしないよ」
少女はプウッと頬を膨らませると、胸ポケットから何かを取り出した。
「これもあるもん」
「……身分証明書？」
「これは偽造できないでしょ？」
「軍属……ねぇ？」
「うん」
「……で」
美夜はそれを高木に渡したが、まだ信じていない。という顔だ。
「野々村大佐に命じられて、ここまで来たというのか？」
「うん。都内のベロリンチンチーノってお店に呼ばれた」
「……何？」
「ベロリンチンチーノ」
「どういう店だ？」
「知らない。正面から入ると、でっかいおっぱいした薬やってるお姉さん二人が、“いらっしゃ～い♪”って出迎えてくれた。お店の奥に４人くらい、拳銃（チャカ）もったお兄さん達がいたけど」
ちょっと考えてから、少女は答えた。
「でも、平野副司令も一緒にいたから、いいんじゃないの？」
「……副司令が？」
ピクリ。
美夜の頬が引きつった。
「その……何という店だ？」

「ベロリンチンチーノ。おしゃぶりサービスがどうのって」
「そこにいたのか」
「うん」
「……もう一度聞く」
美夜の声は、重く、震えていた。
その後ろに立っていた高木がいつの間にか数歩後ろに下がり、オペレーター達は決して美夜を見ようとしなかった。
「それは……どういう店だ？」
「キャバレーっていうけど、完璧風俗だね。入ったら、綺麗なお姉さんがナース服とかセーラー服着て副司令におっぱいパフパフサービス中だったし」
「……証拠でもあるのか？」
「ほしい？」
少女はポケットからデジカメを取りだした。
「んとね……パフパフの現場はコレで、口移しドリンクサービスがコレで……」
美夜の手が無言で少女からデジカメをかっさらおうとしたが、少女の動きの方が速かった。
「ダメ。これは副司令相手の交渉材料にするんだから」
「私は、副司令の妻だぞ」
「ありゃ」
少女は、あーあ。という顔になって、デジカメを美夜に手渡した。
「じゃ、お土産にあげる」
「……」
受け取ったデジカメの液晶に映る映像を無言で眺める美夜。
静まりかえった艦内に似合うのはターミネーターのＢＧＭあたりだろうか。
「お、おい、君」
肩を振るわせ、口に牙を生えさせ、髪を逆立てる、まさに怒髪天を衝くを地でいく美夜は、艦長席に不動明王でも座らせた方がまだ

可愛らしく思えてしまう。
　そんな美夜を平然と眺める少女に、高木が声をかけた。
「君、どうやってそんな店に入り込んだんだね？」
「変装したから大丈夫」
「そういうもんじゃないと思うが……」
「得意」
「ま、まぁ、信じよう。そこに君は野々村大佐に呼び出されたわけだ」
「うん。人事の書類を施療局から持ってきてくれって。都内のどこかも教えてくれなかったんだよ？持って行ったら持って行ったで、お金貸してくれって」
「いくら」
「４０万」
「４０万！？」
「やっと嫁がいなくなったから、これから派手に繰り出すんだって」
「それは、野々村大佐の言葉か？」
「うん。でも、平野副司令は何も反論してなかったよ？っていうか、お姉ちゃんとイチャイチャする方が忙しかったみたいだけど」
「……酔っ払っていたのか？」
「うん。相当酔っ払ってたよ？“俺は美夜なんて怖くない”とか“妻なんて女のうちに入るか”とか何とか」
「……まぁ、冗談はさておき」
「冗談なんて言ってないよ？そのデジカメに録音してあるもん」
「……」
ピピッ
「俺はぁ！嫁も司令も怖くはないぞぉぉっ！」
相当出来上がってるだろう、あきらかに酔っている男の声が艦橋に響き渡った。
「さあ！今晩は派手にいくぞぉぉっ！」
「……」

「ね？」
思わず頭を抱えた高木の前で、少女は自信満々に言った。
「他人の弱みにウソはつかない主義なんだよね。僕」
「いずれ殺されるぞ？そんな性格していると」
「でも、失敗した。売りつけるのに失敗しちゃったもん」
「とにかく！」
繰り返し夫の妄言を聞く美夜を振り切るように高木は声を上げた。
「君は療法魔導師なんだな！？」
「そう」
「療法魔導師を統括管理する宮内省魔導施療局局長である野々村大佐が、直々に、この“鈴谷（すずや）”へ行けと、そう命じたんだな？」
「うん。ハンコや細かいところは局に戻らないとわかんないっていうから。正式な書類は明日にでも送るって」
「……よし」
メキメキメキ
デジカメが美夜の手の中で悲鳴を上げ始めた。
「負傷者いるんだ。足をくじいたという。医務室へ案内しよう。すぐに診てほしい」
高木はそれを懸命に無視して少女を促した。
「湿布で良いと思うけどなぁ」
「腫れが引かないそうだ。ところで、君の名前を聞いていなかったな」
「水瀬」
少女は答えた。
「水瀬悠理」
グシャッ！
艦橋のドアがしまった途端、響いたそんな音が二人を見送った。

翌朝。

当然だが美夜の機嫌は最悪だ。

頬杖をついて艦長席に座っているが、周りは一秒単位で神経をすり減らされるような思いに耐えるしかない。

その美夜達の前で発艦を繰り返しているのは、“白雷（はくらい）”達だ。

日没以降に行われる偵察任務の前に、自主的に訓練を行いたいという申し出を、美夜は認めるしかなかった。

隊長は朝倉大尉を配置した。

階級からは申し分ないだろうし、佐野姉妹やはるかからも同意は取り付けている。

問題は、４人がどれほど戦場で連携がとれるか。

それにかかっていた。

佐野姉妹はさすがつーかーの連係プレイがとれるが、それはあくまで姉妹二人きりのことで、そこに誰かが入ると連携も何もなくなってしまう。

シミュレーターが使えれば、その辺も含めて分析と対策もコンピューターで練ることが出来るが、そういう贅沢品を積み込めなかった“鈴谷（すずや）”では望むべくもない。

メサイアは騎士の手足の延長線上の存在に過ぎない。

陳腐な言葉だが、正論だ。

メサイアが戦争するのではなく、メサイアを駆る騎士が戦争をするのだ。

その単位はあくまで個。

兵隊が集団で展開する銃撃戦とは違い、騎士は個として戦い、個を倒す。

騎士の技量がそのまま戦力に直結し、基本的には集団の戦力差は問題とならない。

個の技量が勝っていれば、原則として勝ち続けることが出来る仕組みだ。

一騎が技量を駆使して迫り来る敵を右へ左へなぎ倒せば、それが勝ちだ。

とはいえ、軍隊は、騎士達にそんな個人戦のオリンピックじみた行為をさせる程、ヒマでも酔狂でもない。

軍隊が騎士にやらせるのは非道も何もない、単なる殺し合いだ。

戦場の交戦にルールは一つ。

生きるか、死ぬか。

それだけだ。

わずかな隙を見せれば背後から刺し殺されることもある。

戦斧で交戦していたのに、気付けば速射砲で頭をぶち抜かれることだってある。

それを卑怯と罵る者はいない。

戦場で正しいのは生き残った者だ。

そんな中で弱い者が生き残るにはどうすればいい？

個と個をいかに連携させ、生き残るチャンスを作り上げるか。

問われるのは、集団プレーを行うしかないだ。

個として技術が劣るなら、集団でそれを補うしかない。

戦斧を上手く使う相手なら、その動きを接近戦で食い止めている間に、死角から狙撃砲で撃ち殺せばいい。

大切なのはいかに勝つかではなく、いかに生き残るかだ。

連係プレーは部隊として生き残るために絶対に必要な技量であり、朝倉達が必死になって4騎の連携をとろうとするのはむしろ当然なのだ。

別に美夜が何か言ったわけではない。

朝倉達は、自発的に行動を起こした。

自分達が何をすべきかを考えた上で、命じられるまでもなく、自らの義務とすべき行為を見つけ、果たそうとしている。

軍隊はこんな人材によってこそ動くのだ。

必要なことを見つけられず、命じられるだけの存在は消耗品でしかない。

美夜は部下に消耗品を持つつもりはないし、朝倉達もそうなるつもりはない。

それが、朝倉達の動きではっきりしたことは、美夜にとっては嬉しい。

「――いざという時は」

高木は、最後の発艦が終了し、カタパルトシャトルが戻るのを目で追いながら言った。

「攻城砲が役立ちそうですな」

「艦隊司令部にぶっ放していい？」

「とりあえず――我々が関与しない所でお願いします」

「……」

ぶすっ。とした美夜の目元は赤く、クマが出来ていた。

「――ご主人は」

「本日は休暇中だそうよ――光菱の重役とゴルフですって」

「出世しておけばよかったと、そういう話を聞く度に思いますな」

「腰の椎間板ヘルニア直すのにいくらかかったと思ってるのかしら。あの時は“もうゴルフやめる”とか散々言っていたのに」

「趣味はそう簡単にはやめられません。私も釣りなんぞ、妻から散々やめろと文句を言われているクチですがね」

「釣れるのか？」

「ええ。釣果がいい時はさすがに妻も黙りますがね」

「ふん……土産は汗まみれのゴルフウェアと酔った亭主の世話だけなゴルフよりは余程いいな。奥様もやればよいものを」

「仕事でもあるまいに、朝寝を邪魔されるのがイヤなんだそうで」

「成る程な……攻城砲のテストをやっておくか」

「いいんですか？」

「かまうものか。いい当てつけだ。操舵手、針路変更――航海上で攻城砲の射撃テストを行う」

「……司令部には報告しておきますよ」

「海軍と共同の訓練海域があったな。あそこでいい。前例が必要な

ら、作ればいいことだ」
「あなたらしい」

“白雷改”が４騎編隊を組んで飛ぶ。
そのうちの一騎のコクピットに収まった美柚姫が、不意に訊ねた。
「ねぇ、亜紀ちゃん、聞いていい？」
「なぁに？」
「あのさ」
「うん？」
「夏川大尉には滅茶苦茶反発してるのに、なんで艦長の言うことには素直に従うのかなぁって」
「へン？」
「う、ううん！？ヘンじゃないけど、ちょっとびっくりして」
「ははっ……」
亜紀は通信モニターの向こうで苦笑した後、言った。
「私と亜夜ちゃんは施設で育ったんだよ」
「施設？」
「そう。児童保護施設」
親から虐待されるなどした子供達を保護して育てる施設のことだと、美柚姫はすぐに悟った。
「そこにいた保護司の沼田先生にそっくりなんだ。あの艦長」
「優しかった？」
「うん！」
亜紀は満面の笑みで頷いた。
「怒るととっても怖かったけどね？先生はいつだって私達のことを一番に考えてくれた。大人達がどんなズルしても、先生は私達にズルしなかった」
「そうそう！」

亜夜が言った。
「先生は、私達を“悪魔”から守ってくれたんだもん！」
「悪魔？」
「うん。ギロッてすっごいおっかないんだよ？ぶったり蹴ったり、痛いことするの」
「……」
保護施設で育った子供達。
その子供達が“悪魔”と呼ぶ。
蹴ったり殴ったり。
その意味するところは、すぐに察することが出来た。
「先生は、私達が“悪魔”にいじめられたら、すぐに助けてくれたの。ぎゅって抱きしめてくれたんだ」
「もう怖くないわ。先生がいるからって。先生、柔らかくていい匂いがして、大好きだったよ？」
「そう……なんだ」
「……だから」
不意に、はるかが言った。
「夏川大尉……嫌いなんだ」
「えっ？どういうこと、霧島中尉」
「……はるかでいい。私も、美柚姫って呼びたい」
「う、うん……どういうこと？はるか」
「“悪魔”の眼が」
はるかは答えた。
「夏川大尉そっくり？」
「そう！」
はっとなった感のある亜夜がコクピットで身を乗り出して興奮気味に大声で言った。
「そうなんだよ！はるかちん！あの人の眼は、“悪魔”にそっくりなんだ！」
「だから私達、あいつが大嫌いなんだ！」

「すごい、私達だって気付かなかったこと、はるかちんはきづいた！」
「これはもう、はるかちんをはるかちん大明神と呼ぶしかないですなぁ」
「……やめて」
「……」
そう、か。
美柚姫は悟った。
佐野姉妹が武器を向けたのは夏川大尉というより、大尉の姿を借りた“悪魔”――虐待した親たちだ。
夏川大尉の、あの人を見下したような眼光が、佐野姉妹にとっては上官のそれではなく、自分達を苦しめ続けた親たちの眼として写ったんだろう。
だからこそ、夏川大尉を殺そうとすることにああもためらいはなかったんだろう。
でも――
「はるか？」
「……何？」
「あなたは何故、あの時、夏川大尉に武器を向けたの？」
「……雰囲気に飲まれた」
「冗談でしょ？」
「美柚姫は？」
「……いや、実は」
美柚姫は、ばつが悪そうにポリポリと頬を掻いた。
「私が――それなんだよね」
「……雰囲気に弱い」
「お互いね」
「……それでいい」

いらん子中隊奮戦す　第九話

キャラクターが団結すれば、いかなる難問でも解決する。
するのだ！
するったらする！
……。
……本当に？
んなわけあるか。
そんな妄言が通用するほど、世の中は甘くない。

連携がとれないキャラクター達が、「これから連携をとるんだ！」「そうね！」「えいえいおーっ！」「さぁっ、みんなで夕日に向かってダッシュよ！」――それで連携がとれるならやってみろ。
出来るはずがないし、実際にそうなった。

夕方まで何度も訓練、補給、訓練を繰り返した、その結果は散々なもの。

連携は全くとれず、訓練で振り回した武器は、仲間に命中してばかりだった。
帰還した騎体は、互いの武器がぶつかったおかげで塗装ははげるし凹むしと散々だ。
「凹む程度ならまだしも」
ハンガーデッキから出撃体勢に入る“白雷改”達を腕組みしながら見守る坂城整備班長の口元には苦みが走っている。
「たかがフォーメーション編成だけで部品交換引き起こしやがったら、海へ叩き込んでいる所だ」
「まぁ、そうっすねぇ」
弟子のシゲがその横で担当する騎体を心配そうに眺めていた。

「ちょっと、頼りないにもほどが……」
「前の連中がデキすぎたってことか」
「まぁ、あれはあれで、苦労させられましたけどねぇ……」

二人の頭上で鈍い重低音が響く。
カタパルトが使用された音。
すでに一番騎が発艦したことを、その音が教えてくれる。

「偵察任務です。壊しはしないでしょう」
「ふん……そう願おうか」

太平洋上空で編隊を組んだ美柚姫達は、美柚姫騎を護衛するように三角形のフォーメーションを組んだ。
戦闘行為が出来ない美柚姫騎を他の三騎が護衛するためだ。
「あーあ」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）から、あからさまに不機嫌なボヤきが聞こえた。
背伸びをした涼宮中尉が、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の予備シートにふんぞり返るようにして座っている。
騎士でもＭＣ（メサイア・コントローラー）でもない彼女を乗せている理由はともかく、肉体的には一般人と同じため、万一の際の戦闘機動に耐えられない彼女の存在が、美柚姫騎が戦闘に参加出来ない原因ではある。
「何で今晩なのよぉ……」
「あ、あの……何か、あったんですか？」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）で恐る恐るという声で訊ねたのは、美柚姫の妹、朝倉瑞穂（あさくら・みずほ）少尉だ。
日焼けしたようなやや浅黒い肌にツインテールにしたヘアスタイル故に、どうひいき目に見ても実年齢より３つは若くに見える。
おずおずとした態度をしているが、普段はかなり勝ち気な娘だ。

その彼女が心配しているのは、少尉である自分が、中尉、つまりは上官である涼宮に何か不愉快な思いをさせたのではないかという、士官らしい配慮からだ。

「――合コン」

それに対して、ぶすっ。とした顔で頬杖をついた涼宮中尉は、腹の中の不愉快さを吐き出すかのような口調で、ぶっきらぼうに言った。

「せっかく、オトコゲット出来ると思ったのに」

「ご、合コン……ですか？」

この非常時に？

その言葉を瑞穂は口の中で噛み殺した。

「そうよ――このご時世じゃなくても、オトコとオンナよ？」

ニヤリと涼宮中尉は底意地の悪い笑みを浮かべた。

「だいたい、アンタもおマタに穴があるならわかるでしょ？顔が良くて、お金持っていて、気前が良くて、お金持ちで、金払いがよくて、お金くれて、後腐れなく捨てることの出来るオトコなんて貴重なのよ？そうでしょう？」

「あ、あの、私……男の人ってよくわからないんですけど」

「あーあ。いいわねぇ。そういうセリフが似合う年頃って。あとですりつぶしてやろ」

「あ……あの……中尉にとって、お金が大切なんですか？それとも男の人が」

「お金とオトコはイコールなのよ。金づると書いてオトコと読むの。義務教育で習わなかった？」

「だ、男女平等なら」

「ふん。戦争で男が死にすぎたから、女を代役に駆り出したい。その口実でしょ？」

涼宮中尉は意地悪く瑞穂を見た。

「あなただって、憧れのお姉ちゃんの近くにいたいからって、志願卒業した」

「な、なんで知っているんですか！？」

志願卒業――――

説明すると長くなる。

全ては先の戦争で大量の男性が戦地で命を落とした結果として深刻な労働力不足に社会が陥ったことから始まる。

社会は、経済学者が語るように、資本家による労働者からの労働力の搾取によって成立する。

そして資本家にとって、都合のいい賃金で十分な労働力となるなら、基本的に労働者の性別、年齢、国籍、民族、宗教、こうしたものは不問とされる。

敬虔なクリスチャンを吹聴する資本家の下に、元イスラム教徒のテロリストだった労働者がいても不思議ではないのはこのためだ。

資本家にとって労働者は消耗品、金が絡まなかったらトイレのちり紙と一緒。

労働賃金が安いという理由で、長年勤め上げた労働者を切り捨てても資本家が痛痒も感じないのは、彼等にとって労働者なんてその程度の価値しかないからだ。

その資本家から、戦争は主な労働者である男を奪った。

当然、資本家は男の代わりになる労働力を求めた。

それが女――――その頃まで家庭を支えるのが仕事とされた主婦達だった。

政府としては、戦争未亡人の就職斡旋の意味合いの方が本当は強かったのだが、この動きを一部の“自称”進歩的な女性達は悪用し、女が社会進出しれば正義とされる社会風潮を作り上げた。

女が社会に出るのは、家庭を支えるためだった。
自分と家族を養うためだった。
それ以上は、求められていなかったのに。
一部の暴走が毒となって全てを麻痺させた。
女は社会で働くもので家庭にいるべきではないと、ここから伝統的な、日本開闢以来、日本の社会と個人を支えてきた価値観が狂いだした。
専業主婦には歪んだ男尊女卑の社会風潮の被害者というレッテルが張られ、それに追い立てられるように家庭から女性達が消えた。
女性達は職場で仕事に追い立てられ、子供は放置された。
ライターを悪戯するなどして、主婦の留守中に誤って命を落とす子供は年間数千人を超えるようになった。

そんなことが日常となり、気付いた時には――
女性達は出産や育児より目の前の仕事とレジャーに明け暮れる。
家庭という言葉に女達は魅力も価値も見失った。
男は労働をもって家庭を支え、妻を専業主婦として家に留める力を失った。
子供は男女から必要とされなくなった。
男は女を不要とした。
女は男を重荷とした。
社会は、家庭を構成単位として認識することが出来なくなった。

そんな社会では出生率は低下に歯止めが利かない。
労働力の補填を安易な方法で行った政府に打つ手はなかった。
減少を続ける労働力を確保する上で、次に目をつけられたのは子供達だ。

出生率の低下に伴う子供の減少、それを最も危惧したのは、彼等を戦力として使いたい軍部だった。

軍部は文部省と組んで、子供達を学校から追い出した。

別な表現を使えば、勉学する場を子供達から奪った。とも言える。何をしたか？

学校への助成金を徹底的に削ったのだ。

削減率は５０分の１以下。

１９６０年代の緩やかな経済成長と共に、受験競争を煽る教育法人の食い物として、雨後の竹の子のように乱立しつづけた私立大学は、国からの助成金を受け取れず、次々と廃校に追い込まれた。

国立大学の学費は3倍に跳ね上げられ、私立大学の学費は文学部で年間一千万が相場。

しかも、そう簡単に卒業できない。

学士位取得試験という国家試験を突破しないと卒業資格が得られず、三回試験に失敗すると受験資格さえ喪失する。

内容は中堅の国家公務員試験並み。

この難関を突破出来ず抗議する学生デモは警察によって鎮圧された。

それならばと、教育産業界が新規に狙ったのは専門学校。

失われた二流、三流の私立大学の代わりを果たそうというのだ。

しかし、国はこの動きに徹底して冷たかった。

助成金が出ない上に、負担増加を嫌がる地方自治体の抵抗もあり、せいぜいが国立の職業訓練校の補完的機能を有する程度。

また、制度改革によって、公務員の試験にも希望する職種における最低数年間の労働経験が盛り込まれ、学歴の項目は削除というか記入の時点で禁止された（例え個人単位での面接でも、学歴を質問すると公務員法で処罰対象となる上、学生には公務員削減の目的で密告が奨励された）ことで、社会の価値観を変えた。

学歴より職歴。
形ばかりの知識より実務能力を社会は求めるようになった。
そして、教育産業界は壊滅した。
金を払って学校へ送るよりは働かせた方が子供のためだ。
それがいつしか親と社会にとって当然の考えとなるのに１０年は必要としなかった。
大学への助成金は全て保育へと回され、幼児は社会から手厚い保護を受けられるようになった。
それまで親達が湯水のように使っていた大学進学に備えた教育費は家庭でも宙に浮き、外食や娯楽、そして新たな子育てのために使われ、経済力を押し上げると共に、女性一人当たりの生涯出産率は２．５を超えさせた。

語学の勉強は語り石に触れさせればそれで済む。
専門知識は会社が教える。
社会へ、あるいは世界へ羽ばたくか否かは全て子供達の自由だ。
そんな大義名分、あるいは美辞麗句のもと、教育は変わった。

大学進学のための勉強から、社会で価値ある人間となるための教育へ。

子供達が勉強を拒絶したのではない。
大人が子供達に大学教育という“無駄”を教えることを拒否したのだ。

よい学校へ。
よい大学へ入れ。
そうすれば大企業に入社できて、将来は安泰だ。
親達が勝手に描き、あるいは教育産業界が夢想させた子供達の人生設計を完璧に崩した。

そんな発想は金持ちか過去の妄想だと、そうなったのだ。

一日も早く学校を出て社会で労働力として活躍してこそ人間としての価値がある。

そうなれば、自分達に都合がいい。

そう夢想し、一連の原動力となったのは軍部だ。

彼等の夢想は実現したか？

実は否だった。

社会をそう煽ってなお、軍は決して満足出来なかった。

何故か？

若者達が社会に出るにしても、軍には志願したがらないからだ。

当然だ。

戦争の現実を子供達だって肌身に感じているのだ。

葬式。

傷痍軍人。

戦争未亡人。

戦争孤児。

その具体例を挙げていたらキリがない。

戦争は、子供達にとって遠い世界での出来事ではない。

すぐ身近に“悲惨なこと”、“嫌なこと”“してはいけないこと”――否定的な存在として、歴とした身近な存在として子供達のすぐそばに居続けたのだ。

だからこそ、子供達は、死を恐れ、その担い手である軍を恐れた。

だからこそ、軍部は次の手を打った。

中学三年生以上で軍に志願して最低3年間の軍務を勤め上げた者は、高校卒業の資格を与える。

そんな仕組みを作り上げたのだ。

戦争に子供を送り込むための愚策として社会で大反発を喰らって尚、軍部は引かなかった。

否、深刻な人材不足に陥っていた軍部は引けなかったのだ。

これを通すか、１９５０年代に廃止した徴兵制を復活させるかの二択しか軍部には残されていなかった。

軍の圧力に屈する形で法案は可決され、生み出された、このみなし卒業制度が、いわゆる志願卒業の制度だ。

時代の要請もあった。

軍の要望に、少なくない子供達が自らの意思として応じたのだ。

おりからの政府の為替政策上の失政による急激な為替相場の高騰。

グローバル化という美名の元での国内産業の切り捨て。

産業構造の空洞化への政府の無策。

投機に走る資本家達の暴走――かつて経済大国と呼ばれた日本のなれの果てのの醜態こそが、今の２０歳までの子供達の目に映った日本の姿だ。

効率化の名の下、資本家は子供達に仕事を教えることを拒み、子供達は卒業後の働き口を奪われた。

それは親も同じ。

家計が火の車となって家々で回り出す中、高校まで子供達を育てられない親の苦境を知って、多くの子供達が軍へと志願するようになった。

孤児がチンピラのグループに参加するのと同じ構図が社会規模で起きている。

軍に呼応するように警察もそれに習った。

反政府系、あるいは人権団体はこれを社会問題と抗議するが、彼等には、子供を育てるだけの現実的な力はない。
彼等にあるのは妄想と世迷い言から成るきれい事だけ。
空気を相手にしているのと同じだ。
肝心の政府と資本家は互いに責任を労働者に押しつけ、雇用者としての責務を果たそうとしない。
そんな中、常に犠牲となるのは本当の弱者。

選択肢が最初から与えられていない子供達だ。

２０歳前で出身高校を言えない若い兵隊のほとんどが、食うに困って軍に志願した者達だ。
軍しか知らないから、或いは軍の価値しか知らないから、外の世界で生きられなくなるのを承知の上で志願するしかなかった。
士気が高い低いは関係ない。
生きるか、死ぬか。
彼等の選択肢はそれだけ。
軍という狭い社会の中で、価値観は時と共に変化し、彼等は狗となっていく。
特に、中学までに年１回以上が義務づけられた検査測定で、騎士など特異な素質があると判明した子供達は政府から目をつけられ、志願卒業を勧められる。
これが療法魔導師やＭＣ（メサイア・コントローラー）、そして魔法騎士となればもう未来はない。
強制されるのだ。
学校教育は養成機関でやるから、早期に軍に入ってくれ。
それが軍の言い分だ。
これに応じれば、給料はわずかだが出るし、確かに勉強も出来る。
拒んでもせいぜいが高校卒業程度のモラトリアムが精一杯。

道は閉ざされる。
彼等は国家によって働き口をすべて奪われる。雇用者に対して圧力が加わり、アルバイトも出来なくなる。
そして、彼等は食うに困った迷い狗同然となり、軍での働き口という、目の前に投げられた腐肉同然の存在に、命を投げ捨てるだけの恩義を感じるようになり、挙げ句は国家の忠犬となる道を進まされる。

そんな連中の中に、瑞穂もいたし、その姉である美柚姫もいた。
ここにいる者達の全員の最高学歴が高校卒業というのが、その証拠のようなものだ。

「ほら」
涼宮中尉は苦笑する。
「同病相憐れむって言うでしょう？」
「えっ？」
「私なんて、小学校卒業してから今までずっと軍で囲われ者だもん。グレるなって方が無理よ無理」
パタパタと手を振って自嘲気味に笑った。
「周りはヤクザやチンピラみたいな奴ばっかりでさ。せめて合コンでも何でもいいから、いい金づるみつけて軍からおさらばしたいと思っても当然でしょ？文句ある？」
「……いえ」
瑞穂は言った。
「どうやったら、合コンっていうのに参加出来るか知りたくなりました」
「そうね――とりあえず、シスコンを治すところから始めましょうね？」
「それはイヤです」
「なんで――男とつきあえないじゃない」

「合コンの相手がお姉ちゃんじゃ、ダメですか？」
「――本気で言ってる？」
「私、真面目に言ってます。お姉ちゃんと合コンっていうのに参加して、金づるをみつけてお姉ちゃんと幸せになるんです」
「……」
「……中尉？あ、あの、私、何かヘンなこと言いました？」
「ううん？」
涼宮中尉は首を横に振った。
「さすがこの中隊だけあって……類は友を呼ぶって、あの言葉思い出しただけ」
「？」

アイバシュラの巣に美柚姫達が到達したのは、日付が変わる頃だった。
分厚い雲に月の光さえ遮られ、周囲には生きた人の住む人家もない。
ただ、本物の漆黒という色がどんなものか教えてくれる、そんな闇の世界が一面に広がっていた。
暗視システムを通さずにいると、今の場所が地上なのか空なのか、前に何か障害物があるのではないか、なら後ろは？全てが疑心暗鬼の中に落ち込んで、恐怖に溺れそうになる。
瑞穂は、人間が眼に頼る生き物なんだなと、不思議なことを思った。
「涼宮中尉――現場上空まであと１分です。現在高度１５００。レーダーに反応無し」
「そう――全騎へ」
涼宮中尉はシートベルトを確認した後、
「以降、指揮権は私に移ります。無茶は言わないからよろしく」

静かに、しかし、きっぱりと言い切った。
落ち着いた感じがする女の声に、瑞穂は少しだけ救われた気がした。
「前回、巣の周囲から回収されたデータを元にすれば、巣周辺には正体不明の重力異常地帯があるはず。まず、それを探すから」
何それ？
そんなもの、どこに？
瑞穂は眼を皿にしてセンサーとモニターに神経を集中した。
何か、見えないか？
何か、感じないか？
……。
マジック・レーダー、異常なし。
ソナー、異常なし。
赤外線センサー、異常なし。
モニター、異常なし。

見えない。
聞こえない。

瑞穂という人間にとっては、ただ視神経と聴神経とに求めた物が反応しないだけのこと。
ただそれだけが異様に怖い。

「とりあえず」

自分の心臓の鼓動が耳に響くほどの緊張感に曝された瑞穂の耳に、涼宮中尉の命令が届いた。

「全騎――止まって」
グンッ！

瑞穂は、慣性制御システムが殺せなかった急激なGによって危うくコンソールに頭を潰される所だった。

「――止まれとは言ったけど」

空中で玉突き衝突の一歩手前まで行った部隊。

美柚姫騎の中で、シートのヘッドレストに頭をぶつけた涼宮中尉が痛みを堪えながら言った。

「ここまで派手に止まれとは言って無いっ！」

「ご、ごめんなさいっ！」

通信モニターの向こうで美柚姫が慌てた様子で謝罪した。

「“普段”だと、これが普通なんで！」

「私の世界じゃ異常っていうのよ！もしくは非常識っ！」

美柚姫の言い訳に涼宮中尉は噛み付いた。

「ったく！お淑やかな乗客が乗ってるんだから、気をつけてよね！？」

「は、はいっ！」

お淑やかって、誰のことだろう？

瑞穂はそれだけは考えるに留めた。

「……さて」

ポキポキ。

指を鳴らせた中尉が目を閉じ、両手をまっすぐに伸ばした。

手を掲げ、何かを両手で受け取ろうとしているような仕草。

その光景に巫女が捧げ物を祭壇に捧げている姿を瑞穂は連想した。

ポワッ

ポワッ

不意に、モニターや計器類の光とは異質な光がＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の中に灯った。

びっくりする瑞穂の前、光っているのは涼宮中尉の両手だ。

伸ばされた掌の中で光球が浮かんでいる。
白くぼんやりとした光は、けっして眩しくない。目に優しい光だ。
その光球から光の線が生じ、線と線が重なり合った。

なんだろう？
瑞穂はそれを不思議そうに眺めるだけ。

声をかけて解説を求めるのも失礼かなぁ。と、瑞穂が思った時だ。
新たに光り出したのは、何と涼宮中尉の額だった。
最初はぽつりとした針の穴のような小さな光が、段々と大きくなっていく。
額に生じた光が今やウズラの卵ほどの大きさの球にまで成長した後、既に生じている両手の光の球へ向けて新たな光の線を伸ばし始めた。
「……」
呆然とする瑞穂の前で、光の三角形が生成された途端、涼宮中尉の両手が巨大な球を抱えた。
中尉が抱えるほどの巨大な球――瑞穂はそれを見た覚えがあった。
三次元モニターの映像にそっくりだ。
「……三次元立体映像の基礎は」
涼宮中尉が不意に口を開いたので、思わず瑞穂はびっくりしてシートの上で飛び跳ねてしまった。
「私達、第三眼（サードアイ）に関する研究データから生じた技術なのよ？」
「……サード、アイ」
第三眼（サードアイ）。
魔導師の一種。
俗に言う千里眼の持ち主だ。
魔力が到達出来る範囲の中にある全てを見通す魔法の眼の持ち主。

瑞穂も噂には聞いていたが、実際に力を持つ人物に出会ったのはさすがに初めてだった。

とにかく、涼宮中尉の抱える球体――――魔法で合成された三次元立体映像――――に映し出された映像が、自分達の周囲の映像だと理解出来ただけでも、瑞穂は褒めてほしいと思った。

「サーチ範囲、どれくらいなんですか？」

「企業秘密」

「何ですか、それ」

「商売道具だもん。値踏みされちゃ困るでしょ？」

「そういうものですか？」

「そういうものです――――よ」

そんな涼宮中尉と瑞穂の前で、立体映像がめまぐるしく姿を変える。

螺旋の塊や、格子状、あるいは数式の羅列。

球体の中に映され、変化を続けるそんな立体映像の意味なんて、一般の人間には何が何だかわからないだろう。

「……あれ？」

瑞穂としても、最初は全くわからなかった。

「……これ」

怪訝そうに眺めていて、瑞穂は瑞穂はやっと意味が朧気ながらわかってきた。

彼女に学問的な才能があったからとか、そういう理由ではない。

「センサーの反応に似てる」

「そうね」

少しだけ、涼宮中尉の口元か笑った。

「魔法のソナーみたいなものよ」

「マジックレーダーとは違うんですか？」

「似ているけど違うんだって」

「どう？」

「知らない。私は使い手だけど、理論家じゃないから」
「……ごめんなさい」
確かにそうだろう。
MC（メサイア・コントローラー）としての才能は自分にはあるが、それがどんなものか理論を根本から説明しろなんて、出来る自信は瑞穂にもない。
「……よし」
しばらくの沈黙の後、涼宮中尉は言った。
「ギリギリで止まったわね」
「えっ？」
「全騎へ。前方１３００メートルに空間的な障害（トラップ）。直進したら、この高度だったら墜落してた所よ」
「空間的な障害？」
「……うーん。何て説明すればいいのかしら。こんなもの、ノリで理解してくれればいいのに」
「……無茶苦茶」
頭をぽりぽりと掻いた涼宮中尉は答えた。
「障害の存在する空間に入り込むと、一切の魔力エネルギーが中和されて、ゼロになるのよ。メサイアのエンジンがストール状態になる」
「まさか！」
瑞穂が驚いたのも無理はない。
「魔晶石エンジンシステムは半永久機関ですよ！？」
「そんなこと言ったって」
中尉は口元を尖らせた。
「本当だもん」
「……」
「信じてない？」
「……千里眼のあたなが言うんです」
瑞穂は答えた。
「私の素人判断よりは信じられます」

「正解♪全騎へ、私の誘導でこれから朝倉大尉騎を先頭にして障害を突破――というか、障害の綻び(ほころ)を抜けます。瑞穂ちゃん？精密誘導でよろしく。失敗したら」
「はい？」
「とっても素敵で淫靡な世界へ叩き込むわよ？」
「……了解」
何だか考えたくないというか、聞くだけで本能的な恐怖を感じた瑞穂は事務的に頷いた。
「誘導をお願いします」
「了解。いい？幅３０メートル。高さ４５メートルの不可視のトンネルを潜ることになる。トンネルの壁に触れたら障害に捕まって、地面に墜落してお釈迦様だからね？全騎ＭＣ(メサイア・コントローラー)は、高度、速度、左右の位置まで完璧に朝倉騎の動きをトレースして」
「こちら朝倉騎ＭＣ(メサイア・コントローラー)、瑞穂です。全騎ＭＣ(メサイア・コントローラー)へ、データリンクシステムのデータ転送開始します。リンクの状況を確認して下さい――お姉ちゃん」
「――うん」
コクピットで緊張した顔の美柚姫が頷いた。
「信じてるから、お願いね？」
「……わかった」
瑞穂は頷いた。
「全騎、大丈夫ですね？これから移動を開始します。中尉、誘導願います」
「了解――位置そのまま、高度、１３５上げ。右、４３……そう。ここをゼロ・ポイント軸に固定します。見えないだろうけど、この先１３００――正確には１２９７．３２メートル先にトンネルがある。行きも帰りもこのトンネルをくぐる。各騎ＭＣ(メサイア・コントローラー)は最悪の状況に備え、単独でもこのトンネルをくぐれるようにデータを記録しておくように」
「了解」

必要なシステムを操作して、瑞穂は答えた。
「システムデータ収集開始」
「よろし。速度ゆっくり、おっぱい撫でるように」
「……こんな感じですか？」
「いいわよ。とっても上手。蟻の谷渡って感じね」
「あの……もうちょっと、普通に会話出来ません？」
「知ってるじゃない。お姉ちゃん相手に練習してるのかしら？」
苦笑する涼宮中尉の頬を汗が流れた。
美柚姫騎を先頭にして、４騎のメサイアが漆黒のトンネルへと入り込もうとしていた。

いらん子中隊奮戦す　第九話（後書き）

更新が遅くてごめんなさい。指をざっくり切ってキーボードが思うように打てなくなりました。血まみれの指を押さえてかかりつけの病院に行ったら「本日休診」……住んでいるところが田舎なもんで、車で外科をみつけるのに一苦労。医者を見つける頃には血がとまってやがんの。ははっ……そのうえ、ここぞとばかりにＡＴＯＫは変換ミス連発しやがって……。

みなさんも怪我や病気には注意しましょう。

事故に怪我に病気に……今年、散々な私。

お祓いにでもいこうかなぁ……。

いらん子中隊奮戦す　第十話

見えない世界を歩いたことがあるだろうか？
試しにタオルで目を覆って歩いてみるといい。
たった一つの感覚が塞がれただけで、普通に歩くことでさえ困難になることを知ることになるだろう。

瑞穂の置かれた立場はそれに似ていた。

涼宮中尉の指示通りに前進、騎体バランスを計器上でのみ判断して、モニターの映像や自分の感覚に頼ってはいけない。
騎士戦死、全カメラ破損、高度計と速度計を含む計器類が生きている状況に置かれた場合、ＭＣ（メサイア・コントローラー）は、高度計と速度計相手に位置及び針路を測定し、騎体を陣地まで生還させねばならない。
瑞穂も、養成校では何度となくモニターが切られた状態で、同じ事をさせられた。
しかし、あれはシミュレーターでのことだ。
こんな一発勝負じゃない。

「ゆっくりでいいわ」
涼宮中尉が横でそう言うが、瑞穂は返事もしなかった。
声を上げた途端、集中力が途切れて全てが終わる。そう思えて怖いのだ。
「そう……。騎体は安定している。上手よ」
涼宮中尉はその力、第三眼（サードアイ）の力で、自分達がどの高度をどの程度のスピードで移動しているかをミリ単位、秒速単位で知ることが出来る。
涼宮中尉が把握している現在の美柚姫騎のスピードは時速１５キロ。

人間の歩行速度と大して変わらない速度だ。
トンネルの幅は“白雷改”の飛行ユニットを展開させた場合、ぎりぎりに近い幅しかない。
接触したら空間汚染が騎体を浸食させ、安全なトンネルの内部にいても墜落は避けられない以上、こんな非常識じみた速度での移動が必要となる。
「そのまま」
涼宮中尉は続けた。
「そのまま――そのまま直進して。あなたが少しでも騎位を狂わせたら、後続が大変なことになる」
「……」
操縦システムを握る手が汗ばみ、フレーム越しの震動が伝わってくる。
恐怖に負けて投げ出したい衝動に何度も駆られたが、瑞穂は手を離さなかった。
「今、編隊の最後尾がトンネルを抜けた――よくやったわ」
はあっ。
瑞穂はため息と一緒に思わずＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の天井を仰ぎ見た。
「編隊全騎へ。難所は抜けた。全ＭＣ（メサイア・コントローラー）は、さっきの場所をきちんと把握しておいて。これから先は目標まで向けて一直線。朝倉大尉？現刻をもって指揮権を戻します。私はこれから、周辺のサーチに専念します」
「朝倉了解――ご協力に感謝します。朝倉より全騎へ。フォーメーションを組み直して」
「「「了解」」」
「ねぇ、涼宮のお姉ちゃん」
編隊機動をとりながら、亜夜が興味津々という顔で訊ねた。
「……何？」
第三眼（サードアイ）の力を使いながら、涼宮中尉は答えた。
「障害ってさぁ」

「うん」
「何にとって障害なの？」
「蓋然性は８２％だけど――」
「がいぜんせー？」亜夜が首をかしげた。
「なぁに？ロボットか何か？」亜紀も不思議そうな顔をする。
「……」
額に青筋を立てた涼宮中尉の抱える立体映像に「殺すぞこのクソガキ！」「義務教育受けてきたか！」などの罵り文句が浮かんだのを、瑞穂は見なかったことにした。
「正しいという確率――簡単に言えば、あの障害は蜘蛛の巣に近い働きを持つ」
「蜘蛛の巣？」
「そう。魔力を持つ対象を捕食するためのものでしょう」
「じゃあ。私達が通ったのは、蜘蛛の巣の穴？」
「そうね。かなり綿密に組まれた巣。その綻びの大きいところを選んで通ったともいえます」
「じゃあ、私達、食べられちゃうところだったんだぁ」
「捕食を目的とするなら、魔法系の生命体を狙ったものでしょうね」
「何それ」
「人間や動物が野菜や他の生命体の肉を食料とするように、魔力を食べることで生きる生命体のことです。この世界でもごく希少なんですけど、存在します」
「それを捕まえて――食べるの？」
「そのための巣ですから」
「……ふぅん？ならさ」
「はい？」
「メサイアも魔法で動いているから、危ないんでしょ？」
「そうですよ？」
「普通の自動車とか、人間が歩いて障害にぶつかったらどうなるの？」

「……」
涼宮中尉は、少し考えはしたが、意外とあっさり答えた。
「別に何とも。もしかしたら、精神的なショックは受けるかも知れませんけど」
「大丈夫なの？」
「何か問題が？」
「ううん？」
亜夜は言った。
「最後の最後には、この騎体、捨てて逃げられるかなぁって」
「それは――かなり困難ですね」
「なんで？」
「アイバシュラはかなり高い捕食能力を持っています。地上を這い回る虫を空から見つけ出す猛禽類の例えを出すまでもなく、いずれは見つかって殺されるでしょう」
「例えが難しいけど、無理……かぁ」
「昼間は地中に隠れて、夜間だけ移動すれば、状況も違うでしょうけどね」
「ははっ。忍者みたいだね」

亜紀のびっくりした声に笑う一同だったが、まさかのその真下に人がいるなんて想像さえしていなかった。
漆黒の闇の中、魔法感知防御対策済みの特殊素材で作られた擬装服（ギリースーツ）を纏う一団が徒歩で移動を続けていた。
帝国陸軍砲兵観測連隊特別班。
レンジャー訓練を受けた猛者達で編成されたエリート部隊だ。

既に擬装網で覆った観測陣地を構築し、アイバシュラの巣を夜間暗視装置付きの双眼鏡に捉えている。
無論、その周辺をゆっくりと飛ぶ“白雷改”達もだ。
メサイアのセンサーが彼等を感知出来ない理由は、彼等が本来、

メサイアの眼から逃れつつ作戦任務を遂げることを目的に専門の訓練を受けてること。
そして、その任務を達成するためにメサイアのセンサーから逃れるための装備として、センサー避けの魔法処理が施された、彼等曰く「隠れ蓑」を装備しているからであって、別に瑞穂達がマヌケだというわけではない。

そしてもう一つ。

アイバシュラの巣を狙う別な者達もまた、“白雷改”の編隊を捉えていた。

気付かないのは当の本人達だけだった。

「……スゴい」
暗視装置によって捉えられ、画像処理された映像は、昼間同然の光景としてモニターに外の光景を映し出す。
モニターが捉えるのはグロテスクな巨大な塔。
タケノコの出来損ないのような、真ん中のあたりで膨らんで上が潰れているような奇妙な建造物。
瑞穂達はその上空を何度も旋回しながら、涼宮中尉の仕事が終わるのを待つしかない。
夜間にはアイバシュラ達は活動しないという情報は本当らしい。
支配者がいなくなった暗闇の中、瑞穂達は恐怖に脅えながら空を飛ぶ小鳥の気分だった。
「高さは……５００メートル超えてる」
「８３６メートルよ……前より全然大きくなってる。四季機関が手こずるわけだ」
涼宮中尉が補足するように言った。

「地上施設は螺旋状、構造は極めて単純だけど。地下は……成長しすぎて、もう迷宮ね」
「迷宮？」
「サーチ限界まで調べているけど」
涼宮中尉の手が動く度に映像が切り替わる。
「主な出入り口――たとえて言えば玄関は４カ所。他にも小型の地下へ通じる穴が３０カ所以上」
「……ちょっと、難しくないですか？」
「要塞を４人で攻め落とせというのに近い」
涼宮中尉はくすっと笑った。
「出来たら映画のネタになるわね」
「私、映画はラブロマンスだけしか見ませんから」
「ダメねぇ。ホラー、スプラッタにサイコサスペンスに任侠物まで、幅は広いわよ？」
「あの……ジャンルが偏りすぎ」
「何か？」
「何でもありません」
「……巣の中で観測されている妖魔の反応は千を超えている。多分、この塔にいる一番デッカイのが親玉ね」
「じゃあ、それを潰せば」
「外部に穴を開けて突破――巣の親玉のみを撃破する？」
「そうです。ビームライフルで」
「貫通は無理ね。この反応からして、目標に到達するまでに狙撃隊のハイメガカノンでも数発を必要とする」
「じ、じゃあ」
「最短ルートで言えば」
涼宮中尉は立体映像を瑞穂に見やすいように調整した。
巣の地上と地下の状況が手に取るようにわかる。
メサイアのセンサーでもこうはいかないだろう。
第三眼（サードアイ）の実力を、瑞穂はまざまざと見せつけられた気がした。

「名称は私がつけたけど、一番太い入り口から侵入して、地下の食料貯蔵庫へ入り、そこから育児室を抜けてロビーへ、そこかららせん状の階段を上って天井から親玉の頭上へ降下――あるいは、螺旋階段のあたりで壁を爆破して……あ、だめだ。これやったら爆発エネルギーに巻き込まれて部隊が全滅する……途中のショートカットは禁止。地下からてっぺんまで登るしかない」
「それが千匹？」
「危険性が判断されているだけでね。ちなみにサイズはメサイア並み。人間並みのもいれたら倍に増える。もううじゃうじゃ」
「……うじゃうじゃ？」
「うじゃうじゃ」
「のこのこ入って、生きて帰る事の出来る確率は？」
「限りなく０％」
「１％ないんですか？」
「１京分の１くらいあればいいかしら？」
「１００％失敗するわけですね？」
「単純がお好きならその通り」
「……今、“白雷改”が持てる限りの武装はしてきたけど」
「メサイアで内部を制圧することより、内部に反応弾を持ち込んで吹っ飛ばした方が現実的ね」
「……ですよね」
瑞穂は頷いた。
「これ、もう攻城戦ですね」
「違う」
「違う？」
「ええ」
涼宮中尉は笑って言った。
「補給ポイントもない、セーブも効かない、マップもなにもないリアルダンジョンＲＰＧよ」
「わぁ。楽しそう」

泣きそうになりながら瑞穂は手を叩いて見せた。
「――さて。情報は集まった。これを見て、上がどう判断するかは、考えたくもないけどね」
「私達に人柱になれとは」
「言うでしょうね」
「ううっ。お姉ちゃぁん……私、死にたくないよぉ」

ピピッ

センサーがそんな音を立てたのは、まさにその時だ。
「ん？」
「飛来物？」
瑞穂と涼宮中尉、それぞれの手段で感知したものは――高速で飛んでくる飛来物だった。
「警告――飛来物体接近中」
「何？」
「この速度からして」
瑞穂の言葉を遮るように涼宮中尉は言った。
「口径４０センチほどの大型砲弾……」
自分の分析結果に唖然となった涼宮中尉は凍り付いた。
「……え？」

弾道コースを割り出した瑞穂と涼宮中尉は、着弾予想地点。つまり、アイバシュラの巣に視線を送った。

●同時刻　“鈴谷（すずや）”艦橋
「どこのバカだ！」
後方で待機中の“鈴谷（すずや）”も、その砲撃を観測していた。

「観測、情報入るか？」
「発砲地点、割り出しました」
オペーレーターが答えた。
「武生付近。この口径からして、列車砲です！」
「列車砲だと！？」
思わず美夜と高木が顔を見合わせてしまった。
「敦賀から運び込んだのでしょう」
高木は信じられないという顔で言った。
「爆破処分により閉ざされていた北陸トンネルを復旧させ、敦賀湾から福井市までのルートを開いたのでは」
「国鉄もよくやる……」
美夜は苦笑した。
「民営化を免れる格好のチャンスだからな。今は」
「ですな。連中の大好きな土建屋イジメ……ではなくて、日夜突貫工事でトンネルを使い物に仕立て、痛んだレールを敷き直した。ただ、送電網を復活させるのはさすがに無理でしょうから……ＤＤ５１形ディーゼル機関車あたりを使って列車砲を福井市まで運び込み、アイバシュラの巣を射程に収めた」
「４０センチということは２０式か？」
「連中ご自慢の２０式４０センチ列車砲でしょう。複数の発砲が確認されていますから、最低でも４門は持ち込まれているはずです」
「海軍の戦艦に搭載されているのと同じ砲弾だ。投入は国鉄の勝手な判断ではないな」
「指揮権の上位にいる陸軍の命令と判断すべき状況です」
「あのバカ共……」
「艦長っ！」
レーダー担当のオペレーターが美夜に振り返った。
「日本海に複数の反応」
「何だ？」
「航空機、反応大きい。機数――４０、４５、増大中。針路、福

井方面です！」
「この忙しい時に！？」
「機種判別出来ました！陸軍の新型爆撃機“富岳”です！」
「富岳が？」
レシプロ戦略爆撃機“富岳”。
狩野粒子影響下でジェットエンジンが使えないことから再設計と再生産が行われたレシプロエンジンの重爆撃機。
あのアフリカ・南米戦線ではジェットエンジンを搭載した最新鋭機に代わってプロペラ戦闘機である“烈風”や攻撃機“スカイレーダー”と共に、美夜はアフリカ前線で幾度となくその姿を眺めたものだ。
その絨毯爆撃の痕の無残な姿は、今でもはっきりと思い浮かべることが出来る。
「奴ら、こんな所で何を？」
「それは」
高木は言いづらそうに、口ごもったが、
「目的は一つでしょう」
「……アイバシュラの巣を叩くつもりか！？」
「奴らも、アイバシュラが昼行性で、しかも巣がどこにあるかを知ったのでしょう。アイバシュラのおかげで、陸軍は福井市街地の占領さえままならない状況。巣のある加賀市へは近づくことも出来ない状況のはず」
「だから」
美夜は信じられない。という顔で首を横に振った。
「列車砲と戦略爆撃で叩くと？」
「そう……なりますな」
「正気の沙汰じゃない。奴ら狂ってる」
「肝心の情報を知らないんでしょう」
「肝心の情報？」
「敵がどんな存在か……このままでしたら、巣から飛び出したアイ

バシュラによって爆撃隊も列車砲部隊も八つ裂きにされます。無論……」

「……奴らもか」

美夜はアームレストを拳で叩くと唸った。

「通信――あの役立たず共と連絡はとれるか？」

「だめです。妨害が激しく、シグナルロスト状態のままです。通信が出来ません」

「……祈るしかないか」

「何にです」

「……何でもいい。とりあえず、願いを聞いてくれそうな奴でいい――各員、戦闘配置、機関、“鈴谷（すずや）”前進。攻城砲、射撃準備にかかれっ！」

●アイバシュラ巣付近

塔に着弾した４０センチ砲弾だが、塔は外壁にヒビが入った程度で致命的な損傷は受けていない。

４０センチ砲が美柚姫達に教えてくれたのは、塔がどれほど頑丈な存在かという、それだけだった。

この先、空爆があってもどれほどの意味があるのか、考える価値さえよくわからなかった。

「上へ逃げられない？」

「無理です。障害は巣全体を覆っています。下手すれば墜落しますよ？それより、巣で動き、アイバシュラ達が出入り口に殺到しています！」

「逃げられるような所を探して！」

美柚姫は怒鳴った。

「カッコいい悪いより、生き延びることを優先する！」

「夏川大尉だったら」

亜紀は言った。

「今頃、戦えと言ってるよね」
「やだねぇ」
亜夜は嬉しそうに言った。
「負け戦よりいいけどね――――で、どうするの？」
「連中が使っていないらしいトンネルに入りましょう」
涼宮中尉が言った。
「少なくとも砲撃や爆撃はそれでしのげます」
「爆撃隊や列車砲の連中は？」
「死にに来たんでしょう？なら、本願を遂げればいいんです」
「うわぁ……怖っ」
「死にたいんですか？」
「ううん？遊びたいだけ」
「――――上等」

美柚姫達が侵入したのは、地上にぽっかりと空いたメサイアが１騎、やっと通れるほどの比較的小さな穴だ。
降下中に見た、涼宮中尉の言う玄関は推定２００メートル近い巨大な口を開けていた。
それに比べたら直径４０メートルほどの穴なんて可愛いものだと、少なくとも美由紀はそう思った。
「曲がりくねっていますが、食料庫に直接通じています。ここに侵入した限りは」
持ってきて良かった。と、涼宮中尉はポケットから耳栓をとりだした。
「侵入者として扱われます。意味、わかりますね？大尉」
「警報は鳴り響いている……」
舌なめずりした美柚姫は、少し考えてから言った。
「全騎へ。私が前に出る。亜紀ちゃん？殿（しんがり）お願い」
「了解だよ？広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）、使っていいよね？」

「勿論。このトンネルなら侵入者を一対一で相手に出来る。敵がビーム系兵器を使う前に焼き殺して。リキッドが終了したら投棄していいよ？そしたら、亜夜ちゃんとポジション変更」
「私は？」
「ビームライフルで支援。はるかも」
「わかったぁ！」
「……了解」

美柚姫は躊躇していた。
トンネルに入ったのは、攻撃のためではない。
友軍からの誤射被害を防ぐための防御的意味合いからだ。
幸い、まだ敵は自分達の迎撃には動いていない。
このまま、じっとしているべきか？
アイバシュラ達が富岳を食らい付くし、列車砲をなぎ倒して再び眠りに落ちるまで待つか？
否。
多分、否だ。
敵はもう、自分達という侵入者を知っている。
すぐに狙ってくるはずだ。
つまり、今は静かなこのトンネルは、すぐに戦場となる。
トンネルは一方通行ではない。
外と内側、双方に敵が殺到すれば――

「涼宮中尉」
「何です？」
「アイバシュラは、何匹いると？」
「約千匹ですが、それが何か？」
「……情報に感謝します」

無駄だ。

ここで死んだふりなんて、無駄の極みだ。
美柚姫は覚悟を決めた。
中で攪乱して、混乱の中でチャンスを狙った方が利口だと、そう判断した。
美柚姫は“白雷改”にシールドを装備させ、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズルを伸展させた。
トンネルに入り込んだことが敵に知れいてるなら、それはそれでいい。暴れるだけ暴れて、敵を少しでも引きつければいいのだ。
「部隊各騎へ――これより巣の内部へ侵入する」

いらん子中隊奮戦す　第十一話（前書き）

今回、作者の設定マニア病が発病しました。鬱病だけでは足りないようですこの救い用のないバカは……はぁ。

いらん子中隊奮戦す　第十一話

富岳。

赤色戦争（１９３８－１９４５）当時のＢ－２９とＢ－３２爆撃機を参考にした戦略爆撃機である。

Ｂ－３２爆撃機は、Ｂ－２９爆撃機という脅威に対抗するために配備された爆撃機である。

この機を語るためには、まずＢ－２９について知ってほしい。

ボーイングＢ－２９“スーパーフォートレス”。

空の要塞と呼ばれた本機は、アメリカ連邦軍の軍事拠点を戦略爆撃するために配備されたアメリカ連合軍の戦略爆撃機である。

完全与圧された機内とノルデン爆撃照準器が可能にした、当時としては信じがたい高高度である高度１万メートルの飛行と、ピンポイントと賞賛された精密爆撃能力は、爆撃を受ける側としては悪夢でしかなかった。

迎撃すべき立場の連邦軍は、本機が投入された時点では、高度１万メートルで迎撃出来る戦闘機もなければ、高度１万メートルの航空機に命中させることの出来る対空砲も保有していなかったから尚更の話だ。

西海岸側の基地から飛び立ち、我が物顔で爆弾の雨を降らせるこの爆撃機の存在によって、連邦は数多くの軍事拠点や工場を爆撃され、大打撃を被り、一時は連合に対して和睦を求める声さえ連邦には強くあがった。

つまり、この機はたった1機で敵を降伏の一歩手前まで追い込んだことになる。

残念だが、戦争の早期終結こそ失敗したが、結果として赤色戦争の犠牲者の何割かは、このたった1機種によると信じられる由縁となっているのは確かだ。

これに対抗し、南部連合を逆に廃墟とすべく開発されたのが、コンベア社製のＢ－３２爆撃機である。

連邦の航空技術をかき集めて開発されたこの機だが、Ｂ－２９と同等の戦果をＢ－３２が上げることはなかった。

理由は一つだ。

Ｂ－２９を配備した連合軍は、同様の機体を連邦が準備するだろうと予め想定しており、高度1万メートルで迎撃可能な戦闘機の配備をすでに完了、さらに濃密な対空防空網を全土に配置していたからである。

この時点でＢ－２９に脅威を感じ、かつ、被害を被っていたのは何も連邦軍だけではない。

アメリカ連合を太平洋側から攻略していた大日本帝国軍にとっても、冗談抜きでＢ－２９は十分以上の脅威であった。

西海岸に接近する艦隊は容赦なくその空爆の雨に曝され、迎撃に立ち向かった戦闘機（零式艦上戦闘機シリーズ）は近づくだけでその優秀な火器管制装置により制御された防御火器群によって撃墜を余儀なくされた。

空母部隊から迎撃に上がった戦闘機部隊は、Ｂ－２９の濃密な防御火力の前に莫大な損害を出し、仮にＢ－２９を撃墜しても、その方法たるや、体当たり攻撃による自殺的戦果がほとんどあった。

そして、この時点で全天候型、特に夜間戦闘能力のある戦闘機を保有しない日本海軍にとって致命的だったのは、このＢ－２９が夜間でも爆撃が可能であるという点だ。

潜水艦と連携して部隊の位置を割り出され、レーダーによる絨毯爆撃にさらされた第二次サンフランシスコ沖航空戦では正規空母２隻が大破、巡洋艦２隻と駆逐艦３隻が戦没するという大惨事となった。

さらに追い打ちをかけるように、艦載型高高度迎撃機として連合軍が配備したＦ８“ベアキャット”の登場もあって、日本海軍は西海岸に近づくことさえ出来なくなった。

護衛空母に搭載されたベアキャットは確実に日本海軍を押し戻し、反撃する艦隊はＢ－２９からの空爆にさらされることになる。

手も足も出ない日本軍の弱みにつけ込んだのが、Ｂ－２９によるハワイ真珠湾への戦略爆撃の開始だった。

日本をはじめとした連邦支援国の軍事拠点だったハワイ王国の港、真珠湾は連日の空爆によって大打撃を被り、冗談抜きで海軍艦艇はハワイに近づくことさえ危険となった。

Ｂ－２９の存在によって、数カ国の海軍の連合部隊は、太平洋側の制空権を一時的に喪失したのだ。

この状況は、河崎重工製の全天候型高高度迎撃戦闘機キ１０８“電征”、上島航空機の六式戦がハワイに配備され、連邦に制空権が戻るまで続く。

太平洋側からの戦略爆撃を検討した日本軍は、連邦政府にＢ－３２の技術供与を求めるが、連邦はこれを拒絶した。

彼等にとって、日本は協力してくれるパートナーではあるが、その力が対等になることを認める価値のある相手ではなかったのだ。

日本がＢ－２９やＢ－３２と同等の戦略爆撃機が欲しければ独自に開発するしかなかった。

それを可能にするある出来事がハワイ沖で発生したのはまさに日本側の僥倖とかいいようがない。

俗に言う伊６９号の奇跡である。

その日、哨戒任務中の潜水艦伊６９は長時間の潜水の後、換気のため浮上した。

艦橋に出た見張り員が艦橋のハッチから顔を出した途端、彼等が目にしたのは、自分達めがけて突っ込んでくる巨大な爆撃機の姿だった（後の調査で、ハワイ爆撃の際、左右双方の燃料タンクに被弾し、不時着を余儀なくされた“プリティー・バニー”号（機長ケリー・ベントレー大尉）であることが確認された）

爆撃機は伊６９の５０メートルという間近に不時着水した。

驚いた見張り員がラッタルから墜落して軽度の打撲を負ったものの、伊一６９の艦長はすぐに武装した乗組員を水に浮かぶ機内へと乗り込ませた。

脱出準備中に日本軍の乗り込まれた不運なＢ－２９搭乗員は、当初驚愕していたが、降伏勧告中に爆撃手がノルデン照準器を破壊しようと銃を抜いたことから全てが台無しとなった（注：爆撃手は照準器を命に代えてでも守ることと義務づけられており専用のテルミット銃が支給されていた）

無益な銃撃戦によってＢ－２９搭乗員１１名のうち、不時着の時点で死亡していたとされる後部機銃手と通信手、また伊６９に収容される前に死亡が確認された所属不明の搭乗員２名を除く７名の射殺が確認された。

機体を占領すると伊６９艦長は、すぐに沈没を防止するためのあらゆる手段を取った。

最後には艦橋が潰れるのを覚悟で艦に縛り付けるという荒技まで見せたこの艦長のおかげで、日本軍は検証可能なＢ－２９を入手することに成功し、機体はハワイで解体の後、日本へと運ばれた。

このＢ－２９を参考に上島航空機（現富岳重工業）が実用化したのが、戦略爆撃機“富岳”である。

光菱が身銭を切って烈風を開発したように、上島も会社を傾けてまで富岳を実用化させたのだ。

２０トンの爆弾を搭載可能。

この状態で高度１万５千メートルまで上昇可能。

さらにこの状態で１万キロの距離を時速６５０キロで飛行できる。

とどのつまり、富岳はこの当時としては破格の超高性能機として生まれた。

Ｂ－２９もＢ－３２もすべてを凌駕していた。

故に、ハワイから西海岸への往復爆撃が可能なこの爆撃機によって日本軍は戦況を一気に挽回したのかと言われれば、実はそんなことはない。

Ｂ－３２ですら跳ね返す防空網は実に濃密で、危険過ぎて爆撃機部隊だけで行動させることが無益な自殺行為であることは、人命を軽視する日本軍指導部でさえわかりきっていたし、なにより、都市部を爆撃することで発生するだろう反日世論を政府が恐れたのだ。

都市部の近くの戦場に投入して流れ弾が都市に降り注げば大変なことになる。

扱いを間違えたらとんでもないことになる危険な兵器だ。

烈風や六式と違い、富岳が政府内部で最初から鬼子扱いされたの

はこのためだ。

さらに、この高性能故に極めて高額となったこの機を無駄に使うだけの余力、つまり、損害覚悟で戦線に投入する度胸は日本軍には最初から無いこともあった。

如何にしてこのクソ高い爆撃機を効率よく使うかこそが運用上の最大の課題だった。

本来、ハワイから往復爆撃が可能な飛行能力を持つ富岳が作戦に参加出来るようになったのが、カリフォルニア半島から２４１キロ沖合にあるグアダルーペ島を日本軍が占領して空港を設置、西海岸へと陸軍が上陸する段階になってからというのが、その証左だ

ちなみに同島はホオジロザメの群生地でもあり、不時着水した乗組員に待ち構えていた悲劇は、後にスペルバーグ監督によって制作された名作パニック映画“サメ”の元ネタとなるがどうでもいい。

とにかく、日本軍がアメリカの土を踏んだ第一歩となるロングビーチ上陸作戦、通称“天一号作戦”における支援爆撃が富岳の初陣となったのは確かだ。

太平洋に浮かぶこの火山性の島に設置された飛行場から離陸した富岳は、最後まで一貫して、制空権を確保した戦域での空爆支援任務のみに投入された。

その意味では、制空権を無視してあらゆる局面に投入されたＢ－３２とは運用方法がかなり違う。これは兵力温存を求めた軍部の方針故とされがちだが、実はそれよりも都市部を戦略爆撃することによる米国民の世論を恐れた政府の事情の方が強い。

戦略爆撃を指揮した岩永少将は幾度となくロサンジェルスやサンフランシスコ、その他工業地帯への戦略爆撃と富岳投入を求めたが軍上層部は頑としてそれを認めなかった。

おかげで富岳の主な戦果といえば敵陣地への絨毯爆撃がほとんどで、ラスベガスをはじめ、数多くの街を廃墟（指揮官であるルイ少将曰く“更地”）にしてのけたＢ－３２とは大違いなのだ。

戦果の少なさ故か運用に高額の費用を必要とする故か、赤色戦争後に富岳はほとんど不要、もしくは軍のお荷物のレッテルを貼られて解体されるか燃料給油機に改造され、いずれにしても１９６０年代には空から姿を消した。

上島はこの富岳から得た技術で、ボーイングと並ぶ世界有数の民間航空機メーカーへと発展、社名を富岳に変えた。

富岳がもたらしたものは、この民間機ＦＵＪ、通称“フジ・ジェット”シリーズの基礎とすれば、日本は十分に元をとったことにはなるが、これ以降、日本軍が戦略爆撃機を持つのは、１９７０年代に少数が反応弾運用のために導入された飛鳥重爆撃機のみ。しかも、この飛鳥は実戦に投入されたことはないなど、爆撃機の面から面からみればいろいろと疑問符が付くのも事実だ。

富岳の後、実戦に投入された重爆撃機は、１９８０年代に新たに設計された富岳改だけであり、一般には富岳と呼べばこちらの富岳改のこととなるのも奇妙な話ではある。

富岳改。

この機体が登場するのは、アフリカ戦線で再び重爆撃機が必要となってからだ。

ジェットエンジンが使用できないアフリカ戦線で最も物を言ったのは富岳と同じエンジンを搭載するＡ－１攻撃機“スカイレーダー”のシリーズだが、より多くの爆弾を搭載して広い面を叩ける爆撃

機が前線から求められ、軍は再び富岳に登場を命じたのだ。
そして富岳改は生まれた。
８０年代の最新技術で再設計された富岳は、マグネシウム素材で出来た燃えやすい機体構造から、難燃性と防弾性を兼ね備えた軽量な複合繊維素材に改められるなど、最新の技術を湯水のように注ぎ込まれて性能が高められた。
だが、新たに空を舞った富岳の相手は人間ではなかった。
魔族軍だ。
世論を恐れる必要も、人道上で悩む必要もない、容赦不要の相手だった。
富岳は今度こそ、戦略爆撃機として酷使された。
先代の富岳乗組員がみたら仰天するだろう市街地への無差別爆撃でさえ、そこに人間がいないとなれば、公然と行われた。
それだけではない。
古い航空技師陣からは“新人類の発想”とか“狂気の沙汰”と酷評された新タイプが富岳のラインナップに加わったのだ。
２２式、もしくは“護衛型”と呼ばれる富岳には爆弾は一発も搭載されていない。
爆弾の代わりに搭載されているのは、機体下面に並ぶ1列１２門の２０ミリ機関砲の列が8列、つまり、９６門が下に向けて装備されていた。
爆弾の代わりに２０ミリ機関砲弾の絨毯爆撃を喰らわそうというのだ。
幅約2．８メートル、長さ2．５キロに渡る弾幕を張ることが出来るこのタイプは、敵味方問わずに地上にいるすべてを破壊することから“悪魔のハンマー”と呼ばれ恐れられた。
これを１２．７ミリ２２０門に改装した“掃射型”は、飛行した

痕跡が地上に残る唯一の航空機として、地上部隊からクレームが入るほどの活躍を見せた。
通常の爆撃タイプの露払いを護衛型が務め、対空型妖魔を攻撃し、爆撃の後に掃射型が撃ち漏らしを仕留めるというのが、日本軍のアフリカ戦線での基本的な戦略爆撃方法となった。

無駄話が滅茶苦茶長くなったが、この作品はこういうヨタ話というか設定が大好きな作者によって執筆されているため、ご寛容を願いたい。

美柚姫達の頭上にいるのは、単なる爆弾を積んで適当にそこらにバラ撒くだけの爆撃機とは違うのだ。
富岳隊の先陣を切るのは、まさにこの護衛型であり、その機長である足立中佐は漆黒の闇の中、列車砲の砲撃によって炎上する市街地を目視で確認した。
「派手に吹っ飛ばしてるな」
闇の中、この遠距離からでもわかる炎による光は、相当に街が燃えている証拠だ。
「街がキャンプファイアーになってる……」
副機長の飯橋がぽつりとそんなことを言ったが、妙案だとも思えなかった。
「レーダーは」
「使い物になりません。狩野粒子レベル4。かなり高い」
狩野粒子が猛威を振るう戦場を夜間飛ぶのは今回が初めてではないが、何度飛んでも慣れない。
レーダーが使い物にならない中、航法士による誘導だけが頼りだ。
「針路、大丈夫だな？」
「問題ありません」航法士ははっきりとした声で答えた。

「爆撃手」
「爆撃開始目標物は確認しています！」
爆撃手は爆撃照準器をのぞき込んだまま答えた。
「針路、固定します！操縦、自動操縦へ切り替え――全機関砲、セフティ解除っ！」
張りのある声に足立は腹を決め、自動操縦に切り替わった操縦桿から手を離すなり、編隊へ通じた通信装置に怒鳴った。
「攻撃目標、“敵要塞”！全機、絨毯爆撃用意っ！」
後続の爆撃隊は、今の命令で密集隊形のままアイバシュラの巣上空を目指して、爆弾倉を開いたはずだ。
爆弾倉から一機5発の割合で照明弾が投下された。
足立には見えないが、爆弾倉が開けば、白く強い光が爆撃隊の真下にパラシュートで落下する手はずになっている。
妖魔へのダミーであると共に、爆撃部隊を護衛してくれている戦闘機隊に対する爆撃開始の合図でもあった。
夜間暗視装置をヘルメットに取り付けた戦闘機パイロット達にとって、強い光は迷惑な存在ではあるが、これ以上に確実な合図はない。

レーダーも使えない真っ暗闇の中、戦闘機隊が進路を変えたのかどうなのかさえ、今の足立達には知る術がない。
出来る事は、連中が基地へ無事に帰ることを祷ることだけだ（そんなことを足立達に言おうものなら、無事の帰還を祈ってほしいのは自分達だと怒鳴られるだろうが――）。
緊張で耳鳴りがする。生きた心地がしない。爆撃開始の合図を、今か今かと待ち望み、未だに号令を出さない爆撃手を怒鳴りたくて仕方ない。
その足立のヘッドフォンに爆撃手の声が届いた。
「よーそろー、よーそろー、……投下っ、投下っ、投下っ！」
ガコンッ！

ガガンッ！

飛行機で荒道（ダート）に突っ込んだような激しく連続した地震のような震動が機体を襲う。

胴体に取り付けられた９６門の２０ミリ機関砲が一斉に砲弾を吐き出し始めた証拠だ。

機体がバラバラになるんじゃないかと錯覚する震動に揺すぶられる足立は、とても歓声を上げたい気分にはなれなかった。

２０ミリ機関砲で何匹か仕留められれば御の字だと、彼は知っていたのだ。

妖魔がタダで殺される程、慈悲深い存在ではないことを。

照明弾が囮となって、これに引っかかってくれた妖魔達を第二陣が片付けることになっている。

最後の掃射型が、照明弾に襲いかかる間抜けを掃射出来れば奇跡。

問題はその第二陣だ。

奇襲に近い第一陣の俺達はともかく、照明弾が囮と気付いた妖魔を相手にする第二陣の連中が上手く生き残れるか。

足立中佐は爆撃後に規定されたコースに機体を戻しながら、そんなことを思える余裕が自分に生まれたことに驚きもせず、ただ機械のように自分の仕事を処理することだけに専念しようとした。

爆撃隊から投下されたのは、ナパームH、もしくはハイパー・ナパームと呼ばれる超高燃焼特殊焼夷弾と集束気化爆弾をタイミングをずらして投下、起爆させる空間制圧爆撃だ。

ハイパーナパーム弾の生み出す紅蓮の炎が地上の妖魔を焼き殺し、もしも相手がゴキブリかクマムシ並みの生命力を持つか、或いは何かの間違いがあって、生き残ったとしても、気化爆弾の衝撃で叩き

殺す二段構えの方法が選択されている。

ズズンッ

鈍い雷のような音がした気がした。

正直、最大出力を絞り出すよう命じられたエンジンの爆音が酷すぎて音が聞き取れない。

「機長だ。誰か何か聞いたか！？」

「後部銃手より機長へ！」

後部銃座の新村軍曹から報告があった。

「後方で連続した爆発を目視しました！スゴイ燃え方してますよ！」

ズズズ――ッ！

トンネルの中が激しく揺れ、頭上から土砂がひっきりなしに落ちてくる。

「富岳による空爆開始されました」

涼宮中尉が短く状況を説明した。

“白雷改”のセンサーはすでにトンネルを覆う土砂によって外の状況を掴むことは出来ない。

「ど、どうですか？」

瑞穂は武装の安全装置を解除し、センサーに神経を集中しながら聞いた。

「いい仕事していますね」

涼宮中尉は答えた。

「護衛型の２０ミリ掃射攻撃で先陣のアイバシュラは足止めを受けました。その後、１３秒後に残存先頭がトンネルを抜け、約２００体が地表から高度１５０メートル一帯に広がった所で空間制圧爆撃に吹き飛ばされました」

「か、勝てますか？」
「残念ですが」
涼宮中尉は首を横に振った。
仕事に集中すると口調が丁寧になるんだな、この人と思いつつ、瑞穂は顔をしかめた。
「だめ……ですか？」
「爆撃のタイミングが早すぎました。全体にあと13秒遅ければ、後方の照明弾に殺到する動きを見せていたところです」
「そ、そうなんですか？」
「爆撃隊が私のような第三眼（サードアイ）を爆撃先導手として登場させていたら、あと2、300体は巻き添えに出来たでしょうに」
「アイバシュラの動きは？」
「すでに全体を把握しているのでしょう。敵にも第三眼（わたし）のような力があるのでしょうか？」
「ぐ、具体的に。こちらのセンサーは何も掴んでいません！」
「爆撃隊は追わない模様というか、後尾の掃射型の対地掃射攻撃で地面に張り付けられているようですね。この間に爆撃が終わった方の爆撃隊は逃げられます」
「え？まだ爆撃隊がいるんですか？」
「第二陣がいるようですね……上手く逃げてくれればいいんですが」

涼宮中尉の言うとおり、アイバシュラ達は富岳の空爆による混乱をごく一時的なパニックに抑え、恐るべきほどの統率力を見せた。
アイバシュラ達が見つけたのは、第一陣が投下した照明弾の灯り。
それを敵性反応と判断したか？
否。
アイバシュラはそれをフェイクだとすぐに見抜いた。
光に反応するより、彼等は涼宮中尉が言う障害に接触した、富岳達の中にいる人間に反応した。

照明弾に向かいかけたアイバシュラ達は一団の塊となって富岳第二陣へと接近しつつあった。

「あれだ！」

投下され、地上で光り続ける照明弾の列が道案内してくれる。

空間制圧爆撃の後、派手に炎上する巨大な塔。

あれが目標だ。

富岳隊第二陣率いる遠藤少佐は目視でそれを確認し、部隊に爆撃を命じようとした。

「機長っ！」

その肩を叩いたのは副機長の小林大尉だった。

「あれを！」

小林大尉が指さしたのは、すぐ真横の空間に花開いた花火だった。

色鮮やかに黄色い大輪の花を咲かせた花火が一発、まるで彼等を歓迎しているかのようにあがっていた。

歓迎？

違う。

遠藤少佐はその色を見て、すぐに部隊に別な命令を下した。

「作戦失敗！急速反転！」

普通の民間機でやったら首が飛ぶような急反転を行いつつ、遠藤は喉のマイクに怒鳴った。

「敵が来るぞ！死にたくなかったら反転して、エンジン全開で逃げろっ！」

花火。

それは、地上から列車砲への砲撃管制を行っていた帝国陸軍砲兵観測連隊特別班からの緊急警告だった。

アイバシュラ達が地上付近にのみ存在していたらともかく、対空

的な動きを見せた場合、花火を打ち上げることで合図とするように予め準備がされていたのだ。
敵が第二陣へ向かっている。という合図が黄色の花火。第一陣だったら赤色の花火があがったはずだ。
黄色があがった以上、遠藤少佐の任務は、爆撃ではなく部下を無事に基地まで生かして帰還させることに変わった。
それだけのことだ。

「爆撃隊反転――アイバシュラは追撃を停止」
「やめましたか」
「やめましたね」
「ということは」
「当然、次の狙いは、私達です」
「お姉ちゃん？」
瑞穂は姉である美柚姫に訊ねた。
「中に入ったのはいいけど、どうするの？」
「どうしたらいいと思う？お姉ちゃんに教えて」
「……本気で言ってる？」
「こんな時に冗談言う趣味、ないよ？」
「……頑張ってねお姉ちゃん。私達、マジック・エジェクトで」
「無駄」
脱出装置のレバーをつかみかけた手を止めたのは涼宮中尉の言葉だった。
「空間が歪んでる中にいるから、魔法転送出来ません」
「……死ぬの？」
「私だけ生き延びさせてくれたら、何万回死んでも良いです」
「私と中尉ってワケには」
「幸運の船の定員はいつだって一人です」
「……私、小さいし細いんですけど」

「むかつくから助けません」
「ねえ、瑞穂？」
「何？このへっぽこ無能野郎のお姉ちゃん」
「ムカッ……お姉ちゃんにそういうこと言っちゃいけませんっ！」
「だから、何？」
「瑞穂に用はないの！涼宮中尉、トンネル外部のアイバシュラ達の動きを教えて下さい！」
「むかっ！」
「外部には迎撃に出たほぼ全戦力が集結中。内部は――」
涼宮中尉は、一瞬黙った。
「直径約５００メートルのドームの状。そこにこのトンネル出口にむかってアイバシュラ３００体以上が包囲網を形成中。迂闊に出れば集中砲火を浴びます」
「……か」
姉のかすれた声が、だめか。と聞こえたのは自分だけであることを瑞穂は祈った。
通信に沈黙が走る。
前に進めば蜂の巣。
下がれば食い殺される。
絶望的な空気が部隊を覆い尽くそうとする、そんな中――
「いい方法がありますよ？」
涼宮中尉は口元で笑った。
「これによく似た卓上想定戦で、前の隊長がやらかした荒技が」
「それ、聞いていいですか？」
「いくらです？」
「……瑞穂の給料手取りで一ヶ月分」
「お姉ちゃんっ！？」
「いいでしょう」
「納得しないで！私のお金、私のお給料！」
「――瑞穂、うるさい。中尉？それで」

「トンネルはコンクリートの代わりに妖魔の樹脂状の体液で固めています」
「それが？」
「これを」

涼宮中尉は作戦を説明した。
それを聞き終えた美柚姫は額に手を当てた。
瑞穂もあきれ顔を隠せない。
「……無茶苦茶」
「それ……どんな人だったのよ」

「ゴキブリみたいな人です」
涼宮中尉は笑った。
「生命力が強いのなんのって」
ただ、その笑みは侮蔑ではない。
むしろ、誇っているような笑みだ。
「こんな時でも絶対に諦めない。どんなに格好悪くても、生き残る選択が出来る人でした」

「物は言い様ですね」
「ごもっとも♪」

富岳隊第二陣の迎撃を止めたアイバシュラ達は、美柚姫達が侵入したトンネル出口から侵入を開始しようとしていた。
アイバシュラ達にとっても、通気口と雨水を確保する雨樋に近い性格を持つこのトンネルは狭い。統率がとれているとはいえ、個単位では簡単ではないらしい。
誰が先陣をきるかで、アイバシュラ同士で本能的な対立が起きてしまい、先頭がトンネルに侵入するのはかなり遅れた。

トンネルはいくつかの曲がりくねったポイントがあり、簡単に奥まで見通す事が出来ない。
アイバシュラ達は列を作ってそのトンネルを移動する。
あともう少しで接触という所まで来た時だ。
アイバシュラの先頭を行く一匹が、それに気付いたのは、本当に偶然だった。
普段ならこういう狭いところでは収納しておく触角を伸ばした所、トンネルとは異質の物体にその触角が触れたのだ。
アイバシュラが見上げた先にあるのは、天井に突き刺された筒状の物体。
無論、アイバシュラはそれが何かなんて知るはずもない。
まして、それがこれまで進んできたトンネルのあちこちに設置されていたことなんて、もっと知りようがない。
ギッ？
アイバシュラが前足を伸ばしてそれに触れようとしたのと、美柚姫達が動いたのはほぼ同時だった。

ドームの中で待ち構えていたアイバシュラの群。
彼等は目の前のトンネルから現れる獲物に食らい付くべく待ち構えていた。
ドーム内の床、壁、天井はすべてアイバシュラ達によって埋め尽くされている。
のこのこと獲物が姿を現せば、一斉にビーム攻撃で蜂の巣にして、その鋭い爪で八つ裂きにするべく準備しているのだ。
その彼等めがけてトンネルから飛び出してきたのは、これもまた筒状の物体。
１０本以上が四方に飛び出して来るなり、壁に張り付いていたアイバシュラにぶつかった。
無論、アイバシュラの強靱な外殻がその程度で潰れるはずもない。
ガンッ。

そんな音を立て、一旦、外殻で弾かれた物体は、本来求められた義務を果たすべく、内部に仕掛けられた信管を作動させた。

ドーム内部に強烈な光と音があふれ、アイバシュラ達が動きを止めた。

美柚姫達がトンネルから飛び出してきたのは、その瞬間だった。

いらん子中隊奮戦す　第十一話（後書き）

Ｂ－３２は知る人ぞ知る太平洋戦争最後の航空戦に参加した実在の爆撃機です。この戦闘には故坂井三郎氏も参加していました。米軍側に死者も出ています。

読者の皆様からのアイデアは未だ募集中です。評価もいただければ嬉しいです。励みになります。よろしくお願いします。

いらん子中隊奮戦す　第十二話

トンネルから飛び出してきた物体は、Ｍ２２型柄付手榴弾という。
美奈代が好んで使った、閃光弾と音響弾を兼ねたあの手榴弾だ。

薄暗いドームの中に突然発生した激しい光と音は、アイバシュラ達の感覚を完全に狂わせた。
状況が理解出来ず、動きを止めたアイバシュラ達の前にトンネルから飛び出してきたのは美柚姫達の駆る“白雷改”達。
「みんな！」
「「了解っ」」
ドームのど真ん中に降り立った美柚姫の背中をはるかが、その右隣に降り立った亜紀の背中を亜夜がカバーする。
全騎が握っているのは広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）のノズル。
「せーのっ！」
美柚姫のかけ声と一緒に、みんなが一斉にノズルのトリガーを引いた。

グウォォォッ！

数万度に達するプラズマ炎がドームの中を駆け回った。
堅固な外殻を持つとはいえ、メサイアですら蒸発させる魔法の炎を前に、生命体であるアイバシュラはあまりに無力だった。
ドームに集結して十重二十重と陣を形成し、侵入者である美柚姫達を八つ裂きにしようと待ち構えていた数百体のアイバシュラ達は一瞬にして蒸発し、あるいは炎に包まれて床をのたうち回った。

ドドドドドンッ！

巨大なドラムを打ち鳴らしたような連続した爆発音がトンネル内部から響いたかと思うと、紅蓮の炎と一緒にアイバシュラの破片が噴き出してきた。
トンネル内部に仕掛けた手榴弾の信管が作動し、トンネル内部を爆発のエネルギーがかけずり回った結果だ。

後に残されたのは、アイバシュラ達から立ち上る煙と焼け焦げたその残骸。
後は――――異様なまでの静寂だった。

皆、この圧勝を前に無言で立ち尽くしていた。
何が起きたか理解出来ていないのは、もしかしたら勝者である美柚姫達自身なのかもしれない。
「――――ドーム内部制圧」
そんな静寂を破るかのように、涼宮中尉が冷静な口調で状況を告げ、その声にハッとなった瑞穂が慌てて周辺をサーチして、中尉をフォローするように言った。
「周辺に敵性反応無し。状況グリーン！」

「勝ったぁっ！」
「やったぁぁっ！」
通信モニターの向こうで、亜紀と亜夜が飛び跳ねて喜んでいた。
数百体の妖魔をたった４騎で制圧してのけたのだ。
奇跡と言っても良い。
それを自分がやってのけたのだから、美柚姫も出来る事ならそれに参加したかった。
だが――――
「涼宮中尉」
その顔は、あまり嬉しそうではなかった。

「――助かりました」
「私の功績じゃないと」
涼宮中尉はクスリと笑った。
「言いたいんですが、お金が欲しいので黙ります」
「この作戦というか……」
「作戦、という程、高尚な代物ではありません」
「えっ？」
「こういうのは悪あがきっていうんです」
「悪あがき……」
「でも、最後に生き残るのはいつだって足掻き続けた奴ですよ。先の部隊は、強いというより――そりゃ実際、強かったですけどね？世界で一番悪あがきが出来た連中だったと思います」
「……そう、ですか」
美柚姫は頷いた。
「勝ったのに嬉しくないのは、他人の案を借りたからだと思っていたんですけど……」
「思い上がりです」
「そのようでした――ところで」
「はい？」
「この悪あがき、考えた人の名前だけでも教えてもらえますか？」
「知ってどうするんです？」
「感謝したい時、名無しさんでは可哀想なんで」
「生きている時点ですでにいろいろ可哀想な人だったんですけどねぇ」
涼宮中尉は小さくため息をついた。
「泉大尉です。泉美奈代大尉」
「……あの“鬼の泉”と言われた？」
「――です」
「そう……ですか」
「感傷に浸っているヒマはありませんよ？」

涼宮中尉は立体映像の再構成をしつつ言った。
「状況はこれで大きく変化しました」
「というと？」
「心臓部へ通じる内部の通路が閉鎖されました。地下迷宮の各所で動き、地下からアイバシュラ達があがってきています。数は１００を超えていますよ？」
「心臓部ってことは……」
美柚姫は周囲を見回した。
「女王蜂だか女王蟻のいるところですね？」
「そうです。このドームを含む地下迷宮から地下の食料貯蔵庫へ入り、そこから育児室を抜けてロビーへ、そこかららせん状の階段を上って天井から親玉の頭上へ降下することを考えていましたが、これはもう無理です。想定していた最短ルート上の通路は、ほぼすべて閉鎖状態」

「そんなの」
通信に割り込んできた亜夜が言った。
「ぶち抜けばいいじゃん！中尉、どこに通路があったの？」

「あなたの真っ正面の壁が閉鎖隔壁ですけど……」

「じゃあ！」
亜夜が抜く手もみせずにビームライフルを構えると、照準もつけずに壁めがけてぶっ放した。
ドンッ！
エネルギー弾が壁に命中し、爆発を引き起こすが――
「……あれっ？」
亜夜がきょとん。としたのも無理はない。
壁には黒く焦げた痕跡は残っているが、肝心の穴が開いていないのだ。

「なんで？」
「壁がそれだけ頑丈なんです」
涼宮中尉が答えた。
「魔法防御というか、魔力中和フィールドに近い反応があります。ビームライフルの出力でどうこうなる代物ではありません」
「なにそれぇ」
亜夜が唇を尖らせ、
「どうしろっていうのぉ？」
「つまんないよぉ」
亜紀もぶーぶー言い出す始末。
「幸いというか、このドームは地下への通気が集中した部分にもなります」
涼宮中尉がシートの裏から引き出したケーブルを首の後ろに接続した。
すると、それまで涼宮中尉目の前にあった立体映像の画像が各騎体でも見えるようになった。
「便利ぃ」
「なんで最初から使わないのぉ？」
「疲れるんです。いろいろ面倒くさいし」
「大変なんだね」
「課金制にしたい位なんですよ？まったく」
「……それで」
はるかが訊ねた。
「……どうするの？」
「別なトンネルを通って逃げることを推奨します。今なら外部に残留したアイバシュラとの若干の交戦はあっても脱出は可能です」
「どうあっても、中への侵攻は出来ないと？」
「ルートは2本。ただし、このルートもむしろ敵によって作られた罠である可能性の方が高い――いえ、９９％の確率で罠と断言出来ます」

「罠？」
「はい――――他のルートが閉鎖されたというのに、何故、このルートだけ生きているのかがわかりません。侵入者を都合のいいルートを移動させてジワジワ殺していくのではないかと」
「鬼の泉様は、こういう状況は？」
「知りたいですか？」
「……私、どうしたらいいと思います？」
その縋るような声に、涼宮中尉の反応は冷たかった。
「さぁ？」
「さぁ……って」
「私は泉大尉ではありませんし、部隊の責任まで私が負う必要があると思えません。決めるのはあなたです」
「で、でも、卓上演習では」
「んなもの、一々、全部覚えているワケないじゃないですか」
「……」
美柚姫は騎体の状況を示すステイタスモニターを一瞥した後、
「――――部隊全騎」
震えながらも、乾いた声で言った。
「これより部隊は前進、この施設内部の女王を倒します」
「……へ？」
きょとん。となった亜夜の眼が点になった。
「み、美柚姫っち？」
「どうせ」
美柚姫は真顔で答えた。
「ここで逃げても、また行けって言われるのは私達よ？」
「だ、だけど……」
「覚悟決めて。ここまでこれた事自体が奇跡みたいなものだよ？もう一回、同じ事、出来る自信があるの？」
「……うっ」
「涼宮中尉、ルートの選定をお願いします。通路侵入時のフォーメ

ーションはさっきと同じで」
「亜夜ちゃん」
亜紀が諭すように言った。
「道を作るだけだよ」
「天国への？」
「うーん。地獄かもしれないけど、とりあえずは行ってみればわかるから」
「……だね」
亜夜はあっさりと頷いた。
「美柚姫っち、主要武装は広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）でいい？」
「ええ。ただ、放射時間を調整して、なるべく発射回数を稼いで。先は長いわよ？」
「うん。敵の武器が使えればいいんだけどねぇ……」
「残念」
「……本当」
瑞穂はぽつりと言った。
「宿屋さんと武器屋さんが途中にありますように」

●福井県上空　“鈴谷（すずや）”艦橋
「レーダーが使えない？」
「はい」
オペレーターが答えた。
「結界が張られているようです。マジックレーダー波が通りません」
「目の前見えているののにか？」
悔しそうに爪を噛む美夜の前。光学合成でメインスクリーンに映し出されているのはアイバシュラの巣だ。
陸軍の列車砲による砲撃は、富岳部隊の撤退と共に停止されたらしい。

ここまで接近する間にアイバシュラの巣の周囲でめぼしい動きはない。
「アイバシュラという妖魔が昼行性だとはいいますが」
いつの間にか高木の横に立った夏川がメインスクリーンを眺めながら言った。
「これほど動かないものとは、意外ですね」
「富岳隊は追っかけてくるアイバシュラの群にかなり狼狽していたが？」
「寝起きを起こされて怒っただけでしょう。実際」
夏川は動きのないスクリーンを勝ち誇ったような顔で指さした。
「ここまで接近したのに何の動きもない」
「……」
「巣の中に戻って眠っているのでしょうね。それとも、寝ている敵を始末するのは後味が悪いですか？」
「“白雷（はくらい）”隊から通信は？」
「ありません」
「所在も不明か」
「はい。何しろ、結界の内部は連絡も何も……」
「――ちっ」
「艦長」
「部下が心配ではないのか？」
「騎体が貴重であることは認めますが？」
「……」
ハァッ。
美夜はため息をつくと、アームレストに用意されたインターフォンをとった。
「ＣＩＣ、対空戦闘の用意、出来ているか？――よし。攻城砲、発射準備！手すきの者はすべて対空戦闘に回せ……芥川、ＦＧＦ、即時最大展開用意」
「了解」

「艦長、我々も」大月が一歩前に出たが、
「対空戦闘の邪魔だ！すっこんでろ！」
「――――っ！」
振り返りもしない美夜の一喝で黙るしかなかった。
「戦いたければ銃座につけ！」

“鈴谷（すずや）”の目玉兵器というかお荷物である攻城砲は、８０００ミリという口径自体が冗談そのもののＭＬ砲（マジックレーザー）である。
あまりの高出力にエンジンからのエネルギー供給が間に合わず出力不足に陥り、艦の航行に支障が出ることや、冷却システムの関係から一日一発が限界という極端に悪い効率など、運用側からすれば桁外れの破壊力から引き算してもデメリットの方が勝る欠陥兵器だ。
それを使おうという美夜の決断もスゴイが、一発も試射したことのない兵器を土壇場で使おうという、その神経の方がある意味で恐ろしい。

中央カタパルトデッキ――――カタパルトが設置されなかった上、カタパルトデッキ上から艦内に入れない形ばかりの甲板の下に据え付けられた砲が発射準備のために収縮して格納されていた砲身を伸展させている。

「各員へ警告、これより攻城砲が発射される！主要機器の電気系統を予備電源へ切り替え急げ！各員、瞬断（しゅんだん）に備えろ！」

“鈴谷（すずや）”艦内には無数の電子機器が備わっている。
狩野粒子による被害こそ魔晶石エンジンから発生する力場の影響で免れているものの、電気機器である以上、電気が瞬間的に断たれる瞬断（しゅんだん）には弱い。
無停電電源装置（ＵＰＳ）を噛ませているとはいえ、万一、瞬電が発生すれば艦内のネットワークは遮断され、ハードウェアには重

大な影響が生じる。
何より、戦闘中に機器の電源を入れ直したり、ソフトウェアの再起動なんてやっているヒマがあるはずがない。
サージ電流が発生しようものならどこにどんな影響が及ぶか考えたくもない。
そんな厄介モノが今、火を噴こうとしている。
もし、造船技師達が乗っていたらこぞって逃げ出しているだろう事態だ。

「これで砲身が吹っ飛んだら」
アームレストに肘をつき、足を組んだ美夜は楽しげに笑った。
「我々は堂々と戦域から撤退して、しばらくは楽が出来るな」
「だといいのですが」
高木は苦笑しながら頷きつつも、自分の仕事は果たそうとした。
「各員、対閃光防御！」
「ＣＩＣより、攻城砲発射態勢完了。目標指示願います」
攻城砲を管理するＣＩＣから連絡が入った。
「――艦長だ。目標は妖魔の巣。一発で仕留めろ」
「レーダーによる補正不能のため、ＳＣ（シップコントローラー・ルーム）管制による目視射撃になりますがよろしいですか？」
「かまわん」
「了解――攻城砲の射撃権限をＳＣ（シップコントローラー・ルーム）へ移管します。ＣＩＣ長谷川中尉よりＳＣ（シップコントローラー・ルーム）、榊少尉」
「……さて」
ポキポキ。
指を鳴らした美夜は、まるで楽しみにしていたコンサートに参加したと言わんばかりの態度だ。
「ショータイムかな？
「見張りより艦長！」
オペレーターが怒鳴った。

「巣で動き！アイバシュラ達が動きました！」
「何っ？」
「こちらに接近してきます！数不明――ただし、かなり多い！」
「見張りを続けさせろ！ＣＩＣ、対空戦闘任せるぞ！？」
「了解っ！」
「ちっ――お楽しみはお預けか？」
艦の後退命令を下そうと考えた美夜だったが、メインスクリーンを睨んで、しばらく考えた。
「副長」
「はっ？」
「あのヘッポコ共が停止したのはどこだった？」
“あのヘッポコ”が朝倉大尉達でしたら」
手元の端末を操作した高木がメインスクリーン横の戦況地図を操作した。
「ここより約２キロ前方ですな」
「あいつら、何で、停止したんだ？」
「通信は結界がひどく、報告を受けていません」
「……結界があると言ったな」
「はい。相当強い結界です。巣周辺にはマジックレーダーも飛びません」
「……ＣＩＣ」
「はい」
「副砲をすぐに巣めがけて発射しろ」
「よろしいのですか？」
「いい。命中する必要も命中させる必要もない」
「――了解。発砲タイミングは？」
「今すぐだ。火は入っているな？」
返答の代わりに、左舷カタパルトの横に設置された副砲が火を噴いた。
ピンク色のエネルギー弾がまっすぐ飛んでいくと、巣に命中した。

巣を構成する塔のど真ん中でエネルギー解放による爆発が観測された。
「よろしかったのですか？」
「……今、少し後悔している」
美夜は正直に言った。
「大月大尉達を個別に出撃させて、ビームライフルで試させればよかったと」
「どっちにしろ、敵はもうこっちに気付いています」
「そういうことだな――――敵はレーダーに引っかかったか？」
「まだ。いえ……今――――レーダーコンタクト！」
「ＣＩＣ、対空射撃、撃ち方始め！」
“鈴谷（すずや）”の対空火器が接近するアイバシュラ達めがけて火を噴いた。

いらん子中隊奮戦す　第十三話

副砲の一撃は巣に着弾した。
結界は、どうやらＭＬ（マジッククレーザー）は通すらしいなと、美夜は見当をつけたが――――。
「まずい……な」
渋い顔をしたのは大月のパートナー、阿部大尉だった。
マッチョに鍛えられた魅惑的な容姿は、女でなくても惚れ惚れするいい男だ。
「結界は魔力を削ぐタイプだな」
「魔力を？」
「おや？艦長、失礼」
独り言としての発言を美夜に聞かれた阿部は軽く敬礼した。
「俺のダンナが戻らないから、探しに来たんだ」
「――――構わん」
美夜は阿部に頷くと訊ねた。
「魔力を削ぐとは、何だ？」
「今の見ていたんだろう？」
軍隊では万能の階級社会を無視するようなフランクな物言い。
普通なら叱責の対象だが、この男にはそんなフランクさこそが相応しい。むしろ敬語なんて使ってくれなかっただけでもありがたい。
美夜はそんな気がした。
「普通に着弾したように見えたが？」
「艦長の目は節穴か？」
「ん？待て」
高木がぶん殴ろうと拳を握ったのを美夜は言葉で制した。
「どういうことだ？阿部大尉」
「結界に触れた途端、出力が半分以上落ちたぞ」
「それは、ＭＣ（メサイア・コントローラー）としての意見か？」

「ああ」
「……」
マズイかな？
美夜がそう思ったのも無理はない。
“鈴谷（すずや）”が装備する対空砲は全てＭＬ砲（マジックレーザー）である。
それが結界で阻害されたとなれば、あの結界は相当な厄介モノだ。
むしろ、メサイア隊が結界であんな慎重な動きをした意味がこれでわかった。

「芥川、あの結界周辺に艦を近づけさせるな。魔力に干渉するとなれば、飛行システムへどう影響するかがわからない」
「了解」
操舵手の芥川が頷いた。
「これ以上、悪いことがないことを祈ります」
残念ながら、さらに悪いことが起きた。
魔力をエネルギーとして撃ち出すＭＬ砲（マジックレーザー）の仕組みとその制限を、美夜が改めて思い知ったのは、ＳＣＬ（シップ・コントローラー・ルーム）からの警告によってだ。

「対空砲火を止めて下さい」
メサイアにおけるＭＣ（メサイア・コントローラー）同様、精霊体を搭載する“鈴谷（すずや）”の全システムを管理する榊少尉の発言は重い。
とはいえ、敵性妖魔が接近しつつある中で、対空砲を撃つなというのは、どういうことだ？
インターフォンで呼び出された美夜は、一瞬、インターフォンから耳を離してしまった。
「何？」
「対空砲火を止めて下さい。そう言いました」

「気でも狂ったか！？」
「エネルギーチャージ中にパワーの供給を停止すると、対空砲の何割かは、砲塔内爆発を引き起こしますが？」
「――――っ！」
そうだ。
忘れていた。
美夜は自分が目の前の敵に拘り過ぎていることに嫌でも気付かされた。
ＭＬ（マジックレーザー）は超圧縮された魔力エネルギーを、魔力フィールドでコーティングした上で砲弾として撃ち出すのがＭＬ（マジックレーザー）だ。
例えるなら、魔力フィールドというゴム風船の中に、魔力という圧縮空気を詰め込んだのとそっくり同じだ。
ただ、この圧縮空気は、開放されれば戦艦すら沈める危険物だ。
それを突っ込む魔力フィールド形成中に対空砲へのパワー供給を急に止めれば、魔力エネルギーは行き場をなくて暴走し、エネルギー解放という名の元、最低でも砲身、普通でも砲塔が吹っ飛ぶ被害が生じるのは確実だ。
幾重にも安全（セフティ）装置がかかっているはず――――そう言いたいだろうが、安全に止めたければまず射撃を止めるのは当然のこと。
だからこそ、普通の飛行艦では不意のエネルギー断に備え、即座に予備のエネルギー系統に切り替え、最悪の事態だけは回避する仕組みが出来ている。
実際、先代の“鈴谷（すずや）”にもそういう仕組みは存在した。
設計の時点から将来的な拡張に備えて十分な出力上の余裕を見込まれているからだ。
所が、元から今の“鈴谷（すずや）”は、そんな仕組みが存在しない。
戦艦だというのに、輸送艦から機関を移植したツケがこういう所に回ってくる。
通常時でさえ出力が不足し、最大出力の８割が精一杯という非力な機関部で頑張っている以上、予備に回せる機関の余裕は最初から

存在しない。
その省かれた余裕の中には、こういう安全装置も範疇に入っていることを美夜は忘れていた。
さらに、ＭＬ砲（マジックレーザー）が使用不能な状況に備えて普通なら搭載されているはずの実弾を使用する近接防御火器システムは――。
武器情報を示す艦のステイタスモニター上に表示されている２０ミリＣＩＷＳの項目が薄くなっている。
残弾の表示はゼロ。ダメージを受けた警告もない。
全てが意味するところは、最初から機能していないことだ。
当然だ。
建造を急ぐあまり、出航の時点でそんなものは搭載されていないのだ。
これもまた、省かれた範疇に含まれていた。

どうすればいい？

そこで青い顔をしている夏川のように部下へ善処を命じるだけなら、さぞ楽だろう。
しかし、美夜はそれをやるつもりはない。
こんな時に善処を命じられた船乗りがやることは、艦長の喉をナイフで掻き切ることだと知っているからだ。

どうする？
美夜はもう一度だけ自問した。

「艦長」
その美夜に、通信モニターの向こうに現れた榊少尉が言った。
真横に切りそろえられた黒髪に細長い眼を持つ、日本人形のような容姿をした榊少尉はこんな時にも表情を変えようとはしない。
「“鈴谷（すずや）”ＳＣ（シップ・コントローラー）として、これより軍規定６０６条権限を発動を宣言

します」

軍規定６０６条。

飛行艦やメサイアが危険な状況に陥った場合に、ＳＣ（シップ・コントローラー）、またはＭＣ（メサイア・コントローラー）に優先して判断する権限を与える規定だ。

艦を預かる最小にして最低の単位は？

艦長ではない。

メサイアなら騎士ではなくＭＣ（メサイア・コントローラー）なのと同様、実はＳＣ（シップ・コントローラー）であり、“鈴谷（すずや）”では榊少尉となる。

階級云々ではなく、飛行艦におけるＳＣ（シップ・コントローラー）にはそれ程の権限が与えられているのだ。

この規定を発動させる権限そのものがＳＣ（シップ・コントローラー）やＭＣ（メサイア・コントローラー）達に一任されており、周囲はそれに従う義務が生じる。

無論、騎士や艦長にとって面白い規定ではないが、自分の不興を買うことも、そして以降の全責任が自分に降りかかることも、全て覚悟の上で榊少尉は言っていることを美夜は否定出来ない。

「……軍規６０６条の発動を承認する」

美夜は制帽を正すと短くそう答えた。

小さく頷いた榊少尉はそれに答えた。

「これより、全火器の射撃タイミング統制を開始します」

「な、何？」

「航行系を除く余剰出力を攻城砲のエネルギーチャージ完了まで投入。対空火器は射撃間隔（レート）を半分に落とします。それでいいですね？」

「……なんだそれは」

「知りませんか？」

「そんな器用なマネが出来るのか！？」
榊少尉がやろうとしているのは、例えたら戦艦で火薬が不足しているから、主砲の火薬を削って対空砲に回し、それでも足りないから、フルオート射撃しか出来ない対空砲の射撃間隔を半分に調整して火薬を調整するというのと同じだ。
普通に出来る話ではないし、美夜の軍務経験や知識を総動員しても、そんなことが可能だと聞いたことすらない。
「ちょっとした裏技です」
驚く美夜に、榊少尉は“何でもない”というか無表情で答えた。
「対空砲に負担はかけません。最低でも爆発は……」
「――任せる」
美夜には、そう答えるしか選択肢はなかった。
「了解。攻城砲、エネルギー充填率８９％。射撃開始可能まで後１３６秒」
その途端、艦橋の全ての照明が落ち、オペレーター達のモニター上に非常用電源装置（ＵＰＳ）へと電源系統が切り替わった警告が表示された。
「全く」
美夜は状況を把握すると思わず呻いた。
「近頃の若い娘は」
「……おやおや」
高木はフォローするでもなく呟き、小さく苦笑した。
「私が何度、艦長に対して思ったセリフやら……」

ギャァァァッ！
ノズルから吐き出されたリキッドが点火される。
魔法によるプラズマ炎の形成音は、断末魔の悲鳴より残酷な雄叫

びと共に、トンネル内部を駆け回る紅蓮の炎となって突き進んできたアイバシュラ数匹をまとめて蒸発させた。
　獲物が数匹では足りなかったのか、通路の角から新たなドームの中へ吐き出された炎は、ドーム内の温度を一瞬、数百度跳ね上げた。
　トンネルへと入ろうとしていた一匹のアイバシュラが上半身を吹っ飛ばされ、焼け残った下半身から生える足と尾が、壊れたオモチャのように無茶苦茶に暴れ回る。
　それを踏みつけてドームに侵入した白い敵――美柚姫達は再び紅蓮の炎でドームを焼き払おうとするが――。
「上っ！」
　MC（メサイア・コントローラー）達からの警告が発せられた時には遅かった。
　フォーメーションをとること。そして、眼に頼った敵の把握が徒となった。
　ドーム真上に潜んでいた数体のアイバシュラが潜んでいることを、“白雷（はくらい）”のセンサーが掴むのが遅れたことを差し引いても、騎士の駆るメサイアとして、その動きの稚拙さは、免れようのない失態として美柚姫達に襲いかかった。
「っ！」
　その瞬間、美柚姫は首が折れたかと錯覚する程の強い衝撃を背中に受けた。
　ピーッ！
　思わず目をつむり、首をすくめたその耳に、聞き慣れない警報が届いた。
「な、何？」
　メインスクリーンが真っ赤になって『警告』の二文字が浮かび上がった。
「広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）、メインタンク破損っ！」
　瑞穂が悲鳴のような声を上げた。
「タンク、誘爆するっ！」
「どーーー」

突然のことに頭が真っ白になった美柚姫は、何を妹に命じていいのか、いや、自分自身がどうすべきなのかさえ覚束なかった。
泣きそうな顔をして、コクピット内を見回すのが精一杯。
３６０度全周囲に警戒が至らなかった己の未熟さを嘆いてももう遅い。
「タンク、強制排除！」
そう叫んだのは、なんとはるかだった。
それに弾かれたように“白雷改”の背中へ巨大なタンクを固定していた爆破ボルトが作動、火薬式のロケットが点火され、一斉にタンクが宙に打ち上げられた。
被弾したのが自分だけじゃないと、美柚姫は初めて知った。
瑞穂が他の騎士の命令に従ったことなんてどうでもいい。
何が起きたかを美柚姫が把握するより早くロケットが安全な高度まで破損したタンクを運ぼうと空を飛び、やがてドーム天井に達した――――。

パッ。

それを目撃した亜夜は、ドームの天井が真っ白に光り出したと思った。
そう錯覚したのだ。
そして、全ての時間が妙にゆっくりと動き出した。
「伏せてぇっ！」
美柚姫の絶叫。
自分めがけて飛びかかってくる“白雷改”。
ああ。お姉ちゃんだな。
そう思った後、亜夜の意識は真っ暗な闇の中へと沈んでいった。

パッ！
着弾と同時に赤い巨体がくの字にへし曲がり、その真ん中から炎が噴き出した。
艦橋の真横を、高速で落下していくアイバシュラの残骸がかすめていった。
別な対空砲が連続したＭＬ（マジックレーザー）による連続射撃を行い、別な一体を追い詰める。
弾幕の線が鞭のようにしなる中、アイバシュラが空中でバカにしたような一回転を見せた。
バカにした？
そうかもしれないし、違うかもしれない。
奴には余裕の動きだったかもしれないし、或いは必死の回避だったのかもしれない。
ただ、その一回転が終わるか否かのタイミングで放たれた別なもう一基の対空砲の一撃が、その頭を砕いたのは確かだった。
頭を失ったアイバシュラはクルクルとスピンをかけたまま、明後日の方角へと飛んでいった。
「……」
美夜はそれを艦長席に座ってじっと眺めているしかなかった。
まだ自分はいいかもしれない。
いや、こうして状況を目視出来る限り、他の乗組員達よりはまだマシだと、そう言い切れる。
アイバシュラ達はこちらの死角を探そうというのか、四方からランダムに攻撃を仕掛けてくる。
レーザーの攻撃がかすめ、或いは艦に着弾する度に震動が走る。
しかし、電源が止まった状況下では、艦橋では艦に何が起きているかを把握することさえ出来ない。
すべては榊少尉一人に任せるしかないのだ。
指をくわえて戦争に立ち会うのがこれほど怖いと美夜が思ったのは久しぶりだ。

暗闇の中、ビームの応酬が繰り広げられるのを傍観するのは、まるで出来の悪い映画を見ているような、そんな気分に近いものがある。

チッ。

舌打ちして思わず爪を噛んだ美夜に、夏川が怒鳴った。

「艦長！」

美夜はその狼狽した声に振り向きもしない。

「後退を！後退しなければ、艦は沈みます！」

「……榊少尉が信じられないか？」

「誰だろうと！」

レーザー攻撃が艦橋の真ん前をかすめていった。あと数メートル近ければ、窓が吹っ飛んで、その余波で美夜を含む二、三人は血の海に沈んでいただろう。

「こんな不利な状況で、何をしようというのですか！」

「……」

「撤退信号を打ち上げて、艦を後退させて下さい！あの巣を叩くことと、我々の本来の任務は一致していませんっ！」

「――榊少尉」

わめき続ける夏川を無視した美夜はインターフォンをとった。

反応はある。

艦内通信が生きていることに、少しだけ美夜は安堵した。

「射撃はどこで行う？」

「結界まで後６２５。艦の回避可能限界距離まであと１２５。攻城砲、パワー充填中。セフティ解除。全対空砲射撃不能……今、パワー臨界値です」

「発砲は任せる」

「了解――衝撃と閃光に注意して下さい。５秒で発砲します」

「総員、対閃光防御！」

美夜がインターフォン片手に怒鳴るその目の前。

中央カタパルトデッキの下に据えられた全長８０メートルを超え

るまでに伸展された巨大な砲身の口に青白い光が集まり、それはやがて辺りを征する光の奔流となって放たれた。

設定された臨界値に到達し、“鈴谷（すずや）”のほぼ全エネルギーを一身に集めた一撃は、灼熱の光の塊となって空間を引き裂き、その射線上にいた不運なアイバシュラ１０体ほどを、奔流に巻き込んで、一瞬のうちに原子単位にその体を分解させた。

これほど強大なエネルギーの塊となれば、かすめるだけでも無事では済まない。

砲身から射出されると同時にさらに膨張し、中央カタパルトデッキの先端を通過してわずか１秒後にはアイバシュラを飲み込むほどに巨大化した一撃の前に立ったこと自体が不運としか言い様がない。

その突然の光に飲み込まれたアイバシュラは何が起きたかわからなかったろう。

直撃を避けたアイバシュラにしても、衝撃波と噴出されるエネルギーの余波から逃れることは出来なかった。彼等は直撃を受け、即死出来た仲間を羨むほど無残に体を切り刻まれ、外殻という外殻を、生きたまま引きちぎられた。

結界内部を飛んでいた別な数体のアイバシュラ達も同様の運命を避けられなかった。

塔に着弾した途端、解放されたエネルギーが四方に飛び散り、ビームライフルの数倍に相当するエネルギーを全身に浴びたアイバシュラ達は、そろって生命体としての全てを奪われた。

塔を形成していた外壁が、着弾と同時に蒸発、岩石蒸気となった岩石はいわばガス化して、あたりを灼熱の地獄へと変えた。

付近にいたアイバシュラ達は、自分達の守るべき塔から襲いかかるエネルギーと熱と衝撃によって空からたたき落とされた。

着弾によるエネルギー解放とそれに伴う一切の爆発現象が終了した後、残されていたのは、中央部を大きくえぐられた塔だけだ。

着弾した付近の外壁は未だにマグマと化したまま、赤く燃えてい

る。
“鈴谷（すずや）”を攻撃していた者も、あるいは塔を守ろうとした者も、すべてのアイバシュラ達が呆然と空に静止したまま動こうとしない。
その目の前で、塔よりも圧倒的な力を持つ重力によって自重を支えきれなくなった塔を形成する莫大な質量が大きく身じろぎして、そして耐えられなくなった挙げ句、ゆっくりと崩壊を開始した。
バキバキという何かが折れる音。
ギギィィィッという悲鳴のような甲高い音。
崩壊の現象より音が遅れて聞こえてくるのは、それだけ離れている証拠だが、美夜達“鈴谷（すずや）”乗組員は、そんなことに構っている余裕は全くなかった。

攻城砲が放たれた途端、“鈴谷（すずや）”は大きく降下を開始し、高度を落としている最中だったのだ。
「きゃぁぁぁっ！」
慣性制御の効いていない艦橋にオペレーターの悲鳴があがる。
シートベルトを締めないか、あるいは高木のように立っていた者達は容赦なく体が持ち上がり、そして床にたたきつけられた。
飛行機がエアポケットに入り込んだような奇妙な浮遊が収まったのは、艦橋から地表の様子がはっきりと間近に見える高度になってからだ。
ほぼ地面ぎりぎりの高度に自分達がいることを、美夜はイヤでも思い知らされた。

艦橋から見えるのは、暗い闇の中に浮かぶ町並みの様子だった。

つまり――
「こりゃあ」
落下から守ろうというのか、大月を抱きかかえた阿部が愛おしそうに大月の顔に頬ずりをしながら言った。

「何軒潰れた？民間にバレたら大騒ぎだぜ？」
「……考えたくない」
「あれ……学校じゃないのか」
「見なかったことに出来ないか？」
ううっ。
美夜はそう絞り出すように唸った。
“鈴谷（すずや）”は落下と同時に、まだ無事だった住宅街に落下したのだ。
全長約５００メートル近い物体の落下を受けた住宅街の一角は、一瞬にして無残な姿へと変貌を遂げた。
普通にやったら死刑に近い状況だ。
「補償だけで、艦の予算なんて吹っ飛びますな……」
腰をさすりながら立ち上がった高木の言葉を待つまでもない。
「……家がマンションで良かったとは思いたくない」
額を抑えた美夜の周囲で照明が復旧した。
「艦長」
通信モニターに現れたのは“鈴谷（すずや）”をここまで落下させた張本人、榊少尉だった。
「飛行システム復旧――攻城砲の冷却に砲噴システムの全出力を回しています。現状、全兵装使用不能。航行レベルＣ。結界が飛びました。索敵システムが巣を捕らえています」
「巣の状況は？」
「塔の半ば――地上２６０メートル付近に着弾。倒壊」
「倒壊？」
「着弾による破損により自重に耐えられなくなったと思われます」
「敵の様子は」
「動き――アイバシュラ達が撤収を開始」
「この状況で対空戦闘不能……か」
「中央カタパルトデッキが異常加熱中。冷却を止めるとカタパルトと中央デッキの一部が融解します――各部エネルギー供給率レベルＢへ復旧。ＳＣ権限（シップ・コントローラー）を現時刻をもって解除を宣言します」

「了解した」
とは言いつつ、一発の砲を放っただけでこんな状況に陥った、まともに戦えない自分の艦相手に憎々しく呻くことを止められなかった。
「……この欠陥品」
「索敵より艦長！」
索敵担当のオペレーターが美夜に振り返った。
「巣に動き！」
「動き？」
「塔が折れた付近に大規模な魔力反応」
「何だ？」
美夜は思わずシートの上で前のめりになった。
復旧したメインスクリーンに、カメラが捉えた半ばからぽっきり折れた塔が映し出されている。
「カメラ、ズーム出来るか？」
「やります」
オペレーターが今や塔の頂点となった地点にカメラの焦点を合わせようとした。
それより早く、塔で動いた物体があった。
塔の中に崩れ落ちた構造物が、まるで塔の中から外へ吐き出されるかのように噴き出した。
数トンどころか数十トンはあるだろう外壁の塊が空中を舞って、住宅街へ容赦なく降り注ぐ。
艦橋の皆が唖然とする中、塔の中から現れたのは、鞭のように触手を伸ばした巨大な蜂だった。
暗闇の中、合成画像としてメインスクリーンに映し出されたその姿は、アイバシュラというよりは、本当に巨大な蜂の上半身にそっくりだった。
ただ、問題は容姿よりも、そのサイズだ。
「データとれるか！？」

美夜の怒鳴り声に、オペレーター達が一斉に仕事にかかった。
「推定全長」
真っ先に答えたのは阿部だった。
「４５０メートル前後……か」
「よくわかるな」
「そりゃそうさ」
阿部は軽くウィンクした。
「俺はいい男だからな」
「答えになってないぞ」
「構うものか。俺は――」
ドンッ！
“鈴谷（すずや）”の間近にまで巣から残骸が飛んできた。
伸ばされた触手がメインスクリーンの中で残骸を掴んでいる。
あの巨大な蜂が残骸を投げつけているのは想像に難くない。
おかげで、阿部の言葉は中断されたが、美夜の耳には、「男に理解されればいい」と、そう聞こえたような気がした。
無論、美夜にそんなことを誰何しているヒマなんてなかった。
「芥川、艦、急速後退！ＣＩＣ、牽制の弾幕――」
言いかけて、美夜は天を仰いだ。
航行レベルＣは、要するにやっと巡航航行が出来ますというレベルで、目安としては最大速度１５ノット前後。
そして攻城砲冷却にその必要とするエネルギーを奪われている対空砲を始め、砲噴関係は一発も撃つ余裕はない。
「手も足も出ないってことか？」
「そうだが……口は出せるようだな」
「ふふっ。俺の口でイっていいのは大月だけだ」
「あ、忘れてた。まぁ、いいか……肝心の大月達は？」
「ショックで伸びてる。夏川は――そこだな」
改めて見れば、未だに大月を抱きかかえたままの阿部の足下には夏川が大の字になって伸びていた。

恐らく、さっきのショックで二人とも頭でも打ったのだろう。
「艦も艦載騎も使えない……か」

ズドン！

不意に、そんな音がした。
「塔基部付近で爆発！」
「何だ！？」
「友軍反応！」
オペレーターの緊張した声が歓声に変わった。
「“白雷（はくらい）”隊ですっ！」
「何っ！？」
「“白雷（はくらい）”隊、４騎、反応確認っ！ダメージＣですが戦闘継続可能っ！」
美柚姫達が生きていた。
それを知った美夜は、不思議と安堵感を感じなかった。
むしろ、何だかスゴく嫌な予感がした。
「あいつら……」
「残存のアイバシュラが“白雷（はくらい）”隊に向かっていますっ！“白雷（はくらい）”隊、応戦開始っ！」
「……この程度か？」
「艦長っ！」
通信担当のオペレーターが怒鳴った。
「今度は何だ！」
思わず声が険悪になったが、自分でも美夜は抑えられなかった。
「射撃警告、発せられました！」
「射撃警告！？」
美夜の顔がぎょっとなった。
「どこだ！？どこからだ！」
「海側からです！」

別なオペレーターが怒鳴った。
「国際規格の射撃警告データ受信、射撃警告元は――」
オペレーターが眉をひそめた。
「どうし――」
別にそれでどうなるわけでもないが、思わず睨み付けた巨大な蜂の口元が光った。
“鈴谷（すずや）”の間近に光の線が走り、住宅地を薙ぎ払った。
住宅地を形成していた建造物や道路の破片が容赦なく“鈴谷（すずや）”を襲った。
「っ！？」
「い、今のか！？」
「違います！」
そのオペレーターは答えた。
「警告元は、フランスです！」
「フランス？」
「フランス王国軍所属、アニイラシオン――と」
「何だ？」
「アサルト・アーマーというのですが……」
パネルを叩きながら、オペレーターは首をかしげる。
「該当する名称は、艦、メサイア、その他ライブラリーに該当無し！」

●日本海
「ははっ。派手だねぇ」
半円形のコクピットの中には外部を向く形で数名のオペレーター達が座っている。
その奥、一段高く設計された場所には、今、潜望鏡のスコープが降ろされていた。

広く設計されたコクピットに幼い声が響く。
軽くてはしゃいだ声は、妙に高い。
「こういうの、ゲームにあるよねぇ」
メインカメラと同調したスコープについたアイピースをのぞき込むんでいるのは、まだあどけない女の子だ。
多分、１４か１５くらいだろう。
「――シエル」
そのヘッドレシーバーに低い若い男の声がして、女の子は顔をしかめ、アイピースから眼を外した。
「遊んでいるんじゃない。モニターを勝手にいじるな。こっちでデータがとれない」
「わかってるよぉ」
ぷうっ。と口元を尖らせたシエルと呼ばれた少女は、不満げにパネルを細い指で叩いた。
何も映っていなかったメインスクリーンに映像が映し出され、潜望鏡が天井へと格納された。
「僕だけ見えていればそれでいいじゃないか」
「そういうワケにいくか。日本海側の偵察だけでいいと思っていたが、予想外の獲物だ。どうやら日本が交戦している様子だが、見るからに分が悪そうだ」
「あいつらが殺られてからでいいじゃん。僕達がここにいるの、知ってるのは」
「国際規定通り、射撃警告は出している」
「そりゃ律儀――」
いいつつ、シエルの眼ははっきり相手を侮蔑していた。
「言ってろ。ポール、炎息（フラム・スーフル）の使用準備、状況を知らせろ」
「……了解」
１８位の、がりがりに痩せた青白い顔をした男が焦点が疑わしい眼でパネルを見ながら、一つ一つ、指で押しながら答えた。
「炎息（フラム・スーフル）。パワー集束値、９７％……冷却システム順調……砲塔内部

パワー安定」
「クリストフ、敵の状況は？」
「こちらに接近する敵は存在しません」
シエルよりはやや年上だろう、それでも十分に幼いうちに入る顔をした少年が答えた。
「敵の脅威なし」
「アドルフ、機関の様子」
「全システム安定」
縁なしのメガネをただしながら、知性のある顔立ちをした背の高い男が答えた。
恐らく、この中では最年長だろう。
落ち着いた口調が告げた。
「問題ない。想定の範囲内だ」
「よし――シエル。一発で仕留めろ？ここで外したら、祖国の恥だ」
「別に」
手慣れた様子でパネルを操作し、シエルは目の前にターゲッスコープを引き出した。
普段から頭部と連動するヘルメットに装着しているスコープをのぞき込み、シエルは不満そうに答えた。
「祖国がどうだろうが、僕にはカンケーないもんね」
「言ってろ。アニイラシオンはお前のオモチャじゃない。陛下と国民のものだ」
「難しいことは嫌いなんだって」
ターゲットスコープの中に塔の中から身を乗り出して暴れ回る巨大で醜悪な物体がはっきりと映し出される。
生理的な嫌悪感を抱くというか、少なくともそれはシエルの美意識からすれば、この世に存在して良い姿形ではなかった。
「ターゲット、ロック。ポール？」
「弾は込めてあるよ？僕の可愛い子猫ちゃん（シャトン ミニョン）」

「ありがと」
シエルは口元でニヤリと不敵に笑うと、トリガーを引いた。

いらん子中隊奮戦す　第十四話

漆黒の闇の海から顔を出したのは、異形の存在だった。
小豆色の装甲はコウモリの羽を膨らませたような肩を左右へ張り出させたヤドカリやエビを彷彿とさせる体は、人体より甲殻類に近い形状をしている。
そんな奇妙な体から、亀の頭――否、巨大な貝の中から蛇の如く伸ばされた、それだけでも生理的な嫌悪感を持たせるには十分な頭部。
そこには単眼が鈍く、そして赤く光っている。
人間の形をどこかに置き忘れたかのような形状は、どんなメサイアやアサルト・アーマーとも違うし、設計者が普通の神経をしていたら、こんなデザインは採用しないだろう。
否、異なるのはその形状だけではない。
その破格のサイズもだ。
左右だけで５０メートル近いサイズを持つ機動兵器なぞ、人類の常識からすれば非常識の極み。設計図どころか構想段階で廃棄されるのが当然な代物だ。
ところが、実際にこいつの横幅はそれだけのサイズを持っているし、実際にこうして現実に存在している。
海面まで浮揚した体から蛇が鎌首をもたげるように伸展された頭部が上下に割れた。
まるで獲物を飲み込もうとしているかのように、開いたというより裂けたという表現が適当な程、大きく開いた下顎と、単眼を擁したまま水平に動かない上顎。
その間にあるのは、獲物を飲み込むための喉ではない。
巨大なＭＬ（マジックレーザー）砲の砲身だった。
口径だけで３メートルを超えるだろう戦艦と比較しても破格に近

い大口径というべきその砲身の真横に2門設置された20ミリML（マジックレーザー）のうち1門が、ガドリングモードでエネルギー弾を連射した。
目標はあの“巣の主”。
オレンジ色の光る棒が何本も“巣の主”めがけて飛んでいく。

「あれ？」
その光景を前に、ターゲットスコープをのぞき込んだまま、そんな声を上げたのはシエルだ。
「何だよ！何でここで同軸機銃なの！？」
「落ち着け、シエル」
火器管制担当のポールが目の前のモニターから目を離さずに言った。
「ジョイスティックのセレクトスイッチがカノンに入っていないだろう？」
「早く言ってよ！」
ターゲットスコープの中で、崩れた塔の残骸の中から上半身をのぞかせていた“巣の主”。
その背中にML（マジックレーザー）が数発、着弾した。
連続した爆発がはっきりと観測出来るが、効果を誰かに訊ねる必要があるとはシエルには思えなかった。
跳ね回るように着弾したエネルギーが駆け回った背中だが、煙が海からの風に流された後を見る限り、まるでダメージを受けた様子はない。
ほんの少し、前に押されたかと思うだけで、もがくわけでもなく、痛みにのたうち回るわけでもない。
それは、まるで背中を叩かれたらこんな風に振り返るといわんばかりの動きだった。

そして、“巣の主”はゆっくりと振り返った。

その光景に脅える趣味はシエルにはない。
普通なら恐怖するだろう光景に、むしろ背筋にゾクゾクとした興奮さえ覚えてしまう。
シエルは“巣の主”へ返事するように、右側のジョイスティックの親指があたる部分に据えられたスライド式レバーを親指で押し上げた。
網膜映像として映し出されるターゲットスコープの隅に表示されていた「Ｇｕｎ」が「Ｃａｎｏｎ」へと切り替わり、残弾表示の代わりに、エネルギーゲージが新たに加わった。
“巣の主”は、その触手を振り回し、怒りを露わにした。
「うわぁ」
それを前にシエルは笑った。
まるでいじめられっ子が、必死になって手足をばたつかせるのをあざ笑ういじめっ子さながらの余裕のある笑みだった。
「怒らせちゃったみたいだねぇ」
「シエル」
レシーバーに、ミシェルの声が届いた。
「遊ぶのも大概にしろ」
「間違っただけだよ！」
返事の代わりに、シエルはトリガーを引いた。
喉に現れていたＭＬ砲（マジックレーザー）の砲口にスパークが走り、そこから、周辺の空気をプラズマ化させることで周囲を白く染あげる程の光塊が吐き出された。
それは、“巣の主”が同様の光塊を吐き出すより圧倒的に早かった。
塔の中で体一回転させ、シエル達に向き直ることを優先した“巣の主”は、よもや相手からこれほどの攻撃が来ると予想さえしていなかったろう。
圧倒的な勝利を信じて疑わない強者の驕りとも言うべき傲慢な動きが致命傷となった。

先程の攻撃で塔の外壁を吹き飛ばした“鈴谷（すずや）”の一撃に匹敵するほどの光塊は見事なまでに“巣の主”の側頭部を捉え、そこでエネルギーを解放させた。

頭部を包み込んだエネルギーの解放は、瞬時に“巣の主”の頭部を形のない原子の塵へと変換し、その余波をもって上半身そのものを引きちぎった。

そして、上半身を失った“巣の主”の体内では、集積が進んでいた莫大なエネルギーを暴走が始まり――巣に破局が訪れた。

かつて、人類が村をつくり、街をつくり、そして都市を作った。

長い、長い年月の中では、戦乱や天変地異など、都市を破壊する力が荒れ狂ったこともあった。

だが、これほどの破壊を、この地を統べる地霊は知らない。

自らが地霊としてこの地を治めることとなった、遠い遠い遙かな昔から今まで、これほどの事態を経験したことはない。

巣の中を暴れ回った、“巣の主”が体内にため込んだエネルギーは、健在だった地下迷宮をかけずり回り、そして全てを吹き飛ばした。

地下まで深くまで構築された巣が一気に吹き飛ばされ、その構造物は地表へとはね飛ばされた。

爆発によって生じた高熱に炙られ、加熱したまま最大高度1キロ以上にまではね飛ばされた土砂と岩石は、重力によって上昇の力を奪われると、そのまま質量と高熱を持つ異質の雨となって周囲へと降り注いだ。

土砂降り。

それは、皮肉な意味で、その言葉を具体化したような光景だった。

雨水や雪、あるいは雹の代わりに襲ってくるのは、土砂だ。

いまだ残存していた住宅街が、高高度から降り注ぐ文字通りの土砂によって粉砕された。
ローンが残っているだろう新築の建て売り住宅が、アパートが、病院が、降り注ぐ土塊や石塊に屋根を、ガレージを、ありとあらゆる構造物を破壊され、その内部に飛び込んだ高熱の瓦礫が可燃物に引火する。
残されていたプロパンガスのボンベがあちこちで砕かれ、家々から炎が噴き出し、瞬く間に住宅を炎で包み込む。
炎によって破壊される苦しみから解放する慈悲の光のように、ポツポツと、黒い雨が降り注ぐ住宅街に最後の灯りが灯り始めた。

翌日。
住宅街上空へと再び艦を進めた“鈴谷（すずや）”の艦橋から見えるのは、一面の焼け野原だった。
未だ黒煙を上げ、あるいはくすぶり続ける住宅達のあちこちで火の手が残っている。
消火する者が誰もいないため、一度生じた火は歯止めが利かない。
海側から吹く風に煽られて、まるで灰色のカーテンのように空を覆い尽くす煙を前に、美夜達は何も出来なかった。
空爆の後と言われても、誰も違和感さえ抱かないだろう。
「フランス軍は」
「撤退したようです。こちらからの返答には一切応じません」
高木は従兵の持ってきたコーヒーを美夜に手渡しながら答えた。
「アニイラシオン……そう言ってましたな」
「何か知っているか？」
寝不足の目元を気にしながら美夜がコーヒーに口をつけた。
苦みが刺激となって弱っていた胃を締め付ける。
胃薬が欲しいな。と美夜は思った。
「いえ。しかし、何かデータが狂っているのではないでしょうか？」

「うん？」
「あれほどの攻撃です」
高木が指さした先。
そこは全長1キロを遥かに超えるだろう巨大なクレーターが残されていた。
黒く大地にぽっかりと開いたすり鉢状の穴には、トンネルを通じてゆっくりと海水が注ぎ込まれ、いまだくすぶる岩盤からはさかんに水蒸気があがっている。
いずれ、時を待たずに海水の湖が出来るだろう。
かつて、ここにはアイバシュラによって生み出された巨大な塔が存在した。
昨晩、ここは、その根元から何からが全て吹き飛んだ。
それを美夜達ははっきりと目撃したのだ。
最後を決めたのは、フランス軍に所属するアニイラシオンという正体不明の反応から放たれたＭＬ砲（マジックレーザー）の一撃。
それを美夜も否定するつもりもない。
彼等の出現が絶体絶命の自分達を敵の目からそらしてくれたこと、彼等から放たれた一撃が、その巨大な敵を吹き飛ばし、塔の誘爆を引き起こしたこと。
全て、否定出来ない事実だ。
だからこそ、高木は信じられないのだ。
「あの一撃は、確実に戦艦のそれを凌いでいました」
「……うん」
艦橋から見ると、その半ばから先端がはっきり見える中央カタパルトデッキ。
その真下では、いまだに砲身の冷却が続いている。
いかに“鈴谷（すずや）”が欠陥品とはいえ、最新鋭の飛行艦が沈没寸前までパワーを振り絞って撃ち出したエネルギーの塊でやっと塔を倒すことが出来たのは事実だ。
「……どうだ？」

美夜がインターフォンを通した先はＣＩＣだ。
「分析は出来ましたが」
ＣＩＣを預かる笠倉少佐は手にしていたコーヒーを一気にあおって答えた。
「たいしたもんです」
「具体的に」
「フランス軍の使用したのは、攻城砲の小型版です」
「何？」
「……簡単に申し上げれば、現在、一般的なＭＬ砲弾（マジックレーザー）は、着弾と同時に爆発する――通常弾頭に例えれば榴弾です。これはご理解頂けますか？」
「無論だ」
美夜は頷くと、インターフォンの通話をスピーカーに切り替えた。
笠倉少佐は立場的に高木副長の直属の部下になる以上、笠倉からの報告は、高木も聞くべきだと美夜はそう判断したのだ。
「だが、それはＭＬ（マジックレーザー）の性格上、やむを得まい？」
「おっしゃる通り、ＭＬ（マジックレーザー）イコール榴弾は定説でした。しかし、最近、それが覆されつつあるのです」
「ん？」
「ここからは――私も理解の中のことで、事実とは反するかもしれませんが」
「かまわん。続けろ」
「はい――まず、このタイプでは、エネルギーを包み込む魔力フィールドを細工しまして、中に注入されるエネルギー弾を従来のような砲弾型ではなく、すり鉢形とします。
これを“エネルギーの成形炸薬化”というのですが、これによって、解放時にエネルギー弾を無駄に四散させるのではなく、一定方向へ指向性を持つようにします」
「成形炸薬弾と同じ？ＭＬ（マジックレーザー）砲弾のメタルジェット化？」
「ちょっとだけ違うんです、副長。というか、さすがに金属と純エ

ネルギーの違いというか」
笠倉は苦笑いを浮かべて頷いた。
「成形炸薬弾におけるモンロー効果は、学問上、爆発時のエネルギーは解放を始めると、すり鉢状の凹型の中央部に集中する特性によるものです。
この辺りはどっちも同じなんですが、肝心のメタルジェットは「高温の金属ガス」でも「高圧の金属ガス」でも無い存在です。それより低い力しかありません。
実際の所、「超高温高圧のエネルギーの塊」であるML（マジックレーザー）弾の場合、メタルジェットより遥かに高いパワーを持ちます」
「話をまとめてくれ」
美夜は言った。
「ここは技術部門の掃きだめじゃない」
「失礼しました。フランス軍の使用したエネルギー弾攻撃は、“鈴谷（すずや）”の攻城砲と同じく、ML（マジックレーザー）砲弾に指向性能力を付与した、一種のエネルギー徹甲弾的な性格を持つ特殊な存在であることが、観測の結果確認されました」
「エネルギー徹甲弾？」
「従来、エネルギーを保護する魔力フィールドを安定的かつ任意の形に形成することが難しく、半ば諦められていた技術なのですが……」
「最近になって、ついに実用化されたのか？」
ぬるくなり始めたコーヒーを飲みながら美夜は訊ねたが、笠倉はそれに不承不承という顔で頷いた。
「あくまで噂ですが」
その顔は楽しげではない。
「――魔族か、そっち側の技術が流入しているのではないか、と」
「まさか」
美夜は思わず高木と顔を見合った。
互いに信じられない。という顔をしていた。

「そんなことがありえるのか？」
「あくまで噂です」
笠倉は肩をすくめた。
「ただ、ここの所の爆発的な技術発展はすでに人類の研究の成果と呼ぶには超越しすぎています」
「この攻城砲もか？」
「……じ、自分は、この砲を非難しているつもりはないのです」
その口調には弁明じみたものが滲んでいる。
「ただ、技術部門の技官の間でも、この攻城砲の魔力フィールド形成技術は未だにオーパーツに近い存在で、予備パーツがないのはそのせいだと」
「予備パーツが……ない？」
「ご存じなかったのですか？副長」
「知るか！」
「し、失礼しました。攻城砲は試作品のワンオフ品です。かといって、何かあったときに交換パーツは必要なので、各部門に問い合わせてみたのですが……」
「返ってきた返事がそれか」
「半日かけて問い詰めた結果です。開発者本人が言ってましたけど、むしろ口径を巨大化させたのは、このフィールド発生装置の小型化に失敗したからで、攻城砲の大出力の何割かは確実にこの装置のために割り当てられているとか……」
「……むぅ」
美夜は呻いた。
「欠陥品というより、オーパーツ……か」
「だからこそ、驚きましたよ」
笠倉は答えた。
「それをフランスが実用化するなんて」
「報告が遅れたのはそのためか？」
「世界各地の裏情報も仕入れていました」

通信画面があれば、プリントアウトした紙束を笠倉が得意げにちらつかせたのが見えただろう。
「フランスも、随分ときな臭いですよ？」
「……そうか」
美夜は頷くしかなかった。
「ご苦労だった。周辺警戒は怠らないでくれ」
「――了解です」
「副長、あの役立たず共はどこだ？」
「夏川大尉達ですか？それとも」
「……うちのいらん子共と言い直そう」
「朝倉大尉達でしたら、なんとか生きてます」
「騎体は無事が」
「乗組員もですが？」
「それはどうでもいい――程度は」
「全騎中破。全騎広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）システム喪失。装甲はかなり手ひどくやられていますが、一応の戦闘継続は可能です。坂城さんが見たら激怒するだろう損傷ですが」
「かまわん」
美夜はコーヒーを飲み干すとアームレストにカップを置いた。
「給料分は働かせろ。言うだろう？働かざる者喰うべからずと」
「――任務は？」
「周辺の狩り出しだ。残存するアイバシュラ、その他何でもいい。敵性反応は全て焼却しろ。あの超問題児もいることだ」
「ああ、涼宮中尉のことですな？了解。朝倉大尉達からの帰艦許可要請は無視します」
アニイラシオンがその巨体を宙に上げ、そして海上を航行中の飛

行艦ランフレクシブルの甲板上に着艦したのは、朝焼けの中だった。
幅６０メートル、長さ３００メートルを誇る巨体は、元来が飛行艦修理用の浮き乾ドックを兼ねた工作艦だ。
全長８９メートル、全高４６メートル、幅が５５メートルもあるアニイラシオンを収容するには、これほどの巨大で収容力がある特殊な艦でもなければ無理だ。
四方を固定アームとワイヤーで固定されたアニイラシオンの周囲では、整備兵達が収容と各部の冷却作業に追われている。
主要部分にはすでにシートがかけられようとしていた。
装甲に立てかけられたハシゴを器用に下りてくる乗組員達を腕組みしたまま出迎えたのは、金髪の青年だった。短くまとめられた髪に切れ長の眼。銀縁のメガネが知的な演出を果たしており、背は高く、全体にスマートな印象を放っている。
白いワイシャツにブルーのスラックス。
そこに白衣を羽織った容姿はかなり女性の目を引く魅力にあふれていた。
フランス王国では甲冑の貴公子と呼ばれるミシェル王子だ。
宮廷や社交界の女性達を虜にする容姿と、誰一人その心を射止めたことのない鉄壁の冷酷さを持って知られた存在。
その顔は決して面白そうではない。
「操縦を一からやり直すか？シエル」
アニイラシオンの乗組員の中で最後に降りてきたのはシエルにミシェルは呼びかけた。
ハシゴを降りきる手前で思い切って、という仕草で甲板に飛び降りたシエルだが、改めて見ると、本当に愛らしい女の子としか思えない。
「ちょっとしたミスだよ。あることでしょ？」
「何が、ちょっとしたミスだ。武装選択もちゃんと出来ないのか？」
「なんだよぉ。しっかり仕留めたからいいじゃないか！」
ムキになって怒り出したシエルは八重歯をむき出しにして抗議し

た。
「そういうものじゃない！」
「やれやれ……」
その二人のやりとりを前にしてぽつりと言ったのはアニイラシオンの乗組員の一人、機関担当のアドルフだ。
「せっかくの初陣からの戻りだ。シャンパンでも開けてくれたっていいのに」
「そう言うなよ」
髪を逆立て赤色に染めた左舷防御担当のジャックがポケットからタバコを取り出しながら言った。
「俺は酒は飲めないんだ。出されても困るだけだ」
早くタバコ吸いてぇ。
ぼやくジャックは苦々しげに目の前での口論を睨むしかない。
その上空を爆音を立てた航空機が通過していった。
濃緑色に赤い丸。
日本機だ。
そこに襲いかかったのは上半身に翼だけつけたような奇妙な騎体、ピヤーというアサルト・アーマーだ。
日本機が突然の妨害に驚いて機体を大きくバンクした。
多分、哨戒飛行中にこの艦を発見したんだろう。
何もわからず、突然の妨害を受けた奴は気の毒なものだ。
「朝っぱらからご苦労なこった」
まるで病み上がりのように青白い顔で、眩しそうに空を見上げたのは、アニイラシオンの武装制御を担当するポールだ。
「近々、この海を通ってチンク共が日本へ侵攻するという噂がある。連中も殺気立っているんだろうな」
「北米であれほど負けてよくカネが続く。羨ましいぜ。すこし分けて欲しいもんだ」
「同感だな」

日本機が遠ざかっていく。
しばらく追撃していたピヤーは追撃を止めたようだ。
「……許可なく艦隊上空を通過って所で抗議かな？」
「た、多分……」
おどおどしながら言ったのは、アニイラシオンの右舷防御担当のジョルジュだ。
この中で一番背が高く細い体の割に気が弱く、ぼそぼそとした口調がむしろ哀れにすら感じられる。
「この艦隊は日本側にルートを通告していないんじゃないかと……」
「まぁ……なぁ」
アドルフは小さく頷いた。
「日本海側の情報を持っているのはロシアと中国と日本だけだ。王子が感心を持つのはわかる」
「有益な情報があったの？」
索敵担当のクリストフが悪戯っぽくアドルフの顔をのぞき込んだ。
「ルカンの部隊が諜報に動いた」
そう答えたのは、シエルの頭を小脇に挟んでグリグリ拳で嬲るミシェル王子だった。
痛い痛い！
そうわめくシエルの声に彼が気にしている様子はない。
「魔族の潜水部隊相手にかなりのチェイスになったぞ」
「逃げられたのかい？」
「ああ。派遣した機は全部オーバーホールが必要なほど酷使されたけどな」
「――――で？どうなんだ？ミシェル……王子」
「別にここでは何と呼んでもいい」
シエルを離したミシェルはアドルフに答えた。
「このバカの面倒まで見てもらってるんだ。感謝のつもりだ。アドルフ」
「継承権取得後でも友だとでも？」

「ふん……腐れ縁だ」
「面白いな……それで？」
「非情に興味深い結果だ。皆も来い。シエル、お前はそこで正座でもしてろ」
ミシェルはアドルフの肩を叩くと艦内へと導いた。
「何でだよぉっ！」
「うるさい。同軸機銃弾を無駄遣いしたバツだ――やつらの空飛ぶ城の撮影に成功した。これは面白いぞ。英独の艦隊と接触するまでに分析が終われば、それなりに日本海で我がフランスが主導権を握ることが出来るかも知れない」
「出来るのか？」
「やるのさ――俺なら出来る。信じろ、アドルフ」

いらん子中隊奮戦す　第十四話（後書き）

あ……キーが進まない。ここんとこ、うつが悪化して頭真っ白。死にたい。おかげで全然全てが進みません。みなさんごめんなさい。

その後、美柚姫達は無事に“鈴谷（すずや）”へと収容されたわけだが……。

「騎体のダメージは？」

ハンガーデッキで追いかけっこを始めたのは涼宮中尉と美柚姫だ。

肉体的には一般人として扱われる涼宮中尉を搭乗させる関係から、戦闘には参加しないはずなのに（それが生還のためにやむを得ないとはいえ）、アイバシュラと交戦を開始した美柚姫のおかげで、問答無用で戦闘機動のGによる気絶と吐き気の地獄に叩き込まれた涼宮中尉がMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）から引き出されるなり、美柚姫の胸ぐらを掴むと、あんたが全裸で乗組員全員に輪姦されるのを見届けるまで許さないとわめきだし、あまりの要求に逃げる美柚姫を拳銃片手に追いかけだしたのだ。

それをあきれ顔で見守る美夜は、配下の整備兵による破損判定作業を苦い表情で待つ坂城整備班長に訊ねた。

「一々聞くまでもねぇだろ」

坂城の表情はレイバンの闇に隠れてわからないが、言いたいことは美夜にもわかる。

“白雷改”達は装甲はボロボロ。

潰れた装甲や、装甲そのものが失われて、その接続部が露わになっている騎も多い。

出撃時に搭載していた広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）をまともに背負っている騎は一騎もいない。

「しばらくはC整備だな……なぁ、艦長。俺ぁ、あいつらを要塞攻略戦に出した覚えはないんだがなぁ」

「私も同じです」

美夜は答えた。

「偵察に行ってどうしてこうなったのか……」

「結果としてはいいほうかい？」
「結果オーライというには」

殺してやる、もしくは犯してやるぅっ！
いやぁぁぁっ！

「……ほど遠い連中です」
「訓練校よりか、精神病院にでも行ってこいって感じかい？」
「……上には上がいるといいますが、下には下がいるものです。あの問題児共より上というか下というか」
美夜の苦笑には不思議な虚無があった。
「……現実の話をしようじゃないか」
坂城はその虚無を拒むように訊ねた。
「これからどうするんだい？“白雷（はくらい）”隊はご覧の通り」
「……」
「しばらくは使い物にはならん。だが、あんたにゃ任務の中止命令は出ちゃいないはずだ。あんた自身、攻城砲とかいうデッカイ花火まで上げちまったんだ。タダで下がるわけにもいかんだろう？」
「……」
美夜は大きく息を吸い込むと頷いた。
「その通りです……まぁ、我々は北陸方面への陽動部隊をかねて近衛のお尋ね者を追いかけにいくわけです」
「芹沢瀬菜とかいったか？」
「ご存じですか？」
「さすがに銀行強盗に知り合いはいねぇよ」
涼宮中尉に足を掴まれた美柚姫がもがきながらも奮戦虚しく床に引きずり倒された。
瑞穂達が慌てて止めに入るが、涼宮中尉の手は止まらない。
戦闘服から装備が次から次へと脱がされていく。
まるでイモガイに捕食されようとしている魚のような美柚姫を前

に坂城は続けた。
「まさかと思うが」
「はい？」
「あの大月達に後を継がせるんじゃないだろうなぁ？」
「何か問題が？」
「――おいおい。問題だらけだろうが。大月達はかなり腕の面では落ちる。そのうえ、奴らは2騎だけだ」
「連携を組むことを拒んだ挙げ句、内乱寸前までの失態を犯したのは連中です」
美夜は言い切った。
「落とし前はつけてもらいます。無駄飯を食わせる余裕は、この艦には存在しません」
「そう……か」
戦闘服のジャケットがひん剥かれてインナーが露わになった所で、遂に美夜が床を蹴った。
「何をしているか！」
「……やれやれ」
罵声一つで動きを止め、美柚姫と涼宮中尉の元へと無重力空間を流れていく美夜の後ろ姿を眺めながら坂城はため息をついた。
「捨て駒を間違えているようにも見えるが……ま、整備屋の俺には関係ねぇ……か」

●“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム
「偵察にいけと」
いまだにエグエグとしゃくり続ける美柚姫と部隊の面々が並ぶ中、美夜は冷たくミーティングの司会を始めた。
その足下にはでっかいタンコブを作った涼宮中尉がぶすっとした顔で正座している。
「そう命じた覚えはあったが、よくも余計なマネをした挙げ句、余

計な損害を出してくれたものだな。朝倉大尉」
「で、ですけど」
「部隊指揮権を楯にするつもりはないが、独断で敵陣地に突っ込んだ挙げ句、部隊を危険にさらし、実際に広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）４基喪失、騎体を中破したことは確かだ」
「うっ……」
「本来なら、命令違反で独房入りと言いたいが、今回は状況が状況だ。私も生還した以上は文句は言わん」
「あ、ありがとうございます」
「……ただな？大尉」
「はい？」
「これだけは聞いておきたい」
「は、はい」
「アイバシュラの巣に、何故侵入した？」
「え？」
美柚姫は一瞬だけ戸惑った顔を見せたが、
「生き残るには、そこしかないと思いました」
そう、答えるしかなかった。
「空域からの撤退は判断としてしなかったのか？」
「現場指揮官としては、無理と判断しました。アイバシュラはすでに巣から出始めていました。あの状況で空から逃げられるという自信がありませんでした」
「それで、どうして巣に？」
「逃げられなくても、奴らに対抗できる状況を生み出すにはそれしかないと思いました」
「……よかろう」
美夜は頷いた。
「満点にはほど遠いが、現場の判断として最善であったというなら信じよう」
「あ、ありがとうございます」

「貴様は7名の生命と陛下のメサイアをお預かりした身だ。常に判断を誤るな」
「はいっ！」

キィィィッ

ズンッ！

金属音と共に艦が軽く揺れた。
皆が、その震動の意味を知っている。
それだけに、知らずに互いの顔を見合ってしまった。

「艦長？あの、教えて下さい」
そっと右手を挙げた亜紀が、本当に恐る恐るという表情で訊ねた。
「こんな時間に、誰が着艦したんですか？」
「も、もしかして」
亜夜は心配そうに眼が涙ぐんでいる。
「私達――クビ、ですか？」
「どうしてそうなる」
その二人の表情に優しく微笑んだ美夜が首を小さく横に振った。
「お前達のお仲間だ」

●“鈴谷（すずや）”メサイアデッキ
頭部に巨大なレドームを頂くという、その特異な形状のためにハンガーベッドに格納出来ず、両膝をついた“正座”状態になったその騎は、主要部と床を太い固定用ワイヤーで接続する作業が終わったばかりだった。
“征龍改（せいりゅうかい）”ＥＷＡＣＳ仕様二号騎。
さつきが駆った時の運用データを元に改装を受けた騎で、頭部の

レドームの形状が若干大型化している。
ハンガーベッドへの固定を諦めてまで実現化した大型化の結果は、戦域全てを把握する“神眼（ゴッド・アイ）”を具現化したと技師達は誇らしげに語っているが、現場でそれをマトモに信じる物好きはいない。
全てを見通せるなら、弾に当たって死ぬ物好きがいるものか。
それが現場のまっとうな見解というものだ。
頭部に設けられたMCR（メサイア・コントローラー・ルーム）と一体化したコクピットから出てきたのは、あの鵜来有珠（うくる・ありす）少尉だった。
「新型艦……かぁ」
EWACSの肩に立つ有珠（ありす）は、少しだけ伸びた髪をお下げにしたのを軽く指で弄びながらデッキの中を満足げに見回した。
「うん……ペンキや素材の匂いが抜けてない……いいねぇ」
「鵜来少尉！」
床を蹴った整備兵が近づいてくる。
「久しぶりだなぁ！」
「ええ」
有珠（ありす）はその整備兵の腕を掴むと肩部装甲へと誘導した。器用に装甲を掴んだ整備兵は有珠（ありす）の肩を軽く叩いた。
「腕前はどうだ？病院生活でなまったんじゃないだろうなぁ？」
「そっちに関してはすこぶる付きのままよ……もっとも、前の部隊の連中がいたら黙っているところだけど」
「違ぇねぇ」
「おかげでね……艦橋へ行くわ。着任のご挨拶しなくちゃね。私、お利口だから」
「はい」

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「北陸方面での偵察任務……か」
辞令を受け取った美夜は艦長席で有珠（ありす）を出迎えた。
「はい」

相変わらず本心をはっきりさせない、あっけらかんとした表情の後ろで何を考えているかがわからない。
ある意味、後藤のお仲間だと美夜はそう思っている。
「直接的には戦闘には参加しませんけど、お世話になります」
「偵察はそういうものだ」
美夜は辞令を高木に渡した。
「早期警戒機が来てくれたことは、こっちとしても心強いが……」
「はい？」
「護衛騎が着任していないのは？」
「それが……」
有珠（ありす）は、苦笑いしながらポリポリと頭を掻いた。
「護衛に回してもらえるはずだったアサルト・アーマーがこっちに回せなくなったと聞きました」
「この忙しいのに？」
「わ、私に怒らないで下さい。風翔というアサルト・アーマーが３騎配属されるはずだったのですが、この風翔の飛行システムでウィルス感染が判明して運用が停止されたんです」
「ウィルス……」
「ええ。戦闘機動に入るとシステムがダウンするって……侵入経路は不明とされていますけど、何しろこの部隊、部隊長が敵前逃亡だかで捕まったという曰く付きですからね。その辺じゃないかと邪推は出来るんですけど」
「……夏川大尉が喜びそうな話だな」
「はっ？」
「元第９中隊出が艦内にいる」
「げっ！」
有珠（ありす）がイ●ミと同じポーズをとった。
「ほ、本当ですか！？」
「何をそんなに恐れる必要がある」
「い、いえ……ですけど、地震雷火事憲兵っていう位で」

「随分、やましい橋を渡っているようだな？」
「勘弁して下さいっ！」
「……まぁ、いい。明日の午前中に“鈴谷（すずや）”とのデータリンク試験を行う。それまでは自室で休んでいろ。部隊との面通しは明日の朝、行う」
「はいっ！」

艦橋から退出する有珠（ありす）を見送った高木がそっと美夜に言った。
「やれやれ……肝心の前線部隊が届かない」
「……だな。津島中佐もここに来て、何を出し渋っている？」
「催促は？」
「したが返答もない。ここでは何もわからない」
「艦隊司令部は」
「私を恐れて梨の礫だ」
「……はぁっ」
「不運だと思ったろう？」
「鴨川の家のローンは始まったばかりなので」
「このご時世に、よく軍人やっててローンが組めたな」
「遺族年金が根こそぎですよ。契約内容をよく確かめておくべきだったと後悔すべきところです」
「……奥様は確か学校の先生だったか？」
「ええ。看護学校の。今の時代、むこうは花形仕事です。ローンだろうが何だろうが左うちわだそうで」
高木は自嘲気味に笑った。
「看護婦なんて嫁にするもんじゃありませんよ。ウチにいたって健康管理だなんだので気が休まる時がない！」
「ふん……心配されているんだろう。いい夫婦じゃないか。少なくとも」
「いや……」
「――夫婦の会話があるだけ」

「……まぁ、それはともかく」
高木はファイルを開いた。
「鵜来少尉の騎は狩野粒子下では貴重な偵察任務に適した騎です。高度1万5千メートル上空から広範囲にわたる動きを察知、母艦に通報することが可能です。山間地などによって“鈴谷(すずや)”から放たされる探知波の欠落を補ってくれます」
「最低でも、奇襲を喰らって泡を食うことは二度と無いか」
「奇襲で二度も沈んでは困りますからな」

約10分後。
「――失礼」
そんな艦橋に入って来たのは夏川だった。
「夜分、失礼いたします」
「――何だ」
「新型が到着したと聞きましたので」
「ああ。それがどうした？」
「自分達の所に着任の挨拶もないのですが」
「明日の朝、私から面通しするから自室にて待機するように命じた。不満か？」
「……着任と同時に、最低でも各部隊長に挨拶させるのが通例では？」
「時間を見ろ。今は交代時間だ。私もあと30分程で休息に入る。昨晩来の戦闘で皆、疲れているんだ。一人の着任で騒がせる必要も無いだろう」
ピーッ
不意に、艦長席のアームレストに装備されたインターフォンが呼び出し音を立てた。
「艦長だ」
「医務室です」

場違いとも思える女の子の声が耳に届いた。
あの水瀬という女の子からだった。
「何だ？」
「軍刑法に従い、医務担当者から最高責任者である艦長へ報告します」
その口調からして、何かに書いたんだろう原稿を棒読みしているのは確かだ。
「ん？」
「現刻より約5分前、艦内における不当暴力行為により負傷したと思しき者が医務室へ来訪しました。症状はごく軽度の打ち身ですが、患者の証言などからして殴られたものと」
「患者は誰だ」
「鵜来有珠少尉です」
「……」
インターフォンを掴んだまま、美夜が夏川大尉の方に振り向いた。
能面のように感情を押し殺した夏川は、直立不動の姿勢を崩そうとしない。
「大尉の階級章をつけた女性士官に誰何されて、答えたら殴られたそうです。
軍刑法では、教育を理由とした暴力行為は禁止されていますし、僕達医務担当者は、診断上、それと判断した場合、法令上、艦長に通報する義務が――」
「わかった」
美夜は答えた。
「鵜来少尉の容態は？」
「外傷はありませんし、内臓、骨共に正常。痛みも引いたようです。ただ」
「ただ？」
「腹部を数発、殴られたと証言が気になって」
「……腹部？」

「顔などは問題が露見する可能性が高いですから、私的制裁の場合、よくある手なんですけど」
「――犯人は誰かわかっている。貴様の初仕事だな。よくやった」
「ありがとうございます。記録は残しますか？」
「いや。ご苦労だった。このまま休んでくれ」
カチャ。
美夜はインターフォンを切った。
「夏川大尉」
「はっ」
「鵜来少尉を殴ったな？」
「証拠がおありですか？」
「少尉は女性士官に殴られたという」
「……指揮官の同伴も無く、艦内ですれ違いましたので誰何しました」
「鵜来少尉にどんな落ち度があったのか」
「面通しもなく、着任したての艦内を作戦空域上空で我が物顔で移動していれば不審者と思われて誰が文句が言えますか？」
「申請はしたんだろう？」
「信憑性がありません。憲兵隊に引き渡すことも考えましたが」
夏川は自信ありげに肩をすくめた。
「私も寛大な所はあります。指導しただけに留めました。少尉はそれが不服で殴られたなどという“言いがかり”をつけたのでしょう」
「貴様の言う“指導”は、軍法上は、私的制裁として禁止されていることは知っているな？」
「私的な欲望を満たすための行為ではありません。
あくまで上官としての指導であり、艦内の歩き方も知らないバカ者に対する必要かつ最小限度の教育です」
「艦にいる限りは、私が最高権力者だ。それに不満はあるか？」
「いえ？それが？」
「明日、ミーティングの席に出席しろ。今後のこともある。お望み

の面通しもしてやろう」
「――――はい」

●翌日　“鈴谷（すずや）”ブリーフィングルーム
「――――“鈴谷（すずや）”に乗る騎士はこれで全てだ」
敬礼を解いた有珠（ありす）の肩に美夜が軽く手を乗せた。
「もう一度、言う。偵察隊の鵜来有珠少尉だ」
美夜の横に立つ有珠（ありす）の顔はどこか浮かない。
そのはずだと、美夜も思う。
何しろ、昨晩、有珠を殴った張本人が腕組みどころか足まで組んで不遜な態度で有珠（ありす）を眺めているのだ。
眺めているというより、値踏みしているという方が正しい気がする。
王侯の前に立たされた戦争奴隷の方がまだ尊大というべき程、有珠（りす）は身を縮ませている。
「元の独立駆逐中隊の生き残りだ。腕は悪くないが、偵察部隊として活躍してもらうことになる。貴様等も戦場における情報がどれほど貴重なものかは言わずともわかるな？」
「「はぁい！」」
手を上げたのは亜紀と亜夜の姉妹だ。
まるで授業参観の小学生さながらに美夜に盛んに手を上げる。
きらきらと目を輝かせるその顔は軍隊には似合わないが、やられる方としては、
――――悪くないな。
軍人としてより、むしろ女として嬉しさを感じてしまうが、。むしろ、せめてこの程度の役得は認められるべきだと、依怙贔屓と言われても、美夜はそう思ってしまう。
「よし♪」
知らずに声が優しくなるのを止められない。

自分でこんな声が出せたのかと、内心で驚いたが止められるものではない。
頬を赤くしながらも、美夜は軽く咳払いするに留めた。
「コホン――鵜来少尉は、護衛部隊の配置があるまでは単独で行動してもうことになる」
「危険ですよ」
美柚姫が驚いた声を上げた。
「た、たった一人でなんて！」
「彼女の戦場は高度1万5千から2万の超高高度だ――その任務の狩野粒子影響下ではあくまで索敵と早期警戒任務だけ。ミサイルが誘導可能なら“鈴谷（すずや）”や貴様等と連携して敵を殲滅することも出来るが……贅沢こそ最大の敵だ」
「だ、大丈夫なんですよね？」
「単独の敵を狙う余裕を与えない戦法を考えることだ。いざという時には――」
ちらりと有珠（ありす）を一瞥した後、
「少尉も軍人としての覚悟はあるだろう」
「……」
その美夜の言葉に、ビクッとなりながらも、有珠（ありす）は小さく頷いた。
昨晩のことが未だに引きずっているのは確かだと美夜ははっきり直感した。
着任早々、先任下士官にシゴかれて、任務より恐怖心が先に来てしまった新兵と反応が一緒だ。
「……夏川大尉」
「はい」
答えると共に夏川がその足を組み直した。
上官に対する態度がなっていないのは誰だと怒鳴りつけてやりたかった。
「現在の“鈴谷（すずや）”の作戦目的は何か」
「芹沢瀬菜の逮捕です」

夏川ははっきり答えた。
「それ以外にはありません」
「――そうか、そうだな」
「その通り――私と大月はそのために第9中隊より派遣されてきました。私達を中心として、任務遂行のために全ては動くべきです」
「……」
「いままで、全てにおいて大目に見てきましたが、今後は、芹沢瀬菜逮捕という任務達成のためには、あくまで我々こそが中核として動いていただきたい」
「ち、ちょっと待ってよ」
異議を唱えたのは亜紀だ。
「つまり、あんたが進めといったら私達、進んで、あんたが死ねと言ったら、死ぬの？」
「――当然だろう」
ふん。
夏川は亜紀を鼻で笑った。
「そのためのお前達だ」
「わ、私達は消耗品じゃないよ！」
亜夜が席を立って抗議した。
「私達は人間だもん！」
「その前に騎士であり、陛下の狗だ」
「それでも！」
亜紀が食い下がった。
「あんたが陛下じゃない！」
「作戦全般において指導的立場にあるのは、経緯からしても私だ」
「何様のつもりよ！どこにあんたの命令に従えって書いてあるの！？」
「そんなことを一々言われなければわからんのか？この愚物が」
「愚物でいいもんっ！」
「――待て」

掴みかからんばかりに顔を真っ赤にした亜紀達の動きが止まったのは、美夜のその一声があったからだ。
「今から“鈴谷（すずや）”の編成を伝えておく。
本日１２００をもって“鈴谷（すずや）”の部隊編成が固定される。
メサイア隊は鵜来少尉の着任をもって、現状は3部隊に編成される」
美夜は脇に置かれた演壇代わりの段ボールの山に置かれたパネルを指で叩いた。
脇に広げられていたスクリーンに映像が投射された。
「本来なら5部隊だが、ベルゲ隊と狙撃隊、それから斬込隊が加わるべきだが、これらは現状でも騎体補充のメドが立たない以上、閉店状態だから考えるな。
芹沢瀬菜逮捕を専門任務とする“独立執行隊”と鵜来少尉の“偵察隊”、そして朝倉大尉達の“八八独立任務部隊”の三部隊で当面はメサイアを運用する」
「独立……執行隊？」
「大月、夏川大尉両名で編成してもらう。両名は脇目もふらずに芹沢瀬菜逮捕に邁進してもらいたい」
「ほう？」
夏川はそれを聞いて、ニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべた。
「独立部隊……ですか」
「そうだ。この“鈴谷（すずや）”は貴様等の母艦であり、その任務を果たすためには努力を惜しむ者はいない。そう心得てくれていい」
美夜の発言を「“鈴谷（すずや）”は独立執行隊の母艦として協力を惜しまない」。そう理解した夏川は、目を細め、敬礼した。
「自発的かつ献身的なご協力に感謝いたします」
夏川はあくまで世辞として言った。
ただ、美夜が黙って頷く以外の反応を望んでもいなかった。
しかし――
「何のことだ？」

美夜の態度は冷たかった。
「――――はっ？」
きょとん。とする夏川に美夜は言い放った。
“鈴谷（すずや）”は“鈴谷（すずや）”で行動させてもらう。そう言ったのだ。貴様等の都合なんて知るか」
「し、質問っ！」
手を上げたのは亜夜だ。
「艦長、その独立執行隊と、私達八八独立任務部隊はどっちが偉いの？」
「平等だ」
「びょーどー？」
「立場は対等だ」
「なっ！？」
愕然とする夏川に美夜は表情を変えない。
「艦長っ！」
夏川が怒鳴った。
「任務は芹沢瀬菜ですっ！それを！」
「わかっているさ。わかっているから、この編成だ。夏川大尉、「独立」の意味を考えろ」
「はっ？」
「貴様達二人が一々、周囲を気にせずとも作戦行動がとれるように権限を付与したのだ。文句を言われるのは心外だ。
貴様達に独立した作戦立案権限を与えるのと同様に、私の部下にも対等の権限を与えて何が悪い。以降、どちらかの協力を必要とするなら、相手に頭を下げる。それは当たり前のことだろう」
「おかしいです！任務遂行においては上位指揮権は私に！」
「ない」
「……は？」
「隊長は貴様ではなく、大月だ」
「あっ！」

目を見張った亜紀がはっとなって言った。
「つまり、このババアはヒラじゃん！」
「あっ！どうして今まで気付かなかったんだろう！」
「……」
愕然となった顔が蒼白からみるみる真っ赤に変化する夏川の体は痙攣したように震えていた。
「階級しかないじゃん、このババア！」
「――っ！」
夏川は美夜を睨み付けると怒鳴った。
「結構！」
「任務に対する不誠実な対応を受けても我々2騎で十分っ！」
夏川はそれだ言うと、敬礼もせずに部屋を出て行ってしまった。
「大月」
「はっ」
「――隊長として不満はあるか？」

動く世界　第一話（後書き）

ネタ大募集です！

●●ネタ大募集！●●

・今回募集するネタは、何と人類、魔族双方のメサイア以外の兵器です！

・簡単な設定上の縛りさえ守ってくだされればＯＫです。

縛りは以下の通りです。

設定の縛り

その１：電子装備搭載不可！

ミサイルやレーザーは積めません。ロケットＯＫ

ＮＧ例：レーザー誘導砲弾搭載型の戦車。

その２：ジェットエンジン類不可！

狩野粒子影響下でジェットエンジンは爆発します。

その３：対歩兵用に有効な口径は８．５ミリ以上！

オーク兵の甲冑は８．５ミリ以上のライフル弾でないと“貫通”出来ません。

ＮＧ例：ＡＫ－７４の発展型。５．４ミリ弾でオーク兵をなぎ倒す。

その４：衛星誘導不可！

総じて、ＷＷ２あたりまでの技術レベルを考えてください。

電子装備が使えない世界で使いモノになる爆撃機から戦闘機、戦車、装甲車から歩兵用の小銃まで。場合によってはガンダムの“ビックトレー”のような大物まで、ジャンルは広いです。

・対象国家はドイツ軍、イギリス軍、フランス軍、その他どこでも結構です。

・架空の国ではラムリアース帝国なんかもありますから、必要なら国家から作ってくださってもＯＫです。

・また、その兵器を使う部隊、兵士などの設定も大歓迎です！

・登場人物の設定は常時募集中ですっ！

・どうせなら自衛隊現役の方、名前載せてみませんか？（笑）

・ロシア軍と中国軍は目下急募状態ですので、両軍マニアの方、特によろしくお願いします！

動く世界　第二話

●東京都某所　天原骨董品店

「やっと連絡（アクセス）出来たと思ったら」

「申し訳ない」

神音の冷たい視線には、はっきり相手への非難の意思が込められている。

その視線の先で営業用スマイルを浮かべているのはユギオだ。

「アイバシュラの件ですか？」

「あんな大量出現は、はっきり商会として大迷惑です。大体、アレの養殖技術を確立したのはウチのグループです。世論が五月蝿いの何の」

「とすると、神音様は、養殖の特許の侵害でお怒りなのですか？」

「まさか。それだけならあなた相手に裁判でも起こしますよ」

「さてさて。天原商会絡みの裁判を引き受ける命知らずな裁判官が、魔界にいるでしょうかねぇ……」

ユギオはソーサーに乗せられた紅茶に手を伸ばした。

「先の軍競争入札侵害の裁判の件は世の常識」

「“話”そのものは存じています。ですが、実行犯がウチだという証拠はないでしょう？」

「その通り。未だ犯人は不明。ただ、裁判長宅の隣の家に燃料を満載した大型車が飛びこんだり、速記主席担当官の娘さんが何者かに監禁され、後に解放されたり、裁判官の一人が行方不明の挙げ句、頭を破壊されて植物人間になって発見されたり……いやいや。彼は優秀にして敏腕な裁判官として知られていた逸材でした。それが今や、主に召されるまで法廷じゃなくて施設のベッドの上。

それだけじゃない。

対立したのは……カールメーソン社でしたっけ？

直接に裁判沙汰を引き起こした幹部は家族ごと交通事故……弁護

士の乗った車が白昼、裁判所の真ん前で銃撃を受けもした。車は蜂の巣、弁護士は無事だったものの、警護官6人が主に召された」

ユギオの視線は、目の前の神音を試すかのようだった。

「人間界の武器が使われた特異な事件ではありましたが、あの見せしめじみた警告は確かに効いたのでしょうねぇ。判決は延期されるという大方の予想を裏切って貴社の勝ち」

「人を犯罪者みたいに」

「おやおや？別にあなたが黒幕だなんて言ってませんよ？ただ、私は事実を述べただけ」

「……よくも」

「ここまで知った上で、あなた方を敵に回すほど、私もバカじゃない」

ニヤリとイヤな笑みを浮かべたユギオがカップの中身を飲み干した。

「あなたは、私を殺そうと思ったら、ここに毒なり何なり入れることも出来た」

「そのカップはお気に入りなの」

眉一つ動かさず、神音は言った。

「それを毒などで汚したくないですし、何より、あなたに使わせているだけで忍耐力の限界なのです」

「私の誠意は通じないと？」

「誠意の前に無実の証拠を持ってきなさい。それが筋道でしょう？」

「……そんなものがあるなら、何を持ってこいと言うのです？具体的に教えて下さい」

「自分で考えなさい。オツムはあるんでしょう？」

「厳しいなぁ……かのんさん？おかわり」

「……百歩譲ってアイバシュラの件はあなた」

ユギオの顔を見た後、神音は言い直した。

「――中世協会ではないとしましょう」

「ありがとうございます」

「仮定に礼を言うなんて、余程切羽詰まっているようね」
「当然でしょう？中華帝国も、私の上司もカンカンです。はっきり言いましょう。
今回の件で、中世協会上層部は、むしろ天原商会が人間界で暴走を始めたのではないかと疑っているのです」
「ウチが？」
「やり口があまりに派手ですしね……ユーラシア大陸の資源確保のためにアイバシュラの巣をかねてより用意して、このどさくさ紛れに人間界での既得権欲しさに仕掛けたのではと」
「聞き捨てならない話ね」
「ところが、肝心の大陸での資源獲得権を、ダユー様達に無償に近い条件で放棄したことは、その論法だと成立しない。じゃあ、天原商会の狙いは何だ？となる」
「……それを調べに東ここへ？」
「こちらも混乱しているのです。何しろ、この日本での戦況は安定していません。こちらに少しでも有利になるよう、中華帝国を買収して、大陸側からの人類反攻ルートを潰そうと暗躍していたというのに、このアイバシュラの騒ぎです。もし、本当にあなたの仕業なら止めて頂きたいと思ったのですが」
「無駄骨ね」
「そのようでした――本当に、お心当たりがないのですか？」
「はっきり、ないです。あれほどの大規模なアイバシュラの巣をどうやって隠していたかさえ不明。ウチの諜報部門も地獄の釜を開けたような騒ぎになっているわ」
「中世協会でもない……あなた方でもない……ヴォルトモード軍でもない」
「……そういうのを第三勢力というのよ？知っていました？」
神音はティーカップを手にはっきりと言い切った。
「天原商会総帥として。我が社は、大陸のアイバシュラ出現には一切関与していません」

「……信じましょう。信じるしかない。ただ、信じた上でも、これはゆゆしき事態です」
「今後においては連絡を密にして欲しいですね。せめてこちらからの呼び出しに応えて頂きたい」
「善処しましょう。そちらでも情報を掴んだら是非」

ユギオが去った後、執務室へ入ってきたのは黒髪の美女、瀬菜だった。
「お加減が優れませんか？」
瀬菜がそう訊ねずにはいられなかったほど、神音の表情は硬かった。
紅茶が冷めてくのも構わずに、ソファーに頬杖をついたままだ。
「……そう見える？」
「……大陸での動きが心配ですか？」
「そうね……」
神音はそのままの姿勢で小さく答えた。
「今、ユーラシア大陸で動く理由がわからない。ヨーロッパではなく、何故、極東なのか」
「というと？」
「アイバシュラで人類の粛正をやるというなら、ヨーロッパや北米を狙えばいい。だというのに、何故、人の少ない極東にあんなアイバシュラをコロニーの規模で発生させたのか。その理由がどうにも見えてこないのよねぇ……」
「資源獲得は？」
「人類の地下資源にどれ程の意味があるの？しかも、この日本にまで……？」
「そういいながら、かつては御主人様もアフリカと南米ではしっかりと」

「資源を人類へ転売して利ざや稼ぐためよ？政治的、地政学的、経済的、すべての面で狙いそのものが理解出来ない」
「――理由がわからなければ、ビジネスチャンスにつながらないですからね。私も出来る事ならお役に立ちたい所ですが」瀬菜はティーセットを片付けながら言った。
「人間である私風情でお役に立てるのはこの程度でしょう」
「何を言うの？北陸方面の仕事は順調に消化してくれて助かるわ」
「ありがとうございます。新しいお茶、淹れましょうか？」
「お願い……で、瀬菜」
神音は体を起こした。
「はい？」
「あなた、人類相手に少し遊びたいって言ってたわね」
「ええ」
瀬菜はちょっとだけ恥じるような笑みを浮かべた。
「単なる思いつきというか、私の増長のようなものです。ですから」
「いいわよ？」
「えっ？」
「こそ泥扱いされっぱなしのこの辺で、でっかく反発したら面白そうじゃない」
「よろしいのですか？」
「結果は報告しなさい？私が楽しめるほど、思い切り派手にやって見せて」

●それから数時間後　東京都千代田区　宮城内
「……ったく」
ガチャ。
乱暴に電話を切ったのは辻中佐だ。
「自分の所属と指揮権がどこにあるのかもわからなくなったのか」
電話の相手は夏川だ。

“鈴谷（すずや）”と騎士達が全く協力的ではない。こんなことでは任務を遂行できないから厳正に処罰してくれ。
夏川の言い分を、辻なりに解釈するとこうなる。
そして、それに辻が引き出した答えは一つだ。
ふさげるな。
たったこれだけ。
これだけでたくさんだ。
もうお前は第９中隊の人間ではないし、俺にはお前の面倒を見る義務もない。その程度のことがどうしてわからない？
夏川にはそう言いたかった。
「……ったく」
原因なんてわかっている。
夏川という騎士は、彼女自身こそが第９中隊だと思い込んでいるフシがあることを、辻はうすうす感じてはいた。
近衛騎士達の取り締まりを任務とする第９中隊。
その姿を具現化した存在が自分だとあの女は自分に任じて疑っていない。
自分と職権や地位を混同している。
それが、この電話ではっきりした。
「厄介な話だ」
そう思う。
すでに第９中隊から登録が抹消されたにもかかわらず、未だに中隊に付与された権限が自分にあると思い込んでいる辺りが、その証拠だ。
「後藤さんに紹介したのはまずかったかな。やっこさん、上手く使ってくれるかなぁ……」
ふと、そんな心配にかられた辻の前に当番兵が郵便物の山を置いた。
封筒や小包、ハガキ、中身が何だか、考えるだけでうんざりする。
「あーあ……今度はどこからだ？」

辻の処理すべき書類は多い。
部下の使った経費の請求書から、タレコミ、それから部下の行動に対する他の部隊や部署からの抗議文、逮捕者から、もしくはその関係者からの助命嘆願書。その他細々としたものまですべてだ。
この仕分けがまず大変な作業となるあたりは、どこの管理職も変わらない。
戦時下という事情もあって、原始的ではあるが郵便としてこのテの書類が送られてくる現状、自分の仕事量が山となって見えることは、辻にとってもやる気を奪われるという意味ではかなり負担だった。
「こんな時に余計な仕事増やすな。バカめ」
毒づくと、辻は郵便物の山の一番上にあった小包を無造作に掴んだ。
「……ん？」
辻がおかしい。と思ったのも無理はない。
郵便局の小包専用封筒。
長方形の軽いがかなり固いものが入った感触があった。
中身は書類じゃない。
宛先は第９中隊の大月大尉となっている。
個人宛というにしても、ここで中身を確認する権限が辻にはある。
この室内へ来るまでにレントゲン他の検査が終了したシールが小包に貼り付けられているのを確認した後、辻はペーパーナイフで包みを破った。
「……なんだこりゃ」
小包として送られてきたのは、“大月殿”と達筆な筆で書かれたのし紙と、それに包まれた桐箱。ご丁寧に水引きで結ばれている。
「あいつ、結婚でもするのか？」
馬鹿な。
大月の性癖を思い出し、辻は小包の包みをもう一度見た。
小包に張り付けられていた発送者の欄。

そこに気付いた辻は、険しい顔で桐箱を睨み付け、しばらく唸った後に水引きにペーパーナイフを入れた。

●“鈴谷（すずや）”艦内

「芹沢瀬菜から？」

「そうだ」

驚いたという顔の大月の前に映るモニター。その向こうでは辻が顔をしかめていた。

「今度、福井市内の宝石店を襲いますので云々と、水引き付きの桐箱に収められた、奉書紙に書いたヤツで連絡してきた。お前、かなりコケにされているのか、それとも相手がおかしいのか」

「……」

「芹沢瀬菜の足取りがここのところ途絶えていたのは事実だ。ここに至って向こうさんから連絡をくれたのは感謝すべきかな？」

「罠、とは思いませんか？」

「今更、お前を罠にかけて何をしようというんだ？」

「……それは」

「第9中隊のお前を名指しで指名してきた意味は何だ？大体、お前を罠にかけて潰したところで、組織として追っている以上、それに大した意味がないことは、あいてだってわかっているはずだ」

「……なら、中隊長は芹沢瀬菜の意図をどのように？」

「はっきり言えば」

辻は言った。

「お前に対する挑発だ」

「挑発？」

「挑戦状。ともいうか？お前に対して、挑んでこい。私を捕まえてみせろと、そうからかっているともいえるな。いい意味でも悪い意味でも、お前はお誘いを受けている」

「……っ！」

大月の握られた拳に力が籠もった。
「おいおい。俺に怒ってどうする」
「し、失礼しました」
「……追えそうか？」
「自分に送られてきた挑戦状ですよ？」
大月は答えた。
「自分一人でも、追います」
「意気込みやよし……だがな」
はぁっと、辻はため息をつくと、デスクに身を乗り出すようにして言った。
「死に急ぐな。お前に死ねと言いたくて連絡したんじゃない」
「……」
「夏川が随分と問題を起こしているようだな」
「……申し訳ありません」
「隊長というより、あの厄介モノはいずれ始末することになるだろう」
そのあっさりとした口調の裏を考え、大月は言葉を詰まらせた。
「主人に刃向かわなくても、自分と主人の区別がつかなくなったような狗を、主人が必要とする。そう思うか？」
「……」
「夏川にはもう少し分別があると思っていたが、権力に溺れるとああなる」
「……恐ろしいと思います」
「この中隊が解体された後、あいつがそれでもああなら、始末は確実だ」
「本人には警告しておきますか？」
「やめろ。こんなことは隊長として知っておけばいい程度のことだ。まして他人に言われるより自分で気付くべき程度のことだ」
「……」
「――我が身が心配か？」

「自分は、死ぬことを恐れません」
「気概だけで生きられるのは若い証拠だ。その割に夏川には随分、尻に敷かれた挙げ句、周囲の信望を失ったらしいな。平野中佐のまとめた周囲の人物評価はかなり厳しいというか、信望を失った分、夏川よりひどいな」
「……」
「お前も苦労するぞ？何故だ」
「はっ？」
「何故、夏川の尻に敷かれるような体たらくになった」
「……お笑い下さい」
自嘲気味に大月の口元に歪んだ笑みが浮かんだ。
「自分は、どうしても女性が苦手なのです」
「苦手？」
「殴ってやろうと何度も思いましたが、夏川大尉の気迫というより、あの女としての匂いを嗅いだだけで体がすくむのです。殴ることなんて出来もしない。もし、夏川大尉がメサイアにでも乗っていてくれたら、殺すことも躊躇わなかったでしょう。しかし、生身の大尉となると」
「……お前も病気ということか」
「かもしれません。いえ、そうでしょう」
「その原因がお前に挑んでるんだ……その相手をしてこそ、お前は前に出ることが出来る。俺はそう思うがね……」
「中隊長」
「……めぼしい情報もない以上、ここは出ろ。そのためにも、必要なら周囲に頭の一つも下げてやれ。土下座はいつだってタダだ。それもわからんあの夏川については、無視しようがなにしようがかまわん。俺からも平野艦長には言っておく。お前も、あんなクレーマーじみた気違（メス）一匹、排除することに躊躇うな」
「は……はい」
「芹沢瀬菜から送られてきたお前へのこのふざけたラブレターはメ

ールで送ってやる。確認しておけ」
「……了解しました」

通信室から出た大月を待ち構えていたのは、その夏川だった。
「探したぞ！」
戦闘服に身を包んだ夏川が途端に怒鳴った。
予想外の展開に、大月ははっきり気圧されてしまった。
辻からはいろいろと言われたが、こうも唐突に顔を合わせるとどうして良いかわからなくなる。
「……あ、あの」
大月が辻に言ったことは本当だ。
ふわっと鼻腔に感じた香水の匂いだけで大月の戦闘意思は根本からへし折られた。
体がすくんでしまい、なにも言えなくなる。
「さっさと戦闘服に着替えてこいっ！」
その大月に夏川は容赦が無い。
「他の連中はすでにシュミレーション訓練に動いているぞ！」
「えっ？」
「あそこまで言われて悔しくないのか！？我々は我々でやることやって、あいつらを見返してやるんだ！わかってるのか！？」

●東京都葉月市
「ったく」
稼働するシミュレーターを睨みながら紅葉は毒づいた。
「騎体は壊す、連携は未だとれない……何のために生きてるのよ。こいつら」
「言い過ぎな気もしますが」
紅葉の横に立って、じっ。とシミュレーションシステムが生み出す疑似空間での戦闘推移を眺めているのはほむらだ。

「私の騎も狙撃隊も未だ改装が進まない現状で頑張っているんです」
「……私が悪いような言い方ね」
「誰も悪くないと言いたかったのですが」
「あなたの言葉には悪意があるのよ」
「津島中佐に言われるとは心外です」
「あ？」
「何でもありません。自重しますと言いたかったのです」
「そうね……で？」
紅葉は訊ねた。
「このアホ共の悪あがきを、ほむがどう判断するかと思ってね」
「……面白い人達」
ほむらはモニターから目を離さずに言った。
「そう思います」
「存在自体がギャグといえばその通りよ。でも、そんなことを聞きたいんじゃないの」
「連携がとれない理由を探れと、そう仰せですか？」
「そうよ。他に意味ある？」
「……これで」
モニターの中では４騎が必死になって包囲する敵から生き残るために戦い続けている。
「生き残ってきたことそのものが驚きですね」
「でしょう？」
「個々の技量は高めですけど……この部隊では誰が加わろうと、これ以上の戦果は期待できないでしょう」
ズンッ！
室内に電子合成された破壊音が響く。
ピーッ。という警報と共に、１騎の撃破判定が宣言された。
すると、次々と生き残ったはずの３騎が撃破されていく。
たった１騎が倒れたことがきっかけに、まるで連鎖反応を引き起こしたように部隊は壊滅した。

「ったく……何度やってもこうなのよ」
「これで当然なのです」
「は？」
「問題は、騎士の技量ではありません」
「じゃあ？」
「武装です」
「武装？」
「戦棍。薙刀、大型戦斧、小太刀……」
ほむらは個々の主要武装を読み上げ、
「こんな武装がバラバラな部隊では連携なんてとれるはずがない」
「何で？」
「何で……って」
相手は六本線の“見通者（シーカー）”だというのに、それがわからないことに、ほむらは正直、面食らった顔になった。
「わかりませんか？」
「わかんないから聞いているのよ」
むっ。とした顔の紅葉が答えた。
「武装については前の部隊だって槍だの薙刀だの使って、連携も組んでいたし、しっかりと戦果も出していたわ」
「原則論として、長物と刀剣類をバラバラに使って連携なんて組めるはずがないです」
ほむらは首を横に振った。
「ハルバードの山崎中尉と薙刀の柏中尉、槍の早瀬中尉と斬艦刀の都築中尉……わかりませんか」
「……？」
「相互に武器のリーチがほぼ同じ武装を使っていたから、フォーメーションも容易に組めたんです」
「斬艦刀は長いから槍やハルバードといった武装とも連携が組めた。ところが」
「そうです。互いのリーチがバラバラなので、連携なんて組めるも

のではないです。フォーメーションがどうしてもいびつになって…
…敵にしたら、そのいびつさを上手く突けば簡単に突き崩せる相手
にすぎなくなる……それが、この連鎖的敗北の原因です」
「……どうしろと？」
「こんな滅茶苦茶な武装選択した部隊なら、自分でも連携を組める
自信はないですが。簡単な工夫で大分結果が違ってくるでしょう」
「工夫？」
「はい」
ほむらは頷いた。
「フォーメーションの配置を変えてみて下さい。それで大分違って
きます」

動く世界　第二話（後書き）

最近、戦闘シーンがなくてごめんなさい。
とりあえず、ネタは大募集中です！

●●ネタ大募集！●●
・今回募集するネタは、何と人類、魔族双方のメサイア以外の兵器です！

・簡単な設定上の縛りさえ守ってくだされればＯＫです。
縛りは以下の通りです。

設定の縛り
その１：電子装備搭載不可！
ミサイルやレーザーは積めません。ロケットＯＫ
ＮＧ例：レーザー誘導砲弾搭載型の戦車。

その２：ジェットエンジン類不可！
狩野粒子影響下でジェットエンジンは爆発します。

その３：対歩兵用に有効な口径は８．５ミリ以上！
オーク兵の甲冑は８．５ミリ以上のライフル弾でないと“貫通”出来ません。
ＮＧ例：ＡＫ－７４の発展型。５．４ミリ弾でオーク兵をなぎ倒す。

その４：衛星誘導不可！

総じて、WW2あたりまでの技術レベルを考えてください。
電子装備が使えない世界で使いモノになる爆撃機から戦闘機、戦車、装甲車から歩兵用の小銃まで。場合によってはガンダムの“ビックトレー”のような大物まで、ジャンルは広いです。
・対象国家はドイツ軍、イギリス軍、フランス軍、その他どこでも結構です。
・架空の国ではラムリアース帝国なんかもありますから、必要なら国家から作ってくださってもOKです。
・また、その兵器を使う部隊、兵士などの設定も大歓迎です！

・登場人物の設定は常時募集中ですっ！
・どうせなら自衛隊現役の方、名前載せてみませんか？（笑）
・ロシア軍と中国軍は目下急募状態ですので、両軍マニアの方、特によろしくお願いします！

動く世界　第三話

右翼　　美柚姫騎（主要武装：戦棍）
中央右　亜夜騎（同：小太刀）
中央左　はるか騎（同：なぎなた）
左翼　　亜紀騎（同：大型戦斧）

いつの間にか、これがいらん子中隊の定番のフォーメーションになっていた。
理由なんて何もないけど、気がついたらこうなっていた。
訊ねられたら全員が全員、そう答えるだろう。

敵を真っ正面に捕らえたら、はるかと亜夜が対応し、右翼と左翼は美柚姫と亜紀が担当する。ただそれだけなのに、ほむらは連携がとれない理由は、この配置にあるとはっきり言い切った。
「シミュレーター空いてますか？」
「“白雷（はくらい）”用？」
「――川上少尉」
ほむらは、自分達のやや後ろで様子を見守っていた麗央に振り返った。
「えっ？」
「シミュレーション、参加出来ますか？」
「えっ？この状況に？」
「そう」
ほむらは頷いた。
「いずれ、あなたの仲間となる４人です。何か問題が？」
「――ない、けどさ」
麗央は困った顔で紅葉の後ろ姿を見た。

1騎加えるなら、“白雷改”に乗る自分が適格であり、“死乃天使”のほむらでは意味がないことに、麗央はその時になってようやく思い至った。

だから、唐突な問いかけに戸惑いながらも答えた。

「い、いいよ？すぐ参加出来る」

“死乃天使”用のシミュレーションは？」

「――設定してないから、そう簡単には出来ない。第一、あんたとあいつらじゃ勝負にならないわよ。弱い者イジメの手助けは出来ない」

「ですが」

「……麗央の分はアイドル状態で待機させているから、搭乗が終了するまで休ませてあげるか」

「ご自由に」

「中隊全騎へ。コクピット内で少し休んで。もう一騎、お仲間増やすから」

「もう一騎？」

「そう」

モニターの向こうで首をかしげた亜紀に、紅葉は答えた。

「川上麗央少尉。“白雷改”に関してはあんた達の先輩格よ」

「使えるの？その子」

「失礼ね。あんた達よりずっとよ」

シュミレーションシステムへ搭乗すべく部屋を出る麗央の後ろ姿を見送りながら、紅葉はほむらに振り返った。

「で？次のお望みは何？」

「次から配置をこう変えて下さい」

ほむらはいつの間にか用意していた、バインダーに挟まれたＡ４サイズのメモ帳を紅葉に手渡した。

「何何？……って」

「何か？」

「あんた……」

紅葉はあきれ顔で言った。
「字、汚いわね」
「――――っ！」
瞬時に顔を真っ赤にしたほむらが睨むような視線になるが、厚顔無恥が白衣を着ているような紅葉が動じるはずもない。
「何よ、小学校低学年でもここまでのたくったような字は書かないわ。あんた、ペン習字習った方が良い」
「……読めませんか？」
「何とかね。でも、これじゃあんた、ラブレターも書けないわよ？恥ずかしくて」
「……っ」
唇を噛み締めたほむらの口元がへの字にまがった。
よっぽど気にしていたのか、それとも単に悔しいのか、体が小刻みに震えている。
「――――でもまぁ」
ぽりぽりと、赤いボールペンで字の間違いを正しながらも紅葉は言った。
「言いたいことはわかった」

右翼　美柚姫騎（主要武装：戦棍）
中央右　亜夜騎（同：小太刀）
中央左　はるか騎（同：なぎなた）
左翼　亜紀騎（同：大型戦斧）

従来のこのフォーメーションが、麗央の参加によって

右翼　麗央騎（主要武装：ハルバード）
中央右　亜紀騎（同：大型戦斧）
中央左　亜夜騎（同：小太刀）
左翼　はるか騎（同：なぎなた）

指揮兼後衛　美柚姫騎（同：戦棍）

こう変化した。

「……あの」

意外にも、一番に口火を切ったのは美柚姫だった。

「な、なんで私が後方に下げられるんですか？」

その顔は、驚きと不満を露骨に表していた。

「隊長だから」

ほむらより先に、紅葉が言った。

「前線部隊の指揮を誰もとっていない。みんながみんな、悪く言えば勝手な、良く言っても個人の判断で状況に対処している。これじゃ烏合の衆と同じでしょ？」

ちがう？

ちらとほむらの方を向いた紅葉の視線がそう訊ねていた。

ほむらはそれを認めるかのように首を横に振った。

「後方であんたは指揮をとりなさい。指揮官は前線でカタナ振り回すだけが仕事じゃない」

「――了解」

「はぁい！次は私っ！」

不承不承という顔で黙った美柚姫に続いたのは亜紀だ。

「何で？私、今まで通りの端っこがいいっ！」

「――却下」

言ったのはほむらだ。

「あなた達姉妹は中央」

「だから、何でっていうか、あんた誰？」

「――明貴ほむら少尉」

「……もしかして、あの“死神”さん？」

死神。

かつてほむらが忌み嫌われた時に使われた渾名。

それを使う亜紀に若干の驚きはあっても敬意はどこにもない。
「……」
ほむらは無言で頷いた。
「――で」
亜紀は眉間に皺を寄せた。
「私達が、なんでその死神様のご意見に従わなきゃいけないわけ？」
「命じてはいない。死にたくなかったらそうしたほうがいい。そう、津島中佐に言っただけ」
「……へぇ？」
割り込むように亜夜が意地の悪い笑みを浮かべた。
「私がこのポジションなのも？」
「――そう。あなた達は後ろに対する注意力が弱いけど、前については強い」
「褒めてる？」
「そう聞いて。それと」
じっ。と二人をみつめたまま、ほむらが黙ってしまった。
「――私が佐野亜紀」
「亜夜だよ」
「……亜夜少尉が左なのは、利き目が左で、亜紀少尉が右だから」
「へっ？」
「亜夜少尉、元は左利きじゃない？」
「……何で知っているの？」
びっくりした顔の亜夜が訊ねた。
「左じゃだめだからって、施設で右利きに慣れろっていわれたの！」
「――二人とも、こうやって？」
ほむらは右手を水平に伸ばすと銃を構えるように手を握り、片目をつむって見せた。
「こう？」
「こうかな？」
ＳＴＲシステムから右手を外した佐野姉妹が同じように手を握り、

片目を閉じる。
　すると――
「……ほら」
　ほむらが言わんとしていることは紅葉にもはっきりわかった。
　共に右腕を伸ばして片目を閉じているのに、亜夜だけが左目ではなく、右目を閉じている。
　利き腕と利き目が違うのだ。
「それ、利き目が左の証拠。注意力が右より左のほうが強いはず」
「……そ、そういうもの？」
「多分ね。問題あれば左右で入れ替えるだけ」
「両翼を長竿武器使用者（ポールウェポン）で固めることで、両脇への攻撃にはリーチを活かした防御が可能になる。必要に応じて中央か後衛が対処する時間がわずかでも確保出来る」
「……な、成る程？」
「す、すごいじゃない」
「論より証拠――シュミレーション、やってみて」

「敵部隊接近中、騎数８。騎種はグレイファントムＭ６４」
　シミュレーションシステムによって作成された合成音がＭＣ（メサイア・コントローラー）の代わりに状況を教えてくれる。
　シミュレーションシステムに搭乗した騎士が戦闘に負けた場合、よく口にする言い訳が、相棒であるＭＣ（メサイア・コントローラー）の不在が原因だという主張。
　あくまでシミュレーションシステムは騎士のための訓練装置に過ぎない。
　騎士は騎士だけで戦闘に勝つことを求められる。
　そんな彼等は、それが単なる甘えであることを後にいやでも思い知らされるのだ――実戦で。
「距離、３００。戦闘展開中」

モニターに映し出されるのは、本当に合成映像なのか訊ねたくなるほど精緻に描写されたグレイファントム達。
手には大型の戦斧が握られている。
さっきから何度も交戦しては敗北を続けた相手だ。
数十種類もある攻撃パターンは、システムによりランダムに決定されるため、一度負けたからといって、二度目も同じ手ではこないのが頭の痛いところだ。
３００メートルというメサイア戦では至近距離で横２列に並んだグレイファントム達と対峙する中、美柚姫はこのポジションに自分が置かれたことに感謝すると共に、あの明貴少尉の発案だろうが、指示の適切さを痛感していた。
前方に並ぶ敵部隊。そして目の前に並ぶ味方。
彼我の部隊同士の配置がはっきりわかる。
だからこそ、薙刀とハルバードで武装した騎体を両翼に配置することのただしさもわかるし、武器の構え方から佐野姉妹が左右正しく配置されていることも何となくでも理解出来る。
――スゴいな。
美柚姫は唾を飲み込んだ。
――これが、指揮官のスタンスかぁ。
その美柚姫の前で、グレイファントムの武器がしっかりと構え直された。
突撃の準備だ。
実戦ではこんなことはない。
一々、敵の面前で武器を構え直すなんてことするのは、“よーい、ドン”で襲ってくるのは同じだ。
でも、この後に何が起きるかそれでわかる。
シミュレーションが示す、空想故の数少ない“甘さ”だと美柚姫は思う。
「全騎、来るよっ！」
考えるより、口が先に動いた。

「対質量攻撃、防御態勢っ！」
前衛を担当する佐野姉妹騎がシールドのエッジを地面に深々と突き刺し、脚部の踵に設置された重量物用アイゼンが下がる。
シールドにアイゼンは、質量に物を言わせた敵の突撃に備える構えの基本だ。
メサイア攻撃。
その何が怖いかと言えば、突撃する時のスピードと、それによって生まれるエネルギーという名の衝撃だ。
数百トンの物体の超音速突撃により生まれるエネルギーは、まともに受けたら肝心のメサイアでも吹き飛ばされかねない。
シールドを地面に突き刺して吹き飛ばされないようにするのは当然のことだ。
これまで、この突撃は数回受けた。
その度に佐野姉妹は回避機動をとって敵を後方から攻めようと足掻いてばかりいた。
そこに第二波の突撃を受け、挟撃の挙げ句に全滅したこともある。
二人もそれから何かを学んだというのか？
違う。
そう。
それだけじゃない。
「……そっか」
わかった。
美柚姫はやっと思い出した。
問題のフォーメーションをとった理由。
フォーメーションを組み替えることは試したが、どうにもうまくいかず、数回試した所で、“面倒くさいからこれでいっちゃおう！”と誰かが言い出して、自然とフォーメーションが固定されていたんだ。

だから、佐野姉妹は双子という生来の連携の良さを遮断されて行活かすことが出来ないまま、敗北を重ねていたのだ。

――参ったな。

美柚姫がそう思うのも無理はない。

私も、肝心の佐野姉妹でさえ、そんなことにも気づけないほど焦っていたんだ。

少なくとも、私はここに配置されて初めてそこまでわかるようになったし、佐野姉妹は佐野姉妹で、並ぶことで初めて連携を思い出したんだろう。

2騎の動きは統一されているかのように連携に無駄がない。

ダンスでもさせたらさぞ見物だろうなと、そんなことを思うに十分だ。

この配置は正しい。

個々の才能は高い。

つまり――。

勝てる。

美柚姫はその確信を、シミュレーションに乗って初めて得た。

「――来るっ！」

その言葉が終わる前に、グレイファントム達の姿が消えた。

普通の人間なら、消えたという認識を頭で理解する方が遅い位の、本当の刹那の瞬間、

ドンッ！

ガッシァァァン！

大砲が爆発したような音と、自動車事故のような音がほぼ同時に鼓膜を襲った。

グレイファントムの突撃音とメサイア同士の衝突の音が、発生源との距離があまりに近いため、人間の脳には同時に発生した音に聞こえるたせいだ。

もうもうと立ち上る土煙。視界がとれず、耳は悲鳴をあげる。体が強ばり、指でさえ上手く動かせない。

そんな中、前衛の2騎がグレイファントム2騎の突撃を抑えていたこと。

そして、両翼に配置されていた“白雷（はくらい）”達が、左右から佐野姉妹にショルダーアタックを敢行したグレイファントムを刺し貫いていることを理解した。

麗央とはるかが、深々と敵騎に突き刺さった獲物を即座に引き抜くのと、撃破されたグレイファントムを踏み台にして後続の2騎が美柚姫の眼前に躍り出たのは同時だった。

「――――くっ！」

シールドを深く地面に突き刺したままの佐野姉妹騎は十分な回避起動がとれない。

美柚姫は即座に左手に持つビームライフルを発砲。

そのエネルギーは、落下姿勢に入っていた1騎の胴体を貫通した。

命中のショックだろうか、手足をまっすぐ伸ばしたまま、尻から落下する奇妙な動きを見せたことに、美柚姫は構っていられなかった。

戦斧を振りかざしたもう1騎のグレイファントムが目の前に襲いかかってくる。

回避が不可能であることは体が判断した。

無意識に掲げた左腕に鈍い疑似感触が走る。

シールドに戦斧が命中したショックだ。

下手をすれば骨が折れる痛みに顔をしかめた美柚姫は、シールドをひねって、戦斧をシールドから引きはがし、戦棍（せんこん）による横薙ぎの一撃をコクピット側面に叩き付けた。

グシャッ。

そんな鈍い音と共に、グレイファントムの胸部装甲が大きく凹んだ。
衝撃がコクピットまで達しているのは感覚でわかる。
皮膚を破らなくても人間が内出血や内臓破裂で死ぬのと同じ現象がグレイファントムで起きている。
それが刃を持たない上に、金属による装甲を持つ対メサイア戦で戦棍（せんこん）が多用される理由だ。
前のめりに倒れるグレイファントムの頭部にもう一撃を食らわし、大地に倒れたグレイファントムを踏みつけ、美柚姫は怒鳴る。
「状況は！？」
答えるMC（メサイア・コントローラー）はいないことに気付いたが、
「亜紀っ！前方クリア！」
「亜夜、OK！」
「左翼霧島、状況グリーン」
「右翼川上、クリア」

ウソみたい。
本当にびっくりした。
それが今の美柚姫の本当に正直な感想だ。
全騎が全騎で、あれほど苦労した敵をあっさりと撃破してのけた。
勝った。
勝てた！
その興奮が脳から全身へと駆け回る。
「……やったぁ」
そして、興奮は脱力感に変わった。
体から力が抜ける。
それが、心地よい。
「それでも、32戦1勝31敗」
はるかが言った。

「でも、最後に勝てたんだから」
イヤミかと思ったけど、それでも許せてしまうほど、心が緩んでいる。
「それも……そっか」
亜紀のそんな言葉に頷くと、ちょっと大変かもしれないと思った美柚姫は、頬を両手で軽く叩くと、気合いを入れた声を上げた。
「そうよ――津島中佐、次、お願いしますっ！」
「まだやるのぉっ！？」

●“鈴谷（すずや）”艦長室

「――現時点における八八任務部隊の仕上がりはこんなところね」
４５戦１２勝３３敗
これが美柚姫達の残した結果だ。
今、力尽きたほぼ全員がシミュレーターの中で潰れている。

「褒めるべき結果とも思えんな……」
「一応、１０連勝はしたんだから」
「ん？めずらしいな。津島中佐があいつらの弁護に回るとは」
美夜の表情は艦長としての職責故に冷たいが、その声にはどこか嬉しさがこめられていた。
「少し、情が移ったのかもね。」
通信モニターの向こうで紅葉が肩をすくめた。
「佐野姉妹もやったわよ」
「――そうか」
「……」

「どうした？」
「艦長、嬉しそうな顔をした」
「そ、そうか？」
「情が移ったのは艦長の方じゃなくて？。それで、“白雷改”の整備状況は？」
「坂城さんからの報告では、進捗は予定通りだ」
「さすが……ね。たしかあと5日……だったかしら」
「3日だ」
美夜は言った。
「3日で出してもらう」
「3日？ちょっと、それは」
紅葉は顔をしかめた。
「危険過ぎる。C整備はそんな簡単じゃない」
「敵が待ってくれないわ」
「“幻龍改（げんりゅうかい）”はどうしたのよ。2騎あるはずでしょう？騎体だけなら使えるはずよ？」
「明日の朝一番で、その使い手二人をそちらに送る」
「あ、あんなのいきなり送られても困るわよ！何しろと！？」
「人体実験実験なり人体改造なり何なり好きにしていい――そう言いたいところだが」
「あーっ。びっくりした。一瞬だけ本気になりかけた」
「やりたいのか？」
「泉大尉がいなくなってから、いろいろ研究データ取りたい作業が中断しているのよ。ほむほむ――じゃなくて、明貴少尉と川上少尉にやらせたら、明貴少尉は屁理屈ならべてばっかだし、川上少尉は瞬時に入院した挙げ句にドクターストップかかっちゃって、やっと復帰よ？あの子、トラウマっちゃって、脳みそっていうか、記憶いじるとこまでやったんだから！」
「泉大尉が頑丈だったのか、少尉達が繊細すぎるのか……」
考えどころだな。

美夜は口元に手をやって小さく失笑した。
「――それで話を戻していいか？」
「あの狗共ならお断り。ウチには狗用の装備はないわ」
「ドッグフードは持参させるわ。そんなに嫌い？」
「近衛と関係していて、あいつらと仲良くなりたいヤツはいないわよ」
「……それもそうか」
「どうせ、この通信だってお仲間がお聞きになってるんでしょうし」
「下手なことは言うものじゃないわよ？」
「はん。ヤバいことは見ざる聞かざる言わざる……大人の流儀ってヤツ？」
「……どちらにしても、あの2騎だけでは不安な状況が生まれた」
「何？」

美夜は、大月から報告のあった、芹沢瀬菜からの犯行予告を手短に話した。

「……3日後に犯行ねぇ」
呆れた。と、紅葉は視線を彷徨わせた。
「わざわざ逮捕に出向いてこいって、何考えてるの？そんなに自信があるのかしら」
「確実にワナだ」
「あの二人を排除する口実には十分じゃないの？」
「私も本音ならそう言うだろう。だが、世の中は色々重なっているんだ」
「北陸戦線で何か動きが？」
「陸軍にアイバシュラの巣を潰したことを察知された。連中は脅威が去ったとして遅れている北陸奪還作戦を急がせようとしている」
「やらせればいいじゃない。あいつらが勝手に死ねばそれは陸軍の責任でしょ？艦長が何で責任感じなきゃいけないのよ」

「――言ったろう？」
美夜は苦虫を噛み潰したような顔で頷いた。
「色々重なっていると」
「まだあるの？」
「中華帝国軍がまた動いた」
「はぁっ！？」
「諜報機関からの情報だ。元山（ウォンサン）に集結中の輸送船団が出航体勢に入っている。目的地は福井湾だと」
「……あちゃぁ」
紅葉が額に手を当てたのも無理はない。
「やっと魔族軍が手薄になったと思ったら、その穴埋めを人類がやってくれるとはね」
「正直、私もびっくりだ。これ以上に質（タチ）の悪い冗談があったら教えて欲しいくらいだ」
「連中のことだから、飛鼠（ひそ）を前面に出してくるわよ？現状の近衛に一々、あいつら相手に戦力を回す余裕があるとは」
そこまで言ってから、紅葉は美夜から視線を外した。
「――近衛だけじゃなくて、“鈴谷（すずや）”にもね」
「この際、神でも仏でもいいから助けて欲しいよ」
「現実的な話として、戦力にメドは？」
「現有戦力をもって善処せよ。司令部からの命令はそんなものだ」
「……」
美夜の顔を見ることが出来ず、紅葉は頭を掻いた。
すでに紅葉でさえ、回せる騎体は無いに等しい。何より、騎士もMC（メサイア・コントローラー）も紅葉の手元にはない。
「――どうしたものかしら」
「艦長、私を試している？」
「試す？何を」
「ツテで何とかならないか。そう言われている気がしてならないの。下手に海外派遣部隊から兵力を引っ張ってもらっても焼け石に水だ

ろうし」
「中華帝国の底力を見る思いだな。恐ろしい」
「数に勝る連中ってのは、恐ろしいわよ。しかも今や連中は技術的にも勝り始めている」
「……」
「インドから東南アジア一帯で欧州軍が押しているとはいえ、それを差し置いて新たな戦線を構築出来るんだからね……財政がよく維持出来るわ。感心するより呆れるしかない」
「あの大国が戦時総動員体制をとれること自体がな……」
美夜も紅葉の意見に同意するかのようにただ小さく頷いた。
「ただ、私達が問題とすべきはそんな世界規模じゃない。この日本の一地方の土地を巡ってだ」
「陸軍は北陸を奪還しようとしている。“鈴谷（すずや）”はそのお手伝い……一騎でも、それが気休めでも欲しいというのが本音？」
「飛べば鍋の蓋でも採用したい。それが本音だ」
「追い詰められているわね」
「追い詰められている」
「……そんな時に芹沢瀬菜とかいう、こそ泥の相手なんてしていていいの？」
「本来の派遣目的は芹沢瀬菜の捕縛。その目的が向こうから来たんだ。相手をするのが筋道だろう？」
「……ものは言い様ね」
「――ついでに聞きたいんだが」
「何？」
「内親王護衛隊（レイナガーズ）はどうしている？」
「二宮大佐の所在？知ってどうするの？」
「この忙しい時にどこで何をしているか聞いてから考える」
「結婚相談所にでも行ってるんじゃない？」
「……おい」
「赤城博士のところよ」

「赤城博士？」
美夜はしばらく考えて、該当する人物をやっと思いついたらしい。
「あの赤城博士か？」
「そう。斬艦刀と“ＤＥＳＴＩＮＹ”の産みの親。他にいないわよ」
紅葉の顔は決して嬉しそうではない。
「誰の命令か知らないけど、いろいろと探りを入れているみたいね」
「白百合の守護者が探偵まがいとは……」
「そんなことしてるヒマがあるなら、部下と一緒にこっちへ来いっ！って？」
「……正解だ。無駄口を叩いているヒマもない。戦力として夏川達を使う必要が出てきた。鍋蓋の代わりでいいから、せめて朝倉達と連携がとれるまでには成って欲しい」
「あの険悪な連中をたった１日でガチ百合にしろって？洗脳していいならすぐよ？」
「最悪、その手があったな……いや、大月大尉は男だから」
「何言ってるの。“あの”阿部大尉が狙ってるのよ？当然、アレは薔薇でしょ？受け専門の」
「……どうして私の周りはそういうのが多いんだ？」
「病原菌撒き散らした根本原因の親友なんてやってるからよ」
「……真理……あんた、恨むわよ？」
「仕方ないわ。こっちもその程度ならバックアップするわ。結果は保証しないけどね」
「……ありがとう」

動く世界　第四話

一度、体に覚えさせると後が楽になることは多い。
それまでの悩みの種だった連携の問題も、そうした類に属することだった。
「どうですか？」
面白くない。と露骨に顔で語る夏川が見る先は、シミュレーションシステムが描き出す仮想空間での戦闘の光景。
「たいしたものよ？」
後藤が乗り移ったかのような底意地の悪い笑みを浮かべる紅葉が言った。
「今朝から3倍の敵相手に負け無し。サバイバルからタイムアタックへとゲームの内容すら書き換えようとしている」
「……」
夏川は一言も無くモニターを睨むように見つめている。
腫れぼったい目に何かを思い詰めているかのような鋭く、険しい目つきの夏川の様子に、紅葉は大した意識も払わずにべらべらと挑発的な話を続ける。
「さすがに個人では秀でた才能があるわけで、今じゃ、近接用の武器だけじゃなくて、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）まで有効に使いこなせるあたりは、もはや連携プレーの粋ってところかしらね。前任者にはまだまだ全部において、レベル的には全然足りてないけど――」
「使えるんですね？」
「……あんた達よりね」
「結構」
話を中断され、むっ。とした紅葉に、夏川は振り向きもせずに頷き、踵を返した。
「シミュレーターに乗ります」
「シチュエーションは？」

「仮の敵を用意して下されば結構。我々“独立執行隊”と中佐ご自慢の“八八独立任務部隊”とで連携がとれる状況さえ作っていただければ」
「……いいわよ？」
紅葉がよこにいたほむらに手を伸ばして、何故か空を掴んだのはその時だ。
「――ちょっと」
「はい？」
「あんた……どこまで胸ないのよ」
「……」
「胸ぐらつかんだはずなのに、きれいに空掴ませるとはやるわね、あんた」
「そのウサを、大尉達相手に晴らせてこいと、そう仰りたいのですか？」
「中佐である私をぶん殴ったら――わかるわね？」
「……“死乃天使”でなくても結構です」
ほむらは相変わらずの無表情で答えた。
「自分のサイズも顧みず、私のことを鉄板まな板絶壁呼ばわりした罪は死んで償わせます」
「……自覚してたんだ」
「何か？」
「何でも無いわ。ええ、何でも」

「……」
「……」
最悪だな。
空気を読んで、そう思ったのは自分だけではないと大月は自信を持って言える。
戦闘展開している部隊のフォーメーションの基本は変わらない。

亜紀達は、連戦連勝を重ねた上に、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を使いこなせるようになってからは、ほぼ鉄壁に近い防御兼攻撃が可能な、いわば完璧な状況だと信じている。

シミュレーションでもこれだけの記録が出せるんだから実戦でも十分――――。

そう、覇気がみなぎり始めた所へ参加してきたのは、彼女達が嫌って嫌って、嫌い抜いた挙げ句にオツリだけで一生暮らせるだろう程の相手――――夏川大尉達だ。

斬艦刀とシールド、そして広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）の装備だ。

二人を誰も歓迎していない。

これが実戦だったら適当なところで殺す手段を探すだろう。

少なくとも、亜紀と亜夜は適当な出撃前にトイレで夏川の喉を掻き斬ることを本気で考えていた程だ。

その二人が、亜紀達の後ろ、朝倉達の真横に2騎並んで立っているのは、はっきり言って――――

邪魔。

それどころではない。

本当の敵が後ろに立っている。

最低でもこの程度は皆が思っている。

二人の参戦を誰も知らされていなかったこともあるのだろうが、それまでの和気藹々、そして意気軒昂たる空気は雲散霧消してしまい、皆の顔からは、だらけてもいないが、やる気も感じられない。

当然、誰も喋らない。

気まずい空気だけはピリピリと張り詰めている。

「斬込隊の復活が望み薄な現状」
紅葉は言った。
「パートナーをえり好みする権利はあなた達にはないことを理解して」
「……」
誰からも返事さえない。
「あんた達は、本当ならこういうフォーメーションこそが基本中の基本。“白雷(はくらい)”隊が前衛で、後方支援と指揮を“幻龍改(げんりゅうかい)”隊が執る……」
「……」
無言。
ただ、口に出さないが“白雷(はくらい)”隊の全員が紅葉の言葉に反発している。
それだけは、さすがの紅葉にもはっきりわかる。
「……余計なこと言ったみたいね」
はぁっ。
紅葉は派手にため息をつくと言った。
「あんた達の、新しい敵を紹介するわ」
「……」
「……返事くらいしたら？」
「返事」
「平野艦長に、態度が悪いから叱ってくれってお願いしてやろうか？佐野姉妹」
「うっ」
「そ、それは」
「……ったく。あんた達がしっかりやってくれるって報告したら喜んでいたのに」
「そ、そうなの？」
「本当？」

「本当よ――それを翌日の、しかも大一番絡みで否定とはねぇ」
「や、やめてよ！」
「やったら許さないからっ！」
「はいはい。じゃ――態度改めて協力しなさい」
「はぁい」
「しかたないなぁ……」
「仕方なくないの。真面目にやりなさい！平野艦長からの命令っ！」
「「はぁいっ！」」
「ったく、素直だと可愛げがあるのに……」
「で？」
「敵はたった1騎よ」
「1騎？」
「そう。この1騎を撃破するまで、次は無いわよ？」
「な……誰？」
「津島中佐……それってまさか」
「麗央？ちょっと黙っていてなさい」
「……うっ」
「麗央ちゃん？」
「えっと……皆さんご存じかと」
麗央が恐る恐るとそこまで言った。
「はぁい。今晩、沢口少尉による羞恥プレー決定ね」
「中佐ぁっ！？」
「たっぷり可愛がってもらいなさい？」
「さ……さすが元・内親王護衛隊（レイナガーズ）」
「朝倉大尉、感心しないで下さいっ！麻紀が本気になったら、私、ホントに死んじゃうっ！」
「そ……そんなにすごいの？」
「だって――何言わせるんです！」
「とりあえず黙れ！」
ぴしゃりと紅葉は会話を制した。

「忙しいんだ！いい？ここで連携がとれなかったら、あんた達の誰かが死ぬ！しかもその死に意味はない！そんな無駄死にが出るわよ！？私の“白雷改”を棺桶にすることは許されていないからね！？」
「……」
「仮想敵は――“死乃天使”」
「し……てんし？」
亜紀達がきょとん。とするのも無理はない。
「私の最高傑作よ。パイロットは明貴少尉」
「ほむらって、あの死神が？」
「そうよ。あんた達は、その死神様の翼から逃れることさえ出来ないでしょうね」
「出来るもんっ！」
ムキになった亜夜が怒鳴った。
「やって、艦長に褒めてもらうんだもんっ！」
「そうだよ！」
亜夜も力強く頷いた。
「私達がやってやるんだ！私達なら出来るっ！」
「――その粋や良し」
冷たく紅葉は頷いた。
「ただ、格の違いを知るのもいい経験よ？それだは言ってあげる」
「何、それ？」
「身の程を知れ。って言葉があるでしょ？」
「亜夜ちゃん、知ってる？」
「そんな哲学じみた言葉知らない」
「……アホにつきあう程、ヒマじゃないの。百聞は何とやらよ」

ピーッ

シミュレーター内に警報が走る。
「敵、出現。騎数１。距離３００」

合成音と共に、モニターに映し出されたのは1騎の白いメサイアだった。

「……綺麗」

それを見た亜夜の口から、そんな言葉が零れた。

装甲の優美な白いラインは“白雷改”よりも女性的で、白い宝石が目の前に現れたような錯覚さえ覚えてしまう。

その背中には青い複数の翼が備えられている。

武装は太刀を二本だけ。

シールドでさえ装備していない。

ビームライフルは腰にマウントされたままだ。

まるで検査でも受けるかのような軽い装備。

たった1騎で、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）まで備える複数の敵相手に装備が軽すぎる。

そう思ったのは、はるかだ。

単騎で出た以上、敵には自分自身への余程の自信がある。

対するこっちは、騎体の性能もわからないし、相手の技量も戦法も何もわからない。

こういう敵を、はるかは一番嫌う。

わからないことは、それだけで脅威だと知っているからだ。

実戦なら、こんな敵は相手にしたくない。

今回、特にそう実感するには理由がある。

それが、はるかにはわかっていた。

自分達がこれまで勝てた理由は主に三つ。

機体の性能。

適切な配置。

そして――――敗北から学んだ経験。

騎体をどう使って、自分達をどう配置すればいいかを負けて覚えた。

負けることが先に来て、そこから学ぶのが部隊のスタンス。
つまり、未知の敵を相手にすることは即座に、
まず負ける。
そこから入らなければならない。
実戦なら、確実に死人が出る方法だ。
それを周りが気付いている可能性は極めて低いし、何が問題か口で上手く説明出来る自信が、はるかには全くない。
他人との関係を拒んできたわけではない。
ただ、どう接していいかがわからないだけだと、はるかは自分を弁護したいが、今や遅い。
鍛えるべきは騎士としての技量より人としてのコミュニケーション能力だなんて、こんな時に自己反省しても意味はない。

相手は味方。
ここで実力を知っておいて意味があるかさえ――――

ビュッ！

風の如く。

そんな表現がしっくりくる程の素早さで敵が動いたのは、はるかがそんなことを思った直後だった。
視界から消えた敵は、騎士の動体視力をもってしても追尾出来なかった。
今まで勝ちを誇ってきた皆が、声も出ないまま、ぽかん。として指一本動かせない。
ただ、亜紀と亜夜が共に空を見上げたのは、もしかしたら、彼女達の中にある騎士としての、あるいは彼女達自身の本能的な何か、それでも反応したからかもしれない。

ドンッ！

不意に、一発のビームライフルが空を走り、それが号令となった時には遅かった。

誰が撃ったのか、それを判断することも出来ず、美柚姫が光の走った方にちらと視線を向けた時には――

ズガッ！

何だかわからないが、背筋が寒くなるような音がした。

中央に配置された亜夜と亜紀の2騎をまたぐように左右の脚で踏みつける白い物体が何かを知る前に、“それ”は動いた。

手を振るったと認識する時には、左右に展開していたはるか騎と麗央騎双方の首が吹っ飛んでいた。

「……えっ？」

左右に投げつけた太刀が、2騎の首を吹っ飛ばして飛び去ったことを、美柚姫はまるで理解出来なかった。

ドンッ！

不意に真横から突き飛ばされなかったら、
これが実戦なら、
その瞬間に美柚姫は死んでいただろう。

白い暴風。

そんな言葉が脳裏を掠めたのは、まさに“それ”を見たからだった。

“死乃天使”だ。

自分に襲いかかってきたが、誰かが突き飛ばしてくれたおかげで、その顎から逃れることが出来たんだ。

「な、誰っ！？」

たたらを踏んで転倒を回避しようとＳＴＲシステム相手にあがく美柚姫の前に出たのは、２騎の“幻龍改（げんりゅうかい）”だった。

「騎体を回復させろっ！」

ビームライフルを乱射して、相手を牽制する夏川大尉の怒鳴り声が耳を打つ。

「――――くっ！」

膝に痛みが走り、膝関節が悲鳴をあげる程の無理な動作を騎体に強いた美柚姫が振り返った時には、再び白い暴風が襲いかかってきた。

ビームライフルの射撃に恐れを抱いている様子は全くない。

ビームがどう飛んでくるかが予めわかっているかと疑いたくなるほど、華麗な回避運動を見せた“死乃天使”が夏川と大月の両騎の間を駆け抜けた。

グラッ。

直後に体勢を崩したのは大月騎。

大腿部を切断され、騎体が横倒しになろうとしていた。

「お、大月大尉っ！」

美柚姫はとっさに大月を支えようと、その騎体を掴んだ。

装甲を掴むことに必死で、その後ろで“死乃天使”がどんな動きを見せたか、それを美柚姫は知ることが出来なかった。

ズキッ。

左膝に痛みが走った。

本当に疑似感覚かと疑いたくなるほどの鈍い痛みが脳内を螺旋状に駆け回る。

「――――っ！？」

痛みに襲われた脳に届いたのは、騎体がバランスを崩した奇妙な感覚と、警報だった。

判定：左脚部切断。

メインスクリーンに映し出された文字が意味するところを理解する前に、騎体が地面に叩き付けられる衝撃が美由紀を襲った。

「――――っ！」

舌を噛みそうなショックに耐えた美柚姫は、未だ擱座判定が出ていないことに感謝しつつ、騎体を這わせてビームライフルを左腕に持たせた。

その横では大月騎や夏川騎もまた、いまだ諦めずにビームライフルで空を飛び回る“死乃天使”を仕留めようと必死になって射撃を続けている。

“死乃天使”が空中で一回転して弾幕を回避。

まるで、嘲るように三騎の頭上を通り抜けていった。

「くそっ！？」

美柚姫はエネルギーカートリッジを交換しつつ毒づいた。

眼は“死乃天使”から離れていない。

ガンッ！

ただ、その音だけはしっかりと聞いた。

「……」

ちらっと、上空から落下した物体が視界の端で地面上を数回、バウンドした。

柄付き手榴弾。

しかも3発が美柚姫達のすぐ間近に落下した。

対メサイア戦をも想定したその爆発力は半端ではない。

歩兵が至近距離に手榴弾を投げつけられたのと何もかわらない。

擱座しかけた騎体の中で、

回避機動どころか、歩行すら出来ない騎体の中で、

気がつくと、美柚姫は呆然として、手榴弾に取り付けられたＬＥＤの赤い点滅を眺めていた。

脳がフリーズして何も考えられない。

すべてがぼんやりとする中、手榴弾の上に覆い被さって、そしてそれを腹の下に抱え込んだのが“幻龍改（げんりゅうかい）”だと気付いた時には、メインスクリーンは真っ白になっていた。

手榴弾を腹に抱え込んだ“幻龍改（げんりゅうかい）”――それは、あれほど自分達を嫌っていたはずの、あの夏川大尉騎だった。

動く世界　第五話

疑似感覚によって腹部を強打した夏川は意識を失い、シミュレーターから引き出された後、担架で運ばれて医務室送りになった。
大月と衛生兵によって運ばれていく夏川を、美柚姫達はそれぞれのシミュレーターの前で見送った。
担架の上でぐったりとしている夏川の顔に、大月がそっとタオルを乗せ、皆の前から姿を消した。

「……何だかさぁ」
夏川がとった行動の意味を考えてなのか、佐野姉妹の顔にも覇気が無い。
「負けるよりショックだよね」
「……私達が戦死判定受けてないこと知っていたのかなぁ」
「多分……ね」

部隊が全滅する程の戦いの中、騎体は破壊されたが、騎士で戦死判定を受けた者は、たった一人を除いていなかった。

それが夏川だ。

腹の下に手榴弾3発をかき集めたのだ。
シミュレーションシステムはご丁寧に騎体が爆散する光景までを描ききって見せたものの、彼女が受けた疑似感覚もまた半端ではなかった。
騎体を擱座させても、死者を出さなかったのはほむらの才能か、自分達の運か考える必要も無い。

結果論として言えば、皆が戦死判定を受けなかったのは夏川の自己犠牲による。

それを皆が知っている。

憎むだけ憎んで、嫌うだけ嫌った相手がとったその行動が何故、自分達を助けるような行動だったのか？

それを説明出来る者は誰もいない。

感情のやり場を求めて皆が戸惑っている。

「……とりあえず」

不意に、美柚姫がパンッと手を叩いた。

「状況は終了――津島中佐に報告するわよ？」

「「了解」」

皆は、それに従うしか無かった。

“死乃天使”に飛び乗られると同時に太刀を首筋に叩き込まれ、脊椎を切断された佐野姉妹騎。

その二騎から引き抜かれ、投げつけられた太刀によって首を吹き飛ばされた麗央騎とはるか達。

大月騎と美柚姫騎は共に脚部大破によって行動不能。

対するほむら騎はかすり傷ひとつ受けていない。

たった1騎相手としては一方的すぎる展開……いや、一方的な虐殺をやってのけたほむらに感慨らしいものはない。

美柚姫達を一瞥すると、夏川がシミュレーターから引き出されるのも無視するようにして部屋を出て行く。

「……何だろう。あの態度」

亜夜がぽつりと言った。

「こーまんっていうか、あいつの方がババアよりムカつくんだけど」
「……同感」亜紀が大きく頷いた。
「鉄板のくせに」
「私達よりサイズ小さいよ、あれ」
「弱いはずだよね」
「うん」
「……おっぱいがのサイズが、戦力とどう関係あるの？」
思わず麗央が訊ねた。
「ちっちっちっ……わかってないなぁ」
まるで嘲るような視線を投げかけると、亜夜は不意に美柚姫の背後に回り込んで、
「ひゃっ――――きゃぁぁぁぁっ！？」
突然のことに悲鳴をあげる美柚姫のおっぱいをわしづかみにした。
「ウチの隊長はこのサイズだよ？」
もみもみもみもみ――――
戦闘服の上からでもわかるそのふくよかなサイズ。
小さな亜夜の手に余る胸が、その手の中で面白いように形を変える。
「このサイズこそが、今回の敗北でさえ最小の犠牲に抑える奇跡を成し遂げた！」
「そうそう、おっぱいが致命傷を避けたんだよ――――あれ？」
亜紀がはるかの胸を掴もうとする。
しかし、はるかは、あっさりと亜紀の攻撃をかわしてのける。
「……むう。とにかく、おっぱいのサイズは戦力においては決定的な差なのだ！」
「ってことは……」
麗央はむしろ哀れむようにして、ふんぞり返る佐野姉妹を見た。
「あんた達、戦力にならないじゃない」
「「そんなことないっ！」」
二人はムキになって反論した。

「私達、貧乳は希少価値だ！それが双子なら特別プレミアが付く！特殊な趣味相手にはむしろこの巨乳より有効なんだ！」
いやぁぁっ！
逃れようともがく美柚姫の胸を揉み続ける亜夜は力説した。
「特に日本はロリコン文化が盛んだから、そういうのが相手なら、私達でも一端の戦力となるんだから！」
「都合がいいっていうかなんて言うか……いろいろ矛盾している気がするんだけど、気のせい？」
「気のせいっ！」
「少なくとも、あの死神は私達のメじゃないわね！」
「いや……私達、束になってボロ負けしたんだけど」
「戦いはこれからだよ！」
「そう！私達は、これからもっともっと可愛くなるし、スタイルだって、ボンキュッボンになれるし、アノ時だって、双子プレーが可能な特殊オプションがデフォでついてる！」
「……クスリやってる？ちょっと腕見せて」
「放せっ！もう死神にもアンタにもオンナとしての将来はないっ！これ確かっ！」
「なっ、ちょ、ちょっと待ってよ！
ほむらはともかく、そこに何で私が入るのよ！
あの超絶ぺったんこと私を一緒にするな！
取り消しなさいよ、あんなえぐれた胸とこの将来有望赤丸どころか花丸印の私のおっぱいをワンセット赤札投げ売りするなんて、許せないっ！
人生１８年生きて、最大の侮辱だわ！」
「この胸には、ほど遠いけどねぇ……」
「やめてぇぇっ……あっ、い、いやぁ……も、もう立ってられない……ぐすっ。もう、何でもするからおっぱいだけは勘弁してぇ……」
「あの貧乳に、このおっぱい触させたら、どれだけ悔しがるかなぁ」
「泣き出すんじゃない？」

「死にたがったりして」
あはははは っ！
佐野姉妹の邪悪な笑い声がこだまする室内。
キイッ
小さく開いたドアから、何かが投げ込まれた。
「ん？」
床をスライディングするように転がってくるのは、円筒状の黒い物体を束にしたものだった。
コロコロコロ――
皆が眺める中、木製の柄がついたその物体は、本来求められている能力を発揮すべく、内蔵された信管を作動させた。
数分後――
「……やっぱり」
苦い顔どころか、青筋を立てて殺意を露わにする紅葉の横で、ほむらは平然とした顔で呟いた。
シミュレータールームの中は床がえぐれ、シミュレーターが横倒しになっている。
換気システムが最大に働いて尚、立ちこめる煙が視界を遮っている。
「ドイツ製は効きませんね。やっぱり日本製じゃないと」
「普通なら重戦車だってふっとぶわよ……あ、あんた、あのシミュレーションシステムが1基いくらするか、わかってるよね」
「あんな所に危険物を持ち込むなんて、何を考えているんでしょう」

「あんたが、あんたがやったんでしょうが！」
「私が何を？」
「本気で言ってる！？アタマ沸いてる！？」
「さすがに近衛騎士として連敗、しかもたった一人のこんな可憐な少女に、美貌だけでなく、剣でまで負けたことに耐えられず、名誉の自決を遂げようとしたのだと、私は信じます」
「手を合わせるな！
ついでに、あれは自決じゃない！
っーか、何よ、今の可憐な美少女って！？
ついでに、模擬戦で負けて自決決め込むバカがどこにいるってのよ！」
「……敗北の辱めを受けるくらいなら死ぬと、誰かが言ってたような言わなかったような」
ほむらは遠い目をしてため息をついた。
「そんなアバウトすぎる根拠が通用すると思ってるの！？あんた、近衛なめてんの！？」
「――津島中佐」
ポンと、ほむらは紅葉の肩に両手を置いた。
「今、私達は、おっぱいのサイズが戦力の決定的差ではないということを……教えてやったのです」
「自決はどうしたのよ、あいつら自決したっていったじゃない！自決におっぱい関係ないし、私まで一緒にするな！」
「このシミュレーション施設、火器持ち込みは厳禁。当然、担当者の許可がいります」
「さらっと話をころころ変えるな、ついでにその責任者様が、あんたのイカれたお目々の前にいるでしょうが！」
「当然、私も火器は持ち込んでいません」
「そこで何してた？さっきまで、私の目の前で何してた？柄付手榴弾で収束装薬作って、あそこに投げ込んだのは誰？」
「……同僚の惨めな姿は見るに堪えません」

俯いて、肩を振るわせたほむら。
「ワケわかんない。ここに手榴弾の柄とか、ワイヤーが転がってるでしょう？これ、誰の仕業だと？」
床に広げられたシートの上に転がっている手榴弾用の研磨された木製の柄とか、ワイヤーの破片とか、あるいはペンチなどをわしづかみにして、紅葉はほむらに突きつけた。
「ほら、これ、見なさいよ！見覚えあるでしょう！？」
「――なんて事するんですか」
「はっ？」
「こんな所で、爆発物を作るなんて」
「……ちょ？」
「調べてもわかります。そこに私の指紋はないですし……」
「……」
紅葉は唖然として、自分の掴んでいる物体と、ほむらを交互に見比べたが、言葉が出てこない。
「……え？」
「――落ち着いて下さい。普通、こんな所で爆発物作りますか？普通」
「っていうか、何を私がやったように仕向けてるのよ！何？その冷たい視線、すっごいムカつくんだけど！」
「白石大尉。憲兵隊に連絡。只今の爆発音は、津島中佐の暴走によります」
「了解――憲兵隊です」
憲兵隊に通じるホットラインの受話器を掴んだ白石が、平然とした顔でほむらに振り返った。
居合わせたスタッフで、あえて紅葉の味方をする者が誰もいない。
「白石ぃっ、テメエ！」
「ありがとう……明貴少尉です……はい、津島中佐が突然乱心されて……もう、私達スタッフでは、どうしていいか……グスッ」
「い、いや、ちょっと違うから……ねぇ、私、絶対、何も……」

「グスッ……ありがとうございます……はい。では、鎮静剤をお願いします。二度と記憶が復活しないくらいに強いヤツを……」
「てめぇ、殺してやるぅぅぅっ！！」

それから半時ほど後のこと。
美柚姫は医務室を訊ねていた。
「簡易検査の上では問題ないです」
ベッドに寝かされた夏川の横で書類を書く女性医師が答えた。
「骨、神経、内臓共に破裂や内出血はありません。ただ、強い負担がかかったのは事実ですから、一晩は様子を見て下さい」
「ありがとうございました」
美柚姫が頭を下げ、医師を見送った後、夏川に話しかけた。
「大丈夫ですか？」
「……意外だな」
美柚姫をみつめる眼に笑みが浮かんだ。
「よもや、お前達の見舞を受けるとは」
「……ははっ。お話、いいですか？」
「そちらがよければな」
「……どうも」
美柚姫はベッドの横に置かれていたパイプ椅子に座った。
「それにしても」
「それはこっちのセリフだ」
「えっ？」
「――なんだ、その格好は」
「ははっ」
シミュレーション室での爆発に巻き込まれた美柚姫は顔といわず体中煤だらけだ。
煤まみれの顔で自嘲気味の笑みを浮かべた美柚姫が頬を掻いた。

「あの後、いろいろありまして……」
「みたいだな……」
笑おうとして夏川は痛みに顔をしかめた。
「疑似感覚で、ここまでする必要があるのか？」
「作ったのが津島中佐ですからね」
「説得力がある」
「お医者様からは一晩の安静が出ています。このままゆっくりと」
「……情けない話だ」
「何を言っているんですか」
美柚姫が布団を直しながら言った。
「模擬戦とはいえ、あなたは私達の命の恩人です」
「恩を売りたくてやったわけじゃない」
夏川は美柚姫の言葉を鼻で笑った。
「あれが指揮官の責務だ」
「……指揮官の」
「そうだ。部下が一人でもいたら、ああやるのが指揮官だ。私は義務を果たしたに過ぎない」
「模擬戦は関係ない――と？」
「これは模擬戦だから、何やってもいい。私がそう思ってやったと？」
「失礼は――覚悟していますが」
「ふん……疑いたくなる気持ちもわかる。私はいつだって、後ろに立っているだけだったからな」
「……」
「私が後ろに立ち続けていた理由がわかるか？」
「……考えはしましたが、間違いだろうと思うから黙ります」
「面白い答えだな」
夏川は目を閉じた。
「大月はどうした？」
「大尉の検査の関係で、部屋から出されました」

「……廊下か？」
「……いえ」
何故か、美柚姫は開いたままの窓を見た。
「ここ、5階なんですよね。確か」
「ん？」
「何でもありません。それで？」
「私は自分の務めを間違えたくないんだ」
「務め？」
「兵達と共にあることは大切だが、共に剣を振るうだけでは指揮官は存在意義はない」
「……」
「大切なのは、部下を無駄死にさせないために、一人でも多く生還させるために何が必要かだ。私は指揮官講習でそう教わったし、それに疑問を持っていない。指揮官として任命された以上、部下と同じ事ではなく、部下を使いこなすことが務めだと」
「……」
「確かに、部下と一緒に、或いは部下に率先して敵陣に突撃することは必要だろう。そうしなければ部下が動けない時もある。それは確かだ。しかし、常にそれではダメだ」
「ダメ？」
「指揮官は部下は猟犬として使うべきだ。猟犬は獲物を見つけたら、飼い主の命令一下、何も疑わずに獲物めがけて襲いかかる。もしそれが出来ないなら、それは調教がなっていない証拠だ。それでは無意味に狗を殺すことになる。それは飼い主の責任だ。
第一、銃を持って狗と一緒に獲物に駆け出すバカもいまい？指揮官は状況を冷静に把握し、飼い犬たる部下に適切な判断を下すことが任務。違うか？」
「そ、それは――そうですけど……」
美柚姫は戸惑った。
何だろう。

夏川の言いたいことがわからないわけではない。
だが、何か心のどこかに反発するものがある。
それが何かわからないにしても、その存在こそが、夏川の意見を飲み込むことを拒絶しているのは確かだ。
「フォーメーションを変えたな」
「えっ？え、ええ」
「あれはいい」
「あ、ありがとうございます。言われればみんなも」
「――貴様にとってだ」
「私、ですか？」
「部下を後ろから見て、指揮についての見方が変わったんじゃないか？」
「えっ？」
図星だった。
美柚姫は、みんなの背中を見て初めて全体が見えた気がした。
それは確かなのだ。
「どうして、それを？」
「私も人を使う身だ」
「……はぁ」
美柚姫は人に使われたことはあっても、人を使ったことはない。
だから夏川の言葉を額面通りに受け取れない。
「私、よくわからないんですけど」
美柚姫は首を横に振った。
「ん？」
「あのフォーメーションは正しいにしても、後ろで采配に専念する余裕があるかな。と、そう思って」
「……成る程？」
「失礼ですが」
美柚姫は言った。
「夏川大尉の仰る立場は、もう一ランク上ではないかな……と」

「ん？」
「大尉のおっしゃる指揮官としての心構えは正しいと思います。ですが、私、誰を率いているという自覚があんまりないんです」
美柚姫は言った。
「成り行きでなっちゃったようなものですし、でも、みんなと一緒に戦っている。その認識はあります。誰の一人も死なせたくもありません。この人数ですし、後ろで指揮棒振るっているのには耐えられません」
「……」
「それをやってる余裕が私にあるかもわかりませんし」
「立場はともかく、見解は違う……と？」
「大尉のご意見は正しいんです。でも、私がそれを実践に移せないだけで」
「貴様には貴様のやり方がある……か？」
「……教えて頂きたいことが二つあります」
立ち上がりかけて、美柚姫は一番聞きたかったことを思い出した。
「何だ？」
「まず、明貴少尉が、上から来て佐野両騎に襲いかかった時です」
「……ああ」
「あの時、ビームライフルを発砲したのは大尉ですよね？」
「――――かすりもしなかったがな」
「何故、あそこで発砲できたんです？」
「ん？」
「済みません。質問が悪かったですね。どうして、上から来るとわかったんですか？」
「……素人のカンだ」
「カン？」
「ビギナーズラックとも言う……」
夏川は目を閉じた。
「貴重なモノを、こんなところで使い果たしたわけだ……もったい

ない」
「あの……大尉？」
「全ては偶然だ――――もう一つは？」
「……何故、手榴弾を」
「言ったろう？部下を生還させるのが指揮官の務めだと」
「それでも……あなたが死にます。あなたが死んだら、部下の指揮を誰が」
「私が死んだ後のことまで面倒見きれるものか。次の指揮官を決めるのは司令部か神様だ」
「……部下を信じている、と？」
「馬鹿な。あんなことはとっさの判断であって、それをどうこういうつもりはない」
「結構、アバウトなんですね」
「そう思うか？」
「え……はい」
美柚姫は頷いた。
「もっと理知的で冷静で酷薄で、それこそ物事をチェスや将棋でもやってるように、論理的に進めている方かと思っていました」
「出来るなら、私もそうなりたいものだが……」
クックックッ……。
夏川は喉の奥で笑うと、掌で顔を覆った。
「……難しいよ。本当に難しい。この立場は部下に舐められたら終わりだしな」
「ふふっ……」
「明後日には出撃だ。その時には協力を頼むぞ」
「――――わかりました」
「じゃあ、しばらく寝させてくれ」
「――――はい」

軽い敬礼を払うと、医務室から出て行く美柚姫。

その手がドアを開いた途端、
「わわっ！？」
医務室に転がり込んできたのは、佐野姉妹だった。
「きゃっ！二人とも！？」
「え、えへへっ」
美柚姫は、ばつが悪そうに微笑む二人が何かを抱えているのに気付いた。
銀色の金属の塊。
「……？それは」
「パインの缶詰」
「この前の特別配給、とっておいたんだよ。甘いものは貴重品だから」
「……まぁ」
「お見舞いに、ババア――じゃなくて、大尉に渡しといて」
「面と向かって渡せばいいじゃない」
缶詰を受け取りながら美柚姫は目を細めるが、
「……言いづらいからヤダ」と、二人はそっぽを向くなり、医務室から走り去っていった。
「――本当に」
それを見送ると、美柚姫は笑って肩をすくめた。
大丈夫。
みんな素直じゃないだけ。
作戦だろうが何だろうが、上手くいくはずだ。
何があろうと、私達は勝てる。
美柚姫はそう確信した。

「――失礼」
「ひゃっ！？」

不意に声をかけられ、美柚姫は危うく抱きかかえた缶詰を落とすところだった。

驚いて振り返ると、そこには白衣を着た銀縁眼鏡の男が立っていた。

衛生兵あがりだろうか、がっちりとした体格が、渡しは軍隊関係者ですと語っている。

「診察の時間ですので、関係者以外は出て下さい」

「……は、はい。あの、このお見舞いだけ置いていって良いですか？」

「私が預かりましょうか？」

美柚姫の返事を聞く前に、白衣の男は缶詰を一つつまみ上げようとして止めた。

理由は美柚姫にもわかる。

下手に掴むと、美柚姫の胸に触れることを男性として心配してくれたのだ。

「……いや、お渡しするくらいならいいでしょう。早めに頼みます」

「ありがとうございます！」

美柚姫が去った後、何故かドアに“清掃中。立ち入り禁止”と書かれたカードがかけられた。

白衣の男は、医療関係者と思えないほどの乱暴さで、先程まで美柚姫が座っていたパイプ椅子に腰を下ろした。

眠ると言っていた夏川は、枕元に置かれた缶詰を手にとって、じっと眺めていた。

「ふん……一昔前なら一缶百円もしなかったがな」

「今では貴重品だ。東南アジアの情勢次第では、次に食べられるのは何年後だろうな」

片手で持った缶詰をしげしげと、まるで信じられないものをもら

ったかのように眺め続けている。
「缶切りでも持ってくればよかったか？」
「楽しみは最後にとっておくことにしよう」
「そんなモノ、後生大事にするなよ……あのガキ共に情が移ったか？」
「馬鹿な」
夏川は枕元に投げ捨てるように缶詰を置いた。
「ちょっと甘い顔しておけば、ああいう類はチョロい。この程度の演技は安いものだ。指揮官たるもの、この程度の演技は出来ないとな」
ベッドから起き上がった夏川の顔には苦痛の色もない。
「疑似感覚程度で寝込むと思われるほど、私はヤワに見られているのは腹立たしいが」
「それでお見舞いは缶詰かい……どれ、俺が喰ってやるぜ？」
「やめろ」
「おいおい……せっかくだろうが」
「缶の処分を誤ると後が厄介だ。奴らを騙し続ける小道具には丁度良い」
「ふん……それで？俺もいろいろと、危ない橋を渡ってここまで来たんだ。ヘタな返事は持って帰れないぜ？」
「協力はする……彼女にはそう伝えてくれ」
「よし……最初の仕事だ」
男は、白衣から取りだした何かを、夏川の胸元に突っ込んだ。
「そいつの指示通りにやりな――“中佐”からのご命令だ」
「わかった」
ガシッ。
胸元に突っ込まれた男の腕を掴むと、夏川はにこりともせず、冷たい表情で答えた。
「お前個人への、仕事の礼だ――とっておけ」
「何？」

ボキッ。

鈍い音が、室内に響き渡ったのは、その直後だった。

動く世界　第六話

●太平洋上空　マラネリ王国軍旗艦“エトランジュ”

「“ランフレクシブル”……か」

艦橋に立つ殿下が真横を航行する大型艦を前に首をかしげる。

「工作艦……だったな」

「はい」と、艦長席に座るキユヅキ艦長が頷いた。

「少なくとも小官が見る限り、あれが戦艦とは思えませんな」

「うん……しかも、総大将はミシェル王子」

「不思議なことですな」

「ん？」

「次期国王が参戦するのはよしとしましょう。しかし王子は」

「……僕と同じ“見通者（シーカー）”だが、騎士ではない」

そう。

今、殿下が接触しようとしているフランス軍を率いる総大将、ミシェル王子は、殿下やレルヒェ、そしてエマと違い、騎士の力を持っていない。

大将として君臨する以外に何も出来ない。

なら、後ろに下がって“見通者（シーカー）”としての仕事に専念していればいいものを、何を考えて前線へ、しかも工作艦で？

メサイアをもって来たというにしても、飛行艦の修理を目的とする工作艦で来る理由がわからない。

「メサイア母艦を派遣出来ないほど、フランスが財政難だと聞いた覚えもないが」

「入るぞ」

背後からの声に振り向くと、レルヒェとエマが艦橋に入って来るところだった。

「ミシェルが来ただと？」

「ああ」
殿下は頷いた。
「嬉しいか？」
「バカを言え」
殿下の横に立ってそこから見える“ランフレクシブル”を一瞥したレルヒェは答えた。
「あの冷血漢に惚れるのはミーハーか変人だけだ」
「な、何よそれは！」
レルヒェに噛み付いたのはエマだ。
「ミシェルはカッコいいじゃない！背は高いし色白で、ああっ、あのクールな眼差しなんて最高っ！」
胸の前で手を握りしめ、体をよがらせるエマの目はうっとりと潤んでいる。
「ああ……ここにもそんなのがいたか」
「あれで彼女がいないってんだから、信じられないわ！きっと心の奥に秘めた、そんな恋をされて」
「どうせ家柄しか取り柄の無いような、どこぞのボンクラ娘とつがいにさせられるのがオチだろうさ」
大した興味も無い。といわんばかりのレルヒェだが、エマの横顔を見て、
「そういえば、エマ？まさか」
「ん？」
「ミシェル王子の所に子供産みに行きたいなんて言わないだろうな」
「ど、どういう表現よ、それ」
「惚れてるんだろう？」
「そ、そりゃ」
エマは頬を赤くして答えた。
「あんだけカッコイイ、ミシェル王子を好きにならない方がおかしいのよ。女の子として」
「私が異常だと？」

「だ、だけどレルヒェだっていずれは」
「結婚なんて、あと10年位してから考えればいいことだ。私は国政の方が興味深い」
「王族はそれじゃ遅いのよ。今のうちにいい男にツバつけておかなきゃ」
「……怖い話してやろうか？エマ」
「へっ、何を」
「お前、今のフランス王に嫁ぐ度胸があるか？」
「あ、あるワケないでしょう」
げぇっ。という顔でエマは舌を出したのも無理はない。
今のフランス王は、でっぷり肥えた腹ばっかり目立つ、あのビア樽みたいな体型にハゲた、年頃の娘にとっては、父親に持ちたくない中年男の典型例みたいな容姿をしている。
性格は温厚で国民からの信望も厚いが、だからといって恋愛の対象と言われれば、年頃のエマとしては御免被るしかない。
「あの顔、思い出せただけで感謝して欲しいわ」
「そうか、ならミシェルは諦めておけ」
「何で？」
「あのフランス王、若い頃はミシェル王子にそっくりだったんだ」
「……」
思考が停止したのか、呆然とするエマの横で、レルヒェは殿下に振り向いた。
「殿下？工作艦に奴らは何を乗せているんだ？」
「気になるか？」
「フランス人がこの戦場にどんな厄介モノを持ちこんでくれたか、考えるだけでぞっとする」
「上等のワインじゃないだろうな。こっちから出向くのはどうだ？」
「そうだな。アイネを連れて行こう。あいつの分析能力だって少しは役立つだろう……おい、エマ？いつまで凍ってるんだ？」

●ランフレクシブル　甲板

本来、破損した飛行艦を修理するための浮きドッグとして建造された艦であるため、ランフレクシブルには普通に見られるような艦橋や装備はほとんど存在しない。

幅６０メートルの甲板には、飛行艦を固定するための大型ドッキングアームが壁のように左右に並ぶ。

これで天井があったらまさしく巨大な工場だな。と、レルヒェは思った。

「マラネリの殿下まで来ているというのは、正直意外だったな」

ミシェル王子は、無重力環境が維持された艦内から甲板に出た後、殿下達をエスコートするように歩く。

華奢なほどスマートな容姿に、物腰の優雅さはさすがに生まれを感じさせる。

何をしているのか、甲板のあちこちで機械の作動音が響き渡り、耳に集中していないと何を言っているのか聞きづらくて仕方ない。

ツナギを着て黄色いヘルメットを被った整備兵達がグラインダーで何かを削っているのを珍しそうに眺めるエマは、甲板の半ばに置かれた巨大な物体に気付いた。

「王子？もしかして」

「ん？」

「この艦でここまで来た理由はあれですか？」

赤黒い装甲に囲まれた金属製のドーム。

それは言われなければこの艦の一部だと誤解したとしても当然。

クレーンで装甲が外され、メンテナンスを受けるその内部は機械の塊。

ただ、あまりに巨大すぎるだけに、それが艦の一部ではないと気付いたエマの勘を評価すべきだ。

「ああ」

ミシェルは足を止めると、腰に手をやった。
その態度は不遜。というと言い過ぎだが、自信に満ちあふれているのは確かだった。
「フランスが開発したアサルト・アーマー、“アニイラシオン”だ」
「アサルト・アーマー？」
言われた方は、思わず目を見開いてしまった。
「あ、あれが！？」
レルヒェと殿下でさえ驚く先にあるのは、あの北陸戦線でアイバシュラの巣主を焼き殺したアニイラシオンそのものだった。
「こんな機動性の悪そうな兵器……」
うーん。
レルヒェは顎に手をやりながら、思わず呻いた。
「主要武装は何だ？」
「機密……ということにしておこうか？」
「隣国の皇帝に対してずいぶんだな」
「ウソだ」
ミシェルは肩をすくめて見せた。
「エマ王女もいる。手の内は見せるさ」
頬を染めてはにかむエマをニコリと一瞥すると、
「新開発の巨大粒子砲だ。破壊力は数日前の実戦でも証明済みだ」
「実戦？」
レルヒェがその言葉に反応した。
「これが実戦に出たのか？」
「ああ――詳細は後で説明してやろう」
「粒子砲なら飛行艦にでも搭載すればよかったんじゃないか？」
「冷却システムの問題さ」
殿下の問いかけに、ミシェルは頭を掻きながら答えた。
「コイツの冷却には水がいる」
「……水冷式だと？」
「空冷でも可動はするさ。だけど、数発でオーバーヒートする。確

実に冷却するには大量の水が必要だ。だから、飛行艦の鈍足さでは戦場で逆に使い勝手が悪くなる」
「矛盾だな」
「そうさ。巨大粒子砲は持ち込みたい。だが、どうやって砲を冷やすかとなれば話は別。その技術的な実証試験も兼ねて日本に送り込むことになった」
ミシェルは静かに、だが、挑むように殿下に訊ねた。
「評価を伺いたいんだが？」
「――見せてもらおうか？」

●山形県魔族軍陣地
「北陸のアイバシュラが巣ごとやられた」
「ほう？」
ズルドの言葉に、ホーサーは目を小さく見開いた。
「巣を駆除したというのか？人類が」
「そうだ」
「ほう……やるではないか。人類も」
「まだ成長しきっていなかったとはいえ、アイバシュラの巣を潰すだけの力を人類が持っているとなれば、これはこれで驚異的なことではある」
「人類にもそれくらいの力はあるだろうに」
ホーサーは煎餅をかじりながら言った。
「だからこそ、お主はここまで苦労してきたわけで」
「まぁ、そう言われれば、少しは救われるか……」
ズルドは茶碗を手にしばらく考えてから首を横に振った。
「いや、どう考えても救われんわ」
「だろうな。北陸方面の動きは」
「人類は軍を集結させつつある。アレを破壊することに成功したん

だ。人類側からすれば、戦意高揚にはもってこいの材料だろう。敦賀側には戦車を始めとした機甲部隊が集結中。対するこっちはメースを前に出してはいるが、本音を言わせてもらうと、妖魔共の更新に大わらわで、とてもではないが対処している余裕がない」

「メースは」

「伊那方面と静岡とこっち側と、回す所は放っておいても山ほど出てくる。何より補給と整備の手配はもう限界だ。メース使いより補給担当と整備兵の方が志願兵として来てくれるなら歓迎したいところだ」

「整備も補給も無しで戦争は出来ぬよ」

「そうだ。数十キロ、数百キロ単位の戦域は魔界なら大した距離でもない。

そういう意見もあるだろうが、現実は違う。

魔界でそんな距離でメースがデカイ顔出来るのは、その戦いに戦争の全権を委任する交戦ルールが存在するからだ。

そんなものは、元からルールがない人類相手では通用しない。

辺境の最も奥地で新種の妖魔相手に戦争するのと同じ位の覚悟が求められるわけで……まぁ、こんな原則論をお前に言うのもどうかと思うがな」

「ふん。それで、どうするのだ？補給がないからといって、みすみす人類に土地を明け渡すほど、お主は慈悲深くないはずだ」

「当然だ」

ズルドは煎餅をその巨大に放り込んだ。

バリバリと口の中で煎餅が砕ける音がして、口の中に茶を流し込む。

「俺はここに慈善活動に来ているわけではない」

「ワシ等が出ようか？」

「いや――兄貴には兄貴の考えがあるようだ」

「ガムロ殿が？」

「というかな？正直な話、俺には誰が考えついたのかがわからぬ」

ずいっ。とズルドは花瓶の如き巨大な茶碗をホーサーに突きつけた。
「兄貴の差し金ではない」
「なら、中世協会の奴らの差し金か？」
「それも違うような気がする。兄貴らしいといえば、兄貴らしい気もするのだが……」
湯飲みを置くと、ズルドは腕を組んで唸りだした。
「お主がそこまで考えあぐねるとは、何がある」
「人類を穴埋めに使うというのだ」
「何？」
ホーサーの顔が不意に険しくなった。
「それはどういうことだ。ワシ等、義勇兵もおるというのに人類に人類を当てるとは！」
「毒をもって毒を制すという例えはあるが、わかるだろう？俺がどう判断を下すべきか悩む理由が」
「……まぁ、な」
ホーサーは未だに眉間に皺を寄せ、茶を飲んだ。
「して？その人類はどこから連れてくるんだ」
「大陸だ」
「漢民族か」
「そうだ。先の戦いでも日和見を決め込んだ、あの変節漢共だ。欲を掻いて北米大陸の制圧にしくじった奴らには海で敵を阻止する力は無い。
北米大陸の軍勢が奴らを攻め滅ぼすために、この弓状列島に橋頭堡を確保するのを阻止したい連中の立場を上手く利用したとも言えるが……」
「義勇兵より人類を使うというその姿勢が気に入らぬ。それがワシの立場じゃが、お主はガムロ殿なり、中世協会なり、とにかく上が決めた判断の何を不服とする」
「わからぬか？」

「言われねばわかりようがなかろう」
「大陸と北陸に出現した、あのアイバシュラの巣の出所がわからぬ中、他人の口車に乗ることが果たして賢明なのかが疑わしい」
「……」
ホーサーは目をパチクリさせた。
「おい、あのアイバシュラ共は、天原商会の暴走ではないのか？」
「魔界でそんな噂はあるらしいがな。
すでに天原はアイバシュラ養殖技術の特許侵害だとして、アイバシュラの巣を生み出した者に対する訴訟準備に入った」
「何だと？それはつまり、あれに天原商会は絡んでいないと？」
「そうだ」
「馬鹿な。あれほどの大量の巣を生み出すのにどれ程の費用と時間がかかると思う？資金力と行動性、そして技術、全てにおいて半端な企業や組織では出来ぬ芸当だぞ」
「気持ちはわかる。俺も、天原商会が介入を否定した時点で、奴らの茶番さえ疑った。
実行犯のクセに被害者を装うのは奴らの常套手段だ。
ところが奴らは今度ばかり本気だ。
首謀者に関する情報提供者には２万ライデンの報奨金を約束した」
「２万だと？」
ライデンは、魔界の通貨単位の中では最高単位。
魔界の基本通貨であるガメルの上の通貨で、１０００ガメルをもって１ライデンとなる。
日本円に換算して１ライデンは１０万円程。
そこから換算すれば、かけられた報奨金は２０億円相当。
破格どころではない。
「魔界中の情報屋が目の色を変えているそうだ」
「当然だ。じゃが、２万もの大金、あのガメツい天原商会が本気で支払うか？」
「この宣言は、宣誓の広場に公示された。わかるな？あそこで宣言

を出したことは、奴らも相応の覚悟が無ければ出来ないことだ。つまり、これは口先だけの情報ではない」

宣誓の広場。

そこ魔界中心都市に存在する広場の一つで、重大な契約事を取り交わす際に伝統的に利用される場所。

商売人や何らかの契約を結ぶ者達が集うことで知られている。

たかが広場に過ぎないと思われるだろうが、ここで交わされた誓いや契約は絶対に破れないという伝統が魔界には存在する。

ここで宣言した以上、それを反故にすることは、魔界の常識からして許されない。

というか、魔界での社会的な信頼性を自ら放棄するのと同じで、商社としては自殺行為に等しい。

天原商会がそこで身の潔白を示す宣言を出した意味は軽視出来ない。

それはズルドやホーサーという魔族にとっては十分にわかる話だ。

「……宣誓の広場でなぁ」

「だからこそよ。あいつらが絡んでいないとなれば一体誰が？そいつらが大陸で跋扈している中で、俺達はどこまで動いていいのか、正直疑心暗鬼なのだ」

「何か情報はないのか？」

「中世協会でさえ、当初は天原商会の仕業と信じて疑っていなかったそうだ。つまり、奴らでもない。無論、我々のはずもない」

「……むぅ」

「第三者がどうも悪巧みしているようだ。そいつらが俺達と手を結んでくれるならまだよしとしよう。だが、俺達をダシに使おうというなら、話は全く違ってくる」

「じゃなぁ」

ホーサーは冷めた茶に顔をしかめた。
「天原を敵に回してまであれだけのことをしでかすとは、余程の覚悟があるのか、それとも単なる馬鹿か」
「馬鹿？」
「天原を軽く見て、今頃、青坊主になってるかもしれぬではないか」
「そこまで軽くはあるまいよ」
「何、ワシの楽観論じゃ。無視してくれて良い。して？その漢民族は使い物になるのか？」
「この弓状列島に北米大陸軍の橋頭堡を築かれたら国の滅亡を決めかねない。奴らがどれ程愚かでも、死に物狂いにはなるだろうというのが、兄貴の考えだ」
「飛べば鍋の蓋でも戦力に――――か」
ホーサーはため息をついた。
「楽な戦いは、三界のどこにも存在せぬ……か」

●福井県上空　2千メートル
すごいな。
それがＥ－ＷＡＣＳに乗る有珠（ありす）の正直な感想だ。
眼下に伸びた道路は土建屋と軍によって繰り広げられた日夜の突貫工事によって復旧した国道。
かつては魔族軍の退却の際に地形が変わるほどの障害物を置かれていたが、今では最初から何も無かったのと同じ位、綺麗な道路が延びている。
「一般国道としても広く作りましたね」
通常任務の他に情報分析など複数の仕事を求められる関係上、複数が搭乗するＥ－ＷＡＣＳ搭乗ＭＣの中の一人、情報分析担当の五十嵐志帆（いがらし・しほ）少尉がパネルを操作しながら言った。
「戦車部隊もこの幅なら楽でしょうね」
その言葉を証明するかのように、車列を作って国道を走っていく

のは八式戦車の群。
　自重３８トンの金属の塊が土煙と共に猛然と走っている姿は上空からでも十分な見物だった。
「機甲部隊が前に出るんだ。メサイア隊でさえまだ都合が付かないというのにね……」
　この世界での戦場では、機甲部隊だろうが歩兵部隊だろうが、陸上でメサイア隊より前に出る部隊はあり得ない。
　敵がメサイアを繰り出せば壊滅が約束されているからだ。
　ところが、今回はまだメサイア隊は前に出ていないどころか、どこの誰が出るのかさえ、定かとはなっていない。
　そんなことを承知の上でだろうか。
　単に命令されたからだろうか。
　前に出て行く陸軍の将兵の気持ちを考え、有珠（ありす）は暗然とした気持ちになった。
「第９機甲師団が補充が終了したんです」
「第９？」
「新潟で壊滅した部隊です。魔族軍相手に民間人の撤退支援ではほぼ常に殿（しんがり）を務めさせられた」
「勇猛っていうか、スゴい経験した部隊がいるんだねぇ……」
　有珠（ありす）は下を移動する車列に軽く敬礼した。
「当時の消耗率は８７％だそうです」
「全滅じゃん……よく部隊として復活させたなぁ」
「そう思います。まぁ、妖魔相手では苦しいですけど。今度の敵は、リハビリ相手には丁度いいんじゃないかと」
「そう――だね」
　有珠は笑って頷いた。
「人類の裏切り者相手には、丁度いいんじゃないかな」
「そういうことです。高度上げて下さい。これから日本海に出て、輸送船団を追います」
「了解」

●富山湾

無事に残された港湾施設に横付けする大型輸送艦に掲げられた国旗は五爪龍をあしらった黄龍旗――中華帝国所属を示している。

そこから続々と揚陸されるのは、中華帝国軍でもアサルト・アーマーに分類されたばかりの飛鼠達だ。

飛鼠の揚陸と周辺への展開が終了次第、陸戦艇と機甲部隊、さらに砲兵や歩兵が上陸を開始する。

すでに日本軍は周辺には存在しないと知ってはいるが決して気が休まるものではない。

制空権が確保されない中、上陸部隊が展開出来るのは、日本軍が何も自分達を恐れているわけではないことを自覚していない者は、少なくともマトモな指揮官にそんな輩はいない。

もし、そうだというなら、それは政治将校だと思えば間違いない。

指揮官達が恐れたのは、揚陸中に空爆を受けることだ。

飛鼠達は対空戦に叶うように出来てはいない。

肝心の対空火器は艦載されたものだけでそのほとんどがレーダー連動式、つまる所、狩野粒子影響下では役に立たない上に、高度1万メートルを超えた有効射程を持たない。

富岳による戦略爆撃でも受けたら船団はあっさり壊滅する。

それを恐れるなというほうが無理だ。

「メサイアはどうしたんだ！」

湾の中で待機を命じられた輸送艦の甲板で苛立った声を上げたのは、戦車大隊に所属する李中尉だ。

タバコを吹かしながらしきりに空を気にしている。

「こんなところで襲われたら終わりだぞ！」

「まぁ、落ち着けよ」

横に立ち、李の胸ポケットからタバコを引き抜いたのは同僚の黄

中尉。訓練校同期の間柄だ。
東南アジア戦線でアメリカ軍から分捕ったという自慢のジッポライターから火を得た彼は、深く肺に煙を送り込んだ後、その煙と共に言った。
「俺達の所にメサイアがあると思わせているだけで十分なんだ。わかるだろう？日本軍だってそこまで馬鹿じゃない。メサイアの対空攻撃は高度1万だろうがなんだろうが容赦なく敵を撃ち落とす事が出来る。そんな脅威があるというのに、高価な爆撃機を投入できないだろうが」
「それを打ち破るだけの脅威がメサイアだろう？」
李中尉は周囲を見回したあと、耳打ちするように言った。
「日本軍のメサイアはかなりだと聞いてるぞ？」
「属国のグレイファントムだけじゃない。そろそろ新型が来る頃だ」
「新型？」
その疑問に答えるように、輸送艦の頭上すれすれを通過していったのは、巨大なメサイアの群だった。
ロシア軍の白馬級（シュトゥーテ）をベースに開発・量産された中華帝国軍新型メサイア“山猫（シャンマオ）”級が、日本の大地を踏みしめようとしていた。

動く世界　第七話

●ランフレクシブル甲板上

「これを評価するなら」

アニイラシオンの設計図を指でなぞりながら、殿下は言った。

「“もっとがんばりましょう”ってトコかな？」

「辛辣だな」

ミシェルは驚いた顔で殿下を見た。

「もう少し高い評価が得られると思ったんだが」

「王子」

設計図から目を離さずに、殿下は訊ねた。

「これは君の設計か？」

「いや」

ミシェルはあっさりと答えた。

そのミシェルさえ、二人の後ろ――――アニイラシオンのコクピット周りでは、レルヒェ達が珍しそうに中を覗いているのをぼんやりと眺めていて、とても殿下の言葉に集中している様子は見えない。

「アルマヴィーヴァが設計した。俺はその運用評価をやるだけさ」

「その名は、アカデミー・デ・シアンスの重鎮の一人だったな」

「ああ。俺と同じ４本線だ」

「４本線の身で“これ”を設計してのけたというのか？」

「おかしいと思うだろう？」

「エンジンは水冷式というより、何か別な液体を注入することで冷却させていたのを、無理矢理水冷に組み替えたようだな」

「そう。設計が全てにおいて雑なんだよ。おの老いぼれ、何を狂ったか知らんがこんなものを作り上げた」

「ん？」

殿下はその時初めてミシェルの顔を見た。

レルヒェ達がコクピットの中に消えたのを見送ったミシェルは殿

下の視線に気付き、バツの悪そうな顔をした。
「まるで評価していないような口ぶりだな」
「評価はしているが、納得出来る造りじゃない。俺の方でチマチマ改装し続けている。どこが問題かは、設計図を見ればわかるだろう？　何より、こいつの技術はどう考えても人間のそれじゃない」
「確かに、技術的に斬新を通り越して革命的なレベルに達している所がチラホラあるな。エネルギーリフレクターは紅葉さんでさえ実用化に苦労しているんだ。それをこうやって作るとは……僕でも思いつかなかった」
「そう。天才の中でも超特級の6本線でさえ思いつかない技術を、たかが4本線がこうもあっさりと実用化するはずがない。出来る話じゃない」
「……」
「――まぁ正直、俺は出所にも興味があるが、それよりコイツの量産化にこそ興味があってね」
「この巨体の？」
「粒子砲とリフレクターをメサイアのオプションに選択出来るサイズまで小型化させたい」
「……むぅ」
殿下は呻いた。
「無理ではないが」
「問題が？」
「科学者としてより、為政者として言わせてもらおう」
「……ああ」
「こんなもの、無用の長物だ」
「ずいぶんだな」
ミシェルは驚いた。というより険悪な色を表情に浮かべた。
「破壊力は実用に十分耐える」
「わかってないな」
殿下の声はミシェルの抗議を制するように発せられた。

「僕は科学者として言っていない。国家を運用する為政者としてものを言っている」
ジロリ。と睨まれたミシェルは言葉を詰まらせた。
「……」
「この手の広域殺戮兵器は、確かに威力はスゴイ。もっていれば、他国を十分威圧出来る」
「……なら」
「その威圧感が時に無用の戦を招き、そして戦で使えば無用の被害と憎しみを生み出す。メサイアが戦争における全権代理人として国家が重用する理由が、ミシェル、君はわかっていないようだな」
「戦争の被害を最小限度に抑えるため……そう言いたいのか？」
「生まれ故郷をこんなもので焼き払われてみろ。家族を殺されてみろ。そんな憎しみを抱く者達を押さえ込むのは容易なことじゃないぞ？かつて戦略爆撃で都市を焼き払い、市民を焼夷弾で焼き殺したあの赤色戦争の戦後復興負担で、フランスがどれ程の苦労をしたかは知っているのだろう？」
「戦争は代理人たる騎士に委ねていればいいと？」
「君が騎士じゃないから黙っていろと言うのではない。為政者にとっては、利用できる都市や市民を無闇に殺されては商売あがったりだ。この日本だって、戦後復興にかかる費用は戦費を遥かに上回るだろう。ズタズタにされたインフラを復旧させ、難民となった国民に衣食住と職を与えるのは容易なことではない。敵を殺して終わる戦争より大変だ。この手の兵器はそんな状況を生み出すきっかけになる。僕なら例え建造しても公表さえしないだろうな」
「低い評価だ」
「ああ。都市をクレーターにして“解放したぞ”と叫ばれるよりか、使わないでいてくれた方が感謝されるだろうな」
「使い方によると思わないか？」
「そりゃ思うさ」
殿下は頷いた。

「対艦戦には砲門数が足りないし、都市部では味方を巻き添えにしかねない。使い方が恐ろしく制限されるだろうからね」
「どうしろと？」
「スクラップにするか、君の言うとおり、小型化を推進することだ。このデカブツで運用する限り、どんなデカい粒子砲だろうと意味がない。破壊力を落としても、連射性をよくして複数の砲門で弾幕を張れるようにすべきだな。まぁ、メサイアは出力の面で相当な無理があるだろうから、艦載砲として開発すべきだろうが」
「それだと面白くないな」
ミシェルは答えた。
「適切なアドバイスは感謝するが、俺は俺でやりたい方向がある」
「無理強いはしないさ。せいぜい、パイロットを無駄死にさせないように運用することだ」
「研究データはやらんぞ？」
「いらんよ。僕はこの手のビーム兵器に興味はないんだ」
「メサイアの方が大切か？」
「相当なコンプレックスがあるみたいだな。メサイアと騎士に」
「……別に」
「気にせずに、君は君の道を行くべきだ。必要なら協力は惜しむつもりもないがな」
「感謝する、とでも言っておこうか」
ミシェルは肩をすくめるとコクピットへむけて歩き出した。
「戦争は騎士だけじゃ出来ないことを証明してやるさ」

同じ頃、レルヒェ達はアニイラシオンのコクピットの中にいた。
「なんだコレ」
複数の座席のあるコクピットの中は、メサイアのコクピットに慣れた身としては、びっくりする位広い。
「パネルとスイッチばっかりだ」

「陛下」
すでにコクピットのあちこちをなで回し始めたレルヒェをアイネが止めた。
「セッティングを狂わされたなんて抗議が来たらどうするんですか」
アイネは中を気にしているのか、入ろうとしない。
「シートの座り心地が固いわ。フランス製の家具としては失格よ」
エマはシートの座り心地について不満がある様子だ。
「アイネ、このコクピットをどう見る？」
「これは、操縦システムというより管制システムですね」
アイネが中を一瞥して言った。
「そうですね。メサイアとしての性格は全くない……むしろＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）や――ひゃんっ！」
ゴンッ！
アイネの短い悲鳴と、コクピット入り口にアタマをぶつけたアイネの悲鳴がほぼ同時にあがった。
「……っ……っ！」
頭を抱えてうずくまったアイネの口からは悲鳴に近いうめき声が零れる。

「人の縄張りに勝手に入るな」
そのアイネの背後から声がした。
そこにいたのは栗色の髪をした女の子だった。
アイネを見下ろすその目は厳しい。
「お前っ！」
その顔を見るなり、レルヒェが噛み付かんばかりの勢いで怒鳴った。
「アイネに何をするっ！」
「ハンッ。聖域を汚すようなマネするからさ」
「アイネは何もしてないじゃない！」
エマも血相を変えてシートから立ち上がるなり、女の子を睨み付

けた。
「アイネ、大丈夫？」
「ううっ……」
涙を浮かべながら首を横に振るアイネ。
「あーあ。これ、コブになってるわ。痛そう……」
「医務室へ行こう」
レルヒェが言った。
「これ以上頭を叩いたらさらに成長が遅れるぞ。ただでさえそんなチビなのに、これ以上伸びなくなったら大変だ！」
「そうよ。こんなチビのままだと、特殊な趣味の持ち主にしか相手してもらえないじゃない！それじゃ、女の子として終わりだわ！」
「――何か、好き勝手にとんでもないこと言ってないか？」
「アンタが悪いんでしょう？アイネに何したのよ！」
「ち、ちょっと後ろから押しただけだよ」
「そんなことでアイネの身長が縮むわけないでしょう！？」
「いや」
アイネの頭に触れたレルヒェは真顔で言った。
「逆だ」
「逆？」
「そうだ。アイネねよかったな。数ミリとはいえ、確実に身長が伸びたんだ。みろ、このタンコブ」
「それは一時的よ。このショックで成長は確実に止まるはずよ」
「むぅ……長期的には損なのか」
痛みなのか何なのか、顔を真っ赤にしたアイネの目元に大粒の涙が浮かんだ。
「とりあえず殿下に診てもらおう。あれでも“見通者（シーカー）”だ」
「その必要は無い」
女の子の頭上から声がした。
ミシェルが女の子の頭を両手でグリグリいたぶりながら立っていた。

「俺だって“見通者（シーカー）”だ。医師免許も持っている」
「そ、そうか」
レルヒェはほっとした顔で頷いた。
「なら頼もう」
「引き受けた」
「へっ？」
アイネがびっくりしたのも無理はない。
不意にミシェルは女の子を突き飛ばし、アイネを抱きかかえたのだ。
「あ、あの！」
男に抱きかかえられたアイネは赤面しながら泡を食った様子で降りようとするがどうにもならない。
「ヘタに動いちゃダメだよ」
狼狽するアイネにミシェルが優しく言った。
「頭を打ってるんだ。安静に」
「わ、私っ、困ります、こんなのっ！」
「俺は全然困らないぞ？」
二人はひっくり返った女の子を踏みつけながら姿を消した。
「……いいなぁ」
エマが指をくわえて二人を見送った。
「私も王子にお姫様ダッコされたかったなぁ」
「何だろう？」
レルヒェはとても不安になった。
「私……何か間違ったことした気がするんだけど」
「……何をしているんだ」
「あ、殿下」
ミシェル達と入れ替えにコクピットにあがってきた殿下が後頭部に足形をつけた女の子の前で立ち止まった。
「これは？」
「知らない」

「知らないで片付けられる女の子キャラもこの作品では珍しいな……ん？」
何故か、殿下はマジマジと女の子を見つめた後、
「おい」
ゲンッ。
その爪先で汚いものを押し出すように頭を小突いた。
「起きろ」
「痛たたっ……」
それで目が覚めたのか、頭を振りながら女の子は起き上がった。
「本当に気絶したよ……今……あれ？」
女の子は、目の前に立つ殿下を見て言った。
「目がおかしいのかな」
「ん？」
「潰れた三日前の肉まんが目の前で立っている」
「失礼なことを！」
エマが怒鳴った。
「相手は一国の国王よ！？知らないの！？」
「知らない」
女の子は答えるなり、気持ち悪い。という顔で殿下から視線をそらせた。
「っていうか、僕は醜いものや汚いものに興味はない。ましてその両方を足して最悪をかけたような物体なら当然だ」
「……」
殿下の額に青筋が立ったのと、エマ達の耳に、ドコッ！という音がしたのは同時だった。
気付いた時には、何故か女の子が泡を吹きながら前のめりに倒れていた。
「で、殿下？」
「……やっぱりな」
「な、何がやっぱりなんだ？」

レルヒェが心配そうに訊ねた。
「殿下は、女の子に手を上げないと思っていたが」
「確かに」
殿下はレルヒェの言葉に納得したように頷いた。
「僕は女の子に手を上げる趣味はない」
「でも、しっかり殴ったじゃない」
「エマ？よく見ろ」
殿下は女の子の顔を踏みつけながら言った。
「――――これは男だぞ」

シエル。

殿下によって水をぶっかけられ、目を覚ました（外見だけ）女の子はそう名乗った。
「本当に男の子？」
エマが信じられない。という顔でシエルを眺める。
「うわっ。お肌とか……全然女の子じゃない」
「ふふんっ」
シエルは自信満々というか、余裕の表情を浮かべ、エマの視線を受ける。
「当然だ」
「……それで、何でお前」
むしろ逆に気持ち悪いと露骨に顔が語っているのはレルヒェだ。
「男のクセに女の格好しているんだ？」
「ふん。わかってないな」
シエルはふんぞり返るように背筋を逸らせ、見下したような表情で言った。
「こんなにカワイイ僕が可愛い格好をしなければ、神への冒涜になるし、僕の可愛らしさの前では、性別なんて些細な問題に過ぎない

だろう？」
「……単なるナルシストか」
「いや、病的なナルシストだ」
「どっちにしろ、近づかない方がお利口ね」
「な、何だか僕、すごい言われかたされてる気がする……」
「カマを語っているんだ。これでも品性あふれていると思え」
「ああっ……究極の美は誰にも理解されるものではないのか……」
「カマに美醜なんかあるか。カマはカマでしかない」
「なぁ、殿下？何かカマにイヤな思い出でも？」
「カマに人権はない。カマはこの地球上で空気を吸うだけで深刻な大気汚染を引き起こすんだ。地面は歩くだけで草木が枯れ果て、緑は失われ――」
「よしよし。いろいろあったらしいことはわかった。で、シエルと言ったわね」
「ああ。エマ王女だな」
「そうよ。それにしても王族に出会ったにしては随分と尊大な態度ね」
「王族なんて」
ふんっ。
シエルはそれこそ嫌悪感を露骨にした顔で言った。
「昔の泥棒や野盗のなれの果てだろう？」
「無政府主義者なの？」
「僕は真実を見ているだけだ」
「なぁんだ。中二病患者か」
「なんだとぉっ！？」

●滋賀県上空　“鈴谷（すずや）”艦橋

「夏川達と連携が組めるというだけでもありがたい……かな」
発艦準備を開始する“幻龍改（げんりゅうかい）”の巨体を艦橋から眺める美夜がぽつりと言った。
「陸軍が動きを活発化させています。本来ならこの辺で近衛も動くべきなのですが」
「政情不安定を理由に、宮城どころか関連施設の警備にまでメサイアを回すという現実か……」
美夜は拳を握りしめた。
北陸方面にメサイア隊の増援がないのは理由がある。
陸軍による施設制圧を恐れ、重要施設を防衛させるためにメサイアの予備兵力まで投入しているのだ。
こんな状況では、前線へメサイアを送る余裕なんてどこにもない。
本当の敵はどこにいるんだ。と、皆が口には出さなくても怒りと疑問を持っている。

ズンッ！
“幻龍改（げんりゅうかい）”が右舷カタパルトで撃ち出された。

その震動が艦の構造物を経由してシートまで揺らし、すぐに左舷カタパルトから“白雷改”が射出される。

“幻龍改（げんりゅうかい）”を収容した右舷はたった2回で発艦作業終了。
左舷でさえ5回の発艦で終了だ。
手持ちのメサイアまで減っていることに美夜は不安より寂しささえ覚えてしまう。
「この作戦が終わってから、北陸全域の防衛などと言われたら目も当てられん」
「言われそうな気がしますがな……」
高木はもうあきらめ顔だ。
「せめて、この作戦だけでも無事に終わることを祈るしかありませ

んな。全てはそれからです」

●石川県内金沢市　某商業施設跡地

かつては美を追い求めて人々が頻繁に通ったであろうデパートは、シャッターが全て閉められ、店内には灯り一つない。

北陸有数の巨大商業施設として建設された駅とロータリー、周辺のビル施設までを一体化させたその巨大施設“アークプリズム金沢”。

かつてはデパートとテナントだけで２００を優に超える商業施設として栄えたここも、今では一人として客も従業員も、施設そのものを必要とする者は誰もいない、放棄された施設となっていた。

市街地には電気も水道も通っておらず、福井からの撤退が行われて以来、ずっと閉じられたままの施設内にはめぼしい商品はほとんどない。デパートやテナントが、盗難を恐れて商品を持ち出せる限り持ち出した後には、ブティックとはいえ、裸のマネキンやハンガーだけがぶら下がったハンガーラックだけがかろうじてかつてそこに何が売られていたかを教えてくれる導となる。

床には「特売」や「フェア」と書かれた広告が散乱し、価値が低いとでも判断されたのか、商品が撒き散らされたようになっている所もある。

通りに出てみれば人気はなく、路上に放置された車の下では野良犬が横たわったままピクリとも動かない。

カラスが犬の間近まで来るとくちばしでその体をつき始めた。

バァンッ！

空気を振るわせる派手な破裂音に驚いたカラスは、久しぶりの獲物をそのままに飛び去ったのは、そのくちばしが犬の腸を引き出す直前だった。

カラスの呪うような声と残響が残る中、市街地には煙一つあがっていない。
すぐに日常と化した静寂が戻ってくる。
破裂音がしたのも、濛々とした煙が立ちこめているも、全ては“アークプリズム金沢”の中だ。
事務施設がある地下二階までの通路を開くために爆薬が使用されたせいで、火薬の匂いがむせかえるほど立ちこめる中、侵入者達は目当ての金庫室へとすでに到達していた。
一人の男が金庫の前に片膝をつき、開かれたアタッシュケース内の機械を操作している。
機械とケーブルでつなげられた金庫のダイヤルに取り付けられた円筒形の物体がカチカチと音を立てる。
ピピッ
電子音がして、男が頷いた。
「開きますぜ？」
「……任せます」
鍵を操作していた男が小さく振り返った先にいたのはあの芹沢瀬菜だ。
男は小さく頷くと、機械に最後の命令を出した。
ギギッ
白いワンピース風のドレスに身を包んだ瀬菜の目の前で金庫の扉が鈍い、悲鳴の様な音を立てて動き出した。
開かれた金庫の中には、他に移すよりは安全だと判断され、残されていた札束と販売用の貴金属類が積み上げられていた。
ヒュゥ。
男が品のない口笛を吹いたのも無理はない。
「予想外ですね」
「……ええ」
瀬菜の横にいた背広姿の男の言葉は瀬菜も同感のようだ。
暗い顔をした瀬菜がじっと照明に照らし出されたお宝を見つめる。

「何か問題でも？」
背広の男は、瀬菜の反応が決して満足していないことに気付き、思わず声をかけた。
「……いえ」
瀬菜は首を横に振った。
「順調に仕事が進むことは良いことです」
「搬出にかかれ――大月のことでしたら」
背広姿の男の命令に従い、黒服の男達が金庫から中身を運び出す。
「何か？」
「――“鈴谷（すずや）”から発艦した奴らがここに向かっています。接触まで推定３０分でしょう」
「大月様が？」
瀬菜の顔に、ぱっと華が咲いたような活気がみなぎった。
「はっきり申し上げれば」
その嬉しそうな声を忘れたいといわんばかりに冷たく、男は答えた。
「私はあの男は好かないのですがね……」
「良い方ですよ？」
「まぁ……」
男は困ったように、メガネに手をやった。
「姫様からすれば、そうなのでしょうが……」
どうしたものか。
男はそう呟くと、瀬菜に訊ねた。
「一応、事前の取り決めですので、対応は銀次にやらせますが、よろしいですね？」
「仕方ありません」
瀬菜は答えた後で、少しだけ考えた。
「逆に聞きたいのですが」
「何ですか？」
「銀さんで大丈夫ですか？」

「あいつは……」
男は少しだけ考えてから答えた。
「運だけはいい男ですから」

動く世界　第七話（後書き）

殿下「どこ行ってたんだ。探したぞミシェル」
ミシェル「うん？」
殿下「……なんだ？」
ミシェル「俺の顔に何かついているか？」
殿下「なんだかカナリアを食べた野良猫みたいな顔しているぞ？」
ミシェル「何だそれは」
殿下「こっちが忙しいというのに、何だその満足げな表情は」
ミシェル「いやぁ」
殿下「うっとりした顔になるな。何があった」
ミシェル「可愛かったぞ？」
殿下「？？？」

レルヒェ「……おい、アイネ？」
アイネ「……」
レルヒェ「怪我はどうだった？診察を受けたんだろう？」
アイネ「……グスッ」
レルヒェ「ん？おい、どうした、内股で歩きづらそうにして」
アイネ「ううっ」
レルヒェ「な、何で泣く！？私が何かしたのか！？」
アイネ「見ないで下さい」
レルヒェ「な、何を？」
アイネ「こんな汚れた私を――私、汚されちゃったんです！うわぁぁぁんっ！」
レルヒェ「ど、どうしたんだ！？私の知らない間に、一体、何があった！？」
アイネ「私――私、帰国したら修道院に入りますっ！」

レルヒェ「？？？」

動く世界　第八話

美柚姫達は、金沢市へ向かう途中で武装した騎士達を乗せたＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）部隊と合流した。
芹沢瀬菜逮捕のために辻が手配した部隊だ。
夏川と大月が先導となり、美柚姫達がＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）の空中護衛のフォメーションを展開する。

メサイア部隊でどうやって人一人を逮捕するのかと思っていたら、結局こういうことになった。
「八八任務部隊はそのまま周辺の護衛と、逃走時の足止めだ」
金沢市上空まであと5分というところで“幻龍改（げんりゅうかい）”を駆る夏川からの指示が耳に入った。
「続けて各騎へ警告。全騎共に空中待機。間違っても直接下へ降りるなよ？」
「へ、何で？」
「金沢駅周辺は地下施設が多い。下手に降りると地下が陥没する」
夏川騎からデータが飛んでくる。
金沢駅駅周辺には網目のように地下通路が走っている。雪の中を歩かずにまだ暖かい地下を通って目的のビルなどへたどり着くことの出来る豪雪地帯ならではの工夫だが、自重数百トン、ただ降りただけで地面がえぐれるようなメサイアにとって、そこは落とし穴の巣のようなものだ。
駅前に知らずに降りたら脚がはまって動けないなんてことにもなりかねない。
「金沢市街地は放棄されたとはいえ、直接的な戦闘には巻き込まれていない。被害が皆無に近い貴重な場所だ」
「どうすんの？」
「誘い出せ」

「誘う？」
「逃げるなり引きずり出すなり、その辺は任せる」
「我々は市街地近郊に降りて騎士部隊を指揮する。朝倉大尉、後は頼んだぞ」
「了解」

市街地の工事現場に降り立った騎体から夏川達が降り立ち、その近くのスクランブル交差点上空では、上空に静止浮遊するＴＡＣ（タクティカル・エア・カーゴ）から騎士達がリペリング降下していく。
「ちょっとした市街戦ってところかな」
その様子を上空から眺めていた美柚姫の耳に夏川からの通信が入る。
「騎士隊と合流した。これから地下連絡道を通って目標へ向かう」
「朝倉了解、ご武運を」
それで通信を切ると、美柚姫はすぐにＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の瑞穂に命じた。
「周辺建物内部の生命反応確認して。ついでに屍鬼（グール）も。地下で戦闘になったらサポートも出来ない」
「了解――上空待機中のＥ－ＷＡＣＳへ。そちらの情報を教えて下さい」
「こちらＥ－ＷＡＣＳ哨戒担当相川、注意して下さい」
上空２万メートルに待機しているＥ－ＷＡＣＳからすぐに返答が入った。
ただ、恐ろしくノイズが入って聞き取りづらい。
「駅周辺に強力な結界あり……ザザッ」
「朝倉騎よりＥ－ＷＡＣＳ、こちらではセンサーオールグリーン、異常は確認されていません」
――ザザッ。
ＮＯ　ＣＯＮＮＥＣＴの表示が通信モニターに現れた。
Ｅ－ＷＡＣＳとの通信が途絶えたことを示す表示は、相互の騎体

が無事である以上はあり得ない事態だ。
「お姉ちゃん！」
「周辺を警戒して！広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）――」
美柚姫は武器の選択に躊躇した。
ここで広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）を使えば、市街地は一瞬で焼け野原だ。
散弾砲なんて使えば目も当てられない。ガドリング砲は使っただけで銃殺モノだ。
「――戦棍（せんこん）でいい」
美柚姫は火器の使用を諦めた。まだ刀剣類で相手した方が、“万一”負けた所で言い訳も出来るというものだ。
負けて殺された時のことは考えないに越したことはないし……。
「全騎へ、近接戦闘用の武装を選択して。流れ弾なんて絶対不可」
美柚姫が腰のウェポンラックから愛用の戦棍（せんこん）を引き抜いた。
他の騎もビームライフルを格納し、戦斧などの武装に交換する。
「飛び道具系は被害が大きすぎてダメ。使えば夏川大尉に怒られるだけじゃすまないよ？」

九州の生まれである夏川にとって、雪は今ひとつ理解出来ない自然現象だった。
空から白いものが降ってきて、その重みで家屋が潰れたり、交通網が麻痺するなんて桜島の火山灰さえ起きないことが本当にあるんだろうか？
この地下通路は、その雪というものから通行人を守り、日常の利便を確保するために作られたという。
通路は不特定多数の人々が行き来しやすいように幅が広く、その両脇はテナントがぎっちりと並び、それだけで好奇心を誘われる。
ただ、都内の地下鉄と接続された地下街を彷彿とさせる構造が出

来た理由が雪対策というのは、やっぱり自分にはわからないな。と夏川はふとそんなことを思った。

「外部からのサーチは？」

「電波状況が悪く、地下街と外との連絡が取れません」

「ちっ」

夏川はケーブルを這わせる有線装置を用意させなかったことを今更に後悔した。

よくよく考えれば、ここは魔族軍の縄張りだ。狩野粒子その他、どんな理由で電子装置が壊れてもおかしくないのが相場となる場所。

メサイアに長く乗りすぎたか……？

そうは思っても仕方ない。

上空から地下をサーチした限りでは異常や脅威は確認出来なかった。

敵はあくまで「アークプリズム金沢」の地下に予告通りにいる。

それを信じるしかない。

真っ暗な地下通路の中、夏川は“暗視”魔法のかかったゴーグルを頼りに、もう一度だけ周りを見回した。

高額な電子装備満載の暗視装置は、こんな所では役に立たないし、何より重い。

近衛魔導兵団が特殊部隊向けに開発した魔法付与済みのゴーグルは、外見こそ普通のシューティンググラスだが、その分軽量で、暗闇の中で使っても使用者に昼間同然の視界を与えてくれる優れものだ。

ゴーグルの暗視魔法付与レンズを持ち上げれば普通の視界が確保出来るように工夫されており、明暗切り替えの即応性にも十分に配慮されている。

こんなものでもなければやっていられない仕事だが、素人が見たらびっくりするだろうな。と夏川はふと、不思議な悪戯心が沸いてくるのを感じた。

「大尉」

夏川が拳銃片手に移動するのを見とがめたのか、騎士部隊の隊長が背中に背負っていたショットガンを差し出した。
「スラグ弾だ。接近戦なら十分やれるぜ」
「――――借りるぞ」

夏川は少しだけバツの悪い思いがした。
指揮官は通常、拳銃だけが配備され、騎士の取り締まりの時でさえそれ以外は携帯した経験が夏川には無い。
むしろ、小銃を持つこと自体が指揮官として問題。なぜなら、銃を撃つなんて下っ端のすることだから。
指揮官教育の皮肉な賜だ。
だが、相手が相手で、状況が状況だ。
騎士隊はいい。
騎士隊に所属しているなら、ショットガンなんて必要ない。
拳銃でさえ必要ないだろう。
むしろ、それが上位警察権執行部隊たる第9中隊とはいえ、メサイア隊に所属する騎士の限界だ。

騎士。

弾雨をくぐり抜け、鉄板を素手でぶち抜く戦闘人種。
その身に必要なのは肉体とその延長線上に属する武器のみ。
剣や戦斧。
メサイアという魔法戦闘兵器が人型なのも、通常なら遠距離からの砲撃の的でしかない巨大なサイズでも、戦場の全てにおいて恐怖と憎悪の対象たりうるのは、まさにメサイアが騎士の肉体の延長線上にあるからだ。
なら、メサイアを駆る騎士が世界最強の騎士かいえば全く違う。
肉体で剣を振るうのと、メサイアで剣を振るうのと、その才能は全く別なのだ。

メサイアでどれ程の戦果を上げようと、その騎士が素手で剣を振り回しても格下の騎士相手に勝てる保証はどこにもない。

故に、メサイアを駆る騎士は別に“メサイア使い”と呼ばれ、あくまで騎士の世界では格下の扱いを受けてしまう。

騎士の象徴たる剣を帯びる権利が基本的にメサイア使いにはないのがその証拠のようなものだ。

彼等が帯びることの出来るのは、短剣か模擬刀のみ。真剣を帯びると地位を詐称したとして罰せられることになる。

こんな実戦の世界でも、それは当然として見なされる。

夏川にショットガンを渡した騎士は、腰に戦闘用の太刀と刀を差した立派な騎士だ。

不意の遭遇戦に備えて、右手にはコンバットナイフを握ってはいるが、この武装で夏川が持てるのはコンバットナイフだけ。

スタンブレードというハードラバー製の長い模擬刀を持つことも出来るが、それは夏川のプライドが許さない。

相手にしても、騎士の身でメサイア使いに敬語を使うのは面白くないと思っている事も経験からわかる。

でけなれば、中尉が大尉に対して敬語を使わない理由がない。

夏川はショットガンの具合を確かめると、騎士の差し出した予備マガジンの入ったケースを腰に吊した。

「……こんなところで市街戦とはな」

「敵は場所と相手を選んじゃくれませんよ。で、どうするんで？」

「こちらが必要なのは、芹沢瀬菜だけだ。身柄さえ確保してくれれば、あとは好きにやっていいさ」

「女は犯した後でもいいのか？」

「ああ。手足引きちぎろうが、尋問に答える舌と、判決文を聞く耳と、死刑台を見つめる目があればいい」

「――上等だ。俺達の後に続いてくれ」

騎士達が無音に近い静けさで前に進んでいくのを、夏川は冷たい目で眺めた。

「大尉」
後ろからついてきた大月が慌てたように、それでも小声で訊ねた。
「よろしいのですか？」
「何が？」
「芹沢瀬菜のことです」
「心配か？」
「そ、それは――」
「近衛の身で、彼女の何を心配する必要がある？」
「裁判所に引き出されたとき、身体に損傷があると」
「公開の裁判が開かれると思っていたのか？」
「まさか……」
「どうせ秘密裁判で処刑されて、盗んだ金は近衛のものだ」
「そ、そんな！」
「余計なところに首を突っ込むと長生き出来ないぞ？」
夏川は狼狽する大月を尻目に騎士達を追った。
その歩き方は、決して騎士達を率先して追おうとする意思のかけらも見えない。
「――欲に目がくらんだと同じ位にな」

「搬出完了まで後５分」
「予定より２分３０秒遅れています」
腕時計をちらと見た瀬菜の声は涼やかだがしっかりとした叱責を含んでいた。
「補正、間に合わせます」
背広姿の男は焦った様子もなく答えた。
「転送、前倒しで開始しろ。門（ゲート）接続」
「地下街ルートＡ、１３番センサーに人間の反応。この動き、騎士です！」

別な黒服の男がＰＤＡ片手に報告した。
「数は」
「１５を超えています」
「ルートＡの担当は？」
「“柘榴石（ガーネット）”と“瑠璃（ラピス）”です」
「……両名へ厳命して下さい」
瀬菜はピンと張られた弦のような口調で言った。
「大月様に手出しは禁止。それと、退却時には必ず通路を爆破し、敵の針路を塞ぐこと。それはいいですね？」
「他には」
「――――多少、過ぎた“遊戯”は大目に見ます」

灯りの消えた“アークプリズム金沢　１００メートル”の案内表示を目にした騎士達は、目標までもう間もなく到達することを知った。
ターゲットである芹沢瀬菜はあのデパートの地下にいる。
抵抗が予想された妖魔も屍鬼（グール）も、とにかく障害となる脅威は存在しない。
地表からの攻撃は、メサイア隊とＴＡＣの直接制圧で防げる。
俺達は、芹沢瀬菜の退路を断って、じっくり追い詰めてから捕縛すればいい。
捕縛した後は――――その先を考えれば、随分と楽しい時間が過ごせるだろうな。と、騎士達は内心でほくそ笑んでいた。
何しろ、写真で見た限りの彼女はアイドルでもそういないだろう程のとびきりの美少女だ。
それを“相手”に自由に“楽しむ”ことが許されているのだ。
男として欲望を感じない方がどうかしている。
騎士達の中にあるのは、任務達成というわかりきった将来ではな

く、“一番始め”に、誰が彼女の“相手”をするかという、不定な事でしかない。
ＴＡＣの中では、彼女が処女かどうかを賭けて卑猥な会話が大声でなされていた。
大抵が、瀬菜は非処女だという意見で占めていたが、どっちにしてもそれを確認する名誉ある一番槍は誰もが味わいたいと思っていた。
「――――ん？」
通路上、“メガネ屋トップスーパー”と書かれた移動式の立て看板の陰からふらっと影が飛び出してきたのは、その時だった。
ふらふらとして、まるで今にも倒れそうな様子。
騎士達は思わず剣やナイフ、そしてシールドを構え、足を止めた。
「う……ううっ……」
静かな地下街にか細い声が響く。
その場にへたり込んだのは、びっくりする位小柄な存在だった。
幽霊でも出たかと身構えた騎士達だったが、それが豪奢な深紅のドレスを身に纏った、透けるほど白い肌を持つ小さな女の子だと知って、警戒を解いた。
無骨な男に過ぎない騎士達にとって女の子の年齢なんて知れたものではない。
騎士達にとっては、その女の子の歳頃ははっきりしない。
わかることと言えば、身長は１メートルちょっと。
金髪碧眼。
性別以外ではその程度だ。
びっくりするくらい小柄で、華奢な体つき。そして顔立ちはまるで人形のようだが、見た目でわかる。この子は屍鬼（グール）じゃない。
もし、この娘が屍鬼（グール）なら、特有の反応があるはずだ。つまり、この子は生きた人間だ。
肌つやに問題はなさそうだが、伏せされた瞳が潤んでいる。
「市民の生き残りか？」

「恐らく――――よく生き残っていたものだ」
騎士達が立ち止まり、静かに包囲網を形成しながらその女の子を取り巻いた。
「どうします？」
「任務の邪魔だ。撤収時に回収しよう。下園」
衛生担当者が呼ばれた。
「貴様、この――――」

サクッ

野菜でも切ったようなむしろ心地よいくらいの音が、静寂の中に短く響いた。

ズル……ッ
ブシュゥゥゥッ

その後に続いた音。
騎士達の脳は、その音の意味を理解するより先に、体のあちこちが発した信号を感覚として捉えることを求められた。

首が痛い。
手が痛い。
右足が痛い。
左足が痛い。

体中が――――痛い。

脳が神経を経由して受け取った信号を感覚に変換し終わる前に、騎士達はその生命活動を強制終了させられていた。

ズシャッ
騎士達の肉片が宙を舞い、
シュルッ
そんな衣擦れの音と共に少女が立ち上がった。

「――――終わったの？」
立て看板の影から、もう一人、少女と同じ背丈のドレスをまとった少女が姿を現した。赤いドレスと対のように作られた濃紺のドレスを纏ったチョコレート色をした髪の女の子だった。
「ええ」
シュルシュルシュル……。
赤いドレスの少女の左手の手元で、そんな音がする。
少女はハンカチを慎重に手首に当て、じっとその様子を眺めている。
「――――ところで、“黒服”から命令されていた大月っていうのは、本当にこの中に含まれていなかったんでしょうね？瑠璃（ラピス）」
「ええ。大丈夫よ」
瑠璃（ラピス）と呼ばれた濃紺ドレスの女の子は自身満々に頷いた。
「この地下墳墓（カタコンペ）の入り口から追跡していたもの」
「ここは地下墳墓じゃないって何度も言っているでしょう？それで、肝心の大月はどうしたのよ」
「連れの女と一緒に“迷宮”の呪符で迷子になってもらってるわ」
クックックッ。
瑠璃（ラピス）は口元に手を当てて優雅なまでに忍び笑いを漏らした。
「今頃お二人でこの――――」
ゴロッ。
瑠璃（ラピス）は足下に転がっていた騎士の中身入りのヘルメットを革靴で

踏みつけた。
「お仲間を追ってテクテクテク、同じところを行ったり来たりされているわ」
「……そう」
シュルッ
それを最後に、音は止んだ。
赤いドレスの少女は頷くとハンカチを開いた。
白い絹のハンカチが、真っ赤に染まっていた。
「斬糸(ざんし)だけで済んじゃったの？」
「まったく、せっかく“薔薇破陣”まで用意してきたのに、楽しむことも出来なかったわ。これで腕利き？笑わせるわ」
「だよねぇ……柘榴石(ガーネット)」
コンッ。
瑠璃(ラピス)は足で弄んでいたヘルメットを蹴った。
赤い軌跡を残して通路を転がっていくヘルメットを一瞥した後、
「こんなつまらない奴ら相手に、瀬菜様は何を手間取っていらっしゃるのかしら」
「手間取っているんじゃなくて、弄んでいるのよ」
柘榴石(ガーネット)と呼ばれた赤いドレスの少女はちらりと瑠璃(ラピス)に視線を向けた。
「猫という動物は獲物をただでは殺さないそうよ。きっと、瀬菜様も同じ」
「ふぅん？獲物は最後までとっておく主義？」
「似たようなものかしらね」

ズズゥゥゥム

遠くから雷のような音がして、地面が揺れたのと、パラパラと埃が落ちてきたのはほぼ同じだった。

「地上で交戦が始まったようね。瑠璃（ラピス）、“迷宮”の有効時間は？」
「設定は5分よ。今丁度、残り1分になった」
「了解した」
柘榴石（ガーネット）はどこから取りだしたのか、片手ででは掴みきれないほど巨大な（彼女の体と比較して）金属の箱を取り出すと、ダイヤルを操作した後、真ん中に設置されたボタンを二回、強く押した。
「これでよし……人類の技術とやら見物するとしましょう」
「終わったの？」
「ええ」
柘榴石（ガーネット）は、金属の箱を、もう興味ないといわんばかりに放り捨てた。
「起爆まで2分。瀬菜様の元へ戻って、大月とかいうのが事態に気付くまで十分な時間はあるでしょう。ところで」
「何？」
「ここにトラップをしかけたこと、どうやって大月に気付かせるの？」
「そこはお任せあれ」
瑠璃（ラピス）は真っ平らな胸を反らせて自身満々に答えた。
「絶対、絶対に気付くから！」
「じゃなければ、私達仲良くスクラップよ？」
「大丈夫だって！」
「信じましょう……いくわよ」
途端に柘榴石（ガーネット）は、通路の奥めがけて駆けだした。
その動きは、人間のそれとはとても思えない。
一瞬にして影となって視界から消えてのけた動きは、強いて言えば騎士のそれだ。
「あっ、まっ、待ってよぉっ！」
瑠璃が後を追い、周囲には静寂と死体が残された。
違う。

ピッ。
ピッ。

そんな音が、静かに、だが、確実に響いている。
辺りを見回せばわかるだろう。
天井や壁の見えないところへべったりと乱暴にモール状の物体が張り付けられている。
それはすべてワイヤーでつなげられ、そのワイヤーはさっき少女が出てきた立て看板の影につなげられている。
そこには、カウントダウンを開始した装置があった。
カウントがゼロになったのと、モールの中に仕込まれた高性能爆薬が起爆したのは、人間の感覚では同時だった。

「地下街付近で大規模爆発！」
瑞穂の報告を受けたとき、“余計な報告するな！気が散るでしょう！？”と怒鳴らなかっただけ、美柚姫は誰かに褒めて欲しいと思った。
視界の端に、駅前の大通りが崩落していく光景が入ったはずだろうが、正直、そんなことを気にしている余裕は全くない。
それより前に、襲いかかってくる敵をどうにかして！
本当に、そう言いたかった。
「市街地へ引き出して！」
美柚姫は怒鳴った。
「これ以上、市街地に被害は出せない！」
「やってるけど！」
「無理だよぉっ！」
佐野姉妹が悲鳴を上げるのも無理はない。
戦斧と小太刀の連係攻撃。

それはフォーメーションをどうするか思案に暮れた中で二人が手に入れた偶然の産物だ。

左から亜紀が戦斧を横に払って襲いかかり、敵がそれを回避した所を小太刀で武装した亜夜が狙う。

ところが、敵は空中戦に相当熟練しているらしい。

腰を狙った戦斧を、下半身をほぼ水平まで後退させることで回避、その不安定な体勢を逆に活かして、狙い所に迷う小太刀を、とんぼ返りの要領で回避してのける。

いつの間にか二人の背後に回ったはるかの薙刀が、回転しきらないその体勢を狙って唐竹割の要領で振り下ろされる。

敵からすれば、亜夜騎の完全な死角からの奇襲となる。

これでさえ、まるでわかりきっていたかのように、敵は騎体を大きく後退させることでかわしてのけた。

「まさかっ――――きゃっ！？」

一瞬、呆然とした美柚姫のすぐ真横をビームライフルの一撃が掠め飛んでいった。

敵は、しっかりと自分達を把握している。

三騎を回避した後、次に来るのが自分だと思ったから撃ったんだ。

美柚姫はそれが何故か、はっきりとわかった。

その上で、一人の騎士として、一隊を率いる指揮官として、何をすべきなのか――――全く頭に浮かんでこない。

川上騎が敵の頭上からハルバードを構えて襲いかかる。

ビームライフルの連射を体を数回、回転させて見事なまでにかわしてのけただけでなく、正確に脳天を狙ったハルバードの斧を操ってのけた。

敵ははっきりわかるほどのスピードで騎体を急降下にいれる。

ハルバードの斧が空を斬ったと思ったが、川上騎はそれが当然といわんばかりにハルバードの槍部を使った突き技へと攻撃手段を変えた。

敵が構えたシールドに深々と槍が突き刺さり、ハルバードの柄を

軸に体勢を整えた川上騎が至近距離からビームライフルを乱射した。
全弾が騎体の数カ所に命中した。
頭部が吹き飛び、肩から腕がもぎ取られ、騎体は空中で分解を始めた。
川上騎がシールドからハルバードを引き抜き、敵を踏み台にして空に舞って2秒後、それまで天才的な才能を発揮していた敵騎は、建設中のビルの工事現場へと背中から落下。爆発した。

動く世界　第九話

●“鈴谷（すずや）”

「せっかくのチャンスだったのに」

大月と夏川を前にした美夜の視線は相変わらず冷たい。

「騎士部隊は全滅。お前等二人だけおめおめ逃げ帰ってきたと？」

「……はい」

大月は答えた。

「弁明の余地はありません。しかし」

「弁明がなければ黙れ。騎士１０名を失った貴様達の失態の始末は、私の権限を越えている」

美夜は入り口で待機していた憲兵に目で合図を送った。

憲兵達が銃を片手に二人に近づく。

「お前達の古巣から送られてきた」

憲兵によって腕をねじ上げられる二人を前に、美夜はデスクの引き出しから一通の封書を取りだした。

「軍法会議送りだ。現刻をもって大月、夏川両容疑者の身柄を拘束する。容疑は」

何故か、美夜はここで書類を折りたたんだ。

「――辻中佐にでも聞くんだな」

「困りましたな」

二人を見送った後、高木はぽつりと呟いた。

「ここに来て、ようやく連携がとれ始めたというのに」

「……」

「……艦長？」

椅子に座ったまま、美夜が顔を強ばらせ、歯を食いしばっている。

「お加減が？」

美夜は無言で頷いた。

その額を脂汗が伝わっていく。
高木は何度か、美夜がこういう状態に陥った所に遭遇しているから、まだ冷静に対応がとれた。
彼はすぐにインターフォンを医務室へつなげた。
「失礼――医務室か？副長の高木だ。艦長の具合が悪い。鎮痛剤を持って、艦長室へすぐに来てくれ」

「はい。いいですよ？服を着て下さい」
ベッドに横たわった美夜の診察を終えた、水瀬が言った。
高木はこのために艦長室から追い出され、今では艦長室の前に立っている。
美夜は高木にとっては乗艦であり、一人の人妻なのだ。
さすがに間違いは犯せない。
「済まないな」
上半身裸になった美夜は、起き上がるとベッド脇に引っかけていたブラウスの袖に手を伸ばした。
「疲れかな」
「精神的なストレスが全身の血行を悪くしているのは事実です。傷口の神経が血行の流れの悪化に過剰反応を起こしたんです。マッサージと治癒魔法はかけておきました。大分違うと思いますけど？」
「ああ。体が軽い。とはいえ、いつもの鎮痛剤を飲んでいないが大丈夫かな？」
すらすらと医者のようなことを言うな。と思って、この女の子が医療に関しては医師以上の療法魔導師であることにやっと気付いた美夜は、苦笑混じりにそんなことを訊ねた。
「これですか？」
水瀬が白衣から取りだしたのは、美夜には見慣れたカプセルだ。
「ああ」
「これ、やめて下さい」

「ん？」
「この薬、いずれ体に悪影響が出ますよ？」
「今まで、特に弊害を感じたことはないが？」
「月経が狂ったこと、ないですか？」
「えっ？」
「成分の中にホルモンや脳下垂体へ影響を与える性質のものがいくつか入っています。この分量だと連続して投与した場合、月経の狂いみたいな生理不順が起きて当たり前なんですけど？」
「……いや」
美夜は驚いた。という顔で答えた。
「てっきり、元から私は生理が狂いやすいんだ。この傷が原因だとばかり思っていたが」
「半分はそうですが、半分は薬の常用による副作用です」
水瀬は言った。
「うーん……いっそ、時間をかけて直さないと困るなぁ……これ」
「確かに困っている」
美夜はブラウスのボタンにかけた手を止めた。
「体はご覧の通り傷だらけで、生理は止まりがちだし、子供なんて半ば諦めている。結婚できただけで奇跡だとな」
「傷なんて」
水瀬は少し驚いた。という顔で言った。
美夜から見れば愛らしい幼い顔立ちだが、いかんせん表情が乏しいせいで、感情の動きが美夜のような管理職になればすぐにわかる。
「消せますよ？こんなの」
「……馬鹿な」
ふっ。
美夜は自嘲気味に笑って見せた。
「医師にも療法魔導師にも無理だと言われている。腕だけでもと皮膚の移植までやったんだ」
「無駄なことしましたね」

「何？」
水瀬は左手で起き上がろうとする美夜の体を押さえた。
ぐっとくるその力の強さは、この娘が騎士だといういい証拠だ。
経歴の中に、魔法騎士とあったのに思い至った美夜の前で、彼女の腹の上にかざされたその右手が強い光を放った。
ぽうっ。
体の中で何かが駆け回っているような、奇妙なくすぐったさに、美夜は歯を食いしばって耐えた。
あまりのむず痒さに知らずと涙が出てくる。
別に水瀬が何かしているわけではない。
ただ、手をかざしているだけだというのに、肝心の美夜の体の中で何かが変化しているのを、本人として強く自覚するしかなかった。
「――――っ！」
食いしばった歯の間から声が漏れる。
痛くない。
苦しくもない。
ただ、むず痒くて仕方ないのだ。
一体、どれくらい、そうしていたのかわからない。
主観的には恐ろしく長い気はしたが、実際にほんの数秒かもしれない。
はぁっ。
美夜は光が収まった途端、涙混じりのため息を吐き出し、呼吸を整える必要に迫られた。
「目立つ所は別にやりましょう」
水瀬の指が、美夜の白い肌の上をつっとなぞった。
「これ、連続してやると疲れますからね。ヒマがあったら医務室へ来て下さい」
「……えっ？」
美夜がびっくりしたのも無理はない。
その肌に刻まれた傷の場所は誰より知っている。

水瀬が今、軽くなぞった所には、まっすぐに１０センチほどの、縫い目もはっきりした傷がある。
あの事故の時、ここから内臓が飛び出しかけたから、よく覚えている。
それが――――？
「……」
信じられない。
美夜は自分の身体をぽかん。として見つめていた。
そっと……震える手で自分の腹を触ってみた。
あるはずの傷が――――ない。
まるで最初から怪我なんてしたことがないといわんばかりの肌があるだけだ。
「……」
言葉にならず、水瀬と自分の腹を交互に眺めるだけの美夜。
その彼女に、水瀬は何でもない。という顔で言った。
「時間下さい。治療に一番必要なのは時間ですから」

この晩、連日のように衛生部隊の到着を催促し続けていた美夜が一転して、当面の間は現状のままでよいと司令部に方針転換を告げたことを、水瀬は知る術さえなかった。

●翌日　朝　“鈴谷（すずや）”ハンガーデッキ
ガス欠寸前まで戦車を走らせた陸軍は、美柚姫達が撤退した後も軍を進め、何の抵抗も受けること無く金沢市街まで到達。同市を数ヶ月ぶりに奪還することに成功した。
金沢市街を戦車が列を作って行進する光景は、まるで凱旋パレードのようでさえある。
金沢市役所屋上に日章旗が翻る様は従軍記者達の手によってテレ

ビで生中継され、それを受信する“鈴谷（すずや）”でも見ることが出来た。
「一体、何だったんだろうねぇ」
テレビでその様子を整備兵達と共に見る亜夜が首をかしげた。
「何であの二人だけ助かったの？」
「さぁ……」
知ってる？と、美柚姫がはるかを見るが、彼女も無言で首を横に振った。
「騎士部隊が先行している間に」
亜紀がどこからかパイロット用のドリンクを両手に抱きかかえるようにして戻ってきた。
「二人だけ引き離されたんだって」
「二人だけ？」
「うん。医務室で聞いた」
はい。これ。と、亜紀はドリンクの入ったチューブを皆に手渡した。
「ああ。医務室っていえば、新任の療法魔導師の娘がいるでしょ？かわいいよね」
「うん。ベッド以外のトコで滅茶苦茶にしてやりたいタイプ」
「何も知らないって顔してるけど、ああいうのがスゴいんだよねぇ。それで？袖の下に何渡したの？」
「美柚姫っちのブラ」
「はぁっ！？」
あっ。これね？
素っ頓狂な声を上げる美柚姫を尻目にポケットから亜紀が取りだしたのは、オレンジ色をした巨大なブラジャーだった。
きゃぁぁぁっ！
おーっ。と歓声があがる衆人環視の元、下着を披露された美柚姫は悲鳴をあげ、亜紀からブラをひったくった。
「冗談だよ。冗談」
「だ、だよね！？ははっ……これも、ランドリー室に落ちてたとか、

そういうのだよね！？」
　ブラを抱きかかえてその場にへたり込んだ美柚姫は泣きながら笑うという器用なマネをしてのけたが、
「バカだなぁ。ゆーりちゃんに本当に渡したらイヤミでしょ？あんな絶壁真っ平ら、可哀想じゃん。だから、本当は副長に売りつけてやろうと思ったんだけど」
「こらぁっ！」
「艦長がね？医務室でゆーりちゃんのマッサージ受けながら、副長と世間話してたのが全部聞こえたんだ。だから、売りつける必要なくなったんだ」
「それで？」
「ゆーりちゃんが言うには、二人には幻覚系の魔法を使われたんだろうって」
「幻覚系？」
「うん。魔法をかけられた魔力断片（マジカル・フラグメント）をゆーりちゃんが嗅ぎつけた。だから間違いないだろうって」
「それ……どういうこと？」
「なんでそんなものついていたかは、ゆーりちゃんにもわかんないって。魔法にかかったのが、あの二人だけなのか、他の騎士達もそうだったのか」
「だよねぇ」
「死体でも回収してくれればまだわかったはずだけど」
「無理だよ。崩落した地下街と一緒に埋まっちゃったんでしょう？」
「うん。二人の数メートル手前まで完全に埋まっちゃった。しかも、爆風ではじき飛ばされてそれだから、あの二人、本当なら死んでいたはず」
「……二人を助けようとした？」
「あり得ないよ。大月大尉は逮捕に来いって誘われたんでしょ？それを何で幻覚魔法で方向音痴にさせて、爆発で殺すようなマネするの？」

「そんなこと、私に言われても困るよぉ……」
「ゆうりちゃんも艦長も、ついでに副長も、誰も彼も、何が何だかわかんないって首かしげてた」

●天原骨董品店

ガラクタと呪具が山積みとなり、雑然とした雰囲気が漂う骨董品店の一番奥に従業員用の休憩スペースがある。
かのんが、どこかの粗大ゴミ捨て場から拾ってきたという普通の家庭用テーブルをとりかこむのは、瀬菜と瑠璃、柘榴石（ガーネット）の三人。
任務終了後、みんなで反省会を兼ねたお茶会を開くのは、いつもの習いだ。
普通の椅子でさえ、瑠璃達二人が座ると背もたれでその姿は全部隠れてしまう。
「……はぁっ」
ケーキをほおばる瑠璃（ラピス）と、静かに紅茶を飲む柘榴石（ガーネット）を前に、瀬菜は小さくため息をついた。
「監視に残した桔梗から、大月様にお怪我がなかったと報告は入っていますけど、大月様達が無事だったのは、桔梗がお二人を突き飛ばして地下街の崩落から助けたからだというではないですか」
「そんなのウソだよ」
フォークをくわえたまま、ほっぺたをクリームだらけにした瑠璃（ラピス）は答えた。
「あいつ、また点数稼ぎしたくてウソついているんだよ」
「そうかもしれないわね」
柘榴石（ガーネット）が優雅な仕草でティーカップをソーサーに置いた。
「その報告では、私の準備した爆薬に問題があった――――そう聞こえるものね」
「そう聞こえるんじゃなくて」

二人の後ろから声がした。
背もたれからのぞき込むようにして二人が振り返ると、そこに立っていたのは紫色のドレスを着た、二人と同じ位の背丈の少女だった。
名前を桔梗、という。
二人と確実に違うのは、その背中に黒い一対の羽が生えていることだ。
「そのものなのよ。大体、経過はずっと見ていたけど、柘榴石（ガーネット）？あんた、ＴＮＴとＣ４、間違って使ったでしょう」
「そんなことないわ」
柘榴石（ガーネット）ははっきり答えた。
「３日前に爆薬筒を作ったけど、事前に爆破による効果範囲を計測して、ＴＮＴを詰め込んだ。爆薬筒による爆風と衝撃波の効果範囲に大月様達がいた所は、ぎりぎりで入らないはずよ」
「なら聞きたいんだけど。その筒、予備作った？」
「いいえ？最初Ｃ４で作ったけど、建築素材の経年劣化を考慮したら、それでは危険と――」
コンッ。
柘榴石（ガーネット）の頭を軽く叩いたのは、桔梗の持つボール紙を丸めたような茶色の筒だった。
長さにして１メートル程度の代物だが、
「この筒の中にどうしてＴＮＴが入ってるの？」
「……えっ？」
びっくりする柘榴石（ガーネット）にたたみかけるように桔梗が怒鳴った。
「バカっ！あんた、爆薬間違って持っていたでしょう！爆薬の質が違うせいで地下街の一部を崩せば済むところが連鎖崩壊は起きるし、私が防御結界でカバーしなかったらあの二人、今頃、挽肉は避けられなかったんだからね！？」
「う、嘘よっ！」
柘榴石（ガーネット）はムキになって怒鳴るが、ちらつかされる明らかな証拠を

前に手も足も出ない。
「……過ぎたことです」
三人のやりとりを黙って聞いていた瀬菜が桔梗用の紅茶を用意しながら言った。
「私は結果を求めます。一応、任務は成功したのです。桔梗、お茶をどうぞ？」
「ありがとうございます――それで」
「何か？」
「人類の情報を掴んできました」
「何かお金になりそうなことを？」
「いえ。大月様達ですが」
「任務失敗で左遷ですか？」
「ご存じでしたか？」
びっくりして動きをとめた桔梗だが、瀬菜は平然としていた。
「そうなるように仕組んだのです。私が」
「はっ？」
「あの御方なら、あんな冗談じみたお誘いにも乗ってくる。そこで目に余るほどの失態を演じさせれば、上層部として彼を更迭するしかなくなる。更迭させれば、彼は前線任務から外され、後方勤務になるでしょう」
「銃殺とか、心配じゃないの？」
「瑠璃（ラピス）、それは考え過ぎよ。大月様は殺すより活かして使った方が利口な御方です」
「ふぅん？じゃあ、御主人様はそこまで考えて、今度の騒ぎを起こしたの？」
「そうです」
「最初から金品強奪はあくまで誘うためのエサで、大月様達はエサの前で大きく転ぶように考えていたと？」

「いけませんか？柘榴石（ガーネット）」
「い、いえ……でも、どうしてそんなに後方へと下げたいとお考えなのです？その……大月様は、騎士ですけど、公には御主人様にとっては……その」
「敵、ではありますけど、それはあくまで公的なことです」
皿の上にケーキを一つ用意した瀬菜は、桔梗をそっと、自分の横にある椅子の上に座らせた。
「個人的には――――わかりますね？」
「私にはよくわからない感情ですが」
桔梗は答えた。
「御主人様……その」
「何です？」
「……いえ」
「はっきり言って良いんですよ？」
「スクラップにされたくないですから」
桔梗はティーカップを掴み、苦笑を漏らした。
「いただきます」
「どうぞ？他に情報はありました？」
「ヴォルトモード卿の軍で医薬品が欠乏気味と。現地ではシンメックスのＭＲが跳梁跋扈しています。我が商会の独占販売に穴を開けたいのでしょう」
「どの薬ですか？」
「リストは傍受しておきました」
桔梗はテーブルの上に小さな水晶を置いた。魔族では一般的なメモリー装置だ。
「さすがですね」
「私はそのために作られたのですから」
紅茶を飲んでほっこりという顔の桔梗を、瑠璃（ラピス）と柘榴石（ガーネット）が憎々しげに睨んでいる。
「な、何よぉ……ちょっと情報分析型だからって」

「私達の妹分のクセに――――生意気な」
「ほらほら。ケンカしないの」
「だってぇ」
「ケンカしたら、今晩のお花付きハンバーグは抜きですよ？」

●“鈴谷（すずや）”艦橋付近

金沢を陸軍が奪還しようが、そんなことは“鈴谷（すずや）”には関係ない。
芹沢瀬菜逮捕失敗をもって任務は終了したはずだ。
ところが、“鈴谷（すずや）”は金沢上空での待機命令が発せられ、そのまま動けない状態に陥った。
次に投入する作戦が決まっていないだけ。すぐに移動になるだろう。
そんな楽観論を口にするのは新入りだけだ。
先代の“鈴谷（すずや）”から乗り継いだ古参の乗組員は、金沢上空にて待機の一言で自分達の未来を悟った。
“鈴谷（すずや）”と艦載メサイア部隊は、よくて金沢防衛、悪ければ石川県か富山県の奪還の先兵を命じられるだろう。
“鈴谷（すずや）”の乗組員は、仕事に関してはマゾでないと務まらない。
そんな自虐的な冗談がまことしやかに語られる中、本当に金沢防衛が正式に任務として司令部から命じられ、その増援が送られることになった時には誰も笑いもしなかった。
司令部が泣いて感謝しろと言わんばかりの口調で美夜に伝えた限りでは、Ｅ－ＷＡＣＳ護衛の風翔隊３騎と、紅龍隊３騎。これで美夜が激怒したのも無理はない。
狙撃隊はどうした！
斬り込み隊は、“死乃天使”は！？
先の“鈴谷（すずや）”メサイア隊の中核を成した部隊の半分が未だに届いていないのだ。

戦力はいつだって半分以下。
フォーメーションもまともに組めない騎士達で何をしろというのか。
風翔隊と紅龍は共にＥ－ＷＡＣＳと連携した空戦でしか真価が発揮出来ない騎で、使い勝手が悪すぎる。
正直、紅龍を送ってくるならまだ“幻龍改（げんりゅうかい）”を同じ数だけ送ってもらった方が美夜としては嬉しかった。
こんなもの、鍋ぶたか猫の手程度の戦力増強だ。
気休めになるなら避けでも送ってくればいいんだ。
飲んで潰れている間に戦争が終わってくれれば万々歳だ。
そう思う。
通信を使った司令部との打ち合わせの後、休憩をとった美夜は、艦橋から席を外した。
目的地は医務室だ。
古傷が一つ消える奇跡が起きた上に、昨晩からすこぶる体の調子が良い。
美夜の古傷。
彼女が二宮と共にメサイア操縦者候補生だった時、訓練中の事故で負った傷のこと。
潰れたコクピットから引き出された美夜を一瞥しただけで、軍医が死亡手続きに入ったあの時療法魔導師が偶然にも学校にいなかったら、美夜は確実に死んでいた。
一年近いリハビリの後に残されたのは、指揮官としての素質を見込んだ艦隊司令部からの誘いと、騎士として使い物にならなくなった体に刻まれた傷だけだ。
当時を物語る傷跡が疲れがたまったり、ちょっとした弾みにひどく痛むことがあり、鎮痛剤が美夜には欠かせない。
整体などにも頼ったことはあるが、気休めにもならなかったし、何より職務上、病院通いは出来ない。それがたまりにたまって、日常の人間としての機能だけでなく、近頃では「女」としての生理的

機能にも響くことが多い。
それを見抜いた上で、水瀬は魔法による治療を勧めてくれた。
深く刻まれた傷を消すことは療法魔導師にも医師からも無理と判断されたこと。
それが可能になれば、公衆浴場にも行ける。ドレスも着られる。何でも出来る。
そんな女としての希望を胸に、通路を歩く美夜の足は知らずに早足となる。

“着艦騎あり！着艦騎あり！各員、事故防止に留意せよ！繰り返す――”
“着艦騎は左舷デッキへ――”
艦内放送が警告を伝える中、メサイアの爆音が壁越しに聞こえてきた。
「……早いな」
そうは思うが、せっかくの休憩時間だ。高木副長が上手くやってくれるだろう。
そう思い直し、美夜は医務室のドアを開けた。

●富山湾
少し考えれば、美夜にもわかることではあった。
否、普通の美夜ならわかっていたはずだ。
何故、Ｅ－ＷＡＣＳが“鈴谷（すずや）”に配備されたか。
そして、何故、司令部がＥ－ＷＡＣＳの護衛を送りつけてきたのか。

すべては“鈴谷（すずや）”に、直接的な戦果を司令部が期待していないという証拠なのだ。

長年の傷が治ることに神経を奪われた美夜が、この時点では指揮官として、戦略的レベルで状況を把握する努力を怠っていたのは事実である。

司令部が“鈴谷（すずや）”に期待していたのは、あくまでＥ－ＷＡＣＳによる情報収集。

その対象は――――“鈴谷（すずや）”の目と鼻の先でおっかなびっくり揚陸作業を続ける中華帝国軍だ。

夜明けと同時に、戦車部隊が揚陸作業に入った。

日本軍からの抵抗は全く受けていない。

艦砲射撃用に沖合に展開していた巡洋艦部隊は一発の砲も発射していない。

福岡と沖縄に攻め込んでほぼ全滅の憂き目を見た中華帝国軍の将兵のほとんどは、無血で敵国の領土に海から乗り込むことに成功した、その歓喜すべき事態が信じられない。という顔をしている。

一体、何でだ？

将兵は、そんなことは教えられていない。

何故、富山湾周辺の都市が放棄されているのか。

日本軍はどこにいるのか。

民間人はどこに隠れているのか。

そんなことは誰も知らない。

ただ、ここに攻め込めと命じられただけ。

何のために攻め込むのか、誰の命令か、そこに正統性があるのか、そんなことを質問する者もいなければ、答える者もいない。

命じられたからここにいる。

前線の将兵とは、そういうものだ。

「早く並べっ！」

「とろとろするなっ！」

指揮官の怒鳴り声に追い立てられるのは、訓練所からここまで連れてこられた新兵達。銃を重そうに担いで走っている様は、熟練兵からすれば殺してやりたくなるほど遅く、鈍い。

その新兵達を押しのけるように、大型輸送艦からキャタピラ音も華々しく吐き出される戦車達が車列を作って港の奥へと消えていく。

ロシア製戦車の影響を色濃く見せる背の低い車体と小さな砲塔。主砲は１０５ミリライフル砲を装備した狩野粒子影響対策済みの戦車といえば聞こえが良いが、はっきり言えば電子装備をほとんど搭載していないだけのことでしかない。

それでもアメリカ軍のＭ６０戦車相手に北米戦線では五分で渡り合った経歴の持ち主であり、対戦車戦に限っては決して侮ることは出来ない。

戦車兵達も北米で戦闘を経験し、実際にアメリカ軍を打ち負かした経験のある者が多く、戦車部隊の志気は旺盛だ。

すでにメサイア隊は上陸を完了し、富山市街地全域を支配下に置いている。

赤兎に続く新型メサイアとして量産が始まっている“山猫（シャンマオ）”の後ろ姿がビルの向こうに見えるだけで、少なくとも人間として安心が出来るのは不思議なものだ。

「日本軍がいない？」

戦車部隊長の李中尉は、司令部からの情報に顔をしかめた。

「どういうことだ？港湾施設まで含めて、日本軍は自国の領土を守ることもしないのか？」

「俺に言うか？それを」

黄中尉はニヤニヤとイヤミに近い笑みを浮かべている。

「何の犠牲もなしに敵の都市を手に入れたんだ。少しは喜べよ」

「……ちっ。それで司令部は？」
「上官にもっと顔を売っておけよ。そうすればお前だって作戦会議に呼ばれるし、仕事もしやすくなるんだ」
「俺は賄賂の類は大嫌いだし、あの面拝むだけで殴り殺さないだけで聖人扱いしてもらって当然だと思っている」
「おいおい……言いすぎだって。そんなこと言っているから、作戦会議に呼ばれないんだろうが」
「うるさい……それで？」
「メサイア隊が県境まで前進する。その間に、俺達は砺波平野を制圧。その後、能登半島方面に侵攻する」
「新潟方面へは進まないのか？」
「そっちは魔族軍の縄張りだ。下手に踏み込めば、俺達だって殺されるぞ」
「……なぁ」
「ん？」
「軍隊経験の長い俺達は――まだいい」
李中尉はタバコをくわえ、ライターで火をつけた。
「問題はあいつらだ」
その視線の先にいるのは、上官に尻を蹴飛ばされている新兵達。
胸ぐらを掴まれているのは１８歳前後の男。でっぷりと太った体つきから外での運動なんてロクにしたこともないだろう。肉の塊を軍服で包んでいるようにさえ見える。上官の罵声、軍隊経験の長い者にとっては大したことのない脅し文句に涙を流している姿は無様でしかない。
他の連中も太っているか痩せているか、チビかのっぽかだけで、中身は大して変わらないだろう。
はっきり、兵隊として使えない。
「今のご時世、徴兵されてまともに使えるヤツなんているもんか」
「……俺が言いたいのはそういうことじゃない」
「ん？」

「新潟方面に、何がいるか――――奴ら、知っているのかと思ってさ」
「……」
李中尉が何が言いたいのか、黄中尉にもわかる。
中華帝国は情報管制が極めて厳しく、国民は政府の都合のよい情報のみを与えられる。
国民は原則として政府発表以外の手段で情報を得ることが出来ない。海外からのラジオは電波妨害によって阻止されてしまう。
世界規模での戦争が続くこの世界では、国家間を通じるインターネットのような情報網は確立されていないし、肝心の宇宙開発でさえ、ＧＰＳ誘導システムのような軍用衛星の開発と打ち上げが最優先で行われた関係で、衛星を通じた放送システムなんて、概念や願望の域を出ていないのが現実だ。
携帯電話も世界的にやっと普及が始まったばかりの段階。
人々が一番早く情報を手にしたければ、テレビかラジオに頼るしかない。
そして、そこで流されるのは大抵が国家の検閲を受けた内容となる。
情報は国家の統制を受けて当然であり、国家を超えたレベルでの言論の自由は存在しないというのが、この世界の暗黙の常識だと思ってくれて良い。
そんな世界の中でも、中華帝国は過激だった。
アフリカや南米で魔族軍相手に戦争が起きている間にさえ、魔族の存在そのものを否定し、両大陸では欧米軍が植民地化を狙って攻め込んでいる。住民は虐殺の嵐に曝されていると国民向けに喧伝し、数十億の国民の多くは、それを今でさえ本気で信じ続けている。
当然なことに日本に魔族軍が出現したことも報道されていないし、

ロシア国境間に妖魔の巣が出現したことも報道管制の元に管理されている。
つまり、何が言いたいかといえば、中国人は妖魔という存在を知らないのだ。

「圧倒的な戦闘能力を誇る妖魔が出現したとしたら、この新兵達はどうなると思う？」
「唖然として、次に震えだして」
黄中尉は支給品のタバコに火をつけた。
「武器を放り捨てて逃げ出す」
「……同感だ」
二人の頭上を飛行艦が通過していった。
「だがな？新潟県境から魔族の方が動かないっていう保証もないだろう？」
「……ああ。連中からすれば、俺達なんてエサだろうしな」
「情報部門なんて志願しなければよかったな。お互いに」
「あのアフリカの悪夢は、今でも夢に見るさ……ただ、あれは他国の出来事だった」
「ここだって他国さ。ここは日本だ」
「属国だか植民地だか、名前は確か……日本省だろう？そんなことを政治将校のブタ共が言っていたじゃないか」
「口を慎め。お前は本当に組織では生きられないタイプだな」
「何とでも言えばいいさ……俺は現実に見聞きしたことを言っただけだ」
「大人になれよ。ここで勝って勲章もらって出世して、美人の嫁もらって、年金もらって老後を過ごしたいだろう？」
「最後だけは望みだな」
「ったく……お？」
舌打ちした黄中尉は、メサイア達が前進を開始したことを音で知った。

「少なくとも、俺達が直接、妖魔と戦うことはなさそうだ」
「メサイアが先……か？」
「そういうことだ。それに、政府だって何の勝算もなしに妖魔だか魔族だかの縄張りに踏み込んだわけでもないだろう？俺はそれを信じるよ」
「……そうか」
「ああ。他が動いた。命令が出たようだな。車両に行こうじゃないか。給料分は仕事してくれ。みんなが迷惑する」

●東京都　民州党党本部
福井県奪還。
金沢解放。

それは、支持率の低下に悩む岡山内閣にとっては又とない慈雨であった。
戦えば戦うだけ領土が減るとまで酷評される戦況に国民ははっきり疲れ切っていた。
政府は失政に失政を重ね、敗北に敗北を重ねた。挙げ句が滅亡寸前の国でありながら身内の軍隊からクーデターを受けるというあり得ない事態まで引き起こした。
すでに国民の信望は政府にはなく、経済は壊滅状態。自国民であるにも関わらず、難民救済の声でさえ影を潜め、人々は己が生き残るだけで精一杯の有様だ。
政府の責任を問うデモ隊や陳情者が警察と押し問答になることは日常茶飯事。
危険だからという理由で、国政の中枢である国会議事堂周辺には立ち入るなという政府広報が流れるに至っては、かつて極東の経済大国と呼ばれた姿はそのどこにもなかった。

国民全部が、失政という燃料を燃やしながら、滅亡へとむかって突き進む列車に乗せられたような絶望感に打ちひしがれていた。

そこに舞い込んだのは、福井を奪還し、石川県まで押し込んだという知らせ。

これに民州党は飛びついた。

まるで戦争全てに勝ったかのような持ち上げをマスコミに要求、テレビ局と新聞社の経営権を持つ岡山グループが支持母体である岡山内閣だからこそ出来る報道管制によって、国民は否応も無く踊らされる。――政府の都合のよい様に。

祝賀ムードに包まれた民州党党本部の一角。

喫煙所でテーブルを囲んでいるのは、永野海軍大臣と、陸海軍の軍服に身を包んだ厳つい顔をした男達だ。

「成る程ねぇ……」

テーブルに置かれた書類を眺めながら永野大臣は何故か微笑んだ。

「これを国民が知ったら、どうなるかしらねぇ……」

「笑い事ではありませんぞ。大臣」

海軍の軍服を着たごま塩頭の男が目を剥いた。

「中華帝国軍はすでに富山湾を制圧。その勢力範囲を拡大し続けているのです！」

「そんなに怒らなくても聞こえていますよ」

「……っ！」

「はぁっ。……いくらなんでも、この国だって報道の自由ってものがあるし、外電経由で中華帝国軍侵攻の話は漏れるでしょう？」

「……」

「その顔からして、中華帝国政府は、日本へ侵攻したことを正式には公表していない……と？」

「その通りです」

中将の階級章と、参謀飾緒をつけた陸軍将校が頷いた。
「既成事実のみを後で国際世論に突きつける腹でしょう」
「……よくやるわ」
「笑い事ではないのです。岡山内閣は何を考えているんですか！」
「私達が連中を呼び寄せたわけじゃない」
「そ、それはそうですが……」
陸海軍の将校が共に困惑した顔を浮かべているのは、永野大臣がつまみ上げた一通の書類の中身による。

内閣総理大臣命令。
陸海軍は富山県奪還を二週間以内に達成せよ。

二週間。
その意味が永野大臣にはわかる。
二週間後に、民州党の総裁選挙がある。
富山県奪還を手土産に総裁選挙に勝ちたいという、岡山達の欲望が期限の理由だ。
「我々は選挙のために戦争しているのではないのです」
「大臣、これは無理です。岡山首相や蓮川大臣だって、富山に中華帝国軍がいることを知っているのでしょう？」
「知った上でやれ……というのでしょう？」
「中華帝国と全面戦争になります！」
「……というか」
ピラッ。
書類を指で挟んだ永野大臣は言った。
「私のクビが欲しいだけでしょう」
「は？」
「指揮主導権を海軍に回すってこの一文。私に詰め腹切らすきっかけにしたいって魂胆がありありと見えるわ。私の命令でノコノコ北陸に軍を進めてみたらあらビックリ、中華帝国軍様がいらっしゃっ

て、日本軍は敗退。強ぉい中華帝国政府様に岡山首相が頭を下げる。
あの失態は、うちの永野ってバカの暴走によるもので、あなた様方がいらっしゃることを知っていたなら、私は止めたでしょうとか、真顔でいうでしょうね。あの人の事だから」
「そんな！」
「――ま、面白いじゃない。海軍がどうしてこの戦いに文句つけるのかがよくわかんないんだけど？」
「メサイアですよ」
「それ、近衛じゃない」
「中華帝国軍の保有する遠距離狙撃タイプの魔力光線兵器を持ち出されたら戦艦だって勝負になりません」
「無駄なものに予算かけてるってこと？」
「いや、そうストレートに言われると返答に困るんですけど……」
「なら、私からも近衛に頭さげてあげるわ。北陸にもっと戦力回せって。それでいい？」
「メサイアによる戦域支配が可能でしたら、そりゃ海軍だって協力は惜しみませんよ。北陸戦線は艦砲射撃支援がやりやすい、格好の戦場ではあるんです」
「艦隊防衛用のメサイア隊が欲しい……そんなところね？」
「はい」
「……あるんじゃないかしらねぇ。少なくとも戦艦作るよりは安いみたいだけど、それなりに高い予算使ってるんだから、元とらせてもらわないとね」

「――おや」
イヤミたっぷりな声がした。
振り向くと、そこに立っていたのは、取り巻きのＳＰに囲まれた蓮川大臣だった。
「みなさんで、何のご相談ですか？」
将校達は立場上、立ち上がって敬礼する必要がある。

ところが、永野大臣はそれを片手で制した。
「年寄りを無理に立たせるものじゃないわ。みんなで老後の人生設計どうしようかって、そんな話していたのよ」
「そんなにお歳でしたっけ？」
見下すとはこういうことを言うんだ。と、そういわんばかりの蓮川大臣に対して、永野大臣は顔色一つ変えることはなかった。
「この前、料亭で私をババアって呼んでくれたじゃない」
「……ああ、その節は失礼」
「頭の下げ方がなってないわね。その程度の教えてもらわなかったの？名門蓮川家の家紋が泣くわよ？」
「――――っ！」
「だからね？この程度のおちょくりに本気になりなさんな。いい歳して。奥さんが泣くわよ？」
「うるさいっ！僕は総理大臣の孫だぞ！」
「はいはい……それで？こんなところまで何しに来たの？タバコ吸うって聞いてないけど？」
「それはこっちのセリフだ。陸軍は僕の管轄だぞ！」
「次の作戦指揮権は海軍にあるっていうからね？陸軍のお偉いさん達にも顔売っておこうと思って引き留めただけよ」
「ふんっ。とんだ貧乏くじを引いたな」
「ところで」
「何だい？」
「富山県の現状を、陸軍大臣はどのように掴んでいるのかしら？」
「ふんっ。北陸の魔族軍は今や総崩れだ。叩けば潰れるだろうさ」
「具体的に」
「……大した戦力は確認されていない」
「中華帝国政府と、どういう話になっているの？」
「……はぁ？」
「はぁっ？って、ここでそのセリフが出てくるの？普通」
「あのな。オバさん。ボケたか」

「――そういうセリフ、私は好きよ？坊や」
「だから、人を子供扱いするなっ！何で北陸に中華帝国軍が絡むんだ」
「……」
目をパチクリさせた後、永野大臣は訊ねた。
「つまり、本当に知らないの？」
「何が」
「……」
永野大臣は、居合わせた将校を一瞥すると、小さく頷き、そして手元にあった写真を蓮川大臣に渡した。
「何だ？これ」
「近衛が撮影した、富山湾の高高度偵察写真よ。そこに写っているのが何かわかる？」
「知るか。これが何だって？」
蓮川大臣は写真を返そうとしたが、
「道路を走っているのは、中華帝国軍の戦車よ」
「まさか」
ぷっ。と、蓮川大臣は噴き出した。
「正気で言っているか？」
「失礼ながら大臣」
立ち上がったのは陸軍の将校達だ。
「陸軍参謀将校として申し上げます。この写真に写っているのは、本物の中華帝国軍です」
「……何だと？」
「坊や？もう一回聞くけど、本当に中華帝国軍が富山に入ったことを知らないのね？」
「……な」
写真を持つ手が震えた。
「馬鹿な！軍事面で僕が知らないことがあっていいものか！おい、お前等、全員で僕をバカにしているんだろう！？そうだろう！？」

「残念ながら」
胸ぐらを掴まれた将校は首を横に振った。
「これは合成などではありません。正真正銘の本物の写真です。大臣」
「……」
蓮川大臣は、彼を突き飛ばすと、踵を返した。
「岡山先生に確認してくる！」

動く世界　第十話（前書き）

あーあ。イブに間に合わなかった……ごめんなさい。

動く世界　第十話

遅すぎた。

軍部が中華帝国軍の動きを察知したにもかかわらず、政府の動きは一言、この言葉で事足りる。

時系列で見ていこう。

一日目

中華帝国側：富山湾攻略部隊、第一陣揚陸完了。

日本側：美柚姫達、金沢市街侵攻。

二日目：

中華帝国側：富山湾攻略部隊、全戦力揚陸完了。七尾湾攻略部隊揚陸開始。

日本側：陸軍先遣隊、金沢市街侵攻開始。同日中に市外奪還。

三日目

中華帝国側：富山湾攻略部隊、主力を砺波平野へ。七尾湾攻略部隊、珠洲市までを制圧。

中華帝国側：金沢平野上陸部隊、富山湾を出航。

日本側：陸軍、金沢にて部隊再編成開始。

四日目

中華帝国側：越前加賀海岸へ上陸開始。

さて？

日本政府は何をしていたか？

動いたのは、この四日目のことだ。

四日目の昼に中華帝国政府が富山、石川県の制圧を宣言。
日本国民のほとんどは、この宣言が外電としてメディアに報じられて初めて日本が侵略されたことを知った。
これは本当のことだ。
中華帝国政府が公開した富山湾の映像が決定打となった。
これに対して政府は全く沈黙を貫いていた。

これが陸軍大臣である蓮川が、永野海軍大臣の所から岡山総理の所に向かった頃の状況だ。

岡山首相との面会に、蓮川は三時間も待たされた。
普通ならあり得ないことで、それだけで蓮川は何か言いようのない不安を感じていた。
「わかってないな」
岡山首相の元を訪れた蓮川に、岡山は見下したような顔で言った。
「中華帝国は、我々と戦うために日本に来ているのではないのだよ」
「で、ですが」
「我が国と中華帝国政府は親密なんだよ。わかるか？親密」
「……はい」
蓮川は、目の前の男が何を言っているのかわからず、先を促すために同意した。
「それでは、彼等は何と戦うために」
「何って……魔族だよ。わかっているだろう？彼等が我々の助けとなって、戦ってくれるのだ」
「それは、何かおかしいとは思いませんか？」
「何がだ」
「中華帝国政府は、日本の領土を征服したと言っているのですが」
「国民向けの宣伝に過ぎんよ。その程度のこともわからんのか」
「……彼等は、魔族を退治した後、そのまま戻ってくれるんですか？」

「一度は失った土地だ」
岡山はあっさりと答えた。
「我々にとっては有力な選挙区でもない」
「そ、それは？」
「別にくれてやっても構うまい」
「な、なっ！？」
「――考えて見たまえ。蓮川君」
気がつくと、岡山大臣の横に広野二郎（こうの・じろう）外務大臣が立っていた。
オールバックになでつけられた髪。肥満体の体に高級仕立てのスーツ。
外務官僚から政治家に転身し、今や親中派議員のトップとも言われる彼は、岡山政権発足後に外務大臣に就任。次々と中華帝国との懸案事項を解決した実績で知られる――領土問題を含めてすべての点で中華帝国に譲歩する形で。
そのあまりに偏った政治姿勢から、保守系議員どころかマスコミからまで売国奴と呼ばれるが、外務官僚を牛耳る彼にとっては怖くも何もない。外務省の中枢は彼の使いやすい親中華派――中華帝国に留学するなどして、中華帝国の王政党に忠誠を誓ったり、或いは親近感を抱いている者達で占められており、彼がその元締めなのだ。
彼を失うことは今の日本にとって外務能力を喪失することを意味する。
だからこそ、蓮川にも岡山に入れ知恵したのが誰か、すぐにわかった。
「すでに日本は一度、あの土地を失っているのだ。そこを“与えられた”として、やれ復興だの開発だので、どれ程の費用がかかると思う？それならむしろ、資力のある中華帝国に引き渡して、資金を投じてもらった方がどれほどよいか」
「あ、あそこは日本の土地です」
信じられない。という顔で蓮川は言った。

「日本の国土ですよ？国家主権を」
「やれやれ……陸軍大臣にまでなった君が、主権などと書生じみたことを言うとはね」
「その通り」
岡山首相も頷いた。
「莫大な戦費もある。中華帝国は、領土の代わりに戦費の肩代わりまで申し出てくれているのだ。皇帝陛下には感謝すべきだと、そう思わないか？」
「……先生が、そうおっしゃるなら」
蓮川の使った天秤は、普通と違っていた。
日本人としての尊厳を天秤にかけたのではない。
彼は、大臣としての地位を天秤にかけて、そう答えたのだ。
「陸軍大臣命令として、今のうちに旧福井と石川県から全部の部隊を撤退させたまえ」
「よろしいのですか？」
「構うものか。復興が必要な場所が減る。反面、戦費は入ってくる。私と岡山先生は、中華帝国と日本双方でこれから英雄として扱われるだろう。ねぇ、先生」

そして、その日のうちに、官房長官は中華帝国の日本での行動を容認するという声明を発表した。
中華帝国は、我が国と人類のために軍事力を派遣してくれたものである。
また、戦後には富山・石川双方の復興の主導権を中華帝国に譲渡する予定である。
本当に、国家の代表としてそう宣言したのだ。
これに記者が訊ねた。
それは富山と石川県を中華帝国に譲渡するという意味か？

官房長官は顔色一つ変えずに答えた。

そういう可能性も否定しない。

●石川県日本軍防衛線

現状、日本軍と中華帝国軍は、石川県の津幡町と金沢市の境界線付近で対峙していた。

津幡町を含むこの周辺は、かつて住宅街と水田が並ぶのどかな土地だったが、先の魔族軍侵攻の際、大型妖魔達の集積ポイントに指定された関係から、人間の残した施設はすべて障害物扱いされ、魔族軍によって完全に破壊された。

その上、今では人間によって地面はほじくり返され、見るも無惨な姿をさらしている。

津幡町は、かつての平家物語に出てくる倶利伽羅峠地を経由して富山側から石川県に入る玄関口としての位置にある。

そして、その津幡町から金沢市へ入る際には、幅数百メートルという巨大な河川ともいうべき東部承水路が地形的な制限、いわばボトルネックとして立ちはだかる。

日本軍はその地形を逆に利用して、津幡町に陣地を構築せず、境界を超えた金沢市側の森下川を越えた所に最前線を構築していた。

日本軍が出迎えた中華帝国軍の兵士は、かなり質が悪い。

日本軍が目の前にいるのに夜間にタバコを吸う者が5本の指では足りない。

軍規に違反している上に、モラル的にも問題なことを兵士自身が理解していない。

ほとんどが徴兵されたばかりの新兵で、武器の取り扱いも慣れていない上に、少子化政策でモラル面に欠けた親達により教育された悪影響がモロに出ているのだ。

ベテランのほとんどを東南アジアと北米で失った中華帝国軍にとって、使い物になる古参兵は最早貴重品だ。

そして、このモラルもなければ経験もない新兵は軍隊にとって恐ろしく厄介モノとなる。

というのは、指導すべき古参兵、特に下士官が少ないいことは、即ち、兵士という個人だけでなく、部隊単位で問題となる失敗が起きやすいことに直結する。

タダでさえ危険が付きものの軍隊では、この状況での不測の失敗が恐ろしいほどの事態を引き起こすことが往々にしてあるからだ。

もしかしたら、この敵とにらみ合っている緊張感と苛立ちが、それに拍車をかけたのかもしれない。

現状、日本軍と中華帝国軍は、互いに距離を取ってにらみ合っているだけ。

互いの有効射程を見ると、８８式戦車の方が数百メートル短い分、八式戦車の有効射程の中に入り込む（無論、相手はそんなこと知らない。中華帝国軍は、砲身から自分達の方が射程が長いと誤って判断していた）形で展開している。

塹壕が掘られ、土嚢を積み上げた機銃陣地が次々と生み出されていく。

戦闘の決定打となるメサイアはまだ出していない。

戦車達の後ろには歩兵の塹壕が四線にわたって深く構築され、さらにその後ろには、迫撃砲陣地があり、少し離れた小矢部市に展開した砲兵部隊が構えている。

そんな中で、新兵がらみの普通なら始末書程度で済むはずの、簡単な失敗が中華帝国側で起きた。

新兵の一人が気に入らない。

そんな理由で、迫撃砲部隊の指揮官が夜中、部下全員を叩き起こした。

これが発端だ。

彼は、訓練を口実に部下全員をシゴき倒して憂さ晴らしをしようとしたのだ。

彼にとって、それはあくまで思いつきの訓練でしかない。

ところが、新兵達はそんなことは知らない。

訓練という言葉は耳にしたものの、夜中に叩き起こされて配置につけと命じられたことだけで、半ばパニックに陥っていた新兵は決して一人や二人ではない。

通常の訓練では、まず号令がかかれば、寝床から迫撃砲陣地めがけて駆けだして配置につく。

そして、任務を始める。

迫撃砲の照準を確認する者。砲弾を箱から取り出す者、装填する者。そして指揮官。

指揮官がにらみを利かせる中、兵士達はそれでも正しく手順をこなしていった。

暗い中、ダイヤルの目盛りを読み、指定された種類の砲弾を箱から取りだした。

問題は――――そこからだった。

「射撃用意、各個に撃て、装填待て！」

「射撃用意、各個に撃て、装填待て！」

「半装填」

「はん、そーよし！

指揮官の命令をそれぞれが唱和する。それはあくまで事故防止のためだ。

ところが、装填手がその唱和にどもった。
体は指示通り、迫撃砲弾を筒の中に半分装填する所までいっていた。
このまま筒の中にいれたら発射されてしまう。
それでは訓練にならないので、ここで弾薬を引き抜いて、担当兵に戻す。
担当兵はまた、箱にそれを詰めて、射撃命令と共に装填手に渡す。
その途中だ。
指揮官は新兵をいびる格好の口実が出来たと、その装填手に近づくなり、その体を突き飛ばした。
暗闇の中、実は夜盲症を患っていたこの指揮官は、この時、装填手が半装填を本当に終了させていたことに全く気付いていなかった。
「貴様っ！」
指揮官が怒鳴り声を上げたのと、迫撃砲弾が発射されたのはほぼ同時だった。

ポンッ。
唖然とする指揮官の前。綺麗に軌道を描いて飛んでいった迫撃砲弾。
それはすぐに、日本軍の陣地に着弾した。
しかもそこは弾薬集積地。集められていた日本軍の大量の弾薬が一斉に火を吹き上げた。

こうなればもう事故がどうかなんて関係なくなる。

日本軍は、中華帝国軍の攻撃が開始されたと断定。
泡を食った末端の兵士達は、中華帝国軍の奇襲が開始されたとして相手陣地へ向けて発砲。日本軍側の陣地で発生した爆発音に叩き起こされた中華帝国軍側の兵士も、撃たれたからには訳もわからず応戦するしかない。

互いに気付いた時には、日中司令部共に手の打ちようが無くなっていた。

互いの戦車壕から戦車がディーゼル音を狂ったように奏でながら出撃する。

自走砲の阻止砲撃をまともに天蓋に喰らった八式戦車が一両、砲塔を吹き飛ばして擱座する。その隣では別な砲弾によって吹き飛ばされ、４０トン近い体をひっくり返した車両から兵士達が命からがら逃げ出していた。

対する８８式戦車も、履帯に砲弾を受けた所を、砲塔側面に１０５ミリ砲の直撃に襲われ沈黙。あるいは対戦車ロケット弾の直撃によって擱座を余儀なくされていた。

戦車達の戦いを尻目に、塹壕から飛び出した中華兵達は勇敢な雄叫びをあげながら日本軍陣地へ肉薄する。そこに機関銃座の１２．７ミリ機関銃と、八式対空戦車の３０ミリガドリング砲による阻止砲撃を浴びせかけられ、兵士達は次々と肉片に変わっていく。

迫撃砲弾に吹き飛ばされた兵隊が、血まみれの腹を押さえてのたうち回る。

家族や恋人の名前を叫びながら闇雲に突進する兵士達。彼等は足を砕かれ、頭を引き裂かれ、人間らしいとは到底言いがたい姿で最後を迎える。

給弾車から弾薬の補充を受けながら阻止砲撃を続けた対空戦車でさえ、迫撃砲の集中砲火によって沈黙させられた。

砲火の開いた穴に攻め寄せる中華兵達は、今度は対人地雷に吹き飛ばされる。

それさえ乗り越えた彼等の生き残りは、塹壕の中に飛びこむなり、小銃を槍として使い、あるいは鈍器として振り下ろし、日本軍兵士を倒していく。

爆風と一緒に鉄と人間の破片が横薙ぎに飛んでくる塹壕の中を駆け回り、接触した中華兵を、今度は日本兵が殺していく。

手を合わせ慈悲を請おうと、両手を挙げようと意味はない。
拳銃やサブマシンガンとスコップで武装した日本兵は、中華兵を容赦なく射殺し、あるいは殴り殺す。
あちこちで火炎放射装置が使われ、敵味方どっちかわからなくなった、かつての人間が火だるまとなって断末魔を舞う。
敵と味方がいり乱れた乱戦状態。
そこで繰り広げられるのは、互いに殺せば殺されるという、まさに殺しの応酬でしかなかった。

血と泥にみまれて、日中どちらの所属かもわからないような兵士が、どちらの言葉とも、否、人間の声とも思えぬ叫びをあげ、両手で握りしめた銃剣を、醜い肉塊と化した死体に何度も振り下ろす。
肉の塊からはうめき声さえあがらないのに、兵士は銃剣を振り下ろすことをやめようとはしない。
生き残った戦車がキャタピラで男をひき殺す直前まで、彼はそれを止めようとはしなかった。

銃声と断末魔の雄叫びが交錯するその夜空の向こう。
金沢市上空の“鈴谷（すずや）”では先に離陸したＥ－ＷＡＣＳと風翔隊に続き、“白雷改”達の出撃が開始されようとしていた。
「金沢に駐屯する部隊から正式に支援要請が出た。戦況は五分だが」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）が行う発艦準備を待つ美柚姫の耳に、艦橋から美夜の声が通信として入った。
「あくまで戦術上のことだ。ここで兵力を失えば、孤立している陸軍は数で押し切られてしまう。政府がどうだろうと、戦っている兵士には関係の無いことだ」
「了解」
ガクンとくる感覚でカタパルトに騎体が乗ったことを感じ取った。
モニター上のいくつもの表示に変化が起きて、カタパルト射出までの時間が加わると、騎体が射出体勢として膝を曲げた、スキージ

ャンプ選手のような体勢になる。
世界を映すメインスクリーンに“カタパルト接続”と赤い警告が表示される。
「カタパルト接続確認、最終ロック解除」
「カタパルトデッキ、針路クリア――朝倉騎、射出、どうぞ！」
「お姉ちゃん！」
「やって！」
「了解、朝倉騎――出ますっ！」
“射出中”というグリーンの文字に切り替わった。

「飛鼠（ひそ）は出せないのか！？」
戦闘が開始されたことは、当然だか中華帝国軍側にも知れ渡っていた。
“山猫（シャンマオ）”のコクピットに入った周大尉はシステムを起動しながら怒鳴る。
「無理です」
MC（メサイア・コントローラー）から返答が入った。
「乱戦になっては、飛鼠（ひそ）はもう投入できません」
「ったく、陸軍のバカめが！勝手なマネを！」
「日本軍のメサイアはまだ確認されていませんが」
「相手だった人間だ。勝てないわけがない」
「それ、命令ですか？」
「――知るか。湯少尉、武装は対メサイア戦だが、二次的に掃討作戦も出来るな？」
「可能です」
MC（メサイア・コントローラー）の湯少尉は答えた。
「対メサイア戦用の大型戦斧は、いざとなれば戦車の装甲だって十分やれます」
「上等だ。まさかいくら日本軍だって、メサイアに通用する飛び道

具はもってないだろうからな」
そう信じたい。というのが、周大尉の本音だった。
ずっと内陸部の部隊にいた彼にとって実戦は初めてだった。
正直、日本軍がどの程度の戦力を持っているか彼は知らない。
どんなメサイアに乗っているのかさえ、何も知らない。
彼にあるのは、ただ、攻撃してくるなら迎え撃つ。
その敢闘精神だけ。
それだけだ。
「敵がどれだけでもいい、俺達は敵を殺すだけだ。――中隊全騎、ご存じの通りだ。陸軍が余計な火だねを作ってくれた。“火消し”に行くぞ！」

美柚姫達は、“鈴谷（すずや）”発艦完了から3分で上空に到達した。
「こちら近衛軍“鈴谷（すずや）”所属、第八八独立任務部隊、隊長の朝倉です」
上空から見た日本軍の陣地は、はっきり言って見るも無惨というしかなかった。
場所はすぐにわかった。
戦場を上空から見て、暗闇の中に浮かび上がった巨大な炎の帯が地上に現れたような、そんな錯覚を美柚姫は覚えた。
暗闇の中でオレンジ色に燃える戦場。
そこで何が燃えているのか、一体、どれだけの人が死んでいくのか。そんな感慨を持つ余裕さえ、美柚姫達は与えられなかった。
「こちら師団司令部！」
雑音がひどい通信が美柚姫の耳に届いた。
「支援必要ですか！？どこからやれば！？」
「爆弾はあるか！？」
「ありませんっ！必要なら最寄りの航空隊基地へ空爆要請、中継し

ますか！？」
「空爆は間に合わない、空から陣地を攻撃する手段はないか」
「えっと……」
美柚姫はちらと武装リストに目をやった。
「３０ミリガドリング砲による対空支援くらい……」
「それでいい、どこでもいい。俺が責任を持つ。地上を掃射してくれ！」
「い、いいんですか！？」
「やってくれ――――畜生、軍曹っ！」
ババババッ！
雷のような銃声の後、交通事故のような音がして、通信が途切れた。
「……っ！」
「お姉ちゃん！？」
「全騎、広域火焔掃射装置用意っ！」
「広域火焔掃射装置を！？」
「フォーメーション組んで、地上に降下後、ホバーで移動、敵陣地に取り付いた所で最大放射一発、中華帝国軍陣地を掃討する！敵のメサイアが来る前に始末つけるよ！？急いで！」
「「了解っ！」」

擱座した戦車を踏みつぶし、逃げ惑う兵士達をひき殺し、ようやく慣れたばかりのフォーメーションをとった“白雷改”が地上すれすれに降下、移動手段をホバー機動に切り替え、ほぼ同時に背負った巨大なリキッドタンクの中に詰め込んだ灼熱地獄を解き放った。
ギャァァァッ！
暗闇を照らし出す照明弾の塊のような光と共に、数万人が同時に悲鳴を上げたかのような独特の発射音をあげ、一瞬にして数万度に達する灼熱のプラズマ炎が中華帝国軍陣地を襲った。
戦車が蒸発する程の炎の嵐が地表の全てを焼き払う。突然現れた

メサイアに驚いて、塹壕に潜って逃げようとした兵士もいた。
だが、誰一人として逃げることは出来なかった。
数万度に達するプラズマ炎は周辺の酸素を一瞬にして燃やす。
その燃える酸素の中には、兵士の肺の中の酸素も含まれている。
つまり、その熱によって肺という内臓まで焼かれた兵士達は、自分の身に何が起きたかわかる前に絶命することを余儀なくされたのだ。
この死に方をしたのは、三本の線で構築された中華帝国軍の前線で言えば最も後ろにある第三線に配属されていた兵士達の死に方。
酸欠による死亡だ。
第二線までに配置され、あるいは日本軍陣地へむけて移動中だった兵士達は、もっと残酷で、しかし、彼等より素早く死ぬことが出来た。
地上を舐め尽くすプラズマ炎によって瞬時に蒸発させられたからだ。
無論、塹壕などで炎の熱から逃れることは出来ない。
メサイアを前に、とっさに塹壕の床へとうずくまろうと身を投げ出した兵士は、床を感じる前に体を蒸発させてしまい、永遠に何も感じることが無くなった。
たった一発でも、広域火焔掃射装置（スイーパーズフレイム）は、全てを地獄に変えるほどに強力な兵器であり、ある意味ではこれがあるからこそ、メサイアは攻撃兵器として恐れられている側面は確かにある。

そして、この破壊力故に、使い手にも負担がかかる。

たった一発の発射だけで一軍の陣地は酷い有様だ。
地面は黒く焼け焦げ、蒸発することを免れた岩石が融解して溶岩と化している。
とてもこの地球上の光景とも思えない光景を前に、皆、言葉もない。

「直線で1キロ以内に生命反応……なし」
「……や、やったね」
亜紀の声が震えていた。
殺しを楽しむ程の亜紀でさえ、この光景を前に声を震わせた。
「わ、私達……やっちゃったんだ……」
「う……うん……」
亜夜が涙混じりに頷いた。
「やっちゃったよ……お姉ちゃん……」
「全騎っ！」
美柚姫が怒鳴った。
「まだ後方に敵砲兵部隊がいる！このまま放置すれば大変なことになる！」
「まだやるの！？」
思わず出た声に、はっとなった亜夜が両手で口を覆った。
そう。
その残虐性故に、使用者は大なり小なり罪悪感を抱かずにはいられないのだ。

「やるの！」
美柚姫は声を荒げた。
「ここでやめたらね？それこそ中途半端、死んでいった人達にも失礼なんだよ！とことんやって、全部終わらせなきゃ、トンデモナイ失礼なんだよ！」
「……やる」
「……ごめんね。こんなこと、命令して」
美柚姫がぽつりと言った。
「でも、誰かがやることだから」
「……後ろ、気をつけて。お姉ちゃん、みんな、焼き殺しながら前進しよう！？早く終わらせるんだ！美柚姫っち、後ろお願い。後ろ

にもたくさん、中華帝国軍はいるから」
「……ありがとう」

美柚姫はうなずくなり、ノズルを小さく絞った状態で、こちらを呆然と眺める中華帝国軍の別部隊めがけてトリガーを引いた。
「……私だけ、撃ってないなんて言わせないんだからね」

美柚姫に勝算があるわけではない。
というか、どうやったら勝ちなのかさえわからない。
とにかく、敵をより多く殺して、敵をここから撤退させることが出来れば勝ちかもしれない。その程度の認識しかなかった。
どうすればいい？
指揮官として、こんな時、どうすればいい？
何もわからない。
その焦燥感が全身をかけずり回る。
悲鳴を上げて、この場から逃げ出したい。
どうすればいい？
どうすれば――――!!
「お姉ちゃん!」
瑞穂の怒鳴り声で、美柚姫ははっと我に返った。
「敵メサイア出現、距離３５００。そろそろ倶利伽羅峠を越えるよ!」

●“鈴谷（すずや）”艦橋
「ったくさぁ」
艦橋の外。甲板では“死乃天使”が発艦していくところだった。
それを見送った乗組員の中に、何故か紅葉がいた。
「あの宣伝から半日で、この戦況はまずいでしょう」

「宣伝というのは、あの官房長官の会見のこと？」
「艦長も見た？」
「ええ――ひどい話よね。陸海軍がクーデター起こさないのが信じられないわ」
「都内でのデモは国家非常事態を理由に禁止。反対意見を国民が表明出来る所は、正直ないに等しいから」
「新憲法制定の後、民主主義国家……になったと思っていたけど、日本は」
「議会政党独裁主義、もしくは官僚独裁主義ともいうわね。少なくとも議会制民主主義の正しい呼び方はそういうものよ。選挙なんて自分達の御主人様を選ぶんじゃなくて、自分達が選ばさせれる錯覚だって、いい加減気付けば良いのにね」
「……他にいい案が？」
「あれば今頃、誰かが採用していると？」
紅葉は肩をすくめた。
「無理よ無理。誰かが思いついたとしても、実行に移せるものですか。そんなこと、戦争で負けたって出来ないことなんだからね？」
「何故？」
「結局、官僚が行政システムそのものだからよ。意外と冷たいようで血肉が通っているのが行政でね」
「温情を感じたことは一度も無いが」
「そりゃそうよ。暖かみはすべて身内のために使うのが役人だもん。そんな官僚皆殺しにて困るのは、戦争で勝って、後でその国を支配する方。何しろ、その国の行政を一から作る必要があるから……ま、そんな下らないことはどうでもいい。私達がここで議論したところで、世の中を変えることは出来ない」
紅葉は美夜に訊ねた。
「メサイアが出たわ。司令部からは？」
「戦況はリアルタイムで司令部に報告しているけど、ウチの司令部が、こういう時に即決即断出来た試しを、私は知らない。答えとし

てはそれで十分でしょう？」
「ええ。イヤになるくらい」
「偶然といえど、“死乃天使”だけでも派遣してくれたとは感謝する」
「本来なら、お姫様と二騎で送りたかったんだけど」
「赤城博士が？」
「何考えてるか知らないけど、“Ｄ－ＳＥＥＤ”の組み上げにかなり手間取っている様子で」
「……熟々、自分が贅沢していたと思う。“白雷改”に“死乃天使”と“Ｄ－ＳＥＥＤ”……手駒に事欠くことは無かったんだから」
「……そうね」
「泉大尉の方は？」
「あのバケモノの補充なんて、いると思う？」
「……」
「とりあえず」
紅葉は“死乃天使”が消えていった暗闇を睨むように見つめた。
「ここは仇討ちに燃えるほむに任せましょう。あの子なら……きっと」

「騎数１１、違う、１３！騎数１３確定っ！」
瑞穂が怒鳴る。
日本軍陣地では未だに戦闘が続いている。
中華帝国軍の砲兵部隊による砲撃は、敵味方を巻き込んでいるはずなのに止むことが無い。
その砲兵部隊が展開する小矢部市に達するには砺波山を含む山々を越えなければいけない。
山を越えたところで小矢部市のどこに敵が存在するかを調べ、そこに斬り込んでなんてやっていたら――。

「こちら土浦隊」
不意に通信が入ったのは、このタイミングでだった。
「砲兵隊は私達の方で攪乱する」
通信モニターに現れたのは美柚姫より年上の、はっきりいってかなりの美女だった。
土浦涼菜――紅龍隊の隊長だと、思い出すのに少し時間が必要だった。
「えっ？」
「風翔隊も対地攻撃に参加する。敵メサイアが山を越え次第、そっちで引きつけて。交戦を確認次第、上からかかる。メサイアは任せたわよ！？」
「り、了解、任されて下さい！」
日本語が変だと思ったけど、出た言葉はひっこみがつかない。
「お姉ちゃん！」
ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）の瑞穂から報告が入った。
「敵、倶利伽羅峠を越えた！それと、敵の増援部隊が倶利伽羅峠に到達。数は大隊級」
「全騎、フォーメーション確認っ！」
美柚姫はとっさに部隊に命じた。
「武装、対メサイア戦装備へ！」
展開していたノズルを戻し、腰に固定、戦棍（せんこん）をサイドスカートのウェポンラックから引き抜いた。
「武装変更確認。それと」
「何？」
ずしりとした戦棍（せんこん）の重さが疑似感覚として伝わってくる。
この重さの感覚が邪魔と思われがちだが、これなければ、打ち込みの感覚がわからず、騎体のダメージに直結してしまう。
「指揮権に変更」
「えっ？」

「上位指揮権が“鈴谷（すずや）”から接近中のメサイアへ変更」
「メサイア？」
「照合終了、データ確認――“死乃天使”？」
「それって……あのほむらちゃん？」
「明貴騎より八八任務部隊へ」
部隊では聞き慣れない女の子の声が入った。
「部隊を前進させて下さい。交戦予定地点指定。津幡中学付近」
「あ……えっ？」
「津幡中学付近へ移動、急いで！」
「はっ、はいっ！」
有無を言わせぬ厳しい口調に思わず頷いた美柚姫は、部隊に前進命令を出す。
「な、何？」
「何で、あの子が？」
混乱したのは何も美柚姫だけではなかった。
亜紀も亜夜も突然の闖入者に狼狽した様子だ。
「というか！」
ハルバードを構える麗央が顔を真っ赤にして怒鳴った。
「私が何でアイツの命令を受けなきゃいけないのよ！」
「……文句は後」
はるかが薙刀を構えつつ言った。
「……相手は私達より強い」
きぃぃぃっ！
麗央の叫びを聞きながら、移動を開始した美柚姫達は、暗闇の中から現れたメサイア達を認めた。
敵は中学校とは七尾線を挟んで対角線上にある津幡高校まで足を進めていた。
美柚姫達が指定された中学校――正確には跡地まであと３００メートルという所でのことだ。
「敵弾飛来っ！」

警報が鳴り響き、MC（メサイア・コントローラー）が割り出した着弾コースがモニターに映し出される。

「回避っ！」

とっさに叫びつつ、美柚姫はシールドを頭上に構えた。

飛来音はまだしないが、それより先にモニター上に瞬間的に現れた砲弾の姿の方を先に美柚姫の神経は掴んだ。

「このっ！」

STRシステムが正確かつ瞬時に、美柚姫の動きを騎体に反映させた。

そして――

「第一試射、弾着！」

砲撃の着弾音に掻き消されそうになりながらも、湯少尉の声が周大尉の耳に届いた。

連続する爆発が、白いメサイア達を覆い隠す。

「砲撃位置正確。次弾、効力射！」

MC（メサイア・コントローラー）によって行われる弾着測定を受けた砲兵隊が日本軍のメサイア達を足止めする作戦は、どうやら功を奏した様子だ。

いくら砲弾の雨を避けるメサイアといえども、集中砲火まで避けきれるものではない。

もし、大きく瞬時に大きく移動するとしても、それなら砲弾回避のために戦闘態勢を崩したままでこっちに突撃するか、或いは後方に下がるかしかない。

こっちに自信が無い以上、可能な限り相手に不利になってもらい、そこに勝機を見つけ出す。

「いい腕だ」

煙が消えるより先に新たな砲弾が着弾する光景に、周大尉は満足そうに頷いた。

彼の周囲では、１２０ミリ機動速射砲を構えた“山猫（シャンマオ）”達が獲物を狙っている。
煙から姿を現し次第、蜂の巣にしてやろうというのだ。
「砲兵隊だけで始末がつくんじゃないか？」
「着弾地点のノイズが激しく、判別が……いや」
湯少尉はコンソールを操作しながら首をかしげた。
「これ……なんだ？」
「どうした？」
「レーダーがダウン！この一帯に強力な妨害がかかっています！」
ブラックアウトしたマジックレーダーのモニターを睨みながら、湯少尉が怒鳴った。
「くそっ！こっちのレーダーじゃ、出力で負けているのか！？」
「何だと？」

ズズズンッ！

遠くから粘っこい爆発音が連続して聞こえた。
腹に響くこの音は、間違いなく爆発音だ。

「何だ！？」
「熱源探知が生きてます！倶利伽羅峠方面で大規模熱源反応！何かが燃えています！」
「まさか！」
「大尉っ！」
部下の金中尉騎から通信が入った。
「前方、日本軍メサイア部隊に動き――」

ズンッ！

黒く塗装された“山猫（シャンマオ）”が一騎、突然現れた白い何かによって、

脳天を真っ二つに切り裂かれたのは、その瞬間だった。

動く世界　第十話（後書き）

最近、感想いただけなくてとても寂しいです。はげみになりますので、評価とか感想をいただければ幸いです。よろしくお願いします。
あと、新兵器やキャラクターのアイデアは常時募集中です。こちらもよろしくお願いします！

動く世界　第十一話（前書き）

久々に、あの部隊に活躍の場が生まれました。

動く世界　第十一話

複雑なことはここでは述べないが、メサイアは、物理的に見た場合、世界でも希に見る頑丈な装甲を持っている。

魔晶石エンジンが起動している限り装甲に付与された防御系魔法が働いて、かなり薄い装甲板しかくなくても、その力で戦車砲の直撃にだって余裕で耐えるようになっている。

それはメサイアの攻撃だって同じだ。

普通に考えて、物理的にメサイアの装甲を切断することは出来ない。

メサイアを撃破したければ、戦斧や戦棍（せんこん）で思い切りぶん殴って中の機材を破壊するか、コクピットの騎士を衝撃でショック死させる必要がある。

それが、中華帝国の広大な領土の中で、他国軍のことなど関係無しに暮らしていた周大尉達にとっては常識。

ところが――。

「……」

正直、周大尉は言葉が出てこなかった。

彼の横に立っていた“山猫（シャンマオ）”は、月中尉騎。

冗談を言ってはみなを笑わせてくれたムードメーカー。

この任務がなければ、来月には結婚する予定だった部隊一幸せな男の駆る騎。

それが、いまやどうだ？

帝剣とまではいかないにしろ、満足のいく装甲が施された騎体の、脳天からコクピット部にかけて深々と全てを割られている。

それだけじゃない。

切断面が高熱に炙られたようにオレンジ色に発光している。

何重もの装甲に守られているはずのＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）も、さらにその下にあ

るコクピットも断ち切られた無残な虚無の中にある。
そこにいた者が絶望的状況にあることは、見ただけでわかる。

だからこそ、わからない。

何が起きたらこんなことになるのか――まさにそれがわからない。

装甲が断ち切られて、しかも切断面が熔けている。
装甲を外して、魔法を解除した後でもなければこんなことは出来ない。
無論、ただの金属の塊に近い戦斧でこんなことが出来るはずがない。
剣だろうが槍だろうが、こんなことが――。
「大尉っ！」
狼狽する周大尉より、MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）にいる湯少尉の方が、現実に対して順応する力があるのだろうか、湯少尉の鋭い一言に周大尉は、ハッ。となってすぐに現実に引き戻された――が。
「湯、あ、あれは何だ！？」
「不明っ！ライブラリーに照合なしっ！」
「あの武器は何だと聞いているっ！」
「わかりませんっ！」

現実に舞い戻った所で、周大尉が新たに目の当たりにしたのは、さらなる信じがたい事態でしかなかった。

長い剣――青竜刀より遥かに長い剣を持った白いメサイア。
部隊のど真ん中に立ち、月騎の脳天をかち割ってくれたそれは、ゆっくりと剣を月騎から引き抜いた。
切っ先が離れるのを待っていたかのように、月騎が膝から崩れ落

ち、地響きを立てて大地に倒れ伏した。

刀剣が青白い、ほのかな光を放ちながら、ゆっくりと動く。

思わずそれに魅入られそうになっていた周大尉は、はっとなって叫んだ。

「全――――っ！」

グシャッ！

全騎。

周大尉はそう叫びたかった。

全騎に、迎撃を命じたかった。

ところが――――。

声が出てこなかった。

湯少尉の耳に届いた、聞き慣れたはずの湯大尉の声が、この時、確かに震えていた。

レシーバーから入る周大尉の声がまるで始まりだったように、グシャッ、という交通事故のような音と、首の骨が折れそうな程の衝撃が湯少尉を襲った。シートベルトが千切れそうな程の激しい揺れによって、シートへ何度も頭をぶつけ、プロボクサー顔負けのパンチ力で噴き出したエアバッグに顔をイヤと言うくらい叩きのめされた。

目の前の計器類が一気にブラックアウト。非常用生命維持装置が作動する音を遠くに聞きながら、湯少尉の意識は闇の中へと消えていった。

月中尉騎から剣――――斬艦刀を引き抜いたのは、ほむらの駆る“死乃天使”だ。

まるで周囲を威圧するようにゆっくりと、しかし油断なく斬艦刀を構え直したほむらは、二度、短く呼吸した後、吐き出した息と共に周囲へと襲いかかった。

左足を軸にして舞うように騎体を一回転させたほむらの一撃は、その剣の届く範囲にいた周大尉等の“山猫（シャンマオ）”達を文字通り一網打尽にした。

コンマ数秒動いた斬艦刀の切っ先は、次々と獲物を噛み砕き、あるいは噛み切った。

突然の闖入者に呆然とした“山猫（シャンマオ）”達は、為す術も無くその体を断ち切られ、自らの身に何が起きたかを知る前に、無残な姿を闇の中に曝すこととなった。

「敵、全騎クリア」

“死乃天使”のコクピットの中に、MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）からのまどかの声が響く。

「スコア5騎」

「――まどか」

ほうっ。小さくため息をついたほむらはまどかに言った。

「朝倉大尉達につないで。生きてるでしょ？」

「ひどいなぁ」

「――びっくりしたけどね」

美柚姫は笑みこそ浮かべているが、口元が引きつっていた。

目の前にいたらぶん殴っていると、雰囲気が宣言している。

「私達は囮ってワケ？」

「いいえ？」
　ほむらははっきり答えた。
「交戦開始に必要な布陣に適した場所が、中学校跡地だっただけです」
「……そうなんだ」
「疑ってますか？」
「信じろって方が、かなり無理かな？」
「……不幸な事故です」
「……事故、ねぇ」
「とにかく」
「逃げるな」
「逃げてません。指揮権は私にあります」
「……そう言うの、何て言うか知ってる？お姉さん、教えてあげようか？ねぇ」
「勝てば官軍。勝ったもん勝ち」
「勝ち方にも方法というか！」
「私、オリンピックやってるつもりないですから」
「……了解」
　大きな息を吐いた美柚姫は、頭の横で指を大きくくるくるさせた後、
「何すればいいの？」
「今、紅龍隊が小矢部の砲兵部隊攻撃中。風翔隊とＥ－ＷＡＣＳがここまでの橋を狙撃中」
　それに答えるように空から一本の光の線が走った後、漆黒を取り戻したはずの暗闇の中に、爆発の赤い光が見えた。
「高度１万５千メートルから、風翔に搭載した長距離狙撃用ビームライフルで」
　再び、別な場所で光の柱が立った。
「――敵の針路を叩いているわ」
「それで？」

「……富山県から石川県へのルートは大きくわけて三つ。すでに占領された能登半島ルート。今、私達がいる倶利伽羅峠超えのルート。そして、北陸自動車道を使ったルート。こっちは今、“鈴谷（すずや）”が前進して、対地艦砲射撃で橋と道路を破壊してくれているはず」
「……瑞穂？戦況は？」
「友軍陣地に増援なし。ただし、敵側、かほく市方面から歩兵部隊、及び機械化自動車部隊の車列が確認されています。それと、日本海に展開している中華帝国軍艦艇に動き。陣形から艦砲支援準備中と推測されます」
「……忙しすぎだよぉ」
「倶利伽羅峠に侵攻中の部隊、動きが止まりました。Ｅ－ＷＡＣＳが車列前後の道の破壊を確認しています」
「……もうっ。手近から片付ける。倶利伽羅峠の敵を焼き払ったら、かほく市へ。余力があったら対艦戦……一晩で普通の一生分の働きだよ。これ」
「お疲れ様」
「……ほむちゃんは？」
「その間」
ほむらは答えた。
「――黒部へ」
「黒部？」
美柚姫は頭の中でどこかを思い出そうとして出来なかった。
「……どこ？」
「新潟県境から約１０キロ位」
「そんな所へ何しに行くの？」
「中華帝国軍のメサイアの集結点がある。そこを襲って、連中を攪乱する」
「誰が？」
「――私が」
「誰と？」

「――まどか」
「MC（メサイア・コントローラー）を数にいれない。つまり、一騎ってことだよね？」
「……そう」
「危険だよ！」
「この仕事、安全なことなんて何もない」
「だ、だけど、それって！」
「――じゃ、上位指揮権発動。大尉達はこれから、この辺の雑魚を始末する」
「ダメっ！」
美柚姫は怒鳴った。
「子供が危険なことしちゃいけませんっ！」
「私と大尉、３つと違わないはず」
「……ほむらちゃん、いくつ？」
「１６」
「そうね！」
「お姉ちゃん……」
瑞穂があきれ顔で言った。
「本当は年齢差、その２倍……」
キッ！
姉の凄まじい殺気に、瑞穂は思わずそっぽをむいた。
「――生きて帰ってきなさいよ？私より３つも若くて死ぬなんて、許されないんだから！そんな、私達みたいなお肌ピチピチした歳で死ぬなんて、うんっ！絶対、絶対ダメっ！３つ違いでっ！」
「――了解」
ほむらは小さく敬礼した。
「武運を」

数分後――
「ねぇ、ほむらちゃん」
暗闇の中、黒部の中華帝国軍メサイア陣地へむけて“死乃天使”を駆るほむらに、まどかがそっと訊ねた。
「何？」
「朝倉大尉って、いくつなの？」
「知らない」
「え？でも、なんか、３つと違わないって」
「当てずっぽう」
「……え」
「私、外見だけで相手の歳が当たったこと、一度もない」
「つまり……いい加減？」
「結果オーライだからいいんじゃない」
「時々、ほむらちゃんがすごくアバウトに思えるんだけど……なぁ。私」
「私、もともといい加減だよ？」
ほむらは、通信モニターに映るほむらをじっと見つめながら言った。
「まどかがいてくれるだけで、私は丁度の加減になるの」
「……へ？」
目をパチクリするまどか。
「気にしなくていい」
「とっても気になるんだけど」
「なら、鈴谷に帰ってから教えてあげる」
「あ、あのね？ほむらちゃん……わ、私、何だかとっても身の危険というか、貞操の危機を感じているんだけど」
「それはね？まどかの中の小悪魔が、これから起きる出来事に心ときめかせてるだけよ」
「私、今晩からここで寝る」
「えっ？そんな所で？」

「ここなら安全だもんっ！」
「そんな狭いところでするのが好きなのね？」
「聞いてっ！」
「聞いてるわ。好きなの？」
「何が！？本当に怒るよ！？」
「誰？私のまどかを怒らせるような罪深いヤツは」
「……もう知らない」
まどかはもう諦めた。という顔でそっぽをむいた。
「富山市上空と全部の敵陣地を一気に突っ切るよ？マジックコンシール全開、防空網を黙らせるからね！？」
「……お願い」

「……ねぇ、お姉ちゃん」
「何？亜夜ちゃん」
「美柚姫ちんって、いくつなの？」
「バストは９――」
「こらっ！」
「そっか、直接訊ねればいいんだ。ねぇ。美柚姫っち、いくつ？」
「――今年で２３」
「こらぁっ、はるかぁっ！」
「――私より一つ上」
「気にする歳じゃないじゃん！」
「そうだよ！びっくりしたぁ。もっともっと上かと思った！」
「な、ないよっ！」

そんな通信がはっきりと入ってくる。

やれやれ……。

その上空高度1万8千メートル上空でため息をついたのは、第802航空戦隊――つまり、あの美川の所属していた部隊。その一騎……否、肩の部隊長を示す赤い十字線と騎体ナンバーは、自分が美川騎そのものだと告げている。

美川が逮捕された後、騎体を駆るのは誰でも無い。美川の上官、倖田少佐その人だった。

美川逮捕の責任をとって戦隊長辞任を申し出たが受理されず、ただ譴責の上で一階級を降格されただけ。

部隊は人員の補充も受けられないまま、騎士なしとなった騎を倖田自身が駆っている。

問題の美川の騎を駆り、戦場に出ることは、美川の寝返りを止められなかった、気付くことさえ出来なかった責任の、彼なりの取り方といえば聞こえは良いが、半分は強制されたようなものだ。

部隊長脱走という、近衛史上前代未聞の失態は、部隊の対外的な体面を傷つけただけでは済まなかった。

はっきり、志気の面でもがた落ちとなった。

脱走という形で、美川は全てを裏切ったのだ。

上官も、部下も、同僚全てを――。

部隊の戦果は、それ以降、目に見える形で減り、体調不良を理由に搭乗を拒否する者まで現れるに至った。

それで尚、何も言ってこない上層部に対して、倖田は美川脱走の責任を、彼等が自分にどうとらせようとしているか、それを悟った。

すべては戦隊長である自分の失態として上層部は見ている。その責任を更迭という安易かつ硬直的な方法で解決しようと考えていない。むしろ、もっと残酷な意味でも解決を狙っている。

つまり、自ら率先して出撃して部隊の統率をとれ。

それで志気が戻らなければ、お前も部隊も終わりだ。

上層部の言いたいことは、詰まるところそこに尽きる。

自分はいい。
この歳だ。
生きるだけ生きた。
やりたいことは大抵やった。
だが――――部下は。

彼がコクピットに座ったのは、そんな一途な想いというか、覚悟からだった。

後方にふんぞり返っているはずの戦隊長が前線に出たことは、確かに彼の部下にとっても否応も無く戦場に出ることを強いるには十分だった。

美川程の実力はない。

そう言い切りながらも、倖田はかつて帝国海軍パイロットとして鳴らした腕前で、十分以上に風翔を駆っている。
普段は通信装置越しに怒鳴りたくなるほどかしましいMC（メサイア・コントローラー）達が静かなのは、完全に自分に遠慮しているとひしひしと感じるものの、それは立場上、耐える範疇だ。
その耳には、部隊間通信を通じて、自分の娘位の年頃の女の子達が交わす会話がモロに入ってくる。
内容はどう考えても作戦とは関係ないことばかり。女の子が電話で話すような内容。それで表現としては十分な代物。
倖田のような古い海軍あがりとしては、近衛のこういう、良く言えばフリーダム。悪く言えばいい加減な風潮はどうしても好きになれない。
海軍なら、女の子といえど任務中にこんな会話をすること自体、考えもつかないだろう。うん。そのはずだ。と、倖田はそう考える。
海軍ならこう、もっと真面目に任務に集中する。

いかなる艦も、人の力があってこそだ。
だが……。
「戦隊長」
その倖田に、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）から通信が入った。
中佐。と呼べない。かといって、少佐と呼べば降格をあざ笑っているように捉えられるのでは？そんな心配もあるのだろう。倖田は呼ばれる度に歯がゆさを感じずにはいられない。
「マーカー４７、破壊完了」
「よし。そのまま続けてくれ」
「了解」
「Ｅ－ＷＡＣＳより警告」
ピーッ。
電子合成された警報と共に、女の声がした。
２千メートル上空にいるＥ－ＷＡＣＳからだ。
ＭＣ（メサイア・コントローラー）をエンジンの管制ではなく、純粋に情報収集のためのみに余計に搭乗させているのは伊達ではない。
空に上がらせたら海軍航空隊のお宝とまでいわれた、Ｅ７４７をベースにした同じＥ－ＷＡＣＳより遥かに性能は上で、敵のすべてが丸見えとなることは、数度の実戦経験から倖田自身が身に染みている。
むしろ敵が気の毒なほどだ。
「敵がこちらに気付いた模様。能登空港から迎撃機、あがりました」
「了解したが、ここまであがれるのか？」
「不明。ただし、離陸速度から迎撃機はレシプロエンジン機と推測。情報追加、氷見方面に新規反応――質量大きい。魔晶石エンジン反応有！メサイアあがりました。騎数３」
「対メサイア戦になるか？」
「可能性大。高度上げ続けていることを考えても、“白雷（はくらい）”隊を狙ったものとは思えません」
「他に動きは？」

「黒部方面に多数のメサイアの動き。富山港湾及び、空港防衛隊も黒部へ動いている模様。“死乃天使”の陽動が効いているようですね」
「……よくやる」
倖田はため息一つ、
「あんなの娘に持ったら……」
ふと、コクピットの端に張り付けられたままの写真に目がいった。
美川が張り付けたままにしていた、その娘と妻の写真。
無邪気な笑顔を浮かべているみさきの顔が何だか辛い。
「……みさき、お前はあんなおてんばになっちゃダメだぞ？」
小さく、そう呟いた後、倖田は張りのある声で怒鳴った。
「編隊全騎、現時点を以て対地攻撃を中断する！」
そこには戦隊長としての、否、倖田という指揮官の重みがずしりとのしかかっている。
「全騎、ラグエルシステム起動！武装はアナイアレーター改、着剣は不要」
「しかし」
春日少尉が通信モニター上でぎょっ。とした顔をした。
「接近戦になったら！」
「この夜戦であんなものつけていたら、私はここにいますと言ってるのと同じだぞ？」
そう。
銃剣といわれているが、結局の所、斬艦刀と理屈は同じ、エルプス魔法を使う。
この魔法は、どうしても光を放つため、夜間戦闘においてはネオンの広告塔を振り回して戦うのとほとんど変わらないのだ。
魔晶石エンジンもそれなりに光を放つが、長さがある分だけ、どうしても目立つ。
それは攻守を問わず、避けたいところだ。
「……了解」

春日少尉もさすがに黙った。
「よろしい……最悪の場合、“鞭”を使え。やれるな？」
「訓練はしていますが」
春日少尉はなぜか顔をしかめた。
「さすがに、趣味ではありません」
「……そうか」
何故か、ちらりと倖田が視線を送ったのは、通信モニター上の秋山中尉だった。
外見は清楚なのだが、その目には何故かとてつもなく残酷な光が宿っている。
「それでいい。それで普通だ。多分」
「へ？」
「なんでもない。相手もＭＣ（メサイア・コントローラー）を積んでるし、何より相手は歴とした騎士様だ。十分にお相手してさしあげろ！」
「「了解っ！」」

「秋山中尉、射撃は全て任せる」
「了解――ラグエルシステム起動――ＡＢＣの３騎、システム連携を確認。全騎へ。これより射撃の主導権は私がとります」
秋山中尉が指をポキポキとならした。
「Ｅ－ＷＡＣＳからの情報……新型騎……“山猫（シャンマオ）”級……ねぇ」
ふんっ。
彼女は情報モニターを一瞥しただけで興味もない。という様子で鼻を鳴らした。
「――私の敵じゃないわね」
彼女の統率下にある風翔が、肩にマウントした長距離狙撃用ビームライフルを格納した。
元々が１２０ミリ砲の代わりにビームライフルのシステムだけを取り外して試験的に組み込んだ代物だ。エネルギーパックを途中で

交換できないため、残弾に不安を抱える状況では使いたくない。
倖田がライフルの使用を宣言しなかったのは正解だと、彼女はそう思う。
サブマシンガンタイプの“アナイアレーター改”は、銃身は短いが2万メートルという距離から攻撃が出来る。
2万メートルは、空戦で圧倒的優位を確保出来るに十分な距離な上に、その距離からでもメサイアの装甲を撃破出来る出力を持つ。
その上、メサイアは基本的に空中戦が出来るほど、空が得意という存在ではない。
地面に足をつけて、騎士の動きをトレースすればこそ、メサイアは世界最強の陸戦兵器存在でいられるのだ。
相手が光学兵器を持っていないことは、この距離から撃ってこないことから推測できる。
接近戦に持ち込んでたたき落とすつもりなんだろう。
そんなこと、出来ると思っているのか？
大型爆撃機と同等とされるメサイアの機動性で、空戦用のこの騎と？
とどのつまり、相手はこっちが何だか全くわかっていない。
多分、同じメサイア程度に思っているんだろう。
面白い。
くくっ。
喉が鳴った。
嬲り殺しにしてやろう。
まずは――
秋山中尉の命令が電気信号となってトリガーへ。
そして、その明白な殺意は、一発の光弾となって銃口から放たれた。

動く世界　第十一話（後書き）

風翔はもっと活躍させたい騎なので、再登場を願いました。武装の一部を変更して、活躍の場をひろげます。

さて……鞭ですけど、皆さんはお好きですか？私は苦手ですけど。感想頂いた方、大変ありがとうございます。この場を借りてまずお礼申し上げます。とても励みになりましたので、続きを頑張ってみました。

改めてお返事申し上げますが、とても嬉しいです。

またお気軽に感想・評価、それからアイデアなんかいただければ幸いです。これからもよろしくお願いします。

動く世界　第十二話

「一体、何が起きているんだ？」

彼等、ウルムチ守備隊に所属の９９１メサイア中隊が日本に着任してまだ半日も経っていないのに出撃を命じられた。

しかも、迎撃任務。

普通のメサイアの任務ではない。

最新鋭のメサイア、“山猫（シャンマオ）”１２騎を擁するものの、世界で最も海から遠いタクラマカン砂漠に近い都市から異動を命じられた彼等の部隊は、何だかんだで、まる３日かけてようやく日本にたどり着いたばかりだ。

騎体を指定された集積地に到着させて、疲労困憊の体をやっと一眠りさせることが出来るかどうかの所を叩き起こされたその騎士は、もう毒づくしかなった。

メサイアも戦闘機も、操縦者に飲酒は厳禁だ。

体質もあるが、急激な動きの中でアルコールが全身に回って危険なことになる。

着任祝いと称して、飲酒を許可された他部隊の騎士達は今頃、どんちゃん騒ぎの挙げ句、出撃を免除されて高いびきの頃だろう。

「黒部の部隊も戦闘中と聞きましたが」

僚騎を組む別な騎士がそう言うが、

「バカを言え。あっちに日本軍はいない」

編隊長でもある彼は即座にそれを否定した。

漆黒の闇の中。光学システムの明度を調整しながら彼は答えた。

「新潟方面はすでに日本軍が守備を放棄している」

「しかし」

「国の言っていることに疑いを持つつもりか？」

「い、いえ……」

そう。
新潟方面は、ロシア軍の攻撃を受け、日本軍は撤退している。
ロシア軍はすでに日本本土から退去しているが、臆病者の日本軍は、ロシア軍の再攻勢を恐れて新潟奪還に踏み切れないでいる。
だから、新潟方面に日本軍はいない。優秀にして勇猛なる我が軍兵士がロシア兵など恐れる必要さえ無いが、彼等を“無意味に刺激”しないため、新潟方面への侵入は厳禁とする。
新潟の状況と軍の方針を、彼等はそう教えられている。

「自分は国に忠誠を誓っています。ですが、状況として現実に空港と港湾の守備隊まで駆り出されていると聞きます。日本軍以外に何が」
「そんなこと、俺が知っている必要があるのか？」
そう言いつつ、さすがに彼も気にはなった。
レーダー上を、数騎の友軍メサイアの反応が自分達と真逆の方向へと移動していく。
連中の進む方角は、確かに新潟方面。
自分達が出る時点ですでに2つ程、別部隊が発進したはず。
つまり、こいつらは、先の連中で相手にならなかったからの増援と見て良い。
そんな馬鹿な。
日本軍がいないはずの方角へ何故、増援を急行させる必要がある？

「警告、前方に大規模な魔力妨害。ジャミングが酷く、レーダー使用不能」
そんなことを考えていたせいで、彼はＭＣ（メサイア・コントローラー）の言葉を聞き逃した。
「ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）、何だって？」

チカッ。

前方で何かが光ったのはその時だ。

ドンッ！

「っ！？」

彼は悲鳴さえ上げられないまま、熱と光の中へ消えた。

エネルギーの塊が、彼に状況を理解させる前に“山猫（シャンマオ）”の胸部パーツへ命中。

その構造物を一瞬にしてえぐり取った挙げ句、その残滓ごと、彼を爆発の炎の中へと叩き込んだのだ。

「編隊長騎、被弾！」

隣を飛んでいた“山猫（シャンマオ）”の騎士が、炎上しながら落下していく編隊長騎を目で追いながら通信装置に叫ぶ。

胸の辺りがオレンジ色の炎を上げている編隊長機が錐もみ状態で落下していく。

頭部装甲が吹っ飛び、ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）が丸見えになった。パラシュートが開き、騎体からＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）が切り離される。

国際法で保護されるオレンジ色のパラシュートと、夜間でもはっきり見える同じ色のフラッシュが、ゆっくりと降下していく。

ＭＣ（メサイア・コントローラー）は助かった。

それはわかったが、彼は編隊長が脱出しない理由を考えるのはやめた。

死人より、自分のことを考えるべき時だ。

「戦闘モード切替え！」

誰に言われるまでもなく、彼は騎士として敵を探した。

これが初陣となる彼の心臓は、破裂しそうだった。

緊張でＳＴＲシステムを握る手が震え、体調を管理する健康管理（バイタルチェッカー）

装置が心拍数と呼吸の異常警告を点滅させる。
あれだけの操縦経験を誇った、ベテランの編隊長がたった一発、時間にしてたった一瞬で死んだ。
基地の記念行事で見た打ち上げ花火のように儚く、あるいはたった一発の銃弾のようにあっけなく、彼にとって大切な存在が死んだ。
彼は、その事実から逃げるようにパネルを叩いた。
操縦モードを離陸モードから空戦モードへ変更。
戦闘離陸に必要な分のパワーを確保するために、カットされていた各部へ魔晶石エンジンからの出力が配分される。
各部を伝わるパワーを血流のように感じ、上昇する騎体のスピードが確実に落ちたのが感覚としてはっきりわかる。
騎体が重い。
まるでパラシュートでも開いたような抵抗。
彼は空気の存在をはっきりと悟り、そして、煩わしい。と思った。

ズゥゥゥゥム……！
後ろから鈍く、粘っこい爆発音が彼等を追ってきた。
その音が何を意味するかは考えたくない。

「――――騎より編隊全騎、隊長騎がやられた！指揮を俺が引き継ぐ！」
「くそったれが！隊長はどうなったんだ！」
「知るか！ＭＣ、敵はまだ見つからないのか！？」
「妨害に勝てませんっ！」

通信上では部隊がパニックになっていた。
まだレーダー上では敵を確認していない。
誰も目視していない。
敵が何で、どこにいるのか、誰もわかっていない。
わかっているのは、編隊長騎が撃ち落とされた。それだけだ。

しかも、たった一発で！

いくらメサイアの空中機動性が低いからといって、対空ミサイルの直撃程度で墜落する程、メサイアはヤワではない。だが、それがたった一発で火を噴いて墜落していったのを、彼等は目の当たりにした。

日本のどこか、名も知らない町に墜落した編隊長機のようになりたくなかったら、彼等がやらなければならないことは一つ。

殺される前に相手を殺す。

これだけだ。

「編隊長より全騎！」

新たに編隊長となったのは、かつての隊長騎を挟んで反対側を飛んでいた二番騎だ。

彼よりは腕が立つというわけではない。

模擬戦ならともかく、実戦なら絶対、俺の方が――――。

恐らく、彼の立場に立たされたら世界中の騎士がとるだろう、そんな考えを抱きながらも、それに異議を唱えるような愚挙はしない。

「現時点をもって、全安全装置解除（セフティ）、全武装使用自由（オールウェポンズ・フリー）を宣言する！」

「り、了解っ！」

通信データは記録されているはずだ。

初陣で声が裏返ったのが恥ずかしい。

「ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）より、安全装置解除します！」

「了解、頼むっ！」

ＭＣＲ（メサイア・コントローラー・ルーム）側の武器管制装置には出撃時の安全のため、安全ピンが刺さっている。この安全ピンを引き抜かないと、ＭＣ（メサイア・コントローラー）も騎士も、何を

どうしようがメサイアは武器を一切使えない。
搭載された武器の数だけある安全ピンをMC（メサイア・コントローラー）が指で一本一本引っこ抜いていくのを実戦で待つのが、これほど煩わしいというか、長い時間を感じるとは思わなかった。
解除終了が遅い。
コクピットから出て、MCR（メサイア・コントローラー・ルーム）に這い上がって、MC（メサイア・コントローラー）をぶん殴って、自分が代わりにやった方が早い。そうとさえ思った。

ドンッ！

ズンッ！

光が再び、部隊を襲った。
今度は二つ、ほぼ同時だ。

やられた！
彼は我が身に起こるだろう最悪の事態を想定して身を固くして、目を閉じた。
「……えっ？」
騎体は飛行を続けている。
自分じゃない。
自分じゃなかった！
やった！
喉まで出かかった歓声を遮るようにMC（メサイア・コントローラー）からの報告が入った。
「全武装、安全装置解除終了！」
「今のは！？」
「編隊2番、5番騎、やられました。騎体、通信途絶っ！」

頭部と連動するヘッドギアを被る頭部で、下を見る。
“山猫（シャンマオ）”の頭部がそれに同調して下を向く。

下――地上めがけて、炎の塊が落下していくのが見えた。
炎には、手足がついていた。
まだ敵と接触もしていない。
日本に到着してから1日と経っていない。
それで長年、苦楽を共にしてきた部隊から3騎、6人もの脱落者を出したというのか？
そんな馬鹿な。

「4番騎より3番騎へ！」
呆然とする彼を現実に引き戻したのは、4号騎からの怒鳴り声だった。
町へ飲みに行くと、地元のチンピラが震え上がる程の迫力を持つ4号騎の騎士のドスの聞いた声は、例え彼が地獄の果てにいたとしても、現実に引き戻すことが出来たろう。
その意味では、彼は感謝すべき立場なのだろうが……。
「2番騎戦死――席次から言ったら、次の編隊長はお前だぞ！さっさと、どうするか指示を出せっ！」
知ってるなら代わってくれ！
本音がそれだ。
そう叫びたかったが、ここでそんなことを口に出そうものなら、次の犠牲者はもう確定だ。
「り、了解っ。編隊全騎、これより3番騎が編隊指揮を執る！」
彼は“山猫（シャンマオ）”が装備する30ミリ速射砲の残弾を確認した。
「全騎――散開しつつ前進っ！ランダム飛行で」

ガンッ！

再び、夜空に炎の華が咲いた。

「4号騎被弾っ、脱落しますっ！」

「散開急げっ！ＭＣ（メサイア・コントローラー）、いい加減、どこから撃ってきたかはわかったな！？」
「はいっ！」
ＭＣ（メサイア・コントローラー）は力強く答えた。
「データ回しますっ！」

「敵、散開」
秋山中尉に言われなくても、Ｅ－ＷＡＣＳから伝わる情報だけで、敵の動きははっきりわかる。
ようやく散開したのは、余程、こっちの攻撃が意外だったせいで、狼狽したからだろう。
ただ、動きも鈍ければ、判断も鈍い。
秋山中尉主導下で行われた攻撃は、次々と編隊長を撃墜してのけたのだから、当然、指揮系統が混乱しているのだが、倖田は知るよしもない。
大きく散らばった敵は、ランダムにコースを変更しつつ、こちらにかなりの勢いで接近しつつある。
こちらはラグエルシステムの支援があるとはいえ、基本は単発の狙撃だ。
確率を無視して発砲すると、システムの意味が無くなる。
ＭＣ（メサイア・コントローラー）が連携して圧倒的な命中率をはじき出すラグエルシステムは、驚異的な矛であると共に、敵を寄せ付けない楯でもある。
ところが――。
ラグエルシステムにも欠点はある。

複数同時攻撃が基本的に出来ないのだ。

三対一で袋だたきにするための道具。

かつて、開発者の紅葉はシステムをそう評価したことがある。

メサイアのレベルでは世界水準を遥かに超越した狙撃能力で、ターゲットに指定した、たった一騎の一点を、ピンポイントで破壊することで、メサイアでさえ吹っ飛ばすほどの圧倒的な破壊力を確保していることは、言い換えれば三騎をたった一騎に集中させることを意味する。

はっきり、機動性に欠けるし効率は悪いし、遠距離狙撃以外では即応性に欠けてむしろ部隊を危険に曝すことになるリスクがあるシステムなのだ。

欠点を補って余りあるほどの攻撃能力はあるものの、使用する時には相当な距離を開けて、Ｅ－ＷＡＣＳのような電子戦騎から情報サポートを得ながら運用しないと、たった1騎か2騎を仕留める間に、生き残った敵に懐に飛び込まれてアウトになる。

１２０ミリ砲の直撃にだって耐えるメサイアの装甲の前に、風翔はなすすべもなく逃げるか負けるかの二択を迫られることになる。

接近戦で、騎士の駆るメサイア相手に、半騎士の駆る出来損ないのメサイアであるアサルト・アーマーが勝つには、天文学的な幸運が必要だ。

Ｆｌｙ　ｒｕｌｅｒのように、ラグエルシステムと同時に、近接戦闘用装備が豊富で、メサイアだろうが何だろうが接近するモノは片っ端から撃ち落とすような贅沢な騎体が開発、実戦投入されて、風翔が倉庫で埃を被るはずだったのは、アサルト・アーマーとしての限界というより、この対メサイアを想定した近接戦の弱さにある。

倖田もそれがわかっている。
空でモノを言うのは、結局は装備と数だ。
たった3騎という半端な数。
再生騎を使った半端な騎体。
騎士と認められない半端なパイロット。
全てが半端な彼等が生き残るには、半端を補う知恵が必要だ。

「次発でラグエルシステムを解除する。全騎へ近接戦闘用意。それと、紅龍隊へ支援を要請してくれ」
「了解」
倖田の後席に座る石川少尉が答えた。
「土浦中尉へはすでに要請を出しています」
「返答は？」
「ショータイムには間に合わせるそうです」
「主役はやっぱり、騎士様か」
クックックッ。
倖田は自嘲気味に笑った。
その倖田騎から放たれた“アナイアレーター”の一撃が、闇に吸い込まれていった。

光球。

命中は確実だ。
“アナイアレーター”は、速射性能を徹底して引き揚げた結果、単発の出力が低く、ビームライフルのような貫通力に欠ける。三点バーストや“スカンク”と呼ばれる、エネルギーパックを一発で使い切るフルバーストは可能だが、そんなことを乱発していたらすぐにエネルギー切れになる。

だから、三発を一点に叩き込むことは、対メサイア戦では、エネルギー不足をカバーしておつりが来る方法だ。

「１０時、１時、２時方向からランダムに接近中」
「全騎、ラグエルシステム解除。格闘戦に持ち込め」

倖田は操縦桿を握りしめた。

「意地でもＥ－ＷＡＣＳには近づけるな！」

通常のＳＴＲではなく、初歩的な擬似的神経接続装置である操縦桿を握りしめることで、風翔は倖田にとって戦闘機となる。

ジェットエンジン真っ青の大出力エンジンと、そこに取り付けられたベクタードノズル、そして各部追加翼や腕を使った機動性は、ＶＴＯＬ戦闘機の比ではない。

この機動性をもって、何故、メサイアに勝てないか。

倖田も最初は理解に苦しんだ。

メサイアを相手にした疑似戦で初めて理解した時は、同時に、倖田にとって格闘戦の概念が崩壊した時だった。

戦闘機なら、後ろをとってロックオンしてトリガーを引けばミサイルが勝手に相手を追いかけて始末してくれるか、或いは機関砲が相手を引き裂いてくれる。

その時、基本的に敵からの反撃はない。

何故か？

戦闘機には後ろに対する攻撃手段がないからだ。
後ろをしっかり確保すれば、どうとでも始末が出来る。
その模擬戦で、悠々と空を飛ぶメサイアの後ろをとった倖田は、メサイアのガラ空きの後ろ姿に勝利を確信し、トリガーに乗せた指に力を込めようとした。
だが、次の瞬間――――。
倖田の目の前にあったのは、メサイアの背中ではなく、銃を構えた真っ正面の姿だった。
３０ミリガドリング砲で蜂の巣にされた倖田は、メサイアが空中戦で強い理由がわかった。
メサイアは空中でも全包囲に攻撃が可能で、後ろをとった所で、ちょっと体をひねれば余裕で反撃出来るのだ。
その速さは、鈍重鈍重と、空を飛ぶメサイアをバカにする者の声を信じた自分の軽率さを恥じるには十分だった。

この教訓から、倖田は戦闘機乗りから機種転換を受ける部下に命じたのは、実に古いシミュレーションで徹底して勝つことだった。
それは、あの赤色戦争当時の戦闘機で、重爆撃機の編隊を攻撃するミッション。
ほぼ全方位からの攻撃を想定し、機体のあちこちに機銃を装備した爆撃機は、後ろをとればいいという、現代のパイロット達にこびりついた戦闘機による空戦概念を破壊するには十分だった。

無論、これで完璧とは全く思っていない。
彼にとって風翔の装備で、最も強力なのは肩部にマウントされた１２０ミリ砲。
そのご自慢の装備すら、運用テストにおいて、メサイアは余裕で耐えてのけた。
直撃を装甲に浴びて、多少、後ろにのけぞったものの、メサイアは何も無かったかのように、彼の目の前で動き続けたのだ。

メサイアは空では爆撃機のように鈍重で、仕留めやすい相手。
そんなのは、はっきり嘘だ。
もしそれが本当だったとしても、それは初期のメサイアのことだろうと思う。
彼の知っているメサイアは、空では爆撃機のように頑丈で、攻めにくい相手なのだ。

ラグエルシステムが解除されたことが警報としてスクリーンに表示された。
２騎が編隊ポジションから離れていく。
“アナイアレーター”の残弾は十分。
部下達は海軍時代からクセを知った戦闘機乗りだ。
戦闘機乗りは、敵がはっきりしていれば、何も語る必要は無い忠実な猟犬だ。
獲物が誰かなんて関係ない。
鹹（くびき）さえ解いてやれば、帰ってくる時には血まみれの獲物を咥えて戻ってくるものだ。
その戦闘機乗りである部下に、倖田はどの何番騎を叩けとは命じない。
すでに彼等は彼等なりに獲物を見つけているのだから。

「――――さて」
倖田が自らの獲物としたのは、１１時方向から接近する敵。
どうやら、自分達の上空にいるＥ－ＷＡＣＳに気付いたようだ。
１騎だけ、上昇機動に入った。

自衛用装備は持っているが、そんなものは気休め程度だ。もっていないとはっきり言い切った所で文句もこないだろう。

彼の部下は左右に大きく別れ、１０時と2時から来る敵に襲いかかろうとしていた。

初期の頃と違い、すでに“アナイアレーター”を装備した風翔は、火力の面でも不足をカバーするレベルに達してはいる。

無論、“アナイアレーター”頼みとはいえ、実体弾しか装備していなかった頃に比べれば、比較にならないほどの火力を得たことになる。

結局、どう運用するかで、兵器の価値が変わることにメサイアの戦闘機もない。

その点でも、武器を扱わせれば、どのミサイルをどのタイミングで、バルカンをどの距離で――すべての武器を、否、敵との距離でさえ使いこなす才能の持ち主である戦闘機乗りは希に見る適材だ。

風翔の大推力エンジンにパワーを叩き込み、ほぼ静止に近い状態で浮いていた倖田騎は敵騎めがけて信じがたいスピードで接近を試みた。

敵はさすがにこっちに気付いたのだろう。

発砲された“アナイアレーター”の光弾を機体をひねって回避し、反撃に転じた。

オレンジ色をした機関砲弾が機体を掠める。

メサイアのパーツを使っているとはいえ、所詮はアサルト・アーマーでしかない風翔は、メサイアほどの防弾能力はない。

機関砲弾だって喰らえば無事では済まない。

普通なら恐ろしくて立ちすくむだろう光景を前に、倖田はひるむということを知らないかのように突撃の手を緩めない。

「――ちっ！」

舌打ち一つ、倖田が至近距離から“アナイアレーター”を叩き込もうとしたが、それを諦めるしかなかったのは、左手で速射砲を構える敵が、右手で戦斧を引き抜き、振り上げたからだ。
世界が数回、回転した後に、体勢を整えた倖田は、自分がしくじったことを知った。
後方から火線が走る。
もう少し、大口径の砲だったら近接信管が作動してかなり危険だったろう。
偶然に助けられたと安堵する余裕はない。

騎体を上昇に叩き込み、上からの攻撃ポジションを確保するが、敵もＥ－ＷＡＣＳへの追撃を諦めていない。
戦闘に参加しないことから、指揮官騎とでも思っているのだろう。
熱心に狙おうとする理由は、それだけで察することが出来る。
上昇を続ける敵。
追う倖田。
上をとれたのは、相手より推力に勝っているだけ。
だが、敵は寄せ付けまいとかなり正確にこっちに発砲を続ける。
慣性制御がそれなりに効いているとはいえ、戦闘機動によってかかるＧが倖田達を容赦なく襲う。
「秋山中尉っ！」
その中で倖田は怒鳴る。
「閃光弾を投擲しろっ！」

「閃光弾！？」
歯を食いしばりながら、きょとん。とした顔を浮かべた秋山中尉だったが、何かを察したのか、
「はいっ！」
次の瞬間、風翔の左腕がうなりを上げた。
「対閃光防御っ！」

秋山中尉は、倖田の怒鳴り声にはじかれたように、腕で顔を覆った。

動く世界　第十二話（後書き）

なんか、おじさんがやたら活躍しだしちゃいました……次もおじさんばっかの予定です。年末、いかがお過ごしですか？もしよかったら、感想なんて聞かせて下されば、寒さに震えながら必死にキー叩いている哀れな女が一人救われます。よろしくお願いします。

動く世界　第十三話（前書き）

今年も一年、ありがとうございました。２０１２年もよろしくお願いします！

動く世界　第十三話

閃光弾が暗闇を真っ白に染め上げた。
途端に、“山猫（シャンマオ）”の“眼”を護るための安全装置が作動し、スクリーンが一瞬、ブラックアウトした。
メサイアの“眼”は、騎士に正確な遠距離感を掴ませるために、極めて人間のそれに近づけて設計されている上に、暗視機能など複数の装置を組み込んでいる関係で、極めて繊細に出来ている。
当然、暗視装置を使用中に強い閃光を浴びることなど想定されておらず、眼を保護するための安全装置が一時的に作動し、メサイアは一時的な失明状態に陥る。
回復が早いか遅いかは、眼がどのように設計されているかにもよるが、少なくとも“山猫（シャンマオ）”の眼は、その意味では極めて出来がよかった。
安全のために切断されたヒューズが自動的に予備系統へと切り替えられるのに擁する時間はわずか1秒足らず。実用性の面では十分過ぎる性能を持っていた。
問題は、強い閃光をマトモに見た騎士の眼の方だった。
元々、人間である騎士の体は、機械程融通や改良を加える余地がない。
視力が回復するまでにどうしても数秒の時間を必要とする。
騎士の戦いで数秒は致命的な時間を意味する。
倖田は撃墜の絶好のチャンスを作ったはずだったが――

ブンッ！

「何だとっ！？」
絶対の自信をもって、至近距離から仕留めようと“山猫（シャンマオ）”に近づいた倖田が目を見張ったのも無理はない。

“山猫（シャンマオ）”は閃光をものともせずに風翔めがけて速射砲で反撃してきた。
騎体に経験したことのない震動が走る。
ステイタスモニターが赤く点滅し、騎体に破損が発生したことを教えてくれる。
「あの光に耐えたというのか！？」
「相手は戦闘機じゃありませんっ！」
後席の石川少尉が怒鳴った。
「私達ＭＣ（メサイア・コントローラー）もいるんです！ＭＣ（メサイア・コントローラー）は、外部情報を眼で頼る必要なんてないんです！」
「レーダーで撃っているようなものか……」
いかんな。
倖田は思った。
どうやら俺は、戦闘機の感覚がどうしても抜けないらしい。
メサイアの厄介さは、頭で考えている以上だ。
そんなことを考えている間にも、後方から速射砲の砲弾が迫ってくる。
騎体を大きくバンクさせて回避機動にいれたが、それでもはっきり、敵はこっちの機動を読んでいる。これがＭＣ（メサイア・コントローラー）の能力かと思うと、正直、ぞっとする。
「秋山中尉、俺に遠慮はいらん。存分にやってくれ」
「都合の悪くなると部下にいろいろ押しつけるのって、管理職の悪い癖ですよ？」
「ああ。悔しかったら、出世してくれ。生きてな」
「はいはい」
「どうすればいい？」
「とにかく、何度でも、戦隊長が戦死してでも接近を試みて下さい」
「励み鳴る言葉だ。敬老精神にあふれているな」
「若手の可能性に賭けてください」
「了解した」

方向転換した風翔が、“山猫（シャンマオ）”とのすれ違い様に、“アナイアレーター”を発砲した。
破壊力は少ないが、速射性に長ける分、この距離ではイヤでもどこかに命中する。
後は、MC（メサイア・コントローラー）がどこを狙ったかによる。
秋山中尉が狙ったのは、ダメージが望めない騎体ではない。
武器だ。
“山猫（シャンマオ）”の速射砲の機関部が見事に打ち抜かれ、マガジンに残っていた砲弾が誘爆。
その光に誘われる蛾の如く、とっさに倖田は胸部で急制動をかけ、脚部ブースターを開いた。
胸部を目に見えない力に押しとどめられた風翔は、天地逆さまになったが、速射砲を吹き飛ばされて狼狽する敵騎を再び捉えるチャンスと思えば、安いはず。
「このっ！」
お菓子やクッションやヌイグルミが天井めがけて落下する中、秋山中尉が選択した武器は、肩部に装備されていたビームライフル。
残弾はたった1発だった。
“アナイアレーター”より破壊力が格段に違う、その貴重な一発が、“山猫（シャンマオ）”の股関節をまともに捉えた。
「しくじった！？」
胸を狙ったはずなのに、若干、上下修正が甘かったらしい。
だが、狙われた方は大変なことになった。
関節部が爆発し、“山猫（シャンマオ）”から両足が脱落していく。
オイルが引火したらしい両足が落下する光景は、まるで空から落とされた松明のようにさえ見える。
敵騎がこれで引くだろうなんて妄想を抱かなかったといえば嘘になる。
天地が逆さまになったまま、倖田がブースターを全開にしたのは、

その妄想を振り切るためだった。
引いても良い。
下半身を吹っ飛ばされたのは、撤退の十分な理由だ。
このまま騎体を捨てても、その理由としても十分だ。
だが、敵は未だに戦いを諦めていなかった。
自らを傷つけた相手をどうあっても地獄に叩き込まなければ気が済まないらしい。
炎上する下半身をそのままに、戦斧を振りかざして逆襲に転じた。
ビームライフルは間に合わない。
とっさに“アナイアレーター”を発砲する。
被弾してあちこちの装甲で小さな爆発が起きても、敵はひるむことさえない。
「……ちっ」
舌打ちした秋山中尉は武装を変更した。
相手は頭に血が上っているだけ。
それだけに厄介。
狂戦士と化した騎士はMC（メサイア・コントローラー）にとって厄介モノ以外の何物でも無い。
彼女は、相手のMC（メサイア・コントローラー）が気の毒だな。と、そんなことを思った。
そんな彼女に与えられた対抗手段は、二つしかない。
否、こんな相対戦で有効に“なるかもしれない”手段は一つだけだ。
「一か八かって、嫌いなんだけど」
風翔が左腕を大きく振りかぶり、接近する“山猫（シャンマオ）”めがけてその腕を振り下ろした。
ビュンッ
空を切り裂いて、その手首から飛び出したのは、先端が鋭利に尖ったアンカー。
それは、偶然と互いの相対速度、そしてアンカーそのものが撃ち出された時のスピード、さらに、アンカー先端部にかけられた貫通魔法の全ての相乗効果によって、“山猫（シャンマオ）”の首元に突き刺さった。

アンカーと風翔を繋ぐワイヤーが盛大に騎体から引き出される。
風翔はワイヤーが切断されないよう、騎体をいままで最も厳しいターンにいれた。
「――そこっ！」
Gによって意識がなくなりかけた秋山中尉は、顔をしかめながら騎体に命令を下した。

次の瞬間――

バンッ！

“山猫（シャンマオ）”からそんな破裂音がして、即座にアンカーがその騎体から外れ、ワイヤーによって宙を舞う。
腕に仕込まれたウィンチがすぐにワイヤーを巻き戻しにかかる。

「やったか？」
「――やりました」
風翔搭乗員達の前で、徐々に炎に包まれようとしている“山猫（シャンマオ）”がゆっくりと高度を落としていった。
「クリティカルヒットです」
「クリティカルヒット？」
「敵に高圧電流を叩き込む“鞭”のアンカーが騎体に突き刺さりました。あの状態で“鞭”を使えば、騎体内部に直接、高圧電流が走ります。サージ対策は意味ありません――騎士もMC（メサイア・コントローラー）も、ショックで即死したと」
「……」
操縦者を失った“山猫（シャンマオ）”は、騎体を右回転させながら、闇の海へと沈んでいった。

●天壇

「散々な叩かれ方だな」

派遣した偵察部隊がリアルタイムで送りつけてくる、中華帝国軍と近衛軍の戦闘詳細を、天壇の戦闘情報室の中でじっと食い入るように見つめているのは、宗像と真菜だった。

薄暗く照明が落とされた映画館というか、ちょっとした野球場程もある戦闘情報室の普段は使われていない一角。そこにある１００インチ近いだろう大型モニターの前に置かれた椅子に座った二人の間には、コーヒーがおかれたテーブルがあるものの、親しさとかそういう雰囲気はかけらもない。

戦力では圧倒的優勢にある中華帝国軍が、近衛に押されっぱなしだ。

「……都合が良いことだ」

ぽつりとした、真菜のつぶやきを、宗像は聞き逃さなかった。

「貴様はどっちの味方だ」

「……私はダユー様の狗だ」

宗像の問いかけに、そっけなく真菜は答えたが、横を向こうともしない。

「人類に愛想を使ってやる理由はどこにもない」

「ふん……尻尾をふる愛想があれば、今でも近衛にいたか？」

「何が言いたい」

「人類相手の謀略は、貴様の担当だろう？この混乱をどう活かす？」

「別に？」

「祖国を他国に蹂躙されているのにか？」

「私達とって、祖国はもうない。ダユー様の治める場所こそ全てだ」

「ふん……どうにも本音を見せないところが、貴様の悪いところだ」

「――明後日の夜、富山港に夏級（シア）が入る」

「夏級？」

「原子力潜水艦だ」
「それがどうした」
宗像はコーヒーを舐めるように飲みながら訊ねた。
「あいつらご自慢の潜水艦が占領地に入ったところで、それが何だというんだ」
「気にするな。それだけの装備を日本に持ち込んでいる。そう言いたかったんだ」
「……それで？」
「……ダユー様は」
しばらくの沈黙の後、真菜は言った。
「大陸の資源をお望みだ」
「資源？」
怪訝そうな顔をした後、
「前から聞こう聞こうと思っていたんだが、魔界というのは、そんなに資源が不足しているのか？」
「鉄や魔晶石についてはこの人間界と比較にもならぬ埋蔵量があるそうだ」
「なら」
「ダユー様の狙いは、人類が知らない、我々にとっては未知のレアメタルだ」
「レアメタル？」
「魔界ではほぼ取り尽くされたとして、貴金属並みの扱いを受けている。“日緋色金（ひひいろかね）”というそうだが」
「なんだそれ」
「借りてきた」
真菜がポケットから取りだしたのは、万年筆だ。
「そのペン先に使われているのがそれだという」
「？」
キャップをとった宗像が驚いたのも無理はない。
そのペン先は光っていた。

金色ではない。
銀色でもない。
七色に光っていたのだ。
「――これは」
千変万化するその輝きは、一瞬たりとも止まることなく、まるで流れるように輝く色を変化させ続けている。
「こんな金属があるのか……」
「我々の知る魔晶石のさらに強力な代物だ。向こうでは主に電子頭脳を作るのに用いられている。
魔界ではすでに千年前に採掘が終了して、備蓄が少しずつ使われているが、数年後には完全に枯渇すると言われている、魔界でも幻の金属。今はそのペン先だけでも莫大な価値がある」
「……貴重品だな」
宗像はキャップを閉じると、真菜に万年筆を戻した。
「加工すれば七色に輝くが、この加工を経なければいつまで経っても単なる石ころ。
しかも、外見からすれば大理石あたりと区別がつかないそうだ」
「その鉱脈が大陸に？」
「裕樹と言ったか？あの子供が記念にと持ち帰った石をご覧になったダユー様は、即座にそれが“日緋色金（ひひいろかね）”だと見抜かれたそうだ。
まぁ、偶然の発見だが――ダユー様は目の色を変えていらっしゃる」
「さもありなん……」
「元来、この金属は、人間界には存在しないというのが、魔界での定説だってそうだが、それが根本から崩れたわけだ。
お前達が帰還してから、私の配下はすべて総動員されて大陸へ散らばった。魔界から好物探査用センサーを搭載した特殊機までチャーターしてな」
「どうだった？」
「全土で鉱脈がいくつも見つかった。全部の採掘したら魔界全体で

一世紀分の需要に耐えられるだろうと見込まれている」
「ほう？」
「ダユー様としては、魔界でも大陸の採掘権を独り占めしている状況だ。このチャンスを逃すはずもない。ダユー様は、いかなる手段、いかなる犠牲を支払ってでも、大陸での“日緋色金（ひひいろかね）”の確保を最優先とお考えだ。正直」
ぐっ。と真菜は拳を握りしめた。
「この戦争を放棄してでもな」
「戦争を放棄？」
「この日本列島をヴォルトモード卿の軍が、そして大陸を自分がとればいい。ダユー様はどこかでそうお考えなのだろう」
「戦力が足りん」
「そうか？ダユー様にとって心強い味方が勝手に現れてくれたじゃないか」
「……アイバシュラ」
「そう。この混乱を使わぬ手はない」
「それで、貴様は何をするつもりだ？私は？」
「お互い、与えられた棒きれでもくわえれば良いだけのこと」
真菜は席を立った。
「お前はメースで出れば良い。私は」
「貴様は？」
「――濡れ仕事さ」

北陸での戦闘は、日中両軍の撤退で一段落した。
記録された限り、この夜の戦闘で、中華帝国軍は４５騎のメサイアと陸軍は２個師団をに相当する兵力を。対する日本軍は兵力１千名と戦車３５両、アサルト・アーマー２が小破という損害を被った。
戦闘を決定づけたのは、後半に飛来した富岳爆撃隊による日本軍

陣地上空への爆撃と、夜を押してかけつけた増援が合流した結果だ。
対する中華帝国軍は、福井市街方面からの機甲部隊が足止めされたこともあり、結果として戦闘を中断。残存兵力は能登半島へ後退した。

しかし、日本の新聞が朝刊にこの戦いを記事として掲載することはなかった。
政府発表は午前１０時の定例記者会見の段階。
会見で発表されたのは、“昨晩未明、中華帝国軍の一部部隊と日本軍部隊が金沢市郊外にて偶発的に接触。中華帝国軍側の被害は最小限度”という、真実にはほど遠い代物。
日本軍の損害については調査中と触れただけで、特別何かを述べることはなかった。
千名の犠牲と莫大な国費をもって作られた兵器を破壊され、国土を蹂躙されながらも官房長官の口調はもう他人事も良いところだ。
そして、これを取材した記者達もまた、政治欄の一番小さな記事とするかどうか。その程度にしか認識がなかった。
軍人が何人死のうが、彼等には関係ない。
黒塗りのハイヤーに乗って、高価な取材費用を湯水のように使って、政府の配る広報から適当に情報を集め、自分なりの言葉に翻訳、上司の認可が得られたら記事の出来上がり。
それをどう読もうが、それは読者の責任であって彼等の責任ではない。
自分は記事を作ってやっている立場であって、その結末に結果を持つ立場ではない。
自分の記事を受けたとして、例え何かあったとしても責任をとるのは他人であって、その人物を非難することこそ、記者である自分の仕事だというのが、彼等新聞記者の姿勢だ。
言論の自由を行使する意思はあっても、自由に対する責任は自覚さえない。

時折、政府に疑問を感じ、思うままに記事に書いてしまう者もいる。

しかし、上層部の意向を強く受けた現場編集長の「こういうのは困る」の一言であっさり取り下げて、彼の都合の良い記事へと書き直す。異議を唱えても掲載は許されないし、下手すれば地方へ飛ばされ、給料は減る。良いことなんて何も無い。

そんな彼等が作った新聞（ラジオもテレビも似たようなもの）でしか、国民は世界を知ることが出来ない。

国民はこの夜に起きた“事実”を知らない。

政府の発表と、それを元に記者達の書いた記事の内容が、彼等にとって“真実”なのだ。

だが――

それはあくまで政府がカバー出来る範疇でのこと。

事態が政府の管理できるレベルを超えた場合どうなるか。

それを試すような事態が発生したのは、この日の正午過ぎだった。

●富山県沖　日本海

天壇から発進した小型艇が潜水を開始してからすで3時間以上。

真っ赤な非常灯のみが点灯する狭い室内で、壁に取り付けられた質素な椅子に座っていると、たった3時間が3日も3年にも、3世紀にも、とにかく長く感じられる。

スウェットスーツに身を包んだまま、ぼんやりとタバコを吸うの

がせきの山。
　左右に並ぶ男達も所在なさげに、ある者は目を閉じ、ある者は装備を確認し、ある者は彼と同じようにタバコを吸っている。
　換気が悪いせいで、室内は既に煙りだらけだ。
「それで、状況は？」
「中国豚をぶっ殺す命令はまだ出ていない」
「うるせぇ。グチってもはじまらねぇ」
　退屈したのだろう。向かいの席に座っていた体格の良い白人の男が背伸びと共に文句を言い出したのを、隣の席に座る黒人兵が咎めた。
　ちらりと見た視線に気付かれたのだろう。
　白人は席を立つとのそりとこっちに歩いてきた。
　目つきから言ってわかる。
　その座った目つきは、普通のそれじゃない。
　こいつは軍人だ。
　しかも、人を殺したことのある実戦経験者だ。
　同じ立場の人間として、それがわかる。
「中国軍なんて恐るるにたらんよ。フォルツァ」
「んなこたぁ、知ってるさ――黄色い豚といわないだけでも、俺はワールドワイドに紳士的な男だ。そうだろ？おっさん」
　――やれやれ。
　さすがにこのトシになると、白人にまでおっさん呼ばわりかよ。
　男――美川はため息混じりに共通語で答えた。
「俺は日本人だ」
「だからよ」
　ポンッ。
　フォルツァと呼ばれた男は軽く手の甲で美川の胸を叩いた。

「中国豚と一緒にしなかっただけ、俺は紳士的だろう？なぁ」
「……そうしておけよ」
「それにしてもよぉ」
フォルツァの横に座っていた褐色の肌をした、髪をチリチリのパーマにした男（確か“ＤＪ”と名乗っていた）が立ち上がるなり、まるで踊るように腰を動かし、周囲を見回すフリをした。
「あんなスゲエ“メサイア”が横を泳いでるってのに、俺達なんて必要あるのか？」
「彼奴等は監視役さ」
美川の横に座っていた男――本名は知らないが、“スティーブ”と呼べと言っていた。が、腕を組みながら言った。
美川より年上で、その迫力のある面構えはギャングの親玉にしか見えない。
スウェットより仕立ての良いスーツでも着せて繁華街を歩かせたら、運転手付きのキャデラックがお迎えに来るだろう。そんな雰囲気を持つ彼は、まるで周囲を威嚇するようににらみを利かせる。
「俺達がしくじったら、潜水艦ごと沈めるためのな」
「――おいおい」
ＤＪは笑った。
「いくら傭兵とはいえ、それはあんまりじゃないか？」
「大金払ってるんだ。この程度の仕事をしくじるようなら、それこそあんまりなんだろうさ――フォルツァ、仕事はわかってるんだろうな」
「ああ。元フォース・リーコンの俺達を雇うに見合う仕事だぜ？こいつぁ」
「そうだ。最悪、しくじった後に艦内を探られても、そこに魔族の痕跡はないってのがベストだ」
「おいおい、親方。俺は自分の墓穴掘りにいくんじゃないぜ？」
スティーブを親方というのは、美川以外の全員が元から傭兵チームとして別に雇われている証拠みたいなものだ。

「美川」
突然、スティーブが言った。
「潜水の経験は？」
「趣味でやったことはある」
「不安だが、脱落するなら置いていく。いいな？」
「やむを得ないさ」
そう。
やむを得ないのだ。
他の連中のように、金目当て、あるいは人類側の特定の政府や何かに恨みがあって傭兵として身を投じた連中と自分は違う。
自分は軍を裏切って寝返ったのだ。
そんなヤツを誰も信じようとしないのは当然だ。
いつ、今度は自分達から寝返るかわからない。
そんなヤツを信じる物好きは世界中のどこにもいない。
だからこそ、美川は、周囲の信頼を獲得するため、つまり、傭兵の中で生き残るために、そして、共に戦う傭兵として存在するに足る価値があることを、危険に身をさらして周囲に証明する必要があった。
だから、真菜に頼んで、危険な特殊部隊の任務に参加したのだ。
今更、怖じ気づいたわけでもないが、改めて危険に対する覚悟を問われると何と返答して良いかわからなくなる。
ただ、美川は無言で頷くだけだった。
「――――よし」
スティーブは頷いた。
「そろそろ時間だ。ケツを上げて装備を確認しておけ」
「了解」
傭兵達がそれぞれに動き出した。
「傭兵対各員に告ぐ。作戦開始１０分前。出撃準備を」
艦内放送が流れた。
もう、進むしか無かった。

スウェット姿の傭兵達が並ぶ中、室内に注水が始まった。
室内の横には、彼等が使う水中スクーターがすでに準備に入っている。
それをぼんやり見ていたら、不意にひんやりとした感覚が足から襲ってくる。
思わず身震いしたのが少しならず恥ずかしく、また、自分がやっぱりトシかなと心配にもなる。
胴を経て頭部まで水に満たされる中、じっと耐えているとすぐに室内が完全に水で満たされた。
入り口横にあったランプが赤から緑に変化したのを確認した先頭に立つスティーブが親指を立てながら、ドアがゆっくりと開く。
ギギィッと音を立てながら、ドアがゆっくりと開く。
ドアの向こうは日本海だ。
それぞれにスクーターの所へ戻ると、アクセルをゆっくり開いた。
相手は航行する潜水艦だ。
いくらドン亀といわれようとも、人間よりは早い。
水中を魚より速く移動出来るスクーターは必需品だ。
グンッとひっぱられる力に任せ、美川は日本海の海中に泳ぎ出た。
口元から漏れる気泡ががなければ、自分が上に進んでいるのか、それとも潜っているのかさえわからない。
目の前には、上下左右がない冷たい世界が広がっていた。
スウェットスーツ越しに伝わる冷たさに、死の世界を連想する。
逃げたい。
そんな気持ちが一瞬、沸き上がってきた。
「チーム2。こちらヘッド3。通信状態はどうだ」
水中なのに、小型艇からは、びっくりする程クリアな通信が入っ

てくる。
「こちらチーム2リーダー。感度5。良好だ。区域デルタを確保」
太陽の光がかろうじて届く水深５０メートルの世界。
すぐ真下は小型艇の甲板。
改めて見ると、小型というが実際は５０メートル以上。立派な艦艇のサイズがある。
首を巡らせば、左右を小型艇と一緒に航行を続ける水中型メースの異形があった。
スクーターで逃げようとする自分を追いかけて来ているような気がする。
マグロだかサメだかに飲み込まれる小魚の気分だった。
「ヘッド3了解。“クジラ”は現在、速力１０ノットで航行中。ランデブーまであと3分。ヘッド3は現状にて待機する」
「チーム2リーダー、了解」
「俺達抜きのパーティは残念だよ」
「美酒は届けてやる――チームへ。編隊を組め。ここで下手な動きをすると目立つ」
美川は予め指示されたポジションへスクーターを移動させた。
スクーターに取り付けられた水中レーダーが、仲間の位置を教えてくれる。
スクーターと仲間にしがみつくようにして移動すること数分――
「やるぞ。全員、機関停止」
スティーブの鋭い声に、スクーターのアクセルを戻した。
スクーターが推進を止め、美川は律儀に指一本まで動くことを止めた。
スクーターの水中レーダーが後方から接近する物体に対する警告を表示した。
「目標接近中。８時方向。夏級だ」
コーン

コーン

遠くからそんな音が聞こえてくる。
映画ではよく聞く音だが、実際にそんな音がするものだと、美川は初めて知った。
緊張のあまり、耳がキーンと鳴り出す。
やがて、その視界にゆっくりと黒い巨体があらわれた。

クジラ。

本当にそう思うに十分な容姿と巨体をもったその物体こそ、彼等が目指す潜水艦だ。

「……動くなよ?」
スティーブの声に小さく美川は頷いた。

デカイ。

本当にそう思った。

スクリュー音を立てながら、ゆっくりと泳いでいくその巨体は、いつまでたっても現れてくる。まるで世界の果てから現れたかのように、とにかく長い。

俺はこんなの相手に対潜水艦戦なんてやっていたのか。

海軍時代のことを思って、美川はちょっとほろ苦くさえなった。

コーン

コーン

ようやく、その尾びれが見えた。
彼の前で、スクリューが盛大に回っている。

「ＯＫ」
スティーブが言った。
「やるぞ」

美川はとっさにスクーターのアクセルを開いた。
ぐんっとくる推進力によって、美川はすぐに遠ざかりつつあった潜水艦との距離を詰めた。
「フォーメーションを維持しろ」
他の隊員達が、潜水艦に接するとすぐに離れていく。
美川が最後だった。
「美川――やれ」
「了解」
美川はスクリューをくぐってその下に飛び出している舵の横までスクーターを進め、スクーターに取り付けられていた物体を取りだした。
吸盤状の取り付け装置を持つ“それ”を舵に叩くように取り付ける。
ベコンッという心臓に悪い音がしたが、美川は構わずに“それ”の起爆ボタンを押し、急いで潜水艦から離れようとアクセルを開いた。
潜水艦の下を通って、その巨体の半ばまで逃れた。
「ヘッド３よりチーム２へ。準備完了を確認」
「了解。こちらはＯＫ。やってくれ」

●中華帝国軍　戦略原子力潜水艦艦内

中華帝国軍「夏」級戦略原子力潜水艦は、中華帝国が誇る潜水艦であると同時に、米ロの保有する同クラスの潜水艦と比較しても十分過ぎるほどの性能を持つ優秀な艦だ。

開発と建造に関しては、両国の原子力潜水艦技術者多数を買収して様々な情報や技術を得ていたことをがすでに発覚しており、２０人近い技術者が有罪判決を受けている曰く付きの艦ではあるが、。その一番艦にしてネームシップの「夏」は、そんな生まれに関係なく、定刻通りの安定した航行を続けていた。

「定時報告です。現在、能登半島沖１２海里。速力１２ノット。深度５０」

航海長が敬礼の後、艦長に告げた。

「ご苦労」

背が高いすらりとした容姿をした艦長が海図を睨みながら頷いた。

「日本軍の姿はない……か」

「出航以来、全く観測されていません」

「……」

従兵が持ってきたコーヒーを受け取った艦長は首をかしげた。

「何故だ？」

「はっ？」

「何故、ここまで日本軍が下がる理由がある？」

「といいますと？」

「先の福岡戦では日本海軍は潜水艦隊をほぼ総動員した上陸阻止戦を実施した。にも関わらず、何故、今回は付近に何も派遣してこない？」

「すでに油がないのでは？」

副長は笑って言った。
「あの小日本にはその程度の力しかありませんよ」
「……だといいのだが」
「何か不安が？」
「……うむ」

艦長は、その腹の内を副長に明かした。

富山湾に展開し、搭載する弾道ミサイルをもって日本軍に対する備えとなせ。

今回受けた、その任務の意味からしてわからない。

「夏」が搭載するのは魚雷ではない。

大陸間弾道弾だ。

中国近海のどこから撃っても、日本全土を射程に収めている。

撃て。と命じられれば、どこからでも撃つし、どこにでも命中させる自信が彼にはあった。

それに、一々、発射することを考えれば、その母体である潜水艦の所在を明白にするなんて、あり得ないというか、潜水艦から弾道ミサイルを発射する意味が無くなるに等しい。

今回の作戦、何の意味があるというんだ？

それが艦長の疑問だ。

「命令なら従うだけでしょう」

元々が王政党の政治将校である副長は言った。

王政党から派遣されてくる政治将校は、大抵は突っ慳貪としているか、人を見下しているものだ。ところが、この副長はそういう所はない。むしろ人なつっこい所があり、ふと心を許してしまう。

ただ、そんな副長の人当たりの良さが、実は相手の内心を知るための道具でしかなく、その耳にしたことはすべて情報部門に筒抜けとなる。

彼に心を許し、政府の批判を口にしたが故に更迭され、或いは陸に上がったが最後、二度と部下の前に姿を現すことが無かった艦長が今まで何人いたかを、今の艦長がしるよしもなかった。
「違いますか？」

「国の命令に文句は言わぬよ」
艦長は答えた。
「俺は国から給料をもらっている」
「ならいいでしょう」
「ただ、この艦が世界に与える影響を考えてみたかっただけさ」
「……脅迫材料でしょう」
「む？」
「大陸間弾道弾搭載型の潜水艦を富山湾に配置することによって、日本ののど元にミサイルを突きつけることになる」
「それなら黄海だろうが東海だろうが関係ない」
「わかりませんか？ナイフはポケットにいれておくより、実際にのど元に突きつけてやる方が、脅迫材料としては使いやすい」
「……成る程？」
艦長は不承不承だが頷いた。
「それは政治将校としての意見か？」
「いえ？」
副長は首を横に振った。
「あくまで一個人としてです」
「……搭載しているのは魚雷じゃない」
艦長は答えた。
「華々しく敵艦を沈めるには、弾道ミサイルは大げさすぎる」
「……」
「祖国のためなら大抵のことは目をつむることにするさ」
「――それでよいでしょう。あなたは艦長なのですから」

ピーッ
「艦長」
ソナー室からの通信に、艦長は頷くのを止めた。
すぐに艦内通信マイクを手にした。
「艦長だ」
「航行中にソナーに異音を拾いましたが、艦に異常ですか？」
「何？」
スピーカーから入る声は、副長にも伝わったはずだ。
思わず互いに顔を見合ってしまう。
「ソナー、異音とは何だ」
「わかりません。ガンという金属音が――」

ボンッ！
ボンッ！

真綿に包み込んだ花火が爆発したような鈍い音が連続して走ったのは、その時だった。

動く世界　第十三話（後書き）

年末年始、いかがお過ごしですか?私は年末年始を一人寂しく過ごす予定です。おせちなんてありません。年越しはカップそばです。来年こそ、豪華に過ごせることを記念しつつ、お酒飲んでこれから寝ます。感想や今後の作品へのご要望なんて聞かせて頂ければ、作者はとても嬉しいです。

何もないと、新年早々、涙を流しながらふて寝します。

というわけで、評価でも感想でも結構ですので、コメントいただければとっても嬉しいです♪よろしくお願いします。

動く世界　第十四話

ジリリリッ！
床が震動するが、これはスクリューが回転によるものじゃない。
緊急事態を告げるアラームが鳴り響き、乗組員達が靴音も高く駆け回る。
「被害知らせっ！」
艦長がとっさに怒鳴る。
「機関より報告っ！」
艦内通信に取り付いた副長が怒鳴った。
「後部で爆発っ！艦尾より浸水っ！」
「操舵、航行は可能かっ！？」
「ダメですっ！舵がききませんっ！！」
「ダメコン急げっ！」
「浸水の規模が激しく、後部排水ポンプが動きませんっ！」
「予備はどうした！」
「電源系統断っ！復旧に時間かかりますっ！」
「艦長っ！機関部浸水が激しく、これ以上、機関部要員を配置させることは出来ません！退去の許可を下さいっ！」

ザァァッ！

言いつつも、艦長は艦内になだれ込んでくる海水の音をはっきり聞いた艦長に与えられた選択肢は一つしかなかった。
「後部要員下がれっ！ベント開けっ！緊急浮上っ！」
「艦長っ！？」
ハッとなった副長が慌てて艦長に駆け寄る。
「ここで浮上ですか！？本艦は機密事項を満載した――」
「――だからだよ」

すがりつく副長の腕を掴んで艦長は答えた。
「俺は国からこの艦を預かっている。沈没させるわけにはいかん。何より、味方のすぐ近くだ。話していた所じゃないか。周囲に敵はいないと」
「……っ」
副長は迷った。
艦を預かる立場としては浮上に賛成だが、政治将校としては反対したい。
下手に浮上して、偵察機に艦の存在を知られた場合の事を考えると、自分の責任問題になりかねない。
「潜行したままで修復は」
「もう無理だ」
艦長ははっきり言った。
「復旧させればまだ戦える。ここで意地を張れば、損害を大きくして、最後には責任も重くなる。不幸中の幸いだ」
「……了解」
「通信、付近の友軍に対して救助要請を出せ」
艦長は副長の肩を軽く叩くと、マイクを掴んだ。
「各部要員に告ぐ！本艦は現在緊急浮上中、最悪の事態に備え、各部要員は脱出準備を進めろ！」

美川達の前で新しい爆発が発生した。
あれだけ派手に爆発しているからには、艦としての運命が尽き果てようとしているのは、船については素人の美川にもわかる。
爆雷を喰らった潜水艦ってのは、こんなものかな。と、ふとそんなことを思った。
「こちらチーム2リーダー。ヘッド3、潜水艦の浮上開始を確認。これより強襲する」

「了解した。第一目標はミサイルの確保だ」
そんな通信を聞きながら、美川は海面へと浮上した。
暗い海の中からは想像も出来ないほど青い空と、四方に広がる海原。
スクーターを手放して浮かび上がったそこには、戦争なんて存在しないといわんばかりの美しい自然が広がっていた。
それに見とれている余裕は美川にはない。
すぐに派手な水しぶきを上げながら、海中から浮かび上がってきたのは黒いクジラ――夏級潜水艦だ。
浮上した慣性で船体がかなりのスピードで美川の横を滑るように進んでいく。
美川は、自分達の攻撃によってズタズタになった艦尾に泳ぎ着くと、装着していたアクアラングなどの装備を外した。
スティーブをはじめとする面々が銃を手に前に進む。
美川は背負っていたＡＫＳ－７４Ｕを手に取ると、安全装置を解除した。
ロシア軍が採用しているＡＫＳ－７４の銃身を切り詰めたショートカービンを与えられた理由は美川の趣味ではない。
元日本軍のパイロットである美川にとって、はっきりなじみのないロシア系の兵器は手にするだけで不安になる。
セフティが解除されているかなど、一々銃を見ないと正直、操作がおぼつかない。
「ハッチが開くぞ！」
先行する誰かの声が耳に届く。
遅れていることを感じ、焦った彼は滑る甲板をよじ登った。
ババババッ！
潜水艦の広い甲板が見渡せる所まで顔を出した途端、連続した銃声が耳を襲った。
とっさに首をすくめるが、幸いにして発砲したのは味方だった。
開かれたハッチの周囲に水兵らしき男達の死体が転がっている。

味方はその横をすり抜けると、前へと進み、他のハッチめがけて容赦なく銃撃を浴びせかける。
銃は手にしたが、何をして良いのか、誰を撃って良いのかさえ美川にはわからないのとは雲泥の差だ。
その美川の肩を掴んだのはフォルツァだった。
いつの間にか横に立っていた彼は、ついてこい。と美川を促すと、近くで開いていたハッチに手榴弾を放り込んだ。
ドンッ！
ハッチの中で手榴弾が炸裂した。
爆発音と、ギャァッ！という悲鳴。艦内から噴き出してきた赤い物体がなんなのか、考えたくもない。
「デッキクリア。俺達は艦内に侵入する。美川、入れ」
フォルツァが艦内に入れと促す。
美川は頷くと、ハッチに通じる梯子の手すりを掴み、一気に滑り降りた。
艦内には、先程の爆発のせいと思しい火薬と血の臭いが充満していた。
床は水浸し。
その水の赤さは、ただの非常灯の灯りを反射してではないだろう。
それは水に浮いた死体――四肢が吹き飛ばされてだるまのようになった乗組員の死体が物語っている。
不思議と、吐き気も起きなかった。
「上手いもんだ」
床に降りた美川の前にフォルツァが立った。
「何が」
「ラッタルの使い方だよ」
「空母搭乗経験がある」
「海軍か？」
「元、だ」
「まぁいい。美川、艦内を制圧するぞ。誰だろうと構わず殺せ。周

囲は全て敵だ」
「了解した」
フォルツァが水密扉に取り付き、ハンドルを回す。
美川はその後ろで銃を構えて不測の事態に備えた。
もわっとした煙がドアの向こうから吹き出してきたが、フォルツァは構うこと無く中へと侵入。素早く右側に照準を定めるとトリガーを引いた。
「美川、お前はまっすぐ行け。俺はこっち側から攻める」
「……了解した」
通路はまっすぐに伸びるものと、右に折れる二通りがある。
この区画はどうやら倉庫らしい。段ボール箱の詰まったスチール棚がいくつも並ぶのを尻目に、フォルツァは右の通路へと姿を消した。

「……とはいえ」
美川は正直、困惑していた。
パイロットとして、あるいは騎士として敵を撃墜することに躊躇はしない。
だが、個人単位で銃を握って人を殺すとなれば話は別だ。
銃の安全装置が解除されているのを思わかがみ込んで見てしまう。
セレクターはフルオートになっている。
構造上、トリガーを引けば弾が出る。
当たるかは――自信が無い。
「やるしかないか」
ため息まじりで立ち上がった。
浸水被害をこの区画は免れていることにも気付かない。
その彼の目の前で、水密扉がむこうから開かれた。
びっくりしたのは美川だけではなかった。
向こう側から姿を現した若い乗組員も黒いスウェットスーツ姿の男に、どう反応していいのかわからない。という顔をしていた。

しばらく、本当は数秒だろうがお互いをじっ。と見つめ合った後、怒鳴り声を上げたのは相手の方だった。

敵だ！

中国語で声の限り叫んだ乗組員めがけて、美川は黙れとは言わなかった。

言葉の代わりに銃口を向け、トリガーを引いた。

ドガガガガガッ！

甲高い発射音が連続して銃口から走った。

トリガーを引いても弾が出てこなくなった頃には、乗組員は見るも無惨な挽肉状態になっていた。

はじめて銃で人を殺した美川は腰が抜けそうになった。

ガクガクと手が震え、力を入れないと立っていられない。

水密扉を塞ぐように倒れる血まみれの肉塊を自分が作った。

悲鳴に近い叫びをあげそうになるのを、ぐっ。と歯を食いしばって耐えた。

こんな所で立ち止まっている理由はない。

美川は、死体を乗り越えると、前へ進んだ。

水密扉の向こうは、小さな部屋。恐らく水密区画なのだろう。四方を水密扉によって構成され、その内の右側の扉が開いていた。

「くそっ。1マガジン使っちまった」

残弾を確認し、マガジンを交換した美川は、セレクトレバーを単発に切り替え、開いたままの水密扉の方へと向かった。

水密扉を潜るとすぐにラッタルがあって、下の水密扉も開いている。

どうやら、さっきの乗組員はこのルート脱出してきたらしい。

そんなことを考えてラッタルに足をかけた美川の前で、

ヌゥォォォォッ！

グガァァァァッ！

激しい雄叫びが轟いた。

まるで野獣の獣同士が争っているような激しい気のぶつかり合い

を連想させるその声と共に、もんどり打って美川の前に現れたのは二人の男。
体格のいい乗組員と、もう一人、フォルツァだった。
力押しではどうやらフォルツァの方が不利らしい。
「当たるかっ！？」
美川は祈るようにして、乗組員の方に照準をつけてトリガーを引いた。
銃弾は男の肩に命中し、痛みにのけぞった男の顔面をフォルツァの爪先が捉えた。
彼の爪先によって扉に後頭部を叩き付けられた大男は、そのまま昏倒。
「助かった」
フォルツァは敬礼の真似事をすると、大男めがけて引き金を引いた。
「親方、Dブロック確保した。前進する」
大男の死体を避けて近づいた美川の肩をフォルツァが叩いた。
「ここからが正念場だ」
「……ああ」
美川は自分が脅えていることを気取られないよう、力強く頷いて見せた。
フォルツァが通ってきた通路に出た美川は、彼と共に通路を左折した。
壁のパイプが破損しており、盛大に水と水蒸気が噴き出していた。
足下は浸水した水で膝まで水浸しだ。
空母とはいえ、船で飯を食った経験のある者にとって、例えそれが敵艦だろうと、この状況は決して歓迎すべきしろものではない。
そんな美川を尻目に、フォルツァは前進することを止めない。
彼が通路の角に姿を消した。
「撃つな！」

鋭い声がした。
「撃たないでくれっ！」
「武装はしていないっ！」
「降伏するっ！」

連続した銃声と、悲鳴が通路に響き渡った。

両手を挙げたまま、目を見開いた死体を横切るには、正直、大の大人でも勇気がいった。

「スティーブより全部隊員へ」
死体を乗り越えたところで、スティーブから通信が入った。
「司令塔を確保した。総員、司令塔へ集合しろ」

「何だよ」
フォルツァが肩をすくめた。
「俺達が最後かい」
「……そうみたいだな」
「ま、いいか」
フォルツァは言った。
「行こう。無駄な仕事はしないことだ」
「そう……だな」
「なぁ」
「ん？」
「美川、アンタ確か、パイロットだったっけ？」
「……ああ」
「その方が良い」
「どういう意味だ？」
「歩兵には向いていないよ。アンタ」

美川が入った司令塔は、血の海だった。
白い軍服が真っ赤に染まった乗組員達が床に転がっている。
その中には、あの艦長も副長もいた。
スティーブが、艦長の首から下がっていたネックレスを外していた。
「付いたか」
「遅くなった」
「いい。仕事はすぐに終わる」
「前部は？」
「ガスを流した」
「ガスを？」
「鎮圧ガスと言われている」
「言われているって何だよ。親方、そのいい加減な言い方は」
「中国人の開発だ。それで死んだら」
スティーブは立ち上がるなり、ネックレスをフォルツァに放り投げた。
「キーだ――あいつらの運がなかったってことさ。フォルツァ、手を貸せ」
「あいよ」
主を失ったパネルにとりかかった二人を見守る美川は、ＫＯＬＯＫＯＬ－３と書かれたガス缶が床に転がっているのに気付いた。
ドクロマークがついているからには、普通に潜水艦に存在していいボンベじゃない。
多分、前部に流し込んだというガスのボンベはこれだろう。と、美川はすぐに推測をつけた。
「アヘンから抽出した無力化ガスさ」
その視線に気付いたのか、ＤＪが言った。
「一回吸えば半日は眠れる」

「そんなに効くのか？」
「ああ。ロシアで暴動鎮圧に使われた時は、警官まで含めてな？眠りすぎて3百人位、二度と起きなかったくらいだよ」
「……」
はあっ。
この潜水艦の前部に何人いたか、考えるだけで愚かだと、そう思った。
天井を見上げた美川を尻目に、スティーブはどこかと通信を続ける。
「座標は――」
「了解、入力は確認した」
「こっちもＯＫだぜ、親方」
パネルを叩いていたフォルツァが答えた。
「よし――3、2，1」
カチッ
二人が同時にキーを回した。
ロックが解除され、分厚いカバーに覆われていた何かのボタンが露わになる。
「押せ」
「本当にやるのか？」
「仕事だろうが」
「……」
フォルツァは一瞬の躊躇の後、ボタンを押した。
ピーッ
ガボッ
ガガンッ
何か、金属製の重い蓋が開いたような音がした。

「ヘッド3へ。仕事は終わった。これより撤退する。後始末を頼む」
「了解した。速やかに脱出しろ。ミサイル発射を確認次第、始末する」

「急げっ！」
司令塔のラッタルをよじ登りながらスティーブは怒鳴った。
「外にボートが用意されているはずだ！そいつに飛び乗れっ！」

ハッチから這い出るなり、丸くなだらかな潜水艦の外殻を滑り降りて、すぐ近くに浮いていたゾディアックボートに向かって泳いだ。
ボートによじ登り、やっとの思いで見た潜水艦は、ミサイルサイロのハッチが開放され、今まさにミサイルが発射されようとしていた。

爆音を轟かせ、次々と撃ち出されていくミサイル達。

「……お、おい」
美川は訊ねた。
「あれ――――どこに発射されたんだ」

何故か、その問いかけに答える者は、いなかった。

ただ全員が、無言で空を眺めているだけ。

それが、美川に言いようのない不安を抱かせるのには十分過ぎた。

「おい、スティーブ」
話しかけようとした美川の前で、潜水艦の横腹に複数の水柱が立ち上った。

水柱の中には、巨大なカニの爪に似た何かが蠢いていた。

●ワシントンD．C　ホワイトハウス

「状況を教えてくれ」

椅子に座ったベネット大統領の顔は厳しい。というよりむしろ強ばっていた。

居合わせた閣僚達の顔も似たようなものだ。

誰一人、体を硬くして緊張を露わにしていない者はいない。

「はっ」

陸軍の制服を着た将官が敬礼した。

「一言で、状況は最悪です」

「国土を蹂躙されたばかりだぞ。それでか」

「通常兵器による戦闘の傷跡は、それなりの時間をかければ復旧されます」

「……」

「しかし、“これ”は、論外です」

「被害は」

「ハワイとサンフランシスコに直撃し、サンタマリア近郊に着弾した反応弾の被害は甚大です」

「正確な被害は」

「不明。ただ、１００万人を遥かに超えます」

「ハワイの太平洋艦隊司令部との通信が出来ません。ただ、中華帝国軍の弾道ミサイルはＭＩＲＶ（マーブ）を搭載しているはずです。多弾頭型の反応弾頭が使用されたとなれば」

「……」

「太平洋艦隊司令部を含むホノルル。いや、オワフ島は壊滅でしょ

う」
「ロスを狙った弾頭は、精度が悪かったと思われますが、サンタマリア周辺は甚大な放射能汚染が続いており、現在、専門部隊が現地へ向かっている最中ですが、手に負えると思えません」
「とにかく、事態の把握を急いでくれ。中華帝国政府から何か言ってきたか」
「今の所、何も」
「……」
「大統領閣下」
空軍参謀総長が立ち上がった。
「――ご決断を」
「業火に業火をもって答えよ――か」

●日本　なにわテレビ
「本日正午頃、大阪城上空付近で爆発した謎の物体は」
「こちら新大阪駅構内です！北区、福島区から避難してきた人達で構内は大混雑です！」
「このテレビをご覧のみなさん。危険ですので淀川を超えないで下さい、危険です！」
「逃げてきた方の話では、大阪駅付近は、死体があちこちに横たわっていて、とてもではありませんが、お見せできる状況にはないとのことです」
「運ばれた死体は解剖され、死因を特定するようです。私も死体をちらと見たのですが、全身の皮膚がただれているというのか、剥けてしまい、赤い肉がむき出しになっていました。また、窒息したかのように青黒い舌が飛び出しており」

●日本　東京ＭＭテレビ

「羽田空港で何か大変なことが起きたようです。現場の木村さん？」
「はい、こちら羽田空港に通じる穴守橋付近です。ご覧いただけますか？警察により橋が封鎖されており、空港で何が起きているのかを知ることは出来ません」
「警察の発表はどうなっていますか？」
「はい、警察からは何も発表はありません。ただ、空港で着陸に失敗した航空機があった模様で、現在、空港で煙が立ち上っているのがここからでもはっきり見えます」
「状況はわからないのですか？」
「はい。私達も、電話を通じて、空港構内に何度も連絡を試みているのですが、どことも繋がらない状況です。現在、日本から海外へ脱出を試みる人達で推定一日５万人程が利用している中でのことですから、大変な事態が起きているものと思われます」

●葉月市　近衛府葉月実験センター
「……まいったわ」
実験器具に埋もれるようにして、ポリポリと頭を掻いたのは紅葉だ。
「アメリカでは反応弾。こっちにゃ化学兵器かぁ」
「化学兵器……ですか」
パソコンのキーを叩いていた白石がその指を止めた。
「出ましたか」
「出た。くっきりとね」
紅葉は手にしていたデータシートを白石に渡した。
「Ｇ３ガスよ」
「……あれですか」
「普段は無色無臭の液体だけど、酸素と結合すると一瞬で気化して拡散する。気体を吸い込むと、体内のヘモグロビンと反応して血管が破壊され、腐敗に似た現象が全身で引き起こされる」

「……そんなもの、何で」
白石の手が震えるのも無理はないと、紅葉は思った。
「大阪、羽田、横須賀……3カ所が襲われた。犠牲者は」
「万の単位じゃ効かないでしょうね。政府の発表は？」
「未だに」
「……聞かない方がマシかもね」

確かに聞かない方がマシだったかもしれない。
政府の発表はその日の夜。
すでに各自治体が確認出来ただけで、数万人の犠牲者が出ていた。
アメリカの発表により、すでに西海岸とハワイが反応弾で攻撃されたことも国民は知っている。
アメリカの衛星が、日本沖合から発射されたミサイルを確認したことも知っている。
発射されたのは6発。
うち3発が日本に落下したことも。

そこまで、国民は知っているのだ。

マスコミのカメラの砲列の前に立った官房長官は、そこまで知った国民が固唾をのんで見守る中、まるで他人事のように、あるいは定時報告でもするかのように、淡々と語った。

本日発生した化学物質による“テロ”は、未だどこからも犯行声明が出ていない。日本政府としては、このような卑劣な行為に対し、断固抗議すると共に、遺憾の意を表明するものである。

動く世界　第十五話

●ドイツ　ベルリン　宰相官邸

「ハワイ、サンフランシスコ壊滅、ロサンゼルス近郊は放射能汚染が深刻……被災者７００万人。推定死者、行方不明者が２００万人……か」

書類をデスクに置いた手が震えていた。

「皇帝もバカなマネをしたものだ」

ドイツ帝国宰相、ヴォルフ・シックルグルーバーは、その震えから逃れるかのように、トントンと指でデスクを叩きながら言った。

「アメリカの世論は」

「世界的都市二つと半分を吹き飛ばしたのですから、申し上げるまでもありません」

ドイツ軍参謀長のフォンテーン将軍は答えた。

「最悪です」

「……」

「北米大陸では既に中国人狩りが始まっています。略奪、暴行、殺戮……凡そ、人が集団でやってのけられる犯罪の全てが、現地の中国人相手に行われています。

おかげで、中華系移民は警察に保護を求め、警察は留置場に彼等を避難させているとか」

「留置場に市民を放り込むことが職責か？」

クックッ。

シックルグルーバーは喉で笑った。

「新大陸の警察官は面白い仕事を見つけたな」

「そのうち、我が帝国でも似たような仕事が起きるかもしれませんぞ」

「その時に留置場が残っていれば良いが」

「縁起でもない」

「縁起が良いことなんて、ここ数年間、私は君から聞いたことは無いぞ？フォンテーン」
「職責は果たしているはずですが？」
「ああ。その点については不満はない。問題は、我が国――――否、全人類が置かれた、この洒落にならない状況だ」
「空軍は２４時間の対ミサイル警戒体勢に入りました。戦闘機及びメサイアは可動全騎が対空迎撃を準備中」
「フランスとロシアはどうしている？」
「フランスは英国と共に、相互防衛条約に基づき、防空データの共有を要請してきましたが」
「貸しは作っておけ。意地でもドイツ本土上空に入る前にミサイルを撃墜しろ。例え高高度でも、爆発された日には北米大陸の二の舞だぞ」
「我々めがけて撃つと思いますか？」
「狂った龍がどう動くかなぞ」
緊張した顔を強ばらせるフォンテーンに、シックルグルーバーは鼻で笑って見せた。
「私が知るか」

●中華帝国　北京　紫禁城　国家中央軍事委員会会議室
「どういうことだ！」
虎が吠えたような、皇帝の怒鳴り声が、中華帝国の軍事を動かす国家中央軍事委員達に叩き付けられた。
当然だ。
今や皇帝となった載賢は顔を真っ赤にして、額には何本もの青筋を立てている。
その怒りを煽りたくないがために、皆が下を向いて黙っている。
「誰だ！誰が撃てと言った！」

「お、恐れながら」
李国家中央軍事委員長が、滝のように流れる冷や汗をハンカチで拭いながら言った。
すでに北米大陸の敗北を皮切りに、敗北に次ぐ敗北の責任をとらされる形で、前任者までに合計8人が処刑されたことを知る彼は、答えること自体が命がけだ。
「ミサイルそのものが「夏」から発射されたことは、我が軍の観測でも確認されており」
ガンッ！
李の顔面に、皇帝が投げつけた灰皿が命中した。
「んなこたぁ、俺だってわかってるわ！」
灰皿が顔面に深々とめり込んだまま、李は後ろに吹っ飛ばされ、床に転がった。
ピクリとも反応しない李を睨み付けたまま、皇帝は叫ぶ。
「貴様っ、俺がその程度のこともわからぬ馬鹿だといいたいのか！？」
「仕方ないよ。兄さん」
李の横に座っていた載武が手をひらひらさせながら言った。
「誰の命令だろうと、撃ったものが今更戻りはしない」
「なら、どうしろというんだ」
「――――おい、そこの死体を片付けろ。公には責任をとって自決したと、そう発表しろ」
「他国に俺達が撃ったと認めろと、そういうのか！？」
「いや？」
載武はあっさり答えた。
「李がやったんだよ。僕達の信頼を裏切って、北米大陸や福岡での敗北に腹を立てたヤツが、職権を乱用して勝手にやったんだ」
「その程度の言い訳が、この世で通じると思っているのか！」
「ヤツは皇帝に裏切りを指摘され、苦し紛れにこの場で自殺したんだよ。他人を犯人にでっちあげても、もう誰も信じはしないさ。む

しろ国家中央軍事委員長がに責任を被らせたほうが利口だよ。外交ルートを通じて、僕達も被害者だとはっきり伝えた方がいい」
「この俺に、他国に頭を下げろというのか？」
「どうしてそういう発想になるかな……」
載武は苦笑いを浮かべて首を横に振った。
「いいかい？兄さんも、李の被害者なんだ。とりあえず、急いだ方がいい。アメリカがこのままやられっぱなしで黙っているはずはない」
「そうだな。あの白豚共、何と言っている？」
「問題はそこだよ」
載武は言った。
「都市二つふっとばされたというのに、黙っているよ。抗議どころか照会さえしてこない」
「何？」
「何も言ってこないんだ。大統領は、国民向けにでさえ、今回の事件について何も発言していないんだ」
「……むぅ」
何か思うところがあるのか、考え込んだ皇帝に載武は続けた。
「この沈黙が怖い。向こうに喋らせる前に、こっちから喋った方がいい。でないと取り返しのつかないことになるかも」
その載武に、スーツ姿の女性が近づくなり、何事かを耳打ちした。
「……」
「……」
すらっとした容姿に、知的なメガネ美女。
皇帝はそれが載武の愛人というか、性的な玩具も兼ねる載武の秘書であることを知っている。ただ、このタイミングで割り込んできた女と、それを許す載武の行動はかんに障った。
「――おい、載武」
「テレビを用意しろ」
女が後ろに下がり、載武はネクタイを緩めた。

「何があった」
「ホワイトハウスが動いた。これから全米向け中継が始まるよ」
「……何だと？」

●日本　東京都永田町　民州党本部
大統領の演説は衛星中継によって世界中に伝えられた。
当然ながら、日本でもそれは聞くことが出来た。
たどたどしい翻訳が、大統領の言葉を日本語に翻訳していく。
“語り石”を使った経験者ならば、ストレートに大統領の言葉を自分の言語として聞くことが出来るのだが、日本語しかわからない者達に対してこの程度の配慮はいくら何でも当然、なされている。
海軍大臣永野文は、面白そうにテレビを眺めていた。
まるで漫才か落語で聞いているかのように口元に笑みが浮かんでいる。
「成る程ねぇ……」

テレビに映る大統領は憔悴の色がはっきりと見えた。
国民の代表、ヒーローとしては随分と見劣りするというのが、彼女の正直な感想だ。

画面の中で、大統領は犠牲者と家族に対して哀悼の意を捧げた後、この事態を引き起こしたのが、日本沖合から中華帝国軍の潜水艦から発射されたミサイルであることを断言した。
やったのは魔族ではなく、同じ人類であるはずの中華帝国政府、つまり中国人であり、彼等は未だにアメリカに対する憎しみを持ち続けていた。
平和を願う我々の祈りは、だまし討ちの如く放たれた地獄の業火によって焼き尽くされた。被害はアメリカだけでなく、人類存亡の危機に耐える日本にまで及んだ。

彼等は人類を完全に裏切ったことを、自らの行動を持って示した。

そして、大統領は最後に声を張り上げた。

彼等に平和を望むこと自体が間違いであったと私は今、強く断言出来る。

国民の皆さん。

私は、アメリカ合衆国大統領として、また、議会と国民から与えられた権限が許す範囲で、あらゆる手段をもって、この人類に対する裏切り行為に対して、断固とした報復を成し遂げることを――――星条旗を踏みにじった者の末路がどれ程恐るべき代物となるか、彼等の末裔でさえわかるよう、彼等に刻みつけることをここに約束します。

「あらあら」

演説が続くにつれ、大統領の目に怒りの炎が沸き上がったのを、文は見た。

政治家に長い演説をさせると、政治家自身がその演説に酔いしれることがある。

今の大統領は、その典型例と言って良いだろう。

もしかしたら、本当は報復なんて考えていなかったのかもしれない。

自らの演説に酔いしれた挙げ句、ついぽろっと口から出たのかもしれない。

しかし、彼は大統領だ。

中華帝国への報復を国民に約束してしまった。

この意味は重い。

国民の憎しみの矛先が中国人と中華帝国政府に向かうことを大統領がわからないはずはないだろう。

だから――――政治は怖い。

文は思う。
理論的に行われるべき統治が、ほんのちょっとの感情で台無しにされる。
冷静が求められるはずの統治者が、感情を制御出来ないから、世の中はロクなことが起きないという、文の持論がまた証明される事態になった。
それが彼女にとっては面白かった。
本来、いつどこからミサイルが飛んできても国民を護るべきは大統領だ。
その責任を全て中国人のだまし討ちに転嫁して、自らの責任を逃れた挙げ句、新たなもめ事の種まで植え付けてのけた。
「こりゃ……それなりに覚悟しておいたほうが良さそうね」
誰かが廊下をバタバタと走っていく音がする。
党本部に普段の静寂な雰囲気はかけらもない。
まるで選挙期間中並みの騒ぎだ。
彼女は、もう興味がないといわんばかりにテレビの音声をミュートにした。
「東京が狙われるかもってわけで、みんな栃木へ逃げ出したってわけ？」
「ドイツ、イギリス、マラネリの国家元首や王族が今、栃木にいるから」
そう答えたのは、彼女の前に座る蓮川陸軍大臣だ。
「いくら何でも、大丈夫だろうって」
「ドイツの皇帝は何て言ってるの？」
「お定まりの日本人に対する哀悼の意ってヤツと、一歩もここから動かない。ドイツは友好国を見捨てないって」
「たいしたものね」
「マラネリもフランスもイギリスも動いてないよ」
「天皇陛下はどうなのよ。東京から動いてないでしょう？それで、肝心の坊やは行かないの？」

「……行かない」
むすっとした顔で、蓮川はそう言った。
「何故？ミサイルで吹っ飛ばされるかもよ？」
「それでも行かない」
「総理は？」
「別に何も言わずに、一人だけ言った」
「あらあら。私もだけど、あなたも随分と信頼されてないのねぇ」
「……どうしたらいいと思う？」
「ん？」
「あんたは、何だかんだいっても、民州党議員で一番、国民から信頼があるというか、能力がある」
「褒めてもあめ玉くらいしか無いわよ？」
「真面目に言ってるんだ」
「……あら、私も真面目なんだけどね」

テレビではニュースキャスターと評論家らしき男が何かやり取りしている。
こんな緊急のタイミングでテレビに顔を出せる輩なんて、仕事が無くてヒマを持て余していると自ら宣言しているようなもの。
つまり、そんな薄い存在の発言に大した価値はない。

「僕達にとって問題はアメリカじゃなくて、日本の被害だ」
「羽田と横須賀、大阪……まとめたら反応弾一発を都市に落とされたのと大してかわらないでしょうね」
「羽田は空港としての機能を失ったし、横須賀は各国海軍まで巻き込んで機能停止。大阪に至っては都市どころか行政府が麻痺している」
「化学兵器は拡散したんでしょう？」
「あんたも行くんだろう？横須賀へ」
「当たり前でしょう？大臣が先陣切らなくて、こんな時に誰が動く

ものですか」
「僕も明日には大阪に行くことにしてるんだ」
「あら、偉いじゃない。成長した？」
「自分に出来ることをしたいだけだよ。幸い、近畿の大手企業は戦火を恐れて四国へ機能を移転していた所だけど、市民は逃げられなかった」
「……」
「妻の実家が大阪なんだ。向こうの両親と連絡がとれないし、僕の秘書や知人で大阪にいた奴らも何人も安否が確認出来ない」
「だから行く？」
「眠れなかった」
蓮川は言った。
「眠れないから、ずっと考えていた。僕は一度、地獄を見た方がいいってね」
「地獄？」
「被害を受けた場所を生で見て、死体を前に何をするか考えてみるんだ。手遅れかもしれないけど、そうでもしなければ、次に進めない」
「……成る程？」
「これだけのことをテロだなんて言ってる連中じゃ、もう未来はないよ。永野さん」
「ん？」
「あんた、党を出るつもりはないか？あんたか元のダンナくらいじゃなきゃ、もうこの国を統治出来ないと、僕は思うんだ」
「総理大臣の孫のあなたはどうなの？私は大臣であって、センセの犬よ？」
「ふざけたことを」
そっぽを向いたはずの蓮川の目が、ぱちくりと動いた。

「どうしたの？ぼうや」
「……」
蓮川が無言で指さした先にはテレビがあった。
「テレビがどうしたの？」
怪訝そうにリモコンを動かし、ミュートを解除した文の眼が、画面上のテロップを読んだ。
「……えっ？」

●中華帝国　上海郊外
国家総動員体制が発動された中華帝国では、国民は全て国家のために働かなくてはならない。
国家が必要と判断したら、例え女子供でも動員される。
子供達でさえ、必要とあれば工場や農場で働かされる。
国家の命令で働く以上、給料は出ない。
あくまでそれは“自発的な奉仕”でしかないのだ。
だから、国家と結託し、この機会に人件費を抑制して暴利をむさぼろうとしたり、実際にそうしている経営者は枚挙に暇がなく、国民も内心では国家のためと言われても、どうにも信じられない所があるのが実情だ。
だからといっても、皆、政府が恐ろしいために命令されればどこへでも行くのだ。
上海の町中にある昔からのボルト製造工場で働いている女の子達も、そんな中で動員命令に従った一部だ。
学校からは電車と徒歩で1時間はかかる。そこから毎日、ボルトを作るために働きに来ているのだ。
国家奉仕の名目で動員された女子高生達が慣れない手つきで町の工場で働いている光景は、今や見慣れたものだ。

サイレンが鳴って、午前中の作業が中断された。
休憩だ。
従業員のためというより、監督が休むために設けられたに等しい休憩ではあるが、働く者達にとってはありがたい時間であることに変わりは無い。
「暑いねぇ」
朝方まで降っていた雨のせいか、制服が汗ばむ程、湿気がひどい。
制服をパタパタさせた女の子達が水筒から水を飲んで思い思いに休憩をとる。
上海近郊でも知られた名門女子校の女の子達とはいえ、国家への奉仕は避けられない。
箸とペン以外ではピアノを弾く程度しか使ったことのない指が、火花を散らせる機械を操作するものだから、その細い指先にはいつくもの絆創膏が貼られている。
それでも彼女達は若さと国家に奉仕できる喜びで元気に満ちあふれている。
自分達が作るボルトが戦闘機や戦車に使われて、国家のために戦うと思うだけで十分幸せなのだ。
とはいえ、それでも休憩時間だけは十分過ぎるほど、普通の女の子となる。
「本当だよ。見て、絆創膏だらけ」
「名誉の負傷よ」
「傷が残ったらイヤだな。私、指は自慢なの」
「いいなぁ……私、形が悪くてさ」
剥げかけた絆創膏を気にしながら女の子の一人が空を見上げた。
真っ青な空に白い雲が流れている。
「あれっ？」
「何？」
「何か光った」
「えっ？」

「ほら――あそこ」
「あっ、本当だ」
「飛行機じゃない？」
「かもね……でも、きれいじゃない？」
「うん。キラキラ光ってる」
「綺麗だねぇ……」

上海現地時間午前１１時０５分３２秒

アメリカ合衆国が発射した大陸間弾道弾は、中華帝国領内の６３都市上空でほぼ同時に禁忌とすべきその力を解放させた。

微笑みながら彼等の来訪を見つめていた女の子達も、工場の人々も――その家族も、男も女も老いも若きも――いや、人間か否かを問わず、全てがその熱線と爆風の中に包み込まれた。

もう、誰にもどうしようもなかった。
炎上する都市から逃げる者達、助けに向かう者達。
すべてに容赦なく放射線が襲いかかり、後に地獄を上回る苦しみを彼等に押しつけることとなる。

戸籍が信頼出来るレベルで管理されていないこともあり、正式な被害を知ることは誰も出来ないし、後世の研究家の間でも、その主張にかなりの数値的な差がある。
ただ、このアメリカ合衆国によって果たされた報復による犠牲者数として一般に言われる数値は

４億５千万

この日、中華帝国はその国民の3分の1と、大半の都市を喪失した。

それは言うまでも無く、中華帝国が国家としての機能をほぼ喪失したに等しい損害を被った事を意味する。

皇帝が叫ぼうとも、報復を命じようとも、最早その命令はどこにも届かない。

皆が、自らの命を守るというギリギリの所でさえ果たせずにいる中、彼がどれ程権威を振るおうとも、振り向く者はいない。

中華帝国政府がどれ程、外交的にアメリカを罵ろうと、アメリカを呪おうと、聞く者はいなかった。

それは、どれほど理路整然としていようと、理にかなっていようと関係はない。

丁度、テロリストの言い分に耳を貸す者がいないのとよく似た、不思議な雰囲気が全人類を包み込んでいた。

結局、政府要人を含め、彼等自身が放射能から逃れるために北京を放棄するしかないと判断するまで数日は必要なかった。

開封を経由して攻撃の被害を免れた数少ない都市である武漢に遷都を完了するまでの数ヶ月、彼は流浪の皇帝となったことだけは確かだった。

そして――

まるでこのタイミングを狙っていたかのようにアイバシュラ達が中華帝国領内へ移動を開始。

それは、放射能によって動きがとれない人類に代わり、彼等が新しい大陸の主となるべく動き出した瞬間でもあった。

憎しみが憎しみを生み、報復が報復を産んだ結果。

代償は罪無き人々の血肉をもって支払われたことに変わりは無い。

後にアイバシュラの群生地帯として、ロシア、ヨーロッパ方面へ向けたその侵攻拠点となる“呪われた大地”はこうして生まれた。

しかし、それでなお、彼等は愚行を改めようとさえしなかったのだ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2073c/

ヴァルキリーズ・ストーム

2012年1月3日23時32分発行